增補

字源

簡野

NLC
9341
6563

角川書店

字源編纂の緣起

予幼時、唐詩選・三體詩を愛讀し、且つ好みて五七言絶句を作り、推敲苦吟、夜夜夜分に達せり　先君子之を戒めて曰く、凡そ物本末あり、事先後あり。抑も四子六經は義理の府にして、文章の宗なり。學者先づ沈潛講究せざるべからず。汝この根本の經學を專攻せず、徒に枝葉の詩賦に耽る、乃ち不可なることとなからんやと。且つ曰く、經學を講究せんには、先づ字義訓詁に通ぜざるべからず。字義訓詁に通ぜずんば、縱令萬卷の書を讀むとも、雲煙過眼と何ぞ撰ばんとて、狩谷棭齋が「**文字の關まだ越えやらぬ旅人は道の奥をばいかで知るべき**」といふ詠、說文歌を朗誦し、諄諄として予が爲めに學問の方針を指示せらる。予不敏なりと雖も、深く庭訓の旨を服膺し、爾來精を小學訓詁に專らにし、爾雅・說文に關する書は、殆ど涉獵せざるなく、以て經

學研鑽の資となし、兼て學徒に授くるに及びても、終始この庭訓を遵守し、頗る成績の見るべき者ありき。然るに教學の制度、改まりてより、學科多岐多端にして、學者力を漢文學に專らにすること能はず、讀書の力、年年に減退して、經學明かならず、人人貨利に汲汲として、禮義廉恥の四維漸く將に解弛せんとす。加之徒に西歐物質的文化に眩惑して、東洋精神的文明の精華たる漢字漢文を蔑視するの結果は、修辭の法を閑却して、文章日日に蕪穢に陷り、藝文漸く地を掃はんとす。予深く之を慨き、曩に故事成語大辭典を著し、以て作文修辭の一助となせり。爾時おもへらく、天下の讀書子をして徧く字義訓詁に通ぜしめんには、別に正確にして且つ解し易き字典の刊行なかるべからずと。乃ち自ら揣らず、其の編述に從事し、研精覃思、夙夜拮据、十數年の久しきに彌ると雖も、當時職を茗蠻に奉ぜしを以て、功程意の如く進まず、日暮れ道遠しの歎に堪へず、若し夫れ速成を期せんが爲めに、他人の援助を藉らんか、杜撰鹵莽の譏を招かんことを恐る。左思右想、憂心忡忡として、明

發まで寐ねられず。忽ち翻然として以爲へらく、公務の餘暇を以て、かかる至難の大事業を完成せんとするは、責任を重んずる者の爲すべき所にあらず、吁吾過てり、吁吾過てりと。乃ち大正三年春首、斷然公私一切の羈絆を脫却し、門を杜ぢ客を謝し、全幅の精力をこの書の屬稿と校正とに竭盡し、前後二十有餘年を經て、漸く玆に之を完成するを得たり。嗚呼先君子の墓木已に拱なり矣、就きて之を質すに由なし。幸に博雅の士の高批を得て、洗煉潤色の功を積まば、希くは偏く之を當世に流傳せしめて、以て東洋の文化を裨補し、且つ之を後昆に傳へて、長へに漢文學の研究に資することを得ん歟。

大正十二年三月

簡野道明識

凡例

本書は、古來經史子集に出でたる一切の漢字を網羅して、精確なる音義を施し、且其の文字を頭字とせる熟語・成句・書名・物名・人名・地名等を簡明に解釋して、五十音順に排纂したれば、漢字典にして故事成語辭典・地名辭典・人名辭典等を兼ねたるものなり。

本書に採收せし文字は、大抵康熙辭典に準據したれども、古書に用例なき文字、又今日すでに廢字に屬せし文字は、之を刪去し、更に同字典以外の文字にして、日常使用せられつつあるものは、其の譌字・俗字たるを問はず、すべて之を增補し、つとめて現代の實用に適せしめんことを期せり。但其の譌字・俗字には必ず其の條下に其の由を註記して、他の正字と混同することなからしめたり。

我國にて造りし文字にして廣く世間に通行せるものは、悉く之を採收して、其の條下に〔國字〕の二字を標記し、且其の意義を略解せり。

字書の嚴正を期することは、字典の最大要件なれば、之が爲めに新に鑄造せし文字は無慮十數萬字の多きに及べり。

字音は、漢・吳兩音を竝記し、其の兩音共通のものは、單に一音を掲げ、又從來慣用の音をば、通音として其の條下に標記し、且文字によりては、唐音・宋音をも併記せり。

一字數音に分るるものは、㊀㊁㊂㊃の符を付して、先づ其の文字の本義に屬する音を掲げ、次に引申して生ぜし轉義の音に及び、且毎音の下に其の所屬の韻を示せり。

韻字は、□にて圍み、其の四隅に圈發を施して以て四聲の別を明かにす、卽ち平聲は□上聲は□去聲は□入聲は□の如くせり。

一字にして數義を有するものは、一一〇符を付して之を列舉す、音韻の異るに從ひて訓義の異るものは亦㊀㊁㊂㊃の符を付して、先づ其の本義を解き、次に轉義に及び、前に標出せし字音の㊀㊁㊂㊃と、互に對照して音義の關係を會得せしむ。

字解は、先づ其の字義を解き、次に其の文字を應用せし熟語の一斑を示し、次に其の出典に及べり。例へば八〇九頁

【敎】カウ　ケウ　㪚 俗に敎に作るは非

○をしへる(誨)知らざることを告げさとらす。又、其のをしへ「儒—」「聖—」「名—」「明—」「弟子職「先生施—」」

とある如し。ここの—符は數字を代表せしなり。通篇之に準じて知るべし。

音義の互に通用せる文字、又、古字・正字等は＝符を施して之を標出す、例へば一四四〇頁「粵」の字の解

○ここに、發語の辭。＝曰・越。○國の名。今の廣東・廣西は古の百—の地、故に此の二省を兩—とい

ひ、又廣東省の異稱を一省といふ。魏徵詩「請ㇾ纓繫ニ南一ㇾ越。」とある如し。

支那にて俗間の文書に通行せる訓義はすべて圏符を付し、佛典に出でたる訓義は圏符を付して解說し、又我國のみに通用せる訓義、例へば霞を「かすみ」嵐を「あらし」といふ類は、圏符の下に之を解說す。六書の一斑を知らしめん爲めに、其の最も解し易き文字には圏符の符の下に造字の意義を略說す。例へば一一二頁(休)の字の條

圏符 休は木に从ひ人に从ふ、行人の休息するには、必ず木蔭(コカゲ)に依るが故なり。

二三三一頁(黛)即ち「まゆずみ」の字の條

圏符 黛は代なり、眉毛を去り、黑色の墨を畫きて之れに代ふるなり。故に代黑に从ふ。とある如し。

同訓異義の文字、例へば「看・見・視・觀・覽・瞻・瞰」「曰・言・謂・云・道」等の異同は圏符の條下に之を辨明す。

引用せし出典は、其の最も古くして且信憑すべき書中より抄出するを以て原則としたれども、古來人口に膾炙せる佳句・格言等は必ずしも時代の新古に拘泥せずして之を引用せり。

熟語の解說の條に於ける引用文詩中、其の熟語と同字なるものは一一の符を用ひ、三字以上の成句又は名詞等は稍長き單線即ち——符を用ひて之を代表せり。

「熟語にして數義あり、一義にして數說あるものは、前に說きたる字解の例に倣ひ、〇符を施して悉く

之を列擧せり。

其の熟語と同一若くは酷似の意義を有する類語は＝符を付して其の條下に標出し、以て應用の才を長せしむ。例へば一七八三頁

【解悶】（カイセン）　しんぱいをはらす。悶は懣。白居易詩、「秋館清涼日、書因ニ――一看」＝遣悶・排悶・散悶・釋悶・消悶。とある如し。

扁旁冠脚の知れ難き文字を檢出する爲めに、檢字索引を付せし外に、精密なる字音索引と、字訓索引とを添へたれば、容易に所要の文字を檢索するを得べし。

文字にて十分に說明し難き禮器・樂器・冠服・兵器・雜器・動植等の圖を博古圖・金石萃編・西清古鑑・金石索・三才圖會等の書より抄出して之を彙纂し、卷末に附載したれば、本文中の解說と參照して其の制作を會得すべきなり。

著者の所藏に係る「隸法彙纂」「草字彙」の原刻本を寫眞版に付し、別冊として添ふ、この二書は支那は勿論、我國にも翻刻せられて、多く坊間に存在せりと雖も、法帖に貴ぶところは原刻本に在り、而して原刻本の容易に求め得難きは、古來學者の同歎するところなり、この二書出でて說文研究者竝に書苑に遊ぶ人士の參考たるを得ば幸なり。

本書稿を起してより茲に二十有餘年、其の間、引用せし書目の主たるものを左に掲ぐ。

書名	卷數	撰者
爾雅	三	撰者未詳
小爾雅	一	漢、孔鮒
方言	一三	漢、揚雄
急就篇	四	漢、史游
說文解字	三〇	漢、許愼
釋名	八	後漢、劉熙
廣雅	一〇	魏、張揖
玉篇	三〇	梁、顧野王
龍龕手鑑	四	遼、僧行均
干祿字書	一	唐、顏元孫
匡謬正俗	八	唐、顏師古
經典釋文	三〇	唐、陸德明
九經字樣	一	唐、元度
羣經音辨	七	宋、賈昌朝
埤雅	二〇	宋、陸佃
汗簡	四	宋、郭忠恕
佩觿	三	宋、郭忠恕
類篇	四五	宋、王洙
駢雅	七	明、朱謀瑋
六書故	三三	宋、戴侗
字鑑	五	元、李文仲
字彙	一四	明、梅膺祚
字彙補	六	明、吳任臣
正字通	一二	明、張自烈

書名	卷數	撰者
康熙字典	四二	清、聖祖敕撰
廣韻	五	隋、陸法言等
一切經音義	一〇〇	唐、釋慧琳
韻鏡	一	撰者未詳
集韻	一〇	宋、丁度等
禮部韻略	五	宋、丁度等
韻補	五	宋、吳棫
五音集韻	一五	金、韓道昭
古今韻會舉要	三〇	元、熊忠
洪武正韻	一六	明、洪武中敕撰
音論	三	清、顧炎武
唐韻正	二〇	清、顧炎武
古音表	二	清、顧炎武
古今韻略	五	清、邵長蘅
古韻標準	四	清、江永
四聲切韻表	一	清、江永
聲類	四	清、錢大昕
聲韻考	四	清、戴震
聲韻源流考	一	清、萬斯同
藝文類聚	一〇〇	唐、歐陽詢
北堂書鈔	一六〇	唐、虞世南
初學記	三〇	唐、徐堅等
白孔六帖	一〇〇	唐、白居易 宋、孔傳
太平御覽	一〇〇〇	宋、李昉等

書名	卷數	撰者
冊府元龜	一〇〇〇	宋、王欽若等
事物紀原	一〇	宋、高承
事文類聚	二三六	宋、祝穆 元、富大用等
玉海	二〇〇	宋、王應麟
小學紺珠	一〇	宋、王應麟
永樂大典	二二八七七	明、永樂中敕撰
三才圖會	一〇六	明、王圻
山堂肆考	二四〇	明、彭大翼
淵鑑類函	四五〇	清、聖祖敕撰
子史精華	一六〇	清、聖祖敕撰
古今圖書集成	一〇〇〇〇	清、聖祖敕撰
佩文韻府	四四四	清、聖祖敕撰
駢字類編	二四〇	清、聖祖敕撰
通俗編	三八	清、翟灝
格致鏡原	一〇〇	清、陳元龍
經籍籑詁	二一二	清、阮元
羣經補義	五	清、江永
經義述聞	三二	清、王引之
經傳釋詞	一〇	清、王引之
十三經注疏	四一六	清、阮元校刊
五經大全	一二七	明、胡廣等
四書大全	三六	明、胡廣等
四書集註	一九	宋、朱熹
皇清經解	一四〇〇	清、阮元等

續皇清經解	一四三〇	清、王先謙
○史記	一三〇	漢、司馬遷
漢書	一二〇	後漢、班固
後漢書	一二〇	宋、范曄等
三國志	六五	晉、陳壽
晉書	一三〇	唐、房元齡等
宋書	一〇〇	梁、沈約
南齊書	五九	梁、蕭子顯
梁書	五六	唐、姚思廉
陳書	三六	唐、姚思廉
魏書	一一四	北齊、魏收
北齊書	五〇	唐、李百藥
周書	五〇	唐、令狐德棻
隋書	八五	唐、魏徵等
南史・北史	一八〇	唐、李延壽
舊唐書	二〇〇	石晉、劉昫等
唐書	二二五	宋、歐陽修等
舊五代史	一五〇	宋、薛居正
五代史記	七四	宋、歐陽修
宋史	四九六	元、托克托
遼史	一一六	元、托克托
金史	一三五	元、托克托
元史	二一〇	明、宋濂等
明史	三三六	清、張廷玉等
明史稿	三一〇	清、王鴻緒
資治通鑑	二九四	宋、司馬光
通鑑綱目	五九	宋、朱熹
通鑑輯覽	一一六	清、乾隆敕撰
續資治通鑑	二二〇	清、畢沅
國語	二一	周、左丘明
戰國策	三三	撰者未詳
貞觀政要	一〇	唐、吳兢
通志	二〇〇	宋、鄭樵
弘簡錄	二五四	明、邵經邦
續弘簡錄	四二	清、邵遠平
晏子春秋	八	撰者未詳
新序	一〇	漢、劉向
說苑	二〇	漢、劉向
列女傳	七	漢、劉向
孔叢子	七	撰者未詳
孔子家語	一〇	魏、王肅
蒙求	三	唐、李瀚
宋名臣言行錄	二四	宋、朱熹
伊洛淵源錄	一四	宋、朱熹
聖門人物志	一三	明、郭子章
萬姓統譜	一四〇	明、凌迪知
尚友錄・同續集	四四	明、廖用賢等
明名臣言行錄	九五	明、徐開任
史姓韻編	六四	清、汪輝祖
國朝先正事略	六〇	清、李元度
吳越春秋	一〇	後漢、趙曄
越絕書	一五	漢、袁康
唐鑑	二四	宋、范祖禹
荀子	二〇	周、荀卿
新語	二	漢、陸賈
新書	一〇	漢、賈誼
鹽鐵論	一二	漢、桓寬
法言	一三	漢、揚雄
太玄經	一〇	漢、揚雄
潛夫論	一〇	後漢、王符
申鑒（小荀子）	五	後漢、荀悅
中論	二	後漢、徐幹
中說（文中子）	一〇	隋、王通
帝範	四	唐、太宗
近思錄	一四	宋、朱熹等
小學	六	宋、朱熹編
北溪字義	二	宋、陳淳
性理大全	七〇	明、胡廣等
讀書錄・同續錄	二三	明、薛瑄
朱子學的	二	明、丘濬
傳習錄	三	明、王守仁
宋元學案	一〇〇	清、黃宗羲等
明儒學案	六二	清、黃宗羲
老子	二	周、老聃
關尹子	一	周、尹喜
列子	八	周、列禦寇
莊子	八	周、莊周

抱朴子	八	晉、葛洪
墨子	一五	周、墨翟
管子	二四	周、管仲
韓非子	二〇	周、韓非
六韜	六	周、呂望
孫子	一	周、孫武
吳子	一	周、吳起
司馬法	一	周、司馬穰苴
尉繚子	五	周、尉繚
黃石公三略	三	撰者未詳
李衛公問對	三	唐、李靖
七書直解	三	明、劉寅
鶡冠子	三	撰者未詳
鬼谷子	一	撰者未詳
呂覽（呂氏春秋）	二六	秦、呂不韋
淮南子	二一	漢、劉安
論衡	三〇	後漢、王充
顏氏家訓	二	北齊、顏之推
○		
孟浩然集	四	唐、孟浩然
岑嘉州集	八	唐、岑參
儲光羲詩集	五	唐、儲光羲
劉隨州集	一一	唐、劉長卿
韋蘇州集	一〇	唐、韋應物
張司業詩集	八	唐、張籍
長江集	一〇	唐、賈島
李長吉歌詩	四	唐、李賀
王司馬詩集	一〇	唐、王建
姚少監詩集	一〇	唐、姚合
溫飛卿集	九	唐、溫庭筠
樊川詩集	七	唐、杜牧
丁卯集	六	唐、許渾
李羣玉集	九	唐、李羣玉
韓內翰集・香奩集	四	唐、韓偓
唐英歌詩	三	唐、吳融
白蓮集	一〇	唐、釋齊已
禪月集	六	唐、釋貫休
浣花集	三	唐、韋莊
和靖詩集	四	宋、林逋
擊壤集	二〇	宋、邵雍
劍南詩藁	八五	宋、陸游
范石湖詩集	三四	宋、范成大
眞山民集	一	宋、眞山民
楊仲宏詩集	八	元、楊載
揭曼碩詩集	三	元、揭傒斯
雁門集	六	元、薩都拉
楊鐵崖詩集	二六	元、楊維楨
大全集	一八	明、高啓
靜居集	四	明、張羽
弇州山人詩部	一七四	明、王世貞
四溟山人集	二〇	明、謝榛
亭林詩集	五	清、顧炎武
精華錄	三	清、王士禎
小倉山房詩集	三七	清、袁枚
甌北集	五三	清、趙翼
揚子雲集	一	漢、揚雄
李元賓文集	六	唐、李觀
李文公集	一八	唐、李翺
樊川文集	一七	唐、杜牧
孫可之集	一〇	唐、孫樵
東萊集	四〇	宋、呂祖謙
渭南文集	五〇	宋、陸游
弇州山人文部	一三六	明、王世貞
震川文集	三〇	明、歸有光
亭林文集	六	清、顧炎武
魏叔子文集	二二	清、魏禧
小倉山房外集	七	清、袁枚
董仲舒集	二	漢、董仲舒
蔡中郎集	一〇	漢、蔡邕
曹子建集	一〇	魏、曹植
嵇中散集	一〇	魏、嵇康
阮嗣宗集	二	魏、阮籍
陸士衡集	一〇	晉、陸機
陸士龍集	一〇	晉、陸雲
陶淵明集	八	晉、陶潛
鮑參軍集	一〇	宋、鮑照
謝宣城集	五	齊、謝朓
何水部集	一	梁、何遜

昭明太子集　五
庾子山集　一六
王子安集　一六
盈川集　二
虞昇之集　七
駱承集　四
陳拾遺集　一〇
李北海集　七
曲江集　二三
李太白集　三五
高常侍集　一〇
杜工部集　三〇
王右丞詩集　二六
毘陵集　二〇
錢仲文集　一〇
次山集　一二
顏魯公集　一六
孟東野集　一〇
柳河東集　四二
韓文（目錄共）　五
元氏長慶集　六〇
劉賓客文集　四〇
白氏文集　七一
李義山詩文集　二一
皮子文藪　一〇
笠澤叢書　六

梁、蕭統　南朝里集　五
唐、周庾信　蘇子美集　一〇
唐、王勃　范文正公集　一二
唐、楊炯　盈川集　一〇
唐、盧照鄰　宋景文集　一二
唐、駱賓王　文忠公全集　一六
唐、陳子昂　老泉公集　一〇
唐、張九齡　韓魏公集　一六
唐、李邕　傳家集　八〇
唐、李白　元豐類稿　五〇
唐、高適　臨川集　一〇八
唐、王維　山谷集　二五
唐、杜甫　東坡全集　三三
唐、錢起　後山集　一〇
唐、韋應物　蘇魏公集　一〇
唐、孟郊　西溪集　一〇
唐、顏真卿　山谷集　一〇
唐、柳宗元　南軒集　一〇
唐、韓愈　山谷集　一〇
唐、元稹　朱子文集　三〇
唐、劉禹錫　嘉祐集　一〇
唐、李商隱　山谷集　一〇
唐、皮日休　文山集　一〇
唐、陸龜蒙　元遺山全集　三〇

唐、陸龜蒙　魯齋全書　七
宋、蘇舜欽　吳文正公集　一〇
宋、范仲淹　道園全集　一六
宋、梅堯臣　誠意伯文集　一〇
宋、宋祁　宋學士全集　三〇
宋、歐陽修　遜志齋集　二四
宋、蘇軾　均藻文淵集　一四
宋、韓琦　大復集　一六
宋、司馬光　空同集　六〇
宋、曾鞏　王文成公全書　一六
宋、王安石　升菴集　八〇
宋、蘇軾　○
宋、黃庭堅　楚辭　一〇
宋、秦觀　玉臺新詠　一〇
宋、蘇軾　唐百家詩選　一〇
宋、陳師道　後山集　一〇
宋、晁補之　雞肋集　七〇
宋、張耒　古今詩刪　三四
宋、陳亮　唐詩選　一七
宋、謝枋得　盛明百家詩　一〇
宋、文天祥　唐詩品彙　一〇〇
宋、楊萬里　唐詩正聲　一〇
宋、陸九淵　聯珠詩格　一〇
宋、張栻　瀛奎律髓　四九
宋、陳與義　詩法家數　一〇
宋、楊時　三體唐詩　一〇
宋、唐庚　唐詩選　一〇
宋、周弼　宋郭茂倩　樂府詩集　一〇〇
宋、金履祥　元方回　瀛奎律髓　四九
元、干濟　明高棅　唐詩品彙　一〇〇
明、高棅　明李攀龍　唐詩正聲　一〇
明、李攀龍　明袁宏道　古今詩刪　三四
明、袁宏道　明鍾惺　唐詩選　一七
明、鍾惺　清聖祖敕撰　御定全唐詩　九三

元、許衡　魯齋全書　七
元、吳澄　元文正公集　一〇
元、虞集　道園全集　一六
明、劉基　誠意伯文集　一〇
明、宋濂　均藻文淵集　一四
明、方孝孺　遜志齋集　二四
明、薛瑄　河汾詩統　一〇
明、何景明　大復集　一六
明、李夢陽　空同集　六〇
明、王守仁　升菴集　八〇
明、楊慎　○
明、劉向　楚辭　一〇
陳、徐陵　玉臺新詠　一〇
宋、王安石　唐百家詩選　一〇
宋、周弼　唐詩三體家法　一〇
宋、郭茂倩　樂府詩集　一〇〇

本書中に引用せし書目は、成るべく頁數を節約して內容を豐富にせんが爲めに、多くは簡稱を用ひたり。例へば

佩文齋詠物詩選	四八六	清、聖祖敕撰
御定歷代賦彙	一八四	清、聖祖敕撰
全唐詩錄	一〇〇	清、徐倬
古詩選	三二	清、王士禎
唐宋詩醇	四七	清、乾隆敕撰
古詩源	一四	清、沈德潛
唐詩別裁集	二〇	清、沈德潛
十八家詩鈔	二八	清、曾國藩
○		
古文關鍵	二	宋、呂祖謙
文章軌範	七	宋、謝枋得
古文淵鑑	六四	清、聖祖敕撰
唐宋文醇	五八	清、乾隆敕撰
唐宋八家文	三〇	清、沈德潛
全唐文	一〇〇〇	清、董誥等敕撰
古文辭類纂	七五	清、姚鼐
駢體文鈔	三一	清、李兆洛
○		
文選	六〇	梁、蕭統
文苑英華	一〇〇〇	宋、李昉等
唐文粹	一〇〇	宋、姚鉉
宋文鑑	一五〇	宋、呂祖謙
文體明辨	八四	明、徐師曾
漢魏六朝七十二家集	三四七	明、張燮
○		
唐六典	三〇	唐、玄宗
漢官舊儀	二	後漢、衞宏
羣書治要	五〇	唐、魏徵等
通典	二〇〇	唐、杜佑
文獻通考	三四八	宋、馬端臨
續文獻通考	二五〇	清、乾隆敕撰
皇朝文獻通考	二六六	清、乾隆敕撰
續通典	一四四	清、乾隆敕撰
皇朝通典	一〇〇	清、乾隆敕撰
大明律	三〇	明、劉惟謙等
○		
太平寰宇記	二〇〇	宋、樂史
輿地廣記	三八	宋、歐陽忞
方輿勝覽	七〇	宋、祝穆
廣輿記	二四	明、陸應陽
大清一統志	五〇〇	清、乾隆敕撰
長安志	二〇	宋、宋敏求
歷代帝王宅京記	二〇	清、顧炎武
日下舊聞	四二	清、朱彝尊
闕里誌	二四	明、陳鎬
水經注	四〇	魏、酈道元
西湖遊覽志	二四	明、田汝成
古今遊名山記	一七	明、何鏜
大明一統名勝志	[illegible]	明、曹學佺
大唐西域記	一二	唐、釋玄奘
天下郡國利病書	一二〇	清、顧炎武
讀史方輿紀要	一三〇	清、顧祖禹
歷代地理志韻編	二〇	清、李兆洛
三輔黃圖	六	撰者未詳
○		
集古錄目	一〇	宋、歐陽修
寰宇訪碑錄	一二	清、孫星衍等
金石萃編	一六〇	清、王昶
考古圖	一〇	宋、呂大防
博古圖	三〇	宋、王黼
西清古鑑	四〇	清、乾隆敕撰
金石索	一二	清、馮雲鵬
金石文字記	六	清、顧炎武
四庫全書總目提要	二〇〇	清、乾隆敕撰
四庫全書簡明目錄	二〇	清、乾隆敕撰
四庫未收書目提要	五	清、阮元

書は書經、詩は詩經、禮は禮記、論は論語、孟は孟子、史は史記、左は春秋左氏傳、荀は荀子、列は列子の略なるの類なり。されば論、學而とあるは、論語の學而篇、孟、離婁とあるは、孟子の離婁篇、左、閔二は、春秋左氏傳の閔公二年の條、史、平準書は、史記の平準書、荀、勸學は、荀子の勸學篇の義なり。餘は類推して知るべし。

本書の刊行につきて、書肆北辰館主人夫妻が、或は鉅萬の貲を捐てて排印の事に任じ、或は數年の久しきに渉りて校字の勞に服し、終始一貫以て本書の完成を援けし功績は、著者の深く感銘する所なり。

檢字

㈠部首從屬の知れ難き文字（友・也・美などを、總畫にて檢出する便に供す。
㈡同畫中の文字は部首の文字を初に出し、次に部首從屬の項に排列せり。
㈢畫數を誤算する處ある文字（臣・表・異など）は、特に前後兩方に重出せり。

一畫

一 一 乙 丿

二畫

二 亠 人 儿 入
八 冂 冖 冫 几
凵 刀 刂 力 勹
匕 匚 匸 十 卜
卩 厂 厶 又
丁 七 乂 乃 九
𠂆 了 刁

三畫

口 囗 土 士 夂
夕 大 女 子
寸 小 尢
尸 屮 山 巛 工
己 巾 干 幺 广
廴 廾 弋 弓 彐
彑 彡 彳 万 丈
三 上 下 个 丫
丸 凡 久 乂 乞
也 于 亡 兀
刈 凡 刃 刀 及
勺 勻 千 卅 叉
子 孑 川 已 巳
巾 干 才 氵 犭
阝

四畫

心 戈 戶 手 支
攴 文 斗 斤
方 无 日 曰 月
木 朩 欠 止 歹
殳 毋 母 比 毛
氏 气 水 氺 火 灬
爪 父 爻 爿 片
牙 牛 犬 王 元
冂 冖 冃 月 丬 氵
不 与 丐 丑 丙
中 丰 丯 丹 之
予 云 互 五 井
亢 什 仁 仂 仍
仄 仆 今 介 从

仍 仏 允 元 内
公 六 兮 冉 冃
冗 冗 凶 刈 办
切 分 勻 勾 勿
匂 匆 化 匹 午
卅 升 卆 廿 卞
卬 厄 厷 友
双 反 收 壬 壬
天 夫 太 天 夫
孔 少 尤 尹 尺
屮 屯 巾 巴 市
市 幻 廿 弍 引
弔 户 扎 无

五畫

玄 玉 王 瓜 瓦
甘 生 用 田 疋
疒 癶 白 皮 皿
目 矛 矢 石 示
内 禾 穴 立 夕
冊 衣 且 丕 世
丗 丘 丙 业 主
丼 乍 乎 乏 仔
仕 仞 仙 仟 仗
付 令 仝 以 兄
充 全 尒 同 册
肋 丹 冬 処 凧
四 囚 出 凸 刊
刋 加 功 匆 匄
勿 包 北 匹 匝

六畫

丱 半 卋 占 卯
厄 卵 去 厶 右
可 号 句 另 叫
叶 古 叩 司 史
只 叱 台 叨 叮
召 叵 叭 叹 回
四 因 囘 外 央
失 本 奴 孕 宂
宄 它 宁 尒 尗
尻 尼 巧 巨 巾
目 市 布 平 幼
庇 弁 弍 弘 弗
必 忉 戉 戊 戾
打 扒 扑 扮 扒
斥 旦 札 朮 末
未 木 正 歹 母

氏 民 永 氷 汁
犮 犯 由 甲 申
辶 防

六畫

竹 米 糸 缶 网
羊 羽 老 而 耒
耳 聿 肉 臣 自
至 臼 舌 舛 舟
艮 色 艸 虍 虫
血 行 衣 襾 汞
両 亘 亙 交 亥
亦 伊 价 伉 伎
企 休 仰 件 伍
伽 任 伐 伽 伏
充 兇 光 先 兌
兆 全 共 冂 再

决 冱 冰 凩 凪
刘 刑 刖 刎 劭
列 劣 匈 匠 匡
卋 卉 卋 印 危
各 合 吉 吃 向
吁 后 吒 吊 吐
吋 同 名 吏 因
囘 囘 囱 圯 圭
在 地 圻 垚 夙
多 夷 夸 好 奸
如 妄 字 存 安
守 宅 寺 尖 尽
帋 州 帆 年 并
庄 异 式 弛 忉
忏 戌 戎 扛 扦

扣 抗 抓 投 收
攻 旭 早 旨 旬
曳 曲 史 有 机
朽 束 朱 朵 朶
次 此 歹 死 求
汗 江 汗 汝 灰
灸 灯 牝 牟 犴
玎 甩 百 礼 究
缶 考 肌 肋 肖
艾 芃 芍 西 辺
迈 让 邛 邙 阢
阡

七畫

臣 見 角 言 谷
豆 豕 豸 貝 赤
走 足 身 車 辛
辰 豕 邑 酉 来
里 長 麦 串 乱
况 些 亨 位 余
克 兌 兎 免 兵
良 刮 刪 初 判
別 利 劬 劫 助
劭 努 問 況 冲
冶 冷 匣 医 床
卣 却 卲 即 卵
厎 吐 呀 吭 告
含 吸 听 呈 君
启 吠 吾 吳 吴
吹 呈 吞 吠 呆
否 吝 呂 呎 困
囤 囤 囤 囤 困
囹 坎 圻 坐 址

毕 分 壮 声 夆
夾 妖 妓 妨 孝
孜 妝 妥 孛 孚
宍 宏 宓 完 宋
宍 龙 廷 厎 局
尿 屁 尾 岌 岑
岩 巡 巫 屆
希 帑 庋 床 序
庇 延 廷 弃 弄
弟 形 彤 役 彸
彷 忌 志 忍 忒
忖 忘 忻 忡 我
戒 成 扼 扵 技
找 抓 承 折 投
收 改 攸 攻 李
旱 旰 旺

更 杓 杠 杏 束
村 杖 杕 杜 呆
杢 杓 李 杢 欧
步 毒 每 汞 汩
沂 汽 汩 沐 灸
災 宍 灵 物 牡
牢 狈 狂 狆 狄
玕 阯 甫 甬 男
町 甸 疔 疙 皐
皂 皃 矣 矸 私
秀 禿 究 糺 系
罕 羊 肜 肛 肝
肯 肖 肘 肚 良
虬 芋 芑 芎 芄
芍 芊 芒 芟 芃
迪 迹 迄 迅 迪

邵一九九 邪一九九 邨一九九 那一九九
邦一九九 邠二〇〇 阮二〇〇 阯二〇〇
阱二〇〇 阽二〇〇 防二〇〇 阪二〇〇 阨二〇〇
阭二〇二

八畫

金二〇三 長二〇三 門二〇四 阜二〇四 隶二〇五
隹二〇六 雨二〇六 青二〇七 非二〇七 並二〇七
靣二〇七 乖二〇八 乳二〇八 事二〇八 亞二〇八
叁二〇九 享二〇九 京二〇九 亩二〇九 依二〇九
來二一〇 侖二一〇 兎二一〇 兒二一〇 兕二一〇
兩二一〇 其二一〇 具二一〇 典二一〇 冒二一〇
凭二一一 函二一一 刮二一一 刲二一一 刑二一一
券二一二 刻二一二 刷二一二 刹二一二 刺二一二
刵二一三 刪二一三 到二一三 劾二一三 劵二一三
匈二一三 匊二一三 匍二一三 匪二一四 匿二一四
協二一七 卅二一七 卒二一七 卓二一七 卑二一七

卦二一七 卷二一七 卻二一七 卷二一七 卸二一七
卹二一七 厓二一七 取二一七 受二一七 叔二一八
叛二一八 咎二一八 呴二一八 和二一八 咪二一八
呺二一八 哲二一八 周二一八 呪二一八 命二一八
困二一八 固二一八 垂二一八 夜二一八 奄二一八
奇二一八 奈二一八 奉二一八 委二一八 妻二一八
妾二一八 妬二一八 季二一八 孤二一八 孳二一八
孟二一八 宛二一八 宜二一八 官二一八 宗二一八
宕二一九 宙二一九 定二一九 宬二一九 尚二一九
屆二一九 届二一九 居二一九 屈二一九 屎二一九
岡二一九 岳二一九 岸二一九 岩二一九 岑二一九
岱二一九 岩二一九 岔二一九 帚二一九 帑二一九
帛二一九 帘二一九 幸二一九 幷二一九 底二一九
廸二一九 弄二一九 弦二一九 弩二一九 征二一九
彼二一九 佛二一九 往二一九 忽二一九 忮二一九
忠二一九 忝二一九 忽二一九 念二一九 忿二一九

怪二一九 怍二一九 或二一九 戔二一九 戕二一九
戾二一九 所二一九 房二一九 戾二一九 承二一九
拗二一九 政二一九 放二一九 欲二一九 斉二一九
斯二一九 斧二一九 於二一九 旁二一九 易二一九
昊二一九 昂二一九 昕二一九 昤二一九 昏二一九
昆二一九 昔二一九 昌二一九 昇二一九 昃二一九
昔二一九 盹二一九 明二一九 旺二一九 昏二一九
朋二一九 服二一九 朋二一九 杳二一九 杲二一九
果二一九 杰二一九 枓二一九 枲二一九 東二一九
林二一九 枺二一九 柿二一九 枚二一九 枉二一九
欣二一九 歧二一九 武二一九 殀二一九 殁二一九
毒二一九 毚二一九 氓二一九 氛二一九 泣二一九
泊二一九 泪二一九 沓二一九 炎二一九 烝二一九
炊二一九 炙二一九 炉二一九 爭二一九 爬二一九
爸二一九 牀二一九 版二一九 物二一九

牧二一九 狀二一九 狄二一九 狎二一九 狐二一九
狗二一九 狌二一九 狃二一九 玨二一九 玫二一九
玫二一九 珏二一九 甽二一九 畫二一九 畋二一九
畛二一九 畀二一九 畏二一九 痂二一九 的二一九
盂二一九 盱二一九 盱二一九 直二一九 直二一九
知二一九 矻二一九 矽二一九 祁二一九 祀二一九
社二一九 秊二一九 秉二一九 穹二一九 空二一九
穹二一九 竺二一九 笁二一九 罔二一九 羊二一九
羌二一九 者二一九 耵二一九 肱二一九 育二一九
肮二一九 胖二一九 肩二一九 股二一九 肯二一九
肱二一九 肢二一九 肫二一九 肭二一九 肺二一九
肧二一九 肪二一九 肥二一九 臥二一九 臥二一九
臼二一九 臾二一九 舍二一九 芸二一九 芽二一九
芥二一九 芰二一九 芨二一九 芹二一九 芩二一九
花二一九 芭二一九 芤二一九 芟二一九 芝二一九
芷二一九

芯 芴 芮 芽 苞
芭 芳 芼 芾 芘
芙 芣 芬 芟 虎
虱 虺 衫 表
虻 軋 迓 近
迎 迄 迪 返 迫
邯 邱 邵 邴 采
邶 邳 邺 邸 阡
阿 阽 阸 阼
陀 陋 陋 陂 附
阮

九畫

面 革 韋 韭 音
頁 風 飛 食 首
香 乘 乾 亟 亭
亮 京 係 信 俎

促 兗 俞 胄 冒
冠 函 刻 剋 剉
削 前 則 剃 刺
勁 勅 勉 勃 勇
匍 匿 南 卻 卼
卽 戚 厚 厘 厖
叟 叙 叛 哀 咢
咸 咼 哉 咨 咫
品 型 垛 垠 奕
奐 奎 奏 契 奔
威 姦 姘 姜 姿
孩 宦 宥 封 屋
屎 峯 巷 帟 希
帥 帝 幽 庠 度
廻 建 廼 弈 弇
拳 弧 弭 彖 彥

徊 後 很 徇 徉
怨 急 思 怎 怱
怠 怒 扃 扁 拏
拜 叟 故 斫 既
昱 昫 昏 昨 是
祀 春 星 昭 昵
昼 昳 昧 昴 昧
昜 晒 易 昜 朐
朏 架 束 查 柴
柿 桌 柔 朱 染
柰 某 某 欽 垣
歪 殃 殄 段 毗
毘 毖 泰 泉 洫
炬 炭 炱 炙
狙 狗 胖 牯 牲
牴 臭 狐 妙 玆

珍 珀 瓮 瓯 廷
甚 畏 界 畊 畫
畎 癸 皆 皈 皇
盈 盅 盃 盆 看
盼 相 盾 省 眊
盼 眉 明 矜 矧
侯 欣 耆 砒 祈
祐 禹 禺 秏 科
秋 炵 秕 穿 穿
突 竽 竿 籾 籽
籴 紀 紅 紃 紕
紂 紅 罘 羌 羌
美 羿 耇 者 耎
耐 耏 耑 耔 耶
胃 胤 胛 胠 胸

胡朐胏胗胥
胆胙胎胆胝
胄胅胈背胚
胞胖胕致舌
舁舠舡芔苡
苢英苑苛茄
苷苣苦苽苟
苗茈若苴苫
茄苒苔苧苕
茶苳苺苞茅
茆茇茉范苾
苠苻茀苹苗
茂苜苯苙苓
虐虺虻邮盂
衍衎袁表衿
衱衽衲袂要

觔訇計訂訃
貟貞負赴赳
軍迤迦迴迮
述迱迨迸迣
迢迪迭迫郁
郊郃邽邢郄
郈郅郇郕酋
酊重陔降陡
限陎陏陊陌
陋

十畫

馬骨高髟門
鬯鬲鬼乘亳
候倉修倏倐
假倒党兼冔
冓冤冣冢冡

冥准凊剡剛
剞剋剔剕剟
剔剜剡剕匪
原厝厞叟員
哥哭哿唇唐
哲唄垂埋夏
奚奘套畚娑
孫宴家宮宰
宸宬宵容尅
射尗嵯屓峩
峷峱島峯差
帬師席庫座
弱彧徑徒恚
恩恝恭恐恣
息恥恧恙恋
扆扅扇拳挈

拳挐拿敉效
斋料旃旄旆
旂旁旅晏晃
晈時晉晋晌
晁書朔朒朕
朓案栞桀栽
桑桒桌栾栗
欬欲歭殈殷
毨毦毣氜氣
烏烋烕烖烝
烈爹牂狺狷
狸玺珩珥班
瓷畟畜畝畞
畚留畠疴疾
皋盎盆眈眩
真眞眣眚眦

青三三 眙三三 脊三三 矩三三 砦三四
磐三四 破三四 些三四 神三四 祟三四 宕三四
祐三四 泰三四 窘三四 宬三四 竝三四
竜三四 笄三四 笊三四 笔三四 粗三四
粉三四 粍三四 索三四 紙三四 素三四
紡三四 紕三四 紊三四 紋三四 缺三五
罡三五 罟三五 罘三五 買三五 芰三五
羔三五 羌三五 羧三五 牂三五 翁三五
翅三五 耆三五 耄三五 耋三五 耘三五
耗三五 耿三五 耽三五 耻三五 肉三五
胭三五 胺三五 胙三五 胸三五 胃三五
胱三五 脅三五 脇三五 脂三五
腫三五 腕三五 腔三五 脊三六 脁三六
胴三六 能三六 脈三六 脉三六 胼三六
腴三六 臭三六 臭三六 舁三六 舐三六
般三六 舸三六 茵三六 荄三六 荇三六
菱三六 茳三六 茴三六 荒三六 苦三六
荊三六 攸三六 莨三六 草三六 茨三六
荓三六 茲三六 荏三六 茱三六 茷三六
茂三六 荀三六 茹三六 耳三六 西三六
荃三六 荐三六 茶三六 荅三六 夷三六
荷三六 茂三六 茫三六 筆三六 笒三六
茯三六 茗三六 茣三六 茹三六 茄三六
虓三七 虔三七 虩三七 蛊三七 蚩三七
蚤三七 盆三七 蚕三七 蚍三七 訌三七
記三七 訕三八 討三八 訒三八 衾三八
衰三八 衷三八 袘三八 裨三八
祛三八 袖三八 袗三八 袒三八 袂三八
袍三八 袹三八 袜三八 被三八 袢三八
衰三八 衾三八 豇三八 豚三八 豙三八
豺三八 貢三八 財三八 貳三八
赶三八 起三八 跂三八 躬三九 辱三九
逐三九 迴三九 适三九 逆三九 逅三九
迹三九 送三九 退三九 迺三九 逃三九
追三九 迸三九 迷三九 迥三九 逼三九
郢三九 郜三九 郝三九 郊三九 郡三九
郤三九 郝三九 郎三九 郭三九 郎三九
酒三九 酎三九 配三九 針三九 釗三九
釘三九 釜三九 院三九 陝三九 陞三九
陵三九 陞三九 陋三九 陝三九 陣三九
除三九 陟三九 陡三九 陛三九 陋三九
雀三九 隼三九 隻三九 晉三九

十一畫

高三九 魚三九 鳥三九 鹵四〇 鹿四〇
麥四〇 麻四〇 乾四〇 做四〇 兜四〇
冕四〇 冨四〇 凰四〇 剪四〇 副四〇
勘四一 勗四一 動四一 務四一
勤四一 匏四一 匐四一 匙四一
匾四一 匿四一 區四一 卵四一
卿四一 厠四一 參四一 啞四一 唯四一
啓四二 牾四二 售四二 商四二 商四二
問四二 啚四二 國四二 圉四二 堊四二
基四二 堇四二 埶四二 堅四二 執四二
堂四二 涅四二 梵四二 壺四二 斎四二
娶四二 婆四二 婓四二 婪四二 婁四二
婁四二 孰四二 寅四二 寄四二 寇四二
宿四三 寂四三 密四三 尉四三 尋四三
將四三 專四三 屏四三 屏四三 崖四三
崗四三 崟四三 崋四三 崑四三 崔四三
崇四三 崒四三 崙四三 巢四三 帷四三
常四三 帶四三 帳四三 康四三 庶四三
強四四 張四四 彗四四 彩四四 彫四四
彪四四 彬四四 御四四 從四四 從四四
得四四 徘四四 悠四四 患四四 悉四四

悤憂戚扈敎
敖救敍敘敕
敗敏斌斛斜
斬断旑旌旋
族既旣晧晛
晨晟晳晰晝
晚晡曹曼朘
望朙朗朖梟
桼條梵梦梨
梁梺欵欷欸
欲殍毫毬毯
添焉焄牼烹
爽牽犀犁猜
率玈現理瓠
瓷瓶甜甛產
畡畢略畧異

皐皎盖盒盔
盡眷眾祭票
离窑窓窒竟
章笟笮笠粗
粕粒紺紘細
紮紫累缻罛
罣羞習翊翌
翎翏耇联聊
胔脚脛脞脧
脩脤脣脫脡
脰脢脬脗脘
脯舂舷舶舵
莠莛荷莪莖
莟莙莒莞莢
莧莎莝莘莬
莊莌莈莚荻

荼茥荳莓莔
莫莩莆[illegible]荊
萛莉莅虛虖
處虙虗蚯蛋
衒術袈衮袋
袤袞裀袷袿
袺袴袱覂[illegible]
規覓覔訝訢
許設訪觖觝
觕谻豉豚貨
貫貪貧赦跂
跖軟逌逑逕
這造逡逝逍
速逐逞逓逖
途透通逗逋
逢連郵郭郰

郟郴部酓酕
野釭釦釤釧
陰陷陭陲陬
陶陳陪陴陸
陵雀雩頃項
飢飤飡飣馗
鬥

十二畫

黃黍黑黹傚
傘牻凱剴割
勛勝勞博厥
厦厤粢喜喣
喬喪喪啻善
單喆堯堥報
堡埶墅壹壺
壻奡奢奠婺

孱寒富尋尊
就尰屬嵗崺
嵜嵌嵒嵓嵆
嵇前嵐嵂巽
幂幇幾弑强
弼弻彘彭復
惡惎惠惑惚
惄悲悶惪戟
扊扉掔掛掌
掣攲敢散敧
敦敝斑斐斝
斮斱斯旐晻
晷景晶晴晣
智普最曾替
期朞朝棄棊
棘棨棗棠棐

棼棻棃欹欿
欽欻款欹殘
殼淼渠焱焭
焦然焚無爲
牚犇犂猋琴
琵琶甥甤甦
甯異畫番畬
畱疏疎痘登
發皓皕皴盛
盜睍矞矟規
短硧硯碑硲
窩窗竦童筈
粵粥粟絃絎
絜絭絲絮絕
條絫羨着翕
翔耋聒胾脉

腔腒腎腯脽
腊脺腅脹腄
腆腓脾腗腑
腁腂腕臯𦧲
䑣舄舃舒舜
菴萎菀菸菡
萁萓菊菌菫
華菓菅菤菰
菎菜菑菆菖
菘菽菹萃萑
萋菁菪萄菩
菼萇菂菟菠
莽萌菲萆菔
萍菩華萊菱
萩虛虜蛩蛬
蛓衆街衕衖

裁裂裌裙裓
裑裋裞裎補
裕裡覃視覗
覘觚觜觗訾
詈詘豙象貁
賀貴貸貳貰
貸買費貰貿
赧越距軰輂
辜逶逸逵逭
週進逮逴逷
逬遂鄗鄆鄂
鄄都鄐酣酥
量釿開閏陻
陰隁階隅隍
隉陼隊隋隄
陽隃隆隈隇

雄雅雁屜集
軒項須順颪
飧馭馮髡鬿

十三畫

黽鼎鼓鼠亂
亶傲僉㑺剿
勤勦勢勣募
勠匯郤厩厪
嗀嗣嘗嗇嗟
塋塍塑塞塗
壼奧媵㝅孶
寘寗嬴尟尠
嵬嵩幹廋彀
彙徯徬微愛
意感愚愆想
愁惹惷愍愈

戡戣戢搴擊
敬斒斟新旒
暗暈暑暋㬹
會楽業楶楚
楙㮚歆歲殿
毓毹準煕煦
煢煞煮照煎
煔煩爺犎猷
猶猷瑟瓻甞
畺畫當晳盜
盞盟睪睛督
矮碁碎碓碚
禁禀禽稚稟
竪筧筭粲粱
綌絺罨罫罪
罧罩置義羣

群羨翛聖聱
肆肄肅腥腰
腎腭腳腱腮
腫腥腠腦腶
腸腜腯腰腜
腷腹腴腲腺
臺舅與辞舝
葊葦葳葚葽
葉葭葥葢葶
葛葵葷葀萱
葫葉葬葘葸
萩葺葚葅葰
萉葱蒂著葶
董葩葆萬葍
葢葡葑葧葯
落葎葛號虞

蜃蜀蜂衙裒
裔裘裠装裝
裊裒裏裷裾
褂裼裧裱裯
裴裨裱裸裲
褄覜解觜詠
詡詹詹豋豊
豢豤賈資賃
絶跫輂載辠
辞辟農遏達
遊運遐遝遇
過遑遒遂遄
逿道達遉遁
逼遍逾遒鄖
鄔鄗鄉鄒鄏
鄍酨酪鈿隘

隕隖隔隗隙
隒雄雊雌雎
雋雉雍雷零
靖靳靴靷頎
頍頓頊頑頌
預颭飲飱飭
馯馱髡髢鳩
鳬鳧鳲黽鼎
亂鼓

十四畫

鼻齊僰兢凳
凴勦匱匲厭
厮敫嘉嘏嗸
嘂嘗墍塾塹
墅塵墊墓壽
夐夤夥夢夣

奩奬奪奩嫛
嫠孵寠寡寨
察實寧寥對
屢嶄嶈嶋嶌
徹幕弊彰徵
慇愨愿慁慈
愬態慂截戩
搴敱敲斡斲
斷暠㬥暢朅
榮槀榦榖槊
槑槃歌歰歊
殼毓氳滎漆
熊熙熏熒爾
犖獃獄瑰瑪
甃甄睦疑竃
皸皷監盡睿

箏箸箙箬碩
碧算箐精粻
粼緊綮綪緋
維罳署罰罽
翠翟翡聚聟
聞肇肈腐膃
膃膏膈膗膄
膝腿膇膀膞
膍膂骨臧臺
與碭舞蒻蓋
蒿蒟蒯蒹蓑
蓌蒼蒴蒜蓍
蒔蒐蒺蓁蒻
蒓蒸蓐蓆蒨
蒩蓀蓎蒳蓄
蒡蓖蓂蒲蒱

蒙蓉蓏蒞虡
蜚蜇蜑蜸蜜
裹製裂裴褫
褐褘褌褖褚
褓複褊褕覡
誓豪貍賓賨
賖辣辡遙遠
遣遘遡遜遞
遝遞鄢鄞鄣
鄙鄭鄘鄜鄗
銜隟隙際障
雒需靤靼鞁
頗領颯颭馰
骰髤髦魁魂
鳶鳩鳲鳳鳴
麼麽

十五畫

齒幂劇劍劈
勰勸匳厲器
墮墜墨壄奭
寬履嶔嶞幣
廣弊影徵徹
德慰憂慤慧
慶慙慫慼憋
憃慝憑慕慾
慮戲戮摯摩
摯摹摩毆敻
數敵敷暫暬
暴暮槱槩槪
樂槷槳槧樊
樣歐毿氂滕
潁漦燎熨熬
穎熟熱犛獒
獎瑩瑴甄畿
瘞皚皜皺盤
瞏磑確碻磈
碼磐磊禜稾
稿稽穀窯糊
緬緜罵罷羮
翬翫翥翦翮
膠膝膞膣腸
膜膚膵膢興
舖蔚蔭蔇蕌
蓊蔮蓺蔻蔛
蓑蔡蔪蓰蓼
蔗蔣蕃蓿蕁
蔬蓴蔎蔙蓯
蔥蔌蔟蓷蔕
蓫蔦蓧蔋蔓
蓽蔔蓱蔑蔀
蓬蔤蔈蔆蔘
蓮蔞虢虣蝨
蝱螯衛衞衝
褎褏褒褞褥
褦褫褪䙛閭
誓豎賡賢質
賞賓賣賚輝
輩輦辤遨遭
遮適遫遲遯
遯郭鄴鄲鄭
鄧鄱鄰鋈隤
隥隣震霄靚
靠靦鞏鞏餈
養頤頫駕駑
髲魄魃魅魯
鴉鴈鴃鴇鳫
麃麾黎鼎鼐

十六畫

龍龜冀冪劓
劒劑勳叡噩
器墾壁壅奮
嬖嬴學導寰
嶪嶧彝徼憨
憙憖憩憲憝
憊憑憋戲戰
擎整整暨暹
曇曆曈橫橛
榮樵樷橐歷
氅燕燄熹燓
璜瓢甌甎甍

褰盥盧瞖瞢
磬磛磨禦穎
穌窶窻篙築
篤縠縈縞縣
穀縢縏罃罩
罹翮翰翯膂
膮膷膬膲膳
膩膨膰膴[illegible]
餱臻輿舘蔿
蕕蔭蕓蕚蕑
蕢蕖蕀款蕙
蕎蕨蕞蕈蕣
蕤蕊蕝蕉蕘
縕蓴蕩蕁蕠
蕛蕆蕃蕪蕢
蔽[illegible]蕠蕗戲

螢螙螣螌融
衛衡褰褔襁
襀褶褵褸褌
親覦觱豫賮
賫賴辥辨辦
辧遺遹選遵
遶遷遹遴遼
鄶鄴隩險隧
隨隸巂霍霏
靜靛靦鞗頮
頭頯餐駡鬳
鮆鴥鴝麇黔
默鼽齓

十七畫

龠勵匵嚊壓
壑嬰嬲嬴孺

嶽嶷嶺幫徽
應懃懇懋戲
擎擊擘戳斂
斵嚮檃檪檗
歛龜營燮盩
瞥磺磿竁篡
篾簏糜糞繫
繇縶縻繁縛
罄罽罾羲翳
聲聳聲臆臄
膾臉臊臅臑
臈膻膽膿臂
臃膺臈臨舉
艱薆薁薀薙
薢薨薅薌薑
薖蕺薊薧薜

蕺薪薐薔薥
蕭薛薦薘薝
薙薄薇薛薐
蘋薩薏蕾薟
薕薐薈虧螯
螽螫蟄蟇蟁
蟊褽襄褻襃
襆襐襌襏覆
覧謑謇謄謈
豁谿谿豳賽
賾賸蹇轂輿
邀邂遽還邅
避邁鄹醬醜
鍪鍪鍫隱隰
隮隸雖霞韓
韔顆頷髻鹹

鬴魈鯗鴴鴻
瑀衛麇黈黏
黝黛黜點黻
黿鼾齋齔

十八畫

叢嚚壘嬰彝
懕懘懟懣戴
擘擧擊斃斷
曓朦檿歸殯
懿爵璧甕甓
盬瞿瞽礐竄
簡簧簪簠繕
翺翹翻翼職
臕臍臑臏舊
薳藁薿薰藏
薩薾藎藉藇
薯薺藂薹對
藐藕蕹藍虩
虧襖襟襘襡
襚襜襠襢謷
謦豐賾贄贅
蹔蹩邇邃邈
鄭鄺醫醬釐
鑒鎜隮隤雟
雙雜雛雘顏
鞫鞶鞮顒題
鵞馥鷃魏魋
鯈鯊鵑鵠鯿
麐黠鼂鼕鼪
鼫鼬

十九畫

儵嚮嚭壟孼
寵寳巃懲攀
櫫櫜櫐歠盩
爇獸璽瓣疇
疆盩礜穨競
簷繫繭繹羆
羃羅羹羸臝
臍臏臕臘艷
藭藝藕藪藚
藤藩藨藦藥
藶藟藜蟹蠁
蟇蠃襞襪襦
襩襤覈覇覷
贇贋贊贗蹵
躄辭辴邊邃
邋鄴醮醯鏧
隴難靡鞶鞶
韡韻類颸颺
騖鬷鶱離鵲
壚麗麓黟黼
攞鼃鼗鼛鼪
鼫齎齕齗龐

二十畫

顛嚴嚳孃孽
寶歸懿懸斅
爛朧櫱蘗欅
獻璺礬礜鑑
纂辮罌耀臙
臚臛覺藹蘊
蘅蘄蘆蘗蘐
蘧藻藷蘂蘇
蘀藺蘘蘋蘑
蘱蘮蘭蘞蘆

龔 [illegible] 櫝 襖 襮
禨 觸 鷹 警 謦
譬 贏 贍 躉 躄
辮 酈 [illegible] 飄 馨
騫 驚 騰 鶩 麵
黤 黥 黨 黧

廿一畫

亹 囂 [illegible] 屬 巍
攀 爛 曩 隳 礔
竈 辯 纇 纍 罍
羼 羸 [illegible] [illegible] 翳
夔 蘠 蘧 蘖 蘘
蘚 蘩 蘪 蘭 蘞
蠚 蠢 蠹 蠡 襯
襱 覺 譽 贓 辯
邏 邐 酆 霸 [illegible]
飆 驂 驁 鷙 驀
鶴 魔 騰 鶯 鶱
鷇 髏 黯 [illegible] [illegible]
鼙 齎 齦 齧 黿

廿二畫

囊 囅 孌 孿 巔
巒 彎 彲 懿 戳
曡 疊 龝 竸 籠
纙 羇 聽 聾 臞
臟 麴 蠱 襲 襳
襴 [illegible] 覽 贗 贖
轡 鬻 酈 鑒 霽
韃 飆 響 饗 饕
饔 饘 驚 驎 驕
髑 鬝 龔 龕 龢

廿三畫

[illegible] 變 巖 [illegible] 戀
攣 欒 籧 蘱 蘸
虀 廱 蘿 蘺 蘽
蠨 蠲 蠱 蠭 犧
纖 齏 衢 讎 讐
讐 變 讜 靈 護
鑒 饜 纂 驚 鸁
鬮 鷺 黴 齏

廿四畫

屭 矗 纘 籩 糴
羈 蠶 蠹 蠹
衢 讒 讖 顰
豔 魘 黶 鷽 灝
鷹 鹽 [illegible]

廿五畫

戇 籬 蘖 欖 纛
蘺 蠻 釃 觀 黌
鬭 驥 驪 [illegible] 鼉

廿六畫

鼈

廿七畫

攫 爵 驤
犨 讜 鑾 鑿 闥
驥

廿八畫

戇 豔

廿九畫

爨 鬱

三十畫

鸞

卅二畫

籲

当用漢字部首別索引

一、本表は「当用漢字表」「当用漢字別表」（義務教育漢字）「当用漢字音訓表」を総合したものである。

一、「当用漢字別表」の漢字には＊印を付した。

一、「当用漢字字体表」によって字体が整理された字は〔 〕の中に旧字体をしるした。ただし、いちじるしい変化のない字体、および、くさかんむり〔艹〕が〔艹〕に、しんにゅう〔辶〕が〔辶〕になった字体などは、原則として省略した。

漢字	読み	頁
一部		
＊一	イチ・イツ・ひとつ	一
＊丁	テイ・チョウ	二〇
＊七	シチ・ななつ	一七
丈	ジョウ	四〇
＊三	サン・みつ	三四
＊上	ジョウ・うえ・かみ・あげる・のぼる	三六
＊下	カ・ゲ・した・しも・さげる・くだる・もと	二二
＊不	フ	四二
且	かつ	四九
＊世	セ・セイ・よ	四九
丘	キュウ・おか	四八
丙	ヘイ	五一
丨部		
＊中	チュウ・なか	五三
丶部		
丸〔丸〕	ガン・まるい	五七
丹	タン	五七
＊主	シュ・ス・ぬし	五九
丿部		
＊久	キュウ・ク・ひさしい	六〇
乏	ボウ・とぼしい	六四
＊乗〔乘〕	ジョウ・のる	六四
乙部		
乙	オツ	六五
＊九	キュウ・ク・ここのつ	六六
乳	ニュウ・ちち・ち	七〇
乾	カン	七〇
乱〔亂〕	ラン・みだれる	七二
亅部		
了	リョウ	七三
＊事	ジ・こと	七四
二部		
＊二	ニ・ふたつ	七五
互	ゴ・たがい	八〇
＊五	ゴ・いつつ	八〇
井	セイ・ショウ・い	八〇
亜〔亞〕	ア	八八
亠部		
亡	ボウ	八九
＊交	コウ・まじわる・まじる	九一
享	キョウ	九二
＊京	キョウ・ケイ	九二
人部		
＊人	ジン・ニン・ひと	九七
＊仁	ジン	一〇三
＊今	コン・キン・いま	一〇一
介	カイ	一〇〇
＊仕	シ・つかえる	一〇五
＊他	タ	一〇七
＊付	フ・つける	一〇九
＊代	タイ・かわる・よ	一〇八
＊令	レイ	一〇九
＊以	イ	一〇四
仰	ギョウ・コウ・あおぐ・おおせ	一一三
仲	チュウ・なか	一一五
＊件	ケン	一一四
＊任	ニン・まかせる	一一四
企	キ・くわだてる	一一一
伏	フク・ふせる	一一六
伐	バツ	一一五
＊休	キュウ・やすむ	一一三
伯	ハク	一一四
伴	ハン・バン・ともなう	一一五
伸	シン・のびる	一二一
伺	シ・うかがう	一二一
＊似	ジ・にる	一二一
但	ただし	一二三
＊位	イ・くらい	一一七
＊低	テイ・ひくい	一二三
＊住	ジュウ・すむ	一二三
佐	サ	一一九
＊何	カ・なに	一一八
＊仏〔佛〕	ブツ・ほとけ	一二五
＊作	サク・サ・つくる	一二〇
佳	カ	一二八
＊使	シ・つかう	一二一
＊来〔來〕	ライ・くる	一二五
＊例	レイ	一二五
侍	ジ・さむらい	一二〇
＊供	キョウ・ク・そなえる・とも	一二九
依	イ・エ	一二七
侮〔侮〕	ブ・あなどる	一三二
侯	コウ	一三六
侵	シン・おかす	一三六
＊便	ベン・ビン	一三三
＊係	ケイ・かかる	一三五
促	ソク・うながす	一三九
俊	シュン	一三八
＊俗	ゾク	一三九
＊保	ホ・たもつ	一四〇

信 シン 一七
*惨 サン・ザン・みじめ 一七
併 ヘイ 一七
*侮 ブ・あなどる 一七
*併 ヘイ 一七
*倉 ソウ・くら 一七
*個 コ 一七
*倍 バイ 一七
倒 トウ・たおれる 一七
*候 コウ 一七
*借 シャク・かりる 一七
做 ホウ 一七
*値 チ・ね・あたい 一七
倫 リン 一七
*仮〔假〕 カ・ケ・かり 一七
*偉 イ・えらい 一七
*偏 ヘン 一七
*停 テイ 一七
*健 ケン・すこやか 一七
*側 ソク・かわ 一七
偶 グウ 一七
傍 ボウ 一七
*傑 ケツ 一七
*傭 ヨウ・やとう 一七
*催 サイ・もよおす 一七
*伝〔傳〕 デン・つたえる 一七
*債 サイ 一七
*傷 ショウ・きず 一七
*傾 ケイ・かたむく 一七
*働 ドウ・はたらく 一七
*像 ゾウ 一七
*僚 リョウ 一七
*僧〔僧〕 ソウ 一七
*価〔價〕 カ・あたい 一七
*儀 ギ 一七
*億 オク 一七
*倹〔儉〕 ケン 一七
*儒 ジュ 一七
*償 ショウ・つぐなう 一七
*優 ユウ・やさしい 一七
儿部
*元 ゲン・ガン・もと 一七
*兄 ケイ・キョウ・あに 一七
*充 ジュウ・あてる 一七
*兆 チョウ 一七
*先 セン・さき 一八
*光 コウ・ひかる 一八
*克 コク 一八
*免 メン・まぬかれる 一八
*児〔兒〕 ジ・ニ 一八
入部
*入 ニュウ・いる 一八
*内 ナイ・ダイ・うち 一八
*全 ゼン・まったく 一八
*両〔兩〕 リョウ 一八
八部
*八 ハチ・やつ 一八
*公 コウ・おおやけ 一八
*六 ロク・むつ 一九
*共 キョウ・とも 一九
*兵 ヘイ 一九
*具 グ 一九
*典 テン 一九
*兼 ケン・かねる 一九
冂部
冊 サツ 一九
*再 サイ・ふたたび 一九
冒 ボウ・おかす 一九
冖部
*冗〔冗〕 ジョウ 一九
冠 カン・かんむり 一九
冫部
*冬 トウ・ふゆ 一九
*冷 レイ・ひえる・つめたい 一九
准 ジュン 一九
凍 トウ・こおる・こごえる 一九
凝 ギョウ・こる 一九
几部
凡 ボン 一九
凵部
凶 キョウ 一九
*出 シュツ・スイ・でる・だす 一九
刀部
*刀 トウ・かたな 一九
*刃〔刃〕 ジン・は 一九
*分 ブン・フン・ブ・わける 一九
*切 セツ・サイ・きる 一九
刈 かる 一九
*刊 カン 一九
刑 ケイ 一九
*列 レツ 一九
*初 ショ・はじめ・はつ・はじめて 一九
*判 ハン 一九
*別 ベツ・わかれる 一九
*利 リ 一九
*制 セイ 一九
*刷 サツ・する 一九
*券 ケン 一九
刺 シ・さす 一九
刻 コク・きざむ 一九
*則 ソク 一九
削 サク・けずる 一九
*前 ゼン・まえ 一九
剖 ボウ 一九
剛 ゴウ 一九
*剰〔剩〕 ジョウ 一九
*副 フク 一九
割 カツ・わる 一九
*創 ソウ 一九
劇 ゲキ 一九
*剤〔劑〕 サイ 一九
*剣〔劍〕 ケン・つるぎ 一九
力部

力 リキ・リョク・ちから 三四
功 コウ・ク 三四
加 カ・くわえる 三四
劣 レツ・おとる 三四
助 ジョ・たすける・すけ 三四
努 ド・つとめる 三四
効〔效〕 コウ 三四
幼 ヨウ 三四
勅 チョク 三四
勇 ユウ・いさましい 三四
勉 ベン 三四
勤 キン・つとめる 三四
務 ム・つとめ 三四
勝 ショウ・かつ 三四
労〔勞〕 ロウ 三四
募 ボ・つのる 三四
勢 セイ・いきおい 三四
動〔動〕 ドウ・うごく 三四
勧〔勸〕 カン・すすめる 三四
勿 モチ 三四
匁 もんめ 三四
包 ホウ・つつむ 三四
化 カ・ケ・ばける 三四
北 ホク・きた 三四
匠 ショウ 三四
匹 ヒキ・ヒツ 三四
匿 トク 三四
区〔區〕 ク 三四
十 ジュウ・とお 三四
千 セン・ち 三四
升 ショウ 三四
午 ゴ 三四
半 ハン・なかば 三四
卑 ヒ・いやしい 三四
卒 ソツ 三四
卓 タク 三四
協 キョウ 三四
南 ナン・ミナミ 三四
博 ハク 三四
占 セン・しめる・うらなう 三四
危 キ・あやうい 三四
印 イン・しるし 三四
卸 おろし 三四
即〔卽〕 ソク 三四
厘 リン 三四
厚 コウ・あつい 三四
原 ゲン・はら 三四
去 キョ・コ・さる 三四
参〔參〕 サン・まいる 三四
又 また 三四
及 キュウ・およぶ・および 三四
友 ユウ・とも 三四
反 ハン・タン 三四
叔 シュク 三四
取 シュ・とる 三四
受 ジュ・うける 三四
口 コウ・ク・くち 三四
古 コ・ふるい 三四
句 ク 三四
叫 キョウ・さけぶ 三四
召 ショウ・めす 三四
可 カ 三四
史 シ 三四
右 ユウ・ウ・みぎ 三四
司 シ 三四
各 カク・おのおの 三四
合 ゴウ・あう 三四
吉 キチ 三四
同 ドウ・おなじ 三四
名 メイ・ミョウ・な 三四
后 コウ 三四
吏 リ 三四
吐 ト・はく 三四
向 コウ・むく・むかう 三四
君 クン・きみ 三四
吟 ギン 三四
否 ヒ・いな 三四
含 カン・ふくむ 三四
呈 テイ 三四
具 グ 三四
吸 キュウ・すう 三四
吹 スイ・ふく 三四
告 コク・つげる 三四
周 シュウ 三四
味 ミ・あじ 三四
呼 コ・よぶ 三四
命 メイ・ミョウ・いのち 三四
和 ワ・やわらぐ 三四
咲 さく 三四
哀 アイ・あわれ 三四
品 ヒン・しな 三四
員 イン 三四
哲 テツ 三四
唆 サ 三四
唯 ユイ 三四
唐 トウ 三四
唱 ショウ 三四

*商 ショウ・あきなう 三六
*問 ヒン・とう 三八
啓 ケイ 三五
*善 ゼン 三四
*喚 カン 三〇
*喜 キ・よろこぶ 三九
喪 ソウ・も 三一
喫 キツ 三一
*単〔單〕タン 三四
嗣 シ 三七
*嘆〔歎〕タン・なげく 三五
*器 キ・うつわ 三三
噴 フン 三五
嘱〔囑〕ショク 三九
*厳〔嚴〕ゲン・ゴン 三七
口部
四 シ 三四
四 シ・よつ 三〇
回 カイ・エ・まわす 三五
因 イン・よる 三四
困 コン・こまる 三六
*固 コ・かためる 三七
圏 ケン 三八
*国〔國〕コク・くに 三八
*団〔團〕ダン・トン 三七
*円〔圓〕エン 三七
*園 エン・その 三五
*図〔圖〕ズ・ト・はかる 三三
*団〔團〕タン 三三
土部
*土 ト・ド・つち 三四
*在 ザイ 三六
*地 チ・ジ 三七
*坂 ハン・さか 三八
*均 キン 三七
坊 ボウ 三七
坑 コウ 三九
坪 つぼ 三三
垂 スイ 三三
*型 ケイ・かた 三三
埋 マイ・うめる 三五
城 ジョウ・しろ 三四
城 イキ 三〇
執 シツ・シュウ・とる 三八
培 バイ 三九
*基 キ・もとい・もとづく 三六
*堂 ドウ 三九
*堅 ケン・かたい 三七
堤 テイ・つつみ 三九
堪 カン・たえる 三九
*報 ホウ・むくいる 三九
*場 ジョウ・ば 三九
塊 カイ 三九
塑 ソ 三四
塔 トウ 三四
*塗 ト・ぬる 三四
*境 キョウ・ケイ・さかい 三五
*墓 ボ・はか 三七
墜 ツイ 三九
*増〔增〕ゾウ・ます 三七
墨〔墨〕ボク・すみ 三九
*堕〔墮〕ダ 三九
堕 フン 三九
墾 コン 四〇
壁 ヘキ・かべ 四〇
壇 ダン 四〇
*圧〔壓〕アツ 四〇
塁〔壘〕ルイ 四〇
壊〔壞〕カイ 四〇
士部
*士 シ 四三
*壮〔壯〕ソウ 四〇
*巻〔卷〕イチ 四〇
寿〔壽〕ジュ・ことぶき 四〇
夕部
*夕 セキ・ゆう 四〇
*外 ガイ・ゲ・そと・ほか 四〇
*多 タ・おおい 四〇
*夜 ヤ・よ・よる 四〇
夢 ム・ゆめ 四一
*夏 カ・なつ 四〇
大部
*大 ダイ・タイ・おおきい 四一
*天 テン・あめ 四一
*太 タイ・タ・ふとい 四一
*夫 フ・おっと 四一
*央 オウ 四一
*失 シツ・うしなう 四一
奇 キ 四一
*奉 ホウ・たてまつる 四一
奏 ソウ 四一
契 ケイ・ちぎる 四一
*奔 ホン 四一
*奥〔奧〕オク・オウ 四一
*奪 ダツ・うばう 四一
*奨〔奬〕ショウ 四一
*奮 フン・ふるう 四一
女部
*女 ジョ・ニョ・おんな 四一
奴 ド 四一
*好 コウ・このむ・すく 四一
如 ジョ・ニョ 四一
妃 ヒ 四一
妊 ニン 四一
妙 ミョウ 四一
妥 ダ 四一
妨 ボウ・さまたげる 四一
*妹 マイ・いもうと 四一
*妻 サイ・つま 四一
*姉 シ・あね 四一
*始 シ・はじめる 四一
姓 セイ・ショウ 四一
*委 イ 四一
*姫〔姬〕ひめ 四一
姻 イン 四一
*姿 シ・すがた 四一

威 イ 四五五
娘 むすめ 四五六
娯 ゴ 四五九
嬢 ジョウ 四五九
婆 バ 四六一
婚 コン 四六一
*婦 フ 四六一
*婿〔壻〕 セイ・むこ 四六五
媒 バイ 四六五
嫁 カ・よめ 四六八
嫡 テキ 四六八
*嬢〔孃〕 ジョウ 四六九

子部

*子 シ・ス・こ 四七〇
孔 コウ 四七一
*字 ジ・あざ 四七三
*存 ソン・ゾン 四七五
*孝 コウ 四七五
*季 キ 四七五
孤 コ 四七五
*孫 ソン・まご 四七八
*学〔學〕 ガク・まなぶ 四七九

【部

宅 タク 四八四
宇 ウ 四八五
*守 シュ・ス・まもる 四八五
*安 アン・やすい 四八八
*完 カン 四八八
*宗 ソウ・シュウ 四八八
*官 カン 四八七
宙 チュウ 四八九
*定 テイ・ジョウ・さだめる 四八九
宜 カク・キャク 四九〇
*客 カク・キャク 四九〇
*宣 セン 四九二
*室 シツ・むろ・キュウ・ク・ウ・シ・みや 四九二
*宮 キュウ・グウ・ク・みや 四九二
宰 サイ 四九六
*害 ガイ 四九六
*家 カ・ケ・いえ・や 四九七
宴 エン 四九八
容 コウ・ヨウ・やど・やどる 四九九
*宿 シュク・やど・やどる 五〇〇
寂 ジャク・さびしい 五〇一
*寄 キ・よる 四九九
密 ミツ 五〇一
*富 フ・とむ 五〇四
*寒 カン・さむい 五〇三

*察 サツ 五〇六
寡 カ 五〇五
*寝〔寢〕 シン・ねる 五〇七
*実〔實〕 ジツ・み・みのる 五〇七
*寧 ネイ 五〇八
審 シン 五一〇
*写〔寫〕 シャ・うつす 五一〇
寛 カン 五〇九
*寮 リョウ 五一一
*宝〔寶〕 ホウ・たから 五一三

寸部

寸 スン 五一三
*寺 ジ・てら 五一四
封 フウ・ホウ 五一四
射 シャ・いる 五一五
*将〔將〕 ショウ 五一六
*専〔專〕 セン 五一七
尉 イ 五一六
*尊 ソン・たっとい・ソン・たずねる 五一八
尋 五一八

小部

*対〔對〕 タイ・ツイ 五一九
*導 ドウ・みちびく 五二〇

*小 ショウ・ちいさい・こ・お・ショウ・すくない・すこし 五二〇
*少 五二三

尤部

*就 シュウ・ジュ 五二六

尸部

尺 シャク 五二七
尼 ニ・あま 五二八
尾 ビ・お 五二九
尿 ニョウ 五二九
*局 キョク 五二八
*居 キョ・いる 五三〇
*届〔屆〕 とどける・とどけ 五二九
屈 クツ 五三〇
*屋 オク・や 五三一
*展 テン 五三三
*層〔層〕 ソウ 五三四
履 リ 五三四
*属〔屬〕 ゾク 五三六

山部

*山 サン・やま 五三七
*岐 キ 五三八
*岩 ガン・いわ 五三八
*岸 ガン・きし 五三二

*峠 とうげ 五三四
*峰〔峯〕 ホウ・みね 五三六
*島 トウ・しま 五三六
*峡〔峽〕 キョウ 五三七
崇 スウ 五三七
崩 ホウ 五三八
*岳〔嶽〕 ガク・たけ 五三一

巛部

*川 セン・かわ 五三五
*州 シュウ・ス 五三五
巡 ジュン・めぐる 五三五
*巣〔巢〕 ソウ・す 五三六

工部

工 コウ・ク 五三六
*左 サ・ひだり 五三八
巧 コウ・たくみ 五三七
巨 キョ 五三七
*差 サ・さす 五三〇

己部

*己 コ・キ 五三一

巾部

*市 シ・いち 五三二

*布 フ・ぬの 五四
帆 ハン・ほ 五四
*希 キ 五四
帝 テイ 五四
帥 スイ 五七
*師 シ 五八
*席 セキ 五九
*帳 チョウ 五九
*帯〔帶〕 タイ・おび・おびる 五九
*常 ジョウ・つね 五九
*幅 フク・はば 五九
*幕 マク・バク 五九
*幣 ヘイ 五九

干部

干 カン・ほす・ひる 五九
*平 ヘイ・ビョウ・たいら・ひらたい 五九
*年 ネン・とし 五九
*幸 コウ・さいわい 五九
*幹 カン・みき 六〇

幺部

幻 ゲン・まぼろし 六〇
幼 ヨウ・おさない 六一

幽 ユウ 六一

广部

幾 キ・いく 六四
*床 ショウ・とこ・ゆか 六五
*序 ジョ 六五
*底 テイ・そこ 六五
*店 テン・みせ 六六
*府 フ 六六
*度 ド 六七
*庫 コ 六七
座 ザ 六七
*庭 テイ・にわ 六八
庶 ショ 六九
*康 コウ 六八
*廉 レン 六九
廊 ロウ 六九
廃〔廢〕 ハイ 六九
*広〔廣〕 コウ・ひろい 六九
*庁〔廳〕 チョウ 六八

廴部

*延 エン・のびる・のべる 六八
廷 テイ 六八

*建 ケン・たてる 六九

廾部

弊 ヘイ 七〇

弋部

*式 シキ 七〇三

弓部

弓 キュウ・ゆみ 七〇三
弔 チョウ・とむらう 七〇四
*引 イン・ひく 七〇四
弟 テイ・ダイ・おとうと 七〇五
弦 ゲン・つる 七〇六
弧 コ 七〇六
*弱 ジャク・よわい 七〇七
*張 チョウ・はる 七〇九
*強 キョウ・ゴウ・つよい 七〇七
弾〔彈〕 ダン 七一〇

彡部

*形 ケイ・ギョウ・かた・かたち 七〇三
彩 サイ 七一四
彫 チョウ・ほる 七一四
彰 ショウ 七一五
影 エイ・かげ 七一六

彳部

*役 エキ・ヤク 七一六
彼 ヒ・かれ・かの 七一八
*往 オウ 七一八
征 セイ 七一七
*待 タイ・まつ 七二一
*律 リツ 七二三
*後 ゴ・コウ・うしろ・のち 七一九
徐 ジョ 七二三
*径〔徑〕 ケイ 七二三
*徒 ト 七二三
*得 トク・える 七二六
*従〔從〕 ジュウ・したがう 七二五
御 ギョ・ゴ・おん 七二四
*復 フク 七二七
循 ジュン 七二七
微 ビ 七二八
*徴〔徵〕 チョウ 七二八
*徳〔德〕 トク 七二九
徹 テツ 七二九

心部

*心 シン・こころ 七三三
*必 ヒツ・かならず 七三五
*忌 キ・いむ 七三六
*忍〔忍〕 ニン・しのぶ 七三七
*志 シ・こころざす 七三七
忘 ボウ・わすれる 七三八
忙 ボウ・いそがしい 七三九
*忠 チュウ 七四〇
*快 カイ・こころよい 七四九
*念 ネン 七四四
怒 ド・いかる 七四一
怖 フ 七四二
*思 シ・おもう 七四八
*怠 タイ・おこたる 七四五
*急 キュウ・いそぐ 七四六
*性 セイ・ショウ 七四九
怪 カイ・あやしい 七四六
恒〔恆〕 コウ 七四七
恐 キョウ・おそれる・おそろしい 七四五
恥 チ・はじる 七四九
恨 コン・うらむ 七五〇
*恩 オン 七五〇
恭 キョウ 七五一
*息 ソク・いき 七五九
悦 エツ 七六一
*悔〔悔〕 カイ・くいる・くやむ 七六二
悟 ゴ・さとる 七六三

患 カン 六五
*悲 ヒ・かなしい 六五
悼 トウ 六五
*情 ジョウ・なさけ 六九
*悪 ワク・にくむ 六八
惜 セキ・おしい 六二
*惑(惑) ケイ・コ・まどう 六七
*悪(悪) アク・わるい 六五
情 グ 六五
悩(悩) ノウ・なやむ 六五
*想 ソウ 六二
*愁 シュウ 六二
*愉(愉) ユ 六四
*患 カン 六九
*愛 アイ 六五
*感 カン 六八
*慎(慎) シン・つつしむ 六八
*態 タイ 六七
慌 コウ 六八
*慕 ボ・したう 六八
*惨(惨) サン 六五
*慢 マン 六四
*慣 カン・なれる 六二

*慨(慨) ガイ 六九
*慮 リョ 六五
*慰 イ・なぐさめる 六九
*慶 ケイ 六二
*憂 ユウ・うれい・うれえる 六八
*憎(憎) ゾウ・にくむ 六七
憤 フン・いきどおる 六九
醜 ケイ 六九
*憲 ケン 六六
憶 オク 六五
*感 カン 六五
*懇 コン 六三
*応(応) オウ 一九
*懸(懸) ケン・かける 六三
*懐(懐) カイ 六三
*懲 クン・ケ 六五
恋(恋) レン・こう・こい 六八

戈部

*成 セイ・ジョウ・なる 七二
*我 ガ・われ 七九
戒 カイ・いましめる 七三
*戦(戦) セン・たたかう 七四
*戯(戯) ギ・たわむれる 七六

戸部

*戸 コ・と 七七
*房 ボウ 七九
*所 ショ・ところ 七八
扇 セン・おうぎ 七三

手部

*手 シュ・て 七三
*才 サイ 七五
*打 ダ・うつ 七四
扱 あつかう 七八
扶 フ 七五
批 ヒ 七四
*承 ショウ・うけたまわる 七八
*技 ギ 七七
抄 ショウ 七八
抑 ヨク 七六
*投 トウ・なげる 七二
抗 コウ 七七
*折 セツ・おる 七九
抱 ホウ・だく 七四
抵 テイ 七九
押 オウ・おす・おさえる 七五
抽 チュウ 七九
*払(拂) フツ・はらう 七四
拍 ハク・ヒョウ 七四

*担 キョ・になう 七五
拓 タク 七七
*抜(抜) バツ・ぬく 七四
拘 コウ 七六
*拙 セツ 七八
*拝(拝) ハイ・おがむ 七四
*招 ショウ・まねく 七六
拷 ゴウ 七四
*拾 シュウ・ジュウ・ひろう 七四
*持 ジ・もつ 七四
*指 シ・ゆび 七四
*振 シン・ふる 七七
捕 ホ・とらえる 七五
*捨(捨) シャ・すてる 七六
*挿 ソウ・さす 七九
*授 ジュ・さずける 七八
掌 ショウ 七七
排 ハイ 七六
掘 クツ・ほる 七四
掛 かける 七八
採 サイ・とる 七九
探 タン・さぐる 七五
*接 セツ 七五
*捜(捜) ソウ・さがす 七五

*推 スイ・おす 七八
*措 ソ 七四
*描 ビョウ・えがく 七五
*提 テイ 七三
*揚 ヨウ・あげる 七五
*換 カン・かえる 七五
*握 アク・にぎる 七六
*掲(掲) ケイ・かかげる 七五
*揮 キ 七九
*援 エン 七六
*損 ソン 七六
*揺(揺) ヨウ・ゆれる 七四
*搜(捜) ソウ・さがす 七五
*搬 ハン 七六
*携(携) ケイ・たずさえる 七七
*摂 サツ 七四
*摘 テキ・つむ 七五
*摩 マ 七八
*撤 テツ 七五
*撮 サツ 七五
*撲 ボク 七五
*擁 ヨウ 七二
*択(択) タク 七五
*撃(撃) ゲキ・うつ 七八
*操 ソウ・みさお 七九

担〔擔〕タン 七二
拘〔據〕キョ・コ 七八
擦 サツ 七五
*挙〔擧〕キョ 一五七
*擬 ギ 七三
*拡〔擴〕カク 七四
*拙〔擲〕セツ 七七

支部

*支 シ 七九
*改 カイ・あらためる 八〇
攻 コウ・せめる 八二
*放 ホウ・はなす・はなつ 八五
*政 セイ・ショウ・まつりごと 八四
*故 コ 八七
*叙〔敍〕ジョ 八一
*教〔敎〕キョウ・おしえる 八九
*敏〔敏〕ビン 八三
*救 キュウ・すくう 八一〇
*敗 ハイ・やぶれる 八三
*敢 カン 八三
*散 サン・ちる 八四
*敬 ケイ・うやまう 八六

文部

*敵 テキ 八九
*数〔數〕スウ・かず・かぞえる 八八
*整 セイ・ととのえる 八一〇

斗部

*斗 ト 八六
*料 リョウ 八七

斤部

斤 キン 八九
*斥 セキ 八九
*新 シン・あらた・あたらしい 八一
*断〔斷〕ダン・たつ・ことわる 八四
斜 シャ・ななめ 八八

方部

*方 ホウ・かた 八六
施 シ・セ・ほどこす 八九
*旅 リョ・たび 八一
*旋 セン 八三
*族 ゾク 八三
*旗 キ・はた 八四
*文 ブン・モン 八三

无部

*既〔既〕キ・すでに 八五

日部

*日 ジツ・ニチ・ひ・か 八五
*旨 シ・むね 八九
*早 ソウ・はやい 八九
旬 ジュン 八九
*昇 ショウ・メイ・のぼる・あがる・あきらか 八三
*明 エキ・イ 八五
*易 セキ・シャク・ジャク・むかし 八五
*昔 セイ・ショウ・は 八一
*星 エイ・うつる 八六
*映 シュン・はる 八九
*春 サク 八九
*昨 ショウ 八三
*昭 ゼ 八五
*是 ジ・とき 八四
*時 バン 八四
晩 ケイ 八三
*景 セイ・はれる 八七
*晴〔晴〕チョウ・ひる 八六
*晨〔晨〕フ 八三
普 ケイ 八三
*晶 ショウ 八七
*暁 カ・ひま 八四
*暑 シュ・あつい 八四
*暖 ダン・あたたかい 八三
暗 アン・くらい 八三
*暫 ザン 八六
暮 ボ・くれる・くらす 八七
*暴 ボウ・バク 八六
*曆〔曆〕レキ・こよみ 八〇
曇 ドン・くもる 八〇
*曉〔曉〕ギョウ・あかつき 八六
*曜 ヨウ 八〇

曰部

*曲 キョク・まがる 八三
*更 コウ・さらに 八四
*書 ショ・かく 八四
*替 タイ・かえる 八六
*最 サイ・もっとも 八八
*会〔會〕カイ・エ・あう 八八

月部

*月 ゲツ・ガツ・つき 八一
*有 ユウ・ウ・ある 八三
*服 フク 八四
*朕 チン 八七
*朗 ロウ・ほがらか 八八
*望 ボウ・モウ・のぞむ 八七
*朝 チョウ・あさ 八九
*期 キ・ゴ 八八

木部

*木 ボク・モク・き 九三
*未 ミ 九六
*末 マツ・すえ 九五
*本 ホン 九七
札 サツ・ふだ 九四
*朱 シュ 九〇
机 キ・つくえ 九九
*朽 キュウ・くちる 九〇
*村 ソン・むら 九四
*束 ソク・たば 九二
杯 ハイ・さかずき 九三
*東 トウ・ひがし 九三
松 ショウ・まつ 九二
*板 ハン・バン・いた 九五
*林 リン・はやし 九五
析 セキ 九三
枚 マイ 九四

*果 カ・はたす 九八
枝 シ・えだ 九九
枯 コ・かれる 九八
架 カ 九七
柄 ヘイ・え・がら 九四
某 ボウ 九三
染 セン・そめる 九三
柔 ジュウ・ニュウ・やわらかい 九三
*査 サ 九三
*柱 チュウ 九三
柳 リュウ・やなぎ 九三
*皆 コウ 九三
*株 かぶ 九四
核 カク 九四
*根 コン・ね 九四
*格 カク 九六
栽 サイ 九六
桃 トウ・もも 九六
*栄 ヨウ 九六
桑 ソウ・くわ 九七
梅〔梅〕 バイ・うめ 九九
*条〔條〕 ジョウ 九八
械 カイ 九五
棄 キ 九三
*棒 ボウ 九八
*森 シン・もり 九五
*椅 カン 九四
*植 ショク・うえる 九三
*業 ギョウ・コウ 九一
*極 キョク・ゴク 九九
*栄〔榮〕 エイ・さかえる 九六
*構 コウ・かまえる 九九
*概〔概〕 ガイ 九三
*楽〔樂〕 ラク・ガク・たのしい 九三
*楼〔樓〕 ロウ 九九
*標 ヒョウ 九七
*枢〔樞〕 スウ 九六
模 モ・ボ 九六
*様〔樣〕 ヨウ・さま 九九
樹 ジュ 九五
*橋 キョウ・はし 九四
*機 キ・はた 九四
*横 オウ・よこ 九二
*検〔檢〕 ケン 九〇
桜〔櫻〕 オウ・さくら 九五
欄〔欄〕 ラン 九四
*権〔權〕 ケン・コン 九六
欠部
*次 ジ・シ・つぐ 九六
*欲 ヨク・ほっする 一〇〇
*欺 ギ・あざむく 一〇〇
*歌 カ・うた・うたう 一〇〇
*欧〔歐〕 オウ 一〇〇
*歓〔歡〕 カン 一〇〇
止部
*止 シ・とまる 一〇六
*正 セイ・ショウ・ただしい 一〇七
*歩〔步〕 ホ・ブ・あゆむ・あるく 一〇一
*武 ブ・ム 一〇二
*歳〔歲〕 サイ・セイ 一〇二
*歴〔歷〕 レキ 一〇二
*帰〔歸〕 キ・かえる 一〇八
歹部
*死 シ・しぬ 一〇八
*殉 シュン 一〇三
*殊 シュ 一〇五
*殖 ショク 一〇四
*残〔殘〕 ザン・のこる 一〇三
*段 ダン 一〇六
*殺 サツ・サイ・ころす 一〇七
*殿〔殿〕 デン・テン・との 一〇九
母部
*毎〔每〕 マイ 一〇二
*毒 ドク 一〇二
比部
*比 ヒ・くらべる 一〇三
毛部
*毛 モウ・け 一〇四
氏部
*氏 シ・うじ 一〇七
*民 ミン・たみ 一〇七
气部
*気〔氣〕 キ・ケ 一〇九
水部
*水 スイ・みず 一〇八
*氷〔冰〕 ヒョウ・こおり 一一三
*永 エイ 一〇四
*求 キュウ・もとめる 一〇四
汗 カン・あせ 一〇九
*汚〔汚〕 オ・けがす・けがれる・よごす・よごれる 一〇七
江 コウ 一〇七
*池 チ・いけ 一〇五
*決 ケツ・きめる 一〇三
*汽 キ 一〇三
沈 チン・しずむ 一〇三
*没〔沒〕 ボツ 一〇九
沖 おき 一〇七
*河 カ 一〇二
沸 フツ・わく 一〇四
*油 ユ・あぶら 一〇二
*治 チ・ジ・おさめる・おさまる 一〇七
沼 ショウ・ぬま 一〇六
沿〔沿〕 エン・そう 一〇三
況 キョウ 一〇三
泉 セン・いずみ 一〇六
泊 ハク・とまる 一〇二
*法 ホウ 一〇四
泌 ヒツ 一〇二
*波 ハ・なみ 一〇三
泣 キュウ・なく 一〇六

注 チュウ・そそぐ 一〇四
泰 タイ 一〇六
*泳 エイ・およぐ 一〇六
*洋 ヨウ 一〇六
洗 セン・あらう 一〇八
津 つ 一〇九
*活 カツ 一〇九
*派 ハ 一〇九
*流 リュウ・ル・ながれる 一〇九
*浦 ホ・うら 一〇九
浪 ロウ 一〇九
浮 フ・うく・うかぶ 一〇九
*海 カイ・うみ 一〇九
*浜 ヒン・はま 一〇九
浸 シン・ひたす 一〇九
*消 ショウ・きえる・ける 一〇九
*涉〔渉〕 ショウ 一〇九
*液 エキ 一〇九
涼 リョウ・すずしい 一一〇
淑 シュク 一一〇
涙 ルイ・なみだ 一一〇
淡 タン・あわい 一一〇
*浄〔淨〕 ジョウ 一一一
*深 シン・ふかい 一一一
*混 コン・まぜる 一一一
*清〔淸〕 セイ・きよい 一一一
*浅〔淺〕 セン・あさい 一一三
添 テン・そえる 一一四
*減 ゲン・へる 一一五
渡 ト・わたる 一一六
*測 ソク・はかる 一一六
*港 コウ・みなと 一一九
*渴〔渴〕 カツ 一一九
*湖 コ・みずうみ 一一九
*湯 トウ・ゆ 一一九
源 ゲン・みなもと 一一九
*準 ジュン 一一九
*温〔溫〕 オン 一一九
浴 ヨク・あびる 一一九
波 ハ・なみ 一一九
滋 ジ 一一九
滑 カツ 一一九
*滯〔滯〕 タイ・とどこおる 一一九
滴 テキ 一一九
*満〔滿〕 マン・みちる 一一九
*漁 ギョ・リョウ 一一九
漂 ヒョウ・ただよう 一一九
漆 シツ・うるし 一一九
漏 ロウ・もる・もれる 一一九
*演 エン 一一九
*漢〔漢〕 カン 一二〇
漫 マン 一二〇
*漸 ゼン 一二〇
*潔 ケツ・いさぎよい 一二〇
*潜〔潛〕 セン・ひそむ 一二〇
潤 ジュン・うるおう 一二〇
*潮 チョウ・しお 一二〇
*澁〔澁〕 ジュウ・しぶい・しぶる 一二〇
澄 チョウ・すむ 一二〇
*沢〔澤〕 タク・さわ 一二〇
激 ゲキ・はげしい 一二〇
*濁 ダク・にごる 一二〇
濃 ノウ・こい 一二〇
*湿〔濕〕 シツ・しめる 一二〇
*済〔濟〕 サイ・すむ 一二〇
*瀬 ライ 一二〇
*浜〔濱〕 ヒン・はま 一二〇
*瀧〔瀧〕 たき 一二〇
*瀬〔瀨〕 セ 一二〇
*灣〔灣〕 ワン 一二〇

火部

*火 カ・ひ 一二〇
灰 カイ・はい 一二〇
*炭 タン・すみ 一二〇
炊 スイ 一二〇
*炎 エン・ほのお 一二〇
*炉〔爐〕 ロ 一二〇
*為〔爲〕 イ 一二〇
*烈 レツ 一二〇
*無 ム・ブ・ない 一二〇
*焦 ショウ・こげる 一二〇
*然 ゼン・ネン 一二〇
煙 エン・けむり 一二〇
*照 ショウ・てる 一二〇
*煩 ハン・わずらわしい 一二〇
*熱 ネツ 一二〇
*燃 ネン・もえる 一二〇
*燈 トウ 一二〇
*焼〔燒〕 ショウ・やく 一二〇
*営〔營〕 エイ・いとなむ 一二〇
*爆 バク 一二〇

爪部

*争〔爭〕 ソウ・あらそう 一二〇
*爵〔爵〕 シャク 一二〇

父部

*父 フ・ちち 一二〇

片部

*片 ヘン・かた 一二〇
*版 ハン 一二〇

牛部

*牛 ギュウ・うし 一二〇
*牧 ボク・まき 一二〇
*物 ブツ・モツ・もの 一二〇
*牲 セイ 一二〇
*特 トク 一二〇
*犠〔犧〕 ギ 一二〇

犬部

*犬 ケン・いぬ 一二〇
*犯 ハン・おかす 一二〇
*状〔狀〕 ジョウ 一二〇
狂 キョウ・くるう 一二〇
狩 シュ・かり 一二〇
*狭〔狹〕 キョウ・せまい 一二〇
猛 モウ 一二〇
猫 ビョウ 一二〇
獄 ゴク 一二〇

*独〔獨〕トク 二三六
獲カク・える 二三七
猟〔獵〕リョウ 二三八
獣〔獸〕ジュウ・けもの 二三八
献〔獻〕ケン・コン 二三八

玄部
玄ゲン 二三九
*率リツ・ソツ・ひきいる 二三九

玉部
*玉キョク・たま 二三九
*王オウ 二三九
珍チン・めずらしい 二三九
殊シュ 二四〇
班ハン 二四〇
*現ゲン・あらわれる 二四〇
*球キュウ 二四〇
*理リ 二四〇
琴キン・こと 二四〇
環カン 二四〇
*瓦ガ 二四〇

瓜部
弁〔瓣〕ベン 二四〇

甘部
甘カン・あまい 二四〇

生部
*生セイ・ショウ・いける・うまれる・き・なま 二四〇
*産サン・うむ 二四〇

用部
*用ヨウ・もちいる 二四〇

田部
*田デン・た 二四〇
由ユウ・ユ・よし 二四〇
*甲コウ・カン 二四〇
*申シン・もうす 二四〇
*男ダン・ナン・おとこ 二四〇
*町チョウ・まち 二四〇
*界カイ 二四〇
*畑はた・はたけ 二四〇
畔ハン 二四〇
*留〔畱〕リュウ・ル・とめる 二四〇
*番バン 二四〇
*画〔畫〕カ・カク 二四〇
*異イ・ことなる 二四〇
*当〔當〕トウ・あたる 二四〇
*畳〔疊〕ジョウ・たたみ 二四〇

疋部
疎ソ 二四〇
*疑ギ・うたがう 二四〇

疒部
*疫エキ 二四〇
疲ヒ・つかれる 二四〇
疾シツ 二四〇
*病ビョウ・やむ・やまい 二四〇
症ショウ 二四〇
痘トウ 二四〇
痛ツウ・いたむ 二四〇
痢リ 二四〇
痴〔癡〕チ 二四〇
療リョウ 二四〇
癖ヘキ・くせ 二四〇

*登トウ・ト・のぼる 二四〇

*発〔發〕ハツ・ホツ 二四〇

白部
白ハク・ビャク・しろ・しろい 二四〇
*百ヒャク 二四〇
*的テキ・まと 二四〇
皆カイ・みな 二四〇
*皇コウ・オウ 二四〇

皮部
*皮ヒ・かわ 二四〇

皿部
盆ボン 二四〇
*益〔益〕エキ 二四〇
盛セイ・ジョウ・さかり・もる 二四〇
盗〔盜〕トウ・ぬすむ 二四〇
*盟メイ 二四〇
尽〔盡〕ジン・つくす 二四〇
監カン 二四〇
盤ハン 二四〇

目部
*目モク・め 二四〇
*直チョク・ジキ・なおす・ただちに 二四〇
*相ソウ・ショウ・あい 二四〇
盾ジュン 二四〇
*省セイ・ショウ・かえりみる・はぶく 二四〇
看カン 二四〇
*真〔眞〕シン・ま 二四〇
眠ミン・ねむる 二四〇
*眼ガン・まなこ 二四〇
睡スイ 二四〇
督トク 二四〇
瞬シュン 二四〇

矛部
矛ム 二四〇

矢部
矢シ 二四〇
*知チ・しる 二四〇
*短タン・みじかい 二四〇

石部
*石セキ・シャク・コク・いし・サ・シャ・すな 二四〇
砂サ 二四〇
砲ホウ 二四〇

*破 ハ・やぶる 一三四四
*研〔研〕 ケン 一三四七
硝 ショウ 一三四八
硫 リュウ 一三四八
硬 コウ 一三四七
碁 ゴ 一三四九
*砕〔碎〕 サイ・くだく 一三四九
碑 ヒ 一三五〇
*確 カク・たしか 一三五二
磁 ジ 一三五二
礁 ショウ 一三五五
礎 ソ・いしずえ 一三五六

示部

*示 シ・ジ・しめす 一三五七
*社〔社〕 シャ・やしろ 一三五八
祈〔祈〕 キ・いのる 一三五九
*祉〔祉〕 シ 一三六〇
秘〔秘〕 ヒ 一三六二
*祖〔祖〕 ソ 一三六四
*祝〔祝〕 シュク・いわう 一三六四
*神〔神〕 シン・ジン・かみ 一三六六
*祥〔祥〕 ショウ 一三六七
*票 ヒョウ 一三六七
*祭 サイ・まつる 一三六八

*禁 キン 一三六八
*福〔福〕 カ 一三六九
*福〔福〕 フク 一三七一
*禅〔禪〕 ゼン 一三七二
*礼〔禮〕 レイ 一三七三

禾部

*秀 シュウ 一三七八
*私 シ・わたくし 一三七九
*秋 シュウ・あき 一三八〇
*科 カ 一三八九
*秒 ビョウ 一三八一
租 ソ 一三八二
*移 イ・うつる 一三八三
*税 ゼイ 一三八四
*程 テイ 一三八五
稚 チ 一三八五
*種 シュ・たね 一三八七
*称〔稱〕 ショウ 一三八七
稲〔稻〕 トウ・いね 一三八九
稿 コウ 一三八八
*穂〔穗〕 スイ・ほ 一三九二

*穏〔穩〕 オン・おだやか 一三九三
穫 カク 一三九四

穴部

穴 ケツ・あな 一三九五
*究 キュウ 一三九五
突 トツ・つく 一三九六
*空 クウ・そら 一三九八
窓 ソウ・まど 一三九八
窮 キュウ・きわめる 一三九九
窯 ヨウ 一四〇〇
*窃〔竊〕 セツ 一四〇二

立部

*立 リツ・たつ 一四〇三
*並〔竝〕 ヘイ・なみ・ならべる・ならびに 一四〇四
*章 ショウ 一四〇四
*童 ドウ 一四〇五
*端 タン・はし 一四〇六
*競 キョウ・ケイ・きそう 一四〇六

竹部

*竹 チク・たけ 一四〇八
笑 ショウ・わらう 一四一一

笛 テキ・ふえ 一四一二
符 フ 一四一三
*第 ダイ 一四一五
*筆 ヒツ・ふで 一四一七
*等 トウ・ひとしい 一四一八
筋 キン・すじ 一四二〇
*筒 トウ・つつ 一四二一
*答 トウ・こたえる 一四二六
*策 サク 一四二五
*算 サン 一四二七
*管 カン・くだ 一四三〇
箱 はこ 一四三〇
*節〔節〕 セツ・ふし 一四三二
範 ハン 一四三六
*築 チク・きずく 一四三七
篤 トク 一四三八
簡〔簡〕 カン 一四三九
簿 ボ 一四四五
*籍 セキ 一四四四

米部

*米 ベイ・マイ・こめ 一四四七
*粉 フン・こな・こ 一四四八
粒 リュウ・つぶ 一四四九

粗 ソ 一四四九
粘 ネン・ねばる 一四五九
*粧 ショウ 一四五〇
*粋〔粹〕 スイ 一四五一
*精〔精〕 セイ・ショウ 一四五一
糖 トウ 一四五四
糧 リョウ 一四五六

糸部

*系 ケイ 一四五七
*糾 キュウ 一四五七
*紀 キ 一四五八
*約 ケク 一四五一
紅 コウ・ク・くれない・べに 一四五九
紋 モン 一四六八
*納 ノウ・トウ・ナ・おさめる 一四六五
*純 ジュン 一四六五
*紙 シ・かみ 一四六五
*級 キュウ 一四六七
紛 フン・まぎれる 一四六七
*素 ソ・ス 一四六八
紡 ホウ・つむぐ 一四七〇
*索 サク 一四七一
*紫 シ・むらさき 一四七一
*累 ルイ 一四七五

*細 サイ・ほそい・こまかい 一四五九
紳 シン 一四五三
紹 ショウ 一四五三
紺 コン 一四五四
*終 シュウ・おわる 一四五三
*組 ソ・くむ 一四五四
*結 ケツ・むすぶ・ゆう 一四五八
*絶 ゼツ・たえる 一四五〇
紋 コウ・あや 一四五六
絡 ラク 一四五七
*給 キュウ 一四五七
*統 トウ・すべる 一四五七
*糸〔糸〕 シ・いと 一四五九
*絹 ケン・きぬ 一四五九
*経〔經〕 ケイ・キョウ・へる 一四五九
*緑〔綠〕 リョク・ロク・みどり 一四六〇
維 イ 一四六二
綱 コウ・つな 一四六二
網 モウ・あみ 一四六一
*綿 メン・わた 一四六二
*緊 キン 一四六三
緒 ショ・お 一四六四
締 テイ・しまる 一四六五
*線 セン 一四六四
縁〔緣〕 エン・ふち 一四六六
*編 ヘン・あむ 一四六九
*緩 カン 一四七〇
緯 イ 一四六八
*練〔練〕 レン・ねる 一四七〇
縛 バク・しばる 一四七一
*県〔縣〕 ケン 一四七一
縫 ホウ・ぬう 一四七九
*置 チ・おく 一四七四
*罰 バツ 一四七五
*署 ショ 一四七五
罷 ヒ 一四七五
*罪 ザイ・つみ 一四七三
*羊 ヨウ・ひつじ 一四七九
*美 ビ・うつくしい 一四七〇
*着 チャク・きる・つく 一四七四
*群〔羣〕 グン・むれる・むれ 一四七四
*義 ギ 一四七三
羽 の・は・はね 一四七七
翁 オウ 一四七八
翌 ヨク 一四七〇
*習 シュウ・ならう 一四七九
翼 ヨク・つばさ 一四七五
*老 コウ・おいる 一四七六
*考 コウ・かんがえる 一四七八
*者 シャ・もの 一四八〇
*耐 タイ・たえる 一四八一
*耳 ジ・みみ 一四八三
*聖 セイ 一四八六
*聞 ブン・きく 一四八五
*声〔聲〕 セイ・こえ 一四八一
*職 ショク 一四八三
聴〔聽〕 チョウ 一四八四
*肺 ハイ 一四八一
*胃 イ 一四八三
*背 ハイ・せ 一四八五
胎 タイ 一四八五
胞 ホウ 一四八六
胴 ドウ 一四八八
胸 キョウ・むね 一四八六
*能 ノウ 一四八八
脂 シ 一四八七
脊 キョウ・おじやすい 一四八七
*脈 ミャク 一四八九
脚 キャク 一四八九
脱 ダツ・ぬぐ 一四九〇
腸 チョウ 一四九三
腐 フ・くさる 一四九三
腕 ワン・うで 一四九四
脳〔腦〕 ノウ 一四九五
腰 ヨウ・こし 一四九四
*腸 チョウ 一四九五
腹 フク・はら 一四九六
膚 フ・はだ 一四九九
膜 マク 一四九九
膨 ボウ 一四九一
胆〔膽〕 タン 一四九三
*欠〔缺〕 ケツ・かける 一五一〇
*絵〔繪〕 カイ・エ 一四九三
繭 ケン・まゆ 一四九四
繰 くる 一四九四
*継〔繼〕 ケイ・つぐ 一四九五
*続〔續〕 ゾク・つづく 一四九七
*織〔織〕 ショク・シキ・おる 一四九二
繁 ハン 一四九八
繕 ゼン・つくろう 一四九三
*羽部
*老部
*耳部
*聿部
*肉部
*而部
*缶部

臧〔臓〕ゾウ 一五四
臣部
臣 シン 一五四
*臨 リン・のぞむ 一五八
自部
*自 ジ・シ・みずから 一五七
臭 シュウ・くさい 一五二
至部
*至 シ・いたる 一五二
致 チ 一五三
*台〔臺〕タイ・ダイ 一五四
臼部
*与〔與〕ヨ・あたえる 一五六
*興 コウ・キョウ・おこる 一五六
*旧〔舊〕キュウ 一五八
舌部
*舌 ゼツ・した 一六〇
*舎〔舍〕シャ 一六〇
舗〔舗〕ホ 一六〇八
舛部
舞 ブ・まう 一六〇
舟部
舟 シュウ・ふね 一六〇
*航 コウ 一六〇
般 ハン 一六〇
船 ハク 一六〇
*船 セン・ふね 一六〇六
艇 テイ 一六〇七
艦 カン 一六〇八
艮部
*良 リョウ・よい 一六〇八
色部
*色 ショク・シキ・いろ 一六一
艸部
芋 いも 一六一四
芝 しば 一六一九
*花 カ・はな 一六一六
芳 ホウ・かんばしい 一六一八
*芽 ガ・め 一六二五
苗 ビョウ・なえ 一六二五
若 ジャク・わかい・もしくは 一六二八
*苦 ク・くるしい・にがい 一六三六
*英 エイ 一六三二
茂 モ・しげる 一六三三
*茶 チャ 一六三〇
*草 ソウ・くさ 一六三六
荒 コウ・あらい・あれる 一六三四
*荷 カ・に 一六三三
荘〔莊〕ソウ 一六三四
*茎〔莖〕ケイ・くき 一六三五
菊 キク 一六三七
菌 キン 一六三七
*菜 サイ・な 一六三九
*華 カ 一六三七
*万〔萬〕マン・バン 一六三八
*落 ラク・おちる 一六四一
*葉 ヨウ・は 一六四四
*著 チョ・あらわす・いちじるしい 一六四七
葬 ソウ・ほうむる 一六四五
蒸 ジョウ・むす 一六四六
*蓄 チク 一六四七
薄 ハク・うすい 一六四五
薪 シン 一六五一
*薫〔薫〕クン 一六五六
*蔵〔藏〕ゾウ・くら 一六六六
虎部
*虎〔虎〕ギャク 一六七〇
*処〔處〕ショ 一六七一
*虚〔虛〕キョ・コ 一六七二
虜 リョ 一六七四
*虐 おそれ 一六七四
*号〔號〕ゴウ 一六七五
虫部
蚊 か 一六七七
融 ユウ 一六七三
*虫〔蟲〕チュウ・むし 一六七六
*蚕〔蠶〕サン・かいこ 一六七三
蛮〔蠻〕バン 一六七三
血部
*血 ケツ・ち 一六七四
*衆 シュウ・シュ 一六七五
行部
*行 コウ・ギョウ・アン いく・ゆく・おこなう 一六七六
*術 ジュツ 一六八〇
*街 ガイ 一六八一
*衝 ショウ 一六八二
*衛〔衛〕エイ 一六八三
衡 コウ 一六八五
衣部
*衣 イ・ころも 一六八四
*表 ヒョウ・あらわす・おもて 一六八六
衰 スイ・おとろえる 一六八八
衷 チュウ 一六八九
*袋 タイ・ふくろ 一六九一
被 ヒ・こうむる 一六九三
*裁 サイ・たつ 一六九四
*裂 レツ・さく 一六九四
裏 リ・うら 一六九七
裕 ユウ 一六九七
*補 ホ・おぎなう 一六九六
*装〔裝〕ソウ・ショウ・よそおう 一六九五
裸 ラ・はだか 一六九九
*製 セイ 一六九八
*複 フク 一七〇〇
襲 シュウ・おそう 一七〇五
西部

*西 セイ・サイ・にし 一七七
*要 ヨウ 一七八
覆 フク 一七八

見部

*見 ケン・みる 一七一
*規 キ 一七二
*視〔視〕 シ 一七四
*親 シン・おや・したしい 一七五
*覚〔覚〕 カク・おぼえる 一七七
覧〔覧〕 ラン 一七八
*観〔観〕 カン 一七八

角部

*角 カク・つの 一七九
*解 カイ・ゲ・とく 一八一
触〔觸〕 ショク・ふれる 一八四

言部

*言 ゲン・ゴン・い・こと 一八五
訂 テイ 一八八
*計 ケイ・はかる 一八七
*討 トウ・うつ 一八〇
*訓 クン 一八九
託 タク 一九二
*記 キ 一九八
*訟 ショウ 一九三
訪 ホウ・おとずれる 一九四
*設 セツ・もうける 一九五
*許 キョ・ゆるす 一九六
訴 ソ・うったえる 一九七
*診 シン 一九九
*詐 サ 一九九
*詔 ショウ・みことのり 一九九
*評 ヒョウ 二〇八
*詞 シ 二〇六
詠 エイ 二〇九
*試 シ・こころみる 二〇九
*詩 シ 二〇三
詰 キツ・つめる 二〇四
*話 ワ・はなす 二〇四
該 ガイ 二〇五
詳 ショウ・くわしい 二〇六
誇 コ・ほこる 二〇七
誌 シ 二〇九
*認〔認〕 ニン・みとめる 二一三
*誓 セイ・ちかう 二一〇
誕 タン 二一三
*誇 コ 二一五
誓 ケイ 二一五
*誠 セイ・まこと 二一〇
*誤 ゴ・あやまる 二一九
*説 セツ・ゼイ・とく 二二一
*課 カ 二二三
*調 チョウ・しらべる 二二六
*談 ダン 二二七
*請〔請〕 セイ・シン・こう・うける 二二八
*論 ロン 二二八
*諭〔諭〕 ユ 二二九
*諸 ショ 二三三
諾 ダク 二三三
謀 ボウ 二三四
*謁〔謁〕 エツ 二三五
*謄 トウ 二三六
*謙 ケン 二三六
*講 コウ 二三七
*謝 シャ 二三八
*謡〔謡〕 ヨウ・うたい 二三八
*識〔識〕 シキ 二三九
*譜〔譜〕 フ 二四〇
*警 ケイ 二四五
*訳〔譯〕 ヤク・わけ 二四五
*護 ゴ 二四八
*誉〔譽〕 ヨ・ほまれ 二四八
*変〔變〕 ヘン・かわる 二四九
*讃〔讃〕 ショウ・ほめる 二五一

谷部

*谷 コク・たに 二五二

豆部

豆 トウ・ズ・まめ 二五三
*豊〔豐〕 ホウ・ゆたか 二五六

豕部

豚 トン・ぶた 二五九
*象 ショウ・ゾウ 二六〇
*予〔豫〕 ヨ 二六二

貝部

*貝 かい 二六三
貞 テイ 二六四
*負 フ・おう・まける 二六五
*財 ザイ 二六八
貿 コウ 二六九
*貧 ヒン・ビン・まずしい 二七二
*貨 カ 二七〇
販 ハン 二七二
貫 カン・つらぬく 二七二
*貴 キ・とうとい 二七三
*貯 チョ 二七四
*貸〔貸〕 タイ・かす 二七六
*買 バイ・かう 二七六
*貸 タイ・かす 二七七
*費 ヒ・ついやす 二七八
*賀 ガ 二七九
*賃 チン 二八〇
賄 ワイ 二八〇
賢 ケン・かしこい 二八二
*売〔賣〕 バイ・うる 二八七
賦 フ 二八七
*賞 シン・たまわる 二八三
賜 シ 二八三
賠 バイ 二八七

頼(賴) ライ・たのむ 一八七
隣 コウ 一八七
贈(贈) ソウ・おくる 一八八
*賛(贊) サン 一八八

赤部

*赤 セキ・シャク・あか・あかい 一八八
救 キュウ 一八八

走部

*走 ソウ・はしる 一八八
赴 フ 一八八
*起 キ・おきる・おこす 一八八
超 チョウ 一八八
越 エツ・こえる・こす 一八八
趣 シュ・おもむき 一八八

足部

*足 ソク・あし・たりる 一八九
距 キョ 一八九
跡 セキ・あと 一八九
*路 ロ・じ 一八九
跳 チョウ 一八九
踊 ヨウ・おどる 一八九
踏 トウ・ふむ 一八九

践(踐) セン 一八九
躍 ヤク 一八九

身部

*身 シン・み 一八九

車部

*車 シャ・くるま 一九〇
軌 キ 一九一
*軍 グン 一九二
軒 ケン・のき 一九四
軟 ナン 一九五
軸 ジク 一九六
較 カク 一九七
載 サイ・のせる 一九七
*軽(輕) ケイ・かるい 一九八
輝 キ・かがやく 一九三
輩 ハイ 一九三
*輪 リン・わ 一九三
*輸(輸) ユ 一九三
*転(轉) テン 一九六

辛部

辛 シン・からい 一九二

*弁(辨)(辯) ベン 一九三
*辞(辭)(辤) ジ 一九三

辰部

*辱 ジョク 一九六
*農 ノウ 一九六

*込 こむ 一九七
迅 ジン 一九八
迎 ゲイ・むかえる 一九八
*近 キン・ちかい 一九八
*返 ヘン・かえす 一九九
迫 ハク・せまる 一九九
*述(述) ジュツ・のべる 一九三
*迭 テツ 一九三
*迷 メイ・まよう 一九四
*追 ツイ・おう 一九七
*退 タイ・しりぞく 一九三
*送 ソウ・おくる 一九三
*逃 トウ・にげる 一九七
*逆 ギャク・さかう 一九三
*透 トウ・すく 一九三
*逐 チク 一九三

*途 ト 一九三
*通 ツウ・とおる・かよう 一九三
*速 ソク・はやい 一九一
*造 ゾウ・つくる 一九四
*連 レン・つらなる・つれる 一九六
*週 シュウ 一九六
*進 シン・すすむ 一九六
逸 イツ 一九九
逐 スイ・とげる 一九九
*遇 グウ 一九七
*遊 ユウ・あそぶ 一九三
*運 ウン・はこぶ 一九三
*遍 ヘン 一九四
*過 カ・すぎる 一九七
*道 ドウ・みち 一九七
*達 タツ 一九三
*違 イ・ちがう 一九二
*遠(遠) エン・とおい 一九三
*遣 ケン 一九七
*適 テキ 一九九
遭 ソウ 一九八
*選(選) セン・えらぶ 一九四
*遵(遵) ジュン 一九五

*遷 セン 一九三
*還 カン 一九七
*辺(邊) ヘン 一九八

邑部

邦 ホウ 一九二
*邪 ジャ 一九二
*邸 テイ 一九三
*郊 コウ 一九四
*郎 ロウ 一九六
*都 ト・ツ・みやこ 一九六
*部 ブ 一九六
*郭 カク 一九七
*郵 ユウ 一九七
*都 ト・ツ・みやこ 一九八
*郷(鄕) キョウ・ゴウ 一九九

酉部

*配 ハイ・くばる 二〇〇
*酒 シュ・さけ 二〇〇
*酢 サク・す 二〇一〇
酬 シュウ 二〇一〇

酪 ラク 一〇一〇
酵 コウ 一〇一一
酷 コク 一〇一一
*酸 サン 一〇一一
*酔〔醉〕 スイ・よう 一〇一二
醜 シュウ・みにくい 一〇一五
*医〔醫〕 イ 一〇一六
*醸〔醸〕 ジョウ 一〇一八

釆部

*釈〔釋〕 シャク 一〇一九

里部

*里 リ・さと 一〇二〇
*重 ジュウ・チョウ・おもい・かさねる・え 一〇二一
*野 ヤ・の 一〇二四
*量 リョウ・はかる 一〇二七

金部

*金 キン・コン・かね 一〇二七
針 シン・はり 一〇三二
*鈍 ドン・にぶい 一〇三六
鈴 レイ・リン・すず 一〇三九
鉛 エン・なまり 一〇四〇
*銀 ギン 一〇四一
銃 ジュウ 一〇四二
*銅 ドウ 一〇四四
銑 セン 一〇四五
銘 メイ 一〇四五
鋭 エイ・するどい 一〇四六
鋼 コウ 一〇四九
*録〔錄〕 ロク 一〇五〇
錘 スイ・つむ 一〇五〇
錠 ジョウ 一〇五〇
*銭〔錢〕 セン・ぜに 一〇五一
錯 サク 一〇五一
*錬〔鍊〕 レン 一〇五二
鍛 タン・きたえる 一〇五六
鎖 サ・くさり 一〇五六
*鎮〔鎭〕 チン 一〇五九
*鏡 キョウ・かがみ 一〇六一
鐘 ショウ・かね 一〇六三
*鉄〔鐵〕 テツ 一〇六五
*鋳〔鑄〕 チュウ・いる 一〇六七
鑑 カン 一〇六七
*鉱〔鑛〕 コウ 一〇六七

長部

*長 チョウ・ながい 一〇七〇

門部

*門 モン・かど 一〇七四
閉 ヘイ・とじる 一〇七七
*開 カイ・ひらく 一〇七八
閑 カン 一〇八二
*間〔閒〕 カン・ケン・あいだ・ま 一〇八〇
閣 カク 一〇八四
閲 エツ 一〇八六
*関〔關〕 カン・せき 一〇八九

阜部

*防 ボウ・ふせぐ 一〇九五
阻 ソ 一〇九八
附 フ 一〇九九
降 コウ・ふる・おりる 一一〇〇
*限 ゲン・かぎる 一一〇二
*陛 ヘイ 一一〇五
*院 イン 一一〇五
陣 ジン 一一〇五
*除 ジョ・のぞく 一一〇六
陪 バイ 一一一一
陰 イン・かげ 一一一五
陳 チン 一一一九
陵 リョウ・みささぎ 一一二三
陶 トウ 一一二八
陥〔陷〕 カン・おちいる 一一二八
*陸 リク 一一三三
*陽 ヨウ 一一三五
隆 リュウ 一一三七
*隊 タイ 一一三八
*階 カイ 一一三九
隔〔隔〕 カク・へだてる 一一四九
*際 サイ 一一五〇
障 ショウ 一一五〇
隣〔鄰〕 リン・となり 一一五〇
随〔隨〕 ズイ 一一五二
*険〔險〕 ケン・けわしい 一一五一
隠〔隱〕 イン・かくれる 一一五三

隶部

隷〔隸〕 レイ 一一五五

隹部

隻 セキ 一一六六
雄 ユウ・おす・お 一一七〇
雅 ガ 一一七六
*集 シュウ・あつまる 一一八一
雇 コ・やとう 一一九一
雌 シ・めす・め 一一九三
双〔雙〕 ソウ 一一九六
*雑〔雜〕 ザツ・ゾウ 一一九七
離 リ・はなれる 一二〇〇
*難〔難〕 ナン・かたい 一二〇九

雨部

*雨 ウ・あめ 一二一一
*雪 セツ・ゆき 一二一二
*雲 ウン・くも 一二一四
零 レイ 一二一九
雷 ライ・かみなり 一二二八
*電 デン 一二二〇
*需 ジュ 一二三〇
震 シン・ふるう 一二三〇
霜 ソウ・しも 一二三三
霧 ム・きり 一二三五
露 ロ・つゆ 一二三六
霊〔靈〕 レイ 一二三九

青部

*青〔靑〕 セイ・ショウ・あお・あおい 一二六一
*静〔靜〕 セイ・ジョウ・しずか 一二六六

非部

*非 ヒ 一二七八

面部

革部
*面 メン・おも・おも 二六九
*革 カク 二七一
音部
*音 オン・イン・おと・ね 二八〇
韻 イン 二八二
響(響) キョウ・ひびく 二八三
頁部
*頁 チョウ・いただき 二八四
項 コウ 二八四
*順 ジュン 二八五
*預 ヨ・あずける 二八六
頒 ハン 二八八
*領 リョウ 二八九
*頭 トウ・ズ・あたま 二九五
*題 ダイ 二九七
*額 ガク・ひたい 二九八
*顔 ガン・かお 二九九
*願 カン・ねがう 三〇七
*類 ルイ 三〇九
*顧(顧) コ・かえりみる 三一〇
風部
*風 フウ・かぜ 三一〇三
飛部
*飛 ヒ・とぶ 三一一〇
翻(飜) ホン・ひるがえる 三一一四
食部
*食 ショク・ジキ・くう・たべる 三一一五
飢 キ・うえる 三一一五
*飲 イン・のむ 三一一五
*飯 ハン・めし 三一一七
飼 シ・かう 三一一八
飽 ホウ・あきる 三一一八
飾 ショク・かざる 三一一八
*養 ヨウ・やしなう 三一一九
餓 ガ 三一二一
*余(餘) ヨ・あまる 三一二二
*館 カン 三一二五
首部
*首 シュ・くび 三一三〇
香部
香 コウ・か 三一三二
馬部
*馬 バ・うま 三一三四
駐 チュウ 三一三六
騎 キ 三一三八
騰 トウ 三一三八
騒(騒) ソウ・さわぐ 三一四七
駆(駈) ク・かける 三一四九
*験(験) ケン 三一五四
驚 キョウ・おどろく 三一五五
*駅(驛) エキ 三一五七
骨部
骨 コツ・ほね 三一五八
髄(髄) ズイ 三一六〇
*体(體) タイ・テイ 三一六一
高部
*高 コウ・たかい 三一六三
影部
髪(髪) ハツ・かみ 三一六七
門部
闘 トウ 三一六九
鬼部
鬼 キ・おに 三一七二
魂 コン・たましい 三一七二
*魅 ミ 三一七二
魔 マ 三一七六
魚部
*魚 ギョ・うお 三一七七
鮮 セン 三一八二
鯨 ゲイ・くじら 三一八四
鳥部
鳥 チョウ・とり 三一八五
*鳴 メイ・なく・なる 三一八五
*鶏(鷄) ケイ・にわとり 三一八四
鹵部
*塩(鹽) エン・しお 三一八五
鹿部
*麗 レイ・うるわしい 三一八六
麦部
*麦(麥) バク・むぎ 三一八三
麻部
麻 マ・あさ 三一八五
黄部
*黄 コウ・オウ・き 三一八四
黒部
*黒(黑) コク・くろ・くろい 三一八九
*黙(默) モク・だまる 三一九〇
*点(點) テン 三一九二
*党(黨) トウ 三一九四
駿部
*駿(駿) コ・つづみ 三一九九
鼻部
*鼻 ビ・はな 三一九二
青部
*青(靑) セイ 三一九六
歯部
*歯(齒) レ・は 三一九八
*齢(齡) レイ 三一九八

字源

簡野道明著

一部

【一】イツ 圓 壹に通用す 大は古字

○ひとつ、ひと、數の始。老子「道生二一」○ひとたび「一四」中庸「人一能之、己百之」○ひとつびとつ「逐一」○はじめ(始)○かず(數)○きはまり(極)○おなじ(同)孟、離婁「先聖後聖其揆一也」○ひとし(均)唐書、薛平傳「絹賦均一」○すくなし(少)○まこと(誠)もつぱら(專)まじりなし(純)書、大禹謨「惟精惟一」ひとへに(偏)○ある(或)○すべて(總)みな(皆)史、淮陰侯傳「一軍皆驚」

【一握】アクアク ひとにぎり、少量。淮南子「夫道者、植レ之而塞二于天地一、橫レ之而彌二于四海一、卷レ之不レ盈二一一一」

【一位】イチヰ 圓松柏科の喬木。＝櫟木・水松樹。

【一意】イチイ 心を專らに一事にそそぐ。新語「管仲相二桓公一、謂レ商事レ君、專心一一、身無二境外之交一、心無二貳斜之慮一」

【一圓】イチエン ○ひとかかへ、兩手にて圍む義。文選、註「三尺曰レ圍、林希逸云、兩手合而圍レ之、爲二一一一」○緬隱詩「舞雪佳人玉一一」○ひとへにかこむ。李商隱詩「更請君王獵一一」

【一葦】イチヰ 一束稻のあし、水に浮べて筏とす、一つのこぶねに喩ふ。詩、衞風「誰謂二河廣一一一一杭レ之」杭は航。

【一葦渡江】イチヰトカウ 達磨が一葦の小舟に乘りて、楊子江を渡りし故事。吳船錄下「丁巳泊二長蘆報恩寺一宿二寺中一、此爲二菩提達磨一葦浮渡處一、寺在二沙洲之上一」後世「一葦」を誤りて一枚のあしの葉と爲すは非。

【一游一豫】イチイウイチヨ 天子の遊幸、豫は樂。孟、梁惠王「夏諺曰、吾王不レ遊、吾何以休、吾王不レ豫、吾何以助、一一、爲二諸侯度一」天子の遊幸は悪政に及びて、諸侯の法度となる。

【一衣帶水】イチイタイスイ ひとすぢの帶の如き狹き水。陳書、後主紀「陳後主荒淫、隋文帝曰、豈可レ限二一一一一不レ救レ之乎、乃伐レ陳」

【一一】イチイチ ひとつびとつ、ことごとく、悉一。韓非、內儲「好二一一一聽一レ之」文天祥、正氣歌「一一遵二丹青一」

【一絃】イチゲン 二十絃。曾子「黃金一一、百乘一宿之盡也」絃は一說に三十絃、また二十四絃。

【一溼米】イチシツマイ ひとにぎりのこめ。孔叢子「兩手曰レ掬、一手曰レ溼」證、弄戰「朝一一、暮一一」

【一因】イチイン ○一つの原因。○圓萬物はすべて同一の根本より出づる故、皆平等なりといふ理。

【一陰】イチイン 圓二人以上の上席ましますとき、第一の上座の稱。

【一陰一陽】イチインイチヤウ 一つの陰と、一つの陽と。易、繫辭、一一之謂レ道、繼レ之者善也」

【一刷】イチサツ 一枚のはれ、始めて刷きも

のに喩ふ。孟、梁惠王「吾力足二以舉二百鈞一而不レ足二以舉一一一」

【一宇】イチウ 一つの家屋。宋高僧傳「一一僧房」

【一芭】イチハ ひとはち、芭はわん、又、はち。史、滑稽傳「一豚蹄、酒一一」

【一榮一落】イチエイイチラク ひとたびは榮え、ひとたびは衰ふ。＝一榮一枯。

【一葉】イチエフ ○きりのひと葉。李子卿、秋扇賦「一一落兮天地秋」○一つの小舟に喩ふ。赤壁賦「寓二一一之芥一レ舟」○一枚に同じ。

【一葉知レ秋】イチエフシルアキ 梧桐の一葉の落つるを見て秋の來るを知る、事物のきざしを見て大勢を察すべきに喩ふ。淮南子「見二一葉落一而知二歲之將レ暮」唐詩「山僧不レ解數二甲子一、一葉落知二天下秋一」

【一圓】イチエン ○圓のこらず、全體。○圓貨幣の單位、百錢の稱。＝一元。

【一隅】イチグウ 一つの村のとりて、又一つの小さき境。論語、舉レ一一不レ以二三隅一、則吾不レ復也。＝一境。

【一息】イチソク ○圓一切の義。水滸傳「一

一費用、都是趙某備辦」〇圓ひとはり、ひとまづ、とにかく。

【一糜】ダイ　〇すべて、善きも悪しきもひきくるめて、糜は概に同じ。史、屈原傳「同二糅玉石一兮、一一而相量」〇おなじ（同）ひとし。杜甫詩「漢方傘一一」

【一毫】ダイガウ　一本の毛すぢ、少しばかり。孟、公孫丑「思下以二一一一接中于人上若レ繋二之于市朝一」

【一寨】ダイサイ　前條に同じ、寨・塞同義。

【無二一毫差一】イチガウサシ　少しの間違もなし。旧書、崔祐傳「夜分輒決レ事、裁割精明、——」

【一合一離】イチガフリ　或は合ひ、或は離る。魏國策「齊趙之交、——」

【一盖】ダイ　ひとつのことわり。

【一箇】ダイ　ひとつの事がら、ひとつののり。淮南子「一一不レ可二以百變一」

【一漢】ダイ　ただ一度の評議。

【一牛鳴地】イチギウメイチ　圓牛の鳴き聲の聞ゆる程の距離の地、鳴一に吼に作る。五車韻瑞、佛書云、以二一一爲二夫五里一、五里はわが三十町弱。王維詩「嫌看雙鳳闕、相去一牛鳴」

【一釣】イチテウ　釣は三十斤。左、定八「顛高之弓六鈞、皆取而傳二觀之一」註「三十斤爲レ鈞」

【一隅】イチグウ　一方のすみ、物のかたはし。論、述而「舉二一一隅一而示レ之、不下以二三隅一反上則不レ復也」

【一遇】イチグウ　ひとたびあふ。晉書、裴宏傳「千載一一、實智之遘會」

【一軍】イチグン　〇周代の制、兵士一萬二千五百人の稱。周禮、注「萬二千五百人爲レ軍」〇軍隊のこらず、全軍。史、淮陰侯傳「一一皆驚」

【一墓】イチボ　ひとむれ。陳信詩「野人相就飲、山鳥一一鳴」

【一丸】イチグワン　ひとまるめ、ひとかたまり。後漢書、陳蕃傳「將以二一一泥一、爲二大王一東封二函谷關一、此萬世一時也」

【一夏】イチカ　圓陰暦四月十六日より七月十五日までの稱、其の間、一切行脚を廢して、安居の期とす（水行經）

【一慧】イチヱ　〇六藝の一。史記「能通一一以上、補二文學掌故缺一」〇一つの藝能「一技一一」

【一月】イチグワツ　〇正月をいふ。賓、春宴序「一一戊午」〇一ヶ月。一月三捷を見よ。

【一月九遷】イチゲツキウセン　一月の中に九度官位の進むをいふ、後漢の車千秋の故事。任昉、代二范雲一謝表「千秋之一日九遷、荀爽之十旬遠至、方二之微臣一、未レ爲二速速一」一日は、一月の誤なること、文選、李善注に見ゆ。

【一月三舟】イチゲツサンシウ　圓三舟あり、一は停り、一は南し、一は北す、南する舟は月の南に隨ふを見、北する舟は月の北に隨ふを見、停る舟は月移らずと見る、如來の智慧は周く照せども、人によりて見樣の異なるに喩ふ。大寶法數「澄江一月、三舟共觀、一舟停住、二舟向二南北一行、向レ南者見二月隨レ南、向レ北者見二月隨レ北、停レ舟者見二月不レ移、譬下如來智無レ不レ周、體無レ不レ在、無依無住、無去無來、皆由二衆生緣有一生熟一故、見二如來有二去住相一、法身之體、本無二去住一也、一月喩レ佛、三舟喩二世間衆生見佛不同一、是名二——喩一也」

【一月三捷】イチゲツサンセフ　一ヶ月の間に三度戰に勝つ。詩、小雅「戎車既駕、四牡業業、豈敢定居、——」

【一言】イチゲン　〇一字をいふ。白虎通「蓋或一一、或兩言」〇一句をいふ。一言以蔽レ之を見よ。〇一度いふ。左、昭三「仁人之言、其利博哉、晏子一一、而齊國省レ刑」

【一言一行】イチゲンイチカウ　一つのことばと、一つの行と。隋書、辛彥謙傳「自レ少及レ長、——、未二嘗涉一レ私」

【一言而非顯馬不レ能レ追】イチゲンジヒケンマフレバオヒアタハズ　一言、口より出でてなば、四頭立の馬車にて追ふも、追ひつきて取りかへすべからず、言語の愼むべきをいふ（說苑、說叢）論、顏淵「駟不レ及レ舌」

【一言半句】イチゲンハンク　わづかのことば。明心寶鑑「——、重値二千金一」

【一言半辭】イチゲンハンジ　わづかのことば。史、信陵君傳「公子曰、侯生留無二——遂レ我」〓一言半句。

【一言以蔽之】イチゲンモツテコレヲオフ　一言にして全體の意義を盡す。論、爲政「詩三百、——、曰思無レ邪」

【一弦琴】イチゲンキン　圓一すぢのこと、すぎごと。

【一絃琴】イチゲンキン　一すぢの琴。梁元帝詩「妾搖五明扇、爰弄——」

【一元大武】イチゲンタイブ　牛の異名、元は頭、武は蹄迹、牛肥ゆれば迹大、故にいふ。曲禮「祭二宗廟一之禮、牛曰二——一」

【一元論】イチゲンロン　宇宙の萬象は無限なれども、其の始は唯一なりとする論、二元論・多元論の對。

【一五一十】イチゴイチジフ　圓一から十まで、始から終まで、悉く、五一に位に作る。〓一部始終

【一虫】イチチウ　同じ席に坐する者、坐は古、座に通ず。史、封禪書「一一避驚」〓一座。

【一座】イチザ　〇かみざ。〇同じ座席〓同席。

【一次】イチジ　〇はじめ、最初、一番目。〇いつぺん、一回、一度。

【一時】イチジ　〇ひととき、つかのま、當座。史、晉世家「一一之利」〇其のとき、當時。魏志、郭支傳「一一雄見」〇同じとき、同時。漢書、魏相傳「四人各主二一一一」〇三ヶ月（春秋序疏）

【一時賜金】イチジシキン　その時限りの下賜

金、年金の類。

【不レ能レ贊二一辞一】イフコトアタハズ　一言だに助け添ふること能はず、極めて名文なるをいふ。史、孔子世家「筆則削、子夏之徒——」

【一字行】イチギヤウ　僅一文字に進み行く。白居易詩「軽衫細馬春年少、十字津頭——」

【一字千金】イチジセンキン　一字が千金の価にあたる、すぐれたる文字・文章などを稱賛していふ、秦の呂不韋の故事に本づく。史、呂不韋傳「呂不韋取二呂氏春秋一布二咸陽市門一、懸二千金其上一、延二諸侯游士賓客一有レ能増二損一字一者与二千金一」

【一字之師】イチジノシ　五代の時、齊己の早梅の詩に「前村深雪裏、昨夜数枝開」とありしを、鄭谷評して、数枝は早梢に適せず、一枝とするに如かずと曰ふ、齊己悦え下り拝す、匹人谷を稱して一字の師といふ、この故事により詩文中の一字の穏かならざる文字を改め呉るる人を尊びていふ（五代史補）

【一字褒貶】イチジホウヘン　春秋の書法、褒ぐるときは字を褒し、貶するときは名を稱するをいふ。左傳序「春秋雖二一字之褒一、貶一然皆須二数句一以成レ旨」

【一食頃】イツシヨクノケイ　圖一度食事する間、轉じて短き時間、即ち寸時・片時の義。法華經、六十小劫、喩如二——一ニ一餉時・一菜頃ケイ　〇ひとひ、終日。月令廣義「一一之計在レ晨」〇ある日。韓愈、何蕃傳「一一擇二諸生一」〇昨今、一朝一夕。韓非、存韓「欲三西面行二其意一、非二一一之計一也」

【一日暴レ之十日寒レ之】イチジツコレヲサラストキハジフジツコレヲヒユ　一暴十寒（宝貝三枚）を見よ。

【一日三秋】イチジツサンシウ　一日逢はざれば、三秋即ち九ヶ月も逢はざる心地する、思慕の切なるをいふ。詩、王風、「一日不レ見、如二三秋一兮」

【一日千里】イチジツセンリ　〇日に千里行く駿馬。廣子、盛箴「騏驥縦レ軼、毎二一日一走千里、有二必走之勢一也」〇俊才を駿馬に喩へていふ。後漢書、王允傳「王佐——王佐才也」

【一日程】イチニチテイ　一日にて到るべきみちのり。楊萬里詩「萬里雲帰——」

【一日縦レ敵数世之患也】イチジツテキヲホシイマヽニスレバスウセイノウレヒアリ　一日たりとも敵を逸し置くは数世までの患を遺すとの意（左、僖三三）

【一日二日萬機】イチジツニジツバンキ　人君の倦怠を戒めたる語、幾は微、事の發動する機をいふ、僅に一日二日の間に、事幾の來る、萬に至る、故に人君は、戒慎せざるべからず。書、皐陶謨「兢兢業業、——無レ曠二庶官一、天工人其代レ之」

【一日之長】イチジツノチヤウ　〇少しく年齢の多き義。論、先進「以レ吾一日長二乎——一ニ」〇少しく勝れたる義。唐書、王珪傳「豆子二数子一、有二一日之長一」

【一仞】イチジン　仞は周の尺にて八尺、一説に四尺、又、七尺。書、旅獒「爲レ山九仞、功虧二一簣一」

【一乗】イチジヤウ　〇ひとひろ、八尺。周禮、地官鼓氏注「八尺曰レ尋、倍レ尋曰レ常」一説七尺。〇ひとたび乗ねる。羅隠詩「登閣遣編試一一、寂寥前事似二如今一」

【一稔】イチネン　穀の一年に一回みのるに取りて、一年の義とす。五代史、王朴傳「兵力精鋭、器用具備、幕下知レ法、諸将用レ命、一一之後、可二以平一レ邊」唐韻「稔、年也、古人謂二一年一爲二一一、取二穀一熟一也」

【一将功成萬骨枯】イチシヤウコウナツテバンコツカル　一人の大将が功名を成すは、萬人の兵卒が命を捨てたる結果なりといふ警戒の語。曹松詩「澤國江山入二戦圖一、生民何計樂二樵蘇一、憑レ君莫レ話二封侯事一、——」

【一株蔓】イツシユノマン　ひとつのとこの上の書物。庾信詩「遊仙半壁畫、隠士——」

【一戎衣】イツジウイ　一たび兵甲を著ける。書、武成「——天下大定」杜甫詩「風塵三尺劍、社稷——」

【一樹陰一河流】イチジユノインイチガノナガレ　圖共に一樹の陰に宿り、一河の流を汲むも、皆これ他生の縁といふ義。佛法明眼論「或處二一村一、宿二樹下一、汲二一河流一、一夜同宿、一日夫妻、皆是先世結縁」

【一樹百穫】イチジユヒヤククワク　一つ植ゑて百の收穫がある、人物を養成するは大なる利益ある譬。一年之計莫レ如レ樹レ穀（宝貝一枚）を見よ。

【一旬】イチジユン　十日間。説文「十日爲レ旬」周禮「凡士之治、有二朝日一、國中一一、郊二旬」

【一乗】イチジヨウ　〇圖衆は如來の教法、衆生を乗せ運びて生死を出離せしむる意。法華經「十方佛土中、惟有二一一法一」〇車一輛をいふ。司馬法「兵車一一、甲士三人、歩卒七十二人」

【一舌之任】イチゼツノニン　口舌によりて事を處置する任務。梁書「張吏部在二——一」

【一瞬】イツシユン　ひとあへぎ、極めて短き時間、一息。蘇軾詩「我老安能貧、萬劫付二一一一」

【一族】イチゾク　同じやから、一つの親族。周語「王御不レ參二一一一」

【一粟】イツゾク　ひとつぶのもみ、微小に喩ふ。赤壁賦「寄二蜉蝣於天地一、渺滄海之二一一」

【一存】イツソン　圖おのれ一人の考。

【一朶】イチダ　〇ひとえだ。白居易詩「綠水紅蓮——開、千花百草無二顏色一」〓一枝。〇ひとひれの雲。竹坡詩話「翩翩孤山一一雲」

【一駄】イチダ　馬一匹だけの荷物、駄は俗

字。宋史、食貨志「以二百四十斤一爲二一時一」二十斛爲二一——一」蘇軾詩「——頃去來今」

【一代】ダイチ ○一世、人の一生。漢書、蕭何傳「爲二一一之宗臣一」○其の世、其の時代。遷賢詩「一一文章太史公」【一代記】ダイチキ 個人一代の傳記したる書。

【一大劫】コチダイコフ 圖住劫・壞劫・空劫・成劫を各一小劫といひ、この四小劫を經せたる期間を一大劫とす。觀無量壽經「滿十二大劫、蓮花方開」【一蓬二妙】イチダイニベウ 尙書令衛瓘と尙書郎索靖と二人俱に草書を善くす、故に——といふ。蓬は官省【晉書】【一諾千金】イチダクセンキン 然諾を重んずる義。史、季布傳「得二黃金百斤一、不レ如レ得二季布一諾一」〓季諾・金諾。【一段】イチダン ○ひときは、一層。李嶠、詠レ雲詩「散作二五綵色一凝爲二一一愁一」○ひとくぎりの地。唐書、朱敬則傳「敬則兄仁軌、嘗誡二子弟一曰、終身讓レ路、不レ枉二百步一、終身讓レ畔、不レ失二一段一」○圖古、六十間をいふ、又、十畝、卽ち三百步。【一團】イチダン ひとかたまり。岑參詩「君家赤驃奔不レ得、——旋風桃花色」【一團和氣】イチダンワキ ひとかたまりの和順の氣。二程全書「謝顯道云、明道先生坐如二泥塑人一、及レ接二人、渾是——」【一彈指】イチダンシ 圖指を一つはじくだけの極めて短き時間。名義集「二十念爲二一瞬一、二十瞬爲二一——一」蘇軾詩「——頃去來今」

【一軸】イチヂク 書畫の掛物を數ふるにいふ。東觀餘論「余無二富貴願一、獨好二古人筆札一、每獲二一軸一展玩、——日不レ知二疾疢之在レ躬、而味可レ忘」【一陣】イチヂン ひとしきり。裴說詩「——風殺二柳條一、濃煙半夜成二黃葉一」【一陣寒】イチヂンカン 一としきり寒い。韓偓詩「昨夜三更雨、今朝——」【一塵】イチヂン すこしのちり。易、繫辭、本義「聖人具二三者之德一、而无二一一之累一」唐彥謙、遊二清涼寺一詩「——不レ到心源淨、萬有俱空眼界清」【一塵不染】イチヂンフセン 圖塵は物欲に喩ふ、物欲に染まざるは、六根清淨の義。後世純潔なる者の形容とす、塵地の清淨、操守の廉潔、文字の粹美などに皆いふ。

【一錠】イチヂヤウ 銀のいたがね、又は靈など一つ。圓絵寶鑑「磨出——兩錠、掃出千年萬年樹」【一丈紅】イチヂヤウコウ 薔薇語にて芍藥の稱。

【一場春夢】イチヂヤウシユンム ○ぼんやりとしてはかなき義。張謂詩「倚二杜陵思信惆悵、——不二分明一」○人間の盛衰は、春夜の夢の如くはかなきに喩ふ。侯鯖錄、東坡行歌二田間一、歸輒曰、內翰昔日富貴、——、坡然レ之、人呼二此媼一、曰二春夢婆一」

【一條】イチデウ 一件の事。晉書、劉寔傳「撰二春秋條例二十卷一」注「凡百レ條者、一一而疏二舉之一、若二木條一焉」

【一帖】イチデフ ○書籍、紙類のひとをり。唐書、選擧志「博士考試、讀者千言、試——」○藥一劑をいふ。白居易詩「已題——紅消散」

【一怒】イチド ひとたび怒る。孟、滕文公「——而諸侯懼、安居而天下熄」【一度】イチド 一回、又一時。太平廣記「張說兩男——合死」【一同】イチドウ みな、いづれも。〓一統。【一動一靜】イチドウイチセイ 或は動き或は靜か。禮、樂記「——者、天地之間也」【一頓挫】イチトンザ ひとくじけ。頓挫を見よ。

【一入】イチニフ ○一たび中へ入る。戴叔倫詩「嫦娥——二月中一去、孤峽千秋空自雲」○圖染物を一度染汁に浸すときは其の度毎に色を增すが故にひときはの義とす。〓一段・一層。

【一人】イチニン ○人ひとり。孟、梁惠王「——衝二行於天下一、武王恥レ之」○ダイテン天子を稱す。書、太甲「——元良、萬邦以貞」傳「——天子、天子有二大善一、則天下得二其正一」○圖ダイドノ攝政關白の異稱。

【一人傳】イチニンデン 盧嵩人傳レ實【一犬吠レ形百犬吠レ聲】イチケンハイケイヒヤクケンハイセイ 一犬吠レ形百犬吠レ聲を見よ。【一人知レ儉一家富】イチニンカンイツカフ 家長たる者、節儉を知れば、其の家富む。譚子化書「——王者知レ儉、則天下富」【一人當千】イチニントウセン ○非常に大力ある者をいふ。涅槃經「譬如二人王有二大力士一、其力當レ千、更無二有レ能降一伏之一者、故稱二此人一——」○武勇の特にすぐれたるをいふ。李陵、答二蘇武一書「疲兵再戰、一以當レ千」【一人敵】イチニンテキ 劍術をいふ。史、項羽紀「劍——不レ足レ學、學二萬人敵一」【一人出兮不二容易一】イチニンイヅルヲヨウイナラズ 天子の行幸は容易の事にあらず。白居易詩「吾君不レ遊有二深意一、——、六宮從今百回偏、八十一車千萬騎」【一人有レ慶兆民賴レ之】イチニンケイアリテチヤウミンコレニヨル 一人は君なり、君の善惡は、萬民の幸憂に關す、故に君の政を爲すは、最も愼むべしとの意【書、呂刑】【一任】イチニン ○さもあらばあれ、ままよ。皮日休詩「卻將二塵土衣一、一濯絲綸淺」〓任他、遮莫。○ひとたび官に任ず【宋史、選擧志】【一如】イチニヨ 圖純一無雜にして異ることなきをいふ、眞如の理。【一念】イチネン ○ひとすぢのおもひ。參同契、注「精勤不退——通レ天」〓一心。○ひとつのこころ。宋史、湯漢傳「——之敎、上帝臨レ汝、祥風慶雲所二從出一也、——之肆、上帝震怒、妖氛陰慘所二從生一也」【一念三千】イチネンサンゼン 圖人の一念中には、三千の法界を具へたりとの意【正觀】

【一年三百六十日】一年中をいふ。施肩吾詩「——、賞心那似二春中物一」

【一年草】一年毎に新芽を出す草。

【一年之計莫レ如レ樹レ穀】一年中の生計を謀ろには、五穀を植うるに若くことなき義。管子「——、十年之計、莫レ如レ樹レ木、百年之計、莫レ如レ樹レ人、一樹一穫者穀也、一樹十穫者木也、一樹百穫者人也」

【一年之計在二于春一】事は豫め計畫し置くを要す、されば一年中の事は、春の初に方針を定むべしとの義。梁元帝纂要「——、一日之計在二于晨一」

【一年將レ盡夜、萬里未レ歸人】戴叔倫、除夜宿二石頭驛一詩「旅館誰相問、寒燈獨可レ親、——」

【一年虛渡レ秋】陰曆の八月十五夜（中秋）に陰りて月なきをいふ。古詩「此夜若無レ月、——」

【一能】一つの藝能。「一技——」

【一上】國左大臣の異稱、太政官の事を總理せし故にいふ、一ノ大臣ともいふ。

【一后】國皇后の異稱。

【一宮】國第一皇子、又、諸國にて第一の格式ある神社。

【一倍】二が四となり、四が八となる如きをいふ。越絶書「一歳再倍、其次一一」

【一八】國草花の名、漢名、鳶尾草。

【一番】〇ひとたび、一度。陸龜蒙詩「幾點社翁雨、——花信風」〇一枚に同じ。聞見近錄「出二紙一一」

【一番槍】國人より先に敵陣に槍を入れる。

【一部】〇全體中の或る部分、一部分。〇書籍の一組。毛詩、國風、疏「詩者一一之大名、國風者十五國之總稱」〇ひとくみの音樂。周書、文帝紀「賜二子鼗金石絲竹樂一一」

【一部始終】事の始より終まで、一伍一什。

【一物】〇ひとつのもの。傳燈錄「本來無一一」〇一事、又、一件の義。禮、文王世子「行二一一而三善得者、唯世子而已」〇國一つのたくらみ、陰謀。

【一物不レ知君子之恥】一つの物を知らざるも、君子は之をはづ、故に學を勉むべしの誡。陔餘叢考「晉書、陶淵明謂二范隆一曰、——」南史、陶弘景傳「讀書萬卷、一事不レ知、以爲二深恥一」

【一佛淨土】國同じ佛界に生れあふ。

【一分】國其の身一人丈の分際。

【一分銀】國德川時代の銀貨幣の一、今の二十五錢に當る。

【一別】一たびわかれる。白居易詩「一一音容兩渺茫」

【一別三春】一度別れて三年を經る。杜甫詩「一別星橋夜、三移斗柄春」

【一瞥】ちらりと見る。莊子「天下嚮レ之猶二一一一也」

【一瓣】〇ひとつのはなびら。本草集解「抽レ莖開レ花、如二一一蓮花一」〇果實の肉の幾つにも分れたる一片。仙傳拾遺「羅公遠嗅レ柑、明皇取レ食レ之千餘枚、皆缺二一一一」

【一瓣香】ひとつまみの香を燒く義、人を敬ふにいふ。陳師道詩「向來——、敬爲二曾南豐一」

【一眸】ひと目、眸はひとみ。崔珏詩「一一春水照レ人寒」

【一木】一本の木。文中子「大廈將レ顚、非二一一所一レ支」

【一木之枝】一本の樹のえだ。史、劉敬・叔孫通傳「千金之裘、非二一狐之腋一也、臺榭之榱、非二——一也、三代之際、非二一士之智一也、信哉」

【一暴十寒】一日暖めて、十日之をひやす、勤むること少く、怠ること多きに喩ふ。暴は曝。孟、告子「雖レ有二天下易レ生之物一也、一日暴レ之、十日寒レ之、未レ有二能生者一也」

【一枚】一箇に同じ、我が國にては紙・板の如き薄き物を數ふるに用ふれども、もと廣く物を數ふるに用ふ。說文「枚、幹也、又箇也、樹枝曰レ條、幹曰レ枚、故凡數レ事曰レ條、數レ物曰レ枚」漢官儀「賜二陰麋大墨一一」

【一枚看板】國俳優などの特に技術のすぐれたる者が、他と連名にせず、別に一枚の看板に其の名を揭ぐること、轉じて俳優の魁、又は一團隊の長の稱。

【一毛】〇ひとすぢの毛。孟、盡心「楊子取レ爲レ我、拔二一一一而利二天下一、不レ爲也」〇極めて輕きに喩ふ。朱熹詩「昨夜江邊春水生、蒙衝巨艦一一輕」

【一毛不拔】吝嗇の者を譏る語。前條の孟子の語を見よ。

【一盲引二衆盲一】國無識者が他の多くの愚者を導きて誤らしむる義。本朝俚諺「無門關云、拚レ身捨レ命、——」

【一網打盡】異黨の人を一時に捕へ罪するをいふ。東軒筆錄「劉元瑜、既彈二蘇舜欽一、遂坐者甚衆、同時俊彥爲レ之一空、劉見二宰相一曰、聊爲二相公一——」

【一抹】ひとなすり。宣和畫譜「躡レ影追レ電、一一千里」

【一味】〇食物の味が一樣である。杜甫詩「數斛廚帷一一」〇國おなじなかま、味方。「一一徒黨」〇國ただ一つの品、多く藥品にいふ。

【一脈】ひとすぢ、脈は脈絡の意。許月卿詩「流泉一一到二宮前一」

【一名】〇別のとなへ。＝異名・別

稱。〇官吏登用試驗に第一番の成績にて及第する。又其の人。〇俗語にて一人の義。
【一命】〇はじめて士となる、はじめて官を拜命せし義。周禮「ーー爵ニ子卿ニ」北史、周太祖紀「以ニ第一品ー爲ニ九命、第九品爲ニーーー」〇一人のいのち「ーーを擲つ」
【一面】〇一方面の略。史、酈侯世家「蕭曰、漢王之將、獨韓信、可ㇾ屬ニ大事ー當ニーーー」〇一方の義。水滸傳「ーー降ニ赦天下罪囚ー（中略）ーー命ニ在京宮觀寺院ー」〇一度面會する。晉書、張華傳「見ㇾ華ーー如ㇾ舊、欽ニ華德範ー如ニ師資之禮ー焉」〇琴・鏡の類の一具をいふ。
【一面識】一度逢ひて顏を見知れる人。
【一沐】ひとたびかみあらふ。呂覽「昔者禹ーー而三捉ㇾ髮、一食而三起、以禮ニ有道之士ー」史、魯世家に周公が賢を求むるに切なる樣を述べて「ーー三捉ㇾ髮、一飯三吐ㇾ哺、起以待ㇾ士」
【一目散】圏ひとすぢに急ぎて、逸散に同じ。
【一目十行】書を讀む眼力のするどきをいふ。北齊書、河南王孝瑜傳「讀ㇾ書十行俱下」遼史、楊遵勗傳「遵勗敏秀、遵勗一目五行俱下、剖決如ㇾ流」
【一目眇】めっかち。晉書、殷仲堪傳「父病積ㇾ年、仲堪衣不ㇾ解ㇾ帶、躬學ニ醫術ー究ニ其精妙ー執ㇾ藥揮ㇾ涙、遂眇ニ一目ー」五代史、唐莊宗紀「克用少驍勇、軍中號曰ニ李鴉兒ー其ーー、及ニ其貴ー也、又號ニ獨眼龍ー」
【一目瞭然】ひとめ見て明かなり。
【一門】〇みうち、一家、一族同族。後漢書、張酺傳「豈有ニーー忠義而爵賞不ㇾ及乎」〇總一つをいふ。
【一文不通】圏一字を知らざるあきめくら。
【一樣】すべておなじさま。杜耒、寒夜詩「尋常ーー窗前月、纔有ニ梅花ー便不ㇾ同」
【一陽來復】冬至の日に至りて、陰氣漸く窮り、一陽初めて生ず、故に冬至をいふ。易、復卦本義「復、陽復生ニ於下ー也、剝盡則爲ニ純坤十月之卦ー而陽氣已生ニ於下ー矣、積ㇾ之踰ㇾ月、然後一陽之體、始成而來復、故十有一月、其卦爲ㇾ復、以ニ其陽旣往而復反ー故有ニ亨道ー又自ニ五月姤卦一陰始生ー至ㇾ此七爻而ーーー、乃天運之自然」轉じて事物回復の運に遇ふ義とす。
【一躍】ひととび、一足飛び。荀、勸學「騏驥ーー不ㇾ能ニ十步ー」
【一夜征人盡望ㇾ鄕】唐の李益の詩の句、征人は出征の人。其の夜上ニ受降城ー聞ㇾ笛詩「回樂峰前沙似ㇾ雪、受降城外月如ㇾ霜、不ㇾ知何處吹ニ蘆管ー、ーーーー」
【一由旬】圏由旬は支那里の四十里・八十里・三十里・十六里の諸說あり、大論には大の由旬は八十里、中は、六十里、下は四十里とす。法華經「菩提樹下敷ニ師子座ー高ーー」
【一與一奪】或時は之を與へ、或時は之を奪ふ。左、成八「詩曰、士也罔ㇾ極、二ニ三其德ー、七年之中、ーーーー二三孰甚ㇾ焉」
【一勞永逸】僅かの勞力を以て、多年の安樂を得。齊民要術「苜蓿長生、種者ーーーー」
【一樂】〇ひとつのたのしみ。孟、盡心「父母俱存、兄弟無ㇾ故、ーー也」〇圏ーー纔は浮纔にせる絹織物、和泉の人、土屋ーーの創始。
【一臘】圏年功を積みたる長老。
【一覽】〇一度みる。後漢書、禰衡傳「雖ニーー猶能識ㇾ之」〇ひと目に見渡す。明一統志「ーー樓、在ニ松江府延果寺ー」〇簡明にして一見して知るべきもの「ーー表」
【一覽不ㇾ忘】一とたび見れば忘れず。釋氏通鑑「僧一行、凡經籍一覽、畢世不ㇾ忘」
【一利一害】一つの利益と一つの害と。
【興ニ一利ー不ㇾ若ㇾ除ニ一害ー】一個の利を始むるよりも、舊來の弊害を除くをよしとす。元史、耶律楚材傳「楚材每言、ーー、生ニ一事ー不ㇾ若ㇾ減ニ一事ー」
【一里一堠】いちりづかの一里堠。北史、韋孝寬傳「孝寬爲ニ雍州ー、改ㇾ路側一里置ニ一土堠ー、歲久損壞、以ㇾ木代焉、周文帝令ニ天下效ㇾ之、一里植ニ一木ー、三里植ニ三木ー、百里植ニ五木ー」字典「堠ハ土ヲ封ジ、或ハ木ヲ以テ里ヲ記スルナリ」
【一流】〇一等に同じ。世說「第ーー復是誰、曰正是我輩」〇師と異りたる一つの流儀。
【一律】〇一樣の音律。淮南子「聽ㇾ音者、不ㇾ可ㇾ聽以ニーーー」〇同じ一樣。蘇軾詩「詩畫本ーー、天工與ニ淸新ー」〇すべて物の變化なき義。「千篇ーー」
【一粒萬倍】〇圏ひとつぶのもみをまけば、萬倍の米となる、一つの善根も多くの佛果を得る喩。〇稻の異名。
【一輪月】一つの圓き月。孟郊詩「高秋數奏琴、澄澈ーーー」
【一兩】〇車一つ。＝一輛。〇古の貨幣の單位、今の圓。〇一二つ。「ーー日」
【一領】甲冑及衣服などの一そろひ。韓非子「不ㇾ用ニーー甲ー」
【一輛】車ひとつ。詩、召南、注「一車兩輪、故謂ㇾ兩」＝一兩。
【一旅】周代の制、兵士五百人の稱。「衆ーー」詩、小雅「我師我旅」

築「五百人爲レ旅」

【一龍一蛇】イツチリウ　或は龍となりて、天に昇り、或は蛇となりて池中に潜む。治世には出で、濁世には隠れて善く時と化するに喩ふ。莊、山木「――與レ時俱化」

【一龍一猪】イツリウイツチヨ　聖問の有無により、甚だしく賢愚の差を生ずるに喩ふ。猪はぶた。韓愈詩「三十毋酔成、乃――」

【一力】イツリク　一人の下男。南史、陶潛傳「爲二――一給二其子一書曰、汝旦夕之費、自給爲レ難、今遣二此力一助二汝薪水之勞一、此亦人子也、汝善遇レ之」‖一僕。

【一連】イツレン　ひとすぢのいと、轉じてわづかのつながり。孔叢子「以二――之任一繫二千鈞之重一」白居易詩「此生雲――」

【一類】イツルイ　〇同一の種類。呂覽「陰陽之和、不レ長二――一、甘露時雨不レ私二一物一、萬民之主、不レ阿二一人一」〇國なかま、同族。

【一例】イツレイ　〇多くの物をおしなべて、一様。史、禮書「諸侯藩輔臣子――、古今之制也」〇一つの例證。

【一犂閑】イチレイカン　犂は耜に同じ、耕なり、耕すに程よき潤のあめ。羅鄴欽詩「山邊夜半――、田父高歌待二歲稜一」黃庭堅詩「南村北村雨一犂」

【一列】イツレツ　一とならび。唐書、李勣傳「女樂――」

【一驂】イツサン　〇一つの對句。許彦國詩話「――云、勢如二連璧友一、情若二兄弟人一」‖聯句。〇ひとつづられ‖一連。

【一蓮託生】イチレンタクシヤウ　〇圓念佛を唱ふれば、死して共に極樂の蓮華の上に生るといふ意。〇轉じて衆人同一の運命に遇ふ譬とす。

【嘗二一臠肉一知二一鼎味一】シヤウイチレンニクチイツテイキミヲ　一臠は一ときれの肉、鼎はなべ、一部を推して全體を知るに喩ふ。淮南子「譬二一臠一知二一鼎之味一、縣二羽與一炭、而知二燥濕之氣一」

【一弄】イツロウ　〇ひとたび音をかなでる、奏は樂曲。劉商詩「――綠桐生死足」〇扁のひときへづり。‖一哢。

【一顰】イツピン　〇ひとつのはたけ、畝は隴に同じ。白居易詩「不レ種二――田一、倉中有二餘粟一」〇畑のひとうね。

【一六】イツロク　〇圓明治九年以前の休暇日、毎月一と六とに當る日を休日とす。〇圓すごろく?――勝負」

【一往】イツワウ　ひたすら、一と筋に。皇侃、論語義疏「――觀二回終日默識不レ違、殊似二於愚者一」

【一往一來】イツワウイツライ　ひとたびゆき、ひとたび來る。曾子「――、莫二之能恩一」

【一泓】イツワウ　ひとたまりの深く清き水。趙嘏詩「――秋水千竿竹、解得勞生半日閑」

【一椀】イツワン　一つのわん。白居易詩「寒食深爐――茶」

【一擧一反三】イツキヨイツハンサン　一事を擧げ示されれば、自ら反して他の三事を察し知る。論、述而「擧二一隅一而示レ之、不レ以二三隅一反、則不レ復也」蔡邕別傳「性通敏、――」

【得レ一忘十】イツテンジフ　記憶力の乏しき戯。韓愈詩「――眞堪レ貽」

【敎レ一識レ百】イツテンヒヤク　少しく敎ふれば、推して他の多くをさとる、才のすぐれたる義。小學「文王生而明聖、太任敎レ之以レ一而識レ百」‖聞レ一知レ十。

【聞レ一以知レ十】イツブンイチヲシツテジフヲ　極めて聰明なる義、一箇條を聞きて、他の十箇條をさとる義。論、公冶長「回也、――」

【聞レ一以知レ二】イツブンイチヲシツテニヲ　一箇條を聞きて、二箇條をさとる。論、公冶長「賜也、――」

【賞レ一勸レ百】イツシヤウイツカンヒヤク　一人の善を賞して、他の百人の善を爲すことを奬勵する。文中子「賞レ一以勸レ百、罰レ一以懲レ衆」

【以レ一警レ百】イイツケイヒヤク　小事を以て大事の戒となす。漢書、尹翁歸傳「其收二取人心一也、――、吏民皆服」

【以レ一知レ萬】イイツチバン　一を推して萬理を知る義。荀、非相「以レ近知レ遠、――、以レ微知レ明」

【一个】イツカ　ひとり、一人、个は箇なり、箇に通ず。大學、泰誓曰、若有二――臣一」

【一介】イツカイ　〇介は芥に通ず、微小の義。孟、萬章「――不二以與一レ人」〇ひとり、一人、又、一夫の義。史、藺相如傳「遣二――之使一」‖一个。〇一心に堅く守るところある義。書、泰誓「如有二――臣一」疏「有二一心耿介之臣一」大學には介を个に作る。

【一介書生】イツカイシヨセイ　一人のつまらぬ書生。王勃、滕王閣詩序「物三尺微命、――」

【一解】イツカイ　古詩の一章、文章の一段に同じ。丹鉛錄「中國以二一章一爲二一解一、王僧虔啓曰、古曰レ章、今曰レ解」

【一階半級】イツカイハンキフ　少しばかりの官位。顔氏家訓、勉學「或因二家世餘緒一、得二――」

【一行】イツカウ　〇ひとたびゆく。唐書、李靖傳「臣雖レ老、尙堪二――一」〇旅行の道づれ、同伴者。〇一つのおこなひ。「一言――」〇六ヶ月の稱。異聞錄「三月爲二一時一、兩時爲二一行一、兩行爲二一年一」〇ひとくだり、ひとならび。

【一行爲レ吏】イッコウノ 他事をなげうちて一意官吏となる。倦斎、與二山巨源一絶交書「遊二山澤一觀二魚鳥一、心甚樂レ之、——此事便廢」

【一向】イッコウ ○ひたすら、ひとすぢに、一意之に向ひて他を顧みざる義。蘇軾、撤レ蜀文「蓄レ力待レ時、併レ兵一」○圓全く、一切。「一一知らず」

【一向宗】イッコウシュウ 圓淨土宗より分れたる眞宗の稱、親鸞上人開く、一向に無量壽佛を念ずるを宗旨とす。⇒眞宗・門徒宗。

【一更】イッコウ 午後八時。張繼詩「千峯孤燭外、片雨一一中」⇒初更。

【一項】イッコウ 一つの事柄。賓耳錄「擧名自是一一、事業自是一一」

【一滴】イッテキ ひとつのふなさを、又、それだけの水の深さ。劉禹錫詩「曲鳥花千樹、宮池水一一」

【機杼一家】キチョイッカ ○機杼は機を織る、一家獨特の文章を作り出すをいふ。北史、祖珽傳、「文章須下自出二機杼一、成中一家風骨上、何能共二人同一生活一也」

【一家言】イッカゲン 他に異なりたる一派の言說。史、太史公自序「略以拾レ遺補レ闕、成二一家之言一」

【一家仁一國興レ仁】イッカジンイッコクキョウジン 一家に仁あれば之を推し及ぼして一國皆仁に興起す、大學に出づ。下に「一家讓、一國興レ讓」

【一家團圓】イッカダンエン 家族相集り和合して樂む、傳燈錄「有レ男不レ婚、有レ女不レ嫁、大家團圓頭、共說二無生話一」盧綸詩、花「團圓、相聚圓坐也」圓は團の正字。

【一家中】イッカチュウ ○圓武家時代に一家の臣僕をこぞりていふ。○一家イッケ 圓おなじ家の者、親族。

【一家富貴千家怨】イッカフウキセンカノウラム 一家が富貴なれば千家が嫉妬して之を怨む。草木子「——、半世功名百世愆」

【一角】イッカク ○一方のすみ。史、夏侯嬰傳「習レ騎開二關一一一」⇒一隅。○一角獸は麒麟の屬、古以て祥瑞と爲す（史、武帝紀）○海獸の名、うにこおる（角魚）○一本のつの。困學紀聞、註「兕一一青色」○支那の貨幣、凡我十錢に當る。○圓かど。⇒一隅。

【一喝】イッカツ 大聲にどなる。

【一葉】イッカン 一枚のかたびら。韓愈、送二石處士序「冬一裘、夏一一、食朝夕飯一盂、敝一盪」

【一膳】イチゼン 圓一角とも書く、ひときはまされるにいふ。

【一函】イッカン ○一つのはこ。范成大、縞眉山記「得二摩崖經一一」○一つの手紙。陸龜蒙詩「欵レ客一一開問訊」⇒一簡・一書。

【一竿】イッカン 一本の竹。賓耳錄「賣竹一一」

【一竿風月】イッカンフウゲツ 一本の釣竿に風月をたのしむ。陸游、感レ昔詩「把レ酒壯遊眞昨夢、——老二南湖一」

【一喜一憂】イッキイチユウ 或はよろこび、或はうれふ。道德指歸論「——、魂神浮游」

【一邱一壑】イッキュウイチガク 山に樵み、谷に釣りして世外に超然たる義。晉書、謝鯤傳「明帝在二東宮一見レ鯤問曰、論者以レ君方二庾亮一、自謂何如、答曰、端委廟堂、使二百僚準則一、臣不レ如レ亮、——、自謂レ過レ之」一本、邱を丘に作る。

【一裘一葛】イッキュウイッカツ 一枚のかはごろもと、一枚のくずかたびら、質しきくらしにいふ。韓愈、送二石處士一序「冬一裘、夏一葛、食朝夕飯一盂」

【一丘之貉】イッキュウノムジナ 古今の類を同くするに喩ふ。漢書、楊惲傳、古與レ今、如二——一」註「貉二其同一類也」貉はむじな。

【一氣呵成】イッキカセイ 稻ひといきに成しとげる。

【一掬】イッキク 兩手にてひとすくひ、掬は掬に同じ。詩、小雅「終朝采レ綠、不レ盈二一一」

【一掬】イッキク 前條に同じ。南史、何點傳「警患二渴利一、發誠不レ愈（中略）夢一道人、形貌非レ常、授二丸一一、夢中服レ之、自レ此病癒」

【一掬土】イッキクド 兩手にひとすくひの土。佛國記「過二舍衛迦佛行乞食一、小兒歡喜、即以二——一施レ佛」

【一掬淚】イッキクルイ 兩手に滿つる程の多くの淚。李白詩「遊傳——、爲レ我

縛三揚州」

【一騎當千】キッタウセン 一人の騎士にて千人に敵するに足る、勇者を形容する語。‖一人當千。

【一機軸】キッカ 圖一種の新らしき工夫。‖新機軸。

【一饋而十起】キッキニシテ 一飯の間に十たび起つ、夏の禹王が民を憫めいたはりし故事。淮南子「禹之時以二五音一聽レ治、——、一沐而三捉レ髮」

【一吸】イッキフ ひといき、又、ひとのみ。

【一斤】イッキン 十六兩の目方。漢書、律歷志「十六兩爲二一斤一」

【一金】イッキン 一鎰(二十四兩)又、一斤をいふ。史、平準書、注「秦以二一鎰一爲二一斤一」漢以二一斤一爲二一金一」

【一鈞】イッキン 三十斤。說文「鈞、三十斤也」

【一琴一鶴】イッキンイッカク 一張の琴と、一羽の鶴と、官吏の清廉なる態に用ふ。宋史、趙抃傳「西蜀入レ蜀、以二——一自隨」

【一匡】イッキョウ 天下をただし治む。論、憲問「管仲相二桓公一、霸二諸侯一、二一天下一」

【一鄉之善士】イッキャウノゼンシ 一鄉中の善良の士。孟、萬章「——、斯友二一國之善士一」

【一嘯】イッセウ 一とたび大笑す。歐陽修、詩「自レ非二我爲發一其嘯一誰口何由開二一一」

【一弓】イッキウ 〇土地の丈量にて八尺の稱。度地論「二尺爲二一肘一、四肘爲二一一、三百弓爲一里一」說に七尺二寸。〇射候の距離にて六尺の稱。儀禮、疏「六尺爲レ步、弓之古制六尺、與レ步相應」

【一去一來】イッキョイッライ 或は往き、或は來る。‖一來一去。

【一炬】イッキョ ひとつのかがりび。杜牧、阿房宮賦「楚人一、可レ憐焦土」

【一擧】イッキョ 〇一度事を擧ぐる。史、項羽紀「國家安危、在二此一一」〇一たび動きて、ひといきに。漢書、張耳傳「鴻鳥高飛、一一千里」

【一擧一動】イッキョイチドウ 圖一度手を擧げ、一度身を動かす、ちよつとしたる動作。

【一擧手一投足】イッキョシュイットウソク 極めて少しばかりのほねをり。韓愈、應二科目一時與二人書一「如有力者、爲二其窮二而通一轉之一、猶——之勞也」

【一擧兩得】イッキョリャウトク 一度事を行ひて兩樣の利を得る。晉書、束晳傳「——外實內寬」類書纂要「爲學看二文字一、虛心解看、涵養究索之功、——」

【一虛一實】イッキョイチジツ 乍ち空しく、乍ち有り、出沒變化測り難き義。

【一局】イッキョク 〇一ばんの圍碁。白居易詩「興發飮二數杯一、圍來棊一一」〇どばん一面。

【一局棊】イッキョクキ 〇一面のどばん。許渾詩「醉斜烏帽髮如レ絲、曾看仙人——」〇一ばんの圍碁。李遠詩「長日惟消——」

【一曲】イッキョク 〇ひとつの水のくま、曲は限。詩經「彼澤一一」〇音樂のひとくさり。白居易詩「五陵年少爭纏頭、——紅綃不レ知レ數」〇ひとまがり。杜甫詩「清流——抱レ村流」〇一方のすみ、全體に通ぜざるにいふ。莊、天道「——之人」

【一區】イック ひとくぎりの地。漢書、霍光傳「甲第——」

【一軀】イック 佛像一體の稱。齊書、扶南國傳「獻二金繪龍王像一一」

【一空】イックウ すべて空し。白居易詩「自レ我學二心法一、萬緣成二一一」

【一酬】イッシュウ ちよつと酒に酬ふ。楊萬里詩「萬事休二多問一、三杯且——」

【一葉一猶十年樹猶有レ臭】イチエフイイネンジュナホシウアリ 晉の敝公の下人の言、葉は香草、藭は臭草、十年有レ臭とは善の消え易く、惡の除き難きをいふ(左、僖四)

【一過】イッカ 〇一たび目をとほす。唐書、后妃傳「——輒不レ忘」〇一度其の地によぎる。李建勳詩「長愛田家事、時時欲二一一」

【一顆】イッカ ひとつぶ、圓きもの、珠・果實などにいふ。白居易詩「月點二波心一一一珠」

【一回】イックワイ ひとたび、一度。白居易詩「君不レ見外州官入長安道、一回來時——老」

【一回忌】イックワイキ 人死して一周年の忌日。‖一周忌。

【一睡一明】イッスイイチメイ 夜と晝とくらくなつたり、あかるくなつたり。莊子「消息盈虛——、日改月化」

【一塊土】イックワイド ひとかたまりの土。說苑「今爲二一人一首レ誅二一人一、衝レ爲二一一下も同也」

【一塊肉】イックワイニク 血統を承けたるひとかたまりの肉、ただ一人のみ餘れる子孫。宋史、帝昺紀「我忍レ死艱關至レ此者、正爲二趙氏一一耳、今無レ望矣」ここは帝昺を指す。

【一攫千金】イッカクセンキン 一つかみに千金の利益を得る、ねれてで栗。

【一括】イックワツ ひとくくり、一つにくくる。

【一貫】イックワン 〇一理を以て萬事を貫通す。論、里仁「子曰、參乎、吾道一以貫レ之、曾子曰、唯」〇終始志を變へず。「至誠——」〇ひとしき義。李頎詩「善惡死生齊一一」‖一齊。〇圖目方千匁、又、古、錢一千文。

【一系】イッケイ 一つのちすぢ。萬世——」

【一契】イッケイ ひとつのわりふ。王羲之、蘭亭集序「每レ覽二昔人興感之由一若レ合二一一」

【一頃】イッケイ 百畝をいふ。史、孔子世家「孔子家大——」

【一經】イッケイ 一つの經書。漢書、韋賢傳「遺二子黃金滿籯一、不レ如二一一」

【一経博士】イッケイ 一経専門の博士。後漢書、程曾傳「上言孝文皇帝、始置ニ――一」

【喫ニ一驚ス】キッイッキョウス 仰驚く。水滸傳、楔子「大尉見了又――、搬了子孃ニ叫一聲、我今番死也」

【一箇九頭】イッカイクズ 一本のくきより九つの穂を生ずる。後漢書、光武紀「生ニ光武於縣舍ニ、是歳縣界有ニ嘉禾生ニ――ニ、因名ニ光武ニ曰レ秀」

【一決】イッケツ 直ちにきっぱりと決断する。六韜「故智者從レ之而不レ失、巧者――而不ニ猶豫ニ」

【一闋】イッケツ 音楽の一曲終りたる義。元史、禮樂志「――樂止」

【一訣】イッケツ ひとたびつまづく。說苑「一噎之故、絕レ穀不レ食、――之故、卻レ足不レ行」

【一隙】イッゲキ 一つのはこ。戰國策「文侯示之誘書――ニ」

【一件】イッケン 個一つの事柄。

【一見】イッケン ○一度見る。漢書、趙充國傳「百聞不レ如ニ――ニ」○一度面会する。王維詩「――如ニ舊識ニ」

【一見如レ舊】イッケンジョキュウ 一度相見て、舊知ルルルの如く親む。唐書、段秀實傳、杖レ策上ニ謁軍門ニ、――」

【一拳】イッケン 一つのこぶし。石の形容とす。白居易詩「頑賤――石、精珍百鍊金」

【一倏】イッケン 一人のしもべ。說文「僕、從也」

【一劍】イッケン 一口のつるぎ。史、淮南厲王傳「衣ニ布衣ニ――之任ニ、賤ニ王侯之位ニ」劉長卿詩「家散ニ萬金一劍ニ士死ニ身留ニ――ニ」答ニ君恩ニ」

【一劍之任】イッケンノニン 一つの劍をたのみとする。戰國策「晉子以ニ――ニ、劫ニ桓公ニ子壇位之上ニ、顏色不レ變」

【一賢】イッケン 一人のかしこき者。呂覽「得レ地千里、不レ如レ得ニ――ニ也」

【一夫吠レ形百犬吠レ聲】イップフバケイヒャッケンバセイ 一夫物形を見て吠ゆれば、百犬其の聲を聞きて皆吠ゆ。一人虚言を傳ふれば、衆人實事として之を傳ふるに喩ふ。潛夫論、賢難「――、一人傳レ說、萬人傳レ實」

【一卷石】イッケンセキ ひとかたまりの石。卷は風の中唐「今天山、――之多」後世は卷を拳に作る。白居易詩「頑賤一拳石、精珍百鍊金」

【一己】イッコ 自分ひとり。陶弁子「聖人不レ以ニ――治ニ天下ニ而以ニ天下ニ治ニ天下ニ」

【一壺】イッコ ○一つのつぼ。晉書、劉伶傳「常乘ニ鹿車ニ、攜ニ――酒ニ○一つのふくべ。韓愈子「中河失レ船、――千金」註「壺瓠也、佩レ之可ニ以濟ニ渉ニ南人謂ニ之腰舟ニ」

【一壺天】イッコテン 小天地、又別世界の稱。後漢書、費長房傳「費長房者汝南人也、曾爲ニ市掾ニ、市中有ニ老翁ニ、賣レ藥、懸ニ一壺於肆頭ニ、及ニ市罷ニ、輒跳入ニ壺中ニ、市人莫ニ之見ニ、唯長房於ニ樓上ニ覩レ之異焉（中略）長房謂レ翁、翁乃與俱入ニ壺中ニ、唯見ニ玉堂嚴麗、旨酒甘肴盈ニ衍其中ニ、共飲畢而出」ニ壺中之天。

【一鼓】イッコ 進軍の時、初めにひとたび鼓をうつ。左、莊十「夫戰勇氣也、一ニ作レ氣、再而衰、三而竭」晉書、溫嶠傳「可ニ――ニ而擒ニ也」

【一顧】イッコ ひとたびかへりみる。史、樂布傳「彭王――ニ與レ楚則漢破、與レ漢則楚破」後漢書、陳蕃傳「數蒙ニ白樂ニ――之顧ニ」

【一顧傾レ城】イッコケイセイ すぐれたる美人を形容す。漢書、外戚傳「李延年歌曰、北方有ニ佳人ニ絕世而獨立、一顧傾ニ人城ニ、再顧傾ニ人國ニ」

【一口】イッコウ ○同じ一つの口。唐書、張元素傳「天下氣然、――頌歌」○釜、鼎などの一つ。西陽雜俎「古鐘一ニ○刀劍一つ。晉書、劉曜載記「獻ニ劍一ニ○人ひとり。後漢書、虞詡傳「二十餘年、家門不レ增ニ一ニ」

【如ニ出ニ一口ニ】ニシュツイッコウノゴトシ 衆人の言、皆同一なるをいふ。戰國策、左右俱曰、無レ有、――矣」ニ異口同音。

【一鉤】イッコウ 一つのかぎ、新月などの形容。王周詩「纔捲玉樓人寂寂、――新月未レ沈レ西」

【一興】イッコウ ○ひとたびおこる。晉書、華廙傳、陽陵陳升、一蹶――、流而爲レ川、滯而爲レ陵」○イッキョウ ひとつの面白きこと。

【一狐蓋三十年】イッコガイサンジュウネン 一枚の狐のかはごろもを三十年著用する、齊の晏嬰の故事。禮、檀弓、布若曰、晏子――、晏子爲知レ禮」

【一狐之腋】イッコノエキ 一匹の狐のわきのしたの白く美くしき毛、少くして貴きものに喩ふ。史、趙世家「千羊之皮、不レ如ニ――ニ」

【一哭】イッコク ひとたびなく。北史、獠傳「亡ニ失兒女ニ――便止、不ニ復追恩ニ」

【一國三公】イッコクサンコウ 一國に三人の主權者あるをいふ。左、僖五「――吾誰適從」

【一國者】イッコクノモノ 國かたくなな者、一國以外の事を知らざる頑固の人。

【一刻千金】イッコクセンキン 一刻が千金にもあたる程の樂しき時期。蘇軾詩「春宵一刻値千金、花有ニ清香一月有レ陰」

【一穀不レ登】イッコクフラズ 一種の穀物がみのらず。後漢書、伏湛傳「――、國君徹レ膳、博雅「一穀不レ升曰レ飢、二穀不レ升曰レ饉、三穀不レ升曰レ饑」

【一呼再諾】イッコサイダク はいはいと二つ返事する、奴隷が主人の命に應ずることの唯諾めるにいふ。韓詩外傳「當前決レ窓、――者、人隸也」

【一忽】イッコツ 極めて微小の度。集韻「一蠁爲ニ――ニ、徐鍇曰、一蠁所レ吐爲レ忽、十忽爲レ絲」

【一筋】イッコン 筋クンの長さ二尺六寸、韓じて狹き土地の稱。退賢、深竹堂詩

「——清涼地、森森蓄玉膏」

【一捆】イッコン 圖ひとしめ。

【一束】イッソク ひとつのあと、月などにいふ。鮮于侁、早發詩「擬前夢踏家千里、馬上詩成月一一」

【一献】イッコン 圖盃を一つさす。

【一細紙】イッシ 圖一連の洋紙、綱は捆、連は五百枚。

【一切】イッサイ ことごとく、すべて。史、李斯傳「請一一逐レ客」

【一切経】イッサイキョウ 佛經の總名、經・律・論の三藏の稱、略して一切經といふ、我邦にては、宇治の黄檗寺の刻本あり、之を蔗堂本といふ。

【一切衆生】シュジョウ 圖地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道にある、一切の生命ある者、世の中のすべての人。法華經「爲二——之父一」

【一妻一妾】イッサイチショウ 一人の妻と、一人のめかけと。孟、離婁「齊人有二——一而處レ室者一」

【一妻多夫】イッサイタフ 一人の婦人が同時に多くの夫を持つ、西藏・印度の一部に此風行はる。

【一再行】イッサイコウ 一兩度事をする。史、司馬相如傳「臨邛令前奏レ琴曰、竊聞長卿好レ之、願以自娯、相如辭謝、爲鼓——」

【一歳九遷】イッサイキュウセン 一年の間に九度官位の進むをいふ。韓愈、上二張僕射一書「日受二千金之賜一、一歳九遷二其官一」

【一所】イッショ 一年ほど、所は助字、許と同義。史記「率取レ鄰——者、即棄去」

【一壯】イッソウ 實ひとひ。夢溪筆談「醫用レ艾一炷、謂二之一一者、以二壯人一爲レ法」壯人とは壯年の人。

【一掃】イッソウ さっぱりとはらひ清める。宋史、畢仲游傳「凡號レ爲レ利而傷レ民者、一一而更レ之」

【一面】イチメン 一つのまど。錢起詩「遠岫見如レ近、千里一一裏」

【一雙】イッソウ 二つにて一組となるもの、一對。史、項羽紀「白璧一一、欲レ獻二項王一」

【一茶頃】イッサケイ 一椀の茶を飲む程の短き間。蘇軾「天漿賦」——乃合」

【一札】イッサツ 一枚のかきもの。春秋序「單執二一一一、謂二之簡、連編書簡、乃名爲レ篇」

【一撮土】イッサツド ひとつまみの少しの土。中庸、今夫地——之多」

【一襞雨】イッペキウ みのを濕すほどのこさめ。鄭谷詩「殷勤——、猶得夢中披」

【一匝】イッソウ ひとめぐり、匝は帀・迊に同じ。後漢書、馮異傳「追至二洛陽一、環レ城——而歸」‖一周。

【一梨】イッリ 梨は鮮明なり、白き齒を出して笑ふをいふ、一笑に同じ。穀梁、昭四「軍人梨然皆笑」自作の詩文などを御笑ひ草に供ふるといふに「博二一一」と書く。

【一盞茶時】イッサンチャジ 圖一椀の茶を飲む程の少しの時間の義。水滸傳、楔子「——、方纔爬將起來」‖一茶頃。

【一三昧】イチサンマイ 圖一心をこめて事をする。三昧(三摩地等)を見よ。

【一子】イッシ ひとりご、又、多くの子の中の一人。盂蘭盆經「——出家、七世父母皆成佛道」

【一子相傳】イッシソウデン 圖學術技藝などの奥儀を己の子の中の一人に傳授して他にもらさざること。

【一死】イッシ ○ひとたび死ぬ。漢書、司馬遷傳「人固有二一一一死有レ重二於泰山一、或輕二於鴻毛一」○一は死することを強めていふ。史、汲鄭傳「——一生、乃知二交情一」

【一匹】イッピツ 一つのさかづき。史、楚世家「人有レ遺二其舍人一一酒一者」

【一絲一毫】イッシイチゴウ 極めて少しの意。‖一毫一絲。

【一周】イッシュウ ひとめぐり。漢書、霍方進傳、註「旬歳猶レ言二滿歳一也、若二十日之一一」

【一周息】イッシュウソク 一回息に同じ。‖小祥忌。

【一週】イッシュウ ○一周に同じ。○日月火水木金土の七曜日。‖禮拜。一星期。

【一式】イッシキ 圖ひとそろひ、のこらず、いつさい。

【一視同仁】イッシドウジン 人類も禽獣も平等に愛すること。韓愈、原人「聖人一視而同仁、篤レ近而舉レ遠」

【一資半級】イッシハンキュウ 少しの官位。柳氏家訓「金二於名官一、匪二近攝要一、——雖二或得レ之、衆怒羣猜、鮮レ有二存者一」‖一階半級。

【一紙半銭】イッシハンセン 圖一枚の紙と半文の錢と。

【一襲】イッシュウ ひとかさね、上の衣と下の裳との具はれる服。史、叔孫通傳「賜二叔孫通帛二十匹、衣——一」

【一心】イッシン ○ひとすぢの心、專一なる心。——不亂」盤庚上詩「——求二妙道一」‖專心。○衆くの人が心を一つにする。賈泰疏「予有二臣三千一、惟——」‖同心。○多くの外物に對して單に心の稱。莊、天道「——定而萬物服」

【一心三觀】イッシンサンガン 圖天台宗に説く所の法門にて、我一心を提へて、空なり假なり中なりと觀ずる法。法華經科註「圓巧則修二——一、圓破二三惑一、圓證二三諦一、圓成二三德一也」

【一心不亂】イッシンフラン 圖心を專らにして亂すことなし。阿彌陀經「執二持名號一、若一日(中略)若七日——」

【一心可二以事一百君一】イッシンモッテヒャククンニツカフベシ 人は一の誠心あらば、百人の君にも仕ふることを得。說苑、——、百心不レ可二以事一二君一」

【一身】イッシン ○おのれひとり。史、魯仲連傳「衆人不レ知、則爲二——一」○ひとりのからだ。王維詩「——轉戰三千里、一劍曾當百萬師」

【一身都是膽】イッシンスベテタンナリ 全身に膽力の

充つるをいふ。膽の極めて大なる義。劉表、趙寔傳注「劉備曰、子龍、——也」子龍は雲の字。

【一針】シン 一つのはり。後漢書、郭玉傳「一一即差」‖一鍼シン

【一新】シン ひとたびあらたまる、全く新らしくなる。

【一審】シン 或る事件の整理せる最初の裁判所にて事實及び法律の裁判をすること。

【一神教】イッシンキョウ 宇宙を主宰する全智全能の唯一神に事ふるを教義とする宗教、基督教・トラスの類、多神教の對。

【一進一退】イッシンイッタイ 或は進み、或は退く。管子「今兵——者、權也」

【一舍】シャ 三十里。左、僖二三、注「三十里爲ニ一一一可ニ以宿ニ舍、則有ニ大室ニ」

【一章】イッショウ ○詩文のひときり。易、乾卦、文言、註「此一一、全以ニ人事ニ明レ之也」○一篇に同じ。孟郊詩「一一嚥機明、百萬心氣定」

【一飯】イッパン 一度飯を食ふ程の短き間。韓愈詩「雖レ得ニ一一樂ニ、有レ如ニ蚤飛蚊ニ」飯は晩に通ず。‖一飯時・一食頃イッサンケイ

【一觴一詠】イッショウイチエイ 酒を飲みつつ詩を吟じて樂む、觴は、さかづき。王羲之、蘭亭集序「——、亦足ニ以暢ニ敘幽情ニ」

【一倡三歎】イッショウサンタン 一人歌を唱へて三人歎美して之を和す、音樂の玄妙なるをほめる語。禮、樂記「清廟之瑟、朱絃而疏越、一倡而三歎、有ニ遺音者矣ニ」轉じて詩文をほめるにも用ふ、倡は唱に同じ、一又壹に作る。

【一齊束】イッセイソク 國甲冑の五品、即ちこて・はいだて・かぶと・はちまき・すねあての總稱。

【一勺】イッシャク ○ひとすくひ。中庸「今夫水一一之多、及ニ其不ニ測、黿鼉蛟龍魚鱉生焉、貨財殖焉」○一合の十分の一の稱。

【一灼之火】イッシャクヒ ひともえのかすかなる火。關尹子「——、能燒ニ萬物ニ」

【一瀉千里】イッシャセンリ 河水の一瀉して千里を走る如く、筆力・辯舌などの奔放快利なるに喩ふ。扁鵲全書「片刻——」韓愈、貞女峽詩「一瀉百里勢ニ雲濤ニ」

【一首】イッシュ 一篇に同じ。皮日休詩「猶引紅蘭詩一一」

【一株】イッシュ 草木のひとかぶ。南史、宋孝武紀「生ニ路禾ニ一一一五莖、改ニ清暑殿ニ爲ニ嘉禾殿ニ」

【一炷】イッシュ ひとつの燈心、又ひとくゆりの香。司空圖詩「清香一一知ニ師窟ニ」

【一錄】イチロク 一眼を見よ。

【一終】イッシュウ 十二年をいふ。左、襄九「十二年矣、是謂ニ一一一ニ歲星十二年ニ而一周レ天終ル故。

【一宿】シュク ○ひとばんどまり。左、莊三「凡師一一爲レ舍、再宿爲レ信、過レ信爲レ次」○一夜をいふ。陳書、孔奐傳「多營ニ麥飯ニ以ニ胡葉ニ裹レ之、一一之間得ニ數萬裹ニ」

【一手胸拍難レ疾無レ聲】イッシュキョウハクヒトシツナレドモコエナシ 片手のみにては如何に疾くうつとも聲なきが如く、國家も君臣相須たずんば、聲譽を擧ぐる能はざるに喩ふ〔韓非、功名〕

【一瞬】イッシュン ○ひとまたたき、極めて短き時間。赤壁賦「天地曾不レ能ニ以一一ニ」○ひと目に見る。蘇軾、超然臺賦「極ニ千里于一一ニ分、寄ニ無盡于雲烟ニ」

【一瞬千里】イッシュンセンリ ひとめにて千里の遠景を見わたす。晉補之、北清亭賦「攄ニ千里于一瞬ニ」

【一黍】イッショ 最少の日方、きび一粒の重量。漢書、律歷志、注「十黍爲レ累、十累爲レ銖」

【一緒】イッショ ○緒は絲すぢ、一とすぢ。晉書、隨機傳論「一一連レ文、則珠流璧合」○國共に、ひとまとめ、合一する。

【一曙】イッショ 一旦に同じ。呂覽、孟春「一一失レ之、終身不ニ復得ニ」

【一色】イッショク ○同じ色。王勃、滕王閣序「秋水共ニ長天一一」○國ひととほり、一種。

【一食萬錢】イッショクバンセン 一度の食事に、一萬錢を費す、奢りの甚だしきをいふ。晉書、任愷傳「初何劭以ニ公子奢侈、愷乃論レ之、——猶云無ニ可レ下レ箸處ニ」

【一所懸命】イッショケンメイ 國一箇所の領地を命にかけて守る、轉じて、いのちがけ、けんめい、一所を一生と齊くは非。‖必死。

【一所不住】イッショフジュウ 一つ所に定住せず、居所を定めざる行脚僧などの境遇をいふ。

【一醉千日】イッスイセンニチ 酒の極めてよきものにいふ。博物志「昔劉玄石於ニ中山酒家ニ酤レ酒、酒家與ニ千日酒ニ〔中略〕俗云、玄石飲レ酒——」

【一炊之夢】イッスイノユメ 盧生が、一度飯を炊ぐ間のゆめ、人生の特み難く榮華のはかなき形容にいふ、唐の開元中、邯鄲の道上の郵舍の主人が黄粱一の飯を炊ぐ間に、道士呂翁の枕を得て、寢ねたるに、五十年の榮華を夢み、覺めて後、人生のはかなきことを觀じたる故事〔枕中記〕‖黄粱一炊、邯鄲之夢・盧生之夢。

【一寸光陰不レ可レ輕】イッスンノコウインカロンズベカラズ 少しの時間も徒に過すべからず。朱熹詩「少年易レ老學難レ成、——」

【一寸法師】イッスンボウシ 國せいのひくき人を罵る語。‖侏儒。

【一世】イッセイ ○一代に同じ。史、留侯世家「人生一一間、如ニ白駒過ニ隙一」○三十年。說文「三十年爲ニ一一ニ」論、子路「必世而後仁」○其の世、其の

時代。漢書、禮樂志「驅二一世之民一、躋二之仁壽之域一」

【一世一代】〇一生涯。〇藝人などが一生涯にてこれを限りと得意の藝を演ずること。

【一世紀】西暦年代の區劃、百年の稱、卽ち第一世紀は紀元元年より百年まで。

【一世冠】一代のかしら。唐書、文藝傳序「唐三百年、言レ詩則杜甫・李白卓然以レ所レ長、爲二一世冠一」

【一生】〇生れてより死するまでの間。晉書、阮孚傳「性好レ屐、或詣レ阮、正見二自蠟レ屐、因自歎曰、未レ知二一生當二幾量屐一」＝生涯・一生涯。〇一人の書生。後漢書、段熲傳「有二一生一來學」

【一生懸命】國命がけにて事をする。一所懸命の誤。

【一成】方十里の地。左、哀元「有二田一成一」

【一眚】一時のあやまち、左、僖三十「不下以二一眚一掩中大德上」

【一齊】〇ひとそろひ。莊子「萬物一齊、孰短孰長」＝平等・一律。〇僭いちどに。

【一齊射擊】一部隊が同時にひとしく敵を射擊する。

【一盛一衰】盛んなる時衰ふる時ある事。莊、天運「四時迭起、萬物循生、一盛一衰」

【一青螺】一つの青山。劉禹錫詩「遙望洞庭山翠色、白銀盤裏一青螺」

【一笑】〇ひとわらひ、一度笑ふ。史、平原君傳「欲下以二美人一之故上殺中吾美人上」〇わらひぐさ。

【一宵】一夕に同じ。蕭思話、守歲詩「共歡新故歲、迎送一宵中」

【一夕】〇ひとばん。左傳「吳子聞之一夕三遷」〇ある夜。

【一石】〇日方の名、四鈞をいふ。（一鈞は三十斤）書、五子之歌、注「四鈞爲レ石」〇ます目の名、十斗をいふ。康熙字典「十斗曰レ石」我國にてコクと讀むは斛の借音。

【一昔】ひとばん。唐書、宗室傳「惠宣太子業有レ疾、帝憂レ之、一昔容鬢爲變」＝一夜・一夕。

【一隻】〇船または鳥一つをいふ。後漢書、徐穉傳「炙二雞一隻一」〇一隻あるものの一つ。齊書、張敬兒傳「馬鐙一隻」

【一隻眼】〇ひとつのまなこ。〇人に異りたる見識。

【具二一隻眼一】一見識をそなふ。楊萬里詩「近來別具一隻眼」

【一尺布尙可レ縫】一斗粟尙可レ舂を見よ。

【一說】〇ひとつの說、ある說。宋書、歷志「備二擇一說一」〇一たびすすめ說く。史、劉敬傳「一說建二萬世之安一」

【一節】〇一貫せるみさを。晉書、羅憲傳「歷二夷險一而一節」〇一つの信を明かにするしるし。禮、玉藻「凡君召以二三節一、二節以走、一節以趨」

【一殺多生】國一人を殺して多くの人を助くること。

【一刹那】國極めて短き時間。俱舍論「時之極少名二刹那一、時之極長名爲レ劫」仁王護國經「一念中有二九十刹那一、一刹那中有二九百生滅一」

【一霎雨】ひとふりの小雨。孟郊詩「昨夜一霎雨、一霎萋荷雨」轉じてひとしきれ程の短時を一霎時、又、霎時・一霎といふ。

【一洗】〇さつぱりとあらひすすぐ。杜甫詩「斯須九重眞龍出、一洗萬古凡馬空」〇一度洗ふ。北史、陸子彰傳「身服二垢汗一、脚數年一洗」

【一戰】一度戰ふ。左、莊十「可二以一戰一、戰則請從」

【不レ直二一錢一】一錢の價値なし、無能をそしりていふ。史、魏其武安侯傳「生平毀二程不識一、不レ直一錢」

【添二一線長一】冬至より以後、日が一線の絲ほど長くなる。歲時記「晉魏閒、宮中以二紅線一量二日影一、冬至後、日添二長一線一」

【一宗】一族に同じ。漢書、吳王濞傳「天下一宗、死二長安一、卽葬二長安一」

【一層】ひときは、一段。王之渙詩「欲レ窮二千里目一、更上二一層樓一」

【一簇】ひとむれ。杜甫詩「桃花一簇開無レ主、可レ愛二深紅一愛二淺紅一」

【一叢】ひとむら。謝朓詩「窗前一叢竹」唐太宗詩「菊散一叢金」

【一束】ひとたば。詩、小雅「生芻一束、其人如レ玉」

【一則】一ヶ條の義、もと佛書に用ふ、後には儒書にも用ふ。容齋隨筆「卷第一、二十九則、卷第二、二十四則」

【一息】〇ひとやすみ、暫く休む。漢書「周二流八極一、萬里一息」＝一憩。〇ひといき、一呼吸。論、泰伯「死而後已、不二亦遠一乎」朱注「一息尙存、此志不レ容二少懈一、可レ謂レ遠矣」

【一尊】ひとつのさかだる、尊は樽・罇に同じ。杜甫詩「何時一尊酒、重與細論レ文」白居易、酒功讚「孕和者何、濁醪一尊」

【一樽】ひとたる。＝一罇・一尊。

【一罇】前條に同じ、罇は尊・樽に同じ。杜牧詩「留レ我酒一罇、前山看二春雨一」

【一帶】帶の如く一筋につづく。白居易詩「一帶山泉繞レ舍迴」

【一體】〇ひとつのからだ。書、大誥、疏「君民共爲二一體一」〇同じく相似たる身分。史、黥布傳「此三人者、同功一體之人也」〇國をしなべて、總體に。

【一道】〇一體に同じ。蘇洵文「作二策二道一、曰二審勢・審敵一」〇一とすぢ。杜牧詩「一道輕帆落二檻煙一」〇一とすぢの道理。孟、公孫丑「夫道一

不満而曾子言之、是或一一也」

【一刀三禮】彫佛像を彫刻する時、一刀を入れる毎に、三度禮拜する義。

【一刀流】國劍術の一派、伊東一刀齋の創始。

【一刀兩斷】ひとかたなにて物を兩斷する如く、情實などにひかされず、斷然たる處置をする。朱子語錄「克己者是從根源上、一一、便斬絕了」

【一捐】一つのこしかけ、又ねだい。後漢書、陳蕃傳「爲樂安太守、郡人周璆高潔之士、前後郡守招命、莫肯至、唯蕃能致焉、字而不名、特爲置一一、去則縣之」

【一旦】或あさ、或日、一朝、いちど。鹽鐵論「家有其備、人有其用、一一有急、貫弓上馬而已」

【一旦豁然貫通】事理を考究するの久しき、一朝からりと悟る義。朱熹、大學補傳「至於用力之久、而一一一一一一焉、則衆物之表裏精粗無不到」

【一端】○ひとはし。詩序疏「各因文勢言之、非一一、不得爲例也」○二丈をいふ。左傳「幣錦二兩」註「二丈爲一一、二端爲一兩、所謂匹也、二兩二匹」

【一撮】ひとになひ。宋史、食貨志「百斤爲一一一」

【一簞食一豆羹】少しの食物。孟、告子「一一一一一一、得之則生、弗得則死」

【一簞食一瓢飲】少しばかりの飲食物、簞は竹にて造りたる圓き食器。論、雍也「孔子曰、賢哉回也、一一一一一一、在陋巷、人不堪其憂、回也不改其樂、賢哉回也」

【一致】○同じおもむき、一つのむね。易、繫辭「天下同歸而殊塗、一一而百慮」○一つになる「國民一一」

【一瓻】書を借るにも、返すにもいふ。古、書を借り又返す時に酒一瓻を贈りたりといふ。王樂道文「借書一一、還書一一」

【一籌】○籌はかずとり、一籌は一つのかずとり、人に一籌を輸くるなり。宋子、游鍾山記「至白鶴觀、觀去山絕頂、尚二三里、君采衆清臘、至觀前、已疲甚、不能至絕頂、予歸、顧而笑曰、若輸我一一矣」○一つのはかりごと。宋史、蔡幼學傳「多士盈庭、而一一不吐」

【一帙】一つの帙に入りたる書籍。帙は書衣。唐書、李密傳「乘牛、掛漢書一帙角上、行且讀」

【一秩】十年。字典「十年爲一一」

【一知半解】なまものじり。半可通。滄浪詩話「有透徹之悟、有一知半解之悟」

【一張】○弓を數ふるにいふ。宋書、陶潛傳「蓄素琴一一」○賦皮一枚。劉禹錫詩「一一斑鹿皮」

【一張一弛】弦を張りて又弛ぶる如く、民を勤勞せしめ、又休息せしむる義。禮、雜記「張而不弛、文武弗能也、弛而不張、文武弗爲也、一一一一、文武之道也」文武は周の文王・武王。

【一張羅】國ただひとかさね、又一枚の外は、所有せざるはれぎ。

【一晝一夜】一日一夜に同じ。太玄經「一一一一、陰陽分索」

【一中節】國淨瑠璃節の一種、京僧都一中の創始。

【一對】ひとそろひ、一雙。皮日休詩「一一獲兒相枕眠」

【一通】○首尾完き一つの文書。後漢書、崔寔傳「宜寫一一、置之坐側」○一道。○國ひとわたり、あらまし、一應、なみ、普通。

【一定】○一つにさだまる、又、きめる。漢書、刑法志「律令一一、愚民知所避」○國きつと、かならず(必)

【一定之論】一定して易らざる論。淮南子「士有一一一一、女有不易之行」班固、答賓戲「聖人有一一一一」

【一丁字】一箇の字といふ義、丁の古文は个なり、个は箇に通ず、故に誤りて一丁字と書くに至れりといふ。唐書、張弘靖傳「天下無事、爾輩挽兩石弓、不如識一一一一」

【一朝】朝起きてより食事までの間。漢書、賈誼傳「屠牛坦一一、解十二牛、而芒刃不頓者、所排擊剝割、皆中理解也」○一旦。

【一朝一夕】ひとあさと、ひとばんと、僅かの間。易、文言「臣弑其君、子弑其父、非一一一一之故、其所由來者漸矣」○一旦一夕。

【一朝之忿】一時の感情に激したるいかり。論、顏淵「一一一一、忘其身、以及其親、非惑歟」

【一朝富貴】俄に富貴となる。蘇軾詩「文章自足欺盲聾、一一一一而發紅」

【一鳥不鳴山更幽】王安石、鍾山卽事詩「茅簷相對坐終日、一一一一一一一」王籍の「蟬噪林逾靜、鳥鳴山更幽」を飜案せしなり。

【一滴】一としづく。王建詩「十日不飮一一漿」

【一擲】一度に擲ち捨てる、命を捨つるには、李白詩「感君恩重許君命、太山一一輕鴻毛」金錢を捨てるには、晉書、盧耽傳「就局十萬一一直上百萬」

【一擲賭乾坤】賭は博奕のかけものにする、天下を取るか捨てるかの分目をいふ。韓愈、過鴻溝詩「誰勸君王回馬首、眞成一一一一一」

【一擲千金】多くの金を一時に費しすてる、豪遊を爲す形容。高

酒詩「――郡是臉、家徒四壁不レ知レ貧」

【一擲百萬】大金をなげすてる如くつかふ。晉書、桓玄傳「劉毅起レ兵、曰、毅家無二儋石之儲一、樗蒲――、其擧二大事一、何謂レ無レ成」

【一敵國】我に匹敵する一國、勢力の盛んなる者の稱。後漢書、吳漢傳「吳公差强二人意一、隱若二――一矣」

【一跌】ひとたびつまづく。漢書、揚雄傳「客徒欲レ朱二丹吾轂一、不レ知二――將レ赤二吾之族一也」

【一轍】〇一つのみち、おなじ車のあと、相同じ。歐陽修文「萬途――」〇圖一とすぢに思ひこむ。

【一貼】圖藥一ぷく。

【一天】〇おほぞらの全體。王建詩「內宴初秋入二二更一、殿前燈火――明」〇一つの天、君主に喩ふ。後漢書、蘇章傳「人皆有二一天一、我獨有二二天一」

【一天四海】あめのした。=宇內。

【一天萬乘】周代、天子の領地は兵車萬乘を出す制なり、それより天子、又、天子の位をいふ。

【一廛】一夫の住宅。孟、滕文公「願受二一廛一而爲レ氓」

【一點】一つのぽちぽち。白居易詩「蔵荻花中――燈」

【一點紅】〇妓女の異稱。雲谿[?]故事「劉郛、好レ詢、嘗念レ詩、座上若有二――一「斗筲之器成二千鍾一」」〇柘榴の異名。王安石詩「萬綠叢中紅一點、動レ人春色不レ須レ多」轉じて多くの中にて只一つの異彩ある者に喩ふ。

【一點鐘】一時間、又、第一時。「午下――」

【一點淚】ひとしづくの淚。李白詩「遙將二――一、遠寄二如レ花人一」

【一途】〇次條に同じ、ひと筋の道、同じ道、ひとすぢ。「文武――」〇圖ひとすぢに、專ら。「――に思ひ込む」

【一塗】ひとつのみち。後漢書、蔡邕傳「夫求レ賢之道未二必――一、或以レ德顯、或以レ言揚」=一途。

【一統】〇ひとつにすべ合す。史、始皇紀「今海內賴二陛下神靈一、――皆爲二郡縣一」=統一。〇圖一同の稱。「貴家御――」

【一頭】牛馬などを數ふるにいふ。漢書、西域烏孫傳「馬牛羊驢槖駝七十餘萬頭」

【出二一頭地一】他の人より一段拔き出る。宋史、蘇軾傳「主司歐陽脩（中略）得二蘇軾刑賞忠厚論一、驚喜欲レ擢二冠多士一、猶疑二其客曾鞏所一レ爲、但寘二第二一、復以二春秋對義一居二第一一（中略）曰、吾當下避二此人一出中一頭地上」

【一等親】血すぢの遠近によりて六等親に分ち、其の第一等に當る親族、父母・養父母・子・養子。

【一德】純一の德。書、咸有一德「惟尹躬曁レ湯、咸有二一德一」

【一得一失】〇一を得て一を失ふ、利と損と相伴ふ。=一利一害。〇一つの得益と、一つの過失と。漢書、韓信傳「智者千慮必有二一失一、愚者千慮必有二一得一」〇轉じて己の意見を陳ぶることを謙して一得之見といふ。

【一斗粟猶可レ舂】僅かの食も兄弟互に分ち食ふべきをいふ。史、淮南衡山傳「一尺布尚可レ縫、――、兄弟二人不二相容一」

【一頓】〇一度の食事、一次の食。釋氏通鑑「今日須レ喫二――一」世說「羅友乞二一食一」〇一度休息する。揚雄賦「怨萬里而――分」=一息。

【無二一可一】一つとして取りどころなし。後漢書「如レ此儕亦――耶」

【一把】ひとたば、ひとにぎり。晉書、陶侃傳「見二人持二――未熟稻一」

【一派】〇ひとつの支流。謝靈運詩「寄分――水、僻徼中岑山[?]」〇一つの流儀。

【一杯】〇ひとつのさかづき。孟、告子「今之爲レ仁者、猶下以二一杯水一救中一車薪之火上也」史、項羽紀「幸分二我一桮羹一」桮は杯に同じ。〇杯に盛りし酒、又、單に酒の稱。錢起詩「九日自佳節、扁舟無二――一」〇圖みつる、充滿。

【一杯機嫌】圖酒に醉ひて愉快なる心地。

【一杯水】ひとさかづきの少しの水。

【一杯酒】晉書、張翰傳「使レ我有二身後名一、不レ如二卽時――一」

【一輩】一つのなかま。史、大宛傳「諸使二外國一――大者數百、少者百餘人」

【一敗塗レ地】全く敗北して、肝腦地にまみれ、再び起つこと能はざる貌。史、高祖紀「劉季曰、天下方擾、諸侯竝起、今置レ將不レ善、――――」

【一方】〇かたはう。=一片。〇かなた、あなた。赤壁賦「望二美人兮天――一」

【一方之藝】一事にすぐれたるわざをいふ。西京雜記「有二一介之善、――一、踐二接士之館一」[?]

【一方之任】一方面をすべ治むるつとめ。漢書、終軍傳「不レ足二以抗二――一」

【一包】ひとつつみ。續齊諧錄[?]「以二長砂一――見レ寄」

【一髮】〇ひとすぢのかみ。傳咸、櫛賦「我嘉二茲櫛一、惡レ亂好レ理、――不レ順、實爲二己恥一」〇遠山のかすかに橫はるに喩ふ。蘇軾詩「杳杳天低鶻沒處、靑山――是中原」

【一髪引千鈞】イッパツセンキンヲヒク　一本の髪の毛にて、千鈞の重き物を引く。極めて危急なる喩。韓愈、與孟尚書書「漢氏以來、羣儒區區修補、百孔千瘡、隨亂隨失、其危如一髪引千鈞。」漢書、枚乘傳「以一縷之任、係千鈞之重。」

【一半】イッパン　はんぶん。半分。方干詩「生涯——在漁舟。」

【一帆】イッパン　一つのほ。常建詩「天際——影、預懸離別心。」

【一般】イッパン　○ひとつ。一樣。同樣。齊己、片雲詩「水涵清淺靑蘿辨、竹裏臨泉也——。」鄭谷詩「——滋味、料知少人知。」○通常の人。特殊の對。「——社會」○國すべて。ぜんたい。「天下——」

【一班】イッパン　一くみ。一列の位。隋書、李德林傳「會遊少年間、取——一級。」

【一斑】イッパン　豹の皮の一つのまだら。轉じて一部分の義とす。晉書、王獻之傳「此郎亦管中窺豹、時見——。」

【見一斑】イッパンヲミル　全豹を見ること能はず、唯其の一斑を見る。見るところの小なる喩。前條を見よ。

【一飯恩】イッパンノオン　一度飯をふるまはれし少しの恩惠。史記「大丈夫勿顧——。」

【一飯之德】イッパンノトク　一度の飯をふるまはれし少しのめぐみ。史、范雎傳「——必償、睚眦之怨必報。」

【一臂】イッピ　一つのひぢ。我が力となるべき人に喩ふ。北史、薛道衡傳「今陽之主、既知斷——。」

【一悲一喜】イッピイッキ　或はかなしみ、或はよろこぶ。王建、美女篇「須臾破顏倏斂眉、——空相宜。」

【一匹】イッピキ　四丈をいふ。說文「匹、四丈也。」漢書、食貨志「布帛廣二尺二寸爲幅、長四丈爲匹。」

【一筆】イッピツ　○ひとふで。圖繪寶鑑「趙子昻能作——書。」○一つの短き文章。唐書、緒仲傳「十金易——。」○國一箇、又、一件の意。「——の田地」

【一筆勾之】イッピツニコウス　ひと筆にて線を引きて除き去る。正字通「俗謂除去曰勾。」宋范仲淹選監司、取班簿視不才者——。

【一品】イッピン　○一つの品。又、特にすぐれたる品物。「天下——」○支那にて官員の最高の位階。○國イッポン、親王の最高の位階。

【一貧一富】イッピンイップ　貧しくなりたり、富みたり。漢書、鄭當時傳「——、迺知交態。」

【一顰一笑】イッピンイッショウ　一たび眉をひそめ、一たび笑ふ。喜怒の色にあらはるる義。韓非、內儲說「韓昭公曰、明主愛——、顰有爲顰、笑有爲笑。」顰は嚬に同じ。

【一百五日】イッピャクゴニチ　冬至を去ること一百五日を寒食といふ。この日火を禁ず。荊楚歲時記「去冬至——、有疾風甚雨、謂之寒食。」

【一當百】イットウヒャク　一人にて百人に敵す。後漢書、臧洪傳「諸將既經此大難、氣益壯、無不一當百。」

【一夫】イップ　○ひとりの男。暴君をいふ。孟、梁惠王「聞誅——紂矣、未聞弑君也。」○一人の義。書、君陳「無求備于——。」

【一夫當關萬夫莫開】イップカンニアタレババンプモヒラクナシ　一人が關所を守れば、萬人の者も之を開くこと能はず。極めて險阻の地にいふ。李白、蜀道難詩「劍閣崢嶸而崔嵬、——。」

【一夫多妻】イップタサイ　ひとりの男が同時に多くの妻を持つ。一妻多夫の對。

【一夫不耕天下受其饑】イップタガヤサザレバテンカソノウエヲウク　後漢書、王符傳に出づ。下に「一婦不織、天下受其寒。」漢書、食貨志「一夫不耕、或受之饑、一女不織、或受之寒。」

【一俯一仰】イップイチギョウ　或は俯し或は仰ぐ。荀悅、雜言「——、乍進乍退。」

【一風流】イップウリュウ　國ひとふう變つてゐる。へんくつ。變人。

【一服】イップク　一回に服用すべき分の藥。齊東野語「服三錢湯一百五十服。」

【一幅】イップク　○布帛などのひとはば。徐彥伯詩「飛書——錦文迴、恨寫長詩倩雁來。」○國書畫の掛物一つ。一軸。

【一餅】イッペイ　ひとかたまり。一片の義。後漢書、樂羊子妻傳「羊子嘗行、路得遺金——、還以與妻。」

【一癖】イッペキ　ひとくせ。白居易、山中獨吟「人各有——、我癖在章句。」

【一碧萬頃】イッペキバンケイ　碧水の廣廣と晴れ渡りたる貌。范仲淹、岳陽樓記「上下天光、——。」

【一片】イッペン　○ひとひら。杜甫詩「——花飛減却春。」○ひときれ。後漢書、周燮等傳序「日買猪肝——。」

【一片月】イッペンノツキ　一つの月。李白詩「長安——、萬戶擣衣聲。」

【一片氷心】イッペンノヒョウシン　極めて清き心。王昌齡詩「洛陽親友如相問、——在玉壺。」

【一偏】イッペン　一方にかたよる。宋史、劉述傳「安石任——之見、改立新議、以害天下大公。」

【一遍】イッペン　ひとゝほり。一回。一度。

【一篇】イッペン　一首の詩文。漢書、陸賈傳「凡著十二篇、每奏——、高帝未嘗不稱善。」

【一編】イッペン　一つのあみたる書。史、留侯世家「出——書、曰、讀此則爲王者師矣。」

【一畝】イッポ　○司馬法には六尺を步となし、步百を畝となす。秦の孝公は、二百四十步を畝と定む。宋の程頤曰く、古の百畝は宋の四十畝に當り、宋の百畝は、古の二百五十畝に當ると。○國三十步。ウネ

【一畝之宮】イッポノキュウ　一畝ばかりの貧しき

家の鎗、儒行「――、環堵之室、篳門圭竇、蓬戸甕牖、易レ衣而出、并レ日而食」

【一歩一喘】ひとあし歩みて、ひといきつく、嶮しき山路を行くさま。

【一封】一つの封書。韓愈詩「――朝奏九重天、夕貶二潮州一路八千」

【一篷】一つのとま。李咸用詩「鬼樹夜分千炬火、漁舟朝卷――霜」

【一抔土】○片手にてすくふ程の少しの土。漢書、張釋之傳「假令愚民取二長陵一抔土一、陛下且何以加二其法一乎」長陵は高祖の陵、高祖の墓を發くといふ婉曲の辭。○轉じて天子の陵墓の義とす。駱賓王檄「一抔之土未レ乾、六尺之孤安在」

【一本】○書物一冊。○別本・異本。○本源を一つにする「忠孝――」

【一品經】法華經二十八品の中を一品づつ分ちて讀むこと。

【一出而不レ可レ反者言也】口に出せば取りかへしがつかず、言語の愼むべきをいふ。新書「――、一見而不レ可レ揜者行也」

【一鳴驚レ人】一度奮發せば、人を驚かしむる大事を爲すといふ譬、齊の威王が荒淫にして、國の亡びんとする時、淳于髡がなぞをかけて諫めたる故事。史、滑稽傳「國中有二大鳥一、止二于王之庭一、三年不レ飛、又不レ鳴、王知二此鳥何也一、王曰、此鳥不レ飛則已、一飛沖レ天、不レ鳴則已、――」

一畫

【七】シツ シチ 質 通じて漆・柒に作る

○ななつ、なな。○ななたび。（七凹）三國志、諸葛亮傳「―擒―縱」○文體の名、問對の別名、楚辭の七諫に始まる、枚乘の七發、曹植の七啓の類。

【七哀】七つのかなしみ。文選、注「――、謂二痛而哀、義而哀、感而哀、怨而哀、耳目聞見而哀、口歎而哀、鼻酸而哀一也」阮瑀・曹植並に――詩あり。

【七緯】○日月と、木・火・土・金・水の五星と。○新論「――順レ度以光二天象一」○緯書の類七つ、七經の對。易緯・書緯・詩緯・禮緯・樂緯・春秋緯・孝經緯〔書錄解題〕

【七雄】支那戰國時代の七強國、雄は首長、齊・楚・秦・燕・趙・魏・韓。班固、答賓戲「――虓闞分二裂諸夏一、龍戰而虎爭」

【七音】○七音の樂調、宮・商・角・徵・半徵・羽・半商の稱。○脣・舌・牙・齒・喉・半舌・半齒音の稱。○七音略「――之作、起レ自二西域一、流入二諸夏一」

【七曜】日・月と、火・水・木・金・土の五星と。後漢書、劉陶傳「陶著書數十萬言、又作二――論一」＝七政。

【七葉】七世に同じ。左思、咏史詩「金張藉二舊業一、――珥二漢貂一」金張は金日磾と張安世と。

【七葉樹】とちの木。杼・橡・栩。葉は掌狀大形、材は建築、器具に用ひ、果は食用とす。

【七香車】すぐれてうつくしき車。魏武帝與二楊文先一書「謹贈二足下四望通幰――一乘一」

【七香湯】七種の香を加へたる湯。飛燕外傳「后浴二五蘊――一」

【七覺支】佛修道の時、其の眞僞善惡を觀察覺了するを覺支といふ、即ち、擇法覺支・精進覺支・喜覺支・除覺支・捨覺支・定覺支・念覺支。

【七去】儒教にて妻を離緣する七種の理由、父母に順ならざれば去る、子なければ去る、淫なれば去る、妬なれば去る、惡疾あれば去る、多言なれば去る、竊盜すれば去る。大戴禮、本命「婦有二七出一、不レ順二父母一去、無レ子去、淫去、妬去、有二惡疾一去、口多言去、竊盜去、有二三不レ去、有レ所レ取、無レ所レ歸不レ去、與更二三年喪一不レ去、前貧賤後富貴不レ去」

【七垢】佛七つのけがれ、垢はあか。翻譯名義集「瑜伽――者、一欲二見三疑四慢五憍六隨眠七慳也」

【七經】○詩經・書經・禮記・樂記・易經・春秋・論語〔後漢書、張純傳注〕○易經・書經・詩經・三禮・春秋〔紺珠〕○書經・詩經・春秋・三禮・論語〔同上〕○書經・詩經・三禮・公羊傳・論語〔七經小傳〕

【七教】○父子・兄弟・夫婦・君臣・長幼・朋友・賓客の道の教。禮、王制「明二――一以興二民德一」○民を治むる七つの根本の教。紺珠「――、家語、孔子曰、――者、治レ民之本、曰、敬レ老・尊レ齒・樂レ施・親レ賢・好レ德・惡レ貪・廉讓」

【七竅】○人の顏面にある七つの穴。蔡揚脈度論「耳目鼻口（以上各二）口」莊、應帝王「人皆有二――一、以視聽食息」○人の胸にありといふ七つの穴。史、殷紀「聖人心有二――一、剖二比干一觀二其心一」

【七見】佛不正なる七種の見解、邪見・我見・斷見・常見・戒盜見・果盜見・疑見の稱。

【七賢】○春秋時代の七賢人、伯夷・叔齊・虞仲・夷逸・朱張・柳下惠・少連〔論、微子〕○晉書、嵇康傳「所二與神交一者、惟陳留阮籍・河內山濤、豫二其流一者、河內向秀・沛國劉伶・籍兄子咸・琅邪王戎、遂爲二竹林之遊一、所レ謂竹林――也」

【七絃琴】七筋の絲の琴、絃一に弦に作る。晉書、孫登傳「登好讀レ易、撫二――一」

【七古】七言古詩の略。
【七國】七雄（前頁三段）を見よ。
【七五三】圖祝儀に用ふるめでたき數にて、皆陽數。「――の祝」は男子が三歳と五歳と、女子が三歳と七歳との年の十一月十五日に行ふ祝。〇しめなは、しめ。＝標繩・注連。
【七言】一句七言の詩、その四句二十八字よりなれるを――絶句といひ、八句五十六字よりなれるを――律詩といひ、句數の多少に拘らざるを――古詩といふ。古文苑「漢武帝元封三年作柏梁臺、詔羣臣二千石能爲七言詩、乃得上坐、帝曰、日月星辰和四時、白梁王以下、作詩者二十三人」
【七言絶句】前條を見よ。＝七絕。
【七言律詩】七言八句より成り、三四の句と、五六の句とは竝に對句を用ふ。滄浪詩話「律詩難于古詩、絕句難于八句律詩」＝七律。
【七菜】七種菜の略、ななくさ。荊楚歲時記「人日採七種菜作羹」
【七才子】〇明の詩人、李夢陽・何景明・徐禎卿・邊貢・康海・王九思・王延相を前の――又七子といふ〔明史、李夢陽傳〕〇明の王世貞・李攀龍・謝榛・宗臣・梁有譽・徐中行・吳國倫を後の――又七子といふ〔明史、李攀龍傳〕
【七札】甲葉七枚。左、成十六「潘由基蹲甲而射之、徹――」強弓を引くをいふ。
【七子】紺珠「建安――、孔融字文擧・陳琳字孔璋・王粲字仲宣・徐幹字偉長・阮瑀字元瑜・應瑒字德璉・劉楨字公幹、建安獻帝年號」前條參看。
【七支】圖十惡中の殺生・偸盜・邪淫・妄語・綺語・惡口・兩舌の七つの稱〔法苑珠林〕
【七志】書物を分類して――とす。南史、王儉傳「依七略撰――四十卷、獻之」紺珠「――、經典・諸子・文翰・軍書・陰陽・術藝・圖譜」
【七死七生】七度死し、七度生れかはる。四十二章經「佛言次爲須陀洹、須陀洹者、――、便證阿羅漢」
【七緞】緞珍の漢名、緞子の上品なるもの。
【七七日】圖人死して四十九日。酉陽雜記「今人以初喪四十九日、居極側謂之――」又按、魏書胡國珍傳、詔自始薨至七七、皆爲千僧齋、令七人出家」
【七十子】孔子の弟子中のすぐれたる人人、孔子の弟子、身六藝に通ずる者七十七人、七十は成數を擧ぐるなり。孟、公孫丑「如――之服孔子也」
【七十二疑冢】魏の曹操死に臨み、人の己の冢を發かんことを恐れ、其の所在を晦まさんが爲めに、七十二の疑冢を作れりといふ。輟耕錄「曹操疑冢七十二、在漳河上」
【七十二候】五日を一候とし、三候を一氣とし、六候を一月とし、一年を二十四氣――に分つ、卽ち正月の立春節に「東風解凍」「蟄蟲始振」「魚上冰」の三候あり、雨水節に「獺祭魚」「鴻雁北」「草木萌動」の三候あり、二月の啓蟄節に「桃始華」「倉庚鳴」「鷹化爲鳩」の三候ある如し、詳細は、禮、月令を見よ。
【七十二弟子】孔子の弟子にて、身六藝に通ぜる者七十七人あり、之を七十二といふは成數に從へるなり。史、仲尼弟子傳「孔子曰、受業身通者七十有七人、皆異能之士也」史、孔子世家「弟子蓋三千焉、身通六藝者七十有二人」
【七生】圖七度生れかはる。四十二章經「七死――、便證阿羅漢」
【七情】七種の情、喜・怒・哀・懼・愛・惡・欲。禮、禮運「何謂人情、喜怒哀懼愛惡欲、七者弗學而能」釋氏要覽「喜・怒・憂・懼・愛・憎・欲」
【七襄】星が七たび其の位次を移す、襄は駕。詩、小雅「跂彼織女、終日――」
【七尺去不蹈師影】弟子たる者、師を尊びて其の影をも踏まざるやうにせよとの戒。敎誡律儀「若隨師行、不得唾笑、不得蹋師影、相去可七尺」
【七尺之軀】身長七尺あるをいふ。荀、勸學「小人之學也、入乎耳、出乎口、口耳之間四寸耳、曷足以美――哉」
【七衆】圖佛弟子の分類、比丘・比丘尼・沙彌・沙彌尼・式沙摩尼・優婆塞・優婆夷。
【七種菜羹】陰曆一月七日のななくさがゆ、七種とは、芹・薺・御行・繁縷・佛座・菘・蘿蔔をいふ、佛座は一名田平子。遵生八牋「荊士、人日採七種菜作羹湯以食之」
【七旬】七十日。書、大禹謨「――有苗格」
【七順】人の道を進むる七つの順道。逸周書「――、一順天得時、二順地得助、三順民得和、四順利財足、五順德助明、六順仁無失、七順道有功」
【七書】七種の兵書、孫子・吳子・司馬法・尉繚子・三略・六韜・李衞公問對〔紺珠〕宋史、選舉志「凡武學生習――兵法騎射」＝武經七書。
【七縱七擒】敵を七たびはなちて七たびとらふ、諸葛孔明が孟獲を擒にせし故事、擒一に禽に作る。蜀志、諸葛亮傳注「孟獲曰、向者不知虛實、故敗、若祇如此、定易勝耳、亮笑、縱使更戰、――、獲曰、

公天感也、南人不二復反一矣」章孝標、諸葛武侯廟詩「一一何處在、茅花襍草盈二神墳一」

【七松處士】シチセウショジ　唐の郎幕の號。唐、郎幕傳「幕歸勤再知二禮部一舉二引寒俊一、士類多レ之、既老號二所居一爲二七松處一、時二松子庭一號二——一云」

【七色】シチシキ　赤・黃・青・緑・紫・紺・緋の七つの色。江淹詞「雲八重兮一一、山十影兮九形」

【七出】シチシュツ　七去を見よ。大戴禮、本命「婦有二一一一一」疏、內則「子甚宜二其妻一、父母不レ說出」疏、出謂二出去一也」

【七政】シチセイ　日・月と、火・水・木・金・土の五星と、其の運行節度ありて國家の政に似たる故。晉書拾唾「七曜亦曰二一一一、齊曰、在二璇璣一玉衡一以齊二一一一、日月木火土金水」

【七星】シチセイ　○貪狼星・巨文星・祿存星・文曲星・廉貞星・武曲星・破軍星。○北斗七星（史、天官書）○七つの星文の如きあざ。晉書、桓溫傳「髮委地、面有二一一一」

【七星劍】シチセイケン　伍子胥の帶びし名劍。吳越春秋、王僚使公子光傳「伍員奔レ吳、至レ江、漁父渡レ之、乃解劍與二漁父一曰、此劍中有二七星一價直二百金一、漁父不レ受」

【七聖】シチセイ　五音（宮・商・角・徵・羽）と二變（變徵・變宮）と（隋書、音樂志）＝七律。

【七清華】シチセイカ　國清華の七家、花山院・西園寺・大炊御門・久我・三條（轉法輪）・德大寺・菊亭の稱。

【七夕】シチセキ　たなばた、古、五節句の一、陰曆七月七日の夕に、牽牛（彦星）織女（棚機）の二星が天河を渡りて相會ふといふ。晉、女、この日、紙絲などを二星に獻りて技藝の上達を祈るをを巧奠といふ。荊楚歲時記「七月七日、爲二牽牛織女聚會之夜一、人家婦女結二綵樓一、穿二七孔鍼一、或以二金銀鍮石一爲レ鍼、陳二瓜果於庭中一以乞巧、有二喜子網一於瓜上一、則以爲レ得レ巧」＝乞巧節。

【七絕】シチゼツ　○七言絕句（七言四句の詩）の略。○絕句七首の○枠をいふ。酉陽雜俎「俗謂レ柿、有二一一一一、二蔕、二多レ陰、三無二鳥巢一、四無二霜葉一、五嘉實、七落葉肥大」

【七折八扣】シチセツハッコウ　國官吏などが買物をするに、強制的に割引をなさしむる義、七折は七がけ。

【七僧】シチソウ　國僧の七つの役。講師・讀師・呪願・三綱・唄師・散花・堂達。○七人の僧侶。北史、張元傳「請二一一一一、供二七僧一」

【七大】シチダイ　國四大に、空大・見大・識大を加へたる稱。四大參看。

【七大寺】シチダイジ　國南都の七つの大寺、即ち東大・興福・四大・元興・大安・藥師・法隆の七寺。

【七堂】シチダウ　國寺院の堂宇、三門・佛殿・法堂・廚・僧堂・浴室・東司ナド一一伽藍はこれ等の建物の完備せる寺院。

【七道】シチダウ　國東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道の稱、今は北海道を加へて八道とす。

【七澤】シチタク　楚の國の大澤七つ。史、司馬相如傳「楚有二一一一一、嘗見二其一一、未レ觀二其餘一也、臣之所レ見、蓋特其小小者耳、名曰二雲夢一、雲夢者方九百里」

【七錢】シチセン　七十歳、十年を一秩とす、一秩（一四頁二段）を見よ。白居易詩「已開第一一、飽食仍安眠」

【七珍萬寶】シチチンバンポウ　國よろづのたから。七珍は七寶に同じ。

【七重寶樹】シチヂュウホウジュ　國金樹・銀樹・瑠璃樹・玻瓈樹・珊瑚樹・瑪瑙樹・硨磲樹の七重に竝列せる極樂の寶樹、一說、黃金の根・紫金の莖・白銀の枝・瑪瑙の條・珊瑚の葉・白玉の華・眞珠の菓の七重竪立せる寶樹（法華經）元好問詩「——國二金界一」

【七條】シチデウ　國七幅ばかりにて製せる袈裟。

【七顚八起】シチテンハッキ　國七ころび八おき、人の運命の浮き沈みのはげしき形容。

【七顚八倒】シチテンハットウ　○幾度もころびたふる、紛亂の甚だしきをいふ。朱子語錄「當二兩之季一——、上下崩騰」○國苦痛に堪へずしてのたうちもがく。

【七等】シチトウ　○すぐれたる人の七階級、五人にすぐれるを茂、十人にすぐれるを選、百人にすぐれるを俊、千人にすぐれるを英、二千人にすぐれるを傑、萬人にすぐれるを聖（白虎通）○孫以下の七世、孫・曾孫・玄孫・來孫・昆孫・仍孫・雲孫をいふ。

【七族】シチゾク　國足利時代、三職に次ぐ重臣の家柄、山名・一色・土岐・赤松・京極・上杉・伊勢の七氏。

【七德】シチトク　○武の七つの德、禁ノ暴戢レ兵、保レ大、定レ功、安レ民、和レ衆、豐レ財（左、宣十二）○詩の七つの體。詩式「一一、識理・高古・典麗・風流・精神・質幹・體裁」

【七德舞】シチトクブ　唐の太宗の武の七德に本づきて作りし舞曲の名、本名は秦王破陣樂。白居易、七德舞詩序「——樂二擬レ亂陳一王業一也」唐書、禮樂志「——貞、本名秦王破陣樂、太宗爲二秦王一破二劉武周一軍中相與作二秦王破陣樂曲一及レ卽レ位、宴會必奏レ之、後令二魏徵・褚亮・虞世南・李百藥一更製二歌詞一、名曰二——一」

【七難】シチナン　國七種のわざはひ、難は厄難・人衆疾疫・他國侵逼・自界叛逆・星宿變怪・日月薄蝕・非時風雨・過時不雨（藥師經）○火難・水難・羅刹難・刀杖難・鬼難・枷鎖難・怨賊難（法華經）

【七年旱】シチネンカン　七年の間のひでり。荀、富國「禹十年水、湯――」

【七年之病求三年之艾】シチネンノヤマイニサンネンノモグサヲモトム　平生之を蓄へずして、事あるに臨みて、にはかに之を求めんとするも不可能なりとの喩。孟、離婁「今之欲王者、猶ホ七年之病求三年之艾一也、苟爲レ不レ蓄、終身不レ得」趙注「艾可二以爲一灸二人病一、乾久益善、故以爲レ喩」

【七寶】シッポウ　圖七種の寶物。阿彌陀經「上有二樓閣一、亦以二金・銀・瑠璃・玻瓈・硨磲・赤珠・瑪瑙一而嚴飾之」〇金・銀・瑠璃・玻瓈・硨磲・瑪瑙・琥珀・珊瑚（般若經）〇金・銀・瑠璃・硨磲・瑪瑙・真珠・摩尼珠（悲水經）〇金・銀・瑠璃・硨磲・瑪瑙・真珠・玫瑰（法華經）‖七珍。〇圖シチホウ　銅などの器物に種種の模様を針金にて置け、釉薬を加へて焼きしもの「――な焼」

【七寶莊嚴】シッポウシャウゴン　七寶もて莊重にかざる。阿彌陀經「舍利弗、極樂國土、成就二如是功德一、莊二嚴佛土一」

【七縱七擒】シチジフシチキン　七まがり、阪路のまがりくねる義。元稹詩「漸進――路、坡陀數丈城」

【七閩】シチビン　支那の東南のえびす、七種に分る、今の福建省福州府閩縣地方。閩、職「方氏、疏「叔熊避二難於濮窠一、隨二其俗一、後分二七種一、故謂二之――一」

【七福神】シチフクジン　圖七柱の福の神、大黒・恵子・毘沙門・辯天・布袋・福祿壽・壽老人。

【七佛】シチブツ　圖毘婆尸・尸棄・毘捨浮・拘留孫・倶那含牟尼・迦葉・釋迦の稱。大灌頂神呪經「――八大菩薩」

【七佛藥師】シチブツヤクシ　圖善稱名吉祥王如來・滿月智慧音自在王如來・金色寶光妙行成就如來・無憂最勝吉祥如來・法海雷音如來・法海慧遊戲神通如來・寶師子瑠璃光如來。

【七廟】シチベウ　天子のおたまや、太祖の廟と、三昭・三穆（當代の天子の父より溯りて上六代）とを併せていふ。史、始皇紀「古者天子――、自二襄公一以下、軼級レ置、凡――」禮、王制「天子――」

【七篇】シチヘン　典、孟軻傳「天下方務二於合從連衡一、以攻伐爲レ賢、而孟軻乃述二唐虞三代之德一、是以所レ如者不レ合、退而與二萬章之徒一、序二詩書一、述二仲尼之意一、作二孟子――一」

【七歩才】シチホノサイ　魏の文帝（曹丕）弟東阿王（曹植）をして、七歩の間に詩を作らしめ、成らざれば大法に行はんといふ、王、聲に應じて詩を作る、曰く「煮レ豆持作レ羹、漉レ豉以爲レ汁、萁在二釜底一然、豆在二釜中一泣、本是同根生、相煎何太急」と（世說、文學）養は豆がら、豆を煮るに其を燃くは、兄弟の無情を諷せしなり、この故事により、詩文の才の敏なるをいふ。

【七面鳥】シチメンテウ　圖上嘴根に肉冠ありて自由に伸縮し、時時青白紫紫紅等の色に變ずるが故、漢名は吐綬雞。

【七夜】シチヤ　〇ななばん「七日――」〇圖子生れて七日目の日を祝ふ稱。

【七里香】シチリカウ　沈「花ヤクチナシの異名、高さ三四尺、春の半に枝頂に花あり、數十朶り開く、香氣烈し。‖瑞香・山梔。

【七里結界】シチリノケッカイ　〇圖七里四方の所に界をたてて、隨得物を防ぐをいふ。〇圖物事を忌みきらひて近づけざる義、しちりけつばい。

【七律】シチリツ　〇七言律詩（七百八句の詩）の略。〇音樂の七つの音律。國語「王曰――者何解、黃鍾爲レ宮、大蔟爲レ商、姑洗爲レ角、林鍾爲レ徵、南呂爲レ羽、應鍾爲二變宮一、蕤賓爲二變徵一」‖七音・七聲。

【七略】シチリャク　漢の劉歆、羣書を總べて――を作る、輯略・六藝略・諸子略・詩賦略・兵書略・術數略・方伎略（漢書、藝文志）

【七錄】シチロク　梁の阮孝緒が定めし書籍の分類法、體裁は七略に本づきて稍之を變ず、一經典錄、二紀傳錄、三子書兵書錄、四文集錄、五技術錄、六佛法錄、七仙道錄（隋書、經籍志）

【七椀】シチワン　〇椀に七杯。盧仝、謝二孟諫議一寄レ新――「――喫不レ得也、惟覺兩腋習習生二清風一」〇轉じて茶を飲む量にいふ。‖七盞。

【七草】ナナクサ　圖秋さく七種の草花、萩・桔梗・尾花・葛・藤袴・女郎花・瞿麥。

【七種】シチシュ　七種菜羹（一八四四）を見よ。

【丁】

㊀㊀テイ・チャウ　㊁㊁タウ・ナヤウ　青　次

㊀ひのと、十干の第四位。陰雅「太歲在――、曰二彊圉一」〇壯年の男子、男子年二十を成一と爲す、納稅兵役の義務ある者。〇をとこ、召し使はるる男、僕役「馬――」「園――」〇魚の頭の骨。‖魚枕。〇つよし（強）さかんなり（壯）〇あたる（當）あふ（相値）〇くぎ。‖釘。〇客――若は志を失ふ貌。‖伶仃。㊁――は木を伐る聲、又、杵をうつ聲、又、碁をうつ聲。〇圖まち、町の略字、又二にて割りきれる數、偶數、又、書物の紙數を數ふる語、又、距離を數ふる語、六十一（又は三十六一）を一里とす、町の略字。

【丁】テイ・チャウ　當・直・方・挺・亭の別は中（一部三畫）の條を見よ。

【丁丁】テイテイ　〇木を伐る聲。詩、小雅「伐木――」〇杵を打つ聲。詩、周南「螽斯兒宜、孫之――」〇碁石又、碁の聲。〇漏刻（時の）の聲。白居易詩「――漏向レ盡」〇碁をうつ聲。王

禹偁、黃州竹樓記「宜ㇾ圍ㇾ棊、子聲ーー然」〇圍物を續けて打つ響「ーーはつしと打つ」

【丁當】〇佩玉（腰に帶ぶる玉）の聲。杜牧詩「我家公相家、劍佩嘗ーー」〇金釵の聲。溫庭筠詩「鬮釵委鬟垂二雲髮一、小響ーー逐二回雪一」＝丁東。

【丁璫】玉などの相擊つ聲、前條に同じ。鄭嵎詩「ーー玉石和二塤篪一」＝丁當・丁璫・玎璫。

【丁東】〇佩玉の聲。李商隱詩「雜佩玉ーー」〇風鈴などの觸れあふ聲。韓偓詩「坐久忽聞鈴索動、玉堂西畔響ーー」＝丁當・東丁。

【丁幾】固形藥料を酒精にとかしたるもの「苦味ーー」

【丁銀】圖慶長の頃作りたる銀貨、棒、又は、板に作り、切りて通用す、一枚四十二匁あり。＝挺銀。

【丁數】〇圖二にて割り切れる數。＝偶數。〇書册の枚數。

【丁度】圖をりよく、あたかも。＝恰好。

【丁日】圖丁の數に當る日。

【丁場】圖宿驛と、宿驛との中間。

【丁半】圖すごろくの采の目、二四六八等を丁（偶）といひ、三五七九等を半（奇）といふ。

【丁憂】父母の喪にあふ。書、說命「王宅ㇾ憂、亮陰三祀」に本づく。宋史「ーー不ㇾ得ㇾ離ㇾ任」＝丁艱。

【丁役】兵役にあたる者。張籍詩「郡縣發二ーー一」＝丁徭。

【丁翁】山女（あけび）の異名。＝通草・附支。

【丁香】丁子を見よ、一說、熱地に生ずる常綠喬木。＝雞舌香。

【丁香魚】臺灣にてひしこ（鯷）＝馬鮫。

【丁艱】父母の喪に遭ふ。五代史、李琪傳「其兄珽丁二內艱一、貧無二以葬一」內艱は母の喪、外艱は父の喪。＝丁憂。

【丁公被ㇾ戮】漢の高祖、楚の將丁公を戮して不臣の罪をあらはしたる故事。史、季布傳「季布母弟丁公爲二楚將一、逐二窘高祖彭城西一、短兵接、高祖急、顧二丁公一曰、兩賢豈相戹哉、於ㇾ是丁公引ㇾ兵而還、及二項王滅一、丁公謁二見高祖一、高祖以二丁公一徇二軍中一曰、丁公爲二項王臣一不忠、使二項王失二天下一者、乃丁公也、遂斬二丁公一」漢書敍傳「幽通賦曰、雍造ㇾ怨而先賞兮、丁繇ㇾ惠而被ㇾ戮」

【丁祭】孔子の祭の名、陰曆の二月・八月の上の丁（ひのと）の日に行ふ、故にいふ。禮、月令「仲春之月、上丁命二樂正習ㇾ舞釋一ㇾ菜」唐書、禮樂志「仲春仲秋釋二奠於文宣王一、皆以二上丁一」＝釋奠。

【丁壯】壯年の男子、わかもの。史、項羽紀「ーー苦二軍旅一、老弱罷二轉漕一」

【丁子】〇おたまじやくし。莊、天下「ーー有ㇾ尾」顧況詩「浮瀛ーー珠聯聯」＝料斗。〇圖熱帶に產し、樹は肉桂に類し、葉は柳に似たり、果實は香料又藥品とす、漢名は丁香。

【丁男】年ざかりの男。漢書、嚴安傳「ーー被ㇾ甲、丁女轉輸」＝壯丁。

【丁稚】〇少壯のもの。春明退朝錄「吳正肅言、律令有二丁推一、推字不ㇾ通、少壯之意、當ㇾ是ーー、唐以二大帝諱一避ㇾ之、損二其點畫一云」〇圖職工又商店などに年限を定めて召使はるる幼者の稱。

【丁定規】圖製圖に用ふる丁字形の大定規。＝丁字尺。

【丁寧】〇陣中に鳴らして、衆を戒むる鉦。國語「戰以二錞于ーー一、儆二其民一也」〇轉じて、再三懇切に戒む、親切の義とす。漢書、谷永傳「日食地震、丁二寧陛下一」後漢書、郎顗傳「ーー再三、留二神於此一」俗に叮嚀に作る。

【丁年】一人前になりて兵役に當る年、滿二十歲、唐代は二十一歲。李陵、答二蘇武一書「ーー奉ㇾ使、皓首而歸」

【丁夫】二十歲前後の壯年の男子。晉書「ーー戰二于外一、老弱穫二于內一」

【丁夜】今の午前二時、一夜を五更に分ち、甲夜（午後八時）乙夜（十時）丙夜（十二時）丁夜（午前二時）戊夜（午前四時）とす（漢官舊儀）

【丁蘭刻木】孝子傳「丁蘭事ㇾ母孝、母亡、刻ㇾ木爲ㇾ母事ㇾ之」詳しくは徐盛、逸人傳を見よ。

【丁零】古の狄種、後ち匈奴の屬國となる、今の露領イルクツク地方。＝丁令。

【丁令威化ㇾ鶴】漢の丁令威、仙術を學び、鶴に化して天に昇りし故事。搜神後記「丁令威本遼東人、學二道于靈虛山一、後化ㇾ鶴歸ㇾ遼、集二城門華表柱一、時有二少年一、擧ㇾ弓欲ㇾ射ㇾ之、鶴乃飛、徘二徊空中一而言曰、有ㇾ鳥有ㇾ鳥丁令威、去ㇾ家千年今始歸、城郭如ㇾ故人民非、何不ㇾ學ㇾ仙冢纍纍、遂高上沖ㇾ天、今遼東諸丁云、其先世有二升仙者一、但不ㇾ知二名字一耳」

二畫

【下】㊀カ・ゲ 馮 ㊁カ・ゲ 禡

㊀したしも、上の對、「樓ー」「山ー」もと・そこ（底）低き所。〇しりへ・うしろ・あと・のち（後）〇すそ・そば（端）〇ほとり。柳宗元、西山宴遊記「凡數州之土壤、皆在二衽席之ー一」〇ふもと。詩、唐風「采ㇾ苦采ㇾ苦、首陽之ー」〇いやし（賤）ひくし（卑）又、其の者、又其の位。

〇下等のもの「一愚」「一策」〇めした、臣屬。〇しもじも、下民「一情」〇たふす(仆)㊀くだる、上よりしてくだる、くだす(降下)降參する。史、樂毅傳「齊城不」一者兩城耳」〇へりくだる、謙遜する。易、屯卦「以貴」一賤、大得」民也」〇おちる(落)史、高祖紀「泣數行」一〇さる(去)のぞく(除)【下位】ヵ〇しものくらゐ。易、乾卦、文言「賢人在」一一而无」輔」〇しものはう。‖下方。

【下幃】ヵ下レ帷ヵスを見よ。

【下游】ヵ〇游は流、下流即ち河口に近き所、又其の地方、上游の對。〇ひくき身分、下位。‖下流。

【下院】ヵン〇國會の衆議院の別名、貴族院を上院といふの對。〇寺をいふ。

【下嫁】ヵ天子の女の臣下にとつぐ事。書、堯典「釐二降二女于嬀汭」孔「堯乃二四夫、帝女一一、以レ貴適レ賤」‖降嫁。

【下交】ヵ貴人が身分の賤しき者に交る。易、繫辭「君子上交不レ諂、一一不レ瀆」史、信陵君傳「信陵君之接二巖穴隱一者、不レ恥二一一一有レ以也」

【下降】ヵ〇天の氣が下にくだる。禮、樂記「地氣上齊、天氣一一」〇天子の女が諸侯に下り嫁す。宋史、禮志「公主一一、初被二選尚一者、即拜二駙馬都尉一」‖降嫁・下嫁。

【下預】ヵコウ「下預ヵコウ」したのあごのほね。

【下學上達】ヵガクジヤウタツ下、人事を學び、上、天理に通達する。論、憲問「不レ怨二天不レ尤レ人、一一」

【下諭】ヵ下を見おろす。劇談錄「楼檣可レ以一一城中」‖下視・俯瞰。

【下氣】ヵ下レ氣ヵキを見よ。

【下級】ヵ〇下の階級、上級の對。〇一官吏」〇低き組、一一生徒」

【下愚】ヵ甚だおろかなる者。論、陽貨「上知與二一一一不レ移」

【下元】ヵゲン陰曆十月十五日。三元參看。

【下弦】ヵゲン陰曆二十二・三日頃の半圓の月。上弦を見よ。

【下午】ヵゴ ひるすぎ。‖過午。

【下國】ヵコク〇諸侯の國、天下。書、泰誓「流二毒一一」〇みなか、地方。上國の對。詩、巳詩「諸侯行二敎化一一一自耕桑」〇己の國を謙していふ。‖敝國。〇國ヵクヵ都から地方に行く。

【下獄】ヵゴク牢屋に入る、入牢。

【下士】ヵシ〇ひくき身分のさむらひ。禮、王制「諸侯之上大夫、卿・下大夫・上士・中士・一一凡五等」〇愚かなる人。老子「一一聞レ道、大笑レ之」〇國海軍の下位の士官、伍長・軍曹・曹長をいふ。‖下士官。

【下視】ヵ高き處より見くだす。舊唐書、王方慶傳「山徑危險、石路曲狹、上瞰脈レ目、一一寒レ心」‖下瞰・下瞷・俯視。

【下濕】ヵシツ低く濕り氣ある地、濕一に溼に作る。書、禹貢、傳「一一曰レ隰」漢書、溝洫傳「一一病レ痺」

【下人】ヵシン〇下部ヵブ奴隷をいふ。魏志、常道鄕公紀「興皆二一一所レ殺」〇ヵヒトヵニ人にへりくだる。論、顏淵「虛以一一」〇國ゲンヵ身分の賤しき者、めしつかひ、げらう。‖下奴。

【下情】ヵジヤウ しもじもの人民の事情。班固、兩都賦、序「或以抒二一一一、而通二諷諭一」管子、明法「一一求レ不二上通一謂二之蔽一」

【下痤】ヵシヤウ わかにに、八歳より十一歳までに死する。儀禮、喪服「中殤は十二歳より十五歳までに死する。

【下若酒】ヵシヤクシユ美酒の稱、下若は潮州の溪の名、其の水にて醸す酒。東坡集、注「潮州有二若溪一、南岸曰二上若一、北曰二下若一、人取二下若水一、釀レ酒極美、俗稱二一一一」

【下手】ヵシユ〇手をくだす、著手する、手づから爲す。「一一人」傳燈錄「直是無二一一處一」〇國ヵつたなし(拙)上手ヵメの對。‖下工。〇ヵタ人にくだる、人のしたにつく、‖人後。〇ヵシモ下の方。‖下方。

【下種】ヵシユ〇たねをおろす。致富奇書「一一核宜排、子宜レ撒」〇國ヵ身分卑しき者。‖下司・下衆。

【下壽】ヵジユ 六十歳、一說、八十歳。上壽參看。

【下酒物】ヵシユブツ 酒のさかな、酒をくだすものの義。遊仙窟「將二一一來」‖下物・飲饌ヵインセン蔬殽ヵシヤウ

【下庠】ヵシヤウ 平民の學ぶ校舍。禮、王制「養二庶老於上庠」、注「一一、左學、小學也、在二國中一」

【下春】ヵシユン 夕日の沒せんとする頃をいふ、春はうすつく、日の沒する形容。淮南、天文「日至二淵虞一、曰二高舂一、晡時、至二連石一曰二一一一、晴後」

【下乘】ヵジヤウ〇騎馬。陳琳書「圍圍之凡鳥、外廄之一一」〇小乘をいふ。〇ヵクダ國乘物より下る。

【下臨】ヵシン 見おろす。韓愈詩、樂遊一一無二遠近一」‖下瞰。

【下世】ヵセイ〇死去する、世を去り下りて土中に入る義。曾子「吾君一一」〇後世。〇下界。弧笈七籤「度二寫妙形一、傳二流一一」

【下走】ヵソウ 自己の謙稱、走は走卒。漢書、蕭望之傳「一一將ヵ踰二延陵之墓一」

【下第】ヵダイ〇落第、試驗に不合格、第は科第、漢以後官吏登用試驗に問題を發ヵに書して答へしむ。賈島詩「一一能無レ愧、高科恐有レ神」‖落榜。〇劣等の義。

【下體】ヵタイ 根と莖と。詩、邶風「采レ葑采菲、無レ以二一一一」

【下道】ヵミチ ぬけ道。左、莊九「以二公旗一辟二子一一一」‖間道。

【下澤車】穀の短き車。後漢書、馬援傳「乘二下澤車一御二款段馬一、爲二郡掾史一、守二墳墓一、鄕里稱二善人一、斯可矣」注「周禮曰、車人爲レ車、行レ澤者、欲レ短レ轂」

【下秩】○ひくき位。劉太眞文「僂二游下秩一、想二象高冥一」=下位。○めかけ。妾御の等級。九歎「逐二下秩於後堂一」

【下陳】下の方のならび。後列。李斯、逐客上書「飾二後宮一、充二下陳一」=後宮。

【承二下塵一】下方に居て塵をうける。後陳。又、人の後に居る義。戰國策「敝甲鈍兵、願承二下塵一」

【下土】○地面。上天の對。詩、邶風「日居月諸、照二臨下土一」。○低き土地。書、禹貢「厥土惟墳。下土墳壚」

【下奴】○めしつかひ、しもべ、げらう。=下人。○己を卑下していふ、やつがれ。=下僕。○人を罵りていふ、そやつ。

【下等】○あしきしな。○下の低き階級、劣等〔周禮、司儀〕

【下等動物】○組織の極めて簡單なる動物。轉じて品性の極めて劣りたる人を罵りていふ語。

【下方】○したのかた、しものほう、下部。上方の對。華嚴經「其最下有二世界一」○人間界。宋史、禮志「七月一日下降、總二治下方一」○國貴人に對して平民の稱。=下民。

【下膊骨】うでのほね。

【下牛】すべて下の牛分。

【下班】席次のすゑ。孟浩然詩「牛刀列二下班一」=末班。

【下番】國當番あけ、又其の日。=非番。

【下邳】地名、今の江蘇省、邳縣の東。

【下婢】はしため、下女。

【下筆】筆を下して書く、詩文を作る。魏志、文帝紀「天資文藻、下レ筆成レ章」岑參詩「學富贍二清詞一、下レ筆不レ能レ休」

【下平】四聲中の平聲三十韻を上下に二分し、其の下半、先・蕭・肴・豪・歌・麻・陽・庚・青・蒸・尤・侵・覃・鹽・咸の十五韻をいふ。上平參看。

【下附】官府又貴人よりさげわたす。=下付。

【下部】○下の方、下の部分。○國しめしつかひ=下男。

【下風】○かざしも。孫子、火攻「火發二上風一、無レ攻二下風一」○したじた、下方の義。左、僖十五「皇天后土、實聞二君之言一、羣臣敢在二下風一」

【下文】○下にある文章、上文の對。○國古、官府より下せし命令書、又、政所より下す公文。

【下物】酒のさかな。世說、豪爽「有二如此下物一、一斗不レ足レ多也」=下酒物〔遊仙窟〕

【下錨】國いかりをおろす、船が港につきてとまる。=投錨・碇泊。

【下民】しもじものたみ。書、洪範「惟天陰騭、下民相二協厥居一」

【下名】國己の名を卑下していふ稱。=賤名。又、單に自分をいふ謙稱。

【下命】國命令を下す、下知する。又、上の命令を貴びていふ。「御下命を蒙る」

【下問】目下の者に問ふ。論、公冶長「敏而好レ學、不レ恥二下問一、是以謂二之文一也」

【下流】○ひくく卑しき地位、上流の對。論、陽貨「惡下居二下流一而訕レ上者上」=下位。○川しも、下に流れる。淮南子「水下流而廣大」

【下里巴人】下等なる俗曲。陽春白雪を見よ。

【下僚】ひくき官吏。後漢書、班固傳「得下及二明時一、秉中事下僚上」=末僚・下官。

【下界】國人間の住む所、上界の對。中黃眞經、注「上界宮館、生二於窈冥一、皆有二五色之氣一、而結二成下土一、土地之皆是水氣橫凝扶住」=人間界。

【下向】國都より田舍の方へ行く。又、參詣せし神社佛閣の所在地より歸り來る。

【下疳】かんさう(疳瘡)花柳病の一種。

【下官】下等の官吏、屬吏、また官吏の謙稱。晉書、毛寶傳「下官能讓レ之」

【下官不職】官吏の職務に堪へざるをいふ語。漢書、賈誼傳「坐二罷軟不一レ勝レ任者、不レ謂二罷軟一曰二下官不職一」

【下浣】月の二十一日より末日までの間の稱。=下澣。

【下澣】前條に同じ。三澣を見よ。

【下下】○下の下、最下等。書、禹貢「厥田惟下下」○國しもじも、官に對して人民をいふ。

【下戶】○酒を飲み得ざる人、上戶の對。○貧民。宋史、高宗紀「鐲二被レ災下戶積欠租稅一」

【下剋上】國下の者が上の者を犯ししのぐ、臣が強くして君に迫る。

【下根】國性質愚劣なるもの、上根の對。=鈍根。

【下坐】しもの坐席、坐は座に通ず、末席。史、孟嘗君傳「客之居二下坐一者、有下能爲二雞鳴一者上」=下座。

【下座】前條に同じ。=末座・末席・末班。

【下財】國かねほり、礦夫、坑夫。

【下劑】くだしぐすり(瀉藥)

【下策】へたなはかりごと、拙き略、拙策、上策の對。漢書、匈奴傳「周得二中策一、漢得二下策一、秦無レ策焉」=下計。

【下山】山を下る、登山の對。

【下車】○車からおりる。禮、樂記「未レ及レ下レ車、而封二黃帝之後于

莅」〇轉じて官吏の初めて任地に到る處とす。漢書「明府一一以來、狗不二夜吠一」

【下宿】ゲシュク 〇國やどおり、奉公人又、宮仕する者が、一時實家にもどり居る。〇食費席料等を拂ひて永く他家に寄寓する。「一一屋」「一一人」

【下旬】ゲジュン 月の二十一日より末日までの間の稱。＝下浣。

【下司】ゲス 國ひくく輕き役、したづかさ。＝下吏・下官・卑官。

【下衆】ゲス 〇國賤しき者、賤民、上衆ジヤウスの對、下種とも書く。〇賤しく、げびてゐる。＝鄙劣・野鄙。

【下水】ゲスヰ 汚水を流しやる溝。＝排水溝・陰溝。

【下拙】ゲセツ 〇へた、つたなし。〇自ら謙して稱す。

【下賤】ゲセン 〇いやし、卑下。〇センニクダル 日下の人にへりくだる。易、屯卦「以レ貴下レ賤、大得レ民也」

【下世話】ゲセワ しもざまのうはさ。

【下足】ゲソク 國ぬぎたるはきもの。「一一番」

【下知】ゲチ 國おほせ、命令、下の者に知らせる義。

【下女】ゲヂヨ 國めしつかひの女、はしため、女中。＝下婢。

【下直】ゲヂキ 國やすね、安直・廉價。

【下男】ゲナン 國めしつかひの男。＝下奴・下僕。

【下人】ゲニン 國身分賤しきめしつかひ、げらう。＝下奴。

【下馬】ゲバ 馬からくだる。蘇軾詩「隻雞敢忘橋公語、一レ一來尋董相墳」

【下馬坊】ゲババウ 陵墓又廟に立つる下馬札。唐書、太宗紀「于二東西廟傍一、立二一一一示レ禁」＝下馬碑。

【下輩】ゲハイ しもざまの者、下等の人。史、滑稽傳「褐人廣衆薦二臨一一一、八士亦以レ此多レ之」

【鄙下】ヒゲ いやし。＝卑下・下賤。

【下品】ゲヒン 〇品格の卑しきこと。上品を見よ。＝野鄙。〇賤しき品物、下等の品。〔蘇洵、上二仁宗皇帝一書〕

【下部】ゲブ 國しもべ。＝下僕。

【下落】ゲラク 等級・物價などの下ること。

【下臈】ゲラフ 位の賤しきもの、臈を積むこと少き者、臈は臘、年の義、上臈の對。

【下痢】ゲリ はらくだり。齊民要術「令二人一一一」

【下略】ゲリャク 文章の終りの部分を省きて記さず、以下省略の義、又、其の省きたることを示すことわりがき。

【下劣】ゲレツ いやしくおとる。漢書「縱其人材一一、尚作二關内侯一」＝闒劣・卑劣。

【每レ下愈況】 況は喩なり、數數喩を設けて喩を設くる毎に、いよいよ卑近となる〔莊、知北遊〕

【三】

㊀サン 覃 ㊁サン 勘 ㊂シン 侵 弎は古字 參に通ず

㊀みつ、み。〇みたび(三回)論、公冶長「一思而後行」㊁たび、しばしば(屢)再三の義。論、先進「南容一復白圭」㊂みつ。

【三椏】ミツマタ 落葉灌木の一種、瑞香科に屬す、每枝三つに分れて出づ、皮は駿河半紙の原料とす、みつまた。＝結香・黄瑞香。

【三惡趣】サンアクシュ 佛三惡道に同じ。

【三惡道】サンアクダウ 佛地獄・餓鬼・畜生の三道。＝三途・三惡。

【三易】サイ 〇文を作るに三つのたやすくすべき方法。顏氏家訓「沈約曰、文章當レ從二三易一、易レ見レ事、易レ識レ字、易二讀誦一」〇エキ 夏の易の連山と、殷の易の歸藏と、周の易の周易と〔周禮、春官、太卜〕連山・歸藏は亡びて傳はらず。

【三畏】サンヰ 三つのおそれはばかるべきこと。論、季氏「孔子曰、君子有二三畏一、畏二天命一、畏二大人一、畏二聖人之言一」

【三位一體】サンミイツタイ 基督敎キリストケウにて、天帝・耶蘇・聖靈の三體を一つの神と見る稱。

【三友】サンイウ 三種類の友。論、季氏「益者一一、損者一一」〇詩・琴・酒の稱。白居易、北窗三友詩「一一者爲レ誰、琴罷輒擧レ酒、酒罷輒吟レ詩、一一遞相引、循環無二已時一」〇松・竹・梅を歲寒一一といふ〔月令廣義〕〇山水・蘭竹・琴酒の稱。元、次山、丐論「古人鄕無二君子一、則與二山水一爲レ友、里無二君子一、則以二竹一爲レ友、座無二君子一、則以二琴酒一爲レ友」

【三宥】サンイウ 〇周代の制にて罪をゆるす三條件、不識・過失・遺忘〔周禮、秋官、司刺〕〇王族の罪を犯せし時、王三たび赦罪を命じ、然る後ち刑する法〔蘇軾、論二始皇漢宣一文〕

【三揖一辭】サンイフイチジ 君子の進仕するには鄭重にして、進處するには輕易なるをいふ。禮、表記「君子三揖而進、一辭而退」

【三衣】サンエ 佛僧の三種の法衣、大衣・七條・五條。釋氏要覽「一一者、法衣有レ三也、一僧伽梨即大衣也、二鬱多羅僧即七條也、三安陀會即五條也」

【三益】サンエキ 三益友の略。次條を見よ。陶潛詩「素心正如レ此、開レ徑望二一一一」

【三益友】サンエキイウ 〇己に益ある三つの友。論、季氏「益者三友、損者三友、友レ直、友レ諒、友二多聞一、益矣」〇梅・竹・石。蘇軾贊「梅寒而秀、竹瘦而壽、石醜而文、是爲二三益之友一」

【三越】サンエツ 〇南越の地。晉書、文帝紀「威加二南海一、名懾二一一一」〇國古の越コシの國、越前(加賀・能登を含む)

越中・越後。

【三加】サン　加冠の禮、加は施なり、著なり、始め緇布冠を冠し、次に皮弁を加へ、次に爵弁を加ふるをいふ。禮、冠義「一一彌尊」

【三河】サン　河東・河内・河南。史、貨殖傳「昔唐人都二河東一、殷人都二河内一、周人都二河南一、夫一一在二天下之中一、若二鼎足一、王者所二更居一也」

【三夏】サン　夏の三ケ月、九夏ともいふ、九夏は夏の九十日。爾雅「凡新盛不レ過二一一一一、始不レ堪レ用」

【三家】カ　〇魯の三大夫。孟孫・叔孫・季孫の論、八佾「一一者、以レ雍徹」〇國デ　徳川氏の三親藩、尾張・紀伊・水戸。

【三峨】サン　蜀の峨眉山をいふ、大峨・中峨・小峨の三峯に分る。蘇軾詩「一一吾鄉里」

【三戒】サイ　〇一生中の三つのいましめ。論、季氏「孔子曰、君子有二一一一一、少之時、血氣未レ定、戒レ之在レ色、及二其壯一也、血氣方剛、戒レ之在レ鬪、及二其老一也、血氣既衰、戒レ之在レ得」〇柳宗元の文集に一一あり、臨江之麋・黔之驢・永之鼠これなり、三戒を假りて鑑戒を垂る。

【三戒壇】サンカイダン　國　大和の東大寺・下野の藥師寺・筑前の觀音寺。

【三界】サンガイ　佛　慾界・色界・無色界。〇この世、世界。法華經「一一無レ安、猶如二火宅一」〇過去・現在・未來の三世界。

【三階】サンカイ　國　二階の上に更に一層の家ある家。‖三層樓。

【三遷】サンセン　國　紋所の名、松の枝葉を笠を傾面より見たる如く三重に畫きしもの。

【三行】サンカウ　〇子の親に對する三つの行、養と喪と祭と。〇人倫の一一は正・君臣・親・父子・和・長幼・「紺珠」

【三考】サンカウ　三年每に官吏の賢否、政事の得失を考へしらべる、一一は九年なり。書、舜典「三載考レ績、一一黜二陟幽明一、庶績咸熙」

【三孝】サンカウ　〇三つの孝行の道。禮記「大孝尊レ親、其次弗レ辱、其下能レ養」〇養・喪・祭「紺珠」‖三行。

【三更】サンカウ　夜の十二時、子の刻、一夜を五更に分ちし其の第三の時刻。杜甫詩「江月去人只數尺、風燈照レ夜欲二一一一」‖丙夜・三鼓。

【三度】サンタビ　三伏（三伏項二四）を見よ。

【三綱】サンカウ　〇君臣・父子・夫婦なり。禮記「君爲二臣之綱一、父爲二子之綱一、夫爲二婦之綱一」又、白虎通一一六紀にも出づ。〇佛　上臺・寺主・都維那ツナの三倍役、又、僧正・僧都・律師。

【三倍】サンバイ　周の武王、禹・夏・殷の後を封じて一一と爲す、倍は敬、王者が先世を敬する義。左、襄二五「備二一一一」

【三學】サンガク　〇國　戒學・定學・慧學、之を三藏に配すれば、戒學は律、定學は經、慧學は論に當る。華嚴疏記「一一之中、以レ戒爲レ首」‖三慧。〇唐の國子學（文武の三品以上の子孫を教ふ）太學（五品以上の子孫を教ふ）四門學（七品以上の子孫及び庶人の俊異なる者を教ふ）

【三覺】サンカク　國　前條を見よ。

【三革五刃】サンカクゴジン　三革は甲・冑・盾、五刃は刀・劍・矛・戟・矢。國語「數大威、定二三革一、隆二五刃一」荀子には隆を豐に作る。

【三角法】サンカクホフ　三角形の邊と角との關係を研究する數學。‖三角術。

【三箇日】サンガニチ　國　陰暦正月の元日・二日・三日。

【三箇津】サンガツ　國　三箇所の名高き船つき場、薩摩の坊津バウ・筑前の博多津・伊勢の阿濃津ツ（一に和泉の堺津）

【三峽】サンケフ　蜀の地、江水山間を經て峽を成す所三あり、巫峽・西陵峽・歸峽（一に夔峽、入蜀記）又、巫山峽・明月峽・廣澤峽（地輿誌）又、巫峽・靈溪峽・歸峽（一に鋼字峯）李白詩「夜發二清溪向二一一一」

【三竿】サンカン　日出でて竹竿三本つなぎたる高さに至る、午前八時頃。南齊書、天文志「日出高一一、朱色赤黃日暈」

【三監】サンカン　〇周代、天子が方伯の國を監督せしむる三人の官。禮、王制「天子使二其大夫一一一一、監二方伯之國一、國三人」〇殷の遺民を治めしむる官、詩、邶鄘衞譜「庶殷頑民皆二封化一日久、未レ可レ以遽二諸侯一、乃分二其地一爲二一一一一、使二管叔・蔡叔・霍叔尹而教レ之」

【三緘】サンカン　緘は封、三重に口を封ずる、言を愼む意。家語、觀周「孔子觀二周廟一、有二金人一焉、一一其口、而銘二其背一曰、古之愼言人也」

【三諫】サンカン　三度いさむる。禮、曲禮「爲二人臣一之禮、不レ顯レ諫、一一而不レ聽則逃レ之、子之事レ親也、一一而不レ聽則號泣而隨レ之」

【三韓】サンカン　〇前漢の初より朝鮮の南部に據りし三國。南史、百濟傳に出づ、即ち馬韓（忠淸・全羅二道）辰韓（慶尙道東北部）弁韓（慶尙道西南部）〇國　前漢の末に起りし百濟・新羅・高麗の總稱。

【三冕】サンベン　三種のかがみ。唐賈、號徵傳「敎畢、帝後臨レ朝歎曰、以レ銅爲レ鑑、可レ正二衣冠一、以レ古爲レ鑑、可レ知二興替一、以レ人爲レ鑑、可レ知二得失一、朕常寶二此一一一、內防二己過一、今魏徵逝、一鑑亡矣」

【三儀】サン　〇天・地・人。太玄經「關二一一一一」〇赤道と冬至と夏至との三線。漢史「設二一一一一以明二度分一」

【三晉】サン　〇國を治むる三つのうつは。管子「先王治國之器三、曰號令也、幣錢也、祿實也」〇國　三種神器の略。

【三犧】牛・羊・豕。左傳「爲六畜五牲三犧以奉五味」注「三犧、祭天地宗廟之犧也」
【三歸】〇異姓の女三人をめとる、齊の管仲、三姓の女をめとり、家を築きて之を處き、家をも三歸と稱す。論、八佾「管氏有三歸」疏「禮、大夫雖有妾媵嫡娶唯一姓、今管仲娶三姓之女、故曰有三歸」〇佛・法・僧の三寶に歸依すること。大藏法數「問受三歸之戒」
【三丘】仙人の居處、三神山に同じ。張衡、思玄賦「問三丘于句芒」＝三山・三島。
【三九之位】三公九卿の位。後漢書——「未見其人、是以災害屢臻、四國未寧」
【三宜休】三つの宜しく休息すべきこと。唐書、卓行傳「司空圖居中條山、作亭觀素室、名亭曰三休、曰量才、一宜休、揣分、二宜休、耄而聵、三宜休」
【三希堂】北京城内月華門の西に在り、清の高宗、王羲之・王獻之・王珣三人の墨蹟を此の堂に珍藏し因りて以て名づく。
【三釁三浴】釁は香を身に塗る、浴は湯あみする、身を清むる義。齊語「比至三釁三浴之」＝三浴三釁。
【三鏡】圖水鏡・大鏡・増鏡の三史書。

【三曲】圖箏・胡弓・三味線の三つのなりもの。「三曲合奏」
【三極】天・地・人の稱。易、繫辭「六爻之動、三極之道也」＝三才。
【三苦】圖苦の緣より生じて受くる苦と、樂破れて受くる苦と、無常の遷流より受くる苦との稱。法華經「我等以三苦故、於生死中受諸熱惱」
【三懼】王者のおそるべき三事。韓詩外傳「明王有三懼、一處尊位而恐不聞其過、得志而恐驕、聞天下之至道而恐不能行」
【三驅】先王田獵の制、合圍せざる義。禮、王制「天子不合圍、諸侯不掩羣」易、比卦「九五顯比、王用三驅失前禽」本義「天子不合圍、開一面之網、用三驅也」史、殷紀「湯出見野張網四面祝曰、自天地四方皆入吾網、湯曰、嘻盡之矣、乃去其三面、祝曰、欲左左、欲右右、不用命、乃入吾網、諸侯聞之曰、湯德至矣、及禽獸」
【三宮】〇圖皇后宮・皇太后宮・太皇太后宮。＝三后。〇伊勢の内宮・外宮・伊雜宮。
【三軍】〇周の制、大諸侯の出す兵數、一軍は一萬二千五百人。〇轉じて、大軍の義とす。論、述而「子行三軍則誰與」
【三軍可奪帥也、匹夫不可奪志也】孔子の語、（論、子罕）三軍の衆は、其の勢盛んなりと雖も、其の勇は人に在りて己にあらず、故に其の將帥を奪ふべし、匹夫は力孤なれども、心に守る所ろ堅ければ、死すと雖も、志は得て奪ふべからず、守るところ我に在りて、人の與かる所ろなきを以てなり、されば人は志を立つること堅固ならざるべからずと。
【三薰三沐】香を以て身を薰し、湯にて髮を洗ひ身を清める。范琛賦「三沐而三薰兮、擧什襲以珍藏」＝三釁三沐。
【三寡】養生の法は思慮・嗜欲・言語をすくなくするに在り。養生雜訣「養生三寡、寡思慮以養神、寡嗜欲以養精、寡言語以養氣」
【三槐】三公の義。次條を見よ。宋史、王旦傳「父祐、尚書兵部侍郎、以文章顯於漢周之際、世多稱其陰德、祐手植三槐於庭曰、吾之後世必有爲三公者、此其所以志也」蘇軾に三槐堂記あり。
【三槐九棘】三公九卿をいふ、周代の制、朝廷に三本の槐を植ゑ、三公が之に面して坐し、又左右に各九本の棘を植ゑ、右に孤・卿・大夫、左に公・侯・伯・子・男が坐して訟を聽くが故。後漢書、賈紹傳「紹上書乞下臣章、咨之羣賢、使三槐議臣罪戾」
【三魁】殿試に及第せし第一席（狀元）第二席（榜眼）第三席（探花）の稱。
【三回忌】圖人死して滿二年目の忌日（大祥）＝三周忌。
【三光】日・月・星。白虎通「天有三光、日・月・星、地有三形、高・下・平、人有三尊、君・父・師」
【三光鳥】〇圖深山に棲む鳥の名、其の啼聲月日星（三光）といふが如し、形モズに似て頭白し。＝山鵲。〇まめまはし（鳥名）の別名。
【三皇五帝】伏犧・神農・黃帝を三皇、少昊・顓頊・高辛・唐・虞を五帝とす（尙書、序）包犧氏・女媧氏・神農氏を三皇、黃帝・顓頊・帝嚳・唐堯・虞舜を五帝とす（史記）
【三瓦戒】屋を葺くに瓦三枚を缺くは盈滿を戒むるなり。史、龜策傳「物安可全乎、天尙不全、故世爲屋、不成三瓦而陳之」注「爲屋欠三瓦而陳之、陳猶居也」
【三花馬】馬のたてがみを切りあみて飾とするをいふ。名畫要錄「開元天寶間、多愛三花飾馬、三花者翦鬃爲三辮、白樂天詩云、鮮衣栽四蓁、馬鬣翦三花是也」
【三浣】一月を三分し、上の十日を上浣、中の十日を中浣、下の十日を下浣とす、唐の制、官吏に每十日に休沐を賜ひしより、轉じて旬

の義とす、説は洗ひそそぐ義、幹に同じ〔類書纂要〕＝三幹・三旬。

【三幹】サンカン 前條に同じ。

【三管】サンカン 笙・笛・篳篥。

【三管領】サンカンレイ 図室町氏の管領職なる斯波・畠山・細川。

【三桓】サンカン 春秋の世、魯の三卿、孟孫・叔孫・季孫をいふ、皆桓公に出づ、故にいふ。論、季氏「故夫ー之子孫微矣」

【三關】サンカン 図近江の逢阪・美濃の不破・越前の愛發ヲ關、一に愛發關を除きて伊勢の鈴鹿關を加ふ。

【三願】サンガン 三つのねがひ。慣蒙、山樓志「一願レ譲二盡世間好人一、二願レ讀二盡世間好書一、三願レ看二盡世間好山水一」

【三過門閭考病死、一彈指頃去來今】サンクワモンカンカウビョウシイチダンシケイキョライコン 蘇軾の詩の句、下に「存亡慣レ見渾無レ淚、鄉井雖レ忘尚有レ心」とあり。注「佛爲二太子一遊二諸城門一、見二生老病死一、遂出家」

【三計】サンケイ 一年十年終身の三つのはかりごと。管子「一年之計莫レ如レ樹レ穀、十年之計莫レ如レ樹レ木、終身之計莫レ如レ樹レ人」四計參看。

【三卿】サンケイ ○周代、諸侯所屬の三つの官、司徒・司馬・司空の稱。○漢、王朝「大國ー皆命二子天子一」○図サンケイ 徳川氏の別家たる田安・一橋・清水の三家。

【三經】サンケイ 易經・詩經・春秋〔漢書、五行志〕書經・詩經・周禮〔綱珠〕

【三徑就レ荒】サンケイアレテヲサム 三徑は隱者などの庭園、就荒はあれる義。歸去來辭「ー、松菊猶存」三徑は三輔決錄「蔣詡字元卿、舍中開二三徑一、唯羊仲・求仲從レ之遊、皆逃レ名不レ出」に本づく。

【三教】サンケウ ○儒教・佛教・道教。文中子、問易、注「儒・老・釋」○図小乘教・大乘漢教・大乘深教。○図神道・儒教・佛教、又近時は神道・佛教・基督教をもいふ。

【三解脫】サンゲダツ 図三種の解脫、即ち空・無想・無願。

【三傑】サンケツ ○三人のすぐれたる人、漢の高祖の臣張良・蕭何・韓信「史、高祖紀」○後漢の光武帝の臣、鄧禹・馮異・馬援。○三國の諸葛亮・關羽・張飛〔紺珠〕○唐の玄宗帝の臣、宋璟・張說・源乾曜〔唐鑑、宋璟傳〕

【三元】サンゲン ○正月元日の稱、年・月・日の三つの始といふ義、元は始なり。玉燭寶典「正月爲二端月一、其一日爲二上日一、亦曰二三元一、歲之元、時之元、月之元也」＝三始・三朝。○上元（一月十五日）中元（七月十五日）下元（十月十五日）の總稱。○天と地と人との稱。＝三才。○進士に及第せし第一・第二・第三席の三人。李東陽詩「本朝科甲重二ー一」

【三絃】サンゲン ○三すぢの絲を張りたる樂器。舊唐書、音樂志「江左諸曲、從容緩雅、樂用二琴一、ー一琴一、箏琴一」○図三味線の稱。

【三愆】サンケン 三つのあやまち。論、季氏「孔子曰、侍二於君子一有二ー一「言未レ及レ之而言、謂二之躁一、言及レ之而不レ言、謂二之隱一、未レ見二顏色一而言、謂二之瞽一」

【三權】サンケン 國家の權力を立法權・司法權・行政權に分つ稱。

【三五】サン ○三と五とを乘じたる數、十五夜をいふ。古詩「ー一明月滿」謝靈運詩「昨ー一分既滿、今二八分將レ缺」○物の飾蔽ヲなる形容。詩、召南「維彼小星、ー一在レ東」疇は微なる貌。

【三五七言】サンゴシチゴン 三言と五言と七言とにて成る詩、李白の創めし詩體。李白詩「秋風清、秋月明、落葉聚還散、寒鴉栖復驚、相思相見知何日、此日此夜難レ寫レ情」の類。

【三五月】サンゴツ 十五夜の月、特に陰曆八月十五夜の月をいふ。劉孝綽詩「明明ー一、乘レ影當二高樹一」

【三五之隆】サンゴノリュウ 三皇五帝の隆盛なる御世〔漢書、郊祀志〕

【三五夜中新月色】サンゴヤチュウシンゲツノイロ 陰曆八月十五夜の鮮かなる月色。白居易、八月十五日夜、禁中獨直對レ月憶二元九一詩「銀臺金闕夕沈沈、獨宿相思在二翰林一、ー一、二千里外故人心、渚宮東面烟波冷、浴殿西頭鐘漏深、猶恐清光不二同見一、江陵卑濕足二秋陰一」

【三奏】サンソウ 昊の地を吳郡・吳興・會稽の三つに分てる稱〔水經注〕

【三孤】サンコ 周の制にて、三公の副官、少師・少傅・少保〔書、周官〕＝三少。

【三鼓】サンコ ○太鼓・鼓ッ鼓。○夜の十二時。程鉅夫詩「燭徹二宮蓮一ー一後、鼓傳二仙掌一九秋初」＝三更。○兵を進める爲めに三たび鉦をうつ〔左、莊十〕

【三鉦】サンショウ 鉦は天竺の兵器、今、眞言宗にて、佛具に用ふ、煩惱を破る義、銅にて作り、兩端一尖なるを獨鈷、三尖なるを三鈷、五尖なるを五鈷といふ。＝金剛杵。

【三須】サンシュ 海中にある三神山、蓬萊・方丈・瀛州の三島山、形壺に似たり故に壺といふ。搜神記「ー一者、海中三山也、一曰二方壺一、二曰二蓬壺一、三曰二瀛壺一、山形似レ壺、故曰レ壺也」

【三顧】サンコ 劉漢の劉備が諸葛孔明の草廬を三度まで訪ひたる故事。諸葛亮、前出師表「臣本布衣、躬耕於南陽、先帝不レ以二臣卑鄙一、猥自枉屈、ー一臣於草廬之中一」

【三公】サンコウ ○天子を輔けて天下を治むる最も高き官、周には、太師・太傅・太保。○漢、周官、立二太師・太傅・太保一、茲惟ー一、論二道經一邦、變二理陰陽一」○漢には、大司徒・大司馬・大司空。後漢には、太尉・司徒・司空。○図太政大臣・左大臣・右大臣。

【三后】サンコウ 國皇后・皇太后・太皇太后。
‖三宮。

【三江】サンコウ 江蘇省の大湖より流出する松江・婁江・東江（吳地記）又、禹貢釋文には、吳松江・錢唐江・浦陽江」

【三國】コクサン 〇後漢の末、魏・吳・蜀の三國鼎立せし際、後、魏に司馬氏起り、蜀を降し、魏を簒ひ、吳を滅し天下を一統す。〇國天竺・唐土・日本。「——傳來」

【三國志】サンゴクシ 六十五卷、晉の陳壽撰す、魏・蜀・吳三國の歷史、宋の裴松之の註、引據博洽、其の文、本文に數倍す。

【三國通覽】サンゴクツウラン 國一卷、林子平著す、朝鮮・蝦夷・琉球の風俗・土產・地理等を記す。

【三業】ゴウ 〇佛身・口・意の作用により てなせる業因（淨住子）〇貪慾・嗔恚・愚癡の三つの罪業。

【三叉】サン 三つに分れる所、みつまた。蘇軾詩「漢逸古路——口、獨立斜陽一數過人」

【三才】サイ 天・地・人。易、繫辭「有二天道一焉、有二人道一焉、有二地道一焉、兼二三才一而兩之、故六」‖三極。

【三才圖會】サンサイズエ 一百六卷、明の王圻撰す、天文・地理・人物等を說くに皆圖を以てす、我國の寺島倘順之に據りて和漢三才圖會を撰す。

【三災】サイ 佛 大・水・風の三つのわざはひ。長岡含輝「——上際、若火災、若水災、若風災」

【三神】サンシン 國麻・藍・紅花。

【三藏】サンゾウ 佛經藏・律藏・論藏（釋氏要覽）又三藏に通ぜる高僧。

【三山】サンザン 〇三神山に同じ（拾遺記）〇楊子江に近き三つの山。李白詩「——半落青天外、二水中分白鷺洲」

【三三九度】サンサンクド 國婚禮の盃事、夫婦が互に三度づつ盃をやりとりするが故。

【三三五五】サンサンゴゴ 三人五人と散亂する貌。李白詩「岸上誰家遊冶郎、——映二垂楊一」

【三子】サンシ 〇老子・莊子・列子の稱。文子を加へて四子ともいふ。〇孟子・荀子・揚子（緡珠）

【三史】サンシ 〇史記・漢書・後漢書（緡珠）〇戰國策・史記・漢書・後漢書、郡國志（錄二中興以來郡縣改異及春秋——會同征伐地名一以爲二郡國志一）

【三司】サンシ 三公に同じ。後漢書、順帝紀、注「——、三公也、卽太尉・司空・司徒也」

【三始】サンシ 正月元旦、歲月日の始。漢書、鮑宣傳「今日蝕於——、誠可二畏懼一」‖三元・三朝。

【三事】サンジ 〇三公をいふ。詩、小雅「——大夫、莫二肯夙夜一」〇若・父・師。國語「民生二于三一、事レ之如レ一、父生レ之、師教レ之、君食レ之」〇三農卽ち高原・低濕・平地に於ける農事。詩、大雅、常武「不レ聞不レ成、——就レ緒」〇國を治むるに必要なる三ケ條。賞、大禹謨、注「——正德・利用・厚生惟和」〇仕宦する者の三つの心得。呂氏春秋訓「當レ官之法、惟有二一曰淸、曰愼、曰勤」〇佛衣・食・住。明の李攀龍、——週其一卷あり。

【三思】サンシ 事を思案することの度に過ぐる義。論、公冶長「季文子——而後行、子聞レ之曰、再斯可矣」

【三時】サンジ 三つの農事に大切なる時、春耕し、夏耘り、秋收む。左傳「——不レ害、而民和年豐」

【三徙】サンシ 三たび居を遷す。三遷參看。

【三宗】サンシュウ 佛華嚴・法相・三論。

【三秋】サンシュウ 〇秋季の三ケ月。王褒詩「律改——節」〇九ケ月。詩、王風「一日不レ見、如二——一兮」‖三季。〇三ケ年、三度の秋。

【三聚淨戒】サンジュジョウカイ 佛卽ち大乘菩薩戒なり、一、攝律儀戒（一切の惡を離れて心を放逸せざる戒）二、攝善法戒（諸善を積み萬行を修する戒）三、攝衆生戒（一に饒益有情戒ともいふ）大慈大悲を起して一切衆生を利益する戒）（心地觀經）

【三家渡レ河】サンカワタル 佛已灰を誤りて三家と讀みし故事、文字を誤讀するにいふ。次條參看。

【三家金根】サンシンキンコン 文字を誤るにいふ。家語「卜商反レ魯、見下讀二史記一者上云晉師伐レ秦、三豕渡レ河、子夏曰、非也、己亥耳、問二之果使一果曰、己亥耳、于レ是衛以二子夏一爲レ聖、尙書故實「韓退之子昶聞劣、爲二柳璟校理一、史傳有二金根車一、韓昶以爲レ誤、改レ根爲レ銀」

【三字經】サンジキョウ 一卷、撰者詳かならず、村塾の課本、每句三字にて韻を押す。人之始、性本善、性相近、習相遠」の類。

【三旨相公】サンシソウコウ 宰相と爲りて獻替する所ろなきにいふ。宋史、王珪傳「自二執政一至二宰相一凡十六年、無レ所二建明一、惟道二聖意一順、當時目爲二——以下其上一殿遣皇云取二聖旨一、上可否訖、云レ領二聖旨一、退論二衆事一者二云已得二聖旨一也」

【三七】サンシチ 廣東人參の類、血止メ藥とす。

【三七日】ミナヌカ 〇國人の死後二十一日目、みなぬか。〇出產後二十一日目、まくらなにし。

【三尸蟲】サンシチュウ 道家の說に人の腹中に三尸蟲卽ち上尸（淸蛆）中尸（白蛆）下尸（血蛆）の三蟲あり、人の陰事を天帝に讒すといふ。柳宗元、罵二尸蟲一文序「有二道士一言、人皆有二尸蟲三、蟲二腹中一、伺二人隱微失誤一、輒錄記、日庚申幸二其人之昏曜一、出讒二于帝一、以求レ殛、以レ是人多讒過、

賊嶽天死」＝三蟲（黄庭内景經）

【三日哭】サンジツコクス 廟の燒けたる時、三日間泣く禮。禮記「有レ焚二其先人之室一、——」

【三日不レ讀レ書、語言無レ味】サンジツフヨマザレバゴンゴアヂハヒナシ 僅に三日間にても讀書せざれば心も卑しくなりて言語も面白味なし。世說、言語「黄太史云、士大夫三日不レ讀レ書、則理義不レ交二於胸中一、便覺二面貌可レ憎語言無一レ味」○晉書、殷仲堪傳「能二清言一、善屬レ文、毎云、三日不レ讀二道德經一、便覺二舌本閒強一」

【三十輻共二一轂一】サンジツプクイツコクヲトモニス 三十の車の輻ヤが共に一の轂コシに集る、而して其の轂の中心は空なり、この空なる中心ありて車の用を爲す人君は常に虚無無爲を貴ぶに喩ふの老子「——當二其無一、有二車之用一」

【三十二相】サンジフニサウ 佛身に三十二の妙相を備ふる義。一、足安平相、二、千輻輪相、三、手指纖長相、四、手足柔輭相、五、手足縵網相、六、足跟滿足相、七、足趺高好相、八、腨如二鹿王一相、九、手過膝相、十、馬陰藏相、十一、身縱廣相、十二、毛孔生青色相、十三、身毛上靡相、十四、身金色相、十五、身光面各一丈相、十六、皮膚細滑相、十七、七處平滿相、十八兩腋滿相、十九、身如師子相、二十、身端直相、二十一、肩圓滿相、二十二、四十齒相、二十三、齒白齊密相、二十四、四牙白淨相、二十五、頰車如師子相、二十六、咽中津液得上味相、二十七、廣長舌相、二十八、梵音深遠相、二十九、眼色如金精相、三十、眼睫如牛王相、三十一、眉間白毫相、三十二、頂肉髻成相（大般若經）

【三十二將】サンジフニシヤウ 三十二人の武將、鄧禹・馬成・吳漢・王梁・賈復・陳俊・耿弇・杜茂・寇恂・傅俊・岑彭・堅鐔・馮異・王霸・朱祐・任光・祭遵・李忠・景丹・萬修・蓋延・邳彤・銚期・劉植・耿純・臧宮・馬武・劉隆・王常・李通・竇融・卓茂。事類全書「後漢顯宗追二感前世功臣一、圖二畫二十八將於南宮一、始二鄧禹一終二耿純一、其外又有二王常・李通・竇融・卓茂一、合三十二人、惟馬援以二椒房一故獨不レ及」

【三十有レ室】サンジフニシテシツアリ 室は妻なり、男子三十歲にして妻ある義。禮、曲禮「三十曰レ壯、有レ室」

【三十而立】サンジフニシテタツ 論、爲政、疏「——者有レ所二成立一也」＝而立。

【三十六歌仙】サンジフロクカセン 圓 一條天皇の時、藤原公任が柿本人丸・山邊赤人・大伴家持・紀貫之・凡河內躬恒・在原業平・紀友則等、萬葉集より古今・後撰時代に及ぶまでの歌人三十六人の秀歌一首づつを撰び、十八人づつ左右に分ちて配合せしもの。別に中古——・新——・女房——等あり。

【三十六宮】サンジフロクキウ 漢の宮殿の數稱じて、廣く帝王の宮殿にいふ、十二・三十六・七十二などは、必ずしも實數にあらず、多數の義として用ふ。駱賓王詩「漢家離宮三十六」

【三十六計不レ如レ逃】サンジフロクケイニグルニシカズ 夾條を見よ。

【三十六策走爲二上計一】サンジフロクサクハシルヲジヤウケイトナス 戰に臨み、猶豫して時機を失はんよりは、寧ろ走りて後圖を爲すを上策とす。齊書、王敬則傳「敬則曰、檀公——」

【三十六詩仙】サンジフロクシセン 石川丈山、我三十六歌仙に擬して漢より宋に至る詩家三十六人を選み、狩野尚信をして、其の像を詩仙堂の四壁に畫かしむ、詩仙の名は、蘇武・謝靈運・杜審言・李白・王維・高適・儲光羲・韋應物・韓愈・劉禹錫・李賀・杜牧・寒山・林逋・梅堯臣・歐陽修・黄庭堅・陳與義・陶潛・鮑照・陳子昂・杜甫・孟浩然・岑參・王昌齡・劉長卿・柳宗元・白居易・盧仝・李商隱・靈徹・邵雍・蘇軾・陳師道・曾幾・蘇舜欽。

【三十六峯】サンジフロクホウ ○嵩山に三十六の峯あるをいふ。一統志「嵩山——、東曰二太室一、西曰二少室一、相去七十里、嵩其總名也、謂二之室一者、以二其各有二石室一也」○圓京都の東山の雅稱。

【三十六鱗】サンジフロクリン 鯉の異名、鱗に三十六鱗あるによる。夢溪筆談「鯉魚當レ脇、一行——、鱗有二黑文一、如二十字一、故謂二之鯉文一」＝六六鱗。

【三仁】サンジン 殷末の三人の忠臣、微子・箕子・比干。論、微子「微子去レ之、箕子爲二之奴一、比干諫而死、孔子曰、殷有二——一焉」

【三辰】サンシン 日・月・星。左、桓二「——旂旗、昭二其明一也」＝三光。

【三身】サンシン 佛法身（佛の本體）報身（法身の妙智の果報によりて現はれたる衆德圓滿の體）應身（衆生濟度の爲めに現はれたる體）

【三津】サンシン 圓さんがのつ、薩摩の坊の津、筑前の博多、伊勢の阿濃津、一說に阿濃津を除きて堺を加ふ。

【三晉】サンシン 戰國時代の趙・魏・韓の三氏、三氏は晉の卿たりしが、後ち晉の地を分ちて獨立す。戰國策「——已破、智氏將レ分二其地一」

【三神】サンシン 圓三はしらの神。萬物造化の——は、天御中主神・高皇產靈神・神皇產靈神。○和歌の——は住吉・玉津島・人丸。

【三神山】サンシンザン 仙人の住める三つの山。史、封禪書「蓬萊・方丈・瀛洲、此——者、在二勃海中一、蓋嘗有二至者一、諸仙人及不死藥在焉、其物禽獸盡白、而黄金白銀爲二宮闕一、未レ至望レ之如レ雲、及レ到——反居二水下一、臨レ之風輒引レ船而去、終無二能至一」＝三山・三壺。

【三秦】サンシン 秦亡びて項羽、秦の降將三

人を閉中に封す、これを一一といふ。一、雍王章節、二、燕王司馬欣、三、翟王董翳（史、始皇紀）

【三親】サン　夫婦・父子・兄弟（顔氏家訓）

【三社】シャ　國伊勢神宮・石清水八幡宮・春日明神。

【三赦】シャ　國三つのゆるすべきもの。周禮、司刺「壹赦曰二幼弱一再赦曰二老旄一一曰二惷愚一」

【三謝】シャ　晉の謝靈運・謝惠連・謝元暉の稱（逃書賦）

【避二三舍一】サンシャ　古は師（軍隊）行くこと一日に三十里にして舍る、三舍は即ち九十里、避は引き退く義、後世は多く畏れ退く義とす。左、僖二三「楚子謂二重耳一若反二晉國一、則何以報、對曰、晉楚治レ兵、遇二于中原一、其辟二君三舍一」辟は避の古字。

【三舍之法】ハッシャ　宋の神宗の時、初めて學に入る者を外舍と爲す、其の數七百員、外舍より內舍に升す、二百員、內舍より上舍に升す、一百員、各一經を治む、月に其の業を考試し、次を以て舍を升す、上舍の者は發解及び禮部試・召試を免じて第を賜ふ。宋史「政和三年五月乙酉臣僚言、陛下龍二潛士一立二——一」

【三上】サンジョウ　文章を練る三つの場所、即ち、馬上・枕上・廁上をいふ。歐陽修、歸田錄「余平生所レ作文章、多在二——一、乃馬上枕上廁上也、蓋惟此尤可二以屬一思爾一」

【三尊】サンソン　漢の高祖の定めし三ヶ條の法律。史、高祖紀「殺レ人者死、傷レ人及盜、抵レ罪、餘悉除二去秦法一」

【三帝】サンテイ　三つの常に定りて變らざるもの。淮南周書「國有二——一管子「天有二常象一、地有二常形一、人有二常體一、一設而不レ更、此謂二——一」

【三儒】サンジュ　三人の儒者、董仲舒・公孫弘・兒寬（緒珠）

【三從】サンジュウ　婦人の從ふべき三つの道。儀禮、喪服「婦人有二——之義一、無二專用之道一、故未レ嫁從レ父、既嫁從レ夫、夫死從レ子」

【三從兄弟】サンジュウケイテイ　またいとこ。

【三珠樹】サンジュ　一種の珍木の名。山海經「——生二赤水上一、其樹如レ柏、葉皆爲レ珠」轉じて三人のすぐれたる兄弟に喩ふ。唐書、王勃傳「初勃幼物物皆著二才名一、故杜易簡稱二——一」

【三銖錢】サンシュセン　古の錢の名、三銖の重量あり。史、平準書「令下縣官銷二半兩錢一更鑄中——上、文如二其重一」

【三出】サンシュツ　雹の形狀。塡雅「雹形如二半球一、其粒一一、蓋雲六出而成レ華、雹一一而成レ實、此陰陽之辨也」

【三種神器】サンシュノジンキ　國天照大神より瓊瓊杵尊に授けたまひし三つの神寶、天皇の天日嗣を知しめす御璽とす、即ち八咫の鏡と、草薙（初名、叢雲）の劍と、八尺瓊の曲玉と。

【三旬】サンジュン　〇上旬・中旬・下旬の稱。日三浴。〇三十日間。周禮、地官「國中一旬郊二旬、野一一」〇三十年。

【三春】サンシュン　陰曆の正月（孟春）二月（仲春）三月（季春）晉書、摯虞傳「聽二賦政子一一」〇三ヶ年、三度の春。

【三寸之舌】サンズンノシタ　車のくさびは、僅に三寸に過ぎざれども、これなければ車の用をなさず、故に物事の主要なるものに喩ふ。淮南子「車無二——一、不レ可二以驅馳一」

【三寸舌】サンズンタ　舌をいふ。史、酈侯世家「今以二——一爲二帝者師一」

【掉二三寸之舌一】タンズンノ　雄辯をふるふ。史、淮陰侯傳「蒯通謂二韓信一曰、願生一主、伏、軾——下二齊七十餘城一」

【三寸不律】ファンジン　不律は筆の異名、不律の合音はヒツ（筆）なり、三寸は其の長さ。爾雅、注「鈎人呼レ筆爲二不律一也」

【三世】サンセ　〇祖父・父・子。曲禮「毋不二——一不レ服二其業一」〇過去・現在・未來。觀無量壽經「一一諸佛、定業正因」

【三世相】サンゼソウ　國佛說又は陰陽道などの說に本づきて人の生死人相等を說き、過去・現在・未來三世の因果應報を判する法。

【三省】サンセイ　〇幾度も我身をかへりみて、過失なきやうにする。論、學而「曾子曰、吾日二——一吾身一」〇唐の官制、中書省・門下省・尚書省の稱。唐書、百官志「唐因二隋制一、以二——一之長、中書令・侍中（門下）・尚書令、共議二國政一、此宰相之職也」

【三牲】サンセイ　三種のいけにへ、牛・羊・豕。禮、祭統「一一之俎、八簋之實、美物備矣」

【三性之養】サンセイノヤシナヒ　牛・羊・豕の三を備へて手厚く親を養ふ。孝經、紀孝行「雖二日用三一一、猶爲二不孝一也」

【三星】サンセイ　二十八宿中の東方七宿に屬する心星の一名。詩、唐風「一一在レ天」

【三聖】サンセイ　〇伏羲・文王・孔子、また禹・周公・孔子、また堯・舜・禹、また文王・武王・周公（緒珠）〇孔子・老子・釋迦。齊東野語「理宗朝、有二詔馬遠一畫二三教圖一（俗に三聖圖といふ）（中略）江子遠贊レ之曰、釋氏鉄塑、老鶴傍睡、惟吾夫子、絶倒在レ地」

【三精】サンセイ　日・月・星の稱（後漢書、注）＝三光・三辰。

【三齊】サンセイ　齊を齊・濟北・膠東の三つに分てる稱。戰國策「蘇代遺二燕昭王書一曰、今乃以二一一一國一燕、其觸必大矣」〇また三齊記、即歷（右）臨淄（中）平陸（左）」

【三少】サンショウ　三孤に同じ。

【三笑】サンショウ　晉の慧遠法師、廬山に在り、陶元亮・陸修靜二人を送り、與に語りて道合し、覺えず虎溪を過

き、虎の鳴くを聞きて心づき、因りて大笑せし故事。廬山記「慧遠法師送レ客過二虎溪一、虎輒鳴、送二陶元亮・陸修靜一與語、道合、不レ覺逾過二虎溪一、因大笑、世傳二一一圖一」

【三焦】漢方にて六腑の一。上中下に分れ、上焦は心臓の下に在り、中焦は胃の中脘に在り、下焦は膀胱の上口に在りて、排泄をつかさどるといふ。（難經）

【三夕】圖秋の夕をよめる三つの秀歌。藤原定家の「見渡せば花も紅葉もなかりけり、浦の苫屋の秋の夕暮」西行法師の「心なき身にもあはれは知られけり、鴫立澤の秋の夕暮」寂蓮法師の「さびしさはその色としもなかりけり、槇立山の秋の夕暮」

【三尺】○法律をいふ。古は一一の竹簡に法律を書せしが故。史、酷吏傳「杜周爲二廷尉一、客有レ讓レ周、曰、君爲二天子一決レ平、不レ循二一一法一、專以二人主意指一爲レ獄、獄者固如レ是乎」○劍をいふ。漢書、高帝紀「吾以二布衣一提二一一一取二天下一」史記には三尺の下に劍の字あり。

【三尺之劍】劍をいふ。三尺は其の長さ。戰國策「奮二一一一一」

【三尺秋水】劍をいふ。秋水は色に喩ふ。越絕書「太阿劍其色如二秋水一」太阿は古の名劍の名。

【三尺童子】五六歳のわらべ。胡銓、上二高宗一封事「夫一一至無知也、指二犬豕一而使二之拜一、則怫然怒」孟、公孫丑上「雖レ使二五尺之童適一レ市、莫二之或欺一」

【三蹟】圖古の三能書家、蹟は筆跡。小野道風・藤原佐理・藤原行成。

【三絕】○三種の藝の特にすぐれたる稱。唐書、鄭虔傳「大二署其尾一曰二鄭虔一一一」詩・書・畫の優秀なるをいふ。○三首の絕句。

【三川】○河南郡の異稱。河・洛・伊の三川あるが故。史、始皇紀「滅二二周一置二一一郡一」○涇・渭・洛の稱。（紺珠）

【三遷】周の孟軻の母が軻を敎育せし故事、初め其の舍、墓地に近し、軻少くして遊を好み、墓間の事をなす、母乃ち市の傍に遷る、軻嬉戲するに乃ち賈人衒賣のまねす、また學宮の傍に徙る、其の嬉戲するや、乃ち俎豆を設け、揖讓進退す、母曰く、此れ眞に吾が子を處くべしと、遂に居る（列女傳）趙岐、孟子題詞「孟子生有二淑質一、幼被二慈母一一一之敎一」＝三徙。

【三戰三走】三たび戰ひて三たびにげる。史、管仲傳「吾嘗一一一一、鮑叔不二以爲一レ怯、知三我有二老母一也」＝三戰三北。

【三千大千世界】圖廣大無邊なる世界の稱。一千國土を小千世界と名づけ、小千世界千を積みて中千世界と名づけ、中千世界千を積みて大千世界と名づく、三たび千を積むが故に三千大千世界と名づく。釋氏要覽「此山（須彌山）有二八山一遶レ外、有二大鐵圍山一周迴圍繞、并一日月晝夜回轉、照二四天下一、名二一國土一、積二一千國土一、名二小千世界一、積二千箇小界一、名二中千世界一、積二一千中千世界一、名二大千世界一、以二三積一レ千、故名二三千大千世界一」＝三千世界。

【三尖瓣】心臓の右心耳と左心室との間にありて三片より成る瓣。心耳・心室の開閉を司る。

【三楚】楚を西楚（淮北郡・陳・汝南郡）東楚（彭城以東、東海・吳・廣陵）南楚（衡山・九江・江南・豫章・長沙）の三つに分てる稱（史、貨殖傳）

【三蘇】宋の蘇洵（老泉）と其の子軾（東坡）蘇轍（穎濱）と。冢書拾唾「眉山人時語云、眉山生二一一一、蜀中草木枯」

【三蘇熟喫二羊肉一】宋の時、三蘇の文章大いに行はる、故に其の文を熟讀すれば、試驗に及第し、羊肉を喫し得る身分となるをいふ。老學庵筆記には三蘇を蘇文に作る。

【三層樓】三階建のたかどの。洛陽伽藍記「大夏門嘗造二一一一一、去レ地二十丈一」

【三族】三つの親族、父母・兄弟・妻子（史、秦紀、注）父族・母族・妻族（漢書注）父・子・孫（周禮、小宗伯、注）父の昆弟・己の昆弟・子の昆弟（儀禮、注）

【三族之罪】三族を連坐せしむる罪。史、秦紀「初有二一一一一一」

【三屬】○三族に同じ。○甲札三屬の數。漢書、刑法志「魏氏之武卒、衣二一一之甲一」

【三足烏】三本足のからす。漢書、武帝紀「南陽獻二一一一一」

【三尊】○圖阿彌陀如來と、觀音・勢至の二菩薩と。普遷生經「供二養一一一」○君・父・師をいふ。三光を見よ。

【三損友】己に損ある三種の友。論、季氏「友二便辟一、友二善柔一、友二便佞一、損矣」三益友（二四○四頁）參看。

【三多】文章を學ぶに三つの多きを要する義。後山詩話「歐陽永叔謂、爲レ文有二一一一、看多・做多・商量多」看多は多く讀む、做多は多く作る、商量多は多く工夫する。

【三代】夏・殷・周、史記に一一世表あり。

【三代格式】圖書名、弘仁格式・貞觀格式・延喜格式の稱。

【三代實錄】圖六國史の一、菅原道眞等勅を奉じて撰す、天安二年八月より仁和三年八月までの史事を記す。

【三代集】圖古今和歌集・後撰和

歌集・拾遺和歌集・後三代和歌集。

【三台】サンダイ 星の名。一名天柱。上台星は太尉に、中台星は司徒に、下台星は司空に當て三公の義とす。晉書、天文志「一一六星」また「一曰二天柱一三公之位也、在レ人曰二三公一、在レ天曰二一一一」‖三能サンノウ

【三公】サンコウ 尚書（中臺）御史（憲臺）諸者（外臺）（後漢書、袁紹傳、注）

【三諦】サンタイ 仏 諸法皆空と觀ずる空諦、諸法皆有と觀ずる假諦、空にあらず有にあらずと觀ずる中諦の三をいふ。三者は一にして三、三にして一、之を一一即是といふ（大藏法數）

【三體】サンタイ 〇書の三體、眞・行・草の稱（唐書、柳公權傳）〇古文・秦篆・漢隷（紺珠）

【三體詩】サンタイシ 次條を見よ。

【三體唐詩】サンタイトウシ 六卷、俗に三體詩と稱す、宋の周弼撰す、唐詩の七言絕句・七言律・五言律を選解す。

【三大節】サンダイセツ 図 三つの大いなる祝祭日、一月三日の元始祭（神器及び歴代の皇靈をまつる）二月十一日の紀元節（天長節（今上御誕辰の祝）

【三到】サンタウ 讀書に必要の三事、眼到ると口到ると心到るとをいふ、到とは專一の義、朱子の語。訓學齋規「余謂、讀書有二一一一、心到眼到口到、一一之中、心到最急」

【三島】サンタウ 仙人の住むといふ三つの海島。神仙傳「海上有二三神山一、曰蓬萊、曰方丈、曰瀛洲、謂二之一一一一、三神山を見よ。‖三壺。

【三刀之夢】サンタウノユメ 三刀は州の字の隱語、王濬の故事に因りて官吏の榮轉するにいふ。晉の王濬夜夢みる、三刀を臥屋の梁上に懸け、須臾にして又一刀を益すと、驚き覺めて意甚だ之を惡む、主簿李毅、賀して曰く、三刀は州の字、又一を益すは明府それ益州に臨まんかと、後益州の刺史を殺すに及び、果して濬を遣して益州の刺史と爲す（晉書、王濬傳）武元衡詩「三刀君入レ蜀、九折我回レ輈」

【三途】サンヅ 朝廷にては僚位を尊び、鄕黨にては齒を尊び、世の中には德を尊ぶをいふ、途は通なり、天下を通じて尊ぶべき義。孟、公孫丑「天下有二達尊三一、爵一、齒一、德一」

【三德】サントク 智・仁・勇。中庸「智仁勇三者、天下之達德也」

【三端】サンタン 進端・發端・香端、君子の宜しく遵くべきもの。韓詩外傳「君子宜レ遵二一一一、文士之進端、武士之鋒端、說士之舌端」

【三段論法】サンダンロンパフ 三つの命題即ち第一前提・第二前提より第三の斷案を引き出す論理の方式。

【三長】サンチャウ 歴史家の備ふべき三つの長所、才智と、學問と、識見と。唐書、劉知幾傳「禮部尚書鄭惟忠嘗問、自古文士多、史才少何耶、對曰、史有二一一一、才學識、世罕兼レ之、故史者少」

【三魂】サンコン 人の腹中にありといふ三種の魂。三尸蟲（二八庚申條）を見よ。

【三徹七辟】サンテツシチヘキ たびたび召し出さるる義、徹は天子の御召、辟は州郡の召。晉書、王裒傳「裒痛二父非一命一、隱居敎授、——皆不レ就」

【三途】サンヅ 仏 三惡道、即ち火途（地獄）血途（畜生）刀途（餓鬼）をいふ。祖庭事苑「四解脫經以二一一一對二三毒一（中略）途道也、謂二惡道一也」‖三塗。

【三途川】サンヅガハ 仏 人死して初七日、關歳の關に至る途中に在る川の名、川に三つの瀨あり、緩急を異にす、生前作業の善惡によりて、渡る所を分つ、川の岸に二鬼あり、懸衣翁、奪衣婆といふ、亡者の著衣を奪ひて樹に懸くといふ。

【三塗】サンヅ 三途を見よ。

【三通】サンツウ 制度に關する三種の書、通典二百卷（唐、杜佑撰）通志二百卷（宋、鄭樵撰）通考三百四十八卷（元、馬端臨撰）三書皆續篇あり。

【三兆】サンテウ 三つの卜形、龜頭の玉兆・魏帝の瓦兆・周の原兆。周禮「掌二一一之法一」

【三島】サンタウ 図 古今集中の祕傳とせる三種の鳥、呼子鳥・稻負鳥・都鳥。

【三朝】サンテウ 正月元日をいふ、歲と月と日との朝の意。漢書、孔光傳「歲之朝曰二一一一」‖三元・三始。

【三天】サンテン 仏 障利支天バリシテン・大黑天ダイコクテン・辨財天ベンザイテン

【三傳】サンデン 春秋の三種の傳、左氏傳・公羊傳・穀梁傳をいふ。文中子「一一傳、春秋敝」

【三吐】サント 人君たる者の人に接見するに力むるをいふ。史、魯世家「周公戒二伯禽一曰、我於二天下一、亦不レ賤矣、然我一沐三捉レ髮、一飯一一哺、起以待レ士」

【三都】サント 〇紺珠「京兆（西都）河南（東都）太原（北都）」〇晉にては晉（李氏）鄧（叔孫氏）成（孟氏）〇宋にては開封・鄧德・河南。〇図 東京・京都・大阪の‖三府。

【三都賦】サントフ 晉の左思の魏都賦・呉都賦・蜀都賦。文選の賦類に出づ。

【三冬】サントウ 冬の三ヶ月。孟冬（陰暦十月）仲冬（十一月）季冬（十二月）の稱。

【三冬文史】サントウノブンシ 貧者は冬の三ヶ月の農事の暇に讀書する語。漢書、東方朔傳「上書曰、臣朔少失二父母一、長養二兄嫂一、年十二學レ書、一一足レ用」

【三偸】サンタウ 詩の一一、語を偸み、意を偸み、歩を偸む（詩苑類抄）

【三等親】サントウシン 第三等に當る親族、曾祖父・曾祖母・伯姉・叔姉・夫の甥・

従父兄弟姉妹・夫の祖父・夫の祖母・夫の伯叔姑・従父・甥の妻。

【三統暦】サンントウレキ 夏・殷・周三代王者の作りし暦に本づきて前漢の孝成帝の時、劉歆の作りたるこよみ〔宋書、暦志序〕

【三毒】サンドク 仏 貪欲・瞋恚・愚癡。定慧を害するが故に毒という。〔六祖壇経〕「六欲不レ生、一一消滅」大乗法数「能者毒害也、謂貪瞋癡皆能破二壊出世善心一、故名レ毒也」‖三垢ともいう。

【三徳】サンドク 〇正直・剛克・柔克の称。克は治なり、剛克は剛を以て柔を治むるなり〔書、洪範〕〇知・仁・勇。‖三達徳。〇天・地・人の徳〔大戴礼、大代〕〇仏 法身(仏の悟りの本体)般若サンニャ(智を出でたる仏の妙智)解脱ゲダ(自在無礙の妙徳)をいう。

【三斗廉】サンタンレン 多くの廉。三斗は多量の義。唐書、権徳輿伝「擢二寓年令、賞劉明、見レ悪輒取、時語曰、寧食二一無レ逢二権懐恩一」北史、崔弘度伝「飲二三斗酪一無レ逢二崔弘度一」

【三人一龍】サンニンイチリョウ 三人の親友に喩ふ。世説「管寧字幼安・華歆・邴原倶遊学、三人相善、故時人号為二三龍一、謂レ寧為二龍頭一、原為二龍腹一、歆為二龍尾一」

【三人行必有二我師一】サンニンコウカナラズワレアリ 三人同じく事を行ふ、其の一人は我なり、他の善を見て之に従ひ、他の悪を見て自ら改む、故に皆我師なりといふ。論、述而「子曰、——択二其善者一而従レ之、其不善者而改レ之」

【三人証レ亀作レ龍】サンニンコウレヲショウシテリュウトナス 仏 定相なきことをいふ〔傳燈録〕

【三人成二市虎一】サンニンイチコヲナス 無根の事も説く者衆ければ、人之を信じて実となす義。戦国策「龐葱謂二魏王一曰、今一人言二市有一レ虎、王信之乎、王曰、否、二人言二市有一レ虎、王信之乎、王曰、寡人疑レ之矣、三人言二市有一レ虎、王信レ之乎、王曰、寡人信レ之矣、龐葱曰、夫市無レ虎明矣、然而三人言而成レ虎」

【三年通二一経一】サンネンツウイツキョウ 三年の間勉めて一部の経書に通ず。漢賈誼・鼂文志「古之学者耕且養、三年而通二一芸一、存二其大体一、玩二経文一而已、是故用レ日少而蓄レ徳多、三十而五経立也」法言に学を経に作る。

【三年不レ窺レ園】サンネンイエヲノゾカズ 一室に閉居して苦学するにいふ、漢の董仲舒の故事。漢書、董仲舒伝「仲舒少治二春秋一、孝景為二博士一、下二帷講誦一、蓋——、其精如レ此」

【三年耕必有二一年之食一】サンネンタガヤスニカナラズイチネンノクイアリ 三年耕作に勤むるときは一年間の食料を蓄ふることを得ん。礼、王制「国無二九年之蓄一曰二不足一、無二六年之蓄一曰レ急、無二三年之蓄一曰レ国非二其国一也、——、九年耕、必有二三年之食一」

【三年無レ改二於父之道一可レ謂レ孝矣】サンネンアラタムルナキヲチチノミチニオイテコウトイウベシ 孔子の語、父の生前、行ひたる事を久しき間改めざるは、父を死せりとするに忍びざる至情に由ることなれば孝といふべし〔論、学而〕

【三年不レ飛】サンネントバズ 有為の志をいだきて、久しく何事も為さざるに喩ふ〔史、滑稽傳〕一鳴驚レ人ヒトヲオドロカスヲマツ

【三年有レ成】サンネンニシテナルアリ 我を用ひて国を治めしむる者あらば、三年にして治功を成就せんとの義。論、子路「子曰、苟有二用レ我者一、期月而已可矣、——」期月は一年。

【三年之喪】サンネンノモ 父母の喪。礼、三年問「孔子曰、子生三年、然後免二於父母之懐一、夫——、天下之通喪也」三年之喪は、二十五ヶ月にて畢る。

【三農】サンノウ 〇平地と山と澤との農。周礼「一生二九穀一」〇春耕・夏耘・秋收をいふ。楊士奇、甘露歌「百穀登場、一一挙レ勝」

【三巴】サンパ 巴郡・巴東・巴西。三巴記「閬苑白水東南流、曲折三廻如二巴字一、故名二一一一一」

【三杯】サンパイ 杯は碗・盃に同じく実至、対酒曲「一酌千愁軟、一一真事空」

【三蛋酔】サンタンスイ 饂飩(或は麺)と醤油と酢とを各一盃、即ち当分に盛りたるもの。

【三忘】サンボウ 騎士たるべき者の忘るべき三事。史記「受レ命之日則忘二其家一、臨レ軍約束則忘二其親一、援レ枹鼓レ之急則忘二其身一」

【三寶】サンポウ 〇仏 仏・法・僧。観無量寿経「発二菩提心一、奉二事師長一」〇耳・目・口。参同契「耳目口一一、閉塞勿二発通一」〇蘇と倹と、天下の先とならざると。老子「我有二一一一一、一曰慈、二曰倹、三曰不レ敢為二天下先一」〇大農・大工・大商。六韜「太公曰、国有二一一一大農・大工・大商、農一其郷則粟足、工一其郷則器足、商一其郷則貨足」〇土地・人民・政事。

【三猿】サンエン 仏 佛法僧の異名、深山に棲む、鳩に似たる鳥。

【三版】サンパン 二丈四尺、一版は八尺。史、趙世家「城不レ及二三版一者一一」

【三碑】サンピ 仏 三つの名高きいしぶみ。陸前多賀城碑・上野多胡碑・下野那須国造碑。

【三筆】サンピツ 仏 書に巧なる三人、嵯峨天皇・橘逸勢ハヤナリ・僧空海。

【三白食】サンピャクショク 仏 僧の食ふ三つの白き食物、乳・酪・飯(十一面呪心経)

【三府】サンプ 仏 東京府・京都府・大阪府。‖三都。

【三賦】サンプ 古の租・庸・調の三税。幕書拾遺「唐——租庸調、有レ田則有レ租、有レ身則有レ庸、租出二米穀一、庸出二綿布一、調有レ戸則有レ調、調出二繒絹布麻一」

【三風十愆】サンプウ 風は風習、愆は罪過。三風は愆の綱、十愆は風の目。書、伊訓「敢有ㇾ恒ㇾ舞ㇾ于宮、酣ㇾ歌ㇾ于室、時謂ㇾ巫風。敢有ㇾ殉ㇾ于貨色、恒ㇾ于遊畋、時謂ㇾ淫風。敢有ㇾ侮ㇾ聖言、逆ㇾ忠直、遠ㇾ耆徳、比ㇾ頑童、時謂ㇾ亂風。惟茲――、卿士有ㇾ一于身、家必喪、邦君有ㇾ一于身、國必亡」十愆は、伝舞・酣歌・殉ㇾ貨・殉ㇾ色・恒遊・恒畋・侮ㇾ聖言、逆ㇾ忠直、遠ㇾ耆徳、比ㇾ頑童となり。

【三不幸】サンフコウ 少年にして高科に登ると、父兄の勢によりて美官となると、高才ありて文章を能くするとをいふ。宋の程頤の語。伊川文集「人有ㇾ――、少年登ㇾ高科、一不幸。席ㇾ父兄之勢ㇾ爲ㇾ美官、二不幸。有ㇾ高才ㇾ能ㇾ文章、三不幸也」

【三不朽】サンキュウ 不朽を見よ。

【三不去】サンフョ 妻を去るまじき三條。大戴礼、本命「有ㇾ一ㇾ――、有ㇾ所ㇾ取無ㇾ所ㇾ歸不ㇾ去、與更ㇾ三年喪ㇾ不ㇾ去、前貧賤、後富貴不ㇾ去」

【三不祥】サンフショウ ㊀國の三つの不吉なること。祥は吉。說苑「婦子曰、國有ㇾ――、夫有ㇾ智而不ㇾ知、一不祥也。知而不ㇾ用、二不祥也。用而不ㇾ任、三不祥也」〇己の爲めにならざる凶德。荀、非相「人有ㇾ――、幼而不ㇾ肖、長而不ㇾ材、老而不ㇾ死、是人之――也」

【三不惑】サンフワク 飲酒・女色・貨財の三欲に惑はざるをいふ。後漢の楊秉の語。後漢書、楊震傳「楊秉嘗言曰、我有ㇾ――、一酒色財也」

【三奉行】サンブギョウ 國德川時代の寺社奉行・勘定奉行・町奉行。

【三部經】サンブキョウ 佛無量壽經・觀無量壽經・阿彌陀經。〇大日經・金剛經・蘇悉地經。〇仁王經・金光明經・法華經。

【三部抄】サンブショウ 國隆寛本願抄・西要抄・父子相迎抄。ㇾ三部假名抄。

【三伏】サンプク 夏の最も暑き日、土用、夏至の後第三庚を初伏とし、第四庚を中伏とし、立秋の後初庚を末伏とす。夏は火氣なり、秋は金氣なり、金氣伏藏の義（史、秦紀注）程晱詩「平生――時、道路無ㇾ行車」ㇾ三庚・伏日。

【三復】サンプク いくたびも繰りかへす。論、先進「南容――ㇾ白圭」

【三幅對】サンプクツイ 國三つ並べて掛ける樣に作りし軸もの、樽にて、物の三つにて一組になるもの。

【三福田】サンフクデン 佛福德を生ずる三つの善行、田とは田の收穫に譬ふ、敬田・恩田・悲田。又、報恩福田（父母師長を敬ふ）功德福田（佛法僧の三寶を敬ふ）貧窮福田（貧苦の人を憐む）（優婆塞戒經）

【三物】サンブツ 〇六德（智仁聖義忠和）六行（孝友睦婣任恤）六藝（禮樂射御書數）をいふ。周禮、地官「以ㇾ鄉ㇾ敎二萬民ㇾ一曰六德、二曰六行、三曰六藝」〇盟約を結ぶ時にすする血を取る三つの動物、犬・豕・雞、君は豕を以てし、臣は犬を以てし、民は雞を以てす。詩、小雅、出ㇾ此ㇾ――ㇾ以頡ㇾ頏斯ㇾ」

【三釜之養】サンプノヨウ 釜は六斗四升（我國の五升七合餘）親在すときは薄祿を厭はずして孝養すべきをいふ。莊、寓言「曾子曰、吾及ㇾ親仕、三釜而心樂、後仕三千鍾而不ㇾ洎、吾心悲」鍾は六斛四斗。

【三墳五典】サンプンコテン 三墳は三皇の書、五典は五帝の書。左、昭十二「左史倚相趨過、楚王曰、是良史也、子善視ㇾ之、是能讀ㇾ――八索九丘ㇾ」

【三分鼎足】サンブンテイソク 地を三分して、鼎の足の如く並び立つ。史、淮陰侯傳「莫ㇾ若ㇾ兩利而俱存之、三分天下、鼎足而居ㇾ」兩利とは劉・項二氏を利するをいふ。

【三苗】サンビョウ 堯舜時代に、江淮荊州に據りし蠻族の名、四凶の一。楚語「其後――復ㇾ九黎之德ㇾ」

【三綱】サンコウ 大夫のおたまや、一昭・一穆と、太祖の廟と。三輔黃圖「九府――十二門九市」

【三輔】サンプ 夏・商・周三代の刑法、輔はつつみ。漢書、刑法志「――之興、皆叔世也」

【三輔】サンポ 漢の時、長安以東を京兆尹とし、長陵以北を左馮翊とし、渭城以西を右扶風とす、三輔共に長安城中を治む。史、大宛傳「漢發ㇾ――ㇾ誰人ㇾ」

【三輔黃圖】サンポオウト 六卷、著者未詳、長安の古跡を記す、考古の資とすべし。

【三輔決錄】サンポケツロク 漢の趙岐著、二酉堂叢書中に收む、記すところは三輔黃圖に似たり。

【三水】サンスイ 〇首かせと、手足のかせと。後漢書、范滂傳、注「――項及手足皆有ㇾ械」〇國古今集中の三つの祕傳としたる木、相生の松・をがたまの木・めどのけづり花。

【三本】サンポン 天地と先祖と君師と。荀、禮論「天地者生之本、先祖者類之本、君師者治之本」

【三盆】サンボン 國上等の白砂糖。ㇾ三盆白。精糖。

【三昧】サンマイ 〇佛平等又は正受・正定と譯す、物事に心を專一にする義。金剛經、註「道云頭一備云致一精云――」〇轉じて奧義を究め妙處を得る義。

【三昧堂】サンマイドウ 佛念佛を修する爲めに建てたる堂。ㇾ念佛堂。

【三密】サンミツ 佛身密・語密・意密。眞言は祕密なり、佛の身の相と語と意とは、高尙祕密にして容易に知りがたき義。大藏法數「密部祕密、謂、如來身口意三業、威現ㇾ通變、說ㇾ法、或思惟、皆非ㇾ諸菩薩聲聞之所ㇾ思議、故

名ニ一一ニ」

【三明】サンミョウ　圖三つの事柄を明かに知る智。宿住智證明（過去の事を知る）天眼智證明（未來の事を知る）漏盡智證明（現在十方の事を知る）法華經「皆得ニ深妙禪定一一六通一具ニ八解脫ニ」

【三藐三菩提】サンミャクサンボダイ　具には阿耨多羅——といふ。正遍智と譯す。遍ねく一切の法を知る意。佛の特性をあらはす語。般若心經、注「無上正等正覺謂ニ無上眞性ニ也」

【三脈術】サンミャクジュツ　右の手の脈搏と、下の頤の兩側の脈搏との整否により身の吉凶を占ふ術。

【三務】サンム　春秋夏三季の農務。左傳「一一成レ功」

【三無私】サンムシ　三つの私なきもの。禮、孔子閒居「天無ニ私覆一、地無ニ私載一、日月無ニ私照一、奉ニ斯三者一以勞ニ天下一、此之謂ニ——ニ」

【三命而俯】サンメイシフ　官位の進むに隨ひて、益〻謙遜するにいふ。左、昭七「一命而僂、再命而傴、——」

【三門】サンモン　〇圖寺院の門の稱。寺院をたる三解脫門即ち空門・無相門・無作門を門に喩へていふ。〇佛教にて教・律・禪の稱。

【三養】サンヨウ　〇禮・氣・財を養ふ。〇養ひ採餘「東坡在ニ黃州一、嘗自書ニ云、東坡居士自レ今以往、早晚飲食、不レ過ニ一爵一肉ニ（中略）有ニ一一說ニ一曰安レ分以養レ福、二曰寬レ胃以養レ氣、三曰省レ費以養レ財」〇神・精・氣を養ふ。養生雜訣「寡ニ思慮ニ以養レ神、寡ニ嗜欲ニ以養レ精、寡ニ言語ニ以養レ氣」

【三役】サンヤク　圖角力の大關・關脇・小結。

【重ニ三譯ニ】サンエキ　三國の通譯を重ねて意を通ずる。十八史略「交趾南有ニ越裳氏一、——而來、獻ニ白雉一」

【三餘】サンヨ　勉學すべき三つの餘暇、冬・夜・陰雨の日なり。漢略「董遇、字季直、性質訥好レ學、人有ニ從學者一、遇不レ肯レ教、曰、必當ニ先讀百遍一、言讀書百遍而義自通、從學者曰、苦渴無ニ日、遇言、當ニ以ニ一一、冬者歲之餘、夜者日之餘、陰雨者時之餘」

【三欲】サンヨク　飲食・睡眠・淫（禪宗名義集）

【三沿三浴】サンエンサンヨク　ゆあみして香を身に塗りて清めるを韓愈、答ニ呂醫山人一書「三浴而三薰之」薰は重・僧に通ず、三僧三浴を見よ。〃三薰三沐ニ

【三禮】サンライ　〇儀禮・周禮・禮記（後漢書「黨錮傳」）〇サンライ天と地と宗廟（人）とを祭る禮。書、舜典「能典ニ朕一一ニ」

【三老】サンロウ　〇年老いて一鄕の敎化をつかさどる者。禮、樂記「食ニ一一五更於大學ニ」〇上壽（百歲）中壽（八十歲）下壽（六十歲）の三つの老年。

【三樂】サンラク　〇君子の三つのたのしみ。孟、盡心「父母俱存、兄弟無レ故、一樂也、仰不レ愧ニ於天一、俯不レ作ニ於人一、二樂也、得ニ天下英才一而敎ニ育之一、三樂也」〇人生の三つのたのしみ、樂摩期（摩、列子に磨に作る）の言。宋語、六末「天生ニ萬人一、惟人貧レ貴、吾得レ爲レ人、一樂也、男尊女卑、吾得レ爲レ男、二樂也、人生有レ不レ免ニ襁褓一者ニ吾行年九十五矣、三樂也」〇サンガク　益を求むる人の三つのねがひ好むこと、禮樂を節し、人の善を言ひ、賢友多からんことをねがふ、又、有害なる三つのこのみ、おごりを好むこと、遊にふけるを好むこと、宴樂を好むこと。論、季氏「益者一一、損者一一」

【三吏】サンリ　三公に同じ。左、成二「王使レ委ニ于一一ニ」

【三利】サンリ　三つの利益。管子「一年之利種レ穀、十年之利種レ樹、百年之利播レ德」

【三里】サンリ　圖灸穴の名、膝の下、脛の上の外傍の稍凹みたる處。

【三陸】サンリク　圖陸前・陸中・陸奥。

【三倫】サンリン　君と官人と近侍の臣と。大戴禮「不レ可ニ不レ愼乎一一矣」

【三良】サンリョウ　〇鄭の國の三人の良臣。左、僖七「鄭有ニ叔詹・堆叔・師叔一一、爲レ政」〇秦の穆公に殉死せし一一臣。左、文六、秦穆公卒、以ニ子車氏之三子一爲ニ殉、皆秦之良也、國人哀レ之、爲レ之賦ニ黃鳥一」黃鳥は、詩經秦風の篇名。

【三略】サンリャク　兵書の名、上略・中略・下略の三卷あり、黃石公の著と稱すれども僞書なり。

【三稜鏡】サンリョウキョウ　光線を分析するに用ふる硝子の三角柱形をなす器械。〃三稜玻璃。

【三陵洲】サンリョウシュウ　地文學にて大河の川口に土砂の堆積して生ずる三角形のす。〃三角洲。

【三稜鍼】サンリョウシン　三つのかどある針、鍼術などに用ふ。〃三稜針。（三稜錐は三つ目ぎり）

【三閭大夫】サンリョダイフ　楚の國の職名、屈原嘗て之に任ず。史、屈原傳「遠父見而問レ之曰、子非ニ——一歟」紺珠「三閭、昭・屈・景」

【三令五申】サンレイ　たびたびくり返して丁寧に告げ戒むる（史、孫武傳）

【三論宗】サンロンシュウ　佛敎八宗の一、中觀論・百論・十二門論の三論より成れる敎。

【三王】サンワウ　三代の聖王、夏の禹王、殷の湯王、周の文武二王。中庸「考ニ諸一一而不レ謬」

【三王外記】サンワウガイキ　圖二卷、太宰純著す。德川五代將軍綱吉（憲王）同六代將軍家宜（文王）同七代將軍家繼（章王）の三世間の事を記す。

【三稜草】サンリョウソウ　圖沙草科に屬する草の

名、莖は三稜をなし、葉はがまに似て狹く、花は紫色にして穗狀をなす、葉は繩の料とす。

【三致レ意】サンチイ 深く意を用ふる義。史、屈原傳「其存君興レ國、而欲レ反二覆之一、一篇中——焉」

【三折レ肱】サンセツコウ 辛苦して修業する義。左、定十三「——、知レ爲二良醫一」

【三遺】サンイ 國 遺形科に屬する草、山地に自生し、又は栽培す、莖葉は香氣多く食用とす。日 鴨兒芹

【上】(一)ジャウ・シャウ 呉 (二)シャウ・ジャウ 漢

上・二は古字

㊀かみ、うへ、下の對「山ー」「樓ー」〇おもて、表面。〇そとがは、外面。〇前に在るもの「一篇」「一卷」〇いただき「頂ー」〇きみ(君)天子の尊稱。史、魏其傳「一初卽位、富春秋」〇めうへ(長者)「長ー」〇かたはら(側)ほとり(邊)〇たかし(高)又、高き所。〇すぐれたるもの、上等のもの「一品」「一賞」〇たつとし(尊)卑の對「一官」「一司」〇尙に通ず、こひねがふ、たつとぶ(尊)漢書、賈誼傳「ー親」〇くはふ(加)論、顏淵「草ー之風必偃」〇一人は他の尊稱。㊁あがる、のぼる、下よりして上に行く(登升)易、雷卦「雲ー于天」〇のる(乘)「ー船」「ー車」〇其の場所に往く「ー途」「ー廁」〇あぐ、のぼす、のす。儀禮、士相見禮「毋ー於前」〇たてまつる、奉じて。〇すすむ(進)「ー書」「ー奏」〇四聲の一、高く呼びて猛烈なるもの「平ー去入」

同訓異語 ノボル 上・升・昇・陞・躋・登・騰・陵〇上は下なるものが、上になるといふ意より、轉用してノボルと訓む、ー木とは、文字を版にほることなり、上ル堂は下に居りし者が、堂上に上りしなり、登堂は階段を經て登るなり、升堂は歩よく、すすみのぼるなり。〇升は降の對、すすみのぼる、升ル天、升ル堂の類。〇昇は升に同じ、後世、日を加へたるなり。〇陞は升と略同じ、階段をのぼり、又官位ののぼるに用ふ「陞敍」〇登は物の上にのぼる義、登ル山、登ル殿の類の曲禮「登レ城不レ指」〇躋はをどりあがる義、飛騰、奔騰などと用ふ。〇騰は升に近し、又謄の反、官位をおしあぐるなり。書經「謨二陟幽明一」〇ジャウ 上・尊・貴・崇・尙等の別は熊(寸部九畫)の條を見よ。

【上衣】ジャウイ うはぎ、表面に著る衣服。

【上意】ジャウイ 君の御心、天子の御意。漢書、元帝紀「言レ事者多進見、人人自以爲得ニー一」〇朝廷の意。

【上客】ジャウカク すぐれたる賓、普通「一賓レ國、其次賓レ人、國賓官也」

【上流】ジャウリウ 水かみ、又、水の上流に在る地。史、高祖紀「古之帝者、地方千里、必居ニー一」日 上流。

【上院】ジャウヰン 國會の二院制の一、下院の對。日 貴族院。

【上雨】ジャウウ 〇よき潤ひの雨。公羊傳「一一而不レ救也」日 潤雨・時雨。〇あまもり。次條を見よ。

【上雨旁風】ジャウウバウフウ 上は雨もり、旁は風吹き入る破屋。韓愈、南海神廟碑「一一、無レ所ニ蓋障一」

【上謁】ジャウエツ 名刺を上ケて見えんことを求む、謁は今の名刺。史、張儀傳「張儀之レ趙ー一レ、求レ見ニ蘇秦一」

【上葉】ジャウエフ むかしの時代。日 上世。

【上苑】ジャウエン 天子の庭園。宋史、樂志「寶圖珠樓臨ニー一、百卉乔ニ春柔一」日 上林。

【上援下推】ジャウエンカスイ 上に在る者は我を官にひきあげ、下に在る者は我を官に薦む。禮、儒行「上弗レ援、下弗レ推」

【上下】ジャウカ 〇かみとしもと。書、堯典「光ニ被四表一格ニ于ー一一一」〇天と地と。論、述而「禱ニ爾于ー一神祇一」〇君と臣と「周禮、訓方氏、注」〇のぼるとくだると。〇圖 日 枠。〇ジャウカ 乘物にて往復する、ゆきかへり。

【上下有レ序民聽不レ慢】ジャウカニジョアリテタミキヽテアナドラズ 上下の秩序正しきときは、民意慢せず【國語】

【上下動】ジャウカドウ 地文學上、地殼のゆれ方の縱なるもの、震源地に起る現象、水平動(橫のゆれ)の對。

【上下兩院】ジャウカリヤウヰン 上院と下院、卽ち貴族院と衆議院と。

【上界】ジャウカイ 佛陀の居所、天上界。下界の對。張說詩、「一一幡花合、中天伎樂來」

【上交】ジャウカウ 易の卦の最上段の稱、文は易の卦の六つの畫段の稱。

【上交】ジャウカウ 〇日上の人とつきあふ。易、繫辭「一一不レ諂、下交不レ瀆」〇親しきまにはり。戰國策「秦與レ梁爲ニー一」日 親交。

【上考】ジャウカウ 官吏の成績勤惰をしらべて上・中・下に分ちたる其の上の成績【唐書】

【上校】ジャウカウ 現今の支那海陸軍の將校の名、我が大佐に當る。

【上客】ジャウカク 上等の賓客。戰國策「應侯曰、善、乃延入坐、爲ニー一」日 上賓・貴客。

【上格】ジャウカク すぐれたる資格、上等の格式。

【上甲】ジャウカフ ついたち、甲は始。漢書、天文志「正月一一、風従二東方一来」＝上日。

【上氣】ジャウキ 闕のぼせ、のぼせる、逆上。＝上衝。

【上喜撰】ジャウキセン 闕宇治の製茶の名。

【上級】ジャウキフ 〇うへのだん、上の階級。〇うへのくみ「一一生」

【上愚】ジャウグ 甚だしき愚人。荀、儒效「是之謂一一一」＝下愚。

【上皇】ジャウクワウ 〇天帝。李白詩「稽首新一一」＝上帝。〇上古の帝王。詩經、正義、序「一一道質、故圖驗之情寡」〇讓位せられたる帝王。李白、上皇西巡南京歌「劍閣重開蜀北門、一一鸞馬若レ飛雲」

【上官】ジャウクワン うはづく、上級の官吏。後漢書、任延傳「吾事二一一一、無レ失二名譽一」＝上司。

【上浣】ジャウクワン 月の一日より十日までの間の稱、院は沐浴なり、唐の制、朝臣十日毎に、一度暇を給りて休浴す、浣は澣に同じ。＝上澣。

【上澣】ジャウカン 前條に同じ。＝上旬。

【上刑】ジャウケイ 最も重きおきて。孟、離婁「善戰者服二一一一一」＝極刑・重刑。

【上京】ジャウキャウ 〇帝京をいふ。後漢書、朝鮮傳「東夷始通二一一一」〇京コヽに上る、馬嵬常の詩に「丁卯一一四絕」あり。

【上計】ジャウケイ 〇すぐれたるはかりごと。戰國策「適足二以強レ秦而自斃一也、非二山東之一一一也」＝上策。〇漢代の制、郡國毎歲使を京師に遣して會計簿を送むるをいふ。

【上啓】ジャウケイ 上に申し上げる。梁昭明太子疏「竊有二愚心一、願得二一一一一」＝上書。

【上卿】ジャウケイ 〇卿の上級の者。史、甘茂傳「秦乃封二甘羅一以爲二一一一一」〇國大臣又は大中納言などが、臨時に宮中の公事を奉行することを命ぜられたる者の稱。〇朝廷の議事の首座となる者。

【上元】ジャウゲン 陰曆正月十五日。晉書、束晳「正月十五日曰二一一一一」＝元宵・元夕・燈節。三元參看。

【上元日】ジャウゲンニチ 前條に同じ。

【上玄】ジャウゲン 天のかみ。隋書「受二命一一一一、膺二清風一字」

【上件】ジャウケン かみのくだり、前に在りし事柄。

【上弦】ジャウゲン 陰曆八九日頃の半圓形の月。故事成語考「一一謂二月圓二其半一、係二初八九一、下弦謂二月缺二其半一、係二二十二三一」

【上賢】ジャウケン 〇すぐれてまさりたるもの。漢書、晁錯傳「成王有二一一一之材一、因二文武之業一、〇一一賢人をたふとぶ。禮記「一一一以崇レ德」

【上午】ジャウゴ 晨ノ刻より正午以前の時間、今は夜半一時より正午に至る間をいふ。＝午前。

【上月】ジャウグワツ 酒を多く飲む人。經史摘語「按以二飲酒一爲二大小月一、三國之時語也、今以レ嗜レ酒、謔二一一一一以二上朔與二月大一井言也」＝酒豪・月大。

【上古】ジャウコ おほむかし。易、繫辭「一一結繩而治、後世聖人易レ之以二書契一」＝太古。

【上工】ジャウコウ 〇すぐれたる醫師。金匱要略「一一治レ未レ病」〇仕事に著手する。慶政全書「二月初二日、東作興、俗謂二之一一一日一」

【上告】ジャウコク 第二審裁判所の裁判に對し不服の申立をなすをいふ。

【上告審】ジャウコクシン 上告に對して行ふ最後の裁判、又其の裁判所（大審院）をいふ。

【上國】ジャウコク 〇王都に近き諸國の稱、かみがた。左、昭二七「吳子使二延州來季子聘二于一一一」〇すぐれてよき國。

【上根】ジャウコン 佛根氣の強きこと、すぐれたる性質。釋老志「初根人爲二小乘一、行二四諦法一、中根人爲二中乘一、受二十二因緣一、一一人爲二大乘一、則修二六度一」

【上坐】ジャウザ 座中の第一位、坐は座に通ず。史、高祖紀「遂坐二一一一一、無レ所レ讓」＝上席・上座。

【上座】ジャウザ 〇前條に同じ。〇僧侶の尊稱、最高の位に在る者。＝座首・上首。

【上才】ジャウサイ すぐれたるはたらき、又、其の人。高適詩「輸軒推二一一一」

【上宰】ジャウサイ 宰相の稱。畢構詩「天子命二一一一」＝上輔。

【上裁】ジャウサイ かみの御裁決。

【上作】ジャウサク 〇圖上でき、又其の物。＝名作・傑作。〇田畠の作物の善きでき、下作の對。＝豐作。

【上策】ジャウサク 〇最もよきはかりごと。漢書、匈奴傳「周秦漢征レ之、然皆未レ有レ得二一一一一者也」＝上計。〇書をたてまつる。＝上書。

【上士】ジャウシ 〇德高くすぐれたる士。老子「一一聞レ道、勤而行レ之、中士聞レ道、若レ存若レ亡、下士聞レ道、大笑レ之」〇周代、士の位を上・中・下の三つに別ち、其の上位に在る者の稱。禮、王制「孟、萬章「一一一位、中士一位、下士一位」

【上巳】ジャウシ 陰曆の三月の初の巳の日の節句、俗にさんぢといふ、桃の節句。後世は巳の日にかかはらず、三月三日と定む、この日流水の上にて禊ぎするを例とす。後漢書、禮儀志「是月一一、官民皆聚二東流水一、祓禊」宋書、禮志「自レ魏以後、但用二三日一、不レ以レ巳」類書纂要「三月一一日、祓禊飲二于流水之上一、以取二水上盛潔之氣一」

【上司】ジャウシ 上級の官廳、又、上位の官。後漢書、楊震傳「吾聞二恩居二

一ーこ

【上旨】天子のおぼしめし、旨は指に同じ。史、公孫弘傳「順二ーー一」

【上指】〇前條に同じ、指・旨通ず。漢書、張湯傳「湯承二ーー一、請造二五金及五銖錢一、籠二天下鹽鐵一」〇上をさす。史、項羽紀「瞋レ目視二項王一、頭髮ーー」

【上志】上代のかきもの、志は誌。呂覽「嘗試觀二于ーー一」=古記。

【上使】圖上より下へ遣す使者、即ち朝廷より將軍家への使者、倂して將軍家より大小名へ遣す使者をもいふ。

【上肢】兩手の稱、兩足を下肢といふの對。

【上梓】文書を版にほる 梓はあづさの木。康熙字典「俗謂レ鋟二文書於板一曰レ梓」

【上秋】秋のはじめ、陰曆の七月をいふ。梁元帝纂要「七月曰二首秋一、亦曰二ーー一、亦曰二蘭秋一、亦曰二閑秋一」

【上日】〇ついたち。書、舜典「正月ーー、受二終于文祖一」=朔日。〇圖宮中の宿直日、又、其の當番の者の稱。=上夜。

【上申】事を官に申し上げる。=上陳。

【上上】上の上、最もすぐれる。=特等。

【上庠】身分賢き者の入りて學ぶ大學。禮、王制「有虞氏養二國老于ーー一、養二庶老于下庠一」=右學。

【上章】〇十二支の庚の異稱。爾雅、釋天「太歲在レ庚、曰二ーー一」〇君主又は政府へ表文を作る、又其の表文。〇或章の前に在る章。=前章。

【上將】首席の大將。史、陳涉世家「陳王使使レ賜二田臧楚令尹印一、使レ爲二ーー一」

【上將軍】全軍の總大將をいふ。事物紀原「史記曰、義帝以二宋義一爲二ーーー一、漢以二呂祿一爲二ーーー一」

【上賞】最上の賞與。戰國策、齊威王令二國中一曰、有下能面二折寡人一者上、受二ーー一」

【上聲】漢字の四聲の一、董・腫・講・紙・尾・語・麌・蟹・賄・軫・吻・阮・旱・潸・銑・篠・巧・皓・哿・馬・養・梗・迥・有・寢・感・儉・豏の二十九韻に分つ、上聲の字は皆仄字。

【上手】技術の巧なること、巧者。顏氏家訓、雜藝「卜筮十中二六七一以爲二ーー一」

【上壽】〇百歲。莊、盜跖「人ーー百歲、中壽八十、下壽六十」〇百二十歲。左、僖、三二、注「ーー百二十歲、中壽百歲、下壽八十歲」〇さかづきを奉りて、無窮の壽を獻ず。史、淳于髡傳「奉レ觴ーーレ」

【上熟】よくみのる。漢書、食貨志「ーー其收自四、中熟自三、下熟自倍」=上孰。

【上首尾】圖よき出來ばえ、好結果。

【上旬】月の一日より十日までの間。唐書、趙光逢傳「七月ーー、齎二三十日糧一、分レ兵並出」=上浣。

【上春】春の初めの月。梁元帝纂要「孟春曰二ーー一・初春・開春・發春・獻春・首春」周禮、內宰、疏「ーー者孟春正歲、以二其春事將一レ興、故云二ーー一也」

【上書】天子に書をたてまつる、又其の書、又其の文體の名。文體明辯「按、字書云、書者、舒也、舒二布其言一、而陳二之簡牘一也」事物紀原「太甲既立不明、伊尹作レ書以戒、此ーー之始也、七國時臣子言二事於其君一、皆曰二ーー一、秦改曰レ奏」

【上升】上にのぼる、升は昇に同じ。論衡「孔子曰、游者可レ爲レ綸、飛者可レ爲レ矰、至二于龍一也、吾不レ知下其乘二風雲一ーー上、今日見二老子一、其猶レ龍乎」=上昇・上騰。

【上昇】前條に同じ。公羊傳、註「天氣ーー、地氣下降」

【上乘】〇圖一切の煩惱を去りて、眞の道理を悟りしをーー禪といふ。傳燈錄「禪有二深淺階級一、悟二我空偏眞之理一而修二是小乘禪一、悟二吾法空所顯眞理一而修者是大乘禪、若頓悟二自心本來淸淨元無二煩惱一、無漏智本自具足、此心卽佛、依レ此而修者、是ーー禪」李中詩「睡目忘二塵慮一、餘レ坐入二ーー一」〇圖大乘に同じ。〇轉じて藝術文章等の最上の出來をいふ。

【上衝】のぼせ。=上氣。

【上衆】圖身分の貴き人、賤人を下衆といふの對。=搢紳。

【上水】圖淸き川池などの水を引きて飲料水とするもの、又其の水を通ずるみぞ。

【上世】おほむかし。孟、滕文公「蓋ーー嘗有下不レ葬二其親一者上」=上古。

【上席】かみざ。=上座。

【上船】ふねにのる。杜甫詩「天子呼來不レーー」

【上善】最上の善。老子「ーー若レ水、水善利二萬物一而不レ爭」

【上牋】表をたてまつる。南史「ーー謝[illegible]」=上表。

【上僊】僊は仙、天に上りて仙人となる、又、死する意。莊、天地「千歲厭レ世、去而ーー」

【上僭】下位の者が僭越にして上位の者の眞似をする。詩、邶風、綠衣箋「綠衣黃裏、綠衣黃裳」箋「猶衣黃、展衣白、緣衣黑、皆以二素紗一爲レ裏、今綠衣反以レ黃爲レ裏、非二其禮制一也、故以喩レ妾ーー」

【上疏】上に書をたてまつる、又、其の文書。通典「有レ所レ陳、皆曰二ーー一」=上表。

【上訴】上にうったへる。杜甫詩

「眞宰ーー天應ノ泣」

【上奏】ジャウソウ 天子に申し上げる。漢書、賈誼傳「ーー畏ノ卻則假錬而周ニ內之ニ」

【上層】ジャウソウ 上の段、上のかさなり。史、樊噲弘度傳「登ノ樓至ニーー一去ノ地四五丈」

【上足】ジャウソク 高弟に同じ。雲笈七籤「弟子數十人、唯王遠知・陸逈沖稱ニーー一焉」ニ高足弟子。

【上簇】ジャウソク 蠶のあがり、蠶が蠶蔟シサンにあがりてまゆを作る。蔟はまぶし。

【上尊】ジャウソン 〇上等の酒、又人より贈られし酒をいふ。隷は樽。漢書、平當傳、注「稻米一斗、得ニ酒一斗一ーニ一ーニ覆米一斗、得ニ酒一斗一ーニ中尊ニ粟米一斗、得ニ酒一斗一ーニ下尊ニ〇上に在りてたふとし。呂覽「ーー下卑」

【上代】ジャウダイ おほむかし、上古の代。晉、武帝紀「通ニーー之不ニ通、服ニ前王之未ニ服」ニ上古。

【上大人】ジャウダイジン 大人に上るといふ義。支那にて兒童の字を學ぶには、上大人、丘乙巳化三千七十士、仝小生、八九子、佳作ノ仁、可ノ知ノ禮也の一十五字より始む(親枝山、猥談)

【上黨之國】ジャウタウノクニ 〇中國の稱、黨は所。越語「ーー我攻而勝ノ之」〇上黨は戰國の韓の地名、秦、上黨郡を置く、今の山西省冀寧道の南部の地、其の地極めて高く天と黨を爲すが故に名づくといふ。史、秦紀「秦攻ニ韓上黨ニ上黨降ノ趙」

【上達】ジャウタツ 高明の道にすすむ。論、憲問「君子ーー、小人下達」

【上段】ジャウダン 〇圖上の段、高き段。家の中にて床を一段高く造りたる室。「ーーの間」〇劍術にて劍を高く頭上に振りかざす身構への稱。

【上知】ジャウチ 聖人をいふ。次條を見よ。ニ上智。

【上知與ニ下愚ニ不ノ移】ジャウチトハカグトヲウツサズ 生れながらにして知る者と、至りて愚なる者とは、如何に教育すとも、移し易ふべからず、孔子の語「論、陽貨」

【上池之水】ジャウチノミヅ 未だ地に至らざる露、又、竹木の上の水の類、之を取りて藥に和して飲ます。史、扁鵲傳「出ニ其懷中藥ニ予ニ扁鵲ニ飲ノ是以ニーーニ」

【上長官】ジャウチャウクワン 圖陸海軍の佐官、(大佐・中佐・少佐)の稱。

【上中下】ジャウチウカ 三等の別ある義。論、雍也「子曰、中人以上可ニ以語ノ上也、中人以下不ノ可ニ以語ノ上也」疏「人之才識凡有ニ九等ニ謂ニ上上・上中・上下・中上・中中・中下・下上・下中・下下也、上上則聖人也、下下則愚人也、皆不ノ可ノ移也」地持論「十方無量世界ーー」

【上丁】ジャウテイ 二月の上の丁ノ日にて孔子の祭日。禮、月令「是月也(仲春之月)ーー命ニ樂正ニ習ノ舞、釋菜疏「必用ノ丁者、取ニ其丁壯成就之義ニ欲ノ使ニ學者藝業成ニ故也」唐書、禮樂志「二月八日以ニーー日ニ釋ニ奠於文宣王ニ」

【上帝】ジャウテイ 〇天の神、造物主、天帝。書、伊訓「ーー不ノ常、作ノ善降ニ之百祥ニ作ニ不善ニ降ニ之百殃ニ」〇天子の稱。後漢書、註「ーー謂ニ天子ニ」〇上古の帝王。梁問「此ーー所ノ聽」

【上聽】ジャウチャウ 天子のおきき。ニ上聞。

【上天】ジャウテン 〇そら、あめ。詩、小雅「ーー同雲、雨雪雰雰」ニ天空。〇天帝〇冬の天。爾雅「冬爲ニーーニ〇天にのぼる。高駢詩「ーーノ下ノ天鶴一隻」ニ昇天。

【上田】ジャウデン 上等の田地、地味の肥えて收穫多き田。漢書、食貨志「民受ノ田、ーー夫百畝、中田夫二百畝、下田夫三百畝」

【上途】ジャウト たびだち、門出、出發。

【上冬】ジャウトウ ふゆ三箇月の上の月、陰曆十月の稱。ニ孟冬

【上棟】ジャウトウ 圖むねあげ。「ーー式」

【上棟下宇】ジャウトウカウ 棟は梁ウツバリにして上に在り、宇は椽タルキにして下に在り、家屋を構造する義。易、繫辭「上古穴居而野處、後世聖人易ノ之以ニ宮室ニ〔レーーレ〕、以待ニ風雨ニ蓋取ニ諸大壯ニ」

【上膓】ジャウトウ 上にのぼる。禮、月令「天氣ーー、地氣下降、天地不ノ通、閉塞而成ノ冬」

【上等兵】ジャウトウヘイ 圖兵卒を上等・一等・二等の三つに分けたる其の第一位。

【上東門】ジャウトウモン 洛陽の城門の名。漢書、賈誼傳「擇ニ良日ニ立ニ諸子洛陽ーー之外ニ」

【上德】ジャウトク 太古、盛德ありて名譽のなき君、又、最上の德。次條を見よ。

【上德不ノ德】ジャウトクフトク 最上の德ある者は德あるも誇らざる義。老子「ーー是以有ノ德、下德不ノ失ノ德、是以無ノ德」

【上頓】ジャウトン 大に酒を飲む。晉書、王恂傳「性嗜ノ酒、醉輒經ノ日、自號ニーーニ」ニ上月。

【上納】ジャウナフ 租稅などを官に納める。ニ納上。

【上人】ジャウニン 〇圖智德ありて人の上に在る僧の尊稱。ニ聖人〇圖法眼に次ぐ僧位の名、法橋ホッケウに當る。〇圖ジャウニン氣立よき人、善人。圖景清「內有ニ德智ノ外有ニ勝行ノ在ニ人之上ニ日ニーーニ」

【上馬】ジャウバ 〇上等の馬。北史、成淹傳「乃賜ニ淹龍廐ーー」ニ上駟。〇馬に乘る。陸游詩「切勿ノ經ニ書生ニーレーー能擊ノ賊」

【上馬杯】ジャウバイ 馬に乘りて出立する時、勸める酒。名臣言行錄「寇準薨ニ王欽若ニ代ノ守、遽酌ニ大白ニ飲ノ之、

命曰ニ――一」

【上覽】ジャウラン　めうへの人、己より上に立つともがら。‖先聖。

【上方】ジャウハウ　〇うへのかた、天上。眞集詩「老人南極星、王母――圃」〇山寺。杜甫詩「――重閉晩、百里見ニ樵客一」〇天子の御物を作り又之を藏する官署。漢書、貢覇傳「――珍寶」‖倘方。〇カタ　國畿内地方の稱。‖上國。

【上報】ジャウハウ　君主の恩に報ゆ。晉書、石崇傳「刻レ肌碎レ首、未レ足ニ――一」

【上膊】ジャウハク　二のうで、かひな、うでの肩から腕までの稱。下膊（腕から腕首まで）の對。

【上半】ジャウハン　二つに分けたる上の半分。一一月」

【上番】ジャウバン　唐人の方言、第一番の義。杜甫詩「會須ニ――看ニ成竹一、客至從レ教不ニ出迎一」

【上品】ジャウヒン　人・物の品がらよきをいふ。晉書、劉毅傳「――無ニ寒門一、下品無ニ勢族一」

【上賓】ジャウヒン　〇上席に就くべき賓客。漢書、枚乘傳「乘久留ニ大國一――」與ニ英俊一遊遨、得ニ其所レ好」〇飛びて天に昇る。西陽雜俎「換骨――」〇帝王の死をいふ。

【上平】ジャウヒヤウ　平は四聲の一、平聲三十韻を分ちて上平・下平とす、上平は東・冬・江・支・微・魚・虞・齊・佳・灰・眞・文・元・寒・刪の十五韻をいふ。

【上布】ジャウフ　國上等の麻織物。

【上部】ジャウブ　うへの部分。

【上風】ジャウフウ　かざかみ。孫子、火攻「火發ニ――一、無レ攻ニ下風一」

【上文】ジャウブン　前に陳べたる文言。詩經、序、疏「――言ニ詩功一既大明」‖前文。

【上聞】ジャウブン　天子のおきき。漢書、武帝紀「發行之君子、率ニ於――一也」‖叡聞・上聽。

【上分則】ジャウブンソク　國最もすぐれたる善き考。

【上兵】ジャウヘイ　すぐれたる兵略。孫子、謀攻「百戰百勝非ニ善之善者一也、不レ戰而屈ニ人之兵一、善之善者也、故――伐レ謀、其次伐レ交、其次伐レ兵、其下攻レ城」伐レ謀とは敵の謀略をうち破りて行ふ能はざらしむる義。

【上幣】ジャウヘイ　〇珠玉をいふ。曾子、國蓄「以ニ珠玉一爲ニ――一、黄金爲ニ中幣一、刀布爲ニ下幣一」〇黄金をいふ「史、平準書」

【上表】ジャウヘウ　表を上る、又、其の表。唐書、百官志「海蔵――頒ニ諸幸一」‖上書。

【上木】ジャウボク　版木にほる、出版する。‖上梓。

【上味】ジャウミ　第一のあぢはひ、すぐれたるあぢ。楞嚴經「酥酪醍醐名爲ニ――一」

【上命】ジャウメイ　おかみのいひつけ。‖君命。

【上臨】ジャウリン　みことのり、上は天子。元史、阿里海牙傳「――ニ伯顏一」‖詔勅。

【上洛】ジャウラク　都へ上る、洛は洛陽にて古の都の名。北史、齊高祖紀「神武自ニ晉陽一西討、遣ニ僕射行洛汝陽王遵・司徒高昂等一趣――」

【上蔟】ジャウサウ　〇國二位又は三位の典侍の稱、蔟は職、年卽ち年功の職。〇一位又は二位となりたる大臣家の嬢。〇身分貴き婦人の稱。‖貴婦人。

【上覽】ジャウラン　〇天子が御覽になる。‖御覽・天覽・叡覽ラン　〇國僧して將軍家にも用ふ。

【上流】ジャウリウ　〇みなかみ。左、昭一八「我得ニ――一何故不レ告」‖上游。〇すぐれたる品位。論語「佳句推レ君最――」‖上品。〇貴き身分。「――社會」

【上六】ジャウリク　易の卦の最上に在る陰爻の稱、六は陰數。

【上陸】ジャウリク　船から陸地へあがること。

【上林】ジャウリン　秦代の御苑、陝西省長安縣の西に在り。史、始皇紀「三十五年、作ニ朝宮渭南一――苑中一、先作ニ前殿阿房一」漢の武帝更に之を增し廣めて周囘三百支那里とし、離宮七十所を築く。

【上梁文】ジャウリャウブン　文體の名、上棟式の祝文。文體明辯「按――者、工師上レ梁之致語也、世俗營ニ構宮室一必擇レ吉上レ梁、親賓裹レ酒贈ニ雜物一稱レ慶、而因以犒ニ匠人一、於ニ是匠人之長以ニ鬯拋一レ梁而頌ニ此文一、以祝レ之、其文首尾皆用ニ儷語一、而中陳ニ六詩一、詩各三句、以接ニ四方上下一、蓋俗證也」

【上略】ジャウリャク　文書の上の文句を略することをいふ。‖前略。

【上漏下濕】ジャウロウカシツ　上は雨もり、下は濕氣上る、貧家の形容。莊、讓王「原憲居ニ環堵之室一、――匡坐而絃」

【上海】ジャウハイ　通商港の名、江蘇省松江府に屬す。元史、世祖紀「分ニ華亭之――一爲レ縣」‖滬、申江。

【上求レ材臣殫レ木】ジャウキウザイシンタンボク　上の者、小材を求むれば、臣民は其の意を迎へて大木を濫伐するに至る義。淮南子「――、上求レ魚臣乾レ谷、上求レ梅而下致レ船」

【上之所レ好下必甚レ焉】ジャウシノコウカヒツジンナリ　上の人の好む所ろの者は下は一層好むやうになる。孟、滕文公「上有ニ好者一、下必有ニ甚レ焉者一矣」淮南子「上之所レ好下尤甚」

【上用レ目則下飾レ觀】ジャウヨウモクソクカシキカン　上の者、明察に過ぐるときは、下の者は其の行をかざる、故に其の眞を察知すること能はざる義。韓非、有度「――、上用レ耳、則下飾レ聲」

【丈】チヨウ　デヤウ　漾

〇尺度の名、十尺。〇たけ、ながさ（長）〇つゑ、杖に借り用ふ。〇おとな、長老の稱、朋友の尊稱。〇方一は一丈四方。又僧の居る所。杜甫詩「方一渾連氷」〇函一は師の尊稱、函は容、古、師弟相對するに席間一だけの間を容るゝが故。〇岳一は妻の父を稱す。〇國藝人などの尊稱。

【丈】ヂャウ　俗に點を加へて丈に作るは非。

【丈尺】ヂャウシャク　丈量に同じ、尺は校ケイ

【丈册】ヂャウサツ　國土地丈量の帳簿。‖檢地帳。

【丈室】ヂャウシツ　一丈四方のへや、方丈の室。白居易詩「一一可ン容ル身、斗儲可ン充ル腹」

【丈人】ヂャウジン　〇長老の稱。晏、師計「師良、一一吉」〇妻の父、しうと。史、匈奴傳「漢天子我一一行也」‖岳丈。〇老人の稱。論、微子「遇二一一一以ル杖荷ル蓧」正義「老人持ル杖、故曰二一一一」‖杖人。

【丈人峯】ヂャウジンホウ　泰山の絕頂に在る峯の名。泰山道里記「絕頂西里許爲二一一一、狀如二老人偃像一」

【丈尺】ヂャウシャク　たけ、寸法。

【丈八】ヂャウハチ　一丈八尺。通俗文「矛長一一、謂之槊」

【丈夫】ヂャウフ　〇一人前の男子、周の尺度にて一丈なるを男子のたけの正しき制とするが故。孟、滕文公「彼一一也、我一一也、吾何畏ル彼哉」後漢書、馬援傳「一一爲ル志、窮當二益堅一、老當二益壯一」張謂詩「一一會應ル有二知己一、世上悠悠安足ル論」〇ヂャウフ　國強し、すこやか、堅固。

【丈夫非ル無ル淚不ル灑二離別間一】ヂャウフあらずなみだなきにあらずそそがずりべつのかん　男子にも淚なきにあらねど、離別などの小事の爲めには流さず。陸機擬、離別詩「——、仗ル劍對二樽酒一恥ル爲二遊子顏一、蛾蛇一落ル手、壯士疾解ル腕、所ル思在二功名一、離別何足ル歎」

【丈夫淚】ヂャウフのなみだ　男子の淚。孟郊詩「君有二一一一、泣ル人不ル泣ル身」

【丈量】ヂャウリャウ　地積の測量。‖檢地・丈勘。

【丈六】ヂャウロク　〇一丈六尺「一一金像」後漢書、西域傳「西方有ル神名曰ル佛、其形長丈六尺而黃金色」觀無量壽經「阿彌陀佛神通如ル意、於二十方國一、隨現自在、或現二大身一滿二虛空中一、或現二小身一一一八尺」〇國あぐら、あぐ、足を組みて坐す、又其の形、一一の佛の坐像に似たるが故。‖結跏ケッカ趺坐フザ

【丈長】ヂャウチャウ　國奉書紙の類、厚くして糊氣なく、丈長し、又、其の紙にて作りし平元結。

【万】

萬（艸部九畫）に同じ　俗に万と書く

【丐】

カツ・カチ　カイ　泰　曷　本、匄に作る。

〇こふ（乞）〇とる（取）〇あたふ（與）〇こつじき、ものもらひ、かたゐ「乞一」柳宗元文「阜隸傭一、皆得ル上父母之邱墓一」

同訓異義　丐・乞・請　〇丐は乞に同じ。〇乞は乞貸と連用し、ねだり求むるなり。後漢書「以ル病上書一ル身」〇請はまことの心を以て、願ひ求める。禮記「請ル業則起、請ル益則起」

【丐子】カイシ　こつじき。‖乞人。

【丐匿】カイトク　とどまらんことを乞ふ。宋史、士民一一ル不ル獲」

【丑】

チウ・チュ　有　シウ・シュ　有

〇うし（牛）十二支の第二位。爾雅、釋天「太歲在一曰二赤奮若一」〇うしの時、午前二時。〇子と寅との間の方角、北東の間。〇むすぶ（結）〇つかぬ（束）〇てがせ（手械）‖杻。〇戯劇の脚色の一、粉墨を面に塗りて出づるもの「生・旦・淨一」

同訓異義　俗に丑・丞に作るは非、羞・紐・紐等此に從ふ。

【丑寅】チウイン　國方角の名、北・東の間。‖艮。

【不】

㊀フ・フウ　㊁フウ・ブ　㊂フツ・ホチ　ホツ・ホチ　㊃ヒ

有　尤　有　月　物　尤　支

㊀いなや、否に通ず、未定の辭。陶潛詩「未知從今去、當復如此一」〇飛びかける。㊁ず、あらず、せず、しからず（不然）弗に通ず、打消の助動詞。大學「雖ル中一遠」㊂おほいなり、古、丕に通ず。秦誓楚文「一顯大神巫咸」

同訓異義　不・弗・未　〇不は輕く、弗は重し、公羊傳「弗者不之深也」と註す。〇未は已ズの反にして、其の事のまださうならぬをいふ、故に「いまだ何何せず」とかゝり訓む。

【不安】フアン　安からず。禮、問喪「口不ル甘ル味、身一ル美也」

【不安心】フアンシン　國安心が出來ず。

【不案内】フアンナイ　國やうすがわからず。‖不知案内。

【不意】フイ　〇おもひがけず、意外。孫子、始計「攻二其無一ル備、出二其一一ル」〇ブイの假想外にてありき。辛延年詩「一ル一金吾子、娉婷過二我廬一」

【不意討】フイうち　〇國だしぬけのかたきうち、敵の不意に乘じてうつ。〇轉じて人の油斷につけこみて打擊ダゲキ

を加へる。

【不一】フイツ　〇一様ならず、ふぞろひ。後漢書、襄楷傳「夫龍形狀ー一レ、大小無レ常」〇一一詳しく述べず、書翰の結尾に用ふる語。‖不乙・不悉・不備・不二一一セイツイズ

【不乙】フイツ　書を讀みかけて止めたる時、乙字形のひつかけをしるすを乙といふ。漢書、東方朔傳「朔割上書、人主從二上方一讀レ之、止觀乙二其處一、讀三日乃盡一」轉じて書翰文の終にーーと書くは、未だ意をつくさざる義。‖不一・不悉・不備・不具・不宜・不鄭。

【不孝】フカウ　其の徳を二三にして終始一ならず、又、其の者。左傳「不敬慢三其無二成德一、是用宣レ之以懲二ーー一」

【不運】フウン　圖不仕合、うんがわるい。‖不遇・不幸。

【不易】フエキ　〇萬代もかはらず。莊、天道「ーー之道」〇イフ安らかならず、ふつさう。左、昭四「以二蔑之ーー一、嫁人願レ結二驪於二三君一」

【不詳】フシヤウ　圖えんがない。‖離縁・離婚・破鏡。

【不倦】フケン　倦のみならず、倦は、古は萬の十倍をいふ、數の甚だ多きをいふ。詩、大雅「爾之孫子、其麗ズーレー」

【不種】フシユ　おだやかならず、物騒フサウ「ーー當」

【不可】カ　然るべからず、善くない、あし。論、先進「顏淵死、門人欲二厚葬一之、子曰ーー」

【不可解】カカイ　合點がゆかぬ　わからず。

【不可抗力】フカカウリヨク　人の力にて防ぎきれざる故障、暴風・海嘯・地震など。

【不可思議】フカシギ　ふしぎ、思ひはかられず。法苑珠林「佛變化無量、三昧力ーー」

【不可能】フカノウ　人力にて出來ず、能く爲すべからず。

【不孝】フカウ　子たる道をつくさず。孝經、五刑章「子曰、五刑之屬三千、而罪莫レ大二於ーー一」孟、離婁「匡章通國皆稱ーー一焉」

【不孝有レ三】フカウニサンアリ　父母に不孝なる三つの事。孟、離婁「ーー、無レ後爲レ大」朱注「於レ禮不孝者有二三事一、阿意曲從、陷二親於不義一也、家貧親老、不レ爲二祿仕一也、不レ娶無レ子、絕二先祖祀一也、三者中無レ後爲レ大」五不孝參看。

【不肖】フセウ　承知せず、又ズとも讀む。隋書、柳述傳「尚書ーレー」

【不幸】フカウ　〇ふしあはせ（不仕合）不運。三不幸を見よ。〇死去する。論、雍也「ーー短命死矣」漢書、昭帝紀「有ーー一者、嗣以二中牢一」

【不悟】フゴ　つつしまず、悟は敬。左傳「以懲二ーー一」‖不敬。

【不慎】フシン　〇さとらず。世說「ーレー脚自屈」〇圖かくどがたしかならず、油斷してしくじる。

【不學無術】フガクブジユツ　學問も無く策略も無し、無學無能。宋史、寇準傳「張鄧謂レ準曰、霍光傳不レ可レ不レ讀、準即取二其傳一讀レ之、至ーー、笑曰、此誤公謂レ我矣」漢書、霍光傳に無を亡に作る、通ず。

【不恰好】フカツカウ　圖かっかうが惡し、形がみにくし。

【不合格】フガフカク　一定の格式に合はず。「試驗ーー」‖落第。

【不合理】フガフリ　ふりくつ、道理に合はず。

【不堪田】フカンデン　圖あれはてて耕作の出來ざる田。

【不刊之書】フカンノシヨ　けづられぬ書、永く傳はりて亡びざる良書。劉歆、答二揚雄一書「與二諸日月一ーー」‖不朽之書。

【不軌】フキ　法度を守らず、むほん。漢書、卜式傳「ーー之臣」

【不羞】フシユウ　〇正義に背く。〇圖みそかごと、まをとこ、姦通。

【不義富貴】フギノフウキ　不義にて得たる富貴。論、述而「子曰、飯二疏食一飲レ水、曲レ肱而枕レ之、樂亦在二其中一矣、不義而富且貴、於レ我如二浮雲一」

【不撓】フダウ　はちず。詩、大雅「倘ーレー二于屋漏一」

【不器】フキ　器は各其の用に適して相通ずる能はず、威德の士は、能はらざることなく、何れの用にも融通の利くをーーといふ。論、爲政「君子ーレー」

【不器用】フキヨウ　圖事をするに拙し、下手ぺ。

【不諱】フキ　〇君父の名の字をば忌み避けざるをいふ。禮、曲禮「臨レ文ーレー」〇直言して諫むる。疑獄「事正言ーレー、以危二身乎一」〇不レ可レ諱の咎、死をいふ、死は人の諱み避くる能はざるものなるが故。後漢書、荀悦傳「如有ーー一」

【不羈】フキ　つながれず、束縛すべからず、常規を以て律し難し。「磊落ーー」漢書、司馬遷傳「少負二ーー之才一」

【不朽】フキウ　くち亡びずして永く傳はる。左、襄二四「太上有レ立レ德、其次有レ立レ功、其次有レ立レ言、雖レ久不レ廢、此之謂二ーー一」

【不朽之勳】フキウノクン　後世までくちざるいさを。鄭亞文「威二諸侯一ーー一」

【不朽之盛事】フキウノセイジ　文章をいふ。典論「文章經國之大典、ーー」

【不規則】フキソク　圖きまりがない、規則立たず。‖不規律。

【不規律】フキリツ　きまりなし、規律なし。‖不規則・不紀律。

【不吉】フキツ　目出度からず。書、畢命「勝而ーレー」‖不祥。

【不歸客】フキクノ かへらぬ人、死せし人、鬼籍に入る人。＝不起人。
【不起人】フキノ ふたたび起たざる人、即ち死せし人。＝不歸客。
【不給】フキフ たらず。孟、告子「秋省レ斂而助レ——」＝不足。
【不急官】フキフノ さし急ぎて置かずともよき官職、さしあたり必要のなき官。漢書、昭帝紀「日者省レ用罷ニ——一」＝冗官
【不急之務】フキフノ いらざる事をせんぎだてする。荀、天論「無用之辯、——、棄而不レ治」
【不龜手之藥】フキシュノ 手にひび、あかぎれ（龜手）のきれぬくすり。莊、逍遙遊「宋人有下善爲ニ——一者上」
【不享】フキヤウ 享は貢獻、諸侯の朝貢せざる者。史、五帝紀「習ニ用干戈一、以征ニ——一ニ＝不共。
【不行儀】フギヤウ 行狀惡し、不作法。＝不行跡・不行狀。
【不行跡】フギヤウ 行狀がわるい、不行儀、不品行。
【不共】フキウ 共は供、朝廷に貢物を供奉せず、諸侯が天子の御機嫌うかがひをせず。左、哀十四「魋之一一、宋之賜也」＝不享・不庭。
【不興】フキヨウ 〇面白からず、興味なし。禮、學記「一レ一ニ其業一不レ能レ樂レ學」〇關機嫌惡し、立腹する。
【不具】フグ 〇そなはらず、かたは。晉書、荷生載記「生既有ニ目疾一、其所レ錄不足一一」＝畸形。〇書輪の経に書く語。＝不乙・不備・不宜。
【不慮】フリヨ 〇はからず、あてにせず、豫期せず。孟、離婁「一一之譽」〇思ひがけぬわざはひ、不測の禍。左、桓十七「備ニ其一一一ニ
【不遇】フグウ 時に遇はず、ふしあはせ（不仕合）不運。詩、邶風、柏舟序「仁人一一、小人在レ側」史、李廣傳「文帝曰、惜乎子一レ一レ時、如令ニ子當ニ高帝時一萬戸侯豈足レ道哉」＝不緣。
【不緣】フエン ふしあはせ、不幸にして時に遇はず。漢書、霍去病傳「誰宿將常困落一一」＝不遇。
【不俱戴天】フグタイテンノカタキ 俱に天をいただかざる君父のあだ、同じ天が下に生かして置かぬ義。曲禮「父之讐弗ニ與共戴一レ天」
【不屈】フクツ 〇屈せず、心をまげて屈伏せず、節を變せず。晉書、王長文傳「刺史知ニ其一一一、禮遣レ之」〇よわらぬ、中途にて挫けず「一一不撓」
【不君】フクン 君たる道を失ふ。左、宣二「晉靈公一一」論、類潤「君一レ一臣不レ臣」
【不羣】フグン 羣衆にすぐれて拔き出る。漢書、十三王傳「夫惟大雅卓爾一一、河間獻王近レ之矣」
【不快】フクワイ 〇心よからず。史、信陵君傳「行數里心一レ一」〇病にかかる。後漢書、華陀傳「體有ニ一一一」＝不例・不豫。
【不換紙幣】フクワンシヘイ 法律上の力により て發行し、本位貨幣と引換の規定なきさつ。＝不兌換紙幣。
【不敬】フケイ うやまひつつしまず、禮を缺く。禮記「祭不レ欲レ數、數則煩、煩則一一」
【不敬罪】フケイザイ 皇室に無禮せしつみ。
【不經】フケイ 常法に遵はざる義。左、襄二十六「與ニ其殺ニ不幸一、寧失ニ一一一ニ
【不經濟】フケイザイ むだが多い、儉約にならず。
【不孝】フカウ きとくなし、賢からず。＝不才。
【不稽】フケイ かんがへきはめず、よりどころ無し、たしかならず。＝無稽・荒誕
【不景氣】フケイキ 國世の中のけいきよからず、人氣が引き立たず、商業が衰へる。
【不繫之舟】フケイノフネ 〇つながざる舟、人間を超絶せし虛心平氣無念無想の心に喩ふ。莊、列禦寇「汎若ニ——一、虛而遨遊者也」〇轉じて飄泊して定めなきに喩ふ。
【不潔】フケツ きたなし、又、其の物。孟、離婁「四子掌ニ一一一、則人皆掩レ鼻而過レ之」四子は四旒、越國の美人。新論「一一在レ面、人皆恥レ之、一一在レ心人不ニ肯親一一」＝不淨。
【不結果】フケツクワ 國不出來、效果があがらず。＝不首尾。
【不便】フビン こころよく思はず。杜甫詩「旅懷殊一レ一」＝不快。
【不見識】フケンシキ 國見識がない、重みがない。
【不言之敎】フゲンノオシヘ 老莊の無爲自然の敎。老子「——、無爲之益、天下希レ及レ之」
【不言之花】フゲンノハナ ものいはぬ花、桃李をいふ。史、李廣傳「諺曰、桃李不レ言、下自成レ蹊」
【不幸】フコウ 辜なきもの。孟、公孫丑「行ニ一不義一、殺ニ一一一、而得ニ天下一、皆不レ爲也」＝無辜。
【不公平】フコウヘイ 公平ならず、えこひいき、公明正大ならず。＝偏頗。
【不穀】フコク 穀は善なり、不善の義、王侯などの謙稱。老子「侯王自稱ニ孤寡一一」
【不才】フサイ はたらきなし。左、成三「二國治レ我、臣一一不レ勝ニ其任一」
【不在】フザイ 留守。其の所に居らず。
【不相應】フサウオウ 國ふさはしからず、身分に相應せず。＝過分。
【不作】フサク 國さくもつが不出來。＝下作・凶作。
【不作法】フサホフ 國ぶしつけ、たちゐふるまひがしとやかならず。
【不參】フサン 國出向はぬ、まゐらぬ、缺席する「一一届」
【不二】フニ 二心にせず。荀子「精神相反、一而一レ一爲ニ聖人一」
【不二價】フニカ かけねを言はず。後漢書 韓康傳「賣ニ藥於長安ニ三十

年、――」孟、滕文公「市賈不レ貳」＝價同じ。

【不二法門】フニホフモン 圖佛教に八萬四千の法門あり、諸法門の上に在りて能く直ちに佛道を見ることを得るを――といふ。維摩經「文殊曰、善哉善哉、無レ有二文字言語一是眞――也」

【不死】シナ死なず「不老――」張九齡詩「吸レ精反二自然一、練レ氣求二――一」

【不死草】フシサウ りゅうのひげの異名、古名かますげ。＝麥門冬。

【不死之藥】フシノクスリ 飲めば死することなきくすり。史、封禪書「諸仙人及――皆在焉」

【不死之樹】フシノジュ 枯死することなき木。博物志「員丘上有二――一、食レ之乃壽」

【不次】シヲ 次第順序によらず、破格例外。漢書、東方朔傳「待以二――之位一」注「不レ拘二常次一言二超擢一也」

【不時】シジ ○時ならぬ。論、鄉黨「――不レ食」禮、月令「雨水――」○豫定せし時にあらず、臨時。赤壁賦「以待二子――之需一」

【不貲】フシ 計られざる程、資産の多き義。漢書、貨殖傳「家亦――」

【不齒】フシ 齒の列ぶる如く、人と列を同じくせず。ハシヲナラベズと訓むは非。左、隱十一「寡人若朝二於薛一、不下敢與二諸任一齒上」

【不仕合】フツカ 圖うんがわるい。＝不幸・不運。

【不思議】フシギ 圖いぶかし、思ひはかれず、不審。維摩經序「此來戲、皆――之本也」＝不可思議。

【不日】フジツ 日ならず、日數たたず、遠からず、やがて。詩、豳風「終風且曀、――有レ曀」註「大雅「庶民攻レ之、――成レ之」

【不悉】フシツ つくさず、手紙の末尾に書く語「草草――」＝不乙・不一。

【不實】フジツ ○親切なし、誠實ならず。左、文五「且華而不レ實、忽之所レ棄也」註「言過二其行一」○フジツ 禮、月令「――有レ曀」註「大雅「庶民攻レ之、――成レ之」

【不悉】フシツ つくさず、手紙の末尾に書く語「草草――」＝不乙・不一。

【不實】フジツ ○親切なし、誠實ならず。左、文五「且華而不レ實、忽之所レ棄也」註「言過二其行一」○フジツ 禮、月令「雨水――」○實定せし時にあらず、臨時。赤壁賦「以待二子――之需一」

【不貲】フシ 計られざる程、資産の多き義。漢書、貨殖傳「家亦――」

【不齒】フシ 齒の列ぶる如く、人と列を同じくせず。ハシヲナラベズと訓むは非。左、隱十一「寡人若朝二於薛一、不下敢與二諸任一齒上」

【不仕合】フツカ 圖うんがわるい。＝不幸・不運。

【不信】フシン まことなし、――用」禮、緇衣「下之事レ上也、身不レ正、言――則義不レ重」

【不信任】フシンニン 信用してまかし切れず、其の任に適せずと認める。

【不信之重數二其友一】フシンノヂウスウソノトモヲカサヌ 不信實の甚だしきものは、其の朋友を欺く。韓詩外傳「不仁之重、怨二其親一――」

【不審】フシン ○つきず、手紙の末尾に書く語「草草――」＝不悉。○富士山の異名。明一統志「富士山 旦三之――」

【不審】フシン ○つまびらかならず。戰國策「――王之聖孰二與堯一也」○圖あやし、うたがひ。

【不深切】フシンセツ 深切ならず、丁寧ならない、不實。＝不親切。

【不親切】フシンセツ 前條に同じ。

【不僧】フソ 草履の異名。丹鉛總錄「――、草鞋也、言二其假賤不レ須レ借也」

【不祥】フシヤウ めでたからず。孟、離婁「――之賓、蔽レ賢者當レ之」左、昭二五「無二――大焉一」＝不吉・不詳。

【不淨】フジヤウ ○けがれ。晉書、謝重傳「婦居二心――一」○圖「――說法」○圖淫慾、――行」○圖大小便、又、月經。

【不祥】フシヤウ ○つまびらかならず。＝不審。○不詳に同じ。易、大壯、彖傳「不レ能レ退、不レ能レ遂、――也」

【不精】フセイ 圖精を出さず、怠る、なげやり、物臭きレ

【不生不滅】フシヤウフメツ 圖生ずることもなく滅することもなし、眞如實相の存在にいふ。王巾、頭陀寺碑「親聽之外、若レ存若レ亡、心行之表、――」

【不生産】フセイ 利益を生ぜず、物を作り出す力なし、生產の計。

【不若】フジヤク ばけもの、妖怪、若は、順、不順の怪物。左、宣三「民入二川澤山林一、不レ逢二――一」

【不惜身命】フシヤクシンミヤウ 圖己の身命を惜まずして、佛道のために力を盡す。

【不納】フノフ 租稅を上納せず。

【不納租田】フノソデン 古、租稅を官に納めずして其の地の領主に與へし田。

【不淑】フシュク ○淑は善なり、善からず、德を失ふ義。詩、豳風「子之――」、云如二之何一」＝不善・不賢・不肖・不德。○人の死をいふ。禮記「如何――」○圖の亡ぶるをいふ。逸周書「王乃升二汾之阜一、以望二商邑一曰、嗚呼――」

【不熟】フジュク ○果物・五穀などがじゅくさず。禮、月令「麥乃――」○食物がよく煮えず、なまにえ。左、宣二「宰夫胹二熊蹯一――」○物事になれず、習熟せず。晉書、祭謨傳

「卿讀二爾雅一――、幾爲二勸學一死」＝未熟。○蹉しからず。○解決せず、不調。

【不恤緯】○機織を事とせる寡婦が、其の緯の少きを憂へずして、宗周の亡びんことを憂ふといふ故事。左、昭二四「鄭子大叔曰、抑人亦有レ言曰、嫠―――、而憂二宗周之隕一、爲レ將レ及焉」○轉じて、志士が身を忘れて國を憂ふる譬とす。○國 蒲生君平の著書の名。

【不受不施】圖日蓮宗の一派、文祿四年備前妙覺寺の僧日奥始めて之を唱ふ。

【不順】○長上の命にしたがはず、道理に順はず。史、武帝紀「天下有二――者一、黄帝從而征レ之」○常のとほりでなし「氣候――」

【不承知】圖承知せず、知らず、受け合はず。

【不承不承】圖不承知ながら、いやいやながら、已むを得ず。

【不如歸】杜鵑の異名、其の聲、不如歸去といふが如し、故にいふ。蜀王本紀「望帝淫二其臣鱉靈妻一、乃禪レ位亡去、時此鳥鳴、故蜀人見二杜鵑鳴一而悲二望帝一、其鳴如レ曰二――去一」

【不職】職務にたへず。漢書、賈誼傳「下官――」

【不食之地】開墾の出來ざる地。禮、檀弓「我死則擇二――一而葬レ我焉」

【不所存】圖むかんがへ。＝不心得。

【不隨】心のままならず、手足がしびれて自由ならず。「半身――」＝不仁。

【不隨意筋】心臟の筋肉の如く意思と關係なく運動する筋肉。

【不正】ただしからず。論、子路「身――、雖レ令不レ從」

【不齊】ひとしからず、そろはず。

【不成功】事をなし遂げず。

【不成人】○不具の人、かたは。○禮を知らざる人に嘲ふ。禮、禮器「禮也者、猶レ體也、體不レ備、君子謂二之――一」

【不成文律】不文法・不文律に同じ。

【不成立】圖なりたたず。＝不成功。

【不世出】めったに世に出でざる義にて極めて稀に有るにいふ。史、淮陰侯傳「功無レ二二於天下一、而略――者也」

【不整頓】きまりなし、物事が整はず。

【不肖】○人は天の生ずる所なり、故に天に似ざる義、人に加かざるをいふ。中庸「賢者過レ之、――者不レ及也」一説、父に似ざる不才者。史、五帝紀「堯知二子丹朱之――不一レ足レ授二天下一」○自己の謙稱。＝不佞。

【不肖之父】愚なる父。家語、七十二弟子解「冉雍生二於――一」

【不消化】食物のこなれあし。

【不屑】屑は潔、いさぎよしとせず、あきたらず。詩、鄘風「鬒髮如レ雲、――レ髢也」

【不屑之教誨】敎ふるをいさぎよしとせずして、敎へざることが、卻りて其の人の爲めに善き敎訓となるをいふ。孟、告子「敎亦多レ術矣、予―――也者、是亦敎二誨之一而已矣」

【不竊】ぬすまず。論、顔淵「苟子不レ欲、雖レ賞レ之――」

【不宣】書翰の終に書く語、宋代には目下への手紙には不具、目上には不備、朋友間には――を用ひたれども必ずしも拘せず「春渚紀聞」

【不染】そまらず、うつらず、けがれず。

【不然】○然りとせず。○命を用ひざる者。左、莊二四「征伐以討二其――一」

【與二不善人一居如レ入二鮑魚之肆一】惡人と同じく居るは鹽漬の魚を賣る店に入る如く、己の身も自然と臭氣に化する。家語、六本「與二善人一居、如レ入二芝蘭之室一、久而不レ聞二其香一、卽與レ之化矣、――久而不レ聞二其臭一、亦與レ之化矣、是以君子謹二其所二與處一」

【不足】○たらず、數に滿たず、とぼし。論、顔淵「百姓――、君孰與足」＝不給。○圖不滿足、不平の義とす。

【不測之淵】深さの知れぬふち、危險の地、又不安の所に喩ふ。史、袁盎傳「陛下從レ代乘二六乘傳一、馳二――一」

【不孫】へりくだらぬ、不遜に同じ。論、陽貨「惡二――以爲レ勇者一」

【不遜】從順ならずしておごり高ぶる。論、述而「奢則――、儉則固、與二其――一也寧固」

【不第】試驗に合格せず。唐書「其――、則習レ業如レ初」＝落第。

【不退轉】圖專念、佛を信じて心を他に散らさず。維摩經、佛國品「已能隨順轉不二退轉輪一」

【不道】道に背く。左、僖二「其爲二――一」

【不道德】道にそむきたる行。＝不德義。

【不撓】たわまず。蔡邕、橋太尉碑「有下百折――臨二大節一而不レ可レ奪之風上」

【不倒翁】玩具の一種、おきあがりこぼし。陔餘叢考「兒童嬉戲有二――一、糊レ紙作二醉漢狀一、虛二其中一而實二其底一、雖二按捺旋轉一不レ倒也」

【不導體】熱、又、電氣を傳へざる物體。

【不托】湯の中に餅を入れたるも

の、うどんの類。五代史、李茂貞傳「一日食レ粥、一日食二ーー一」

【不兌換紙幣】不換紙幣（四三頁三段）に同じ。

【不達】〇わからず、道理に通達せず。〇國とどかず「郵便物ーー」＝不着。

【不斷】〇たえず。隋書、突厥傳「重桑襲葉、子子孫孫乃至萬世ーレー」〇思ひ切りあし、ぐづぐづ「優柔ーー」〇國つねづね、平生、日常。「ーー著」

【不治】〇なほらぬ「ーーの難病」〇都合よくをさまらず。孟、離婁「治レ人ーレー反二其智一、禮レ人不レ答、反二其敬一」

【不知足】己の分に滿足することを知らず。遺教經「ーーー者、雖レ富而貧」

【不著】國つかず「荷物ーー」＝不達。

【不住】とどまらず。沈約文「不常ーー、非レ今非レ義」李白詩「兩岸猿聲啼ーレー」

【不忠】〇臣たる道を盡さず。〇人の爲めに眞心を盡さず。論、學而「爲レ人謀而ーレー乎」

【不注意】氣をつけぬ、をちど、手ぬかり。＝不用意。

【不通】〇とほらず、かよはず「音信ーー」漢書、孫寶傳「杜レ門ーレー二水火一」〇言語文字を解せず「言語ーー」論衡、別通「通人、猶二富人一、ーー者、猶二貧人一也、通人胸懷二百家之言一、ーー者、空腹無二一牒之誦一」

【不都合】國〇つがふがわるい、不便。〇ふらち、ふとどき。

【不束】國〇下品にして見苦し。〇ぶしつけ、不調法「ーー者」

【不弟】兄に從順ならず、弟・悌通ず。淮南子「孟秋之月、求二不孝ーー一」

【不悌】前條に同じ。

【不定】〇定まらず。莊、天地「神生ーー者道之所レ不レ載也」〇佛あてにならず、定めなし。法華經新註序「老少ーーー」

【不貞】操を守らず「ーーの妻」越絶書「街女ーー」

【不庭】朝廷に伺候せず、王庭に來朝せず。庭・廷通ず。左、隱十一「以二王命一討二ーー一」＝不共・不享・弗庭。

【不逞】〇逞は稱束なり、しめくくりなくわがまゝなるふるまひ、又、其の人。張衡、思玄賦「謀二九皋之介鳥一兮、怨二素意之ーー一」〇逞は快なり、ーーは滿足せざる義。左、隱十一「鬼神實ーレー二于許君一」

【不體裁】國體裁あし、みにくし、みつともない。

【不弔】〇天のあはれむ所とならず。詩、小雅「ーレー二昊天一」〇あはれみのなき義。左、襄十三「君子以レ呉爲二ーーー一」＝不仁。

【不調】國ととのはず、折合はぬ。「談判ーー」

【不調法】〇國ふつつか、拙し。〇そこつ、そさう。

【不調和】つりあひが惡い、相應せず、似合はず。

【不敵】〇敵對せぬ「莫二ーレー一」〇國敵を敵とも思はず、肝ふとく物を畏れず「大膽ーーー」

【不天】天の祐くる所とならず。左傳「孤ーー不レ能レ事レ君」

【不腆】腆の厚からざるをいふ、腆は厚なり、人に物を贈る謙辭。左、文十二「ーー敝器不レ足レ辭也」＝粗品・薄謝。

【不圖】思ひがけなし、はからざりき。論、述而「ーレー爲レ樂之至二於斯一也」

【不同】〇ふそろひ「次第ーー」〇おなじからず。

【不登】五穀みのらず。孟子「比年ーレー」

【不動】〇動かず、動かさず。孟、公孫丑「我四十ーレー心」〇佛不動尊の略。

【不動產】土地又、家屋の如く、存在の場所を變動せざる財產。動產の對。

【不動尊】佛明王の一、略して不動ともいひ、又、大聖威怒王ともいふ、顏の相貌獰惡にして右手に降魔の劍を持し、左手に縛の繩を握り、背に火焔を負ひ、左右に制吒迦・矜羯羅の二童子を侍せしむ。よく一切の障礙煩惱を降伏すといふ。

【不透明】光がすきとほらず。

【不德】〇道德に背く、德がない。史、始皇紀「以二重吾ーー一也」〇恩にかけぬ。＝無二德色一

【不得意】國へた、不得手。

【不得要領】主要とする旨を得ず、うやむや。漢書、張騫傳「不レ能レ得二月氏要領一」

【不德義】義理人情にそむく、又、其の行。

【不得策】爲めにならぬはかりごと、ふため。

【不居】國心が到らず、不都合・不法に同じ。

【不認可】〇ゆるさず、認可せず。〇ゆるされず、認可とならず。

【不如意】〇意の如くならず、心に思ふやうにならず。魏志、曹爽傳「萬一有レーレー」〇國まづし、不足がち、貧乏。

【不佞】〇口才なし。論、公冶長「雍也仁而ーレー」〇はたらきなし、不才、自己の謙稱。左、昭二十「寡人ーー」沈成大詩「ーー願秉レ筆、遠繼二峽口碑一」

【不寧】やすらかならず。禮、月令「遑覺ーレー、土地分裂」

【不能】フノウ　〇才智なし、にぶし。論、子張「嘉レ善而矜二不一一」論、泰伯「以レ能問二於一一」〇力に能はぬ、へた。
【不伐】フバツ　功に誇らず。論、　也「孟之反一レ一」
【不抜】フバツ　ぬきとられず、堅くしてうごかず。老子「善建者一レ一、善抱者不レ脱」易、乾卦「確乎其不レ可レ拔」宋史、宗室世系表「磐奕維持、以成二一一之基一」
【不法】フハフ　法度にそむく「一一行爲」管子「法一レ一、則令不レ行」
【不法行爲】フハフカウヰ　故意又は過ちて他人の權利を侵し損害を生ぜしめたる行爲。
【不備】フビ　〇完備せず、そなはらず。〇そなへをせず、防備せず。〇書簡文の終に書く語。言類雜記「宋人書簡以レ登與レ卑曰二不具一、以レ卑上レ尊曰二一一、朋友交馳曰二不宣一、見二東軒筆錄一、今人多不レ辨、然三字分別殊亦未レ解」＝不具・不悉・不盡。
【不必要】フヒツエウ　いり用がない。＝不用。
【不敏】フビン　さとくなし、おろか。論、顏淵「回雖二一一一、請事二斯語一矣」＝不才。
【不武】フブ　武道の心得なし「不文一一」
【不服】フフク　從はず、得心せず。論、季氏「遠人一レ一」
【不文】フブン　〇文を書くせず、文章が下手へ＝拙文。〇文に書きあらはさず「一一律」
【不文法】フブンパフ　文字に書きあらはさざる法律、古來の習慣等にて法律上の效力を生ずるもの。＝不文律・不成文律。
【不文律】フブンリツ　前條に同じ。
【不平】フヘイ　心たひらかならず、不滿足に思ふ。莊、列禦寇「以二一一一平二其平一也一一」韓愈、送二孟東野一序「大凡物不レ得二其平一則鳴」
【不平均】フヘイキン　平均ならず、ひとしからず。
【不便】フベン　〇たよりあし、便利でない。荀、議兵「汝所レ謂便者、一一之便也」〇國ビンあはれ。＝憫然ビンゼン
【不變】フヘン　かはらず。尹文子「一一之法、君臣上下是也」＝不易。
【不偏不黨】フヘンフタウ　かたよらず與くみせず。＝中正。
【不凡】フボン　なみなみならず、尋常ならず。晉書、沈南先賢傳「足下有二一一子一」＝非凡・非常。
【不犯】フボン　國女をおかさず、僧侶が邪淫戒を犯さざること。
【不本意】フホンイ　國本心にかなはず、氣に向かず、心ならず。
【不磨】フマ　すりきれぬ、絶滅せず「千古一一」＝不朽。
【不昧】フマイ　くらからず、心が聰明なる義。
【不毛】フマウ　五穀・草木の生ずるは、身體に毛を生ずるが如し、故に一一は、穀草の生ぜざるやせちの義とす。公羊、宣十二「君如矜二此喪人一、錫二之一一之地一」＝磽确カウカク
【不滿】フマン　圓滿に入らず、心に滿足せず。＝不平・不滿足。
【不滿足】フマンゾク　前條に同じ。
【不眠】フミン　ねむられず「一一症」列、周穆王「其民常覺而一レ一」後漢書、第五倫傳「終夕一レ一」
【不明】フメイ　〇あきらかならず、道理にくらし、おろか。〇はつきりとせぬ。＝不分明。
【不明亮】フメイリャウ　明かならず。
【不明瞭】フメイレウ　明かならず。＝不分明。
【不名譽】フメイヨ　名譽を汚す、なをれ（名折）
【不滅】フメツ　ほろびず、盡きず「靈魂一一」＝不朽・不磨。
【不面目】フメンボク　國不名譽に同じ。
【不問】フモン　とはず、罪を見のがす、追窮せず。
【不揚】フヤウ　あがらず、容貌の醜きをいふ。左、昭二八「今子少一レ一、子若無レ言、吾幾失レ子矣」＝不揚。
【不夜侯】フヤコウ　茶の異名、多く飲めば眠られざるが故。胡嶠、飲茶詩「沾レ牙舊姓餘甘氏、破レ睡須レ封二一一一」
【不夜城】フヤジャウ　〇昔、東萊郡に在りし城。夜間に日出でたりと傳ふ〔三齊略記〕〇夜も晝の如くに明かなる城。雪月の夜、又は遊里などの燈火明かなる形容とす。蘇頲詩「帝畿平野外、火樹一一一」
【不渝】フユ　かはらず。詩、鄭風「舍レ命一レ一」＝不變。
【不豫】フヨ　〇よろこばず、心よからず。豫は悦。孟、梁惠王「吾王一レ一」〇病。書、金縢「王有レ疾弗レ豫」豫・不同じ。〇あらかじめせず。中庸「一レ一則廢」
【不豫色】フヨショク　よろこばざる顏色。孟、公孫丑「夫子若レ有二一一一一然」
【不用】フヨウ　用に立たぬ、いりようがない。孫子、始計「兵、詭道也、故能而示二之不能一、用而示二之一一一」
【不用意】フヨウイ　國氣をつけず、てまはしが惡し。＝不注意。
【不用心】フヨウジン　國ようじんがわるい、警戒を怠る。
【不老不死】フラウフシ　老いず死なず。列、湯問「珠玕之樹皆叢生、華實皆有二滋味一、食レ之皆一一一一」
【不埒】フラチ　國法に從はず、埒外ラチグワイ即ち境界外に踏み出す。＝不法・不屆。
【不利】フリ　〇ふため、利益なし。孟子「我將レ言二其一一一也」〇ブリ戰にまける、勝利を得ず。
【不履行】フリカウ　約束をふみおこなはず。
【不律】フリツ　〇筆の異名、不律の合音は筆なり。爾雅、釋器「一一謂二之筆一」注「蜀人呼レ筆爲二一一一也」語之變轉」〇おきてを守らざる者。宋書「爲二之以罰一一一」

【不立文字】モジ 禅道は心を以て悟るべし、故に文字を立てず。宗鏡「達磨以レ心傳レ心、——」

【不倫】フリン 〇人倫にそむく。〇類を同じうせず。

【不良】フリョウ よからず。礼、月令「毋レ或ニ——一、百工咸理」

【不慮】フリョ 〇思ひがけなし。「——の災難」〇思ふことなし。孟、盡心「所ニレ——一而知一者、其良知也」

【不善】フゼン 善からず、類は善。書、元帝紀「抗ニ明威一以懐ニ——一」‖不良・不善。

【不例】フレイ 〇常と違る、常ならず。〇圏やむ、病氣。

【不了】フリョウ 〇すまず、終らず。晉書、庾純傳「宿小市井事ニレ、是以來後」〇さとらず、了解せず。南史、蔡撙傳「武帝曰、卿殊ニレ——一事」

【不甘願】フカンガン 圏よからぬかんがへ。料かぬばざる義。‖不意見。

【不漁】フリョウ 圏しけ、魚がとれず。‖不漁。

【不慣】フカン 慣やすからず、ねだんが高い。

【不孝】フコウ 〇其の体躯を受け終へざる義、士の死にいふ。禮、曲禮「士曰ニ——一」疏「士縗以代レ耕、——不レ終ニ其縁一也」〇大夫のわかじに。禮、曲禮「壽考曰レ卒、短折曰ニ——一」〇諸侯の死を他國に告ぐる時の謙辭「禮記」

【不和】フワ むつましからず、なかたがひ「家内——」論、子路「小人同而——レ」〇静かに止まるに喩ふ。雑南子「止如ニ——一」「疾如ニ風雷一」

【不悪】フオク 〇知ること明かにしてまどはず。論、子罕「知者——レ」〇四十歳、論、爲政「三十而立、四十而——レ」

【丙】ヘイ メン 銑

〇まがき、籬を遮くる短牆。〇おほふ(蔽)ふさぐ(塞)見えず。

参考 丙とは別字、河・阿等之に從ふ。

【与】 四 書

與(白部八畫)に同じ。

【丘】キウ ク 尤

〇をか、四方が高く中央のくぼめるをか(阜)陵よりは小なるをか。〇むら、田里、四邑卽ち百二十八家より成るむら。漢書、刑法志「四井爲邑、四邑爲ニ——一、十六井也」〇むなし(空)〇大いなり。〇たかし(高)〇あつまる(聚)〇三——は蓬萊・方丈・方壺の三山。〇比——には倚。

同訓異義 丘・岡・阜・陵〇丘は四方高く中央下がきをいふ、孔子の諱を丘といふ。家語「生而首上圩故因名曰レ丘」とあり、圩は平かにして中の少しくくぼみたる義。博雅には、小陵を丘といふ。韓愈文「某水某丘、吾嘗子時、所ニ釣遊一也」〇岡は說文に山脊なり。詩、周南「陟ニ彼高岡一」岡は俗字。〇阜は卑雅釋地に、大陸を阜といふ。說文に、山の石無きもの、釋名に、土山を阜といふ、高原を言ふなり。詩、小雅「如レ山如レ阜」〇陵は爾雅、釋地に、大阜を陵といふ、山の漸次に低くなりて登り易きものをいふ。書、堯典「蕩蕩レ山襄レ陵」

【丘墓】キウボ はか、おくつき、墓所。潘岳、楊荊州誄「退守ニ——一、杜レ門不レ出」‖丘隴・丘墓・丘家・丘墳。

【丘岡】キウカウ をか。‖丘阜・丘陵。

【丘壑】キウガク をかと谷と、隱者の棲息する處。晉書、簡文帝紀「棲ニ遲——一」謝靈運詩「昔余遊ニ京華一、未ニ嘗廢ニ——一」

【丘嫂】キウサウ 丘は大、長兄の妻、第一のあによめ。漢書、楚元王傳「爲ニ嫂微時、嘗與ニ賓客一過ニ其——一食」‖長嫂。

【丘索】キウサク 古書の名、八索九丘の略。耶律楚材詩「琴書潘相對、尚未レ忘ニ——一」

【丘山】キウザン 〇をかと山と。莊子「——積レ卑而爲レ高、江河合レ水而爲レ大」〇物の多くあるに喩ふ。史、張儀傳、秦虎賁之士、百餘萬、積粟如ニ——一」〇靜かに止まるに喩ふ。雑南子「止如ニ——一」「疾如ニ風雷一」

【丘冢】キウチョウ をかの如く築けるつか。梅堯臣詩「赤松不レ見天地長、黄石共葬ニ——一荒」‖丘墓・丘塋。

【丘墓】キウボ 前條に同じ。雑南子「河上之ニ——一不レ可ニ勝數一」

【丘亭】キウテイ 丘は空、あきや、空屋。漢書、息夫躬傳「來レ有ニ第宅一寄ニ居ニ——一」‖空亭。

【丘先】キウセン 神を祭る壇域。漢家周書「設ニ——一於南郊一以祀ニ上帝一配ニ后稷一」

【丘首】キウシュ 狐は平生丘陵に住む、故に死に臨み、首を丘に向くるは、其の本を忘れざるなり、本に倚き、初を忘るるは、仁者の心にあらざるに喩ふ。禮、檀弓「古之人有レ言曰、狐死正ニ——一、仁也」‖首レ丘

【丘之禱久】キウノトウヒサシ 丘は孔子の名、吾は罪を天地の神祇に獲ざらんとて、平生より禱ること已に久しと。論、述而

【丘阜】キウフ をか、こやま。雑南子「夫大生レ小、多生レ少、天之道也、故ニ——一不レ能レ生ニ震雨一、滓水不レ能レ生ニ鮫龍一者小也」‖丘陵。

【丘墳】キウフン 一丘卽ち百二十八家の民より出す祝にて、馬一匹・牛三頭を賦す、鄭の子產に始まる。

【丘墳】キウフン 〇つか、墓所。‖丘墓・丘塋。

〇古書をいふ。九丘と三墳と。梁書、昭明太子傳「通讀二墳典一、曁二極一一」

【丘墓】はか。おくつき。漢書、司馬遷傳「亦何面目、復上二父母之一一乎」

【丘木】墓の上に生じたる木。曲禮「爲二宮室一、不レ斬二于一一」‖丘樹・喬木。

【丘民】田里の野人。孟、盡心「民爲レ貴、社稷次レ之、君爲レ輕、是故得二乎一一一而爲二天子一、得二乎天子一爲二諸侯一、得二乎諸侯一爲二大夫一」

【丘里之言】里俗の言をいふ。里は五鄰、即ち二十五家。莊、則陽「何謂二一一一、曰、丘里者、合二十姓百名一以爲二風俗一也」‖俚言・鄙諺・丘言。

【丘陵】をか。曲禮「從二長者一而上二一一一、則必鄉二長者所一レ視」‖丘阜・岡陵。

【丘墟】つか（塚）部は地の高所、陽に同じ。禮、月令「壁一一之大小高卑」柳宗元、與二許京兆一書、阜隸庶幾皆得レ上二父母一一一」‖丘陽。

【且】

㊀シャ　㊁ショ・ソ　㊂ショ・ソ　㊃ソ

虞　魚　遇　馬

㊀かつ、其の上に。詩、唐風「彼其之子、碩大一篤」〇ながら、つつ。韓愈、送二李愿歸二盤谷一序「飲一食兮」〇まづ（先）しばらく（姑）未定の意をあらはす。詩、唐風「一以喜樂、一以永日」〇よし、たとへ、假設の辭、また、はた、すら。〇それでも矢張り、然るになほ。韓愈、進學解「行雖二修而不一レ顯二於衆一、猶一月費俸錢一」〇まさに…す（先づ…と讀み、…と返し讀む）將に同じ。戰國策「城一抜矣」〇かりそめ「苟一」〇と（與）〇これ、ここに（此）〇ほとんど（幾）㊁次且は、しさる貌、進まず。‖趙趄。〇しく（薦）〇祭に牲を載する臺、まないた、俎の古字。〇多き貌。詩、大雅「遹追來孝」〇陰暦、六月の異名。㊂へだつ（阻）〇悲護の貌。詩、周頌「有二嚳有一」㊃ゆく（往）‖徂。

【世】

㊀セイ・セ　㊁セイ

廣　本、世に作る、古文は古字

㊀よ。詩、大雅「本支百一」‖代。よよ、代代。詩、大雅「一執二其功一」〇人の世、この世、人間。論、微子「豈若二從一辟一之士一哉」〇人の一生涯。〇とき（時）時節、又時勢。史、屈原傳「能與一推移一」〇とし（歳）〇一王朝の時代。〇三十年を一一とす。論、子路「如有二王者一必一而後仁」〇父子相繼ぐを一一とす。孟、離婁「君子之澤、五一而斬」〇一つの血統、家門「家一」㊁うまる。列、天瑞「人自一一之老」‖生。

【世運】世の氣運、世のまはり合せ、時世の變遷。班彪、王命論「値二帝王之一一一」

【世襲時期】世の中のきづな、わづらひ。文選「率一一一」

【世綫】世の中のゆかり。戴叔倫詩「青山滯二一一一」‖俗緣・塵緣。

【世家】〇世世祿をうくる家。孟、滕文公「仲子齊之一一也」‖世族。世門、世胄。〇史記に諸侯王の事を紀するを一一といふ、開國の時より世世相續く意、本紀と其の體を同じくす。

【世紀】〇百年、百年間。〇西曆にて紀元元年より前後に百年づつに區分して算する年數の稱。

【世規】世ののり、世間の法度。列士傳「執レ義可二以爲一一一」

【世及】世襲に同じ。後漢書、二十八將傳贊「朝有二一一之私一」

【世系】ちすぢ、世世相續の血統。唐書、李多祚傳「其先歸義長、徙入二中國一一一遷遠」‖系統・世統。

【世卿】代代繼ぎ來りし卿大夫、春秋の時、此の制行はる。

【世數】世の中のをしへ、社會の風教。漢書、今吾子藍察二學於一一」矣」

【世子】諸侯の嫡子。古は天子のよつぎ（太子）の義にも用ふ、世世絕えざることを欲するの義。孟、滕文公「滕文公爲一一一」

【世紀】よに傳へ行ふまつり。任昉文「遠協二神期一、用彰一一一」

【世事】世の中の事がら。王維詩「一一浮雲何足レ問、不レ如高臥且加レ餐」

【世雄】先代よりのかたき。宋史、李綱臣傳「金人一一、無二可レ和之義一」

【世襲】父子うけつぎて代代に傳へる、襲は受。一一財產」漢書、武帝紀「一一一舒士」‖世及。

【世襲財產】國華族の家にて宮内省の認可を得て永く子孫に傳ふる身代。

【世臣】代代其の國に仕ふる家臣。孟、梁惠王「所謂故國者、非レ謂レ有二喬木一之謂也、有二一一一之謂也」

【世情】世のありさま、人情、世態人情。陶潛詩「林園無一一一」

【世儒】世に數ひ迎へらるる儒者。曹植詩「君子通二大道一、無レ煩レ惑二一一一」

【世綱】世の中のきづな。魏志、陳思王植傳、注「羈ニ絆於一一、維ニ繫於祿位ニ」＝世累・世網。

【世世】よよ。累代。史、鄭當傳「與ニ諸侯ニ剖レ符、一一勿レ絕」＝代代。

【世笑】世間のものわらひ。阮瑀文「三夫不レ顧、終爲ニ一一ニ」

【世態】世の中のありさま。故事成語考「可レ厭者一一炎涼」趙抃詩「一一人情冷如レ水」＝世情。

【世智】〇世才に同じ。商子「閉ニ塞一一、則巧有レ餘」〇（佛）世わたりのちゑ。

【世胄】世世祿を受け繼ぐ家、又、其のあとつぎ。胄はそうりやう。徐陵書「三秦一一、六輔良家」＝世家。

【世嫡】親の家をつぐべき男子。北史、李彪傳「恢學ニ儒術、以訓ニ一一ニ」＝嫡嗣・家嫡。

【世途】世の中、世に處する道、世渡りの險夷あるを道路に比していふ。李白詩「一一多ニ翻覆ニ」＝世路。途一に塗に作る。魏氏春秋「處ニ身世塗ニ」

【世塗】前條に同じ。

【世統】代代うけつぎし血統。宋書、禮志「尊ニ祀一一、以昭ニ功德ニ」＝世系。

【世念】世の中のおもひ。陸游詩「一一堅頑似ニ火牛ニ」

【世範】書名、三卷、宋の袁采著す、睦親・處己・治家の三門に分ち、立身處世の道を說くこと懇切なり。

【世父】父の兄、をぢ。爾雅「父之昆弟、先生爲ニ一一、後生爲ニ叔父ニ」＝伯父。

【世紛】世の中のもつれ、うき世のごたごた。朱熹詩「爲レ客厭ニ城市、還レ家辭ニ一一ニ」

【世標】世のてほん、世のかゞみ。江淹、横超墓銘「行爲ニ一一ニ」＝世範。

【世變】世の變遷、轉變。畢命「一一風移、四方無レ虞、予一人以寧ニ」

【世母】父の兄（伯父）の妻、をば。爾雅「父之兄妻、曰ニ一一ニ」＝伯母。

【世網】世の中のきづな、世の中の係累。陸機詩「一一嬰ニ吾身ニ」＝世綱・世累。

【世味】うき世のあぢはひ、人の嗜ひ趨く聲色貨利の類をいふ、世態人情。陸游詩「一一年來薄似レ紗」

【世務】この世のつとめ。隋書、柳莊傳「江南人有ニ學業ニ者、多不レ習ニ一一ニ、習ニ一一ニ者、又無ニ學業ニ」鹽鐵論「孟子守ニ舊術ニ不レ知ニ一一ニ」＝時務。

【世史】代代史となる資格ある者。漢書「好用ニ一一子孫、新進年少者ニ」

【世累】世の中のわづらひ。白居易詩「野情遺ニ一一ニ」＝俗累。

【世路】世の中、又、世に處してゆく道。南史「異端將レ盡、一一方夷」＝世途。

【世祿】祿を世世にする、子子孫孫に傳ふるふち、世襲の家祿。孟、梁惠王「耕者九一、仕者一一」

【世論】世間のぎろん、世人の物議。

【世界】〇よのなか、世間、宇宙、天地。〇（佛）過去・現在・未來の三世を世といひ、東西南北上下を界といふ。楞嚴經「世爲ニ遷流、界爲ニ方位ニ」〇同種族の一むれ「動物一一」〇一區劃を成せる所。楊萬里詩「荷花一一柳絲鄉」

【世界主義】世界の平和發達を以て標準となし、一國一地方に偏せざるもの。

【世外】〇浮世を離れたる淸らかなる地。＝仙境・別天地。〇うき世を遁れて高尙にくらすこと。

【世閒】人世。史、淮南王傳「人生ニ一一、安能邑邑如レ此」

【世故】世間一切の事故。列、楊朱「家累ニ萬金ニ不レ治ニ世故ニ、放ニ意所レ好」

【世才】社會の事情に通ぜる才、處世上のはたらき。＝世智・俗才。

【世辭】（國）人の氣に入るやうにいふことば、愛想のよき言葉。

【世人】世間の人、世の中の人。張謂、題ニ長安主人壁ニ「一一結レ交須ニ黃金ニ、黃金不レ多交不レ深」

【世上】よ、よの中。＝世間。

【世說】書名、劉宋の臨川王劉義慶撰す、三卷、漢晉間の名士の言行を集め、分ちて三十八門とす。梁の劉孝標の註あり。

【世染】世の中のけがれ、うきよの俗事。[illegible]「[illegible]一一、坐對ニ天涯ニ」＝世塵・俗塵。

【世俗】よのなか、世のならはし、俗は習俗。孟、梁惠王「寡人非ニ能好ニ先王之樂ニ也、直好ニ一一之樂ニ耳」

【世尊】（佛）釋迦牟尼佛の尊稱、世間、出世間の人皆尊ぶ義。金剛經新註「一一者智超ニ過三界ニ」五燈會元「一一在ニ靈山會上ニ拈レ華示レ衆、是時衆皆默然、惟迦葉尊者破顏微笑」

【世尊寺流】（國）藤原行成の書風。

【世帶】（國）所帶の訛、一身に帶ぶるところの財產、轉じて一家のくらし。＝家計・生計。

【世道人心】世の中の條理と人の心事と。＝風敎。

【世評】世間のうはさ、世上の評判。

【世話】〇（國）世の中のうはさ、世間の評判。＝世評・風說。〇とりもつ、力を添へる、又其のこと。＝周旋・斡旋。〇世間の出來事「一一狂言」

【辟ニ世金馬門ニ】世のうるさき事を朝廷の上に在りて避ける。前

漢の東方朔の故事。史、滑稽傳「避レ世金馬門、隱二於俗一、——、宮殿中可二以避一レ世全レ身、何必二深山之中、蒿廬之下一」

【辟レ世】サク 世を逃れ隱れる。辟は避。論、憲問「賢者辟レ世、其次辟レ色、其次辟レ言」

【遯レ世】コウ 前條に同じ。

【棄レ世】スウ 世をすてて、人間の事に預らず。莊、達生「夫欲レ免レ爲レ形者、莫レ如レ棄レ世」

【遯世】トンセ 世のうるさき事を避けのがれる。易、乾卦文言「——レ悶」＝遁世。

【下レ世】ゲセ 世代の數を古ふ。左、宣三「王孫滿曰、——レ三十、小年七百、天所レ命也」

【與レ世推移】ヨセイスイイ 世の中の成り行きにまかせて移る。莊、漁父「聖人者不レ厭二於世一、不レ逆二於物一、——」＝與レ世沈浮。

【與レ世俯仰】フギョウ 世人と倶に浮沈してさからはざる義。宋史、米芾傳「芾爲レ文奇崛、特妙二于翰墨一、因不レ能二——一」

【處レ世若二大夢一】ショセジャクダイム 浮世に在るは夢の如し。李白、春日醉起言レ志「——、胡爲勞二其生一」

【卽レ世】ソクセ 死する義、一世を終ふ。國語「閒閒——」

【世亂識二忠臣一】セランニチュウシンヲ 世亂れて、人の節義が見はれる、故に始めて忠臣たることを知る。唐書、崔圓傳「帝省レ書泣下曰、——、卽日拜二中書侍郎一」老子「國家昏亂有二忠信一」

【世濟二其美一】セイセイノビヲス 後代の人が前代の人の美を成すをいふ。左、文十八「——、不レ隕二其名一」

【世篤二忠貞一】セトクチュウテイ 代代篤く忠貞の道を行ふ。書、君牙「惟乃祖乃父、——、服二勞王家一」

【世】

世(前條)に同じ。

【丕】

ヒ 支

○大いなり。○はじめ、もと、(元)○うく(奉)漢書、郊祀志「二天之大律一」

【丕基】ヒキ 大いなる帝王のもとゐ。丕を見よ。＝鴻基・丕丕基。

【丕訓】ヒクン 大いなるをしへ。書、君陳「爾惟弘二周公一一」

【丕業】ヒギョウ 大いなるわざ。史、司馬相如傳「天下之壯觀、王者之一一」＝丕構・丕烈・洪業・偉業。

【丕顯】ヒケン 大いに明か。書、君牙「一一哉、文王謨」

【丕顯德】ヒケントク 大いに明かなる德。書、洛誥「公稱二——一」

【丕構】ヒコウ 丕業に同じ。

【丕子】ヒシ 天子の嫡子。書、金縢「是有二一一之責于天一」＝元子・太子。

【丕緒】ヒショ 大いなるいさを。宋史、一一啓二宗祐一」＝丕緖。

【丕緖】ヒセツ 大いなるいさを。書、大禹謨「嘉二乃一一一」＝大功・丕緒。

【丕闡】ヒセン 大いにあらはれる。宋史「聖明一一、輪奐一新」

【丕祚】ヒソ 天子のくらゐ。李商隱詩「一一始無窮」＝寶祚。

【丕祉】ヒチ 大いなるさいはひ。東晳文「陽堦二爾慶一以介二一一」

【丕圖】ヒト 大いなるはかりごと。元史「敍撰二一一一」

【丕丕】ヒヒ 大いなる貌。書、立政「受二此一一基一」

【丕烈】ヒレツ 大いなるいさを。後漢書、馮衍傳「衍上書陳二八事一、其一曰、顯二文德一、其二曰、興二一一一」書經の「丕承哉、武王烈」に本づく。

【丙】

ヘイ 梗

○ひのえ、十干の第三位、方位にては南、五行にては火に配す。爾雅、釋天「太歲在二一一一、曰二柔兆一」○あきらか(光明)○魚の尾(爾雅)

【丙魏】ヘイギ 漢の宣帝の名臣、丙吉と魏相と。

【丙吉牛喘】ヘイキツゼン 漢の名相丙吉が牛の喘ぐを見て、時氣の調和を失するを思ひし故事。漢書、丙吉傳「吉出、逢二清道死傷一不レ問、逢二人逐レ牛、牛喘吐レ舌、使二騎問一逐レ牛行幾里一」

【丙科】ヘイカ 試驗の成績の第三等。史、張蒼傳「乃中二一一一」

【丙午丁未】ヘイゴテイビ ひのえうまの年と、ひのとひつじの年と、此の兩年を厄年として忌む。容齋五筆「——之說、中國遇レ此輒有二變故一、非二胡生二於內一、則夷狄外侮」

【付二丙丁一】フヘイテイ 火中に投じて燒き棄てる、丙丁は五行にて火に配す、故にいふ。王守仁、復二童克剛一書「會同志諸友、共——、爲二克剛一焚二此醜障一」＝付レ火。

【丙部】ヘイブ 子類の書をいふ。唐書、藝文志「玄宗開都各緊二書四部一、皆令以二甲乙丙丁一爲レ號、以列二經史子集四庫一」とあるに本づく。

【丙夜】ヘイヤ 夜の十二時、子の刻。唐書、循吏傳「——不レ安レ枕」五夜(八六五三頁)を見よ。＝三更。

【丞】

五 畫

(一)ショウ・ジョウ (二)ジョウ 蒸 遵

(一)たすけ、たすく(輔佐)長官のたすけ、そへ(副貳)府一は府尹の次官、縣一は知縣の次官。○うく、承に通ず。史、張湯傳「於是一上指」○つぐ(繼)○すすむ、進む貌、丞に通

す。㊁すくふ（救）拯に通ず。【丞掾】ジョウエン　丞と掾と、共に長官の屬僚ジンリョウ。【丞史】ジョウシ　丞と史と、共に長官の屬僚ジンリョウ。【丞相】ジョウショウ　天子を助けて政を行ふ最高の官、相も助。史、漢紀「惟武王二年、初置二一一一一」＝宰相。【丞丞】ジョウジョウ　連なる貌。史、五帝紀「一一父不レ格レ姦」＝烝烝・蒸蒸。

七畫

【並】 ヘイ　竝（立部五畫）に同じ。

一部

【一】 コン　シ　眞　元

〇すすむ（進）〇しりぞく（退）〇上下通ずる。

一畫

【丩】 キウ　尤

〇まじはる（交）〇まとふ、糾と通ず。〇つらなる（連）〇めぐる（繞）瓜・藤などが他物にまきつきて上がる。〇はびこる（蔓延）

二畫

【丫】 ア　麻　丁とは別字

〇また（又）〇物の先の分れて上に出るもの、草木の枝の如き類。〇きのまた（岐枝）〇あげまき、つのがみ。＝總角。【丫丫】アア　あげまきの貌。馬融「廣成頌」「江南女兒年十五、兩髻一一面粉光」【丫髻】アクヮン　あげまきに結びたる髪。婢、又は幼女の稱とす。類聚「一一少女、垂髮小婢也」＝丫鬟・丫頭・鬟髻。【丫鬟】アクヮン　前條に同じ。歐陽修、憎二蒼蠅一賦「徒使二蒼頭一一巨扇揮」＝丫髻・丫頭は奴僕。【丫頭】アトウ　年少きあげまきの侍女。蝦蟇詩「吳中呼二女子之賤者一曰一一」劉禹錫寄二鄰小妓一詩「花面一一十三四、春來神約向レ人時」

三畫

【个】 ㊀カ・コ　㊁カイ　箇　哿

㊀箇・個に同じ、物の數にいふ、枚なり。史、貨殖傳「竹竿萬一一」〇つつむ（包）〇一一はひとり。＝一人。〇ひさし（母屋の四面にある勞舍）禮、月令「季春居二右一一」㊁介に通ず。大學「若有二一一臣」

三畫

【中】 ㊀チュウ　東　㊁チュウ　送

㊀なか、うち（内）内部、外の對。〇まんなか、中央、四方の正中。〇なかば（半）ともゆう。〇こころ（心）史、樂書「情動於一」〇あづかる（關與）〇兩者の中間に居る、又、賢愚強弱の中間に在る「一人」〇ひとし（均）〇よろし（宜）〇ただし（正）かたよらざる正しき德。中庸「一者天下之大本也」〇天地の正しき氣。左、成十三「民受二天地之一一以生」〇たひらか（平）〇なる、たひらぐ（成）〇みつ（滿）〇なほし（直）禮、玉藻「頭頸必一一」㊁あたる、あつ、豫言どほりになる、的にあたる「百發百一」〇適合する、氣に合ふ、心にかなふ。左、定元「未嘗不一吾志也」〇試驗に合格する。北齊書、方伎傳「武成親試之、皆一一」〇あたりて傷ふ「一暑」「一風」〇應ずる。禮、月令「律一大簇」〇かなめ（要）〇なかごろ、仲に通ず。

同訓異義　中・當・丁・直・方・挺・孕

〇中は矢の的に中る義、百發百中と用ふ、轉じて廣く的中する義とす。家語「孔子聖賢、其所二制置一、皆一一諸侯之制一」又そこなひあてらるる義に用ふ「一レ酒」「一レ酒」の如し。〇當は敵當の當なり、彼と我とぺったりと當りあふなり。李白、蜀道難「一夫一レ關」〇丁は丁度そこへゆき當るなり、當と同意なれども敵當の意はなし。歐陽修文「丁父憂二去レ官一」〇直はたいたいする義、當チ値に同じ、あたひとも訓む。史記「白金爲二幣直三千一」〇方はまさにとも訓み、方今と熟す、今を盛りになり。前赤壁賦「方其破二荊州一下二江陵一」順レ流而東也、舳艫千里、旌旗蔽レ空」〇挺は抵當と連用す、當と同意。史記「偽レ人、及盜一レ郎」〇孕は丁と同じ、又宝りあたる義。柳宗元詩「獨遊一レ午時」

【中央】チュウアウ　まんなか。詩、秦風「溯遊從レ之、宛在二水一一」【中央銀行】チュウアウギンカウ　内國諸銀行の中心となりて國家經濟を保護する銀行、我が日本銀行の類。【中央集權】チュウアウシフケン　國家の政權を中央政府に集め、地方の官吏はただ其の命令を奉行するのみなる義。【中央政府】チュウアウセイフ　一國の政を統轄する所、内閣諸官省の稱。【中謁】チュウエツ　〇京師を警護する官、漢武帝の時名を執金吾と改む【漢

書、百官公卿表）〇國職・海軍尉官を大・中・少の三等に分てる其の中位。

【中陰】チュウイン　佛人の死後、四十九日の間の稱、中有を見よ。大藏法數「此色身死後、未不レ托レ生前、名爲二一一一」‖中有。

【中印度】チュウインド　恒河の上流平原、印度の主要部分たる地。‖中天竺・中竺。

【中有】チュウウ　佛　現在と冥途メイとの中間の暗き界、人の死後、四十九日の間の稱。‖中陰。

【中葉】チュウヨウ　なかごろの世、葉は世。詩、商頌「昔在一一、有レ虔且業」‖中世。

【執レ中】シッチュウ　過不及の無きところを執る、天子の施政の根本義とす。論、堯曰「允執二其中一」

【中夏】チュウカ　〇中は中央、夏は大、支那人が自國を稱する語。後漢書、馬融傳「明德遠二乎一一一蔵紫暢二乎四荒一」〇夏のなかば。徐凝詩「中秋未三必脈二一一」

【中賀】チュウガ　賀表には誠懇誠忱額首頓首の八字を書くべきを文集などには略して此の二字を注するなり。中朝參看。

【中行】チュウコウ　行は道、中正にして過不及なき道。論、子路「不下得二一一一而與之、必也狂狷乎」

【中學】チュウガク　普通の學びかた。文子「上學以神聽、一一以心聽、下學以耳聽」

【中嶽】チュウガク　嵩山をいふ。爾雅「嵩高爲二一一一」‖中岳。

【中河失レ船一盞千金】チュウガフネヲイッセンキンニセンス　泰はふくべの類にて價安きもの、されど中流にて難船せし時には、これにすがり生命を濟ふことを得れば實に千金に價するとの義にて、貴賤の常なきに喩ふ〔鶡冠子〕

【中間】チュウカン　〇あひだ、なか。戰國策「韓魏レ相去、一一不レ遠」〇なかだち、紹介。家語、致思「士不二一一見、女嫁無レ媒、君子不二以交一諂也」〇チュウゲン　國古、侍と小者との中間に召使はるる者。

【中氣】チュウキ　病の名、中風に同じ。

【中饋】チュウキ　婦人の室中にありて飲食を主る義、より轉じて妻の稱とす。易、家人「在一一、貞吉」

【中貴人】チュウキジン　內臣中の貴幸せらるる者（史、李將軍傳）後世は專ら宦官を用ひて——と爲す。

【中宮】チュウキュウ　〇皇后の稱。周禮、天官「內宰以二陰禮一教二六宮一」注「六宮謂レ后也、后象レ王立二六宮一而居レ之、謂二之六宮一者、今稱二六后一爲二一一一矣」〇三宮の總稱。

【中矩】チュウク　規則にあてはまる。禮記「周旋中レ規、折旋一レ一」矩は定木。

【中軍】チュウグン　上軍・中軍・下軍の三軍中、一一の兵最も精鋭なり、故に又、中堅ともいふ。左、昭五「舍二一一一、舉二公室一也」

【中君】チュウクン　はだぎ。漢書、石奮傳、注「一一若三今百二中衣一」

【中和】チュウワ　〇中正にしてやはらげる性情。中庸「致二一一一、天地位焉、萬物育焉」〇程よくして過不及なし。

【中和節】チュウワセツ　陰暦二月一日の稱。舊唐書、德宗紀「詔以二二月一日一爲二一一一」

【中華】チュウカ　世界の中央に位する文明國、支那人が自國を稱びて稱する語。康熙字典「中國曰二華夏一」‖中夏。

【中外】チュウガイ　〇朝廷の內とそとと。後漢書、宦者傳「一一服從、上下肼レ氣」〇國內と外國と。

【中慙】チュウザン　こころのうち。陶潛詩「念レ之動二一一一」‖中懺・中情。

【中官】チュウカン　宮中に奉仕する役人、男勢を去りし宦者ウヮンを以て之に任ず。後漢書、朱穆傳「一一近習猶持二國柄一、手握二王爵一、口含二天憲一」‖中人・宦官。

【中浣】チュウカン　月の十一日より二十日までの間の稱。三浣（二六頁同注）を見よ。‖中旬・中澣。

【中澣】チュウカン　前條に同じ。丹鉛錄「俗以二上澣一一下澣一爲二三旬一、蓋本二唐制十日一休沐一而今猶襲之也

【中啓】チュウケイ　圓親骨の上端を外へそらしたる扇子、たたみてもなかば啓きしやうに見ゆる故。‖折疑扇。

【中經】チュウケイ　詩經・周禮・儀禮の稱（隋書、經籍志）大經は禮記・春秋左氏傳、小經は易經・書經・公羊傳・穀梁傳。

【中局外閉】チュウキョクガイヘイ　局は閉、心中の欲を外に出さず、外部の邪惡を心中に入れず。文子「中欲不レ出、謂二之局一外邪不レ入、謂二之閉一一一、何事不レ節、外閉中局、何事不レ成」

【中元】チュウゲン　陰暦七月十五日。‖盂蘭盆。三元（二七頁注）を見よ。

【中原】チュウゲン　國の中央部。魏徵詩「一一逐レ鹿」‖中國・天下。

【中涓】チュウケン　禁中の掃除役にて天子の左右に親近する者、中は禁中、涓は清潔。漢書、曹參傳「參以二一一一從」‖中謁者。

【中堅】チュウケン　大將の本陣、中軍は大將の在る所にして、最も堅固なればいふ。後漢書、光武紀、光武與二敵死者三千人一衝二其一一一」

【中樞後勁】チュウスウコウケイ　中軍と後殿と、中軍は謀を制し、後殿は精兵を用ひて勁きが故にいふ（左、宣十二）

【中原之鹿】チュウゲンノシカ　中原は天下の義、鹿は帝位に喩ふ。晉書、石勒載記「若遇二光武一當レ並二驅中原一、未レ知レ鹿死二誰手一」

【中午】チュウゴ　まひる、日が正しく午即ち正南に達せし時。‖正午。

【中古】チユウコ なかむかし。上古と近古との中間の時。繫辭「易之興也、其于ニ中古一乎」ことは夏殷の際を斥していふ。今は漢唐より宋明に至るまでをいふ。西洋にては羅馬の滅亡より哥倫布の新世界發見に至るまでをいふ。
【中興】チユウコウ 一旦衰へたる世の再び盛んに興る運に中る。詩、大雅序「任レ賢使レ能、周室中興焉」
【中冓之言】チユウコウノゲン 宮中深奥の處の陰祕猥褻の言。詩、鄘風「中冓之言、不レ可レ道也、所レ可レ道也、言之醜也」
【中國】チユウゴク ○世界の中央に在る國の義にて、支那人が自國をほこり稱する語。○群。梓材「皇天既付ニ中國民一」○國山陽道の異稱。又、山陰・山陽兩道の總稱。
【中佐】チユウサ 國陸・海軍の佐官を大・中・少の三等に分ちし中位のもの。
【中座】チユウザ 國事のなかばにて席を退く。
【中材】チユウザイ 中等のはたらき、なみなみの才。史、游俠傳「況以ニ中材一而涉ニ亂世之末流一乎、其遇レ害、何可ニ勝道一哉」＝中才。
【中歲】チユウサイ ○豐年と凶年との間にある歲。宋史、食貨志「大約中歲畝一石」○壯丁のとしごろ。鄭谷詩「賢人知ニ止足一、中歲便歸休」
【中策】チユウサク 中等のはかりごと。漢書、匈奴傳「周得ニ中策一、漢得ニ下策一、秦無レ策焉」＝中計。
【中山】チユウザン ○戰國時代の國名、今の直隷省定縣の地。○唐の地名、宜州に屬す、今の安徽省宣城縣。古來名筆を產す。韓愈、毛穎傳「穎中山人」○琉球の別稱。
【中山傳信錄】チユウザンデンシンロク 書名、六卷、清の徐葆光、乾隆年間琉球に使して見聞せし事實を錄す。
【中山酒】チユウザンノサケ 長く醒めざる醇酒。搜神記「狄希、中山人、能造ニ千日酒一、飲レ之千日醉」
【中產】チユウサン 貧富の中間に在る身代。中等の財產。中人の產。宋史、食貨志「中產之家」
【中士】チユウシ 士を上・中・下の三等に分ちたる中等に位する者。孟、萬章「中士一位、下士一位」
【中子】チユウシ 三人兄弟の中の者。上は長子、下は季子。史、楚世家「中子紅爲ニ鄂王一」
【中止】チユウシ 事を中途にて止む。晉書、成恭杜皇后傳「后少有ニ姿色一、然長猶無レ齒、有ニ來求レ婚者一輒中止、及ニ帝納采之日一、一夜齒盡生」
【中耳】チユウジ 耳の鼓膜の內かはに在る小室。「中耳炎」＝鼓室。
【中使】チユウシ おもてむきにあらざる天子の御使者ないないの勅使。齊書、王敬則傳「中使相望、軒晃成レ陰」
【中指】チユウシ なかゆび。たかたかゆび。晉書、淳于智傳「鼠囓ニ其左手中指一」
【中試】チユウシ ○試驗を大・中・小の三等に分ちし其の中等（宋史、選擧志）○シニアタル こころみにあたる義、試驗に合格する、及第する。
【中州】チユウシユウ ○世界の中央に位する國、支那人が自國を尊稱する語。世說、注「桓溫平レ洛表曰、今中州既平、宜ニ時綏定一」＝中華・中國。○俗に河南省の稱、天下の中に居る義。
【中秋】チユウシウ 秋のまんなか、陰曆八月十五日。白居易詩「中秋三五夜、明月在ニ前軒一」夢梁錄「八月十五日、中秋節、此日三秋恰半、故謂ニ之中秋一、此夜月色倍ニ明于常時一、又謂ニ之月夕一」
【中秋無月】チユウシウムゲツ 八月十五夜に曇りて月なきをいふ。
【中人】チユウジン ○賢愚の中間に在る人。論、雍也「中人以上、可ニ以語一レ上也、中人以下、不レ可ニ以語一レ上也」○貧富又は强弱の中間に在る人。漢書、文帝紀「百金、中人十家之產也」鹽鐵論、貧富「數石之重、中人弗レ勝」○宮中奉仕の人、宦官クワンクワン○チユウニンなかだちになる人。＝中介者。
【中心】チユウシン ○心のうち。詩、邶風「謔浪笑敖、中心是悼」○物のまんなか「中心點」○かなめ「中心人物」
【中射】チユウシヤ 戰國時代諸侯の朝にて宮中の宿衞に任じたる士。
【中謝】チユウシヤ ○天子に上ずる表文に誠惶誠懼頓首頓首の八字を書く書式。唐宋八家文の蘇軾、謝レ表ニ移汝州一表に「臣軾中謝、伏念云云」とある中謝の二字は原文に誠惶誠懼頓首頓首の八字ありしを略せしことわりがきなり。○任官の命を受けて入りて謝するをいふ（通鑑、唐武宗紀、注）
【中將】チユウジヤウ ○國古、近衞府の次官。○陸・海軍武官の將官を大・中・少の三等に分てる其の中位。
【中傷】チユウシヤウ 讒言して人の名譽をきずつく。後漢書、楊秉傳「有ニ忤ニ逆於心一者、必求ニ事中傷一」
【中情】チユウジヤウ こころのうち。離騷「孰云察ニ余之中情一」
【中殤】チユウシヤウ 年十二より十五までの間に死するをいふ（禮、檀弓、注）
【中舍人】チユウシヤジン 東宮附の官名。事物紀原「晉咸寧中、初置ニ太子中舍人官一、宋朝神宗又置レ之」
【中主】チユウシユ 世の常の君。管子「中主任レ勢守レ數以爲レ常」
【中酒】チユウシユ ○酒宴が酣なり。史、樊噲傳「項羽既饗ニ軍士一、中酒、亞父謀欲レ殺ニ沛公一」○サケニアテラル 酒にあてられる、ふつかゑひ。韋莊詩「近來中酒起常遲」
【中壽】チユウジユ 八十歲。莊、盜跖「中壽八十」一說に百歲。上壽（三八頁三段）參看。
【中宿】チユウシユク ふたばん泊り。左、僖二四

「命二女三宿一、女一一至、雖レ有二君命一何其速也」＝信宿。

【中旬】月の十一日より二十日までの間の稱。張昱詩「花飛不二復過一一一」＝中澣。

【中書】〇我國の中務に當る官名、宮廷の文書・詔勅を司る。漢武帝の時に始まる。事物紀原「一一之官、雖レ起レ自二漢武一而所レ治之府、魏晉始有レ之、謂二之一一省一」〇宋代の政事堂、樞密院と共に大政を掌る官衙。文獻通考、職官考「宋朝設レ官之制、名號品秩一切襲二用唐舊一、然中書不二專用三省長官一、一一門下竝列二於外一、又別置二一一於禁中一、是爲二政事堂一、與二樞密院一對二掌大政一」〇天子の所藏の書物。漢書、孔安國傳「以二一一一校レ之非レ是」

【中書君】筆の異名。韓愈、毛穎傳「累二拜中書令一與レ上益狎、上嘗呼爲二一一一一」

【中書令】中書省の長官。事物紀原「魏文帝黃初初、改二祕書令一爲二一一一一」也」

【中書王】國親王にして中務省の長官たる人の稱。中書參看。

【中暑】あつさにあてられる。

【中丞】官名。事物紀原「漢初御史大夫有二兩丞一、一曰二御史丞一、一曰二一一一」、初學記曰、秦官、漢因レ之、謂二之一一一」、以下其別在二殿中一、掌中蘭臺總二於外督二部刺史一、內領二侍御史一」

故云」

【中繩】すみなはにあたる。荀、勸學「木直一レ一」

【中食】〇ひるめし。＝晝食。〇食物の毒にあてらる。鍾台生母張夫人傳「夫人一レ一、從而吐レ之」

【中樞】物の中心となりて最も肝要なる所、主要部。樞は戶のくるる、開閉を自由にするもの、故に喩ふ。

【中正】かたよらずしてただし。禮、樂記「一一無レ邪、禮之質也」管子「爲二人君一者一一而無レ私、爲二人臣一者、忠信而不レ黨」

【中世】なかむかし。後漢書、朱穆傳「夫一一之所レ敎、已爲二上世之所レ薄」＝中古。

【中性】〇文法にて男性、女性のいづれにも屬せざるもの。〇酸性と鹽基性とのいづれにも屬せざる性。

【中聖】酒にあたりて二日醉する。聖は淸酒〔魏志、徐邈傳〕中二聖人一を見よ。

【中宵】よなか。晉書、祖逖傳「一一起坐」＝中夜・中霄・夜半。

【中昔】〇よなか。昔は夕に通ず。＝中夕・中宵。〇國上古と近古との間。＝中古。

【中絕】〇中途にて斷絕する。晉、高宗彤日「民一二一命一」〇中間をたちきる。戰國策「秦攘二食韓氏之地一、

一一不レ令二相通一」

【中千世界】佛三千世界の中位の世界、小千世界の千倍、大千世界の千分の一にあたる〔法華經〕

【中說】書名、文中子ともいふ、隋の王通撰す、其の體、論語に擬して作る。

【中尊】〇佛釋迦佛。天中記「佛殿中塑二三世佛像一、一一釋迦」〇阿彌陀如來の稱。左右に觀世音菩薩・勢至菩薩の二佛ある故。

【中台】三台の一、司徒の官、敎育を掌る、今の文部大臣。周禮、春官、疏「三台一名天柱、上台司命爲二太尉一、一一司中爲二司徒一、下台司祿爲二司空一」

【中台座】宰相の座位、首相の位。王維詩「久践二一一一一、終登二上將壇一」台を臺に作るは誤。

【中隊】國軍隊の一區分、大隊と小隊との中間に在りて數小隊より成る。

【中唐】唐代の詩を初唐・盛唐・一一・晚唐の四期に分ち、代宗の太曆より文宗の太和年間に至る七十餘年間(白居易・韓愈・柳宗元等出づ)を一一といふ。

【中堂】〇宰相の政を行ふ所、唐の制、政事堂を中書省に設けしが故、轉じて又、宰相の異稱。〇堂上の南北の中間。儀禮「受二玉於一一一」

【中道】〇過不及なき中庸の道。孟、盡心「孔子豈不レ欲二一一一哉」＝中行。〇道路の中央。禮記「爲二人子一者、行不レ一レ一、立不レ中レ門」〇事のなかば。次條を見よ。

【中道而廢】事を中途にて止む。論、雍也「力不レ足者、一一一一」

【中斷】中途にて切れたゆ。水經、注「隋使出而見二大蛇一一一、因舉而藥レ之、故謂二之斷蛇丘一」＝中絕。

【中竺】中印度の稱。

【中軸】〇中央に在るしんぎ。〇中心の義。

【中腸】心のうち。陸倕詩「沈思結二一一一」

【中直】〇中がまつすぐ。史、魏悰傳「竹外有二節理一、一一空虛」〇なかなほりする。國爭をやめてなかよくする、和睦する。

【中庭】なかには。孟、離婁「相二泣於一一一」王建、十五夜望レ月「一一地白樹棲レ鴉、冷露無レ聲濕二桂花一、今夜月明人盡望、不レ知秋思在二誰家一」

【中朝】〇中國をいふ〔通鑑、周世宗紀、注〕〇內の朝廷。漢書、劉輔傳「一一左將軍辛慶忌」＝內朝。〇朝廷に臨む。史、范雎傳「今大王一レ一而憂、臣敢請二其罪一」

【中天】なかぞら。杜甫詩「一一懸二明月一」＝中空。

【中典】輕からず重からず、中間の刑。周禮、大司寇「刑二平國一用二一

一こ注「用ニ一一者、常行之法」
【中途】チュウト　○行く路のなかば。李白詩「一一不レ遇レ人」○事のなかば、半途。＝中道。
【中途半端】チュウトハンパ　圖はした、長し短し。
【中塗】チュウト　道路の中央。左思詩「枳棘塞ニ一一ニ」＝中途。
【中都】チュウト　地名、今の山東省兗州府汶上縣。禮、檀弓、註「一一、魯邑名、孔子嘗爲ニ之宰ニ」
【中毒】チュウドク　毒にあてらる。契子「一一レ頻レ命」
【中納言】チュウナゴン　圖太政官の次官、大納言と少納言との間に在りて、内奏・宣下のことを司る。
【中二千石】チュウニセンセキ　漢の制、諸官の階級を石にてあらはす、中は滿、二千石に滿つる義にて、二千石に次ぐ官。
【中日】チュウニチ　圖春秋二期の彼岸七日の間の正中に當る日。春は春分、秋は秋分の日。
【中年】チュウネン　○なかほどのとし、四十歳前後。晉書、王羲之傳「一一以來傷ニ於哀樂ニ」○一年をへだてる。禮、學記「比年入レ學一一考校」
【中農】チュウノウ　大地主と小作人との中間にある農民。
【中保】チュウホウ　なかだち、兩者の中間に立ちて周旋する者、口いれ。＝仲人・媒介者。

【中微】チュウビ　なかごろ衰ふ。史、楚世家「其後一一、或在ニ中國ニ、或在ニ蠻夷ニ」
【中風】チュウフウ　病の名、ちゅうき、半身又は一部のしびれる病。康熙字典「醫書一一中氣是也」＝中氣・中症。
【中腹】チュウフク　山の頂と麓との間。＝山腹。
【中分】チュウブン　まんなかから半分にわける。漢書、項籍傳「一ニ分天下ニ」
【中幣】チュウヘイ　黄金をいふ〔管子〕
【中門】チュウモン　○宮庭の中門。漢書、董賢傳「賢至ニ一一ニ」○圖貴人の屋敷の外門と寢殿との間に設けし門。
【中夜】チュウヤ　よなか、夜半。書、冏命「一一以興、思レ免ニ厥愆ニ」＝中宵。
【中庸】チュウヨウ　○偏せざるを中といひ、易らざるを庸といふ、物事、過不及なくほどよし。中庸「君子一一、小人反ニ一一ニ」○書名、四書の一、もとは禮記中の篇名。
【中老】チュウロウ　○四十歳を初老と云ふに對して五六十歳の人を云ふ。○圖徳川時代の武家の重役。大老に次ぐもの。○武家の奥向の女役。老女に次ぐもの。
【中牢】チュウロウ　羊と豕との備はれる饗食。漢書、兩龔傳「祠以ニ一一ニ」＝少牢。
【中流】チュウリュウ　○河の中央。史、周紀「武王渡レ河、一一、白魚躍入ニ王舟中ニ、武王俯取以祭」○中等の義。
【中流之砥柱】チュウリュウノシチュウ　黄河のかはなかに立ちて屹然として少しも動かざる柱狀の石の稱、今の河南省河南府陝州の東四十支那里に在り。亂世に處して節義を厲ます士に喩ふ〔日知錄〕禹貢には砥を底に作る。
【中霤】チュウリュウ　五祀の一、室中をいふ。上古穴居の時、上にまどをあけて明を採る、故に霤アマダレが其の所より落つ、よりて室中の義とす、古、卿大夫の家、土神を祭る所とす〔禮、郊特牲〕
【中立】チュウリツ　○兩者の間に立ちて、かたよらず、中正獨立の義。中庸「一一而不レ倚、强哉矯」○兩交戰國の何れへも加勢せず「局外一一」史、田儋傳「彭越是時居ニ梁地ニ一一」○圖雙方の間に居て事を周旋する。＝媒介。
【中略】チュウリャク　中間の文句を略す。
【中呂】チュウリョ　十二律の一、陰曆四月の異名。禮、月令「律中ニ一一ニ其數七」＝仲呂。十二律參看。
【中論】チュウロン　書名、後漢の徐幹撰す、二卷、二十篇に分つ。
【雖レ不レ中不レ遠矣】ナカラズトイヘドモトホカラズ　正しく的中せずとも甚だしき間違なし。大學「心誠求レ之、一一」

【丯】カイ　囲
くさが、ちりみだる、草生じて散亂する貌。
解字 三つの横畫、皆右より左方に引く、次條の丰と正に相反す。害・契・絜などの字皆此に从ふ。

【丰】フウ　图
○草の盛んにしげれる貌「一茸」○みめよし（美好）おもぶくら（豐頰）顏がまろく肥えてうつくし。詩、鄭風「子之一兮、俟我乎巷兮」○風に通用す。「一裁」「一標」
解字 上畫ノに作るは非。邦・丯・峯などの字、皆此に从ふ。
【丰儀】ホウギ　儀は容、うつくしき容貌。
【丰采】ホウサイ　うつくしきやうす。＝風采。
【丰姿】ホウシ　うつくしきすがた。高啓詩「莫下把ニ一一ニ比中楊柳上」＝風姿。
【丰神】ホウシン　うつくしき容態。張準詩「兩威不三敢觀ニ一一ニ」
【丰貌】ホウボウ　丰采に同じ。＝風貌。
【丰容】ホウヨウ　美好なる容貌。

四畫

【丱】㊀クワン・ケン　㊁クワウ　便 讚
㊀あげまき、つのがみ（總角）小兒の髮を束ねて兩角とする貌。詩、齊風「總角一兮」傳

「總角聚ニ兩髦ニ也」〇轉じていとけなし(幼稚)㊁あらがね、古の礦の字。

解字 あげまきに結びたる象形字。

【丱角】クワンカク つのがみ、あげまき、轉じて幼童をいふ。水經注「總童ーー弱年女子」

【丱女】クワンヂョ あげまきしたる少女。＝幼女。

【丱童】クワンドウ あげまきしたるわらべ。＝幼童。

六畫

【串】㊀㊁ クワン・ケン 諫 セン 先 穿に同じ

㊀ならふ、なる、慣に通ず、狎習なり、したしみなれる「親ー」〇てがた(契)劵に通ず。㊁つらぬく、連ねて貫く、錢ーーは一貫の義。うがつ(穿)〇國くし、丳の誤用。

【串子】クワンシ 官府の錢穀の領收證「文字指歸」＝串票。

【串童】クワンドウ 歌舞に慣れたる少年子弟。

七畫

【丳】サン セン 潸

〇くし、さしぐし、肉をつらぬきて火にあぶる器。〇くしにつらぬく。

丶部

【丶】チユ 麌

〇しるし、きれめにしるす點。〇ともし火、燈火の象形。〇主の古字。

二畫

【丷】イ 支

佛書に用ふる伊の字〔涅槃經〕

【丸】クワン グワン 寒 丸は俗字

〇たま、はじき弓のたま「彈ー」左、宣二「從ニ臺上ー彈レ人而觀ニ其避ー丸也」〇すべて小にして圓きものをいふ「ー藥」「ー泥」〇まろくしてころばす玩具。莊、徐無鬼「市南宜僚弄ー丸」〇まろし、まろみ(圓)〇まろぶ、まろばす(轉)まるめる。〇鳥のたまご。〇墨を數ふるにいふ。宋書「月賜ニ隃麋墨一ー」〇轉じて墨の稱「烏ー」「松ー」〇ーーは易直スナホの貌。〇國まる(全體)〇まる(圓)「日のー」〇まる(城郭の內)〇まる、まろ。船・刀・劍・人などに添へることば「常陸ー」「小烏ー」「牛若ー」〇そつくり、そのまま「ー裸」「ー寝」

解字 丸は丸の俗字。

【丸丸】グワングワン 〇樹のなほき貌。詩、商頌「松柏ーー」〇國スツカリ全體の俗語。〇すべて、全體。

【丸劑】グワンザイ ぐわんやく。＝丸藥。

【丸泥】グワンデイ どろのかたまり。後漢書、隗囂傳「囂將王元說レ囂曰、今天水完富、士馬最强、北收ニ西河上郡ー、東收ニ三輔之地ー、按ニ秦舊迹ー、表ニ裏河山ー、元請以ニ一ーー、爲ニ大王ー東封ニ函谷關ー、此萬世一時也」小數の兵にて大敵を攻め落すをいふ。

【丸藥】グワンヤク ねりてまるめたるくすり。史、倉公傳「即令レ更服ニーー」＝丸劑。

三畫

【丹】タン 寒

〇赤色の土、水銀と硫黃と化合して成りし赤色の土。丹砂。朱砂・辰砂。〇あか、あけ(朱)〇あかし、あかく塗る、揚雄、解嘲「朱ニー其轂ー」〇精錬せしくすり「金ー」不老不死の藥。〇まごころ(誠心)赤心にして僞なきをいふ。〇牡丹ボタンは花の名、一名鼠姑。〇ー麥ダンマルクは歐洲の國名。＝丁抹。〇國赤つち。

[illegible] 丹・赤・紅・絳・緋・殷〇丹は丹砂の色なり、大赤なり。〇赤はきらきらとあかきなり。〇紅は桃色なり。〇絳は大赤色なり。〇緋は深紅色なり。〇殷は香アカ黑色なり、血の古くなりて、黑色を帶びたるをいふ。

【丹堊】タンアク 赤かべ、あかぬりの堊。蘇轍、杭州龍井院訥齋記「樓觀飛湧ーー炳煥」

【丹扆】タンイ 天子の諸侯に對する時、後に立つる赤色の屏風。舊唐書、敬宗紀「李德裕獻ニーー箴六首ー、上深嘉レ之」

【丹楹】タンエイ 〇赤ぬりのはしら。＝丹柱。〇はしらをあかくぬる。春秋、莊二三「丹ニ桓宮楹ー」漢書、貨殖傳「諸侯刻レ桷ーレー」

【丹鉛總錄】タンエンソウロク 書名、明の楊愼撰す、二十七卷、天文・地理・時序・花木等二十六目に分つ。

【丹霞】タンカ あかきもや。江淹詩「ーー蔽ニ陽景ー、綠泉涌ニ陰渚ー」

【丹崖】タンガイ 〇丹の出づるがけ。丹山を見よ。〇赤色のがけ。大條發看。

【丹崖靑壁】タンガイセイヘキ 丹き色のがけと靑き色の石壁との高く美くしきが如く、人品のすぐれて高きをいふ。晉書故事「晉、宋纖有ニ遠操ー、馬岌造焉、纖拒而不レ見、岌嘆曰、名可レ聞

而身不レ可レ見、徳可レ仰而形不レ可レ覩、知先生人中之龍也、銘詩石壁二日、丹崖百丈、青壁萬尋、奇木蔽レ曀、蒨若二鄧林一、其人如レ玉、維國之琛、室邇人遠、實勞二我心一」

【丹曦】タン　〇赤きあさひ。〇赤き日。梁昭明太子、香爐賦「匪二一一于四嶽一」

【丹丘】タンキュウ　靈夜常に明かなる丘ノ名。遊記「高等有二一一之國一、獻二瑤臺瓊以盛二甘露一、帝德所レ治、被二於殊方一也」又「有二一一千年一燒、黄河千年一清、至聖之君以爲二大瑞一」丘一に邱に作る。

【丹丘之仙茶】タンキュウノセンチャ　極上等の茶。謝宗、茶論「此一一、勝二烏程之御苕一」烏程は呉興の縣名、御苕は酒の名。

【丹歌】タンカ　まごころ。傳咸表「伏二路一一一」二丹誠・丹慤。

【丹穴】タンケツ　丹砂の出る穴。史、貨殖傳「巴寡婦清其先得二一一一、而擅二其利一」

【丹雘】タンカク　まごころ。任昉表「鉅乎之懇誠溢レ闕、永昌之一一獲レ申」

【丹山】タンザン　丹砂を産する山。水經、注「丹水南有二丹崖一一一、悉顯壁覆レ岸、皆二紅雲秀レ天」

【丹脂】タンシ　赤きべに。拾遺記「諸嬖人欲レ要レ寵者、皆以二一一一點レ頰而後進寺」二燕脂シュ

【丹漆】タンシツ　赤きうるしにて塗る。說苑「一一不レ文、白玉不レ雕、寶珠不レ飾」

【丹心】タンシン　まごころ。謝朓詩「飲餐二丹石心一、聊流二素絲涕一」文天祥詩「留二取一一照二汗青一」二赤心。

【丹心照二萬古一】タンシンテラスバンコヲ　忠誠の心がいつまでも明かである。楊繼盛詩「浩氣還二太虚一、一一、生前未了事、留與後人一補」

【丹脣】タンシン　〇赤く美くしきくちびる。丘巨源詩「倡樓出二素手一、歌席動二一一一」二朱脣。〇少年の口びる。沈佺期詩「一一曾學レ史、白首不レ成レ編」

【丹砂】タンシャ　辰砂シンシャに同じ。本草綱目「一一即今朱砂」管子「上有二一一一一者、下有二黄金一」二丹沙。

【丹砂化爲二黄金一】タンシャクワシオウゴントナル　道士が丹砂を燒き化して黄金となす術をいふ。史、封禪書「少君言レ上曰、祠レ竈則致レ物、一一、黄金成、以爲二飲食器一則益レ壽、益レ壽而海中蓬萊仙者乃可レ見」

【丹精】タンセイ　あかつち。詩、邶風「林如二湮緒一」疏「其顏色赫然而赤、如二厚漬之一一一」

【丹砂】タンシャ　朱ぬりのかき。楊炯、孔子廟碑「一一數仞、吐二納雲霞一」二丹垣。

【丹者】タンジャ　石榴ザクロの異名（酉陽雜俎）

【丹朱】タンシュ　〇あかいろ、赤色のもの。博物志「燒二一一一成二水銀一」〇堯ギョウの子の名、不肖にして位を繼ぐを得ず。

【丹書】タンショ　丹にて赤く書く、容易に消えざるが爲め。漢書、高帝紀「與二功臣一剖レ符作レ誓、一一鐵契、金匱石室、藏二之宗廟一」

【丹竈】タンソウ　〇赤と青との玉のぐ。〇彩色畫。漢書、蘇武傳、麟二竹帛所レ載、一一所レ畫、何以過二子卿一」答越志「每疑二一一過レ實、今觀二此景一、乃知二良工苦心一」

【丹誠】タンセイ　〇まごころ。唐書、戴至德傳「資二啓沃一、罄二一一一」二丹心・丹款・赤誠。〇國心をこめて精を出す。二丹精・丹念。

【丹精】タンセイ　國心をこめて事をする、念を入れる。二丹念・丹誠。

【丹石心】タンセキシン　まごころ。丹心を見よ。

【丹竈】タンソウ　道士即ち方術の士の靈藥を煉る竈ノ名。四溪叢話「松下有二竅一一、又有二茅屋數間一」

【丹楹】タンエイ　仙人の居る所。列仙傳「紫陽眞人周季道過二淺門子一、乞二長生訣一、淺門子曰、名在二一一石室中一、何憂レ不レ仙」六帖には石室を玉室に作り、名の上に汝の一字必りり。

【丹墀】タンチ　あかくぬりたる庭、天子の殿階の下をいふ。漢書、百官志「以二丹朱一漆レ地、謂二之一一一」張衡、西京賦「青瑣一一」

【丹頂】タンチョウ　赤きいただき、鶴をいふ。墨客揮犀「蜡嶺山唐威子修レ道所、絕壁有二石穴一、謂二之羽化一、鶴頂如レ丹、毛羽皆黑、日照レ之、金色燦然」白居易、劉蘇州以レ鶴遠寄詩「素毛如二我鬢一、一一似二君心一」

【丹柱】タンチュウ　あかきはしら。崔駰、七依「一一雕檻、飛閣層樓」二丹檻。

【丹鳥】タンチョウ　〇螢ケイの異名。古今注「螢火一名景天、一名燐、一名夜光、一名宵燭」〇鳳凰の異名。魏志、管輅傳、注「文王受レ命、一一銜レ書」二丹鳳。

【丹田】タンデン　臍ホゾより一寸下の所。黄庭經「一一之中精氣微」

【丹念】タンネン　國丹精に同じ。

【丹之所レ藏者赤】タンノゾムトコロニアルモノハアカシ　丹土に入るものは赤し、人は交はる友によりて、善ともなり惡ともなる喩。家語、六本「一一、漆之所レ藏者黑、是以君子必愼二其所一レ與處一者一ナリ」

【丹楓】タンフウ　紅葉したるかへで。杜甫詩「門巷落二一一一」二紅楓・霜楓。

【丹粉】タンプン　赤き色のこ。唐書、閻立本傳「立本俯二伏池左一、研二朱一、望二坐者一、滴レ汗」

【丹陛】タンペイ　赤く塗りたるきざはし、天子の御所の稱。隋書、薛道衡傳「趨二事紫宸一、聽二一一一」

【丹墀】タンチ　赤と青と。陳泰詩「晶熒一一飛二鷰閣一」

【丹藥】タンヤク　ふしぎのきめあるねりぐすり。唐書、柳公綽傳「有二道士一獻二一一一」二靈藥・神藥・仙藥。

【丹良】螢火の一名（古今注）＝丹鳥。

【丹臒】朱色の鮮かなる土、辰砂の類。○書、梓材「其塗ーー」疏「臒、采色、各有レ青有レ朱、ーー則朱色者」江淹賦「視ニ金碧之琳琅ー、艷ニーー之照爛ー」

四畫

【主】シュ ス 國

○きみ（君王）國家の元首。○あるじ、ぬし（家長）○客に應ずる人、客の對。○己の仕ふる人「ー人」漢書、蒯通傳「狗各吠ニ非其ーー」○つかさどる（宰）まもる（守）すぶ（領）○もちぬし、物の所有者。柳宗元文「問ニ其ーー曰唐氏之棄地」○つかさ（宰）かしら、をさ（長）「謀ー」「盟ー」○かみ（神）○神靈のやどるところ、位牌「木ー」○もと（宗要）○たふとぶ（上）○意志の向ふ所「ー意」「ー張」○おもに、もととして、物事の要點。易、繫辭「樞機之發、榮辱之ー也」○燈火。○耶蘇教徒が奉ずる天の神「天ー」○公ーは天子の女。○國 女が男を親み呼ぶ稱。○淵・山などをつかさどる神靈。

【主媼】主人たる老婦人。

【主意】おもなる意味、かんじんなるむね。＝主旨。

【主一無適】心を專らにして他に適ゆかず、宋儒が、敬の字の義を解せし語。論、學而、朱注「敬者————之謂」

【主因】おもなる原因。

【主要】かなめ、おも、かんじん。

【主翁】家の主人たるおきな。○主人翁を見よ。

【主恩】君主のめぐみ、又、主人の恩。宿居書、崔衍傳「貞元中、天下好進奉以結ニーーー」

【主我】○我が心を主としたる我。○己の利益を主として他を顧みざるかんがへ、利己觀念。

【主客】○四方の賓客を掌る官名。史、滑稽傳「以ニ髡爲ニ諸侯ーーー」○主人と客と、轉じて重きものと輕きものと、又、敵と味方と。

【主眼】かなめなるところ、がんもく。＝主要・要領。

【主義】○理想に進み行く道ゆき。○自己の執り守る一定の方針。

【主器】宗廟の祭器を主るは長子の任なり、よりて長子の稱とす。易、序卦「ーレー莫レ若ニ長子ー」に本づく。

【主君】○君主、天子。○己の主人を尊びていふ。

【主管】主として管理す。

【主觀】事物を知覺し、思考し、感動する所のもの、われ。○客觀の對。

【主計】○會計を司る官名。漢書、張蒼傳「爲ニーー四歲ー」○國軍隊經理部にて會計を司る將校相當官の名。

【主權】○國家を統治する最も高くして強き權力にして、全然不可侵のもの。＝統治權。○この主權を有する者をーー者といふ、我國にては天皇。

【主宰】つかさ、事物を支配する者。荀、正名「心者、道之ーー」

【主裁】主となりてきりもりする。＝主宰。

【主產物】○主として製造せらるる物品、副產物の對、石炭瓦斯をーー、骸炭を副產物とする類。○其の地にて產出する主要物產、我國にては生絲・茶の類。

【主司】○試驗官。唐書「狀元以下往謝ニーーー」○係り官。

【主旨】主意に同じ。

【主使】犯罪の謀主となり、他人を指使して罪を犯さしむる者。

【主事】○主となりて事に當る「東宮ーー」○宋の官名。宋史「中書省錄事三人、ーー四人」

【主辭】論理學の命題、又、文章の主となる語。＝主語。

【主人】○一家のあるじ。賈誼、鵩鳥賦「ーー將レ去」賀知章詩「ーー不ニ相識ー、偶坐爲ニ林泉ー」○國己が事ふる人。

【主人翁】宿のあるじ、翁は尊稱。史、范雎傳「願借ニ乘車駟馬於ーーーー」

【主人公】○一家の長、又、主となりて事を行ふ人。韓愈詩「更煩將ニ喜事ー來報ーーー」○小說・脚本の中にて主眼となる人物。

【主臣】惶恐といふ如し、發語敬謝の意、主上に在り、臣下に在りて自然に敬恐する義。史、陳丞相世家「平謝曰、ーー、陛下不レ知ニ其駑下ー、使レ待ニ罪宰相ー」一說に羣臣に主たる意、人主を斥していふ。

【主者】主として其の事に任ずる者。漢書「上問ニ右丞相勃ー曰、天下一歲決獄幾何、勃謝レ不レ知、天下錢穀一歲出入幾何、勃又謝レ不レ知、汗出沾レ背、愧不レ能レ對、亦問ニ左丞相平ー、平曰、各有ニーーー」勃は周勃、平は陳平。

【主上】天子を稱する語、人君の韓非、揚權「ーー用レ之、其國危亡」杜甫詩「ーー頃見レ微」

【主將】軍の總大將。六韜「ーー之法、在ニ務攬ニ英雄之心ー」

【主唱】主となりて言ひ出す、發頭人となりて說きまはる。＝首唱。

【主從】國主人と家來と、君と臣と。

【主膳】シュゼン　天子の膳部を掌る官（唐書、車服志）

【主體】シュタイ　○目的物となるもの。‖本體・本源。○行爲の本となるもの、客體の對、權利義務の一一は人にして客體は物。

【主治醫】シュチイ　治療を司る主任の醫者。

【主張】シュチャウ　○自分の持論。韓愈、送窮文「各有二一一、私立二名字一」○主宰する。莊、天運「天其運乎、地其處乎、日月其爭二於所一乎、孰二一一是一、孰綱二維是一」○主として張り持する。宋史、徐中行傳「願安レ時處レ順、一二一世道一」

【主持者】シュヂャ　主となりて事を行ふ人。

【主腦】シュナウ　かしらだてはたらく人、事要なる人、中心人物、腦は身體中の主要部、故に喩ふ。

【主任】シュニン　主として事に任ずる者、責任を負ひて事にあたる者。

【主辱臣死】シュジョクシンシ　臣は其の主人と生死艱苦を共にする義。韓非子「一一、上下相與同レ憂久矣」越語「君憤已、爲二人臣一者、君憂臣勞、君辱臣死」

【主筆】シュヒツ　新聞・雜誌などの記者の首位に在る者。

【主賓】シュヒン　○賓客中の主たるもの。○主人と客と。

【主父】シュフ　○あるじ。おやぢ。○妾が夫を稱していふ。戰國策「一一大怒而笞レ之」

【主婦】シュフ　○一家をつかさどるをんな。○祭祀に主となるをんな。禮記「非二宗子一、雖レ無二一一一可也」

【主文】シュブン　○試驗官。唐書「一一數員不レ已」‖主司。○圖俱書・附言等に對して、本文をいふ。○判決文の第一段、判定の結果及び適用する所の法律を記するもの。

【主母】シュボ　本妻・正妻。史、蘇秦傳「妾欲レ言二酒之有レ毒、則恐二其逐一一一也」妾が妻を稱する語。

【主簿】シュボ　帳面ナドを主ドる官。漢官儀「一一掌二縣之簿書一」事物紀原「後漢始有二一一之號一、諸郡置之、部今錄事參軍也、至二隋大業中一、諸縣始置二一一、掌勾二稽簿書一、料正縣內非違一」

【主謀者】シュボウシャ　主となりて、はかりごとをするもの。‖張本。

【主務省】シュムショウ　特に其の行政事務を主掌する官廳、例へば教育の事は、文部省を一一とするが如し。‖主務官廳。

【主務大臣】シュムダイジン　主務省の大臣。前條を見よ。

【主盟】シュメイ　盟の時に主となるもの。劉克莊詩「每歲落花要二一一一」‖盟主。

【主馬寮】シュメリョウ　圖宮內省の中にある一局、御料の馬匹を司る。

【主力】シュリョク　おもなるちから。轉じて本陣・中堅等の義とす。

【主基】スキ　圖大嘗會ダイジョウエの時、供御ゴの新穀を奉る爲めに豫め占ひ定める國、其の第一を由基ユキ第二を一一といふ。すきはすすぎ（悠紀）の義。‖主紀・次基。

【主稅】シュゼイ　○圖古、みつぎもの又は田租米貢などを掌りし官、其の役所を一一寮といふ、民部省に屬す。○人名「大石一一」

【主殿寮】トノモリョウ　○圖古は宮中の御庭の掃除・湯沐・薪油等のことを掌る役所、明治四十年十一月官制改正により宮城監令及び其の附屬建物の管守並に警察に關する事務を掌る。

丿部

【丿】ヘツ　ヘチ　屑

○右より左へ戻る。○首を擧げて體を伸ぶる。

【丿ヘ】フツ　舟などのゆれ動く貌。

【丿】フツ　ホチ　物

左より右へ戻る。

一畫

【乂】㊀ガイ・ゲ　泰　㊁ガイ　隊

㊀かる（刈）、草をかる、通じて刈取に作る。○をさむ（治）をさまる。書、太禹謨「政乃一一」○やすし（安）○しんとしてものさびし「肅一一」○かしこし、賢才。書、皐陶謨「俊一在官」㊁こらす（懲）「懲一一」いましむ（戒）

【乂安】ガイアン　をさまりて安らか。史、封禪書「方內一一、民人靡レ疾」‖安乂。

【乂清】ガイセイ　をさまりてきよし。鍾會文「今邊境一一、方內無事」‖晏清。

【乂寧】ガイネイ　をさまりてやすらか。後漢書、楊賜傳「五登二衰職一、弭レ難一一」元史、刑法志「百年之間、天下一一」‖安寧。

【乃】㊀ダイ・ナイ　賄　㊁アイ・エ　賄　通　ダイ　ナイ

㊀すなはち、そこで、上を承けて下を起す辭、於是コニオイテ書、堯典「一命二羲和一」○語勢をととの

のへ緩くし、又、物を一ッ一ッあぐる時に用ふる語。書、大禹謨「一聖一神」○わづか(幾)呂覽、義賞「天下勝者衆矣、而霸者一五」○なんぢ(汝)○これ(是)史、蕭攻傳「噫乎攻一市井之人」○かれ(彼)○その(其)○それがし、なにがし(某)○一者はさきに、むかし。戰國秦策「一者過杜山」‖乃昔。○をさむ(治)㊀ダイは、ふなうた(棹歌)柳宗元詩「欸一一聲山水綠」○國ノ通と同じくのの音に假り用ふ。

同訓異義 竺乃・遒・則・卽・便・輒・最○乃はそこでと譯す「繼レ事之辭」と註す。一事を言ひ畢りて更に或事に言ひ及ぶ義。月令「仲春之月、雷乃發レ聲」とあり、雷は仲春に至りて、そこで激く聲を發すとの義。○遒は乃と同字。○則の字の類は、皆句中にある字なり、句尾にあることなし、則は「れば」「らば」「るならば」「るなれば」「は」などと譯し「然後之辭」と註す。「これはからそれはさう」といふ辭。論語「子弟入則孝、出則弟」とある如し、則の字、字を隔てて置くことあり。左傳「山有レ木、工則度レ之」とある如し、則の字木の字の下に置くべきを一字隔てて工の字の下に置けり、これ工の字を重く主としたるなり、毛詩「既見二君子一、我心則喜」とあるも、此れと同じく子の字の下に、則の字を置くべきを、我心の二字を隔てて置きたるなり。○卽は、とりもなほさずと譯す、そのままの義、性卽理也の如し、則の字は疑にして、卽の字は急なり。史、項羽紀「徐行卽免レ死、疾行則及レ禍」とあり、ここにては徐行を主とするに由りて、徐行に卽を用ひ、疾行には則を用ひたるなり。○便は、そのまま、たやすくと譯し、卽也と註す、卽よりは稍〻輕し。○輒は、たやすくと訓む、便に近し「每レ事卽然也」と註す、輒は俗字。○最は受け敷下る義にて上を受くる辭「たやすく、そのまま」の義、便に近し。

【乃前】ダイ　父の自稱、乃父に同じ。宋楊秀詩「大兒怒叫小兒啼、一一對レ竹方哦レ詩」

【乃公】ダイコウ　○汝の君といふ義にて、君主が臣下に對し稱りていふ自稱。史、留侯世家「嬰儒幾敗二一事一」○父が子に對する自稱。漢書「陳萬年曰、一一教二戒汝一反睡不レ聽何也」‖祖公。

【乃今】ダイコン　いま、このごろ、現今。莊、逍遙遊「而後一一培レ風」

【乃翁】ダイオウ　なんぢのせんぞ。乃父を見よ。

【乃父】ダイフ　なんぢの父、父が子に對する自稱。書、君牙「惟乃祖一一、世爲二忠貞一服二勞王家一」

【乃至】ダイシ　○乃は上を承けて下を起す辭、よりて何何より何何に至ると、中間を略する語「二回一一六回」佛書に多く用ふ。戰國趙策「天下之卿相人臣、一一布衣之士、莫レ不二貴大王之行義一」○あるひは、もしくは。

【乃者】ダイシャ　さきに、前日。漢書、賈何賈參傳、注「一一猶レ言二曩者一」‖日者、嚮者。

【乃往】ダイオウ　㊀既往の義。无量壽經「一一過去、久遠无量」

【乃武乃文】ダイブダイブン　天子の德を譽める語、天地を經緯するを文といひ、瞞亂を裁定するを武といふ。書、大禹謨「益曰、都、帝德廣運、乃聖乃神、一一」‖允文允武。

【久】キウ　ク　有

○ひさし「長一」「恆一」暫の反對。中庸「不レ息則一」○ながし(永)とほし(遠)○久しくす、永き間、時がたつ、行くこと遲し。史、天官書「一而至」○久しく待つ。左、昭二四「寡君以爲盟主之故、是以一子」○留まる。孟、公孫丑「可以一則一」○ふさぐ(塞)

【久安】キウアン　ひさしくやすらか。漢書、賈誼傳「雖二一一之勢一、成二長治之業一」

【久矣】キウイ　久しき閒である、矣は助字。史、齊世家「吾太公望レ子一一、故謂レ之曰二太公望一」‖久也。

【久佚】キウイツ　永逸に同じ。揚雄、解「不レ受二單于朝一書「不二遊勞一者不二一一、不二暫勞一者不二永寧一」

【久逸】キウイツ　久しく安んじたのしむ。後漢書、賈逵傳「我可レ謂二一勞而一一、暫疑而永寧者一也」

【久淫】キウイン　ひさしくあそぶ、久しく留まる。楚辭「歸來歸來、不レ可二一一」

【久要】キウエウ　年久しき約束、要は要約。論、憲問「一一不レ忘二平生之言一」‖舊約。

【久淹】キウエン　久しく一所にとどまる、淹は滯留。孟浩然詩「日暮田家遠、山中勿二一一一」‖久留、久滯。

【久遠】キウエン　ながくひさし。孟子「舜禹益、相去一一」

【久交】キウカウ　久しくまじはりてかはらず。宋史、郡癘傳「滑而不レ激、和而不レ流、人與交久、益尊二信之一」

【久旱逢甘雨】キウカンホウカンウ　長くつづきたるひでりに好き雨に逢ふ、人世喜ばしき事の一。登科隨筆「一一他

鄕遇₂故知₁、洞房華燭夜、金榜掛レ名時」

【久久】永き間。道德指歸論「澄滴之流、｜｜而成₂江海₁」

【久欽】久しく敬ひ慕ふ義。韓愈、酬₂別張使君₁詩「｜｜江總文才妙、自歎虞翻骨相屯」

【久懷】久しき間のおもひ。王令詩「｜｜海技待₂後乘₁」

【久曠】○久しく空しくして行はず。漢書、禮樂志「｜｜大儀、未レ有₂立禮成₁レ樂」○官位などを長くあけて置く。後漢書、光武帝紀「帝王不レ可₂以｜｜₁、天命不レ可₂以謙拒₁」○月日を久しきにわたりて空しく費す。曠日彌久の約。

【久闊】ひさしぶり、久しく無沙汰する、闊は疎闊。蜀志、許靖傳「｜｜情慉、非₃夫₂筆墨₁所₂能寫陳₁」＝久別。

【久敬】人と交はること久しくして益敬ふ。論、公冶長「晏平仲善與レ人交、久而敬レ之」

【久困】ひさしくくるしむ。漢書、賈捐之傳「民衆｜｜、連年流離」

【久坐】久しく坐する。杜甫詩「退レ高送₂所親₁、｜｜惜₂芳辰₁」

【久次】ゐすわり、長き間同じ官にとどまりて昇進せず、次は止。漢書、孔光傳「以₂｜｜₁補₂諸侯太傅₁」

【久視】ながいきして世に視息する。老子「長生｜｜之道」

【久疾】ながわづらひ。後漢書、馬皇后傳「后嘗｜｜大夫人令レ寤レ之」＝久痾。

【久習】久しくならふ。後漢書、黃香傳「帝亦惜₂香幹用₁｜｜舊事₁」

【久滯】○久しくとどこほる。詩經「我取₂其陳₁」の疏「出₂官粟之舊積｜｜者₁」○長き間、事がはかゆかず、ひさしく一所にとどまる。長逗留＝久淹。

【久長】久しくながし。史、三皇紀「其祚胤繁昌｜｜云」＝長久・久遠。

【久住】久しくとどまりてすむ。蜀志、諸葛亮傳「分レ兵屯田、爲₂｜｜之基₁」

【久病】ながわづらひ。考工記「牛有₂｜｜₁、則角裏傷」

【久聞】久しき間、聞きてゐる。韓維詩「｜｜高陽勝、近在₂汝州側₁」＝久睽。

【久別】久しく別れる、又、久しきわかれ。劉得仁詩「｜｜青雲士、幽人分固然」

【久勞】ひさしきあひだほねをる。史、晉世家「｜｜₂于外₁」

【久離】ひさしくはなれてゐる。＝久別。

【久留】久しくとどまる。李陵詩「行人難₂｜｜₁、各言長想思」

【久米部】國上古の武士の一族の名、其の長官を久米直といふ。＝來目部。

【久米舞】國古、大嘗會の時、行ひし舞樂の名、琴取二人、舞者八人、刀を執りて蜘蛛を斬る狀を爲す。

【久之】蘇舜欽詩「｜｜屈勉强爲レ吝、嫌レ春愛レ秋眞可レ恰」之は助字、之を久しくすと讀むは非。

【夊】

久（前條）の俗字。

三畫

【之】 シ 支

○ゆく（往・適）論、公冶長「｜₂一邦₁」○いたる（至）詩、鄘風「｜死矢靡レ他」○かはる（變）周易の筮法にて卦爻の變る義。○これ（是・諸）事を指す辭。論、公冶長「老者安レ｜」○この（此）詩、周南「｜子于歸」○の、上下の系屬を示す辭、所有・所在などを示す辭「大學｜道」「中庸｜爲レ德」詩、周南「在₂河｜洲₁」○姓と名との間に置く無意味の助字。論、雍也「孟｜反」○無意味の助字「久｜」「頃｜」○かな（哉）○にて、おいて（於）大學「｜₂其所₁親愛₁而辟焉」○のこす（遺）○いづ（出）○えだ（枝）

【[illegible]】これ 之・此・是・維・惟・旃・斯・諸・伊・時・伎○之は、是也とも、此也とも註す、然れども是・此よりは意輕し「天命之謂レ性」「學而時習レ之」の如し、語勢によりて指すところの物を略することあり、孟子に「江漢以濯レ之、秋陽以曝レ之」とある如し、上に布の字を省きたるなり、之の字、名詞の上に置くときは、是と同じく「この」と訓む「｜人」「｜兒」の如し。○此は彼に對する辭、孟子に「彼一時也、此一時也」とあり。○是は非に對する辭なり、此は、此の時、或は此の處を切に指す、是は、汎にして虛用なり「夫子之至₂於是邦₁也、必聞₂其政₁」の是も、何れの邦と確かに指すにあらず、齊にても、衞にても、現に居たまふ邦を、汎く指すなり。○維・惟の二字は同音同義なり、上にばかり置く、是と略ミ同じけれども、非とは對せず、祭文獄頌等に多く用ふ。詩、召南「維鵲有レ巢、維鳩居レ之」○旃は音ミ之焉の合音なり之と略ミ同じ、詩に「上愼₂旃哉₁」の如し。○斯は此と近し、然れども彼に對せず「予將下以₂斯道₁覺中斯民上也」の如し「ここ」と訓むときは、卽の字の重き意なり。○諸は之と乎との兩義を合したる字なり「不₂之乎斯₁」は「不₂諸斯₁」の寫なり、句末にあるときは、疑の辭となる、孟

子に「遐至、盍レ去請」の如し。〇伊・時・伕の三字は、維と同じく、發語の辭にて、祭文等に用ふ。意輕し。〇之・往・如・逝・行・徂・征等の別は往（彳部五畫）の條を見よ。

【之江】シカウ　浙江の別稱、其の形之の字の如きが故。

【之字路】シジロ　屈曲して上ること、之の字の形の如き險路。方干詩「路盤二之字一見二禪關一」

【之無】シム　俗に文字を識ること少き者を譏りて不レ識二ーー一といふ。白居易の故事に本づく。唐書、白居易傳「其始生七月、能展レ書、姆指二ーー兩字一、雖二試百數一不レ差」

【之罘】シフ　山名、今の山東省登州府福山縣の東北に在り、海中に突出する半島の名、秦始皇此の山に登り石を立つ、灣内は即ち煙臺、通商港の一、貿易甚だ盛んなり、沿岸に砲臺あり、崆峒島の砲臺と對峙して渤海の咽喉を成す、今は港名をも之罘といひ、之を芝に作る。

【之子】ココノ　この子、此子に同じ。詩、周南「ーー于歸、宜二其室家一」

【仰レ之彌高】コレヲアフゲバイヨイヨタカシ　孔子の德の高大無邊なるを贊したる語。論、子罕「顏回喟然歎曰、——、鑽レ之彌堅」

【聽二之未一レ聞】コレヲキクニイマダキコエザルニオイテス　物の未だ聞えざる先に聽く。列子「——、察二之未一レ形、而鑑二其神智一、識二其才能一、可レ謂レ知レ人」曲禮「聽二於無一レ聲、視二於無一レ形」と同義。

【思レ之思レ之鬼神通レ之】コレヲオモヒコレヲオモヘバキシンコレニツウズ　日夜思索して怠らざれば、一旦豁然として悟る所あるをいふ。管子「思レ之、思レ之、又重思レ之、思レ之不レ得鬼神將レ告レ之」

【束二之高閣一】コレヲカウカクニツカヌ　高き棚の上に上げ置きて用ひず。晉書、庾翼傳「杜乂・殷浩、並才冠二當世一、翼弗二之重一、語レ人曰、此輩宜レ束二之高閣一」韓愈詩「春秋三傳束二高閣一、獨抱二遺經一窮二終始一」

【藐レ之】コレヲカロンズ　藐は小なり、又、輕なり、尊貴の人に遊說するには、先づ先方を輕視して畏れず、以て十分に其の說を盡すべきをいふ。孟、盡心「說二大人一則藐レ之、勿レ視二其巍巍然一」

【收二之桑楡一】コレヲサウユニヲサム　前日の失敗せし事を後日に回復するに喩ふ、桑楡は日西に傾きて桑楡の上に在る義。後漢書、馮異傳「失二之東隅一、——」

【運二之掌上一】コレヲシヤウジヤウニメグラス　事の甚だ爲し易きに喩ふ。孟、公孫丑「以二不レ忍レ人之心一、行二不レ忍レ人之政一、治二天下一、可レ運二之掌上一」＝運二之掌一。

【稱レ之不レ容レ口】コレヲシヨウシテクチニイレズ　口に餘るほどほめそやす。漢書、袁盎傳「剸客至二館中一、問レ盎、稱レ之皆不レ容レ口」

【叩レ之以レ大者則大鳴】コレヲタタクニダイヲモツテスレバスナハチタイメイス　師弟の問答は鐘の如し、之を叩くに大を以てすれば大鳴す、問の大小に應じて師の答に大小の異あるに喩ふ。禮、學記「叩レ之以レ小者則小鳴、——」

【陷二之亡地一然後存】コレヲバウチニオトシイレシカルノチニソンス　一旦士卒を滅亡の地に陷らしめて、而る後、人人をして自ら奮ひて生を得しむ。孫子、九地「——、陷二之死地一然後生」史、淮陰侯傳「信曰、兵法不レ曰、陷二之死地一而後生、置二之亡地一而後存」

【招レ之不レ來】コレヲマネケドモキタラズ　呼べども來らず、人物の高尙にして抗直なるにいふ。史、莊助傳「汲黯——、麾レ之不レ去」

【用レ之則爲レ虎不レ用則爲レ鼠】コレヲモチフレバトラトナリモチヒザレバネズミトナル　人を重く用ふれば虎の如き威勢あるも、用ひざれば鼠の如く隱れる喩。東方朔、答難「尊レ之則爲レ將、卑レ之則爲レ虜（中略）——」

【爲二之辭一】コレガジヲツクル　口實をつくる。論、季氏「君子疾下夫舍レ曰レ欲レ之而必爲二ーー一上」

四畫

【乎】コ ウ　篆　虖は古字

〇か、や、疑問の辭。論、八佾「禮後ー」〇疑問の反語。史、伯夷叔齊傳「可レ謂レ孝ー」〇かな、感歎をあらはす辭。論、雍也「中庸之爲レ德也其至矣ー」〇感歎の意をあらはす形容詞の語尾に添へる助字「郁郁ー」「巍巍ー」「蕩蕩ー」〇呼びかけに用ふる辭。論、里仁「參ー、吾道一以貫レ之」〇を（於・于）論、爲政「攻二ー異端一斯害也已」〇より（于・於）孟、萬章「孝子之至、莫レ大二ー尊一レ親」〇に（于・於）論、先進「浴二ー沂一風二ー舞雩一」〇呼に同じ、於ーアは感歎の意をあらはす助辭。詩、大雅「於ー小子」＝於戲・於虖・嗚虖・嗚摩

同訓異義　カ　〇乎・邪・耶・歟・與は共に句尾に置く字なり、疑の辭に、詠歎の義を兼ぬ「禮後乎」「其眞無レ馬耶」「爲レ仁之本歟」の如し、邪は耶と同じく、歟は與と同じ、乎の字、于の字の如く句間に用ふることあり「浴二乎沂一、風二乎舞雩一」の如し、又形容辭の下につきて「郁郁乎」「洋洋乎」などと用ふ、かかる場合にても、矢張り詠嘆の意を含めるなり、邪・耶・歟・與は、詠嘆の意、乎よりは輕くして、疑の意重し。〇ニ　乎・于・於の別は于（七九頁一畫）を見よ。

【乎哉】コサイ　〇かな、感歎をあらはす助辭「宜ーー」〇か、疑問をあらはす助辭。韓愈文「閣下且以爲二仁人一」

一一」〇や、反語の助辭。史記「何征而不レ服一一」

【乍】サ 㸑

〇しばらく（暫）淮南子「燈將レ滅而一明」〇たちまち（忽）孟、公孫丑「今人一見孺子將レ入於井」〇にはかに（猝）〇はじめて（初）〇國ながら、つつ。

同訓異義 乍・忽・倏・欻の別は忽（心部四畫）を見よ。

【乍雨】サウ たちまちあめふる。歐陽修詞「一一乍晴花自落」

【乍浦】サホ 地名、浙江省平湖縣の東南三十支那里に在り、鴉片戰爭に英兵の爲めに陷れらる、今は海口の要地たり。

【乏】ハフ ボフ 㞑 通音 バフ

〇とぼし（匱）なし、暫く無し、むなし（空虛）、まづし（貧）〇官職のあき、空位。左、成二「不敢攝官承一」〇すつ（廢）戰國燕策「不敢以一國事」〇つかる（疲）五代史、周德威傳「因其勞一而乘之」〇皮にて作れる矢防ぎ。周禮、春官、車僕「大射共三一」

【乏匱】ハフキ とぼし。國語「無二鐵乏一一之患一」

【乏窮】バフキユウ まづしくして苦む。＝貧窮・乏迫・貧乏・乏困。

【乏月】バフゲツ 四月の異名、冬穀既に盡きて、夏の麥未だみのらざるが故。〔四時纂要〕

【乏困】バフコン 乏匱に同じ。

【乏少】バフセウ とぼし。北史「撰衆一一」

【乏絕】バフゼツ 暫くの間乏しく盡きる。禮、月令「賜貧窮一振乏一一」

【乏餒】バフダイ とぼしくしてうう。漢書、魏相傳「振一一」＝乏餒。

【乏厄】バフヤク まづしく苦しむ、又其の者、厄は厄。後漢書、質帝紀「方レ春戒レ節、廣濟一一」＝乏困・乏窮・乏迫。

【承レ乏】トボシキヲウク ジヨウバフ 官に任ずることを謙遜していふ、適當の人なきが故に、己が暫く其の空位を補充する意。字解參看。

【七】畫

【乖】クワイ 㫆 㾞

〇そむく（背・睽）左、昭二十「楚執政衆而一」もとる（戾）和の對「一僻」「一張」たがふ、合はぬ、ことなる（異）さかふ（逆）〇分れる、はなれる（離）漢書、敘傳「官失學微、六家分一」

【乖異】クワイイ たがふ。史記「各一一難二施用一」

【乖違】クワイサイ そむきたがふ。陶潛詩「風水互一一」＝睽違。

【乖越】クワイエツ 度をこえてそむきたがふ。桓溫、檄胡文「六合殊レ風、九鼎一一」

【乖逆】クワイギヤク そむく。＝乖叛・叛逆。

【乖睽】クワイケイ そむきたがふ。呂大鈞賦「一一有レ甚二於鷗鷸一」

【乖忤】クワイゴ もとりさかふ。漢書、李廣傳「輕細微渺之漸、必生二一一之患一」

【乖舛】クワイセン もとりたがふ。〔劉向新序〕

【乖散】クワイサン そむきて逃げ去る、離散する。後漢書、公孫瓚傳「故謀臣猛將稍有二一一」

【乖舛】クワイセン そむきもとる。潘岳、西征賦「處崇之一一、何相越之遼迥」

【乖張】クワイチヤウ 弓が反對にそりかへる、くひちがふ、そむきもとる。韓愈詩「前計頓一一」＝背戾・乖角。

【乖背】クワイハイ もとりそむく、背馳する。何承天文「一二五經一故見レ棄二於先聖一」

【乖悖】クワイハイ そむきもとる。＝乖戾。

【乖叛】クワイハン そむく。漢書、谷永傳「制レ遠之道、微而無二一一之難一也」＝乖反。

【乖僻】クワイヘキ ねぢけもとる、僻は邪僻。＝乖邪。

【乖繆】クワイビウ あやまりたがふ、繆は違。晉書、殷仲堪傳「綜理一一、號令不一」

【乖濫】クワイラン そむきたがふ。後漢書「其爲二一一、胡可二勝言一」

【乖離】クワイリ そむきはなる「人心一一」＝乖貳。

【乖戾】クワイレイ たがひもとる。易林「與レ叔一一、動與レ失レ便」

【乖歪】クワイワイ そむきゆがむ。

【八】畫

【乗】乘（次條）の俗字。

【九】畫

【乘】㊀ジヨウ ㊁ジヨウ 㸑 㴦 乗は俗字

㊀のる（騎・駕）「一馬」易、乾卦「時一六龍以御天」〇またがる（跨）〇のす。列、黃帝「風一我邪」〇のぼる（上・登）列、黃帝「俱一高臺」〇かつ（勝）〇人をしのぐ（凌・加）周語「一人不義」〇因る、つけ入る「一勢」〇はかる（計）〇かけざん（倍加）〇記錄・歷史、事を記載する義。孟、離婁「晉之一」㊁つる、そろひ（雙・對）康熙字典「物雙曰一」法言「雙雁曰一」〇馬・矢などの同じ物の四つの稱。康熙字典「物四數皆曰一」、禮少儀「壺酒、孟子發二一矢一」

〇車の數をかぞふる稱。〇車・馬などののりもの。〇圖衆生を舟に載せて彼岸に到らしめる方便、小ー・大ー・最上ーの別あり。傳燈錄「此心卽佛曰ニ最上ー」〇圖のる、だまされる。〇はづむ、氣がーる、ーり氣。

【乘客】圖舟又、車に乘る人。

【乘艦】いくさ舟にのる、軍艦に乘る。

【乘釁】すきまにつけこむ。後漢書「光武嘗、赤眉必破ニ長安ー、欲ニーレー幷ニ關中ー」

【乘黃】神馬をいふ。管子「地出ニーー」

【乘軒】乘レ軒を見よ。

【乘桂】いかだにのる、桂は查に同じ。北史、韋瑱傳「ーレー下ニ釣磯ー」

【乘矢】四本のや。孟、離婁「發ニーー而後反」

【乘勢】勢につけこむ。孟、公孫丑「雖レ有ニ智慧ー、不レ如ーレー」

【乘積】或數に或數をかけあはせて得たるかず（單に積ともいふ）

【乘除】乘はかける、除は割る、かけて割ればもとの數に復す、故に功と罪と、又、譽と毀とさし引きして相つぐなふ義とす。韓愈詩「名聲相ーー」

【乘田】春秋時代魯國にて家畜を飼養することを掌る官名。孟、萬章「孔子嘗爲ニーー矣」

【乘馬】〇うまにのる、のりうま。〇四頭立の馬。詩、小雅「ーー在レ廐」＝駟馬。

【乘法】乘積を計へ出す算法。＝掛算。

【乘肥】肥えたる馬にのる。韓非子「ーレー衣レ輕、怡然自得」

【乘匹】のりうま（乘馬）

【乘輿】〇乘物の總稱。孟、梁惠王「今ーー已駕矣」〇天子の車馬、轉じて行幸中の天子を指していふ。蔡邕、獨斷「天子至尊、不ニ敢渫瀆言ニ之、託ニ之於ーー、乘、猶レ載也、輿、猶レ車也、天子以ニ天下ー爲レ家、不下以ニ京師宮室ー爲中常處上、則當ニ乘ニ車輿ー以行中天下上、故羣臣託ニーー以言レ之、或謂ニ之車駕ー」

【乘龍】〇龍に乘る。列仙傳「簫史得レ道、好吹レ簫、秦穆公以ニ女弄玉ー妻レ之、後弄玉乘レ鳳、簫史ーレー、共昇レ天去」〇女壻の貴く盛んなるをいふ。楚國先賢傳「黃憲・李膺、俱娶ニ太尉桓焉女ー、時謂ニ桓叔元兩女俱ーレー、言ニ得レ壻如ニ龍也」杜甫詩「門闌多ニ喜氣ー、女壻近ーレー」

【乘合】圖あひのり、同じ一つの舟又は車などに他の人人と共に乘る。＝同乘・同船。

【乘組員】圖船にのり込みて航海の業に從ふ者。＝船員。

乙部

【乙】イツ イチ 圓 通音 オツ

〇きのと、十干の第二位、五行の木に當る。爾雅、釋天「太歲在レ乙曰ニ旃蒙ー」〇甲に對して、第二位又は次の義とす。〇かがまる（屈）〇とどまる、とどむ（止）〇をはり（終）〇文書の讀みどまりの所につけるくぎりのしるし。史、東方朔傳「朔初上書、人主從ニ上方ー讀レ之、止輒ーニ其處ー」〇名の代りに用ふ、なにがし（某）史、萬石君傳「奮長子建、次子甲、次子ー」〇魚のはらわた（魚腸）一說に魚の腮骨共にー字形に曲れるもの。禮、內則「魚去レー」〇虎の兩脇の胸の皮下にある三寸許のー字形のもの。〇ひとつ、一に通ず「不ー」〇つばめ（燕）もと乙の字、形と音と似たるによりて通用す。

【乙乙】〇出て難き貌、苦み思ふをいふ。陸機賦「思ーー而若レ抽」＝乙乙・軋軋。〇ひとつひとつ。王羲之、十七帖「不ニ復ーーー」＝一一。

【乙禽】つばめ。黃裳元詩「茅簷四月ーー來」＝乙鳥。

【乙第】しもやしき、別邸。梁冀、操輒傳「命舍ニ之于永昌ーー」

【乙鳥】燕の異名、もと乙字、形音似たるによりて通用す。本草「燕一名ニーー」＝乙禽。

【乙榜】舉人をいふ。進士を甲榜といふの對。

【乙夜】午後十時、漢以後、一夜を甲乙丙丁戊の五夜に分つ。漢舊儀「畫漏盡、夜漏起、省中黃門持ニ五夜ー、五夜者甲夜（午後八時）ーー（十時）丙夜（十二時）丁夜（午前二時）戊夜（四時）」陳學詩「宵永ーー君王閒」＝二更。

【乙夜之覽】乙夜は午後十時、天子の讀書をいふ。杜陽雜編「文宗親レ朝後卽閱ニ羣書ー、謂ニ左右ー曰、若不ニ甲夜視レ事乙夜觀レ書、何以爲ニ人君ー邪」＝乙覽。

【乙覽】乙夜之覽の略。

【乙科】〇試驗の科目の第二等。甲科の次。唐書、韓休傳「與ニ趙冬曦ー俱ーー」〇後世俗に舉人をいふ。進士を甲科といふの對。

【乙種】第二等に位するもの、甲種の次「ーー程度」

【乙部】歷史類の書をいふ。丙部（第一頁四段）を見よ。

【乙子】圖末の子。

【乙姬】圖海中にありといふ龍宮の女神。

【乙女】ヲトメ 國少女。又、末に生れたる女。

【乞】

イツ・イチ 質 ヒツ 物 又、亂に作る

つばめ(玄鳥)＝燕。

一 畫

【九】

㊀キウ・ク 有 ㊁キウ 尤

㊀ここのつ。○ここのたび(九回)書、益稷「簫韶—成」○數のきはまり、數の終り。表聞「天地之至數、始於一、終於一爲」○周易にて老陽(陽の極數)をあらはす字「初—」「一二」○おほし(多)—國—山等の—は、必ずしも實數のみにあらず。○きはむ(究)○ひさし(久)○—は古の算法の名。㊁あつまる(衆)＝鳩に通ず。○あはす、糾に通ず。論、憲問「—合諸侯」

【九夷】キウイ 九種のえびす。後漢書、東夷傳「夷九種、畎夷・于夷・方夷・黃夷・白夷・赤夷・元夷・風夷・陽夷也、一曰、玄菟・樂浪・高驪・蒲餘・濊更・索家・東屠・倭人・天鄙也」

【九夷八蠻】キウイハチバン おほくのえびす。書、堯典「愼克—」商、湯通ニ道于——」＝八蠻九貊。

【九有】キウイウ 九州に同じ、有は其の地を極有する義。詩、商頌「奄二有—一」

【九垠】キウギン 國土のかぎり。王勃詩「伊我區寰、混レ濟ニ—一」＝九垓。

【九淵】キウエン ○きはめてふかきふち、九重のふち。○九つのふち。列、黃帝「視旋之淵、爲レ淵、止水之淵爲レ淵、流水之淵爲レ淵、沈水之淵爲レ淵、雍水之淵爲レ淵、汧水之淵爲レ淵、肥水之淵爲レ淵、是謂ニ—一」爲」

【九夏】キウカ ○夏の九十日。潛居、六月啓「三伏炎蒸、—一將レ謝」＝九暑。○周の九つの大いなる樂歌、夏は大(太)周(舟)鍾師以二鐘鼓一奏ニ—一」

【九江】キウカウ ○洞庭湖の異名。沅・漸・元・辰・敍・酉・澧・資・湘の九川が同じく合するが故。書、禹貢、蔡傳「—即今之洞庭也」○㊀の縣名、明代、—一府を設く、江西省に屬す。九南鐵路の起點たり、通商港にして貿易甚だ盛んなり、輸出品は、茶紙を以て大宗とす。

【九牛】キウギウ 我一毛」キウギウノ 九匹の牛の毛の中の一本の毛、大多數中の極少數に喩ふ。漢書、司馬遷傳「假令僕伏レ法受レ誅、若二九牛亡ニ一毛一」

【九垓】キウガイ 天地のはて。爾雅「九天之際曰ニ—一」＝天垠・九坂。

【九棘位】キウキヨクヰ ○孤卿大夫と公侯伯子男との位、外朝をいふ。禮、王制「史以二獄成一告二于正一、正聽レ之、正以二獄成一告二于大司寇一、大司寇聽二之棘木之下一」注「左九棘孤卿大夫位焉、右九棘公侯伯子男位焉」○九卿の位。

【九廻腸】キウクワイチヤウ ○心腸の迴轉するほど憂悶する義。司馬遷、報二任安一書、「腸一日而九廻」○川などの屈曲多き形容。柳宗元詩「江流曲似ニ——一」

【九官】キウクワン ○古、國家の政を執りし九つの大官。司空・后稷・司徒・士・共工・虞・秩宗・典樂・納言をいふ、司空は百揆ヒヤクキを總べ、今の總理大臣、后稷は農政を掌り、司徒は五教を敷き、士は訟獄を理め、共工は百工の職事を供給し、虞は山澤の事を掌り、秩宗は宗廟百神を祀ることを掌り、典樂は音樂舞蹈の事を掌り、納言は帝命を出納するの官にして、下言を聽きて上に納れ、上言を受けて下に宣ぶるものなり(書、舜典)○國島の名、大き鵬鯤の如く、性怜悧にして人語をまねす。＝梁吉子。

【九刑】キウケイ 周の九つの刑法、墨刑(入墨刑)・劓刑(鼻切刑)・宮刑・大辟(死刑)流刑・贖刑(科料)鞭刑(笞刑の一)・扑刑(笞刑の二)左、昭六「周有ニ亂政一、而作ニ——一」

【九卿】キウケイ 九人の大臣、時代によりて名異る、周は、少師・少保・少傅(以上三孤)冢宰・司徒・宗伯・司馬・司寇・司空(以上六卿)秦漢は、大常・

光祿勳・大鴻臚・大司農・衞尉・太僕・廷尉・宗正・少府。宋は大常・光祿勳・衞尉・太僕・廷尉・宗正・大鴻臚・大司農・少府。禮、王制「天子三公ーー二十七大夫、八十一元士」

【九經】○周禮・儀禮・禮記・左傳・公羊傳・穀梁傳・易經・書經・詩經〔初學記〕○一說に易・詩・書・禮記・春秋・孝經・論語・孟子・周禮。○天下を治むる九つの道。中庸「凡爲二天下國家一有二ーー一、曰修レ身也、尊レ賢也、親レ親也、敬二大臣一也、體二羣臣一也、子二庶民一也、來二百工一也、柔二遠人一也、懷二諸侯一也」

【九經庫】九經に深く通ぜるをいふ。舊唐書、谷那律傳「貞觀中累補二國子博士黄門侍郎一、褚遂良稱爲二ーーー一」

【九竅】人體に備はる九つのあな。口・兩眼・兩耳・兩鼻孔(以上陽竅)兩便孔(陰竅)をいふ〔周禮、天官、疾醫〕＝九穴。

【九穴】九竅に同じ。

【九月九日】菊の節句、卽ち重陽の節をいふ。續齊諧記「汝南桓景隨二費長房一遊學累レ年、長房謂レ之曰、汝家當レ有二災厄一、急宜レ去、令下家人各作二絳囊一、盛二茱萸一以繫レ臂、登二高山一、飮中菊酒上、此禍可レ消、景如レ言、擧レ家登レ高、夕還見二雞犬牛羊一時暴死一、長房聞レ之曰、代レ之矣」王勃詩「ーーー望鄉臺」

【九京】墓地をいふ。京は原に通ず。よみぢ。禮、檀弓「是全二要領一以從二先大夫於ーー一」＝九原。

【九原】戰國時代の晉の卿大夫の墓のある地名。轉じて墓地又はよみぢ(黃泉)の義とす。黃庭堅賦「願睎ーー兮、豈其可レ作」＝九京。

【九賢】九人の賢人。明一統志「ーー祠在二河南府嵩縣治北一、ーー宋周敦頤・程顥・程頤・邵雍・張載・司馬光・呂祖謙・朱子、元許衡」同書「ーー祠在二吉安府學明倫堂一、祀二宋歐陽修・楊邦乂・胡銓・楊萬里・周必大・胡夢昱・歐陽珣・歐陽守道・文天祥一」

【九獻】古の禮、主客九たび酒を酬酢するをいふ。周禮、大行人「饗禮ーー」注「ーー者主酌獻レ賓、賓酢二主人一、主人酬レ賓、酬後更八獻、是爲二ーー一」

【九五】易の卦にて、下より數へて五つ目の陽爻。

【九五之尊】天子の位。九は陽の數、九五は易の卦にて天子の位。易、乾卦「九五飛龍在レ天、利レ見二大人一」謝觀賦「懷勞二百二之勞一、足レ居二ーーー一」

【九功】九種の功績。水・火・金・木・土・穀(以上を六府といひ、民を養ふ基)正德・利用・厚生(以上を三事といひ、善政の本)書、大禹謨「ーー惟敍」左、文七「六府三事、謂二之ーー一」

【九孔螺】石決明の異名。明一統志「惠州府土産二ーーー一」本草「石決明一名ーーー」

【九國】○戰國の九國。紺珠「齊・楚・燕・趙・韓・魏・宋・衞・中山」○九州に同じ。

【九穀】黍・稷・秫・稻・麻・大豆・小豆・大麥・小麥〔周禮、太宰、注〕

【九載相逢】九年目に出逢ふ義、載は歲なり。杜甫詩「九載一相逢、百年能幾何」

【九三】易卦にて、下より數へて三つ目の陽爻。

【九山】○九つの山。會稽・泰山・王屋・首山・太華・岐山・太行・羊腸・孟門〔呂覽、淮南子〕會稽・衡山・華山・沂山・岱山・嶽山・醫無閭・霍山・恆山〔職方氏、九州山鎭〕○多くの山。○九州の名山。書、禹貢「ーー刊旅」

【九二】易卦にて、下より數へて二つ目の陽爻。

【九思】君子の平生思ふ所九あるをいふ。論、季氏「君子有二ーー一、視思レ明、聽思レ聰、色思レ溫、貌思レ恭、言思レ忠、事思レ敬、疑思レ問、忿思レ難、見レ得思レ義」

【九死一生】殆ど死せんとして僅に助かりし義、極めて危きをいふ。

【九州】○九つの國、冀・兗・青・徐・荊・揚・豫・梁・雍の稱〔書、禹貢〕＝九土・九國。○國西海道九ヶ國の稱。

【九秋】秋の九十日。王勃詩「ーー良會少、千里故人稀」

【九仞功虧二一簣一】九仞の山を築くに、一簣の土を缺けば、其の功を完成する能はず、以て積年の勞も一失の爲めに敗るるに喩ふ。書、旅獒「夙夜罔レ或レ不レ勤、不レ矜二細行一、終累二大德一、爲レ山九仞、功虧二一簣一」

【九章】○虞舜の世、天子の冕服の模様は十二章なりしが、周に至りて其の中の日月星辰を旂に升せ、冕服にはーーとす。周禮、春官、司服注「古天子冕服十二章、至レ周以二日月星辰一畫二於旌旗一、而冕服ーー、一曰龍、二曰山、三曰華蟲、四曰火、五曰宗彝、皆畫以爲レ繢、六曰藻、七曰粉米、八曰黼、九曰黻、皆絺以爲レ繡」○古の算法の名。後漢書、鄭玄傳、注「ーー算術周公作也」＝九數。

【九錫】大功ある者を優禮して特に賜はる九つの品。一に車馬、二に衣服、三に樂器(一に樂則)四に朱戶、五に納陛、六に虎賁、七に鈇鉞、八に弓矢、九に秬鬯(祭に用ふる酒)〔漢書、武帝紀注〕

【九春】春の九十日。曹植詩「自期三年歸、今已歷二ーー一」＝靑春・陽春。

【九夏】夏の九十日の間の暑をい

ふ。管子「一一乃至」＝九夏。

【九職】キウシヨク〇舜の九佐。緯略「契爲司徒、禹爲司馬、皐爲司空、后稷爲田疇、夔爲樂正、倕爲工師、伯夷爲秩宗、皐陶爲大理、益掌驅禽」〇國に宮職・中宮職・春宮職・左右京職・大膳職・修理職。

【九成】キウセイ　〇音樂の一曲終るを一成といふ。周禮、春官「九奏乃終」、謂之一一＝九奏。〇九層に同じ。宋之問詩「層城路一一」

【九斗】キウト〇九曜に同じ。〇北斗をいふ＝九魁。

【復九世之讎】キウセイノアダヲフクス　九代以前の仇を討つ。漢書、匈奴傳「昔齊襄公一一、春秋大之」

【九霄】キウセウ　おほぞら。孫綽、原憲贊「志逸一一、身安陋衖」＝九天・雲霄・沖霄。

【九折坂】キウセツバン　曲折多き阪みち、つゞらをりの山路。又、其の阪の名。四川省に在り。漢書、王尊傳「先是王陽爲刺史、行部至邛郲一一、歎曰、奉先人遺體、奈何數乘此險、後以病去、及尊爲刺史、至其阪、問吏曰、此非王陽所畏道耶、吏曰是、尊叱其馭曰、驅之、王陽爲孝子、王尊爲忠臣」＝羊腸阪。

【九遷】キウセン　九たび官職が遷む。鍾會、上蘇僕射書「日受千金之賜、一歲一一其官」

【九層之臺起於累土】キウソウノダイモルイドニオコル　九層の高き臺も其の始めは極めて少しの土を積み上げて成る。事は細より大に至るに喩ふ。老子、第六十四章「一一、千里之行、始於足下」

【九族】キウゾク　〇高祖・曾祖・祖父・父・己・子・孫・曾孫・玄孫の稱〔書、堯典〕〇父族四、母族三、妻族二をいふ。左傳、桓六年「親其一一」注「一一、謂外祖父・外祖母・從母子・及妻父・妻母・姑之子・姊妹之子・女子之子・幷己之同族、皆外親有服、而異族者也」

【九閡】キウガイ　霄漢の階段に同じ〔太玄經〕

【九地】キウチ　極めて低き處。九天の對。孫子、軍形「善守者、藏於一一之下、善攻者動於九天之上」

【九疇】キウチウ　箕子が武王の問に答へたる天下を治むる九種の大法。五行（水・火・木・金・土）五事（貌・言・視・聽・思）八政（食・貨・祀・司空・司徒・司寇・賓・師）五紀（歲・月・日・星辰・曆數）皇極・三德（正直・剛克・柔克）稽疑（雨・霽・蒙・驛・克・貞・悔）庶徵（雨・暘・燠・寒・風・時）五福（壽・富・康寧・攸好德・考終命）〔書、洪範〕＝九法。

【九重】キウチヨウ　こゝのへ。王城の門は九重に作る。楚辭、九辯「豈不鬱陶而思君兮、君之門以一一」

【九通】キウツウ　歷代の制度を記する九種の書。通典・通志・文獻通考の三通に、皇朝文獻通考・皇朝通典・皇朝通志・續通志・續通典・續文獻通考を加へたる二千二百三十七卷。

【九鼎大呂】キウテイタイリヨ　九鼎は禹の世に鑄りたる鼎、夏・殷・周の三代傳へて寶とす。大呂は周廟の大鐘。其の寶の大なるに合す、以て貴重のものに喩ふ。史、平原君傳「毛先生一至楚、使趙重於一一」

【九天】キウテン　〇九方の天。呂覽、有始「天有九野、中央曰鈞天、東方曰蒼天、東北方曰變天、北方曰玄天、西北方曰幽天、西方曰顥天（淮南、天文訓には顥を昊に作る）西南方曰朱天、南方曰炎天、東南方曰陽天」太玄經「一中天、二羨天、三從天、四更天、五晬天、六廓天、七減天、八沈天、九成天」＝九霄・九旻・九野。〇天の最も高き處。九地の對。九地を見よ。

【九冬】キウトウ　冬の九十日。劉峻文「一一有隙、三餘暇時」

【九德】キウトク　人の行ふべき九つの德。書、皐陶謨「行有一一」（中略）寬而栗・柔而立・愿而恭・亂而敬・擾而毅・直而溫・簡而廉・剛而塞・彊而義」寬は寬容、栗はおごそか、愿はまこと、亂はをさめる、擾は順、毅は果斷、塞は充實、彊は屈せず。

【九拜】キウハイ　〇禮拜の九つの形式。稽首・頓首・空首・振動・吉拜・凶拜・奇拜・褒拜・肅拜。周禮、春官「太祝辨一一」〇幾度もおじぎする。

【九陌】キウハク　都城の大道凡そ九條あるをいふ。漢の長安城中八街九陌あること三輔黃圖に見ゆ。楊巨源詩「一一華軒爭道路」

【九方皋】キウハウカウ　古の善く馬を相せし人。秦の穆公の爲めに良馬を求めて之を得たり。列子、說符「伯樂曰、臣之子皆下才也、臣有所與一一、其相馬、非臣之比也」

【九法】キウハフ　九疇に同じ。韓愈、與孟簡書「聖賢之道不明、則三綱淪而一一斁」＝九疇。

【九尾狐】キウビノキツネ　〇太平の世に出づといふ、尾の九つに分れたる狐。宋書、符瑞志「漢章帝元和中、一一見郡國」〇奸佞なる人に比す。商輅、續綱目「宋眞宗以陳彭年參知政事、彭年敏給强記、尤好刑名之學、性奸諂、時號一一」

【九賓】キウヒン　天子の九種の賓客。史、叔孫通傳「大行設一一」注「一一則周禮九儀也、謂公侯伯子男孤卿大夫士也」

【九百】キウヒヤク　愚人をいふ。愛日齋叢鈔「陳無己云、世人以癡爲一一、謂其精神不足也」

【九服】キウフク　周代の制。侯服・甸服・男服・采服・衞服・蠻服・夷服・鎭服・藩服の稱。服は天子に服從する義。〔周禮、職方氏〕＝九畿。

【九牧】○九は九州、牧は牧民の官、九州の長官をいふ。左、宣三「夏之方有レ德也、遠方圖レ物貢レ金、――鑄レ鼎象レ物」=九采。○九州。羅隱詩「――土田周制在」

【九萬里】極めて遠きをいふ。莊、逍遙遊に鵬の大を形容して「摶二扶搖一而上者――」とあるに本づく。楊萬里、雪軒詩「上下――、洗淨無二纖埃一」

【九野】○九州に同じ。後漢書、馮衍傳「疆二理――一」○九天をいふ。九天（六八頁三段參看）。

【九陽】○日をいふ。後漢書、仲長統傳「沆瀣當レ餐、――代レ燭」○日の出る處をいふ。楚辭「朝二――一兮[illegible]」

【九流】九つの學派。儒家者流五十三家・道家者流三十七家・陰陽家者流二十一家・法家者流十二家・名家者流七家・墨家者流六家・縱橫家者流十二家・雜家者流二十家・農家者流九家、以上に小說家者流を加へて十家とす（漢書、藝文志）

【九旒冕】前後九つの玉藻を垂れたる冠。宋史「――、親王中書門下奉祀則服レ之」

【九里香】木犀の異名。

【九曜】○日曜・月曜・火曜・水曜・木曜・金曜・土曜・計都・羅睺の九星の稱。○圖紋所の名、一つの大星の外を八つの小星の繞れる形。

【九十春光】三ヶ月九十日間ののどけき春景色。陳陶詩「――在二何處一、古人今人留不レ住」

【九品】○佛極樂往生の等級、上中下の三品ありて、其の各に又上中下の別あり。「――淨土」「――蓮臺」○九卿をいふ。周語「外官不レ過二――一」○官吏の九等の階級。魏志、陳羣傳「制二――官人之法一、羣所レ建也」

二畫

【乞】㊀キツ 物 ㊁キ 未 通音 コツ

㊀こふ、もとめる（要求）=匃。○こひ、ねがひ。張羽詩「安得金丹從レ汝―」○こじきする、こじき、こつじき。㊁物を人にあたふ（與）晉書、謝安傳「以レ墅―レ汝」

同訓異義 乞・丐・請の別は丐（四一頁三段）を見よ。

【乞假】いとまを請ひて休息する、假は暇の古字。盧綸詩「――依二山宅一、疑蹤屬二歲闌一」

【乞丐】○こじき。=乞人・乞匃。○求め乞ふ。陳琳文「曹操父嵩――攜養、因レ贓假レ位」

【乞匃】前條に同じ。

【乞骸】乞身に同じ。歐陽修詩「何時乞二殘骸一」=乞二骸骨一。

【乞巧】陰暦七月七日の夕、卽ち七夕に牽牛・織女の二星を祭るに、女兒五色の絲を捧げて手藝の上達を禱るをいふ。我國にて――奠とて、天平勝寶七年始めて淸涼殿の庭にて行はる。荊楚歲時記「七夕、婦女以二綵縷一穿二七孔針一、或以二金銀鍮石一爲レ鍼、陳二瓜果於庭中一以―――」

【乞巧奠】陰暦七月七日の夕、牽牛・織女の二星を祭り、裁縫の上達を禱る儀、ほしまつり。前條參看。

【乞巧棚】たなばたを祭るたな。東京歲時記「七夕家家錦綵、結爲二―――一」

【乞巧樓】東京夢華錄「唐時京師七夕、貴家多結二綵樓于庭一、謂二之―――一」

【乞言】老人に善言の敎を乞ふ。禮、內則「凡養レ老五帝憲、三王有二――一」有は又。

【乞士】佛僧の別稱、梵語の比丘は其の義――と爲す、上は諸佛に法を乞ひて慧命を資益し、下は施主に食を乞ひて色身を資益するが故。

【乞兒】乞丐に同じ。列、黃帝「路遇二――馬醫一」=乞人。

【乞人】こじき。孟、告子「蹴爾而與レ之、――不レ屑也」=乞兒。

【乞身】辭職を乞ふ、仕ふる者は身を委ねて君に事ふ、故に致仕を――といふ。後漢書「以レ病上書――」=乞二骸骨一。

【乞借】求めて借る。曹唐詩「――新城利鉸刀」=乞貸。

【乞食人】こじき。戰國策、「豫讓自刑以變二其容一、爲二―――一而往乞」=乞人・乞丐。

【乞貸】求めて借る、貸は借、貸の音の時はかす。漢書、韓王信傳「旦暮――蠻夷」=乞貸・乞借。

【乞米帖】法帖の名、唐の顏眞卿の書。王偁詩「學レ寫顏公乞米書」

【也】ヤ 馬

○なり、決定の辭、句の終に置く。論、泰伯「君子人與、君子人―」○上を結ぶ辭。論、學而「亦不レ可レ行―」○下を起す辭。論、學而「夫子至二於是邦一―」○か。や、疑問の辭。孟、梁惠王「寡人之民、不レ加レ多何―」○や、呼びかけに用ふ。論、先進「回―其庶乎」○語勢を強める爲めに用ふる助字。論、子路「必―狂狷乎」○かな（哉）詠歎の辭。左、成二「惜―不レ如レ多與二之邑一」○また、發語の辭、多く詩又は俗語に用ふ、亦よりは輕し。杜甫詩「靑袍―自公」

同訓異義 なり也・又・復・亦などの別は又（部首二畫）の條を見よ。

【也哉】○斷定の最もつよき辭。○

反語を表はすに用ふ。

【也乎哉】○贊歎の辭。○疑問の辭、又、反語を表はすに用ふ。

【也知】也は發語。岑參詩「也知鄕信日應レ疎」

【也者】といふの義。論、學而「孝弟ーー其爲レ仁之本與」

六 畫

【乱】亂(乙部十二畫)の俗字。

七 畫

【乳】ジュ ニュ 慶 通音 ニュウ

○ち、ちち、ちぶさ。○ちちしる「ー汁」○石灰質を含める水滴の凝りたるもの「石鐘ー」○ちちをのます。○人又鳥獸が子を生む、子が生まる。○鳥が卵を伏せる「雞ー」○やはらか(柔)○やしなふ、そだつ(育)○いつくしむ(字)○母親。唐書、韓思彥傳「兄弟共ー而生」○哺ー類は乳をのませてそだてる動物類。○馬ーは葡萄の異名。

【乳媼】うば、めのと。唐書、元德秀傳「兄子、襁褓喪レ親、無レ資得ニーー一、德秀自乳レ之」＝乳母・乳嫗。

【乳醫】○乳の疾を治する醫者。漢書、霍光傳「ーー淳于衍」○産科醫の一名〔書敍指南〕

【乳嫗】乳媼に同じ。古今詩話「頻蘩翁、敢辭ニーー之譏一」

【乳香】凝固せし樹脂。又、其の樹の名、常緑喬木、紅海の沿岸に產す、葉は羽狀複葉、小白花開く、其の樹幹よりーーを滲出す、薰香の料とす。

【乳柑】くねんぼ、九年母、香橘。浙江、永嘉等の縣に出づ。太眞外傳「開元末、江陵進ニーー橘一」

【乳癌】乳房に生ずる惡性の腫物。乳腺がはれて硬くなる病。

【乳牛】牛乳をしぼり取る爲めに飼ふ牛。

【乳虎】子を乳育する虎は平時よりも猛し、以て甚だ猛暴なる者に喩ふ。漢書、甯成傳「寧見ニ乳虎一、無レ値ニ甯成之怒一、其暴如レ此」

【乳兒】ちのみご。＝嬰兒。

【乳犉】子もちの牝牛。宣和畫譜「ーー放牧」

【乳齒】ちのみば、ぬけかはらざる前の幼兒の齒。齊民要術「相法、一歲上下生ニーー各二一」＝乳牙。

【乳臭】ちちくさし、經驗に乏しき者を嘲りていふ。史、高祖紀「漢王以ニ韓信一擊ニ魏王豹一、問ニ酈食其一、魏大將誰、對曰柏直、漢王曰、是口尚ーー、安當ニ吾韓信一」

【乳人】小兒に乳をのます人。宋書、劉峻敬傳「無レ由レ得ニーー一」＝乳母・乳媼。

【乳石】鐘乳石をいふ。

【乳腺】乳房の中に在りて乳汁を分泌する腺。

【乳豬】子に乳をのます牝豚。又、荀、榮辱「ーー不レ觸レ虎、乳狗不ニ遠遊一、不レ忘ニ其親一也」

【乳頭】○ちぶさの尖端に突起せるもの、乳腺の總べてあつまる處。○舌の面に在る微小なる突起。

【乳房】ちぶさ、膨房。

【乳鉢】くすりをねり又、粉にするに用ふる小形のすりばち、陶器又玻璃器にて造る。それに用ふるすりこぎを乳棒といふ。

【乳糜】○食物が胃內にて消化液の作用を受けて白色乳狀液に化せし者。○牛酪の一名。水經、注「長者女以ニ金鉢一盛ニーーー上レ佛」

【乳母】うば。史、張蒼傳「蒼之免レ相後、老口中無レ齒食レ乳、女子爲ニーー一、妻妾以レ百數、嘗孕者不ニ復幸一、蒼年百餘歲而卒」＝乳媼・乳嫗・嬭。

【乳棒】乳鉢を見よ。

【乳木】佛 ちぎ、護摩に燒く木。

【乳名】をさな名、幼名、小兒の時の名。蘇軾新話「生有ニ其父姓名附里及已ーー一」＝小字。

【乳養】ちちをのませてそだてる。後漢書「母自ーー」

【乳雛】ちちのできもの、乳腺炎の一名、分娩後數日惡寒發熱して乳房紅く腫れて痛を覺ゆるもの、急に治せざれば化膿す。

【乳酪】牛・羊の乳にて製したる食品の爲。晉書、天錫傳「乳酪養レ性、人無ニ嫉心一」

【乳兄弟】國 同じ乳母に育てられし小兒ども。＝阿嬭兒。

八 畫

【乹】乾(次條)の俗字。

十 畫

【乾】(一)ケン (二)カン 先 寒

(一)易の卦の名、純陽の卦。○いぬゐ、方角にて戌と亥との間(西北)易、繫辭「ー西北之卦也」○そら(天)○天子に關することに用ふ「ー綱」「ー德」○すすむ(進)行きて息まず。○すこやか(健)易、本義「ー健也」○つよし(堅)かたし(固)○つとむ(勤)(二)かわく(燥)かわかす、ひる、水が涸れる。晉書、范汪傳「冬月河淡ー涸」ほす。○とぼし、缺乏する。蕭功武、義兵行「供ニ給軍需一民力ー」○うはべだけ、表面だけつく

らふ。北史、尉景傳「何顧ㇾ啼濕哭」〇連ー（レン）は馬の飾。顧況詩「金鞍玉勒錦連ー」〇桑乾（サウカン）は河の名、卽ち濕水。

【乾運】（カンウン）天を維持する大づな、天の成り立つ大本（おほもと）。李義府詩「飛章神ニ地絡ニ戴化樞ニーー」

【乾曜】（カンエウ）日をいふ。元史「月之道循ㇾ行、明同ニ良於ーー」

【乾圖】（カンヅ）天のまるきをいふ。易經「乾爲ㇾ天爲ㇾ圜」院詩、通易論「ーー坤方、女柔男剛」

【乾坤】（カンコン）天地の局面を回轉する、天下の亂を平定する義。韓愈、潮州刺史謝ニ上表「陛下卽位以來、射禱郊、——、天戈所ㇾ麾、莫ㇾ不ニ寧順ニ」

【乾剛】（カンガウ）健かにして物に屈せざる德。歐陽修表「奮ニ發ーー一、闡ニ承天統ニ」

【乾綱】（カンカウ）天ののり、帝王のおほづな、君主の大權。晉書、華譚傳「聖人之臨ニ天下ニ也、順ニーー一以流ㇾ化、順ニ谷風一以興ㇾ仁」〓帝綱、皇綱、王綱。

【乾基】（カンキ）帝王の事業のもとゐ。晉書、趙記慕容皝疏「闡ニ崇ーーニ

【乾化】（カンクワ）五代梁の太祖の年號。

【乾元】（カンゲン）天の道、乾は天、元は大。易、乾彖傳「大哉ーー、萬物資始」

【乾乾】（カンカン）進みて止まざる貌。易、乾卦「君子終日ーー、夕惕若」

【乾坤】（カンコン）〇易の二つの卦の名、轉じて〇天と地と。易、說卦「乾爲ㇾ天」「坤爲ㇾ地」韓愈詩「雪擁ーー合」〇陽と陰と。〇いぬゐ（西北）とひつじさる（西南）と。

【整ニ頓乾坤ニ】（セイトンカンコン）亂を定めて天下の秩序をただす。杜甫、洗兵馬行「二三豪俊爲ㇾ時出、——濟ㇾ時了、東走無ㇾ復憶ニ鱸魚一、南飛各有ニ安ㇾ巢鳥ニ」

【乾坤清氣】（カンコンセイキ）天地に滿てる清き氣。權德輿詩「乾坤有ニ清氣一散入ニ詩人肺ニ」

【乾坤清氣錄】（カンコンセイキロク）書名、十四卷、明偶桓撰す、金宋の末より明初に至るまでの詩を集む、去取極めて苟もせず。

【乾兒】（カンジ）こぶん、手下。謂青日札「ーー門生布ニ滿天下ニ」

【乾城】（カンジヤウ）乾闥婆城に同じ。

【乾淳三先生】（カンシュンサンセンセイ）朱熹（字は元晦）張栻（字は敬夫）呂祖謙（字は伯恭）

【乾道】（カンダウ）〇易に所謂至健の德をいふ、又天の道の義。易、乾卦彖傳「ーー變化、各正ニ性命ニ」〇宋の孝宗の年號。

【乾道成ㇾ男】（カンダウセイダン）乾は天にして陽に配す、故に男を成すといふ。易、繫辭「ーー、坤道成ㇾ女」

【乾闥婆城】（ケンダツバジヤウ）佛水蒸氣の作用にて山川城闕などが空中に幻出するもの、俗に海中の蜃（シン）が氣を吐くに由るといふ。智度論「可ニ眼見一無ㇾ有ㇾ實、名ニ——ニ」日海市・蜃氣樓（シンキロウ）

【乾餱】（カンコウ）天子が自ら政を裁決する。

【乾端坤倪】（ケンタンコンゲイ）天地のはて、倪も端。韓愈、南海神廟碑「——、軒豁呈ㇾ露」

【乾竺】（カンヂク）天竺に同じ。傳燈錄、東堂不ㇾ折ㇾ柱、南塞不ㇾ學ㇾ仙、卻來ーー寺、披ㇾ衣敷ニ坐禪ニ」

【乾闥】（ケンタツ）天の國、天象をいふ。舊唐書、禮儀志「仰則ーーニ」

【乾德】（カントク）〇乾の德の義、健かにして進みて息まざる德。易林「扶陽之政、以保ニーー一、終無ニ患惑ニ」〇天子の德。〇宋の太祖の年號。

【乾隆】（カンリウ）清の高宗の年號。

【乾薑】（カンキヤウ）天の神、又、陽の精氣。晉植、漢二祖優劣論「世祖體ニーー之休德一、襲ニ眞和之純精ニ」

【乾嘔】（カンオウ）からえづき。法苑珠林「推ㇾ胸ーー」

【乾艾】（カンガイ）もぐさ、ほしたるよもぎ。灸術に用ふ。齊民要術「取ニーー一雜藏ㇾ之」

【乾漚】（カンオウ）川や池の水がかれる、字解を見よ。

【乾薑】（カンキヤウ）しやうがの乾したるもの、藥用とす。

【乾吃】（カンキツ）どもること。沈遘詩「醫有ニ當年ーー兒ニ」

【乾魚】（カンギョ）魚の乾したる者、ひもの。

【乾枯】（カンコ）かわきて水氣がなくなる。

【乾候】（カンコウ）熱帶地方にて、一年內に二回現るる乾燥する季節。

【乾喉】（カンコウ）のどがかわく、口を緘めて說く。說苑「ーー世賢、仰ㇾ天而歎」

【乾燥】（カンサウ）〇かわく。〇おもしろみなし、無趣味。

【乾燥療法】（カンサウリヤウハフ）砲創ヤケドの療法、洗滌せず、ただ拂拭して繃帶を施す療法。

【乾鵲噪而行人至】（カンジヤクサウジカウジンイタル）かささぎが鳴くときは遠行の客が歸り來るしるしなりといふ俗說。西京雜記「陸賈曰、——、蜘蛛集而百事喜、故乾鵲噪則餘ㇾ之、蜘蛛集則放ㇾ之」說は性質をにくみて乾をよろこぶ、故に乾鵲といふ、此の俗說によりて喜ぶともいふ。

【乾笑】（カンセウ）うはべをよそほひて強て笑ふ。能改齋漫錄「世言ニ笑之不ㇾ信者一爲ニーー一、按宋范曄謀ㇾ逆、就ニ刑於市一、妻來別罵曄曰、身爲ニ不ㇾ足ㇾ惜ㇾ師、奈何枉ニ殺子孫一哉ーー而已」

【乾癬】（カンセン）皮膚病の名、ひぜん、一種の病菌の寄生して起るもの。

【乾打壘】（カンダラヒ）石碑の文字を打ちて紙に寫し取るに用ふる墨、松烟に燈ㇾ煤を和して製す。

【乾竹】（カンチク）かれたるたけ。金光明經

「卽以ニ一一ー刺ー頭」＝枯竹。

【乾啼】うはべのみ悲みて泣く、そらなき。字解を見よ。

【乾電池】みづ氣無き電池、レクランセイ電池の藥液を石硏末等に浸して造りたるもの。

【乾肉】ほじし。

【乾板】たねいた、寫眞に用ふる感光液を塗りし硝子板。＝乾片。

【乾飯】ほしいひ。後漢書、吳祐傳「常食ニ一一ー」

【乾糒】ほしいひ〔唐書、杨庭傳〕＝乾飯。

【乾物】食用植物のほしたるもの。干瓢・椎茸の類。

【乾瓢】圖夕顔の實の白く柔かき部分のみを、長く薄く裂きて干したるもの＝干瓢。

【乾沒】水を干乾し端ぢの如く、財利をきびしく民より取りて己の有とする義。史、酷吏傳「張湯始爲ニ小吏一、一一」」誠に利を得るを乾といひ、利を失ふを沒といふ。

【乾浴】湯水を用ひずしてゆあみする、按摩する時、兩手にて身體をこする一種の養生法。雲笈七籤「夜臥時、常以ニ兩手一揩ニ摩身體一、名曰ニ一一ー」

【乾酪】牛乳を精製して、乾しさらしたる食品。唐書、地理志「茂川通化郡貢ニ一一ー」

【乾糗】ほしたる食料、ほしいひの類。又飮料に對してすべての食物。

十二畫

【亂】ラン 俗 乱は俗字

○みだる、みだす、みだれ(案)治まらず、秩序が立たず「ーー世」「ー邦」○安からず。楚辭、大招、章句「憂思煩ー」きまらぬ、事の未だ定らざる辭。檀弓「夫婦方ー」○たたかひ、兵寇、左、文七「兵作ニ於內一爲ーー」○心惑ふ、思ひ煩ふ。鮑照、採菱歌「春思ー如ー麻」○をさむ（治）理〕○河の流を正しく橫ぎり渡る。書、禹貢「ー於河」○淫する、淫行「ー淫ー」姦する。史、黥布傳「王疑ニ其與ー」○まじふ、まじはる（混雜）○音樂の卒章。論、泰伯「師摯之始、關雎之ー」○霍ーは病名、暑氣にあたりて吐瀉する病。

【亂鴉】あちらこちらにみだれ飛ぶからす。

【亂葦】みだれしげれるあし。張籍詩「野塘晴明ーー開」

【亂雲】みだれたる雲。

【治レ亂之藥石】刑罰に喩ふ。後漢書、崔寔傳「政論曰、蓋爲レ國之法、有レ似レ理レ身、平則爲レ養、疾則攻焉、夫刑罰者、ーー也、德教者、興レ平之粱肉也」

【撥レ亂反レ正】撥亂反正を見よ。

【亂階】階は梯、みだれるきざはし。詩、小雅「無レ拳無レ勇、職爲ニーー」」＝禍梯・亂梯。

【亂高下】國急に物價のあがりさがりの甚だしきにいふ、暴騰に次ぐに暴落を以てする類。

【亂行】みだらなるおこなひ、亂暴なるふるまひ。

【亂逆】謀叛、むほん。

【亂蛩】しきりにみだれ鳴くこほろぎ。范成大詩「行行ーー響」

【亂杙】國列を正さずに打ち込みしくひ。「ーー逆茂木」

【亂後】みだれたる後、戰爭後。亂前の對。＝亂餘。

【亂國】みだるるくに。荀、君道「有ニ亂君一無ニーー」、有ニ治人一無ニ治法一」

【亂獄】不公平なる裁判。周禮、秋官「四方有ニーー」」

【亂雜】みだれまじる、秩序立たず。＝混雜・蕪雜。

【亂山】みだれて峙つ山山。杜荀鶴詩「遊人不レ可レ見、春入ニーーー靑」

【亂次】順次をみだす。

【亂酎】歌の終に於て、一篇の大旨を撮めていふ辭〔史、屈原傳、懷沙賦、注〕

【亂心】心が亂れる、氣がくるふ。左、昭二「爾有ニーー一無レ厭」

【亂臣】○天下をよく治むる臣。書、泰誓「予有ニーー十人一」十人は、周公旦・召公奭・太公望・畢公・榮公・大顚・閎夭・散宜生・南宮适・文母。○君を弑する臣。次條參看。

【亂臣賊子】君を弑する臣と、父を害する子と。孟、滕文公「孔子成ニ春秋一而ーー懼」

【亂眞】摸倣の巧にして眞物と別ち難きをいふ。南史「小人幾欲レーー」

【亂鐘】やたらに撞く鐘。馬戴詩「ーー斷鳥急、殘日半帆紅」

【亂世】みだれたる世、昏亂の世。詩、周南、關雎序「治世之音、安以樂、其政和、ーー之音、怨以怒、其政乖、亡國之音、哀以思、其民困」

【亂世之英雄】擾亂の世の英雄。後漢書、許劭傳「曹操微時、常卑レ辭厚レ禮求レ爲ニ己目一、劭鄙ニ其人一」曰、君則淸平之姦賊、ーーーー也、操大悅而去」

【亂聲】圖○行幸の時、鑾御を輸ずる爲めに奏する音樂。○雜樂の始に吹き立てる笛、篳篥、又、笛、鉦・太鼓を合せ奏する。

【亂俗】風俗をみだす。史記「鄙儒小拘、如ニ莊周等一、又猾稽ーレー」

【亂賊】ゾク 世をみだすわるもの。
【亂打】ダ みだれたたく、むやみに打つ。林寛詩「椎鼓——金吾鼓」
【亂鼓】コ めつたうち、みだりに鼓をうつ。汪元量詩「鞞鼓——裂二巖谷一」
【亂道】ダウ ○無稽なる詩文、己の詩文の謙辭。歐陽修、與二梅聖兪一簡「——兩首、在二謝丈處一可二略與觀一否之」○邪説を以て道理をみだる。漢書、張禹傳「新學小生、——レ道誤レ人、宜レ無二信用一」
【亂抽】チウ 手あたり次第に書物などをぬき取る。韓愈、張中丞傳後序「——二他帙一以試」
【亂帙】チツ とりみだしたる書帙。＝亂書。
【亂梯】テイ 亂階に同じ。越語「毋下賊二其衆一以爲中——上」
【亂調】テウ みだれたる調子。
【亂破】ラツパ 國古、戰國時代に敵を襲ふ爲めに抱へ置きし盜賊の類。
【亂逸】イツ すぢみちをわきまへず、あばれまはる。
【亂發】ハツ みだれてはなつ、鐵砲・弓矢などをむやみに發射する。
【亂罰】バツ みだりにつみす。書經「——無罪」＝濫罰。
【亂髮】ハツ かみをみだす。みだれがみ。五代史「——如レ蓬」＝蓬髮。
【亂筆】ピツ 國みだれがき、順序もなくしだらなく書きつける「——御免」
【亂舞】ブ ○順序も無くみだれまふ。梁簡文帝、箏賦「譬燕七十二、——未レ成レ行」○國古、五節セチの舞の後などに、殿上人等が今様謌をうたひてまひし舞、又、能の舞の間に舞ふもの、らつぷ。
【亂離】リ 國みだれて民逃散す。魏志、注「——之後、百姓凋盡」
【亂麻】マ みだれたるあさ、世の亂れたるに喩ふ。
【亂民】ミン 黨を結びて社會の安寧秩序をみだす人。
【亂脈】ミヤク みだれて筋道が立たず。＝亂雜。
【亂命】メイ 人將に死せんとして神志悖亂せし時の遺囑をいふ。未だ病にかからざる時の命令を治命といふの對。左、宣十五「疾病則亂、吾從二其治一也」
【亂理】リ みだれたるすぢみち。
【亂離】リ 世がみだれてはなればなれになる。
【亂流】リウ ○流を正しく横ぎりてわたる。爾雅「水正絶レ流曰レ亂」○水がみだれ流れる。李嘉祐詩「春塘水——」
【亂倫】リン 人倫にはづれたるおこなひ、男女の關係にいふ。世說、方正「王丞相初在二江左一、欲レ結二援吳人一、請二婚陸大尉一、對曰、培塿無二松柏一、薰蕕不レ同レ器、玩雖二不才一、義不レ爲二——之始一」
【亂緒】シヨ みだれたるいとすぢ。

亅部

【亅】ケツ 月
かぎ、鉤の形に象る。

一 畫

【了】レウ 篠
○さとる、理解する（瞭解）○をはる（訖・畢）○さとし（慧）「聰——」後漢書、孔融傳「小而——、大未二必奇一」○さだまる、きめる（決）すむ（濟）○こころよし（快）○つひに（終）唐書、姚南仲傳「——復何益」○あきらか（明）「明——」○句末に用ひて決定若くは終結の意をあらはす。王守仁文「此已被二私欲隔斷一、不三是知行的本體一了」○秦吉了は鸚鵡に似たる鳥の名、能く言笑す、九官鳥キウクワンテウ。李白詩「安得二秦吉了一、爲レ人道二寸心一」
【了解】カイ よく道理をさとる、がてんす、了了の後の解を見よ。
【了竟】キヤウ 了得に同じ。
【了悟】ゴ ○あきらかにさとる。＝了解・瞭了。○國明かなる心にて性を見る義。傳法正宗記、偈「泡幻同無礙、如何不二——一」
【了償】シヤウ 負債をかへし終る。馬臻詩「欠詩——人多笑」
【了事】ジ ○事理を明かにさとり知る。竹澤詩「硯臨富二有田業一、埋三家人不レ敗而——、未レ悉付レ之」○事を畢ふ、始末をつける。
【了承】シヨウ 承知する。
【了然】ゼン あきらかなる貌。了了の後の解に同じ。
【了諾】ダク はつきりとうべなふ。
【了得】トク さとる、合點がゆく。＝了然・了徹・曉了・解了。
【了戻】レイ 物が二股又は一股結び糾リヨウりてまつすぐに伸びざる貌。（西陽雜俎）
【了了】レウ ○さかしき貌。字解を見よ。○明かなる貌。世說「鍾士季曰、王安豐阿戎——解二人意一」＝了然。

二 畫

【予】㊀㊁ ヨ 魚語
㊀たまふ（賜）あたふ、與に通ず。詩、小雅「君子來朝、何錫——之」㊁われ（我）論、述而「天生二德於一、桓魋其如レ何」＝余。
【予一人】ヨイチニン 天子の自稱。書、湯誥

「晩聞萬方有衆、明聽ニ――諭ニ」【起ン予】フンヨオコス 己の心附かざりしことを人より注意せられて悟る。論、八佾「孔子曰、――ル者商也、始可ニ與言ニ詩已矣ニ」商は子夏の名。陸游詩「稚子誤ン經疑ニ――ル」【予告】ヨコク 官吏が暇を賜ひて家に歸るを得ること。遯齋閒覽「告者以ン暇告ニ於上ニ、從ン之而或賜或予、故因謂ニ之告ニ」【予小子】ヨセウシ ○天子の未だ喪を除かざる時の自稱。禮、曲禮「天子未ン除ン喪曰ニ――ニ」○喪中に限らず天子の自稱。詩經「維――夙夜敬止」【予奪】ヨダツ 與ふるとうばふとの二義。【予知好の歸徴】ヨチカウノキセイ 晉は決していたづらに辯舌を弄するを好む者に非ず。孟、滕文公「公都子曰、外人皆稱ニ夫子好ン辯、敢問何也、孟子曰、――、予不ン得ン已也」

【事】 七畫 ジ

書 亟は古字

○こと、ことがら。大學「物有ニ本末ニ一有ニ終始ニ○しわざ。しごと、つとめ(務)論、顏淵「先ニ――一後ニ得ン」大を攻といひ、小を――といふ。○かはりたること(變故)「四方無ニ――一」○むほん、叛逆。史、吳王濞傳「因以ニ此發ニ謀、欲ニ舉ニ――一」○こととす。史、曹參世家「卿大夫以下吏及賓客見ニ參不ニ――一事」○をさめる(治)なす(爲)いとなむ(營)○たつ(立)いさを(功)○つかふ(使)○つかまつる(奉仕)「ニ君」「ニ父」曲禮「年長以倍、則父ニ之」○もちふる(役)○さす、さしはさむ、物を以て地に插す。漢書、嚴延年「所ニ以不ニ敢ニ勿ニ於公之腹者、畏ニ奉法ニ也」ニ制ニ伴ニ。

【事出】ジシュツ ○ことがら、事のわけ、理由。方干詩「誰向ニ吟窗ニ問ニ――一」○結果の直接原因となれる事實。【事捜】ジサウ をり、はづみ、機會。晉書、温嶠傳「無ン後ニ――一」【事業】ジゲフ しごと。易經「鼓ニ而措ニ之天下之民ニ謂ニ之ニ――一」【事業年度】ジゲフネンド 事業を經營するに、便宜上特に定めたる期間。【事件】ジケン ○ことのくだり、事の次第。○ことがら、事故、一事を一件といふ。正字通「件、說文分也、又名件條件、俗誠ニ物數ニ曰ニ若干件ニ」【事故】ジコ ○できごと。周禮、秋官「小行人治ニ其――一及其萬民之利害、協ニ其――一書ニ」○こと、わけ、しさい。二事件。【事後】ジゴ 物事を實行せしのち。事前の對。【事後承諾】ジゴショウダク 火急の場合に、先づ實行したる事を後日に至りて承諾を求むる義。【事功】ジコウ てがら、事業の功績。【事項】ジコウ ことがら、事の箇條、項は款項の義、事物の件數をいふ。【事故】ジコ すべてのこと、各事。陶潛詩「聖賢擺ニ餘跡、――在ニ中都ニ」【事業成】ジシンナル 何事も成功せしことなし。白居易、醉吟詩「――身也老、醉鄉不ン去欲ニ何歸ニ」【事事物物】ジジブツブツ あらゆるものごと、萬事萬物。【事實】ジジツ 實際のことがら、事の眞相。史、莊周傳「率皆虛語無ニ――ニ」【事情】ジジャウ ことのありさま、事のおもむき。戰國策「語論――ニ」二事態。【事守】ジシュ しごと、つかさ。禮記「是天子之――也」二職守。【事蹤】ジシャウ ことがらのあと。陸機、表「――難跡、皆可ニ推較ニ」二事跡。【事務】ジム ことといきほひと、又、事のなりゆき、事の趨勢。【事跡】ジセキ 事のあとかた、歷史のあと。二事蹟ジセキ・事蹤。【事蹟】ジセキ ことのあとかた。二事跡・事迹・事蹤。【事前】ジゼン 事を實行せざる以前。【事態】ジタイ ことのありさま。二事情。【事蹟】ジタイ 事の大體、綱は總統。後漢書、胡廣傳「練ニ達――一ニ明ニ解朝章ニ」【事大黨】ジダイタウ 力の強大なる方に事へるを得策とする主義の黨派。【事端】ジタン ことのいとぐち、爭のはじめ。【事典】ジテン 百般の事を行ひ邦國を富ませる法則、司空の職に屬す。周禮、天官、太宰「六曰、――、以百ニ邦國ニ、以任ニ百官ニ、以生ニ萬民ニ」【事物】ジブツ すべてのものごと。【事物紀原】ジブツキゲン 書名、十卷、宋の高承撰す、天地・生植・正朔・歷數等の五十五部に分ちて事物の原始を說く。【事文類聚】ジブンルイジュ 書名、前集六十卷・後集五十卷・續集二十八卷・別集三十二卷・新集三十六卷・外集十五卷・遺集十五卷あり、羣書の要語・事實・詩文等を類聚す。【事疑】ジギ かはりたることがら、さわぎ。二疑亂。【事務】ジム つとめ、職務。魏瑤書「適有ニ――一、須ニ白經營ニ」【事理】ジリ ことのわけ、事のすぢみち。【事例】ジレイ ことの實際ありしためし。二實例。【事不ン師ン古】ジフシセズンバ 事を爲すに古人の跡を手本と爲さず。書、說命「事不ン師ン古、以ニ言之ニ――一、厥後罔ニ有ニ――一書ニ」○こと、わけ、しさい。二事件。【事後】ジゴ 物事を實行せしのち。事前の對。【事後承諾】ジゴショウダク 火急の場合に、先づ實行したる事を後日に至りて承諾を求むる義。【事功】ジコウ てがら、事業の功績。【事項】ジコウ ことがら、事の箇條、項は款項の義、事物の件數をいふ。【事故】ジコ すべてのこと、各事。陶潛詩「聖賢擺ニ餘跡、――在ニ中都ニ」【事業成】ジシンナル 何事も成功せしことなし。白居易、醉吟詩「――身也老、醉鄉不ン去欲ニ何歸ニ」【事事物物】ジジブツブツ あらゆるものごと、萬事萬物。【事實】ジジツ 實際のことがら、事の眞相。史、莊周傳「率皆虛語無ニ――ニ」【事情】ジジャウ ことのありさま、事のおもむき。戰國策「語論――ニ」二事態。【事守】ジシュ しごと、つかさ。禮記「是天子之――也」二職守。【事蹤】ジシャウ ことがらのあと。陸機、表「――難跡、皆可ニ推較ニ」二事跡。【事務】ジム ことといきほひと、又、事のなりゆき、事の趨勢。【事跡】ジセキ 事のあとかた、歷史のあと。二事蹟ジセキ・事蹤。【事蹟】ジセキ ことのあとかた。二事跡・事迹・事蹤。【事前】ジゼン 事を實行せざる以前。【事態】ジタイ ことのありさま。二事情。【事蹟】ジタイ 事の大體、綱は總統。後漢書、胡廣傳「練ニ達――一ニ明ニ解朝章ニ」【事大黨】ジダイタウ 力の強大なる方に事へるを得策とする主義の黨派。【事端】ジタン ことのいとぐち、爭のはじめ。【事典】ジテン 百般の事を行ひ邦國を富ませる法則、司空の職に屬す。周禮、天官、太宰「六曰、――、以百ニ邦國ニ、以任ニ百官ニ、以生ニ萬民ニ」【事物】ジブツ すべてのものごと。【事物紀原】ジブツキゲン 書名、十卷、宋の高承撰す、天地・生植・正朔・歷數等の五十五部に分ちて事物の原始を說く。【事文類聚】ジブンルイジュ 書名、前集六十卷・後集五十卷・續集二十八卷・別集三十二卷・新集三十六卷・外集十五卷・遺集十五卷あり、羣書の要語・事實・詩文等を類聚す。【事疑】ジギ かはりたることがら、さわぎ。二疑亂。【事務】ジム つとめ、職務。魏瑤書「適有ニ――一、須ニ白經營ニ」【事理】ジリ ことのわけ、事のすぢみち。【事例】ジレイ ことの實際ありしためし。二實例。【事不ン師ン古】ジフシセズンバ 事を爲すに古人の跡を手本と爲さず。書、說命

「——以克永レ世、暱二說佞一聞」【致レ事】イタス官を辭める。禮、內則「七十一レー」注「致二其事於君一而告レ老」＝致仕。【不レ事】トコトヲコトメ事を事とも思ひてつとめざる義。史、曹相國世家「卿大夫以下吏及賓客見二參不一レ事」【不レ了レ事】サトクタ 本理を明かに悟らず。南史、蔡撙傳「武帝曰、卿殊——、撙曰、臣未二嘗有一——之目」【爲レ事】コトナス 同僚として、互に助け合ひて事務を共にする。聯は連（周禮、太宰）【襄レ事】ナストク 葬式を濟ます。左、定十五「葬二定公一、雨不レ克レー、禮也」【不レ經レ事少年】セウネンル 世の經驗を積まざる年少者。晉書、桓沖傳「謂二謝安一曰、大敵已至、遣二諸——一、衆又寡弱、天下事可レ知矣」【先事慮レ事】コトヲオモンクル 事の生ぜざる以前に、其の事の是非成敗などを考へる。荀、大略「——謂之慮、遲則事優成、先レ患慮レ患謂二之豫一、豫則禍不レ生」【因レ事制レ宜】コトニヨリテヨロシキヲセイス 其の事に應じて相當の方法を施す。臨機の處置を爲す。漢書、韋玄成傳「明王之御レ世也、遭レ時爲レ法、——」【事以レ密成】モツテナル 凡そ事業は、愼密を以て成就す。韓非、說難「——、語以レ泄敗」

一一部

【一】ジ 通 貳に通ず　式は古字

〇ふたつ。〇ふたたび（再）〇つぎ（次）〇ならび、同等のもの。〇ふたつにす、別にする。後漢書、韓康傳「不レー價」〇ふたごころ、うたがひ。〇異ーは風の神の名。新撰上下の聲は其の長さを齊しくす、上聲の短きものは上の字の古字。

【二酉】ニイウ 大酉・小酉二山の石穴に古書千卷を藏せし故事によりて藏書の多きにいふ「ー！五車」郡國志「大酉山在二辰溪山下一、有レ洞名二大酉洞一」「小酉山在二辰州府一、又名二鳥巢山一、在二酉溪口一、山下有二石穴一、中有二書千卷一、傳云、秦人避レ地隱學於此」「自二酉溪北口一十餘里、與二大酉山一相連、故曰ニー一」二山は今の湖南省沅陵縣の西北に在り。【二院】ニン 國會の上院と下院と。「二院制」【二曜】ニエウ 曜は燈に同じ、日月をいふ。王融、上二北伐一疏「偶化二兩儀一、均明ニー一」【二雅】ニガ 詩經の大雅・小雅の漢書藝傳「盛備備之篇深今、乃ー一之所レ祇」【二便】ニベン かけね。家語「孔子爲二中都宰一、男女別レ塗、市無ニー！」＝貳偶。【二界】ニカイ 欲界十界と三界との稱。【二階】ニカイ 樓たかどの。＝樓・重屋。【二更】ニカウ 今の午後十時。宋書、歷志「到ニー一四唱」王維、秋夜獨坐詩「獨坐悲二雙鬢一、空堂欲ニー一」＝乙夜・二鼓。【二季】ニキ 〇二つの季節、春と秋と。又、夏と冬と。〇國盛と衰と。【二氣】ニキ 陰と陽との氣、咸卦彖傳「感也、柔上而剛下、ー一感應以相與」太極圖說「ー一交感、化二生萬物一」【二儀】ニギ 天と地との義。元帝纂要「天地曰ニー一、以レ人參之曰二才一」晉書、成公綏傳「何陰陽之蘊レ測、傳ニー一之奎閣一」＝兩儀。【二簋可二用享一】ニキモチヰテスベシ 心に誠敬を主とすれば、二簋の薄物にても神を享すべきをいふ。簋は黍稷を盛る器。易、損卦「損、有レ孚元吉、无レ咎（中略）——」【二極】ニキク 南極と北極との責、洪範「日月之行、疏「南北ニー一、中等之處謂二之赤道一」【二君】ニクン ふたりのきみ。左、隱元「段不レ弟、故不レ言レ弟、如ニー一、故曰レ克」二夫參看。【二京】ケイ 東京（洛陽）と西京（長安）と。張衡に東京賦・西京賦あり。晉書、班固兩都、理勝」其辭二張衡ー一文過二其實一」【二頃田】ケイ 田二百畝。史、蘇秦傳「秦曰、使二吾有一洛陽負郭田二頃一、吾豈能佩二六國相印一乎」【二喬】ケウ 喬氏の二人の美女、周瑜孫策に從ひて皖城を攻め、喬公の兩女を得、皆國色なり、策自ら大喬を納れ、瑜小喬を納る（三國吳志周瑜傳）喬一に橋に作る。杜牧、赤壁詩「折戟沈レ沙鐵未レ銷、自將二磨洗一認二前朝一、東風不下與二周郎一便上、銅雀春深鎖ニー一」【二月賈二新絲一、五月糶二新穀一】ニガツニアタラシキイトヲカヒ、ゴガツニシンコクヲウル 二月は方に蠶桑の時にして未だ絲あらざるに、先づ絲を賈り、五月は方に田をくさぎる時にして未だ穀あらざるに、先づ穀を糶る、農家貧苦の狀をいふ。唐書、食貨中、陸二田家一詩「父耕二原上田一、子劚二山下荒一、六月未レ秀、官家已修レ倉、——、醫二得眼前瘡一、剜二卻心頭肉一、我願君王心、化作二光明燭一、不レ照二綺羅筵一、偏照二逃亡屋一」【二月花】ニガツノハナ 春の花をいふ。李嶠、詠レ風詩「解二落三秋葉一、能開ニー一」杜牧、山行詩「停レ車坐愛楓林晚、霜葉紅二於ー一」【無二二言一】ナシ 一たび口よりだせし言は決して違はざる義。唐書、魯大經傳「卓然高行、口ー一」【二元論】ニゲン 宇宙の根本實在を、相

反せる二個の原理より成るとする說。

【二鼓】二更に同じ。宋書、禮志「上水二刻、奏槌一一爲二再嚴一」

【二口糧】二人扶持の穀。唐書、隨賛傳「一歳給二——一、賜二種子一勸レ之播蒔一」

【二藏】大乘經と小乘經と。

【二三】專一ならずしてしばしば操守を變ずる義。詩、衞風「士也罔レ極、二三其德一」

【二三子】二三人の義、師が弟子を呼ぶにいふ。論、述而「——以レ我爲レ隱乎、吾無レ隱二乎爾一」

【二史】春秋と尙書と。

【二至】夏至と冬至と。左、昭、二一「——二分、日有レ食レ之、不レ爲レ災」

【二十一史】明刊監本の正史。二十二史を見よ。

【二十一史約編】淸の鄭元慶二十一史の文を摘みて編成す、卷首及び金石絲竹匏土革木の八部に分つ。

【二十一代集】國勅撰の歌集二十一部の總稱。古今集・後撰集・拾遺集(以上三代集)後拾遺集・金葉集・詞花集・千載集・新古今集(以上八代集、以下十三代集)新勅撰集・續後撰集・續古今集・續拾遺集・新後撰集・玉葉集・續千載集・續後拾遺集・風雅集・新千載集・新拾遺集・新後拾遺集・新續古今集。

【二十五菩薩】佛佛に亞ぐ有德者二十五人の稱、觀世音・大勢至・藥王・藥上・普賢・法自在王・陀羅尼・虛空藏・白象王・寶藏・德藏・金藏・光明王・金剛藏・山海慧・華嚴王・日照王・月光王・衆寶王・三昧王・獅子吼・定自在王・大威德・大自在王・無邊身。十往生經「若有二衆生一念二阿彌陀佛一願二往生一者、彼佛即遣二——一擁二護行者一、若行若坐、若住若臥、若晝若夜、一切時一切處、不レ令二惡鬼神得二其便一也」

【二十四孝】○孝子二十四人、大舜・漢文帝・曾參・閔損・仲由・董永・剡子・江革・陸績・唐夫人・吳猛・王祥・郭巨・楊香・朱壽昌・庾黔婁・老萊子・蔡順・黃香・姜詩・王褒・丁蘭・孟宗・黃庭堅。○書名、元の郭居業編す、以上二十四孝の事を記す。

【二十四氣】一年を分ちて二十四氣節(毎月二氣)とす。立春・雨水(正月)啓蟄・春分(二月)淸明・穀雨(三月)立夏・小滿(四月)芒種・夏至(五月)小暑・大暑(六月)立秋・處暑(七月)白露・秋分(八月)寒露・霜降(九月)立冬・小雪(十月)大雪・冬至(十一月)小寒・大寒(十二月)(淮南、天文)=二十四節。

【二十四史】淸の乾隆中、二十二史に舊唐書・舊五代史を加へて叢書とせしもの。二十二史を見よ。

【二十四節】二十四氣を見よ。

【二十二子】淸の光緒年間浙江書局にて彙刻せし二十二種の子類の叢書、老子・莊子・列子・墨子・管子・晏子・鬼谷子・吳子・孫武子・荀子・韓非子・呂子・孔叢子・淮南子・揚子・白虎通・風俗通・抱朴子・文中子・東萊子・鄧子・續選子。

【二十二史】史記(司馬遷)漢書(班固)後漢書(范曄)以上を三史といふ。これに三國志(陳壽)晉書(房玄齡)宋書(沈約)南齊書(蕭子顯)梁書(姚思廉)陳書(同上)後魏書(魏收)北齊書(李百藥)周書(令狐德棻)隋書(魏徵等)南史(李延壽)北史(同上)唐書(歐陽修)五代史(同上)を加へて十七史といひ、更に遼史(托克托)金史(同上)宋史(同上)元史(宋濂)を加へて二十一史といひ、明史(張廷玉)を加へて二十二史といふ。唐書と五代史とには、新舊二種あり、すべて合して二十四史ともいふ。

【二十二史劄記】三十六卷、淸の趙翼著す、史記より明史に至る二十二史に就きて、その誤謬を訂し、また政事の得失、治亂興亡に關するある者は、論評を付せり。

【二十二社】國古、京都の守護神として祭りし二十二座の神社、伊勢・石淸水・加茂・松尾・平野・稻荷・春日・大原野・大神・石上・大倭・廣瀨・龍田・住吉・日吉・梅宮・吉田・廣田・祇園・北野・丹生川上・貴船。

【二十八字詩】七言絕句をいふ。

【二十八將】○後漢の光武帝の功臣二十八人、明帝の時、其の像を雲臺に畫く、鄧禹・馬成・吳漢・王梁・賈復・陳俊・耿弇・杜茂・寇恂・傅俊・岑彭・堅鐔・馮異・王霸・朱祐・任光・祭遵・李忠・景丹・萬脩・蓋延・邳彤・銚期・劉植・耿純・臧宮・馬武・劉隆(後に、王常・李通・竇融・卓茂を增して三十二人とす)○國日光東照宮に配祀せし德川氏の功臣二十八人の稱、松平康忠・酒井忠次・井伊直政・榊原康政・大須賀康忠・大久保忠敎・伊奈忠俊・內藤家長・伊奈忠政・大久保忠世・內藤信成・酒井正親・大久保忠佐・米津淨忠・平岩親吉・奧平信昌・本多忠勝・鳥居元忠・菅沼定盈・渡邊守綱・阿部長成・高木性順・蜂屋貞次・服部正綱・安藤直次・本多康高・松平伊忠・水野勝成。

【二十八宿】古代の星學にて、星宿を四方七星合せて二十八に分ちし稱、東方は角・亢・氐・房・心・尾・箕、北方は斗・牛・女・虛・危・室・壁、西方は奎・婁・胃・昴・畢・觜・參、南方は井・鬼・柳・星・張・翼・軫をいふ。

【二十四番花信風】小寒より穀雨に至る凡て四月八氣二十四候一氣を

三候に分ち二十四候あり)間に於て毎候五日一花の風信を以て之に應ずるをいふ。小寒の一候は梅花、二候は山茶、三候は水仙。大寒の一候は瑞香、二候は蘭花、三候は山礬。立春の一候は迎春、二候は櫻桃、三候は望春。雨水の一候は菜花、二候は杏花、三候は李花。驚蟄の一候は桃花、二候は棣棠、三候は薔薇。春分の一候は海棠、二候は梨花、三候は木蘭。清明の一候は桐花、二候は麥花、三候は柳花。穀雨の一候は牡丹、二候は酴醾、三候は楝花。〔張氏經柔〕

【二十寮】圖古の官制にて、諸官に附隨せる二十の寮。大舍人・圖書・內藏・縫殿・內匠・大學・雅樂・玄蕃・諸陵・主計・主稅・木工・左右馬・兵庫・主殿・典藥・大炊・掃部・主水。

【二十六夜待】圖陰曆正月及七月の二十六日の夜の稱。夜半月の出る時、三尊の靈形其の光が見ゆるとて之を拜するをいふ。

【二四不同二六對】絕句・律詩にて二字目と四字目とは必ず平仄を異にすべく、二字目と六字目とは必ず平仄を同うすべき法式。

【二心】○ふたごころ。左傳「臣無二二心一」○佛異心・妄心。又、大慈心・大悲心。

【二親】父と母と。魏書、后妃傳「早失二――一」

【二豎】病氣。晉の景公病める時、夢に、病魔が二人の童子となりて來れりといふ故事。左、成十「晉侯疾病、求二醫於秦一、秦伯使二醫緩爲一レ之、未レ至、公夢、疾爲二二豎子一曰、彼良醫也、懼傷レ我、焉逃レ之、其一曰、居二肓之上、膏之下一、若レ我何、醫至、曰、疾不レ可レ爲也、在二肓之上、膏之下一、攻レ之不レ可、達レ之不レ及、藥不レ至焉、不レ可レ爲也、公曰、良醫也、厚爲二之禮一而歸レ之」

【二丘】圖比丘と比丘尼と。

【二水中分白鷺洲】金陵西南江中の洲を詠ぜし句。李白、登二金陵鳳凰臺一詩「三山半落青天外、――」唐詩選に出づ。

【二世】○二代に同じ。史、秦紀「子胡亥立、是爲二二世皇帝一」○佛現在の世と、未來の世と。

【二姓】○男女の二家。次條參看。○兩朝の君。後漢書、蔡邕傳「忠臣不レ事二二君一、子不レ受二辛苦之賜一、況可レ事二――一」○二夫をいふ。陳標、節婦賦「予敢以二先人之敎一分、以二一身一而事二――一」

【二姓之好】男女兩家のよしみ。禮、昏義「昏禮者、將レ合二――一、上以事二宗廟一、而下以繼二後世一也、故君子重レ之」

【二聖一賢】二聖は大禹・孔子、一賢は孟子をいふ。韓愈、諍臣論「禹過二家門一不レ入、孔席不レ暇レ暖、而墨突不レ得レ黔、彼――者、豈不レ知二自安佚之爲一レ樂哉、誠畏二天命一而悲二人窮一也」

【二昭二穆】諸侯の廟の禮。王制「諸侯五廟、――與二太祖之廟一而五」

【二千石】漢代の郡の太守。年俸二千石なるに由る。漢書、百官表「郡守秦官、掌レ治二其郡一、秩――」漢書、循吏傳「庶民所下以安二其田里一而亡中歎息愁恨之心上者、政平訟理也、與レ我共レ此者、其唯良――乎、以爲太守吏民之本也」

【二千里外故人心】月に對して、遠國の友を思ふ義。「三五夜中新月色」を見よ。

【二祖】○高祖と世祖と。後漢書、章帝紀「告二祠――四宗一」注「――謂二高祖・世祖一、四宗謂二文帝・武帝・宣帝・明帝一也」○佛禪家にて初祖達磨の次の祖。正宗記「――慧可大師、武牢姬氏子、幼出家、後見二達磨於少室山一、繼二闡玄風一」

【二疏】漢の疏廣・疏受の二人の稱。漢書、疏廣傳「地節三年、立二皇太子一、廣爲二太傅一、廣兄子受爲二少傅一、朝廷以爲レ榮、廣謂レ受曰、知レ足不レ辱、知レ止不レ殆、功遂身退、天之道也、遂上疏乞二骸骨一、上皆許レ之、公卿大夫設二祖道一、供二張東都門外一、送者車數百兩、道路觀者、皆曰、賢哉二大夫」蒙求に――散レ金の章あり。

【二尊】○二つの尊き者。禮、喪服四制「資二於事一レ父、以事レ母而愛同、天無二二日一、土無二二王一、國無二二君一、家無二二尊一、以レ一治レ之也」○佛釋尊即ち釋迦と、慈尊即ち彌勒と。○圖伊弉諾尊と伊弉冊尊と。

【二代】夏商の兩代。論、八佾「周監二於――一、郁郁乎文哉、吾從レ周」疏「――謂二夏商一」

【二諦】佛○世諦と出世諦と。○俗諦と眞諦と。釋氏要覽、佛所說法、皆歸二――一」

【二桃殺三士】奇計を用ひて勇士を殺すをいふ。齊の景公の臣に、公孫接・田開疆・古冶子の三勇士あり、功を恃みて專恣なり。公之を患ひ、晏子の計を用ひ、二つの桃を三人に與へ、功を計りて之を食はしむ。三士初は爭ひ、後は恥ぢて皆自殺せり〔晏子春秋〕諸葛亮、梁父吟「一朝被二讒言一、――、誰能爲二此謀一、相國齊晏子」

【二刀流】圖大小の二刀を兩手に用ふる劍道の一流。寛永年中、宮本無三四はじむ。

【二致】ふたつの旨趣。宋史、周堯卿傳「聖人之意、豈――耶」

【二女】ふたりのむすめ。書、堯典「釐二降――于嬀汭一、嬪二于虞一」傳「――長曰二娥皇一、次曰二女英一」

【二程】程明道・程伊川の兄弟の稱。○宋史、張載傳「嘗坐二虎皮一講レ易、京師聽從者甚衆、一夕二程至、與論レ易、次日語レ人曰、比見二二程一、深明二易道一、吾所レ弗レ及、汝輩可レ師レ之、撤レ坐輟レ講」

【二程全書】六十八卷、書名、宋の程顥・程頤兄弟の遺著にして、明の萬曆中徐必達の合刻せしもの。

【二帝三王】二帝は唐堯・虞舜、三王は、夏の禹王・殷の湯王・周の文王・武王(漢書、揚雄傳)

【二天】大恩を受けたる人を天に比べていふの稱。後漢書、蘇章傳「章遷二冀州刺史一、故人爲二清河太守一、章行レ部、將レ按二其姦贓一、乃請二太守一、爲設二酒肴一、陳二平生之好一甚歡、太守喜曰、人皆有二一天一、我獨有二二天一、章曰、今夕蘇孺文、與二故人一飲者、私恩也、明日冀州刺史案レ事者、公法也、遂擧二正其罪一」書言故事「常レ感二仰賴二二天一之庇一」

【二典】尚書の堯典・舜典をいふ。宋史、太祖紀「帝晩好レ讀レ書、嘗讀二二典一、歎曰、堯舜之罪二四凶一、止從二投竄一、何近代法網之密乎」

【二等親】第二等に當る親族、祖父・祖母・嫡母・繼母・伯父・叔父・姑・兄・弟・姊・妹・夫の父・夫の母・妻・妾・姪・甥・孫。

【二南】詩經の周南と召南と。詩、周南召南譜、注「二南、文王之詩、而分繫二二公一」

【二難】二つの得難きもの。賢主と嘉賓と。王勃、滕王閣序「四美具、二難幷」

【二人】○ふたり。易、繫辭「二人同レ心、其利斷レ金」二人心を同じうすれば其の堅きこと金をも斷つとの義。○父母の稱。詩、小雅「明發不レ寐、有レ懷二二人一」明發は夜の明け方の略。

【二人同レ心其利斷レ金】二人の項を見よ。

【二舞】○國安摩の舞の次に舞ふ可笑しき舞樂の名。○轉じて何事にても他人の後に出でて其の眞似をなすをいふ。

【二丸】國本丸のそとまはりの城郭。外城、羅城。

【二八】十六歳、多くは女子に用ふ。李白詩「[illegible]女、紅粧二八年」

【二妃】堯舜の二妃、娥皇・女英なり。晉書、后妃傳贊「二妃光レ舜、三母翼レ周」

【二碑紀レ功】晉の杜預が兩碑を立て、其の功を紀せしをいふ。晉書、杜預傳「杜預好レ爲二身後名一、常言高岸爲レ谷、深谷爲レ陵、刻レ石爲二二碑一、紀二其勳績一、一立二峴山之上一、一沈二峴山之下一、曰、焉知二此後不一レ爲二陵谷一乎」

【二百十日】國立春の日より二百十日目の日。陽曆の九月一日頃に當る。其の後十日目を二百二十日といふ。暴風雨多くして稻作を害す。共に農家の厄日とす。

【二百二十日】前條を見よ。

【二百六韻】四聲の中にて平聲五十七韻、上聲五十五韻、去聲六十韻、入聲三十四韻を合せていふ。

【二夫】二人のをつと。史、田單傳「王蠋曰、忠臣不レ事二二君一、貞女不レ更二二夫一、吾與二其生而無一レ義、固不レ如レ烹」

【二府】○漢代、丞相と御史との稱。漢書、劉向傳、註「二府、丞相・御史也」○宋は中書省・樞密院の稱。文事は中書に出で、武事は樞密に出づ。

【二分】春分と秋分と。二至を見よ。

【二柄】○人主の執る二つの權柄、刑と德と。韓非、二柄「明主之所二導制一其臣一者、二柄而已矣、二柄者刑・德也」○賞と罰との二つの權力。新論「以二賞罰一爲二二柄一、賞論レ功、罰論レ罪」○文と武との二つの權力。魏元忠文「天下柄二、文武耳」

【二毛】黑毛と白毛と、白髮まじりの老人。左、僖二二「君子不レ重レ傷、不レ禽二二毛一」二毛班白。

【二毛作】國同一の田地にて一年に二度の作物を得る、稻を刈りたる跡に麥を蒔くの類。

【二名】二字の名。曲禮「禮不レ諱二嫌名一、二名不二偏諱一」

【二銘】宋の張載(橫渠)の東銘と西銘と。紹珠「二銘、西銘訂頑、東銘砭愚」

【二妙】二人の優れたる技を稱す。晉書、衞瓘傳「瓘爲二尙書令一、與二尙書郎索靖一、俱善二草書一、時人號爲二一臺二妙一」

【二老】伯夷と太公と。孟、離婁「二老者天下之大老也」

【二利】國自利と他利との稱。瑜伽論「有二二利一、名二上士一」

【二陸】○晉の陸機(字は士衡)と、陸雲(字は士龍)と、兄弟共に詩文を能くす。晉書、陸機傳「陸雲字士龍、與二兄機一齊レ名、號曰二二陸一」○宋の陸九齡兄弟。宋史、陸九齡傳「與二弟九淵一相爲二師友一、和而不レ同、學者號二二陸一」

【二輪】○佛福德と智慧との稱。○二つの車の輪「二輪承」○國二つの花冠。

【二六時中】陰曆の時計の晝六時、夜六時、合せて十二時の間をいふ。晝夜といふに同じ。

【二王】○ふたりのきみ。禮、曾子問「天無二二日一、土無二二王一」○夏と殷と。詩、小序「振鷺、二王之後、來助レ祭也」箋「二王、夏殷也、其後、杞也宋也」○晉の能書家王羲之と其

の第七子王獻之との稱。〇[佛]佛法守護の神として寺門の左右に立てる金剛力士の稱、左を密迹金剛、右を那羅延金剛といふ。＝仁王。

【二日醉】ふつかゑひ 國 翌日まで醉ふ。＝宿醒・宿醉。

一畫

【于】㊀ウ・ヲ 虞 ㊁キヨ・コ 魚

㊀ここに(發語の辭)詩、周南「之子于歸」一說に往く義。〇に(於・乎)主として下の字に係る。論、爲政「吾十有五而志于學」〇を(於・乎)書、盤庚「[illegible]于朕志」〇おいて(於)〇より、から(於・乎)書、大禹謨「祇承于帝」〇較べていふことば。〇ゆく(往)書、大誥「予翼以ー」〇なす(爲)〇大いなり、廣大なる貌。〇まく、迂に通ず。〇ーーは行く貌、又、自ら足れりとする貌。㊁ああ、吁に通ず。詩、周南「于嗟麟兮」

[解字] 于は亏と同、縱畫左へはねる。宇・吁・汙・紆・竽・紆・迂等之に从ふ。

[同訓異義] ・于・於・乎・諸〇この四字は共に反へる所に從く字なり。〇於は輕く、于は重し、于は下にかかり、於は上下にかかる、孟子に「吾聞ㇾ出ニ於幽谷ー遷ニ于喬木ー者ㇼ、未ㇾ聞ㇾ下ニ喬木ー而入ニ於幽谷ー者ㇼ」とあるが如し。〇于は主として下に在る字に係る、於は體と用とを兼ぬれども、于は體のみに係る、論語「友ニ于兄弟ー施ニ於有政ー」とあるが如し、春秋に「築ニ于宿ー」「會ニ于朱ー」など、大抵地名には、于を用ひたり、論語に「入ニ于河ー」「入ニ于海ー」この類も、乎の字、彼に屬するを知るべし、于は乎とも譯す、在の字の義あるによる。〇乎は疑歎の意を含めり、主として上の字にかかる、論語「浴ニ乎沂ー、風ニ乎舞雩ー、詠而歸」とある如し。〇諸は之乎の二合字なり、論語に「子張書ニ諸紳ー」とある如し、之於の義を兼ねたるなり。

【于嗟】ああ 嘆息の辭、又、なげく、吁嗟に作る。

【于于】うう 〇滿足する貌、自ら足れりとする貌。莊、應帝王「其臥徐徐、其覺ーー」一說、無知の貌。〇行く貌。韓愈、上宰相書「ーー焉而來矣」

【于役】うえき 役に往く、君命を奉じて他國へ使する。詩、王風「君子ーㇾー、不ㇾ知ニ其期ー、曷其至哉」＝行役。

【于越】うゑつ 越の國、于は發聲。荀、勸學「ーー夷貉之子、生而同ㇾ聲、長而異ㇾ俗」＝於越。

【于歸】うき ゆきとつぐ、嫁にゆく、于は往、一說にここと訓み、發語の辭とす。詩、周南「之子ーー、宜ニ其室家ー」

【于喁】うぐう 前後の聲の相和する貌、輕きのかけごゑの類。莊、齊物「前者唱ㇾ于、而隨者唱ㇾ喁」釋文「ーー聲之相和也」

【于公高門】うこうかうもん 漢の于定國、其の父于公、獄官となり、獄を決すること平かなり、其の閭門壞れし時、父老共に之を治む、于公謂ひて曰く、少しく門閭を高大にし、駟馬高蓋の車を容れしめよ、我獄を治めて陰德多し、子孫必ず興る者あらんと、定國に至りて、丞相となる(漢書、于定國傳)

【于思】うさい 鬚髯多き貌。左、宣二「ーーー棄ㇾ甲復來」

【于闐】うてん 漢の西域の國名、葱嶺の北に在り、唐代の都督府を置く、今の新疆和闐城。

【于飛】うひ 夫婦の和合に喩ふ。詩經の「鳳凰ーー」に本づく。

【亍】チョク トク 沃

〇すこしくあゆむ(小步)右足のあゆみ。康熙字典「左步爲ㇾ彳、右步爲ㇾ亍」〇たたずむ。

二畫

【云】ウン 文

〇いふ(言)いはく(曰)〇これ、ここに、發語辭、又、無意味の助辭。詩、小雅「伊誰云從」〇うはさに聞く、俗語の何何する由の由に當る。柳宗元、種樹郭橐駝傳「捨ニ其名ー亦自謂ニ橐駝ー云」〇他人の言を引きて述ぶるに用ふ。論、子罕「牢曰、子云吾不ㇾ試故藝」〇めぐる(運動)管子、戒「四時云下而萬物化」〇くも、雲の古字。〇かへる(旋)〇紛ーは興る貌。漢書、司馬相如傳「威武紛ー」＝紛紜。〇ーーは多く盛んなる貌＝芸芸。又、言葉を省きていふ時に用ふ、しかじか。

[解字] 雲の古字、雲は雨をふらす、故に後に雨を加ふ、人言を發すれば氣を出すこと雲に似たり、故に轉じて曰の義とす。

[同訓異義] 云・曰・言・謂・道。〇云・曰の二字は義略ぼ同じ、正字通にも、「云與ㇾ曰、音別義同、凡經史曰通作ㇾ云」とあり、但し云は、意稍輕く、曰は稍重し、云の字、文の終におきて「諸氏云」との如く結ぶことあり、これは誰が此の如く云へりとの意なり、かかる所に、曰の字を用ふることなし。〇言・謂の二字は義略ぼ同じ、言は心に思ふ所を、口に

遜ぶるなり。言論・言說などと熟す。謂は、報也、告也と註す、人に對して言ふなり。「子謂顏淵曰」の如し。又、人に對して言ふにあらずして、其の人を評して言ふにも用ふ。「子謂子賤」の如し。又、謂は「おもへらく」とも訓む、心に思ふことは、必ず口にあらはるればなり。○道は言と同じ、ただ言は、多く實用にして重く、道は虛用にして輕し。孟子に「道性善、言必稱堯舜」の如し。

【云爲】ウンヰ 言論と行爲と。易、繫辭「是故變化云爲、吉事有祥、象事知器、占事知來」轉じて世間の有樣、世態人情の意。東都賦「云爲之一一乎」

【云云】ウンウン ○しかじか。此の如し此の如しといふが如し。言を略していふに用ふ。史、汲黯傳「武帝曰、吾欲云云」○言葉多き貌。韓愈詩「□□方云云」○盛んなる貌。莊、在宥「萬物云云」

【云云】ウンウン 雲の運り行く貌。呂覽、圜道「云氣西行、云云然」

【云爾】ウンジ しかいふ、かくかくなりと上文の結びに用ふる語。論、述而「不知老之將至云爾」

【云何】ウンカ いかに。史、司馬穰苴傳「軍中不馳、今使者馳云何」＝如何。

【五】ゴ 㐅 或は伍に作る

○いつつ、十の半數。書、武成「列爵惟五」○いつつにす。詩、鄘風「良馬五之」○いつたび、五回。說苑、指武「五敗荊人」

【五友】ゴイウ ○五つの節操ある植物。竹・梅・蘭・菊・蓮（薛文清文）○五つのすぐれし友。明一統志「五友亭在瑞慶府南充縣。南宋游炳題云、明月淸風爲直友、古典今文爲義友、孤雲野鶴爲自樂友、怪石流水爲娛樂友、山中僕爲相保友、是五者無須臾不在此間也」

【五噫之歌】ゴイノウタ 後漢の梁鴻、京都を過ぎ、世の非なるを嘆じて作れる歌。後漢書、梁鴻傳「東出關過京師、作五噫之歌。曰、陟彼北芒兮噫、顧瞻帝京兮噫、宮室崔嵬兮噫、人之劬勞兮噫、遼遼未央兮噫」

【五音】ゴイン 宮（喉音）商（齒音）角（牙音）徵（舌音）羽（脣音）。孟、離婁「師曠之聰、不以六律、不能正五音」

【五雲】ゴウン ○五色のくも。周禮、保章氏「以五雲之物辨吉凶水旱降豐荒之祲象」○物は色。○人の書簡を稱す。唐書、韋陟傳「陟常以五采牋爲書記、使侍妾主之、其裁答授意而已、皆有楷法、陟惟署名、自謂所書陟字、若五朵雲、時人慕之、號郇公五雲體」陟、郇國公に封ぜらる、故にいふ。

【五蘊】ゴウン 佛 蘊は積りて人身を成す五つのもの。色（肉體）受（事物を受け入るる心のはたらき）想・行・識。受以下の四は心法なり。羣書拾唾「色蘊・受蘊・想蘊・行蘊・識蘊」大藏法數「積集色受想行識以成身也」

【五加】ゴカ うこぎ、灌木の一種、葉は五葉一叢にして鋸齒あり、夏小白花開く。本草綱目「五加皮、五葉者良」

【五雅】ゴガ 五つの字書。明の郎奎金合せ編して名づく、卽ち、爾雅・小爾雅・逸雅・廣雅・埤雅。

【五戒】ゴカイ 佛 五つのいましめ。不殺生・不偸盜・不邪淫・不妄語（以上性戒）不飲酒（遮戒）晉書、會稽王道子傳「佛者以五誡爲教、絕酒不淫」五戒を犯すを五惡といふ。

【五害】ゴガイ 凶年の五つの害。管子「凶年五害、水・旱・風霧・雹霜・厲、五害已除、人乃可治」

【五交】ゴカウ 世俗の五つのよからぬ交。勢交・賄交・談交・窮交・量交（劉峻、廣絕交論）

【五孝】ゴカウ 身分によりて孝道に五つの異あるをいふ、天子・諸侯・卿大夫・士・庶人の孝、孝經に見ゆ。唐玄宗、孝經序「雖五孝之用則別、而百行之源不殊」

【五更】ゴカウ ○一夜を五分したる稱、更とは一更每に夜番の者が更代する義。漢官舊儀「五夜者、甲夜・乙夜・丙夜・丁夜・戊夜、衞士甲乙相傳盡五更」五夜に同じ、五夜を見よ。○午前四時。＝戊夜。

【五客】ゴカク 五種の鳥。羣書拾唾「李昉作五客堂、畫五禽於壁間、白鷴閑客、孔雀南客、鸚鵡隴客、鶴仙客、白鷺雪客」

【五樂】ゴガク 五つの音樂。漢書、郊祀志「修五樂」○春は琴瑟、夏は笙竽、季夏は鼓、秋は鐘、冬は磬を謂ふ。○紺珠「鼓・鐘・磬・琴・瑟」

【五嶽】ゴガク 五つの高山、泰山（東嶽）華山（西嶽）衡山（南嶽）恆山（北嶽）嵩山（中嶽）（爾雅、釋山）霍山は衡山の一名にて在る。

【五覺】ゴカク 佛 五つのさとり。始覺・本覺・相似覺・隨分覺・究竟覺（首楞嚴經）宗鏡錄「有衆生覺・佛覺・聲聞覺・二乘覺・菩薩覺・佛覺・見諦一一」

【五眼】ゴゲン 佛 五種の眼力。無量壽經「修心佛法、肉眼淸徹、靡不分了、天眼通達、無量無限、法眼觀察、究竟諸道、慧眼見眞、能度彼岸、佛眼具足、覺了法性」

【五感】ゴカン 目・耳・鼻・口・肌の五つの感覺。

【五諫】ゴカン 五種のいさめかた。家語、辯政「孔子曰、諫有五義、一曰譎諫、二曰戇諫、三曰降諫、四曰直諫、五曰諷諫、惟度主以行之、吾從其諷諫乎」後

漢書、李尋傳「總有――、讒皆上」

【五閏色】綠・紅・碧・騮・紫。

【五季】季は世の末の義、五代をいふ。宋史、地理志序「唐室既衰、――迭興、五十餘年、更易八姓」

【五紀】歲・月・日・星辰・曆數。書、洪範「協用――」紀は正しき法。

【五氣】○五方卽ち東・西・南・北・中央の氣。史、五帝紀「炎帝修德振兵、治――」○書、洪範「雨・暘・燠・寒・風」

【五教】父義・母慈・兄友・弟恭・子孝。周禮「――紀、宜」

【五儀】○公・侯・伯・子・男の五等爵。周禮、春官、典命「掌諸侯之――」○五等の人品。家語、五儀解「孔子曰、人有――、有庸人、有士人、有君子、有賢人、有聖人」荀子にも出づ、聖人の上に大の字あり。○秀士・選士・俊士・造士・進士（禮記）

【五畿】國山城・大和・河內・和泉・攝津の畿內五ヶ國を總稱す。宋史、日本國傳「――七道三島、凡三千七百七十二都、四百一十二驛」云云」

【五畿七道】國畿內五箇國と、東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の七道。今は北海道を加へて八道とす。

【五畜】○五つの家畜。牛・羊・豕・雞・犬。漢書「民有――」○靈樞七篇「――、肉者、馬・牛・羊・猪・狗也」

【五行】萬物を組成せる五種の元氣、木・火・土・金・水の稱。書、洪範「――、一曰水、二曰火、三曰木、四曰金、五曰土。水曰潤下、火曰炎上、木曰曲直、金曰從革、土爰稼穡」又、五行相生とは木生火、火生土、土生金、金生水、水生木をいひ、五行相剋とは木剋土、土剋水、水剋火、火剋金、金剋木をいふ。

【五行相剋】五行を見よ。

【五行相生】五行を見よ。

【五經】○易經・書經・詩經・春秋・禮記。――の稱は、漢の武帝、建元五年、――博士を置けるに初まる。○五つの醫書、素問・靈樞・難經・金匱要略・甲乙經。○五つの禮、吉・凶・軍・賓・嘉。禮記「禮有――、莫重於祭」=五禮。

【五經大全】書名、一百十七卷。明の永樂中胡廣等に勅して撰述せしめたるもの。

【五經鼓吹】五經の旨を發揮すべき文章の義、鼓吹とは鼓をうち笛を吹きてはやし立てる義。晉書、孫綽傳「絕重張衡左思之賦、云三都二京、――也」

【五經庫】腹中に多くの經書を貯ふる義、庫はくら。隋書、房暉遠傳「暉遠幼有志行、治三禮・春秋三傳・詩・書・周易、兼善圖緯、周武帝平齊、搜訪儒俊、暉遠首應辟命、授小學下士、時人每稱爲――」

【五經笥】五經庫に同じ、笥は方形のはこ。後漢書、邊韶傳「韶以文學知名、教授數百人、韶口辯、曾晝日假臥、弟子私嘲之曰、邊孝先、腹便便、懶讀書、但欲眠、韶潛聞之、應時對曰、邊爲姓、孝爲字、腹便便、――、但欲眠、思經事、寐與周公通夢、靜與孔子同意、師而可嘲、出何典記、嘲者大慚」

【五金】五種のかね、金・銀・銅・鐵・錫。

【五禽】手足を屈伸し、身を躍し首を仰ぎ禽獸の姿勢をなし、血液を循環せしむる養生法、今の體操の如きもの。後漢書、華佗傳「古之仙者爲導引之事、熊經鴟顧、引挽腰體、動諸關節、以求難老、吾有一術、名――之戲、一曰虎、二曰鹿、三曰熊、四曰猿、五曰鳥」

【五逆】佛無間地獄に落ちるべき五つの罪惡。父を殺し、母を殺し、阿羅漢（得道者）を殺し、和合僧を破り、佛身の血を出す（觀經疏記）觀无量壽經「――十惡具諸不善」=五無間業。

【五玉】○五色の玉、蒼玉、赤玉、黃玉、白玉、玄玉をいふ。王融、淨行頌「――旣潤迹而信、八桂灌芳風乃播」○公・侯・伯・子・男の五等諸侯が天子に見ゆる時に執る五つの玉瑞。五瑞に同じ。五瑞參看。

【五苦】佛人間の免れ難き五つのくるしみ、生・老・病・死・愛別。觀无量壽經「惡道不遠、――所逼」=五痛。

【五葷】○五種の臭菜、佛家にては、大蒜・小蒜・興渠・慈葱・茖葱。○道家にては、韮・薤・蒜・蕓薹・胡荽。

【五果】桃・李・杏・栗・棗（素問）

【五花馬】馬のたてがみを剪りて飾とせる馬。岑參詩「五花騘馬七香車、云是平陽帝子家」

【五官】○五つの官能、鼻・目・口・耳・形（荀、天論）○五行の官。[illegible]「木正句芒、火正祝融、金正蓐收、水正玄冥、土正后土」

【五刑】○五つの刑罰、墨（黥）劓（はなきる）剕（あしきる）宮（勢を割く）大辟（死刑）書、舜典「象以典刑、流宥――」○治國の上より定めたる五つの罪。野刑（農功を怠る罪）軍刑（軍中にて將の命に背きし罪）鄕刑（不孝其の他の非行を行ひし罪）官刑（官吏の職を怠りし罪）國刑（人民たる分に安んぜず秩序をみだす罪）（周禮、大司寇）

【五月雨】○陰曆五月に降る雨。博物志「俗以――爲分龍雨、一曰隔轍雨」○國陰曆五月頃ふりつづく霖雨=梅雨・梅霖。

【五教】○五常の道のをしへ。書、

舜典「汝作二司徒一、敬敷二ーー一在レ寬」○兵卒を訓練する五つの方法。緊書拾唾「兵ーー、形色之旗、以敎二其目一、誡命之數、以敎二其耳一、進退之度、以敎二其足一、長短之利、以敎二其身一、賞罰之誡、以敎二其心一」

【五古】詩の一體、一句五言の古詩。句數は長短の制限なし。

【五庫】車庫・兵庫・祭器庫・樂庫・宴器庫(禮、月令)

【五羖】五つの牡羊。戰國秦策「ーー大夫之相レ秦也、勞不レ坐レ乘、暑不レ張レ蓋」ーー大夫は百里奚の異稱。史、秦紀「繆公聞二百里奚賢一、欲二重贖一レ之、恐二楚人不一レ與、請以二ーー羊皮一贖レ之、楚人遂許與レ之」とあるに本づく。

【五湖】○五つの湖水。滆湖・洮湖・射湖・貴湖(以上太湖の支派)と太湖と(後漢書、注)○太湖の別名。緊書拾唾「周禮、揚州其浸ーー、按張勃吳錄曰、太湖之別名、以二其周行五百里一、謂六千頃一、故以二ーー一名レ之一」

【五袴】袴は褲に通ず、はかまの類。五つの袴とは、人民の富むをいふ。後漢書、廉范傳「范字叔度、建初中、遷二蜀郡太守一、成都民物豐盛、邑宇逼側、舊制禁二民夜作一、以防二火災一、而更相隱蔽、燒者日屬、范乃毀二削前令一、但嚴使レ儲レ水而已、百姓爲レ便、乃歌レ之曰、廉叔度、來何暮、不レ禁レ火、民安作、平生無レ襦、今ーー」

【五褲】前條を見よ。

【五鈷】圓眞言宗の佛具、金剛杵の頭の五箇あるもの。單頭のものを獨鈷、三頭のを三鈷といふ、もと印度の護身用武器、煩惱を破る寶にて佛具となる。

【五侯】○前漢の成帝の時の五諸侯。緊書拾唾「王氏ーー(成帝同日封二舅五人一爲レ侯)王譚(平阿侯)王商(成都侯)王立(紅陽侯)王根(曲陽侯)王逢時(高平侯)詳くは漢書、元后傳を見よ。○後漢の桓帝の時の五諸侯。緊書拾唾「東漢ーー(桓帝時、五人以誅二梁冀一功、同日受レ封、號二ーー一)單超(新豐侯)徐璜(武原侯)左悺(上蔡侯)具瑗(東武陽侯)唐衡(汝陽侯)」詳くは後漢書、單超傳を見よ。

【五侯鯖】非常の珍味、よせなべ。鯖は肫に同じ、魚を煮、肉を煎るをいふ。西京雜記「五侯不二相能一、賓客不レ得二來往一、婁護豐辯、傳二食五侯間一、各得二其歡心一、競致二奇膳一、護乃合以爲レ鯖、世稱二ーー一、以爲二奇味一焉」=伏鯖。

【五溝】五つのみぞなり。周禮、夏官、司險「設二國之ーー五塗一、而樹二之林一以爲二阻固一」鄭注「ーー、遂・溝・洫・澮・川也」

【五穀】○稻・黍・稷・麥・菽(周禮、職方氏)麻・黍・稷・麥・豆(漢書、食貨志、注)

【五胡十六國】種族五にして其の國十六あり、五胡は匈奴・氐・羌・羯・鮮卑。十六國は、漢(前趙)成漢・後趙・前涼・前燕・前秦・後燕・後秦・西秦・後涼・南燕・西涼・南涼・北涼・大夏・北燕。

【五言】五言の句、四句二十字よりなれる詩を五言絶句、又、略して五絶といひ、八句四十字よりなれるを五言律、又、五律といひ、句數に制限なきを五言古詩、又、五古といふ。

【五言金城】次條に同じ、金城は堅固なる城の義。南唐書、儒者傳「劉洞詩長二于五言一、自號二ーーーー一」

【五言長城】五言の詩に巧にして常人の企及すべからざるに喩ふ、長城は萬里の長城、唐の劉長卿の故事。新唐書、隱逸祕系傳「系與二劉長卿一善、以レ詩相贈答、權德輿曰、長卿自以爲二ーーーー一、系用二偏師一攻レ之、雖レ老益壯」

【五根】圓信・勤・念・定・慧の五法、能く他の一切の善法を生ずる本なればいふ。大藏法數「根卽能生之義、謂此ーー能生二一切善法一、一信根、謂信二於正道一也、二精進根、謂修二正法一无間无雜也、三念根、謂於二正法一記憶不レ忘也、四定根、謂攝心不散也、五慧根、謂於二諸法一觀照明了也」

【五采】青・黃・赤・白・黑。書、益稷「以二ーー一彰施二于五色一、作レ服」ーー五色・五彩・五綵。

【五彩】五采に同じ。

【五綵】五采に同じ。

【五倉】五臟をいふ。漢書、郊祀志「官二化食ーー之術一者、谷永人」

【五藏】次條に同じ。漢書、藝文志「ーー六府」六府は、大腸・小腸・胃・膽・膀胱・三焦(水分排泄器官)府は腑に同じ。

【五臟】肺臟・心臟・脾臟・肝臟・腎臟。書、盤庚、疏「以レ心爲二ーー之主一」ーー五臟・五倉。

【五雜俎】十六卷、明の謝肇淛(字は在杭)撰す、天・地・人・物・事の五類に分ちて雜記す、和版あり。

【五山】○五つの寺。○祇園精舍・竹林精舍・大林精舍・誓多精舍・那爛陀寺(以上印度)○徑山寺・育王寺・天童寺・靈隱寺・淨慈寺、又、異愛寺・護念寺・慎林寺・西寺・溫泉寺(以上支那)○圓天龍寺・相國寺・建仁寺・東福寺・萬壽寺(以上京都)○圓建長寺・圓覺寺・壽福寺・淨智寺・淨妙寺(以上鎌倉)○東海中に在りて神仙の住むといふ五つの山、岱輿・員嶠・方壺・瀛洲・蓬萊「列、湯問」○五嶽に同じ。

【五事】○貌・言・視・聽・思。書、洪範「敬用二ーー一」○兵事の要五つ。孫子、始計「道・天・地・將・法」

【五祀】ゴシ 一年間に行ふ五つの祭。春は戸、夏は竈、秋は門、冬は行、季夏は中霤（チウリウ）を祀る。〔禮、月令〕白虎通には行を井に作る。

【五戎】ゴジウ ○弓矢・殳・矛・戈・戟。禮、月令「敎二於田獵一以習二――一」＝五兵。○五種の軍用車。周禮、春官、車僕「戎路・廣車・闕車・苹車・輕車」

【五臭】ゴシウ 五つの臭。羶（セン）・焦（セウ）・香・腥（セイ）・朽〔禮、月令〕○五つの臭氣ある草木。管子「薜荔・白芷・蘼蕪・椒・連、――所二以殺一レ疾避一レ老」

【五色】ゴシキ 青・黃・赤・白・黑。老子「――令二人目盲一」

【五色無主】ゴシキシユナシ 恐懼することの甚しく、顏色定まらず。淮南、精神「禹南省方、濟二于江一、黃龍負レ舟、舟中之人、――、禹乃熙笑」

【五時敎】ゴジケウ 佛天台宗にて釋迦の一生を五期に分け、其の說きし經典によりて區別せし名稱。第一期華嚴（ゴン）時・第二期阿含時・第三期方等時・第四期般若（ハンニヤ）時・第五期法華涅槃（ハン）時。

【五日一風十日一雨】ゴジツイツプウジフジツイチウ 五風十雨（八六頁一段）を見よ。

【五十歩百歩】ゴジツポヒヤクポ 少しの差にて大體同じき義。孟、梁惠王「孟子對曰、王好レ戰、請以レ戰喩、塡然鼓レ之、兵刃既接、棄レ甲曳レ兵而走、或百歩而後止、或五十歩而後止、以二五十歩一笑二百歩一、則何如、曰不可、直不二百歩一耳、是亦走也」

【五十三驛】ゴジフサンエキ ○五十三の宿驛。黃山谷詩「鬼門關外莫レ言レ遠、――是皇州」○國江戸日本橋より京都三條大橋に至る間にありし五十三の宿驛。大津より品川に至る東海道の宿驛。＝五十三次（ツギ）。五十三亭（黃山谷詩）

【五十而知四十九年非】ゴジフニシテシジフクネンノヒヲシル 今年始めて前年の非を知り得たりとの義。淮南、原道訓「蘧伯玉年五十、而有二四十九年非一」

【五刃】ゴジン 五種の兵器。刀・劍・矛・戟・矢。賈誼「定二三辛一、隱二――一」

【五辛】ゴシン 韭・薤・葱・蒜・興渠。風土記「元旦造人、上二――盤一」

【五辛盤】ゴシンバン 五種の辛（カラ）き物を盤に盛り、元旦に之を食すれば、五臟の氣を通じ、健康を保つといふ。風土記「元日造二――一、五薫鍊レ形、五辛所三以發二五臟之氣一、莊子所レ謂春月飮レ酒茹レ葱、以通二五臟一也」

【五舍】ゴシヤ 國古、宮城内に在りし女御・更衣の居所。昭陽舍（梨壺）淑景舍（シゲイシヤ）（桐壺）飛香舍（ヒギヤウシヤ）（藤壺）凝華舍（梅壺）襲芳舍（雷鳴壺（カンナリノツボ））

【五車韻瑞】ゴシヤインズキ 百六十卷、明の凌稚隆編す。此書は、經・史・子・集・賦の五部に分ち、每部、二字三字四字の熟字を列し、一一其の出典を明かにす。

【五常】ゴジヤウ ○仁・義・禮・智・信（白虎通）漢書、董仲舒傳「仁義禮智信――之道」○五典に同じ。書、泰誓「狎二侮――一」疏「――、父義、母慈、兄友、弟恭、子孝」五典參看。

【五障】ゴシヤウ 佛女人は罪業深くして、梵天王・帝釋天・魔王・轉輪聖王・佛身と成るにさはりありといふ因緣。

【五城十二樓】ゴジヤウジフニロウ ○神仙の居所。史、武帝紀「方士有レ言、黃帝時爲二――一以候二神人一」○天上の白玉京に在りといふ城樓。李白詩「天上白玉京、十二樓五城、仙人撫二我頂一、結髮受二長生一」

【五爵】ゴシヤク 五つの位、公・侯・伯・子・男。禮、王制「王者之制二祿爵一公侯伯子男凡五等」

【五車之書】ゴシヤノシヨ 車五輛に載すべき程の書冊。藏書の多きをいふ。莊、天下「惠施多方、其書五車」＝二酉。

【讀五車書】ゴシヤノシヨヲヨム 五輛の車に積む程の多くの書を讀む。杜甫詩「富貴必從二勤苦一得、男兒須レ讀二五車書一」

【五種】ゴシユ 黍・稷・菽・麥・稻（周禮、職方氏、注）＝五穀。

【五趣】ゴシユ 佛天・人・地獄・畜生・餓鬼。无量壽經「開二示――一、度二未度者一」＝五道。

【五銖錢】ゴシユセン 重さ五銖ある錢の名。漢書、武帝紀「元狩五年、始鑄二――一」

【五出】ゴシユツ 草木の花は其の蕊多く――するをいふ。宋玉、符瑞志「草木花多――、雪花獨六出」

【五衰】ゴスイ 佛天人の死する時、現はすといふ五つの死相。身光不現・華鬘萎顇・兩腋汗流・體便臭穢・不樂本座〔祖庭事苑〕因果經「福盡之時、五衰相現、一者頭上華萎、二者眼瞬、三者身上光滅、四者腋下汗出、五者自然離二於本座一」

【五瑞】ゴズイ 天子より五等の諸侯に頒ち賜ふ圭璧の類。公は桓圭、侯は信圭、伯は躬圭、子は穀璧、男は蒲璧〔書、舜典〕周禮、秋官、大行人「上公執二桓圭一九寸、諸侯執二信圭一七寸、諸伯執二躬圭一諸子執二穀璧一五寸、諸男執二蒲璧一」

【五寸之鑰制開闔之門】ゴスンノヤクカイカフノモンヲセイス 微小の者も、要路に立つときは、其の勢力の及ぶ所る廣大なるに喩ふ。淮南、主術「一圍之木持二千鈞之屋一――」

【五性】ゴセイ 人の五つの性情をいふ。大戴禮「民有二――一、喜怒欲懼憂」

【五牲】ゴセイ ○五つのいけにへ。麋・鹿・麏・狼・兔。東都賦「薦二――一、致二三犧一」○牛・羊・豕・犬・雞。左、昭十一「――不二相爲用一」

【五星】ゴセイ 木（東方歲星）火（南方熒惑星）金（西方太白星）水（北方辰星）土（中央鎭星）史、天官書「天有二――一、地有二五行一」

【五聲】五音に同じ。〔書、堯典、疏〕
【五世而斬】斬は截、絶え盡くる。孟、離婁「君子之澤、――」君子の德澤も五世も經れば絶える。
【五尺之童】小兒をいふ。周の制、八寸を一尺とし、十尺を一丈とす。故に大人を丈夫といひ、小兒を――といふ。孟、滕文公「雖レ使ニ――適ニ市、莫ニ之或欺ニ」
【五節會】古、宮中にて行はれたる五つの節句。正月の元旦・白馬(正月七日)踏歌(正月十五・六日)端午・豐明(新嘗會の翌日)の五つの節會。
【五節句】國陰暦にて一年中五つの祝日、正月七日の人日・三月三日の上巳・五月五日の端午・七月七日の七夕・九月九日の重陽。
【五絶】○詩の一體、五言絶句の略。○絶句五首。○虞世南の人に絶する五つの事。唐書、虞世南傳「帝稱ニ其――、一曰德行、二曰忠直、三曰博學、四曰文詞、五曰書翰」
【五攝家】國攝政職に任じ得べき五つの家柄、即ち近衞・九條・二條・一條・鷹司。
【五善】○弓を射るに五つの善きこと。論、八佾「子曰、射不レ主レ皮」集解「馬融曰、射有ニ――焉、一曰和志體和也、二曰有ニ容儀ニ三曰主皮、能中レ質也、四曰和頌、合ニ雅頌ニ也、五曰興武、與レ舞同也」○軍國の五つの善き道。新書「――者所謂善知ニ敵之形勢ニ善知ニ進退之道ニ善知ニ國之虛實ニ善知ニ天時人事ニ善知ニ山川險阻ニ」
【五千言】史、老子傳に老子書上下篇を著し道德の意を言ふ五千餘言とあるによりて、老子の道德經をいふ。言は字なり。白居易詩「道德無レ所レ言、時窺――」＝五千文。
【五千上慢】佛釋尊、法華を說かんとし給ひしとき、增上慢の心を抱ける五千人の比丘曰ふ、我等既に妙果を悟れり、何ぞ、法華を聞く要あらんとて、席を立ちて去りしをいふ。增上慢とは、すでに增上の法を得たりとして、慢心を抱くをいふ〔法華經、方便品〕
【五宗】高祖・曾祖父・祖父・父・子・孫。史、太史公自序「――旣上、親屬協和」
【五層】いつかさなり、層は重屋なり、北史、魏太武紀「發ニ鄴城――佛圖ニ于泥像中ニ得ニ玉璽二ニ」＝五階。
【五總龜】人の博識を稱す。唐書、殷踐猷傳「博學尤通ニ氏族・曆數・醫方ニ與ニ賀知章・陸象先・韋述ニ最善、知章嘗號爲ニ――謂ニ龜千年五聚問無レ不レ知也」
【五俗】詩の五つの俗習。滄浪詩話「詩要レ去ニ――ニ俗體・俗意・俗句・俗字・俗韻」
【五蛇】五匹のへび、晉の文公に從ひ天下を周流せし狐偃・趙衰・魏武子・司空季子・介子推の五人に比す。史、晉世家「龍欲レ上レ天、五蛇爲レ輔」注「龍喩ニ重耳ニ――喩ニ五臣ニ」重耳は文公の名。
【五大】○天・地・君・親・師の稱。○佛五輪より生ずる地・水・火・風・空の五つの稱。弘決「從ニ五輪ニ生ニ――ニ」
【五大州】全世界の陸地を五つに區分せし稱。亞細亞・亞非利加・歐羅巴・亞米利加・濠太剌利。＝五大陸。
【五大尊】○佛不動・降三世・軍荼利・大威德・金剛夜叉の五大明王。○國五壇の御修法とは、壇を五つ作りて――を安置し、法を修するをいふ。
【五大夫】松の異名、秦の始皇泰山に上り、風雨暴に至り、松樹の下に休ふ、因りて其の樹を封じて――(秦の爵名)となしたる故事に本づく。史、始皇紀「始皇東行ニ郡縣ニ乃遂上ニ泰山ニ立レ石封祠祀、下、風雨暴至、休ニ於松樹下ニ因封ニ其樹ニ爲ニ――ニ」
【五大老】國豐臣秀吉の置きたる五人の大老、五奉行の上に位す、即ち德川家康・前田利家・宇喜多秀家・上杉景勝・毛利輝元。
【五大力】國內海を航行する荷船、傳馬よりは稍大なるもの。
【五大力菩薩】佛金剛吼・龍王吼・無畏十力吼・雷電吼・無量力吼をいふ。國王三寶を信ずる時は、佛――を遣して、其の國を護らしむといふ。
【五代】○唐・虞・夏・商(殷)・周〔孔安國、尙書序〕○黃帝・堯・舜・禹・湯〔禮、祭法、注〕○唐の後に起りし後梁・後唐・後晉・後漢・後周。宋史、太祖紀「――諸侯跋扈」＝五季。
【五代史】書名、新舊二種あり、舊――は宋の太宗の時、薛居正等に敕して梁唐晉漢周各代の歷史を編修せしめたるものを後人總稱して――と稱す、其の後、宋の歐陽脩、舊史を改修して――記七十五卷を作りたるを俗に新――と稱す。
【五體】○筋・脈・肉・骨・毛皮。○頭・兩手・兩足。法苑珠林「――投レ地、歸ニ於聖王ニ」○全身の義とす。＝四體。
【五道】佛天・人・地獄・畜生・餓鬼〔法華經〕
【五達】五方に通ずるみち、また、五辻。爾雅「――謂ニ之康ニ六達謂ニ之莊ニ」
【五達道】天下古今の共に由る所の道五つ。中庸「君臣也、父子也、夫婦也、昆弟也、朋友之交也、五者天下之達道也」

【五段教授法】ゴダンケウジュハフ 心理自然の理法に從ひて豫備・提示・連結・總括・應用の五段に分けて教授する法。

【五地】ゴチ 五種の土地。〔周禮、地官〕「大司徒以二土會之法一、辨二五地之物生一」、曰、山林・川澤・丘陵・墳衍・原隰〕＝五土。

【五智】ゴチ 〔佛〕大日如來が成就せしといふ五つのちゑ。法界體性智・大圓鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智。

【五塵】ゴヂン 〔佛〕心の障礙となる五つのけがれ。色・聲・香・味・觸の五欲。〔大藏法數〕「障二蔽眞性一、染汚之義、謂二此ーー一」、陸佃、詩疏「故也」

【五蟲】ゴチウ 五種の動物の總稱、毛蟲（麒麟爲二之長一）羽蟲（鳳凰爲二之長一）介蟲（龜爲二之長一）鱗蟲（蛟龍爲二之長一）裸蟲（人爲二之長一）

【五濁】ゴヂョク 〔佛〕劫濁に起る五つのけがれ。次條を見よ。

【五濁惡世】ゴヂョクアクセ 〔佛〕惡世の五つの濁、劫濁（時のけがれ）煩惱濁・衆生濁（衆人のけがれ）見濁（邪神の邪見）命濁（人の壽命が漸次に縮まる）〔楞嚴經〕ーー惡世。

【五痛】ゴツウ 五苦に同じ。

【五丁】ゴテイ 五人の壯男。〔蜀王本紀〕「秦惠王欲レ伐レ蜀、以レ路不レ通、乃刻二五石牛一、置二金其後一、蜀人見レ之、以爲二牛能便一レ金、蜀王發二卒千人一、使二ーー力士拖一レ牛成レ道、於レ是秦遂伐レ蜀」

【五帝】ゴテイ ○少昊・顓頊・帝嚳・唐堯・虞舜〔尚書、序〕○黄帝・顓頊・帝嚳・唐堯・虞舜〔史記〕

【五鼎】ゴテイ 五つの鼎に五つの肉味を盛りて神に供へるの孟、〔孟子、梁惠王〕「前以二三鼎一、而後以二五鼎一」、〔注〕三鼎は士の祭、ーーは大夫の祭。〔漢書〕ーー食、〔注〕「牛・羊・豕・魚・麋」

【五鼎食】ゴテイショク 大夫の祭には、五鼎の肉を供す、故に榮達する義とす。〔漢書、主父偃傳〕「大丈夫生不二ーー食一、死則五鼎烹耳」

【五聽】ゴテイ 獄を聽く五つの法。辭聽（直からざれば言煩はし）色聽（直からざれば顏色あかくなる）氣聽（直からざれば氣喘ぐ）耳聽（直からざれば聽くこと惑ふ）目聽（直からざれば眸子眊し）〔周禮〕

【五典】ゴテン 父は義・母は慈・兄は友・弟は恭・子は孝、又、父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり〔書、舜典〕＝五倫・五品・五常。

【五天竺】ゴテンヂク 天竺を東・西・南・北・中央の五に分ちて稱す。

【五土】ゴド 山林・川澤・丘陵・墳衍・原隰〔後漢書、明帝紀、注〕＝五地。

【五都】ゴト ○五つの都。○漢代は、洛陽・邯鄲・臨淄・宛・成都〔紺珠〕○漢・魏二代は、長安・譙・許昌・鄴・洛陽〔同上〕○唐の肅宗の時は、京兆（上都）河南（東都）鳳翔（西都）江陵（南都）太原（北都）〔地理通釋〕

【五等】ゴトウ ○五等の爵。〔禮、王制〕「公（地方百里）侯（方百里）伯（七十里）子（五十里）男（五十里）」○夫ある婦人の五等。〔曲禮〕「天子之妃曰レ后、諸侯曰二夫人一、大夫曰二孺人一、士曰二婦人一、庶人曰レ妻」○死を稱する五等。〔曲禮〕「天子死曰レ崩、諸侯曰レ薨、大夫曰レ卒、士曰二不祿一、庶人曰レ死」

【五等親】ゴトウシン ○己との親族關係を一等より五等に分ちし稱。○其の第五等に當る親族、妻妾の父母・姑子（父の姉妹の子）舅姨の子（母の兄弟姉妹の子）玄孫（曾孫の子）外孫・壻（女の夫）

【五德】ゴトク ○人の五つの德。〔紺珠〕「中庸、聰明睿知（足知之意）寬裕溫柔（仁）發強剛毅（義）齊莊中正（禮）文理密察（知）」〔朱注、五者之德〕○將軍の五つの德。〔孫子、始計〕「將五德、智・信・仁・勇・嚴」○雞の五つの德、よりて雞の異名とす。〔韓詩外傳〕「雞有二ーー一。首戴レ冠者、文也、足傳レ距者、武也、敵在レ前敢鬪者、勇也、得レ食相呼、仁也、守レ夜不レ失レ時、信也」

【五斗米】ゴトベイ 縣令の俸給、薄祿の義とす。〔宋書、陶潛傳〕「我不レ能下爲二ーー一折レ腰向中鄉里小人上、即日解二印綬一去レ職」

【五內】ゴナイ 肝・心・脾・肺・腎〔蜀志、楊儀傳〕「歎咤之聲、發二於ーー一」

【五伯】ゴハク ○伯は霸に通ず、五人の霸者。○三代のは、夏伯昆吾・商伯大彭・豕韋・周伯齊桓・晉文〔左、成二、注〕○春秋の世のは、孟子「ーー者三王之罪人也」趙注「齊桓・晉文・秦穆・宋襄・楚莊」＝五霸。

【五馬】ゴバ 太守の車には、五馬を用ひしによりて太守の異稱とす。〔遁齋閑覽〕「漢時朝臣出使以二駟馬一、爲二太守一增二一馬一、故爲二ーー一」〔詩、鄘風、干旄〕「孑孑干旟、在二浚之都一、素絲祖レ之、良馬五レ之」とあるに本づく。

【五倍子】ゴバイシ ふし、ぬるで（沒食子）漆に似て紅葉す、又、其の葉に生じたる蟲の巣は粉末にして齒を染むる料又藥用とす。

【五霸】ゴハ 霸は諸侯の盟主なり、五伯を見よ。

【五方】ゴハウ 東・西・南・北と中央と。轉じて中國と四方の夷狄の國と。〔禮、王制〕「ーーー之民、言語不レ通、嗜欲不レ同」

【五美】ゴビ 五つの美くしき德。〔論、堯曰〕「子曰、尊二ーー一、屏二四惡一、斯可三以從二政一矣、子張曰、何謂二ーー一、子曰、君子惠而不レ費、勞而不レ怨、欲而不レ貪、泰而不レ驕、威而不レ猛」

【五品】ゴヒン 五常に同じ。〔書、舜典〕「百姓不レ親、ーー不レ遜」＝五典。

【五百春】五百年の春。莊、逍遙遊「楚之南有冥靈者、以五百歲爲春、五百歲爲秋、上古有大椿者、以八千歲爲春、八千歲爲秋」冥靈は木の名。

【五百羅漢】釋迦の死後、其の遺經を結集するため來會せし諸弟子〔五百羅漢 [illegible]〕＝五百阿羅漢。

【五父】ちちとして敬ふべき五つの閒柄。實父・養父・繼父・義父・師父。

【五風十雨】五日に一たび風吹き、十日に一たび雨ふるは、氣候の順を得たるなり。論衡「太平之世、五日一風、十日一雨、風不鳴條、雨不破塊」和凝、宮詞「——餘糧在、金殿惟聞奏豐穰」

【五不孝】〇五つの親不孝の行。孟、離婁下「世俗所謂不孝者五、惰其四支、不顧父母之養、一不孝也、博奕好飲酒、不顧父母之養、二不孝也、好貨財、私妻子、不顧父母之養、三不孝也、從耳目之欲、以爲父母戮、四不孝也、好勇鬪狠、以危父母、五不孝也」〇禮、祭義「曾子曰、居處不莊非孝也、事君不忠非孝也、涖官不敬非孝也、朋友不信非孝也、戰陳無勇非孝也」

【五奉行】豐臣秀吉の置きたる五人の奉行、五大老の下にあり。石田三成・增田長盛・長束正家・淺野長政・前田玄以。

【五服】〇、堯舜時代の制度にて、王畿の外の地域。甸服・侯服・綏服・要服・荒服の稱。各服五百里、荒服に及びて二千五百里〔書、益稷〕〇五等の喪服、斬衰(三年)齊衰(周年)大功(九月)小功(五月)緦麻(三月)の稱〔草書拾唾〕〇天子・諸侯・卿・大夫・士の衣服〔書、皐陶謨、傳〕

【五福】〇人の五つのさいはひ。壽・富・康寧・攸好德・考終命〔書、洪範〕〇新論「——、壽・富・貴・康寧・子孫衆多」

【五分五分】國半分の義、兩方相同じ、相匹敵する、又、さしひきなし。

【五不取】妻を娶るに不可なる五つの條件。大戴禮、本命「女有五不取、逆家子不取、亂家子不取、世有刑人不取、世有惡疾不取、喪婦長子不取」逆家子とは謀反人を出したる家の女子、亂家子とは家庭の亂れたる家の女子、喪婦長子とは父死して我儘に育てる女子。

【五部大乘經】五つの佛典。華嚴經・大集經・大品般若經・法華經・涅槃經。

【五兵】〇五つの武器、戈・殳・戟・酋矛・夷矛。周禮「司兵掌五兵五盾」〇刀・劍・矛・戟・矢〔淮南子、注〕＝五戎。

【五廟】諸侯のおたまや、二昭と二穆と、太祖の廟と。

【造五鳳樓手】文章の巧妙なるをいふ。談苑「梁韓洎・韓浦能爲古文、洎常輕浦曰、吾兄爲文、如繩樞草舍、聊蔽風雨而已、予之文是——」

【五畝之宅】周代、井田の法にて、一夫毎に五畝の宅地を受くるをいふ。孟、梁惠王「——、樹之以桑、五十者可以衣帛矣」

【五臟】心臟・脾臟・腎臟・肺臟・肝臟〔醫宗金鑑〕

【五味】五つのあぢ、辛・酸・鹹・苦・甘〔禮、禮運〕注に、春は酸多く、夏は苦多く、秋は辛多く、冬は鹹多くすとあり。

【五民】士・農・工・商・賈。一說に五方の民〔史、貨殖傳、注〕

【五無間業】五逆に同じ。

【五明】〇古の異名。古今注「舜廣開視聽、求賢人以自輔、作五明扇」〇梵 印度の波羅門時代より行はれし五つの學科目。聲明(文法・文學)工巧明・醫方明・因明(論理學)內明(哲學・教義學)の稱。持地經「菩薩求法、當於五明處求、當於一切——處求」

【五夜】一夜を五分し、甲夜(午後八時)乙夜(午後十時)丙夜(夜半十二時)丁夜(午前二時)戊夜(午前四時)とする稱、夜を守るもの、甲乙順番に更代す、故に五更ともいふ〔漢官儀〕杜甫詩「——漏聲催曉箭」

【五藥】五種の藥材。草書拾唾「——、草・木・蟲・石・穀」

【五欲】耳目鼻口の欲と心に愛憎あるの欲と。管子「節其——、去其二凶」〇財欲・色欲・飲食欲・名欲・睡眠欲〔法華經〕次條參看。

【五慾】佛 人間の五つの慾。卽ち見・聞・香・味・觸。祖庭事苑「大論云、世間中——、無不愛樂」＝五塵。

【五老會】五人の老人の會合。澠水燕談錄「慶曆末、杜祁公(衍)告老退居南京、與太子賓客致仕王渙・光祿卿致仕畢世長・兵部郎中分司朱貫・尚書郎致仕馮平爲——、吟醉相勸、士大夫高之、五人年皆八十餘、康寧爽健」

【五柳先生】晉の陶潛自ら其の門に五柳を栽ゑて、——と稱し自ら傳を作る。晉書、隱逸傳「陶潛字元亮、少懷高尚、嘗著五柳先生傳以自況」

【五律】〇五言律詩の略。〇律詩五首。

【五粒松】ごえふのまつ(五葉松)。五代史「嵩山有五粒松、松脂入地千年、化爲藥、去三尸、因徙居求之」＝五鬣松。

【五倫】人生の五つのみち。孟、滕

文公、使三契爲二司徒一、敎以二人倫一、父子有レ親、君臣有レ義、夫婦有レ別、長幼有レ序、朋友有レ信」‖五典。

【五輪塔】ゴリンタフ　佛方形と圓形との五つの石を積んで作りし塔、下より地・水・火・風・空に象る。

【五里霧中】ゴリムチウ　大霧中に在り、迷ひて往く所を知らざる喩。後漢書、張楷傳一張楷字公超、性好二道術一、能作二五里霧一、時隔四人裴優、亦能作二三里霧一」

【五旅】ゴリョ　二千五百人の軍勢、一旅は五百人。周禮「五卒爲レ旅、一一爲レ師、五師爲レ軍」

【五陵】ゴリョウ　漢の高帝以下五帝の陵をいふ、皆長安に在り。長陵（高帝）安陵（惠帝）陽陵（景帝）茂陵（武帝）平陵（昭帝）其の近後、富豪の家多し。白居易詩「一一年少爭頭」

【五嶺】ゴレイ　湖南省と廣東省との界にある大庾・始安・臨賀・桂陽・揚陽の五つの嶺。史、張耳傳「北有二長城之城一、南有二五嶺之戍一」漢書に五領に作る、同じ。

【五禮】ゴレイ　〇吉（祭祀）凶（喪葬）賓（賓客）軍（軍旅）嘉（冠婚）（書、舜典）周禮、大宗伯「以二吉禮一事二邦國之鬼神一、以二凶禮一哀二邦國之憂一、以二賓禮一親二邦國一、以二軍禮一同二邦國一、以二嘉禮一親二萬民之婚姻一」〇五等諸侯の禮。書、皐陶謨「天秩二有禮一、自二我一一一、有二庸哉」

【五彩】ゴサイ　五つのくしひなる動物、麟・鳳・龜・龍・白虎（ビャク）何承天、白鳩頌「一一兮」性」

【五鬣松】ゴリョウショウ　どえふのまつ（五葉松）奚幸雜識「李賀有二五粒小松歌一（中略）粒者鬣也」

【五勞】ゴラウ　五つの人體を勞するもの。黃帝五氣論「久視傷レ血勞二於心一也、久臥傷レ氣勞レ脾、久坐傷レ肉勞レ脾、久立傷レ骨勞レ腎、久行傷レ筋勞レ肝」

【互】ゴ　遇

〇たがひに「交一」〇たがふ（差）〇かはるがはる「參一」〇入りまじる（雜）入りみだれる「紛一」〇入りかはる、宋之問詩「周遊晦明一」〇らち（埒）‖行馬。〇堀・濠又壕・蛙の如き甲殻あるものの總稱。

【互有】ゴイウ　同一の物件を二人にて相互に用ふる。

【互角】ゴカク　圓〇まさりおとりなし。‖五分五分。〇算學にて一直線が他の二直線と相交りて成る八角ごの稱。‖錯角。

【互鄕】ゴキャウ　地名、今の江蘇省沛縣に在り、一說、河南省項城縣の北一里に在り。論、遠面「一一難二與言一」朱注「其人習二於不善一、難二與言一也」

【互市】ゴシ　國と國との貿易。後漢書、烏桓傳「歲時一一」唐代に一一監あり、外國と貿易の事を掌る。

【互惠】ゴケイ　相互の間に、利益又は恩典を等しく享有する義「一一條約」

【互讓】ゴジャウ　互にゆづりあふ。

【互生】ゴセイ　草木の葉相對せず、たがひちがひに生ずる義。對生の對。

【互選】ゴセン　選擧せらるる資格あるものが、互に選擧し合ふ。

【互贈】ゴゾウ　互にみる。晉書、度尙傳「郭黨一一、異同蜂至」

【互物】ゴブツ　龜鼈蜃蛤の如き甲殻あるもの「周禮、天官、鼈人」

【互文】ゴブン　二つの文又は句にて一方に說くことが他方にも通じ、相補ひて意を完くする書き方。

【互用】ゴヨウ　相たがひに用ふる。

【井】セイ　シャウ　極

〇ゐ、ゐど、地に穴ほりて水を出す。〇ゐげた、ゐげた形、てんじやう。〇きよし（清）ふかし（深）〇易の卦の名、巽下坎上。〇周代の制、一里四方の田地、卽ち九百畝を井字形に等分して九區とする稱。〇井によりて市を作る、故にまちの義とす「市一」〇水をつかさどる星の名、ちちり、二十八宿の一。〇一一は境界などの正しく整ふ貌、又、事を作すに法度ある貌。又、往來の連屬する貌。

【井井】セイセイ　もと井に作る、中の丶は釣瓶に象る。

【井蛙】セイア　井底蛙に同じ、蛙一に鼃に作る。

【井蛙】セイア　前條に同じ。

【井鹽】セイエン　ゐどの水を汲み取りて製成するしほ、四川・雲南等の地に在り。

【井桁】セイカウ　水を井字形に組みたるゐげた、又、井の上に架けし橫木。高啓詩「一一烏鳴破二曉煙一」‖井欄。

【井幹】セイカン　ゐげた、幹は轆轤、秋水「一一之上」‖井桁。

【井幹樓】セイカンロウ　ゐげたの形に組みたる樓。漢書、郊祀志「立二——一、高五十丈」注「積二木而高爲一レ樓、若二井幹之形一也、井幹者、井上木欄也、其形或四角、或八角、張衡西京賦云、井幹疊而百層、卽謂二此樓一也」

【井綆】セイカウ　つるべなは、ゐどのつるべの縄。‖汲綆。

【井幹】セイカン　ゐげた、幹は轆轤、秋水「一一之上」‖井桁。

【井幹樓】セイカンロウ　ゐげたの形に組みたる樓。漢書、郊祀志「立二——一、高五十丈」注「積二木而高爲一レ樓、若二井幹之形一也、井幹者、井上木欄也、其形或四角、或八角、張衡西京賦云、井幹疊而百層、卽謂二此樓一也」

【井汲】セイキフ　井水を汲み、杵臼を操りて、家事に勉むる。後漢書、馮衍傳「妻悍、不レ得レ遂二饋養一、兒女皆當自操二井臼一」轉じて自ら家政の勞に服する義とす。

【井魚】セイギョ　ゐどの中にゐる魚、井底蛙と同義。淮南子「一一不レ可二以語一レ大、拘二於隘一也」

【井深不食】井は深く、才能あれども明主に採用せられざるに喩ふ。論語「九三、――、爲二我心惻一可二用汲一王明並受二其福一」

【井陘】ケイ　○縣名、直隷省保定府に屬す。○山の名、――縣の東北に在り、四關爲く、中央低く井の如し、故に名づく。○邊陲の地の名、即ち――口、亦――關・土門關といふ、昌黎の九曲の一、歷代要害の地とす。

【井月】市中の家、吉の市を爲す者は井邊に集る、故にいふ。宋史、食貨志「――就爲二商人所一要」

【井絡】星のやどりの名、二十八宿中の鬼宿のうち星、鬼、天官書

【井井】○さかひ目の正しき貌。又、事を晉すに法度ある貌。荀、儒效「――分其官一使理也」○往來のつづく貌。易、井卦「往來――」

【井泉】ゐど。

【井然】井井の前解に同じ。

【井地】井田に同じ。孟、滕文公「使二畢戰問一――」

【井中觀星】私心におぼはるるときは、見るところ狹さに喩ふ。尸子、廣澤「因二井中一觀レ星、所レ觀不レ過二數星一、自二丘上一以觀、則見其始多出云云、私心、井中也、公心、丘上也」○亀レ井觀レ天。

【井田】實施周二代の田制、九百畝の田地を九等分して井形となし、周圍を八家に分ちて各之を耕さしめ、中央を公田とし、八家共に力を合せて之を耕して、其の收穫を官に貢ぐ。孟、公孫丑「方里而井、井九百畝、其中爲二公田一、八家皆私二百畝一、同養二公田一」

【井底蛙】井の底のかはづ、見解の小なるに喩ふ。世間知らず。莊、秋水「井蛙不レ可レ以語二於海一者、拘二於虛一也、夏蟲不レ可レ以語二於冰一者、篤二於時一也、曲士不レ可レ以語二於道一者、束二於教一也」後漢書、馬援傳「援譬二喩一曰、子陽――耳、而妄自尊大」○井蛙・管見。

【井目】圍碁の目の上に打ちし跡。すべて九つありて井字形をなす、劣者おつに先ちてこの點に石を置く。○制目・平目。

【井閭】むげた。白居易詩「――排二閭巷一、煙火萬家」○井閭・井幹。

【井臼】井閭に同じ。

【井堰】せき、田に注ぐ用水をせき止め又は加減する爲めに設けるせき。

【井筧】ケン　圖　○どがは、樋きもの。

【坐井觀天】見る所の小なるに喩ふ。韓愈、原道「老子之小二仁義一非レ毀之也、其見者小也、坐井而觀レ天曰二天小一者非二天小一也、彼以二道德一爲レ仁、子子爲レ義、其小レ之也則宜」○用二管窺一天。

四畫

亙　コウ　徑

○きはまる、きはむ（極）○つらなる、とほる（通）唐書、貴妃楊氏傳「第舍聯――」○ひろさ（表）ながさ（長）のひひろがり（延表）後漢書、梁冀傳「經――數十里」○わたる（竟）物の此端より彼端に竟るにいふ。○をはる（終）

【亙古】亙は竟なり、中の月は舟の形、舟の兩岸に竟るに象る、舛は古字。

亘　㊀セン　㊁クワン　先　寒

㊀もとむ（求）○しく（布）○俗に借りて亙字と通用す「――古」㊁桓（木部六畫）に同じ。

五畫

況　キャウ　漾

ここに、發語の助辭。詩、小雅「――也永歎」

【況且】二に從ふ。況於の俗字として用ふるは非なり。

些　㊀シャ　㊁サ　麻　箇　通音

㊀すこし（少）いささか。㊁無意味の助字。禁辭、招魂「何爲四方ー」

【些些】すくなき貌。白居易詩「――日業若爲」○些少・微些。

【些細】すこし。○瑣細。

【些事】少しのことがら。○細事。

【些子】盆景をいふ（五百弗）

【些子兒】すこしばかり、子・兒二字共に助字。後山詩話「宋太祖夜幸二趙普一、――新月」○召二趙多遜一賦レ詩、誦レ詩訖、曰、些子兒、虛詩耳、誰家玉匣新開鏡、露二出清光一――」

【些少】わづか。○些少・微少・少許・些些。

亞　㊀ア　㊁アク　禡　陌

㊀つぐ（次）又、次位。蜀志、諸葛亮傳「諸葛亮智識――二於兄一」○みにくし（醜）○つく（就）○あひむこ（兩壻）詩、小雅「琬琰姻ー」○姪。○あはす（配）○いね、稻に通ず。○一洲一洲ともいふ。○古、祭器の紋の一字形あるもの。㊁わかる、また、えだ（支・岐）俗に椏に作る。㊂ぬりかざる（塗飾）意に通ず。○あし、

惡に通ず。㊃おす、おしつける。壓に通ず。杜甫詩「花蕊一枝紅」

同訓異字　亞・次・續・繼等の別は續(糸部十五畫)の條を見よ。

【亞鉛】アエン とたん、銅と合せて眞鍮を作り、鐵板に鍊ぐして工作に用ふ。‖鉾・白鐵。

【亞寒帶】アカン 寒帶と温帶との中間の地。

【亞槐】アクイ 國大納言の異稱。三公に次ぐ官の義、周代の制、朝廷に三槐九棘を植ゑ、三公は槐に面して坐す、故に三槐を三公の義とするに本づく。‖亞相。

【亞灌木】アカンボク 灌木と喬木との中間に在る植物、芙蓉の類。

【亞卿】アケイ 九卿に次ぐ官。史、樂毅傳「設逢委レ質爲レ臣、蕭昭王以爲二一レ」

【亞獻】アケン 祭祀に初獻に續きて飲食物を獻ずるをいふ。儀禮、特牲饋食禮「主婦洗二爵于房一酌二一尸一」

【亞歲】アサイ 冬至をいふ、魏晉は冬至の日、萬國及び百僚の稱賀を受く、因りて小會す、其の儀、歲朝に亞ぐの義、(宋書)曹植、冬至獻二襪履一表「四方交泰、萬壽昭蘇、一一迎レ祥、隨長納レ慶」

【亞子】アシ 次男・次子。類書纂要「次息・季子・一一、竝次子之稱」

【亞相】アショウ 〇等相に次ぐ、御史大夫の稱。容齋續筆「漢御史大夫名爲二一一」〇國大納言の異稱。‖亞槐。

【亞將】アショウ 次將。漢書「將一一周勃」

【亞字欄】アジラン 亞字形に組みたるてすり。

【亞聖】アセイ 〇聖人につぐ人、顔子の稱。孟子序說「孟子大賢、一一之次也」〇孟子の稱。趙岐、孟子題辭「命世一一之大才者」元の文宗、孟子を封じて一一鄒國公と爲す。

【亞土壤】アドジョウ 岩石分解して、土壤となれるも、尙岩石の細片を交ふるもの、土壤と岩石との中間のもの。

【亞熱帶】アネツタイ 熱帶と温帶との中間の地。

【亞匹】アヒツ 匹敵するともがら、たぐひ、匹は類、同志、諸葛亮傳「亮之器、能理レ政、抑亦管商一一」管は管仲、商は商鞅。

【亞父】アフ 楚の項羽が其の臣范增を尊びて稱せし語、之を尊ぶこと父につぐ義。史、項羽紀「一一南鄉坐、一一者范增也」

【亞麻】アマ ぬめどま、高二三尺、葉は細長にして互生す、莖は麻に代用し、種子は一一仁油を取る。

【亞流】アリュウ 同じなかま。‖同類・流亞・亞匹。

【亞爾加里】アルカリ 赤色のリトマス液を青色に變ずる性あるもの。

【亟】 二畫

トウ 九 成詳なりず。

一 部

【亡】 ㊀ボウ・モウ 陽 ㊁ブ・ム 虞

㊀うしなふ(失)〇ほろぶ、ほろぼす(滅)〇しぬ(死)死せし者。〇なし、存在せず死して此世に處らず。論、雍也「不幸短命死矣、今也則一一」〇家に在らず。論、陽貨「孔子時一一其一」也」〇にぐ、のがる(逃)さる(去)漢書、韓信傳「蕭何聞信一一自追之」〇わする、忘に通ず。詩、邶風「心之憂矣、曷維其一一」〇酒にふける「荒一一」㊁なし、有の反對。論、八佾「不如二諸夏之一一也」‖(無)〇まづし(貧)

同訓異字　古字は入に从ひ、亡に从ふ、しは音隱、隸に亡に作る。

同訓異字　亡・失・喪の別は失(大部二畫)の條を見よ。

〇ナシ・無・靡・莫・罔等の別は無(火部八畫)の條を見よ。

【亡友】ボウユウ 死にたるともだち。

【亡逸】ボウイツ にげうす、ちりうせる。北史「勞二近一一一研二覈異同一」‖散逸・亡佚。

【亡者】ボウシャ すでに死せし君主。

【亡國之音】ボウコクノオト 滅びたる國の音樂、淫靡なる音樂をいふ。樂記「鄭衞之音、亂世之音也、比二於慢一矣、桑間濮上之音、——也、其政散、其民流、誣二上行一レ私而不一レ可一レ止也」‖亡國之聲。

【亡國之聲】ボウコクノセイ 前條に同じ。韓非、十過「此——也、師延與二紂一爲二靡靡之樂一也、及二武王伐一レ紂、師延走二濮水一而自投、聞二此聲一者、必于二濮水之上一」

【亡國之大夫不レ可二以圖一レ存】ボウコクノタイフハもってはかってそんすべからず 滅びたる國の大夫は、國家を存することを圖る資格なし、大夫

は政を執る官。史、淮陰侯傳「敗軍之將、不レ可二以言一レ勇。――」吳越春秋「亡國之臣不二敢語一レ政」

【亡兄】バウ　すでに死せし兄。晉書、周嵩傳「――天下人、爲二天下人一所レ殺、復何所レ怨」

【亡失】バウ　失せかける、缺けて無くなる、闕は缺。舊唐書、經籍志「經書實多レ所二――一」‖亡逸・亡缺。

【亡魂】バウ　○なき人のたましひ。漢書、陵統傳「以慰二忠將之一――」‖亡靈。○精神を失ふ。南史、章叡傳「楊大眼將二萬餘騎一來戰、矢貫二大眼右臂一、――一面走」

【亡命】バウ　にげかくれる、罪は國の逃走。――一出澤」‖亡匿・逃竄。

【亡矢】バウ　うしなふ。史、項羽紀「所二――一以十萬一數」

【亡人】バウ　○逃亡にんして居るもの。大學「見賢而不レ能レ舉、舉而不レ能レ先、命也。不レ善而不レ能レ去、過也」‖無以爲二亡命一。○死にたる人。‖死者。

【亡國】バウ　己の國を出奔したる家來。禮記「君無二弔二――一重耳一」

【亡酒】バウ　酒宴の席を逃れ避ける。史、齊悼惠王世家「諸呂有二人醉一レ――一」

【亡走】バウ　にげはしる。

【亡弟】バウ　すでに死せし弟。

【亡侯】バウ　にげかくれる。史、劉侯世家「更二姓名一――下邳一」‖亡竄。

【亡八】バウ　仁義禮智孝悌忠信の八を忘れる義、遊里　女郎買、又女郎屋の稱とす　‖忘八。

【亡八官】バウパウクワン　たいこもち。‖幇間バウカン

【亡父】バウ　死にたるちち。漢書、劉根傳「――近親」

【亡夫】バウ　死したるをつと。

【亡逋】バウ　にげうせる。蘇軾詩「作」詩火急追二――一」

【亡命】バウ　命は名なり、名籍を脫して逃亡す、かけおち。史、張耳傳「脊――遊二外黃一」

【亡滅】バウ　ほろぶ。‖滅亡。

【亡羊歧】バウヤウキ　岐路多くして逃げたる羊を失ふ、學問の道、多端にして得る所なきを歎ずる喩。列子、說符「楊子之隣人亡レ羊、既率二其黨一、又請二楊子之豎追一レ之、楊子曰、嘻亡二一羊一、何追者之衆、隣人曰、多二歧路一、既反、問レ獲レ羊乎、曰、亡之矣、曰、奚亡之、曰、歧路之中又有レ歧焉、吾不レ知二所之一、所二以反一也、都子曰、大道以多歧亡レ羊、學者以多方喪レ生」

【亡羊補牢】バウヤウホラウ　牢は羊を囲ひ養ふ所の圍、羊をうしなひて牢を補ふは、過を後に悔い改むる意。戰國策「亡レ羊而補レ牢、未レ爲レ遲也」

【亡命】バウ　にげしとりこ、捕虜の逃亡せし者。呉藏者歌「逋侯起二――一、威武蘇二覓夷一」

【亡靈】バウ　死せし人のたましひ。‖亡魂。

【亡是公】バウ　この公はなしとの義、假設の人名として用ふ。漢書、司馬相如傳「――者、無二是人一也」‖烏有先生。

【亡狀】バウ　無禮なり。漢書、項籍傳「秦中遇レ之多――」‖無狀。

【亡賴】バウライ　やくざもの、「――漢」史、高祖紀「常以レ臣――」‖無賴。

【亡慮】バウ　おほよそ、すべて、概算する。漢書、趙充國傳「――萬二千人」‖無慮。

【亡聊】バウレウ　ものさびしい、聊は安んじ樂む。‖無聊。

【亡者】バウ　死して冥途にある者。風俗通、十反「――有レ寒、實難二類之一」‖死者。

亢　カウ　㊀カウ　㊁カウ　康　陽

㊀のど、のんど、俗に吭に作る。くび（入類）㊁つよし、つよくす（強）○さかふ（逆）○たかぶる（驕）自負する、あがる、のぼりすぎる、易、乾卦「――龍有レ悔」○あみぼし、二十八宿の一、東方の宿。○ふせぐ（拒）おほふ（蔽）庇護する。左、昭元「吉不レ能レ――身、焉能レ――宗」○あたる（當）、匹敵する。揚雄、趙充國贊「――謀歷レ――」○あやまち、あやまつ（過愆）○きはまる、きはむ（極）左、宣三「可以――レ龍」○むね（棟）北史、宇文忻傳「誠有二四阿重一重一廊」○たかし（高）○卑屈する所なし。唐書、崔信明傳「寧レ――以門望自負」

【抗レ亢擲レ虛】カウカウテキキョ　亢は咽喉、虛は空虛、敵の急處を衝ち、空虛に衝き入る。史、孫子傳「――、形格勢禁、則自爲レ解耳」

【絕レ亢】カウ　のどぶえを絕ちて死する。史、陳餘傳「――一面死」

【亢倣】カウ　たかぶりおごる。王維詩「――逐二東西一」

【亢打】カウ　あたりふせぐ、打拔してふせぐ。漢書、嚴助傳「奚二能一一國雄一」

【亢旱】カウ　大ひでり。劉向說苑「土潤溽二――一」‖大旱。

【亢進】カウ　たかぶれるかほつき、傍若無人の狀をいふ。柳宗元、論二鄧道書一「獨幹能強不レ顧二流俗一、――一面爲レ卿」

【亢悔】カウ　高き位地にのぼりつめてくやむ。申鑒「陽極則亢、陰極則凝、亢則有レ悔、凝則有レ凶」亢龍有悔を見よ。

【亢燥】カウ　土地高くしてかわく。徐幹時「築レ室――依二山根一」‖高燥。

【亢進】カウ　たかまりすすむ。心悸――

【亢進】コウシン　自ら高くして人に屈せざる意。
【亢燥】コウソウ　高きはな。莊、人間世「豚之―者」
【亢陽】コウヨウ　ひでり。康熙字典「旱曰―」▫亢旱・騰陽。
【亢龍有レ悔】カウリョウ　亢龍はのぼりつめたる龍、轉じて人に喩ふ、韓愈を叙めて残慨せざれば敗亡の悔あるの意。易、乾卦「上九――」象傳「――、盈不レ可レ久也」
【亢倉】コウソウ　對等の禮を持して屈下せず。禮記「莫敢與レ君―レ」▫抗禮。

四畫

【亦】エキ　ヤク　隔

〇もまた、傍及の辭。論、公冶長「左丘明恥之、丘―恥之」〇又に似て輕し。史、信陵君傳「爲公子―足矣」〇おほいなり（大）奕に通ず。詩、周頌「―服厥明」〇わき（兩掖）

同訓異義　タ亦・又・復・還等の別は又（部首二畫）の條を見よ。

【亦歩亦趨】エキホヤクスウ　弟子の其の師の爲す所を學ぶをいふ。莊、田子方「顏淵問二於仲尼一曰、夫子歩亦歩、趨亦趨、夫子奔逸絶レ塵、而回瞠二若乎其後一」▫回は顏淵の名。

【亥】ガイ　隔

〇ゐ、十二支の第十二位。爾雅、釋天「太歳在―、曰二大淵獻一」方角にては西北と北との間、時刻にては午後十時。
【亥月】ガイ　陰曆十月の異名。
【亥豕之誤】ガイシノゴ　文字のうつしあやまり、亥と豕と字形似たる故に誤る。家語「或謂レ史曰、三豕渡レ河、子夏曰、己亥渡レ河、校レ之果然」▫帝王之誤・魯魚之誤・烏焉馬之誤。
【亥子】ガイシ　圖　陰曆十月の節日の稱、十月には、北斗の斗柄が、亥に向ひて建ずるが故に亥月といひ、此月の初の亥の日の亥の刻に、――餅を食へば萬病を除くといひ、又、牡雄間ビンを爲す習俗あり。▫玄猪。

【交】カウ　肴

〇まじはる、まじはり、つきあふ、彼と此と相合ふ。〇つきあひ、好を通じて往來する。論、公冶長「善與人―」〇まじふ、いりみだれる。孟、梁惠王「兵刃既―」〇ともに（共俱）たがひに（互）こもごも、孟、梁惠王「上下―征」利」かはるがはる。〇かふ、かはす、やりとりする。〇つるむ、婚合する。禮、月令「虎始―」〇よしみ（好）易、泰卦「上下―而其志同也」〇とも（友）〇えり（衣領）〇ころ（頃）月又は時候のかはり目「春夏之―」〇みづち。▫蛟。〇―は鳥の飛びかふ貌、一說、鳥の聲。〇鵁に同じ、―精は鳥の名、ごるさぎ。▫鵁鶄。

同訓異義　タ交・接・雜・錯・混・淆・參・間・厠・際・祥〇交は物の入りくみたるなり、交互・交易の類、轉じて朋友の交りにも用ふ、論語「愛平仲、善與レ人交、久而敬レ之」〇接は交に近し、されども入りくむ義なし、彼より來るを、出迎ふる意あり、應接・面接・接待の類、衛風「接二遠人一以禮」〇雜は純の反、色色の物の入りこみたるなり、錯雜・雜遝・雜駁の類。〇錯は物の入りちがひて交るなり、錯簡は書物の紙の入りちがひなり 錯誤・錯亂などと通用す。〇混は別別の物が、一つにうちまじりたるなり、混亂・混同の類。〇淆は混に近し、混淆・淆亂と連用す。〇參は人數の中へ、あつかり加はるなり、參政・參軍の類。〇間は多くある物の間へ、まじり入るなり。〇厠は間に近し、引きあげて、其の列へ進めまじふる義。史記「厠二之賓客之中一」〇際は交際と熟す、稍に近し。〇祥は雜なり、ごたまぜにする義。楚辭「同祥二玉石一兮、一槩而相量」

【交倩】コウセン　次條に同じ。因話錄「――調二之纈牀一」
【交椅】コウイ　椅子をいふ、脚が交又して疊むやうに造りしもの、牀几ショウキをいふ。水滸傳「讓第一把――教二小弟坐了一」胡牀・交牀・交倚・胡椅。
【交友】コウユウ　〇ともだち。魏志「特以二――之禮一」〇友に交はる。禮、儒行「同而進、不レ同而退、其――有二如レ此者一」
【交遊】コウユウ　まじはりあそぶ、つきあふ、交際する 又其の人。史記「朋友――、久不二相見一、卒然相覩、歡然如レ故」
【交陰】コウインコウヨウ　多くの木の枝が互にかげを交ふる。雜詩之詩「春鳥鳴二交陰一、夏木茂――」
【交易】コウエキ　物と物とをとりかへる。易、繫辭「日中爲レ市、致二天下之民一、聚二天下之貨一、――而退」▫互市。
【交加】コウカ　入りまじる。梁簡文帝賦「何悲緒之――」杜甫詩「種竹――翠」
【交界】コウカイ　さかひをまじへる、境界を接する、又さかひめ。▫隣城・隣境。
【交蓋】コウガイ　車のきぬがさを交ふる、車を駐めて相語る義。黃庭堅詩「――相逢水急流」▫傾蓋。

【交交】コウ 鳥の飛ぶ貌。詩、秦風「―― 黃鳥止于桑」

【交合】コウ 男女がまじはる、まじはり。‖交媾・交接。

【交感神經】コウカン 脊椎の兩側に添ひて下走する神經、腦に始まり、腹腔内の諸臟腑に分布して其のはたらきを調節す。

【交誼】コウ ともだちのよしみ。陸倕詩「臨レ別提二新語一、少悲交舊誼」‖交情・友誼

【交換】コウ 〇とりかへる。‖交易。〇とりかはす、贈答する。

【交款】コウ 互によろこびたのしむ。晉書「一面――、便若二平生一」

【交歡】コウ 交驩に同じ。

【交驩】コウ よろこびをまじふ、驩は歡に通ず。史、陳賈傳「君何不下――二大尉一深相結上‖交歡。

【交戟】コウ 〇ほこを十文字に交へ合はすの意、項羽紀「――之衞士、止欲レ入、内〇樽じてほこを交へて守衞する者。

【交結】コウ まじはる、まじはり、交際してよしみを結ぶ。後漢書、北海靖王興傳「性謙恭好レ士、千里――」

【交互】コウ たがひに、かはるがはる。‖互易 倉頡篇「陰陽――、陽爲レ陰、陰爲レ陽、陰陽二氣、還而爲レ象」

【交午】コウ たてよこに入りまじる、縱橫に交錯する「穀梁傳、注」

【交媾】コウ 交合に同じ。李白詩「――臍二綿醜一」

【交婚】コウ 互に婚姻をとりかはす。魏書「蓋容元眞以レ妹爲二獻昭成帝后一、蓋容又請二――一、昭成帝乃以二烈帝女一妻レ之」

【交叉】コウ 二つぶつちがひになる「――點」隋書、禮儀志「――即爲二馬槍一」

【交際】コウ まじはる、又、まじはり、際は接なり、禮儀幣帛を以て交接するなり「孟、萬章、萬章問曰、敢問――何心也、孟子曰、恭也」

【交錯】コウ 入りまじる、入りみだれる。‖錯雜。

【交耳】コウ 耳に附きて語る。論衡「胡越之人、對口――而言、尚不二相解一」

【交收】コウ うけとる、又、うけとり。交付の對

【交關】コウ 互に物のやりとりする。‖關通「――好貨皆厚」‖關市。

【交亟】コウ 互にいりまじる。郭璞、帝女賛「純固五丈、枝相――」‖集詩「一二交士相――」

【交脛】コウ しやうぎ。演繁露「今之――、胡本自レ唐來、始名二胡牀一」‖繩牀・交椅。

【交情】コウ 友だちのよしみ。淳書、鄭當時傳「一貴一賤、――遇見」‖交誼。

【交觴】コウ さかづきを取りかはす。曹植文「――接レ盞以致二殷勤一」

【交諫】コウ たがひに諫りあふ。書、堯典、疏「上下――務在レ服レ人」

【交讓木】コウ 〇ゆづりは、常緑喬木、葉長くして質厚し、面は緑にして背は白を帶ぶ、新葉出る後、舊葉四落す、故に名づく。‖書榕。〇一種の珍木。述異記「黃金山有二楢木一、一年東榮西枯、一年西榮東枯、張華謂二之――一」

【交酒】コウ さかづきをとりかはす。禮記「禮非レ祭、男女不レ――」‖交觴。

【交手】コウ 〇手をこまぬきて何事をも爲すことなし。漢書「諸侯――、事レ之八年」‖拱手。〇手をとりかはして相接近する。

【交綏】コウ あひひき、兩軍互に退く。左、文十二「晉楚乃皆出戰――」

【交易】コウ 紙幣をいふ、交易に用ふ、故にいふ。大學衍義補「金循宋四川交子法」註――、自二一貫二至二十貫一五等謂二之大鈔一、自二一百二至二七百一五等謂二之小鈔一」

【交接】コウ 〇まじはる、まじはり。‖交際。史、扁鵲傳「當二此三卑名流一――所ニ――一」‖交際・交遊。〇男女がまじはる、交合する、まじはり。列、天瑞、注「不レ假ニ――一而生レ子」

【交涉】コウ かけあひ、かかりあひ、わたりをつける、關係する。

【交捷】コウ まつげを合す、寢ぬる義。史、竇傳「太后嘗病三年、陛下不ニ――一レ解ニ衣」

【交戰國】コウセンコク 戰を交へつつある敵對國。‖中立國の對。

【交接】コウ 互にはりあひて爭ふ、對抗する。晉語「我覓ニ――一」

【交代】コウ 官吏が任期滿ちて他の人と代る。漢書、蓋寬饒傳「及二議臺一――、自請願復留」‖交替。

【交替】コウ 入りかはる、代り合ふ。‖更代、交代。

【交態】コウ まじはりのさま。淳書、鄭當時傳「一貧一富、遠知二――一」‖交情。

【交道】コウ まじはりの道。

【交單】コウ 金錢の受け取り證、單はかきつけ。明律「匠役――簿册二申報諸官者如計し贓、以二盜官自盜一論」

【交質】コウ 人質をとりかふ。左、隱三「周鄭――」

【交杖】コウ 戰を交ふ、杖は兵器。‖交兵。

【交通】コウ 互にゆきかよふ、互に往來する。蘇轍、乞レ貴二降韶一狀「――左右一以結二主知一」

【交點】コウ 彼と此と相交る點。‖交叉點。

【交番】コウ 〇かはるがはる番をする。‖輪番 〇かはるがはる番をする所。――所」巡査の派出所。

【交尾】コウ つるむ、動物の雌雄牝牡相まじはる、單に尾ともいふ、書、堯典、鳥獸孳尾」註「交接曰レ尾」孳は

乳化する。

【交鬨】コウ〇ひぢをまじへて何事をも爲し得ざる義。戰國策「四面一一而事レ楚」‖交手・拱手。〇人の適合するに喩ふ。莊子「吾終身與レ女、交二臂一而失レ之」

【交付】フ わたす、授ける。‖附與・交附。

【交附】フ 前條に同じ。

【交兵】ヘイ 兵をまじへる、戰をする。‖交戰・交伐。

【交朋】ホウ ともだち。陸游詩「一一一歎如二天遠一試向二今宵夢裏一尋」‖交友。

【交錯】サク 性こをまじふ、たたかふ。隋徐文「戰無二一一之勝一」‖交雜。

【交際】サイ ちかひをむすぶ。

【交錯】サク 〇みぞぐち。漢書、高帝紀見ニ一於上一。史記に交を鮫に作る。‖鮫館。〇二組交結の形を畫けるもの。周禮「一一爲レ旃」

【交惡】アク 雙方互になかがわるい、兩ながら相疾惡する。左、隱三「周鄭一一」

【交淺言深】シン 交の淺きに深く立ち入りて話すは愚なるをいふ。後漢書、崔駰傳「交淺而言深者愚也」

【交友】ユウ 友をあざむく義。史、樂毅傳「天下稱二鄙況一一」

【交絕不レ出二惡聲一】 絕交

したる後にも、その人の惡口をいはず。史、樂毅傳「臣聞、君子一一、忠臣去レ國、不レ絜二其名一」

五畫

【享】

㊀ カウ・キャウ　㊁ ハウ　㊂ キャウ・カウ

平　去　入

㊀とほる（通達）故障なく行はれる。易、乾、文言「一者嘉之會也」天地の四德の一にて萬物生長の德をいふ。「元一利貞」㊁にる（煮）易、鼎卦「大一以養聖賢」‖烹。㊂すすむ、たてまつる（獻）奏する。易、大有「公用一于天子」‖享。

【享】 古は、享の字三義を兼ぬ、後一畫を加へて、享獻の享を作り、四點を加へて、烹飪の烹を作る。今皆通用す。

【享通】 運がよくして出世する。

【享途】 平易にして通達せる道路。鄭谷詩「自許一一在、循綱復振時」

【享人】 周代の官名、鼎鑊へにて物を煮ることを掌る。周禮

【享熟】 十分にる。禮記「一一一狼藉、嘗而膳レ之非レ孝也、養也」

六畫

【享】

キャウ　カウ　去

〇すすむ（薦）たてまつる（獻）獻上する、ささぐ（捧）みつぐ（貢）〇まつる（祭）物を神に供へる。〇もてなす、饗應する、「宴一」左、成十二「一以訓二恭儉一、宴以示二慈惠一」〇うく（歆）受ける、應ずる、臨む、孟、萬章「使レ之主レ祭、而百神一レ之」〇やしなふ（養）〇さかもり（宴）

同訓異義 享・受・承等の別は受（又部六畫）の條を見よ。

【享有】キャウ うけたもつ。‖受領。

【享侑】キャウ もてなす、饗應する。宋史「既享侑、減中膳羞」

【享祭】キャウ 神を祭る儀禮。高啓詩「列一一祭」

【享御】キャウ 天子の位をうける。後漢書、孝安帝贊「嬪一一」

【享國】キョク 在位の年をいふ。晉、無逸「肆中宗之一一、七十有五年」肆は故也

【享祭】キャウ 物をそなへてまつる。聲子「安レ能樂レ宅一一」‖享祀。

【享祀】シ 前條に同じ。

【享獻】ケン 福をうける。封禪文「帝用一レ一」‖享福。

【享嗣】シ のちをうけつぐ。南史「平一一異而一レ一」

【享奠】テン 物をすすめて祭る。禮記「道路皆祓、有二司一一乃止」

【享受】ジュ 物をうける。後漢書、史英傳「及二其一一俗称」

【享廟】ビョウ 神を祭るために設けたるごてん、廟の條に設く。

【享年】ネン 年をうける。蔡邕、郭有道碑「稟レ命不レ融、一一四十有二」‖行年。

【享福】フク さいはひをうける、天よりうけたる幸福。後漢書「是故高宗以一一」高宗は殷の王、武丁。

京

㊀ ケイ・キャウ　㊁ キャウ・カウ　㊂ ゲン

元　陽　去

㊀みやこ（帝都）〇大いなり。左、莊二二一莫之與一」〇なか（丘）絕高（クタカシ）の丘。〇たかし（當）〇おほし（多）〇くわら。‖陳。〇數の名、兆（十億）の十倍。㊁ひとし（齊）〇一一（ヤカ）は憂のさりがたき貌。詩、小雅「憂心一一」㊂京に適ず「九一」

【京兆】チョウ 〇京師の守護職、京兆尹の略。〇圖 唐朝時代の京都所司代の別名。

【京師】シ 〇みやこの義、又は略。〇北京人の普調。

【京漢鐵路】テツロ 北京の正陽門より河南省を通過して湖北省の漢口大智門に至る鐵道の名。

【京畿】キ みやこの近邊の地。俗世基、樂府「鼓吹入二一一」‖縣内・京圻。

【京魚】ケイぐぢ。漢書、揚雄傳「騎二一一一一」‖鯨魚。

【京華】ケイみやこ、華は文華。謝靈運詩「昔余游二一一一一、未二曾隕二芳聲一」‖京師。

【京官】ケイクワン 宰相以下京師に在職せる官吏。老學菴筆記「唐自二相輔一以下皆謂之一一一、百レ官于京師一也」

【京觀】ケイクワン 武功を示す爲めに、敵の死尸を積みたる上に土を高く封ぜしもの。我が西京の耳塚の類。左、宣十二「君盍下築二武軍一而敬二書尸一以爲ニ一一一上」

【京師】ケイ 天子の在ますみやこ、京は大、師は衆、大衆の走る所の義。春秋、成十三「公如ニ一一一」‖京都・京華・京邑・京洛。

【京室】ケイ 王室なり。詩、大雅「思齊」「周姜ニ一一之婦」

【京城】ケイ ○天子のおます所‖皇居・宮城。○轉じてみやこ、京師の義とす。白居易詩「自言本是ニ一一女」○もと朝鮮の首府の名。

【京畤】ケイ 京は大、高くそばだつ。

【京童】ケイ 都のこども、きやうわらんべ。

【京兆】ケイ ○長安の地名、今の陝西省西安府。謂會「一一、兆者衆數、言二大衆所一在也」○漢の世一一・左馮翊・右扶風を漢の三輔といひ、帝室の輔翼とす。○一一尹をいふ。‖京尹。

【京兆尹】ケイテウ 京師の太守、尹は長官。漢書「爲二京兆一皆曰ニ一一一」‖京尹。

【京兆眉】ケイテウ 妻の爲めに眉を畫きし故事。漢書「張敞爲二京兆尹一、罷レ朝過レ閭、長安中傳二張京兆眉嫵一、有司以奏、上問レ之、敞曰、閨房之內、有二甚於畫眉一者上」

【京坊】ケイ みやこのまち。

【京奉鐵路】ケイホウ 北京より‖天津・山海關・錦縣を經て奉天に至る鐵道。

【京樣】ケイ みやこぶり、みやびやかなる容姿をいふ。那琴代醉編「都何以訓レ京、都者、鄙之對也、今諺云、一一、卽古之所レ謂都、相如傳、車從連都、是也」

【京洛】ケイラク 天子のみやこ、もと洛水のほとりの洛陽に都せしが故。蔡邕賦「余有レ行二于一一一」‖京師。

【京童】ケイ 京師をいふ、童は羣稚の下の者の陳琳、爲二袁紹一上書「兵個二公族一、子弟生長ニ一一一」

【京都】ケイト みやこ、天子の都、京師をいふ‖司馬晉の世に始まる、景王の諡の師を避けたるなり。魏志、文帝紀「任城王薨二於京都一」‖京師。

【亩】 七畫

廩（广部十三畫）の本字。

【京】

京（亠部六畫）に同じ。

【亭】 テイ 靑

○とどまる（停畱）○とまりや、はたごや（旅館）しゆくば（宿驛）後漢の代、十里毎に一一を設く。釋名「一、停也、道路所レ舍、人停集也」○ちん、うてな、あづまや（四阿）○たひらか（平）ひとし（齊均）○一一はたかし、聳立の貌。○いたる（至）○あたる（直）○ととのふ（調）○さだつ（化育）老子「一之毒之」○青一セイはとんぼ、色青くして大いなるもの。‖蜻蜓。

【亭育】テイ そだて養ふの意。唐書、代宗紀「中字及レ物一一爲レ心」‖亭毒。

【亭居】テイ 水がとまり溜るの意。漢書、四域傳「其水一一、冬夏不二增減一」‖亭濕。

【亭午】テイ 亭は至なり、日の午に至る時。孫綽、遊天台山賦「發和一一」註に「一一は日、一說、亭は值るなり。」‖正午。

【亭鯁】テイ 邊境に築きて敵のやうすをうかがふものみ。後漢書、光武紀「築二一一一一修二烽燧一」

【亭子】テイ うてな、ちん、子は助字。大業雜記「帝於二江山一造二一一十二所、其最上名二翠微亭一」

【亭次】テイ しゆくば。後漢書、趙孝傳「送至二一一一一卽座不レ及」‖驛次。

【亭樹】テイ うてな、ちん、樹は屋宇ある處。宋史、樂黃目傳「久在レ港、園下レ居、有二一一一竹樹之勝一、後海自得」‖亭臺。

【亭障】テイショウ 邊境の警衛に設けて通行人の出入を檢査する關所。漢書、李武紀「匈奴行壞二光祿諸一一一」‖亭鄣。

【亭主】テイ ○あるじ、一家の長、一家の主人。搜神記「秦二往戶外一呼二一一一」○圖ねつと。‖良人。

【亭燧】テイ とりでに設けたるあひづののろし。顏延之詩「臥伺金析寒、起候二一一煙」

【亭然】テイ ○そびえ立つ貌。‖亭亭。議然。○秀でぬきんでる貌。南史、王僧辯傳「一一獨立、不レ交二當世一」‖卓然。

【亭長】テイチヤウ 驛のをさ、盜賊を捕ふる職。後漢書、百官志「十里一亭、十亭一鄕、有二一一一、持二更徼一以禁レ賊、皆選以武勇一」‖亭父。

【亭場】テイヂヤウ 宋時代の鹽を貿買する處の名。宋史、食貨志「鬻レ鹽之地、曰二一一一」

【亭亭】テイ ○高く聳え立つ貌。太公兵法「高山磐石其上一一」○遠く浮べる貌。魏文帝詩「西北有二浮雲一一一如二車蓋一」○山名、泰山の支峯。史、封禪書「封二泰山一禪二一一一」

【亭毒】テイドク そだてやしなふ、化育の

義、亭は其の形を品するをいひ、毒は其の質を成すをいふ。老子「故道生之、徳畜之、長之育之、亭之毒之、養之覆之」宋書、礼志「道貴玄虚、重深一一」‖亭育。

【亭林文集】書名、六巻、清の顧炎武撰す、亭林は其の號、雑論・序・書・記・墓誌銘を載す。

【亮】リャウ　㊥　亮は俗字

〇まこと(信)孟、告子「君子不一、惡乎執」‖諒。〇たすく(佐・助)晉書、王導傳「勳格四海、翼二三世」〇あきらか(明)「明察」韓愈詩「輝煥朝日一」〇ほがらか(朗)曾晳がほがらか「鏗一」

【解字】高の省畧と儿とに从ふ、儿は人、高処に居る人は明かに見得る意、文字、俗に几に从ふは非。

【亮陰】リャウアン　天子の喪に居るをいふ。書、説命「王宅憂一一三祀」‖梁闇・諒闇・諒陰。

【亮陰】カウアン　あかるき(だて、又あかり障子。‖亮障。

【亮月】リャウグワツ　あきらかなる月かげの称　唐詩「峡峨一一、麗二於高陽一」‖朗月・明月・峡月。

【亮察】リャウサツ　あきらかに察し見る、人のおもひやりの敬語。王守仁、與二安宜慰一書「承二開及一、不レ敢不二以正」

封二宰一一」‖明察・亮照・明察。

【亮節】リャウセツ　清く明かなるみさを。陸雲詩「一一三恪」‖清操。

【亮然】リャウゼン　あきらかなる貌。晉書、載記「維レ酒長驅、肆二調一一」

【亮達】リャウタツ　明かにして事理に通達する。

【亮直】リャウチク　心あきらかにしてただし。晉書、傅休奕傳「性剛健一一」

【亮抜】リャウバツ　心あきらかにしてすぐれる。孫綽文「茂才一一」

八　畫

【亳】ハク　㊥　亳は俗

殷の湯王の都したる地、今の河南省歸徳府商邱縣の地、之を南一と爲す、後に西一に遷る、河南省河南府偃師縣の地。

【亳社】ハクシヤ　殷代の社、古、國を建つるや必ず先づ社を建つ、殷は亳に都す、故に名づく、轉じて周人、殷を称して一一といふ、亳一に薄に作る。

十一　畫

【亶】㊀タン・ダン　㊁チン　㊂セン　㊥先　早

㊀まこと(誠)まことに、信に、詩、小雅「是究是圖、一其然乎」

〇ただ、漢書、賈誼傳「非一一倒懸而已」‖但。〇あつし(厚)大いなり。〇かたぬぐ。荀、議兵「路一者」也‖祖。㊁たたかむ、屯一チュンは行き難く進まざる貌、俗に迍邅に作る。㊂もつぱら(專)ほしいまま。‖擅。

【解字】亩に从ひ旦の畧、俗に旦に从ふは非なり。

十九　畫

【亹】㊀ビ　㊁モン　元尾

㊀つとむ(強勉)〇進む貌。〇美一は美くしく文ある貌。孫綽、遊天台山賦「彤雲斐一以翼翼」㊁水の峡間ヲを流れて兩岸相對して門の如きもの、水門。詩、大雅「鳧鷖在一」

【亹亹】ビビ　〇つとめて倦まざる貌。詩、小雅「一一文王、令聞不レ已」〇水の流れ進む貌。左思、呉都賦「流湲一一」〇走る貌。陸機詩「一一孤獣驕」

人　部　（一）

【人】ジン　ニン　眞

〇ひと、にんげん、生民。〇たみ、國民。〇己以外の人、他人。崔子玉、座右銘「無道一之短、無說一之長」〇ひとびと、ひとりびとり。後漢書、魯恭傳「家給一足」〇ひとがら、性質。〇賢き人、賢才。韓愈、送温處士序「相爲天子得一於朝廷」〇卑き官名、又は職工などの名稱に用ふ。「封一」「眞一」「王一ジン」は天子をいふ。書、呂刑「一一有レ慶、兆民賴レ之」

【人爵】ジンジヤク　人のわざ。天然・自然に對していふ。高啓詩「天自出レ巧非二人爲一」‖人工。

【人工】ジンコウ　ひとかず「一一調査」

【人烟】ジンエン　人家の炊烟、轉じて人家の義。次條に同じ。晉植詩「子星舞一一」

【人煙】ジンエン　人家のけむり、轉じて人家の義とす。「一一稠密」李白詩「開來四萬八千歳、不レ與二桑麻一通ゆ一一」‖人烟。

【人界】ジンカイ　〇人の住む世界。〇仏人間に同じ。天上界の對。‖人間界。

【人海】ジンカイ　人の多くあつまれるにいふ。張華浩詩「一一誰知我亦閑」

【人綱】ジンカウ　人倫ののり、人道のおほもと。解嘲「上世之士、一一一紀、不レ生則已」

【人傑】ジンケツ　衆人にすぐれたる人。史、陳餘傳「於二此時一不レ成二封侯之業一者、非一一一也」‖人傑。

【人格】カク　〇ひとがら。‖人品。〇資質。識見にして義務責任を解し得る一人前の資格。綱紀・自治等はこの一一なし。

【人祇】ジン　人と神と。石岡湛「気運協従、一一悉附」

【人紀】キ　人たる者の履むべきすぢみち。書、伊訓「先王惟修二一一一」

【人鬼】キ　死せし人のたましひ。周礼「天神一一地示之礼」

【人境】キョウ　人のふむべき道。仏、経運転、生滅、幼稚・君仁・臣忠、十者謂二之一一一」

【人琴之嘆】ジンキンノタン　死せし人の用ひし琴の調子さへも合はずなりしことを悲きし故事にて、人の死をいたむ情の甚だしきにいふ。晉書、王徽之傳「王献之卒、徽之奔喪不レ哭、直上二霊牀一、坐取二献之琴一弾レ之、久而不レ調、嘆曰、嗚呼子敬人琴俱亡、因頓絶、月餘亦卒」‖人琴俱亡。

【人煙】エン　人の住む所。陶潜詩「緒レ論在二一一一、而無二車馬喧一」‖人界・人寰。

【人和】ジンワ　人心の和合。孟、公孫丑「地利不レ如二一一一」

【人皇】ジンコウ　〇太古第三代目の王族。〇三皇　神武天皇以後の人の代となりてよりの天皇。其の以前を神代といふの対。

【人寰】ジンカン　人の世、寰は界。蘇軾詩「赤子視二萬類一流葬関一一一」‖人境。

【人傑】ケツ　衆人にすぐれたる人物。人中の傑物。史、高祖紀「此三者（蕭何・張良・韓信）一一也」‖人豪。

【人倫】ジンリン　人のうはさ。後漢書、班超傳「内省不レ疚、何憚二一一一」

【人権】ケン　人たるの権利。

【人口】コウ　〇ひとかず。‖人員・人数・人頭。〇人のくち、世人のうはさ。

【人後】コウ　人のしりへ、人のあと。李白詩「風流数二君等一一一」‖人のあとになる。

【人戸】コ　たみのいへ。蘇洵、論二積欠一状「一一既未二納足一」‖民家・民戸。

【人工】ジンコウ　人のしわざ。天工の対。陶潜詩「貧居乏二一一一」

【人才】サイ　はたらきある人、人物。南齊書「子恒品二藻一一一」

【人造】ゾウ　人力にてつくる、又、其の物「一一石」

【人家】ジンカ　人畜に同じ。漢書、爰盎傳「陛下所二以爲一寵夫人一、適所二以禍一之、猶不レ見二一一一乎」

【人事鑑棺定】ジンジカンオサダム　人の行事の是非善悪は、死後、棺の蓋をして初めて定まる。晉書、劉毅傳「丈夫蓋レ棺事方定」

【人事不省】ジンジフセイ　大病、又は重傷の為めに、全く知覚を失ひたるをいふ。

【人日】ジンジツ　正月七日の稱、一日は雞を占ひ、以後六日まで獣畜を占ひ、七日は人を占ふ、故にいふ。荊楚歳時記「東方朔占書曰、歳正月一日占レ雞、二日占レ狗、三日占レ羊、四日占レ猪、五日占レ牛、六日占レ馬、七日占レ人、八日占レ穀、若晴明温和爲二蕃息安泰之候一、陰寒慘烈爲二疾病耗損一」

【人師難レ遇】ジンシニアヒガタシ　身を謹み行を修めて人道の師たるものは得がたきをいふ。通鑑、後漢紀、孝昭帝紀「班昭請二於郎婦一曰、経師易レ遇、……経師とは単に経書の講義を爲す師。

【人心】ジン　〇人の欲情より発する心。道心の対。書、大禹謨「一一惟危、道心惟微」〇人人の心。

【人心惟危】ジンシンハアヤシ　人の心は知りがたし。史、酷吏、伝傳「酈通論二蕩宕曰、常由君成安君、二人相與、天下至愚也、然而卒相誅者、患生於多欲一而——也」

【人心如レ面】ジンシンカオノゴトシ　人ごとに、其の心の異なること、顔面の同じからざるが如し。左、襄三一「人心之不レ同、如二其面一焉、吾豈敢謂二子面如二吾面一乎」

【人身】シン　からだ、肉體。「一一生理」‖人体。

【人身攻撃】ジンシンコウゲキ　人の私行などを挙げてそしり責める。

【人神共憤】ジンシントモニイキドホル　人も神も共にいきどほる。舊唐書、于頔傳「肆レ行暴虐、——、法令不レ容」

【人爵】ジンシャク　人の定めたる官位。天爵の対。孟、告子「公卿大夫、此一一也」

【人主】シュ　きみ、天子。揚雄、解嘲「上説二一一一、下談二公卿一」‖君主・人君。

【人種】シュ　〇人の種類、皮膚・骨格等によりて、黄色一一・白色一一・銅色一一・黒色一一・褐色一一の五つに分つ。〇人のたね、子孫をいふ。法苑珠林「欲レ令二一一不レ絶」

【人勝】ジンショウ　人日（正月七日）に用ふる婦人の首飾。荊楚歳時記「人日剪レ綵爲二花勝一以相遺、或鏤二金箔一爲二人一、或以二彩縷一結二之一一」

【人證】ショウ　證人の陳述による證拠。書証によるを書證といふの対。

【人色】ショク　人の生き生きしたるふだん色、生色。

【無二人色一】ジンショクナシ　おそれて顔色を失ふ。漢書、李陵傳「陵召二匈奴所レ得漢人一、——、法令不レ容」

【人瑞】ズイ　人間界のめでたきしるし、非凡のすぐれたる人、又、長寿の人をいふ。後文徴通考「弘治中、太倉州毛弼年百歳、面孫登及第、有司爲建二一一狀元坊一」唐書、鄭覃子仁表、覃以二開成文章一自高、曰、天瑞有二五色雲一一有二鄭仁表一」

【人生感二意氣一】ジンセイハイキニカンズ　人は意氣相投ずる所に感激してはけむ。魏徴詩

「――、功名誰復論」

【人生自レ古誰無レ死】ジンセイおのづからコレシナカラン　人は古より一人として死せざるものなし。文天祥、過二零丁洋一詩「――、留取丹心照二汗青一」

【人生観】ジンセイカン　自己と此の世との関係に就きての観念、楽天主義・厭世主義など。

【人生識字憂患始】ジンセイジキヲシレバウカンハジマル　人が学問して義理を知れば、益世上色色と苦労の種となれば、無学の方が却つて安楽なりとの意。蘇軾詩「――、姓名粗記可二以休一」

【人生七十古来稀】ジンセイシチジフコライマレナリ　人生は短くして、七十齢を重ぬる者は、昔より少し。杜甫、曲江詩「朝回日日典二春衣一、毎日江頭尽レ酔帰、酒債尋常行処有、――、穿レ花蛺蝶深深見、点レ水蜻蜓款款飛、云云」＝古稀。

【人生行楽耳】ジンセイコウラクノミ　人生ははかなきものなれば、唯行楽して一生を送るべし。漢書、楊惲傳「――、須二富貴一何時」

【人生在レ勤】ジンセイアリ　人間は勤務するに在るをいふ。書経には人を兵に作るの道行縫「蘇頌告曰、――、勤則不レ匱、戸樞不レ蠹、流水不レ腐、此其理也」

【人生如二朝露一】ジンセイハチヤウロノゴトシ　人の生命の短きを朝露の日出づれば則ち乾くに喩ふ。漢書、蘇武傳「――、何久自苦如レ此」

【人迹】ジンセキ　次條に同じ。

【人跡】ジンセキ　人のあしあとの意。漢書、嚴助傳「與二中國一異、限以二高山一、――所レ絶」＝人迹。

【人跡板橋霜】ジンセキバンケウノシモ　朝早く出で行くに、我より先にすでに行きし客ありと見えて板橋の霜に人跡の印するを見る。温庭筠、商山早行詩「晨起動二征鐸一、客行悲二故郷一、雞声茅店月、――」

【人道】ジンダウ　〇人のふむべき道。易、謙卦「――之謙、益而好レ謙」＝人倫。〇専ら人の往来する道路。車馬道の對。

【人中】ジンチウ　鼻の下のみぞ。相書「――長一寸、壽一百」

【人中騏驥】ジンチウキキ　騏驥は千里の馬。衆人にすぐれたる人に喩ふ。南史、徐勉傳「此所謂――、必致二千里一」

【人中獅子】ジンチウシシ　天才、衆人に秀でたるをいふ。獅子は百獣の王、故に喩ふ。郗氏要覧「治禅経後序云、天竺天乗沙門、仏陀斯那、天才特拔、遠離独歩、内外綜練、妙入二経本一神、世人成曰二獅子一」＝人中騏驥。

【人中之能】ジンチウノノウ　人品高遠にして測るべからざる人を褒す。晉書、宋纖傳「不二與レ世交一、居二于酒泉南山一、不レ應二州郡辟命一、太守馬寔歎曰、名可レ聞、而身不レ可レ見、徳可レ仰、而形不レ可レ視、吾今而後知二先生――一人中之能也」

【人定】ジンテイ　衆人のねしづまる時、午後十時。一説に、日入りて衆動息む時、即ち甲夜（午後八時）をいふと。海錯碎事「柳公綽毎日與二子弟一論レ経、或講二求政官治一、家之要一、至二一一鐘鳴一、始就レ寝」

【人彘】ジンテイ　豚の如き人といふ意。呂は牝豕、呂太后、漢の高祖の愛姫、戚夫人の手足を断ち、眼を去り、耳を薫し、痞薬を飲ましめて廁中に居らしむ、命じて――といふ（史、呂后紀）＝人豕。

【人頭税】ジントウゼイ　あたまかずにかけて取り立てる税。＝人口税。

【人馬】ジンバ　人と馬との魏武帝詩「行行日已遠、――同時飢」

【人馬絡繹】ジンバラクエキ　繁華にして、人馬の往来しげくつづく貌。絡名「往来不レ絶、曰二絡繹一」

【人望】ジンバウ　衆人の喜び望む所。後漢書、斉武王傳「請時令議立二劉氏一、以従二人望一」＝人心。

【人品】ジンピン　〇なりふり、風采。〇ひとがら、人格の洗練。蘇軾、弾二王源一文「源強二――庸陋一、習賞参レ革」

【人夫】ジンプ　人足をいふ。北史「趙郡王譚召二近州――一」

【人譜】ジンプ　書名、一巻。――新記二一巻、明の劉宗周撰す、古人の嘉言善行を集め、類を分ちて之を録す、和版あり、劉氏――といふ。

【人物】ジンブツ　〇ひと、人類。晉書劉毅傳「好臧二否――一」〇人の生れつき、性質。〇すぐれたる人、人才。〇人と物と。晉書、干寶傳「撰二集古今神祇怪異、――變化一、名曰二捜神記一」

【人文】ジンブン　〇人類社界の文明、又、人倫の序。易、賁卦「觀二乎――一、以化二成天下一」〇人物と文物と。

【人夫】ジンプ　人のてほん。魏志、劉靖傳「行為二――一、縦任二人師一者」

【人牧】ジンボク　人民を養ひ治むる者の義、牧は牛馬などをはなしがひするに喩ふ、人君をいふ。孟、梁恵王「今夫天下之――、未レ有二不レ嗜レ殺人者一」

【人民】ジンミン　たみ、あをひとぐさ。国家に対していふ。周礼、大司徒「知二其利害一以阜二――一」＝国民・衆生。

【人命】ジンメイ　人のいのち。後漢書、鍾離意傳「僅二――一、縦二刑罰一」古詩、嘉賓慈二再過一、――不レ可レ縦」

【人面獣心】ジンメンジウシン　無道にして人情なき者をいふ。史、匈奴傳「夷狄之人、被髪左衽、――」

【人欲】ジンヨク　人の嗜欲。禮、楽記「滅二天理一而窮二――一者也」

【人慾】ジンヨク　人の心に兆す種種の慾。前條に同じ。

【人籟】ジンライ　人の吹奏する鳴物の音、笛の類。天地自然の音響を天籟、地籟といふに対していふ。荘、斉物「地籟則衆竅是已――則比竹是已」比

竹は苗。

【人里】ジンリ　人の住む村里。法苑珠林「逃避二貧母一下墓二一一一」

【人理】ジンリ　人のふむべき道。漢書、敘傳「窮二一一一一後二萬方一」＝人道。

【人柳】ジンリュウ　人の形せるやなぎ。三輔故事「漢苑中有二細柳一狀如二人形一、號曰二一一一、一日三眠二起」

【人立】ジンリツ　人の立つ如くにあつて。左傳「衆一一而噪」

【人倫】ジンリン　○人のふむべき道、倫は序。孟子、滕文公「一一明二於上一、小民親二於下一」○人類。

【人力】ジンリキ　人の力。孟、梁惠王「一一不二可及一也」

【人力車】ジンリキシャ　圖我國にて創造せし車、支那人稱して東洋車といふ。

【人質】ジンチ　ひとのたぐひ。にんげん。（人間）

【人類学】ジンルイガク　生理學、史學などの上より人の身體精神を說明し、人種の區別又は民族の事蹟を研究する學問。

【人我之相】ジンガノソウ　圖我と人との分け隔てをし、人を輕んじ我を重んずる心。

【人氣】ニンキ　圖世人の愛ひ入れ、人の氣乘り。

【人魚】ニンギョ　○さんせうを、鮫魚（山海經）○海中に住むといふ想像の動物、上半身は女人、下半身は魚の形、之を食へば、人をして老いざらしむといふ＝儵長。

【人間】ジンカン　○人の世、世間に同じ。韓非、解老「不レ能レ免二一一法令之禍一」李白詩「別有二天地非一一一」○圖ひと、人類「一一の力」

【不レ知二人間有二羞恥事一】シラズジンカンニハシュウチノコトアルヲ　人間の世に恥づべき事のあるを知らず、破廉恥の人を嘲る辭。歐陽修、與高司諫書「君足下猶能以二面目一見二士大夫一、出二入朝廷一稱二諫官一、是足下不レ復知二人間有二羞恥事一耳」

【人間行路難】ニンカンコウロナン　人の世渡りのむづかしき義。薛據、魚山子詩「一一、路出二賦租一不レ如魚鮓子、駕レ浪浮二滄虛一」

【人間萬事塞翁馬】ニンカンバンジサイオウガウマ　人生は禍福常なきをいふ、元の僧臨暉の詩句。昔、塞上に近く住める翁の馬、にげて胡に入り、人皆之を弔す、數月にして、其の馬、胡の駿馬を率ひ歸る、人皆之を賀す、然るに其の子騎を好み、馬より墮ちて其の髀を折けり、人皆之を弔す、後、胡人寇に入りて戰を交ふるに當り、壯丁これに赴きて死する者十の九、然るに其の子跛たるを以て家に居り、父子相保ちて全きを得たりといふ故事（淮南、人間訓）

【人間纔五十年】ニンカンワヅカニゴジュウネン　人の一生は大約五十年なりとの意の法苑珠林「天壽人間如二五十歲一」

【人相】ニンソウ　○人のかほかたちの樣子容貌のよしあし。○又、其れにより て人の運命を占ふものを一一見ニンソウ「といふ。＝觀相カンソウ

【人參】ニンジン　○藥草の一、朝鮮の名產、其の根は人の形をなす。＝人蔘。○圖野菜の一。＝胡蘿蔔。

【人情】ニンジョウ　○人のなさけ、人の愛情。又、人の情欲。禮記「一一以爲レ田」○圖浮世の情實「一一本」

【不レ近二人情一】ヒトニチカヅカズ　世のつねの人情とたがふ。莊、逍遙遊「大有二徑庭一」

【人選】ニンセン　圖衆人の中より選び出す。

【人足】ニンソク　圖荷物を運び、走り使をなし、又は土工などのてつだひをする勞動者。＝人夫。

【人非人】ニンピニン　○佛非道のもの。法華經「阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅加、一一等」○圖人でなし、人にして人にあらず、人の無道を罵る語。

【人別】ニンベツ　圖○人毎に、一人一人に附けて掲ふる○戸籍に同じ。

【人馬殘賊】ジンバザンゾク　人は何とて其の情を隱すことを得んや、隱すことを得ず。論、爲政「子曰、視二其所一以、觀二其所レ由、察二其所レ安、一一一一」

【人倫不レ食二烏喙一】ヒトハウカイヲクハズ　人は僕僕に還るも、烏喙を食はず、是れ一呼空服を滿たすとも毒に中れば餓死と同じければなり。戰國策「人之餓所二以不一レ食二烏喙一者、以爲雖二偏充一レ腹、而與レ死同レ患也」

【繪レ人者不レ能レ繪二其情一】ヒトヲエガクモノハソノジョウヲエガクヲエズ　人の心情を畫にかきあらはすことは能はざるにいふ。韓林玉露「繪レ雲者、不レ能レ繪二其濕一、繪レ月者、不レ能レ繪二其明一、繪レ花者、不レ能レ繪二其馨一、繪レ泉者、不レ能レ繪二其聲一、一一、然則昔語文字、固不レ足二以盡一道也」

【誨レ人不レ倦】ヒトヲオシフルニウマズ　導く人を教へて倦怠せず。論、述而「子曰、默而識レ之、學而不レ厭、一一、何有二於我一哉」

【餵レ人詩】ヒトヲオクルノシ　人をおどろかす程の名詩の意。蔡絛「西清詩話」由翁雁峰一日、此處呼吸之氣、振動帝座、一根不レ揣二頭腦一一來、猛レ首問レ翁「天那」

【兼レ人】カネヒト　人に勝つ、又、一人にて二人を併す義の論、孟、梁惠王「子曰、來、吾一一故退」之、由レ是一一故退」之」

【知レ人】ヒトヲシル　人物の賢愚を知りわける。書、皐陶謨「一一則哲、能官レ人、安レ民則惠、黎民懷レ之」

【貴レ人賤レ己】ヒトヲタフトビオノレヲイヤシム　君子は人をたふとびて己を卑下す。禮、坊記「君子一一、先レ人而後レ己」

【罪レ人不レ孥】ヒトノツミヲヌノクニセズ　罪人を刑するには、其の一身に止めて、妻子に及ぼさず、孥は妻子。孟、梁惠王「國中

誅而不レ征、淫梁無レ禁、——」史、孝文紀「——、不レ誅レ無レ罪」

【人各有レ能有二不能一】ヒトオノオノノウアリノウアラズ人の才能には各得手、不得手あり〔左、定五〕

【人衆者勝レ天】ヒトノオホキハテンニカツ人衆くして勢力強きときは、其の凶暴一時は天理に勝ちて非を遂ぐることあるをいふ。史、伍子胥傳「——、天定亦能勝レ人」

【見レ人後レ過】ヒトノアヤマチニオクル他人の善惡を見て自ら戒む。唐書、魏徵傳「——、可レ明二得失一」

【不二以レ人廢レ言】ヒトヲモツテゲンヲステズ身分惡しとて、其の言の善きをば棄てず。論、衛靈公「君子不二以レ言擧レ人、——」

【可レ以レ人而不レ如レ鳥乎】ヒトニシテトリニシカザルベケンヤ人と生れながら鳥に及ばずして可ならんや。大學「詩云、緡蠻黃鳥、止二于丘隅一、子曰、於レ止知二其所一レ止、——」時は小雅縣蠻篇。

【玩レ人喪レ德】ヒトヲモテアソベバトクヲウシナフ小人を玩べば、遂に吾が德を失ふに至る。書、旅獒「——玩レ物喪レ己」

【人必自侮然後人侮レ之】ヒトカナラズミヅカラアナドルヲノチヒトアナドルヲ人は自ら侮りて身を修めず、故に他人に侮らるるに至る。孟、離婁「夫——、家必自毀、而後人毀レ之、國必自伐、而後人伐レ之、太甲曰、天作孽、猶可レ違、自作孽、不レ可レ活、此之謂也」

【人傑地靈】ヒトイデテチモマタセイナリ人物が秀でて土地が勝れて居る。王勃、滕王閣序「物華天寶、龍光射二牛斗之墟一、——、徐孺下二陳蕃之榻一」

【人死謂レ名】ヒトノシヌルニナヲイフ名の重んずべきをいふ。五代史、王彥章傳「豹死留レ皮、——」

【人莫レ知二其子之惡一】ヒトソノコノアシキヲシラズ人は愛情に溺れて、其の子の惡を知り得ず。大學「——、莫レ知二其苗之碩一」

【爲レ人】ヒトノタメ人がら、性質。史、司馬相如傳「藺相如之——、更二名相如一」II性格。

【人有レ不レ爲也而後可二以有一レ爲】ヒトニアルヤフルマヒアリテノチニナスアルアリ人は義によりて取捨する所ある者にして、始めて以て事を爲すべきをいふ〔孟、離婁〕

【逢レ人說二項斯一】コウシヲヒトニトクス唐の國子祭酒楊敬之が、項斯の才を愛して、人に逢ふ毎に之を稱せし故事、よりて誦りに人の善行を稱贊する義とす。全唐詩話「項斯、字子遷、始未レ爲二聞人一、因以レ卷謁二楊敬之一、楊苦愛レ之、贈レ詩云、幾度見レ詩詩盡好、及レ覽二標格一過二於詩一、平生不レ慊レ識二人善一、到レ處——、未レ覺詩逾二長安一、明年擢二上第一」

【可レ人】ヒトニカナフ人の意にかなふ、人の意に適する。唐書、温造傳「州刺史張建封聞二其名一、書幣招禮、遇欣然曰、——レ——也、往從レ之」

【施レ人慎勿レ念】ヒトニホドコスコトナカレヒトヲオモフコトナカレ人に施しては、恩にきせることなかれといふ義。崔子玉、座右銘「——、受レ施慎勿レ忘」

【適レ人】ヒトニユク適は往なり、女子の嫁するをいふ。儀禮、喪服、注「凡女行二於大夫以上一曰レ嫁、行二於庶人一曰レ——」

【因レ人成レ事】ヒトニヨツテコトヲナス獨立の氣力なく、人にたよりて事をなす。史、平原君傳「毛遂招二十九人一曰、公等碌碌、所レ謂——者也」

【無レ道二人短一無レ說二己長一】フタンヲイフナカレジチョウヲトクナカレ人の短所をいふべからず、己の長所をほこるべからず〔崔瑗、座右銘〕

【不レ因二人熱一】ヒトノネツニヨラズ獨立して人の力を借らざる義。世說、德行「樂伯嘗少孤、營獨止、不二與レ人同食一、比舍先炊、已呼二伯嚮一及二熟釜一炊、伯嚮曰、童子鴻、——者也、滅レ竈更燃レ之」

【人之患在三好爲二人師一】ヒトノウレヒハコノンデヒトノシトナルニアリ人の患とする所は、師となりて人を教ふることを好むにあり、孟子の語〔孟、離婁〕

【不レ患レ人之不二己知一】ヒトノオノレヲシラザルヲウレヘズ我が才德を他人に知られざるも、少しも心に憂へず。論、學而「——、患レ不レ知レ人也」

【乘二人之事一者戴二人之恩一】ヒトノコトニノルモノハヒトノオンヲイタダク人の恩惠を受くれば、亦其の

人の憂患を引きうけて力を盡すべきをいふ。史、淮陰侯傳「——、衣二人之衣一者、懷二人之憂一、食二人之食一者、死二人之事一」

【人之準繩】ヒトノジュンジョウ世の人のてほん。子華子「仲尼、——也」

【人之水鏡】ヒトノスイキョウ精神の清く明かなるに喩ふ。晉書、樂廣傳「此——、見レ之瑩然、若レ披二雲霧一而覩二青天一也」

【爲レ人謀而不レ忠乎】ヒトノタメニハカリテマコトナラザルカ人の爲めに事を謀りて眞心より出でざりしことはなきかと自ら心に省みる。論、學而「曾子曰、吾日三省吾身、——、與二朋友一交而不レ信乎、傳不レ習乎」

【人之將レ死其言也善】ヒトノシナントスルニソノコトバヤヨシ人窮すれば本心に立ちかへる、故に其の言ふことは善し。論、泰伯「曾子曰、鳥之將レ死、其鳴也哀、——」

【寄二人籬下一】ヒトノマガキニヨル他人の籬下の下に身を寄する、詩文など先人の眞似をするに喩ふ。張燕公集、自序「大文皆有二常體一、但當以二有體一爲レ常、大丈夫當下酬二詩書一、制二禮樂一上、何至下因循寄二人籬下一哉」飯羽文「僕之詩話、非下修二人籬壁一、拾二人涕唾一得來者上」

【人之領袖】ヒトノリョウシュウ世人の頭領。晉書、謝鯤傳「文帝深器二重之一、每二朝會一、輒一自送之一曰、謝鯤當レ爲二人之領袖一」

也」【人者萬物之靈】ブツノレイ 人は萬物中にて、最も靈妙なるをいふ。書、泰誓「惟天地萬物之父母、惟——」【人非二木石一】ニンヒボクセキズ 人は皆喜怒哀樂の情あり、木石の情なきが如くならず。白居易詩「——皆有」情、不レ如不レ遇二傾城色一」【人一能レ之己百レ之】ヒトヒトタビコレヲスルニヒヤクタビ 「己」は人に、百倍して勉強すべし。中庸「——、人十能レ之、己千レ之、果能二此道一矣、雖レ愚必明、雖レ柔必強」

【介】カイ 畫

○はさまる、間に居る「一居」左、裏三一「以二敝邑褊小一、一於大國一」○かぎる(限・盡)○たすく(助)詩、豳風「爲二此春酒一以一眉壽一」たすけ(副)○なかうど、ひきあはせ「紹一」孔叢子、雜訓「士無一不レ見」○大いなり。詩、小雅「一爾景福」○よろひ(兵甲)「一冑」又、よろひをかぶる。○よる、たよる(因)左、文六「一人之寵非勇也」○かたし(堅・確)易、豫卦「一于石」○みさを(節義)孟、盡心「柳下惠不レ以二三公一易其一」○ちいさし(小)「一丘」○へだつ(隔)○ひとり(特)○よし(善)○ほとり(側畔)「江一」○やどる(舍)○ひとりだち(孤立)○一は一夫。○一は明かなる貌。═耿歌。○かふ(蟲類の甲殼)又、甲殼ある蟲。韓愈、應科目時、與二人書一「非常鱗凡一之品彙匹儔一也」○あくた。═芥。○國語、周官の一。○かひ。═貝。

【介意】カイ 氣にかける。列、黃帝「雖二傷破一不レ用一一」═介懷。【介介】カイカイ 心明かにして世俗と相容れざる貌。後漢書、馬援傳「一一獨惡レ是耳」═耿耿・介介然・介然。【介殼】カイカク 貝がら。═甲殼。【介居】カイキョ ○中間にはさまり居る。左、襄九「一一二大國之間一」○孤立してたすけなし。史、張耳・陳餘傳「獨一一河北一」【介懷】カイクワイ 心にかける。南史「張氏爲二無錫令一遇レ劫、生妾皆盡、不二以一一一」═介意。【介圭】カイケイ 大いなる玉、圭は珪、天子の諸侯を封ずる時、賜はるしるしの玉。詩、大雅「錫二爾一一一以作二爾寶一」【介佐】カイサ すけ、輔佐する。═介輔。【介士】カイシ ○甲冑之士に同じ。漢書、張安世傳「安世舜、賜二印綬一送以二輕車一一一」○堅く心に守る所あるの士。═耿介之士。【介祉】カイチ 大いなる福。風俗通「邪疾已去、新二一一一也」═介福。【介貳】カイ つき添ひて助ける、介添ソヘ常袞文「凡所二一一一皆有二卓絕之稱一」【介冑】カイチウ 兵車につける武裝せし四頭立の馬「劉勰新論「干戈載興、一一將レ動而禽獸應レ之」【介之推】カイシスヰ 春秋の時の人、晉の文公に從ひて出亡し、各國を歷遊し、十九年を經て文公國に還りて君となる、祿賜及ばず、之推母と綿山に隱る、公之を求むれども得ず、山を焚く、之推遂に死す。【介者】カイシャ 甲冑を著けたる兵士。曲禮「一一不レ拜」═介冑之士。【介錯】カイサク 圖○介抱する。○切腹の時、傍に附き添ひて、首を切る、又、其の人。【介爾】カイジ 長壽を助くる、人の壽を祝するに用ふ。詩、豳風「爲二此春酒一以介二眉壽一」に本づく。【介紹】カイセウ なかだち、紹介する。證、聘儀「一一而傳レ命」【介石】カイセキ 自ら節義を守ること石よりも堅し。易、豫卦「六二、介二于石一」【介然】カイゼン ○しばらくの間、暫時。孟、盡心「山徑之蹊閒、一一用レ之而成レ路」○孤立の貌、固く守りて化せざる貌。老子「使二我一一有レ知、行二於大道一、唯施是畏」○物がはさまりて氣にかかる貌。韓愈、送二溫處士一序「何能無一一一於懷一耶」【介添】カイゾヘ 圖○助けて事をなす人。○嫁入りの時につき添ひて、世話する女。【介冑】カイチウ よろひ(甲)とかぶと(兜)と。曲禮「一一則有二不一可レ犯之色一」═甲冑。【介冑生二戮辱一】カイチウセイレウジョク 戮はしらみの子、蝨はしらみ、戰爭の久しきにわたる喩「漢書、嚴安傳」韓非子「甲冑生二蝨蟲一、鏃雀處二籬幃一」【介冑之士】カイチウ よろひかぶとを著けたる兵士。═介士。【介添】カイゾヘ 嫁入りの時につき添ひて、世話する女。【介胄】カイチウ よろひ(甲)とかぶと(兜)と。曲禮「一一則有二不一可レ犯之色一」═甲冑。【介胄生二戮辱一】カイチウセイレウジョク 戮はしらみの子、蝨はしらみ、戰爭の久しきにわたる喩「漢書、嚴安傳」韓非子「甲胄生二蝨蟲一、鏃雀處二籬幃一」【介胄之士】カイチウ よろひかぶとを著けたる兵士。═介士。【介添】カイゾヘ 嫁入りの時につき添ひて、世話する女。【介然】カイゼン ○しばらくの間、暫時。孟、盡心「山徑之蹊閒、一一用レ之而成レ路」○孤立の貌、固く守りて化せ【介弟】カイテイ 介は大、貴龍の大弟。左、襄二六「寡君之貴一一也」【介特】カイトク ひとりぼち、孤立して助なし。又、其の人。左傳「喪二老疾一敢二一一」【介胄】カイチウ 前條に同じ。梅堯臣詩「自持二一一一輕二良珍一」【介馬】カイバ よろひを著けたるうま、武裝せし軍馬。蘇洵送二石昌言一引「一一數萬騎馳過」【介抱】カイホウ 圖○たすけいだく、保持す

る〇看病する。
【介撰】カイセン 應接を掌る者、しやうばんやく、介は客のつき添、撰は主人の方の世話役、共に主客の間に立ちて取次を爲す者。馬璧文「承迎如二一一」按一に倩に作る。
【介夫】カイフ 甲冑をつつけたる兵士。禮記「陽門之二一死」＝介士。
【介婦】カイフ 〇そばめ、よめいりの時、新婦に付き添ひて世話する女、介添の女。〇衆婦の義。禮記「一一請二于冢婦一」
【介福】カイフク 大いなるさいはひ。易經「受二茲一一于其王毋一」
【介鱗】カイリン 心がひがみて俗人と氣が合はぬ。道山清話「性一一、不二與レ人往還一」
【介輔】カイホ つき添ひて助ける。＝介佐。
【介立】カイリツ 〇ひとりだち、孤立して助なし。張衡、思玄賦「子不察而一一」＝獨立。〇はさまり居る。＝介居。
【介鱗】カイリン 貝類と魚類と。淮南、地形「一一者、夏食而冬蟄」

【仇】キウ 尤

〇あひて、たぐひ、つれあひ（匹・配偶）迷に通ず。〇あだかたき（怨敵・讐敵）史、齊侯世家「張良爲韓報一一」〇一一は傲る貌。詩、小雅「執我一一」＝敖敖。謷謷。
【仇英】キウエイ 明人、字は實父、十洲と號す、工に人物鳥獸山水樓觀の類を畫く、秀雅鮮麗、皆名筆と稱す。
【仇怨】キウエン うらみ。＝怨恨コン・仇恨。
【仇家】キウカ 怨のある家、又、かたき。漢書、郭解傳「解夜見二一一一」＝仇人。
【仇校】キウカウ 二種以上の異本を引き合せて正す。事類全書「寫藏二異書一、皆手自一一」＝讎校・校正。
【仇偶】キウグウ つれあひ。王褒文「鳴鏑相應、一一相從」＝配偶・匹耦グウ
【仇隙】キウゲキ なかたがひ、すきまがある。蘇軾詩「西羌解二一一一」
【仇恨】キウコン あだ、うらみ。韓愈詩「一笑釋二一一一」＝仇怨。
【仇視】キウシ かたきとしてみる。＝敵視。
【仇讎】キウシウ かたき。＝仇敵。
【仇人】キウジン かたき、怨ある人。＝仇家。
【仇敵】キウテキ あだがたき。＝讎敵・仇讎。

【今】キン コン 㠯 俗に今と書くは非

〇いま（現時・現在・現世）古の對。韓愈、原道「古之爲二民者四、一之爲二民者六一」〇けふ「一日」〇このとき（此時）〇たちまち、すぐに、急にする辭。詩、召南「追其一兮」
【今上】キンジヤウ 上とは天子の稱、當代の天子。史、太史公自序「作二一一本紀一」＝今帝。
【今體】コンタイ 今樣ヤウぶり、詩文などにいふ。古體の對。舊唐書、李商隱傳「自」是始爲二一一章奏一」
【今歲】コンサイ 古韻の對。齊・梁以後の韻書にて四聲に分てる者の稱、特に今日通用の詩韻のみを指していふにあらず。
【今日】コンジツ この時、又今年に同じ。孟、滕文公「一一未レ能、請輕レ之以待二來年一」
【今雨】コンウ 新に交りし友をいふ、雨は友と音通。杜甫、詩小序「臥二病長安旅次一、多雨、鄭常車馬之客、舊雨來、一一不レ來」范成大詩「人情舊雨非二一一一、老境增年是減年」又、同人の詩に「冷暖舊雨一一、是非一波萬波」
【今回】コンクワイ このたび、こたび。＝今次・今度・今般。
【今曉】コンケウ けさ。楊萬里詩「一一還差暖」＝今朝。
【今月】コンゲツ 〇このつき。＝當月。〇今、現在てらす月。李白詩「一一曾經レ照二古人一」
【今古】コンコ いまとむかしと。＝今昔。
【今吾】コンゴ 前日の自分に對して現在の自分。王炎詩「年光除日又元日、心事一一非二故吾一」
【今歲】コンサイ ことし。元稹詩「堯年始二一一一」＝今年。
【今見】コンケン 開けふ。＝今天・今日。
【今週】コンシウ この週。來週の對。
【今人】コンジン 現世の人。次條を見よ。
【今人不レ見古時月】コンジンフレケンコジヅキ 今の世の人は古代の月は見ず。李白、把レ酒問レ月詩「青天有レ月來幾時、我今停レ杯一問レ之、人攀二明月一不レ可レ得、月行卻與レ人相隨、皎如二飛鏡臨二丹闕一、綠烟滅盡清輝發、但見宵從二海上一來、寧知曉向二雲閒一沒、白兎搗レ藥秋復春、嫦娥孤棲與レ誰鄰、——今月曾經レ照二古人一、古人今人若二流水一、共看二明月一皆如レ此、唯願當レ歌對レ酒時、月光長照二金樽裏一」
【今者】コンシヤ いま、今時、このごろ、頃者。＝今玆。
【今生】コンセイ このよ、いまの世の自分。易詩「一一此事不レ如レ君」
【今昔】コンジヤク 〇今と昔と、現在と過去と。韓愈詩「樂我盛明時、予馬徒一一」＝今古。〇昨夜の義。史、鮑策傳「一一王子、宿在二華陽一」
【今昔之感】コンジヤクノカン 今の身の上より過去の境遇をしのび、又は現代と昔時との變遷を感じて歎く。
【今昔物語】コンジヤクモノガタリ 圖書名、六十卷、源隆國撰す、天竺・震旦ヶ本朝の三部に分ちて、古今の雜話を集錄せしもの、每條「今は昔」と書出せるによりて名づく、一名、宇治大納言物語。
【今世】コンセイ いまのよ。＝現代・今代。
【今宵】コンセウ こよひ。徐陵詩「一一花燭

涙、非二是夜迎一レ人」‖今夕・今夜。

【今夕】コンセキ こよひ。詩、唐風「一一何夕、見二此良人一」‖今宵。

【今夕何夕】コンセキカセキ 今晩は何たる良きみなるぞといふ義。前條を見よ。

【今是昨非】コンゼサクヒ 今日は是にして昨日は非なり、今までのおやまちを、今始めて悟れる義。陶潜、歸去來辭「覺二今是而昨非一」淮南子の「通伯玉、行年五十、而知二四十九年之非一」の語に本づく。

【今代】コンダイ いまのよ。‖現代・今世。

【今旦】コンタン けさ。‖今朝・今曉。

【今帝】コンテイ 今上皇帝の略。史、匈奴傳「一一卽レ位」‖今上。

【今朝】コンテウ けさ。詩、小雅「弊一之維レ之、以永二一一一」‖今曉。

【今天】コンテン 圖 けふ。‖今日・本日・今晨。

【今日】コンジツ ○けふ。禮、文王世子「一一安否何如」○このごろ。‖目下・現在「一一の急務」

【今日之顏子】コンジツノガンシ 今の世の顏回、賢德ある人を稱す〔晉書、羊祜傳〕

【勿レ謂二今日不一レ學有二來日一】コンジツヲガクスルアリトイフヲナカレ 今日勉學せずとも明日があるなどといふ可からず。朱熹、勸學文「一一、勿レ謂二今年不一レ學有二來年一、日月逝矣、歲不二我延一、嗚呼老矣、是誰之愆」

【今年】コンネン ことし。次條を見よ。‖今歲・今玆。

【今年花落顏色改】コンネンハナオチテガンショクアラタマル 今年の花も落ち盡きて人の顏も衰へ改まる。劉廷芝、代下悲二白頭一翁上詩「一一、明年花開復誰在、已見松柏摧爲レ薪、更聞桑田變成レ海、古人無二復洛城東一、今人還對落花風」

【今年花似去年好】コンネンハナキョネンニニテヨシ 今年の花は去年の花の美くしきに同じ。學齋、秦良弁家花樹歌「一一、去年人到今年老、始知人老不レ如レ花、可レ惜落花君莫レ掃」

【今般】コンパン 圖 このたび。‖今回・這般・這次。

【今晚】コンバン こよひ。北齊、斛律傳「一一始顯」‖今夕・今宵。

【今夜】コンヤ こよひ。‖今宵・今晚。

【今來】コンライ ○これから。古往二一一一只今來一た。曹植詩「始出嚴霜結、一一白露晞」

【今鏡】イマカガミ 圖 書名、十卷、作者詳かならず、大鏡の後を受けて、後一條天皇より高倉天皇まで、百四十餘年間の事を記す、一名、續世繼。

【今樣】イマヤウ 現今のはやり、當世風「一一歌」‖今體。

【什】 シフ ジフ 縦

○とを。‖十。○十人、十家。○日常使用する器物。史、五帝紀、註「一物謂二常用者一其數非二一、故曰一」○詩經の雅と頌との十篇を一卷としたるにより、轉じて一一篇の義とす。白居易詩「珠玉傳二新一」

【什一】ジフイチ 井田の法にて十分の一の地租を取るをいふ。孟、滕文公「一一去二關市之征一」轉じて地租の義とす。

【什一之利】ジフイチノリ 商賈の利、十分の一の利を得るをいふ。史、越世家「候レ時轉レ物、逐二一一一」

【什器】ジフキ 日用の家具。史、五帝紀「雷作二一一於壽丘一」‖什物。

【什具】ジフグ 前條に同じ。

【什五】ジフゴ 十人、又は五人の兵卒組合。禮記「軍旅一一、同レ爨則倚レ廬」

【什襲】ジフシフ 大切に秘藏する。關子「宋之愚人得二燕石一、藏之以爲レ寶、本匱十重、緘巾一一」

【什伍】ジフゴ 兵卒十人のかしら。史記「亦各自置二千長・百長・一一一」

【什二】ジフニ 十分の二、即ち二割の利益、商賈の利をいふ。史、蘇秦傳「治二產業一、力工商、逐二一一一以爲レ務」

【什八九】ジフハッキュウ 十の中の八九まで。通俗編「漢書宣帝紀、畜產大耗一一、丙吉傳、至レ今一一矣」

【什寶】ジフハウ 圖 家寶として秘藏する什物。

【什百】ジフヒャク 次條を見よ。

【什佰】ジフヒャク ○十人又は百人の兵卒の組合。史、始皇紀「隱二匿行伍之間一而離二其一一之中一」‖什百。○十倍百倍の義。孟、滕文公「或相一一、或相千萬」

【什物】ジフモツ ○日用の器。其の數一にあらず、故にいふ。後漢書、馬援傳「賜一一、無レ不二充備一」○圖 秘藏のたからもの。‖什寶。

【什麼】イカマ 圖 いかに、なに、疑問の辭。小說に用ふる俗語。無官「韓愈問二牛僧孺一曰、且以二拍板一爲二一一一」‖甚麼。

【仁】 ジン ニン 縦

○いつくしみ、いつくしむ、同情する（愛）○至大至善の道德、人道の極致。論、顏淵「子曰、克レ己復レ禮爲二一一」○おはれみ、あはれむ（憐）○したしみ、したしむ（親）○しのぶ（忍）○ひと。論、雍也「雖レ仁者告之曰、井有二一一一焉、其從之也」‖人。○人情の厚き風俗、醇厚なる風俗。論、里仁「里一一爲レ美」○有德の人。論、學而「汎愛衆而親一一」○ひとのこころ。○さね、果實の中の核にて生氣あるもの「杏一一」○醫書に手足の痿痺するを不一といふ。

【仁愛】ジンアイ いつくしみ。漢書、管仲鮑傳「以レ此見二天心之一一一」‖仁惠。

【觸レ仁者謂二之賊一】コレヲジンニフルモノヲゾクトイフ 人として仁の德をそこなひやぶる者

は之を風の靡といふ。孟、梁惠王「——、賊義者謂二之殘一、殘賊之人謂二之一夫一」【輔レ仁】ホジンタスク 朋友相共に善を責めて仁德を增進せしむる義。以レ文會レ友を見よ。【仁義】ジンギ いつくしみの心と正しき行と。孟、梁惠王「王何必曰レ利亦有二仁義一而已矣」【仁義禮智】ジンギレイチ 人の心に生れながら具ふる四德。孟、公孫丑「惻隱之心、仁之端也、羞惡之心、義之端也、辭讓之心、禮之端也、是非之心、智之端也」孟、告子「——非二由レ外鑠レ我也、我固有レ之也」【仁義禮智信】ジンギレイチシン 人の備ふる五常の道。董仲舒文「夫仁誼禮智信、五常之道、王者所レ當二修飾一也、五者修飾、故受二天之祐一而享二鬼神之靈一、德施二於方外一、延及二羣生一也」【仁畜】ジンチク あはれみ愛ふ。漢書「匈奴獨可二以威服一、不レ可二以一一一也」【仁強】ジンキョウ いつくしみありてつよし。【仁君】ジンクン なさけ深き君。易大「聞二惠親一見二仁一一」【仁化】ジンカ 仁政に同じ。めぐみを施して敎化する。呉志「務修二仁一一」【仁兄】ジンケイ 人を尊びて稱す。後漢書、趙壹傳「壹報二皇甫規一書曰、實望二一一昭二其雅遇一」【仁惠】ジンケイ いつくしみ。後漢書、王暢傳「數二一一之政一」＝愛惠。【仁厚】ジンコウ なさけありて手あつし。唐書「一一下レ士」【仁愁】ジンシュウ いつくしみめぐむ。曹植文「侍臣省二奏文一、陛下體二一一一」＝仁愛。【仁柔】ジンジュウ なさけありてやはらか。宋史、高麗傳「高麗、器扶餘之別種、性一一惡レ殺、不二屠宰一」【仁獸】ジンジュウ 仁德あるけもの、麒麟をいふ。公羊傳「麟者一一也、有二王者一則至」【仁人】ジンジン 仁者に同じ。心の德の全く備はる人。論、衞靈公「志士一一無二求レ生以害レ仁」【仁人之言其利博】ジンジンシゲンソリハク 仁者のいふ所は、其の利益する所大いなり。左、昭三「——哉、晏子一言、而齊侯省レ刑」【仁心】ジンシン めぐみあはれむこころ。孟、離婁「今有二一一一仁聞一、而民不レ被二其澤一」【仁信智勇嚴】ジンシンチユウゲン 大將たるものの身に備ふべき五つの德。宋史、岳飛傳「張俊嘗問二用兵之術一、飛曰、——、闕一不可」孫子、始計「將者、知信仁勇嚴也」に本づく。【仁者】ジンシャ ○なさけ心のある人。○道德の全き人。論、子罕「一一不レ憂」論、憲問「一一必有レ勇」＝仁人。【仁者無レ敵】ジンシャムテキ 仁者は人を愛す故に天下に敵なし（孟、梁惠王）【仁者樂レ山】ジンシャラクヤマ 仁者は義に安んじて、動き遷らざること山に似たり、故に山を樂む。論、雍也「知者樂レ水、——、知者動、仁者靜」【仁弱】ジンジャク なさけふかくしてよわし。史記「孝惠爲レ人一一」【仁政】ジンセイ 仁德ありていのちながし。漢書、禮樂志「臨二一世之民一、膺二一一之域一」論、雍也「仁者壽」【仁術】ジンジュツ ○仁の道を行ふてだて。孟、梁惠王「無レ傷也、是乃一一也」○醫術。【仁恕】ジンジョ あはれみておもひやる。後漢書、張敏傳「寬明而一一」【仁政】ジンセイ 民をめぐむまつりごと。孟、滕文公「一一必自二經界一始」【仁靜】ジンセイ 仁者の心の靜なるをいふ。仁者樂レ山を見よ。【仁善】ジンゼン なさけぶかくしてよし。【仁漸義摩】ジンゼンギマ 民を治むるに仁惠を以てしたしうるほし、義烈を以てときみがく。次第に仁義の道に入らしむる義。漢書、董仲舒傳「漸レ民以レ仁、摩レ民以レ義」＝漸レ仁摩レ義。【仁惻】ジンソク めぐみあはれむ。蔡琰詩「阿母常一一」【仁道】ジンドウ めぐみいつくしむ道。易林「一一隔塞」【仁澤】ジンタク めぐみのうるほひ。晉書「甘露者一一也」【仁德】ジントク なさけ深き玉善の德。宋史、樂志「禮樂交修、一一該洽」【當レ仁不讓二於師一】トウジンフジョウオシ 仁道を行ふ上には、師と雖も遜るに及ばず、當とは仁を爲すの時に臨む義。論、衞靈公「子曰、——」【仁人之安宅也】ジンジンノアンタクナリ 心に仁德を守るは、人の無上の安宅なるをいふ。孟、萬章「孟子曰、——、義人之正路也」【仁風】ジンプウ ○仁德の敎化。唐太宗、述聖賦「流二惠澤于瀛表一、鼓二一一于區外一」○顏の異名。晉書、文苑傳「袁弘出爲二東陽郡一、乃祖二道於冶亭一、時賢皆集、安欲レ以二卒迫一試之、臨レ別執二其手一、顧就二左右一、取二一隅一面授之、曰、聊以贈レ行、弘應レ聲答曰、輒當下奉二損一一慰中彼裝底上、時人歎二其率而能要一焉」【仁聞】ジンブン 人をいつくしむといふきこえ（孟、離婁）仁心參看。【仁勇】ジンユウ いつくしみふかくして勇氣あり。漢書、辛慶忌傳「賢行正直、一一得二衆心一」【仁里】ジンリ 風俗の美なる鄕。張衡、思玄賦「眴二一一一、其焉宅兮、眴二義途一、其焉迫兮」論、里仁「子曰、里仁爲レ美」に本づく。【仁王】ニンワウ 佛法守護の二神の稱。左轉を密迹金剛、右顧を那羅延金剛といふ。寺門に此二神を安んじたるを一一門といふ。

【从】従(イ部八畳)の本字。

【仍】ジョウ　ニョウ　蒸

○よる(因)もとのままに従ふ。論、先進「一一舊貫如之何」○なほ、かさぬ、かさなる(重)○しきりに(頻)漢書、谷永傳「機危一臻」○すなはち。＝乃。○一一は志を得ざる貌。淮南、精神「一一然知ㇾ益領之足ㇾ羞也」又、衆き貌。○遠きちすぢの子孫。

同訓異語　ジョウ仍・頻・連・荐・累・切○仍は以前に變らず、つづきての意にて、連の字に近けれども、間の切れざる意はなし。詩經「仍執ニ醜虜一」○頻はたびたびの意、晉書に「頻煩進之」の如し。○連は引きつづきて間の切れざる意。史記「連與ニ漢戰一」○荐は草の縁かれる義より轉用して、助辭とす、洛に同じ、重なり、つづきてと譯す。左傳「不虞荐至」○累はかさねがさねつづく意、累年・累代と熟す。○切はきにしみこむ程、切々にする義。

【仍世】ジョウセイ　代代の義。晉書「一一多敗」＝累代・歴代・累世。

【仍孫】ジョウソン　昆孫の子【爾雅、釋親】

【仄】ショク　ソク　職

○そばだつ(峙)かたぶく(傾)○ほのか、かすか(幽)○かたはら、そば(旁)側に通ず。○いやし(陋)○うらがへる「反ー」魏志、陳思王植傳「瞻望反ー」○四聲の中にて平聲を除き、上聲と去聲と入聲とに屬する字。

同訓異語　ソク仄は山の圧巌ガ人厂下に處れば傾側の象あり、通じて側に作る。

【仄聞】ソクブン　平聲以外即ち上・去・入三聲に屬する韻字。平韻の對。

【仄行】ソクコウ　身をそばだてて歩く、わきによけて行く。＝側行。

【仄起】ソクキ　絶句の詩の起句の第二字、仄字なるをいふ。平起の對。

【仄日】ソクジツ　ゆふひ、かたぶく日。梁簡文帝詩「一一暫留ㇾ光」＝夕日・斜日・斜陽。

【仄聳】ソクショウ　仄峭に同じ。沈約文「上去入爲ニ一一一」

【仄注冠】ソクチュウカン　形がそばだちて先の下に垂れたる冠。漢書、五行志「昌邑王賀、遺ㇾ冶ニ一一一」

【仄入】ソクニュウ　詩の絶句、律詩八句すべて第一字を仄字にするをいふ。詩人玉屑「八句一一格」

【仄聞】ソクブン　うはさにきく、ほのかに聞く。列子「吾一一之試以告ㇾ汝」＝側聞。

【仄陋】ソクロウ　微賤シヤなる身分。漢書、循史傳「孝宣繇ニ一一一而登ニ至尊一」＝側陋。

【仆】フ・ブ　ボク　屋　有　遇

○たふる、ふす(僵・偃)身が倒れる。○たふす、たふれしむ。○斃れ死す。唐書、薛仁貴傳「所ㇾ射皆應ㇾ弦而ー」

【仆僵】フキョウ　たふれふす、たふる。元結問時「族姻紛ー一」＝僵仆。

【仆僵】フキョウ　たふる。潘尼、四道賦「輪輿顛覆、人馬ー一」＝僵仆。

【仆臥】フガ　たふれてねる。

【仆倒】フトウ　次條に同じ

【仆頓】フトン　たふれふす。＝頓仆。

【仆頓】フトン　たふれる、頓はつまづきたふれる。王充論衡「偕有ニ一一之論一」＝仆頓・顛倒

【仆伏】フフク　たふれふす。

【仆斃】フヘイ　たふれて死ぬ。＝斃死。

【仏】ブツ　佛(人部五畳)の古字。

【仂】ロク　職

○あまり、數の餘。○十分の一。○三分の一。○つとむ(勤)

【以】イ　三畳　紙

もと目に作る

○もて、もちひて(用)孟、梁惠王「一羊易之」○なす(爲)論、爲政「視ㇾ其所ー一」○まこと(實)○やむ。孟、梁惠王「無ー則王乎」＝已。○ゆゑ(故、因)詩、衛風「何其久也、必有ー一也」○おもふ(思)おもんみる、おもへらく(惟・以爲)○して、にして、接續の辭。史、仲尼弟子傳「城高ー厚、池廣ー深」○上句を承くる辭。書、泰誓「作ㇾ奇技淫巧ー一悅ニ婦人一」○と、ともに。韓愈、剝啄行「凡今之人急ㇾ名ー一官」＝與。○あたふ(與)○とも、つれ。○とる(執)○ひきゐる(率)左、僖二六「凡師能左右之曰ー一」○にる。＝似。

同訓異語　イ以・用○以は閑語のでに當る、事之以ㇾ禮、葬之以ㇾ禮は、事ふるにも禮でつかへる、葬るにも禮で葬るなり。○用は以よりも意つよし。論語「惡是用希」

【以降】イコウ　このかた。＝以來。

【以外】イガイ　これよりほか。以内の對。

【以還】イカン　このかた。＝以降・以來。

【以後】イゴ　これよりのち。以前の對。＝爾後。

【以心傳心】イシンデンシン　心から心に傳へる、深奥なる理義は、言語にてあらは

し難く、心にて悟るべしとの義。傳燈錄「佛滅後聽二法於邇薬一――」

【以上】イジャウ これよりかみ。以下の對。

【以西】イセイ これよりにし。

【以前】イゼン これよりまへ。以後の對。

【以東】イトウ これよりひがし。

【以內】イナイ これよりうち。以外の對。

【以南】イナン これよりみなみ。

【以降】イカウ 天子に上奏する。禮、曾子問「有司――曰、古之禮、慈母無レ服」

【以北】イホク これよりきた。

【以來】イライ それから、このかた、史、秦紀「自レ今――」＝爾來・以降。

【以往】イワウ これよりまへ、これよりさき。

【以爲】おもふには、おもふやうは。以の字一字にても同じ。韓愈、論二佛骨一表「伏――、佛者夷狄之一法耳」

【仡】

㊀キツ・コツ 物 ㊁ゴツ・ゴチ 月

㊀いさましく、たけし、さかんなり、勇壯なる貌。〇――は高大なる貌。㊁舟の動く貌。

【仡仡】キツキツ 〇勇壯なる貌。書、秦誓「――勇夫、射御不レ違」〇高大なる貌。詩、大雅「崧嶷――」〇ゴツゴツ 舟の動く貌、又、安からざる貌。柳宗元詩「巨舟軒昂――還」

【仡然】ケツゼン たけく勇ましき貌。公羊、宣六「――從二乎趙盾一而入」

【仔】シ 支

〇たふ(任)〇かつ(克)〇俗に子に通ず。

【仔細】シサイ くはし、いちぶしじゆう。子細の俗用。

【仔蟲】シチウ 昆蟲の孵化して未だ成蟲とならざる者の稱。

【仕】シ 紙

〇つかふ、つかへまつる、官職に就く、貴人に奉侍する。〇つかへ(仕宦)みやづかへ。〇まなぶ(學)〇あきらか、あきらむ(察)〇事又士に同じ。〇國つかまつる、爲す、又、致すの敬語。

【仕隱】シイン 仕宦して役所の中に隱れる。紀談「唐輔爲二江西從事一、不レ親二公牒一、人稱二――一」＝吏隱。

【仕入】シイレ 國商品などを買ひ入れる「――帳」

【致レ仕】チシ 官を辭して退く、辭職する。公羊、宣元「退而――レ――」＝致レ事・挂冠。

【仕家】シカ 官に仕へて吏と爲ることを得る家がら。唐書、韋丹傳「立二學宮一取二――子十五人一」

【仕學並長】シガクナラビニ 官職上の事務と學問と、竝に長じ進む。論、子張「子夏曰、仕而優則學、學而優則仕」

【仕儀】シギ 國なりゆき、事のありさま。「――に因りては」

【仕組】シグミ 國工夫してくみ立てる、小說・脚本などのすぢがき。＝脚色・くみたて。

【仕宦】シクワン 官職につく。白居易詩「――當レ作二執金吾一」俗に宦を官に作るは非なり。

【仕進】シシン 官につかへてすすむ。後漢書、崔駰傳「常以二典籍一爲レ樂、未レ遑二――之事一」

【仕丁】シチヤウ 國古、諸國より徵集して禁中の雜役に使ひし人夫。

【仕途】シト 官につかふる道。陳遘詩「――決奏息二交遊一」＝官途・仕路。

【仕非レ爲レ貧】シヒハヒンノタメニアラズ 仕宦の本旨は道を天下に行ふにありて貧しき爲めにあらず。孟、萬章「孟子曰、――也、而有二時乎爲一レ貧、娶二妻非一レ爲レ養也、而有二時乎爲一レ之」

【仕拂命令】シハライメイレイ 〇債權者に仕拂する義務ある國務大臣又は他の當該官吏が、國庫、又金庫に向ひて發する仕拂方の命令。〇債權者に仕拂ふべく債務者に對して裁判所より發する命令。

【仕路】シロ 仕途に同じ。金史「從二――一」

【仞】ジン 震 軔に通ず

〇ひろ、周尺の八尺、一說に七尺、又四尺とす、又、軔に作る。〇深さをはかる(度)〇たかし(高)ふかし(深)〇みつ、軔に通ず。司馬相如、子虛賦「充二――其中一」

【仞三】ジンサン 刃に從ふ、俗に仞に作るは非なり。

【仙】セン 先 俔に同じ

〇輕く擧がる貌。杜甫詩「行邁更覺二――一」〇山に入りて、不老不死の術を修むる法。――術」又、其の術を得たる人、やまびと、せんにん。〇ひじり(聖)凡俗を超越せし人。「草――」杜甫詩「自稱臣是酒中――」〇うつる(遷)〇胎――は鶴の異名。

【仙遊】センユウ 人の死を敬ひていふ、登仙して去るの義。＝仙逝。

【仙掖】センエキ 〇宮中のにはっ沈佺期詩「御柳垂二――一」掖は宮城の正門の左右の掖門。＝宸掖・宮掖。〇翰林院の異稱。東軒筆錄「翰林謂二之――一」

【仙翁花】センオウグワ 國草花の一種、石竹科に屬し、高さ一二尺に達し、秋日、石竹に似たる花開く、山城嵯峨の仙翁寺より出づ、故に名づく。＝鶏冠。

【仙機】センキ 女の仙人。盧照鄰詩「遙聞

鏡影惇ニ――一」‖仙女。

【仙家】せんにん、又、其の家。十洲記「元洲有二五芝一服レ此得二長生不死一、上多ニ――一」

【仙家九轉丹】仙人の練りたる藥。呂温、趙二秦眞觀李寬中秀才書院一詩「願君此地攻二文字一、如レ練二――一」

【仙界】仙人の住する所、俗氣を離れたる閑靜の地をいふ。劉滄詩「蓬萊ニ――海門通」‖仙鄉・仙靈・仙境。

【仙客】○鶴の異名〔談苑〕‖仙禽。○仙人。唐玄宗詩「――願二入聞一」‖羽客。○杜鵑の異名〔柳軒雜談〕

【仙樂】仙人の奏する音樂。白居易詩「――風飄處處聞」

【仙宮】仙人の住める家。‖仙府・僊宮。

【仙禽】鶴の異名。鮑照、舞鶴賦「偉二胎化之一一」‖胎仙。

【仙鄉】仙人の住む地。又、俗をはなれたる勝地。李中詩「羽人曾許駐ニ――一」‖仙境・仙靈。

【仙境】仙人の居る所。周必大詩「廣寒第一推ニ――一」‖僊境・神仙之境。

【仙居】○仙人のすまゐ。俗氣を脫せし幽淸の室。李白詩「幽蘭淸寂香ニ――一」○山名、卽ち靈隱山。

【仙國】仙人のすむ國。又、俗を離れたる住居「遊ニ――一」‖仙境・仙靈。

【仙果】桃の異名。桃は西王母の故事、又、武陵桃源・天台山などに植ゑられて仙人と緣深きが故。‖仙桃。

【仙花紙】圖伊豫宇和島に產する一種の厚くして強きかみの名。‖仙過紙。

【仙貲】仙鄉に同じ。陳旅詩「龍虎之山仙所レ貲、我昔夢寐游二其閒一」

【仙桂】月桂樹をいふ、進士の試驗に及第せしにいふ。黃滔、出レ京別同年一詩「卻說聯レ臂昇天路、一枝ニ――一已攀援」

【仙源】○神仙の居る所、俗人の到ること能はざる靈境。雲笈七籤「福地第四曰二東ニ――一、福地第五曰二四ニ――一」○桑の異稱〔眞誥〕

【仙古】蠶蛸の異名。

【仙公】仙人に同じ。杜甫詩「少容疑二莊史一、多術怪ニ――一」‖仙翁。

【仙骨】仙人の骨相、風采の非凡なる形容。杜甫詩「自是君身有ニ――一」

【仙査】仙人の乘るいかだ、又、亮の時、天を一周せしいかだ、査は槎に同じ。拾遺記「堯時巨査浮二西海上一、十二年一周天、名二貫月査一」

【仙才】才思の凡俗を超絕せるをいふ。詩話總龜「宋景文評二唐人詩一云、太白ニ――一、長吉鬼才」

【仙棗】紫苑の異名。‖紫苑。

【仙草】すぐれて靈妙なる草。十洲記「瀛洲生二神芝一一、長洲有ニ――一靈藥一」‖神草。

【仙山】仙人の居る山。白居易詩「忽聞海上有ニ――一、山在二虛無縹渺閒一」

【仙子】○せんにん。李商隱詩「――玉京路」‖仙人。○圖女子の容貌の秀美なる者。白居易、長恨歌「其中綽約多ニ――一」

【仙姿】容貌秀逸にして仙人の如きをいふ。宋黃詩「――遍覺出二風塵一」

【仙姿玉質】仙人のすがた、玉の體質、氣品のすぐれたる美人の形容。古今詩話「――、肌香體輕」

【仙心】仙人のこころ、高尙にして塵俗を超越せし心。文心雕龍、正始明道、詩雜ニ――一」

【仙鷺】隱者の著る鶴のけごろも。鄒谷詩「蓑露――挫二吟身一」

【仙佛】仙人の行ふ神靈の術。朱熹詩「不レ學飛――」

【仙遊】仙遊に同じ。

【仙神】仙人の名籍。雲笈七籤「名上ニ――一」

【仙仙】舞をまふ貌、仙は僊に同じ。詩小雅「屢舞僊僊」

【仙鼠】蝙蝠の異名「搜子方言」

【仙陀】佛寺の稱。翻林伐山「佛寺曰二僊陀一、又曰二伽藍一、又曰二香阜一、又曰二祭園一」‖金山。

【仙遊平】圖陸前國仙臺より產する特地の名。

【仙桃】もも。西陽雜俎「――出二柳州蘇耽仙壇一」‖仙果。

【仙遊】圖中仙道の略、近江・美濃信濃・上野等の諸國を經由する街道。

【仙丹】仙人が煉りて作りし不老不死の藥。眞誥「遂得ニ――一升レ天」‖仙藥・神藥・靈丹。

【仙壇】仙人の居所。元結詩「九疑第二峯、其上有ニ――一」

【仙人杖】枸杞の異名〔抱朴子〕

【仙杖】天子の儀杖をいふ。宰參詩「玉階ニ――擁二千官一」

【仙槎】長命を保つといふ珍木。宋史「壽比ニ――一」

【仙女】女の仙人。‖仙娥。

【仙洞】○仙人の居所。白居易、春題二華陽觀一詩「帝子吹レ簫遂二鳳凰一、空閨ニ――一號二華陽一、落花何處堪二惆悵一、頭白宮人掃二影堂一」○圖仙人の居所に比して、上皇の御所、院の御所。轉じて上皇を尊ぶ。

【仙童】仙人の使役する童子。杜甫詩「有レ時騎二羸戌一、虛室使ニ――一」

【仙人】仙は遷、遷りて山に入り、老いて死せざる人。南史、隱逸傳「荊楚之ニ――也」‖仙公・仙客。

【仙人衣】えな。‖胞衣。

【仙人掌】センニンショウ ○闕王樹カツラの異名。花鏡「——非レ草非レ木、非二果蘇一無レ枝無レ葉、又非無レ花、土中突二出一片一、與二手掌一無レ異、其膚色青綠、光潤可レ觀」無花とあれども夏時紅白色の花開く。○仙人が手掌を以て盤を擎げ甘露を承くるやうに作りしもの（漢書、武帝紀）＝仙掌。○茶の異名。

【仙人酒】センニンシュ ちちの異名。＝乳汁。

【仙人柏】センニンハク 檜カヤの異名。

【仙班】センパン 仙人のなかま。清貧の位に喩ふ。黃庭堅詩「金玉堂中寂寞人、一ー時得共二朝眞一」

【仙筆】センピツ 詩文の特にすぐれたるにいふ。貫休詩「常思李太白、一ー驅二造化一」

【仙蹕】センピツ 神仙の通行する時のさきばらひ、轉じて天子の御通行をいふ。

【仙府】センプ 仙人の居所。高適詩「仙宮一ー有二眞仙一」

【仙風道骨】センプウドウコツ 仙人道士の骨相、非凡の風采にいふ。李白、大鵬賦序「有二一ー與レ神遊三八極之表一」

【仙護】センプク すぐれてかんばしきかをり。

【仙藥】センヤク 飲めば仙人となり得らるといふ靈藥（史、始皇紀）

【仙輿】センヨ ○仙人の乘る車。○闕上皇の御乘物。

【仙籙】センロク 神仙をいふ。鮑照、昇天行「從レ師入二道嶽一、結レ友事二一ー一」宋蘇軾詩「武夷山上有二一ー一、山下寒流曲曲清」

【仟】

セン 千に通ず

○ち（千）百の十倍。○千人の長、をさ、かしら。○田間の道。＝阡。○一ーは草しげる貌。＝芊芊。

【仟仟】セン 草の盛んなる貌。謝朓詩「遠樹曖阡阡」李善の注に一ーに作る。＝芊芊。

【仟佰】セン ○千百に同じ。漢書、食貨志「匹夫之害、有二一ー之得一」注「仟謂二千錢一、伯謂二百錢一、今俗猶謂二百錢一爲二一伯一」○田間の道をいふ。漢書、食貨志「商君開二一ー一」注「一ー田間之道也、南北曰レ仟、東西曰レ伯」＝阡陌。○千人の長と百人の長と。史、陳渉世家「俛二仰一ー之中一」

【他】

㊀タ ㊁タ・ダ 國歌佸・佗に通ず

㊀ほか（別・異）○よそ、異りたる所。○別の事、よそごと。孟、梁惠王「王顧左右而言一」○ふたごころ（二心）詩、鄘風「之死矢靡一」○ほかのひと（別人）○たれ（誰）かれ（彼）○方言、人を呼びて一ーといふ。○よこしま（邪）法言「君子正而不一」㊁おふ、おはす。＝駄。

【他愛】タアイ 自己の利益を犧牲にして、他人の爲めに力を盡す。自愛の對。「一ー主義」

【他意】タイ 他心に同じ。

【他家】タカ ○他人の家。詩、唐風、葛生篇、傳「喩二婦人外或二於一ー一」○國彼といふ義。杜甫詩「羅敷獨向二東方一去、誰堪二一ー作二使君一」

【他界】タカイ 國あの世に行く義、死去する、逝去する、貴人の死にいふ。

【他行】タカウ 他の地に行く。魏書、列女傳「始云二一ー一」＝他出。

【他技】タギ 外の技藝。大學「斷斷兮無二一ー一」

【他岐】タキ ほかのえだみち●韓愈詩「通途無二一ー一」

【他郷】タキョウ よその土地。古樂府「夢見在二我傍一、忽覺在二一ー一」

【他郷遇二故知一】タキョウニコチニアウ 他國に來て舊き知己に出會する、喜ばしきことの一。久旱逢二甘雨一「六一異題跋」を見よ。

【他言】タゲン ○他人の百葉、又、陰口タクチ 楚詞「寧閉二一ー一」○タゲン 國人に話す、外の人に漏らす。

【他見】タケン 國ひとにみられる、他人の目に入る。

【他故】タコ ほかの事情。離騷「豈其有二一ー一今」

【他國】タコク 己の國のほかの國。父母之國の對。孟、盡心「去レ斉接レ淅而行、去二一ー一之道也」＝外國・他邦。

【他嗤】タシ 外の姉妹の子、をひ。唐書「武帝愛二養宮中一異二一ー一」

【他殺】タサツ 他人に殺される。自殺の對。

【他山之石】タザンノイシ 他の山から出る粗惡の石も、以て我が玉を磨くに足る如く、不善の人も善人の德器を成すの具たるに喩ふ。詩、小雅「——、可二以攻一レ玉」

【他志】タシ あだしごころ。檀弓「或敢有二一ー一」＝二心。

【他日】タジツ ○前日。孟、梁惠王「一ー君出、則必命二有司所一レ之」○後日。孟、滕文公「一ー求レ見二孟子一」

【他心】タシン ○ふたごころ、あだしごころ。＝二心・異志・他志。○ほかの心、異なる存念。

【他生】タショウ ○闕今生以外、諸の世界に生るる義「一ーの緣」○タセイ 來世に生れ出づ。李商隱詩「一ー未卜此生休」＝後生。

【他出】タシュツ 外へ出て行く。西陽雜俎「沙彌道振、因二一ー夜歸一、中路忽遇レ虎」

【託二他出一】タクシュツ 留守を使ふ。過庭錄「有二鄉舉貢生者一、問二先子所一レ居、以レ刺投レ謁、先子昧二其人一、託以二他出一」

【他所】タショ 他の場所。漢書、五行志「風發二於一ー一」

【他姓】タセイ おのれと異なる姓。
【他席】タセキ 他郷の宴席。王勃詩「九月九日望鄉臺、——他鄉送ル客杯」
【他端】タタン ほかの考、別の策。‖他圖。
【無二他端一】タタンなし 別に他の奇策の端を發すべきものなし。史、信陵君傳「今有ル難一、而欲ル赴二秦軍一、譬如以ル肉投二餓虎一、何效之有哉」
【無二他腸一】タチョウなし 心腸の内、他の惡意なし。史、商鞅傳「上以爲二鞅忠實一無二他腸一」
【他動】タドウ 他の事物を處理する動作。例へば、人を敎ふ、政を行ふの類。自動の對。
【他動詞】タドウシ 他動の意を表はす動詞。自動詞の對。
【無レ他】タなシ これより外にはなし。孟、告子「學問之道一レ、求二其放心一而已矣」
【靡レ他】タなシ 前條に同じ、又、この外の心なし、二心なし。詩、鄘風「之死矢一レ」
【他人】タジン ○我よりほかの人。詩、小雅「一一有レ心、予忖二度之一」○関係類を除きしほかの人。
【他人有レ心予忖二度之一】タジンコヽロアレバワレコレヲタクスル 他人の心を、予は之を善く推測する。詩、小雅、巧言篇「孟、梁惠王篇に之を引用す。
【爲二他人一作二嫁衣裳一】タジンノタメニカセイショウヲツクル 女の慎むべきをいふ。全唐詩、秦韜玉、貧女詩「蓬門未レ識綺羅香、擬レ托二良媒一益自傷（中略）苦恨年年壓二金線一、——」
【他年】タネン ○前年に同じ。陸游詩「一一鼓角横關路、馬上遙看與レ此同」○後年。
【他念】タネン 他心に同じ。
【他方】タホウ ほかのかた、異る方角。杜甫詩「萬里各一一」
【他邦】タホウ とつくに。論、鄭玄「問二人於一一拜拜而送レ之」‖外國。
【他聞】タブン 他人にきかれること、ひときき。‖外聞。
【他們】タモン 們はともがら、彼等・彼輩に同じ。
【他流】タリュウ 國己の流義と異る流義。
【他力】タリキ 佛阿彌陀如來の本願の力。自力の對〔敎行信證〕轉じて他人の助力。

【代】タイ 隊

○よ、よよ（時世）○人の一生涯、人の此世に生存する間。○かはる（替）入りかはる「更一」左、莊八「及瓜而一」○繼ぎて任ずる「擇一」○父子相繼ぐをいふ。○かはるがはる（更）○國名、趙の先。○國しろ。○ね、價。○れう、材料。

同訓異字 代・變・化・易・替・更等の別は變（言部十六畫）の條を見よ。

【代印】ダイイン 他人の印の代りに己の印を捺する。
【代價】ダイカ 物品のあたひ。‖價金。
【代講】ダイコウ 人に代りて講義をする。南史、紀少瑜傳「六經博士鮑皦、雅相欽悅、時皦有レ疾、請二少瑜一一一」
【代議士】ダイギシ 國民に選擧せられ、代表者となりて、帝國議會に出で、立法に參與する人。
【代議政體】ダイギセイタイ 國民が代議士を選びて、立法に參與せしむる政體。
【代金引換郵便】ダイキンヒキカエユウビン 郵便局が差出人の委託に依り、其の郵便物を、到著郵便局にて、代金と引換に受取人に交付し其の代金を取り立てて差出人に交付するもの。
【代官】ダイカン ○國德川時代の地方官、年貢戸籍等の事を掌る。○其の役所を一一所といふ。‖郡宰。
【代言】ダイゲン 人に代りていふ。書、說命「夢帝賚二予良弼一、其代レ予言」
【代言人】ダイゲンニン 原告、又は被告の代理となりて口をきく者。辯護士の舊稱。
【代作】ダイサク ○詩文などを人に代りて作る。○かはり入りかはりて出る。孟、滕文公「暴君一一」
【代參】ダイサン 國人に代りて神佛にお詣りする。
【代診】ダイシン 國主治醫の代理をして病人の病を診察する。‖代脈。
【代謝】ダイシャ 入りかはりて辭し去る。淮南、兵略「春秋有二一一一」
【代償】ダイショウ 他人に代りてつぐなふ。又、損害に對して其の代價を拂ふ。宋史、汝明傳「汝明爲二鷹中裝一、一一之」
【代序】ダイジョ 次第に入りかはる。離騷「春與レ秋其一一」
【代書】ダイショ 人に代りて書く。‖代筆。
【代數】ダイスウ 數字の代りに符號文字を用ひて計算する算法。‖點竄。
【代租】ダイソ 田より上るみつぎにかふ、年貢米。のかはりに納むる稅。唐書、以布一レ」
【代代】ダイダイ よよ。法苑珠林「一一傳襲」張若虛詩、人生一一無二窮已一」‖世世。
【代田】ダイデン 年年、場所をかへて耕す田。漢書「歲代レ處、故曰二一一」
【代納】ダイノウ 他人に代りて稅を納める。
【代人】ダイニン みやうだい（名代）‖代理人。
【代馬】ダイバ 代郡の馬色をいふ、又其の地より産する名馬、代は即ち冀北。史、蘇秦傳「秦帶有二巴蜀一、北有二一一一」
【代馬不レ思レ越】ダイバハエツヲオモハズ 北方の代郡に産する馬は南方の越の國を慕ひ思はず。李白詩「一一、越禽不レ戀レ燕、情性有レ所レ習、土風固其然」
【代馬依二北風一】ダイバハホクフウニヨル 故郷の忘じ難き喩。韓愈論「樹木數徙則槁、蟲獸徙レ居則懷、故——飛鳥翔二故巢一、胡馬依二北風一、古レ不レ哀二其生一」

詩

【代笞】ダイ 人に代りて書く。湯鎗小品「會試、沈同和以ニ一ー一中ニ第一名ニ、ー者趙鳴陽中ニ第六名ニ、俱與江人、事發、竝罷除ノ名」

【代表】ダイ 衆人又は或團體に代りて意見をあらはし明かす「ー一者」

【代辦】ダイ 人に代りて事を辦ず。‖代理。

【代理】ダイ 代辦に同じ。

【代名詞】ダイメイ 名詞に代用する詞、人代名詞・指示代名詞の二に分つ。

【代物】ダイ ○國物のあたひ、代金。○代償材料、又、賣買する品物、商品。

【代理】ダイ 人にかはりて事を處理もりする、みやうだい。‖代辦。

【代料】ダイ 物のあたひ。‖代金。

【仗】 チャウ 養 漾

○つはもの、劍戟の總名、兵器。○つゑ、杖に通ず、つゑつく。魏徵詩「ー策謁ニ天子ニ」○よる(倚)南史「ー義而動」○たのむ(憑)「ー氣」ダイは使ノ氣ニに同じ。○唐の制にて宮殿の下の兵衛をいふ。儀衛志「朝會之ニ三衛番上分爲ニ五ー皆帶ニ刀ー」○聞ーは戰を聞く義。

同訓異義 仗・依・寄・憑・兒・賴等の別は依(人部六畫)の條を見よ。

【付】 フ 遇

○あたふ(予・與)さづく(授)わたす「交ー」○財貨を支出する。○つく。○よる(寄)よす、たのむ(託)○まつりの名。‖祔。○國つき○故にの義「病氣にー缺席」○對しての義「意圖にー五本」

【付梓】シ 書物を版にする。‖上梓。

【付囑】フショク 言ひ附ける、又、たのみ。法苑珠林「親受ニー一ー」‖囑託。

【付託】フタク たのみ、たのむ。諸葛亮、出師表「恐ー一不ノ效、以傷ニ先帝之明ト」‖委託・寄託。

【付与】フあたふ、與は與。書經「ニー四方ー」‖付與。

【付丙】フ 火にて焚く、秘密の手紙などを火中に投じて焚く義、丙は火。‖付ニ丙丁ー。

【付與】フあたふ、さづく。杜甫詩「ニー一後世ー傳」

【令】 ○レイ・リャウ ㊀レイ・リャウ ㊁レイ・リャウ 敬 皮 青

○のり、おきて(法律)「律ー」「法ー」○おほせ、をしへ、いましめ(告戒・敕戒)孝經、諫爭「子從ニ父之ー一可」「謂ニ孝乎ー」○いひつけ(命)「命ー」○をさ、つかさ、一縣の長官「縣ー」○よし(善)詩、大雅「ー聞ー望」○人の親族を稱する敬語「ー兄」「ー息」㊁したがふ(服從)○つかふ(使)孟、梁惠王「便嬖不ノ足ニ使ニ於前ー與」○しむ、せしむ(俾)○ーレイは犬のくびたまの環ノの鳴る音。詩、齊風「盧ー一」㊂鴒に通ず、脊令セイは鶺鴒に同じ。

同訓異義 令・使・遣・敕・俾○令は使令也と註す、使よりは意重し、命令の義より轉用す。史記「令ニ張儀詳去ニ秦」の如し、詳は佯に通ず。○使は令也・役也と註す、人に命令して爲さしむる義。論語「雍也可ノ使ニ南面ー」○遣は發也・使ノ人也と註す、我より拘束せずして、彼に任す意あり。史記「乃遣ニ張良往立ノ信爲ニ齊王ー」○敕は敕へて爲さしむる義なり。左傳「子敕ニ寡人和ニ諸戎狄ー以正ニ諸華ー」○俾は使也・從也と註す、使よりは輕し、詩書には多く見ゆれども、後世の散文には用ふること希なり。

【令愛】レイ 人のむすめの敬稱。剪燈新話「今則謹攜ニー一ー同此歸寧ー」‖令嬢。

【令嚴】レイ よきはかりごと。‖令謀・令圖。

【令尹】レイ 周代の楚國の上卿。楚、公冶長「崔ー一之政、必以告ニ新ー一ー」令は善、尹は正す義。

【令嬢】レイ 人のむすめの敬稱。‖令愛。

【令価】レイ 人のめしつかひの敬稱。

【令格】レイカク おきて、規則、法律。魏志「著ニ之ー一ー」

【令徳】レイ 人の妻の父の敬稱。合璧事類「青城山爲ニ五嶽之長ニ、故名ニ丈人山ニ、今世呼ニ人婦翁ニ爲ニー一ー」‖令岳・嶽翁。

【令甲】レイカフ 法令の首章、法令に先後の次第ありて一ー令乙・令丙といふ、轉じて廣く政令の義とす。漢書、宣帝紀「ー一、死者不ノ可ニ復生ニ」宋史、楊時傳「凡元祐之政事、著在ニー一ー」

【令閨】レイカイ 人の妻の敬稱。侯鯖錄「東坡再謫ニ惠州ニ、一老婦人年六十九、爲ノ鄰、其妻三十餘子、公與ノ詩曰、ー一方富而立年、賢夫已近古稀年」‖令閫。

【令儀】レイ よろしきにかなふ威儀。詩、大雅「ー一令色、小心翼翼」

【令君】レイクン 漢末以後、尚書令の異稱。(晉書、荀勗傳)

【令兄】レイ ○己の兄、詩、小雅「此ー一弟、綽綽有ノ裕」○後世は他人の兄の敬稱。

【令閫】レイ 人の妻の敬稱。‖令室。

【令月】レイ ○よき月。儀禮、冠禮「ー一吉日」○陰暦の二月の異名。

【令管】レイクヮン　令正に同じ。管は家族。
【令厳】レイゲン　人の父の敬稱。厳は厳君、即ち父。
【令公】レイコウ　中書令の尊稱。後魏書「高允爲二中書令一、文帝重レ之、不レ名、呼爲二令公一」
【令閫】レイコン　令閨に同じ。閫は門のしきみの内、即ち家内。‖尊閫。
【令妻】レイサイ　〇善き妻。詩、魯頌「魯侯燕喜、一一寿母」‖良妻。〇人の妻の敬稱。‖令正。
【令士】レイシ　よきさむらひ。漢書「龐統荊州一一」‖善士。
【令子】レイシ　善き子、他人の男の子の美稱。‖北史、高琳傳「琳母嘗被二魘泗一、見二石光彩朗潤一、遂持以歸、是夜夢人謂曰、夫人向所二將來一石、是浮磬之精、若能寶持、必生二一一一、儻而有レ娠生レ琳」‖令息・賢郎・令郎。
【令旨】レイシ　〇皇后・皇太后の命令「金史、章宗紀」‖綸旨。〇レイジ　東宮・三宮・中宮・親王の命令。
【令姉】レイシ　人のあねの敬稱。
【令慈】レイジ　人の母の敬稱。‖令堂・令萱。
【令嗣】レイシ　よきあとつぎ。黄庭堅文「向見二一一、眉目明秀」‖令緒。
【令日】レイジツ　よき日。後漢書、袁安成傳「即以二一一一」‖吉日。
【令室】レイシツ　人の妻の敬稱。宅は内室。‖令正。
【令人】レイジン　善き人。詩、邶風「母氏聖善、我無二一一一」
【令辰】レイシン　めでたき日。任昉文「以二令月一一一嘉賓一典策一」‖吉日・佳辰・佳節。
【令状】レイジョウ　官府より出す命令の書状、さしがみ「検事の一一」
【令嬪】レイヒン　人のむすめの敬稱。‖令愛。
【令稱】レイショウ　よきほまれ。桓範、薦二管寧一表「束脩善行、少有二一一一」‖令名・令譽。
【令終】レイシュウ　をはりをよくす。琴賦「又善二始而一一一」‖善死。
【令叔】レイシュク　人のをぢ、又はをば即ち叔父・叔母の敬稱。
【令緒】レイショ　よきあとつぎ、人の相続人の敬稱。‖令嗣。
【令色】レイショク　顔色をよくして人の氣に入るやうにする。論、學而「巧言一一、鮮矣仁」
【令正】レイセイ　人の妻の敬稱、正は政に同じ、家政の義。‖令政・相正・令閫・令室・令夫人。
【令政】レイセイ　前條に同じ。
【令壻】レイセイ　よきむこ、人のむこの敬稱。
【令節】レイセツ　よき節日。宋之問詩「一一三秋晩、重陽九日歓」‖佳節。
【令千金】レイセンキン　他人のむすめの敬稱。‖令愛・令嬢。
【令息】レイソク　人の男の子の敬稱。‖令郎。
【令孫】レイソン　人のまごの敬稱。
【令尊】レイソン　人の父を呼ぶ敬稱。‖令厳。
【令太太】レイタイタイ　他人の妻の敬稱、おくさん。
【令堂】レイドウ　善き北堂の義、人の母の敬稱。‖萱堂・令慈。
【令長】レイチョウ　縣の長官。運文擇論「漢法、縣萬戸以上爲レ令、以下爲レ長」
【令嬢】レイジョウ　人のむすめの敬稱。‖令嬢・令愛。
【令寵】レイチョウ　人の妾などの敬稱。
【令女之節】レイジョノセツ　令女は曾文叔の妻の名、夫の死後、其の家之を他に嫁せしめんと欲す、令女耳鼻を斷ちて從はず、遂に其の貞節を全うせし故事「魏志、諸夏侯曹傳、注」
【令弟】レイテイ　己のおとうと、又、他人の弟の敬稱。令兄を見よ。
【令姪】レイテツ　人の從子の敬稱。杜甫詩「一一才俊茂、二美有二何求一」
【令閨】レイケイ　よきはかりごと。‖令謀。
【令徳】レイトク　善き徳行。詩、小雅「顯允君子、莫レ不二一一一」‖善徳。
【令望】レイボウ　善き人望。令聞令望を見よ。
【令伯】レイハク　人のをぢ、又はをば、即ち伯父・伯母の敬稱。
【令範】レイハン　よきてほん、よきのり。
【令夫人】レイフジン　身分ある人の妻の敬稱、古、諸侯の妻をいふ、夫は扶、夫を扶くる義。
【令聞令望】レイブンレイボウ　よきほまれありて人に慕はるる。詩、大雅、烝民「一一、宣二王之躬一」
【令弟君子、四方爲レ綱」
【令母】レイボ　人の母の敬稱。蔡邕文「於其一一、愛二玆義方一」
【令誤】レイゴ　よきはかりごと。‖嘉謀・眞謀・令猷・令圖。
【令僕】レイボク　尚書令と僕射と「晉書、殷浩傳」
【令妹】レイマイ　〇己の妹の稱。左思詩「峨峨一一、應レ期誕生」〇人のいもうとの敬稱。
【令不二虚行一】レイフキョコウナラズ　法令は上に其の實なければむなしく行はれず。管子「國不二虚重一、兵不二虚勝一、民不二虚用一」
【令名】レイメイ　よきほまれ。孝經、諫諍「士有二爭友一則身不レ離二於一一一」‖令聞・美名。
【令譽】レイヨ　よきほまれ。‖令名・芳譽。
【令郎】レイロウ　人の男の子の敬稱。古詩「重說大守家、有二北一一君一」‖令子・令息。
【令義解】リョウノギゲ　書名、十巻、大寶令を註解せしもの、清原夏野等勅を奉じて撰す。

【仝】

同（口部三畫）に同じ。

書言

【伊】

四　イ　支

〇これ、この（是）揚雄、河東賦

「一年暮春」〇かれ、かの(彼)の詩、秦風「所謂一人、在二水一方一」〇ただ、これ(惟・維)發語の辭。儀禮、士冠禮「嘉薦二脯」〇聲又は動作を形容する無意味の助字。後漢書、翟宣傳「智士彷彿二於下一」

【伊伊】イイ 貴の意の劉禹錫賦「樹猶二如此一」

【伊威】イヰ 蟲の名、わらぢむし、おめむし、濕地に生じ、體灰白色楕圓形にして數對の足を有す。詩、豳風「一一在レ室」〓鼠婦・蝨蟊。

【伊鬱】イウツ へつらふ貌。超奇、鄧禹詩「一一北堂上、猶懼侍門邊」一說、呻吟うめきの意。

【伊尹太公之謀】イインタイコウノハカリゴト 天下を治平する策をいふ。伊尹は殷の湯王の相、太公は周の文王の相呂尚、共に古の名臣。蘇軾、擬孔論二子房與二蓋臣之才一不レ侔二一而特出二於荊軻並攻之計一」

【伊鬱】イウツ 〇むしあつき貌。何晏賦「盛二平浮暑之一一」〇氣の舒びざる貌、心が結ぼれふさぐ貌。班彪、北征賦「永一一其誰愬」〓懣伊・鬱陶。

【伊皐】イカウ 殷の湯王の相伊尹と、唐堯の際の相皐陶と共に古の賢相。後漢書、班固傳「將軍宜下詳二唐殷之舉一察二一一之齟一令中遠近無レ偏、幽屋連と」

【伊霍】イクワク 伊尹は殷の太甲を桐宮に放きて改悔せしめたる賢相、漢の霍光は昌邑王賀を廢して孝宣帝を迎へ立てし名臣。後世遊臣が廢立をはかる義に轉用す。賢書、桓溫傳「桓溫陰蓄二不臣之志一、及二枋頭之敗一、威名頓挫、郗超勸レ溫行二一一之事一、以立二大威權一、溫途入朝、自二太后一廢レ帝」

【伊吾】イゴ 讀書のこゑ。〓咿唔・吾伊。

【伊州】イシウ 〇地名、唐代に置く、今の新疆哈密縣に在り。〇樂曲の名。白居易詩「新教二小玉唱二一一」

【伊周】イシウ 殷の湯王の相伊尹と、周の武王、成王の相、周公旦と、二人共に古の賢相の標準、西征賦「彼貞荷之殊重兮、雖二一一其有レ殆」

【伊川先生】イセンセイ 宋の程頤の弟、名は頤、字は正叔、宋の哲宗に仕へ、晩に龍門伊水の上に居る、學者一一と稱す「宋史、道學傳」〓程伊川。

【伊勢物語】イセモノガタリ 國書名、二卷、在原業平の作といへど詳かならず、和歌を主とせる隨筆體の文にして、主として業平一生の行事を記す。

【伊望】イバウ 伊尹と太公望と、共に天子を輔佐せし賢相。後漢書「一一之策、何以加レ之」〓伊呂。

【伊傅】イフ 伊尹と傅說と、共に賢相。後漢書、崔駰傳「募二昔人之選一辰兮、參二一一之選一時」

【伊呂】イリョ 殷の伊尹と周の呂尚と、二人共に天子を輔佐せし賢相。漢書、董仲舒傳「董仲舒有二王佐之才一、雖二一一一無レ以加レ」〓伊望。

【伊達】ダテ 國はでやかに飾れるよそほひ、はで、いき。「一一者」〓豪華・華奢。

【伎】カイ ケ 〓介に同じ

【伎】カウ 〇大いなり。〇よし(善)詩、大雅「一人維藩」〇俗に使用人をいふ「小一一」「貴一」

【伎】キ 〇くはだつ、計畫する。〇つまだつ、踵を擧けて望む。漢書、高帝紀「日夜一一而望歸」〓跂。

【伎倆】ギリャウ 人に從ひ、止に從ふ 止は即ち足

【伎】カウ 〇たくひ、つれあひ(配耦)あひて(匹敵)〇すこやか(健)つよし(彊)〇ただし、なほし(正直)〇あたる(當)〓抗。たくらぶ(匹耦)〇かくす(藏)〇おごる(驕)淮南、齊俗「一一行以違レ俗」〇たかし、高き貌。〓閎。〇あたる、匹敵する。〇正直の貌。

【伎行】キカウ おごりたかぶるおこなひ、

【伎儻】キタウ 豪儻の行。字解を見よ。

【伎俠】キケフ をとこだて、伎は權力を以てつよく人に抵抗する義。漢書、朱博傳「一一好レ交」〓任俠。

【伎健】キケン つよくすこやか、又、其の者。漢書、宣帝紀「選二郡國吏三百石一一一習二騎射一者一皆從レ軍」

【伎證】キセウ 對等の證を用ひて下らず。莊、瀟父「萬乘之主、千乘之君、夫子未レ嘗不二分庭一一一」〓抗禮

【伎儻】キタウ つれあひ、伎は儷、儻は對、夫妻の義。左、成十二「不レ能レ能二其一一一」〓匹耦・配偶。

なり、人が足をつまだてて望む會意文字、俗に企と書くは非。

【企及】キキュウ　およぶ。唐書、杜甫傳「揚雄・枚乘、可ニ一一一也」

【企業】キギョウ　事業をくはだて起す。生産活利を以て目的とする者をいふ。一一家」

【企踵】キショウ　かかとを擧げて望む。漢書「天下之士、延ニ頸一一一」

【企羨】キセン　望みてうらやみ慕ふ。北史「鄉曲人士、莫ニ不一一一焉」

【企圖】キト　くはだてはかる。＝企畫。

【企望】キボウ　くびすをあげてのぞむ。後漢書、袁術傳「非ニ海內一一之意也」

伎 キ・ギ 紙 シ 寘 キ・ギ 支

㊀わざ、うでまへ「一能」「一倆」○はたらき（才智）○たくみ（巧藝）○わざをぎ（俳優）○女樂をいふ「唐書、元載傳」㊁○そこなふ（傷害）伎に通ず。○かたむく（傾）㊂むつゆび。＝技。○ゆるやか、舒ぶる貌。詩、小雅「維是一一」

【伎巧】キコウ　たくみ、てわざ、又、才智。老子「人多ニ一一」＝技巧。

【伎能】キノウ　はたらき、うでまへ。史、孟嘗君傳「無ニ他一一一」＝技能・才能。

【伎倆】キリョウ　已にうごまへある故、人のするわざを見て、腹かゆくおもふ。潘岳、射雉賦「徒心煩而一一」風俗通「高漸離擊ニ筑名一傳ニ保于人一聞ニ堂上有ニ客擊ニ筑、一一不ニ能ニ無ニ出ニ音」高漸離は擊筑の名人、伎一本技に作る。＝技癢・伎懷。

【伎癢】キヨウ　○伎能に同じ。陸游詩「天狐一一本無ニ多」○智謀あるなり、倆、一に兩に作る。唐書、司空圖傳「伎兩雖ニ多性靈惡」

休 キウ・ク 尤 虞

㊀いこふ（息）○やむ、とどまる（止）○よろこび、さいはひ（慶）周語「以承ニ天一」○うつくし、よし（美・善）書、召誥「惟王受ニ命、無ニ疆惟一」○なだむ、ゆるす（宥）書、呂刑「雖一勿一」○やすむ、やすみ（休暇）○職を辭してやすむ（致仕）杜甫詩「官因ニ老病一」○大いなり「一命」○一一はやすし（康）ゆるし、ひろし（寬容）又、其の形容。大學「其心一一焉」又、つつまやか（儉約）なる貌。詩、唐風「良士一一」一說、道を樂む心。㊁あたたむ（溫）○いたむ（痛）なげく（歎）左、昭三「民人痛疾而或燠ニ之一」＝咻。

同訓異義 休は木に从ひ人に从ふ、行人の休息するには、必ず木蔭などに依るが故なり。

【休憩】キュウケイ　心をやすめる。＝休神。

【休沐】キュウモク　よききさいはひ。宋書、武帝紀「時停ニ一一一」

【休慶】キュウケイ　やすみいこふ。唐書、崔元綜傳「性恪愼、坐ニ政事堂一、東帶終日不ニ一一一」

【休應】キュウオウ　めでたきしるしの事實にあらはるる義。唐書、武后以爲ニ一一、名ニ曰慶山一」＝休徵・瑞應。

【休暇】キュウカ　やすみ。南史、張敬兒傳「每ニ一一、輒修ニ貲自給」＝休假・休日。

【休嘉】キュウカ　よろこばし、めでたし。又、其の事。申鑒「皆徵不ニ至而一一集ニ之、謀之術也」＝嘉祥。

【休學】キュウガク　學問を休む。

【休刊】キュウカン　新聞雜誌等の發行を一時やすむ。

【休休】キュウキュウ　○心を樂易にしてゆたかなる貌。書、秦誓「其心一一焉」○儉約なる貌。詩、雅、韓訓「一一儉也」○美くしく大いなる貌。公羊、文十二「其心一一」○退き休む。次條を見よ。

【休休亭】キュウキュウテイ　唐の司空圖の亭の名。全唐詩話「司空圖謝ニ病歸ニ中條一、結ニ茅屋ニ一、命ニ曰ニ一一一」中條は山の名。

【休告】キュウコク　よろこびとわざはひと、告は天のとがめ。北史「積善餘慶、積惡餘殃、豈非ニ一一耶」＝禍福・吉凶。

【休勳】キュウクン　美くしく大いなるいさを。班固文「一一顯祥、永永無疆」

【休和】キュウワ　やすんじやはらぐ。左傳「一人行ニ善、則百姓ニ一一」

【休會】キュウカイ　會議を休む、會合をやすむ。

【休光】キュウコウ　立派なるいさを。韓愈與ニ于襄陽一書「能垂ニ一一一」

【休火山】キュウカザン　一時噴火の止みたる火山。

【休慶】キュウケイ　よろこび。王褒文「嗣祚遐長、臣民一一」＝嘉慶・祥慶。

【休憩】キュウケイ　やすみいこふ。＝休息。

【休歇】キュウケツ　やむ。崔顥詩「直言榮華未ニ一一、不ニ覺ニ山嵐海將ニ暮」＝休止。

【休業】キュウギョウ　しごとをやすむ、又やすみ。

【休遣】キュウケン　罪人をやすましはなつ。後漢書、虞延傳「除ニ細陽令一、每ニ至ニ歲時伏臘一、輒ニ一一徒繫、各使ニ歸ニ家、竝感ニ其恩德一、應ニ期而還」

【休祐】キュウユウ　よききさいはひ。＝休祚。

【休告】キュウコク　官吏のやすみ、告は暇。李嶠詩「及ニ此乘ニ一一一、卿將ニ卿ニ適ニ肥ニ」＝休沐。

【休止】キュウシ　やむ、やすむ。易林「兵革ニ一一」＝休歇。

【休日】ケフジツ やすみ 休業日。唐書、裴寬傳「會一一登ノ第」

【休心】キウシン 心をやすめる、安心する。＝休神。

【休神】キウシン 心をやすめる。＝休心・休意。

【休舍】キウシヤ 家にやすみいこふ。史、高祖紀「欲三止ノ宮一一」

【休祥】キウシヤウ よきさいはひ、祥は福の先づ見はるるもの。書、泰誓「朕夢協二朕卜一、襲二于一一」＝吉兆・休徵。

【休書】キウシヨ 離縁状、みくだり半、俗に妻を出す休といふが故。

【休職】キウシヨク 國 或期間、現在の職務を解除する制度。

【休戚】キウセキ よろこびと、憂とっ。晉語「爲二晉一一不レ背レ本也」＝喜憂。

【休戰】キウセン 交戰國が互に申し合せて或期間いくさを中止する。

【休祚】キウソ よきさいはひ。晉書「本支繁三百世、一一鍾二聖躬一」

【休息】キウソク やすみいこふ。詩、周南「南有二喬木一、不レ可二一一一」＝休憩。

【休題】キウダイ 閑話一一」 話をやめる、話を轉ずる「閑話一一」

【休祉】キウシ よきしあはせ、祉は福。後趙錄「佛圖澄謂レ虎曰國家心存二佛理一、建レ寺度レ僧、當レ蒙二一一一」虎は石虎。

【休致】キウチ 年老いて官職を辭してやすむ、致は致仕。

【休場】キウジヤウ 興行などのやすみ、又、興行などに出勤せず。

【休暢】キウチヤウ うつくしく行きわたる。李陵文「榮聞一一、澤被寺葛」

【休徵】キウチヤウ よきしるし、休は美。漢書、成帝紀「一一嘉應、頌聲並作」

【休停】キウテイ やすむ。晉書「始無二三日一一一」

【休暢】キウチヤウ よきさいはひ。後漢書、陳蕃傳「一一符瑞、豈遠乎哉」＝休祥。

【休兆】キウテウ めでたきしるし。全唐詩話「聖人啓レ運、一一必彰」＝休徵。

【休德】キウトク うるはしきとくの史、司馬相如傳「奉二漢傳之一一一」＝善德・美德。

【休寢】キウシン やすんずる。史、律書「結二和通レ使一一北陲一」

【休沐】キウボク 國 休息し、又宿泊する。「一一所」

【休範】キウハン よきてほん、好き模範。晉書「流二一一于無窮一」

【休命】キウメイ 天の善き命令。易經「君子以遏二惡揚レ善、順二天一一一」

【對揚休命】タイヤウキウメイ 對は答なり、君命に答へ、其の意を衆に宣揚する。書、說命「敢對二揚天子之休命一一」＝對二揚王休一」詩、江漢」

【休明】キウメイ 大いに明か。左、宣三「定王使二王孫滿勞二楚子一、楚子問二鼎之大小一輕重一焉、對曰、德之一一、雖レ小重也」

【休沐】キウボク 官吏の暇を得て休息する義。漢は五日毎に、唐は十日毎に一日家に歸り沐浴するを許さる故にいふ。康熙字典「一一謂二休假一也、一曰二下沐一一曰旬沐、唐法旬休者一月三旬、遇レ旬則一一、卽十日一沐沐也」

【休業】キウゲフ やすみて保養す 又民の力をやすめ養ふ。

【休老】キウラウ 老者を安んず。禮記「一レ一勞レ農」

【休烈】キウレツ すぐれてよきいさを。後漢書、和帝紀「藏レ功以揚二一一一」＝休光。

【伋】キフ 緝

○人名、孔一は孔子の孫、字は子思。○一一は嚴詐の貌。

【仰】

㊀ギヤウ・ガウ 養 漾
㊁ギヤウ・ガウ 養 漾
㊂ガウ 陽

通音カウ

㊀あふぐ、首を擧げて上に向ふ。○心にしたふ「企一」うやまふ(敬)○おほせ(命)康熙字典「以尊命卑曰一」○毒藥などを飲む。唐書、楊收傳「自作書謝二天子一卽一鴆死」㊁たのむ(恃)上の力をたのむ。史、平準書「衣食一給縣官」まつ(俟)よる(資)㊂たかし、又、卬に作る。＝昂。

【仰飲】ギヤウイン あふぎうやまふ。

【仰鳳】ガウホウ あふむきにねる。世說「郗隆七月七日、出日中一一」

【仰觀】ガウクワン あふぎて天をみる。易繫辭、易與二天地一準、故能彌二綸天地之道一、仰以觀二於天文一、俯以察二於地理一」

【仰止】ギヤウシ 高山をあふぐ、止は助字。轉じて聖人を仰ぎ慕ふ義とす。詩、小雅「高山一一、景行行止」

【仰視】ギヤウシ あふぎみる。史、孔子世家「衞靈公與二孔子一語、見二蜚鴈一一一之一色不レ在二孔子一、孔子遂行」

【仰事俯畜】ギヤウジフチク 仰ぎて父母に事へ、俯して妻子をやしなふ。孟、梁惠王「俯足二以事一父母一、俯足二以畜一妻子一」

【仰取】ギヤウシユ あふぎて取る。蘇軾詩「學如二富貴一在二博收一一一謝拾無二遺鄒一」

【仰瞻】ギヤウセン あふぎみる。＝仰視。

【仰藏】ギヤウザウ あふぎいのる。北史、崔浩傳「父浩疾篤、乃剪爪截レ髮、夜在二庭中一一一斗極一爲レ父請レ命、求二以身代一」

【仰望】ギヤウバウ ○あふぎのぞむ。學參詩「一一將與レ沈」○心にしたひて特みとする。孟、離婁「眞人者所二一一一終レ身也」

【仰慕】ギヤウボ あふぎながめる。孫綽文「徘徊城隅二一一一松林」

【仰感】ギヤウカン 仰いで君恩に感ずる。哭

越春秋「不ㇾ稱ニ一ー俯愧ニ」
【仰企】ギャウ 首をあげ足をつまだてて切に望む。あこがれ慕ふ。賈島詩「一ー碧霞仙」
【仰山】ガン ○國大いなる形容、多き語。○おほげさ、おほぎやう。
【仰成】セイ 首を仰ぎて成功を俟つ。書經「予小子垂拱一ー」
【仰羨】エン あふぎ望みてうらやむ。謝靈運、緩二青溪一文「一ー古風」
【仰倒】タウ 仰向けにたふれる。北夢瑣言「陳摶ノ刀一揖、馬生一ー」
【仰歎】タン 天をあふぎてなげく「投ㇾ書一ー」
【仰天】テン ○天をあふぐ。史、滑稽傳「淳于髠一ー大笑、絶纓宋絃」○國大いにおどろく。ㇾ吸篇。
【仰慕】ボ あふぎしたふ。晉書、陽侃傳「一ー二ー天風」
【仰不愧ニ於天】ヲテン 心にやましき所なければ、天帝に對しても愧づることなき意。孟、盡心「——、俯不ㇾ怍ニ於地一」

【件】ケン 錫

○わかつ（分）、區別する。○物事を數ふに用ふ。康熙字典「俗號物數曰若干一」「物一」「事一」舊唐書「所斷罪、二十一以上爲ㇾ大、十一以上爲ㇾ中」○國くだり、くだん、前に記したる事物、證書の結尾に用ふ「仍而如ㇾ一」
【件作】ケン しなじな。ㇾ事事・物物。
【件數】スウ ことがらの數、事件の數。
【件名簿】メイボ 國事の箇條を書き記す帳簿。

【伍】ゴ 慶 五に通ず。

○いつつ（五）○五人。禮、祭義、注「五人爲一」○くみ、なかま（同級・同列）○まじはる（交）衆と雜處する、なかまとなる。史、淮陰侯傳「生乃與ㇾ哙等一」○つらなる（行列）○五人組、古、五家相保つ組合。左、襄三十「取ニ我田疇而一之」○古、軍法にて五人を一組とせし稱。左、桓、五「先偏後一」
【伍子胥】ゴシ 名は員、父の奢、兄の尚、楚の平王の爲めに殺さる。員、吳に奔り吳を導きて楚を伐つ、既に郢に入る、時に平王已に卒す、乃ち其の墓を掘り、其の尸を出して之を鞭つこと三百す。申包胥曰く、子の仇を報ずること、甚しからずやと、子胥曰く、吾日暮れ途窮る、故に倒行して逆施するなりと、後ち吳王夫差を讓め從はれず、大宰嚭之を讒す、王乃ち子胥に屬鏤の劍を賜ふ、盛るに鴟夷の革を以てし、之を江中に浮ぶ、吳人之を憫み、爲めに祠を江上に立てて胥山といふ。
【伍籍】セキ 組合の戸籍（唐書、宰相傳）
【伍長】チャウ ○周の制、軍中にて五人組のかしら。○周の制、五家の組合の長。○國軍書の次に位する下士。
【伍伴】ハン なかま、くみ。ㇾ伴侶
【伍符】フ 兵卒五人組の符信（漢書、馮唐傳）

【伈】シン 震

おそる（恐）る貌。
【伈伈】ジン 恐るる貌。韓愈、祭ニ鱷魚一文「一ー倪倪爲ニ民吏羞一」

【任】㊀ジン・ニン ㊁ジン・ニン 侵

㊀あたる（當）はりあふ、抵抗する。左、僖十五「衆怒難一」○たふ（堪）○まこと（誠）恩を以て相信ずる。○おつし（薦）○おふ（負）になふ（擔）○たもつ（保）○ひきうける、保證する。○まかせる、ねぢける、ㇾ壬。○をとこだて（俠）友道に篤し。詩、邶風「仲氏一只」○いだく（抱）○たつ（立）㊁こと（事務）つとめ、やくめ（職責）○もちふる（用）官職を授くる「一賢」まかす（委）ゆだねる。○はらむ（妊・姙）○きまま、ほしいまま（縱一）
【任重道遠者不ㇾ擇ニ地而息一】メンテイコウ 重き荷物を負ふて遠き路を行くものは、如何なる地にても休息する。韓詩外傳「一ー、家貧親老者、不ㇾ擇ニ官而仕一」矢條參看。
【任重而道遠】ニンモノヲシテミチトホシ 背に負ふ荷は重くして、行くべき道は遠し。十人の賢の重大なるに喩ふ。論、泰伯「士不ㇾ可ㇾ以不ニ弘毅一、——、仁以爲ニ己任一、不ニ亦重一乎、死而後已、不ニ亦遠一乎」
【任意】イ きまま、心まかせ。公羊傳疏序「說者疑惑、莫ニ有ニ信ㇾ經一ー反ㇾ傳違戾者一」ㇾ隨意。
【任運】ニンウン 運命の自然にうちまかせる。宋書「有ㇾ心ニ於遵ㇾ運、不ㇾ如ㇾ無ニ心於一ー」
【任期】ニン 務に服すべき期限。
【任官】カン 官職に任ずる。皇侃、論語義疏「一ー得ニ其人一也」
【任俠】ニンキャウ をとこだて、相集に信ずるを俠と爲し、是非を同くするを俠と爲す。史、季布傳「爲ニ一ー有ㇾ名ニ於楚一」
【任國】コク 任所に同じ。
【任子】ニンシ 父兄の廕にて官に任ぜらるる子。漢書、王吉傳「宜ㇾ明ㇾ選ㇾ求ㇾ賢、除ニ一ー之令一」ㇾ蔽子。
【任使】シ 人に事をまかせて使ふ。中庸「官盛一ー、所ㇾ以勸ニ大臣一也」
【任人】ニンジン ねぢけびと。書、僞典「柔ㇾ遠能ㇾ邇、惇ㇾ德允ㇾ元、而難ニ一ー」

寵表率服」‖佞人。

【任率】ニンソツ うまれつきのまま。修飾を加へず。晉書「一一不ㇾ修二威儀一」

【任所】ニンショ 任地に同じ。

【任縱】ニンジュウ きままにしてしめくくりなし。晉書「嗜ㇾ酒一一、不ㇾ拘二小節一」‖放縱。

【任他】ニンタ ままよ、きもあらばあれ。元稹詩「眼前仇敵都休ㇾ問、身外功名一一一」‖從他・遮莫。

【任遂】ニンスイ 氣ままにして禮法に拘泥せず。晉書、阮咸傳「咸一一不ㇾ拘」

【任地】ニンチ 役目をつとむる所、赴職地。周禮、載師「凡一一國宅無ㇾ征」

【任擔】ニンタン 使役につかる、能は疲なり。漢書、賈山傳「疾敵重數、百姓一一」

【任務】ニンム つとめ。

【任命】ニンメイ 人を擧げて官に任ずる。

【任免】ニンメン 官に用ふるとやめむると。漢書「不ㇾ勝ㇾ任也當ㇾ免」

【任用】ニンヨウ 職をあたへ用ふる。漢書、嚴助傳「惟助與二齊王一見一一一」

【任那】ミマナ 古の國名、朝鮮の南端に在り、新羅・百濟の間に介在す、今の慶尚南道の地、神功皇后新羅を攻め日本府を此に置く、後に新羅の爲めに滅ぼさる。

【仲】 チュウ 図

○なか、中に通ず。○つぎ、第二番目。○おとうと。○爺ーは銅にて鑄りたる人。‖銅人。○図なか、人と人との關係「一よし」

【仲由】チュウユウ 孔子の弟子の名、字は子路（史、仲尼弟子傳）

【仲夏】チュウカ 夏三ヶ月の中の月、陰曆の五月の異名。

【仲介】チュウカイ ○兩者の間に立ちて世話をする、仲立ちなかうど「一一業」‖中介。

【仲弓】チュウキュウ 孔子の弟子冉雍の字、德行を以て傳せらる。

【仲兄】チュウケイ 中のあに、二番目の兄。‖中兄・仲氏。

【仲裁】チュウサイ 國爭の中に入りて和解させる。‖居中調停。

【仲山】チュウザン 古の國名、漢書に中山に作る、今の陝西省涇陽縣の西北に在り。

【仲子】チュウシ 兄弟中のなかの子。廣雅字典「一一亦曰二中子一」

【仲氏】チュウシ 二番目の兄の詩、邶風「伯氏吹ㇾ壎一一吹ㇾ篪」‖仲兄。

【仲秋】チュウシュウ 秋三ヶ月の中の月、陰曆八月。中秋は八月十五日にて義異なり。

【仲春】チュウシュン 春三ヶ月の中の月、陰曆二月。‖中春・仲陽。

【仲尼】チュウジ 孔子の字。史記に「一一弟子傳」あり。

【仲尼再生】チュウジサイセイ 孔子の再生、人の賢を稱していふ。隋書「陳果幼受二孝經尚書一、一覽成ㇾ誦、八歲能屬ㇾ文、十三編讀二論史一、時人皆謂一一、年甫十八授二監察御史一」

【仲尼之徒】チュウジノト 孔夫子の門人ども。孟、梁惠王「一一、無下進二桓文之事一者上」桓文は齊の桓公と晉の文公と。‖仲尼之門。

【仲長統】チュウチョウトウ 漢の高平の人、少くして學を好み、博く書記に渉り、文辭に富贍なり、尚書郎となる、論じて時事に及ぶ毎に憤發嘆息す、因りて著論し、名づけて昌言といふ、卒する年四十一、著はす所の學志論、古文眞寶に載す。

【仲冬】チュウトウ 冬三ヶ月の中の月、陰曆十一月。‖中冬。

【仲人】チュウニン 國結婚のなかだちする人。‖媒妁・月下氷人。

【仲父】チュウフ ○父のおとうと、をぢ。○名「父之弟曰一一、仲、中也、位在ㇾ中也」‖叔父。○齊の桓公、管仲を尊びて稱す。

【仲陽】チュウヨウ 仲春に同じ、陽は春のあたたかき氣。漢武帝重至「二月爲二一一一」

【仲呂】チュウリョ ○音樂の十二律の陰に屬する國子、陰曆四月に配す。○轉じて四月の異名。‖中呂。

【仲居】ナカイ 國中に使はるる下女、樓内地方にて遊里・料理屋などの婢。

【仲立】ナカダチ 國他人の間に立ちて賣買の媒介を爲す者、口入ㇾ一一業」

【仲間】ナカマ 國己と事を同うする者、くみあひ。‖伴侶・同輩・夥伴。

【仿】 ㊀ ハウ 養 ㊁ バウ 養 彷に同じ

㊀たたずむ、さまよふ、ぶらぶらあるく、たちもとほる。㊁にたり、さもにたり（似）「比一！」○ほのか、かすか（髣）見ること審かならず。○ならふ、まなぶ、倣に通ず。

【仿效】ハウカウ ならふ、まなぶ、まねする。‖倣效・模倣。

【仿徨】バウクワウ さまよふ、たちもとほる。史、莊子傳「一一不ㇾ能ㇾ去」‖彷徨・方羊。

【仿彿】バウフツ さもにたり、仿佛として相似る、かたどる。晉書「相國之府、一一崇宮」

【仿宋本】ハウソウホン 宋代の刊本の行書字畫等其の體にして頗わて刊行せし書物。

【仿佛】バウフツ ぼんやりと見ゆる、ほのかなる貌。揚雄、甘泉賦「一一其若ㇾ夢」‖彷佛・髣髴。

【仿徉】バウヤウ ぶらぶらと遊び行く貌。次條に同じ。楚辭、招魂「一一無ㇾ所ㇾ倚」‖方羊・彷徉。

【彷徉】ホウヤウ さまよふ、たちもとほる、仿一に方・彷に作る。淮南、原道「一一於山峽之旁」‖徜徉。

【伐】 バツ 月

○うつ「征ー」罪のある者を攻める。○軍を進むるに鐘鼓あるを伐といひ、無きを侵といふ。○いさを（功）左、莊二八「且旌君ー」‖閥。○うつ（撃）つづみうつ（撃鼓）○木をきる（斫）水）○ころす（殺・誅）荀、議兵「堯ー驩兜」○うるはし（美）○ほこる、自ら其の功にほこる。書、大禹謨「汝惟不ー」誇（訓部六畫）參看。○もとる（悖）「ー徳」○たて（盾）

【同訓異義】フク 伐・征・討・撃・打・撲・拍・搏・斫・撾・扑・捶・殴○伐は左傳に、罪を撃ちてうつを伐といふとあり、征伐と連用すれば、上より下をうつなり、左傳に、卽に鉦鼓あるを伐といひ、無きを侵といふとあり。○征は上より下の罪をとがめうつなり。孟子「征者上伐ー下也」○討は罪をいひたてて討つなり。書經「天討ニ有罪ニ」以上の三字は、戰ひて敵をうつに用ふ。○撃は手或は物にてつよくうつなり。史記「技ー劍撃ー柱」北史「以ニ寅石一撃ニ打公門ー」又、敵をうち、仇をうつにも用ふ。○打は撃也と註す。用法廣し、又、何の義もなく用ふることあり、打殺・打睡等の如し。猶ほ國語にうちぎき」「うちふす」といふが如し。○撲は小撃也、ぼとぼとと打つ當る義。「等撲ー衣」「撲ー鉦」の類。○拍は手のひら又は拍板ニ物の類をうつなり。○撫は拍に同じ、ただ撫は手に力を入れてうつなり。○搏は輕く物に當ててうつなり。書經「搏ニ拊琴瑟ー」○撾は鉦鼓をうつなり。○撾・扑・捶の三字は「むちうつ」と訓む、刑罰の時、杖にてうつなり。○殴は杖にて人をたたくなり。觀文「殴捶ニ撃物ー也」

【伐閥】バツ てがらや經歴、又、其の家がら。唐書、車千秋傳「無ニ他材能ー、又無ニー功勞ー」‖閥閲。

【伐柯】バツカ 斧の柄にする木をきる、斧の柄を作る爲めに木を伐る者は、其の執れる斧の柄の寸法を標準とす、以て人の娶るべき者は眼前に在るに喩ふ。詩、豳風、伐柯「ーー伐ー、匪ニ斧不ー克」

【伐鼓】バツコ つづみをうつ。詩、小雅「ーー淵淵鼓ー咽咽」

【伐性之斧】バツセイノオノ ○いのちをたちきるものの義、女色に喩ふ。呂覽、本性「出則以ー車、入則以ー鼓、務以自佚、命之曰ニ招蹶之機ー、肥肉厚酒、務以自強、命之曰ニ爛腸之食ー、靡曼皓齒、鄭衛之音、務以自樂、命之曰ニ伐性之斧ー」

【伐善】バツゼン 己の善卽ち所能に矜ける。論、公冶長「願無ーレー勞」

【伐木】バツボク 木をきる。詩、小雅「ーー丁丁」杜甫詩「ーー丁丁山更幽」

【伐謀】バツボウ 敵の計畫ヲ破りて行はれざらしむる。孫子「上兵ーレー、其次伐レ交」

【伐冰之家】バツヒョウノイヘ 卿大夫以上の貴き家、古時、卿大夫以上は喪祭に冰を用ふるを得、故にいふ。大學「ーー、不レ畜ニ牛羊ー」

【伐檀】バツダン 詩經、魏風の篇名、在位者が功なくして祿を受くるを刺りし詩。

【不レ伐】フバツ 自ら其の功にほこらず。論、雍也「孟之反ーレー」

【仳】

㊀ヒ　㊁ヒ　支　紙

㊀わかる（離別）詩、王風「有女ー離」㊁みにくき貌。

㊀フク・ブク　㊁ホク　㊂フカ・ブ　庚　陌　有

㊀ふす（俛）うつぶく。曲禮「寢毋ニ伏ー」かくす（匿藏）かくる（隱遁）書、大禹謨「嘉言罔ー攸レ伏」○かくれたる罪。漢書、趙廣漢傳「發ニ姦摘ー伏如レ神」○したがふ（服）罪に伏す。左、隱十一「既ニ其罪ー矣」○ふせぜい。戰國策「可ニ以置ー」○よる（憑）西京賦「ー櫺檻而頫聽」○陰曆六月の節の名、夏至の後の第三庚を初伏、第四庚を中伏、立秋後の初庚を末伏とす、所謂三伏なり、庚は金、金は火を畏る、故に此の極暑中には金氣が伏藏する義。㊂はらばふ、匍に通ず。史、范雎傳「膝行蒲ー」㊂鳥、卵をあたためる。漢書、五行志「承相府史家雄雞ー子」

【同訓異義】フク 伏・俯・仆・俛・臥・偃・偪○伏は起の反、面を地につけうつぶしになる義。禮記「經卑」伏」又、屈服の義とす。左傳「既ニ其罪ー矣」○俯は仰の反、うつむく義。禮記「磬ニ其俯仰ー伸」○仆はたふれ、ふするなり、偪に同じ。○俛は俯に同じ。○臥は坐の反、橫にねる義。禮記「晉殯寢而殯ニ于堂ー、周殯ニ于ー」○偃はふすとも訓む、仆なり、又橫に臥して息ふ義とす、偪息と用ふ。○偪は偃に近し、仰偃はかたぶきたふるるなり。

【伏陰】フクイン 陽の中に陰れてある陰の義、夏時に陰を生ずの陰の如きにいふ。國語「天無ニー陰ー地無ニ散陽ー」

【設レ伏】セップフク ふせぜいをおく。漢書「出レ奇ーレー、嬌詐之兵設作」

【伏甲】フクカフ ふせぜい、よろひを著けた

る兵を伏せ置く。史、刺客傳「公子光出二其ー一」‖伏兵・伏戎。

【伏羲】フクギ 上古の帝王の名。風姓、聖徳あり、日月の明に象る、故に太昊といふ、民に佃漁牧畜を教へ、犠牲を養ひて庖厨に充つ、故に又、庖犠といふ、始めて八卦を畫し、書契を造る。

【伏刑】フクケイ つみにしたがひ服す。‖伏罪・服罪。

【伏劍】フクケンニアス 自殺するをいふ。史、陳讓傳「ー一自殺」

【伏虎】フクコ うづくまれるとら。韓詩外傳「楚熊渠子夜行、見二寢石一以爲二ー一、射レ之、沒レ金飲レ羽」

【伏竄】フクサン かくれてあらはれざるあだ。晉子「ー一在レ側」

【伏在】フクザイ ひそみかくれてある。

【伏罪】フクザイ つみにしたがひ服す。左、隱十一「既伏二其罪一矣」‖伏刑。

【伏竄】フクサン にげかくれる。賈誼文「造鄒ー一兮騊駼遠郊」

【伏雌】フクシ 卵を伏せてゐる雌どりの雞。風俗通「百里奚仕レ秦、其妻就レ之、百里奚、五羊皮、値別時、妻ー一、炊二扈廚一、今富貴、忘レ我爲」

【伏日】フクジツ 盛夏の日。字解を見よ。漢書、東方朔傳「ー一詔與二從官一肉」‖三伏。

【伏刃】フクジン やいばに伏し、死する。漢書「卻レ秦ー一」‖伏劍。

【伏戎】フクジュウ ふせぜい。易、同人「九三、ー二ー于莽二升二其高陵一、三歲不レ興」

【伏從】フクジュウ 服從に同じ。

【伏膝】フクシツ 漢の文帝の時、能く尚書を治むる者を求め、伏生を得たり、年九十餘、老いて行く能はず、乃ち太常掌故鼂錯をして其の家に就きて之を受けしめ、二十九篇を得たり、今文尚書これなり。

【伏生】フクセイ 前條を見よ。

【伏線】フクセン 文章の組立上、後に出づる事柄の導火ヒモとなる語句。

【伏奏】フクソウ 伏して天子に奏を申し上げる。齊書、倖臣傳論「ー一之徒、旣寵

【伏誅】フクチュウ ふしてながめる。‖俯瞰。

【伏兎】フクト 車の下の軸に當る處、ところしばり。考工記、注「古謂二之轅一、亦謂二之輿、或謂二之ー一、伏於軸上、納二於車底一、方孔、使二與軸一相鉤連一也」

【伏弩】フクド 弓隊の伏兵。

【伏匿】フクトク ふしかくる、かくれひそむ。史、龜策傳「聖人ー一、百姓莫レ行」

【伏拜】フクハイ ふしをがむ。後漢書、南匈奴傳「單于當二ー一受二詔」

【伏望】フクボウ ふしてのぞむ。

【伏波將軍】フクハショウグン ○漢の武帝の時置きし將軍の名(漢書、南粵傳)○後漢の馬援も亦此官に拜す、よりて馬援の稱とす。後漢書、馬援傳「雖二習ー一兵事一、未レ嘗二交陣一」‖馬伏波。

【伏法】フクハフアス 法律に服して刑を受ける。漢書「假令僕ー一受レ誅」

【伏兵】フクヘイ 敵を襲ふ爲めに兵をかくし置く。ふせぜい。史、淮陰侯傳「ー一從二間道一以二木罌一渡レ軍」

【伏弊】フクヘイ 伏兵ヘイを林莽の中にかくす、伏戎を見よ、後世、匿監ヒンの潛み匿るるにいふ。

【伏魔大帝】フクマダイテイ 明の萬曆四十二年に敕して蜀漢の關羽を封じて三界——と爲す。‖監增。

【伏魔殿】フクマデン 惡魔の隱れ居る所「水滸傳」‖魔窟・魔界。

【伏臘】フクラフ またつの三伏の日と、陰暦十二月の極寒の日と。後漢書、襄延傳「歲時ー一、輒休二諸徒一」

【伏竜隱淪】フクリョウインリン 世にかくれたる賢者。晉林伐山故事「鄧艾號二伏竜、陸機號二隱淪一」

【伏流】フクリュウ 地下をかくれ流るる水。錢起詩「藥井通二ー一」

【伏鱗】フクリン 深くひそみかくれたる魚。

【伏龍鳳雛】フクリョウホウスウ かくれてゐる龍と、鳳凰のひなと、未だ世に知られざる大人物に喩ふ。蜀志、諸葛亮傳注「襄陽記曰、備生俗士、數歲時、擇二可レ與者一、而未レ遇、徐庶・石韜與二備一善、謂二備曰一、諸葛孔明・龐士元也」

【伏歷】フクレキ 馬が廐の中に伏す、歷は櫪に通ず、廐のねだ板。漢書、李尋傳「不レ可レ不レ可レ以觀レ道」注「ー一、謂二伏二櫪歷一而休之也」‖伏櫪。

【伏櫪】フクレキ 前條に同じ「老驥ー一」

【伏帷】フクイ 謹みて考へ思ふに、多く奏疏に用ふ。李密、陳情表「ー一聖朝以レ孝治二天下一」

【伏願】フクガン 謹みてねがふの意。多く奏疏に用ふ。

【伏屋】フクヲ 圖 低くきたなき家。‖蓬屋・蔀家

伢 ガ 麻

うつくし、うるはし(美)俚ー一は漢の女官の名。‖嬉好。

位 イ 寘 圓 圓

五畫

○くらゐ、ところ(所)其の處る所の地をいふ「方ー」「爵ー」の如し。○みぶん、天子の身分。史、伯夷傳「堯將レ遜ー一、踐於二羣ー一」人民の身分。中庸「君子素二其ー一而行」○くらゐす、其の所に安んずる。中庸「天地ー一焉、萬物育焉」○ただし(正)○つらなる(列)○人に對する敬語「各ー一」○圖 くらゐ、おも

み、品格。〇ばかり「三里ー」‖程許。

【位育】ヰイ 位は其の所に安んずる、育は其の生を遂ぐる。中庸「致二中和一、天地位焉、萬物育焉」に出づ、これ學問の極功にして聖人の能事なり。

【位階】ヰイ くらゐの等級。

【位號】ヰイガウ くらゐ、爵位名號。吳志「策時年少、雖レ有二ー一、而士民皆呼爲二孫郎一」

【位記】ヰイキ 級位の旨をしるせるかきつけ。

【位記返上】ヰイキヘンジャウ 國位記を天子にかへし奉る、位ある者が不正の行爲、又は禁錮以上の刑に處せられし時、其の位階を取上げらるる制度。

【位次】ヰイ 位の次序。史、陳丞相世家「以二絳侯勃一爲二右丞相一、ー第一」‖位序・席次。

【位序】ヰジョ 前條に同じ。

【位署】ヰショ 國古、官と位とを連ねて、公文書に署する式。官と位と相當すれば、官を上にす「中納言從三位某」の如し。官位相當せざれば、位を上にして、位高く官卑きは、行の字を加へ「正二位行大納言」の如し。官高く位卑きは、守の字を加ふ「從四位守治部卿」の如し。‖署衙。

【位置】ヰチ 人、又は物の在るべき所。宣和書譜「宋米ー有レ序」

【位秩】ヰチツ 位と俸祿と。又、位に附けるふち。北史「不レ加二ー一」

【位田】ヰデン 國古、位階に付けて給せられし田地。親王は一品八十町より四品三十町に至る。臣下は正一位八十町より從五位八町に至る、各等差あり。

【位牌】ヰハイ 神位に置きて祭る牌。朱子語類「如祔二祭伯叔一、則附二於曾祖之後一、在二ー一西邊一」‖木主・位版・神主。

【位袍】ヰハウ 國古、朝臣の著用せし禮服のうはぎ。位階によりて色を異にす。

【位望】ヰバウ 地位と人望と。北史「ー隆重、寵過二目表一」

【位版】ヰバン 位牌に同じ。

【位封】ヰホウ 國古、諸王及三位以上の諸臣の位に付けて給せられし封戸。

【位服】ヰフク 國位のみ有る人の朝廷に出る時の服。

【爲レ位】ヰスルヒトヲナス 其の職責を盡さずして徒に其の位に在るをいふ。論語、尚書公、謂文仲其レー者與」

【不レ謀レ位】ヰヲバカラズ 君子は位のなきを患ふることなし。論、里仁「子曰、ー——患レ所二以立一」

【偏レ位】ヘンヰニヨル 其の官位にそなはる、官位に在るといふ謂。漢書、魏相「臣相幸得ーレー」

【位不レ副レ德】ヰハトクニソハズ 貴き位に登れば自然に驕りの心の生ずるをいふ。晉、周顗「ー——、誠不レ期二後、蓋位推德、無レ戰二前勳一」

【位卑言高】ヰヒクシテゲンタカシ 位ひくきに言說を高くして大臣などの政治を視此といふ。孟、萬章「ー——罪也」

【佑】イウ 宥

もと右に作る。祐に同じ

たすく、たすけ（佐・助）「天ー」

【佑啓】イウケイ たすけて開き導く。孟子「ー二ー我後人一、成以レ正無レ缺」書、君牙に啓祐に作る。

【佑助】イウジョ たすく、たすけ。‖祐助。

【佚】㊀イツ・イチ 質 ㊁テツ・デツ 屑

㊀やすし、やすんず、たのしむ（安佚）逸に通ず。〇あそぶ、なまける。〇あやまち（過失）書、盤庚「惟予一人有ー一言」〇のがる、かくる（隱遁）ほろぶる、棄てらる、逸に通ず「ー書」〇うつくし（美）なまめかし「ー女」〇行列。㊁ゆるし、ゆるくす、しまりがない（緩）〇たがひに、かはるがはる。史、十二諸侯年表「四國ー興」‖逸。

【佚遊】イツイウ きままにあそぶ。論、季氏「樂二驕樂一、樂二ー一」‖逸遊。

【佚道】イツダウ 民を安んじ勞ふみち。孟、盡心「以二ー一使レ民、雖レ勞不レ怨」

【佚女】イツヂョ なまめきたる美人。‖艷

「見二有娀之ー一」

【佚蕩】イツタウ あそびたのしみて身にふける。離騷「畢ー遊以ー一兮」

【佚罰】イツバツ あやまち、つみ。字解を見よ。

【佚老】イツラウ 〇世を遁れし老人。蘇軾詩「伊川ー一愛如レ猶」〇老人を安んぜしむ。宋史「設二祠祿之官一、以ーレー優レ賢」

【佚樂】イツラク あそびたのしむ。‖逸樂。

【佚宕】イツタウ 次條に同じ。梁簡文帝賦「追二寂閑一而曠遠、任二女休一而ー一」‖跌宕。

【佚蕩】イツタウ しまりなし（放縱）だらしない。漢賈、揚雄傳「爲レ人、簡易ー一」‖跌蕩・放蕩・佚宕。

【何】㊀カ 歌 ㊁カ 哿

㊀なに、なんぞ（曷・奚）〇いづれ（孰）〇いかん、いづくんぞ（安）〇いくばく、無（何は無幾何に同じ。〇なじる、せむ、詞に通ず。㊁になふ（荷）おふ（負）たふ（任）

【何曷奚胡盍焉那庸】カカツケイコカエンナヨウ 何・曷・胡・盍・那・庸・奚・詎〇何は「なにぞ」「いかがぞ」と、疑ひて、問ひただす辭なり。〇曷は「なんとして」と訓す、輒く詰る意あり。〇胡は曷に同じ、「胡無不レ止、曷令不レ行」の如し。〇盍は何不の合字なり「何ぞ何何せざる」

と、かへり訓む。孟子「王欲レ行レ之、則寤反二其本一矣」〇那は奈何の合字なり、「なんで」と譯す。唐詩「隔二那邊一北地一來」〇那は何也、また焉也とも註す「いづくんぞ」とも訓む。晉世家「此天所レ置、庸可レ殺乎」また庸何また庸詎とも連用す「庸何傷」「庸詎可乎」の如し。〇奚は何也と註す。六書故に「奚・何・胡・曷、一聲之轉、義同」とあり、四字大抵は同意なれども、奚は不思議に思ひ、その根本を推して問ふことを主とす。孟子に「奚不レ去也」とあるが如し。〇詎は巨・遽に作る、同音同義なり「未レ知詎也」と註す、史記に「沛公不二先破一關中一兵一、公巨能入乎」とあるが如し。

【何承】ショウ　字は平叔、三國の時、魏の宛の人、進の孫、颺の公主に尚す、容姿に美なり、少くして才の秀でたるを以て名を知らる、晉爽引きて散騎侍郎と爲す、侍中尚書に遷り、僕射列侯を贈ふ、晏・夏侯玄等と、談じて清談をなす、天下の士大夫之を慕ひ、遂に流風を成して復制すべからず、論語集解の著あり。

【何景明】ケイメイ　明の信陽の人、字は仲默、弘治の進士、詩・古文に工なり、李夢陽と共に復古の學を唱へ、天下翕然として之に從ひ、文體一變するに至る。

【何首烏】シュ　蔓草の一種、多年生蔓草。本草「――有二赤白二種一、赤者雄、白者雌」

【何紹基】ショウキ　清の湖南道州の人、字は子貞、蝯叟と號す、道光の進士、編修に官し、書に工にして世の貴めに賓重せらる。

【何郎】カロウ　〇梁の何遜をいふ、水部員外郎たり、故にいふ。梁書「揚州廨宇有レ梅盛開、何遜常吟二詠其下一、後居二洛陽一、思レ梅不レ得、請レ再任揚州一、從レ之、既至、適花盛發、大開二東閣一、延二文士一、賦詩終日」高啓、梅花詩「自レ去二一無二好詠一東風愁殺幾回開」〇何晏をいふ。宋璟賦「儀如二傅粉一、是謂二一一」何晏を見よ。

【何楚】カソ　物の粗末なるをいふ。趙宋の時、京師に一一あり、賣る所の物麁惡多し、故に名づく。齊言故事「物之不二精好一曰二一一」

【何如】イカン　いかに、どのやうに。孟、梁惠王「只二五十步一笑二百步一、則一一」

【無何】ムカ　まもなし。范成大詩「醉前現在皆騰醒、飯後一レ一爛漫眠」

【何許】コキョ　何の處。晉書、山簡傳「山公由二一一往至二高陽池一」

【何有】カユウ　なんの難きことなし。論、里仁「能以二禮讓一爲レ國乎、一一」

【何必】カヒツ　あながち、それのみに限らずとの義。孟、梁惠王「一一曰レ利」

【何居】カキョ　怪み問ふの辭。禮記「一一、我未二之前聞一也」〓何故

【有二何面目一】ナンノメンボクアラン　人にあはす面目なし。漢書、趙充傳「貪レ祿而避レ殺、毋以全レ義、――、立二于天下一」

【伽】カ　歌

〇梵語の「カ」「ガ」の音をあらはすに用ふ。〇なすび。〓茄。〇國とぎ（伴侶）

【伽陀】ガダ　梵〇讃美詠歌の義。耶律楚材詩「一一誦罷爐煙冷」〇妙樂の名。華嚴經「如二阿一一華一能滅二一切苦一」李華文「脩二大乘一者一一妙藥」

【伽藍】ガラン　梵てら。佛道を修業する處の名義、僧一一、譯曰二衆園一」〓精舍。

【伽楠】ナン　梵熱地に産する木材の心より製せし香の名、沈香の一種、黒く堅きを上品とす。〓奇南・伽南・伽蘭香。

【估】コ　虞

〇みつぎ（市稅）又、ねぶみする、又、あたひ（價）唐書、陸長源傳「高鹽價賤一」〇うる（賣）論、子罕「一之哉、一之哉、我待賈者也」かふ（買）〇あきなひする人。北史、邢巒傳「商賈一交入」〓商賈

【估客】コカク　あきうど、貨物を販ぐ者。世說「聞二江渚間一一船上、有二詠一レ詩聲一、遂有二情致一」

【估衣】コイ　自ら其の儕をてらひ貶る。隋書、開皇中、有二曹妙達等一、皆妙二絲管絃一、特二其善技一一二公王之間一、爭相慕尚」

【估稅】コゼイ　商品に課する稅。竹書「一一悉除、市無二二價一」

【佝】ク　虞　有

〇一短くして甚だ醜きき貌。〇おろか（愚蒙）〇かかはる。〓拘。

【佝僂】クル　せむし、くぐせ。列、黄帝「一一承レ蜩」承レ蜩とは蜩を空に拋ちて巧に之をうける技。〓痀僂。

【佐】サ　箇

もと左に作る

〇たすく（助・輔・貳）周禮、天官「一王均邦國」〇たすけ、その（副貳）又、其の官「軸一」「王一之才」〇すすめる（勸）「一食」〇一書は隸書即ち今の楷書をいふ。魏書、江式傳「亡新居攝時、有二六書四曰一書、秦隸書也」

（貝部八畫）の條を見よ。

【估價】コカ　物のねだん、相場。唐書、陸贄傳「一一宜レ視二月平一」

同訓異義 佐（タスク）助・輔・翊・翼等の訓は助（力部五畫）の條を見よ。

【佐官】（サクワン）圖大佐・中佐・少佐の總稱。

【佐史】シ 縣の屬官（後漢書、光武紀）

【佐貳】（シ）そへやく、すけ、輔貳の官。唐書「主以二郎官一、其一一皆御史」

【佐車】（サシャ）そへぐるま。左、或二「鄭周父御二一一」一副車・武車。

【佐理】（サリ）聖天子をたすけて太平を致す。陸機、辨亡論「君子者何也、一一扶レ命、道レ政明レ法、親レ時而行、有道而臣」人者也」

【佐治】（サチ）佐理に同じ。史、周紀「以佐二成王治一、治百レ今二名於天下一」

【佐幕】（バク）○將軍の幕府中に在りてこれをたすくる（周行者、爲二諸侯一表）○國嘉永・安政以來、尊王攘夷の論、囂囂しかりし時、幕府を助くるを主義とせし一派」「一一家」

【佐命之士】（サイ）天命を受けて天子となるべき人を輔けて建國の大業を成さしむる士。漢書、李陵傳「佐命立功之士」後漢書二十八將論「成能感二會風雲一、奮二其智勇一稱爲二一一一」

【佐吏】（リ）すけやく、上官をたすくる部下の役人。晉書、陳壽傳「在二武昌一、諸一一殷勤之徒、乘二秋夜一往共登二南樓一」目屬官。

【佐理】（リ）政治を助けて國を理むる。

【作】㊀サク ㊁サ 佳遇

㊀なす、つくる、こしらへる（爲）○書をあらはす「著一一」○田をつくる（治田）「耕一一」○はたらく、はたらかす（動）○つかふ（使）もちふ（用）○かはる、かへる（變）うごく、うごかす（動）顏色などを變へ動かす。史、蘇秦傳「韓王勃然一一色」○はじめつくる（創造）○おこる、たつ（興起）易、乾卦「聖人一而萬物睹」ふるひおこす（振興）「振一」書、康誥「一新民」○おこす、生ずる。韓愈、潮州刺史謝上表「毒霧瘴氛日夕發一一」㊁しわざ（所爲）○はたらき（作用）○ふるまひ「振一」「動一」○おく（起）○けづる（削）○國さく、穀菜類のできばえ「豐一」「不一」○さく、こしらへ、細工。

同訓異義 ス作・爲・成・就・濟○作は爲なり、はじめつくる義。○爲は事をするなり。左傳「老夫耄矣、無二能爲一也」○成・就の二字、共に爲したる事をしとぐるなり。小學「德器成就、大異二衆人一」○濟は成なり、なしはせるなり。書經「必有レ忍也、乃有レ濟」

【作爲】（サクヰ）つくる、つくり設くる。

【作聖】（サクセイ）○著作せし主意。漢書、藝文志「爲二之序一、皆其一一」○心を用ひて創作する。法苑珠林「常須二一一不レ起二雜緣一」

【作家】（サクカ）○つくる人、文章・詩歌・小說・美術品などを創作する人、又、著作の名人。唐氏雜記「王績好與レ人作二碑誌一、有下送二謝策一者上謂レ王神門維曰、大一一在二那邊一」○ナイスに結好して家庭をつくる。○財産を蓄へて立派なる家業を立てる。晉書、食貨志「桓帝不レ能レ一一、曾無二私蓄一」

【作邑】（サクイフ）十二支の酉の異名。爾雅「太歲在レ酉、曰二一一」

【作柄】（サクガラ）圖農作物のできばえ。

【作曲】（サクキョク）歌に曲譜を附ける。

【作官】（サククワン）官吏となる。

【作興】（サクコウ）○おこる。孟、離婁「聞二文王一一一日盡レ歸乎來」○ひきおこす目振興。

【作事】（サクジ）圖家を作る。普請する。

【作事奉行】（ブギャウ）徳川時代に公の營繕普請の事を司る來行職。

【作仕】（サクシ）詩文をつくる。又、つくりたる詩文。

【作人】（サクジン）○田を耕作する人。異祥記「在レ田一一」○惡俗を化して新らしき人を作る。詩經「周王壽考、遐不レ一一」轉じて人才を養成する義とす。

【作者】（サクシャ）○制度を創作する人。禮、樂記「一一之謂レ聖、述者之謂レ明、明聖者述作之謂也」○著述する人。○モッテ起ちて隱れ去るもの。論、憲問「一一七人矣」

【作手】（サクシュ）著作する人。淮北偶談「實本朝一一一也」

【作成】（サクセイ）つくりなす。漢、郊祀歌「經天地一一二四時」

【作善】（サクゼン）善をなす。書、伊訓「一レ降二之百祥一」

【作戰計畫】（サクセンケイクワク）圖戰をするについてのはかりごと。

【作輟】（サクテツ）或は爲し或はやむる、事を爲すに常なき義。法言、孝至「有レ人則作レ之、無レ人則輟レ之、之謂」僞、親レ人者審二其一一一而已矣」

【作頭】（サクガシラ）大工の棟梁（サクの音典「修二造倉廩一各委二官及一一姓名、扁刻題記」

【作得】（サクトク）圖耕作して租を納めたる殘餘の得分。

【作揚】（サクヤウ）圖耕作する處、畑畑。

【作坊】（サクバウ）しごとば、作事場。五代史「唐帝夜聞二一一鍛甲聲一以爲二兵

至、達レ旦不レ寐」

【作品】サクヒン つくりたる品。

【作病】サクビヤウ いつはりて病氣なりといふ。‖假病。

【作文】サクブン 文章をつくる。‖屬文。又作りたる文。

【作毛】サクモウ 圖みのり。稙穀の出來。

【作物】サクモツ ○圖田畠に植うる植物の總稱。○つくり出せしもの、詩歌・文章・美術品などにいふ。‖作品。

【作俑】サクヨウ 俑は偶人、偶人を作りて葬に殉ぜしむ、これ後世人を以て葬に殉ぜしむるの階をなせり。故に惡例をはじむる義とす。孟、梁惠王「孔子曰、始作レ俑者、其無レ後乎、爲二其象一レ人而用レ之也」

【作勞】サクラウ 農作の骨折。陳遊詩「歸レ地勿二違農一、何曾憚二作勞一」‖作苦。

【作力】サクリキ 仕事につとめる。管子「民非二作レ力、毋二以致一レ財」

【作例】サクレイ 圖詩歌、文章など、手本として示すもの。

【作料】サクレウ 圖物を作りし賃。

【作業】サギヤウ しごとをする。漢書、高帝紀「不レ事二家人生産一」

【作法】サホフ 圖たちゐふるまひのしかた。

【作用】サヨウ はたらき。傳習錄「作在二一一」

【作用言】サヨウゲン 圖はたらくことば、今いふ動詞。

【作歷生】サリヤクセイ 如何にといふ意。禪林句

【伺】シ 寘 又、覗に作る

○うかがふ（偵候・訪問）○ひそかにみる（窺察）○ねらふ（狙）○まつ（待）○圖うかがふ、問ひただす、質問する。

【伺候】シコウ 伺・窺・偵・候・狙・覗○何は俟なり、察なり、ひそかに探りうかがふなり、覗に同じ。○窺はのぞき見る「管中窺レ豹」の如し、覗に同じ。○偵はひそかにさぐり伺ふ「探偵」「偵察」と熟す。○候はまちをりて樣子を窺む義「斥候」と熟す。○狙はねらひをつけるなり、「狙撃」と熟す。○覗は視なり、覘なり、すきまより見るなり、窺に近し、覗に同じ「王使二人覗二夫子一」この如し。

【伺間】シカン すきまをつけねらふ。孔叢子「日夜一レ一」‖伺隙。

【伺窺】シキ ひそかに樣子をみる。柳宗元文「蟄形決目潛一レ分」

【伺隙】シゲキ 乘ずべきのすきまを偵伺する。漢書「窺レ間一レ一」‖伺間。

【伺候】シコウ 目上の人の安否を伺ふ。曾愈、送二李愿一歸二盤谷一序「一二于公卿之門一」

【伺察】シサツ うかがひみる、人の擧動をうかがひ探る。北史、魯琮傳「出二入宮掖一一二內外一」‖窺察。

【伺星】シセイ 辰星の別名「御覽」晨一に星に作る。

【伺晨鳥】シシンテウ 天の將に明けんとして先づ鳴く鳥、雞の類。陸機詩「賢彼一一、揚レ聲當及レ旦」

【伺望】シバウ うかがひのぞむ。後漢書「密令二太史一一之」

【伺風鳥】シフウテウ かざみ、竿上に鳥を刻みて置き、風の方向を見るもの。宛委餘編「夏禹作一一、卽相竿也見二古今注一」‖相風。

【伺辦】シベン 圖上にうかがひて許可せらる。

【佽】シ 紙

一は小なる貌。詩、小雅「一一彼有レ屋」一解に解せり。

【佽佽】シシ 小なる貌。詩、小雅「一一彼有レ屋」‖齷齪の意。日差差。

【似】シ ジ 紙 佃は本字

○にる、にす（省）類する。○つぐ（嗣）○うく（承）○ささぐ（奉）賈島詩「今日把一一君、誰有二不平事一」○しめす（示）○たぐふ（類）○擬議して未だ定めざる辭。

【似續】シゾク つぐ、ひきつぐ、あとをつぐ。詩、周頌「以似以續」

【似是】シゼ 似せて書きうつす。日席ゲ。

【似類】シルイ によりたるもの。王充論衡「一相一一、其實非也」‖類似。

【似續】ジゾク 圖ありすがた。日肖像ゲ。

【似而非者】ニジヒヒシヤ 一見、是に似て實はしからず。えせ。孟、盡心「惡二一一一也、惡二莠恐二其亂一レ苗也」戰國策「幽莠之幼也似レ禾、驕牛之黃也似レ虎（中略）此皆似レ之而非者也」

【佃】シ 眞

○のぶ、のばす（舒）易、繫辭「引而一レ之」○なほくす（直）屈する者をして直からしむ「一一寃」○のび、せのび。曲禮、注「志倦則欠、體倦則一レ也」○圖白ます「一一」

同訓異字 伸・申・遙・陳等の別は遙（差部五畫）の條を見よ。

【伸冤】シンエン せむしを療治してのばす。枚乘、七發「一レ一起レ蹙」

【伸腰】シンエウ こしをのばして息む。陸游詩「一一午飯餘」

【伸寃】シンエン 無實の罪をのべはらす。‖申寃。

【伸吭】シンカウ ものを待つさま。柳宗元文「仰レ首一レ一、張レ目而視曰、庶幾

有二高レ路而垂レ仁者一耶」＝引吭。
【伸筆】シンヒツ　くびを長くのばす。宋史「一レ一就レ刃」
【伸欠】シンケン　のびとあくび。字解を見よ。蔡観文「一乃作」＝欠伸。
【伸脚】シンキャク　のぶるとちぢむと。蘇軾詩「機牙任二一一一」
【伸長】シンチョウ　ながくのばす。
【伸張】シンチョウ　のばしはる。おしひろむ。
【伸眉】シンビ　ひそめしまゆをのばす。愁をひらく。漢書「可三復一二一於後一」顔氏家訓「愁眉始得レ伸」

【征】 セイ　庚

一伐はあはせて行く貌。又、おそる(懼)

【侶】 ㊀セウ　㊁セウ　蕭　篠

㊀たすく(介)「一介」紹に通ず。㊁宗剛にて又たるものの位置「一穆」昭に通ず。
【侶伝】セウデン　中に立ちてひき合ふ＝紹介・介侶。

【佗】 ㊀タ　㊁タ　㊂タ　歌　個　箇

㊀ほか、他・它に通ず。○かれ(彼)○よこしま(邪)法言、問道「君子正而不一」○おふ(負)背に負ふ。○になふ(荷)駄に通ず。○うるはし(美)○委一ダ

は雍容自得ユウヨウジトクタルの貌。詩、鄘風「委委一一」一説、佗は支の誤、音イ。㊁くはふ(加)㊂かうむる(被)史、張儀策傳「醪レ酒一一レ」＝被髪。○㊀わぶ(憂)佗の誤用。○わびる、罪を謝す。○わびし(落莫)
【佗佗】タタ　容うるはしくゆったりとせる貌。詩、鄘風「委委一一、如レ山如レ阿」
【佗髪】ダハツ　髪を被ること。史、張儀傳「醪酒一レ一」＝被髪。
【佗負】タフ　背になふ。漢書「以二一馬一自一一」

【但】 タン　旱

○ただ(単唯)歐陽修、朋黨論「當退二小人之偽朋一」○ひとり。○すべて(凡)○いたづらに、ただに(徒)無意味の助辭。劉廷芝詩「一看古來歌舞地」○むなし(空)○㊀ただし、それとも又、一書は本文の次に書き添へて取りのけ即ち例外の場合を示す文言。
【類字】人に从ひ旦に从ふ、又、亶に作る。但は別字。
【同訓異字】ダ但・噉・只・止・徒・弟・啻等の別は噉(口部八畫)の條を見よ。

【住】 チュウ　遇　畫　ヂュウ

○すむ、居處を定めて居る、又、すまひ。○やむ。(止)中止する。李白詩「兩岸猿聲啼不一」○とどまる(留)去の對。杜甫詩「去一與願遂」○たつ(立)射雉賦「清道而行　擇レ地而一」をる(居)
【住居】ジュウキョ　住宅に同じ。
【住下】ジュウカ　㊀止宿する。
【住家】ジュウカ　すまる。＝住宅。
【住戒】ジュウカイ　㊀佛の戒を心にとどめてまもる。佛遺教經「汝等比丘已一一」
【住止】ジュウシ　すまひ居る。陶弘景文「繋二陰居一一一」
【住喫】ジュウキツ　㊀物を食ひ又は飲ふことをやめる。
【住手】ジュウシュ　手をやすめる。＝止手。
【住所】ジュウショ　すまひ。蘇舜欽詩「念君一一近不レ遠」＝住處。
【住職】ジュウショク　住持の條解に同じ。
【住僧】ジュウソウ　其の寺に住める僧。
【住宅】ジュウタク　すみか、すまる。＝住家。
【住持】ジュウヂ　㊀一寺の主たる僧。寺中に居住して事務を總べ持する義。老學菴筆記「小院一一名二臨濟一」＝住職・主僧。○此の世に住みて佛法を維持する義「一一三寶」(三寶は佛・法・僧)
【住者】ジュウシャ　一所にとどまり居る、客は助字。鄭常詩「僧家無二一一一早晩出二東林一」
【住舘】ジュウカン　住宅に同じ、館はやしき。
【住人】ジュウニン　其の地に住みてゐるひと、土地の人。夢渓筆談「隨州大洪山一一李處殺レ人」
【住民】ジュウミン　一定の區域内に居住せるたみ。
【住吉物詣】スミヨシモウデ　書名、二卷、作者未詳、我國王朝時代の小説、中納言藤左衛門督なる人の女が縁壮の成待に遇ひて住吉に參籠せしが、終には立身せし趣向に作りしもの。

【佇】 チョ　語

○たたずむ、立ちどまる、ひさしく立つ(久立)詩、鄘風「瞻望不レ及、一立以泣」○まつ、待ちて居る。
【佇見】チケン　たたずみ見る。李嶠詩「一一燕然上、抽毫頌二武功一」
【佇眷】チケン　たちとまりてかへりみる。
【佇念】チネン　たたずみ思ふ。鮑照賦「望二天涯一而一一、撞二雄劍一而長歎」
【佇眄】チベン　たちとまりてみる。陸機詩「一一要二遐妓一倚レ軒玩二餘芳一」
【佇立】チリツ　たたずむ、久しく立つ。字解を見よ。

【低】 テイ　霽　又、氐に作る

○ひくし。高・昂の對。○價が

やすい。蘇軾詩「不見鱸魚貿自ー」○聲がひくし「ー聲」○うなだる（俛・俯）○たる、さがる（垂）談藪「黍熟頭ー、麥熟頭昂、黍麥俱有」所以ー昂」

同訓異語 低・卑・庫・矮○低は高の反なり、またひくく垂るる義、低昂と熟す。○卑は高・尊・崇の反なり、地位のひくきに用ふ、用法低よりは狭し。○庫は卑に同じ。○矮はせいのひくきなり、矮人・矮屋の如し。

【低音】テイオン 通常の音律よりひくきもの。

【低下】テイカ さがる。‖下低。

【低酒】テイカイ やすね。居家必用「折為二ー一」

【低印】テイイン 或はひくくなり或は高くなりて定まらず。漢書「奮迅ー一、頓足起舞」‖低昂。

【低昂】テイコウ 前條に同じ。談藪「王元景大酔、楊直齋曰、何太ー一」

【低氣壓】テイキアツ 氣象上の用語、氣壓計が七百六十粍以下に降りし時の空氣の壓力にして多くは風雨を伴ふ。

【低吟】テイギン 聲ひくくうたふ。‖低唱。

【低徊】テイカイ ○立ちもとほる。首をたれてさまよふ貌。史、孔子世家贊「ー一留ー之不ー能ー去」○思ひ煩ふ意あり。屈原、九章「ー一夾鏡、宿二北姑一兮」‖低佪。○延びやかに廻る。楊雄、解嘲「大語叫呼、大道ー一」

【低佪】テイカイ 前條に同じ。潘岳賦「嗟ー一而不ー思」

【低減】テイゲン ひくくへらす、價をやすくする。

【低語】テイゴ 聲ひくくかたる。ささやく。曹松詩「青蛾ー一指二東方一」

【低唱】テイショウ 聲ひくくうたふ。蘇軾詩「何如ー一二三杯」‖低吟。

【低地】テイチ ひくき土地。論衡「不ー得二南岸ー一一不ー能ー通流入二乎東海一」

【低頭】テイトウ ○かしらをたれる、屈辱する。後漢書、梁鴻傳「無ー乃欲ニー一就二之乎一」○頭を垂れて恐懼する。禮記、註「謝拜、拜ー一也」

【低能兒】テイノウジ 図 あたまのはたらきのにぶき子、白癡ナドの兒。

【低眉】テイビ 垂れさがるまゆ（語林）

【低迷】テイメイ はるかに低くさまよふ貌。李商隱詩「恍惚無ー一悦明又暗、ー一不ー已斷還連」

【低落】テイラク ひくくさがる。

【低利】テイリ やすき利息。

【低率】テイリツ やすき利息。‖低利。

【低廻】テイカイ ねだんがひくい、價がやすい。

【低窪】テイア ひくくくぼめる土地。鄭元祐詩「青眼不ー一論ー一價、ー一擧望ー一酬」

【佃】テン デン 先 田・畋に通ず

○つくだ（治田・墾田）開墾せし田地。○たつくる（農耕）○他人の田を借りて作る農夫、小作人。宋史、食貨志「訂其主ー一以漁」‖畋。

【佃客】デンカク 小作人。宋史「以二小民役屬者一爲ニー一、使ー一之如二奴隷一」‖佃戸。

【佃器】デンキ 農具。後漢書「賦二與ー一、使ー一就二農業一」‖田器・佃具。

【佃漁】デンギョ れふ。禽獣に佃といひ、魚介に漁といふ。易、繫辭「蓋二取諸離一以ー一」‖田は獵。‖畋漁。

【佃具】デングー 農具。唐書「耕牛ー一」‖佃器・田器。

【佃戸】デンコ 小作人。五代史、周行逢世家「識時務者、押ニー一送租一入ー一城」‖佃客。

【佃作】デンサク 田を耕し作る。史、貨殖傳「民雖ー一不ニー一、而足二於衣食一矣」

【佃煮】ツクダニ 図 小鰕・小蝦ニ醤油ヲ始のむきみ等を醤油にて煮つめたる食品。江戸時代に隅田川の口なる佃島ニテ創製せしが故。

【佔】㊀テン ㊁テフ 塩 豏

㊀うかがふ。‖覘。みる（視）○たる、下垂する（俛）○しむる、俗に占に通用す「ー據」「ー領」

㊁ーーはささやく、耳語する貌。

【佔耳】テンジ 耳を垂れる。韓愈、應ニ科目一時與ー一人書「俛ー一ー」

【佔畢】センヒツ 佔は視る、畢は簡なり、誦我を解せずして唯文字を讀むのみをいふ。禮、學記「今之教者、呻ニ其ー一ー、多ニ其訊一言及二于數一」

【佔佔】センセン ささやく貌。漢書、匈奴傳「令ニ喋喋而ー一ー」‖沾沾。一說、輕薄なる貌。

【佞】ネイ 徑

○はたらき、才あり、自ら謙して不ーといふ。晉語「夷吾不ー」○口才・辯才。論、先進「是故惡ー夫ー者」○ねぢけびと、辯才ありて心正しからず。○へつらふ、おもねる（諛）

解字 女に从ひ信の省に从ふ、女子の信はーに近きが故。俗に佞・侫に作るは皆非なり。

【佞奸】ネイカン 新の王莽南郊に哭せし時、これに諂ひ泣きしものは皆郎官となりし故事に本づきて上の氣に入るやうにつとむるにいふ。四征賦「擾ニー一以拜ー郎」

【佞惡】ネイアク 心ねぢけてへつらふ。又、其の者。後漢書「ー一清珍」

【佞巧】ネイコウ 辯才ありて、たくみにへつらふ。史、周紀「爲ー人ー一」

【佞幸】ネイカウ　こびへつらひて寵を得る者。史記に一一傳あり。
【佞倖】ネイカウ　前條に同じ。南史、恩倖傳序「及二斉帝世一、胡母顕個夫之徒、専二一一一

兄曰ニ一一一」○天子が同姓の諸侯を尊稱する語（儒禮）

【伯母】ボ をば、父母の姉、又、伯父の妻。（晉書、顧衆傳）ニ事ニ一一一以レ孝聞」

【伯俞泣レ杖】ハクユキフヲ 韓伯俞、性至孝なり、過ありて、母之を杖てば泣く、母曰く、能日汝を杖ちしに未だ嘗て泣かず、今泣くは何ぞやと、答へて曰く、往者杖たるれば當に痛みぬ、今や痛からず、母の力の衰ふるを知る、是を以て泣くと（說苑、建本）

【伯勞】ラウ もず。（爾雅）「鵙、一一也」（廣韻）「一一似二鵲鵙一喙短」‖博勞鳥。

【伯樂】ラク ○星の名。石氏星經「一一天星名、主レ典二天馬一」○古、孫陽といふ人、能く馬を相せしを以て名づく、轉じて能く馬の事に明かなる者の稱とす。（韓愈、送二溫處士一序「一一一過二冀北之野一、馬羣遂空」‖博勞。○國 馬の事に精しく、又馬の賣買に從事する者。

【伯樂一顧】バイラクイツコ 名馬が伯樂に遇ひて其の價を增したる故事、名君賢相の知遇を受くるに喩ふ。（戰國策「蘇代、曰、客有レ謂二伯樂一曰、臣有二駑馬一、欲レ賣、比三三旦一立二于市一、人莫二與言一、願子一顧レ之、請獻二一朝之費一、伯樂乃旋視レ之、去而顧レ之、一旦而馬價十倍」

【伯勞】ラウ もず。‖伯勞。

【伯主】シュ 諸侯のはたがしら。史記「四國迭起、更爲二一一一」‖霸主。

【伴】

㊀ハン・バン ㊁ハン・バン 寒 輯

㊀とも、ともがら、つれ（侶）「同一」○つれだつ、ともなふ（相從）○よる（依）はんべる（陪從）㊁—奐は閒暇ある貌。詩、大雅「一奐爾遊矣」

【伴侶】ハン つれあひ。（王褒文「鳴鑾相應、一一相從」

【伴食】バンショク 正客のおともをしてごちそうになる、轉じて無能の大官をそしりていふ。（唐書、盧懷慎傳「開元三年、與二姚崇一對二掌樞務一、自以爲更道不レ及レ崇、每レ事推讓之、時人謂二之一一宰相一」

【伴隨】バンズイ つきしたがふ、おともする。‖陪從。

【伴接】バンセフ しやうばん。‖接伴・相伴。

【伴僧】バンソウ 國 葬式の列にともなふ僧。

【伴誦】バンジュ ○貴族、又は富家の子弟の讀書する相手となる者。又其の役。○宋代の官名、宗室の教育を司る。

【伴侶】バンリョ なかま、ともがら、同伴の人。（韓愈詩「我來無一一、把レ酒對二南山一」‖儕侶。

【伴天連】バテレン 昔時、傳道の爲め、我國に來りし切支丹宗の宣教師の號、轉じて、切支丹の異稱。

【伴送】トモヲクル 國 古の諸部の長官。

【伍】

ヒ 支

○力あり。○おほし（衆）

【伍伍】ゴゴ ○力ある貌。詩、魯頌「以レ車一一」○駢り行く貌。

【佾】

ヒツ 質

○威儀あり。○みつ（滿）

【佾佾】ヒツ 禮容の貌。詩、小雅「威儀一一」‖悅悅。

【佛】

㊀フツ・ブツ ㊁ホツ ㊂ヒツ 質 月 物

古字

○さとる（覺）○はとけ（釋尊・浮屠）（韓愈、論二佛骨表「夫一本夷狄之人」○さかふ（逆）もとる（戾）‖拂。○ねぢる（捩）曲禮「獻レ鳥者一其首」○仿一はほのか、さもにたり。（揚雄、甘泉賦「仿一其若夢」‖彷彿。○佛蘭西フランス國の略稱。㊂さかんなり、勃浡に通ず、興起する貌。㊂たすく、たすけ。‖弼。○國 ほとけ、死せし人。○極めて柔和なる人、おひとよし。

【佛戀】ブツ 心うれへてふさがる貌。文選、注「一一、不安貌」‖弗鬱。

【佛海】ブツカイ ほとけのみち。佛道を海の廣きに喩ふ。（梁武帝文「同歸二一一」‖法海。

【佛閣】ブツカク てら。（白居易詩「一一正著一巍」‖浮屠・梵閣・佛刹。

【佛學】ブツガク 佛法の學問。（石林詩話「晉初爲二一一一者、皆從二其師一」

【佛眼】ブツガン 佛教をさとり得たる者の眼識。（黃山民詩「一一共レ燈明」

【佛龕】ブツガン ほとけを安置するづし。轉じて寺をいふ。（雞林志「鵝山有二一一一、林木益邃」

【佛義】ブツギ 佛法の意義。（南史「舒二莊老玄言一、尤善二一一一」

【佛經】ブツキャウ ほとけの經文。（晉書、何準傳「唯誦二一一一」

【佛供】ブツク 佛の前にそなへる食物。

【佛果】ブツクワ 佛に歸依するによりて得る善き報。（隋煬帝、設齋願疏「下度二未生一、上求二一一一」‖成佛。

【佛偈】ブツゲ 佛家の詩、佛を讃美する詩。（其の體、多くは四句づつなれば、四句の偈ともいふ。

【佛敎】ブツケウ 西紀前五百年頃、印度の釋迦牟尼シャカニ が說き出したるをしへ、因果を說き勸善懲惡を敎へ、さとりを開くを宗旨とするもの。‖釋敎・佛道・佛法。

【佛語】ブツゴ ○佛敎のことば（淨住子）○ブツ 佛蘭西語の略。

【佛工】ブツコウ 佛像をきざむほりものし。‖佛師。

【佛二師骨一表】ブツコツヲヒョウス 唐の韓愈の獻

せし文、嘉祥皇帝の元和十三年、功徳使上言す、鳳翔の法門寺の塔に佛骨あり、相傳ふ、三十年に一たび開く、開けば則ち歲豊に人安し、請ふ之れを迎へんと、帝其の言に從ひ、この年、十二月迎へて大内に入れ、留むること三日、王公士庶奔競野咽す、明年愈此の表を上りて佛の信奉するに足らざるを極諫す、帝、表を見て大に怒り、愈を貶して潮州の刺史とせり、文は唐宋八家文讀本に出づ。

【佛葬】ブツサウ　佛教の儀式を用ひて行ふとむらひ、佛式の葬。神葬の對。

【佛像】ブツザウ　ほとけのすがた。五代史「鑄銅爲二天下之銅一」

【佛桑花】ブツサウクワ　暖地產の灌木の一、葉は桑に似、花は五瓣、長くして紅色の蕊あり、朝開きて晩に萎む。‖扶桑・朱槿・琉球木槿。

【佛刹】ブツサツ　てら。又、佛塔。韋應物詩「一一出二高枝一」‖佛閣。

【佛參】ブツサン　圖てらまゐり。

【佛子】ブツシ　㊀佛戒を受けたる者の稱。佛を天子とし、其の信者を太子に比していふ〔法華經〕

【佛事】ブツジ　佛法の經事、佛に供養する。西陽雜俎「大作二一一」‖法會・法事。

【佛師】ブツシ　佛工に同じ。

【佛祠】ブツシ　ほとけを安置するほこら、寺。韓愈詩「清汴繞二一一」

【佛指甲】ブツシカフ　草の名、べんけいさう、ちどめさう、多年生草、高さ一二尺、葉は莖の頭に似て對生し、莖頭に黃花を著く。‖佛甲草。

【佛式】ブツシキ　佛教の儀式。權德輿文「一一縫掩攝手摸レ足」

【佛心】ブツシン　佛のやうなるよき心。司空圖詩「理到二忘機一近二一一」

【佛者】ブツシヤ　佛道の修業者、僧侶。韓愈文「一一曰孔子聖師之弟子也」

【佛性】ブツシヤウ　㊀ほとけの本性、卽ち眞如ニシンの妙理をいふ。佛性論「空是一一、一一卽大涅槃」

【佛生會】ブツシヤウエ　灌佛會ブツワエに同じ。

【佛生日】ブツシヤウニチ　㊀釋迦の誕生日、陰曆四月八日。この日灌佛會を行ふ。東京夢華錄「四月八日——、十大禪院、有二浴佛齋會一」

【佛掌薯】ブツシヤウシヨ　つくねいも。著預ヂヨの根、掌狀をなす。

【佛舍利】ブツシヤリ　㊀釋迦の遺骨。法苑珠林「若二一一椎打不レ破」‖佛沙利。

【佛樹】ブツジュ　菩提樹ボダイジュの異名。釋迦牟尼ムニが此樹下にて正覺を得たりといふが故。

【佛手柑】ブツシュカン　暖地に產する果樹、實は人の手の狀を爲し、香氣多し。香櫞と同種。

【佛書】ブツシヨ　佛教の書。‖佛典。

【佛前】ブツゼン　ほとけのまへ。代酬楊「折レ花供二一一」

【佛祖】ブツソ　佛教の開祖、釋迦牟尼ムニ。

【佛陀】ブツダ　㊀如來なり、大覺者の義、ほとけ。大論「諸言二知者一、知二過去・未來・現在・衆生・非衆生・數有常無常等一切諸法一、菩提樹下了了覺知、故名二一一」范成大詩「入言二一一入二三昧一」‖浮屠・浮圖・佛圖・菩提。

【佛道】ブツダウ　佛のみち。南史、梁武帝紀「晩乃潛信二一一」‖佛教。

【佛塔】ブツタフ　佛像位牌等を安置する壇。

【佛智】ブツチ　ほとけのちゑ、根本智（先天性）と後得智（後天性）との二あり。

【佛頂寧】ブツチヤウ　つくねいも。‖佛掌薯。

【佛頂面】ブツチヤウメン　圖怒氣を含み、又、ふあいけうなる顏つき。

【佛弟子】ブツデシ　佛のおでし。‖信徒。

【佛天】ブツテン　佛者が佛を天として、尊崇する稱。

【佛典】ブツテン　佛教の經文。‖佛經。

【佛殿】ブツデン　佛像を安置する寺。原僊錄「一一未二甚壞一」

【佛圖】ブツト　佛陀に同じ。‖浮屠。

【佛頂著レ鞋】ブツチヤウチヤクアイ　好き著書に、拙き序を附くるをいふ。典籍便覽、歐陽修五代史、或作レ序冠二其前一、王安石曰、佛頭上豈可レ著レ糞乎」

【侫レ佛】ネイブツ　佛の冥護を祈らんとて、つらひつかへる。侫佛（二四五一頁）を見よ。

【佛針】ブツシン　世尊のもちたるはちの水經、注「一一青玉也」

【佛法】ブツポフ　釋迦の教。晉書、武帝紀「帝初奉二一一、立二精舍於宮內一」

【佛法僧】ブツポフソウ　〇㊀ほとけ（如來）ほとけの道（教法）其の道に入る出家（比丘）の三寶。種智「其始修レ心則依二一一之三寶一」〇鳥の名、鶫に似て小なり、頭は淡黑、羽毛綠色、嘴脚赤し、深山に棲み、其の鳴く聲——といふが如し。‖三寶鳥。

【佛閣】ブツカク　圖ほとけをまつれる宇。

【佛名】ブツミヤウ　〇ほとけの名。〇圖御一一とは、古、宮中にて陰曆十二月十九日より三日間、清涼殿にて行はれし行事。僧に一一經を誦み、三世の諸佛の名號を唱へしめて六根の罪障ザイを滅する修法。

【佛滅】ブツメツ　一一日の略、陰陽家にて、萬事に凶なりと云ふ大惡日、卽ち、正・七月の四・十・十六・二十二・二十八日。二・八月の三・九・十五・二十一・二十七日。三・九月の二・八・十四・二十・二十六日。四・十月の一・七・十三・十九・二十五日。五・十一月の六・十二・十八・二十四・三十日。六・十二月の五・十一・十七・二

十三・二十九日。

【佛母】ブツモ　釋迦如來の母、摩耶夫人（一證淨摩耶）淨飯王の妃をいふ。大集經「生二淨飯王家一託二生摩耶夫人胎內一」

【佛門】ブツモン　佛とけのみち。‖釋門・桑門ともいふ。佛法界。

【佛狐捷】ブツコセツ　國天文十年、葡萄牙人の傳へたる大砲の名。ぶらんぽるとかる。

【佛力】ブツリキ　佛の通力。

【佛然】ブツネン　盛んに興る貌。荀、非十二子「一一平世之俗起焉」‖浡然・勃然。

【佛座】ブツザ　國春の七種の一、初生の圓葉が佛の蓮華座に似たるが故。‖雞腸草。

【佈】ホ　フ　遇

〇あまねし（徧）〇しく、布告する、布に通ず。

【体】ホン　阮

〇おとる（劣）〇あらし（麤）‖笨。

俗に體の略字として用ふるは誤。

【体夫】ホンフ　楊雄をかく人夫。通鑑、唐紀「懿宗咸通十二年葬二同昌公主一賜二酒餅錢四十萬駄一以飼二一一一」

【余】ヨ　魚

〇われ（我・予）〇み（身）〇あまる、あまり。周禮、地官「其一聚以待頒賜」‖餘。

【余月】ヨゲツ　陰暦四月の異名。爾雅「四月爲二余一」

【余鑒】ヨカン　われら。‖予鑒。

【余們】ヨモン　前條に同じ。

【余等】ヨラ　われら。‖予等。

【伶】㊀レイ　㊁レイ　庚　青

〇ひとり（獨）〇もてあそぶ（弄）又、君主の弄となる臣。〇一俐　はさがし（小才小慧）〇音樂師、わざをぎ「一人一黃帝の時、一倫といふ者、音樂を作り、世世樂官となりしが故。

【伶優】レイユウ　わざをぎ、役者、俳優。蘇軾詩「力盡病騏驥、伎窮老一一」

【伶官】レイカン　音樂を奏する官。五代史記に一一傳あり。‖樂官。

【伶工】レイコウ　樂人をいふ。唐書、百官志「一一、謂二夜警爲一レ嚴」

【伶人】レイジン　〇樂人、樂を司る官。字解參看。晉書、戴逵傳「逵對二使者一破琴曰、戴安道不レ爲二王門一一一」〇たいこもち。‖弄臣・幇閒・仁八官。

【伶仃】レイテイ　獨り行く貌。又、志を失ふ貌。魏徵詩「父老鄕國來、形影何一一」‖零丁・伶打。

【伶傳】レイデン　さまよふ貌。又、おちぶれる貌。古猛虎行「少年懍且怖、一一到二觝鄕一」‖姈嫈。

【伶俐】レイリ　こさがし。康熙字典「今方言謂二詰鞫一曰一一一」

【伶倫】レイリン　黃帝の臣の名、嶰谷の竹を取りて樂律を製せし人。呂覽、古樂「昔黃帝令一一作二爲律一」漢書に伶倫に作る。

六畫

【依】㊀イ・エ　㊁イ・エ　尾　微

㊀よる、もたれる（憑倚）〇たすく（助）互に助け合ふ。左、僖五「輔車相一」〇によると（頼）史、司馬相如傳「其人材足一一也」たのむ（恃）〇つく（附就）したがふ（從・循）論、述而「一於仁」〇そのまま「一然」〇ありさま。〇一は樹の茂りて盛んなる貌。一說、枝のしなやかなる貌。〇一稀は彷彿などに同じ。㊁やすし、やすんず（安）〇堂上の戸と扉との間の地。又古、天子が其の所に立てたる屏風にて斧の形を繡せるものを張る、高さ八尺、武威を示す爲め設く。曲禮「天子當一一而立」扆に通ず。〇たとふ、たとへ（譬喩）禮、學記「不一學博一不能安一詩」

【依人】イジン　人に從ひ衣に從ふ、衣の人身により附く如く互に相離れざる會意文字。

【依稀髣髴】イキホウフツ　依・倚・憑・凭・頼・據・仗・藉・寄〇依はひたと、よりそひて離れざるなり。柳文「草木之生也、依二於土一」〇倚は依に近し、物にもたれつくなり「侍」門」「侍」樓」の類。〇憑はもたれかかるなり。書經「憑二玉几一」〇凭は憑に同じ。〇賴はたのみとして、よるなり。大學序「賴二此編之存一」〇據は物のより所とするなり。後漢書、馬援傳「據」鞍顧眄」〇仗は憑倚なりすがりよるなり。左傳「仗レ信以待レ晉、不二亦可一乎」〇藉は身の依る所をいふ、たよりて力にするなり。〇寄は寄託・寄寓と用ふ、たよりて就く義。

【依依】イイ　〇枝のしなやかなる貌。詩、小雅「楊柳一一」一說、盛んに茂る貌。〇離るるに忍びざる意、思ひ慕ふ貌。楚辭、九思「志懇懇兮一一」〇たどたどしき貌。

【依倚】イイ　たよる、もたれかかる。杜甫詩「願レ形無二一一一、甘心守二部廓一」‖依賴・倚賴。

【依章】イショウ　諧ひ和して相離れず。漢書、禮樂志「五音六律、一一繩昭」

【依遠】イエン　どつちつかず、依はより從

ふ、違はたがひ去る、甲乙何れとも判然と決せざる貌。漢書、谷永傳「展ノ意無ノ所ニ一一」

【依稀】キ　さもにたり、ぼんやりと見える。劉禹錫詩「宋璟梁館街ー一」‖彷彿。

【依臨】イ　たよる、よりすがる。書、金縢「我先王亦永有ニ一一」‖倚賴。

【依舊】イキウ　昔のとほりなること。唐書、國誡ー一爲ノ庶」

【依據】イキョ　よりどころ。又、議論のよりどころ。

【依願免官】イグワンメンクワン　圖本人の願によりて官を免ず。

【依止】イシ　よりどころとしてとどまる。周禮、夏官、掌固「以ニ一一」

【依然】イゼン　もとのまゝの南史、沈文季傳「一一猶有ニ故情」

【依託】イタク　たよる、たのむ。吳志「陳武仁厚好ノ施、鄉里遠方、多ー一之」

【依投】イトウ　たよる、よりすがる。鄒谷詩「小生識淺、早說便ー一」‖依託。

【依遵】イジュン　よりたのむ。‖依賴・依憑。

【依附】イフ　よりかかる。

【依約】イヤク　隱微なる貌。温庭筠、美人詩「連朝眉鏡ノ山、ー一腰如ノ杵」

【依賴】イライ　○よりたのむ。曾鞏文「庶使ニ遺民永有ニ一一」‖倚賴。○圖不公平、偏頗なの義。「一一最負ケ」

【侑】イウ　宥

○たすく、たすけ（佐・相）ゝすゝむ（勸）○貴人に陪食する。○むくゆ、むくい（報）○たぐひ、ならぶ（耦）姉に通ず。○ゆるやか（寬）ゆるす。管子、法法「文有ニ一一武無ニ一赦」宥に通ず。

【侑觴】ユウシャウ　酒を勸める。晉東野語「名姬十數皆衣ノ白、凡首飾衣領皆牡丹、首簪二圖殿紅一枝、執ノ板奏ノ歌ー一」‖侑酒。

【侑食】イウシ　○貴人に侍りて食ふ。禮、玉藻「ー一不ノ盡ノ食」‖陪食。○欲食の體を示へてすゝめる。周禮、春官「膳夫、以ノ樂ー一ノ」

【佾】イツ　圓

○つらなる、樂舞の行列にて、行と列との人數皆同じ、天子は八ー八六十四人、諸侯は六ー三十六人、大夫は四ー十六人、士は二ー四人。論、八佾「八ー舞ニ於庭ー一」一說、每列を通じて八人。

【佳】カイ・ケ　歌佳通音カ

○よし、よろし（好・宜）○うつくし（美）みめよし（好）○このむ（好）老子「一一兵者不祥」

補遺　佳・善・好・嘉　長等の別は善（口部九畫）の條を見よ。

【佳葉】圖よきたばこ。‖佳煙。

【佳煙】圖よきたばこ。‖佳葉。

【佳士】カシ　圖よりて結構なること。

【佳者】カシャ　よきさかな、好下物。張養浩詩「安得ー一錦鯉雙」

【佳氣】カキ　めでたき氣、吉祥の氣。佳哉を見よ。

【佳期】カキ　○美人と期して會する。楚辭「與ニ一一兮夾ノ張」通俗、詩「何年征戍客、傳語報ニ一一」○よき時節。‖佳辰・佳節。

【佳器】カキ　○よきうつは。○立派にして有用なる人物。宋書、謝弘微傳「童幼時、精神端審、時然後言、叔父混見而異ノ之、曰、此兒深中風鑑、方成ニ一一、有ノ子如ノ此足矣」

【佳境】カキャウ　景色のよき處。事の味ある箇所。晉書、顧愷之傳「顧愷之、每ノ食ニ甘蔗ー一、常自ノ尾至ノ本、人或怪ノ之、愷之曰、漸入ニ一一」‖妙境・熟境。

【佳句】カク　よき文句。杜甫詩「張論ニ一一新ニ」

【佳偶】カグウ　よきつれあひ。‖嘉偶・佳對。

【佳果】カクワ　よきくだもの。歐陽修詩「虛堂來ニ清風ー一、一歲ニ纔消ニ一一」‖佳實。

【佳景】カケイ　よきけしき。黃庭堅詩「北山ー一勝ニ南山」‖好景。

【佳言】カゲン　よきことば。柳宗元時竟夕閒ニ一一」‖嘉言・善言。

【佳言如ノ屑】カゲンジョセツ　佳きことばの屑のごとくして出でて盡きざること、銀雀の飛ぶが如きに喩ふ。世說、賞譽「胡毋彥國吐ニ佳言ー一如ノ屑、後進領袖」

【佳公子】カコウシ　品格の高き貴公子。史、平原君傳贊「平原君翩翩濁世之ー一也、然未ノ親ニ大體ー一」

【佳作】カサク　好き文詩。李白、春夜宴桃李園序「不ノ有ニ一一、何伸ニ雅懷ー一」

【佳士】カシ　品行端正なる士。三國志、楊俊傳「咸作ニ一一ー一」‖名士。

【佳詞】カシ　よき詩文。

【佳詩】カシ　よき詩。‖嘉詩・佳什。

【佳兒佳婦】カジカフ　よきむすこ、よきよめと。通鑑、唐紀「陛ー一今具付ノ卿」舊唐書には好兒好婦に作る。

【佳實】カジツ　よき果實。黃庭堅詩「江梅有ニ一一」‖佳果。

【佳子弟】カシテイ　よきわかもの。晉書、王羲之傳「字逸少、梁爲ニ從伯敦導所ニ器重ー一、時陳留阮裕有ニ重名ー一、爲ニ敦主簿ー一、敦嘗謂ニ羲之ー一曰、汝是吾家

——、當レ不レ減二王濬一」

【佳仕】ジョ　よき詩文。＝佳篇・佳作。

【佳人】ジン　みめよき女。李延年詩「北方有二一人一、絶世而獨立」＝美人。

【佳人薄命】ハクメイ　美人は不仕合の者多し。蘇軾詩「自レ古佳人多命薄、閉レ門春盡楊花落」

【佳辰】シン　よき日。又、よき時。王筠詩「命纜趁二一一」＝吉辰。

【佳城】ジョウ　墓地。墓の堅固なるを城に喩へていふ。西京雜記「滕公駕二王東都門一、馬嘶鳴不二肯前一、以レ足跼レ地、久之、滕公使二士卒掘一馬所レ跼地一、入三尺所、得二石槨一、有レ銘曰、「一千歳、三千年見二白日一、呼嗟滕公居二此室一」滕公曰、嗟乎天也、吾死其即安レ此乎、死遂葬焉」滕公は前漢の夏侯嬰なり、博物志には嬰の死後に石槨を得たりとす。

【佳酘】ショウ　よきさけ。元好問詩「兵廚一一供分攜」＝美酒・旨酒。

【佳趣】シュ　よきおもむき。白居易詩「夜雪有二一一一」

【佳稱】ショウ　よき名。沈約詩「寮園同二一一一」＝嘉稱。

【佳壻】セイ　よきむこ。唐書、獨孤郁傳「憲宗歎二優德典一乃有二一一一」＝快壻。

【佳絶】ゼツ　極めてよし。蘇軾詩「環レ城三十里、處處皆一一」

【佳節】セツ　めでたき日。王維詩「每レ逢二一一一倍思レ親」韓愈詩「幽懷適與二一一會」＝良辰・吉辰。

【佳餚】コウ　結構なるたべもの。法書要錄「說二一一一」＝美饌・玉饌。

【佳對】タイ　よきつれあひ。好き配偶。晉書、鮑文鄭太后傳「帝從容謂二劉隗一曰、鄭氏二妹、可レ爲二一一一」＝良匹・嘉耦。

【佳適】テキ　心によくかなふ、よきたのしみ。山家清供「眞一一也」

【佳傳】デン　人の美事を多く載せたる傳記。北史、魏收傳「初收在二神武一時、爲二大常少卿一修二國史一、得二陽休之助一、因謝二休之一曰、無二以謝一レ德、當爲二卿作二一一一」

【佳哉】カナ　善いかなと歎美する詞。後漢書、光武紀「氣一一、鬱鬱葱葱」

【佳配】ハイ　よきつれあひ。＝佳偶・良配。

【佳芳】ホウ　よきにほひ。＝佳香。

【佳美】ビ　甚だうつくし。

【佳品】ヒン　よき品。許有壬詩「世傳銅雀亦一一、搜二換黃旗一今無レ遺」

【佳文】ブン　よき文章。楊德輿詩「安郎有二一一一、新句凌二碧雲一」

【佳聞】ブン　よききこえ、よき名譽。

【佳簡】ヘン　すぐれたる詩文。李白詩「投贈有二一一一」蘇軾詩「偶然談笑得二一一一」＝傑作・名篇。

【佳朋】ホウ　よき友。韓愈詩「幸玆得二一一一」＝良朋・好友。

【佳懿】イ　よきすみ。舊唐書、裴行儉傳「禮遵良非二綺筆一一、未二皆輒

書一」

【佳味】ミ　よきあぢ。南部煙火記「所謂金鑾玉膾、東南一一也」

【佳名】メイ　よきほまれ、よき名聲。李商隱詩「一一留二清川一」

【佳茗】メイ　よき茶。蘇軾詩「從來一一似二佳人一」

【佳夜】ヤ　よきよる。東坡志林「良月一一」＝良夜・美宵。

【佳例】レイ　よきしきたり。

【佳麗】レイ　容貌、又景色が極めてうつくし。史、魏策傳「或美好一一而爲二衆人患一」

【佳話】ワ　一時に傳誦せらるる盛んなる事。宋史、藝文志に陳唐一一一卷あり。

【侅】カイ　ガイ　灰

〇つねならず（非常）〇むせぶ（咽）

【佼】㊀カウ　ケウ　巧　㊁カウ　ケウ　看

㊀みめよし、かほよし（美好）＝姣。〇よし（好）〇すこやか（健）㊁まじはる、まじはり（交）とも（友）

【佼佼】カウ　好き貌。後漢書、劉盆子傳「卿所謂雞中鶚鶚、庸中一一者也」

【佼人】カウジン　みめよき人、別離の詩、陳風、月出「一一燦兮」＝姣人・美人・佳人。

【佼意】カウ　みめよきわらんべ、美少年。

【侃】カン　旱　輸　又、侃に作る

〇つよし（剛）なほし（直）剛直なる貌、一解、和らぎ樂む貌。

【侃諤】カンガク　剛直にして言を曲げざる貌。＝侃侃諤諤。

【侃侃】カン　剛直なる貌。一解、和らぎ樂む貌。論、鄉黨「朝與二下大夫一言、一一如也」

【侈】キ　紙

〇かさぬ、かさなる（重累）〇もとる（戻）〇くすし、ことなり、あやし（奇異）＝詭。

【侈靡】ビ　あやしく正しからざることば。淮南、齊俗「爭爲二一一一」＝詭辯。

【佶】キツ　キチ　質

〇すこやか（健）さかんなり（壯）詩、小雅「四牡既一一」〇ただし（正）

【佶屈聱牙】キツクツゴウガ　かたくるしく耳に入り難し、むづかしく讀み難き文の形容。韓愈、進學解「周誥殷盤、一一」

【供】キョウ　ク　多　宋

〇まうく（設）〇足す（給）魏

志、鍾繇傳「一給資費」使得專學」○そなふ、そなへもの（具）晉書、何曾傳「一日之一、以錢二萬爲限」○ささぐ、たてまつる（奉）○すすむ（進）○訊問せられて自ら事情を述ぶる「口一」○共に通ず。○國ども、從者「一待」○ども、複數を表はす「子一」

【供億】キョウオク　億は安、乏しき者にほどこして安心せしむ。左、隱十一「一二父兄、不ノ能ニ一一」

【供給】キョウキュウ　需用ノモトに應じて、そなへあてがふ。魏志、鍾繇傳「一ニ一資費ニ供ニ一ニ共ニ作ル。左、僖四「敢不ニ共給ニ一」

【供給契約】キョウキュウケイヤク　現品を所有せざる賣主と物品買入を取りむすぶ約束

【供御】クゴ　天子へたてまつる膳部ノ宋書、彭城王義康傳「皆以ニ上品ヲ滿ニ食限一而以二次者一一ニ一上ニ一」

【供具】キョウグ　みつぎものをさめる。

【供祭】キョウサイ　まつりの用にあてる。漢書、注「無ニ冤魂所ニ以一ニ一」

【供述】キョウジュツ　裁判所にて事實を述べる。

【供職】キョウショク　官前などに物を供へすすめる。後漢書「一ニ一新味」

【供託】キョウタク　提供寄託の義、主として辨濟の目的物（金錢又有價證券）を法定又は裁判所の指定せし場所に供託して其の保管に附する行爲。

【供帳】キョウチョウ　宴會を開く爲め、種種の設をなし幕を張る。漢書、疏廣傳「設ニ祖道一ニ一東都門外一」＝供張。

【供養】クヨウ　○うまき飲食物を供へて親を養ふ。戰國策「得ニ甘脆一以養ノ親一一備」＝奉養。○國ク佛又は死者の靈前に物をささげる。法華經「一一恭敬、尊重讚嘆」

【供具】ググ　○供張の具をいふ。史記「張ニ羽旗、設ニ一一一以饗ニ神君ニ一」＝共具。○グ國佛菩薩に供養する物。香華・樂器・幡蓋の類。法華經「於ニ當來世ニ以ニ諸一一、供養奉事」

【供奉】グブ　○天子のおともする。又、其の者。○官名、唐の代、一材一藝ある者内廷に供奉するを得、よりて從官の總稱とす「翰林一一」

【供米】クマイ　神佛にすすめ奉つる米。

【供物】クモツ　國神佛に奉るそなへもの。

【供待】クタイ　國來客の從者、車夫どもを待たせ置く所。

【侃】カン

○やはらぐ（和）○つよし（強）○ただす（正）○樂しむ（樂）○あきらか（明）○ほがらか（朗）○つとむ（勉）○ほこる（誇）○ほめる（稱）○ほめ（稱）○ほこり（誇）○ほこり（誇）○ほこり（誇）○ほこり（誇）○ほこり（誇）

【侈】シ

○おごる（驕）○ほこる（誇）○ほこり（誇）○ほこり（誇）○ほこり（誇）○ほこり（誇）○ほこり（誇）

【侏】シュ

○こびと（小人）○こびと（小人）○こびと（小人）○こびと（小人）○こびと（小人）

【侑】ユウ

○すすめる（勸）○たすける（助）○たすける（助）○たすける（助）○たすける（助）

【侔】ボウ

○ひとしい（等）○ひとしい（等）○ひとしい（等）○ひとしい（等）○ひとしい（等）

【侘】タ

○わびる（詫）○わびる（詫）○わびる（詫）○わびる（詫）○わびる（詫）

【侚】ジュン

○めぐる（巡）○めぐる（巡）○めぐる（巡）○めぐる（巡）○めぐる（巡）

【侗】トウ

○ほこる（誇）○ほこる（誇）○ほこる（誇）○ほこる（誇）○ほこる（誇

【侍妾】ジセフ そばめ、めかけ。孟、盡心「倉前方丈、一一數百人、我得レ志不レ爲也」＝側室。

【侍中】ジチュウ ○漢の官名、天子の左右に侍し、衆事を贊導し、顧問に應ず。○魏晉以後は門下省の長官。

【侍女】ジヂョ そばにはんべる女、こしもと。＝侍兒・侍婢。

【侍丁】ジテイ 留りて其の父母に侍する壯丁。唐書「詔十丁以上免二二丁、五丁以上免二一丁、一一老者免二徭役一」

【侍僮】ジドウ 貴人のそば近くつかふる童。唐書「騎奴一一、次レ殺拉引」＝侍童・侍竪。

【侍讀】ジドク 侍講に同じ。唐書、百官志「東宮官、一一無二常員一、掌レ講二導經學一」

【侍婢】ジヒ こしもと。于鵠詩「一一休レ梳官樣髻」

【侍郎】ジラウ 官名、内閣各省の次官に當る。

【侍立】ジリフ そばにはべり立つ。蜀志「皆執レ刀一一終日」

【侍所】ジトコロ 國鎌倉幕府にありし官署。兵事と警察事務とを司る。其の長官を別當といふ。

【使】㊀シ ㊁シ 紙 眞

㊀しむ、せしむ(令)使役の辭。○もし、假定の辭。孟、告子「一」人之所レ欲莫レ甚二於生一」○つかふ(役)論、學而「一レ民以レ時」㊁つかひ(使者)○つかひす。○國つかふ、用ふる、費す。

同訓異字 ㊀使・令・遣・敎・俾の別は令（人部三畫）の條を見よ。

【使役】シエキ つかふ。周禮、疏「政謂二賦稅一、役謂二一一一」國文法上の語、他を使役して或る動作を爲さしむる意をあらはす助動詞、立たしむ・行かしむの類。

【使氣】シキ 氣にまかせてはやる。一レ一ヲ見よ。

【使鬼錢】シキセン 俚財力の極めて大いなるをいふ。賈庭堅詩「貧無二一一一、又無二封侯骨一」

【使君】シクン ○四方の國國につかはさるる天子の使者の尊稱。後漢書、寇恂傳「一一建レ節、衛レ命以臨二四方一」○漢の世、太守を府君、刺史を一一といふ。

【使館】シクワン 公使館の略稱。

【使喚人】シクワンニン 俚召使人。

【使指】シシ ○ゆびをつかふ。漢書「如二身之使一レ臂、臂之一一一」○轉じてさしづする。

【使臣】シシン 君命を帶びて外國に使する臣、今の大使・公使の類。＝使節。

【使相】シシャウ 宋の代、位相將を兼ぬる者の稱。文獻通考、職官考「宋制以二節度使一兼二中書令或侍中中書門下平章事一、皆謂二之一一一、以待二勳賢故老及宰相久次罷レ政者一、蓋位兼二將相一、品極二文武一之稱」

【使酒】シシュ さかくせわるし。使レ酒(サカヲ)を見よ。

【使星】シセイ 使者の稱。後漢書、李郃傳「二君觀二京師一時、寧知二朝廷遣二使耶一、二人問何以知レ之、郃云有二一一一向二益州分野一故知レ之耳」とあるに本づく。錢起詩「極目煙波外、孤舟一一一」

【使節】シセツ 節(ハタ)を持ちたる天子のつかひ。周禮、地官注「以二王命一往來必有レ節以爲レ信」

【使嗾】シソウ けしかけてつかふ。王篇「使レ犬曰レ嗾」指嗾の誤用。

【使丁】シテイ めしつかひの男、小使。

【使程】シテイ つかひに行く道。程子詩「一一雖二久駐一、同レ首漢二漁樵一」

【使軺】シセウ 使者の乘る輕きくるま。王惲詩「九萬鵬搏翼、孤忠寫二一一一」

【使徒】シト 神の使命を四方に傳へる徒弟、基督(キリスト)の十二弟子をいふ。

【使脾氣】シヒキ 國怒る。

【使聘】シヘイ つかひを遣りて訪よ。後漢書「車和已被、一一流通」

【使命】シメイ つかひのやくめ。又、君よりつかはさるる使者。宋史、田景咸傳「性鄙吝、爲二一一一至二惟設二肉一器一」

【使用】シヨウ つかひもちふる。

【使令】シレイ いひつけて使ふ。孟、梁惠王「便嬖不レ足レ一一一於前一與」

【使料】シレウ 用ふるしろ、つかひ料。唐書「吏用二丁直一爲二一一一」

【侈】㊀シ ㊁イ 支 紙 或は奢に作る

○おごり、おごる(奢)分に過ぎて美麗、又廣大なることを好む。○ほしいまま(恣)○よこしまなるおこなひ。孟、滕文公「放辭邪一」○ひろし(廣)おほいなり(大)○おほし(多)ゆたか(饒泰)○すこしくはる(微張)○鐘の口などのひろく開く義。

同訓異字 侈・侮・驕・奢・傲等の別は奢（大部九畫）を見よ。

【侈傲】シガウ おごる、おごり。史記「行二暴虐一一、國人謗レ王」

【侈口】シコウ 大いなる口。漢書、王莽傳「莽爲レ人一一」

【侈侈】シシ ゆたかに多き貌。左思、蜀都賦「一一陸離、卓鄰埒レ名」

【侈哆】シシ 物事の立派なる貌。路史「龍顏一一、四目重光」

【侈奢】シシャ おごる。おごり。南史、齊高帝紀「以レ長一一一之源、命打二破之一」＝奢侈。

【侈大】シダイ 廣大なり。國語「已一一哉」

【侈奢】シャ　おごる。おごり。管子「儉ニ財用ヲ禁ニ一ー一ニ」
【侈端】シタン　おごりのはじめ。唐書「恐ル漸ノ靡ニ一ー一ヲ勸レ帝斥レ之」
【侈放】シホウ　おごりてわがまま。
【侈費】シヒ　図無駄なるつひえ。
【侈靡】シビ　おごりてみだら、奢侈にして淫靡。戰國策「淫遊ー一」

【欣】シ　寘　通じて次、又、佽に作る
○たすく、たすけ（助）詩、唐風「人無ニ兄弟一胡不ニ一焉」○ならぶ（比）○かはる（代）たがひに（遞）○およぶ（及）○とし、すばやし（輕疾）漢書、宣帝紀「募ニ一飛射士一」

【佴】ジ　寘　ニ
○そふ（副貳）○たすく（助）＝佽。

【侁】シン　眞　駪に通ず
○馬、羣行して先んぜんとする。○おほし、衆多の貌。
【侁侁】シンシン　衆き貌。詩、召旻「我ニ來ー一ニ些」＝駪駪。

【侚】シュン　ジュン　震
○したがひ死す、殉又、徇に通ず。書、伊訓「ー一于貨色」○しめす、となふ、徇に通ず。漢書、五行志「車裂以ー一」註「ー一、行示也」○とし（疾）俾に通ず。

【倏】シュク　屋
○ー儵はいっすんぼふし、短人。又、うだち、梁上の短柱。
【倏儵】シュクチョウ　○いっすんぼふし。讀、王制「ー一百工」○古、短小の人を俳優とせしが故に俳優の義とす。史、孔子世家「優倡ー一戲而前」○つかばしら、梁上の短柱。淮南、主術「短者以爲ニ一梲櫨一」韓愈、進學解「樹ニ一ー、根蘭唇牖」
【倏倫】シュクリン　小人國。後漢書、東夷傳、至三——「人長三四尺」
【倏離】シュリ　えびすの言葉の聞き取り難き貌。ー一歌舌「後漢書、南蠻傳「語言ー一」

【倥】タ　董
○ほこる（誇）史、韓安國傳「卽欲以ー一鄰敵」○ー傑ケツは志を失ふ貌。○図わぶ、心苦しく思ふ。又、閑居する。○わびし、なげかはし。
【倥傯】コウソウ　志を失ふ貌。離騷「忳鬱邑、余ー一兮」

【倥】タク　覺

○よする、たのむ（寄）＝託。○轉ー曺は宋人、琦の曾孫、寧宗の卽位するや、ー曺定策の功を負みて甚だ專横なり。

【侻】㊀テウ　篠　㊁エウ　篠
㊀かろし、うすし（偸薄）あさはか。○獨行の貌、行きて勞苦に耐へざる貌。○かりそめ（苟且）○ぬすむ（竊取）周語「ー一天以爲ニ己力一」㊁ゆるやか、ゆるし（緩）のばす。荀、王霸「ー一其期日一而利ニ其巧任一」
【侻巧】チョウコウ　うはべのみ巧によそほひて、かるがるし、輕佻佞巧の義。
【侻侻】チョウチョウ　○行きて勞苦に耐へざる貌。詩、小雅「ー一公子、行ニ彼周行一」○あさはか、輕薄。
【侻薄】チョウハク　かろがろし。唐書、鄭覃傳「文人多ー一」＝輕薄・輕佻。

【侗】㊀トウ　東　㊁トウ　董
㊀おろか（無知）論、泰伯「ー一而不ニ愿一」○おろかなる人。書、顧命「在後之ー一、敬迓ニ天威一」○空ーはをさなし（童蒙）＝空同。㊁なほし（直）○長大なり。㊂まこと、つつしむ（誠懇）
【侗然】トウゼン　誠なる貌。莊、庚桑楚「侗然而往、ー一而來」

【佩】㊀ハイ　隊　㊁ヒ　支　ハイ　卦
㊀古、天子、又爵位ある人のおびもの「玉ー一」天子は白玉、公侯は玄玉、大夫は蒼玉を用ふ。詩、鄭風「雜ー一以贈之」○おぶ（帶）身に著ける、腰につける。論、鄉黨「去ニ喪無ニ所ー一不一ー一」○持つ、攜へる。白虎通「農夫ー一耒耜、工匠ー一斧、婦人ー一鍼縷」○心に銘める「感ー一」「ー一服」「荷ー一」杜甫詩「寸心銘ー一牢」○玉にて飾りたるおび帶。＝玉帶。○水めぐる、水が縈紆す。㊁おびもの。
【佩帶】ハイタイ　俗に珮に作るは非なり。
【佩韋】ハイイ　韋かはは柔かなるもの、之を帶びて性急の癖を矯めんとせし西門豹の故事によりて行を慎み、注意の深きにいふ。韓非、說林「西門豹之性急、故ー一レ以自緩、董安于之心緩、故佩レ弦以自急」
【佩恩】ハイオン　恩を蒙る、恩を感ずる。＝荷恩。
【佩香】ハイカウ　にほひぶくろ。
【佩玖】ハイキウ　かざりにつくる美石。詩經「彼留之子、貽ニ我ー一ニ」
【佩魚】ハイギョ　唐代、五品以上の官人のおびる魚形の袋の飾。唐書、車服志

「中宗初、龍二銀袋一復給以レ魚」困學紀聞「一一始二于唐永徽二年、以レ李爲二諱也」李は唐の姓、李・鯉音相近し。

【佩玉】ハイギョク おびだま。詩經「將翱將翔、一一環琥」

【佩環】ハイクワン 古、身におぶる玉の輪。子華子「出則有二環佩一、動則有二一一一」

【佩弦】ハイゲン 弦は急しく張りたるもの、故に之を帶びて心のゆるやかなるを矯めし故事。前の佩韋を見よ。

【佩劍】ハイケン 佩刀に同じ。

【佩紫】ハイシ 紫の印綬をおぶ。轉じて高官に任ぜらるるをいふ。晉書、陵レ朱一一」

【佩綬】ハイジュ 印のくみひもをおぶ。唐書「六品以下、去レ劍一レ一」

【佩囊】ハイナウ みどりの色をおびる。李百藥、奉賦「御一レ一而辭レ寒、梅含レ香而受レ日」

【佩刀】ハイタウ 腰におびるかたな。後漢の代、天子諸侯王公卿百官皆一一あり しこと、後漢書、輿服志に見ゆ。武備志、日本考「刀大小長短不レ同、立レ名亦異、倭人有二長刀、謂二之一一」、其刀上又插二小刀一、以便二雜用一」

【佩服】ハイフク ○身におびつける、佩用する。○心にとどめて忘れず、服膺する、心に悅服することは佩玉の身に在るが如き義。

【佩綬】ハイジュ 印のひもをおぶ。轉じて官途につく義。蔡邕、胡廣黃瓊頌「赫赫三臺、七佩二其綬一」

【佩文韻府】ハイブンインフ 四百四十四卷、清の聖祖康熙四十三年翰林の諸臣張玉書以下七十六人、勅を奉じて纂修す、韻によりて、成語を排列し詩家の用に供す、別に韻府拾遺百十二卷ありて合刻す。

【佩文齋詠物詩選】ハイブンサイエイブツシセン 四百八十六卷、清の聖祖の御選、天文・地理以下四百八十六類に分ちて古代より明代に至る詠物の詩を採錄す。

【佩文齋書畫譜】ハイブンサイショガフフ 一百卷、清の康熙帝の御定、論書十卷、論畫八卷、歷代帝王書二卷、同上畫一卷、書家傳二十三卷、畫家傳十四卷、以下敘跋頗る完備せり。

【佩用】ハイヨウ 身に著け用ふる。

【佰】ハク ビヤク 陌

○もも。漢書、食貨志、註「一謂二百錢一」‖百。○をさ、かしら、百人の長。○ちまた、田の東西の界道、陌に通ず。

【併】ヘイ 并（八部八畫）に同じ。

【倖】ボウ 尤

○ひとし、そろふ（齊・等均）おなじ。莊、大宗師「畸二於人一而一二於天一」○いなむし（食二苗蟲一）‖蟊蟘。

【倖】ヤウ 養

○いつはる、いつはり（詐）「詐一」○だます、おざむく（給）○あらは、うはべをいつはりかざる、陽に通ず。○倘一はたもとほる、さまよふ。‖倘徉。

同訓異義 倖・僞・詐・誦・詭等の別は僞（人部十二畫）の條を見よ。

【倖免】ヤウメン いつはりておほしとなる。洛陽伽藍記「一一不レ罹二於世罪一」

【倖狂】ヤウキヤウ きちがひのまねをする、僞りて狂者となる。史、宋世家「箕子被レ髮一一而爲レ奴」‖陽狂。

【倖愚】ヤウグ いつはりて愚なるふりす。荀悅文「寘武子一一」

【倖言】ヤウゲン いつはりのことば。韓非子「坐而一一」‖詐言。

【倖死】ヤウシ 死にたるふりをする（史、范雎傳）

【倖睡】ヤウスイ たぬきねいり、ねたふりをする。郭璞、幽棲賦「觸レ物則笑、見レ人一一」‖陽睡。

【倖臥】ヤウガ うはべだけたふとぶ。史記「項羽、乃一一懷王二爲二義帝一」

【倖敗】ヤウハイ ことさらに敗れたるふりを裝ふ。史記「秦軍一一而走」‖倖北。

【倖病】ヤウビヤウ 病氣といつはる。說苑「子胥諫不レ用、因稱一一レ不レ行」

【倖北】ヤウホク 敗れたるふりして僞りにげる。史、李牧傳「一一不レ勝」

【倖官】ヤウクワン にせめくら。元稹詩「秀才自一一」

【來】（一）ライ （二）ライ 灰 咍

㊀きたる、きたす、く。○いたる（至）○かへる（還）○およぶ（及）○よぶ（呼）○まねく（招）きたす。○今より後に至る時。論、微子「一者猶可追」○このかた、から、より。韓愈、與二孟尙書一書「入秋一、眠食何似」○いざ、いざなふ意を表はす爲めに語尾に添へる。史、孟嘗君傳「長鋏歸一乎」○語勢を強める爲めに添へる助辭。莊子「嘗以語我一」○こむぎ、麥に通ず。㊁ねぎらふ、來る者の勞をなぐさめる。孟、滕文公「勞二之一一之」‖徠。

【來意】ライイ 訪ひ來りたる者の意中。後漢書、公沙穆傳「一一厚矣」

【來由】ライユウ ことのいはれ。白居易詩「權教二啼鳥記一一一」‖由來。

【來遊】ライイウ 來りあそぶ、遊びに來る。

【來裔】ライエイ 後の世。後の世の子孫。

【來葉】ライエフ 後の世。唐書「永貽二孫子一

一」＝来世・後世。
【来援】ライエン 来り援ふ。
【来孫】ライソン 来生に生れるいんねん。梁高僧記「永結二来一」
【来夏】ライカ 来年の夏。
【来賀】ライガ 来りてよろこびを述べる。
【来駕】ライガ のりものが来る。人が訪ひ来るにいふ敬語。＝来車。
【来迎】ライガウ 仏が現れ来りて人を浄土に迎へる。五会法事讃「観音勢至自ー一」
【来航】ライカウ 外国より船に乗りて来る。
【来客】ライカク 外より来りし客。張籍詩「公事稀疎ー一少」
【来格】ライカク ○きたる、格は至、祭に鬼神の至り臨む義。書、征苗「祖考ー一」＝来臨ライリン ○人又は物の来る義。禮、月令「暴風ー一」
【来学】ライガク 師の家へ来り学ぶ。往教の対。
【来翰】ライカン 来札に同じ。宋書、呉喜傳「恕獲ニー一」＝来書・来信。
【来簡】ライカン 前條に同じ。
【来儀】ライギ 来りて容儀ある義。書、益稷「簫韶九成、鳳凰ー一」
【来禽】ライキン 林檎キンの別名。通雅「ー一、即林檎也」
【来享】ライキャウ 諸侯が朝廷になづき来りて貢物を献上する。詩、商頌「莫三敢不ニー一」＝来聘。
【来会】ライクワイ あつまりの席に来り集る。
【来観】ライクワン 来りて見る。
【来月】ライゲツ 次に来るべき月。
【来貢】ライコウ 来朝して、貢物をたてまつる。
【来寇】ライコウ きたりあだす。
【来歳】ライサイ 今年の次に来るべき年。禮、月令「百縣爲ニー一、受ー朝日與諸侯所レ税二於民一、輕重之法、貢職之數ニ」＝翌年・来年。
【来札】ライサツ 他より来れるてがみ。杜甫詩「会面思ニー一」＝来書。
【来至】ライシ きたる。
【来歳】ライサイ 来年。呂覽「今歳美禾、ー一美麥」今歳は今年。
【来秋】ライシウ 来年の秋。
【来日】ライジツ 今より後に来る日。朱熹、勸學文「勿レ謂今日不レ學而有ニー一」
【来襲】ライシフ 敵が不意に攻め寄する。
【来信】ライシン 他人よりのおとづれ。又、其のてがみ。
【来侵】ライシン 来りてをかす。
【来訊】ライジン きたりおとづれる。＝来訪。
【来車】ライシャ 車が来る。又、車にて来る、人の来ることをいふ敬語。＝来駕。
【来者】ライシャ ○我より後に生れ来る者、後進の者。論、子罕「焉知ニー一之不レ如レ今也」○我の方になつき来る者。公羊、隱二「ー一勿レ拒、去者勿レ追」
【来者可レ追】ライシャカツイ 既に過ぎたることは如何ともしがたけれども、未来の事はなほ追ひ及びて改むるを得べし。論、微子「往者不レ可レ諫、来者猶可レ追」
【来状】ライジャウ 先方より送り来れる書状。＝来書。
【来春】ライシュン 来年の春。漢書、張敞傳「況至ニー一」
【来如】ライジョ 来る、如は助辭。易、離卦「九四、突如其ー一」
【来書】ライショ 他より来りしてがみ。杜甫詩「各遥レ萍流轉、ー一翻作レ行」＝来札・来翰。
【来世】ライセイ ○のちの世。書、仲虺之誥「予恐ー一、以レ台罹二口實一」＝来葉。○佛未来の世。過去・現在に対していふ、後生。法華經「佛告二舍利弗一、汝於ニー一、當レ得レ作レ佛、號曰二花光王一」
【来蘇】ライソ 仁者が此地に来りて人民再生の思をなすをいふ、蘇は蘇息。書、仲虺之誥「奚徯レ我、后レ来其蘇、民之戴レ商、厥惟舊哉」
【来孫】ライソン 玄孫の子。爾雅「玄孫之子、曰ニー一」往来の親ある義。
【来談】ライダン 訪ひ来りて話をする。
【来庭】ライテイ 諸侯が朝廷に来りて天子におめみえする、又、帰順する。詩、大雅「王猶允塞、徐方ー一」
【来朝】ライテウ ○入朝に同じ。詩、小雅「君子ー一、何錫予レ之」○外國の使者の我朝に来る義。
【来同】ライドウ 来り集る。詩、魯頌「淮夷ー一、莫レ不二率從一」
【来訪】ライハウ 来りおとづれる。＝来訊。
【来賓】ライヒン 来客に同じ。禮、月令「季秋之月、鴻雁ー一」
【来聘】ライヘイ 貢物を献じて朝廷に来り訪ふ。左、隱七「齊侯使二其弟年一ー一」＝来享。
【来牟】ライボウ 小むぎと大むぎと。詩、周頌「貽二我ー一ー一」
【来諭】ライユ 来状にてのさとし。＝来示・来教。
【来格】ライカク 鬼神がきたりて其の場にのぞむ、格は臨。宋史、寧宗郊祀樂章「穆穆ー一、洋洋如レ在」＝来臨。
【来臨】ライリン 人が我家に来りしことの敬語。＝来駕。
【来歴】ライレキ 過ぎ来しかたの經歴。唐浪詩話「用レ事不二必拘ニー一ー一」＝由来。
【来王】ライワウ ○四方の夷の國にて、新王の嗣ぎて立ちし時、初めて中國に来りて天子におめみえする禮。詩、商頌「莫三敢不ニー一」○爽秋が朝廷になつき来る。書、大禹謨「無レ怠無レ荒、四夷ー一」
【来往】ライワウ ゆきき。＝往来。
【来者不レ拒去者不レ追】ライシャフカキョシャフツイ 来り附くも反き去るも其の意に任

せる。公羊、隱二、注「王者不ㇾ絶ニ夷狄一、縁ㇾ義者、來者勿ㇾ拒、去者勿ㇾ追」

【侖】ロン 元
○ついづ(紋)○昆ー(コン)はまろし。又、山の名。‖崑崙。

【例】レイ 霽
○たぐひ(比・類)○ためし、しきたり(典ー・慣ー)○おほむね(槩)みな(皆)○國たとへば、ーせば、前のためしを引用するにいふ。
【例規】キ ためしとなれるおきて。
【例外】グレイ 常にきまりたる事の外、原則に對していふ。
【例月】グレイ つきづき、毎月。
【例言】レイ 書物などの首に附するあらましの注意がき。‖凡例。
【例刻】コク きまりの時刻。
【例祭】サイ 年年、又は月月のきまりのまつり。
【例時】レイ 例刻に同じ。
【例式】シキ いつものかた。
【例日】ジツ きまりの日。
【例證】ショウ ためしとなる證據。
【例題】ダイ 例として出す問題。
【例典】テン ためしとなれる儀式。
【例年】ネン としどし。‖毎年。

七畫

【侃】カン 寒
いさまし、勇壯なる貌。
【侃侃乎】コカン 耕す者の行く貌。莊、天地「ー——耕而不ㇾ顧」

【俄】ガ 歌
○にはか、にはかに、念に、たちまち(忽)○すみやかに(速)○しばらく(須臾)○傾く貌。詩、小雅「側弁之ー」‖俄。○國にはか、茶番狂‖仁和賀。
【俄頃】ケイ しばし、しばらく。晉書、王戎傳「王渾ー一輒去」‖頃刻・暫時・瞬時。
【俄國】ガコク 露西亞(ロシア)國をいふ(俄普西佛の略)‖露國。
【俄然】ゼン にはかに、念に。‖卒然。

【俔】キン 先
ーーは冠の飾ある貌。又、恭順なる貌。詩、周頌「載弁ーー」

【俓】キョウ 徑
ーーはあわただしき貌。楚辭、九歎「魂ーー而南征」又、遠くに行く貌。

【俍】キョク 沃
○たけひくし(短小)○せまる。局・蹐に通ず。

【俍】ゴク 屋
ーーは容貌大いなり。詩、邶風「碩人ーーー」

【係】ケイ 霽
○かかる、かく。‖繫。○しばる(縛)左、僖二五「ー與人以圍商密」○つなぐ(繫)つぐ(繼)○ひく。莊、山木「ー屨而見魏王」‖曳。○國かかり、或る事務に關係する職員「學務ー」
【同訓異字】係・繫・系・掛・挂・懸・繋・絓・羅○係・繫の二字は通用す、つなぎ留めて置く義。漢書、景帝紀「古宰重器、國命所ー繫」易の繫辭といふは、文王周公の辭につなぎ續くる意。○系は繫に同じ、ただ繫はつなぎ結ぶ意あれども、系は連也、纏也、胤也、緒也と註し、系統と用ひて、結ぶ意は無し。○掛は近くに物を釘などにてつり下ぐるなり、俗に掛物ガケモノと用ふる如し。○挂は掛に同じ。○懸は遠く又は高く物をかくるなり、深く敵地に攻め入るを、懸軍萬里などといふ。孫文「三子者之命、則懸二乎天一矣」○繋は懸に同じ。○繋はひきまつはるるなり「懸二疾病一」の類。○絓は網にかかる義、轉じて病災にかかる義とす。○羅は附なり、べったりと附く義。易經「日月麗二乎天一」
【係争物】ケイソウブツ 兩者の互に爭ふ物件、訴訟の目的物。
【係累】ケイルイ 家をつぐべきちすぢ、あとつぎ。後漢書「ーー當立」
【係數】ケイスウ 代數にて積の因數の片一方ガタ
【係蹄】ケイテイ わな、繩を以て獸の蹄ひづめを引きかけて取るしかけ。
【係風捕影】ケイフウホエイ 係ー風捕ー影ーを見よ。
【係累】ケイルイ ○つなぎしばる。孟、梁惠王「殺二其父兄一、ーー其子弟一」‖係累。○ほだし、妻子眷族のわづらひ。‖家累。
【係屬】ケイゾク 前係に同じ。楚辭「諂ー所今ーー」

【俓】(一)ガウ (二)ケイ 庚 徑
(一)ただちに(直)○いそぐ(急)(二)わたる、徑に通ず。史、司馬相如傳「ー峻赴險」○なほし(直)○かたし(堅)

【俠】キョウ 葉
○をとこだて、又、其の行ある人「任ー」○たもつ、もつ(持)○さしはさむ、はさむ、挾に通ず。○ちかづく(近)

輔するなり。

【俠客】をとこだて。後漢書、馬援傳「兄子嚴敦竝喜二譏議一、而通二輕ーー一」王融詩「關レ車進ーーー」

【俠氣】をとこぎ。山谷題跋「有二豪俠閒ーーー」

【俠骨】をとこだての氣まへ。張華詩「死閑ニーー香一」

【俠者】をとこある者。‖俠客。

【俠烈】をとこぎに富みて、はげしき氣象。黃淑詩「ーー良有レ聞、古來共知レ然」

【倪】㊀ケン ㊁ケン 銑 霰

㊀たとへ、たとふ（譬喩）㊁しのび（儁察）‖譲細作。○ーーはうかがひ見る貌。一解、恐懼の貌。

【倓】コウ 尤

○弓を射るまと。○きみ（人君）又、一封土の君「諸ー」大名。康熙字典「古者以射選賢、射中者獲封爵、故因謂之諸ー」○五等爵の第二位「ー爵」○王城を距る五百里の地。○うかがふ。候に通ず。○むかふ（迎）○よし、うつくし（美）○なんぞ（何）○すなはち（乃）○これ、ここに（維・惟・伊）發語の辭。○無意味の助字。今に通ず。

【倹】もと儉に作る、人に从ひ厂に从ふ。張布の狀に象る、矢其の下に在り。

【倹王】戰國時代の魏の隱士、年七十にして家貧なり、夷門の監者たり、魏の公子信陵君、趙の爲めに秦を伐たんとして侯生に謀る、生其の將朱亥を薦め、晉鄙を殺し其の兵を率ゐて趙を救ひ、遂に秦を破りて趙を存す。

【倹服】侯服に隣する方五百里の地。周禮「方千里曰二國畿一、其外方五百里曰ニーーー」

【倹謂】まと、方十尺なるを侯といひ、四尺なるを鵠といふ。

【倹鮮】非常の珍味、よせなべ、どもくずし。五侯鯖（八三二頁）を見よ。

【倹甸】倹服と甸服と、近畿の地。

【倹方城】宇は朝宗、雲夢と號す、河南南部の人、明亡びて仕へず、性豪邁不羈、才を負ひ任俠にして氣を使ふ、文を以て一時に雄視す、魏叔子・汪苕文と、清朝三家と稱せらる、其の文、才氣奔放よく其の人と爲りに似たり。

【倹伯】倹爵と伯爵と、大名たち、諸大名。晉經「外有二州牧一ーーー」

【倹服】禹貢の五服の第二、王城の周圍を去る五百里より一千里に至るの地、天子の采倹となりて服事する。禹貢「五百里ーー」

【倹牧】一封土の主となりて、民を牧する大名。家語「準ニーーー以見二於王一」

【倹】レ 編

○まつ（待）論、鄉黨「不ーー臨行矣」‖竢。○ーーは柔くしてゆるく行する貌。

【侵】㊀シン ㊁シン 寢 沁

㊀をかす（漸進）次第に入りこみてかすめる。○けづる（腋削）○やぶる（破）害する、迫まる。○不意に敵をうつ。○すすむ（進）○わざはひ。○みのらず（歲凶）五穀登らざるを大ーといふ。○やうやく（漸）寖に作る同じ。○やや（稍）㊁たけひくし（短小）みにくし、容貌揚がらず。漢書、田蚡傳「貌ーー而體弱」寢に作る、同じ。

【侵侮】侵・犯・干・冒○侵は漸進也と註す、いつとは無しに、ひそかにをかす意なり、軍に鹵掠なく、しのびて國を伐つを侵といふ。○犯は獸などの人の田畑をふみあらすが如く、むやみに他領にふみ入る意、犯レ上・犯レ顏・犯レ法などと用ふ。○干は求也、犯也、此の方よりかまはずに、犯し入る義、權門などへとり入り仕官等を求むるを、干謁といふ。○冒は說文に「家而進也」とあり、何にても首に物を被りて進む義、綿帽子を冒頭といふ、冒レ矢・冒二矢石一などと用ふ、他の註を稱するを冒レ姓といふ。史記「齊冒レ姓、爲二齊氏一」註に、冒は假稱するを謂ふ、人首の稱冒あるが若しとあり。

【侵淫】漸く進む【文選、風賦、注】‖侵尋。

【侵害】をかしそこなふ。左、襄十二、註「ーー隣國」‖侵殘。

【侵疆】國境の地ををかしとる。又、そのとりたる地。場雄文「歸二其ーーー」

【侵撃】侵入して撃つ、敵地にをかし入りて攻撃する。

【侵漁】れふしが魚を捕ふる如く、次第に他人の物ををかしとる。魏書、宣帝紀「詔曰、小吏皆勤レ事、而來祿薄、欲レ無ーーー百姓、難矣」

【侵攻】をかしせめる。

【侵寇】をかしあだする。晉書、邊塞載ーーー」

【侵削】をかしけづる。‖侵蝕。

【侵蝕】をかしそこなふ。陳書「山丘變移、陵谷或皆劇伐、莫レ不ーーー」‖侵害。

【侵尋】漸次に進む。史、武帝紀「天子始巡二祭ーーー於泰山一」

【侵蝕】シンショク　をかしはむ。次第に蝕園にくひこむ。＝蠶食。
【侵擾】シンジョウ　をかしみだす。漢書「一ニ一百姓」
【侵猥】シンワイ　ひそかにをかしぬすむ。魏敬文「蟻潰銷集、一ニ邊鄙」
【侵践】シンセン　妄にをかしてふみにじる。北史、陰嬌傳記「自レ古以來、賢人君子、填塞之處、不レ得ニ一一」
【侵奪】シンダツ　をかしうばふ。史記「項王數一ニ一漢南進」＝侵掠。
【侵入】シンニフ　をかし入る。書、孔傳「一ニ一封郊疆一伐レ之」
【侵貿】シンバイ　をかす。謝朓詩「三省無ニ一一」
【侵暴】シンバウ　をかしあらす。
【侵伐】シンバツ　をかしうつ。史記「神農氏世衰、諸侯相一一」
【侵犯】シンハン　他の國土又は財産ををかす。吳志「各守ニ分土、無相一一」
【侵侮】シンブ　をかしあなどる。曲禮「禮不レ踰レ節不ニ一一」
【侵牟】シンボウ　犯しむさぼる。漢書「漁ニ奪百姓ニ一一萬民ニ」牟は蛮根を食ふ虫、蝉に同じ、故に喩ふ。
【侵罔】シンマウ　大權ををかし、ないがしろにす。漢書「臣驕一一、陵陽失レ節」
【侵略】シンリャク　をかしとる。史、五帝紀、注「農相一一、奔往耕期年、耕者讓レ畔」
【侵掠】シンリャク　をかしとる。左、襄十一「禁ニ一一」戰國趙策「一ニ一各地ニ」＝侵略。
【侵陵】シンリョウ　をかしなぶる。左、昭二「寡固不レ可ニ以敵レ衆」の如し。○貧は虚の反なり、充滿して開くるなきにいふ、しかとと譯す。左傳「陳鍼子ニ宇宗卿ニ、資惠后ニ、是と雖ニ用ふ。○貞はげにもと譯す、善也と註す「貞有レ以也」の如し。○諒は彼我の心の相通ずるにいふ、貞に略ー同じ、亮に同じ。○苟は誠也と註す「苟志ニ於仁ニ、則無ニ惡矣」の如し。○洵はくりかへし、くりかへしてもその通りの義。詩、王風「洵美且仁」○允はゆるすといふ義、いかにもと譯す、事理のたがはすして、しっくりとかなふを允當といふ、信也と註す。書經「允執ニ其中ニ」

【信】㊀シン　㊁シン　眞　眞

㊀まこと（慤實）まことをとす、疑はず。孟、盡心「盡レ書則不レ如レ無レ書」○まことに。○あきらか（明）明かにす。左、昭二五「一罪之有無」○きはまる（極）○もちふる（用）○ふたばんどまり。左、莊三「一宿爲レ舍、再宿爲ー」○しるし（驗）老子「其中有ー」○わりふ（符契）「印ー」つかひ（使者）「ー使」訊と通ず。○おもし（重）○まかす（任）○おとづれ「音ー」㊁のぶ。易、繫辭「往者屈也、來者ー也」＝伸・申。

【同用字彙】信・訫・誠・固・實・眞・諒・荷・洵・允。○信は信實と熟す、聞難からざる義、實よりはやや輕し。「國家之存亡禍福、信有ニ天命ー非ニ惟人ー也」の如し。○眞はほんまにと譯し、偽之反と註す、うそのままにて、少しもつくろはざる義、天眞・性眞などと熟す。史、留侯世家「呂后眞而主矣」○誠は詐の反、眞と同用、眞誠と熟するにても知るべし。孟子「子誠齊人也」○固はもとよりとも訓む、當然之詞と註す「寡固不レ可ニ以敵レ衆」の如し。○實は虚の反なり、充滿して開くるなきにいふ、しかとと譯す。左傳「陳鍼子ニ宇宗卿ニ、資惠后ニ、是と雖ニ用ふ。○貞はげにもと譯す、善也と註す「貞有レ以也」の如し。○諒は彼我の心の相通ずるにいふ、貞に略ー同じ、亮に同じ。○荷は誠也と註す「荷志ニ於仁ニ、則無ニ惡矣」の如し。○洵はくりかへし、くりかへしてもその通りの義。詩、王風「洵美且仁」○允はゆるすといふ義、いかにもと譯す、事理のたがはすして、しっくりとかなふを允當といふ、信也と註す。書經「允執ニ其中ニ」

【信愛】シンアイ　信用していつくしむ。宋史「視ニ諸生ー如ニ其子弟ー、諸生亦ー如ニ其父兄ー」
【信鳥】シンてう　水鳥の名、かもめの一種。海物異名記「鷗之別類、羣鳥噂噂隨レ潮、謂ニ之ー一」＝信鷗。
【傳ニ信】デンシンヲツタフ　信ずべき事を世人に傳へ示す。毅梁、桓五「春秋之義、信以レ傳レ疑以傳レ疑」
【取レ信】トリテシンヲ　信ずべき證を取る。漢書、楚元王傳「無レ所レ一ー」
【考ニ信六藝ー】カウシンリクゲイニ　古事の信否を六經に照して考察する、藝は經。史、伯夷傳「夫學者、載籍極博、猶ー、詩書闕レ佚、然虞夏之文可レ知也」
【信向】シンカウ　他人を信じて其の德に歸向する。漢書、韓延壽傳「所ニ一一」
【信仰】シンカウ　神佛をたふとびてたのみすがる。＝歸依。
【信筑】シンチクあひづのしるし「一一機」＝合圖ヲ。
【信歌】シンカ　まことと、いつはりと。晉夫論「一一在レ性、不レ在ニ親疏ー」
【信機】シンキ　信實にして正し。南史、周敷傳「開ニ數一一、皆往依レ之」
【信禽】シンキン　雁の異名。郝經詩「一一秉ニ天運ー斷不レ爲ニ炎涼ー」
【信解】シンゲ　佛佛を信仰して其の道を悟る。
【信教自由】シンケウジイウ　人民の宗教を信ずることは其の自由に任せ、政府にて關渉せざるをいふ。
【信結】シンケツ　まことを以て交をむすぶ。陸雲文「一ニ民情ー」
【信皆不レ美美皆不レ信】シンゼンビヤクビビヤクフシン　信ずべき言は外面を飾らず、飾れる言は信なし。老子の語。
【信士】シンシ　○信義のあるさむらひ。後漢書、來歙傳「世稱來君叔天下一ー」○出家せずして佛門に入りたる男子の稱。楞嚴經「爲ニ清一ー、守レ仁不レ殺、知レ足不レ盜」＝優婆塞ウバソク○佛菲せる男子の法名につくる稱。
【信次】シンジ　二ばん以上のとまり。何遜詩「淮ー無ニ一ー」＝信宿參看。

【信使】シンシ つかひ。使者。司馬相如、諭巴蜀檄「故遣ニ―一喩ニ三百姓一」

【信宿】シンシュク しるし。史記「受ニ―一、賽五日」

【信人】シンジン 誠ありて欺かざる人（孟子）

【信心】シンシン 心をこめて神佛を信頼して祈念する。

【信者】シンジャ 神佛を信仰するもの、宗教を信仰する人。梁高僧傳「時有ニ―一」‖教徒・信徒。

【信賞必罰】シンショウヒツバツ 賞罰を嚴明にし、功ある者は必ず賞し、罪ある者は必ず罰す。後漢書、宣帝紀「孝宣之治、――」

【信宿】シンシュク 二ばんどまり。左、莊三「凡師一宿爲ニ舍、再宿爲ニ信、過ニ信爲ニ次」詩、豳風「於ニ女―一」

【信書】シンショ てがみ。手書。札。書簡。

【信處】シンショ 二ばんどまり。詩、豳風「于ニ女―一」‖信宿。

【信託】シンタク 信用して事を任せ頼む。

【信託會社】シンタクガイシャ 信託の引受其の他依頼を受けて財産の管理を爲す會社。

【信鳥】シンチョウ かもめ。禽經「鷗―也」本草「一種隨ニ潮往來謂ニ之信鳥一」‖信鷗。

【信天翁】シンテンオウ あほうどり、性鈍にして魚を捕ふること能はず、口を開きて魚蝦の墜ちし魚を拾ひ食ふ、故に信天翁と名づけたりといふ「五雜俎」‖信天公。

【信徒】シント 信者に同じ。

【信及ニ豚魚一】シンキュウトンギョ 豚・魚は共に愚鈍の純きもの、然るに信能くこれに及ぶは信の道の至れるなり。易、中孚「豚魚吉、――也」

【信女】シンニョ 圖○出家せずして佛門に入りたる婦人の稱。○佛葬したる婦人の法名につくる稱。

【信念】シンネン 信仰するまごころ。‖信心。

【信牌】シンパイ しるしのふだ。官吏の地方を巡回する時、携帶する證牌。明律集解「凡府州縣自ニ上行ニ下、以ニ牌爲ニ信、故曰ニ―一」

【信賴】シンライ 信用してたよる。‖信賴。

【信孚】シンプ まこと、孚は雛の卵を孵化するに必ず期の如くして信を失はざる義。左、莊十「小信未ニ孚、神弗ニ福也」

【信風】シンプウ 東北風（國史補）

【信用】シンヨウ 信用してたがふ。北史、楊乾運傳「少雄武、爲ニ鄕閭ニ―一」‖信義。

【信書】シンショ 圖郵便切手。

【信用】シンヨウ 人に信ぜられて用ひらる。左、宣十二「其君能下ニ人、必能ニ―其民一矣」

【信用貸】シンヨウガシ 圖人物を信用して無抵當にて金錢を貸す法。

【信賴】シンライ あてにしてたよる、信用してたよる。

【信陵】シンリョウ 地名、戰國の魏の地、今の河南省寧陵縣の地、即ち魏の公子無忌（―君）の食邑。

【侁】 シン 圖 愼・倂・峻と通用す

よし（善）わらべ、ちご（童子）童男童女。張衡、東京賦「―子萬童」

○とし（敏）智が千人に過ぐるをいふ。○すぐる、ひいづ（秀）○大いなり、たかし（高）○うさぎ‖竦。

【俊異】シュンイ 衆人にすぐれて秀でる、又其その者。漢書「招ニ選天下材智士一―者編ニ用之一」

【俊穎】シュンエイ すぐれぬきんづ、又、其の者。宋史、虞允文傳「弦幼子稱ニ―一美秀一」

【俊乂】シュンガイ すぐれて賢き人。書、皐陶謨「―在ニ官」

【俊傑】シュンケツ 俊傑に同じ。

【俊器】シュンキ すぐれたる器量ある人。晉書「期毋輔之見ニ光逸一、謂ニ荀邃一曰、彼似ニ奇才一、便呼上ニ車與談良久、果ニ―一」

【俊兄】シュンケイ 自ら其の兄を尊ぶ辭。韋玄成詩「茅土之繼、在ニ我―一」

【俊傑】シュンケツ 才德の衆にすぐれたる人。孟、公孫丑「尊ニ賢使ニ能、―在レ位」

【俊彦】シュンゲン 才智のすぐれたる人、彦は男子の美稱。書、太甲「旁求ニ―一、啓ニ迪後人一」

【俊語】シュンゴ すぐれて立派なることば。朱熹詩「―非ニ錄錄一」

【俊才】シュンサイ すぐれたるはたらきある人。

【俊英】シュンエイ 才智が衆人にすぐれて而く明か。又、人品が秀でて高い。晉書、裴楷傳「楷、風神高邁、容儀―一」

【俊士】シュンシ 周代の學制、庶人の子弟中、道德の秀でたる者を三年に一回選拔して、太學に入れたる其の被選拔者。禮、王制「司徒論ニ選士之秀者一而升ニ之學一曰ニ―一」

【俊秀】シュンシュウ 才智のすぐれたる者。後漢書、黨錮傳「天下ニ―王叔茂」‖俊穎・俊邁・英俊。

【俊達】シュンタツ 性質の秀でて事理に通達する。杜牧、與ニ池州李使君ニ書「足下性ニ―堅明、心正而氣和」

【俊哲】シュンテツ すぐれてさとし、又其の人。陸機文「皆生ニ―一」‖俊彦。

【俊童】シュンドウ すぐれてさときわらべ。‖神童。

【俊德】シュントク すぐれて大いなるとく。

書、堯典「克明ニ―ニ、以親ニ九族」【俊髦】バツ　才徳の衆に秀でたる人。髦は毛中の長毛、故に喩ふ。爾雅、注「士中之俊、猶ニ毛中之髦ニ」【俊拔】バツ　すぐれひいづ。宋史、陳宜中傳「少甚貧、而性特ニ―ニ」‖英俊。【俊法】ハツ　法律をきびしくする、又、其の法律。公羊、注「梁君隆ニ刑ニ―ニ」‖厳法・峻法。【俊敏】ビン　才智秀でてさとし。【俊辯】ベン　すぐれてさとき辯口。晉書、羊祜傳「辭甚ニ―ニ」【俊邁】マイ　才智すぐれてねんごろ。邁は超なり。宋史、蘇頌傳「―ト能文、尚ニ氣概ニ」‖俊秀。【俊民】ミン　秀でて異なれる民。抱朴子「蒲輪玉帛、以抽ニ丘園之―ニ」【俊茂】モウ　才學衆にすぐる。又、其の者。漢書、舉ニ其ニ―ニ」

【俎】ソ　國

○つくゑ。祭享の器、牲を載せて薦むるもの。後漢書、馬融傳、注「―載ニ牲之器ニ」○まないた、魚肉を料理する臺。史、項羽紀「如今人方爲ニ刀ニ―ニ我爲ニ魚肉ニ」

俗に俎に作るは非なり。

【俎實】ジツ　俎に盛る中み。史、禮書、注「大饗祫ニ祭先王ニ、以ニ鼈魚ニ爲ニ―ニ」【俎豆】トウ　○祭祀に食物を盛る器。論、衛靈公「―ニ之事、則嘗聞ニ之矣ニ○ひろく禮器の稱とす。史、孔子世家「常陳ニ―ニ、設ニ禮容ニ」

【俏】セウ　曉

○にる(似)○かたどる(像)○みめよし、俗に婦容の美好なるをいふ。

【俏然】ゼン　琴を反ぺすこと。莊、讓王「孔子―ニ反ニ琴而絃歌ニ」

【促】㊀ソク　㊁サク・ソク　覺沃

㊀せまる(迫)しじまる(蹙)短くなる。唐書、柳宗元傳「長來愁ニ日月益ニ―ニ」ちかづく(近)○せき立てる、うながす「催」史、陳涉世家「―ニ趙兵亟入關ニ」‖趣。○はやし(速)すみやか。潘岳、悼亡賦「聞ニ冬夜之恆長ニ何此夕―ニ」○せまし(狹)○きびし(急)きびしくなる。○局ニはちいさき貌。○こまやか(密)㊁せまる。‖疑。

【促束】ソクソク　促機に同じ【埤雅】【促急】ソクキフ　せき立てる。いそがす。新語「懷ニ―ニ者、必有ニ所ニ虧ニ」‖催促・督促。

【促窘】ソクキン　せまりくるしむ。【促裝】ソクソウ　よそほひをうながす。謝靈運詩「振衣古人寮、―ニ趨ニ梁粮ニ」‖趣裝。【促進】ソクシン　うながしすすめる。【促杵】ソクシヨ　臼しげくつくきね。張鉉詩「拂ニ砧知露濕ニ、―ニ恐ニ霜飛ニ」【促織】ソクシヨク　こほろぎ。寒くなる故、はたおりをいそげと鳴く蟲の稱。古詩「―ニ鳴、愁婦驚ニ杜甫詩「―ニ甚微細、哀音何動ニ人ニ」‖蟋蟀。【促成】ソクセイ　うながして早く成就せしむ「―ニ栽培」【促聲】ソクセイ　文法上、音と音との間に挾まりてつまること。まったくのつの聲の類。【促促】ソクソクソクソク　世事にあくせくする。韓愈、進學解「醇ニ常途之―ニ、窺ニ陳編ニ以盜竊ニ」‖齷齪ソクアク【促迫】ソクハク　うながし、せまる。【促轡】ソクヒ　手綱をかいくる。【促步】ソクホ　せはしくあゆむ。齊民要術「令ニ―ニ以ニ足踐ニ實底ニ」

【俗】ゾク　沃

○ならひ、ならはし(風習習慣)上の化する所を風といひ、下の習ふ所を―といふ。曲禮「入ニ國問ニ―ニ」○いやし、雅ニ(ヤビ)ならず(鄙陋)○つね(凡庸)「凡ニ―ニ」○世の中、世間、世の人。呉志、嚴翻傳「性不ニ協ニ―ニ、多見ニ誇毀ニ」○脫出家せし僧に對して在家の人。宋書、徐湛之傳「世祖命使ニ遊ニ―ニ」【俗惡】アク　いやしくみにくし。【俗間】カン　野卑なる調子。白居易詩「古琴無ニ―ニ」【俗調】チヨウ　俗歌に同じ。【俗絲】シ　○世の中のゆかり。陳鑑錄「―ニ未ニ盡、慎勿ニ相近ニ」‖塵緣・世緣。○僧とならざる時の俗族。唐高僧傳「釋智興ニ―ニ宋氏」【俗歌】カ　世の中のはやりうた。‖民謠・俚歌・俗曲・俗謠。【俗客】カク　○世間の凡俗なるきゃく。杜甫詩「休ニ怪兒童延ニ―ニ」○李のモモの花の異名。三柳軒雜識「李花俗ニ―ニ」【俗學】ガク　世俗のはやり學問。北史「―ニ鄙智」【俗間】カン　よのなか。漢書「浮ニ滋―ニ」‖世閒。【俗眼】ガン　俗人のまなこ。平凡なるみかた。集異記「―ニ不ニ識ニ神仙ニ」‖俗目。【俗忌】キ　世俗の忌み所の事をいふ。宋書、王僧恩傳「嫌悪以ニ五月五日ニ生、家人以ニ―ニ、欲ニ令ニ出繼ニ疏宗ニ祖猛見奇之曰、此非常兒、昔孟嘗君惡日生面相ニ齊、是兒亦將ニ興ニ吾門ニ、故名ニ之爲ニ嫌惡ニ」【俗氣】キ　俗臭に同じ。【俗曲】キヨク　○俗間に行はるる歌のふし。‖俗調。○俗歌に同じ。【俗化】カ　俗了に同じ。

【俗意】ゾクイ つまらぬいやしきお、俗人のよろこぶ意。名臣記「不ㇾ可ㇾ以二一一一傳ㇾ其意旨ㇾ」

【俗懐】ゾクカイ いやしきこころ。＝俗情。

【俗官】ゾクカン 俗間に使用する言葉。雅言の對、さとびことば。＝俗語。

【俗諺】ゾクゲン 民間に行はるることはざ。下世話ㇾ魏書、邢巒傳「且一一云、耕則問二田奴一絹則問二織婢一」＝俚諺。

【俗語】ゾクゴ ○いやしきことば、野卑なる詞。○日常俗間にて用ふることば。雅語の對。後漢書、蔡邕傳「其高者頗引二經訓一風二喩之一言下則連二偶一一、有ㇾ類二俳優一」

【俗骨】ゾクコツ いやしきほねぐみ。仙骨の對。王貞白詩「念子無二一一一、頗與鶴書招」＝凡骨。

【俗才】ゾクサイ 世俗の事に通じたる才。＝世才。

【俗殺】ゾクサツ 次條に同じ。

【俗煞】ゾクサツ 俗了に同じ、煞は動辭、殺に同じ。張船山詩「一一汾陽軟脚筵」

【俗士】ゾクシ 見識ひくきつまらぬ人。蜀志「儒生一一、鮮識二時務一」

【俗字】ゾクジ 漢字の正しからざる字體。俗を頽、館を舘と書く類。

【俗耳】ゾクジ 俗人のみみ。世說、言語「戴仲若（名は顒）春日攜二雙柑斗酒一、人問二何之一答曰、往聆二黃鸝聲一、此一一針砭、詩謂鼓吹」一一針砭とは、いやしき耳を療治する義。

【俗事】ゾクジ 世の中のうるさきことがら。神仙傳「樊巴少而好ㇾ道、不ㇾ修二一一一」＝雜事。

【俗臭】ゾクシュウ 世俗のいやしきにほひ、野卑なる氣分。＝俗氣。

【俗習】ゾクシュウ 世の中のいやしきならはし。

【俗人】ゾクジン ○凡庸の人。老子「一一昭昭」○世間の人人。

【俗情】ゾクジョウ 世俗のいやしき心。風雅ならざる心。陶潛詩「詩書敎二厥好一、園林無二一一一」

【俗主】ゾクシュ 平凡なる主。呂覽「一一處ㇾ情」

【俗儒】ゾクジュ 見識せまく心卑しき學者。論衡「一一好長ㇾ古而短ㇾ今」

【俗儒不ㇾ通二時宜一】ゾクジュフツウジギ 俗儒は時務に暗きをいふ。漢書、元帝紀「且——、好是ㇾ古非ㇾ今、使二人眩一於名實一、不ㇾ知ㇾ所ㇾ守、何足二委任一」

【俗柄】ゾクヘイ ○世人の貴ひなれたるよびな、とほり名。○俗名に同じ。

【俗姓】ゾクセイ 未だ僧とならざる時の姓。唐高僧傳「釋惠超、一一田」

【俗說】ゾクセツ 世俗の人の論說。漢書、刑法志「又因二一一一而論ㇾ之」

【俗諦】ゾクタイ 世俗如實の理、忠孝仁義等一切世間の道をあきらめ悟る義。＝俗諦名輪集「三摩鉢底此云二等持一、即方便隨緣止、止於一一」

【俗體】ゾクタイ ○僧に非ざる人の風體。○風雅ならざる體。

【俗塵】ゾクジン うきよのちり、世のわづらひ。唐太宗詩「超然離二一一一」＝世累。

【俗傳】ゾクデン 世人の言ひつたへ。

【與ㇾ俗違】ゾクトタガフ 世の中の俗人とあはず。王貞白詩「古樂知ㇾ音少、名言——」

【俗念】ゾクネン 世のうるさきおもひ。白居易詩「世緣一一消除盡、別是人間清淨氣」

【俗之所ㇾ排】ゾクノハイスルトコロ 俗人のしりぞけるところの人をいふ。揚雄、連珠「明君取ㇾ士貴ㇾ拔二衆之所ㇾ遺、忠臣郤ㇾ善、不ㇾ厭二俗之所ㇾ排」

【俗之所ㇾ欲因而予ㇾ之】ゾクノヨクスルトコロニヨツテコレヲアタフ 衆俗の欲する所は、之を授け與ふる史、晏子傳「——、俗之所ㇾ否、因而去ㇾ之」

【俗蹙】ゾクハイ 平凡なるともがら。戴復古詩「一一衆多吾蹙少」＝俗流。

【俗不ㇾ可ㇾ醫】ゾクフカイス 俗氣ある人は濟度す可からず。蘇軾、綠筠軒詩「無ㇾ肉令二人瘦一、無ㇾ竹令二人俗一、人瘦尚可ㇾ肥、士——」

【俗煩】ゾクハン 世のならはしがうるさくわづらはし。左傳、疏「國之將ㇾ滅、風敎一一」

【俗物】ゾクブツ 平凡なる無趣味の人物。晉書、王戎傳「一一已復來敗二人意一」＝俗人。

【俗文】ゾクブン 分かり易き通俗文。

【俗氣】ゾクキ 世俗のうるさき氣。冷齋夜話「恨筆二一一所二蔽翳一」＝俗臭・世塵・俗塵。

【俗務】ゾクム 世の中のつとめ。杜甫詩「環堵蕭二一一一」＝雜務。

【俗名】ゾクミョウ 僧出家後の法名に對して、在家の時の名をいふ。

【俗規】ゾクキ 世間普通の儀式。池北偶談「不二能一一一」

【俗用】ゾクヨウ 國世俗の用事。＝俗事。

【俗吏】ゾクリ 學問なくしてつまらぬ俗務に從ふ役人。漢書「一一之所二能爲一者、在二子刀筆匡牆一而不ㇾ知二大體一」

【俗流】ゾクリュウ 凡俗なるなかま。韓愈詩「一一知者誰、指法競二嘲傲一」＝俗輩。

【俗累】ゾクルイ 世の中のわづらひ。沈約詩「一一從ㇾ此休」＝塵累・世累。

【俗了】ゾクレウ 凡俗のものとなしをはる。方岳詩「有ㇾ權無ㇾ雪不二精神一、有ㇾ雪無ㇾ詩一二人」

【俗話】ゾクワ 世の中のつまらぬはなし。杜荀鶴詩「洞裏客來無二一一一」

【俛】

○かろし（輕）○てがるにやすし（簡易）淮南、本經「其行一一而順ㇾ情」

【保】

㊀ ハウ・ホウ

㊁ ホ

㊀たもつ、もつ（所持・所有）○そだてやしなふ（育養）孟、滕文公「古之人若ー赤子」○たのむ（特）○まもる（守）○いだく（抱）○もり、つきそひ。禮、文王世子「入則有ー、出則有師」○なかだち「牙ー」○くみあひ。○やすんず（安）○たすく（佑）○全くす「ー全」○たふ（任）其の責に任ずる、うけあふ「ー證」「ー險」周禮、地官、大司徒「令五家爲ニ比、使之相ー」○やとはれ人（傭）「雇ー」史、樂布傳「窮困賃傭於齊爲酒家ー」○趙宋の代、義勇兵の組合の稱。正字通「紹興之間、詔ニ淮漢間取戸主之雙丁十戸爲ー、五ー爲ニ團、團有ニ長」○こじろ（小城）「城ー」又、都邑の城。○むつき、襁褓に通ず。㊁たすけ安んず。

【保右】ハウイウ　まもりたすく。詩、大雅「ーー命ノ爾」＝保佑。

【保有】ハウイウ　たもちもつ。

【保佑】ハウイウ　たすける、力をそへて助ける。書、召誥、註「格ニ正夏命」ーニー之」＝保右。

【保衡】ハウカウ　宰相の稱、天下この人に倚りて平を得る義。書、說命「昔先正ーー、作ニ我先王」＝阿衡。

【保甲】ハウカフ　趙宋の代の義勇兵の組の稱。正字通「宋元豐以ニ諸路義勇ー改爲ニーーー」

【保惠】ハウクヰ　やすんじめぐむ。書經「能ーニー于庶民」

【保人】ハウジン　保證人（未信編）

【保眞】ハウシン　我が天賦の眞性を保ちて失はざる義。風俗、卜居「寧超然高舉、以ーレー乎」

【保全】ハウゼン　たもちて全うす。後漢書「夫ーニー一身ニ、就ニ若ーニー天下」

【保持】ハウヂ　たもちもつ。孤樂文「幸賴ニ大將軍ーニー之耳」＝維持。

【保定】ハウテイ　やすんじさだめる。詩、小雅「天ーニー爾ニ亦孔之固」

【保寧】ハウネイ　たもちやすんず。李吉甫文「ーニー社稷」

【保馬】ハウバ　民をして組を設けて、官馬を飼養せしむる義。文獻通考、兵考「按熙寧五年、所レ行者ーーー也、元豐七年所レ行者ーー也、皆是以ニ官馬ー貸ニ之於民ニ、令ニ其字養ニ戸馬ー則是猶ニ其科賦ニーー則是猶ニ其征役ー」

【保民】ハウミン　たみをやすんず。孟、梁惠王「ーレー而王、莫ニ之能禦ー也」

【保命】ハウメイ　○生命を長くたもつ「ーー酒」○上の命令を持ちむ。左、僖廿三「保ニ君父之命ー而享ニ其生祿ー」

【保護】ハウヰ　天子の親兵。變興即ち天子の御車を保護する戰。變或は變に作る、車の上に附ける鈴、鸞鳥の象に象る。五代史記、王彥章傳「京師號有ニーーー五百騎ー」

【保安條例】ハウアンデウレイ　社會の安寧秩序を保つ爲めに設けし規則。

【保育】ハウイク　やすんじそだてる、保護養育。＝撫育

【保介】ハウカイ　周代の農事を勵むる官。詩、周頌「噫嘻ーーー」

【保管】ハウクワン　保護管理の約語、規定又は契約により、他の物を預り保存する。

【保險】ハウケン　損害をつぐのふ保證。生命ーーー火災ーーの類。

【保元物語】ホウゲンモノガタリ　國三卷、作者未詳、保元元年七月、後白河院と崇德院との御爭につきての戰記。

【保釋】ホシャク　かばひまもる。書、畢命「成ニ定東周郊境ー、使レ有ニーーー」＝庇護。

【保護預】ホゴアヅカリ　金銀、又、公債證書・株券等を其の所有者の請求により、手數料を取りて保管する。

【保護國】ホゴコク　強大國の保護によりて存立せる國。印度の英國に於ける類。

【保護色】ホゴシキ　動物が其の常に棲む所の周圍の草木地面等の色に類似せる體色を有する其の色をいふ、敵の目に觸れざるやう自然に進化せしもの。

【保護鳥】ホゴテウ　種族の滅亡を防ぐ爲め、又、害蟲を捕食する益あるが爲めに行政權を以て其の捕獲を禁止せられたる鳥類。

【保佐】ホサ　他人の能力を助けて過なからしむる義。保佐人ホサニンは準禁治產者の財產を管理する人。

【保社】ホシヤ　互に保護する組合。元好問詩「父兄漸來同ーーー」

【保障】ホシヤウ　○小城ととりでと、保は國に同じ、障は塞上の要險の處に築きしとりで。左、定十二「且成、孟氏之ーー也、無レ成是無ニ孟氏ー也」○租稅を輕くして民を保んずる政治。史、趙世家「肥子使ニ尹鉏爲ニ晉陽ー、請曰、以爲ニ禦寇ー乎、以爲ニーー乎、簡子曰、ーー哉、尹鉏損ニ其戸數ー」

【保釋】ホシヤク　刑事未決囚が保證金又他の保證を出して一時歸宅を請ふ時、裁判所又は裁判所が之を許可する法。

【保守】ホシュ　これまでのとほりを守りたもつ「ーー黨」

【保衆】ホシュウ　衆をあつめて保ち守る。左傳「我敝邑用不ニ敢ーーー」

【保證】ホショウ　あかしをする、うけあふ、ひきうける「ーー人」「ーー金」

【保哨】ホセウ　みはりの兵。

【保存】ホゾン　大切にたもつ、失はざるやうに維持する「ーー登記」

【保存林】ホゾンリン　風致を添へ、又は水害を禦ぐ爲めに政府が其の採伐を禁止し又制限せる森林。

【保單】ホタン　保證書。

【保庇】ヒ　かばふ。宋史、楊延昭傳「胶力爲ニ一一以及ニ於此一」
【保傳】フ　かしづき、もりやく。戰國策「不レ離ニ一一之手一」
【保母】ボ　もりやくの女。禮記「其次爲ニ一一」‖保姆。
【保姆】ボ　○もりやくの女。‖保母。○國幼稚園の女教師。
【保養】ヨウ　身體を健かにたもち養ふ。列、力命「蒸天不レ存ニ手一一、窮達不レ繫ニ于智力一」‖養生。
【保庸】ヨウ　やとひにん（傭人）‖保傭。
【保傭】ヨウ　前條に同じ。

【俘】フ　虞

○とりこ、とりこにする（虜獲）生擒する。○とる（取）書、湯誓「一ニ厥寶玉一」
【反レ俘】ハンフ　とりこをかへす。宋史「一ニ一歸レ幣可也」
【俘級】フキフ　俘虜と首級と、いけどりと討ち取りし首と（南史、宋武帝紀）‖俘馘。
【俘獲】フカク　敵兵をいけどる。唐書、李光弼傳「一一過宮」‖生擒。
【俘馘】フカク　敵を獲て其の左耳を截る。左傳「示ニ之一一一」
【俘斬】フザン　いけどりにすると斬り殺すと。宋史「一一甚衆」‖擒斬。
【俘囚】フシウ　とりこ。蘇軾詩「王命獻ニ一一一」
【俘虜】フリョ　多くのとりこども、既は衆。
【俘虜】フリョ　とりこ。晉書、祖逖傳「幸哉遺黎免ニ一一一」‖俘囚。

【侮】ブ　麌

○あなどる、あなどり（慢易）史、淮陰侯傳「淮陰少年有ニ一一信者一」○かろんず（輕）輕蔑する。○しのぐ（陵）左、昭元「不ニ一一一」○もてあそぶ（戲弄）
同訓異義　侮・慢・易○侮は人を輕んじなぶる義、慢易なり。孝經「治レ國者、不ニ敢侮ニ於鰥寡一」○慢はだらくにして、何とも思はざる義、暴慢・怠慢と連用す、侮より甚し、相手なくとも放肆にして、じだらくなるは慢なり。○易は心やすくあひしらふなり。
【侮弄】ブロウ　あなどりなれる。‖狎侮。
【侮謔】ブギャク　あなどりたはむれる、かろんじてふざける。桂苑叢談「常嗜レ酒一一時醒一」
【侮笑】ブセウ　あなどりわらふ。韓愈詩「低レ頭受ニ一一一」
【侮辱】ブジョク　あなどりはづかしめる。
【侮蔑】ブベツ　あなどりののしる。魏書、高涼王孤傳「見ニ一一遂卽去レ之」
【侮慢】ブマン　人をあなどりて自らおどりたかぶる。書經「一一自賢、反レ道敗レ德」

【便】

㊀ベン　㊁ベン　㊂ヒン・ビン　眞　先　綫

㊀やすし（安）○したがふ（順）○いばり（溲）漢書、張安世傳「郎有ニ醉レ殿上者一」○たより、都合、勝手。荀、議兵「汝所謂ニ一者不ニ一一也」○たよりよし、都合よし、利あり。○おとづれ（音信）○とし（敏）○すなはち（輒）莊、達生「若乃夫沒人則未嘗見ニ舟而一操之也」○一面は扇の類。㊂やすんず（安）くつろぎ休む。○ならふ（習）○一一は肥滿せる貌。又、ひとし、平に通ず。又、みやびやか（閑雅）なる貌、又、明かに辯ずる。○へつらひ、へつらふ「一佞」㊂やすし。○たよりよし。
同訓異義　便・則・卽・輒・乃・迺の別は則（刀部七畫）を見よ。
【便安】ベンアン　おだやかにおちつく、やすらかにしてたよりよし。後漢書「爲ニ吏民所ニ一一」
【便衣】ベンイ　短くして袖を小にしたる便利なる衣服。漢書、李陵傳「陵一一一步出レ營」
【便易】ベンイ　たよりよし、易はてがる。急就篇「一一於事一」‖便宜。
【便益】ベンエキ　便利よし。‖便宜。
【便佞】ベンネイ　くそのしる。唐書、郭弘霸傳「弘霸親ニ一一卽染レ指貨、驗ニ疾輕重一」‖讒計。
【便巧】ベンカウ　たくみにへつらふ。新語「一一者近レ仁」
【便宜】ベンギ　都合よし。漢書、婁敬傳「臣願見レ上言ニ一一」
【便宜施行】ベンギシカウ　其の時の見はからひにて事を行ふ。史、蕭相國世家「卽不レ及ニ奏上一報一一、上來以聞」上は高祖。
【便器】ベンキ　大小便をとる器、おまる。‖便盆・虎子。
【便計】ベンケイ　都合よきはかりごと、便利なる謀。史、滑稽傳「所レ謂奇策一一也」
【便姸】ベンケン　輕くしてうるはし。張翰詩「輕側綺屨、顧盼一一」
【便娟】ベンケン　○雲の輕く飛ぶ貌。雪賦「初一一于簾櫳、末萦ニ盈於帷席一」○あてやかなる貌。南都賦「僊超一一、舞ふ貌。駱賓王文「一一舞袖」
【便嬛】ベンケン　身輕にみやびなる貌。前條に通ず。司馬相如、上林賦「靚粧刻飾、一一綽約」
【便蠲】ベンケン　便器に同じ。
【便座】ベンザ　○くつろぎて坐する席。

漢書、萬石君傳「子孫有二過失一不二誰譴一、必一一對レ案不レ食」○休息のへや。漢書、張禹傳「禹見二之於一一一」＝便房。

【便私】ビンシ　自分の勝手のよきことをはかる。韓非子「言曲而一一」＝利己。

【便辭】ビンジ　くちまへ巧きことば。漢書、藝文志「一一巧說」

【便習】ビンシフ　なれる。後漢書「一二一山谷」

【便人】ビンジン　事に慣れたる人、聖賢を以て自ら居らざる讒辭。禮、表記「唯欲三行之浮二于名一、故自曰二一一一」

【便所】ビンジョ　圖かはや、てうづば。＝雪隱イン

【便捷】ビンセフ　すばやし。淮南子「虎豹一一、熊羆多力」＝便敏。

【便旋】ビンセン　○小便する、旋は尿イ。○たちもとほる。博雅「徘徊一一也」＝徘徊。

【便水】ビンスイ　よく水になれる、游泳などの巧なる義。陰書「晉二一一者一引取二其筏一」

【便道】ビンダウ　ちか路、便利よき道路。杜甫詩「一一即長驅」

【便地】ビン　便利よき土地。漢書、匈奴傳「使下韓安國將三十萬衆一徼於一一上」

【便殿】ビンデン　天子の休息の御殿、便は安くくつろぐ。漢書、武帝紀「一一火」

【便疏】ビンソ　病名の一、よこね。＝橫痃。

【便佞】ビンネイ　辯口に巧にして、見聞の實なく心に誠なき者。便辟を見よ。

【便房】ビンバウ　くつろぎてやすむ部屋、休息べや。潘岳文「憩二一一一以偃息」

【便法】ビンパフ　つがふのよき方法、てがるなるしかた。

【便祕】ビンピ　ふんづまり、大便が祕結する、大便の通じが無い。

【便敏】ビンビン　さとし、すばやし。韓愈、毛穎傳「穎爲レ人强記而一一」＝便捷。

【便風】ビンフウ　○おひて。楊炯詩「香逐二一一一來」＝順風。○たより。山谷刀筆「餘須二它日一一一也」

【便服】ビンフク　くつろぎて休む時に著るきもの、ふだんぎ。＝私服・燕衣イ

【便腹】ビンフク　こえふとりたる腹。蘇軾詩「十圍一一貯二天真一」

【便壁】ビンペキ　君にへつらひて、其の氣に入るもの。孟、梁惠王「一一不レ足レ使二令於前一與」

【便辟】ビンペキ　便は人の欲する所に順ふ、辟は人の惡む所を避くる義、人の意を迎へてこびへつらふ。又其の人。論、季氏「友二一一一、友二善柔一、友二便佞一、損矣」

【便便】ビンビン　○肥滿せる貌。漢書、邯鄲傳「腹之一一、五經之笥」○明かに辯ずる貌。論、鄕黨「其在二宗廟朝廷一一一云、唯謹爾」○みやびなる貌。韓詩外傳「一一閑雅貌」

【便面】ビンメン　扇の類。漢書、張敞傳注「鄭古曰一一所二以障レ面、蓋扇之類也、不レ欲レ見レ人、以レ此自障レ面則得二其便一、故曰二一一一」

【便乘】ビンジョウ　初學に分り易く作る、又、其の書物。

【便門】ビンモン　かってぐち、裏門、便は便利。

【便覽】ビンラン　一覽するに便利なる書物、一見してはやわかりのする書物。

【便利】ビンリ　都合よし、自由にきく。史、荊軻傳「手足一一、耳目聰明」＝便宜。

【俛】ベン・メン　㊀　㊁　㊂　㊃　㊄　㊅　㊆　㊇　㊈　㊉　㊊　㊋　㊌　㊍　㊎　㊏　㊐　㊑　㊒　㊓　㊔　㊕　㊖　㊗　㊘　㊙　㊚　㊛　㊜　㊝　㊞　㊟　㊠　㊡　㊢　㊣　㊤　㊥　㊦　㊧　㊨　㊩　㊪　㊫　㊬　㊭　㊮　㊯　㊰　㊱　㊲　㊳　㊴　㊵　㊶　㊷　㊸　㊹　㊺　㊻　㊼　㊽　㊾　㊿　(1)　(2)　(3)　(4)　(5)　(6)　(7)　(8)　(9)　(10)　(11)　(12)　(13)　(14)　(15)　(16)　(17)　(18)　(19)　(20)　(21)　(22)　(23)　(24)　(25)　(26)　(27)　(28)　(29)　(30)　(31)　(32)　(33)　(34)　(35)　(36)　(37)　(38)　(39)　(40)

所二館具一」＝俗言・俚語。
【俚諺】リゲン　さとびたることわざ。韓琦詩「事累載二方册一、今復著二一一」＝俗諺。
【俚語】リゴ　さとびたることば。五代史、王彦章傳「彦章武人不レ知レ書、常爲二一一一」＝俚言・俚諺。
【俚耳】リジ　いやしき人の耳。＝俗耳・里耳。
【俚辭】リジ　俚語に同じ。
【俚淺】リセン　いやしくしてあさはか。宋史、藝志「洞旨一一」
【俚俗】リゾク　さとびていやしい。五代史「翔所レ作皆一一語」＝鄙俗・野卑。
【俚鄙】リヒ　さとびていやしい。＝鄙俗。

【俐】リ　㊀

さとし、こさかし、俗一は點慧の義。

【侶】リョ　㊀　語

○とも（朋）つれ、ともがら（儕）たぐひ（類）○ともなふ（伴）友とす。蘇軾、赤壁賦「一二魚鰕而友麋鹿」
【侶行】リョコウ　ともなひて行く。陸機、草木疏「鱗不二一一」
【侶儔】リョチュウ　つれ、ともだち。＝儕侶。

【俙】　㊀

おもかげ、すがた、容貌、弟は兄の面影あるが故。

【倚】イ　㊀　キ　㊁　八畫　支　紙　畫

㊀よる、因ナむ。○よりかかる（憑依）たのむ（恃）「一勢陵レ人」○かたはら（側）○かたよる（偏）○調子に合せる。漢書、張釋之傳「優夫人一瑟而歌」○もつ（持）㊁奇に同じ。○かたはもの。＝畸。

同訓異語　倚・依・寄・憑・藉・靠等の別は依（二三五四段）の條を見よ。

【倚傾】イケイ　かたよりかたぶく。上林賦「磐石振崖、巖巖一一」
【倚恃】イジ　よりたのむ。孟郊、寓雀吟「黃雀猶二承慶一一主人仁」
【倚閭】イリョ　あけび。＝山女・丁翁。
【倚託】イタク　よりたのむ、たよりにする。＝依賴・倚賴。
【倚馬七紙】イバシチシ　馬前にて立ちどころに、七枚の紙に書く程の長文を草したる故事、文才の敏捷なるにいふ。世說、文學「桓宣武北征、袁虎時從、被レ責免レ官、會須二露布文一、喚レ袁倚二馬前一令レ作、手不レ輟筆、俄得二七紙一、殊可レ觀」
【倚馬才】イバノサイ　馬によりかかりて待つ間に萬言の文章を作る程のすぐれて敏捷なる天才。李白、上二韓荊州一書「請試二微官一、倚レ馬可レ待」
【倚伏】イフク　禍と福とは互に相因りて生じ、相續まり伏する義。老子「禍兮福之所レ倚、福兮禍之所レ伏」班固、幽通賦「北叟顧レ禍其一一」
【倚門之望】イモンノノゾミ　母が外出せし子の歸るを待ちわびる情をいふ。戰國齊策「王孫賈年十五、事二閔王一、王出奔、失二王之處一、其母曰、女朝出晚來、則吾倚レ門而望、女暮出而不レ還、則吾倚レ閭而望、女今事レ王、王出走、女不レ知二其處一、女倚何歸」
【倚賴】イライ　たよる。後漢書、袁安傳「自二天子一及二大臣一、皆一一之一」＝依賴。
【倚棚】イホウ　らんかんにもたれる。＝倚闌。
【倚閭之望】イリョノノゾミ　倚門之望に同じ。
【倚廬】イロ　父母の喪中に住む假のいほり、中門外の片隅に葦掛けて作る。禮、問喪「居二於一一一、哀三親之在二外也一」＝倚閭。
【倚樓】イロウ　たかどのによる。杜甫詩「勳業頻看レ鏡、行藏獨一一」
【倚人】イジン　かたはもの、不具者。莊、天下「南方有二一一一焉」＝畸人。

【俺】エン　㊁　儉　個

われ（我）

【個】カ　コ　個

個個　ひとつびとつ。＝一一。
【個人】コジン　己ひとり。社會、又、公衆人に對していふ語「一一一」
【個個】ココ　取り立てていふ條件、かど「一一當ニ其一一一」
【個條】カジョウ　○倫理學の一派、個人の獨立自由を重んじ、個人を基礎として、一切の行動を規定せんとする主義。○教育學の一派、個性を發達するを以て教育の目的とするもの。
【個性】コセイ　個人が特別に有する性質。
【個數】コスウ　かず。

【倖】カウ　㊁　庚

○さいはひ（幸）こほれざいはひ、分に非ずして得るしあはせ「僥一」「僥一」○したしむ（親）へつらふ（佞）
【倖愛】コウアイ　君の寵愛を受けてゐる女、君のおもひもの。＝愛妾。
【倖門】コウモン　僥倖ギョウコウの門。舊唐書「武宗詔誡二元宜一一一頓塞」
【倖利】コウリ　こほれざいはひ。＝僥倖ギョウコウ

【倣】

倣（人部十畫）に同じ。

【倶】キ　㊁　支

輩ーはおにやらひをする時かぶる面。四目の者を方相、兩目の者をーといふ。荀、非相「仲尼面如蒙ーに供は頬・儛に通ず。

【倨】 キョ 圖

〇おごる「ー傲不遜」〇足を投げ出してすわる(箕坐)〇さしがね、矩の直きもの。〇すこしくまがる(微曲)

同訓異字 倨・傲・驕・奢・侈等の解は奢(大部九畫)を見よ。

【倨傲】ガウ たかぶりあなどる。驕慢不遜。莊子「夫子猶有ニーー之容ニ」魏志、陳羣傳「高才ーー」

【倨句】ク たかぶる氣ぶん。唐書、忠義傳「無ニーー矜色ニ」

【倨慢】マン 臥して思慮なき貌。淮南、覽冥「臥則ーー、興則酌酌」‖居居。

【倨觀】クワン おどりたかぶりて他人をかろんずる。金史、蕭肆傳「憑ニ特恩倖ニ、ニニーー同列ニ」

【倨侮】ブ たかぶりて人をあなどる。倨非、驕言「慮ニ平廣肆、郊曰ニ草野而ーーニ」

【倨傲】ガウ 倨傲に同じ。漢書、王尊傳「尊爲ニ相、ーーー不屈ニ」

【倶】 ク 通用 ケ

〇ともに(偕)みな(皆)〇そなはる(具)〇ともにす。つれだつ。

同訓異字 倶・偕・與・共〇倶・偕の二字は、同義にて、共にうちそろひてと訓す、但、偕は、倶よりは意強し、例へば花艸に在くに、始終相攜へて行くは、偕の字、少し前後しても、一所に行き合ふは、倶の字なるが如し。詩衛風「及ニ爾偕老ニ」孟子、「父母倶存」〇與は黨與の義にて、くみあふ義より、ともにと訓む。易に「立ニ天之道ニ陰與ニ陽、立ニ地之道ニ剛與ニ柔、立ニ人之道ニ仁與ニ義ニ」とある如し。論語「始可ニ與言ニ詩已矣ニ」〇共は公共と熟す、へだて無く、寄り合ひて、事を共にする義なり「與ニ衆共ニ之ニ」の如き、與は組み合ふ所を主とし、共は衆人と、共同にする所を主とす。

【倶生神】シャウ 俗人の左右の肩の上に在りて行爲の善惡を監視するといふ神、右なるは女神にて人の惡業を錄し、左なるは男神にて善業を書きとめるといふ「無量壽經」

【倶舍宗】シャ 佛教八宗の一、法相宗の分派、天親菩薩の倶舍論を所依とする小乘教、倶舍は梵語、藏と譯す、一切所應の知識を包藏する義。

【倶樂部】ラブ 圖もと英語の音譯、集會所の義。

【倶製函藏】ザウ 圖黒き龍が劍を卷ける圖にて、不動明王の法形を現はしたるもの。

【倔】 クツ 物

つよし(強)こわし(梗)梗戻の貌、剛情、いっこく。

【倔強】キャウ がうじやうにして屈せず、屈抑を受けず。宋史、趙鼎傳「檜曰、此老ーー猶ニ昔ニ」‖倔彊。

【倔彊】キャウ 前條に同じ。五代史「孟知祥ーニー於蜀ニ」

【倌】 クワン 支

とねり、馭を主る小臣。

【倪】 ㊀ゲイ 齊 ㊁ゲイ ㊂ガイ 佳

㊀をさなし(幼弱)幼者。孟、梁惠王「反ニ其旄ーニ」純は老人。〇きは(際)はし(端)かぎり(限)韓愈、南海神廟碑「乾端坤ー、軒豁呈露」〇わかつ(分)疏、秋水「惡至而ー貴賤」〇おぎなふ、裨益す。㊁僻ーは城上のひめがき。‖堄堄。〇ながしめ、斜視。‖睨。㊂ほとり、かぎり、きは、はし。‖涯。

【倪迂】ゲイ 倪黄を見よ。

【倪雲林】ゲイウンリン 倪黄を見よ。

【倪黄】ゲイワウ 共に元代の畫家、倪瓚、字は元鎮、雲林と號す、無錫の人、博學にして詩畫に工なり、古法を一變し、天眞幽淡を以て宗となす、性潔を好む、人倪迂と稱す。黄公望、字は子久、聰敏絶倫、畢は百氏の說に通じ、最も畫山水をよくせり。元の季の四大家と稱せられしは、以上二人と王蒙・吳仲圭となり。

【倪寬】クワン 前條を見よ。

【倦】 ケン 銑

〇うむ、おこたる(懈)疲、懦行「敎行而不ー」〇つかる(疲)〇おごる(倨)

【倦游】ケンイウ 游學に倦み疲れる。史、司馬相如傳「長卿故ーー、雖レ貧、其人材足レ依也」何遜詩「我本ーー客、心念似ニ歸旌ニ」

【倦厭】ケンエン あきていやになる。

【倦勤】ケンキン 天子が政務の勤勞にうみていやになる。書、大禹謨「傲期侮ニ于勤ニ」

【倦態】ケンタイ うみていこふ。臨游詩「ーー石展鼓、好搥銅博山」

【倦困】ケンコン うみてくるしむ。

【倦意】ケンイ うみておこたる。

【倦程】ケンテイ 道の遠きにうむ。李商隱詩「ーーー山南有、家レ園閒蜡屐」

【倦懨】ケンエン うみつかれる。‖倦疲・倦憊。

【倦勞】ケンラウ　うみてつかる。‖倦怠・倦弛。

【無ㇾ倦】ナカレ　始終勤め行ひてうみおこたることなかれと戒むる辭。論、子路「子路問ㇾ政、子曰、先ㇾ之勞ㇾ之、請ㇾ益、曰ㇾ倦ㇾ」

【候】コウ　宥　一に候に作る

○うかがふ（伺）とふ（訪）みる（望）さぐる。○うらなふ（占）考へる。後漢書、郎顗傳「父宗能望氣占ㇾ吉凶」○さぶらふ、はんべる（侍）○きざし（兆）しるし（證）○まつ（待）迎へる。陶潛、歸去來辭「稚子ー門」○ものみ「斥ー」ものみの番所。後漢書、光武紀「北邊築亭ー修烽燧」○邊疆を守る官吏。○賓客を送迎する官吏。○事のありさま（情狀）「火ー」「症ー」○一年を七十二に分ちたる時節の稱、轉じて時節の義とす「氣ー」魏書、律曆志「五日一ー」○國さぶらふ、有りといふ敬語、今は書簡文に用ふ。

同訓異字　候・伺・偵等の即は伺（二二頁二段）の條を見よ。

【候雁】コウガン　かり、時候に應じて來去するが故。

【候騎】コウキ　ものみの騎兵、斥候する騎兵。‖偵騎。

【候儀】コウギ　天象を揣きたる天文圖。‖渾天儀。

【候館】コウクワン　ものみ。周禮「市有ニー一ー一」註「一ー、樓可ニ以望ニ者也」

【候調】コウテウ　軍中の斥候。唐書、李皎傳「誤山度ㇾ河、號令嚴密、一ー不ㇾ能ㇾ知」‖調候。

【候人】コウジン　道路にて賓客を迎送する役人。詩、豳風「彼ー兮」‖候官。

【候鐘】コウシヨウ　時計をいふ。帝京景物略「一ー應ㇾ時、自擊有ㇾ節」

【候蟲】コウチウ　時候に應じて出で、又鳴く蟲。柳宗元詩「門掩ー秋」

【候鳥】コウテウ　時候に應じて來去する鳥類。秋來る雁、春來る燕の類。

【候潮】コウテウ　潮のさし來るをうかがひまつ。李嘉祐詩「長安帶ㇾ酒別、建業ー一歸」

【候補】コウホ　候は待つ、官に補せられを待つ義、官職に就く希望、又其の希望ある人をー一者といふ「士官ー一生」

【候脈】コウミヤク　血液の流通をうかがふ、診察する。搜神記「醫至察ニ其容、候ニ其脈一」

【候問】コウモン　きげんをうかがふ、みまふ、伺候訪問。唐書、房琯傳「帝命ㇾ中ニ使ㇾ以便ニー一」

【候吏】コウリ　斥候をつとむる役人。後漢書「ー一還曰、河水流漲、無ㇾ船不ㇾ可ㇾ濟」

【候補】コウホ　候は待つ、官に補せられを待つ義、官職に就く希望、又其の希望ある人をー一者といふ「士官ー一生」

【候脈】コウミヤク　血液の流通をうかがふ、診察する。搜神記「醫至察ニ其容、候ニ其脈一」

【候問】コウモン　きげんをうかがふ、みまふ、伺候訪問。唐書、房琯傳「帝命ㇾ中ニ使ㇾ以便ニー一」

【候吏】コウリ　斥候をつとむる役人。後漢書「ー一還曰、河水流漲、無ㇾ船不ㇾ可ㇾ濟」

【候候】コウコウ　ものみやぐら。周禮、夏官「掌ニ王ー一之政一」‖臚車。

【候文】コウブン　國手紙に用ふる文體。決定の辭に候といふ語を用ふるが故。‖書翰文。

【倥】

㊀コウ　㊁コウ　㊂コウ　送董東

㊀一個はおろか、無知なり。‖倥。㊁一傯はいそがはし、せまる（迫促）㊂くるし、困苦。○國ぬかる、ぬかり、油斷して仕損ずる。

【倥傯】コウソウ　○いそがはしき貌。劉基詩「顛怪天地無、去來何ー一」○困む貌。楚辭、九歎「愍ー一於山陸一」

【倥侗】コウトウ　童蒙の無知なる貌。法言、學行「ー一顓蒙」

【倪】

コン　阮

㊀俛は事物の開通せざる貌。又、四凶の一。‖混沌。

【倅】

㊀サイ　㊁ソツ　月　陷

㊀そへ（副）そへぐるま（副車）○未だ仕官せざる子、へやずみ、曹子㊁百人の一隊の稱。卒に通じ用ふ。○國せがれ、己の男子を呼ぶ稱。

【倅車】サイシヤ　そへぐるま。周禮、夏官「掌ニ王ー一之政一」‖副車。

【倉】

㊀サウ　㊁シヤウ　陽　養

㊀くら、こめぐら（穀藏）囲きを囲といひ方をー一といふ。○ー卒・ー皇は、にはか（急遽）あわつ（遽）○あをし、蒼に通ず。○あをうなばら、滄に通ず。○はらわた、臟に通ず、五ー は五臟。㊁かなしむ、愴に借用す。

【倉海】サウカイ　あをうみ。揚雄、甘泉賦「東ー一」‖滄海。

【倉庚】サウカウ　うぐひす（鶯）詩、豳風、七月「春日載陽、有ニ鳴ー一」

【倉困】サウキン　米ぐら。字解を見よ。白氏長慶集「廩祿二百石、歲可ニ盈ニー一」

【倉皇】サウクワウ　あわつ、にはか。杜甫詩「ー一已就ニ長途一往」‖蒼黃・倉卒・蒼惶。

【倉黃】サウクワウ　あわつる貌。風土記「大雪被ニ南越一、大皆ー一吠噬」

【倉頡】サウキツ　黃帝の史臣、始めて文字を造りし者。許愼說文序「黃帝之史ー一初造ニ書契一、依ニ類象一形故謂ニ之文一、其後形聲相益、即謂ニ之字一、著ニ於竹帛一謂ニ之書一、倉一に蒼に作る。

【倉廩】サウリン　くら、倉は米ぐら、廩は穀物を入るるくら。舊唐書、高祖紀

「高祖起二義兵一開二一一一以賑二窮乏一」

【倉公】コウ　漢代の名醫、史記に扁鵲一一列傳あり。

【倉皇】コウクワウ　くらに貯へたる穀物。後漢書、程曾傳「一一腐而不レ可レ食、錢貫朽而不レ可レ校」‖倉米。

【倉倉】ソウソウ　音律の響の形容。宋史「開レ口吐レ音調二之商一、其音將將一一然」

【倉薬】ソウヤク　くらの中のもみ。史、高祖記「一一多非レ乏」

【倉卒】ソウソツ　にはか、あわつ。李陵、答二蘇武一書「前書一一未レ盡二所懷一」‖倉猝。

【倉儲】ソウチョ　くらの中のたくはへ。宋書、劉懷肅傳「衛二一一一以候二王師一」

【倉頭】ソウトウ　〇めしつかひ、小使。倉者皆義通ず、古、賤者青布を頭にまとひし故。漢書、蕭望之傳「一一廬兒」‖蒼頭。〇倉廩を掌る者。晉書、石崇傳「一一八百餘人」

【倉府】ソウフ　倉は米ぐら、府は錢ぐら。漢書、王式傳「縣官貿來、一一空」

【倉米】ソウマイ　くらの中のこめ。晉書、庾翼傳「一一一百萬斛」

【倉扁】ソウヘン　倉公と扁鵲と、共に古代の名醫。史記に其の傳あり。轉じて名醫の稱とす。

【倉庾】ソウユ　こめぐら。史、文帝紀「發二一一一以振二貧民一」注「在レ邑曰レ倉、在レ野曰レ庾」

【倉廩實而令圖空】ソウリンジツシテレイクウヲハカル　人は貧窮すれば已むを得ず、他人の物を盜めども、富有の身となれば、盜むことなければ、自然牢獄は空虛となる。管子「一一、賢人進而姦民退」

【倉廩實則知二禮節一】ソウリンジツスレバレイセツヲシル　人は財產ゆたかにして、始めて禮義作法を知るとの義。管子、牧民「一一、衣食足則知二榮辱一」

【倉龍】ソウリョウ　たけ八尺以上の馬。禮、月令「乘二駵馬一一一」‖蒼龍。

【倉兄】ソウケイ　悲み憂ふる形容。詩、大雅「一一塡兮」‖愴怳。

【傳】シ　圓

〇物を以て地に插ばさむ。‖制。〇たつ（立）事を立てる

【傳刃】シンジン　刃を腹に刺す。史、張耳陳餘傳「且下一一公之腹中一以成中其名上」

【修】シウ　シュ　尤　倩に通ず

〇をさむ（理）〇ととなふ（飭）〇かざる（飾）「一飾」〇正す、ととのへをさむ（整治）大學「先二其身一」〇ならふ（習）學ぶ。漢書、敍傳「東髮一一學」〇つつしむ（敬）〇そなふ、そなはる（備）〇ながし（長）詩、小雅「四牡一一、廣」〇たけ、身の高さ。戰國、齊策「鄒忌一八尺有餘」〇前一は古のすぐれたる人。〇祭に用ふるさかだる（中篇）卣に通ず。

修・治・理・收・斂・藏・納　御〇修は飾なり、整理なり、屋宅道路を修理する類、あしき所をなほす義。修身・修レ道の類にも用ふ。大學「欲レ修二其身一者、先正二其心一」中庸「春秋修二其祖廟一」脩は、脯也と註して、別字なれども、後世は通用す。〇治は亂の反、いり亂れたる事の、おちつきてをさまるなり。禮記「治二絲棼一」大學「欲レ治二其國一者、先齊二其家一」〇理は玉を治むる義、筋道を正してをさむるなり、理レ髮・整理の類。禮記「三十而有レ室、始理二男事一」〇收は取り入るるなり、收藏・收斂と連用す。〇斂はひとつとかきあつめて取り込むなり。後漢書「鮑永抗直、朝廷斂レ手避レ之」〇藏は見えぬやうに、くらへかくし入るる義。〇納はいるるとも訓む、をさむと訓むときは、先方へ入れをさむるなり。〇御はもと馬を使ふ義、轉じて下をひきまはし、治むるに用ふ、御二字內」の如し、取と同じ、取二革屈一の類。

【修偉】シウヰ　たけたかく立派なり。南史、袁昂傳「容貌一一、器範人倫」

【修史】シウシ　國と國とのよしみををさむ、國と國とのよしみを通ずる。‖修交。

【修學】シウガク　學問ををさめならふ。

【修學旅行】シウガクリョコウ　實地に就きて學生の見聞知識を博める目的にて行ふたび。

【修祓】シウバツ　長きすそ。拾遺記「長袖一一」

【修遠】シウエン　長く遠し。登樓賦「路遵遠而一一」

【修禊】シウケイ　みそぎする、三月上巳の節句に水邊にて行ふ祭事。王羲之、蘭亭集序「暮春之初、會二於會稽山陰之蘭亭一一一事一也」

【修撰證書】シウセンショウショ　成規の學科ををさめたることを證明するために、授けるかきつけ。

【修史】シウシ　歷史を編修する。

【修祀】シウシ　禮ををさめて祭る。漢書郊祀志「天子躬二率天地一一一山川一、古今通禮也」

【修辭】シウジ　〇言語文章ををさめかざりてつやをつける、文辭を潤色してうるはしくする。禮、文言「一一立二其誠一、所二以居一レ業也」〇又其の學問を一一學、又、美辭學といふ。

【修葺】シウシフ　家根、壁などをつくろひなほす。梁書、吳平侯景傳「一一城隍一」‖補葺。

【修身】シウシン　身ををさめ行を正しくす。大學「欲レ二其家一、先修二其身一」

【修樹】シュジュ たけたかき木。
【修熟】シュジュク 學藝ををさめて上手になる。
【修飾】シュウショク すでに成りし物を更にをさめかざりて文采を增さしむ。論、顏問「行人子羽ー二ニ之ニ」
【修正】シュウセイ ○なほし正す。晉書「既以ニ新律、遠ニ二舞、次更ー二ニ頒屋ニ」○をさまりてただし。漢書「行義ー二、柔毅敦厚」
【修省】シュウセイ わが身をかへりみてをさめる。易經「君子以恐懼ー一」
【修整】シュウセイ をさめととのへる。行をととのへ正す。後漢書、張堪傳「居ニ處幽室ニ、必自ー一」
【修撰】シュウセン ○文書をつくる。‖編纂・編修。○史書を編纂する官の名。唐書、百官志「史館ー一四人、掌レ修ニ國史ニ」
【修繕】シュウゼン つくろひなほす。漢書「ー二ー故宮ニ」
【修道】シュウダウ ○人のみちををさむ。○道路をなほす。
【修竹】シュウチク ながく延びたる竹。北史、柳弘傳「ー一夾レ池」‖脩竹。
【修飭】シュウチョク 身ををさめいましむ。後漢書「內自ー一、外遠ニ疑嫌ニ」
【修德】シュウトク 德行を修める。易、蹇卦象傳「山上有レ水蹇、君子以反レ身ー一レ」
【修敏】シュウビン をさまりて、さとし。魏書、高祖紀「經行ー一、文思遒逸」
【修廢】シュウハイ ながきひさし。夏侯湛、秋夕哀賦「尋ニ一之飛檐ニ覽ニ明月之流光ニ」
【修復】シュウフク もとのやうにつくろひなほす。後漢書「詔ー二ー四京園陵ニ」
【修文】シュウブン 文德ををさめる。國語「先王之訓也、有ニ不享ニ、則ー一レ」
【修文郎】シュウブンラウ 冥土ノイにて文章を掌る役人。三十國春秋「蘇韶卒、後從弟節晝見レ記、節因問ニ幽冥事ニ、韶曰、頗同ニ下廻見爲ニ地下ー一ニ文人の死を謂ひて修文と爲すはこの故事に本づく。
【修睦】シュウボク よしみををさめる、國と國とのよしみを通ずる。‖修好。
【修茂】シュウモ たけが長くのびしげる。
【修竟】シュウキョウ 道ををさめ德をやしなふ。張養浩文「維人之心、屈レ惡伸レ善、由レ茲乃遵敎」
【修容】シュウヨウ ○容儀を修飾する〔禮記〕○女官の名、魏の文帝置く。
【修理】シュウリ つくろひなほす、をさめ正す。後漢書、光武紀「ー二ー長安ニ」‖修治・修繕。
【修理職】シュリシキ 國古、宮城の破壞を修繕することを掌る職、をさめつくろひつかさ。其の長官を修理太夫といふ。
【修了】シュウリョウ 規定の學科ををさめ終はる、卒業。
【修練】シュウレン ○學びたる事をよくねる。○道家にて仙術を修むる道。
【修行】シュギョウ ○學藝道德を修める。漢書、儒林傳「凡通ニ經術ニ固當レ一ー先王之道ー一」○佛法を行ひ修む。晉書、鳩摩羅什傳「不レ揀ニ小檢ー一者頗疑レ之」
【修業】シュギョウ 學問藝術ををさめ習ふ。
【修驗者】シュゲンジャ 國修驗道を修める人、總髮にて錫杖ヲ袈裟ヲ頭巾ヲを著け、大刀を佩び、金剛杖をつき、法螺ヲを吹き、山野に露宿修行す、故に山伏ヤマブシともいふ。
【修驗道】シュゲンダウ 國佛教の一派、胎藏界・金剛界の兩部を本とし、加持祈禱を爲し、本地垂跡スイジャクの說を立てて神にも事ふ、故に兩部神道ともいふ、役小角エンノヲヅヌを祖とす。
【修羅】シュラ 梵阿修羅の略、六界の一、其の王、力強くして、能く梵天帝釋と爭ひ鬪ふ、故に修證サンたる光景を形容していふ。大藏法數「言殿戰鏡、懷三猜忌心ー常好ー鬪戰ー、是名ニ阿ー一道ー」

【借】シャ セキ・シャク 陌 禡

○かり、かる（假）「假ー」○他よりかりたるもの、おひめ（債）○かす（貸）論、衞靈公「有ニ馬者ー一人乘レ之」ゆるす（許）たすく（助）漢書、朱雲傳「ー二客報ニ仇ー」○よし（縱）たとひ（縱令）かりに（假）假說の辭。○不ー一は草履の異名、其の價やすく人に借るを要せざる義。
【借印】シャクイン 國ヒ 借令・借使・縱・縱令・假令の別は續（永部十一畫）を見よ。
【借家】シャクカ 國賃錢を拂ひてかりて住む家。‖借宅・借屋。
【借區】シャクク 借りたる一くぎりの地。
【借款】シャククワン 負債を起こす。又、借金の條件。
【借錢】シャクセン かりてみる。東都事略「便ニ手ー一」
【借債】シャクサイ かりたる金、おひめ。‖負債・借財・借錢・借金。
【借對】シャクタイ 古人の詩賦、同音の字を借りて對句とする法。劉禹錫詩「談笑有ニ鴻儒ー、往來無ニ白丁ー」の如き鴻字を借りて紅字と爲し、以て白字に對するなり。
【借地】シャクチ 土地を借る。又、借りたる土地。
【借用】シャクヨウ かりて用ふる。
【借問】シャモン 借は假なり、假に問ふ、試に問ふ。陶潛詩「ー一爲レ維悲、憤レ人在ニ九青ー」
【借如】シャジョ 假設の辭。張九齡、封事「ー一諸司清要之職」‖假如。

【倡】㊀ シャウ ㊁ シャウ 漾 敬 ㊀に同じ

㊀わざをぎ（歌舞・女樂・俳優）史、孔子世家「優ー倡侏儒ー一侲而進」○あそびめ、うたひ

め。揚侯斯詩「世無劉孟交」、不及青樓ー」○みだる(亂)くるふ(狂)猖に通ず。○さかんなり(盛)○みちびく(導)㊁となふ、唱に通ず。禮、樂記「壹ー而三歎」

【倡優】ショウイウ わざをぎ、役者。女に倡といひ、男に優といふ。史、荊軻傳「楚之鉅劍利而ーー拙」‖娼優。

【倡伎】ショウギ うたひめ、音曲歌舞を以て酒席の興を助ける女。舊唐書、天竺國傳「百姓殷樂、家有二奇樂一ー」‖倡女・樂妓。

【倡狂】ショウキャウ 甚だしくくるふ。莊、山木「ーー不レ知レ所レ往」‖猖狂。

【倡優】ショウイウ 色の盛んなる貌。陳陶詩「綠衣宛地紅ーー」

【倡隨】ショウズヰ 夫婦相和する。關尹子「夫者倡、婦者隨」‖唱隨。

【倡道】シャウダウ ききだちて唱へ出す。‖唱道。

【倡佯】シャウヤウ さまよふ。司馬光文「逍遙ーー、惟心所レ適」‖倘佯。

【倡和】シャウワ 甲となへ乙これにてよく調和するをいふ。詩、鄭風「倡予和女」‖唱和。

【倘】シャウ 養

○ー然は忽ち止む貌。莊、在宥「雲將見之ー然止」○もし、或は然るの辭。‖儻。

【倘來】タウライ 偶・若・如・設等の別は若（艸部五畫）の條を見よ。

【倘佯】シャウヤウ さまよふ、たちもとほる。淮南子「ーー中庭」‖徜徉。

【倏】シュク 圏 儵は本字

○たちまち、すみやか(急疾)○犬の疾走する貌。

【倏忽】シュクコツ 俗に火に从ひて條に作るは非なり。

【倏忽】シュクコツ 倏・忽・乍等の別は忽（心部四畫）の條を見よ。

【倏然】シュクネン たちまち、すみやか、疾速にして捕捉すべからざる形容。漢書、敘傳「辰ーー其不再」‖儵忽。

【倏辟】シュクヘキ 極めて短き時間。謝莊賦「尋二瓊宮一ーー」

【倏閃】シュクセン たちまちにひらめく。元稹詩「蕭條簾外雨、ーー案前燈」

【倏】

倏（前條）の俗字。

【倢】㊀シュク ㊁テキ 屋 錫

㊀はじめ。詩、大雅「令終有レ」はじめて(始)書、胤征「ー擇天紀」○おこす、つくる(作)○あつし(厚)○ととのふ(整)張衡、思玄賦「備二元辰一而ー駿」○はなはだし(甚)○よし(善)㊁すぐれる。‖倢。

【倢伃】セフ 箋 捷・婕に通ず

○すみやか(速)○はやし(疾)とし(利)○たよりよし(便)捷に通ず。○うつくし(美)

【倢伃】セフ 漢の女官の名。武帝置く、位上卿に比し、爵列侯に比す。‖婕妤。

【倩】㊀セン ㊁セイ 霰 靜

㊀うるはし、みづみづし(美好)○口もとあいらし。○男子の美稱。㊁むこ(壻)○やとふ(雇)○圖つらつら(熟)

【倩兮】セイケイ 口わきのあいらしき貌。好き口輔ヲ詩、衛風「巧笑ーー」兮は助字。

【倩粧】センサウ うるはしきよそほひ。吳融詩「柳眉櫻顏ーー新」

【倩倩】センセン 美好なる貌。杜甫詩「披顏爭ニーー一逸足競二駿駿一」

【倒】㊀タウ・トウ 號 ㊁タウ・トウ 號 嘯

㊀たふる、たふす(仆)○はけしき動作を表ずはすに用ふ。「ー壁」「ー懸」㊁さかさま、さかさまにす。詩、齊風「顚之ー」之、自「公召」之」○さかふ(逆)韓非、難言「至言忤于耳而ー于心、非二賢聖一莫能聽」○圖商家の破產をいふ。「ー閉」「ー欠」

【倒行逆施】タウカウギャクシ 道理に順はずして施行す。史、伍子胥傳「吾日暮途遠、故倒二行而逆一施之一」

【倒圈】タウケン くらの米を籃く出す。宋史「人人皆ーー以慶之」

【倒戈】タウクワ ほこを味方の方へ向けて攻むる。書、武成「前徒ーレ、攻二于後一以北」

【倒景】タウケイ ○夕日。下より上へ返照するが故。蘇軾、潮州韓文公廟碑「滅沒ーー不レ可レ望」○さかさまにうつるかげ。溫庭筠詩「鳥飛二天外一斜陽盡、人過二橋邊一ーー來」

【倒懸】タウケン ○君臣の位の顚倒する喩。漢書、賈誼傳「天下之勢方ーー」○大旱に同じ。

【倒懸】タウケン 身體をさかさまにつるされる、困苦の甚だしきをいふ。孟、公孫丑「當二今之時一萬乘之國行二仁政一民之悅レ之、猶レ解二ーー一也」

【倒懸】タウケン 文勢を強める爲めに語をさかさまに置く法、仁鮮矣を鮮矣仁とし、善走於衣食を衣食於善走とするの類。

【倒懸】タウケン 前條に同じ。

【倒屣】タウセン 身代れを失ふ、身代かぎ

り、破産する。
【倒死】タウ　たふれしぬる、ゆきだふれ。‖顚死シン
【倒屣】シタ　屣をさかさまに穿つは人を歡迎するの意の忙劇にして情の切なるにいふ。後漢書「蔡邕資客塡レ門、聞二王粲至一門、一レ一迎レ之曰、此王公之孫、有二異才一、吾不レ如也」
【倒懸】タウ　たふれたるかき。禪能詩「葵花墜二一一一」
【倒植】シタ　倒さまに立つ、一解植は音チ置に同じ。賈誼、弔二屈原一文「賢聖逆鬼方正一一」
【倒生】タウ　草木をいふ、さかさまに地に首して生ずるが故。淮南、原道「一一植傷」
【倒竅】タウ　財布フをさかさまにす、所持金を盡く出す義。陸游詩「一一猶堪レ買二釣舟一」
【倒置】タウ　位置がさかさまになる、顚倒する。莊、繕性「謂二之一一之民一」
【倒著】タウ　さかさまにきる。仇遠詩「一一烏巾一旦醉眠」
【倒顚】タウ　くつがへる。くつがへす、逆さまにする。歐陽修詩「子足未レ及レ閒、我衣驚二一一一」‖顚倒。
【倒流】リウ　さかさまになかる。木華、海賦「吹濤則、百川一一」‖逆流。

【倬】タク　㊥

○あきらか(明)○あらはる、いちじるし(著)○大いなり。詩、大雅「一彼雲漢」

【倓】㊀タン　㊁ダン　覃　寢

㊀しづか(靜)○やすし(恬)やすんず(安)㊁蠻夷にて罪を贖ふ貨(後漢書、南蠻傳)‖賤。
【倓然】ダン　安んじて疑はざる貌。荀、仲尼「一一見二管仲之能足一以託一レ國也」

【値】チ　㊀質

○あふ(遇)あたる(當)後漢書、崔寔傳「一尼連之會」○たつ。‖植。もつ(持)詩、陳風「一其鷺羽」○あたひ(物價)あたひす、直に通ず。○すつ(捨)おく(措)

【値遇】グウ　○であふ。閻維、注「遇對相一一」‖遭遇。○人に知られて優遇せられる、知遇せらるる。

【倀】㊀チャウ　㊁タウ・ヂャウ　㊂タウ・チャウ　敬　庚　陽

㊀くるふ(狂)○たふる(仆)○くるひて道に迷ふ。㊁獨立の貌。㊂あらし(疎率)○ふみまよふ、道を失ふ。
【倀倀】ショウ　盲人が手引の人を失ひて途に迷ふ貌。禮、仲尼燕居「治レ國而無レ禮、譬猶二瞽者無一レ相、一一乎其何之」相は盲人のてびき。

【倜】テキ　チャク　錫

○高く擧がる貌。○儻は拘束せられざる貌。
【倜然】テキ　高く擧がる貌。荀、君道「一一乃擧二太公於州人一而用レ之」
【倜儻】タウ　才氣すぐれて高くして拘束せられず、獨立不羈。司馬遷、報二任安一書「唯一一非常之人稱焉」‖卓犖。
【倜倜然】テキテキ　不羈獨立の貌。荀、彊國「則一一其不レ及遠矣」

【俳】ハイ　佳

○わざをぎ(俳優・藝人・雜戲)○一倜はたちもとほる。‖徘徊。○圍されうた、俳諧歌、又連歌の發句、俳句。
【俳優】ハイ　わざをぎ、役者。家語「一一侏儒戲於前」‖優倡・俳倡。
【俳諧】ハイ　○遊戲の言詞、俳優に類する者をいふ。宋の太尉袁淑、古の文章の、人をして笑はしむる者を取り集め次して一一集と名づく。○圍狂體に詠ずる和歌、連歌の發句なる五七五の三句の十七字にて成る短歌。‖俳句。一一を作る人を俳人、俳人の作れる輕妙洒落の文を俳文といひ、又其の趣味を俳味・俳風などといふ。
【俳諧】ハイカイ　されごと、戲言をいふ。譚錄「僕白舒二一一一日楊業與二平弘一退朝、白語レ之曰、日之夕矣、累曰、以レ我百二中羊下來一耶」
【俳謔】ハイ　たはむれ。歐陽修文「如二李正論一、來一一矣」
【俳倡】ハイシャウ　わざをぎ。漢書、枚乘傳「詭笑類二一一一」‖俳優。
【俳戲】ハイ　詩文の遊戲に近きもの、俳優の諧話に似たる者をいふ。

【倍】ハイ　㊀遇　㊁バイ

○ます、ますます(益加)○そむく(反)○證、縞衣「信以結レ之、則民不一一」‖背。○そらんじ讀む、書物にそむきて暗誦する。韓愈、韓滂墓誌「滂讀書一一文、功用衆人」‖諷。○いやし(俗)論、秦伯「斯遠鄙一一矣」

倍・蓰・畔・背・反等の別は叛(又部七畫)を見よ。
【倍加】バイ　ばいまし。蘇軾詩「公才與二曹丕一豈止十一一」
【倍蓰】バイ　倍レ義ヲニヲ見よ。
【倍蓰】バイシ　倍は一倍、蓰は五倍。孟、滕文公「或相一一、或相什伯」
【倍稱之息】バイショウ　二倍の利息、非常の高利をいふ。鹽鐵、論レ貧「貸二子錢一、歲不レ時、期令而事改、富二其有一者、

生貝而賈、亡者取二——一」【倍反】ハイ そむく。＝背反。【倍文】ハイ そらよみ。劉禮、注「一レ一日レ誦」＝背文・背誦。【倍俸】ハイ 俸給を二倍にする。唐書「乃倍二其俸一約不レ得二貪暴一」【倍約】ヤクニソムク 約束にそむく。史記「已而一レ、與二趙魏一合從」

【倣】ハウ 養

○ならふ(倣)まなぶ(學)宣和書譜「學者率模一爲」通じて仿放に作る。○よる(依)

同訓異字 倣・倣・習・肄・慣・閑の別は倣(人部十畫)の條を見よ。

【倣效】ハウカウ ならふ、まねる。韓愈、論二佛骨一表「自レ朝至レ暮、轉相一一」

【俾】㊀ヒ 紙 ㊁ヘイ 霽

㊀しむ、せしむ(使)○したがふ(從)書、武成「罔不率一」○ます(益)○もつ(持)○つかさ、つかさどる(職)㊁倪ゲイはながしめににらむ、斜視する。史、信陵君傳「侯生下見其客朱亥一一倪故久立」＝睥睨。

同訓異字 俾・令・使・遣・敎の別は令(人一〇九五三㌻)の條を見よ。

【倪】ヒ 未

○やぶる(敗)○そむく(背)史、三王世家「毋一レ德」

【俯】フ 麌 俛・頫に通ず

○ふす、うつむく(俛)首を垂れる、仰の反對。易、繫辭「仰以觀二于天文一以察二於地理一」○かがむ(屈・曲)○伏しかくれる。禮、月令「季秋之月、蟄蟲咸一」

同訓異字 俯・伏・仆・俛・僵等の別は伏(人一〇六四三㌻)の條を見よ。

【俯瞰】フカン 高き處より下をみおろす。＝下瞰。

【俯視】フシ うつむきてうかがひみる。中說「烏鵲之巢、可二俯而窺一也

【俯仰】フギャウ うつむきたり、あふぎたり、坐作進退。禮、樂記「樂二其干戚一、習二其一一一調伸一、容貌得レ莊焉」＝俛仰。

【俯仰不レ愧二天地一】フギャウハヂズ 心疚しき所なく、仰いで天に對し、俯して地に對しても少しも愧づることなし。孟、盡心「仰不レ愧二於天一俯不レ怍二於人一」

【俯項】フカウ うなだれる、うつむく。

【俯首】フシュ 頭を垂れる。＝俛首。

【俯拜】フハイ うつむきてをがむ。姚合詩「仰聞天語近、一一環珮連」

【俯伏】フク うつむきふす、平身低頭する。史、蘇秦傳「一一侍取レ食」

【俯歩】フホ つつしみうつむきてあゆむ。庾闡詩「一一朝二廣延一」

【俯案】フアン 妻子を養ふ。＝俯育。

【俯聆】フレイ うつぶしてきく。劉琨詩「仰觀二河漢流一、一一趨嶋吟一」＝俯聽。

【併】㊀ヘイ 迥 ㊁ヘイ 敬

㊀ならぶ(相竝)列ナラブる。○きそふ(競)賈誼、治安策「高帝與二諸侯一起」㊁しりぞく。＝屏。○あはす。孟子題辭「後爲二魯所一」＝幷。○國しかし、しかしながら、さりながら。

【併有】ヘイイウ あはせたもつ、あはせて領有する。

【併合】ヘイガフ あはせてひとつにする。＝合併。

【併起】ヘイキ ならびおこる、競ひたつ。字解を見よ。

【併肩】ヘイケン かたをならぶ。漢書「吾於二人之兄一、與二其弟一一レ一面事レ主」

【併進】ヘイシン ならびすすむ、一緒ニ進む。

【併盥】ヘイクワン 同時にあはせ盥く。

【併呑】ヘイトン あはせのむ、悉くあはせる。＝併有。

【併發】ヘイハツ 同時におこる、並り生ずる「一一症」

【併膳】ヘイゼン 二人の食をあはせて一人に食はしむる。列士傳「羊角哀與二左伯桃一爲レ友、俱往仕レ楚、至二梁山一、逢レ雪糧盡、度レ不二兩全一、遂一レ一與レ哀」

【併用】ヘイヨウ あはせ用ふる、共に用ふる。

【俵】ヘウ 嘯

○ちる(散)○わかちあたふ(分與)○國たはら、又其の數を數ふるに用ふ。

【俸】ホウ 宋 又、奉に作る

ふち、秩祿、扶持米、給料。漢書、宣帝紀「小吏勤二事而一薄、欲二其無一レ侵二漁百姓一」

【俸給】ホウキフ 職務に對する給料。宋史「議賜以爲二一一」

【俸錢】ホウセン 俸給の錢。杜甫詩「一一時散二弟子一盡」

【俸秩】ホウチツ 職務に對する報酬の米又は錢、ふち。晉書、山濤傳「祿賜一一、散二之親故一」＝俸祿。

【俸祿】ホウロク 俸給のこり。唐書、馮元傳「斥二一一以給二貧窮一」

【俸廩】ホウリン ふち米、官吏に給する扶持米ヲ

【俸祿】ホウロク ふち、俸給。宋太祖詔「一一鮮薄、朱レ可レ貪レ寵」＝俸秩。

【俔】㊀モン 霰 ㊁モン 元 願

㊀一渾は肥潔せる貌。㊁ともが

ら（倆・儷）など（等）「我ー」「他ー」の如く人稱に添へて用ふる。

【傑】 ラ 箇

はだか（赤體）＝裸・贏。禮、月令「中央土其蟲ー」註「人爲ー蟲之長」

【傑國】コク 國人皆赤體にて居る國の名。淮南、俶眞「四方之ー」、鳥獸弗ン辟、與爲ン一也」

【傑然】ゼン 裸か。吳志「日南郡男女ー」＝裸然。

【傑鱗】リン はだかむし、羽毛鱗介の其の身を蔽ふものなきものをいふ。字解を見よ。

【倫】 リン 圓

○たぐひ（類）曲禮「儗人必于其ー」○ならぶ、くらぶ（比）○しな、ともがら「等ー」漢書、甘延壽傳「絕於等ー」○とも、くみ（伍）○ついで（次序）○つね（常）書、洪範「彝ー攸叙」○のり（紀）○すぢ（義理）禮、祭統「夫祭有ニ十ー焉」○みち（道）中庸「行同ー」○えらぶ（擇）

【倫紀】リン キ 人のふむべき道。＝人倫。

【倫次】リン ジ 身分の次第順序。

【倫常】リン ジョウ 人倫の道。

【倫序】リン ジョ 次第。班固文「方ニ之古賢、實有ニーー」

【倫儔】リン チウ ともがら、なかま。＝倫匹。

【倫匹】リン ヒツ ともがら、同じなかま、同列の人。法華經「其聞足聖尊最勝、无ニーー」

【倫理】リン リ 人倫道德の原理。其の學を倫理學・道義學といふ。禮、樂記「樂者通ニーー一者也」

【倫類】リン ルヰ ともがら、又人倫。荀子「ーー不ン通、仁義不ン一、不ン足ン謂ニ善學ー」

【倫敦】リン トン 英國の國都、世界最大の都會たり。

【倞】 ㊀ リャウ 漾 ㊁ キャウ 養 梗

㊀とほし（遠）㊁つよし（強）

【倆】 リャウ 養

伎ーはたくみ（巧）わざ（伎）

【倭】 ㊀ ヰ ㊁ ワ 歌 支

㊀すなほ、順ふ貌。○ー遲は回りて遠き貌。㊁やまと。古、支那人が日本を呼ぶ稱。

【倭遲】ヰチ 回りて遠き貌。詩、小雅「四牡騑ー、周道ーー」＝倭遲・倭夷。

【倭奴】ワド 古、支那人が我國人をいやしめ呼びし稱。元史、日本傳「日本國在ニ東海之東一、古稱ニーー國一」＝倭寇・倭鬼・倭夷・倭醜。

【倭舞】ヤマトマヒ 國 大嘗會又諸社の祭禮の時に舞ふ舞樂、應神帝の時、大和吉野那國栖の民の始めたるもの。

九畫

【僅】 アク オク 覺

○ー促はかかはる（拘）＝齷齪。○ー佺は堯の時の仙人の名、好みて松實を食ひ、能く飛行すといふ（列仙傳搜神記）

【僅促】アクソク 心せはしく胸狹くして物に拘る。楚辭、九歎、ーー談ニ於鄙願一兮」＝齷齪・局促。

【僚】 イ エ 尾

○なく（哭）○なくこゑ。の餘音。禮、雜記「童子哭不ーー」

【偉】 イ 尾

○大いなり、大いにして立派なり。○さかんなり（盛）○くし（奇）

【偉岸】イガン 容貌の壯大なる貌。唐書「從晦姿質ーー、所ン重以ニ風力一聞」

【偉器】イキ すぐれたる人物。後漢書、黃允傳「爾有ニ經人之才一足ン成ニーー一」＝大器。

【偉勳】イクン 大いなるいさを。＝偉烈・偉績。

【偉觀】イクワン さかんなる見もの。潘道源詩「陵園陽開增ニーー一」＝壯觀・大觀。

【偉藝】イゲイ すぐれたる藝能。晉書、天文志「高才ーー、與ン神合ン契」

【偉業】イゲフ 大いなる事業。＝大業・丕業。

【偉功】イコウ 大いなるいさを。＝偉烈。

【偉才】イサイ すぐれたるはたらきある人。謝朓文「冠世ーー」＝偉器。

【偉肚】イタ 體格が大にして立派である。後漢書、杜詩傳「八子皆ーー」

【偉秀】イシウ すぐれひいでる。＝秀偉・傀偉。

【偉人】イジン すぐれたる大人物。偉は大。魏志、鍾繇傳「此三公者、乃一代之ーー也」

【偉績】イセキ 偉勳に同じ。＝偉烈・偉功。

【偉丈夫】ヰジャウフ　身體又は性格のすぐれたる大人物。宋史、范祖禹傳「其生也、母夢ㇾ――被ニ金甲一入ニ臥室一」

【偉哉】ヰサイ　勝れて大いなるを歎美する辭。莊、大宗師「――造物、又將ニ以ㇾ女爲ㇾ」

【偉烈】ヰレツ　おほいなるいさを。＝偉功・偉勳・偉績。

【偶】グ　遇

○――は獨り行く貌。列、楊朱「――爾、偭ニ耳目之觀聽一」＝踽踽。○せぐくまる貌。漢書、東方朔傳「行步――」註「曲躬貌」

【僂】ル　慶

○――は腰をかがめこしを曲げる。○――傴はほそきこし（細腰）の貌。○――紹はたをやかにして姿容多し。

【僅】キン　震

○ふす（臥）たふる、たふす（僵仆）○なびく、なびかす（靡）なびき伏す。論、顏淵「草上ニ之風」必ㇾ――」○したがふ（服）○いこふ（息）やすむ（休）詩、小雅「戒息ニ在ㇾ牀」○ふせる、やむ（止）漢書、天文志「天下ㇾ兵、百姓安寧」○おごる（驕）○せく、ふせき。＝堰。○かはや（廁）○むぐらもち、又、どぶねずみ、鼷に通ず。

【僵仆】キヤウフ　僵・伏・俯・仆・臥等の別は伏（人部四畫）の條を見よ。

【僵仰】キヤウギヤウ　○ねたり又、起きたりする、轉じて浮沈する義。韓詩外傳「與ㇾ時遷徙、與ㇾ世――」＝俯仰。○ひまなるさま。詩、小雅「或棲遲――」

【僵仆】キヤウフ　おどりたかぶる。權德輿詩「琴觴恣ニ――」＝倨傲。

【僵革】キヤウカク　戰をやめる、革はかぶと、よろひの類。史、高祖紀「盾鼻已乾、武王ㇾ――爲ㇾ軒」＝偃戈・偃武。

【僵甲】キヤウカフ　戰をやめる、甲はよろひ。＝偃兵・偃武。

【僵戈】キヤウクワ　戰をやめる、戈はほこ。呂覽「九有ㇾ――、八方同軌」＝偃革・偃武。

【僵臥】キヤウグワ　うつぶしになりてねる。

【僵月】キヤウゲツ　ひたひの骨のさま。復女の骨相の稱。後漢書、梁后紀「此所謂日角ㇾ――、相之極貴、臣所ㇾ未ㇾ嘗見一也」

【僵月刀】キヤウゲツタウ　なぎなた。三才圖會「按使ㇾ刀無ㇾ如ニ偃子之妙一、然其刀法有ㇾ數、藝高而能識破者、無ㇾ之無ㇾ能、惟關王――、刀勢既大、其三十六刀法、兵仗過ㇾ之無ニ不ㇾ屈者一、刀類中以ㇾ此爲ニ第一一」＝關刀。

【僵月堂】キヤウゲツダウ　唐書、李林甫傳「林甫有ㇾ堂如ニ僵月一、號ニ――一」林甫此の堂に居りて大臣を中傷構陷する法を思ふ、一名月堂。汪藻詩「巧語曾ㇾ運――」

【僵蠶】キヤウサン　○おどりたかぶる貌。左、哀六「彼皆ㇾ――時寒ニ子之命一」○轉じて奇怪なる巖石の形容とす。柳宗元、鈷鉧潭西小邱記「石之突怒――負ㇾ土而出、爭爲ニ奇狀一」○舞ふ貌。楚辭、九歌「靈ㇾ――今姣服」靈は巫ニ○高き貌。離騷「望ニ瑤臺之――一兮」○物の衆くして盛なる貌。張衡賦「――列ニ於四隅一、的歷分ニ於五柱一」

【僵草】キヤウサウ　人民の敎化に服從すること、草の風になびき伏す如きをいふ。孟解を見よ。

【僵師】キヤウシ　でくつかひ。列、湯問「周穆王時、巧人有ニ――者一、爲ニ木人一能歌舞、此傀儡之始也」＝傀儡師。

【僵尿飲ㇾ河不ㇾ過ニ滿腹一】キヤウジヤウインガフヒヤクマンフクイツ　どぶねずみが河にて水を飲むも腹一ぱいより多くは飲む能はず、人各其の性分に安んずべしとの喩。莊、逍遙游「鷦鷯巢ㇾ林不ㇾ過ニ一枝一――」

【僵側】キヤウソク　よりかかりてふす。もたれ掛る。＝倚伏。

【僵柝】キヤウタク　柏子木をふせて用ひず、盜賊の警戒を要せざるやうに太平の世となる【舊照、河清頌序】

【僵猪】キヤウチヨ　ふせき、用水をせきとめし所。用水池、豬は瀦は通ず。左、僖二五「規ニ――一」

【僵仆】キヤウフ　たふれふす。魏書「時有ㇾ風旋旗者一」

【僵武】キヤウブ　武器をふせて用ひず。いくさをやめて太平の世となりし義。書、武成「ㇾ――修ㇾ文」＝偃戈・偃兵・偃甲。

【假】カ　馬

㊀カ・ケ　㊁カ・ゲ　㊂カ　㊃カク・キヤク　㊄クワ・ケア　皆・麻・禡・藥

㊀かり、一時のまにあはせ「一王」○かる（借）禮、王制「大夫祭器不ㇾ――」○よる（因）○かす（貸）北史、魏清河王懌傳「若天ㇾ之年總ニ南矣」○ゆるす（容）北史、魏世祖紀「大臣犯ㇾ法無ㇾ所ニ寬ㇾ」○大いなり。○よし（美）＝嘉。○かりに、もし、たとひ、假設の辭。史、晏子傳「一令晏子而在、余雖ニ爲之執鞭所ニ忻慕一焉」○さいはひ。＝暇。㊁はるか、とほし。遐に通ず。㊂ひま。＝暇。休沐、やすみ。㊃いたる（至）易、萃卦「王ㇾ――有ㇾ廟」＝格。㊄にせ、うそ、いつはり。眞の反對。

同訓異義 ヒト 假・假令・假使・縱・縱令等の別は縱（糸部十一畫）を見よ。

【假求】カキュウ 貸さんことを請ふ。後漢書「――不レ稱、常恨レ之」

【假金方用二眞金一錢】カキンマサニマサニシンキンヲモチフベシトイヘドモ 眞の黃金にて滅金ッする。李紳、答二章孝標一詩「――、若是眞金不レ鍍レ金」（眞才は飾るを用ひざる喩）

【假髻】カケイ 婦人の頭の飾に用ふる毛。かづら。周禮、追師、注「副、婦人首飾、三輔謂二之――一」‖假頭。

【假設】カセツ かりに其の形をよそほふ。

【假山】カザン つきやま（築山）皮日休詩「兒僮不レ許驚二岡鳥一樂草須レ教レ上二――一」

【假子】カシ 養子をいふ（唐書、王世充傳）

【假字】カジ 圖假名に同じ。

【假借】カシャク ○かる。南史、蕭嶷傳「家貧無レ書、每從レ人――、必皆抄寫」○ゆるす、見のがす。蜀志、魏延傳「不二――一」○六書の一。說文序「――者本無二其字一、依レ聲託レ事、令長是也」

【假手】カシュ 假レ手カリヲを見よ。

【假粧】カショウ こわいろ、似せて出すこと。

【假設】カセツ ○かりにまうける。○ケツよしや、假りに設けて說く辭。漢書、賈誼傳「――陛下居二齊桓久盛一」‖假令・假如・假若・縱令。

【假稱】カショウ かりに他の人に代りて職務をつとめる。晉書、張茂傳「承二先人之餘德一――二此州一、以全二性命一」

【假喘】カゼン 將に絕えなんとする氣息。張說表「――殘生、悲懼轉集」

【假貸】カタイ ○かりる。史、主父偃傳「家貧、――無レ所レ得」○かす。

【假託】カタク かこつける、ことよせる。宋史、寧宗紀「――權勢一、竊弄二威福一」

【假定】カテイ かりにさだめる。

【假頭】カトウ かづら。晉書、五行志「假髻或名二――一」

【假泊】カハク 諸船舶が、風波を避け又は臨時の用を足す爲めに假に立ち寄りてとまる。

【假寐】カビ うたたね。詩、小雅、小弁「心之憂不レ遑二――一」

【假父】カフ かりの父おや。說苑「呂不韋曰、吾乃皇帝――也」‖養父。

【假母】カボ ままはは。漢書、衡山王傳「有下賊二傷后――一者上」‖繼母。

【假埋】カマイ かりにうづめる。後漢書、東夷傳「新死者先――レ之」

【假名】カミョウ ○名號を借りる。後漢書、邳彤傳「卜者王郎――レ勢驅二集烏合之衆一、逆震二燕趙之地一」○國歷史上の邪實を小說脚本に組み立つる時、實名を避けてかりに呼ぶ名。○ケミョウ俗名、通稱。○眞字の對。いろは（平――）五十音（片――）の二種あり。‖假字。

【假面】カメン 舞伎などのかぶるめん。隋唐佳話「高齊蘭陵王長恭、面類二美婦人一、乃著二――一以對レ敵、勇冠三軍一」薛道衡詩「――飾二金銀一、盛服插二珠玉一」

【假樂】カラク よろしくたのしむ。詩、大雅「――君子」‖嘉樂。

【假王】カリオウ かりの王。史、陳涉世家「乃以二吳叔一爲二――一監二諸將一」同書、淮陰侯傳「願爲二――一便、撫王耳、大丈夫定二諸侯一、即爲二眞王一耳、何以レ假爲」

【假設】カリモウケ 圖書物のとおかたの一。洋書綴の略式のもの。

【假枕】カリマクラ ○圖うたたね、かりね。‖假寐。○たびね。‖外宿。

【假令】カリョウ よしや。‖假設。

【假如】カリョ よしや。韓愈文「――釋氏能與レ人爲二禍福一」‖假若。

【假使】カリョウ 假令に同じ。

【假若】カリョク よし、假設に同じ。‖假令・假如。

【偕】カイ ケイ 佳

○ともに（俱）○――はつよくさかんなり（强壯）○ととなふ（整）○かなふ、適する。顏延之詩「物謝時既晏、年往志不レ――」諧に通ず。

同訓異義 ニモ 偕・俱・與・共の別は俱（人部八畫）の條を見よ。

【偕隱】カイイン 共にかくれる。左傳「能如レ是乎、與レ女――」

【偕偕】カイカイ つよくさかんなる貌。詩、小雅「――士子、朝夕從レ事」

【偕行】カイコウ ○ともにおこなはる。易、益卦「凡益之道、與レ時――」○ともにゆく。詩、豳風、無衣「王于興レ師、修二我甲兵一、與レ子――レ――」

【偕老】カイロウ つれあひ、配偶。又つれそふ。易林「安樂富有、二人――」

【偕作】カイサク ともにたつ。詩、豳風「修二我矛戟一、與レ子――」

【偕老同穴】カイロウドウケツ ○夫婦の契。生きては共に老い、死しては墓穴を同じくして葬むらる。詩、邶風、擊鼓「死生契闊、與レ子成レ說、執二子之手一、與レ子偕老」又王風、大車「穀則異レ室、死則同レ穴」穀は生。○うみへちま、海綿類に屬せる筒形網狀の蟲。筒中に他の小蟲が寄住するが故に名づく。

【偕樂】カイラク 衆人と共に樂む。孟、梁惠王「古之人與レ民――、故能樂也」

【偈】 佩（人部六畫）に同じ。

【偈偈】カンカン 剛直の貌。唐書、薛延陀傳「――不レ于二虛誓一」‖侃侃。

【修】ゲン 諫

○いつはる（僞）○にせもの（僞物）

【傸】クワウ 陽 傸に同じ ○彷ー・傍ーはたたずむ、さまよふ。‖彷徨。○ひま、いとま（暇）遑に通ず。法言「忠臣孝子、ー乎不ー」

【偈】㊀ケツ・ゲチ 月 所 ㊁ケツ ㊂ケイ・ゲイ 霽 月 所

㊀はやし（疾）すみやか。詩、檜風「匪車ー兮」○すこやか（健）たけし（武）㊁ーは力を用ふる貌。㊂いこふ（息）憩に通ず。○同音ゲ釋氏の詩詞、佛の功徳を讃美する頌詩の義、多くは四句を用ふ。傳燈錄「惠忠禪師有ー安心ー」

【偈頌】ケイジュ 佛の功徳をたたへほむる歌、讃美歌ゼンビカ。晉書、旭摩羅什傳「經中ー皆其式也」‖梵唄ボンバイ

【偈偈】ケツケツ 力を用ふる貌。莊、天道「ー乎揭ニ仁義ー而行」

【健】㊀ケン・ゴン ㊁ケン・ゲン 銑 嶝

㊀すこやか、身體がぢやうぶである、無病。○つよし、たけし（強）精力強壯なり。○強くして力あり（伉）倦まず。易、乾卦「天行ー、君子以自強不息」

㊁あぐ（擧）○かたんす（雛）○㊃したたか、ひどく、甚だ。

【健胃劑】ケンイザイ 消化を助くる藥。多くは重炭酸曹達・苦味丁幾などを配合して製す。

【健康】ケンカウ すこやか。‖康健。

【健康診斷】ケンカウシンダン 傳染病流行の時などに各人の身體の健否を診斷することをいふ。

【健強】ケンキャウ すこやか。蘇軾詩「二老風流總ー」‖健剛。

【健脚】ケンキャク すこやかなる足。‖健歩。

【健在】ケンザイ まめにくらす。黃庭堅詩「身ー且加レ餐」‖好在。

【健訟】ケンショウ たけくしてはげしき唐書、李華傳「華文辭縮廉、少ニ宏傑氣ー類士ー自肆、時謂不レ及ニ類士ー而華自疑過レ之」類士は蕭類士。

【健兒】ケンジ ○血氣さかんなるわかもの。洛陽伽藍記「快馬ー、不レ如ニ老騾吹レ膈」‖壯士「ー社」は其の團體。○軍卒の職名。六典「天下諸軍有ニーー」

【健訟】ケンショウ 性險惡にしてあらそひごとを好む、好みて訴訟する。易、訟卦「險而ー」

【健勝】ケンショウ すこやかにして氣分がすぐれる、多く書簡文に用ふ「益御ーー」

【健捷】ケンセフ つよくしてすばやし。金史「驍遙擊レ敵、ーー如レ此」

【健全】ケンゼン ○すこやか、身體が無病。○㊃心が惡しき思想に染まず「ー一分子」

【健羨】ケンセン ○貪欲の甚だしきをいふ。史記、自序「去ニーー一雄ニ聰明ー」○㊃非常にうらやむ。

【健戰】ケンセン たけくたたかふ。‖健鬪。

【健啖】ケンタン 多くくらふ、大食、啖は噉・啗に同じ。癸辛雜識「閻卿ーー、飲欵下作ニ小點心ー相待上‖健飯。

【健鬪】ケントウ たけくたたかふ。後漢書「諸將非レ不ニーーー」‖健戰。

【健忘】ケンバウ 非常に忘れっぽい。白居易詩「老來多ーー、惟不レ忘ニ相思ー」‖善忘。

【健筆】ケンピツ 字を達者に書く、又達者に詩文を作る。徐陵文「陳琳ーー、未レ盡ニ愚懷ー」參錄「雄辭ーー皆如レ飛」

【健武】ケンブ たけくつよし。宋史、李光傳「擇ニ其ーー者ー統以ニ士豪ー」‖毅武・剛武。

【健婦】ケンプ 氣力の強き女。樂府隴西行「ーー持ニ門戶ー、亦勝ニ一丈夫ー」

【健歩】ケンポ たっしやにあゆむ。韓偓詩「一點心隨ニーー歸」‖健脚。

【健男】ケンナン すこやかにして男氣あり。宋史「ーー輕捷」

【倏】シュク 屋 通じて條に作る

倏（入部八畫）に同じ。

【候】コウ 候（入部八畫）に同じ。

【偶】グウ 有 通じて隅に作る ○ならぶ（竝）そろふ（雙・對）禮、郷特牲「鼎俎奇而籩豆ー」○ちやう（丁）二にてわりきれる數、凡そ數は雙を一、隻を奇といふ。○あふ、あはす（合）○かなふ（諧）○たぐふ（匹）たぐひ（類）つれあひ（夫妻・伉儷ケンレイ）「配ー」○とも（儕輩）漢書、賈誼傳「率ニ其ー一亡之ー中」○ひとがた、でく（俑）「木ー」「土ー」○やどる。‖寓。○しかはせ。‖遇。○たまたま（適然）思ひよらず。列、楊朱「鄭國之治ニ耳、非ニ子之功ー也」

同訓異字 偶・會・適○偶は適と略同じ、但し偶は思ひ設けず、ふと出あひたる意あり。楚策「偶有ニ金千斤ー、謝ニ之左右ー、以供ニ芻秣ー」○會は正其時也と註す、をりしもと譯す、唐時代よりの俗語なり。○適はたまたまとも、まさにとも訓む、つまり同義なり、史記に「適然猶ニ偶然ー」と註す、適は、ちやうど、そこへであひたるなり。書經、註「有前之事、適當ニ其時ー」

【偶吟】グウギン 偶吟に同じ。‖偶咏。

【偶感】グウカン ふと起りしかんがへ、偶然に發したる感想。

【偶吟】グウギン ふと出來たる詩歌。

【偶語】グウ　相對して語る。史、秦紀「有三敢二ニ詩書一棄市」

【偶坐】グウザ　さしむかひてすわる。曲禮「御二同於長者一毋レ式不レ對、ニ不レ辯」目對坐。

【偶像】グウザウ　木石又は金屬などにて作りたる像。漢書「霍去病過二焉耆山一、得二休屠王祭天金人一、此中國ニ之最古者」

【偶像教】グウザウケウ　偶像を宗教的客體として崇拜し、之に依りて安慰を求めんとする宗教。

【偶作】グウサク　偶成に同じ。

【偶視】グウシ　さしむかひてみる。‖對視。

【偶然】グウゼン　偶然に同じ。

【偶日】グウジツ　丁丑の日。奇日の對。

【偶人】グウジン　でく、人形。史、殷紀「爲ニ一ニ土之天神一ニ」目偶像。

【偶處】グウショ　夫婦さしむかひて居る、同棲する。春秋繁露「使二吏民夫婦皆ニ一ニ」

【偶數】グウスウ　丁の數、二にてわりきれる數。奇數の對。白虎通「陰數偶」‖雙數。

【偶成】グウセイ　思ひがけなく出來る、偶然に成る。作詩などにいふ。‖偶作・偶做。

【偶然】グウゼン　思ひがけなくして然る義。思ひがけず。列、黃帝「范氏之竊、以爲ニ一ニ」

【偶中】グウチウ　はからずあたる、まぐれあたり。

【偶配】グウハイ　つれあひ、夫妻。‖配偶。

【偶妨】グウバウ　もやひぶね（唐書、高駢傳）

【偶發】グウハツ　不意におこる、ふと起る。

【偶匹】グウヒツ　つれあひ。‖配偶。

【做】

作（人部五畫）の俗字。

【偲】

㊀シ
㊁サイ　支　灰

㊀ニは親切に善を賞める、又詳かにすすめはげます（詳勉）㊁かしこし。○鬚ゲ多き貌。詩、齊風「其人美且ニ」‖思。○圖しのぶ、思慕する。

【偲偲】シ　互にすすめて善をはげます。論、子路、朋友切切ニ〻」

【偕】

シャ　馬　指の俗字

○さく（裂）○圖さて、發語の辭。

【僮】

ショウ　東

儱ニは不遇アハセの貌。‖龍鍾・蹤蹱。

【悾】

ソウ　董　悾に同じ

悾ニはくるしむ貌、又せはし（忙）き貌。

【側】

ソク　職

○かたはら（旁）ほとり、そば（附近）○そばだつ。○ほのか（仄）いやし（卑）○たふる（仆）○ちぢむ（縮）○かたぶく（傾）○そむく（反）反ニは叛黨なり。○いたむ。‖惻。○がは。○ひとり、ことに（特）

【側壓】ソクアツ　側面の壓力、堤防は水のニ力を防ぐ所以なり。

【側聞】ソクブン　輕くしてうつくし。晉書、祖逖筠傳「能逐二弦吹之音一、爲ニニ之詞一」‖側歷。

【側近】ソクキン　程近き場所「晉唐書」‖旁近。

【側目】ソクモク　かたよりたる肯說。晉、蔡仲之命「罔ニ以ニ改ニ其度一」

【側耳】ソクジ　みみをそばだつ。史、周昌傳「呂后ニニ子東廂一聽」‖傾耳。

【側室】ソクシツ　○そばめ、妾。漢書、文帝紀「文帝曰、朕高皇帝ニ之子也」○古、次男以下の家子の稱「左、桓、二」

【側身】ソクシン　おそれ愼みて其の身を安んぜざる義。詩序「遇レ災而懼、ニレ修レ行」

【側注】ソクチュウ　○冠の名、一名高山冠。○本文のかたはらに記せる解釋。‖側註。

【側席】ソクセキ　○かたよりてだらしなくすわる。○憂ありて席に安んぜず。說苑、修貴「文公爲レ之ニ一而盛」

【側側】ソクソク　○いたむ貌。古樂歌「ニ一力力、念レ君無レ極」‖惻惻。○身にしみて感ずる貌。韓偓詩「ニ一輕寒翦翦風」

【側息】ソクソク　かたいき（片息）須臾の間をいふ。孔叢子「不レ忘二於ニ一ニ」

【側草】ソクサウ　特に設けたる一つのさかだる（儀禮、士冠禮）

【側聽】ソクチヤウ　耳をそばだてて聽く。曲禮「毋ニ一ニ」‖竦之詩「ニ一風薄レ木、遙瞻月開レ雲」

【側柏】ソクハク　このてがしは、常綠灌木の一。

【側微】ソクビ　身分いやし、微賤なり。史記自序「爲父ニ一卒師二西伯一」‖側陋。

【側媚】ソクビ　心よこしまにしてへつらふ。書經「無レ以ニ巧言令色便辟ニ一ニ」

【側筆】ソクヒツ　筆を少しく斜にして書く。山谷題跋「ニ一取レ妍」

【側聞】ソクブン　うはさにきく、ほのかにきく。韓愈、與二于襄陽一書「ニ一、閣下抱二不世出之才一ニ」‖仄聞。

【側面】ソクメン　當面ならざる方面。そとがけ「ニ一攻」「ニ一擊」

【側目】ソクモク　○めをそばだつ、敢て正視せざるなり。戰國策「ニレ而視、側レ耳而聽」○嫉視にくむなり。漢書「皆ニニ於望之等一」望之は蕭望之。

【側隱】ソクイン　輕くしてうつくし。南史「辭甚ニ一」‖側豔。

【側陋】ソクロウ　身分いやしき人。晉、郭璞「明ノ明揚ニ一一ニ」＝側微。

【停】テイ　チャウ　青

○とどまる、やむ（中止）○さだまる（定）○とどこほる（滯）○やすむ（息）○とどむ、とどまる（止）

【停止】テイシ　停・止・留・駐・遏・遮等の別は止（部首四畫）の條を見よ。

【停筆】テイヒツ　○親しき友を思ふことにいふ。陶潛に一一贈四首あり、其の序に「一一思ニ親友一也」○行く雲をとどむる義にて歌ふ聲の妙なるにいふ。＝遏雲。

【停講】テイカウ　書物の講義を止める。南史、梁簡文紀「承聖三年九月辛卯、帝於ニ龍光殿一講ニ老子義一、十月丁卯ノ一、丙子續講」

【停學處分】テイガクショブン　生徒が不都合の行を爲したる時、或期間通學を禁ずる懲罰。

【停會】テイクワイ　議會の會期中、或期間議事を中止する處置。

【停滯】テイタイ　滯りてらちがあかず。隋書、李弘傳「弘在ニ吏部一、其選舉先ニ德行一、而後ニ文才一、務在ニ兼慎一、雖レ致ニ一一一有レ所ニ進用一、拘多稽レ職」

【停止】テイシ　○事を中途にてやめる。唐書、令狐楚傳「所レ宜ニ一一一」○國　帝室などに凶事ありし時、職物をさしとめる。

【停止公權】テイシコウケン　禁錮の刑に處せられし者に附加する一種の刑、刑期中公權の行使を差止められるもの。

【停駁】テイバク　車をとどめる。魏書、高間傳「大軍一一、庶事咸理」

【停車】テイシャ　くるまをとどむ。杜牧、山行詩「一一坐愛楓林晩、霜葉紅ニ於二月花一」

【停車坐愛】テイシャザアイ　前條の詩の意を畫題とせしもの。

【停車場】テイシャジャウ　汽車・電車等が、客を昇降させる爲めに車を止める一定の場所。ステーション。＝車站。

【停手】テイシュ　手をとどめる。韓愈詩「盃行到レ君莫レ一、破ニ除萬事一無レ過レ酒」

【停職】テイショク　官吏に不都合ありし時、一定の時期間其の職務を取上げる懲戒處分。

【停頓】テイトン　たち留まりてみる。

【停滯】テイタイ　とどまりとどこほる。＝遲滯。

【停電】テイデン　電流の輸送をとどめる。又、故障によりて電氣の流通がとまる。

【停泊】テイハク　舟にてとどまる。白居易詩「提レ籠復攜レ棹、遇レ勝時一一」

【停留】テイリウ　とどまる。

【停留場】テイリウジャウ　乘合馬車、又、電車等が客を昇降させる爲めに設けたる場所。

【偵】テイ　チャウ　庚

○うかがふ（伺・候）さぐる（探）○ものみ、まはしもの（間諜）「游一」「一候」

【偵騎】テイキ　敵情をさぐりうかがふ騎兵、斥候の騎兵。明史、「遇ニ一一一、盡殺之」

【偵察】テイサツ　敵の樣子をさぐる、又其の者。後漢書、任延傳「遂止ニ龍一一、候卒ニ」＝偵諜、斥候。

【偵察】テイサツ　敵の樣子をさぐる。

【偵伺】テイシ　うかがひさぐる。後漢書、淸河孝王傳「使ニ御者一一ニ一得失ニ」＝探偵、偵候。

【偵探】テイタン　敵のやうすをさぐる。＝斥候、探偵。

【偵知】テイチ　敵の樣子をさぐりしる。

【偵諜】テイテフ　ものみ。沈約碑文「一一不ニ敢東窺ニ」＝斥候、偵邏。

【偵邏】テイラ　みまはりて樣子をさぐる、又其の者。後漢書、南匈奴傳「置ニ都縣一一耳目ニ」

【偸】㊀トウ・ツ　尤　㊁ユ　虞

㊀うすし（薄）かろがろし（輕）人情が輕薄なり。論、秦伯「故舊不レ遺、民則不ニ一」○いやしくもす、かりそめにす（苟且）證、表記「安肆日一一」○ぬすむ（盜）ぬすびと。㊁うすし、かろがろし。

【偸安】トウアン　一時の安をむさぼる。賈誼、新書「夫抱レ火積ニ之積薪之下一而寢ニ其上一、火未レ及レ然、因謂ニ之安一、レ一者也」＝苟安。

【偸閒】トウカン　すこしのひまをぬすむ。白居易詩「一一意味醇ニ常閒一」

【偸文】トウブン　かべにあなを穿ちて盜みをする者、こぬすびと。漢書、王莽傳「大者累ニ金、小者一一、不レ過ニ二斛一」＝狗盜、鼠盜、穿窬之盜。

【偸惰】トウダ　しまりなくゆるぶ。唐書、陸長源傳「晉有ニ所ニ一一、長源觀其正」

【偸兒】トウジ　ぬすびと。世說「王子敬徐曰、一一、青氈是吾家舊物、可ニ特置ニ之」＝偸兒、竊盜。

【偸身】トウシン　人に屈はれ又公職に在りながら私の事をなす。

【偸生】トウセイ　死すべき時に死せずして徒に生きながらふ。李陵、答ニ蘇武ニ書「豈レ一レ之士、而惜ニ死之人哉」＝苟活。

【偸稅】トウゼイ　關稅を脫する。

【偸偸】トウトウ　一寸逃れして、事におそれる。賈誼新書、「一一偸レ事」

【偸盜】トウタウ　○ぬすむ、又ぬすびと。後漢書「其敎劫者爲レ上、傷レ人一一

者次レ之」○偸ぬすみ、五戒の一。【偸長】チャウ 窃盗のかしら。漢書、張敞傳「一一歸資酒」【偸啼】チイ 人に知れぬやうに泣く。陳後主詩「大婦怨二空閨一中婦夜一一」【偸薄】ハク 人情うすし。陳子昂表「臣聞、時方一一、勸レ人以レ孝、時方趨競、勸レ人有レ禮」＝輕薄。【偸慢】マン なまけあなどる。【偸眠】ミン ひまをぬすみてねむる。白居易詩「舊閑吏部暫一レ一」【偸免】メン ひまをぬすみて手をぬく、なまけてのがれる「唐書、蕭復傳」＝苟免。【偸利】リ 正義によらずして得たる利益。淮南子「一一不レ可二以爲一レ行」

【偪】ヒョク 匣 通音フク

○せまる（迫）禮、雜記「君子不レ偪上、不レ一レ下」＝逼。○むかばき（行縢）禮、內則「一履著レ綦」＝幅。○はらはる（腹痛）【偪仄】ソク 次條に同じ。杜甫に一一行あり。【偪側】ソク 相迫せる義。司馬相如賦「一一巡淫」＝逼側。

【偏】㊀ヘン ㊁ヘン 蕊 先

㊀かたよる（頗）中正ならず。中庸、朱熹章句「不一一之謂中」○いやし（鄙）○かたはら（旁側）かたほとり。○かたおち（依怙）不公平。書、洪範「無一一無陂、遵二王之義一」○たぐひ（屬）○なかば（半）半身。○たすけ（佐）○ひとへに。○古、車戰にて二十五乘の稱「司馬法」○一一はひるがへる貌。＝翩翩。○文字の左の畫、へん。旁ツクの對。㊁かたよる、正しからず。

補注 偏はイに从ふ、かたよる。彳に从ふ偏はあまねし、義正に相反す。

【偏阿】ヘン かたよりて正しからず。後漢書「司察一一」＝偏私。【偏愛】アイ かたおちのいつくしみ、えこひいき。【偏安】アン 帝を一方に稱して全國統治の權なきものをいふ。諸葛亮表「王業不二一一一」【先偏後レ伍】ヘンゴ 車戰二十五乘を偏とす、車兵を以て先だて、卒伍を以て之に次ぐ。左、桓五「——、伍承彌縫」【偏諱】ヘンキ 二字の名の其の一をいふ、諱は名の曲禮「二名不二一一」【偏狹】ヘンキョウ 心かたよりてせまし、へんくつ。【偏見】ヘンケン かたよりたる意見。宋名臣言行錄「王安石雖レ有二時名一、然好執二一一、不レ通二物情一」＝僻見。【偏枯】ヘンコ ○半身がしびれて自由ならず、半身不隨の人。管子「舉盲喑喔聾一一」○俗に恩澤が一方に偏して他方に及ばざるにいふ。【偏伍】ヘンゴ 兵士の組合。偏は車戰二十五乘、伍は步卒五人。晉書「皆レ兵敎レ戰、使二一一有レ常」【偏國】ヘンコク かたよりたるくに。列、楊朱「珠方一一」＝偏土・僻地。【偏袒】ヘンタン 袈裟の類、左肩より右腋にかけて體の上半部を覆ふ。僧尼の上殿、北魏の時に始まりて僧衣の起原をなすもの。【偏私】ヘンシ えこひいき、不公平。＝偏頗。【偏恃】ヘンジ 父死して母のみ存する、惸は情恃の恃にて母をいふ。【偏師】ヘンシ 車戰にて二十五乘、士卒にて五十人をいふ。左傳「晉子以二一一一一一」一說、一部分の兵。全師の對。【偏執】ヘンシツ 心がかたよりてせまし、へんくつ、執は固執。＝偏狹。【偏信】ヘンシン 一方のみを信ずる。北史「荀不二一一一」【偏將】ヘンショウ 一方面の大將。唐書、張孝忠傳「安祿山表爲二一一一」＝偏裨。【偏照】ヘンセウ かたよりてらす。張蘊古文「大明無二一一一」（大明は太陽）【偏袒】ヘンタン かたはだをぬぐ。新序「一一推レ車」＝偏祖。【偏側】ヘンソク かたより傾く。謝靈運、山居賦「勢有二一一一、地閡二周員一」【偏黨】ヘントウ かたよる。前漢雋不疑傳「敎無二一一一」＝偏側。【偏斷】ヘンダン 公平ならざるとりきめ、かたよりたる斷定。宋書、蕭惠宗傳論「義無二一一一」【偏袒右肩】ヘンタンウケン 圖 かたはだをぬぐ、金剛經註「偏二袒右肩一、右膝著レ地」【偏提】ヘンテイ 酒を入れる壺、てうしの類。【偏詩】ヘンシ 一方の言のみをきいて信ずる。漢書、鄭陽傳「一一生レ姦、獨任威レ福」【偏土】ヘンド かたよりたる地。＝偏國・僻地。【偏執】ヘンシツ 友となるものなき義、つれがない。書、旅獒「一一中正にして公平なり。書、洪範「一一、王道蕩蕩、無レ黨無レ偏、王道平平」【偏陂】ヘンピ えこ、不公平。書、洪範「無レ偏無レ陂、遵二王之義一」＝偏私・偏頗。【偏陂】ヘンピ ちんば、びっこ。晉書、紀瞻傳「創既不レ差、足復一一」【偏頗】ヘンパ えこひいき。晉書、熊遠傳「無二一一之失一」＝偏陂。【偏廢】ヘンパイ 一方のみをすてる。陸機文「一氣一一、則萬物不レ得二獨成一」【偏房】ヘンバウ めかけ、こしもと。列女傳「身雖二尊貴一、不レ如二一一一」＝側室。【偏裨】ヘンピ 一方の脾。漢書「韓昌爲二一一一、討二羅四、分屯二二處一」

【偏旁】ペンバウ次條に同じ。【偏傍】ペンバウへんと、つくりと。蘇軾詩「強尋ニ―一推ニ點畫一」＝偏旁。【偏親】ペンシン兩親の中いづれか一方を失ふこと。晉書王羲之傳「幼丁ニ―一、罹ニ艱酷一」【偏倚】ペンイ心がかたよりてひがむ。【偏曲】ペンキョクかためくら、めっかち。漢書、杜欽傳「少好ニ經書一、而目―一」＝隻眼・一目妙。

【偒】ベン メン 厳

○むかふ（鄕）貌、少儀「尊壺者―其鼻」＝面。○そむく（背）

【偆】便（人部七畫）の本字。

【偈】ヨウ 徑

○にぶし（鈍）○つきぴと、こしもと。＝腰。

【偸】タイ 灰

○いつくしむ（愛）近づく（昵近）○縫隱、詠柳詩「相―相倚不勝春」○むつぶ（睦）○よる（倚）

【傜】ユウ 尤 【徭】

○つかひ、えだち、徭に通ず、―役は徭役。○つかふ（使）○ななめ（斜）

【傚】㊀カウ ㊁カウ・コウ 篠 效

○ならふ（倣）效に通ず。詩、小雅「君子是則是―」○のっとる（法）「法―」○かたどる（象）○まなぶ（學）

同音異義 倣・傚・習・肄・慣・習○倣は效に同じ、先例にまねびならふなり。○傚は倣と同義なり、傚也、依也、事也、想象也、運行也と註す、放に准る、同じ。○習は重也と註す、その事を疾遽となく、重ねてならひ熟するなり。論語「學而時習ニ之一」○肄は習なり、藝術を復習するなり。左傳「肄レ業」○慣はならひ、なるるなり。大戴禮「習慣如ニ自然一」○閑は無骨ならざるやうに、なるるなり。史記「明ニ於治亂一、閑ニ於阿合一」

【倣擬】ホウギまねす。【倣像】ホウザウならひかたどる。

【傋】カウ・コウ 有 講

おろか（無智）

【傋惑】コウワクおろか。荀、儒效「愚陋――」

【傀】㊀クヮイ 灰 賄 ㊁クヮイ 灰 賄 紙

㊀大いなる貌。○天の貌。○くし、あやし、わざはひ、もののけ、あやしきもの（怪異）㊁―儡クヮイはあやつり人形、くぐつ（木偶）

【傀偉】クヮイ大いなる山のくづれかかる貌。世說、容止「山濤曰、嵇叔夜―、若ニ玉山之將ニ頽一」

【傀然】クヮイゼン大いなる貌。荀、性惡「―獨ニ立天地之間一而不ニ知一」

【傀儡】クヮイあやつり人形。列、湯問「周穆王時、巧人有ニ偃師者一、爲ニ木人一能歌舞、此―之始也」＝傀儡子。

【傀儡子】クヮイライシ人形づかひ、でくまはし。次條に同じ。樂府雜錄「―自ニ北傳云、起下於漢祖在ニ平城一、爲ニ冒頓所ニ圍、其城一面、卽冒頓妻閼氏兵、强ニ於三面一、陳平訪知ニ閼氏妒忌一、造ニ木偶人一、運ニ機關一、舞ニ於陣間一、閼氏望見、謂ニ是生人一、遂ニ其城下一、冒頓必納ニ美女一、遂退ニ軍一、後樂家翻爲ニ戲具一」

【傀儡師】クヮイライシ人形づかひ、人形を歌に合せて舞はしむる人。＝傀師。

【傔】㊀ケイ 黄 ㊁ケイ 霽

㊀まつ（待）㊁つなぐ。＝繫。

【傑】ケツ 屑

○すぐる、まさる（勝・優）○ぬきんでる（擢）ひいでる（秀）又其の人。漢、高祖紀「子房・蕭何・韓信三者皆人―也」○とる（執）○おごる（傲）

【傑起】ケツキすぐれておこる。蜀志、楊戲傳「――龍驤」

【傑句】ケツクすぐれたる句。蘇軾詩「我詩無ニ一―一、萬景隨ニ莫レ隨一」

【傑觀】ケツクヮンすぐれて大いなる門觀。陳師道詩「重門――屹相望、表ニ裏山河一自一方」

【傑作】ケツサクすぐれたる詩文・書畫の類。陸游詩「太古實―――、筆落九天上」

【傑出】ケツシュツ衆人の中にて特にぬきんでる。後漢書、徐穉傳「角立―――」

【傑俊】ケツシュンすぐれたる人物。淮南、泰族「知過ニ萬人者謂ニ之英一、千人者謂ニ之俊一、百人者謂ニ之豪一、十人者謂ニ之傑一」＝俊傑。

【傑然】ケツゼン衆にぬきでて秀でる貌。後漢書、第五種傳「種―――自嫌、在ニ鄉曲一無ニ比耳之譽一」

【傑特】ケツトクひとりぬきいづ。李觀文「始皇之英偉―――」＝傑出。

【傑物】ケツブツ○勝れたる人物。○すぐれて秀でたる物。

【傑立】ケツリツぬきいでて立つ。陸游詩「三峯―――插雲閒」

【傔】ケン 鹽

○したがふ(從)つかふ(仕)○おとも、おつき(侍從)【僕人】ボクジン 使者の召使人。唐の制、節度大使・副使皆一一あり。後世の承差に同じ。【僕從】ボクジュウ おそばつきの家來。唐書、封常清傳「奏二一一三十人一」【僕卒】ボクソツ つき從ふ兵卒。唐書「縱二一一等二江陵舍一」‖衛兵。

【僕】ボク 沃

【僕僕】ボクボク 醉ひて舞ふ貌。詩、小雅「屢舞一一」

【僬】サウ 篠

○いやしき者(鄙賤者)のなかもの(田舍漢)○いやし(鄙賤)

【僬夫】フウ 次條に同じ。

【僬父】サウ いやしきもの、人を賤みていふ、おなかもの。晉陽秋「吳人謂二中州人一謂レ僬、陸機呼二左思一爲二一一一」

【傘】サン 旱 繖に通ず

からかさ、さしがさ、雨を禦ぎ日を蔽ひて笠舒すべきもの。【傘柄】サンヘイ からかさの柄。耶律楚材詩「一一擎二鐵笛一」

【傑】ソ 遇

○むかふ(向)蘇軾、放鶴亭記「暮則二東山而歸一」○したがふ(循)

【傍】㊀ハウ・バウ ㊁ハウ・バウ ㊂ハウ 庚 養 敬

㊀そば、かたはら(側)旁に通ず。○つくり(旁)字畫の右方。○みだりに(妄)㊁そふ。○よる(倚依)よりそふ。○ちかづく(近)李白詩「雲一馬頭生」㊂一一は已むを得ざる貌。詩、小雅「四牡彭彭、王事一一」

同訓異字 ハウ傍・旁・磅等の別は漆(水部八畫)の條を見よ。

【傍訓】バウクン 漢字のふりがな。

【傍倣】バウハウ さまよふ。史記「一一不レ能レ去」‖徘徊・仿佛・彷彿。

【傍レ花隨レ柳】バウクワズイリウ 春の時令を敘ぶる語。程明道詩「雲淡風輕近午天、——過二前川一」

【傍觀】バウクワン かたはらに居てみる、其の事に關係せず「袖手一一」

【傍系】バウケイ えだ葉のちすぢ。父子の關係を以て稱く血統を直系といふの對、兄弟・伯父・叔父・伯母・叔母・姪の類をいふ。

【傍妻】バウサイ 妾をいふ。漢書「王葉好二酒色一、多娶二一一」‖側室。

【側室】ソク ○そばのへや。‖脇房。○けしやうべや。‖裝身房。

【傍若無人】バウジャクムジン かたはらに人なきがごとし、無遠慮のふるまひをいふ「史、刺客傳」‖旁若無人。

【傍生】バウセイ 側邊ばかより生ずる。癸辛雜識「甘蔗種レ之則一一」

【傍接圓】バウセツエン 三角形の一邊と他の二邊を延長せし二線とに觸接する圓輪。

【傍聽】バウチャウ かたはらに居てきく。

【傍統】バウトウ 本家より別れいでたるちすぢ、別家。

【傍輩】バウハイ ともだち、なかま(朋輩)

【備】ビ 寘

○そなふ(措辦)そなへ(用意儀仗・警護)先つあらかじめ具へて用を待つ。○そなはる(完全)そろへる。書、周官「官不必一一惟其人」○なる(成)○ふせぐ(防)○つぶさに、ことごとく(盡)みな(皆)禮、月令「農事一一收」○足る。易、繫辭「易之爲書也、廣大悉一一」○足す、補ふ。漢書、禮樂志「補一之」○加へる、數に入れる。史、儒林傳序「文學掌故補郡屬一員」○長き兵器、槍・矛の類。

同訓異義 フウ備・具・供○備は多くの事物の悉くそなはる義。百行備・文武備の如し、轉じてあらかじめ用意して、そなへ置く義にも用ふ、備不虞の如し。○具はもと器具の具なり、事物の全くして缺けざる義に用ふ。○供は用に立つる義、そなへものにするなり。左傳「王祭不レ供」

【備位】ビヰ 其の官職にそなはる、官職に在るといふ謙辭。漢書、魏相傳「臣相、幸得レ一一」‖充位。

【備員】ビイン 數の中に加へる。史、始皇紀「博士雖二七十人一特一一兎レ用」

【備考】ビカウ 參考にそなへる。

【備救】ビキウ あらかじめそなへて、すくひたすける。左傳「一一內患一」

【備禦】ビギョ 敵をふせぐそなへをする。梁書「築二城隍一爲二一一」

【備具】ビグ そなはる、そろふ。史、司馬相如傳「百官一一」‖具備。

【備荒】ビクワウ 凶年のそなへ。

【備荒植物】ビクワウショクブツ 凶年にそなへる植物、食ひて害なき草木。

【備荒貯蓄】ビクワウチョチク 凶年の用意に、平素金錢をたくはへ置く。

【備悉】ビシツ 十分にそなはる「魏志、陳思王傳」‖備具。

【備置】ビチ そなへおく。班婕妤文「一一官閣一」

【備忘】ビバウ 忘れぬ爲めの用意、又、其のかきつけを一一錄といふ。

【備品】ビヒン そなへつけの物品、又消費して無くなる物品を消耗品といふ。

ふに對して永く保存すべき物品をいふ。

【求二備於一人一】フトシテヒトリニソナハラシムトス　才德の十分に備れる事はもんことを一人に望む。論、微子「無レ求二備於一人一」

【傅】フ　ヒフ　虞　遇

㊀つきそひ（看護人）もり、かしづき（保護者）○たすけ（輔佐）○つきそふ、つく（附著）かしづく、ちかづく（近）いたる（至）詩、大雅「鳳凰于飛、翽翽其羽、亦レ于天」○かきつける（記載・登錄）漢書、高帝紀「蕭何發二關中老弱未一レ傅悉詣レ軍」○えだつ。㊁しく（敷）のべる。漢書、文帝紀「一納以レ言」

【傅愛】フアイ　かしづき愛する。顏延之文「阿保一一」

【傅說比二列星一】フエツヒレツセイニアタル　殷の傅說は、死して天に上り星となりしといふ。莊、大宗師「傅說得レ之以相二武丁一、奄有二天下一、乘二東維一、騎二箕尾一而比二於列星一」

【傅嶽】フガン　地名、今の山西省平陸縣の東に聖人窟あり、殷の時、傅說の版築に從事せし處、史記に傳險に作る。

【傅巖之築】フガンノキヅキ　傅は附く、巖は岩の角あるもの、築は耳環引。李斯、逐客上書「宛珠之簪、——」

【傅近】フキン　附近に同じ、近づく。仲長統、昌言「宜レ竪二一一門房之內一、突二婦人之閒一」

【傅御】フギョ　つきそひ。詩經「王命二一一遷二其叔父一」

【傅會】フクワイ　○こじつく、附著會合の意。漢書、貢禹傳「雖レ不レ好レ學亦善一一」○一篇の文の首尾完成するをいふ。後漢書、張衡傳「作二二京賦一、精思一一、十年乃就」○つけ合す。列、湯問「一二一草木膠漆、白黑丹青二之所レ爲」

【傅玄】フゲン　字は休奕、晉の北地の人、少くして孤貧、博學にして善く文を賦す、性剛直峻急、人の短を容ることを能はず、晉に事へて侍中と爲る、卒する時年六十二、顯貴に至ると雖も奢侈を服せず、傅子數十萬言を著す、玄また能く樂府歌章を作る、晉代宗廟朝廷の樂章、多くはその手に成る。

【傅佐】フサ　人のたすけとなる。又、其の人。左傳「皆有二親暱一以相一一」

【傅彩】フサイ　畫に彩色を施す。

【傅山】フザン　清初の人、少くして異稟あり、堅苦して氣節を持す、書を善くす、趙秋谷推して天下第一と爲す。

【傅子】フシ　書名、一卷、晉の傅玄撰す、儒家類に屬す、言ふ所、治道に切にして儒風を啓く、精意名言少からず。

【傅相】フソウ　もりやく　つきそひ。漢書、賈誼傳「置二一一方振二其事一」

【傅姆】フボ　つきそひの女、こしもと、侍女。漢書、王吉傳「爲二一一一所レ害」

【傅粉郎】フフンラウ　白粉をつけたる男の義、魏の何晏の故事。世說、容止「何平叔美二姿儀一、面至白、魏明帝疑二其傅レ粉、正夏月與二熱湯餅一、既啜、大汗出、以二朱衣自拭一、色轉皎然」

十一畫

【傴】ウ　虞

○かがむ（屈）せぐくまる（背曲）左、昭、七「一命而僂、再命而一一、三命而俯」○せむし（癃）

【傴背】ウハイ　せむし、頭の前に出でて背の高く後に聳えたる病。舊唐書、史思明傳「安祿山二養髮一爲レ髻一一」‖佝僂・病癃。

【傴附】ウフ　媚び愛する。莊子「以レ下一一人之民一」下位に居て在上者の愛に任ずるをいふ。

【傴僂】ウロウ　○せぐくまる。歐陽修、醉翁亭記「一一提攜、相往來而不レ絕」○腰曲の貌。韓愈詩「升レ階一一蒲二肩酒一」○せむし。淮南子「子求行年五十有四、而病二一一一」‖傴背。

【傲】ガウ　號

○おごる、おごり（倨）‖敖。曲禮「敖不可長」ほこる（誇）○あなどる（慢）しのぐ（凌）○たのしむ（樂）あそぶ（遊）○啾（口部十一畫）に通用す。

【傲・敖・傺・睨・倨等の別】傲・敖・傺・睨・倨等の別は者（大部九畫）を見よ。

【傲岸】ガウガン　たかぶりてかどかどし。李白詩「懶生何一一、終レ酒復誰レ玄」

【傲虐】ガウギャク　おごりてしへたげる。萬慢にして亂暴なる事、盡書、益稷「一一殄レ世」‖傲暴。

【傲倨】ガウキョ　たかぶりおごる。‖倨傲・驕倨。

【傲頑】ガウグワン　おごりてかたくな。驕傲にして頑固。

【傲睨】ガウゲイ　おごりて世人をにらみつける。黃庭堅詩「其一一萬物一滑稽以玩レ世、白首不レ衰」

【傲兀】ガウコツ　たかぶりて屈せざる貌、尊大にかまへる。杜甫詩「一一能消萬古愁」‖傲岸。

【傲骨】ガウコツ　おごれる骨相。鳳瑛「唐人詩、李白不レ能レ屈レ身、以三腰間有二一一一」

【傲狠】ガウコン　おごりてもとる、たかぶりて物にさからふ。晉書「王敦內懷二不臣一、一一跋上」

【傲霜】ガウサウ　霜の寒きにも屈せず、霜の形容。蘇軾詩「菊意已無二寒一霜意一、猶殘數蕊有一一一枝一」

【傲慢】ガウマン　多言をいふ。荀、勸學「不聞而告謂二之傲一」‖一面背一二、

謂之贅、傲非也、驁非也」傲は嗷に通ず。

【傲侈】ガウ たかぶりておごる。北史、崔岡傳「恭儉福之興、一一驕之機」一本、侈を僞に作る。‖侈傲・奢傲。

【傲視】ガウ おごりて人をさげすみ見る。舊唐書、音樂志「始皇一統、一二一百王」

【傲縱】ガウシヨウ おごりてわがまま。晉書「諫之才學不レ及レ父、而一一過レ之」‖傲慢。

【傲然】ガウゼン おごりたかぶる貌。

【傲慕】ガウバリ おごりてあらあらし。管子「驕倨一一之人、不レ可二與交一」‖傲睨。

【傲物】ガウブツノ人におごり高ぶる。唐書「昔細衝・潘岳矜レ己一レ一」‖傲世。

【傲慢】ガウマン おごりて人をあなどる。南史「驕狠一一、禍之始也」

【僅】キン 圓 通じて菫・廑に作る

○すこし(少)わづかに(纔)纔に能くする、辛うじて。舊唐書、僖宗紀「克用踰垣一免」○あまる(餘)○ちかし(近)ほとんど。韓愈、張中丞傳後序「城中士卒一萬人」○おとる(劣)

同訓異字 僅・纔・劣・才・財・裁○僅は少也と註す「ちっとばかり」と譯す。歐文に「畢僅僅知二章句一」とあり、又、ちかしと訓み、近と通ず。晉書に「職所二殺害一僅二十萬人一」とあり。○纔は纔始と連用す、染色の一入絳をいふ、幾入も染る、其の初めに、ちょつと藍に入れたる淺なり「入レ寨纔七日、離レ家已三年」は春に入りて日なほ淺く、やつと七日になりしとなり。○劣は弱也、少也と註す、助辭として「僅僅不足之辭」と註す、優の反にて、常なみの所に及ばぬをいふ。○才・財・裁の三字、音義共に纔に通ず。後漢紀「妻子衣食裁足而已」晉義補「上達者財十二耳」近思錄「自二孟子一而後、能將二許大見識一尋求者、才見二此人一」

【僅僅】キン わづか。漢書、地理志「陳章出二黃金一然華華」注「華華少也、華讀曰レ僅」

【僅少】キンセウ すくなし。

【傾】ケイ キャウ 庚

○かたぶく(偏)一方に偏する、かたよる。○よこしま、斜ナナメになる。○そばだつ(峻)○ふす(伏)○うつす(寫)○むなしく(空)○やぶる(圮)○きづつく(傷)○滅らぐ、衰へる。申說「以レ勢交者、勢一則絕」○まじふ。○つく、つくす(竭盡)陶潛詩「杯盡壺自一」○くつがへす(覆)淮南、原道「持レ盈而不一」

【傾倚】ケイイ もたれてたよる。蔡邕文「農帝寬仁、四國一一」

【傾偃】ケイエン たふれふす。晉書「旌旗儀飾皆一一」

【傾蓋】ケイガイ 車を駐めて車のかさをかたむけ近づきて語る、一見して故人の如く相親むにいふ。家語、孟思「孔子之レ郯、遭二程子於塗一レ一而語、終日甚相親、顧謂二子路一曰、取二束帛一以送二先生一」鄒陽、獄中上梁王二書「諺曰、有二白頭如レ新、一一如レ故」

【傾向】ケイカウ かたむきむかふ、なりゆき‖趨勢。

【傾陷】ケイカン 人をかたむけおとしいる。傾奪し陷溺せしむ。宋史「呂惠卿始謀二事安石一及二勢約力敵一則一二一安石、甚二于仇讐一」

【傾毀】ケイキ かたむきくづる。

【傾葵】ケイキ 葵藿の日に向ひ傾く如く、深く心を傾けて慕ふ義。曹植表「葵藿之傾二葉太陽一雖レ不レ回レ光、然向レ之者誠也」

【傾蓑】ケイサ ゆふ日。謝惠連詩「一一無二兩且一」‖落日。

【傾危之士】ケイキノ詭辯を弄して國を傾け危くする人。史、張儀傳贊「此兩人眞一一哉」張儀・蘇秦の二人を指す。

【傾懷】ケイクワイ 心をかたむけておもふ。蘇軾詩「相對輒一レ一」

【傾月】ケイゲツ 入りかけのつき。謝惠連詩「房櫳引二一一一」‖落月。

【傾嫁】ケイカ かたむけつくす。南史「一二一財產」‖傾盡。

【傾國】ケイコク 國を亡ぼす妖美なる女。白居易、長恨歌「漢皇重レ色思二一一一」絕實妃を指す。

【傾想】ケイサウ 心をかたむけて思ふ。晉書「一座一一」

【傾耳】ケイジ 耳をかたむく、注意してよくきく。禮記「一レ一而聽レ之、不レ可二得而聞一也」‖側耳。

【傾心】ケイシン 心をかたむけて其の方に向往する。後漢書「一レ一折レ節莫レ不二爭赴二其庭一」

【傾邪】ケイシヤ かたよりて正しからず、よこしま。

【傾渴】ケイカツ かたむけそそぐ。蘇軾詩「一一五石尊」‖傾注。

【傾注】ケイチユ かたむきそそぐ。通鑑詩「暴雨忽一一、注涼終夜決」

【傾仄】ケイソク よこにかたむく。‖傾側。

【傾城】ケイセイ ○城をかたむけ亡ぼす、妖美なる女をいふ。漢書、外戚傳「北方有二佳人一絕世而獨立、一顧傾二人城一再顧傾二人國一」又、詩、大雅、瞻卬「哲夫成レ城、哲婦一レ一」とあるは智慮ありてさしでがましき女は國を亂るに至るをいふ。○圖避女の稱、おいらん。

【傾側】ケイソク かたむく。又、志をまげる。

進德指南論「一一僅仰、務合二當世一」

【傾倒】クヮイ 〇心をかたむけて感服する、傾は甚だしき義。杜甫詩「忘士懷二感傷一、心實已一一」‖心折。〇かたむきたふる。南史「江淹爲二太子勁所一推排一、殆於一一」〇酒を酌み盡す。杜甫詩「蘇侯得二數過一、儀容每一一」‖傾瀉。

【傾注】チウ 心をかたむけてそそぐ、注意してゆく。陸龜蒙詩「明發成二浩歎一、誰能少一一」

【傾覆】フク かたむきおつ。白居易詩「閭閻半飄蕩、城壞多一一」

【傾跌】テツ かたむきたふる。李德裕文「如二君子之中庸一、滿則一一」

【傾吐】ト 意見を十分に言ひ盡す。韓愈詩「高文大論日一一」

【傾頭】トウ からべをかたむく、物をぢ（るにいふ。白居易詩「閒依二小橋一立、一レ一時一吟」‖傾首。

【傾囊】ナウ ふくろの中のものを盡く出しつくす。又、財布をはたく。雲笈七籤「雲篆資書、一一相付」

【傾嚢】ナウ かたむけやぶる。

【傾蓋】ガイ かたむけくつがへす。漢書「作二色難詩一、以相一一」‖轉注。

【傾慕】ボ 心をかたむけてしたふ。北史、天子屬目、百寮一一」

【傾盆】ボン ぼんをかたむく、又、急に降る大雨の形容。陸游詩「黑雲當レ空萬馬屯、轉盼白雨如二一一一」

【傾落】ラク かたむきおつ。晉書「大風之後、廟閣屋瓦、有二數枚一一一」

【債】 サイ 卦

〇かり、おひめ（負一・借財）漢書、鼂錯傳「賣二田宅一、鬻二子孫一以償一」〇凡て果すべき責あるにいふ「文一」「書一」通じて責に作る。〇かし（貸）「一主」

【債家】カ かしぬし、債權者。東晉賦「一一至而相敦、乃取レ東而償レ西」‖債主。

【債鬼】キ 借金とりをにくみ惡鬼に喩へていふ語。

【債券】ケン 〇借用の證文。〇政府・銀行・會社などが、其の債務を證明する爲めに發行する手形「公債證書」「勸業一一」の類。

【債權】ケン 貸主が借主に對して有する權利、その權利を有する人を一一者といふ。

【債人】ニン かりぬし（借主）‖債務者。

【債主】シュ かしぬし。後漢書「一一日至、逼求不レ已」‖債權者・債家。

【債鏡】キョウ かりがね、借金。

【債務】ム 金錢などを借りたる人の返濟すべき責務、其の責務ある人を一一者といふ。

【催】 サイ 灰

〇うながす（促）せきたてる。梁簡文帝、從軍行「將軍號令嚴、天子屢書一」〇せまる（迫）〇もよほす。〇きざす、發する。孟浩然詩「歲時歸思一」〇開く、設ける「宴を一す」の類。

【催科】クワ 租稅の上納をうながす。宋史、職官志「獄訟無レ冤、一一不レ擾、錢穀治事之最」‖催租。

【催花雨】クワウ 春雨をいふ。陸游詩「催花初過社公雨」

【催花鼓】コ 花を開かすつづみ。開元遺事「明皇二月月遊二上苑一、呼二高力士一取二羯鼓一、臨レ軒縱擊、奏二一曲一名二春光好一、回二顧柳杳一、皆已發坼、笑謂二妃子一曰、得レ不二喚レ我作一天公一乎」馬祖常詩「催花羯鼓曼二新聲一」

【催告】コク 書面・使者・執達吏・配達證明郵便・公示などを以て催促の意を義務者に告知する法。

【催租】ソ 稅の米納をうながす。詩話總龜「詔一一人至」

【催促】ソク 〇うながしせまる。古詩「鬼伯一何一一」〇逼ひかけて相せまる。白居易詩「冬至夏萬相一一、垂老光陰速似レ飛」

【催督】トク うながししらべる（鄧志、李敏傳）‖督促。

【催迫】ハク せまる、せばまる。陶潛詩「四時相一一」‖逼迫。

【催馬樂】バ 國古代の歌曲の名、神樂歌の類。もとは馬を率くに歌ひし俗歌。

【催眠術】ミン 人の意識を一點に集注せしめて眠らしむる術。

【傷】 シャウ 陽

〇いたむ、いたみ（痛・損・悼・賊・害）〇そこなふ（損・害）やぶる（破損）〇きず。左、僖二二「君子不重一」きずつく（創）〇うれふ（憂思）詩、小雅「我心憂一レかなしむ（悲）なげく（嘆）

補説 傷・悼・痛等の別は悼（心部八畫）を見よ。

【傷折】セツ きず、けが。‖創痍。

【傷家】カ 禾穀をそこなひやぶる。荀子「稽耕一レ一」

【傷害】ガイ いためそこなふ。

【傷耗】カウ そこなひへる。

【傷寒】カン 傳染性のはげしき熱病。ちやうちやぶすの類。

【傷寒論】ロン 醫書の名、漢の張機撰す。專ら傷寒の病を論ず、金匱要略と共に漢法醫の重んずる所とす。

【傷泣】キフ かなしみなく。史記「其少女純業一一」

【傷弓之鳥】キウノトリ 前事に懲りて深く恐れて後事を警戒するに喩ふ。

戰國楚策「——、聞二弦音一而高飛」

【傷禾】シャウクワ なへをそこなふ。晉書「河南郡川、隕霜一レ一」‖傷穀。

【傷痏】シャウイ いたみくやむ。漢書、韓延壽傳「吏聞者自一一」

【傷枯】シャウコ 草木がそこなはれかれる。後漢書「穀類をそこなひやぶる。

【傷穀】シャウコク 穀類をそこなひやぶる。

【傷令】シャウレイ 仲夏行二冬令一、則雹凍一レ一‖傷禾・傷稼。

【傷魂】シャウコン 心をいたましむ。呂覽「賢神一レ一」‖斷魂・傷神。

【傷嗟】シャウサ いたみなげく。徐陵文「慷二此殊才一、實可二一一」‖傷悲・悲歎・痛歎。

【傷創】シャウサウ きずつく。又、きず。

【傷愴】シャウサウ かなしみいたむ。‖傷悲。

【傷慘】シャウサン うれひいたむ。無若劇、瑣瑣詩「一一淚墓增二悲心一」

【傷心】シャウシン こころをいたむ。戰國策「悲莫レ痛二於一一一」‖傷神。

【傷神】シャウシン こころをいたむ。‖傷心・傷魂。

【傷生】シャウセイ 生命をきずつく。中說「吉者不二以レ死一一」

【傷惻】シャウソク いたみかなしむ。梁武帝昭「弭勞一一」

【傷指】シャウシ やぶりそこなふ。杜甫詩「大魚一一皆垂頭」

【傷悼】シャウタウ なげきいたむ。史、賈誼傳「以自一一」‖嗟悼。

【傷歎】シャウタン いたみなげく。陳琳爲袁紹檄豫州「僧衆無レ依、實可二一一」‖傷悲・悲歎。

【傷涕】シャウテイ かなしみなく。張衡賦「爲レ之一一、酹二於路濱一」‖傷泣。

【傷塤】シャウフン 心わづらはしくかなしむ。張載詩「我之懷矣心一一」

【傷懷】シャウクワイ きずあと。齊諧記「一」黃雀銜二鵄梟一所二摶逐一一一甚多」

【傷悲】シャウヒ いたみかなしむ。詩、召南「未レ見二君子一、我心一一」

【傷鳳】シャウフウ 摘名。‖桑加爺兒。

【傷慎】シャウシン いたみいきどほる。吳志、張紘傳、注「紘遊一一」

【傷兵】シャウヘイ 戰爭に出てきずつきたる兵士。

【傷疹】シャウシン やぶりそこなふ。‖傷害。

【傷歎】シャウタン いさぎよき態をそこなひやぶる。孟、離婁「可二以取一可二以無一取、取一レ一」

【傻】 セン 先 仙に同じ

○やまびと（仙人）○一一は輕く舞ふ貌。

【傻佻】センテウ 輕く舞ふ貌。詩、小雅「屢舞一一」

【傻人】センジン 仙人に同じ（史、始皇紀）

【傯】 傳（人部九畫）に同じ。

【傺】 テイ 霽

○とどまる（止）○侘一タイは志を失ふ貌（離騷）

【傳】 ㊀ テン・デン 先 ㊁ テン・デン 霰

㊀つたふ（付與・敎授）つたはる。○さづく（授）ゆづる（遞）○しく（布）及ほす、發布する。孟、公孫丑「德之流行、速於置郵而一命」○つぐ（繼）陸機、與二王儉書一「非間五一、年未爲二遲」○のぶ（述）○とく（說）○うつる（轉）○つづく（續）○うつす（移）㊁やど、はたごや、うまつぎ（驛遞）○しゅくつぎの車馬。康熙字典「古者以二車乘馬一、乘二韶京師一謂之一車」○關所を過ぐるわりふ（符）○古人の事迹を傳ふる文の一體。文體明辨「漢司馬遷作二史記一、創爲二列一一、以紀二一人始終一（中略）其品有四、一曰史一、有二正變一二體、二曰家一、三曰托一、四曰假一、使作者有二考焉一」○經書の義解、又、賢人の著書「聖經賢一」○つたへ、いひつたへ、記錄。孟、梁惠王「於一一有之」

【傳意】テンイ わが心を他につたへしらす。溫庭筠詩「巫娥一一託二悲絲一」

【傳錄】テンロク うまつぎ、しゅくば。唐書、百官志「鸞部掌一一」

【傳省】テンセイ 人より人に傳へてみる。歐陽修詩「新詩何惜爲一一」

【傳奇】テンキ 小說をいふ。後山詩話「一一者、唐裴鉶所レ著小說也」

【傳記】テンキ 一人の一代の事がらを記したるもの。一代記。○賢人の書きたる書物を傳といひ事實を紀錄せるものを記といふ。漢書、元后紀「五經一一」

【傳疑】テンギ 古事の疑はしき者は、其の儘に傳へる。傳信を見よ。

【傳隨】テンズイ 指揮官の號令をつたへる騎兵。

【傳遞之臣】テンテイのシン しゅくばにて運送に從ふ忙がしき小やくにんの義、士が自分をいふ謙稱。禮、玉藻「士曰一一」

【傳玩】テンクワン 此より彼に傳へてもてあそぶ。晉書「五騎一一、傳翫遂久」

【傳教】ヂヤウ をしへをつたへる。皇甫冉詩「慧力堪ノレ一ノレ、禪功久伏ノレ魔」

【傳語】ヂン ことづて。岑參詩「馬上相逢無二紙筆一、憑ノ君ノ一報二平安一」‖傳言。

【傳國璽】ヂンコクジ 次條を見よ。太平御覽「——是秦始皇所ノレ刻、其玉出二藍田山一、是丞相李斯所ノレ書、其文曰、受二命于天一、既壽永昌、漢高祖定二三秦一、秦王子嬰獻二此璽一、及二漢高卽一位仍佩ノレ之、因以相傳、故號曰二——一」漢書、輿服志「璽皆玉螭虎紐」

【傳國寶】ヂンコクホウ 帝位に卽く者の譲り受ける印、秦始皇の時作るといふ、始め傳國璽といふ、唐代改めて——と稱す。

【傳言】ヂンゲン ことづて。史、絳侯世家「亞夫乃ノレ一ノレ、開二壁門一」‖傳語。

【傳習】ヂンシフ つたへならふ。唐書、每ノレ鄕給二一卷一、傳二其一一一」

【傳習錄】ヂンシフロク 書名、三卷、明の王守仁（陽明）が門人の問に答へて其の學を傳授せしものを編したる語錄。

【傳信】ヂンシン 古事の信ずべき者は其の儘之を傳へる。史、三代世表「信以傳ノレ信、疑以傳ノレ疑、故兩言ノレ之」

【傳神】ヂンシン 人の肖像を寫して其の精神を傳へる。晉書、顧愷之傳「愷之每ノレ畫ノレ人、數年不ノレ點ノレ眼、人問ノレ之、答曰、一一寫形正在二阿堵中一」

【傳舍】ヂンシヤ やどや。去る者、來る者、轉轉相傳へて常主なき義。史、鄒陽其傳「沛公至二高陽一一」

【傳車】ヂンシヤ しゅくつぎのくるま、驛傳の車。史、游俠傳「條侯乘二一一一、將ノレ至二河南一」

【傳寫】ヂンシヤ つたへうつす。晉書、左思傳「三都賦成、豪相一一、洛陽爲ノレ之紙貴」

【傳受】ヂンジュ 師より業を傳へ受ける。漢書、儒林傳「一一者不ノレ絕也」

【傳授】ヂンジュ つたへさづく。中庸「孔門一一心法」

【傳乘】ヂンジョウ しゅくつぎの車に乘る、又、しゅくつぎの車馬。左、莊九「公一一而歸」康熙字典「古者以二車駕一馬曰二傳乘一、謂二之傳車一」

【傳稱】ヂンショウ いひつたへてほめる。魏武帝、短歌行「正而不ノレ譎、其德一一」

【傳誦】ヂンショウ 人人相つたへてとなへる。宋史、時人一一、以爲二勸戒一」

【傳書鳩】ヂンショキウ 鳩の一種、故鄕に歸る特性を利用して、軍事通信の用に供す。

【傳令】ヂンレイ 諸方に轉寓して寄食する。孟、滕文公「從者數百人、以一二一于諸侯」

【傳說】デンエツ いひつたへ。漢書「下及二諸子一一、皆充二祕府一」‖口碑。

【傳染】デンセン ○うつりしむ、感つき。夏文彥、論畫「筆墨超凡、一一得ノレ宜、意趣有ノレ餘者謂二之妙品一」○病氣に感染する、病がうつる。

【傳舶】デンパク さいはひを後世につたへる。

【傳祖】デンソ つたへてのっとる、雁は法。後漢書「皆專相一一」

【傳奏】デンソウ 國武家より朝廷に申し上げる事を取りつぐ官職。

【傳送】デンソウ しゅくつぎにておくる。史記「轉車一一」

【傳殆】デンタイ 殆は小飯なり、少し食ひて一時の飢をしのぐ。史、淮陰侯傳「今二其神將一一ニ日、今日破ノレ趙會食」

【傳道】デンダウ ○道をつたへ教ふ。○古來傳ふる所の道。

【傳道師】デンダウシ 基督ストリ教を衆人につたへ廣める者。布敎師・宣敎師・牧師。

【傳遞】デンテイ 物を送り屆ける。奉使紀聞「一一二其言一」

【傳說】デンエツ うまつぎば（驛遞）

【傳注】デンチュウ 書籍の注釋。博物志「上代去二先師一近、解二釋經文一皆曰ノレ傳、傳二師說一也、後代去ノレ師遠、或失二其傳一、故謂二之注一、注下已意一也」

【傳遞】デンテイ しゅくばよりしゅくばへ承け次ぎて送る、遞送・驛遞。

【傳統】デンタウ 系統をつたふ。又、傳はれる血すぢ。沈約文「守ノレ器一ノレ、子ノレ斯貴ノレ直」

【傳燈】デンドウ 佛法燈を傳ふる義、祖師の法脈を承け傳ふるをいふ。法は暗を照す燈の如し、故に喩ふ。釋氏要覽「自行化ノレ彼、則功德彌增、法光不ノレ絕、亦名二無盡燈一」

【傳馬】デンバ しゅくつぎのうま。漢書、昭帝紀「顧省二乘輿馬及廢馬一、以補二邊郡三輔一一」‖驛馬。

【傳馬船】デンバセン 國荷物を運送するに用ふるはしけぶね。しゅくばのはやうまに相當する早き船の義。

【傳播】デンパ 四方へつたはりひろがる。宋史、賀鑄傳「所ノレ爲詞章、往往一一在二人口一」‖流布。

【傳芳】デンパウ 美名を後世にのこす。北史「書二名竹帛一、一一萬古」‖流芳。

【傳發】デンパツ 令を發して出立させる。史、淮陰侯傳「夜半一一」

【傳聞】デンブン うはさにきく、つたへきく。公羊傳「所一一異ノレ辭」

【傳聞何可二盡信一】デンブンカカジンシン 聞き傳へたる事には誤もあれば盡くは信じ難し。歐陽修、春秋論下「然則所ノレ傳者、皆不ノレ可ノレ信乎、曰、——」

【傳聞不ノレ如二親見一】デンブンフジョシンケン 聞き傳へよりは自ら實見するの確かなるに如かず。後漢書、馬援傳「——、親ノレ影不ノレ如ノレ察ノレ形」‖百聞不ノレ如二一見一。

【傳票】デンピヤウ ○軍隊等にて金錢の代用として發行するてがた。‖軍票。○會計事務上、金品支出の請求事項を書き出すふだ。

【傳檄】デンゲキ あひづののろし、次第に傳へ知らしむるが故。

【傳命】ダン 命令を發する、それを出す。孟、公孫丑「置郵而ー之」【傳來】ライ ○つたはりきたる。‖渡來。○代代つたへ來る。‖相傳。【傳令】レイ 命令をつたふ、つたへたる命令。

【僄】（ウ）（ヤウ）

○かろし（輕）性行淺なり、身輕便なり、すばやし。○はやし（疾）

【僄疾】シツ ○心かろがろしくしてこさかし。後漢書、班固傳「竊ー信奧ニー」○かろくしてこせつく。‖輕薄。【僄悍】カン すばやくあらあらしい。史、高祖紀、項羽爲ニ人ー」‖猾賊」ト訓ム悍。

【僄】（ヨウ）（チョウ）多

○やとふ、やとはる（雇）やとひにん。後漢書、夏馥傳「變姓爲ニ治家ー」○勞作の賃金。㊁ひとし（均）詩、小雅「昊天不ー」

【僄役】エキ やとひつかふ、又、やとはれつかはる。

【僄耕】カウ 人にやとはれてたがやす。史、陳涉世家「涉嘗與ニ人ー」ー、輟レ耕之壟上ニ」

【僄客】カク やとはれ人。韓非子「ー一致ニ力而疾耕」‖傭徒。

【僄工】コウ やとはれたる職工。劉禹錫詩「此日ー記ニ名姓ニ」君數到僄池前」

【僄作】サク 人にやとはれてはたらく。後漢書、侯瑾傳「性篤孝ー一爲レ養」‖傭作。

【僄食】ショク やとはれて生活する。五代史、梁太祖紀「與ニ其母ー一ニー避ニ賊人ー」

【僄身自資】シシンジシ 傭耕して生活する。魏書、劉芳傳「嘗則——給、夜則讀誦不レ輟」‖傭耕自給。

【僄傳】デン やとはれて主書記をする。

【僄勞】ラウ 勞作して賃金を得る。史、范雎傳「爲レ人ー」

【僄徒】ト やとはれびと。荀子「干レ賞蹈レ利之兵也ー一賓賞之道也」‖傭夫。

【僄僕】ボク やとはれ人、僕は從僕人を立ててやとはるる義。‖雇僕。

【僄夫】フ 人に雇はれたる男。‖雇夫。

【僄聘】ヘイ 頼ひてやとひ入れる。‖雇聘。

【僄役】エキ やとはれたるしもべ。開天傳信記「子爲ニ廢中ー與ニー一雜作」

【僇】リク ロク 屋

○はづかしめ（辱）荀、非相「爲ニ天下大ー」○ころす、戮に同じ。

【僂】ロウ・ル ロル 慶 尤 有

○かがむ（屈）せぐくまる。左、昭七「一命而ー、再命而傴、三命而俯」○せむし、くぐせ（痀瘻）莊、達生「痀ー承レ蜩」

【僂僊】セン 背を曲げる、せぐくまる。

【僂屈】クツ かがむ、腰を曲る。

【僂指】シ ゆびをりてかぞへる。荀、儒效「雖ニ有ニ聖人之智ー一未レ能ー一數也」‖屈指。

【僂麻質斯】マチスス 英語の骨膜、身體の關節の痛む病。りようまち。‖風疾。

【働】

〔勞字〕はたらく「勞ー」

十二畫

【儡】カン 諫

○たけし、武き貌。○ゆるやか、寬大なる貌。詩、衞風「瑟兮ー兮」一解に威嚴の貌。○いかる、憤に通ず。○うかがふ。‖覘。

【儡儡】ライ 果斷の貌。

【儡然】ゼン いかる貌。唐書、王叔文傳「ー一以語ニ天下無ニ人」‖憤然。憤然。

【儦】キ 支 紙 寘

敢に通ず

かたぶく（傾）そばだつ（側）

【儦儦】ヒ 醉ひて舞ふ貌。晉、小進「應ー一舞ー一」

【僖】キ 支

○よろこび、よろこぶ、喜に通ず。○たのしむ（樂）

【儀】ギ グ 寘 遇

○いつはり、うそ、いつはる（譎詐）○にせ（僞物）萬の對。○なまり、あやまり。‖訛・譌。

【儀儀】ギギ 儀は人之を爲す、天眞にあらず、故に人に從ひ爲に從ふ。

【儀・詐・譎・詭・作・陽・詳・矯・僞】儀・詐・譎・詭・作・陽・詳・矯・僞は人爲にて、天眞にあらざるなり、いつはりこしらへたるなり、虛僞・詐僞と用ふ。晉紀「太子有ニ淳古之風ー而末世多レ儀、恐不レ了ニ家事ー」○詐は詐欺と連用す、欺きたますこと、誠實の反なり。說苑、貴德「巧詐不レ如ニ拙誠ー」○譎は

權詐なり、正しからず、詐謀を設けていつはるなり、すべて言行器服などのあやしく異樣なるをいふ、說に同じ「晉文公譎而不レ正」の如し。○說は譎に同じく、あやしくして正しからざる義、說巧・說變と用ふ。孫子「兵者詭道也」○俳・陽の二字は同音同義、內心は然らずして、うはべをいつはるなり。史記「倨子佯狂爲レ奴」○詳は佯に同じ、後世は用ひず、史記に佯狂を一本詳狂に作る。○僞はよい加減に誣ひていつはる、矯レ詔と用ふ。書經「矯二誥上天一」○贋はにせものなり、眞の反。韓非子「晉以二贋鼎一往」【僞位】ギヰ 有名無實の帝位。宋史「建炎四年、殘卽二僞一位」＝虛位。【僞學】ギガク 正しからざる學。宋寧宗の時、韓侂胄政を秉り己に異る者を除かんと欲し、道學を目して一と爲す、蓋し以爲らく貪黷放肆は人の眞情にして廉潔好修は皆僞なりと、乃ち一の禁を用ふることを禁じ、朱熹の官を削り、蔡元定を竄す、朝廷の正士一空す。【僞服】ギフク にせ。【僞君子】ギクンシ うはべばかり君子の風をする人、僞善者。丹鉛總錄「——則既稱二美名一而其流レ惡無レ窮矣」【僞言】ギゲン いつはり。柳宗元文「矯笑而一一」【僞笑】ギセウ いつはりてなく。唐書「過二重榮墓一一一而祭」【僞稱】ギシヨウ いつはりのとなへ。＝僞名。【僞證罪】ギショウイザイ 證人が裁判所にて不實の申立を爲したるつみ。【僞飾】ギシヨク いつはりかざる。【僞詔】ギセウ にせのみことのり。宋史「九月豫下二一一一」【僞善】ギゼン うはべばかりの善。＝詐善。【僞態】ギタイ いつはりのさま。戰國策「科條既備、民多二一一」【僞朝】ギテウ 當代の朝廷に對して、僭僞の朝を指す。李密、陳情表「臣少事二一一」【僞筆】ヒヅ 他人の筆蹟ににせてかく。又、その書。【僞炸】ギサク 藏をあざむく爲めに裂ぐるのろし。四征賦「譬二一一一以阻レ衆」【僞本】ギセン にせぼん、古人の名を僭り、又は古壺の體に似せて作りし書。圖書見聞誌「今所レ存者多是一一」＝僞書。【僞名】ギメイ いつはりのな。楚辭、九章「被以二不慈之一一」

【僑】 キヨ 鳥

かれ(彼)寓に通ず。

【僑】 ケウ 書

○たびやどり、かりずまひ(旅寓)○高し、喬に通ず。○人名、周代の鄭の子產の名。【僑居】キヨウ かりずまひ。草廬物詩「一一念二歸緣一」＝假寓。【僑寓】ケウグウ かりずまひ。＝旅寓・寄寓・僑居。【僑士】ケウシ たびびと。韓非、亡徵「羈旅一一」＝僑人・僑民。【僑人】ケウジン たびびと、寄留人。隋書、食貨志「晉元帝寓二居江左一百姓之自拔南奔者謂二之一一一」＝寄寓人・僑士。【僑商】ケウシヤウ たびあきうど。

【僥】 ㊀ ゲウ ㊁ ケウ・ゲウ 蕭 篠

㊀さいはひ、もとむ(求)㊁僥ーは短人、西南夷の別名。【僥倖】ケウカウ ○こぼれさいはひ。班固、奕旨「優者有二不遇一劣者有二一一一」○利を求めて止まざる貌。莊子「幾何一一而不レ衰二人之國一」＝僥幸。

【僚】 ㊀ セン ㊁ セン 戰 潸

㊀しめす、あらはす(表・見)㊁そなふ(具)

【僕】 シヨク 有

○ちん、賃金。○やとふ(雇)北齊書、盧文偉傳「一一二千餘車」やとはる。【僕居】シヨクキヨ 僕舍に同じ。【僕舍】シヨクシヤ 他屋舍をかりうける。又、僭家ずまひ。【僕船】シヨクセン ちん錢を出してふねを僭る。

【像】 シヤウ ザウ 養 もと象に作る

○かたち(形ー)○ならふ、似せてかたどる(摹倣)荀、議兵「一一上之意」【像敎】ザウケウ 偶像を立てて崇拜せしむる宗敎、佛敎の類。洛宮遺事「自二一一一以來、最爲二靈應一」【像贊】ザウサン 畫像の上の題銘。梁昭明太子文「美レ終則說發、圖レ像則贊興」【像生花】ザウセイクワ 造花をいふ。夢梁錄「宋時四節六局中、有二果子局一、掌二一一果等一」【像擬】ザウギ かたどり似せる。【像形】ザウケイ かたどる。かたち。＝象形。

【僬】 ㊀ セウ ㊁ セウ 嘯 蕭

㊀ーは明發の說。○ーー僥は短人、西南夷の別名。㊁はしる、趨走して容止を整へざる說。

【僧】 ㊀ セン ㊁ シン ソン 寒 侵 別字 僧は別字

㊀かる(假)なぞらふ(擬)下の者が分を越えて上の者のまねをする「―越」○おごる、おごり(驕)○たがふ(差)㊁いつはり、いつはる、讒言(ザンゲン)をする。‖譖。㊂みだる(亂)

【僭越】(センエツ)分限(ブンゲン)をこえる。漢書、賈誼傳「諸侯王―、地過古制」‖僭上。

【僭號】(センガウ)分をこえてつけたる帝王の名號。春秋、注「夫差欲レ霸二中國一、尊二天子一、自去二其―一而稱レ子」

【僭偽】(センギ)分をこえて地位をぬすむ。南史、宋武帝紀「義充其機、―赤滅」

【僭擬】(センギ)分をこえて上のまねをする。唐書、褚自澤大、忽二―一之嫌」

【僭侈】(センシ)身分にこえて不相應のおごりをする。

【僭賞濫刑】(センシャウランケイ)みだりに賞し、みだりに刑す。左、襄、二六「無レ國者賞不レ僭、而刑不レ濫」

【僭上】(センジャウ)分をこえて上のまねをする。漢書、食貨志「―亡レ限」‖僭越。

【僭稱】(センショウ)僭號に同じ。

【僭縱】(センシュウ)分にすぎてほしいまま。後漢書、皇后紀序「諸侯―、軌制無レ章」

【僭竊】(センセツ)分にすぎて爵位をぬすむ。蘇軾賦「彼狂奔之―」

【僭差】(センサ)分をこえて、上の者をあなどる、卑者が尊者をあなどる。左傳「其罰――於鬼神」

【僭陵】(センリョウ)みだりに分限をこえたる事をする。‖僭越。

【僭濫】(センラン)分をこえてみだらなるおごりをする。周禮、疏「諸侯―無道」

【僭號】(センガウ)分にこえたるれい。禮記「舜二大武一乘二大路一、諸侯之―也」

【僤】

㊀セン・ゼン　㊁タン・ダン　㊂ユン

㊀行き動く貌。㊁あつし(篤・厚)○すみやか(速・疾)

【僧】

ソウ　蒸

○佛門に入りたる人の稱。魏書、釋老志「之三歸、若君子之三畏也」隋書、經籍志「佛弟子、男曰二桑門一而總曰―、女曰二比丘尼一、俗人信レ佛法者、男曰二優婆塞一、女曰二優婆夷一」‖上人・沙門・出家・比丘。○佛道を修めて悟り得たる人の稱。

【僧庵】(ソウアン)僧廬に同じ。

【僧衣】(ソウイ)僧のころも。梁・丘遲詩「山頭禪室掛二―一」

【僧院】(ソウイン)僧侶の居るてら。陸游詩「―疏鐘出二林嘯一」‖僧庵。

【僧綱】(ソウカウ)㊀僧官僧位の高級のもの、官にては僧正・僧都・律師。位にては法師・法眼・法橋の稱。

【僧祇】(ソウギ)㊀大衆の義。翻譯名義集「梵語阿―無數也、―大衆也」

【僧巾】(ソウキン)僧侶のかぶるづきん。蘇軾詩「潔似二―白一」

【僧伽】(ソウギャ)○―那の略、僧徒をいふ、衆多の僧。一人の僧にもいふ。琅琊代酔篇「―唐言二衆僧一、史略云、凡四人以上名レ僧、一人亦稱レ僧、蓋從レ衆之名也」○梵語、師子の異名。

【僧官】(ソウクワン)僧の官、僧正・僧錄の類。

【僧舘】(ソウクワン)てら。王安石詩「午飯投二―一」‖僧房・僧院。

【僧社】(ソウシャ)てら。白居易詩「晨鐘―過レ橋處」‖僧寺。

【僧正】(ソウジャウ)○僧官の最高のもの。釋氏要覽「蓋以比丘無レ法、若馬無二轡勒一、漸染二俗風一、將レ乖二雅則一、故擇二有二德望一者、以レ法而繩之、令レ歸二淨正一、故云―」、此以二優婆夷一爲レ始」○圍僧官の第一位、大―・―・―・權―の三に分つ。

【僧廊】(ソウラウ)僧のもつ拂子(ホッス)。圍は大鹿、其の尾毛を束ねて作る。蘇軾詩「清談對二―一」‖麈尾。

【僧衆】(ソウシュウ)多くの僧徒。宋書、蕭開傳「自宜二悉供一一」」

【僧侶】(ソウリョ)こばうず。黃庭堅詩「―手二金鑰一」‖僧徒。

【僧俗】(ソウゾク)僧侶と俗人と。

【僧都】(ソウヅ)圍僧正に次ぐ官、大―・權大―・―・少―・權―の五に分つ、都は統、僧徒をとりしまる職。

【僧尼】(ソウニ)ばうずと、あまと、比丘(ビク)と比丘尼(ビクニ)と。

【僧坊】(ソウバウ)てら。‖僧房・僧院。

【僧房】(ソウバウ)僧の居るへや。蘇軾詩「―有二宿火一、手足漸和柔」‖僧院・僧廬・僧坊。

【僧帽筋】(ソウバウキン)肩胛骨(ケンカフコツ)を脊柱(セキチウ)の方にひきつける背筋。

【僧帽瓣】(ソウバウベン)心臟の左心耳と左心室とのへだてを爲す瓣膜、血液の逆流するを防ぐ、二尖瓣。

【僧帽月下門】(ソウバウゲッカモン)推敲(スイカウ)を見よ。

【僧跋】(ソウバツ)僧が足をくみてすわる、ざぜん、禪宗にて行ふ靜坐法。蘇軾詩「終朝危坐學―」‖跌坐。

【僧徒】(ソウト)僧尼の守るべきおきて。白居易詩「清淨依―」

【僧侶】(ソリョ)僧のともがら。‖僧徒・僧伽。

【僧廬】(ソロ)てら。‖僧庵・僧房・僧院。

【僧錄】(ソウロク)僧官の名。梁玄語錄「元魏以二沙門僧顯一爲二京師統一、所分僧二十統一、唐罷レ統立二兩錄司於京邑一」調二之―一」我國にては、足利義滿の時、始めて―司を置く。

【僔】ソン　阮

○うやうやし、つつしむ（恭敬）撙に通ず。荀、仲尼「恭敬而―」○あつまる（聚）○―はおほし（衆）

【僩】タイ　クワイ　佳　灰

○したがふ（順）○みやびやか（嫻）○長き貌。

【僣】テツ　屑

わるがしこし（狡猾）

新考　僭越の僭と異り。

【僮】トウ　東

○わらは（童）未だ元服せざるわかもの。○しもべ、婢妾の總稱。史、貨殖傳「卓王孫家―八百人」○かたくな（頑）○おろか。○無知の貌。○おさなし（幼）○―は竦敬ウヤマヒツヽシムの貌。

【僮御】トウギョ　しもべ。後漢書「勅制二―一」＝僮僕。

【僮昏】トウコン　無知にして暗愚なるもの。國語「―不レ可レ使レ謀」

【僮使】トウシ　めしつかひ、めしつかはる。

【僮然】ドウゼン　無知おろかなる貌。太玄經「物―未レ有レ知」

【僮僮】トウトウ　おそれつつしむ（竦敬）貌。詩、召南「被之――、夙夜在レ公」

【僮僕】ドウボク　しもべ、丁稚。陶潛、歸去來辭「――候迎、稚子候レ門」

【僮隷】ドウレイ　しもべ。後漢書「課二役―一、各得二其宜一」

【償】フン　問

○たふる、たふす（償）左、隱、三「鄭伯之車―于濟」○くつがへりやぶる（覆敗）大學「一言―事」○うごく（動）左、僖十五「張脈―興」

【僕】ホク　屋

○しりぞく（屏）○今の雲南・四川・貴州邊に居りし蠻夷。後漢紀「―人在二漢爲一犍爲郡一、在二唐爲一于矢部一盛南詔東部也」

【僕】ボク　沃

○しもべ（奴）○僕、僕遽「仕于公一曰レ臣、仕于家一曰―」○車の御者。論、子路「子適レ衛、冉有―」○われ、やつがれ、自己の謙稱。漢書、韋玄成傳「自稱爲―卑辭也」○したがふ（從）○はづかしめ（辱）○ともがら（徒）莊、則陽「仲尼曰、是聖人―也」○つく（附）詩、大雅「君子萬年、景命有―」○かくす（隱）

【僕未レ可レ終】ボクノマダオワルベカラズ　應對の事多くして擴相（傳命の者）をかふるも說き盡されず。僕は太儐、擴相を掌る職。儀禮「聘公曰、敢問二儐行一、孔子對曰、遽數レ之、不レ能レ終二其物一、悉數レ之乃誄、――也」誄は久。

【僕御】ボクギョ　しもべ、馭者。史、管晏傳「今子長八尺、乃爲二人―一」

【僕圉】ボクギョ　しもべ。らまかひ。劉峻、自序文「八歲遇二樂梓輔覆一身免二―一」

【僕區】ボクク　僕は隱、區は匿、亡命者をかくまふ、又、其の刑書の名。左、昭、七「文王作二――之法一」

【僕使】ボクシ　しもべ。易林「爲二人―一」

【僕遫】ボクソク　凡庸の小才。又短簡の貌。漢書、息夫躬傳「諸曹以下―不レ足レ數」

【僕妾】ボクセフ　下男と下女と。＝僕婢。

【僕貸】ボクタイ　しもべとなりて貸金を受く。左、襄、二七「申鮮虞來奔、―二于野一」

【僕僮】ボクトウ　めしつかひ、しもべ。

【僕婢】ボクヒ　下男と下女と。

【僕夫】ボクフ　○しもべ、車を御する者。詩經「召二彼―一」○禽を掌る官。周禮「隸一―」

【僕僕爾】ボクボクジ　煩ワヅラハしく張ラなる貌。孟、萬章「雖レ曰二―一也」――垂拜一也」

【僕射】ボクヤ　秦の射を主る官。唐以後尚書の長官の稱。後漢書、百官志「本注曰、僕射、秦官、史始皇本紀有二―一周書曰、是也、古者殿レ武以二海レ射者一掌レ事、故曰二――一也（中略）漢成帝建始元年初置二尚書五人一、一人爲二――一、此蓋其始也、獻帝建安四年、以二郗慮一爲二左―一、衛臻爲二右―一、置二左右一之始也」

【僕桑】ボクサウ　蝙牛ベンギウの異名。山海經「青要之山、是多二――一蒲盧一」＝蜾蠃。

【僕隸】ボクレイ　しもべ、めしつかひ。

【僚】㊀レウ　㊁レウ　蕭　篠

㊀とも、ともがら（朋・同官）「同―」通じて寮に作る。○つかへびと（官人）「官―」書、皐陶謨「百―師師」○賤役に服する人、下司。左、昭、七「隸臣―、―臣僕」㊁みめよし（美好）詩、陳風「佼人―兮」

【僚友】レウイウ　同役のとも。曲禮「―稱二其弟一也」＝同寮・涼寮。

【僚壻】レウセイ　あひむこ、兩壻即ち姉妹の夫が相呼びていふ稱。晉書、燕嵩傳「妻會稽賀邨女、―陸氏先宰相子」

【僚屬】リョウゾク したやく。‖屬僚。
【僚佐】リョウサ したやく。‖屬官・屬僚。
【僚友】リョウユウ 僚友に同じ。

十三畫

【優】 アイ 國

〇ほのか(彷彿)かすかに見ゆる(微見)〇むせぶ(咽)
【優然】ユウゼン ほのかに見ゆる貌。禮、祭義「祭之日入レ室、一一必有レ見二乎其位一」

【億】 オク 職

〇萬の萬倍。‖萬萬。〇萬の十倍。禮、內則、疏「算法一之數、有二大小二數一、小數以十爲レ等、十十爲レ百、百百爲レ千、十千爲レ萬、萬萬爲レ億、億億爲レ兆也、大數以萬爲レ等、萬至レ萬、是萬萬爲レ億也」〇多數の義。〇やすんず(安)左、昭、二一「心一則樂」〇おもんばかる(料度)論、先進「一則屢中」〇むね、臆に通ず。漢書、平都侯相碑「除悲馮一」〇かけもの(賭錢)おもはくしてかける義。
【億劫】オッコウ 〇國無限に長き時。捨遺記「殘二九天之正氣一、生二于一一之內一」〇國おっくう、ものうく思ふ。
【億載】オクサイ 久しく遠き後の世、載は年に同じ。揚雄、長楊賦「揆二一一一

＝法則。
【儀制】ギセイ さだまれるおきて。禮儀制度。元稹文「僭越之人、紊乘ニ―一」
【儀鳳】ギホウ 鳳の瑞樂の稱していふ。張衡賦註「―下二鳳凰一」＝風儀。
【儀容】ギヨウ 儀容に同じ。
【儀刀】ギタウ 儀式に用ふるかざりがたな。通鑑、唐紀「別給ニ―一」注「―以ル木爲ル之、以ル銀裝ル之、具ニ刀之儀一而已」
【儀仗】ギヂャウ 儀式に用ふる武器、仗は劍戟の總名。唐書、百官志「掌ニ戎器儀仗一」
【儀仗兵】ギヂャウヘイ 儀仗を帶びて天皇の護衛又は國家の儀式に參列する兵隊。
【儀注】ギチュウ ○天文の事を記せし書物。後漢書、律曆志「參ニ案一一」○禮節をいふ。南史、司馬褧傳「撰ニ嘉禮一一一百一十二卷一」
【儀狄】ギテキ 夏の時、初めて酒を造りし人、よりて酒の異名とす。戰國策「昔者帝女令ニ―一作ニ酒而美、進之禹、禹飲而甘レ之、絕ニ旨酒一曰後世必有レ以レ酒亡ニ其國一者ト」
【儀的】ギテキ まと。又、めあて。韓非子「棄ニ―一而妄發、雖レ中而不レ巧」＝標的。
【儀典】ギテン 儀制に同じ。＝儀法。
【儀態】ギタイ よきやうにとりはからふ。よきはかりごと。詩、大雅「我ニ―一之一」＝善謀。
【儀同】ギドウ 官名、儀同三司の略、儀制三司と同じき義、漢殤帝の時、鄧隲事跡將軍と爲り儀三司に同じとあるに本づく。
【儀法】ギホフ きまり、おきて。＝儀矩。
【儀範】ギハン のり、てほん。晉書、謝安傳「安處レ家、常以ニ―一訓ニ子弟一」＝儀矩。
【儀服】ギフク 禮式に著用するきもの。禮服。
【儀文】ギブン ○れいぎのあや、たちゐふるまひのみやびなるさま。○形式。公川文。
【儀表】ギヘウ のり、てほん。史記、自敘「以爲ニ天下ノ―一」＝法則。
【儀門】ギモン 官衙の門戸。明會典「凡新官到レ任之日、至ニ―一前ニ下レ馬」
【儀容】ギヨウ 儀にかなへるかたち。元稹詩「春草綠茸雪色白、想君騎馬好ー一」
【儀禮】ギライ 書名、十七篇。周禮・禮記と合せて三禮といふ。共に十三經に列す。

【儅】 キャウ 陽

○たふれる(仆倒)曹岡、六代論「百足之蟲、至死不ー一」○たふす、倒す。莊、則陽「推而ー之」
【儅臥】キャウガ たふれふす。汝南先賢傳「大雪積レ地丈餘、洛陽令王仲宣ー門、無レ有ニ行路一、謂安已死、令ニ人除レ雪入ニ戸、見ニ安ー一」
【儅拔】キャウバツ 木がたふれて根がぬける。晉書「滻滬汎溢、衝ニ陷山谷一、巨松ー一浮ニ於滻滬一」
【儅仆】キャウフ たふる。戰國策「頭顱ー一、相ニ望於境一」＝仆儅。
【儅蹶】キャウケツ たふれる、又死す。魏志、臧洪傳「ー一麾下」

【儈】 クヮイ 泰 古、會に借り用ふ

牙ーはすあひ、さいとり(仲買人)市人を會合し、賣買の間に居る者。

【儆】 ケイ 梗 敬

いましむ、いましめ(戒)警に通ず。
【儆戒】ケイカイ いましむ。書、大禹謨「吁戒哉、ー一無虞」＝警戒。

【儇】 ケン 先

○もとむ(求)○うかがふ(覗)
【儇薄】ケンハク 途徑の徹と異りて後世限りて通用す。
【儇幸】ケンカウ 望むまじきことを求める。＝徼倖。

【儉】 ケン 琰

○さとし、さかし(慧利)○とし、はやし(疾)輕捷なる貌。詩、齊風「揖ニ我謂ニ我ー一兮」
【儇薄】ケンハク さかしき貌＝佞然。
【儇子】ケンシ こざかしく輕薄なる男、小才子の稱、非相「鄒曲之ー一」
【儇佞】ケンネイ 疾く走る貌、都賦「ー一巧敏、衛レ枚無レ聲ー一」
【儉】 ケン 豏

○つづまやか(節約)禮、檀弓「國奢示ニ之以レ儉」○すくなし(少)とほし。○あきたらず。○としみのらず(歲歉)「荒ー一」北史、韓麒麟傳「年豐多積、歲ー一出振」○けはし。荀、富國「下疑俗ー一」＝險。○へりくだる貌。
【儉約】ケンヤク けんやくして手輕にはらむる。魏志、注「戒ニ其子ー一以ニ儉一」＝節儉。
【儉節】ケンセツ つづまやかにしてしはし
【儉省】ケンセイ つづめてはぶく。宋史「制度務ニ―一」
【儉然】ケンゼン へりくだる貌。
【儉素】ケンソ 儉約にして質素に善ず、華恒傳「雖ー一」
【儉德】ケントク つづまやかなるよきとく。易經「君子以ニ―一辟レ難」
【儉薄】ケンハク つづまやかにしてうすし。後漢書、周經傳「爲レ貴ル薄ー一不

ン充」

【儉德之共也】キョウトクノキョウ 節儉を守るは、德義の基しきなり、共は恭（左、莊二四）

【儉朴】ケンボク つつましやかにして飾なし、儉約質朴。白居易、策林「人情ー一、時俗淸和」‖儉素。

【儉可二以助レ廉】ケンモッテレンヲタスクベシ 節儉は廉潔の心を助け養ふをいふ。宋史、荒純仁傳「親族有二請レ救者一、純仁曰、惟ー一、催恕可二以成一レ德、其人書二於坐隅一」

【儉約】ケンヤク つつましやかにする。漢書、平津侯傳「身行ニーー一」‖節約。

【儉用】ケンヨウ 費用をつつましやかにする。白居易文「量レ入ーレー、亦可二自給一」

【儉素】ケンソ つつましやかにしてをしむ、やぶさか。晉書、羊陽王望傳「性ー一而好二取斂一」‖儉嗇。

【儉】シ 寘

○細かく碎く。○ことなし。○ことなり（異）○すぐれる（卓特）又、其の人。左、莊十一「得ー一曰」克」

【儁異】シュンイ すぐれてまさる。又其の人。管愈詩「期行多ニーー一、議論無二瑕疵一」‖俊秀・卓犖タク

【儁逸】シュンイツ すぐれてひいでる、又其の人。後漢書「故九江太守逸膺、英オーー」‖秀逸・卓逸・傑出。

【儁料】シュンリョウ すぐれたる料簡。韓愈詩「簸二名ーー一、與二我近輔一」

【儁傑】シュンケツ すぐれてひいでる、又其の人。韓愈、柳子厚墓誌銘「ー一廉悍、議論證二據今古一、出二入經史百子一」

【儁才】シュンサイ すぐれたるはたらき、又、其の人。左傳「鄧甘有二三ーー一」‖俊才・俊才。

【儁出】シュンシュツ すぐれて秀でる。北史、韓麒麟傳「若有二高明卓爾才具ーー者、朕亦不レ拘二此例一」‖傑出・傑逈。

【儁朗】シュンロウ すぐれて高し。晉書「惟爾ー一英毅」

【儁望】シュンボウ すぐれたるほまれ。晉書「風流ー一、冠後來之秀」‖傑望。

【儁邁】シュンマイ すぐれてぬきんでる。晉書「風鑒淸爽、神淸ー一」‖傑出。

【儁良】シュンリョウ すぐれてよし、又其の人。後漢書「喜二六館一、搜ニーー一」

【儃】㊀セン ㊁タン 先早

㊀なり、ふり、すがた（態）○ー佪は進まざる貌、たたずむ貌。㊁ーーは舒開なる貌。莊、田子方「ーー然不レ趨」

【儋】㊀タン ㊁タン ㊂セン 覃闞豏

㊀になふ（負・荷）通じて擔に作る。㊁もたひ（罌・罍）又二の器に容るるまめの稱。史、貨殖傳「漿千ー㊂にぎはす、助ける。‖贍。

【儋耳】タンジ ○南蠻の八種の一。○郡の名、漢置く、今の廣東省ーー縣の西に在り。

【儋石之儲】タンセキノチョ 石は一石、儋は二石、人の之をになふをいふ、すこしのたくはへ。漢書、揚雄傳「無二ーー一、晏如也」

【儂】ドウ ノウ 冬

○われ（我）韓愈詩「鱷魚大二于船、牙眼憮二殺ー一」○かれ（彼）楊維楨詩「勸ーー莫上北高峯」○えびす（苗族の一）

【儇】ケン 銑

つとむ（勉）心に欲せざる所を強ひてつとめる。‖勤。

【儡】㊀ヘキ ㊁ヒ 霽賄

㊀かたよる（偏）○ひがむ「邪ー」ひがみてほしいまま。孟、梁惠王「放ー邪侈無不爲已」○いやし（鄙・陋）「偏ー」○くせ（惡習）‖辟。○るなか「ー地」㊁ー倪は、ひめがき、城上の女牆。‖埤堄。○さく。‖避。

【僻遠】ヘキエン とほくかたよる。史記「秦穆公、ーー不與二中國一會盟一」

【僻境】ヘキキョウ 僻陬に同じ。

【僻隅】ヘキグウ かたすみ、かたほとり。‖邊土・邊隅。

【僻見】ヘキケン かたよりたる見解、中正を失せしかんがへ。‖偏見。

【僻在】ヘキザイ 一方にかたよりてある、僻地に在る。

【僻志】ヘキシ ひがみて正しからざる心、次條を見よ。

【僻事】ヘキジ 正しからざる事、ひがごとの中庸「僻ー一則ー一作」

【僻書】ヘキショ 偏僻にして道義に依らざる書。世說、豳兎令狐綸曾以二著ー一訪二於温嶠一、嶠答曰、事出二南華經一、非ーー一也、裴相公聖理之暇、時覓レ覽レ古、綸甚慕、奏二嶠筠有レ才無レ行、不レ許二登第一、遂經例終レ身」

【僻陬】ヘキスウ かたよりたる土地、かたゐなか。‖僻土・僻地・僻境。

【僻姓】ヘキセイ めづらしき姓氏。鄧椿代醉編「偶得二近時人ーー一錄レ之」

【僻說】ヘキセツ かたよりて中正ならざる

言說。‖辭說。
【僻地】ヘキチ かたいなか。張說文「遠居二一一一、代爲二右族一」‖邊土・僻陬。
【僻上】ヘキジヤウ 前條に同じ。
【僻戾】ヘキレイ ひがみもとる。唐書、陸贄傳「一一殘妄」
【僻論】ヘキロン 中正ならざる議論。‖辟論。

【僕】 僕（人部十二畫）の本字。

十四畫

【儗】ギ 俎

○なぞらふ、擬に通ず、分限を越えて目上の人のまねをする(潛上)たくらぶ、くらぶ(比較)曲禮「一人必于其倫」○うたがひ、うたがふ(疑)○一一はしけりて盛んなる貌。漢書、食貨志「故一一而盛也」‖疑擬。

【僦】サイ セイ 隊 霽

○ともがら(同輩)たぐひ(等類)左、成二年「文王猶用衆、況吾一乎」○ともに(俱)相伴ひて。○ひとしく(等)

【僦等】サイトウ 同じなかま。南史、章昭達傳「恩寵超二於一一一」
【僦輩】サイハイ 同じなかま。隋書、李文博傳「一一莫レ不二敬憚一焉」
【僦類】サイルイ 同じなかま。晉書、王濟傳「好以レ貴傷レ物一一以レ此少レ之」

【儘】ジン 軫

○みな(皆)ことごとく、すべて。‖盡。○たとひ、もし。‖縱徹詩「相逢一道二休官去一」一道一著と連用するも同義。○まかす(任)ままよ。白居易詩「一君花下醉二青春一」○國まま、多く書簡文に用ふ「故に」「に付」の意。○そのまま、現在有るとほり。○氣まま、ほしいまま。

【儘教】ままよ。劉克莊詩「一一人比駿、喚作鎭南詩」‖縱莫。

【儒】ジュ 虞

○學者の稱。法言、君子「通二天地人一曰一」周禮、天官「四曰一、以道得レ民」○周公・孔子を宗とせる教學、又其の學者。○俠一は短人、一寸法師、又は役者、藝人。又梁上の短き柱。‖株檮。

【儒家】ジュカ 儒者に同じ。
【儒家者流】ジュカシャリウ 儒教の學派の者、又其の學派、古の九流の一。漢書、藝文志「一一蓋自二司徒官一出、助二人君、順二陰陽一、明二教化一者也」
【儒雅】ジュガ 儒道の正しき義理。魏志、李典傳「典好二學問一、貴二一一一、杜甫詩「風流一一是吾師」
【儒行】ジュカウ 儒者の品行。禮記に一一篇あり、孔子が魯の哀公に對して儒者の行を語りし語を錄す。
【儒學】ジュガク 孔子を祖とする學問。又、其の學派。史、五帝世家「河間獻王德、好二一一一」
【儒官】ジュクワン 儒學を以て仕官するもの。三國志、一一非二其人一、將何以宣二明聖道一」
【儒冠】ジュクワン 儒者のかぶるかんむり。漢書、酈食其傳「諸客一一來者、輒解二其冠一、溺二其中一」
【儒經】ジュケイ 儒學の書物。楊衒詩「雲居避世客、凝白習二一一一」
【儒教】ジュケウ 孔子を祖とする仁義道徳の教。史記、魯人皆以二一一一、而朱家用レ俠聞」
【儒良】ジュリヤウ 人魚をいふ。哺乳動物にて草を以て食とし海中に棲息す、形海牛と似たり。
【儒士】ジュシ 儒學を修むるさむらひ。魏志、高堂隆傳「舉二一一一一舉二逸民一」‖儒者。
【儒臣】ジュシン 儒學を以て仕ふる臣。劉因詩「所濟唐開元、一一相伯仲」
【儒者】ジュシャ 孔子の學を奉ずる人。史、淮陰侯傳「成安君、一一也」‖儒生・儒家。
【儒將】ジュシャウ 武人にして儒者の風ある者。蘇軾詩「一一不レ須詩二鄒魯一、本レ閒詩句解二風流一」鄒魯は春秋の時の晉の元帥、詩書禮樂に通ぜし人。
【儒術】ジュジュツ 儒者の道。史、循吏「今上卽レ位、招二致一一之士一」‖儒道。
【儒書】ジュショ 儒學の書物。
【儒生】ジュセイ 孔子の學を修むる學者。列、周穆王「雲有二一一一、自能治レ之」
【儒宗】ジュソウ 儒者の宗師、學者のかしらかぶ。晉書、賀循傳「朝廷嘉二其能一、令レ敎二胄生徒一、號爲二當世一一」
【儒服】ジュフク 學者のきるきもの。禮記「夫子之服、其一一歟」史、叔孫通傳「通一一、漢王憎レ之」
【儒墨】ジュボク 孔子の敎と墨子の敎。荘、天運「天下大駭、一一皆記」
【儒名而墨行】ジュメイニジボクカウ 名は儒者と稱すれども、其の行は墨氏の道に合するをいふ。韓愈、送二浮屠文暢師一序「人固有二一一者一、問二其名一則是、校二其行一則非、可二以與レ之遊一乎、如有二墨名而儒行者一、問二其名一則非、校二其行一則是、可二以與レ之遊一乎」
【儒門】ジュモン 學者のいへがら。張說謝二賜史記一表「服二道一一、策二名昌運一」‖儒家。
【儒林】ジュリン 孔子の道を奉ずる學者のなかま。史記「一一傳あり、任昉文「蔡公一一之亞」
【儒分爲レ八】ジュブンシテハチトナル 孔子の後分れ

て、子張氏・子思氏・顏氏・孟氏・漆雕氏・仲梁氏・公孫氏・樂正氏の八となる（韓非・顯學）

【儽】タイ　灰　しもべ。＝臺・與儓。

【儽】ダウ　皓　○くるしみよわる（困疲）韓愈詩「始知樂名教、利用苦拘」○倦＝は相呼び合う公聲。唐書、劉禹錫傳「鼓吹裴回其聲倦」

【儔】チウ　尤　通じて疇に作る　○ともがら、たぐひ、なかま、（等類）○たれ（誰）○おほし（衆）○ひとし（同一）

【儔匹】チウ　同じともがら。漢書「求二之儔匹一」＝儔侶・儔類・儔倫。

【儔倫】チウ　ともがら。韓愈「今古無二儔倫一」＝儔匹。

【儔侶】チウ　ともがら、たぐひ。杜甫詩「石根青楓林、猿鳥聚二儔侶一」＝儔侶・儔類。

【儔類】チウ　同じなかまの意。韓愈「非二儔類一」

【儐】㊀ヒン　㊁ヒン　眞　國

㊀賓客を導き主人を相（たすく）る人。○賓客又は鬼神に接するに禮を以てする。禮、禮運「山川所以二鬼神也」（省きて賓に作ることもあり）○みちびく（導）たすく（相）○すすむ（進）○つらぬ（陳）詩、小雅「」爾遠豆」○ひそむ（眉蹙）＝顰。㊁しりぞく。戰國策「六國從親以一秦」＝擯。○うやまふ（敬）つつしむ（恭）

【儛】ブ　㒳　まひ、まふ（樂舞）莊、在宥「鼓二歌以一之」＝舞。

【儚】ボウ　㒳　○およぶ（迷）○一はくらし（惛）○　國　はかなし、無常。

十五畫

【優】イウ　尤　○ゆたか（寬裕）餘力あるなり。論、學而「仕而一則學」○おほし（饒）あつし（渥）○やはらぐ（和柔）「一游」○ひろし、ゆるやか（寬）○しとやか（閑舒）○やさし（柔順）○まさる（勝）劣の反對。○たはむれ（遊伎）わざをぎ、やくしや（倡者）藝人。漢書、東方朔傳「朔好二詼諧一、武帝以俳一畜之」たはむる（調戲）左、襄、六「少相狎、長相一」○ゆるやかに、ゆたかに。○あまねし（洽）○のろし。○伊一は佞媚の貌。

同訓異字　優・勝・愈・賢　○優はゆったりとまさる、劣の反、餘力あるなり。○勝は負に對し、かつと訓むにより、人の下とならず、優に之に過ぐる義。通書「賓勝善也、名勝恥也」○愈は勝也、賢也、過也と註す、過ぎこしてまさる義。孟子「丹之治レ水也、愈二於禹一」○賢はかしこしと訓むにより勝ぢの義に轉用す。孟子「二子之勇、未レ知二比孰賢一」

【優渥】イウアク　あまねく天子の恩澤を被るる。詩、小雅「既優既渥、既霑既足、生二我百穀一」陳書、章昭達傳「恩寵一一、超二于儕輩一」

【優劣】イウレツ　もてなしを衆人と異にする。後漢書、匈奴傳、其父兄子弟、事相一一」

【優遊】イウイウ　○やはらぎてのどかなる貌、閑暇自得の意。詩、大雅、卷阿「伴奐爾游矣、一一爾休矣」＝優閑・優遊。○ぐづぐづする貌、決斷力に乏し。漢書、元帝紀贊「率二制文義一一一不レ斷」＝優柔。

【優優】イウイウ　ゆるやかに和ぐ貌。詩、商頌「敷レ政一一、百祿是遒」

【優假】イウカ　あつくもてなす。後漢書「率二其義一、特一一二之」＝優待・優賞・寵待。

【優洽】イウカフ　仁德があまねく十分にゆきわたる。易林「仁德一一、恩及二異域一」

【優閑】イウカン　ゆったりとして閑暇である貌。唐書「南陽故人、並以二一一自保」

【優毅】イウキ　やさしくして心つよし。馬融文「溫直一一、孔孟之方也」

【優遇】イウグウ　優待に同じ。

【優寵】イウチョウ　ゆるやか。後漢書、魏霸劉寬傳贊「臨レ政亦稱二一一」

【優容】イウヨウ　てあつきめぐみ。元敍文「一一愈深」＝深容・隆容。

【優顯】イウケン　すぐれてあらはれる。晉書、張宏敍「任遇一一」

【優厚】イウコウ　てあつし。晉書、魏舒傳「舒齊時年八十二、帝甚傷悼、贈賻一一」

【優柔】イウジウ　○やさしくおとなしい。文心雕龍「一一以懷レ遠」○ぐづぐづする、きまりがつかぬ。＝優游。

【優倡】イウシャウ　わざをぎ、史、孔子世家「一一侏儒、戲而前」＝俳優。

【優契】イウシャウ　てあつくほめすすめる。南史「今區宇寧晏、宜加二一一」

【優秩】イウチツ　特別にすぐれる。歐陽修文「賜命一一、特加二于常品一」＝優畀。

【優勝劣敗】ユウショウレッパイ　まさるものは勝ち、おとるものは敗る、生存競争、自然淘汰のさまをいふ。‖弱肉強食・適者生存。

【優物】ユウブツ　他のものよりも勢がすぐれてゐる、つよみがある。

【優笑】ユウショウ　座興を助ける者、たいこもち藝人の類。元稹、論二教本一書「一一陵亂之率」

【優詔】ユウショウ　てあつきみことのり、優渥なる詔。唐書、李綱傳「一一拜二侍書一」

【優然】ユウゼン　ゆったりとおちつく貌。‖綽綽シャクシャク

【優遇】ユウグウ　高き官位にうつる、榮轉する。

【優贍】ユウセン　才智が十分に多し、贍は足る。後漢書、蔡邕傳「有二一一之智一」

【優先權】ユウセンケン　他の者をさしおきて先づ手を下し得る權利。

【優待】ユウタイ　てあつくもてなす。宋史、王嗣宗傳「以レ文場二王薄一、頗見二一一一」‖優遇。

【優待券】ユウタイケン　特別のもてなしをなすべく規定せし招待券。

【優待生】ユウタイセイ　學業品行共に優等なる故を以て學校より、特別のあつかひを受け、授業料免除等の特典を與へられたる生徒。

【優賞】ユウショウ　てあつくほめ賞すること。‖賞讃

【優渥】ユウアク　てあつきみことのり。優詔。

【優待】ユウタイ　てあつくもてなす。宋史、王嗣宗傳「以レ文場二王薄一、頗見二一一一」‖優遇。

【優待券】ユウタイケン　特別のもてなしをなすべく規定せし招待券。

【優待生】ユウタイセイ　學業品行共に優等なる故を以て學校より、特別のあつかひを受け、授業料免除等の特典を與へられたる生徒。

【優賞】ユウショウ　てあつくほめ賞すること。‖賞讃

【優渥】ユウアク　てあつきみことのり。優詔。

【優然】ユウゼン　ゆったりとおちつく貌。‖綽綽シャクシャク

【優贍】ユウセン　才智が十分に多し、贍は足る。後漢書、蔡邕傳「有二一一之智一」

【優先權】ユウセンケン　他の者をさしおきて先づ手を下し得る權利。

【優待】ユウタイ　てあつくもてなす。宋史、王嗣宗傳「以レ文場二王薄一、頗見二一一一」‖優遇。

【優待券】ユウタイケン　特別のもてなしをなすべく規定せし招待券。

【優待生】ユウタイセイ　學業品行共に優等なる故を以て學校より、特別のあつかひを受け、授業料免除等の特典を與へられたる生徒。

【優貸】ユウタイ　てあつくもてなす。白居易文「弘二一一之風一」‖優遇・優待・優假。

【優柔】ユウジュウ　寛大にしてゆるす、おほめにみる。北史「一一和調」

【優裕】ユウユウ　ゆたか、十分にある。國語「享祀時至而布施一一也」

【優恰】ユウコウ　やくしや、恰は樂人。‖優倡。

【優劣】ユウレツ　まさりおとり。晉書、陸機傳「定二陸之一一一」（二陸は陸機と陸雲と）‖高下。

【優婆】ウバ　てあつくあはれむ。李嘉詩「常時矜禮數、漸老荷二一一」

【優曇華】ウドンゲ　〇佛三千年にして一たび花開く、この花開くときは金輪王出づといふ想像上の植物、轉じて極めて稀に有る事に喩ふ。法華經「佛告二舍利佛一、如レ是妙法、如二一一時一現一耳」〇くさかげろふ蟲の卵。

【優婆塞・優婆夷】ウバソク・ウバイ　佛出家せずして佛弟子となりたる男子を優婆塞（善男子・清淨士）といひ、女子を優婆夷（善女子・清淨女）といふ。

【償】シャウ　陽

〇つぐのふ、あがなふ。〇むくゆ（酬）史、廉相如傳「臣覩二大王無一意一」趙城邑故臣復取レ璧」〇つぐのひ（代金・報酬）〇かへす（還）

【償金】シャウキン　つぐのひきん。

【償却】シャウキャク　つぐのひかへす。‖償還。

【償還】シャウクワン　つぐのひかへす。‖償却。

【償責】シャウセキ　〇其の責任をつぐのひ果す。唐書「雖レ死不レ足レ一一」〇借錢をかへす、實は償に通ず。淡書「有二貧二田宅一、鬻二子孫一以レ一一者上矣」

【償復】シャウフク　つぐのひかへす。‖償還。

【儁】へウ　蕭

〇一一は人の衆き貌。詩、齊風「汶水滔滔、行人一一」〇爲隊の多き貌。詩、小雅「一一俟俟」

【倜】（俶）テキ　錫　（足）

㊀傀一はでく、くぐつ、人形つかひ（木偶戲）〇やぶる（敗壞）淮南、俶眞「孔墨之弟子以二仁義教一導于世一不レ免レ于一其身一」㊁一然は意の安からざる貌。

十六畫

【儈】㊀シン　㊁ジン　眞

㊀うら（裏）襯に通ず。㊁おや（父母）親に通ず。

【儡】儡（人部十三畫）に同じ。

【儲】チョ　魚

○たくはふ、たくはへ（貯積聚）淮南、主術二十七年而有ニ九年之一ニ○まうく、まうけ。○そへ（副）ひかへ。○太子を東ーといふ、まうけのきみ（南史、齊文惠太子傳）○ーに與はさまよふ貌。揚雄、羽獵賦「ー與乎大浦ー浪乎宇內」‖相羊。

【儲偫】チョ　ヂ　儲・偫・峙の別は書（辨部十畫）の條を見よ。

【儲位】チョ　太子のくらゐ。唐書「不レ定則攸、況ーー乎」

【儲胥】チョ　ショ　時の宜しの人、字は同人、康熙の時人、經史に博通す、曾て唐宋十家の文を選び海內に風行す。

【儲宮】チョ　よつぎのきみ、太子の濃尼文「乃漸ニ上京一、羽ニ儀ーー」‖儲貳・儲副。

【儲君】チョ　よつぎのきみ、太子（公羊、僖、五、注）‖皇太子・東宮・春宮・東儲・儲宮儲嗣・儲貳・儲副。

【儲后】チョ　儲貳に同じ、后は君。王元長、曲水序「ーー養智在レ斯、妙善居レ貞」

【儲貳】チョ　よつぎのきみ、太子。晉書、禮志「太子之禮、同レ君、所下以重ニーー一正ー正嫡上

【儲副】チョ　よつぎのきみ、太子。唐制冊皇太子文「建ニ立ーー一崇ニ鞏國本一」○しもべ、賤はこもの、僕婢。前書、大傳「憎ニ其人一者憎ニ其ーー一」○たくはへ、貯は須用。長楊賦「木擁楯樂ニーー一」

【儲粟】チョ　○たくはふ。周書「皆ニ造戎仗一ーニー食糧一」○たくはへ。‖儲蓄。

【儲蓄】チョ　たくはふ、たくはへ。後漢書「節用ーー、以備ニ凶災一」‖貯蓄。

【儲副】チョ　よつぎのきみ、太子。後漢書・种嵩傳「太子國之ーー」‖儲貳・儲君。

【儩】ボウ　養　俸に同じ

ーーはくらし（乏）‖俸俸。

【儱】ロウ　ロウ　篠

ー侗は未だ器を成さず。

【儱侗】ロウ　ドウ　不遇の貌、又漠然の貌。‖龍鍾・臃腫。

十七畫

【儭】㊀サン・ザン　㊁サン　㒳　感

㊀惡しき貌「醜ー」○陳列が整はず。左、僖、二二「敗ー可也」（敵陣の整はざるに乘じて擊つないふ）㊁ことばかろし（輕言）○まじへいふ。

【儭言】サンゲン　ましてぐち。曲禮「長者不レ及ニ毋ーーー一」

【儵】シュク　屋

○あをぐろし（青黑色）○たちまちに、倏の本字。楚辭、九歌「ー而來兮、忽而逝」○禍福に罹る。

【儵忽】シュクコツ　たちまち‖倏忽。

【儷】㊀ダ・ナ　㊁ダ　哿　歌

㊀おにやらひ（驅疫）疫鬼を追ひはらふ。論、鄉黨「鄉人ー、朝服而立於阼階」○柔順なる貌、一說、盛んなる貌。㊁たをやか（嫋）○行くに度ある貌、正しきあるきぶり。詩、衞風「佩玉之ーー」

【儷】レイ　ライ　霽

○ならぶ（竝）○たぐひ、なかま（等類）晉書、樂志「越ニ古今一而無ニーー一」○つれあひ（配偶）「伉ー」左、成、十一「烏獸猶不失ニーー一」○駢ーレンは漢魏六朝時代に行はれし文體。‖駢四儷六文。四六文。

【儷偕】ライカイ　ともなふ、つれだつ。楚辭、九辨「陰陽不レ可ニ與ーーー一」

【儷皮】レイヒ　儷は偶、一對の鹿の皮、元服の祝儀、又婚禮の結納に用ふる。儀禮、士昏禮「主人醴ニ賓東帛ーーー一」

廿畫

【儸】ゲン　ゴン　㒳

○おごそか、いかめし（矜莊）詩、陳風「有美一人碩大且ー」嚴に通ず。○うやうやし（恭）つつしむ、うやまふ（敬）曲禮「ー若思」○頭を昂ぐ。

【儸儸】ゲンゲン　おごそかにしてつつしむ、格は嚴敬。禮、祭義「嚴威ーー、非レ所ニ以事ニ親也」

【儸乎】ゲンコ　おごそかなる貌。晉金文「ーー其若レ思、淒乎其若レ逝」

【儸然】ゲンゼン　おごそかにして犯すべからざる貌。論、子張「望レ之ーー、卽レ之也溫」

【儹】タン　寒

○偭ーはすぐれる（卓異）○ー蒲は心ひろし（豁達）○もし、もしくは（或然）史、伯夷傳「ー所謂天道是耶非耶」俗に偶に作る。○たちまち（儵忽）莊、繕

性「物之一來者也」○いやしくも(苟)○一乎は志を失ふ貌、又明かならざる貌。莊、天地「一乎若二行而失一道也」

【儻惚】クツコツ　ほしいまま、不羈の貌。關尹子「道恍惚而無レ知乎、心一一而無レ親乎」

儿部

【儿】ジン　エン　真

ひと(人)

解字　人は立てる人に象り、儿は行く人に象る。

一畫

【兀】コツ　ゴチ　月

○高くして上平かなり。○禿けたる貌。○無知の貌。○一一は動かざる貌。○あしきる(刖)○臬一は安からざる貌。‖兀兀。

【兀兀】ゴツゴツ　動かざる貌の韓愈、進學解「焚二膏油一以繼レ晷、恒一一以窮レ年」一說、心を用ふる貌。‖乾乾。

【兀刑】ゴツケイ　足をきる刑罰。

【兀坐】ゴツザ　動かずに坐する。蘇軾詩「一一如二枯株一」

【兀山】ゴツザン　はげやま、又平地に突き出たる山。

【兀人】ゴツジン　兀ヒル刑に處せられたるもの。‖兀者。

【兀者】ゴツシヤ　足きりの刑に處せられたる者。莊、德充符「魯有二一一王駘一」

【兀然】ゴツゼン　安からざる貌。劉伶、酒德頌「一一而醉、恍爾而醒」一解、無知の貌。

【兀立】ゴツリツ　突き出てそびえたつ。

二畫

【允】イン　エン　軫

○まこと(信・誠實)書、君奭「告二汝朕一」○まことに、眞に。書、大禹謨「惟精惟一、一執厥中」○うけがふ(肯)ゆるす(許)したがふ(從)應じて許す。○あたる(當)後漢書「案レ法平一」○おもねる(佞)

【允可】インカ　ゆるす。‖允許。

【允協】インキヨウ　まことにつつしむ、誠實にして謹愼。書、堯典「一一克讓、光二被四表一」

【允協】インキヨウ　まことに和ぎかなふ。皆書、杜爽傳「故能一一時雍」

【允若】インジヤク　允は信、若は順、心の底より服從する。書、大禹謨「懷二保萬民一、惠二于黎一、不レ一不レ一、一厥有レ常、吉哉」

【允當】インタウ　ただしくあたる。左、僖、二八「軍志曰、一一則歸」

【允納】インナフ　まことゝして採用する。書、陳二軍國之宜一、多見二一一一」

【允文允武】インブンインブ　まことに文、まことに武、天子の文武の德の備はれるをたたへいふ。詩、魯頌、泮水「一一、照二格烈祖一」

元　ゲン　グワン　元

○もと(本)はじめ(始)‖原。○一年の第一日。○年號の第一年。○年號。○よし(善良)易、繫辭「一者善之長也」○善き人。左、文、十八「堯舜氏、八一使レ布二五教于四方一」○大いなり。○かうべ(首)孟、滕文公「勇士不レ忘二喪レ其一一」○一一はたみ(民衆)賈誼、過秦論「制二海內一子二一一」○氣、天地の太徳。○をさ、つかさ(首長)

同訓異字　元・本・原・舊・故・素等の別は本(木部一畫)の條を見よ。

【元惡】ゲンアク　わるものゝかしら。書、康誥「一一大憝、詗二大可一惡也」‖元兇。

【元遺山】ゲンイサン　元好問を見よ。

【元俱】ゲンキユ　もとね。翦燈餘話「開レ倉以賑レ之、但取二一一一不レ求二厚利一」‖原價・元直

【元慨】ゲンガイ　八元八愷を見よ。

【元亨釋書】ゲンコウシヤクシヨ　圖三十卷、京都東福寺の虎關和尙編す、推古天皇以來七百餘年間の、佛道に關する事を詳記す。

【元好問】ゲンカウモン　字は裕之、遺山と號す、金の太原秀容の人、七歲詩を能くす、長ずるに及び、經史百家を淹貫す、金元間の文學者の最たり、元遺山全集四十卷あり。

【元亨利貞】ゲンカウリテイ　易道にて乾(天)の四德、元は萬物の始、春に屬し仁と爲す、亨は萬物の長、夏に屬し、禮と爲す、利は萬物の遂、秋に屬し、義と爲す、貞は萬物の成、冬に屬し、智と爲す【易、乾卦】

【元氣】ゲンキ　○萬物の根本の勢、天地の氣。後漢書、明帝紀「升二靈臺一、望二一一一」○人の精氣。唐書「柳公度善二攝生一、嘗曰、吾初無レ術、不レ過二一一佐二喜怒一耳」○國威勢・壯健・勇氣。

【元九】ゲンキウ　唐の元稹をいふ、九は其の排行。白居易詩「倩レ誰將レ書與二一一一」

【元勳】ゲンクン　天子の母方のをぢ。詩、大雅「王之一一」

【元吉】ゲンキチ　大吉に同じ。易經「黃裳一一」

【元規之塵】ゲンキ下の故事によりて、心よからぬ人の行爲をいふ。晉書「庾亮居ニ外鎭一、面ニ對ニ朝廷之權一、導內不レ能レ平、常遇ニ西風塵起一、擧レ扇自蔽曰、――汚レ人」元規は亮の字。塵は土煙。

【元兇】ゲンキョウ わるものの かしらの 日元惡。

【元君】ゲンクン 道教にて女の仙人の美稱。男を眞人といふの對。楚辭「――將ニ遊ニ乎四極一」

【元勳】ゲンクン 國家を興すに與りたる大功。又、君主を輔佐せし大功ありし者。漢開文帝詩「校尉立ニ――一」

【元化】ゲンカ ○造化の大いなるはたらき。陳子昂詩「仲尼探ニ――一幽遘一陽和一」○帝王の德化に喩ふ。元結、補樂歌「――油油兮、與レ物同ニ其始一」

【元輕白俗】ゲンケイハクゾク 唐の元稹の詩は輕浮、白居易の詩は淺俗なりとの評語。珊瑚鉤詩話「――、郊寒島瘦、皆其病也」孟郊の詩は寒酸、賈島の詩は瘦寒の氣味あるをいふ。

【元月】ゲンゲツ 一年のはじめの月、正月の異名。

【元結】ゲンケツ 字は次山、唐の武昌の人、天寶の進士、道州の刺史と爲り、容管經略使に進む、到る處、惠政あり、民石を立て德を頌す、卒して禮部侍郎を贈らる、其の詩自ら胸次を寫し、古人を規摸するを欲せず、唐人中に在りて別に一派を開けり。

【元元】ゲンゲン ○根本の義。後漢書、班固像「――本本、禪見洽聞」○たみ、百姓。戰國策「制ニ海內一子ニ――一」

【元后】ゲンコウ ○元は大、后は君、おほぎみ、天子をいふ。書、泰誓「――作ニ民父母一」○天子の嫡后即ち第一品后。晉史「孝武帝后方氏、世宗第三后也、所レ生、諡曰ニ皇后一比ニ敎恭一、奉ニ天濟一レ神、其以ニ――一配レ帝」

【元功】ゲンコウ 元勳に同じ。帝業を佐け興す大いなるてがら。漢書、文景功臣表、注「――謂ニ佐ニ興帝業一也」

【元朝】ゲンチョウ 元日に同じ。唐德宗詩「獻覩ニ――一、萬方咸在レ庭」

【元策】ゲンサク 大いにすぐれたるはかりごと。後漢書、注「――猶ニ善謀一也」

【元子】ゲンシ ○元は首なり、天子の嫡子。詩、魯頌「建ニ爾――一、俾レ侯ニ于魯一」日太子、○唐の元結の自稱、又、其の著書に名づく。

【元史】ゲンシ 明の宋濂撰す、本紀四十七卷、志五十三卷、表六卷、列傳九十七卷あり、此の書倉卒にして成る、最も疏略となす。

【元祀】ゲンシ はじめのとし、第一年、祀は年、殷代の語。日元年。

【元始祭】ゲンシサイ 圓一月三日に天子が賢所及皇靈殿に天神地祇と歷代の皇靈とを祭らるる祭。國本を年の首に祭る故にいふ。

【元次山】ゲンジザン 元結を見よ。

【元稹】ゲンシン 字は、微之、唐の河南の人、元和六年制科に擧げられ、第一たり、詩を善くし、白居易と倡和し、元白と並稱せらる、時に元和體と稱す。

【元首】ゲンシュ ○天子。書、益稷「――明哉、股肱良哉、庶事康哉」○はじめ、原始。晉書、律曆志「更以ニ十一月朔旦冬至一爲ニ――一」

【元帥】ゲンスイ 總大將をいふ。左、僖、二七「晉作ニ三軍一、謀ニ――一、趙衰曰、郤穀可」

【元帥府】ゲンスイフ 總大將の居る本營。蘇軾詩「――前羅ニ萬戟一」

【元聖】ゲンセイ 大いにすぐれたるひじり。書、湯誥「惟ニ――一罔レ之ニ我レ力」日大聖。

【元宵】ゲンショウ 上元即ち正月十五日の夜。韓偓詩「――清景亞ニ元正一」日元夕。

【元宵】ゲンショウ おぼぞら。蔡邕詩「奕奕ニ――一」日大空。

【元夕】ゲンセキ 上元の夜、正月十五日の夜。事類金書「唐太宗時、三元不レ禁レ夜、上元御ニ乾元門一、中元下元御ニ東華門一、而上元遊觀獨盛」吳師道ニ――一詩あり。日元宵、元夜。

【元素】ゲンソ 物の成分を形づくる原質。

【元祉】ゲンシ 大いなるさいはひ。宋史「永錫ニ――一」

【元戎】ゲンジュウ 大いなる兵車。詩、小雅、六月「――十乘、以先啓レ行」日大戎。

【元嫡】ゲンチャク ○本妻。○よつぎ、嗣子。

【元德】ゲントク 大いなること。書經「玄宗謚天若ニ――一、永不レ忘在ニ王家一」

【元寶草】ゲンポウソウ 佛耳草ブッシソウの一名。

【元妃】ゲンピ ○第一番目のきさき、皇后。史、周本紀「姜源爲ニ帝嚳ニ――一」○始めて聚りし妻。日元配。

【元白】ゲンパク 唐の詩人元稹（微之）と白居易（樂天）との唐書、白居易傳「居易最工レ詩、與ニ元稹酬詠、故號ニ――一」

【元符】ゲンプ ○大いなる祥瑞。揭傒斯、長揚賦「方將像ニ――一、以禪ニ梁父之基一、屬ニ泰山之高一」○宋の哲宗の年號。

【元服】ゲンプク 男子の二十にして冠を著くる儀式。元は首、冠は首に著く、故にいふ。儀禮、冠禮「令月吉日、始加ニ――一、棄ニ爾幼志一、順ニ爾成德一」

【元本】ゲンポン ○物事のもと。晉書、天文志、北斗七星、在ニ太微北一、七政之樞機、陰陽之ニ――一也」通典「宋孝建元年詔曰、尙書、百官之――、庶務之樞機」○もと金（母財）利子金に對していふ。

【元老】ゲンロウ 國家に大功ある臣。詩、小雅、采芑「方叔ニ――一、克壯ニ其猶一」

【元老院】ゲンロウイン 圓維新の際の功臣を以て組織せし立法部。

【元良】ゲンリョウ 大いによし、又其の者。

書、太用「一人ー―、萬邦以貞」
【元金】グヮン　借し又は預けたるもとき ん。利子の對。
【元日】グヮンジツ　一年の最初の日、正月朝日。宇彙「正月一日曰ニ―ー」＝元旦・元朔。
【元服】グヮンプク　物ごとを始め出したる人、轡組又商品を始めて發賣せし家。
【元旦】グヮンタン　元日のあした。梁三朝雅樂歌「四氣新ー―、萬壽初今朝」
【元朝】グヮンテウ　元旦に同じ。僧惠洪詩「ー―落レ見レ雪」
【元年】グヮンネン　○帝王卽位の第一年。○年號のあらたまりたる第一年。
【元來】グヮンライ　もとより、もと。＝本來。
【元利】グヮンリ　元金と利息の金と。

三畫

【兄】㊀ケイ・キヤウ　㊁キヤウ　㊂庚

㊀あに、いろせ、このかみ。○二人又は二物の中にて優れる方。世說、德行「元方難ニ爲レ其ー」季方難ニ爲レ其弟ー」○親しき友を呼ぶ敬稱。㊁いはんや、まして。樊毅、華嶽廟碑「君善必書、ー乃盛德」＝況。○おそる。＝怳。○くらぶ。○國え、十干の甲エフ丙ヒノエ戊ツチノエ庚カノエ壬ミヅノエにいふ。えは兄の義。
【兄公】ケイコウ　妻より大の兄を呼ぶ敬稱（國雅、釋親）
【兄事】ケイジ　兄として敬ひつかふ。禮經「十年以長、則ー―ニ之ー」
【兄弟ノ爲ニ兄難ノ爲ニ弟ー】ケイダイノタメニケイタリガタクテオトタリガタシ　優劣をわかちがたき義。世說「陳元方子長文有ニ英才ー、與ニ季方子孝先ー各論ニ其父功德ー、爭ノ之不ノ能ノ決、諮ニ于大邱ー、大邱曰、元方難ノ爲ニ其兄ー、季方難ノ爲ニ其弟ー」大邱は元方及び季方の父、大邱の長陳寔。
【兄弟】ケイダイ　あにと、おとうとと。書、君陳「惟孝、友ニ于ー―ー」詩、小雅「ー―既翕、和樂且孺」＝昆弟。
【兄弟鬩ノ牆外禦ニ其務ー】ケイダイハカキノウチニセメアヒテソトニソノアナドルヲフセグ　兄弟が牆の内にて互に爭ふも、外より侮りて來る人あらば、一致して之を禦ぐ。詩、小雅「兄弟鬩ニ于牆ー、外禦ニ其務ー」務は侮。
【兄弟之國】ケイダイノクニ　親しみ深き國、又互に嫁娶の關係ある國。周禮「以ニ賓ー―ー」史、張儀傳「秦楚婚姻ノ國、親ニ―ー」
【兄弟爲ニ手足ー】ケイダイハシュソクタリ　兄弟は手足の如く、一度失へば再び得る能はざるをいふ。莊子「――夫婦如ニ衣服ー、衣服破時更得ノ新、手足斷時難ニ再續ー」

【充】シュウ　㊁通　ジュウ

○みつ（滿・實）孟、梁惠王「君之倉廩實、府庫ー」○ふさぐ、ふさがる（塞）詩、邶風「寢如ー―」耳ニ」註「如ニ塞ノ耳無ニ聞也ー」○あつ（當）漢書、揚雄傳「ー庖厨而已」○おこなふ（行）○ながし（長）○たかし（高）○わづらはし（煩）左、哀十一「事ー政重」○よし、うつくし（美）○こゆ、こやす（肥）○あく（飽）○ーは心に憂ある貌。
【同訓異字】俗に充に作るは非なり。
【同訓異字】充・滿・盈・實・塞・塡の別は滿（水部十二畫）の條を見よ。
【充位】ジュウヰ　くらゐにあてる、徒に員に備はるのみにて其の實を盡さざる義。史、酷吏傳「丞相取ニ―ー、天下平詳決ニ于海ー」＝作貪。
【充腹】ジュウフク　みちあふれる。史記「ー―而知ニ禮於外ー」
【充盈】ジュウエイ　みちみつる。禮記「四體既正、膚革ー―、人之肥也」＝充滿・充實・充初。
【充積】ジュウセキ　みつると、むなしきと。楚辭「蓼ニ北極ー而一息兮、吸ニ沆瀣ー以ー―」
【充詘】ジュウクツ　喜びて節を失ふ貌。禮、儒行「不ノーニー於富貴ー」
【充血】ジュウケツ　血が身體の一所に集り滯る。又其の病「腦ー―」
【充缺】ジュウケツ　かけたるをおぎなふ。漢書「今當下選ニ於軍郡ー、以充ニ其缺ー」
【充耳】ジュウジ　○みみにあてるかざり。詩、衞風「ー―琇瑩、會弁如ノ星」○耳聾ノ狀にいふ。詩、邶風「寢如ニ―ー」註「如ニ塞ノ耳無ニ聞也ー」
【充實】ジュウジツ　十分にみち足る。後漢書「財富ー―、錢穀未ノ可ノ當也」＝充物。
【充初】ジュウショ　みちて一ぱいになる物は滿。後漢書、濟河王慶傳「珍寶玩好ー―ニ其邸ー」＝充實・充盈・充滿。
【充斥】ジュウセキ　みちひろがる、充は滿、斥は大なり。左、襄、三一「寇盜ー―」
【充積】ジュウセキ　みちつもる。陳書、袁樞傳「貲產ー―」
【充滿】ジュウマン　みちて餘る。唐書「儲蓄ー―」
【充足】ジュウソク　十分にみちたる。
【充塞】ジュウソク　ふさぐ、ふさがる。孟、滕文公「邪說誣ノ民、ー―仁義ー」
【充當】ジュウタウ　充塡に同じ。
【充庭】ジュウテイ　庭にみつる。晉書、樂志「嘉會置酒、嘉賓ー―」
【充塡】ジュウテン　あてはめる。宋史、兵志「取ノ人分ノ類ー―」＝充當。
【充棟】ジュウトウ　積みてむなぎにとどく。藏書の多きにいふ。柳宗元、陸文通墓表「其爲ノ書、處則ー―ニ宇、出則汗ニ牛馬ー」
【充美】ジュウビ　たりととのひて美なり。
【充備】ジュウビ　みちそなはる。後漢書「屑ニ送什物ー、無ノ不ニ―ー」
【充分】ジュウブン　俗に十分と同じく用ふ。

【充滿】マンシ 充牣に同じ。莊子「一ニ天地一」
【充用】ジユウ あてもちふる。
【充閭之慶】ジユケイ 賓客が門閭にみつる、男子を生むを賀するの詞。晉書、賈充傳「充字公閭、父逵晩始生レ充、目後當レ有二一一一、故以爲二名字一焉」

四畫

【兕】キヨウ 冬

○あし(惡)凶に通ず。○あらし(暴)○おそる(恐)恸に通ず。○おそるるこゑ(懼聲)
【兕漢】キヨウカン わるもの。‖兕徒。
【兕器】キヨウキ 人を殺傷するに用ふる器。
【兕懼】キヨウク おそる。左、僖二八「曹人一一」
【兕賊】キヨウゾク わるくよこしま。兇惡にして殘酷。
【兕手】キヨウシユ 直接に手を下して人を殺傷せし者、下手人。‖兕犯。
【兕徒】キヨウト わるもの。‖惡人・兕漢。
【兕暴】キヨウバク わるくしてあらし。又其の者。
【兕慝】キヨウトク 人ごろしなどの惡事。

【光】㊀クワウ ㊁クワウ 陽

㊀ひかる、ひかり、あきらか(明)てり、かがやく(燿)つや、(潤澤)いろ(色澤)てらす(照)○大いなり、ひろし(廣)○美くしき文物、文化。易、觀卦「觀二國之一一」○ほまれ、榮譽。淮南、俶眞「與二之同一一」㊁いろどる(彩)
【光有】クワウイウ 光は火いに保有する義。左傳「一ニ天下一」
【光陰】クワウイン としつき、歲時、光は晝日、陰は夜。李白、春夜宴二桃李園一序「一一者百代之過客」
【光陰似二逝水一】クワウインニセイスイニタトフ 歲月の速やかに過ぎゆくに喩ふ。顏氏家訓「光陰可レ惜、皆三諸逝水一」
【光陰如レ箭】クワウインジヨセン 月日の速かに過ぎて再び復らざるに喩ふ。李益、遊子吟「君看白日過、何異二弦上箭一」
【光映】クワウエイ てりうつる。南史、陳後主張貴傳「一ニ後庭一」
【光榮】クワウエイ ほまれ。李白詩「名在二烈女傳一、竹帛具二一一一」‖榮譽。
【光耀】クワウヨウ ひかりかがやく。列子「日月星辰、亦積氣中之有二一一一者」‖光輝。
【光演】クワウエン あきらかにひろむ。諸葛亮文「照烈皇帝、謚二明獻之德一、一ニ一文武一」
【光焰】クワウエン もえる火、ほのほ。次條に同じ。
【光燄】クワウエン ほのほ。盛んなるいきほひ。韓愈詩「李杜文章在、一一萬丈長」‖光焰。
【光偃】クワウエン よき評判。魏書「吸二引後生一爲二其一一一」‖聲價。
【光臺】クワウダイ 圖三十二相の一。佛の眉間にある白き光明を放つ毛。
【光學】クワウガク 物理學の一部にて、光線に關することを研究する學問。
【光照】クワウセウ ひかりかがやく。陳志「德教一一、九服慕レ義」‖光輝。
【光輝】クワウキ ひかりかがやく。班固文「清廟之一一」‖光耀。
【光華】クワウクワ ○ひかり、かがやく氣。竹書紀年「日月一一、且夜且分」‖光采・光輝。○光榮の義。顏照詩「宗室生二一一一、賓僚遠傾望」
【光怪】クワウクワイ あやしくかがやくひかり。懷素法帖、夜夜風雷起二一一一」
【光光】クワウクワウ ひかりかがやく貌。名醫のかがやく形容。漢書、馮奉世敍傳「子明一一發三迹四軍一」
【光晃】クワウクワウ きらきらとひらめく。王逸、九思「奔竜兮一一」
【光室】クワウシツ ○日のひかりの韓愈詩「暗日古二一一一」○景色、おもむき。
【光陰】クワウイン めぐりたき事。忠經「先後一一、皆君之德」‖休暇。
【光顯】クワウケン 德などの明かにあらはるる義。詩經「明明在レ下」の疏「一一之德、在二于下一也」
【光棍】クワウコン 圖惡黨加者ヲ無賴の匪徒をいふ。
【光采】クワウサイ 次條に同じ。
【光彩】クワウサイ ひかりのあや。うつくしきかざり。北齊書、陳敬傳「朝有二使敬一、便是國之一一」
【光參】クワウサン 海參ナマコの一種、我が近海に產す、水煮曝乾して支那に輸出す。
【光身】クワウシン 圖はだか(裸躰)‖光身子。
【光色】クワウシヨク いろつや。南史「一一甚麗」‖光澤・色澤。
【光燄】クワウエン ひかりかがやく。張衡、東京賦「德宇天覆、鎔烈一一」
【光昭】クワウセウ ○ひかりかがやく。明かに照らす。漢武帝、秋胡行「明明日月光、何所不二一一一」○かがやかしあらはす。左傳「一ニ先君之令德一、可レ不レ務乎」
【光閃】クワウセン 光のひらめき。
【光線】クワウセン ひかり、ひかりのすぢ。‖光芒
【光明】クワウミヤウ 明かにあらはしひらく。晉書、杜預勿銘記「晉王纘レ軌一一徽風一」
【光澤】クワウタク いろつや。‖光色。
【光波】クワウハ 光線の波動。
【光芒】クワウバウ きらきらするひかり。杜甫詩「蜚浪日一一」
【光被】クワウヒ 德のひかりが普く世に及ぶ。書、堯典「一ニ四表、格二於上下一」
【光風霽月】クワウフウセイゲツ 心の高明なる形容。霽月は雨後の月。宋史、周惇頤

傳「人品甚高、伊懷酒落、如二——一」【光復】クワウフク 舊業を恢復する義。隋書「——二中華一、永敦二隣好一」【光武帝】クワウブテイ 後漢の帝の始祖、姓は劉氏、名は秀、字は文叔、前漢の高祖九世の孫、兵を起して天下を平げ、建武元年洛陽に卽位す。【光名】クワウメイ うつくしき名。管子、中匡「——溢二天下一」＝美名。【光明】クワウミヤウ 〇明かにひかる、ひかり。詩、周頌、敬之「學有レ緝二熙于——一」〇クワウミヤウ 佛の德のひかり。【光明正大】クワウミヤウセイダイ 心の潔白にして、道理正しく大いなる義。清、顧棟高、春秋大事表卷首、讀春秋偶筆「如レ此幾同二俗吏之引一例比一律與二顚生之改一文曠二字、聖人心事、——、決不レ如レ此」【光來】クワウライ 人の來ることの敬稱。＝光顧・光臨。【光臨】クワウリン 人の來ることの敬稱、光は榮なり、臨臨を以て榮とする義。晉書、劉毅傳「枉レ駕——一」＝光來・貴臨。【光烈】クワウレツ 大いなるいさを。易林「——無レ窮」【光祿勳】クワウロククン 漢代の宮殿掖門戸を掌る官。漢書、百官表「郎中令掌二宮殿掖門戸一、武帝更二名——一」【光祿寺卿】クワウロクジケイ 祭祀・朝會等の事を掌る官。宋史「——、掌二祭祀・朝會・宴饗・酒醴膳羞之事一」

【先】

㊀セン ㊁セン 【古】【金】【篆】

㊀さき。〇はじめ(始)〇まへ(前)後に對していふ。吳志、諸葛恪傳「將軍在レ——」〇今より前「レ是」〇早し。韓愈、師說「生乎吾前、其聞レ道也、固レ——乎吾一」〇かしら(首)〇むかし(古)詩、大雅「——民有レ言、詢二于芻蕘一」〇とほつおや「祖——」「——世」司馬遷、報二任安一書「太上不レ辱レ——」〇已に死せし者「——考」「——帝」「——君」〇まづ。大學「欲レ治二其國一者、——齊二其家一」㊁さきだつ、さきんづ。禮、月令「——立春三日」〇あによめ(娘)㊂さきがけ(前驅)洗馬は一馬。【先啻】センシ 先人のなしたるはかりごと。胡宿禁內降詔「感服二——一」【先憂後樂】センイウコウラク 衆人より先に憂へ、衆人より後に樂む、志士仁人の國家に對する心がけ。范仲淹の語。歐陽修、范文正公神道碑銘「先二天下之憂一而憂、後二天下之樂一而樂」又孫朴子「先憂爲二後樂之本一」【先引】センイン さきにたちて道案內する。漢書、嚴安之傳「少史冠二法冠一、爲レ——導一」＝先驅。【先塋】センエイ せんぞのはか。過庭錄「吾愚愚民救レ疑害二財一——一」【先考】センカウ 亡き父、考は亡父。爾雅「父曰レ考、母曰レ妣」＝先人・先君。【先塋】センケイ 人にさきだちて道を悟れる人。孟、萬章上「予天民之——者也」＝先知。【先驅】センク さきばらひ、又さきがけ。史、孟軻傳「鄒子如レ燕、昭王擁レ——一」【先君】センクン 〇亡き父。〇他人の亡父。北史、程紹讓元順一曰、老身與二將——一、頻連二戰事一」〇歷代の天皇。晉、伊訓、注「——謂二禹以下少康以上賢王一」〇祖父以上の稱。孔叢子「吾——之相レ魯」【先月】センゲツ あとげつ、去月。＝前月。【先決問題】センケツモンダイ 一番さきに取りきめる可きことがら。【先見】センケン 事に先だちて見込を立てる。後漢書、楊彪傳「愧無二自覺一——之明一、猶懷二老牛舐犢之愛一」【先賢】センケン むかしの賢人。禮記「祀二——於西學一」＝先正。【先後】センゴ さきにするとあとにすると。大學「知レ所二——一、則近レ道矣」【先刻】センコク 圖 さきほど、いましがた。【先妻】センサイ 死去又は離縁せしつま。後妻の對。【先子】センシ 先人に同じ。【先祀】センシ せんぞのまつりっ左傳「苟守二——一無レ廢二我勳一」【先資】センシ おやゆづりの財產。＝遺產。【先識】センシキ 先見の明をいふ。晉書、索靖傳「靖有二——一遠量一、指二宮門銅駝一曰、會見二汝在一荊棘中一耳」【先日】センジツ さきのひ、このあひだ。＝過日。【先人】センジン 〇亡き父。＝先子・先考・先君。〇せんぞ。職官紀談「今人稱二先子・先君・——一爲レ父、然不二獨父一也、如二曾祖二稱二曾子一曰、吾先子之所レ與也、則稱レ祖爲二先子一」＝先世・祖先。【先臣】センシン 〇死亡せし臣。〇君王又は主君に對して、已に死せし父の稱。【先楽】センラク 樂の始皇帝以前の時代、即ち戰國時代。禮、河間獻王傳、獻王所レ得書、皆古文——舊書」【先進】センシン 學問、官位の已より先に進める人。論、先進「——於二禮樂一、野人也」【先唱】センショウ 人よりさきにいひ出す。文子「——者窮之路也」＝首唱。【先手】センシュ 人より先に手を著ける。蘇軾詩「告レ歸謝二——一」【先儒】センジュ 先代の儒者。杜預、左傳序「——所レ傳、皆不二其然一」【先取特權】センシュトクケン 他の債權者より一番先に辨濟を受け得る特別の權利。【先春】センシュン 茶の異名(茶譜)盧仝、茶歌「——抽出黃金芽」【先緒】センショ 先人ののこせるしごと。那勃文「世宗統匱、率遵二——一」＝遺

業。
【先勝】セン　陰陽家にて、急用、又は公事沙汰などに適すと云ふ日。——日の略。
【先從】セン　先人のなしたるあと。
【先正】セイ　前の世の賢人。書、說命「昔——保衡」‖先賢・先民・先哲。
【先生】セイ　○已より先に生れて、道を辨へ知れる人。孟、告子「——將二何之一」○敎師、師匠。管子、弟子職「——施レ敎、弟子是則」○人を呼ぶ敬稱。史、平原君傳「毛——以三三寸之舌一、彊二於百萬之師一」○父兄をいふ。論、爲政「有二酒食一、——饌」○鄕人の官を退きて家に居る者の稱。（後、士流皆稱二鄕——一」
【先世】セイ　亡父。又、祖先。唐書、王師範傳「吾與二——一、且示二子孫不一レ忘レ本也」‖先人。
【先聖】セイ　古の聖人をいふ。班固、幽通賦「誤——之大猷一兮、亦降レ德而勗レ信」
【先聖先師】センセイ　古、學を立つる、必ず——に經營す、虞・夏・商・周四代は舜・禹・湯・文を以て先聖とし、此の四聖を佐けて其の德業を成就せし者を先師と爲す。降以後は、大抵孔子を先聖とし、顏子を配して先師とす。
【先先月】センセンゲツ　圖先月の前の月、去去月。
【先祖】ソセン　○初代の祖先（書、多士）‖始祖。○始祖以下歷代の先人。
【先途】センド　○官位、學問の我より先に進みたる人。後漢、班固傳「中書監二表「十餘年間、位超二——一」‖先輩。○圖修驗者などの勤行をつみて導入のときに先導となる者の稱。
【先知】センチ　衆人より早く道を覺り知る、又、其の人。孟、萬章「使二——覺二後知一」‖先覺。
【先輩】センパイ　先祖より世世傳へ來りし田業。後漢書、班固傳「農殿二——之眠敎一」
【先陣】センジン　先鋒に同じ。
【先著】センチャク　人よりさきに到着する。
【先住】センジュウ　圖先代の住持の世紀「——僧陽愛清」
【先帝】センテイ　前代の天子。諸葛亮、出師表「——創業未レ半」
【先哲】センテツ　いにしへの賢者（書、召誥）‖先正・前哲。
【先哲叢談】センテツソウダン　圖八卷、原善著す、德川時代の儒者文人の事蹟性行を記す。
【先天】センテン　○人の生れ來る以前をいふ。易、文言「——而天弗レ違」○生前より我が身に備はる。
【先途】センド　圖身のなりゆき、最期。
【先登】センとう　まっさきに敵の城に攻め入る。さきがけ。左、隱十一「穎考叔取二鄭伯之旗一以——」
【先入爲レ主】センニュウヲシュとす　先に聞きたることを主とする義。淺書、息夫躬傳「觀二覽古戒一、反覆參考、無レ以二先入之語一爲レ主」
【先輩】センパイ　天子又は太子の出御に供奉するさきがけ（前驅）。越語「句踐親爲二夫差一——」‖洗馬。
【先輩】センパイ　學問年齒の我より長じたる人。王維詩「爲レ學經二——一」‖先進。
【先方】センポウ　圖むかう、相手かた。此方の對。
【先發】センパツ　○先だちて出發す。○先だちていひ出す。史記「汲黯——、弘継二其後一」天子常設」‖先唱。
【先鞭】センベン　さきほど。‖先度。
【先非】センピ　前になしたる惡事。‖前非・昨非。
【先妣】センピ　亡き母、妣は亡母。先考を見よ。
【先父】センプ　亡父をいふ。‖先考。
【先負】センプ　陰陽家にて、公事などに忌む日、緣起のわるき日。——日の略。
【先府君】センプクン　亡父の敬稱、單に府君ともいふ。蘇洵文「嗚呼二蓋見一、蓋二——一也」‖側に朱子語類「無レ爵曰二府君夫人、淡人碑已有、只是尊レ神之辭、府君如二官府之君一」
【先鞭】センベン　人に先んじてする。さきがけ。次條を見よ。
【著二先鞭一】センベンをツク　人に先だちて功を成す。晉書、劉琨傳「琨少負二志氣一、有二縱橫才一、與二祖逖一爲レ友、逖被レ用、與二親故書一曰、吾枕レ戈待レ旦、志梟二逆虜一、常恐二祖生先一レ吾著レ鞭」
【先鉾】センボウ　いくさのさきがけ。唐書、薛仁貴傳「問二——一白衣素誰一」
【先民】センミン　いにしへの賢人。詩、大雅「——有レ言、詢二于芻蕘一」
【先務】センム　第一になすべきつとめ。宋史「以レ改レ刑爲二——一」
【先約】センヤク　先に約する。北周書、楊寧傳「欲レ背二——一」‖前約。
【先容】センヨウ　先づ之が容を爲す、前以て其の人をとりもつ。鄴陽、獄中上書「蟠木根柢、輪囷離奇、而爲二萬乘器一者、何則以三左右先爲二之容一也」前以て彫刻して形容をつくる義。蘇軾、上二梅直講一書「非三左右爲二之——一、非二親黨爲二之請屬一」
【先例】センレイ　以前からのしきたり、これまでありしためし。梁書、袁昂傳「非二有二——一」‖前例。
【先靈】センレイ　先祖の靈魂。後漢書、光武紀「——無レ所二依歸一」
【先烈】センレツ　前代よりの餘光。書經「惇二克紹二——一」
【先王】センオウ　古の善き天子。論、季氏「晉者——以爲二東蒙主一」
【先拂】センパラい　圖郵稅又は運送料金を先方の受取人より仕拂ふ規定。
【先即制人】センソクセイジン　先だちて事を擧ぐるときは、能く人を制し得べし。史、項羽紀「會稽守殷通謂二項梁一曰、江西皆反、此亦天亡レ秦之時也、

言聞——、後則爲ン人所ン制」【先獲二我心一】アラカジメワガココロヲエタリ　我より先に我心に欲する通りの事をなせるを喜ぶ。詩、邶風、綠衣「綠兮綠兮、裏ン其以風、我思二古人一實獲二我心一」

【充】

充(儿部五畫)の俗字。

【兆】

テウ　篠

○うら、うらなひ、龜の甲を灼き、われめによりてうらなふ占。周禮、春官、大卜「掌三三之法一」○うらかた。漢書、文帝紀「一得二大橫一」○きざし、しるし。○きざす、はじまる。○億の十倍。○おほし(衆多)○わかつ(分)○はかばのさかひ(墓界)占ひて定むる故。孝經、喪親「卜二其宅一而安二厝之一」○まつりのには(壇域)○京一は京師をいふ。詔會「一者衆數、言二大衆所一在也」

【兆域】テウイキ　はかば。周禮、春官、冢人「掌二公墓之地一、辨二其一一一」‖塋域。

【兆億】テウオク　衆くの民(堯武帝、訊獄詔)‖兆民・億兆。

【兆候】テウコウ　きざし、まへぶれ。

【兆占】テウセン　うらかた。漢書、王莽傳「陳知二成敗一、感應二一一」

【兆朕】テウチン　物のきざし。淮南、俶眞「欲二與ン物接一而未ン成二一一」‖徴朕

【兆物】テウブツ　おほくのもの。禮記、樂記「乾坤之一一萬品資而陸ン形」‖萬物。

【兆民】テウミン　おほくのたみ。書、呂刑「一人有ン慶、一一賴ン之」‖億兆・衆庶。

【克】

コク　職　剋に通ず

○たふ(任)あたふ(能)○よく、よくす(能)○う(獲)○しのぐ。○かつ(勝)○かちき(勝心)○心を抑制する。○揩一は稅を多く取る。‖誅求。

【克己】コッキ　克・勝・揩等は勝(力部十畫)の條を見よ。

○コク・能・善・享・好○克はかつと訓む、成し難きところをしおほせる義、能也と註すれども、能よりは重し。「克己」書經「克明二峻德一」○能はもと獸の名、熊に似て、強堅なるもの、故に、強壯にして事に勝ふるをいふ、故に能は得に通ず。中庸に「語ン大天下莫二能載一」とあるは、載することを得ることなしに同じ。○善は良也、吉也と註す、十分至極せる義「善事二於父母一爲ン孝」の類、能ン養といへば、其人の力にて養に堪能なるをいひ、善ン養といへば、外より見てその養のみごとなるをいふ、善は一に多の義に用ふ、善笑・善收の如し。○喜はこのみて之を調む、うれしがる義。史、東方朔傳「喜爲二庸人一誦說」の類。○好は思ひてみてよしとする義。左傳「好以ン衆整」

【克孝】コクカウ　よく親に事へる。書經「格慎一一、重二蒸紳人一」

【克己】コッキ　おのれの慾にうちかつ。論、顏淵「一一復ン禮爲ン仁」

【克儉】コクケン　よく儉約する。書經「克勤二于邦一一一二于家一」

【克似】コクジ　よくにる。‖克肖。

【克讓】コクジャウ　(りくだりてゆづる。禮、學典「允懷一一」

【克肖】コクショウ　よくにる。韓愈文「一一二其德一」

【克紹】コクセウ　よくうけつぐ。書經「惇三一二先烈一」

【克捷】コクセフ　敵にうちかつ。晉書「所在一一」

【克忠】コクチュウ　よく君に事へる。書經「爲ン下一一」

【克伐怨欲】コクバツエンヨク　四つの惡德、克は勝つことを好み、伐は自らほこる、怨は恨む、欲は貪る。論、憲問「一一不ン行焉、可二以爲一仁矣」

【克敏】コクビン　よくさとし。詩經「曾孫不ン怒、農夫一一」

【克復】コクフク　もとのやうに取りかへす。南史「投ン鉄一起、則悉能一一」‖剋復。

【免】

㊀メン　㊁ブン・モン　阮

㊀まぬかる、のがる(脫)○ぬぐ。韓愈、毛穎傳「因一冠謝」○さける(避)韓愈、送石處士序「論二與出遊一未ン嘗以事一一」さらに(去)○やめる(止)○ゆるす(赦)罪を宥す、束縛を解く。○除く、納稅の義務を除く。北齊書、文宣帝紀「遣二蠲之處一租」○しりぞく(黜)淡の時、其の官を黜け去らしむる義。○はなつ(縱)㊁子をうむ、娩に通

【兎】

兔(大畫)の俗字。

【兒】

㊀タイ　㊁エツ　月　泰　通ン夕

㊀易の卦の名。○よろこぶ(悅)○あな(穴)老子「塞二其一一、閉二其門一」○とほる(通)○なほし(直)○かふ(贖易)丁芝仙詩、十千一得餘杭酒」○さは(澤)○あつまる(隨ン衆)荀、議兵「仁人之兵一則若二莫邪之利鋒一」㊁よろこぶ、說に通ず。

【兌換】ダカン　ひきかへる、正金と紙幣とのひきかへ、兩換。之を行ふ銀行を一一銀行、其の手形を一一券、又、一一紙幣といふ。‖那換。

す。○喪の禮にて冠を去り髮を括る。○あざやか（鮮）

解字　免の字の點を去りたるに同じ。免に从ひて其の足を缺する會意文字、俗に免に作るは非。

同訓異義　免・赦・釋・宥・允・許等の別は赦（赤部四畫）の條を見よ。

【免役】メンエキ　○服役の義務をゆるす。○兵に出ることをゆるす。

【免疫】メンエキ　傳染病にかかることをのがれる。藥液注射其の他の方法によりて、病の感染をのがるる性となることを一一性といひ、其の獲得を一一質といふ。

【免許】メンキョ　圖ゆるす、ゆるし。＝允許。

【免許狀】メンキョジョウ　或事を行ふ自由を與ふる證として官府・學校、又は師家より附與する證書。＝免狀。

【免官】メンカン　官職をゆるさる。事物紀原「梁祖爲二太僕一、作二私書一、請二託郡縣一、發覺一レ一」＝免職。

【免罪】メンザイ　つみをゆるす。

【免喪】メンソウ　すでに父母の喪を除くをいふ（禮記）

【免囚】メンシュウ　懲役の年限を終へて出獄せし者、出獄人。

【免赦】メンシャ　罪をゆるす。後漢書「一ニ一參刑一」＝赦免・宥免。

【免狀】メンジョウ　免許狀に同じ。

【免職】メンショク　官職を免ずる（南史、何敬容傳）＝免官。

【免租】メンソ　免租に同じ。

【免席】メンセキ　其の座を立つ。家語「舟有一一」＝離席。

【免租】メンソ　租稅を免除す。北齊書、文宣帝紀「遣レ使一之處一レ一」＝免稅。

【免租地】メンソチ　地租を課せられざる地。公立學校敷地、鄉村社地墳墓地、堤塘、井溝、鐵道用地等の類。

【免訴】メンソ　檢事の起訴せし公訴被告人を、證據不十分等にて放免する處分。

【免說】メンゼイ　つみをのがれる。漢書「盜賊不二輒伏一辜、一一者衆」

【免冑】メンチュウ　かぶとをぬぐ。國語「一レ一而聽レ令」＝免冠。

【免黜】メンチュツ　役をやめしりぞける。後漢書、梁冀傳「故吏賓客、一一者三百餘人」

【免除】メンジョ　義務をゆるしのぞく。

【免身】メンシン　子を生む。史、趙世家「夫婦一一生レ男」＝娩身・分娩ブンベン

六畫

【兒】㊀ジ・ニ　㊁ゲイ　唐支

俗にルの音に充てて用ふ

㊀こ、ちご、みどりご（孩子）わらは（童）○をさなし、いとけなし（幼少）よわし（弱）○物の名の下に添へる助字。郝經詩「橘奴又梨一」㊁こども、倪に通ず。○姓、漢に一寬あり。

解字　孩子なり、儿に从ふ、小兒の頭囟未だ合はざるに象どる、俗に兒に作るは非。

【敎二兒嬰孩一】キョウニエイガイ　小兒の敎育は惡習に染まざる幼時に於てすべきをいふ。顏氏家訓、敎子「孔子云、少成若二天性一、習慣如二自然一是也、俗諺曰、敎二嬰孩一、敎二嫡初來一、——、誠哉斯語」

【兒戲】ジギ　こどものたはむれ。取るに足らざる喩。史、絳侯世家「吾者卻上棘門軍、若一一耳」

【兒科】ジカ　小兒科の略。

【兒輩】ジハイ　兒曹に同じ。

【兒孫】ジソン　こと、まごと。王勃文「孫一一於襁褓一」＝子孫。

【兒孫自有二兒孫計一】ジソンジユウアリジソンノケイアリ　子孫には自ら子孫の計あるべければ、徒に子孫の爲めに遠き憂慮を爲すに及ばず。宋詩紀事「汲汲光陰似二水流一、隨時得レ過便須レ休、——、莫下與二兒孫一作中馬牛上」

【兒女】ジジョ　こども、又、男の子と女の子と。韓愈詩「無レ爲一一態一」一態とは情にひかさるる所あるきま。

【兒女之債】ジジョノサイ　こどもの敎養婚姻の諸費をいふ、免る能はざる負債の義。晉書「顧和公早墜二一一」」

【兒啼】ジテイ　○小兒がなく。援鶉堂筆記「俗呼二一一一」○小兒の啼く如くに啼く。史記「子產治レ鄭二十六年而死、丁壯號哭、老人一一」

【兒童】ジドウ　こども。蘇軾詩「一一誦二君實一」君實は宋の司馬光の字。

【兒輩】ジハイ　こどもたち。駁復古詩「一一欲レ知二當日事一」＝小兒輩・兒曹。

【兒郎】ジロウ　○圖むすこ、息子。○夫をいふ。＝兒夫。

【兒寬】ジカン　漢の千乘の人、倘書を治む、家貧くして貰作し、經を帶びて鬻く、漢の武帝の時、對策して掌故となり左內史に遷る、史民之を信愛す、世務に通じ、文法に明習す、經術を以て吏事を緣飾す、後ち御史大夫となる。

【兒齒】ジシ　老人の齒落ちて更に生ずる者、長壽の徵とす。詩、魯頌「黃髮一一」

【兜】

トウ　尤

獸の名、野牛に似て色青く、重さ千斤、一角あり。長さ三尺餘、性よく抵觸するを以て其の角にて盃杯を爲りて酒戒と爲す、皮は堅厚にして甲に製す。

【兜甲】トウコウ　兜の皮にて造れるよろひ。周禮、冬官、考工記「一一六屬」

【兜鍪】トウム　兜の角にて製れる觥にて、古、罰杯に用ふ、又廣くさかづきの義とす。詩、周頌、魯頌「我姑酌二彼一一一」＝角觥。

【虎ノ兜ノ虎】コノトウノトラ　賢者が災厄に遇

ひて、其の不幸を嘆ずるにいふ。孔子世家「孔子於レ野不レ得レ行、絕レ糧、從者病莫二能興一、孔子講誦弦歌不レ衰(中略)孔子知二弟子有一レ慍心一、乃召二子路一而問曰、詩云、——、匪二兕匪虎一、率二彼曠野一、吾道非レ邪、吾何爲於レ此、云云」詩は詩經、小雅、何草不黃篇。

【兎】ト　通

うさぎ、山野に穴居する獸の一、長二尺許、色黑褐又白色、耳長く、前肢短く、善く走る、目は赤く、上脣缺く、毛は筆を製するに用ふ。曲禮「一曰明視」韻會「陸佃云、一吐也、明月之精、視レ月而生、故曰二明視一」

附錄 兎字に从ひ、一點を加ふ、俗に從に作る、兎は俗字。

【兎園册】トエンサツ 卑近なる書物、通俗の書物、轉じて自著の謙稱。五代史、劉岳傳「——者、鄉校俚儒敎二田夫牧子一之所レ誦也」

【得レ兎忘レ蹄】トヲエテワスルヽテイ 兎を得て仕舞へば最早蹄卽ち兎を捕ふるわなは不用となる、學問が成就すれば書物は不用になる喩。筌蹄を見よ(莊、外物)

【兎毫】トガウ ふで。羅隱詩「幽窗染二一一一」

【兎角龜毛】トカクキマウ うさぎに角を生じ、龜に毛を生ず。世に無きことの喩。楞嚴經「無則同二於龜毛兎角一」

【兎起鶻落】トコツクヮクラク 兎が方に起ちて、はやぶさが已に落つ、書家の語、筆勢の健快なるに喩ふ。歐經詩「兎起復鶻落、雲行溪水流」

【兎缺】トケツ 三つ口。晉書、魏詠之傳「生而一一」兎の上脣は缺く、故にいふ。=兎脣。

【兎絲】トシ ねなしかづら、蓉、絲に似たる芽を生じて他の草木に寄生し、晩夏、小白花を著く。淮南子「千年之松、下有二茯苓一、上有二一一一」

【兎絲附二女蘿一】トシフジョラ ねなしかづらがつたにからみつく、夫婦の契にいふ。古詩「與レ君爲二新婚一、——」

【兎脣】トシン 三つ口、缺脣。=兎缺。

【兎豆】トヅ うさぎあみ。詩、周南「肅肅一一、椓レ之丁丁、赳赳武夫、公侯干城」

【兎走烏飛】トソウウヒ 兎は月、烏は日、日月の速かに過ぐるをいふ。莊南傑、傷歎行「——不二相見一、人生依稀逐レ電」

兌　七畫　銳　エン

○まこと(信)○古の九州の一、今の山東省の西北と、直隸省の西南との地。禹貢「濟河惟一一州」

党　八畫　養　タウ　俗に黨の略字として用ふ

人の姓、一耐虎は姚秦の將。○一懷英は金人、字は世傑、能く文を屬す、篆籀は當時第一と稱せらる。

兜　九畫　尤　トウ

○かぶと(冑・首鎧)○まどふ(惑)音語「在レ列者獻レ詩、使レ毋一一」○後よりして之を曳む「一一拿」「一一捕」○一子は輿の屬、今は山轎の稱とす。○梵語のトの音に宛て用ふ。

【兜鍪】トウムかぶと(盔)古は革を用ひ、後世は鐵を用ひて作る。說文「一一首鎧也」=兜牟。

【兜率】トソツ 欲界六天の第四天、地上三十二萬由旬の上にありて、彌勒菩薩ミロクボサツの之に居る。大藏法數「梵語一一、華言二知足一、謂下其於二五欲境一知二止足一故此王依レ空而居」

【兜率天】トソツテン 前條に同じ。

兢　十畫　蒸　シン

○すすむ(進)○一一は衆多の貌。

兢　十二畫　蒸　キヨウ　唐

○つつしむ(戒愼)いましむ(戒)おそる(懼)矜に通ず。○一一は自ら安んぜざる貌、又、ふるふ、わななく(戰慄)又、かたくつよし(堅強)

【兢戒】キヨウカイおそれいましむ。溫庭筠文「君子之所二一一一」

【兢悸】キヨウキふるひおそる。宋書、文帝紀「願レ已一一何以克堪」=戰悸。

【兢兢】キヨウキヨウ ○戒め懼るる貌。詩、小旻「戰戰一一如レ臨二深淵一、如レ履二薄氷一」○戒めつつしみて自ら安んぜざる貌。賈泉與諸「一一業業、一日二日萬機」○堅彊なる貌。詩、小雅「矜矜一一、不レ騫不レ崩」

【兢惶】キヨウクワウつつしみおそる。柳宗元文「懇遏途深、一一無レ措」

入部

【入】ジフ　ニフ　寘

○いる(内)出の反對、外よりして内に至る。○すすむ(進)○うく(受)○ひたす、つける(浸漬)周禮、鍾氏「七一傷繒」○つらぬく(貫)○とりあげ

る、めしとる。史、侯幸傳「盡沒ー鄧通家」○をさむ、をさめる(納)○おつ、おとす(墜)○かへる、かへす(還)きたる、きたす(來)○租稅、收得物。禮、王制「量ー以爲出」○四聲の一「ー聲」其の聲短促にして急なるもの。○圖いる、要する。○いり。器の容量、興行ものの客の數。

同音字彙 入・納・內・容○入は出の反なり、いるなり、いるるにあらず、入相イッシャウとは州郡の官より、朝廷に入りて宰相になること。論語「危邦不ー入、亂邦不ー居」○納は容納・納受などと連用し、受けいるるを主としていふ、入は入るる物を主としていふ。書經「數納以ー言」左傳「山澤納ー汙」○內は音ダフ納に同じ。孟子「非ー所ー以內ー交於孺子之父母ー也」○容は盛也、受也、包函也と註す、容受は器中にうけ入るるなり、容ー民・容ー衆等は、德量大にして、衆民を包み容るるなり。

【入校】ニフカウ 入學に同じ。

【入閣】ニフカク 內閣に入りて大臣となる。

【入學】ニフガク 初めて學校に入る。周禮「春ーノー舍菜合舞」

【入金】ニフキン 圖金錢を拂ひ入る。‖入銀。

【入覲】ニフキン 參內して天子にまみゆ。諸侯に其介圭ーニー于王ー」

【入聞】ニフブン 圖天子が內に入りたまふ。出御の對。

【入花】ニフクワ 圖佛前の語、宗匠點者等にさし出す添削料、いればな、古、進物に花の枝を折り添へたるが故。

【入貢】ニフコウ みつぎものをもつて入り來る。周禮「令ー諸侯春ーー」

【入寇】ニフコウ 外國より攻め來る。

【入國】ニフコク 入府に同じ。

【入札】ニフサツ 圖いれふだ、せり、物件を賣買するに各自評定の價格を札に書きて投票せしめ、其の最低價の者より買ひ、或は其の最高價の者に賣る方法。‖投票。

【入室】ニフシツ 學問藝術などの奧義をきはむる義。論、先進「子曰、由也升ーノー堂矣、未ーニ入於室ー也」

【入津】ニフシン ふねが港に入る。‖入口・入港。

【入神】ニフシン 藝術などの巧妙の域に入る義。易經「精義ーー」

【入相】ニフシャウ ○內閣に入りて宰相となる。○圖日ぐれがた「ーーの鐘」‖薄暮・日沒。

【入聲】ニフシャウ 漢字の四聲の一、屋・沃・覺・質・物・月・曷・黠・層・藥・陌・錫・職・緝・合・葉・洽の十七韻に分つ、音尾にフ・ツ・ク・チ・キの聲ある仄字。

【入手】ニフシュ 圖手に入れる、うけとる、‖落手・受領・領收。

【入塾】ニフジュク 塾舍に入りて寄宿する。

【入唐記】ニフタウキ 六卷、宋の陸游著す、孝宗の乾道六年閏五月十八日山陰を發し、沿道勝を探り、古を弔し、十月二十七日夔州に至るの紀行なり、行文頗る、考據精確、遊記の上乘とす、范成大の吳船錄と竝稱せらる。

【入籍】ニフセキ 甲國の人民、乙國に歸化して其の國籍に編入せらるる義、又、出生或は嫁娶等にて其の家の戶籍に入れる義。

【入選】ニフセン 選に入る、えらばれる。‖當選、また出品などの審査シンに合格する。

【入浴】ニフヨク 圖ゆに入る。‖入浴の又特に溫泉にゆあみするにいふ。

【入道】ニフダウ ○圖佛道に入りたる人(唐律疏議)○圖佛道に入りたる三位以上の人の稱、又廣く僧の義とす。

【入定】ニフヂャウ 圖禪定に入る、定は梵語、禪那の譯、靜慮の義、轉じて死滅の義とす。智度論「ーー火水不ー能ー害亦不ニ命終ー」

【入場券】ニフヂャウケン 展覽會・演藝場などに入り得る證となる切符ッ木戶札フダ

【入朝】ニフテウ 外國の使臣などの來りて參內する義。史、南越尉陀傳「漢兵臨ー境、嬰齊ーー」

【入梅】ニフバイ つゆのいり。梅雨季に入る日、芒種後の壬日にて陽曆六月十日頃。

【入幕之賓】ニフバクノヒン 特に親しき客をいふ。書言故事「晉郗超爲ニ桓溫參軍ー、謝安王坦之謁ー溫、溫令ー超臥ニ帳中ー聽ー其言ー以風動帳開、安笑曰、郗生可ー謂ニ——一夫ー」もと世說、雅量篇に出づ。

【入神】ニフシン 意子の初めて入學するをいふ、古、學舍を泮宮といふが故。泮宮參看。

【入費】ニフヒ 圖つひえ、いりめ、費用・入用。

【入夫】ニフフ 圖いりむこ。‖贅壻。

【入府】ニフフ 圖諸侯が己の領地に赴任すること。‖入國・入部・就封。

【入滅】ニフメツ 圖死す。‖入寂。

【入門】ニフモン ○師の門に入る、弟子入りする。○初めて學ぶ者の便に供する書物、てびき。‖初步。

【入用】ニフヨウ ○いりよう。北魏書、樂志「因ニ天然之有ー、爲ニ一之物ー」‖所用・需用。○圖つひえ、いりめ。

【入浴】ニフヨク ゆあみする。入湯。山海經「西海有ニ黃池ー、婦人ーー、出則懷妊矣ー」

【入來】ニフライ 圖きたるの敬語。

【入牢】ニフラウ 圖らうに入る。‖入獄。

【入洛】ニフラク みやこに入る、みやこにいり。洛は洛陽、支那の古の都府。北魏書、叱列延慶傳「後隨ニ風朱榮ー」ーノーし‖入京・上洛。

【入水】ニュスイ みなげ、身を水中に投じて死する。‖投身。

【入内】ジュダイ 國内裏に入る。皇后・中宮などに定まりし婦人が、皇居に引き移るにいふ。

【入魂】ジュコン 國互に氣を知り合ひて仲が善い、懇意。‖親密・懇親。

【入木】ニュボク 晉の王羲之の書は、木に墨のしみ入ること三分なりしといふ故事によりて、書道の義とす。―道。書斷「王羲之、晉帝時、祭二北郊一夏二祝版一、工人削之、筆ノ入ル三分一」

一畫

【乂】

亡（工部一畫）の本字。

二畫

【内】

㊀ダイ・ナイ 國
㊁ゼイ 音
㊂ダフ・ノフ 合

㊀うち（裏・中）區域のうち、又、或時期のあひだ。外の反對。○ま、へや（房）齋書、晉錯傳「先爲築二室家一、有二一堂二一」ねや（寢室）○ごてん（宮禁）禁曰「―」‖大内。○我が國。漢書、賈捐之傳「貪」外虛「―」、務欲廣地不慮其害」○こころ（心意）易、坤卦「君子敬以直「―」、義以方」外」○味方（かた）韓非、内儲說「明主絕二之於一而施二之於外一」○うちわ、ひそか。史、匈奴傳「惠后與二狄后子冒一爲一應一」○つま（妻）○嬪妾、女色、いろごと。魯語「好「―」、女死之、好ノ外、士死之」外とは賢人。㊁ほぞ。‖枘。○水の入りあふ所。‖汭。㊂いる、とりいれる。論、堯曰「出一之吝、謂二之有司一」‖納。

【内裏】ダイ 天子の宮殿。前漢書、李尋傳「大家但―坐、外事聽二老奴處置一」‖禁中・禁闕・宮庭。

【内意】ナイ こころのうち、意中、内心。梁武帝、淨業賦「樂二―一而自騁」

【内憂】ナイ ○國内の憂。外患の對。次條參看。○中心の憂「漢書、張安世傳」○母の喪。‖内艱。

【内憂外患】ダイイウグワイカン 國内に生ずる憂と、外國より攻め寇る患と。左、成十六「唯聖人能外内無ノ患、自ノ非二聖人一、外寧必有二内憂一、盡二精ノ慧以爲二外懼一乎」

【内薀】ナイ 内にたくはへ（蓄）む。北史、齊帝紀論「外禦二文敎一、―二雄圖一」白居易賦「識心―、壯容外奮」

【内記】ナイ 其の妻などにとり入りて内内に面會して謁ふ。漢書、翟義傳「―一徑入」

【内苑】ナイ 宮中の御苑。晉書、呂光載記「講二墓臣於―一新堂一」

【内緣】ナイエン 國おもてむきならざるえにし、入婿の手續をせざる婚姻。

【内應】ナイオウ ひそかに敵に通ずる、うらぎりする。史、鄭生傳「足下解ノ兵攻ノ之、臣爲二―一」‖内通。

【内外】ナイ 心、心のうち。外界の對。

【内行】ナイギヤウ 平生家にをる時のおこなひ。閨門内の操行。史、五帝紀「嫘居二於内一、―一淑愼」

【内閣】ナイカク 中央政府の最高機關、天皇に直隷し、萬機を翼贊し、大政を會議する所。

【内學】ナイガク ○もと纖緯の學をいふ。後漢書、方術傳「自ノ是習爲二―一、與二奇文一、貴二異數一」○佛學をいふ。嚴維詩「―一似二支郎一」

【内閨】ナイケイ ○奥向き、妻女のへや。北史、魏那部傳「那與ノ綜甚疏、自云、妻入二―一爲ノ狗所ノ吠」劉長卿詩「―一金屏曙色開」

【内監】ナイカン ○唐代、宮中に内侍監を置く、宦官を以て其の官に任ず、より宦官の異稱とす。○清代、監獄に―あり、强盜の如き重罪犯人を入る。

【内輪】ナイリン ○宋の代、翰林學士（文筆を掌り、參議諫諍するを得る職）の稱。宋史、王旦傳「―得ノ官幾日」‖内相。○清の代、内閣中書の稱。

【内艱】ナイカン 母の喪をいふ。父の喪を外艱といふの對。五代史、李琪傳「丁二―一、貧無二以葬一」

【内記】ナイキ 國古、中務省に屬せし官、大小に分ち、詔敕宣命の起草を掌る。

【内規】ナイキ 國うちうちのさだめ、公にせざる規則。

【内集】ナイシフ 舊故あるものを採用する。史、晉世家「外舉不ノ避ノ仇、―不ノ隱ノ子」杜牧詩「―一無ノ慚古所ノ難」

【内侍】ナイジ 女御（中宮に次ぐ女官）の別名。儀禮、既夕「其母之喪、則―一者浴」

【内宮】ナイグウ 國伊勢神宮の天照大神宮。豐受大神宮を外宮といふの對。

【内君】ナイクン 人の妻を呼ぶ敬稱。‖内政・令閫

【内調】ナイテウ ○諸道のをしへ。後漢書、班昭傳「作二女誡七篇一、有ノ助二―一」○國官省の長官より部下に通するないないの調令。‖内達。

【内科】ナイクワ 内臟の病を治療する醫術。外科の對。

【内外】ダイゲ うちと、そととも。史、禮法解「―一實服曰ノ正」

【内懇】ナイコン 心の中が敬慕なる次の栄史、度宗紀「資識―一、七歲始百、書必合ノ度」

【内兄弟】ナイケイテイ 母方のいとこ。通俗、梁紀「母葬以二兄弟一節、謂二之―一」

【内郡】ナイグン 國内又家内のうちわもめ、郡は國。史、項羽紀「多二―一」‖内

訌・内亂。
【内見】ナイケン ないないにて見る。‖内覲。又、したみする。
【内庫】ナイコ 宮中の御物を入るるくら。唐書、藝文志「繕寫藏二於ー一」
【内顧】ナイコ ○生計上のことに心をめぐらす。左思詩「外望無寸祿、ー一無二斗儲一」○首をめぐらして親る。論、經業「車中不ー一」○妻子をおもふ。漢書、楊僕傳「失レ期ー一」
【内攻】ナイコウ 病氣が外へ發せずして内部にこもる「熱のー一」
【内訌】ナイコウ うちわもめ。詩、大雅「天降二罪罟一、蟊賊ー一」‖内部。
【内奘】ナイサウ 宮中の集まりたる室。漢御殿「詩經、邶風、毛傳」‖中奘。
【内國】ナイコク ○國のうち、内地。○我が國。外國の對。‖本邦。
【内済】ナイサイ 國 もてむきにせずしてすませる、示談ジにて事濟となる。
【内遠】ナイエン ○心の中にたくはふ。淮南子「聖人ー一、不レ爲二物先唱一」○宮中にある官廳。公羊、僖二「貢出二之ー一、藏二之外府一」‖内庫。○はらわた、ざうふ。‖内臓。
【内閣】ナイカク はらわた、ざうふ。柳宗元詩「協和理ニーー一」‖内藏。
【内子】ナイシ おくがた、卿大夫の本妻。左、僖、二四「以二叔隗一爲ニーー一」
【内史】ナイシ ○國家の典法を司る官〔書、酒誥〕○京師を治める官職。漢書、竇嬰傳「錯爲ニーー一、數請レ間言レ事」○書記官。史、儒林傳「陽陵經生至二長沙ー一」
【内旨】ナイシ 内内の沙汰ダ 唐書「始伏御、拜二御史一時、先被ニーー一、而制未レ出、歸臥二子家一、無二喜色一、頃之、御史造レ門、子弟驚白、伏御發起、見レ之、時人稱二其有一量」
【内侍】ナイジ 國 ○ーー司に屬する女官、御侍・典侍・掌侍の三等に分つ。○特に掌侍をいふ。
【内侍所】ナイジドコロ 國 ○禁中の殿の名、三種神器の一たる八咫鏡ヤタノカガミを奉安する所。‖温明殿・賢所カシコドコロ ○八咫鏡の稱。
【内室】ナイシツ つま（妻）
【内貨】ナイシ ○家の珍寶及妻妾をいふ。左、襄二八「以二其ー一、遷二于盧蒲嫳氏一」○國 ありのままの事實。
【内集】ナイシフ うちわのあつまり、親類のまとゐ。小名錄「謝安宴ニーー一、兒女論二文義一」
【内心】ナイシン こころのうち。淨印法門經「ーー清淨、戒行潔白」外貌の對。
【内親】ナイシン ○妻の親類。‖内戚。○朝廷内にて親しむ。呂覽「ーー二羣臣一、下二百姓一、以求二其心一」○心の内にて親しむ。
【内親王】ナイシンワウ 國 ○古、親王の宣下のありし皇女、うちのみこ。○現制にては皇子以下皇玄孫に至るまでの姫君の稱。
【内相】ナイシャウ ○翰林學士の異稱。唐書、陸贄傳「贄入二翰林一、年尚少、以レ材幸（中略）常居レ中參二謀ニ可否一、時號ニーー一」○國 内務大臣の異稱。
【内情】ナイジャウ 内内の情實、うちわの事情。
【内障眼】ナイシャウガン 眼病の名、そこひ。
【内豎】ナイジュ おくむきに仕ふる給まの小臣。禮、文王世子「至二寢門之外一、問ニーー之御者一」
【内潤外朗】ナイジュンガイラウ 玉の光澤の内に含まれたるを内潤、外に發するを外朗といふ。世説、品藻「或問二汝兩許孰愈一、曰、二荀皆玉也、慈明外朗、叔慈内潤」
【内助】ナイジョ 妻の夫を助くる義。（魏志、郭后傳「在昔帝王之治二天下一、不二惟外輔一、亦有ニーー一」
【内稱】ナイショウ みうちの者を官に推薦する。禮、儒行「ーー不レ辟レ親、外舉不レ辟レ怨」‖内舉。
【内證】ナイショウ 國 ないない、ないしよ。内密。ひそかに「ーー話」
【内職】ナイショク ○宮中のおくむきの女の務。（禮、内則「天子聽二外治一、后聽ニーー一」○朝廷の官職。地方官に對して。○國 本職の餘暇にする賃仕事。
【内省】ナイセイ 内心に自ら省察する。次條を見よ。
【内省不レ疚】ナイセイフキュウ わが心にかへりみて、恥づる所なし。論、顔淵「ーー夫何憂何懼」
【内制】ナイセイ 翰林學士の官をいふ。朝野類要、翰林學士官階之ーー、掌二王言・大制誥・詔令・敎文之類一、中書舍人謂二之外制一、亦掌二王言一凡誥詞之類」
【内政】ナイセイ ○後宮のまつりごと。周禮、天官、女史「掌二王后之禮一、以詔レ后治ニーー一」○國 内の政治。‖内治。○人の妻の敬稱。
【内清外濁】ナイセイガイダク 内心は清く澄めどもうはべは濁る、亂世に處して身を全うするの道。太玄經「ーー敏衣裏レ玉」
【内戚】ナイセキ ○宮仕せる婦人の親近者。後漢書、趙典傳「帝延二入ーー一、與會歡甚」○父方の親類。母方を外戚といふの對。
【内膳司】ナイゼンシ 國 古、宮内省中にありて御食事供御のことを掌りし役所。
【内則】ナイソク 家の内にて定めたるおきて、閨門内の儀則、男女室に居りて父母舅姑に事ふるの法。家憲。禮記に一ー篇あり。
【内屬】ナイゾク 外國の降り來りて屬國となる義。史、律書「南越朝鮮、自二襲時一ーー、爲二臣子一、後且擁レ兵觀望」
【内疎外親】ナイソガイシン 心中には疎んじて表面には親む。韓詩外傳「無二内疎而外親一」
【内帑】ナイド ○尚書省の異稱「唐書、王思遠傳」○御史臺の異稱「元史」
【内大臣】ナイダイジン 國 太政大臣の古稱。又

現官制にては御璽ぎょじ・國璽を保管する親任官。
【内帑】ナイド 天子の金ぐら。宋史、高宗紀「出二一一綿絹一賜二宗室一」
【内道場】ナイダウジャウ 國古、禁中にて佛道佛事を修せられし所。
【内談】ナイダン 國ないないのはなし、密談。
【内地】ナイチ ○本國、本州。○國内の土地。國の中央部の國域に遠き地。
【内地雑居】ナイチザッキョ 國外國人の我が國に居住する者は、内地の何れの所にても居住するを得、又内地人と同一の法律に服従する義務あることを規定せし制度。
【内治】ナイチ ○國内の政治。外交の對。○家の内のつとめ、婦人の職(對、皆義)＝内政。
【内陣】ナイヂン 國社寺にて神體又木像を安置する所。＝本殿・本堂。
【内寵】ナイチョウ ○天子の愛顧を受ける氣に入りの女、おもひもの。＝内嬖。○君主のおぼえめでたき者、お氣にいり。史、伝幸傳「一一嬖臣大底外戚之家」＝恩幸。
【内通】ナイツウ ＝内應に同じ。
【内朝】ナイテウ 周代、内朝・治朝・外朝を三朝といふ、治朝は天子毎日事を視る所、内朝は、燕朝又は路寢ともいひ天子退居の所、外朝は國家非常の事ある時に、萬民を聚めて諮詢する所(禮、玉藻、疏)
【内典】ナイテン 國佛教の書物。儒書を外典といふの對。北史、蕭詧傳「一一華嚴般若法華金光明義疏三十六卷」
【内殿】ナイデン 裏向のごてん。後漢書、靈帝紀「南宮一一采寤自壞」
【内帑】ナイド 地方官より中央政府の官職にうつる。晉書、李密傳「密有二才能一、常望二一一一、而朝廷無レ援」
【内徳】ナイトク ○中心の徳。詩經、疏「徒善二其外飾一、使二容儀可レ觀、而一一不レ稱」○皇妃の徳。陳書、皇后傳序「非二獨外相佐一也、蓋亦有二一一一助一焉」
【内坊】ナイバウ 太子のきさきの宮。唐書、百官志「太子一一、局令二人、從五位下」
【内房】ナイバウ 婦人の住む部屋。＝閨房ケイバウ
【内病】ナイビャウ 體内のやまひ。史、吳王濞傳「吳王身有二一一一」
【内府】ナイフ ○貢賦の貨物兵器等を藏する宮中の庫(周禮、天官)○國内大臣の稱、小松一一」
【内附】ナイフ なつき來る、服從し來る。後漢書、光武紀「西河一一」
【内服】ナイフク 國藥を飲む。＝内用。
【内福】ナイフク ○人に知られざる幸福。列、力命「不レ賊二外禍一不レ享二一一一」○國世人に知られざる富。
【内分】ナイブン 國おほやけにせず、内密。
【内嬪】ナイヒン 宮中にて君主の寵愛を受くる婦人、おもひもの、お氣にいり。左、僖十七「一一如二夫人一者六人」
【内辦】ナイベン 國御即位及元日以下の諸節會に主として事を執る職の稱。
【内密】ナイミツ 國ないしよ、うちわに謀める。
【内務省】ナイムシャウ 國國内の諸行政を取扱ふ中央官廳。其の長官を内務大臣といふ。
【内命】ナイメイ 朝廷を經ざる人君のないないの命令。輪林志「俾三專掌二一一一」
【内命婦】ナイメイフ 宮中に奉仕する三夫人以下の官女の稱。周禮「閽人掌レ守二王宮之中門之禁一、凡外内命夫命婦出入、則爲レ之關」命夫命婦とは夫の妻を外命婦といふの對。
【内面】ナイメン うちがは。外面の對。
【内約】ナイヤク 國うちうちの約束、うちわのとりきめ。
【内用】ナイヨウ ○國うちうちのようじ。○藥を飲む。＝内服。
【内欲】ナイヨク 忍み求むる心の欲。禮、康誥「誕二敷文王之德一、毋二於小大一、勿二以一一一」
【内裏】ナイリ 國内のみだれ。疏、雜記「一一不レ興焉、外患非レ辟也」
【内覽】ナイラン 内見に同じ。
【内氣】ナイキ 國ふんりよ深し。＝小心。
【内金】ナイキン 總金高の内の若干金「一一を渡す」
【内訳】ナイワケ 國金額の支出又は收入のこわけ。總計に對する明細書。
【内藏寮】ナイザウレウ 國宮内省中にありて皇室の御物を保管する役所。
【内匠寮】ナイシャウレウ 國宮中の營繕の事を掌る役所。古、中務省に屬し、今は宮内省に屬す。

【尓】 二 畫

爾(文部十貳)に同じ俗に尓に作る。

【全】 四 畫 先 セン

○まったし(完)缺けず、傷つかず。○難りなし。○まったうす。○そなふ(具)そなはる(備)十分にそろふ。霊筧七籤「君臣俱具、父子固一」○まったく、すべくくる(統括)「一國」「一省」王維詩「草色一經細雨」濕」○たもつ、生命を失はず。
同訓異字 全・完○全は具なり、完は足ンタの意、物の一部始終そろひたるなり、大全・全集の類。○完は物のかけめなきなり、完固・完璧と連用す、全は殘るところなきなり、完はかけたるところなきなり。
【全文】ゼンブン 文章を全うする。禮記「君子不レ奪二人之歡一、不レ傷二人之患一、以一一レ一也」

【全甲】ゼンカフ　全レ甲マッタウスを見よ。
【全軀】ゼンク　己の身を全うする。司馬遷、報二任安一書「一レ軀保レ妻子一之臣、隨而媒二孽其短一」
【全軍】ゼングン　〇すべての軍隊。賈島詩「涉レ流躡二大旆一、登レ岸見二一一一一」〇マッタウス戰陣にて一兵士を失はず。孫子「凡用兵之法、一レ軍爲レ上」
【全快】ゼンクワイ　圖病が全くいゆ、平癒する。＝全治。
【全活】ゼンクワツ　身を全うしていきる、又、いかして命を全うす。漢書、成帝紀「遣二使者一循二行郡國一、務有二以一一之一」
【全計】ゼンケイ　完全なるはかりごと、十分にぬけめなきはかりごと。
【全經】ゼンケイ　まったき經書、經とは聖人の作りたる書。漢書、劉歆傳「漢興已七八十年、離二于一一一、固已遠矣」
【全權】ゼンケン　すべての權利。
【全功】ゼンコウ　十分なるいきを。列、天瑞「天地無二一一一」
【全國】ゼンコク　國内すべて、國中こぞりて。
【全才】ゼンサイ　完全なる才能。劉禹錫詩「出レ文入レ武是一一」
【全紙】ゼンシ　のこらずのかみ、紙一面、一枚の紙そのまま。二分したるを半切セツといふの對。
【全集】ゼンシフ　〇全書に同じ。〇一作家の詩文を遺く收めたる書物。抄本の對。文獻通考「一一未レ見」
【全身】ゼンシン　〇からだぜんたい。＝渾身。〇マッタウスからだを無事にたもつ。陳武内傳「修二絕レ穀一レ一之術一」＝全軀。
【全眞】ゼンシン　〇己の自然の性を完全にたもつ。晉書、曹毗傳「一レ一養レ和」〇出家道士の稱。
【全書】ゼンシヨ　〇まったくそろへる書物。晉書、新序目錄序「隋唐之世、尙爲二一一一、今可レ見者十篇而已」〇一作家の著作を、殘らず編次して一部の書となせるもの「二程一一」「王陽明一一」
【全勝】ゼンシヨウ　〇勝つことを全うす。孫子「善守者藏二於九地之下一、善攻者動二於九天之上一、故能自保而一一也」〇圖まるがち、かちどほし。
【全生】ゼンセイ　生命を保全する。晉子「一一之說興、則廉恥不レ立」
【全性】ゼンセイ　天性を全うする。淮南子「一レ保レ眞、不レ虧二其身一」
【全盛】ゼンセイ　〇十分に盛んなり。五代史、唐臣傳「臣見二長安一一時一」〇血氣がまっさかり。宋之問詩「寄レ言一一紅顏子、可レ憐半死白頭翁」
【全精】ゼンセイ　全レ精ツクスを見よ。
【全然】ゼンゼン　圖まったく、すべて、まるきり。
【全體】ゼンタイ　すべて、みな、總體。劉克莊詩「山啼一一出、樹老半身枯」
【全唐詩】ゼンタウシ　書名、九百卷、目錄十二卷、清の康熙四十二年彭定求等勅を奉じて編す、作者二千二百餘人、詩數四萬八千九百餘首を收む。
【全唐文】ゼンタウブン　書名、一千卷、清の嘉慶十九年董誥等勅を奉じて撰す、唐人の文集を彙輯し、并せて五代の文をも收む、體例、全唐詩に同じ。
【全治】ゼンチ　〇まったくをさまる。子華子「一一而無レ網」〇病が全くなほる、全快。
【全智全能】ゼンチゼンノウ　完全なる智能。
【全通】ゼンツウ　〇全く通ずる、線路の全體が開通する。〇すべての理に通達する。唐書、選擧志「經策一一爲二甲第一」
【全丁】ゼンテイ　一人前の壯丁。晉書、范寧傳「以二十二爲二一一、十六至二十九爲二半丁一」
【全德】ゼントク　まったき德、完全無缺なる德。唐書、裴度傳「事二四朝一以二一一始終」
【全能】ゼンノウ　完全無缺なるはたらき、何でも出來る才智。全用を見よ。
【全敗】ゼンパイ　まったくのまけ、すべて敗北する。
【全般】ゼンパン　圖のこらず、全體。
【全癒】ゼンユ　うちそろひてすべてうつくし。
【全備】ゼンビ　十分にそなはる。＝完備。
【全部】ゼンブ　總べての部分、其のもの全體。＝總體。
【全幅】ゼンプク　〇きれのはばいっぱい。般戚式詩「最宜一一容飛綃」〇精神のすべて、ありたけ「一一の精神」
【全滿】ゼンマン　〇十分に全き事。蘇轍、賀表「能事既修、一一自至」〇幸福を全くする。後漢書、皇甫規傳「高規忌柏人之名、遷之以一レ一」
【全文】ゼンブン　一篇の文章のこらず。＝全篇。
【全豹】ゼンペウ　まるで。豹の皮の一斑ヒトフシを見て豹であることを知るといふ故事（晉劉參看）によりて俗に一斑を一部分一一を全體の義に用ふ。
【全篇】ゼンペン　全き一篇の文。李山甫詩「贈送行者得二一一一」
【全滅】ゼンメツ　殘らず滅ぶ。
【全癒】ゼンユ　病全くいゆ。＝全治。
【全用】ゼンヨウ　のこる所なきつかひみち、完全なる效用。列、天瑞「天地無二全功一、聖人無二全能一、萬物無二一一一」
【全力】ゼンリヨク　ちからいっぱい。劉子翬詩「克己有二一一一」

六畫

【兩】（一）リヤウ　（二）リヤウ　俗字

㊀ふたつ。（二）同じやうなもの二つをいふ。〇雙方、左右、陶潛詩「白髮被二一鬢一」〇ふたつながら。二つとも。晉書、周處傳「忠孝之道、安得二全一」〇

ふたたび(再)〇たぐひ、ならび、一對(匹耦)〇車數の稱。‖輛。〇布帛二端の稱。‖匹。〇めかたの名、二十四銖の稱。〇隊伍の編制、二十五人の稱。〇魎に通ず「罔ー」㊁車乘をいふ。詩、周南「百ー御之」〇圓リャ昔の銀貨四兩三分の稱。又金貨四分ブの稱。〇今の一圓の稱。

兩 倍に兩・兩に作るは非。

【兩腋】エキ 左右の手のにぎりこぶし。陸游詩「汗沾ニー一色如ノ柒」

【兩鬢】イン ふたごころ。宋書、樂志「兩君有ニー一、故來相決絕」‖兩心・貳心。

【兩楹】エイ 堂上の東西に在る二本の大柱。禮、檀弓「子路昔之夜夢ノ奠ニ予ーー之間」

【兩曜】ヨウ 日と月と。梁元帝纂要「日月謂ニ之ーー」

【兩腋生ノ風】カゼヲヒトフエヲ 茶を喫して七椀に至れば、兩方の腋の下に清風の生ずるを覺ゆと盧全、謝三孟諫議寄ニ新茶ニ詩「一椀喉吻潤、兩椀破ニ孤悶ニ三椀搜ニ枯腸ニ唯有ニ文字五千卷ニ四椀發ニ輕汗ニ平生不平事、盡向ニ毛孔一散、五椀肌骨清、六椀通ニ仙靈ニ七椀喫不ノ得、也唯覺ニ兩腋習習清風生ニ」

【兩畨】リャウバン 廣東・廣西二省の稱、昔の百粵の地なるが故。‖兩廣。

【兩河】カワ 河南と河北と。圃雅「ーー開曰ニ冀州ニ」

【兩住】リャウ ニつながらよし。蘇軾詩「簷山雪月ーー色」

【兩江】カウ 今の江蘇・江西・安徽の稱。

【兩掛】カケ 圖旅行用の行李の類、天秤棒の兩端にかけて荷ふもの。

【兩替】カヘ 圖一種の貨幣を同じ價格の他の貨幣と交換すること。‖兌換・兌銀。

【兩替屋】ヤ 圖切賃サンを取りて兩替を業とする者。‖兌銀舖・錢莊。

【兩間】カン 〇天と地との間。宋史、胡安國傳「宜剛可ニ以塞ニー一、忍可ニ以安ニ天下ニ矣」〇二つのもののあひだ。

【兩漢】カン 前漢（西漢）と後漢（東漢）と。顏氏家訓「上書陳ノ事、起ノ自ニ戰國、遠ニ於ーー、風流弼厲」

【兩儀】ギ 天と地と。又陰と陽と。儀は宇宙の大法。易、繫辭「易有ニ太極ニ、是生ニーー」

【兩師書賢】シリャウコシュ 博學にして實用の才なき者を嘲りていふ。陸餘叢考、卷四三「齊陸陸、學極博、而讀易不ノ解ニ文義ニ、土儉曰、陸公書廚也、今人謂ニ讀書多而不ノ能ノ用者ニ爲ニ一本ノ此」

【兩雅】ガ 雅豚と雅舍と。漢書、兩雅傳「ーー皆楚人也、雅豚、字君實、雅舍、字君儁、二人相友善、竝著ニ名節、故世謂ニ之楚ーー」

【兩極】キョク 地の兩端、北極と南極と。晉書、天文志「北極出ノ地三十六度、南極入ノ地三十六度、ーー相去、一百八十二度半」

【兩旬三年得】リャウシュンサンネンエタリ 唐の賈島が獨行潼底影、數息池邊身の二句を、三年かかりて得たることを述べたる詩句。賈島、自述詩「ーー、一吟雙淚流」

【兩君】クン 二國の君。論、八佾「邦君爲ニーー之好ニ、有ニ反玷ニ、管氏亦有ニ反玷ニ」

【兩京】ケイ 前漢・後漢の二都。元史、世祖紀「定ニーー四川戎軍ニ二三年一更、屢ニ其家屬ニ、軍官給ノ俸贍ノ之」

【兩觀】カン 闕をいふ。闕は、公門の兩側にあるものみの樓。春秋、定二「雉門及ーー災」雉門は南門。

【兩賢】ケン 二人の賢人。史、季布傳「ーー豈相厄哉」

【兩臉】レン 兩方のほほ、臉は目の下、頬の上の處。李洞贈ニ廬錬師ニ詩「ーー酒醉紅杏姉、半胸酥嫩白雲饒」

【兩虎相鬪】アヒタタカフ 兩雄又は兩強國の互にたたかふに喩ふ。史、廉頗・藺相如傳「今ーー、其勢不ニ俱生ニ」

【兩造】ソウ 訟は亞なり、法廷に至る雙、原告と被告と。賈、呂刑「ーー具備」

【兩造具備】ソウグビ 原告・被告兩者の訴訟の證據明かに具はるをいふ。賈、呂刑「ーー、師聽ニ五辭ニ」

【兩三行淚】カウノナミダ はらはらとおつる淚。賈島詩「三十年來長在ノ客、ーー忽然非」

【兩山排ノ閘送ノ青來】セイヲオクリテリョウザンハカドヲヒラキ 兩方の青山が青き色を門戸に送り來る。王安石、書湖陰先生壁ニ「茅簷長掃淨無苔、花木成ノ蹊手自栽、一水護ノ田將ノ綠去、ーー」

【兩驂如ノ舞】サンノゴトシ 驂は副馬なり、駕御の術の巧なるをいふ。詩、邶風簡兮「執ノ轡如ノ組、ーー」

【兩心】シン 〇ふたごころ。㊁兩人の心。白居易詩「ーー苦相憶、兩日盃相諳」

【兩晉】シン 西晉と東晉と。陳書、沈不害傳「古者王世子之貴、猶與ニ國子一齒、降及ノ漢鼓瞽不ノ廢、豈乎ーー、斯事彌隆」

【兩廂】シャウ 堂の東西の廊。歐陽修詩「聖經日陳ノ前、弟子羅ニーー」

【兩手】シュ りゃうて。詩、唐風、椒聊「椒聊之實、蕃衍盈ノ掬。彼其之子、碩大且ノ朮」‖雙手。

【兩制】セイ 宋の內制と外制と。翰苑故事「宋、翰林學士謂ニ之內制ニ、中書舍人知制誥、謂ニ之外制ニ」內制は制誥の文を掌り、外制は勅制を掌る。

【兩省】セイ 門下・中書の二省「小學紺珠」

【兩堉】ヤウセイ　あひむこ。兩雛「――謂爲レ壻」‖姪堉。

【兩稅法】リヤウゼイハフ　唐代の稅法。夏（六月）秋（十一月）の兩度に收む（唐書、德宗紀）

【兩棲類】リヤウセイルヰ　卵生の冷血動物にて、幼時は鰓を有し、水中に棲む、長じて肺にて呼吸し、陸上に棲むもの、蛙・さんせううをいもりの類。

【兩舌】リヤウゼツ　二まいじた。无量壽經「――惡口妄言綺語」‖食言。

【兩浙】リヤウセツ　浙東・浙西をいふ、錢塘江以南を浙東といひ、以北を浙西といふ。五代史「錢鏐據有――」

【兩全】リヤウゼン　二つながらまったし。晉書、馬隆傳「忠孝之道、安得――」

【兩蘇】リヤウソ　蘇軾と蘇轍と。宋史、巢谷傳「紹聖初、蘇軾・蘇轍謫二嶺海一、平生親舊、無復相聞者、谷獨徒然、自二眉山一徹レ京、欲三徒步訪二――一、聞者笑三其狂一」

【兩到】リヤウタウ　到底と到洽との二兄弟。梁元帝贈二到溉・到洽一詩「何如今――、復似二凌レ寒竹一」――を二竹に比していふ。

【兩袖】リヤウシウ　兩袖なく、胸と背とに當てて著るもの、うちかけ。釋名「其一當レ胸、其一當レ背」南史「謝安都著二絳納――一衫」‖兩襠・補襠・半臂。

【兩袒】リヤウタン　袖方のかたをぬぐ。事文類聚「其女――、日、嬴東家食、四家宿」

【兩端】リヤウタン　○兩方のはし、二つの極端。中庸「執二其――一、用二其中於民一」○事の終始、本末。論、子罕「有二鄙夫一問二於我一、空空如也、我叩二其――一而竭焉」

【持二兩端一】ヂリヤウタン　二心を抱く。史、鄭世家「晉閻二楚之伐一レ鄭、發レ兵救レ鄭、其衆持二――一、故遲」

【兩地】リヤウチ　住處の二所に分るる義。何遜詩「念此一繩笑、分爲二――一愁」

【兩杖鼓】リヤウヂヤウコ　羯鼓コツの異名。通典「羯鼓正如二漆桶一、兩頭俱擊、以レ出二羯中一、故謂二羯鼓一、亦謂之――」

【兩頭蛇】リヤウトウジヤ　二つ頭のあるへび。嶺南異物志「韶州多――」‖晉書新書「孫叔敖爲レ兒、出遊逢二兩頭蛇一、憂不レ去、母問二其故一、泣曰、今且見二――一、母曰、蛇安在、曰聞レ見二――一者死、恐二後人復見一之、已殺而埋レ之矣、母曰、無レ憂、汝不レ死矣、吾聞有二陰德一必有二陽報一、後爲二楚相一」

【兩耳不レ聞二窗外事一】リヤウジフトウヲイハズクワイガイノコト　兩耳不レ聞二窗外事一、一心惟讀二聖賢書一、東晉傳「一舉――、外實內貧」

【兩都賦】リヤウトフ　漢の班固の西都賦（長安）東都賦（洛陽）を合稱す、文選に載す。晉書、左思傳「班固兩都、理勝二其辭一、張衡二京、文過二其意一」

【兩髦】リヤウバウ　幼兒の髮を二つに分けて、兩方に垂れたるもの。詩、鄘風柏舟「髧彼――、實維我儀」

【握二兩把汗一】アクリヤウハノアセヲ　兩手に汗をにぎる。危き場合に深くおそるる義。姜兩、投甕雜筆「今世人勞二襄人涉レ險而濟者一、輒曰、爲レ爾捻二兩把汗一、按、元史憲宗召二趙璧一、問曰、天下何如而治、對曰、請先誅二近侍尤不善者一、憲宗不レ悅、璧退、世祖曰、秀才汝須身都是膽耶、吾亦爲レ汝――也」元史、趙璧傳には、把を手に作る。

【兩班】リヤウハン　朝鮮にて、もと文班と武班との並稱、其の祖先が朝國の國家に對して、文勳、又は武勳を建てたる家柄、我國の士族の類。

【兩髻】リヤウケイ　兩方のびんの陶潛詩「白髮被二――一」‖兩鬢。

【兩夫】リヤウフ　ふたりのをっと。‖二夫。

【兩廂】リヤウシヤウ　○宋代、中書省と樞密院とをいふ「治平類要」○漢代、丞相と御史とをいふ「漢書、杜周傳」

【兩部】リヤウブ　○兩方の部分。○一派の宗教、本地垂跡の說に基づき、佛敎と神道とを習合せしもの「――神道」○圖胎藏界と金剛界との稱。

【兩部鼓吹】リヤウブコスヰ　樂に坐部立部あり、之を兩部といふ、鼓吹は、總べて樂器をいふ。兩史、孔稚珪傳「風韻清疏、門庭之內、草萊不レ翦、中有二雞鳴一、曰我以レ此當二――一」

【兩便】リヤウベン　○雙方の便利。○大便と小便と。

【兩鳧連飛】リヤウフレンピ　兄弟共に榮達するに喩ふ。北史、崔曠傳「俊弟仲文、有二文學一、天保初、俊爲二侍中一、仲文爲二給事光祿大夫一、同日受拜、時云二――一」‖晉故事には連を齊に作る。

【兩雄不二俱立一】リヤウユウフタタビハタテズ　二人の英雄は相並びて立つこと能はず、必ず爭を生じて一方はたふる。漢書、鄒食其傳「――兩賢不レ竝レ世」

【兩用】リヤウヨウ　兩つながら用ふる。戰國策「賓主間二日、晉欲二一一公仲公叔一、其可乎」

【兩立】リヤウリツ　ならびたつ。戰國策「楚強則秦弱、楚弱則秦強、其勢不二――一」

【兩兩】リヤウリヤウ　二つづつ、二つならび。‖雙雙「姿容洞庭四、俗事皆――」

【兩淮】リヤウワイ　淮南と淮北と。今の江蘇省淮陽道の地。地理通釋「自レ古立二國東南一以二――一爲二根本一」

七畫

【兪】㊀ユ　㊁シユ　㊂ユ　㊃ユ

㊀しかり、應ずる詞。書、堯典

「帝曰！」○うつろ舟。㊁やすし、やはらぐ（恬安）○いよいよ。前、仲尼「一務遠」＝愈。○一は和悦なる貌。

【俞健】ユケン 清の徳清の人、字は蔭甫、曲園と號す、道光の擧士、吳門に居り著書を以て自ら娯む、春在堂全集あり。

【俞兒】ユジ 古の善く味を識り分ちし人。淮南子「一一狄牙、皆通灑之水一而別レ之」

【俞跗】ユフ 黄帝の時の名醫。跗、漢書に柎に作る。史、扁鵲傳「上古之時、醫有二一一一、治レ病以二湯液一」

【俞扁之術】ユヘンノジュツ 古の名醫、俞跗と扁鵲との醫術、轉じて名醫の治療にいふ「史、扁鵲傳」

【俞扁之門】ユヘンノモン 名醫の門をいふ。柳宗元文「一一、不レ拒二病夫一」

八部

【八】ハチ 勝 或は捌に作る

○やつ。○やたび（一回）朱子語錄「當二商之季一七轉一倒、上下崩頽」○わかつ、わかる（別）兩兩相背く。

【八佾】ハチイツ 天子の舞樂、八人づつ八列より成る。論、八佾「一一舞二於庭一」

【八家文】ハッカブン 八大家を見よ。

【八旗兵】ハッキヘイ 清の太祖の時、定めし兵制、毎三百人に、一佐領を置き、五佐領に一參領を置き、五參領に一都統を置く、すべて七千五百人、各部統に一旗を授く、旗各其の色を異にす、鑲黄旗・正白旗・鑲白旗・正藍旗・正黄旗・正紅旗・鑲紅旗・鑲藍旗是れなり。

【八極】ハッキョク 國の八方のはて。後漢書、明帝紀「恢二弘大道一、被二之一一一」淮南、本經「紀二綱一一一經二緯六合一」、

【八苦】ハック 佛 人生の八つのくるしみ、生苦・老苦・病苦・死苦・愛別離苦・怨憎會苦・求不得苦・五陰盛苦の稱「涅槃經」

【八區】ハック 八方の區域、天下の義。晉書、樂猷「勵二一一宇宙一、化動二一一一」

【八功德水】ハクドクスイ 佛 彌陀如來の報土にある池中の水、澄淨・清冷・甘美・輕軟・潤澤・安和・除患・增益の八つの功德ありといふ。無量壽經「一一滿然盈滿、清淨香潔、味如二甘露一」

【八荒】ハッコウ 國の八方のはて。賈誼、過秦論「併二呑一一一一」＝八垠・八極。

【八紘】ハッコウ 四方と四隅と。淮南、地形「九州之外、乃有二八殥・八殊之外、而有二一一一一一之外、乃有二八極一」殥は遠。

【八卦】ハッケ 八種の卦、即ち乾三・兌三・離三・震三・巽三・坎三・艮三・坤三の稱。易、繫辭上「兩儀生二四象一、四象生二一一一」轉じて易道の義。

【八刑】ハッケイ 周代の八つの顚、不孝・不睦・不婣・不弟・不任・不恤・造言・亂民の刑。周禮、地官、大司徒「以二鄉一一一糾二萬民一」

【八景】ハッケイ ○八つのよきけしき。夢溪筆談「度支員外郎宋適工レ畫、尤善爲二平遠山水一、其得意者、有二平沙落雁・遠浦歸帆・山市晴嵐・江天暮雪・洞庭秋月・瀟湘夜雨・煙寺晚鐘・漁村夕照一、謂之一一一、好事者多傳レ之」○國 近江一一は、比良暮雪・矢橋歸帆・石山秋月・瀨田夕照・三井晚鐘・堅田落雁・粟津晴嵐・唐崎夜雨。

【八犬傳】ハッケンデン 南總里見八犬傳の略。九十一卷、曲亭馬琴の作りし小說。

【八顧】ハッコ 後漢の竇武の時の名士八人。後漢書、黨錮傳「郭泰・范滂・尹勳・巴肅・宗慈・夏馥・蔡衍・羊陟爲二一一一」顧は善く德行を以て人を愛顧敎導する義。

【八股文】ハッコブン 明以後科擧に應ずる者の用ふる文體、文の結構、股は對偶の義、對句法によりて八つに分ちして論ずるが故。日知錄「經義之文、流俗謂二之八股一」

【八相】ハッソウ 佛 世尊一生涯の變相、住胎・誕孩・愛欲・樂苦行・降魔・成道・轉法輪・入滅の稱。一說、受胎・降生・處宮・出家・成佛・降魔・說法・涅槃。

【八葦】ハッソウ 漢法醫の用ふる八つの藥草をいふ。即ち蕙蒲・艾蒿・車前・商蓐・蒼耳・忍冬・鳥韭・蘩蔞。

【八朔】ハッサク 陰曆八月朔日の稱。

【八索九丘】ハッサクキュウキュウ 古書をいふ。左、昭十二「左史倚相趨過、王曰、是眞史也、是能讀二三墳五典一一一」

【八叉手】ハッシュ 八たび手をこまぬきて、詩の成る義、詩才の敏捷なるをいふ。北夢瑣言「温庭筠工レ賦、毎二入試作一賦、一一而八韻成」＝八吟。

【八宗】ハッシュウ 國 佛敎の八つの流派、俱舍・成實・律・法相・三論・華嚴・天台・眞言「一一兼學」

【八省】ハッショウ 國 古の八つの官省、中務・式部・兵部・治部・刑部・民部・大藏・宮內。內裏に在りて一一の百官が政務を執る所を一一院、又朝堂院といひ其の正殿を大極殿といふ。

【八省院】ハッショウイン 前條を見よ。

【八將神】ハッショウジン 陰陽道にて吉凶の方位を司るといふ八つの神、太歲・大將軍・太陰・歲刑・歲破・歲殺・黄幡・豹尾。

【八俊】ハッシュン 八人のすぐれたる人。後漢書、黨錮傳「李膺・荀昱・杜密・王暢・劉祐・魏朗・趙典・朱寓爲二一一」後は英俊の義。

【八駿】ハッシュン 周の穆王の八頭のすぐれたる馬。拾遺記「穆王一一一名二絕地一二名二翻羽一三名二奔霄一四名二超影一五名二騰雲一六名二超光一七名二挾翼一」穆天子傳には馬の

名を赤驥・盜驪・白義・踰輪・山子・渥黃・華騮・綠耳とす。

【八世】ハッセイ　五帝と三王との世を併稱す（小學紺珠、注）

【八姓】ハッセイ　圖古の八つのかばね。眞人ヒト朝臣アソミ宿禰スクネ忌寸イミキ道師ミチノシ臣連ムラジ稻置イナギ

【八政】ハッセイ　國家を治むるに必要なる八つの政。食・貨・祀・司空（土を掌りて其の居を安んず）司徒（敎を掌りて其の性を成す）司寇（禁を掌りて其の姦を治む）賓（外交）師（軍の稱）（書、洪範）

【八節】ハッセイ　一年中の氣候の變り目の八つ。立春・春分・立夏・夏至・立秋・秋分・立冬・冬至（史、律書、注「八正者ナリ」）

【八卦】ハッケ　曆法にて壬子より癸亥に至る十二日間の中、丑・辰・午・戌の四日を除きし八日の稱。一年に六回あり、壬・癸は水なり、故に此の間は雨多しといふ。

【八千歲爲レ春】ハッセンサイヲシュントス　大椿の長壽なるをいふ。列、湯問「朔之南有二冥靈者一、以二五百歲一爲レ春、五百歲爲レ秋、上古有二大椿者一、以二八千歲一爲レ春、八千歲爲レ秋」冥靈も木の名。

【八體】ハッタイ　○秦代に於ける八つの文字の書體、大篆・小篆・刻符・蟲書・摹印・署書・殳書・隸書（漢書、藝文志、注）○書斷「篆・籀・八分・隸書・章草・草書・飛白・行書、通謂二之一書一」

【八達】ハッタツ　晉代の宏遠の士八人、胡毋輔之・謝鯤・阮放・畢卓・羊曼・桓彝・阮孚・孟光（晉書、光逸傳）

【八珍】ハッチン　○八種の美味、淳熬ジュンガウ・淳母・炮豚・炮牂・擣珍・漬・熬・肝膋カンレウの稱（周禮、冢宰、膳夫）○牛・羊・麋・鹿・臐ノ豕・狗・狼（埤雅）張蘊古文「雖二一手前所一レ食不レ過レ適レ口」

【八斗才】ハットサイ　詩文の才の富めるをいふ。南史、謝靈運云、天下才共一石、曹子建獨得二八斗一、我得二一斗一、自レ古及レ今、共用二一斗一、奇才博識安足レ繼レ之」

【八方】ハッポウ　四方と四隅と。史、司馬相如傳「六合之內、一一之外」

【八風】ハッフウ　○八方の風。淮南、地形「何謂二八風一、東北曰二炎風一、東方曰二條風一、東南曰二景風一、南方曰二巨風一、西南曰二涼風一、西方曰二飂風一、西北曰二麗風一、北方曰二寒風一」○圖八種の人心を搖動するもの、利・衰・毀・譽・稱・譏・苦・樂。大藏法數「謂此八法世間所愛所憎、面能二動人心一、名之爲レ風」

【八分】ハッブン　書體の一、秦の始皇の時、上谷の王次仲が、小篆二分と、隸書一一とを雜へて作る。佩觿集には、一字の勢、八の字の如くにして、偃波の文あれば名づくとあり。又、一說八體より分れたる故の名。杜甫、小篆歌「大小二篆生二一一一」

【八表】ハッピョウ　八方の極めて遠きはて。晉、王敦傳「皇綱紐絕、一一永風」何承天詩「仁聲被二一一一」日八極。

【八音】ハチオン　○八つの鳴り物、金・石（磬）絲・竹・匏・土・革・木。書、堯典「四海遏二密一一一」過は絕、密は靜、天子の喪により、音樂を絕ち禁じて靜かならしむ。○圖八種のおと。法界次第「種好音・柔輭音・和適音・慧尊音・不女音・不澁音・深遠音・不竭音」

【八裔】ハチエイ　八方の極めて遠きはて。李白詩「大鵬飛兮振二一一一」

【八垠】ハチギン　國土の八方のかぎり。淮南、地形「九州之外、乃有二一一一

古今・後撰・拾遺・後拾遺・金葉・詞花・千載・新古今和歌集。

【八大家】ハチダイカ　唐宋二代の文章家八人。唐の韓愈・柳宗元・宋の歐陽修・蘇洵・蘇軾・蘇轍・曾鞏・王安石をいふ。明の茅坤の唐宋八家文鈔、清の沈德潛の唐宋八大家文讀本あり。

【八大山人】ハチダイサンジン　明の宗室、其の名を逸す、初僧と爲る、書に工、又畫を善くす、水墨芭蕉怪石花木、及洲雁汀鳧、翛然として俗間なく、人爭うて之を貴とす。

【八大地獄】ハチダイジゴク　佛　閻浮提の南洋、日道の下にある八つの大地獄、等活・黑繩・衆合・叫喚・大叫喚・焦熱・大焦熱・无間（受苦、阿鼻＝八熱地獄。

【八大菩薩】ハチダイボサツ　佛　八種の菩薩、觀陀・跋難陀・婆伽羅・和修吉・德叉迦・阿那婆達多・摩那斯・優鉢羅。

【八道】ハチダウ　○國全國を八つに區劃せし稱。東海・東山・北陸・北海・山陰・山陽・南海・西海の一一。○朝鮮にては京畿・江原・咸鏡・平安・黃海・忠淸・慶尙・全羅の一一。明史、朝鮮傳「是時優已八王京、畿飛輦二勤王子陪臣二朝三府庫一一一盡虛沒、且暮且渡二鴨綠江一」

【八陣】ハチヂン　○太古、風后の作りし八つの陣立、天・地・風・雲・龍・虎・鳥・蛇。○諸葛亮の作りたる陣形、洞當・中黃・龍騰・鳥翔・連衡・握奇・虎翼・折衝。蜀志「諸葛亮傳」「推二演兵法一作二一一圖一」○國大江維時が唐より傳來せしといふ陣立、魚鱗・鶴翼・雁行・堰月（偃月）鋒光・衡軛・長蛇・方圓。

【八丈】ハチジヤウ　國伊豆の八丈島産の絹織物「黃一一」

【八珍】ハチチン　○八つの美味、飢・渴・寒・暑・水・火・刀・兵。○國地獄・餓鬼・畜生・北洲・長壽天・佛前佛後（人間）盲聾瘖啞・世智辨聰。

【八熱地獄】ハチネツヂゴク　八大地獄に同じ。

【八方天】ハッポウテン　佛　天を八つの方角に分けたる稱、帝釋天（東方）伊舍那天（東北）閻魔天（南方）火天（東南）水天（西方）羅刹天（西南）毘沙門天（北方）風天（西北）

【八聾】ハチロウ　八種のきこえず、天笠・瞎官・禮德・貴耳・偏耳・駒觀・旁看。貴、旅窓閒二話手九夷一一」一說、八は多數の義、百聾に同じ。

【八腋】ハチエキ　八つのつゝ。周禮、小司寇「以一一一邦法一斷二刑罰一一曰、議親之辟、二曰、議故之辟、三曰、議賢之辟、四曰、議能之辟、五曰、議功之辟、六曰、議貴之辟、七曰、議勤之辟、八曰、議賓之辟」

【八面】ハチメン　あらゆる方面。馬無二閑ノ面看ノ爾詩「洞房記ノ約屋縫ノ裙、一一玲瓏得ノ月多」

【八龍】ハチリウ　八人のすぐれたる子。後漢書、荀淑傳「有二子八人一、儉・緄・靖・燾・汪・爽・肅・專、皆有二名稱一、時人謂二之一一一」

【八王日】ハチワウニチ　國立春・春分・立夏・夏至・立秋・秋分・立冬・冬至の日、人間の事を司る諸王神が交代する日といふ。大藏法數「春秋——者、是天地陰陽交代日也、此之八日、帝釋輔臣奏二行天下一比二校善惡一、定レ生注レ死、增二減罪福一、樂レ善者若能避禁持齋、致レ生二善處一也」

【公】コウ　ク　東

○おほやけ、正しくして偏頗なし、私の對（無私）あからさま（明白）○やくしよ（官府）詩、召南「退食自一」又やくしよのつとめ。○共有・共同。○さゝみ、諸侯、主君。○父の敬稱。列、黃帝「家一執席」○婦が夫を敬ひ稱す。漢書、賈誼傳「與一併居」○長者の敬稱。同書「此六七一無差」○同輩の敬稱。史、平原君傳「一等耦耕」○五爵の第一位。孝經、孝治「一侯伯子男」○宰相「三一」○いさを（功）詩、大雅「王一伊濯」○鉅一は天子をいふ、天子は天下の父たるが故。

【公安】コウアン　公共の安寧、社會の無事に安らかなる義。

【公案】コウアン　○おほやけのしらべがき、役所の調書。○佛　禪宗の問答の案。碧巖集、月庵宗賓（頌二此一一）」

【公移】コウイ　官府よりのうつしぶみ。文體明辨「按一一者、諸司相移之稱也、其名不レ一、故以二一一揔之」

【公有】コウイウ　おほやけの所有。私有の對。

【公邑】コウイフ　君の領地。公羊傳「不下以二私邑一累上一一」

【公役】コウエキ　公事につかはれる。禮記「有二一一無私使一」

【公益】コウエキ　社會公衆の利益。

【公園】コウエン　公衆の遊ぶ爲めに設けられる庭園。

【公侯】コウコウ　天子の家。左傳「一一之利、知無レ不レ爲」○皇室・公室。

【公暇】コウカ　おほやけにたまはる休暇。

【公物】コウブツ　おほやけの役所。○官府・官署。

【公海】コウカイ　何國の領分にも屬せざる海（海岸より三海里以外）

【公開】コウカイ　公衆の傍聽觀覽、又は集會等を許す。祕密の對。

【公開狀】コウカイジヤウ　或る人にあてたる書翰に從ひ八に從ふ、八は背くなり、ムは私なり、ムに背くを公と爲す。

狀を直接に賜らずして、新聞等に出して公衆に示す。

【公廳】ヲヤ 役所。‖公署。

【公解田】ヲヤカイデン 人民の困窮を救済する爲めに置きたる田地。義田。「階文帝以二百畝供二貧不一足、益二廣公解一、收二息取一利、振二窮乏一施上於是公卿以下內外官給二職分田一、又給二一一以備一用、大底凡官品司各有二一一」諸官文武職事各有二職分田一」

【公行】ヲヤ 公然と行はれる。左傳「盜賊一一、而天厭レ之」

【公幹】ヲヤ 個おほやけのつとめ。‖公事。

【公私】ヲヤ おほやけの事。國家、民衆。「醫、古者、高宗嘉二傅武氏傳一「后業屢不レ恥、以就二大事一、帝謂能率レ己、故扳二一一立レ之」

【公共】ヲヤ 世の人の共にする所にして、個人の私するを得ざる義。公衆共同。史、張釋之傳「法者天子所レ與二天下一一一也」

【公共心】ヲヤキヤウシン 公衆の爲めに盡す心。

【公課】ヲヤクワ 〇官府よりわりつけらるるかかりもの。又、ぶやく。〇やくめ、おほやけのつとめ。

【公會】ヲヤクワイ 公衆のよりあひ、又其の場所。

【公機】ヲヤキ 三公の位。三槐を參照せよ。玉照新志「位極二一一、夢寐二古今一」

【公館】ヲヤクワン 〇地方の官舍〔縣、府子問〕〇公使館などの稱、又、廣く官人の寓居の義とす。

【公卿】ヲヤケイ 〇三公と九卿と。轉じて、高位高官の稱。論、子罕「出則事二一一」〇ヲヤ國くげ、攝政・關白・大臣(公)と參議大・中納言・三位以上(卿)との總稱。

【公潔】ヲヤケツ 清らかにして私心なし。漢書「爲レ相一一、清托不レ行」

【公言】ヲヤゲン あからさまにいふ、公然と發表していふ。‖妄言・明言。

【公志】ヲヤコヽロザシ おほやけのおきて。

【公權】ヲヤケン 公法上國民の有する權利。選擧被選擧權、官公吏となる權利の類。

【公債】ヲヤサイ 國家又は地方自治體の債務。

【公子】ヲヤコ 〇大名の子、わかとの。儀禮、喪服「諸侯之子稱二一一」史、平原君傳「平原君、姻二屬天下之佳一一也」〇有位者の子。〇他人の子の尊稱。

【公子王孫】ヲヤコワウソン 貴族の子弟をいふ。戰國策「一一、左挾レ彈右攝レ丸」

【公司】ヲヤシ 個會社。

【公示】ヲヤシ おほやけにしめす。

【公示催告】ヲヤシサイコク 官報などに公告して、證書處分失踪の宣告、及取消の判決を受けたるものに對し、請求、又は權利あるものに、其の屆出をなさしむる爲めに催告する。

【公私】ヲヤシ おほやけとわたくしと。君と民と。漢書、食貨志「一一之積」

【公使】ヲヤシ 國一國を代表して、外國に駐在し、國際上の事を處理する外交官、特命全權一一・辦理一一・代理一一の三種あり。

【公事】ヲヤジ 〇官府又は公共に關するしごと。論、雍也「非二一一一未レ嘗至二於偃之室一也」〇ヲヤ關うったへ、訴訟。

【公式】ヲヤシキ 〇數の記號及運算の符號を以て作られたる算式、如何なる實數の場合にも應用し得る一定の規則となるもの。〇正當の手續を履む仕方。‖正式。

【公室】ヲヤシツ 天子の家柄、君の族。論、季氏「祿之去二一一五世矣」‖公家。

【公人】ヲヤジン 國家又は公共團體の機關としての資格上よりいふ人。私人、個人の對。

【公相】ヲヤシヤウ 三公宰相の義。宋史、王旦傳「此兒當レ至二一一一」

【公上】ヲヤウヘ 君主又は官府の稱。楊惲、文「治レ產以給二一一一」

【公主】ヲヤシユ 天子の女なり、天子、女を諸侯に嫁する時に、同姓の諸侯又は三公をして之を主らしむ、故にいふ。漢書、高帝紀「相二呂元一一、亦皆數」

【公衆】ヲヤシユウ 社會一般の人人。‖民衆。

【公署】ヲヤショ やくしよ、公吏の事務を取扱ふ役所。金史「掲二之一一、以示二勸懲一」

【公益】ヲヤエキ 公共の事務を處理する職、廣義にては官吏をも含む、狹義にては官吏以外の公吏又議員などをいふ。

【公正】ヲヤセイ 〇私なくしてただし。史、伯夷傳「非二一一一不レ疑レ惟」〇國一一證書は、公認したる正しき證書の義。

【公正證書】ヲヤセイショウショ 前條を見よ。

【公然】ヲヤゼン おもてむき、明明地ヲヤヽ社會「一一抱レ木入レ竹去」

【公選】ヲヤセン 公平に衆人より選擧す。漢書、葉仲舒傳「二一賢良修案博習之士一」

【公租】ヲヤソ 政府への租稅。

【公訴】ヲヤソ 檢事より起すうったへ。

【公孫布被】コウソンフヒ 前漢の公孫弘、儉約にして三公の位に在りて、布衣を著けし故事。史、平津侯傳「弘爲二布被一、食不レ重レ肉、汲黯曰、弘位在二三公一、奉祿甚多、然爲二布被一、此詐也」

【公牘】ヲヤクトク 官のかねぐらの漢書、裴曲傳「有二中使者一、卽墨二一一一市レ歡」

【公道】ヲヤダウ 〇おほやけなるみち。又、上義「人欲縱、而一一行」〇個衡の公平なるにいふ。

【公爵】ヲヤクシヤク 〇國政府よりの示遠。〇姓を賜ひたる皇子、皇孫、又は清華

攝家、大臣大將などの人の子。

【公館】コウカン　おほやけの役所。徐鉉詩「獨坐二一一正煩レ暑」＝公署・公衙。

【公忠】コウチュウ　公正にして忠實。名臣言行錄「願爲レ相以二一一便二國家一爲レ事」

【公定】コウテイ　おほやけに定むる、――相場コウバイは取引所にて取引賣買せし相場。

【公田】コウデン　井田の中央の田、其の周圍の八家力をあはせて之を耕し、其の收入を公租とす。詩、小雅、「雨二我一公田一」遂及二我私一」

【公轉】コウテン　地球其の他の諸遊星が、一定の軌道によりて、太陽のめぐりを旋轉する現の自轉の對。

【公德心】コウトクシン　社會公衆の爲めにする德義心。

【覆二公餗一】コウソクヲクツガヘス　餗は鼎に盛りし食物、大臣の其の職に堪へざる喩。公の條に、鼎に盛る供物を反覆する。易、鼎卦「九四、鼎折レ足、――其形渥、凶」

【公債】コウサイ　納稅を怠り又は債務を果さざる者の財產を差押へて、公衆にせり賣する處分。

【公倍數】コウバイスウ　諸數の何れを以てしても割りきることを得る一數。其の――中の最小なるものを最小公倍數といふ。

【公方】コウカタ　〇おほやけにしてただし。後漢書「忠正――」〇コウホウ國將軍家の尊稱。

【公法】コウホウ　おほやけのおきて、直接に國家に關係する法律。

【公報】コウホウ　〇官吏より官府への報告文書。〇官府より國民に發表する報告。

【公判】コウハン　公衆の面前に於て罪の有無輕重を判決する裁判。

【公評】コウヒョウ　ただしきおほやけの批評、公平なる品評。王休賦「――在レ人分何愚何智」

【公布】コウフ　一般にふれ示す。

【公武】コウブ　國公家と武家と、即ち朝廷と幕府と。――合體ガッタイは德川幕府の末年、――の一致を圖りて國を治めんとはかりし一派の議論。

【公服】コウフク　朝廷に出づる時の制服。皇朝類苑「常朝起居竝――」

【公道】コウドウ　正義の爲めのいきどほり。宋史、陳亮傳「蓋國家之大恥而天下之――也」

【公平】コウヘイ　私なくたひらか。管子、形勢「天――、故美惡莫レ不レ覩、地――、故小大莫レ不レ載」

【公平無私】コウヘイムシ　心が公則にして一點の私なし。韓詩外傳「正直者、順レ道而行、順レ理而言、――」

【公輔】コウホ　天子を輔佐する大官、三公と四輔と。漢書、孔光傳「入稱二四輔一出備二三公一」

【公俸】コウホウ　上より受くる俸給。職書「生平――成以供君」

【公民】コウミン　〇おほやけのたみ。〇二年以上其の市町村に住し、地租又は直接國稅二圓以上を納むる滿二十五歲以上の男子、公民は市町村の議員選擧に參與し、又名譽職に就く權利を有す、この權利を――權といふ。

【公務】コウム　おほやけのつとめ。

【公明】コウメイ　私なくあきらか。

【公明正大】コウメイセイダイ　心が潔白にして正しく大いなり。

【公生レ明】コウセイメイ　公平の心ありて然る後明智を生ずる。說苑「――、偏生レ暗、誠信生レ疑、詐僞生レ塞、誠神生レ神、夸誕生レ惑」

【公門】コウモン　君の門。論、語「入二――一鞠躬如也」＝君門。

【下二公門一式二路馬一】カコウモンニシキシロバヲス　君の門前を過ぐるときは、馬車を下る、又車中にて君の馬に遇ふときは、車の橫木に頭を下げて敬禮する。禮、曲禮「大夫士――」

【公養之仕】コウヨウノシ　國君の優遇に感じて、賢人の出で仕ふる義。孟、萬章

【公約數】コウヤクスウ　諸數の何れをも割りきることを得る一數。其の――中の最大なるものを最大――といふ。

【公餘】コウヨ　おほやけのつとめのいとま、公務の餘暇。王禹偁詩「――多愛入二林泉一」

【公用】コウヨウ　おほやけに用ふる。漢書、毋將隆傳「武庫兵器、天下――」

【公吏】コウリ　官吏にあらずして國家の事務を扱ふ人。執達吏・公證人、及自治體の吏員等の類。

【公理】コウリ　證明を要せずして明かなる眞理。＝原則。

【公立】コウリツ　府縣市町村等の公共團體にて設け立てる。

【公廩】コウリン　官の米ぐら。宋史「發二――一以救二饑孽一」

【公力】コウリョク　〇えだち、おほやけのため無報酬にてする力役。宋書「立二宅於吳一多役二――一、蠲レ官」＝公役。〇國法を行使する機關の強制力。

【公論】コウロン　公平なる言論。世說「其自有二――一」＝輿論。

【公羊傳】クヨウデン　書名、十一卷、周末の齊の公羊高が春秋の傳を作りしもの、春秋――の略稱、左氏傳・穀梁傳とを併せて、春秋三傳といふ。

【公文所】クモンジョ　國鎌倉時代に政令を發布せし役所。＝政所マンドコロ

【六】リク　ロク　圍　或は陸に作る

〇むつ。〇むたび（一圍）〇易の陰爻。〇國名。左、文、五「楚人滅之」今の安徽省六安縣。

【六緯】リクイ　〇五經の緯と樂緯と（漢書、李尋傳、注）一說樂緯に易ふるに孝經緯を以てす。〇五藏と腑と。

（前項七籤、注）

【六逸】リク六人の世外に超逸せし人、即ち唐の世に、徂徠山に隠れて日月沈飲せし李白・孔巣父・韓準・裴政・張叔明・陶沔（唐書、李白傳）‖竹渓六逸。

【六一居士】コクイツ宋の歐陽修の別號。宋史、歐陽修傳「修始在二滁州一號二醉翁一、晩更號二——一」（歐陽集、歐公自序）集古録一千卷、藏書一萬卷、有琴一張、碁一局、置二酒一壺一、吾老其間、是爲二——一」

【六親】リク父・母・兄・弟・妻・子。

【六行】リク孝・友（兄弟の愛）・睦・婣（外戚を親む）・任（人の爲めに力を致す）・恤（人の窮をあはれむ）（周禮、地官、大司徒）‖六徳。

【六学】リク〇國子學・太學・四門學・律學・書學・算學の六つの學科。（唐書、職官志「國子監有二——一」）〇六經をいふ。（漢書、儒林傳「古之儒者博學二於六藝之文一、考二其同異一、以觀二聖人之所一レ以明二天道一、正二人倫一、致二至治一之成法也」

【六樂】リク周代に存せる黄帝以下六代の樂。雲門（黄帝樂）咸池（堯帝樂）大韶（舜帝樂）大夏（禹王樂）大濩（湯王樂）大武（武王樂）の稱。（周禮、大司徒「以二——一防二萬民之情一而教二之和一」）

【六合】リク東・西・南・北・上・下の六方。（易傳、序「道在二——一之外、近在二一身之中一」）莊、齊物「——之外、聖人存而不レ論」

【以二六合一爲レ家】イリクヲモッテカスル天地四方を家とするは、天下を一統するをいふ。（賈誼、過秦論「——、殽函爲レ宮」）

【六気】リク〇陰・陽・風・雨・晦・明。左、昭、元「天有二——一」〇人の六つの氣の好・惡・喜・怒・哀・樂（管子、注）（唐書、裴度傳「夫顧安之道、當レ順二適時候一、則——平和、萬壽可レ保」

【六紀】リク紀は理、人道を正し齊ふる六つの理。諸父・兄弟・族人・諸舅・師長・朋友（白虎通、三綱六紀）

【六義】リク詩の六義、風・賦・比・興・雅・頌の稱（毛詩、序）‖六詩。

【六儀】リク〇祭祀・賓客・朝廷・喪紀・軍旅・田馬の六事に關する儀容。（周禮、地官「保氏養二國子一以レ道、教二之以一——一」）〇唐代の官名。（唐書、職官志「——六人、掌下教二九御四儀一、舉二其屬一以贊二后之禮儀一上）

【六畜】リク六つの家畜。牛・馬・羊・雞・犬・豕。左、僖、十九「古者——不レ相二爲用一」

【六禽】リク六種のけもの。麋・鹿・熊・羆・野豕・兎（周禮、庖人）雁・鶉・鶉・雉・鳩・鴿。又、魚・豚・猪・鼈・雉・雁（紺珠）

【六郷】リク周の制度。王畿郊内にありて、大司徒の掌る所。比（五家）閭（五比）族（四閭）黨（五族）州（五黨）鄉（五州）の稱（周禮、地官、小司徒）（紺珠「百里内爲二——一、外爲二六遂一」）

【六遂】リク六つの道に遵ふあしき行。左、隱、三「賤妨レ貴、少陵レ長、遠間レ親、新間レ舊、小加レ大、淫破レ義、所謂——也」

【六宮】リク宮中のおくむき、大奥。（周禮、内宰「内宰以二陰禮一教二——一也」鄭注「皇后正二六寢一、燕寢五、是爲二——一、夫人以下分居焉」）

【六極】リク〇六つの大不吉なる事、凶短折・疾・憂・貧・惡・弱の稱（書、洪範）〇上下四方の稱。（莊、天運「天有二——五常一、帝王順レ之則治」

【六軍】リク天子の軍、七萬五千人の稱。（周禮、地官、注「一軍萬二千五百人」周制天子——、諸侯大國三軍」）‖六師。

【六花】リク雪の異名。（歐陽修詩「朝霰九霄間、雜糅二——一散」‖六出。六出を見よ。

【六科】リク士を擧ぐる試験科目。（紺珠「——、秀才・明經・進士・明法・明書・明算」又「——、文章典麗・節操方正・法理該通・節用愛民・剛方毅直・智勇絶倫」）

【六博簺】ロクハクサイ宋の遠準の作りし六つの後侮の戒。（紺珠「宋遠準——官行二私曲一、失時悔、爲不レ儉レ用、貧時悔、藝不二少學一、過時悔、見レ事不レ學、用時悔、醉發二狂言一、醒時悔、安不二謙讓一、病時悔」）

【六官】リク周代中央政府の天・地・春・夏・秋・冬の六部に分け、治（天官）教（地官）禮（春官）兵（夏官）刑（秋官）事（冬官）を分掌せしめたる總稱（周禮）‖六卿。六典參看。

【六卿】リク周代の六大臣。（冢宰・司徒・宗伯・司馬・司寇・司空（周禮）宋代は、右師・大司馬・司徒・左師・司城・大司寇。‖六官。

【六經】リク聖人の手に成りし易・書・詩・春秋・禮・樂記。（樂記は秦火に亡び、五經のみ存す（漢書、武帝紀贊）

【六經注レ我】リクケイヲチュウスル六經はすべてわが心の理を說明したるものなりとの意。（宋史、陸九淵傳「——、非注二六經一、學苟知レ本、六經皆我注脚」）

【六藝】リク〇六種の必修、即ち禮・樂・射・御・書・數をいふ（周禮、地官、大司徒）史、孔子世家「弟子三千人、身通二——一者、七十有二人」〇易・禮・樂・詩・書・春秋。史、伯夷傳「夫學者載籍極博、猶考二信於——一」‖六經。

【六月秋】リクゲツシュウ陰暦六月の大暑中も秋の如く涼しき心地する。（劉克莊詩「旅外蒼茫——」）

【六月氷】リクゲツヒョウ暑氣の候にある氷。（征記「陵室氷井、有二——一」）

【六五】リクゴ易卦にて、下より數へて五つ目の陰爻。

【六工】リクコウ六材を用ひて物を作る工

人。曲禮「天子——、曰土工・金工・石工・木工・獣工・草工、典二制六材一」六材は——の使用する六種の材料。

【六功】リク　六種のてがら。緒琺「——、王功曰レ勤、國功曰レ功、民功曰レ庸、事功曰レ勞、治功曰レ力、戰功曰レ多」

【六國】リクコク　春秋戰國の時の齊・楚・燕・韓・魏・趙の六諸侯の國。戰國策「——從親以擯レ秦」宋之問詩「——兵同合、七雄孰未レ分」七雄は秦を加へし稱。

【六穀】リクコク　六種の穀物、稻(稻)・黍・稷・麥・菽・麻の稱。周禮、膳夫「凡王之饗食、用二——一」

【六材】リクザイ　器をつくる六種の材料。六工を見よ。

【六曹】リクソウ　六官に同じ。宋史「神宗元豐五年改二唐六典一、建二——之官一、一謂二吏部・戶部・禮部・兵部・刑部・工部六尚書一也」

【六三】リクサン　易卦にて、下より數へて三つ目の陰爻。

【六二】リクジ　易卦にて、下より數へて二つ目の陰爻。

【六師】リクシ　天子の軍。詩、大雅「周王于邁、——及レ之」＝六軍。

【六詩】リクシ　詩の六體、風・賦・比・興・雅・頌。漢書、藝文志「國子者卿大夫之子弟也、皆學二——一」＝六義。

【六辭】リクジ　六つの辭令、祠辭・命辭・誄辭・會辭・盟辭・謀辭。周禮「大作二——一、以通二上下親疎遠近一」

【六獸】リクジュウ　六つのけもの、麋・鹿・熊・麗・野豕・兎（周禮、庖人、注）

【六晉】リクシン　戰國の時の晉の六卿、韓氏・魏氏・趙氏・范氏・中行氏・智氏の稱。戰國策「昔者——之時、智氏最強」

【六親】リクシン　父・母・兄・弟・妻・子の稱（管子、牧民、注）一說、父・子・從父昆弟・從祖昆弟・曾祖昆弟・族昆弟をいふ。又、一說、父・子・兄・弟・夫・婦の親子「——不レ和、有二孝慈一」漢書、禮樂志「——和睦」＝六戚。

【六情】リクジョウ　喜・怒・哀・樂・愛・惡の六つの情。詩經、序「——謂二子中二百物變一字外一」

【六出】リクシュツ　雪の異名。雪に六角あり、故にいふ。韓詩外傳「草木花、多五出、雪花獨——、其數屬レ陰也」＝六花・六出公。

【六順】リクジュン　上にしたがひ事ふる六つの道。六逆の反對。左、隱、三「君義、臣行、父慈、子孝、兄愛、弟敬、所レ謂——一也」

【六書】リクショ　〇漢字の構成に關する六つの法。象形（日月魚鳥の類）指事（上下の類）會意（日月を合せて明とする類）形聲・轉注・假借（說文解字）〇六體の文字。漢書、藝文志「——者、古文（科斗の書）奇字・篆書・隸書（今の楷書）繆篆・蟲書」＝六體。

【六職】リクショク　人の六つの天職、王公・士大夫・百工・商旅・農夫・婦功（紡績）

【六遂】リクスイ　周の制、王國百里の外に在りて、遠人の掌る所、鄙（五家）里（五鄙）鄙（四里）鄙（五鄙）縣（五縣）遂（五縣）の稱（周禮、地官、小司徒）

【六瑞】リクズイ　王及び公侯伯子男の五等爵の諸侯のわりふの玉。周禮、太宗伯「以レ玉作二——一以等二邦國一」

【六牲】リクセイ　六つのいけにへ、馬・牛・羊・豕・犬・雞。周禮、天官、膳夫「凡王之饋食用二六穀一、膳用二——一」

【六藏】リクゾウ　父・母・兄・弟・妻・子。呂覽、季春、論人「論レ人者、又必以二——一四隣一——六親也、四隣相匿、而謁レ長戚レ短、何謂二——一、父母・兄弟・妻子、何謂二四隣一、交友・故舊・邑里・門郭」＝六親。

【六緯】リクイ　詩經・書經・易經・春秋・禮記・樂記の總稱、帝王儀、注「——雖レ存、固聖人之糟粕」＝六經。

【六尺之孤】ロクシャクノコ　十四五歲なるみなしご、一尺は二歲半。論、泰伯「可二以託一二——一」

【六宗】リクソウ　六種の尊び祭るべきもの、四時・寒暑・日・月・星・水旱（雲・雨典）實透は、天宗は、日・月・星、地宗は、河・海・岱とす。孟康は星・辰・風伯・雨師・司中・司命とす。

【六韜】リクトウ　六書に同じ。周禮「五曰二——一」疏、「書有二——一、形聲實多」六書を見よ。

【六輔三略】リクホサンリャク　兵書の名。六輔は太公望撰と稱す、文輔・武輔・龍輔・虎輔・豹輔・犬輔すべて六十篇。三略は上中下三卷、黃石公撰と傳ふれども、二書共に後世の僞作。＝輔略。

【六朝】リクチョウ　三國の呉・東晉・宋・齊・梁・陳の六國。羅鄴詩「——空認舊江山」宋史、張守傳、乾隆白二——一爲二帝王都一」疏には一名建業、又金陵・秣陵ともいふ、明の南京應天府、今の江蘇省江寧府。

【六帖】リクジョウ　書名、白居易編す。淺學新「白居易、取二凡有精識、可レ備二詞藻一者一、采用二事出各以二門目一類聚、號レ曰二——一」

【六天】リクテン　天の稱、天に蒼・炎（赤）白・黑・黃の五帝あり、之に天帝を加へて——といふ、漢儒の說（禮、郊特牲、疏）

【六典】リクテン　〇周代、國家を治むる六種の國法、典は經なり、法なり、治典・教典・禮典・政典・刑典・事典の周禮、天官「建二邦之一——、以佐二王治一邦國一」〇禮記の大宰・大宗・大史・大祝・大士・大卜。〇唐の社令卿庶を記せる書。宋史「唐明皇——三十卷」又「敎二老・振二幼・救レ疾・恤レ孤・賜二貴寵一、任二失職一」九個上」

【六德】リクトク　人の守るべき六つの德、智・仁・聖・義・忠・和（周禮、地官、

大司徒）又、禮・仁・信・義・勇・智（緒珠）

【六馬】バク　天子の馬車に附けたる六頭の馬。書、五子之歌「予臨二兆民一、懍乎若二朽索之馭二六一一」荀、勧學「伯牙鼓レ琴而六仰秣」

【六博】バクバク　すごろくの類。戦國齊策「駆レ雞走レ犬、六一蹋鞠」日蹴鞠。

【六幕】バクバク　天地四方の稱、幕は覆ふ義。（漢書、禮樂志「紛二紜六一合一」）黄庭堅詩「屯雲擘二六一一新月吐二半規一」日六合。

【六八】リクヤ　易の卦に於ける陰の數。漢書、注「七九陽數、六一陰數」

【六法】バクハウ　〇六種の書法。古書品録序「一一者何、一、氣韻生動、二、骨法用筆、三、應レ物象レ形、四、隨レ類賦レ彩、五、經二營位置一、六、傳移模寫是也。〇規・矩・權・衡・準・繩（新論）〇（ロクホウ）獄法・刑法・民法・商法・刑事訴訟法・民事訴訟法。

【六飛】リクヒ　天子の車を引く六頭の馬、迅きこと飛ぶが如きによりていふ。漢書、賈誼傳「今陛下駕二一六一、馳二不測山一」日六鶴。

【六轡】リクヒ　馭馬に附けたる六つの綱。詩、秦風、駟鐵「駟鐵孔阜、六一在レ手」

【六府】リクフ　〇水・火・金・木・土・穀（書、大禹謨）〇土木器具等を司る六つの役所。曲禮「天子之六一曰二司土・司木・司水・司草・司器・司貨一」〇人の身内の機關。胃・大腸・小腸・膀胱・三焦。周禮、春官、天府、疏「在二人身中一飲食所レ聚、謂二之六一一」日六腑。

【六服】リクフク　王畿の外圍に在りて各五百里を一區とする地域六つの稱。侯服・甸服・男服・采服・衛服・蠻服。周官、「一一羣辟、罔レ不レ承レ德」

【六穀】リクコク　生・穀・黄・睦・實・畜の權力。齊語「管子曰、聖王之治二天下一也（中略）慎用二其六一一焉」

【六米】リクマイ　六種の穀物。緒珠「一一、黍・稷・粉・粱・菰（マコモ）・大豆」

【六味】リクミ　〇苦・酸・甘・辛・鹹・淡の六つの味。〇醎（ロク）・乳・酪・生酥・熟酥・醍醐・淡。

【六夢】リクム　六種のゆめ。周禮、春官、占夢「以二日月星辰一、占二一之吉凶一、一曰正夢、二曰噩夢（悪夢）三曰思夢、四曰寤夢、五曰喜夢、六曰懼夢」

【六六藝】リクリクゲイ　山に三十六の峯あるをいふ。地異、諸山三十六峯賦「未レ觀二奇峯之六六一」

【六六鱗】リクリクリン　鯉の異名。其の鱗、一列に三十六枚あるによりていふ。埤雅「鯉三十六鱗、具二六六之數一」

【六律】リクリツ　十二律中の陽に屬する六つの音、黄鐘・大蔟（タイソウ）・姑洗・蕤賓（スヰヒン）・夷則・無射の稱。禮、禮運「五聲一一十二管」

【六呂】リクリョ　十二律中の陰聲に屬する六種の音、夾鐘・仲呂・林鐘・南呂・應鐘・大呂。六律參看。

【六龍】リクリュウ　天子の御車につく六頭の馬、龍は八尺の馬。易、乾卦「時乘二一一一以御レ天」轉じて直ちに天子の車駕をいふ。李白詩「一一回幸萬人歡」日六馬・六飛。

【六禮】リクライ　〇六つの大切なる禮、冠禮・昏禮・喪禮・祭禮・鄉飲酒禮・相見禮。禮、王制「司徒脩二一一、以節民性」〇婚姻の六つの禮。文中子、事君「娶レ妻必具二一一」注「納采・問名・納吉・納徴・請期・親迎」

【六王】リクワウ　戰國の六國の王。史、始皇紀「一一成伏二其辜一、天下大定」

【六么】リクヨウ　唐代の樂曲の名。康熙字典「一一、曲名、琵琶錄、綠腰卽錄要也、本自二樂工一進レ卽、上令レ錄二出要者一、乃以爲レ名、後轉呼二綠腰一、又訛爲二一一一也、樂書、琵琶卽有二一一、唐僧善本彈二一一曲一下撥二一聲一、如二雷發一、妙絶入レ神。白居易琵琶引、先爲二急弦一後一一」

【六衙府】ロクエフ　國古の左近衛府・右近衛府・左衛門府・右衛門府・左兵衛府・右兵衛府の稱。

【六界】ロクカイ　佛六種の境界。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の稱。

【六歌仙】ロクカセン　國名高き歌よみ六人の稱。在原業平・僧正遍照・喜撰法師・大伴黒主・文屋康秀・小野小町。

【六國史】ロクコクシ　國六種の史書の總稱。日本書紀・續日本紀・日本後紀・續日本後紀・文德實錄・三代實錄。

【六根】ロクコン　佛眼・耳・鼻・舌・心・意の六つの稱。法華經料注「以二六識一換二六塵一、稱染一一」

【六根清淨】ロクコンシャウジャウ　前條の六根に染る心の作用を六識といひ、六識より生ずる色・聲・香・味・觸・法の欲性を六塵といひ、六塵の執著之證ち去るを——といふ。

【六齋日】ロクサイニチ　佛一月中忌み愼むべき六つの日、陰曆の八日・十四日・十五日・二十三日・二十九日・三十日の稱。この日、鬼神勢力を得て人命を奪ふといふ。阿含經「若有二一一持八戒、二一日一夜、如是可レ計」

【六塵】ロクヂン　古代、相見る時の六つの贈物、摯は贄に通ず。諸侯は皮帛、卿は羔、大夫は雁、士は雉、庶人は鶩、商工は雞（周禮）

【六時】ロクジ　佛一晝夜を六つの時に分つ、晨朝・日中・日沒・初夜・中夜・後夜。阿彌陀經「晝夜一一而雨二曼陀羅華一」

【六識】ロクシキ　六根清淨を見よ。

【六十六部】ロクジフロクブ　國六十六ヶ國の寺に詣でて一部づつの法華經を納むる義。轉じて諸國行脚の僧をいふ。日雲水・六部。

【六尺】ロクシャク　〇國昔時、貴人の駕籠をかきしもの、かごかき。日莊尺。〇酒を造る桶。〇酒家の酒造の事に

あづかる下僕。

【六字名號】ロクジノミョウゴウ 仏 浄土宗の念仏に唱ふる南無阿彌陀佛ナムアミダブツの六字の稱、南無は梵語、歸命と譯し、後生を願ふ義。

【六趣】ロクシュ 佛 衆生が業によりて趣き住むところを六處に分ちたる者。地獄趣・餓鬼趣・畜生趣・修羅趣・人間趣・天上趣。法華經「盡見二彼土一一衆生一」＝六道。

【六正刑】ロクセイケイ 國 武家時代の六種の本刑。禁獄・追放・流罪・斬罪・梟首・磔の稱。

【六祖】ロクソ ○禪家にて宗派の未だ生ぜざる間の六人の祖師、達磨・慧可・僧璨・道信・弘忍・慧能。○特に慧能の稱。正宗記「一一慧能大師、姓盧氏」

【六賊】ロクゾク 佛 智慧を害し、功德をそこなふ六つの賓物。色・聲・香・味・觸・法。楞嚴經「眼耳鼻舌及與二身心一六爲二賊媒一自劫二家寶一」

【六大】ロクダイ 佛 地大・水大・火大・風大・空大・識大。前五大は理にして胎藏界に屬し、識大は智にして金剛界に屬す。

【六道】ロクドウ 佛 ○地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上道の六世界。法華經「見二一一衆生一貧窮无二福慧一」＝六趣。○死者一一の旅費として錢六文を棺に入るるを一一錢といふ。＝紙錢・香奠錢。

【六道能化】ロクダウノウケ 佛 地藏の稱。

【六道輪廻】ロクダウリンネ 佛 善惡の應報により て、地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天上道の六道に流轉するをいふ。翻譯名義集「三世猶二環旋一六道喩如二輪轉一」

【六塵】ロクジン 佛 種種の煩惱を生じ、心を汚す六つの物。眼・耳・鼻・舌・身・意の六根より生ずる欲をいふ。金剛經、注「於二此一一起二憎愛心一」

【六通】ロクツウ 佛 六種の通力、天眼通・天耳通・他心通・宿命通・神足通・漏盡通。法華經「爲二世所二恭敬一如二一一羅漢一」＝六神通。

【六入】ロクニフ 佛 眼・耳・鼻・舌・身・意の六つ。楞嚴經「眼入レ色、耳入レ聲、鼻入レ香、舌入レ味、身入レ觸、意入レ法、皆虛妄」＝六根。

【六如】ロクジョ 六塵に同じ。

【六方】ロクハウ 東・西・南・北・上・下の稱。彌陀經科注「問一一諸佛、爲二淨土佛一爲二穢土佛一」＝六合。

【六波羅密】ロクハラミツ 佛 善き果報を得べき六つの行、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の稱。波羅蜜は梵語、到彼岸と譯す。法華經「爲二諸菩薩一說二一一」

【六部】ロクブ ○支那の中央政府の吏部・戶部・禮部・兵部・刑部・工部の稱。今は無し。○國 六十六部の略稱。

【六附】ロクブ 大腸・小腸・膀胱・胃・膽・三焦の書、整庵、疏「心爲二五藏之主一、腹爲二一一之總一」＝六府。

【六輪】ロクリン 佛 人世一切の諸法の常ならざるに喩ふ。金剛經「一切有爲法、如二夢幻泡影一如レ露亦如レ電、應レ作二如レ是觀一」＝六如。

【六欲】ロクヨク 六根に生ずる慾情。＝六慾。

【分】 ケイ 廻

○音調を強むる爲めに添へる助字。○句の間に用ひて、語のしばらく頓りて、意氣の再びあがる勢を示す。漢武帝、秋風辭「歡樂極一哀情多」○乎の如く用ふ。老子「悅一怡一」

【共】 四 書

㊀ キョウ・グ　㊁ キョウ・グ　㊂ キョウ

圖 多 來

㊀ともに、おなじ(同)みな(皆)ともにす。史、張釋之傳「法者所與二天下一一也」おほやけにす(公)○もろもろ、おほし(衆)㊁うやうやし。＝恭。左、昭、七「三命益一」○つつしむ(謹)○給する、そなふ。＝供、そなへもの。㊂むかふ(向)論、爲政「如レ北辰居二其所一而衆星一之」○こまぬく。＝拱。○圖 とも、ども、雖の義「候へ

同訓異語 「一」

共・倶・與・偕の別は倶(人部八畫)の條を見よ。

【共有】キョウイウ ともにもつ、衆人が共同して所有する。

【共給】キョウキフ 需用にそなへてがふ。左、僖、四「敢不二一一」＝供給。

【共工】キョウコウ ○上古、水を治めし官。書、堯典「都一一、方鳩僝レ功」○百工の事を掌りし官。漢書、百官公卿表「垂作二一一一利二器用一」

【共計】キョウケイ 合せ數へる。＝合計。

【共儉】キョウケン つつしみて儉約する。禮記「一一而好レ禮、宜レ歐二小雅一」又、「一一莊敬、禮教也」＝恭儉。

【共坐】キョウザ ともにすわる。

【共産主義】キョウサンシュギ 私有權を消滅して、社會の總べての財產を社會を組織する各人の共有とし、資本家・勞働者を平等ならしめんとする主義。＝社會主義。

【共酲】キョウテイ ともに酒を酌む。高啓詩「酒熟誰一一」＝同酲。

【共進會】キョウシンクワイ 相ともに進歩を謀る爲め各自の製作品等を持ち寄りて優劣を比較し、廣ねて公衆に觀覽せしむる會。

【共濟】キョウサイ 共同してつかさどる。晉書、職官志「中舍人四人、咸寧四年置、以二舍人才學美者一爲レ之、與二中庶子一一一文翰一」

【共承】キョウショウ 謹しく受く。史記「一一

嘉惠」
【共張】キョウチョウ 饗應のそなへつけ。漢書「無二一一餘役之勞一」＝供張・供帳。
【共通】キョウツウ どちらにもすべてに通ずる。
【共同】キョウドウ 〇人と共にする。＝合同。〇總計・共合・共計。
【共犯】キョウハン 二人以上の者が相謀りて罪をおかす。
【共謀】キョウボウ ともにはかる、ぐるになる。＝通謀。
【共讐】キョウシュウ あひむつぶ。
【共養】キョウヨウ そなへやしなふ、養成する。漢書、律歷志「―二三德一爲レ善」＝供養。
【共用】キョウヨウ 共同して用ふる「一一粒」
【共立】キョウリツ 〇ともに立ちて居る。＝並經。漢書「遠儒二賢書一一二於側一」〇二人以上の者が協力して設くる。
【共和】キョウワ 〇協議して行ふ政治。史、周紀「周公・召公、二相行レ政、號曰二一一一」〇國號の名。國家の主權、人民に在りて、君主を立てず、大統領を選擧して政を行はしむる政體。＝民主政體。

【兵】 ヘイ ヒョウ 匣

〇つはもの。はもの（武器）〇ものゝふ（軍人・戰士）左、昭十四「簡二上國之一」兵器以を執りて我ヲに從ふ者。「精一」〇いくさ（戰爭）「弭一」〇あだ（寇）〇敵を禦つ、きる（斬）こころす（殺）左、定十「士一之」
【兵威】ヘイイ 軍の勢。＝兵勢。
【兵員】ヘイイン 兵士の人數。
【兵營】ヘイエイ 軍隊の屯する所。＝屯營・軍陣・陣營。
【兵衛】ヘイエイ 〇守護のつはもの。戰國策「居處一一甚殷」＝護衞兵。〇ヱヒヤウ 國古、兵衛府に屬して、宮門の守衛行幸の行列などを司りしもの。
【兵役】ヘイエキ 國民の義務として、兵士となり、軍事に服するをいふ。
【兵器】ヘイキ 兵器を總めて用ひず、敵を止むる義。新序「一一而不レ動」
【兵刑】ヘイケイ 軍を引き止めて設ける史、周本紀「王一一郊」
【兵糧】ヘイリョウ 酒食を以て兵士を養ふ。史、孫子傳「闔廬曰、可二以小試一一一乎」
【兵家】ヘイカ 兵法に明かなる人、また其の學派（漢書、藝文志）
【兵械】ヘイカイ 戰爭に用ふる道具。史、律書「六律爲二萬事根本一一、其於二一一尤所レ重」＝武器・兵仗・兵器。
【兵革】ヘイカク 兵は刀戈の類、革は甲冑の屬、轉じていくさ。孟、公孫丑「威二天下一不レ以二一一之利一」＝兵甲。
【兵學】ヘイガク 戰爭に關する學問、軍事上の學問。
【兵甲】ヘイコウ 兵は矛戟、甲は鎧冑。轉じて戰爭の義とす。又、兵士。孟、離婁「城郭不レ完、一一不レ多、非二國之災一也」＝兵革。
【兵燹】ヘイセン いくさぶね。列仙傳「大業二一一、欲レ製二樓船一」＝兵船・軍艦。
【兵器】ヘイキ 兵械に同じ。六韜、龍韜「酒二練一一、製二弩非法一」
【兵戈】ヘイカ ほこ。轉じて戰爭の義とす。唐、杜甫詩「飛席垂レ涕泣、一一示レ不レ反」＝干戈。
【兵戰】ヘイセン やいばとほこ。史記「將二一一一而論二兵法一多矣」
【兵權】ヘイケン 兵馬の權力。魏志「攻取者先二一一一」
【兵庫】ヘイコ 武器を納るるくら。吳越春秋「實二倉廩一治二一一一」＝武庫。
【兵事】ヘイジ 兵力を以てあらそふ。＝兵戰。
【兵書】ヘイショ 〇兵事を掌る官吏。事物紀原「漢公府掾史有二一一一主二兵事一」〇國海軍下士官の一階級。陸軍の工曹に相當す。
【兵士】ヘイシ つはもの。＝士卒・戰士。
【兵刃】ヘイジン 軍用のはもの、刀劍。孟、梁惠王「一一既接、棄レ甲曳レ兵而走」
【兵主】ヘイシュ 將をいふ。管子、小匡「凡一一者、必先審二知地圖一」
【兵術】ヘイジュツ 戰爭の術。北史「李老孔丘之才智、呂望孫武之一一」＝兵法。
【兵書】ヘイショ 兵學の書物。唐書、藝文志「師曠二一一一萬篇一」＝軍書・兵法書。
【兵衆】ヘイシュウ 〇兵士のかず。＝兵數。〇兵士と兵器と。
【兵制】ヘイセイ 兵備に關する制度。
【兵勢】ヘイセイ 兵戰に同じ。
【兵錄】ヘイロク 兵卒の數を記載する帳簿。續世說「通考「嘉靖八年、往事上天下一一、僅九十七萬」
【兵船】ヘイセン いくさぶね。舊唐書「開元上更請二一一一」＝軍艦・戰艦・兵艦。
【兵隊】ヘイタイ いくさびと。我は野火。宋史、神宗紀「命二樞密副使一一一者經レ畧」＝兵火。
【兵隊】ヘイタイ 〇兵士の隊伍。〇轉じて兵士。
【兵站】ヘイタン いくさのいとぐち。＝戰源。
【兵團】ヘイダン 軍隊の組織。曾鞏、文「一一之制、以二訓練一爲レ事」
【兵站部】ヘイタンブ 軍隊の後方に在りて軍用品の出納を取扱ふ所。

【兵伏】ヘイフク つはもの、剣戟の総称、いくさ道具。‖兵械。

【兵連禍結】ヘイレンカケツ 戦の久しく続きて、わざはひの絶けざる義。漢書、匈奴傳「——、三十餘年」

【兵屯】ヘイトン 軍兵のたむろ。蘇軾文「承平都國滅——」

【兵馬】ヘイバ 武器と軍馬と。轉じて軍事、又、戦争の義とす。

【兵者詭道也】ヘイハキドウナリ 兵を用ふるには、正道のみを履まずして色色の奇計を用ふ、詭は正しからざるなり。孫子、始計「——、故能而示之不能、用而示之不用」

【兵者凶器】ヘイハキョウキ 武器は不吉の道具、戦争は人をそこなふ悪事なるをいふ。越語「范蠡曰、勇者逆德也、——也」

【兵不厭ノ詐】ヘイフエンノサ 軍事上には敵をいつはりあざむくをも咎めず。韓非子「兵陣之間、不ノ厭ニ詐偽ニ」

【兵貴ニ神速ニ】ヘイハシンソクヲタフト 用兵は迅速を貴ぶ義。魏志、郭嘉傳「太祖將ノ襲ニ袁尚ニ嘉言、——」

【兵閒ニ捷速ニ】ヘイハセツソクニ 兵を用ふるは拙くとも速かなるを貴ぶ。孫子、作戦「——、未ノ覩ニ巧之久ニ也」

【兵猶ノ火】ヘイユホノ 兵事は常に用心すべき喩。左、襄四「欒仲曰、夫——也、弗ノ戒將ニ自焚ニ也」

【兵法】ヘイホフ 戦をする方法。事物紀原「——始ニ於黄帝ニ」

【兵者不祥之器】ヘイシャフショウノキ 兵は人を害ふ故にいふ。不祥は、不吉。老子「——、非ニ君子之器ニ」

【兵備】ヘイビ いくさのそなへ、戦争の用意。‖軍備。

【兵部】ヘイブ ○兵事を掌る官名。事物紀原「周禮、夏官司馬之職也（中略）後周始曰ニ——ニ」○國古、兵事を司りし役所。‖兵部省。

【兵舞】ヘイブ 武の楽。周禮「——用ニ於山川ニ有ニ捍禦之義ニ」

【兵勇】ヘイユウ 國兵卒。

【兵亂】ヘイラン 戦争の爲めに世がみだれる。楚語「命足ニ以禦ニ——ニ」‖戦乱。

【兵略】ヘイリャク いくさのはかりごと。唐書「嘉落有ニ大志ニ通ニ——ニ」‖軍略。

【兵衛府】ヘエフ 國古、兵部を指揮して、宮門の守衛、行幸の行列などの事を掌りし役所、左兵衛、右兵衛の二府を置く。

【兵粮】ヒョウロウ 兵士の食ふかて、軍隊の糧食、粮は糧。‖兵食。

【兵粮攻】ヒョウロウノセメ 國敵を圍みて糧食を運び入る道を絶ち飢渇に陥れて勝を制する戦術。轉じて衣食の道を絶ちて人を困らすにいふ。

【貝】 六 畫

貝（寶部七畫の貝に同じ）の略字。

【其】 ㊀キ ㊁キ 國支 ‖は古字

㊀その、それ、物を指すの辭。易、繫辭「一旨遠、一辭文」○語意を強める爲め添へる無意味の字。詩、周南「灼灼一華」○無意味の助字。詩、小雅「夜如何一」○將の字と同じ意味に用ふ。易、否卦「一亡一亡」㊁無意味の助字。詩、檜風「彼一之子」

同訓異字 ソノ・其・夫の別は夫（大部一畫）の條を見よ。

【知ニ其雄ニ守ニ其雌ニ】ソノユウヲシリテソノメスヲマモル 雄は剛、雌は柔なり、柔弱の道を守りて、勝を求めざる喩。老子「——、爲ニ天下谿ニ」

【得ニ其寃ニ】ソノジツヲエル 其の人の意中を得るをいふ。北魏書、寇儁勝傳「拙ニ——」

【識ニ其一ニ不ノ知ニ其二ニ】ソノイツヲシリテソノニヲシラズ 事理の一端を知るも其の他を知らざるにいふ（莊、天地）

【爭ニ其吭ニ】ソノコウヲアラソフ 人命をたつ。韓愈文「郭爲ニ不順ニ往——」

【拉ニ其肮ニ捌ニ其脊ニ】ソノカウヲヒシギソノセヲサク 事の要所をおさへる喩。肮はのどぶえ。史、劉敬傳「夫與ノ人鬪不ノ搤ニ其肮ニ捌ニ其脊ニ未ノ能ノ全ニ其勝ニ也」‖批ノ亢搤ノ虚。

【其醜不ノ億】ソノシュウオクセズ 數の多きをいふ、醜は數。詩、大雅、文王「商之孫子、——」

【其愛一也】ソノアイイツナリ 其のはかる所の道の同一なる義。孟、離婁「先聖後聖——」

【其歸一也】ソノキスルトコロイツナリ 其の隠著する所は一様なり（史、儒林傳）

【非ニ其鬼ニ而祭之諂也】ソノキニアラズシテコレヲマツルハヘツラヒナリ 吾等の祭るべき祖先にあらざるものを祭るは諂にへつらふものなり。孔子の語（論、爲政）

【入ニ其國ニ者從ニ其俗ニ】ソノクニニイルモノハソノゾクニシタガフ 其の國境に入れば、其の土地の風俗に從ふべし。淮南、齊俗「——、入ニ其家ニ者避ニ其諱ニ」曲禮「入ノ竟而問ノ禁、入ノ國而問ノ俗、入ノ門而問ノ諱」に同じ。

【河漢其言ニ】カカンソノゲンニ 言論の旨意を漠然としてとりとめなく、測知するに難からしむる義。莊、逍遙遊「吾驚ニ怖其言ニ猶ニ河漢而無ニ極也」

【金玉其質】キンギョクソノシツ 美質をいふ。晉書、顧榮傳「陸士光貞正清貴、——」

【二三其德ニ】ソノトクヲニサンス 其の心の徳を一にせず。詩、衞風、氓「士也罔ノ極、——」

【格ニ其非心ニ】ソノヒシンヲタダス 其の不善の心を正す。書、冏命「——、傅ニ克紹ニ先烈ニ孟、離婁「惟大人爲ニ能格ニ君心之非ニ」

【伸ニ出ニ其右ニ】ソノミギヲノバス 右は上、勝めて勝れて及ぶものなきにいふ。史、

田叔傳「漢廷諸臣、無下能出二其右一者上」【其旨遠】トオシ　其の旨意の深遠なる義。易、繫辭「其稱レ名也小、其取レ類也大、——、其辭文、其言曲而中」【不レ揣二其本一而齊二其末一】メンセヌトハカラカヒトシ　其の根本を究めずして、徒に其の末にのみ齊せるの非なるをいふ。孟、告子「——、方寸之木、可レ使レ高二於岑樓一」【即二其兩端一而竭】ソノリョウタンヲタタキツクス　兩端は兩頭の義、終始本末上下精粗を盡して、餘蘊なきをいふ。論子罕「有二鄙夫一問二於我一、空空如也、我——叩レ之」

【具】グ　圖

〇そなへ、そなふ（設備）そなはる（完備）惡錯、論貢粟「以二富積多一而備先レ也」〇そなはり有する。孟、公孫丑「一禮而微」〇わきまふ（辨）〇ともに、俱に通ず。大學「民一衛鄰」〇つぶさに（備）ことごとく（悉）〇のぶる（陳）宋史、梁克家傳「上命條二風俗之弊一」〇うつは（器物）〇心のはたらき（材用・才能器量）李陵、答蘇武書「抱二將相之一」〇器物の件數を計ふるに用ふ。史記「旃席千一」

同訓異義　フサ具・備・供の別は備（人部十畫）の條を見よ。

【具案】グアン　實行の方法をそなへたる考案。【具有】グイウ　そなへもつ。【治レ具】グヲス　〇饗應の用意をする、具は酒食の具。史、張耳陳餘傳「趨其實嬖傳「趨其夫妻一レ一」〇グ國家を治むるすべての制度文物。【具眼】グガン　まなこをそなへる、眼識がある、鑒識に富む。【具官】グクワン　〇官吏の員に備はり居る義。漢書、儒林傳「諸博士、一一待レ問、未レ有二進者一」〇文章の煩雜などの官職を書すべきを略するにいふ語。歐陽修、上三宰相書「月日一一」【具慶】グケイ　父母ともに存するよろこび。晉束皙語誥「一一下父母俱存、重慶下祖父母俱在」二程全書「伊川先生曰、人無二父母一、生日當レ位悲痛、更安忍二設レ酒張レ樂以爲一レ樂、若二一一者一可レ矣」【具獄】グゴク　獄案已に成りて宣告の文の全く具備するをいふ。漢書、于定國傳「抱二其一一一、哭於府上一」【具申】グシン　圖つぶさに申し上げる。【具臣】グシン　聊か其の數に備はるのみの家來。論、先進「今由與レ求也、可レ謂二一一一一」【具象】グシャウ　形象を具する義。‖具體。【具體】グタイ　三公の位に立ちて、國民のともに仰ぎ見る所となる。詩、小雅、節南山「赫赫師尹、民具爾瞻」【具然】グゼン　自ら滿足する貌、自得する貌。荀子「一一欲レ爲二人師一」【具足】グソク　〇十分にそなはりたる。法華經「此大良藥、色香美味、皆悉一一」‖具全・具備。〇圖よろひ、甲冑【具體】グタイ　〇全體を完全にそなへる。孟、公孫丑「舟牛・圭子・顏淵則一レ一而微」聖人たる要素を備へたれども人物が小。〇形・內容ありて感覺し得るもの。抽象の對。‖具象。【具陳】グチン　つぶさにのべる、詳細に陳述する。【具備】グビ　そなはり足る。淮南子「文武一一、動靜中レ儀」‖具足。【具文】グブン　形式のみをそなへたる文面。漢書、宣帝紀「上計簿一一而已」

【典】テン　銑

〇つね（經・常）「五一」みち。詩、大雅「文王之一」〇のり（法）規則。〇儀式・法式。〇ふみ、五帝の書。〇つかさどる（司・主）〇質シを入れて金を借る（質貸）杜甫詩「朝問日日一春衣」〇しきたり、故事「一故」

同訓異義　典は五帝の書、冊（册に同じ）の‖上に在るに從ふ、之を尊閣スルヒタトするなり。【典衣】イン　衣服を質に入れる。字解を見よ。【典雅】ガ　〇しなやかなる貌。王融、謝レ賜二衰竪一雲衣除授、仙裾一一」〇水の屈曲して流るる貌。柳宗元、鈷鉧潭記「其始置レ舟水自レ南奔注、抵二山石一屈折東池、其一一勢峽、盪擊益熱」柳河東集には、典を顚に作る。【典要】エン　〇定りたる法、要は規約。易、繫辭「上下无レ常、剛柔相易、不レ可レ爲二一一一」〇典雅にして頽靡なる義。【典謨】テンボ　取次することを掌る職、謁は名刺。曲禮「問二士之子一曰二能一一一矣、幼曰レ未レ能一レ一也」【典雅】ガ　ただしくみやびやか。典麗にして雅正なり。魏書、胡叟傳「於二讀書籍一、再閱二於目一、皆誦二於口一、好閱レ文、既著爲二一一之辭一」【典籍】テンセキ　典は書經の堯典・舜典、籍は仲虺之誥・湯誥・大誥など。文中子「春秋作而一一絕矣」典謨訓誥參看。【典學】ガク　典は常、常に學問に從事するの義。書、說命「念二終始一典二于學一」【典儀】ギ　のり、法式、典制儀式。後漢書「郎二春秋奏射一備列二一一一」【典憲】ケン　〇天子のうまやを司る官。

隋書、百官志「改二龍殿一曰二一一」〇國左一一は左馬頭おさいの唐名。【典據】テンキョ　ただしくしてよりどころあり。大唐新語「成有二一一」【典訓】テンクン　正しき人道のをしへ。〇後漢書、班昭傳「家二先君之餘寵一、賴二母師之一一」【典刑】テンケイ　〇一定してかはらざる刑罰。書、舜典「象以二一一」＝常刑。〇古來のおきて。詩、大雅「雖レ無二老成人一、尚有二一一」＝舊法。〇定まれるおきて。鄭語「修二一一一以守レ之」＝典要。【典型】テンケイ　常ののり、てほん、型はかた。＝典刑・常刑・典法。【典經】テンケイ　聖人の書。書經、儒林傳、序「雖二逸篇亥一、掇二簡里之一一」＝經典。【典午】テンゴ　〇典は司、午は馬、司馬の官をいふ。潛志、識周傳「一一忽今月四没今、一一者謂二司馬一也」〇晉代の稱、司馬氏なるが故。魏晉雜形、蜆山詩「當塗一一事紛紛、四蜀山川附二霧雲一」【典故】テンコ　典例と故實と。後漢書、東平王蒼傳「慈二愛骨肉一、寡過二一一」【典醫軍】テンイグン　古、軍陣の取りしまりを掌る官の名、監軍の類。【典紀】テンキ　〇國家にて定めたるまつり。國語「凡諸郊宗廟報此五者、國之一一也」〇古、祭祀を掌る官名、周禮の春官の屬。

【典侍】テンジ　國女官の名、内侍の次、正權の二に分つ。【典式】テンシキ　のり、さだめ。漢書、爲二世一一一」【典章】テンショウ　のり、きそく。隋書、牛弘傳「採二百王之損益一、成二一代之一一」＝典制。【典常】テンジョウ　常に守るべき道。書經「率二由一一一、以蕃二王室一」【典證】テンショウ　典故ある證據、よりどころ。魏書、高允傳「允遂著二名字論一甚有二一一」＝典據。【典職】テンショク　職務を掌る。史記「一レ數十年」【典制】テンセイ　のり。史、禮書「經作二一一」＝典章・法制。【典籍】テンセキ　ほん（書物）【典膳】テンゼン　〇天子の膳部を掌る官。唐書、車服志「主膳一一局」〇國宮中の内膳司の判官、天子の食膳を掌る官。【典則】テンソク　のり、さだめ。北史、李諤傳「選レ吏舉レ人、未レ進二一一」＝典法・常法。【典屬國】テンゾクコク　古、夷狄を歸服せしむることを掌る官の名。【典當】テントウ　質を入れて金を借る。後漢書、劉虞傳「一二胡夷一」＝抵當。【典賣】テンバイ　抵當にして賣拂ふ。白居易文「舊宅一一與レ人」【典法】テンプ　のり、てほん。史、禮書「一一不レ傳」＝典則・典刑。

【典範】テンパン　のり、てほん。聞書見聞錄「一一則有二春秋・毛詩・論語・孝經・爾雅等閫一」【典物】テンモツ　しちもつ。＝抵當物。【典墳】テンフン　三皇五帝の書たる三墳五典の略。轉じて古書の義とす。張諤詩「朝綱在二一一」【典鋪】テンポ　しちや（質屋）＝質舖・典當舖・印子舖。【典謨訓誥】テンボクンコウ　古の帝王の定めたる法則にして、書經の篇名とす。堯典・舜典・大禹謨・皐陶謨・伊訓・湯誥などの總稱。【典藥寮】テンヤクリョウ　國古、宮内省に屬せし役所、醫藥の事を掌る、其の長官を典藥頭といふ。【典律】テンリツ　定りたるおきて。後漢書、宋登傳「使下持レ節臨二大學一奏定一一上」【典禮】テンレイ　定まりたる儀式。後漢書、祖沖傳「修二一一」【典廄】テンレイ　ただしくうるはし。南史、王郁傳「文辭一一」【典籍】テンセキ　文章の篇名、魏の文帝の撰、文選に出づ。

八畫

【兼】ケン　畫　圖

〇かね、かぬ、合せ有する。易、繫辭「一三才而兩之」〇かね

て。〇あはす（并）合併する。史、始皇紀「秦并一一諸侯山東三十餘郡こます（倍）〇まさる（勝）論、先進「由也一レ人」〇ふたつながら、本官の外に別の職をもあはせ務むる「一任」〇と（接續）〇國かぬ、雖しとする義。〇かねて、あらかじめの義「一題」

【同訓異義】兼・該・攝・包　〇兼は并也、二つ以上のものを、一つに合す義、本官ありて、他の官を兼ぬるを兼官といふ。〇該は兼也、備也、咸也と註す、十が十、皆兼ね備はるなり、兼該とは、何も殘さず、兼ぬる義。太玄經「萬物兼該」〇攝は總也、兼也、代也、代りて假に兼ぬるなり、攝政と用ふ。左傳「攝レ官承レ乏」〇包はつつむと訓む、廣くひきくるめる義。

【兼愛】ケンアイ　みうちと他人との別なく一樣に愛する、墨翟の首唱せし說。平等の愛。孟、盡心「楊氏一一、是無レ父也」【兼有】ケンユウ　かねたもつ。宣和畫譜「晉二諸家之善一而一一之」＝并有。【兼該】ケンガイ　かねそなふ。晉書、庾蔚傳「先帝神武、算略一一」＝兼備。【兼行】ケンコウ　晝夜いそぎ行く、二日路を一日に行く。孫子、軍爭「倍レ道一レ」

【兼學】ケンガク　種種の學問をかね學ぶ。「八宗ー―」

【兼金】ケンキン　好き黃金。價の普通の金に倍する意。孟、公孫丑「王饋ニ―一百ー」

【兼勤】ケンキン　二つ以上の役をかねつとめる。‖兼務。

【兼官】ケンカン　本官の外に兼ぬる官。

【兼采】ケンサイ　あはせ取る。裴松之、上三國志注ニ表「綴事、以ニ衆色一成レ文、蜜議以ニ一一一爲レ味」任昉、奏レ士表「非ヲ取ニ衆子一無ニ求ニ味于一一一上」‖廣採。

【兼載】ケンサイ　多くの物をあはせのせる。管子「ニ一萬物一」

【兼治】ケンチ　あはせすくふ。易經、注「ニ一萬物一無ニ所遺一也」

【兼人】ケンジンカヌ　人に勝る。一人にて能く二人の事を兼ぬる。宇儀を見よ。

【兼堂】ケンドウ　本職の外に他の務をかねつかさどる。‖兼官。太常職奉ニ天地一兼掌ニ宗廟一」

【兼能】ケンノウ　よわき者を扶せすべる。書、仲虺之誥「ー―レ攻レ昧」

【兼旬】ケンジュン　十日以上にわたる。

【兼職】ケンショク　本職の外にかね勤むる職。

【兼摂】ケンセツ　かねをさめる。二つ以上の事務を一人にて兼ねる。轉、褒服小記、疏「士喪無レ主、不ニ敢使ニ大夫ー一爲ニ主也」‖兼掌。

【兼總】ケンソウ　あはせすべる。公羊傳、春王正月疏「或者是ー―其成功ニ之稱也」

【兼帶】ケンタイ　〇兩職を兼ねて帶ぶる。事文類聚「ー―倚ニ起居注ニ」〇圖一つの物を二人以上にて用ふ、もやひ。

【兼題】ケンダイ　圖前以て出し置く歌の題、豫め課する歌の題。‖宿題。

【兼珍】ケンチン　美味を多くあはせ食ふ。後漢書「自御ニ綈衣ニ食無レ二レー」

【兼程】ケンテイ　常に行く道の倍行く。蹇起詩「有レ意ー―去、飄然ニ謁レ程」‖兼行。

【兼聽】ケンチョウ　衆人の說をかねてきく。漢書「博覽ー―、謀及ニ疏遠一」唐、魏徵傳「帝問ニ爲レ君者、何道而明、何失而暗、徵曰、君所ニ以明ー―也、所ニ以暗一偏信也」

【兼統】トウ　あはせすべる。隋志「事無ニ一一之物」

【兼帶】ケンタイ　一つに合せ呑む。孔叢子「務ニ在ヤー―ニ一天下一之心ヒ」‖幷呑。兼并。

【兼任】ケンニン　二つ以上の官職に兼ね任ぜらるる。

【兼倍】ケンバイ　一倍に同じ。王褒、策問「周官三百、漢位ー―、歷レ魏以降、游惰實繁」

【兼備】ケンビ　かねそなへる。奧、禮書「管仲之家、一ー三歸」

【兼覆】ケンフク　廣くかねおほふ。管子「天之載大、故能ー―萬物」

【兼并】ケンペイ　併に同じ。

十一畫

【糞】フン　糞（次條）に同じ。

十四畫

【糞】フン　圖又、糞に作る

〇こひねがふ（希）左、僖三三「鄭有備矣、不可ー―也」のぞむ（望・欲）こひねがはくは。韓愈、與孟東野書「ー―足下、一來相親也」〇のぞみ、ねがひ。〇古、九州の一、今の直隸・山西及び河南省と滿洲との一部。晉書、地理志「ー―州其地有ニ險有レ易、帝王所レ都、歷以ニ南北關大、分ニ衛以西一爲ニ幷州ー―、燕以北爲ニ薊州ー」

同訓異字　糞・希・倘・幸・庶・幾・庶幾〇糞は欲也、望也と註す、觀と音通ず、倘ひ望む意あり。〇希はまれと訓む、故にまれなることの、出來るやうに願ふなり。〇倘は庶幾也と註す、黎民倘亦有レ利哉の如し、倘の字たふとぶといふ義あり、たふとび願ふ意なり。〇幸は非レ分而得レ之レ幸と註す、幸謂ニ護太子一の如し。〇庶は糞也と註す、幾と同義なり、庶幾と連用しても、一字づつ別ち用ひても同じ、又、庶乎とも連用す。〇庶幾はこひねがはくはとも、ちかしとも訓む、遠きものは及び難き故、望を絶つも、近きは及ぶべし、されば願辭、又は近辭と註すれども、意は一なり。孟子「王庶幾無ニ疾病ー」

【糞願】フンガン　ねがひ、のぞみ。吳志、周魴傳「經年之ー―」

【糞望】フンボウ　のぞむ、のぞみ。‖希望・觀望・糞願。

【糞北】フンホク　糞州の北方、馬の產地。左、昭、四「糞之北土、馬之所レ生」‖北、邊ニ近胡鹿ー一ー一序「伯樂一過ニ一ー之野ニ而馬羣逐空」

十八畫

【顛】テン　顚（頁部十畫）の俗字。

二十畫

【顯】ケン　顯（頁部十畫）に同じ。

冂部

【冂】㊀ケイ・キャウ 青 ㊁ケイ・キャウ 迥

㊀國邑の遠き界。○さき。說文「邑外謂之郊、郊外謂之野、野外謂之林、林外謂之ー」＝同・坰。㊁とほし（遠）○むなし（空）

二畫

【冉】ゼン 琰 冉に同じ

○すすむ（進）行く貌。○毳の甲の緣へ【冉冉】ゼンゼン 行く貌。楚辭、九章「老ー其將レ至兮」＝再冉。

【冃】㊀バウ ㊁ボウ 号 號

㊀こどものかぶりもの、小兒の頭衣。＝帽。㊁おほふ（覆）

三畫

【冋】冂（部首）に同じ、坰（土部五畫）の古字。

【冊】サク 陌 策に通ず、通音 冊は本字 サツ

○爵位封緣を授くる時のみことのり（符命）○かきつけ（簡）ふみ（書籍）○書物を數ふる詞「一ー」○はかりごと（謀略）

【冊拜】サクハイ 勅書を與へて官に任ずる。晉書「前代三公ー、皆設二小會一」【冊命】サクメイ 皇后皇太子などの立つ時、みことのりを書して命ずる。事物紀原「漢儀曰、一曰、策書、策、簡也、今ー即是、蓋始二於漢一、書二命目一、丁卯命作二冊書一、則漢緣二周事一也」＝策命。【冊立】サクリフ 詔勅にて皇太子皇后等を定め立てる。【冊子】サッシ ○とぢほん、帳面。○ほん、書物・草紙。【冊府元龜】サップゲンキ 書名、一千卷、宋の王欽若等敕を奉じて撰す、太平御覽と並びて、宋代類書の冠冕たり、三十一部一千一百四門に分ち歷代君臣の事迹を集錄す。

【册】冊（前項）に同じ。

【冉】ゼン 琰 冉（冂部二畫）に同じ 姓「ー有」「ー伯牛」【冉求】ゼンキウ 周代の魯の人、字は子有、孔門十哲の一人、孔子曰く、千室の邑、百乘の家、求や其の賦を治めしむ可しと。【冉冉】ゼンゼン 行く貌。＝再再。【冉伯牛】ゼンハクギウ 周代の魯の人、名は耕、孔子の弟子、德行の科に列す。【冉雍】ゼンヨウ 周代の魯の人、字は仲弓、孔門十哲の一人、孔子曰く、雍や南面せしむ可しと。

四畫

【冎】クヮ 禡

わかつ（別）人の肉を剔りて其の骨を置く義。

【再】サイ 隊

○ふたたび（二回）ふたたびする。論、公冶長「一斯可矣」○かさぬ（重）○ふたつ（兩）【再練】サイレン 國 再婚に同じ。【再閉】サイヘイ 一旦閉ぢたるものを二度重ねて閉く。【再考】サイカウ 考へなほす、ふたたび考へる。【再歸熱】サイキネツ 傳染性熱病、一週間又五六日を隔てて發熱するが故。＝回歸熱。【再擧】サイキョ ふたたび事をあげる。【再會】サイクワイ ふたたび出あふ、再度めぐりあふ「父子ー」【再建】サイケン ふたたびたてる「本堂ー」【再現】サイゲン ○再び現はるる、又、再び現はす。○心理學上一旦經驗したる表象の再び意識中に現はるるをいふ。【再嚥】サイエン ふたたびかへりみる。漢書、外戚傳「一顧傾二人城一、ー傾二人國一」【再興】サイコウ ふたたびおこる。唐書、高倩傳「憲二前陸贄一、欣二今ー一」【再再】サイサイ 國 たびたび、幾度も幾度も。【再造】サイザウ ○ふたたびつくる、つくりなほす。唐書、郭子儀傳「國家ー一、卿力也」○いきかへる。魏書、高允傳「荷二殿下ー之恩一」【再昨日】サイサクジツ をとつひ、一昨日。【再三】サイサン 兩三回、たびたび。漢書、霍方進傳「ー奏レ事」【再思】サイシ ふたたび考へ思ふ。【再審】サイシン 刑事事件の判決確定の後、疑はしき點ある時、更に上級裁判所をして審理判決せしむるをいふ。【再從兄】サイジュウケイ 年上のまたいとこ。【再從兄弟】サイジュウケイテイ またいとこ、祖父の兄弟の孫。我國にてはいとこの子、父母の兄弟姉妹の孫。【再從弟】サイジュウテイ 年下のまたいとこ。【再宿】サイシュク ふたばんどまり。左、莊、三「一宿爲レ舍、ー一爲レ信、過レ信爲レ次」＝信宿。【再生】サイセイ いきかへる、よみがへる。＝再蘇。【再醮】サイセウ 再嫁の義、二度よめいりする、醮は冠娶の時の飲酒の禮。儀、喪、本命「既嫁從レ夫、夫死從レ子、婦雖ニー一之禮一」

【再選】サイ ふたたび當選する。又、再度選擧する。
【再訂】サイ ふたたび訂正する、二度改め正す。
【再度】サイ ふたたび。＝二回・二度。
【再讀】サイ ふたたびくりかへしてよむ。宋史、張方平傳「方平少頴悟絶倫、凡書皆一閱不ニ再讀一」
【再任】サイ ふたたび官に任ずる。
【再拜】サイ ふたたびおじぎする、丁寧に二拜する。曲禮「ニ稽首一ニ再拜一」＝三拜・九拜。
【再犯】サイ ふたたび罪をおかす。
【再版】サイ 圖同一の書物を再び版に刻む。＝重刻。
【再發】サイ 再びおこる「病氣ニ―」
【再來】サイ ふたたびきたる。史、淮陰侯傳「時者難レ得而易レ失也、時乎時、不ニ―一ニ」

五畫

【冏】ケイ キャウ 青
あきらか（明）ひかる（光）
【冏冏】ケイ 光りかがやく貌。韓愈詩「戲題盧圖南、月旦應ニ―一」
【冏然】ケイ 光り明かなる貌。木華、海賦「ニ―鳥逝」

六畫

【冒】目（門部七畫）の俗字。

七畫

【冑】チウ 宥
○かぶと（首鎧）○圖冑を誤りて甲冑を轉倒して訓む。
解字 冑の下部は月に從ふ、藏覆の義。月に從ふ胄子の胄と同じからず。

【冒】㊀バウ・モウ ㊁バイ・マイ ㊂ボク 號・豪・職
㊀おほふ、おほひ（蔽覆）○をかす（侵犯）むかう見ずに進む「ニ矢石一」○むさぼる（貪）○わたる（渉）○ふれる（觸）○かぶりもの（頭巾）漢書、鳥不ニ―疑傳「著ニ黄一」＝帽。○かうむる（被）○かりに名のる、假稱する。漢書、衛青傳「ニ姓衛氏一」○こねむ、媚に通ず。○いむ（忌）㊁流ニはたいまい、驀の屬。＝玳瑁。㊂むさぼる、犯して取る「貪ニ―一頓」は、古、匈奴單于の太子の名。
解字 冂・目に從ふ、物を以て自ら蔽ひて進む義。
同訓異義 ボウ・侵・犯・干の條を見よ。
【冒行】ボウカウ すすみおこなふ。
【冒險】ボウケン 危險をおかす。
【冒瀆】ボウトク それみにくむ。書、泰誓、「ニ―以惡一レ之」＝媚疾。
【冒襲】ボウシフ 他家のあとをうけつぐ。漢武帝、申ニ侯選人一疏「ニ―ニ良家一」
【冒進】ボウシン みだりにをかしすすむ。韓愈文「ニ―之患生、驕官之刺興」
【冒冠】ボウクワン 老人の頭にかぶる綿帽子。漢書、周勃傳「太后以ニ―一提ニ文帝一」
【冒稱】ボウショウ いつはりて稱すること、氏名などをいつはる。
【冒姓】ボウセイ 他の姓を假稱す。漢書、衛青傳「故ニ―一爲ニ衛氏一」
【冒猜】ボウサイ 原猜をいつはり稱する。
【冒占】ボウセン 他人の物をかし取る。
【冒頭】ボウトウ 言語文章等の前置詞、前口上。
【冒瀆】ボウトク をかしけがす、無禮をする。
【冒認】ボウニン 他人の物を我物とみとめる。
【冒昧】ボウマイ 事理を問はずしてむかう見ずに進む。
【冒名】ボウメイ 名をいつはる（僞名）
【冒頓】ボクトツ 匈奴の單于の名。史、匈奴傳「及ニ―立、攻ニ破月氏一」

八畫

【冕】ク 銑
○おほふ（覆）○殷代の冕ムリ

【冤】ベン 銑
かんむり、大夫以上のかんむり。朝儀祭禮等に着用す、上に織物も て掩へる板を被せたるもの。說文「古黄帝初作ニ―一」
【冕服】ベンフク 貴人の禮式に用ふるかんむりと服と。書、太甲「伊尹以ニ―一奉ニ嗣王一歸ニ于亳一」
【冕旒】ベンリウ 貴人の冕ムリの前後に垂れ下げる珠玉。天子の冕は十有二旒、諸侯は九、上大夫は七、下大夫は五旒。康熙字典、ニ―以ニ絲繩一貫ニ玉、垂ニ冕前後一也」

九畫

【冥】メイ 靑
○かまふ。＝構。○宮中の構結深密の處。詩、鄭風「中ニ―之言、不ニ可一道也」

冖部

【冖】ベキ 錫
○おほふ（覆）巾を以て物を覆ふ。＝羃・幎。○おほひ。○圖わかんむり、字の形が片假名のワに似るが故。

二　畫

【冗】イウ　尤

㊀一豫はうたがふ(狐疑)疑ひて決せざる貌。後漢書、馬援傳「一豫未決」‖猶豫。

【冗】ジョウ　冗(山部二畫)の俗字。

七　畫

【冠】㊀クヮン　㊁クヮン　寒　換

㊀かんむり、かむり、冕弁の總稱。〇とさか(雞)㊁元服のこと。後漢書、輿服志「馬融有二一一一」㊂成年に達する。韓愈、送楊少尹序「初一舉於鄉」〇衆のかしら(首位)まさる(勝)史、滅夫傳「夫名一三軍」〇かんむりを著く。

解字　冖・元・寸に从ふ、首に在り、故に元に从ふ、法制あり、故に寸に从ふ、俗に冠・冠に作るは非。

【冠纓】クヮンエイ　かんむりのひも。史、滑稽傳「淳于髠仰レ天大笑、一一絶纓」

【挂レ冠】クヮンクヮイ　官を辭する義。後漢書、逸萌傳「逸萌字子慶、北海都昌人、王莽殺二其子字一萌謂二友人一曰、三綱絶矣、不レ去禍將レ及レ人、即解レ冠挂二東都城門一、將二家屬一浮二海客一於遼東一」といふ故事に本づく。‖解レ冠。

【彈レ冠】ダンクヮンズ　冠の塵を拂ひて、官の召聘を待つ。漢書、王吉傳「王吉少好レ學明レ經、宣帝時爲二諫大夫一、與二同郡貢禹一爲レ友、世稱王陽在レ位、貢公一レ一、言二其取舍同一也」

【冠蓋相望】クヮンガイサウバウ　行く車の相つぎて絶えざるさま、即ち前車は後車の冠蓋を望み、後車は前車の冠蓋を望むなり。冠蓋は車のおほひ、乘車のやれ。戰國策、韓使者求二救于齊一——也」

【冠角】クヮンカク　鳥のとさかと獸のつの。後漢書、輿服志「馬融有二一一一」

【冠距】クヮンキョ　とりのとさかと、けづめと。劉禹錫新詞「公輸之刻レ鳳也、一一未レ成、翠羽來レ樹」

【冠玉】クヮンギョク　かんむりの飾りのたま。外貌の美にして其の實なき者に喩ふ。史、陳丞相世家「平雖二美丈夫一如二一一一耳、其中未二必有一也」

【冠軍】クヮングン　衆人にすぐれてぬきんでる。法言「冠二乎羣倫一」‖出羣。

【冠笄】クヮンケイ　〇冠は男子二十歳にして元服する禮、笄は女子十五歳にしてかんざしをさす禮。史、樂書「婚姻一一所二以別一男女一也」〇冠をととめるかんざし。宋史、禮志「奉二一一以進」

【冠婚】クヮンコン　元服の禮と婚姻の禮と。禮記「夫禮必本二于天一、殽二于地一、列二于鬼神一、達二于喪祭射御一一朝廷一」

【冠詞】クヮンシ　〇外國語に在りて名詞にかぶらせて數・性・指定の意等をあらはす語。英語 Article の譯。〇國まくらことば、次條に同じ。

【冠辭】クヮンジ　國まくらことば、一つのことばの首に添へて形容又は修飾する詞。多く歌に用ふ「あしびきの」山「あづさゆみ」引くの類。

【冠櫛】クヮンシツ　かんむりを著け髪をくしけづる。白居易詩「一一心多懶、逢迎興漸微」

【冠者】クヮンジャ　〇元服して、冠をつけたる男、丁年に達せし者。論、先進「一一五六人、童子六七人」〇國古、六位にして官のなき人の稱。

【冠雀】クヮンジャク　鶺鴒の異名(後漢書、楊震傳)

【冠序】クヮンジョ　はしがき。司馬光、進二資治通鑑一表「竊以一一、錄二之嘉名一」‖弁言。

【冠絶】クヮンゼツ　最もすぐれる。宋書、顏延之傳「文章之美、一一當時」

【冠族】クヮンゾク　すぐれて善きいへがら。高官に登りし家柄(宋史、柳元景傳)

【冠帶】クヮンタイ　冠をつけ、帶をむすぶ。又、其の身分、社會。夏侯湛文「是以得下接二一一之末一、充二爭大夫之列一」

【冠帶之國】クヮンタイノくに　禮儀にあつきに。漢書「越方外之地、劉レ髮文レ身之民也、不レ可レ以二一一法度一理レ也」

【冠讎】クヮンシウ　敵必加二於首一」　貴賤上下の別をみだるべからざるに喩ふ。史、儒林傳「一一、履鄉レ新必關二於足一」

【冠冕】クヮンベン　〇かんむり。轉じて首位の義。三國志、嗣統傳「當レ爲二南州士之一一」〇仕官の義。三國志、王粲傳「汝先人世有二一一一」

【冠履】クヮンリ　かんむりと、くつと。說苑「一一不レ同レ處、賢不肖不レ同レ位」又、上と下とに喩ふ。

【冠履倒易】クヮンリタウエキ　次條に同じ。後漢書、楊賜傳「一一、踐爲代レ處」

【冠履顚倒】クヮンリテンタウ　上下の順序がさかさまになる喩。

【戴二冠履一忘二頭足一】タイクヮンリヲワスルトハアタマトアシヲ　本を輕んじて末を重んずる喩。淮南、泰族「且夫之生也、以レ輔二仁義一、今重レ法而棄レ義、是貪二其冠履一而亡二其頭足一也」

【冠禮】クヮンレイ　男子年二十にして初めて冠を被る禮。元服の禮(儀禮、士冠禮)

八　畫

【冤】エン　元

〇無實の罪、ぬれぎぬを著る。史、于定國傳「定國爲二廷尉一、民

自以不」○ぬれぎぬ。史、淮陰侯傳「嗟乎ー哉烹也」○うらみ(恨)あだ(仇)韓愈詩「往者不可悔、孤魂抱深ー」○かがむ(屈)かがまる(枉曲)

【冤】ヱン 無實のつみ。枉は事實を曲げる。李白詩「皇穹察ニー一、白日開二昏氣一」

【冤抑】ヱンヨク 無實の罪におちいりかがまる。東方朔、七諫「獨ー一而無レ極兮」

【冤枉】ヱンワウ 無實のつみ、枉は事實を曲げる。李白詩「皇穹察ニー一、白日開二昏氣一」

【冤魂】ヱンコン 無實の罪にかかりしうらみ。杜甫詩「思責負ニー一」

【冤罪】ヱンザイ 無實のつみ。‖冤枉。

【冤親】ヱンシン 怨ある家と、親愛する者と。五燈會元「佛敎無ニー一平等」

【冤讎】ヱンシウ 無實の讒言ザンゲン。漢書、孫寶傳「家ニ受ー一」

【冤傷】ヱンシャウ 無實の罪を受けたるを傷みかなしむ。漢書「議者ー一之」

【冤訴】ヱンソ 無實のつみをうったへる。舊唐書、狄仁傑傳「周歲斷二滯獄一一千七千人、無ニー一者」

【冤世】ヱンセイ 無實のつみにおちいる。枚乘、七發「汗流沫墜、ー一陵罪」

【冤情】ヱンジャウ 無實のつみにかかりたるうらみ。李德裕文「快雪ニー一、慰二開心懷一」

【冤抑】ヱンヨク 無實の罪におちいりかがまる。東方朔、七諫「獨ー一而無レ極兮」

【冤枉】ヱンワウ 無實のつみ、枉は事實を曲げる。李白詩「皇穹察ニー一、白日開二昏氣一」

【冢】チョウ 囲 通じて塚に作る

○つか(高壇)墓の高大なる者。○大いなり。○はれもの(腫)○なか(丘)山のいただき(山頂)○やしろ(祠)○もりつち(封土)

【冢君】チョウクン 君長の尊稱、秦晉に曉る友邦ー一、越我御事庶士、明聽レ誓」

【冢宰】チョウサイ 冢は長、宰は治、周代六官の長。今の總理大臣の如き者、大宰相の義。書、周官「ー一掌二邦治一統二百官一均二四海一」後世は吏部尚書の異稱。

【冢子】チョウシ ○太子、又、世子。左、閔二「太子奉二冢祀社稷之粢盛一以朝夕視二寒暖一者也、故曰ー一」○あとつぎの長男。禮、內則「父沒母存、ー一御レ食」‖冢嫡・嫡長子。

【冢祀】チョウシ せんぞのまつり、宗廟のまつり。‖冢子を見よ。

【冢嗣】チョウシ あとつぎ、太子、又、世子。

【冪】ベキ 通音 メキ

○くらし(昏暗・昧)天氣がくらい、やみ(闇)よる(夜)又智識が明かならず「頑ー一」○とほし(遠)○ふかし(深・玆)○心思の深奥なるにいふ「ー想」○奥深き道理。○かすか(幽)○いとけなし(幼)幼者は智が昧き故。○青ーはそら(天)楚辭、九章「據ー一而攄虹」○うみ、うなばら、溟に通ず。

【冪冪】ベキベキ まっくら、暗は昧の至極、九思「雲霧會分日ー一」‖冥昧・冥昏。

【冥期】メイキ 理にくらくかたくなな。‖頑冥・固陋。

【冥願】メイグワン 冥土にて幸福を受けんことを求むるねがひ、後生ねがひ。陳子昂、爲ニ人請ニ子弟出家一表「乞遂ニー一、祝ニ天恩一」

【冥鴻】メイコウ 世を避けて志を高尚にする者に喩ふ。李賀詩「我今乖レ翅附二

塵寰、羨宗諸子傳「帝曰、橋平匹ー一、安用ニ元帥一」‖嫡長子。

【冢社】チョウシャ 土地を守護する神のやしろ、うぶすなの神社。

【冢中枯骨】チョウチュウココツ 死せし人。無能なる人に喩ふ。蜀志、先主傳「ー一、何足レ介レ意」

【冢嫡】チョウチャク 家を相續すべき長子。北史、李彪傳「明ニー一之重見ニ乎天一」

【冢土】チョウド 土の神、大社。書經「類ニ于上帝一宜ニ于ー一」

【冢婦】チョウフ 嫡長子のよめ。禮、內則「父母舅姑ニ冢婦ー一」‖介婦は衆婦。

【冢】ボウ 東 モウ 通じて冢に作る

○おほふ(覆)○くらし。

○冢なり、宀冢に从ふ、冢(前條)とは別字。

【冥】ベイ 青 通音 メイ

○くらし(昏暗・昧)天氣がくらい、やみ(闇)よる(夜)又智識が明かならず「頑ー一」○とほし(遠)○ふかし(深・玆)○心思の深奥なるにいふ「ー想」○奥深き道理。○かすか(幽)○いとけなし(幼)幼者は智が昧き故。○青ーはそら(天)楚辭、九章「據ー一而攄虹」○うみ、うなばら、溟に通ず。

【冥鬼】メイキ 冥途のおに。

【冥冥】メイメイ まっくら、暗は昧の至極、九思「雲霧會分日ー一」‖冥昧・冥昏。

【冥期】メイキ 理にくらくかたくなな。‖頑冥・固陋。

【冥願】メイグワン 冥土にて幸福を受けんことを求むるねがひ、後生ねがひ。陳子昂、爲ニ人請ニ子弟出家一表「乞遂ニー一、祝ニ天恩一」

【冥鴻】メイコウ 世を避けて志を高尚にする者に喩ふ。李賀詩「我今乖レ翅附二

莊、逍遙遊「北ー有魚」○玄ーは水神(靈、月令)○ー土はあの世、よみぢ。

同訓異字 冥は窗カスなり、宀に从ひ、日に从ひ、六に从ふ。六は陰數にて地なり、日、地に入る會意。

【冥佑】メイイウ 神佛のたすけ、佑は祐と同。晉書、桑蠲傳「報德ニー一」‖冥助・冥加。

【冥祐】メイイウ 前條に同じ。

【冥應】メイオウ 神佛の御利やく「南史、解叔謙傳」

【冥界】メイカイ よみぢ。‖冥土。

【冥行】メイカウ 物を見すしてゆく、くらやみの道を行く、又、其のこと。

【冥感】メイカン 神明の心を動かす、誠心が鬼神に感通する。晉書、李充傳「劉殷至孝ー一」

ー—し冥冥多雨。

【冥昏】ミン くらし。春秋繁露「不レ見不レ聞、是謂ニー—一」‖冥昧・冥晦。

【冥婚】ミン 已に死せし者が婚を結ぶ。舊唐書、睿至忠傳「韋庶人爲二七弟贈汝南王禎一與二至忠亡女一爲ニー—一合葬」

【冥捜】ミン くらがりに物をさがす。(暗中捜索)目を閉ぢて深く心に考へさがす。作詩などにふける義。晉張談「鄰壁雞鳴欲レ作レ詩、郎伏二草中一ー—、或得レ句則羅而出、遇レ之者、莫レ不レ笑」

【冥想】ミン 心にふかくかんがへる。支遁詩「道會貴ニー—一」‖深思。

【冥助】ミン 冥加に同じ。

【冥土】ミン 陽よみぢ、死して行く幽遠なる地の義。‖冥途・冥府。

【冥途】ミン 前條に同じ。太平廣記「ー—小吏」

【冥茫】ミン ひろく遠くしてはっきりと見えず。沈佺期詩「雲海已ー—」

【冥漠】ミン 神佛のばち。天罰。

【冥罰】ミン よみぢ。‖冥土。

【冥福】ミン 死後のさいはひ。北史、崔挺傳「追二奉ー—一」

【冥昧】ミン まっくら。李白詩「此中ー—失二晝夜一」‖冥昏。

【冥冥】ミン 〇くらき貌。詩、小雅「維塵ー—」〇幽昧にして見とめ難し。荀、修身「行二乎ー—一、施二乎無報一」〇遠くをぐらき空。揚子「鴻飛ー—し冥冥多雨。

【親二冥冥一謀二無形一】ミンメイニハカル 暗きに見、形なきに謀るは、推理の明かなるなり。說苑「明者視二於冥冥一謀二於無形一、聽者聽二無聲一、慮者戒二於未成一」

【冥冥之志】ミンメイノこころざし 人の知らざる所にて十分に志を篤くして事を勵む。荀、勸學「無二——一者、無二昭昭之明一、無二赫赫之功一」

【冥冥】モク 深奥の貌。吳都賦「曠瞻遐邇、遐眺ー—」

【冥濛】ミン うすぐらし。黃庭堅詩「梅雨晝ー—」‖冥冥・濛濛・模糊。

【冥冥】ミン 魚の異名。一說、木の名。列、湯問「朮之南有ニー—者一、以二五百歲一爲レ春、五百歲爲レ秋」

【冥加】カミ 冥冥の內にかうむる神佛の加護。大藏法數「以二佛神力一、增二菩薩智慧一、瞭密難レ見、故曰ニー—一」‖冥助・冥利。

【冥利】リミ 〇神佛のたすけ。‖冥加。〇うん、しあはせ。

九畫

【冨】フ 富(冖部九畫)の俗字。一說、富に同じ。

十三畫

【冪】ベキ 〇おほふ(覆)〇ふきん、食物をおほふ巾。〇まく、たれぬの(幕)まどかけ。〇數學にて根數の相乘積「自乘ー(平方)」「三乘ー(立方)」

【冪冪】ベキ 雲などのおほひ低れる貌。李華、甲二古戰場一文「鬼神聚兮雲ー—」

ン 部

三畫

【冫】ヒョウ 蒸 〇こほり(冰)〇こほる(凍)〇圖にする(二水)字の扁の名。

三畫

【冬】トウ 冬 〇ふゆ、四時の最終、立冬より立春に至る、陰暦の十・十一・十二の三ヶ月間の稱。〇つく(盡)をさまる(藏)をはる(終)〇ふゆごもり。

【冬温夏清】トウオンカセイ ふゆはあたたかにし、なつはすずしくす。子たる者の親に事ふる禮(曲禮)定省參看。

【冬學】トウガク 村塾にて、冬日農家の閒暇なるときに開くもの。陸游詩「僵僵朱扉開ニー—一」注「農十月、乃遣レ子入レ學」

【冬季】トウキ 冬の時節。‖冬期・冬時。

【冬期】トウキ 前條に同じ。

【冬瓜】トウグワ とうぐわん、西瓜に似たる瓜、煮て食ふ。

【冬官】トウクワン 〇周代の六官の一、土木工作のことを掌る(周禮)‖司空。〇唐代、工部省の異稱。

【冬藏】トウザウ 穀物の類を、冬をさめ貯へる。禮、樂記「春作夏長仁也。秋斂ー—義也」千字文「秋收ー—」

【冬至】トウジ 二十四氣の一、夏至の反對にて、夜最も長く日最も短し。陽暦の十二月二十二三日頃、此日太陽、赤道以南二十三度半の所に在り。此緯度をー—線といひ、此線よりして大陽再び北に向ひて復る。史、律書「氣始二于ー—一、周而復生」

【冬日可レ愛】トウジツアイスベシ 冬の日は溫暖にして愛すべし、人の慈惠なるに喩ふ。左、文七「趙衰、冬日之日也、趙盾、夏日之日也」注「——、夏日可レ畏」

【冬青】トウセイ もちのき、常綠樹、葉は卵形をなして光澤あり、夏初細白花開き、球狀赤色の實を結ぶ、皮は霜を避る。女貞モクセイの一種。

【冬扇夏爐】トウセンカロ 冬の扇と夏の火鉢と、時機に合はざる無用の事物に喩ふ。論衡「作二無レ益之能一、納二無レ補之說一、猶如二以レ夏進レ爐、以レ冬奏レ扇、亦徒耳」

【冬冬】トウトウ 門を叩く聲。白居易詩「門ー—一」

【冬氷可レ折】トウヒョウおるべシ　水は柔なれども氷となれば折ることを得、人の剛柔の性も時によりて異るに喩ふ。文子「――、夏水可レ結」

【冬眠】トウミン　動物が冬期地中にとぢこもりて活動せざるをいふ。

四畫

【決】 決（水部四畫）の俗字。

【亙】 コウ　通じて洞に作る

〇こほる（凝結）寒くして閉ぢ凝る。ひゆ（冷）こほる、いつ（凍）〇さむし、さむさ（寒）〇圓さゆ、すみわたる。

【亙寒】コウカン　きびしきさむさ、亙は閉。左、昭、四「固陰――」

【冲】 チュウ　東　沖に同じ

〇やはらぐ（和）〇むなし、うつろ（空虚）老子「太盈若レ――」〇ふかし（深）〇わく（湧）〇をさなし、いとけなし（幼稚）書、金縢「惟予一人、弗及知」〇ひひる、高く上る。〇――は冰を鑿つ聲、又、垂るる貌。

【冲瀹】チュウヤク　空しきと滿つると。孫綽詩「蕩滌表二――一」

【冲虚】チュウキョ　ふかくむなし。阮籍詩「養レ志在二――一」〓虚冲。

【冲虚眞經】チュウキョシンケイ　列子の別名「唐書、藝文志」

【冲人】チュウジン　をさなき者が自ら稱する謙辭。字解を見よ。

【冲讓】チュウジョウ　心を虚しく和げて讓る。

【冲靜】チュウセイ　虚心無爲にして安くしづかなり。「蔡邕、荊州刺史廚候碑「仗二――一以臨レ民、施二仁義一以接レ物」

【冲想】チュウサウ　むなしくして深きおもひ。王勃、七夕賦「――自閑、神情如レ逸」

【冲淡】チュウタン　あっさりして心むなし、淡一に澹に作る。晉書、儒林傳「杜夷高虚――、與レ俗異レ軌」

【冲色】チュウショク　前條を見よ。

【冲冲】チュウチュウ　〇冰をわるこゑの形容。詩、豳風「二之日鑿レ冰――」〇垂れさがる貌の時、小雅「倥傯――」

【冲天】チュウテン　高く天にのぼる。史、淳于髡傳「一舉レ――」並一に飛に作る。

【冲漠】チュウバク　ぼんやりとしたる貌。七命「――公子、含レ華隱レ曜」程子遺書「――無朕、萬象森然已具、不レ應不二是先一、已應不二是後一」

【冲融】チュウユウ　和らぐ。杜甫詩「和氣日――」

【冰】 ヒョウ　蒸　俗に氷に作る

〇ひ、こほり。〇つらら「――柱」〇こほる（凍）禮、月令「孟冬水始レ――」〇あぶら（脂）〇やづつのふた（矢筒蓋）左、昭二「公徒釋レ甲執レ――而踞」

【冰夷】ヒョウイ　河の神。山海經「――即河伯也」日馮夷。

【冰河】ヒョウガ　高山より流下する冰の川、英語 Glacier の譯。

【冰解】ヒョウカイ　冰釋に同じ。

【冰肌】ヒョウキ　〇こほりの如き清く美くしきはだへ。莊、逍遙遊「藐姑射之山、有二神人一居焉、肌膚如二冰雪一」〇梅花の形容。黃庭堅詩「寒香寂寂動二――一」日氷魂。

【冰肌玉骨】ヒョウキギョクコツ　〇梅の形容。竹坡詩話「――清無レ汗、水殿風來暗香滿」日冰姿玉骨。〇もと美人の形容「後蜀主孟昶、詞」

【冰凝】ヒョウギョウ　こほりかたまる。後漢書「冰既解釋、還復凝合」

【冰涙】ヒョウルイ　こほりがとける。涙は散なり。閻丘冲詩「陽升土潤、――川流」

【冰紈】ヒョウガン　冰の如く潔白にして光澤ある絹。漢書、地理志「齊俗織作二――綺穀珠璣之物一」紈は素なり。

【冰鏡】ヒョウキョウ　〇月の異名。孔平仲詩「團團――吐二清輝一」日氷輪。〇人物の潔白なる形容。晉書「衛瓘見二樂廣一而奇レ之、曰、此人之――、見レ之瑩然若レ披二雲霧一而覩二青天一」

【冰結】ヒョウケツ　液體が凝りかたまりてこほりとなる、こほるの唐太宗詩「寒外悲風切、交河冰已結」

【冰潔】ヒョウケツ　冰の如くきよし。孔融、衛尉張儉碑「――淵清、介然特立」日冰清。

【冰語】ヒョウゴ　媒介人のことば。壽昌故事「媒言曰二――一」冰人參看。

【冰壺玉鑑】ヒョウコギョクカン　心の極めて潔白なるに喩ふ。杜甫詩「――懸二清秋一」

【冰壺秋月】ヒョウコシュウゲツ　心の極めて清く明かなるに喩ふ。圓機活法「李延年如二――一、楚徹無レ瑕」

【冰魂】ヒョウコン　月の異名。陸游詩「醫二得――等艱一回」日冰肌。

【冰姿玉骨】ヒョウシギョクコツ　冰肌玉骨に同じ。事芳譜「梅、一曰、――、世外佳人、但恨レ無二傾城之笑耳、出二桂林記一」

【冰室】ヒョウシツ　ひむろ、冰を藏する室。詩、豳風、毛傳「凌陰――也」

【冰人】ヒョウジン　なかうど、媒妁人。晉書、索紞傳「令狐策夢下立二冰上一與二冰下人一語上、紞曰、冰上爲レ陽、冰下爲レ陰、陰陽事也、君在二冰上一與二冰下人一語、爲二陽語一陰、媒介事也、君當レ爲レ人作レ媒」とあるに本づく。

【冰刃】ヒョウジン　しらは。七命「――鏡水凝、――霜潤」

【冰心】ヒョウシン　潔白なる心。王昌齡詩「洛陽親友如相問、一片――在二玉壺一」

【冰釋】ヒョウキャク　こほりの如く疑の解け

る義。左、杜預序「渙然―ー、怡然理順」‖冰解。

【冰算】ヒヨウサン　冰柱の異名。頻書纂要「簷溜凝ー垂下一日ニ一ー一」‖銀竹・冰柱。

【冰清】ヒヨウセイ　こほりの如くきよし。晉書、衛玠傳「歸公ー一、女壻玉潤ー」

【冰雪心】ヒヨウセツシン　潔白なる心。古節婦吟「瑤池古冰雪、爲ン妾作ニ心肝一、死者儻復生、剖與ニ良人一看」‖冰壺心。

【冰雪操】ヒヨウセツサウ　冰雪の如く清らかにして潔白なる節操。高適詩「奈何――、尙與ニ蘼蕪一羣」

【冰鮮】ヒヨウセン　冰づけの魚。清涼錄「主人置ニ瓷冰一街坊攜賣謂ニ之涼冰一、鮮魚肆以護レ魚謂ニ之ーー一」

【冰蘖】ヒヨウゲツ　艾ヨモギの異名。爾雅、釋草、疏「艾一名ーー、卽今艾蒿也」

【冰炭相愛】ヒヨウタンアイス　冰と炭火と互に相愛す。冰炭相容れずの反對。淮南子「天下莫ン相ニ憎于膠漆一而莫ン相ニ愛于冰炭一」注「冰得レ炭則解、炭復ニ其性一、炭得レ冰則保ニ其炭一、故曰ニ相愛一」

【冰炭不二相容一】ヒヨウタンアイスヲアヒヨウセズ　冰と炭火とは性質反對にして相容れず、以て君子と小人とは和合し難きに喩ふ。楚辭、七諫「冰炭不レ可ニ以相並一兮」　顧炎武「冰炭不レ同レ器」

【冰柱】ヒヨウチウ　つらら。‖冰算。

【冰點】ヒヨウテン　水の凍る溫度、攝氏寒暖計の零度、華氏の三十二度。

【冰凍】ヒヨウトウ　こほり。睡記「時雪不レ降、――消釋」

【冰嚢】ヒヨウノウ　熱を下げる爲めに冰を入れて局部にあてる袋、こほりぶくろ。多くは豚の膀胱にて造る。

【冰片】ヒヨウヘン　〇こほりのかけら。張祐詩「――馬蹄中」〇藥の名。‖龍腦。

【冰洋】ヒヨウヤウ　海洋中全く堅冰を結ぶ者。南極に在るを南――、北極のを北ーーといふ。

【冰綸】ヒヨウリン　月の異名。蘇軾詩「雲峯欲滴――」

【冰魚】ヒヨウギョ　圖ひうをの類、白魚に似て小さく冰の如く潔白なり、秋冬の交、琵琶湖・宇治川にて捕ふ。

【冰消】ヒヨウセウ　冰がとける。張正見詩「雲霏青山路、――綠水池」

五畫

【況】

況（「水部五畫」の俗字。

【泮】

ハン　㊥　通じて洴に作る

とく、冰が釋ける。詩、邶風「士如歸妻、迨ニ冰未一泮」

【冶】

ヤ　㊥

〇いる（鑄）金屬をとかし鑄る。〇ねりあげる、精錬する。杜甫詩「陶ー賴詩篇」〇けすぐへるをとこ。李白、擬古詩「岸上誰家遊ーー、三三五五映ニ垂楊一」

【冷】

㊀　レイ・リヤウ　㊁　レイ・リヤウ　㊂　梗　㊃　靑

〇ひやか。熱の反對。〇ひゆ、ひえる。〇すずし（涼）さむし（寒）さびし（淒）〇清くしてひまあり、閒散なり。杜甫詩「廣文先生官ー一」〇さびし。徐彦伯、孤燭歎「切切夜閨ー、微微孤燭然」〇情薄し「一淡」〇あざけりさげしむ「一笑」〇きよし、すがすがし（氣清）梁武帝、淨業賦「心清ー其若ニ水、志皎潔ニ其若ニ雪一」㊂こほり、こほる（冰）

【冷罨法】レイアンホフ　冷水又はひやし藥を布に浸して疾患の局部をひやす治療法。溫罨法の對。

【冷炬】レイキヨ　將にきえんとする光。憎常建詩「燈殘ーー微」

【冷艷】レイエン　つめたくしてつややかなり。丘爲、左掖梨花詩「ーー全欺レ雪、餘香乍入レ衣」

【冷巷】レイカウ　さびしきちまた。白居易詩「ーー閉レ門無ニ客到一」

【冷汗】レイカン　ひやあせ、恥ぢ又は驚きたる時出るあせ。

【冷眼】レイガン　情愛のなきめつき。冷淡にして求むる所なき目つき。李商隱玉

詩「孤衾―無二來入一」
【冷卻】レイキャク つめたくなる、熱を失ふ、卻は却の正字。
【冷遇】レイグウ ひややかにあしらふ、冷淡なる待遇。厚遇の反對。
【冷灰】レイクワイ 火のけなきはひ。李商隱詩「十歲裁レ詩走レ馬成 ―一錢場 勳二離情一」轉じて名利の欲なき心に喩ふ。
【冷官】レイクワン いやしく閒散なる官職。張籍詩「年長身多病、獨宜レ作二―一」日冷官。
【冷月】レイゲツ 陰暦七月の異名。
【冷血動物】レイケツドウブツ 體溫が外氣の溫度より低き動物、爬蟲類の屬。轉じて冷酷なる人を罵りていふ。
【冷酷】レイコク 甚だむごたらし、無慈悲。日冷酷。
【冷淘】レイタウ 十卷、宋の程憲洪撰す、己の見聞せし所を雜記す、詩話多きに居る。
【冷藏庫】レイザウコ 回夏時飲食物などをひやし又は腐敗を防ぐ爲めに氷にてひやすくら。
【冷酒】レイシュ ひや酒。白居易詩「小盞吹レ醅嘗二―一」
【冷水浴】レイスイヨク 衞生上、皮膚をつよくする爲めに冷水をあびる。又、皮膚を濕布にてこするを冷水摩擦といふ。
【冷靜】レイセイ 物事にあわてずしてしづかなり。
【冷笑】レイセウ あざけりわらふ。北史、崔曠傳「何意下讀二國士傳一文一直此―上」
【冷酸】レイサン 寒氣のきびしき義。張柬詩「東風―一著衣寒」
【冷節】レイセツ 寒食の節の異名。四民月令「齊人呼二寒食一爲二―一」
【冷泉】レイセン ○鑛物質を多量に含める泉。溫泉の對。日鑛泉。○浙江省、西湖の近傍、飛來峯下に在る泉の名、白居易に―亭記あり。
【冷然】レイゼン ○輕妙なる貌。莊、逍遙遊「列子御レ風而行、―善也」一說すずしき貌。○ひややかに思ひやりなし。日冷淡。
【冷淡】レイタン ○あっさりする。白居易詩「白花―無二人愛一」○さびしくしづか、又、同情なし。李中詩「―一少二知音一」
【冷暖自知】レイダンジチ 我が事は他人の言を待たずして自ら心に知る義。傳燈「今學レ指二授人一、如二人飲レ水―一」
【冷鵝】レイガ つめたきはらわた、不親切、不熱心。又、其の者。顏氏家訓「楊朱之倫、世謂二―一」
【冷燈】レイトウ ひかりのさびしきともしび。蘇軾詩「―殘月照二空牀一」日寒燈。
【冷】レイ ○ひややかなると熱きと。○淡なると熱心なると。○さびしと、にぎやかなると。
【冷鳳】レイホウ ひやかしののしる。嘲罵する。
【冷透レ肌】レイトウハダヘ 冷氣肌膚にしみこむ。司馬光詩「烏皮几榻風侵レ袂、白玉樓高――」
【冷飯】レイハン ひやめし。陸游詩「―一鍾二砂糖、殘楊家三新露一」
【冷評】レイヒョウ ひやかしたる批評。
【冷僻】レイヘキ 人跡の到ること罕なる地。白居易詩「窓下栽―一」轉じて文字の見ること罕なる者をいふ。
【冷冷】レイレイ ○清涼なる貌。東方朔、七諫「下―面來風」○音聲の清き貌。陸機、文賦「音―一而盈レ耳」

六畫

【冽】レツ 屑 レイ 霽

○さむし（寒氣）○ひややか。詩、小雅「有二―一泉一」○ひゆ（冷）○はげし、寒氣嚴し、風はげし。王褒、碧賢臣頌「虎嘯而谷風―一」烈に通ず。○いさぎよし（潔）
【冽清】レツセイ ひややかにしてきよし。東京賦「陰池幽流、玄泉―一」
【冽泉】レツセン ひややかなるいづみ。京賦「―一前堆注」
【冽烈】レツレツ ○風のはげしき貌。左思、雜詩「秋風何―一」日烈烈。○寒氣の厳しき貌。韓愈詩「朔風―一撞二朝茵一」

【凋】チョウ 蕭 コ 遇

○こほる（凝）○とづ（閉）
【凋陰】チョウイン こほりとづ。張衡、西京賦「―一寒」

【凖】準（水部十畫）の俗字。

【凇】ショウ・ス 冬 ソウ・ス 送

○こほりつく（凍著）寒氣結びて珠の如き狀をなせるもの、之を霧―といふ。白居易、冬夜詩「月淡千門霧―寒」○こほり（冰）つらら（冰柱）

【凍】セイ 霽 凌に通ず

○さむし（寒）○すずし（冷）さびし。陶潛詩「秋月―月風」○日物すごし。
【凍雨】セイウ ものさびしくつめたき雨。蘇軾詩「亂來和二―一、投レ空如レ散レ絲」
【凄其】セイキ さむくしてさびし、其は然に似たる助辭。詩、邶風、柏舟「綸兮綸兮、―一以風」
【凄愴】セイサウ さびしきうらみ。主勃詩「他鄉易レ感增二―一」

【凄愴】セイサウ さびしくさわやか。草應物詩「戸關已ニー、長夜感二深情一」
【凄日】セイジツ すずしき秋の日（梁元帝纂要）＝凄辰
【凄辰】セイシン 秋の季節（梁元帝纂要）
【凄凄】セイセイ 寒くいたましき貌。詩、鄭風、風雨「風雨ー一、雞鳴喈喈」
【凄切】セイセツ 身にしむほどかなし。皮日休詩「君詞亦ー一」
【凄然】セイゼン 凄凄に同じ。荘、大宗師「ー一似レ秋、暖然似レ春」＝凄其。
【凄楚】セイソ すさまじくかなし。李子卿、聽二秋蟲一賦「志若者易ニー一」
【凄風】セイフウ ○すさまじきかぜ。左、昭四「春無ニー一、秋無二苦雨一」○西南風。禹貢「西南曰ニー一」
【凄凉】セイリヤウ きびしくさむし。陸游詩「霜鬢已ニー一」
【凄涼】セイリヤウ ものさびし。李賀詩「ー一四月閨、千里一時絶」
【凄裏】セイリ ものすごくさびし。舒頔詩「且容花鳥作ニー一」

【清】セイ シャウ 敬

○さむし（寒）○ひやゝか（冷）○すずし（涼）すずしくする、涼氣を致す。曲禮「凡爲二人子一之禮、冬溫而夏ー一」
辨正 淨なり、ンに从ふ、シに从ふ淸淨の淸とは別。

【凋】テウ 蕭 通じて彫に作る

○しぼむ、草木がなえしなびる。○かれる（枯）物の生氣が衰へる、やつれよわる。李嘯詩「法其九日至、頗感顔髮ー一」○そこなはる。說文「半傷也」
【凋槁】テウカウ しぼみかれる、槁は枯。歐陽修詩「四時悲二代謝一萬物惜ニー一」＝凋枯・枯槁。
【凋衰】テウスイ おとろへやつれる。唐書、崔植傳「漢承二秦修縱之餘一、海內ー一」＝疲弊。
【凋換】テウクワン しぼみかはる、凋零變更の義。李白詩「天地無ニー一、青顔有二凋改一」
【凋瘵】テウサイ おとろへやむ、瘵は病。吳師道詩「誰當二良醫一、治二此凋瘵一」
【凋盡】テウジン しぼみつきる、おとろへつくる。左傳「宮室崇侈、民力ー一」＝彫盡。
【凋謝】テウシヤ しぼみおちる、謝はしりぞき去る。轉じて人の死をいふ。韓愈詩「朋友日ー一」＝凋落・凋零。
【凋傷】テウシヤウ しぼみそこなふ。沈約詩「芳質易ニー一」杜甫詩「玉露ー一楓樹林、巫山巫峽氣蕭森」
【凋兵】テウヘイ つかれたる兵卒。史記、敵甲ー一、願承二下風一」戰國策には凋を鈍に作る。
【凋落】テウラク しぼみ衰へる、おちぶれる。李白詩「朱顔ー一鏡、白髮一何新」＝凋零。
【凋零】テウレイ 凋落に同じ。蘇軾詩「海棠千樹已ー一」

【涼】リヤウ 陽（水部八畫）の俗字。

【凍】トウ 送 東

○こほる（凝結）總、月令「孟冬地始ー一」○こほり（冰）○さむし（寒）○こごゆ。孟、梁惠王「父母ー餓、兄弟妻子離散」
【凍雨】トウウ ふゆのあめ。陳師道詩「ー一能妨夢、朝霜故作レ寒」＝寒雨。
【凍餒】トウタイ ふゆのさむきくるも。方干詩「ー一愁容色、寒日澄二斜暉一」
【凍餓】トウガ こごえうう。字解を見よ。＝凍飢・凍餒。
【凍飢】トウキ こごえうう。漢書、項羽傳「天寒大雨、士卒ー一」＝凍餓。
【凍硯】トウケン こほりのはりしすずり。曾鞏詩「ー一向レ陽呵」＝凍研。
【呵二凍硯一】カトウケン 嚴寒の時、凍えし硯に息を吹きかけてあたためる。天寶遺事「李白撰二詔誥一時、大寒硯凍、帝勳二宮嬪一執二牙筆一呵レ之」
【凍瘡】トウサウ 凍傷に同じ。
【凍死】トウシ こごえて死す。杜甫詩「朱門酒肉臭、路有ニー一骨一」
【凍傷】トウシヤウ しもやけ。＝凍瘡。
【凍皴】トウシュン さむくしてひびがきれる。杜甫詩「手脚ー一皮肉死」＝脂賦。
【凍餒】トウタイ こごえうう。孟、梁惠王「ー一其妻子」＝寒餒。
【凍冰】トウヒヨウ こほり。＝寒冰。

【凌】リヨウ ロウ 蒸

○あつこほり（積冰）○陰はひむろ（冰室）○おのゝく（戰栗）漢書、揚雄傳「虎豹之ー一遠」○こゆ（越趄）わたる（涉）史、始皇紀「ー一水經地」○をかす、しのぐ、陵に通ず。
【凌陰】リヨウイン ひむろ（冰室）詩、豳風「三之日、納二于ー一」＝凌室。
【凌雨】リヨウウ はげしくふるあめ。揚子「震風ー一」＝暴雨。
【凌雲觀】リヨウウンクワン 漢の明帝の建てし高臺、地を去ること二十五丈、誤りて先づ榜を釘す、乃ち繩にて牽誕を盛り、繩墮にて之をつるしあげて君せしむ、既に下れば鬚髮皓然たりといふ（三國、魏志）
【凌雲之志】リヨウウンノこころざし 高く世外に超脫する志。漢書、揚雄傳「縹縹有二ー一」史、司馬相如傳「飄飄有二凌雲之氣一」
【凌煙閣勳臣】リヨウエンカククンシン 唐の太宗、貞觀十七年、勳臣を凌煙閣に畫かしむ。長孫無忌・河間孝王恭・杜如晦・魏徵・房玄齡・尉遲敬德・李靖・蕭瑀・段志玄・張亮・劉弘基・屈突通・

柴紹・殷開山・侯君集・長孫順德・張公謹・程知節・虞世南・劉政會・唐儉・李勣・高士廉・秦叔寶の二十四人(唐書、太宗紀)

【凌】リョウ 他を壓して其の上に出る。人をおしのぐ。宋書、恩倖傳「遷二孫世資一、用相一一」‖陵駕。

【凌虐】リョウギャク むごくしへたぐ。殘刻。中論「一一小國」

【凌澌】リョウシ こほり。方干詩「陰谷入レ夏有二一一一」

【凌室】リョウシツ ひむろ。漢書、高帝紀「求二其一一一」注「一一、藏レ冰之室」‖凌陰。

【凌人】リョウジン ひむろを掌る役人。周禮、天官「一一掌レ冰」

【凌厲】リョウレイ 人をしのぎはつみしむ。石崇文「父子見二一一一」

【凌水石】リョウスイセキ 寫水石の異名。

【凌霄花】リョウセウクワ のうぜんかづら、蔓生にして葉は椿の如く花は赭黄色にして形あさがほに似たり。‖紫葳・陵苕・女葳・鬼目・藸客。

【凌雲之志】リョウウンノこころざし 大業をしのぐ高尚の志。晉書、慕容皝載記「垂猶レ慮也、飢則附レ人、飽便高颺、遇二風塵之會一、必有二一一一一」

【凌波】リョウハ 美人の歩みかたの輕くみやびなる形容。曹植賦「一一微步、羅襪生レ塵」

【凌波仙子】リョウハセンシ 水仙花の形容。黄庭堅、水仙花詩、「一一生レ塵襪、水上盈盈步二微月一」

【凌侮】リョウブ しのぎあなどる。晉書、齊王攸傳「使レ酒數一一」‖陵侮・陵侮

【凌轢】リョウレキ しのぎきしる。史、灌夫傳「一一宗室一、侵二犯骨肉一」‖軋轢。

九畫

【減】減(水部九畫)の俗字。

十畫

【凃】サウ 陽・庚 冷とは別

○さむし(寒)○ひやゝか(冷)

【凃冷】サウレイ 冷やかなる貌。列、湯問「日初出則一一涼涼、及二其日中一、如レ探レ湯」

【凜】リン 眞 栗に通ず

○さむし。○一例は寒き貌。‖凜烈。

【凜凜】リンリン さむき貌。歐陽修詩「天日往險弱、風威多一一」

十二畫

【凟】濕(水部十二畫)の譌字。

【凘】シ 支・寘 ○解けてながるるこほり(流冰)風俗通「冰流曰一、冰解曰凘」○こほり(冰)

十三畫

【凜】リン 寢 凜は俗字

○さむし(寒)陸機詩「遺涼清且一」○すさまし(凄)ぞっとする。○つつしむ(敬畏)「一遵」

【凜慄】リンリツ 寒くしてわななく、寒其だしくして戰栗する。顧清詩「摺レ羅猶一寒一一」

【凜乎】リンコ ○寒さのはげしき貌。○勢のりりしき貌。懼れてひきしまる貌。書、五子之歌「一一若二朽索之馭二六馬一」

【凜秋】リンシウ あきの季節、秋の氣は肅殺なるが故。楚辭「獨悲二此一一一」

【凜然】リンゼン 身にしみてぞっとする。‖竦栗。

【凜遵】リンジュン 恪上の命令を敬ひて守る。

【凜凜】リンリン ○寒さの身にしむ貌。潘岳、寡婦賦「寒凝凄以一一」‖凜然・凜乎。○勢のりりしき貌。

【凜冽】リンレツ 寒さはげしき貌。李白賦「嚴冬慘切、寒氣一一」

十四畫

【凝】ギョウ 蒸

【凝意】ギョウイ 心を一事にこらす。江淹詩「一一一方自警」

【凝煙】ギョウエン こりてむすぼれるけむり。劉肇詩「一一泛二城闕一」

【凝合】ギョウガフ かたまりあふ。後漢書、眼顧傳「‖凝固。

【凝寒】ギョウカン 陰氣こりて寒きびし。

【凝灰岩】ギョウクワイガン 火山破裂の際、噴出せし灰及砂が積りて成りし岩。

【凝華舍】ギョウクワシャ 圖古、宮中に在りしつぼねの名。‖梅壺

【凝結】ギョウケツ こりかたまる。淮南子「一一而不レ流」

【凝固】ギョウコ ○かたまり合ふ。‖凝合。○液體が熱を失ひて固體となる。

【凝脂】ギョウシ こり固まりたるあぶら、轉じて、柔かく滑かなる香の膚にいふ。詩、衛風「膚如二一一一」世說「王右軍見二杜弘治一數日、面如二一一、點如二點漆一」

【凝視】ギョウシ 目をこらして一方をみつ

める。謝雪渓「瞩瞪目ー一久之」‖凝眺。

【凝結】ギョウケツ かたまりあつまる。盛弘之「荊州記」「沙石ー一地勢無レ所レ宜」

【凝漸】ギョウゼン むすばれたる氷。郁離子「夏無二烈日一、冬不ニーー一」

【凝集力】ギョウシュウリョク 液体及固体の分子間に存する引力。液体及固体に形象を賦与する力。

【凝眺】ギョウチョウ 一方をみつめる。世説「ーー不レ瞬」‖凝眺。

【凝水】ギョウスイ たまりみづ。陸雲賦「堅不レ可レ鑽、清如ニーー一」‖止水。

【凝水石】ギョウスイセキ 寒水石の異名〔本草〕

【凝晴】ギョウセイ 凝眺に同じ、晴はひとみ。‖凝視。

【凝然】ギョウゼン こりかたまりて動かざる形容。宋史、趙汝談傳「荷得レ之、ーー淡然、孰得レ于レ之」李成用、孫天行「三清宮殿浮二晴空一、玉皇端レ笏方ーー」

【凝滞】ギョウタイ ○とどまりとどこほる。史、大史公自序「上下無レ所ニーー一」○かかはりなづむ、拘泥する。風俗通、流文篇「聖人不レ一ニー於物」

【凝澹】ギョウタン 水の集りたたへて清き義、転じて、心の清く静かなるに喩ふ。潘方生詩「吾生幸ーー」

【凝佇】ギョウチョ じっと立ちとまる。宋玉賦詩「高軒坐ーー」

【凝眺】ギョウチョウ 目を一方に注ぎてみつめる。劉宋思詩「樓頭ーー倚二晴暉一」‖凝視・凝望。

【凝念】ギョウネン おもひをこらす。王侍郎詩「宮軒已レ一、況乃清江湄」‖凝思。

【凝碧池】ギョウヘキチ 河南有洛陽の古の禁苑中に在り、唐の安禄山、其の部下を此の池邊に宴す、禁苑は即ち西苑。王維詩「ーー頭奏二管絃一」

【凝留】ギョウリュウ とどこほりとどまる。‖凝滞。

【凝視】ギョウシ こほりてさだむし。蘇軾詩「風雨助ニーー一」

几部

【几】キ 俗に机に作る

○おしまづき(跽ー)ひぢかけ、おしまづき、つくゑ(案)○やすし。○ーーは安重の貌。詩、國風「赤舄ー一」

【几案】キアン つくゑの齊整、劉善明傳「牀榻ーー、不レ加二塵翳一」

【几筵】キエン ○ひぢかけ(脇息)と座席エンと。荀子「脩第ーー、所ニ以養レ體」‖几席。○古の祭の席〔周禮〕

【掎レ几】キキ つくゑをはらふ。儀禮「主人ーレ一授校、拂レ拭レ賓」

【几閣】キカク つくゑと、たなと。雑應物詩「ーー積二案書一、時來北窗閲」

【几覬】キキ つくゑと、すずりと。楊萬里詩「ーー生二涯光一」

【几席】キセキ ひぢかけと、むしろと。史、禮書「魏侯脩第、ーー所ニ以奠レ體也」

【几杖】キジョウ ひぢかけと、つゑと、皆老を養ふ所以の具。曲禮「大夫七十而致レ事、若不レ得レ謝、則必賜ニ之ーー一」

【几帳】キチョウ 國古、貴人の家に備へたる家具の一、塞に柱を立て横木に帷帳を垂れしもの、内外を遮るに用ふ。

【凡】ハン ボン 俗に凡・凡に作る

○みな(皆)おほむね(大槩)淡書、揚雄傳「請略舉ー一」○すべて(總)○おしなべて。中庸「ー爲二天下國家有二九經一」ことごとく(悉)○つね(常)なみ、尋常。魏志、董昭傳「昭受恩非ーー、不敢不陳」○なみのもの、尋常の人。○仙の對稱、俗人・俗界。○かず(數)○かぞふ、あつめはかる。

同訓異語 凡・渾・總・都の別は渾(水部九畫)の條を見よ。

【凡百】ボンピャク もろもろ、多くのものをすべていふ。國語「ーー箴規、晉羣臣聞レ之」

【凡例】ボンレイ 卷首にかかげて書中の大旨と編纂の體例とをのべるはしがき。杜預、左傳序「其發レ凡以言レ例、皆經國之常制、周公之垂法、史書之舊章」

【凡爲レ聖】ボンイセイ 凡にさとる意。宗鏡錄「還丹一粒、轉レ鐵爲レ金、至理一言、ーー」還丹は仙藥。

【凡格】ボンカク つねなみのしな、尋常の品格。‖凡器。

【凡眼】ボンガン 見識の低き目。‖俗眼。

【凡器】ボンキ つねなみの才能。晉書「此人非ニーー一也」‖凡才・凡材。

【凡近】ボンキン おろか、凡庸にして淺薄。魏崇文「使本ーー之材、素無二經濟之具一」

【凡下】ボンゲ つまらぬ人。‖凡庸。

【凡骨】ボンコツ つまらぬからだ、平凡なる人格。仙骨の對。蘇軾詩「欲レ換ニーー一無二金丹一」

【凡材】ボンザイ つまらぬ人、凡庸の人。宋書「散木ーー、皆可レ入レ用」

【凡人】ボンジン つねなみの人。列仙傳「或謂ニーー一」‖凡夫。

【凡手】ボンシュ なみなみのてぎは、平凡なる技倆。‖凡技。

【凡衆】ボンシュウ つまらぬただの人人。‖凡民。

【凡僧】ボンソウ 僧綱以下の役僧の總稱。

【凡俗】ボンゾク つねなみの人。品格いやしき者。梁武帝文「因ニ彼ーー一、喩二此中玄一」‖凡庸。

【凡庸】ボンヨウ つねなみにて才短し。皆

書、盤玩傳「臣實一一、風操不レ立」【凡鳥】ボン　凡庸の人物に喩ふ。世說、簡傲「嵇康與二呂安一善、每二一相思一、千里命レ駕、安後來、值二康不一レ在、喜出レ戸延レ之、不レ入、題二門上一作二鳳字一一一也」喜は康の兄。【凡庸】ボンヨウ　つねなみのこども。神童の對。南史「蔡興宗年十歲喪レ父、哀毀有レ異二於一一一」【凡部】ボンブ　いやしき俗人。晉書「庾亮傳「臣一一小人」【凡夫】ボンプ　○なみなみの男。○佛未だ佛道を悟らざる者。法華經「一一淺識、深著二五欲一」【凡民】ボンミン　つねなみのたみ。凡庸の民。孟、盡心「待二文王一而後興者、一一也」【凡庸】ボンヨウ　つねなみ。史、周勃世家贊「才能不レ過二一一」【凡流】ボンリュウ　つねなみのもの。任昉、爲二范尚書一讓二封侯一表「臣素門一一、輪翻無レ取」

二畫

【処】ショ　處（卢部五畫）に同じ。

四畫

【颪】ホウ　〔國字〕たこ、いかのぼり（紙鳶）

【颭】セン　〔國字〕こがらし、秋末より冬初にわたりて吹きすさむ風。

【颯】〔國字〕なぐ、なぎ。風波しづまる。

六畫

【凭】ヒョウ　ヘイ　憑　馮　同じ

○よる（倚）几に依る。○もたれる、よりかかる。史、達祖、詠燕詞「日日畫欄獨一」

九畫

【颺】ヨウ　ソウ　陽

ほうわうの雌（飢は雄）想像上の瑞鳥、雞頭蛇頭燕頷龜背魚尾五采あり、高さ六尺許、聲は五音に中り、梧桐にあらざれば棲まず、竹實にあらざれば食はず、醴泉にあらざれば飲まず、飛べば羣鳥これに從ふ、天下治平の嘉兆としてあらはるといふ。通じて皇に作る。書、益稷「鳳皇來儀」

十畫

【颳】ガイ　噶　慨に同じ

○やわらぐ（和）○たのしむ（樂）○よし（善）善き人。史、五帝紀「高陽氏有二才子八人一謂之八一」○かち、戰勝。○かちどき、戰捷ノ音樂。史、主父偃傳「天子大一」

【颳歌】ガイカ　戰勝の時にうたふ歌。凱旋の軍歌。蔡邕、禮志「黃帝使二岐伯作二承樂一一」＝慷歌。

【颳樂】ガイカク　かちいくさの音樂。周禮、大司馬「一一奏二于社一」＝愷樂。

【颳旋】ガイセン　戰に捷ちて歸る。梁元帝文「班レ師一一、休レ牛息レ馬」＝凱旋。

【颳旋】ガイセン　戰捷ちて凱歌を唱へてかへる（宋書、謝靈運傳）＝愷旋・凱歸。

【颳旋門】ガイセンモン　凱旋の壯士を迎へ入れる爲め、又は戰勝を記念する爲めに建てる大門。

【颳陣】ガイヂン　戰に勝ちておんやに歸ろ。

【颳弟】ガイテイ　やはらぎたのしむ、弟は悌。詩、小雅「一一君子、民之父母」＝愷悌・樂易。

【颳風】ガイフウ　○和らぎ吹く風。詩、衞風「一一自レ南、吹二彼棘心一」○南風。

【颳雅】ガイガ　釋天「南風謂二之一一一」

十二畫

【颳】トウ　橙　こしかけ（牀）の屬。

【颳】凭（几部六畫）に同じ。

口部

【口】カン　塭　○物を受くる器。○口を張る貌。

二畫

【凶】（一）キョウ　（二）キョウ　匈　○あし、わるし（惡）○よこしま（邪）○とが（答）○わかじに（夭・短折）○わざはひ（禍）吉の反對。○五穀みのらず。○ききん「一年」○わるもの。唐書、孝友傳「父死一手」＝兇。（二）うれふ、おそる。晉語「敵人入而一悔一悔に通ず。

同訓異義　ア凶・惡・醜・匪の別は惡（心部八畫）の條を見よ。

【凶惡】キョウアク　極めてあし。又、其の者。易林「一一不レ起」

【凶音】キョウイン　あしきしらせ、不吉なたより。＝凶報。

【凶狡】キョウカウ　あしくしてこすし。後漢書、朱穆傳「一一無行之徒、媚以求レ官」

【凶器】キョウキ　○人を殺すに用ふるもの。史、主父偃傳「兵者一一也」○喪

の時に用ふる器。周禮、天官、冢宰「喪服——不レ入レ宮」

【凶逆】キョウギャク 心惡しく理にさかふ。又、其の者。顏氏家訓「抗二拒——一」‖惡逆・凶悖。

【凶悪】キョウアク 惡しくして物をしへたげ。又、其の者。

【凶悪】キョウアク わるくおろか。又其の者。列、楊朱「仁聖亦死、——亦死」

【凶穢】キョウワイ あしくけがれたるもの。曹植文「蕩滌——、勦二除醜類一」

【凶荒】キョウコウ 五穀みのらず、ききん。周禮、地官「掌二蘇都之委積一、以待二——一」

【凶獷】キョウクワウ わるづよし。晉書「踈二仁義一者爲二中冦一、肆二——一者爲二外夷一」

【凶猾】キョウクワツ わるくこすし。又、其の者。晉書「董爲二明君一、掃二除——一」‖凶狡。

【凶狡】キョウカウ 心よからざるをとこだて。蘇軾文「其人多二——一不レ逞之徒一」

【凶荒】キョウクワウ あらあらしくつよし。後漢書、烏桓鮮卑傳論「習頓二——一」

【凶窪】キョウワ わるづよきあだ。孫綽文「推二鄧——一、全レ身濟レ功」

【凶歲】キョウサイ 五穀の實らざる年。孟、告子「——子弟多レ暴」‖歉歲・凶年。

【凶作】キョウサク 作物のよくみのらざる歳、不作。

【凶事】キョウジ 不吉の事。老子「吉事尚レ左、——尚レ右」

【凶徒】キョウト わる者ども、賊は衆。‖凶徒。

【凶邪】キョウジャ よこしまにしてあし。又、其の者。隋書「摧二拉——一」

【凶穢】キョウワイ 穀物のみのらざると、よくみのると。漢書、食貨志「歳有二——一、穀有二貴賤一」

【凶手】キョウシュ わるもの。又惡人のしわざ。唐書、孝友傳「父死二——一」

【凶險】キョウケン 心あしくねぢける。又其の者、險は姦邪。沈與求詩「須レ知三筆意似二人意一、柔輭未三必非二——一」‖姦險。

【凶賊】キョウゾク 惡しき賊徒。‖凶逆。

【凶毒】キョウドク あしきどく。淮南子「天雄烏喙、藥之——也、其發易レ入」

【凶德】キョウトク あしき性質(書、多方)

【凶年】キョウネン 五穀のみのらざるとし、ききん。孟、梁惠王「——饑歲」‖凶歲・歉歲・歉歲

【凶作】キョウサク 惡しくして理にさかふ。韓愈文「——之心」‖凶逆。

【凶服】キョウフク 喪中のきもの、もふく。‖喪服。

【凶問】キョウモン 死去のしらせ。通鑑、後唐明帝紀「是夕徐溫——至」‖訃音

【凶夢】キョウム 不吉の夢、えんぎ惡しき夢。吉夢の對。

【凶戻】キョウレイ あらあらしく理にもとる。又、其の者。南史、宋武昌王渾傳「渾少——」‖暴戻・凶悖。

【凹】

㊀アフ 合
㊁アッ 柑

㊀なかくぼ、くぼむ、なかひくし(低下)凸の反對。㊁くぼたまり(窪)

【凹字】土の窪めるを——といひ、土の高きを凸といふ。古の象形字。

【凹心現】アッシンゲン 硯の中央の低くして濕ひを成す者。韓鄂「歲華紀麗」「晉人多用二——一者、欲二體レ墨潤一筆耳」

【凹凸】オウトツ 中くぼと中だかと。字彙「今按遊記云、張仙巖壁二乘帝駕一、望如二——一、近視則皆」遊記は名遊記。

【凸】

クヮイ 佳

あらつち(墳)つちくれ。漢書、律歷志「野人皋——而與之」‖塊。

【出】

㊀シュッ 質
㊁スキ 遇

㊀いづ、でる、物内より外へでる。入の反對。史、平原君傳「使二遂蚤得一處二囊中一、乃穎脱而——一」遂は毛遂。○すすむ(進)○さる(去)はなる(離)「——鄉」○あらはれる(現・露)歐陽修、醉翁亭記「水落而石——者、山間之四時也」○產する「產——」易、說卦「萬物——乎震」○とほざかる(遠)○はく(吐)○仕へる、「——仕」○地方官となりて赴任する。韓愈、樊紹述墓誌銘「——爲二滁州刺史一」○しりぞく(斥黜)やむ(罷)○にぐ(逃)「——亡」○をひ(鋤)爾雅、釋訓「男子謂二姉妹之子一爲——」㊁いだす、だす。

【出】進なり、艸木土出の形に象る、俗に兩出に從ひ出に作るは非。

【出入】シュツニュウ 用ひて遊ぶ。‖出遊。

【出遊】シュツユウ 其の場所に行きて演說し、又、技藝をつとめ行ふ。

【出格】シュツカク ○古、奏章などを書くに敬意を表する爲め、定れる行より、頭を擡げて書くをいふ。○國常格の外に出る。‖別段・別格・破格。

【出金】シュッキン ○かれをだす。○金を出し合ふ。‖出錢・醵金

【出京】シュッキョウ ○みやこを出て離れて地方に行く。‖出都・離京(單には上京の義に用ひし例もあり)○國みやこにのぼる。‖上京。

【出疆】シュッキャウ 己の國を離れて他國

に行く。孟子「―レ必載レ質」

【出御】シュツギョ　天子が内御殿から表御殿におでましになる。入御の対。

【出挙】シュッキョ　多くの人よりぬけでる。後漢書、蔡邕傳「拔レ萃―レ」‖抜擢・出類・出萃。

【出火】シュッカ　図くわじを出す、火を失する。又、くわじ。‖火災・失火。

【出棺】シュッカン　とむらひを出す。

【出家】シュッケ　○家を出でて仏門に入る。晉書、佛圖澄傳「多奉レ佛相競―」○図僧をいふ。

【出現】シュツゲン　神仏などの出でて形を現はす義。捜神記「時時――」

【出口】シュッコウ　図貨物を外国に運び出す、口は港の義。‖輸出。

【出獄】シュツゴク　罪を赦され、又満期にて、牢を出る。

【出妻】シュッサイ　離縁されたるつま。‖出婚。

【出塞】シュツサイ　塞を出る。塞は、中国の北方、夷狄の境界をいふ。史、周紀「將レ兵―レ攻レ梁、梁破則周危矣」

【出山】シュツザン　隠者の出でて仕ふる義。杜甫詩「在レ山泉水清、―レ泉水濁」

【出産】シュッサン　○つくりいだす。うまれいづ。唐彦謙、索氏詩「―在二四時一、極美宜二於秋一」○図子が生る。

【出仕】シュッシ　いでつかへる、官吏になる、官途につく。‖仕官。

【出資】シュッシ　もとでを出す、資本を出し合ひて或事業を営む。

【出身】シュッシン　○官に挙げられる、登用せられる。唐の制、郷貢進士の吏部の撰に及第せる者をいふ（文献通考、選挙考）○図で、或学校より出たる身分「大學―」

【出社】シュッシャ　図新聞社、其の他、会社に出る。

【出生】シュッシャウ　子ができる。‖出産。

【出将入相】シュッショウニュウシャウ　文武兼ね備はり出ては将となり、入りては相となる。唐書、李徳裕傳「出二入將相一、二十餘年」崔顥詩「兩朝出將又入相」

【出色】シュッショク　衆くの色を抜き出て一きは目だつ。転じて、衆に秀でる義とす。

【出所】シュッショ　でどころ、由来。‖出典・出拠。

【出処】シュッショ　出でて官に仕ふると退きて家にをると。易経「君子之道、或出或處」韓愈、送二石處士一序「凡去就――何常」

【出水】シュッスイ　水が出る、大水が陸上に氾濫する。

【出世】シュッセ　○俗界を出離する。‖出世間。○身を起す、立身する。李白詩「浪跡未二―一」

【出世間】シュッセケン　○仏世を遁れて仏道に入る。○世間の俗累を断ちて超然としてゐる。

【出征】シュッセイ　征伐に出で往く、出陣する。詩経「王于――、以佐二天子一」

【出精】シュッセイ　図せいをだす、精力を出す、力を尽らにして勉める。

【出奠】シュッテン　外に出して他家の場とする、賓はいりむこ。漢書、賈誼傳「家貧子壯則――」

【出席】シュッセキ　図其のむしろにでる、座につらなる。‖列席。

【出題】シュツダイ　試験の題を出す。唐書、選挙志「從レ內―レ、以試二進士一」

【出立】シュッタツ　図かどでする、旅だつ。‖首途・出発・発程。

【出塵】シュツジン　世のけがれより出で離れる、世を遁れる。北山移文「耿介絕二塵俗之標一、瀟灑―二出之想一」‖脱俗。

【出張】シュッチョウ　図でばる、用事を帯びて他所に出て行く。

【出廷】シュッテイ　図裁判所に出頭する、法廷に出る。‖出庭。

【出典】シュッテン　字句、又、故事などの出どころ、よりどころ。‖典拠。

【出版】シュッパン　書物を版にして世間に出す。‖出板・上梓・刊行。

【出品】シュッピン　品物を出す「博覧會の―」

【出母】シュツボ　離縁になりて、家を出されたる生母。

【出没】シュツボツ　あらはれたり、かくれたり。劉長卿詩「―鳧戞レ浪」‖隠見。

【出奔】シュッポン　己の国を去りて、他国に出で奔る。春秋、宣十「齊崔氏―」‖出亡。

【出洋】シュツヨウ　図外国に行く「―大臣」

【出来】シュッタイ　○図できる、できあがる、成る、できあがり、成就。○おこる、発生する。○できばえ、成績、「上―」「不―」

【出藍】シュツラン　あゐより採りたる青色が卻りてあゐよりも青し、以て弟子の師より優る義に喩ふ。荀、勸學「學不レ可レ已、青出二于藍一而青二于藍一、冰水爲レ之而寒二于水一」

【出離】シュツリ　図世俗の係累を離れ雑念

を断つ、世を遁れ捨てる。‖出世間。

【出倫】シュツ多くの仲間のものよりもぬけでる。後漢書「有ニ―一之才」‖出類・超倫・絶倫・抜羣。

【出路】シュツ出る路。續搜神記「坎中窮無ニ―一」

【出師】シュツいくさを出す。‖出兵。

【出師表】スイヒョウ諸葛亮（孔明）作る、前後二篇あり。安子順評「讀ニ孔明ニ―一而不レ墮レ淚者、其人必不忠、讀ニ令伯陳情表ニ而不レ墮レ淚者、其人必不孝、讀ニ退之祭ニ十二郎文ニ而不レ墮レ淚者、其人必不友」令伯は、李密。退之は、韓愈。

【出納】スイ出すと納るると、だしいれ。官、錢典「―ニ―臣命」

【出奔】シュッ‖出亡。

【出放題】ダイ㊥口にまかせて、むやみに語ること、でたらめをいふ。

【凸】トツ 月

○なかだか（中高）○いづ（出）○おこる（起）

【凸凹】オウ中だかと中くぼと、でこぼこ。東方朔、神異經「大荒石湖、千里無ニ―一」

六畫

【函】㊀カン 覃 ㊁カン 咸

俗に函に作るは非

㊀いる（容）曲禮「席間ニ―丈」○つつむ（包）○ふくむ（含）○よろひ（鎧）㊁ひつ、はこ（匣）○ふみばこ（封筒）○―胡は大いなる音聲の形容。蘇軾、石鐘山記「南聲ニ胡、北音清越」

【函蓋相應】ガイソウオウはことふたとよく相應する義、彼此相會して同一體に歸するに喩ふ。大日經、疏「衆ニ――、相稱則授受」

【函宏】カンコウ容るる所ひろく大いなり。左思、吳都賦「伊玆都之ニ―一」

【函谷】カンコク關の名。○秦の―關は今の河南省靈寶縣の南に在り、是を秦の東關と爲す、關城、谷中に在り、深險函の如し。○漢の―關は今の河南省新安縣の東北に在りて武帝の元鼎年間に移し置く。

【函谷雞鳴】カンコクケイメイ孟嘗君、秦國を逃れて夜半函谷關に至る、關の法、雞鳴きて門を開く、客に雞の鳴き聲を爲す者あり、皆雞之に和して鳴きしかば、關守、孟嘗君の一行を關外に出せし故事「史、孟嘗君傳」

【函使】シン手がみを持ち來るつかひ、函は狀箱。

【函人】カンジン甲冑をつくる職人、具足師。孟、公孫丑「矢人豈不ニ仁於ニ―一」

【函丈】カンジョウ師の席と己の席との間に一丈の餘地を容るる義。轉じて、師の尊稱とし、先生長者に奉るに、某先生―一と書くは此に本づく。字解を見よ。

【函洞】カンドウ㊥汽車のとんねる。

刀部（刂）

【刀】タウ 豪

○かたな（兵）○はもの（刃）○刀の形をなせる古錢の名、黃帝始めて首山の銅を鑄て造る。○刀の形せる小船。詩、衛風「誰謂ニ河廣、曾不レ容ニ―一」

【不レ容ニ刀】イレズタウ川幅の極めて狹くして小船をも容れず。字解を見よ。

【試レ刀】コロミルタウ罪人などを斬りて刀の利鈍をためす。北史「安德王延宗以レ因ニ―一驗ニ其利鈍ニ」

【敲レ刀】コウタウ庖丁を使ふ。戰國縱橫「藉政目、嗟乎、政乃市井之人、一レ以ニ―一」

【抽レ刀】スイタウ刀劍を拔き放つ。五代史「ニ―一逐之」

【刀折矢盡】タウセツシジン激戰の形をいふ。後漢書、段類傳「下レ馬大戰、至ニ日中ニ――、虜亦引退」

【刀架】タウカ かたなかけ。

【刀鋸】タウキョ かたなと、のこぎりと、刀は割く（勢をさく）刑、鋸は足きる（刖）刑に用ふる刑具、轉じて刑罰の義とす。司馬遷、報ニ任安ニ書「豪

何令ニ―一之餘蔭ニ天下豪傑一哉」韓愈、悲ニ李愿歸ニ盤谷ニ序ニ―一不レ加、理亂不レ知」

【刀鋸鼎鑊】タウキョテイカク皆人を刑する具、鑊は人を煮るかま。蘇軾、留侯論「當ニ韓之亡秦之方盛ニ也、以ニ――」待ニ天下之士ニ」

【刀光】タウクワウ かたなのひかり。崔國輔詩「―照ニ塞月ニ、陣色明如レ雪」

【刀重】タウチョウ故郷に歸るをいふ、還の字の隱語なり。李陵の匈奴に在るや、漢の使者、陵に向ひて漢に還歸せんことを勸めんと欲するも、單于の前にて私語するを得ず、乃ち屢ゝ其の―を循りて其の足を握り、陰に漢に還らんことを諭せし故事、環と還とは同音なるが故なり「漢書、李陵傳」高適詩「主將應レ未レ盡、且莫レ顧ニ――」

【刀圭】タウケイ○藥を盛るさじ。刀匕に似て其の端に圭の如き形せる中窪の所ありて其の中に藥を容る「池北偶談」‖藥匙。○轉じて、醫術の義とす「―家」

【刀戟】タウゲキ かたなと、ほこと。蜀志、諸葛亮傳、注「棄ニ其ニ―一、更ニ持ニ市單衣ニ折レ節學問」

【刀劍】タウケン かたなと。史、春申君傳「―璽以ニ殊玉ニ飾レ之」

【刀筆】タウヒツ かたなのきずあと。察琰詩「砂場白骨兮、―簡數」‖刀痕。

【刀槍】タウサウ かたなと、やりと。白居易、

琵琶行「銀瓶乍破水漿迸、鐵騎突出ー一鳴」

【刀箭】タウセン　次條に同じ。北史、權武傳「殺傷甚多、ー一皆折」

【刀槊】タウサク　刀と長さ一丈八尺あるほこと。晉書、荷生載記「性耐ニー一、不ニ堪ニ鞭捶ニ」

【刀山劍樹】タウサンケンジュ　酷刑をいふ。宋史、劉鎭傳「作ニ陰者剝顚ニ――之刑ニ」

【刀自】タウジ　○老母の稱。婦人の尊稱。古字たる負の字を誤りて二分し、更に訓讀せしものか（北堂書鈔）○㊀㊁主婦、又年たけたる婦人の稱。

【刀主】タウシュ　かたなのさや。宋史、輿服傳「親ニ其ー一、不ニ與レ刃合ニ」＝刀鞘。

【刀刃】タウジン　かたな。刀のは。莊、養生主「ー一若ニ新發ニ于硎ニ」

【刀匠】タウショウ　かたなかぢ。北史、司馬悅傳「召ニ州內ー一示レ之」＝刀工。

【刀錐】タウスイ　微小の利に喩ふ。陳子昂詩「務光讓ニ天下ニ、豈貪ニ一ー一ニ」

【刀稍】タウセウ　かたなのさや。盧照隣詩「翠羽裝ニー一ニ」

【刀尺】タウシャク　剪刀いと、ものさしと、裁縫の用具。杜甫詩「寒衣處處催ニー一ニ」

【刀舌】タウゼツ　かたなのみね。北齊書「以ニ柔鐵ニ爲ニー一ニ」＝刀背。

【刀尖】タウセン　かたなのきっさき。

【刀泉】タウセン　ぜに、通貨。刀は人に利ある義、泉は到る處にあまねく流通する義。＝刀布。

【刀鋸】タウキョ　刀を以てひたひを刺み、これにいれ墨する刑。周語「有ニ奔鋸ーー之民ニ」＝黥刑。

【刁】チウ　刀（前條）に同じ。國立刀字の旁の名。

【刁斗】チウト　○一斗は、銅にて造り一斗の量を入る、晝は炊具とし、夜は陣の警戒の爲めに擊つ、即ち鐎斗と銅鑼とを兼ねたる古の軍用の具。漢書、李廣傳「不ニ擊ーー斗自衞ニ」○一ーは風止まんと欲して微しく動く貌、そよぐ貌。莊、齊物「而獨不ニ見ニ之調調之ーー乎」

【刃】ジン　㊀俗に、双に作るは非

【一】【畫】

○やいば、兵器の鋭利の處「刀ー一」○やいばす、きる、きりころす「自ー一」

【刃創】ジンサウ　かたなきず。周禮、注「金瘡ーー也」＝刃傷。

【刃鋭】ジンエイ　はものののきっさき。

【刃傷】ニンジャウ　やいばを以て人をきずつける。＝刃創。

【二】【畫】

【刈】ガイ　㊀通音カイ俗に苅に作る

○かる（芟）草又は稻をかる。○たつ（絕）○ころす（殺）金史、吾札忽傳「所ーー甚多」○とる（取）○農具、鎌の屬。

【刈禾】ガイクワ　いねをかる。唐賀詩「楊柳已寒色、楚山方ーーレ」

【刈穫】ガイクワク　刈は草をかり、穫は穀をかる。又、單に穀をかりをさむる義とす。

【刓】シャ　㊀サウ

きず、きずつく。＝創。

【切】㊀セツ・セチ　㊁セイ・サイ

㊀きる、刀を以て之を斷つ。○きざむ（刻）○さく（割）○みがく、骨角の類をみがきあける。○せまる（迫）○しきりに。○いそぐ（急）○まこと（懇實）ねんごろ（懇到）○たしかに（確實）○おさへる（按）史、扁鵲傳「不ニ待ーー脈」○かなめ（要）○とじきみ（門限）○かへし。＝反。字音を示すために、或字の發音と或字の聲韻と相將して一の音を生ずる法。㊁みぎり。○一刻に通ず。○おほし（衆）○一

切は大凡なり。

【切刀】セツタウ　刀に从ふ、七の聲、俗に切に作るは非なり。

【同訓異語】切・斬・斫・斷・截・伐等の訓は斬(斤部七畫)の條を見よ。

【同訓異語】切・伐・殲・連・誅等の訓は伐(人部二畫)の條を見よ。

【切要】セツエウ　適切にして肝要、かなめ。

【切開】セツカイ　治療のため筋骨を斷ち、又きりひらき施術する。

【切迫】セツパク　きびしくいさむ。史、主父偃傳「明主不レ惡ニ――一」‖直言極諫。

【切玉】セツギョク　古の名刀の名。鋭利にして玉をも切斷する義。列、湯問「周穆王征ニ西戎一、西戎獻ニ昆吾之劍一、練鐵赤刃、用レ之――如レ切レ泥」

【切玉刀】セツギョクタウ　昆吾刀をいふ。前條を見よ。蘇軾詩「君才有レ如ニ――一、見レ之裸體無ニ生レ毛」

【切磋琢磨】セツサタクマ　骨角を治むる者は既に切りて又之を磋ぎ、玉石を治むる者は既に琢ち、又之を磨きて益ー其の精を求む、以て學德を修めて深く練習を積むに喩ふ。詩、衛風「瞻ニ彼淇澳一、菉竹猗猗、有レ斐君子、如レ切如レ磋、如レ琢如レ磨」磋ー鉋に磋に作る。大學「如レ切如レ磋道レ學也、如レ琢如レ磨、自修也」

【切偲】セツシ　切切偲偲を見よ。

【切實】セツジツ　實際によくあてはまる。適切にあてはまる。‖劉切

【切齒扼腕】セツシエンワン　齒をくひしばり、腕をにぎる。甚だしく憤るさま。史、張儀傳「楚於期偏袒扼腕而進曰、此臣之日夜切齒腐心也」扼一に握に作る。

【切切】セツセツ　○ねんごろなる貌。論、子路「朋友ー――偲偲」‖懇到。○細かにして急なる貌。白居易詩「小絃ー――如ニ私語一」○憂ひ思ふ貌。家語「ー――而哀」○急にせまる貌。黃庭堅詩「歸心ー――望ニ刀頭一」○再三告げ諭むる貌、公用文の結尾に多く之を用ふ。

【切切偲偲】セツセツシシ　切切は懇到の貌。偲偲は互に善を責め勵ます貌。論、子路「朋友――、兄弟怡怡」

【切促】セツソク　さしせまる。後漢書、張奐傳「州期ー――、郡縣惶懼」‖切迫。

【切斷】セツダン　きりたつ、きり離す。

【切中】セツチウ　たしかに理に當る。李之儀題跋「善論難、剛談ー――」

【切直】セツチョク　ねんごろにして正し。漢書「ー――之言、明主所レ欲ニ急聞一」

【切望】セツバウ　しきりにのぞむ、甚だ欲する。‖懇望

【切腹】セツプク　圖はらをきって自殺する。‖割腹　屠腹

【切磨】セツマ　みがきて益を得る。唐書、陸贄傳「ー――之益、不レ盡矣」‖切磋・琢磨。

【切勵】セツレイ　玉をみがき攻めるる、轉じて、朋友互に相勵まし合ふ義とす。

宋史、李侗傳「舉居終日、交相ー――」

【切磋琢磨】を見よ。

【切劇】セツゲキ　切磋に同じ。劇は削なり。

【切なり】。劉禹錫、砥石賦「ー――下上」

【切脈】セツミャク　醫師が病人のみやくをおさへ診察する。字解を見よ。‖脈診。

【切問】セツモン　實際にあてはまる適切なる質問。論、子張「博學而篤志、ー――而近思」

【切膚】セツフ　甚だはげし。後漢書「言甚ー――、坐免レ官」

【切論】セツロン　すこしもはばからずして議論する。眞德秀文「危言ー――」

【切手】セツテ　圖金錢の代用をなすふだ、一種の證券「郵便ー――」「商品ー――」‖票・券。

【切支丹】キリシタン　圖耶蘇ヤソ天主教の稱。轉じて魔法、魔法づかひの義にもいふ。西班牙イスパニア語の轉訛。

【分】

㊀フン・ブン　㊁フン・ブン　同文　一番

㊀わかつ、合の反對。わく(別)○わかる(別)○さく(裂)○わる(割・割)○くばる(賦)あたへる(與)○ほどこす(施)○なかば(半)荀、仲尼篇「以ニ齊之一ー――之、而不レ足」○あまねし(偏)○へだつ(隔)しきる、かぎる(限)○尺度の單位。一寸の十分の一。○時刻の稱。一時間の六十分の一。○角度の稱、一度の六十分の一。○二十四氣の一、春又は秋の半にあたり、晝夜平分の時「春ー――」「秋ー――」○ーーはぶにる貌、紛に通ず。㊁わかち(區別)○ひとし(均)○もちまへ(性質)○ちから(器量)○みち(名分)○ぶん、本分。○つとめ(職責)諸葛亮、出師表「此臣所ニ以報一先帝一而忠ニ陛下一之職一也」○しな(等差)○圓ぶ。古の錢にて一分ブは一兩の四分の一。轉じて今の二十五錢の稱。

【同訓異語】分・別・判・頒・班・析說○分は合の反對、物を別別にわける義。易經「物以レ羣分」又、施也、與也と註す。孟子「分ー――人以レ財」調二之惠一○別は辨別と連用す。彼は彼、此は此と、區別して混ぜざる義。分の字に、異の字の意を帶びたり。孟子「夫婦有レ別」○判は分に斷の意を兼ね、判斷・判決と連用す。晉書「逆順於レ茲判矣」○頒は分ち賜ふ義。明史「帝頒ニ佛典於塞外一」○班は頒と音義通ず。禮記「班ニ諸兄弟之貴者一」○析はもと斤にて木をわる義なり、それより筋道をわかつに用ふ。析理・析義と用ふ。○訣

は永く別るる義、永訣と連用す。史記「與二其母一訣」

【分秧】ブン　田うゑ。秧は稲の苗。〈蘇軾詩〉「——及二初夏一」‖插秧。

【分除】ブン　一分ヅヽの光陰、僅かの時間。晉書、陶侃傳「大禹聖者、乃惜二寸陰一、至於衆人、當惜二分陰一」

【分訓】ブン　互に訓字を分ちて詩を作る。白居易詩「落壁聯題——句」

【守レ分】ブンヲモル　自分の分限だけを守る。文子、自然「廉者可レ令レ守レ分、不レ可レ令二遊飯一」

【分界】ブンカイ　分ちし界、又、界を分ける。輿志、注「各保二一一一、無レ求二細益一而已」

【分解】ブンカイ　○ときわける、解剖する。後漢書、馬皇后紀「二一趣理一、各得二其情一」○理化學にて或物體が電氣・熱・空氣等の作用にて成分を變じ、わかれわかれの物質となる現象。

【分校】カウ　手を分けて書物を校正する。權德輿文「二一秘府弘文之書一」

【分毫】ブンガウ　一分一毫、極めて些細なる義。晉成伯賦、市賦「談二智於尺寸之間一、鑒二察於一一之際一」

【分割】ブンカツ　わかつ、わけて取る。

【分岐】ブンキ　わかれ、えだ、又二つにわかれる、またになる。‖分歧。

【分標】ブンヒョウ　えりをわかつ、人と別るる標識。詩「折レ枝一レ一十載餘」‖分秩・分手。

【分秩】ブンチツ　分袂に同じ、秩はたもと。盧思道詩「一一俄易レ慘」

【分化】ブンクワ　生物の體内の組織開に行はるる分業作用。

【分科】ブンクワ　學校にて各學科に分れて獨立せる科目「一一大學」

【分課】ブンクワ　業務の受持を分けてわりつける。又、分けたる業務の受持。

【分外】ブンガイ　○身のほどをはづれる、過分。魏志「不レ務二一一之賞一」‖非分。○程度の外に出る。‖十二分。

【分軒】ブンケン　わけて支配する、わけて管轄する。‖分管。

【分管】ブンクワン　前條に同じ。

【分家】ブンカ　一つの家すぢから分れたるいへ、しんや、別家。本家の對。

【分曉】ブンゲウ　○天の將に明けんとするをいふ。吳晦賦「曙光一一、出二虛宿一」○さっぱりと明かる。洞天清錄「古器款識、必細如レ髮、幻整一一、大小深淺如レ一」‖清晰。

【分業】ブンゲフ　各其の長ずる所に隨ひ、業を分ちて之に服する義、一物を生産するに二人以上の人が手を分ちて完成するかせぎかた。‖分功。

【分限】ブンゲン　○上下尊卑の別、身のほど、身ぶん。北史、陳侯傳「臣竊以二畎畝一、欲レ使レ知二一一一」○圖書きぶんざい、ぶげん「一一者」

【分權】ブンケン　政權を各機關に分配する。集權の對「地方一一」

【分功】ブンコウ　各人、力を分ちて事に任じ、以て生産事業を成す義。‖分業。

【分歲】ブンサイ　年越コシの夜に相聚りて寢を開くをいふ。風土記「除夜祭レ先竢レ曙、長幼悉飲、祝頌而散、謂二之一一一」

【分際】ブンサイ　けぢめ。みぶん、分限。史、儒林傳「明二天人之一一一」

【分散】ブンサン　○わかれちる、ちりぢりになる。史、歷書「子弟一一」‖離散。○分けちりて無くなる「家貲一一」

【分子】ブンシ　物理學にて物體を構成する最も小さきつぶ。

【分至】ブンシ　春分・秋分・夏至・冬至をいふ。左、僖五「一一啓閉、必書二雲物一」‖二至二分。

【分身】ブンシン　○佛菩薩ボサツ等が種種の形に身を變じて現はれる權化ゴンゲ傳說「一一千百億」○身をわける、神出鬼沒する義。清異錄「梁將蕭從周、每レ臨レ陣、乘四面北認焉如レ神、胥人稱爲二一一術一」○身ふたつになる、子を生む。‖分娩。

【分掌】ブンショウ　事を分けてつかさどる、分擔。後漢書「一一乘輿服物一」

【分手】ブンシュ　人とわかれる、別離する。江淹、別賦「一一而銜レ淚」‖分攜・分袂。

【分首】ブンシュ　分袂に同じ。杜甫詩「直到二綿州一始一一」‖分手。

【分錄】ブンロク　一分一錄の義、極めて少しの分量、わづかの利益。錄は兩の二十四分の一。史、大宛傳「善二市賈一、爭二一一一」‖錙錄シロク

【分書】ブンショ　書體の一。‖八分ハップン

【分水界】ブンスヰカイ　地文學にて反對の方向に流れる二つの川流の分界線、屋根の棟の如くに山脈がこの界線を成すを以て、一に分水嶺ともいふ。‖分水線。

【分水嶺】ブンスヰレイ　前條に同じ。

【分寸】ブンスン　一分一寸の義、わづか、些少。史、蘇秦傳「臣東周之鄙人也、無レ有二一一之功一」‖寸分。

【分析】ブンセキ　○紛れたる者を一一わかち解く。通鑑、梁太祖紀「帝命二元彥一一一」○物體を構成する諸の元素に分解する。

【分疏】ブンソ　いひわけする、又、いひわけ。宋濂銘「世俗謂二自辯解一曰二一一」‖辯解・分理。

【分隊】ブンタイ　軍隊にて、一小隊を四分せるものの稱「一一長」

【分揩】ブンカイ　わかちになふ、擔ひ又は賣任の一部分を引き受ける。‖分掌。

【分地】ブンチ　分け與ふる地、敵の領土を奪ひて功勞ある將士に分ち賜はる土地。史、項羽紀「未レ有二一一一」

【分庭抗禮】ブンテイカウレイ　對等の禮を以て相見る義。亢は抗。莊子「萬乘之主、千乘之君、未レ嘗不二一一一」

【分統】ブントウ　わけて支配する。舊唐書

「諸章子姪ニ―之ニ」

【分網】ブンドウ はかりのおもり。‖秤錘・法馬。

【分頭税】ブントウゼイ 人数にわりつけて取り立てる税。‖人頭税。

【安レ分】ブンニヤンズ 身の分限に安んじて外物に誘はれざる義。蘇軾詩「胡不レ安ニ其分一但為ニ物所ニ誘」

【分派】パン ○わかれ。山河の分るるもの。李商隠詩「盗浦塵ニ―ニ」○流儀・学説などの別に分れ出でたるもの。

【分配】パイ くばりわかつ。

【分遣】パン 人の派ツを吾身にも分けて引受ること。国語「敢不レ―乎」

【分澱】パン しるがしみでる、醤内の液汁がにじみだす。‖滲漏ロウ・浸出。

【分布】パン 分ちて處處にしく、分れ處まる。「動物―圖」

【分付】プン 人に物を分け與ふる。漢書、原渉傳「―ニ―諸客ニ」

【分賦】プン わかちくばる、わりつける。

【分秩】プンチツ たもとをわかつ。人と別れること。謝恵連詩「飲餞野亭館、―澄湖陰」‖分手・分襟。

【分秒】ビョウ 一分一秒、極めて少時間の義。

【分別】ベツ ○けじめ。‖差別・區別。○圖わきまへ、かんがへ（思慮）

【分別盛】ワキマヘ 圖人の思慮の最も成熟して物事に迷はぬ年ごろ、四十歳前後。

【分娩】ベン 子をうむ。‖分免・分身。

【分捕】ブン ○手分けして罪人を捕ふ。後唐書、荘レ使―而擒レ之ニ○ブンドリ 圖戦場にて敵の物を分ち取る行爲、又、其の物「―品」‖鹵獲。

【分封】ブン ○古、王者が地を分ちて諸侯を封ずる義。○蜜蜂の一つの巣に二つの王の生ぜし時、老王が衆蜂を率ゐて分家し、別に新しき巣を構へるはたらき。

【分崩】ブン わかれくづれる。論、季氏「邦―離析、而不レ能レ守」‖瓦解。

【分明】ブン はっきりとわかること。史、始皇紀「賞賜―」

【分門書】ブンモンショ 類書をいふ。舊唐書、杜佑傳「開元末、劉秩撰ニ――三十五巻一號曰ニ政典一、佑加以ニ開元禮樂一、號曰ニ通典一」

【分野】ブン 戦國の時、天文家が支那全土を天の二十八宿に配當して區別したる稱。其の―に星變ある時は、其の國に災ありといふ。周語「茂之所レ在、則我有周之―焉是也」

【分理】ブン いひわけする。鄭氏家範「子孫受ニ長上詞責一不レ論ニ是非一、但當ニ俯レ首默受一、毋レ得ニ―ニ―一」‖分疏。

【分離】ブン わかれはなれる。又、わけはなす。

【分流】ブンリウ えだながれ。漢書「河水―繞ニ城下一」‖枝流。

【分屋】ブン 分も屋も皆小數、屋は簷の略字、すこしばかり。‖些少。

【分量】ブンリヤウ ○身のほど、みぶん。宋史、高皇后傳「―既過、辞レ之」‖分限。○めかた・ますめ・容積・かさ。

【分掠】ブンリヤク てわけしてかすめ取る。唐書「―定州」

【分龍雨】ブンリユウ 驟雨をいふ。埤雅「俗五月雨、曰ニ之――一、又曰ニ隔壁雨一、言夏雨多至、龍各分レ域、雨時往往隔ニ一檐一而異也」

【分類】ブンルイ たぐひによりて區別する。書經、序「別生ニ―ニ一」‖類別。

【分裂】ブンレツ わかちさく。わかれさける。賈誼文「客ニ割天下一、―ニ―河山一」

刊 三畫 カン 寒

○けづる（削）○きる（斫）棊に通ず。書、禹貢「隨山―木」○きざむ、ゑる（刻彫）王倫、諸淵碑「―玄石以表レ徳」○書物を出版する。

刊刀に从ふ、干の聲、**刊**（夾修）とは別字。

【刊行】カンカウ 書物を版にして世に行ふ。‖印行・上梓ジヤウシ

【刊校】カンカウ 刊定に同じ。

【刊誤】カンゴ 文字などの誤を削り正す。宋史、藝文志に劉敞漢書―一四巻あり。

【刊石】カンセキ いしにほりつける。

【刊定】カンテイ 不用の文字を削り、誤を正し定める。陳書、姚察傳「別寫ニ一本一、有レ疑悉令ニ―ニ一」‖刊校。

【刊木】カンボク きをきる。字解を見よ。‖棊木。

刋 センケン 刊とは別字

きる（切）

【刋改】センカイ 板木をけづりあらためる。後漢書、鄭康成傳「括ニ囊大典一、網ニ羅衆家一、刪ニ蕪穢一、―ニ―誤失一（學者略知レ所レ歸）」

切 四畫 セツ 屑

切（刀部二畫）の譌字。

刎 フン 文 元 ゲン・グヮン

○けづる（削）削りて廉隅を去る。楚辞、九章「―方以為レ圓」‖圓。○ひとしくす（齊）○すれつぶれる。史、淮陰侯傳「印―弊忍不レ能レ予」

【刎頸】フンケイ けづりみがく、蘇舜欽詩「器成必――」

【刎敝】フンヘイ すれつぶれる。又、潤みみ敝れる。唐書、今水流秀レ実、民力

一一」

【刑】 ケイ ギャウ 書 もと刑に作る

○のり（法律）○つね（常法）「典ー」○のっとる（法）孝經、「德教加二於百姓一ー於四海一」○なる（成）禮、學記「敎之不ー」、其此之由乎」○ころす（殺戮）○くびはね（剄）「自ー」○つみ（罪）○しおき（處罰）罰の總名。舊刑律、死・流・徒・杖・笞を五ーと爲す。○つみす、罪に行ふ。○祭に粢ッを盛るうつは、鉶に通ず。史、太史公自序「嗟二土ー一」○かたち、形に通ず。

【刑措】ケイ 民、法を犯さず、刑廢して用ひざる義。史記「成康之際、天下安寧、ー一四十餘年不レ用」

【刑具】ケイ 罪人をしおきする道具。笞杖枷鎖など。

【刑科】ケイ おきてのさだめ。刑罰の條項。唐高宗傳「清愼不レ經ー一」

【刑官】ケイ 刑法を掌る官吏、司法官。陳信詩「辭ス條ニー一」＝秋官。

【刑敎】ケイ 人を罪する法と仁義道德の敎と、刑罰と敎育と。荀悅文「安平之世、則ー一並用」

【刑罰】ケイ 刑せらるるつみ。南史「ー無二輕重一、悉原レ之」

【刑事】ケイ ○刑法を以て論ずべき犯罪事件。○刑事巡査の略語。犯罪人を偵察逮捕するを專務とす。

【刑人】ケイ 刑を受けて身體を傷つけられし者。

【刑書】ケイ 刑法の條文。左傳「鄭人鑄二ー一」

【刑政】ケイ 罪人をさばくまつりごと、詩、周雅序「國史明二乎得失之迹一、傷二人倫之廢一、哀ニー一之苛一」

【刑譴】ケイ しおき。譴は謫に同じ、罪なり（後漢書、朱穆傳）＝刑戮。

【刑戮】ケイ 刑罰を加へてこらす。晉書、傅咸傳「ー一二小人一、義責二君子一」

【刑典】ケイ 刑罰の法則。罪人をつみするおきて。＝刑法。

【刑徒】ケイ つみびと。史、孫子傳「孫臏具ニー一（見前二齊使一）」＝囚人。

【刑不レ厭レ輕】ケイハカロキヲイトハズ 刑罰は重きに失せんよりは寧ろ寬に失するを可とする意。荀悅「敗レ刑者不レ厭レ輕、爲レ德者不レ厭レ重」

【刑期二于無レ刑】ケイキスルニムケイニ 刑罰を設くる所以は、惡人を懲らして再び惡事を犯し、刑罰を蒙らざるやうにするを期す（書、大禹謨）

【刑不レ上二大夫一】ケイハタイフニアガラズ 刑罰は大夫の人の身には加へず、士大夫の面目を重んじ、且其の節義を奬勵せんが爲めなり。司馬遷、報二任少卿一書「傳曰、ー一、此言二士節不レ可レ不二勉勵一也」

【刑罰】ケイバツ つみと、ばつと。刑法罰則。論、子路「ー一不レ中」

【刑法】ケイホウ ○罪人を處分するおきて。陸機文「除ニー一之厲一」＝刑典。○國六法の一、一般國民の犯罪行爲の上に適用すべき處罰法。

【刑范】ケイハン 刀を鑄るいかた、刑は型、范は範、笵、瀰國「ー一正金錫美」

【刑部】ケイ ○刑罰を掌る官署の名。唐書「ー一尙書一人、侍郎一人、掌二律令刑法徒隷按覆讞禁之政一」事物紀原「唐虞之士師、周禮司寇、皆ー一之任也、光武謂二之賊曹一、爲二尙書曹一、後周始有ニー一大夫、則ー一自二字文周一始也」○國 古の八省の一、今の司法省に當る。

【刑辟】ケイヘキ つみ。世說「桑陶遇ニー一之刺」＝刑戮。

【刑網】ケイモウ 刑罰のさだめ。罪人の刑に觸るるは鳥の網にかかるが如し、故に喩ふ。北史「ー一大密、命二有司一案レ律、務寧二厥中一」＝法網。

【刑名學】ケイメイガク 法律學の類。刑は形の義、其の名を以て實を責め、毫も超する所なきなり。史、韓非傳「喜二刑名法術之學一」

【刑餘】ケイヨ ○刑に處せられ餘命をたもつ者。宮者を稱す。漢書、蓋寬饒傳「以ニー一爲二周召一、以二法律一爲二詩書一」○廣く前科者をいふ。＝敎徒。

【刑戮】ケイリク 刑法を以て罪人を罰する。又其の刑罰。論、公冶長「邦無レ道、免二於ー一」

【刑律】ケイリツ 刑罰法律なり。＝刑法。

【刖】

㊀ ゲツ ㊁ ガツ 屑 月

㊀あしきる（斷足）あしの筋をたちきる刑。＝削。㊁たつ（絕）

【刖脚】ゲッキャク 罪ありて足の筋をたちきられる、又其の者。史、孫吳傳進贊「孫臏ー一筹二策龐涓一」＝刖足。

【刖罰】ゲツバツ 古、足をきるつみ。漢書、刑法志「ー一五百」

【刖者】ゲツシャ 罪によりて足の筋を斷たれしもの。周禮、秋官、掌戮「墨者使レ守レ門、劓者使レ守レ關、宮者使レ守レ內、ー一使レ守レ園、髡者使レ守レ積」

【刖足】ゲツソク 刖脚に同じ。漢書、註「刖二其右足一」＝刖跟。

【刎】

フン 吻 通音 フン

○はぬ、くびはね（剄）「自ー」「不ー至者ー一其人一」○刀もて首を斷ちて自殺するを自ーといふ。

【刎頸之交】フンケイノマジハリ 生死を共にし、たとひ頸を刎ねらるるとも心を變へざる程親しきまじはり。史、廉頗藺相如傳「廉頗肉袒負レ荊、至二門謝一レ罪、藺頗之人、不レ知二將軍寬一至レ此、卒相與驩爲ニー一」

【刎】 リ・ライ 支 俗に州の字體として用ふるは非

さく（割）

【列】 レツ　屑

○わかつ、わかる（分解）○つらなる、つらぬ（陳・連）○ならぶ（竝）○くらゐ（位・位次）○ついで（行次・席次）○わかち。○つら、ならび、くみ（隊伍）組に入る、仲間（ナカマ）になる。○しく（布）○たのとて（小膳）

同訓異字　列・連・聯・羅等の別は連（走部七畫）の條を見よ。

【列記】レツキ　ならべしるす。

【列強】レツキヤウ　つよき多くの國國、强大なる列國。

【列缺】レツケツ　いなびかり。漢書、揚雄傳「辭歷ー—、吐火施雉」＝電光・天閃。

【列侯】レツコウ　多くの大名。一人にあらず、故に列といふ。史、高祖紀「六年論ン功與ニ諸ー—一、剖ン符行ン封」＝諸侯。

【列國】レツコク　○ならびたつ衆くの國國。「ー—干渉」○地つづきの國、隣接せる國。淮南子「韓晉ー—也」

【列姑射】レツコヤ　仙人の住めりといふ山。山海經「ー—在ニ海河洲中一」＝藐姑射之山。

【列坐】レツザ　竝び坐する。後漢書、劉盆子傳「公卿皆ー—ニ殿上一」

【列士】レツシ　衆くの士類。荀子「被ニ文學一服ニ禮義一爲ニ天子ー—一」

【列島】レツタウ　つらなれる多くの島。

【列峙】レツヂ　ならびそばだつ。左思、魏都賦「三崤ー—而嶙峋」

【列女傳】レツヂヨデン　七卷、漢の劉向撰す。母儀・賢明・仁智・貞愼・節義・辯通・壁擘の七目に分つ、續傳一卷、作者明かならず、今合刻して一書とす。

【列傳】レツデン　史書中に於いて羣臣の事蹟を列叙せるもの。本紀・世家等に對する名。史、太史公自序、作ニ七十ー—一」

【列土】レツド　土地を分ちて諸侯を封ずる、又、其の多くの封土。漢書「方ニ海内一非ン爲ニ天子一ー—ン分」疏、非ン爲ニ諸侯一皆與ン爲ン民也」

【列眉】レツビ　つらなれるまゆ、明かなる喩。戰國策「吾信ン汝也、猶ニ一ー—一也」

【列羅】レツラ　つらなりならぶ。梁昭明太子文「綴ニ辭形一以ー—」＝羅列。

刦　ケフ　コフ　葉

○おびやかす（劉）○うばふ（奪取）かすめる（掠）○とどむ（禁持）提れて悪事を爲さしめす。荀、修身「ー—之以師友」

【刼】 刦（前條）の俗字。

【刪】 サン　刪　又、刪に作る

○けづる（削）○のぞく（削除）理に合はざる不要の文字を除き去る。古、書籍は竹のふだを編みて作り、字を除去するには刀を以て削り去る、故にいふ。漢書、律歷志「ー—其僞辭、取ン正義一著ン於篇一」○さだめる（定）取捨して選定する。

【刪改】サンカイ　字句をけづりあらたむ。晉書「ー—ニ前文一撰ニ定晉禮一」

【刪革】サンカク　字句をけづりあらためる。＝刪改。

【刪削】サンサク　文辭をけづり又修飾する。宋史、樂志「樂章累朝多ー—」＝刪改潤色。

【刪除】サンヂヨ　不要の語句をけづり去り必要のことを記しのべる。＝刪撰。

【刪正】サンセイ　文字をけづり正す。＝刪修。

【刪省】サンセイ　文字をけづりはぶく。後漢書、桓郁傳「ー—、定成三十二萬言一」

【刪節】サンセツ　語句を削りて程よく節略

する。伊洛淵源錄附錄「其餘浮辭多合ニ一ニ」＝刪省。
【刪削】サンサク　文字文章の不要のものを除き去りて撰び定める。＝刪定。
【刪潤】サンジュン　けづりきる。劉寬夫文「一一成ノ功、繁蕪立盡」
【刪除】サンジョ　けづりて除き去る。＝刪省。
【刪定】サンテイ　刪修に同じ。
【刪補】サンホ　不要の字句をけづり必要の字句を增し加へる。＝刪拾・刪削・增補。

【初】ショ　魚

〇はじめ（始）〇はじめて。〇もと（本原）莊、繕性「復其ニ一」〇はじまり、おこり（端緒）ふるごと（故事）禮弓「夫魯有ニ一」〇まへかた（以前・舊）左、隱元「遂爲ニ母子一如ニ一」〇うひ、はつ。

詳解 始なり、刀、衣に從ふ、衣を裁するの始なり。

同訓異語 ハジ・初・始・肇・創・緒・昉・首・甫。〇初は最初の義、後に對していふ、修記文にて事のはじめをいふには初を用ひ、事のはじまりをいふには始を用ふ。左傳「初鄭武公娶ニ于申一」〇始は事のはじまりをいふ、終の反なり。孟子「始作ノ俑者、其無ノ後乎」〇肇は開けかかる始なり。大雅「后稷肇祀」〇創は創始の意、新に爲し始むる義。詩傳「時乘君始有ニ車馬一、故因人創見而驚ニ美之一」〇昉は創に同じ、創業を規模とも書く、昉の俗字。〇昉は日の初めて出る意。通鑑「三皇之號、昉ニ於周曙一」〇首は頭首の義、一番がけにの意。〇甫は始也と註す、大きくなることの始めなり。後漢書「甫從ニ博士一爲ニ刺史一」

【初衣】ショイ　〇未だ仕宦せざる前の衣服。李白詩「久辭ニ榮祿一遂ニ一一ニ」＝初服。〇國ウブ生れたる子に初めて著せる衣服。＝産衣。
【初一念】ショイチネン　國はじめに思ひ込みし心、最初の一心。
【初夏】ショカ　なつのはじめ。陰暦四月の異名。＝孟夏。
【初爻】ショコウ　易の卦の最下段の稱。
【初更】ショコウ　初夜に同じ。
【初學記】ショガクキ　三十卷、唐の玄宗、諸王が學に從ふを以て、徐堅に命じて、部門を分ちて經史文章の要典故事を類纂せしめたるもの。
【初九】ショキュウ　〇易の卦にて、陽爻の初の稱。〇月の第九日目。
【初旭】ショキョク　あさひ、でたての太陽。白居易詩「蓮點開ニ一一ニ」＝初日。
【初月】ショゲツ　みかづき（三日月）書譜「纖纖乎似ニ一一之出ニ天涯一」＝新月・蛾月・初魄。
【初弦】ショゲン　陰暦の七八日頃の弓張月。庚肩吾詩「一一值ニ早秋一」
【初三】ショサン　月のはじめの第三日目。白居易詩「可ノ憐九月一一夜」
【初次】ショジ　國初回、第一回。
【初志】ショシ　思ひ立ちし最初の志望、初一念。曹植、黃初六年令「修ニ吾往梁ニ守ニ吾一一ニ」
【初秋】ショシュウ　〇あきのはじめ。曹植詩「一一涼氣發、庭樹微鎖落」〇陰暦七月の異名。＝孟秋。
【初日】ショジツ　日の初めて出たるをいふ。曹植賦「其始進也、皓若ニ一一照ニ扶桑一」
【初心】ショシン　〇本心に同じ。樊融詩「慶鹿愧ニ一一ニ」〇國無經驗、うぶ。又、ならひたて、初學。
【初旬】ショジュン　つきはじめの十日。＝上旬・上浣・上澣。
【初春】ショシュン　はるのはじめ。陰暦の正月の異名。梁元帝纂要「孟春曰ニ上春・一一ニ」＝早春。
【初祖】ショソ　初代のせんぞ、又遠祖。蘇軾詩「更把ニ安心一向ニ一一ニ」
【初唐】ショトウ　詩體を論ずる者、唐代を初・盛・中・晩の四に分ち、唐初より開元の初に至るまでを一期とし、一一と名づく、王勃・騰賓王・楊炯・盧照鄰・沈佺期・宋之問等最も著る。
【初程】ショテイ　かどで、轉じて物事の初めにいふ。翠雨軒詩話「風光詩、一舉指嘆盛衰興、曾記一一便客舟」＝發程。
【初冬】ショトウ　ふゆのはじめ。陰暦十月の異名。＝孟冬。
【初度之辰】ショドノシン　初めての節の義、誕生日をいふ。離騷「皇覽ニ揆余初度一」＝生日。
【初犯】ショハン　初めて罪を犯す。再犯・三犯の對。
【初步】ショホ　あるき出したる初の一あしの義。轉じて物事のてはじめ。＝入門。
【初發心】ショホツシン　國初めて佛道に入らんとする發心。宜律師感應記「從ニ一一乃至ニ成佛一」
【初夜】ショヤ　午後八時。古、一夜を五更に分けし、最初の時刻、戌の刻。更とは更代して夜を守る義。＝甲夜・初更。
【初老】ショロウ　國四十歳の稱。
【初涼】ショリョウ　はじめてのすずしさ、秋のはじめ。劉禪詩「昊天清且高、秋風發ニ一一ニ」＝早涼・新涼。
【初午】ハツウマ　國二月初の午の日、この日稻荷神社の祭を行ふ。
【初空月】ハツソラヅキ　國陰暦正月の異名。＝初花月。
【初花月】ハツハナヅキ　前條に同じ。
【初夢】ハツユメ　國正月二日の夜みるゆめ。

【判】ハン　諫

〇わかる、わかつ（分）辨別する。〇さだむ、さばく、決斷す

る、是非曲直を決断する。又、さばき、裁決。〇わかれちる（離散）〇なかば（半）〇かたわれ（片）配耦フレ者の一方、夫、又は婦。〇つかさ。〇大官の人が小官を籠ねるにいふ、宋代、宰相が樞密院にーとなる類。〇圓印形。〇紙などの大さ。〇古の金貨の稱「大ー」「小ー」

【判断】ハンダン 物事の是非、善惡をわかちさだめる。北齊書、許惇傳「以二能ー下一、見レ知二時人一」

【判取帳】ハンドリチャウ 圓金錢物品等を送り届けし時、受取人より、領收の證印を取り置く帳簿。

【判任官】ハンニンクワン 圓官吏の最下級、大臣又は府縣知事之を任免す。奏任官の下。

【判明】ハンメイ あきらかにわかる。

【判例】ハンレイ 訴訟事件を判決せし先例。‖判決例。

【別】（ベツ）　唐韻　彼列切　ベツ

〇わかる、わかつ（分別）〇とく（解）はなす、はなれる（分離）〇わかち（區別）へだて。小學、明倫「右明二夫婦之一」〇わかれる、わかれ（別離・分岐）〇わきまふ（辨）〇よそ、ほか（他）べつに。

周禮疏云　別・分・列・頒・班・析等の別は分（刀部二畫）の條を見よ。

【別業】ベツギョウ かはり、ちがひ。

【別駕】ベツガ 刺史が州を巡察するときに隨ひ行く官。別に屬して行くが故。事物紀原「唐六典曰、後漢、州置二一ー一、歷代皆有レ之」

【別項】ベツカウ 他の箇條。別の事項。

【別號】ベツガウ 〇名目ナを異にす。書、君奭、疏「保衡伊尹一人也、異レ時而一ー」〇人すでに名ありて別に一の名を立つるをいふ、單に號ともいふ。‖別字。

【別格官幣社】ベツカクカンペイシャ 圓功臣を祭る社格、官幣社及國幣社の中間に位するもの。

【別儀】ベツギ 圓外のこと。‖他事・餘事。

【別居】ベツキョ 家族が分れて別の家に住居する。

【別家】ベツケ 圓本家より分れ出たる家。しんや。‖分家。

【別墅】ベツショ しもやしき。業は莊に同じく田園の墅。南史、謝靈運傳「修二營ー一、傍レ山帶レ江、壺二幽居之美一」‖別野。

【別乾坤】ベツケンコン 別天地に同じ。

【別魂】ベツコン 離別の時のかなしき心。韓詩「巴山楚ニー一、巴水徹二衡門一」

【別懇】ベツコン 圓取りわけての懇意。特別のしたしみ。‖昵懇ジッコン入魂ジュッコン

【別才】ベツサイ 特別の才思。嚴滄浪詩話「詩有ニー一、非レ關レ書也」

【別離】ベツリ としわすれの酒もり、歲末の酒宴。蘇軾、餞歲詩序「蜀中值二歲晩一、問遊謂二之餞歲一、酒食相邀爲ニー一」‖分歲。

【別紙】ベツシ 他の紙。吳志、注「ー一官、足下不レ死、孤不レ得レ安」

【別愁】ベツシウ わかれのかなしみ。崔顥詩「不二作レ書相問一、誰能獻ニー一」‖離愁。

【別集】ベツシフ 一人等の詩文集（隋書、經籍志）

【別人】ベツジン ほかの人。宋書、謝晦傳「或用ニー一」‖他人・餘人。

【別將】ベツシャウ 他の將校。他所に在る將。漢書、高帝紀「項梁乃召ニー一」

【別趣】ベツシュ 特別のおもむき、特殊の意趣。嚴滄浪詩話「詩有ニー一、非レ關レ理也」

【別所】ベツショ ほかのところ。北魏書「引二之ー一」‖他所。

【別緒】ベツショ 離別の感情。獨孤及文「尊酒可二以慰ニー一」

【別墅】ベツシャ しもやしき。晉書、謝安傳「開レ碁賭ニー一」

【別當】ベツタウ 〇圓古、檢非違使ケビイシ藏人所ドコロ院廳・淳和奬學院・大歌所・政所マンドコロ侍所サムラヒドコロ等の長官。職別に專當する職。〇例官の一。〇現制にて親王家の執事の長官。〇院廳のーより轉じて俗に乘馬の口とり、うまかひ。‖馬丁。

【別宅】ベツタク 本宅の外に設けたる家。晉書、裴楷傳「皆經ニー一」しもやしき。‖別第・別莊・別邸・別業・別墅。

【別段】ベツダン 圓とりわけ、ことさら。‖特別・格別・格段。

【別邸】ベツテイ 別宅に同じ。

【別第】ベツダイ しもやしき。別に設く第宅（唐書、韋嗣立傳）‖別墅・別邸・別宅。

【別條】ベツデウ 圓變りし事情。‖異變。

【別天地】ベツテンチ 俗界を離れたる土地。

李白詩「桃花流水杳然去、別有二天地非二人間一」‖別乾坤。
【別途】ベツ　ほかのみち、異なる方面。「一ー一支出」
【別働隊】ベツドウタイ　圖本隊の外に在りて別に行動し、本隊を援助する軍隊。‖游軍。
【別派】ベツ　ほかの流派。北史「同レ源ー」
【別房】ベツ　○妾をいふ。世說「謝太傅劉夫人性妒、不レ令二公有一ー一」‖別室。○べつの（や。
【別品】ベツ　○圖わけて善き品物。○うつくしき女。別嬪。‖美人。
【別嬪】ビン　圖みめよき女。‖別品。
【別名】ベツ　異名に同じ。史、秦帝紀、注「旅者、氏之別名也」
【別離】ベツ　わかれる。わかれ。離辭、九歌「悲莫レ悲二兮新ー一」‖離別。
【別懇】ベツ　わかれのなみだ。杜甫詩「天涯兼秋色二遠客一ー一遙添錦水波」

【利】リ　圓

○とし（銳）するどし（銳）鈍の反對。○はやし（疾）物事がすらすらと通りてとどこほらず。孟、盡心「惡ー口」○よし（吉）よろし（宜）易、賁卦「ー有攸往」○つがふよし（便宜）○こころよし（快）○なめらか（滑）○とほる、とほす（通）○したがふ（順）○物の功用「水ー」「地ー」の類。○いきほひ、ちから「權ー」「ー器」○かち（戰勝）○まうけ（潤益）まうける。中庸「或ー而行之」○益を他に及ぼす「ー國」「ー民」○元金より生ずる利子○とみ（富）○むさぼる（貪）戰、坊記「先レ財而後レ禮、則民ー」
【利鋭】リエイ　するどし。人物志「以二推護一爲二ー一」‖銳利。
【利益】リエキ　○まうけ。‖利得。潤益。○圖佛のめぐみ。‖冥利。冥加。
【見レ利思レ義】ケンリシギ　利益を見ては義に合ふや否やを思ひ考へて、取ると否とを決する。論、憲問「子曰、ー一ー、見レ危授レ命」
【牟レ利】ムリ　利益を貪り取る。史、平準書「富商大賈、無レ所レ牟二大利一」
【利鈍】リドン　はやふ（鈍）慮思道文「軽剛ー一、便習者多」‖走舸・輕舸・快走船。
【利害】リガイ　都合の善きと悪しきと。周語「明二ー一之鄕一」‖得失・利病。
【利権】リケン　利益をひとりじめにする。沈亞之文「ー一大登」‖壟斷。
【利眼】リガン　するどきまなこ。太陽の異名とす。陸機、演連珠「ー一臨レ雲」
【利器】リキ　○するどき刃物○すぐれた才器に喩ふ。後漢書、虞詡傳「不レ過二盤根錯節一、何以別二ー一乎」韓愈送二進郡南一序、懷二抱ー一」
【利金】リキン　○利兵に同じ。戰國策「堅箭ー一」○圖元金に對する利息、又、利益金。
【利戈】リカ　するどきほこ。杜牧文「以二ー一一壽レ喉」
【利源】リゲン　利益の出づるもと。蘇軾、收蜜詩「慚愧野花知二ー一」
【利剣】リケン　するどきつるぎ。公羊、宣六「子之劍、猶二ー一也」
【利口】リコウ　○辯舌がすぐれて巧みなり。論、陽貨「惡ー一覆二邦家一者」○圖かしこし。‖怜悧。
【利己主義】リコシュギ　己の幸福を全うするを以て人生の目的とする說。利他主義の反對。
【利根】リコン　圖利口のたち、利發なる性根。法華經「正見邪見、ー一鈍根」
【利爪】リソウ　するどきつめ。蘇軾詩「ー一排レ空怒且雄」
【利札】リサツ　圖公債證書、又は債權の利子を受け取る時、切斷して利子の受取の證となすもの。
【利子】リシ　借したる元金に對して生ずる報酬の金、利息に同じ。‖利錢。
【利筆】リヒツ　するどきくちばし。孫楚詩「ー一入二人肉一」
【利生】リショウ　圖衆生を利益する。法苑珠林「遙要ー一無レ過二見佛一」
【利潤】リジュン　利益に同じ。北史、姚氏傳「親姻皆求ー一」‖潤益。
【利瀉】リシャ　利益を積みて、次第に金がふえる。
【利能】リノウ　するどききり。皮日休詩「桔槹利如レ錐」
【利舌】リゼツ　よく口をきく。券同契「發辯ー一」‖利口。
【利息】リソク　貸金又預金の元金に對し其の幾分に相當する割合の金を收むるをいふ。息は利子の子と同じく子息の繁殖するに比す。北史、劉靚傳「歲入ー一以二巨萬一計」
【利鎌】リケン　するどきやじり。李華、弔二古戰場一文「ー一入レ骨、鏃沙入レ面」
【利他】リタ　圖他人を利益する。淨土論「應レ知由二自利一故則能ーレ、非レ是不二能自利一而能ーレ他也」
【利他主義】リタシュギ　他人の幸福を全うするを以て人生の最善の目的とする說。墨子の兼愛說の類。
【利導】リドウ　已に部合よきやうに人をみちびき出す。史、孫子傳「善用レ兵者、因二其勢一而ーニ之一」
【利途】リト　身分がよくなる。立身する。孟、離婁「人之所二以求一富貴一ー一者」
【利得】リトク　まうけ。易林「君子萬年、動有ニー一」‖利益・潤益。
【利鈍】リドン　するどきと、にぶきと。吳志、注「兵有ニー一、戰無二百勝一」
【利之所レ在皆貴賈踏】リノアルトコロミナキカフトウ　貴は孟賁、諸は專諸、共に古の勇者。

人の利を求むるときは、皆、孟賁・專諸の如き勇氣を發して、少しも畏るることなき義〔韓非、內儲說〕【利倍】バイ 倍を得ること一倍する。白居易、策林「應疾而化速、一一而功倍」【利不二從レ天來一】リハテンヨリキタラズ 利は天より降り來ることなし。鹽鐵論「一一、不二從レ地出一」【利兵】リヘイ するどきはもの。孟、梁惠王「堅甲一一」【利病】リビョウ 利と害と。後漢書、羊續傳「使二民一一一」‖利害。【利便】リベン 都合よろし。賈誼文「因レ利乘レ便、宰二割天下一、分二裂河山一」‖便利。【利鈍】リドン するどきとにぶき。韓詩外傳「異邪之一一」【利用】リヨウ ○物の用ひ方を巧くする。書、大禹謨「正レ德一一、厚生惟和」○巧に應用する。【利用厚生】コウセイ 利用とは工の器を作り商の貨を通ずる類、厚生とは、魚を食ひ、肉を食ひ、飢ゑず寒ゑざる類をいふ。前條參看。【利欲】リヨク むさぼりほしがる心。地朴子「不貪二一一一動レ心」【利率】リリツ 利息の元金に對するわりあひ。【利隊】リスイ ふちのもらけ、又、ふちを得るを利する。禮記「那レ君三遊而不レ出レ竟、則一レ一也」

六畫

【刮】クワツ 圖

○けづる（削）○する（刷）こする（擦摩）韓愈、進學解「一レ垢磨レ光」【刮摩】クワツマ 物をこすりみがきて滑澤ならしむる。周禮、冬官「一一之工」‖刮磨。【刮目】クワツモク 目をこすり拭うて明かに見る。吳志、呂蒙傳、注「蒙曰、士別三日、卽當二一相待一」

【刲】ケイ 陷 齊

○さく、わる（割）割きて取る。戰國齊策「一魏之東野一」○さす（刺）易、歸妹「士一羊無レ血」

【刑】

刑（刀部四畫）の本字。

【券】ケン 圖 券とは別字

○てがた、わりふ（契）古、木ふだに契約の事項を書き、兩分して各一を雙方に保存し、後日の證とせしもの。史、孟嘗君傳「合一狹之」○きつぶきつて、印紙證文の類「鄭一」「有價證一」【折レ券】セツケン 借用證書を破り棄てる、券は金錢貸借の證書なり、卽ち債權を棄つる義、古は竹簡に字を書す、故に折るといふ。史、高祖紀「兩家一レ一責」責は債。【券契】ケンケイ 約束てがた。わりふ。‖要契。【券書】ケンショ 約束のかきつけ、證文。史、孟嘗君傳「貧窮者、悉燔二一一以捐レ之」【券面額】ケンメンガク 證書のおもてに記入してある金だか。【券約】ケンヤク ちぎる。‖契約。

【剋】コク・コウ・ク 屋 尤 職

○さく（割剋）書、秦誓「一割孕婦一」○わかつ（割）○ほふる（屠）○ふぐる、くりぬく、うつろにする。易、繫辭「一レ木爲レ舟」【剋割】コクカツ からだをきりさく。宋史「支離斬一一」【剋剝】コクハク 動物をほふりて肉を解く。漢書、王莽傳「與二巧屠一共一二一之」‖刳剋。【剋期】コクキ はらをさく、制腹。戰國策「一レ一折レ腸、首身分離」

【刻】コク 圖

○きざむ。呂覽、察今「一レ舟求レ劍」ほる、ふるる（彫）ちりばむ（鏤）○けづる（削）○さく（割）○はぐ（剝）○いたむ（痛）○そこなふ（害）○むごし（殘忍）○深字の義あり、故に度に過ぐる者皆之をといふ、「忌一」「苛一」の類。○漏一レ一の時間の度。轉じて時間の義とす。「卽一」【刻意】コクイ 深く意思をくるしめる。莊、刻意「一レ一尙行」唐書、張九齡傳「卑一一修飾、而刑政自清」‖苦心。【刻印】コクイン 彫刻したる印。又、印をきざみほる。【刻下】コクカ ただいま。‖卽時・卽今・目下。【刻念】コクネン むごくさびし。史、嚴延年傳「用レ刑一一」‖峻刻。【刻苦】コクク ほねをりくるしむ。宋史、孔文仲傳「一一問學數二博洽一」【刻絡】コクラク きざみかがく。‖彫繪。【刻限】コクゲン 定められたる時刻。【刻薄】コクハク 頑固にして時勢に通ぜざるに喩ふ。齊書、顧歡傳「一レ一沙門、守レ株道士」【刻舟】コクシュウ 呂覽の鵠（七畫）字の條を見よ。【刻削之道無レ異二大目之如一小】コクサクノミチハオホキナルヲカロンジチヒサキヲカロンズルガゴトシ 人の顏面を雕刻するに、最初、鼻はなるべく大にすべく、目はなるべく小にすべし、鼻は

凸起したれば、一度小にすれば再び大にすることを得ず、目は凹みたれば、一度大にすれば再び小にすることを得ざればなり、因りて事を爲すには其の初に當りて適當の方法を考へ失敗することなきやうにすべきに喩ふ〔韓非、說林〕

【刻字】コクジ　文字を彫りさざむ。又、其の文字。

【刻舟】コクシュウ　舟の進み行くを知らずして、ふなばたに目じるしのすぢをつけて、落したる劍を求める意。事物に拘泥して變通を知らざる頑固の人を嘲りていふ。舟字の條、一ノ一項の劍を見よ。

【刻日】コクジツ　期日を限定する。宋史、張浚傳、「一ノ一決ノ戰」

【刻深】コクシン　むごし、苛刻にして深く責める。漢書、賈捐傳「言文ノ一」‖峻刻・酷急。

【刻燭】コクショク　銅壺にきだをきざみて時間のたつを驗する。南史、王僧傳「令ノ預二朝宴一ノ一賦二詩文一、不ノ加ノ點」

【刻漏】コクロウ　きざみけづる〔李東陽、石鼓歌〕

【刻薄】コクハク　いれずみ。黥、呂刑、傳「刻二其額一而涅之曰二墨刑一」‖黥。

【刻薄】コクハク　むごくして情薄し。史、酷君傳「酷君者、天資ノ一人也」

【刻法】コクハフ　きびしきおきて。賈誼文「深刑ノ一、朝夕切切、而後行哉」‖峻法・苛法・嚴法。

【刻銘】コクメイ　後世に傳へん爲めに石に彫りつける、銀は玉に次ぐ美石。柳宗元、韓君墓誌「銀刻二玆銀一」‖刻石。

【刻本】コクホン　版に刻みたる書物、出版せし本、すりまき。寫本の對。‖刊本・板本。

【刻銘】コクメイ　銘の文をきざむ。又、きざみたる銘。宋史、泰山有二唐明皇刻銘一」

【刻薄】コクハク　しのぎおかす、刻剝淩轢の義、刑を用ふることのきびしきをいふ。史、酷吏傳序「一ノ一宋室、接二時勢一」

【刻削】コクサク　厳しくしていさぎよしの意。朱熹傳「一ノ一剛直」

【刻潤】コクジュン　水どけい。周禮「掌二挈壺氏一ノ一」‖漏刻。

【刻鏤】コクロウ　きざみゑがく。禮記「器不ノ一一」‖雕鏤。

【刻意清秀】コクイセイシュウ　秋の景色のさっぱりとしたるをいふ。嶋刻星霜、清爽秀麗の義。歐陽修、豐樂亭記「擬二幽芳一而隊二喬木一、風霜冰雪、——、四時之景、無ノ不ノ可ノ愛」

【刷】サツ　セツ　屋　黠

○する、こする（刮摩）○はらふ（掃）ぬぐふ（拭）拭ひ除く。漢書、梁懷王揖傳「爲二宗室一」汙亂之恥」○きよむ（清）○はけ（刷子）はけにて板を押す、印刷する。

【刷羽】サツウ　はねを撫でつくろふ。梁簡文帝、詠二鼠鬚一詩「一ノ一向二沙洲一」

【刷行】サツコウ　書物を版にすりて世に行ふ。印刷發行。‖印行。

【刷牙散】サツガサン　圖齒磨粉。‖牙粉。

【刷牙子】サツガシ　圖齒際やうじ。

【刷掃】サツサウ　ふきはらふ。掃除して清める。

【刷新】サッシン　害を除き去りて事を新にする。‖革新。

【刷洗】サッセン　拭ひ清むる。樂遠詩、「辰ノ滯振拔、塵瑕一ノ一」‖刷新。

【刷恥】サッチ　はぢをすすぎ清める。漢書「飲ニノ一改ニ行」

【刷印】サツイン　こすり去る。五代史「一ニ其皮膚一」

【刷毛】サツモウ　圖はけ。‖刷子。

【剎】サツ　セチ　黠　通音　セツ

○はしら、旛を建つる柱。○てら（佛寺）僧徒が一法を得れば旛を建てて遠方に告げ知らせたるによりて旛柱の義より轉じて佛寺の稱とす「古一」○たふ（寺塔）佛家にて舍利を藏する石塔。○一摩は梵語、くに（國土）をいふ。○一那は極めて短き時間。

【剎鬼】セツキ　圖おに、惡鬼羅刹なり。譯剎は梵語、鬼と譯す、人を食ふ鬼にて毘沙門に奉仕するといふ。

【剎帝利】セツテイリ　圖印度四姓の第二位にある王族、武力を以て土地人民を領し政治を行ふ、略して利利といふ。

【剎那】セツナ　圖極めて短き時間。俱舍論「時之極少者名ニ一一」

【剎利】セツリ　剎帝利に同じ。

【刺】（一）シ　寘　（二）セキ　陌　剌字

（一）さす。○さし殺す。○そこなふ（傷）○とげ（棘）はり（鍼）のさ（莖）○ほこさき（鉾）淮南、氾論「修戟無一」○魚骨の細き者。○なふだ「名一」○そしる（譏）○せむ（責）罪をたづねしらべる。周禮、秋官「司一掌三一」○とる（取）○のぞく（除）○かる（刻）（二）さす。孟、梁惠王「一人而殺之」やいばす（刃）○ぬひとり「一繍」俗にシ音に讀む。○さをさす（棹・櫂）史、陳平世家「平乃一船而去」○うかがふ（偵伺）

同訓異義　スル刺・繁・指・傷○刺はとげ

又は針にてさすなり。綱目「霍光嬖妾、上傳之、若有二芒刺在レ背」また人をさし殺すにも用ふ。○傳は刀を插しこむ義。傳レ刃と用ふ、刺に同じ。○指はゆびにてさし示すなり。○整は筆畫のさす義。○ルツ 刺・諷・非・謗・訕・詆・譏・誚・短・背・毀等の別は諷（言部八畫）の條を見よ。

【刺謁】シエツ 名刺を出し取次を請ひて面會する。‖謁見。

【通レ刺】ツウシ 名刺をさし出して面會を求むる。異苑「一レ、字不レ可レ識」

【投レ刺】トウシ 前條に同じ。梁書、處士諸葛璩傳「璩安レ貧守レ道、悅レ禮敦レ詩、未レ嘗投二刺郡宰一、曳中裾府寺上」

【刺激】シゲキ 次條に同じ。

【刺戟】シゲキ 人をそしりておどり高ぶる。北史「好飲レ酒、頗涉二一一一一」‖刺激。

【刺譏】シキ そしる。

【刺探】シタン 偵察して之を擧發する機。漢書、嚴延年傳「稱レ意一一、無所二迴避一」

【刺花】シクワ 薔薇ノバラの異名「木草綱目」

【刺殺】シサツ ○さし突く、心を感動せしめてはげます。○肉體にびりびりと刺す如き感覺を與ふる「一一性食物」

【刺激】シゲキ はげます。興奮さす、刺戟して感激せしむ。

【刺撃】シゲキ さしうつ。

【刺股】シコ 苦學をいふ。戰國策「讀レ書欲レ睡、引レ錐自刺二其股一」

【刺紅】シコウ いばらの異名。花譜「薔薇一名刺紅」

【刺候】シコウ やうすをうかがふ。漢書、蒸王旦傳「蒸王旦遣二幸臣一之二長安一問二禮儀一陰一一朝廷事」‖伺候・刺探。

【刺骨】シコツ ○治療法の一。韓非子「開古扁鵲之治レ病也、以レ刀一レ一」○恨のその甚だしきをいふ。聞見前錄「哲宗即レ位、退二元豐大臣於散地一、皆銜レ怨一レ」○寒氣の甚だしきをいふ。戴復古詩「一一清寒氣自來」

【刺草之臣】シサウノシン 草を刈る賤しきけらい、平民が君主に對して卑下する稱。儀禮、士相見禮「庶人則曰二一一一」‖草莽之臣。

【刺殺】シサツ きしころす。史、刺客傳「戰政一一俠累」

【刺史】シシ 漢唐時代の州の長官。漢書、百官志「孝武帝始置二一一十三人一」‖太守。

【刺繡】シシウ ぬひとり。又、ぬひとりする。史、貨殖傳「一一文不レ如レ倚二市門一」

【刺繡師】シシウシ ぬひとりの職工。倫衡「牛刀可二以割一雞、雞刀難二以解一レ牛、刺繡之師、能縫二帷裳一、納繡之工、不レ能レ織レ錦」

【刺斫】シシヤク きすときると。

【刺青】シセイ いれずみ。清異錄「力者張幹一一左手二日、生不レ怕二京兆尹一、右曰死不レ畏二閻羅王一」‖刺文。

【刺鼠】シソ 蝙蝠ヘンプクの異名。‖刺蝠。

【刺促】シソク 世事に役せられていそがはしい。晉書、潘岳傳「一一不レ得レ休」

【刺割】シカツ 刀にてさし、筒にて撃つ。史、張耳陳餘傳「一一身無二可レ擊者一」

【刺熱】シネツ 針にて體を刺し、灸やきがねをあててやく。又其の治療法。

【刺美】シビ そしると、ほめると。‖美刺・毀譽褒貶。

【刺文】シブン いれずみ、ほりもの。‖文身・刺青・刺皮。

【刺絡】シラク 動脈を針にてさして血を取る、瘀ダを去る療治などに行ふ法。

【刺客】シカク 暗殺を爲す者。史記に一一傳あり。

【刺痢】シリ くだくだと百多き病。管子、白心「執能棄二一一一、爲二惸惸一乎」

【刑】 ジ 圓

みみきる（斷耳）又、其の刑。古の肉刑の一。書、康誥、傳「劓一一刑之小者」

【劓】 ㊀ レイ・サイ ㊁ シイ・サウ 圓 韓

㊀はじめ、はじむ（始）創に通ず。㊁きずつく、やぶる、そこなふ（傷）

【創造】サウザウ はじめ起こす。魏志、武帝紀、注「是以一一大業」‖創造。

【制】 セイ 圓

○つくる（造）程よくしたてる（裁）普語「故能治事以一一百物」○さだめ（成法規則）○さだむ、規則を立てる。○おきて、のり（法律）○ただす（正）○さばく、斷ずる「裁一一」○しめくくる（檢）「節一一」○とどむ（禁止）○をさむ（御）○つかさどる（主）呂覽「以告一一兵者」○天子の命令、みことのり（詔勅）○しな（等級）○ほど（程度）○ほしいままにす（恣）もっぱらにす（擅）○かたち、かた（形式）

【稱制】セイシ 天子に代りて政を行ふ。史、呂后紀「今太后一レ一王昆弟諸呂、無所二不可一」

【擅レ制】センセイ 天子の詔なりと詐る。漢書、高五王傳「レ一以令二天下一」‖矯制。

【制書】セイショ 八股文をいふ、制藝又程藝文ともいふ。制科に用ふる文體。

【制禁】セイキン おさへとどむ。‖禁制・制

止。

【制御】セイギョ　おさへつけて自由にをさむる。史記「一二海内」＝制馭。

【制馭】セイギョ　前條に同じ。馭は御者が馬をつかふに比していふ。

【制挙】セイキョ　制科に同じ。唐書、選擧志「唐制取レ士之科、其天子自詔者曰二一一一、所三以待二非常之才一焉」

【制軍】セイグン　㊥清代、總督の異稱。

【制科】セイクワ　天子親ら詔して擧人を試驗する。〔唐書、選擧志〕＝制擧。

【制決】セイケツ　つくり定める。＝制定。

【制禁】セイキン　制裁に同じ。

【制限】セイゲン　おさへかぎる。一定の限度を立てて越ゆることなからしむ。＝節制。

【制裁】セイサイ　不善を止むる爲めのこらしめにして、法律によるものと、社會の習慣規定などによるものとあり。

【制作】セイサク　考へつくる。又、其作られたる制度文物など。類皷錄「一二一曲調一」

【制策】セイサク　天子が親ら試問する義。

【制札】セイサツ　㊥禁止の箇條を掲示するたてふだ。

【制酸剤】セイサンザイ　胃酸の過度に生ずるを止める鹽基性の藥。

【制止】セイシ　おさへとどむる。＝禁制。

【制使】セイシ　天子のつかひ。唐律釋文「天子所レ使、謂二一一一」＝勅使。

【制書】セイショ　制詔に同じ。漢書、呂后紀、注「天子之言、一曰二一一、二曰二詔書一一一者、謂レ爲二制度之命一也」

【制詔】セイショウ　みことのり、天子の命令。史、秦紀「命爲レ制、令爲レ詔」

【制節】セイセツ　程よく制限する。孝經、諸侯「一レ謹レ度」＝節制。

【制銭】セイセン　歴代通行の圓錢。我が國邦方孔の寛永通寶の類。

【制蹇】セイケン　㊥明清時代、總督の敬稱。

【制吒迦童子】セイタカドウジ　㊥不動明王の右脇なる侍者、頭に天衣をまとひ、左手に三鈷を持し、右手に金剛杖をつく。＝勢多迦。

【制定】セイテイ　つくりさだめる。後漢書「一二一礒樂二」＝制決。

【制度】セイド　國家のさだめ。政治上のきめ。易經「節以二一一、不レ傷レ財、不レ害レ民」

【制服】セイフク　○服裝を制定するの意。「度レ辭而一レ」○規定の服裝。

【制禦】セイギョ　禮儀をさだめつくるの意。書「王肇功成作レ樂、治定一レ」

【到】タウ　遇

○いたる（至）○ゆきとどく（達）及ぶ。○極まり至る、十分にゆきとどく「懇一」「周一」

同訓異義　到・至・臻・詣・遇・格・抵等の別は至（部首六畫）の條を見よ。

【到底】タウテイ　○つまり。畢竟。○そこまで。吳澄詩「心如二清水一一一澈」＝徹底。○圖とても。

【到頭】タウトウ　つまるところ、とどのつまり。盡頭に窮り到る義。羅隱詩「浮世一一須レ適レ性、男兒何必盡成レ功」＝至竟・畢竟・到底。

【到達】タウタツ　圖其の時、又其の地にいたりとどく。

【到著】タウチャク　圖其の地にいたりつく。

【到來】タウライ　○其の時又は其所に至る。岑參詩「一一逢二臨酒一」○圖人より物を贈られる。

【剄】ケイ　遇

くびきる、刀を以て首を刎ねる。史、淮南王傳「令從者魏敬一レ之」

【剋】コク　職　通じて克に作る。剋は俗字

○かつ（克勝）「金一木」「木一土」の類。○たふ、あたふ、よくす（能）○ころす（殺）○けづる（削）○きびし（嚴酷）○かならず（必）堅く約する。後漢書、鍾離意傳「一期俱至」○きざむ、刻に通ず。

【剋意】コクイ　こころをくるしめる。李商隱文「平生忍恕不レ樂、始一一事レ仲」＝刻意。

【剋核】コクカク　きびしの甚、八閩通「一一太甚、則必有二不育之心一應レ之」＝剋覈。

【剋期】コクキ　堅く期日を限り定める。字解を見よ。

【剋覈】コクカク　きる。徐陵文「一一無レ貨、纖金無レ貲」

【剋殄】コクテン　敵をほろぼしつくす。晉書「創二啓鴻基一一一强楚」

【剋伐】コクバツ　○しひて己に從はしむ。前漢記「武帝好二微行一、而御二一一」○克伐に同じ、克は勝つ、伐は矜る。論、憲問「克伐怨欲不レ行焉、可二以爲一仁矣」

【剋復】コクフク　國の亂に克ちて、常狀に復するをいふ。晉書、王導傳「當レ共戮二力王室、一一中興一」＝克復。

【剋勉】コクベン　私慾に克ちて事をつとめはげむ。北史「深自一一」＝剋勵。

【剋勵】コクレイ　剋勉に同じ。顏氏家訓「不レ能二一一」

【剉】ザ　圖

○きる（斫斬）○こまかくきざむ（細切）○折り傷く。○かど（芒角）をけづり去る。

【剉折】ザセツ　戰にまける。剉は挫に通ず。後漢書「備城獲レ全、廣兵一一」

＝挫折。

【削】 ㊀サク ㊁セリ 職 入

㊀けづる(刪・刮・削)○きざむ(刻)○おかす(小侵)○かく、へす。○きる(斫)○よわむ(弱)○よわる(弱)○こがたな、古、紙筆のなかりし時、竹簡に字を刻せし書刀。○わかつ(分・割)○うばふ、うばはれる(奪)○のぞく(除)けす、抹殺する。㊁かたなのさや。＝鞘・陥。

【削筆】サクヒツ 草稿をけづりけす。北史、李孝伯傳「孝伯切諫、削二誠草藁一」唐書、戴胄傳「妾已即レ一レ、外莫レ知」

【削減】サクゲン けづりへらす。漢中士女志「皇二諸侯强大一、建議一一」

【削髪】サクハツ けづる。文同詩「巧者强一一」

【削正】サクセイ 詩文をけづりなほす。＝刪正

【削成】サクセイ 刀にてけづり成したる如く聳え立つ。山海經「太華之山、一一而四方、高千仞、廣十里」一說、削は陗、陡峻の義。

【削籍】サクセキ 官吏が免職せられる。職員錄より其の名を削られる。＝落職。

【削損】サクソン けづりへらす。晉書「先自一一也」＝削減。

【削奪】サクダツ けづりてうばひ取る。晉書「一二一威權一」

【削髮】サクハツ 官位などをけづり脫げす。

【削除】サクジョ けづりのぞく、とりのける。＝刪去。

【削髮】サクハツ ○かみをけづる、かみを剃ッる。髮を去る。＝剃髮。○髮をそりて僧になる、出家する。宋史、王旦傳「一レ枝レ綱」綱は靈染の僧衣。＝落飾。

【削壁】サクヘキ けづりたちたるかべ。晉元一文「一一峯色、石紋雲樓」

【前】 ㊀セン・ゼン ㊁セン 銑 先

㊀まへ。後の對。○さき(先)○さきんず、さきだつ(先)○あらかじめ、未だ然らざる時。中庸「至誠之道可レ以一知一」○すすむ(進)○もと、むかし(故)○今まで、過去「一非」「一因」○みちびく、みちびき(導)㊁そろへてきる(齊斷)俗に剪に作る。○あさぐろきいろ(淺黑色)○國まへ。○人目に觸れる「人一」○わりあて「三人一」○貴女の名に添へる稱。「玉藻一」○平等以下の交に人を呼びて「おー」といひ、貴人に對しては音讀して「御ゼン」といふ。

【前因】ゼンイン あの世からのゆかり、前生のいんねん。釋寶休詩「渾似レ有二一一」＝宿緣・前緣。

【前緣】ゼンエン 前生のいんねん。蘇軾文「此殆世俗之所レ謂一一者」＝前因。

【前河】ゼンカ さきばらひ。韓愈、送二李愿歸二盤谷一序「武夫一一、從者塞レ途」

【前項】ゼンコウ まへの箇條。

【前覺】ゼンカク 人よりさきに道理をさとり得たる者〔吳都賦〕＝先覺。

【前漢】ゼンカン 朝代の名。後漢の對。漢の高祖より孺子嬰に至るまで。＝西漢。

【前紀】ゼンキ まへの世の紀事。謝靈運賦「國史以載二一一、家傳以申二世績一」

【前記】ゼンキ ○以前の記錄「考二諸一一」○前にしるす「一一の條項」

【前疑】ゼンギ 疑は官名、古、天子の左右前後に侍する輔佐の臣四人あり、疑は其の前に侍するを以て一一といふ。張藉古、大將軍「靜臣司レ直、敢告二一一」禮、文王世子「虞夏商周有二師保一、有二疑丞一」疏「古者天子必有二四輔一、前曰レ疑、後曰レ丞、左曰レ輔、右曰レ弼」

【前金】ゼンキン 國まへばらひ、さきに拂ふ代價。又、賃金・まへきん。

【前後】ゼンゴ 遠ひと遠くと。矣子、治兵「一一有レ顧、左右旋轉」＝進退。

【前賢】ゼンケン 前代の賢人の遺せるほん。蔡邕、司空文烈侯楊公碑「乃及二伊公一、克光二一一一」

【前驅】ゼンク 天子の行列のさきのり、又前陣。周禮、大僕「王出入則自取レ面一一」

【前勳】ゼンクン まへかたのいさを。左傳「恢二弘舊德一、以追二念一一一」＝前功・前勞。

【前科】ゼンカ かつて犯したるつみとが、「一一者」

【前官】ゼンカン ○前にいひたる官。論、陽貨「一一戲レ之耳」○古人のいひのこしたる官。最、大善、與「君子以多識二一一往行一以畜二其德一」

【前賢】ゼンケン 前時のかしこき人。晉書、王貞傳「一一後聖、代爲二師祖一」＝先賢・前哲。

【前劃】ゼンカク 國前に書きあらはしたる箇條。＝前記。

【前古】ゼンコ 過ぎ去りしむかし。＝往古。

【前古未曾有】ゼンコミゾウ 古よりいまだなし。

【前妻】ゼンサイ 先の妻。晉書「賈充一一李氏坐徙、後妻二郭氏一、李以二大義一得レ還、郭亮死二左右夫人一」＝前室。

【前栽】ゼンサイ ○うゑごみ。下座集「一一前水」○國庭中草木をうゑたるざしきの庭。又、其の草木。

【前修】ゼンシュウ 前世德を修めたる賢人、古の君子。離騷、離騷「雖二吾法二夫一一一兮」＝先哲。

【前事之不レ忘後事之師】ゼンジノフスルゴジノ 前日行ひし事を忘れざるは、後事を處置するによき參考となる戒。史、始皇紀「野諺曰、——也、是以君子爲レ國、觀二之上古一、驗二之當世一、參以二人事一、察二盛衰之理一、審二權勢之宜一」

【前身】ゼンシン ○佛 前世に在りし時のからだ。白居易詩「閑思二往事一似二一一」○圖 變革せざる以前の事物。

【前生】ゼンセイ 佛 まへの世のからだ。今生コンジョウの對。雲笈七籤「汝一一與二南極尊神一、同在二禪黎世界一」

【前借】ゼンシャク 圖 まへがり、一定の期日後に受け取る可き賃金・報酬等を其の期日前に借用する融通法。

【前車覆後車戒】ゼンシャノフクルハゴシャノイマシメ 前車の傾覆を見て、後車は警戒して、亦覆へらんことを恐れるをいふ、前人の失敗を見て、後人の戒とすべきに喩ふ。漢書、賈誼傳「鄙諺曰、——、桀氏所二以亟絕一者、其轍迹可レ見、然而不レ遠、是後車又將レ覆也」

【前績】ゼンセキ 先人の遺し置きたる事業のいとぐち。楚辭、天問「篤二就一一」遺業・先業。

【前世】ゼンセ ○むかし。後漢書、周燮傳「昔在一一、求レ賢如レ渴、封レ墓賦レ閭、以光二賢哲一」‖前代。○佛 三世の一、現世のまへの世。‖前生。

【前世紀】ゼンセイキ ○一世紀（西暦にて百年を一世紀とす）まへの世。○前世界の義。

【前世界】ゼンセイカイ 現在の世界の狀態にならざりし以前の世。‖舊世界。

【前星】ゼンセイ 皇太子の異稱。漢書、五行志「星傳曰、心、大星、天王也、其一一太子、後星庶子也」

【前聖】ゼンセイ まへの世のひじり。班固、東都賦「六藝所レ不レ能レ談、一一醒二得而言一焉」‖先聖。

【前哨】ゼンショウ 軍隊の宿營する時、前方に設けて敵兵の警戒に當る隊をいふ「一一線」

【前隊】ゼンタイ さきがけの隊伍、軍の先頭に進むくみ。後漢書、光武紀、註「南陽爲二一一一、河内爲二後隊一」‖前鋒・先鋒。

【前知】ゼンチ 事の起らざる前に豫め知る。中庸「至誠之道、可二以一一一」‖豫知・逆睹ゲキト

【前定】ゼンテイ 前以て定まる。中庸「豫一一則不レ跲、事一一則不レ困」

【前程】ゼンテイ 前途に同じ。樂府詩「尊以二一一新酒一」

【前程萬里】ゼンテイバンリ 前途の多望なるをいふ。南楚新聞「魏公崔相鉉之子也、爲二童兒一時、隨レ父訪二韓滉一、指二案上牓二命詠レ之、遂命二筆硯一、略無二佇思一、援筆曰、此兒可レ謂二一一一一也」

【前提】ゼンテイ 論理學の語、三段論法にて議論の基礎となる命題（大一一）又後に起すべき議論の伏線となすまへおき（小一一）

【前兆】ゼンチョウ 事の起るまへじらせ。韓駒詩「那知此相遇、乾鵲果一一」

【前哲】ゼンテツ 前代の賢者。左、成、八「賴二一一一以免也」‖先哲・前賢。

【前殿】ゼンデン 正殿の前にある殿舍。史、始皇紀「先作二一一阿房一」

【前徒】ゼント まへに在る軍人。書、武成「一一倒レ戈」

【前途】ゼント ゆく先のみち。將來。夢溪筆談「吳僧持二一貫錢一來云、壽戒照レ之、當レ見二一一吉凶一」‖前程・前路。

【前登】ゼントウ 人に先きだちて登る。さきがけする。後漢書「精兵八百、强弩千張、以爲二一一一」‖先登。

【前突】ゼントツ すすみつく。後漢志「馬超負二其力一、陰欲二一一一」

【前度劉郎】ゼンドノリュウロウ 去りて又重ねて來る者の稱。劉禹錫、再遊二玄都觀一詩「種レ桃道士歸二何處一、——今又來」盞し劉晨・阮肇重ねて天台に到るの故事を用ふ。

【前敗】ゼンパイ 以前の失敗。楚語「使レ復二其位一、以無レ忘二一一一」

【前望】ゼンボウ 我より先に進める賢人。宋史、田畫傳「議論慷慨有二一一風一」‖先輩・先覺・先進・先達。

【前茅】ゼンボウ 茅は春秋の楚國の旌旗、前に敵あれば旌旗を揭げて之を後軍に報ず、今の斥候なり。左、宣十二「軍行、右レ轅左追レ轅、一一虞レ無、中權、後勁」

【前踞後恭】ゼンキョコウキョウ 老いたる狐が前は胡（のどの下に垂れたる皮肉）を踞ふみ、後は尾につまづく、進退谷まる喩とす（詩、豳風、狼跋、註）跋（足部五畫）の條の跋胡を見よ。

【前午天】ゼンゴテン 圖 午前。

【前非】ゼンピ 前になしたる惡事。崔湜詩「事往覺二一一一」‖先非・昨非。

【前蹕】ゼンヒツ 天子の行幸のさきども。道路を警戒し行人をとどむるもの、さきばらひ。‖前驅。

【前夫】ゼンプ 再嫁せし者、其の先の夫をいふ。辛延年詩「男兒愛二後婦一、女子重二一一一」‖先夫。

【前聞】ゼンブン これまでにきく。又、其の事がら。禮、檀弓「我未二之一一也」

【前鋒】ゼンポウ いくさのさきがけ。史、黥布傳「爲二楚軍一一一」‖先鋒・前隊。

【前門拒レ虎後門進レ狼】ゼンモンニトラヲフセグトキハコウモンニオオカミヲススム 後に諺を脫れて又禍に逢ふに喩ふ。戰國考「禍去禍又至、曰二前門拒レ虎後門進レ狼」

【前勞】ゼンロウ 前日にたてたる功勞。司馬光詩「朔鼎刻二一一一」‖前功・前勳。

【前良】ゼンリョウ 前時の賢良なる人。張衡、思玄賦「御二一一之遺風一兮」‖先哲・先賢。

【前略】ゼンリャク ○文章のはじめの一部を省く、前文省略。○圖 書翰文に時候見舞などの冒頭ボウトウを省く時に用ふる書きだしの語「一一御免」

【前應】ゼンオウ 事の起らざるまへにおも

んばかる。職國策「―不ㇾ定、後者有二大患一將奈ㇾ之何」
【前例】ゼンレイ　まへからのためし。南史「晉有二鑒光殿一、漢之―也」‖先例・古例。
【前烈】ゼンレツ　まへの世の人のいさを。晉起「公劉克爲二―一」‖餘烈。
【前聯】ゼンレン　詩の七言律・五言律、共に第三第四の句を―といひ、第五第六の句を後聯といふ。
【前王】ゼンワウ　まへの代の帝王。大學「於戲―不ㇾ忘」
【跋ㇾ前疐ㇾ後】バツゼンテイゴ　狼が前に進まんとすれば、その胡（のどの下の垂れたる肉）をふみ、後に退かんとすれば、その尾につまづく如く、進退に窮するに喩ふ。韓愈、進學解「―、動輒得ㇾ咎」跋胡ゴを見よ。

【則】ソク　職

○のり（法）天理、制度、禮法。○てほん（模範）○のっとる、てほんとして倣ふ。○つね（常）○條字の如く事を列擧する時に用ふ「格言二―」○夷―は十二律の一にて七月の律の名。○すなはち、上文を受けて下文を起す接續詞、而る後。論、學而「行有餘力―以學文」又、至りては、於いては。論、憲問「仁―吾不ㇾ知也」又、若し然らば。論、學而「過―勿ㇾ憚ㇾ改」
同訓異字　則・乃・卽・便・輒等の別は乃（ノ部一畫）の條を見よ。
【則效】ソクカウ　のっとりならふ（左傳）
【則闕之官】ソクケツノクワン　國太政大臣の異稱。天子の師範にして天下の儀刑たる人なれば最も其の人を精選するを要す。大寶令「有德之擇、無二其人一則闕」とあるに本づく。
【則天武后】ソクテンブコウ　姓は武、名は曌、はじめ唐の太宗の才人なりしが、後、高宗の后となりて政權を專にす、高宗崩じて中宗立つに及び、遂に中宗を廢して其の弟睿宗を立て、更に睿宗を廢して、自ら帝位に卽き、則天皇帝と稱し、國を周と號す、在位十六年、中宗位に復して、后を廢す、歸て卒せり、年八十一、著はす所臣軌二卷あり。
【則度】ソクド　のり、てほん。宋史「庾充文、言動有二―一」‖法度。

【剃】テイ　タイ　霽

かみをそる、髮を去る。
【剃刀】テイタウ　かみそり。段成式詩「起就二夕陽一齋二―一」
【剃度】テイド　頭をそりて佛道に入る、剃髮得度の略。唐書「妄爲二―一、託二號出家一」
【剃髮】テイハツ　かみをそる。魏書、房崇吉傳「―爲二沙門一」‖剃頭・剃髮・薙髮。

【剌】ラツ　曷　別字　剌とは

○もとる（戻）そむく（乖）「乖―」たがふ（差）ひがむ（僻）○はづ（恥）○物の聲の形容に用ふる。―は風の聲、撥―は弓を張る聲。跋―は魚の躍る聲。○外國語のラ音に借用す「亞―比亞」
【剌剌】ラツラツ　風の聲。李商隱詩「去程風―、別夜漏丁丁」

八畫

【剡】エン　琰

○けづる（削）易、繫辭「―木爲ㇾ矢」○きる（斬）荀、殭國「―其脛」○するどし（銳利）○ほこさき（鋒）○―は光り輝く貌。離騷「皇―其揚靈分」又身を起す（禮、玉藻）
【剡溪】エンケイ　地名、浙江省に在り、曹娥江の上流なり、王子猷雪夜に戴逵を訪ひし所、一名戴溪。
【剡子】エンシ　周代の人、二十四孝の一、其の父母牝鹿の乳を求む、乃ち牡鹿の皮を被り、鹿群中に交り、漸く之れを得たりといふ。
【剡紙】エンシ　剡溪より産する紙。‖竹紙。
【剋手】コクシュ　すばやき手なみ　するどき手わざ。梁書、賈誼傳「―以衝二孤人之胸一」

【剛】カウ　陽　通音　ガウ

○こはし。柔の反對。易、乾卦「大哉乾乎、―健中正」○かたし（堅固）○つよし（勁）○奇日（ハヒ）をいふ。○まさに、詩に用ふる俗語、適然（タマタマ）の意「―逢」「―過」の類。―道―地と連用するも義同じ。
【剛銳】ガウエイ　たけくするどし。晉書、趙逵勃戒記「肸宗族子孫、―如ㇾ鐵」
【剛柔】ガウジウ　かたくつよき性質を擧げて、柔和となす。史、季布傳「能――」
【剛梗】ガウカウ　てづよし。北史、游肇傳、宜武嘉其―一」‖強梗。
【剛愎】ガウフク　剛直にして屈せず、前條に同じ。晉書、謝鯤傳「性―、無ㇾ所二屈撓一、頗有二理識一」
【剛悍】ガウカン　たけくしてつよし（左思賦）‖剛驁。
【剛氣】ガウキ　たけく勇ましき氣。禮記「――不ㇾ怒」
【剛殺】ガウサツ　かたくしてつよし。剛は勁直にして欲なし、殺は堅忍。論、子路「子曰、―木訥近ㇾ仁」‖木强。

【剛強】ガウ　かたくしてつよし〔漢書、王莽傳〕皆案詩、一一必死仁義王」‖剛梗。

【剛玉】コウ　鋼玉石の異稱。

【剛果】クワ　心つよくしておもひきりよし。後漢書、楊政傳「其一一任ㇾ情、皆如ㇾ此也」‖剛決。

【剛決】ケツ　志かたくおもひきりよし。唐書「一一犯ㇾ上」‖剛果。

【剛健】ケン　すこやかにしてつよし。易、乾卦「大哉乾乎、一一中正純粹精也」

【剛直】チョク　剛直にして正直にして憚らず。北史、李諧傳「務存ㇾ大體、不ㇾ徇ㇾ細節、自ㇾ是無ㇾ一一之譽、而潛有ㇾ匡正之志」

【剛毫】ガウ　剛直にして屈せざる義。魏志、程昱傳「一一少ㇾ慮」

【剛毅】ガウ　つよくしてきびし。後唐書「皆以一一操ㇾ下」

【剛毅木訥】ボクトツ　木の異名。

【剛愎】ガウ　心がつよくしてせつかち。‖剛愎。

【剛愎】ガウ　つよくしてたけし。晉書、慕容傳「一一之鳥、突無ㇾ敵必突」

【剛柔】ガウ　かたきと、やはらかなると。易、繫辭「一一相摩、八卦相盪」

【剛日】ガウ　十干のうちの甲・丙・戊・庚・壬にあたる陽の日。他の五日を柔日といふの對。曲禮「外事以ニ一一一」外事とは出征狩獵など。

【剛者】ガウ　意志固く私欲にうち克つ人。論、公冶長「吾未ㇾ見ニ剛者一」

【剛到】ガウ　剛愎來に同じ。

【剛斷】ガウ　志つよくしておもひきりよし。漢書「雖ニ儒者一性一一」‖剛決。

【剛腸】ガウ　心つよく物に屈せず。南史、弘正傳「雖ニ謟似ㇾ媚、一一似ㇾ直」

【剛直】ガウ　志かたくしてただし。後漢書「倫雖ニ一一一、然常疾ニ俗吏苛刻一」

【剛鄧】ガウ　漢代、宮吏が佩びたる飾の具、剛はつよし、鄧は國姓の劉の字を折りてば卯金刀となるによる〔漢書、王莽傳〕

【剛敏】ガウ　つよくしてさとし。元史、阿沙不花傳「豫直一一、憂ㇾ閑如ㇾ憂ㇾ家」

【剛武】ガウ　つよくいさましの漢書、地理志「周末有ニ子路・宓賤・民人慕ㇾ之、故其俗一一、上ニ氣力一」

【剛風】ガウ　道家にて高き處の風をいふ。抱朴子「去ㇾ地四千里、風力猛壯、有ニ一一世界一」

【剛愎】ガウ　がうじやうにしてもとる、剛愎很愎の義。左、宣十二「一一不仁、未ニ肯用ㇾ命」‖剛戾。

【剛褊】ガウ　心つよくして急なり、褊は褊に通ず。魏志、呂布傳「卓性剛而褊」唐書、崔元翰傳「性一一不ㇾ能ㇾ取ニ容於時一、孤特自恃」

【剛辯】ベン　剛健にして明辯なり。北史、李彪傳「一一之才、顚堪ニ時用一」

【剛強】ガウ　つよくしてたけし。三國論「高祖有ニ果銳一一之氣一」

【剛來】ガウ　國只今來る、剛は助字。

【剛力】ガウ　國つよく大いなる力。○修驗者の仲よ奴ㇾ轎ㇾ命じて高山の靈場に登る者を案内する人足をいふ。

【剛戾】ガウ　強情にして理にもとる。史、秦紀「始皇爲ㇾ人天性一一自用」‖剛愎。

【剛戾自用】ガウレイジヨウ　がうじやうにしてもとり、自らオ智を用ひて人の說を容れず。前條を見よ。

【剛烈】ガウ　こはくしてはげし。後漢書「隷情一一、成ニ其不撓之威一」

【剛氣】ガウ　豕の異名〔曲禮〕

【剛悍】ガウ　つよくして威嚴あり。後漢書、王允傳「允性一一疾ㇾ惡」

【剞】キ　支　紙

○きざむ（鏤）彫刻する。○ほりものに用ふるまがり刀。

【剞劂】ケツ　彫刻用の曲刀と、曲り鑿とも。莊子、養生主「指ニ一一、而不ㇾ用ㇾ今」轉じて、彫刻の義とす。

【剞劂氏】ケツシ　はんほり、彫刻師。

【剞】㊀ケイ・キヤウ　㊁リヤウ　リヤク　㊀㊁支　㊁薬

㊀いれずみ、面上に施す墨刑。‖黥。㊁他人の物をかすめとる（鈔取）うばひとる（奪取）‖掠。

【剗】㊀サン・セン　㊁サン・セン　㊂セン　㊀㊁銑　㊂霰

㊀けづる（削）刻に通ず。○たひらげる（平）戰國策「一而類」破ニ吾家」㊁をさむ（治）平にし治める。韓愈詩「活計以ニ一」㊂かる（刈）除き去る。蘇軾詩「賊盜何足ニ一」

【剗鐫】セン　けがれたるものを削り去る。白居易詩「新園卿ニ一」

【剌】シ　寘

○さす、さしこむ。○刀を插む。史、張耳陳餘傳「敢ニ一刃公之腹中一」刺し殺す義。通じて俥に作る。

同訓異字　刺・俥・指・盤の別は刺（刀部六畫）の條を見よ。

【刱】

創（刀部六畫）の俗字。

【剔】テキ　錫

○とく、骨又は肉を解く、解剖する。○のぞく（除）物を選びて惡しき者を除き去る「一除」「一出」

【剔抉】テツケツ　ほりくじる、ほじくり出

す。韓愈、進學解「爬羅ー剔、刮ノ垢磨レ光」賢者を求め出して登用する形容。

【剔抉】テキケツ たち切る。詩、大雅、疏「謂ニ去之ー剔一之ニ者」

【剟】 ㊀テツ ㊁タツ 易 屑

㊀けづる(刊)商子、定分「有ノ敢ー定法令一者死」○さす(刺)兵器にて刺す。史、張耳陳餘傳「刺ー無可ノ撃者」○さく(割)割き取る。漢書、賈誼傳「盜者ー寢戸之簾」㊁けづりさる(削去)

【剟定】テイケづりて定める。字解を見よ。

【剝】 ハク 覺

○はぐ(褫)衣服を脱がせる「ー奪」むく、皮を除き去る。○牲ニヘを殺して骨肉を解く。○おつ、おとす(落)離ちおとす。○そこなふ(傷害)○けづる(削)○さく(割・裂)○易の卦の名、坤下艮上。轉じて運命の吉ならざるにいふ。○ー又、ー啄は人の足音、一說、戸を叩く音。

【剝蝕】ハクショク はげかける。韓愈文「斷裂ノ碑ー蝕レ不レ可レ讀」

【剝落】ハクラク はげおつる。李商隱「苔蘚ー一、雨露淋漓」

【剝製】ハクセイ 鳥獣などの皮を剝ぎ肉を去り、防腐劑を塗りて、これを原形の如く縫ひあはせて標本用などにせしもの。

【剝啄】ハクタク こつこつと敲く音の形容。足音又は訪問者の戸を叩く音の形容。韓愈、ー一行「剝剝啄啄、有ノ客至ノ門」歐陽修「門無ニー一一、松影參差」

【剝脫】ハクダツ はがしおつる。荀子「不ニー一一、不ニ脫落一」ロ剝落。

【剝奪】ハクダツ はぎとる、奪ひ取る。元稹詩「患在ニ爭ー一之不已」ロ無理ヲ

【剝膚】ハクフ 困窮の極、一身を容るるの地なきをいふ。家の屋根までも盡くはぎ落す意。易、剝卦「君子得レ輿、小人ー一レ廬」

【剝復】ハクフク 二字共に易の卦、剝卦は一陽、五陰の上に在り、即ち陰が長じて陽が消するの象。復卦は純下坤上にて一陽が五陰の下に在り、即ち陽氣が漸く將に盛んならんとするの象、亂世の極、治世となる如く衆陰消長の理にいふ。宋史、程元鳳傳「極ニ論世運ー一之機、及人主所レ當レ法ノ天者ニ理宗覽レ之曰、有ニ古遺直風一」

【剝民】ハクミン 稅を重くして民を苦しめる。

【剝落】ハクラク はげおつる。李商隱「苔蘚ー一、雨露淋漓」

【刖】 ゲツ 末

あしきる、古の五刑の一、膝蓋骨を切り去る刑。ロ斬・刖。

【刖刑】ゲツケイ 足きりの罪。書、呂刑「ー一之罰五百」

【刖跡】ゲツセキ 足きりのつみ【書經】ロ刖罰。

【剖】 ㊀ホウ・ブ ㊁フ 有 宴

○わる(割)わかつ(判・中分)○わかる(分)さく(拆)○やぶる(破)

【剖判】ホウハン 割・裂・割・析等の別は製(衣部六畫)の條を見よ。

【剖決】ホウケツ 理非曲直をわかち定める、判斷する。隋書、裴政傳「簿案盈レ几、ー一如レ流」ロ裁決。

【剖析】ホウセキ わかちさく、解決する。南史、姚察傳「劉璠於ニ公館一、訪ニ漢書疑事十餘條一、並爲ニー一、皆有ニ經據一」

【剖斷】ホウダン 是非曲直をわかち定める。南史、北休源傳「ー一如レ流」ロ斷獄・判決。

【剖竹】ホウチク たけをわる、又、わり竹。史記「ー一有ニ朱書一」

【剖破】ホウハ さけやぶる。さきやぶる。蔡邕疏「肝腦流離、白骨ー一」

【剖判】ホウハン わかれ開く。韓非、解老「自ニ天地之ー一、以至ニ于今一」ロ開闢。

【剖符】ホウフ 割符ヲ二分シ、其の一を持ちて信となす。史、高祖紀「ー一レ封ニ功臣一」

【剖腹】ホウフク はらをたちわる。晉書「岐伯ー一以滿レ腸」

【剖分】ホウブン わかれる。成公綏賦「滑劑ー一、玄黃判離」

【剖裂】ホウレツ わかちさく、分割する。漢書、諸侯王表「ー一疆土、立ニ二等之爵一」

【剜】 ワン 寒

○ゑぐる(扶)刀にてゑぐり取る。○けづる(削)韓愈詩「有レ洞若ニ神ー一、有レ巖若ニ天劃一」○ゑる(雕)

【剜肉】ワンニク からだの肉をゑぐり取る。義興中詩「二月黃ニ新蛩一、五月蠶ニ新穀一、醫ニ得眼前瘡一、剜ニ卻心頭肉一」この詩に本づきて眼前の急を救ひて其の後を顧みるに暇あらざるをー一醫瘡といふ。

【削】 サク 藥 九畫

【削減】サクゲン 減ずる。

【削除】サクジョ 除く。

【削奪】サクダツ 奪ひ取る。

【削髮】サクハツ 髮を剃る。

【削平】サクヘイ 平定する。

【削職】サクショク 職を奪ふ。

【削籍】サクセキ 籍を削る。

【削足適履】サクソクテキリ 足を削りて履に適せしむ。

【削筆】サクヒツ 筆を削る。

【削木】サクボク 木を削る。

【削除】サクジョ 除く。

【削減】サクゲン 減ずる。

【削奪】サクダツ 奪ひ取る。

【削髮】サクハツ 髮を剃る。

【削平】サクヘイ 平定する。

【削職】サクショク 職を奪ふ。

【削籍】サクセキ 籍を削る。

【削足適履】サクソクテキリ 足を削りて履に適せしむ。

【削筆】サクヒツ 筆を削る。

【削木】サクボク 木を削る。

肉をけづりて骨を置く。

【剃】 テイ　タイ　囚　物の破ぶるる聲。

【剩】 ショウ　ジョウ　俗字　剩は俗字

○あまる、あまり（餘）○ながし（長）おほし（過多）○あまつさへ、おまけに。

同訓異義　剩・餘・賸・賸等の別は餘（食部七畫）の條を見よ。

【剩餘】ジョウヨ　事の過ぎて後、尚殘るかなしみ。李嶠詩「莫ノ嗟ス剩餘秦、筆筆有ニ一一一」‖餘。

【剩員】ジョウイン　あまりたる人數。玉海「初置ニ一一、以ニ處ニ退兵ニ」

【剩金】ジョウキン　つり錢。又、あまれる金。‖剩餘金。

【剩語】ジョウゴ　むだぐち。傳燈錄「浮杯無ニ一一一」‖贅言。

【剩餘】ジョウヨ　あまり「一一金」‖餘剩。

【剪】 セン（羽部九畫）の俗字。

【副】 ㊀フク　㊁ヒョク　㊂ヒク・フク　宥　職　屋　通音フク

㊀わかつ（割）○わる（割）○さく（裂）㊁さく（析）切りわける。曲禮「爲ニ天子一副ニ瓜者一之」㊂そふ、つきそふ。○たすく（佐助）○かなふ（稱）適合する。○そへ（貳）たすけ（輔佐）○つまびらか（審）○うつし（謄寫本・副本）すべてその者、正の對「一使」「一將」「一車」○古、后・夫人の首飾、髮を編みて作る「一笄」

同訓異義　副・添・貳・倂・沿の別は添（水部八畫）の條を見よ。

【副貳】フクジ　總監につきそひて之を輔佐する官。唐書、裴寂傳「爲ニ一一晉陽宮一一」

【副官】フクカン　長官に直隷して軍事上の庶務を掌る武官。

【副啓】フクケイ　そへて申す。添へ書き。‖追白・追啓・二伸。

【副笄】フクケイ　古、貴夫人の髮かざり、步搖（ゆれの類。詩、卿風「一一六珈」

【副業】フクギョウ　本業のあひまにする仕事、耕作のかたはら蠶桑・養豚を爲す類。

【副産物】フクサンブツ　主産物に附隨して生ずる物品。石炭瓦斯を製造する時生ずる骸炭（コークス）の類。

【副作用】フクサヨウ　藥が其の目的たるはたらきに附隨して生ずる別の作用。

【副使】フクシ　そへのつかひ、正使につきそひの使者。唐代、節度使・觀察使・團練使など皆一一あり。

【副貳】フクジ　そへ、つきそひ。書經傳「一一三公」

【副詞】フクシ　國動詞・形容詞又は他の副詞につきそひて其の意味を限定することば。

【副車】フクシャ　そへぐるま。史、留侯世家「良擊ニ秦皇帝博浪沙中一誤中ニ一一」

【副將】フクショウ　主將の副たるもの、次將。

【副主】フクシュ　皇太子の稱。後漢書「儲君一一一」

【副署】フクショ　勅語の御名御璽に關係大臣が姓名をそへがきする。

【副菜】フクサイ　副菜に同じ。

【副食物】フクショクブツ　國飯にそへて食ふ食物、おかず。

【副本】フクホン　正本のひかへ。正本のうつし。唐書、百官志「使ニ先驗ニ一一」

十　**劃**　カイ　陷　夬

【劃】 ガイ　カイ

○する（摩）○きる（切）○うごく（動）○かま（大鎌）○一切は切近の義。切に事理に中つる。

【劃切】カイセツ　よくあてはまる。唐書、趙傳「凡二百餘奏、無ニ不ニ一一當ニ帝心一者」‖適切・切近。

【剖】 ホウ　ボウ　厚　有　講　卦　紙　尾　通音ホウ　フ

開（刀部八畫）に同じ。

【割】 カツ　曷　○さく（裂）刀を以て裂く。○たつ（裁）きる（切）裁り取る。○わる、やぶる（破）○わかつ（分）杜甫詩「陰陽一一昏曉」わかる（分）○そこなふ（損害）書、堯典「洪水方一」○わざはひ（災害）書、大誥「天降ニ一于我家」○國わり、率の義。一一は十分の一。○わる、數を除する「一算」

同訓異義　割・裂・剖・析・劈等の別は裂（衣部六畫）の條を見よ。

【割愛】カツアイ　殘り惜しき心をきりて去る。徐陵詩「皇恩曉ニ下人一一一遠和親」

【割據】カツキョ　地をさき取りて據る。後漢書「竇融傳「席ニ卷三秦一一一河山一」

【割讓】カツジョウ　地をさきゆづる。

【割授】カツジュ　きりあたへる。阮瑀文「割ニ授江南一不ニ屬ニ本州一」

【割烹】カッポウ　いけにへを料理する。禮、樂記「天子祖而割ニ牲」

【割席】カッセキ　席を別にする、同席せず。六帖「捷管擧與ニ華歆一同學（中略）管一一曰、子非ニ我友一也」

【割線】カッセン　數學にて圓周と交りて二つの交叉點を生ずる直線。

【割烹】カッポウ　肉をさきてにる。料理する。孟、萬章「伊尹以ニ一一一要ニ湯有ニ諸一」

【割腹】カップク　國はらをきる。‖切腹。

【割合】カツアイ　國ぶあひ、‖率。○彼此を

比較して、くらべて「一ノ高い」

【割印】ワリイン　圖引き合せて證據とする爲め一の印を二枚の紙にかけて押すをいふ。わりはん。

【割栗】ワリグリ　圖小さくわりたる石、土臺下又、道普請などに用ふ。

【割註】ワリチュウ　圖本文の下に二行に記するかきいれ。＝註脚。

【割引】ワリビキ　圖定價の幾分を引きさげる。＝減價。

【割符】ワリフ　圖古、木片に文字を記して二つにわり、一片を止め一片を授け、他日合せて證とするもの。＝符節・符契・勘合。

【割前】ワリマエ　圖わけまへ、配當額。又分擔して支拂ふ一人あてのたか。

【割戻】ワリモドシ　圖剩餘金ノアリカネを出金者にわりあてて返す。

【創】

㊀きず。漢書、曹參傳「身被七十ノ」㊁きずつく(刃傷)○できもの、かさ。曲禮「頭有ノ則沐」＝瘡。○はじむ、始める(始)造る。＝創。㊂いたむ(傷)○こりる、こらす(懲)

同訓異義　創・初・始・肇・基・元・首・本の別は初(刀部五畫)の條を見よ。

【創夷】キズつく(傷)＝創痍。

【創痍】キズつく(傷)＝創夷。

【創業】ソウギョウ　事業を起す、國の基を建てる。孟、梁惠王「君子ノ一ノ垂ノ統」

【創業守文】ソウギョウシュブン　創業は國の基をはじめ立てる、守文は其の成りたるを守りて永く之を維持する。唐實錄支配傳「帝曾問ニ――孰難、玄齡曰、方二時草昧、羣雄競逐、攻破乃降、戰勝乃剋、創業則難、魏徵曰、王者之興、天授人與、既得二天下一、則安二于驕逸一、守文爲レ難、帝曰、玄齡從レ我定二天下一、見二創業之難一、徵與レ我安二天下一、見二守文之不一レ易、然創業之不レ易、既往矣、守文之難、方與二公等一愼レ之」

【創見】ソウケン　はじめてみ出す、新に發明せし意見、新らしきかんがへ。史、司馬相如傳「唐レ期紹至、不二特一ニ一」

【創建】ソウケン　はじめたつ。＝創立。

【創造】ソウゾウ　はじめて作る。＝草創・創始・創設・創作。

【創作】ソウサク　はじめつくる、新たに書物を著す。又其の著作物。＝新作。

【創始】ソウシ　はじめ、はじまり。

【創傷】ソウショウ　きずつく。きず。＝瘡傷。

【創制】ソウセイ　はじめて造る、つくり出す。管子「一ニ一天下一、帥二列諸侯一」＝創造・草創。

【創世記】ソウセイキ　書名、舊約聖書の首卷、主として天地開闢、萬物を創造せし事を記す。

【創設】ソウセツ　はじめてまうくる。＝新設。

【創置】ソウチ　はじめておく。名義記「漢武一ニ一總關一、以緊二國書一」＝創設・創建。

【創定】ソウテイ　始めさだむ。魏志、註「一ニ一王業一」

【創統】ソウトウ　事業のいとぐちをはじめる。魏書「皇道開レ符、乾業一レ一」＝創業。

【創痍】ソウイ　きずつけそこなふ。後漢書「數爲レ羌所ニ一一」

【創立】ソウリツ　はじめたつ。はじめ起す。南史「軍國器械、多レ所ニ一一」＝創建。

【剄】

タク　㊀

きる(斫)＝剄。

【剳】

タフ　トフ　㊀

剳とは則字

○かぎ(鉤)○かま(鎌)

【劇】

㊀シャウ・サウ　㊁シャク・サウ　㊀

【劇務】ゲキム　多忙な職務。

【劇甚】ゲキジン　はげしい。

【劇職】ゲキショク　多忙な職務。

【劇場】ゲキジョウ　芝居小屋。

【劇談】ゲキダン　はげしい談話。

【劇藥】ゲキヤク　はげしい藥。

【劇烈】ゲキレツ　はげしい。

【劇論】ゲキロン　はげしい論。

【勦】

㊀セウ　㊁サウ　㊀

㊀たつ(絕)○ころす(殺)㊁とる(取)○かすめとる(略取)㊂ぬきとる。

【劈】

ヘキ　㊀

刀に從ふ、劃は俗字。劃とは則字。

【劃】

㊀ヘウ　㊁ヘキ　㊀

【剽】

サン　セン　㊀

けづる(削平)＝剗。鏟と通ず。

【剽刈】ヒョウガイ　かりとる。柳宗元文「一ニ一穢草、伐二去惡木一」

【剽薙】ヒョウテイ　かりのぞく。郝經詩「一ニ一撒二蕃堰一」

【剸】

㊀セウ　㊁セウ　㊀

㊀たつ(絕)○ころす(殺)㊁とる(取)○かすめとる(略取)㊂ぬきとる。

【剸】

㊀セン　㊁セン　㊀

㊀きる(裁)たつ(裁)㊁ほしいまま。荀、榮辱「好一行也」もっぱら。漢書、蕭何傳「上以是一ニ一屬任何關中事」＝專。

【剸決】センケツ　專ら己の考にてきめる。唐書、杜佑傳「軍興饋運、佑得ニ一一ニ一＝專決。

【剝】

㊀ヘウ　㊁ヘキ　㊀

㊀おびやかす、おどす（劫）史、酷吏傳「攻ー爲ニ羣盜ニ」○はぐ（剝）○きる（截）○かろし（輕）○はげし（烈）○あらし（悍）○とし、すばやし（急疾）○さすが（副）㊁する（末）標に通ず。

【剿】セウ　○輕疾の貌。○漢の武官の名。史、衛將軍驃騎傳「幸爲ニ天子侍中、善ニ騎射ー、尹從ニ大將軍ー愛ー卲與ニ壯士ー爲ニ一校尉ー」‖滅姚。

【剿殺】セウサツ　あらあらしくしてずるし。又、其の者。晉書「招ニ集ー一ー」

【剿慄】セウリツ　すばやくあらあらし。漢書地理志「然ニ其ー一ー」‖憯悍・慓悍。

【剿輕】セウケイ　○かろがろし。淡書、傅賢「夫荊楚ー一好作ー亂、自ー古記ー之矣」○翻セウ氣かろにして突飛なる義。

【剿絕】セウゼツ　おびやかすこと。‖脅迫。

【剿其】セウキ　おびやかしせめる。史、游俠傳「ー一不ー休」

【剿疾】セウシツ　すばやし。顏籀「厥性ー一」‖勁捷。

【剿竊】セウセツ　かすめぬすむ。他人の詩文を盜みてわがものとするにいふ。事文類聚、能詩亦ー一」‖剿賊。

【剿賊】セウゾク　剿竊に同じ。韓愈、樊宗師墓銘「惟古於ー詞必己出、降而不ー能乃ー一」

【剿盜】セウタウ　おびやかしぬすむ。‖剿賊・剿掠。

【剿奪】セウダツ　おびやかしてうばふ。唐書「寧當ー一草間ニ求ー活哉」‖劫奪・剿掠。

【剿掠】セウリヤク　○おびやかし撃つ。攻撃する。史、莊周傳「指ー事類ー情ー一ー儻罔ニ」○はげおつ。蘇軾詩「文字ー一因ニ風雨ニ」

【剿掠】セウリヤク　おびやかしてかすめる。唐書「山賊ー一、戸口流散」‖剿奪・奪掠。

十二畫

【劃】クワク　陌

○さく、わる（割）韓愈詩「有厭類天ー一」○かぎる、錐刀を以てすぢをつけて分つ、畫に通じ用ふ。○木の尖りし刀（錐刀）

【劂】ケツ　ケイ・ケ　屑　月

○ほりものに用ふるこがたな（刻刀）曲れる鑿。漢書、揚雄傳「棄ニ其劂ー一」○ほる、ゑる、彫刻する。又、其の技。傅毅、琴賦「施ニ公輸之劂ー一」

十三畫

【劇】クヰイ　クヮツ　陽　藥

たつ（斷）

【劊子手】クワイシシウ　死刑を執行する者、くびきり。

【劇】ケキ　陌　通音ゲキ

○さく（割）○そこなふ（傷害）禮、聘義「君子比ニ德于玉ー一而不ー義也」○甚ー一は春秋時代の魯の人。

【劇】ケイ　霽

○さく（割）○そこなふ（傷害）○はなはだし（甚）○はげし、いそがし（煩忙）「繁ー一」○ます（增）○なやむ（艱）○たはむれ、しばる「戲ー一」○たはむる（遊戲）○さかんなり（盛）

【劇院】ゲキヰン　しばゐ場。‖劇場。

【劇飲】ゲキイン　甚だしく酒を飲む「北史、元行恭傳」‖痛飲。

【劇雨】ゲキウ　はげしきあめ。韓愈、徐偃王廟碑「州無ニ怪風ー一」‖甚雨。

【劇園】ゲキエン　芝居のなかま。‖梨園・劇界。

【劇界】ゲキカイ　劇園に同じ。

【劇寇】ゲキコウ　はげしきあだ。強暴なる寇盜。唐書「秦王數平ニ一ー一、功冠ニ天下ー一」

【劇子】ゲキシ　やくしゃ、俳優。

【劇甚】ゲキジン　はなはだし。‖太甚。

【劇震】ゲキシン　はげしき地震。

【劇症】ゲキショウ　急にはげしきやまひ。

【劇暑】ゲキショ　はげしきあつさ。陸游詩「劇雨無ニ一ー一」‖甚暑・隆暑・盛暑・酷暑。

【劇驗】ゲキケン　いそがはしきつとめ。強說文「切ニ一ー一、實大要深」‖劇務。

【劇賊】ゲキゾク　おほぬすびと「宋史、岳飛傳」‖大盜・劇盜。

【劇盜】ゲキタウ　おほぬすびと。宋史「招ニ一ー一ー當成ー一」‖強盜。

【劇道】ゲキダウ　芝居の道、演劇に關する事がら。

【劇談】ゲキダン　急ぎてはげしく話す。漢書、揚雄傳「口吃不ー能ニ一ー一」

【劇壇】ゲキダン　しばゐのぶたい。

【劇地】ゲキチ　緊要にして重要なる地。權德輿文「是邦爲ニ東關ー一」

【劇場】ゲキヂヤウ　芝居ヰ小屋。演劇場。‖劇院。

【劇通】ゲキツウ　劇界の通人の略、演劇の道にくはしき人。

【劇動】ゲキドウ　はげしくうごく。又、はげしき動作。

【劇旁】ゲキバウ　三方に通ずるみち「爾雅、釋宮」

【劇繁】ゲキハン　いそがはし。宋史「以ニ吏事一道、多任ニ一ー一」‖繁劇。

【劇評】ゲキヒヤウ　劇演劇ゲキの批評。

【劇務】ゲキム　いそがはしきつとめ。北史「不ー能ー應ニ一ー一」

【劇問】ゲキモン　急ぎて問ふ。

【劇藥】ゲキヤク　はげしきききめを有し、多量に服用するときは中毒するくす

りっ＝劍刺。
【劇虜】ゲキリョ 勢つよき人をひす。＝殘虜。
【劇烈】ゲキレツ はげし、きびし。
【劇論】ゲキロン はげしく痛論する、激切なる論難。元史、元明善傳「初在二江西一金陵二毎與二諸集一一、以相切劇」

【劍】ケン 圖 劍は古字、俗に劒に作る

○つるぎ、たち、腰に帶ぶる兵器。事物紀原「管子、昔蚩尤受而制之山發而出金、蚩尤受而制之、以爲二鎧矛戟一、此一甲之始也」○つるぎにて殺す。潘岳、馬敦誄序「手一文鰐」○劍を使ふ術「學一」
【按劍】アンケン つるぎのつかに手をかけなでる、將に劍を拔かんとする狀。史、平原君傳「毛遂一レ一、歷階而上」
【賓劍買牛】ケンヲカフギュ 兵革の事を止めて農業に就かしむる。漢書、循吏傳「龔遂爲二渤海太守一、見二齊俗奢侈好一末技一不レ田作一、遂躬率二以二儉約一、勸二民務一レ農、民有レ帶二持刀劍一者一使二賣一レ刀買レ牛、賣レ劍買レ犢、吏民皆富實」
【彈レ劍】ダンケン 爪にて劍をはじく。史、孟嘗君傳「馮驩彈二其劍一而歌」
【杖レ劍】ジョウケン ただ一劍をつゑつくのみにして外に餘要なき義。史、淮陰侯傳「一レ一從レ之」
【劍客】ケンカク 劍術に熟したる人。後漢書、馬援傳「傳曰、吳王好二一一一、百姓多二創瘢一、楚王好二細腰一、宮中多二餓死一」＝劍士。
【劍閣】ケンカク 長安より至る蜀の道に當る大劍・小劍二山の要害、閣道相連るが故。水經注「小劍戍、北去二大劍三十里、連山絕險、飛閣相通、故謂二之一一一也」
【劍閣銘】ケンカクメイ 晉の張載の作、文選に載す。
【劍匣】ケンカフ 刀劍を入るる箱。白居易詩「一一塵埃滿、籠奩日月長」
【劍花】ケンカ 劍と劍とが相うちて散る火花。李賀、走馬引「胡孃一一淨、暮餘劍光冷」
【劍光】ケンクワウ つるぎのひかり。唐節愍太子顯樂章「一一揮作レ電、旗影列成レ虹」
【劍戟】ケンゲキ つるぎと、ほこと。國語「奚金以鑄二一一一」
【劍血】ケンケツ つるぎにつきたるち。戎昱詩「日暮歸來霜二一一、將軍遺恨殺レ人多」
【劍鋏】ケンケフ つるぎのつか。邢居實賦「歎二鵬旅之無一友兮、彈二一一一而沽歌」＝劍把。
【劍棧】ケンサン 蜀の劍閣に架したるかけはし。王勃、九成宮頌序「前縄一一、玉壘千尋」
【劍士】ケンシ 劍客に同じ。莊、說劍「曾超文王喜レ劍、一一夾レ門而客三千餘人」
【劍璽】ケンジ ○帝位のしるしとして天子の所持するつるぎと、たまと。李白詩「一一傳二無窮一」○圖三種の神器中の、天叢雲劍と八尺瓊曲玉と。
【劍刃】ケンジン つるぎのは。孟郊、寒溪詩「一一凍不レ割、弓弦彊難レ彈」
【劍術】ケンジュツ つるぎをつかふわざ。唐書、賈至傳「弧矢絕倫、一一無レ前」＝劍法。
【劍首】ケンシュ つるぎと、たてと。史、項羽紀「持二一一一步走」
【劍帳】ケンチャウ 前條に同じ。新書「殺戮之道、利レ用二一一一」
【劍道】ケンダウ 圖劍術の道。＝劍術。
【劍南詩藁】ケンナンシカウ 八十五卷、宋の陸游撰す、游、蜀に在ること十年、其の風土を樂む、故に一生作る所ろ、總べて名づくるに劍南を以てす。
【伏レ劍】フクケン 刃の上に伏して自殺する。史、張儀傳「一レ一自殺」
【杖レ劍】ジョウケン つるぎをつゑつく。＝杖劍。
【劍把】ケンパ つるぎのつか。＝劍鋏・劍柄。
【劍鉾】ケンボウ 劍鋒に同じ。柳宗元詩「海畔尖山似二一一一、秋來處處割二愁腸一」
【劍菱】ケンリョウ 圖○紋所の名、菱形の四隅を劍先の形に尖らせたるもの。○福津伊丹に產する名酒の名。
【劍舞】ケンブ つるぎのまひ。史、項羽紀「軍中無二以爲一樂、請以一一」
【劍俸】ケンポウ つるぎのきっさき。楊炯詩「一一生二赤電一、馬足起二黃塵一」＝劍鉾。
【劍門】ケンモン 劍閣に同じ。天寶傳信記「上幸レ蜀回二車駕一次二一一一、門左右鎖鑰峭絕、上謂二侍臣一曰、一一天險若レ此、自レ古及レ今、數亡相繼、豈非二在レ德不一在レ險乎」

【剝】セツ 藥

○きる（裁）○たつ（絕）
【剝絕】セツゼツ きりつくす。漢書、王莽傳「將二百萬之師一、征伐一一之一矣」

【劈】ヘキ ハク 陌 錫

○つんざく（裂）○やぶる（破）○わる（割）○わかつ（分）
【劈開】ヘキカイ さきひらく。＝擘開。
【劈栗】ヘキリツ 圖薪ヤ
【劈碎】ヘキサイ わりくだく。晉松詩「一一項圩、意有レ餘」
【劈頭】ヘキトウ 事の一番はじめ「一一第一」

【劉】リウ 尤

○まさかり（鉞）斧の屬。○ころす（殺）○つらぬ（陳）○のぶ（陳）○そこなふ（殘）○漢の姓「一邦」「一秀」

【劉禹錫】リウウシャク　字は夢得、唐の中山の人、柳宗元と同時に、進士に擢んでられ、博學鴻詞の科に登り、詩文に工なり、會昌二年卒す、白居易推して詞豪と爲す。

【劉基】リウキ　明の青田の人、字は伯温、經學に深く、文章を善くす、明の太祖を輔けて遂に天下を定む、太祖人に謂て曰く、伯温は、吾が張子房なりと、呼ぶに老先生を以てす、郁離子・覆瓿集等の著あり。

【劉向】リウキャウ　前漢の學者、字は子政、漢の宗室なり、人と爲り誠忠にして、屢〻諫を上る、列女傳・新序・洪範五行傳・說苑等の著あり。

【劉宋】リウソウ　南朝の宋（姓は劉氏）の別稱、以て趙宋に別つなり。

【劉備】リウビ　三國時代の蜀の主、字は玄德、關羽・張飛と相善し、備、兵を起すや、二人從ふ、諸葛亮の言を用ひて、天下三分の計を定め、遂に帝號を稱す、昭烈皇帝これなり、成都に都す、在位三年にして崩ず。

【劉參得】リウサンタク　劉禹錫を見よ。

【劉覽】リウラン　めぐらしみる（回覽）あまねくみる、劉は陳なり、瀏に同じ。淮南、原道「一一萬照」

【劉伶好レ酒】リウレイコウシュ　晉の劉伶字は伯倫、最も酒を好み、酒德頌を作る。世說、任誕「劉伶病レ酒渴甚、從レ婦求レ酒、婦捐レ酒毀レ器、涕泣諫曰、君飲太過、非二攝生之道一、必宜レ斷レ之、伶曰、甚善、我不レ能二自禁一、唯當下祝二鬼神一自誓斷上之耳、便可レ具二酒肉一、婦曰、敬聞レ命、供二酒肉於神前一、請二伶祝誓一、伶跪祝而曰、天生二劉伶一、以レ酒爲レ名、一飲一斛、五斗解レ醒、婦人之言、愼不レ可レ聽、便引レ酒進レ肉、隗然已醉矣」

十四畫

【劓】ギ　寘

○さく（割）○はなきる、古の五刑の一。

【劓罰】ギバツ　はなきりのつみ。書、呂刑「一一之屬千」＝劓罪。

【劓靡】ギビ　はなきりのつみ。＝劓刑。

【劍】　劍（刀部十三畫）の古字。

【劑】㊀シ　㊁セイ・ザイ　霽　支　通音ザイ

㊀ころへきる（齊截）○質一はてがた、わりふ（券書）大を質といひ、小を一といふ。㊁まぜあはす（調合）○まぜあはせたる製藥、まぜあはせたる味。

十五畫

【劇】シツ　陌

わりふ（券）通じて質に作る。

十七畫

【劗】サン　咸

○うがつ（鑿）○ふるへる（彫）きざむ（刻）韓愈詩「造化何以當二劗鑱一」

十九畫

【劗】㊀サン　㊁セン　銑　忝

㊀そる（剃）髮をそる。○きる（切）○へらす（減）㊁きる。＝翦。漢書、嚴助傳「一髮文身之民也」＝翦髮。

【劘】マ　㊁ビ　寘　支

○けづる（削）○わかつ（分）○きる（切）する（剖）切一はみがく。＝切磋磨。

力部

【力】リヨク　職

○ちから、筋肉の力、又、能一精一勢一膽一學一筆一財一。○すぢ（筋肉）○つとむ（勤務）書、盤庚「一一稽」○はなはだし、病重し。○しもべ（僕）人の爲めに使役せらるる者。陶潛、與子書「遺此一一助汝薪水之勞」

【力役】リヨクエキ　えだち、政府より課せらるる夫役ヲ孟、盡心「一一之征」＝力政。

【力穡】リヨクショク　農業をつとめる。陸游詩「兒孫一一供二賦租一」＝力田・力稽。

【力行】リヨクカウ　○つとめおこなふ。中庸「一一近二乎仁一」○實行をつとめる。史、儒林傳「爲レ治者不レ在二多言一、顧二一一何如一耳」

【力耕】リヨクカウ　つとめたがやす。＝力田。

【力學】リヨクガク　○つとめまなぶ。＝勉學。○ガクリキ物體の動靜・運動の遲速等を研究する學問。

【力攻】リヨクコウ　力をつくしてせめる、又、其のこと。

【力爭】リヨクサウ　○ちからを極めてあらそふ。○つよくいさめる。＝極諫・苦諫。

【力作】リヨクサク　つとめはたらく。

【力士】リヨクシ　○ちからつよき男。史、淮陰侯傳「此特一一之事耳」○佛法守護の大力者、金剛一一の略稱。○リキジ圖すまうとり。

【力子】リヨクシ　つとめほねをる子。後漢書「游子常苦レ貧、一一天所レ富」

【力人】リヨクジン　ちからある人。左、宣、十五「獲二杜回一、桑之一一也」

【力臣】リヨクシン　○君の爲めに力をつくす家來（禮記）○勇力の臣。左傳、樂氏之一一晉戎、國人憚レ之」

【力食】リキショク 己の労力によりて食ふ。
【力政】リキセイ ○えだち。暦、王制「五十不レ從ニ二ー一」＝力役。○武力を以て政をなす。武断政治。漢書、五行志「天子弱、諸侯ー一」
【力戰】リキセン つとめたたかふ。魏武帝文「果勇不レ顧、臨レ敵ー一」＝力闘。
【力田】リキデン 農事を勤みつとむる。史、倭寺傳「ー一不レ如レ逢レ年、善仕不レ如ニ遇合一」＝力耕・力稼・力穡。
【力闘】リキトウ 力戰に同じ。
【力勉】リキベン つとめはげむ、つとめはげます。宋史、劉沆傳「父ー一ニ之」
【力瘁】リキスイ ちからつく。李華、弔ニ古戰場一文「漢倾ニ天下一、財殫ー一」
【力量】リキリョウ ○ちからの分量。○はたらき、うでまへ。＝器量。
【同レ力度レ德】ナカラヲナニシテハカルベシ 二人の力量同じければ其の徳の優劣をはかる義。「書、泰誓」
【力貧レ實】チカラマヅシテミヲマヅシ 人の力は堅實なるを貴ぶ義。劉勰新論「ー一、智貴レ卒」
【力勝レ貧】チカラハヒンニカツ つとめはたらくときは貧に勝つことを得。說苑「ー一讒勝レ忠、愎勝レ害、戒勝レ災」
【力拔レ山兮氣蓋レ世】チカラヤマヲヌキキハヨヲオホフ 勇力のすぐれたるを形容す。項羽が垓下に敗れし時の歌。史、項羽紀「項王乃悲歌忼慨、自爲レ詩曰、ー一時不レ利兮、騅不レ逝、騅不レ逝兮、可ニ奈何一、虞兮虞兮奈レ若何」＝拔山蓋世。

【加】 カ 麻 三畫

○くはふ、くははる。○ます(増・益)多くなる。○かさねる(重)のぼる(上)。○ほどこす(施)。○侵す、しのぐ(凌)。論、公冶長「我不レ欲ニ人之ー一諸我一也」○すぐ(過)。禮記「獻子ー一於人一等矣」○つく(著)。論、鄉黨「ー一朝服ニ」○ますます。○くはふるに、其の上に。○數をよせあつめる算法「ー一減乘除」

同訓異字 加・益・增・倍・滋の別は益(皿部五畫)の條を見よ。

【加一倍法】カイハフ 一に一を加へて二となり、二に二を加へて四となるの類。宋史、道學傳
【加恩】カオン 恩惠を加へる。漢書、嚴安之傳「有レ詔ーレ」
【加害者】カガイシャ 人を殺傷せし犯人。被害者の對。＝下手人。
【加冠】カクワン 男子二十歳にして始めて冠を著くる、又其の儀式。說苑「君子始冠、必祝ニ成禮一ー一以厲ニ其心一」＝元服。
【加減】カゲン ○ますと、へすと。杜甫詩「藥餌憎ニー一門庭闊ニ掃除一」＝損益。○圓であひ、あんばい、程度「醫ー一」
【加護】カゴ ○大切にまもる。陰怪詩「玉躬子ー一」○佛天のたすけ。法苑珠林「得レ成ニ此ー一方便一」
【加算】カサン ○算術にて四則の一、數を合せくはへる算法、くはへざん。＝加法。○かぞへこむ、算入する。
【加餐】カサン 多く飲食する、身體を大切にする義。後漢書、桓榮傳「願君慎レ疾ー一重ニ愛玉體一」
【加之】シカノミナラズ 其のうへに、之に加ふるに。
【加稅】カゼイ 年貢をます。唐書「軍興ーレ」
【加勢】カセイ 力をそへる、助力する。＝應援。
【加納魚】カノウオ 圖蓬萊にて鯛をいふ。
【加增】カゾウ ○くはへます。後漢書、韋彪傳「君年在ニ喪艾一、不レ可ニ復以ー一」＝增加。○武家の祿だかを多くする。＝增俸。
【加速運動】カソクウンドウ 速度の漸次に強くなる運動。物體の落下する時の運動の類。
【加損】カソン ますと、へすと。宋史「千金之物、所ニー一、不レ過ニ錄兩一而移焉」＝加減・增損・損益。
【加答見】カタケン 粘膜の炎衝を生ずる病。急性・慢性の別あり「腸ー一」
【加持】カヂ 圖眞言宗にて修する祈禱、佛の大悲が衆生に加はり、衆生の信心が佛心に感ずる義。總藏記「加者諸佛護念、持者我自行」
【加賀】カガ ましておく。＝增置。
【加減】カゲン くはへそへる。白居易詩「ー一老氣味、改ニ變嬌容儀一」
【加膳】カゼン ますます、手厚くする。膳は厚なり。等なり。宋史、張田傳「輔臣ーレ」＝益膳。
【加入】カニフ なかまにはいる、組合に入る。
【加年】カネン としをます。＝加齡・增年。
【加倍】カバイ ばいまし。＝倍加。
【加判】カハン 圖他の印に添へて己の印を押して保證する。
【加筆】カヒツ ふでをくはへる、又詩文に手を入れてなほす。＝添削。
【加俸】カホウ 俸給を增す、給料をふやす「年功ー一」＝典「匠官ー一」
【加味】カミ 食品に香料などを加へてあぢをつける、轉じて他の物を混ぜ入れる。
【加盟】カメイ ちかひにくはは、同盟のなかまいり。
【加養】カヤウ 身體をやしなふ、養生する。＝保養・攝養。
【加齡】カレイ 加年に同じ。

【功】 コウ ク 東

○いさを、いさをし、てがら「ー一績」勞を以て國を定める。○自ら功としてほこる。○こ

と、わざ、しごと（事業）てわざ、木土の業。‖工。○つとめ、やくめ（職務）○よし（良）荀、王制「辨ニ其―苦」○なる（成）○喪服の名。大―は九月、小―は五月の喪服。字彙「喪服大―小―謂ニ之―者、謂治布之―有ニ精粗ニ也」

【功】コウ　力に从ふ。工の座。

【功】コウ　事の殆ど成らんとして止むに臨ふ。書、旅獒「不レ矜ニ細行ニ、終累ニ大德ニ、爲レ山九仞、――」

【功役】コウエキ　土木のえだち。後漢書「―繁興」

【貿レ功】カコウ　互に分業して、交易する。元倉子「男子不レ織而衣、婦人不レ耕而食、男女―レ―、相資爲レ業」

【功賃】コウチン　物價高し。漢書、食貨志「萬物―ー」

【功級】コウキュウ　てがらの等級。元倉子「天子躬率ニ諸侯ニ耕ニ藉田ニ、大夫士各有ニ―ー一動ニ人參ニ地產ニ也」

【功狗】コウク　てがらのある犬、又てがらが犬に同じ。史、高帝紀「蕭何功人、諸君―ー也」

【功勳】コウクン　いさを。晉書「帥ニ由舊章ニ、敍ニ勳―ー」‖勳功・功伐。

【功課】コウクワ　事業の課程、仕事の成績。後漢書、百官志、注「凡四方水土―ー、錢穀則奏ニ其殿最ニ而行ニ賞罰ニ」

【功業】コウゲフ　○いさを。○土木のわざ。

【功構】コウコウ　家屋をかまへ造る。魏書、蠕蠕傳「跋經ニ始正殿ニ、―ー初成」

【功郎】コウラウ　てがらと、つみと。

【功臣】コウシン　國家に功勞のある臣。戰國策「張儀者秦王之忠信―ー也」

【功績】コウセキ　功業に同じ、績は業。周禮「稽ニ其―ー」‖功績。

【功蹟】コウセキ　いさを。高駢、―ー銘ニ平金石ニ」‖勳蹟・功勳。

【功田】コウデン　いさをによりて賜はる領地。

【功均ニ天地ニ】コウトンチニ　功業の大いなること天地に同じ。陸倕、石闕銘「――、明竝ニ日月ニ」

【功績】コウテキ　○いさをと仁德と。唐書、太宗紀「―ー兼隆」○ひきいる人の爲めにする善行、慈惠。

【功成名遂】コウナリナヲトグ　てがら既に成り、名もあがる。老子「富貴而驕、自遺ニ其咎ニ、――身退、天之道」

【功有ニ五品ニ】コウアリゴヒン　いさをに勳・勞・功・伐・閥の五等ある義。史、高祖功臣年表「古者人臣――、以レ德立ニ宗廟ニ定ニ社稷ニ曰レ勳、以レ言曰レ勞、用レ力曰レ功、明ニ其勞ニ曰レ伐、積レ日曰レ閥」

【功能】コウノウ　○はたらき。功力と能力と。○きめ。‖效能。

【功疑惟重】コウギハオモキヲ　功の大小不明なるときは大なる格に從ひて賞すべし。書、大禹謨「罪疑惟輕、――」

【功牌】コウハイ　功ある者を奬勵するめたるの類。楊愼詩「――銀牒編」

【功伐】コウバツ　いさを、てがら。史、項羽紀「自矜ニ―ー一」

【功閥】コウバツ　いさを。蔡邕文「述ニ其―ー之最ニ」‖功伐。

【功夫】コウフ　思慮をめぐらす。韓偓詩「始知名譽有ニ―ー一」‖工夫。

【功名】コウミヤウ　てがらと、よきほまれと。史、張耳傳「――有下著ニ於當世ニ者上」

【功譽】コウヨ　功名に同じ。

【功用】コウヨウ　はたらき、てがら。史、伯夷傳「典職數十年、―ー既興、然後授レ政」

【功庸】コウヨウ　いさを、功は國に益し、庸は民に益す。國語「無ニ―ー一者、不ニ敢居ニ高位ニ」

【功勞】コウラウ　功伐に同じ。

【功利】コウリ　てがらと利益と。

【功利主義】コウリシュギ　ミル・ベンサム等が唱へたる倫理說、行爲の結果が最大數の人の最大幸福となるを以て善と定むる主義。

【功略】コウリャク　てがらと、はかりごと。史、淮陰侯傳「臣請、盲ニ大王―ー一」

【功力】コウリキ　きめ。てがら。自居易詩「不レ如卯時酒、神速―ー倍」‖效驗。

【功令】コウレイ　學事に關する規定、功は學問の功課。史、儒林傳「余讀ニ―ー一、至レ廣ニ開ニ諸官ニ之路ニ、未ニ嘗不ニ嗟レ書而歎ニ一也」‖法令。

【功烈】コウレツ　大いなるいさを。國語「社稷山川之神、皆有レ―ー于民ニ者也」‖大功・不朽。

【劦】ケフ　四畫　協

○力をあはす（同力）○いそがはし（急）

【劣】レツ　屑

○おとる。優の反對。○よわし（弱）力微なり「弱―ー」○うすし（薄）○わづか（僅）宋書、劉懷貞傳「―ー通ニ車軸ニ」○いやし（鄙）○すくなし（少）○つたなし（拙）白居易詩「顧我文章―ー、知他氣力全」○おとりたる者。

同訓異字　少力に从ふ、會意。

劣・僅・纔・才等の別は僅（人部十一畫）の條を見よ。

【劣才】レツサイ　おとりたる器量。‖凡才・薄才・拙才。

【劣情】レツジヤウ　いやしき心情、つまらぬ情慾。

【劣弱】レツジヤク　おとりてよわし。易經、蹇「若ニ无ニ朋來ニ、則―ー也」‖弱劣。

【劣等】レツトウ　おとれるしな。優等の反對。‖下等。

【劬】 五畫 ク 㔾

○つとむ(勤)○つかれ(労)

【劬勤】クキン いそがはしくつとめる。後漢書、袁紹傳「日夜勤苦、不ㇾ憚ニ一ー一」

【劬勞】クラウ 骨折りて痛労する。詩、小雅「哀哀父母、生ㇾ我ー一」

【劬瘁】クツイ いそがしく苦労する貌。程俱詩「誰能三萬卷、縣頭苦ー一」

【劬役】クエキ 骨折りて役労する。唐書、吳湘傳「發ㇾ人强力ー一」

【劫】 ケフ 㔾 コフ

訛りて通用す

○かすめとる(強取)うばふ(奪)○おびやかす(脅)せまる(迫)威力を以ておびやかし迫る。○ー一は勉むる。韓愈文「人皆ー一」設設。○浩ー一は宮殿の大階級。○コフ 佛一世の稱、又極めて永き時間。刹那の反對。又、單に時間又、世の義。

【劫劫】ケフ ○勉め勵む貌。字解を見よ。○コフ 佛世世の義。白居易、水月菩薩贊「生生ー一、長爲ニ我師一」

【劫脅】ケフ おびやかす、おどす。‖脅迫。

【劫制】ケフ 威力を以ておびやかして從はしむ。唐書「操ニ殺生柄一ニ一天下一」

【劫紗】ケフ おびやかしかすめる。晉書「兵士ー一」‖劫掠・劫奪。

【劫盜】ケフ おびやかしてぬすむ。又、其の者。南史、宋孝武帝紀「司ニ水火ー一」‖劫賊。

【劫奪】ケフ おびやかしてうばふ。‖剽奪・劫掠。

【劫縛】ケフ おびやかしてしばる。柳宗元文「鄉之行ニ一ー者、側ㇾ目莫ㇾ敢過ニ其門一者ㇾ」

【劫盟】ケフ おびやかしてちかはしむる。左傳「劫ニ公而强與ㇾ之盟」

【劫掠】ケフ 劫掠に遭ひしあと。戰後をいふ。

【劫掠】ケフ 劫略に同じ。

【劫略】ケフ ○おびやかして劃する。史記「擇ニ客天下一ー一諸侯一」‖劫制。○おびやかして奪ひ取る。昔の時の刑法に一ー律あり。‖掠奪。

【劫灰】ケフ 人間界の大火を劫火といふ。一ーは其の灰をいふ。高僧傳「普洽武帝ニ見明池底、得ニ黑灰一(中略)問ニ於法開一開曰、世界終盡、劫火洞燒、此灰是也」李賀詩「一ー飛盡今古平」

【劫數】ケフ 佛經の語。

【助】 ジヨ 㔾

○たすく(佐)力を借す、貧を救ふ。○たすけ。○助ける人。○ます(益)○殷時代の租稅法、井田として田地を井字形に九區に分ち、中央を公田とし、周圍の八區を八家に分ち、八家力を合せて公田を耕し、公田の收入を官に納むる法。一とは民の力を借りて公田を耕する義。孟、滕文公「殷人七十而ー一」

同訓異義 且に从ふ、俗に目に从ひて、助に作るは誤。

助・輔・弼・翼・扶・佐・佑・援・資・賛・介○助は力を添へて、たすくるなり、輔助・天助・援助などと連用す。○輔は兩勞夾ㇾ車木也と註す、車輻のたふれざるやうに、兩勞にひかへ木をなし置くなり、それより、たすくると訓む、輔佐・輔行の類。○弼は正ㇾ弓器也と註す、故に己を正しうして、先方の過失なきやうにただしたすくるなり、輔弼・匡弼と連用す。○翼は鳥の翼ある如く、側よりかかへたすくるなり、輔翼・翼賛と連用す。○扶は手をひきて、ころげぬやうに助くる義。論語「危而不ㇾ扶、焉用ニ彼相一」○佐・佑の二字は、左右の手の如く、身にそひて助くる意、佑は祐に同じ、王佐之才・輔佐・匡佐・天佑・神祐と用ふ。○援は引き上げてすくひ助くる意、後援・援兵と熱す。○賛は言葉をそへてたすくるなり。家語「游夏不ㇾ能ㇾ賛ニ一辭一」○禅はたすけ補ふ義。歐文「禅ニ陛下之聰明一」○資は、もとでをやりて、たすけとするなり。老子「不善人者、善人之資」○介は間に入りてたすくる義。詩經「爲ニ此春酒一、以介ニ眉壽一」

【助教】ジヨケウ 教授の次の官。晉代、國子ー一を置く、唐代、國子學・太學・廣文館・四門學皆ー一あり、明清の代、ただ國子監のみー一あり。

【助言】ジヨゲン ことばを添へて助ける、くちぞへをする。

【助産】ジヨサン 産婆をいふ。塊窗小牘「從ニ一ー朱婆婆墻外、得ニ一銅器如ニ盞一」

【助字】ジヨジ 文意を補ふために添ふる字。乎・於・平・矣・焉・哉・也の類。國語の助詞に相當す。‖助辭・助語。

【助詞】ジヨシ 國文法上の用語、語と語との關係を示すことば。てにをは。

【助成】ジヨセイ 前條に同じ。

【助手】ジヨシュ 國てだすけ。又、其の人、すけ「大學ー一」

【助成】ジヨセイ 力をそへて事を成し遂げさせる。晉經、孔傳「ー一ー道化」

【助勢】ジヨセイ 力をそへる、加勢する。‖助力。

【助炭】ジヨタン 圖火鉢のおほひ。木の枠に紙を張りしもの火氣を助けて永く保たしむるもの。

【助長】ジヨチヤウ ○遠かに大ならしめんことを欲して、卻つて之を害する義。

孟、公孫丑「心勿レ忘勿ニ―一也、無下若二宋人一然上。宋人有下閔二其苗之不レ長而揠レ之者上。芒芒然歸、謂二其人一曰、今日病矣、予助レ苗長矣、其子趨而往視レ之、苗則槁矣」○俗に力を添へて長大ならしむる義に用ふ。

【助動詞】ジョドウシ 國文法上の用語、動詞の意味を助けることば。なり・たりの類。

【助法】ジョホウ ○殷の代の租稅法。字解を見よ。○國手續書等の方式に關する法律。

【助陽】ジョヨウ ○死者の冥へ贈るもの。壙を助くる義。香奠の類。後漢書「―一甚盛」

【助命】ジョメイ いのちをたすける、死すべき者を救ふ。

【助役】ジョヤク 國市町村長などの次に位して事務を助ける吏員。又、鐵道停車場にて驛長の次に位する役。

【助理】ジョリ 天子を助けて天下を治む、理は治なり。漢書、百官志「―一萬機」

【助力】ジョリョク ちからを添へてたすける。漢書、孔光傳「得二其―一一」＝援助。

【劭】 セウ 蕭 嘯

○すすむ（勸勉）漢武帝詔「先帝―農」○つとむ（勉）○よし、うつくし（美）法言「董仲舒之才之―也」○たかし（高）宋書、宗室傳「雅量高―」

【努】 ド 慶

○つとむ（勉）○はげむ（勵）○國ゆめ。

同訓異義 努・勤・勉・懋・力・攻・勵・務の別は勤（力部十一畫）の條を見よ。

【努力】ドリョク つとむ。李陵、與二蘇武一詩「―一崇二明德一」＝勉強。

六畫

【劾】 ガイ コク 職 陌

○さはむ（糾）罪狀をとり調べる「彈―」「糾―」○罪狀のとりしらべがき。後漢書、范滂傳「滂知レ遂不レ行、投レ―去」○かんがふ（覈）○しらべる（按）○おす（推）○つとむ（勤力）

【劾按】ガイアン 人の罪を告發してただす。唐書、令狐彰傳「請レ―二無狀一」

【劾奏】ガイソウ 告發してとらへつなぐ。唐書「金吾―一、帝寤レ之不レ罪」

【劾狀】ガイジョウ 人を法にあてんことを乞ふ上書。唐書、崔隱甫傳＝彈劾書。

【劾奏】ガイソウ 官吏の罪をしらべて天子に言上する。漢書、元成傳「以二元成實不二病一、―一之」

【劾彈】ガイダン 人の罪をしらべてあばく。＝彈劾。

【劾謁】ガイエツ 罪をあばきて天子にたしり告げる。唐書、李商隱傳「惟―一一幸臣一」

【効】 カウ 號

效（支部六畫）の俗字。

【劫】 キャウ 陽

○勤慤ケンカクはいましめ愼む貌。書、酒誥「汝―二殷殷獻臣一」

【勤慤】キンカク は急にせまる貌。又、にはか（遽）なる貌。韓愈文「新師不レ牢、―勤將レ逋」

【勞】 ケン 銑 俗の本字

○うむ（倦）○つかる（疲勞）

參考 契券の券と異り、勞は刀に从ふ、此は力に从ふ。

七畫

【勁】 ケイ キャウ 敬

○つよし（強・遒）左、宣十二「中權後―」○すこやか（健）○かたし（堅）○するどし（銳）

【勁氣】ケイキ ○はげしき氣象。蘇轍詩「有レ命孤蓬轉、―一道二雁騰一」○はげしき風氣。

【勁悍】ケイカン つよくしてあらあらし。晉書、陶璜傳「夷獠―一、脈世不レ賓」

【勁越】ケイエツ はりの強きゆみ。漢書、賈誼傳「可レ賜二之堅甲及―一利矢一」

【勁果】ケイカ つよくしてはたす、勁健果斷。後漢書、袁紹傳「北兵雖レ衆、而―一不レ及二南軍一」

【勁健】ケイケン つよくしてすこやか。酈水燕談錄「雖二點畫肥瘦一、而筆力―一」

【勁草】ケイソウ つよきくさ。後漢書、王劉傳「疾風知二―一一」忠烈不屈の士に喩ふ。

【勁士】ケイシ 氣節のはげしくつよき人。荀子「行法至堅、不下以二私欲一亂上所レ聞如レ是、則可レ謂二―一一矣」

【勁秋】ケイシュウ 風霜のはげしき秋の時候。文賦「悲落葉于―一」

【勁疾】ケイシツ つよくしてすばやし。＝勁捷。

【勁拔】ケイバツ つよくすぐれし馬。轉じて文章のすぐれて力あるにいふ。＝遒勁。

【勁松彰二於歲寒一】ケイショウハ つよき松の節操は歲寒の時に至りてあらはる。潘岳、西征賦「――、良臣見二於國危一」

【勁切】ケイセツ つよくきびし。魏志「寒氣―一」

【勤節】キンセツ つよくして屈せざるみさを。江淹詩「疾ㇾ風知ニ一一一貫ㇾ霜見ニ貞心一」
【勤捷】キンセフ 勤疾に同じ。
【勤策】キンサク つよきやり。
【勤卒】キンソツ つよき兵卒。晉書「其時一一」
【勤直】キンチョク つよくしてただし。韓非子「能法之士、必強毅而一一」‖剛直。
【勤懇】キンコン つよきいしゆみ。史、賈生傳「其時一一、守ニ要害之處一」
【勤拔】キンバツ つよくして秀でぬきんづる。
【勤弩】キンド するどきをの。曹植、蟬賦「吉ニ黃雀之作ニ害兮、忌ニ螳蜋之一一一」
【勤風】キンプウ つよく吹くかぜ。張正見詩「深松有ニ一一一」
【勤猛】キンモウ つよくたけし。孔稚圭文「吳楚一一、帶甲百萬」
【勤利】キンリ つよくするどし。尹文子「兵甲一一、封疆修理、强國也」
【勤厲】キンレイ つよくはげし。魏志、注「梁朗子秀、一一能直言」
【勤烈】キンレツ つよくしてはげし。晉書「一一限ㇾ身全ㇾ節」

【勅】チョク 職

○みことのり。○いましむ（誡）○文體の名。文體明辯「劉勰云、戒ㇾ飭ニ文、貴ニ詔之切者一事物紀原「三代而上、王言有ニ典謨訓誥誓命凡六等一、其總謂之書、漢初定ニ儀則一、四品其四曰、戒一今一是也、自ニ此帝王命令始稱一一、至ニ唐顯慶中一、始云不ニ經ニ鳳閣鸞臺一、不ニ得ニ稱一一一之名遂定ニ於此一」

新字 もと敕に作る。勅戒は筋に通ず。

【勅戒】チョクカイ いましむ。いましめ。韓愈詩「一一四方、修期有ㇾ誉」
【勅額】チョクガク 勅命によりて寺を建つる時、賜ふ額。名物六帖「通鑑周紀、世宗勅ニ天下寺院一、非ニ一一一者、悉廢ㇾ之、胡三省、注一一者、勅ニ賜寺額一、如ニ慈恩・安國・興唐之類一、按、勅許建ㇾ寺、則賜ㇾ額、謂ニ之一一一、非ニ寔筆扁額一也」
【勅勘】チョクカン 國天子のおとがめを受けて遂ひ退けられる、勅命による勘當の義。
【勅許】チョクキョ 天子のおゆるし、勅命による免許。總總條「謹附啓聞聞、事重人微、不ㇾ能ニ宣盡一、法師已蒙ニ一一、逕改葬焉」‖勅免。
【勅願】チョクガン 天子の御願。
【勅願所】チョクガンジョ 天子の御新願あらせらるる社寺の稱。
【勅諚】チョクジョウ みことのり。宋史「一一堂判五卷」‖詔勅。
【勅誡】チョクカイ 天子の御戒斷。‖勅斷。
【勅祭】チョクサイ 勅命の祭事。
【勅旨】チョクシ 天子のおほせ。宋史「趙準曰、臣有ニ一一一不ㇾ得ㇾ遵ニ三十萬一」
【勅使】チョクシ 天子の使者。晉書、何無忌傳「稱ニ一一一」‖天使。
【勅授】チョクジュ 天子親しく位を授け給ふ、我國にて、古は五位以上に限る。現制は從四位以上、宮內大臣之を奉行す。
【勅書】チョクショ みことのりをしたためしかきつけ、勅命の文書。‖勅宣・詔書・御書。
【勅宣】チョクセン みことのり、勅命の宣旨。‖勅書。
【勅撰】チョクセン みことのりを奉じて書をえらぶ。‖欽定。
【勅選議員】チョクセンギイン 國勳功又、學識ある三十歲以上の男子中より敕任せらるる貴族院議員。
【勅答】チョクトウ ○天子のおこたへ。南史、蕭子雲傳「宜ㇾ改ニ之一一一」○國謂りて天子の御下問に對する答の義に用ふ。
【勅斷】チョクダン 天子のおさばき。金史、賈鉉傳「一一亦依ニ已定程式一」‖勅裁。
【勅說】チョクセツ 國みことのり。詔勅・勅宣。
【勅任】チョクニン ○みことのりによりて任命する。○國古、天子が大納言以上將官諸長官等を親しく任命せられをいふ。現制にては天皇の御置をおされし辭令書を以て官に任命する手續。一一官は奏任の上、親任の下に位す。
【勅諚】チョクジョウ 勅命の門牓ㇾ白居易詩「寺門一一金字書」
【勅使流】チョクシリュウ 國後圓融天皇の宸筆を祖とする書流の一派。
【勅命】チョクメイ 天子の命令。書、舜典「奮ニ庸汝二十有二人一、孔傳「特一一ㇾ之」
【勅諭】チョクユ ○天子の御さとし。徐陵文「一一分明」‖詔諭。○天子親らさとしたまふ。漢書、東平王宇傳「奉ニ璽書一一ニ之」
【勅令】チョクレイ ○天皇の命令。○國謀合の協賛を經ずして直ちに發せらるる天皇の命令。
【勅勒】チョクロク 匈奴の地名。斛律金、一一歌「一一川、陰山下、天似ニ穹廬一、籠ニ蓋四野一、天蒼蒼、野茫茫、風吹草低見ニ牛羊一」

【勑】勅（前條）の俗字。

【勉】ベン 銑

○つとむ（勤）はげむ（勵）○すすめはげます「勸一一禮、月令「一一諸侯」
【勉行】ベンギョウ つとめしひて行ふ。中庸「勉強而行ㇾ之」‖力行。
【勉學】ベンガク 學問をつとめはげむ。
【勉勵】ベンレイ 勵き事をしひてつとむる。漢書、循吏傳、贊少自一一」‖勉勉。

【勉勸】ベンクヮン つとめすすめる。漢書「一ニ一農桑」‖勸勉。
【勉ノ旅】ベンセンノリョ 能く勉勵せよとはげます語。高適詩「行矣各一ノ一、吾當二勉烈一」
【勉勉】ベンベン つとめはげみて已まざる貌。詩、大雅「一一我王、纘二紀四方一」‖孜孜・汲汲。
【勉厲】ベンレイ 永徐に同じ。漢書「故二千石、有二治理効一、輒以二雅書一一一、增ノ秩賜ノ金」‖勉勵。
【勉勵】ベンレイ つとめはげむ、せいを出す又、つとめはげます。‖勉厲。
【勉强】ベンキョウ つとめはげむ。論衡「欲二一一爲二將矣一」‖勉勵。

【勃】 ホツ　通音ボツ　月

○にはか、にはかに(猝)○顔色を變ずる貌。○盛んなる貌。○怒る貌。○おしひらく(擠排)おこる(興起)○渤(水部九畫)に通ず「一海」
【勃鬱】ボツウツ 氣の盛んにつもる貌。‖鬱勃・鬱結。
【勃興】ボツコウ さかんにおこる。後漢書、黨錮傳「漢祖杖ノ劍、武夫一一」
【勃然】ボツゼン ○顔色をかふる貌。孟、梁惠王「王一一、變二於色一」‖艴然。○にはかなる貌。莊子「忽然出、一一動」‖卒然。○にはかに興起する貌。‖渤然。
【勃窣】ボツソツ ○はらばひて行く、又、行くことゆるやかなる貌(司馬相如、子虛賦)○冒論の急切ならざる貌。晉書、張悛傳「一一爲二理窟一」
【勃怒】ボツド さかんにいかる。長楊賦「聖武一一、爰振二其旅一」
【勃發】ボツハツ にはかにおこる、だしぬけに出る。
【勃勃】ボツボツ 盛んなる貌。淮南、時則「一一陽陽、惟德是行」

【勇】 ユウ　通

○いさましい。怯の反對。膂力又膽氣の人に過ぐる者。論、泰伯「一而無レ禮則亂」○たけし(猛)たけき者(猛士)李嶠詩「決勝三河一、長驅六郡雄」○兵卒をいふ「兵一」○するどし(銳)○思ひきりよし(果敢・果決)○いさむ、元氣を出して進む。韓愈、柳子厚墓誌銘「一於爲二人一」○すこやか(勁健)○つよし(強)
【有レ勇無レ義爲レ亂】ユウアリテギナケレバランヲナス 唯勇のみありて、義なければ、世を亂るに至る。論、陽貨「子曰、君子有レ勇而無レ義爲レ亂、小人有レ勇而無レ義爲レ盜」君子・小人は皆位を以ていふ。
【買レ勇】カヘ我がすぐれたる勇氣を買へよとて己の勇を誇る義。左、成二「欲レ勇者買二余倍勇一」賈逵仁詩「一一登二維嶽一」
【鼓レ勇】コユウ 勇氣を鼓舞する。吳錦麒詩「一一恐不レ速、行行列短矛」
【倚レ勇】ユタノム 勇氣を倚む。論、陽貨「子路曰、君子一一乎、子曰、君子義以爲レ上、君子有レ勇而無レ義爲レ亂」
【勇悍】ユウカン いさましくつよし。史、酷吏傳「以二一一一能レ軍」‖猛悍。
【勇敢】ユウカン 勇氣ありて事をおしきりて爲す。史、刺客傳「專諸一一士也」
【勇氣】ユウキ いさましき氣。左、莊十「夫戰一一也」
【勇健】ユウケン たけくつよし、邁は健。金史、宿衛不失傳「一一踰レ常、倏二出落雒之外一、其一一如レ此」
【勇俠】ユウキョウ いさみて、をとこだてある。又其の者。
【勇健】ユウケン いさましくたけし。後漢書、烏桓傳「有下一一能理決二鬪訟一者上推爲二大人一、無二世業相襲一」
【勇壯】ユウサウ いさましくさかんなり。後漢書、耿秉傳「性一一」
【勇士】ユウシ いさましきさむらひ。孟、滕文公「一一不レ忘レ喪二其元一」
【勇進】ユウシン いさましくすすむ。
【勇者】ユウシャ 勇氣ある人。論、子罕「一一不レ懼」
【勇將手下無二弱兵一】ユウシャウノモトニヨワキヘイナシ 勇敢なる大將の下には、弱き兵卒なし。‖強將下無二弱兵一(蘇軾、題二連公壁一)
【勇退】ユウタイ 思ひきりよく官を退く。戴復古詩「日暮倒行非二吾事一、急流一一有二何難一」
【勇斷】ユウダン いさましきさま。宜和書譜「有レ無二仲由之一一一」
【勇敢】ユウカン いさましき膽氣。荀子「一

一猛戾、則節ノ之以二謹順一」【勇断】ダン思ひきりよくさだむ。五代史「高麗以レ国、一一類レ己」‖勇決・勇敢。【勇面無レ識則亂】スナハチラレイケレバミダル勇氣のみありて禮儀なきときは、遂に亂暴に至る。孔子の語（論、泰伯）【勇武】ブ いさましくたけし。‖武勇。【勇慎】シン いさみて、大いにいきどほる。【勇猛】モウ いさみてたけし、勇壯剛猛。淡書、匡衡傳「一一剛強」【勇猛精進】シャウジン 勇心をたけく募らにして佛道を進修する。元是淨程「一一、志願无倦」【勇略】リャク 勇氣すぐれてはかりごとに長ずる。【勇力】リョク 心いさみて力もり。左、襄二一「生二叔虎一、実面有二一一一」【勇往邁進】マイシン 勇みてひた進みに進む。‖勇迸・勇壯直前。

八畫

【勍】ケイ 庚

つよし（彊）たけし。【勍敵】テキ つよきかたき。左、僖二二「一一之人」

【勘】ケン 國

うむ、つかる。莊、應帝王「學ノ道不レ一」‖倦。

【勘】㊀カイ ㊁チョク 國國

㊀徠に同じ、いたはる、ねぎらふ（勞）㊁敕（支部七畫）に同じ。○いましむ。○みことのり、天子の制書。

九畫

【勘】カン 國

○かんがふ（校）つき合せてしらべる、校合する。○くりかへしさだめる（獲定）○きはむ、罪をただし問ふ（鞫問）「推一」「審一」【勘考】カンカウ かんがへる、思案する。‖考慮。【勘校】カンカウ ひき合せてかんがへただす。兩京記「僧二一一而已矣」‖校勘・校正。【勘合】カンガフ ○比べあはせてしらべる。宋史、兵志「令下可二一一一」○わりふ。外國交通を許可せし證として授けるわりふ。牛印をかんがへ合す。居家必用「一一、即古之符契也」【勘氣】カンキ 國勘當に同じ。【勘契】カンケイ ○てがた、わりふ。夢溪筆談「如二古之一一一也」○宮殿の門を開閉するあひかぎ。【勘奏】カンソウ かんがへてくはしくしらべる。隋書、律曆志「竝加二一一一」【勘書】カンショ 書物をかんがへしらべる。劉克莊詩「唐律細一一」【勘當】カンタウ かんがへしらべて罪にあてる。通鑑、唐高宗紀「請更加二一一」○「一一」國君父の怒に觸れて臣子たる義を斷たれる。‖勘氣。【勘定】カンヂャウ ○かんがへて定める。唐書、王彦威傳「竇二一一兩稅使」○國數へる、計算する。又、其の計算「一一書」【勘亭流】カンテイ 國書體の一、芝居の番附などを書くに用ふ。江戸中村座の手代勘六の創せしところ。【勘辨】カンベン ○事を考へ定める。放翁題跋「觀二蘭亭一當下如二諸宗一一一入レ門便了」○國人の罪過をこらへてゆるす、かんにんする。【勘解由】カゲユ 國次條に同じ。【勘解由使】カゲユシ 國古、國司の更代の時の解由狀を掌る役所、長官・次官判官・主典等の官人あり。【勘文】カンモン ○國古、陰陽寮より、天變地異吉凶等の事をかんがへて奏せし案文○カンジン解由ヲ勘定の文書。

【勣】キ・ク 錫

つとむ（勉）人をはげましつとめしむる。書、牧誓「一哉夫子」

同訓異字 勤・勉・勉・力・努・務等の別は勤（力部十一畫）の條を見よ。

【勛】勳（前條）の誤字。

【動】㊀トウ ㊁トウ 董 通音ドウ

㊀うごく。靜の反對。所を移し易へる、ゆれる（搖）○はたらく「勞一」○事をなす。坐作進退する。論、顏淵「非レ禮勿一」○いづる（出）禮、月令「仲春蟄蟲始一」○生ずる。禮、月令「草木萌一」○ふるふ（震）○さわぐ（騷）心がおちつかず。○感ずる「感一」○みだれる（亂）○かはる（變）○いきもの、禽獸蟲魚の類「一物」○やもすれば。韓愈、進學解「一輒得咎」㊁うごかす（搖）

同訓異字 動・搖・振・蕩 ○動は靜の反、じっとして居らざるなり、驗虞。論語「知者動、仁者靜」○搖はゆるぐ、ゆるがすと訓む、強弱し、定の反、心のおち付かざるを、詩に「中心搖搖」とありて、疏に「心憂無レ所二附著一之意」とあり。歐文「若此事一動、則天下搖」○振はゆすり動かすこと、大風振レ屋の如し。韓愈詩「蚍蜉撼二大樹一」○蕩は激に觸ず、搖と略同じ、蕩レ舟・心蕩などの如し。

【動員】ドウイン 國軍用語、戰闘準備として

地方の騒擾を鎮圧する。「―令」【動搖】ドウエウ ○ゆれうごく。○心がうごきみだれる。淡書「人人自安難ニ―一」【動悸】ドウキ 驚きてむなさわぎする。後漢書、馮異傳「心中――」【動機】ドウキ ○倫理學にて行爲の原因となる心の狀態。○事の發動する機會。陰符經「動ニ其機一萬化安」【動作】ドウサ たちゐふるまひ。‖動止。【動産】ドウサン 家具金錢等の如き移動すべき財産。土地家屋等を不―ーといふの對。【動止】ドウシ うごくと、とまると。たちゐふるまひ。‖擧止・動作・動靜。【動詞】ドウシ 國文法上の用語、事物のはたらきを言ひあらはすことば。はたらきことば。【動心】ドウシン こころをうごかす。孟、公孫丑「我四十不ー―」【動色】ドウシキ 顏色をかへる。色（部首六畫）の動ノ色ヲ見ヨ。【動靜】ドウセイ ○うごくと、しづかなると。又、たちゐふるまひ。易經「一―有ノ常、剛柔斷矣」○動物と植物と。史、五帝紀「―之物、小大之辨」【動蕩】ドウタウ 心がうごく。王安石詩「錄心――不ノ可ノ抑」【動地】ドウチ 勢さかんにして地をゆるがす。漢書「車騎驚起、殷ノ天ー―」【動魂】ドウコン 心を驚かす。詩品「陸機所擬十四首、文温以麗、意悲而遠、驚心―、讀乎一字千金」【動物】ドウブツ 禽獸蟲魚などのいきもの。周禮「其―宜毛物、其植物宜ニ皂物一」【動物園】ドウブツエン 種種の動物を蓄ひ置きて、人の研究又は遊覽に供する所。【動物岩】ドウブツガン 地質學にて動物の遺骸堆積して成れる岩石の稱、珊瑚・石灰岩の類。【動兵】ドウヘイ 戰を始める、干戈を動かす。【動脈】ドウミヤク 心臟より出づる生血を全身に送る脈管。靜脈の對。【動容】ドウヨウ ○たちゐふるまひの容儀。孟、盡心「―周旋中ノ禮者、盛德之至也」‖舉動。○ヨウクヮウ容貌を變動する。漢岳賦「―ノ變ノ音而觀者、莫レ不下抃二舞乎旗鼓一、謳中吟乎聖世上」【動亂】ドウラン 世のみだれ。‖騷動。【動力】ドウリヨク 物體をうごかす力、機械を運轉する力。

【務】

㊀ブ・ム　㊁ブ・ム　去　遇

㊀つとめ。○まつりごと。「政ー」○しごと。「職ー」○つとむ（强）㊁あなどる、あなどり。詩、小雅「兄弟閱于牆、外禦其ー」‖侮。【務本】ムホン 道の根本に力をつくす。論、學而「君子ノー、本立而道生」

【勐】

ベン　ビン　銑　軫　靈に通ず

○つとむ（勉）○すすむ（勸）

【勒】

ロク　職

○くつばみ、くつわ（銜）馬の口にふくませ、轡ナヅをつけて馬を御する具。○おもがい、馬頭の絡。○一說、たづなに銜クツのあるを―、銜のなきを羈といふ。○おさへる（抑制）制御する。後漢書、馬廖傳「廖性寬緩、不能教ニ子孫一」○をさむ（治）ととのへる（整）後漢書、光武帝紀「親ー二六軍一」○ゑる（雕）ほる（鑿）○きざむ（刻）禮、月令「物ー二工名一」【勒韻】ロクイン 詩を作るに韻字を定める。唐詩紀事「王灣麗生殷賜ノ宴、同勒ニ天前燭年四韻一應ノ制五首律詩」【勒花】ロククワ 勒は抑へる、寒氣が花を抑へて開かしめず。歐陽修詩「蠟色初含ノ柳、餘寒尙ー―」【勒石】ロクセキ 石にほりつける。‖刻石。【勒住】ロクヂウ おさへとどめる。范成大詩「隔年寒力凍ニ芳塵一ー二ー東風一」寂寞濱」【勒停】ロクテイ 官職を免ずる。【勒兵】ロクヘイ 兵を治めととのへる、除伍を編成し點檢する。史、孫子傳「可ニ以少試ー二ー乎」【勒銘】ロクメイ 銘の文字を金石に彫りつける。又彫刻したる銘文。晉書、郭璞傳「上有ニ―ー一」‖刻銘。

【勛】

十畫　女　動の古字

いさを（功績）

【勛業】クンゲフ いさを、てがら。杜甫詩「尙書ー―超ニ千古一」‖勳業。

【勝】

㊀ショウ　㊁ショウ　蒸　徑　先

㊀たふ、たへる（任堪）論、鄒陽「執圭鞠躬如也、如不ー―」○かなふ（稱）○あげて（盡）ことごとく（盡）㊁かつ、かち、敵にうちかつ。負敗の對。○制する、抑へる。史、伍子胥傳「人衆者ー天」○すぐれる（超出）○まさる（優）○すぐ（過）○くはふ（加）○すぐれたる物、すぐれたる場所、すぐれたる景色「名ー」○かみかざり。婦人の首飾。杜甫詩「ー裏金花巧耐寒」

勝・克・捷・贏・競　○勝は負の反、勢のすぐれたるなり、廣く用ふ、史記「人多則勝ノ天、天定則勝ノ人」○克は勝ち難きものに克つな

り、克レ己は、己の私欲にうちかつなり。左傳に「得レ禍曰レ克」とあり。○捷　軍にかつなり、捷書とは、軍にかちたる知らせ文なり。○亟は差引してまうけたるなり。東坡詩「亟得兒童語言好」○亟は軍に勝ちて亂を平ぐるなり、鎭定と連用す。○勝・耐・堪・任・禁・能の別は耐（而部三畫）の條を見よ。○勝・優・愈・賢の別は優（人部十五畫）の條を見よ。

【勝引】シヨウイン　すぐれたる等き友。李善、文選注「一一、勝友也、引猶レ導、良友所二以進一已、故通呼曰二一一一」

【勝概】ショウガイ　風景よく高く明かなる地。唐書、陳子昂傳「子昂盛言二東都一一可レ營二山林一、武后奇二其才一、召見二金華殿一」

【勝堅】ショウケン　すぐれたるおもむき。堅は概に同じ、致なり。唐書、裴度傳「極二都城之一一」

【勝氣】ショウキ　○すぐれたる氣象。梁簡文帝銘「一一無レ儔、高塵誰偶」○國人に勝たんと競ふ心。まけじだましひ。

【勝區】ショウク　風景のすぐれたる地。又、萬物のあつまる所。

【勝軍木】ショウグンボク　ぬるでのき、山野に自生する落葉樹、秋日紅葉して愛すべし。‖白楸木。

【勝會】ショウクワイ　さかんなるよりあひ。盛大なる宴會「晉書、謝衡傳」

【勝景】ショウケイ　すぐれてよきけしき。元好問詩「每恨一一不レ得レ窮」

【勝慨】ショウガイ　よきここち。李白詩「一一只自知、佳趣爲レ誰談」

【勝國】ショウコク　我が勝ちて亡ぼしたる國の義、前代の亡國をいふ。周禮、士師「若祭二一一之社稷一、則昏二之尸一」

【勝算】ショウサン　かつみこみ、又其の謀。カツハ孫子「廟算多者勝」

【勝日】ショウジツ　五行說にて木剋レ土・土剋レ水・水剋レ火・火剋レ金・金剋レ木の五日をいふ、勝は剋カツなり。史、封禪書「以二一一一駕レ車辟二惡鬼一」

【勝圖】ショウト　富商をいふ。管子「游子一一之所レ道」‖豪商。

【勝常】ショウジヤウ　健康が平常にまさる、人の健康を祝する語。東坡尺牘「旅候一一」

【勝情】ショウジヤウ　山水景勝の地を好む情。世說「許掾好レ游二山水一、而體便二登涉一、時人云、許非二徒有一一、實有二濟勝之具一」

【勝者所レ用敗者之棋也】ショウシヤノモチフルトコロハイシヤノキナリ　勝者用ふる器は一なれども、かちまけは其の人の技倆による。顧璨文「一一、興國所レ用、亡國之臣也」

【勝所】ショウショ　景色のすぐれたるところ。梁昭明太子詩「故歡遊兮玆一一」‖勝地。

【勝迹】ショウセキ　すぐれたる古跡。孟浩然詩「江山留二一一一、我輩復登臨」

【勝槩】セウガイ　盛んなる盛則の義。王勃、滕王閣序「童子何知、躬逢二一一」

【勝訴】ショウソ　かちたるうったへごと、訴訟の勝利。

【勝地】ナショウチ　景色又は地形のすぐれたる地、形勝の地。王巾、頭陀寺碑文「建部之一一也」‖勝境・勝所。

【勝地本來無二定主一】ショウチホンライムテイシユナシ　景勝の地はもとより一定の所有者はなし。白居易、遊二雲居寺一題二壁三十六地主一詩「亂峯深處雲居路、共踏レ花行獨惜レ春、——、大都山屬二愛レ山人一」

【勝致】ショウチ　すぐれたるおもむき。王曾賦「有二國遊之一一」‖勝槩。

【勝敗】ショウハイ　かちまけ。史、陳丞相世家「無レ益二於一一之數一、數は計なり、又運命。‖勝負。

【勝負】ショウフ　かちまけ。韓非、喩老「未レ知二一一一」

【勝負兵家常勢】ショウフヘイカノツネナリ　かちまけは兵法家の常なり。唐書、裴度傳「一勝一負、兵家常勢」

【勝利】ショウリ　かちて利を得る。唐高信傳「因二此一一一」

【勝流】ショウリウ　すぐれたる身分の人。南史「唯以二衆叡年長且州里一一、特相敬重」‖上流。

【勝侶】ショウリヨ　すぐれて真きつれ。南史「招二納一一一」‖真伴。

【勝手】カツテ　圖きまま。‖任意。

【勞】

㊀ラウ・ロウ　㊁ラク・ロク　【勞】

㊀つかる、つかれ（疲）くるしむ（苦）○はげし（劇）力を用ふること甚だし、骨を折る。○つとむ（勤）○うれふ（憂）○しごと（事功）禮、儒行「先一一後祿」㊁なぐさむ（慰）○いたはる。○ねぎらふ、つかれを慰め勞める。禮、曲禮「君一之則拜」

【勞逸】ラウイツ　苦勞と安樂と。左傳「與之一一」‖勞佚。

【勞役】ラウエキ　ほねをりはたらく。又、ほねをり仕事。魏志、註「驚二此百姓一一一未レ已」‖苦役。

【勞歌】ラウカ　勞動する時うたふ歌。韓詩外傳「飢者歌レ食、勞者歌レ事」張旭詩「旅人倚二征棹一、滯甚起二一一一」

【勞瘵】ラウサイ　肺病の古名。‖勞症。

【勞銀】ラウギン　圖勞働の報酬として得る賃金。

【勞苦】ラウク　○心をいためくるしめる、體がつかれくるしむ。‖苦勞。○なぐさめいたはる。漢書、張耳傳「一如二平生歡一」

【勞結】ラウケツ　うれへて心がむすぼれふさぐ。書、丕文「未レ足レ解二其一一」‖憂鬱。

【勞倦】ラウケン　つかれうむ。荀子「君子隘窮而不レ失、一一而不レ苟」‖疲倦。

【勞遣】ラウケン　ねぎらひて使はす。北史「一一二之」

【勞困】ラウコン　つかれくるしむ、つかれ。

果志、華嶷傳「被雀我損、加以ニー一」
【勞作】ラウサク　ほねをりわざ。‖勞動。
【勞使】ラウシ　おひつかふ。白居易詩「不レ願レ見ニー一」
【勞而不レ怨】ラウジフクセズ　孝子は苦役せらるれども親をうらまず。論、里仁「子曰、事二父母一幾諫、見二志不一レ從、又敬不レ違、——」
【勞而無レ功】ラウジテコウナシ　骨折るのみにて功果なし。徒勞の義。管子、形勢「彊不レ能、告レ不レ知、謂二之勞而無一レ功」
【勞人】ラウジン　苦役に從ふ人。詩、小雅「ー一草蟲」草草は心を勞する貌。
【勞心】ラウシン　政治などに心をくるしめる。孟、滕文公「ー一レー者治レ人、勞レ力者治二於人一」
【勞神】ラウシン　心をくるしめる、心配する。
【勞症】レウシヤウ　勞咳に同じ。
【勞劇】ラウゲキ　ねぎらひめぐむ。唐書、王式傳「爲二晉州刺史一、會河曲大猾、民流二徙他州一不レ納、獨式ー一之」‖勞恤。
【勞疲】ラウヒ　つかれ、つかる。‖勞乏。
【勞動】ラウドウ　體をつからし動かす。三國志、華陀傳「人體欲レ得ニー一」
【勞働】ラウドウ　國ほねをりはたらく、働は國字。‖勞動。
【勞働者】ラウドウシヤ　身體を勞して生活する者。
【勞乏】ラウバウ　つかれ、つかる。五代史「因二其ー一而乘レ之、可二以勝一也」‖疲勞。
【勞疲】ラウヒ　くたびれつかる。易林「匪レ勉勞レ危、道塗ー一」‖疲勞。
【勞問】ラウモン　ねぎらひなぐさめてみまふ。北史「降レ資ー一、徵爲二侍中一」‖慰問。
【勞來】ラウライ　來らしねぎらふ。孟、滕文公「放勳曰、勞レ之來レ之」‖勞徠。
【勞徠】ラウライ　前條に同じ。漢書、游俠傳「往至二喪家一、爲棺斂、ー一畢歸」
【勞勞】ラウラウ　ほねをりの甚だしき貌。陳陶詩「登涉漫ー一」
【勞力】ラウリク　力をつかふ、ほねをり。勞心を見よ。

十一畫　【勤】キン　ゴン　支

○つとむ、つとめ。○はたらく、心を盡し力を盡して怠らず。○ねんごろ、厚意にて人を待つ「殷ー一」‖懃。○いたはる、たすける。左、僖三「齊方ー一我」○くるしみ、くるしむ（苦）うれふ（憂）呂覽、不廣「ー一天子之難」

同訓異義　勤・勉・懋・力・努・孜・勵・務○勤は骨折り、精出す義。勤勞・勤學などと用ふ。○勉はしひてつとむるなり。勉强・勉勵と用ふ。○懋は勉に同じ。書經「懋昭二大德一」○力は勤に近し、力を入れて精出す義。○力學・力行・力田と用ふ。○努は一いきに、力を入れて勵む義。古詩「少壯不二努力一、老大徒悲傷」○孜はやめずにはげむ義。孜孜と連用す。○勵は勉に近し、二字共に人をすすめはげます意あり。自勉・自勵といふときも、自ら怠情の心を除ち、己の志氣を勵ますことなり。○務は專ら力也と註す、精力を一途に、其の事に用ふる義にて、日夜朝暮のわざとするなり、故に轉用して、つとめと訓むときは、家務・政務の如く、事の字の意に代へ、不斷の仕事の義となる。

【勤行】ゴンギヤウ　○つとめておこなふ。老子「上士聞レ道、勤而行レ之」‖力行。○國ほとけに事ふるつとめ。
【勤格】キンカク　つとめつつしむ。晉書、任愷傳「素有二識鑒一、加以二在レ公ー一」‖恪勤。
【勤學】キンガク　せいだしてまなぶ。魏志「長大而能ー一者」‖勉學。
【勤儉和緩】キンケンクワンクワン　官吏の四字の訓誡。晁氏客語「李若谷數二初官一云、——、其人日、勤儉和已閑」命奏、緩之一字未レ喩、李云、甚事不二因レ忙錯了一、甚事はなにごとかと訓む。
【勤苦】キンク　ほねをりくるしむ。國、學記「時過然後學、則ー一而難レ成」‖勤勞。
【勤倹】キンケン　つとむると、つづまやかなると、倹は儉約。詩、魏風、汾沮洳、疏「之子能ー一如レ是」
【勤懇】キンコン　ねんごろ、至誠の心をつくす。漢書「勤勤懇懇、實在二于此一」
【勤仕】キンシ　つとめつかへる、官職をつとめる。‖仕宦。
【勤惰】キンダ　つとめととのへる。晉書、殷羨「陶侃勤而整、自强不レ息」
【勤續】キンゾク　國ひきつづきてつとめる、繼續して奉職する。
【勤惰】キンダ　つとむると、おこたると。宋史「察二官吏ー一以聞」‖勤怠。
【勤怠】キンタイ　前條に同じ。
【勤番】キンバン　○國順番に更代するつとめ、かはりばんのつとめ。○德川時代江戸づめの大小名の屬吏に單身にて奉公せし小役人。
【勤無償役】キンムシヤウエキ　勤勉は無上の價ある實なり。明心寶鑑「ー一、佩是護身符」
【勤勉】キンベン　つとめはげむ。國語「ー一以動レ之」‖强勉。
【勤務】キンム　つとめる、役をつとめる「ー一時間」
【勤勞】キンラウ　つとめくるしむ。實、金融「昔公ー一王家」
【勤王】キンワウ　王事に力をつくす、皇室に力を盡す。左、僖、二五「求二諸侯一莫レ如ニー一」

【勤】 ㊀サウ 看 ㊁サウ 效 ㊂セウ 藥

㊀とる、他人の物を襲ひ取りて己の有とす。＝譲。○つかる(勞)孟子題辭「心ー形察」つからす。○すばやし(輕捷)㊁かすめとる(抄取)㊂たつ(截・絕)つくす、ほろぼす。書、甘誓「天用ー絕其命」【勤誅】サウ次條に同じ。【勤說】サウ他人の說をぬすみとりて己の說とす。曲禮「毋ニー一、毋三雷同一」【勤絕】ゼツ たつ、たやす。字解を見よ。【勤滅】メツ たちほろぼす。魏書「擢二性剛直一、ー二一長姦一」＝勦絕。【勤計】ケイ うちつくす。【勤殄】テン 敵をほろぼしつくす。柳宗元、沛國漢原廟銘「ー二一鷲楚一」＝珍滅。【勤滅】メツ のこらずほろぼす。

【勢】 セイ 圭 古、埶に作る

○いきほひ、ちから(力)物の活動する力、人を制する威力、又權力。○しほ、をり(機會)孟、公孫丑「雖有二智慧一不如乘ー」○ありさま「形ー」自然のなりゆき「趨ー」○へのこ、外腎。宮刑は男子のーを割く刑。○せい、ぜい、人數、又軍隊の義。【勢樂】セイ 外より來るいきほひと、さかえと。荀子「辭列簿、貢祿厚、形勢勝、是榮從レ外至者也、夫是之謂二ー一」【勢要】セイ 權勢ありて要路に居る者。北齊書「ー一之徒」【勢援】エン しりぞし、ちからぞへ。【勢家】カ 權勢ある家。漢書、張禹傳「何爲レ家不レ治二垣屋一、目、後世賢、師二吾儉一、不賢毋レ爲二ー一所一寒」＝權門。【勢交】カウ 勢利之交に同じ(廣絕交論)【勢權】ケン いきほひ。晉槓文「潛二處蓬室一、不レ干二ー一」＝權勢。【勢望】バウ いきほひと人望と。權勢威望。恩思道文「恩寵ー一、煙二灼朝野一」【勢至菩薩】シサツ 圖大勢至力ありて智慧の光を以て一切の事物を照すといふ。【勢族】ゾク いきほひのある家。＝勢家。門閥家。【勢門】モン 勢家に同じ。寒門の對。舊唐書「貢舉猥濫、ー一子弟、交相酬酢」【勢利】リ 權勢と利益と。【勢利場】ジヤウ 權勢利益のある所。劉克莊詩「事ノ世爭馳ー一」【勢利之交】リノマジハリ 權勢利益の爲めの交際。漢書、張耳・陳餘傳「ー一古人羞レ之」【勢力】リキ いきほひ。權勢威力。【勢力範圍】ハンヰ 圖政府の權力の行はるる區域内。又何事にても自己の權力の及ぶ區域内。【勢不レ可二兩立一】リツスベカラズ 對立すべからざる勢。史、孟嘗君傳「此雄雌之國也、勢不二兩立一」

【勣】 セキ 錫 績に通ず

○いさを(功)○わざ、事業。

【募】 ボ 遇

○つのる。○まねく(招)招き集める。後漢書、光武紀「招ー一猛士一」○よぶ(召)よびよせる。○廣く求める、賞を懸けて求める。○つかふ(使)○圖つのる、甚だしくなる、增長する「病がーる」【募役法】エキホフ 民家より人夫を徵發する代りに金を徵取し、其の金にて他人をつのりて使役する法律。宋の王安石の定めし新法の一。【募緣疏】エンソ 社寺橋梁などの寄附金をつのる文、人に向ひて慕化し善緣を結ばしむる文。文體明辯「ー一者、廣求二衆力一之詞也」【募債】サイ 公債又、社債などを廣くつのる。【募集】シフ つのりあつむ。＝徵募。【募選】センス 金を出して人をつのりえらぶ。荀、議兵「招延ー一」【募兵】ヘイ 給料を與へて兵士をつのる。徵兵とは別。唐書「建中四年、下レ詔ー一」

【勦】 リク 屋 戮に通ず

あはす。力を一にする。【勦力】リキ力をあはす。玉篇「書曰、庶尹允諧、孔安國曰、衆ー一同レ心也」＝戮力。

十二畫

【勧】 ィ 眞

○くるしみ、くるしむ(苦)詩、小雅「莫知我ー一」○つかれ、つかる(勞)

十三畫

【勲】 ケフ 葉

○やはらぐ(和)思の和合する發。○人名、劉ー一は南朝の梁の人、文心雕龍五十篇を著す。

【勦】 バイ 封 邁 マイ

つとむ、はげむ(勉力)邁に通ず。【勦相】バイ はげましたすく。書、立政

「其惟吉士、用ニ―ニ我國家ニ」

十四畫

【勳】クン　㊇　勛は古字

いさを、いさをし（功績）皇室又は國家に盡したるてがら。說文「能成王功ニ也」

【勳位】クンキ　皇室又は國家に功ありし者に授けられるくらゐ。「大ー―」＝勳級。

【勳閥】クンバツ　子弟が父兄の功業によりて官爵を得るをいふ。齊書「ー―人才」

【勳記】クンキ　勳等に敍せらるる證として、勳章と共に賜はるかきつけ。

【勳貴】クンキ　てがらある貴族。宋史「出ニ於ー―」文辭清麗」

【勳舊】クンキウ　國家に勳功ある故舊の臣。晉書、陳寔傳「帝以ニ其ー―耆老ニ禮レ之甚重」

【勳勤】クンキン　いさを。＝勳勞。

【勳業】クンゲフ　てがらをたてたる事業。＝勳績。

【勳功】クンコウ　いさを、てがら。＝功績。

【勳臣】クンシン　てがらあるけらい。宋書、臧質傳「質國成ー―、忠誠篤亮」

【勳狀】クンジヤウ　いさをを賞めて大將などより賜る感狀。

【勳章】クンシヤウ　てがらをあらはす爲めに胸にはるしるし、勳功を表する徽章。

【勳績】クンセキ　いさを。＝勳業・勳績。

【勳迹】クンセキ　いさをのあと。晉書「家君ー―如レ此」

【勳績】クンセキ　いさを。晉書「刻レ石爲ニ三碑ニ紀ニ其ー―ニ」＝勳業・功績・功勳。

【勳等】クントウ　てがらいさをしの大小の等級「勳二等」

【勳望】クンバウ　いさをと、ほまれと。北史、賀蘭傳「前朝舊臣、ー―兼著」

【勳閥】クンバツ　いさをあるいへがら。宋史、吳挺傳「擢少起ニ―ー、弗レ居ニ其貴ニ」＝勳伐。

【勳勞】クンラウ　王那又は國家に盡したるてがら、ほねをり。禮記「成王以ニ周公ニ爲レ有ニ―ー於天下ニ」＝功勞。

【勳烈】クンレツ　大いなるいさを。後漢書「歷ニ事二主ニ―ー獨昭」

十五畫

【勵】レイ　㊇　通じて厲に作る

○はげむ、つとむ（勉）「勤ー」○はげます（勸勉）「奬ー」○すすむ（勸）

【勵行】レイカウ　はげみおこなふ。又、おこなひをはげます。南史「修レ身ー―レ非レ礙不レ動」

【勵志】レイシ　こころざしをはげます。晉の張華、ー―詩九篇を作る。文選に載す。＝厲志。

【勵精】レイセイ　心をはげます。＝精勵・厲精。

十七畫

【勸】ケン　クワン　㊇

○すすむ（奬）つとめ行はしむ。漢書、賈誼傳「慶賞以ー―善、刑罰以懲ニ惡」○つとむ（勉）力行する。○たすく（助）○悅び從ふ。論、爲政「擧ニ善敎ニ不能則ー―」○おしへみちびく（敎導）誘掖する。書、大禹謨「ー―之以ニ九歌ニ」○はげます。

同訓異字　勸・遉・晉・前・薦・奬・奬の別は遉（定部八畫）の條を見よ。

【勸誘】クワンイウ　すすめいざなふ。說きさとして從はしむ。

【勸誘員】クワンイウイン　保險會社等にて保險に加入せんことを說きすすめる運動員。

【勸戒】クワンカイ　善をすすめ惡をいましむ。左傳、序「其敎之所レ存、文之所レ害、則刊正レ之、以示ニ―ー一ニ」＝勸誡。

【勸誡】クワンカイ　前條に同じ。

【勸解】クワンカイ　兩者の爭を說きさとして和解せしむる。輿地錄「某甲與ニ某乙ニ鬪競、某甲之母ー―」

【勸學】クワンガク　學問をすすめはげます。左傳「敎ー―レ、授レ方任レ能」

【勸學院】クワンガクヰン　國弘仁十二年、藤原冬嗣の創建せし藤原氏の學校。

【勸學田】クワンガクデン　國古、學問奬勵の目的にて大學寮・典藥寮・勸學院の生徒の食費に充つる爲めに、朝廷より附與せられたる租稅免除の田。

【勸學文】クワンガクモン　學問を勸むる爲めに、作れる有韻の文。古文眞寶前集に、宋の眞宗皇帝・仁宗皇帝・柳屯田（永）王荊公（安石）白樂天（居易）朱文公（熹）の――、及司馬溫公（光）の勸學歌を載す。

【勸課】クワンクワ　人民にわりあてて仕事をすすめ行はしむる。

【勸誨】クワンクワイ　すすめをしふ。宋史「總ニ學館ー―」

【勸化】クワンクワ　國信者の喜捨をつのる。「ー―帳」釋氏要覽「ー―得レ財、擬レ造ニ佛像ニ」

【勸業】クワンゲフ　なりはひをすすめはげます。殖産興業を奬勵する。史、貨殖傳「各勸ニ其業ニ樂ニ其事ニ」

【勸業銀行】クワンゲフギンカウ　國農工業の改良發達のため、其の資本を貸附するを以て目的とする株式組織の銀行。又、其の銀行が發行する債券を勸業債券といふ。

【勸工】クワンコウ　工業をすすめはげます。中庸「勸ニ百工ニ」

【勸告】クワンコク　官ひきかせてすすむる。忠告する。「辭職ー―」

【勸酬】クワンシウ　酒をすすめむくゆ。宋史、進學傳「張載爲ニ雲巖令ニ、每月首具ニ酒食ニ召ニ鄉人高年ー會ニ縣庭ニ親

爲ニ—一、使三人知二養レ老事一長之義一」

【勸導】クワンダウ　○すすめのぼす。六代論「—ニ—賢能一」○圖寺院建立などに寄附金をすすめる「—ニ—帳」‖喜捨・勸化。○圖或資金を得る爲めに興行物を催し、觀覽料の收入を以て之に充てる法「—ニ—相撲」「—ニ—元」

【勸進帳】クワンジンチヤウ　寺院建立などの寄附金を募る帳面。‖勸化帳。

【勸進表】クワンジンヘウ　帝位に即くことを勸める上表。魏晉六朝、凡そ位を簒ふ者、皆禪讓に託す、讓國の詔既に下るも、猶遜讓して受けず、朝臣乃ち——を奉る、大抵功德を頌美して、之を天命に歸す、典雅滿紙、文品の最下なるもの。

【勸相】クワンサウ　すすめ助ける。易經「君子以勞レ民—レ」

【勸奬】クワンシヤウ　はげましすすむ。唐書「幕二衙師備一發揚—一」‖奬勵。

【勸賞】クワンシヤウ　人に善行を勸むる爲め賞與する。宋史、良吏傳「以充ニ—一」

【勸請】クワンジヤウ　圖神佛の靈魂のうつしを他の所に請ひ、迎へて、永く其の所にまつる。大乘法數「度心—一、以遠二離敬之識一」

【勸善懲惡】クワンゼンチヨウアク　よきことをすすめ惡しきことをこらす。左、成、十四「懲レ惡而勸レ善、非二聖人一誰能修レ之」‖勸懲。

【勸導】クワンダウ　すすめひきゐる。晉書「—ニ—有功、深加二奬勵一」

【勸懲】クワンチヨウ　善をすすめ惡をこらす。宋史、禮志「是非較然、用爲ニ—一」

【勸農】クワンノウ　農業をすすめはげます。事物紀原「漢承レ秦、置二太農丞十三人一、入部二州一以—ニ—桑力田一者、此—官之始也」

【勸勉】クワンベン　すすめはげます。‖奬勵

勹部

【勹】ハウ　看

つつむ(包・裏)

【勻】イン　眞　キン　眞

○ととのふ(齊均)杜甫、麗人行「肌理細膩骨肉—」○すくなし(少)○あまねし(徧)㊁ひとし。‖均。○圖にほふ。又、句に作る。

【勻少】　少なり、勹に從ひ二に從ふ。

【勾】コウ　尤

○まがる(曲)くぎり、又、くぎりをつける。‖句(口部二畫)○圖—を漢音コウに讀みて動詞として用ひ、句を呉音クに讀みて名詞として用ふ。

【勾檢】コウケン　一一とりしらべる。白居易詩「—ニ—簿書一多二園葵一」‖案驗。

【勾當】コウタウ　○任務を擔當する。歸田錄「—ニ—公事一回」‖句當。○圖官名、掌侍の首位にある—ニ—內侍の略。禁家にて勤定方、即ち會計吏。眞言宗にて寺務を執る役僧。又、百人の官名、檢校の下、座頭の上に在り。

【勾攝】コウセフ　てすり。通雅「吐谷渾子二何上作レ稱、長一百五十步、—ニ—甚嚴飾、—ニ—之名、始見レ此」‖鉤欄・勾闌。

【勿】㊀ブツ・モチ　㊁ボツ・モチ　月　物

㊀なかれ、禁止の辭(毋莫)論、學而「過則—レ憚レ改」なし(無)あらず(非)否定の辭。○いつくしむ(愛)○つとむ(勉)○にはか(猝)㊁はらふ(拂)塵を去る。

【勿勿】ブツブツ　○にはか、急遽なる貌。論衡文「—ニ—少レ暇」○つとめてやまざる貌。‖勉勉。

【勿論】モチロン　圖論ずるまでもなし、いふまでもなし、もとより、無論。

【勿怪】モツクワイ　圖思ひがけなし、思ひ設けぬ「—ニ—の幸」

【勿體】モツタイ　圖ものものしきやうす、尊嚴「—ニ—ぶる」

【匆】【國字】

○にほふ、かをる、香氣を發する。○うるはしく映ずる「朝日に—ふ」○にほひ、香氣、芳香。

【匁】【國字】

もんめ(文目)重量の稱、一貫の千分の一。

三畫

【匈】 キョウ　カツ・カチ　局　拳

一に、丐又匈に作る

○こふ（乞）○もとむ（求）漢書、西域傳「乞ー無所得」○あたふ（與）後漢書、賈武傳「ー施貧民」

【匃】 カイ　匄（前條）に同じ。

【匆】 俗に怱と同じく用ひ、ーー一と連用して急遽の義とす。一說、匆匆を誤用せしならんと。

【包】 ハウ　ヘウ　肴

○つつむ。禮、樂記「倒載干戈、ー之以ニ虎皮一」つつみ（裹）つつみしもの、つと（苞）○いる（容）○とる（取）○かぬ（兼）すべる（總）○ふくむ（含）○をさむ（藏）かくす（隱）李翺、幽懷賦「ー深懷而告誰」○おひしける（叢生）書、禹貢「草木漸ー」苞に通ず。○はらごもり、はらごもる（孕）○くりや。易、姤卦「ー有魚」＝庖。○ひさご。＝匏。

【包含】ハウガン つつみふくむ。後漢書、ーニ山澤一、遊帶ニ丘荒一」＝包容。

【包犧】ハウギ 伏義に同じ（易、繫辭）＝庖犧。

【包裹】ハウクワ 裹にて物をつつむ如く、悉く取る。漢書、賈誼傳「席二卷天下一、ーニ宇內一」

【包羞】ハウシウ つつむ。范成大詩「葉貴誼飢危欲レ死、尙能ーー一絲窠」絲窠はまゆ。

【包攬】ハウラン つつみいだく。すべて所有する。晉書、武帝紀「罷ニ清潔幔一、ニニ揭起一」

【包荒】ハウクワウ 荒穢をつつみ容れる。宰相が人の言を聽きいれる器量ある譬。易、泰卦「ーレ用ニ馮河一」

【包括】ハウクワツ まとめてひとくくりにす。西京雜記「賦家之心、ーニ宇宙一」＝總括。

【包莖】ハウケイ かはかぶり、皮が龜頭につきて離れざる男根。

【包袱】ハウフク にごしらへ、つつみよそほふ。

【包藏】ハウザウ 心につつみかくす。左、昭元「ーニ禍心一」

【包子】ハウツ ○銀錢を包みて封じたるもの。宋武林舊事「大內賜ニーー一」○餡の餡ツのあるもの「雞林玉露」

【包絡】ハウラク つつみまとふ。づかねくる。韓愈詩「古道自愚癡、古百自ーー」

【包茅】ハウバウ つかれたるちがや、祭に酒をそそぎて供へるもの。左、僖、四「爾貢ーー不レ入、王祭不レ共」

【包容】ハウヨウ つつみいれること。人の訛などを容れる廣き度量。

【包羅】ハウラ ひきくるめる。孟子題辭「ーニ天地一」＝網羅。

四畫

【匈】 キョウ　多

○むね。＝胸。○みだる（擾）さわぐ（騷）亂れ騷ぐ。○ーーはかまびすしき聲、又、亂れさわぐ貌。

【匈匈】キョウキョウ ○さわぎてみだるる貌。漢書、高帝紀「天下ーー」○かまびすしく議論する聲。荀、天論「君子不レ爲ニ小人之ーー一也而綏中其行一」

【匈中】キョウチウ むねのうち。漢書、司馬相如傳「其於ニーー一曾不ニ蘄芥一」＝胸中。

【匈奴】キョウド 支那の北方にて威をふるひしあびす。土耳其コルク種族に屬す。＝山戎、獫狁、葷粥、玁狁、獯鬻。

六畫

【匐】 カフ　合

○めぐる（周）○ふさぐ、氣がふさがる（鬱）○匍ーは石など

【匐】 ○はらばふ。○ふす（伏）前に伏す。○つまづく（顚蹶）

【匍匐】ホフク ○はらばふ。小兒が手を地につけて行く。孟、滕文公「赤子ーー將レ入レ井」○はしりつまづきて急ぐ。詩、邶風「凡民有レ喪、ーー救レ之」

【匍匐莖】ホフクケイ 地にはひつつ節處に根を生じてのびるくき。甘藷ヤウの類。＝匐枝。

九畫

【匏】 ハウ　肴

の重疊ガせる貌。

【匊】 キク　圖　或は掬に作る

○にぎる（握）物の手に在るなり。○むすぶ。○雨の手、又、一手、たなごころ（掌）詩、小雅「終朝采ニ綠、不レ盈ーー一」

【匍】 ㊀ タウ　㊁ ユウ　蕭　尤

㊀するもの（陶器）今は陶に作る。○陶器を作る。㊁かはらがま。＝窯。

七畫

【匍】 ホ　フ　虞　遇

○はらばふ。○ふす（伏）前に伏す。○つまづく（顚蹶）

【匍匐】ホフク ○はらばふ。小兒が手を地につけて行く。孟、滕文公「赤子ーー將レ入レ井」○はしりつまづきて急ぐ。詩、邶風「凡民有レ喪、ーー救レ之」

【匍匐莖】ホフクケイ 地にはひつつ節處に根を生じてのびるくき。甘藷ヤウの類。＝匐枝。

○ひさご、ふくべ、瓜の一種、外皮を乾して水漿を容れる器とし、又水を泳ぐに腰に著けてうきぶくろに代ふ。詩、邶風「一有苦葉」○しゃうのふえ、笙竽の屬、八音の一。

【瓠瓜】クワ　○ひさご。論、陽貨「吾豈―也哉、焉能繫而不レ食」＝匏。○星の名。宋史、天文志「―五星在二離珠北一」

【瓢】

ホク　國　屋　通音フク

はらばふ、ふす（伏）「匍―」

十畫

【瓤】

アフ　合

婦人のかみかざり、髻飾。杜甫、贈人行「頭上何所有、翠爲二―葉一垂鬢脣一」

【瓶】

キュウ　東

かがむ。―は謹み敬ふ貌。

【瓷】

トフ　合

かさなる（重疊）

【瓷甸】タフ　石などのかさなる貌。木華、海賦「磊―而相屬」

十四畫

【甕】

キュウ　東　翁に同じ

―は謹みうやまふ貌。史、魯世家「―如畏然」

匕部

【匕】

ヒ　紙

○さじ（匙）○やじり（矢鏃）左、昭二六「一人者三寸」

【匕首】ヒシュ　あひくち、其の首、匕に似たるが故。長き一尺八寸の短劍。史、荊軻傳「荊軻至」秦、獻二燕督亢地圖一、圖窮而―見」

【匕鬯】ヒチャウ　匕は匙、鬯は鬱金香を釀せる酒。皆宗廟の祭祀に用ふる器。易、震卦「不レ喪二―一」

【匕箸】ヒチョ　さじ、はし。食を口に運ぶ器。蜀志、劉先主傳「先主方レ食、失二―一」

【匙】

化（次條）の古字。

二畫

【化】

クワ　禡

○かはる（變）天地自然の變易。○天地の萬物を生成するをいふ「造―」「一工」論、子罕、集注「天地之―往者過、來者續」○聖人の民族を善き方に移し易ふるをいふ「敎―」「德―」○習慣・風俗・德敎・敎育。○かはらしむ。○ばける、形を變ずる、異物となる。周禮、大宗伯、疏「鳩―爲鷹」ばかす。○とりかへる、貿易する。書、益稷「―居」居は蓄積する。○あらたまる（改）○うつる（移）うつす。○死滅・消盡。○てづま（幻術）○なまり、あやまり。＝說。○異れる物質が相合して新らしき物質となる。

同部異字　化・魁・易・琴・代・更・換等の別は魁（鬼部十六畫）の條を見よ。

【化育】クワイク　天地自然が萬物をつくりそだてる。中庸「能盡二物之性一、則可三以贊二天地之―一」

【化學】クワガク　物質の化合及分解の法則現象等を研究する科學。

【化雖】クワスイ　つるにばける。搜神後記「丁令威本遼東人、學二道于靈虛山一、後―ノ歸遼、集二城門華表柱一、時有二少年一、擧レ弓欲レ射レ之、鵭乃飛、徘二徊空中一而言曰、有レ鳥有レ鳥丁令威、去レ家千年今始還、城郭如レ故人民非、何不レ學二仙冢纍纍一、遂高上沖レ天」

【化合】クワガフ　異なれる元素が二種以上相結合して、新らしき物質を生ずる、又其の現象。

【化治】クワヂ　めぐみおほうるほふ。魏志、蘇則傳「陛下―二中國一、德流二沙漠一」

【化感】クワカン　政敎によりて人心を動かして善に遷らしむ。傳休奕詩「―二一海外一、海外來賓」＝感化。

【化居】クワキョ　居は蓄積。其の居積する所の貨物を交易變化する、今の交易互市。書、益稷「暨二益奏一庶有無―一」一說、品物を貿易すると、たくはへ置くと。

【化外】クワイ　王化のおよばざる遠き外國。宋史、太祖紀「棄二銅錢一無レ出二―一」

【化工】クワコウ　造化のたくみ。賈誼賦「且夫天地、爲レ爐兮、造化爲レ工」李商隱詩「徒勞恨二―一」＝天工。

【化人】クワジン　魔法つかひ、幻術師。列、周穆王「西極之國、有二―一來」＝幻人。

【化者】クワシャ　死にたるひと。孟、公孫丑「且比二―一無レ使二土親一膚＝死者。

【化醇】クワジュン　厚く凝成する、無化する時、醇は濃厚。易、繫辭「天地絪縕、萬物―一」

【化生】クワセイ　○新らしく形をかへてうまる。易、繫辭「男女構レ精、萬物―一」＝形化。○四域の風俗、七夕の日、人形を水に浮べて弄ぶ、婦女の戲、兒を得るまじなひとす。薛綜、

吳維岳「芙蓉殿上中元日、水拍二銀盤一浄二一一」〇ケシャウ 圖四生の一、所託なくして自然に生ずる、出現。法華經「一切衆生皆以爲二一一一」〇ばけもの（妖怪）

【化成】クワセイ 〇そだてて其の生をとげしむ。易、下象傳「聖人久二于其道一、而天下一一」〇化學にて異なれる物質又元素が、結合して新らしき物體を形づくる。

【化石】クワセキ 枯死せし動植物が或作用によりて、石に化せしもの。

【化導】クワダウ 徳を以て人を善にみちびく。後漢書「隨レ俗一一、各得二治宜一」‖德化。

【化膿】クワノウ うみ。疵、腫物などの癒え始むるとき、分泌する液汁。

【化被二萬方一】クワヒバンパウ 教化が遠く八方に廣がり及ぶ。柳宗元、賀レ赦表「恩覃二九有一、――」

【化理】クワリ 德化と治績と、善き教化を布きて天下を太平に治める、現は治。柳宗元銘「有二其文武一弘二吾一一」‖化治。

【化力】クワリキ 造化のちから。揮塵後錄「天造地設、神謀一一、非二人所一能爲一」

【化身】クワシン 佛菩薩が形をかへて現はれる。‖權化ゴンゲ

【化粧】クワシャウ 圖べにおしろいをつけて顔かたちをよそほふ、おつくりする。假粧の訛。

【化粧品】クワシャウヒン 圖べにおしろい、香水の類。

【化度寺碑】クワドジヒ 卽ち化度寺の故僧邕禪師舍利塔の銘、唐李百藥の文、歐陽詢の書、率更得意の筆、所謂直木曲鐵法なり、其の石、宋時已に亡す、今傳ふる所摸本翻刻の者多しとす。

【北】

㊀ホク 職 ㊁ハイ 隊

㊀きた。南の反對。子の方。〇きたす、北方へ行く。呂覽、孟春「候雁一」〇そむく（背）たがふ（違）史、魯仲連傳「士無二反一之心」〇にぐ（奔）逃亡する。史、晉仲傳「三戰三一」〇やぶる、まける（敗）〇ふす（伏）〇妻の異稱。李商隱文「夜雨寄」レ北」㊁そむく（背）わかつ（分異）分離する。書、舜典「分一三苗」

【北緯】ホクヰ 地球の赤道以北の緯度。

【北陸】ホクリク 北のまど。禮記「薄レ一一、使二陰明一也」王粲、涼風至賦「一一閉レ戸、四園夜宴」

【北越】ホクエツ 〇越の北方の地の稱。呂巖詩「朝遊二一一一暮蒼梧」〇圖北國の越後の稱。

【北燕】ホクエン 五胡十六國の一、漢人種。馮跋を祖とす、二世、二十八年にして後魏の爲めに滅ぼさる。

【北轅適楚】ホクエンテキソ 轅（車部十畫）の條下を見よ。

【北海樽】ホクカイソン 孔融の故事、孔融北海の相たりしが故。後漢書、孔融傳「孔融性寬容少レ忌、好レ士、喜誘二益後進一、及レ退閑職、賓客日盈レ門、常歎曰、坐上客恆滿、樽中酒不レ空、吾無レ憂矣」

【北岳】ホクガク 恆山の別稱、五岳中にて北方に在るが故。書、舜典「巡守至二于一一」

【北郭】ホククワク 圖江戸吉原遊郭の異稱。‖北里。卑は俗用。

【北嚮】ホクキャウ 北の方に向ふ、嚮は向。史、項羽紀「亞父南嚮坐、亞父者范增也、沛公一一坐」‖北鄉。

【北極】ホクキョク 〇地球の北のはて。〇北辰星。爾雅「一一謂二北辰一」

【北闕】ホクケツ 宮城の北門、上奏謁見等には此門より出入す、闕は宮門なり。漢書、高帝紀「立二東闕一一、前殿一」聽レ事宮中、內裏の稱とす。

【北國】ホクコク 北方の國。北魏書、崔浩傳「一一兵動」

【北鄙】ホクヒ 北方のえびすの地。朔も亦北なり。‖朔北。

【北山移文】ホクザンイブン 南北朝の時、齊の周顒、鍾山卽ち北山に隱れ、後、郡に應じ海鹽縣の令と爲り、御ってこの山を過ぎんとせし時、會稽の孔稚珪（字は德璋）これを諷みて――を作り、山靈の威を假り、顒をして再び至ることを得ざらしむ、移文は後の移檄に同じ。文は古文眞寶、續文章軌範等に出づ。

【北山之嗟】ホクザンノナゲキ 王事に勞して兩親を養ふを得ざるなげき。詩、小雅、北山篇の詩の意より轉成せし語。曾參、謂州上二執政一曰「參竊於政役、而不レ得レ養二父母一、則有二――、謁羽之嗟一」

【北史】ホクシ 一百卷、二十四史の一、唐の李延壽撰す、北朝の魏、北齊、周、隋四世二百四十二年間の事を紀す、分ちて十二本紀、八十八列傳とす。

【北司】ホクシ 宦官をいふ。唐の內侍省は大內の北に在るが故。唐書、劉貴傳「宦人握レ兵、橫二制海內一、號曰二一一一‖北寺。

【北寺】ホクジ 〇宦官卽ち宮刑を受けて內廷に奉侍する者の役所。劉禹錫詩「步出二一一門一、遙望二四英園一」〇轉じて宦官の別稱。‖奄人、宦者。

【北至】ホクシ 夏至の別名。太陽が赤道を超え、北行して最も近く來る義。南至（冬至）の對。

【北枝】ホクシ 北の方に出たる枝、多く梅花に用ふ。賈休、閑居詩「南枝復一一、玉蕊結二毛衣一」

【北周】ホクシウ 國名、後周ともいふ、北朝の一、鮮卑の宇文部の裔、始祖は宇

文祭、長安に都す、五世、二十五年にして滅ぶ。

【北辰】ホクシン　北極星をいふ。論、爲政「譬如ー一居二其所一而衆星共レ之」共は向ふ。

【北宗】ホクシュウ　〇禪宗にて唐の神秀を祖とせる宗派「傳統錄」〇唐の李思訓を宗とせる畫家の一派「畫家集」

【北垂】ホクスイ　きたのはてに在るへんびの地、垂は陲に同じ。後漢書、費禹傳「安定ー一定二萬世之計一」＝北奇・北邊。

【北齊】ホクセイ　國名、北朝の一、高洋を祖とす、鄴に都す、五世、二十九年にして滅ぶ。

【北齊書】ホクセイショ　五十卷、唐の李百藥撰す、本紀八卷、列傳四十二卷に分つ、志表なし、志は隋書に具す。

【北宋】ホクソウ　宋の別稱。南宋の對。太宗より欽宗に至るまで皆汴に都し、北方に在りしが故。

【北窗】ホクソウ　北のまど、窓は俗字。朱熹、四時讀書樂詩「ー一高臥羲皇侶」次條に同じ。

【北牖】ホクユウ　北のまど。晉書、陶潛傳「晉宋夏月虛閑高臥ー一之下、清風颯至、自謂二羲皇上人一」

【北堂】ホクドウ　〇主婦の居所、よりて其の異稱とす。儀禮、士昏禮「婦洗在二ー一」鄭玄、示レ兒詩「主婦治二ー一、膳服適二親疎一」〇主婦は一家の主母、轉じて母の稱。＝萱室

【北道主】ホクドウシュ　主人となりて來客の世話する、轉じて道案内の義に用ふる。左、僖三十の「東道主」より轉成せし語。野客叢書「後漢光武謂二耿弇・郭農等一曰ー一人一」

【北朝】ホクチョウ　〇南北朝時代の魏・北齊・北周等の國の稱。東晉・宋・齊・梁・陳を南朝といふの對。〇開延元元年より元中九年に至る四十七年間、吉野の後醍醐帝系と、京都の光明帝系と兩統竝立せし時の京都方の稱。吉野方を南朝といふの對。

【北狄】ホクテキ　北方のえびす、匈奴をいふ。南蠻の對。＝犬戎・玁狁。

【北斗】ホクト　天の北極にある星宿の名。七星、斗ノ形に列り、其の柄、一晝夜に十二方を指す。唐書、韓愈傳贊「學者仰レ之如二泰山ー一」＝大熊星。紺珠「ー一七星、天樞・璇・璣・權・玉衡・開陽・搖光」

【北斗以南一人而已】ホクトイナンイチニンノミ　北斗星の在る所より南方に唯一人のすぐれたる賢人の意。唐書、狄仁傑傳「授二并州法曹參軍一、同府參軍鄭崇質、母老且疾、當レ使二絶域一、仁傑謂二長史裴行儉一曰、仁基・綝三代行、仁基曰、狄公之賢、萬古ー一塵」轉じて廣く墓地の義に用ふ。

【北芒】ホクボウ　前條に同じ。梁溝、五噫歌「陟二彼ー一兮噫」

【北方之強】ホクホウノキョウ　義の如何に關せずして、强勇なる者をいふ。中庸「南方之强與、ー一與」

【北伐】ホクバツ　北方の國をうつ。史、封禪書「寡人ー一山戎一」

【北半球】ホクハンキュウ　地球を赤道にて南北に兩斷せし北の半分。

【北部】ホクブ　北のはてのあなか、北方の邊鄙の地。說苑「紂爲二ー一之歸一、其亡忽焉」北は殺伐の域なるが故。

【北冰洋】ホクヒョウヨウ　北極の周圍に在りて冰に鎖されたる海。

【北風】ホクフウ　〇寒き風。爾雅「ー一謂二之涼風一」〇さむかぜ。洛陽伽藍記「北風飄レ塵、飛雪千里」＝朔風。

【北平】ホクヘイ　北京の異稱、明史に永樂元年二月ー一を改めて順天府と爲し北京を置くとあり。

【北邊】ホクヘン　きたのはて、北方の邊土。漢書、食貨志「匈奴絕二和親一、侵二擾ー一ー一」

【北冥】ホクメイ　次條に同じ。

【北溟】ホクメイ　北方の大海。莊、逍遙遊「ー一有レ魚、其名爲レ鯤、鯤之大、不レ知二其幾千里一也」一本北冥に作る、通ず、冥とは冥冥として遥なきに取る。

【北面】ホクメン　〇臣の席位、故に臣として事ふる義とす。南面（君の座位）の對。史、田單傳「王蠋布衣也、義不レ ー一於燕」〇轉じて弟子となりて師事する義とす。漢舊、于定國傳「自執レ經ー一、備二弟子禮一」〇闕古、院の御所を守護せし武士。

【北門鎖鑰】ホクモンサヤク　北門のかぎ、北方の守禦の義とす。宋史、寇準傳「寇萊公鎭二大名一、北使至、語レ寇曰、相公望重、何故不レ在二中書一、寇曰、主上以二朝廷無事ー一非レ準不可一、準は萊公の名。左、僖三十二「杞子自レ鄙使告二于秦一曰、鄙人使二我掌一其北門之管一」注「管、鑰也」に本づく。

【北洋】ホクヨウ　直隸・奉天・山東の各省外交の事務あるの地を指していふ。「ー一大臣」其の以南の沿海、又沿江の各省を南洋といふの對。

【北里】ホクリ　〇いろざと、花柳の巷、妓院の所在地。史、殷本紀「使二師涓作二新淫聲ー一之舞、靡靡之樂一」〇國江戸吉原遊郭の異稱。＝北郭。

【北涼】ホクリョウ　五胡十六國の一、匈奴種、三世、四十三年にして後魏の爲めに滅ぼさる。

【北京】ペキン　〇今の支那の首府、明の成祖、遷天より都を北平に遷す、應天を南京と稱し、北平を北京と稱す。〇ホクケイ　宋は大名を、金は大定を以てー一と爲す。

九畫

【匙】シ　支
○さじ「茶ー」「飯ー」＝匕。○かぎ「鑰ー」黄庭經「玉ー金鑰常完堅」

匸部

【匸】ケイ　陽　匸とは別
はこ（筐）一斗の量を容るる方形のはこ。

三畫

【匹】ヒツ　支　緝
手を洗ふために水を注ぐ器、沃盥の器、把手は中空にして柄となり、又水を注ぐ口となるもの。左、僖二三「奉ー沃盥」

【匝】サウ　合　帀の俗字又、通に作る
めぐる（周）史、高祖紀「圍宛城三ー」めぐり。

四畫

【匡】㊀キャウ　陽　㊁ワウ　陽
㊀ただす（正）ただしをさめる。論、憲問「一ー天下」○ただし（方正）○すくふ（救）ただしすくふ。孝經、事君「ー救其惡」○たすく（輔）ただしたすける。漢書、宣帝紀「ー朕之不逮」○めしびつ（飯器）○はこ（筐）○おそる（恐）＝惶。○まがる、斜に曲る。○まぶち。史、淮南王安傳「淚滿ー橫流」＝眶。㊁くぐせ（瘡疾）活に通ず。
同訓異字　匡・正・規・繩・斜・格・糺・貿の別は正（正部一畫）の條を見よ。
【匡益】キャウエキ　ただして益する。晉中興書「性剛愎、志在ニーー」＝匡補。
【匡衡】キャウカウ　前漢のーー、學を勤め燭なし、隣舍に燭あれども遮ばず、衡乃ち壁を穿ち、其の光を引きて之を讀む、邑の大姓文不識、家富みて書多きに名あり、衡乃ち其れが爲めに客作して、價を求めず、書を得て遍く之を讀まんことを願ふ、主人感歎して資給するに書を以てし、遂に大學を成す（西京雜記）
【匡諫】キャウカン　惡をただしいさめる。
【匡救】キャウキウ　ただしすくひて惡事をとめる。孝經、事君「將二順其美ー一ー其惡」
【匡懼】キャウク　おそれる、匡は愧、禮器「衆不ニーー一」＝恐懼。
【匡矯】キャウケウ　正しくためなほす。荀志「無ー能ーー」
【匡護】キャウゴ　たすけまもる。隋書、高祖紀「ー得レ免」＝扶持。
【匡坐】キャウザ　ただしくすわる。韓詩外傳「原憲ーー而弦歌」＝正坐。
【匡濟】キャウサイ　ただしすくひて善に導く。羅隱詩「太平ーー術」＝匡拯・匡救。
【匡佐之勳】キャウサノクン　君を助けて天下を定めたるいさを（晉書、山濤傳）
【匡山】キャウザン　○廬山の別稱。南史、劉慧斐傳「游ニ於ーー一遇ニ處士張孝秀ー一、相得甚歡、遂有ニ終焉之志ー」○四川省に在る山名、一名大ーー。杜甫、懷ニ李白ー一詩「ーー讀書處、頭白好歸來」
【匡時】キャウジ　時勢をすくひただす。唐太宗詩「提レ劍撫ーー」
【匡牀】キャウシャウ　ねどこ。淮南子「心有レ憂者、ーー難席弗レ能レ安也」＝臥牀・方牀。
【匡拯】キャウジョウ　ただしすくふ。晉書「實賴ニ有晉ーー之德ー」＝匡濟・匡救。
【匡正】キャウセイ　ただす、ただしくする。左傳「安ニ靖楚國ー一ニーー王室ー」＝救正。
【匡持】キャウヂ　ただしまもる。資治通鑑「晉ニ深自ーー一ー」
【匡定】キャウテイ　輔けさだめる。晉書、王戎傳「ーー一ニーー大業ー」
【匡弼】キャウヒツ　ただしたすける（後漢書、左雄傳）
【匡復】キャウフク　國勢の傾頽せんとするを正し救ひて恢復する。晉書「今孤當ーー一ニ帝胤ー一、宜可ニ獲居ニ極位ー」
【匡補】キャウホ　ただしおぎなふ。＝匡益。
【匡弼】キャウヒツ　ただしたすく。晉書「內外衆ニーー之規ー」＝輿賛。
【匡廬】キャウロ　○廬山の別稱。殷周の際、匡裕といふ仙人、廬を結びて居りしによりて名づく（後漢書、郡國志）白居易、廬山草堂記「ーー奇秀甲ニ天下山ー」

【匠】シャウ　漾
○たくみ、だいく、今は廣く百工の通稱とす「銅ー」「鐵ー」「畫ー」○さいく、製作。○もくろみ、考案「窓ー」
【匠意】シャウイ　かんがへ、心のたくみ。許孟容、程公集序「屬詞ーー、必本ニ于道ー」＝意匠。
【匠戶】シャウコ　大工の家、又、大工。滿會典「各省皆有ニーー一ー」
【匠氏】シャウシ　○匠人に同じ。韓愈、進學解「夫大木爲レ棟、細木爲レ桷、欂櫨侏儒、椳闑扂楔、各得ニ其宜ー一施以成レ室者、ーー之工也」
【匠師】シャウシ　周代の官名、百工の事を監督する職。
【匠人】シャウジン　大工イ水を攻むるの工人（周禮、考工記）
【匠石運斤】シャウセキウンキン　匠石は、古の善く斲る工人の名、斧斤を運らして物を斲るに、遂巡を瞬らず。より

て技藝の微妙を究むるものを稱するに用ふ。莊、徐無鬼「郢人堊漫二其鼻端一、若二蠅翼一。使二匠石斲一之、匠石運レ斤成レ風、聽而斲レ之、盡レ堊而鼻不レ傷、郢人立不レ失レ容」

【匠伯】ショウハク 大工のかしら。梁。莊、人閒世「見二櫟社樹一、其大蔽レ牛（中略）一レ不レ顧、遂行不レ輟、（中略）曰、已矣、勿レ言レ之矣、散木也」

五畫

【匣】カフ 洽 押に通ず

はこ（箱・匱・筐）大なる者を箱といひ、小なる者を一といふ。杜甫詩「平生白羽扇、零落蛟龍一」

八畫

【匪】㊀ヒ ㊁フン 尾 文 微

㊀はこ、かたみ（籠）方形の竹器。‖筐。〇あらず。‖非。〇あし（惡）「一徒」〇あやある貌。詩、衞風「有レ一君子」‖斐。㊁一一は車馬の行くに文ある貌。禮、少儀「車馬之美、一一翼翼」又、馬の行きて止まらざる貌。‖騑。㊂わかつ（分）くばる（配）周禮、天官、大宰「八曰一頒之式」（羣臣に賜を分つ儀式）

【匪夷所思】イシ 夷（大部三畫）の條を見よ。

【匪躬之節】ヒキュウ 一身の利害をかへりみずして、君の爲めにつくす忠節。易、蹇卦、王臣蹇蹇、匪二躬之故一」韓愈、諍臣論「居二無用之地一、而致二一一」

【匪石之心】ヒセキ 堅くして動かすべからざる心。詩、邶風「我心匪レ石、不レ可レ轉也、我心匪レ席、不レ可レ卷也」晉書、王導傳「實賴二元帝一、固慎二一一」

【匪賊】ヒゾク 世を害するわるもの、惡人。‖匪徒・兇徒。

【匪徒】ヒト わるものども。‖匪類。

【匪類】ヒルイ 匪徒に同じ。

九畫

【匭】キ 紙

〇はこ（匣）唐書、百官志「鑄二銅一四一」〇はこにす、はこに入れる。

十一畫

【匯】クヮイ 賄 隊 滙は俗字

〇めぐる（回）水流の廻旋する義。〇衆くの水が會合する。蘇軾詩「洶湧衆流一」〇圖貨幣の甲地より支出して、乙地にて受取るを一といふ。爲替。

【匯兌】クヮイ 圖爲替ヰ一一單は爲替手形。

【匯費】ヒ 圖爲替料。

【匯票】ヘウ 圖爲替券。

十二畫

【匱】キ 圓

〇大いなるはこ（匣）ひつ。史、太史公自序「石室金一之書」‖櫃。六書故「大ナル者ヲ一ト爲シ、次ヲ匣ト爲シ、小ヲ匳ト爲ス」〇とぼし（乏）つく（竭）詩、大雅「孝子不一」〇もっこ、簀と通ず。

【匱窮】キユウ とぼしくくるしむ。‖貧窮。

【匱竭】ケツ とぼしくしてつく。國語「官不レ易レ方、而財不二一一」

【匱乏】バウ とぼしくつく。‖匱竭。

【匱乏】バウ とぼし。圖饑饉「昔禹水湯旱、百姓一一」

【匱糧】キリヤウ かてを食ひつくす。

【匳】レン 鹽（次條）に同じ。匳は俗字。

十三畫

【匳】レン 鹽 本、籢に作る

〇かがみばこ、くしけ（鏡匣）「鏡一」けしやう道具を入れるはこ「粉一」「粧一」〇かうばこ。香を盛る器「香一」

十五畫

【匵】トク 屋

〇ひつ（匱）‖櫝。〇はこ（函）〇小さき棺。漢書、楊王孫傳「昔帝堯之葬也、窾木爲一」

匸部

【匸】ケイ カイ 卦

〇かくす（藏）〇おほふ（覆）〇國字畫上の用語。

備考 匸に從ひ一ありて之を覆ふ、匸（前條部首）は物を受くるの器なり。匸は物を覆ふなり。匸と匸と形近似して而して意相反す。

二畫

【匹】㊀ヒツ 質 通音ヒキ 俗に、疋に作る ㊁ボク 屋

㊀ひき、布帛四丈（凡そ二端）の稱。〇馬牛などの畜類を數ふるに用ふ。〇たぐひ（偶）たぐふ（配）〇つれそふ、對にな

る、つれあひ。左、桓十、注「庶人夫妻相ー」〇一夫「ー夫」〇ならび(雙對)〇ならび、ならぶ。〇ともがら(儕輩)〇あひて、對敵。左、僖二三「秦、晉ー也」〇とも(朋友)禮、緇衣「惟君子能好ニ其ー」〇あふ(合)あはす。㊀あひる、鶩に通ず。‖家鴨。

【匹偶】ヒツグウ 〇次條に同じ。〇あふ、かなふ、適合する。詩、大雅、注「ニー己之心」に

【匹耦】ヒツグウ つれあひ。詩、鄭風、溱洧、箋「男女相奔、各無ニー一」‖匹偶・配耦。

【匹似】ヒツジ たとへば何の如しといふ意。多く詩に用ふ。黃庭堅詩「田多殺少無ニ人會、ー一無」田過ニ生」‖匹如。

【匹如】ヒツジョ 前條に同じ。元稹詩「ー一元不ニ到」京來」に

【匹庶】ヒッショ たみぐさ、人民。後漢書、祭祀志「皇天降ニ顯皇帝ニ以ニー一、受ニ命中興」‖庶人・庶民。

【匹儔】ヒッチウ 〇つれあひ。曹植詩「中有ニ孤鸞ニ、哀鳴求ニー一」〇たぐひ。韓愈、應ニ科目ニ時與ニ人書「非ニ常鮮凡介之品藥ニー一」

【匹鳥】ヒッテウ 鴛鴦の異名、常に匹偶してゐる故。‖匹禽。

【匹敵】ヒッテキ 〇對等のあひて。魏志、郭后傳「自當ニ與ニ郭門戶ニー一者ニ」〇つれあひ。漢書、鼂錯傳「人情非ニ有ニー一ニ不ニ能ニ久安ニ其所ニ」‖匹配・匹耦。

【匹馬】ヒツバ 一ぴきのうま。公羊、僖ニ三「ー一隻輪無ニ反者ニ」大敗の狀をいふ。古は車戰なり、故に輪といふ

【匹馬單槍】タンサウ 助を人に借らざるに喩ふ。五燈會元「ー一便請ニ相見ニ」

【匹配】ヒッパイ 相ならぶ。つれあひ。易經、疏「天地ー一、則能成ニ品物ニ」‖對偶・匹耦・配偶。

【匹夫】ヒップ ひとりのをとこ。又、いやしきをとこ。論、子罕「ー一不ニ可レ奪ニ志也」四婦を見よ。

【匹夫無罪】ヒップブザイ 元來罪なき者も、寶玉を懷くがために、其の身に禍害を招くをいふ。左、桓十「初虞叔有ニ玉、虞公求ニ旃、弗ニ獻、既而悔ニ之曰、周諺有ニ之、ー一、匹夫用ニ此、其以ニ寶ニ害也、乃獻ニ之」

【匹夫之俠】ヒップノケフ 身分のいやしきをとこだて「史記」

【匹夫之勇】ヒップノユウ 血氣にはやる小勇。孟、梁惠王「此ー一、敵ニ一人ニ者也」

【匹鄙】ヒッピ ひとりの婁。又、いやしきをんな。論、憲問「豈若ニー一之爲レ諒也、自ニ經於溝瀆ニ而莫ニ之知ニ也」左、桓十、注「庶人ハ夫妻相匹ス、其ノ名既ニ定マル、單ト雖モ亦四トイフ、故ニ通ジテ四夫ートイフ」

【匹練】ヒッレン 一ぴきのねりぎぬ、瀑布の形容。蘇軾詩「巖頭ー一練ニ天淨、泉底眞珠瀉レ客忙」

五畫

【匿】ニイ 因 俗に匿の略字として用ふ

〇うつぼ、ゆぎ(箙)矢を入れる具。〇矢を藏ふもの、やおほひ。‖箙。

六畫

【合】アン アフ 感 合

〇こぶ、へつらふ(媚迎合)唐書、蕭復傳「盧杞諂詭阿ー一」〇鳥ー一は市ッの名。杜甫詩「晚風爽鳥ー一」に

七畫

【匽】エン 阮

〇かくす(隱)〇ふす(偃)

【匽武】エンブ いくさをやめる。漢書、禮樂志「興レ文ーレ一」‖偃武。

九畫

【區】ク キウ・ク オウ・ウ コウ・ク 尤 尤 尤 虞

㊀かくす(隱)〇をさむ(藏)〇すまる、ねどころ(居所)漢書、揚雄傳「有ニ田一區、宅一ー」〇こいへ(小室小屋)〇まちまち、ひとつびとつ。〇しな、わかち(差別・分別)〇たぐひ(類)〇こわけ、さかひ(分域)「ー域」〇しきる、かぎる。‖劃、子張「ー以別矣」〇ーはちいさき貌。轉じて己の心をいふ謙辭。〇玉十個の稱。㊁をか(阜)〇さかひ(域)〇わかち(分)㊂かくす(匿)〇星ースの名、十六升。㊃かがまる(曲)‖句。

【區域】クヰキ さかひうち。一國内。晉書、后妃傳「陰教治ニ于宮閫、淑慝彰ニ于ー一」

【區宇】クウ 〇土地のくぎり。晉書、地理志「表ニ揖讓而分ニー一」‖區畫・地域。〇宇内の義。‖區縣。

【區區】クク 〇小いさき貌。賈誼、過秦論「秦以ニー一之地、致ニ萬乘之權ニ」〇轉じて己の心を謙していふ。李陵答ニ蘇武ニ書「ー一竊慕ニ之耳」〇それぞれ、まちまち。

【區區之心】ククノコヽロ 小いさくつまらぬ心、己の心を謙していふ。略して單に區區ともいふ。‖藏曝。

【區處】ククわかつ、かぎる。わかち、かぎり。‖區劃。

【區劃】クカク 前條に同じ。

【區縣】ケン 字内の義。陳書「大庇二黔首一、光二宅一ー一」＝區宇。
【區處】ショ それぞれぶわけして處分する。漢書、黃霸傳「具爲二ー一ー一」
【區分】ブン それぞれにわける、しきりをつけて分ける。魏書、李彪傳「ニー書體一」
【區別】ベツ 類によりてかぎりわかつ。論、子張「譬二諸草木一區以別一矣」＝類別。
【區脫】ダツ 北方のえびすが其の境上に造れる斥候用の土室。漢書、蘇武傳「ー一捕二得雲中生口一」＝區脫。

【匿】トク ヂク 職

〇かくる(藏)〇かくす、かくまふ(隱)「舍ー」〇かくしてあらはさず、包みかくす。論、公冶長「ー怨而友其人」〇にぐ(逃亡)〇さく(避)〇かたまし、かくれたる罪惡(陰姦)＝慝。〇服ーは缶

同訓異字 匿・隱・避・藏・祕の別は隱(卓部十四畫)の條を見よ。

【匿笑】トクショウ にげかくれる。＝亡匿。
【匿名】トクメイ 名前をかくして記さず。魏書、爾朱世隆傳「爲ニー書、自陳二其門一」
【匿名帖】トクメイデフ 己の姓名を記載せざる文書。齊家寶要「切勿レ造二匿名帖一」

【匿伏】フク かくれひそむ。＝潛伏。

【扁】ヘン 銑 扁に通ず

〇うすし(薄)うすくひらたし。〇まどかならず。〇かけがく「ー額」
【扁額】ガク かけがく、横に長き額面。＝扁額。
【扁桃】タウ 桃の一種、巴旦杏の類。西陽雜俎「ー出二波斯國一呼爲二婆淡一、樹長五六丈、圍四五尺、實似二桃子一而形扁、故謂之ー一」＝扁桃。
【扁平】ペイ ひらたし。＝扁平。

十部

【十】(一)シフ・ジフ 緝 什・拾に通ず (二)シン 侵

(一)とを。〇とたび(一回)中庸「人一能之、己千之」〇十倍。漢書、韓安國傳「利不ー者不レ易レ業」〇全し、をはり(終)〇滿足の義「ー分」(二)とを。

【十惡】アク 國十善を見よ。大藏法數「惡即乖レ理之行、謂衆生觸レ境順倒縱二此惡情一、於二身口意一、動與レ理乖、成二此ー一也」
【十雨】ジフ 十日目に一度雨がふる義、氣候の順を得たるにいふ。王充論衡「五日一風十日一雨」とあるに本づく。王炎、豐年謠「五風ー雨ー天時舒、又見四郊稻稚肥」
【十友】ジフイウ 宋の曾慥伯、花を品して十友になぞらふ。一、桂花(仙友)二、蓮花(淨友)三、海棠(名友)四、酴醾(韻友)五、梅花(清友)六、菊花(佳友)七、梔子花(禪友)八、瑞香花(殊友)九、蘭花(芳友)十、蠟梅花(奇友)(事文類聚)三餘贅筆には、茉莉を雅友、芍藥を艷友と爲し、蘭・蠟梅を省けり。
【十干】カン きはめてさときにいふ。論、公冶長「回也聞レ一以レ十」
【十義】ギ 人の履むべき十個條の道。禮、禮運「父慈・子孝・兄良・弟弟・夫義・婦聽・長惠・幼順・君仁・臣忠十者謂二之人義一」＝十敎。
【十五夜】ジフゴヤ もち、陰曆八月十五日の夜、古來觀月の節とす。＝中秋夜・三五夜。
【十三經】ケイ 十三種の經書。周易・尚書・毛詩・春秋左氏傳・春秋公羊傳・春秋穀梁傳・周禮・儀禮・禮記・孝經・論語・孟子・爾雅。
【十三史】シ 十七史を見よ。
【十三代集】ダイシフ 國十三代の敕撰に係る歌集。新敕撰集・續後撰集・續古今集・續拾遺集・新後撰集・玉葉集・續千載集・續後拾遺集・風雅集・新千載集・新拾遺集・新後拾遺集・新續古今集の總稱。これと八代集とを合せて二十一代集といふ。
【十三篇】ペン 孫子の兵書。始計以下十三篇より成るが故。楓窗詩「戊營燈火夜、自注ー一」
【十三夜】ジフサンヤ 國陰曆九月十三日の夜、陰曆八月十五夜に對して後の月といひ、古、觀月の節とす。
【十事】ジ 家を治むる十箇條の法。紺珠「少儀外傳、治家ー一、持レ身以二清潔一、處レ心以二公平一、勿レ使二婦人預二政事一、擇レ師敎レ子學未レ成勿レ使下應二科舉一遠中庠序上、衣服器用皆出二中制一、待二家有無一、貧二恤孤貧一、謹二慶弔之禮一、無レ蓄二異物珍寶美少僕一、接二賓客一以二和睦一、待二奴婢一以二寬恕一」
【十字架】ジカ 西洋にてはりつけの刑に用ひし十字形の具。耶蘇敎が此刑に處せられてより、耶蘇敎及敎徒の標識とす。
【十字街】ジジカイ 四つ辻のひろき街。譚林句集「ー頭吹レ笛」
【十字火】ジクワ 兵用語、彈道が標的の所に於て交叉するやうに兩側より發射する砲彈。＝十字砲火。
【十字科】ジクワ 四瓣の花冠と四強雄蕊とを有し、莢ヤを結ぶ植物の部門の稱。蘿蔔ダイ・紫蘆アブラの類。＝十字花科。
【十字砲火】ハウクワ 十字火に同じ。
【十字碑】ヒ 春秋の時、吳の季札の墓碑。前漢志「季札墓在二申巷一、孔子表二其墓一曰二嗚呼有吳延陵季子之墓一、謂之ー一ー」唐殷仲容篆本、宋郡

守朱彦剔石し浚川の楠公の碑は之に倣ふ。

【十七史】シヂフシ 十七種の史書。史記・漢書・後漢書・三國志・晉書・宋書・南齊書・梁書・陳書・後魏書・北齊書・後周書・隋書（以上十三史）に南史・北史・唐書・五代史を合せていふ（宋史、藝文志）

【十日一水】ジフジツスヰ 十日間にわづか一水をゑがく。靈工の苦心をいふ。杜甫詩「十日畫二一水、五日畫二一石」こ

【十全】ジフゼン 十分にきったし、少しの缺けもなし。周禮、醫師「歲終則稽二其醫事一以制二其食一、一一爲レ上、十失一次レ之、十失二次レ之、十失三次レ之、十失四爲レ下」

【十善】ジフゼン 圖殺生・偸盜・邪淫・妄語・兩舌・惡口・綺語・貪欲・瞋恚・邪見の十種の罪惡を犯さざるをいふ。一一の德ある者は來世天子に生れかはるといひ、天子を一一の君と呼ぶ。法華經科註「五戒一一、正出二三途一」

【十中八九】ジフチユウハツク 十の中にて八九まで。漢書、朱博傳「平二處輕重一、——」

【十弟子】ジフデシ 圖釋迦の高弟十人。舍利佛（智慧第一）須菩提（解空第一）富樓那（說法第一）大目揵連（神通第一）摩訶迦旃延（論義第一）阿那律（天眼第一）優波離（持戒第一）羅睺羅（密行第一）（維摩經）

【十大弟子】ジフダイデシ 釋迦の高弟十人。舍利佛（智慧第一）目連（神通第一）摩訶迦葉（頭陀第一）阿那律（天眼第一）須菩提（解空第一）富樓那（說法第一）優波離（持戒第一）羅睺羅（密行第一）（維摩經）

【十奴】ジフド うたひめ、又あそびめの異名。妓の字を分てば一一となるに由る。類書纂要「妓字一一也、雖二其貌美一、不レ過二一一一奴一」

【十遍不レ如二一寫一】ジフヘンシカズイツシヤ 十たび讀むは一たび寫すの精なるに如かず。鵝林玉露「讀十遍、不レ如二寫一遍一」

【十友】ジフイウ 宋の張敏叔、草木の花十二種を選びて人に擬し、名花——と稱す、卽ち牡丹（貴客）梅（清客）菊（詩客）瑞香（佳客）丁香（棄客）蘭（幽客）蓮（靜客）茶蘼（雅客）桂（仙客）薝蔔（野客）茉莉（遠客）芍藥（近客）（三餘贅筆）貴字一本貧に作る、恐くは誤。

【十二支】ジフニシ 子（甲夜）丑（赤奮若）寅（攝提格）卯（單閼）辰（執徐）巳（大荒落）午（敦牂）未（協洽）申（涒灘）酉（作噩）戌（閹茂）亥（大淵獻）をいふ。十干參照。‖十二枝・十二子・十二辰。

【十二州】ジフニシウ 堯の世、天下の地を冀・兗・青・徐・荊・揚・豫・梁・雍・幽・幷・營の——に分ちしをいふ（書、舜典）其の長官を牧といふ。十二牧。

【十二指腸】ジフニシチヤウ 小腸の上端にて胃の下口に接續する部分。長さが十二指を竝べし位あるが故。

【十二辰】ジフニシン 十二支に同じ。

【十二章】ジフニシヤウ 古、天子の衣服に附けたる日・月・星辰・山・龍・華蟲・宗彝・藻・火・粉米・黼・黻の十二種のかざり模樣（書、益稷）

【十二階】ジフニカイ 十二かさなりの高き屋。白居易詩「南臨贈部三千界、東對蓬宮——」李商隱詩「如何雪月交光夜、更上瑤宮——」

【十二樓】ジフニロウ 多くのはしどだん。劉禹錫詩「江上高樓——、梯梯登倦與レ衆齊」

【十二分】ジフニブン 圖物事の十分を過ぎて至極せる義。‖過分。

【十二律】ジフニリツ 〇六律六呂の稱。陽六は六律にて、黃鐘（十一月）大蔟（正月）姑洗（三月）蕤賓（五月）夷則（七月）無射（九月）陰六は六呂にて、大呂（十二月）夾鐘（二月）仲呂（四月）林鐘（六月）南呂（八月）應鐘（十月）（漢書、律曆志）〇圖宋越ツイ斷金・平調・勝絕・下無ム射・雙調・蛮鐘・黃鐘ワウシヨウ變徵ヘンチ盤涉バンセフ神仙・上無の十二調子。

【十二列國】レツコク 春秋時代に於ける十二の強國、晉・衞・齊・魯・曹・蔡・燕（以上姬姓）齊（姜姓）陳（媽姓）宋（子姓）楚（羋姓）秦（嬴姓）‖十二諸侯。

【十念】ジフネン 圖〇念佛・念法・念僧・念戒・念施・念天・念休息・念安般・念身・念死をいふ。〇口に一聲南無佛を唱ふるを一念といひ、之を十度するを一一といふ。法苑珠林「依二一一而升二樂國一也」

【十年一覺揚州夢】ジフネンイツカクヤウシウノユメ 揚州は江南繁華の地、少年の頃、綠酒紅燈の間に遨遊せしが、十年を經たる今日、其の夢も醒めたりといふ義。杜牧、感懷詩「——、贏得青樓薄倖名」

【十年磨二一劍一】ジフネンマスイツケン 十年の間、一口の劍をみがく。賈島詩「——、霜刃未二嘗試一」

【十能】ジフノウ 圖炭火を持ち運ぶ具。

【十八學士】ジフハチガクシ 唐の太宗十八人の文學の士を選し、閻立本に像を圖せしめ、稱讚に贊を作らしめ、之を——と號す。緋珠「杜如晦・房玄齡・于志寧・蘇世長・薛收・褚亮・姚思廉・陸德明・孔穎達・李玄道・李守素・虞世南・蔡允恭・顏相時・許敬宗・薛元敬・蓋文達・蘇勗」

【十八公】ジフハチコウ 松の異名。松字を分てば十八公となる。吳志「初丁固、爲二尚書一、夢二松樹生二其腹上一、謂レ人曰、松字十八公也、後十八歲、吾其爲レ公乎、卒如レ夢焉」

【十八史】ジフハチシ 史書十八種の稱、元の曾先之——略を著す、十七史に宋濂を加へていふ。十七史參照。

【十八省】ジフハチセイ 支那本部を十八に區分せし總稱。直隸（燕）山東（齊）山西（晉）河南（豫）陝西（秦）甘肅（隴）江蘇（吳）安徽（皖）浙江（越）福建

(國)江西(贛)四川(蜀)貴州(黔)雲南(滇)湖北(鄂)湖南(湘)廣東(粵)廣西(桂)又、浙江・福建を合せて閩浙と稱し、湖北・湖南を湖廣、又、楚と稱し、廣東・廣西を兩廣、又、粵と稱す。

【十八天】ジフハチテン 圖三十三天中にて、色界に在る十八の天、梵衆天・梵輔天・大梵天・少光天・無量光天・光音天・少淨天・無量淨天・徧淨天・無雲天・福生天・廣果天・無想天・無煩天・無熱天・善見天・善現天・色究竟天、これに欲界の六天と、無色界の九天とを加へて三十三天となる。

【十八般】ジフハチハン 武藝十八種の稱。矛・楯・弓・弩・銃・鞭・劍・鎚・杁・斧・鉞・戈・戟・牌・棒・槍・鐧。又、一說、弓・弩・槍・刀・劍・矛・盾・斧・鉞・戟・簡・楯・叉・把頭・叉・縛繩・白打。

【十八番】ジフハチバン 圖俳優市川家に傳ふる十八種の得意の狂言、轉じて、得意の藝、おはこ。

【十風五雨】ジフフウゴウ 十日に一たび風吹き、五日に一たび雨降る、氣候の順を得たるをいふ。陸游詩「斗酒隻雞人笑樂、——歲豐穰」〓五風十雨。

【十分】ジフブン 〇物事の滿ち足ること。孔平仲詩「花開已——」俗に充分と書くは非なり。〇ブン 一分を十、合せたる尺度。〇ブン 一時間の六分の一。

【十妙】ジフミヤウ 〇十干の異名。〇親母・出母・嫁母・庶母・繼母・繼母・慈母・養母・乳母・猪母の稱〔居家必要〕

【十萬億土】ジフマンオクド 圖この世から彌陀の淨土、卽ち極樂世界に至るには、四方十萬億のみちのりある佛土をふるといふ。

【十日】ジフニチ 十人の日。十手を見よ。

【十夜】ジフヤ 圖淨土宗にて陰曆十月六日より十五日まで一一の開行ふ別時念佛。

【十翼】ジフヨク 易經中の上象・下象・上象・下象・上繫辭・下繫辭・文言・序卦・說卦・雜卦の十傳の稱、易經の羽翼となる義。孔子の述作せし所なりといふ〔周易正義序〕

【十六夜】ジフロクヤ いざよひ、陰曆十六日の夜。〓既望。

【十六羅漢】ジフロクラカン 佛一切の煩惱を去り盡したる十六尊者の稱。羅漢は梵語、眞人又應眞と譯す。賓度羅跋羅惰闍ビンドラバラダジヤ迦諾迦伐蹉カナカバツサ迦諾迦跋釐カナカバリ惰闍ダジヤ蘇頻陀ソビンダ諸短羅ダラ跋陀羅バダ迦哩迦カリカ伐闍弗多羅バジヤラタラ戍博迦ジユバカ半託迦ハンタカ羅怙羅ラゴラ那伽犀ナカイ因揭陀インダ伐那婆斯バシナ阿氏多アシタ注荼半託迦チユダハンタカ

【十戒】ジフカイ 佛〇十惡を犯さざるいましめ、十善戒。不殺生・不偸盜・不邪淫・不妄語・不飮酒(以上五戒)に不說過罪・不自讚毀他・不慳・不瞋・不謗三寶を加へて菩薩の一一といふ。〇五戒に、不著華鬘好香塗身・不歌舞倡妓亦不往觀聽・不得坐高廣大牀上・不得非時食・不得捉錢金銀寶物を加へて沙彌の一一といふ。魏書、釋志「其爲二沙門一初修二一一一曰二沙彌一」

【十界】ジフカイ 圖佛界・菩薩界・緣覺界・聲聞界・天上界・人間界・修羅界・畜生界・餓鬼界・地獄界の稱。大藏法數「法界者諸佛衆生之本體也、然四聖六凡感報界分不レ同、故有二十法界一焉」〓十法界。

【十干】ジフカン 甲(閼逢)乙(旃蒙)丙(柔兆)丁(強圉)戊(著雍)己(屠維)庚(上章)辛(重光)壬(玄黓)癸(昭陽)の稱。〓十幹。

【十幹】ジフカン 前條に同じ。

【十笏】ジフコツ 笏は古、官吏の帶に插みしゃく、それを十箇つきたる位の廣さ。隋唐嘉話「有二維摩居士石室一、以二手板一縱橫量レ之、得二一一一一」

【十指】ジフシ 十年の稱。賈島詩「客舍幷州已一一、歸心日夜憶二咸陽一」〓十秋。

【十洲】ジフシウ 仙人のすめりといふ島。十洲記「祖洲・瀛洲・玄洲・炎洲・長洲・元洲・流洲・生洲・鳳麟洲・聚窟洲」

【十指會】ジフシクワイ 足袋の異名。清異錄「曹翰常著二錦襪一、有二嘲レ之者一、詩云、不レ作二錦衣裝一裁爲二一一一一」

【十子全書】ジフシゼンショ 十種の子書を集めて合刻せしもの。老子二卷・莊子十卷・荀子二十卷・列子八卷・管子二十四卷・韓非子二十卷・淮南子二十一卷・揚子十卷・鶡冠子二卷・文中子十卷、合せて百二十七卷。

【十室之邑】ジフシツノユウ 家十戶ある、狹小なるむら。論、公冶長「子曰——、必有二忠信如レ丘者一焉、不レ如二丘之好レ學也」

【十襲】ジフシフ 十重にかさねつつみて大切に祕藏す。說苑「寶襛十重、纏以二一一一一」〓什襲。

【十進法】ジフシンハフ 數學にて十位を以て一桁ゲタとして進み行く命數法。

【十手】ジフシユ 〇十人の手。大學「十目所レ視、一一所レ指、其嚴乎」〇ジフ 圖昔時、罪人を召捕るに用ひし短き鐵棒。〓尺鐵・鐵笹。

【十宗】ジフシウ 圖我邦に行はるる佛教の宗派中、俱舍シヤ成實ジヤウ律・法相ホツサウ三論・天台・華嚴・眞言・禪・淨土の稱。

【十千】ジフセン 一萬錢なり、千は千錢。晉林「求レ利一一」王維、少年行「新豐美酒斗一一」一斗の價一萬錢の美酒。

【十體】ジフタイ 十種の書體、古文・大篆・小篆・摹文・八分・隸書・章草・行書・飛白・草書〔紺珠〕

【十哲】ジフテツ 〇十人のすぐれたる賢人、孔子の高弟十人。紺珠「顏淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓・宰我・子貢・冉有・季路・子游・子夏・顓孫師・曾子參」一一」〓孔門十哲。〇圖俳

人芭蕉の高弟十人。螢木其角・服部嵐雪・森川許六・向井去來・各務支考・內藤丈草・立花北枝・河合曾良・志田野坡・越智越人。‖蕉門十哲。

【十方】ジッパウ 東西南北の四方と其の乾・坤・艮・巽の四隅と上下との稱。天下又、宇宙の義。唐太宗、聖教序「弘二濟萬品一典二御一一一」

【十法界】ジッポッカイ 佛地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上・聲聞・緣覺・菩薩・佛の十世界。‖十界。

【十方圍】ジッパウゐ 曆法にて甲申より癸巳まで十日間の稱。此間十方塞りて相談事ととのはず、萬事慎む可き厄日とす。

【廿】ジフ ニフ 廿 又、廿に作る

はたち、二十。

【千】セン 先

〇ち、百を十倍せし數。〇ちたび「一回」中庸「人十能之、己一之」〇ちぢ、數の多き義。〇ちまた、南北に通ずる路。‖阡。〇一錢をいふ。

【千金之裘非二一狐之白一】センキンノカハゴヒトツノハクニアラズ 千金の裘を治むるには衆賢の力に資るに喩ふ。墨子「江河之水非二一水之源一、——」一鎰は二十兩、又二十四兩。

【千葉桃花】センエフ やへざきの桃の花。開天遺事「御苑——開、明皇折二一枝一餐二貴妃一曰、此花亦能助レ嬌」

【千億】センオク 甚だ多き數にいふ。寒山詩「君臣同和、福祚一一」

【千聲】センセイ おほくのはなぶさ。白居易詩「剪レ碧排二一一」

【千谷萬來】センコクバンライ 圖 多數のきゃくが入り代りて集り來る。

【千巖萬壑】センガンバンクワク おほくの岩と溪と。すぐれたる溪山をいふ。晉書、顧愷之傳「千巖競秀、萬壑爭流」

【千金】センキン 〇大金又、甚だしき高價の義。一金は十兩。說苑、建本「一一之裘非二一狐之皮一」〇かねもち、富豪の義。史、越世家「一一之子不レ死二於市一」

【千金之價】センキンノアタヒ 甚だ貴きあたひ。一金は十兩。論衡「有二利劍一——」

【千金之裘】センキンノキウ ねっちあるかはごろも。說苑、建本「——、非二一狐之皮一」

【千金之裘非二一狐之腋一】センキンノキウハイッコノワキニアラズ 貴重なる狐白裘を作るは、一狐の腋の能く成す所にあらず、國を治むるは衆賢の力によるに喩ふ〔史、劉敬叔孫通傳〕

【千金之劍】センキンノケン たふときつるぎ。新序「延陵季子今不レ忘レ故、脫二——一今帶二丘墓一」

【千金子】センキンシ 富豪の家のむすこ。史、貨殖傳「千金之子、不レ垂レ堂」

【千金不レ死百金不レ刑】センキンハシセズヒャクキンハケイセズ 多額の金を使へば死刑徒刑にても免れ得られる、地獄の沙汰も金次第。尉繚子、將理「今世諺云、——」

【千鈞】センキン 重量の甚だ大いなるにいふ。一鈞は三十斤。魏志「一一之弩、不下爲二麗目一發上機」韓愈、與二孟尙書一書「一髮引二一一」

【垂二千鈞之重於鳥卵上一】スイセンキンノオモキヲチョウランノウヘニ 重大を以て輕小に加ふれば直ちに破る、以て形勢の危きに喩ふ。史、張儀傳「嬰二孟賁烏獲之士一、以攻二不服之弱國一、無レ異レ垂二千鈞之重於鳥卵上一、必無二幸矣一」

【以二千鈞壓一潰癰一】センキンヲモッテヒトツノデキモノヲアッスル 強力を以て疲労に乘ずれば、之を破ること甚だ易きに喩ふ、癰は背に發するできもの。戰國策「齊罷國也、以二天下一擊レ之、譬猶下以二千鈞之弩一潰中癰也」

【千軍萬馬】セングンバンバ 多くの兵士と馬と。‖千兵萬馬。

【千花】センクワ 多くのはな。李白詩「三月咸陽城、一一盡如レ錦」‖千芳。萬花。

【千言】センゲン 長き詩文。陸游詩「落筆輒一一」

【千言萬語】センゲンバンゴ くどくどしく言葉を盡していふ。又其のことば。

【千古】センコ 〇おほむかし。宋之問詩「聖德超二一一一」〇永遠の世。蘇頌文「激二清一時、流二譽一一一」

【千古名】センコノナ 永世まで殘るほまれ。李白詩「豈傳二一一一」

【千斛船】センコクブネ 米千石を積む大ぶね。‖千石舟。

【千戶侯】センコノハウ 千戶ある廣き領地を有する大名。史、貨殖傳「淄川千畝竹、(中略)其人皆與二一一一等一」

【千呼萬喚】センコバンクワン 幾度となくしきりによぶ。白居易、琵琶行「——始出來、猶抱二琵琶一半遮レ面」

【千劫】センゴフ 圖 ながき世。唐太宗、聖教序「無レ滅無レ生歷二一一一」‖萬世。

【千載一遇】センザイイチグウ 千年に一たび相あふ。容易に遇ひがたき義。三國名臣序贊「——、賢智之嘉會、遇レ之不レ能レ無レ欣、褒レ之何能無レ僭」‖千歲一時。

【千載之會】センザイノクワイ 千年目に一度出あふ機。容易に得難きまはりあはせ〔宋書、袁淑傳〕‖千載一遇。

【千歲一時】センザイイチジ 千載之會に同じ。晉書、慕容雲載記「慶運難レ遇、——、公彤得レ辭也」

【千歲冰】センザイノコホリ 永久とけざるこほり。西陽雜俎「頗梨、——所レ化也」

【千差萬別】センサバンベツ さまざまのちがひ。

【千山萬水】センザンバンスヰ 多くのやまかはの深山の形容。紹元怪遠「——不レ見レ有レ路」

【千秋】センシウ ながき年月。李陵詩「嘉會難二再遇一、三載爲二千秋一」

【千秋節】センシウセツ 天子の誕生を賀するいはひ日。唐の開元十七年八月五日に始まる(明皇雜錄)‖天長節。

【千秋雙】センシウサウ 千古の久しきに渉りて消えざる雙。杜甫詩「劍舍四道——、門泊吳萬里船」

【千秋萬歲】センシウバンサイ 千年萬年の義。長壽を願ふいはひのことば。ちよよろづよ。韓非、顯學「——之後期耳、而一日之霸無一徵二于人一」

【千秋萬古】センシウバンコ 千年萬年、極めて久しき歲月。劉延芝、公子行「百年同謝四山日、——北邙塵」

【千枝萬葉】センシバンエフ 道の千萬殊なるに喩ふ。淮南、俶眞「道有二經紀條貫一、得二一之道一、通二——一」

【千思萬考】センシバンカウ いろいろに考よ。

【千紫萬紅】センシバンコウ 紫や紅のいろいろのはな。

【千尋】センジン ちひろ、尋は八尺、千尋は八千尺、傳じて極めて高く又深だ深き形容とす。阮信詩「高閣一一起」

【千辛萬苦】センシンバンク おほくのくるしみ。

【千字文】センジモン 一卷、梁の周興嗣撰す四言古詩二百五十句より成る故に名づく、蓋し興嗣が魏の鍾繇の——の韻をふみて撰せしものなりといふ。

【千章】センシャウ 千本 大木を數ふるを章といふ。史、貨殖傳「山居一一之材」

【千觴】センシャウ 杯をおほくかさねる。李白詩「高談滿二四座一、一日傾二一一」

【千狀萬態】センジャウバンタイ いろいろのさま。歐陽修翅說「——雖二簡而意足一矣」

【千手觀音】センジュクワンオン 圖千手千眼觀世音菩薩の略、六觀音の一、像には四十の手あり、千手千眼は廣大無礙の化用をあらはす。

【千種萬類】センシュバンルイ いろいろの種類。

【千乘】センジョウ 乘は兵車、周の制、天子は畿內の地千里四方を領し、兵車萬乘を出し、諸侯は方百里兵車一一乘を出す。一乘には甲士三人、步卒七十二人、車士二十五人附屬す、即ち千乘の車、十萬人の卒を出すを大諸侯の兵賦とす。轉じて大諸侯の義とす。孟、滕文公「萬乘之國弑二其君一者、必一一之家、一一之國弑二其君一者、必百乘之家」

【千乘之國】センジョウのくに 大諸侯のくに。兵車千乘を出す國の義。論、學而「道二——一敬レ事而信」

【千端萬緒】センタンバンショ 種種雜多の事がら。晉書、胡侃傳「遷二荊州刺史一、侃性勤敏、於二吏職一、關外多事、——、皆レ有二條理一、遠近書疏、莫レ不二手答一、皆如レ此」

【千石舟】センセキシウ 千石の米をつむほどのふね。せんごくぶね。大學衍義補「通二——一千斛船。

【千搜萬索】センサウバンサク いろいろにさがす。韓愈詩「——何處有」

【千朶】センダ おほくのえだ。成廷珪詩「一聲鳳壑松子落、一一萬朶芙蓉開」

【千丈隄以二螻蟻之穴一潰】センジョウテイヲロウギノケツヲモツテスル 小事をつつしまざれば大害を來す喩(韓非、喩老)

【千日紅】センニチコウ 草の名。秋日童子にて楊梅に似たる深紫色の花を著く。‖千日草。

【千人所レ指無レ病而死】センニンノサストコロヤマイナクシテシス 多數の人につまはじきされれば病なくとも死する義(漢書、王嘉傳)

【千芳】センパウ 多くのはな。徐陵賦「百藥爭レ新、一一競レ馥」‖千花。

【千般】センパン いろいろ、さまざま。韓偓詩「花樹綠楊垂、一一黃鳥語」‖千種萬般。

【千萬】センバン 〇いく〳〵にも、くれぐれ「一一自重」通俗編「一一 今猶慎了字猶也、唐宋已皆用レ之」〇圖若し。「不都合一一」

【千百】センピヤク あまた、多數の義。韓愈與孟尙書一書「所謂存二什一于一一」

【千兵萬馬】センピヤウバンバ おほくの兵とおほくの馬と。南史、陳慶之傳「——避二白袍一」‖千軍萬馬。

【千篇】センペン 多くの詩文をいふ。蘇軾詩「君才敏贍倹二百丈一朝作二一一日未レ晞」融遊詩「酣興一一風雨速」

【千篇一律】センペンイチリツ 詩文の作法が同じ調子にて變化なし。藝苑卮言「白樂天詩、——」

【千變萬化】センペンバンクワ いろいろにかはる。

【千里不レ留レ行】センリヲトヾメズシテユク 千里の遠きに行くにも、遠り止むる者なし。天下列、湯問「——惟意所レ適」

【千里二千萬人一吾往】センリニセンマンジンアレドモワレユカン 自ら反省して直ければ千萬人の多勢あるとも、少しも畏れず、之に抗して進み行かん。孟、公孫丑「自反而不レ縮雖二褐寬博一吾不レ惴焉、自反而縮、——矣」

【千門萬戶】センモンバンコ 〇禁中の宮殿の多きをいふ。史、計布書「帝作二建章宮一、度爲二——一」〇圖市中の人家の多きにいふ。

【千羊皮不レ如二狐腋一】センヨウノカハキツネノワキニシカズ 衆愚は一賢に如かざる喩。史、商君傳「趙良曰、——、千人之諾諾不レ如二一士之諤諤一」

【千里】センリ 〇はるかに遠き所。漢書、高帝紀「運二籌帷幄之中一、決二勝一一之外一」〇轉じて美しき推南、人間訓「——之堤以二螻蟻之穴一潰」

【千里鶯啼綠映レ紅】センリノウグヒスナキテミドリアカニエイズ 到る處に鶯が鳴きて綠樹が紅花に映じて春色正に好し。杜牧、江南春「——、水村山郭酒旗風、南朝四百八十寺、多少樓臺烟雨中」

【千尺寒潭】センシヤクノカンタン 千里の遠方の景を領に一尺一寸程の場所に集めて見る。柳宗元、始得二西山一宴遊記「其高下之勢、峭然注然、若レ垤若レ穴、——、攢蹙累積、莫レ得二遁形一」

に厭なき義。莊、說劍「臣聞大王喜ノ劍故以ノ劍見ノ王、王曰、子之劍何能禁制、曰、臣之劍、十步一人、——王大說ノ之、曰、天下無ノ敵矣」

【千里命ノ駕】センリガダイガ 遠方の友を思ひ之を訪はんとて、車の用意をなす。晉書、嵇康傳「呂安服二康廣高致一、每二一相思一、輒——」

【千里眼】センリノ 遠方まで見とほす力、探偵を使ふによる。魏書、楊逸傳「逸爲ノ政愛ノ人、尤憎二豪猾一、廣設二耳目一、其奸吏出使二下邑一、皆自持ノ糧、人或爲設ノ食者、雖ノ在二閨室一、終不ノ遣、咸言楊使君有二——一、那可ノ欺ノ之」

【千里同風】センリノ 遠方まで同じ風が吹く、世の太平なる義。論衡「千里不ノ同ノ風、百里不ノ共ノ俗」

【千里猶二對面一】センリナホコレ 書狀を以て陳述することの巧なるをいふ。唐書、房玄齡傳「高祖曰、房玄齡機識、實宜二委任一、雖爲二吾見一陳ノ事、千里之外、猶二對面語一」

【千里馬】センリバ ○一日に千里を走る名馬。戰國燕策「莽年——至者三」○轉じて、才智の勝れたる人に喩ふ。韓愈、雜說「世有二伯樂一、然後有二——一」⇨千里駒。

【千里行始二於足下一】センリノコウハカナラズソクカニ 天下の事、皆微小を積みて大を成すに喩ふ。老子「合抱之木、生二於毫末一、九層之臺、起二於累土一、——」

【千里駒】センリノ 遠路のつかれ。類倶詩「解ノ衣臥二清宴一、慰二我——一」

【千里江陵一日還】センリノコウリョウイチニチニカヘル 江流の極めて迅疾なる形容。李白、早發二白帝城一詩「朝辭白帝彩雲間、——」

【千里駒】センリノ ○年少にして才のすぐれたる者に比す〔漢書、楚元王傳〕○千里馬に同じ。楚辭、卜居「寧昂若二千里之駒一乎」

【千里信】センリノ 遠國よりのおとづれ。杜牧詩「故園杳無二——一」

【千里月】センリノ 遠方を照す月。李嶠詩「他鄉——」

【千慮一失】センリノヒトツ 智者もたまには思ひちがひあり。史、淮陰侯傳「智者千慮必有二一失一、愚者千慮必有二一得一、故曰、狂夫之言、聖人擇焉」

【千慮一得】センリョノイットク 前條を見よ。

【千木】チギ 圖上古家屋の棟の上に交叉して取りつけたるかたそぎの材。今神社の建築にのみ用ふ。

【千代】チヨ ○千世に同じ。○圖祝めて長きとしつき、ちよやちよ。⇨千歳・萬世。

【午】ゴ 畫 廣

○うま、十二支の第七。⇨敎祥。○時の名、まひる、正午。○正南の方角。○さかふ(逢背)

漢書、劉向傳「朝臣舛ー」⇨忤。○旁ーはたてよこ(縱橫)十文字に交る。字彙「一縱一橫曰旁ー」

【午下】ゴカ 圖ひるすぎ。⇨過午。

【午供】ゴグ 僧のひるめしのそなへ。僧清璨詩「山廚修ニーー一」⇨午膳。

【午橋莊】ゴケウノサウ 唐の裴度の別莊の名。唐書、裴度傳「於二午橋一創二別墅一、花木萬株、中起二涼臺暑館一、名曰二綠野堂一、度視ノ事之暇、與二詩人白居易・劉禹錫一酣宴終日、高歌放言、以二詩酒琴書一自樂、當時名士皆從ノ之游」

【午月】ゴゲツ 五月の異名。夏の正は寅に建つが故。⇨皐月。

【午午】ゴゴ こみあふ貌、雜沓する。梅堯臣詩「雲中蓂ーー」

【午後】ゴゴ ○午下に同じ。○晝の十二時より夜の十二時まで。唐書、韓愈傳「禁ノ僧ーー不ノ得ノ出」

【午刻】ゴコク うまのこく、まひる。⇨正午・亭午・午時・午牌。

【午餐】ゴサン ひるめし。白居易詩「ーー何所ノ有、魚肉一兩味」⇨午饌。

【午時】ゴジ ひるどき、ひるにぶん。白居易詩「不ノ作ニーー眠一、日長安可ノ度」

【午睡】ゴスイ ひるね。顧谷詩「溪鶯喧ニーー一山巖止二春飢一」⇨午睡。

【午餉】ゴショウ ひるめし。盧瀞詩「寬厚ーー餘」⇨午餐。

【午初】ゴショ 午前十一時。

【午睡】ゴスイ ひるね。張耒詩「深堂無ノ人ーー餘」⇨晝眠。

【午前】ゴゼン ○ま晝まへ、正午まへ。○夜の十二時より晝の十二時まで。

【午餐】ゴセン ひるめし。皮日休詩「爲ノ予備ニーー一」⇨午飯・午餉・午餐。

【午熱】ゴネツ ひるごろのあつさ。楊萬里詩「夜熱依然ーー同、開ノ門小立月明中」

【午碓】ゴタイ 正午を知らせる爲めに放つ大砲。⇨午砲。

【午飯】ゴハン ひるめし。白居易詩「朝眠因ノ客起、ーー伴ノ僧齋」⇨午食。

【午焚】ゴフン 正午の勤行。王安石詩「ーー隔ノ雲知ノ有ノ寺」

【午夢】ゴム ひるねのゆめ。朱熹詩「德來拂ノ石支ノ牀睡、萬壑吟風ーー閒」

【午門】ゴモン 北京の紫禁城の正門。俗に五鳳樓といふ、前は皇城の端門に接す。

【午夜】ゴヤ 夜の十二時。晝の十二時の午の轉用。李賀詩「羅幃ーー愁」⇨夜半。一說、午・五通ず、五夜(五更)に同じと。

【卅】サフ 俗 ソフ

三十、みそ。

【升】ショウ 古 斛 升とは別字

○量目の名、一合の十倍。○ます、一升ます、俗に枡とも書く。○なる(成)禮、樂記「男女

無辨則亂ー」〇よみ、布八十縷の稱。證、雜記「朝服十五ー」〇易の卦の名、巽下坤上。〇すすむ(進)〇あがる、のぼる、のぼす(登)降の反對。詩、小雅「如ニ日之ー」‖昇。〇さかんなり(隆)〇みのる、穀物成熟す。論、陽貨「新穀既ー」

同訓異語　升・上・昇・陞・登・躋・陟・の別は上(三六頁二段)の條を見よ。

【以レ升量レ石】シヨウヲモツテハカル　升と石とは共に枡目の名、升は少く、石は多し、故に量ること能はず、以て愚者が賢者の心を測ること能はざるに喩ふ。淮南子「使ニ衆度ニ衆、是猶ニ以レ升量ニ石也」

【升遐】シヨウカ　天子の崩御したまふをいふ。通鑑、梁武紀「先帝ー一」胡注「記曲禮曰、告レ喪曰ニ天王登假一、注、登上也、遐已也、上已者、若ニ仙去一耳、登即升也」‖登遐。

【升降】シヨウカウ　〇さかんなると、おとろふると。書、畢命「道有ニ一一一」‖汙隆・盛衰。〇上り下り。‖登降。

【升級】シヨウキフ　〇學級が進む。‖昇級・進級。〇官位が高くなる。‖昇進。

【升恆】シヨウカウ　人の壽をいはふ語。詩、小雅、天保「如ニ月之恆一、如ニ日之升一」

【升斛】シヨウコク　ます。ますめ。王褒文「推レ之以ニ一一一、正レ之以ニ權衡一」‖斗斛。

【升勻】シヨウキン　〇一升一勺の量。ますめの多少。元好問詩「金粟論ニ一一一」〇すこしばかりの分量。

【升進】シヨウシン　官位が、のぼりすすむ。後漢書、王符傳「符獨耿介、不レ同ニ於俗一、此遂不レ得ニ升進一、志意蘊憤、乃隱居、著ニ書三十餘篇一」

【升踐】シヨウセン　高き處にのぼりて地をふむ。後漢書、章帝紀「經ニ平原ニ一一一陵防一、詢ニ訪耆老一」‖登踐。

【升沈】シヨウチン　のぼると、しづむと、榮えると衰ふると。李白詩「ー一應ニ已定一、不ニ必問ニ君平一」‖窮通・浮沈・榮枯・盛衰。

【升殿】シヨウデン　天子の殿上にのぼる。唐書、禮樂志「座レー者、謂ニ東四階一」

【升騰】シヨウトウ　のぼる。騰ものぼる。後漢書、左雄傳「踴躍ー一、超レ等論レ西」

【升聞】シヨウブン　上にきこゆ。書、舜典「玄德ー一、乃命以レ位」‖上聞。

【升平】シヨウヘイ　穀物がよくみのりて其の價がたひらかなり、轉じて、泰平の世の義とす。漢書、揚雄傳「民至ニ三年之儲一曰ニ一一一」宋之問詩「相與樂ニ一一一」‖昇平。

【升龍降龍】シヨウリヨウカウリヨウ　のぼり龍と、くだり龍と。旌旗等の模樣に用ふ。周禮、大行人「戰ニ大旆日月ー一」

【丸十】

卒(十部六畫)の錯字。

【三】

【弔】

弔(十部四畫)の俗字。

【屯】

世(一部四畫)に同じ。

【半】

ハン　輸

〇なかば(中央)「月ー」「夜ー」〇はんぶん(半分)「太ー」「一ー」「強ー」戰國策「秦不レ接レ刃而得ニ趙之ー」〇わかつ(分)半分にわける。「折ー」世說「斫諸屋柱悉割ニ爲ー一薪」〇全からず、少しばかり、終らず。〇おはぎれ(大片)〇圖はん、奇數。

【半價】ハンカ　はんねだん、半代價。南史、郭原平傳「裁求ニ一一一」

【半解】ハンカイ　〇はんぶんだけわかる、なかばさとくする。滄浪詩話「有ニ透徹之悟一、有ニ一知ー一之悟一」〇はんぶんに分ける。左傳、註「享則ー一其體一而薦レ之、所ニ以示ニ其儉一」

【半篙】ハンカウ　篙はふなざを、竿半分程の深さの水、一篙の半分。陳與義詩「ー一寒碧秋垂」釣、一笛四風夜倚レ樓」

【半額】ハンガク　〇眉の廣きをいふ。ひたひの半分の義。後漢書「城中好廣眉、四方且ー一」〇圖はんぶんの金高。

【半可通】ハンカツウ　圖なまものじり。一知半解の者。

【半規】ハンキ　まるのはんぶん。規ばぶんまはし、轉じて圓の義とす。黃庭堅詩「新月吐ニ一一一」‖半圓・半輪。

【半旗】ハンキ　圖弔意を表する時、旗竿の中程の所に揭げるはた。‖弔旗。

【半弓】ハンキウ　圖弓の一種。大弓の半分位の長さのもの。

【半句】ハンク　少しのことば「一言ー一」‖片言。

【半官報】ハンクワンパウ　圖政府の機關新聞。

【半夏】ハンゲ　〇はそぐみ、藥草の一。證、月令「ー一生、木槿榮」〇夏至より後十一日に當る日。凡そ七月一二日頃、田植の終期とす。‖半夏生。

【半徑】ハンケイ　さしわたしのはんぶん、圓又は球の中心より其の周圍又は表面に至る距離。直徑の半分。

【半頃】ハンケイ　五十畝の田。頃は百畝。元好問詩「溪田耕ニ一一」

【半月】ハンゲツ　〇ゆみはりづき。徐陵、孝義寺碑「明星皎皎流ニ一一之光一」‖弦月。〇一ヶ月の半分。

【半減】ハンゲン　はんぶんへる、はんぶんにへらす「汽車賃ー一」

【半山】ハンザン　宋の王安石の號。

【半身】ハンシン　流產なり。同書「婦人懷孕、血氣不レ能ニ榮養一、以致ニ數月而墮一、名ニ一一一」

【半子】ハンシ　半分の子の義にて、むすめ

のむこ(唐書、回紇傳)劉禹錫、祭二楊臣子一文「爲二君一一」〇女壻。

【半紙】ハンシ 國紙の一種、二十枚を一帖とす。もと延紙ノベガミを半分に切りたる大さなるが故。

【半日村】ハンニチムラ 高山の麓にありて、一日の中、なかばは日陰になるむら。

【半死半生】ハンシハンショウ なかば死し、なかば生く、生死のさかひに在る。

【半信半疑】ハンシンハンギ なかば信じ、なかばうたがふ、眞僞に迷ふ。

【半身不隨】ハンシンフズイ 半身不隨意の義、中氣などにて、身體の半分が自由を失ふ狀態。〓半身不仁、半身不遂、偏枯。

【半晌】ハンショウ 半時なり。水滸傳「王進看了一一」

【半鐘】ハンショウ 國つりがねの小なるもの。

【半生】ハンセイ 一生の半分、半生涯。陸游詩「天公惜我一一勞、寄二傲江湖一亦足レ豪」

【半生半熟】ハンセイハンジュク なまにえ、未だ十分に心を相知らざる義。指掌錄「莫レ怪二禪前無一笑語一、——未二相識一」轉じて技藝の未だ熟逕せざるにもいふ。

【半宵】ハンセウ 半夜に同じ。

【半切】ハンセツ 〇唐紙を縱に半分に切りたるもの。〓半折。〇ハンセツ 國手紙を書く紙。〓卷紙。

【半島】ハントウ 陸地が海中につき出て、三方海に圍まれたる地。

【半濁音】ハンダクオン 國清音と濁音とのなかばの音、パ・ピ・プ・ペ・ポの五音。

【半直】ハンチョク はんれ、半分の價。宋書、郭世道傳「以二一一一與二世道一」〓半價・半値。

【半天】ハンテン 天のなかば。鮑照詩「高峯插二一一一」〓中空・中天。

【半纏】ハンテン 國羽織に似て袖短く、襟の折れてかへらざるもの。

【半點鐘】ハンテンシャウ 三十分毎に撃つ鐘の義。轉じて半時間の義とす、一點鐘は一時間。

【半途】ハント 事のとちう、ちうとはんぱ、中途。李白詩「百歲落二一一一一一」〓中道・半塗。

【半夏子】ハンゲシ 國しらみの異語。虱の字は風を半分にせし形なるが故。

【半幅】ハンプク 半分のはば、半枚。唐書、裴度傳「欲レ收二天下英雄之心一、惟有二詔書紙一一一」

【半脚】ハンキャク 山のいただきと麓との中程の所、山の中腹。韓愈詩「唄レ雲渡レ[雨+翕]藏二一一一」

【半部論語】ハンブノロンゴ 通鑑、宋紀「趙普云、以二一一一治二天下一」

【半面】ハンメン 〇かほの半分。南史、后妃傳「帝時レ至、必爲二一一一粧一以俟」〇物のかたがは。片面カタメン。

【半面之識】ハンメンノシキ すこしのしりあひ、少しく面を識れる義。後漢書、應奉傳、注「晉諱二彭城一、相二資質一、賀時出行、閉レ門造レ車、匠於內開レ扇、出二半面一視レ奉、奉卽委去、後數十年、路見二車匠一、識而呼レ之」

【半夜】ハンヤ よなか。于鵠詩「遙聽繞山一一鐘」〓夜半・半宵。

【半輪】ハンリン 半ばかけたるつき。李白詩「蛾眉山月一一秋、影入二平羌江水一流」〓半規。

四畫

【卉】キ 俗字 艸部 十畫

〇くさ、百草の總名。南史、徐勉傳「聚二石移一果、雜以花一一」〇くさき、草木の總名。詩、小雅「山有二嘉一一、維栗維梅」

【犬】ケン 草にて作れる犬。朝野僉載「徐湛伯爲レ文、多變易求レ新、以二狗爲一一、竹馬爲二騶騎一」

【卅】シフ 艸部 よそ、四十。

【卐】世(一部四畫)に同じ マン 圖

〇まんじ、佛書に用ふる萬の字。華嚴音義「一音之爲レ萬、謂二吉祥萬德之所一レ集也」〇圖一巴ハンエは雪の舞ひつつ降る形容。

五畫

【犮】ハツ 叔(又部六畫)の俗字。

六畫

【協】ケフ 艸部

〇かなふ、あはす(合)〇やはらぐ(和)〇つきしたがふ(服從)書、微子之命「下民祇一一」〇輔助タスクする。

【協韻】キョウイン 互に通じ合ふ詩の韻。滄浪詩話「楚辭及選詩、多用二一一一」〓叶韻。

【協諧】キョウカイ かなひやはらぐ。宋史、樂志「必使二八音一一、歌者從容而能永二其言一」

【協諧契約】キョウカイケイヤク 債權者と破産者との間に結ぶ和解約束、裁判所の許可を得て債務又は債權の一部を棄てて破産處分を落著せしむる一法。

【協合】キョウガフ やはらぎあふ。禮記、疏「天地一一、而生二萬物一」

【協洽】キョウカフ 十二支の未の異名。爾雅「太歲在レ未、曰二一一一」

【協議】キョウギ はなしあひ、相談。宋史、禮志「溥率同詞、指神一一」

【協贊】キョウサン 相うやまひて心をあはせる。書、皐陶謨「一一和衷哉」

【協合】ケフガフ 會員の協同一致によりて設立する會。

【協契】ケフケイ 心をあはせて、相ちぎる。晉書、簡文帝紀「皇后錫ノ璽、一一斷ノ金」

【協賛】ケフサン 力を合せてたすける「臨會ノ一一」蜀志、來敏傳「竝能一二大將軍姜維一」‖協扶・協和賛襲。

【協心】ケフシン 心をあはす。書經「三后一一、同庶二于道一」

【協商】ケフシャウ 協議してとりはからふこと、さうだんする。

【協從】ケフジウ かなひしたがふ。陸倕、銘「鑑形一一、人祇攸應」

【協奏】ケフソウ 種種の樂器を合せかなづ。宋史、樂志「簫簧一一、鼗鼓弭拊」‖合奏。

【協定】ケフテイ 協議して決定する、相談の上にてきめる。

【協定稅率】ケフテイゼイリツ 國家が或る貨物に課する關稅に就き、特に他の國と協定せし稅率。

【協同】ケフドウ 力をあはす。阮籍、詠「内外一一」

【協比】ケフヒ やはらぎしたしむ。左傳「詩云一二其隣二昏姻孔云」

【協扶】ケフフ 力をあはせてたすける。宋史、樂章「天人一一、一統有ノ慶」‖協賛。

【協贊】ケフサン やはらぎむつぶ(和親)北史、王慈傳「朝廷一一、遐邇歸ノ心」

【協約】ケフヤク 雙方の利害關係によりて彼此協商して定めたる約束、國際にも個人間にも皆これあり。

【協力】ケフリョク ちからをあはせる。‖戮力

【協和】ケフワ かなふ、やはらぐ、和合する。書、堯典「一一萬邦」

【卅】

卅(十部四畫)に同じ。

【卒】

㊀ ソツ・ソチ 質 月 本は俗字

㊁ シュツ

㊀しもべ、やっこ(隷人・僕)「從一」〇下級の軍兵「兵一」〇軍隊。〇周代の制、平民百人をいふ。周禮、小司徒「五人爲伍、五伍爲兩、四兩爲一」〇むら、民戸三百ある邑。齊語「三十家爲邑、邑有司、十邑爲一、一有帥」〇あわてる(匆遽)「倉一」〇にはか(暴急)吳子「一遇敵人」にはかの出來事。漢書、辛慶忌傳「應一」㊁をはる、をふ(終)〇すむ、やむ(已)〇つく(盡)大夫の死をいふ。〇つひに(竟)

【卒去】ソツキョ 〇大夫の死をいふ。卒の正音はシュツ〇國五位以上三位以下の人の死をいふ。

【卒遽】ソツキョ にはか。漢書「御史大夫一一不レ能二詳知一」‖急遽。

【卒業】ソツゲフ 成る事業ををはる。司馬相如、難二蜀父老一「百姓力屈、恐不レ能レ一」‖畢業。

【卒伍】ソツゴ 〇庶人の編制。周禮、地官、小司徒「乃會二萬民之一一而用レ之、五人爲レ伍、五伍爲レ兩、四兩爲レ卒」〇民籍。史、項羽紀「願賜二骸骨一、歸二一一一」

【卒乘】ソツジョウ 歩兵を卒といひ、車戰の兵を乘といふ。左傳、元「繕二甲兵一、具二一一一」

【卒然】ソツゼン にはかなる貌。孟、梁惠王「一一問曰、天下惡乎定」‖卒爾・率爾。

【卒卒】ソツソツ あわててせかせかとおちつかざる貌。漢書、司馬遷傳「一一無二須臾之閒一」黄庭堅詩「北門一部會、塵埃人一一」‖猝卒。

【卒倒】ソツタウ にはかにたふれる、にはかにめをまはす。卒然發倒する病。‖卒僵。

【卒中】ソツチウ 卒中風の略、にはかに中風を起して死する病、血が腦に鬱結ケツして腦膜の破裂する病。‖腦溢血

【卒徒】ソツト 隨從の者。莊子「夫具レ舟者、必量二卒徒一而後發焉」

【卒部婆】ソツブバ 梵語、佛舍利を安置する高塔、廟・方墳・高顯などと譯す。木石等にて地水火風空の五層の高塔を作る、今の五重の塔。涅槃經「一見二一一一、永離二三惡道一、何況遊立者、決定生二安樂一」‖卒堵婆・率都婆・塔婆。

【卓】

タク 覺

〇たかし(高)「一見」「一識」高く立つ貌「一立」〇こゆ(越)すぐれる(殊)〇つくる(几案)今、桌に作る。

【卓異】タクイ 衆にすぐれてことなり。漢書、宣帝紀「恩惠一一」‖卓絶。

【卓像】タクザウ すぐれてえらし。吳志「戴二孫烈之一體二一一之才一」

【卓逸】タクイツ すぐれてひいでる。又、其の者。蔡邕文「才藝百行、一一不レ羣」‖秀逸・卓絶。

【卓越】タクエツ すぐれてこえる。晉書「州郡有二貢俊之舉一、猶未レ獲二出羣一一之人一」‖超絶。

【卓行】タクカウ すぐれて高きおこなひ。漢書、張去病傳「一一珠遠」

【卓爾】タクジ 能は異、言行などの高くすぐれて、衆人に異れる義。後漢書「此其言必有二一一切至當一聖心一者ム」

【卓冠】タククワン 高くぬきんでる。後漢書「一二一古人一當世實レ哀」

【卓見】タクケン すぐれたる見識。すぐれたるかんがへ。‖卓識。
【卓午】タクゴ まひる。卓は高なり。日高き處に至るなり。王士禛詩「蜂聲滿院日――」‖正午。
【卓子】シタク つくゑ。子は助字。
【卓犖】タクシン すぐれたる貌。論、子罕「如二有レ所レ立―一」
【卓錫】タクシャク 錫杖を卓立する、遊行の僧が留まる義。一統志「大慶嶺雲封寺東泉、自二石穴一湧出、甘洌可レ愛、相傳大鑒禪師得レ法歸レ南、―二―于此一此因名二―一泉一」
【卓珠】タクシュ すぐれる。韓愈文「功緒―一、偃療循レ業」‖卓絶。卓異。
【卓絶】タクゼツ すぐれてひいでる。晉書、孫楚傳「才藻―一、爽邁不羣」‖卓越。卓殊。
【卓然】タクゼン すぐれたる貌。漢書、成帝紀「使二―一可レ觀」‖卓卓。卓爾。
【卓卓】タクタク 高くたつ貌、特立の貌。文心彫龍「孔氏―一、信含二異氣一」
【卓犖】タクラク 高く遠き貌。李漢、集昌黎文序「汗瀾―一」
【卓拔】タクバツ すぐれてぬきんでる。‖卓絶。
【卓文君】タクブンクン 人名、漢の蜀郡臨卬の富人卓王孫の女なり、新に寡して音を好む、司馬相如客と其の家に至る、酒酣にして琴を鼓し、琴心を以て之を挑む、文君心に悦んで之を好みし、夜亡げて相如に奔る（漢書、司馬相如傳）
【卓茂】タクモ 後漢の南陽宛の人、平帝の時、密の令と爲り敎化大いに行はる、光武徵して太傅と爲す。
【卓犖】タクラク 高くぬきでる。晉書、郗超傳「――不羣、有二曠世之度一」‖超越・殊絶・絶異。
【卓躒】タクラク 前條に同じ。孔融文「英才―一」

【卑】ヒ 支 紙

㊀ひくし（下・低）中庸「如二登高必自レ―一」〇いやし（賤）〇いやしむ、人を見くだす。〇いやしくす、己をへりくだる。㊁しむ、せしむ、前、宥坐「―民不レ迷」‖俾。

同訓異字 卑・賤・陋・俚・鄙・野等の別は賤（貝部八畫）の條を見よ。〇卑・低・矮等の別は低（人部五畫）の條を見よ。

【卑汙】ヒオ 〇いやしみけがす。史、日者傳「今何以―二―長者一」〇ひくくいやしい。下賤。
【卑行】ヒカウ 己よりめしたの親類。目上の親類を尊行といふの對。禮林玉露「此關查與二其親戚一―一也」‖卑屬。
【卑近】ヒキン ひくくしてちかし。陸游詩「學不レ超二―一、人誰非二聖賢一」
【卑屈】ヒクツ 心がいやしくいぢけてゐる。
【卑官】ヒクワン ひくき官職。韓愈詩「判司―一不レ堪レ說、未レ免捶楚塵埃間」
【卑下】ヒカ 〇おのれをひくくし人にくだる、謙遜（ケンソン）する。漢書、高帝紀「―二―士卒一」
【卑劇】ヒゲキ 官がひくくして務がいそがはし。錢起詩「始憐寧二―一、宵眠亦有レ公」
【卑快】ヒクワイ 心いやしく氣おくれがする。‖臆病。
【卑辭】ヒジ ことばをひくくして、謙遜（ケンソン）する。史記「齊懼必レ―レ重レ幣以事レ楚」
【卑濕】ヒシツ ひくくしてうるほふ。高燥の反對。後漢書「――暑熱」
【卑人】ヒジン 心いやしき人。漢書「腐木不レ可二以爲一レ柱、―一不レ可二以爲一レ主」‖賤人。
【卑猜】ヒサイ ひくきかき。尸子「―一來レ羣、榮辱由レ中」‖姪嫉。
【卑濕】ヒシツ 地ひくくしてむし暑し。歐陽修詩「地氣尤―一」
【卑陋】ヒロウ 心にはづる貌。莊、天地「子貢―一失レ色、項項然不二自得一」
【卑淺】ヒセン いやしくあさはか。晉墾文「末世之―一、以二先王之道一爲二迂遠而難レ遵」
【卑賤】ヒセン 身分ひくくいやし。韓詩外傳「―一貧窮、非二士之恥一也」
【卑俗】ヒゾク 下品にしていやし。
【卑側】ヒソク いやし。雲笈七籤「欲レ無二―一媚悅之巧一者希矣」‖卑陋。
【卑屬】ヒゾク 己より目下の親族。尊族の對。家禮儀節「―一謂二兄弟子孫一」‖卑行。
【卑秩】ヒチツ ひくき官職。歐陽修詩「辛勤慙二巧宦一、窮賤守―一」
【卑恢】ヒイ 身をひくくして（へつらふ。晉書、石崇傳「嚴城君每レ出、崇除二車路左一、望レ塵而拜、其―一如レ此」
【卑溼】ヒシツ ひくくやせたる土地。後漢書「江南―一之域」
【卑鄙】ヒヒ いやし。諸葛亮表「先帝不レ以二臣―一」
【卑劣】ヒレツ いやしくしておとる。又行がいやしい。‖陋劣。卑陋。
【卑陋】ヒロウ 〇いやしくせまし。宋史「第宅―一、才數十楹」〇心ひくくいやし、下品。‖卑劣。
【卑狼】ヒラウ いやしくみだりがはし。魏志「自云―一不レ獲レ處二人間一」

【南】ナン 七畫 十

〇みなみ。北の反對の方位、午の方。〇みなみす、南方へ向ひて行く。〇雅樂の名。詩、小雅「以雅以―」〇和南は僧家にて合掌して禮を作すをいふ。

【南無】ナム 圖梵生を助けたまへと佛に

斷る謂、救我・歸命頂禮・眞實などと譯す。釋氏要覽「唯識鈔云、梵語ー一、此翻爲ノ名、卽是歸趣之義也、或云二那摩或曼謨、皆梵音訛也」

【南威】ナンイ　古の美人の名、南之威ともいふ、之は助字。戰國魏策「晉文公得二南之威一三日不ノ朝、三日不ノ聽ノ朝、遂推二南之威一而遠ノ之曰、後世必有下以ノ色亡二其國一者上

【南越】ナンエツ　越の國の稱。南方に在る故。洪範五行傳「蜮如ノ鼈三足、生二于南越一、南越婦人多淫、故其地多ノ蜮、淫女或亂之氣所ノ生也」〓南蠻。

【南蠻】ナンバン　前條に同じ。

【南交】ナンカウ　支那の南方、交趾の地。今の安南。書、堯典「申命二羲叔一宅二ー一」

【南行北走】ナンカウホクソウ　いそがはしく南北に奔走する。易林「ー一、延ノ頸望ノ禽」

【南岳】ナンガク　五岳の一、南方に在る衡山の別名。書、舜典「至二于ー一」〓南嶽。

【南客】ナンカク　〇南方の旅人。歎陳詩「偶宿俱ー一」〇くじゃくの異名。楊文公談苑「孔雀曰二ー一」

【南柯夢】ナンカノユメ　淳于棼の故事によりて夢の喩に用ふ。淳于棼の宅の南に古槐樹あり、棼醉うて、其の下に臥す、夢に大槐安國に入りて王に見ゆ、王曰く、吾南柯郡、政事治まらず、卿を屈して守となさんと、棼那に至り、凡そ二十年にして使者送り歸らしむ、遂に寤む、古槐下の穴を尋ぬるに一大蟻あり、卽ち王なり、又一穴あり、直に南枝に上る、卽ち南柯郡なりと〔異聞集〕

【南洽北暢】ナンカフホクチヤウ　南にひろまり北にのびる、天子の恩威が四方に被る義。終軍、白麟奇木對「是澤南洽而威北暢也」

【南橘北枳】ナンキツホクキ　淮南のたちばなを淮北に移植すればからたちに變はる。人も其居る所の風俗によりて善に遷り惡に化する喩。晏子春秋「橘生二淮南一則爲ノ橘、生二淮北一則爲ノ枳、葉徒相似、其實味不ノ同、所二以然一者、何、水土異也」

【南京】ナンキン　〇支那江寧府卽ち金陵の別稱、三國吳以下數國及明の首都たりし地。〇國支那產の意に用ふ「ー一織」「ー一米」

【南金】ナンキン　南方の荊州・揚州等の地より出る黃金にして質の最も美なるもの。詩、魯頌「元龜象齒、大路ー一」

【南極】ナンキヨク　〇地球の南のはて。〇南極に在る老人星〔史、天官書〕杜甫詩「ー一老人主二壽昌一」

【南薰】ナンクン　みなみの風。又、世のよく治るを南風之薰といふ。家語、樂「南風之薰兮、可三以解二吾民之慍一兮」

【南瓜】ナンクワ　かぼちや、たうなす。

【南宗】ナンシウ　南宗の畫風、文人畫。

【南華眞經】ナンクワシンケイ　莊子〔書名〕の別名。唐書、藝文志「天寶元年詔號二莊子一爲ー一、列子爲二冲虛眞經一」〓南華經。

【南華之悔】ナンクワノクヒ　上官に忤ひて、試驗に及第することを得ざりし故事。唐詩紀事「令狐綯爲ノ相、以二書事一問二温庭筠一、庭筠曰、事出二南華經一、非二辭書一也、綯相公聖理之暇、時宜ノ覽ノ古、綯怒、卒不ノ得ノ第、庭筠有ノ詩曰、因知此恨人多積、悔讀二南華第二篇一」

【南冠】ナンクワン　南方に在る楚國人の冠の稱。又、楚人鍾儀がー一して囚はれし故事によりて囚虜の義とす。左、成、七「晉侯觀二于軍府一、見二鍾儀一、問ノ之曰、ー一而繫者誰也、有司對曰、鄭人所ノ獻楚囚也」駱賓王詩「自應ノ迷二北鬼一、誰肯問二ー一」

【南阮】ナンゲン　晉の阮咸、道の南に居る、故にいふ。晉書、阮咸傳「咸與ノ籍居二道南一、諸阮居二道北一、北阮富、而ー一貧」

【南廡】ナンブ　南向のまど。陶潛、歸去來辭「倚ー一以寄ノ傲、審二容ノ膝之易一安」〓南窗。

【南山】ナンザン　終南山の略稱。周の都豐鎬の南にあるが故。詩、小雅「節彼ー一、維石巖巖」

【南山之壽】ナンザンノコトブキ　長壽を祝する辭。南山は終南山にて、周の都なりし豐鎬の南に在り。詩、小雅、天保「如二月之恆一、如二日之升一、如二ー一之不ノ崩」

【南司】ナンシ　官名、御史中丞をいふ。

【南史】ナンシ　唐の李延壽撰す、延壽、宋・齊・梁・陳の正史に就き改刪補修して、南朝四代百七十年間の事を記す、本紀十卷・列傳七十卷、凡て八十卷。

【南至】ナンシ　冬至をいふ。每年十二月二十二日頃。太陽が南に廻りて冬至點に達する時。左、僖、五「春王正月、辛亥朔、日ー一」

【南枝】ナンシ　南方にのびし枝、多く梅に用ふ。白帖、大庾嶺上梅、ー一落、北枝開」

【南薰】ナンクン　南風なり、夏の涼しき風、歷は涼風。陶潛詩「蕭寥五月中、清朝起ー一」

【南之威】ナンシノイ　南威を見よ。

【南人】ナンジン　〇南方の國の人。論、子路「ー一有ノ言、人而無ノ恆、不ノ可二以作一巫醫一」〇元代、南宋の人を指していふ。

【南宗】ナンシウ　〇禪宗は達磨より五世にして南北二派に分る、ー一は、慧能を祖とし、北宗は神秀を祖とす。〇唐の王維を畫とする畫風。

【南齊書】ナンセイショ　梁の蕭子顯撰す、本紀八卷・志十一卷・列傳四十卷、凡て五十九卷。〓齊書。

【南船北馬】ナンセンホクバ 支那の南方を旅行するには船を便とし、北方は馬を便とす、よりて忙しくかけまはることにいふ。

【南詔】ナンセウ 唐の初、雲南の蠻族六部に分かる、之を六詔といふ、詔とは蠻語王の謂、蒙舎詔最南に在り、故に又一一といふ。

【南殿】ナンデン 圖紫宸殿の別名。

【南天燭】ナンテンショク なんてん。本草綱目「本名南燭、俗謂二之——一、木而似レ竹」=南天竹。

【南斗】ナント 南方の星宿の名、其の形斗に似たり。三輔黄圖「長安故城、城南爲二一一一形一、城北爲二北斗形一、故號二斗城一」

【南都】ナント 〇今の河南省南陽縣、後漢の光武帝の生長せし地、洛京の南に在り、故に一一といふ、張衡一一賦を作る。〇圖奈良の別稱。南方に在る古き都なるが故。

【南方之強】ナンパウノキョウ 含忍の力を以て人に勝つをいふ、即ち君子の勇なり。中庸「子路問レ強、子曰、——與、北方之強與、抑而強與、寛柔以教、不レ報二無道一、——也、君子居レ之、荘二金革一、死而不レ厭、北方之強也、而強者居レ之」

【南八男兒】ナンパチダンジ 南八とは南斉雲を斥す、八は其の字行なり。韓愈、張中丞傳後序「——死耳」とあるによりて、轉じて四字を連續して大丈夫の義として用ふ。

【南望】ナンバウ 〇南方のえびす。孟、滕文公「今也一一缺舌之人、非二先王之道一」〇圖葡萄牙人・西班牙人等の呂宋ルソン地方より本邦に入り來りしものの稱、轉じて外國の義に用ふ「一一鎖」

【南氷洋】ナンヒョウヨウ 五大洋の一、南極に近く、終年氷結す。

【南風不レ競】ナンプウハズ 〇南風は南方の詩なり、其の音微弱にして振はず、以て南方の國の勢力衰へて振はざるに比す。左、襄十八「晉人聞レ有二楚師一、師曠曰、不レ害、吾驟歌二北風一、又歌二南風一、——多二死聲一、楚必無レ功」〇轉じて我が國にて南朝の勢の振はざるに借り用ふ。

【南畝】ナンポ 南方の日當りよきはたけ。詩、豳風「同二我婦子一、饁二彼一一一、田畯至レ喜」

【南北司】ナンボクシ 唐代、宦官グワンを北司、內閣を南司といひし總稱。

【南北朝】ナンボクテウ 〇東晉の末より陳の一統に至るまで南北對立百五十年間の稱。即ち宋・齊・梁・陳の四朝が建康に都して江南の地を領せしを南朝といひ、之に對して江北の諸國が後魏に合併せられ、更に分裂して後周に至るを北朝といふ。〇圖延元元年、後醍醐天皇、吉野に遷幸したまふや、足利尊氏は光明天皇を京師に擁立せり、よりて吉野を南朝、京師を北朝と稱す、爾後五十七年、後小松天皇に至りて南北一統となる。

【南叉】ナンサ みなみの方に在る大海、其は滇。莊、逍遙遊「一一者天池也」

【南滇】ナンテン 前條に同じ。

【南面】ナンメン 天子のくらゐ、天子の座は南の陽に向ふが故にいふ。北面の對。易、說卦傳「聖人一一而聽、嚮レ明而治」

【南面稱レ孤】ナンメンショウコ 人君となる義、孤は王公などの謙稱「史、荊燕世家」

【南面百城】ナンメンヒャクジョウ 南面は人君の位、人君となりて百城を領する富貴の榮をいふ。北史、李謐傳「謐二集諸經一、廣校二異同一(中略)每曰、丈夫擁二書萬卷一、何假二——一」

【南陽縣菊水】ナンヤウケンキクスヰ 河南省南陽縣に出る水の名、此の水を飲めば、長壽を得るといふ。風俗通「南陽縣有二甘谷一、谷中水甘味、上有二大菊一、落レ水從レ山流下、得二其流液一、谷中人家飲二此水一、上壽百二三十、其中百餘歲、七八十則爲レ夭」

【南呂】ナンリョ 〇十二律の一、陰暦八月に配す、よりて陰暦八月の異名とす。南は任、呂は拒、陽が盛にして衆穢を妊生し、陰が之を拒ぎて漸く秋氣に感ぜしむるをいふ。

【南錢】ナンセン 圖昔の貨幣二朱銀の稱、銀一兩の八分の一。錢は瓦貿の銀。

【南樓之會】ナンロウノクワイ 晉の庾亮が武昌の南樓に登りて殷浩の徒と秋夜談咏したる故事によりて觀月の宴の義とす。晉書、庾亮傳「在二武昌一、諸佐吏殷浩之徒、乘二秋夜一往共登二南樓一、俄而不レ覺亮至、諸人將二起避一レ之、亮徐曰、諸君少住、老子於二此興復不レ淺、便據二胡牀一、與二浩等一談詠竟レ坐」

十 博 ハク 書畫 第

〇ひろし(廣)ひろさ、ひろむ。論「子罕「一我以レ文」〇あまねし(普)多し。史、伯夷傳「載籍極一一」〇學問に通ずる、多聞。〇大いなり。〇かふ(貿易)〇とる(取)〇ばくち、すごろく(局戲)又それを爲す。

【博字】 十に从ひ甫寸に从ふ、俗に愽・塼に作るは竝に非なり。

【同訓異義】 博・廣・闊・弘・汎等の訓は廣(广部十一畫)の條を見よ。

【博愛】ハクアイ ひろく衆を愛する。周書、注「一一二於人一爲レ仁」韓愈、原道「一一之謂レ仁、行而宜レ之之謂レ義」=汎愛。

【博依】ハクイ 詩はひろく物にかこつけて己の志を言ふ、轉じて詩をいふ。禮、學記「不レ學二一一一、不レ能レ安

ノ詩」

【博引旁證】ハクインバウシヨウ 事を論ずるに廣く類例を擧げあまねくよりどころを示す。‖考證該博。

【博奕】ハクエキ 博は局戲ゴクギ奕は圍碁。論、陽貨「不レ有二ー者一乎、爲レ之猶賢乎已」轉じて俗にばくち、賭博の義に用ふ。‖一六 丁中・楞嚴ハウ 袁宏遵。

【博雅】ハクガ 學博く道正し。又、其の人。王逸文「昔淮南王安、ー好レ古」

【博學】ハクガク ひろく學ぶ。又其の人。論、子罕「大哉孔子、ー而無レ所レ成レ名」‖博習。

【博洽】ハクカフ ひろくあまねし。後漢書「京師士大夫、成推二其ー一」

【博戲】ハクギ すごろくのあそび。論衡「男子不レ讀レ經、則有二ー之心一」‖博劇。

【博究】ハクキウ ひろくきはめる。晉書、鄭沖傳「ー二儒術及百家之言一」

【博局】ハクキヨク すごろく、圍碁などのばん、碁盤の類。漢書、吳王濞傳、皇太子引二ー一提二吳太子一殺レ之」

【博覽】ハクラン ひろく見る。魏志「但ー二書傳一」‖博覽。

【博劇】ハクゲキ ばくちのたはれ。顧雲詩「ー一或設レ奕」‖博戲。

【博言學】ハクゲンガク ひろく各國の言語に通じ、言語の起原發達變遷を比較研究する科學。‖言語學。

【博塞】ハクサイ 雙六ハクの杜甫詩「相與ー一賃二歌娘一」注「ー一賭博爲レ樂也」‖博六・六博・局戲。

【博濟】ハクサイ ひろくすくふ。魏志「成以ー一、加二於天下一」‖廣濟。

【博搜】ハクサウ ひろくさがす。丁詡、大蒐賦「ー一二駿書一廣召二文英一」

【博山】ハクサン 〇山東省青州府に在る山名。〇飾器の上に山の形を刻して飾とするもの「ー一爐」「ー一鑪」

【博山爐】ハクサンロ 香爐の名。考古圖「香爐象二海中博山一下盤貯レ湯、使二潤氣蒸一香、以象二海之四環一」

【博施】ハクシ 〇ひろくおよぶ、ひろく行きわたる。荀子「風雨ー一」〇ひろくほどこす。論、雍也「ー一於民一而能濟レ衆」

【博識】ハクシキ ひろく物事をしる、又其の人。子韋子「陰武子明審以ー一、晉國之爲老也」

【博習】ハクシフ ひろく學藝をならふ。禮、學記「五年視二ー一親レ師」‖博學。

【博詢】ハクジユン 廣く問ひはかる、ひろく人の意見を聞く。後漢書、陳元傳「ー一可否一」‖博咨。

【博綜】ハクソウ ひろくすべをさめる。晉書、王導傳「ー一萬機、不レ可二一日有レ曠」

【博徒】ハクト ばくちうち。史、信陵君傳「毛公藏二于ー一一」

【博物】ハクブツ 〇ものしり、博識の人。左、昭、元「晉公聞二子產之言一曰、ー一君子也」〇動物・植物・鑛物學の總稱。

【博物志】ハクブツシ 十卷、晉本晉の張華撰と題するも、實は原本は散佚して傳はらず。後人、張華の遺文を採りて編を成し、又、他說を雜取して之に附益せしなり。

【博物新編】ハクブツシンペン 三集、英國の學士合信ホワイト著す、一集は、地氣論・熱論・水質論・光論・電氣論、二集は、天文略論・地球論、三集は鳥獸略論を載す。

【博聞】ハクブン ひろく聞き知る。史、屈原傳「ー一彊志、明二於治亂一嫺二於辭令一」‖博覽。

【博文約禮】ハクブンヤクレイ ひろく文を學びて事理を究め之をしめくくるに禮を以てすれば、正しき道に背くことなしとの教。論、雍也「子曰、君子、博學二於文一、約レ之以レ禮、亦可二以弗レ畔矣」

【博辯】ハクベン 辯論の博く大なる義。韓愈文「奇能ー一」

【博約】ハクヤク 博文約禮をつづめたる語。

【博勞】ハクラウ 〇鳥の名、もず。孟、滕文公「缺舌」注「缺ー一也、惡聲之鳥」‖鵙・伯勞。〇ハクラウ古よく鳥を見分けたる名人。‖伯樂。〇轉じて牛馬を賣買する商人。俗に馬喰とも書く。

【舶南李隨筆】ハクナンリズイヒツ 俗訓レ互二市馬一曰二ー一、初余不レ詳二其義一、偶閱二韻書一、伯樂一作二ー一、乃知互市之際、能相レ馬者、或稱之曰二ー一、後訛爲二互市之義一」

【博浪沙】ハクラウサ 河南省陽武縣の南に在る地名、張良、力士をして椎の始皇を狙撃せしめたる所。

【博覽】ハクラン ひろく書物をみる。廣く古今の事物を知る。漢書、成帝紀贊「ー一古今、容二受直辭一」‖博聞・博觀。

【博覽會】ハクランクワイ 農工等の出品を陳列して衆覽に供し優劣を比較して勤工の資とするもの。‖賽會。

【博士】ハカセ 〇數學を掌る官。漢書、百官志「ー一、秦官、掌レ通二古今一、秩比二六百石一、員多至二數十人一、武帝建元五年初置二五經ー一一」〇國古、大學、又國學の教官、明經・明法・文章・音・書・算の諸ー一に分つ。〇ハカセ現制にて專門の學術に熟達して、學位令の規定に基きて授くる稱號。轉じて廣く博學者、ものしりの義とす。

卜部

【卜】ボク 屋

〇うらなひ、うらなふ、龜の甲を灼き、その縱橫のわれ目を見て、吉凶を判斷する。〇えらぶ、選定する。史、周紀「成王使二周公一ー一居」うらなひて定むるが故。〇あたふ（予）たまふ

（賜）詩、小雅「君曰ー爾、萬壽無疆」

【卜居】ボクキョ　居所をうらなひさだめる。字解を見よ。

【卜相】ボクソウ　うらなひと、人相・家相見と。唐書、方技傳序「凡推步・ー！醫巧皆技也」

【卜祀】ボクシ　吉凶をうらなひて祭る。宋史「三年ー一、百世承レ基」

【卜老】ボクラウ　吉凶をうらなふひと。‖占者・卜師・易者。

【卜商】ボクシャウ　字は子夏、衛の人、孔子の弟子、孔子より少きこと四十四歳、文學に長ず。

【卜筮】ボクゼイ　卜は龜甲をやき、筮はめどぎを用ひてうらなふ。曲禮「龜爲レ卜、筴爲レ筮」‖占筮。

【卜占】ボクセン　うらなひ。占は兆ッを視、又は數を推してうらなふ。

【卜築】ボクチク　地を擇びて家屋を構へる。蘇軾詩「青山舊在古城隅、萬里歸來ー一初」

【卜定】ボクテイ　うらなひて事のよしあしを判斷する。

【卜禘】ボクテイ　天子が五年目に祖先の靈を合祭する禘の祭の日をうらなひさだめる。禮、學記「未レ一レ、不レ視レ學、游二其志一也」

【卜以決レ疑不レ疑何卜】ボクヰケツギフギカボク　卜筮はもと疑を判せんが爲めなり、疑なければ卜筮を用ふるには及ばず。左、桓十一「莫敖曰、卜之、對曰、ー、遂敗二鄧師於蒲騷一」

【卜鄰】ボクリン　住居を定むるに當り、先づ其の鄰近の善惡をうらなひ定むる義。左、昭三「非二宅是卜、惟鄰是卜、二三子先ー レ一矣」杜甫詩「李邕求レ識レ面、王翰願レ一レ」

【卜部】ボクブ　國古、神祇官に隷屬して占卜の事を司りし職。

卟 畫

クヮン　諫　卵に同じ

○つのがみ、あけまき。○總角の貌。○をさなし（幼稚）

卞 畫

㊀ヘン・ベン　銑　㊁ハン・ベン　㒳

㊀さわがし（躁疾）○のり（法）○かはる（變）㊁たのしむ（樂）‖般。

【卞急】ベンキフ　さわがしくいらだつ、性急。左、定三「鄆莊公ー一而好レ潔」‖躁疾。

【卞和】ベンクワ　○周の時の人、玉璞を得て厲王に獻ぜしに、王以て詐と爲し、其の左足を刖ぜしに、又以て詐と爲し、其の右足を刖る、文王位に卽くに及び、王、王人をして之を琢かしめたるに果して寶玉を得たりといふ。韓非、卞和「楚人和氏、得二玉璞一楚山中一」‖和氏之璧。○轉じて寶玉をいふ。

【卞隨】ベンスイ　古の高士。莊、讓王「湯遂與二伊尹一伐レ桀克レ之、以讓二ー一」

占 畫

㊀セン　豔　㊁セン　豔

㊀うらなひ、うらなふ、きざしを視又は數を推して事物の吉凶を判斷する。○うかがふ（候）○みる（視）○はかる（隱度）○とふ（問）○ためす（驗）㊁たもつ（有・保）韓愈、進學解「一小善者率以錄」○しむ、據る、領する。王安石詩「坐ー白鷗沙」

【占卜】センボク　卜に從ふ。

【占有】センイウ　しめたもつ、自己の所有とする「一一權」‖占領。

【占據】センキョ　土地を得てそこにたてこもる。‖割據。

【占候】センコウ　雲氣をうかがひて吉凶を知る。後漢書、朗顗傳「能望レ氣ー二吉凶一」

【占術】センジュツ　うらなひのわざ。後漢書「文公以二ー一聽レ名」

【占書】センショ　うらなひの事を記せる書。晉書「太守陰澹從來二ー一」

【占筮】センゼイ　うらなふ。筮は蓍ギにてうらなふ。北史、楊愔傳「會稽二ー一、大小必中」‖卜筮。

【占夢】センム　うばひて我が有とする。舊約創傳「一二鄰里先入田地一」

【占兆】センテウ　うらなひのきざし。龜甲のわれめ又は筮竹の數にあらはれし吉凶のうらかた。

【占田】センデン　田地を占有する。晉書、食貨志「男子一人、レ一七十畝、女子三十畝」

【占領】センリャウ　取りて、我が有とする。一定の地に據りてたもち有する。‖占有。

卣 畫

イウ　尤　有

たる（酒）酒を盛る器。大樽を尊、中樽を一、小樽を罍といふ。詩、大雅「秬鬯一一」

卦 畫

クヮイ　卦　通音　クワ・ケ

うらかた、易道にて六本の算木を種種に配合してあらはれたる兆象によりて吉凶を判斷する。易、繫辭「四象生八一」八一は乾・坎・艮・震・巽・離・坤・兌。

【卦筮】クヮイゼイ　うらなひ。漢書、儒林傳「治レ易爲レ郎、至二太子一長二子一一」

【卦兆】ケイチョウ 卜筮のうらかた。淮南子「蓍二一一、察二吉凶一」

卩部

【卩】セツ 厙 節(竹部九畫)の古字

○ふし。○しるし、てがた、わりふ。

【巳】卩(前條)に同じ。危・犯・泥・卷・範等の字之に从ふ。

二畫

【卯】㊀カウ・ガウ 豪 ㊁ギャウ・ガウ 巧

㊀われ(我)詩、鄭風「一須二我友一」○たかし。‖昂。たかくなる。漢書、食貨志「萬物一貴」○意氣があがる(激厲)司馬相如、長門賦「意慷慨而自一」㊁あふぐ。‖仰。○のぞむ(望)○ねがふ(願)○むかふ(向)○まつ(待)

三畫

【卬】キョウ 邛(邑部三畫)の譌字。

【卮】シ 支 巵に同じ

○さかづき、酒漿を盛る器、四升を受くる大杯「玉一」○故器、一ぱい入れば傾き、空になるとあふむくしかけに造りし酒器。轉じて、物に因り變に隨ふ、臨機應變の義に用ふ。莊、寓言「一言日出」○ぺに。史、貨殖傳「巴蜀地饒二一脂」‖煙支・臙脂。

【卮言】ゲン 臨機應變の巧なることば。字解を見よ。一說、さかづきの酒の如く味ある言。又、一說に卮は支、支離してとりとめなきことば。莊、寓言「一一日出、和以二天倪一」‖巵言。

【卮子】シ 梔子(木部)に同じ。

【卮酒】シュ さかづきの酒。史、項羽紀「賜二之一一」‖巵酒。

【卯】ボウ 四 或は酉に作る、俗に夘に作るは非

○う、十二支の第四位。‖單闕。○時刻の名、午前六時。○方角の名、東。○をかす(冒)○おふ、しげる(茂)

【卯君】クン 卯の年生の人。蘇軾、子由生日詩「東坡持二是語一一一」注「一子由也、子由卯年生、故云」

【卯酒】シュ 朝飲む酒、あさざけ。白居易詩、心頭一一未レ消時」‖卯時酒。

【卯飯】ハン 朝めし。王炎詩「書生一一動及レ午、盍縁菜糕頻自煮」‖早飯。

【卯簿】ボ 官署の出勤簿。卯の刻即ち今の午前六時に出勤する規定なりしが故。

四畫

【印】イン 震

○はん、いんぎょう、おして、しるし(信)木或は金石に文字を刻して證信とするもの。○書畫を版にする「一刷」○痕跡アトをつける。○一度イチドは國名、古、身毒又、天竺と稱す、亞細亞洲南部の最大半島、今、英國に屬す。○國しるし、心おぼえ、めじるし。又少し、いささか。

【印影】エイ 印を捺してうつりたる形。轉じて印形をいふ。

【印可】カ ゆるす、承認する。許可する。論語、魯侃疏「皆被二孔子一一也」‖允可・認可。

【印行】コウ 書物書畫等を刷りて世に出し行ふ。‖刊行・出版。

【印號】カウ てがた、切符。申報字典「入門一一」

【印鑑】カン ○いんかがみ、印章の見本「一一届」○關所又は役所などの門鑑、或は營業の許可を證明する鑑札の類。

【印形】ギャウ 國印材に自己の姓名又は官職の名などを彫刻して信證とするもの。‖印章。

【印矩】クイ 書畫などに印を捺すに用ふる定木、小さき曲尺の如きもの。

【印顆】カ 印形に同じ。‖印章。

【印捻】ネン 印を捺して封ずる。何遜詩「故鄉有二書信一、綴縢一一開」

【印刻】コク 文字物象を彫る。東觀餘論「但若一一一字一耳」‖彫刻。

【印材】イン 印形にする材料、木石金玉の類。黃庭堅集に「謝三王仲至惠二黃玉一一」詩あり。

【印刷】サツ 版にほりし字畫などを紙にする。夢溪筆談「一板一一」

【印紙】シ 國收稅の一法として政府より發行する切手ヲの一種、證書類に貼りて信證とするもの。支那にては印花といふ。

【印璽】ジ しるし、印形、璽は天子、諸侯の印、後世はただ天子の印のみにいふ。漢書、食貨志「賜二皁子一一與二天子一同」

【印信】シン しるし、證印。

【印章】シャウ はん、印形、章は其の文字

【漢官儀】

【印象】シャウ ○印を捺したる如く物の面に跡のつきたる形象。○意識せし外界の事物の心に生ずる感覺。

【印綬】ジュ 印は官の印章、綬は印の環を承けつなぐくみひも。史、項羽紀「項梁持二守頭一、佩二其一一一、‖印組。

【印書】ショ 板に彫りて刷りし本、すりまき。遠山清話「近時一一盛行、而

寫ノ書者往往皆士人、躬自負擔」‖印本・板本・版本。
【印祝】インシュク 圖書籍出版者が著者の檢印、即ち承認の印を請けしに對して支拂ふ金。
【印肉】インニク 圖いんを押すに用ふるにく。支那にては印色・印泥といふ。
【印判】インバン 圖印形に同じ。印判師インバンシはいんばんをほることを職業とする人。
【印板】インバン 書物などのはんぎ。‖印版。
【印譜】インプ いろいろの印影を集めたる書。舉古編「宣和——四卷」
【印本】インボン 版にすりたる書物。寫本の對。‖版本・印書。

【危】キ 支

〇あやふし(殆)あぶない、傾きて倒れかかる。安の反對。論、季氏「一而不持、顚而不扶」〇あやぶむ、不安に思ふ。疑懼する。說文「在高而懼也」〇あやふくす、害する、傷ふ。禮、儒行「有比黨而一之者」〇おつ。〇屋の棟の上。〇たかし(高)たかくす。論、憲問「一言一行」〇はげし(厲)〇うみやめ、八宿の一「一宿」

同訓異式 危・殆〇危はあぶなく、おもつかざる義、高峻の義あり、危は高きものは顚仆の慮あり、殆よりは甚つよし。易經「安而不ノ忘ノ危」〇殆はほとんどとも訓む、あぶなげありて、不安心なる義。論語「多見闕ノ殆、愼行二其餘一則寡ノ悔」

【危害】キガイ 身命をそこなふほどの災難。
【危機】キキ 危難のおこらんとするきざし。危難の由りて發動する所の機會。晉書、諸葛長民傳「貧賤常思二富貴一、富貴必賤二一一」
【危急】キキュウ さし迫りてあやふし。論、出師表「此誠二一存亡之秋也」
【危窘】キキン あやふくくるしむ。五代史「善因二一一、出二奇計一」
【危苦】キク あやふくくるしむ。史、平原君傳「家之所ノ有、盡散以饗二士、士方二一之時一、易レ錄耳」
【危懼】キク 次條に同じ。懼は懼の略字。
【危慴】キク あやぶみおそれる。書經「慄慄一一、若レ將レ隕二于深淵一」‖危怖・危惧。
【危窟】キクツ たかきそら。盧綸詩「棧道一一一」
【危險】キケン あやふくけはし、あぶなし、又要害の地。南史「以二江南一一一宜レ立二重鎭一」
【危疑】キギ あやふくたれかかる。廣信銘「松柱一一、風泉虛謂」
【危言危行】キゲンキコウ 言と行とを高くして俗に隨はず、危は高峻。論、憲問「子曰、邦有レ道——、邦無レ道危レ行言孫」
【危坐】キザ ただしくすわる、危は高なり、尻を下にして正しく坐すれば姿勢高くなるが故。史、日者傳「正一一」‖端坐。
【危棧】キサン あぶなきかけはし。元黃詩「捋レ達二危棧巖一、須下作二魚貫一行上」
【危身】キシン 禍患を避けざる義。論語「一一奉レ上、曰レ忠」
【危樹】キジュ たかきうてな。江總詩「一一引二清風一」‖危樓。
【危檣】キショウ たかきほばしら。盧綸詩「落日映二一一一歸帆向二岳陽一」‖岑樓。
【危牀】キショウ あやぶみおそれる、沈佺期詩「延レ首當レ階、神增二一一一」‖危懼。
【危砌】キセイ たかきいしだたみ。韋處厚詩「雨合飛二一一一天開卷二曉窗一」
【危然】キゼン 正しき貌。莊子「一一得二其所一」
【危殆】キタイ あやふし、殆も危なり。徐陵文「釋二羈窮途一、唯濟二一一一」
【危地】キチ あやふき所、きはどき場合。‖死地。
【危篤】キトク くるしみおぼれる。唐書「聖哲乘レ機、拯二其一一一」
【危篤】キトク 圖やまひ甚だおもし。‖瀕死。
【危難】キナン あやふきわざはひ。史、張儀傳「秦兵之攻レ楚也、一一在二三月之內一」
【危邦】キホウ ほろびかかりし國。論、泰伯「一一不レ入、亂邦不レ居」
【危微】キビ あやふくしてかすか。書、大禹謨「人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執二厥中一」
【危怖】キフ あやぶみおそれる。吳志「人居二世間一、猶二白駒過一隙、而常抱二一一一」
【危峯】キホウ 高くけはしきみね。謝靈運、山居賦「傍二一一一立二禪室一」
【危棚】キホウ 極めてたかきてすり。李商隱詩「輕レ命倚二一一一」‖危闌。
【危慄】キリツ あやぶみおそれる。易林「一一不レ安」‖危悚・危懼。
【危巓】キテン 高くけはしきみね。戴良詩「解レ鞍憩二一一一、倚レ劍望二幽壑一」
【危樓】キロウ 甚だたかきうてな。劉孝詩「大江東下峙二一一一」‖岑樓。
【見レ危致レ命】イノチヲイタス 國家の危急の場合には身命を拋ちて力を盡くす。論、子張「子張曰、士——、見レ得思レ義」憲問篇には致を授に作る。
【危若二朝露一】キハクスルコト 朝露は日を見れば忽ち乾く、以て運命の危きに迫れるに喩ふ。史、商君傳「君——、倘將欲二延レ年益レ壽乎」‖人生如二朝露一（漢書）
【危如二累卵一】キハクスルコト あやふきこと卵を累ねたるが如し。史、范雎傳「秦王之國、危二於累卵一」

五畫

【却】キャク 卻（卩部七畫）の俗字。

【卻】セウ ゼウ 通 郤（邑部五畫）とは別字 ○たかし（高）「年高德―」○美くし。

【即】ソク 卽（卩部七畫）の俗字。

【卵】㊀ラン 早 通音ラン ㊁コン 元 ○たまご。○そだてる、撫育する。左、哀十六、注「今撫育人曰『一養』言如『鳥孚』卵也」㊁うをのはらご、魚子。

【卵育】ランイク そだてる。韓愈文「鱷魚之溷淹―ニー於此」赤固其所」＝生育。

【卵形】ランケイ 鷄のたまごの如き形、楕圓の一方が少し細き形。

【卵巢】ランサウ 動物の母體の生殖器の一、卵子を産生する所。

【卵子】ランシ たまご。

【卵色天】ランショクテン 雨氣を含みて黄色を帶びたる天の色。殷增詩「小泛鴈汀畔、輕搖――」

【卵生】ランセイ 卵の形にて生るるもの、胎生に對して主として鳥類をいふ。

【卵塔】ランタフ そとば（卒塔婆）にか。陸游詩「一一空啣獸獸銘」

【卵白】ランパク たまごのしろみ。＝蛋白

【卵翼】ランヨク 鳥の卵を孵し、雛をはぐくむ如く、父母の兒を育つるをいふ。左、哀、十六「白公勝如レ卵、予翼而長レ之」＝撫育・撫育・養育。

【見レ卵求二時夜一】ケンランキウジヤ 雞の卵を見て直ちに時刻を報ぜんことを欲す、甚だ早計に過ぐるをいふ。莊、齊物「長梧子曰、女亦太早計、見レ卵而求二時夜一、見レ彈而求二鴞炙一」

【以レ卵投レ石】イラントウセキ 圓りてもろき物を以て、堅きものにあつ、物の直ちに碎くるに喩ふ。荀、議兵「以レ筦投レ鬱、以レ卵投レ石者」――以レ指撓レ湯」

六畫

【卷】キン 眞 ひさご（瓠）さかづき（觚）紙を破りて杯とせしもの。婚禮の式に用ふる酒器。禮、昏義「合レ巹」

【卻】キャク 卻（卩部七畫）に同じ。

【卷】㊀ケン・クワン 銑 ㊁ケン・クワン 霰 ㊂ケン 先 ㊃コン 阮 ○まき、古、紙なき時、竹簡に文字を書し、一舒せらるるやうに裝製す。故に書物を次第するに一一、又は第何一といひ、轉じて書册の義とす。○まがる、かがまる（曲）㊁まく。詩、邶風「我心匪席、不レ可レ一」＝捲。○をさむ（收・斂）まきをさめる。論、衞靈公「邦無二道則可一レ一而懷之」㊂まがる、かがまる（曲・屈）○ちひさし、區區。中庸「一一石之多」○つつしむ、（謹）○ねんごろ（懇）懇に通ず。○みめよし、好き貌。㊃貴人の禮服。＝衮。

【卷甲】カンカフ よろひを巻きをさめ、戰を止むるにいふ。晉書「一レ一韜旗、廢二農桑之務一」＝偃武。

【卷懷】カンクワイ まきてふところにす、己が才能を晦ます義。論、衞靈公「邦有レ道則仕、邦無レ道則可二卷而懷一之」＝韜晦。

【卷袞】カンコン ねんごろ、親切なる貌、忠勤の貌。漢書、賈捐之傳「敢昧死竭二一一一」＝懇懇。

【卷耳】カンジ 苓耳（ヲナモミ）の異名、はこべの類。詩、周南「采二采一一一不レ盈二頃筐一」箇雅「一一苓耳」注「廣雅云、葉耳形似二鼠耳一、叢生似レ鍉、臨曬疏云、四月生レ子、如二耳中璫一、或謂二之耳璫一、幽州人謂二之鉗耳一」

【卷舌】カンゼツ ○したをまく、爲歎する貌。漢書「禮官博士卷二其舌一而不レ談」李白詩「愚園莫二能和一、巴人皆一一」○星の名（漢書、劉向傳、注）

【卷丹】カンタン おにゆり、葉莖共にひめゆりに似て大きく、花は黄赤色にして黒斑あり、根は苦みを帶ぶ。

【卷土重來】カンドチョウライ 一度敗北したる者が再び非常の努力をもりかへして攻め來る。杜牧詩「江東子弟多二才俊一、――未レ可レ知」

【掩レ卷吁】エンカンク 卷を閉ぢてなげく。蘇軾詩「掩レ卷嘘長吁」

【開レ卷有レ得】カイカンユウトク 次條に同じ。宋書、陶潛傳「少年來好レ書、偶愛二閑靜一、――、欣然忘レ食」

【開レ卷有レ益】カイカンユウエキ 書物を開きて讀めば益する所あり。宋史「太宗詔、修二太平御覽一、千卷、上日讀三卷、宋琪以二勞瘁一爲レ諫、上曰、――、不レ爲レ勞也」

【卷軸】カンジク ○まきものの心。○まきものの。李白、與二韓荊州一書、「三千

制作、成ニ一一ニ一ノ國點取りの歌、又俳諧の最も秀逸のもの。紬に近きほど點が高きが故。‖卷頭。【卷軸】クワンヂク まき物と軸本の被はと、書冊の稱とす。【卷持】クワンヂ 國四方より取りまきて獸をかり取る「富士の一一」

【卸】シャ 國 卸に作るは非

○おろす。○ぬぐ(脫)○荷物を車又は肩などから下に移し置く。○おつ(落)○國おろす、おろし、問屋より小賣商人に賣る。

【卹】㊀シュツ ㊁ソツ 通音シュツ 月 月 郎に作るは非

㊀めぐむ、あはれむ。‖恤。○うれふ(憂)㊁かきなでる(搔摩)

【卹金】シュツキン 陸海軍人が戰死又は戰陣にて負傷して死せし者の遺族に賜はる恩賜金。【卹賞】シュツシャウ 官吏の死せし時、其の葬祭の資を賜ふをいふ。【卹典】シュツテン 官吏の死後に、其の功を錄して官爵を追贈するをいふ。

七畫

【卻】キャク 俗 卻は俗字 郤は別字

○しりぞく(退)○おし返す、受けずして還す。○除く、はらふ(攘)○了と同じく、助字として他の動詞の下に添へる「失ー」「忘ー」「滅ー」○あふむけにする(仰)○かへりて、反對に。李商隱詩「一話巴山夜雨時」

【卻行】キャクカウ あとへ退く。漢書、高帝紀「擁ニ彗迎ニ門一一」注「卻退而行也」【卻來】キャクライ しりぞけすつ。杜甫詩「衆魚常才鑒一一、赤鯉躍出如レ有レ神」【卻走】キャクソウ しりぞきはしる。說苑「一一而求レ逮ニ前人一」【卻步】キャクホ あとしざり。‖卻行。【卻立】キャクリツ あとへ退きて立つ。

【卽】ゴッ ゴチ 月 或は飢・仇に作る

あやふし(危)易、困卦「上九困ニ于葛藟ニ于臲一」かづらが大木に纏ひのぼり、己の分を超えて止まるを知らず、風吹く毎に恐れ危ぶみて心が安んぜざる義。

【卽】シキ ソク 國 俗に、卽・卽に作る

○つく(就)位を踐む「一位」○ちかづく(近)其の所にゆく。漢書、高帝紀「使ニ陸賈一授ニ璽綬一」ちかし(近)○いま(今)時、

を移さず「一時」「一劍」○すなはち、そこで、直ちに、とりもなほさず。史、老子傳「或曰儋一老子也」○もし(若)萬一。○一一はみつ(充實)る義。又、雄烏の鳴く聲。○一周はもへさし、燭炬の餘燼。管子、弟子職「左手執ニ燭、右手執ニ一」

【卽卽斯斯】ソクソクシシ 卽・乃・則・便・輒等の別は乃(ノ部一畫)の條を見よ。○卽・附・付・著・就等の別は附(阜部五畫)の條を見よ。【卽位】ソクヰ ○天子の位につく。春秋、桓、元「春王正月公一レ一」○席に就くっ儀禮「主人玄冠朝服、緇帶素韠一ニ一于門東西一」【卽詠】ソクエイ 卽座に詩歌を作る。【卽效】ソクカウ 卽時に利く、直ちに顯はれるきめ。【卽吉】ソクキツ 喪服を除き去る。南史、荀匠傳「匠雖レ一レ而毀瘁逾甚」【卽吟】ソクギン 國卽座に作る詩歌。‖卽事。【卽金】ソクキン 國卽座に仕拂ふ。卽時ばらひ。【卽興】ソクキョウ 折に觸れ物に感じて卽時に生ずるおもしろみ、多く詩の題などにいふ。【卽景】ソクケイ 眼前に見る所の風景。錢起詩「一一眞桃源」【卽決】ソクケツ 國其の場にてすぐきめる。

「一一裁判」‖卽斷。【卽刻】ソクコク すぐそのとき。‖卽時。【卽今】ソクコン ただいま。‖目下・現在。【卽座】ソクザ 卽席に同じ。【卽死】ソクシ 卽時に死す(唐書、夏侯孜傳)【卽事】ソクジ ○其の場にて見たる景色。又、事物を詩に作る。○往きて其の事に就く。史記「一レ一用希」【卽日】ソクジツ 其の日、當日。史、項羽紀「項王一一因留三沛公一與飮」【卽心是法】ソクシンゼハフ この心がとりもなほさず佛法。傳燈錄「三祖問ニ二祖一、何名ニ佛法一、曰卽心卽佛、——」【卽心是佛】ソクシンゼブツ 開悟をひらけば、其の心卽ち佛となる。禪林類聚「如何是佛、卽曰、——」‖卽心卽佛。【卽且】ソクシヨ むかての異名。【卽世】ソクセイ 死する。國語「國國一一」【卽燈】ソクトウ 螢火の異名(爾雅)【卽席】ソクセキ ○せきにつく。儀禮、士冠禮「一一坐」○其のざ。梁書、蕭介傳「藏盾(酒器の名)之飮、蕭介文、一一之美也」‖卽座。【卽阼】ソクサ 卽位に同じ。史、孝文紀「遍帝一一」‖踐阼。【卽題】ソクダイ 國其の座にて卽席に作らしむる詩文などの題。宿題の對。【卽答】ソクタフ 直ちにこたへる。【卽斷】ソクダン 卽決に同じ。【卽墨】ソクボク 地名、春秋時代の齊の邑、

漢代、縣を置く、勝東王の國都たり、今の山東省平度縣の東南。
【卽墨侯】ソクボク　現の異名。文房四譜「石虛中、字居默、南越人、善度方圓、中心坦然、拜二——一」

九畫

【鄂】 ガク　藥　鄂は別字

【卿】 ケイ　キャウ　庚
○きみ、執政の大臣、周の六一は天官冢宰、地官司徒、春官宗伯、夏官司馬、秋官司寇、冬官司空。古は上大夫の稱。後世は官省の長官の稱。○秦・漢以來、君の臣を呼ぶ稱。同輩相呼びて亦一と稱す。隋唐以來は爵位已よりやや卑き者に對しても亦一と稱す。○あきらか(章)○むかふ(嚮)
【卿雲】ケイ　太平の世にあらはるるめでたきくも。慶雲歌「一一爛兮、糾縵縵兮、日月光華、旦復旦兮」‖慶雲・景雲・瑞雲。
【卿卿】ケイ　妻より夫を呼ぶ稱。卿暱シテ之の意を含む。世說、惠帝「王安豐卿、常卿二安豐一、安豐目、婦人卿レ壻、於レ禮爲二不敬一、後勿二復卿一、婦曰、親レ卿愛レ卿、是以卿レ卿、我不レ卿レ卿、寵宮レ卿レ卿、遂慢聽レ之」
【卿子冠軍】ケイシクンン　楚の懷王の臣、宋義の號。史、項羽紀「諸侯將皆屬二宋義一、號二——一」注「卿子、時人相親尊之稱、猶レ言二公子一也、上將故言二冠軍一」
【卿相】ケイシャウ　天子を佐けて朝政をとる大臣、公卿宰相。‖卿輔。
【卿郎】ケイ　卿相に同じ。晉書、溫嶠傳「入作二——一、出將二三軍一」

十一畫

【郤】 シツ　シチ　質　俗に隙に作る
ひざふし(膝頭)漢書、吳王濞傳「願皆一行」

厂部

【厂】 カン　翰　旱　通音ガン
○きし(岸)がけ(厓)○いはほ(巖)○國がん、雁の略字として用ふ。○がんだれ、字畫上の語。

二畫

【厄】 ㊀ ヤク　㊁ アク・ヤク　陌　厄
㊀きのふし(木節)‖枙。○肉なき骨。㊁わざはい。‖戹。阨に作る同じ、くるしむ(困)あやふし。○國やく、不吉の運生ヤクセイ「一年ヤクドシ」「一拂」
【厄落】ヤクヲトシ　國身にまはりあはせたる災難をはらひ除く、又、其の方術。‖厄拂。
【厄介】ヤッカイ　國○他人の雜儀をたすける、介抱する。○轉じて、むづかし、難儀、面倒、わづらひ、もてあましもの。○世話になる、ねふらふ。
【厄災】ヤクサイ　わざはひ。‖災厄。
【厄年】ヤクドシ　國人の一生中、災難に罹る可き運命に當るといふ年齡。男の二十五・四十二・六十、女の十九・三十三・三十七など。
【厄難】ヤクナン　厄災に同じ。災厄艱難。易林「蹇之旅一一、配二玉危忠一」
【厄拂】ヤクバラヒ　國○身の災難を拂ひ除く。‖厄落。○昔時、大晦日又は節分の夜、厄難を攘ひ除く祓ひことばを唱へて鐃を乞ひ歩きし者、古の追儺の遺風といふ。

五畫

【厎】 ㊀ シ　紙　㊁ シ　支　㊂ チ　寘
㊀と、といし(柔石)‖砥。○とぐ(礪)砥石にてとぎみがく。○いたす(致)書、旅槩「西旅」貢厥槩」○さだむ(定)書、皐陶謨「朕言惠可レ行」㊂といし。○とぐ。㊂いたる(至)㊃いたす(致)
【厎石】シセキ　といし。漢書、梅福傳「群臣東帛者、天下之一一」‖砥石。
【厎礪】レイ　○とぎみがく。○刃物を砥石にてとぎみがきて銳利にする。漢書、蕭望之傳「一二一鋒鍔」轉じて學問又、節操をはげみつとめる。‖砥礪。

六畫

【厓】 ㊀ ガイ　佳　㊁ ギ　支　或は崖に作る
㊀きし、がけ、きりぎし(涯岸)○みづぎは(水畔)○かぎり、きは(際限)○きはだつ、かぎりあり。○まなじり、にらむ。‖睚。㊂きし。
【厓山】ガイザン　宋末、陸秀夫が其の主、昺を負ひて海に赴きて死せし所、今の廣東省新會縣の南の海中に在り。‖厓門山。
【厓昔】ガイシャク　にらみみる。漢書、孔光傳「一一莫レ不二誅傷一」一度にらまれたる程の少しの怨も必ず復讐する。‖厓眦。
【厓略】ガイリャク　大略の義。‖概略。

七畫

【戛】 ガ　黠　歌

けはし、さがし。‖嶮。

【厚】コウ 有

○あつし。薄の反對。○大いなり、多し、重し。○こし（濃）「濃ー」○むつまじ（睦）○あつさ、あつみ。○あつくす、ねんごろにす、優待す。

【厚薄】コウハク 厚・篤・敦・淳・醇・渥・腆○厚は薄の反、物の厚薄の厚なり。易經「坤厚以載ー物」又、廣く用ふ、溫厚・情厚なども、輕薄ならず、厚くたのもしき義。大學「其所ー厚者薄、其所ー薄者厚、未ー之有ー也」○篤は心を用ふること確かにして、專一にかたまりたる義、篤學・篤行などと連用す、轉じて病の重りて、とりつめたるを、病篤といふ。○敦は薄の反なれども、厚の如く物の厚みには用ひず、性行の上のみに用ふ。孟子「聞ー柳下惠之風ー者、鄙夫寬、薄夫敦」○淳は濁の反にて、醇と通ず、風俗又は性質の厚くしてまざりけなき義。○醇はまざりけなき、良き酒なり、淳に通ず。漢書「黎民醇厚」○渥はうるほひの治ーきをいふ、恩の字の意を帶ぶ。○腆は薄の反なり、進物の念の入りたるよき物をいふ、不腆は謙辭にて、自分の進物をいふ。

【厚意】コウイ ねんごろなるこころ。漢書、趙廣漢傳「不ー忘ニ卿ー一」‖厚情・厚志。

【厚恩】コウオン てあつきめぐみ。漢書、宣元六王傳「稱ニー一」‖榮恩・洪恩・高恩。

【厚顏】コウガン あつかましく、面の皮厚き者は感銘くして恥を知らずとの意。詩、小雅「巧言如ー簧、顏之厚矣」孔雀、北山移文「豈可ー使ニ芳杜ー一、薜荔掩ニ羞ー」‖鐵面皮。

【厚誼】コウギ てあつきよしみ、厚情なる交誼。

【厚給】コウキュウ てあつき俸給。

【厚貺】コウキョウ てあつきたまもの、人よりの贈物又は禮遇を稱する語（大平廣記）‖厚賜。

【厚遇】コウグウ てあつきもてなし（漢書「漢王ー二ー之」‖鴈遇。

【厚眷】コウケン てあつきめぐみ。唐明皇文「答ニ人神之ー一ー」‖深眷。

【厚顏】コウガン 面厚顏。‖鐵面皮。

【厚載】コウサイ 地をいふ。易經「坤厚載ー物」後漢書、皇后紀贊「坤惟ー一、陸正ニ乎內ー」

【厚葬】コウソウ てあつきほうむり。薄葬の反對。莊子「莊子將ー死、弟子欲ニー一之」

【厚志】コウシ ねんごろなるこころざし。‖厚意。

【厚賜】コウシ てあつきたまもの。詩經、疏「受ニ此ー一也」‖厚貺。

【厚祿】コウロク ゆたかなるたくはへ。陸游書、「雖ー肥肉、甘ー口而疾ー形、曼理皓齒、說ー情而損ー精」‖醇酒

【厚遺】コウイ ちのあつきつむぎ、かとりぎぬ。後漢書、馬援傳「陛下躬服ニー一」

【厚生】コウセイ ○民のくらしをてあつくする、帛を衣て寒をしのぎ、肉を食ひて體を養ふ類。書、大禹謨「正ー德利ー用、ー一ー惟和」○身體を大切にする。

【厚健】コウケン てあつきはなむけ。

【厚送】コウソウ てあつくみおくる。史、晉世家「ー一ニ贈耳ニ」

【厚待】コウタイ てあつくもてなす。宋史「故吾ー二ー之ニ」‖敎待・饗待・厚遇。

【厚澤】コウタク てあつきめぐみ。晉世南詩「鴻施洽ニ幽遠ニ、ー一潤ニ槁枯ニ」‖厚恩。

【厚秩】コウチツ てあつきふち。北史「高位ー一、與ー時輕始」‖厚祿。

【厚德】コウトク ○あつき行。論語「唯ー一者、能受ニ多福ニ」○あつきめぐみ。德は恩。

【厚報】コウホウ てあつくむくゆる、鄭重なる返禮。‖厚酬。

【厚貌深情】コウボウシンジョウ 外貌は深愛を示して心の底は深くして知り難き義。莊子「孔子曰、凡人心險ニ於山川ー、難ニ於知ー天、天猶有ニ春秋冬夏旦暮之期ー、人者——」

【厚薄】コウハク ○あつきと、うすきと。淮南子「豈其趨捨ー一之勢異哉」○濃きと淡きと。○多きと少きと。

【厚福】コウフク あつきさいはひ。宋史「能保ニ全而享ニー一者ー、由ニ忠正ー也」

【厚帶】コウタイ 贈り物をてあつくする、又、てあつき贈り物。

【厚朴】コウボク ○なさけあつくして飾りけなし。紀異錄「既飾ニー一之才ニ」○ほほの樹、葉は柳に似て大きく、木蘭に似たる白花を著く、其の樹皮を乾して漢藥とす。

【厚味】コウミ うまき食物。列、楊朱「鼎食美服、ー一鮫色」‖美味。

【厚味宜薄】コウミヨロシクウスカルベシ 膳は濃、味の厚き者は、其の毒すみやかなりと

の幾、宜縁は譴を受くること速かなる喩。周語「高位寔疾顚、——」【厚利】コウ 多いなる利得。史記「說レ之以二ニーー一」【厚誣】コウブ てあつき扶持ナリ＝高誼。

【厘】 リン 先 俗に釐の省字として用ふ

○みせ、たな(市廛)○圓りん、一銭の十分の一。

【庞】 バウ 江

○大いなり。＝庞。○あつし(厚)左、成、十七「民生敦ー」○ゆたか(豐)○まじる、まじはる(雜)

【庞鴻】バウコウ 盛大なる貌。司馬相如文「満恩ー一」＝厖洪。【庞雑】バウザツ いりまじる、純一ならず。唐書「方今設レ吏不レ精、流品ー一」【庞然】バウゼン 形の甚だ大いなる貌。【庞大】バウダイ 形又は容積が甚だ大いなり。【庞眉】バウビ 毛深きまゆ、老人をいふ。四子講徳論「ー一者耆之老」

八 畳

【原】 ゲン グヮン 元

○はら、地の平かにして廣き處。○もと(本)元と通ず。漢書、董仲舒傳「道之大ー出於天」○みなもと。＝源。○おこり、はじめ。漢書、食貨志「農商買四者衣食之ー」○もとる、もとづく(基)○ふたたび(再)○かさぬ(重)○たづぬ(尋)本を推レ究むる。漢書、薛宣傳「ー心定罪」○ゆるす(宥・赦)晉書、潘岳傳「會詔ー之」○つつしむ(謹)＝愿。○すなほ(直)○よみち、又、墓地。禮、檀弓「從先大夫於九ー」もと地名より轉訛せしもの。○文體の名、其の本原を推論するを主とす、韓愈にー道ー人などの五ーあり、後人之に因りて作る。○姓、ー憲は孔子の弟子。

同部畳韻 スク 原・尋・尋・時・揮の朋は部(寸部八畳)の條を見よ。

○ヒ 原・本・蓄・元・故等の朋は本(木部一畳)の條を見よ。

【原案】ゲンアン もとの文案、最初の議案。修正案の對。【原委】ゲンヰ 本と末と。＝源委、晉記「或原也、或委也」【原由】ゲンイウ 事のおこり。＝原因。【原宥】ゲンイウ 罪をゆるす。＝原レ見ニーー一、仰愧二先臣一、俯レ肌入レ骨」＝赦免。【原因】ゲンイン 物事のおこり、もと。＝原由。【原価】ゲンカ もとね、仕入れし時のねだん。玉堂雑字「照二依ーー一」【原稿】ゲンカウ したがき。＝草稿。【原活】ゲンクワツ 死罪をゆるしていかす。唐書「ーー其餘」【原遣】ゲンケン 罪人などをゆるしてはなちやる。晉書、武帝紀「帝隔レ絶、觀レ釁二因徒一多レ所ーー一」【原憲】ゲンケン 周の宋人、孔子の弟子、原思なり、人と爲り捐介、居る所ろ蓬蒿藜藋、上漏り下濕ふ、匡坐して弦歌す、子貢之に過ぎりて曰く、夫子病めるかと、憲曰く、財なき之を貧といふ、道を學びて行ふこと能はざる之を病といふ、思の如きは貧なり、病にあらざるなりと。杜甫詩「賭生ーー貧」【原語】ゲンゴ もとのままのことば。譯語の對。【原告】ゲンコク 訴訟を提起したる人、そにん。被告に對していふ。水滸傳「ーー人李吉在二這里一」【原籍】ゲンセキ 二度目のかひこ。淮南、泰族「ーー蠶再收」＝二化蠶。【原子】ゲンシ 物理にて元素の分子を構成するもの。【原始】ゲンシ ○はじめをたづぬ。易、繫辭「ーレ反レ終、故知二死生之說一」○はじめ、おこり「ーー時代」【原質】ゲンシツ したぢの性質、もとの物質。＝素質。【原隰】ゲンシフ 高く平かなる地と低く平かなる濕地と。詩、禹貢「ーー底レ績」【原人】ゲンジン ○人智の未だ發達せざる太古の民。○人の性に本づきしたがふ。韓愈にーー篇あり。【原心】ゲンシン こころを推したづねる。漢書、薛宣傳「ーレー定レ罪、探レ意立レ情」【原赦】ゲンシャ 罪をゆるす。又、ゆるし。魏書、刑志「不レ在二ーー之例一」＝原宥。【原狀】ゲンジヤウ もとのありさま、以前の狀態。【原情】ゲンジヤウ 事の情實を尋ね究むる。後漢書、郅惲傳論「凡言二成事一者、以二功業一易レ顯、謀二逸初一者、以二理隱一難レ昭、斯固ーレー比レ迹、所レ宜二推察一者也」【原色】ゲンシヨク もとのいろ、紅・黄・青の三色の稱、この三色の配合により種種の色を現す。【原色寫眞版】ゲンシヨクシヤシンバン 實物の色そのままの寫眞銅版、實物の色を赤・黄・青の三色に分解して、三個の寫眞をとり、之を銅版に製し三色のインキにて重ねて印刷する。＝三色版。【原籍】ゲンセキ もとの戸籍、本籍。寄留籍の對。又其の所在地を原籍地といふ。【原宥】ゲンイウ ゆるしすすぐ、罪を宥し汚

名を清める。唐書、柳宗元傳「雖レ被二一一、而子孫始遠」
【原泉】ゲンセン みなもと。孟、離婁「一一混混、不レ舎二晝夜一」‖源泉。
【原藪】ゲンソウ 原野と大澤と。家語「鑄二劍戟一以爲二農器一、放二牛馬于一一一」
【原則】ゲンソク もととなる規則、おほもとのさだめ。
【原測】ゲンソク たづねはかる。淮南子「一二一漸清之道一」
【原貸】ゲンタイ ゆるす、貸は假借。魏志、鍾會傳「有レ功二王室一猶不二一一一」
【原道】ゲンドウ ○もとのみち。○道義の本源をたづねる。淮南子に一一篇、韓愈の文に一一あり。
【原天】ゲンテン 天道をたづね究める。
【原田】ゲンデン はらのはたけ。左、僖、二八「一一每疾、舍二其舊一而新是謀」
【原動】ゲンドウ 運動又は活動をおこすもと。
【原頭】ゲントウ はらのほとり。王昌齡詩「白草一一望二京師一」
【遡レ原】アヒニ 原は源、水の源に遡ふ。道の根源を知り得る義。孟、離婁「君子深造レ之以レ道、欲三其自二得之一也(中略)資レ之深、則取二之左右一逢二其原一」
【原版】ゲンパン ○活字を組み合せて直ちに印刷に用ふるもの。紙型版の對。○もとのはん。翻刻、又は縮刷などの對。
【原被】ゲンピ 原告と被告と。‖兩造。
【原文】ゲンブン ○もとのままの文。○他國語に譯せざるもとの文章。譯文の對。
【原簿】ゲンボ 原は重なり、已に正册を立てて更に重ねて册を立つるをいふ。一說におほもとのおたまや。史、高祖紀「爲二高祖一一一」
【原簿】ゲンボ ○謄寫、又は改作せしものにあらざる最初の帳簿。○もとちやう、簿記の主要帳簿の一、仕譯の日座を設けて、貨借の記入をなすもの。
【原本】ゲンポン ○もと、根本。漢書「敎化之一一」○もとづく。淮南子「惟達二道德一者、能一二一之一矣」○もとの書物、もとの文書、謄本に對していふ。
【原野】ゲンヤ のはら。杜甫詩「始喜一一闊」
【原理】ゲンリ おほもとの道理。說明・推論・斷定の據りて生ずるもとの道理。
【原料】ゲンリョウ 製品のたねとなるもの、加工すべきもとの材料。紡績絲の一一は綿、日本酒の一一は米の類。

【厄】

㊀サク ㊁ソ 入 麥 通

㊀といし(礪石)○みがく(磨)○まじる(混)錯(金部八畫)の古字。㊁おく。漢書、賈誼傳「抱二火一之積薪之下」註「一、置也」‖措。

【厓】

シ 支 或は崖に作る

一腹は山のいただき(山巓)

九畫

【厠】

シ 寘 廁(广部九畫)に同じ

○かはや。○まじふ(雜)○つぐ、ついづ(次)○そば(側)○きし、ほとり。

十畫

【厥】

㊀ケツ ㊁クツ 物 月

㊀その、それ(其)○みじかし(短)○さける、たる(垂)‖頓。○ほる、あばく。‖掘。○のぼせ、神氣逆上のやまひ。㊁突一は北方のえびすの名。夏に猾二厥一殷に鬼方、周に玁狁イン漢に匈奴、魏に突一、宋に契丹キツタンといふ。

【厥角】カクカク 頭をさげて禮を行ふ、角は額、ぬかづく。漢書、諸侯王表「漢諸侯王、一一稽首」

【厦】

サ 禡 廈(广部の十畫)の俗字

屋)

【厤】

レキ 錫 歷(止部十二畫)の古字

○ふ、わたる。○こよみ。‖曆。○をさむ、をさまる(治)

十一畫

【厩】

キウ 有 廐(广部十一畫)の俗字

うまや(馬舍)

【厱】

キン 寢

わづか、わづかに(少)‖僅。

十二畫

【厭】

㊀エン ㊁エフ・オフ 琰 葉 ㊂エン 豔 ㊃アフ・エフ 洽 狎 ㊄イフ・オフ 業 ㊅アン

㊀あく(飽)‖饜。○たる(足)みつ(滿)史、貨殖傳「不一二精麤」○いとふ。○ふさぐ(塞)○うむ(倦)つかれる(疲)論、述而「學而不一一、誨人不倦」○にくむ(惡)○たつ(絕)○すつ(棄)㊁おす(壓)○しづむ(鎭)○はらふ(攘)「禁!」○ふす(伏)○おさふ(抑)○つぶす

（潰）〇あふ、かなふ（合）周語「克二帝心一」〇そこなふ（損）〇あたる（當）〇したがふ（從）〇おそはる（襲）悪夢。〇兩手を引きて胸の前に合せる敬禮法。儀禮、鄉飲酒「賓ー介入門」㊂かくす（藏）おほふ（掩）〇おそふ。＝魘。㊃やすし（安）＝壓。しづか（靜）㊄おさへて伸びす。〇のぞむ（臨）㊅ー溫は、うるほふ（濕）㊆しづみおほる（沈溺）

厭飽　ヲア　厭飽・飫・饜の別は飽（其部五畫）の條を見よ。

【厭厭】エン　〇滿ち足りて夢の盛んなる貌。詩、周頌「ー―其德」〇安靜なる貌。詩、豳風「ー―良人、秩秩德音」

【厭患】クワン　〇いとひ、うれふ。〇おさへつけられるうれひ。潛夫論「棟折榱崩、懼レ有二ー―一」

【厭世】セイ　人世に居るをいとふ。疏、天地「千歲ー―レ、去而上僊」

【厭世主義】シュセイ　哲學にて人間の世を苦痛の境界とし、此苦痛を脫するには現世を出離するに在りとなす說。

【厭足】ソク　十分にあきたる、滿足する。＝厭飫・饜足

【厭飽】ハウ　あきたる、あきていやになる。易林「可二以ー―一」＝饜飽。

【厭煩】ハン　いとひわづらふ。

【厭舞】ブ　圓えびす、舞樂の初めに舞ふ舞。

【厭伏】フク　食にあく、厭は髮と通ず。轉じて人を疏んずる。楚辭、哀時命「時ー―而不レ用兮、且隱伏而遠ノ身」

【厭離】エンリ　佛この世をいとひはなれる。往生要集「ー―穢土、二欣求淨土」＝出離。

【厭捋】イフ　禮式にて厭は兩手を引き胸につける。捋は手を前に推し出す（儀禮、鄉飲酒禮、注）

【厭抑】エフ　おさへつけふせぐ、抑へ鎭める。宋書、宋廢帝「ー二凶寇一」＝壓當。

【厭腳】キヤク　まじなひ。後漢書、清河孝王慶傳「爲ニ―ー之術一」＝禁厭。

【厭然】ゼン　〇顯ひ服する貌。荀、儒效「天下ー―」〇おほひ隱す貌。大學「見二君子一而后ー―、揜二其不善一」

【厭當】タウ　祈禱、まじなひなどして禍をおさへつける。漢書「東溟以ー二一之一」

【厭伏】フク　おさへつけて鎭める。

【厭浥】イフ　うるほふ貌。詩、召南「ー―行露」＝厭邑。

【厭氣】イキ　圓あきて倦みたるきもち。

【厮】シ　支　廝に同じ

〇しもべ（僕）〇わかつ、わかる（分析）〇はなる（離）〇新を取る者。

【厮役】エキ　しもべ、奴隸。＝廝徒・廝隸。

【厮養】ヨウ　廝徒に同じ、竪は童僕。唐書、李憲立傳「雖ニ―ー一閭輿記二姓名一」

【厮徒】ト　めしつかひ。史、蘇秦傳「ー―十萬」

【厮養卒】ソツ　こもの、軍中にて薪を取り、又はまかなひなどするしもべ。史、陳餘傳「有二―ー一」

【厮輿卒】ソツ　こもの、輿はかごかき。（漢書、嚴助傳）

【厮隸】レイ　廝徒に同じ（唐書、史朝義傳）

十三畫

【厩】キ　支　廐に同じ

廐ーはけはし（險）又、山の嶺（ガケ）

【厲】㊀レイ　㊁ライ　霽　泰

㊀あらと、麤質の砥。＝礪。〇とぐ（研）みがく（磨）〇はげし（烈）たけし（猛）おごそか、きびし（嚴）論、子張「聽二其言一也ー」〇あやふし（危）〇はやし（疾）いそがし（急）〇おこる、おこす（興作）〇あがる、あぐ（抗）〇ふるふ（奮）はげむ、はげます。＝勵。〇にくむ（疾）〇しへたぐ（虐）暴虐なる人の謚に用ふ。孟、離婁「名之曰二幽ー一」〇惡鬼。〇がけ、岸の高く危き處。〇衣を以て水を渉る、帶より以上をーといふ。詩、衞風「深則ー、淺則揭」〇あし（惡）みにくし（醜）〇やむ（病）やましむ。〇えやみ、やくびやう（疫）わざはひ（禍）たたり（祟）左、昭七「子產曰、鬼有二所レ歸、乃不レ爲ニ―一」〇喪服に下垂するおほおび。㊁かったい。史、范雎傳「漆二身爲ニ―一」＝癘。

【厲階】カイ　怨をまねくいとぐち。詩、大雅、桑柔「誰生ニ―ー、玉ノ今爲ノ梗」梗は病。＝禍端。

【厲行】カウ　〇行をみがく。魏志「祇節ー―、秉ノ心不ノ回」＝勵行。〇きびしく行ふ。強制して行はしむ。

【厲鬼】キ　やまひのおに、やくびやうがみ、又、惡鬼。左、昭七「今夢黃熊入二于寢門一、其何ー―也」

【厲禁】キン　厲は遏、遮る、きへぎりとどめる、轉じてきびしくとどめる義（周禮、司禮）＝嚴禁。

【厲志】シ　そこなひしへたげる、奚業詩「具當備有レ作、ー―更紛更」

【厲揭】ケイ 水を渉る。衣を持ちて深き處を渉るを厲、衣をかかげて淺瀬を渉るを揭といふ。詩、邶風「深則厲、淺則揭」轉じて機に臨み變に應じて程よく世を渡る義(論、遮問)

【厲莊】レイサウ はげしくおごそか。柳宗元文「韓安平——論殺、高朗振邁」‖嚴肅。

【勵志】レイシ 志をおこして勉強する。漢書「——娛ㇾ緒」‖勵志。

【厲疾】レイシツ ○はげしくはやし。疾、月令「季冬之月、征鳥——」○ケイかったい、瘧病。‖瘧疾。

【厲人】レイジン かたち醜き人。莊、天地「厲之人夜半生二其子一、遽取ㇾ火而視ㇾ之、汲汲然唯之恐二其似一己也」

【厲聲】レイセイ おごそかにしてつつしむ。禮記「色容——、視容清明」‖嚴肅。嚴厲・嚴峻。

【厲色】レイシキ 顏色をはげしくして怒る、血相をかへる。晉書「——謂二左右一」

【勵精】レイセイ 精出してつとめる。漢書、宣帝紀「——求ㇾ治」‖勵精。

【厲聲】レイセイ こゑをはげしくす。宋史「——折ㇾ之曰、懦語沮ㇾ軍、可ㇾ斬也」

【厲世摩鈍】レイセイマドン はげましすすめて人材を振作する。漢書、梅福傳「辟雍東帛者、天下之底石、高祖所二以厲一ㇾ世一ㇾ鈍一也」

【厲石】レイセキ あらと、きめのあらさといし、(砥はきめの細く柔かなるといし)‖礪石。

【不ㇾ厲】レイ はげしくせず、猛からず。禮、表記「一ㇾ而威」

【厲然】レイゼン 嚴厲なる貌。晉書、周顗傳「顗以二東海王越不一ㇾ盡二臣節一、每言論一ㇾ、輒深憚ㇾ之」

【厲俗】レイゾク 世の中をすすめはげます。史記「激ㇾ貪一ㇾ」

【厲風】レイフウ ○四北のかぜ。呂覽、注「一ㇾ、乾氣所ㇾ生、一曰二不周風一」○あらき大風。○さびしく、さむげに吹く風。‖悲風。

【厲兵】レイヘイ 武器をとぐ。戰國策「綏ㇾ甲一ㇾ」‖礪兵。

【厲民】レイミン たみをし(たげなやます。孟子「——而以自養也」‖虐民。

【厲利】レイリ 研ぎてするどくする。‖厲鋭。

【厲憊ㇾ王】アイレイオウ 厲は癘病の人、亂世にありては王者は往往其の臣下に弑せらるる故に王者は、常に心に憂懼を抱く、厲者の唯だ其の形の苦痛なるのみに比ぶれば、王者の苦む所は更に甚だし。故に厲者は王者の不幸を憫むとの謂(韓非、姦劫弑臣篇)

厶部

【厶】(一)シ (二)ボウ 有 支

㊀わたくし。私に通ず。○かたまし(姦妻)㊁それがし。‖某。

二畫

【左】コウ 肱(肉部四畫)の本字。

三畫

【去】(一)キョ・コ 御 (二)キョ・コ 遇

㊀さる(行)過ぐ、過ぎ去る。○はなる(離)就の反對。時、又は所が隔る。○過ぎ去りし時「過一」○たがふ(違)○四聲の一、音の哀しくして遠き者。○すつ(棄徹)遠ざく、放逐する。小學、明倫「不顧二父母一」㊁をさむ(藏)收藏する。漢書、蘇武傳「掘野鼠一草實而食之」‖春。○のぞく(除)とりのける。論、鄭黨「一喪無所ㇾ不ㇾ備」

同訓異字 去・距・違・行の訓は距(足部五畫)の條を見よ。

【去禁】キョキン 禁令を除き去る。左傳、毀ㇾ關一ㇾ」

【去月】キョゲツ せんげつ、前月。北史「蕭吉奏二隋文帝一曰、一—十六日、皇后陵前有二黑氣起一」

【去事】キョジ すぎ去りし事、已往の事。新語「一—之戒、來事之師也」

【去就】キョシュウ ○さると就くと、已の身の出處、進退の義。漢書、賈誼傳「同二生死一輕二一—一」○彼を離れて之に附く、陳琳、檄二吳將校部曲一文「背二先賢之一—一」伊尹が夏を去りて殷に就きしをいふ。

【不ㇾ識二去就一】シキョシュウ其の位に處るべきか、去るべきかを決斷する能はず。漢書、王昌傳「或——、强者負ㇾ力、弱者憚ㇾ愚、鋭甚悼焉」

【去其】キョキ 事のはなはだしきをのぞきさる。左思、魏都賦「罷ㇾ候館一ㇾ斬、去ㇾ桑一ㇾ」

【去聲】キョセイ 四聲の一、迄・宋・絳・寘・未・御・遇・霽・泰・卦・隊・震・問・願・翰・諫・霰・嘯・效・號・箇・碼・漾・徑・宕・沁・勘・豔・陷の三十韻に分つ。去聲に屬する字は皆仄字なり。一—を示すには字の右肩に半圈を付す。

【去取】キョシュ すてると、とると。宋史、選擧志「三銓先ㇾ策、次ㇾ論、次二詩賦一、通考爲二一—而超二格經義一」

【去職】キョショク 官職をやむ。晉書、陶潛傳「即日解二印綬一一ㇾ」‖辭職。

【去勢】キョセイ 睾丸をぬきとる。

【去年】キョネン こぞ、今年の前の年。‖昨年。

【去來】キョライ ゆくと、くると。張說詩「共知世事何甘定、且喜年華去復來」

【去留】キョリュウ 去ると留ると。事の敗ると成ると。史、范雎傳「今吾事之一—

在二張君一」‖威敬。
【去來今】コライコン 國過去・現在・未來の略語。佛徑「無起無滅――」
【去者日疎】サルモノハ 相別れては漸く疎遠となる。死者は日を經うて生者に忘れられる。古詩「去者日以疎、生者日以親」

【厽】 去（前條）の本字。

九畫

【參】 ㊀サン 覃 ㊁サン 感

㊀みつ、三に通ず。○まじはる、まじる（一錯・間廁）○あづかる（干與）「一政」「一謀」くははる（加）つらなる（列）ならぶ（竝）○はかる（謀度）○わかつ（辨別）○まゐる（謁）まみゆ（謁）君主又は長上に面謁する。○つれ（同伴）○星の名、からすき、二十八宿の一。㊁まじふ（雜）‖糝。㊂一一はむらがり立つ貌、竦立、又、長き貌。一差は舛しからざる貌。‖蓼。○藥草の名、人參。○西方の申の位に在る星の名。○國まゐる、社寺などに詣でて拜する。

【參夷】サンイ 三族を誅す、夷は平らぐ。漢書、刑法志「商鞅遵ニ一之誤一」‖夷ニ三族一。
【參加】サンカ あづかりくははる、仲間に入る、參列する。
【參賀】サンガ 朝廷にまゐりて賀辭を述べる。宋史、職官志「皇太子節朔不レ受ニ官僚一一」
【參向】サンカウ 國其の方へまゐりむかふ、おもむく「勅使一一」
【參考】サンカウ まじへかんがへる。魏志、注「一一衆家一」‖參校・參勘・參稽。
【參校】サンカウ 彼此照しあはせて考へる、校は對比。柳宗元文「得ニ大尉實跡一、一一備具」
【參看】サンカン てらしあはせみる。‖參照。
【參勘】サンカン 參考に同じ。參同契「此書一一、眞實方可レ下レ手」
【參議】サンギ 大政にあづかり議する。又其の官名。唐書、百官志「以ニ吏部侍書一一一朝政一」
【參勤交代】サンキンカウタイ 國德川時代に諸國の大小名が年年かはりあひて江戸に來り勤めし制度、勤一に覲に作る、江戸づめ。
【參具】サング 三つ備はる、卽ち主は明に相は知に、將は能なること。管子「主兵必一一者也」
【參宮】サングウ 國いせまゐり、伊勢の大神宮にまゐる。
【參會】サンクワイ ○種種のものが雜り集る。漢書、韓安國傳贊「因德一一、待レ時而發」○一所に至りあつまる。‖集會・參集。
【參差】サンクワク はかりごとにまじはりて計畫する。元稹詩「一一遊敎陋」‖參謀・參畫。
【參管】サンクワン あづかり掌る。五代史「一一要機一」
【參觀】サンクワン ○多くの中に加はりて見る。○國其の所にまゐりて見る。
【參詣】サンケイ ○某所に集り到る。晉書、藝術傳「王嘉遊ニ于倒獸山一、公侯以下成躬往一一」○國まゐる、神社佛閣にまうでる。
【參稽】サンケイ てらし合せて考へる。荀子「一一治亂一」‖參考・參勘。
【參決】サンケツ 相談にあづかりてさだめる。魏書、高帝紀「常一一可否一」。
【參駁】サンバク 彼此參考してしらべる。韓非、姦劫弑臣「循ニ名實一而定ニ是非一、因ニ一一而審ニ言辭一」
【參伍】サンゴ 入りまじる貌。易、繫辭「一一以變」
【參近】サンキン したやく、顯官。魏志、王基傳「上疏固辭、歸ニ功一一」‖下僚。
【參坐】サンザ 三人並びてすわる。戰國齊策「一一於衛君之前」
【參贊】サンサン 其の事にあづかりてたすける。南史「欲下引ニ時賢一一中一大議上」‖贊襄。
【參貳】サンジ 其の事にあづかる、貳は副。范仲淹、邠州建學記「予一一國政一」‖參與。
【參事會】サンジクワイ 國府縣郡市會の議員によりて成り、其の管轄內の事を議する會。
【參集】サンシフ まゐりあつまる。‖參會。
【參上】サンジヤウ 國まゐる、あがる、うかがふ。行く、訪ふなどの敬語。‖參堂。
【參掌】サンシヤウ あづかりつかさどる。晉書、職官志「初有ニ軍師祭酒一一一敎律」五代史、史珪傳「承ニ領文書一一一庶務一」
【參酌】サンシヤク はかり比べてよき方をえらびとる。漢書、賈捐傳「願採ニ證經一一一奏法一」‖斟酌。
【參乘】サンジヨウ 陪乘をいふ。‖驂乘。
【參政】サンセイ まつりごとにあづかる、又其の官名。宋史「目爲ニ魚頭一一一」
【參政權】サンセイケン 立法部の議員となりて國政に參與する權利。
【參照】サンセウ 參考に同じ。
【參禪】サンゼン 佛の道に入る、禪學を學ぶ。蘇軾詩「暫借ニ好詩一消ニ永夜一、每レ逢ニ佳處一輒一一」（禪は前坐して佛法の妙理を究め味はふ修業）
【參綜】サンソウ 課題に參與してすべ治める。晉書、溫嶠傳「機密大謀、皆所ニ一一一」
【參錄】サンロク あづかりすべる。‖參綜。
【參內】サンダイ 內裏卽ち禁中にまゐる。‖參朝。

【參堂】サンダウ　國人の家を訪ふことの敬稱。‖參上。

【參知政事】サンチセイジ　宋代に宰相の副官として、國家の大政に參與し、庶務を掌理せし官。宋史、職官志「――掌ㇾ副二宰相一、凡二大政一參ㇾ焉。」

【參朝】サンテウ　朝廷にまゐる。蔣唐卿「――之日、宜ㇾ在二本品見任之上一」‖參內・登朝。

【參殿】サンデン　國貴人の御殿へまゐる。

【參天貳地】サンテンジチ　德を地に比するはこれ地を貳にするなり、地と已と天とを并せて三とす、これ天を參にするなり、德を天地に均しくする義。司馬相如書「勤二思乎――一」

【參拜】サンパイ　社寺などにまゐりてをがむ。

【參謀】サンバウ　○相談にあづかりてはかる。劉克莊詩「丞相曾參二督府謀一」○幃幕の中にありて畫策にあづかる役。李氏刊誤「――、秦漢之職、在二營幕中一參二畫戎機一」○國軍議にあづかり作戰計畫をあづかり議する職。其の長官を――總長といふ。

【參半子】サンハンシ　疊の二重なるもの。荀子「堯舜――」

【參與】サンヨ　○其の事にあづかる。‖參預。○國明治の初年、太政官中に置かれたる官名。

【參預】サンヨ　參與に同じ。晉書、唐彬傳「朝有二疑議一、每――焉」

【參籠】サンロウ　まじはりならぶ。鄭符賀「來泉――」

【參列】サンレツ　參加に同じ。

【參籠】サンロウ　國神社佛閣にまゐりてとぢこもる、おこもり。

【參差】シンシ　長短齊しからざる貌。詩、周南「――荇菜、左右流ㇾ之」

【參參】シンシン　○蓑り立つ貌。東觀、楊亡詩「――其幢」○長き貌。張衡、思玄賦「長二金佩之――一」

【參商】シンシャウ　四方申の位に在る參と、東方卯の位に在る商との二星、相距ること遠く、長く相見ず、故に別後久しく相合はざるにいふ。陳機詩「形影――乖」杜甫詩「人生不二相見一、動如二參與一商」

十畫

【叅】　參（前條）の俗字。

十二畫

【𠦂】シュン　眞　稕　うさぎ、狡兎の名。戰國策「東郭――、天下之狡兎也」

又部

【又】イウ　宥　○また（復）○さらに（更）○ふたたび（復）詩、小雅「天命不ㇾ――」○て（手）○たすく（祐）○ゆるす。禮、王制「王三――然後制ㇾ刑」‖宥。

同訓異義　又・復・亦・還・有・也○又は再也、更也と註す、再に、更を兼ねたる義なるが故に、多く別段の事を說くに用ふ。左傳「祭足帥ㇾ師、取二溫之麥一、秋又取二成周之禾一」○復は重也、再也と註す、下地ヲあることを、反復する義、不ㇾ可二復讀一は、一度讀みたる文を、反復して、二度とは讀まれぬとの意なり。○亦はもまたと訓み、旁及之辭と註す、此も此の如く、彼も亦此の如しといふやうに、旁にまで引き及ぼす義。史記「有ㇾ功亦誅、無亦誅」○還はめぐり來りてまたの義。管子「還四年伐二孤竹一」○有は又に近し。詩經「不ㇾ日有曛」○也は發語之辭と註す、詩又は俗語に多く用ふ、亦に似て輕し。學參詩「也知鄉信日應ㇾ疎」

【又生二秦一】シタイツシンシ　我が敵たる秦の外に、また一つの敵を增す義。史、張耳傳「秦未ㇾ亡而誅二武臣等家一、此――也」

二畫

【叉】㊀サ　㊁サイ　麻　佳　㊀ふたまた（兩岐）○こまぬく（拱手）○まじふ。○わかる（分）○夜ーヤは印度の鬼神の一。㊁かんざし‖釵。

【叉牙】サガ　齒の缺けたるをいふ。韓愈、落齒詩「――妨ㇾ食ㇾ物」

【叉手】シュ　手をこまぬく、うてくみする。項言「溫庭筠工ㇾ賦、每二入試作一ㇾ賦、凡八――而八韻成」‖拱手。

二畫

【友】イウ　有　○とも、ともだち、同志をー、同門を朋といふ。○ともとす、友としてまじはる。論、季氏「――直――諒――多聞益矣」○いつくしむ、いつくしみ、兄弟仲のよき義。

【友愛】イウアイ　○兄弟のいつくしみ。吳志「――其篤」○朋友のしたしみ。

【友于】イウウ　兄弟仲がむつまし。書、君陳「惟孝――ニ兄弟一」この下の二字を略せし語。陶潛詩「欣侍二溫顏一、喜見二――一」

【友誼】イウギ　ともだちのよしみ。‖友情。

【友情】イウジャウ　友人に對する情愛。‖朋友のよしみ。‖友誼。

【友生】イウセイ　とも、友人。詩小雅「知伊人矣、不ㇾ求二――一」‖朋友・友朋。

【友善】ユウゼン 友としてなかよし。後漢書、王充傳「充有二志操一、與二馬融・實章・張衡・崔瑗等一ー一」

【友禪】ユウゼン 國京都の畫工ーーの始めたる染模様。花鳥風月を種種の色に彩り染めしもの。友一に禅に作る。‖加茂川染。

【友弟】ユウテイ 兄弟のなかがよい。北史、汪昕傳「性敦篤、以ニーー一知レ名」‖友悌・友穆。

【友悌】ユウテイ 兄弟の仲むつまし、悌は兄長に順ふ。‖友弟。

【友邦】ユウホウ 隣國をいふ。書、秦誓「嗟我ーー冢君」

【友朋】ユウホウ ともだち。左傳「豈不レ欲レ往、畏二我ーー一」

【友睦】ユウボク 兄弟の仲むつまし。南史「兄弟ーー、修レ身勵レ行」

【友穆】ユウボク 兄弟やはらぎてむつまし。宋書、謝弘微傳「弘微少孤、事レ兄如レ父、兄弟ーー之至、聲レ世莫レ及也」

【友助】ユウジョ 國ともだち、互に相扶持する義。‖友人・友生。

【友逆】ユウギャク 國ともだち。‖友生。

【友引】トモビキ 國陰陽道にて相引として勝負のなき日の稱。後世は友を引くといふ字に拘泥コウデイしてこの日に葬送を營すことを忌む。

【及】キフ 圖

○およぶ、追ひつく、およぼす(達)○および、竝に。○いたる(至)論、鄭黨「惟酒無レ量、不ーー亂」○あまねく被る。○かかる(繋)○つぐ(繼)○と、ともに。‖與。

同訓異義 及・逮・迨・暨・洎・曁○及は至也と註す、先へ至りとどくなり。書經「罰弗レ及」調、賞延二于世一」又、兼與之辭と註するときはトと訓む。○逮は及と同じ、あとよりおひ付くなり、逮捕・逮夜などと用ふ。○迨は逮と略ヽ同じ。○暨はやゝと及ぶ義、又與トなり、あづかり及ぶなり。○洎は及に同じ、うるほひの及ぶ義。○曁は遠方から及ぶなり、歳月を經て及ぶなり。○トと及レ與・洎の前は與(臼部八畫)の條を見よ。

【及瓜】キフカ 任期の滿つる義、瓜時とは瓜の熟する時、即ち陰暦の七月なり。左、莊、八「瓜時而往、曰、レ一ー而代」

【及逮】キフタイ おひつく。魏志「但恐見二無劃一、不二相ーー一耳」

【及第】キフダイ 試驗に合格する。事物紀原「隋唐以來、進士諸科、遂有ニーー之目一」‖登第。

【及第花】キフダイカ 杏花メンの異名。鄭谷、曲江紅杏詩「女郎折得殷勤看、道是春風ーー」

【及遑】キフコウ おひつく。

【及門】キフモン 門下生となりて業を受くるに及ぶ義。

【及落】キフラク 及第と落第と、合格と不合格と。

【双】

雙(隹部十畫)の俗字として用ふるは非。

【収】

收(支部二畫)の俗字。

【反】

㊀ハン・ホン ㊁ハン・ホン ㊂ハン 扁圖 阪圖

㊀かへる、來る。往の反對。○かへす、舊に復する。○かへりて(卻)○そむく、たがふ、相異する、もとる、むほん。‖叛。○かへりみる「ー省」孟、公孫丑「自ーー而不レ縮」○かんがへる、思考する。論、述而「舉ーー隅不レ以二三隅一ー」㊁かへる、かへす。○ひるがへる、ひるがへす、冤罪をしらべて無罪とする「平ーー」○かへし、或字の發聲と或字の聲韻と相磨して一の聲韻を成す法。‖切。㊂ひさぐ。‖販。○ーーはおちつきておもおもしき貌。詩、小雅「威儀ーー」○圖そり、そる、後方へ曲りかへる。

同訓異義 反・翻・復・卻○反は反掌の反にて、物のひっくり反りて、うらになる義。管韓傳に「就二義博一謂レ易、未二一年一、義博反從二管韓一」の如し。○翻は反に同じ。魏志「恣」忠爲レ國、翻爲二重愆一」○復は反復の義、反に同じくして稍輕し、稍に作るも同じ。小雅「謀臧不レ從、不レ臧覆用」○卻は卻退の卻なり、さうなき筈なるに、卻りてさうある意、欲レ發レ生、卻傷レ生の如し。却は俗字なり。

○ハン 反・叛・畔・倣・背等の別は叛(又部七畫)の條を見よ。

【反映】ハンエイ てりうつる。‖反照。

【反景】ハンケイ 夕日のかげ。周櫪清詩「夕陽ーー低二黄埃一」‖反照。

【反影】ハンエイ かへりうつる。かげ、又、一事に對して現ずる他の現象。

【反應】ハンオウ ○味方にそむきて敵に心をよせる、うらぎり、內通。‖內應。○藏化學作用を受けて生ずる變化の現象。

【反歌】ハンカ 國長歌の終に添へる短歌。もとに反りて前歌の大意を約言し或は前歌の意を補足するもの、萬葉集などに其の例多し。

【反抗】ハンコウ 目上ノ人にさからふ。‖反拒。

【反汗】ハンカン 前の命令を取り消す。漢書、劉向傳「號令如レ汗、汗出而不レ反者也、今出二善令一未レ能レ踰レ時而反、是ーー也」

【反閉】ハンペイ 詐りて敵國の人となり、閉

険をうかがひ、敵状を探りて反り報ずる者。史、燕世家「說ㇾ王仕ㇾ齊爲ニ一一一」又、敵の間諜ㇾを利用して反りて我用を爲さしめる。

【反眼】ㇵﾝ 反目に同じ。韓愈、柳子厚墓誌銘「一一若ㇾ不ニ相識一」

【反求】ㇵﾝ 我が身にかへりみて求める。中庸「射有ㇾ似ニ乎君子一、失諸正鵠一一ニ諸其身一」

【反錦】ㇵﾝ 人よりの贈物を反すにいふ。左、昭、十三「君向受ㇾ襲一ㇾ」ㇾ反璧。

【反響】ㇵﾝ こだま、やまびこ、音響の反射をいふ。轉じて政言動が社會に及ぼせし影響。

【反逆】ㇵﾝ 君にそむきて亂をなす。通典「重罪十條、一一、一一」ㇾ亂逆。

【反捉】ㇵﾝ 反抗に同じ。（張衡、東京賦）

【反賃】ㇵﾝ かりもの、ひきで貸物の荷。儒效「積ニ一一一而爲ニ商賈一」ㇾ販貨。

【反古】ㇵﾝ 次條に同じ。

【反故】ㇵﾝ ほぐ、ほうぐ、ほんご、書紙を反へして用ふるㇾ。北齊書、韓晉明傳「安能作ニ刀筆吏一被ニ一一紙一邪」ㇾ故紙・反古。

【反語】ㇵﾝ 其の字義と反對の意になるやうに用ふることば。ㇾ用ㇾの用が反對に不ㇾ用となるの類。

【反顧】ㇵﾝ うしろをかへりみる。鄉里をこひしく思ふ。後漢書「燔ニ燒屋室一、絕ニ其一一之望一」

【反魂香】ㇵﾝ 香料の名、之を焚けば亡き人の靈をかへして其の姿を現すといふ。東坡詩集、注「李夫人死、漢武帝念ㇾ之不ㇾ已、乃令ニ方士作ニ一一一ㇾ之、夫人乃降」

【反相】ㇵﾝ むほんの人相。漢書、吳王濞傳「高帝曰、汝狀有ニ一一一」

【反葬】ㇵﾝ 旅行先にて死せし者を故郷に葬りはうむる。北史、李德林傳「一一故里一」ㇾ歸葬。

【反殺】ㇵﾝ かへりうちにする。又、返討ㇾの同語。

【反覆】ㇵﾝ くちびるをかへす、心に服せずして口をとがらしてそしる。史、平準書「利令下、有ニ不ㇾ便者一、輒不ㇾ變、數ㇾ一ㇾ」

【反射】ㇵﾝ 光・音・熱等が物の面にあたり、はねかへされて反對の方向にかへる發。てりかへし。

【反掌】ㇵﾝ 手のひらをかへす、事の容だ易きに喩ふ。漢書、枚乘傳「易ニ於反ㇾ掌、安ニ於泰山一」

【反證】ㇵﾝ 圖或事件の證據となれる事實を打消す可き反對の證據。

【反首拔舌】ㇵﾝ 髮を亂し形を變り衣を更つ。左、傳、十五「秦獲ニ晉侯一、以歸、將ニ夫人一ㇾ——ㇾ郊」

【反芻獸】ㇵﾝ 牛・羊・鹿等の如くあらくかみたる食物は第一の胃に入り、第二の胃に移りて、再び口に吐出し、十分に噛みこなして後、第三第四の胃に送るもの。

【反正】ㇵﾝ もとの正しき道にかへす。天下を平定する。公羊、哀、十四「隱ニ亂世一、反ニ諸正一、莫ㇾ近ニ乎春秋一」

【反省】ㇵﾝ わが身をかへりみる。ㇾ反求。

【反噬】ㇵﾝ ○そむきかむ、恩を受けたるもの、又は親しかりしものにそむきはむかふ。劉知幾賦「終一一而相害」○おひつめられてかへってかみつく。

【反照】ㇵﾝ ○てりかへす。ㇾ反映。○ゆふひ。ㇾ反景・返照。

【反切】ㇵﾝ 字音を表するに他の平易なる二字を以てす、即ち上の字（父字又、切字）の聲と、下の字（母韻字）の韻とを合せて一音を綴成する法。宋景文筆記「孫炎作ニ一一一、論本于鄭康ニ一ㇾ」ㇾ翻切。

【反舌】ㇵﾝ ○えびすの言語。呂覽「蹙ニ夷一一、皆服ニ遠厚一也」ㇾ鴃舌。○百舌鳥の異名。禮、月令「仲夏之月、一一無ニ聲一」

【反接】ㇵﾝ 兩手をうしろでにしばる。（史、陳丞相世家）

【反則】ㇵﾝ 法律又は規則にたがふ。

【反側】ㇵﾝ ○ねがへりする。詩、周南「輾轉一一」○そむく、むほんㇾ。後漢書、光武紀「使ニ一一子自安一」

【反對】ㇵﾝ ○うらはら、あべこべ。○さからふ。贊成せず、不同意。

【反道】ㇵﾝ 道理にそむく。晉經、傳「以ニ一一一盟之約一」ㇾ違背。

【反撥】ㇵﾝ ○はねかへる。○他人の言爲意思等に反對する。

【反比】ㇵﾝ 數學上の語、二つの數の反對の比例を以て增減するをいふ。ㇾ反比例。

【反復】ㇵﾝ くりかへす。孟軻詩「說月如ニ宿昔一、人事幾一一」ㇾ反覆。

【反覆】ㇵﾝ ○不ㇾもとす。史、屈原傳「欲ㇾ一一之一篇之中、三致ニ意」○ひるがへる、言行に定りなき人。漢書、韓信傳「齊多ニ變一一之國」○幾度もくりかへす。ㇾ反復。

【反覆手】ㇵﾝ 手をかへす、事の甚だ易き喩。漢書、酈寄傳「殺ニ王降ニ漢、如ㇾ反ニ覆手一耳」ㇾ反掌。

【反璧】ㇵﾝ 人の贈物を反すにいふ。左、僖、二三「晉公子重耳之及ニ於

難一也、及レ貴、俗負鴨乃鰻二盤飧一、寓レ壁焉、公子受レ飧一レ」‖反餔。

【反哺】ホ 食物を口うつしにして食はせる。烏が母に哺育せられて生長せし後は其の恩に報ゆる爲めにかへしはぐくむといふ。よりて子が生長の後、親の恩をかへして養ふ義とす。哺は口中に在る食物。禽經「慈烏一一、白服不祥」梁武帝、孝思賦「銜蛇含レ珠以酬レ德、慈烏一レ一以報レ親」

【反命】ホ かへりごと、使者がかへりて報告する。儀禮「凡使者歸一一曰、某既得レ將レ事矣」‖復命。

【反目】ホン 目をそばだててにらみあふ。易、小畜「夫妻一一、不レ能レ正レ室也」

【反問】ホン 人に問はれたる事に對してあちらこちらに其の人に問ひかける。

【反倫】ホン 人の道にそむく。墨雅「負レ類一レ一」

【反戻】ホレ そむきもとる。荀夫論「下民一一」‖違背・違反。

六畫

【取】シュ 圓

○とる(捕・採)○採る、擇びて撮る。史、仲尼弟子傳「以貌一人、失二之子羽一」○貰りてたすけとする。易、繫辭「遠近相レ一」○をさむ(收)○うける(受)孟、萬章「一介不レ以レ與レ人、一介不レ以一諸人一」○もとむ(索)○めとる。中庸「一妻、如何」‖娶。

同訓異字 ㊀取・執・秉・把・操・採・撮・捕・捉・摯・娶・攫○取は捨の反、わが物にする義。孟子「可二以取一、可二以無一取、取傷レ廉」○執は物を固くとる義、筆をとり、器をとり、人をとらへ、心をとり守るなどに用ふ。中庸「擇レ善而固執レ之者也」○秉は執に近し、とりまもる意、秉レ燭、秉レ圭の類。○把は握也と註す、把レ盃・把レ巻の類、俗に一把といふは、一握りなり。○操は正しくとり守るなり、操レ斧・操二几杖一の類、又心をとり守るにも用ふ。孟子「操則存、舍則亡」○採はひろひ取るなり、采に同じ、採二草木一の類。○撮は指にてつまみ取るなり、一撮土はひとつまみの土なり。○捕は追ひかけてとらへる、とらふと訓す。追捕と熟す。○捉はとらへてくる義、把捉と用ふ。「捉二一個誠一將來」の類。○摯はぬき取るなり。漢書「斬レ將摯レ旗」○娶はとりてもとでにすること。易經「大哉乾元、萬物資始」○攫は掣に同じ、手にてあつめ取る義、總攬と熟す、また我が方へ引きつける義にも用ふ。後漢書「力優二英雄之心一」

【取次】シュ ○次第にの義。白居易詩「酔把二花枝一一吟」○圖雙方の中間に立ちて物事を傳へる、又、客の來意を主人に告ぐる。

【取舍】シャ とると、すつると、善をとり惡をすてる。漢書、賈誼傳「莫レ如レ免レ非一一」‖取捨。

【取捨】シャ 前條に同じ。

【取稱】ショウ ほまれをとる。稱は稱讃。舊唐書、山東人李白、亦以二文奇一一レ」

【取笑】ショウ 人にわらはれる。杜甫詩「一一同學翁」

【取得】トク ○とる、己の所有とする。○エ、長所。

【取予】シュ とると與へると、やりとり「史、仲尼弟子傳」

【取締役】トリシマリヤク 圖商事會社などの重役、すべての事務を執行し、且つ外部に對して會社を代表するもの。‖公司董事。

【取引】トリヒキ 圖賣買・交易・うけわたしなどの總。

【受】ジュ 有

○うく、得る、うけ取る。○うけつぐ(承繼)孟、萬章「殷一一夏、周一一殷」○いる(容納)きき入れる。○もる(盛)容れる。杜甫詩「野航恰一一兩三人」○のす(載)○らる、被る。

同訓異字 ㊀受・承・享・禀○受は物を手に受取り入るるなり。詩經「受二天之祜一」○承は下より上の物をうくるなり、承露盤と用ふ。承レ恩は、上より恩をうくるなり、受レ恩は以吾が恩を受けたる義なり。○享は饗と音義同じ、獻也、祭也、獻也と註す、御受納下さるといふ義。韓愈、祭二田橫一文「魂彷彿而來享」孝經「祭則鬼享レ之」享年・享レ福などと用ふるは、受と同じ。○禀は受レ命曰レ禀と註す、受と略一同じけれども、物を受くるには用ひず、禀レ命・氣質之禀の如し。

【受戒】カイ 佛戒を受ける。漢書、薛宣傳「師レ恩一レ」

【受經】ケイ 經書の講義を受け學ぶ。漢書、夏侯勝傳「勝翻久既繫、翻欲二從レ勝一レ、勝辭以二罪死一、翻曰、朝聞レ道夕死可矣、勝賢二其言一、遂授レ之」翻は黃翻。

【受敵】ジテキ をしへを受ける。任昉文「一一君子、將二二十年一」‖受業。

【受業】ジュギョウ 弟子が學業を師に受ける。國語「士朝而一レ一、晝而習復、夜而計レ過、無レ憾而後即レ安」

【受業者】ジュギョウシャ 教を受くる者。史、儒林傳「申公者魯人也、弟子自二遠方一至、一一百餘人」

【受驗】ジュ こころみをうける、試驗を

受ける。＝應試。

【受室】ジュシツ 妻を娶る。左、桓六「鄭太子忽帥レ師救レ齊、齊請レ妻レ之、忽固辭、人問二其故一、曰、レ一レ而歸、是以レ師婚也」

【受信】ジュシン 他より發せし音信を受ける。手紙電報等をうけ取る「―レ人」

【受賞】ジュショウ 賞與を受ける、褒美を受ける。

【受取】ジュ ○うける。漢書、王尊傳「―レ一歸鮪一」○トリウケ 圖 うけとりのかきつけ、領收書。

【受授】ジュ うけると、さづけると。受渡ウケワタシ

【受精】セイ 雌雄の卵巢内の卵子が雄の睾丸内の精蟲と相合して生殖作用を營むをいふ。

【受禪】ゼン 帝位をゆづりうける。宋書、樂志「―レ一卽レ阼、享二天祥一」

【受祚】ジュ ○天子の位をうけつぐ。○さいはひをうける。薛綜、鳳賛「上下一レ一」

【受胎】タイ はらむ、みごもる。＝懷姙 姙娠シンシン

【受託】タク たのみをうける。依賴せられる。

【受知】チ 人の知遇をうける。歐陽修詩「―レ一固不レ易、知レ士誠尤難」

【受持】ジ 事をうけもつ。擔當する。王安石詩「承レ恩奉二敎表一方當二弘一一二」

【受答】ジュ むちうたれる。史記「張耳隨レ之、使レ一レ一」

【受納】ノウ うけいれる。後漢書、侯覽傳「一二一貨遺、以二巨萬一計」

【受罰】バツ 罪を受ける。左傳「有レ罪一レ一」

【受孕】ヨウ さいはひをうける。詩經「一レ一無レ疆、四方之綱」

【受命】メイ ○君主の命令を受ける。吳子「一レ一而不レ降、家、敵破而後言レ返、將之過也」○天命を受けて天子となる。次條を見よ。

【受命之君】メイノキミ 天命を受けて天下に王たる君。史、周紀「西伯、蓋―一」

【受命寶】メイホウ 天命を受けて天子となる者の印。五代史、晉紀「得二一一」ニ御璽ヲ

【受理】リ うけをさめる、受け附けて處分する。

【受領】リョウ ○うけとる。○ズリョウ 圖 領地を受ける、國司に任ぜらる、特に受領の稱。

【受祿】ロク ○さいはひをうける。詩經「一二于天一」○俸祿をうける。

【叔】シュク シク 又

○をぢ（季父）○兄弟の年下の弟「伯仲一季」○こじうと、婦より夫の弟をさしていふ（小舅）○ひろふ（拾）をさむ（收）詩、豳風「九月一菽」菽は藿の實。○まめ（豆）＝菽。○よし（淑）＝俶。○すゑ（晩季）○すゑとなる、おとろふ。

【叔季】キ ○すゑの兄弟、末弟。○すゑの世。朱熹賦「在二一一而且然、矧休明之景運」

【叔兒】ジ 異姓のをぢ。禮記「天子同姓謂二之叔父一、異姓謂二之一一」李商隱詩「一一德懷馨」

【叔世】セイ すゑのよ、澆季の世。漢書、刑法志「三隆之興、皆一一也」＝末世。

【叔薬】ヤク 豆とあはと。漢書、昭帝紀「得レ以二一一當一賦」＝菽薬。

【叔孫通】ソンツウ 漢の薛の人、博士となり、高祖に説きて朝儀を起さしむ、古禮と秦儀とを采り雜へて之を制す、通を拜して奉常となし、金五百斤を賜ひ、太子太傅に遷す。

【叔父】フ 父の弟、をぢ。親名「伸父之弟、曰二一一、叔、少也」今は伸父をも含めていふ。北國にては母の弟にもいふ。

【叔母】ボ 父の弟の妻、をば。南史「一一劉撫養」我國にては父母の妹にもいふ。

【叙】ジョ 叙（支部七畫）の俗字。

【叛】ハン 一番 ホン

○そむく「離一」＝反。通じて畔に作る。○むほん「謀一」

同訓異字 叛・畔・倍・背・反・負 乖

○叛・畔の二字は普通通ず、離叛なり。史、李斯傳「後儀相立、爲二佞王一叛レ秦」孟子「燕人畔」○倍・背の二字は普通通ず、反なり、うらはらになるなり、向の反なり。孟子「師死而莫レ之一」書經「背二師保之訓一」○反はひっくり反りてそむくなり、叛に通ず、謀反と用ふ。○負は恩に背き、德を忘るるをいふ。唐詩「不レ負二信陵恩一」○乖は戾なり、背なり、異なり、さからひて、そむく義、乖二先王之訓一の類。

【叛臣】ハンシン むほんせる家來。

【叛將】ハンショウ むほんせる將。

【叛跡】ハンセキ むほんを企てたるあとかた、叛逆の形迹。

【叛賊】ハンゾク むほんにん。

【叛徒】ハント むほんせるともがら。

【叛服】ハンプク そむくと、したがふと。

【叛兵】ヘイ むほんせる兵。

【叕】テツ 厄

○つづる（聯）○つらなる（連）

七畫

【叛亂】ハン　そむきみだる。むほん。‖叛逆。

八畫

【叟】（一）ソウ　有　（二）シウ　尤

㊀おきな、老人の稱、老を尊ぶ稱。孟、梁惠王「一不遠千里而來」‖翁。㊁―は米をとぐ（淅米）聲。詩、大雅「舂之――、烝之浮浮」‖溲溲。

十四畫

【叡】エイ　霽　睿に通ず

○深くあきらか（深明）○とほる（通）○さとる、さとし。○聖と同じく天子のことにいふ「一慮」「一覽」

【叡感】カン　天子の御感賞。

【叡才】サイ　すぐれてさときはたらき。潘岳「閑居賦」「持二鄭―一、遊二於雲漢之閒一」

【叡算】サン　天子の御年。歐陽修文「―綿長、等二乾坤一而不レ老」‖寶算。

【叡旨】シ　天子のおぼしめし。‖聖旨。

【叡聖】セイ　知德すぐれて事理に通達す。又其の人。主に天子の德をたたへていふ。後漢書、鄧禹傳「昔文王承二積德之緒一、加レ之以二―一、三分天下一」‖明聖。

【叡智】チ　すぐれてさときちゑ。白賁「心意―一」‖叡才。

【叡哲】テツ　すぐれてさとくかしこし。東京賦「―一欽賢、鄙二致洛宮一」

【叡聞】ブン　天子のおきき。‖天聽。

【叡覽】ラン　天子の御覽。錢起、雲地圖賦「陪二聖主之慶步一、安二重華之―一」‖御覽・天覽。

【叡略】リャク　すぐれたるはかりごと。晉書「世宗以二―一創レ基」‖英略。

【叡慮】リョ　天子のみこころ。‖叡德。

十六畫

【叢】ソウ　東　或は叢・叢に作る

○くさむら。草のしげく生ずる所。○物が一所にあつまる、あつむ（聚）漢書、東方朔傳「―珍怪」むらがる。○わづらはし、くだくだし。

【叢祠】シ　草がしげりてけがれる。元稹、詩序「通州之地、―卑濕」

【叢笑】ショウ　○むらくも。むらがり集まれるくも。○古の音樂の名。李善、上二文選注一表「嬉戲之後、接二―一之奏詞一」

【叢脰】トウ　囚人を捕縛して四へ屈くす。うばらにて圍みて逃亡を防ぐが故。易、次卦「上六、係用二徽纆一、真二于―一、三歲不レ得、凶」

【叢筆】ヒツ　たけやぶ、たかむら。杜甫詩「―低レ地翳」

【叢桂】ケイ　むらがり生ずるもくせい。庾信賦「小山則―一關レ人」

【叢輕折レ軸】ケイセツジク　重りて載き物にても積みて多きに至るときは、車軸を折るに至る。漢書、中山王傳「――、羽翮飛レ肉」

【叢語】ゴ　あつめたることば。

【叢脞】ザ　くだくだしし。煩細にしてしまりなし。書、益稷「元首―一哉、股肱惰哉」

【叢撫】ブ　むらがりあつまる。楚辭「―細介」

【叢玉】ギョク　むらがりいたる、しきりに來る。呂覽「萬災―一」

【叢桐】ドウ　樹のしげみの中にある梧れたるほこら（史、陳涉世家）鄒宗元詩「―一古木疎」

【叢集】シュウ　むらがりあつまる。舒嶽賦「―一累積、奚二舒于其側一」

【叢棘】キョク　むらがりあつまる。竹書紀年「八風循通、陰蟲―一」‖叢萃。

【叢書】ショ　○書籍をあつめる。又、あつめたる書籍。韓愈文「門以二扃板一、―一其閉一」○煩碎にして統一なき書といふ義にて、雜解、唐の陸龜蒙、自ら其の詩文を集めて笠澤―といふ。○同種の書を一とまとめにして一部とする稱「漢魏―一」

【叢萃】スイ　むらがりあつまる。中論「眞僞―一而不レ悉」‖叢聚。

【叢生】セイ　むらがりはえる。西都賦「榛木―一」‖蕪生。

【叢祠】シ　むらがりてめぐる。古岳瀆經「木魅水蠱、奔馳―一」

【叢聚】シュウ　むらがる貌。韓愈詩「淮之水紆紆、楚山直―一」

【叢談】ダン　あつめたるものがたり。說苑「―一篇」あり。唐書藝文志に「桂苑―一」あり。

【叢綴】テツ　あつまりてこまやか。塊雅「竹言二根本一―一、松言二枝葉繁竹一」

【叢竹】チク　たかむら。漢書「行數百千里、夾以二深林一―一」

【叢篠】ショウ　ささはら。生ひしげれる細竹。張九齡詩「―一赤泉深」

【叢帖】チョウ　古今の法帖を彙刻せしもの。唐の時の秘清堂帖に始まる。

【叢芳】ホウ　むらがりたるにほひ草。陸子昂詩「―一鬱淒、郁郁盼紛」‖蕙芳。

【叢薄】ハク　くさむら。草木むらがりしげる、水に臨といひ、草に薄といふ。淮南子「深林―一、虎豹之所レ樂也」

【叢莽】ソウ　しげれるくさむら。杜佑文「蕪―一」

【叢茂】モ　むらがりしげる。阮籍詩「榛―一以傾岑」

【叢蘭欵】ランカン　芳蘭の香を愛する意。楚辭「怨しき者が善き者の害を恐すに

喰ふ。文子「――、人性欲ノ乎、嗜欲害ノ之」

【叢林】ソウリン 門徒の聚り居る處をいふ。臨濟正宗「譬如二大樹叢一、故僧聚處曰二叢一」

【叢雲劍】ソウウンケン 圖三種の神器の一、素盞男命ノミコトが出雲の國にて大蛇の尾より得たるつるぎ。＝草薙劍ナギノツルギ

口部

【口】コウ 音

○くち、五官の一。○ほとり。○ひとかず、ひと。孟、盡心「八一之家、可二以無一レ飢」○しなかず、刀劍などを數ふるにいふ「劍一一」○あな（孔穴）○くちにす、口に出して言ふ。○いりくち、こぐち。○圖出入の要地、港の義に用ふ「出一」「入一」○圖はし、はじめ、端緒。○てづる、緣、仕事「一をさがす」○たぐひ、種類「別の一」

【口業】コウゴウ 口供の調書。開元天寶遺事「疑伏二世罪一、能一張公一一」

【口哦】コウガ くちずさむ。陳海詩「一一七字黃鸝語」

【口號】コウゴウ くちずさむ「新年一一」杜甫、紫宸殿退朝口號、注「一一猶二隨レ口誦吟一」＝口占・口吟。

【口講指畫】コウコウシクワク 口にて說き、指にて畫く。ねんごろにをしふる形。韓愈、柳子厚墓誌銘「紐二永子厚一――、皆二文詞一者、悉有二法度可レ觀」

【口角】コウカク くちのほとり。李商隱詩「一一流レ沫右手飜」＝口邊。

【口岸】コウガン 圖江海の各港をいふ「通商一一」＝口は港。

【口氣】コウキ くちつき、ことばつき。＝口吻。

【口義】コウギ 口づから其の意義をのべる。唐代、明經科の試驗に一一・儒義の兩種あり。

【口吃】コウキツ 口がどもる。史、韓非傳「非爲レ人一一不レ能二道說一而善著レ書」

【口給】コウキフ ことばがたっしや。給は捷。論、公冶長「禦レ人以二一一一、屢憎於人」＝口辯。

【口吟】コウギン ○口どもりて言語明了ならず。後漢書「一一舌言」○口ずさむ。＝口哦。

【口供】コウキョウ くちがき、罪人が口づから其の罪狀を述べたることを筆記せるもの「宋儒錄」

【口外】コウガイ ○圖長城以外をいふ。又、西北邊境の關外をいふ。○圖くちに出す、他言する。

【口實】コウジツ ○いひぐさ。人の話柄となす。食、仲應之語「恐二來世以レ台爲二一一一」台は吾。○只其の言あるのみにて實なきをいふ。左、襄、二二「若不レ恤二其患一、而以爲二一一一」○口中の食物。易、頤卦「自求二一一一」○口すぎ、錄食の義。左、襄、二五「豈爲二其一一一、社稷是養」

【口耳之學】コウジノガク 耳に聞きたることを、そのまま口に言說して、己に益する所なき學問。遠鄙陰說の學問。みみがくもん。荀、勸學「小人之學也、入二乎耳一、出二乎口一、口耳之間則四寸耳、曷足三以美二七尺之軀一哉」

【口上】コウジョウ 圖口にて申し上げる。言上すること。

【口受】コウジュ 直ちに口づから敎をうけること。史、十二諸侯年表「七十子之徒一一其傳指」

【口述】コウジュツ くちづからのべること。又其の言葉。

【口數】コウスウ 人數をいふ。史、高祖紀「吾以二其一一」

【口舌】コウゼツ ことば。くちさきの史、陳侯世家「此雖下以二一一一爭上也」

【口舌之勞】コウゼツノロウ 言語の上にて立てたる功。史、廉頗藺相如傳「相如徒以二口舌一爲レ勞」

【口占】コウセン くちずさむ、口中にて隱に其言をのべて人に授くる義。後漢書、陳寵傳「馮几一一授二書吏一」

【口宣】コウセン ○口づから天子の命をのべ傳へる。唐書、王起傳「命二中使一一一」○圖古、五位以上の官位を授くるに、頭辨が敍旨を取次ぎて傳達せし口頭の宣命。

【口錢】コウセン ○人口に賦課する稅。人頭稅。漢書、貢禹傳「奏二一一一一一一一帝一」○圖買官の謝せし手數料。

【口譖】コウセン くちづから攻めすすめる。漢書、黃霸傳「一一霸干二上一、擢爲二潁州刺史一」

【口唾】コウダ つばき。王充論衡「與レ人談言、一一射レ人」

【口漱】コウソウ 口を漱れしあとのつや。最く用ひし茶碗の緣などのよどれの

類。禮、玉藻「毋流而杯圈不能飲長、口澤之氣存焉爾」

【口達】コウタツ　ことばにて通達する、言ひ渡す。後漢書「一一宣誡」

【口陳】コウチン　口上にてのべる。＝口述。

【口中雌黄】コウチュウシオウ　かみつぶし易し、以て事の極めて危く又、容易なるに喩ふ。漢書、王莽傳「以二新室之成一、而香二胡麻一、無レ異二口中雌黄一」

【口中雌黄】コウチュウシオウ　言論を改変するに喩ふ。雌黄は黄色の顔料ゲ古の書冊は黄紙を用ひ、誤寫ある時は雌黄にて塗り消し、其の上に改め書せし故にいふ。晉書、王衍傳「義理有レ所レ不レ安、隨即改更、世號二——一」

【口頭交】コウトウノマジハリ　くちさきのみにて眞實のなきまじはり。孟郊詩「但結二——一、肝裏生二荊棘一」

【口碑】コウヒ　いひつたへ。世人の傳說は永久に滅びざること石碑に刻せしが如し、故にいふ。五燈會元「勳レ君不レ用鐫二頑石一、路上行人口似レ碑」

【口吻】コウフン　ことばづかひ。張彦遠、指南車賦「詞給而一一」

【口賦】コウフ　人口に割りつけて取る稅金。漢書、昭帝紀「毋レ收二四年五年一一」

【口腹】コウフク　飲食をいふ。禮記「先王之制二禮樂一也、非三以極二一耳目之欲一也」孟、告子「一一豈適爲二尺寸之膚一哉」

【口吻】コウフン　くちさき。言語をいふ。舊唐書、李德裕傳「編纂出二于智慮一、乘枯生二于一一一」又、ことばづき、口氣。

【口北】コウホク　關蒙古をいふ。

【口約】コウヤク　口やくそく、ことばの上の約束。

【口糧】コウリョウ　○兵士の糧食。＝兵糧。○貧民に給する食物。

【口論】コウロン　國いさかひ、ことばのあらそひ。＝爭論・口舌之爭。

【口業】コウゴウ　佛言語より起るすべての惡業。十惡中の妄語・綺語・惡口・兩舌の類。佛家にて身・口・意を以て三業と爲す。

【口授】コウジュ　くちづからさづく。漢書、蓺文志「一一弟子、弟子退而異レ言」

【口傳】コウデン　口づから傳へる。齊家要「吾鄉當二嘉靖年間一、里中士大夫相拜者、尙不レ過二一一」

【口分田】クブンデン　國大化の改新後、國民一人毎に平均に分與せし田地。

【噤レ口】キンコウ　口を閉ぢて物を言はず。史、龜鑑傳「鄧公曰、臣恐天下之士一レ不二敢復言一也」＝杜口。

【衝口而出】ショウコウジシュツ　口に任かせて出づる。東坡集「跋二歐陽公書二云、此數十紙、皆文忠公——、縱レ手而成、初不レ加レ意者也」

【杜レ口】トコウ　口を閉ぢて言はず。史、范雎傳「一レ裹レ足、莫二肯攖一レ牙」＝閉口。

【閉レ口】ヘイコウ　杜レ口に同じ。晉鐵論「倪大夫、一レ不レ言」

【閉レ口而笑】ヘイコウジショウ　口を大きく開きて快く笑ふ。莊、盜跖「人除二病疫死喪憂一、其中——者、一月中未レ過二四五日一而已矣」

【箝レ口】カンコウ　ものをいはきぬ。漢書、賈誼傳「且兒啼一塞二其口一也」＝杜レ口。

【守レ口】シュコウ　言をつつしむ。發幸雅誡「當鄒公有二一一一如レ瓶、防レ意如レ城之誡一」

【口鉗】コウカン　口をつぐみてもの言はず。鉗は箝に同じ。莊子「形解而不レ欲レ動、一一而不レ欲レ言」＝箝口

【口尙乳臭】コウショウニュウシュウ　口がまだちくさし、其の年少にして經驗乏しきをそしる。史、高祖紀「漢王以二韓信一擊二項王一、問二鄒食其一、得二大將一、對曰、柏直、漢王曰、是——、安能當二善韓信一」

【不レ容レ口】フヨウコウ　人の美をほめたたへて口にて形容し盡されず。史、蓺盛傳「稱レ之皆——」

【可口】カコウ　口によくかなふ。味のよき義。莊子「三皇五帝之禮義法度、其猶二柤梨橘柚一耶、其味相反而皆可二於口一」

【口亡二揮霍一】コウボウキカク　言ふ所みな舞にして、えらびすつべき言なし。學經「——、身亡二揮行一」

【口有レ蜜腹有レ劍】コウユウミツフクユウケン　外面親切なるが如くにして、內心陰險なるに喩ふ。通鑑綱目、唐紀「李林甫爲レ相、尤忌二文學之士一、或陽與レ之善、啗以二甘言一、而陰陷レ之、世謂二林甫口有レ蜜腹有レ劍」

【口是傷レ人之斧】コウゼショウジンノフ　讒言、言語「利レ人之言、暖二如絲絮一、傷レ人之語、利二如荊棘一、一言半句、重値二千金、一語傷レ人、痛二如刀割一、口是傷レ人斧、言是割レ舌刀」

【口是禍之門】コウゼカノモン　言語の愼むべき戒、禍は口より起るが故に禍道詩「——、舌是斬レ身刀、閉レ口深藏レ舌、安レ身處處牢」

【出レ口入レ耳】シュツコウニュウジ　甲の口より出でて乙の耳に入る。他に知るものなきをいふ。左、昭、二十「王曰、言出二於余口一、入二於爾耳一、誰告レ建也」

右　ウ　イウ　畫　有

○みぎ。左の反對。○みぎす、右の方に行く。○そば、又、そばに居る侍者。○たすく（助）側ぶにゐて輔佐する。書、大甲「左一一厥辟」厥辟は其の君、左右は佐佑。○みちびく（導）○

かみ(上)〇たふとぶ(上・尚)〇すすむ。倘に通ず。〇つよし(強)

【右】ユウ・ウ・ウウ・ウウ・ウウ 右・尊・貴・崇・上・尚の別は尊(寸部九画)の條を見よ。

【右學】ガク 殷の世の太學をいふ、西郊に在り、大夫の老いたる者を養ふ。又、左學は、庶民の老いたる者を養ふ。禮、王制「殷人養二國老于一一、養二庶老于左學一」

【右掖】エキ 國右大臣の異稱。＝右槐

【右拒】キョ 右方の方陣。左拒の對。左傳「爲二一一一以當二陳人一」

【右軍】グン 〇天子に中軍・左軍・一一あること左傳に見ゆ。〇晉の王羲之、一一將軍たり、よりて羲之を稱していふ「王一一」(晉書、王羲之傳)

【右契】ケイ てがた、わりふの右の半分。證書をいふ。次條參看。戰國策「操二一一一而爲レ公、責二德於秦楚之王一」＝右券。

【右券】ケン 右のわりふ。てがた、證文の義、古は木片に證文を記し、左右に兩分し、一一を債務者に渡し、左券を債權者の方に存し置き、他日相合せて證となせしなり。史、平原君傳「事成、執二一一一以責」＝右契。

【右史】シ 古の官名。史記正義、論史例「古者帝王一一記レ言、左史記レ事、言爲二尚書一、事爲二春秋一」

【右手書レ圓左手書レ方】ケイシュニハヤクヲカキ ニハヤクヲカキ

一時に二事は成しがたき喩。韓非、功名「一一、兩不レ能レ成」

【右職】ショク 高官をいふ。後漢、循吏傳「進明以二新入レ財爲二官、不レ署二一一一」

【右姓】セイ 貴き家がら。後漢書、郭伋傳「更始新立三輔、連徴二兵戎、百姓震駭、強宗一一、各據レ衆保レ營、莫二肯先附一」＝右族・名門・名族・大姓・貴族。

【右戚】セキ 勢力ある親類。南史、蔡撙傳「臣預爲二一一一且職在二納言一」

【右族】ゾク すぐれて勢力あるいへがら。柳氏家訓「余見二名門一一、莫レ不レ由二祖先忠孝勤倹一以成中立之上」

【右筆】ヒツ 國かきやく、昔、貴人に侍して書記を掌りし役。＝祐筆・侍史。

【右衛】エイ たすけ、たすける、天子の左右に在りて輔佐する。又、其の官名一一左輔と對稱す。晉書、潘尼傳「左輔・一一・前疑・後丞、一日萬機、衆業乾乾」

【右府】フ 右大臣の唐名。＝右相。

【右武】ブ 武をたふとぶ。尚武に同じ。史、平津侯傳「守成尚レ文、遭遇レ一一」遭遇とは亂世に遭遇するの義。

【右狀風】フウ 秦の内史の地。漢の都名、三輔の一、扶は助、風は化の義。今の西安府以西、鳳翔府に至る地。

【右文】ブン 文學をたっとび重んずる。宋史、禮志「蔵二列聖崇儒一一之擧一」

【右文左武】ブン 文武兩道を以て天下を治むる義。潘岳、君臣相遇樂賦「咸右レ文而左レ武、或先レ吁而後レ唱」＝左文右武。

【右袒】ウタン 肩の衣を左右に張りたるが如く、其の右方に張りたる陣をいふ。左袒の對。史、李牧傳「多爲二奇陳、張二左右翼一」＝右軍。

【右大臣】ダイジン 國昔、左大臣を輔けて萬機を執行する大臣の名。

【右往左往】オウオウサオウ 國右へゆき左へゆく、あちらこちらに行きちがふ。

【可】

㊀カ ㊁コク 陷 歌

㊀べし。決定・想像・命令・可能の意を表はす辭。〇又、助字として輕く用ふる。中庸「體物不レ一一」遺」〇うけがふ(肯)承諾する。〇ゆるす「許一」否の反對。〇よし、やや よし。論、雍也「一一也簡」〇かしづき、もり(傅御)役、内則「擇二于諸母與レ者一」〇ばかり、ほど。史、滑稽傳「飲一二五六斗一」㊁汗コクは突厥の君長。

【可】カ 哿・箇 【可】コク 陷・合

レ可・當・合・應・容・須・宜〇可は肯也、許可也と註し、せらるると譯す、可二深教一は、深く猥ぜらるるなり、不レ可レ已は已むべからざるなり、秋卑不レ可レ聞の如し。〇當はさうなるべきと譯す、當然の理などの當の義なり、まさに何何すべしと反り訓む。史、淮南王傳「非二大王一當二誰立一者」〇合は當と同用。宋論「秦皆以レ水而不レ合レ土」俗語に多く用ふ。水滸傳「小子被レ論之人、理合レ就レ死、何故將軍賣嚇相待」〇應は料度之辭也と註す、なるべし、であらう、などと譯す、彼の將に然らんとするを度る義。家語「匹夫爲二侮諸侯一者、誅應レ斯」〇容は許容の義を含めり、可と略レ同じ、不レ容また憂察と通用し、單用することは希なり。〇須はすべからく何何すべしとかへり訓む、用也、待也、求也、と註す、かくせよともとむる意あり。戰國策「須二以決一レ事」〇宜はよろしく何何すべしとかへり訓む、さうした方がよき故、さうせよと、判斷する意あり、宜レ去は去る方がよき故に、去れとの義なり。

【見レ可而遷】スルヲミテウツル 戰に臨みては、宜しく進むべきを認めて進む。左、宜十二「臨武子曰、——、知レ難而退、軍之善政也」

【可萬】カバン 法度に叶ふ。萬は頗なり。考工記「可レ規一レ、謂二之國工一」

【可決】カケツ 行ふがよろしと決定する。

否決の反対。
【可見】レ 可人に同じ。世説「桓温経二王敦墓下一曰、一一、一一」
【可人】ジン 取るべきところある人、善き人。蘇軾詩「始信淵明是一一」‖可見。
【可燃物】カネンブツ 有機鉱物の一名 有機物より化成せし鉄物にて燃焼し得るもの、石炭の類。
【可能】ノウ ○為し得られる。不可能の反対。○ヨクシ堪へられぬ。許渾詩「一レー垂白侍二文王一」‖可レ堪・可レ耐。
【可否】ヒ よしあし。又、許すべきか否か。‖是非。
【可分債務】カブンサイム 法律上、普通に分けて弁済し得る性質の債務。銭米の債務の類。
【無レ可無レ不可】カモカムフカモカム 言行に過不及なく中道に合へるをいふ。論、微子「我則異二於是一、——」
【可憐】カレン ○愛やさしく美くしっ李白、清平調「借問漢宮誰得レ似、一一飛燕倚二新粧一」○問むべき意。ふびんっ荘、庚桑楚「汝欲レ返二性情一而無二由入一一レー哉」
【可汗】カカン 唐代、夷狄の君長の称っ唐書、突厥伝「一一猶二単于一也、妻曰二可敦一」
【不レ可】フカ 可とせず、聴き入れず。左、定十三「趙孟一レー」

【号】

號(虎部七画)に同じ。俗に号とかく。

【句】

㊀ク ㊁コウ・ク ㊂コウ・ク 尤 有 遇

㊀くぎり、詩文のひとくぎり、詞絶ゆ、とどまる(止)○まがる、かがまる(屈曲)鉤に通ず。㊁あたる(當)俗に勾に作る。一當は任務に當る、辦理の義。○かかはる(拘)○弓を引きしぼる、又、やごろ(鵠)㊂矩形を對角にそひて折半せしものの稱、直角三角形「一股」○まがる(曲)かがまる。○國發句の略。俳句。
【句格】カク 語句を組み立つる法則。蘇軾詩「改二更一一各其便」‖句法。
【句集】クシュウ 國俳句を集めたる書物。
【句題】クダイ 國三代集中の和歌の七字句一つを取り出して歌の題とするもの。
【句点】クテン 句のきれめにしるす点。
【句投】クトウ 句讀に同じ(孔氏雑説)
【句逗】クトウ 句讀に同じ。
【句讀】クトク よみきり、文中にて文意の切れる處を句といひ、句中にて讀み來の一寸止まる所を讀といふ。句點は「○」讀點は「、」を用ふ。開天遺事「每レ人談論、皆成二一一」」韓愈、師説「彼童子之師、授二之書一、而習二其一一一者也」‖句逗。
【句法】クハフ 詩文の句の組み立てかた。‖句格。
【句僂】コウロウ まがる。説苑「其卑下一一、背猶二其理一」
【句欅】クラキ さきの曲れるほこ。史、秦始皇紀「一一長鎩」‖句子戟・鉤戟。
【句當】コウタウ ○とりあつかふ、任務を引受けてはからふ。宋史、曹彬傳「江南一一公事一回」○國寺から當る僧、学侍ガクジの第一に居る稱「一一の内侍」句を勾に作る。○官の名、検校の次、監頭の上。
【句配】コウハイ 傾斜の度「山の一一」「急一一」
【句股】コク ○をれ曲りし造り方のすり、句は鉤。通雅「一一其般」‖句闌。○後世は專ら妓女俳優の居る處の稱とす。鶏肋集「胡仲彬乃杭州句闌中演二說野史一者」
【句留】コウリウ 事に因りてつなぎとめる。白居易詩「未レ能下抛二得杭州一去、一半一一是此湖」

【另】

クヮ 馬

○わかつ、さく。人肉を割りて其の骨を置く。‖剮刷。

【叫】

ケウ 嘯

○さけぶ、なく(泣)さけぶ聲。○一一は遠く聞ゆる聲。
俗に、叫に作るは誤。
【叫號】ケウガウ さけびよぶ。詩、小雅「莫不レ知一一、或怪怪幼汝」
【叫火燈】キャウクワテン 夜中、火の用心と呼びて市中を巡るもの、一まはりの清稼錄「殘年永夕有下聚二街談一街高唱二禦防燭小心一者上名曰二一一一」
【叫駡】ケウバ さけびてかまびすし。李白詩「停二棹彼二林樾一、聞二猿相一一」
【叫喚】ケウクワン ○わめく。通典「聲二鼓拒戰一、不レ得二一一一」○國一一地獄は八熱地獄の第四、獄卒に責められて泣きさけぶ世界。
【叫譟】ケウサウ かまびすしくさけぶ。韓愈文「提レ兵一一」
【叫叫】ケウケウ ○さけぶ聲の形容。柳宗元詩「一一稲鴻哀」○遠く聞ゆる聲。揚雄、解難「大語一一」
【叫嘯】ケウセウ さけびうそぶく。木華、海賦「更相一一」
【叫然】ケウゼン 聲を立ててさけぶ貌。漢書、呂邑王傳「遂一一號曰」
【叫呶】ケウドウ かまびすし。柳宗元文「狂奔一一、以干二天刑一」‖叫駡。
【叫天兒】ケウテンジ 告天児の異名。雷州府志「一一似レ雀、飛鳴而飛愈高」‖雲雀。鶾。
【叫囂】ケウガウ 大聲にてさけびののしる。
【叫賣】ケウバイ さけびうる。陳夫人詩「小艇撐來一二花」

【叶】

ケフ 協(十部六画)に同じ。
國かなふ。意の如くなる、能く

する「養生不相一」

【古】コ　虞

○いにしへ。今の反對。三一は上一中一下一。○むかし（昔）過去の世。○昔の道、古の事。論、遡而「信而好レ」○先王又、先祖。禮、祭義「以祀二天地山川社稷先一」○ふるし、ひさし（久）時を經ること久し。○ふるめかし、昔のおもかげ、流俗に趨き附かざるにいふ「一道」「一文」○はじめ（始）

【古意】コ　○ふるめかしき心もち。蘇軾詩「陶居有二一一」○いにしへをしのぶ心、懷古の情。李密詩「悵然懷二一一」

【古印】イン　古人の用ひし印〔印文考論〕

【古雅】コガ　ふるめかしくみやび。法書要錄「可レ謂二高雅一一有レ餘」

【古戒】コカイ　古人のいましめ。正書「陸下謹二一一、反二覆參考」

【古格】コカク　古代のかた。古の法式。

【古學派】コガクハ　○昔の學藝を研究するを主とする學派。○圖伊藤仁齋の學派、宋儒の新しき理氣說に反して、古き經義を研究するを主とするが故。

【古稀】コキ　七十歳。杜甫、曲江詩「酒債尋常行處有、人生七十古來稀」侯鯖錄「令閨方當二而立歳一、賢夫已近二一一年一」令閨は人の妻の敬稱。而立は三十歳。

【古昔】コセキ　昔の正しき義理。唐書、禮樂志「敬二采一一」

【古金】コキン　圖むかし用ひし貨幣、小判・大判の類。

【古玩】コガン　珍奇の古器の玩賞すべきもの。〇古董。

【古玩舖】コガンポ　俗ふるだらぐみせ。骨董店。〇古董舖。

【古諺】コゲン　ふるきことわざ。譚苑醍醐「左傳、脣亡齒寒、蓋一一也」

【古語】コゴ　古に行はれしことば。蘇軾詩「一一多二妙字一」

【古今】ココン　昔と、いまと。〇今昔。

【古今和歌集】コキンワカシュウ　圖二十巻、我國勅撰和歌集中の最も古きもの、醍醐天皇の延喜五年、紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑等勅を奉じて撰す、略して古今集ともいふ。

【古參】コサン　圖古くより參りて仕へ居る者、ふるがほ。新參の對。

【古詩】コシ　詩の一體、酒を押すのみにて、必ずしも平仄句數にかからず、其の體に、五言・七言又は長短句などあり。

【古事記】コジキ　圖三卷、神代より推古天皇に至る事を記す、我國史書の最古のもの、元明天皇の和銅四年、太安麻呂に詔して、稗田阿禮の口誦する所を記せしめたるもの。

【古心】コシン　古の人の心。古のままのすなほにしてかざりなき心。古貌を見よ。

【古人之糟魄】コジンノソウハク　魄は粕に同じ、さけかす。今世に傳はる古聖賢の言は、古人のかすばかりにて、大切の滋味なしとの意。莊、天道「桓公讀二書於堂上一、輪扁斲二輪於堂下一、釋二椎鑿一而上、問二桓公一曰、敢問公之所レ讀爲二何言一邪、公曰、聖人之言也、曰、聖人在乎、公曰、已死矣、曰、然則君之所レ讀者、——已夫」

【古酒】コシュ　年を經たるふるき酒。今年醸造せし酒を新酒といふの對。

【古色】コショク　ふるめかしきいろ。時代のつきしいろつや「一一蒼然」

【古昔】コセキ　むかし。杜甫詩「溫溫語候門、禮亦如二一一一」白居易詩「溫溫語候門、禮亦如二一一一」

【古跡】コセキ　むかしの事物のあと。旧蹟・舊跡。

【古先】コセン　いにしへ。昔賢「一一哲士」

【古戰場】コセンジョウ　昔時、戰爭のありし場所。唐の李華に弔二一一一一文あり。

【古體】コタイ　○いにしへぶり。○圖古風。○絶句及び律詩以外の詩。

【古刀】コトウ　圖ふるきかたな。德川時代以前に造りしかたな。其の以後のを新刀といふの對。

【古道】コドウ　ふるきみち。又古の道。文天祥、正氣歌「一一照二顏色一」

【古註】コチュウ　經書の漢唐時代の註釋をいふ。宋以後のを新註といふの對。〇古注。

【古家】コカ　ふるきつか。水經、注「瑯琊山爾有二一一一陵柏爾然」〇古屋。

【古典】コテン　○古代に行はれし書物、我國の紳典、支那の經書、希臘・羅馬時代の著書の類。○古代の典章。後漢書二建武五年、乃修二起大學、脩二一一一」

【古渡】コト　○ふるき船わたしば。○圖ふるく外國よりわたり來りし品物「一一珊瑚」

【古董舖】コトウホ　俗古道具屋。〇古玩舖。

【古方】コホウ　古昔の藥方。宋書、許叔重嘗疾篤「一一一」

【古貌】コボウ　昔の人の如き古雅なるかたち、古人の風采。韓愈詩「孟生江海士、一一又古心」

【古風】コフウ　○いにしへぶり、昔のおもむき。唐書、王仲舒傳「穆宗每言、仲舒之文有二一一一」○古體の詩。〇古詩。

【古物】コブツ　ふるくなりし昔の品物。〇古董・古玩。

【古文】コブン　○漢の代、別時代の科斗文字をいふ稱。史、儒林傳「孔氏有二一一尚書」○唐の代、古體の散文をいふ。六朝以來の四六文の對。韓愈、師說「好二一一一」

【古文辭學】コブンジガク　明の李攀龍・王世貞等が唱へたる文學上の一派、先秦

を典則として詩文を作ることを主張せしもの。物徂徠は之に倣ひて更に経義を解する上にも古文辞に通ぜざるべからずと提唱せり。

【古文眞寶】コブンシンポウ　前集三巻、後集二巻、宋の黄堅編すと傳ふ、七国より宋に至る詩文を錄す、前集は詩を録め、後集は文を録む。

【古文辭類纂】コブンルイサン　七十五巻、清の姚鼐撰す、論辯・序跋等の十三類に分ち、古文の模範たるべきものを收む、選擇頗る精嚴とす。

【古文尚書】コブンショウ　四十六巻、五十九篇、漢の魯の共王、孔子の宅を壞ちて壁中より得たるもの、若干斗文字、故に——といふ、後偽多く其の偽を識す。

【古墳】コフン　ふるきはか。虚論詩「一樹繁花對二一墳」

【古墓】コボ　ふるきはか。白居易詩「一一何代人、不レ知二姓與一レ名」

【古木】コボク　ふるき立木。王維詩「一一無二人逕一、深山何處鐘」＝老樹。

【古眛】コマイ　ふるめかしきおもむき。歐陽修詩「詞意正貴レ非レ俚、一一雖レ淡淳不レ薄」

【古來】コライ　むかしより。王倫詩「醉臥二沙場一君莫レ笑、一一征戰幾人回」

【古老】コロウ　故事に通じたる老人。ものしりの老人。椎磯、史「聽二一一之論語一」

【古里】コリ　わが生れし地、父母の國。＝故郷・故園。

【古流】コリュウ　圖いけばなの流儀の一。花枝の自然を尊む一派。

【古陵】コリョウ　ふるきみささぎ。

【古往】コワウ　むかし。西征賦「一一今來、消矣悠哉」

【好レ古】コウコ　古の道を愛する。論、述而「子曰、我非二生而知一之者、一一レ敏以求レ之者也」

【貧レ古而畏レ今】イマヲオソレフルキヲマヅシムル　過去を貧び現在をいやしむ。莊子「尊レ古而卑レ今、學者之流也」

【以レ古爲レ鑑】コヲモツテカガミトス　古の事を經みて戒となす。唐書、崔發傳「一一、可レ知二興替一」

【據古】キョコ　古の義理に據る。漢書、眞禹傳「守經一一、不レ阿二當世一」

【古之狂】コノキョウ　古の狂者は志願太だ高く、常則に拘束せられざるもの。論、陽貨「一一也肆、今之狂也蕩」

【叩】コウ　㊀

○たたく、うつ（擊）（敲、學記「一之以小者則小鳴、一之以大者則大鳴」○諄ねる、問ふ。○おこす、ひらく（發）啓發する。論、子罕「我一其兩端而鳴焉」○ひかふ（控引）史、伯夷傳「一馬而諫」○ぬかづく。

【叩頭】コウトウ　ぬかづく。正字通「稽顙曰二一一一」＝叩頭。

【叩門】コウモン　○たたく形容。樂毅臣詩「閉門謝一一」○懇に問ふ。貶。鄭重懇切の意。朱深詩「別禍不レ忍レ分、一一陳二苦詞一」

【叩閽】コウコン　宮闕に至りて自ら寃を訴ふる。

【叩首】コウシュ　ぬかづく。正字通「稽顙曰二一一一」＝叩頭。

【叩頭】コウトウ　ぬかづく、頭を以て地をたたく。謝を謝する時などにする。漢書、朱雲傳「免レ冠解二印綬一、一一一殿下一」＝叩首・稽顙。

【叩頭蟲】コウトウチュウ　こめつきむし、きくひむしの羽化せしもの、頭を抑ふれば頭を上下して舂く狀に似たり。ぬかづきむし。

【叩門】コウモン　門戸をたたきておとづれる。陶潛、乞食詩「一レ一拙二言辭一」

【司】シ　㊁　㊂

○つかさどる（主）其の事を主管する。○つかさ（職務）○官署の名、各部の分職をいふ「藩一」「臬一」○まもる（督察）○うかがふ。伺と通ず。

【司讞】シゲン　政事の闕失を諫諍する官名。宋史、職官志「一一凡朝政闕失、大臣垂二百官一事有二違失一、皆得二諫正一」

【司空】シクウ　○古、土地民事を掌る官名。唐、舜典「一一掌二邦土一、居二四民一、時二地利一」○漢の三公の一。

【司勳】シクン　古、賞典の事を掌る官の名。周禮、夏官「一一、掌二六鄕賞地之法一」

【司業】シゲフ　國子監の教官。今の大學教授の如きもの。＝國子一一。

【司庫】シコ　唐代、武器財寶等のおしいれを掌る官名（唐書、百官志）

【司寇】シコウ　古、刑罰盜賊などの事を掌る官名。秦、周官「一一掌二邦禁一」

【司機吏】シキリ　周代、牧畜の役人。史、孔子世家「嘗爲二一一一而畜蕃息」

【司儀】シギ　唐代、來賓の贈答を司りし官名（唐書、百官志）

【司直】シチョク　公明正直を司る人。後世主として裁判官をいふ。晉、鄒湛、羔裘「彼其之子、邦之一一」

【司天臺】シテンダイ　天文を觀測する所。＝天文臺。

【司徒】シト　○周代、教育を掌る官名。今の文部大臣の如きもの。賈、舜典「汝作一一、敬敷二五教一、在レ寬」○漢の三公の一。

【司農】シノウ　農事を掌る官名。今の農商務大臣の如きもの。事物紀原「魏爲二后稷一、樂爲二治粟內史一、漢景更爲二大農令一、武帝太初元年、改爲二大一一」

【司馬】シバ　○古、軍事を掌る官名。賈、牧誓「司徒・一一・司空」注「一一主レ兵、治二軍旅之誓戒一」○漢代の三

公の一。

【司敗】シハイ　古、陳・楚の二國にて刑罪を司りし官名。左、文、十、圭「陳・楚名二司寇一爲二一一一」

【司法省】シホフシヤウ　國十省の一、國家の司法行政に關する事務を掌る中央官廳。

【司服】シフク　周代、天子皇后の衣服の事を掌る官名〔周禮、天官〕

【司庫】シコ　唐代、米ぐらの事を掌る官名。唐書、百官志「一一司庫各一人」

【司隷校尉】シレイカウヰ　京師に在りて盜賊を捕へ、非常を警戒する官名。今の我が警視總監の類。

【司令塔】シレイタフ　軍艦の甲板上に設けたる一室。交戰中艦長司令官等が此内にて號令する。

【司祿】シロク　○周代俸祿の事を掌る官名〔周禮、地官〕○星の名。史記「文昌宮六曰二一一」

【史】シ　紙

○ふびと、事を記錄することを掌る官。○天子の言行を記する官。禮、玉藻「動則左一書之、言則右一書之」○ふみ、歷史。史記以下明史に至るまで二十四一を正一と爲す。○はで、あや、かざりありてうつくし。論、雍也「文勝質則一」

【史家】シカ　歷史家。

【史閣】シカク　○史書を藏する所。○史書を編纂する所。吳競文「居二一一一」‖史館。

【史學】シガク　歷史を研究する學問。

【史可法】シカホフ　明末の忠臣、字は憲之、清の順治二年清兵南京城を陷るや、捕へられて殺さる。明末南渡の時、特む所は、——一人のみ、人或はこれを宋の文天祥に比す。

【史漢】シカン　司馬遷の史記と、班固の漢書と。世說「張茂先論二一一一、簡雅可レ觀」

【史翰】シカン　歷史の文書〔齊書、樂緒傳〕

【史記】シキ　百三十卷、漢の司馬遷撰す、上は軒轅に始まり、下は漢の武帝に至る、十二本紀・十表・八書・三十世家・七十列傳に分つ。

【史魚】シギョ　春秋の衞の大夫、靈公遽伯玉を用ひずして彌子瑕に任ず、史魚、死して尸を以て諫む、靈公乃ち伯玉を進めて子瑕を退く、孔子之を稱して直哉一一と曰ふ。

【史官】シクワン　歷史を編修する官。晉書「司馬談父子皆爲二一一」‖史職。

【史館】シクワン　修史局をいふ。事物紀原「史職肇レ自二黃帝一、而倉頡沮誦掌レ之、周及列國亦有二史名一、漢武置二太史公一、漢以後職在二祕書一、唐太宗始置二一一一、以修二國史一」

【史劇】シゲキ　國歷史上の事實をたねとして脚色せし芝居狂言。世話物劇などの對。

【史策】シサク　ことがらを記せし文書、記錄。‖史册。

【史實】シジツ　國歷史上の事實の略語。

【史臣】シシン　史事を記する臣。杜甫詩「直筆在二一一一」‖史官。

【史生】シセイ　國平安朝時代に官廳の文書を寫すことを司る役人。

【史乘】シジヤウ　歷史の書、乘は記載の義。孟、離婁「晉之乘」

【史職】シシク　歷史を編修する官。唐書、蔣乂傳「父在二朝廷一、久居二一一一」‖史官。

【史蹟】シセキ　歷史にのこれる事跡。‖史跡。

【史籍】シセキ　歷史の書。後漢書、班彪才高、而好二述作一、遂專二心一一之間一」‖史書。

【史遷】シセン　司馬遷、良史の才あり、故にいふ。

【史談】シダン　○歷史のはなし。‖史話。○司馬遷の父、太史公司馬談。宋書、劉湛傳「雖レ乏二相如之筆一、庶免二一一之愧一」

【史摘】シテキ　周の宣王の時の太史。古文を擬して大篆を作りし人。故に大篆を一に籀文と曰ふ〔說文序〕

【史傳】シデン　史乘に同じ。南史、劉勰傳「博涉二一一、語二前代舊典一」

【史有三長】シユウサンチヤウ　歷史を書くには、才學識の三長を備ふべし。唐書、劉知幾傳、禮部尚書鄭惟忠薨問、自レ古文士多、史才少何耶、對曰、——、才學識、世學レ乘レ之、故史者少」

【史二傳】シニデン　編年體と紀傳體と。編年は左傳に始り、紀傳は史記に始る。

【史筆】シヒツ　歷史をかく筆。晉書「既登二東觀一染二一一一」

【史部】シブ　日錄家、書物を分類して經史子集の四部と爲す、凡そ事を紀するの書、正史・編年史・紀事本末・別史・雜史・傳記より地理・時令・職官・政書等に至るまで皆一一に屬す、一に乙部ともいふ。

【史料】シリヤウ　歷史の材料。

【史論】シロン　歷史の評論。文心彫龍「一一序注、則師二統子駿要一」

【只】シ　紙　支

○ただ、これのみ（唯・但・止）○詞の終に用ふる助字。詩、小雅「樂一君子」○のみ。耳に同じ。左、襄二七「諸侯歸晉之德一」

同訓異字　只・唯・惟・止・但・徒・第・衹・翅・直・徑の別は唯（口部八畫）の條を見よ。

【只今】シキン　現在の表。李白詩「一一惟有二西江月一」

【只管】シクワン　ただ其の事ばかりに專らかかはる義。一向に、ひとすぢに。

朱子語錄「一一怕二人瞧不二得、故重疊說」

【叱】 シツ 質

○しかる(訶)曲禮「侍客之前、不レ叱レ狗」○責める、ののしる(罵)○いかる(怒)說。

俗字 日に从ひ七の聲、俗に叱に作るは非。

【叱呵】シツカ しかる。しかり。蘇軾文「一レ不レ去、喫二嗽藥一」

【叱咤】シツタ 詩文などの添削を乞ふ謙辭。

【叱吒】シツタ しかりせめる、ことばをいふ。‖詞責。‖譴責。

【叱石成羊】シツセキセイヨウ 石(部首五畫)の條下を見よ。

【叱咤】シツタ 大聲にしかる。又、いきまきて舌打する。史、淮陰侯傳「項王、喑噁一一、千人皆廢」

【台】 ㊀タイ・ダイ 灰 ㊁イ 支

俗に㠯の略字として用ふるは非

㊀ほしの名、上一中一下一の三星あり、故に三一といふ。轉じて三公の稱、更に轉じて敬意を表する語となる「一安」「一臨」「一端」○はらごもり。‖胎。○さめはだ。‖鮐。㊁われ、わが(予我)書、說命「以輔二德」○よろこぶ(悅)史、大史公自序「唐堯遜位、虞舜不一」○やしなふ(養)○うしなふ(失)

【台位】タイイ 三公のくらゐ。轉じて宰相の稱。楊巨源詩「心期玉韻親二一一、鵷鷺同レ君戴二姓名一」‖台座。

【台階】タイカイ ○三公の位。杜甫詩「一一堪敷全」‖台位。○人の居宅をいふ敬語。

【台輔】タイホ 台鼎に同じ。

【台鼎】タイテイ 三公。台は三台星、周代に三槐を朝廷に植ゑ、これに面して三公の座位を定む、故に三公の代とす。‖書、酈食等傳「或以二雅望一鳥二一一一」‖三槐。

【台鉉】タイゲン 三公の位の鉉は鼎のみみづるの陳書、章昭達傳「初世祖嘗夢昭達升二于一一」‖台鼎。

【台座】タイザ 三公の位。王維詩「久踐二中一一、終登二上將壇一」‖台位・台席。

【台宰】タイサイ 天子を輔佐して百官を統べ治める大臣。後漢書、謝弼傳「一一無レ能、國命所レ繫」‖宰相・冢宰・台輔・台弼。

【台司】タイシ 三公の位。孔氏雜說「荀爽自レ被二徵命一至レ登二一一一、四十五日」

【台書】タイショ 御手紙、人のてがみをいふ敬語。‖尊書・台翰・台墨。

【台席】タイセキ 三公の位。通鑑、唐敬宗紀「柳公綽曰、奇章公甫離二一一」注「宰相之位、取二象三台一、故曰二一一」

【台鼎】タイテイ 三公。三台星と鼎の三足とに象る。後漢書「位登二一一一」‖台鉉。

【台背】タイハイ しみはだ、老人をいふ。最も年老いたる人の背が龜甲の斑文に似る故。詩、大雅「黃耇一一」‖駘背。黃耇は白髮の更に黃變するに至る大老。

【台弼】タイヒツ 宰相をいふ、弼は天子を輔弼スルする義。宋史「建二事兩朝一、踐升二一一一」‖台輔・台宰。

【台傅】タイフ 宰相、傅はかしづきたすける。北史「歷二事三朝一、師二訓少主一、不レ出二宮省一、彙致二一一一」‖台宰。

【台甫】タイホ 圖他人に對して其の號を問ふときにいふ。

【台輔】タイホ 三公、宰相の稱。後漢書「詢二謀一一一」‖台宰・台弼。

【台盤】タイバン 台鼎に同じ。

【台命】タイメイ ○三公の命令、轉じて月上の人の來意をいふ敬語。御來命の○圖皇族の御命令。

【台覽】タイラン ○みそなはす、御覽す、貴人の見ることの敬語。○圖古は主に公方の御覽に用ひ、今は主として皇族にいふ「經一一一」

【台嶺】タイレイ ○天台山の一名。‖台嶽・北嶺。○圖比叡山の一名。

【台袁】イワ 和らぎよろこぶ貌。‖怡怡。

【叻】 タク トカ 藥

○かたじけなくす、謙遜のことば。‖忝。○みだりに(濫)「一竊」○むさぼる(貪)‖蠹。

【叻習】タクシュウ むさぼりて事を忘る。唐書、李光顏傳「以二一一一一一一」

【叮】 テイ 青

○一嚀はねんごろ。○しんせつにいひつける、再三告げる。

【叮嚀】テイネイ ねんごろ、親切。‖丁寧。

【召】 ㊀テウ 篠 ㊁セウ 嘯 通 セウ

㊀めす。○よぶ(呼)○まねく、手を以てするを招といい、言を以てするをーといふ。‖集「一募」○めし、僕長者よりのまねき。曲禮「父一無諾、唯而起」㊁人名。又、地名。○閩めす、飲食其の他の事を爲す敬語「一しあがる」「羽織をー す」

【召按】セウアン 召してとりしらべる。

【召喚】セウカン まねくこと。

【召喚狀】セウカンジョウ きしがみ、官廳よりのよび出しのかきつけ。

【召見】セウケン よびよせて對面する。水經、注「李延年女弟、上一一之」

【召集令】セウシュウレイ 歸休せる陸海軍人を

よび集める為めに発する命令。又、其の令状。

【召書】めしぶみ。おめし出しの文書。

【召致】まねきいたす　めして来らしむ。

【召還】めしよせて側に置く。

「聞二其秀材一、一二門下一」

【召南】詩経の篇名。周南・一一諸

「得二聖人之化一者、謂二之周南一、得二賢人之化一者、謂二之一一一」周は周公、召は召公奭、文王の臣子。

【召伯】周の召公奭。采を召に食む、故にいふ。詩、召南、甘棠「蔽芾甘棠、勿レ翦勿レ伐、一一所レ茇」

【召集】兵士又は人夫などを召しあつめる。北史「任其一一」一一徴発・召募。

【召辟】任用する為めにめしよせる。宋和書誌「呉越銭氏有二高世志一不レ屈二一一」一一辟。

【召募】兵士などをめしつのる、よびあつめる。後漢書、呉武紀「一一猛士」一一募集。

【回】ハ　回

○かたし、なし。否定の辞。後漢書、呂布伝「大耳兒最二一信」○つひに（遂）後漢書、隗囂伝「帝知其終不為一用、一欲」討之」○一羅はさかづき（酒巵）北史、祖珽伝「神武宴僚属于坐失二金一羅」

【叭】ハツ　ハチ　曷　又、吧に作る

喇一ッは軍中に吹く楽器。＝號筒。

【另】レイ　リヤウ　径

○わかる（分別）○さきひらく（割開）○国別に一事を為すをいふ。○誌銘、弛む義に用ふ。

【叻】

〔国字〕かます、むしろを織りたる袋、穀物・石炭などを入れる。

【各】カク　薬　三　常用

おのおの。それぞれに異る。

【各位】おのおのがた、みなさま、多くの人を呼ぶ敬語。＝諸君。

【各各】おのおの、それぞれ。＝一一別・一一異。

注「諸侯各一一其兵」

【各式】各様に同じ。

【各件】おのおのの箇条。

【各項】各箇に同じ。

【各国】おのおのの国。

【各自】めいめい。

【各様】各般に同じ。

【各地】各地に同じ。

【各地】それぞれの地。＝各処。

【各条】おのおのの箇条。

【各般】いろいろ、さまざま。＝各種。

【各別】ひとつびとつに区別する。五代史「以レ此比方、豈宜二一一一」

【各様】いろいろ、さまざま「各人一一」

【各論】ひとつびとつ別けて論ずる。総論・汎論等の対。

【各従二其類一】蔦物皆同気同類のもの互に相従ふをいふ。易、文言伝「同声相応、同気相求、水流レ湿、火就レ燥、雲従レ龍、風従レ虎、聖人作而万物覩、本二乎天一者親レ上、本二於地一者親レ下、則一一他」

【合】カフ　ゴフ　合　通音ガフ　又、カン

○あふ、おはす（合）あつまる（集）○つれそふ、配する、あひて（配耦）○おなじ（同）たぐひ（類）○まじはる（交雑）○やはらぐ（和同）詩、小雅「妻子好一」○こたふ（答）○とづ（閉）閉の反対。戦国策「蚌一而箝其口」○はこ「一子」「鈿一」＝盒。○単位の名。一勺の十倍。○べし、副詞として用ふ。韓愈、諫二迎仏骨一表「豈一一吏惜身命」＝當。○六一は天地四方、○国地の面積の称。一坪の十分の一。

【合歓】ネムノキ　合・遇・逢・遭・値・会・晤の別は遇（正韻九遇）の条を見よ。

【合意】○こころを合す。漢書、尉陀伝「同心一一、庶幾有レ成」○心にかなふ。気に入る。陸賈新語、天子問二天下一無所レ一一」

【合剤】数種の薬を調合して一剤とすること。

【合計】○一定の格式に適合する。易林「蠱出行狩、一一有レ獲、蹇公飲レ酒」○試験に及第する。

【合点】正にかなふ。

【合羽】雨具の一。

【合羽制】多人数相続して事を決定する制度。

【合級】小学校の編制法の一、生徒の数少き時、二三級を一つに合せて教授する法。

【合金】二種以上の金属を合せて造りしかね。真鍮・青銅の類。

【合巹】さかづきを合せる。婚礼の式。一瓢を二分するを巹といふ、壻と婦と各一片を執りて酒を飲む。後、昏礼「壻至、壻揖レ婦以入、共レ牢而食、一一而醋、所以合レ巹同二尊卑一以親之也」醋は酒を飲む。

【合拶】拶手にてかかへる。又、其

の大いさ。韓詩外傳「盈把之木、無二一一之枝一」

【合矩】ガフ 定木にあふ、規則にあてはまる。梁武帝文「中レ規一レ、分レ閒下レ注」‖中矩。

【合歡】ガフクワン 圖仲間、組合。

【合歡】カフクワン 相寄りてよろこびの心を合す。博記「酒食者所二以一レ一也」

【合歡扇】ガフクワンセン あはせあふぎ。班婕妤詩「裁爲二一一一、團團似二明月一」

【合歡木】ガフクワンボク ねむの木、高さ二三丈、葉は對生複葉、夜開葉葉相合して眠るが如し、故に合昏といふ、昏は歡と音通。

【合計】ガフケイ あはせかぞふ。周禮、注「一二其士之全伍一、視二其兵器一」‖總計。

【合子】ガフシ はこ、子は助字。正韻「一一盛レ物器」‖盒子。

【合祀】ガフシ 一つの社、又、廟に二人以上の靈をあはせ祭る。‖合祭・合食。

【合資會社】ガフシクワイシヤ 無限責任社員と有限責任社員とが、資本を出しあって組織する會社。

【合沓】ガフタフ かさなる。謝靈運詩「巒隥有二一一、往來無二窮極一」‖重疊。

【合壽】ガフジユ 二人以上力を合せて著述する、又其の著作。

【合同】ガフドウ ○合幷に同じ。○圖やくそく、契約。

【合抱】ガフハウ ひとかかえ。老子「一一之木、生二於毫末一」

【合符】ガフフ わりふをあはす。劉禹錫「入神之製、與二造化一一レ一」

【合浦珠還】ガフホシユクワン 合浦の珠が再び、もとにかへる。孟嘗の故事に本づきて太守の善政を布くにいふ。後漢書、循吏傳「孟嘗字伯周、遷二合浦太守一、郡不レ產二穀實一、而海出二珠寶一、與二交阯一貿レ穀、人採求、不レ知二紀極一、珠遂漸徙二於交阯郡界一、行旅到レ官、革二易前弊一、求二民病利一、曾未レ踰レ歲、去珠還還」合浦は廣東省廉州府に在り。

【合名會社】ガフメイクワイシヤ 無限責任社員が資本を出しあひて組織する會社。‖無限公司。

【合理】ガフリ 道理にかなふ。

【合離】ガフリ あふと、わかれると。徐陵詩「枝開影一一」

【合力】ガフリク ○人と共に力を合す。後漢書、班超傳「與共一一レ一」‖戮力・協力。○圖力を合せ捲へる義より、めぐみ、ほどこしの義に用ふ。

【合和】ガフワ 五にやはらぐ。後漢書「四海一一、萬世蒙レ福」‖和合。

【合切】ガフサイ 圖のこらず、合式一切の義。‖一切サイ

【合葬】ガフサウ 尸を同じ穴にうづめる。禮、檀弓「一一非レ古也、自二周公一以來未二之有一改」

【合作】ガフサク ○二人以上にて一つのものを作る。詩經、箋「子夏毛公一一」‖合著。○格に合せしよき作品、詩文などの評語。

【合唱】ガフシヤウ 多人數にて音曲を合せとなふ。

【合掌】ガフシヤウ ○兩手のひらを合す。佛などを拜する時に行ふ禮。南史、處默傳「一一便絕」○詩の對句の字の無方其の義を同うするものを一一對といひて忌む。謝玄暉詩「魚戲新荷動、鳥散餘花落」の類。

【合從連衡】ガフジユウレンカウ 春秋戰國の時、韓・趙・燕・楚・齊の六國同盟して秦に對抗する策を合從といふ、蘇秦の說。又六國を皆秦に服從せしむるを連衡といふ、張儀の說。從は縱、六國の地形は縱に長し。衡は橫、七國の地形は橫に長し、縱に合し橫に連なる義。史、孟軻傳「天下方務二於一一、以二攻伐一爲レ賢」

【合戰】カツセン たたかひ。漢書「于レ是襲レ土、且日一一」

【合奏】ガフソウ 種種の樂器を合せ奏する。張衡賦「金石一一、妖冶遊會」

【合體】ガフタイ 一緒になる、心をあはせる「同心一一」

【合點】ガフテン ○圖和歌・俳句等に評點をつける。○轉じてよしとうなづく、承知する、のみこむ。

【合羽】カツパ 圖西班牙イスパニヤの外套ガウンの製を模して作りし雨衣。毛布・細布・桐油紙等にて製す。西班牙語のあて字。‖雨衣。

【合井】ガフヰ 一つになる、あはせる。‖合併・合同。

【合併】ガフヘイ 合幷に同じ。

【合壁】ガフヘキ 圖かべどなり。「近所一一」‖近鄰。

【合璧】ガフヘキ 美くしきものの二つ合ふにいふ。漢書、律歷志「日月如二一一一、五星如二連珠一」

【合本】ガフホン 二冊以上又は二種以上の書物を合せ綴ぢて一卷としたもの。‖合冊。

【合口】アフチ ○圖つばのなき短刀。‖ヒ首。○話がよくあふ。

【合點】ガテン 圖信號、又暗號などにて我思ふことを他に通じ知らせる方法。‖相圖。

【吉】キツ キチ 圓 吉は俗字

○よし(善)○さいはひ(幸福・福利)○めでたし。凶の反對。○ついたち(朔日)詩、小雅「二月初一」○つつしむ(謹)○唐の州の名、今の江西省廬陵縣の地。○一林は清朝の基を築きし地、古の肅愼國、唐の渤海國、宋の契丹女眞の地、今は省名とす。

同訓異字 吉・善・好・佳・嘉・喜・美・眞・祥・淑は善(口部九畫)の條參看。

【掃ノ吉】エキチ ○住居とするに宜しき地を選ぶ。葬名「宅、掃也、掃二吉處一」

面營ㇾ之」

【卜ㇾ吉】ボクキツ 墓地としてよろしき地をうらなひ定める。歐陽修、瀧岡阡表「惟我皇考崇公、一ニ於瀧岡一之六十年、其子修始克表ニ於其阡一」

【吉行】キツカウ 出陣等の凶事に對してよろこびの旅行。漢書、王吉傳「古者、一ー日五十里」

【吉金】キツキン 善き質の銅、善金の義。鼎匜等を作る地金にいふ。韓城鼎銘「堅久ー一、用作ニ寶尊鼎一」

【吉凶】キツキョウ さいはひと、わざはひと。又、善き事と惡しき事と。易經「定ニ天下之ー一一」李義山雜纂「貧ㇾ田了ニー一」

【吉光裘】キツクワキウ 美くしく珍しき、かはごろも、吉光は馬の名、神馬の類。西京雜記「武帝時西域獻ニ——、入ㇾ水不ㇾ濡、上時服ニ此裘一以燕ㇾ朝」

【吉慶】キツケイ めでたく賀すべきこと。魏書、彭城王傳「賢者三年、不ㇾ擧ニー一」

【吉月】キツグワツ つきのはじめ、月朔をいふ。論、鄉黨「ー一必朝服而朝」‖吉日。

【吉錢】キツセン 吉はよき日がら、錢は潔神に事ふるに齋戒して身を清める。詩、小雅「ー一爲ㇾ饌」

【吉相】キツサウ めでたきしるし。喜ばしき前兆。

【吉左右】キツサイウ 圖よきたよりも‖吉報・舒消息。

【吉士】キツシ よきさむらひ。貴、立政「其惟ー一、用酌ニ相我國家一」‖良士。

【吉事】キツジ めでたき事がら。禮記「ー一雖ㇾ止不ㇾ忌」祭祀の事をいふ。老子「ー一尚ㇾ左、凶事尚ㇾ右」凶事は喪の事。

【吉日】キツジツ よき日がら、事を爲すに幸ある日。儀禮、冠禮「令月ー一」‖吉辰・良辰。

【吉人】キツジン 善人に同じ。詩、大雅「爲ニ王多ニー一」

【吉辰】キツシン よき日。儀禮「令月ー一、始加ニ元服一」‖良辰・吉日。

【吉羊】キツヤウ 次條に同じ、羊は祥の古字。漢元嘉刀銘「宜侯王大ー一」

【吉祥】キツシャウ ○さいはひ。史、蔡澤傳「聖人所謂ー一善事者與」‖吉瑞。○キツチヤウ 圖昔の衛士の長。‖吉上。

【吉祥天女】キツシャウテンニョ 圖美くしき女のほとけ、帝釋天の女、毘沙門天の妹。‖吉祥天。

【吉瑞】キツズイ めでたきしるし。淮南、王莽傳「ー一累仍」‖吉祥・祥瑞。

【吉祥】キツシャウ さいはひ。蔡邕表文「垂ニー一于當時一、演ニ昌期于後嗣一」

【吉日】キツジツ 吉月に同じ。‖穀旦。

【吉了】キツレウ 甲蟲の一種、たまむし、全體、金綠色にして美麗なり。

【吉兆】キツテウ めでたきまへじらせ。‖休徵。

【吉貝】キツパイ 草の名、今の棉花。唐書「ー一草也、績ニ其花一爲ㇾ布」

【吉報】キツパウ よきしらせ、めでたきおとづれ。‖吉語。

【吉囘】キツクワイ さいはひ。蜀志文「享ニ玆ー一、永守ニ盛福一」

【吉夢】キツムム めでたきゆめ。詩、小雅「ー一維何、維熊維羆」

【吉例】キツレイ めでたきためし、えんぎのよき前例。‖嘉例。

【吉禮】キツレイ 神を祭る禮式「周禮」

【吉上】キツシャウ 圖昔の衛士の長。‖吉祥。

【吃】キツ 圓

○どもり、どもる。史、韓非傳「爲ニ人口ー、不ㇾ能ニ道說一」○くらふ。新書、耳痺「越王之窮、至ニ乎ー一山草一」‖喫。○受け入る。○ーー一は笑ふ貌。飛燕外傳「笑ーー不絕」

同訓異義 吃・吶○吃は言のゆきつまる義。史記「口吃不ㇾ能ニ言一」○吶は吃と略同じ、言のつまりて訥あかざる義。漢書「吶口少ㇾ言」

【吃水】キツスイ 船脚の水に沈み入る程度。‖喫水。

【吃舌】ゼツ どもり。

【吃驚】キツキヤウ おどろく、びっくりする。吃は受け入るる義。‖喫驚。

【向】㊀キャウ・カウ 圖鄉・嚮に通用す ㊁シャウ

㊀むかふ(對)むく、むき、むかひ、面する。背の反對。○おもむく(趣)おもむき「趣ー一」「傾ー一」○まど(窗牖)○むかし、さき、今より以前。莊、寓言「ー一也俯、而今也仰」‖鄉・嚮。○すくふ(救)○ちかづく(近)「ー一晨」「ー一晩」かたむく(傾)㊁人の姓、地名。○圖むき、むく、適する、相應する。

同訓異義 向・迎・逆・迓・逆・逢○向は目あての方へ、正面に向くなり、嚮・鄉に作る、同じ。○迎は來る人を出迎ふる義。中庸「送往迎ㇾ來」○逆は要と音義通ず、迎也、求也と註す、さへぎり待ち受けて迎ふるなり。隋紀「煬帝幸ニ東都一、至ニ樂郎、郡人邀ㇾ上言」○迓は如何と思ひゆき迎ふるなり、相迎也と註す。此の方から八分迎ふれば先にも一二分は待ち迎ふる義。訝の字の意あり。○逆は來る道まで出かけて迎ふるなり、もと順逆と運用す。○逢は順、迎ふるは逆の意より、むかふと訓む、ハタゴヤを逆旅といふ、逆番ゲキ。○逢は兩方よりひたと行き逢ふ意、逆迎は北方の氣に入るやうに、とりもつをいふ。孟子「逢ニ君之惡一、其罪大」

【向者】キャウシャ さきごろ。列子「ー一、夫子仰ㇾ天而嘆」‖曩者・嚮者。

【向年】キョウ 圏 先年に同じ。

【向火乞兒】キョウカ 勢利に走る小人を譏る語。開天遺事「張九齢見三朝士廊二相携一國忠一語レ人曰、此曹皆一旦火盛灰冷、當レ凍二裂肌膚一矣」

【向後】キョウゴ 今よりのち。ののち。‖以後・今後。

【向日】キョウジツ さきのひ、先日。‖疇日・過日・曩日。

【向日葵】カウキ ひまはり、菊科の一年生草、高さ五六尺、黄花を著く、其の花、常に太陽に向ひて傾く。故に人を慕ふ情に喩へて衰心・傾葵などといふ。

【向上心】シャウジャウ 上達せんとするこころ。上へ上へと進まんとする心。

【向背】カウ むかふと、そむくと。‖離背。

【向秀】シャウ 字は子期、晉の河内人、雅に老莊を好み、莊子に註し、奇趣を發明す、少くして山濤に知られ、嵇康と親み善し、康被誅して、思舊賦を作る。

【所レ向無レ敵】ムカフトコロテキナシ 強兵の向ふ所、敵する者無し。諸葛亮、心書「因二天之時一、就二地之勢一、依二人之利一、則一一、所レ擊者萬全矣」‖所レ向無レ前〔後漢書、岑彭傳〕

【吽】(一)ク 虞 (二)キュウ 虞 尤

○あ、ああ、疑ひ、驚き、怪み、なげく時に發する聲。省して于に作る。○なげく(歎)うれふ(憂)詩、周南「云何一矣」おどろく。(二)ふく。‖噓。

同訓異義 ア吁・嗚呼・烏乎・於戲・嗟・嗟乎・噫・嘻・唉・悪の用は嗚(口部十畫)の條を見よ。

【吁呼】クコ おどろく貌。又なげく貌。白虎通「臥之話話、起之一一」

【后】コウ 有 宥 一音ゴ

○きさき、天王、君主。書、仲虺之誥「徯我一一」○きさき。白虎通「商以前ハ皆妃トイフ、周始メテ立テ正嫡ヲ王ト曰フ、秦漢ニハ皇ト曰ヒ、漢ニハ祖母ヲ太皇太ト稱シ、母ヲ皇太ト稱ス」○諸侯をいふ。書、堯典「班瑞于羣一一」○地を司る神。左、昭二九「土正曰一一土」‖地祇。○のち。大學「知レ止而一有レ定」‖後。○おくる。

【后祇】コウキ 地の神。漢明帝詩「王者布二大化一、配レ乾搭二一一」

【后宮】コウキュウ 宮中の女官の居る所。‖後宮。

【后稷】コウショク ○古、農事を掌る官の名。書、舜典「棄黎民阻レ飢、汝一一、播二時百穀一」○轉じて周の先祖の棄の別名。

【后帝】コウテイ 天をいふ。左、文二「皇皇一一」

【后土】コウド 土の神、社に同じ。左、昭、二九「土正曰二一一」‖地祇。

【后妃】コウヒ きさき。詩經、大序「關雎、一一之德也」‖皇后。

【后辟】コウヘキ 次條に同じ、辟は君。

【后王】コウワウ 天子、君主。書經「樹二一一君公一」

【吒】(一)タ 禡 (二)タク 陌 麻 咤に同じ

○しかる(叱)いかる(怒)したうち、吒の稍徐なるもの。○なげく(歎)(二)あざける(嘲)

【吒仏】シャブツ したたかにして貪ふ。曲禮「毋二一一」

【吒婆】バ 禡 さまたげ、さはり。正字通「梵書一一此言二障礙一」

【吊】甲(弓部一畫)の俗字。

俗に錢一千を稱して一一といふ。

【吐】ト 慶 遇

○はく、口より出だす。詩、大雅「柔則茹之、剛則一之」○出す、現はす、舒ぶ。○はき出せしもの。

同訓異義 ア吐・噴・嘔・嘔吐・喀○吐は呑の反對、一口にはくなり。史、伯世家「周公一飯、三吐レ哺」○噴は勢よく吐くなり、泉噴咽は、泉のふき出るをいふ。○噴は噴に同じ、口よりふき出すなり。○嘔は吐づくことなり、歐と同じ、嘔吐と連用す、すべて次第につづけて吐くをいふ。左傳「吾伏レ弢嘔レ血、鼓音不レ衰」○嘔は噴に同じ、喀血と用ふ。俗に略に作るは非。

【吐握】トアク 賢人を求むるに急なるをいふ〔李日、與二乾莉州一書〕‖吐捉。次頁の吐哺握髮ハクハツを見よ。

【吐哺】トホ 餐をふき出す。慶安寺銘「風擾宮一日、龍蓼一レ」

【吐逸】トイツ もどす、はく。一旦食ひしものをはき出す。‖嘔吐。

【吐血】トケツ 血を吐く。‖喀血。

【吐膈】トカク 食物を吐き出をくらます。徐陵文「舟中之人、一一頓仆」

【吐根】トコン 小灌木の名、もと巴西に産す、高き尺許、葉橢圓形、對生、花小にして白し、其の根は捩を袪る要藥とす。

【吐劑】トザイ はきぐすり、食ひしものをはき出さす藥。

【吐瀉】トシャ はきくだし。嘔吐と下痢と。‖吐下。

【吐綬雞】トジュケイ 七面鳥の漢名、もと巴蜀及閩廣山中に產す。‖火雞。

【吐納】トナフ ○呼吸に同じ。道家に

て修練の術。胸中の濁滯の氣を吐き出し、清新の氣を吸ひ入れる、今いふ深呼吸の類。莊、刻意「吐レ故納レ新」○出すと訓ずる。陸游詩「三峽來三江流一、崖谷互ー一」

【吐芳】ハク　にほひをはき出だす。南都賦「含ー一揚レ」

【吐蕃】ト　今の西藏、國王棄宗弄贊、印度に通じ、又、唐の太宗と和好し、兩國の文物を採用して皆日に盛んなりしが、唐以後漸く衰へ、清の世崇以來藩屬國となる。

【吐哺握髮】トホアクハツ　食事中又は髮を洗ふ時、來賓あれば、口中の食物を吐き、髮を握りて直ちに出迎ふ、周公が賢士を延見するにつとめし故事。韓詩外傳「一沐三握レ髮、一飯三吐レ哺、猶恐レ失二天下之士一」史、魯世家には握を捉に作る。

【吐沫】ブ　唾つば。‖唾。

【吐露】ロ　はきあらはす、うちあけて意中を語る。韓愈、答二陳商一書「愈敢不ー一情實一」

【吋】トウ　有

○しかる、叱の俗字。○國いんち、英國尺度の單位、我が八分、三八一に當る。

【同】トウ　東　又、仝に作る

○おなじ、ひとし（齊）異の反對。○おなじくす、ともにす（共）○なかま、ともがら（輩）○あつまる。詩、大雅「獸之所レ聚、鳥之所レ萃、蒲盧所レ入、尚不レ生レ毛、靑蠅所レ集、汚レ人之白レ受、讒言之人、其情亦然」○あつむ（衆）○やはらぐ（和）「和ー一」○たひらぐ（平）○周代、諸侯が天子に會見する禮。周禮、卷官、大宗伯「時見曰レ會、殷見曰ー一」○古の制、方百里の稱。司馬法「十成爲レ終、終十爲ー一」○さかづき、爵の名。○樂器の名、銅にて造る。

【同惡相助】アクアクスケ　惡人も惡事を成し遂ぐる爲めには、互に助け合ふをいふ。史、吳王濞傳「——、同好相憎、同情相成、同欲相趨、同利相死」

【同氣】イキ　おなじきと、ことなると。曲禮「夫讖者所下以定二親疏一、決二嫌疑一、別ニ——一、明ニ是非一也」‖異同。

【同意】イ　○おなじ心。○同じわけ。‖同義。○承知、賛成する。

【同遊】ユウ　共にあそぶ。淮南子「虎鹿之不ニ——一者、力不レ敵也」

【同一轍】ドウイツテツ　車のわだちの一様なる義。轉じて形式の一様なるにいふ。‖一律。

【同寅】ドウイン　互に謀みて公事に奉ずる義、轉じて同僚をいふ。書、皐陶謨「ー一協恭」

【同雲】ドウウン　雪ぐも、其の色のどんよりとして一色なる義。詩、小雅、信南山「上天ー一、雨レ雪雰雰」

【同價】カドウ　同じねだん。孟、滕文公「巨屨小屨ー一、人皆爲レ之者」

【同行】ドウカウ　人と共に行く。詩、邶風「有レ女ー一」

【同好】ドウカウ　好みを同じくする、趣味を共にする。又其の人。史、吳王濞傳「同惡相助、ー一相圖」

【同庚】ドウカウ　おなじ年齢。年齢を庚といふ。晉客揮犀「文彥博、居レ洛日、年七十八、與三和朠・司馬旦・席汝言一爲ニ——一會」‖同甲。

【同學】ドウガク　同じ師につきて學びたる者。漢書、蕭望之傳、梁之事二同縣后倉一、以爭論二太常一受レ業、復師ニ——博士白奇一」‖同門。

【同甲會】ドウカフクワイ　同じ年齢の人の會合。夢溪筆談「文潞公住レ洛日、年七十八、同時有二中散大夫和朠・朝散大夫司馬旦・司封郎中席汝言一、皆年七十八、皆爲ニ——一、各賦二詩一首一」

【同軌】ドウキ　○天下の車の軌ワダの度を同じくす。天下一統の義。中庸「今天下、車ー一、書同レ文、行同レ倫」○轉じて中國諸侯の義。左傳、元「天子七月而葬、ー一畢至、諸侯五月、同盟至」

【同義】ドウギ　おなじ意味、おなじわけ。‖同意。

【同氣相求】ドウキアヒモトム　同聲相應を見よ。

【同歸而殊塗】ドウキニシテトヲコトニス　天下の理、歸する所は同じけれども、其の道は異るをいふ。易、繫辭「天下ー一、一致而百慮」

【同居】ドウキョ　同じ家に住する。易、説卦「二女ー一、其志不レ同レ行」‖同房。

【同仇】ドウキウ　仇ワダを共にする。詩、秦風「修二我戈矛一與レ子ー一」

【同鄉】ドウキャウ　同じ故郷。‖同國・同里。

【同化】ドウクワ　他人を感化して我と同にからしむ。

【同業相仇】ドウゲフアヒアダス　同じ業をなす者は、互に相敵視す。俗にいふ同業がたき。衆書「同業相妒、ー一」

【同業者】ドウゲフシャ　おなじ商賣をするなかまの者。

【同權】ドウケン　同等の權利。

【同工異曲】ドウコウイキョク　巧工は劍を同じくして、其の調子を異にす、以て同等の文才ある作家も、體により、其の文章に異彩を放つに喩ふ。韓愈、進學解「下逮二莊騷太史所レ錄子雲相如ー一」

【同功一體】ドウコウイッタイ　功績と地位とを同一にする義。史、鄧禹傳「往年鄧・彭越、前年銚・尤信、此三人者ー一之人也」

【同歲】ドウサイ　おなじ年齢。晉書「侯與レ敏同郡、又ー一」‖同甲・同庚・同齡。

【同窓】ドウサウ　同じ師につきて學びたる友。升菴錄「士子同レ榮曰ニ——一」

【同姓】ドウセイ　はらから、兄弟。史、孝文紀「使二得レ謝之父母妻子ー一集会如レ故」‖同胞。

【同志】ドウシ　志を同じくす。又、其の者。

国語「同レ心則一レ一」
【同指】ドウシ　主旨を同じくす。指と旨と通ず。淮南子「殊レ事而一レ一」‖同旨。
【同時】ドウジ　ともに、同じ時に、いつしょに。
【同歳】ドウサイ　おなじ年齢。‖同庚。
【同舟相救】ドウシュウアイスクフ　利害を同じくする者は知ると知らざるとの別なく、期せずして互に相救ふ。孫子、九地「呉人与二越人一相悪也、当二其同レ舟済而遇レ風、其相救也如二左右手一」
【同士討】ドウシウチ　同味方と味方とのはたしあひ。
【同臭味】ドウシュウミ　吾と同じ趣味ある義、同類。黄庭堅詩「呉レ君草木臭味同」
【同而不レ和】ドウジフワセズ　表面は阿比して心を同じくする如く見ゆれども、内心はうちとけざる義。論、子路「子曰、君子和而不レ同、小人——」
【同人】ドウジン　○易の卦の名。易、同人「一レ于野亨、利レ渉二大川一、利二君子貞一」○同じ志の人。
【同仁】ドウジン　彼此の差別なく、平等にめぐむ。業書「一レ一相愛、同悪相救」
【同心】ドウシン　○心を同じくす。おなじこころ。又、其の心。易、繋辞「二人一レ一、其利断レ金、一レ之言、其臭如レ蘭」○国徳川時代に於ける下級の捕吏、與力・同心の下に属す。
【同酔】ドウスイ　ともどもに酒をくむ。沈説詩「貰酒酔一レ一」‖同酌。
【同情】ドウジョウ　おもひやり、おなじおもひ。恕の字の義。史、呉王濞傳「同悪相助、同好相図、一レ一相成、同欲相趨、同利相死」
【同性】ドウセイ　おなじ性質、男と男と、又、女と女との類。
【同棲】ドウセイ　○同じ一つ家に住む、一緒にくらす。○夫婦の関係を保つ。
【同勢】ドウゼイ　同等の身分のなかまっ左、僕、二三「晋郷一レ一」
【同声相應同氣相求】ドウセイアイオウドウキアイトム　同じ声は互に相応じ、同じ気あるものは互に相求む。識見を同じくする者は自然に相合ふにいふ。易、文言「子曰、——、水流レ湿、火就レ燥」
【同声異俗】ドウセイイゾク　人の性は本来同じけれども、習慣によりて風俗を異にするに至る。荀、勧学「于越夷貊之子、生而同レ声、長而異レ俗、教使二之然一也」
【同席】ドウセキ　坐席を同じくして坐する。史、淳于髠傳「男女一レ一」
【同族】ドウゾク　同じやから。又、同じ種族。周礼、秋官「凡王之一レ一、有レ罪不レ即レ市」
【同堂】ドウダウ　父方のいとこ（北史、公孫表傳）‖従兄弟・同堂兄弟・堂兄弟。
【同道】ドウダウ　国つれだちて行く。‖同行・同伴。
【同断】ドウダン　国おなじ、前のとほり。‖同然。
【同座】ドウザ　流俗に同じうする義。老子「和二其光一、同二其塵一」
【同等】ドウトウ　同じ等級、同じ品位。
【同年】ドウネン　○おなじよはひ、おないどし。‖同庚・同歳。○おなじ年に進士の試験に及第せし者。國史補「倶捷謂二之一一」捷は及第の義。‖同年生。
【同年生】ドウネンセイ　同じ年に進士に及第せし仲間の者。亜文類聚「詢二其履歴一、乃——」略して同年ともいふ。
【不レ可二同年而語一】カラズドウネンニシテカタルベカラズ　同じ年に語ることは出来ず、両者の大に相隔るをいふ。賈誼、過秦論「比レ権量レ力、——也」史、游侠傳「誠使下郷曲之俠与二季次原憲一比上権量レ力效中功於当世上不二同日而論一矣」
【同胞】ドウハウ　はらから、兄弟。胞は胞胎ナ東方朔、客難「一一之徒、無二所二容居一」
【同胞】ドウハウ　胞は長揖シタリ、朋友は互に困窮を救ひ、禍を貸し与へて之を共にす、よりて朋友の義とす。詩、柔風、無衣「豈曰レ無レ衣、与二子一レ一」
【同榜】ドウバウ　同時の試験及第者。
【同伴】ドウハン　いっしょに伴ひ行く。家語、注「本与二叔孫一一者也」‖同行。
【同班】ドウハン　おなじ位次。宋史、儒書傳「即二治書事一奏レ事則一レ一」
【同筆】ドウヒツ　同じ人の書きし書其。同じ筆跡。
【同病相憐】ドウビョウアイアハレム　親苦を同じくする者は、互に憐み助ける。呉越春秋「子胥渡二河上歌一曰、——、同憂相救」
【同文】ドウブン　天下を一統して用ふる所の文字を同じくす。中庸「今天下、車同レ軌、書一レ一、行同レ倫」
【同期】ドウキ　国昔時武家の殿中城中にて諸士の雑役に使はるる制髪帯刀の人、お坊主。‖童坊。
【同盟】ドウメイ　○諸侯相共に盟約を結ぶ。公羊傳「一一者何、同レ欲也」○国くみを結ぶ義「一一罷工」
【同盟国】ドウメイコク　国家と国家とが互に利害を同じくする場合に、利益の共通又は交換を目的として互に相助け合ふことを約束せし国。
【同盟罷工】ドウメイヒコウ　賃金の増額を請求するなどの為めに一同申し合せて業務を休む行為。ストライキ。
【同明相照】ドウメイアヒテラス　物は類を以て相従ふをいふ。史、伯夷傳「——、同類相求、雲従レ龍、風従レ虎、聖人作而萬物覩」
【同門】ドウモン　あひでし、同じ師に学びたる友。漢書、儒林傳、註「一一同レ師学者也」‖同学。
【同類】ドウルイ　おなじたぐひ。なかま。史、

倫表傳「同明相照、一一相求」
【同寮】ドウリョウ　同僚に同じ。左、文、七「同官爲レ寮、吾安一一、敢不レ盡レ心乎」
【同僚】ドウリョウ　あひやく、同役の者。詩、大雅、板「我雖レ異レ事、及レ爾一一」日同寮。
【同列】ドウレツ　共に位に列する人。史、伍子胥傳贊「況一一乎」

【名】メイ　ミョウ　㊥

○な、姓氏及び通稱、事物のとなへ。實の對。○身分・職責等の分限「一分」「一義」○ないふ。○きこえ、ほまれ、名あり、名高し。○眉と眼との間（目上）○人を數ふるにいふ。○なづく。○文字。○號令。○命。
【解字】名は自命ナノカなり、夕は昏くして相見えず、故に口を以て自ら名いふ。
【名聲】メイセイ　すぐれたる考案。
【名位】メイイ　官位、官秩。左傳「一一不レ同、禮亦異レ數」
【名醫】メイイ　なだかきいしゃ。漢書、杜延傳「昭帝末、寢二天下一一」日良醫・國手。
【名園】メイエン　すぐれて景色よき庭園。唐の李格非、洛陽一一記を著す。
【名家】メイカ　○名門に同じ。史、甘茂傳「一一之子孫」○立論の法式を研究する學派。公孫龍・惠施等の流。史、太史公自序「一一使二人儉而善失一レ眞」
【名號】メイゴウ　○ほまれ。史、鄒陽傳「區區一一者、不二以レ欲傷レ行」○よび名、稱呼。荷、賦篇「一一不レ美、異レ是爲レ鄰」○佛阿彌陀佛のとなへ。
【名下無二虛士一】メイカニキョシナシ　名聲高き者は、必ず其の名に伴ふ實力を有するをいふ。陳書、姚察傳「太建初、報二聘於周一、江左多二名先在一レ後者一、咸相傾慕、注周劉琳、竊於二公館一訪二逸書疑事十餘條一、並爲剖析、皆有二經據一、琳謂所親曰、名下定無二虛士一」
【名衛】メイエイ　名と官位との文飾。通考、二書二其一一」
【名爵】メイシャク　○おもてだつなまへ「一一書替」○名と爵位と。日名分。
【名分】メイブン　爵位と車服と。左、成、二「唯名與レ器、不レ可二以假一レ人」
【名譽】メイヨ　なと、いみなと。連文釋義「生曰レ名、死曰レ譽」
【名動】メイドウ　なだかきてがら。江淹文「西京上統、東都一一」日殊勳。
【名花】メイカ　○すぐれてよき花。李白詩「一一傾國兩相歡」牡丹を指していふ。○圖妓女の佳なる者。
【名花十友】メイカノジュウユウ　十友（三六五日三種に分つ）を見よ。
【名花十二客】メイカノジュウニキャク　牡丹（貴客）梅（清客）菊（壽客）瑞香（佳客）丁香（柔客）薔薇（細客）蓮（淨客）茶蘼（雅客）桂（仙客）薝蔔（野客）茉莉（遠客）芍藥（近客）の稱。宋の張景修に始まる、貧一に貧に作る。
【名士】メイシ　なだかき人、又其の通になりたる稱。名畫記「唐宋道子・郎庾皆一一」
【名宦】メイカン　たふとき官位。白居易詩「一一老慚レ求、退身安二草野一」
【名門】メイモン　姓名と鄉貫とを。家陰比事「規レ絕二一一一」
【名教】メイキョウ　聖人のをしへ。五倫・五常などの如くそれぞれ名を立てて明かにするが故にいふ。晉書、樂廣傳「一一之內、自有二樂地一」
【名實】メイジツ　すぐれて立派なることば。晉書、山濤傳「天下一一也」
【名山大澤】メイザンタイタク　名ある山と、大いなる澤と。漢、王制「——不二以封一」
【藏二名山一】メイザンニゾウス　古は著書の亡失せんことを恐れ、石函などに入れて、名山に藏せり。史、司馬遷傳「太史公掌二天經異傳、論二百家雜語一、藏二之名山一、副在二京師一」
【名士】メイシ　才德のすぐれたる士。禮、月令、聘二一一一、禮二賢者一」
【名刺】メイシ　なふだ。晉書、日札「古者削二竹木一以書二姓名一、故曰レ刺、後以レ紙書、謂二之名紙一」日名帖・名片。
【名紙】メイシ　前條に同じ。
【名詞】メイシ　文法にて事物の名をあらはすことば、家・池・君・臣などの類。日名物字。
【名綢】メイチュウ　なだかき館、綢は黑色の衣。柳宗元詩「願言依二一一一、朝夕且夕仰」日名僧。
【擬二名字一】メイジヲギス　儕して王と稱する。蘇軾、衰忠烈碑「天下大亂、豪傑蜂起、方二是時一、以二數州之地一、——者、不レ可二勝數一」
【名實】メイジツ　○名聲と實功と。孟、告子「夫子在二三卿之中一、一一未レ加二於上下一」○名と實際と。
【名狀】メイジョウ　狀態をいひあらはす、形容する。王令詩「旁舍有婦人一一一一」
【名相】メイショウ　なだかき宰相。漢書、張湯傳「文學推二湯一爲二一一一」
【名將】メイショウ　すぐれて名ある大將。史、佞幸傳「誅二殺一一一」
【名手】メイシュ　技藝のすぐれたる人、名人。北史、崔暹傳「鋭意研精、遂爲二一一一」
【名主】メイシュ　○すぐれたる君主。日名君。○圖德川時代江戶の各町又、地方の各村に置きし役人。今の町村長の類。日里正。
【名妹】メイマイ　勝れて美くしき女。
【名酒】メイシュ　すぐれてよき酒。陶潛詩序「余偶有一一、無二日不レ飲、飲レ輒盡レ醉、忽焉復醉」
【名儒】メイジュ　なだかき儒者。漢書「一一有二師傅恩一、天下任レ之、多レ所二貫薦一」
【名所】メイショ　圖なだかきところ、すぐれ

たる景色の地。‖名勝・勝所・勝区。
【名勝】メイショウ　○山水の景色のすぐれたる地。北斉書、韓賢照伝「嗜人飲二美酒一、對二一一、安能作二刀筆吏一被二反故紙一耶」○名家の勝れたる士。晉書、裴秀論業疏、冥人初不レ附、王導勁用二諸一一」
【名輩】メイハイ　○な、となへ。○ほまれ、名誉。漢書、王吉傳「材器……、稍不レ能レ及、而祿位懈隆」
【名簿】メイボ　○戸籍。漢書、高帝紀「民前或相棄保二山澤一、不レ書二一一」○〇字のそへる名詞「三公」「四書」「五経」の如し。
【名世】メイセイ　一世に名ある賢者。礼、公孫丑「五百年必有二王者興一、其間必有二一一者一」
【名門】メイモン　ほまれ、名聞の門。
【名跡】メイセキ　図うけつぐ可きみゃうじ。家名。
【名節】メイセツ　名誉と節操。晉書、祖納傳「二人相友、益著二一一」
【名族】メイゾク　名高き家がら。漢書、徐樂傳「王公大人、一一之後」
【名門】メイモン　名高き家がらの子孫の房書「綾、既一一、於吏非二有方一」
【名跡】メイボク　ほまれのほしょ。名を争ふ所、試験場など。衛鼎銘「卿早出二一一」‖試院。
【名帖】メイチョウ　なふだ〔時用二名一〕‖名刺。
【名牒】メイチョウ　なふだ。後漢書「高第者上二一一」「富二以レ大貴一連二一」‖名紙・名刺。
【名田】メイデン　人民の所有する田地。漢書、蕭伸計傳「限二民一一一以給レ不レ足」
【名馬】メイバ　名ある良馬。東観漢記「有二一一一者一」
【名望】メイボウ　ほまれ高く人望あり。南史「整一一功業著聞」
【名業】メイギョウ　○名高き事跡。世説「便成二一一」○業の佳なる者。
【名品】メイヒン　○すぐれたる品。‖物品。逸品。○官位。‖名位。
【名物】メイブツ　○土地にある物と其の名と。周礼、大司徒「辨二其山林川澤邱陵墳衍原隰之一一一」○名づくべき品物。名詞の事物。○図其の土地特有の食品。‖名産。
【名分】メイブン　ぶんげん　みぶん。人倫の分限「大義一一」荘子「易以道二陰陽一、春秋以道二一一一」‖本分。
【名聞】ミョウブン　世間のきこえ。評判。‖名声。
【名篇】メイヘン　すぐれたる書物。文詩文。潘岳、酬黄門賦「登二金華一以問レ道、得二石室之一一」
【名流】メイリュウ　名望ある人のなかま。北史「恭之、學渉二經史一、所レ交皆一一儁士」
【名論】メイロン　○名望と物論と。名誉を見よ。○すぐれて善き議論「一一卓説」
【名王】メイオウ　なだかきみ。
【名詮自性】ミョウセンジショウ　名は其のものの性をいひあらはす義。唯識論「依語詮分位差別、而假建二立者句文身、一一一一句詮二差別一」
【名利】メイリ　図名誉を求めんとする欲。大慈法鏡「名即世間之衆也、諸人因二衆名一、能遠レ親愛レ已、故重二貨財一、求樂者、而不レ知レ止、是爲一一」
【立名】リツメイ　ほまれをあぐる。史、伯夷傳「閭巷之士、欲二砥レ行一一者」
【名親】メイシン　図生れたる子に名を附ける人。なづけおや。多くは生後七日目に母方の祖父が命名する。
【名遂二其實一】メイスイジツ　名の實際より盛なるをいふ。虚名。韓詩外傳「祿過二其功一者恥、一一一一者禍」
【名題】メイダイ　図芝人が看板になまへを掲げるを得る資格。名誉は實際の盛ありて、はじめて來るをいふ。莊、逍遙遊「堯治二天下一、天下既已治也、而我猶レ代レ子、吾將爲レ名乎、——也、吾將爲レ實乎」

【史】

○つかさ(司)人を治むる者「官一」○をさむ(理)
【吏員】リイン　官吏の數の文官吏。後漢書「省二減一一一」
【吏隠】リイン　卑き官職に隠れる。宋之問詩「官遊非二一一」
【吏幹】リカン　官吏たる才幹。北史、裴蘊傳「明練有二一一一」‖吏能。
【吏議】リギ　官吏の處分をいふ。免職の如き類。辛遷二一一」
【吏才】リサイ　官吏たらに堪ふる才能。‖吏能・吏幹。
【吏術】リジュツ　官吏となりて政を施す道。唐書、趙誠傳「誠於二一一一尤所レ長」
【吏職】リショク　官吏の職務。‖官。宣帝紀「帝勤二于一一、夜以忘レ寢」
【吏卒】リソツ　ひくき官吏。小役人。
【吏道】リドウ　○官吏たる心得。‖吏術。○朝鮮に行はるる一伸の假名。朝鮮語を寫す爲めに漢字の音訓を假りたるもの。訓讀の創作な

りといふ。‖吏叶。
【吏治】リチ 官吏のおこなひ。政。史記「整ー一、一一刻深」‖政治。
【吏能】リノウ 官吏としてのはたらき。北史「琇之有ニ一一、仕ノ蜚ニ吏令一」‖吏才。吏術。
【吏部】リブ 支那の中央官庁の一。始は尚書省の一部なりしが明清にては獨立の一省とし、戸・禮・兵・刑・工の五部と合せて六部といふ。
【吏目】リモク 宋元以後、捕盗、及諸州に置きし官名。盗賊を糾捕し獄囚を防ぎ逃脱を糺ぐる。

四畫

【叶】 インオン 葉

○牛鳴く。○阿ノ字は息の出入の稱。

【呀】 カ 麻

○口を張る。○むなし（虚）○大いなるくち。○絵ー一っは谷の大きくうつろなる貌。
【呀呀】ガガ ○牛鳴の口を張る貌。○孤及、射虎飜詩（飜虎ー一立當ノ路」○口を開きて笑ふ貌。韓愈詩「王冊開以笑、賜官助ニー一」
【呀呷】ガカツ ○口をあけてのみしる。又、口を開く貌。五代史「謀邪毎レ親ニ殺人ニ不レ堪ニ呀呷ー一、人以爲ニ眞殺人ニ也」○波の呑吐する貌。木華、海賦「猛潮ー一、雄波瀾涌」

【吭】 カウコウ 陽 養 漾

○のど、のんど（咽喉）‖亢航。頸。○くび（頸・首）柳宗元文「仰首伸ー一」○物事の要處。

【告】 カウコク 號 通音 沃

○つぐ、かたる（語）○しらす（報）上に告ぐるをーといひ、下に發するを語といふ。○をしふ（教）しめす（示）管子、水地「聖人之治於世也、不ー人」也、不戸說也」○まをす（白・啓）○とふ（問）たづぬ（訪）禮、王制、疏「君毎月使ニ人放膳ニ問ニ存否ニ」○おほす（命）○こふ（請）○やすみ（休暇）史、汲黯傳「黯多病、病且ー滿三月、上常賜ー一者數」
【告朔】コクサク 日に從ひ、牛に從ふ 牛の人に領るる、角に標木を著く、告ぐる所以なり、告に作るは非。
【告假】コクカ 假は暇なり、ひまをもらふ。官職を辭する義。蔡絡紀論「有ニ一卒一、免ニ行伍一、乞ニ一一一」‖致仕・辭職。
【告師】コクシ 自分の家に歸ることを申上げる義。官吏が休暇を請ふ、又其のやすみび。史、高祖紀「常ー一之レ田」
【告訴】コクソ 被害者が其の損害を回復する爲めに被害地又は加害者所在地の官吏にうつたへ出るをいふ。
【告知】コクチ 公衆に告げ知らす。
【告知書】コクチショ 公衆につげ知らす文書。
【告天子】コクテンシ ひばり。‖雲雀・告天・叫天子・天鷚。
【在レ告】ザイコク 官吏が休暇を賜ひて自宅に在るをいふ。通鑑、唐紀宗紀「軍將皆ー一」‖告歸。
【告發】コクハツ 被害者以外の人が他人の犯罪行爲を官吏に訴へ出る。‖告訐。
【告病】コクビヤウ 病氣の届出。○天子崩「嗣帝ー一」
【告別】コクベツ いとまごひ。杜甫詩「相逢判二衰老一ー一衰二忽忽一」‖訣別。
【告命】コクメイ 今の辭令書なり。正字通「唐制、授官之符曰二告身一、即今謂ニ一一一」
【告喩】コクユ 人民につげきとす。喩一に諭に作る。‖諭告。
【告諭】コクユ 前條に同じ。
【告老】コクラウ 年老いたるを告げて辭職を乞ふ。左、襄、十六「晉韓宣子ー一」

【含】 ㊀カン 覃 ㊁ガン 覃 通音 侵

㊀ふくむ（銜）口に入れる。○つつむ（包）いれる（容）函に通

す。○いだく（懐）心に思ふ。○しのぶ（忍）左、宣十五「國君ー垢」垢は恥。○ー麰は麥などの麤んに秀づる貌。漢書、梁鴻傳「麥ー兮先秀」㊁古、死者の口にふくましめたる玉。＝琀・唅。○國ふくむ、花がつぼむ。○納得トクする。

【含】ガン 含・銜・啣○含は口に物をふくむなり。また廣く包み入るる義。傳燈錄「包ー含萬物」○銜は口にくはへるなり、含は、口の内にふくむなり、銜は字は外に出すなり、詩には含・銜二字通用す。含ー杯は銜ー杯に同じ。○啣は烏銜切、貯ー食也と註す、口内に物をたくはへ居るなり。

【含蕚】ガンカ 花をふくみて萼える。景衡、湖表賦「天地綢繆、百卉ー蕚」

【含有】ガンイウ ふくみもつ。孫綽、權銘「虛以ーー、文以飾ー身」

【含英咀華】ガンエイソカ 文字の眼目の妙處を咀嚼し、香味を胸中にたくはふる事。韓愈、進學解「沈ー濃郁、——」＝咀ー嚼英華ーソクエイクワ

【含玉】ガンギョク 古、死人の口に含ましめたる玉。周禮、天官「大宰大喪ー賵、贈玉ーー」

【含胡】ガンコ はきはきとせぬ、模糊として明かならず。唐書、顏果卿傳「縣山斷二其舌一、復能無否、果卿ーー而絕」＝含糊。

【含糊】ガンコ はきはきせず。にえきれず。舊唐書、陸贄傳「朝廷每爲ニーー、未三嘗窮二究曲直一」＝糊塗。

【含垢】ガンコウ はぢをしのぶ。垢は恥。左、宣、十五「國君ーー、天之道也」

【含沙射】ガンサシャ いさごむし、支那の南方に植むといふ怪物、沙を含みて人の影を射る時は其の人病死すといふ。白居易詩「山無二殺霧草一、水有ニーー一」轉じて小人が陰險なる手段にて人を害するに喩ふ。同詩「含ー沙射二人影一、寃ー病人不ー知」

【含羞】ガンシュウ はぢらふ、はぢをふくむ。蒲道源詩「晨妝初罷倚ーー」

【含羞草】ガンシュウサウ ねむのきさう、一年生草、葉は羽狀複葉、花は毬形淡紅色、葉に觸るれば兩葉相疊みて下垂す。

【含章】ガンシャウ かざりを內にふくみたくはふ。易經「ーー可貞」魏志、管寧傳「ーー柔質、冰潔淵清」

【含笑】ガンセウ ○ゑがほをつくる。庾信詩「阮籍披衣起、王戎ーー來」○花の開き初めをいふ。羅虬詩「野桃ーーー竹流翅、楡柳自搖沙水清」

【含雪】ガンセツ 雪を口に含む。轉じて山に積れる雪の色の宿に入る形容とす。杜甫詩「商含西嶺千秋雪、門泊東吳萬里船」

【含嗽】ガンソウ うがひする「ーー劑」

【含桃】ガンタウ ゆすらうめ。禮、月令、注「ーー、櫻桃也」＝鶯桃。

【含蓄】ガンチク ふくみたくはふ、言外に深き意味を含む。韓琦詩「遙嗣古意多ニーー一」＝蘊蓄ウンチク

【含怒】ガンド 怒を堪へしのびて居る。國策「ーーレー之日久矣」

【含蓄】ガンバク はなのつぼみ。獨孤及詩「ーー向二新陽一」

【含味】ガンミ 口中にふくみあぢはふ。轉じて事の意味を考へ究める。後漢書「ーー經籍」

【含漱】ガンソウ 性質をふくみ有するもの、即ち人類をいふ。宋書、符瑞志「ーー稟二五常一」

【吸】キフ 入

○すふ、息を引き入れる。呼の反對。○のむ（飲）○ひく（引）引き込む。詩、小雅「載ーー其舌」＝嘯。○こゑ（聲）

【吸引】キフイン ○吸ひ込む。○我が味方に引き入れる。

【吸吸】キフキフ 雲の動く貌。劉向、九歎「雲ーーー」

【吸收】キフシウ すひとる、すひこむ。

【吸入器】キフニフキ 醫療器の一、藥液を蒸發せしめて患者にすひとませる裝置に作れるもの。

【吸壓】キフアツ 或る動物の有する圓狀の器官、之を以て他の物體に附著す、章魚のいぼの類。

【吸風飲露】キフフウインロ 神仙の粒食を絕つ者をいふ。莊、逍遙遊「藐姑射之山、有二神人一居焉、肌膚若二冰雪一、淖約若二處子一、不ー食二五穀一、ーー」

【吸墨紙】キフボクシ すひとりがみ、書きたる文字の乾かぬ時、上より押しつけて墨汁を吸取せしむるきめの粗き紙。

【吟】ギン 侵 通じて唫に作る

○うめく（呻）○なげく、なげき（歎）○ためいきをつく（歎息）ためいき。○うたふ（哦・咏）○どもる（吃）後漢書、梁冀傳「口ー舌言」○詩歌「白頭ー」「梁甫ー」の類。○なく（鳴）「蟬ー」「猿ー」うそぶく（嘯）○沈ーンは深く思ふ貌。

【吟詠】ギンエイ 吟唱に同じ。詩經、衛、人民和樂、謳歌ーー」

【吟哦】ギンガ 詩歌をうたふ。白居易詩「醉臥閑ーー」＝吟詠。吟嘆。

【吟樂】ギンガク 詩を吟ずること。指樂府詩「徒覩ーー如二秋蟲一」

【吟笻】ギンキョウ 詩人の攜へるつゑ。詩を考へながらたづさへ曳く杖。＝吟杖・吟筇。

【吟哥】ギンコ こゑろぎ。埤雅「蟋蟀俗

ン送ル陽、一名ニー一」‖吟蓋。
【吟蓋】ギンガイ　前條に同じ。中華古今注「蟋蟀一名ニー一」
【吟懐】ギンクワイ　吟心に同じ。
【吟月】ギンゲツ　月を觀て詩歌を口ずさむ。杜荀鶴詩「溪頭ノ一上二漁船一」
【吟情】ギンジヤウ　吟心に同じ。
【吟殺】ギンサツ　詩を吟ずる、殺は助字。韋莊詩「夕陽ニー倚レ樓人」
【吟詩】ギンシ　詩を考る時にひねる口ひげ、詩人の口ひげ。杜荀鶴詩「ニー自安閑」○時世を悲み慨きて發する聲。後漢書「ニー捫胸」
【吟社】ギンシヤ　詩歌をつくる心もち。‖吟心・吟興・吟情・詩情。
【吟叟】ギンソウ　詩歌を作る人の翁。高駢詩「好巢二高陽一結ニー一」
【吟唱】ギンシヤウ　詩歌をうたふ。元好問詩「道場ニー心自足」‖吟哦・吟咏。
【吟聖】ギンセイ　吟心に同じ。
【吟誦】ギンシヨウ　詩歌を高らかにうたふ。‖吟頌。
【吟聲】ギンセイ　詩歌をうたふこゑ。温庭筠詩「書迹臨二鍾鼎一ニー接二舜絃一」
【吟嘯】ギンセウ　○吟詠に同じ。宋之問詩「ニー自安閑」○時世を悲み慨きて發する聲。後漢書「ニー捫胸」
【吟壇】ギンダン　詩家中の領袖をいふ、壇坫を主持する者。杜牧詩「今代風騒將、誰登李杜壇」轉じて廣く詩人の敬稱とす。
【吟杖】ギンヂヤウ　吟笻に同じ。
【吟朝】ギンテウ　詩を作り世をあざける。歐陽修詩「我老慵二朝謁一、安能事ニー一」
【吟嘉】ギンカ　吟哦に同じ。梁書、王筠傳「ニー常爲二口實一」
【吟味】ギンミ　○詩を吟じて其の意を味ふ。僧齊月詩「ニー不レ如レ秋」‖吟情○の味を十分にあぢはふ。李商隱、麓山人寄レ茶詩「持レ贈欲ニー、擲レ歸空吾嗟」○轉取りしらべる、あらためる。
【吟聲】ギン　吟節に同じ、聲はあかさの枝。

【听】ギン　欣　齦
○笑ふ貌、口の大いなる貌。司馬相如、上林賦「亡是公ニー然而笑」○俗に借りて聽の字と爲すは非。○國ほんど、英語の數量のあて字、我が百二十匁強に當る。

【呈】狂（犬部四畫）の古字、呈と異り。

【吮】㊀クワ　㊁クワ　麻　歌
㊀うごく（動）○かはる（化）○あやまる（譌）㊁口開く。

【君】クン　文
○きみ、天子・主上・元首。○諸侯・公卿・大夫などの領地を有する者の稱。○つかさ、主宰者。史、西南夷傳「西南夷ニー長以ニ什數一」○夫が妻を稱し、又妻妾が夫を稱していふ。○子が父母を稱し、又子孫が祖先を稱していふ。○人を呼ぶ敬稱。○鬼神の尊稱「湘ニー」○封號「孟嘗ニー」「春申ニー」の類。○たつとし（尊）
【君牙】クンガ　周の穆王の賢臣の名、穆王命じて、大司徒と爲す。書經にニー篇あり。
【君公】クンコウ　諸侯の稱、書經「賜二后王一ニー」
【君侯】クンコウ　○列侯の丞相相國たる者の稱、漢官儀○諸侯の尊稱。
【君山】クンザン　洞庭湖中にある山の名。水經注「洞庭湖中有ニー一編山一、一一有二石穴一、潤二通吳之包山一、郭景純所レ謂巴陵地道者也、是山湘君之所二遊處一故曰ニー一矣」
【君子】クンシ　○才德高き人の稱。論語「而聖人吾不二得而見一之矣、得レ見二ニー一者一、斯可矣」○在位者の稱。詩、顔淵「ニー之德風、小人之德草、草上之風レ必偃」○妻が夫を稱していふ。詩、召南「未レ見ニー一、憂心仲忡」○竹の異名。詩、衛風「瞻二彼淇奥一、綠竹猗猗、有レ斐ニー一」
【君子鄉】クンシキヤウ　善人の住居するさとの稱。後漢書、王烈以ニ老行一稱二鄉里一、有二爭田者一、詣レ質二之烈一、或牛途而反、或寘レ道而反、所レ居名爲ニ一一」
【君子花】クンシクワ　蓮の異名。周敦頤、愛蓮說「蓮、花之君子者也」
【君子國】クンシコク　○風俗醇良にして禮儀の正しき國。淮南子「東方有二君子之國一」我國を指すに似たり。○新羅を指す（唐書）
【君子遠二庖鼈一】クンシエンハウベツ　君子は人と爭はず、以て身を全うするをいふ。韓詩外傳「鳥之美羽句喙者、鳥長レ之、魚之修口垂腴者、魚長レ之、人之利口明辯者、人長レ之、是以ニ一、遠二文士之進一、遠二武士之鋒一、遠二辯士之舌端一」
【君子人】クンシジン　君子たる人の義、論、泰伯「ニー與、ニー也」‖士君子。
【君子過也如二日月之食一】クンシクワヤニジツゲツノショクノゴトシ　君子の過は日月の蝕の如く、一時其の明を蔽はるるも、本體の德は終始にして現はる。論、子張「子貢曰、ニー將、過也人皆見レ之、更也人皆仰レ之」
【君子仇】クンシキウ　德ある人のつれあひ。詩、唐風「綢繆薪二芻楚一、楚隔ニー一」
【君子三樂】クンシサンラク　君子は常人と異りて、特に三つの樂あり。孟、盡心「君子有二三樂一、而王天下、不二與存一焉、父母俱存、兄弟無レ故一樂也、仰不レ愧二於天一、俯不レ作二於人一二樂

也、得二天下英才一而教二育之一三樂也」

【君子儒】クンシュ　道を學び、德を修めて治國平天下を目的とする學者。名利の爲めに學ぶ小人儒の對。論、雍也「女爲二――一無レ爲二小人儒一」

【君子之德風】クンシノトクハ　上たる人の德は風の如く、下たる者皆其の風化を受くるをいふ。論、顔淵「子曰、――、小人之德草、草上之風、必偃」

【君子之交淡若レ水】クンシノマジハリハタンジャクノゴトシ　君子の交は淡泊なること水の如くにして永久變らざる義。莊、山木「――、小人之交甘若レ醴」

【君子無レ所レ爭】クンシハアラソフトコロナシ　君子は、人と爭ふことなし。論、八佾「子曰、――、必也射乎、揖讓而升、下而飲、其爭也君子」

【君子不レ蔽二于屋漏一】クンシハオクニヘイセズ　君子は人の見ざる堂奥に在りても、恥づることを爲さず。詩、大雅、抑「相レ在二爾室一、尚不レ愧二于屋漏一」傳「西北隅謂二之屋漏一」

【君子不レ器】クンシハキセズ　器は各其の用に適して相通ずる能はず、成德の士は體備はらざることなし、ひとり一材一藝を爲すのみに非ざるをいふ。孔子の語「論、爲政」

【君子勞レ心小人勞レ力】クンシハこころヲラシ　セウジンハちからヲラス　治者と被治者とは其の勞する所を異にするをいふ。左、襄、九「知武子曰、――、先王之制也」

【君子成二人美一】クンシハ　君子は人を誘ひ動めて、其の善事を成就せしむ。論、顔淵「子曰、君子成二人之美一、不レ成二人之惡一、小人反レ之」

【君子交絕不レ出二惡聲一】クンシノマジハリタツトキハアクセイヲダサズ　君子は絕交せし後にも、其の人の惡口をいはず。史、樂毅傳「臣聞、古之――、忠臣去レ國、不レ潔二其名一」

【君子先撲而後交】クンシハマヅエラビテノチニマジハル　君子は先づ、友を擇びて交る、故に後悔なきをいふ。文中子「――、故寡レ尤」

【君子愛レ道不レ愛レ貧】クンシハミチヲアイシテマヅシキヲアイセズ　君子は道に違ふことを愛ふるも、貧乏は愛へず。論、衛靈公「耕也餒在二其中一矣、學也祿在二其中一矣、――」

【格二君心之非一】キミノこころノアヤマチヲタダス　君主の心の非を正す。孟、離婁「惟大人爲二能格二君心之非一」

【君主政體】クンシュセイタイ　一人の君主が統治機を有して一國を治める政體。共和政治を民主政體といふの對。

【君側】クンソク　君主のおそば。禮記「刑人不レ在二――一」

【君道】クンダウ　人君たるの道。孟子「欲レ爲レ君、盡二――一」

【君長】クンチャウ　〇きみ、かしら、をさ。禮、表記「以撫二平其――一」〇部落のかしら、夷のをさ。‖酋長。字解を見よ。

【不レ辱二君命一】キミノメイヲハヅカシメズ　使者となりて、主君の命を辱かしめず。論、子路「使二于四方一、――」

【君臨】クンリン　君として、其の下に臨む。國語、赫胥楚國、而一二レ之」

【君王】クンワウ　一國のきみ。‖君主。

【君射則臣決】キミイレバシンカツス　上の好む所は下必ず之に倣ふをいふ。決は ユガケ なり。荀子「――、楚莊王好二細腰一、故朝有二餓人一」

【親レ君不レ如二奚基一】キミヲシタシムハケイキニシカズ　奚は國基、奚者は、妄に嬖子を下さず、今、臣の妄に君を易置するは、これ君を視ること奚基に如かざるなり。左、襄二五、「寧子――、其何以免乎、奚者果レ奚不レ定、不レ勝二其禍一而況置レ君而不レ定乎、必不レ免矣」

【不レ君】キミナラズ　君が君たる道を失ふ。古文孝經、庶人「――、則レ――、臣不レ可二以不一レ臣」

【屢レ君數】シバシバキミヲシバス　主君にしばしば諫見する。一說に屢、煩むる「論、里仁」

【君以レ民爲レ體】キミハタミヲモッテタイトナス　君は人民の力を須つて國を成す、故に體といふ。禮、緇衣「民以レ君爲レ心――、心安則體安、君泰則臣泰」

【君尊臣死】キミタットケレバシンハシス　君恥辱を受くれば、臣は死を決して其の恥を雪ぐべし。すべて臣は其の君と生死線苦を共にすべきをいふ。越語「范蠡曰、爲二人臣一者、君憂臣勞、――」‖主尊臣苦。

【君者舟也庶人者水也】キミハフネナリショジンハミズナリ　君と庶人とを舟と水とに喩ふ、助くる者も時には害をなすとの義。荀、王制「――、水則載レ舟、水則覆レ舟」

【肩】ケイ　霽

ひらく(開)‖啓。

【啓明】ケイメイ　よあけの明星。爾雅「天明星謂二之――一」‖啓明。

【呎】㊀ケツ　㊁セツ　屑　屑

㊀ささやく(小聲)〇はやし(疾)㊁すする‖歡。

【吾】㊀ゴ　㊁ギョ・ゴ　魚　虞

㊀われ、わが、己に就きて言ふにはーといひ、人に因りて言ふにはーといひ、人に對ふ。孟、公孫丑「我善養ー浩然之氣」〇自己の存在、自己の意識。陸游詩「草廬寂默我忘ー」〇ふせぐ(禦)とどむ(止)執金ーは官名、金革を執りて非常を禦ぐことを掌る。〇ささふ(支)たがふ(違)〇子兄などの字に冠して親む意を表す「ー子」「ー兄」〇伊ーは吟哦のこゑ。‖咿嗄。㊁ーは親まざる貌。

ワ吾・我・予・余は皆（戈部三画）の倍を見よ。

【吾伊】ゴイ 讃歎のことば。黄庭堅詩「南窗試吾伊一一」‖唔咿・唔嘻。

【吾兄】ゴケイ わが兄。友を親み尊びて呼ぶ称。韓愈詩「一一既風翔、王子亦飛翮」

【吾吾】ゴゴ 親まざる貌。‖論語「暉暉之一一、不ノ如二鳥鳥一」

【吾子】ゴシ あなた。友が相親み尊ぶ称。孟、公孫丑「敢問二夫子之一一曰、一一與二子路一孰賢」

【吾人】ゴジン われら、われわれ。‖吾曹。

【吾儕】ゴサイ われら。‖吾儕・吾輩。

【吾妻鏡】アヅマカガミ 五十二巻、東鑑にも作る。撰者詳ならず、高倉天皇の治承四年、源頼朝の伊豆に起りしより、四由天皇の文永三年に至る、将軍六代八十餘年間の事を記す。

【吾家顒】ゴカギョウ わが子の俊秀なるを称す。晋書、顧和傳「總角便有二清操一、族叔粲雅重ノ之曰、此——、與二吾宗一者、必此子也」

【吾家千里駒】ゴカセンリノク 年少にして才の優れたるものを称す。晋書、荀崧載記「嗣子元達、堅之從兄子也、幼慷慨有二遠操一、不ノ屑二時榮一、堅嘗目ノ之曰、——也」

【吾家之明珠】ゴカノメイシュ わが子の俊秀なるをすぐれたる珠に比していふ。梁書、劉孺傳「七歲能屬ノ文、十四居二父喪一、毀瘠骨立、宗黨咸異ノ之、叔父瑱攜以之ノ官、常置二座側一、謂二賓客一曰、此兒——也」

【吾曹】ゴソウ わがともがら。杜甫詩「客情投二異縣一、詩思滿二一一一」‖吾輩・吾儕。

【吾師】ゴシ わが先生。左傳「子產曰、其所ノ善者、吾則行ノ之、其所ノ惡者、吾則改ノ之、是一一也」杜甫詩「風流儒雅亦一一」

【入二吾室一者但有二講堂一】ゴシツニイルモノタダコウドウアルノミ 前聞の樂をいふ。南史、謝譓傳「不ノ妄交接、門無二雜賓一、有ノ時領袖曰、——、對二我飲一者、唯當二明月一」

【吾輩】ゴハイ 吾曹に同じ。左、宣、十一「一一小人」

【吾儕】ゴサイ わがなかま。左、昭、十二「一一之士」

【落二吾手一】ワガテニオツ わが物となる。杜甫詩「不ノ意青草湖、扁舟——」

【吾徒】ゴト わがともがら。論、先進「子曰、非二一一一也、小子鳴ノ鼓、而攻ノ之可也」

【非二吾徒一】アラズゴトニ 吾吾のなかまにあらず。前條を見よ。

【吾友】ゴユウ わがとも。親みていふ。論、子張「一一果也、爲ノ難ノ能也、然而未ノ仁」

【吾仏】ゴブツ 吾曹に同じ。

【吾道東矣】ゴドウヒガシス 後漢の馬援が郭玄の東に去りしを評せし語。後漢書、郭玄傳、玄事二扶風馬融一、從質二諸疑義一、既還、融喟然謂二門人一曰、鄭生今去、——」

【吾道南矣】ゴドウミナミス 程明道が楊時の去るを惜みていふ。宋史、楊時傳「以二師禮一見二程頤於潁昌一、相得甚悦、其歸也、頤目二送之一曰、——」

【吾門標秀】ゴモンヒョウシュウ わが家の傑出の子。晋書、慕容皝載記「此兒非二徒吾門之標秀一、乃佐時之良器也」

【吾豈敢】ワレアニアエンヤ われは何を以てそれに當らんや、當らず。論、述而「子曰、若二聖與一レ仁、則——」

【吾過矣】ワレアヤマテリ われは失策せりといふ。晋、桓沖「子見投二其杖一而拜曰、——、——、吾聊と爾索居、亦已久矣」

【呉】ゴ 圓

○大いなり。○かまびすし、やかまし（譁）詩、周頌「不一不敎」○たのしむ、娯に通ず。○國名、周の初、泰伯一に居り、子孫王と稱し、國始めて大、後、越の爲めに滅ぼさる。○三國の時、孫權江南に據り、國を一と號す。○五代の時、楊行密、淮南に據り、江西を兼有して、國を一と稱す。○地名、秦の時、會稽地方に一郡を設けたるによりて、今も江蘇省の異名を一といふ。○おもんばかる（慮）○闘くる、くれる、與ふ、受く。○くれぐれ、念を入る、かならず。○娯と同じく古、支那の異稱とす「一竹」「一服」

【呉娃】ゴア 呉の美女。李白詩「一一與二越姫一、窈窕淘二鉛紅一」‖呉姫・呉孃

【呉越之思】ゴエツノシ 戰國の時、呉王夫差と、越王句踐と久しく闘爭せし故事によりて、互に敵意を懐くこと。

【呉音】ゴオン 支那の南方、呉の古音にして風に我國に傳はる。‖漢音の對。

【呉下阿蒙】ゴカノアモウ 知識なきつまらぬ者。呉志、江表傳「孫權謂呂蒙曰、卿今者掌事、不ノ可二不學一、蒙乃就學、篤志不ノ倦、魯肅過ノ尋二論事一、乃歎曰、非二復呉下阿蒙一、今者學識英博、非二復一、士別三日、卽更刮目相待」‖阿蒙は發語の辭。

【呉干之劍】ゴカンノケン 呉の干將の作れる名劍。戰國策「——、周試用二牛馬一」

【呉姫】ゴキ 呉の地の美女。李白詩「落花踏盡遊二何處一、笑入一一酒肆中」

【呉起】ゴキ 周の衛の人、善く兵を用ふ、魏に仕へ、武侯と西河に浮びて下り、魏に在りて險に在らざるを論ず、魏を去りて楚に適く、楚の悼王その賢を聞きて相となす。呉子一卷を著す。

【吳牛喘ノ月】アゴウシノ 吳は暑さ烈しき故、牛は月を見て、日なりと思ひて喘ぐといふ。よりて暑氣の甚だしきに喩ふ。世說、言語「滿奮畏ノ風、在ニ晉武帝座、北窗作ニ琉璃屏、實密似ノ疎、奮有ニ難色、帝笑問ノ之、奮答曰、臣猶ニ吳牛見ノ月而喘ノ」

【吳吟】ゴギン 故郷を懷ふ義。戰國策「陳軫曰、王、獨不ノ聞ニ吳人遊ノ楚者一乎、楚王甚愛ノ之、病、故使ニ人問ノ之曰、試病乎、意亦思乎、左右曰、誠思則將ニ一一、今軫將ニ爲ノ王一一」

【吳阿】ゴア 火の神。山海經、注「一一、祝融弟、亦爲ニ火正一也」

【吳會】ゴクワイ ○秦の會稽郡の一名。漢に至りて吳・會稽の二郡に分つ。○今の江蘇省吳縣城の一名。

【吳道子】ゴダウシ 唐の畫人、名は道玄、玄宗の時、召して供奉とす。筆法超絶、畫聖と稱す。又善く佛像を畫く。

【吳山】ゴザン 浙江省杭縣に在り、春秋の時、吳の南界たりしが故、又、胥山ともいふ、子胥の名に本づく、左、大江を帶び、右、西湖を瞰す。金主亮詩「立ノ馬一一第一峯」

【吳子】ゴシ 一卷、周の吳起撰すと題す、圖國・料敵・治平・論將・應變・勵士の六篇に分つ、秩序井然として紊れず、孫子の奇變窮りなきに及ばざるも、亦善く兵を言ふものといふべし。

【吳兒】ゴジ 吳下の少年の者。晉書、夏統傳「貫充稱ノ統、此一一石人木鷄也」

【吳須】ゴス ○支那の一一焼の陶器、青藍又は赤藍等あり。○青黑色のコバルトの細末を、水に溶解せしめて漆器の青き模樣を畫くに用ふる繪具。

【吳船錄】ゴセンロク 二卷、宋の范成大の著、淳熙中、成大、四川制置使より、召されて舟に乘りて京師即ち臨安(吳の地)に赴く時の日記。陸放翁の入蜀記に對して一に、出蜀記ともいふ。

【吳楚七國】ゴソシチコク 前漢の孝景帝の時に、聯合して反せし國國。即ち、吳・楚・趙・膠西・膠東・菑川・濟南。

【吳鎭】ゴチン 元の一人、字は仲圭、梅花道人と號す、嘉興魏塘の人、詞翰に工なり、尤も善く山水竹木を畫く。

【吳中】ゴチウ 江蘇省吳縣を、古、一一とも稱す。春秋の時吳の國都たりしが故。史、項羽紀、避ニ仇於一一ニ」

【吳音】ゴイン 字は幼清、幼にして親悟、宋の咸淳の末、遺士に舉げられて第せず、元に入り、仕へて翰林學士に至る、學者草廬先生と稱す、臨川郡公に封ぜらる、夙に斯文を以て自ら任ず。

【吳郡】ゴグン 江蘇省吳縣なり、左思に一一賦あり。注「一一者蘇州是也」

【吳坂】ゴバン 地名。古今注「貳箜在ニ吳城之北ニ今謂ニ之一一」劉琨、與ニ盧諶ニ書「脊縢膜倚ニ騎于一一、長ニ鳴于伯樂ニ知與ノ不ノ知也」

【吳服】ゴフク 國くれはとり、支那の吳の地方より傳來せし織物、又、それに習ひて織りたる織物の總稱。

【吳綾】ゴリョウ 吳の地より出すあやぎぬ。唐書、韋堅傳「會稽則一一、吳郡則方丈綾」

【吳縑】ゴケン ごろふく、舶來のこわき毛織物の名。もと駱駝の毛にて織りしもの、今は羊毛綿絲等をも用ふ。蘭陵のあて字。‖吳綢服。

【吳淞】ゴソウ 江蘇省蘇州府吳縣に屬す、上海の東北、揚子江と黃浦江との合流點に在り、西層一千八百九十八年開港場となる。

【吳】

吳(前條)の俗字。吳志、薛綜傳「無ノ口爲ノ天、有ノ口爲ノ一一」

【吼】コウ

有 宥

ほゆ、牛なく。猛獸の鳴くにいふ「獅子一一」

【吼說】コウセツ 聲をあげてさけぶ。後漢書「辛莫ノ不ニ一一ニ」

【吼怒】コウド さけび怒る。岑參文「鐵虎爭ノ肉、一一鬪闘」

【吹】

㊀ スキ
㊁ スイ
支 寘

㊀ふく(嘘)氣を出す、風ふく。○うそぶく(嘯)○たすく(助)㊁はやし、笛類の音樂「鼓一一」讀、月令「入學習一一」○かぜ(風)「寒一一」

【吹竽】スイウ ふえをふく。史記「其民無ノ不ニ一一ノ鼓ノ瑟」‖吹笛。

【吹起】スイキ 風吹きおこる、又、風が吹きおこす。李遠詩「秋風一一九華盃」

【吹噓】スイキョ ○いきをふきかける。○人をすすめあげる。隋書、儒林傳「伏惟明尚書公、咳唾足ニ以活ニ枯鱗ニ、一一可ニ用飛ニ窮羽一一」杜甫詩「願借ニ一一送ニ上天一一」

【吹嘘】スイキョ 氣をふきかけてあたためる。白居易詩「一一長未ノ已」

【吹管】スイクワン ○ふえをふく。庾信詩「北關開ニ一一一」○化學にて火を吹きつけるくだ、又、ひふきだけ。

【吹雪】スイセツ ふぶき。戴叔倫詩「晩至如ニ一一一」‖風雪。

【吹奏】スイソウ 笛などをふきかなでる。

【吹彈】スイタン ふえをふくと琴などをひくと。‖吹竹彈絲。轉じて音樂の總とす。

【吹竹】スイチク 笛を吹く。韓愈文「一一彈絲、觀金擊石」

【吹笛】スイテキ ふえをふく。後漢書、馬融傳「融善ニ吹笛一、好ノ一一」

【吹肚魚】スイトギョ 河豚の異名「本草綱目」

【吮】 セン・エン　シュン・ジュン　㊥銑

○口にてすふ(炊)○ねぶる、なめる(舐)

【吮疽之仁】ソジンノ　呉起が部下の兵士の疽のうみをすひとりし故事、よりて大将が卒をいたはる仁とす。史、呉起傳「卒有二病レ疽者一起為吮レ之」

【吮癰舐痔】ゼンヨウシジ　（つらひ損ぢることの甚だしきにいふ。漢書「文帝病レ癰、鄧通常為レ上吮二吮之一」論、陽貨「荀悪レ失レ之、無所レ不レ至矣」の注「小則――」

【呈】 ㊀テイ　㊁アイ　㊥梗　呈と㊥は別

㊀あらはる(露)あらはす(見)○しめす(示)表する。晉書、元帝紀「星斗一レ祥、金陵表異」○とく(解)○ほと、程に通ず。史、始皇紀「以二衡石量一書、日夜有レ、不中一、不得二休息一」○すすむ(進)「進一」○公牘文の一種、屬吏が長官に對して差出す文の名。㊁たくまし。‖逞。○こころよし(快)

【呈上】テイジョウ　さしあげる、獻ずる。北周書、宗懍傳「即日――」‖進呈・獻上。

【呈露】テイロ　あらはす。むきだしにする。晉楓賦「皓質――」

【吶】 トツ　㊥月

○どもる、どもり、言の難きなり。‖訥。○喊(カン)はをめき叫(ケウ)ぶ。

同訓異字　吶、吶吃の別は吃(口部三畫)を見よ。

【吶喊】トツカン　大聲にわめく、鼓を盛す爲めに鬨聲(コエ)を擧げる。編纂全書「更夫鳴レ鑼一一」

【吶吃】トツキツ　口どもる。又、事の進み難きにいふ。指地志「被圍寒戰、形氣一一」

【吶口】トツコウ　どもり、言語に難む貌。漢書、季布傳「一一少言」‖訥口。

【吶吶】トツトツ　口どもる。證、檀弓「其有一一然、如レ不レ出二諸口一」‖訥訥。

【吞】 トン　テン　㊥元　通音㊥先

○のむ、口に入れる、吐の反對。○あはせつつむ(竝包)己の有とする「併一」○ほろぼす(滅)○かろんず(輕)ばかにする「一敵」

同訓異義　咽なり、口に從ふ天の聲。天に從ひて吞に作るは非。

同訓異義　吞・飲・咽・嚥○吞は物をかまずに、丸のみにするなり。吞刀・吞舟魚の類。○飲は湯水などをのむなり、轉じて飲レ酒・飲レ氣などと用ふ。○咽・嚥の二字は同じ、つばをのむなり、一口づつ、のんどへのみこむなり。

【吞咽】ドンイン　のみこむ。急就篇、注「所二以一一物一也」‖吞嚥。

【吞就】ドンシュウ　船をのみこむ、航は船。左思、呉都賦「長鯨一レ、脩鯢吐レ浪」‖吞舟。

【吞牛之氣】ドンギュウノキ　幼にして氣象のすぐれたるをいふ。杜甫詩「小兒五歲頭吞レ牛、滿堂賓客皆回レ頭」尸子の「虎豹之子、雖レ未レ成レ文、已有二食牛之氣一」の語に本づく。

【吞舟之魚】ドンシュウノウオ　ふねをのむほどの大魚。莊、庚桑楚「――、碭而失レ水、則螻蟻能苦レ之」

【吞噬】ドンゼイ　のみかむ。鮑圖を侵し取る義。魏志、崔琰傳「哲人君子、儀有二色斯之志一、熊羆壯士、懐二吞一一之用一」

【吞聲】トンセイ　○默して聲を發せず。鮑照詩「心非二木石一豈無レ感、一レ聲難不二敢言一」○忍ぶ。

【吞吐】ドントド　のむと、はくと、のんだりはいたり。鮑照、登二大雷岸一與二妹書一「其中雖レ波解レ天、高浪漫レ日、一一百川、皆二滅焉一」‖吐吞。

【吹】 スイ　㊥支

○ほゆ。○犬なく。孟、公孫丑「雞鳴狗一相聞而達二乎四境一」

【吹噓】スイキョ　ほゆ。柳宗元文「虎豹咆噬、代二雅牢之一一」

【吹螘】スイギ　なくかへる。蘇軾詩「稻須二初一一」注「嶺南呼二蝦蟇一爲レ螘」

【吹臺】スイダイ　梁(土部九畫)の熱語を見よ。

【吹日】スイジツ　（部首四畫）の熱語參看。

【呆】 ㊀ハウ　㊁ボウ　㊥皓　有㊥

㊀保(人部七畫)の古字。㊁菜(木部五畫)の古字。○おろか(愚)俗に、癡と同義に用ふ。○圖あきれる、意外に驚く。

【否】 ㊀ヒ　㊁ヒツ　㊥紙　有㊥

㊀いな、不なり。可の反對。口にて許さざるなり。孟、萬章「一不然也」○いなむ、こばむ(拒)○しからず(不然)あらず。大學「其本亂而末治者一

矣」㊁よからず(不善)あし(悪)「臧ー」○あしき事、けがれし物、ふさがる(塞)ふさがる所。○易の卦の名、坤下乾上。○國いなや、即時に、直ちに。

【否運】ヒウン あしきめぐりあはせ。張九齢詩「ーー逢三閉ニ」

【否隔】ヒカク 閉ぢへだたる。孟書「人道不レ通、則除閉ーー」

【否極反レ泰】ヒキョクハンタイ 否泰並に易の卦の名、否塞の運命も極度に達すれば、泰平にかへる。梁宣帝賦「望二否極而反レ泰、何吝吾而無レ津」

【否決】ヒケツ 不可なりと議決する。可決の反対。

【否臧】ヒザウ あしきと、よきと。白居易詩「朝野分二倫序一、賢愚定ニーーニ」ㇼ臧否・善悪。

【否泰】ヒタイ 易の二つの卦の名、否は塞、泰は通、否塞と通泰との運命。吳越春秋「時過二于期一、否終即泰」潘岳、西征賦「覧地勢之安危、信二人事之ーー」

【否定】ヒテイ 非とす、然らずとなす。肯定の反対。

【否徳】ヒトク うすきとく。又、正しき徳にたがふ。書、舜典「ーー忝二帝位一」ㇼ不徳・薄徳・薄徳。

【否認】ヒニン 然らずとみとめる、否なりと認定する。

【吩】

ホン 願 元 通音フン

○噴(口部十二畫)に同じ。○いひつける。

【吩咐】フンフ 國事を衆人に分けていひつける、それぞれ命令する。もと分付に作る。

【吻】

ブン 吻 通音フン又 脗に作る

○くちさき、くちもと(口邊)轉じて言語の氣をいふ「口ー」○物のつき出たる邊端。孔平仲詩「葉走堂階二雲雲依殿ー」浮」

【吻合】フンガフ 兩方の脗がぴったりとあふ。事の相合するに喩ふ。

【吝】

リン 震 遴と通ず、俗に悋に作る

○をしむ(惜)○やぶさか(鄙嗇)しぶる、爲すを雖んずる。書、仲虺之誥「改過不ーー」○うらむ(恨)くやむ「悔ー」

同訓異字 リン 吝・嗇・借・愛・慳 ○吝はしわきなり、吝嗇と連用す。○嗇は物を少しく用ふる義、吝と同じく、しわき義にも用ふれども、嗇は物を妄に費さざる義にて、善き方にも用ふ。老子「治レ人事レ天莫レ如レ嗇」○惜は用法廣し、吝惜・貪惜と用ふればしわき義となり、愛惜・貴惜と用ふれば、物を大切に思ひてをしむ義となる。○愛は愛惜と連用す、心にかけて惜む義。論語「爾愛二其羊一、我愛二其禮一」○慳は吝に同じ。

【吝愛】リンアイ ものをしみする。愛は惜。ㇼ吝惜。

【吝惜】リンシャク をしむ心。陶潜文「曾不レ一ーニ去留ニ」

【吝嗇】リンショク ものをしみをしてきたなし。易、說卦「坤爲ニーー一」易林「吝嗇ーー、鉢不レ解レ囊」ㇼ鄙吝。

【吝情】リンセン 吝愛に同じ。

【呂】

ロ 通

○せぼね(脊骨)○陰の音律「六ー」

【呂翁枕】リョオウチン 唐の開元中に、盧生が邯鄲の旅舍にて、道士呂翁の枕を借りて黄粱の飯の炊ける間に、八十年間の榮辱の夢を見たる故事(枕中記)ㇼ呂公枕。

【呂紀】リョキ 字は廷振、明人、翎毛に工なり、閻ー山水人物を作る、設色鮮麗、生氣奕奕たり、時に絶めて貴重す、詔に應じ制を承くるに、多く意を立て規を進む、孝宗嘗て之を稱して曰く、工に藝事を執りて以て諫むるはーーこれ有りと(畫史彙傳)

【呂刑】リョケイ 書經の周書の篇名、呂侯、周の穆王の司寇たり、贖刑の法を作る、之をーーといふ、呂は姓、甫國の侯、故に一に甫刑ともいふ。

【呂公】リョコウ 漢の單父の人、高祖を微なる時に識り、女を以て之に妻す、即ち呂后。

【呂公枕】リョコウチン 呂翁枕に同じ。張祜詩「繁華一夢人不レ知、萬事盡歸ーー」

【呂氏春秋】リョシシュンジウ 二十六卷、一に呂覽ともいふ、秦の呂不韋撰すと題す、實は其の賓客中智略の士の集むる所ろ、凡そ十二紀・八覽・六論に大別す。

【呂尚】リョショウ 即ち太公望。周の文王の師となる。

【呂祖謙】リョソケン 字は伯恭、東萊と號す、早く高第に擢んでられ、一代の宗師たり、著はす所、左氏博議・文集等あり、淳熙八年卒す、年四十五。

【呂東萊】リョトウライ 呂祖謙を見よ。

【呂傳】リョデン 周の太公望呂尚と殷の傅說フとを、共に賢人。王逸、九思「ーー堪二与殷周一興」

【呂覽】リョラン 呂氏春秋の別名。

【呎】

【國字】

フート(複數はヒート)英國の尺度、我が一尺・〇〇五厘餘。

五畫

【唉】 アウ 養
○ふさがる(塞)○かなしむ(悲)○むせぶ(咽)
【唉咽】アク 流の通ぜざる義。揚都賦「山阜瀺灂而嶄巖、泉流迸集而一」

【唲】 アク 陌
なく(喔)＝咿。鳥の聲、又は雞の聲。

【唁】 イウ 尤
鹿のなくこゑ。
【唁唁】イウ 鹿の呦くこゑ。詩、小雅「一一鹿鳴、食二野之芹一」
【唫唫】ガウ なきむせぶ、又、泉のむせび流るる聲の形容。潘陶詩「如レ恨往來人不レ見、水聲一一也二花溪一」＝幽咽。
【唫喔】イク 鳥獣の鳴きこゑ。張說詩「一一鳥獣馴」

【咏】 エイ 敬
うた、うたふ(歌)＝詠。漢書、東方朔傳「彈二琴其中一、以一先王之風一」
【咏嘆】タン 聲を長くして歎息する。＝詠歎。

【唯】 エイ 霽
くどくどし(多言)
【唯唯】ヰ くどくどしき貌。玉篇「一一猶二喈喈一也」

【唄】 カ 歌
○しかる。＝訶。○いかる(怒)○せむ(責)○いらつ。苛に通ず。○一はわらふ(笑)又笑ふ聲。○ふく、いきを吹きかける(噓氣)
【唄唄】カ からからと笑ふ貌。傳燈錄「猶有二一人一一大笑」
【唄喝】カツ 大聲にてしかる。應璩詩「無用相一一」
【唄禁】カン しかりとめる。韓愈、送李願歸二盤谷一序「鬼神守護兮、一一不祥」＝訶止。
【唄嘘】カク 氣をふきかける。韓愈詩「炎帝持二祝融一、一一不二相炎一」
【唄吸】カシ いきを吹きかけて煖りたる硯をあたたむ。漢荊文詩「吟成一一レ冰猶堅」
【唄譴】カン しかりせめる。鄭俠詩「正直招二一一一」＝訶責。
【唄漣】カ しかりつけて守る。宣侯、頭二法華壇一「阿「山鬼善一一、千載照二層巒一」
【唄止】シ しかりとどむ。史、李廣傳「潮陵尉醉一二一廣一」＝訶禁。
【唄責】カセキ きびしくせめしかる、折檻スル。＝訶責。後漢、廢帝紀「晉數一一」＝訶譴。

【唅】 カン 覃
【唅然】タン 呵呵に同じ。
【唅凍】トウ こほれる筆に息を吹きかけてあたためる。天寶遺事「李白擢二詔誥一、時大寒硯凍、帝勅二宮槇一、執二牙筆一一レ之」＝呵筆・呵硯。
【唅慰】シ しかりのしる。後漢「太祖見二檢書一、一二一之」
【唅潰】ヒツ 呵凍に同じ。楊萬里詩「一一更成レ揮」

【吐】 カ・ケ 馬 麻
○くちあく、口を張る貌。莊、秋水「公孫龍口一而不レ合」○あくび。

【唅】 カイ 灰
○あざけりわらふ(調笑)杜甫詩「任受二衆人一」○わらふ。左思、吳都賦「囂然而一」○一一はよろこびたのしむ貌。皇甫謐文「晉民嗷嗷、今民唅唅」
【唅笑】ヒツ わらふこと。後漢「大一二一之一」

【唧】 カフ 合
○吸ひて飲む。○かまびすし、聲衆し。○蟬一は衣の張る貌。
【唧唧】カフ 鳴モのなくこゑ。爾雅「蟋蟀一一」

【咎】 ㊀キウ 有 ㊁カウ 篠
陷に菩に作るは非
㊀とが、あやまち(罪過)「罪一」○とがむ、とがめ。○わざはひ(災・凶事)「殃一」やまひ(病)○にくむ、にくみ(惡)仇として惡む。書經序「殷始一一周」○あし(凶)休の反對「休一」○尉と通ず、晉の一犯、左傳に尉犯に作る。㊁皐と通ず、皐陶、古、一繇に作る。
【咎人】人に從ひ各に從ふ、各は相違ふなり。
【咎祲】キウシン わざはひ。京房易傳「萬民流散、無二一一一」
【咎レ咎】キウキウ あやまちをわびる。陳琳文「偉觀慎レ懼、レ一陛レ上」
【咎戒】カイ とがめいましむ。後漢書「人自抑損以塞二一一、則天道酌レ滿、鬼神福レ謙矣」
【咎悔】クワイ とがめくい。荀悦文「詳二出子口一、則一一及レ身」
【咎尤】イウ とがめ。劉志「長二衆一一一」

【呴】 ㊀ク・コ 遇 ㊁ク 虞
㊂コウ・ク 尤 ㊃コウ・ク 有 ㊄コウ・ク 宥
㊀あたたむ(溫)㊁いきふく(噓吹)＝嘔。○よろこぶ(悦)○しかる(呵)㊂しはがれ聲。

㊃ほゆ（吼）㊄なく。史、殷本紀「有飛雉登鼎耳而ー」■雊。

【昫曝】ク・ボ 日を開きていきをふく。漢書、王褒傳「ー呼吸如二霧松一」

【昫昫】ク・ク 言葉の順ふ貌。史、東方朔傳「ー一晻晻」

【昫論】ク・ロン 温め悉む。淮南子「ー一覆育、萬物蕃生」

【和】㊀ クヮ・ワ 國 ㊁ クヮ・ワ 國 昧は古字

㊀やはらぐ、やはらか。○むつぶ（睦）○ととのふ（調）○たひらか、たひらぐ（平）○なかなほりする「一睦」○したがふ（順）○かなふ（諧）○あふ、あはす（會）のどか（長閑）あたたか（温）○うらら（麗）○宜しき節に叶ふ行爲。○車の軾に懸ける鈴。○やまと（日本）㊁こたふ、應ずる。易、中孚「鳴鶴在陰、其子ー之」○調子をあはす。○他人の詩と同韻の字を用ひて詩を作る。○まねをする。○まぜあはす、調合。○合せたる數。

【和熊】クヮ・ユウ 唐の柳仲郢の母韓氏が、熊膽を和して丸藥をつくり仲郢に與へ、其の勤學を助けし故事。小學、外篇善行「公綽妻韓氏、當命粉二苦參・黃連・熊膽一和爲レ丸、與二諸子一、每二永夜習一レ學、嘗レ之以資二勤苦一」

【和氏之璧】クヮシノヘキ 古の寶玉の名。韓非、卞和「楚人和氏得二玉璞楚山中一、奉而獻二之厲王一、厲王使二玉人一相レ之、玉人曰、石也、王以レ和爲レ誑、而刖二其左足一、及二厲王薨武王即レ位、和又奉二其璞一而獻二之武王一、武王使二玉人相一レ之、又曰、石也、王又以レ和爲レ誑、而刖二其右足一、武王薨、文王即レ位、和乃抱二其璞一而哭於楚山之下一、三日三夜、淚盡而繼レ之以レ血、王聞レ之使二人問一其故一、和曰、吾非レ悲レ則也、悲二夫寶玉而題レ之以レ石、貞士而名レ之以レ誑、此吾所二以悲一也、王乃使二玉人理一其璞一而得レ寶焉、遂命曰二ー一」

【和璞】クヮボク 璞はあらたま、卞和が楚の厲王に獻じたるもの。和氏之璧參看。戰國策「范雎獻二書昭王一曰、臣聞周有二祇侯一、宋有二結綠一、梁有二懸黎一、楚有二ー一」此四寶者夏工之所レ失也」

【和盤托出】クヮバンタクシュツ 圖食物などを盛盤と共に持出す義。すこしも隱さず、一切打ちあらはすにいふ。西湖佳話「和樂部托出、閨閣態二風流一」

【和壁】クヮヘキ 和氏之璧の略語。

【和樂】クヮラク やはらぎたのしむ。詩經「政事一レ家、ー一且湛」

【和鑾】クヮラン 車鸞の鈴、和は車の軾にかけて鸞と應和す、鸞は鑾ニにかける鈴ノ形、小雅「ー一雝雝」

【和墨】クヮボク やはらぎあふ。禮記「人之所二以聚一レ居一レ之理盡矣」■和一・和合。

【和韻】クヮイン 他人の詩と同韻を用ひて和し作る。珊瑚鉤詩話「前人作レ詩、未レ始ー一、自下唐白樂天與二元微之一爲中二淅觀察於荏來一、郵筒一倡和、始依レ韻、而多至二千首一、少或百數十首、篇章甚富」

【和惸】クヮケイ やはらぎよろこぶ。杜撃、猫賦「或溫溫以ー一、或惸惸以嘯叫」■和悅・和睦・和喜。

【和悅】クヮエツ やはらぎよろこぶ。■和懌。

【以レ和致レ和】ワヲイタシテワヲイタス 國民のやわらげる心によりて、自然に豐年などの幸福を招く。漢書「始自レ天降レ此、皆ー一、應二天動一也」

【和歌】クヮカ 圖やまとうた、本邦固有の歌。くにぶり。■國歌。

【和解】クヮイ 爭をやめて仲なほりする。春秋、注「莒僖有レ懼、紀侯既昏二於魯一、使二大夫盟一レ莒以ー一レ之」■和息。

【和諧】クヮイ やはらぎととのふ。司馬相如、琴賦「交情通二體心一ー一」■和協諧合。

【和羹調梅】クヮコウテウバイ 種種の味を調和してあつものを作る。轉じて人君を輔佐して天下を調理する宰相のこととす。書、說命「若作二和羹一、爾惟鹽梅」僞說註「佐二和羹一、酸

切醉消除」

【和學】クヮガク 圖本邦固有の文學。漢學・洋學などの對。

【和合】クヮガフ ○うちとけて互にむつみあふ。管、幼官「審之以レ道則民和、養レ之以レ德則民合、ー一故能習、習故能諧」○やはらぎあふ。陳詩外傳「天施地化、陰陽ー一」○兩家の男女を合せて結婚せしむる。易林「使二媒求一レ婦ー一二姓一」

【和合衆】クヮガフシュウ 圖儒家の稱、五人以上を衆といふ。法華經料註「僧伽、此翻二ー一」

【和姦】クヮカン 男女合意上の姦通。強姦の對。

【和漢】クヮカン 圖日本と支那と。からやまと。■漢。

【和氣】クヮキ やはらかなる氣分の意。祭義「有ー一者、必有二愉色一」

【和氣致レ祥】クヮキチシヤウ 陰陽相和げば、其の氣自ら瑞祥を出す（漢書、劉向傳）

【和睦】クヮボク やはらぎよろこぶ。史、魯世家「古者太平、萬民ー一」■和惸・和悅。

【和議】クヮギ 講和の相談。宋史、高宗紀「胡銓上書直論二ー一」

【和讓】クヮジヤウ やはらぎつつしむ。南史、王諶傳「諶貞正ー一、朝廷稱レ善、人多與レ之厚」

【和煦】クヮク 春の日のあたたかなる義。謝靈運、山居賦「承ー一而芳腴」

【和訓】ワクン　國漢字を本邦のことばに譯して訓むよみ方。

【和光同塵】ワクワウドウヂン　智恵の光を深く隠して顯さざるを和光といひ、世の塵俗の中に混じて居るを同塵といふ。老子「和二其光一、同二其塵一」

【和敬】ワケイ　やはらぎつつしむ。禮、樂記「易故樂在二宗廟之中一、君臣上下同聽レ之、則莫レ不二和敬一、在二族長鄉里之中一、長幼同聽レ之、莫レ不二和順一、在二閨門之內一、父子兄弟同聽レ之、則莫レ不二和親一」

【和協】ワケフ　うちとけて親しくする、和衷協同の略。左、隱十一「寡人有レ弟不レ能二和協一」

【和憐】ワケン　やはらぎてこころよし。律呂相召賦「天理不レ虧、物情一一」

【和諧】ワカイ　やはらぎてへりくだる。易林「一一致レ樂、君子攸レ同」

【和族】ワゾク　わが南北朝時代に九州地方の邊民が屬、支那朝鮮の沿岸に舶して擾掠を行ひしものの稱。高麗史「一一之侵始レ此」‖倭寇ワコウ

【和琴】ワゴン　國わが國にて創めたる六絃の琴、あづまごと、やまとごと、むつのを。

【和魂漢才】ワコンカンサイ　國心はやまとだましひを持し、才智は漢學に資るを要すとの義。菅原道眞の語。

【和算】ワサン　國たまざん、本邦固有の數學、そろばんを用ひてする算術。‖珠算。

【和讃】ワサン　國支那の偈頌ジュを本邦の今様文に譯して誦ふもの、佛の功德を讃美サンする唄。

【和字】ワジ　國○假名カナ○我が國にて作りし文字。辻・緋の類。‖國字。

【和酬】ワシウ　他人の作りたる詩意に和して答へる。王禹偁詩「調高誰一一」‖賡酬。

【和而不レ同】ワジフナドウ　人とやはらげどもおもねりて從ふことなし。論、子路「子曰、君子——、小人同而不レ和」

【和集】ワシフ　やはらぐ、集もやはらぐ。淮南子「天下寧定、百姓一一」‖和輯。

【和輯】ワシフ　やはらぐ。漢書、南粵王趙佗傳「與二剖符一通レ使、使レ一一百粵」粵は越の古字。

【和親】ワシン　やはらぎしたしむ。和敬を見よ。

【和上】ワジヤウ　國和尚に同じ。大集經「善二敎父母師長一一、故得二肉髻相一」

【和熟】ワジク　○よくみのる。左傳「年穀一一」○互にむつみ合ふ。‖和合。

【和順】ワジュン　やわらぎしたがふ。和敬を見よ。

【和舒】ワジョ　やはらぎてゆるやか。卞關賦「匪二天威之嚴厲一、緝二慢惰之一一」‖和暢。

【和如二琴瑟一】ワジョコトシツシツノゴトシ　夫婦の仲よきをいふ。詩、小雅「妻子好合、如レ鼓二琴瑟一」

【和製】ワセイ　國本邦にて作　。又その物。舶來品の對。

【和暖】ワダン　やはらぎあたたか。王逸、九思「風習習兮一一」‖溫暖。

【和彈】ワダン　調子を合せて琴をひく。睦機、鞠歌行「急弦高張思二一一一」

【和神】ワシン　やはらぐ。劉基詩「默默參二一一一」‖和輯。

【和衷協同】ワチウケフドウ　心の底よりやはらぎて共に力をあはす。書、皐陶謨「同寅協恭和衷哉」

【和暢】ワチャウ　やはらぎのどか。晉書、王戎之傳「天朗氣清、惠風一一」

【和調】ワテウ　やはらぎととのふ。曾子「夫民必知レ禮、然後中正、中正、然後一一」

【和適】ワテキ　やはらぎかなふ。天竺國記「中天竺其土一一」

【和同】ワドウ　やはらぎて一致する。禮、月令「孟春天地一一、而萬物萌動」

【和南】ワナン　國手を合せてをがむ。飜譯名義集「合掌作レ禮曰二一一一」

【和賣】ワバイ　○相對賣アイタイバイなり。左、昭十六、正義「上云レ賣二諸賈人一、則是一一、而子產謂二之強奪一者、韓子以レ威逼レ之」○宋代の制、春の乏絕の時に、國庫の錢を民に貸し、夏秋に至りて絹を官に輸せしむるをいふ〔玉壺清話〕

【和比】ワヒ　やはらぎあふ。周禮、注「比謂二築與レ民一一也」‖和合。

【和附】ワフ　是非を究めずして人の說に同意する。韓愈、平淮西碑「萬口一一」‖附和雷同。

【和風】ワフウ　○のどかなる春風。杜甫詩「薄衣臨二積水一、吹レ面愛二一一一」○國我が國ぶり、日本風。支那風・洋風などの對。

【和文】ワブン　國日本文。漢文又英文などに對して。‖國文。

【和平】ワヘイ　やはらぎておだやか。禮、樂記「耳目聰明、血氣一一」‖平和。

【和睦】ワボク　やはらぎむつぶ。孝經「民用一一、上下亡レ怨」

【和穆】ワボク　やはらぐ。曹植賦「仰二春風之一一一兮、聽二百鳥之悲鳴一」‖緝穆・和輯。

【和民】ワミン　民をやはらぐ。左、隱四「臣聞二以レ德一レ一、不レ聞レ以レ亂」

【和名】ワミヤウ　國我が國にて呼ぶとなへ。漢名の對。

【和鳴】ワメイ　鳥が聲を合して互に鳴く。樂器が互に和ぎて鳴る。詩、周頌「鐘鼓備舉、喤喤厥聲、肅雝一一、先祖是聽」

【和約】ワヤク　國と國とが爭を息めて講和し相共に締結せし條約。

【和譯】ワヤク　外國の文を我が國文になほす。又其のなほしたる文。

【和諭】ワユ　やはらぎよろこぶ。淮南子「一一虛無所二以養一レ德」‖和懌。

【和懌】ワヤク　やはらぎよろこぶ。‖和懌。

【和尙】ワシャウ　國のりの師、敎師の義。僧の尊稱。天台宗にてはクワシャウ、

眞言宗にてはワジャウ、禪・淨土宗にてはヲシャウといふ、又、律・眞宗にては和上と書く。

【和蘭】ヲランダ　西洋の國名。＝阿蘭陀。

【咊】　和（前條）の古字。

【哈】　㊀ケウ　㊁カウ・ゴウ　呉　漢

㊀然は盛大なる貌。㊁怒り叫ぶ聲。○かぜの聲。

【呼】　㊀コ　㊁カウ・ケウ　虞　遇

㊀よぶ（喚）よびよせる「招ー」○さけぶ、大聲を發する「歡ー」「叫ー」「疾ー」史、游俠傳「如ニ順風而ー」○はくいき（出息）吸の反對。○嗚ーアは歎息の聲。通じて嗚乎・烏虖に作る。○なげく（歎）㊁よぶ。＝謼。○ああ、感ぜられて發する聲。禮、檀弓「曾子聞之瞿然曰ー」

【同訓異語】コ呼・喚・召　○呼は聲をたててよぶなり、呼ー舟・呼ー童の類。○喚は大聲にて急によぶなり、寢入りたる人をよびおこす類。○召は口にても、手にても、手紙にても、よび招くなり。

【呼應】コオウ　○相よび相こたふ。傳燈錄「呼ー山山應如ー是、六窗俱呼俱應」○五に腹を合せる「東四ー一」

【呼韓邪】コカンヤ　匈奴の王の名。漢書「——單于來朝」略して呼韓ともいふ。張衡賦「——來享」

【呼牛呼馬】コギウコバ　牛（部首四畫）の條を見よ。

【呼吸】コキフ　○いき。呼は出る息、吸は入る息。莊子「吹向ー一」○極めて短き時間。晉書「決ニ勝負於一朝一、定ニ成敗於ー一ー」○圖ぐあひ。調子。

【呼吸器】コキフキ　呼吸作用を營む機關の總稱、鼻孔・喉頭・氣管・氣管支・肺臟など。

【呼叫】コケウ　すふと、はくと。翁は嗽。陸機文「留乃ー一ー九陽、抱ー一含ー一元、引ー一新吐ー一故」＝呼吸。

【呼嗟】コサ　なげく聲、ああ。後漢書「頓踣ー一、莫ー一不ー一卹ー一心」

【呼噪】コサウ　さけびさわぐ。

【呼集】コシフ　呼びあつめる「不時ー一」

【呼唱】コシャウ　よびとなふ。さきばらひ。柳宗元文「行ニ一ー一于朝廷一而已耶」

【呼捨】コシャ　圖様・殿などの敬語をはぶきて、人の姓名を呼ぶ。

【呼出】コシュツ　圖呼び出す「ー一狀」

【呼物】コブツ　圖盛んに評判せらるるもの。

【呼鈴】コレイ　圖人を呼ぶ時に鳴らす鈴。電氣にかけのを電鈴といふ。＝喚人鐘。

【哨】　コウ　㊀

おほごゑ（大聲）

【哨哨】コウコウ　おほごゑ。荀、解蔽「掩ー耳而趨者、謼ニ溪壑一以爲ニ一ー一」

【呱】　コ　虞

ちのみ兒のなくこゑ。

【呱呱】ココ　みどりごの啼くこゑ。書、益稷「啓ー一而泣」

【咋】　㊀サク・シャク　㊁サ　陌　藥

㊀かむ（噛）くらふ（啖）「啖ー一」○大いなる聲、うなる。○かまびすし、さけぶ。㊁かたるこゑ。○しばらく（暫）

【咋嗜】サクひなうた。＝囓鐵論「鄙夫樂ニ一ー一、而怪ニ詔雅一」

【哲】　㊀シ　㊁セ　支　祭

㊀そしる（誓）○せむ（苛）しかる（訶）○よわし（弱）○なまける（惰）○かりそめ（苟）㊁きず（瑕）＝疵。○やまひ（病）

【嗟嘆】サタン　なまける、情緩なり。史、貨殖傳「楚越之地、地勢饒ニ食、無ニ饑饉之患一以故ー一偸生、無ニ積聚一而多ニ貧」注「ー一、苟且隨ニ嗜之調一」

【周】　シウ　尤

○めぐる、めぐらす（繞）めぐり「一回」＝週。○あまねし、ひろく行きわたる（徧）○こまか（密）○そなはる（備）○きびし（嚴）○まこと（忠信）○公平の心にて人と親む。論、爲政「君子ー一而不ニ比一」○すくふ。＝賙。○ぎはす（賑）論、雍也「ー一急不ニ繼ニ富一」○くま（曲）詩、唐風「生ニ于道ー一」○いたる（至）「一親」○武王が殷を滅して天下を有せし朝の名、三十八世緜王タンが秦に亡ぼさるるに至る八百七十餘年間。○南北朝の時、宇文覺、西魏の禪を受けて號をーと改む、五世二十五年にして隋に亡ぼさる。＝北周。○五代の時、郭威が後漢に繼ぎて帝と稱し、國をーと號す、三世十年にして宋に亡ぼさる。＝後周。

【同訓異語】シウ　周・徧・遍・普・洽・浹○周は徧也、遍也、密也と註す、十分にゆきとどく義。易經「知周ニ乎萬物一而道濟ニ天下一」○徧は周と略ー同じく、寧ろ廣し、一わたりあま

ねきなり。史、蘇秦傳「閉レ戸不レ出、出二其書一徧觀レ之」○遍は徧に同じ。○普は博也、大也、徧也、一めんにあまねくかかる義、溥に作る、同じ。孟子「普天之下、率土之濱」○洽は潤のあまねくしみわたる義。書經「好レ生之德、洽二于民心一」○浹は浹洽と連用す、義は洽に同じ。○周・徧・遍・環・行・巡・旋・運・圓・廻・循・繚の別は徧（糸部十一畫）の條を見よ。

【周匝】シウサフ めぐり。＝周圓。

【周遊】シウイウ あまねく遊びめぐる。＝遍歷。

【周書】シウショ 周密なる儀衛。司馬遷、報二任安一書「絏二縲紲一而不レ辱、在二闒茸一而不レ窘」

【周易】シウエキ 周代文王・孔子によりて大成せし易經。又、其の書、卽ち易經。

【周圓】シウエン めぐり。後漢書、西域傳「大宛國所レ居城邑、＝＝百餘里、城中有二五宮一、相去各十里、宮室皆以二水精一爲レ柱、食器亦然」

【周燕】シウエン ほととぎすの異名。爾雅「子規亦曰二望帝一、亦曰＝＝＝」＝杜鵑、不如歸。

【周緣】シウエン まはりのふち、めぐり。＝周邊。

【周行】シウカウ ○大道。周道に同じ、一解に、周の朝廷の列位。詩、周南、卷耳「嗟我懷レ人、寘二彼＝＝一」○めぐりゆく。晉灼、北殿賦「＝＝數里、仰不レ見レ日」

【周諮殷盤】シウシインバン 周誥は、書經の大誥・康誥・酒誥・召誥・洛誥。殷盤は、殷の盤庚篇。韓愈、進學解「＝＝＝、詰屈聱牙」

【周忌】シウキ 死後滿一年目の忌日。＝一周忌。

【周求】シウキウ 遍くもとめさがす。

【周給】シウキフ あまねく給與する。後漢書「賑二給鄉閭故人一、莫レ不＝＝＝」

【周囘】シウクワイ ○とりかこむ。謝靈運文「四山＝＝、雙流遶遝」○まはり。漢書、劉向傳「＝＝五里有餘」＝周圍。

【周旋】シウセン めぐりまはる。射雉賦「＝＝廻復、寖繞盤跱」

【周見】シウケン あまねく見る。後漢書、班固傳「＝＝洽聞」＝周覽。

【周孔】シウコウ 周公と孔子と。晉書、江道傳「仰味二義農、俯尋＝＝＝」

【周公】シウコウ 名は旦、周の文王の子武王の弟、武王を佐けて天下を定め、又、幼主成王を輔けて、制度禮樂を定め、天下大いに治まる。

【周興嗣】シウコウシ 南北朝時代の人、梁武帝の天監の初、韻語を以て千字文を作る、一夕にして之を成す、髮髭皆白し。

【周歲】シウサイ 滿一年。金唐詩話「未＝＝、而爲二奸人一所レ殺」＝周年。

【周遭】シウサウ かこむ、めぐる。劉禹錫詩「山圍二故國一＝＝在」＝周匝。

【周室】シウシツ 周の王室。武王より赧王に至る三十八世、八百七十六年間。

【周親】シウシン 周は至なり、至りてしたしきみうち。書、泰誓「雖レ有＝＝＝、不レ如二仁人一」＝至親。

【周盡】シウジン あまねく十分にゆきわたる。劉無雙傳「詞理哀切、敘述＝＝」

【周章】シウシャウ ○あわてる、うろたえさわぐ。晉灼、光殿賦「俯仰顧眄、東西＝＝」＝倉皇・狼狽。○あまねく遊ぶ。楚辭「卿翻遊兮＝＝」＝周遊。

【周星】シウセイ 星が天をひとまはりする間、卽ち十二年。＝一紀。

【周召】シウセウ 周の周公旦と召公奭と、共に成王を輔佐せし人。

【周旋】シウセン ○めぐる。戴復古詩「荒池蛙叫噪、破屋燕＝＝」○とりまはす、たちゐふるまひ。禮、內則「進退＝＝愼齊」○圖とりもつ、きもいり、世話する。「＝＝屋」

【周遮】シウシャ 圓形に曲りて步むをいふ。禮、玉藻「＝＝中レ規、折還中レ矩」＝周旋。

【周到】シウタウ あまねくゆきとどく。ぬけめなし。「用意＝＝」

【周道】シウダウ ○おほぢ、大道。詩、小雅「＝＝徵遲」○周の世の政敎。詩、檜風「顧二瞻＝＝一」

【周緻】シウチ 十分にゆきわたる、こまかにしてぬけめなし。戴復古詩「羅列滿二吾前一、禮數頗＝＝」＝周密。

【周程張朱】シウテイチャウシュ 周濂溪、名は敦頤、字は茂叔。程明道、名は顥、字は伯淳。程伊川、名は頤、字は正叔。張橫渠、名は載、字は子厚。朱晦菴、名は熹、字は元晦。皆宋代道學の大家。＝濂洛關閩。

【周敦頤】シウトンイ 宋の大儒、字は茂叔、濂溪先生と稱す、人品甚だ高く、胸襟灑落なり、神宗帝の熙寧六年に卒す、年五十七。

【周年】シウネン 滿一年（周喪、禮志）。＝周歲。

【周普】シウフ あまねし。宋史、樂志「降レ福穰穰、德施＝＝」＝洽普・周溥。

【周溥】シウフ 前條に同じ、溥は普。宋史、樂志「非二禋祀香、既溥＝＝」

【周邊】シウヘン まはりのふち。＝周緣。

【周委】シウヰ めぐり、委は長さ。漢書、揚雄傳「＝＝數百里」＝周圍。

【周密】シウミツ あまねくゆきわたる。こまかにしてぬけめなし。周到にして細密。漢書、張安世傳「職典二樞機一、以二謹愼一＝＝」

【周繞】シウネウ めぐりつらなる。晉書、搜神物戴記「石郭天池、＝＝千里」

【周郎】シウラウ 吳の周瑜をいふ、孫策、瑜に建威中郎將を授く、時に年二十四、吳中皆呼びて＝＝と爲す。

【周流】シウリウ ○ひろくゆきわたる。易、繫辭「變動不居、＝＝六虛」○天下をあまねくめぐる。史、貨殖傳「富商大賈、＝＝天下」＝徧歷。

【周禮】シウライ 四十二卷、周官ともいふ、周の周公旦の作と傳ふ、天地春夏

秩爵に象りて官制を立て、職掌を記し、天官・地官・春官・夏官・秋官・冬官に分つ、名を六官又、六典と曰ふ。

【呪】 シウ シュ 有 漢音ジニ

○のろひ、のろふ。○まじない、まじなふ。

【呪水】スイ さしなひの術にて病を治する水。西湖志餘「辨才往二天竺一取二呪水一持二一一一、歸二病者一飲愈」

【呪詛】ソ のろふ。同詛呪。

【呪罵】バ のろひのゝしる。李義山雜纂「一一一無先」

【呪文】モン のろひまじなひに唱へる文句。

【呻】 シン 眞

○うめく、うなる(吟)○うたふ(吟)○なげく(歎)

【呻吟】ギン うめく。うなる。苦痛を發する。又、詠誦する。韓、列禦寇「一一婆氏之地一」轉じて苦みて詩などを口ずさむ義。陸游詩「老業一一未レ廢レ詩」

【呻呼】コ 苦みてうなる。列子「壹則一一而即レ事、夜則悸寤而熱病」

【咀】 ソ 語

○かむ、かみくだく、くらふ、飯味する。韓愈、進學解「含英咀華」○ふくむ(含)

【咀嚼】シヤク ○かみこなす。司馬相如賦「一一二一華藻一」○轉じて文義を味はひさとる。文心雕龍「敏二尋泉石一、一一文苑一」‖通嚙。

【咀嚙】カウ かみこなす。轉じて、書を講みて意味を究むるにいふ。蘇軾文「探二制其華實一而一一其膏味一」

【咀嚼】タン かみくらふ。晉紀「聽二其一一一」

【哦】 ガ ネウ 歌 宵 又、誤に作る

かまびすし、やかまし(譁聲)

【哦哦】ガ 多言にして止まざる貌。韓愈、贈張籍「汝不レ憶耶、而一一以害二其生一耶」

【咀】 タツ 易 屑と通ず

○しかる(相呵)○相呼ぶ聲。

【呿】 ティ 齊 灰

○しかる(呵)○そしる。‖詆。

【咕】 テフ・セフ 葉 鹽

○なめる(嘗)○小さき貌。○ささやく(囁)○くどくどし(多言)

【咕嘯】ジウ ささやきしやべる。唐書、姚紹之傳「嶠等數附二承嘉耳一一」

【咕囁】ネフ くどくどし。又ささやく。

【喘】 ゼン 先

○あへぐ、息せはしくつく。○ほこる、誇る。○ほこり。

【喘息】ソク あへぐ。息せはしくつく。

【喘月】ゲツ 月に喘ぐ。喩、力の及ばざるに苦しむ。

【喘汗】カン 汗を流して喘ぐ。喩、大いに恐れ入る。

【喘急】キフ 息せはしくつく。

【喘乏】ボフ 息せはしくつく。

【喘喘】ゼン 息せはしくつく。

【喘咳】ガイ 息せはしくつく。

【喘鳴】メイ 息せはしくつく。

【喘嘯】セウ 息せはしくつく。

【喘氣】キ 息せはしくつく。

【喘病】ビヤウ 息せはしくつく。

【喘咽】エン 息せはしくつく。

【喘呼】コ 息せはしくつく。

【喘咻】キウ 息せはしくつく。

【喘喝】カツ 息せはしくつく。

【喘嗽】ソウ 息せはしくつく。

【喘咳】ガイ

○ふく、いきふく（嘘）○吩ーは俗語、それぞれにいひつける義。

【咈】フツ　ヒツ　眞　物

○もとる（戻）書、堯典「吁ー哉」○たがふ（違）○いな（否）

【命】メイ　ミャウ　敬

○つかふ（使）せしむる。○のる、みことのり、大を命といひ、小を令といふ。○のり、をしへ、をしふ。○政令、告示、示す、いましめ、いましむ、おほせ、申しつけ、まうしつく。○うん、めぐりあはせ「運ー」○いのち「生ー」○みち（道）○な、なづく（名）亡ー」は名籍を脱して逃亡する。○ことば「辭ー」○はかる（計）○官服。○國古、貴人の名に添へし敬稱。

注意 命は使セしなり、口に从ひ令に从ふ。

【命案】ミンアン　殺人事件。

【矯ー】ケウメイ　矯は、託、上たる者の命に託して言ふ。「晉國宜策、ー以ー假賜二諸民一」

【命根】ミンコン　いのちのもと、生命を保つ根元。華嚴經「如人護ー身先護二ー一」

【命數】ミンスウ　○まはりあはせ。李頎詩「江山非二久適一、ー一未二終奇一」‖運命。○いのち。‖壽命。

【命世】メイセイ　一世に秀でて名ある人。李陵、答二蘇武一書「賈誼・亞父之徒、皆信ー一之才、抱二將相之具一」

【命世雄】メイセイユウ　大豪傑をいふ。干寶晉紀總論「非二命世之雄一、不レ能レ取レ之矣」

【命題】メイダイ　論理學の用語。主たる題目の斷定を言辭にて表示せしもの。

【命中】メイチウ　的に正しくあたる。命ずる如くにゆく。漢書、李陵傳「力掘レ虎、射ー一」

【方ー】ハウメイ　方は道、王命に違ふをいふ。書、堯典「方ー命圮レ族」

【命日】メイジツ　國いのちの辛かりし日の義、毎月の其の日に當る日、又毎年の當月當日を祥月ショウキー一といふ。

【安命】アンメイ　天より受けたる己の分に安んずる。鮑照文「逸然任レ性、樂レ道ー一」

【命緣ー薄】メイエンハクシ　生命は至りて重けれども、義の爲めにはすてて顧みず。後漢書、朱穆傳「情爲レ爲使、ー一」

【命輕於鴻毛】メイケイヨリコウモウ　一命を捨つることの極めて易きに喩ふ「司馬遷、報二任安一書」

【命在レ天】メイアリテテン　人の壽命は天に在りて人力にて奈何ともすべからず。史、高祖紀「命乃在レ天、雖二扁鵲一何徒」

【命婦】メイフ　○大夫の妃の稱「儀禮、喪服」國○五位敍爵の官女の稱。五位の妻を外ー一といふ。○內侍司の雜仕の女官。○稻荷の神の使といふ狐の稱。

【命服】メイフク　古、士大夫の官等を一命より九命に分つ、其の位階相當の服。詩經「服二其ー一、朱芾斯皇」

【命分】メイブン　うんめい。蘇軾詩「窮人ー一薄」

【命脈】メイミャク　いのち。玉緒ノヲ

【命名】メイメイ　人又は物に名を附ける。

【命令】メイレイ　いひつけ、さしづ。字解を見よ。

【命長辱多】メイチャウクジョクオホシ　國長生すれば、はぢをうくることも多しとの喩。（徒然草）莊子「多二男子一則多レ畏、富則多レ事、壽則多レ辱、是三者非レ所二以養一レ德也」に本づく。

六畫

【哀】アイ　灰

○かなし、かなしみ、かなしむ、憂ひ思ふ。○あはれ、あはれむ（閔・憐）韓愈、應科目時與人書「ー二其窮而通レ轉之一」○いたむ（傷・痛）○母のなき者「ー子」

注意 哀・悲・憫・怜・憐の別は悲（心部十二畫）の條を見よ。○哀・悲の別は悲（心部八畫）の條を見よ。

【哀哀】アイアイ　かなしむ貌。詩、小雅「ー父母、生レ我劬勞」

【哀衣】アイイ　忌中に著るきもの。‖喪服フク

【哀音】アイイン　かなしき音調。李白詩「蛩聲斷續揚ニーー一」

【哀咽】アイエツ　かなしみむせぶ。陸雲文「重二惟痛恨一、胥增ニーー一」‖哀噫。

【哀歌】アイカ　哀詩に同じ。

【哀噫】アイカツ　かなしみてむせぶ。南史、晉熙王昶傳「因把二姬手一、南望慟哭、左右莫レ不ニーー一」‖哀咽。

【哀嘆】アイタン　かなしみて泣きさけぶ。子石詩「ー一墮二馬矟一」

【哀鳴】アイメイ　かなしみおどろく。魏志、注「鴈レ時ー一、莫レ不二傷痛一」

【哀毀骨立】アイキコツリツ　父母の喪などにかなしみてやせ衰へたる形容。世說「王戎雖レ不レ備レ禮、而ー一」

【哀泣】アイキフ　かなしみなく。蔡邕文「酸嫜之ー一」‖傷泣。

【哀吟】アイギン　かなしみて詩歌を吟ずる。又其の詩歌。

【哀矜】アイキン　かなしみあはれむ。ふびんに思ふ。論、子張「如得二其情一、則ー一而勿レ喜」‖哀憐。哀憫。

【哀願】アイガン　なげきかなしみて切にねがふ。‖哀請・歎願。

【哀矜】アイキン あはれみて目をかける。杜甫詩「上天回ニ―一ニ」

【哀哭】アイコク かなしみなく。＝哀泣。

【哀恨】アイコン かなしみうらむ。温庭筠「―自咎、五陵誰隔」

【哀唳】アイレイ かなしみなげく。孫楚詩「追ニ慕先軌一感想ニ―一」

【哀子】アイシ ○母死して父のみ存する者の称。〔唐開元礼〕○父母の喪中にある子。卒哭の後は孝子と称す。

【哀史】アイシ 滅亡の時などのあはれなる歴史。又不幸なる身の上ばなし。

【哀悼】アイトウ 死者を傷む文。韻語を用ひて作る。＝哀辞。

【哀詩】アイシ かなしくあはれなる事を叙したる詩歌。＝哀歌。

【哀辞】アイジ 文体の名。文体明辨「按、―者、哀ニ死之文也、悲依於心、故曰ニ哀、以ニ辞達ニ哀、故謂ニ之―一也、昔漢班固初作ニ楽氏―一、後人因レ之」

【哀絲激竹】アイシゲキチク 管絃の聲の悲壮にして人を感動するをいふ。杜甫詩「酒肉如ニ山又一時、初絃哀絲動ニ豪竹一」

【哀絲激肉】アイシゲキニク 哀絲はかなしき音を發する絃、激肉ははげしき歌聲、肉は人口より發する聲。黄庭堅仁詩「――寫ニ懐抱一」

【哀心】アイシン かなしむこころ。禮、樂記「其―感者、其聲嘽以殺」

【哀傷】アイショウ かなしみいたむ。＝哀悼・哀痛。

【哀情】アイジョウ かなしきこころ。漢武帝歌「歓樂極今―多」

【哀怪】アイカイ あはれみすくふ。哭悪「乞降ニ春天之澗一ニ―其命一」

【哀勝】アイショウ かなしみて切に乞ふ。＝哀乞・哀願。

【哀詔】アイショウ 天子初めて崩じ国中に布告するの詔をいふ。

【哀感】アイカン かなしみいたむ、感は憂ふ。史、萬石君傳「其執レ喪―甚悼」＝哀傷。

【哀惜】アイセキ かなしみをしむ。人の死をいたむ。＝哀悼。

【哀訴】アイソ かなしみうつたへる。杜甫詩「見ニ人慘澹者一ニ―」

【哀悼】アイトウ かなしみいたむ。蔡邕文「永懐ニ―一」＝悲悼・哀惜・哀痛・哀傷。

【哀痛】アイツウ 哀悼に同じ。墾慶文「哀辞之體、以ニ―一爲レ主」

【哀弔】アイチョウ かなしみとぶらふ、くやみ。＝哀悼。

【哀笛】アイテキ あはれなる笛の音。薛道衡詩「秦夜―曲、霜天斷雁聲」

【哀慟】アイドウ かなしみなげく。梁書「思慕不ニ自堪一、晨夜―一」＝哀哭。

【哀愍】アイビン かなしみあはれむ。＝哀矜・哀憫。

【哀憫】アイビン かなしみあはれむ。柳宗元文「伏乞ニ―一」＝哀矜・哀愍。

【哀慕】アイボ かなしみしたふ。南史「父靈殯居レ憂以レ致卒、元璞時童孺、―一異レ之」

【哀鳴】アイメイ かなしみなく。詩、小雅「鴻鴈于飛、―一嗷嗷」＝悲鳴。

【哀戚】アイセキ 死者をかなしみて、生前の功績をたたへる文詞。晉書、潘岳傳「辭藻絶麗、尤善爲ニ―一之文一」

【哀慟】アイドウ あはれみいつくしむ。史、刺客傳「塞ニ所ニ―一之交一」

【哇】

㊀ アイ・エ
㊁ カイ
㊂ ア・ワ
麻 佳 蛙

○へつらふこゑ(諂聲)○みだらなる聲(淫聲)○はく(吐)孟、膳文公「出而―之」㊁ふさがる、氣が暢びず。㊂小兒の聲。○みだりがはしき聲。

【哇哇】アア ○わらふ貌。元包經「言唯唯、笑ニ―一」○小兒の聲。歐陽修詩「兒曹助ニ喘聲一ニ―」

【咿】イ 支

○喔ニはしひてわらふ(強笑)つくりわらひ。○ニ唔は讀書の聲。

【咿唔】イゴ ○小兒の語を學ぶ聲。蘇軾詩「小兒ニ―語ニ譯韓一」○讀ダのきしる聲。韓偓詩「應是石城艇子來、兩槳ニ―過ニ花塢一」

【咿嚘】イア ○雞などの聲。林景熙詩「天雞ニ―、斗轉ニ河低一」○へつらひて強ひて笑ふ。韓愈詩「正旦免ニ―一ニ」＝囁嚅。

【咿軋】イアツ 車や舟の櫓なんどいきしる音。王維詩「煙深ニ―事遥音」

【咿咿】イイ ○蟲の鳴く貌。劉禹錫詩「機械今蠢ニ―一」○物の鳴る聲。李賀詩「女媧采月角ニ―一」

【咿嚶】イオウ ○鹿の聲。歐陽修詩「ニ―山鹿鳴」＝呦呦。○ことばのはっきりせざる貌。韓愈詩「巴語相ニ―一」

【咿唖】イア 言語の明かならざる貌。柳宗元詩「ニ―九譯重」＝咿嗄。

【咿唔】イゴ 書を讀む聲。韓愈篇要「ニ―讀書聲也、不ニ聰慧一者、口熟讀レ書故有ニ此聲一ニ」＝伊吾・喑咿。

【咽】

㊀ エン 先 ㊁ イン 眞 ㊂ エツ・エチ 屑 霰

㊀のど、のんど(喉)轉じて、要所、急所の義とす。㊁ニはつづみのふし。㊂のむ。＝嚥。㊃ふさがる(塞)新序、雜事「雲霞充ニ―、則奪ニ日月之明一」聲がむせびふさがる。漢書、隨願歌「隨頭流水、嗚聲幽ニ―」○むせび、むせぶ(噎)

【咽下】エンカ のみ下す。＝嚥下。

【咽喉】インコウ のんど。又、物の急所。戰國策「韓天下之ニ―一」

【咽咽】イン　鼓の聲のかさなる貌。六書故「淵淵ー一、其聲不ㇾ同、淵淵狀ニ鼓聲多而遠、ー一聲近而疊ニ味ニ其聲一可ニ以知ニ其義一」

【咳】

㊀ガイ　㊁ガイ　灰　隊

㊀せき、しはぶき。‖欬。㊁赤子がわらふ‖孩。

【咳聲】ガイセイ　みどりご、二三歳の幼兒。嬰兒の初めて笑を知る者。史、扁鵲傳「皆不ㇾ可ニ以告ニ一一之兒一」‖孩嬰。

【咳嗽】ガイソウ　せき。正字通「無ㇾ疾有ㇾ聲、謂ニ之咳一無ㇾ聲有ㇾ疾、謂ニ之嗽一」三國志「便苦ニ一一一欲ㇾ臥不ㇾ安」

【咳唾】ガイダ　○せきと、つばきと。○轉じて長者の言語を敬ひていふ。漢書、宣元六王傳「大王誠賜ニ一一一」

【咳唾成ㇾ珠】ガイダセイシュ　○せきつばが皆珠玉の如く尊ばる、權勢ある者を形容していふ。趙壹、刺ニ世疾邪ニ賦「勢家多ㇾ所ㇾ宜、咳唾自成ㇾ珠」○詩文の才に富める形容。晉書「江淹謂ニ郭璞一曰、咳唾成ニ珠玉一、吐氣作ニ虹霓一」李白詩「咳唾落ニ九天一、隨ㇾ風生ニ珠玉一」

【咬】

㊀カウ・ケウ　巧　看

㊁ガウ

㊀ーーは鳥の聲。㊁かむ‖齩。

【咬咬】カウカウ　鳥のさへづること。禽經、鸛鵒鳴「栄栄關雎、ーー好音」

【咬菜】カウサイ　野菜を食ふ。粗食する義。呂氏鄉友雜記「汪信民嘗曰、人常咬ニ得菜根一則百事可ㇾ做」

【咬嚼】カウシャク　かみこなす。又、文字を綿細に玩味する。竹坡詩話「ーー三十年」

【咢】

ガク　藥

○おどろく(驚)愕と通ず。○つづみうつ。○つば。‖鍔。○ーーは祇の高き貌。又直言して爭ふ貌。諤と通ず。

【哈】

㊀ガブ・ゴフ　㊁サフ　合　合

㊀魚の多き貌。○魚の口の動く貌。㊁口を以て歠飲ㇾスルこと。

【咸】

カン　咸

○みな(皆)ことごとく(悉)書、堯典「庶績ー一熙」あまねし(徧)○易の卦の名、艮下兌上。○うごく(感動)○おなじ(同)○すみやか(速)○はやし(疾)○やはらぐ(和)○とづ(閉)‖緘。○ひつぎなは(棺束)

同訓異語　咸・皆・僉・擧の別は皆(白部四畫)の條を見よ。

【咸宜】カンギ　ことごとくよろし。詩、商頌「殷受ㇾ命ーー、百祿是何」

【咸鏡道】カンキャウダウ　朝鮮の東北部の地、寒氣猛烈、土地豐饒なり、分ちて南北二道と爲す、南道の首邑を咸興といひ、北道の首邑を鏡城といふ。咸興は李氏の創業の地。

【咸和】カンワ　ことごとくやはらぐ。

【咸萃】カンスイ　ことごとくあつまる。宋史「百神ーー」

【咸秩】カンチツ　みなやすし、寧は治なり、平なり。易經「萬國ーー」晉書、樂志「品物ーー、洪基永固」

【咸陽】カンヤウ　秦の都。今の陝西省西安府咸陽縣の地。‖渭城。

【咸陽宮殿三月紅】カンヤウキウデンサンゲツコウ　秦の都の咸陽の宮殿が楚の項羽に燒かれて三ヶ月間も火がきえざりしをいふ。晉秦、處美人草詩「漏門玉斗紛如ㇾ雪、十萬降兵夜流ㇾ血、ーー、翻築已隨ニ煙塵一滅」

【咸有ニ一德】カンイウイツトク　君臣皆純一の德あるなり。書、咸有一德「惟尹躬暨湯、ーー。克享ニ天心一、受ニ天明命一」尹は伊尹、殷の湯王の臣。

【咥】

㊀キ　未　薺　㊁テツ　屑

㊀大いにわらふ貌。○にこやか(莞爾)㊁かむ(齧)易經「履ニ虎尾一不ーー人一亨」○くらふ。

【咻】

㊀キウ・ク　尤　遇　㊁ク　虞

㊀嘆ーーは痛み念ひて發する聲、人病みてうなる聲。○なげく(歎)○かまびすし、かまびすしくす(譁)孟、滕文公「一齊人傳之、衆楚人ーー之」㊁あたたむ、暖ぎ孵にてぬくめる。‖呴。

【咻咻】キウキウ　○いたみなく聲。高適詩「旅雁悲ーー」○呼吸する聲。蘇軾詩「草中ーー有ニ寒兎一」

【咽】

ヤン　寒

○くちびがむ、口もと正しからず。○和に通ず。淮南、說山「ー氏之璧」

【咀】

㊀ケン・クワン　㊁ケン・クワン　元　阮

㊀あきらか(著明)威儀容止の著しく目立つ貌。詩、衞風「赫兮ー兮」(大學には喧に作る)

○なく。○いたむ(痛)○おそる(懼)㊁ゆるやか(迂緩)

【哄】 コウ キヨウ 図 多

○衆くの聲、ときの聲。○笑ひて大聲を出す。

【哄笑】コウセウ たかわらひ。どよめき笑ふ。

【哄然】コウゼン どっと聲をあげて笑ふ貌。

【哄堂】コウダウ 一座の衆人、皆笑ふをいふ。○因話錄、唐御史有三臺院・殿院・察院二人知二雜事一、名二雜端一、公堂會食、皆絕笑、左右不レ可レ忍、雜端笑、而三院皆笑、座謂二一一

【哂】 ㊀ コウ ㊁ コウ 有 名

㊀厚く怒れる聲。㊁はぢ(恥)そしり(譏)一に話に作る。

【哉】 サイ 灰

○かな、感嘆の意を表はす助語。○論、衛靈公「直一史魚一。○や、か、疑問の意を表はす助語。韓愈、送二高閑上人一序「今閑之於二草書一、有二旭之心一」反語の意を表はす助語。論、陽貨「吾豈匏瓜一」○はじむ(始)○はかる＝材。

【哉生魄】サイセイハク 陰暦の月の十六日なり、月が始めて魄を生ずる義。魄は月の輪郭の光なき處。書、康誥「惟三月——」

【哉生明】サイセイメイ 始めて月が光明を生ずる義、即ち陰曆の月の三日をいふ。書、武成「厥四月——」

【咨】 シ 支

○はかる(謀)事を謀る。○とふ(問)＝諮。○なげく、なげき(嗟)○あ、ああ(嘆聲)○これ(此)ここに(於)

【咨嗟】シサ ためいきをつきてなげく。孔叢子「驚騭同レ聲、伯樂聞レ之一＝咨歎。

【咨咨】シシ 嘆息の貌。詩、邶風、匏有苦葉「雖レ則二妻子一不二一一……」

【咨詢】シシュン とひはかる。詩、小雅、皇皇者華「載馳載驅、周爰一一」＝咨訪。

【咨訪】シハウ とひはかる。吳志「每レ有二大事一、必相一一」

【咨美】シビ 深く感心してほめる。唐書、李延壽傳「高宗嘉レ之、一二直筆一、賜二其家帛五十段一」

【咨文】シブン 同級の官廳間にて用ふる公文。

【咫】 シ 紙

○尺度の名、周尺の八寸。國語「鮑叔氏貢二楛矢石砮一、其長尺有一一」○轉じて、短く又、近き義とす。○「一尺之書」○圖た、手の義、手一ぱいの長さ「八一鏡」

【咫尺】シセキ ○咫は八寸、尺は十寸。距離の近きにいふ。左傳、九「天威不レ違レ顏一一」○簡單、又、短き義。史、淮陰侯傳「發二一乘之使一、奉二一一之書一」

【咫尺之地】シセキノチ 狹小の地。史、蘇秦傳「一舉無二一一一以有二天下一」

【咭】 シ 紙

ねぶる。＝舐。

【哆】 シ タ 哿 紙 シャ 馬

○口を張る。○おほし(衆)○大いなり、寬大なる貌。○よこしま(邪)

【咽】 ヲ 眞

○くちさき(口吻)○くちもと(口脣)口と耳との間。

【哂】 シン 軫

○わらひ、わらふ(笑)○ほほえむ(微笑)論、先進「夫子一之一」一解に大いに笑ふ。○あざわらふ、そしり笑ふ(嘲笑)

【哂笑】シンセウ あざわらふ。戴表元詩「童奴一一妻子罵」

【咲】 笑(竹部四畫)の古字、俗して、矣に作る。

○わらふ。○圖さく、花開く。

【咤】 タ 禡

○したうちする。＝吒。○驚き異ける。○ほこる、詫に通ず。○はく(噴)○しかる(叱怒)怒りて聲を發する。漢書、王吉傳「口倦乎叱一」

【咤叱】タシツ したうちしてしかる。後漢書、仲長統傳「叱咤一一」＝叱咤。

【咤食】タジキ したうちして食ふ。口舌中にて聲を爲す。曲禮「毋二一一」＝吒食。

【咷】タウ・テウ　嘯　豪
○なく(泣)哭く聲。易、同人「先號―而後笑」○さけぶ(叫)

【咮】チウ・シュ　宥　遇　遇
○くちばし(喙)鳥の口。○星の名。‖柳。

【咪】ビ　紙
○羊の鳴く聲。○メートル、佛蘭西の尺度の名にあてて用ふ、我が曲尺の三尺三寸。‖米突。

【品】ヒン・ホン　寢
○しな(物件)○もろもろ(衆庶)もろもろの物。○のり、のっとる(法式・法度)○たち、性質「一質」○たぐひ(類)くらゐ(位)官位の次第。周語「外官不過九―」○しなさだめする「一評」○わかち、區別、等級、秩序。書、舜典「五―不遜」○おなじ、おなじくす(同)○ひとし、ひとしくす(齊)○はかる(量)○國の親王に賜る位、一―より四―まであり。
【品位】しながら、ねうち。唐書「其――甚衆、不ㇾ欲ㇾ輕以授ㇾ人」‖品格。
【品彙】しなによりて類別する。たぐひ。韓愈文「非ㇾ常鱗凡介之―」‖類・種類。
【品行】おこなひ、行狀「―一方正」
【品格】しながら。ねうち。桂海香志「嫩機香―― 在ㇾ黃連根香之上」‖品位。
【品題】區別を立ててしらべる。後漢書「―ニ―公卿」
【品定】人物の高下をめきゝして定める。‖議定。
【品級】官位の等級。
【品畫】畫を評する。倪瓚詩「―ノ―評ㇾ詩也自佳」
【品藻】しなさだめする。漢書、揚雄傳「聊遡――」‖品評。
【品詞】文法上、意義又は形式上より分類したる詞の種類「八―一」
【品字形】品の字の形の如く三方に並び坐する。葛長庚詩「佳友―― 」‖鼎坐。
【品隲】しなさだめ、隲は定むる。‖品評。
【品庶】もろもろの民衆。後漢書「―一以二陛下一爲ㇾ父」
【品制】しな、等差。後漢書、何敞傳「明君賜賚、宜ㇾ有ニ―一ニ」
【品性】ひとがら。‖品質・人品。
【品階】階級を立てて制限する、節は等差。
【品第】しなさだめして次第する。顧元緒詩「書院錄―― 」
【品題】繫定をする、品評する。人物の高下を評隲する。李白、與ニ韓荊州一書「今天下以二君侯一爲ニ文章之司命、人物之權衡ニ一經ニ―一、便作ニ淮士一」
【品致】おもむき。人品。
【品秩】くらゐと、ふちと、爵位と俸給と。南史、陳章王綜傳「復ニ其―一ニ」‖爵位。
【品程】のり、法則。‖法度。
【品等】しなのよしあしの次第。物の等差。
【品題】しなさだめする。‖批評・品隲・品藻。
【品物】○萬づの物體。易、乾卦「一流ㇾ形」‖萬物。○しなもの。‖物品。
【品目】○物のとなへ、なまへ。‖題目。○しなさだめする。魏志、何曼傳、注「常爲ニ名士一―一」
【品類】たぐひ、種類。もろもろの物。王羲之文「仰觀ニ宇宙之大、俯察ニ―一之盛一」‖品彙。
【品例】等級のさだめ。書經「問ニ九德一―一」
【品田】國音、親王・內親王に賜ひし田。‖品は位。
【品封】國音、親王・內親王の階級によりて賜はりし封戶。
【品切】國語などの賣切れたる。

七畫

【咯】(一)ラク　(二)カク　藥　藥
(一)いひあらそふ(訟言)‖諮。(二)雄ゞのこゑ。○國はく(吐)喀血の喀の字の誤用。

【唉】(一)アイ　(二)キ　灰　支
(一)こたふる聲(應)莊、知北遊「狂屈曰、―吾知之」○驚き問ふ。管、桓公問「禹立諫鼓於朝而備ニ訊一」(二)ああ、惡むことば。史、項羽紀「―豎子不ニ足與謀一」‖誒。○なげきて發することば。

【唔】アフ　イフ　合　語　省して邑に作る
○なげく(嘆息)○むせぶ(嗚咽)○しゃくりなき(歔欷)○鳴―は氣短し。

【唌】エン　先
―は讒言の急なる貌〔後漢書、梁鴻傳〕

【員】(一)エン　(二)キン　先　眞　先　文　通音キン

㊀かず（数）物の数、人の数、轉じて人の義とす「醫ー」「職ー」○しばしば（屢）○まはり、めぐり（周）「幅ー」○まろし。＝圓。㊁ます（益）○無意味の助語、云に通ず。㊂人名。伍ーは戰國吳の人。

【員外郎】ヰングワイ　郎の定員外の官。後世は郎中の下、主事の上に位す。

【員數】ヰンスウ　もののかず。

【員半】ヰンパン　其の數の中に加へる、員は數。唐、平原君傳「毛遂曰、願君即以ー遂ー行矣」

【員員】エンエン　しばしば。紫閨「頭痛ーー」

【員銀】エンギン　一圓の銀貨。員は圓。

【員嶠】エンケウ　海中の仙山、列子「渤海之東有ー大壑ー焉、其中有ー五山ー、一曰岱輿、二曰ー、三曰方壺、四曰瀛洲、五曰蓬萊、仙聖之所ー往來ー」

【員石】エンセキ　まるき石。孫子「善戰ー人之勢、如ー轉ーー於千仞之山ー者勢也」＝圓石。

【員簏】エンロク　昔の異名の古今注「貴、或紫、或青、一名ーー、一名綠錢、一名綠華」

【哥】カ　歌の古字

○うた。漢書、藝文志「ー永言」○うたふ。○こゑ（聲）○あに（兄）酉陽雜俎「帝呼ー寧王爲大ー」

【哥窯】カヨウ　古の陶器の名、窯は陶器を燒くかま。王世貞、宛委餘編「宋時處州張生兄弟皆作ー窯（中略）ーー御題ー其兄所ー作者ー」格古要論「青ーー色貴、滾淚不ー、亦有ー鐵足紫口者、今亦少ー有」

【哥哥】カカ　○爾兄の義。あにき、他人を呼ぶ敬稱。＝大哥・阿哥。○古は子が父を稱するにもいふ。

【哿】カ　哥・歌

㊀よし（可）詩、小雅「ー矣富人、哀此惸獨」○めでたし（嘉）㊁婦人の首のかざりもの、珈に借り用ふ。

【哦】ガ　歌

○うたふ（歌）「吟ー」韓愈文「日ー其間」○うなる（吟）

【哽】カウ　キャウ　梗

○むせぶ（咽）○ふさがる（塞）悲みて聲がつまる。莊、外物「雖則ー」＝梗。

【哽咽】カウエツ　涙にむせぶ。古詩、焦仲卿妻詩「ーー不ー能ー語」

【哽哽】カウカウ　ふさがる（莊、外物）

【哽結】カウケツ　かなしみてむせびむすぼる。陸機文「悲懷ーー」

【哽悵】カウコン　むせびなきしてうらむ。南史「奄然便歿、帝尤ーー」

【哽塞】カウソク　○かなしみて胸ふさがる。北史「ーー涕泗交流」○道路がふさがる。秦觀文「道途ーー」＝梗塞。

【哮】カウ　ケウ　肴

○ほゆ（吼）○さけぶ（叫）○猛獸が怒りほえる。「咆ー」「ー虎」＝嘵。

【哮闞】カウカン　いかりほえる。李白文「喧鳴ーー、風旋雨驚」＝嘵闞。

【哮吼】カウコウ　さけびほゆ。傳燈錄「師子ーー奮起」

【哮喘】カウセン　たけりてかみつく、轉じて賊軍の兵威の猛烈なるにいふ語。唐書「ーー無ー前」

【哮喘】カウセン　病名、肺の內に痰を生じ、呼吸促迫し、其の氣息逆く噎え、目張り皮膚青白、時に冷汗あり。

【哮咆】カウパウ　ほゆ。劉植文「書藏智行、俯仰ーー」＝咆哮・哮吼。

【唅】㊀カン　㊁カン　勘・覃

○くちあく、口を開く。○ふくむ、含の俗字。漢書、王褒傳「龔ー穢ー穢」○死者の口にふくます玉。＝琀含。○玉をふくむ。

【唏】㊀キ　㊁キ　微・紙

㊀わらふ（笑）○かなしむ（哀）○なげく、なげく聲。史、十二諸侯年表「紛爲彙箕、而箕子ー」＝歎。○おそる（懼）㊁わらふ。○なく（啼）○痛む聲。

【唁】ゲン　阮

とむらふ、災にかかり、又は俘虜となりし者を弔ふ。弔は死者をとむらひ、ーは生者を弔ふ。詩、鄘風「歸ー衛侯」慰問する「ー勞」

【唔】ゴ　吾（口部四畫）に同じ。

ーは讀書の聲。晉言故事「南臺讀書聲ー、北牕兒月歌竹枝」＝吾伊・伊吾。正字通「伊吾、吟哦聲、亦作ー咿唔」

【哭】コク　屋

○なく（泣）大聲に泣くをーといひ、細聲にて涕あるを泣といふ。「痛ー」「號ー」禮、檀弓「歌于斯ー于斯」○人の死を悲みて泣きさけぶ禮。

＝大聲にて泣く、故に二口に从ふ。

別は嗚（鳥部三畫）の條を見よ。

【哭岐泣練】キッキ　岐（山部四畜一の條を見よ。
【哭泣】コッキュウ　なきさけぶ。禮記「父死不レ得レ與二子一之哭一」
【哭聲】コクセイ　かなしみなくこゑ。
【哭歌】コッカ　大聲にて泣きなげく。魏書「賈誼一、谷永切諫」
【哭臨】コクリン　かりもがりをとむらひてなく。禮記「大夫士、一レ一則枝」
【哭哦】コクガ　衆人がかなしみて泣く。漢書、文帝紀「帝崩遺詔曰、無二發レ民一ニ一宮闕中一」注「衆哭曰レ臨」

【咬】サ　麻
そそのかす、誘ひて事を爲さしむる「教一」

【唇】シン　眞　俗に脣は脣の字に通用するは非
おどろく（驚）

【哢】ソク　屋
一囀は舌を以て媚を求める（楚辭、卜居）

【哨】㊀セウ　㊁サウ・セウ　嘯　篠
㊀ちひさし（小）又、齒の口が歪む。○一一はことばおほし（多言）㊁みはり（番兵）ものみ（斥候）轉じて盜賊に備ふる番所「營一」
【哨艇】セウテイ　みはりの戰船、敵艦の動靜を探偵する軍艦。‖哨船。
【哨哨】セウセウ　ことば多き貌。揚子法言「嘵嘵一一、聖人不レ取也」
【哨船】セウセン　盜賊を防ぐ爲めに巡行する船。正字通「舸、音哨、今俗呼二兵卒偵巡者一曰二一一一」
【哨兵】セウヘイ　みはりの兵。戰時一一を配置せし範圍の外界を一一線といふ。

【唐】タウ　陽
○ほら（大言）莊、天下「荒一之言」○ひろし。○むなし（空）○ねなしごと（妄言）○廟中の路、堂下より門に至る徑ち、○どて、つつみ。周語「陂一汚瘭、以鍾其美」‖塘。○うしなふ（失）○ねなしかづら。ひかげのかづら。詩、鄘風「爰采一矣」○王朝の名、高祖李淵、隋の禪を受け、國を一と名づく。‖李唐。○五代の唐の莊宗李存勗、後梁に嗣ぎて帝と稱し國を一と名づく。‖後唐。○帝堯は陶一氏と稱す。○國から、もろこし、支那をいふ。
【唐音】タウオン　字音の一種。唐代の字音。行在の行脚僧の誦經の類。
【唐鑑】タウカン　宋の范祖禹撰す、唐の高祖より昭宣に及ぶまでの史事の大綱を綜み、褒貶するに論斷を以てす、初め十二卷、呂祖謙之に註し、分ちて二十四卷とす。
【唐弓】タウキュウ　○弓の力の強弱の中を得たる者（考工記）○國ゆみの一種。上下のみ曲りて其中のまっすぐなるもの。
【唐虞】タウグ　次條を見よ。論、泰伯「一一之際於レ斯爲レ盛」
【唐虞之化】タウグノカ　唐は帝堯陶唐氏、虞は帝舜有虞氏、仁德あまねくゆきわたり、敎化大いに行はれし治世。旨非「陛下以二聖明之德一方二隆一一一」
【唐花】タウカ　むろざきの花、時ならざる花。王士禎詩「試燈風裏見二一一」
【唐堯】タウギョウ　古の聖皇、帝嚳の子、陶に封ぜられ、又唐に封ぜらる、故に天下を有つの號を陶唐氏といふ。
【唐山】タウザン　唐土に同じ。
【唐棧】タウサン　國布の一種、舶來の棧留縞（ペルシヤの義、棧留は摩廬地たる前印度の地名の訛。
【唐紙】タウシ　國支那製の紙、長さ五尺幅三尺ばかり主に書畫をかくに用ふ。
【唐突】タウトツ　むなしきみせ。唐は壁のなき屋、突は馬をあきなふ地。莊子「是求二馬於一一一也」‖突闖。
【唐詩】タウシ　唐時代の人の作りし詩。李白・杜甫の詩の類。
【唐詩選】タウシセン　七卷、明李攀龍（字は于鱗）の編と稱すれども、實は賈人の僞託に出づ、古詩・律・排律・絕句等に分ちて唐代百二十六人の詩を輯む。
【唐人】タウジン　○支那人。もろこしびと。○外國人。‖異人。
【唐書】タウショ　新舊兩書あり。舊唐書は、石晉の劉昫等の撰、二百卷。新唐書は宋の歐陽修・宋祁二人の撰、二百二十五卷、兩書竝に二十四史中に列す。
【唐宋八大家】タウソウハチダイカ　唐・宋の二代の八人の大文章家、明初の朱右に始まる、唐は韓愈（字は退之、號は昌黎）柳宗元（字は子厚、號は柳州）の二人。宋は歐陽修（字は永叔、號は六一）蘇洵（字は明允、號は老泉）蘇軾（洵の子、字は子瞻、號は東坡）蘇轍（軾の弟、字は子由、號は穎濱）曾鞏（字は子固、號は南豐）王安石（字は介甫、號は半山）の六人。‖唐宋八家。
【唐宋八家文讀本】タウソウハチカブンドクホン　三十卷、清の沈德潛撰す、唐宋二代の古文家八人の文を集め每篇評點を加へ、初學文を學ぶ者の軌範とす、八家の名は前條を見よ。
【唐律】タウリツ　ひろき貌「道德指歸論」‖浩浩。
【唐堤】タウテイ　つつみ。呂覽「一一以遮

レ水」＝塘堤。

【唐様】タウヤウ　李の一種、郁李アクなり。詩、召南「何彼襛矣、一一之華」

【唐天】タウテン　國舶來の天鵞絨ビロード

【唐土】タウド　國から、もろこし、支那。＝唐山・漢土。

【唐突】タウトツ　○觸れ犯す、つきあたる。＝衝撞・周旋傳「何乃刺二譏無禮一」二西施一也」＝抵觸。○だしぬけ。後漢書、桓帝紀「所二一一一非消物故一」＝卒爾。

【唐三絶】タウサンゼツ　唐代、藝能に卓絶せる三人。李白の詩賦、裴旻の劍舞、張旭の草書。

【唐筆】タウヒツ　國支那製の筆。

【唐物】タウブツ　國諸外國より舶來せし品物、舶來の雜貨「一一店」

【唐文粋】タウブンスイ　一百卷、宋の姚鉉撰す。古賦・詩・頌・贊・表奏書疏・文・論・議・古文・碑・銘・記・箴誡名・書・序・傳銘記事の十六類に分つ、去取謹嚴、總集中の善本とす。

【唐木】タウモク　國多くは熱帶地方に産し、支那を經て、本邦に渡來せし林木。紫檀・黑檀など。

【唐墨】タウボク　國支那製の墨。

【唐本】タウホン　國支那より舶來せし書物。和本・洋本の對。

【唐撫】タウブ　ねなしかづら（雅）＝女蘿・菟絲。

【唐六典】タウリクテン　三十卷、唐の玄宗御撰、李林甫等を本じて註す、六典とは三師・三公・三省・九寺・五監・十二衛をいふ。唐代の官制を評敍して周禮に擬す。

【唐金】タウキン　銅七分、鉛三分より成れる合成金。＝青銅・紫銅。

【唐銅】タウドウ　前條ニ同じ。

【唐草】タウサウ　國蔓の形の模様の名、織物・彫刻・陶器などに用ふ。

【唐櫃】タウビツ　國脚のある、支那風の長持。古、物を入れ荷ひ歩くに用ふ。

【唐様】タウヤウ　國○書體の一、支那人の書風に似たる書體。御家流・定家流等を和様といふの對。○草書と區別して隷書・篆書の稱。○すべて支那風の義。

【哲】テツ　屑

○あきらか（明）事理に明か。○さとし（敏）○しる（知）○ものしり、賢人、知者。

【哲学】テツガク　宇宙間の根本原理、原則を研究する學問。形而上學。

【哲匠】テツシヤウ　すぐれたる士、多は男子の美稱。蔡邕、誄辭「配二彼一一一、既隆其昌」

【哲嗣】テツシ　國人のあとつぎの美稱。＝令嗣。

【哲人】テツジン　道理に明らかなる人。詩、大雅、抑「其維一一、告二之話言一」＝哲士。

【哲匠】テツシヤウ　事理に明かなる大臣。王維詩、謀猷錯二一一一」

【哲聖】テツセイ　○才德の全きひじり。○すぐれたる天子。蔡邕、太尉橋公碑「親二我一一一」

【哲夫】テツフ　すぐれて賢き男。次條參看。

【哲婦】テツフ　さときをんな。詩、大雅、「哲夫成レ城一一傾レ城」

【哲母】テツボ　さかしきはは。陸機文「依依一一、既明且慈」＝賢母。

【哲苑】テツエン　才德すぐれる。宋書「藩王一一、四維宰臣」

【哲理】テツリ　哲學上の道理。

【哲王】テツワウ　賢明なるきみ、明哲の君主。詩經「世有二一一一」

【唄】バイ　卦

○佛の功德をほめたたへる歌、頌・讃美歌の類、又、其のうたを唱へる。唐書、王縉傳「王縉佐二代宗一作二內道場一晝夜梵一」○國うた、俗謠「端一」「長一」

【唄器】バイキ　佛の功德ヲをほめたたへる歌。寺塔記「一一未レ巢、滿地現二舍利一」＝梵唄・梵唱。

【唄多】バイタ　木の名、僧徒其の葉を用ひて經文を寫す。＝貝葉・貝多羅。

【哺】ホ　遇

○口中にふくむ食物。史、魯世家「一飯三吐レ一」○はぐくむ（育）○やしなふ。食物を他の口中へ入れる。○くらふ、くらはす（食）○かむ（咀嚼）○あぢはふ。

【吐哺】トホ　字解、又吐（口部三畫）の條を見よ。

【哺乳】ホニウ　○ちちをのます。潛夫論「一多則生二癡病一、富貴盛而數二驕疾一」＝乳哺。○一一動物は母の乳を飲みて生育する動物。人及獸類の如き高等の胎生動物。

【哽】ホツ　月

○一噎は軍中の吹奏、らっぱの類（戚繼光、新書）

【晞】ラウ　豪

ことばわからず。

【啐啐】ソツ 容語の解せられざる貌。宋梅修、殘春詞醒詩「風流翠黛無一！」

【哩】リ 眞

○語の餘聲。○元代、詞曲の助語。國○わい、意味を強むる爲めに語尾に添へる。○まいる。英國の里程、我が十四町四十三間一尺三寸餘。

【唳】㊀リヤウ ㊁ラウ・ロウ 篠 豪

㊀鶴―は啼き極りて聲なし、或は唳に作る。㊁小兒啼きて止まず。

【哢】ロウ 送

○鳥がうたふ（鳥吟）○さへづる（囀）

【哢呪】ロウイ 強ひてわらふ。‖乾笑。

【哢吭】ロウコウ 鳥がさへづる。左思、蜀都賦「雲飛水宿――清渠」

八 畫

【唵】㊀ア 馬 ㊁アク 陌 ㊂ア 麻 禡

㊀おし、おふし。史、刺客傳「吞炭爲―」‖癌瘖。㊁わらふ（笑）わらふ聲、笑ふ貌。㊂―嚘はかたこと。小兒、語を學ぶこと。㊃ああ、驚きて發する聲。韓非、難「―是非君」人者之言也」○烏などの聲。淮南、原道「烏之―」

【唵嚘】アク 小兒學ㇾ言也」○鵝の聲。曾幾詩「什與譽ㇾ兒癡―」

【唵嚘】アク ○笑ひ語る聲。易、震卦「笑言―」○烏などの鳴く聲。淮南、原道「烏之―」、鵲之喈喈」○小兒の語ることば。蘇軾詩「小兒―語三編熟」‖唵嚘。

【唵嚘】アク 笑ふ貌。揚子法言「―笑曰、須二以發ㇾ矇決ㇾ蔽」

【唵子】アシ おし。啞に同じ。「―做二手勢一」

【唵生】アイ おしの學生。

【唵然】アン あきれて口もきき得ざる貌。

【唵吒】アタ ○人の聲のさわがしき貌。入語詩催。范成大詩「―滿船聞二異語一」○烏などのやさしき聲。歐陽修詩「黃鸝巧色已可ㇾ愛、百囀―如二嬌嬰一」

【唵鈴】アイ 球操用具の一、中央くびれて兩端球狀をなせる一對の木製品、聲のせざる鈴の義。

【唵】アン 寒

○ふくむ（含）○手にて食を進む。○梵呪に用ふる發聲の詞。

【唯】㊀イ 一 ㊁ヰ ㊂スヰ 支 ㊃ユヰ

㊀うけこたへ、いらへ、悲しくうけこたへすることば、はい。禮、曲禮「父召無諾、先生召無諾、―而起」㊁ただ、ひとり（獨）惟・維に通ず。易、乾卦「其―聖人乎」㊂誰に同じ。

同訓異字 唯・惟・只・止・但・徒・第・資・翅・直・徒○唯は惟に通ず、これ許りと諦し、專なる辭、又、獨也と註す。大學「惟善以爲ㇾ寶」易「其唯聖人乎」とある如し。○只は唯と略ㇾ同じくして、意輕し「此文一出名ㇾ世、只一字未ㇾ安」の如し。○止は只と同じ、つづまり、これに止まるといふ義なり。世說「今夕止可ㇾ談二風月一、不ㇾ宜ㇾ及二公事一」○但は俗にただしと訓む、それはさうなれども、ただしこれはかうと、他を置きて、一つを取る意にて、唯の字の義と異なれり。世說に「入二我室一者但須二清風一、對二我飮一者、唯當二風月一」とあり、上の句は、我が室には風塵の俗客共は、一切訪ひ來らず、ただ清風の、吾づるあるのみとの意にて、但の字を用ひ、下の句は我が酒伴は、獨り風月のみなりとの意にて、唯の字を用ひたるなり。○徒は空也と註す、むだにと譯す。史記「家居徒四壁立」徒善・徒法などと熟するにても辨へ知るべし。○第は、なにかなしに、ただかくせよといふ意なり「君第還ㇾ朝、臣能令二君辭一」「陛下第遊二雲夢一」などとある如し。○資・翅の二字は同じ、不の字か、何の字か、豈・寧等の字の下に置きて、反語となる。○直は、ただちに、ずっと、と譯す、他に思ひ廻すことなく、まっすぐにといふ意あり、但に近し。孟子「直不二百步一耳、是亦走也」○徑は、ただちにと訓む、てみぢかと譯す、ちかみちの義より轉用す「徑往而卷二蜀漢一、定二三秦一」の如し。

【唯唯】イヰ ○はいはい、丁寧に返事する。戰國策「范雎曰―」○他人の意におもねり阿ふ貌。史、趙世家「諸大夫朝、徒聞二―一、不ㇾ聞二周舍之謂一」○魚の相隨ひ行く貌。詩、齊風「敝笱在ㇾ梁、其魚―」

【唯唯諾諾】イヰダクダク ふたつへんじ一も二もなくうなづく、おもねりつつしみてはいはいと從ふ。

【唯諾】イダク はいはいと應ずる聲。唯は遽かにして恭しく、諾は緩かにして慢かなり。曲禮「必愼二―一」

【唯一】イツ ただひとつ。無二。

【唯一神教】イツシンケウ 上帝を唯一の實在とする教義。‖一神教。

【唯一神道】イツシンタウ 神道の一派、純粹

なる我國の神道、儒佛の教をまじへざるもの。兩部神道などの對。後土御門帝の時、京都吉田の祠官卜部兼倶に始まる。

【唯我獨尊】ユイガドクソン 佛天地の間に於てただ我獨り尊し。傳燈錄「釋迦牟尼佛初生、一手指レ天、一手指レ地、周行七歩、目顧二四方一曰、天上天下、唯我獨尊」

【唯心論】ユイシンロン 哲學にて心を離れて物質なく、天地間のすべての現象は、唯心の發現なりとの論。唯物論の對。

【唯物論】ユイブツロン 哲學にて、物質を以て終局の實在とし、精神上のすべての現象も皆物質の作用に外ならずとの説。唯心論の對。

【唯識論】ユイシキロン 唯心論に同じ。

【唬】

㊀カ 廣 ㊁カウ 篇

㊀虎の聲。㊁ほゆ、猛獣が吼える。‖虓哮。㊂よぶ（呼）‖號。

【啀】

ガイ 佳

○かみあふ、狗が齧まんと欲する。‖狺。○國いがみ、言ひ爭ふ「一合」

【唫】

㊀キン ㊁ギン 侵 提

㊀どもる（吃）口いそがし。○口をとづ、聲を出さず。㊁うたふ、吟（口部四畫）の古字。

【啓】

ケイ 霽

○ひらく、あける（開）論、泰伯「一予足、一ニ予手」○をしふ（敎）○てびき、みちびく（導）知能をひらき導く。○ひざまづく（跽）詩、小雅「不レ遑二一處一」啓は跪、處は居。○さきばらひする、出發する「一行」軍の前を一といひ、後を殿といふ。○まうす、文書にて事を陳述する、又其の上書、手翰。○星の名、あけのみやうじやう。○立春・立夏の時候。左、僖五「分至一閉」

同訓異字 啓・開・闢・辟・發・闡・拓・披・拆・擘の訓は開（門部四畫）の條を見よ。

【啓佑】ケイユウ みちびきたすける。啓發輔導する。書經「一ニ我後人、咸以レ正罔レ缺」

【啓行】ケイカウ たびだちする。詩、大雅、公劉「弓矢斯張、干戈戚揚、爰方一レ一」

【啓蟄】ケイチツ 雅ほこらのとびらをひらく。曉亜志「人輪三百餘二、乃爲一一」‖開幄。

【啓居】ケイキヨ 家にひざまつきて安坐する。詩、小雅「王事多難、不レ遑二一一」‖啓處。

【啓示】ケイジ ひらきしめす、うちあけて示す。

【啓事】ケイジ 上に事を啓する書面。晉書、山濤傳「濤爲二吏部尚書一、凡用レ人行レ政、皆先密啓、然後公奏、舉無二失才一、時稱二山公啓事一」

【啓上】ケイジヤウ まうし上げる、書簡文の用語。‖啓白。

【啓處】ケイシヨ 家にやすらかにひざまつきて居る。詩、小雅、四牡「王事靡レ盬、不レ遑二一一」

【啓奏】ケイソウ 陛下に申し上げる。皇后には啓といひ、天子には奏といふ。

【啓蟄】ケイチツ 二十四氣の一、冬ごもりの蟲がうごきいづる義。三月五日頃。

【啓迪】ケイテキ をしへみちびく。書、太甲「勿求二俊彦一、一ニ後人」

【啓白】ケイバク 事を申しあげる、陳べ說く、白も亦まうす。‖啓上。

【啓明】ケイメイ あけの明星。よあけに東方に見ゆる金星の一名。詩、小雅「東有二一一」‖大白星。

【啓蒙】ケイモウ 蒙昧を啓發す。Encyclopédie アンサイクロペディ

をしへ導く。朱子に「易學一一」の著あり。‖訓蒙。

【啓發】ケイハツ 意を開き辭を達する。智識をひらく。論、述而「子曰、不レ憤不レ啓、不レ悱不レ發」憤は、心通ぜんことを求めて未だ得ざる意、悱は、口言はんと欲して未だ能はざる貌、啓は其の意を開くをいひ、發は其の辭を達するを言ふ。

【啓閉】ケイヘイ 啓は立春、立夏、閉は立秋、立冬。左、僖五「分至一一」

【啓沃】ケイヨク 我が心を開きて、君王の心につぎこむ。書、說命「啓二乃心一、沃二朕心一」

【啓翼】ケイヨク 罪のひだりがはのそなへ。‖左陣・左翼隊。

【啎】

ゴ 遇

○さかふ（逆）‖忤。○あひふる（相觸）○あふ（逢）

【啐】

㊀サイ 隊 ㊁サイ 卦 隊

㊀おどろく（驚）○よぶ（呼）○なむ（音）㊁くらふ（喰）

【喈】

㊀サク・ジャク 藥 陌 ㊁シャ 禡

㊀さけぶ（大聲）口かま多し。史、信陵君傳「晉鄙嚄一宿將」○鳥の聲。○鳥の聲。㊁なげく、又なげく聲。後漢書、光武紀「一曰氣佳哉一」

【喈喈】サクカイ 鳥の鳴く聲。詩、邶雅「鷄鳴一一」

【喫】

㊀サフ・セフ ㊁サフ・セフ 合 盍

㊀一喋は水鳥が魚を食ふ貌。㊁

すする(啜)史、呂后紀「始與商帝一」血盟」

【嗳】 ㊀サフ ㊁サフ 合 洽

㊀くらふ(啖)楚辭、九辯「飛雁皆ー夫粱粟兮」㊁ーー喋は水鳥が食物をすすりくらふ。

【嗳喋】ワフ ついばみくらふ。上林賦「ーニー音流、喧嘩憂嗣」

【呪】 ㊀ジ ㊁アイ 支 佳

㊀へつらふ(諛)おもねる(阿)曲げて從ふ貌。○かまびすし(多言)○噦ーはしひてわらふ(強笑)楚辭、卜居「噦唈喔ー」㊁かたこと(片言)○ーー嚘アイは小兒のかたこと。荀、富國「拇指之ー嚘之」

【售】 シカ シウ 尤 宥

○うる(賣)賣りて手を去る、賣り出す。○あきなふ(商)○かはれる(買)○もとめられる(求)○行はる、用ひられる。

同訓異字 賣・販・沽・貨・賴の別は貿(貝部八畫)の條を見よ。

【商】 シャウ 陽 商と異り

○あきなひ、あきなふ(賣買)あきうど「行ー」○あき(秋)秋の風。梁元帝纂要「秋曰素ー」○はかる(度量)漢書、趙充國傳「廣必ー軍進退」あきらかにす(章)○つよし(強)○つね(常)○はる(張)○くだる(降)○五音の一、金に屬する音、清くさえて悲を含む音。禮、月令「孟秋之月、其音ー」○星の名。心宿。○王朝の名、一に殷といふ、成湯、夏に代りて天下を有ちし號。○除法にて割りて得たる數。

【商鞅】シャウアウ 戰國衛の人少くして刑名の學を好む、秦の孝公を相けて法令を變改し、井田を廢し、阡陌を開き賦稅の法を改む、商に封ぜられて商君と號す、孝公卒して殺さる。

【商庚】シャウカウ うぐひすの異名。□倉庚・黃鸝。

【商號】シャウガウ 商店の牌號「伊勢屋」「武藏屋」「何何洋行」などの類。

【商搉】シャウカク はかりさだめる、推し引なり、引き比べて考へさだむ。北史、崔孝芬傳「ーニー古今、開以二剛讓一」

【商鞅不ー遠】シャウアウフエンクヮイエンウヲウ 覆亡の先例は遠く古代に求めずとも目前に在りとの義(胡銓、上二高宗一封事)□殷鑑。詩、大雅、蕩「殷鑑不ー遠、在二夏后之世一」

【商議】シャウギ 互に相談して謀る。水滸傳第三回「眞長老與二首座一ーー」

【商況】シャウキャウ あきなひのありさま。商賣の景氣。

【商矩】シャウキョ むかでに似たる小蟲の名。やすで、あまびこ。□馬陸・馬蚿。

【商君】シャウクン 商鞅を見よ。

【商科】シャウクヮ 大學の分科の一、銀行・保險・外國貿易・領事・稅關倉庫・交通等の科目に分つ。

【商會】シャウクヮイ 商業上の組合。□商社。

【商館】シャウクヮン 商家の大いなるもの、おもに開港場に於ける外國人の商店をいふ。

【商業】シャウゲフ あきなひのわざ。□商法。

【商估】シャウコ あきうど。估は賈(北史、郡縣傳)

【商賈】シャウコ あきうどの商は行商、賈は店に居てあきなひす。周禮、天官、大宰、注「行曰レ商、處曰レ賈」

【商工】シャウコウ あきんどと職人と、又商業と工業と。

【商港】シャウカウ 貿易の商船の集るみなと。軍港・要港等の對。□商埠。

【商山】シャウサン 山の名、陝西省商縣の東に在り、四皓が秦の亂を避けて隱れし處。□商坂・商鎧。

【商山四皓】シャウサンスカウ 漢の高祖の時商山に隱れし四人の老人。東園公・夏黃公・甪里先生・綺里季。四人皆鬚眉皆白し、故に皓といふ。

【商秋】シャウシウ あき。□金天。

【商事會社】シャウジクヮイシャ 商法にて規定せる合名・合資・株式・株式合資の四種類の會社。

【商社】シャウシャ 商會に同じ。

【商稅】シャウゼイ 商業の稅。□宋史、食貨志「隆興中減二茶鹽之禁一及減ーニー」

【商船】シャウセン あきなひぶね。行貨、陶侃傳「侃爲二武昌太守一、時山夷多鈔レ江劫掠、侃命下諸將詐作ニー一以誘上レ之、劫果至生二擒數人一斬之、自レ是水陸肅清」□商舶。

【商戰】シャウセン 商業上のかけひき。戰爭に喩へていふ。

【商度】シャウタク はかる、くりもりする。□商估。

【商店】シャウテン みせ、商品を賣る所。□商鋪。

【商事】シャウジ 商會・會社、又、會社の重役。

【商人】シャウジン あきうど。左、僖、三三年「鄭ーー弦高將レ市二于周一」□商估。

【商人婦】シャウジンフ あきうどの妻。張籍詩「那作ニーー、愁水復愁レ風」白居易、琵琶行「老大嫁作ニーー一」

【商船】シャウセン 商業用のおほぶね。鄭俠詩「大矛ーー滿二汀洲一」□商舶。

【商牌】シャウハイ かんばん。牌は札。□屬牌。

【商賣】シャウバイ あきなひ、うりかひのわざ。商法・商業。

【商法】シャウハフ ○あきなひ、商賣の道。□

商業。○六法の一、商業上に關して特に規定せし法律。

【商賈】ショウカ あきなふ、販はふりうり。

【商量】ショウリャウ 酌量。

【商品】ショウヒン 商人が賣買する物品。

【商埠】ショウフ 國外國と通商の港。開港場をいふ。

【商風】ショウフウ あきかぜ。五音の商を秋に配する故。梁元帝纂要「秋風曰二金氣一一一

【啖呑】タンむさぼりのむ。

【啗】 タン 感

○くらふ、くらはす。＝噉・噉。○利を以て誘ふ。史、高帝紀「往說二秦將一以レ利」

同訓異字 啗・食・喫・吃・啖・噉・哺・餔・茹・噉・餐・嚥・咀・嚼の別は食(部首九畫)の條を見よ。

【啗】 テキ チャク 錫 藥とは別もと(本)

【啜】 ㊀テツ ㊁セツ 屑 屑

㊀なく貌。○かまびすし、言多くして止まず。㊁すする(吮)なめる(嘗)くらふ。禮、檀弓「一レ羹飲レ水」

【啜泣】セツキフ すすりなく。詩、王風「有レ女仳離、啜其泣矣」

【唸】 テン うなる(呻)

【啄】 ㊀トク 沃 ㊁タク 覺

㊀ついばむ、鳥が物をつつき食ふ。○嘴にてつつく。○一は物の音をいふ、こつこつ。㊁くちばし(嘴)＝味。

【啄啄】タクタク ○こつこつと鳥の物をつついばむ音、轉じて、戸をたたき、又は下駄の音の義。韓愈、剝啄行「剝剝一一、有レ客至レ門」○雞の聲。韓愈文「一一庭中、拾二蟲蟻一哺レ之」

【啄木】タクボク 次條に同じ。左貴嬪詩「南山有レ鳥、自名二一一一一一則啄レ樹、暮則巢宿」

【啄木鳥】タクボクテウ 鳥の名、きつつき。木の幹をつつき蟲をとりて食ふ。＝斲公。

【啅】 ㊀トン ㊁シュン 元 元

㊀いき(口氣)○いつはる、いつはり(誕)○一一はおもくおそき貌。㊁をしふ、すすむ。○一一はくどくどし(多言)＝諄諄。

【啅呼】シュンコ ○多言なる貌。莊、胠篋「釋二夫恬淡無爲一而悅二夫一一之窒一」○トシ承く遲き貌。詩、王風「大車一一」

【啗】 ヒ 紙 俗に圖の啼字とするは非

○いやし＝鄙。○をしむ(惜)

【問】 ブン モン 問

○とふ、とひ、たづぬ(訊)ききただす。○みまふ、安否をたづぬ。○おくる(遣)詩、鄭風「雜佩以一之」○いふ(言)○つぐ(告)○めす、めし(聘)○いひつけ(命令)○ほまれ、聞に通ず。

同訓異字 ㋐問・訊・詢・咨・訪・謀○問はとひたづねる、訊なり。書經「好レ問則裕」又、音問の義にも用ふ。○訊は問なり、問ふに言を以てするなり、また告ぐる義にも用ふ。○詢は、はかりとふなり、咨と略ゝ同じ、信實にとひ謀る義。左傳「詢レ親爲レ詢」○咨は諮に同じ、問也、謀也、說文に「謀レ事曰レ咨」とあり。○訪はひろく相談する義、こちらから往きて謀るにいふ、又人を尋ぬるにも用ふ。○謀は事を謀るをいふ、はかるとも訓む。

【問候】モンコウ 時候みまひ。＝候問。

【問罪】モンザイ つみをとひただす。宋史「遣使一レ一」

【問津】モンシン わたしばの所在を問ふ。論、微子「使二子路一一レ焉」轉じて、てびき、入門の義「詩學一一」

【問訊】モンジン とひたづねる。僧祇律「禮拜不レ得レ如二短羊一當二相一一一」＝訊問・問訊。

【問責】モンセキ とひせめる。

【問對】モンタイ 問答に同じ。

【問題】モンダイ ○とひ、たづねる事がらの題目「試驗一一」○未定の事がら、疑問。

【問訊】モンジン 問訊に同じ。訊は略ゝ

【問答】モンダフ とふと、こたへると。とひと、こたへと。世說「偃蹇一一」＝問對。

【問注所】モンチュウジョ 鎌倉時代に訴訟を裁決せし所。執事・寄人等の職員を置く、今の裁判所。

【問辨】モンベン 問ひわきまふ、辨は判別。易經「君子學以聚レ之、問以辨レ之」

【問柳尋花】モンリウジンクワ 春の景色を玩賞する義。杜甫詩「一一到二野亭一」

【好レ問則裕】コウモンソクユウ 知らざることを人に問ふことを好めば、心廣くゆたかなり。書、仲虺之誥「一一、自用則小」

【喉】 レイ 霽

○鶴又雁の鳴く聲。晉書、陸機傳「華亭鶴一」○蟬の聲。陳子昂詩「嘹一白露蟬」

九畫

【喔】 アク・オク 屋 覺

○一一は雞の聲。○一咿はしひてわらふ(强笑)へつらひわらふ。又、雞の聲。

【喔咿】アクイ にはとりの聲。白馬易詩「一一雞下レ樹、嚶嚶日上レ梁」

【喔咿】アクイ ○しひてへつらひ笑ふ。難訓、卜居「一一嚅唲、以事二婦人一乎」

○雞の鳴く聲。韓愈詩「天星半落雞ー一」

【喔嘯】ヨク　かまびすしく鳴く。易林「雀行求ㇾ穀、喜鵲ー一」

【喑】㊀イン・オン　㊁イン・オン　㊀㊁侵

㊀なく、小兒が泣きて止まず。○聲を失して言ふこと能はず、おし(唖)後漢書、袁閎傳「遂稱ニ風疾一不ニ能言一」○だまる(默)ものいはず。㊁しかる、したうちす。

【暗啞】アン　おし。又、口をつぐむ。蘇軾詩「撫ㇾ掌笑ニ先生一、年來效ニ一一一」

【暗嗜】イン　ものいふ能はざる貌。風俗通義「無ニ聲譽一徒ー一而已」

【暗噁叱咤】イツタ　大聲にてどなりつける。史、淮陰侯傳「項王、ー一千人皆廢」

【暗蟬】セン　おふしのせみ。韓愈詩「一一終不ㇾ鳴」

【喓】エウ　蕭

むしのこゑ(蟲聲)詩、召南「一一草蟲」

【喙】カイ　隊

○くち、鳥のくちさき、くちばし(嘴)○ことば(言語)「容ー」○短氣なる貌、性急。俗語「余病ー」○くるしむ(困)○烏ー烏頭の別名。

【喙息】カイソク　獸類をいふ。史、匈奴傳「設行ー一蠕動之類」注「以ㇾ喙而息也」

【喈】カイ　佳

○やはらぐ(和)鳥のやはらぎて鳴く聲。○とし、はやし(疾)詩、邶風「北風其ー」○かねのこゑ。詩、小雅「鼓鐘ー一」

【喈喈】カイ　○鳥の聲の和ぎて遠く聞ゆる貌。詩、周南「黃鳥于飛、集ニ于灌木一、其鳴ー一」○鐘の聲。字解を見よ。‖鏗鏗。

【喀】カク　キャク　陌　喀とは別字

○はく(嘔吐)「一痰」○又、はくこゑ。

【喀喀】カク　物を吐く聲。列、說符「兩手據ㇾ地而歐ㇾ之、不ㇾ出ー一然」

【喀血】カツ　口から血を吐くの俗に誤りて咯血に作る。

【喝】㊀カツ・カチ　㊁アイ　曷　㊁泰

㊀しかる(訶)○大聲にておどしつける(嚇)○大いに呼ぶ。○のむ(飲)「一酒」「一茶」㊁聲がしはがれる、しゃがれる。○陰ー(噎塞)

【喝采】カツサイ　やんやとほめはやす。陶潛記「一一、北人鄉語、稱ㇾ美之意」馬鍾詩「新歷誰得梨園籍、喜入王孫一一聲」

【喝食】カツジキ　禪宗、律宗の寺にていふ待童、大衆にて食時を報ずるこゝろ。

【喝道】カツダウ　ききばらひ。貴人の通行の時、人民を驅拂ひて道を避けしむる。李商隱、雜纂、殺風景の條「松間ー一」

【喝破】カツハ　どなりつける。大聲にて叱りつける。

【喊】㊀カン　㊁カン　咸　㊁豏

㊀さけぶ(叫)高聲にて疾呼する、怒りてよばはる、ときのこゑ(鬨聲)「吶ー一」㊁とづ、口をつぐむ。○しかる(呵)

【喊聲】カンセイ　ときのこゑ。‖鬨聲・吶喊。

【喢】ガン　㘝

ねいびき(鼾聲)○とづ、口をつぐむ。

【喢嘷】ガンカウ　ねいびき。列、周穆王「眠中ー一呻呼」

【喢嘿】ガンモク　口を閉づる。唐書、楊場傳「公卿ー一唯唯」

【喜】㊀キ　㊁キ　㊀㊁紙

㊀うれし、よろこぶ(悅)たのしむ(樂)○さいはひ(福)よろこび(悅)吉事。㊁よみす(好)詩、小雅「我有ニ嘉賓一中心ー一之」よろこぶ、たのしむ‖悲。

【喜懼】キク　喜・悅・說・怡・忻・欣・懽・懼・慄・怡・愉・慶・賀・慶○喜は怒・悲・憂三字の反樂なり、悅なりうれしきなり轉じてこのむともよむ、喜ㇾ酸の類。○悅は說に同じ、うれしく思ひて、中心にて樂み服するなり悅服と用ふ。○欣・忻・訢の三字、同じよろこびて、氣のうきたつさまなり、歡に近し、歡欣と連用す。○歡・懽・驩の三字、同じ、憂・悲の二字に對して用ふ、喜び樂みていさむをいふ。○怡は心にじっとりと、しみこむやうに悅ぶなり、恰悅なり。○恰は和なり、樂なり、顏色にこにこして悅ぶなり。陶潛文「酌ニ賜柯一以怡ㇾ顏」○愉はよろこびの顏にあらはるるなり。禮記「有ニ和氣一者、必有ニ愉色一」○慶はめでたき事なり。易經「積善之家必有ニ餘慶一」○賀は禮物を贈りて相祝慶するなり。禮記「婚姻不ㇾ賀、人之序也」詩、大雅「四方來賀」○懽は安んじ樂みてよろこぶ、悅なり、悅懌と連用す。

【喜懌】キエキ　よろこび、よろこび。‖喜悅。

【喜劇】キゲキ　樂をかしみのもるしばゐ。悲劇の對。

【喜見城】シキケン 次條に同じ。
【喜見天】キケンテン 圖三十三天の地居天の上にありて帝釋天の居る天宮。‖喜見城。
【喜子】シ 蜘蛛の異名。爾雅「蠨蛸長踦」注「蜘蛛長脚者、俗呼爲ニ喜子一」‖喜母。
【喜字餘】キジヨ 圖七十七歳をいふ。喜の字の草書體が、七十七と讀まるるによる。‖喜壽。
【喜心】シン よろこぶ心の體。樂記「其ー感ニ人心一者、其聲發以散」
【喜捨】シヤ 圖よろこびて、財寶を棄てる、神佛のことに金品を寄附するにいふ。
【喜壽】ジュ 喜字餘を見よ。
【喜色】ショク よろこばしきかほいろ。家語「孔子爲ニ魯司寇一攝ニ行相事一、有ニー色一」
【喜靡】ヒ うれしげなるこゑ。楊萬里詩「一番雨過來ニ綿密一、無數飛禽有ニー喜一」
【喜躍】キヤク よろこびてをどる。柳宗元文「無レ任ニ抃躍一之至一」‖抃躍。
【喜樂】キラク よろこびたのしむ。詩、唐風「且以ー一、見以永レ日」

【喟】キ 圖

○ためいきをつく。○なげく。（歎）
【喟嘆】キタン 喟然に同じ（劉向、九歎）
【喟然】キゼン ためいきをつきて感歎する貌。論、先進「夫子ー一歎曰、吾與レ點也」

【嘅】

㊀ギョウ・グ ㊁ゴウ・ゲ 圖有 多 圖

㊀魚の口の水面に見ゆるにいふ。あぎとふ「喁ー」轉じて上の德を慕ひて爭ひ歸する義とす。○となふ（唱）○よぶ（呼）又互に呼びあふ、又其の聲。莊、齊物論「前者唱于而隨者唱ー一」㊁魚の口の聚りつどふ貌。
【嘅嘅】コウコウ ○魚のあつまりあぎとふ貌。轉じて衆人の仰ぎ慕ふ義。史、司馬相如傳「延ー頸擧ー踵、ーー然、皆願レ爲ニ臣妾一」○何の爲す所もなく平見なる貌。史、日者傳「公等ーー者也、何知ニ長者之道一乎」

【嘔】ク 圖 通 虞

○いき（息）呼吸。○ふく（吹）漢書、中山靖王傳「衆ー漂山」あたたむ、溫め潤す。‖煦。轉じて保護する義。唐書、魏徵傳「護民之勞、ー之若ニ子」○しめす（呈示）○ーーは諂ひて強ひて笑ふ貌。柳宗元文「ーー趙趙」

【嘻】

㊀クヲウ・ヲウ ㊁クヲウ・キャウ 庚 陽

㊀ーーは小兒の泣く聲。詩、小雅「其泣ーー」㊁ーーはやはらぐ（調和）詩、周頌「鐘鼓ーー」又、かまびすし（諠）○いかる（怒）○さきばらひ。○なく。
【嘻呷】カフ かまびすし。吳都賦「讙譁ーー、芬藹隱映」
【嘻嘻】キキ ○かまびすしき聲。詩、周頌「ーー厥聲」○小兒の泣く聲。字解を見よ。○音樂の調和せる聲。字解を見よ。

【喚】クヮン 翰

○よぶ（呼）白居易詩「千呼萬ー始出來」わめく（叫）○まねく（招）聲をかけてよびよせる。

同訓異語 ○喚・呼・召の別は呼（口部五畜）の條を見よ。

【喚起】キクワン ○よびおこす。○轉じて注意をよび起す。○鳥の名、鷓鴣の異名。五更より鳴きて曙に至りて止むといふ。韓愈詩「ーー聽前啼、催歸日未レ西」催歸も鳥の名。
【喚丹】クワンタン さけぶ。‖叫喚。
【喚呼】コワン よびさけぶ。
【喚集】シフシフ よびあつめる。‖嘯集。
【喚春鳥】シュンシュン ○鳥の名。顧渚山茶記「山中有レ鳥如ニ鴝鵒一、色黃、每レ至ニ正二月一作レ聲云ニ春起一也、至ニ三四月一云ニ春去一也、採レ茶者呼爲ニ報春鳥一、又名ニーー一」○喚起鳥の別名「冷齋夜話」
【喚問】カンモン 官署などに呼び出して、訊問する。

【嗳】

㊀クヮン ㊁クヮン・ケン 元 翰

㊀いかる（恚）○かなしむ。○強ひて答ふ。㊁うれふ（愁）○おそる（恐）○いかる（恚）

【喬】ケウ 蕭

○たかし（高）○木高くして上部がまがる。○おごる、ほしいままの義。表記「ー面野」顯に通ず。○矛の柄の刃に遠き所にありて飾の羽毛をかくるかぎ。○ー詰は意平かならず。

同訓異語 ○喬・高・崇・隆・卲の別は高（部首十畫）の條を見よ。

【喬嶽】キョウガク 泰山を指していふ。轉じて廣く高山の義とす。‖嵩嶽・峻嶽
【喬詰】キョウ 心平かならず。既、在宥「天下始ーー卓鷙」
【喬志】シキョウ おごりたかぶる心の體。樂記「賓客歡聲ーー」‖驕志。
【喬嶽】キョウガク たかくそびゆる嶽。山居賦「凌ニ岡上一而ーー、陵ニ澗下一而扶疏」
【喬松】キョウショウ ○高大の松樹。事類賦「美

彼一一、国三玆綿竹一」○人名。次條を見よ。

【喬松之詩】ケウショウ 喬は王子喬、松は赤松子、共に長寿の仙人。よりて長寿の意にいふ。龍図秦観「蓼洋集」「世長稱レ孤、而有二一一一」

【喬遷】ケウセン 人の家を移すを賀していふ。詩経の語に本づく。喬木の條を見よ。又仕官して位の進みにいふ。張籍詩「滿堂虚左待、衆日望二一一」

【喬木】ケウボク ○たかき木。詩、小雅「出レ自二幽谷一、遷二于一一」○丈が長く幹太くして木材となる可き樹木の稱。松・柏・樅・杉の類。陳琳・胡笳などを誰木ケウボクといふの對。

【喫】 ケキ 錫 通音キツ

○くらふ(食)ヒ吃。○のむ(飲)杜甫詩「對レ酒不能一一」

(部首九畫)の條を見よ。

【喫煙】キツエン たばこをすふ。ヒ喫烟。

【喫緊】キツキン 肝要の義。晶字彙「恒言要緊謂二之一一」

【喫驚】キツキヤウ おどろく、びっくりする。

【喫茶】キツチヤ ○茶を飲む。水滸傳、第三回「且請貝外方丈一一」○女子の嫁するをいふ。七修類稿「種レ茶下レ子、不レ可二移植一、移植則不二復生一、故女子受レ聘、謂二之一一」

【喫著不レ盡】キツヂヤクフジン 衣食餘りあるをいふ。東軒筆錄「宋王曾幾解及廷試、皆首冠、劉子儀曰、狀元一生——、身正レ色曰、曾孚生之志、不レ在二温飽一」

【喫飯】キツパン ○めしをくらふ。○くちすぎ。五代史、安叔千傳「當レ與二汝一一一喫一」ヒ餬口。

【喧】 ケン 元

かまびすし、誰論に通ず。拾遺記「雲車轍馬跡之一一」

【喧歌】ケンカ かまびすしくわらふ。元稹詩「滿堂會二客喧一一」

【喧囂】ケンガウ かまびすし。ヒ喧噪。

【喧聒】ケンクワツ ○かまびすし。ヒ諠譁・喧噪。○圖いさかひ。爭鬪。

【喧鬨】ケンカウ かまびすしく相撃つ。又鬪聲。李白が「飛龍潭洪爭一一」

【喧囂】ケンガウ やかましくとどろく。歐陽修が「畫舫遊一一」

【喧暗】ケンアン かまびすし。王維詩「一一芳蘇下、或樂城復起」

【喧爭】ケンサウ かまびすしく爭ふ。杜甫詩「富貴窓同レ客、一一慚レ著レ鞭」

【喧噪】ケンサウ かまびすし。ヒ喧呼・喧聒・喧囂。

【喧靜】ケンセイ かまびすしきと、しづかなるとっ杜甫詩「一一不レ同レ科、由處各天機」

【喧擾】ケンジヤウ かまびすしくみだれる。ヒ喧攘。

【喧粉】 かまびすし。柳宗元詩「遊二逼屏一幽躁一、淡泊辭二一一」ヒ喧囂。

【喧隙】ケンゲキ かまびすしくさわがし。皮日休詩「鈎楯跨二通衢一一一、當二九市一」

【喧座】ケンザ うるさくかまびすし。梁簡文帝詩「一一是時息、靜坐對二重幃一」

【喧傳】ケンデン かまびすしくいひふらす。楊萬里詩「松竹一一菊細開」ヒ謠傳。

【喧聞】ケンブン やかましく人が一っぱいになる。唐國史補「郡邑爲レ之一一」

【喧擾】ケンジヤウ かまびすしくいそがし。白居易詩「清晨臨二江望、水鳥正一一」

【喧殺】ケンサツ かまびすしくみだれる。裴度詩「頃來多二譴黜一、此夕任二一一」ヒ喧擾。

【喙】 ㊀ケン 銑 ㊁ガン 翰 ㊂ガン・ゲン 諫

㊀くち(口部七畫)に同じ。㊁いやし、粗俗なり、容儀を失する論、先進「由也一一」㊂すこしくわらふ貌。

【喉】 コウ 尤

喉(次條)の本字。

【喉】 コウ

○のど、のんと(咽)のとぶえ。○縛じて要所に嚙ふ「天下の咽一」○舌は宰相をいふ。

【扼喉】ヤクコウ ○のんどをしめつく。晉書、宣帝紀「扼二其喉一而擯二其心一」○要害の地に據りてたもつ。魏志「實レ地而守レ之、扼二其喉一而不レ得レ進」

【喉衿】コウキン ○要害のよき地、衿は襟。晉書、載記「四塞山河、有二一一之勢一」○緊要の義。孟子題辭「論語者五經之鎖鑰、六藝之一一也」

【喉舌】コウゼツ 宰相の義。詩、大雅「出二納王命一、王之一一」傳「一一、冢宰也」

【喉頭】コウトウ のどくび、のどの上端。

【喉吻】コウフン のんどと、くちびると。ヒ全、新秦歌「一喉一一調、兩頰發二孤聞一」

【喪】 ㊀サウ・ソウ 陽 ㊁サウ・ソウ 陽

㊀うしなふ(失)位を失ふ。○ほろぶ(亡)ほろぼす。○死。㊁も(忌服)人の死を悲みて、或期間凶服を著けて、うれひにこもり居る禮。○ひつぎ(柩)曲禮「送一不二踰境一」

【喪家之狗】サウカノイヌ 新に死にたる人のある家の犬。家人不幸を悲みて犬に食を與へざる爲めに痩せ衰ふ。以て痩せ衰へたる人に嚙ふ。家語、入官「累然若二一一一」

【喪祭】サウサイ もと、まつりと。禮記「一之用、賓客之交義也」
【喪志】サウシ 志をうしなふ。書、旅獒「玩レ人喪レ德、玩レ物ー レ！」
【喪失】サウシツ うしなふ。‖喪亡。
【喪心】サウシン 本心をうしなふ。左傳「哀而樂、樂而哀、皆ー レ ー 也」‖喪神・失心・失神。
【喪神】サウシン 前條に同じ。
【喪亡】サウバウ とむらひに用ふるくるま。
【喪車】サウシヤ 喪服の代りに普通服の上に佩びる喪中のしるし。和服には左胸に黒布を結びつけ、洋服には左腕に黒布を巻く。
【喪章】サウシヤウ 喪服の代りに普通服の上に佩びる喪中のしるし。和服には左胸に黒布を結びつけ、洋服には左腕に黒布を巻く。
【喪主】サウシユ 葬式をいとなむ主人公。施主ヒ
【喪魂】サウコン 魂をなくする、甚だ懼るる義。唐劉業起居注「突厥ー ー、深服ニ帝之能ヒ兵、敢ニ其所ニ部、不ニ敢南入ー」
【喪亡】サウバウ 喪失に同じ。
【喪服】サウフク もふく。喪に居る間、著る麻製の衣服。周禮「ー ー凶器、不レ入レ宮」‖凶服・斬衰サンサイ
【喪亂】サウラン 死喪と禍亂と。詩經「天降ニ ー ー」
【喪禮】サウレイ 葬式又喪に居る禮法。

【喪】

シ 遇

○ただ、ただに（但・止）不・何・奚などと連用す。書、泰誓「不ー若ー白其口出」或は翅に作る。

【啾】

シウ 尤

○なく（鳴）小聲にて鳴く。又、其の聲。○鳥又、蟲の鳴く聲。○小兒のこゑ、なげく（歎）
【啾唧】シウキ なきさけぶ。柳宗元賦「悲鳥悲而ー ー兮」
【啾嘈】シウサウ 聲さわがし「荀悦賦」
【啾啾】シウシウ ○蟲又は鳥などが小聲にてなく。楚辭、招魂士「蟪蛄鳴兮ー ー」○悲哭の聲。杜甫、兵車行「新鬼煩冤舊鬼哭、天陰雨濕聲ー ー」
【啾唧】シウシヨク ○細かに聲けたる聲。王安石詩「幽鳥迎ー陽語ー ー」○聲が多くして煩る。歐陽修詩「一身但得ー レ 飽、暮口息ニー ー」

【唧】

ショク シツ 職 質

○なく（鳴）○すだく、おほくの小さき聲がやかまし。蟲、又、鳥・鼠などの聲。○國かこつ、歎く。
【唧唧】シヨクシヨク ○はたおりなどの小さき聲のしげき狼。古詩「ー ー復ー ー、木蘭當ー戸織」一說、歎息の聲。○蟲のなく聲。歐陽修、秋聲賦「四壁蟲聲ー ー」‖啾嘈。
【唧筒】ソクトウ 圖みづでっぽう、ポンプ。

【喘】

セン 銑

○あへぐ、いきせく（疾息）いきせく病、せき、ぜんそく。○いびき（鼾聲）○いき、氣息、轉じて生存の義。○ささやく（微言）荀、君道「ー而言」
【喘喘】センセン いきがあへぎて苦しむ。梁簡文、因ニ於暑汗ー頽則ー ー、靜則多ー言」
【喘嘘】センキヨ せきむせぶ。李觀詩「願レ汝薄暖節、何力禁ニー ー」
【喘呼】センコ あへぎて口を開く。韓駒詩「赤日下照烘ニ朝霞ー、腹鳴肩擧氣ー ー」
【喘汗】センカン あへぎて汗を流す。蘇舜欽詩「人皆ー ー抱レ樹立」
【喘氣】センキ あへぐ。劉楨文「獻ニ ー ー于玄武、烏戚ニ髮予高危ー」
【喘喘】センセン あへぐ貌。莊、大宗師「魚相ー ー子乘レ病、ー ー然將レ死」
【喘息】ゼンソク ○あへぐ。李白詩「ー ー愛ニ妙氣、步虛吟ニ眞聲ー」○せきをせく病。‖氣喘・哮喘。

【善】

㊀ゼン ㊁セン 銑 霰

㊀よし（吉・良・佳）惡の反對。○美・好・佳・嘉・奇・美・良・臧・吉・淑○善は惡の反、善甘・善政と連用す、よみすとも訓む。左傳「君子是以善ニ晉莊公ー」○好は醜惡の反、形のよきなり、轉じて何にても、盛く善きことに用ふ、風日好・好時節の類、よしみとも訓む、結レ好ニ二姓好の如し。○佳は美なり、好なり、佳人は、美人なり、佳氣・佳境などと用ふ。○嘉は佳に同じ、但、佳辰は、嘉辰に同じけれども、佳景・佳人などには、嘉の字は用ひず、嘉は善・樂の意、佳は好・美の意なればなり、又よみすとも訓む、善としてほむる義。○祉は嘉に同じ。○美は醜・惡の反、形のうるはしきなり、美人・美服・美玉などと用ふ、好に近くして、はなやかなる意あり。○眞は善也、賢也と註す、程よくとのひて善きなり、眞月・眞工・眞器・眞馬などと用ふ、又德性の程よく具りたるに用ふ、善眞・温眞・賢眞の類。○臧は否の反、善なり筋道のよきなり。○吉は凶の反、めでたきなり、善人を吉人といふは、善人くし、まさる（優）○おほし（多）○大いなり。○單に通ず。單于。‖善子。㊁よしとす、是なりとする。○なかよし、親し「友ー」史、刺客傳「所ー荊卿可レ使也」○膳と通ず。

は、必ず福を受くるにより、めでたき人の意なり。○淑は善なり、淑女・淑人・淑徳・淑気と用ふ、和らぎて善きなり。

【善意】ゼンイ　よきこころ。漢書、薛廣徳「厚賂二其一一一」‖好意。

【善悪】ゼンアク　よきいしゃ。論　冠子「圃説兄弟三人並ー一」‖良醫・良手。

【善謔】ゼンギャク　よくうたふ。謔は吟なり、歌なり。孟子「王豹處二於淇一而河西ー一」

【彰ー善】ショウゼン　善行を表彰する。晉、華命「旌二別淑慝一、表二厥宅里一、ー一ー癉レ惡、樹二之風聲一」‖章善。

【懲ー惡】チョウアク　善人を賞し惡人を罰する。公羊　傳序疏「春秋者、——之書」

【責ー善朋友之道也】セムルハ　互に善事を責め勵むるは友人の道なり。孟、離婁「——、父子責レ善、賊レ恩之大者」

【盡ー善盡ー美】ジンゼンジンビ　この上もなく善美なり。論、八佾「子謂レ韶、盡レ美矣、又盡レ善也。謂レ武、盡レ美矣、未レ盡レ善也」

【作ー善降ー之百祥】サセバ　人一善を作せば、天は之れに多くの幸福を賜ふ。書、伊訓「惟上帝不レ常、——、作二不善一降二之百殃一」

【爲ー善最樂】ヲサムルハ　善事を行ふは人の最大の樂なり。後漢書、東平憲王傳「日者問二王侯一家何等最樂、王曰、——」

【見ー善則遷】ミテスナハチウツル　易、下繫「風雷益、君子以ー一、有レ過則改」

【善賈】ゼンカ　よきあたひ。論、子罕「求二ー一一而沽レ諸」‖高價。

【善行】ゼンコウ　よき行狀　曲禮「修レ身踐レ言、謂二之ー一」行修言道、德之質也」

【善行無二轍迹一】ゼンコウテキセキナシ　轍は、車輪のあと、迹は足あと、眞の善行は、人に目立つことなきに喩ふ。老子「——、善言無二瑕讁一、善計不二籌策一」

【善遇】ゼングウ　てあつくもてなす。史記「客無二所レ擇、而ー一之一」‖善待・厚遇。

【善果】ゼンカ　佛善き果報。善根のむくい。

【善慢】ゼンマン　思ひ多く感得さとし。詩經「女子ー一、亦各有レ行」

【善敎】ゼンケウ　よきをしへ。又よくをしふ。禮、學記「ー一者、使二人樂二其志一」

【善巧方便】ゼンギョウホウベン　佛上手に教へみちびくてだて。

【善言聞二於布帛一】ゼンゲンブンヲフハク　善言を人に與ふるは、布帛を被らしむるよりも暖かなり。荀、榮辱「與二人善言一、煖二於布帛一」

【善後】ゼンゴ　後日の爲めに善き計を爲す。蘇軾、ー一乃萬全」

【善後策】ゼンゴサク　禍失敗をとりかへすべき計略、不結果なりし事のあとしまつ。

【善攻】ゼンコウ　たくみにせむ。戰國策「樂毅ニー一、不レ能レ取二六城一」

【善根】ゼンコン　佛善き果報を受くべき所業。根は果に對していふ。金剛經「種二諸ー一」

【善才】ゼンサイ　琵琶の名手の名、轉じてすぐれたる琵琶師の義とす。白居易詩「曲能常敎ニー一服」

【善哉】ゼンサイ　ゆたかなるとし。管子「牧レ民者、厚收ニー一、以充二倉廩一」‖豐年。

【善柔】ゼンジュウ　よく人に媚びて心の誠實ならざるもの。論、季氏「友ニー一」

【善心】ゼンシン　善良なる心。晉語「思則ー一生」

【善神】ゼンジン　人に福を與ふる神。史、始皇紀「ー一可レ致」

【善診】ゼンシン　よく病をみわける。嵐頭翰古之治、「醫ー一則疾不二彌漸一、工善度則木無二憂材一」

【善祥】ゼンショウ　よきしるし。漢書「成帝時、槐谿都、子永演一得二古磐十六枚一、謀者以爲ニー一」‖吉祥。

【善種】ゼンシュ　よきたね。漢書「雖レ有ニー一、不レ能レ生焉」‖良種・嘉種。

【善熟】ゼンジュク　よくみのる。唐書、種徳興傳「江淮田一ー一、期旁資二數道一」

【善書不レ擇二紙筆一】ゼンショフタクシヒツ　善書には紙筆を擇ばず。能書筆を擇ばず。後山談叢「——妙在二心手一」

【善政】ゼンセイ　よきまつりごと。孟、盡心「ー一不レ如二善敎之得二民也一」

【善逝】ゼンセイ　佛佛の十號の一。瑜伽論「上昇最極　永不二退還一、故名ニー一」

【善摩】ゼンマ　よきこと。禪源「ー一都不レ知レ轉、未レ可二謂能徹一也」

【善績】ゼンセキ　よきいさをし。後漢書、循吏傳「寇之ー一、母有二其助一焉」

【善待】ゼンタイ　あつくもてなす。史記「合レ己者ー一之、不レ合レ己者不レ能二忍見一」‖厚待・優待・善遇。

【善知識】ゼンチシキ　佛德高き僧。道敎題「求ニ——一求二善護助一」‖高僧・名僧・大德。

【善男善女】ゼンナンゼンニョ　佛法に歸依せる男女。‖善男信女・善男子善女人。

【從レ善如レ登】ショウゼンジトウ　善に從ふは甚だ難きをいふ。國語「祭公曰、——、從レ惡如レ崩」

【從レ善如レ流】ショウゼンジリュウ　善に從ふの速かなるをいふ。〔左、昭、十三〕

【善人】ゼンニン　善きおとなひの人。家語、六本「與ニー一居、如レ入二芝蘭之室一、久而不レ聞二其香一、即與レ之化矣」

【善敗由レ己】ゼンパイユキ　事の成敗は我が心ひとつの善惡によりて分る。左傳、二十「——、福由二人乎敗」

【善忘】ゼンボウ　よくわすれる。甚だしく物わすれする。莊、達生「軒下圖不

レ上、則使二人一一レ」
【善不】ゼンフ　善惡の義。左傳「夫人朝夕退而游焉、以證二執政之一一」
【善謀】ゼンボウ　よく舞よ。本事詩、白樂天、姬人樊素善歌、姬人小蠻一一、能爲レ詩曰、櫻桃樊素口、楊柳小蠻腰」
【善辯】ゼンベン　辯口よき後。唐書、崔湜傳「性滑稽、一一」
【善謚】ゼンシ　よきはかりごと。晉書、武帝紀「明達一一、自斷二大事一」
【善貝爲賓】ゼンバイヲヒントス　金玉を寶とせずして、善人を寶とす。大學「楚書曰、楚國無二以爲一レ寶、惟——」
【善藥】ゼンヤク　よくきくくすり。唐書「一不可レ醫手」＝良藥。
【善鳴】ゼンメイ　よくことわりを說き明かす。和漢朗詠「可レ謂二一一一矣」
【善子】ゼンシ　たくみに物をあたへる。淮南子「一一者、用約而爲レ德、善取者、入多而無レ怨」
【善用】ゼンヨウ　たくみに用ふる。左傳「惠之慶其民、而一一之」
【善鄰】ゼンリン　よく鄰國にしたしむ。左傳、六「親レ仁一レ、國之寶也」
【善良】ゼンリョウ　よし。＝良善。
【善類】ゼンルイ　善良なるともがら。子華子「旌二一一而表二勁節一者、法之正也」
【善哉】ゼンサイ　○よしと歎美することば。左、昭十六「孺子一一、吾有レ望矣」○佛　佛の示現等に唱へる讃美のことば、ありがたや。○圓　つぶし

あんの汁粉。
【善游者溺】ゼンユウシャデキス　技能に長ずる者は、これに滯りて卻りて厄を受くるに喩ふ。淮南、原道「夫——、善騎者墮、各以二其所レ好、反自爲レ禍」
【善待レ問者如レ撞レ鍾】ゼンタイモンシャハシュモクノゴトシ　質問を受くるに巧なるものをいふ。撞くものの力に應じて鐘の鳴る音に大小の差ある如く、問に應じて適當の答をなす意。禮、學記「——、叩レ之以二小者一則小鳴、叩レ之以二大者一則大鳴、待二其盛容一然後盡二其聲一」

【單】

㊀タン　㊁ゼン

○ひとへ。一枚の反對。○ことごとく（書）周語「夫禹能二平水土一」○ひとり（獨）ひとつ。○大いなり。○めぐる、めぐり（周）○ひとへに。㊀ゆたか（豐）殺多し。○あつし、あつくす（厚）○まこと、まことにす（誠信）㊁一手は廣大なる貌。
【單閼】タンアツ　十二支の卯の異名（爾雅）
【單衣】タンイ　ひとへもの。北史、劉廙傳「爲市一一」
【單位】タンイ　算數にて基礎となる數の位。
【單一】タンイツ　ただひとつ。
【單純】タンジュン　はやふれ（通鑑、宋紀）＝輕

【單行】タンカウ　○ひとりにて行く。後漢書「命分遣二使者一、徵服一一」＝獨行。○敕書に對して、其の中の一部だけを別に出版して世に行ふ意。「一一本」
【單寒】タンカン　運命單薄にしてまづし。後漢書、高鳳傳「家傳一一」＝單貧。
【單閒】タンカン　てがる。＝簡易。
【單騎】タンキ　一人のうまのり。梅堯臣詩「長堤凍柳不レ堪レ折、窮臘使二君一一行」
【單記】タンキ　ひとへのふすま。草廬物詩「一一自不レ暖、霜深已曙曙」
【單記無記名投票】タンキムキメイトウヒョウ　選擧法の一、投票紙に被選擧人一人を限り記名し、選擧者自身の氏名を記入せざる法。
【單句】タンク　單一なる短き句。
【單座】タンザ　ひとりですわる。＝孤坐・獨坐。
【單使】タンシ　ただ一人の使者。陳書、蕭乾傳「一一歸部」
【單辭】タンジ　かた方のいひぶんのみにて證據とならざることば。後漢書、朱穆傳、法「一一、謂レ無二正據一也」＝偏辭。
【單絲不レ成レ線】タンシフセイセン　かたわれにては物の用をなさざるに喩ふ。水滸傳「——、孤掌豈能鳴」
【單身】タンシン　ひとりみ、ただひとり。宋書、孫法宗傳「一一勤苦」
【單車】タンシャ　一つの車。史、循吏傳、今一一來代レ之」
【單舍利別】タンシャリベツ　白砂糖六十五匁を蒸潤水三十五匁に溶かしたる液、藥用とす。
【單縱陣】タンジュウジン　一列にならぶ陣立。
【單純】タンジュン　ひとすぢにてまじりけなし。複雜の對。＝純一。
【單純承認】タンジュンショウニン　無條件の承諾。
【單少】タンセウ　すくなし。後漢書、南匈奴傳「兵衆一一、不レ足二以防二內外一」
【單線】タンセン　往復ともに同一の線路による一すぢの鐵道。往復二線が別に竝行するを複線といふの對。＝單軌。
【單刀直入】タンタウチョクニュウ　ただ一刀にて直ちに敵中に斬り込む轉じて、文章言論などの直ちに本題に說き入るに喩ふ。傳燈錄、龐蘊曰、「——、則凡聖盡喪二眞宗一」
【單丁】タンテイ　兄弟なき壯丁。齊書「凡一一之身、及氏獨、並蠲二今年田租一」
【單艇】タンテイ　小舟、今のボート。通鑑、齊紀「胡諧之等、一一逃去」
【單調】タンテウ　變化なき調子。
【單獨】タンドク　ただひとり、ただ一ひとつ、ひとりもの。韓愈、送窮文「一一一身、誰爲二謀拙一」
【單則易折衆則難摧】タンソクハセツシュソクハサイシガタシ　一人孤立すれば折れ易く、衆力相合すれば摧け難きをいふ。北史、吐谷渾傳「阿豺命二諸弟一曰、汝

取二隻箭一折レ之、延即折レ之、汝又取二十九隻一折レ之、延不レ能レ折、阿射曰、汝曹知乎、――、戮レ力一レ心、然後社稷可レ固也」

【單薄】タンバク　少くうすしっ古詩「居貧衣――、腸中常苦レ飢」

【單文孤證】タンブンコショウ　僅かに一片の文書にて、不十分なる證據。四庫全書提要、子類、鴟冠子の條「宋レ可下以二――一證上斷中其僞上」

【單兵】タンペイ　一人の兵。後漢書、耿恭傳「以二――一固守二孤城一」

【單瓣】タンベン　ひとへの花びら。又其の花。

【單本位】タンホンイ　經濟學にて一種の貨幣を以て本位を定め、他を皆補助貨幣とする制度。

【單門】タンモン　まづしき家。南史「雖二――一後進、必加二善誘一」‖寒門。

【單老】タンロウ　老年にして妻子なきもの。梁武帝詔「凡民有下――孤稚不レ能二自存一者上、郡縣咸加二收養一」

【單利】タンリ　元金にのみつける利息。利子にも利息をつけるを複利といふの對。

【單列】タンレツ　一列に同じっ武備志、日本考「鉄――縦歩、爲二胡螺陣一」

【單于】ゼンウ　匈奴の酋長の稱。天の廣大なる義に取る「漢書、匈奴傳」

【嗤】タン　感

――は、ゆたかにあつし（豐厚）漢書、郊祀歌「靈生――」

【啼】テイ　齊

○なく。殺梁、傳十「麗姫下堂而――」‖囀。○涙を流し聲をあげてなく（哭）○鳥獣が鳴く。

【啼泣】テイキュウ　涙をながしてなく。魏志、袁紹傳、注「愛怖失レ色、垂レ――」

【啼血】テイケツ　血を吐きて鳴く、ほととぎすの啼きごゑの痛切なるをいふ。李山甫詩「斷腸思二故國一、――滿二芳枝一」

【啼哭】テイコク　大聲になく。王建、原上新居詩「晝來梨園盡、――小兒飢」

【啼眉】テイビ　なきて顰めるまゆ。元稹詩「紅綃少締數――」

【喆】哲（口部七畫）に同じ。

【喋】㊀テフ　㊁タフ　洽　葉

㊀かまびすし（喧）しゃべる（利口多言）○ふむ。史、淮陰侯傳「韓信涉二西河一虜二魏王一、定二夏說一、――血閼與」‖閼與ヲッは地名。‖喋。○血の流るる貌。㊁ついばむ（啄）ふくむ（含）嗟！――は鳶雁の聚り食ふ貌。

【喋喋】チョウチョウ　よどみなくしゃべる貌。漢書、張耳之傳「豈效二此曾夫――利口捷給一哉」‖嘖嘖。

【喋呫】チョウテツ　聚りてついばみくらふ。劉基詩「眠レ沙臥レ竹鳴且翻、――藻荇亂二交錯一」

【喋囁】チョウセツ　ささやく（晏林）‖沾嘖・私語。

【喻】㊀ユ　㊁ユ　遇　寘

諭に同じ

㊀さとす（曉）‖諭。なしふ（敎）教へて了解せしむ、善に導く、いさむ（諫）○なしへ、さとし。○了解す、さとる（悟）○たとへ、たとふ（譬）㊁やはらぐ（和）○よろこぶ（悦）漢書、王褒傳「喟―受之」

【喻喻】ユユ　よろこぶ貌。博雅「嘔嘔・――、喜也」

【喇】ラツ　黠　一音ラ

ことばはげし。

【喇叭】ラッパ　管の樂器、軍中にて號令を傳ふるに用ふ。正字通「――軍中吹器、俗呼二號筒一」

【喇嘛教】ラマキョウ　西藏を中心として蒙古及び滿洲地方に行はるる佛教の一派、唐の代、印度より西藏に入る。首長を達賴喇嘛といふ。

【喨】リアウ　ロウ　養

ほがらかなる聲。聲の清く遠きなり「嘹――」‖喨。

【喰】【國字】

くらふ。

十畫

【嗌】㊀エキ・アク　陌　㊁アイ　隘

㊀のど、のんど（咽）史、倉公傳「飲食下――」○笑ふ貌。㊁むせぶ（噎）

【嗌嗌】アクアク　笑ふ貌。韓詩外傳「殊笑――、威儀固陋」

【嗚】㊀オ・ウ　虞　㊁ナ　遇

㊀ああ（歎辭）烏に通ず。○歌ふ聲。㊁なげき、いたむ（歎傷）後漢書、袁安傳「嘯――流涕」

【嗚呼・烏乎・於戲・於・嘻・

吁・噓・嘻・唉・惡。○嗚呼・烏乎・於戲・於は共に皆一音にして歎辭なり、よき事にも、わろき事にも用ふ。烏乎は、嗚呼の古字なり、後世ね嗚呼を哀傷に用ひ、於戲を歎美に用ふれども、上代の法にあらず。○嗟は吝嗟咏歎の辭、これはこれはと訝す、善惡ともに用ふ。嗟乎と用ふるも同じ。詩經「嗟我懷ㇾ人」○吁は驚也、疑怪之辭也と註す。噫よりは、意やや輕し。○噫は哀傷痛恨之辭也と註し、また不平之聲と註す。論語「噫斗筲之人何足ㇾ算也」○嘻は歎也と註し、和樂之聲とも註す、されど稀にはただ音を借りて、哀痛に用ひし例なきにしもあらず。史記、趙世家「趙簡子召ㇾ之曰、請」の註に「猶而呼之言」とあり。請と嘻とは通音なり。○唉は歎恨して聲を發する辭なり、恨みののしる聲。史記「唉豎子不ㇾ足ㇾ與謀」○咨は驚嘆に、少しく怒氣を帶びたる辭なり、漏典何言乎の如し。

【嗚呼】アア ○ああ。歎息の聲。書、秦誓「一一西土有衆、咸聽ㇾ朕言」○歎き痛む聲。禮、檀弓「一一哀哉尼父」＝烏乎・嗚嘑・於乎。

【嗚呼有吳延陵季子之墓】アアユウゴエンリョウキシノ 江蘇省丹陽縣の吳の季札のはか。南畿志「季札墓在二申巷一、孔子表二其墓一、曰二一一、讀二之十字碑一、唐殷仲容摹本、宋郡守朱彥卿石」＝十字碑。我が楠公の湊川の碑は此に本づく。

【嗚呼史】ヲコ 歐陽修の五代史記の異稱。每篇論贊の初に嗚呼の二字を揭ぐる故。

【嗚啞】アア からすの鳴く聲。李賀詩「弄ㇾ月聊一一」

【嗚軋】アア つのぶえ（角）の聲。杜牧詩「一一江樓角一聲」

【嗚咽】アツ なきむせぶ。蘇軾詩「觀者皆歔欷、行路亦一一」

【嗚嗚】アア うたを歌ふ聲。史、李斯傳「擊ㇾ缻叩ㇾ甌彈ㇾ箏搏ㇾ髀、而歌呼一一快ㇾ耳目ㇾ、眞秦之聲也」

【嗢】チツ アツ 月 ○むせぶ（咽）○一噱キツは大いに笑ひて止まず。魏志、注「鍾繇得ㇾ書一噱」

【嗢咽】アツ 呑みてむせぶ。陸龜蒙詩「低ㇾ頭增二歔欷一、到ㇾ口復一一」

【嗢】㊀カク ㊁カウ 藥 肴 ㊀一一はきびしき貌。○きびしく大いなる聲。一說によろこび樂む。○熱に苦む意。㊁さけぶ、又、其の聲。莊、則陽「夫吹ㇾ筦也猶有ㇾ嗢也」○はやきこゑ、一說に、笛の聲。

【嗢噱】アツ 前條に同じ。

【嗢感】アツ 前條に同じ。

【嗢官】アツ 五官の一、にほひをかぎ別けるはたらきのある器官。＝鼻・嗅覺器。

【嗢神經】アツシン 鼻腔内の粘膜に分布して、嗅覺を司る神經。

【嗢】キウ 送 有 かぐ。＝嗅。

【嗢覺】アツ 鼻にてかぐかんじ。＝嗅感。

【嗢】ケフ 葉 ○あふ（合）○すふ（吸）

【嗢嗢】アツ いきをする。梅堯臣詩「一一氣蓋危」＝呼喘。

【嗹】㊀ケン 銑 ㊁ケン 豐 ㊂カン 銑 ㊃ケフ 葉 ㊀ふくみ、頬の中の食をほほばる處。○足らず、無し、腹に滿たず、穀升ばらず、食盡く。穀梁、襄二四「穀不ㇾ升、謂之一一」歉に通ず。○小さき貌。晉語「一一之德」註「一一猶ㇾ小小也」㊁へりくだる。＝謙。㊂ふくむ（銜）うらむ（恨）史、外戚世家「心一之而未ㇾ發也」㊃たる（足・慊）○かなふ（愜）こころよし（快）

【嗹嗹】アン ○小さき貌。晉詩「一一之德、不ㇾ足ㇾ說也」○へりくだりたる貌。漢書、藝文志、易之一一」

【嗹退】タン （りくだる。漢書、尹翁歸傳「溫良一一」＝謙退。

【嗹然】ゼン 快ㇾき貌。滿足する貌。荀、非十二子「一一而終日不ㇾ言」

【嗟】㊀サ ㊁シャ 禡 麻 通音 ㊀咄一ツはひといき。晉書、石崇傳「作ㇾ豆粥、咄一便辦」㊁あ（歎辭）「吝一」「吁一」○なげき、なげく（歎）痛く惜む。○となふ、たたふ（稱）

【嗟嘻】アア 嗟・嗚呼・吁・惡等の別は嗚（口部十畫）の條を見よ。

【嗟詠】ナイ　其の徳をほめうたふ。徐陵詩「遠近一一、貴賤順仰」

【嗟吁】サア　ああ、吾嗟咏歎の辭。薛都刺詩「我超二此慶一三一一、百年好醜皆虚無」

【嗟懼】クサ　なげきおそる。後漢書、梁冀傳「海内一一」

【嗟嗟】サア　○なげくこゑ。ああ。何遜詩「撫レ絃乏二歓娯一臨レ觴闕一一」○海中の怪物の鳴き聲「水經、河水、注」

【嗟吝】シナ　なげく。蘇軾詩「至レ今三十年、父老猶一一」‖吝嗟・嗟歎。

【嗟賞】サシヤウ　感歎してほめる。宋史、王質傳「見二其所レ爲文一一ニ一之」‖嗟稱。

【嗟稱】サショウ　感歎してほめる。李白詩「千金答二漂母一、萬古共一一」‖嗟賞。

【嗟惜】サセキ　なげきをしむ。宋史「若レ此練官、亦不レ可得、一一久之」

【嗟悼】サタウ　なげきいたむ。潘岳誄「聖王一一、詔二贈衮冕一」‖傷悼。

【嗟歎】サタン　感歎する。漢書、武帝親見二其創一、一ニ一之」‖嗟吝。

【嗟慨】ビン　なげきあはれむ。魏書、高帝紀「詔曰、百姓嗷然、朕用一一」

【嗟憤】サフン　なげきいきどほる。梁武帝檄「人神怨結、行路一一」

【嗟服】サフク　感心してしたがふ。後漢書、符融傳「一見一一」

【嗟來之食】サライ　ああ來りくらへと無禮なる態度にて與ふる食物。禮、檀弓「予唯不レ食二一一一一以至二於斯一也、從而謝焉、終不レ食而死」

【嗄】㊀サ　㊁アイ　卦　國

㊀こゑかる、しはがれごゑ。だみごゑ（濁聲）老子「終日號而聲不一、和之至也」○衆獣語にて感歎の「ああ」返事の「唯」の意に用ふ。㊁のほせる、氣逆上す。○泣き極まりて聲立たず。

【嗜】シ　眞

○たしなむ、たしなむ、たしなみ、殊に好む。○むさぼる（貪）

【嗜愛】アイ　たしなみこのむ。拾遺記「能去二滯慾一而離一一一」‖嗜好。

【嗜痂】シカ　痂はかさぶた、痂を嗜み食ふ。宋書、劉穆之傳「邕嘗謂二孟顗一曰、卿休先患二炎瘡一、嗜痂落在レ脉上、因取食レ之、卿体大無レ痂、未レ落者、悉宜取以飴レ邕」轉じて嗜好の當を失する者をいふ。

【嗜好】シカウ　たしなむ。たしなみ。宣和書譜「平居無二所一一一」

【嗜芰】シキ　ひしをたしみ食ふ。芰は菱の四角・三角のもの。國語「屈到一一一」

【嗜玩】シグワン　このみもてあそぶ。漢書、郭昌后紀「少一一一、不レ喜二筆誦一」

【嗜僻】シンヘキ　かたよりてすきこのむ。劉基詩「才疎乏二世用一、一一惟書史」

【嗜慾】シヨク　たしなみ好むこころ、たしなむ慾。淮南子「神清者、一一未レ能レ亂」

【嗤】シ　支

○わらひ、わらふ（笑）○あざわらふ、さげすみ笑ふ（冷笑）

【嗤易】イ　わらひあなどる、易はあなどる。‖嗤侮。

【嗤斬】シン　はづかしめてあざわらふ。唐書、李臨府傳「緩紳共一一一之」

【嗤笑】シセウ　あざけりわらふ。南史、王琨傳「莫レ不二擯掌一一一」

【嗤詆】シテイ　わらひのしる。唐書、姚崇傳「無レ論二曲直一、均受一一一一」‖笑罵。

【嗤鄙】シヒ　わらひいやしむ。

【嗤侮】シブ　わらひあなどる。‖嗤易。

【嗣】シ　寘

○つぐ（繼）うく、つづく（續）○よつぎ、相續人（後繼者）○ならふ（習）

（糸部十五畫）の條を見よ。

【嗣續】シゾク　能く前業を繼續するをいふ、祭の相臨ふ如きに喩ふ。宋書「絶叫高躍、久無一一一」

【嗣君】シクン　先君に嗣ぎて君たる者。左傳「將レ待一一一」

【嗣興】シコウ　前者につぎて盛んにおこる。書經「禹乃一一、天乃錫二禹洪範九疇一」

【嗣子】シシ　あとつぎのむすこ。禮記「大夫士之子、不レ敢自稱曰一一某」

【嗣人】シジン　あとつぎ。韓愈、柳子厚墓誌銘「是惟子厚之室、既固既安、以利二其一一一」

【嘗】　貧（口部十一畫）の俗字。

【嘏】シ・ク　魚

○をしむ（愛惜）やぶさか、しはし（吝）「吝一」○むさぼる（貪）○ひかえめにする。老子「治二人事一天莫レ如一一」○とりいれ、禾穀を收む。漢書、成帝紀「服田力一一」橋に通ず。○一一夫は貢物を受けて天子に上ることを司る官。又、天子の動物園などの小吏。又農夫をいふ。

（口部四畫）の條を見よ。

【嗒】タフ　合

○わする。○解體する貌。

【嗒然】タフゼン　心に懐ふことを忘るる貌。莊、齊物「一一似レ喪二其耦一」‖嗒焉。

【嗢】

嗢（口部八畫）の誤字。

【嘽】 テイ 齊

○なくゝ後漢書、梁冀傳「悲眉—妝」‖啼。○さけぶ(號)

【嗔】 ㊀テン ㊁シン 眞先

㊀—は氣の盛んなる貌。又盛んなる聲。‖闐闐。㊁いかり、いかる、憤怒する。‖瞋。

【嗔恚】シイ いかる、いかり、憤怒。大慈法數「—者、卽忿怒之心也、謂於諸衆生或於二違順境一不レ順二己意一心生忿怒也」‖同志。

【嗔怒】シン 怒りてののしる。馬融常詩「汝等莫—、我法、日未レ見二一一」

【嗔色】シン いかれるかほいろ(北史、劉庫仁傳)

十一畫

【嘔】 ㊀オウ・ウ ㊁オウ・ウ 有尤 ㊂ク 遇

㊀うたふ、うたふ。漢書、朱買臣傳「毋—道中」論に通ず。○こゑ(聲)○かたる。○よろこぶ(喜)㊁もどす、あげる、はく(吐)㊂よろこぶ。

同訓異字 嘔・吐・噴等の別は吐(口部三畫)の條を見よ。

【嘔啞】オウ ○小兒の語る聲。○なりものの音のかまびすしき貌。杜牧、阿房宮賦「管絃——、多二於市人之言語一」○車の聲。曹植詩「手推—車」

【嘔乳】オウ きしるおと。陸游詩「繅車—秋空曉」‖吟亂。

【嘔嘔】オウ ○よろこぶ貌。博雅「—喤喤、喜也」○物のこゑ。陸游詩「—啞啞車軸急」○のゝ和ぎ好みする貌。史、淮陰侯傳「項王言語—」

【嘔氣】オウ はきたき心地。

【嘔血】オウケツ ちをはく。後漢書「遼—兩鬢」‖吐血・喀血。

【嘔吐】オウ はく、あげる。

【嘉】 カ 麻

○よし(善・佳)よみす。○うつくし(美)うまし(旨)味うまきもの。○たのしむ(樂)○よろこぶ(喜)禮、禮運「交獻以—魂魄」○よみす、このむ(好)○さいはひ(幸)

同訓異字 嘉・善・好・佳・美・吉等の別は善(口部九畫)の條を見よ。

【嘉賞】カイ よみしあいする。後漢書、鄧皇后紀「動有二法度一帝深—一焉」

【嘉穎】カエイ めでたきいねなどの穂。拾遺記、炎帝時、神芝生二其異色一、號曰二—一」

【嘉獻】カケン 國を治むるよきはかりごと。書、君陳「惟有二嘉謀—一、則入告二爾后于內一」‖嘉謀・嘉猷。

【嘉蔬】カイ よき木かげ。蘇軾詩「幽人得二—一、露坐方揚酌」‖美蔭。

【嘉宴】カエン めでたきさかもり。水經、注「賓享二—一、是宜是觴」

【嘉好】カコウ よしみ、又、其の會。左傳「唯—聘享三軍之事、於レ是乎使レ卿」

【嘉殽】カコウ よきさかな。詩經「彼有二旨酒一、又有二—一」‖嘉肴・佳肴。

【嘉卉】カキ 美くしき草花。詩、小雅「山有二—一、侯栗侯梅」

【嘉氣】カキ めでたきけはひ。李商隱文「鼓舞雷動、—盈禹」‖瑞氣。

【嘉客】カキャク ほめよろこぶ。又、さいはひ。

【嘉儀】カギ いはひごと。めでたき儀式。

【嘉會】カカイ よき鳥獸。魏文帝詩「狩人獻二—一」

【嘉貺】カキョウ よきたまもの、人よりの贈物を敬ひていふ。錢起詩「長跪捧二—一」‖嘉賜・嘉錫。

【嘉魚】カギョ ○鯉に似たる一種の魚。宇宙「—一鯉質鮮鱗、肌肉甚美、出二于河南之丙穴一」○よき魚、魚の美なるもの。

【嘉玉】カギョク 宗廟の祭にそなへるよきたま。禮記、凡祭二宗廟之禮一、玉曰二—一」

【嘉耦】カグウ よきつれあひ。左傳「—曰レ妃、怨耦曰レ仇」

【嘉葉】カヨウ よきかをり。王融頌「燈賦開二遠照一、香字爲二—一」

【嘉禾】カカ ○穗のおほくつきたるめでたき苗。宋書「帝臨二在レ位、朱草生、—一秀、甘露降、醴泉出」○いね。‖嘉苗。○周公の作りし書名「書序」

【嘉會】カカイ めでたきあつまり。風流の會合。晉書、樂志「—宜レ洽」‖佳筵・佳會。

【嘉惠】カケイ よきめぐみ。左傳、敷二君之—一」

【嘉慶】カケイ よろこびめでたき事。魏志「兆民欣喜、咸樂二—一」‖休慶。

【嘉陵子】カリョウシ 李白の異名。韓愈「贈京兆記、「東都洛陽坊有二李樹一甚實甘美、爲二京都之美一、故稱二嘉慶子一」‖居易に詠ず——詩あり。

【嘉月】カゲツ 陰暦三月の異名。昭明太子、七契「韶二—一而結二交遊一」‖桃月・暮月。

【嘉言】カゲン よきことば。書、伊訓「聖謨洋洋、一一孔彰」‖善言。

【嘉悉】カシツ よきおきて。宋書、文帝裏皇后傳「魏國方安、一一警レ策」

【嘉穀】カコク ○其き穀物。○めでたき穀物。‖嘉禾。

【嘉績】カセキ よきとし。韋應物詩「山川降二—一、草木叢二潤澤一」‖豐年。

【嘉蔗】カシャ よきそなへもの、又よきさかな。吳志、孫登傳「賜二黃柑一笥一、—珍膳」韓愈、祭二神文「清酌—一、

侑以二音擊一以謝二神貺一」

【嘉實】カジツ　善き果物の實。黃庭堅詩「紅梅有二一一一」

【嘉辰】カシン　よき日。又、よき時。王筠詩「長絲殺二良節一、命緡應二一一一」‖佳辰・吉日。

【嘉祥】カショウ　めでたきしるし。漢書、宣帝紀「屢獲二一一一、非二聰知之任一」‖吉兆・休徵・嘉徵。

【嘉獎】カショウ　よみしてほめすすめる。晉書文「一一士倫、助二成世敎一」

【嘉種】カシュ　よき穀種。詩、大雅「既降二一一一、維秬維秠」‖善種。

【嘉肴】カコウ　よろしき肴。陳琳、鷂鵾賦「有二一一之合鳥一、含二一一之哀聲一」‖嘉良。

【嘉穀】カコク　○よき名。ほまれ。張載賦「庶二一一于百代一、信神人之所レ祝」‖佳稱。○ほめたたへる。

【嘉瑞】カズイ　めでたきしるし。春秋、哀、十四、注「麟者仁獸、聖王之一一也」‖吉兆・嘉祥・吉瑞。

【嘉慶】カケイ　よき喬慶のもりもの。李華、含元殿賦「王場内祓、則一一無レ倫、太陽臨照、而天下文明」

【嘉靖】カセイ　よく治め安んずる。書經「一一殷邦」‖安和。

【嘉招】カショウ　人の招を敬ひていふ。潘岳詩「微身輕二鴻毛一、翰冠忝二一一一」‖謙招。

【嘉績】カセキ　よきいさを。書經「一一多二于先王一」‖嘉勳。

【嘉蔬】カソ　よきそなへものの儀禮、士冠禮「甘醴惟厚、一一令芳」

【嘉知】カソ　よきそなへものを載せたるつくゑ。宋書、祖廟歌「醴酒具登、一一咸薦」

【嘉祚】カソ　よきさいはひ。隋書、音樂志「允矣一一、其升如レ日」‖休祚・嘉祉・嘉福。

【嘉蔬】カソ　○美き野菜。○稻の異名。

【嘉遯】カトン　よきめぐみ。李華文「人心上感、天降二一一一」‖嘉惠。

【嘉耦】カグウ　よきしあはせ。司馬相如文「成侯二一一一、隱レ有二岡道一矣」

【嘉釀】カジョウ　よきさけ。范成大詩「想得利川來歲好、瓦盆一一滿二慈甕一」‖佳醞・嘉醞。

【嘉賓】カヒン　よきまらうど。詩、小雅、鹿鳴「我有二旨酒一、以燕二樂一一之心一」‖佳賓。

【嘉服】カフク　吉事に着るきもの。左傳「以二一一一見、則發禮未レ事」

【嘉福】カフク　よきさいはひ。陸機詩「行矣保二一一一」

【嘉聞】カブン　よきほまれ。左、昭、二二「生有二一一一」‖令聞。

【嘉文席】カブンセキ　はなむしろ（花莚）

【嘉平】カヘイ　陰暦十二月の異名。しはす。史、秦始皇紀「更名レ臘、曰二一一一」

【嘉饌】カセン　よきはかりごと。書、君陳「一一一」‖美饌・嘉醞。

【嘉木】カボク　めづらしくよき木。郭璞、梧桐贊「桐實二一、鳳凰所レ棲」‖珍木・嘉樹。

【嘉味】カミ　うまきもの。中庸「酸鹹甘苦不レ同一一以濟、謂二之和羹一」‖美味・旨食・佳味。

【嘉名】カメイ　よき名。○驢騾「錫レ余以二一一」‖美名。

【嘉豐】カホウ　善き穂まれ。國語「合レ一一」

【嘉耦】カグウ　よし。蔡邕文「時惟一一」‖嘉偶。

【嘉例】カレイ　よきためし。‖吉例。

【嘉禮】カレイ　五禮即ち吉・凶・軍・賓・嘉の一にて、婚禮をいふ。又、めでたき儀式。周禮、大宗伯「以二一一一親二萬民一」

【嘏】カ　馬

○おほいなり（壯大）○とほし（遠大）○ながし（長大）○かた し（固）○さいはひ（福）○祭の時、福を主人に致すことば、祝辭。禮、禮運「修二其祝一」

【嘽】カイ　佳

嗐に同じ。一一は犬の噛まんとする貌。

【嘿】カウ　看

○大いなり、志大いなり、言大いなり。○おほらく貌。詩りて語る。

【嘿嘿】カウカウ　○志大いにして言大いなる貌。流、盡心「其志一一然」○雞のなく聲。元稹詩「雞亂聲一一」‖膠膠。○鼠の器物をかむ音。蘇軾、鼠賦「一一齧聲、牽在二窶中一」

【嘿嘿】カウカウ　鳥の鳴くこゑ。蘇軾詩「野鳥一一厭花春」

【嗷】ガウ　ゴウ　豪　又、聱に作る

○かまびすし（囂）。煩・熱に通ず。西京雜記「紛紜翔集、喈一一」

【嗷嗷】ガウガウ　○かまびすしく呼ぶ聲。愁

歎、九歎「聲ー一以寂寞兮」〇衆人の愁ふる貌。漢書、陳湯傳「下至三衆庶一ー一苦之」〇雁の鳴く聲。詩、小雅「鴻雁于飛、哀鳴ー一」‖鰥寡。【噭噭】キョウ かまびすし。周邦彦文「歌管ー一」‖喧噪。【噭訞】ガウ 強ひてうったへ出る。徒黨を組みて騒へる。

【噭】 ケウ 噭（前條）に同じ。

【噭厲】ケウ やかましく、さわがし。蘇軾文「民情ー一、如二晉鼓一長」

【嘎】 カツ 鴈 ーーは鳥の聲（廣韻）

【噓】 キョ 虞 御 ○ふく（吹）氣を吹き出すに急なるを吹といひ、緩きをーといふ。うそぶく。〇はく（吐）‖呼。〇ああ、歎息の聲。〇吹ーは俗語、稱美する義。‖揶揄。〇圖うそ（虚言）

【噓唏】キョ 太息してなげく。阮籍文「ーー傷レ氣」

【噓吸】キョウ いきをする、いき。延、大逝「執ーニー是一」‖呼吸。

【噓噓】キョ 〇雲などのいづる貌。蘇軾詩「ーー雲擁出、奕奕龍蛇結」〇いびきのこゑ。蘇轍詩「日高酣睡聲ーー」

【噓訑】キョ あたたかきいきを吹きかけてあたためる。淮南子「卵之化爲レ鷇、非二慈鳥ーー覆伏、累レ日積レ久、則不レ能レ爲レ雛」

【嘩】 譁（言部十二畫）に同じ。

【嘒】 ケイ 霽 〇聲いそがし、きびし、こゑ。（小聲）〇聲やはらぐ。〇かすか（微）なる貌。詩、召南「ーー彼小星」

【嘒嘒】ケイ 〇聲いそがし。詩、小雅「鳴蜩ーー」〇聲が和らぐ。詩、商頌「ーー管聲」

【嘄】 ケウ 篠 さけぶ上叫。

【嘄譟】ケウ さけぶ。漢書、伍被傳「如レ使二狂夫ーニー於東遲一」

【嘄】 クゥ 嘯 さけぶ（大呼）

【嘻】 ㊀コ ㊁コ 虞 遇 ㊀よぶ。‖呼。さけぶ（叫）〇淮（水部十一畫）に同じ。史、秦本傳「南有二沱易水一」㊁したうちしてしかる（咄嗟）孟、告子「ーー爾而與レ之、行道之人不レ受」〇よぶ、さけぶ。

【嘈】 サウ 號 豪 〇さわがし（騒）又、其の聲。〇かまびすし（喧）

【嘈嘈】サウ 聲さわがしき貌。王褒詩「雲閣何ーー、雷鼓鳴相和」‖嗷嘈。

【嘈嘈】サウ 聲さわがしき貌。白居易、琵琶行「大絃ーー如二急雨一」

【嘈雜】サウ やかまし、衆くの聲がまじりて刺ち難し。抱朴子「管絃ーー」

【嘖嘖】サク つづみの聲。又、やかましき聲。陸機、文賦「務ーーニ而妖冶」

【嘖噪】サク むれがやける、胃内醗酵ナイ

【嘖】 サク 陌 〇大いに呼ぶ、さけぶ（叫）〇あらそひ言ふ貌。〇かまびすし、多言なり。〇なく（鳴）〇いたる（至）‖願。〇はじめ（初）

【嘖嘖】サク 〇爭ひて口やかましき貌。顔含「ーー、爭言貌」〇口口にやかましくうはさする、稱賛して置かざる貌「好評ーー」〇鳥の聲の形容【爾雅、釋鳥】

【嘗】 シャウ ジャウ 陽 又嘗に作る 嘗は俗字

〇なむ、口に味ふ。〇こころみる（試）味ひてためす。〇ここ ろみに。〇かつて（曾）これまでに。〇秋のまつり、新穀をーーなむる義。かんなめまつり。【爾雅、釋天「秋祭曰ーー」

【同訓異義】嘗・嘗〇嘗はなむる、こころみる、などの義あり、もとからと謂す「俎豆之事、則嘗聞レ之」は、もとから聞きて知りて居るといふ意なり。〇嘗は字書に、猶ほ嘗の如しとあり、したちと謂す「不二嘗讀一」は、したち讀まぬなり、嘗は、嘗より意やや重し。

【嘗祀】シャウ かんなめまつり。今年の新穀をそなへて神をまつる。史、封禪書「四大冢鴻畤岐吳岳、皆有ニーー一」注「以二新穀一祭レ之」

【嘗試】シャウ こころみる、ためす。孟子「我雖二不敏一、請ーニーレ之」

【嘗試之說】シャウシノセツ 他事を借り、姑く試に之を爲す說をいふ。荀、王制「姦言姦至、——鋒起」

【嘗新】シャウシン 時節の食物の新に出でたる物を嘗む、孟夏麥を嘗め、季秋稻を嘗める類。禮、月令「孟秋之月、農乃登レ穀、天子ーレ」‖新嘗。

【嘗膽】シャウタン にがきものをなめる、復讐せんとして艱苦を忘れざる義。史、越世家「越王句踐反レ國、乃苦レ身焦レ思、置二膽於座一、坐臥仰

ル膿、飲食亦皆ル之也」宋史、李綱傳「強敵內侵、中國勢弱、此誠陛下一思レ報、厲精求レ治之日」

【嗟夫】フウ　人におもねりへつらふことの甚だしきにいふ。晉故事「人ノ醜詔恥ナキヲ言ヒテ一一之徒トイフ、唐ノ郭弘霸、侍御史トナル、時ニ大夫魏元忠病ム、僚屬省候ス、弘霸獨リ後ル、請ウテ便液ヲ嘗、即チ指チ染メテ嘗メ、以テ病ノ輕重ヲ驗ス、實シテ曰ク、甘キ者ハ病癒エズ、今味苦シ、當ニ癒ユベシ、患ナケント、元忠其ノ姻チ惡ミ、朝ニ暴語ス」吳越春秋には、越王句踐が入りて吳に臣たりし時、吳王疾あり、范蠡の計を用ひて、吳王の糞を嘗めて其の味の苦酸を知り、疾の瘳ゆることをいひたれば、吳王大に悅び、因りて赦されて歸りし事を載す、弘霸置し其の故智に倣ひしか。

【嗾】ソウ　ソク　屋　有

けしかける、口にて犬をけしかけ使ふ聲。左、宣二公一夫褰裳に轉じて、そそのかす、煽動敎唆するの北史、宋弁傳「爲二人所一レ」

【嗽】㊀ソウ　宥　㊁ソク　屋　㊂シュ　宥　通音ソウ　サク

㊀せき、せく（咳）しはぶく、しはぶき。㊁くちすすぐ、くちあらふ、本、漱に作る。㊂すふ（吮）史、倉公傳「日一三升」

【嗽吸】ガイ　せき。‖咳嗽。

【嗽藥】ヤク　うがひぐすり。‖含嗽劑。

【嘆】タン　寒　㒳

なげき、なげく（太息）「永一」‖歎。

【嘆嘆】タン　なげく。何遜詩「臨レ階獨一一」‖吾嗟・咨嘆。

【嘌】ヘイ　㒳　嘯

車の行くこと疾くして節度なし。詩、檜風「匪車一兮」

【嘛】マ　麻

喇一、敎は佛敎の一派。喇（口部九畫）を見よ。

十三畫

【噎】エツ　イツ　質　屑

むせぶ、むせび（飯塞）つまる（充塞）憂ひて十分に息する能はず。詩、王風「中心如一」

【噎嗚】エツオウ　○むせびてはく。蘇軾文「對レ案頻驚、擧レ斉一一」○笑ひ語る聲。韓愈文「笑喜一一」

【因レ噎廢レ食】インエツハイショク　むせぶ爲めに食ふことをやむ。小さき障の爲め肝要なる事を止むるに喩ふ。淮南、說林「有二以レ噎死者一而禁二天下之食一則悖矣」

【噁】㊀チ・ウ　遇　㊁アク　藥　㒳

㊀嘔一に怒る貌。㊁一一は烏のこゑ。

【嗥】カウ　豪

○ほゆ（咆）猛獸がほえる。○さけぶ。莊、秋水「兒子終日一、而嗌不レ嗄、和之至也」‖號。

【嗥叫】カウキョウ　さけぶ。北史「一一流涕」

【嘻】㊀キ　㊁キ　眞　支

㊀たのしむ（樂）○やはらぐ（和）○あゝ（歎辭）○ほめ（贊美）る聲。○なげく（歎息）こゑ。○いたむ（痛）かなしむ（悲）うらむ（恨）○おそ（懼）れて發する聲。○おどろきて怒る時の聲。○わらふ（笑）たはむれ樂みて笑ふ。○一一は自得の貌。㊁しひてわらふ（強笑）

同用漢字ア　嚱・嗟・嗚呼・吁等の別は嗚（口部十畫）の條を見よ。

【嘻嘻】キキ　○自得せる貌。揚雄、河東賦「一一旭旭」○たはむれ笑ひて樂む聲。戴、家人「婦子一一、終吝」

【嘻笑】キショウ　強ひて笑ふ。史、張其武安侯傳「夫怒、因一一耳、將軍首人也」

【嚶】キ　支

○くちゆがむ。○いつはり、いつはる。○みにくし（醜）

【嚘】キ　微　資

○すこしくくらふ（小食）司馬相如、大人賦「一瓊華」○なけく（唏）淮南、繆稱「號而哭、一而哀」○口みにくし（口醜）

【嚚】器（口部十三畫）の俗字。

【嚙】キツ　屑

○すふ「一氣」‖吸。○をさむ、をさまる（斂）

【嚫】㊀クヮイ　卦　㊁キ　寘

㊀いきづかひ。○なけく（太息）㊁喟（口部九畫）に同じ。

【嚫然】カイゼン　太息する貌。晏子、雜篇「一一而歎」

【嚫息】ソクイ　ためいきをつく。舞賦「明詩表相、一一激節」

【曉】 ケウ 蕭
おそる（懼）
【曉曉】ケウケウ 懼るる聲（詩、幽風）

【嘵】 サイ 卦
○一日にくひつくす（曲禮「無ㇾ炙」○かむ（噛）○相共に食ふ。孟、滕文公「蠅蚋姑ㇾ之」

【噲】 サウ シャク・ソウ 巧 宥
○市人の聲、かまびすし（喧）
○國語ニは食品の一。
【噲咊】ソウワ 鐘の聲。司馬相如賦「聲ㇾ一而似二鎗音一」

【噭】 サフ サン 咸 合
○ふくむ（銜・啣）○かむ（噛）
莊、天運「蚊虻ㇾ膚則通昔不ㇾ寐矣」

【噪】 シ 紙 本、訾に作る
○くちばし（鳥喙）○俗に口をいふ。○すべて物の斗出するものをいふ「山ㇾ」「沙ㇾ」

【噦】 噦（口部二十一畫）に同じ。

【噸】 セイ 霽

○いななく、いばゆ、馬鳴く。
○なく（鳴）馬臻詩「ㇾ鴻入ㇾ幽耳」○むせぶ（噎）○こゑ破れる、しはがれる。漢書、王莽傳「大聲而ㇾ」

【噴】 セツ 嗑
○ふく、うそぶく、口を窄めて聲を出す。○聲を長く引きて詩を歌ふ「長ㇾ」○はげしく聲を出してうなる「虎ㇾ」
【噴詠】セツエイ うそぶきうたふこと。馬融常詩「ㇾ一紙頗嬾、聖賢力或弱」
【噴歌】セツカ 詩歌をうたふこと。小雅「ㇾ一揚扢、念彼碩人」ㇾ吟嘯。
【噴兒】セツジ よびあつまれるもの。王深詩「築ㇾ壘防ㇾ一ㇾ」
【噴集】セツシフ よびあつめる「兒徒ㇾ一ㇾ」
【噴衆】セツシウ よびあつめる衆。唐書、北狄室韋傳「逐ㇾ水草而處、無ㇾ城郭、但相ㇾ一、非ㇾ畢去ㇾ」ㇾ嘯集。

【噳】 ㊀ セツ ㊁ セウ 屑 篠
㊀かむ（噛）かみこなす（嚼）○食ひて生活する者、たみ（生民）㊁嘯ㇾは鳥の聲。○きびし（急）禮、樂記「其哀心感者、其聲ㇾ以殺」
【噳殺】セツサツ 噳は急にしてかなしむ、殺は減り衰ふ。禮、樂記「ㇾ一之音作、而民思憂」

【噱】 ケツ 薛
おそる（懼）
【噱噱】ケツケツ 懼るる聲（詩、幽風）

【噭】 キヤウ 篠
○なく（鳴）馬臻詩「ㇾ鴻入ㇾ幽耳」○むせぶ（噎）○こゑ破れる、しはがれる。漢書、王莽傳「大聲而ㇾ」

【噸】 セツ 嗑
○ふく、うそぶく、口を窄めて聲を出す。○聲を長く引きて詩を歌ふ「長ㇾ」○はげしく聲を出してうなる「虎ㇾ」
【噸詠】セツエイ うそぶきうたふこと。馬融常詩「ㇾ一紙頗嬾、聖賢力或弱」
【噸歌】セツカ 詩歌をうたふこと。小雅「ㇾ一揚扢、念彼碩人」ㇾ吟嘯。
【噸兒】セツジ よびあつまれるもの。王深詩「築ㇾ壘防ㇾ一ㇾ」
【噸集】セツシフ よびあつめる「兒徒ㇾ一ㇾ」
【噸衆】セツシウ よびあつめる衆。唐書、北狄室韋傳「逐ㇾ水草而處、無ㇾ城郭、但相ㇾ一、非ㇾ畢去ㇾ」ㇾ嘯集。

【噴】 ㊀ セツ ㊁ セウ 屑 篠
㊀かむ（噛）かみこなす（嚼）○食ひて生活する者、たみ（生民）㊁嘯ㇾは鳥の聲。○きびし（急）禮、樂記「其哀心感者、其聲ㇾ以殺」
【噴殺】セツサツ 噴は急にしてかなしむ、殺は減り衰ふ。禮、樂記「ㇾ一之音作、而民思憂」

【噳】 ㊀ セツ ㊁ セウ 屑 篠
㊀かむ（噛）かみこなす（嚼）○食ひて生活する者、たみ（生民）㊁嘯ㇾは鳥の聲。○きびし（急）禮、樂記「其哀心感者、其聲ㇾ以殺」
【噳殺】セツサツ 噳は急にしてかなしむ、殺は減り衰ふ。禮、樂記「ㇾ一之音作、而民思憂」

【噣】 ソン 阮
○ふく、水を噴くく○沙ㇾはなまこ。ㇾ海鼠。

【噣】 ソン 阮
○ふく、水を噴くく○沙ㇾはなまこ。ㇾ海鼠。

【噺】 タウ 皓 或は調に作る
○あざける、輕蔑シてそしる。○あざけり。○たはむれる（戯謔）
【噺謔】タウギヤク あざけりおどける。謔はおどける。韓愈詩「ㇾ一思逸鮮」ㇾ嘲謔・嘲噺。
【噺戯】タウギ あざけりたはむれる。からかふ。南史「凡所二奏劾一、頗雜ニ一ㇾ」
【噺嘯】タウセウ あざけり笑ふ。陳瀜詩「祇自取ニ一ㇾ」ㇾ嘲笑。

【噺】 タウ 皓 或は調に作る
○あざける、輕蔑シてそしる。○あざけり。○たはむれる（戯謔）
【噺謔】タウギヤク あざけりおどける。謔はおどける。韓愈詩「ㇾ一思逸鮮」ㇾ嘲謔・嘲噺。
【噺戯】タウギ あざけりたはむれる。からかふ。南史「凡所二奏劾一、頗雜ニ一ㇾ」
【噺嘯】タウセウ あざけり笑ふ。陳瀜詩「祇自取ニ一ㇾ」ㇾ嘲笑。

【噺】 タウ 皓 或は調に作る
○あざける、輕蔑シてそしる。○あざけり。○たはむれる（戯謔）
【噺謔】タウギヤク あざけりおどける。謔はおどける。韓愈詩「ㇾ一思逸鮮」ㇾ嘲謔・嘲噺。
【噺戯】タウギ あざけりたはむれる。からかふ。南史「凡所二奏劾一、頗雜ニ一ㇾ」
【噺嘯】タウセウ あざけり笑ふ。陳瀜詩「祇自取ニ一ㇾ」ㇾ嘲笑。

【噺】 タウ 皓 或は調に作る
○あざける、輕蔑シてそしる。○あざけり。○たはむれる（戯謔）
【噺謔】タウギヤク あざけりおどける。謔はおどける。南史「文辭鄙野、多被ニ一ㇾ」
【噺戯】タウギ あざけりたはむれる。謔は戯。蘇軾詩「願君發ニ衆句一、一一破ニ天慳一」ㇾ調嘲・調謔。
【噺詬】タウコウ あざけりそしる。陸游詩「風波起ニ平地一、兩耳厭ニ一ㇾ」
【噺嗜】タウシ あざけりかまびすし。歐陽修詩「下ㇾ筆點竄皆ニ一ㇾ」
【噺嘆】タウタン あざけりわらふ。劉禹錫詩「時時一大笑、此必相ニ一ㇾ」ㇾ嘲哂・嘆笑。
【噺哂】シン あざけりわらふ。夏侯湛、東方朔贊「陵ニ轢卿相一、一ニ愛僕一」ㇾ嘲嘘。
【噺笑】タウセウ あざけりわらふ。竹葉詩「雖ㇾ無ニ酒醴一發ニ一ㇾ、亦有ニ談笑一恣搜抉」ㇾ調笑・嘲哂。
【噺誚】タウセウ あざけりそしる。晉書「一ニ士大夫一」
【噺嗚】タウヲ おどけをいふ。おどけ。劉志、費禕傳「捔權性好滑稽、一一輒ㇾ方」ㇾ諧謔・嘲詼・嘲誚。
【噺嘔】タウヲウ あざけりのしる。晉書、束晳詩「野僧餐不ㇾ慙、瑞筆相ㇾ一」ㇾ嘲詈。
【噺詈】タウリ あざけりのしる。曾鞏詩「衆口沸ニ一ㇾ」
【噺秀】タウシウ あざけりもてあそぶ。蘇軾詩「豈不ㇾ懷ㇾ歸畏ニ一ㇾ」

【曄】 ㊀タン 寒 ㊁セン 先 ㊂タン 寒 ㊃タン 翰 ㊄セン 銑 ㊅タン 翰

㊀あへぐ(喘息)○よろこぶ(喜)たのしむ(樂)○おほし(衆多)○閒暇、餘力ある貌。盛んなる貌。㊁ー暅は迂緩なる貌。又、怒りてむせぶ(噎)㊂ー暖はなく(泣)○ーーはおほ(衆)き貌。㊃ー嘽は聲ののびてゆるやか(舒緩)なる貌。○おそれ(慄)をののく。㊄ゆるやか(寬綽)なる貌。㊅ーーは喜び樂なことの盛んなる貌。【曄曄】ヨウヨウ ○喘息ゼンソクの貌。詩、小雅「我車ーー」○衆き貌。詩、小雅「我車ーー」○よろこびたのしむ貌。詩、大雅「徒御ーー」○盛んなる貌。又、閒暇、餘力ある貌。詩、大雅「王旅ーー、如ル飛如ル翰」【曄面】ヨウメン ○迂緩なる貌(列、力命)○怒りてむせびなく(揚子方言)

【嗽】 咳(口部八畫)に同じ。くらふ(嗽)＝咽。【嗽食】ソクショク くらふ。後漢書、安帝紀「更相ーー」【嗽粥】ソクシュク かゆをすする。

【嘯】 ブ 蕭

○はっきりせず。精明ならざる貌。○國さぞ。推量の意を表はす助辭「ーー寒からん」【嘯然】ゼン あいまいにしてはっきりとせざる貌。淡書、韓信傳「諸將皆ーー、陽應曰、諾」

【嘽】 モク 職

だまる、ものいはず。史、荊軻傳「荊軻ー而逃去」＝默。

十三畫

【曖】 アイ 泰

○いき(氣息)あたたかき氣。○國おくび。

【嘻】 ㊀イ ㊁アイ・エ 其 支

㊀あ、ああ、歎息の聲、痛傷の聲。論、子張「一言游過矣」未だ寤らざる聲。○なげく、なげき。㊁おくび、おくびす、食に飽きて息する。禮、內則「不ル敢噦ー噫ノ」【同論異音】アア 嚱・嗚呼・吁・咨等の別は嗚(口部十畫)の條を見よ。【嘻手】アア 歎息又は哀痛のこゑ。＝噫嘻。【嘻嘻】アア ○歎美のこゑ。詩、周頌「ーー成王」○痛み悲む聲。

【嘷】 ㊀エツ・チチ ㊁クツ・ケ 泰 月

㊀さくり、しゃくり(逆氣)○ゑづく、吐くに聲のみにて物出でず。㊁ーーは烏の鳴く聲の形容。又、徐かに行きて節度ある貌。馬につけたる鈴の聲。又、寬くして明かなる貌。【噦噦】クツクツ ○烏のこゑ。又、馬につけたる鈴の聲。詩、小雅「君子知止、鸞聲ーー」○寬くして明かなる貌。詩、小雅「ーー其冥」

【噩】 ガク 藥

○おどろく、おどろき。＝愕。○おごそか(嚴)【噩耗】ガクカウ 圖死去の知らせ。人をしておどろかしむるが故、耗は凶耗ケウ【噩噩】ガクガク 愿癡なる貌。法言、問神「周書ーー」【噩電】ガクデン 圖人の死を知らす電報。【噩夢】ガクム ○驚きて見るゆめ。周禮「二日ーー」＝惡夢。○圖不祥の夢。

【器】 キ 寘

○うつは、うつはもの、用具の總名「一皿」○はたらき(才能)禮、王制「百工各以其ー食之」きりやう、度量。論、八佾「管仲之ー小哉」○うつはにす。其の才能にしたがって使用する「一使」○一つの事に役立つもの。論、爲政「君子不ー」○たっとぶ、有用の人として重んずる「朝廷ー之」【器量】キリャウ 才能ありとして愛する。吳志、少綏惠有ー才幹、權ーニ之」【器異】キイ 才能ありて衆に秀でる(漢書、武帝紀)【器字】キウ 才能人品。人の倫與。晉書「風度宏遠、ーー高雅」【器械】キカイ ○うつは、道具。漢書「兵法曰、ーー不レ利、以二其卒一予ル敵也」○圖惡思の動作なきものに嚙よ。

「——的」

【器幹】キカン　才能のはたらき。

【器局】キキョク　はたらきと、どりゃうと。才識と氣度と。晉書、何充傳「充居二宰相一有二——一」

【器具】キグ　器物に同じ。

【器官】キクワン　動植物の體を構成して生活作用を司るはたらきあるだうぐ、人體の耳目鼻口の類。

【器玩】キグワン　もてあそびもの。歐陽修、日本刀歌「百工五種與レ之居、至レ今——皆精巧」＝玩具。

【器財】キザイ　いろいろの道具ダウグ＝器具・器物。

【器使】キシ　人を使ふに、其の才能の長ずる所によりて用ふること猶ほそれぞれの器を用ふる如くする。論、子路「子曰、君子易レ事而難レ悅、及二其使レ人也器レ之」蔡襄詩「豈無二人——一」

【器識】キシキ　器量と見識と。晉書、張華傳＝器局識見。

【器實】キジツ　器量と材質と。南史、柳元景傳「元景寡二言語一、有二——一」

【器什】キジフ　うつは、其の數一ならず、故に什といふ。＝器物・什器。

【器重】キヂウ　其の才器を重んずる。晉書、王羲之傳「深爲二從伯敦一導一所二——一」

【器直】キヂキ　さしがね。韻會小補「——曲尺也、梓人用レ之」

【器度】キド　心廣くゆったりとする。北史、楊津傳「少雄謹、以二——一見レ稱」＝度量。

【器二不レ匱一】キヲカラカズ　同じ器を二つ備ふるときは、用ふるに、不自由なし。左、哀六「君異二於器一、不レ可二以二——一、君二多レ難」

【器物】キブツ　うつはもの。儀禮、聘禮「賈二——一」＝器什・器具。

【器分】キブン　人人の才能性質などのちがへ。魏書、蕭寶夤傳「——定二于下一、辭位懇二于上一」

【器皿】キベイ　食品を盛るうつは。孟、滕文公「牲殺——、衣服不レ備、不二敢以祭一」

【器用】キヨウ　○はたらき。王褒、聖主得二賢臣一頌「夫賢者、國家之——也」○圖たくみ、上手。

【器量】キリャウ　○はたらきと、どりゃうと。蔡邕、郭有道碑「——弘深」○圖みめかたち（容色）

【噤】キン

キン　寝　沁

○つぐむ、口を閉ぢる。○ものいはず。

【噤吟】キンギン　口をつぐみてうめく。揚雄、解嘲「蔡澤雖二——一、而咲二唐擧一」

【噤口】キンコウ　くちをつぐみて言はず。史、日者傳「恨然——レ不レ能レ言＝閉口。

【噤凍】キンタウ　嚴寒の爲めに口のきかれぬ程こごえる。南史、王僧傳「嘗僕レ雇縛二諸庭樹一、時天夜雪、——久之」

【噤閉】キンヘイ　口をつぐむ。劉向、九歎「口——一、而不レ言」

【噱】キャク

藥

○大いに笑ふ、又其の聲。漢書、敍傳「談笑大——」○噱——は笑ひて止まず。○くちあく。

【噱然】キャクネン　大いにわらふ貌。

【噳】グ

遇

○多く相聚る。○笑ふ貌。

【噳噳】ググ　笑ふ貌。又、多くあつまる貌。詩、大雅「鮪鰋甫甫、鷹鸇——」

【噲】

㊀クヮイ　卦
㊁クッ　紇

㊀のど、のんど（咽）○——はこころよし（快）又、寛く明かなる貌。詩、小雅「——其正」㊁やつれる（憔悴）顏色が衰へる。莊、讓王「顏色腫——」

【噭】

㊀ケウ
㊁ケキ・キャク　篠・嘯　錫

㊀ほゆ（吼）○よぶ（呼）○さけぶ（叫）○——クヮウ——然は哭ケウする聲。○くち（口）㊁くらふ。＝喫。○聲はげし（激）

【噭慮】キョウリョ　さけびこたふ。曲禮「母二側レ——一」

【噭噭】ケウケウ　ほえ鳴く。杜甫詩「——來二九天一」＝嘷嘷。

【噭噭】ケウケウ　哀しみ鳴く聲。謝靈運詩「——夜猿啼」＝嘵嘵然。

【噭讀】ケウトク　衆くの聲が雜りてやかましい。韓愈文「高管——」

【噭然】ケウネン　なく聲。公羊、昭、二四「——而哭」

【噭咷】ケウタウ　○泣きさけぶ。漢書「望二見延壽車一、——楚歌」○小兒のなきて止まざる貌。

【噭破】ケウハ　どなりつける。＝喝破。

【噲】ゲン

霰　銑　獮

あぎとふ（喘）魚が口を水面にあらはして浮ぶ。淮南、主術「水濁則魚——」

【噲喝】ゲンカツ　魚の口の水上にあらはる貌。左思、吳都賦「——沈浮」

【噪】サウ

號

さわぐ、さわがし「鵲——」「蟬——」＝譟。

【噪音】サウオン　音樂の聲が雜り亂れて快からざるもの。

【噪聒】サウクワツ　かまびすし。劉基詩「——亂二語談一」

【噪蟬】サウセン　やかましくみだれ鳴くせみ。蘇軾詩「——聲亂日初曛」

【噬】ゼイ　㊐
○かむ(嚙)○くらふ(啗)○ついばむ(啄)○およぶ(逮)
【噬嗑】かみ食ふ、易の卦の名、離上震下。象傳「頤中有レ物、曰二ー嗑一、ー而亨」物の頤中にはさまるときは、害を爲す、齧み合はすときは、其の害亡びて亨通するをいふ。
【噬齧】かむ。埤雅「食相ー一、行無レ列、飲無レ順」
【噬臍】ほぞをかむ。ほぞをかまんとして口がとどかず、後悔しても及ばざるに喩ふ。左、莊、六「若不二早圖一、後君噬レ臍」齊・臍通ず。
【噬蠚】猛獣毒蟲などがかみつくと、さすと「北齊書、酷法和傳」
【噬臍】かみくらふ。王令詩「二ー著人衣」
【噬子】かみのむ。物を爭ひ奪ふ。柳宗元詩「孤鳳蜂蟻爭ー一」＝呑噬。

【噴】㊀セン　㊁タン　㊐㊑
㊀ものいふ(言語)○おほくいふ、しゃべる(多言)㊁ーーは煩はしき語。

【噣】㊀チウ・トウ　㊁タク・トク　㊒㊓
㊀くちばし、鳥の口(喙)咮に通ず。○星の名、一名は柳。㊁ついばむ(啄)

【噴】㊀ホン　㊁フン・ホン　㊒㊑　通音フン
㊀はく、ふく、氣を吐く。莊、秋水「一則大者如レ珠」○鼻を鼓ふす。○しかりつける(叱)㊁吹く聲。○しかる(叱)
同訓異字　噴・吐・嘔等の別は吐(口部三畫)の條を見よ。
【噴煙】煙をふき出す、ふき出すけむり。＝噴烟。
【噴火】火をふき出す「ーー口」
【噴火山】ヴルカン　現正より、火、又煙をふき出す山。＝火山。
【噴激】はげしく吹きあげる。孟郊詩「谷鏡相ーー、石怒爭旋廻」
【噴出】ふきでる。ふきだす。
【噴水】水をはく。又、ふき出づる水。拾遺記「此魚ーレ雨爲レ雲」
【噴雪】浪の白く立つ貌。李白詩「湖似二連山一ーレ來」
【噴泉】高くふき出す泉水、人工にてもつくる。＝飛泉。
【噴嚏】くさめ、はなひる。野客叢書「隨筆曰、今人ーー不レ止者、必云二有レ人說一レ我、按、詩鄭風、寤言不レ寐、願言則嚏、注、女思二我心一則嚏也、今俗人嚏云、人道レ我、此古之遺語、余觀二類要編風篇一、正有二此說一」
【噴嚔】ふきあがる。
【噴薄】ふき出す。湧き出す。李白詩「亂流爭二迅湍一ーー如二雷風一」
【噴飯】ふきだす。笑笑して口中の飯をふき出す。＝噴羹「東坡云、文與可見レ予詩云、料得清貧饒太守、消川千畝在二胸中一、不レ覺失笑、ーレ口滿レ案」
【噴吶】聲をあらくしてしかる貌。韓詩外傳「瞋レ目振レ腕、疾言ーー」
【噴霧器】きりふき、霧を吹き出す器械。

【噺】㊀カツ　㊁ワ　㊒㊑　雅・謔に通ず
○鳥の聲。＝噦。○ーーは鳥あひ和ぎ鳴く聲。又民の和ぎ服する義。

【噸】㊀トン　㊁タン　㊒㊑
はなし(說話)
【噸子】㊀國子㊁
【噸】㊀國子㊁
とん。英國の單目、我が二百七十一貫、九百五十匁強。

十四畫

【噎】アイ　㊒㊑
噦(口部九畫)に同じ。

【噶】カツ　㊒
○さけび、よぶ(叫呼)○なる(鳴)
【噶矢】かぶらや、鳴り響く矢、又、古は、かぶらやを發して、戰を始むるを例とす、故に事の始をいふ、をこり。莊、在宥「吾知二曾史之不レ爲二桀跖一ーー也」

【噱】カク　㊒㊑　通じて赫に作る　通音カク
○いかる(怒)又、怒りて發する聲。莊、秋水「噱得二腐鼠一、鵷雛過レ之、仰而視之曰、ー」○しかる(呵)叱りて拒む。○おどす「威ーー」○わらひごゑ(笑聲)
【噱噱】からからと笑ふこゑ。晉古詩「正月三日、田公笑ーー」
【噱怒】あらあらしくいかる。＝赫怒。

【噦】タツ・ワツ　㊒㊑
○よぶ(喚)大いに喚ぶ。○かまびすし、多言。○大いに笑ふ。○ああ、大いに驚きて歎息する聲。史、外戚世家「武帝下車泣曰、ー大姊何藏之深也」
【噦咋】猿が鳴き噪く聲。傅玄賦「威ーー而鼓噪」
【噦唾】口やかましき貌。史、信陵君傳「晉鄙ーー客前」一解に噦は大いに笑ふ、噦は大いに呼ぶ。
【噦噦】大聲を發してどなりつけ

る、又、多言の貌。柳宗元文「誹謗ー〻」

【嚅】ジュ　遇

○嚅ーはかまびすし(多言)又、言はんと欲して復ち縮む貌。韓愈、送李愿序「口將言而嚅ー」‖嚅嚅。○つぐむ(噤)

【嚅呪】ジュ　強ひて笑ふ貌。楚辭「將呪詛而媚俗ー〻以事二婦人一乎」

【嚌】㊀セイ　㊁カイ　往　蟹

㊀なむ(嘗)祭の肉をなめる。○ふつり、まつる(祭)㊁ーーカイは祭くの聲。班彪、北征賦「鴈雞鳴以ーー」

【嚌吉】セイ　哀シナみ怨む聲。趙非詩「肩レ書子レ劍出レ門去、ーー背復兒女如」

【嚌蔵】セイ　切りたる肉を食ふ。韓愈文「夫外棄徒レ業者、皆不レ造二其室一、不レ嚌二其蔵一者也」

【嚃】タフ　タイ　合　泰

すする(歠)曲禮「無ーー羹」ーー羹とは其の菜をかますしてこれをすすり呑む義。

【嚀】ネイ　青

ねんごろ(懇)寧に通ず。叮ーはねんごろに囑ぐむ辭。‖丁寧。

【嚊】ヒ　置

○はないき、喘息の聲。○國かか、かかあ(妻・女房)

【嚂】ラン　翰

○むさぼる、○食ふ貌。

十五畫

【嚶】イウ　庚

○啀ーは噛の未だ定らざる貌。○むせぶ(咽)○啀ーはなけく(歎)韓愈詩「佇立久啀ー」

【嚙】ガウ　巧

かむ(咬)骨を嚙む、‖齧。

【嚚】ギン　ゴン　眞

○話るこゑ。○おろか(愚)○言ふこと誠なし。書、堯典「父頑母ーー」左、僖二四「口不ー道。忠信之言謂ー」

【嚚瘖】イン　おしにて言ふこと能はず。

【嚚訟】ギン　言忠信ならずして爭を好む。書、堯典、帝曰、吁、ーー、可乎」

【嚥】エン　霰　又咽に作る

○のど、のんど(咽)○のむ(呑)呑みこむ。

【嚥下】カ　のみくだす、のみこむ。

【嚕】タン　寒　陷

くらふ、くらはす(啖)‖啗。

【嚢】キャウ　養

○むかふ、むく。‖向。○さきに(曩)○うく(享受)もてなしを受ける。漢書、宣帝紀「上帝嘉ー」○まど(牖)○ひびく。漢書、賈山傳「天下ーー應」‖響。○もてなす。‖饗。

【嚮】キャウ　養

○むかふ、むく。‖向。○さきに(曩)○うく(享受)もてなしを受ける。漢書、宣帝紀「上帝嘉ー」○まど(牖)○ひびく。漢書、賈山傳「天下ーー應」‖響。○もてなす。‖饗。

同訓異義　嚮・鄉・向・往○嚮・鄉・向は三字同じく、昔也と訓よ、さゝ程と訳す。○往は往日の義なり。

【嚮應】キャウ　響は響に通ず、響の速に應ずるが如く、速に應じて起る。李陵を見よ。後漢書、劉平公傳「海內嚮慕、爲ーー」

【嚮日】シャウ　○日にむかふ。左傳、注「猶レ傾レ葵ノー、以藏二其根一」‖向日。○さきごろ。‖往日・向者。

【嚮者】キャウ　さきに。列子「侍御猶ニーー之人一所レ垂猶ニーー之處一」

【嚮道】ダウ　○次條に同じ。○行軍に道路の險易などを偵察する者。孫子「不レ用ニーー一者、不レ知二地利一」

【嚮導】ダウ　みちびく。案内。又、案内者。‖鄉導。

【嚮背】ハイ　むかふと、そむくと。

【嚮赴】フ　むかひおもむく。漢書、敍傳「從レ諫如二順流一、趨レ時如ニーー一」

【嚮用】ヨウ　一心に任用する。宋史、黃幹「仁宗亦ーニーー之一」

【嚱】キ　支　○口中のこゑ。○嚱ーアは、驚歎の聲。

【嚴】㊀ゲン・ゴン　鹽　嚴　㊁ゲン　嚴　㊀おごそか。○いかめし（威）威ありて犯し難し。○からくきびし（苛酷）寛の反對。○つよし（毅）○致命急なり。○はげし（烈）甚だし「ー冬」「ー寒」○ただし（正）○たっとし、たっとぶ（尊）○はばかる、おそるる。孟、公孫丑「無ー諸侯」○つつしむ、つつしみ（敬）○いましむ、敵の侵入などを警戒して備へる（戒嚴）㊁儼に同じ。○國いつくし、うつくし。

【嚴威】ゲンイ　きびしくたけだけしい。傅、祭義「ー嚴格非ー爲ー人事ー親也」

【嚴苛】ゲンカ　きびしい。むごしい。漢書、張湯傳「ー深法ー」‖嚴酷・苛酷・殘酷。

【嚴寵】ゲンチョウ　車の用意を念がせる。曹植詩「僕夫早ー、吾將二遠行遊一」

【嚴家無二悍傭一】ゲンカムカンヨウ　嚴格なる家にはてあらくわがままなる奴僕なし。韓非、顯學「ー、慈母有二敗子一」

【嚴格】ゲンカク　きびしくしてつつしむ。後漢書、鄧禹傳「長ー師自重、而鄧禹先二ー一」‖嚴苛。

【嚴科】ゲンカ　きびしきおきて。徐陵裝「其宜ー歸二鄉閭一ー」‖苛法。

【嚴刑】ゲンケイ　きびしき仕置。晉書「處以二ー一」‖嚴罰・嚴科。

【嚴警】ゲンケイ　きびしくいましむ。又、きびしき警戒。齊書、東昏侯紀「陳顯達至ー都、宮城ー一」‖戒嚴。

【嚴恭】ゲンキョウ　おごそかにしてきよし。王儉文「聖心過恭、寢在ー一」

【嚴刻】ゲンコク　きびしくして殘忍。晉書「以ー一立ー功」‖嚴苛・嚴酷。

【嚴酷】ゲンコク　おごそかにしてきびし。漢書、鄧禹傳「長ー師自重、而鄧禹先二ー一」‖嚴苛。

【嚴格】ゲンカク　おごそかにしてただし。‖嚴正・嚴重・嚴格。

【嚴毅】ゲンキ　おごそかにしてつつしむ、意は謹。唐書「爲ー人ー一、以二威嚴一聞」‖嚴恪。

【嚴憲】ゲンケン　はげしくきむし。崔仲祥文「歎冬花於ー一」‖極寒。

【嚴毅】ゲンキ　おごそかにして志つよし。唐書「光弼、ー一沈果、有二大略一」

【嚴禁】ゲンキン　きびしくさしとめる、きびしき禁令。宋書「空立ー一」

【嚴紲】ゲンセツ　ひとや、牢獄。古、縲にて囚人を繋み逃亡を防ぎしが故。

【嚴君】ゲンクン　○父の敬稱。易、下象傳「家人有ー一焉、父母之謂也」‖嚴父。○嚴父はチャンフ父を尊ぶ。孝經、聖治「嚴ー父莫ー大二於配一天」

【嚴訓】ゲンクン　おごそかなるをしへ。盧諶詩「高祖俯加ー一」

【嚴科】ゲンカ　きびしきおきて。徐陵裝「其宜ー歸二鄉閭一ー一」‖苛法。

【嚴刑】ゲンケイ　きびしき仕置。晉書「處以二ー一」‖嚴罰・嚴科。

【嚴警】ゲンケイ　きびしくいましむ。又、きびしき警戒。齊書、東昏侯紀「陳顯達至ー都、宮城ー一」‖戒嚴。

【嚴恭】ゲンキョウ　おごそかにしてきよし。王儉文「聖心過恭、寢在ー一」

【嚴刻】ゲンコク　きびしくして殘忍。晉書「以ー一立ー功」‖嚴苛・嚴酷。

【嚴酷】ゲンコク　おごそかにしてきびし。漢書、鄧禹傳「長ー師自重、而鄧禹先二ー一」‖嚴苛。

【嚴苛】ゲンカ　はげしきしも。楚辭、九辯「秋既先戒以二白露一兮、冬又申ー之以二ー一」

【嚴師】ゲンシ　○師を尊ぶ。禮、學記「凡學之道、ー一ー爲ー難」○きびしき先生。

【嚴振】ゲンシン　おごそかに整ふ。史、日者傳「顏色ー一、未二嘗見一齒而笑一也」

【嚴飾】ゲンショク　ぞっとする程おごそか。宋濂詩「ー一五刑布二秋肅一」‖莊嚴。

【嚴親】ゲンシン　おごそかなるおや。司馬光詩「騎省侍ー一」

【嚴莊】ゲンソウ　おごそかにしてつつしむ。管子「人主者溫良寬厚、則民愛ー之、整齊ー一、則民畏ー之」‖矜莊・遑莊・齊莊。

【嚴將軍】ゲンショウグン　劉琨の將、嚴顏をいふ。文天祥、正氣歌「爲ー一頭」諫志「嚴顏爲二劉璋一守二江州一、劉備遣二張飛一擊二取巴蜀之地一、獲ー顏、飛呵曰、何不二早降一、顏曰、卿等無ー狀、侵二奪我州一、我州但有二斷頭將軍一、而無二降將軍一、飛將ー斬之、顏自若、飛壯而釋ー之」

【嚴霜】ゲンソウ　おごそか。宋史、吳廷燮傳「治ー宋ー一」‖嚴肅・嚴重・嚴莊。

【嚴峻】ゲンシュン　おごそかにしてきびし。史、酷吏傳「吏務爲ー一」

【嚴色】ゲンショク　顏色をおごそかにする、威嚴ある顏色。元倉子「高冠ー一」

【嚴正】ゲンセイ　きびしくただし。

【嚴正中立】ゲンセイチウリツ　交戰國の何れにも援助又は防礙をせず、嚴しく局外中立を守る義。

【嚴切】ゲンセツ　きびし。孔融文「明詔――、敕二州郡一」‖峻嚴・峻切。

【嚴然】ゲンゼン　おごそかにおもおもしき貌。威ありて犯し難きさま。

【嚴親】ゲンシン　おごそかなる親父。宋書「不レ可レ謂二―一嚴父一義一也」

【嚴達】ゲンタツ　國きびしく申し告げる、嚴重に布告する、又、其のたっし。

【嚴禁】ゲンキン　國きびしくかけあふ、強梗に禁制する。

【嚴重】ゲンヂウ　○嚴ありておもおもし。後漢書、寇安傳「安爲レ人―― 有レ威」○はばかりおもんず。史、游俠傳「諸侯以レ此―二之一」○ゲンヂウ　國きびし、いかめし、ぬけめなし。

【嚴程】ゲンテイ　きびしき日を限られたる官吏の旅。杜甫、送二長孫判官一詩「天子憂二涼州一―― 須三到早一」

【嚴朝】ゲンテウ　おごそかなる朝廷。後漢書「欲レ使二―― 必加二濫罰一」

【嚴凍】ゲントウ　嚴寒に同じ。

【嚴罰】ゲンバツ　○きびしくつみす。○きびしき刑罰。‖嚴刑・峻刑。

【嚴法】ゲンハフ　きびしきおきて。史記「―― 而刺刑」‖苛法・峻法。

【嚴敏】ゲンビン　きびしくしてさとし。宋史、薛奎傳「爲レ政―― 、擊斷無所貸」

【嚴父】ゲンフ　○父。宋書「孝レ之如二―一」‖嚴君。○父をうやまふ。孝經「孝莫レ大二乎―一」

【嚴武】ゲンブ　人名。唐書「―― 挺之子也、拜二劍南西川節度使一」酒賢、投二贈趙祭酒一詩「何幸獨重陽司業、―― 深憐杜拾遺」

【嚴猛】ゲンマウ　きびしくたけし。漢書、循吏傳「黃爲レ人―― 倘レ威」

【嚴密】ゲンミツ　ぬけめなくこまか（後漢書、郎顗傳）

【嚴命】ゲンメイ　きびしくいひつける。又、其の命令。史、趙世家「進愛二――一」

【嚴明】ゲンメイ　おごそかにして明か。漢書「徵爲二河南尹一、政稱二――一」

【嚴烈】ゲンレツ　きびしくはげし。唐書「所レ守―― 、僚吏畏レ之」‖嚴峻。

十八畫

【囂】　ケウ　ガウ　通　又噪に作る　通音　ガウ

○かまびすし、やかまし（喧譁）○さわがし（騷）○わづらはし。○おほし（衆）○―― は自得して欲なき貌、己の分に安んじて他を願はざる貌。又、おほき（衆多）貌。又、亟ひ歎く貌。

【囂囂】　頁に从ふ、首に作るは非。囂に靜なり、气、頭上に出づ、出に从ひ頁に从ふ、頁は首なり。

【囂囂】　ガウ　○聲のかまびすしき貌。詩、小雅「聽二我――一」‖驁驁。○自得して欲なき貌。孟、盡心「人知レ之亦―― 、人不レ知亦―― 」○馴き愛ふる貌。又、衆多なる貌。詩、小雅「讒口―― 」‖敖敖。

【囂競】　やかましく爭競して榮途を求める。北史「―― 無レ親、優游獨逸」

【囂譁】　かまびすし。韓愈詩「―― 所レ不レ及、何異二山中聞一」

【囂諠】　かまびすし。謝靈運詩「王子愛二清夜一、區中實―― 」

【囂然】　囂囂に同じ。

【囂塵】　やかましく塵多し。うるさきまちなかのけがれ。左、昭三「公欲レ更二晏子之宅一、曰、子之宅近レ市、湫隘―― 、不レ可二以居一」

【囂闐】　かまびすしくみちふさがる。孟郊詩「漢樓龍―― 」

【囂塵】　衆人がやかましくそしる。王融文「緇淺寮」廣、致二貽―― 」

【囂拘】　かまびすしくわづらはし。李白詩「再得レ洗―― 」

【囂紛】　かまびすしく、みだれる。失名詩「簫以隔―― 」‖囂然・囂煩。

【囃】　サフ　ソフ　合

○はやし、舞を助くる聲。○はやし。歌に合せて調子をとる鳴りもの。又歌無くして樂器のみにて奏する音樂。○はやす、言ひ立てる、評判する。

【囁】　シャク　葉

○かむ(齧)○かみ碎く「咀ー」○くらふ(食)○あぢはふ、翫味す、意味を了解する。

【噂味】シュク あぢをかみ分ける。蘇軾詩「嗅レ香ーレー本非レ別」

【噂噦】シュクワツ 甚だ味なき義。楞嚴經「味如レーレー」

【噂】セフ 葉

○咕ーはささやく、ひそびそばなし(耳語)史、魏其武安侯傳「乃效兒女咕ー耳語」○口動く。○かまびすし(喧)○ひそかにののしる(私罵)

【噂喏】詩言ひかけて口をつぐむ貌。韓愈、送二李愿一序「口將レ言、而ーレ」

【囀】テン 霰

○さへづる(鳥鳴)庾信、春賦「新年烏聲千種ー」○ひびき(韻)聲の轉ずるてうし。

十九畫

【囈】ゲイ 霽

○たはごと(戯言)○うはごと(譫言)夢中のとりとめなき言。○ねごと(睡語)

【囈語】ゲイ ねごと、たはごと。拾遺記「呂蒙常在二孫策座上一酣醉、忽夙夢中師二周易一部六俄而無起、衆皆冒、呂蒙ーー通二周易一」

【囋】㊀サツ ㊁サン 黠 翰

㊀嚙ーはつづみのおと。又、聲多し。㊁たすく＝贊讃。○言はずともすむことを無理にいふ。荀、勸學「問一而告二二、謂レーー」

【嚼】㊀サン・ザン 感 ㊁セン 儼 ㊂サン・セン 豏

㊀くちばし(喙)○すする(啜)㊁なむ(啗)○すこしくくらふ(小食)㊂あぢはふ(味)○なむ。

【囊】ダウ 皓

○ふくろ、小を嚢といひ、大を橐といふ。一解に底あるを嚢といひ、底なきを橐といふ。○ぜにいれ、財布。賀知章詩「一中自有レ錢」○ふくろにす、ふくろに容れる。○つつむ(括)

【傾囊】ふくろの中の金を盡く出す。雲笈七籤「雲笈寶璋、ーー相付」

【如レ探レ囊】甚だ易きに喩ふ。五代史、南唐世家「李毅曰、中國用レ書生相、取二江南一如レ探二囊中之物一耳」

【囊括】ふくろにいれて口をくくる、のこらず包み取る。實誼、過秦論「有下席二卷天下一、包二舉宇內一、ーー二四海一之意上」

【囊螢讀書】晉の車胤の故事。螢雪を見よ。

【囊沙之計】韓信が萬餘の土嚢を以て川の上流を塞ぎ、敵の川を渡らんとするを待ちて、之を決し、大に敵兵を破りし計(史、淮陰侯傳)

【囊錐】底ある嚢ロと、底なき橐ロと。詩、大雅「子レ橐子レ囊 思二戢用光一」

【囊中】ナウ ○さいふのなか。字解參看。○ふくろのなか。次條參看。

【囊中之錐】賢才は誰の囊中に在る如く忽ちに其の才鋒をあらはすに喩ふ。史、平原君傳「平原君曰、夫賢士之處レ世、譬若二錐之處二囊中一、其末立見」

【探二囊中之物一】事の甚だ容易なるに喩ふ。前の如レ探レ囊を見よ。

【囊中無一物】財布の中に一文の錢もなし。

【扣二囊底智一】ありたけのちゑをしぼる。晉書、慕容皝載記「謂二吳王曰、吾計決矣、且晉投レ老、――足二以盡二之、不レ復需二逆賊一以累二子孫一也」

【囁】テン 銑

わらふ、笑ふ貌。

【囁然】笑ふ貌。莊、達生「齊桓公ーー而笑」

【囉】ラ 歌

○歌の調を助くるこゑ。○小兒の語。

二十畫

【囂】

【囂】囂(廾部十一畫)の古字。

廿一畫

【嚕】

【嚕】讀(言部六畫)に同じ。

かむ(嚙)後漢書、孔融傳「猶二鳥嚕之相一」

【嚩】ソク 屋

○つける、たのむ(付託)○いひつける。

【囑託】シュク ○たのみまかす。抱朴子「不爲二利欲一動上不爲ニーー二屬上」○圖一時屬ひ入れて事務を委せ賴む、又其のたのまれし人。

【囑付】シュク いひつける。朱熹詩「更得二情調一新ーー、陶寒幅的有二餘韻一」

口部

【口】○圀(口部九画)の古字。○國(口部八画)の古字。○圀(口部八画)の古字。○圀(口部八画)の古字。○圀

面無レ子曰レ獨、此四者天下之窮民、而無レ告者」

【四凶】シキョウ　堯の代の四悪人、共工・驩兜・三苗・鯀らの称（書、堯典）左、文、十八「舜臣レ堯、賓二于四門一、流二一族濮敦・窮奇・檮杌・饕餮一、投二諸四裔一、以禦二魑魅一」

【四極】シキョク　四方の極遠の国。傅雅、釋地「東至二於泰遠一、西至二於郁國一、南至二於濮鉛一、北至二於祝栗一、謂二之一一極一」‖四裔・四至。

【四苦】シク　㊀生・老・病・死の人生の四つのくるしみ（法華經科註）之に愛別離苦・怨憎會苦・求不得苦・五陰盛苦を合せて八苦といふ。

【四苦八苦】シクハック　前條を見よ。

【四空】シクウ　四方のおほぞら。徐孝克詩「上宰明二一一」‖太空。

【四隅】シグウ　よすみ。淮南子「經二營一一」

【四君子】シクンシ　蘭・菊・梅・竹を氣高き君子に喩へていふ。

【四科】シカ　孔門の四種の學科。德行・言語・政事・文學。論、先進「德行、顏淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓、言語、宰我・子貢、政事、冉有・季路、文學、子游・子夏」朱注「程子曰一一乃從二夫子於陳蔡一者爾」

【四荒】シクワウ　四方の國のはて。漢書、賈誼傳「一一鄉レ風、百姓素朴」南雅「四方曾荒之國」‖四裔。

【四惡】シアク　〇政治家の四つの悪ふべきこと。後漢書、荀悦傳「致レ政之術、先屏二一一、一曰慢、二曰私、三曰放、四曰奢」〇人生の四つのうれへ。法苑珠林「一一謂二生老病死一也」‖四苦。

【四計】シケイ　處世上の四つの計畫。月令廣義「一日之計在レ晨、一年之計在レ春、一生之計在レ勤、一家之計在レ身」又「一年之計在レ春、一日之計在レ寅、一家之計在レ和、一身之計在レ勤」

【四參】シサン　琴・碁・書・畫。

【四教】シキョウ　〇詩・書・禮・樂の四つのをしへ。論、述而「子以二四教一、文行忠信」〇文・行・忠・信の四つのをしへ。論、述而「子以二四教一、文行忠信」〇女の四つの教、婦德・婦言・婦容・婦功。四行を見よ。〇㊀藏教・通教・別教・圓教「一一三密」

【四聲】シセイ　〇唐初の四文館、王勃・楊炯・盧照隣・駱賓王（唐書、王勃傳）〇元の柳貫・虞集・揭傒斯・黄溍を儒林一一といふ（解醒語）〇明の四文生（明史「逐貢與二李夢陽・何景明・徐禎卿一竝稱二一一」

【四書教】シショキョウ　王陽明が道を學ぶ心得として門人に授けし四句のをしへ「無レ善無レ惡心之體、有レ善有レ惡意之動、知レ善知レ惡是良知、爲レ善去レ惡是格物」

【四庫】シコ　唐の玄宗、兩都に各、書四部を聚め、甘（經）乙（史）丙（子）丁（集）を以て號とし、經史子集の四庫を列す（唐書、藝文志）清の乾隆三十七年、敕を奉じて、一一全書總目を撰す。

【四庫之書】シコノ　四庫を見よ。

【四顧】シコ　よもを見まはす。杜甫詩「下レ馬古戰場、一一但茫然」

【四劫】シコフ　㊀世界の成立より滅亡に至る四つの大いなる時期。成劫・住劫・壞劫・空劫。（大藏法數）

【四散】シサン　四方にみだれちる、おちこちに飛び去る。

【四支】シ　兩手兩足、支は肢。易、文言「君子黄中通レ理、正レ位居レ體、美在其中、而暢二於一一、發二於事業一、美之至也」‖四體。

【四至】シシ　四極に同じ。

【四肢】シシ　兩手兩足。轉じて、身體の義とす。荀子「如二一一之從一レ心」‖四支・四體。

【四始】シシ　〇正月元旦をいふ。史、天官書、注「一一謂二正月旦一歲之始、時之始、日之始、月之始」〇詩の四體。詩經、序「是謂二一一、詩之至也」疏「一一者、風也、小雅也、大雅也、頌也」

【四時】シジ　春夏秋冬。易、文言「與二一一合二其序一」‖四季。

【四時山色】シジサンショク　四時の山の色の形容。郭熙、山水訓「真山之煙嵐、四時不レ同、春山淡冶而如レ笑、夏山蒼翠而欲レ滴、秋山明淨而如レ粧、冬山慘淡而如レ睡」

【四時之序成レ功者去】シジノジョナルヲサル　人の功成り名遂ぐれば、退くべきに喩ふ。史、范雎・蔡澤傳、蔡澤曰、吁、君何見之晚也、夫一一」

【四詩】シ　〇前漢の時行はれたる四種の詩經、齊詩・魯詩・韓詩・毛詩。今は毛詩のみ存す（稗疏）〇詩經の中にある詩の四體。二南・國風・雅・頌。‖四始。

【四獸】シジュウ　四方の星宿の形を、動物に擬して名づく。經、曲禮「行前二朱鳥一（南）而後二玄武一（北）左二青龍一（東）而右二白虎一（西）」‖四神。

【四七之際火爲レ主】シチノサイカシュトス　四七は二十八なり、前漢の高祖より後漢の光武に至るまで二百二十八年、卽ち、四七之際なり、漢は火德、故に火を主とす。後漢書、光武紀「同舍生彊華自二關中一奉二赤伏符一曰、劉秀發レ兵捕二不道一、四夷雲一一、龍鬬レ野、一一」

【四十九日】シジフクニチ　㊀人の死後の日數を七日を以て累算し、第七回卽ち七七四十九日目（此の間死者の霊其の家に還るといふ）‖七七日。

【四神】シシン　天の四方の星の象、青龍（東）朱雀（南）玄武（北）白虎（西）「一一相應」‖四獸。

【四箴】シシン　視・聽・言・動の四つのいましめ。程頤の作りし文の名。小學外篇に出づ。

【四生】㊀胎生・卵生・濕生・化生。法苑珠林「此方他方、一一慈父」
【四象】㊀易の語。老陽・少陽・老陰・少陰「易、繫辭上」
【四捨五入】㊀数學にて四以下のはしたを切り捨て、五以上のはしたを繰り上げて算入する法。
【四衆】㊀比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の稱。
【四種三密】㊀四種は、摩訶・三昧耶・遍摩・羯磨、三密は身・口・意の三つに祕密神妙の悟ある義。
【四術】㊀術は道。先王の詩書禮樂の四道をいふ。禮、王制「樂正崇二一立四教一、順二先王詩書禮樂一以造レ士、春秋教以二禮樂一、冬夏教以二詩書一」
【四書】㊀大學・中庸・論語・孟子の稱。宋の程顥・程頤二子に始まる。
＝四子書。
【四書大全】㊀三十六卷、明の永樂中翰林學士胡廣等勅を奉じて撰す。
【四序】㊀春夏秋冬の次序。北齊書、文宣紀「分二一一一一綱二三光一」
【四職】㊀○國古の官名四つ。左京職・右京職・大膳職・修理職。○室町時代所司の職にありし四氏、山名・一色・細川・畠山。
【四重】㊀○次條に同じ。漢書「方今一一憂然」○四方に垂れる。詩經「八月在レ宇」毛義「屋一一爲レ宇」
【四陲】㊀國の四方のはて。陲は邊。
＝四裔・四境。
【四弄】㊀非田を四つ合せたるもの にて、邑の稱。周禮「一一爲レ邑」
【四姓】㊀○印度國民の四階級、婆羅門・刹帝利・吠舍・首陀羅。○四つのかばね。源氏・平氏・藤原氏・橘氏。
【四聲】㊀音韻の四種、平聲・上聲・去聲・入聲。東晉以後、文詞聲調を以て相尚ぶに、齊の周顒始めて一一切韻を作る。
【四善】㊀官吏の四つの善き行。舊唐書、職官志「凡考課法有二一一一一曰德義有レ聞、二曰清愼明著、三曰公平可レ稱、四曰恪勤匪レ懈」
【四戰之國】㊀四方に敵を受けて戰ふ國。史、蘇世家「趙一一也、其民習レ兵、不レ可レ伐」
【四則】㊀加・減・乘・除の四つの算法。
【四塞之國】㊀四方みな山河に塞がれて禦害よきくに。戰國策「齊南有二太山一、東有二瑯琊一、西有二清河一、北有二渤海一、此所レ謂一一也」史、蘇秦傳「秦一一、被レ山帶レ渭、此天府也」
【四諦】㊀佛明らめ悟にすべき四事、苦（生老病の數）集（骨肉財物の聚集）滅（寂滅止息）道（道を懷ひて修行す）大乘法數「一一者、諦卽審實之義、謂審聞之人、用二析空觀一、諦二審苦集滅道之法一、一一不レ虛、是名二藏教生滅一一一」
【四體】㊀兩手兩足。からだ。論、微子「一一不レ勤、五穀不レ分」禮記「一一既正、膚革充盈、人之肥也」＝四肢。
【四道】㊀國古、大學寮に設きし四つの分科、紀傳（歷史及詩文）明經（經義）明法（律令格式）算道（算術）
【四道將軍】㊀國崇神天皇の朝に全國四道に派遣せし鎭撫使、大彥命（北陸）武渟河別（東海）吉備津彥（西海）丹波道主命（丹波）
【四大】㊀○㊁四大種の略。四つの大元素、地・水・火・風。釋氏六帖「一一地水火風、亦名二大種一」○道・天・地・王の稱。老子「道大、天大、地大、王亦大、域中有二一一一而王處レ一焉」
【四大奇書】㊀明代小說の奇書四種。水滸傳・三國演義・西遊記・金瓶梅。
【四代】㊀虞舜と夏・殷・周三代の世との所稱。禮、學記「記曰、三王一一唯其師、其此之謂乎」
【四達】㊀四方にとどく。すみずみまでゆきわたる。禮記「一一而不レ悖」＝四暢。
【四端】㊀仁・義・禮・智の道のこぐち。孟、公孫丑「惻隱之心、仁之端也、羞惡之心、義之端也、辭讓之心、禮之端也、是非之心、智之端也、人之有二是一一也、猶二其有一四體一也」
【四知】㊀後漢の楊震、東萊の太守となり、昌邑を經、もと舉げし所の茂才王密湯見し、夜に至り金十斤を懷に遺る、震曰く、故人我を知る、君故人を知らざるは何ぞやと、密曰く、暮夜知る者なしと、震曰く、天知る、神知る、我知る、子知る、何ぞ知るものなしと謂はんと、密慙ぢて出づ（後漢書、楊震傳）
【四鎭】㊀○四方の藩鎭。杜甫詩「一一富二時賦一」○四つの重大なる名山、鎭は地纜をしづめる義。揚州の會稽山・青州の沂山・幽州の醫無閭山・冀州の霍山（周禮、大司樂、注）
【四杖制】㊀老人の杖につきての制度、五十は家に杖つき、六十は鄉に杖つき、七十は國に杖つき、八十は朝に杖つくことを得（禮、王制）
【四仲】㊀仲春・仲夏・仲秋・仲冬。
【四通五達】㊀諸方へ往來すべき便利ある地。史、鄭食其傳「陳留天下之衝、一一之郊也」
【四通八達】㊀道の四方八方に通ずる便利の地。子華子、問篇「齊之爲レ國也、其處所レ出、一一、遊士之所レ湊也」
【四鳥別】㊀四羽の鳥が其の母に別るといふ故事にて、母子相別るるにいふ。蒙求、顏回「桓山之鳥、生二四子一焉、羽翼既成、將レ分二于四海一、其母悲鳴而送レ之」

【四條流】シジョウ　圖○後嵯峨天皇より始まりし繁山法の一派。○圖山應舉の門人松村吳春より始まりし畫法の一派。‖四條派。

【四天】シテン　四時の天。爾雅「春爲二蒼天一、夏爲二昊天一、秋爲二旻天一、冬爲二上天一」

【四天王】シテンワウ　○佛東西南北を守る帝釋の外臣、東方持國天、西方廣目天、南方增長天、北方多聞天。法華文句「——者、帝釋外臣如二武將一也」圖○一將の部下に屬する勇士四人の稱「頼光——」○或る技藝に秀でたる四人の稱「和歌の——」「弓馬の——」

【四等親】シトウシン　ちすぢの親疎によりて第四等にあたる親族、高祖父・高祖母・從祖父姑（祖父の兄弟）從祖伯叔父姑（祖父の兄弟の子）夫の兄弟姉妹・兄弟の妻妾・再從兄弟姉妹・外祖父・外祖母・舅（母の兄弟）姨（母の姉妹）兄弟姉妹の孫・從父兄弟の子・外甥・外姪・曾孫・孫の妻。

【四德】シトク　○乾の四德、元・亨・利・貞（易、乾卦）○婦人の四つの德、言（辭令）德（貞順）功（絲麻）容（婉娩）（禮、昏義）

【四瀆】シトク　四つの大河。江（岷山より出づ）河（崑崙山より出づ）淮水（桐柏山より出づ）濟水（王屋山より出づ）をいふ。瀆はみぞ、川の義。禮、王制「——視二諸侯一」爾雅「江淮河濟爲二四瀆一」

【四配】シハイ　孔子の廟に配する四人、即ち、顏子（右）子思（右）曾子（左）孟子（左）‖四侑シユウ

【四方】シハウ　○東西南北の國國。書、大禹謨「——風動、惟乃之休」○四方の外國。論、子路「子曰、行レ己有レ恥、使二於——一、不レ辱二君命一、可レ謂レ士矣」‖四表・四向。

【四方竹】シハウチク　幹の四角なるたけ。

【四方之志】シハウノこころざし　○男子生れて四方に遠遊する志ある義。禮志、荀攸傳「天下方有レ事、而劉表坐保二江漢之閒一、其無二——一可レ知」○シハウ海內四方の記錄、周禮「令掌二——一」

【四方拜】シハウハイ　圖三大節の一。正月元旦の午前四時に、天子が清涼殿の東の庭に於て天地四方及山陵を禮拜して、其の年の災厄をはらひ淸祚ソクを祈りたまふ儀式。

【四旁】シバウ　前後左右、又、東西南北の稱。黃滔詩「青山環二——一」

【四寶】シハウ　筆・墨・紙・硯。明一統志「——堂在二徽州府治一、以二郡出二文房一一一爲レ義」

【四美】シビ　良辰・美景・賞心・樂事。王勃、滕王閣序「——具、二難并」

【四部】シブ　四方のあちこち。張華詩「群聖振二——一」

【四百四病】シヒヤクシビヤウ　四百四種のやまひ。五臟に各八十一の病ありとし、四百五より死を除きし數。千金方「——、同時俱發」

【四百餘州】シヒヤクよシウ　支那全國の稱。圖書編「義二省天下一——縣官」

【四分一】シブンイチ　圖銅に其の四分の一の錫を合せたる合金。‖圖銀

【四分五裂】シブンゴレツ　ちりぢりに分れさける。天下の大いに亂るる義。史、張儀傳「天下——」

【四不殺】シフサツ　修身治國の上に於ける四つの不殺。崔瑗、座右銘「無下以二暗塞一殺中身、無下以二貨財一殺中身、無下以二政事一殺中民、無下以二學術一殺中天下上」

【四勿】シブツ　孔子が顏回に教へたる、爲してはならぬ四つの誡。論、顏淵「非レ禮勿レ視、非レ禮勿レ聽、非レ禮勿レ言、非レ禮勿レ動」朱熹詩「顏生斬二——一、曾子日三省」

【四表】シヘウ　四方のそと。書、堯典「光二被——一、格二于上下一」

【四廟】シビヤウ　高祖・曾祖・祖・父のたまや。禮記「以二其祖一配レ之、而立二——一」

【四壁】シヘキ　家のまはりのかべ。史、司馬相如傳「家居徒——立」——立は、壁ばかりの貧しき家の義。

【四邊】シヘン　あたり。又、四方のまはり。張詠詩「官舍——多種レ竹」

【四輔】シホ　君主の左右前後に侍して輔佐する四つの官、左輔・右弼・前疑・後丞。禮、文王世子「設二——一及三公一」漢書、孔光傳「入稱二——一、出備二三公一」‖四近。

【四牡】シボ　馬車に屬する四頭のをうま。詩、小雅「——騤騤」箋「——者人君所二乘驅一」

【四孟】シマウ　四時の孟月、孟春・孟夏・孟秋・孟冬。

【四民】シミン　人民の四階級、士・農・工・商。書、舜典「司空掌二邦土一、居二——一、時二地利一」

【四面楚歌】シメンソカ　四方みな敵に圍まれたるをいふ。史、項羽紀「項王軍壁二垓下一、兵少食盡、漢軍及諸侯兵、圍レ之數重、夜聞二漢軍四面皆楚歌一、項王乃大驚曰、漢皆已得レ楚乎、是何楚人多也」

【四面受レ敵】シメンテキをうく　四方より攻め寄せらるる義。史、留侯世家「雖二萬乘一、有二此國一、其中小、不レ過二數百里一、固地薄、——、非二用レ武之國一也」

【明四目達四聰】メイシモクタツシソウ　廣く事物を見聞する義。書、舜典「詢二于四岳一、闢二四門一、——」

【四門】シモン　四方の門。書、舜典「流二共工于——一、——幽陵」

【四門學】シモンガク　唐代庶人を入學せしむる爲めに國子學郤ち大學の四方の門側に建てし學舍、其の教官を四門博士といふ。唐書、選擧志「有二文學史學一者、入二——一、爲二俊士一」

【四門博士】シモンハカセ　前條を見よ。

【四野】シヤ　四方の郊外。漢書、息夫躬傳

「環境由生。一一風起」阮籍詩「登ル高臨ニ一一」

【四鄰】シン　四方のとなり。又、四方の郷国。轅、楯弓「與ニ一一一交」

【四令】レイ　坐作・進・退の四つの規律、古代兵法の語。

【四禮】レイ　冠（元服）婚・喪・祭の四大儀（文中子）

【四靈】レイ　四つの神霊なる動物。麟、鳳凰、亀、龍。礼運「麟鳳亀龍、謂ニ之ー一一」

【四六判】バン　図　縦三尺六寸、横二尺四寸の西洋紙。又これを三十二に裁ちたる大いさの書物の型。縦六寸、横四寸あるが故。

【四六文】ブン　四字六字の句より成れる文章、六朝の頃盛んに行はる。四六騈儷の文。十駕齋養新録「駢儷之文、宋人或謂ニ之四六ー一」‖駢四儷六。

【囚】シウ　九。

○とらはれ、めしうど、つみびと（罪人）○とりこ（俘虜）○とらふ（拘）とりこにす、つなぐ（繋）牢獄に繋ぐ。○罪を裁判したる點。書、康誥「至ー一要ー一」‖獄舎。

解字 人、口中に在るに从ふ。

同訓異字 囚・俘・虜・禽　○囚はとらへて牢に入れ置くなり、囚徒と用ふ。○俘は軍にてとりことせし人なり、軍所ノ獲也と註す。○虜はいけどりにせし人なり。史記、註「生得曰ノ虜、斬ノ首曰ノ獲」○禽は擒に作る同じ、戦に勝ちて敵をとらへ、手どめにする義。孫子「小敵之堅、大敵之禽也」

【囚因】シウイン　囚人の罪を定むる。書、多方「ー一珍ニ戦多罪ニ亦克用勳」

【囚入】シウニフ　誤入をしらべる。漢書、何武傳「行ノ部ー一ノ一」同書、尚不疑傳「行ノ雅縣ニ囚徒」

【囚役】シウエキ　囚人に課する仕事。‖懲役。

【囚首】シウシュ　とらはれて牢につながれる。易林「身加ニ囹圄ー一ー束縛」‖囚人。

【囚獄】シウゴク　ひとや。‖牢獄・監獄。

【囚係】シウケイ　ひとやにつながれる、係はあしかせ。沈佺期詩「昆弟兩三人、相次俱ー一ー」

【囚人】シウジン　とらはれびと。‖罪人。

【囚首喪面】シウシュソウメン　頭髪をくしけづらざることと囚人の如く、面をあらはさざること喪に居るが如し。王安石の情を矯め俗に戻るをそしる語。蘇洵文「ー一面謁ニ詩書ー一」

【囚徒】シウト　とらはれびと。

【囚縛】シウバク　とらへしばる。李綱詩「更遣ニ韓彭孥ニー一ー」‖囚繋。

【囚繋】シウケイ　とらはれて牢につながれる。郊祀詩「重負遭ニー一ー」‖囚繋。

【囚俘】シウフ　とりこ。‖囚俘・俘囚。

【囮】

国は俗字

○よる（仍・依・猶）もとのままに従ふ。論、爲政「殷ー一夏禮」○ちなむ、ちなみ「ー一緣」○ゆかり（縁）○依り親む。論、學而「ー一不ー一失ー一其親」○就く。たよる、たのむ（託）孟、公孫丑「時子ー一陳子ー一以告孟子」○たより（便宜）○よりて、ちなみて。○そこで、さうして。○おこり、もとづく、由る「原ー一」○わけ（理由）○頻に通ず。

同訓異字 因・自・從・由・緣・仍等の別は自（部首六畫）の條を見よ。

【因依】インイ　互にたよりあふ義。王昌齡詩「衆賊相ー一ー」

【因由】インユウ　事のおこり。‖原因・由來・原由。

【因緣】インエン　○佛ゆかり、いんねん、今生ぜし事に對する以前の關係。果報の對。名義集「尼陁那、此云ニー一ー」○つて、機會。史、田叔傳「未ノ有ニー一ー」

【因應】インオウ　私意を用ひずして、自然のままにまかせる。史、老子傳贊「老子所ノ貴道、虚無ー一、變ニ化于無爲ー」

【因果】インクワ　○佛因緣と果報と、過去の因緣より生ぜる現在の果報。現在の因緣より生ずる未來の果報。華嚴經「察ノ果知ノ因、譬如下蒲花方ニ其吐ニ花、而果具ニ藥中ー上」○哲學にて原因と結果と。○因窓しき運命ノ下に惡因のむくい。

【因果應報】インクワオウホウ　善因には善果、惡因には惡果あり、因と果と互に相應にてたがはざるをいふ。法華經、方便品「如ノ是因、如ノ是緣、如ノ是果、如ノ是報」

【因緣】インエン　○佛因緣となる惡事。劉勰文「佛以ニ大慈一救ニ諸苦一、憫ニ起ー一、故劫濁而從ニ來ー上」○因いろいろ、かたくな・頑固。

【因子】インシ　數學にて多くの數を順次に乘じて得たる積に對して、其の乘じたる數をいふ。‖因數。

【因襲】インシフ　ならはし。これまでのしきたりにより從ふ。劉歆、移ニ太常博士ー一書「仲尼之道又絕、法度無ノ所ニ一ー一ー」

【因循】インジュン　舊習を守り、ぐづぐづして遷らず。漢書、循吏傳「ー一守ノ職、無ノ所ニ改作ー一」

【因數】インスウ　數學にて乘積を生ずるもとの二數。‖因子。

【因明】インミョウ　五明の一、印度に起りし論理學、宗（斷案）因（小前提）喩（大前提）の三支作法によりて事物を究む。大論「ー一考ニ定正邪ー一研ニ覈

【回】 ㊀ クヮイ・エ 廻は正字、囘は俗字 ㊁ クヮイ・エ 廻

㊀めぐり(周囲)「周ー」○めぐる、めぐらす「一転」○かへす、かへる(返)もとにもどる。○よこしま(邪曲)「私ー」「姦ー」詩、小雅「其徳不ー」○ひがむ(僻)○かがむ(屈)○たがふ(違)○たび(度数)俗に一次を一ーといふ。○小説などにて一篇を一ーといふ。㊁とほまはり「迂ー」「紆ー」○さく(避)忌み避ける。「避ー」

【回互】クヮイゴ 同・帰・遶・還・遷・周等の訓は(正字通十四画)の條を見よ。

【回環】クヮイクヮン 同・帰・遶・還・遷・周等の訓は統(系部十二画)の條を見よ。

【回旋】クヮイセン めぐりうつる。張衡文「霜鴻ー一」

【回避】クヮイヒ 諸藏を避置する者の為めに出す汽車又は電車。

【回紇】クヮイコツ めぐりまはる。沈約「桂舟既容與、綠浦復ー一」‖紆回。

【回易】クヮイエキ 商人が物品を交易する。

【回漕】クヮイサウ ‖運漕綱目」‖貿易。

【回道】エクヮイ 道がまがりくねりて遠し、迂回にして遠道。史、李將軍傳「東道少ー一」

【回改】クヮイカイ かへしあらためる。南史、孝義傳「執ノ志終無ニー一」

【回航】クヮイカウ 諸方の港をめぐり航する。‖廻航。

【回看】クヮイカン ふりかへりてみる。王維詩「ー一射ノ鵰處、千里暮雲平」‖回顧。

【回忌】クヮイキ ○いみさける。唐書「上子無ニー一」‖回避。○人の死後めぐり来る忌日「七ー一」‖年忌・年回。

【回帰線】クヮイキセン 赤道の南北、各緯度二十三度二十八分の所に引きたる假定の線、太陽が一年に一回此間を往復してもとにもどるが故。北の線を夏至線、南を冬至線といふ。

【回帰熱】クヮイキネツ 一定の時間を置きて熱の高下する熱病、マラリア熱・間歇熱ケンカツネツ

【回帰年】クヮイキネン 春分より次の春分に至る間の時日。‖太陽年。

【回向】クヮイカウ ○光明ある線。張衡賦「幾ー一其揚ノ光」○亜剌比亜のマホメットの開きし宗教。‖回教。

【回回藥】クヮイクヮイヤク 番草、きつねのぼたんの異名。

【回題】クヮイコ ○ふりかへり見る。‖道想・回看。○ふりかへりて思ふ。‖回想・追懐。

【回紇】クヮイコツ 次條を見よ。

【回鶻】クヮイコツ 四城の部落の名、魏の時に高車部、隋の世に鉄紇又は回紇といふ。唐書、回鶻傳「建中元年、請易ニ回紇一、曰ニー一」

【回想】クヮイサウ 昔のことをおもひまはす。‖回思・追想・回顧。

【回漕】クヮイサウ 貨物を舟にて運び送る。

【回漕問屋】クヮイサウトヒヤ 回荷主と海運業者との間に立ちて、荷物の運漕を取扱ふ営業者。

【回収】クヮイシウ とりもどす。

【回子統】クヮイシユウ びろうど。‖天鵝絨。

【回邪】クヮイシヤ よこしま。史記「ー一不レ正」邪一に姦に作る。‖邪曲。

【回翔】クヮイシヤウ 鳥がとびかける。傅休奕詩「雙魚自踴躍、兩鳥時ー一」湘中記「衡山有ニ懸泉ニ瀉ニ壑間ニ、巻洛如レ綫、有ニ白鶴ニ一ニ一其上ニ一」

【回首】クヮイシユ ふりかへりて見る。‖回顧。

【回春】クヮイシユン ○春にたちもどる。○病おもほる。

【回書】クヮイシヨ 書信への返事。夢渓筆談「使人不ニ肯去ニ須レ資ニー一」

【回生】クヮイセイ よみがへる「起死ー一」‖蘇生。

【回旋】クヮイセン めぐりまとふ。北史、陸逸傳「馮衣性清儉、後隠ニ居嵩山ニ一年、焚燎之日、有ニ紫雲一翥ニー一其上ニ一、自レ地屬レ天、彌レ朝不レ絶」同書に廻に作る。

【回雪飄】クヮイセツヘウ 舞妓の軽妙なる形容。曹植、洛神賦「飄颻兮若ニ流風之回レ雪」

【回護】クヮイゴ まげたわめる、非真を曲げる。

【回答】クヮイタフ かへりごと、返事。

【回天】クヮイテン 君主の心を挽き回す。後漢書、張玄素傳「陛微猷曰、張公論レ事、有ニー一之力、可レ謂ニ仁人之言、其利博ニ哉」

【回転】クヮイテン まはる、まはす、めぐる、めぐらす。

【回頭】クヮイトウ かうべをめぐらすこと、頭をふりかへす。‖回首。

【回避】クヮイヒ ○よける、忌みて避ける。後漢書、袁安傳「無レ所ニー一」○法律上の語、訴訟事件にて、判事又は書記が嫌疑を招く事情ありし時、きけて其の審理に關係せざる事。

【回避】クヮイヒ 天子の御かへり。蹕は道路を警戒するさきばらひ。行幸錄「急レ蹕見レ之」

【回復】クヮイフク かへる、もとどほりになる。陶潜詩「ー一遂無レ期」

【回纏】クヮイヘン つむじかぜ。曹植詩「何意ー一摩」‖旋風センプウ

【回毛】クヮイモウ つむじ。白雅「ー一在レ背」

【回廊】クヮイラウ めぐれる廊下。沈佺期詩「ー一遶ノ亭二危峰一」

【回覧】クヮイラン 一つの物を衆人が順送りにまはして見る。又其のこと。

【回欄】クヮイラン まがれるてすり。温庭筠詩「蓬萊宮闕赤ー一」

【回環】クヮイクヮン めぐりまとふ。庾信賦「山林幽映、川澤ー一」

【回眸】クヮイボウ こよみがひとめぐりす

る、新年になる義。‖改曆。
【囘祿】クワイ　火の神。轉じて、火災の義。左、昭十八「子產禳二火于玄冥一」玄冥は水の神。
【囘向】カウ　佛○己が功德を他にめぐらし向はしむ。讀經、念佛によりて亡者の冥福を祈る。止觀「囘二衆善一向二菩提一」○一一院は寺の名。唐書、后妃傳「乞下以爲二一一院一」

【囘】

囘（前條）の本字。

【囵】

シン　眞　圓

をどり、ひよめき、小兒の頭上の微に動く所、頭會の臘蓋、頂門。

四畫

【囫】

圇（水部八畫）の古字。

【囮】

クヮ　ゲヮ　歌

○をとり、生鳥を繫き置きて他の鳥を誘ひ來す（鳥媒）○かはる（化）
【囮青】イクワ　うまれそだつ。元包經「草類一一、庶物生植」
【囮鳥】イクワ　をとり。

【囲】

圍（口部三畫）の俗字、一說に、面の古字。

【元】

グヮン　寒

へる、つぶれる、角の磨滅するにいふ。‖刓。

【囧】

ケイ　キャウ　梗

○あきらか（明）窗のあかり。○ひかる（光）
【囧囧】ケイ　ひかりかがやく貌。韓愈詩「蟲鳴室幽幽、月吐牕一一」‖熠燿。

【囯】

國（口部八畫）の俗字。

【囫】

コツ　月

俗に物の完きを一圇（リン）といふ。‖渾侖。

【困】

コン　阮

○くるしむ、くるしみ、くるしめられる（苦）○なやむ（煩）○つかる（梓）倦み極りて力乏し。○こまる、きはまる（窮）生活に窮する。通ぜず。○みだれ、みだる（亂）へ晉、子智「不爲二酒一困」○うれふ（憂愁）○易の卦の名、坎下兌上。
【困木】木が口中に在りて伸ぶることを得ず、困窘する所以なり。
【困學】カク　さとり難しく心に困みて學問する。論、季氏「困而學レ之、又其次也」
【困學紀聞】キブンカク　二十卷、宋の王應麟の撰、經史子集の考證を劄記す、援據精博にして、宋人考證の書の上乘とす。
【困窘】コンキン　こまり苦む。貧になやむ。論、堯曰「四海一一、天祿永終」
【困苦】コンク　こまりくるしむ。素經、傷「民者嗟爰然、病レ水一一」
【困塞】コンソク　くるしみてまづし。文中子「蛟龍困二於蟻一、昏主困二於酒一」
【困鳳】コンフヮン　つかれてねる。蘇軾詩「同遊一一九曲潭、寒レ衣聞到吳王豪」
【困媧】コンクヮ　くるしみて貧しく物がつきてなくなる。後漢書、順烈梁后紀「賦斂煩數、官民一一」
【困踧】コンシュク　くるしみてつまづく。‖困蹙。
【困獸】コンジウ　人に逼られてくるしむ獸。次條を見よ。
【困獸猶鬪】コンジウユウトウ　くるしむときはけものすら戰ふ。困獸は二字熟語としても讀む。左、定、四「一一、況國相乎」‖窮鼠齧レ猫。
【困塞】コンソク　くるしみせまる。金史、賊勿一一、且無二降意一」‖困窮。
【困縛】コンバク　くるしみてとぼし。史記「軍亦有二天幸一、未二皆一一一也」‖困乏。‖困窮。
【困窮】コンキウ　くるしみつかれる。莊子「處二窮閭陋巷一一一綴レ屨」‖困窮。
【困御】コンギョ　くるしむ、こまり入る。御は却の正字。
【困敝】コンヘイ　つかれくるしむ。國雅、傷「時有二一一一一」
【困躓】コンチ　くるしみつかれる。陸田錄「財用匱乏、公私一一」‖困頓。
【困厄】コンヤク　○わざはひ、災難。○くるしむ、難儀する。‖困阨。
【困阨】コンヤク　なんぎ、くるしみ。史、荒雖・蔡澤傳「二子不二一一一、惡能激手」‖困厄。
【困約】コンヤク　くるしみてまづし。史、祢

世家「晉文公古所謂明君也、亡居ㇾ外十九年、至二ー一一」【困阨】コンアク　なんぎくるしみ。阨は阨。＝困厄。【困倦】コンケン　くるしみてものうし。癸辛雜識「病ㇾ酒而ー一」

【囥】㊀サウ・ソウ　江　㊁ソウ　東　俗に窓に作る

㊀まど（牖）窗に在るを牖、屋に在るをー といふ。㊁けむりだし（竈突）

五畫

【困】キン・コン　眞　キン・ゴン　慁

○こめぐら（米廩）囲きをー、方なるを倉といふ。○輪ーはまがりくねる貌。漢書、鄒陽傳「蟠木根柢輪ー離奇」【困ㇾ窮】コンキュウ　くらに貯へたる米を盡く出す。韓愈文「倒ㇾ廩ーㇾー」＝倒窮。【困倒】コントウ　前條に同じ、有りたけの財産をもち出す義。宋史、趙瓦淳傳「入貲ーㇾー以應ㇾ之」【困困】コンコン　くるくるまはろ貌。杜牧、阿房宮賦「鉤心鬬角盤盤焉、ーー焉」【困倉】コンサウ　こめぐら。次條に同じ。禮記「修ニーー一」【困廩】コンリン　こめぐら。揚雄臣箴「ーー見ニ餘積一」

【囚】シュウ　尤

○かたし（堅）ぢゃうぶ。○いやし（陋）○かたくな。一を執りて通ぜず。孟、告子「哉高叟之爲詩也」○かたまる、かたくなる。晉語「國以可ー」○かたむ（警備）○かため（險要守備）要害よし、城郭が完くして堅し。論、季氏「一而近於費」○もと、もとより、まことに、いふまでもなし。○蓋だしく、切に「ー請」「ー辭」○病久しく治せず、痼・錮に通ず。

同訓異字　固・本・原・元・故等の別は本（木部一畫）の條を見よ。

【固有】コユウ　もとよりある。孟、告子「仁義禮智、非ニ由ㇾ外鑠ㇾ我也、我ーニ一之一也」【固有名詞】コユウメイシ　文法上の用語、其の人其の事物のみが特に有する名こと。孔丘・泰山の類。人・山等を普通名詞といふの對。【固陋】コロウ　てづよくいさめる。左傳「ーー不ㇾ聽」【固窮】コキュウ　もとよりいふまでもなくくるしむ。論、衛靈公「君子ーー」一解に固く困窮を守りて天命に安んずる義。【固拒】コキョ　かたくふせぐ。漢書、劉歆傳「深閉ーー」韓愈、送ニ少室李拾遺一書「卽可ㇾ爲之時、自藏ニ深山一、牢關而ーー、卽與ニ仁義者一異ㇾ守矣」【固形體】コケイタイ　固體に同じ。【固結】コケツ　かたくむすびあふ。東京賦「洪恩素蓄、民心ーー」【固塞】コサイ　堅固なるとりで。史、韓安國「ーー不ㇾ樹、機變不ㇾ張」【固辭】コジ　再び辭する。かたくことわる。書、大禹謨「禹拜稽首ーー」【固疾】コシツ　久しく癒えざるやまひ。後漢書、皇甫規傳「臣素有ニーー一、惡ニ犬馬齒窮不ㇾ報ニ大恩一」＝痼疾・宿病。【固執】コシツ　己の意見を固く執りて下らず。禮記「識ㇾ之者、擇ㇾ善而ーーㇾ之者也」【固守】コシュ　かたくまもる。庾信賦「箱上屯軍、鴻門ーー」【固請】コセイ　しきりに願ふ、切に請ふ。【固體】コタイ　強く固まりて一定の體形を有する物。液體・氣體の對。＝固形體。【固持】コヂ　かたくもちこたへる。固く維持する。＝固守。【固著】コチャク　かたくつく、かたまりつきて離れず。【固定】コテイ　かたまる、定まりて動かず、永く保存すべきもの。【固定資本】コテイシホン　經濟學にて生產のもとでとなり幾回となく使用せられ、漸次に減りゆくもの、貨幣等の流動資本に對して機械・船舶などをいふ。【固陋】コロウ　ちゃうぶにしてかたし。＝牢固。【固陋】コロウ　かたくなにして心いやし。司馬相如、上林賦「部人ーー、不ㇾ知ニ忌諱一」＝鄙陋・頑固。【固守】コシュ　前條に同じ。

【囹】レイ　青

○ひとや（牢獄）○をり（檻）【囹圄】レイギョ　ひとや、らうや。圄は禦。囚徒を領繫して禁禦する義。禮、月令「命ニ有司一省ニーー一」管子、五輔「倉廩實而ーー空」【囹圄】レイギョ　前條に同じ。

六畫

【囿】イウ　宥

○その（苑）濠あるを囿、牆あるをーといふ。○限られたる區域（範圍）禽獸を放ちがひにする爲めに垣にて圍みし所、動物園。○かかはる、見識のせまき義。

同訓異字　囿・園・苑等の別は園（口部十畫）の條を見よ。【囿苑】イエン　とりけものを飼ふその。禮、王制「衆ニ驅獸於ーー一」＝苑囿。【囿人】イジン　○禁中の動物園を守る官。

周禮「一一掌二囿游之獣禁一牧二百獣一」○後世、花木を種植する者の通稱とす。十園春秋雞狗坊卒長傳「善種二子母蔗一灌時有レ法、繁植蔓衍、遂爲二湖南一一冠一」

【囥】 図（口部八画）の古字、唐の則天武后の作。

七畫

【圂】 カン 圏 函（口部六画）の本字

おとがひ（口下）

【圄】 ギョ 圄と通ず

○とどむ（止）○ふせぐ（禦）○とらふ（囚）左、宣四「一伯嬴于轅陽」○ひとや（獄）

【圄空】ギョクウ ひとやがからになる、罪を犯す者なき義。王褒文「周公躬二吐握之勞一、故有二一一之隆一」‖圄囹空虚。

【圄囚】ギョウ ひとや。北齊書、陽休之傳「一一空虚」‖囹圄。

【家】 ㊀コン ㊁クン 痕 諄

㊀かはや（厠）‖溷。㊁家に畜ふ犬豕の類。‖豢。

【圃】 ホ 虞

○はたけ、その、菜をうゑるはた、果樹をうゑるその（園）○はたけつくり。論、子路「吾不如二老一」○ところ（場所）禮記「孔子射于一相之一」

【圃人】ホジン 圃をかふことを掌る官。周禮、夏官「一一掌二蔬果之政令一」

【圃畜】ホチク はたけつくりのおやぢ。類苑「一一、倚レ鋤睥睨」‖老圃。

【圃畦】ホケイ はたけのうね。元結詩「菜レ畦列二一一一、引レ流灌二時蔬一」

【圃師】ホシ はたけつくり。‖園丁・園人。

八畫

【圉】 ㊀ギョ・ゴ 語 ㊁ギョ 語

○うまかひ（馬丁）うまをかふ。○うまや（廐）まき（牧）馬を養ふ所。○國のはて（邊陲）左、隱十一「亦聊以固二我一一也」○ひとや（獄）‖圄。○とどむ（止）ふせぐ（禦）○一一は困みて舒びざる貌。○樂器の名。‖敔。㊁とどむ（止）禦と通ず、ふせぐ（禦）莊、繕性「其來也不レ可レ一」

【圉圉】ギョギョ くるしみて未だ舒びざる貌。孟、萬章「始舍之一一焉、少則洋洋焉」

【圉師】ギョシ うまかひの長官。周禮、夏官「一一掌レ教二圉人養一レ馬」

【圉人】ギョジン 馬をかふことを掌る官。周禮、夏官「一一掌二養馬芻牧之事一」

【圉紲】ギョセツ とらはれつながれる。鮮卑文「剖胎殺二無罪一、親族遠二一一一一」

【圈】 ㊀ケン 阮 ㊁ケン 先

○をり（檻）動物を入れて畜ふ圏。○ひとや（牢）㊁木を屈けて屈すと爲す、さかづき。又、ほんの類。‖棬。㊂をり、ひとや。○めぐる（轉）○わ、まる「一點」

【圈圈】ケンケン わ、まる。‖團圓。

【圈檻】ケンカン をり。淮南、主術「養二虎豹一者、爲二之一一、供二其嗜慾一」‖圈牢。

【圈外】ケンガイ かぎられたるくぎりのそとう‖範圍外。

【圈樞】スウケン 圏の中心。‖圏心。

【圈套】ケントウ ○鳥けものを捕へるわな。○勢力範圍の義。

【圈點】ケンテン 詩文などの妙所・要所を示す爲めに、其の傍にうつ圏き點。

【圈內】ケンナイ かぎられたるくぎりのうち。‖範圍内。

【圈外】ケンガイ 圏内に附する中圏。平聲は左下、上聲は左上、去聲は右上、入聲は右下。

【圈牢】ケンロウ 獣をいれおくをり。曹植文「此徒一一之養物、非二臣之志一也」

【國】 コク 職

○くに（邦）一政體の下に屬する土地人民「建一」「一體」○地理上又は行政上の區劃。○一國の首都。孟、離婁、編「一中無二興立談者一」○諸侯の封土。○ふるさと（故郷）盧儀詩「去一三巴遠」○一一中にて特にすぐれたる者の義「一工」「一色」

【國威】コクイ くにの威光。後漢書、宣二明一一、而長二其後一」

【國有】コクユウ 國家の所有。「一一林」‖官有。

【國運】コクウン 國家のなりゆき。一國の運命。

【國恩】コクオン 國家のめぐみ。柳宗元、謝二平淮夷雅一表「思レ報二一一一獨惟文章」

【國家】コッカ ○一定の土地と統治組織とを有する人類のつまり。○くに、統治權の主體。書、立政「其惟吉士、用勳二相我一一一」

【國家學】コッカガク 國家の性質・組織・成立等を研究する學問。

【國家費充二忠臣一】コッカノヒミチテチュウシンヲアテル 國家のみだれたる時に、忠臣の節始めてあらはるる義。老子「六親不レ和有二孝慈一、一一」

【國家主義】コッカシュギ　其の生存する國家の安寧富強を圖るを以て目的とする主義。

【國家柱石】コッカチュウセキノ　國家の重任を負ふ相將をいふ。漢書「內行脩有二威風一、位歷二將相一、——臣也」

【國歌】コッカ　○忠君愛國の意を發す時、又は國の慶事等の際に歌ふ特定の歌曲。我が君が代の類。○國やまとうた。‖和歌。

【國界】コッカイ　くにざかひ。漢書「適定二一一」‖國境。

【國交】コッカウ　國と國とのまじはり。國際。史記「重レ幣輕レ使、燕趙之間、將レ爲二一一一一也」

【國香】コッカウ　○すぐれたる香氣。○轉じて、菊の異名。左、宣三「以二楚有二一一一一一一人服二媚之一如レ是」

【國綱】コッカウ　國家を治むるおほづな。晉書「覽二其大一當三以經二一一一一」‖國維。

【國號】コッカウ　國の名稱。詩經、諸「自レ契至レ湯、雖二則八遷一而一一不レ改」

【國忌】コッキ　先帝崩御の日に相當する年年の忌日。大祭日の一。

【國紀】コッキ　國家ののり。國家の秩序規律。後漢書「善人、國之紀也」

【國基】コッキ　國家を維持するもとゐ。左傳「仲尼謂二子產一、於二是行一也、是以爲二一一一一矣」‖國本。

【國基】コッキ　すぐれたる基の名人。文苑英華「杜牧盛二一一王逢一詩」あり。

【國旗】コッキ　其の國のめじるしとなるやうに制定せしはた。我が日の丸の旗の類。

【國器】コッキ　すぐれたる治國の才ある者。史、晉世家「從者皆一一」

【國均】コッキン　事の輕重をはかりて平かにする、國權又は國政の義とす。詩、小雅「尹氏大師、維二國之均一」‖國鈞。

【國鈞】コッキン　前條に同じ。白居易詩「爲問三丞相、如何秉二一一一」‖國權。

【國禁】コッキン　國の法律にてとめたる事がら。國のはっと。

【國境】コッキョウ　くにざかひ。劉恕「折二衝外禦一保二一一一」‖國界。

【國俔】コッケン　すぐれて猛き狗。左傳「長木之斃、無レ不レ擾也、一一之瘈、無レ不レ噬也」

【國君】コックン　一國のきみ。左、宣十五「一一含レ垢」

【國華】コッカ　くにのひかり。國語、季文子曰、吾聞以二德榮一爲二一一一一」晉書、衞瓘張華傳「忠爲二令德一、榮乃一一一」‖國光。

【國會】コッカイ　國民より選擧せられし議員が一一議事堂に集りて、國政を議する機關。

【國光】コッコウ　くにの光。國家の盛んなる德のかがやき。易、觀卦「六四觀二國之光一、利レ用レ賓二于王一」

【國皇】コッコウ　○星の名。史記「一一星、大而流、狀類二南極一」○其の國の天皇。

【國憲】コッケン　國政をとる高官。左傳「一一、君之貳也」‖大臣。

【國教】コッキョウ　國民の信奉すべく定めたるをしへ。又宗教。

【國憲】コッケン　國のおきて。國家の根本法規。後漢書、曹褒傳「撰二定一一一」‖憲法。

【國權】コッケン　國政の威力。漢書、五行志「襄公時、天下諸侯之大夫皆執二一一一一」‖國鈞。

【國庫】コッコ　國家の財產を統一して收支保管する所。大藏。

【國語】コッゴ　○國別の國有のことば。○書名、二十一卷、左丘明の撰と傳ふ、春秋の世の八國の事を記す、卽ち周語・魯語・齊語・晉語・鄭語・楚語・吳語・越語に分つ、左氏傳に對して春秋外傳ともいふ。○國やまとことば、我が國のことば。

【國工】コッコウ　一國にすぐれたる良工。周禮、輸入「謂二之一一一」注「國之名工」

【國債】コクサイ　國家が財政の都合上、借り入れる金、政府の負債、國民より募るを內一一又內債といひ、外國より募るを外一一又外債といふ。

【國際】コクサイ　國と國とのつきあひ。‖國交。

【國際法】コクサイホウ　國家と國家との關係につきて規定せし法規。其の政府と政府との間に關するものを國際公法。國民と他の國民との間に關するものを國際私法といふ。

【國葬】コクソウ　國家に大功勞ありし人を弔ふ爲めに、國家の費用にて營む葬式。

【國殤】コクショウ　皇女の夫、國壻に同じ。魏書「寵仁以二一一一特一」

【國策】コクサク　國國策の略稱。

【國士】コクシ　才德の一國を蓋ふ名士。史、刺客傳「豫讓曰、至二於智伯一一遇レ我、我故一一報レ之」

【國士恩】コクシオン　國士として厚く待遇せられし恩。魏徵詩「深懷二一一一」

【國士無雙】コクシムソウ　一國中に雙びなき士。史、淮陰侯傳「高何曰、諸將易レ得耳、至二如レ信者一、一一」

【國子】コクシ　公卿大夫の子弟。周禮、大司徒「以三德一、教二一一一」

【國子學】コクシガク　天子の都城內に置き、貴族及び國中の俊才を教育する所。事物紀原「晉武帝咸寧四年初立二一一一」‖國學・國子監。

【國子監】コクシカン　前條に同じ。

【國子祭酒】コクシサイシュ　國子學の校長。古、會合饗宴に、尊長が先づ酒を地に供へて神を祭る、故に轉じて長官の義とす。

【國子司業】コクシシゲフ　國子學の敎授。

【國史】コクシ　○一國內の出來事を記錄する史官。詩序「一一明二乎得失之迹一」○一國の歷史。○國日本歷史。

【國司】コクシ　國貴、全國に配置せし地方

官、其の長官を守、又國守といひ、介（スケ）掾（ジョウ）目（サカン）の屬官あり。

【國字】（コクジ）○其の國の通用文字。外國字に對していふ。元禮典「至元八年、頒二行一一一」○國我が國にて造りし漢字體の文字。峠・畠・柚などの類。

【國志】（コクシ）くにの記錄。晉書、袁宏傳「余以二暇日一、常覽二一一」‖國史。

【國罪】（コクザイ）くにのまつりごと。史記「入則與二王圖一議一一」‖國政。

【國事犯】（コクジハン）政治上の犯罪、時の政府の施政に不平を懷きて犯したる罪。

【國師】（コクシ）○國民の模範とす可き人。○天子の師。○國天子に佛教を傳へたる禪僧に賜はる稱號。他宗の大師に同じ。

【國制】（コクセイ）君主のよつぎ、まうけのきみ。後漢書「哀平短祚、一一三絕」‖太子・國儲・儲君。

【國詩】（コクシ）○其の國固有のうた。○國やまとうた。‖和歌・國歌。

【國璽】（コクジ）國家を表章する印。

【國讎】（コクシュウ）國のかたき、國民の公敵。‖國仇。

【國狀】（コクジョウ）くにのありさま。

【國相】（コクショウ）一國の政治を輔佐する宰相。岑參詩、攝政朝堂頂、持衡一一崇」

【國庠】（コクショウ）國都にある學校。唐會要「皆有二一一、謂二國學一」

【國事】（コクジ）國家の大計。新序、雜事「寡人未レ得レ所二以爲一一一也」

【國成】（コクセイ）くにののり、成は式。詩經「誰秉二一一、不二自爲一政」

【國政】（コクセイ）國家の政事。孟、公孫丑「行二乎一一如レ彼其久」

【國稅】（コクゼイ）直接に國庫に納める稅金、中央官廳の費用にあつるもの、地租・所得稅の類。町村稅・地方稅などの對。

【國堵】（コクト）天子のむこ、天子の女を娶りたる者。貞和類聚「家世貴顯、又身爲二一一」‖國壻。

【國姓爺】（コクセンヤ）支那語にてあゆ。‖香魚。

【國籍】（コクセキ）一個人が國家に附屬する名籍。

【國俗】（コクゾク）くにのならはし。孟、告子「變二一一」

【國賊】（コクゾク）國家にあだをなすもの。尉繚子「將自二千人一以上、有二戰而北、守而降、離レ地逃レ衆、命曰二一一」

【國體】（コクタイ）國の成りたち。くにがら。漢書、成帝紀「儒林之官、四海瀾源、宜レ皆明二於古今一、温レ故知レ新、通二達一一一、以備二顧問一之博士」

【國恥】（コクチ）國のはぢ。禮記「一一足レ以興レ之」‖國辱。

【國風】（コクフウ）國家のしづめ、國家の重鎭。徐彦伯詩「大儒天下寶、維賢國之鎭」

【國儲】（コクチョ）國君のよつぎ。漢書、疏廣傳「太子一一副君」‖太子・皇儲・儲君。

【國定教科書】（コクテイキョウカショ）國家が撰定せし教科用圖書、全國の初等教育程度を一定する目的を以て、文部省にて編輯す。

【國朝】（コクチョウ）他國又は他の朝代に對して當代の朝廷の義とす。元唐書、禮儀志「高雅神堯皇帝、一一首祚」‖聖朝。

【國典】（コクテン）○其の國の儀式。○國の法典。‖國法。○國わが國固有の書物。‖皇典。

【國土】（コクド）くに。漢書、王莽傳「一一人民」

【國土安穩】（コクドアンノン）國が安らかに治まる。華嚴經「天下太平、一一」

【國度】（コクド）くにのいりめ。國家の用度。梁武帝詔「一一多乏」‖國用。

【國幣】（コクヘイ）國の財寶を納めおく府庫。幣は貨幣を藏するくら。‖國庫。轉じて國家の財產の義。

【國蠹】（コクト）國家に害毒を流す者、蠹は木のしんを食ふ蟲。白居易詩「蠹レ心除二一一」‖國賊。

【國棟】（コクトウ）太子の稱。晉語「夫太子國之棟也」

【國難】（コクナン）くにのなんぎ。魏志、武帝紀」

【國寶】（コクホウ）○くにのたからとなるもの。左、隱、六「仁親善レ隣、國之寶也」○國古社寺の建造物及藏品中

製作の優れる物、又、特別の由緒ある物などの、國のたからとして政府より保護を與へあるもの。
【國法】ハフ　國家を治むる法令。周禮、内史「執ニ―一」
【國寶】ホウ　國家又は君主を代表して來りし貨寄、國家の優待を受くるもの。
【國風】フウ　くにのならはし。又、くにぶり歌。詩經の一一に本づく。張九齡詩「陳ノ詩問ニ―一」
【國文】ブン　○その國固有の文章。○國わが國固有の文。‖和文。
【國柄】コクヘイ　國土人民を支配する權力。後漢書、陳元傳「王莽專據ニ―一、以偷ニ天下一」‖國權。
【國業】ゴフ　國政また國權に同じ、國の平均を秉る義。史、終侯世家「君後三歳而侯、侯八歳爲ニ將相一、持ニ―一」
【國幣社】コクヘイシヤ　國幣社の格式にて官幣社の次に位するもの。内務省より年年幣帛を捧ぐ、大・中・小の三級に分つ。
【國母】ボ　○皇后の稱、萬民を子とする義。後漢書、鄧后傳「帝曰、皇后之尊、與ノ朕同體、承ニ宗廟一、母ニ天下一、豈易哉」北魏書、張普惠傳「命ノ之爲ニ―一」○天子の御はは。‖皇太后。
【國歩】ホ　國家の運命、多くは悪しき方にいふ。詩、大雅「於乎有ノ哀、―斯頼」
【國本】ホン　○立國の根本。南史「人爲ニ―一」‖國基。○太子をいふ。宋史「寧宗以ニ―一未ニ立、命ニ選ニ太祖十世孫年十五以上者一、教ニ宮中一」
【國民】コクミン　たみ、人民。
【國脈】コクミヤク　國家の繼續する命脈。潛夫論「是以身常安、而―永」
【國務】コクム　國家のつとめ。政治。梁武帝詔「獄訟稍簡、―少閑」
【國命】コクメイ　くにのまつりごと。論、季氏「陪臣執ニ―一、三世希ノ不ノ失ノ矣」
【國用】コクヨウ　國のつひえ。禮記「冢宰制ニ―一、必于ニ歳之杪一」‖國費。
【國老】コクラウ　○卿大夫の致仕せるもの。左、僖、二七「―皆賀」○國君を輔くる大臣。‖家老。
【國利】コクリ　國家の利益。孫子「夫兵久而―者、未ニ之有一也」
【國良】コクリヤウ　國中の善良なる士。張九齡文「愼擇ニ僚佐一、歎求ニ―一」
【國力】コクリヨク　くにの富力。又、兵力。唐書「度支多遷延、以困ニ―一」
【愛國】アイコク　國を思ふ心深し。史記「欲ノ使ニ親民如ノ子一ノ如ニ家」
【享國】キヨウコク　人君が位に居る義。書、無逸「中宗之ノ一、七十有五年」
【爲ノ國】ヰコクノ　私利の爲めに國を他に與ふる。史、晉世家「郤人或賓ニ北國於秦一」史、蘇秦傳「左右一ノ一　反覆之臣也」
【經ノ國經ノ野】ケイコクケイヤ　都市と鄉邑とを地わりして營む。周禮「―、設ノ官分ノ職、以爲ニ民極一」
【肇ノ國】ハジメテクニヲ　始めて國を建つる。書酒誥「乃穆考文王、一ノ一在ニ西土一」
【國之爪牙】コクシノサウガ　國家を守る壯勇なる武臣をいふ。漢書、李廣傳「廣上書自陳、上報曰、將軍者、―也」
【國之司直】コクシノシチヨク　司直は、公直を司る義、後世は專ら司法官の稱とす。詩、鄭風「彼其之子、邦之司直」漢書、婁敬傳贊「婁敬脩爲ニ司直一、正ノ色立ニ於朝一、遂ニ詩所謂―一無ニ以加一也」
【國亂則思ニ良相一】クニミダルレバリヤウシヤヲオモフ　國家亂るる時は良相を得たしと思ふ。史、魏世家、家貧則思ニ良妻一、―」
【國破山河在】クニヤブレテサンガアリ　國は亡びたれども自然の山河のみは依然として存す。杜甫詩「―、城春草木深」

【圍】 イ　寒　青

○かはや（廁）○まじる（雜）
【圍廁】コンイ　かはや、雪隱。蜀志、注「管輅ノ一一」‖圍圊・厠所。
【圍廁】イ　かはや。涅槃經「大小一一、無ニ不ニ備足一」

【圇】 リン　眞

圇ニコンは物の完き貌。‖渾圇。

九畫

【圓】 エン　ヲン　先　員は古字　口は省文

○まる（丸）まるし、まどか（圓）方の對。○まろくす、まろむ、圭角なく全き義、滿ちて豐かなり「一通」「一滿」○めぐる、めぐり（周）○貨幣の單位、百錢を一とす。○完く成る、了る「一婚」「一成」○圓あたり「關東一一」

圓圓圓

まんまろきなり。形體に限らず、義理の上にも廣く用ふ。圓滿・圓熟と熟す。古は圓また員に作る。韓非子「左手畫レ圓、右手畫レ方、不レ能二兩全一」○圓は圓なり、まろくあつめる義、疑團は疑のかたまりなり。圓樂は車輪なり。小學「及レ至レ接レ人、圓渾是一團和氣」○丸は彈丸なり、丸薬などの如く、こまんまろく、ころげるものなり。

【圓影】エンエイ　月の異名。曹植詩「一一光未レ滿、衆星爛以繁」

【圓圓】エンエン　まろき貌。徐陵文「明月一似二新蛾之眉一」‖團團。

【圓丘】エンキウ　まろきをか。天を祭る壇。禮記「祀二天一一、祀二地方丘一」

【圓光】エンクワン　圖佛菩薩の頭上に現はるる圓形の常光、後光ゴクワウの觀无量壽經「頂有二一一一面各百千由旬」

【圓活】エンクワツ　なだらかにして滯なし。顏書筆勢「一一不二拘執一也」文章軌範、趙鵬飛評「人能熟二此篇一、於二他篇等文字一、便能生活」

【圓滑】エンクワツ　まろくおだやかにしてかどだたず。蘇軾詩「鵝夷滑二一一一」

【圓月】エンゲツ　まどかなるつき。李洞詩「一年十二度一一、十一回圓不レ在レ家」‖滿月。

【圓成】エンセイ　まろきと、かけたるとの。韋應物詩「華月屢一一、君還浩無レ期」

【圓孔方木】エンコウハウボク　相合はざる貌の傳燈錄「若將二有限心識一作二無限中用一、如將二方木一逗二圓孔一」‖圓鑿方枘。

【圓坐】エンザ　まどる。車座に坐す。晉書、阮籍傳「大盆盛レ酒、一一相酌」

【圓座】エンザ　圖藁・蒲などを編みてまろく平たく作りし敷物。‖圓草薦。

【圓草薦】エンサウセン　圓座に同じ。

【圓鑿方枘】エンサクハウゼイ　まろき穴に入るるに四角なる枘を以てす、相合はざるにいふ。史、孟軻傳「持二方枘一欲レ內二圓鑿一、其能入乎」

【圓周】エンシウ　圓形の周圍。圓心より同一距離にある點のつながり。

【圓周率】エンシウリツ　數學上の語。圓の直徑と圓周との比。普通に三百零一四一六と定める。

【圓心】エンシン　圓形の中心。圓周の各點より同一距離に在る點。

【圓寂】エンジャク　圖僧侶の死をいふ。圓滿具足して寂滅する義。

【圓熟】エンジュク　おだやかにして十分に熟練する。圓絵宝鑑「古人筆法一一、用意精到」

【圓錐形】エンスイケイ　まろぎりのさきの如くに圓く尖れる形。圓を底とし點を頂とす。

【圓頂】エンチャウ　○まろきあたま。○雅髮せる僧をいふ。蘇軾詩「一一國二松石一」

【圓通居士】エンツウコジ　竹の異名〔海異錄〕

【圓轉】エンテン　○まろくころげる。晉書、王濛傳「遊性急爲レ果、嘗食二雞子一、以レ箸刺レ之不レ得、便大慙擲レ地、雞子一一不レ止、便下レ牀以二展脚一踏レ之」○自在にめぐりて滯こほらず。

【圓頭】エンドウ　まろきあたま。‖鐵頂。

【圓頭方足】エンドウハウソク　まろきあたま、四角なるあし。人間をいふ。淮南、人間「頭之圓也象レ天、足之方也象レ地」‖方趾圓蓋。

【圓寢】エンシン　圖陵傍近に殿舍する法の義、法華ホケの妙法をいふ。轉じて法華宗の異名を一一宗といふ。

【圓木警枕】エンボクケイチン　宋の司馬光、まろき木にて枕を作り、少しく眠れば枕ころびて覺め、起きて書を讀む。苑太史集）轉じて苦學の義とす。

【圓滿】エンマン　○みちわたる。南史、梁武帝紀「有二神光一一一堂上一」○まろくたらひて缺くる所なし。

【圓夢】エンム　ゆめの吉凶を判斷する。正字通「占レ夢以レ吉凶一曰一一」

【圓融】エンユウ　○あまねくほどこす。晉編「公家之貢、歛二於民間一者、謂二之一一」○なたらかにして滯なし。符載銘「器以レ境生、境因レ一一」

【圓笠】エンリフ　まろきかさ。儒光義詩「一一覆二我首一」

【圓動】エンドウ　まろきあたま。南史「方雖レ一一、萬不レ遺レ一」

【圓山派】エンヤマハ　圖圓山應擧の畫の流派。

【園】エン　サン　元

○はたけ、果樹をううるその、垣のあるは一、無きは苑。○そののかき（樊）詩、鄭風「將仲子兮、無二踰我一一」○みささぎ（帝陵）はか（墓）。曾子問「葬二于一一」○別野ベツヤ。遊息の處の名。

【園苑叢書】ソノタノ　圖・囿・苑・園揚○園は果を植うるその、周圍に垣あり、又廣く菜または花・果園等と熟す。漢書「漢帝紀、三年不レ修レ園」轉じて最園は帝王のみささぎ。○囿は苑に同じ。○苑は禽獸を養ふ所以なり、周禮の疏に、古は之を囿といひ、漢には之を苑といふと、師古曰く、鳥獸を養ふを苑といふ、苑に垣あるを囿といふ、苑囿は廣き地面を要すれば、天子諸侯の力なるでは設け得難し、漢の上林苑・宜春苑・梁の孝王の東苑、文王の靈囿の如きを見ても知るべし。春秋成十八年「築二鹿囿一」の註に、墻を築きて鹿苑と爲すとあり、花あるそのを花苑といひ、多く萬物を蓄へ

用を待つ義より転じて設苑・字苑等の普名となり、物の集りたる一区域の場所の義より、文苑・藝苑等と連用す。○圃は音イウ、訓その、苑の周囲に垣あるをいふ、前の苑の解を参看せよ。漢書、高帝紀「故秦苑囿園池、皆令二民得レ入レ之」転じて、文囿は、文章の社会、詩囿は、詩を講ずる場所。○場は音チャウ、場は俗字（場は音エキ田の畔界をいふ、別字なり）訓、には、ば、禾を収むるはたけ、稲のこなしば。

【囿圃】ユウホ　はたけ。漢文挙要「漢有ルヲ園ト曰ヒ、場有ルヲ圃ト曰フ」

【園遊会】エンユウクワイ　園庭を開園に多くの客を招き、種種飲食店・演芸場などを設けてもてなしをする一種の宴会。

【園苑】エンエン　その。庾信詩「一一是二芳菲一」

【園芸】エンゲイ　花卉・蔬木等を栽培する技。

【園丘】エンキウ　みささぎに在るおたまや。後漢書、祭祀志「漢諸陵皆有二一一、承二寝廟一為也」‖園陵。園廟。

【園蔬】エンソ　はたけのやさい。後漢書、臭祐傳「自免帰レ家、不二復仕一、躬灌二一一、以二経書一教授」‖園菜。

【園池】エンチ　そのと、いけと。史、王覇傳「詔二美田宅一一甚衆」

【園丁】エンテイ　にはつくり。陸游詩「一一刈二霜稲一、村女貧二秋茶一」‖蒙荷ケイ畦丁。

【園亭】エンテイ　庭に設けたるちん、園内の四阿アヅマヤ。宋史、李昉傳「昉所レ居有二一別墅之勝一、多召二故人親友一、宴二集其中一」

【園廟】エンベウ　園陵に同じ。漢書、蘇武傳「郎レ武奉二一太牢一謁二武帝一一」‖園陵。

【園陵】エンリョウ　その、はたけ。周禮、冢宰「一一謂二墓木一」洛陽名園記「洛人云、一一之勝、不レ能二相兼一者六」‖園園。

【園林】エンリン　その、はやし。宋書、禮志「雉子游二原澤一、幼度二馴介心一、飲啄雖二勤苦一、不レ願レ捿二一一」

【園生】ソノフ　園その、には。

十一畫

【圊】　ダン　㊥　一音トン

○まどか、まろし。‖圓。○まろめる。○あつまる、聚合す。○あつまり（聚合體）かたまり、よりあひ「観光一」○軍隊の組、又、其の称「旅一」○一一は路の多き貌。

圊圊　圓・圄・丸の別は圊（口部十一畫）の條を見よ。

【圊圊】ダンダン　○まろし。元稹詩「一一青玉壺」○轉じて圓満にまとまる義。長く続く小説などのはりの意に用ふ「大一一」○家族のむつましき義。白居易詩「家居雖二蓬蒿一、春園事一一」

【圊魚】ダンギョ　鼈魚の異名。

【圊月】ダンゲツ　まるきつき、満月。江淹詩「紈扇如二一一」

【圊結】ダンケツ　人人あつまりて組合をむすぶ。金史、唐古傳「一一兵士二為レ伍」

【圊坐】ダンザ　くるまざにすわる。まどる。文獄経場名「一一飲レ酒以為レ楽」‖圊坐・圊樂。

【圊茶】ダンチャ　かためたる上品の茶。錢田錄「茶之品、莫レ貴於龍鳳、謂二之一一、凡八餅重一斤」

【圊子】ダンシ　穀類の粉をこねまるめて造る食品「粢一一」白雅譜「賣一一者」

【圊社】ダンシャ　くみあひをつくる。又、組合。‖圊體。

【圊局】ダンキョク　うちは。王昌齢詩「且將二一一一暫徘徊」

【圊體】ダンタイ　あつまり、圊結したる組。

【圊圊】ダンダン　○まろき貌。班婕妤詩「裁為二合歓扇一、一一似二明月一」○露の玉なんに多き貌。謝惠連詩「一一滿葉露」

【圊長】ダンチャウ　○官名、一軍圊の長。○圊圊の長。

【圊匪】ダンピ　北清事件（我が明治三十三年）を起したる支那の賊徒の稱。義和團匪徒。

【圊團】ダンダン　大体に同じ。團は塼の正字。

【圊樂】ダンラク　○まどか。陸游詩「堆レ案此翁閑慣慣、御爺見女話一一」‖圊坐。○まろし（圓）陸羽詩「披書窻直月一一」○だんごにまるめる。又、團子。范成大詩「撚レ粉一一意」

【圊結】ダンケツ　人民を編制して教練する義、以て郷土を防ぎ衛る。

【圊練使】ダンレンシ　官名、唐代に置く、大なる者は十州を領するに至る、並に團練副使を置く、後、刺史をして悉く――を帯びしむ。

【圓】　ト　㊥　圖は俗字、圜は別字

○はかる（度謀・計）相談する。質ひ問ふ。○はかりごと（策略）○土地山川などの形狀を畫きたるもの、ゑ（繪）○ゑがく（畫）○國土。○河一一は伏羲の世、黄河より現出せしといふ龍馬の背に負へる八卦のゑづ。

圖謀計畫　圖・計・謀・畫・度等の別は計（言部二畫）の條を見よ。

【圖案】ヅアン　あもやうのしたがき、圖畫の意匠。

【按レ圖索レ駿】アンヅサクシュン　圖畫を按檢して、駿馬を求めんとするも得るこ

と雅し、因りて眞を失ふに喩ふ。晉林伐山「伯樂知二其子之駑一、但解レ駕爲レ笑耳、此馬好レ跳、不レ堪レ御也、所レ謂――也」

【圖解】ヅカイ　圖をときあかして說明する。

【圖案】ヅアン　圖がく。又、繪畫。漢書、郎ニ―于甘泉宮一」

【圖繪】ヅカイ　圖がく。又、繪圖。宣和畫譜「周昉生平ニ―甚多」

【圖繪寶鑑】ヅカイパウカン　五卷、元の夏文彥の撰、上古以來、宋金元に至る畫人を論評せしもの。

【圖工】ヅコウ　圖かき。淮南、氾論「夫ニ―好レ畫二鬼魅一而憎レ圖二狗馬一」＝畫工。

【圖讚】ヅサン　繪の餘白に書き入れる評語、又は詩歌。畫讚（唐書、許孟容傳）

【圖書】ヅショ　圖づ。圖づのおもて。

【圖式】ヅシキ　圖づのかた。繪圖の樣式。北史、宇文忻傳「爲二明堂一ニ―奏レ之」

【圖緯】ヅヰ　河圖と緯書と。皆未來の事、又占驗に關する事を記せし書。後漢書、張衡傳「中興之後、儒者爭學ニ―一ニ」

【圖議】ヅギ　はかりて議論する、相談する。韓愈文「丞相公卿士大夫勞ニ于―一ニ」

【圖讖】ヅシン　未來の吉凶を記したる書。未來記。後漢書、光武紀「以ニ―一」說ニ光武一」

【圖文】ヅブン　はん、印章。行嚴集「印章曰ニ―一ニ」

【圖書】ヅショ　○書物。晉書、天文志「東壁二星、主ニ文章一、天下ニ―之祕府也」○河圖洛書の略。易、繫辭「河出レ圖、洛出レ書、聖人則レ之」○私印をいふ（印文考略）

【圖書館】トショクワン　多くの書物を集めて衆人に見さす所。＝書籍館。

【圖書寮】ヅショレウ　圖古、中務省に屬し、圖書の收集保管・圖史の修撰等を掌る所。今は宮內省に屬し、圖書の收集保管・皇室皇族に關する記錄等を掌る。

【圖籍】ヅセキ　○土地の圖面と人民金穀の籍と。史、張儀傳「據ニ九鼎一按ニ―一、挾ニ天子一以令ニ于天下一」○書籍。據書、安豐王延明傳「船ニ載ニ―萬有餘卷一」＝圖書。

【圖南鵬翅】トナンホウシ　偉業を成さんとするくはだて。莊、逍遙遊「有レ鳥焉、其名爲レ鵬、背若ニ泰山一、翼若ニ垂天之雲一、摶ニ扶搖一羊角而上者九萬里、絕ニ雲氣一負ニ靑天一、然後圖レ南、且レ適ニ南冥一也」

【圃】十三畫

圖（前條）の俗字。

【圜】十三畫

㊀クヮン　㊁エン　先　刪

㊀めぐる（繞）かこむ（圍）㊁圓（口部十畫）に同じ。

【圜圍】クヮンヰ　四方よりとりかこみてみる。賈誼、治安策「天下ニ―而起」

【圜繞】クヮンゼウ　めぐる。めぐらす。揚雄「其角多節、慇懃ニ―者爲ニ鷫鸘一」＝圍繞。

【圜流】クヮンリウ　めぐりてながれる。家語「ニ―九千里」＝環流。

【圜丘】エンキウ　天子が冬至に天を祭る處。周禮「ニ―」疏「土之高者爲レ丘、圜者象ニ天圓一也」＝天壇。

【圜鑿方枘】エンサクハウゼイ　圓き穴に四角なるせん、物事の相合はざる形容。楚辭、九辨「圜鑿而方枘兮、吾固知ニ其鉏鋙而難レ入」＝圓鑿方枘・圓孔方木。

【圜牆】エンシャウ　圜土に同じ。漢書、司馬遷傳「幽ニ于ニ―之中一」＝牢獄。圜圄。

【圜土】ヱンド　ひとや。まろく圍みたる牢獄。周禮、地官「以ニ―一納レ之」＝圜牆。

【圜方】エンハウ　まろきと四角なると。又、其の器。王粲詩「嘉賓充ニ―一、旨酒盈ニ尊罍一」＝圓方。

【圞】十九畫

ラン　㊇

まどか（圓）巢（木部十九畫）の正字。

土部

【土】ト　圖ド　一畫

○つち、どろ、地。易、繫辭傳「百穀草木麗乎ニ―一」○くが（陸）○ところ（場所）○ふるさと。○くに（邦國・領地）○わざ（業）○はかる（度）○つちのかみ（地祇）○五行の一、位置にては中、人倫にては君、時にては夏、音にては宮、色にては黃、味にては甘に配す。○星の名（鎭星）○八音の一、―を燒きて作りたる樂器。○をる（居）○木のね。

【土鴨】ドアフ　あまがへる（雨蛙）色青くして小く、木に上りて鳴く。＝樹蛤。

【土域】ドイキ　くにのうち。史、始皇紀「貧及ニ半萬一、恩厚ニ―一ニ」

【土音】ドイン　其の地方の人の發音、其の土地の人のこわね。

【土芋】ドウ　芋の一種。＝何首烏芋・土卵。

【安レ土】アンド　○國をやすらかにす。史記「ニ―息レ民」○其の地に安んず。禮記「不レ能ニ―一、不レ能レ樂レ天」

【土芥】ドカイ　つちと、あくたと。輕じて

極めて卑しき物に喩ふ。孟、離婁「君之視レ臣如二土芥一、則臣視レ君如二寇讐一」

【土階】カイ　つちのきだはし。史記「堯高三尺、一一三等」

【土梗】カウ　○つちにんぎやう。戰國策「夜半一一與二木梗一鬬」‖土偶。○にせもの、こしらへもの。莊、田子方「吾所レ學者直一一耳」

【土豪】ガウ　其の土地にて勢力あるかねもち。

【土害】カウ　あなぐら。‖土窟。

【土宜】ギ　○その土地に宜しき農作物。左、文、六「無使レ失二其一一」○土產。

【土俵】ヒヤウ　土產物モノを人に贈るにいふ。

【土器】ドキ　せともの、つちやきの器物、陶器。

【土簋】キ　黍稷を盛りて神に供ふる土器。韓非、十過「昔者堯有二天下一、飯二於一一、飲二於土鬲一」

【土疆】キヤウ　土地のさかひ。曹植、漢武帝贊「威振二百蠻一、恢二拓一一」

【土偶】グウ　つちにんぎやう。史記「木偶人謂二一一人一」‖土梗。

【土窟】クツ　つちあな。神仙傳「李意期於二城都角中一作二一一一居レ之」

【土化】クワ　農作する。周禮、地官「草人掌二一一之法一」

【土瓜】クワ　烏瓜カラスウリの一名、夏白毛ある花を著け、秋秋赤色の小瓜を結ぶ。

【土蝸】クワ　蝸牛カタツムリの異名。

【土塊】クワイ　つちくれ、つちのかたまり。

【土釜】フ　汁を盛る鍋の如き土器、兩耳三足の祭器。韓非、喩老、桑實必不レ加二於一一、必將二犀玉之杯一」

【土語】ゴ　其の土地の言語。‖方言。

【土工】コウ　○やきものし。曲禮、注「一一、陶旋」‖陶工。○どかた。○つちぶしん、築堤・道路開鑿などの工事。

【土功】コウ　土木の工事。書、益稷「惟荒度二一一、弼成二五服一」‖土工。

【土空】コウ　つちあな。方輿記「秦人呼二土窟一爲二一一」

【土寇】コウ　土民の亂をなす者。土民の一揆。明紀金載「河南一一」‖土匪。

【土壞】コウ　一里づか。周書「路側一里、置二一一」

【土沙】ダ　土と沙と。揚雄賦「匪二惟幼稚嬉二戲一一」‖土砂。

【土砂】ダ　前條に同じ。

【土葬】ソウ　屍體を土中にはうむる。火葬・水葬の對。南史「一一則瘞二埋之一」

【土蔵】ドゾウ　圓つちぐら、火を防ぐため土をあつく塗りこめて建てしくら。

【土作】ドサク　土木の工事。後漢書「遵二起九廟一、窮二極一一」‖土工。

【土產】ドサン　○其の土地の產物。唐書、季德裕傳「物非二一一」○圖みやげもの。

【土師】シ　○司空の官の異名。○ハニシ圓古、土器製造に從事せし家の氏。武內宿禰を祖とす。

【土人】ジン　○其の國土に生れし人民、土著の人。‖土民。○土偶に同じ。

【土神】シン　其の土地のかみ、うぢがみ、產土神ガスナ。

【土塘】ドシヤク　どべい、ねりべい。齊書「無二蚤蝨一、皆昏二板屋一一」

【土壤】ジヤウ　つちくれ。史、李斯傳「太山不レ讓二一一、故能成二其大一」

【土產】ドサン　いなどの一種、つちばった、くそばった。

【土色】シヨク　恐れて土の如くあをざめたる顏色。

【土星】セイ　太陽系中の第六位にある遊星、直徑約三萬里、二十九年と百六十七日にて太陽を一周す。

【土足】ソク　圓土のつきしままのあし、又、履物モノをはきしままの足。

【土俗】ゾク　其の土地のならはし。‖土風・土習。

【土蘇木】ドソボク　水松ミヅマツの一種、低く小さくして庭木とす。‖伽羅木ボク

【土臭】ドシウ　○土にて築き上げたる高きだい。○圓建物の基礎となる横木、又、石。轉じて物事のもと、根本。

【土當歸】トウキ　うど、わかき莖を食用とす。‖獨活。

【土著】ドチヤク　其の土地に永住するもの。史、大宛傳「其俗一一耕レ田」

【土蠶】サン　むかで。‖蜈蚣。

【土豚】ドシ　どべう（土鰍）魏志、將潛傳「擢作二一一、遣二絕湖水一」‖土堵・土墻・土壁。

【土壁】ドヘキ　○どべう。容齋四筆「多僻二一一至誥城門、以杜二水入一」‖土豚。○大いなる穴。宋玉、風賦「盛怒於一一之口」

【歸レ土】キド　人の死をいふ。人死すれば魂は天に升り、魄は土に歸る。禮、祭義「衆生必死、死必一レ一」

【土著】ドチヤク　土著の民の意をなす者。‖土賊・土寇。

【土筆】ドヒツ　つくし、問荊ツクシの花の稱。早春地下莖より地上にぬき出で、形筆に似たり、煮て食ふ。

【土風】ドフウ　○鄙土のはやりうた。○其の土地の風俗。陸機詩「一一清且嘉」

【土俵】ドヒヤウ　圓○土豚に同じ。○相撲をとる場所。土を入れし俵二十八個を以て環狀に圍みしもの。‖土俵場。

【土崩】ホウ　土のくづるる如くくづれる。史、主父偃傳「天下之患、在二于一一、不在二于夷狄一」

【土蜂】ホウ　あなばちの異名。周雅、注「今江東大蠭在二地中一作レ房者、爲二一一、即馬蜂」

【土木】ボク ○ふしん、家屋・堤防・道路などの工事の習語「知二―之事一」（荀子）○美術の一。土を用ひて種々の形を作る技術。「―工」

【土地】トチ 土地に生ずる穀菜草木。左、昭七「食二土之毛一、誰非二君臣一」

【土饅頭】ドマンジュウ 土をまろく盛れる墓。范成大詩「纔有二千年歳門限一、移須二一箇――一」（墳）

【土竜】モグラ 支那産の鴨片。支那人の稱。洋楽の對。

【土用】ドヨウ 図○歴の上の名、土の氣の盛んなる時。一年に四期有りて一期を十八日間とす。春は清明より立夏まで。夏は小暑より立秋まで。秋は寒露より立冬まで。冬は小寒より立春まで。日土旺（○祥に夏の一―の稱。暑さの最もきびしく感ずる期間。

【土生】ドセイ 土の中に造りし牢舎。通鑑綱目、朱理宗紀「丁大全改築新州一―一拘留」

【土龍】モグラ ○臆病ものの異名。○田鼠。○土にて製せし龍、古、雨を祈るに用ふ。淮南子「―一致レ雨」

【土繻毒】ヒセイ 織物の一、黒色の油狀又は塊狀をなす。油にて解かして塗料に用ふ。アスファルト。

【土公】ドクウ 図つちを司る神。春は竈、夏は門、秋は井、冬は庭に居るといふ。○土公神ドクシン

【土蜘蛛】ツチグモ ○くもの一種、長き袋狀の巣を作りて半ば地中に置き、其の底に棲息す。○図上古穴居の人種の名。

【土猪成レ山】ツチノシシヤマトナス 俚諺の「塵もつもれば山となる」といふに同じ。荀、勧學「積二土成一レ山、則風雨興焉」說苑、建本「――、則隳墮生焉」

壬 ジン 畫 支

○よし（善）○はる（生）

圖形ノに从ひ土に从ふ、呈・聖・延・望等の字、皆此に从ふ。壬とは異り。

圯 イ 支

圮とは別

つちばし（土橋）漢書、張良傳「嘗閒從容遊下邳一上」

圖形巳の已に从ふ。一說已に从ふ。

圩 ウ 虞

○くぼむ（窪）史、孔子世家「孔子生而一頂、故名二丘一」―頂は頭の上のくぼめるをいふ。○きし（岸）つつみ（堤）

坊 ホウ 支

○こて（鏝）＝杇。○こてにて壁をぬる。

【坊人】ボウジン さかん、壁を塗る職人。左、襄三一、註「―一塗者也」＝坊者。

圭 ケイ 齊 珪の古字

○たま、瑞玉、上圓く下方なるもの、古、諸侯を封ずるしるしに用ふ。故に重土に从ふ。○いさぎよし（潔）○旅の名。黍を六十四あつめたるもの、升の十萬分の一。○かど（廉）「一角」○土―は日影を測る器。

【圭角】カドカク かど。言語行爲などのかどありて他人と融和せざる意。圭、角、孟子序說「程子曰、孟子有二淸英氣一、才有二英氣一、便有二―一」

【圭臬】ケイゲツ 日影を測る木表、日時計をいふ。黄侯、乾清宮賦「裁二日晷一以二圭臬一、陳二文、陳二―一製二鳧輪一以軸」て法度・標準などの義とす。

【圭撮】ケイサツ 極めて少量の義。撮は三指にて撮む程の量、圭の四倍。漢書「食二多少一者不レ失二―一」

【圭環】ケイカン 宗廟に用ふる酒器。形勺の如し。皮日休文「王有二祀臣一、錫二之―一」

【圭璋】ケイショウ 祭式の時に用ふる飾りの貴きたまの稱じて人品の高きに喩ふ。詩經「如レ圭如レ璋」

【圭勺】ケイシャク 極めて小量の義、些少の意に用ふ。王禹偁詩「行年過二半世一、功業無二一―一」＝圭撮。

【圭田】ケイデン 圭は潔、其の收穫を以て祭に奉ずる田。孟、滕文公「卿以下必有二―一、―一五十畝」

【圭竇】ケイトウ いぬくぐり、圭の形の門旁のくぐり。梁昭明太子文「解門爲宿、―一猶著」＝圭竇。

【圭復】ケイフク 人より寄せ來りたる手紙を再三くりかへして讀む義。論、公冶長「南容三復白圭」注「白圭之玷、尙可レ磨也、斯言之玷、不レ可レ爲也」とあるに本づく。

【圭竇】ケイトウ くぐり、門旁の小戸。其の形圭の如し。禮、儒行「筆門―、蓽戸環窬」＝圭竇。

在 ザイ 隊

○あり（居・存・住）ゐます。○ながらへる、生存する。○あきらか（明）○みる（察）明かに察する。書、舜典「―璿璣玉衡」○確定の意を表はす助詞。大學「―止於至善」○図在所ザイショ在鄉ザイカウの義より轉じて田舍の義とす「東京―」

同訓異字 在・有・或の別は有（月部二畫）の條を見よ。

【在位】ザイイ 天子のくらゐにをる。書、堯典「朞―一七十載」

【在鄉】ザイキョウ 図○ふるさとに居る。○み

なか、ざいご。‖在所。
【在鄉軍人】ザイキヤウグンジン　鄉里に居る兵士、兵籍にありて現役ならざる軍人の稱。
【在學】ザイガク　學校に居る。‖在校。
【在勤】ザイキン　勤めにある、勤務に在る。‖在職。
【在外】ザイグワイ　外國に在留する。
【在官】ザイクワン　官吏の職に在る。
【在家】ザイ　○圖在俗の人。出家の對。佛本行經「今三人出レ家、二人一レ」‖俗人。○圖あなかのいへ。ざいがう。
【在所】ザイ　ところどころ。陽萬里詩「新晴ー一野花香」‖處處。
【在三之義】ザイサンノギ　人は君・父・師の三者によりて生ずるものなれば、其の身の在る所にて死を致すべき義あるをいふ。晉語「欒共子曰、民生二於三一事一レ之如一レ一、父生レ之、師教レ之、君食レ之。非レ父不レ生、非レ食不レ長、非レ教不レ知、生之族也、故一事レ之、唯其所レ在則致レ死焉、報レ生以レ死、報レ賜以レ力、人之道也」禮運文「非レ心媿レ跡、以敦二在三之節一」
【在宿】ザイシュク　外に出ずに家に居る。‖在宅。
【在職】ザイシキ　職務に從事してをる。官吏「一レ一多所二缺曠一」
【在世】ザイセイ　生きてよにある、ながらへる、生存。
【在昔】ザイセキ　いにしへ、むかし。詩、商頌「自レ古一レ、先民有レ作」‖往昔。
【在俗】ザイゾク　圖出家せずに家に在る。
【在宅】ザイタク　己の家に居る。
【在銘】ザイメイ　圖刀劍器物類に製作人の名の記してあるをいふ。
【在野】ザイヤ　官に仕へざるもの。野は朝の對。孟、萬章「一レ一曰二草莽之臣一」
【在來】ザイライ　ありきたり、これまでどほり。
【在留】ザイリウ　一時一定の地に留まり居る、又外國に留り居る「一一民」

【地】チ　ヂ　圖

○つち、下土。○くが、をか（陸）○くに（邦國・領土）○ところ（場所）○ところ（居處）○ちば（位置）孟、離婁「禹稷・顏子易レ地則皆然」○したち、（底下位）○したぢ、豫備。○土を主る神（后土）○語尾に添へる無意味の詞「一頭ー」「活潑潑ー」圖○ち、布帛の厚み。○文章中の會話を除きたる文句、即ち作者の語句。
【地位】チイ　ところ。くらゐ、たちば。‖地歩。
【地異】チイ　地上の異變、地震・海嘯など。天變の對。‖地變。
【地維】チイ　地の成立するつなぎ。史記「天柱折、一一絕」
【地域】チイキ　ちのさかひ、又さかひうち。周禮、大司徒「以二天下土地之圖一、周二知九州之一一廣輪之數一」‖區域。
【地妖】チイウ　地上に起る不思議なる事がら。家語「天災一一、不レ能レ加也」‖地異、地怪。
【易レ地皆然】イチヂカイゼン　人其の地位を換ふれば皆同じ行をなす。孟、離婁「禹稷・顏子、易レ地則皆然」
【拔レ地倚レ天】バツチキテン　文勢の雄大なるを評す。錦字箋「揉揉云、玉川月蝕詩、退之無二此筆一解、莫レ不二拔レ地倚レ天、句句欲レ活」
【掃レ地】サウチ　ことごとく滅びて一物をも留めず。漢書、揚雄傳贊「秦滅二六國一、而上古遺烈、——矣」
【掃レ地】サウチ　地をはらふ。蔡叔倫詩「風吹二楊柳一漸一レ一」さっぱりと跡方もなき義。‖掃地。
【地價】チカ　土地のあたひ。北夢瑣言「以二此地一奪レ之、殊不レ肯二一一」
【地遠】チエン　土地のはて、地のかぎり。‖地角。
【給二地芥一】キフチカイ　地上のあくたを給ふ、事の甚だ易きに喩ふ。漢書、夏侯勝傳「經術苟明、其取二青紫一、如二俯給二地芥一耳」
【地行仙】チカウセン　地上を行く仙人。人の長壽を祝する語。蘇軾詩「先生眞是——、住レ世因循五百年」
【地角】チカク　地のはて。徐陵文「天涯窮一一、悠然」
【地殼】チカク　地皮に同じ。
【地下室】チカシツ　地中にて繁殖する植物のくき。俗に誤りて根と稱す。蓮根の類。
【地祇】チギ　くにつかみ、地神。周禮、大宗伯「建二邦之天神人鬼一一之禮一」‖后土。
【地久】チキウ　地は永久かはることなしや老子「天長一一」
【地久節】チキウセツ　圖俗に皇后陛下の御誕生日を祝ふ祝日の稱。前條老子の語に本づく。
【地球】チキウ　太陽系中第三位に在る遊星。吾人の棲息する世界、扁扁平なる球形を爲すが故。
【地筋】チキン　白茅ヂキの異名。
【地錦】チキン　蔓生植物の一。つた（蔦）の異名。須根にて樹木又石垣等にはひつく。
【地紙】チガミ　地のおほうな、地を成立維持する自然の力。柳宗元、鐃歌「服二天綱一頓二一一」‖地維。
【地官】チクワン　土地人事に關する政を掌る官、周代の六職の一。周禮「一一司徒、曰二敎官之屬一」
【地形】チケイ　○土地山川のありさま。史、秦本紀「聞二其一一與二其兵勢一」○圖土木を起す時に其の土地をならし固める工事。
【地峽】チケフ　海に挾まれたる狹く長き

地脈が兩大陸を連結する所。‖地頸。

【地券】チケン　官府より下附する土地所有の證明書。宋史、包拯傳「持ニ一自言」

【地獄】ヂゴク　閻魔ヤマの異名。

【地獄】ヂゴク　罪死者の生前の罪により苛責を受くる處。等活・黒繩・合會・叫喚・大叫喚・焦熱・大焦熱・阿鼻の八大地獄に分つ。法華經「受ニ一畜生餓鬼之苦一」

【地衣】チイ　菌石セキの一名。

【地藏菩薩】ヂザウボサツ　圖六道能化の菩薩にて、慈悲を主として子供の靈魂を護るといふ。

【地膚】チフ　ぢしし、すくもむし。本草「蝟蟲一名ニ一一」

【地志】チシ　地理書。韓愈、毛穎傳「山經ニ一、字書圖畫、九流百家、天人之書」‖地誌・地記。

【地嘴】チシ　みさき、陸地の細く海中に突出せる所。‖岬。

【地質學】ヂシツガク　地皮の成立・組織・性質等を研究する學問。

【地震】チシン　大地のゆれ動く義。なゐ。地熱の發作・地皮の收縮・地中の空所の陷落等に因りて起る。周語「陽伏而不ニ一能ニ一出、陰遁而不ニ一能ニ一烝、于是有ニ一ニ一」

【地上權】チジヤウケン　建築物又は竹木等を所有する爲めに他人の土地を使用する權利。

【地場】ヂヂヤウ　かがりび。周禮、注「燋、ニ一也」‖炬燭・篝火。

【地辷】スベリヂ　圖地のうは皮が低き方にすべり落つる現象。

【地稅】チゼイ　土地に課する租稅。宋史、食貨志「城郭之賦、宅稅・ニ一之類是也」

【地勢】チセイ　土地の狀態、山川險易の形勢。漢書「秦形勝之國也、ニ一便利」‖地形。

【地積】チセキ　地面の廣さ、土地の面積。

【地蜂】チホウ　みみず。蜂が似たる故。‖蚯蚓・蚰女・地龍子。

【地租】チソ　土地に賦課する租稅。唐書、徽傳「修ニ洛陽宮一勞ニ人也、收ニ一二厚ニ斂也」‖地稅。

【地皮】チヒ　地皮のかさなり。

【地代】チダイ　圖他人所有の土地を借りて居る者が地主に拂ふかりちん。‖借地料。

【地軸】チヂク　地の中心。陳信表「德動ニ天關一、威移ニ一ニ一」‖坤軸。

【地鎭祭】ヂチンサイ　土木工事を起し基礎を築くに先だちて、其の建築物の安全を祈る爲め、土の神を祭るまつり。

【地者】チシヤ　一定の地に安著して、他に移らざるもの。漢書、食貨志「理ニ民之道、ニ一爲ニ本」‖土著。

【地圖】チヅ　海陸邦國・山川都邑の位置形狀等を畫きしるづ。

【地動】ヂドウ　地うごき。漢書、元帝紀「郡國被ニ一ニ一災ニ甚者、無ニ出ニ租賦一ニ一也」‖地震。

【地動儀】チドウギ　古代の地震機。後漢書、張衡傳「造ニ候風ニ一ニ一、以ニ精銅一鑄成」

【地頭】チトウ　〇地面なり。唐書、食貨志「大歷元年、有ニ一ニ一錢、每ニ畝二十」〇ヂトウ　圖諸國の莊園のつかさ。源頼朝始て之を置く。

【地頭】チトウ　〇地につく。北史、魏昭成帝紀「身長八尺、隆準龍顏、立髮ニ一ニ一」〇地に案てる。

【落ニ地】オチニ　人の初めて世に生れ出る義。陶潛詩「ニ一爲ニ兄弟一、何必骨肉親」

【陷ニ地】オチニ　消滅の義。論、子張「文武之道未ニ墜於地一、在ニ人」

【擲ニ地作ニ金石聲一】ナゲテヂニカネイシノコエヲナス　詞句のすぐれたるにいふ。晉書、孫綽傳「嘗作ニ天台山賦一、辭致甚工、初成以示ニ友人范榮期一云、卿試擲ニ地、當ニ作ニ金石聲一」

【陷ニ地】オチニ　地にぬりつく。轉じて敗滅する義。史、劉敬傳「肝腦ニ一ニ一」

【地熱】チネツ　地球の内部の熱さ。‖地心熱。

【地方】チホウ　〇其の土地。晉書、孝懷帝紀「藩子ニ一爲生ニ人一」〇帝都以外の地、ゐなか。

【地方稅】チホウゼイ　各府縣にて取立てて其の地方の行政費等にあてる稅金。國稅の對。

【地望】チバウ　よきいへがら。門地人望。北夢瑣言「郎君猶ニ如ニ是ニ一、作ニ如ニ是行止一」

【地盤】チバン　〇地のどだい。‖地殼。〇己の一身を立つる所。‖立脚地。

【地皮】チヒ　地球のうはかは。‖地殼。

【地符】チフ　地上に現はれるめでたきしるし。天瑞の對。王融、曲水詩序「天瑞降、ニ一升」

【地文】チブン　〇地のあや。論「日月者天之文也、山川者地之文也、言語者人之文也」〇藥草の一種、半夏ハンゲの異名。

【地文學】チブンガク　地球の構造・天體との關係・氣界水界地熱の作用等を研究する學問。天文學の對。

【地平線】チヘイセン　陸地と天と相接する水平の一直線、天と地との界目のすぢ。

【地球】チキウ　地上の異變。地震・海嘯の類。漢書「天變見ニ于上、ニ一動ニ于下一」‖地異。

【地步】チホ　地位に同じ。

【地脈】チミヤク　地層のつづけるすぢみち。史、蒙恬傳「不ニ一能ニ一無ニ一絕ニ一ニ一」‖土脈。

【地面】チメン　〇土地の表面。‖地上。〇とち、地所。

【地榆】チユ　野生の草の名、われもかう。本草「其葉似ニ一檢而長、初生布ニ一地、故名」

【地輿】チヨ　地球。地は方にして萬物を載するに因りて車輿に喩ふ。淮南

子「以ㇾ天爲ㇾ蓋、以ㇾ地爲ㇾ輿」‖坤輿・輿地。

【地籟】チライ　地上の音響。人籟・天籟の對。莊、齊物「子游曰、ー！、則衆竅是已」

【地雷火】チライクワ　あらかじめ地中に爆發物を埋め置き、敵が其の上を通過する時、爆裂せしめて死傷せしむるしかけ。

【地臘】チラフ　道家にて行ふ五月五日の祭の名。雲笈七籤「五月五日名ニー一」

【地利】チリ　○地形の緊害よき義。孟、公孫丑「天時不ㇾ如ニー一」○土地より産する利益。地の生産。孝經「因ニ天之道、就ニ地之利、謹ㇾ身節ㇾ用、以養ニ父母ニ」

【地理】チリ　○地の高低廣狹等の狀態。易、繫辭「仰以觀ニ于天文、俯以察ニ于ー一ニ」○陸地の位置形狀・河海山嶽の所在・邦國都邑の形勢・人文の盛衰等の すべて地球に關する事がら。又之を研究するをー一學といふ。

【地黃】チワウ　藥草の一、葉の裏表に毛あり、夏、壺のさきに薄紫の花を著く。蘇軾詩「ー一飼ニ老馬ニ、可ㇾ使ニ光祿ニ人」‖地髓。

圮 ヒ 紙

やぶる、こぼつ（毀）書、堯典「方命ー族」くつがへす（覆）戊巳の己に从ふ。

【圮毀】ヒキ　くづれやぶる。王禹偁文「雉堞ー一、蒿萊荒穢」‖頽毀・頽圮。

【圮敗】ヒハイ　やぶれかける。蘇軾文「支ニ其紙斜、補ニ其ー一ニ」

【圮絕】ヒゼツ　やぶれたえる。蔡邕文「微言ー一、來者曷聞」‖斷絕。

坑 カウ 四畫 庚

陘に同じ

○あな（穴）地の陷りし穴。○たに（壑）莊、天運「在ー滿ー」○あなにする。史、項羽紀「詐ー秦降卒三十萬」おとしいる（陷）○ほり（塹）○圊圂廁をいふ、廁にゆくを登ー一といふ。

【坑陷】カウカン　地面がくぼみて出來し穴。唐書、百官志「ー一井穴皆有ㇾ標」

【坑口】カウコウ　礦山の穴の口。

【坑殺】カウサツ　穴に陷れてころす。史記「武安君挾ㇾ詐、而盡ー一ニ之ニ」‖陷殺。

【坑穽】カウセイ　坑殺に同じ。趙岐文「ー一ニー傷生ニ」

坍 カツ 黠

○ちり、あくた。○あか（積垢）

坎 ㊀カン ㊁カン 感 闞

㊀あな（穴）○つかあな（塹穴）○穴を穿ちて葬る、地を穿ちて祭る。○けはし、さがし（險）又、其の事、其の處。○おちいる、おとしいる（陷）○なやむ（艱）○はかる（詮）○鼓などを擊つ聲。詩、陳風「ー其擊ー鼓、ー其擊ー缶」又、力を用ふる聲。○ちひさきもたひ（小罍）○星の名、溝渠水泉を主るといふ。○方位の名、正北。○易の卦の名、ー上ー下。㊁けはしき岸。

【坎坷】カンカ　行きなやむ。不遇アウンにて志を得ざる貌（揚雄、河東賦）‖軻ー。坎壈。

【坎制】カンセイ　前條に同じ（後漢書、注）

【坎坎】カンカン　○力を用ふる聲。詩、檜風「ー一伐ㇾ檀兮」○鼓をうつ聲。詩、小雅「ー一鼓ㇾ我」

【坎侯】カンコウ　樂器の名、漢武帝造る、其の腹坎坎として節に應ずるが故、後訛ヲヤリて箜篌に作る（樂府解題）

【坎穽】カンセイ　おとしあな。論語「若下陷ニー一、食中于井ニ」‖坎陷・陷穽・陷阱。

【坎井之鼃】カンセイノア　あちくぼみし井中に住める蛙、人の聞見の狹きに喩ふ。荀子「ー一、不ㇾ可ニ與語ニ東海之樂ニ」‖井底之蛙。

【坎壈】カンラン　志を得ざる貌。楚辭、九辨「ー一兮貧士、失ㇾ職而志不ㇾ平」‖坎坷。

圻 ㊀キ ㊁ギン 眞 微 文

㊀王畿千里の地。‖畿。○ー父は司馬の官、王畿の兵甲を掌る。㊁さかひ、かぎり。淮南、俶眞「四達無ㇾ竟、通ニ於無ー一」‖垠。

圾 キフ 緝

あやふし（危）‖岌。

均 ㊀キン ㊁キン ㊂エン 眞 同 先 韻に通ず

㊀ひとし、ひとしくす（等）たひらか、平かにする、平等にする。中庸「天下國家可ー一也」○ととのふ（調）詩、小雅「六轡既ー一」○あまねし（徧）○おなじ（同）○はかる（度）○ろくろ、瓦を造るに用ふる回轉器。○樂器の名。○音樂上にて音律の變化。㊁こゑ、ひびき、韻の古字「音ー一」㊂そふ。史、夏本紀「ー一河海通ニ淮泗ニ」‖沿。

均・齊・倂等の別は齊（部首十四畫）の條を見よ。

【均一】キンイツ　ひとし、ひとしくす。平均一致。唐書、薛平傳「兵經完葺、稍賦

一一」

【均窯】キンヨウ　古の磁器名。宋、鈞州の窯で今の河南省禹縣に在り、硃砂紅・翠青綠・茄皮紫の三種あり、底に一二等の數目字號ありて記と爲す。

【均衡】キンコウ　つりあひ。‖平衡・平均。

【均輸】キンシュ　官名。次條を見よ。史記「桑弘羊爲大農丞、領天下鹽鐵諸會計之事、稍稍置ニ一以通ニ貨物一」

【均輸法】キンシュホウ　其の地に多く産する貨物を缺乏せる地へ運びて當時ひ、價の平均を得しむる法。其の官を均輸といひ、各郡國に置く。宋史、食貨志「均輸之法、所ニ以通ニ天下之貨一、制ニ輕重一、斂散之術一、使ニ商賈者既便而有ニ以得一、以歸ニ於農一」

【均水】キンスイ　水を平等に配る。‖作ニ一一約束一、以防ニ分爭一」

【均勢】キンセイ　勢力が互に相平均する義。

【均照】キンショウ　同じやうに照りかがやく。駱賓王文「曜輪一一、或流ニ景于華域一」

【均田】キンデン　あまねし。後漢書、和帝紀「詔曰、荊州比歲不レ節、今茲淫水爲レ害、徐豫二頗登、而多不ニ一一」

【均當】キンタウ　同じやうに割りあてる。

【均調】キンテウ　平らかにならしととのへる。宋史、陳堯佐「運ニ用人才一一ニ天下一」

【均霑】キンセン　ひとしくうるほふ、生物がひとしく雨露の惠にうるほふ如く、各國各人同等の利益を得る義。

【均等】キントウ　ひとし。北史「禮數一レ一」‖均一。

【均服】キンプク　軍服、同じそろひの服の義。左傳五「一一振振」‖戎衣・戎服。

【均平】キンペイ　ひとしく平かにす。徐寅詩「日月無レ情也有レ情、朝昇夕沒照一一」‖公平。

【坽】キン　㊥　あな（坎）

【坽坎】カンカン　深く穴を掘る。史記、酷吏傳「甸人築ニ一一一」

【坐】ザ　㊥

○すわる。行の對。○すわるべき席。座に通ず。○古、ひざまつく（跪）義に用ふ。曲禮「先生ニ坐ニ一一一而遷之一」○まもる（守）左、桓十二「楚人ニ一其北門一」○ながら、容易に、手足を勞せずして。孟、離婁「千歲之日至、可ニ一一而致一也」○そぞろに、漫然として。杜牧詩「停ニ車一愛楓林晩」○まきぞへ（連累）「連ニ一」

【坐暗】ザアン　何事も爲さず、言はざる義。易林「筮遯ニ一名爲ニ無用一」

【坐陪】ザバイ　誰をうつ、おながら隨從する義。世說、巧藝「王中郎、以ニ圍棋一爲ニ一一手談一」‖手談。

【坐甲】ザカフ　甲を著たるまま坐して敵を待つ。左傳「裹レ糧一レ一」

【坐具】ザグ　㊥ござ・とんの類。法苑珠林「一一之用、本是坐時之具」

【坐蜜】ザミツ　まきぞへの部にて獄屋につながる。宋史、岳飛傳「一一經月、無ニ可レ證者一」

【坐食】ザショク　はたらかずにくらふ。ぐひ。吳志「後宮之中、一一者萬有餘人」

【坐職】ザショク　坐業に同じ。

【坐睡】ザスイ　ゐねむりする。ゐねむり。

【坐若ニ尸】ザスルトシカタノ　坐するときは、尸の如く正しくする。曲禮「一一、立如レ齊」

【坐船】ザセン　船に船を乘りあげる。

【坐禪】ザゼン　㊥趺坐して佛道を求める。無言靜坐して佛道の妙理を究める修業。楞嚴經「譬若ニ一觀ニ諸經典一、一一於白蓮北一」

【坐側】ザソク　そば。後漢書、循吏傳「一一、以當ニ賓人夜誦之音一」

【坐致】ザチ　勢せずしておながら物を致す。周書「六條既爲、一一千里一」

【坐忘】ザバウ　雜念なくして我を忘れる。莊、大宗師「顏回曰、回一一矣」

【坐部伎】ザブギ　唐の玄宗、樂を二部に分ち、堂下は立奏す、之を立部伎といひ、堂上は坐奏す、之を一一といふ。白居易、華原「立部貴、坐部賤、坐部退爲立部伎」

【址】シ　㊦

もとゐ（基）‖趾。劉兼、長春節詩「太平基一千年永、混一車書萬古存」いしずゑ（礎）

【坤】トン　㊤㊦

○ふさぐ、ふさがる(塡塞)草土をもて水を塞ぐ。○うね(田隴)

【坏】ハイ　灰　又、阨に作る

○をか(阜)○瓦のしたぢ、瓦の未だ燒かざるもの。○ふさぐ、とづ、土にて壁の隙を封ずる。禮、月令「孟冬使有司」城郭」○屋後の牆。揚雄、解嘲「或築一宿過」

【坊】バウ　陽

○まち(町)ちよた。○へや(室房)いへ(家)舍ー主は太子の宮。宮ーは僧寺をいふ。○いがた(型)○ふせぐ(防)ささふ(障)○つつみ(堤)○圖ぼう、僧形の人にいふ「師のー」「武藏ー」又、男の小兒を親みていふ。

【坊間】バウまち。‖坊市。

【坊曲】バウ　唐の制、妓女の居る所の名。周美成詞「憶悟ー人家」

【坊市】バウまち。杜陽雜編「ー人家」‖坊間・街市。

【坊舍】バウ　僧の住みて居る所。‖僧房。

【坊主】バウ　圖○坊舍の主の義。僧をいふ。○僧形の人。又頭の圓き物。○毛髮・草木等の無き形容。

【坊場】バウ　市街をいふ。文獻通考、征榷考「按ー、城市也、商稅酒稅皆出焉」

【坊店】バウみせ。陳游詩「近村ー賣ニ酒酤」酤はもろみざけ。

【坊本】バウ　市中にて賣る書物。官本・家塾本などの對。

【坊門】バウ　市街の門。唐書「今暫逢ニ寢ー一、卻閉ニー一」‖巷門。

【坊欲】バウ　欲心をふせぐ。禮、坊記「刑以坊ニ淫、命以ニー一」

【坊巷】バウ　坊舍に同じ。

【坂】ハン　阮　潸　阪に同じ

○さか、傾斜せる山路。○どて、つつみ(堤)澤の障。

【坐】ヒ　紙

○ならふ(比)相連なる。吳都賦「酒賣ー一」

【坌】フン　問

○ちり(塵)○けがる。○あつまる(聚)ならぶ(竝)

【坌集】フンシフ　衆人が一時にあつまり合ふ。唐書、儒學傳「ー一ー京師」

【坌湧】フンヨウ　坌は衆なり、盛んにわき出づる。後漢書、綱衡傳「飛ニ詞勝ニ辯、縱氣ー一」‖坌湧。

【坋】フン　吻

○ちり(塵)塵起る、坌に通ず。○大いなるつつみ(大防)○かく(拌)

五畫

【坳】アウ　巧

くぼみ(凹所)窪下の地。

【坳堂】アウダウ　堂の中のくぼみたる處。坳は凹に通ず。莊、逍遙遊「覆ニ杯水ー一之上、則芥爲ニ之舟一」‖堂坳。

【坳窪】アウワ　ふかくくぼむ。柳宗元文「凡ー一泜岸之狀、無レ後ニ其故一」

【埃】アイ　灰

○ちり、ほこり(塵埃)○くらし(昧)○ー扎アイは際限なき貌。

【垌】カ　馬　圖　一に峒に作る

○ゆきなやむ。轉じて不遇の義とす「坎ー」○平かならざる貌。

【垈】カン　翰

ろつぼ(土罎)

【垈場】カンバ　金銀を溶かすに用ふる土製のつぼ。

【垌】ケイ　迥　同は古字

林の外の地、郊野「郊ー」「林ー」

【坤】コン　元

○つち(地)易、說卦「ー爲地」乾の對。○くが(陸)○をか(岡)○ひつじさる、西南の方角。○したがふ、乾に順ふ義、すなほ、やはらか(柔順)乾の剛健に對して。○妻の道。臣の道。○易の卦の名、ー上ー下。○皇后又は女の事に用ふ。乾を天子又は男とするに對して「ー極」「ー德」

【坤維】コンキ　地の成立するおほづな。地の綱凝。姚合詩「賦成性分論ニー一」‖地維。

【坤宮】コンキウ　皇后の喩れたまふ慈悳。後漢書「ニー一天下」

【坤儀】コンギ　坤輿に同じ。舊唐書「夫乾ー一」

【坤極】コンキヨク　皇后のくらゐ。後漢書、皇后紀「宜ニ配ニ天作一正ニ位ー一ニ」

【坤元】コンゲン　つち。地の德。易、坤卦「至哉ー一、萬物資生」

【坤道】コンダウ　女の守るべきみち。‖婦道。

【坤軸】コンヂク　地の中心。杜甫詩「殺氣南行動ニー一」‖地軸。

【坤範】コンハン　地の萬物を育つる徳。易、坤卦「坤厚載レ物、徳合二無疆一」轉じて女、又、皇后の徳にいふ。
【坤輿】コンヨ　地をいふ。輿は車の物を載せる所。故に地に比す。易經「坤爲二大輿一」＝坤儀・地輿。
【坤靈】コンレイ　地の神。宋書「山嶽河瀆皆坤之靈」＝地祇。

【垂】スキ　支　畱は俗字

○たる、さがる、ぶらさがる。○しく(布)後漢書、鄧禹傳「一功名於竹帛一」○ほとり。＝陲。堂の盡くる處、階に近き邊。又、其の所に居る。史、司馬相如傳「坐不レ一レ堂」轉じて國のはて、邊境。○なんなんとす、將に及ばんとする義「一レ成」「一レ老」○ほとんど(殆)
【垂顧】スキコ　おとがひを垂れさげる、食ひたく思ふ形容。歐陽修詩「流涎倘一レ一レ」＝梁頤。
【垂櫻】スキイ　かんむりのひもをたれる。
【垂雲表】「一ニ一玉階一論二道衆宮一」
【垂拱】スキキョウ　○衣を垂れ手をこまぬき何事をもせざる義。書、武成「惇二信明一レ義、崇一レ徳報一レ功、一レ而天下治」○衣を垂れて手をこまぬく敬體。
【垂拱之化】スキキョウノカ　天下の太平をいふ。前條を見よ。晉書、劉寶傳「昔虞任二五臣一、致二一一一一」
【垂教】スキキョウ　をしへをたる。＝垂示。
【垂眷】スキケン　めぐみをかける。曹植詩「君不二一一一、豈云二其誠一」＝垂顧。
【垂結】スキケツ　垂範に同じ。宋史、樂志「衆辟率レ此、一レ一レ無レ窮」
【垂顧】スキコ　めぐみをかける。庾亮表「先帝龍興、垂二異常之顧一」＝垂眷。
【垂察】スキサツ　おもひやりをたれる。韓愈文「赤惟少一レ一レ焉」
【垂示】スキジ　をしへをたれる。後漢書「遂二違先世一一ニ一後世一也」＝垂教。
【垂死】スキシ　しにかかる。元稹詩「一一病中驚坐起」＝垂沒・瀕死。
【垂仁】スキジン　めぐみをたれる。韓愈文「奈二其辭一而一レ採納焉」
【垂跡】スキシャク　佛天竺の佛が衆生濟度の爲めに諸國の神人に生れかはりて出現し、佛法の跡を遺す「本地一一」＝垂迹。
【垂準】スキジュン　すみなはの端におもりを附けて下げ、物のゆがみを正すもの、さげずみ。＝垂直器。
【垂垂】スキスイ　○將に及ばんとする貌。杜甫詩「江邊一樹一一發」＝漸漸。○たれさがる貌。薛能詩「滿風輕拂絲一一」
【垂涎】スキエン　食を欲してよだれをたれる。轉じて物を深く望み欲する義。晉誼新書「一レ一相告」張元幹詩「扁舟莫二浪發一、蚊蚋正一レ一」
【垂線】スキセン　垂直線に同じ。
【垂範】スキハン　垂軌に同じ。宋史、樂志「發レ祥一レ一、永世貽レ孫」
【垂雲】スキウン　ふくろをたれる、空妻の儀、から、てぶら。齊語「賄侯之使、一一而入、彌縫而歸」
【垂紐】スイチュウ　さいはひをたれる。柳宗元文「宗社一レ一、啓二鉤鼎心一」
【垂直線】スイチョクセン　おもりを絲にてつるしたる如く、地平面と九十度の角度を保てる直線。＝垂線。
【垂涕】スイテイ　なみだをながす。史、司馬相如傳「爲之一レ一」神女賦「憫慨一一」
【垂髫】スイチョウ　さげ髪、轉じて幼兒をいふ。魏志、毛玠傳「一一執レ節、堅勁取レ官」＝髫齔・髫髮。
【垂髫戴白】スイチョウタイハク　垂髪の幼兒と白髪を戴ける老人と。後漢書、鄧禹傳「禹所レ止、輒停レ車住レ節以勞二來之一、父老童稚、——滿二其車下一、莫レ不二感悅一」(髫一に髪に作る)陳遊詩「——各欣然」
【垂天】スイテン　そら一杯にたれさがる。莊、逍遙遊「翼若二一一之雲一」
【垂統】スイトウ　帝王の系統を繼ぎて後世に垂れる義。孟、梁惠王「君子創レ業一レ一爲レ可レ遺也」
【垂芳】スイホウ　ほまれを後世にのこす。晉書「一ニ一竹帛」＝流芳。
【垂白叟】スイハクソウ　しらがおやぢ。＝叟白翁。
【垂簾】スイレン　てばんを縫官にのこす。沈約文「方二執前秀一、一ニ一後鳳一」
【垂冰】スイヒョウ　つらら。庾肩吾詩「一一滴二玉手一、含刺貫二寒眼一」＝冰柱。
【垂暮】スイボ　年老ゆるをいふ。張元幹詞「年華一一猶鮮榮」
【垂楊】スイヨウ　しだれやなぎ。梁元帝詩「一一拂二胡塵一」
【垂老】スイロウ　七十に近き老人。宋史、王襄傳「一一之年、殞二身鋒鏑一」
【垂柳】スイリュウ　しだれやなぎ。梁元帝詩「巫山巫峽長、一一復垂楊」
【垂綸】スイリン　つりいとをたれ魚を釣る。世說「王弘之、性好レ釣レ魚、上俯江有二一處一、名二三石頭一、弘之常一一於此一」
【垂憐】スイレン　あはれみをたれる。韓愈文「亦惟少一レ一焉」
【垂簾之政】スイレンノセイ　天子幼少の時、太后代りて政事を執るをいふ。開見錄「呂文靖爲レ相、章獻太后垂レ簾聽レ政」
【垂露】スイロ　○たれしたたる露。○書法の語、縱に引く畫のをはりをはねずして筆を押へて止むる法。
【垂水】スイスイ　圖　たきの古語。＝瀑布。

【坼】タク　陌　拆に同じ

○さく(裂)○ひらく(開)
【坼副】タクフク　さけわれる、龜裂をいふ。史、楚世家「生子六人、一一而疏

焉」

【坍副】タンフク　難産をいふ。詩、大雅「先生如レ達、不レ坍不レ副」達は小羊なり、これは羔羊が后稷を生むの易かりしをいふ。

【坍壞】タンクワイ　われさけること、破裂する。後漢書、五行志「京師郡國地震、城地一一湧レ水、敗二壞城郭一」

【坦】タン　旱

○たひらか(平)○ゆるやか、ひろし(寬)論、述而「君子一蕩蕩」

【坦夷】タンイ　坦平に同じ、夷は平。

【坦懐】タンクワイ　ひろく平かなる心「虚心一一」朱書、張永傳「勸二興レ水一

【坦率】タンソツ　さっぱりとしてかざらず。坦易にして直率なり。北史、李廣傳「一一無レ私」

【坦蕩】タンタウ　心ひろく平か。論、述而「君子坦蕩蕩」晉書「其外一一、而内淳至」

【坦坦】タンタン　ひろき貌。又、平かなる貌。易、履卦「履レ道一一、幽人貞吉」

【坦途】タント　平かなるみち。韓愈詩「近來自說詩一一」

【坦腹】タンプク　ねころぶ、王羲之の故事によりて女婿の義とす。晉書、王羲之傳「郗鑒使二門生求二壻于王導一、導令下就二東廂一徧觀中子弟上、聞レ諸レ

曰、王氏諸少並佳、然聞二信至一咸自矜持、惟一人、在二東牀一一食、獨若レ不レ聞、鑒曰、此正佳壻邪、訪レ之乃羲之也」俗語、壻を坦といひ、人の壻を令坦といふは此に本づく。

【坦平】タンヘイ　たひらか。劉禹錫詩「蜀路新修盡一一」＝坦夷。

【坦路】タンロ　坦途に同じ。

【坻】○チ　支　○シ　紙　○テイ　齊

㊀しま、す、小洲。又、水中の高き地。左、昭十二「有レ酒如レ淮、有レ肉如レ一」○みぎは、なぎさ。爾雅、釋水「小渚曰レ沚、小沚曰一」㊁とどまる(止)○つか、小高き地。○には(場)㊂さか(阪)

【坫】テン　豏

○兩柱の間に設けたる、土にて作りしさかづきだい、獻酬の禮畢りて杯を其の上にふせる。論、八佾「邦君爲二兩君之好一、有レ反一」○堂の隅。

【坡】ハ　ヒ　歌　支

○さか(阪)○つつみ(堤)

【坡陀】ハダ　とてのきし。宜和遺事、一「黄州滾月臺一一」＝坡老。

【坡老】バラウ　坡仙に同じ。

【坡仙】バセン　蘇東坡をいふ。陳益稷詩

【坡頭】ハトウ　つつみのほとり。

【坡塘】ハタウ　つつみ、とて。＝堤防・堤堰。

【坡陀】ハダ　斜に傾きて平かならざる貌。爾雅、釋地「一一不レ平」

【坩】○フ　虞　○フ　遇

㊀白石英、水晶の類。○いかだ(筏)㊁ます(盞)附に通ず。

【坪】ヘイ　庚

○たひらか(平)地の平かなる所。○圖つぼ、地面にて六尺四方の稱。＝步。又、錦・壁等にて一尺平方の稱。彫刻等にて一寸平方の稱。

六畫

【垣】エン　ヱン　元

○かき(籬)卑きを一、高きを墻といふ。○たすけ(援)庇護する者。詩、大雅「大師維一」○上中下ある星の名。

【垣衣】エンイ　階に生ずる苔の類「廣雅」

【垣墻】エンシヤウ　かき。書、費誓「踰二一一、竊二馬牛一」＝墻垣。

【垣篇】エンペン　まがき。元德明詩「雪永一一雞犬閑」

【垓】○カイ　佳　灰　○カイ　通用　ガイ

㊀くにのはて(極土)「九一」○さかひ(界)○數の名、十億を兆、十兆を京、十京を一といふ。○まもり(守)㊁かさぬ(重)○かさねたるだん(階級)史、封禪書「大乙壇三一」○圖數の名、京の千倍。

【垓下】ガイカ　安徽省鳳陽府靈壁縣の東南に在り、漢の高祖、楚の項羽を圍みし處(史、項羽紀)

【垝】キ　紙

やぶる(毀)

【垝垣】キエン　やぶれたるかき。詩、衛風「乘二彼一一一以望二復關一」＝壞垣。

【垠】ギン　眞　文

○かぎる。かぎり。李華、弔古戰場文「浩浩乎平沙無一」はて(邊界)爾雅「九天之際、曰九一」○きし(崖)

【垠界】ギンカイ　さかひ。

【垠際】ギンサイ　はて、かぎり。晉書、載記、花萼無二一一一＝垠涯・涯際。

【型】ケイ　キヤウ　靑

かた、いがた（鑄式）土を以て造りたるもの（竹又、金を以てするを範、木を以てするを模といふ）轉じて、のり、てほん、模範の義とす「典ー」「儀ー」

【型法】ケイホウ　いがた。

【型模】ケイボ　いがた。‖模型。

【垢】コウ　有

○あか、ちり、ほこり（塵・滓）○あかつく、よごれる。○けがす、けがれ、けがれ（汚）○はぢ（恥辱）左、宣十五「國君含ー」

【垢膩】コウジ　あかつきがれる。陸書、楊伯醜傳「形體ー、未二曾櫛沐一」

【刮レ垢磨レ光】カツコウマス　人の瑕疵を刮り去りて、淨行の光を發せしむる、人才を成就する義。韓愈、進學解「ー、蓄有二幸施一」

【含レ垢】ガンコウ　濁汚を受け忍ぶ。左、宣十五「晉伯宗曰、瑾瑜匿レ瑕、國君ーレー」瑕は玉のきず。

【垢黯】コウアン　垢膩に同じ。

【垢滓】コウシ　あかと、かすと。轉じて汚穢の義とす。長笛賦「既二盥汚穢一、澡二雪ーー一」

【垢膩】コウジ　あかや汗あぶらにてよごれる。杜甫詩「入レ舟難二苦熱一ーー可二避濕一」

【垢氣】コウキ　けがれたる氣。元稹詩「夜閑心寂寞、洞庭無二ーーー一」‖俗氣。

【垢塵】コウジン　あかつきやぶれる。又、其の衣。唐書、常衣ーー、居二一室一」

【垢面】コウメン　あかつきたるかほ。漢書「亂首ーー、不レ解二衣帶一連月」

【垢離】コウリ　垢が離るる、佛に願を立つる時、水を浴び身心を清むるをいふ「ーーを取る」

【垞】タ　麻

ちひさきをか（小丘）

【梁】タ　馬　又、堶に作る

○あづち（射垜）○もんぜや（門前の堂塾）

【垜】タ　禡

垜（前條）に同じ。

【垘】テウ　蕭

○野ノ二の界。○祭の名。○つかあな、墓地。兆に通ず。

【垤】テツ　質

○ありづか（蟻封）○つか、小高き地。丘阜。孟、公孫丑「太山之於二丘ー一河海之於二行潦類也」

【埀】フク　屋

○土ふさがる（土塞）○くづれる（崩）

七畫

【埃】アイ　灰

○ほこり、すなけむり。○ちり（塵）ごみ。

【埃雲】アイウン　すなけむり。ほこりがもやの如く見ゆるもの。轉じてけがれの義とす。晉書、郭璞傳「混二光塵于ーー一」‖埃嬡。

【埃壒】アイアイ　ちり、ほこり。班固、西都賦「蛾ニーー之混濁」‖塵埃。

【埃塵】アイジン　ほこり、ちり。晉書、儒林傳「滅氏修虐、棄レ德任レ刑、煽二於壃埸一ーー」‖塵埃。

【埃壒】アイアイ　ちりと、すすと。劉禹錫、聯句「遺爲ニーー二篋可レ掃」

【埃氛】アイフン　ちりほこりのいきり。宋史、王素傳「ーー肅レ空」

【埃壒】アイアイ　くろきほこり。家語「有ーー一塵垢中」

【埃塵】アイジン　ほこりが霧の如く起る。唐書、李密傳「既兩軍接、ーー冥冥」

【埃滅】アイメツ　ほこりの如くにほろぶる。後漢書、張純曹褒鄭元傳論「自二秦焚二六經一、聖文ーー」

【埏】㊀エン　㊁セン　先　輪

㊀きはまり、地のはて（地際）八ーは地の八際、八方のはて。○つか穴のみち（墓道）㊂ねやす、こねる、水を加へて土を柔かにす。○やはらかなる土。

【塡】カク　覺　職

○いしおほし、山に大石多し。○塙ーはやせぢ、瘠薄の地。一說に地が平かならず、さか。史、三王世家「燕地塙ー」

【堄】クヮン　寒　韓

○ぬる（粉）漆を灰に和して塗る。○垠の名。

【城】セイ　庚

○しろ、内をーといひ、外を郭といふ。天子、又、國王の居所。○みやこ（都邑）くに（國土）○防禦の爲めに築きたるとりで。○きづく（築城）○佳ーは墓地。

【城邑】セイユフ　みやこ。都城と邑里と。史、淮陰侯傳「以二天下ーー一封二功臣一、何所レ不レ服」

【城闉】セイイン　城の門。魏書、崔光傳「近在二ーーー一」

【城隍】セイクヮウ　しろのどて。後漢書、西羌傳「築二ーー一作二大航一」‖城塙。

【城下】セイカ　○しろのした。又、城の附近の地。左、宣十五「ーー之盟有二以レ國變一、不レ能レ從也」○國昔、大名の

城のあるまち。‖城市・城邑。
【城下之盟】ジャウカノチカヒ 居城の下まで、攻め入られて和議を講ずる。左、桓十二「楚伐レ鄭、大敗レ之、爲二――一而還」
【城濠】ジャウガウ しろのまはりの堀。李白詩「一一矢三往路一馬首迷二荒陂一」‖城池。
【城壕】ジャウガウ 前條に同じ。江淹詩「武レ馬陛二一一一」
【城角】ジャウカク 城のすみ。李賀詩「一一栽二石榴一」‖城隅。
【城郭】ジャウクワク しろのまはりのからぼり。梁書、陳慶傳「修二一一一爲二備禦一」
【城隍廟】ジャウクワウベウ 城の鎮守の神のやしろ。
【城復二于隍一】ジャウフクスルニ 城池をほり、其の土を積みて城となすを治に喩へ、其の城土のくづれて隍にかへるは、治極りて、亂生ずるに喩ふ。易、泰卦「――、其命亂也」
【城郭】ジャウクワク しろのくるわ。禮、檀弓「一一溝池以爲レ固」又、しろ、內に在るを城、外に在を郭といふ。
【城壁】ジャウヘキ しろのものみ。張正見詩「揚鑣出二一一一」‖城岡・城闕。
【城闕】ジャウケツ しろの門。詩、鄭風「俄号建兮、在二一一一兮」‖城觀。
【城狐】ジャウコ 城に棲む狐、以て君側に居る小人に喩ふ（說苑、善說）晉書、謝鯤傳「王敦謂レ鯤曰、劉隗奸邪、將レ危二社稷一、吾欲レ除二君側之奸一、何如、對曰、隗誠始レ禍、然一一社鼠也」社鼠は神社に棲む鼠。
【城溝】ジャウカウ しろのまはりの堀。史記「梁伯好二土功一、治二一一一」‖城池・城濠。
【城寨】ジャウサイ 城塞に同じ。蜀志、楊洪傳「拜二一一一一太守」‖城砦。
【城楯】ジャウジュン とりで。陳書、立二一一一一以担二官軍一」‖城壘。
【城市】ジャウシ 城邑市坊なり。後漢書、閻纘傳「扶絕志世外、常居二先人家側一、未レ嘗入二一一一」
【城址】ジャウシ しろのあと。
【城隊】ジャウスイ 城下のまち。
【城主】ジャウシュ しろのぬし。六韜「一一逃北」
【城守】ジャウシュ ○城にたてこもりて守る。淮南子「大國出攻、小國一一」○図しろもち。德川時代、領地に城を有する大名。‖城主。
【城戍】ジャウジュ ○二の丸、羅城。宋史「小有二警際一、大有二一一一」○しろのまもり。
【城代】ジャウダイ 國書、城の主に代りて城を守りし重臣、しろあづかり、城の留守役。
【城旦】ジャウタン 毎旦起きて城を築く役に服せしむる刑徒、四年の刑。史、李斯傳「既爲二一一一」
【城池】ジャウチ ○しろのまはりの堀。黃滔詩「流水下二一一一」‖城濠・城溝。
○しろと堀と。孟、公孫丑「城非レ不レ高也、池非レ不レ深也」
【城堞】ジャウテフ しろ。雉も城の雅。北史、薛孝通傳「擇二華山一以爲二一一一」
【城中寸土尺寸金】ジャウチウスンドセキスンキン 土一升に金一升といふが如し。宋の僧潛順、十竹詩「――、幽軒種レ竹值十箇、春風愼勿下長二兒孫一穿二我墻前綠苔一破上」
【城壕】ジャウガウ 城のひめがき。宋史「軍無二一一一、每伐二五木一爲レ樽」‖女牆。
【城都】ジャウト みやこ。‖都城・城邑。
【城內】ジャウナイ 城の中。後漢書、朱儁傳「以爲二一一一」
【城堡】ジャウホウ しろ、とりで。元史、文宗紀「修二一一、布レ兵拒守」‖城壘。
【城府】ジャウフ 城市と官衙と。後漢書、顯宗紀「修二復二鄗山之南、未三營入二一一一」
【不レ深二城府一】フカクジャウフ 城府は城と官衙と、人に接するにへだてを爲さず、肝膽を披く意。宋史、傳遵慶傳「遵慶厚重寡言、遇レ人――、人自不レ忍レ欺」
【城壁】ジャウヘキ 城のかべ。五代史、南唐世家「府庫充實、一一修葺」
【城裏】ジャウリ 城のうち、城中に同じ。鮑照詩「雞鳴洛一一、禁門平旦開」張籍詩「洛陽一一見二秋風一、欲レ作二家書一意萬重」
【城塹】ジャウザン 敵を防ぐとりで。齊書、高帝紀「治二新亭一一未レ畢、聞前已至」‖城壘・城砦・城櫓・城寨。
【城樓】ジャウロウ 城上のたかどの、遠望すべき者。後漢書、鄧禹傳「光武會二一上一、披二輿地圖一」

【垂】

垂（土部五畫）の俗字。

【垻】

㊀ ハ 麻 ㊁ ハイ 泰 ㊂ ヲ 禡 ㊃ 元

㊀不かなる川。㊁るせき（水堰）

【埒】

㊀ ホウ・ラ 養 ㊁ フ 虞

㊀大いなり。○さかんなり（貌）㊁くるわ（郭）‖郛。○山上に水あるにいふ字。

【埋】

マイ 佳

○うづむ、をさむ（藏）かくす（隱）○うづもる。○図うめる、足らざる所を補ふ「一め合せ」
【埋葬】マイサウ 死骸をうづめる。南史、扶南國傳「土葬則一二之」
【埋沒】マイボツ うづもれてあらはれず、うづもれて亡ぶ。孔武仲詩「正爲二利欲一相一一」‖埋沒。
【埋香】マイカウ 美人の葬をいふ。李賀詩「相陵飛燕骨一一」
【埋玉】マイギョク 英才の死をいふ。晉書、庾

亮傳「與亮將レ葬、何充會レ之、歎曰、一ニ樹於土中ニ、使ニ人情何能已ニ」轉じて美人の死にもいふ。

【埋骨】ほねをうづめる。白居易詩「龍門原上土、一レ一不レ埋レ名」

【埋葬】死者を地中にうめはうむる、はうむり。

【埋藏】うづめかくす。附攷、注「既葬一ニ一之一也」

【埋胞】生れし子の胞衣を埋める。北魏書、太祖道武皇帝紀「明年有レ孕生ニ於一レ一之次一」

【埋伏】うづもれふす、ひそむ。

【埋棺】棺をうづめる。後漢書、趙咨傳「生者之情、不レ忍レ見ニ形之壞一、乃有ニ掩レ壙一之制一」

【埋沒】うづもれて見えず。南史、郭祖深傳「飾口利辭、競相推薦、納直守レ信、坐見ニ一一」‖埋湮。

【埋火】圖炬・火鉢の類にうづめたる炭火。‖宿火。

【埋立地】圖河海等をうめて陸地とせし場所。

【埌】ラウ　漢

○つか(冢)○はるか(遐)○壙一は原野のはてしなき貌。

【埒】レツ　レチ　厲

○らち、短き垣、馬一は馬場の短き垣。○山上に停る泉。又、其の境。○ひとし(等)音語「叔向子產晏嬰之才相等一」○圖らち。馬場の周圍のかこひ、轉じて物ごとの排ルるを一があく」といふ。

八畫

【埜】アグ　ナ　遇　禡

○いろつち(色土)しらつち、しっくい「白一」○しらかべ(粉壁)○どろ(泥)○ぬる(塗)つぐ(次・亞)の義。先づ泥にて塗り之に次ぐに灰を以てぬり飾る。○ぬり飾りたる壁牆、單に牆壁の義にも用ふ。李泰伯、袁州學記「飾一丹漆」○しろく塗らざる室にもいふ。

【埜室】白くぬらざるあらかべのいへ、喪に服する者の居る室。禮、雜記「三年之喪、廬ニ一之中一」

【埜漫】ててにて塗る。漫は墁に通ず。莊、徐無鬼「鄙人一ニ一其鼻端一」

【場】ヂヤウ　陽　場とは別

○あぜ、くろ(畔)田のさかひ、大いなる界を疆、小なる界を一といふ。○くにざかひ(邊境)左、成十三「鄭人怒君之謀一」

【堦】カイ　次(土部四畫)に同じ。

【堦砌】ふしあはせ、不遇。馮衍賦「非レ惜ニ身之一一分」‖坎坷。

【堦井之蛙】井の底のかはづ。蔵見の狹きに喩ふ(莊、秋水)‖井底之蛙。

【基】キ　支

○もとゐ、建物のどだい。○よりどころ(依據)もと、根本。○わざ(事業)○物事のはじめ、おこり、もとゐす、はじむ(始)○鐏一はすき(田器)孟、公孫丑「雖レ有ニ鐏一、不レ如レ待レ時」○きろ。ニ一のあて字。或數量に冠して其の千倍をあらはす「一米」「一瓦」

【基字】○規模また度量の義。勤志、先主傳評「機權幹略、不レ遜ニ魏武一、是以一一亦殊ニ袁宏、三國名臣贊「堂堂孔明、一一安邊」○もとゐの義。北史、齊昭帝紀贊「齊之一一、止在ニ於斯一」

【基金】基本金に同じ。

【基業】基緒に同じ。後漢書「一一已定」

【基源】もとゐ。後漢書「川河領陣之一一」

【基址】もとゐ。‖基礎。

【基緒】もとゐとなる事業。晉語「綱王丕承ニ一一」‖基業。

【基數】一より九までの九つのかず。順次形を變へ、十に至りてまた元の一にかへるが故。

【基礎】建物のいしずゑ。轉じて總て物事のもとゐ。‖基址。

【基兆】もとゐ、はじめ。漢書、匡衡傳「室家之道、修則天下之理得、故禮本ニ冠婚一、正ニ一一而防ニ未然一也」

【基本】もとゐ、事物の基礎。漢書「明王愛ニ發一一」‖根據。

【基本金】事業のもとでとして用ふるかね。‖基金。

【基督敎】クリスト　全智全能の神創ち天帝の子として猶太に生れしヤソキリストを祖とする宗敎。‖耶蘇敎。

【埼】キ　支　微　碕・崎に作る

さき、きしのくま(岸頭)

【堊】㊀キン　㊁キン　文　眞

㊀ねばつち(黏土)‖堊。㊁ぬる(塗)○わづか、僅に通ず。

【堊堊】塵少の貌。漢書、地理志「贖罪出ニ黃金一一斤一一物之所レ有」‖僅僅。

【堁】 クワ 禡
ちり、塵の起る貌。

【堄】 ゲイ 霽 齊
埤ー＝城の上のひめがき(女牆)＝睥睨。

【埶】 ㊀ゲイ ㊁セイ・セ 霽 霽
㊀うう(種)＝藝(艸部十五畫)○わざ(才技)㊁勢(力部十一畫)に同じ。

【堅】 ケン 先
○かたし(固)つよし(勁)○みつ(實)○かたまる、かたむ(固)「ー壘」○かたき所、かたきもの「中ー」○てづよく、かならず。歐陽修、論范富」狀「ー不」許」辭」○よろひ。ー甲の略。「被ー」
【堅固】ケンコ かたきかこみ。袁淑文「振レ旅則ーー可レ解」
【堅壁】ケンヘキ 陣營をかたくす、又、かたき陣營。後漢書「張遼傳、ーレ營固守」＝堅陣。
【買レ堅】カケンジツ かたき敵をおそれずして進む。晉唐書、李光顏傳「ーレ陣而衝レ之」
【被レ堅執レ銳】ケンヲカウムリエイヲトル かたき甲冑をかうむり、銳利なる兵器をとる。戰國策「吾ーー、赴二強敵一而死、此猶二一卒一也」
【排レ堅】ハイケン かたき敵陣を押し開きて進む。宋書、宗越傳「ーレ陷レ陣、氣力兼レ人」
【堅巧】ケンカウ ぢゃうぶにして製作がたくみなり。甘澤謠、陶峴自製二三舟一、備極ニーーー一」
【堅剛】ケンガウ かたくつよし。杜牧詩「指二揮解兒輩一、意氣何ーー」
【堅革】ケンカク かたきかはにて造りしよろひ。史、禮書「ーー利兵不レ足二以爲レ勝」＝堅甲。
【堅確】ケンカク かたくたしか。李東陽、石鼓歌「其臣拜論俱ーー」
【堅甲利兵】ケンカフリヘイ かたきよろひと、すぐるどきはもの。執レ銳以避二楚之一ーー一矣」
【堅壘】ケンルイ かたし。霊斷「唐歐陽迪、詢之子、善レ書、紙必須ニーー薄白滑者一、乃書レ之」
【堅強】ケンキャウ かたくしてつよし。史、藝淳傳「百體ーー手足便利、耳目聰明而心慮智」
【堅確】ケンカク かたくこる。立志の堅固なる義。荀子「惟ーー之謀」
【堅完】ケンクワン かたく全き義。顧元時、遊二惠山寺一詩「地無二車馬塵一、松筠政ーー」文徵明詩「文章足二事業一、操レ志亦ーー」
【堅勁】ケンケイ かたくつよし。蘇軾「其氣念疾ーー」
【堅固】ケンコ かたくして破れず。韓非、解老「城ーー」＝堅牢。
【堅實】ケンジツ かたくして確實、たしかにして間違なし。
【堅刃】ケンジン ぢゃうぶなるはもの、轉じて強き兵力。史記「亞父之用レ兵、持二威重一執ニーーー一」
【堅心】ケンシン かたきこころ。孟郊詩「ーー如二鐵石一」
【堅城】ケンジャウ 堅固なるしろ。蜀志「ーー皆下」
【堅橋】ケンキョウ ぢゃうぶなるたて。獨孤及文「鋼車雲梯、強弩ーー」＝堅盾。
【堅勝】ケンショウ からだがぢゃうぶにてすぐれる、青簡文に用ふ。＝壯健・強健。
【堅職】ケンショク かたくしてこまか。釋名「整齊也、其摩勞密然、ーー可レ愛」＝堅致。
【堅陣】ケンヂン かたき陣立。晉書「前後屢陷ニーーー一」
【堅直】ケンチョク かたくただし。史記「石奢者楚昭王相也、ーー廉正、無レ所二阿避一」
【堅定】ケンテイ 徳性が堅く定まりて動かず。論語集注「品節詳明、而徳性ーー、故能立」
【堅良】ケンリャウ かたくして正し、堅固にして良潔なり。白行簡賦「玉乃ーー」
【乘レ堅策レ肥】ケンニノリヒヲムチウツ 堅固なる車に乘り、肥えたる馬に鞭つ。漢書、食貨志「ーー、履レ利乘レ機」
【堅忍】ケンニン がまんづよし。漢書「其人ーー伉直」
【堅白同異之辯】ケンパクドウイノベン 是を非とし、非を是とし、同を異なりとする詭辯。卽ち日にて石を見れば白色を見れども堅を知らず、手にて石に觸るれば堅を知れども白を知らず、然るに堅白とは何ぞやといふの類、趙の公孫龍の學說。史、孟軻傳「趙有二公孫龍一、爲ニーーー一」
【堅冰】ケンピョウ かたきこほり。易、坤卦「履レ霜ーー至」物事は微細の時に於て戒むべきをいふ。
【堅木】ケンボク かたき木。北魏書、甄琛傳「攻ニーー一者、必爲レ之擇二良器一」
【堅約】ケンヤク 堅き約束。漢書、蕭望之傳「烏孫持二兩端一亡ニーーー一」
【堅牢】ケンラウ てがたし。＝堅固。
【堅壘】ケンルイ ○かたきとりで。杜牧文「名城ーー」＝堅城。○とりでをかたくして守る。魏志「宜王ーレ不レ應」

【堀】 ㊀コツ ㊁クツ 物 月
㊀あな。＝窟。㊁ほる、地をうがつ。○圖ほり穿ちたる川又池。
【細堀】サイクツ 地下の室。左、昭二七「伏

中于ー一而享レ王」＝饗宴。

【堀通】ホリトホル　圖いしずゑを築かずして土中にいけて建てたる柱「ー一小屋」

【堀抜】ホリヌキ　圖深く地中の水脈に及ぶまで穴をほり貫きて、水を地上にわき出さしむる井戸。

【堀割】ホリワリ　圖陸地をきり開きて造りし運河。

【掃】サウ　ソウ　陸　同じ

○はく、はらふ、穢を除く「ー除」○すつ（棄）○つつみ（隄）きし（岸）竹木にて作り水害を捍ぐもの。

掃帚星　箒星の一名〔晉書、天文志〕

【執】シフ　シツ　緝

○とる（取）手に取る。○たもつ（保）まもる（守）もつ（持）論、堯曰「允ー其中」○ふさぐ（塞）左、僖二八「願以聞」ー讒愿之口」○はからふ（處）あつかふ「ー政」○とらふ（捕）罪人を捕ふ。孟、盡心「ー之而已」○かまへる（構）むすぶ（結）越語「又與ー大國」ー讎」○同志の友、父ーシフは父の友。○おそる。

同訓異字　ト執・取・秉・把・操・採等の訓は取（又部六畫）の條を見よ。

【執拗】シツヨウ　かたいぢ。名臣言行錄「光曰、人言ニ安石奸邪一則毀ニ之太過、但不レ聽ニ事、又ーー耳」

【執意】シツイ　己の意見をかたくまもる。魏書「ーー抗言」

【執友】シツイウ　○志をとること同じき親友。曲禮「ーー稱ニ其仁也」○父の友。曲禮「見ニ父之執一」

【執一】シツイツ　一事のみ固く守りて變通を知らず。孟、盡心「執レ中無レ權、猶ニ執レ一也」

【執柯】シツカ　媒約人。詩、豳風「伐レ柯如何、匪レ斧不レ克、取レ妻如何、匪レ媒不レ得」

【執行】シツカウ　○とりおこなふ、實行する。○法律の用語、當路者が職權を以て法律上定めたる事を實行する「強制ーー」「ーー猶豫」○圖シュウ寺院の事務を統ぶる職「吉野のーー」

【執行命令】シツカウメイレイ　仕拂命令中に定めたる期間内に債務者が異議を申立てざる時、債權者の請求により區裁判所より發する命令。

【執義】シツギ　正道をとり守る。漢書、賈捐之傳「守レ道堅固、レー不レ回」

【執金吾】シツキンゴ　漢代に宮門を警衛することを掌る官。吾は禦。近衛の長官。後漢書、百官志「ーー一人、中二千石」後漢書、光武紀「仕宦當レ作ニ

——、娶レ妻當レ得ニ陰麗華一」

【執火】シツクワ　燧ニの異名。事文類聚「燧名ーー一以ニ其鑑赤一」宏はほさみ。

【執經】シツケイトル　師に從ひて業を受ける。漢書、于定國傳「定國乃迎レ師學ニ春秋一、身ーレー、北面備ニ弟子禮一」＝執業。

【執權】シツケン　○政治の權力をにぎる。權臺、政論「聖人ーレー、遭レ時定レ制、不ニ強レ人以ニ不能一」＝執柄。○圖北條氏の時、將軍を輔けて政を行ふ役、足利時代には管領といふ。

【執戟夫】シツゲキフ　駕のくちとり。

【執笏】シツコツ　しゃくをもつ。晉書「古昔貴賤皆ーレー」

【執事】シツジ　○貴人に侍して其の家政を掌る臣。又、人を敬びて直ちに名を指さず、其の侍者へまでといふ意より轉じて、貴人の代名詞に用ふ。左、僖二六「寡君使ニ下臣輸ニーー一」○事をとり行ふ。論、子路「居處恭、レー敬」

【執脩】シツシウ　束脩の禮を執る義。禮記「ーレー以將レ命」＝執贄。

【執徐】シツジョ　十二支の辰の異名〔爾雅〕

【執綏】シツスイ　車中のとりてを手に持つ。綏は執りて車に上る索。。論、鄉黨「升レ車必正立ーレー」

【執政】シツセイ　政をとる。又、其の官。史記「唯二三ーー、猶ニ吾股肱一也」

【執奏】シツソウ　臣民の意見上書などを取次ぎて天子に申し上げる。

【執達吏】シツタツリ　法律によりて訴訟に關する書類を送達し、又裁判所の執行處分等を爲す區裁判所に屬する役員。＝圖承發吏。

【執中】シツチウ　中庸の道をとり守る。論、堯曰「天之曆數在ニ爾躬一、允執ニ其中一」堯が舜に位を禪る時の詞。

【執筆】シツピツ　ふでをとりて文字を書く。＝操觚。

【執紼】シツフツ　葬を送る輿、古、送葬する者必ず柩車の紼を引きて力を助く、紼は卽ち索。禮記「助レ葬必ーレー」

【執柄】シツペイ　○器具のえをとる。禮記「夫人ーレー」○政權をとる。＝執權。○圖關白の異稱。

【執轡】シツヒ　むちをとる、御者をいふ。論、述而「子曰富而可レ求也、雖ニーー之士、吾亦爲レ之」

【執務】シツム　事務をとり扱ふ。

【執禮】シツレイ　禮を執り守る。論、述而「子所ニ雅言一、詩書ーー、皆雅言也」

【執拘】シツコウ　とらへる。書經「盧ーー以歸ニ于周一」＝拿捕。

【執玩】シツグワン　手にとりてもてあそぶ。宋書、張永傳「上每レ得ニ永表啓一、輒ーー吾賢自歎」

【執心】シフシン　深く心に思ひ込む、熱中する。又、其の心。臨機應變「ーー守ニ時信一、識變終不レ彫」彫は凋。＝執著心。

【執著】シフチャク　圖心に深く思ひこむ。染

武帝詩「一一性易レ驚」晉發七篇「衆生一一最故無二明悟一」

【埴】 ショク 職

ねばつち、はに(黏土)

【埴土】ショクド ねばつち。‖粘土。

【埴師】ショクシ 図上古、埴輪を製するを業とせし工人、はし。‖土師。

【埴生】ショクセイ 図はに土の地。又、其の土にて作りしもの。土にて作りし賤しき物の形容「一一の小屋」貧民の陋屋の形容。

【埴輪】ハニワ 図埴土にて造りし人・馬・家等の類古墳の周圍に車輪の如く半ば埋めて立てしもの。垂仁帝の時、野見宿禰が之を創め、殉死の代りに用ひしもの。

【埵】 タ 哿

○かたきつち(堅土)○薩一は梵語、菩薩に同じ。

【堆】 タイ 灰

○うづだかし、高く積みあがる。○をか(阜)○さしおく(舍・措)

【堆金積玉】タイキンセキギョク 金玉を高く積む。富有をいふ。李賀詩「——誇二豪毅一」

【堆紅】タイコウ 堆朱を見よ。

【堆積】タイセキ うづだかくつむ。

【堆疊】タイジョウ うづだかくかさなる。‖累積。

【堆朱】タイシュ 朱漆を厚く塗り上げ、これに模様をほりたる漆器、盆・香合・印籠などに用ふ。‖堆紅・累紅。

【塿】 タイ 厦 又、螻に作る

ゐせき(堰)土を以て水を堰き、往來する船舶に對し通行稅を徴する所。

【堂】 タウ ダウ 陽

○おもてざしき(正寢)土を高く盛りて其の上に南向に築きし座敷。○朝廷にて長官の執務する處「政事一」揚雄、解嘲「曜二金門上玉一」○高く顯らる貌。○一一はただし(正)さかんなり(盛)又威儀整然たる貌。○山の寬くして平かなる處。○住家・屋室・社寺。○俗に母の稱「令一」「家一」○中一は清朝にて内閣大學士の稱。

【堂奥】ドウオウ 堂と室の奥まりし所と、より學問の奥義に喩ふ。門に入りて堂に升り、堂よりして室に入る、奥は室の西北隅なるが故。

【堂宇】ドウウ 堂をいふ、宇はのき。齊書、劉祥傳「一一臨レ光、隨燈有レ時不レ照」

【堂兄弟】ドウケイテイ 父方のいとこ、同室兄弟の略。北史、公孫表傳「祖季眞云、二公孫同——耳、吉凶會集、便有二士庶之異一」‖從父昆弟。

【堂構之業】ドウコウノギョウ 父の設計によりて子が基を起し屋を構ふる義にて、子が父の業を繼ぎ成せる業。書、大誥「肯構肯堂」の語より出づ。李密說文「家庭之美、——、快何如也」

【堂室】ドウシツ 裏ざしきと、奥ざしきと。後漢書、橋元傳「以二幼年一遽升二一一」

【堂上】ドウジョウ ○父母をいふ。穀梁傳「禮、送レ女、父不レ下レ堂」北史「太夫人在レ堂」父母は一一に在るが故。○官長をいふ、一一にて事を治むるが故。○図四位以上の昇殿を許されたる官人の稱。殿上人ともいふ。

【堂堂】ドウドウ ○容儀盛んなる貌。論、子張「一一乎張也」○立派に整頓せる貌。孫子、軍爭「勿レ擊二一一之陣一」勿レ邀二正正之旗一」正正は齊ふる貌。

【堂高數仞】ドウタカクシジン 極めて高大なる堂。孟、盡心「——、榱題數尺、我得レ志、弗レ爲也」

【升レ堂入レ室】ショウドウニュウシツ 道にすすむ次第をいふ。論、先進「門人不レ敬子路、子曰、由也、升レ堂矣、未レ入二於室一也」

【堂屋】ドウオク 裏ざしきと、ねまと。儀禮、疏「一一無事」

【堂廡】ドウブ ざしき。廡は堂のまはりの廊、堂下の周屋。列子「一一之上、不レ絕二鼓樂一」

【堂老】ドウロウ 宰相の互に相呼ぶ稱。國史補「宰相相呼爲二一一一」

【埿】 デイ 霽 蟹

どろ、ひぢりこ。‖泥。

【培】 ㊀ハイ ㊁ハイ・バイ ㊂ホウ 有 咍 灰

㊀つちかふ、草木の根に土を被ひ養ふ。やしなふ(養)ます(益)㊁かさなる(重)○そむく(陪)○つか(冢)㊂つつみ(隄)ちひさきをか(小阜)

【培根】バイコン 根本をつちかひやしなふ。趙孟頫詩「一レ利秋實仰レ天望二年豐一」

【培植】バイショク ○つちかひ植う。宋史「林木非二一一一、根株弗レ成」○人才を養成する義。金史「專以二一一一裴之勵後進一爲二己責任一」

【培養】バイヨウ 草木をつちかひやしなふ。轉じて事物を助けて發逵せしめる。朱熹詩「新知一一韓深洗」

【培壅】バイヨウ つちかひまもる、培植整護の義。宋史「以二一一有宋三百餘歲之基一」

【培壠】ホウロウ 小きき阜か丘、禮二四「一一

無三松柏一（今本、部婁に作る、通ず。

【埤】 ㊀ ヒ・ビ ㊁ ヒ・ヒ ㊂ ヘイ・ハイ 齊 紙 支

㊀ます（增）つく（附）おぎなふ（補）あつくす（厚）○かき、低き牆。㊁低くして濕氣ある地。晉語「松柏不生一」○百畝の田の稱。㊂城上のひめがき（女牆）＝陴・俾倪。

【埤益】ヒヤク　多く增し加ふる。詩、邶風「政事一ニ一我」

【埤汙】ヒヲ　卑く下る。操行が高潔ならず。荀子「好二其貨一、不レ恤二其文一、是以軀身不レ免二一一一傭俗一」＝卑汙。

【埤雅】ヒガ　二十卷、宋の陸佃撰す。爾雅の埤補たる義、釋魚・釋獸・釋鳥・釋蟲・釋馬・釋木・釋草・釋天の八篇に分ちて、字義を說明す。

【埤濕】ヒシツ　低くしめりけのある地。司馬相如、子虛賦「其一一則生二蒹葭蒲一」＝卑濕・下濕之地。

【埤堄】ヒゲイ　城のついぢ、ひめがき。集韻「一一、女牆也」

【埠】 フ ★ 國

はとば（波止場）商船の發着所、もと歩に作る「商一」

【埠頭】フトウ　はとば。通雅「一一、水瀕也」

【堋】 ㊀ ホウ ㊁ ヒョウ 蒸 徑 ホウ 蒸

㊀ほうむる（葬）土をかけてうづめる（埋）㊁あづち（射垜）＝垜。○ふせぎ（堰）

【城】 ヨク キキ 職

○さかひ、かぎり「區一」○かぎる、さかひする。孟、公孫丑「一レ民不レ以二封疆之界一」○くに（邦國）「異一」○ところ（場所）○きは、はて、極端。

【域中】ヨクチウ　宇內に同じ。賈誼、王文「誦二看今日之一一一、竟是誰家之天下」

【埜】 野（里部四畫）の古字。

九畫

【墳】 アン 諫

つかあな（墳）の中の埋藏する處。

【堙】 イン 眞 陻と通ず

○ふさぐ、ふさがる（塞）うづもる。○つちやま、土にて築きたる山。公羊、宣十五「子反乘レ一而窺二宋城一」

【堙鬱】インウツ　氣むすぼれふさがる。韓愈「文、爲二之樂一、以宣二其一一一」

【堙塞】インソク　ふさがりとどこほる。＝堙窒。

【堙替】インタイ　文案におとろふ。＝堙廢。

【堙窒】インチツ　ふさがりて通ぜず。宋史「河渠一一」＝堙塞。

【堙滅】インメツ　うづもれてきえる。史、伯夷傳「若レ此類、名一一不レ稱、悲夫」＝湮滅。

【堙陵】インリョウ　次第におとろふ。唐書「大臣敍刑、日以一一」＝堙替。

【堰】 エン 銑 又、隘に作る

ふせぎ（壅）土を築きて水の流を塞ぐ所。

【堰壞】エンカイ　○ふせぎ。船の通行稅をとる爲め河中の水をせきたる所。（唐書、食貨志）○田地の灌漑の爲めに設くるふせぎ。宋史「坡塘一一、可二以取一レ水溉一」

【堺】 界（田部四畫）に同じ。

【堦】 階（阜部九畫）に同じ。

【塀】 ガク 藥

きし（岸）がけ（崖）

【堪】 カン 覃

○たふ、もちこたへる（任勝）こらへる、しのぶ「一忍」○天をいふ「一輿」○山形の奇怪なる貌。○地中の穴。

同訓異義　堪・耐・勝・任等の別は耐（而部三畫）の條を見よ。

【堪當】カタウ　○山が奇怪なる形してそばだつ貌。揚雄、蜀都賦「一一一嵯倚」○目上に逆ひて逆はる。

【堪忍】カンニン　たへしのぶ、がまんする。魏書、李洪之傳「志性慷慨、多レ所二一一一」

【堪能】カンノウ　才能すぐれて事に巧なり。宋書、明帝紀「其文武一一、爲レ才經用」

【堪輿】カンヨ　天地の總名。淮淩、心慮「淫一一、俯仰舞レ垠」

【堪輿家】カンヨカ　人を葬るべき地をうらなひ求むることを專門とする者。＝風水家。

【塌】 タフ 葉

○つぼ（坩堝）金屬を鎔かすに用ふる土器。

【塒】 クワウ 陽

○あひどの（合殿）○城下のほり、隍に通ず。

【塙】 ゲウ 嘯

○たかくとほし（高遠）○人名、帝一陶唐氏は古の聖天子。

【堯峯】ギョウホウ 山などの至りて高き貌。‖嶢嶢。

【堯禁】ギョウキン 聖君の燕と暴君の笑と。漢書「一一之分、在二於義利一而已」轉じて聖君と暴君と。又、善人と悪人と。

【堯舜氏木】ギョウシュンボク 堯は朝廷に鼓を設きて君を諫めんとする者に之をうたしめ、舜は木を立ててこれに戒の語を書かしむ。堯舜二帝がよく人の善言を容れたることをほめし語。前漢書、賈誼傳「堯設二誹謗之木一、舜木求レ諫」

【堯舜】ギョウシュン 古の聖天子の唐堯と虞舜と、總じて聖天子の義とす。毎に暴君の桀・紂二人と對比していふ。

【堯舜化】ギョウシュンカ 堯舜二帝の化、天下のよく治るをいふ。晉書「弘二堯舜之化一、開二正南之路一」

【堯舜之民可二比屋而封一】ギョウシュンノタミハヒヤクシテホウスベシ 堯舜の人民は、聖天子の徳に化して善良なるが故に、家毎に諸侯に封じても可なりといふの義。新語「一一、皆紂之民可二比屋而誅一」

【堯趨舜歩】ギョウスウシュンポ 堯舜のはしり歩するが如く、態容の盛んなるをいふ。宋史、樂志「皇帝陞レ座、流雲四開、——、下踏二天階一」‖禹歩舜趨（荀子）

【堰】エン 人は其の仕ふる所の主に忠を盡すをいふの奥、淮陰侯傳「陌之狗レ吠レ、堯非二不仁一、狗固吠レ非二其主一」

【堰風舜雨】エンプウシュンウ 堯舜の二帝の仁徳が天下に普く行きわたりしを、風雨の恵の至らざる處なきに比していふ。又、太平の世、風雨の時に順ふ形容とす。

【堰鮫】エンコウ 堯帝のよはひ、天子の長寿にいふ。晏殊詩、金爐煖龍香遠、共祝ニ一萬歳一「柳永詞「祝ニ一、北極齊レ尊、南山共レ久」‖聖壽。

【堲】コウ 齊

○いちりづか、土を封じて壇をつくり里程を記す、古、五里毎に設く。○ものみ（土堡）敵の様子を探る爲めに設けたる土のとりで「斥一」「烽一」「一吏」

【堲槐】コウカイ 一里塚の代りに植えし槐木。北史、韋孝寛傳「當二堲處一植二槐樹一代レ之」

【堲子】コウシ いちりづか、子は助字。范成大詩「乍脱泥中滑、還疑一一長」‖里堲。

【堲樹】コウジュ 一里塚を築きたる上に植えし樹木。

【堲程】コウテイ 旅行の路程はての義。王建詩「老與ニ一一疎」

【堲碑】コウヒ 一里塚にたてし里程標の石。

【塋】エイ 莽（艸部九畫）の俗字。陸・酔に同じ

【塽】ソウ 蕭 蕭

うね（稲田畦）

○にくむ（疾）○もえさし（餘燼）管子、弟子職「左手秉レ燭、右手折一」

【塾】ジュク 屋

【塙】カク 覚

塙（土部十四畫）に同じ。

【塲】ダン 寒

いんぢうち（飛礫戯）‖打瓦。

【場】ジョウ 陽

塲とは別、俗に塲に作る

○ば、には、神を祭る爲めに掃ひ淨めたる地「祭一」「齋一」土を築きたるを壇といひ、地を除ひたるを一といふ。○はたけ（圃）穀類を收むるには。○をりばしょ、ところ。○時期、ばあひ「一一の夢」

【場屋】ジョウオク 試験場。通鑑、唐、武宗紀、注「唐人謂二貢院一爲二一一一、重レ今猶然」

【場師】ジョウシ 庭園のことを掌る役人。轉じて庭作り、うゑきや。孟、告子「今有二一一一、舍二其梧檟一、養二其樲棘一、則爲二賤一一一焉」‖農圃師

【塲圃】ジョウホ 穀類を收むるには。詩、豳風「九月築二一一一、十月納二禾稼一」

【場裏】ジョウリ 其のばしょの中「競爭一一」‖場中。

【場合】バアイ 圖そのをり。其の時期。

【場所】バショ 圖ところ、其の土地。

【塚】チョウ 冢（冖部八畫）の俗字。

【堤】テイ 齊

つつみ、どて。‖隄。

【堤堰】テイエン つつみと、ゐせきと。陸游、張郎傳「修立一一、創レ田數千頃」‖塘堰。

【堤塘】テイトウ つつみ。唐書「一一百八十里」‖堤防。

【堤防】テイボウ 前條に同じ。後漢書「一一潰渠、所レ以順二助地理一、通中利重蓄上」

【堞】チョウ 葉

城の上のひめがき（女牆）‖埤堄ヘイ又、ひめがきを設くる。左、襄二七「崔氏一一其宮一而守レ之」

【堵】ト 虞

○かき（垣）宅のまはりの垣、轉じて居所の義。○尺度の名、一丈を版と爲し、五版を一と爲す。○鐘磬を懸くる物の名。○阿！は物を指していふ、俗語、この物、這箇。○防ぐ。は寇盜を防禦する義。

【堵列】リツ 道側又は式場等に整列して立つ。又其の列。「一一兵」

【安堵】アンド 家に居て邪なくして安心する。蜀志、諸葛瑾傳「百姓一レ一」⇒按堵。

【如レ堵】ジョト 人の多く集る形容。人垣を築く。晉書、衞玠傳「京師人士聞二其姿容一、觀者一レ一」堵牆を見よ。

【報】 ハウ ホウ 土 9

○むくい（返禮・果報）○むくゆ（酬）こたふ（答）かへす（復）○しかへし（復讐）史、范雎傳、睚眦之怨必一」○つぐ（告）しらす（知）○あはす（合）○囚人の罪を論じて判決する。○めうへの人と密通する、下が上に姪する。左、宣三「鄭文公一鄭子之妃」鄭子は文公の叔父。

同訓異義 報・酬・酢○報は復也、答也、へんぱうする義、また告と同じく用ふ、報知の類。○酬は盃を反すなり、獻酬と連用す、轉じて返答の義にも用ふ。○酢は再び反盃するなり、轉じて、酬酢を、應對の義に用ふ。

【報應】ハウオウ 因施すことあれば必ず報あり、感ずることあれば必ず應あるをいふ、故に現在の禍福を以て昔一一の致す所と爲す。

【報恩】ハウオン 恩にむくゆる。說苑「唯賢者爲二能一一一」謝恩・報德。

【報效】ハウカウ 恩に感じて力を盡す。南史「荷二國重恩一、無二以一一一」杜甫詩「一一神如レ在」⇒報効。

【報施】ハウシ 人より物を惠まれて之に報ゆる義。詩、邶風「投レ我以二木瓜一、報レ之以二瓊瑤一」

【報告】ハウコク つげしらす。⇒報知・報道・通知。

【報告祭】ハウコクサイ 喜び事を死者の霊に告げる爲めにするまつり。

【報國】ハウコク 國恩にむくゆる。曹植文「思下一效二筋力一、庶以一上一」

【報祭】ハウサイ 禮祭りする。禮記「一一一四方之神一」

【報賽】ハウサイ 田事ノ既に畢りて後、神明のめぐみを謝して祭りする、御禮まゐり。周禮、小祝「疏「求レ福謂二之禱一、一一謂二之祠一」⇒報祀・報祭。

【報祀】ハウシ 禮祭りする。張九齡詩「燭龍煌煌、明宗一一」⇒報祭。

【報施】ハウシ 善行に對して幸福をむくいほどこす。史、伯夷傳「天之一一一善人、其何如也」

【報酬】ハウシウ むくいる、又、謝禮の金品。

【報讐】ハウシウ かたきをうつ、かたきうち。戰國策「吾其報二智氏之讐一矣」⇒復讐・報仇。

【報謝】ハウシャ 來意に答へむくゆる。史記「遣禹爲レ人廉儉、公卿相遣請レ禹、禹終不一一一」⇒答謝。

【報章】ハウシャウ ○へんじ。杜甫詩「相憶無二南雁一、何時有一一一」⇒答書。○俗新聞紙をいふ。

【報償】ハウシャウ しかへしをする。漢書、匈奴傳「單于入二漢兵入一匈奴一、御奴輒一一」⇒報復。

【報春鳥】ハウシュンテウ 立春の節に鳴く鳥の名。述異記「願渚山有二一一一、春至則鳴、秋分亦鳴、似二鴞之類一也」

【報道】ハウダウ しらす。李渉詩「若逢二城邑人相問一、一一花時也不レ閑」

【報答】ハウタフ ○むくゆる、人の惠に報ゆる。杜甫詩「招攜每感雙魚遠、一一空思一劍存」○こたへる、へんじ。周書、盧柔傳「陸レ機一一、皆合二事宜一」

【報德】ハウトク 報恩に同じ。

【報復】ハウフク かたきをうつ。徐彦伯詩「一一一何迅」⇒復仇。

【報聘】ハウヘイ 隣國の聘問を受けたる返禮。左傳「劉康公來一一」

【報本反始】ハウホンハンシ 根本にかへり報ゆる義。禮、郊特牲「社稷二楽盛一所二以報一レ本反レ始也」

【報命】ハウメイ 使者がかへりて返事を申し上げる。史記自序「南略二邛笮昆明一、還一一」⇒復命。

【保】 ハウ ホウ 土 9 俗

通じて保に作る

○とりで（砦・壘）土石を積みて築きしこじろ（小城）○つつみ、どて（隄・塘）

【堡砦】ハウサイ とりで。

【堡柵】ハウサク とりで。元史「方二舟載百、結爲一一一」

【堡障】ハウシャウ とりで。遼史、聖宗紀「請レ建一一三、烽幸一一」⇒堡壘。

【堡聚】ハウシュ 衆をあつめて保守す。左傳「我敝邑用不二敢一一一」

【堡壁】ハウヘキ とりで。前漢錄「一一悉降」⇒堡壘。

【堡壘】ハウルイ とりで。

【塾】 ボウ 土 9

○一教はをか（小隴）○かはらけ（瓦器）⇒牢。○すやきのつほ。

【墅】 野（里部四畫）に同じ。

【塁】 十 畫 エイ 次

はか(墓)つか(冢)

【塋域】ケイ はかば。齊書、陰金銀石、以納二一一之屬一。＝墓地・塋域・墓穴。

【塋樹】ケイ 墓地にうえたる樹木。唐書「忍レ犯二吾一一一耶」

【塋地】ケイ 墓地に同じ。清通禮「一一自二塋心一至二四穸一、一品九十步、二品以下遞二減十步一」

【塋田】ケイ 墓地。墓地。＝塋域・塋地・墓田。

【塲】ヲウ 圃 隅に同じ

○ちいさきどて(小障)○こじろ(庳城)○とりで(營居)後漢書「遮卓築二一於郿一、號萬歲一」○むら(村落)杜甫詩「窮行盡日無村一一」

【塲壁】ヲウ 土を築きたるとりで。後漢書「遣レ兵屯二河內衝要一皆作二一一一」

【堧】テウ 篁

一然は風の起る聲。又、塵の起る貌。宋玉、風賦「夫庶人之風、一然起二于窮巷之閒一」

【墟】カイ 蒲

たかだい、高燥の地。左、昭三「請更諸爽一者」

【墐塏】カイ 岡などの高き貌。何景明、憲章賦「山一一以組領兮、野痛條而無レ色」

【墟】㊀カク ㊁カウ・コウ 沃 覺

㊀かたきつち(堅土)○土高し。㊁いしぢ、石多き地。やせぢ(瘠地)＝墝磽。○國はなは、小高き所。又、山の差し出たる所。

【墐】カク 陌

つちかさなる、土附著してかさなる、沙礫をいふ。

【塊】クワイ 隊 泰

○つちくれ、土のかたまり「土一」○大一は大地。又、造物の名。莊、大宗師「大一載我以形」○かたまり、凝結して形を成すもの「血一」「肉一」○壘は胸中に鬱結せる思、不平の心。○ひとり(孑)獨處ヒトリの貌。○物の件數の稱。

【塊壘】クワイカク 植物の地下莖の一種、養分を蓄積して球塊狀をなせるもの、馬鈴薯ジャガタラの類。

【塊然】クワイゼン ひとり處る貌。漢書、陳湯傳「使二湯一一一」

【塡】テン 先

壎(土部十四畫)に同じ。

【塒】シ ジ 支

とや、土の垣を繫ちて作る雞のねぐら。詩、王風「雞棲于一一」

【塍】セキ 陌

やせつち(瘠土)

【塍埼】セキク 次條に同じ。後漢書「土地一一」＝境埼。

【塍薄】セキク やせつち。＝瘠薄・塍埼。

【墐】ソ 遇 遇じて塑に作る

○土をこねて物に象りて作る。○でく(土偶)

【塑】ソ 遇

壞(前條)に同じ、土にて造りし人がた。又、神佛の形。

【塑像】ソザウ 土にてつくりたる物の像。史記に帝乙が偶人アをつくりて以て天神に係ねるとあるを一一の始とす。瑯琊代酔篇「道家一一亦如レ此」

【塑人】ソジン でく、土人形。程子全書「明道終日端坐如二泥一一一、及レ接レ人、渾是一團和氣」

【塞】㊀ソク ㊁サイ 徳 職

㊀ふさぐ、うづめる(塡)とざす。○みつ、みたす(充滿)○へだてる(隔)絕つ。○道がふさがりて要害よし。史、蘇秦傳「秦四一之國」○運悪しきこと。○一一は安んぜざる貌。㊁さかひ(邊界)○國ざかひに設けて敵を防ぐとりで(邊障)こじろ(小城・壘)○博一は戲具、すごろく。又、其のさい(骰子)○神佛に禮まゐりする。＝賽。

【塞翁失馬】サイオウ 莊・杜・淮・楼・窓・梁○塞は通の反、向うへ通れぬやうにする義。論語「邦君樹二塞門一」轉じてとりでの義とするときは音サイ邊塞・要塞と連用す。○杜は塞と同じ、とづるとも訓む。杜門不レ出の如し。○塞はつかへふさがる意。國語「川壅而潰、傷レ人必多」○楼はさまたげるものありて通ぜざる義、兵楼・路楼の如し。○窓は塞なり。易經「懲忿窒レ欲」○梁は氣分のふさがる義、鬱陶と連用す。

【塞翁馬】サイオウ 人生禍福の定まりなきに喩へたる語。酬盧秘書詩「人間萬事一一、推枕軒中雖レ雨眠」人間萬事一一（九八頁二段）を見よ。

【塞徼】ソクケウ 邊境にあるとりで、徼は邊塞。

【塞淵】ソクエン 誠實にして思慮深く著實なり、塞は實、淵は深。詩、邶風「仲氏任只、其心ー（ソク）ー」

【塞住】ソクヂウ ふさぎ止める。

【塘】タウ 陽 通じて唐に作る

つつみ（隄防）土を築きて水を防ぐもの「池ー」

【塘池】タウチ ためいけ、つつみを築きめぐらして水を湛へしいけ。

【塌】タフ 合

○ひくし（低）くだる（下）地が低下（ヂカ）なり。○おつ、おとす（墮）陳琳檄「垂頭ー翼」

【塔】トフ 合

○そとば（卒都婆）土又は石を積み上げて五重七重より十三重に至る、一に浮圖又、浮屠ともいふ。○てら（佛堂）○物の墮つる聲。

【塔影】タフエイ たふのかげ。楊萬里詩「人家隨ー遠、ー（ヂカ）落ー湖深」

【塔尖】タフセン 塔の先のとがりし所。魏都賦詩「城郎徼北見ニー（ヂカ）ー」

【塔頭】タフトウ 塔の先（サキ）をいふ。百條經「以ー（ヂカ）ー（ヂカ）尼寶珠、置ニ其ー（ヂカ）ー」‖塔婆（バ）圖○卒塔婆の略、方墳又は廟と譯す。元亨釋書「植倍造ニー（ヂカ）ー、至ニ落成日ニ留電擊破」○略して細長き板を刻みて卒塔婆の形に象り、梵語などを書きて墓の周圍に樹てるもの。

【塡】㊀テン 先 ㊁テン 震 ㊂テン 霰 ㊃テン 眞 ㊄シン 震 ㊅テン 銑 ㊆テン 阮 ㊇テン 銑

○うづむ、ふさぐ、ふさがる（塞）博物志「炎帝女、溺死東海中、化爲ニ精衛ー（ヂカ）ー、常取ニ西山之木石ー（ヂカ）ー一ー東海ー（ヂカ）ー」みちふさがる、實は古字。○したがふ（順）班固、東都賦「一ー（ヂカ）ー流泉而爲ニ沼ー（ヂカ）ー」○鼓の聲。㊁力盡く。○やむ（病）㊂しづむ、しづまる‖鎭。○さだむ、さだまる。㊃重厚の貌。㊄おく。漢書、貢禹傳「武帝時、多取ニ好女ー（ヂカ）ー、以ー（ヂカ）ー後宮ー（ヂカ）ー」‖實。㊅ーー（ヂカ）ーは嚴正にして盛んなる貌。‖正正。

同訓異義 ○塡・滿・塞・充等の別は諸（水部十一畫）の條を見よ。

【塡償】テンシヤウ 賠償財を返還する。

【塡充】テンジウ うづめみたす。‖補充・塡補。

【塡如】テンジヨ とぢふさがる貌。

【塡星】テンセイ 五星中の一、土星の別名。

【塡然】テンゼン 鼓の聲の盛んなる貌。孟、梁惠王「ー（ヂカ）ー鼓ニ之、兵刃既接」

【塡塞】テンソク ふさぐ、又、一ぱいに充ちふさがる。梁書、昭明太子傳「內外百司奏ニ事者、ーニ（ヂカ）ー千前ニ」

【塡塡】テンテン ○厚重にして鷲實の貌。莊、馬蹄「至德之世、其行ーー（ヂカ）ー」○軍旗の嚴正にして盛んに立てる貌。淮南、兵略「不ニ躁ニ堂堂之寇ー（ヂカ）ー、不ニ擊ニ一ー（ヂカ）ー之旗ー（ヂカ）ー」‖正正。○鼓の鳴りはためく聲。楚辭、九歌「雷ーー（ヂカ）ー兮雨冥冥」

【塡補】テンホ うめ合せ補ひなふ。元史「挽次ーー（ヂカ）ー」‖塡充。

【塡門】テンモン 客などが門に一ぱいに滿つ。‖閫門。

【塗】㊀ト・ヅ 虞 ㊁ト 虞

㊀どろ（泥）ー炭」○みち、通行する道（途）○ぬる、なすりつける、まみる。○ふさぐ（杜塞）○けがす（汚）○厚く多き貌。○糊ーヒはぼっきりせざる貌。宋史、呂端傳「端小事糊ー（ヂカ）ー、大事不ニ糊ー（ヂカ）ー」㊁どろみち（泥路）○水ぴたりの地、濕地。

同訓異義 塗・塡・塩・塾○塗は泥なり、轉じて壁などを、べったりとぬるに用ふ。揚雄文「粉ニ塗而不ニ堊」○塹はうはぬりをする義。左傳「坊人以ニ畤ー（ヂカ）ー、塡ニ舘宮室ー（ヂカ）ー」○塹は下地の見えぬやうに塗る、すきまをぬる。詩、豳風「蠶ニ向ニ塹戶ー（ヂカ）ー」○槩は漆にてぬる、槩に同じ。史、貨殖傳「木器髹者千枚」

【塗糊】トコ 文字のつたなきをいふ。劉炳詩「病目ーー（ヂカ）ー不ニ作ー（ヂカ）ー字、紛牘香屑惜ニ烏絲ー（ヂカ）ー」烏絲は界紙（ケイシ）

【塗乙】トイツ 塗字と乙字と、文章を作りて字を捨つると脫字ありし時、其の傍に鉤して補ひ入るると。一說に、乙は音シと甲乙の乙に非ずと。

【塗改】トカイ 文字をぬりけして書き改める。李商隱、讀ニ韓碑ー（ヂカ）ー詩「點ニ竄堯典舜典字ー（ヂカ）ー、ニー（ヂカ）ー淸廟生民詩ー（ヂカ）ー」韓碑は憲宗の平淮西碑なり。

【塗抹】トマツ ぬりけして改める。文字を改めなほす。唐書、百官志「不ニ便者ーー（ヂカ）ー而奏遷」‖塗改・改竄。

【塗說】トセツ 聞く所あれば直ちに途上にて說く。善言を聞くも心に留めて己の有とせざるをいふ。論、陽貨「道聽而ーー、德之棄也」

【塗澤】トタク 白粉などをぬりてつやをつける、化粧する。則天后傳「后雖ニ春秋高ー（ヂカ）ー、善自ーー、雖ニ左右ー（ヂカ）ー不ニ悟ニ其衰ー（ヂカ）ー」

【塗炭】トタン ○塗は泥、炭は火、水火のくるしみ。書、仲虺之誥「有夏昏德、民墜ニー（ヂカ）ーー（ヂカ）ー」○どろと、すみと、きたなきものの喩。孟、公孫丑「如ニ

以二朝衣朝冠一塗二於一一と【塗糊】ト　厚く多き糊。楚辭、九歌「白玉爲二糧食一兮、桂漿爲二塗糊一兮」【塗抹】トツ　ぬりけす。韓愈記「僧」筆一一自有二天然之致一」【塗抹詩書】トシツ　大切なる詩書をぬりけす。轉じて幼兒の義とす。書言故事「言二人見幼一曰二——一、猶二全示一添丁一時句、記來二案上一翻二墨汁一、塗二抹詩書一如二老鴉一、父傷母惜擲不レ得、卻生二嚢笑一令二人睡一」【塗料】トリヤウ　ぬるのぐ。＝顏料。○工事用のぬりぐすり、ペンキ・しぶの類。【塗師】シ　國　うるし細工ぢをする職人。＝漆工・漆匠。【塗籠】ゴメ　國　周圍をぬりこめ窓戸より出入するやうに造りし室。古は寢室とす、後世の納戸にあたる。【塗物】ヌリモノ　國　うるし細工の器物。＝漆器・髹漆。

【塡】 テン　國　ぬる（塗）左、襄三一「坊人以時一鎗宮室」　補説　ヌル　塗（前條）を見よ。

【塚】 チョウ　國　塚とは別字　○はこりがとぶ。○風吹きて塵起る。

十一畫

【墩】 カン　國　けはしききし（險岸）

【墾】 キ　眞　未　○ぬる、仰ぎ塗る。○とる（取）詩、召南「墳墓一之」○いこふ。（息）詩、邶風「民之攸一」

【墟】 （前條）に同じ。

【墐】 キン　眞　震　○ぬる（塗）詩、衛風「塞向一戸」向はまど。○ふさぐ（塞）○うづむ（埋没）詩、小雅「行有死人、尚或一之」○溝のほとりの道。

【境】 ケイ　梗　通じて竟に作る　○さかひ（界・疆）かぎり。○物のさかひ目、事の分れ目。○ところ（處）場所「住一」「勝一」○地位、分際、めぐりあはせ「一遇」「逆一」○學業の進み詣る處をいふ「進一」「聖一」【境内】ケイダイ　區域のうち。史、項羽紀「擇二一一一」＝域内。【境域】キヤウ　○さかひ。＝境界。○境内の地。宋書「一一幽遐」【境界】キヤウ　さかひ、又、くにざかひ。○さかひ、かぎり。列、周穆王「不レ知二一一之所一接」○場所。耶律楚材詩「我愛北天眞一一」＝境地。【境遇】キヤウ　○さかひ、かぎり。○身のおきどころ。＝境遇。【境遇】キヤウグウ　身のおきどころ。＝境遇。【入レ境問レ禁】ニユウケイトフ　國境に入れば其の國の禁制を問ふ。曲禮「入レ竟而問レ禁、入レ國而問レ俗」竟は境に通ず。

【塀】 サウ　養　地の高く明かなる處。

【墳】 シン　震　○すなち（沙土）○にごる、混沌として清澄ならざる貌。

【塾】 ジュク　屋　へや。門側の堂、弟子を集めて學業を授くる部屋、學舍、又學生の寄宿舍。禮、學記「古之教者、黨有レ庠、家有一一」【塾師】ジュクシ　塾舍の教師。【塾生】セイ　學舍に在る生徒。【塾頭】トウ　塾生のかしら。

【墅】 （一）シヨ　麻　（二）ヤ　麻　㊀かりいほ、なや（田廬・田廬）

田畠の牧穫物をとり入れる小屋。○しもやしき（別館・別莊）晉書、謝安傳「園一一別一一」（二）はら（郊外）＝野。

【塹】 セン　豏　一に壍に作る　通音ザン　○ほり（濠）城を遶る水。史、高祖紀「深一一而守」○あな（坑）○ほる（堀）史、秦紀「一山堙谷、千八百里」【塹壕】ザンガウ　城のほり。＝塹濠・城池。【塹濠】ザンガウ　前條に同じ。【塹壘】ザンルイ　ほりと、とりでと。魏志「一未レ成、哥兵大至」

【塼】 （一）セン　（二）タン　寒　先　㊀かはら。＝甎。○紡一はいとまき。（二）まどか。＝團。【塼鬢】センビン　かはら。晉書、吳遂傳「裁開傳貨、夜燒二一一」

【塒】 チ　支　には、石を敷ける庭、丹一は天子のには、赤く地を塗るが故。

【塵】 ヂン　眞　○ちり、ごみ、ほこり（埃）あくた。○けがる、けがす（汚）詩、小雅「祇自一兮」けがれ「一界」

○うるさし「俗ー」○道家にて世の義とす、一世を一ーと爲す。○あと（跡）流風餘韻をいふ。宋史「追ー前許之餘ー」○佛悟を開くに妨となる種種の欲、六ーは、色・聲・香・味・觸・法。

塵鹿 鹿が行きて土を揚ぐるなり。

【塵埃】アイ ○ちりほこり。莊、逍遙遊「野馬也ー也、生物之以ー息相吹也」＝埃塵。○世のけがれ。史、屈原傳「浮ー遊ー之外」不ー受ー世之溷垢ー」

【塵壒】アイ ちりほこり。趙抃詩「潔淨去ニーー」＝塵埃。

【塵綫】アイ ちりにてけがる。又、ちりけがれ。後漢書「盥ニ洗ーー服飾鮮潔、沐浴以ー時、身不ニ垢辱ー、是謂ニ婦容ー」

【塵襟】アン うるさき世のほだし、人世の羈絆。白居易詩「未ー能ー脫ニーー」＝塵累。

【塵烟】アン けむりの如く立ちのぼちり、すなけむり。＝黃塵。

【塵縲】アン 世の中のうるさきゆかり。范成大詩「暗綠子章新活計、軟紅三尺蔑ーー」＝塵累・俗縁。

【塵汚】ダン けがれ。＝塵垢。

【塵飯】ハン ちりと、かさぶたと。沈遼詩「湖水洗ー面去ニーー」

【塵芥】カイ ちりあくた。

【塵界】カイ けがれたる世界の意。釋氏心經「色聲香味觸法爲ニ六ーー」＝塵世・塵海・塵寰。

【塵累】ダン けがれてやかまし、塵埃多くして喧囂なる地。唐明皇詩「路與ニーー一隔」

【塵蓋】ガイ ちりにてけがれたる蓋。李白詩「且得ー洗ニーー」＝塵面。

【塵懐】ナン うるさくけがらはしき心。穆は胸。韓愈詩「衰拙醒ニ俗耳ー、清泉濯ニーー」

【塵境】キョウ けがれたる世の中。陳光詩「定醒ー辭ニーー、依ー師過ニ晩年ー」＝塵界。

【塵外】ガイ うき世のほか。＝世外・塵表。

【塵寰】カン ちりのよ、人間世界。蘇軾詩「不ー知門外有ニーー」＝人寰・塵界。

【塵消】ショウ ○ちりと水滴ダクと、極めて微小なるものに喩ふ。○已のする事を卑下していふ。宇文融詩「螳將ニ同ー力、相與效ニーー」＝微力。

【塵喧】ケン うるさくやかまし。張籍詩「烟霞咫尺少ニーー」＝塵囂。

【塵垢】コウ ○ちりあか。淮南子「崑山之玉瑾、而ーー不ー能ー汚也」○世の中のけがれ。莊子「彷ニ徨乎ーー之外ー」

【塵劫】ゴウ 佛物と時と。轉じて極めて久しき世間の義。王冲、頭陀寺碑「功濟ニーー」

【塵事】ジ 世俗のうるさきことがら。陶潛詩「閑居三十載、遂與ニーー一冥」＝世事・俗事。

【塵滓】シ けがれ。許彦周文「東坡詩不ー可ニ指摘經識ー、無ニ一點ーー」

【塵習】シュウ うるさき世のならひ、世間の風俗習慣。

【塵世】セイ 塵界に同じ。

【塵俗】ゾク ちりの世の中。任昉文「司徒袁粲有ニ高世之度ー、脫ニ落ーー」

【塵泥】デイ ちりと、どろと。孟郊詩「應ー憐泣ニ楚玉ー、寂寞如ニーー」

【塵土】ド ちり、けがれ。李正封詩「九陌無ニーー」

【塵斗】トウ ちりとり、ごみとり。＝塵箕。

【塵品】ヒン もろもろの物。張文成文「爲ニーー之醫王ー、作ニ聚生之慈父ー」

【塵坊】ボウ ちり。梅堯臣詩「耳目絕ニーー」

【塵氛】フン けがれたる氣。杜甫詩「此生隨ニ萬物ー、何路出ニーー」

【塵表】ヒョウ 世俗のほか。南史「挂ニ冠人世ー、棲ニ心ーー」＝世外・世表・塵外。

【塵凡】ボン けがれたる世間。賈餗泰詩「龍宮自與ニーー一隔」

【塵網】モウ けがれたる世の中。陶潛詩「誤落ニーー中ー、一去三十年」

【塵務】ム 世の中のうるさきつとめ。世說「ーー縈ー心」＝世務・俗務。

【塵面】メン ちりにけがれたるかほ。楊萬里詩「ーー我自知」

【塵勞】ロウ 佛煩惱の義、外物と内愛とすべて心を勞するもの。圓覺經疏鈔「塵是六塵、勞謂ニ勞倦ー、由ー塵成ー勞、故名ニーー」

【塵累】ルイ 世の中のわづらひ。耿湋詩「惆悵多ニーー、無ー由ー訪ニ釣翁ー」＝塵縲。

【塲】

場（土部九畫）の俗字。

【塙】

㊀ テイ・タイ 齊 ㊁ テツ 屑

㊀陰驛カゲウマの貌「ー驛」○高き貌。㊁たくはふ（貯）○とどむ（止）

【塾】

テン 琰

○おぼる（溺）水におぼれ苦しむ。晉、金縢「下民昏ー」○くだる（下）地が下り陷る。○うるほふ（濕）○をる（折）後漢書、郭太傳「太行遇雨、巾一角ー、時人乃故折ニ一角ー以爲ニ林宗巾ー」○けがる（穢）○圖しとね（茵褥）

【塾墊】テン 地が低く濕ひて狹し、よりてつかれくるしむ義とす、墊は窮迫。左、成六「民懲則ーー」＝羸困。

【塾溺】デキ おぼる。溺志「人爲ーー」

【塾沒】ボツ 下りしづむ。柳宗元文「西

海有レ水、散漫而無レ力、不レ能レ貯レ水、投レ之則委靡一一、及レ底而後止」

【墁】 ㊀バン・マン ㊁バン・マン 寒 ㊀墉に同じ ㊁こて（塗具）＝鏝。㊁かべかざり、牆壁をぬり飾る。

【墉】 墁（前條）に同じ。

【墓】 ボ ム 遇 はか（塋域）つか（塚）平かなるを一、土を封するを冢、土を高くするを墳という。

補説 土に从ひ、莫の省畳に从ふ、孝子思慕の土なり。

【封レ墓】 ホウボ 荒れたる墓に土を盛りて修繕する。書、武成「釋二箕子囚一、封二比干墓一」

【墓碣】 ボケツ 形の円なるはかじるしの石（方なるは碑）

【墓参】 ボサン 祠はかまゐり、墓にまゐりて香華をたむけるの＝墓祭・展墓。

【墓誌銘】 ボシメイ 文體の名、死者の経行事業などを記して墓石に刻み、後世に傳へしむる文辭。銘は文の終に係ける韻語。

【墓所】 ボショ はかば、死者を葬る所。後漢書、馬援傳「會況卒、援行レ服期年、不レ離二一一一況は援の長兄。

【墓隧】 ボスイ はかみち。水經、注「判レ石樹レ碑、列二於一一一」＝神道。

【墓地】 ボチ はかば、死人を葬る所。周禮「凡爭二一一一者、聽二其獄訟一」＝墓所。

【墓碑】 ボヒ 形の方なるはかじるしの石（圓なるは碣）

【墓田】 ボデン はかば。晉書、郗紹傳「進レ辭懇レ侯、賜二一一一頃一」＝墓所・墓地。

【墓表】 ボヒョウ 文體の名、死者の経歴などを記して立つるもの。東漢の安帝、元初元年、詔者二一一君一一を立てしに始る。

【墓木已拱】 ボボクイキョウ 拱は両手にて合せ圍む程の大いさ、墓にうゑたる木の拱に至るは、死して久しきを經たる義。左、僖三十二「所何知、中寿爾墓之木拱矣」

【墉】 ヨウ ユウ 腫 通ず ○とりで（小城）○しろのかき（城垣）○かべ（壁壁）かき（垣牆）＝壁。郊特牲「君南向于北一下二○みぞ（溝）○仙人の宮室。

【墟】 キョ 魚 ○あと、ふるきあと（古跡）「殷一」「姚一」○大いなる丘○大いなる墓二○いち、臨時の市場、貨物輻湊の處。＝集。

【墟市】 キョシ むらざとのまち。范成大詩「一一稍來集」

【墟墓】 キョボ 草に埋もれて祭る者無きはか、無縁づか。禮記「一一之閒、未レ施二眞於民一而民眞」

【墟落】 キョラク あれたるむらざと。王維詩「斜陽照二一一一、窮巷牛羊歸」＝村落。

【墟里】 キョリ 前條に同じ。晁補之詩「牛羊散二一一一」

【墺】 オウ 号 通じて奥に作る ○ありづか（坪）○ちいさきをか（小阜）「堳一」

十二畫

【墝】 ㊀カウ・ケウ 肴 ㊁カウ・コウ 效 磽に同じ ㊀石多きやせぢ（瘠土）やせだ（薄田）㊁地平かならず。

【墝埆】 コウカク やせぢ。淮南、原道「舜耕二歷山一、田者爭處二一一一、以二肥饒一相讓」＝磽确。

【墝埆】 コウカク やせぢ。曹鄴詩「自驚二疲牛一理二一一一」＝墝埆。

【墝肥】 コウヒ やせたる地と、こえたる地と。荀子「相二高下一視二一一一」

【墟】 キョ 魚 ○あと、ふるきあと（古跡）「殷一」「姚一」○大いなる丘○大いなる墓二○いち、臨時の市場、貨物輻湊の處。＝集。

【墟市】 キョシ むらざとのまち。范成大詩「一一稍來集」

【墟墓】 キョボ 草に埋もれて祭る者無きはか、無縁づか。禮記「一一之閒、未レ施二眞於民一而民眞」

【墟落】 キョラク あれたるむらざと。王維詩「斜陽照二一一一、窮巷牛羊歸」＝村落。

【墟里】 キョリ 前條に同じ。晁補之詩「牛羊散二一一一」

【墳】 塊（土部十遺）に同じ。

【墹】 セン ゼン 銑 霰 一に墱に作る 清く掃除せしまつりのには（靈時）禮、祭法「王立二七廟一一壇一一」後には禪に作る。

【増】 ソウ 蒸 徑 曾に通ず 通音ゾウ ○ます（益）數が多くなる、加はる、かさなる（重）○おほし（衆）○ますます。柳宗元文「喜極一悲」○層に通ず。揚雄、甘泉賦「一宮參差」

補説 增・益・倍・滋・加の別は益（皿部五遺）の條を見よ。

【増輝】 ゾウキ ひかりをます。後漢書、增二日月之輝一」

【増益】 ゾウエキ ましくはふ。高唐賦「交加累積、重疊一一」＝増加。

【増演】 ゾウエン ましひろめる。隋書、經籍志「九聖之一一、以廣二其意一」

【増加】 ゾウカ まし加はる。唐書、食貨志「應使奏吏之能者、有二四科一、一曰戸口一一、二曰田野墾闢、三曰稅錢長數、四曰、事辦先レ期」＝増益。

【増改】 ゾウカイ ましてあらためる。禮記「禮樂之情同、故明王以相沿也」疏「沿謂二因而一一也」

【増額】 ゾウガク 價金品のたかをまし加へる、又ましだか。

【增給】ゾウキュウ 給料を増す。‖增俸。
【增減】ゾウゲン 増すと、へらすと。唐書、百官俸錢、會昌後不二復一一一‖損益・增損・加減。
【增資】ゾウシ 資本を増加する。
【增進】ゾウシン ますますすむ。學力・體力等が増し加はる。
【增殖】ゾウショク ふやす、ふえる。
【增水】ゾウスイ 降雨又は雪解等にて河湖などの水量がます、ましみづ。
【增增】ゾウゾウ おほき貌。詩、魯頌「烝徒一一」
【增損】ゾウソン 聖減に同じ。史記「有下能一一一字一者上予二千金一」
【增大】ゾウダイ ますて大きくなる。
【增築】ゾウチク 建てましする。宋史、吳拱傳「一一一長隄一民賴以安」
【增秩】ゾウチツ 俸給を増す。漢書、薛宣傳「所」居有レ跡、數一一レ蝗レ免」‖增俸。
【增長】ゾウチョウ 圖つけあがる、心術行爲などが次第に悪しき方に向ひ進む。
【增張】ゾウチョウ ましふえる。後漢書、郭太傳「或階益一一、故多二顯榮一」‖增益。
【增注】ゾウチュウ 書物の註解を増し加へて精しくする。又、其の注文。‖增註・補注。
【增註】ゾウチュウ 前條に同じ。
【增穀】ゾウコク 例年より多く米を買ひ入れる。宋史「三路饑歲、仍令一一糴
【增展】ゾウテン ましひろげる。金史、禮志一一一太廟一、益二十二室一」
【增年】ゾウネン 年を増し加へる。陸游詩「身老怯一一一」
【增倍】ゾウバイ まして一倍になる義。倍雖、疎二氣勢之一一也」
【增補】ゾウホ ましおぎなふ。後漢書、胡廣傳「一一十六篇一」‖補足。
【增鏡】ゾウキョウ 圖かがみの美稱、眞澄スミの翁のあて字。○書名。十卷、著者詳ならず、後鳥羽院より後醍醐天皇までの事を記す。水鏡・大鏡と并せて三鏡と云ふ。

墮 ㊀ダ・ダ ㊁キ 隋は俗字

○おつ、おとす(落)○やぶる(壞)こぼつ(毀)損する。○くづす(頽)くづれる。○つぶす(潰)○おこたる(懈)惰に通ず。韓非、五蠹「修而一者貧」
同訓異字 墮・落・墜等の別は落(艸部九畫)の條を見よ。
【墮耳】ダジ おちたるみみかざり。珥は耳璫ダトウ也、淳于髡傳「前有二一一一、後有二遺簪一、乾餌藥レ此、飲可二八斗一而醉二髡一」‖環珥。
【墮胎】ダタイ はらみ子をおろす、人工にて流産させる。
【墮胎藥】ダタイヤク 子をおろす藥。南史、徐孝嗣傳「孝嗣在レ官、毋不レ願レ有子、以二擣レ衣杵一自資二其腰一、井屬二一一、胎更堅」
【墮落】ダラク ○失敗する。荀、富國「毀瑕一一」○花などがしぼみて落ちる。詩、採有梅、傳「盛極則一一」○圖道心を失ひて、邪道におちいる。法華經「或當二一一餓レ火所レ燒」
【墮淚碑】ダルイヒ 晉の羊祜ヨウコが襄陽に守として、甚だ民の心を得たり、卒するに及び美碑相接す、襄陽の百姓、峴山の祜が平生遊憩せし所に碑を建て廟を立て、歳時祭祀す、其の碑を望む者、淚を落さざるなし、杜預名づけて——といふ「晉書、羊祜傳」‖峴山碑。

墮 墮(前條)に同じ。

墜 ツキ シュツ 質

○おつ(落・隕)○うしなふ(亡・失)衰へる。論、子張「文武之道、未」一一於地一在」人」○おとす(落)
同訓異字 墜・落・落の別は落(艸部九畫)の條を見よ。
【墜落】ツイラク 墮落に同じ。
【墜地】ツイチ 地におつ。轉じて、衰へ亡びんとするにいふ語。字解を見よ。杜甫詩「家聲肯一一」
【墜典】ツイテン すたれたる法度。晉唐書、刑法志「補二千年之一一一、逸二百王之餘軌一」
【墜落】ツイラク 墜下に同じ。
【墜露】ツイロ おつるつゆ。離騷「朝飲二木蘭之一一一」

墱 トウ 元 陸と通ず

○ちひさきさか(小阪)○たかきはし(閣道)○ちひさきあな(小坎)より分れ出るみなまた(水分派)左思、魏都賦「一流十二、同二源異一口」

墩 トン 元

○平地にある堆タイき處「謝公一」をか(丘)どて。○こしかけ。

墊 テン 霰

墝 ハク 覺

墩(前條)に同じ。

つちくれ（塊）

【墳】 フン　元　願

つか（冢）はか（墓）盂、灘墓「卒之東郭ー聞之祭者」

【墽】 ブム　灰

○はか（墓）○墓地を度がりて定める。

【墳】 ㊀フン　文　㊁フン　阮　㊂フン　吻

㊀はか（墓）土を高く盛りたる墓「古ー」「荒ー」○をか（丘）「丘ー」○大いなるつつみ（大防）○つぎは（水涯）○大いなり。○わかつ（分）○伏羲・神農・黄帝の書。大道を記するが故。左、昭十三「讀三ー五典八索九丘」轉じて古書「典ー」「皇ー」㊁うごもてるこえつち（肥土）の意、禹貢「厥土黑ー」㊂うごもつ、土が沸起する。左、僖四「公祭地地ー」

【墳墓】フンボ　はかば。論語、西征賦「思緬二祖予ー一」‖墳墓。

【墳衍】フンエン　水涯ぎわと平地と。周禮「山川丘陵ー一」

【墳史】フンシ　古書と史書と。晉書「篤好二ー一」

【墳樹】フンジュ　墓に生じたる木。杜牧詩「故人ー一五秋風」

【墳典】フンテン　三墳・五典の略、三皇・五帝の書の稱。墳は分なり、三才の分、天地人の始を論ずる義。又、大なり、大道を說くが故。轉じて古書の義とす。宇解を見よ。南史、丘巨源傳「屋漏、恐レ濕ニー一」

【墳墓】フンボ　はか、おくつき。檀弓「奈何去ニー一也」

【墳羊】フンヤウ　聲の季桓子の井を穿ちて、中より得たりといふばけもの。晉語「土之怪曰ニー一」‖羵羊。

【墳壚】フンロ　土のうごもちて色黑く質剛き者。書、禹貢「下土ー一」‖黑剛土。

【墨】 ボク　モク　職

○すみ、書畫を書くに用ふる黑色の料。轉じて筆跡の義。又轉じて書畫を作る義「文人ー客」○縄ーはすみなは。轉じて法則・標準の義とす。○くろし、くろむ（黑）孟、滕文公「歡鍋面深ー」○くらし（闇昧）明かならず。○いれずみ、五刑の一。○五尺の長さ。周語「不過二丈尋常之間」○けがれ（汚）むさぼる、官吏が賄賂などを取るにいふ「貪ー」○おとろへたる貌。○へりくだる。○だまる、聲なし、默に通ず。○一翟の唱へたる學說。○國名、一西戎ノ一の略稱。

【墨家】ボクカ　筆愛崇儉を主義とせる墨翟の學派。又、其の人。史記、自序「ー儉而難レ遵、然其彊レ本節レ用不レ可レ廢也」‖墨者。

【墨海】ボクカイ　硯の異名。文房四譜「黃帝得二玉一鉅一、治爲二ー一、其上篆文曰二帝鴻氏之硯一」

【墨行】ボクカウ　墨子の行を爲すもの。韓愈、送二浮屠文暢一序「人固有二儒名而ー者一、問二其名一則是、按二其行一則非、可二與レ之游一乎」

【墨客】ボクカク　文筆書畫の巧なる人「騷人ー一」李白詩「ー一多二新文一」

【墨翰】ボクカン　書畫をいふ。盡藏「近世牧溪僧法常作ニー一、粗無二古法一」

【墨君】ボククン　竹を此君といふによりて墨紛の竹をいふ。蘇軾、ー一堂記「王駙之謂二竹君一、天下從而君レ之、今與可又能以レ墨象二君之形一、作レ堂以居レ君、而獨レ余爲レ文、以頌二君德一」與可は文與可、善く竹を畫く。

【墨牽裏】ボクケンリ　しゃくやくの異名。廣雅「ー、芍藥也」

【墨痕】ボクコン　墨のあと。圖繪寶鑑、姜濟窩二山水一無ニー一、有二雲烟出沒之奇一」‖墨跡。

【墨罪】ボクザイ　いれずみ、五刑の一、額に刻みてこれに墨す。周禮、秋官「ー一五百」

【墨莊】ボクサウ　墨は墨跡、多く書物を藏する義。書目故事「宋朝劉燁死、妻鬻二書千餘卷一、指二示諸子一曰、汝父謂レ此爲ニー一、今賠二汝輩一、爲二學殖之具一」

【墨子泣レ絲】ボクシキウ　人は習慣により て善惡を殊にするをいふ。淮南、說林「墨子見二練絲一而泣レ之、爲下其可二以黃一可中以黑上」

【墨汁】ボクジフ　○すみのしる。林下偶談「唐王勃屬レ文初不二精思一、先磨ニー一數升一」‖墨瀋。○インキ。○黑き汁。

【墨瀋】ボクシン　墨汁に同じ。北齊書「書迹遒勁者、令レ飲ニー一升一」

【墨者】ボクシャ　墨家に同じ。孟、滕文公「ー一夷之因二徐辟一而來レ見二孟子一」

【墨守】ボクシュ　墨翟のよく城を守りし故事によりて固く自說を執りて變せざる義とす。後漢書、鄭康成傳「時任城何休好二公羊學一、遂善二公羊ー一」墨翟之守を見よ。

【墨蹤】ボクシュウ　墨跡に同じ。梅堯臣詩「年深粉劍見ニー一」‖墨蹟。

【墨水】ボクスイ　○すみをすりたる汁。林下偶談「飲ニー一升一」‖墨汁。○國　東京の隅田川の異稱。

【墨水紙】ボクスイシ　すひとりがみ。‖吸墨紙。

【墨跡】ボクセキ　すみのあと、筆跡をいふ。

宋史、藝文志「古墨一一藏二其中一」‖墨迹。

【墨蹟】ボクセキ　前條に同じ。

【墨池】ボクチ　○すみつぼ。李白、草書歌行「一一飛出北溟魚」○筆硯を洗ふ池。晉鍾にー一記あり。

【墨竹】ボクチク　○すみ繪のたけ。阿梓寶鑑「徽宗作ニー一一」○竹の一種。茅亭客話「有二綠竹一、葉細而資、堅瘦而榮、亦謂二之ー一一」

【墨尺】ボクシャク　僅かの長さ、轉は五尺。周語「不レ過ニー一一緡當之間一」

【墨場】ボクジョウ　文墨のなかま。又、其の場所。宋之問詩「資乃ー一絕、文稱詞伯雄」‖翰墨場。

【墨縄】ボクジョウ　すみ繩のなわのしし、肉ぶとにして骨なき文字の形容。衛夫人筆陣圖「多肉微骨者、謂二之ー一一」

【墨翟之守】ボクテキノシュ　楚の軍師公輸般、雲梯を作りて宋を攻む、墨翟固く宋の城を守りて九たび之を卻け、入ること能はざらしめし故事により難城防戰の强固なるにいふ。史、魯仲連傳「今公又以二敵國之民一距二全齊之兵一、是ー一也」

【墨涅】ボクデツ　いれずみ。

【墨帖】ボクジョウ　石ずりの折本。‖法帖。

【墨斗】ボクト　すみつぼ、やたて。

【墨突不レ暇レ黔】ボクトツアラズニイトマアラズクロムニ　墨翟が道を行はんとして天下を周游せし爲め、己の家の竈のけむりだしも黒くなる暇なかりき。晉國、管寧數「聖哲之後、接援遑遑、孔席不レ暖、墨突不レ黔」新論「仲尼栖栖、突不レ暇レ黔、墨翟遑遑、席不レ及レ煖」○韓愈、靜臣論「孔席不レ暇レ煖、而墨突不レ得レ黔」

【墨梅】ボクバイ　すみ繪の梅。畫鑒「楊補之ー一、甚清絕、水仙亦奇、自稱二逃禪老人一」

【墨妙】ボクミョウ　すぐれた。張旭詩「深棟ー一生」

【墨寶】ボクホウ　書法の佳なる者の稱。

【墨劓】ボクギ　周代の五刑の一、額にいれずみするしおき。贖、呂刑「ー一之屬千」‖黥辟。墨刑。

【墨辟】ボクヘキ　いれずみの刑。贖、呂刑「ー一疑赦、其罰百鍰」‖墨罪。

【墨翁】ボクオウ　○癈なき貌。史、商君傳「武王諱以興、殷紂ー一以亡」‖默默。○くらやみ。晉、四稱「政令不レ善、ー一若レ夜」

【墨雲】ボクウン　文辭の巧妙なる喩。江淹賦「淵雲之ー一」淵は王褒(字は子淵)雲は揚雄(字は子雲)

【墨園】ボクエン　○すみ繪のらん。輟耕錄「鄭所南先生、工畫ニー一、不二妄與一レ人」○蘭の一種、其の花深紫、墨の如き者、閩廣地方に産す。

【墨林】ボクリン　書畫をいふ。宋史、王柏傳「著有二天文考・地理考・ー一考一」

【惜墨如レ金】セキボクジョノゴトシ　揮筆にて甚き、墨を多く用ひざる義。古今名畫記「李成作レ畫、ー一」

【墨突】ボクトツ　力を用ひて田地を耕しひらく。北史、蘇綽傳「皆令二就レ田ー一、以レ時勿二失其所一」‖開拓・開墾・墾闢。

【墨闢】コンヘキ　前條に同じ。

墻　十三畫

【墻】レイ　○まはりのかき(周垣)○めぐらす(續)

壙　十三畫

【壙】野(里部四畫)の古字。

壎　十三畫

【壎】㊀アク・オウ　㊁キク・ヲク　同じ

○をか(陸)四方の土の居るべき處。○みづぎし(水尾)○國名、ー一斯太利(オウストリア)の略稱。

壘　十三畫

【壘】コン　○ひらく(開)力を用ひて土を反す。○荒田をつとめをさめる(力治)○やぶる(傷)やぶれそこなひしもの。

【壘耕】コンコウ　地をひらきたがやす。

【壘荒】コンコウ　荒地をたがやし開く。

【壘養】コンヨウ　土地をひらき穀樹などを植ゑつける。唐書、岡二美田數十畝一、ー一レ士ー一」

【壘草】コンソウ　くさを刈りひらく。韓非子「今上急ニ耕レ田ー一レ以厚二民產一」

【壘墾】コンコン　地をひらく。列子「扣レ石ー一レ」

【壘田】コンデン　用地をひらきをさめる。

【國語】

壇　十三畫

【壇】㊀ダン・ダン　㊁タン・ダン　稱　俗

㊀土を高く盛り上げたるまつりのには(祭場)古は將相を任ずるにも亦ー一を設く。漢書、高帝紀「設ー一具禮、拜韓信爲二大將一」○盟誓又は國君の朝會にも亦ー一を設く。㊁ー一曼は寬廣なる貌。又、平かにして博き義。

【壇墠】ダンセン　祭壇なり、雖も亦壇。事物紀原「左氏傳曰、除レ地爲レ墠、築レ土爲レ壇」單に墠に通ず。

【壇場】ダンジョウ　祭祀會盟等を行ふ爲めに設けたる高きだん。史記「擇二其日一、齋戒設ニー一一」‖壇兆。

【壇兆】ダンチョウ　前條に同じ。兆は祭壇の界。後漢書、上東巡狩至二泰山一、修二光武山南ー一一」

壕　十三畫

【壕】ゴウ　堀(土部八畫)に同じ。

壁　十三畫

【壁】ヘキ　○かべ、かき(垣)○とりで

（壁）○がけ（厓）馬岌、石壁銘「青―千尋」○なまめ、二十八宿の一。晉書、天文志「東―二星、主文籍、天下圖書之府」

【壁陽】ヘキヤウ　とりで。晉書「修ニ―一、樹ニ藩障一」＝壁壘・保障。

【壁魚】ヘキギョ　蟲の名、しみ。杜甫詩「開レ門野鼠走、散レ帙―乾」＝衣魚・蠹魚。

【壁畫】ヘキグワ　かべにえがきたる畫。駱賓王詩「銘書非二晉代一、―是梁年」

【壁光】ヘキクワウ　苦學するにいう。漢書、匡衡傳「衡勤學、家貧無レ燭、隣舍有レ燭而不レ遮、乃鑿レ壁引二其光一而讀レ之」

【壁虎】ヘキコ　蟲の名、やもり、形とかげに似て尾短く、全身灰黒色を帶び、壁間に棲む。＝守宮。

【壁書】ヘキショ　○かべに書きたる文字。國○足利氏の末、武家の家憲を記せしもの。○公衆にふれ示すはりだし。＝揭示。

【壁錢】ヘキセン　壁に棲むひらぐも（平蜘蛛）

【壁中書】ヘキチュウショ　前漢の武帝の末、魯の恭王が孔子の家の壁中より發見せしといふ古文尚書・古文孝經の類をいふ（漢書、藝文志）＝壁藏書。

【壁門】ヘキモン　とりでの門。史、絳侯世家「亞夫乃傳言開ニ―一」＝軍門。

【壁立】ヘキリツ　○かべの如くにつったつ。水經、注「其山唯石、一一千仞」○四方のかべの立てるのみにて他の家財なし、貧家の形容。史、司馬相如傳「家居徒四―一」北史、崔挺傳「家徒一―、兄弟怡然」

【壁壘】ヘキルイ　とりで。漢書「深溝一一、分レ卒守レ徼」＝軍壘・城壘。

【壁訴】ヘキソ　圖壁に向ひてうったへる、ひとりつぶやくをいふ。

【壁有レ耳】ヘキニミアリ　何處にて何人の聞くことあるかも知れずとの義。詩、小雅「君子無二易由言一、耳屬二于垣一」に本づく。博聞錄「――、牆有レ縫」

【壅】ヨウ　ユウ　多　腫

○ふさぐ、ふさがる（塞）せく（堰）とづ（閉）○つちかふ（培）肥料又は土を以て植物の根をつちかひ養ふ。

同訓異字　壅・塞・杜・梗等の別は塞（土部十畫）の條を見よ。

【壅勁】ヨウケイ　君民上下の情をへだつる、ふさぎおさへる。韓非子「世主所二以一―一失二其所有一也」

【壅絶】ヨウゼツ　ふさがりたゆ。東方朔文「道一一而不レ通」

【壅阻】ヨウソ　ふさがりとどまる、ふさがりへだたる。＝壅隔。

【壅塞】ヨウソク　ふさぐ。又、ふさがる。禮記「讒ニ―一、以傷ニ水潦一」

【壅滯】ヨウタイ　ふさがりとどこほる、物事がはかどらず。晉書、陶侃傳「筆翰如レ流、未二嘗一一一」＝停滯。

【壅閉】ヨウヘイ　ふさぎとづる。ふさがりて通ぜず。左傳「勿レ使レ有レ所ニ―一」＝壅塞・壅滯。

【壅蔽】ヨウヘイ　ふさぎおほふ。君主の耳を蔽ひ防げる。唐書「問以二時事一、通ニ―一之路一」

【壅】ヨウ　塞（前條）に同じ。

【壠】ラン　感

―坎は志を得ざる貌。＝坎壈。

十四畫

【壟】アイ　カイ　泰　壒は俗字

○ちり、ごみ、ほこり（塵埃）「埃一」○應合する。

【壓】㊀アフ・エフ　洽　通音アツ　㊁エン　鹽　或は、厭・靨に作る　㊂デフ　葉

㊀おし、おす、おさふ（抑）おさへつける、重力にて上より抑へる。權威にて屈服させる。○やぶる（壞）○しぼる（笮）「―搾」○あたる（當）○しづめる（鎭）○ふさぐ（塞補）○ふす（伏）㊁あく、いとふ、にくむ、足る。＝厭。㊂おさふ、一つの塔にて按ずふ。

【壓卷】アツクワン　衆人の詩文中の最も秀でたるもの。他の諸卷（答案の文）を壓倒する義。

【壓搾】アツサク　おさへしぼる「一一機」

【壓死】アツシ　物におしつぶされて死ぬ。

【壓制】アツセイ　むりにおしつけ制する。

【壓脊樑】アツセキリヤウ　むながはら。屋根の棟を葺くかまぼこ形の瓦。

【壓倒】アツタウ　他をおしたふす。唐摭言「我今日一一元白」元は元稹、白は白居易、共に唐の詩人。

【壓條】アツデウ　とりき、條は枝。花經「分レ枝一一」

【壓迫】アツパク　おしせまる。おしつまる。

【壓尾】アツビ　ものをはり。楊萬里詩「一一桐花也作レ塵」

【壓伏】アツフク　次條に同じ。

【壓服】アツフク　おしつけしたがはしむ。壓御屈服。＝壓伏。

【壓力】アツリヨク　おすちから、物體が他の物體をおしつける力「一一計」

【壕】カウ　ゴウ　豪　濠に通ず

ほり、城下の池。柳宗元詩「壓鳴寨雨下二空一」

【壑】ガク　藥

○たに（谷）○みぞ（溝）あな

（坑）○大―は海をいふ。莊、天地「大―之爲物也、注爲而不滿、酌焉而不竭」

【壑谷】クヮク　低下の地、地下室に喩ふ。左、襄三十「鄭伯爲二窟室一夜飲、朝者曰、公安在、其人曰、吾公在二―一」に

【壢】カン　㊀

かたきつち（堅土）

【壜】キ　㊁

○もりつち（累土）○もっこ。＝簣。

【壝】タン　㊀　㊁　埠に同じ

つちかき、築器、土を燒きて作り、上銳く、底平かに、形稍鍾に似たり、中空にして六孔若くは八孔あり、八音中の土に屬す。

【壎篪相和】ケンチヲ　埠篪は共に樂器、兄弟の親しきこと、唱へて篪和するが如きに喩ふ。詩、小雅「伯氏吹レ壎、仲氏吹レ篪」

【如レ埠如レ篪】ケンコトキハ　篪は笛の類、壎と篪との聲相和する如く、兄弟の睦まじきにいふ。前條を見よ。＝如レ壎如レ篪。

【塹】ザン　㊀

壕（土部十一畫）に同じ。

【壕】セン　㊀　㊁　壎に同じ

○きし、岸邊の地。○かき、牆の外の短き垣。

【壽】タウ　㊀　㊁　嶂と通ず

○とりで（堡）一說に高き土。○つつみ（堤）

十五畫

【壙】クヮウ　㊀　㊁

○あな、墓の穴。○ほらあな（空洞）ある地、又廣き野。孟、離婁「猶二水之就一下、獸之走一―也」○―は野原のひろく開けたる貌。

【壙壟】クヮウロウ　原野の空廓なる貌。新書「天下――、一人有レ之」＝茫茫・壙壙。

【壙穴】クヮウケツ　死者を葬るはかあな。＝葬穴・夜臺。

【壚】盧（广部十二畫）の俗字。

【壘】㊀ルイ　㊁ライ　㊀紙　㊁支　斷

㊀とりで、敵に備へる爲め土を累ねて作りし小城（軍壁）左傳「高深―固」軍以待」之」○天―は星の名。㊁かさぬ、かさなる（重）かく、かかる。＝累・纍。○―は家又は墓などの相次ぐ貌。㊂壯んなる貌。漢書、鮑宣傳「魁―之士」＝磊。

【壘尉】ライヰ　とりでの事を掌る役。後漢書、光武紀「時有二長人巨無霸一長一丈、大十圍、以爲二―一」

【壘塊】ライクワイ　かたまり、胸中にわだかまれる不平。世說、任誕「晉阿籍胸中―一、故須レ酒以澆レ之」

【壘空】コウ　ちひさきあな。莊子「不レ似二―之在二大澤一乎」

【壘砦】ライサイ　とりで。＝壘壁・壘堡。

【壘壁】ライヘキ　とりでと、其の下の濠と。宋書、柳元景傳「―未レ立、可下得二平地一決戰上」

【壘令】ライレイ　軍壘と軍令と。周禮、遂人「營二軍之―一」

【壘壁】ルイヘキ　かさなり峙てる山。地理通釋「重巖―、隱レ天蔽レ日」

【壘堡】ルイホウ　とりで。＝壘壁。

【壘壁】ルイヘキ　とりで。史、自記傳「趙軍築二―一、而守レ之」

【壘門】ルイモン　とりでの門。宋書、樂志「通幢羅二天珠一、而鉾造二―一」＝壁門。

【壘壁】ルイヘキ　家などの連りつづく貌。張載、七哀「北邙何―一」＝累累・纍纍。

十六畫

【壞】㊀クヮイ　㊁クヮイ　卦　隊

（山部八畫）の條を見よ。○ワイ　壞・破・敗・傷等の別は破（石部五畫）の條を見よ。

【壞毀】クヮイキ　やぶれそこなふ。＝類毀。

【壞決】クヮイケツ　くづれる。馬融賦「眠二於食一兮、―二垣牆一」＝潰決・壞崩。

【壞血病】クヮイケツビヤウ　久しく新鮮なる蔬菜を食はざるか、又は苦だからき鹽藏肉を食用とするなどより起る病、身體衰弱して齒齦ただれ皮膚土色となる。＝黃疸。

【壞疽】クヮイソ　ゑずまひをくづす、ろくにすわる。韓非、外儲說「平公腓痛足痺、而不二敢―一」＝胡坐・箕踞。

【壞體】クヮイタイ　くづれたるかき。溫庭筠詩「龍蛇滿二―一」＝頽牆。

【壞俗】クヮイゾク　風俗をみだす。又、みだれたる風儀。＝類俗。

【壞類】クヮイルイ　やぶれくづれる。＝壞崩。

【壞徹】クヮイテツ　こはしすてる。揚雄文「吾有二溫廈一、而尙缺焉、――而能全」

【壞散】クヮイサン　そこなひやぶる。賈誼疏「時俗殊而不レ還兮、恐功久而―一」＝敗壞・壞毀・頽毀。

【壞崩】クヮイホウ　くづれる。＝壞頽。

【壞亂】クヮイラン　やぶりみだす、やぶれみだ

あれる。風俗がみだりがはしくなる。
【壊滅】クワイメツ　やぶれただれる。
【壊裂】クワイレツ　やぶれさける。‖類襲。

【壇】 タン　㊀ドン　㊀

○ふかがめ、甕の屬、酒甕。陸龜蒙、謝山泉詩「石ー封寄野人家」‖壇。○國びん、硝子ガラス製の德利トクリ。

【龍】 リョウ　㊀ロウ　㊀

【龍】は本字　【壟】に通ず

○つか(塚)○くろ、うね(畝)田の中の高き處。
【壟望】エンバウ　つか。土を盛りて築きし墓。‖隴望。
【聊斌】ロウ　はたけ。轉じてゐなかの義とす。史、項羽紀「乘ノ勢起ニー一之中ニ」三年遂將二五諸侯一」
【壟阪】ロウハン　岡の高く聳えたる處、古、其の高所に登りて市中を見まはし、安き物を買ひ占め高く賣りたる故事により、轉にてたくみに市の利を獨占する義とす。孟、公孫丑「有二賤丈夫一焉、必求二壟斷一而登レ之、以左右望、而罔二市利一」龍は壟に通ず。

【壜】 【罈】(前條)の本字。

【壚】 ロ　㊀リョ・ロ　㊀

○あらきくろつち(黒剛土)○ねろり「茶ー」‖爐。○土を累ねて作りし酒を賣る所(酒屋)史、司馬相如傳「令二文君當ー一」

十七畫

【壌】 ㊀ジャウ　㊁ジャウ　㊀　㊁

㊀つち、耕作すべき土地。○やはらかなるつち(柔土)○ゆたか(富足)穰に通ず。列、天瑞「一年而給、二年而足、三年大ー一」○こゆ(肥)○くに(國土)○とち(大地)「天ー」○ところ(場所)○やぶる(傷)○ーーは入りみだれたる貌。○數の名、垓の十倍。○醸ーは古、野老の戲、ーは木製の具、形履に似たり、ニーを作り、先つ一ーを地に置き、三四步を隔てて手中の一ーを擲ち、中るを以て上と爲す。㊁こえつち(肥土)
【壌壌】ジョウジョウ　紛錯ブンサクせる貌。史、貨殖傳「天下ー一、皆爲レ利往」‖攘攘。
【壌地】ジョウチ　土地。又、國土。孟、滕文公「夫滕ー一褊小」
【壌奠】ジョウテン　土地より産せし祭のそなへもの、野菜の類。書、康王之誥「敢執ニー一、皆再拜稽首」
【壌土】ジョウド　農作に適するつち。國語「惡金以鑄二鉏夷斤斸一試二諸ー一一」

廿一畫

【壩】 ハ　㊀

ゐせき(堰)水を障ヘる堰。

士部

【士】 シ　㊀

○さむらひ、四民の首たる者「ー農工商」○官吏の總名。周代にては大夫の次位。○學德ある者「ー君子」○裁判官。書、舜典「皐陶汝作ー一」○もののふ(武夫)○をとこ、男子の尊稱。○こと、又、ことごとく、事に通ず。
【取レ士】トルシ　士をあげもちふる。孟子「ーレー必得」與志、魏策「臣聞殷湯ーニー於商賈一舉擢ーニー於牟輸一、周武ーニー於負鼎一、大漢ーニー於奴僕一」
【士氣】シキ　○さむらひかたぎ。武士、又、士君子の氣風。○兵士の元氣。
【士君子】シクンシ　學問ありて德行高き人、上流社會の人。
【士官】シクワン　陸海軍の少尉・中尉・大尉及其の相當官の稱。轉じて廣く將校の總に用ふ。‖武官。
【士操】シサウ　士の守るべきみさを。武士道。晉書、王國寶傳「少無ニー一、不レ修ニ廉隅一」
【士子】シシ　○讀書して科擧(官吏登用試驗)の準備をなし居る人。又、學校の男生徒。○官職ある人、つかさびと。詩、小雅「憯憯ーー、朝夕從レ事」
【士師】シシ　訟獄をつかさどる長官。論、微子「柳下惠爲ニー一三黜一」
【士庶人】シショジン　官吏と農工商の庶人と。‖四民・士庶。
【士族】シゾク　○さむらひの家がら。讀書人のやから。晉書、許邁傳「家世ーー」○國維新後、武家の家位に對して賜はりし身分の階級、華族と平民との中間に位す。
【士卒】シソツ　○下士と兵卒と。又、廣く軍人の稱とす。○國維新前、さむらひと、あしがると。士族と卒族と。
【士大夫】シタイフ　○官職ある人。考工記「作而行之、謂ニ之ーー一」○郎士將校をいふ(史、李廣傳贊)
【士道】シダウ　さむらひの行ふべき道。‖士操。
【士女】シジョ　をとこ、をんなと。‖男女。
【士農工商】シノウコウショウ　人民の四種別。穀梁、成、元「古者有二四民一、有二士民一、有二商民一、有二農民一、有二工民一」
【士爲二知レ己者一死】シヰチキシス　士はよく己の心を知れる人の爲めには身

命をなげうつ。晉の陶潛の語。史、刺客傳「――、女爲ニ說ク己者ニ容」說は悅。

【士不ニ可ニ以不ニ弘毅ニ】士の心志は、弘大にして、剛毅ならざるべからず。論、泰伯「――、任重而道遠、仁以爲ニ己任ニ、不ニ亦重ニ乎、死而後已、不ニ亦遠ニ乎」

【士夫】○少年の人。易經「老婦得ニ其ニ士ニ」○男子の通稱。

【士風】○さむらひの氣風。‖士氣。○學者の風習。

【士分】圓さむらひたる身分、士たる資格。

【士民】○もろもろの人人。晉子「勸ニ一一勉ニ稼穡ニ」‖人民。○道藝を學習する人。士農工商を見よ。

【士林】さむらひのなかま。韜隱詩「濟濟清名映ニ一一ニ」‖士類。

【士類】士林に同じ。晉書、裴秀傳「少有ニ才氣ニ、似ニ不ニ經ニ、爲ニ一一ニ」所ニ稱ニ」

一畫

【壬】ジン　ニン　侵

○みづのえ、十干の第九位。爾雅「太歲在ニ一曰ニ玄黓ニ」方位には北。○はらむ。‖妊。○おふ(負)‖任。○へつらふ、おもねる(佞)書、皐陶謨「巧言令色孔ニ一」○大いなり。

【壬人】ジン　佞人なり。漢書「是故ニ一一在ニ一位ニ」

【壬生部】ベフ　圓昔、皇子誕生の時、うぶゆの事を司りし民。

四畫

【壯】サウ　漾

○さかんなり(盛)さかんにす。詩、小雅、克ニ一其猷ニ」○大いなり(雄大)○つよし(強・彊)○わかざかり、三十歲又其の前後「一丁」「一年」○陰曆八月の異名。爾雅、釋天「八月爲ニ一ニ」○灸の一灼を一一といふ。

同訓異字　壯・盛・旺・熾・昌の別は盛(皿部七畫)の條を見よ。

【壯意】さかんなる意氣。後漢書、馬援傳「左右哀ニ其ニ一一、莫ニ不ニ爲ニ之流涕ニ」

【壯遊】さかんなる遊覽、又、さかんなる漫遊。宋楊詩「一一詩局窮」

【壯俠】からだのすこやかにして立派なるわか者、俠は健かにして美くし。禮、月令「仲夏養ニ一一ニ」

【壯悍】さかんにしてつよし。魏書「北人一一、上レ馬持ニ三仗ニ、驅馳若レ飛ニ」

【壯擧】さかんなるくはだて、めざましき事業。‖壯圖。

【壯快】さかんにしてこころよし。

【壯懷】さかんなるおもひ。韓愈詩「風雲入ニ一一、泉石別ニ幽耳ニ」

【壯悔堂】清の文人侯方域(雪苑)の室號、――詩文集十卷あり。

【壯觀】さかんなるみもの。雄大なるみえ。司馬相如、封禪文「天下之一一、王者之丕業」‖大觀。

【壯月】八月の異名「爾雅、釋天」

【壯健】さかんにしてすこやか、年わかくしてたくましい。漢書、匈奴傳「賢一一一」

【壯語】さかんなることば、又、さかんに語る「大言一一」文心雕龍「高談公館、一一歐猴」

【壯士】○氣力さかんなるますらを。史、項羽紀「項王曰、一一賜ニ之巵酒ニ」○國一定の職業なく、人に賴まれて政事上の運動などを引受け、腕力にて事を成し遂げんとする者。

【壯士憔】さかんなる士の心がいたみうれふ。杜甫、後出塞詩「悲笳數聲動、――不レ絕」

【壯志】さかんなるこころざし。晉書、李子雄傳「少慷慨有ニ一一ニ」‖大志・雄志。

【壯齒】わかざかり。齒は齡・年齡ノ二に從ひ士に從ふ。士に從ふ壬とは別なり。

【壯年】はたらきざかりのとしごろ。三十歲頃の年齡。‖壯齒。

【壯夫】○氣力さかんなるますらを。李白文「僕本一一、慷慨不レ歡」‖壯士。○わかざかりの男。韓愈詩「君爲ニ一一我少年」‖壯丁。

【壯武】さかんにたけし。魏志、典韋傳「韋既一一、其所レ將皆選卒」

【壯茂】さかんにしげる。易林「明庶長養、花葉一一」

【壯勇】○年わかく勇氣あり。陸機文「選ニ四方一一、實ニ之邊域ニ」○氣力さかんに勇ましい。‖勇壯。

【壯屬】さかんにはげし。晉書「人

情操厚、則一一之心生」
【壯麗】サウレイ さかんにしてうるはし。後漢書、東海恭王彊傳「善恭王好二宮室一、起二靈光殿一、従一一」
【壯齢】サウレイ さかんなるよはひ。謝靈運詩「一一綴二前期一、類年迫二暮齢一」‖壯年。壯齢。
【壯烈】サウレツ 意気盛んにしてはげし。後書、刁沖傳「沖雖二儒生一、而氣心一一、不レ異二強梁一」

【声】 聲（耳部十一畫）の俗字。

【壷】 八畫 コ

壺 壼とは別

○つぼ（酒器）口開く腹の方なる器、之に反するを方一といふ。○投一はつぼに矢を投げ入るる遊戯、周代にては賓客を遇する禮の一。禮、投壺「投一之禮」○ふくべ、ゆふがほ（瓠蘆）瓜の類。鶡冠、孫聞「中河失レ船、一一千金」
【壺器】コウ かめ。飽照詩「何時領レ杯場二一一一」
【壺漿】コウシヤウ 壺に入れたる飲料。孟、梁惠王「簞食一一以迎二王師一」
【壺觴】コウシヤウ 酒壺と、さかづきと。陶潜、歸去來辭「引二一一一一以自酌、眄二庭柯一以怡顔」
【壺中天】コチウテン 仙人壺公の故事により別世界の義に用ふ。漢書、方術傳「費長房者、汝南人也、曾為二市掾一、市中有二老翁一賣レ藥、懸二一壺於肆頭一、及二市罷一、翁跳入二壺中一、市人莫二之見一、唯長房於二樓上一視レ之、異焉、因往再拜、翁乃與俱入二壺中一、唯見二玉堂嚴麗一、旨酒甘肴、盈二衍其中一、共飲畢而出」‖壺天・壺中天地。
【壺中天地】コチウテンチ 前條に同じ。元稹、幽栖詩「一一乾坤外、夢寐身名且罷閑」
【壺天】コテン 壺中之天に同じ。參同契、注「修レ丹者法二天象一地、反レ身而求、則身中自有二一一一也」
【壺蜂】コホウ 蜂の一種。方言「蜂大而蜜、謂二之一一一今人亦呼為二細蜂一」‖胡蜂。
【壺裏束】コリソク 図 女のよそほひの名。市女笠をかぶり薄絹を垂る、
【壺焼】コヤキ 図 さざえの肉を切り其の殻に入れて其のまま味をつけて炙りしもの。

【壹】 九畫 イツ

壹 図

○ひとつ。‖一。ひとたび（一回）文字の改易を防ぐために借りて一の字に代用す「一萬圓」○はじめ（始）○もっぱら（專一）○あはす（合）「統一」○まこと（誠）あつし（醇）史、曹參世家「載其清淨民以寧一」○とづ（閉）ふさぐ（塞）○すべて（凡）みな（皆）
【壹意】イチイ 一事に心を專らにす。史記「專心并力一一」‖一意。
【壹是】イツ ○すべて、もっぱら。大學「自二天子一以至二於庶人一、一一皆以レ修レ身為レ本」‖一切。○一説に是の義、壹は助語なりと。
【壹倡三歎】イツシヤウサンタン 一人唱へて三人之に和す、清廟の琴音は質素を旨とすれば之を好む者少きをいふ。後世、三たび歎息する義に用ふるは誤れり。禮、樂記「清廟之瑟、朱絃而疏越、壹倡而三歎、有二遺音一者矣」
【壹敗塗レ地】イツハイトチ 一旦敗れて肝腦をして地に塗れしむる。史、高祖紀「天下方擾、諸侯竝起、今置レ將不レ善、——、皆非二敢自愛一、恐能海不レ能レ完二父兄子弟一」
【壹發五豝】イツパツ 一矢を發して五豝を獲るは獲物の多きなり。詩、召南「彼茁者蓬、——」豝は牝豕。

【壺】 壷（士部八畫）に同じ、壹は別字。

【壻】 十一畫 セイ

聟 俗字

○むこ、女婿の夫。○をっと、妻より夫を呼ぶ稱「夫一」○賓（客）○はいりむこ。○をとこ、男子。晉書、顧愷傳「陛下勿レ以常一一畜レ之」
【壻士】セイシ 士に從ふ、俗に女に從ひ壻に作る。
【壻甥】セイセイ むこ。壻・甥同義。王褒詩「自二天漢一一一」‖女壻。

【壺】 十一畫 コン

壼 壺とは別

宮中往來の道、宝の通路。
【壺奥】コンオウ 宮中のおく深き所。轉じて、物事のおくそこ。班固、答賓戯「究二先聖之一一」‖蘊奥。
【壺閫】コンコン 宮中の小門。轉じて宮中の奥むき。荀勗詩「內訓隆二一一」
【壺訓】コンクン 婦女のよきをしへ。陳子昂文「崇二一一」‖內訓。
【壺政】コンセイ 宮中の奥向の政。顏延之文「一一穆宣」‖不修は、閨門の亂れて修まらざる義。

【壽】 十一畫 ジュ

寿 図 一音ス

○いのちながし、ながいきする。左、僖三二、注「上一百二十歳、中一百歳、下一八十歳」○ひさし（久）物が久しく存在す。○とし、よはひ（年齢）○こと

ぶく、長命をいはふ。○酒を以て祝を爲す。○金閨の祝物を以て人に贈る。史、壽政傳「爲二壽政母一」○ことぶき、長命の幸福。○星の名（角亢）「一星」

【壽筵】ジュエン　ことぶきのさかもり、いはひの席。‖壽宴。

【壽觴】ジュシャウ　杯を長者に獻じて壽を祝す。史、項羽紀「項莊入レ前レ」舞、請二以劍一擊二沛公一於坐一、殺レ之」‖上レ壽ヲ

【壽命】ジュメイ　壽命を養ひ、長生する。史、老子傳「蓋老子百六十餘歲、或言二二百餘歲一以二其修レ道而一レ也」

【壽域】ジュイキ　長壽をいはふさかづき。蘇軾詞「心十餘年眞一夢、朝來一一兒孫奉」

【壽觴】ジュシャウ　ながいきを祝ふいはひ。還曆（六十一歲）喜字（七十七歲）米壽（八十八歲）のいはひの類。

【壽星】ジュセイ　いのちながくしてたのしむ、星は慶。‖、小雅「宜レ兄宜レ弟、令德一一」

【壽考】ジュカウ　ながいき、考は老。詩、大雅「周王一一、遐不レ作レ人」

【壽域】ジュイキ　いのちながくして安らか。詩經「但二願一一無二兵革一」蘇軾、木草序「納二斯民於一一一」

【壽客】ジュカク　菊の異名。花譜、爲二一一一」

【壽光客】ジュクワウカク　鏡の異名。司空圖、容成侯傳「容成侯金炯者、本蜀郡人、上嘉二其璽局一、命以二容成侯一、秦二朝詩、遺二號壽光先生一」白帖「唐人謂レ鏡曰二金炯一、亦曰二一一一」

【壽域】ジュイキ　生前に建て置くはか。後漢書、趙岐傳「年九十餘、先自爲二一一」‖壽藏。

【壽山石】ジュサンセキ　石材の一、蠟石ロウセキの異名。

【壽山福海】ジュサンフクカイ　人の長壽を祝する語。劉誠意集に「一一一圖歌」あり。

【壽詞】ジュ　よごと。ことぶきを祝ふことば。

【壽昌】ジュシャウ　いのち長くして隆んなり。晉書、穆帝紀「遣二使傳國璽一送レ之、文曰受二天之命一、皇帝一一、百億單賀」

【壽脈】ジュミャク　いはひのさかづき。漢書、叔孫通傳「上二一一一九行」‖壽杯。

【壽序】ジュ　人の長壽を祝する爲めの文。‖壽詞。

【壽星】ジュセイ　人の壽命を司るといふ星の名。爾雅「一一一南極老人星也、祠レ之以祈二福壽一」

【壽星祿】ジュセイロク　桃の一種、からもも、あめんだう。

【壽仙魚】ジュセンギョ　かがみだひ。

【壽祉】ジュシ　命長く幸ある義。元史、順宗皇后傳「九州四海、業未レ星二於聖心一、爲歲千秋、願永膺二於一一一」

【壽家】ジュカ　生前に建て置くはか。後漢書、侯覽傳「操作二一一一、石槨雙闕、高廡二百尺一」‖壽藏。

【壽徵】ジュチョウ　生命の長きしるし。詩經、黃髮台背、皆一一也」

【壽林】ジュリン　いはひのさかづき。羅鄴詩「日捧二南山一入二一一一」‖壽觴。

【壽福】ジュフク　ながいきと、さいはひと。易林「振二除災害一、更與二一一一」

【壽木】ジュボク　ながいきする木。拾遺記「新論之國、有二一一之林一、一樹千尋」

【壽命】ジュミョウ　いのち。淮南、精神「不レ能レ終二其一一一」

【壽命延長】ジュミョウエンチャウ　いのちながし、長生する。論衡「氣運厚而體堅強、則一一一」

【壽老人】ジュラウジン　七福神の一、南極老人ともいふ。壽星の化身にて、常の元結年中の人なりといふ、白髮を蓄れ、杖を携へ、圓頭を持ち、鹿を伴ふ像を造く。

【壽樂】ジュラク　生命長くして樂しむ。說苑「皆欲二其一一一」

【壽則多辱】ジュチタジョク　長命なれば恥をうくること多し。莊、天地「堯曰、多二男子一則多レ懼、富則多レ事、一一、是三者非レ所二以養一レ德也」

十二畫

【埀】シュン　ソン　阮　眞

○一一はよろこぶ（喜）又まふ（舞）貌。‖蹲蹲。

夂部

【夂】㊀チ　㊁シュウ　支　東

㊀おくれていたる（後至）㊁終（糸部五畫）の古字。

【夆】㊀ホウ　㊁ベウ　冬　江

㊀あひさかふ（逆悟）○ひく（牽挽）○あふ（遇）逢に通ず。㊁あつし（厚）

【夌】リョウ　蒸

陵（阜部六畫）の古字。

夂部

【夂】スキ・サイ　支　支

鍥（糸部七畫）の古字

○行くこと遲き貌。又、安く行く。

七畫

【夏】㊀カ・ゲ　㊁カ・ゲ　馬　國

㊀なつ、四季の第二位、陰暦の四・五・六の三ヶ月間。○なつのあつさ。○大いなり、大いにす。㊁支那にて本國の稱、世界の中央にあるすぐれたる大國の義、中國、中華。○朝代の名、禹王より桀王に至るまで十七主、四百五十八年間、即ち我紀元前千五百七十一年より九百十三年に至るまで。○大いなり。○大いなる家。又大いなる廟。○青黄赤・白黒の五色。○こひさぎ(楸)

【夏育】カク　古の勇士の名、能く生牛尾を拔く。

【夏雨】カウ　なつのあめ。○喩詩「商林一一歌、爲レ我生二涼風一」

【夏禹】カウ　夏の世の開國の君、舜の讓を受けて天子と爲る、姓は姒氏。

【夏郷】カキヤウ　なつのくも。陶潛詩「春水滿二四澤一、一一多二奇峯一」實和音譜「暮懐素襟二一一趨レ風、頓悟二筆意一、自訓得二草書三昧一」

【夏屋】カヲク　○大いなるいへ。楚辭、大招「一一廣大」＝大廈・夏堂。○盛んに食饌を設け、禮物の大いに具る義。詩、秦風「于レ我乎、一一渠渠」＝大具。

【夏海】カイ　おほうみ。呂覽「禹北至二一一正之國一一之窮一」＝大海。

【夏官】カクワン　周代六官の一、軍政を掌る官。○周禮、序「義叔爲二一一一、是司馬也」

【夏珪】カケイ　宋の畫人、字は禹玉、寧宗の朝、畫院に待詔たり、金帶を賜ふ。院人中、出二山水一は范寬を學び、李唐より以下其の右に出づる者無し(杭州志)

【夏畦】カケイ　夏日の炎天に田を耕す、甚だ辛苦する義。孟、滕文公「爲レ之者、疾レ病二一一一」

【夏桀】カケツ　夏の末世の暴君桀王をいふ。轉じて殷の暴君紂王と共に暴君の號とす「桀紂」

【夏五】カゴ　春秋經に、夏五月の月の字缺けて一一とあるによりて陰暦五月の稱とす(春秋、桓十四)

【夏口】カコウ　○地名、今の湖北省武昌縣の西、黄鶴山上に在り、三國の時、吳、一一城を築く。○縣名、即ち今の漢口鎮、江漢二水の要衝に據り、通商極めて盛んなり。

【夏后氏】カコウシ　夏の代をいふ、禹、始めて夏伯に封ぜらる、故に國號を夏といふ、后は、批讚を以て君に受くるが故の美稱。論、八佾「一一以レ松」

【夏枯草】カコサウ　野生の多年生草、壓方にして高七八寸、葉は長卵形にして端尖る、盛葉皆毛あり、夏初淡紫色穗狀の花開く、夏至の後枯る故に名つく、全葉皆藥用とす。

【夏山】カザン　なつの山。臥遊錄、郭熙記「春山淡冶而如レ笑、一一蒼翠而如レ滴」

【夏時】カジ　なつのころ、夏の時節。說文「一一、萬物皆丁實」＝夏日・夏期。

【夏日】カジツ　なつのひ、なつ。轉じて長るべき人物に喩ふ。左、文七「趙衰冬日之日也。趙盾一一之日也」

【夏正】カセイ　夏の代に用ひし曆法にして、成有一德「愛革二一一一」＝夏曆。

【夏石】カセキ　鐘乳石の異名。＝石乳。

【夏節】カセツ　陰暦五月五日。＝端午節。

【夏楚】カソ　學校にて怠慢なる生徒を懲らすに用ふるむち、夏は楩楚は荊なり。禮、學記「一一二物、收二其威一也」

【夏臺】カダイ　夏の代の獄の名、轉じて獄屋の義とす。史、夏紀「桀召レ湯囚二之一一」

【夏蟲不レ可レ以語二於氷一】カチウフカイゴヲヒヨウニ　夏の蟲は氷を知らず、以て人の識見の狹小なるに喩ふ。莊、秋水「一一者、爲二於時一也、曲士不レ可レ以語二於道一者、束二於教一也」

【夏鼎】カテイ　五色の羽を具ふるきじ、翟は雉。鷕、禹貢「羽畎一一」羽畎は羽山の谷。

【夏天】カテン　なつのそら、なつの日。章應物詩「岸幘偃二東齋一一一清二晨露一」＝夏日・夏時。

【夏蓼】カリヤウ　夏用ふるたかむしろ。陰煬帝詩「一一蔭二修竹一」別賦「一一青兮雲不レ移、冬紅凝兮夜何長」

【夏半】カハン　陰暦四月の異名。＝仲呂。

【夏夜】カヤ　なつのよる。王昌齡詩「一一如二涼秋一」＝夏夕。

【夏約】カヤク　なつまつり。約は編に同じ。禮、明堂位「一一秋嘗冬烝春社」＝夏祭・夏祀。

【夏爐冬扇】カロトウセン　夏の火鉢と冬のあふぎと、無用の事物に喩ふ。論衡「作二無レ益之能一、納二無レ補之說一、猶二夏爐冬扇一、以レ冬奏レ爐、以レ夏進レ扇、亦徒耳」

【夏至】ゲシ　二十四氣の一、冬至の反對にて日の最も長き時、六月二十一日頃。春秋繁露「一一之後、萬物皆盛」

【夏至線】ゲシセン　赤道より北緯二十三度半の所にある假定の線。太陽が此線上に來る日を夏至といひ、之より再び南に歸る、故に回歸線ともいふ。

十一畫

【夐】ケイ　敬

はるか。＝迥。とほし。

【夐絕】ケイゼツ　はるかへだたる貌。蔡邕馬賦「駒株一一」＝懸隔。

【夐然】ケイゼン　はるかなる貌。王維文「竭石館前、一一鳥逝」

二十畫

【夔】 キ　支

○もののけ、木石の怪。○一一は敬ひ懼るる貌。書、大禹謨「一一齊慄」○舜の臣の名、典樂の官たり。

夕部

【夕】 セキ　陌

○ゆふ、ゆふべ（暮）朝の對。○ゆふべに君に謁見する、ゆふづとめ。○よる（夜）任昉文「終一不寐」又、昔と通ず。年又月の終。尚書、大傳「臘爲歲一」、嘯爲月一」○ななめ（斜）

【夕話】セキワ　ゆふべのもや。劉禹錫詩「村墟起二一一」

【夕陰】セキイン　ゆふぐれ、又ゆふかたのくもり。祖詠詩「竹覆經冬雪、庭昏未二一一」范仲淹、岳陽樓記「朝暉一一、氣象萬千」

【夕可】セキカ　道を求むるに暮らなるべき。論、里仁「朝聞レ道、則夕死可也」

【夕霞】セキカ　ゆふかたのもや。唐太宗詩「緒天散二一一」○春霞・暮靄。

【夕陣】セキジン　ゆふひのひかり。王維詩「寂莫掩二柴扉一、蒼茫對二一一」○斜暉・夕陽・夕照。

【夕照】セキショウ　ゆふひ。白居易詩「秋波江窓水、一一青蕪岸」○斜陽・斜暉。

【夕惕】セキテキ　ゆふべに我身を反省しておそれつつしむ。易、乾卦「君子終日乾乾、一一若厲、无レ咎」

【夕霧】セキム　ゆふぎり。謝靈運詩「林壑斂二暝色一、雲霞收二一一」

【夕暮】セキボ　ゆふぐれ。潘尼詩「一一無二停流一」

【夕靄】セキアイ　ゆふぎり。王維詩「一一攜二山杖一」

【夕陽】セキヨウ　○ゆふひ。韓愈詩「陽レ侯露見一一君」○山の西。綱雅「山西曰二一一、山東曰二朝陽一」○老境に喩ふ。白居易詩「一一愛二子孫一」

【夕陽紅】セキヨウコウ　ゆふひがかたむき垂れる。杜牧詩「漢主朝前雨歩碧、一一一聲風角——」

【夕郎】セキロウ　黄門郎の異名。漢官儀「黄門郎、日暮入對二青瑣門一拜、名曰二一一一」

【夕郎】セキロウ　ゆふひのひかり。王維詩「寂莫掩二柴扉一、蒼茫對二一一一」○斜暉・夕陽・夕照。

【夕嵐】セキラン　ゆふべのもや、嵐は山氣の蒸しうるほひて起る氣。袁枚詩「前レ江有レ山、朝煙一一」

【夕和】セキワ　圖ゆふかた海岸地方に生ずる無風の時。○夕風。

二畫

【外】 ゲ　泰

○ほか、そと。内の對。一定の範圍のそと、他所、他國。○宮中に對して朝廷の義「一朝」又、朝廷に對して地方の義「一官」○うはべ（表面）○おもてざしき。奥向の室に對して。○女の方のみうち「一戚」「一甥」○とりのけ「除一」はづす、そとにする。○とほざける、うとんず（疏）「疎一」しりぞく（斥）○我黨以外の人、世間の人。

【外援】ゲエン　外より來るたすけ。韓非子「内事一一、以伊尹勢一者可レ亡也」

【外緣】ゲワイエン　己の身より外のゆかり。外より來る物欲。白居易詩「自レ此聊以適、一一不レ能レ干」

【外舅】ゲワイキュウ　外祖をいふ。元稹詩「扶レ牀小女君先識、應爲三些些似二一一一」○國外公。

【外家】ゲワイカ　皇后又皇妃のさと、外戚の家（漢書、賈梨田蚡傳）

【外界】ゲワイカイ　我身以外の事物、五官に觸れ感ずる總ての事がら。

【外交】ゲワイコウ　外國とのつきあひ。又、外國との交渉。國語「乃尊二其一一、而勉レ之、以報二其德一」

【外交官】ゲワイコウカン　外務省に屬する大使、公使、領事などの官の總稱。

【外塚】ゲワイチョウ　城のそとぼり。五代史、葛從周傳「出レ兵攻二一一、從周拒二擊之一」○外濠。

【外學】ゲワイガク　漢代儒者を内學といふに對して、經書の研究をいふ。

【外親】ゲワイシン　父の黨。母の黨を内親といふの對。

【外誘】ゲワイユウ　朝廷以外の議論、外間のうはさ。五代史、唐太祖子傳「遣二宦官一察二一一以爲二如何一」

【外救】ゲワイキュウ　外より來るたすけ。戰國策「一一必至」○外援。

【外舅】ゲワイキュウ　妻の父。爾雅「妻父爲二一一、妻之母爲二外姑一」

【外殿】ゲワイデン　天子臨朝する内殿に對して、内殿は内地産の馬、一一は外國産の馬を畜ふ。李斯、諫二逐客一書「駿良駃騠、不レ實二一一一」

【外勤】ゲワイキン　圖屋外にてつとめる務、諸會社の勤誘員・外交員の類。

【外強中乾】ゲワイキョウチュウカン　外貌は立派なるも、其の實は才なきをいふ。晉書故事「——、曰三徒有二外貌一」

【外貌】ゲワイボウ　外より來るあなどりをふ

せき止む。詩、小雅「兄弟閱二于牆一、――其務一」務は侮。

【外慶】グワイ 外患に同じ。唐書、陸贄傳「乾元後、――連發」

【外憺】グワイ 外患のおそれ。國民に對する戒の心を弛べしめざる爲め、敵國を滅さずして常におそれ戒めとする。左、成十六「盡二歸レ楚以爲二――一乎」

【外郭】グワクワク 城のそとぐるわ。轉じてすべて物のそとまはり。=外廓。

【外患】グワイクワン 外國より攻めらるるうれひ。孟、告子「無二敵國一外患一者、國恆亡」=外慶。

【外觀】クワンクワン みえ、表面のみば。

【外兄】グワイケイ をばの子の己より年長の者(年下の者は外弟)後漢書、來歙傳「王遊曰、君叔雖二單車遠使一而陸下之――也」

【外兄弟】グワイケイテイ ○をばの子。儀禮、士喪禮、疏「――者、姑是內人、以出レ外、而生故也」○同母異父の兄弟。

【外形】グワイケイ そとのかたち、表面のなりかたち。

【外教】グワイケウ 儒佛敎以外のをしへ。梁武帝詔「既乖二內典慈悲之儀一、又傷二――好生之德一」儒教をいふ。

【外見】グワイケン 外觀に同じ。

【外言不入於閫】グワイゲンフニイリテコンニ閫は門限 男子は門外の言をば家にては言はざる義。曲禮「――、內言不レ出二於閫一」

【外姑】グワイコ 妻の母。爾雅、「妻之父爲二外舅一、妻之母爲二――一」

【外寇】グワイコウ 外國よりのみつぎ。文同詩「――入二中原一、萬里關二大綱一」

【外冦】グワイコウ 外國より攻め來るあだ。國語「留二――一而不レ害」

【外國】グワイコク よそのくに、他國。漢書、武帝紀「行二幸甘泉宮一、賚二――一者」=外域・外邦。

【外債】グワイサイ 國家が外國より借り入れる金、外國に對して負ふ債務。國內にてするを內債といふの對。

【外甥】グワイセイ 妻の兄弟。爾雅「妻之昆弟曰二――一、其姊妹女也」

【外史】グワイシ 官府以外の事を記錄する官。轉じて史官にあらずして、私に事を記錄する者の稱。又、其の手に成りし記錄。周禮、春官「――掌レ書二外令一」

【外徙】グワイシ 都よりそとにうつる、地方官に轉任する。唐書、徐堅傳「數――」

【外姊妹】グワイシマイ 妻の姉妹。

【外人】グワイジン ○我が國にあらざる世間の人。孟、滕文公「公都子曰、――皆稱二夫子好レ辯」○他人又、外國の人。○圖四洋人、歐米人。

【外心】グワイシン ふたごころ。左、昭三「寧虎謂二趙曰一、而固有二――一」=異心。

【外臣】グワイシン 他國の君主に對していふ自稱。儀禮「他國之人、則曰二――一」

【外邪】グワイジヤ 己の身の外のすべて身心の害となるもの。文子「中欲不レ出、誘之閉二――一不レ入、誘之閉」

【外障眼】グワイシヤウガン 眼病の一、めの外面にくもりを生じて見え難くなるもの、うはひ。內障眼ナイシヤウガンの對。

【外出】グワイシユツ 外へ出る、他出する。南齊書、張敬兒傳「不二復――一」

【外資輸入】グワイシシユニフ 外國の資本を國內に引き入れて、融通する。

【外戚】グワイセキ 皇后のみうち、又、母方のみうち。史、――世家「守レ文之君、非二徒內寵茂一也、蓋亦有二――之助一焉」漢書、淳于長傳「以二――一居二九卿位一」

【外妾】グワイセフ かこひもの。

【外祖】グワイソ 母方の祖父母(晉書、魏舒傳)

【外曾王父】グワイソウワウフ 母の亡祖父。爾雅「母之王考、曰二――一」

【外曾王母】グワイソウワウボ 母の亡祖母。爾雅「母之王姒、爲二――一」

【外孫】グワイソン 母又妻のみうち。漢書、匡衡傳「史高以二――一爲二大司馬一」=外族。

【外孫】グワイソン 他家に嫁したるむすめの子。史、劉敬傳「陛下誠能以二適長公主一妻レ之、冒頓在、固爲二子壻一、死則二――一爲レ臣子一」

【外套】グワイタウ 防寒又雨除けとして衣服の上に着る被物。

【外治】グワイチ 國のまつりごと、朝廷のおもてむきの政治。宮中の政の對。

【外帑】グワイド 國家が外國より借り入れる金、外國に對して負ふ債務。國內にてするを內債といふの對。

【外敵】グワイテキ 外國よりのみつぎ。文同詩「――入二中原一、萬里關二大綱一」

【外寇】グワイコウ 外國より攻め來るあだ。國語「留二――一而不レ害」

【外國】グワイコク よそのくに、他國。漢書、武帝紀「行二幸甘泉宮一、賚二――一者」=外域・外邦。

【外債】グワイサイ 國家が外國より借り入れる金、外國に對して負ふ債務。國內にてするを內債といふの對。

【外甥】グワイセイ 妻の兄弟。爾雅「妻之昆弟曰二――一、其姊妹女也」

【外史】グワイシ 官府以外の事を記錄する官。轉じて史官にあらずして、私に事を記錄する者の稱。又、其の手に成りし記錄。周禮、春官「――掌レ書二外令一」

【外徙】グワイシ 都よりそとにうつる、地方官に轉任する。唐書、徐堅傳「數――」

【外姊妹】グワイシマイ 妻の姉妹。

【外人】グワイジン ○我が國にあらざる世間の人。孟、滕文公「公都子曰、――皆稱二夫子好レ辯」○他人又、外國の人。○圖四洋人、歐米人。

【外心】グワイシン ふたごころ。左、昭三「寧虎謂二趙曰一、而固有二――一」=異心。

【外臣】グワイシン 他國の君主に對していふ自稱。儀禮「他國之人、則曰二――一」

【外邪】グワイジヤ 己の身の外のすべて身心の害となるもの。文子「中欲不レ出、誘之閉二――一不レ入、誘之閉」

【外障眼】グワイシヤウガン 眼病の一、めの外面にくもりを生じて見え難くなるもの、うはひ。內障眼ナイシヤウガンの對。

【外出】グワイシユツ 外へ出る、他出する。南齊書、張敬兒傳「不二復――一」

【外資輸入】グワイシシユニフ 外國の資本を國內に引き入れて、融通する。

【外戚】グワイセキ 皇后のみうち、又、母方のみうち。史、――世家「守レ文之君、非二徒內寵茂一也、蓋亦有二――之助一焉」漢書、淳于長傳「以二――一居二九卿位一」

【外妾】グワイセフ かこひもの。

【外祖】グワイソ 母方の祖父母(晉書、魏舒傳)

【外曾王父】グワイソウワウフ 母の亡祖父。爾雅「母之王考、曰二――一」

【外曾王母】グワイソウワウボ 母の亡祖母。爾雅「母之王姒、爲二――一」

【外孫】グワイソン 母又妻のみうち。漢書、匡衡傳「史高以二――一爲二大司馬一」=外族。

【外孫】グワイソン 他家に嫁したるむすめの子。史、劉敬傳「陛下誠能以二適長公主一妻レ之、冒頓在、固爲二子壻一、死則二――一爲レ臣子一」

【外套】グワイタウ 防寒又雨除けとして衣服の上に着る被物。

【外治】グワイチ 國のまつりごと、朝廷のおもてむきの政治。宮中の政の對。

禮、昏義「天子聽二――一、后聽二內職一」=外政。

【外儀】グワイギ 地方儀禮の役所、地方の儀表。晉書、張華傳「每何二朝陳一、敬レ出二華一二一」

【外傳】グワイデン ○本文のほかにつけ足したる記錄「韓詩――」○外國にて傳ふる事實「春秋――」

【外貌】グワイバウ うはべのやうす、外にあらはれたる容貌。史、樂書「――斯須不レ莊不レ敬、而慢易之心入レ之矣」

【外藩】グワイハン 諸侯王のくに。だいみやう。晉書、禮志「哀帝以二――一援立」

【外賓】グワイヒン 外國より來れる賓客。元稹、敕「古者諸侯賓二――一、鳴二三卿一陳二主壻一」

【外府】グワイフ ○國外にあるくら。左、僖二「若得二道於虞一、猶二――一也」○國の金錢財物を藏め置く處。

【外侮】グワイブ 外國又他人より受くるあなどり。左傳「其懷二柔大下一也、猶懼レ有二――一、扞二禦侮一者、莫レ如レ親」

【外部】グワイブ そとがは。

【外物】グワイブツ 己の心身より外の物、己以外の物欲。富貴名利の類。韓愈文「雖二――一、玉不レ膠二于心一」

【外朗】グワイラウ 世間のきこえ、ひときき。宋史、選擧志「惟懼レ玷二――一」

【外寵】グワイチヨウ 君主の氣に入りの男。=嬖臣。氣に入りの女を內寵といふ

の對。

【外務】グワイム　○世の中の務。常套文「混冥元和、放ニ絕一一一」○外國に關する政務。

【外務省】グワイムシャウ　國政府の最高機關たる十省の一、國際行政の事務を掌る中央官廳。其の長官を外務大臣といふ。

【外面】グワイメン　うはべ、表面。

【外面如菩薩內心如夜叉】グワイメンニョボサツノゴトクナイシンニヨヤシャノゴトシ　外面は慈悲深き菩薩の如く、內心は猛惡なる夜叉の如し。容貌は溫和にして心は邪惡なる人の形容。

【外洋】グワイヤウ　○世界萬國共用の海、海岸より三里以外の海。‖公海。○內海に對してそとうみ。‖外海。

【外王父】グワイワウフ　母の亡父。爾雅「母之考爲ニ――一」

【外王母】グワイワウボ　母の亡母。爾雅「母之妣爲ニ――一」

【外廓】グワイカク　國昔、禁中の御垣の外を守りし番所。左右衞士府及左右兵衞府の總稱。

【外記】グワイキ　國昔の官名、太政官の主典にて、大少あり。恒例、臨時の公事の記書、奏文を勘造し、記錄することを掌る。

【外宮】グワイキウ　國伊勢の豐受太神宮の稱。內宮の對。

【外科】グワイクワ　專ら手術によりて治療する醫術。藥液を主とする內科の對。

【外題】グワイダイ　國表紙に書く書物の名、みだし、標題。‖題簽。

【外道】グワダウ　○國佛教以外のみち。傳燈錄「心外求レ法、名爲ニ――一」國○人を邪道に陷らしむる者、惡魔。○惡相をなせる假面。

【外典】グワンデン　國佛書以外の書、主に儒書を斥す。佛書を內典といふの對。

【外法】グワホフ　國○正しからざる方術。‖魔法。○物のそとがはの線より反對の外側の線までの寸法。‖外郭。

【外辨】グワンベン　國昔、內辨の助役として節會の時、承明門外にて諸事を準備する官の名。

【外樣大名】ゲヤウダイミヤウ　國德川幕府の大名の稱。關原の役の後、德川氏に附屬せしもの。譜代大名の對。

夙　シュク　屋　畫

○つと、あした（早朝）○つとに、早し、朝早くより。○朝はやく起きる。○ふるし（舊）「一志」「一願」「一昔」○つつしむ（敬愼）詩、大雅「載震載一」

同訓異字　ツト・夙・早・蚤の解は蚤（虫部四畫）の條を見よ。

【夙意】シュクイ　かねての意見。宋書、謝述傳「知ニ是仁一一」‖宿意。風志。

【夙紀】シュクキ　朝はやくおきる。‖夙興・蚤起。

【夙慧】シュクケイ　をさなくしてさとし。‖夙悟・早慧。

【夙悟】シュクゴ　をさなくしてさとし。謝靈運文「愧ニ班生之一一一」

【夙興】シュクコウ　朝はやく起きる。詩、小雅、小宛「一一夜寐、無レ忝ニ爾所生一」夜寐は夜おそくねる。

【夙志】シュクシ　早くからのこころざし。韓愈詩「吾聞九疑好、一一今秋レ伸」‖宿志。

【夙就】シュクシュウ　幼くしてはやく成就する。蔡邕文「早智一一、參美顯宗」‖夙成。

【夙儲】シュクチョ　老儲をいふ。唐書、崔沔傳「居ニ一室一學自力、非ニ名士一一一、不ニ與遊一」‖宿儲。

【夙成】シュクセイ　をさなくして成就する、早熟。後漢書、袁術傳、幼主明智、總敏、有ニ――之德一」‖夙就。

【夙昔】シュクセキ　ふるく（齊時）より、つね、平生。古樂府「一一夢見レ之」‖宿昔。

【夙敏】シュクビン　をさなくしてさとし。南史、謝弘微傳「此兒、深中一一、方成ニ佳器一」‖夙悟・夙慧。

【夙莫】シュクボ　あさと、ばんと、莫は暮。‖旦暮・朝夕。

【夙夜】シュクヤ　朝はやく起き、夜おそく寢ぬ。書、舜典「一一惟寅、直哉」詩、大雅、蕩民「一一匪レ懈、以事ニ一人一」一人は君主。

【夙夜在レ公】シュクヤコウニアリ　官吏が早朝より深夜まで朝廷に在りて勤めるをいふ。詩、魯頌「――、在レ公明明」

多　タ　歌

○おほし（衆）少の對。○まさる（勝）○おほくす（衆）○きびしく責め求む（刻求）要求をきびしくする。左、傳七「後之人必求ニ于汝、汝必不レ免」○いさを（戰功）○稱美する。漢書、袁盎傳「諸公聞レ之、皆ニ――一レ盎」タと音語す。○まさに（適・祇）レ論、子張「一見ニ其不ニ知レ量也」

【以レ多問ニ於寡ニ】タヲモツテクワニトフ　聞見の多きに卻りて他の少き者に問ふ。論、泰伯「以レ能問ニ於不レ能一――」

【多寡】タカ　おほくのきいはひ。‖多福。

【多角形】タカクケイ　多くの直線にて圍まれたる平面形。

【多額納稅者】タガクノウゼイシャ　國稅を多く納める者。一府縣中にて最高納稅者十五人の稅、互選によりて貴族院議員となる資格あり。

【多聞】タモン　伸惡し。左傳「君臣一レ一」

【多岐亡羊】タキバウヤウ　にげし羊を追ふ者が、道の數多に分れて居る所に至りて終に見失ひし故事によりて學問の道の多端にして、眞理を得ることの難きに喩ふ。列、說符「大道以ニ多岐一亡レ羊、學者以ニ多方一一レ生、學非ニ本不ニ同、非ニ本不ニ一、而

末異若レ是、唯歸レ同反レ一、爲レ亡二得喪一」
【多寮】タリョウ　多きと少きと。孟、滕文公「五穀ー一同、則價相若」
【多穫】タカク　おほく穀物をとりいれる。歐陽修詩「ー一由二力耘一」
【多血質】タケツシツ　感覺強くして容易に外物の刺戟レヲを受け、且之を永く保つこと能はざる氣質。
【多言】タゲン　しやべる、おほく言ふ。詩、鄭風「人之ー一、亦可レ畏也」＝饒舌。
【多言數窮】タゲンシキュウス　言多ければ、しばしば困窮する。老子「ー一、不レ如レ守レ中」
【多言多敗】タゲンタハイ　多辯はあやまち多し。家語、載周「金人銘云、無二多言一、ー一、無二多事一、多事多レ患」
【多元論】タゲンロン　宇宙の諸現象を以て獨立自存せる多くの實在の集合なりと說く哲學說。一元論・二元論の對。
【多故】タコ　なんぎなる事故がおほし。國語「王室ー一、余懼及レ焉」＝多事・多難。
【多祐】タユウ　多くのさいはひ。潘岳詩「賜神委命、已來ニー一」＝多幸・多福。
【多恨】タコン　うらみ多し、うらみが讀きず。
【多罪】タザイ　つみ多し、轉じて失禮をわびる謙遜のことばとす。
【多材多藝】タザイタゲイ　藝能おほし。書、金縢「能ー一、能事二鬼神一」
【多士】タシ　おほくの秀才。詩、大雅「濟濟ー一、文王以寧」＝衆士。
【多次】タジ　たびたび。＝屢次・頻頻。
【多事】タジ　こと多し、いそがはしい。うるさき事が多し。莊、天地「堯曰、多ー一男則多レ懼、富則ー一レ」
【多疵】タシ　あやまちおほし。疵はきず。戰國策「齊見辨之爲レ人也、ー一レ」
【多時】タジ　久しきあひだ。王安石詩「望二連山水一立ー一」
【多識】タシキ　多く事物を識る。唐書、褚遂良傳「帝悅曰、人之立レ身、不レ可二以無一レ學、遂良所レ謂ー一君子也」＝博識。
【多疾】タシツ　身に疾多し。史、酷吏傳「性ー一レ、卽道引不レ食レ穀」＝多病。
【無二多子一】タシなし　多きことなし、子は助字。傳燈錄「臨濟曰、元來貴樂佛法ー一」＝無二多地一。
【多神教】タシンキョウ　多數の神の存在を認めて崇拜する宗教。一神教の對。
【多謝】タシャ　厚く禮をいふ。多は厚。漢書、趙廣漢傳「界上亭長曰、至レ府爲レ我、ー一問二趙君一」
【多情】タジョウ　○感情多し。杜牧詩「ー一卻似總無情」○圖うつりぎ、うはき、いろけ多し。
【多數決】タスウケツ　事を議するに同意者の最も多き意見通りに決定する法。
【多勢】タセイ　圖おほぜい、多くの人かず。＝多人數。
【多少】タショウ　○多きと少きと。史、禮書「以ニー一爲レ異」○おほし。孟浩然、春曉詩「夜來風雨聲、花落知ー一」○圖やや、幾分か。
【多錢翁】タセンオウ　かねもちおやぢ。貫耳集「有ニ一ー」
【多錢善賈】タセンゼンコ　資本おほきものは、善く商を爲す、すべて資材に富む者は事を成し易きに喩ふ。韓非、五蠹「鄙諺曰、長袖善舞、ー一、此言二多資之易一爲レ工也」
【多大】タダイ　甚だ多し。
【多多益辨】タタマスマスベン　次條を見よ。
【多多益善】タタマスマスゼン　多ければ多き程ますますよく之を處置する。史、淮陰侯傳「上問曰、如レ我能將二幾何一、信曰、陛下不レ過二能將三十萬一、上曰、於レ君如何、曰、臣多多而益善耳」演書には「多多益辨」に作る。
【多端】タタン　する事が多い、いそがはし、端は事業の緒引容編殿賦「惟工匠之ー一」
【多能】タノウ　才能おほし。論、子罕「子曰、吾少也賤、故ー二一鄙事一」
【多方】タホウ　○四方の國國。○いろいろのむき。種種の方法。左傳「ー一以誤レ之」○書經の總名。
【多方面】タホウメン　いろいろのむき。
【多忙】タボウ　いそがはし。＝繁忙。
【多望】タボウ　將來にのぞみおほし。
【多寶塔碑】タホウトウヒ　唐の岡京千福寺の僧慧念の舍利塔、天寶年間の勅建、碑文は顏眞卿の書、其の中年筆法の最も整齊にして圓健なる者と爲す。
【多半】タハン　大多數の義。林逋詩「常憐古寺圖、ー一寫二漁樵一」
【多般】タハン　事が多し、又、たのしみおほし。宋史、樂志「永二淑女一兮、樂ー一」
【多病】タビョウ　病多し。晉書、衞玠傳「ー一體羸」＝多疾。
【多福】タフク　おほくのさいはひ。書經「厥二愛ー一」
【多分】タブン　○おほし、たくさん。諸經要集「我與二汝ー一」○圖おほかた、たいてい、十中の八九。
【多聞】タモン　○見聞多き人。論、季氏「友ニー一」○俗ー一天は毘沙門天をいふ。○圖城の周圍を長屋作りにせしもの、松永久秀が大和の志貴山の毘沙門堂の上に城をー一城と名づけしに始まる。
【多辟】タヘキ　多くの諸侯。詩經「大命ー一、數二都子萬之繼一」辟は君。
【多様】タヨウ　種種のおもむき。＝多種。
【多容】タヨウ　度量がひろくして多くの人をいれる。荀子「寬容而ー一」
【多欲】タヨク　欲深し。韓詩外傳「福生二于無爲一而患生二于ー一」
【多力】タリキ　力つよし。韓非子「其ー一者樹二其黨一、寡力者借二外權一」
【多識二前言往行一】タシキゼンゲンオウコウ　多く古人

の義旨等を識る。易、大畜「君子以——、以畜其徳」

【多歴二年所一】(タレキニネンショヲ)おほくの年月を経る。所は助語の四東賦「——、二百餘期」

五　畫

【夜】ヤ　エ

○よ、よる。昼の對。○よは、よなか(夜半)「夙興—寐」よふけ(深更)○くらやみ。

【夜遊】(イウ)　よるあそび。李白文「古人秉レ燭——、眞有レ以也」

【夜陰】(イン)　よる、夜間。隠書、崔瓦倫傳「——失レ道」

【夜雨】(ウ)　よるのあめ。杜甫詩「——剪二春韭一、新炊間二黄粱一」

【夜鶯】(エン)　よるのさる。李端詩「唯有二——一知二客恨一、峰陽渓路第三聲」

【夜行】(コウ)　よあるき。禮、内則「女子——以レ燭、無レ燭則止」

【夜客】(カク)　ぬすびと。李渉、井岡砂宿題二——一詩「暮雨瀟瀟江上村、綠林豪客夜知聞、他時不レ用逃二名姓一、世上如今半是君」

【夜學】(ガク)　よるまなび。孟郊詩「——曉未レ休、苦吟神鬼愁」

【夜涛】(タウ)　○夜の波。孔稚珪、北山移文「悪張空谷之——一、徴」○鴟は子を護りて夜いねず、以て愛情の深きに喩ふ。白居易詩「——愁二子瓶中鳴一」

【夜合】(ガフ)　ねむの木。羣芳譜「——花開香滿レ庭」‖合歓木。

【夜合樹】(ガフジュ)　前條に同じ。

【夜合錢】(ガフセン)　藝倡妓を買ふ代金、きよく代。

【夜氣】(キ)　よるの沈まりたる氣。劉孝儀詩「——清二籬菅一、曉陣懸二郊原一」

【夜闌】(ラン)　よる家にかへる。晉書、夏統傳「星行——」

【夜火】(クワ)　よるもやす火。越絶書「爲二詐兵一、爲二前翼一——相應」

【夜臥】(ガ)　よふけてねむる。説苑、設疑「喜二——一者、不レ能二蚤起一」‖夜寐。

【夜會】(クワイ)　○夜中に會合する。稽神錄「與二鄉人一——」○よる客を招きて酒宴を開き、舞踏などして樂む四洋風のあつまり。

【夜光】(クワウ)　○螢の異名「爾雅、疏」○珠の名、次條を見よ。

【夜光珠】(クワウジュ)　夜珠の名、暗夜に光を發する名玉。述異記「南海有レ珠、即鮫目、夜可二以鑒一、謂二之——一」‖連城珠。

【夜光杯】(クワウハイ)　名玉にて造れる酒杯。東方朔、十洲記「周穆王時、四城獻二夜光常滿杯一、杯受三三升一、是白玉之精、光明夜照、晝夕出二杯於中庭一、以向レ天、比レ旦而水汁滿レ中、汁甘而香美、助二賓客人之器一」

【夜景】(ケイ)　よるのけしき。宋史「嗣榮——深清」‖夜色。

【夜警】(ケイ)　よるのいましめ。夜間の警戒。呉融詩「鴉鳴——地塘冷」

【夜月】(ゲツ)　夜の月。蘆稜、中呂四月啓「——流レ輝」

【夜業】(ゲフ)　夜間に仕事する。‖夜作。

【夜絃】(ゲン)　よるひく琴。鮑照詩「愁緒——迫」

【夜漏】(ロウ)　夜間室内にて用ふる便器。尿瓶。

【夜哭】(コク)　よる聲をあげてなく。祝、坊記「喪節不二——一」

【夜作】(サク)　よなべ、夜業。漢書、陳湯傳「鑿二脂火一——」

【夜坐】(ザ)　夜中眠ねずして坐する。唐書、劉武周傳「晉二——一延中一」

【夜市】(シ)　よみせ。東京夢華錄「中秋節——開二至三更一」‖夜肆。

【夜思】(シ)　よるの物思ひ、夜間に工夫をめぐらす。柳宗元文「蚤作而——、勤レ力而治レ心」

【夜肆】(シ)　よみせ、夜店。李商隱文「更待二魚目一當二——一」

【夜熟】(ジュク)　よふち、又よふちする。宋書、自序傳「街枚——」

【夜深】(シン)　よふけ。夜がふける。杜甫詩「——露氣清」

【夜叉】(シャ)　人を害する惡鬼、盜驗品「——惡鬼、食二噉人肉一」‖藥叉。

【夜叉頭】(シャトウ)　惡鬼の頭髪の亂れたるをいふ。王璵詩「爲來花開菩薩面、綵髻藥散——」

【夜誦】(シュウ)　夜中に書を讀む。呉志、步騭傳「以レ種レ瓜自給、晝勤二四體一、——經傳」‖夜讀。

【夜色】(シキ)　よるのけしき、夜の光景。杜牧詩「天街——涼如レ水、臥看牽牛織女星」‖夜景。

【夜照】(セウ)　螫の異名「本草綱目」

【夜汐】(セキ)　よるのうしほ。葛長庚詩「——潮——大江東」

【夜績】(セキ)　夜中に紡績する。漢紀、食貨志「婦人同巷相從——、女工一月得二四十五日一、必相從者、所レ以省レ費二燈火一、同二巧拙一而合二習俗一也」‖夜紡。

【夜雪】(セツ)　夜中、降る雪。羣應物詩「閑門深巷絶、芳雪——庭行跡」

【夜前】(ゼン)　昨日のよる。‖昨夜、前夜。

【夜船】(セン)　よふね。許渾詩「山風寒殿磬、渓雨——經」

【夜戰】(セン)　夜のいくさ。孫子「——多二火鼓一、晝戰多二旌旗一、所三以變二人之耳目一也」‖夜鬪。

【夜曲】(ソウ)　よるのまど。孟浩然詩「永懷愁不レ寐、松月——牕」

【夜盜】(タウ)　はかあな、用悪。陸機、挽歌「送レ子長——」沈約、傷二美人一賦「忽逾二朧於——一」‖鼠穴。

【夜拷】(カウ)　夜を警むる爲めに擊つひやうしぎ。駱賓王詩「——聞」

【夜砧】(チン)　よるのきぬた。陸游詩「村巷時時雨、江城夜——」

【夜直】(チョク)　夜、禁中に宿直する。玉海「真宗嘗令二那侍設一レ醴、——諭

聞こ」
【夜筒】ヤトウ　よる吹くふえ。陳後主詩「谷暗宵鉦響、風高―一咽」
【夜遊】ヤユウ　夜宴を遊む。臨海水土物志「自餘島有二人開遊一、射レ雉歸來―一レ晝」＝夜誦。
【夜泊】ヤハク　夜ふなどまりする。張繼に「楓橋―一」の詩あり。
【夜紡】ヤバウ　夜間いとをつむぐ。唐賢詩「日間收レ漁鵜二夫耕一、―一繰花一到二天曉一」＝夜績。
【夜半】ヤハン　よなか。荘、太宗師「―一有レ力者、負レ之而走」＝半夜。
【夜叉】ヤシャ　夜おそくねる。詩、大雅「風興―一、無レ忝二爾所生一」
【夜分】ヤブン　○よなか。後漢書、光武紀「―一乃罷」＝夜半。○よる、夜中。
【夜猫子】ヤビヤウシ　梟ケウの異名。
【夜警】ヤケイ　偕のよるの讀經。江總詩「―一聞三界一、朝香徹二九天一」
【夜夢】ヤム　よるのゆめ。杜牧詩「芳生間二離別一、―一苦二東西一」
【夜禁】ヤキン　よまはり。夜中警戒の爲めに見まはる。華陽、端午行「―一無二驚晉一」＝夜巡。
【夜來】ヤライ　ゆふべから。孟浩然詩「―一風雨聲、花落知多少」
【夜郎】ヤラウ　西南夷（今の貴州の西境）の名、其の勢強く雄大なりしにより、人の尊大なるを稱して―一自大といふ。漢書、西南夷傳「西夷君長以レ十數、―一最大」
【夜闌】ヤラン　よふけ。蔡琰、胡笳十八拍「更深―一分、夢二汝來一斯」
【夜涼】ヤリヤウ　よるのすずしき氣。高適詩「獨步二閑庭一逐二―一一」
【夜漏】ヤロウ　よるの時間。漏は漏刻ロウコクの略。李中詩「長笛起二誰家一、秋涼―一餘」
【夜話】ヤワ　よるのはなし。白居易詩「―一坐及二東方明一」
【夜沈沈】ヤチンチン　夜の更け行く貌。李白詩「月寒天清――、美人一笑千黃金」
【夜御殿】オトド　圖清涼殿の中に在る主上の御寢所。
【夜以繼レ日】ヒニツグヨル　夜業務を務むるをいふ。莊子「賢者――、思二慮善否一」
【夜行被レ繡】ヨルノキルニシュウヲ　夜あるくにぬひとりのきものを著る。功名を慨きて世に知られざるに喩ふ。史、項羽紀「富貴不レ歸二故鄉一、如二被レ繡夜行一、誰知レ之者」

十一畫

【寅】イン　眞　支

○つつしむ（敬）おそる（傷）うやうやし（恭）＝寅。○ひく（牽引）ひき、つて、てづる。○すがる（緣連）○すすむ（進）○大いなり。○とほし、とほき處、殯に作る。
【寅緣】インエン　○からみつく。齊民書、合歡楚・牛僧孺傳贊「喬松孤立、蘿薜―一」○よりすがる、つてを求めて進む。又、賄賂を贈りて官に進む。韓愈詩「肯壁無レ路難二―一」＝攀附。

【夥】クワ　哿

おびただし、盛んにして多し。
【夥計】クワイ　俗○合資にて營業する者をいふ。○商家などの手代、番頭の下に居るもの。＝伙計。
【夥人】クワジン　なかまのひと、連人。
【夥多】クワタ　あまた。顏氏家訓文、「凡斯―一、皆可二悉數一」

【夢】㊀ボウ・ム　㊁ボウ・ム　東　送　俗字

㊀ゆめ、睡眠中に見る幻像。周禮、春官、占夢「以二日月星辰一占二六―之吉凶一、二正一、二曰一、三思一、四曰一、五喜一、六懼一」○ゆめみる、―を見る。○雲―は楚の七澤の一、方九百里あり。㊁―ボウは明かならざる貌。
【夢厭】ムエン　次條に同じ、妖怪などを夢みて安眠する能はざるにいふ。康熙字典「廣韻、厭、魅也、別作レ魘」
【夢魘】ムエン　ゆめにおそはれる。韓愈詩「猶疑在二波濤一、怵惕夢成レ魘」＝夢眠。
【夢幻泡影】ムゲンホウエイ　圖幻はまぼろし、泡は水のあわ、影は物のかげ、事の捉ふべき所なきに喩ふ。金剛經「一切有爲法、如二――一」
【夢魂】ムコン　ゆめ。林逋詩「芳草閑迷幹―一」
【夢想】ムサウ　○夢中におもふ。司馬相如、長門賦「忽寢寐而―一兮」＝夢思。○圖夢中に神佛のおつげ。夢中の神託。
【夢死】ムシ　何事もなさずして空しく死す。莊子語錄「雖二高才明智一、應二于見聞一、醉生―一、不二自覺一也」
【夢刀】ムタウ　かたなを夢みる。晉の王濬が三刀に一刀を益す夢を見たるを李毅が賀して三刀は州（俗に州を刀とも書く）更に一刀を益せば益州となる、公は將に益州の守たらんと言ふ、後果して然りき、この故事より、榮轉の義とす（晉書、王濬傳）＝三刀之夢。
【夢中】ムチウ　○ゆめのなか。＝夢裏。圖○本心を失へるさま、うちやらんん。○專心を一事に寄せて他を顧みざるさま、一所懸命イッショケンメイ
【夢中相尋】ムチウアヒタヅヌ　夢中に親友を尋ねる。晉書故事「六國張敏與二高悛一善レ友、每相思不レ能レ得、便於二夢中一往尋、但行至二半路一、即迷不レ知レ路」
【夢中占レ夢】ムチウウラナフ　夢中に夢の吉凶を判斷する。次條の莊子の語に本

ずくの王績詩「——滿、還向二酒家一來」

【夢中夢】ムチュウム　人世のはかなきに喩ふ。莊、齊物「方二其夢一也、不レ知二其夢一也、夢中又夢二其夢一焉、覺而後知二其夢一也」

【夢佇】ムチョ　ゆめになりとも逢ひたしと切に思ふ、佇は切に望む義。梁武帝詔「旌二賢求一レ士、一一斯急」

【夢澤】ムタク　ゆめにらせ。老學菴筆記「一一止レ此」＝夢兆。

【夢兆】ムチョウ　ゆめにらせ。擊虞文「不レ盡二子一一者」

【夢寐】ムビ　いねて夢みる。ゆめのま。後漢書、耿顯傳「北虜臣顯區區之意、晨夜一一、寤レ心所レ計」

【夢王】ムオウ　紂の夢を見て文名を揚ずるに至りし故事。南史「江淹少時、夢二人授二五色筆一、由レ是文藻日新」開天遺事「李太白少時夢所レ用之筆頭上生レ花、後天才贍逸、名聞二天下一」

【夢卜】ムボク　○ゆめと、うらなひと。○ゆめにて吉凶をうらなふ。又、其のうらなひ。又、夢のつげにてうらなひ知る。晉、泰誓「朕夢協二朕卜一、襲二于休祥一、戎商必克」杜牧文「傳曰得二於一一一」傳曰は傳說と曰尙と。

【夢寐】ムビ　ゆめみるあひだ。張九齡詩「所思如二一一一」

【夢現】ムゲン　圖ねて居る時と、さめて居る時と。轉じてゆめとも正氣とも分らざるさま。むちゃら。ぼんやり。

【夢解】ムカイ　圖ゆめはんじ。見たる夢の吉凶を判斷する。

【夢枕】ムマクラ　圖夢中、己の枕もとに神佛の現れて事をつげる。

【夢】

夢の前性の俗字。

大部

【大】

㊀タイ・ダイ　㊁タ・ダ　㊂泰　㊃

㊀おほいなり、事又物が大いなり。小の對。○すぐ（過）戰國、秦策「無レ一一大王」○人を敬ぶの稱、人の著作を「一作」「一著」といふ、大いなりとして敬ぶ。○おごる「尊一」○ながし（長）おもし（重）○あらし（麤・粗）「一布」○ふとし、ふとさ、太と通ず。○あまねし（徧）○こえてうつくし（肥美）○はじめ（初）禮、文王世子「一昕徵鼓」○おほいに。○おほかた。事物の大部分「一凡」「一抵」㊁たけし（猛）○はなはだし（甚）＝太。

【大安日】タイアンジツ　陰陽道にて萬事によろしとする吉日。＝大安。

【大位】タイ　貴き官位。後漢書「不レ有二忠肖奇謀一而取二一一一」

【大尉】タイ　○漢代、三公の一。○團隊海軍武官の名。大佐參看。

【大意】タイイ　○おほよその意味。○大いなるこころざし。後漢書、耿弇傳「光武笑曰、小兒實乃有二一一一哉」＝大志。

【大醫】タイイ　宮中の侍醫。梁書「敕二一一不レ得下以二生類一爲レ藥」

【大有】タイイウ　易の卦の名。易經「一一元亨」

【大有年】タイイウネン　大豐年の義。春秋「宣公十有六年冬——」

【大猷】タイイウ　大いなる道、大いなるはかりごと。詩、小雅、昊天「秩秩一一、君子莫レ之」

【大慝】タイトク　○大いなるうれひ。國語「近二其小寵一而遠二其一一」○父母の喪。

【大一】タイイツ　○至りて大いなり。莊子「至大無レ外、謂二之一一」○天地の未だ分れざる混沌たる元氣。禮記「夫喪必本二於一一」

【大威德】ダイトク　圖明王の一、六面六臂を有し、四方を護る神。

【大隱隱二朝市一】タイインインチョウシ　眞の隱者は或は朝廷の小吏となり、或は市中の賣卜者・藥賣りなどになりて韜晦する義。王康琚詩「小隱隱二陵藪一、——」白居易詩「大隱住二朝市一、小隱住二丘樊一」

【大雨】タイ　おほあめ。詩、小雅「月離二于畢一俾レ滂沱一矣」箋「將レ有二一一一、徵氣先見二于天一」

【大漠】タイバク　おほうみ。史、孟荀傳「有二一一海一環二其外一」

【大要】タイヨウ　おもなるかね。阮籍詩「智巧萬端出、一一不レ易レ方」＝緊要。

【大役】タイエキ　大いなるえだち、國家の大工事（周禮、地官、鄕師）

【大易】タイエキ　易經。總稱賦「體二一一一與二春秋一」

【大液】タイエキ　漢の武帝の作りし池。白居易詩「一一芙蓉未央柳」

【大僧】ダイソウ　圖阿片の異名。＝大烟。

【大烟錠】ダイエンジョウ　圖阿片を吸ふ煙管。

【大圓】タイエン　天をいふ。管子「能載一一者、體二乎大方一」＝大圜。

【大圜】タイエン　前條に同じ。圜は圓の古體。序意「受有二大圜在レ上、大矩在レ下、汝能法レ之、爲二民父母一」注「圜、天也、矩、方、地也」

【大淵獻】タイエンケン　十二支の亥の異名「爾雅」

【大衍曆】タイエンレキ　唐の開元十二年、僧の一行の詔を受けて作りたる曆。唐書「及一一行作一一、詔二太史一測二天下之晷一」

【大音】タイオン　大聲なり。後漢書、百官志「一一謂レ敎畢」＝大聖・大音聲。

【大牙】タイガ　天子又は將軍のたつる旗。張衡、東京賦、注「古者天子出、建二一一旗一、竿上以二象牙一飾レ之」

【大我】タイガ　哲學にて宇宙の各我の根

本たる絶對の我。小我の對。

【大家】タイカ ○富貴の家。左傳「貧賤形骸叔衡叔権子羽皆一一也」○學藝にすぐれし人「唐宋八一一」○近侍の官より天子を稱する語。獨斷「親近侍從官、稱二天子一曰一一一」○タイしうとめ。顏書纂要「婦レ姑稱爲二一一一一」轉じて女の尊稱「晉一一」○國タイ貴き家がら。又、金持家。

【大哥】タイ あにき、大兄の義。酉陽雜俎「帝呼二寧王一爲二一一一」

【大廈】タイカ 大いなる家屋。淮南子「湯沐具而蠭虿相弔、一一成而燕雀相賀」

【大廈之材非二一丘之木一】タイカノザイアラズイッキュウノボクニ 天下の太平を致すは衆人の力によるに喩ふ。王褒、四子講德論「一一、大平之功、非二一人之力一也」

【大廈將レ顚非二一木所レ支也】タイカマサニテンナラントスレバイッボクノ ササフルトコロニアラズ 國家の將に覆へらんとする危急の際には獨力にては支へ難きに喩ふ「女中子」

【大雅】タイガ ○詩の一體。詩經大序「雅者正也、言二王政之所二由興一也、政有二小大一故有二小雅一焉、有二一一一焉」○文人相敬稱する語。班固「一一宏遠、於レ是爲レ羣」の語に本づく。

【大寶】タイホウ 天子ののりもの。轉じて天子を斥す。晉書、郗紹傳「一一親征、以レ正伐レ逆」

【大凱】タイガイ 大いに凱旋する。史、主父偃傳「天下既平、天子一一」漢書には大愷に作る。愷は凱、一說にかちいくさに用ふる音樂なりと。

【大行】タイカウ ○天子の崩御して未だ謚を奉らざる間の稱。史、李斯傳「一一未レ發、喪被未レ葬」通典「帝初登遐、朝臣稱曰二一一皇帝一」○賓客を接待することを掌る官。史、叔孫通傳「一一設二九賓臚句傳一」

【大行不レ顧二細謹一】タイカウハサイキンヲカヘリミズ 大事を行はんとする者は、少しの謹をば顧みず。史、項羽紀「范增曰、一一、大禮不レ辭二小讓一」

【大江】タイカウ 揚子江の異名。⇒長江。

【大考】タイカウ 大いに官吏の能否勤惰を考査する。周禮「三年大比、則一一州里一」

【大郊】タイカウ 王者の天を祀る名。家語「晉無二冬至一一之事一」

【大較】タイカク おほむね。史、律書「世儒闇二於一一一、不レ稽二輕重一」⇒大概。

【大綱】タイカウ おほづな、おほぐくり。法官「總二有天下一、擧二一一一一一而萬」

【大巧若レ拙】タイカウハセツノゴトシ 大いに巧妙なる者は、卻りて拙なる者の如く見ゆる義。老子「大直若レ屈、一一、大辯若レ訥」

【太羹不レ和】タイカウハワスズ 大羹は肉の汁、別に鹽梅の調和を爲さず。禮、樂記「一一、有二遺味一者矣」

【大學】タイガク ○國都にある最高の學校。漢書「一一者、賢士所レ關也、敎化之法、宜レ先」

【大寒】タイカン 二十四氣の一、一月二十日より二月四日まで、卽ち小寒と立春との中間。

【大寒索レ衣】タイカンニコロモヲモトム 大寒に至りて、かはごろもを求める、盜を捕へて繩を綯ふと同じく不用意の喩。本源也」⇒太學。○國大學院及文・法・醫・工・理・農等に分科す。

【大學諺解】ダイガクゲンカイ 國林道春著、假名文にて大學を解釋せしもの。

【大學三舍法】ダイガクサンシャノハフ 王安石のたてたる學制、三舍は外舍・內舍・上舍、其の學生は各一種の經書を研究し、每月試驗を以て其の優劣を定め舍をうつす法「宋史」

【大學寮】ダイガクレウ 國天智天皇の朝に創立せし大學校、京都に在りて式部省に隸す、文章・紀傳（歷史）音（漢字の發音）算・明經・明法等の科に分つ。

【大慨】タイガイ 海をいふ。莊、天地「一一爲レ物也、注焉而不レ滿、酌焉而不レ竭」

【大概】タイガイ ○國大いに愧る、佛の異稱。又、佛果の義。翻譯名義集「慚夢愧、而一一常明」

【大喝】タイカツ 大聲にてしかる「一一一聲」

【大浴】タイヨク 大いに和ぎて治まる。儀禮集傳「以勤二文王之宣光一、以揚二武王之大訓一、而天下一一」

【大旱】タイカン おほひでり。孟、梁惠王「若一一之望二雲霓一也」

【大寒】タイカン 二十四氣の一、一月二十日より二月四日まで、卽ち小寒と立春との中間。

【大寒索レ衣】タイカンニコロモヲモトム 大寒に至りて、かはごろもを求める、盜を捕へて繩を綯ふと同じく不用意の喩。

法官、寡見「大寒而後索レ衣、不二亦晩一乎」

【大盤】タイバン 大いなるいくさぶね。晉書、五行志「一一漂沒」

【大姦似レ忠】タイカンハチュウニニタリ 甚だしき姦人は、卻りて忠臣の如くに見ゆ。呂覽文「一一、大詐似レ信」王安石を論ぜし語。

【大伽藍】ダイガラン 大いなる寺。

【大氣】タイキ 天地の氣。⇒雰圍氣

【大朝】タイテウ うみづき、子の生れる十箇月めの月、卽ち臨月「史、呂不韋傳」

【大逵】タイキ 大いなる辻路。左傳「子都拔レ棘以逐之、及二一一一一一一及レ」

【大義】タイギ 大いなるすぢみち。後漢書、班固傳二所擧無二常師一、不レ爲二章句一、擧二一一一而已」⇒大道。

【大義滅レ親】タイギメツシン 君臣の大義を全うせん爲めには、父子の私親を滅する。左、隱四「君子曰、石碏純臣也、惡二州吁一、而厚與焉、一一、其是之謂乎」厚は碏の子、州吁の亂に與りしを以て、碏之を殺せり。

【大器】タイキ 自然のままならざる人物の義。老子「大道廢有二仁義一、智慧出有二一一一」

【大儀】タイギ 國○ねぎらふことば。御苦勞。○務み疲れる、物ぐさし、おっくふ。

【大器】タイキ ○偉大なる人がら。管子「鮑伯謂二桓侯一曰、管仲者天下之賢

人也。——也」○貴器。政権に喩ふ。左傳「重之以——」
【大器小用】タイキショウヨウ　大才ある者を小吏に用ふるに喩ふ。後漢書、逸民傳「大器之於小用、固有所不宜也」
【大器晩成】タイキバンセイ　鐘鼎の如き大いなる器は、早く成らず、以て大才は速に成らざるに喩ふ。老子「大方無隅、——」
【大鼎】タイテイ　おほがなへ。大將のはた。周禮「水路建——」
【大権】タイケン　天下のまつりごと。唐書「帝父自用、李絳參二貴——」
【大帰】タイキ　でもどり。よめ入せし女が離縁になりて實家にかへる。左傳「夫人姜氏歸于齊、——也」
【大昕】タイキン　よあけ。禮、學記「天子視學、——鼓徵、所以警衆也」＝早晨。
【大琴】タイキン　二十七絃の琴。爾雅、注「琴大者、二十七絃」
【大鈞】タイキン　天。又、造化、鈞は陶工の旋盤、轉じて物を化成する義とす。賈誼、鵩鳥賦「——播物兮、块圠無垠」＝太鈞。
【大慈】タイジ　大いなるいましめ。孟、梁惠王「問一國——、然後敢入」
【大逆】タイギャク　甚だしく道に背きたるおこなひ、君・父などを弑するをいふ。
【大噫】タイイ　大いにわらふ。漢書、敘傳「談笑——」
【大弓】タイユウ　○大いなるゆみ。○國中弓。楊弓等に對して通常のゆみ。
【大虚】タイキョ　おほぞら。＝大空。
【大衆】タイシュウ　大いにこぞる、大勢の兵にて一時に攻める。蜀志、諸葛亮傳「治戎講武、以待——」
【大局】タイキョク　圍碁の盤面の大體の形勢をいふ。轉じて事局の大勢の義とす。
【大區】タイク　天地の内をいふ。淮南子「綴志舒節、以馳——」
【大空】タイクウ　おほぞら。＝大虚。
【大宮司】ダイグウジ　㊀大神社の社務を掌る神官の長。
【大君】タイクン　○おほきみ、天子。易經「——有命、開國承家」○國segment川時代に將軍の尊稱とす「東照——」
【大軍】タイグン　あまたの軍勢「漢書、李廣傳」
【大勲】タイクン　大いなるいさを。書經「——未集」＝大功。
【大勲位】タイクンイ　國國家に功勞ある者を賞する爲めに定められし九等の階級の第一。
【大火】タイカ　○心星。左傳「味爲三辰火、心爲——」＝火星。○夏のあつさ。陸龜蒙詩「人間方——、此境無三朱夏一」○大いなる火災「列、黄帝」
【大過】タイカ　○易の卦の名。易經「——棟橈、利有攸往亨」○大いなるあやまち。論、述而「五十以學易、可三以無——一矣」
【大塊】タイカイ　○天地をいふ。莊、齊物「——噫氣、其名爲風」○造化をいふ。莊、大宗師「——載我以形、勞我以生」
【大黄】タイオウ　○大いなる石ゆみの名。史、李將軍傳「廣身自以——射其裨將」○藥草の名。初夏に草を出して綠色の草小花をつく、根を下剤藥とす。名醫別錄「——生三河四山谷陰四、八月中采根火乾」
【大荒落】タイコウラク　十二支の巳の異名。〔爾雅〕
【大廈】タイカ　おほきくひろし。淮南子「——之宇、遊三無極之野一」
【大恩】タイオン　○大いなるわづらひ。＝大刑。○大いなるしんばい。＝深愛。
【大願】タイガン　大いなるねがひ。史、范雎傳「此臣之所二——一也」
【大寰】タイカン　あめのした、天下。吳葉詩「——幸混一、四海際三輻員一」
【大欸】タイカン　大いなるあな、窠は空なり。莊、養生主「批二大郤一、導二——一」
【大観】タイカン　○物ごとの道理を十分に見ぬきて心に會得する。賈誼、鵩鳥賦「通人——兮、物無レ不レ可」○大觀の有樣。范仲淹、岳陽樓記「此則岳陽樓——也」
【大紅蓮】ダイグレン　圍梵語、摩訶鉢特摩の譯、八寒地獄の一。
【大計】タイケイ　大いなる計畫。
【大経】タイケイ　○唐代、進士の試驗科目として、禮記・春秋左氏傳の稱。詩經・儀禮・周禮を中經。易經・書經・公羊傳・穀梁傳を小經といふ（唐書）○人のふむべき大いなる道。左傳「禮、王之——也」＝大道。
【大慶】タイケイ　遼朝ケンの異名（爾雅、疏）
【大外記】タイゲキ　圍昔の官名、おほいしるすつかさ、太政官に屬して内記の詔書案文を勘へ正し、太政官の奏文を作ることを掌る。
【大月】タイゲツ　○大いなる月。○だいのつき。一箇月三十一日ある月。一・三・五・七・八・十・十二月をいふ。陰曆にては三十日ある月。
【大侠】タイキョウ　大いなるをとこだて。史、季布傳「朱家——」
【大厳】タイゲン　○大いなるしごと。＝洪業。○高嶽「富有之謂——」＝洪業。○高深なる學業。漢書、荒仲舒傳「下レ帷發レ憤、潛三心——」○隋の煬帝の年號。
【大叫喚】ダイキョウカン　八大地獄の一、二の地獄に陷りたるものは、うめき叫ぶといふが故。
【大冒】タイボウ　大いなることば、ほらをふく「——壯語」莊、齊物「——炎炎、小言詹詹」
【大卷】タイカン　黄帝の樂の名。周禮「大司樂、以三樂舞一教二國子一、舞二雲門一——大成大磬大夏大濩大武一」注「黄帝

日二至門一一一」

【大限】タイゲン　寿命ナイの終。

【大原】タイゲン　おほもと。漢書、張仲舒傳「道之一一出二於天一、天不レ変、道亦不レ変」＝大本。

【大絃】タイゲン　琴のふときいと。後漢書「移レ政猶レ張二琴瑟一、一一急者小絃絶」

【大賢】タイケン　すぐれてかしこき人。晉書陳頴傳「英偉一一、多出二於山澤一」

【大権】タイケン　天皇の権柄。唐書、陸贄傳「京邑如レ身、王畿如レ膚、而四海如レ指、此天子之一一也」＝大柄。

【大謹】タイケン　甚だ重きつみとが。北史、李彪傳「臣有二一一一一則遺レ室而清レ死」＝大罪。

【大元帥】タイゲンすい　○國家の兵権を総ぶる元首、天皇の稱。＝大総戎。○國明王部の総司の稱。

【大戸】タイコ　○大家に同じ。○唐人、酒盃の大いなる者の稱。白居易詩「戸大傾二甜酒一」

【大姑】タイコ　をっとの姉。

【大故】タイコ　○怒逆をいふ。論、微子「故舊無二一一一則不レ棄也」○父母の大喪をいふ。孟、滕文公「不幸至二於一一一」○大いなる事故。礼記「君子非レ有二一一一、不レ宿二于外一」

【大悟】タイゴ　大いに悟をひらく。後漢書、王常傳「伯升見レ常、説以二合従之利一、常一一」

【大工】タイコウ　○良きたくみ。六編「大農、一一・大商」＝百工。○國木匠。

【大功】タイコウ　○大いなるてがら。左傳、舜有二一一一二十二而爲二天子一」○喪服の名、一一は五月、小功は三月の喪服。

【成二大功一者不レ謀二於衆一】タイコウヲナスモノハシュウニハカラズ　大事業をなす者は、独断にてなすの意。戦國趙策、肥義曰、臣聞レ之、疑事無レ功、疑行無レ名、夫論二至徳一者、不レ和二於俗一、一一」

【論二大功一者不レ錄二小過一】タイコウヲロンズルモノハショウカヲカエリミズ　大功を論じて之を賞するときは、其の小過は措いて問はず。漢書、陳湯傳「一一、挙二大美一者、不レ疏二細瑕一」

【大侯】タイコウ　○大いなる射布、諸侯の射る的。詩經「一一既抗、弓矢斯張」○大國の大名。史、功臣侯年表「一一不レ過二萬家一、小者五六百戸」

【大口魚】タイコウギョ　たら(鱈)の異名。

【大鴻臚】タイコウロ　漢代の官名、外國の賓客を接待することを掌る〔漢書、百官表〕後世は鴻臚寺といふ一の衙門となる。

【大後天】ダイコウテン　俗明後後日。

【大巧若レ拙】タイコウハセツノゴトシ　真の巧者は卻りて拙なるが如く見ゆ。老子「大直若レ屈、一一、大辯若レ訥」

【大哭】タイコク　甚だしくなく。史記「漢王聞レ之、袒而一一」

【大黒】タイコク　○次條の略。○國炊婆の稱、厨に居るが故。

【大黒天】ダイコクテン　俗天竺の神。三寶を護し五穀を守り、飲食を饒にす、よりて廚ヤの神とす、本邦にて福の神として尊ぶ。

【大極殿】ダイゴクデン　國昔、八省院の中央に在りし朝堂院の正殿。天子の政を執られし所。

【大昏】タイコン　次條に同じ。

【大婚】タイコン　天子の婚姻。春秋胡氏傳「不レ重二一一之禮一、失二其節一矣」＝大昏。

【大根】ダイコン　國野菜の一。＝蘿蔔。

【大佐】タイサ　國陸海軍武官を将・佐・尉に三分し、各を又大・中・少の三つに分つ。一一は佐官の最上級。

【大差】タイサ　おほちがひ。＝遥庭。

【大才】タイサイ　大いなるはたらき。唐書「一一當二大用一」

【大壮】タイソウ　○大いにさかんなり。○易の卦の名。乾下震上、雷が天上に在りて陽剛盛長の義。易經「一一利レ貞」又「上古穴居而野處、後世聖人、易レ之以二宮室一、上棟下宇、以待二風雨一、蓋取二諸一一」

【大造】タイゾウ　大なる功。造は成就の義。左、成十三「是我有二一一一于四一也」

【大喪】タイソウ　天皇が大行天皇・太皇太后・皇太后・皇后の喪に服せらるる時をいふ。

【大棗】タイソウ　なつめの實を乾したるもの、薬用とす。

【大札】タイサツ　はげしき流行病〔周禮、醫師夫〕＝大疫。

【大彩】タイサイ　俗支那服の上衣の名。＝長衫。

【大繖】タイサン　大いなるきぬがさ。唐書「天子出一一」

【大士】タイシ　○徳行の高き士。晉子「務レ物之人、無二一一一焉」＝大人。○周代の官名。左傳、注「一一、治獄官也」○佛大心を開發せる士の義にて菩薩の稱。＝開士。

【大旨】タイシ　大指に同じ。

【大志】タイシ　大いなるこころざし。唐書「太宗爲レ人、聰明英武有二一一一、而能屈レ節下レ士」

【大使】タイシ　○國家又は君主を代表せる最高の使者。北史「留二一一一邊二行天下一、求二政善惡一」○國一國を代表して外國に駐在する外交官、公使の上に位す。

【大始】タイシ　一番のはじめ、おほもと。＝太初・元始。

【大姉】タイシ　○一番年うへのあねっ○あねを呼ぶ敬稱の漢書、孝景王皇后傳「帝下レ車泣曰、一一何藏之深也」○タイシ俗女子の戒名に添へる語。

【大見】タイケン　あに、幅にてすぐれたる賢者の義とす。後漢書、楊衒傳「一一孔文舉、小兒楊德祖、鉛刀一割、莫レ不レ斷レ數也」

【大事】タイジ　○大いなることがら。周禮、小宰「一一則從二其長一、小事則專達」＝大事件。○國大切の義。

【大指】タイ　大體のむね。史、汲黯傳「漢二承史二而任レ之、其治黄ニー一而已」＝大旨。

【大師】タイシ　○三公の一、文官中最高の官位。○タイシ　朝廷より高徳の僧に賜はる称號。○眞言宗にて特に弘法大師の稱。

【大驚】タイケイ　非常に、大いに出驚する義。漆秋「ーニー于比蒲ニ」

【大醜】タイシウ　わるものののかしら。易經「遇二其ー一ー一」＝元惡。

【大自在天】ダイジザイテン　佛印度の造化の神。

【大悲大願】ダイヒダイガン　佛非常なるいつくしみあはれみ、衆世普菩薩の徳を頌する語。法華經「ーー常无二懈倦ニ」

【大蟒】タイバウ　二十七絃にして長さ八尺一寸、徽さ一尺八寸あるもの（爾雅、注）

【大人】タイジン　○子が父を呼ぶ稱。史、高祖紀「始ーー常以レ臣爲二無賴ニ」○母を呼ぶ稱。後漢書、黨錮傳「范滂將レ就レ誅、與レ母訣曰、ーー割二不レ忍之愛ニ」○大徳の人の稱。小人の對。易、乾卦「飛龍在レ天、利二見ニーー一ニ」○知となり、成長せし人。○人を呼ぶ尊稱「仁兄ーー」

【大人虎變】タイジンコヘン　王者が天下を變革するは條理炳然として虎の毛の文采あるが如きをいふ。易、革卦「ーー、未レ占有レ孚」

【說二大人一則藐レ之】タイジンニトカバウスレバスナハチコレヲメヅ　尊貴の人の前にて、意見を述ぶる時には之を輕視しておそれず。孟、盡心「ーー、勿レ視二其巍巍然ニ」

【大臣】タイシン　○一國の政治の重任に當れる大官。○國古、太政官の上官、太政大臣・左大臣・右大臣・內大臣等の稱。おほいまうちぎみ。○現制にては內閣の十大臣・宮內大臣・內大臣の稱。

【大使】タイシ　大徳義。韓詩外傳「一穀不レ升曰レ歉、二穀不レ升曰レ饑、三穀不レ升曰レ饉、四穀不レ升曰ニーー一ニ」

【大信】タイシン　大いなるまこと。禮、學記「ーー不レ約、大時不レ齊」

【大進】タイシン　國昔、中宮職・皇太后宮職・大膳職等の判官の長。

【大盡】ダイジン　○陰曆の大の月の最終の日、即ち三十日。竹坡詩話「朱希眞作ニーー行詩ニ」○國遊郭等にてかねもちの客の稱。○田舍のかねもち。分限者シゲンシャ長者。

【大審院】ダイシンイン　國最高の裁判所、法律上の問題を審議する所。

【大車】タイシャ　○大いなるくるま。易經「ーー以載」○大夫の車。詩經、傳「ーー、大夫之車」

【大社】タイシャ　○つか。＝冢土。○國おほやしろ、國土を守護する神社「國幣ーー」

【大赦】タイシャ　天下の罪囚を悉くゆるす。史、始皇紀「ニー天下ニ」首都の近傍或は一地方を限りて罪人を赦すを曲赦といふの對。

【大匠】タイショウ　すぐれたるたくみ。又、大工の長ラシ次條參看。

【代二大匠一斲】ダイショウニカハリテハツル　拙き者が巧なる者に代りて事を執る義。老子「夫ーー者、希レ有レ不レ傷二其手一矣」

【大祥】タイショウ　死後二十五ヶ月目のまつり、三周忌。儀禮、士虞禮「期而小祥、又期而ーー」

【大將】タイショウ　○軍の總指揮官。抱朴子「ーー民之司命、社稷之存亡、於レ是乎在」○國古の近衛府の長官、現制にて陸海軍武官の名。大佐參看。○軸にて總てかしらだつ者の稱。

【大常】タイジャウ　○日月を畫きたる天子の旗。周禮、注「ーー、九旒之畫二日月一者」○淸代、宗廟の儀式を掌りし官（淸書、百官公鷹表）後世は一の衙門となりてーー寺といふ。

【太嘗祭】ダイジャウサイ　國天皇卽位後、始めての新嘗祭ニヒナメノマツリ（大嘗宮）を設け、悠紀ユキ主基スキを定めて新穀を享らしめ、天皇親ら之を天神地祇に捧げて祭らる。

【大相國】ダイシャウコク　國太政大臣の唐名。

【大上立德】タイジャウリットク　人の最上の行は徳を立て世を現め、人を濟ふに在るをいふ。左、襄、二四「叔孫豹聞レ之、大上有レ立レ德、其次有レ立レ功、其次有レ立レ言、雖レ久不レ廢、此之謂二不朽一」

【雖レ見二大蛇一不レ可レ見二女人一】ミルトイヘドモオロチヲ　女人の人を惑すの甚だしきをいふ。寶積經、一二「見於女人、能失二眼功德一、ーー」

【大嚢】タイノウ　大いにかみくらふ。莊子「嚢文、遊二屠門一ーー、豈不レ快レ意」

【大酒】タイシュ　おほざけ、さけを多量にのむ。又、其の者。＝酣飲・痛飲。酒豪。

【大僞】タイギ　眞に道を悟りたる大學者。荀、儒效「彼ーー者、雖下歷二於窮閭漏屋一、無中置錐之地上而王公不レ能二與レ之爭一名」

【大樹】タイジュ　將軍の異稱。後漢の馮異の故事。後漢書、馮異傳「爲レ人謙退不レ伐、諸將論レ功、異常獨屏二樹下一、軍中號爲二ーー將軍一」

【大樹之下無二美草一】タイジュノモトニビサウナシ　賢路のふさがれる所には人才の出でざるに喩ふ。說苑、說叢「高山之巓無二美木一、傷於多陽一也、ーー、傷於多陰一也」

【大樹將軍】タイジュシャウグン　前の「大樹將軍」と同じ。後漢書、馮異傳「帝云云」と詔二郭林宗一ーー、何爲樓樓、不レ遽窓邇ニ」樹、一本に木に作る。

【大戎】タイジュウ　大いなる兵車。詩經、戎「先啓レ行之車、謂二之ーー一ニ」＝元戎。

【大祝】タイシュク　かんぬし、神官。神を奉祀することを司る官（周禮、春官）

【大熟】タイジュク　大いにみのる。書經「歲則

ーー」‖大稔。

【大手筆】タイシュヒツ　立派なる文章を書く手腕。又、其の手腕ある人。晉書、王珣傳「夢人以二大筆如椽一與レ之、珣語二人曰一、此當レ有二ーー事一」

【大序】タイジョ　○詩經の總體の序。小序の對。○圖芝居狂言のはじまりの舞。‖序幕。

【大氣】タイキ　二十四氣の一。小雪の次に來る氣節。陽曆七月二十三日頃より八月八日頃まで。

【大赦】タイシャ　佛敎中の高尚なる理を述げるもの、慈悲博愛の主義によりて一切の衆生を救ふ。小乘の對。衆生をのせて彼岸に渡す船の意。梁書「帝乃ーー、而得二度脱一」

【大乘經】ダイジョウキョウ　三部の一。一切經。二、大乘經二十、般若經・四、法華經・五、涅槃經。

【大織冠】タイショクカン　圖古、一級の位の名に授けし冠。正一位の官に相當す。

【大水】タイスイ　○おほみづ。春秋「桓公元年秋ーー」‖洪水。○大いなる河、海、湖などの稱。釋名「天下ーー四、謂二之四瀆一」

【大酺鬼】タイホキ　圖よっぱらひ。‖泥醉者。

【大數】タイスウ　○甚だ多きかず。○おほよその數、おほかた實數に近きかず。

【大成】タイセイ　完全に成しあげる。孟、萬章「孔子之謂二集ーー一」

【大成殿】タイセイデン　孔子の廟をいふ。孔子は聖人の道を集めて大成せしが故。宋史、禮志「熙寧七年、詔、ーー廟文宣王殿、以二大成一爲レ名」‖文廟・聖廟。

【大姓】タイセイ　いきほひ強き家がら。漢書、陳咸傳「案二ーー一犯レ法、輒論輸レ府」

【大勢】タイセイ　○大體のなりゆき。魏志、劉放傳「ーー以見」○おほぜい、多人數。饅頭心史「元兵ーー、合圍月餘」

【大生意】タイセイイ　圖大營業、盛大なる商工業。

【大察不レ入二於里耳一】タイサツリニイラズ　正しき音樂は俗人には分らず、以て高尚なる言論は俗人に解せられざるに喩ふ。莊、天地「ーー、折楊皇荂、則嗑然而笑」

【大小】ダイショウ　○おほいなると、ちひさきと。孟、滕文公「服ーー同、則異相若」○圖大刀と鋸差との稱。

【大笑】タイショウ　大いにわらふ。老子「下士聞レ道ーー之」

【大疏】タイソ　ひろきすなはち。北史、魏太祖紀「追破二之於ーー一」

【大切】タイセツ　圖○だいじ、ていねい、ねんごろ。○おほきな芝居の最終の幕。

【大雪】タイセツ　○二十四氣の一、小雪の次に來る氣節、十二月七日頃。淮南、天文「小雪後、斗指レ壬曰ーーー」○平地にて一尺に積つる雪「左、隱八」

【大節】タイセツ　國家の大事變。論、泰伯「臨ーーー而不レ可レ奪也」

【大全】タイゼン　大いに余くして缺けなし。莊、田子方「發二夫子之發一言爲一也、吾不レ知二天地之ーーー一」

【大潮】タイチョウ　やまひが大いに進みて危篤なり、天子にいふ。齊、嗣命「疾ーー」

【大膳職】ダイゼンシキ　宮内省に屬する官の名、供御の膳部の調進を掌る。

【大千世界】ダイセンセカイ　圖十億國土の稱。須彌世界の一世界を一千世界といひ、一千世界を中千世界、中千世界を大千世界といふ。數術記遺「四天下共日月爲二一世界一、有二千世界一、有二一銕圍山一、遶レ之、名曰ーーー」

【大前天】ダイゼンテン　圖一昨昨日。

【大汎】タイハン　大いにはばむ。五代史、王鎔傳「中二流矢一、臥二輿中一、梁軍ーー」

【大蜡】ダイサイ　周代、天子が十二月に行ふ祭の名。禮記「ーー、天子之祭也」‖臘祭。

【大蘇】タイソ　蘇軾をいふ。軾の弟轍を小蘇といふの對。蘇轍詩「誰將二家集一過二燕都一、每被二行人問ーー一、莫レ把二文章一動二盧狂一、恐妨二歲矣風二江湖一」

【大昏】タイコン　圖甚だ、おほいに。

【大簇】タイソウ　音律の名、正月に配す、より正月の異名とす。禮記「孟春之月、律中ーーー」

【大總統】ダイソウトウ　現時支那にて大統領の稱。

【大息】タイソク　ためいき、ためいきをつきて歎く。史、蘇秦傳「仰レ天ーー」

【大族】ダイゾク　勢力ある家がら。漢書、高祖紀「齊楚ーー」

【大醜】タイシュウ　おにやらひ。禮記「季冬之月、命二有司一ーー」後漢書、禮儀志「季冬月、大享臘、先レ臘一日、爲二ーー一曰之逐疫一」

【大慈】タイジ　大いなるわるもの、惡は甚。晉、康誥「元惡ーー、刻惟不孝不友」

【大蓋】タイガイ　おほよそ、あらまし。淮南、況論「觀二小節一足レ以知二ーー一」

【大内裏】ダイダイリ　圖古、宮城のたたへ。おほうち。‖禁中。

【大遒】タイシュウ　大いなる道理。列、說符「ーー以二多岐一亡レ羊、學者以二多方一喪レ生」○人の行ふべき大いなる道。法言「小辯破ーー一而惑レ衆」

【大庶】タイショ　○節度使の別てて行く旅。歐陽修、送錦堂記「高牙ーー、不レ足レ爲二公榮一」○圖天子のみはた。天皇旗。

【大刀頭】タイトウ　刀劒の頭に環あり、環・還音通ず、よりて故郷に還るといふ隱語とす。古詩「何日ーーー」

【大膽】ダイタン　きもがふとい、度胸がある「ーー不敵」

【大地】ダイチ　とち、地球。‖輿地。

【大知】ダイチ　大いなる智識。史記「蜂共

一一也與」莊、齊物「一一開闢、小知閒閒」

【大嶷】ダイ ○甚だしくおろか。韓愈文「凡我所ㇾ爲、隔ㇾ我命ㇾ去二小豎一一」‖大愚。○黄公望の號（畫史）

【大壮】ダイ 易の卦の名。易經「一一利ㇾ貞、不二家食一吉、利ㇾ渉二大川一」

【大智不ㇾ異ㇾ愚】ダイチフイグ 大いなる智者は卻りて愚者の如し、君子は小智を弄せざる義。晉公和尚頌「衆生與ㇾ佛無ㇾ殊、大智不ㇾ異二於愚一」蓮華經文「大勇若ㇾ怯、大智若ㇾ愚」

【大佛之藪】ダイブツノソウ 長壽の稱。莊、逍遙遊「上古有二大椿者一以二八千歲一爲ㇾ春、八千歲爲ㇾ秋」

【大姥】ダイボ おかみさん。

【大腸】ダイチヤウ 腹の一部、小腸の下端より始まり、迂回して肛門に通ずるもの。

【大長公主】ダイチヤウコウシユ 天子の姑或は姉妹考「唐制、皇姑爲二一一、後亦謂二之長長公主一」

【大長秋】ダイチヤウシウ 皇后宮に附屬する官名、宮中の宣命を掌る。

【大丈夫】ダイジヤウフ ○意思強くして立派なる人。孟、滕文公「富貴不ㇾ能ㇾ淫、貧賤不ㇾ能ㇾ移、威武不ㇾ能ㇾ屈、此之謂二一一」‖偉丈夫。○國ダイジヤウブ確實又、堅固の義。

【大蟲】ダイチウ 虎の異名。傳燈錄「百丈問二希運一見二一一一、麼、還便作二虎溪一」

【大著】ダイチヨ 人の著作を敬ひていふ。

【大氐】ダイテイ おほよそ。漢書「天下一一無ㇾ慮皆鑄二金錢一」‖大抵・大略。

【大抵】ダイテイ おほかた、おほよそ。史、酷吏傳「一一盡武以二不道一」

【大帝】ダイテイ ○天をいふ。張衡賦「昔者一一授二舜與一公而觀ㇾ之、冀以二鈞天廣樂一」○歷代帝王中特に盛德ある天子の稱「明治一一」

【大禘】ダイテイ 先祖のおほまつり。詩說「大武康王、一一報祀」

【大潮】ダイテウ 滿月或は新月の時、太陽と月とが同じ直線内にありて地球を引くとき生ずる大いなる潮汐をいふ。

【大遼】ダイリヤウ ○大いにたのしむ。宋書、陶潛傳「每ㇾ醉輒一一」○いぬなづな、一名、ていれぎの異名。爾雅、疏「蓫一名亭歷、一名一一」‖葶藶。

【大遠】ダイエン 八十歳以上の老人の稱。王綱說「齊晉悠悠者、無爲曉二一一一」

【大典】ダイテン ○大いなる典籍。後漢書、鄭康成傳、括二號一一、網二羅衆家一」○大いなる國家の式典。晉唐書、職官志「錀二明邦國之一一一」‖大典禮。

【大篆】ダイテン 書體の名。周の宣王の時に史籀の作りしもの。漢書、注「周宣王太史作二一一十五篇一」

【大斗】ダイト ○大いなるひしゃく。詩經「酌以二一一一、以斟二黄者一」○大いなるます。史記「田常以二一一一出貸、以二小斗一收ㇾ之」

【大度】ダイド 大いなる度量。史、高祖紀「有二一一一、不ㇾ事二家人生產作業一」

【大都】ダイト ○大いなる都邑。左、隱元「先王之制、一一不ㇾ過二參ㇾ國之一一」○おほむね、あらまし。韓愈文「乃命二工人一存二其一一一」

【大東】ダイトウ ○ひがしのはて。詩、魯頌、閟宮「奄二有龜蒙一遂荒二一一一」‖極東。○國我國の異稱。

【大同】ダイドウ ○小差を問はずして混同する。莊、天地「不ㇾ同同ㇾ之之謂ㇾ大」○太古、財產・權利・王位世襲等の事の未だ無かりし時代をいふ（禮、禮運）○地名。山西省一一府に在り、漢に平城といふ。

【大同江】ダイドウカウ 朝鮮の河、源を平安南道劍山の附近に發し、西南流して黄海に入る、朝鮮五大江の一、灌漑の利多し。‖浿水。

【大同小異】ダイドウセウイ 殆ど同にくして少しく異なりし莊、天下「萬事畢同畢異、此之謂二大同異一」

【大統】ダイトウ 天子のちすぢ。後漢書、光武紀、東海王、陽皇后之子、宜ㇾ承二一一一」

【大統領】ダイトウリヤウ 共和政治の國の元首、國民より選擧せられて或年限の間其の位に居る。

【大頭魚】ダイトウギヨ 鯛魚の異名。

【大頭腦】ダイトウノウ 頭腦は體中の最も大切なる所、よりて甚だしく、肝要なる義とす「朱子語錄」

【大德】ダイトク ○大いなる道德。又、それを有する人。中庸「一一必得二其位一」○天地造化の仕事。中庸「小德川流、一一致化」○高僧の稱。僧肇記「行滿德高曰一一一」

【大纛滅二小盜一】ダイトクメツセウタウ 大いなる恩德は小なる怨恨を滅す。左、定、五「王曰、一一道也」

【大內】ダイナイ ○天子の經所。晶字箋「凡人宮室皆曰二臥內一、而天子之藏中則曰二一一一」○天子の府藏。又、それを掌る官。史、景帝紀「以二一一一爲二千石一」○國內裏の稱。

【大內記】ダイナイキ 國書の官名。中務省に屬し、詔勅宣命を草し、位記を書く等のことを掌る。

【大腦】ダイナウ 腦髓の一部。頭蓋の前頭部に位し、全腦の大部分を占め、意識思慮の本源をなす。

【大納言】ダイナゴン 國書の官名。太政官の次官、奏請及宣下の取次をなすことを掌る、下に中納言・少納言あり。

【大難】ダイナン ○大いなる困難。莊子「臨二一一一而不ㇾ懼者、聖人之勇也」○大いに難しとする。埤雅「管子曰、陸岸千仞、人之所二一一一也」

【大日如來】ダイニチニヨライ 梵語、毘盧遮那ビルシヤナの譯、日の神。

【大日本史】ダイニホンシ 圖二百四十六巻の徳川光圀の撰、神武天皇より後小松天皇に至る事を記し、本紀七十三巻・列傳一百七十巻・序目錄三巻に分つ。

【大任】タイニン 大いなる任務。國覺「淳于髡曰、臣不肖、不レ足三以當二一一一」

【大波】タイハ おほなみ。蘭雅「一一之神曰二陽侯一」＝大浪。

【大拜】タイハイ 宰相に除する義。「北夢瑣言」

【大旆】タイハイ 日月と、のぼり龍と、くだり龍とを畫ける天子のはた。儀禮、覲禮「天子乘レ龍載二一一一」

【大方】タイハウ ○世の中のかしこき人。君、秋水「吾長見レ笑二於一一之家一」○おほかた、あらまし。陸機文「見二綏世之長御一議二人情之一一一」

【見レ笑二大方一】ケンセウタイハウニ 世の識見ある人に笑はれる、方は道、有道者の義。南華參考。

【大砲】タイハウ 數人の力にて發する火器。おほづつ。

【大寶】タイハウ 天子のくらゐ。易、繫辭「聖人之一一曰レ位」

【大寶令】タイハウリヤウ 國文武天皇の大寶年間に制定せし法令。

【大白】タイハク 大いなるさかづき、白は酒の色、轉じて罰爵の義とす。左思、吳都賦、注「一一杯名、有二犯レ令者一、舉而罰レ之」許北雜誌「遂滿二引一一一」

【擧二大白一】アグ さかづきをあげる。酒を飲む。漢書、張良傳「君臣相適、其離如レ此、復擧二一大白一」

【大漠】タイバク ひろきすなはら。李賀詩「一一沙如レ雪、燕山月似レ鉤」

【大兼小】タイケンセウ 大なる者は小なる者の代用をもなす。春秋繁露、度制「夫已有二大者一、兼二小者一」

【大法】タイハフ ○だいじな法律。後漢書、卓茂傳「律設二一一一、禮順二人情一」○あらまし。＝大略。

【大半】タイハン おほかた、ほとんど、三分の二以上。漢書、高帝紀「今漢有二天下一一一」

【大汎】タイハン 大いにひろし。沈約詩「隘二此一一庭一、方知二九域局一」

【大洋】タイヤウ 大いなる海。南史、明帝紀傳「出撫二一一一」

【大般石】ダイバンジヤク 大いにわだかまれる石をいふ。盧山記「峰頭有二一一一」

【大般若經】ダイハンニヤキヤウ 六百卷。唐の玄奘三藏の譯せる佛經。

【大尾】タイビ すべてのをはり、最終。＝大團圓。

【大庇】タイヒ 大いにかばふ。杜甫詩「安得二廣廈千萬間一、一一天下寒士俱歡レ顏」

【大美】タイビ 天地の大いに美くしき道。莊子「天地有二一一一而不レ言」

【大父】タイフ ちぢ、祖父。漢書、鄭當時傳「其知友皆一一行」

【大夫】タイフ ○周代の官名、夫は扶助の義、卿の下、士の上に位す。禮記「三公九卿、二十七一一、八十一元士」○松の異名。泰山記「小天門有二秦時五一一松一」○醫師の異稱。國○五位の通稱。○樂人又、倡妓等の名に添へて呼ぶ稱。○職の長官「東宮一一」

【大府】タイフ 宮廷及政府の器物を藏める庫。

【大阜】タイフ 大いなるをか。陸雅「高平曰レ陸、大陸曰レ阜、一一曰レ陵」

【大部】ダイブ 卷數多き書籍をいふ。梁高僧傳「大部經文」

【大廈】タイカ 大いなるいへ。史、李斯傳「居二一一之下一不レ見二人犬之憂一」＝大廈。

【大補】タイホ 國昔の官名、各省の次官にて卿の下、少輔の上に位す。

【大風】タイフウ ○おほかぜ、大風に喩ふ。漢、高祖歌「一一起兮雲飛揚」○惡疾の名、かったい。素問「病二一一一、骨節重、鬚眉落」

【大福】タイフク ○大いなるさいはひ。易林「平旅正直、以綏二一一」＝大幸。○大恩。漢書、王莽傳「一一之恩」

【大不敬】タイフケイ 甚だしき不敬、特に天皇・皇后、其の他皇室に對する不敬。

【大分】タイブ ○おほよそのきまり「荀、榮辱」○國ブンよほど、だいぶ。

【大丙】タイヘイ おほぞら。又、神の名。淮南子「昔者馮夷一一之御也、乘二雲車一、入二靈闕一、絳二排閶闔一、論二天門一、論レ有二輕車良馬一、不レ能レ與レ之爭レ先」

【大兵】タイヘイ ○多くの兵。＝大軍。○國大いなるからだ「一一肥滿の男」

【大柄】タイヘイ 大いなる權力。禮記「禮者君之一一也」宋史「公正之道、莫レ先二於賞罰一、斯爲二政之一一一也」＝大權。

【大廟】タイビヤウ 天子の祖先のおたまや。論、八佾「子入二一一一、每レ事問」＝太廟。

【大辟】タイヘキ おもきつみ、死刑をいふ。書、呂刑「一一疑赦」

【大別】タイベツ ○おほきくわける、大區分する。○山名、湖北省漢陽縣の東北に在り。

【大辨】ダイベン 國太政官の屬官、左右二官に分れ、省の庶務を掌る。

【大變】タイヘン ○大いなるかはり。後漢書「天地譴怒、一一仍見」○國大いに、非常に、甚だしく「一一熱し」

【大辯如レ訥】タイベンジヨトツ 辯口のすぐれてよきものは、かへりて訥辯の如く見ゆ。老子「大巧如レ拙、——」

【大母】タイボ ばば、祖母（漢書、文三王傳）

【大醞】タイウン 天子より大いに酒食を民に賜はる。魏志、賜二渤海郡百戸牛酒一一一日」

【大鳥】タイテウ 想像上の鳥の名、おほとり。莊、逍遙遊「北冥有レ魚、其名爲レ鯤、鯤之大、不レ知二其幾千里一也、

化而爲レ鳥、其名爲レ鵬、鵬之背、不レ知二其幾千里一也」論語「一一之動、非二一羽之輕一也」

【大北】タイハイ　大いに敗る。國語「吳師一一」＝大敗。

【大僕】タイボク　古、天子の服御等の事を掌りし官。後世は一一寺といふ一の衙門となる。「周禮、夏官」

【大本】タイホン　おほもと。中庸「中也者天下之一一也」＝大原。

【大本營】タイホンエイ　戰時に大元帥の軍事を視たまふ陣營。

【大麻】タイマ　○あさ。葉の皮の纖維もて糸を採りて布を織る。○神に奉る幣、どんさ。

【大枝】タイシ　國命婦の歩きぶり。一一の金」

【大味】タイミ　すぐれたるあぢはひ。漢書、揚雄傳「一一必淡、大音必希」

【大夢】タイム　長きあひだのゆめ、轉じて人生に喩ふ。莊子「且有二大覺一而後知二其一一一也」

【大名】タイメイ　○大いなる名もれ。又その者。史、越世家「一一之下、難二以久居一」○國大いなる名田の持主の義、將軍家の臣にて領地の多き者、轉じて德川時代に知行一萬石以上の者の稱。

【大命】タイメイ　○天の命。書經「集一一于厥躬」○君主の命。後漢書、王常傳「臣聚一一」

【大明】タイメイ　太陽。禮、禮器「一一生二於東一月生二於西一」

【大盟】タイメイ　會同して大いにちかひをなす。周禮、地官「凡喪紀賓客、軍旅一一、則飾二其牛牲一」

【大妙】タイミョウ　道の至極せる處、又、大いに神妙なる義。莊子「顏成子游謂二東郭子綦一曰、吾聞二子之言一七年而天成、八年而不レ知レ死、不レ知レ生、九年而一一」

【大宋】タイソウ　國且那、貴下。日老爺。

【大澤】タイタク　おほうみ。耶律楚材詩「北漠絕二窮域一、西關抵二一一一」

【大約】タイヤク　おほよそ、おほまか。＝概略・大略。

【大勇】タイユウ　大いなる勇氣、義理より出づる勇氣。孟、公孫丑「告曾國二一一於夫子一矣」

【大用】タイヨウ　○重大なるつかひ。周禮「以待二邦之一一一」○大いに任用する。史記「康子使レ召二再求一、孔子曰、魯人召二求將レ一一之一也」

【大欲】タイヨク　大いなる私慾。禮、禮運、飲食男女、人之一一存焉」＝大慾。

【大老】タイロウ　○年おいたる賢者。孟子「二老者、天下之一一也」○國德川幕府の執政官の長。

【大勞】タイロウ　大いなるほねをり。左傳「一一未レ艾、君子勞レ心、小人勞レ力、先王之制也」

【大亂】タイラン　大いなるみだれ。

【大理】タイリ　○刑獄を司る官、今の司法官。後世、一一寺といふ一の衙門となる。春秋元命苞「燒爲二天子一得二皐陶一聽爲二一一一」○國檢非違使別當の異稱。

【大理石】タイリセキ　石灰岩の一種、質緻密、色は純白なり、又他石と混じて縞模様をなすものあり、裝飾石材に用ふ、栃木縣大理府より出づるが故に名づく。

【大陸】タイリク　○大いなる陸地。揚雄「一一曰二阜一」○澤の名【書經】○島國に對して廣大なる陸地。

【大戮】タイリク　大いなる罪、死刑。史記「計畫始行、辛受二一一一」＝大辱。

【大倫】タイリン　人の大いなる道すぢ。孟、公孫丑「內則父子、外則君臣、人之一一也」

【大梁】タイリョウ　戰國の時の魏の都、今の河南省開封縣。

【大略】タイリャク　○おほよそ、あらまし。孟、滕文公「此其一一也」○大なるはかりごと。史記「安國爲二人多一一一」

【大呂】タイリョ　○周廟の大鐘の名、九鼎と共に周の寶器、轉じて貴重の義とす「九鼎一一よりも重し」○十二律の一、十二月に配す、故に又十二月の異名とす。呂は拒、陽氣の大いに動き出でんとするを陰が拒ぎ抑へる義。禮、月令「季冬之月、律中一一一」

【大力】タイリキ　○大いなるちから。晉書、郭璞傳「一一而遲鈍」○造化の義。李白詩「一一運二天地一」

【大輪】タイリン　大轂服　官吏などの最も重き禮服、官等に從ひて其の制を定む。

【大烈】タイレツ　大いなるいさを。書經「揚二武王之一一一」

【大隆】タイリュウ　大いにいさぎよし。莊子「大仁不レ仁、一一不レ曉」

【大路】タイロ　○ひろきみち。詩、鄭風「遵二一一一兮、攬二子之袪一兮」○天子の車。＝大輅。

【大輅】タイロ　天子のくるま。書、顧命「一一在二賓階面一」＝牢輅・大路。

【大論】タイロン　高大なる議論。中庸「不レ謀二一一一、則志不レ立、不レ知二至言一則心不レ固」

【大和】タイワ　八卷、藏原爲憲の著といふ。一名世繼物語、文德天皇より後一條天皇に至る十四代百七十五年間の帝王大臣などの事を記す。

【大藏省】タイゾウショウ　國十省の一、國費支出・租稅徵收・國債・造幣等、政府の財政一切を司る中央官廳。

【大袈裟】オオゲサ　國事實よりも大いなる義。針小棒大。

【大御所】オオゴショ　國德川時代、將軍の隱居せし者の尊稱。

【大年寄】オオトシヨリ　國德川時代の官名。老中の上に位す。

【大祓】オオハラヘ　國六月と十二月との末日に行ふ神事、半年間の罪穢を祓ひ去る式。

【大宮人】オオミヤビト　國禁中に仕へて居る

人。

【大向】オホカウ 圖芝居の舞臺の正面のうしろ、立見ほうする所。

【大率】オホナミ あらまし。白居易詩「賢愚類相交、人情之一一」‖大略。

【大日付】オホヒツケ 圖徳川幕府の老中の屬官、今の警察官の類。專ら諸大名に係る事を掌る。

【大様】オホヤウ 圖ゆったりとしてこせつかず。

【大凡】オホボン たいてい。韓愈文「一一物不レ得二其平一則鳴」

【大童】オホワラハ 圖髪をふりみだす。‖枝葉。

【大和魂】ヤマトダマシヒ 圖やまとごころ、日本人固有の氣質。‖和魂。

【天】一畫

㊀ユウ ㊁アウ オウ 慣 語 書

㊀一はにこやか(愉)のびやか、顔色和げる貌。又、少ツクしてうつくし(少好)○草の盛んなる貌。○わざはひ(災・禍)「天一」㊁物の生じて未だ壯んならざる貌。㊂かがまる(屈)○わかじにに(短折)

【夭逝】エウセイ 次條に同じ。淮南子「莫二能一一一」

【夭閼】エウアツ ふさぎとどむ。莊、逍遙遊「背負二青天一而莫二之一一者」‖天遏・壅閼。

【夭夭】エウエウ ○わかくうつくしき(少好)貌。詩、周南「桃之一一」○顏色よろこばしき貌。論、述而「子之燕居申申如也一一如也」

【夭矯】エウケウ わかくうつくし。張羽、歌曲「宴一一今好晨」

【夭矯】エウケウ 飛び騰がる貌。郭璞、江賦「拂二洪波一而皎躍、吸二飛霞一而一一」

【夭蟜】エウケウ ○龍の飛びあがる形容。「司馬相如、大人賦」○頸りに伸びる形容、同、上林賦「一一支格」○木の枝の曲る貌「漢書」

【夭昏】エウコン わかじにに、昏は人生れて未だ命名せずして死するをいふ。左、昭十九「札瘥一一」

【夭札】エウサツ わかじにに、天は天年を盡さざる疾、札もわかじにに。左、昭二「孤疾不レ降、民不二一一一一」‖天折・夭逝。

【夭死】エウシ わかじにに。‖夭逝・夭折。

【夭斜】エウシヤ 正しからず。白居易詩「錢塘蘇小小、入道最一一」‖夭邪。

【夭傷】エウシヤウ わかじにに。戰國策「生命遂長終二其年一而不二一一一」

【夭殤】エウシヤウ わかじにに、二十歳未滿にて死する。韓愈詩「百口無二一一一」‖夭折・夭札。

【夭壽】エウジユ わかじにと、ながいきと。短命と長壽と。

【夭逝】エウセイ わかじにに。‖夭折・夭死。

【夭折】エウセツ わかじにに。吳志、孫堅傳「孫登臨レ終、疏云、顏回有二上智之才一、而倘一一、況臣愚陋、年過二其壽一」‖短折。

【夭那】エウダ たをやか、なまめかしき形容、又、其の姿。‖夭娜・婀娜。

【夭娜】エウダ 前條に同じ。宋楊詩「一一瑤池神」

【夭桃】エウタウ わかく美くしき桃の木、わかき婦女の容色に喩ふ。詩、周南、桃夭「桃之夭夭、灼灼其華、之子于歸、宜二其室家一」

【夭厲】エウレイ 疾疫をいふ。左傳「盜賊公行、而一一不レ戒」

【夭枉】エウワウ わかじにに。唐書「少死則曰二一一一」‖夭折。

【夬】一畫

㊀クヮイ・ケ 卦 厦

㊀さだむ(決)○わかつ(分)○易の卦の名、乾下兌上。㊁ゆがけ(射講)‖鉤弦。

【夬夬】クヮイクヮイ おもひきりよし、果決なり。易經「君子一一」

【太】一畫

タイ ダイ 泰

一音タ大に通ず。泰に同じ。

○おほいなり、ふとし、大の極なり。○はなはだ(甚)‖甚とも連用す。○とほる(通)○はじめ「一初」○算き者の中にて最も貴き者の稱「老一翁」

附録 太・泰・泰等の別は甚(甘部四畫)を見よ。

【太阿龍泉】タイアリユウセン? 古の名劍の名。楚王、風胡子(胡一に湖に作る)を召して、吳越に之き、歐冶子干將に見えて、鐵劍三枚を爲らしむ、一を龍泉(一に泉を淵に作る)といひ、二を太阿(一に太を泰に作る)といひ、三を上市(一に工布に作る)といふ「越絶書」

【太尉】タイヰ 秦・漢の官名、武事を掌る、尊きこと丞相と等し、三公の首に居る、歷代相承け明に至りて廢す。

【太一】タイイツ ○一番はじめ。莊子「主之以二一一一」‖太始・太初。○天帝のなます所。楚辭「登二一一今玉堂一」○星の名。史、天官「一一中宮極星」‖太乙。○終南山の一名。‖太乙。

【太乙】タイイツ 前條を見よ。

【太陰】タイイン ○月。太陽(日)の對。春秋元命苞「一一水精爲レ月」○冬、陰氣甚だしき義「獨斷」○陰陽道にて太歲神の皇后。‖太陰神。

【太陰層】タイインソウ 月の滿虛を以て基礎とせしこよみ。太陽層の對。‖陰層・舊層。

【太佳】タイカ はなはだよろし。

【太昊】タイカウ 太皞に同じ。

【太康】タイカウ 太平に同じ。魏明帝、樂府「百姓謳吟詠二一一」

【太皞】タイカウ 天をいふ、後漢書、耶頴傳

「一一悦和、怡聲乃發」注「一一天也」

【太鵬】タイホウ 春の神。淮南子「東方木也、其帝一一、其佐句芒」

【太行脸】タイカウケン 太行は山の名、極めて險阻を以て聞ゆ。歐陽建詩「不レ渉二一一一、誰知二斯路難一」

【太閤】タイカウ 関白の子、父に代りて關白となりし者、其の父即ち前の關白を呼ぶ尊稱。落飾すれば禪閤といふ。

【太閤記】タイカウキ 二十二巻、豊臣秀吉一代の事蹟を錄す、小瀬甫庵の著。

【太監】タイカン 宦官、去勢せし男子。

【太簡】タイカン 甚だ簡略にして敬なし。論雍也「居レ敬而行レ簡、以臨二其民一、不二亦可一乎、居レ簡而行レ簡、無二乃一一一乎」

【太儀】タイギ ○萬物のみなもと。張華文「一一幹運、天廻地游」○唐代、公主（天子の女）の母の稱。王建、宮詞「一一前日曙房來」

【太鈞】タイキン 造物者をいふ、造物者の萬物を作るは陶工の器を鈞上に作るに似たるが故、鈞は、陶器を製する旋盤の演書、賈誼傳「一一播レ物」‖大鈞。

【太虚】タイキョ おほぞら。杜甫詩「東樓雲氣起、澹蕩滿二一一一」‖太空。

【太極】タイキョク 天地未だ分れず元氣の混沌たる時をいふ。易、繫辭「易有二一一一、是生二兩儀一」

【太極圖】タイキョクヅ 宋の周敦頤が工夫せし圖形、其の解釋を記せしものを一一說といふ。太極即ち宇宙の根本義を圖解せしもの。

【太極殿】タイキョクデン 魏より歷代に至るまで天子の正殿の稱、本邦亦此にならひて一一といふ。

【太空】タイクウ おほぞら、天をいふ。蘇軾、喜雨亭記「一一冥冥、不レ可二得而名一」‖太虚。

【太君】タイクン 官人の母にて縣又は郡に封ぜられし者の稱「宋史、職官志」

【太和】タイワ ○至正太中の道。易經「各正二性命一、保二合一一」○陰陽の調和せる氣。班固、答賓戲「沐二浴玄德一、翫二一一一」

【太皇太后】タイクワウタイコウ 天子の祖母。

【太古】タイコ ○おほむかし。○學問上にて區劃せし年代の最も古き期間、上古の前。

【太鼓】タイコ 樂器の一、木を刳くり拔きて胴とし、牛又は犬の革を張り、桴にて打つもの。

【太公】タイコウ ○祖父。史、齊世家「西伯獵、得二呂尚一曰、吾一一望レ子久矣」○父。史、高祖紀「高祖五日、一朝二一一、如二家人父子禮一」○曾祖父〔陔餘叢考〕

【太公望】タイコウバウ 周の文王の師、呂尚をいふ。史、齊太公世家「四伯獵果遇二太公於渭之陽一、與語大說曰、自二吾先君太公一曰當レ有二聖人一適レ周、周以興、子眞是邪、吾太公望レ子久矣、故號レ之曰二一一一、載與俱歸、立爲レ師」

【太后】タイコウ 天子の御母。漢書、外戚傳、序「帝母稱二皇一一、祖母稱二太皇一一」‖皇太后。

【太湖石】タイコセキ 峯・洞などの形をなせる石、盆景、庭石等に用ふ。支那の太湖より出づるが故。五雜俎「洞庭西山出二一一、黑質白理、高逾二尋丈一、峯巒窻穴、脞有二天然之致一」

【太宰】タイサイ 百官の長、今の總理大臣。禮記「吳侯レ陳、一一範使二於師一」‖冢宰。

【太宰帥】ダザイノソチ 次條を見よ。

【太宰府】ダザイフ 圖古、筑前の國に置かれし官府。九州・壹岐・對馬を管轄し、又唐・三韓・諸蕃との外交上の事を掌る、其の長官を太宰帥といふ。

【太歲】タイサイ ○木星の異名。爾雅「一一在レ甲曰二閼逢一」○陰陽道にて八將神の一「一一神」

【太倉】タイサウ 官の米ぐら。史、平準書「一一之粟、陳陳相因」

【太倉稊米】タイサウテイマイ 滄海の一粟と同義、太倉は官府の米ぐら、稊は小米、稗の類の莊、秋水「計二中國之在二海內一、不レ似二稊米之在二太倉一乎」

【太早計】タイサウケイ はやまる、事を爲すに早きに失する。莊、齊物「汝亦一一、見レ卵而求二時夜一、見レ彈而求二鴞炙一」

【太草草】タイサウサウ 甚だいそがし、非常に草急。五代史、漢臣傳「皆一一耳」

【太癡生】タイチセイ はなはだやせる、生は助辭。李白詩「爲問緣レ何一一」

【太子】タイシ 位を繼ぐべき子、古は天子諸侯の長男、漢以後は天子のみにいふ。禮、王制「王太子、王子、羣后之一一」

【太史】タイシ ○天時曆祭祀等の事を掌る官「周禮、春官」○其の時代の記錄を掌る官。

【太史氏】タイシシ 歷史を掌る官人。韓愈、送二楊少尹一序「一一又能張二大其事一、倘レ傳綴二疏踪跡一不」

【太史簡】タイシカン 齊の太史が、崔杼の其の君莊公を弑せしことを竹簡に直筆して誅まざりし故事「左、襄二五一文天祥、正氣歌「在レ齊一一」

【太始】タイシ 太一に同じ。

【太姒】タイシ 人名、有莘氏の女、文王の妃となる。詩經「一一嗣二徽音一」

【太師】タイシ 官名、三公の一。文官の最上位、天子の師法たるべき義「書、周官」

【太甚】タイジン はなはだし。戰國策「嘻亦一一矣、先生之言也」

【太上】タイジャウ ○極めてすぐれたる義。左、襄二四「一一立レ德」○おほむかし、三皇五帝の世。曲禮「一一貴レ德」○天子「莊、君子」‖至尊。

【太上皇】タイジャウワウ ○天子のちち。漢書、

高帝紀「上尊二太公一曰——」○㊀天皇が御位を譲られたる後の尊號。太上天皇・上皇・仙洞。

【太常寺】タイジャウジ 唐代、禮樂郊廟社稷の事を掌れる官衙。唐書「——卿一人、少卿二人」

【太守】タイシュ ○郡の長官。漢書、職官志「郡守秦官、掌レ治二其郡一、秩二千石一、景帝更レ名——」○㊀古、上總・常陸・上野の三國の守、親王之に任ず。又、國守大名の稱。

【太初】タイショ 萬物の由りて生ずるはじめ。列、天瑞「——者、氣之始也」

【太初曆】タイショレキ 漢の武帝の太初元年に鄧平の造りし曆。漢書、律曆志「各自增減以迨二漢——一」

【太清】タイセイ 大いに清し、天をいふ。鶡冠子「聖人之德、上及二——一、下及二太寧一、中及二萬靈一、太寧は地の異名。

【太祖】タイソ ○初代の帝王。詩經「——太師皇父」○大夫などの初代。‖初祖・始祖。

【太素】タイソ ○天地の未だ成立せざる時。開闢以前。列、天瑞「——者、質之始也」○極めて質朴の性。

【太簇】タイソウ 陰曆正月の律の名、轉じて正月の異名。禮、月令「孟春之月、律中二——一、東風解レ凍」‖大蔟。

【太宗】タイソウ 貞觀政要「貞觀二年京師旱、蝗蟲大起、太宗入レ苑視レ禾、見二蝗蟲一、撮二數枚一而呪曰、人以レ穀爲レ命、而汝食レ之、是害二于百姓一、百姓有レ過、在二予一人一、無レ以其有レ災、但當レ蝕二我心一、無二害二百姓一、將レ吞レ之、左右諫曰、恐成レ疾、不可、太宗曰、所レ冀移二災朕躬一、何疾之避、遂吞レ之、自レ是蝗不二復爲一レ災」

【太僧生】タイソウセイ はなはだにくし、生は助辭。太俗生參看。

【太息】タイソク ためいきをつく。史、高祖紀「喟然——」

【太俗生】タイゾクセイ はなはだ鄙俗なる義、生は助辭。增續祖府「傳燈錄、南泉坐次、一僧叉レ手而立、南泉曰、——、檢令掌、南泉曰、太俗生」

【太孫】タイソン 天子の御まご。‖皇孫。

【太太】タイタイ 俗稱奥樣、夫人。

【太沖】タイチュウ 虛靜にして無爲なる義、沖はむなし。莊子「吾鄉示レ之以二——一」

【太寧】タイネイ ○地。甚だ安泰なる義。太清を見よ。○甚だやすらか。忠經「天地——、君之德也」

【太保】タイホ 官名。三公の一、天子の德を保ち安んずる義。書、周官「立二太師・太傅・——一、玆惟三公」

【太白】タイハク ○よひの明星。爾雅「明星謂二之啓明一」注「——星也、晨見二東方一、爲二啓明一、昏見二西方一爲二——星一」‖金星。○㊀精製せし白砂糖。

【太白捉レ月】タイハクソクゲツ 李白は采石にて醉ひて水中の月を捉らんとして死す。侯鯖錄「李白過二采石一、酒狂入レ水、捉レ月而死」

【太牛】タイギュウ 三分の二以上、おほかた。莊辭、七諫「年既已過二——一今、然猶恕而留滯」‖大牛。

【太煩】タイハン はなはだしく繁雜なり。白虎通「所二以五歲巡狩一、何爲——也」

【太父】タイフ 祖父。史、謂侯世家「——開地」

【太傅】タイフ 官名。三公の一、天子をたすけ傅ク義。太保を見よ。

【太夫人】タイフジン 父死し嗣ぎて諸侯となりし子が其の母を稱していふ。漢書、文帝紀、注「列侯之妻稱二夫人一、列侯死、子復爲二列侯一、乃得レ稱二——一」

【太平】タイヘイ 世が治まりて平か。唐書「——無レ象」‖泰平。

【太平樂】タイヘイラク ○雅樂の曲名。破陣樂。○㊀狀まり勝手の言ひぶん。

【太平記】タイヘイキ 四十一卷、後花園天皇の文保二年より、後村上天皇の正平二十二年に至る、五十年間の事を記す、作者未詳。

【太廟】タイビョウ ○初祖のおたまや。太祖の廟。○㊀伊勢大神宮。

【太卜】タイボク 官名。卜筮の官の長。殷以後晴雨に至るまで置く。‖卜正。

【太僕】タイボク ○周代車政の長官。○唐代輿馬を掌る官。齊職儀「崇僕之長曰——一掌二輿馬一」

【太僕寺】タイボクシ 唐代、廐牧輿の政を掌れる官衙。唐書「——、卿一人、少卿二人」

【太洋】タイヨウ 大陸に對して大海の稱。

【太洋島】タイヨウタウ 大陸と遠く隔たりて、成立も地脈も全く無關係なる島嶼。

【太陽】タイヨウ ○日。太陰（月）の對。張衡、靈憲序「日者——之精、積而成レ烏象一」○夏の異名、陽氣甚だしき義。

【太陽系】タイヨウケイ 太陽を中心として運行する天體の一團體、太陽・遊星（地球など）衛星（月）彗星・流星等之に屬す。

【太陽曆】タイヨウレキ 地球が太陽を一周する三百六十五日二四二二の日數を一年とせし曆。太陰曆の對。‖陽曆・新曆。

【太牢】タイラウ 牛・羊・豕の牲を合せ具へたる饗食、羊・豕のみは少牢といふ（公羊、桓、八、注）轉じて極めて盛んなるごちそう。王褒、聖主得二賢臣一頌「羹レ藜含レ糗者、不レ足二與論一——之滋味一」

【太沽】タイコ 直隸省に屬し、白河の口を扼せる要地、砲臺あり。

【太政官】ダジャウクワン ㊀昔の最高の官府の名、其の長官を太政大臣といふ。

【太刀取】タチトリ ㊀○切腹の介錯人。又、斬罪の刑人の首を刎ねる者。○相撲にて横綱力士の土俵入に太刀

を持ちて従ふ力士。

【天】テン　先

○あめ、あま、そら、おほぞら。地の對。○萬物の主宰者、造化、造物者。○時節、氣候「一候」「春ー」○正義、眞理。孟、離婁「順ー者存、逆ー者亡」○無爲自然の道。人爲人工の對「ー工」「ー然」○帝王、又は其れに關する敬稱「ー顏」○いただき(頭)うへ(上)にいただく義、臣が君を稱し、妻が夫を稱する語「所ー」○仰ぎ賴る所の者をいふ。漢書、酈食其傳「王者以民爲ー、而民以食爲ー」○うまれつき(性質)「ー才」○めぐりあはせ(運命)○死刑、五刑の一。一說に而字の誤。○圖一日の義「今ー」「明ー」

【天魂】テンコン　天より降さるるとがめ。孟、梁惠王「不ー取必有ニーー」

【天位】テンヰ　天子のくらゐ。書、太甲「ー一朝哉」

【天威】テンヰ　○上帝の威力。○天子の御威光。左、僖九「ーー不ー違ー顏咫尺」○天然に備はれる威嚴。漢晉春秋、獻曰、公ーー也、南人不ニ復反ニ

【天爲】テンイ　天のしわざ。人爲の對。

【天意】テンイ　天のこころ。韓非子「ーー無ー所ニ怫忤ー、將百無ー所ニ擊摩ー」

【天維】テンイ　天のつな、天の成立するおほもと。淮南子「ーー建元、常以ー寅始」＝天綱。

【天佑】テンイウ　次條に同じ。

【天祐】テンイウ　天のたすけ。易、大有「上九自ーーレ之、吉、无ー不ー利」＝天佑・天助・天贊。

【天胤】テンイン　天命によりて立ちたる、天子のちすぢ。書、高宗肜日「圖ー非ニーー」＝天嗣。

【天衣無縫】テンイムホウ　天女の著てゐる衣服は、ぬひめがない、詩文などの自然にすらりと出來たるに譬へていふ。靈怪錄「郭翰暑月臥ニ庭中ー、有ー人冉冉自ー空而下、曰、吾織女也、徐視ニ其衣、殊無ー縫、翰問ー之、曰、天衣本非ニ針線ー爲ー也」。

【天宇】テンウ　○おほぞら。陶潛詩「昭昭ーー顯、皎皎川上平」杜甫詩「ーー清霜淨、公堂宿霧披」＝天空。○天下の稱。晉書、后妃傳「母ニ儀ーー、助ニ宣王化ー」

【天運】テンウン　天より授かりし運命、自然のめぐりあはせ。

【天潤之慈】テンジュンノジ　甚だしくへだたる。詩、大雅、旱麓「鳶飛戾ー天、魚躍ニ于淵ー」＝雲泥之差。

【仰ー天而唾】ギョウテンシテダス　人を害せんとして卻りて己を傷ふ意に喩ふ。四十二章經「惡人欲ー害ニ賢者ー、譬ーー、唾不ー污ー天、還污ニ己面ー」

【天鑑】テンカン　上帝のこたへ、上帝の感應。北史、嵇紹傳「ーー人和、時會竝集」

【不ー怨ー天不ー尤ー人】フエンテンフユウジン　己世に遇はざるも、天を怨みず、又、人を咎めず、益、身を修むるをいふ。論、憲問「ーー、下學而上達、知ー我者其天乎」

【指ー天射ー魚】シテンシャギョ　無益なる事の喩。記苑、尊賢「秦用ニ趙高ニ而天下知ニ其亡ー也、非ニ其人ニ而欲ー有ー功、譬ニ其若ー夏至之日、而欲ニ夜之長ニ射ー魚指ー天、而欲ー發ー之當ー矣」

【樂ー天】ラクテン　天の道理を樂む。晉、繫辭「ーー知ー命、故不ー憂」

【天恩】テンオン　上帝のめぐみ。又、天子のめぐみ。後漢書、班超傳「ーー殊絕、誠非ニ小臣所ニ當ニ被蒙ー」

【天下】テンカ　○天の下、世界。書、大禹謨「奄ニ有四海ー、爲ニーー君ー」○一國の內。

【小ニ天下ー】ショウテンカヲ　天下を小さしと思ふ。眼界の廣きにいふ。孟、盡心「孟子曰、孔子登ニ東山ー而小ー魯、登ニ太山ー而小ー天下ー」

【天下太平】テンカタイヘイ　天下よく治りて平か。轉、仲尼燕居「言而履之禮也、行而樂之樂也、君子力ニ此二者ー、夫是以ーー也」

【天下無雙】テンカムソウ　天下にならびなし。後漢書、黃香傳「香家貧、內無ニ僕妾ー、躬執ニ苦勤ー、盡心奉養、遂博學ニ經典ー、究ニ精道術ー、能ニ文章ー、京師號曰、ーー、江夏黃童」

【天河】テンカ　あまのがは。詩經、雲漢「ーーー也」沈佺期詩「曉月臨ー牖近、ーー入ー戶低」＝銀河・天漢。

【天家】テンカ　天下を以て家となす者の義、天子の稱「國語」＝天皇。

【天戒】テンカイ　天のいましめ。書經「先王克謹ニーー」

【天界】テンカイ　○おほぞら。陶潛詩「清氣澄ニ餘滓ー、杳然ーー高」○圖天に在る世界、天上界。劉禹、平等剎下銘序「ーー飾ニ其四圍ー、龍宮隣ニ其七寶ー」

【天街】テンガイ　易星と星との間をいふ。史、天官書「易畢閒爲ニーー、其陰陰國、其陽陽關」

【天蓋】テンガイ　○天がおほふ。後漢書、延

篤傳「不ㇾ知ニ天之爲ㇾ蓋、地之爲ㇾ輿」圖〇釣り下げたるきぬがさ。又其の形に造りし舞具。〇虚無僧のかぶる深編笠。

【天遲地角】テンチチカク 天のかぎり、地のはて。徐陵文「天遲鴻鵠、地角悠悠」韓愈文「一在ニ天之涯ニ一在ニ地之角ニ」

【天遲如ニ比隣ニ】テンチヒリンノゴトシ 遠隔の地も隣家に居るが如き思をなす。王勃詩「海内存ニ知己ニ一」

【天巧】テンカウ 自然のたくみ。王炎、冬雪行「玉妃剪ㇾ水出ニ一一ニ、飛花萬點爭ニ清妍ニ」＝天工。

【天幸】テンカウ 上天のめぐみ。史、張去病傳「軍亦有ニ一一ニ」

【天郊】テンカウ 王者の天をまつる名。晉書「一一所ㇾ祭曰ニ皇天之神ニ」＝大郊。

【天香】テンカウ すぐれてよき香。李嶠、蓮花賦「貯ニ盈盈之眞色ニ、汎ニ靑靑之一一ニ」

【天香國色】テンカウコクシキ 牡丹の異名。國色は國中第一の美色。王建詩「國色朝酣ㇾ酒、天香夜染ㇾ衣」

【天行健】テンカウケン 天の行はすこやか。易、乾卦「一一、君子以自强不ㇾ息」

【天角】テンカク 天の一隅。庾信詩「奔河絕ニ地維ニ、折ㇾ柱傾ニ一一ニ」

【天樂】テンガク 天上の音樂。劉禹錫詩「雲輧欲ㇾ下星斗動、一一一聲肌骨寒」＝鈞天廣樂。

【天鵝絨】テンガジョウ 織物の一種、びらうど〔西班牙語〕

【天眼】テンガン 圖普通の肉眼にて見ること能はざる物事を見透す眼の力。佛國記「阿那律以ニ一一ニ遙見ニ世尊ニ」

【天眼通】テンガンツウ 圖六神通の一、能く六道の衆生の生死・苦樂の相を見、及び一切世間種種の形色を見て障礙あることなき神通力〔法界次第〕

【天監】テンカン 天がかんがみる、上帝の監視。書、太甲「一一ニ厥德ニ用集ニ大命ニ、撫ニ綏萬邦ニ」＝天鑑・天鏡。

【天漢】テンカン 〇あまのがは、天の中央に多數の星が集りて河の如く見えるもの。詩、小雅、大東「維天有ㇾ漢、監亦有ㇾ光」劉禹錫詩「池色連ニ一一ニ」＝銀河・雲漢・天河。〇漢の武帝の年號。

【天顏】テンガン 天子の御かほ。杜甫詩「遊瀟稀副高陽報、一一有ㇾ喜近臣知」＝龍顏・聖顏。

【天癸】テンキ つきのもの、つきやく。黃帝素問「女子二七而一一至」＝月經・月水。

【天紀】テンキ 天理の運行する自然のみちすぢ、日・月・星辰・曆數の稱、天の綱紀の義。書、胤征「俶擾ニ一一ニ」

【天氣】テンキ 天の氣色をいふ。魏文帝詩「秋風蕭瑟ニ一一涼」＝天候。

【天氣圖】テンキヅ 氣象を觀測する爲めに多くの區域を分ち、每區に於ける天氣の模樣を集合して圖に現はしたるもの。

【天氣豫報】テンキヨホウ 天氣圖により風雨陰晴などの氣象を未然に推測して天氣を豫め知らせる。

【天旗】テンキ 西方にある九星の名〔史、天官書〕

【天器】テンキ うまれつきのはたらき。淮南子「此全ニ其一一者」

【天機】テンキ 〇造化のはたらき。又、意思。淮南子「內有ニ以通ニ于一一ニ」＝天意。幹して機密の義。〇人の天より受けたる機智。莊、秋水「動ニ吾一一ニ」〇國家の機務。吳志、孫權傳「君臨萬國、秉ニ統一一ニ」〇圖天子の御樓輦「一一準ㇾ衡」

【天騭】テンチツ 天馬に同じ。晉書、庾闡傳「莫邪挺ㇾ鍔、一一汗血」

【天弓】テンキウ 虹ニの異名。白虎通「一一虹也、亦名ニ帝弓ニ」

【天牛】テンギウ かみきり。太くひむしの羽化せしもの、甲翅黑く白斑あり、頭に二本の角の如き觸鬚を有し、強く、能く髮をくひ切る。酉陽雜俎「一一、黑角長也」

【天告】テンコク 天のとがめ。楊雄、兗州牧箴「有ㇾ國雖ㇾ久必衰ニ一一、有ㇾ民雖ㇾ長、必懼ニ人殃ニ」

【天球儀】テンキウギ 天球を小さき模型に造り、天體の分布を示したるもの。地球儀の對。

【天均】テンキン 是も非と雖じて爭しきものと觀ずる義。莊子「聖人和ㇾ之以ニ是非ニ、而休ニ乎一一ニ」

【天魚】テンギョ 星の名。甘石星經「一一星在ニ尾河中ニ、主ニ雲雨理ニ陰陽ニ」

【天狗】テンキウ 〇流星の墜るもの。史、天官書「一一狀如ㇾ犬、奔星有ㇾ聲、其下止ㇾ地類ㇾ狗」〇怪獸の名。山海經「陰山有ㇾ獸焉、其狀如ㇾ狸而白首、名曰一一、其音如ニ榴榴ニ、可ニ以禦ニ凶」〇圖人の形して鼻長く、羽あり、深山に棲み空中を飛行するといふ怪物。鼻の高きより轉じて、自慢する者に喩ふ。

【天具帖】テングヂャウ 國美濃に産する質薄く且つ柔かなる紙の名。楮の纖維にて製す。白くして麗し、貴重品を包み、硯子の內貼、又は版木に貼るなどに用ふ。＝典工帖。

【天君】テンクン 心をいふ。荀子「心居ㇾ中虛以治ニ五官ニ、夫是之謂ニ一一ニ」范傑、心箴「君子存ㇾ誠、克念克敬、一一泰然、百體從ㇾ令」

【天火】テンクワ 〇天然に起りし火災。左、宣十六「凡火、人火曰ㇾ火、一一曰ㇾ災」〇陰陽道にて火を慎むべき日。屋根葺・棟上等を忌む。

【天戈】テンクワ 天子のほこ。天兵に同じ。韓愈表「雷厲風飛、日月清照、一一所ㇾ麾、無ㇾ不ニ從順ニ」

【天瓜】テンクワ きからすうり。爾雅「栝樓」注「齊人呼ニ之爲ニ一一ニ」＝王瓜。

【天花】テンクワ 圖はうさう(鉋蒼)

【天花藥】テンクワヤク 圖梁武帝の時、靈光法

師が經を講ぜしときに、天花が散り布きたりといふ故事。高僧傳「梁僧法雲講次、天花散墜」

【天花粉】テンクワフン　あせしらず。木鳥瓜カラスウリの根より製せし澱粉。あせもに撒布して効ありといふ。

【天外】テングワイ　天のそと、非常に遠く或は高き所。

【天潢之派】テンクワウノハ　皇族の稱、天漢は銀河ガンガ皇族は天河の分派の如し、故にいふ。史、天官書「王良旁有ニ八星一絕レ漢曰ニ天潢一」魏、曹圖表「王孫公子、疏ニ派天潢一、宜下親ニ宗室一、強レ幹弱レ枝上」

【天官】テンクワン　○周代の宰相、六職の一。周禮「一ニ冢宰、曰ニ治官之屬一」續「天子建ニ一ニ先ニ六大一、曰大宰、大宗、大史、大祝、大士、大卜、典ニ司六典一」○すべての天子に仕ふる官吏の稱。爾雅「百官小吏曰ニ一ニ」○星の異名。史記自序、注「星有ニ尊卑一、若ニ人之官曹列位一、曰ニ一ニ」

【天恚】テンヰ　天然のわざはひ。周禮「歲時有ニ一ニ民病一」

【天刑】テンケイ　○自然に定まれる法。周禮「上非ニ一ニ、下非ニ地德一」○天より降したまふ罰。‖天譴。

【天刑病】テンケイビヤウ　癩病ライビヤウの一名。

【天啓】テンケイ　天のみちびき、天が人の運命を開き起す。李白詩「明斷自ニ一ニ、大略居ニ豈才一」

【天庇】テンヒ　上帝より賜はるよろこび

【漢書、兒寬傳】禮記「黃者無レ疆、受ニ天之慶一」

【天經】テンケイ　○天より定めし道。孝道をいふ。孝經「夫孝、天之經也、地之義也」○禮をいふ。左、昭二五「夫禮、天之經也」

【天誥】テンカウ　天のいましめ。說苑「妖孽者、天所ニ以警ニ天子諸侯一也、惡夢、所ニ以警ニ士大夫一也、故妖孽不レ勝ニ善改一、惡夢不レ勝ニ善行一」

【天閶】テンカウ　○天帝の居所の門戸。‖天門。○天子の宮門、宮城の門。宋書、桂陽王休範傳「誅ニ一ニ」

【天爵】テンシヤク　帝王の事業。杜牧文「一ニ一張」

【天眷】テンケン　天のめぐみ。又、天子のめぐみ。晉書、周浚傳「非ニ一ニ之隆一、時何以辱レ此」

【天險】テンケン　天然の要害。漢書、陳湯傳「踰ニ崤谷之重阻一、看ニ一ニ之襟帶一」‖天阻。

【天際】テンサイ　天より垂れかかる。世說「絕壁一ニ、曉波迅急」

【天誥】テンカウ　天のとがめ。宋書、文帝紀「上答曰ニ一ニ、下恤ニ民瘼一」‖天罰。

【天吳】テンゴ　海神の名。山海經「朝陽之谷、有ニ神曰ニ一ニ、是爲ニ水伯一、其爲レ獸也、人面八首、八足八尾、皆青黃也」

【天結】テンケツ　天より降したまふさいはひ。詩經「曾孫壽考、受ニ天之結一」

【天竅】テンキヨウ　○かみなり。靈仙禮記「曾

【漢書、兒寬傳】禮記「黃者無レ疆、受ニ天之慶一」

【天經】テンケイ　○天より定めし道。孝道をいふ。孝經「夫孝、天之經也、地之義也」○禮をいふ。左、昭二五「夫禮、天之經也」

【天誥】テンカウ　天のいましめ。說苑「妖孽者、天所ニ以警ニ天子諸侯一也、惡夢、所ニ以警ニ士大夫一也、故妖孽不レ勝ニ善改一、惡夢不レ勝ニ善行一」

【天閶】テンカウ　○天帝の居所の門戸。‖天門。○天子の宮門、宮城の門。宋書、桂陽王休範傳「誅ニ一ニ」

【天爵】テンシヤク　帝王の事業。杜牧文「一ニ一張」

【天眷】テンケン　天のめぐみ。又、天子のめぐみ。晉書、周浚傳「非ニ一ニ之隆一、時何以辱レ此」

【天險】テンケン　天然の要害。漢書、陳湯傳「踰ニ崤谷之重阻一、看ニ一ニ之襟帶一」‖天阻。

【天際】テンサイ　天より垂れかかる。世說「絕壁一ニ、曉波迅急」

【天誥】テンカウ　天のとがめ。宋書、文帝紀「上答曰ニ一ニ、下恤ニ民瘼一」‖天罰。

【天吳】テンゴ　海神の名。山海經「朝陽之谷、有ニ神曰ニ一ニ、是爲ニ水伯一、其爲レ獸也、人面八首、八足八尾、皆青黃也」

【天結】テンケツ　天より降したまふさいはひ。詩經「曾孫壽考、受ニ天之結一」

【天竅】テンキヨウ　○かみなり。靈仙禮記「曾

日ニ一ニ、曾神曰ニ曾公一ニ」○河鼓星の別名。晉書「在ニ牽牛北一ニ一也」

【天語】テンゴ　天子の御言葉。李白賦「聽ニ一ニ之察察一」歐陽詹、拜勅詩「丁寧一ニ深、曉諭皇恩闊」

【天工】テンコウ　自然になりたるたくみ。陶偃、新鐫刻銘「神道無レ跡、一ニ窄レ代」‖天匠・神造。

【天公】テンコウ　天帝に同じ（晉書、天文志）

【天功】テンコウ　自然のはたらき。書、舜典「欽哉惟時、亮ニ一ニ」

【天后】テンコウ　○天子をいふ。宋史「諸侯戰レ伯、一ニ當レ陽」○則天武后の稱。唐書、高宗則天皇后武氏傳「進ニ號一ニ」

【天候】テンコウ　そらもやう。‖天氣。

【天構】テンコウ　天然につくられる。任昉文「一ニ匠者何工」

【天閡】テンコウ　天上のくに。耶蘇教にて靈を贖はれし人の靈魂が死後に行くといふ天上界。‖天堂。

【天骨】テンコツ　うまれつきての骨格。晉書、裴楷傳「一ニ疎朗」

【天閾】テンコン　天門のしきみ。漢書、揚雄傳「一ニ決今地振開」謝じて、九重、又は雲上の義とす。

【天閹】テンコン　○天帝の居所の門。楚辭「命一ニ其開關兮」○帝王の宮門。

【天假之年】テンカクシネン　いのちを延ばす義。左、僖二八「晉侯在レ外十九年矣、而果得ニ晉國一、險阻艱難備嘗レ之

矣、民之情僞、盡知レ之矣、——而除ニ其害一、天之所レ置、其可レ廢乎」

【天才】テンサイ　うまれつき才智すぐれる。又、其の人。北史、李德林傳「識度一ニ、必至ニ公輔一」

【天災】テンサイ　天然のわざはひ、水旱・地震・疫癘など。左、僖十三「一ニ流行」

【天宰】テンサイ　百官の長。唐書、李吉甫傳贊「古甫踐ニ一ニ、謀謨是先」‖冢宰。

【天戮】テンリク　天子の御裁決。‖勅裁。

【天際】テンサイ　天のはて。謝朓詩「一ニ識ニ歸舟一、雲中辨ニ江樹一」‖天末。

【天造】テンザウ　天然につくられたるもの。

【天造草昧】テンザウサウマイ　運の未だ開けざる時をいふ。一傳に天造は天の始めて物を造る義にて、雜亂晦昧、天下未だ定まらず、名分未だ明かならざる時をいふ。草は亂雜、昧は晦冥。易、屯卦「——、宜レ建レ侯、而不レ寧」

【天作】テンサク　天然につくられたるもの。韓愈文「一ニ而地藏レ之」

【天山】テンザン　一名雪山、新疆の境内にある山。

【天産】テンサン　天然の產出物、天產物。張翰文「青壁自ニ孚一ニ、道琢奚ニ于匠人一」

【天產物】テンサンブツ　天然に產出する物。

【天誅】テンチウ　天誅に同じ。吳志、賀邵傳

「拓レ土萬里、畧レ承二一一一、實由二人力一也」

【天蚕絲】テンサン てぐす。天蚕の繭より取りし絲。釣絲などに用ふ。

【天子】テンシ 君主の敬稱。天の命を受けて一國の君たる人。書、洪範「一一作二民父母一、以爲二天下王一」＝天皇・皇帝。

【天士】テンシ 天道を知れる者。史、李尋傳「披二擢一一一、授以二大職一」

【天耳】テンジ 天のみみ〔周志、秦策傳〕

【天使】テンシ ○日月をいふ。淮南子「日月者天之使也」○流星をいふ〔晉書、天文志〕○天子の使。通鑑、唐紀「大尉待二一一一不敬」○耶蘇教にて天帝の命を受けて人に現はるるといふ靈物。

【天時】テンジ 天のとき、時日支干孤虚旺相の場をいふ。孟、公孫丑「一一不レ如二地利一、地利不レ如二人和一」

【天資】テンシ うまれつき。史、商君傳「商君者、其一一刻薄人也」＝資性。

【天關】テンカン 星の名。星經「房四星一名二天旗一、二名二一一、三名二天駟一、四名二天馬一」

【天賜】テンシ 天のたまもの。蘇軾詩「一勺亦一一、曲レ肱有二餘歡一」

【天日】テンジツ てんぴ。韓愈文「指二一一一」

【天日】テンジツ 湯泣誓二生死不二相背負一」＝太陽。

【見二天日一】テンジツヲ ○帝位に復するに喩ふ。舊唐書、韋庶人傳「帝在二房州一時、常謂レ后曰、一朝一一、誓不二相棄忘一」○又、罪人が赦免せらるるにもいふ。

【天疾】テンシツ 生れつきての惡疾。穀梁、昭二十「有二一一一者、不レ得レ入二乎宗廟一」

【天質】テンシツ うまれつき。後漢書「因二一一之自然一、論二上哲之高訓一」＝天稟・天性。

【天心】テンシン ○天帝のこころ。書、咸有一德「克享二一一、受二天明命一」○天の中央。邵雍詩「月至二一一一處、風來二水面一時」

【天津】テンシン 直隸省に在り、大運河と白河と會する所の南岸に位し、北京の咽喉にして、北支那第一の通商港。

【天眞】テンシン 天然のままにてかざりなし。人の本性をいふ。晉書、阮籍傳「保二一一一」

【天眞爛漫】テンシンランマン 自然のままがあきらかに見える。自然のままにうつくし。

【天神】テンジン ○天の神。地祇の對。周禮「掌二建邦一一人鬼地示之禮一」○〔佛〕圓書原道眞を祀りし天滿宮の稱。

【天匠】テンショウ 天工に同じ。謝羽詩「斧鑿自一一」

【天章】テンショウ 天のあや、天文。李參詩「一一降二三光一、垂澤被二九州一」

【天常】テンジョウ 五常の道をいふ。揚子法言「吾見二一一一、舍二帝王之統一也」

【天賞】テンショウ 上帝の賞與。呂覽「有二一一得レ舍レ主」

【天漢】テンカン あめのかわ、天地。張協、詠二二疏一詩「濟風激二萬代一、名與二一一一俱」

【天壤無窮】テンジョウムキュウ 天地とともにきはまりなし。

【天上天下唯我獨尊】テンジョウテンゲユイガドクソン 〔佛〕天地開闢に於て己に及よものなし。傳燈錄、釋迦牟尼佛初生、一手指レ天、一手指レ地、周行七步、目顧二四方一曰、——」＝天上天下唯我最尊〔大莊嚴經〕

【天上石麒麟】テンジョウノセキキリン 小兒のすぐれたるを褒むる語。陳書、徐陵傳「徐陵年數歲、沙門寶誌、至レ陵二其頂一曰、——也」

【天錫】テンシャク 天よりたまはる。書、仲虺之誥「天乃錫二王勇智一、表二正萬邦一」＝天賜・天授。

【天爵】テンシャク 天より受けたる美德にして自然に尊き者。人爵の對。孟、告子「仁義忠信、樂レ善不レ倦、此一一也」

【天赦日】テンシャビ 〔曆〕毎月の八日の稱。○〔陰陽〕曆にて年に四回ある最上の吉日。

【天守】テンシュ 〔圍〕城の建物の一、本丸の中に幾層にも高く造れる櫓＝天主・天守閣。

【天酒】テンシュ 甘露の異名。瑞應圖「甘露、美露也、神靈之精、仁瑞之澤、其凝如レ脂、其甘如レ飴、一名膏露、一名一一」

【天授】テンジュ 天よりさづかる。史、淮陰侯傳「陛下所レ謂一一、非二人力一也」

【天壽】テンジュ 自然にさだまりたる壽命。書、君奭「一一平格、保二又有殷一」＝天年。

【天主教】テンシュキョウ 耶蘇舊教の一派、羅馬法王を教主と仰ぐもの。最も早く我國に傳はる。

【天狩】テンシュ はははきぼし、彗星。漢書「彗星曰一一」

【天序】テンジョ ○時候の順序。＝天時。○帝王の世つぎ。漢書、成帝紀「惠仁孝順、可下以承二一一一上繼中祭祀上」

【天助】テンジョ 天のたすけ。王安石文「天下無事過二千百年一、雖レ曰二人事一、亦一一也」＝天佑・天祐。

【天壽】テンジュ みことのり。王維詩「一一拜二夕郎一」＝詔敕。

【天縱】テンショウ 天よりゆるさる。論、子罕「固一一レ之將聖、又多能也」名義錄「一一生知、不二從レ師學一」

【天職】テンショク ○天帝の職。列、天瑞「一一生覆、地職形載」○天子の職。民を治むるは天の命に由る、君主の專らにする所にあらず、故に一一といふ。荀子「一一既立、天功既成」○天より命ぜられたるつとめ。孟、萬章「弗二與共二天位一也、弗二與治二一一一也、弗二與食二天祿一也」

【天樞】テンスウ 北斗七星の第一位に在る星にて、北極の樞軸をなすもの〔晉

書、天文志」＝斗極。
【天水】テンスイ あまみづ。雨水。
【天粋】テンスイ 天然の儘にて雑りなし。黄庭堅文「惟一一之質、可二以琢磨成一レ器」
【天瑞】テンズイ 天より降すめでたきしるし。漢書、董仲舒傳「一一應レ誠而至」
【天井】テンセイ ○上棟の中に於て木を交へて方形とし、井幹の如き者。藻井ともいふ。藻は水草、井は星宿、皆火を厭する爲めなり。謝朓、拝敬府「臥觀一一懸」○テンジャウ 圖 屋根うらのはりいた。
【天生】テンセイ 天が物を生ずる。易、繋辞「一一之神物、聖人則レ之」
【天成】テンセイ 自然に成る。晉史「故曾侯、紙、氣韻一一」
【天性】テンセイ うまれつき。禮、樂記「人生而靜、天之性也、感於物而動、性之欲也」＝天賚・天稟。
【天晴】テンセイ 地震・風雷・洪水などの天然のわざはひ。後漢書、安帝紀論「推二尋吉凶一、以答二一一一

【天長節】テンチヤウセツ ○唐の玄宗皇帝の誕生日の名。明皇實錄「開元十七年百官上表、請以二八月五日一爲二千秋節一、天寶七年改爲二——一」○國三大節の一、天皇陛下の御誕生日を賀する祝日。

【天長地久】テンチヤウチキウ 天地は長久にして盡きず。老子「——、天地所二以能長且久一者、以レ不二自生一、故能長生」

【天柱】テンチウ ○天の墜ちざるやうに支へて居るはしら。次條參看。○屋の名。晉書、天文志「三台六星、一曰二——一、三公之位也」

【天柱折】テンチウセツ 天下の大いに亂るるに喩ふ。史、三皇紀「——、地維絶」

【天誅】テンチウ 上帝のみこころ。‖天罰。

【天誅】テンチウ 天命を奉じて殺す。孟、萬章「伊訓曰、——造攻自二牧宮一」淮南、脩務「舜伐二有苗一、——加二於三苗一」

【天廚】テンチウ 天子のくりやの食物をおくる。毛詩、王風「——、金罍維酒恰」

【天中節】テンチウセツ 陰暦五月五日の午時（提要錄）

【天竜】テンチウ ○天帝のいつくしみ。易、師卦「承二——一也」○天子のめでいつくしみ。劉孝綽詩「自レ昔承二——一、於レ茲被二人爵一」

【天帝】テンテイ 萬物造化の神。雲笈七籤「四司者——之輔官也」

【天庭】テンテイ ○屋の名。晉書、天文志「大微爲レ衙、又爲二——一」○天帝の居所の庭の義。法苑「仰二——一而知二天下之居一卑也」○額頭ひたひをいふ。

【天廷】テンテイ 上帝のおきき。又、帝王のおきき。書、泰誓「天視自二我民視一、——自二我民聽一」

【天朝】テンテウ 朝廷の敬稱。宋史「唯堅二臣節一、上奉二——一」‖皇朝。

【天假レ手】テンカテ 天は人力を假りて行ふをいふ。書、伊訓「皇天降レ災、假二手于我有命一、造攻自二鳴條一」

【天柱】テンチウ 天子のたとへ。天子のちから、天子の事業。史、高祖紀「使二人不レ得レ——一矣」

【周レ天浹レ地】シウテンケフチ 甚だおそれて身を容るるに地なし。周はせぐくまる、浹はぬきおし。詩、小雅、正月「——天盜而不二敢不一局、謂二地蹐而不一敢不一跼」‖局蹐。

【天無二私覆一】テンムシフ 天道は、無私公平なるをいふ。禮、孔子閒居「——、地無二私載一、日月無二私照一」

【天無二二日一】テンムニジツ 天に二つの日なき如く、國を治むるは一君に限る義。禮、曾子問「孔子曰、——、土無二二王一」

【天女】テンニョ ○女の天人。又、女神。○女神の名に添へる詞「吉祥——」○燕の異名「採蘭雜志」○織女星の異名。史、天官書、注「織女一名——、天子女也」

【天年】テンネン 天より受けたる壽命。史、刺客傳「老母今以二——一終」‖天壽。

【天然】テンネン 自然のまま。じねん。史、主父偃傳「陛下——之聖、寬仁之資」

【天之詐】テンシノイツハリ 詐は謀なり。天詐參看。

【知二天之天一】テンノテンヲシル 天の萬物を生育する理を知りて、之を崇敬する義。史、孟子傳「臣聞、——者、王事可レ成、不レ知二天之天一、王事不レ可レ成、王者以二民人一爲レ天、而民人以レ食爲レ天」

【天作孽猶可レ違、自作孽不レ可レ逭】テンノサクルゲツハユルスベシ、ミヅカラノサクルゲツハノガルベカラズ 天より降せる災は避くべきも、自ら招きたる禍は到底逃るべからず。書、太甲「欲敗レ度、縱敗レ禮、旣連二于厥躬一——」孟子には道を活に作る。

【天之道】テンノミチ 酒をいふ。漢書、食貨志「酒天之美祿、頤二養天下一」

【天之曆數】テンノレキスウ 帝王相襲ぐ次第。論、堯曰「堯曰、咨、爾舜、——、在二爾躬一」

【天馬】テンバ ○上帝の乘りて空を駈け行く馬、伯樂星の司る馬。○大宛國より産する名馬。史、樂書「後代二大宛一得二千里馬一、作レ歌」‖天騏 汗血 千里馬。

【天葩】テンパ 天然にうつくしき花。韓愈詩「——吐二新芬一」

【天杯】テンパイ 天子より賜はるさかづき。上官昭儀詩「宸翰頒二諸仰一、——接二獻酬一」

【天寶】テンパウ ○天然の珍寶。王勃文「物華——、龍光射二牛斗之墟一」○唐玄宗の年號。

【天保九如】テンポウキウジヨ 人の長壽を祝する語。詩、小雅、天保第一章「天保二定爾一、以莫レ不レ興、如レ山如レ阜、如レ岡如レ陵、如二川之方一至一、以莫レ不レ增」同第二章「如二月之恒一、如二日之升一、如二南山之壽一、不レ騫不レ崩、如二松柏之茂一、無レ不二爾或一承」

【天閒】テンカン 天より降す刑罰。書、甘誓「今予惟恭行二天之罰一」

【天牛】テンギウ そらのなかば。儒光義詩「初日照二龍門一、我在二——一」‖中天。

【如二天半雲一】テンハンウンノゴトシ 山などの聳え立つ貌。三秦記「華山在二長安東三百里一、不レ知二幾千仞一、——」

【天翻地覆】テンプクチフク 天ひるがへり地くつがへる、極めて秩序の亂るるをいふ。中庸或問「三辰失レ行、則必——」

【天妃】テンピ ○海神の名「元史、成宗紀」‖天后。○國辨才天の異稱「——廟」

【天庇】テンピ 天の加護。又、君主の加護。齊映、出官後自敍表「臣有二微功一、實由二——一」

【天秤】テンビン 天平に同じ、物の重さを量る器械。

【天稟】テンピン 天より受けたる性質。王安石詩「予生少而懋、好レ古乃——」‖天賦。

【天付】テンプ ○うまれつき。晉唐書「神

傳將略、一一忠貞」‖天生・天稟。○天よりさづかる。文同詩「中間列二亭榭一佳景賞一一」

【天府】テンフ　○產物の豊かなる地。戰國策「沃野千里、蓄積饒多、地勢形便、此所レ謂一一也」○天然に要害よき地。漢書「據二一一地一以レ義征伐」○深間の深き所。荀子「學問不レ厭、好レ士不レ倦、是一一也」

【天符】テンフ　天より降す祥瑞。宋書、樂志「陛下長惟樂、永世合一一」

【天賦】テンフ　天よりさづかる。舊唐書、傳宗紀「河中節度使王重榮、神在社烈、一一機謀」‖天付・天稟・天授。

【天覆】テンフク　○天のおほふかぎり、天が下。中庸「天之所レ載、地之所レ載」○天の廣くおほふが如く、ひろく布き及ぶ。漢書、匡衡傳「陛下聖德一一、子二愛海內一」

【天福】テンプク　天より降したまふさいはひ。列子「可二以生一而生、一一也」

【天物】テンブツ　天然に生ぜし物。次條參看。

【暴二天物一】バクテンブツ　天の生ぜる萬物をそこなひあらす。禮、王制「無レ事而不レ田、曰二不敬一、田不レ以レ禮、曰二暴天物一」書、武成「暴二殄天物一、害二虐流民一」

【天竺】テンジク　國支那にては棒不技テンジクといふ、一說に油の萬葉假名なりといひ、或は山東京傳の天竺浮浪人云云の說などあれども、何れも

準據の甘なり、調理法と語調とより考ふれば洋語たること疑なし、或は天竺（洋人の舶來の義）のフライの轉訛か。

【天分】テンブン　天より受けたる性質。又、運命。魏志「自窒レ出二吾一一」

【天兵】テンペイ　天子の兵、官軍をいふ。揚雄、長楊賦「一一四臨」明史「一一下二紫禁城一」‖王師。

【天陸】テンリク　農家のさざはし。王庭珪詩「此去飛騰資二一一」

【天表】テンピョウ　○天外に同じ。班固賦「遊二目於一一」○帝王の儀容をいふ。晉書、裴秀傳「一一如レ此、固非二人臣之相一也」

【天漏】テンロウ　そらのつむじかぜ。陳子詩「手間一星漢一如レ可レ近、俱見一一吹レ雲露濕」‖天颱。

【天璇】テンセン　星の名。星經「一一十五星在二斗南一」

【天壇】テンダン　大空のほとり、そらのはて、又、極めて遠き地。杜甫詩「一一常作レ客、老去一何市」

【天狼】テンロウ　天上の星宿、風・雷・日蝕の類を掌る、萬望之傳「客二於一一」

【天姥】テンボ　山名。浙江省新昌縣の東五十支里に在りて、天台山と對立す。方輿勝覽「台州有一一山」謝靈運詩「脫屐二剡中一宿、明登一一峯」嚴宇記「登二此山一者、或聞一一歌謠之聲一、故名」

【天歩艱難】テンポカンナン　天運未だ回らずして、時の艱難なるをいふ。詩、小雅、白華「一一、之子不レ猶」

【天朗氣清】テンロウキセイ　天色明朗にして氣候清和なり。蘭亭集序「是日也一一、惠風和暢」

【天麻】テンマ　藥草の名。木草「一一即赤箭、生二鄖州利州泰山勞山諸處一」

【天魔】テンマ　人を惡道に誘ふ天上の妖鬼。大盡法數「此魔即欲界第六天也（中略）爲一一、爲二障碍一」蘇軾詩「明星未レ出萬家閒、外道一一猶奏レ樂」

【天網恢恢疎而不レ失】テンモウカイカイソニシテフシツ　網は網に同じ。天の網は目あらきが如きも、善惡の報漏らすことなし、失一本に漏に作る「老子」

【天末】テンマツ　そらのはて。何遜詩「一一靜二波瀾一」‖天涯・天際・天杪。

【天幕】テンマク　厚き麻布などにて造り、野營の時張りて、雨露を凌ぐもの。

【天民】テンミン　天の法則に從ふ民。孟、盡心「有一一者二、遵可レ行二於天下一、而後行之者也」

【天命】テンメイ　○天の命令、天より受ける運命。論、爲政「五十而知一一」書經「誕膺一一、以撫二方夏一」○天が命ずる。中庸「一一之謂レ性」書、皐陶謨「一一有德、五服五章哉」

【天目山】テンモクサン　山の名。十道山川攷「一一在二臨安府於潛縣北六十里一、有二兩峯一、峯頂各一池、左右相對、名曰二天目一」

【天不レ言】テンイハズ　天は言葉を出さず。荀子「一一、而人推レ高焉、地不レ言、而人推レ厚」

【天文】テンモン　天のあや、天體の現象、曇、虹、蜃氣「仰觀二於一一」

【天文臺】テンモンダイ　天文を觀測する爲めに設けたる高きもの。‖司天臺。

【天門】テンモン　○天上の門戶。天門登八參看。○こころ、一說に、大道をいふ。○道家にて鼻孔をいふ。老子「一一開闔、能無レ雌乎」○兩眉の閒をいふ。‖天庭。○宮城の門。杜甫詩「一一日射黃金牌」‖君門。

【天門冬】テンモンドウ　藥草の名、杉の葉に似、夏小白花を開き黑き實を結ぶ。根を砂糖漬とし又藥用に供す。

【天門登八】テンモンタツ　下文の陶侃の故事によりて、仕官して始どその極に近づくに喩ふ。晉書、陶侃傳「侃夢生二八翼一、飛而上レ天、見二天門九重一、已登二其八一、惟一門不レ得レ入」

【天庾】テンユ　星の名。晉書、天文志「天倉南四星、曰一一、積二廐粟一之所也」

【天與】テンヨ　天賦に同じ。

【天與弗レ取反受二其咎一】テンヨトラザレバカエッテソノトガヲウク　天の與ふる所を取らざれば反りて其の咎を受く。遠周書「一一、當レ斷弗レ斷、反招二其亂一」

【天籟】テンライ　自然に鳴る風などの聲。地籟・人籟の對。莊、齊物「女聞二人籟一、而未レ聞二地籟一、女聞二地籟一、而未レ聞二一一一夫」轉じて、詩文などの

殊に巧妙にして、自然の節奏にかなへるにいふ。

【天籟】テンライ　道家の説にて、正月一日の祭の名（歳華紀麗）

【天覧】テンラン　天子の御らん。

【天吏】テンリ　天の命を奉ずる官吏。天道を行ふ有徳の人、即ち王者。孟、滕文公「無レ敵二於天下一者一一也」

【天理】テンリ　天地自然の道理、天の萬事萬物を支配する正しき條理。禮、樂記「好悪無レ節二於内一、知誘二於外一、不レ能レ反レ躬、天理滅矣」⇒天道。

【天理教】テンリキョウ　國天保年中、大和の中山みき女の唱道せし神道、國常立尊以下伊弉册尊に至る数柱を合せて天理王命と名づけて祭る。

【天翔】テンショウ　ひばりの異名。⇒告天子・雲雀。

【天倫】テンリン　兄弟をいふ、兄は先にして弟は後なること自然の倫次なり。毅梁、民、元「兄弟一一也」李白文「会二桃李之芳園一序一一之樂事一」

【天幕】テンマク　たての實をいふ。本草「栝蔞一名一一一名野甜、一名澤姜」

【天緑】テンリョク　○天より降すさいはひ。論、我曰「四海困窮、一一永終」○天より授かりし俸禄

【天泥】テンデイ　雨の多く降る義。杜市詩「安得レ森二雨師一、駕能掃二一一一」

【天蛾】テンガ　けむすくもむし。古今注「蛾蚕一名一一、一名碩鼠」

【天王】テンワウ　○天子の稱。晉「一一諸夏之所レ稱、天下所二歸往一、故稱二一一一一」史、孝文紀「所レ謂一一者乃天子」○國佛の名に添へる稱「牛頭一一」

【天王星】テンワウセイ　太陽系に屬する七遊星の一、第七位の星。太陽より平均距離七億二千萬里、直徑は一萬三千里、八十四年に太陽を一周す。

【天皇】テンノウ　至尊の稱。唐書、高宗紀「改二皇帝一稱二一一一一一」⇒天子・皇帝。

【天津日嗣】アマツヒツギ　國天子のみくらゐ。

【夫】フ　ホ　図　一畫　フウ

○をとこ、をのこ、一人前の男子。○賦役として公事に勞動する男。⇒成丁。○をっと（良人）○それ、發語の辭。○かの、物事を指す。論、憲問「管一一三子」○かな、語の已む辭、感歎の意を表す。論、子罕「逝者如レ斯一一」

【夫子】フウシ　○先生・長者の尊稱の左文、元「孤貧賤以喝二一一一一何罪」○師を尊び稱す、單に子といふに同じ。論、學而「一一温良恭謙」○將士を指していふ。書、泰誓「勗哉一一」○大夫の位に在る者を呼ぶ敬稱。論、憲問「信乎一一不レ言不レ笑不レ取乎」○妻、其の夫を稱す。孟、滕文公「必敬必戒、無レ違二一一一」

【夫婦】フウフ　をっと、つまと。めうと。小學、明倫「禮始二於謹二一一一」⇒諸夏之妻。

【夫婦別】フウフノベツ　夫と妻と、各職分を守りて相犯さざる道。五倫の一。禮記「一一、父子親」

【夫役】フエキ　えだち、人夫となりて公事に服するつとめ（續文獻通考）

【夫家】フカ　女がかたづきたる家。よめに行きし夫の家（漢書、劉向傳）

【夫君】フクン　妻が夫を敬ひて稱す。高駢、閨怨詩「人世悲歡不レ可レ知、一一初破二黒山一歸」

【夫讐】フシュウ　ふやくの宋書「事是既隔、一一又嚴」⇒夫役。

【夫妻反目】フウサイハンモク　夫婦なかのあしき義。易、小畜「九三輿説レ輻、一一」

【夫人】フジン　○古、人の母の稱。史、刺客傳「進二百金一舊、將二協用一一一嚴報之役一得以交二足下之歡一」○古、己の母の稱。後漢書、歴本傳、注「汲南記云、元人謂レ人曰、此我故婦非レ有二他過一、家一一、遇レ之貧酷」○天子の妾、后の次位。周禮、考工記「一一以勞諸侯」○諸侯の正妻。又貴人の妻。曲禮「天子之妃曰レ后、諸侯曰二一一一」夫は扶にして道を以て人を扶くる義。○漢魏以來諸侯の妻にあらざるも尊く貴人の妻の敬稱とす「馮一一」「衛一一」○人人の義。左傳「一一恣痛、不レ知レ所レ庇」注「一一猶二人人一」○國古は女官の稱。今は貴人の妻の稱。

【夫須臾逸】フシュユイツ　養笠なり、夫須はすげ（草の名）養笠に作る、故に笠の義、臾逸は短靴の形、簑を形容す、よりて養の義とす。陶潜里詩「倘書親餉老農夫、養レ道夫須與二臾逸一」

【夫税】フゼイ　田百畝の税（周禮、載師、注）

【夫壻】フセイ　をっと。王維詩「一一輕商兒」

【夫倡婦隨】フショウフズイ　夫婦の道をいふ。陽尹子「天下之理、夫者倡、婦者隨」

【夫容】フヨウ　芙蓉に同じ。崔豹子「一一芰荷」

【夫布】フフ　周の法、職業なき者に課する税布。周禮「凡無レ職者出二一一一」⇒次條參看。

【夫里之布】フリノフ　夫布と里布と、夫布は一夫力役の征、里布は桑麻を植ゑざる者を罰して課する税。孟、公孫丑「廛無二一一一一一、則天下之民皆悦、而願レ爲二之氓一矣」

【央】　図　一畫　オウ　エイ・ヤウ

㊀なかば、まんなか（中半）上官儀詩「明月樓中夜未一一」○つく（盡）漢武帝、李夫人賦「惜一一蓄華之永一」○一一は廣き貌。○ひさし（久）とほし（遠）㊁一一は聲のやはらぐ（和）貌。又、あざやか、鮮明なる貌。

【央央】オウオウ　○衆の卻げる貌。詩、周頌

「龍旂陽陽、和鈴――」○鮮明なる貌。詩、小雅「白駒――」○――アクハひろき貌。司馬相如、長門賦「覧二曲室之――一」

【失】㊀シツ ㊁イツ 質 屑

㊀うしなふ、うす、無くなる。○はなつ（縦）○あやまち、あやまつ（過・錯）○わする（遺）知らず。㊁にく、にがす、逸・佚・軼に通ず。

同訓異字 失・喪・亡○失は得の反、取り失ふ義。普通「時歳不レ可レ失」又、仕損ずる義にも用ふ、過失の如し。○喪は亡になり、なくなりしこと、失と通ず、喪レ気・喪明の如し。○亡はほろびうせたる義。滅亡・死亡の義、失と通ず。家語「楚人亡レ弓、楚人得レ之」

【失意】イシ 思ふやうにならず、意の如くならず。得意の対。劉禹錫詩「秋霧満頭惟二消釋一、莫レ謂無レ情――者」

【失限】シゲン うしなひおとす。左伝「幸承以来、弗二敢――一、而致二諸宗祧一」

【失脚】シキャク 足をふみはづす、つまづく。蒙求「郤詵「不レ覚――亦墜二子井一」陸游詩「――墜二世網一、衰病忽使尊」

【失墜】シツツイ 叙は御、馬を御する法をあやまる。転じて、國家を統御する法をあやまる、又其のこと。舊唐書、任瓌傳「陪氏――、天下沸騰」

【失墟】シキョ よりどころをうしなふ。恃む所を失ふ。後漢書「州郡――、長吏多逃亡」

【失偶】シグウ 失儷に同じ。＝失縄。

【失火】シカ 過ツテ火を出す。風俗通「城門――、殃及二池魚一」唐の柳宗元に賀二誅士王叔元一一書あり。

【失計】シケイ しそこなひ。宋史「謂周之――、未レ有下如二東遷之甚一者上」＝失策。

【失敬】シケイ ○礼儀にはづれる、そさうする。＝無礼・失礼。○国俗に御免を蒙る義に用ふる「お先に――」

【失業】シゲフ 職をうしなふ、生活の道を失ふ。＝失職。

【失己】シキ いひそこなふ。いひすぎ。戦国策「国二於患一――」於レ君、再拝釋レ罪。＝失口・放言。

【失誤】シゴ あやまり。＝過失・過誤。

【失口】シコウ 失言に同じ。礼記「不レ――二於人一」＝過言。

【失策】シサク しそこなひ。しくじる。＝失錯。

【失錯】シサク しくじる。錯は乱。周礼、太史、疏「恐二事有一――一」

【失辞】シジ いひそこなひ。左傳「行人――レ」＝失言。

【失神】シシン きぬけ。精神を失ふ。＝喪神。

【失真】シシン まことの道をうしなふ。李白詩「樸散不レ復レ古、時訛皆――レ」

【失鉦】シセイ 道物のなまにえ、又、にえすぎたる義。論、郷党「――レ不レ食、不レ時不レ食」

【失躁】シソウ 失踪に同じ。

【失色】シキショク ○いろをうしなふ、顔色をかへる。驚きおそるることの甚だしきにいふ。晉書「前鋒失レ利、矢及二馬首一、左右――レ」○人に対して容貌のおどそかならざる義。礼記「不レ――一於人一」

【失礎】シソ 失策に同じ。

【失政】シセイ 政をあやまる、あやまれる政。淮南、時則「三月――レ、九月不レ下レ霜」

【失笑】シショウ こらへきれずしてふきだす。蘇軾詩「諸生聞レ語定――、冬暖誠レ寒夜無レ帳」＝噴飯。

【失跡】シセキ あとかたをなくす。韓愈詩「中間不レ得レ意、――成二遷延一」＝失踪。

【失踪】シソウ あとかたを失ふ、すがたをかくす。逐電する、踪は蹤。

【失態】シタイ 醜態をうしなふ、体面をけがす。＝失礎。

【失体】シタイ 事体をわきまへず。又、面目を失ふ。北史「吏書――、便加二疑譴一」

【失当】シタウ 理に合はず、正当の道にかなはず。＝不当。

【失期】シキ ともを失ふ。洞簫賦「亡レ儔――レ」＝失時・後通ず。

【失墜】シツツイ うしなひおとす。左傳「羣臣以レ死守レ之、弗二敢――一」＝失隕。

【失徳】シトク 礼義に外れる。又、其の行。

【失念】シネン わすれる。道教經、常当二無レ念在レ心、若――者、則失二諸功徳一」＝忘却。

【失魄】シハク 詩句の平仄の調はざるもの。集陳鵠、耆旧続聞「表啓之類、近代聲律尤厳、或乖二平仄一、則謂二之――一」

【失敗】シハイ しくじり。＝失錯。

【失望】シバウ のぞみかなはず。あてがはづれる。漢書「項羽居二咸陽一、殺二秦降王子嬰一、焼二宮室一、收二資貨婦女一而東、秦民――」

【失費】シヒ つひえ、いりめ。

【失名】シメイ 名がわからぬ、名を忘れる。＝逸名。

【失明】シメイ めくらになる。史記、自序「左丘――レ、厥有二国語一」

【失命】シメイ いのちを失ふ、生命をなくする。

【失理】シリ 道理にはづれる。詩經、序「政教昏レ失者非レ無二政教一、但施レ之――レ耳」＝非理・背理。

【失体】シタイ 体儀を失ふ、そきうをする。荀子「公侯――レ則幽」＝失敬・無礼。

【失貌】シバウ つれあひをうしなふ。＝失偶。

【失措】シツソ 國こひがかなはぬ、そはれぬ様。
【失路】シツロ みちにまよふ、出身の道をうしなふ、出世をあやまる、志を得ざるに喩ふ。揚雄、解嘲「當ル塗者升二青雲一、ー レ ー者墳二溝壑一」塡一に委に作る。

【夲】タウ トウ

本とは別字

○すすむ(進)おもむく(趨)○おほひたもつ(奄有)

【夷】イ

○たひらか(平)○たひらぐ(平)○やすし、やさしい(安易)○大いなり。○つね、人の常に守るべき道。孟、告子「民之秉ー」‖彝。○つらぬ(陳)○えびす、野蛮人「東ー」○きず(創)‖痍。○きずつく(傷)○かる(芟)○すき、鋤の類。○敵を誅し滅ぼす、悪人を除く。○たぐひ(等)○ともがら、たぐひ(儕・等)曲禮「在レ醜ー不レ爭」○足を展べてすわる。あぐらかく。論、憲問「原壤ー以俟」‖箕坐。○陵ーは次第に衰ふ。漢書、成帝紀「帝王之道日以陵ー」【夷易】イヤ やすらか、たやすし。‖平易・夷簡。
【夷由】イイウ ○むささびの異名(爾雅、疏)‖猶豫。○行かずしてためらふ(後漢書、馬融傳)
【夷猶】イイウ ためらふ貌。離騷、九歌「君不レ行兮ー ー」‖夷由・猶豫。
【夷悌】イテイ よろこぶ。詩、豳頌「我有二嘉客一、亦不二ー ー一」‖夷悅。
【夷悅】イエツ よろこぶ。夷は怡に同じ。家語「四海之舟與所レ及、莫レ不二ー ー一」‖夷悌・夷愉・怡悅。
【夷狄】イテキ 夷狄と、中國と。陳書、陸子隆傳「綏二集ー ー一、甚得二民和一」
【夷界】イカイ えびすの土地。杜甫詩「ー ー荒山裏、蒼州歳晩時」
【夷考】イカウ をしなべて平かに考へる。孟、盡心「ー ー二其行一而不レ掩者也」
【夷路】イロ 平易にしてわづらはしからず。平淡にし實樸なり。梁書「性託二ー ー一、特愛二林泉一」
【夷踞】イキヨ 足をなげ出してすわる。後漢書、孝容傳「衆皆ー ー相對」‖箕踞。
【夷曠】イクワウ 平らかにしてひろし。
【夷險】イケン 土地の平坦なると、險惡なると。又、順境と、逆境と。晉書「分二ー ー一、序二長幼一」‖險夷。
【夷敵】イテキ 土が平らかにひろし。應璩文「沙鹵ー ー」‖平敵。
【夷傷】イシヤウ 傷つく、きりきず。又、傷つけられし者。左傳「命二軍吏一察二ー ー一、補二卒乘一」‖顔延之誄「勉二慰ー ー一、捐二遑餘痛一」‖創傷・創痍。
【夷斉】イセイ 伯夷・叔斉の二人。
【夷陌】イヒヤク 伯夷と盜跖と。善人と惡人との義。沈炯詩「彭殤無レ異レ歸、ー ー可レ同レ朝」
【夷然】イゼン 平かなる貌。安らかなるさま。
【夷滅】イメツ 三族をきりたひらく。晉書「恣二ー ー一、取二快情意一」
【夷則】イソク 十二律の一、陰暦七月に配す、よりて七月の異名とす。史、律書「七月律中二ー ー一」‖者、言二陰氣之賊一萬物一也」夷は傷ふ、則は法、萬物が刑法を被る義。
【夷門】イモン うづくまる。王褒文「入レ市不レ得二ー ー一、夜臥二廣莫一」‖踞居。
【夷道】イダウ たひらかなるみち。淮南、原道「馳二騁ー ー一」‖坦途。
【夷猶】イユウ やすくおだやか。晉書、食貨志「八表ー ー、區内輯寧」
【夷坦】イタン 道が平らか。又、心がたひらか。南史、文學傳「胸襟ー ー、有二士君子之操一焉」‖坦夷。
【夷狄】イテキ えびす、野蛮人。夷狄戎狄を見よ。‖戎狄・蠻夷・夷翟・東夷北狄。
【夷蜜戎狄】イミツジウテキ 四方のえびす。韓、王制「東方曰レ夷、南方曰レ蠻、四方曰レ戎、北方曰レ狄」
【夷議】イヒ やすらけくしづかに治まる。郝名進、大度賦「六合清晏、八荒ー ー」
【夷俘】イフ とりこ。左傳「謂二之ー ー一」
【夷矛】イボウ ほこの一種。考工記「酋矛常有四尺、ー ー三尋」
【夷滅】イメツ たひらぎほろぶ。又、たひらげほろぼす。水經、注「城隍ー ー、略存二故跡一」
【夷愉】イユ やすらかによろこぶ。宋史、李綱傳「國門内外、ー ー肅穆、若レ無二人聲一」
【夷戮】イリク たひらげ殺す、ほろぼされる。後漢書、張衡傳「黎儉畏忌、必彖二蘇鮮一「黎庶前慢、鮮不二ー ー一」
【夷隆】イリウ 低きと、高きと。又、衰ふると、盛んなるとの南都賦「直有二ー ー一」
【匪夷所思】ヒイショシ 常人の考へ及ぶ所にあらず。易、繫辭「漢有レ兵、ー ー」

【夸】

㊀クワ 麻 ㊁クヮ 馬 ㊂コ 遇

㊀おほいにす(奇張)華言實なし。○一畦はやはらか(柔)身を卑め己を屈する。㊁ほこる(自大)○またがる。漢書、諸侯王表「ー州兼郡」‖跨。㊂おごる(奢)○うつくし、美くしき貌。

注意 夸は奢なり。大に从ふ、亏の聲。夸に作るは非。

【夸淫】クヰン おごりてみだらなり。史記「―自恣、以財驕レ人」
【夸矜】クヰコウ ほこる、たかぶる。史記「兩國相擊、此宜二―一見レ長」
【夸言】クヰゲン 事實を大きくかざりて語る、誇大なる話（梁簡文帝、悔賦）‖大言。
【夸詐】クヰサ 大言を吐きていつはる。又其のこと。漢書、韓信傳「齊―多レ變、反覆之國」
【夸者】クヰシヤ 權勢にほこりたかぶる人。史、伯夷傳「―死レ權、衆庶馮レ生」
【夸大】クヰダイ おほげさ、ほこりて尊大なり。‖誇大。
【夸父逐日影】クヰフヽヂクジツエイ 夸父は上古の人名、己の力をはからずして、大事を企つるに喩ふ。列、湯問「夸父不レ量レ力、欲レ追二日影一、逐二之於隅谷之際一、渴欲レ得レ飲、逐飲二河渭一、河渭不レ足、將三走レ北飲二大澤一、未レ至道渴而死」

【夾】四畫　㊀カフ・ケフ　㊁ケフ　叶葉

㊀さしはさむ。‖挾。左右より持つ、傍より扶ける、はさまる。○ちかし（近）○かぬ（兼）○一鐘は十二律の一。㊁かたはら（傍）○刀のつか（刀把）‖鋏。○せさし。‖狹。○をとこだて。‖俠。

【夾挾・插の別は挾（手部七畫）の條を見よ。
【夾撃】キヤウ はさみうつ。史、淮陰侯傳「淺兵―一、大破レ之」‖夾攻。
【夾攻】コウ さしはさみうつ。左傳「背二巴師一而―二之一」‖夾撃。
【夾谷】コク 地名、山東省萊無縣に在り、孔子が魯の定公を相けて、齊の景公と會せし地。
【夾雜物】ザフブツ まじりもの。
【夾侍】ジ ○左右にはんべる。又、其の人。○佛語の左右に侍り居る者。不動の制吒迦・毘焔羅。彌陀の觀音・勢至の類。
【夾雨】ウ はさまりまじる、雨は雜。史、律書「夾鐘者言二陰陽相一―一也」
【夾鐘】シヨウ 十二律の一、陰曆二月に配す、よりて二月の異名とす。禮、月令、注「仲春氣至、則―一之律應」陰陽相夾則レ生する義。‖夾鍾。
【夾槳】シヤウ はさみめぐる。呂覽、有二兩蛟一―一其船一」
【夾袋】タイ 衣服のかくし、ぽけっと。名臣言行錄「呂蒙正爲レ相、―一有レ冊、謁見者、必問二人材一、即疏レ之以奏」―中人物ノクヂヲシラフの語、此に本づく。
【夾竹桃】ケフチクタウ 常綠灌木の一、葉は竹葉に似、花は夏日開く形色共に桃に似て美くし。
【夾侍】ジ 門閥の兩旁にかかぐるふだ。神異經「西南荒閒―一、題曰二入往門一」
【夾輔】ホ 左右よりさしはさみてたすける。左、僖四「齊侯以二諸侯之師一、代レ楚、管仲曰、昔召康公命二我先君太公一曰、五侯九伯、女實征レ之、以―一周室一」

【奄】五畫　㊀エン　㊁エン　叶葉

○おほふ（被・覆）大いにして餘あり。○ことごとく（悉）○たちまち（忽）○にはかに（遽）㊁ひさし。‖淹。久しく留る。㊂ふさがる、精氣閉藏す。又、其の者。○宦官、閹に通ず。
【奄有】エンイウ おほひたもつ、全部殘らず領有する。詩、魯頌「―二下土一纘二禹之緒一」
【奄尹】エンイン 宦官の長。禮記「命二―一」申二宮命一」‖閹尹。
【奄奄】エンエン いきのふさがりて絶えんとする貌。李密、陳情表「劉日薄二西山一、氣息―一」
【奄欵】クワン 去來の忽ちにして定かならざる貌。左思賦「慨悶―一」
【奄忽】コツ たちまち、はやし、にはか。漢書、鼂吏傳「―如レ神」‖倏忽・忽然・奄然。
【奄人】エンジン 宦官をいふ。‖閹人。
【奄然】ゼン 奄忽に同じ。
【奄留】リウ 久しくとどまる、永く滯在する。‖淹留。

【奇】支　○くし、くすし（異）○くしきもの、普通ならざるすぐれしもの、非常のもの（異物）「―才」「―童」○めづらし（珍）あやし（怪）○ひそか（祕）○よこしま（邪）○いつはる、いつはり（詐・譎）○ひとつ（隻）○二にて割り切れざる數。偶數の對。○十六歲以上。丁年未滿の男子、餘夫。○數―はふしあはせ（不遇）史、李廣傳「李廣老數―一」○醜―は委曲盤戻ワダカマヒの貌。○俗―は小說の類。
叶支　大に从ひ可に从ふ、俗に奇に作るは非。
【奇異】イ 他と異りてめづらし。不思議。書經、疏「奇技謂二―一技能一」
【奇偉】イ すぐれて大いに立派なり。吳志、吳主傳「形貌―一」
【奇瑰】カイ めづらしくうつくし。傅休奕、李賦「叡二斯味之―一」
【奇麗】レイ めづらしき形せるくも。李白詩「奇峯出二―一、秀木含二秀氣一」
【奇嶼】キヨ 數のあまり、嶼は餘。漢書

「商賈大者積貯倍息、小者坐列販賣操二其ーー一」
【奇絲】キシ ふしぎのえにし、思ひがけざる因縁「合縁キエーー」
【出レ奇制レ勝】キヲイテカチヲセイス 奇計を出して勝を得る。史、田單傳「兵以レ正合、以レ奇勝、出レ奇無レ窮、奇正還相生耳」
【奇巧】キカウ めづらしきたくみ。後漢書、和帝紀「商賈小民、或忘二法禁一ーー一廃貨、流積公行」
【奇行】キカウ 人なみかはりしおこなひ、風がはりの行。
【奇香】キカウ めづらしきかをり。博物奇境記「ーー一丸」
【奇效】キカウ ふしぎなるききめ、霊妙なる效驗。‖奇驗。
【奇寒】キカン 例年と異りたるきびしきさむさ。酉陽雜俎「今歳ーー」
【奇技】キギ あやしく異りたる手わざ。書、泰誓「作ーー淫巧一以悦二婦人一」
【奇氣】キキ めづらしき氣。王粲詩「金精發ニーー一」
【奇戲】キギ めづらしき遊戲。晉書、五行志「恭帝爲二琅邪王一好ーー一、常閉二一馬於門內一、令二人射一之」
【奇畜】キチク めづらしき家畜。史記「其ーー則麋駝・騱・贏」
【奇奇怪怪】キキクワイクワイ 極めてあやし、甚だしく奇怪。
【奇奇妙妙】キキメウメウ 極めてふしぎ、甚だしく奇妙。
【奇句】キク 人のいひ及ばざるめづらしき句。宋史「林逋、冨爲レ詩、其詩澄淡清粹、多ニーー一」
【奇偶】キグウ 奇數と偶數と、はん（奇）とちやう（偶）と。楊基詩「五鮹琢句對二虚實一、騶青儷黃配ニーー一」
【奇遇】キグウ 思ひがけなくめぐり會ふ。‖奇觀。
【奇觀】キクワン 奇數と偶數と。易經「陽卦奇、陰卦觀」‖奇偶。
【奇勳】キクン すぐれたるいさを。李白詩「顯閭著ニーー一」
【奇花】キクワ めづらしき花。宋史「夾レ岸皆ーー珍木」
【奇果】キクワ めづらしきくだもの。後漢書、桓榮傳「詔賜ニーー一、受者皆懷レ之、榮獨舉レ手捧レ之以拜、帝笑指レ之曰、此眞儒生也」
【奇謂】キヰ 思ひがけなきわざはひ。升菴集「有二奇禍一者、必有ニーー一」
【奇快】キクワイ はなはだおもしろし。酉陽雜俎「笑曰ニーー一」
【奇怪】キクワイ ○あやしくふしぎ。史、周紀「館ーー物」‖詭怪。○圖キクワイけしからぬ。
【奇瑰】キクワイ めづらしくすぐれる。又、其の物。孟郊詩「地遠有二餘美一、我來采ニーー一」
【奇懷】キクワイ ふしぎなるおもひ。范成大詩「歎伯有ニーー一」
【奇貨可レ居】キクワカキヨ めづらしき品は之を買ひ置き、時を待ちて大利を得べしとの義。秦の王子子楚が趙に人にちとなりて冷遇せられ居るのを呂不韋といふ商人が見て、奇貨居く可しとて子楚に金を與へて優待せり、子楚後に莊襄王となりて呂不韋を丞相とし、文信侯に封じて河南洛陽十萬戸を食ましめし故事に本づく。史、呂不韋傳「呂不韋賈二邯鄲一、見而憐レ之曰、此ーー、乃往見二子楚一、子楚を財貨にくらべていふ。
【奇蓮】キレン すぐれたるはかりごと。晉書、文帝紀「ーー指授、制二勝千里一」‖妙謀・奇策・奇計・奇謀。
【奇觀】キクワン かはりてめづらしきみもの。楊萬里詩「ーー初逢慰二遠愁一」‖偉觀。
【奇形】キケイ めづらしきかたち。晉書「ーー異狀」‖奇狀。
【奇計】キケイ めづらしきはかりごと。史、陳丞相世家「凡六出ニーー一」‖奇謀・祕計。
【奇警】キケイ すぐれてきとし。宋史、王珪傳「弱歲ーー、出レ語驚レ人」
【奇壻】キセイ ○すぐれてつよし。敖陶孫文「ーー無レ前」○なみはづれたる書行をなす。
【奇譎】キケツ いつはり、たくらみ〔漢書、朱博傳〕
【奇言】キゲン おもしろきことば。傅休奕詩「臨レ急吐ニーー一」
【奇驗】キケン ふしぎなるしるし。すぐれたるききめ。劇談錄「吉凶屢有ニーー一」
【奇功】キコウ めづらしきてがら。漢書、陳湯傳「爲レ人多二策謀一、喜ニーー一」‖奇勳。
【奇觀】キクワン めづらしきてあひ、思ひがけざるめぐりあひ。韓愈詩「不下同二ーー一往空視二斯文一來」‖奇遇。
【奇骨】キコツ 人に異なる骨相。晉書、桓溫傳「此兒有ニーー一、可二試使一啼」
【奇才】キサイ すぐれたるはたらき。史、周昌傳「年雖レ少然ーー也」
【奇彩】キサイ めづらしきいろどり。晉書、子夜詩「山林多ニーー一」
【奇緑】キリヨク めづらしきいろどり。北史「所レ珍在レ緑、不レ務ニーー一」
【奇相】キサウ めづらしき人相。金史「吾兒有ニーー一貴不レ可レ言」
【奇草】キサウ めづらしきくさ。李德林文「神禽異獸、珍木ーー」
【奇想】キサウ めづらしきかんがへ、奇抜なる思ひつき。
【奇策】キサク 人の意表に出づるはかりごと。‖奇計。
【奇字】キジ 文字の六體の一、奇異の形せる書體。漢書、藝文志「六體者、古文・ーー・篆書・隸書・繆篆・蟲書」
【奇臭】キシウ あやしきにほひ。荀子「ーー以レ鼻異」‖異臭。
【奇獸】キジウ めづらしきけもの。書、旅獒「珍禽ーー」‖異獸。

【奇日】キジツ はんの日。偶日の對。
【奇疾】キシツ ふしぎにめづらしき病。宋史、呂夏卿傳「得ニ一ー一身體日縮、卒時僅如ニ小兒ニ」
【奇習】キシフ めづらしきならはし。奇異なる風俗。
【奇強】キキョウ 不正に敵陣をおそひうつ。
【奇邪】キジャ よこしま。中正の反對。禮記「雖ニ有ニ一ー一而不ニ治者回祿災」
【奇寒】キカン 中正ならず、甚はよこしまの寒。天官「去ニ其淫思與其ー一之民ニ」＝奇邪。
【奇肱】キコウ めづらしきかたちの遠國。山海經「西山多ニ一ー一ニ」
【奇計】キケイ めづらしきおもむき。白居易詩「逸興遄飛ニ一ー一ニ」＝妙趣。
【奇怪】キカイ ○ふしぎなる技術。韓愈詩「世說無ニ一ー一ニ」＝妖術。○圖てにをはなし。＝陸離。
【奇偉】キイ ○珍らしくすぐれたる容色。又、其の所。唐書、文苑傳「王維初舍ニ祕川ニ地ー一ニ」○奇兵を以て敵にかつ、異りたる方略にて勝つ。又、其の統將。孫子「凡戰者以ニ正合、以レー一ー」
【奇瑞】キズイ ふしぎにめでたきしるし。奇異なる瑞相。論衡「萬物育則ー一出ニ」＝異瑞。
【奇數】キスウ ○はんのかず、二にて割り切れざる數。偶數の對。○ふしぎなる方術。後漢書、王昌傳「超經王好ニ一ー任俠手越魏閒ニ」
【奇蹟】キセキ かみわざ。神の力にてする不思議なるわざ。又、其の形迹。
【拜ニ奇石ニ】ハイセキ 宋の米元章が奇石を愛して拜したる故事。石林燕語「米芾好ニ奇石ニ、知ニ無爲軍ニ、初入ニ州廨ニ、見ニ立石ニ、奇ニ喜曰、此足ニ以當ニ吾拜ニ、遂命取ニ朝笏ニ拜レ之、呼曰ニ石丈ニ、爲ニ書者所ニ彈ニ」
【奇說】キセツ かはりたる言論。人を驚かす言說。晉書、許詢傳「供給ニ中書堂、講レ肆ニ一ー一ニ」
【奇面】キメン すぐれたるみさを。奇特なる節操。世說「韓魏多ニ一ー一、個個有ニ名利ニ」
【奇姿】キシ ○めづらしきかたちの詩「瑤臺倚ニ雲構ニ一ー寶玲瓏ニ」＝奇狀。○圖不思議。奇妙。
【奇談】キダン めづらしきはなし。＝奇話。
【奇致】キチ めづらしきおもむき。南史、高祖傳「招ニ集文才ニ、準ニ意題レ韻、赤時有ニ一ー一ニ」
【奇智】キチ めづらしきちゑ。晉語「樂王曰、陶之朱鬼以ニ布衣ニ而富侔レ國、是必有ニ一ー一ニ」
【奇珍】キチン めづらしきたから。法苑珠林「一ー瓔珞、一切寶藏、自然出現」
【奇拔】キバツ めづらしくぬきんでる。遊天台山賦「嗟台嶽之所ニ一ー一、實佛明之所ニ扶持ニ」
【奇師類】キシルイ 一足一枚の踏ワを有する獸類。馬・犀など。偶蹄類の對。
【奇篇】キヘン おもひがけなく得るさいはひ。もっけのさいはひ。偶偉。奇福の對。文中子「從ニ天之則、內無ニ一ー一、外無ニ奇福ニ」
【奇物】キブツ めづらしきもの。歐陽修文「劉原父博學好ニ古、多ニ古器ー一ニ」＝奇品。
【奇文】キブン すぐれたる妙文。陶潛詩「一ー共欣賞、疑義相與析」
【奇分】キブン めづらしきよき香。韓愈詩「天蕊吐ニ一ー一ニ」
【奇聞】キブン 珍らしき話。
【奇兵】キヘイ 奇は正の反、ふしぎなる計を用ひて敵の不意に出づるいくさ。史、淮陰侯相如傳「連括、既代ニ鹿頤、秦將自起閒ニ之、數ニ一ー一將敗走ニ」
【奇峯】キホウ めづらしき形の山。陶潛詩「春水滿ニ四澤ニ、夏雲多ニ一ー一ニ」
【奇謀】キボウ すぐれたるはかりごと。北史、獨孤信傳「美風儀、有ニ一ー一大略ニ」
【奇瑰】キカイ めづらしきあらたま。奇峻無詩「千山積ニ石珠ニ一ー一ニ」
【奇夢】キム 不思議なる夢。
【奇茗】キメイ すぐれてよき茶。蘇軾詩「一ー洗ニ煩悶ニ」
【奇妙】キミョウ ○ふしぎにめづらし。晉書、律歷志「一ー之式、不レ傳ニ來世ニ」○めづらしくすぐれる。法華經「散ニ衆妙華ニ種種ー一、以爲ニ莊嚴ニ」

【奇薬】キヤク　めづらしきくすり。蘇軾詩「千金得ニ一ー一」‖妙薬・霊薬。
【奇利】リ　めづらしきまうけ。晉子「ー一未レ在ニ其中一也」
【奇禽】キン　異位貴下、こんま貴下。‖奇鳥。
【奇魔】マ　すぐれてうるはし。漢書、郊祀歌「紫壇設華ー一」嬋は美人。‖妙麗。

【奈】タイ　ナイ　㊥　奈に同じ　通音ナ

なに、いかに、いかんぞ（那）
同訓異字　奈・奈何・如何・何如・何若等の別は如何（女部三畫）の如の條を見よ。
【奈落】ナラク　○㊀梵語、陰府、無救なると譯す。地獄の名。○㊁足の裏の窪の下に設くる穴ぐら。刑罪を踏み鳴らす音を反響せしむるため。
【奈良漬】ナラづけ　㊀大根・瓜・茄子等を酒の粕につけた食の物。
【奈何】いかに。‖如何。

【奉】㊀ホウ・ブ　㊁ホウ　㊀㊁宋

㊀たてまつる、ささぐ（獻）上に獻呈する、恭しく持つ。○うけつぐ、うけたまはる（受承）仰せをうける。○おくる（送）○すすむ（進）○やしなひ（養）○まかなひ、生活の費用。孟、告子「妻妾之ー一」○みつぎ（貢物）㊁ふち（秩祿）‖俸。
【奉引】ホウイン　みちびき、前導して車を引く。漢官儀「大鴻臚公卿ー一」
【奉加】ホウガ　㊀神佛への寄進の中へ加へる。‖喜捨・本納「ー一帳」
【奉行】ブギョウ　○君命を奉じて施し行ふ。漢書、魏相傳「方今務在ー一故事一而已」○㊀吉、武家にて、種種の職の長官「町ー一」
【奉給】ホウキュウ　ささげそなへる。北史、孫嶷傳「往來ー一、時人無二及者一」
【奉還】ホウカン　かへしたてまつる。
【奉職】ホウショク　物を献上する。後漢書、郭躬傳「廷尉ー一」‖奉呈。
【奉公】ホウコウ　○君のために力を盡す。後漢書、桓譚傳「愛ー一國」○㊀下男下女に住みこむ「ー一人」
【奉餞】ホウセン　貴人の旅路を祝ふ。宋書、武帝紀「ー一于新亭」
【奉賞】ホウショウ　みつぎものをおさめたてまつる。後漢書「重課ー一」
【奉懇】ホウコン　懇切にこひねがふ。
【奉謁】ホウエツ　天子の正統（庶）を奉ずる、よく政令に服從する義。孟子「日月所ー一臨而ー一」
【奉仕】ホウシ　君主につかへまつる。
【奉使】ホウシ　使命を奉じて行く。後漢書、馮衍傳「懷ー一金垂ー一紫、揚ー一節ー一」
【奉刺】ホウシ　○あがめまつる。○宋代、功臣又、學者を優待するため、各地にある道教の寺等の祭事を掌らしめて秩祿を與ふる特典。
【奉將】ホウショウ　上帝の命令、又は君命を奉じて行ふ。書、胤征「ー一天罰」‖奉行。
【奉營】ホウエイ　まつる。又、まつり。後漢書「後世子孫ー一我」
【奉書】ホウショ　○㊀室町時代に官吏が公方の命をうけて下すかきつけ。○紙の一種、色白く宜柔く、厚き書、又、儀式上の文書を書くに用ふる大判の紙。
【奉書紙】ホウショガミ　羽二重に似たる精良の紙綿。
【奉承】ホウショウ　うける、つつしみて受ける。方言「ー一具來、本最先聞」
【奉職】ホウショク　職務をつつしみつとめる。史、循吏傳「ー一循レ理、亦可二以爲一レ治」
【奉祖】ホウソ　祖先に仕へまつる。後漢書「臣聞、子係レ父レ、爲レ孝」‖奉先。
【奉送】ホウソウ　貴人を見送りたてまつる。白居易「有ー一命第ー一君一者」
【奉答】ホウトウ　うけつぎて行ふ。晉書、武帝紀「欲ー一令ー一恪義二爲ー一天下式一」
【奉献】ホウケン　たふとびいただく。左、襄二十五ー一ー一「屬公」
【奉體】ホウタイ　上意を承けて行ふ。書經、傳「奉レ義ー一」
【奉答】ホウトウ　つつしみてこたへまつる。
【奉勅】ホウチョク　勅命をうけたまはる。‖奉詔。
【奉呈】ホウテイ　さしあげる、獻上する。‖奉獻。
【奉天】ホウテン　滿洲盛京省の首府、吉の奇・錦二州の地、戰國の燕の地、盛京、又、瀋陽といひ、清朝發祥の地、今尚宗廟を存す、東南に渾河を帶び、西南に遼河を控ふ。
【奉納】ホウノウ　神社佛閣等に金品を寄進する。
【奉陪】ホウバイ　天子又は貴人のお供をする。杜牧「何時得ニ一ー一」
【奉幣】ホウヘイ　神に幣帛をたてまつる。
【奉幣使】ホウヘイシ　㊀天皇が神に幣帛を奉らるる時の勅使。
【奉公】ホウコウ　長上につかへやしなふ。

【奕】エキ　ヤク　㊥　六畫

○ーは大いなり。又、さかんなり（盛）又、うつくし（美）又、かがやく、光る貌。又、憂ふる貌、又、しなやかなる貌。○ついで（次序）○かさぬ（重）○俗に碁に通じて圍碁の義とす。
【奕奕】エキエキ　○美くしき貌。詩、魯頌「新廟ー一」○大いなる貌。詩、大雅「ー一

ー梁山、維禹甸ㇾ之」○憂ふる貌。詩、小雅「未ㇾ見ニ君子一、憂心ー一」○光りかがやく貌。北齊書、琅邪王儼傳「眼光ー一、數步射ㇾ人」○舞ふ貌。張衡、東京賦「萬舞ー一」○輕靡（シナヤカ）なる貌。左思、吳都賦「儀從ー一」

【奕葉】エキヤウ　だいだい。增韻「ー一累世也」曹植文「伊君順考、ー一佐時」＝奕世・累葉。

【奕基】エキキ　ごをうつ。又、其の技。四庫總目「杜陵杜夫子、善ニー一一、爲ニ天下第一ー」＝弈棋・圍碁。

【奕秋】エキシウ　古のごろちの名人。孟、告子「ー一通國之善ㇾ奕者也」

【奕歌】エキカ　どばん（基盤）段成式詩「閑對ニー一傾ニ一壺ー」＝碁局。

【奕者】エキシヤ　どうち。左、襄二五「ー一舉ㇾ棋不ㇾ定」

【奕世】エキセイ　だいだい。國語「ー一載ㇾ德、不ㇾ忝ニ前人ー」＝累世・奕葉。

【奕代】エキダイ　だいだい。陶潛文「綴文之士、ー一繼作」＝奕世・累代。

【奐】クヮン　㒳

○大いなり。○ゆたか、ひまありて豫ノ（タノ）む貌。詩、大雅「伴ー一爾游矣」○あきらか、文采粲明（アヤアカ）なる貌。○さかんなり（盛）【奐焉】エクヱン　文采の粲明（アヤアカ）なる貌。禮記「美哉ー一」

【奎】ケイ　㒳

○兩髀（ももの間、またぐら。○星宿の名、二十八宿の一、西方に在りて、其の數十六、文章を主る、其の形屈曲して字畫の狀をなす。

【奎運】ケイウン　文運に同じ。

【奎文】ケイブン　文章をいふ、奎星はまがりて、文字の畫に似たり、故にいふ。李綽搜神異「奎主ニ文昌ー」

【奎分】ケイブン　奎星の天の分野にあたる地、奎は文明の司命たる星。名山記「閬里當ニー一、斯文在ㇾ玆」

【契】㊀ケイ　㊁セツ　㊂ケツ　㊃キツ

㊀ちぎる、ちぎり（約）約束する「ー一約」○まじはり、ちなみ、交を結ぶ「交ー一」「魚水ー一」○あふ、あはす（合）「ー一合」○わりふ、てがた「符ー一」「券ー一」○うれひくるしむ（憂苦）○おつ、おそる（怯）㊁人の名、殷の湯王の祖。書、舜典「帝曰、ー一汝作司徒」㊂くるしむ（勤苦）＝挈。○きざむ（刻）呂覽「ー一舟求劍」鍥に通ず。○うとし（疏闊）久しく逢はず。○たつ（絕）かく（缺）㊃「ー一丹（タン）は國名、東胡種、支那の東北部に在り、後魏の頃より支那に通じ、唐末に內蒙古を占領し、五代の頃、皇帝と稱し、遼國を建つ。

【契丹】契は大約なり。大に从ひ初に从ふ。初は、刀に从ひ手に从ふ。俗に契に作るは非。

【契印】ケイイン　わりいん、書類の紙が二枚以上ある時、これを證明する爲めに兩紙に跨げて押す印形。

【契合】ケイガフ　左右のわりふを合す。轉じてぴったりとよく合ふ。＝符合・吻合。

【契會】ケイクワイ　わすびあふ、ちぎる。司馬光詩「神精一ー一、形迹兩俱忘」

【契闊】ケイクワツ　○ふさがる。漢書、范丹傳「行路急卒、非ニ陳ニー一之所ㇾ疏闊」久闊。○勤め苦む。詩、邶風「死生ー一、與ニ子成ㇾ說、執ニ子之手ー一與ニ子偕老」

【契兄】ケイケイ　兄弟約束せし兄。＝義兄。

【契約】ケイヤク　爰ひ苦む。詩、小雅「ー一寤歎」

【契券】ケイケン　わりふ、契約證書。荀子「合ニ符節ー一、別ニー一者、所ニ以爲ニ信也」

【契子】ケイシ　やしなひご。＝義子。

【契書】ケイシヨ　約束證文。＝契券。

【契照】ケイセウ　契券に同じ。照はてらし合せて證據とする義。文獻通考、田賦考「面問ニ來歷ー一取ニ索ー一」

【契刀】ケイタウ　漢の王莽の作りし貨幣。漢書、食貨志「更遣ニ大錢ー一又造ニー一錯刀ー」

【契弟】ケイテイ　兄弟約束せし弟。＝義弟。

【契父】ケイフ　やしなひおや、ままちち。＝養父・義父。

【契符】ケイフ　わりふ。華陽國志「井絡啓ㇾ運、文昌ー一」＝符節。

【契文】ケイブン　ちかひのかきつけ、契約書。

【契券】ケイケン　契券に同じ。

【契盟】ケイメイ　ちかひをむすぶ。＝締盟。

【契母】ケイボ　やしなひおや、ままはは。＝養母。

【契約】ケイヤク　やくそく。賣買・請負・保險・貸借等に關する約定。

【奏】ソウ　㒳

○君王に申し上げる。又、其の書。○すすめる（進）上にさし出す。○かなづ、音樂を爲す。周禮、春官「九ー乃終、韶ニ之九成ー」○すぢ、腹に通ず。○あつまる、輳・湊に通ず。

【奏按】ソウアン　奏問して罪を案驗（アンケン）する。後漢書、羊陟傳「再遷ニ冀州刺史ー一ー貪濁、所在追然」

【奏案】ソウアン　天子へ申し上げるかきつけのしたがき。＝奏牘。

【奏可】ソウカ　上奏を採用する義。漢書、武帝紀「丞相御史、所ㇾ舉賢良、或治ニ申商韓非蘇秦張儀之言ー一亂ニ國政ー一

請二皆罷一ー一」

【奏案】ソウアン　奏案に同じ。案一に奏に作る。唐書、陸元方傳「取二ー一焚レ之」

【奏楽】ソウガク　音楽をかなでる。

【奏議】ソウギ　意見を天子に奏聞する。漢書「公卿稱職、ー一可レ述」

【奏事】ソウジ　ことをひく。郭祥正詩「絶絃風生松ー一レー」

【奏曲】ソウキョク　奏楽に同じ。

【奏勲】ソウクン　奏功に同じ。

【奏決】ソウケツ　奏上してさだめる。長編「天下獄悉欲ニー一」

【奏功】ソウコウ　事の成功を君に申し上げる、転じて、ひろく事の成就せし義とす、てがらをあらはす、功を立てる。＝奏勲。

【奏裁】ソウサイ　天子に上奏して裁決を仰ぐ。唐書、百官志「大事ー一」

【奏事】ソウジ　ことをひく。史、廉頗・藺相如傳「趙王好レ音、請ー一レー」

【奏上】ソウジョウ　天子に申し上げる。＝奏聞。

【奏章】ソウショウ　天子に申し上げるかきつけ。＝上奏文・上書。

【奏者番】ソウシャバン　徳川時代諸侯以下の将軍に謁見する者を取り次ぐ役。＝謁者。

【奏裁】ソウサイ　天子に上奏して裁決を仰ぐ。唐書、百官志「大事ー一」

【奏事】ソウジ　ことをひく。史、廉頗・藺相如傳「趙王好レ音、請ー一レー」

【奏上】ソウジョウ　天子に申し上げる。＝奏聞。

【奏章】ソウショウ　天子に申し上げるかきつけ。＝上奏文・上書。

【奏者番】ソウシャバン　徳川時代諸侯以下の将軍に謁見する者を取り次ぐ役。＝謁者。

【奏授】ソウジュ　奏上し御裁可を經て位記を授ける。正五位以下之により宮内大臣宣行す。

【奏書】ソウショ　奏疏に同じ。＝奏章。

【奏請】ソウセイ　天子に上奏して御願する。漢書「有司ー一、減二什三一」

【奏捷】ソウショウ　勝利のしらせを天子に奏聞する。

【奏摺】ソウセツ　奏上文。

【奏疏】ソウソ　○文體の名。文體明辨「ー一者羣臣論諫之總名也」○上にたてまつる文書。宋史、李惇傳「ー一凡數十」＝上疏。

【奏弾】ソウダン　天子に申し上げて役人の罪過をただす。上奏弾劾（梁書、劉之遴傳）

【奏笛】ソウテキ　ふえをふく。晉書「敕二御伎一ー一レー」＝吹笛。

【奏陛】ソウヘイ　天子に申しあげるかきつけのふだ。上奏の書陛。王廷珪詩「百辟動レ容觀ニー一、幾人回レ首愧二朝班一」＝奏陛。

【奏任】ソウニン　大臣の奏聞を經て任命する官等、三等以下の高等官。勅任の下、判任の上に位す。

【奏薬】ソウヤク　上申すると、命令をうけると。唐書、竇威傳「恐萬機ー一、有レ所二壅閉一」

【奏舞】ソウブ　まひをまふ。晉書、樂志「登歌ー一、神樂其和」

【奏聞】ソウモン　天子に言上する。＝上奏。

【奏】

㊀ タ　㊁ シャ　麻　麻

㊀はる（張）○ひらく（開）○はこる（奏）㊁おごる。＝侈。

【奔】

㊀ ホン　㊁ ホン　㊂ ホン　阮　阮　元

奔は古字、奔は俗字

㊀はしる（走）○禮を備へずして結婚する。自由結婚。周禮、地官、媒氏「仲春之月、令會二男女一ー者不レ禁」○はしらす、しりぞく、おふ（逐）㊁やぶる、敗す「ー軍」㊂おもむく、急に赴く、急變あればー り赴く。

同訓異字　奔・走・趨の別は走（部首七畫）の條を見よ。

【奔逸】ホンイツ　はしりにげる。＝逸走。

【奔逸】ホンイツ　速かに走りて前者に乗りこす。莊、田子方「顏淵問二於仲尼一曰、夫子步亦步、夫子趨亦趨、夫子馳亦馳、夫子ー一絶塵、而回瞠二若乎其後一矣」＝奔佚。

【奔遺】ホンイ　はしりつひゆ。宋史「諸城望レ風ー一」＝潰走。

【奔競】ホンキョウ　走りきそふ、競爭する。

【奔洪】ホンコウ　南史、顏延之傳「ー一千餘」激しく流れる河水。揚雄「甘泉賦」「ー一雨滂」＝激流。

【奔喪】ホンソウ　異郷にて親の死を聞きて奔り赴く喪。禮記にー一篇あり。

【奔竄】ホンザン　はしりのがれる、にげ隠れる。淮南、注「減二卻レ軍出降、或ー一山谷一」

【奔馳】ホンチ　騎馬又は水流などの勢急なるにいふ。洛陽名園記「湍瀨則ー一」＝奔駛。

【奔車之上無二仲尼一】ホンシャノウヘニチュウジナシ　聖賢は危地に居らざる喩。奔車は覆る車。韓非、安危「ー一、覆舟之下無二伯夷一」

【奔翔】ホンショウ　はしりおもむく。韓愈、碑銘「叫譟ー一、乘二門請一レ起」

【奔星】ホンセイ　夜間空中を飛行する星。長楊賦「疾如ニー一、發如二雷霆一」＝流星。

【奔走】ホンソウ　かけまはる、運動する。晉紀「ー一事二賊考城一長」韓愈、與二陳給事一書「衣食於ー一」

【奔湊】ホンソウ　はしりあつまる。晉書、會稽王道子傳「勢傾二天下一、朝野ー一」

【奔湍】ホンタン　はげしく奔する大なみ。廣茂詩「長瀾疑浴レ日、連島類ニー一レ」

【奔滿】ホンマン　はやせ。王炎詩「韓レ絶涉ニー一支レ流入二園塘一」＝急滿・奔瀨。

【奔騰】ホンドウ　はしりかける。後漢書、隗囂傳「赤車ー一」

【奔北】ホンボク　敗られて逃げる。北は敗。「南史、侯景傳」

【奔注】ホンチュウ　勢よく流れ注ぐ。杜甫詩「溪行水ー一」

【奔女】ホンジョ　いたづらむすめ、淫奔女。正式の禮を備へずして男の許に走る女の義。

【奔逸】ホンイツ　狂人が乗ればあばれ奔り、又人をふむあれうま。漢書、武帝紀「馬或ー一、而致二千里一、士或有二負俗之累一而立二功名一」

【奔逸】ホンイツ　はげしきいなびかり。蘇軾詩「經二度萬里一如二ー一ー一」

【奔瀾】ホンラン　はげしくはやきうしほ。柳宗詩「ー一激二南浦一」＝奔濤。

【奔馳】ホンチ　はしりのぼる、かけあがる。後漢書、和帝紀「ー二ー阻險一死者繼レ路」

【奔突】ホントツ　はしりつく。後漢書「馬鄧ー二ー賊陣一」

【奔波】ハンパ　なみの奇する如く爭ひおもむく。晉書、袁宏傳「杜二豪強之門一塞二ー一之路一」

【奔放】ホンポウ　○勢よく走る。後漢書「飛兎顧景、絶足ー一、莫レ能レ及」○筆勢の自由なること。

【奔放】ホンポウ　○勢よく走る。後漢書「飛兎顧景、絶足ー一、莫レ能レ及」○筆勢の自由なること。

【奔命】ホンメイ　君命のままに奔走する。左、成、七「余必使下爾罷二於ー一一以死上」

【奔雷】ホンライ　はげしく鳴るかみなり。杜甫詩「昨夜有二ー一ー一」轉レ壑流な

どの意のはげしき形容。

【奔浪】ホンラウ　はしるなみ。騷、宋玉、文「下爲二ー一迅波所二激射一」＝奔濤。

【奔流】ホンリウ　はやきながれ。唐、太宗詩「ー一酒二絡纓一」＝急流・激流。

【奔濤】ホントウ　はやせ。范成大詩「波旗四征上二ー一ー一」＝奔瀾。

七畫

【奚】ケイ　㊥

○なんぞ、なんすれぞ、なに(何)いづくんぞ、疑問の辭。韓非、十過「一智小忠」又、反語の辭。歸去來辭「樂二夫天命一復ー一疑」○しもべ。隷役。周禮、天官「酒人上二百人」＝僕。

【奚奴】ケイド　しもべ(下男)。陸游詩「詩卷隨處累二ー一ー一」＝僕隷。

【奚童】ケイドウ　てっち、こぞう。

【奚囊】ケイノウ　腸景を探りつつ得たる詩を入るるふくろ。唐書、李賀傳「每旦日出、出騎二弱馬一、從二小奚奴一、背二古錦囊一、遇レ所レ得、書投二囊中一」柳貫詩「故謂二歐王一爲二ー一ー一」

【奚若】イカンソヤク　なんとして、如何ぞ、なんすれぞ。

【奘】㊀サウ・ザウ　㊁サウ　㊥　㊦　俗字

○大いなり。○さかんなり(壯・盛)㊁玄ー一は唐の高僧の名、姓陳氏、貞觀の初、西人に隨ひて西域に遊ぶ。

【奎】㊀クワイ・ケイ　㊁クワイ・ケイ　㊥　㊦

㊀ながくしておほいなり(長大)㊁かさぬ、かさなる(重)「衣ー一」○おほひ、物の外圍「笥ー一」「封ー一」○他人のすでに用ひし文字・言語を模擬するをいふ。轉じてふるくさし「陳ー一」○くま(地曲)地の曲りし所「河ー一」

【奎壁】ケイヘキ　ふるくさき言、陳腐の語。

【奮】フン　㊥

ふるひおこす、あしか、草索にて作り、四隅にひもを附け土を盛りて運ぶ具。晉書、王猛傳「少以二織ー一爲レ業」

【奮鋤】フンジョ　もっこ。すきと、土工の具に用ふ。晉書、石勒載記論「ー一相尋、干戈不レ息」

八畫

【奭】㊀シャク　㊁セキ　㊥

○おほいなり(大)おほし(多)○關ー然は僧の名(宋史、日本傳)

九畫

【奧】カウ　㊥

○おごる、あなどる(慢・傲)傲に通ず。○排ーはつよし、嫣健なる貌。○夏の時の人名。論、憲問「ー盪舟」○叫ーは相呼ぶ義。

【奢】シャ　㊥

○おごる、おごり(侈)分に過ぎる。儉の對。○はる(張)すぐ(過)

【奢侈】シャシ　侈・奢・驕・泆・慢・傲・泰○奢は儉の反、衣食住等の立派を好むなり。○記「國奢則レ示レ之以レ儉」○侈は約の反、張大にするなり、誠あれば自ら溢れておごるなり。○驕は高ぶりて傲慢なるなり、心につきていふ、誠の反なり。周官「位不レ期驕、祿不レ期侈」にて、驕・侈の別明かなり。○泆はおごり過ぎて、やりばなしにするなり。○慢は傲也と註す、人を輕んずる也、敖に通ず。禮記「敖不レ可レ長」○傲は泰の反、傲慢と用ふ、人を何とも思はぬなり。○泰は侈・奢の義を兼ぬ、傲慢の意はなし、ゆたかに分に過ぐるなり。孟子「侈食暗使二不二亦泰一乎」

【奢侈】シシ　おごりてなまけ遊ぶ。後漢

書、方今時俗ー一」

【奢傲】シャゴウ　おごりたかぶる。左傳「六卿強而ー一」＝傲奢・驕奢。

【奢綺】シャ　おごりてはでやか。異志、諸葛瑾傳「錦繡文繒、綢綺ニー一」

【奢華】シャクワ　おごりてはなやか。又おごりかざる。韓愈詩「當ノ春天地爭ー一、洛陽園苑九紛紜」

【奢侈】シャシ　おごり、ぜいたく、奢は華美、侈は過當。漢書、食貨志「爭ニ於ー一」＝侈奢。

【奢肆】シャシ　おごりてほしいまま（唐書、崔從傳）＝奢放・肆奢。

【奢恣】シャシ　おごり。晉書「性奈ー一」＝奢侈。

【奢泰】シャタイ　おごりの甚だしきこと。ー一顯の諸侯ノ如し。

【奢放】シャホウ　おごりてほしいまま。淮南、齊俗訓「貧者會ニ凶歲ニ、饑寒ニー一」

【奢靡】シャビ　身分に過ぎるおごり。國史、羊祜傳「窮ニ極ー一ニ」＝侈靡。

【奢欲】シャヨク　おごりを好む欲。後漢書「驕恣ニー一」

【奢者心貧】シャシンヒン　おごりを好む者は心に足ることを知らざるが故に、心常に貧しとの義。曾は常に通ず。譚子化書、儉化「奢者富不ー一足、儉者貧有ー一餘」＝儉者心貧

【奫】　チン　アン　寘

○さだむ（定）書、禹貢「ー一高山大川ニ」○するおく（置）下に置く。○そなへる、すすむ（薦）神佛に物を供へる。○まつり（祭）

【奫位】シンヰ　死者の靈前に手向ける物。＝香奠。

【奫菜】シンサイ　神前に野菜をそなへる。又、其の供物（儀禮、士昏禮）

【奫郊】シンコウ　天子のみやこをさだめる。

【奥】　十畫　書

㊀アウ・オウ　㊁ホク・ヲク　屋

㊀おく、宇の西南の隅、古、祭神の位。＝隩。八佾「與ニ其媚ニ於ー一、寧媚ニ於竈ー一」○うらざしき、寢所。○ふかし、おくふかし「深ー一」○かなめ（主要）「樞ー一」○つみあつめる、つみあつまる（積聚）○にる（烹和）○にごる。㊁くま（隈）澳・隩に通ず。○あたたか、あたたむ（暖）＝燠。○圖おく、妻の敬稱。

【奥妙】オウミョウ　文章の意味のおくぶかき義。唐書、韓愈傳「皆ー一閎深與ニ孟軻揚雄ー一相表裏」

【奥義】オウギ　○深遠なる義理。孔安國、尚書序「雅誥ー一、其歸一揆」＝奥旨。○圖おくのて、祕傳。

【奥區】オウク　國の中央の地。邊境の對。宋史「據ニー一於吳會ニ」＝隩區。

【奥旨】オウシ　學藝などの極所、おくの て。＝奥義。

【奥祕】オウヒ　おくふかきひみつ。曾鞏典錄「上窮ニ陰陽之ー一、下探ニ人情之歸極ニ」＝奥義。

【奥李】オウリ　しでざくら。陸璣、詩疏「唐棣ー一也」＝郁李。

【奥書】オウショ　圖○書物・巻物等の終に其の來歴などを記よ、かきいれ。＝跋文。○題書の文面に相違無きことを證明するかきいれ。

【奥附】オウフ　圖書物の終に添へて著者・發行所・印刷發行年月日・定價・版權等のことを記せし紙。

【奥南紙】オウナンシ　圖に川時代歐羅巴洲の産。

【奥行】オウコウ　圖家やしきの表通りを間口といふに對し、其の側面の長さの稱。

【奫】　十一畫　書

キン　ウン　眞

水の深く廣き貌。元結、樂歌「聖德至深兮、ー一如ニ淵」

【奭】　サウ　シャウ　養

○すすむ（勸）はげます、誘掖する、とりもつ、推薦する。○たすく（助）なす（成）左、襄十一「ー一王室」○ほむ（褒美）

【奭進】サクシン　奭・進・晉・前・勸等の訓は進（走部八畫）の條を見よ。

【奭挹】インフ　すすめる。唐書、李顏傳「大加ニー一以レ女妻レ之」

【奭學】シャクガク　學問をはげます。

【奭訓】シャククン　すすめをしへる。後漢書、郭太傳「好ニー一士類」

【奭進】シャクシン　すすめのぼす。後漢書、孔融傳「薦ニ達賢士ニ多レ所ニー一ニ」

【奭顯】シャクケン　すすめてしたがひ行はしむ。李綱、事君「ニー一其美ニ匡ニ救其惡ニ」

【奭勉】シャクベン　すすめはげます。梁書「ー一吏民ニ討ニ破寇賊ニ」＝勸奭。

【奭導】シャクドウ　はげましひきおこす。陸賈、新語「當ニー一三王ニ、論ニ五帝ニ」＝勸導。

【奪】　ダツ　㊥

○うばふ、うばはる、強ひて取る。○條位をとりあげる。論、憲問「ー一伯氏駢邑三百ニ」○みだる、みだす。○文字の脱漏あるをいふ「訛ー一」

【奪胎】ダッタイ　尊・算・撰○善は子の反、強ひて引きたくり取るなり。老子「將レ奪レ之、必先與レ之」○算は選取曰レ算と註す、下ニ上のものを奪ひ取るなり、算レ位・算賦

等の如し。○襭は衣をはぎとる義、轉じて位記等を取り上ぐるにも用ふ。

【奪衣婆】ダツエバ 圖三途河ニテ亡者の衣類をうばひ取るといふ鬼女。十王經「葬頭河曲有二――一、記二亡人衣一」

【奪情】ダツジヤウ 除服出仕を命ずる義、引續きて喪をつとめんと思ふ人情を官府が奪ふとの意（通鑑唐紀、胡註）公羊傳「重奪二孝子之情一」（慕無レ窮）

【奪取】ダツシユ うばひとる。唐書、賄賂敎唆傳「一ニー貨稍逗刺レ之」

【奪職】ダツシヨク 官職をうばひとる、免職さす。‖削職。

【奪胎】ダツタイ 古人の詩意を易へずして語を作るを換骨といひ、古詩の意を本として、形容し稍意の易るを一といふ（冷齋夜話）今は古人の詩意に本づき之に模倣して作る喩とす。

【奪魄】ダツパク 精神を奪ふ、失神する。左傳「原叔必有二大咎一（天奪之魄一矣」

【奪目】ダツモク 强烈なる光にて目がくらむ。北史「電光一レー」

【奪掠】ダツリヤク かすめとる。‖奪略。

【奪略】ダツリヤク うばひとる、かすめとる。‖奪掠。

【奮】 十一畫

レン 圖 別に奮・奮に作る

かうばこ（香合）くしげ（鏡匣）化粧ばこ。

【奭】 十二畫

セキ 圖

○赤き貌。○さかんなり（盛）○いかる（怒）○人名。召公一は周の武王の臣。

【奮】 十三畫

フン 圖

○ふるふ、はげむ、はげます（勵）勇む。○振ふ、振ひて塵を去る「一レ衣」○あぐ、あげる（揚）○おこす、發し起す、發揚する。○とぶ（飛）大いに飛ぶ。○ふるひうごく、ふるひうごかす（震動）○怒る、憤り激する。○はたたきす（鼓翼）

同訓異語 フル奮・震・振・揮・戰・顫・篩 ○奮は勇み進むなり、奮飛・奮戰・奮レ威などと用ふ。○震は雷にて震動するなり、轉じて威光に震るにも用ふ。○振はぶるぶるとふるふこと、震と音義通ず、されども雷などには用ひず、又ばっぱっとはたきふるふ義。荀子「新浴者振二其衣一」○揮は手にて物をふるなり、揮レ毫・揮レ戈・揮レ扇の類。○戰はがたがた體や手のふるふ義、戰戰・戰慄の類。をののくとも訓む、股戰而栗の如し。○顫は身のぶるぶるとふるふこと、心顫・股顫の類。○篩は、ふるひにて通す義。漢書「篩レ土絮二阿房之宮一」

【奮起】フンキ ふるひおこる。‖奮發。

【奮撃】フンゲキ はげしくふるひうつ。晉書「將士一ー、莫レ不レ用レ命」‖奮討。

【奮激】フンゲキ はげしくふるひたつ。北史「莫レ不二ー一ー敵赴二敵場一」

【奮迅】フンジン たけりはやる。後漢書、劉植傳「一ー拔起」‖奮發迅疾。

【奮振】フンシン ふるひたつ。‖奮起。

【奮進】フンシン ふるひすすむ。

【奮然】フンゼン ふるひて力を出すさま、奮發する形容。

【奮張】フンチヤウ ふるひたたかふ。‖振闘。

【奮討】フンタウ ふるひたちてうつ。蜀志「武忠義一ー」

【奮闘】フントウ ふるひたたかふ。宋史、吳挺傳「金人操二短兵一ー一」

【奮怒】フンド ふるひいかる。陳琳文「興レ兵一ー、誅二凶暴逆一」‖憤怒。

【奮發】フンパツ ふるひおこる。後漢書「陛下、神武一ー、以レ少制レ衆」‖奮起。

【奮飛】フンピ 鳥が羽を張りて勢よく飛ぶ。詩、邶風「不レ能二ー一ー」

【奮臂】フンピ ひぢをふるふ、勇を鼓して事を爲す形容。曉幾論「孟賁一ー」

【奮躍】フンヤク ふるひをどる、勇み進む。宋史、李綱傳「綱下レ令、能殺レ敵者、厚賞、衆無レ不二ー一ー」

【奮厲】フンレイ ふるひはげむ。‖奮勵。

【奮勵】フンレイ ふるひはげむ。‖奮厲。

【奭】 十五畫

ヒ 圖

○さかんにおほいなり（壯大）○せまる（迫）○いかる（怒）詩、大雅「內一二于中國一及二鬼方一」

女部

【女】

㊀ ヂヨ・ニヨ ㊁ ヂヨ・ニヨ 圖語

㊀をんな、をみな、め。男の對稱。易、繫辭「坤道成一レ」○むすめ、女の子、已に嫁するを婦といひ、未だ嫁せざるを一といふ。○すべて卑く小なる者をいふ「一牆」「一桑」○なんぢ。孝經「一知二之乎一」‖汝。○うるき、二十八宿の一「一宿」㊁めあはす、妻となす、配する。

【女媧】ヂヨクワ 風の神の名。淮南、天文「一ー鼓吹、以司二天和一以長二百穀一」

【女優】ヂヨイウ をんなやくしや。女子の俳優。

【女英】ヂヨエイ 堯の女にして舜の妃たる

人の名「楓皇ー」

【女誡】ヂョカイ　宮禁中の嬪妾などの誡諭をいふ。說苑、君道「宮室營邪、ー盛耶」

【女垣】ヂョエン　城の上のたけ低きかき、ひめがき。說文「堞、城上ー也」‖女牆。

【女楷】ヂョカイ　をんなのてほん。梁簡文帝誡「行爲ニーー」‖女鑑。

【女誡】ヂョカイ　一卷、後漢の曹昭（班氏、曹世叔の妻、班固の妹、大家と敬稱せらる）の著、篇を卑弱・夫婦・敬順・婦行・專心・曲從・和叔妹に分ちて、女子の道を說く。

【女校書】ヂョカウショ　うたひめ、妓女の唐代蜀の薛濤といふ文才ある妓女が書類を校正せし故事に本づく。王建詩「萬里橋邊ーー」

【女樂】ヂョガク　女子を集めて音樂を爲す。論、微子「齊人歸ニーー一、季桓子受レ之」

【女華】ヂョクワ　菊の異名。本草「菊花、一名女節、一名ーー」‖女花。

【女職】ヂョショク　女色に耽りて國事を敗るわざはひ、女難。唐書、明皇紀、贊「自ニ高祖一至ニ於中宗一數十年間、再罹ニーー一、唐祚既絕而復續」

【女兄】ヂョケイ　あね。史通「俾ニ同氣ーー摩レ笄引決」女弟は妹。

【女系】ヂョケイ　をんなのあととり、女子の相續者。

【女垤】ヂョテツ　菊の異名。本草「菊、一名女花、一名ーー」

【女權】ヂョケン　女子の權利、女子の勢力。

【女月】ヂョゲツ　女あるじの家。宋史、食貨志「凡無レ夫無レ子、則爲ニーーニ」

【女公】ヂョコウ　夫の姉の敬稱「爾雅」

【女功】ヂョコウ　をんなのてわざ、女子の仕事。‖女工・女紅・婦功。

【女后】ヂョコウ　きさき。宋史「景宗使ニーー相繼稱レ制乎」‖皇后。

【女紅】ヂョコウ　女子のてわざ、紅は工・功に通ず。漢書、景帝紀「錦繡纂組、害ニーー者也」

【女桑】ヂョサウ　めぐは。爾雅、注「今俗呼ニ桑樹小而條長ニ爲ニーー樹ニ」

【女士】ヂョシ　女にして士の行ある者「詩經」

【女史】ヂョシ　○後宮に仕へて記事を掌る女官。周禮、春官「ーー掌ニ王后之禮職ニ」○女の文筆の才ある者の稱。後漢書、皇后紀「ーー彤管、記レ功書レ過」

【女子與小人】ヂョシトセウジントハ　妻妾僕隷の輩は多くは道理を解せざるを以て、取扱ひ難し。論、微子「子曰、唯女子與ニ小人一爲レ難レ養也、近レ之則不孫、遠レ之則怨」

【女牀】ヂョショウ　星の名、紀星の北の後宮に在る三星「晉書、天文志」

【女將】ヂョショウ　圖おかみ。客商實の家の主婦。

【女牆】ヂョショウ　城の上のたけ低きかき、ひめがき。古今註「ーー、城上小牆也」

【女主】ヂョシュ　皇后。又、女帝。後漢書、皇后紀論「東京皇統屢絕、惟靜ニーーニ」

【女孺】ヂョジュ　をんなわらは、召使の小女。

【女色】ヂョショク　をんなのいろか。

【女性】ヂョセイ　○文法上、名詞・代名詞の有する性質が女に屬する者。男性・中性の對。○ジョセイをんな。‖女人。

【女侍】ヂョジ　むこ、むすめの夫。‖女壻。

【女壻】ヂョセイ　むこ、むすめの夫。杜甫詩「門閥多ニ賢氣一ーー近乘レ龍」‖女術。

【女孫】ヂョソン　まごむすめ「史、陳丞相世家」

【女丈夫】ヂョジャウフ　男らしき女、をとこまさり〻女。

【女巾】ヂョキン　圖○をんな、女子。○奉公をする女。‖下女。

【女中堯舜】ヂョチュウゲウシュン　賢明なる后妃をいふ。宋史、英宗宣仁高皇后傳「昔宗嗣レ位、尊爲ニ太皇太后一臨レ政九年、朝廷清明、華夏綏定、力行ニ故事一、抑ニ絕外家私恩一、人以爲ニーーニ」

【女貞】ヂョテイ　ねずみもち。灌木にて夏時小白花をつけ、小さき楕圓形の果實を結ぶ。藥芳譜「ーー、一名貞木、一名鼠梓木。

【女娃】ヂョアイ　めひ、兄弟姉妹のむすめ。

【女奴】ヂョド　○猫の異名。探蘭雜志「猫、一名ーー」○下女をいふ。唐書「著頭ーー」

【女童】ヂョドウ　女子の十五歲以下の者。搜神記「得レ嫁ニーーニ」

【女德】ヂョトク　女のふむべき道德。左傳「ーー無レ極、婦德無レ終」

【女房】ヂョバウ　○をんなのへや。圖○ニョバウ昔、禁中に仕へし女官の稱。○妻、內儀。

【女無ニ美惡一入レ宮見レ妬】ヂョムビアクイツテキウニハイレバミヲネタマル　女は容貌の美醜を分たず、後宮に入れば、他の同輩に嫉まる。史、晉仲連鄒陽傳「ーー、士無ニ賢不肖一入レ朝見レ嫉」

【女蘿】ヂョラ　さるをがせ、ひかげのかづら。詩、小雅「蔦與ニーー、爲ニ子松柏ニ」

【女郎】ヂョラウ　○女にして男子の才氣ある者。木蘭辭「同行十二年、不レ知木蘭是ーー」○圖あそびめ、遊女。‖娼妓。

【女郎花】ヂョラウクワ　○もくれんの異名、木蘭。白樂天詩「怪得獨饒ニ脂粉態一、木蘭曾作ニ女郎一來」○こぶしの異名。雞放翁詩「閑看ーー」自注「唐人謂ニ辛夷一爲ニーーニ」‖辛夷。○圖をみなへし、秋の七草の一（敗醬）

【女流】ヂョリウ　をんなのなかま「ーー小說家」

【女禮】ヂョレイ　女のたちゐふるまひにつきての作法。

【女院】ニョヰン　圖皇太后の稱門に入りて、

門脇の號ある御方の稱。
【女護島】ニョゴ　國女のみ住むといふ島。又伊豆の八丈島の異名。
【女人】ニョ　をんな、女子・婦人。
【女人禁制】ニョニンキンセイ　國女子は身にけがれあり、又五障の罪あるものとして靈場（昔時の高野山などに入ることをさしとめる事。
【女犯】ニョボン　國僧が邪淫戒を破りて女をおかす。又其の罪。
【女王】ジョワウ　をんなの天子。＝女帝。
【女衒】ジョゲン　國遊女の口いれを業とするもの、街はなかだちして賣る。＝女儈。

奴 三畫 虞

㊀ヌ・ド
㊁ド・ヌ

㊀やっこ、しもべ、人に使役せらるる男女、古は罪人又は俘虜を用ひたりしが、後世は廣く卑賤の者を用ふ。㊁やつ、己を卑下し、又、他を賤めていふ。○ヨウ　國昔、武家の下男、草履取り。
【奴家】ドカ　國女子が己を卑下していふ稱。＝賤妾。
【奴角】ドカク　犀の一つの。＝犀角。
【奴顏婢膝】ドガンヒシツ　人に對して卑屈なる態度をなすをいふ。梅村詩、交際「以二一一者一為レ曉二解當世一」臨終詩「一一眞乞丐、反以二正直一為二狂癡一」
【奴畜】ドチク　しもべの如くに卑みて養ふ。漢書「一一之二不二日為一兄弟數一」
【奴才】ドサイ　○劣等の才。晉書、劉元海載記「成都王既敗、元海曰、籍不レ用二吾言一、遂自奔潰、眞一一也」○清朝にて滿人の官吏が皇帝に對して己を卑下していふに用ふる語。臣に同じ。
【奴視】ドシ　物をさげすみ輕蔑する。楊允孚詩「皮鞭乳酒鐙鎗肉、一一山陰對角羊」
【奴隷】ドレイ　人をいやしめて呼ぶ稱。晉書、石崇傳「崇乃歎曰、一一利二吾家財一」
【奴婢】ヌヒ　○男のしもべと女のしもべと、下男と下女と。○古、罪ある人を官に沒收して賤役に使用せしもの（周禮、秋官、司厲、注）
【奴僕】ドボク　めしつかひ。漢書、公孫弘卜式兒寬傳贊「衛青奮二於一一一、日磾出二於降虜一」＝隷僕・奴隷。
【奴隷視】ドレイシ　人を奴僕の如く見下だしてあしらふ。＝奴視。
【奴隷】ドレイ　しもべ。顏氏家訓「勉強一一」＝僕隷。

好 三畫 皓

㊀カウ・コウ
㊁カウ・コウ

㊀よし（善）○うつくし、みめよし（美）○よしみ、なかよし（相善）詩、衛風「永以為一一兮」○親善コレを結ぶ爲めの會合。論、里仁「邦君為二兩君之一一」○よく、ともすれば。寒山詩「聽明一一短命」○國甚だ、非常に「一一冷」「一一大風」㊁すく、このむ、よろこぶ、愛して賞かす。詩、唐風「中心一一之」○このみ、嗜一一」○ひきでもの、酒の興を助ける品物。又其の物を與へる。○このみて、ややもすれば。漢書、霍光傳「今陛下一一與諸生一一」式燕且喜」
【好合】カウガフ　よくあふ、仲が善い。詩、小雅「宜二爾室一一一」
【好下物】カウカブツ　善き酒のさかな。下物は酒を下すものの美。＝佳肴。
【好音】カウイン　善きみどころ。よく見える。
【好漢】カウカン　役に立つよき男。晉唐遺狄仁傑傳「則天謂二仁傑一曰、狄一一、汝二一一一」
【好機】カウキ　善きおり、都合善き機會。
【好仇】カウキウ　よきともがら。詩、周南「逑二武夫、公侯一一」
【好逑】カウキウ　よきつれあひ。詩、周南「窈窕淑女、君子一一」＝好匹。
【好奇心】カウキシン　ものずきのこころ。
【好句】カウク　善き字句。六一詩話「詩人貴二一一一一、而理有レ不レ通、亦當捐也」
【好果】カウクワ　善き結果、よき成績。
【好玩】カウグワン　もてあそびもの、玩弄物。
【好景】カウケイ　よきけしき。蘇軾詩「一年一一君須レ記、正是桃黃柳綠時」＝勝景。
【好謀】カウボウ　へりくだることを愛する。
【好雨】カウウ　よきうるほひの雨。杜甫、春夜喜雨詩「一一知二時節一當レ春乃發生」
【好悪】カウアク　このむと、にくむと。すききらひ。＝愛憎。
【好歌】カウカ　よきうた。詩經「作二此一一一」
【好合】カウガフ　よくあふ、仲が善い。詩、小雅「宜二爾室一一一」
【好下物】カウカブツ　善き酒のさかな。下物は酒を下すものの美。＝佳肴。
【好音】カウイン　善きみどころ。よく見える。
【好漢】カウカン　役に立つよき男。晉唐遺狄仁傑傳「則天謂二仁傑一曰、狄一一、汝二一一一」
【好機】カウキ　善きおり、都合善き機會。
【好仇】カウキウ　よきともがら。詩、周南「逑二武夫、公侯一一」
【好逑】カウキウ　よきつれあひ。詩、周南「窈窕淑女、君子一一」＝好匹。
【好奇心】カウキシン　ものずきのこころ。
【好句】カウク　善き字句。六一詩話「詩人貴二一一一一、而理有レ不レ通、亦當捐也」
【好果】カウクワ　善き結果、よき成績。
【好玩】カウグワン　もてあそびもの、玩弄物。
【好景】カウケイ　よきけしき。蘇軾詩「一年一一君須レ記、正是桃黃柳綠時」＝勝景。
【好謀】カウボウ　へりくだることを愛する。

易、謙卦「人道惡レ盈而ー レ」後漢書、樊宏傳、常戒二其子一曰、天道惡レ滿而ー レ、前世貴戚皆明戒也」

【好古】カウコ いにしへをこのむ。論、述而「ー レ敏以求レ之者也」

【好個】カウコ ほどよし、ちゃうと善し。

【好在】カウザイ きげんよくゐませ、人を祝していふ。杜甫詩「因レ君問二消息一、ー ー阮元瑜」＝健在。

【好相】カウサウ よきにんさう。吾妻、羊結傳「孺子有二ー ー一」

【好士】カウシ よき人物。世說「子嶽ー ー」

【好漢】カウカン うまき食物、ごちそう。周禮、天官、庖人「共二祭祀之ー ー一」

【好醜】カウシウ かほよきと、みにくきと。

【好聚】カウシウ 朋子「賢愚ー ー、成敗是非、無レ不二消滅一」＝好醜。

【好時候】カウジコウ 紙の雅名。文房四譜、筆陰精知自、字宗玄、亦曰二ー ー一」＝楮先生。

【好事者】カウズキモノ ものずき、物事に深く心を寄する人。孟、萬章「ー ー爲レ之也」美吉、揚雄傳贊、時有二ー ー一、藏二酒者一」從遊學」

【好事不レ出レ門】カウジフモンヲイデズ よきことは世間に、あらはれがたし。北夢瑣言に古語を引きて「ー ー、惡事行二千里一」

【好身手】カウシンシュ 勝格の壯んに武きをいふ。杜甫詩「朝方健兒ー ー」

【好人物】カウジンブツ 心だての善き人。＝好人・善人・好士。

【好息】カウソク よきねのとり。吳均文「ー ー相鳴、嗈嗈成レ韻」

【好匹】カウヒツ 好逑に同じ（詩、周南、傳）＝良匹。

【好評】カウヒヤウ 善きひゃうばん、善き批評。

【好武】カウブ 武事をこのむ。楮少孫、魏丞相傳「其人ー レ、貪二勇士一、能レ劍」杜甫詩「將軍不レ ー レ、稚子能レ文」

【好物】カウブツ ○其をもの。白居易詩「世間ー ー不二堪求一、祇愛レ飲琉璃盞」○圖すきこのむ食物。

【好文】カウブン 文學をこのむ。鏡起詩「遊主ー レ兼好レ武」

【好文永】カウブンエイ 梅の異名。晉起居注「晉武好レ文、則梅開、慶レ學、則梅不レ開」

【好辯】カウベンクワン 辯論をこのむ。孟、滕文公「孟子曰、予豈ー レ 哉、予不レ得レ已也」

【好爲二人師一】カウトナルヒトノシトナル 物知り顏して人の師となるを好む。孟、離婁「孟子曰、人之患在二好爲一人師一」

【不レ ー阿レ所レ好】コノムトコロニアヒセズ 己の好む所に私して、こびへつらはず「孟、公孫丑」

【好】㊀カン ㊁カン・ケン 俗 剛

㊀をかす（犯）みだる（亂）○もとむ（求）史、齊世家「尙以二漁釣一ー 周」于に通ず。㊁わたくし、わたくしす（私）いつはり、いつはる（詐僞）心術正しからず「ー 雄」「ー 惡」○たはる（淫）＝奸・姦。

【好窺】カウキ かけがれてよこしまなる陸贄文「行實ー ー」

【好惡】カウヲ よこしまにしてわるし。＝姦惡。

【好逞】カウテイ わるがしこを製す。

【好黠】カウカツ 前條に同じ。＝猾黠・姦黠・姦點。

【好宄】カウキ 惡黠の內より起るを好といひ、外より起るを宄といふ。＝姦宄。

【好曲】カウキョク 心ふしくよこしまなる小邪。

【好猾】カウクワツ わるがしこし。又其の人。

【好計】カウケイ わるだくなみ。＝讒計・姦計・奸策。

【好逋】カウブ よこしまにしていつはる。＝奸詐。

【好詐】カウサ わるだくみしていつはる。

【好才】カウサイ わるおる。＝邪智・奸智。

【好翹】カウケウ いつはりよこしまなる小人。晉、詩「奸二豪貴忠義之心一、卻ー ー不レ逞之計一」＝姦類。

【奸人】カンジン 心あしくねぢけたる人。

【奸臣】カンシン よこしまなる臣下。

【奸邪】カンジャ よこしま。又、其のもの。

【奸商】カンショウ よこしまなるあきんど。

＝姦商。
【奸智】カン わるぢえ。＝姦智・奸才。
【奸佞】カンネイ よこしまにしてへつらふ。姦邪諛佞。
【奸物】カンブツ わるもの。＝奸人・奸徒。
【奸吏】カンリ よこしまなる官吏。

【妁】シャク 藥

なかうど（媒）「媒ー」

【如】ジョ ニョ 魚

○ごとし（若）にたり（似）おなじ（同）ひとし（均）○ゆく（往・適）いたる（至）○して、て、而に通ず。○しく、相及ぶ、相比す。論、公冶長「子曰弗ー也、吾與ニ汝弗ー也」○あたる（當）○およぶ（及）○もし（若）萬一。○形容詞の語尾に添へて語調を助くる辭、然に同じ「晏ー」「怡怡ー」○何・何ー㊀は疑問の意をあらはす辭、いかに、いかが。○眞ー㊁は不變不易の眞理、本覺。

【如何】ジョカ 如何・何如・何若・奈・奈何・如・何○如何は此の事はいかがと問ふ意なり、若何とかきても同義なれども、意稍輕し、若爲も如何の義なり。○何如・何者は共に比類を問ふ意にて、これは如何樣であるぞと尋ぬることなり、點爾何如の如し、如何は何を主とし、何如は如を主とす、奚若も何如に同じ。○奈・奈何は共に略ー如何に同じ、奈は如也那也と註す。○如・何は各各一字にてもいかんと訓む、何則は、如何則の如を略したるなり、其如ニ天下與ニ來世一矣は、世の字の下に何を略したるなり。すべて、何如・何若は連用の文字なり、如何・若何・奈何は、連用もし、又引き分けても用ふ、程頤其如ノ予何・信ニ讒慝一而弃ニ忠直一、若ニ諸侯一何・陛下縱自輕、奈ニ高廟・太后一何の如し。

【如干】ジョカン いくばく。任彦升文「食邑ーー戸」＝若干。

【如月】ジョゲツ 陰曆二月の異名、きさらぎ。＝更鐘。

【如今】ジョコン いま。杜甫詩「艱難昧ニ生理一、飄泊到ニーー一」＝而今。

【如上】ジョジョウ 前に言ひし如く、以上の通り。

【如如】ジョジョ 憤悶せざる貌。賈島詩「當レ窓月色自ーー」

【如夫人】ジョフジン 人の妾をいふ。左、僖十七「内嬖如ニ夫人一者六人」とあるに本づく。

【如露】ジョロ 植木に水を注ぐなどに用ふる具、ブリキ製の水入に蘆の實に似たる穴をあけしもの。＝如雨露。

【如意】ニョイ ○思ふままになる。漢書「陛下雖レ行ニ此道一、難不レ得レーレー」○佛家の具、玉・鐵・木・竹などにて造り、長さ一尺許。釋氏要覽「古之爪杖也、用以搔抓、如ニ人之意一、故曰ニーー一」

【如意寶珠】ニョイホウジュ 祭き珠、これを持てば所願意の如くなりといふ。法華經「摩尼珠瓔珞、如意珠瓔珞」＝如意珠。

【如意輪】ニョイリン 佛 六臂ありて如意寶珠を持てる觀世音の像。

【如在】ジョザイ 神を祭るに神のゐますが如く謹む義。論、八佾「祭如レ在、祭レ神如ニ神在一」

【如是】ニョゼ かくの如く、かやうに。＝如斯。

【如是我聞】ニョゼガモン 佛 かくの如く我は聞けりといふ義、如來の教に從ひて、阿難これを諸經の佛說の發端とせし語。金剛經「——、一時佛在ニ舍衛國祇樹給孤獨園一、與ニ大比丘衆千二百五十人一俱」

【如法】ニョホウ ○佛 かたの如く佛法の則にしたがひて、其の通りに行ふ「順正理論」○圓まつたく、まことに。「ーー暗夜」はまっくらやみ。

【如來】ニョライ 佛 佛の尊稱。金剛般若經「無レ所ニ從來一亦無レ所レ去、故名ニーー一」

【如何】ジョカ いかに、どうしやう。時、樂風「ーー忘レ我實多」論、述而「不ニ曰ー其如レ予何」

【妊】ジン 寢

○美くしき女。○年わかき女。

【妄】バウ マウ 漾

○みだり、うそ、でたらめ、いつはり（虛誕）あやまり、空しく、みだりに。○无ーは易の卦の名、乾上震下。

妄・誣・漫・猥○妄はめったになり。妄言・妄語・妄作の類、以下四字は助辭としても用ふ。○誣は妄に近く、まぎれる意あり。濫レ眞は、眞物にまぎれるなり、濫入は、まぎれて入りこむなり、濫費は費すまじきを費するなり。○漫は差別なく、わけも無き義、漫歩と用ふ。○猥は煩雜の義、かるがるしくなれる意、煩猥・猥雜と連用す。

【妄念】モウネン みだりなる心。蘇軾詩「虛心開ニ地籟一ーー覓ニ桃源一」

【妄妖】バウエウ とりとめがなくしてあやしい。薛唐傳、張蘊古傳「素有ニ風疾一、而語涉ニーー一」

【妄求】バウキウ みだりにもとむ。徐賁詩「溷屋豐家莫ニーー一」

【妄動】バウドウ 妄動に同じ。

【妄言】バウゲン みだりにいふ。殘にあはざるでたらめ。莊、齊物「爲レ女ーー之ニ女以妄ニ聽之一」＝妄語。

【妄語】バウゴ みだりなるそらごと。蘇軾

詩「――自知レ宮見レ棄」‖妄言・妄説。○㊥五戒の一。‖虚言。

【妄殺】バウサツ　みだりにころす。戯苑「勇者不二―一」‖濫殺。

【妄人】バウジン　無智にしてみだりに事を為す人。孟子「此亦―也已矣」

【妄信】バウシン　むやみに信用する、わけもなくまことにする。

【妄進】バウシン　みだりにすすむ。張仲素文「是非罔レ惑、孰敢―一」

【妄笑】バウセウ　みだりにわらふ。南史、王志傳「性嚴未二嘗―一」

【妄説】バウセツ　みだりなる言説。蘇軾詩「後世徒―一」

【妄誕】バウタン　うそ、いつはり。梅堯臣文「愚昧貝レ之爲二―一」

【妄談】バウダン　妄語に同じ。後漢書「採二取虚僞誇誕一一、令二忠孝失一望」

【妄動】バウドウ　みだりにうごく、無分別に事をする。‖妄擧。

【妄念】バウネン　みだりなるかんがへ。

【妄發】バウハツ　みだりに發する。春秋繁露「藏二此四者一而勿レ使二―一、可レ謂レ天矣」四者とは、喜怒哀樂。

【妄批】バウヒ　他人の詩文などを批評することの謙稱、妄に批評する。‖妄評。

【妄評】バウヒヤウ　みだりにしなさだめをする、むやみに批評する。‖妄批。

【妄辯】バウベン　むやみにしゃべる、むやみに言ひわけする、無法なる辯解。

【妄想】バウサウ　㊥みだりなるかんがへ、迷へる空想。華嚴經「无二一衆生而不レ具二有如來智慧一、但以二―一顚倒執著一而不二證得一」

【妄執】バウシフ　㊥迷へる執念。‖妄念。

【妄自尊大】ばうじそんだい　妄りに自身のみ優れたりと誇る。後漢書、馬援傳「子陽井底蛙耳、而――」子陽は公孫述の字。

【妄用】バウヨウ　みだりに用ふる。

【妄見】バウケン　㊥みだりなる知覺、實在せざる現象を實在せるが如くに感覺する。

ひのきざし。中庸「國家將レ亡、必有二―一」

【妄幻】バウゲン　怪しき法術にてまよはす。

【妄言】バウゲン　あやしくして正しからざる言。閻若、注「世以二―一爲レ訛」

【妄妍】バウケン　なまめきてうつくし。韻野

【妄想】バウサウ　㊥みだりなるかんがへ、迷へる空想。華嚴經「无二一衆生而不レ具二有如來智慧一、但以二―一顚倒執著一而不二證得一」

【妄執】バウシフ　㊥迷へる執念。‖妄念。

【妄自尊大】ばうじそんだい　妄りに自身のみ優れたりと誇る。後漢書、馬援傳「子陽井底蛙耳、而――」子陽は公孫述の字。

【妃】㊀ヒ　㊁ハイ　㊥微

㊀つれあひ、たぐひ(匹)ノ古は貴賤を論ぜず妻の義に用ふ。○きさき、皇后に次ぎて貴き嬪御の稱。又、太子の嫡妻。○女神の尊稱「天ノ―」「湘ノ―」㊁つれあひ。‖配。○㊥皇族のつれあひ。

【妃匹】女已に從ふ、女の己に偶ぶ意。

【妃媲】つれあひ。詩、衞風、氓詩序「喪二其ノ―一」‖配偶。

【妃妾】めかけ、そばめ、漢書、孝元皇后傳「我過人之ノ―一」‖側室。

【妃嬪】女官の稱、皇后の次を妃、妃の次を嬪といふ。杜牧、阿房宮賦「―一嬪嬙、王子皇孫、辭レ樓下レ殿、輦來於秦」謂婚は宮女の位卑き者。

【妖】㊀エウ　㊁エウ　㊥蕭

○なまめく、なまめかし、うつくし、たをやか(嬝娜)○あやし(異)わざはひ(孽)人に禍を與ふるあやしきこと。左、莊十四「人棄レ常則レ―興」○もののけ、ばけもの、へんげ「―怪」

【妖異】エウイ　あやしきばけもの。後漢書、公沙穆傳「講レ經自若、亦無二―一」‖妖怪。

【妖氛】エウフン　あやしきけはひある雲。

【妖妖】エウエウ　なまめきてうつくしき貌。舒元輿、牡丹賦「妁妁―一、遞遞遞遞」

【妖婉】エウエン　なまめかしく美くし。王勃、春思賦「南鄰少婦多二―一」‖妖冶。

【妖艷】エウエン　なまめかしくあでやか。‖妖麗。

【妖媚】エウビ　うつくしくなまめきたるひめ。陳後主詩「―一臉似二花含一露」

【妖冶】エウヤ　なまめかしく美くし。王勃、春思賦「南鄰少婦多二―一」‖妖艷。

【妖麗】エウレイ　なまめかしくあでやか。‖妖艷。

【妖孽】エウゲツ　うつくしくなまめきたるひめ。陳後主詩「―一臉似二花含一露」

【妖星】エウセイ　○あやしき不吉の星。○はははきぼし。晉書、天文志「―一曰レ彗」漢書晉義「―一曰二掃星・長星・擾槍一」

【妖眚】エウセイ　あやしきわざはひ。晉書「刑殺失レ中、―一竝見」

【妖精】エウセイ　妖怪に同じ。

【妖嬈】エウデウ　うつくしくなまめかし。唐謹詩「艷詞傳二靜婉一、新曲定二―一」

【妖賊】エウゾク　あやしきわるもの。南史

【妖術】エウジュツ　あやしきわざ。怪異の術。元史、順帝紀「以二―一陰謀一衆」‖魔法。

【妖彗】エウスイ　ははき星、わざはひぼし、【晉書】‖妖星。

【妖星】エウセイ　○あやしき不吉の星。○ははきぼし。晉書、天文志「―一曰レ彗」漢書晉義「―一曰二掃星・長星・擾槍一」

【妖眚】エウセイ　あやしきわざはひ。晉書「刑殺失レ中、―一竝見」

【妖精】エウセイ　妖怪に同じ。

【妖嬈】エウデウ　うつくしくなまめかし。唐謹詩「艷詞傳二靜婉一、新曲定二―一」

【妖賊】エウゾク　あやしきわるもの。南史

「宋武旣累破二一一一」

【妖態】ヨウタイ　なまめかしくこびるすがた。後漢書、梁冀伝「妻孫壽、善爲妖態、色美而善爲二一一一、作二愁眉一」

【妖艶】ヨウエン　あやしきそらごと。宋史、方技陳摶伝「一切君臣一一之說、皆以二虛誕一宗」‖怪誕。

【妖女】ヨウジョ　なまめきてうつくしき女。詩經「名部多二一一一、京洛出二少年一」

【妖冶】ヨウヤ　なまめきめしつかひ。後漢書「一一美姿」

【妖不ㇾ踰ㇾ德】ヨウフㇾユㇾトク　邪なるわざはひは、正しき徳に勝つ能はず。史、敍紀伊勝曰、臣聞、——、帝之政其有二闕與一、帝其修ㇾ德」

【妖由ㇾ人興】ヨウユㇾヒトおこる　あやしきわざはひは人の心の正を失へるによりて起る。左、莊十四「人之所ㇾ忌、其氣燄以取ㇾ之、一一也、人無ㇾ釁焉、妖不二自作一、人興ㇾ者則妖興、故有ㇾ妖」

【妖靡】ヨウビ　うつくしくなまめかし。又其の者。列子「一一盈ㇾ庭」‖妖冶淫靡。

【妖繭】ヨウケン　○なまめかしく美くしき女。○人をなやます怪しき女。‖蠱婦。

【妖気】ヨウキ　あやしき氣。不祥の氣。李白詩「一一成ㇾ羣二一一」

【妖艶】ヨウエン　なまめきたるお氣にいり。後漢書、李固傳「因造二一一一、使二樊豐之徒乘ㇾ權放恣一」

【妖魔】ヨウマ　人を害する惡しきもの。歐陽修詩「存ㇾ之弊二後世一、古儀照二一一一」‖惡魔。

【妖魅】ヨウミ　あやしきばけもの。‖妖怪。

【妖殘】ヨウザン　人を害する惡しきもの。元稹詩「一一縱橫橫」‖殘孽。

【妖冶】ヨウヤ　なまめきてうつくし。謝靈運詩「紅粧無二安容一、翠鈿飾二一一一」‖妖艶・妖媚・妖治。

【妖媚】ヨウビ　なまめきてうつくし。拾遺記「諸侯宮殿之臣、競具二粧飾一一、取ㇾ容」

【妖孽】ヨウゲツ　妖怪に同じ。

【妖怨】ヨウエン　あやしき言を以て人をまどはす。誘惑する（晉語、與二世子一書）

【妐】カイ　卦　泰

○ねたむ、そねむ（妬）○やぶる。

【妓】キ　紙

あそびめ、うたひめ「藝一」も女子の音樂をなすもの。又、女の色を賣るものをいふ「娼一」

【妓園】ギエン　衆くの妓女に坐側を圍まして寒を防ぐをいふ。天寶遺事「申王至二冬月一、每ㇾ有二風雪一、際中苦寒、使二宮妓密二圍坐側一、以禦二寒氣一」

【妓館】ギカン　妓女の家。

【妓樂】ギガク　うたひめのかなでる音曲。劉遵詩「開ㇾ筵一一陣」

【妓夫】ギフ　女郎屋の下男、賃銀數の客引。

【妓女】ギジョ　○うたひめ「樂妓」○色を賣る女（倡妓）○遊女グサの異名。

【妓媵】ギエイ　遊女の色を賣る所。女郎屋‖遊家・青樓。

【妝】サウ　シャウ　陽　俗に粧に作る

○かざる、かざり（飾）○よそほひ、けしやう、紅白粉などにて容貌をかざる。

【妝奩】サウレン　けしやうばこ、粉粉嚢一一漆二奩粉一」‖妝臺。

【妝梳】サウソ　よそほひくしけづる、化粧をする。

【妝親】サウシン　粉黛を施しよそほひかざる、親は裝飾なり。儀禮、士昏禮「春詩「川原曉服鮮、桃李最一一」

【妝臺】サウダイ　妝奩に同じ。韓愈詩「一一一暫開」

【妊】ジン　ニン　沁　別に姙に作る

はらむ（懷胎）

【妊娠】ニンシン　はらむ。‖懷妊。

【妊婦】ニンプ　はらみをんな。妊娠せし女。

【妊孕】ニンヨウ　はらむ、みもち。‖妊娠・懷妊・悅胎。

【妣】シ　紙　支

○こじうと（夫の兄）○しうと（夫の父）

【妥】ダ　哿　通音ダ

○やすんず、やすし（安）唐書、循吏傳「民去愁數而就ㇾ安」○おつ（落）墜に通ず。杜甫詩「花一一粘ㇾ蝶」

【妥安】ダアン　安んじ靜まる、よくおちつく。唐書「驕中一一」‖安妥・安穩。

【妥貼】ダテン　互にかりあふ。

【妥當】ダトウ　おだやか、安く定まる。

【妥帖】ダチョウ　おだやかに當る。○安く定まる。詩文の字句の適當なるにいふ。陸機文「或一一而易ㇾ施、或顚齟而不ㇾ安」

【妒】ト　遇　姤に同じ

○ねたむ、にくむ、他の善を羨みて惡む、○他の男女の情交を忌みて惡む、やく。

同訓異義　ネタム　妒・惡・憎・疾・嫉ハ惡（心部八畫）の條を見よ。

【妒婦】トフ　女子戶外に立ちて室內を偸ふの意。

【妒情】トジョウ　ねたみ深く氣あらし。南唐

近事「其妻張氏、——卞急」‖紛悍。
【妒忌】ねたみいむ。りんきする。漢書、禮樂志「人性有二男女之情、——之別一」‖妒疾。
【妒婦】ねたむ、りんき。梅妃傳「妍色傾唐、——冲冲」
【妒賢】賢人をねたむ。
【妒殺】甚だしくねたむ。萬楚詩「紅槿——石榴花」
【妒疾】ねたみにくむ。後漢書「小人專レ制レ權、——賢者」‖妒嫉・嫉妬・妒忌。
【妒婦】前條に同じ（漢書、劉敞傳）

【妨】ハウ 陽 漾 通音 バウ

○さまたぐ、じゃまをする、さまたげ、じゃま（名）○そこなふ（害）
【妨遏】さまたげとどむ。‖妨止。
【妨害】さまたげそこなふ。韓非、飾邪「——於治民」‖妨碍。
【妨礙】さまたげ、さまたぐ。礙は俗字。范成大詩「靜看蒲蘇結レ網低、無レ端——小鼎飛」‖妨碍。
【妨賢】賢人の進路をさまたげる。大學、朱注「——而病レ國」
【妨止】さまたげとどむ。‖妨遏。
【妨訴抗辯】原告の訴訟條件に缺點ある時、被告が抗辯するをいふ。

【妣】ヒ 紙

なきはは（歿母）亡父を考といひ、亡母を——といふ。曲禮「生曰二父母一、死曰二考一妣一」

【妙】メウ 嘯

○たへ「神レ」精巧・善美を極める、極致、不可思議、神祕。老子「立之又玄、衆——之門」○わかし（弱少）「——齡」○たをやか（纖婉）
【妙齡】すぐれてよきかんが（へ）。
【妙緣】ふしぎのいんねん。李華文「眞乘——、冥祥慈應」
【妙歌】たへなるうた。法苑珠林「是琴音聲及——、聲聞二蔽欲界諸天音樂一」
【妙解】すぐれてよくさとる。晉書、王珉傳「——二法理一」‖妙悟。
【妙香】すぐれたるにほひ。增一經「有——三種一謂二多聞香・戒香・施香一、此三香逆風順風、無レ不レ聞レ之」
【妙高山】大海中にある高さ八萬四千由旬の山、日此の山に入れば夜となり、出づれば晝となるといふ。‖須彌山。
【妙筭】十分によくえらぶ。魏志、高貴鄉公傳「——二德行一、以充二其選一」‖妙擇。
【妙妓】すぐれてたへなるげいしゃ。晉槧、七啓「才人——」
【妙技】たくみにたへなるわざ（阮瑀、箏賦）
【妙境】たへなる場所。王維孺文「獨二此微官一、若レ開二金石一、洞二玄一——一曾窺二樣跡一」
【妙曲】すぐれてたへなる音樂。嵇康、琴賦「理二正聲一、表二——一、揚二白雪一、發二清角一」
【妙句】巧妙なる語句。宋書、謝靈運傳「至二于高言——一、晉謂天成」
【妙訓】すぐれて善きをしへ、たへなる敎訓。沈約、究竟悲悲論「曉說二大典一、弘二宣——一」
【妙偶】たへなる偶、偶は佛家の詩詞。蘇軾詩「榜嚴在二牀頭一、——時仰讀」
【妙計】すぐれたるはかりごと。
【妙訣】すぐれたる方法、靈妙なる祕訣。葉適詩「欲レ度二世人一無二——一」
【妙見】菩薩の名。北斗星の本地、國土を護り、貧窮を救ひ、諸願を成就せしむといふ。‖妙見菩薩。
【妙悟】甚だよくさとる、ふしぎによく會得する。又、其のこと。元史、仁宗紀「——二釋典一」
【妙語】すぐれたることば。蘇軾詩「——噴二芳鮮一」
【妙才】すぐれたる才。傑出せる才能。張衡賦「——肩レ伎」
【妙相】たへなる骨相。梁簡文帝文「儀如常住、——長存」
【妙想】すぐれたるかんがへ。浦道源詩「——乃與二天機一通」‖妙思。
【妙操】すぐれたるみさを。論衡「高志——之人」
【妙算】たへなるはかりごと。陳書、高帝傳「——遠圖」‖妙策・妙計。
【妙旨】すぐれてたへなるむね。梁書、沈約傳「窮二其——一、自謂二入神之作一」
【妙思】すぐれたるかんがへ、靈妙なる思想。晉書、范甯傳「——通レ微」‖妙想。
【妙甚】たへなること甚だし、張翥詩「——七字環瑰詞」‖妙絕。
【妙手】すぐれたるうでまへ、甚だ上手。樂府解題「伯牙爲二天下——一」
【妙趣】すぐれたるおもむき。陸游詩「個中——無レ語」‖妙味・妙致。
【妙吹】笛などを巧に吹く。列仙傳「簫史——、鳳雀舞レ庭」
【妙迹】すぐれたる筆蹟（晉書、王羲之傳）‖妙筆。
【妙說】すぐれたる言論。魏書、常景傳「味二道綜一微旨、鳴レ善演——」
【妙絕】甚だしくすぐれる。後漢書、張超傳「善二於草書一、——時人」‖妙甚。
【妙選】十分によくえらぶ。漢書、劉輔傳「——有德之士」‖妙擇。

【妙速】ミョウソク　巧妙にして速か。晉書、荀勗載記「下ノ筆成レ章、未レ有二升レ高不レ賦、臨レ餐不ロ諫、朱彬趙整等、推二其ー一一」

【妙態】ミョウタイ　たへなる姿態。傅毅、舞賦「姿絶倫之ー一、惚怳若之潔清」‖妙容・妙姿。

【妙道】ミョウドウ　たへなるみち、至極せる道義。莊、齊物「我以爲ニー一之行一也」

【妙擇】ミョウタク　十分によくえらぶ。精選する。唐書、李嬌傳「陛下誠用二臣言一、ニー一能者一委之、莫レ不二盡レ力効一レ死矣」‖妙選・妙簡。

【妙致】ミョウチ　すぐれたるおもむき。‖妙趣。

【妙珍】ミョウチン　すぐれてめづらし。又、其の物。漢書、食貨傳「竭二四海之ー一ー以」‖珍妙。

【妙智力】ミョウチリキ　㊀たへなるちゑの力、微妙なる智力。

【妙典】ミョウテン　微妙なる典籍、佛書をいふ。通統文「甘露ー一、先降二殊恩一」

【妙嘱】ミョウチョク　たへなるさへづり。

【妙徳】ミョウトク　玉りてたへなる道、すぐれたる徳。南史、貴榮傳「嘗著ニー一先生傳一」

【妙年】ミョウネン　年わかし。曹植、求二自試一表「終軍以ニー一ー一使レ越」‖少年・妙齢。

【妙筆】ミョウヒツ　たへなる書畫。圖畫見聞志「太宗御札云、頃所レ進墨跡古畫、俱是ー一」‖妙迹。

【妙品】ミョウヒン　すぐれし作品、傑作。宋史、文苑傳「聞ニー一ー一、輒レ損二千金一不レ惜」

【妙舞】ミョウブ　たくみに舞ふ。謝朓詩「清歌閉二上客一、ー一送レ將レ酣」

【妙法】ミョウホウ　㊀たへなるほとけの道、すぐれたる佛法。法華經「如是ー一、如二優曇鉢花時一現一耳」

【妙味】ミョウミ　すぐれたるあぢ、たへなるおもむき。晉書、王接傳「斯玉鉉之ー一、絶世之徽猷也」‖妙趣。

【妙薬】ミョウヤク　すぐれたる良藥。沈約文「或得ニー一、或聞二異香一」‖靈藥・神藥。

【妙絶】ミョウゼツ　すぐれたるほまれ。孔稚圭、北山移文「駁ニー一於浙右一」

【妙用】ミョウヨウ　ふしぎなるはたらき。李卓玉詩「刀圭滅ニー一、厳洞契二冥搜一」

【妙理】ミョウリ　たへなる道理、玄妙の理。北史、高允傳「天下ー一至多」

【妙論】ミョウロン　すぐれたるはかりごと。晉書、孫楚傳「上應遠御、ー一潜授」‖妙計。

【妙應】ミョウオウ　すぐれてうるはし。漢書、外戚傳「ー一善舞、由レ是得レ幸」

【妙齢】ミョウレイ　年わかし。宋史、蔡襄傳「ー一秀發、聰敏絶レ人」‖妙年。

【妤】ヨ　魚

○うつくしきをんな（美女）○婕ーは漢代の女官の名。

【妍】ケン　五畫　女

妍（女部　六畫）に同じ。

【委】㊀ヰ　㊁ヰ　㊂ヰ　紙　㊀ヰ　㊁ヰ　寘

㊀ゆだぬ、まかす「ー任」「ー託」○なりゆきにまかす。○つく、たのむ（屬）○したがふ（隨）○つむ（積）おく（置）○すつ（棄）○つまびらか、つぶさ「ー細」○しほれる、勢がなくなる。‖委。○すゑ（末）本を原といひ、末をーといふ。○禮、學記「或原也或ー也」㊁官府に蓄へ、賑恤に備ふる米穀、薪芻の類、多きを積といひ少きをーといふ。○官の倉庫を司る役所「ー吏」㊂ゆったりとしておちつきたる（雍容自得）貌。

【委委】イイ　ゆったりとせる貌。詩、鄘風「ー佗佗、如レ山如レ河」‖委佗。

【委佗】イタ　○ゆったりとおちつける（雍容自得）貌。詩、召南「退食自レ公、ー一ー一」○うねりくねりあるく貌。恐れて歩む貌。史、蘇秦傳「嫂ー一蒲服、以レ面掩レ地而謝」○ゐ　どちらの異名。‖泥蟠。

【委員】イイン　或事務をまかされたる人。

【委羽】イウ　淮南子「九州八殥之外、迴有二八紘一、北方曰二積冰一曰ニー一」注「ー一、山名、在二北極之陰一、不レ見レ日」

【委捐】イエン　物をすてる「魏志、武帝紀」‖委棄。

【委巷】イコウ　まがりくねりたるせまき　まち。

【委棄】イキ　○物をすてる。委捐。○うちすてておきはぬ。漢書、谷永傳「陛下ー一不レ納」

【委去】イキョ　すてさる。世說「駐車ー一、比レ出已遠」

【委曲】イキョク　つまびらかなるわけ。史、禮書、注「猶二周洽一、ー一得二禮之序一」‖委細。

【委頃】イケイ　小節に拘泥する義。司馬相如文「ー一振巖、拘レ文牽レ俗」

【委細】イサイ　くはしくこまか。‖委曲・委悉。

【委質】イシツ　委は置、質は贄なり、贄即ち禮物を君の前に置くは、初めて仕官する義。一說に、質は音シツ形體なり、わが形體を君にまかす義なりと。左、僖二三「策レ名ーレ、或乃辟也」

【委積】イセキ　あつめたくはふ、委は少しくつむ、積は多くつむ（周禮、地官、大司徒）

【委悉】イシツ　委曲に同じ。

【委嘱】イショク　まかせたのむ。‖委託。

【委蛇】イダ　○おとなしくすなほ。後漢書、賈逵傳「仁厚ー一」○手足の屈

伸が自由ならず。枚乗、七発「四支ー一」○道がまはりくねる。王逸、九思「望二旧邦一兮路ー一」

【委蛇】ヰダ 蛇又は蟬などのぬけがら。荘、知北遊「孫子非二汝有一是天地之ー一也」

【委託】ヰタク たのむ、たのみ預ける「ー一金」

【委託販賣】ヰタクハンバイ 他より商品を頼まれて預りて賣る、品物を預りて賣る。

【委端】ヰタン 禮服を服する表。穀梁傳「桓公ー一搢笏而朝二諸侯一」＝端委。

【委遅】ヰチ ゆるやかに遠き貌。一解に疲れて歩行のはかどらざる貌。詩、小雅「周道ー一」

【委注】ヰチウ 心をそそぎてたのむ。宋史「不二敢負一陛下ー一之意」

【委頓】ヰトン 力がくじけ衰へる。晉書、裴楷傳「楷今ー一臣深憂レ之」＝疲困。

【委任】ヰニン ゆだねまかせる。又、己の代理をつとめさせる。

【委任狀】ヰニンジヤウ 委任せしことを証明する爲めのかきつけ。

【委廃】ヰハイ 衰へて振はざる貌。韓愈、送二高閑上人一序「頽墮ー一、潰敗不レ可二收拾一」

【委伏】ヰフク すてられて隠れる。後漢書「令二滑神之徒、ー一ー隊畝一」

【委吏】ヰリ 米穀の出納をつかさどる官。孟、萬章「孔子嘗爲二ー一一矣、曰會計當而已矣」

【姁】

㊀ク ㊁ク 虞 ㊂ク 遇

㊀―喩は美くしき貌。○ー一は和好の貌。やはらぎてよし。㊁おうなの如くことばのやさしき貌。史、淮陰侯傳「項王言語ー一」㊂ーーはたのしむ（佚樂）呂覽「燕雀處レ堂、子母ー一然相樂也」＝謳謌。

【姁嬉】クキ 美くしき貌。又、和ぎ悦ぶ。傅毅賦「ー一致レ態」

【姑】

コ 虞

○しうとめ、夫又は妻の母。○をば、父の姉妹。詩、邶風「問我諸ー一」○小ーは妻が夫の妹をいふ、こじうと。○しばらく（且）書、酒誥「惟教之」

同訓異字 姑・暫・且・少等の別は暫（日部十一畫）の條を見よ。

【姑嫜】コシヤウ しうとめと、しうとと。夫の母と父と。于濆詩「父兄未レ許レ人、長二妾事ー一一」＝舅姑。

【姑且】コショ しばらく。棒じてなほざりの義とす。＝苟且。

【姑洗】コセン 十二律の一、陰暦三月に配す、よりて三月の異名とす、姑は故にて舊の義、洗は鮮にて新の義、萬物舊を去りて新に就く月の義。禮、月令「季春之月、律中ー一一」

【姑蘇】コソ 春秋戦國の時の吳の國の都、今の江蘇省蘇州府。張繼詩「ー一城外寒山寺、夜半鐘聲到二客船一」

【姑蘇臺】コソダイ 春秋の世、吳の國の臺の名。史、吳世家「吳王夫差破レ越、越遷二四萬一家於二江南一、吳王許レ之、既得二四萬一、甚寵レ之、爲築二ーー一、高三百丈、游二宴其上一」

【姑息】コソク 一寸のがれ、しばらくの安をぬすむ。禮、檀弓「細人之愛レ人也、以二ーー一」

【姑娘】コジヤウ ○父の姉妹。○妾婢をいふ。○圖未だ嫁せざる女。

【姑嫜染】コシヤウセン ほぼづきの異名。

【姑夫】コフ ○父の姉妹の夫。○婦人が夫の姉妹の夫をいふ。

【姑母】コボ 父の姉妹。

【姑射山】コヤサン ○仙人の居るといふ山。莊、逍遙遊「藐姑射之山有二神人一居焉、肌膚若二氷雪一、綽約若二處子一」○圖太上天皇の御所、仙洞御所、はこやのやま。

【姆】

㊀サン ㊁セン 寒 先 婦に同じ

㊀みめよし（好）○そしる（誹）㊁ーーセンはよろめき歩む貌。漢書、外戚傳「立而望之、何ー一其來遲」＝踳跰。

【姆笑】サンセウ そしりわらふ。漢書、異姓諸侯王表「秦自任二私智一、ーー三代」＝嘲笑。

【始】

㊀シ ㊁シ 紙 賞

㊀はじめ、はじまり。大學「物有二本末一、事有二終一」終の反對。○もと（本）おこり。㊁はじめて。禮、月令「桃ー華」

同訓異字 始・初・肇・創の別は初（刀部五畫）の條を見よ。

【始皇】シクワウ 史、秦始皇紀「既爲ーー帝、後世以レ計數、二世三世至二於萬世一、傳二之無窮一」

【始業】シゲフ しごとをはじめる「ーー式」

【始元】シゲン はじめ、おこり、根原。＝始原。

【始原】シゲン はじめ、おこり。＝原始・始元。

【始原林】シゲンリン 古より自然に存在し、未だ曾て人の手を入れしことなき森林。

【始審】シシン 訴訟の第一回のさばき。＝初審・第一審。

【始終】シジウ ○はじめ、をはり。＝終始。○始より終まで、たえず、つねに。

【始祖】シソ 初代のせんぞ。種子遺書「冬至祭ーーー」＝鼻祖。

【始末】シマツ ○はじめと、すゑと。世說「ーー正當動靜之異耳」＝顚末・始終・本末。圖○ととのへをさめる、都合よく處分する。○あとさきを

考へて支出する義より轉じて費用を省く義とす。

【始末書】シマツショ 圖事の顚末を記せしかきつけ、過失ありし時、其の原因結果等の次第を認めて上官に差出す文書。

【有レ始無レ終】アリテハジメナシ 事を始むれども成功せず、人の操守なきをいふ。晉書、劉聰載記「小人――、不レ能レ如二貫高之流一也」

【有レ始者必有レ終】カナラズハジメアルモノハオワリアリ 物事は始あれば必ず終あり。揚子法言「有レ生者必有レ死、――、自然之道也」

【愼レ始而敬レ終】シンデハジメヲツツシミテオワリヲケイス 事の終始をつつしむ。禮、表記「子曰、事二君――一」

【始如二處女一後如二脫兎一】ハジメハショジョノゴトクニシテノチハダットノゴトシ 始は處女の如く靜かにして敵に油斷をさせ、後は脫する兎の如く急にして敵をして防ぐに及ばざらしむ。孫子、九地「始如二處女一、敵人開レ戸、後如二脫兎一、敵不レ及レ拒」

【姉】シ 紙

○あね、いろね(女兄)○婦人を親み、又は敬ひて呼ぶ稱。

【姉姉】シシ ○うば(乳母)の稱。北齊書、南陽王綽傳、綽兄弟皆呼レ父、爲二兄兄一、嫡母爲二家家一、乳母爲二一一一、嫡爲二姊姊一○母の稱。同書、后妃傳「太原王紹德呼二其母文宣皇后一爲二一一一」○敬淳傳「敬淳、尤明二一一一、自二魏晉一以降、推二本其來一、皆有二條序一」

【姉氏】シシ かばねと、うぢと。又みやうじ、うぢ。

【姓名】セイメイ みやうじ(家名)と人名と。

【妻】㊀セイ・サイ ㊁セイ・サイ 㕘通音サイ

㊀つま、夫の配偶者。白虎通「一者齊也、與二夫齊一體一」○小一は妾。㊁めあはす(配)女を以て人に嫁す。論、公冶長「以二其子一一之」

【妻子】サイシ ○つま。詩、小雅「一一好合、如レ鼓二琴瑟一」○つまと、子と。韓愈文「其如二東京、取二一一一一」」＝妻孥。

【妻孥】サイド 妻はやはらかなるを貴ぶ。左傳「夫和而義、一一而正」

【妻妾】サイセフ つまと、めかけと。嫡妻と側室と。宋書、周朗傳「特雖可三以聘二一一、大布可三以拳二鼻姑一」

【妻帶】サイタイ つまをもつ、女房もち「肉食一一」

【妻蕩】サイトウ 妻の親類。

【妻女】サイジョ ○妻、女房。○妻と娘と。

【妻裕】サイユウ つまと、こと。裕は孕に通ず。詩、小雅「宜二爾室家一、樂二爾一一」」

【妻孥】サイド 前條に同じ。高啓詩「讓飲自足歌二一一一」

【妾】セフ 葉

○めかけ、そばめ(側室・小妻)かこひ者。○わらは、女の謙稱。○古、罪ありて官に使役せらるる給事女。○むすめ(女子)漢書、五行志「處一一過」之而孕」

【妾御】セフギョ めかけ。讀、內則「妻不レ在、一一其敢當夕」

【妾出】セフシュツ めかけの生みし子、めかけ腹の子。

【妾宅】セフタク めかけをかこひ置く家。

【妾婦】セフフ めかけ、こしもと。孟、滕文公「以レ順爲レ正者、一一之道也」

【妾孽】セフゲツ めかけ、氣に入りの女。＝妾腰。

【妾腰】セフヨウ めかけ、そばめ。後漢書、楊賜傳「今一一驟入閨尹之徒、共專二國朝一、歎二同日月一」＝妾婦・妾孽。

【妲】タツ 曷 通音ダツ

己ダツは殷の紂王の妃。

【妮】ヂ ニ 支

しもをんな(下女・使女・婢)「一子」

【妯】㊀チク ㊁チク 尤 屋

㊀むなさわぎ(心動)㊁兄弟の妻、相呼びて一娌リツといふ。○

うごく、靜かならず。

【妬】 妒（女部四畫）に同じ。

新字 女石に从ふ、女石を持して他を害せんとする意。

【妬悍】トカン 嫉妬の心ありて氣あらし。南唐近事「其妻張氏、一一卞急」＝妒悍。

【妬氣】トキ 男女のねたむ心、りんき。梅妃傳「一一沖沖」

【妬殺】トサツ ねたむ。殺は助辭。萬葉詩「眉黛奪將青草色、紅顏一一石榴花」＝妒殺。

【妬疾】トシツ ねたみにくむ。後漢書「嘉（劉瑋）一一賢者」

【妬忌】トキ 前條に同じ。荀子「一一怨謗、以傾二賢人一」＝嫉妬。

【妬癡】トチ りんきの度に過ぐるをいふ〔唐書〕

【妬婦】トフ 妻が夫をねたみ。夫が妻をねたむ義。漢書、五行志「相有二一一之心一」注「婦謂二夫妬一婦也」

【妹】 バイ マイ 陰・泰 妹は別字

○いもうと、いもと（女弟）○いも、少女を親みて呼ぶ稱。○姉一は易の卦の名、兌上震下。

【妹婿】バイセイ よめ。又、つま。北史、乳母爲二姉姉一、婦爲二一一一

【妹背】セモ 圖妹兄の義にて男と女と。又めうと、夫と婦と。又、兄と妹と。姉と弟と。

【妹背鳥】セモドリ 圖子規ホトトギスの異名。

【妹】 バツ マツ 曷

一嬉は夏の桀王の后、一に末喜に作る。

【妣】 パン 寒

ばば（老女）

【妣姆】ボン ばば。老婦の稱。晉書、武十三王傳「一一尼僧、尤爲二親暱一」

【嬤】 ボ 慶

○かしづき（女師・保母）＝姥。○姉人五十にして子なく、出でてまた嫁せず、婦道を以て人に教ふる者をいふ。○一一はあによめ、弟の妻より嫂ソウを呼ぶ稱。

六畫

【娃】 アイ エ 佳・麻

○うつくし、みめよし（美好）○美くしき女。李白詩「吳一與二越豔一」○館一は吳の宮殿の名。白居易詩「館一宮畔千年寺」

【威】 キ 微

○たけし（猛）おごそか（尊嚴）

書、洪範「惟辟作一」○やうす、禮式のかた（禮貌容儀）○いきほひ、勢力、權力。○おそる、畏に通ず、はばかる（憚）○おどす、しへたぐ（虐）

【威而不一猛】 威嚴あれどもあらあらしからず。論、述而「子溫而厲、——、恭而安」

【威遠】エン 遠方の國ををどし服せしむる。宋史、王旦傳「旦曰、陛下奄二有天下一、使二大臣坐爲爭一無禮之名一、或聞二外國一、恐無二以一一」

【畏一威】イヅ 畏は此、怒の解くる義。淮書、魏相傳「相心善二其言一、爲雲二威嚴一」唐書、裴度傳「發有二志照一、每犯二顏諫一、疏一逢帝甚怒一、神色不レ徙、而天子亦爲一一」

【威海窟】エカイ 山東半島に在りて、北方旅順口と相對して、渤海灣の口を扼す、今は英國の租借地。

【威嚇】カク おどす、嚇は怒り叱る。＝恐嚇・威脅。

【威儀】イ 威ありて容儀の則るべき義。左、襄三一「北宮文子云、有レ威而可レ畏謂二之威一、有二儀而可一レ象謂二之儀一」詩、邶風「一一棣棣、不レ可レ選也」

【威虐】ギャク 威力を以て、他をおどし、しへたげる。

【威光】コウ 犯し難き權威のかがやき。

【威刑】ケイ 刑罰。隋書「國之所レ恃、不レ在二一一一」

【威脅】キョウ おどす、おどかす、又おどし（宮書、王敦傳）＝威嚇。

【威厳】ゲン 威ありておごそか（戰國策）

【威權】ケン 威光と權力と（漢書、諸侯王年表）

【威信】シン 威ありて信實（後漢書、郭伋傳）

【威神】シン 威嚴ありてたふとし。

【威勢】セイ いさましきいきほひ。韓非子「一一之可二以禁一暴」＝勢威。

【威澤】タク 威力と恩澤と。後漢書「上命不レ行、一一日損」

【威重】ヂュウ おごそかにしておもおもし。傅休奕、樂府「善哉一一、運二神兵一」

【威雷】イ はげしきかみなり。恐じてきびしき威力（後漢書、章帝紀）＝威烈。

【威斗】ト 北斗の威を借りて衆兵を壓服せんとする意を以て、王莽が案出せし器、長さ二尺五寸の銅製の北斗星、出入毎に人をして之を負ひて從はしめしもの（漢書、王莽傳）

【威儀】ギ おごそかにして犯し難き儀。威嚴なる儀。後漢書「貪二慕一一、顧充二行伍一」

【威望】ボウ 威光と人望と。徐鉉詩「夕郎一一拜二霜臺一」

【威如二破竹一】威力の大いなるにいふ。晉書、杜預傳「今兵威已振、譬如レ破レ竹、數節之後、迎レ刃而解」

【威嚇】おどしつみする。盧綸論「大強則不レ可二以一一一」

【威武】たけく勇ましき力。孟、滕文公「一一不レ能レ屈」

【威風】威嚴あるやうす。‖威容。

【威服】おどして服從せしむ。史、秦始皇紀「一二一海内一」

【威福】威光を以て他をおどし。又、恩を施せて人を壓伏する。書、洪範「臣無二有二作レ福作レ威玉食一」荀悦、漢紀「作二一一一、結二私交一、以立二强于世一者、謂二之遊俠一」

【威名】威勢のすぐれたる名聲。漢書「開二暴公子一一一久矣」

【威容】威嚴のあるやうす。華陽國志「杜畿爲二尚書郎一一一可レ觀」‖威風。

【威稜】みいづ。神靈の威力。轉じて天子の御威光。漢書、李廣傳「一一憎二乎隣國一」稜は勁。‖稜威・威靈。

【威力】人を威服せしむる權力。晉書「仰憑二一一一、庶雪二國家之恥一」

【威力偵察】敵の防禦を犯して敵情の探偵を强行する義。

【威(惡)】いかめしくたふとし。吳志、是儀傳「宣二揚德美一、廣二耀一一一」‖威稜。

【威烈】さかんなる威光。漢書、度尚傳「長二尚一一一、進入二山谷一」‖威猛。

【姨】イ　支

○をば、母の姉妹。○妻の同母姉妹。左、莊十「息媽過二蔡一、蔡公曰、吾一也、止而享レ之」

【姨子】をば、妻の同母姉妹。

【姨婆】をっとの母の姉妹。

【姨母】をば、母の姉妹〔釋名〕

【姻】イン　眞　別に婣に作る

○よめとり、むことり、えんぐみ、壻入を婚、嫁入をーといふ。○みうち、親戚・緣者。○ちなみ(因緣)

【姻亞】姻は壻の父、亞はあひむこ同士が互に呼ぶ稱。轉じてみうち、親類。詩、小雅「琬琰一一」

【姻婭】前條に同じ。

【姻家】婚姻又は緣組の關係あるみうち。‖親戚・姻族・姻類・姻戚。

【姻親】親類同士にて結婚する。又其のえんぐみ。又、親戚。婚は重婚。

【姻私】えんぐみを結びてわたくしの利をはかる。宦官の徒と緣ぐみを結びて私をはかる類〔後漢書、羊涉傳〕

【姻戚】夫婦關係の親族。後漢書「宗門廣大、一一不レ少」‖姻家・姻族・親戚。

【姻族】みうち、親戚。劉禹錫文「一一相賀、壺觴盈レ門」‖姻家。

【姻屬】姻家に同じ。‖姻族。

【姻弟】むこのおとうと。陳雅「壻之稱、爲二姻兄弟一」

【姻末】親戚の尊長者に對する謙稱〔幾社增瑚〕

【姻類】姻家に同じ〔魏書〕

【姚】㊀エウ　蕭　㊁テウ　篠

㊀かほよし、みめよし、うつくし、美好なる貌。○はるか。‖遙。○姓、舜の後裔。㊁かろし。‖窕。㊂聚一はつよくはやき(勁疾)貌。

【姚遠】はるかにとほし〔荀、榮辱〕‖遙遠。

【姚江】浙江省餘姚縣の南に在る江名。一一學派は王陽明の學派。

【姚黃】牡丹中の第一の名品、牡丹譜「人謂二牡丹花王一、今一一眞爲レ王、魏紫后レ之」

【姚娘】姚は虞舜の姓、娘は夏の禹王の姓。韓愈、進學解「上規二一一一渾渾無レ涯、周誥殷盤佶屈聱牙、春秋謹嚴、左氏浮誇、易奇而法、詩正而葩」

【姚冶】なまめきて、美好なる貌。荀、非相「美麗一一」‖妖冶。

【姣】㊀カウ・ケウ　巧　㊁カウ・ケウ　篠

㊀うつくし(美)なまめかし(媚)佼・姣に通ず。○美人。○さとし(狡・智)㊁みだる、たはる(淫)左、襄九「穆姜曰、棄位而一、不可謂貞」

【姣好】顏が美くし〔漢書、東方朔傳〕‖姣美・姣麗。

【姣姣】才智ある貌。後漢書、劉盆子傳「宿所謂鐵中錚錚、傭中一一者也」

【姣童】容貌の美くしき男子。‖美少年。

【姣美】みめよし。荀子「築室反耳一一、天下之傑也」‖姣好・姣麗。

【姣冶】うつくしくなまめく。又、其の美女。抱朴子「南威青琴、一一之棱、而必俟二盛飾一以增レ麗」‖艷冶・妍冶。

【姣服】姣好に同じ〔後漢書、梁讓傳〕

【妾】カン　刪　奸と通ず

○よこしま(邪)かたまし、書。堯典「滔滔矣不レ格一一」○わたくし(私)○いつはり(詐)○みだら(淫行)みだる(亂)○惡人(罪人・淫婦・佞人・惡漢)○㊁かしまし(喧)

【姦惡】カンアク わるもの。潛夫論「張湯增二定律令一、以防二一一一」【姦竇】カンイ ねぢけたる心。列女傳「舜猶内治、厚レ有二一一一」【姦勇】カンイウ 心よこしまにしていさましし。國語「一一爲レ賊」【姦雄】カンイウ 心のよしき豪傑。家語、始誅「此乃人之一一者也」【姦婬】カンイン 男女のみだりがはしきおこなひ。＝姦淫。【姦隱】カンイン よこしまにしてかくれたる惡事。隋書、乞伏慧傳「民多二一一一」舊唐書、張亮傳「發二擿一一」【姦佞】カンネイ 惡事を爲すものをあばき出す。漢書、趙廣漢傳「レ一一摘レ伏如レ神」【姦佞】カンネイ 心のあしきお氣にいり。後漢書「納二諛一一」【姦黠】カンカツ わるがしこし。北史「引致一一」＝姦點・姦猾。【姦宄】カンキ かたましくよこしま。姦は内邪、宄は外惡。〔書、舜典〕【姦仮】カンケ 心惡しくして人をたぶらかす。漢郊祀歌「一一不レ萌、妖孽伏息」＝姦詐。【姦強】カンキャウ 心かたましくつよし。蘇軾詩「場來東觀弄二丹墨一、聊借二舊史一誅二一一一」【姦詭】カンキ よこしまにしてつよし。【姦訛】カンクワ 心惡しくよこしまなるをとこだて。梁書「還招二浦逃一多來二一一」【姦險】カンケン 心がねぢけて惡し〔賈誼、鵩鳥賦〕＝奸惡・姦險。【姦詐】カンサ よこしまにしていつはる。漢書「作爲一一」【姦賊】カンザク 心あしく官物をわたくしする。唐書、綦連儁傳「發二酬馬都尉杜中立一一」【姦慝】カンタク わるだくみ。＝奸策・姦計。【姦邪】カンジャ よこしま。又、其の者。韓愈文「一一讒佞奴負之徒」＝姦悪。【姦妻】カンサイ よこしま。宋史、董槐傳「臣知二大全一一」＝姦邪。【姦衆亂色】カンシュウランショク 惡しき衆と、みだらなる色と。禮、樂記「君子反レ情以和二其志一、比レ類以成二其行一、一一、不レ隔二聰明一、淫樂慝禮、不レ接二心術一」【姦淫】カンイン かたましくねぢける。王安石詩「附麗無二一一」【姦漸】カンゼン あしくよこしまなるきざし。孔穎達表「遠防二邪萌一、深杜二一一」【姦盜】カンタウ ぬすびと。晉書、武帝紀「一一起、刑獄煩」【姦智】カンチ よこしまなるち惠。曾子「民貧則一一生」【姦通】カンツウ まをとこ、夫ある女と他の男と不義をする。＝有夫姦。【姦謁】カンエツ よこしまにしてへつらふ。北史、廉士文傳「擢二發一一長吏一、尺布斗粟之贓、無レ所二貸借一」＝邪謁。【姦佞】カンネイ 心ねぢけてへつらふ。又、其の者。晉書「嘿二一一於州國」【姦夫】カンフ まぶ、まをとこ、人の妻に通ずる男。【姦婦】カンプ ままをとこをする女。姦夫の相手の女。【姦富】カンフ 不正なる手段にて得たるとみ。又、其の者。史、貨殖傳「本富爲レ上、末富次之、一一最下」本富は農夫、末富は商人の富。【姦商】カンショウ よこしまにしてみだら。又、其の者。【姦吏】カンリ 法を枉げて私利をはかる惡しき官吏。史記「態二法律一、以奉二一一一」＝奸吏。

【奸】

姦（前條）に同じ。

【姬】キ 支

○ひめ、皇后、王妃。○女子の美稱。○めかけ（妾）史、孟嘗君傳「使人抵二昭王幸一一求レ解」○姓、黄帝一水に居り、一を以て氏と爲す、周人其の姓を嗣ぐ。圖○ひめ、貴人のむすめ。○貴女の名に添へて呼ぶ敬稱「橘一」○小にして愛すべき物の名に冠していふ「一小松」【姬姜】キキャウ 姬は周の姓、姜は齊の姓、共に大國、よりて大國のひめぎみの義とし、又轉じて宮女の稱とす。【姬周】キシウ 三代の時の周をいふ、姬は其の姓。魏志、陳思王植傳「一一之樹レ國」【姬妾】キセフ めかけ。＝姬媵。【姬旦】キタン 周公旦をいふ、姬は周の姓。晉書、王導傳「樂同二伊尹一、道隆二一一一」【姬傅】キフ おつきの女官。【姬媵】キヨウ 姬妾に同じ〔唐書、盧邁傳〕【姬娥】キガ 圖女德ありて女子の模範となるべき婦人。又、其の書名。

【娩】キ 微 【姞】キツ キチ 質

たをやか（閑雅）しとやかにしてよし（靜好）

人の姓、黄帝の子孫。又、あ

ざな。

【姜】 キャウ カウ 陽

○人の姓、齊の國の姓。○一姓の女。○陳西省に在る川の名。‖岐水。

【婷】 クッ 麻

○うるはし、夸に通ず。○うつくしき(美好)貌。

【婷婷】ッ 美くしき容貌(潘岳賦)‖我貌。

【婷名】ミャウ 美くしき名。‖美名。

【妍】 ケン 先 又妍に作る

○うつくし(美好)うるはし(艷)なまめかし(媚)嫵然、送李愿序「爭ー而取機」○みがく(研)

【妍艷】エンエン なまめきてうるはし。楊巨源詩「ー照二江頭一春風好客廻」

【艷ノ妍】タダカハス 美をあらそふ。陸游詩「野草幽花自ー一」‖爭ノ妍。

【妍好】ケンカウ ○かほかたちが美くし、みめよし。杜甫詩「新龍方ー一」○景色がうつくし。太平廣記「湖州名郡、風物ー一」

【妍華】ケンクワ うつくしくはなやか。朱熹詩「桃李自ー一」

【妍粧】ケンサウ うつくしきけしやう。鮑照詩「京洛女兒多ニー一」‖艷粧。

【妍蚩】ケンシ 美くしきと、みにくきと。‖妍媸・妍醜。

【妍媸】ケンシ 前條に同じ。世說「智識ー一、本無ノ關二於妙處一、傳神寫照、正在二阿堵中一」‖美惡。

【妍倡】ケンシャウ うつくしきわざをぎ。晉埴、娛嬉賦「作二齊娼之ー一」

【妍捷】ケンセフ うつくしくしてはやし。唐書、裴行儉傳「不ノ擇二雜藝一而ー一者、余無二取世南一耳」

【妍淫】ケンイン うるはしくあざやか。何景明賦「組織裲襠、務極ニー一」‖秀麗。

【妍芳】ケンハウ うつくしくかんばし。李嶠、遂提賦「桃李ー一、逼二新姓一也」

【妍冶】ケンヤ うつくしくしくなまめかし。又、其の美女。沈炯詩「土地多ニー一」‖艷冶。

【妍麗】ケンレイ うつくしくうるはし。楊基詩「煎氣日已銷、黃花自ー一」

【娟】 娟(女部七畫)に同じ。

【姬】 コウ ク 有

○あふ(遇)○うつくし、みめよし(好)晉子「其人皐ー一」○易の卦の名、巽下乾上。

【姮】 コウ ゴク 嫦に同じ

女のあざな。

【姮娥】ガウ 月の異名、もと羿の妻の名、ー一が、不死の藥を竊み服して月中に奔り、月の精となりしといふ故事に本づく。淮南、覽冥「羿請二不死之藥于西王母一、ー一竊ノ之、奔ニ月宮一」‖嫦娥。

【姿】 ㊀シ ㊁シ 眞支

㊀すがた、なり、かたち(形態)○おもむき(趣味)㊁かたちつくる(容)すがたを飾る、こびる(媚)

【姿字】シ すがた、かたち。晉書「劉生ー一神俊、命世之才也」

【弄姿】ロウシ すがたを飾りて媚を呈する。後漢書、李固傳「胡粉飾ノ貌、揷頭ーノー」

【姿狀】シジャウ すがた、かたち。宋書「ー一雄偉」

【姿色】シショク すがた、きりやう。後漢書、皇后紀「ー一端麗」

【姿勢】シセイ からだのかまへ、みがまへ。‖姿態。

【姿態】シタイ なりふり。‖姿勢。

【姿體】シタイ すがた、かたち。唐書、李義琰傳「ー一魁秀」‖姿貌。

【姿望】シバウ すがた、風采。晉書、何劭傳「雅有ニー一」

【姿貌】シバウ すがた、かたち。後漢書、周郎傳「眾ー一短陋」‖容貌・姿態。

【姿容】シヨウ すがた、かたち。‖姿貌。

【姬】 姬は別

つつしむ(慎)

【姝】 シュ 虞

○うつくし、みめよし(美好)詩、邶風「靜女其ー」○うるはしきひと(美人)○ー一はやはらかによわき貌(柔懦)莊、徐無鬼「暖暖ー一」○かざる(粉飾)

【姝好】シュカウ かほよく、うつくし。唐書「采ニ擇天下ー一」

【姝姬】シュキ うつくしき女、美人。

【姪】 妊(女部三畫)に同じ、詭に通ず、誇なり。

【娣】 テイ 齊

みめよし、ー一は美好の貌。漢書、西域傳「ー一公主」

【姪】 テツ 屑

○めひ、兄弟の生める女。○をひ、兄弟の生める男子(甥)聞見錄「臣諸子皆豚犬、有ー一輩備宰相才也」○妻の兄弟の子を妻が稱していふ。

【姪甥】テツセイ めひと、をひと。白居易詩「弟妹妻孥小ー一」

【姪孫】テツソン またをひ、甥の子、兄弟の

孫（明律）

【姓】 姓（女部四畫）に同じ。

【姓孕】ニン はらむ。異苑「婦人一一未ㇾ滿三月、著二墳衣冠一平旦左繞レ井三匝、映二井水一詐覩レ影而去、勿二反顧一、勿レ令二墳見一、必生レ男」

【姥】 ボ 慕

ばば（老女）うば。‖婦。

【姥櫻】ザクラ 園○櫻の一種、花は八重にして大輪、色淡く、葉に先ちて開く。○おほどしま、年よりたる女の異稱。

七畫

【娥】 ガ 歌

○みめよし、かほよし、うつくし（好）○美人「宮一」「仙一」○人の名、一皇は堯の女、舜の妻、嫦一は羿の妻、不死の藥を竊みて月に奔る、よりて又、月の異名とす。‖姮娥。夸一は天女、韓一は歌妓。

【蛾形】ガケイ 月の異名、蛾眉の形。鮑溶詩「厚レ綫模糊一一靜」

【蛾娥】ガ 女子○うつくしき貌。古詩「一一紅粉粧」

【蛾蛟】ガカウ なまめきてうつくし。列子「鄭有二處子之一一者一必賄而招レ之、媒而挑レ之、弗レ賚而後已」

【蛾嫦】ガジヤウ 美くしき女。列子「簡二狄簡之處子一一靡曼者一」

【娙】 ㊀カン・キヤウ 青 ㊁ケイ 徑

㊀かほよし、美好なる貌。○女のたけたかくうるはし。㊁うつくし。○一娥は漢代の女官の名。

【娟】 ㊀ケン ㊁エン 先

㊀うつくし、みめよし（美好）「婉一」通じて嬋に作る。㊁うつくし、美好。○連一はしなやか（纖弱）○便一は輕き貌。舞ふ貌。○一一は幽遠（カスカシヤカ）なる貌。○微しく曲れる貌「聯一」○こびる（媚）

【娟娟】エン 幽遠なる貌。かすかに遠し。杜甫詩「風含二翠篠一一一淨」

【娟秀】エンシウ うつくしく秀でる。唐書、高駢傳「左右侍姬百餘、皆一一光麗」

【娯】 ゴ 虞 遇

○たのしむ、たのしみ（樂）「歡一」「宴一」張衡、西京賦「窮歡極一」○たはむる（戯）「遊一」「戯一」

【娯樂】ゴラク 娯・樂・嬉・豫の別は樂（木部十一畫）の條を見よ。

【娯遊】ゴイウ たのしみあそぶ。馬融常詩「長安青雲士、任俠日一一」

【娯嬉】ゴキ たのしみよろこぶ。蘇軾詩「與レ我相一一」

【娯戯】ゴギ 笑ひてたのしみ舞ふ貌。柳宗元文「一一笑舞」

【娯親】ゴシン 老いたる父母をなぐさめたのしましむ。國學紀聞「陳思王曹芝篇曰、伯瑜年七十、綵衣以一レ一」

【娯情】ゴジヤウ 心をよろこばす。陶田賦「聊以一レ一」

【娯適】ゴテキ たのしみよろこぶ。李華詩「佳人是二一一一」

【娯樂】ゴラク よろこびたのしむ。‖悦樂。

【娑】 ㊀サ ㊁サ 歌 哿 馬 通音シヤ

㊀婆一は形容詞。婆（女部八畫）を見よ。㊁驟一は馬の疾走する貌。

【娑婆】シヤバ ○梵語堪忍・忍土・能忍などと譯す。內には諸煩惱、外には寒暑風雨の苦を忍ばざるべからざる國土、現世をいふ。○圖平獄を地獄に喩へ、牢獄以外の地をいふ。

【娑婆塞】シヤバソク 圖この世の場所を塞ぎて人の邪魔になる義、徒らに生きて益なき者を罵る語。

【娑羅雙樹】シヤラソウジユ 娑羅は梵語、高遠又は堅固と譯す。釋尊、此の樹下にて涅槃に入る、二樹合して一樹をなす、故に雙といふ。娑一に沙に作る。遺教經「於二一一間一將レ入二涅槃一」

【婕】 サク 藥

つつしむ（謹）

【婕妤】ショウ つつしむ貌。史、申屠嘉傳「自二縊死一後、爲二丞相一者皆一一謹備レ具而已」

【嫁】 シン 震 寘

はらむ、みもち（妊身）「妊一」身に通じ作る。

【嫣】 ダ 哿

○婀一は美くしき貌（洛神賦）○嫵一嫣一は柔かにして長し。又、たをやかにして長し。

【嫣嫣】ダ 柔かにして長き貌。梅堯臣詩「嫣柳枝一一」

【娘】 ヂヤウ 陽 禦に通ず

○むすめ、をとめ（少女）「村一」○俗に、はは（母）康熙字典「俗稱父曰爺、母曰一」

【娘子】ジヤウシ ○むすめ。少女・處女。○

母。温公書儀「古稱ノ父爲二阿郎一、母爲ニ一一」○朝妻をいふ。

【娘子軍】ジャウシグン　女の率ゐる軍隊の名。唐書、平陽公主傳「下ノ嫁ニ柴紹一、高祖兵興、主招二南山亡命一得二數百人一、以應ノ帝、帝渡ノ河、主引二精兵萬人一、與二柴王一會二渭北一、紹及ノ主計置二幕府一、分二定京師一、號二――一」

【娣】

㊀ テイ・ダイ　㊁ テイ・ダイ　齊

㊀いもうと（妹女弟）爾雅、釋親「女子同出、先生爲ノ姒、後生爲ノ一」㊁おとうとよめ。兄の妻を姒、弟の妻を一といふ。同書「長婦謂ニ稚婦一爲ニ一、稚婦謂ニ長婦一爲ニ姒婦一」

【娓】

ビ　支

○したがふ（從・順）○うつくし（美）○つとむ（勉）○一一は倦まざる貌「一一而語」＝嘆賞。

【娉】

㊀ ハイ　㊁ ハウ・ヒャウ　庚　敬

㊀とふ、おとづれる（問）＝聘。○めす（召）○めとる（妻）㊁一一婷は美くしき貌。

【娉婷】ヘイテイ　美くしき貌。杜甫詩「不ノ嫁惜ニ一一」

【娉命】ヘイメイ　結婚のやくそく。北史「與ノ君一一雖レ單、二家多故、未レ及ニ相見一」

【娩】

㊀ ベン　㊁ ベン・メン　銑　阮

㊀やはらかにしたがふ（柔順）○禮、內則「女子十年不出、姆教二婉一聽從」○こびる（媚）㊁うまる（生）出産する「分一」

【娵】

リ　紙

姉一はあひよめ（姉姒婦）

八畫

【婭】

ア　禡

○あひむこ、己の妻の姉妹の夫、兩壻相呼ぶ稱。爾雅、釋親「兩壻相謂曰一、言相亞次也」通じて亞に作る。○みうち（姻戚）

【婭壻】アセイ　あひむこ。唐書、李傳傳「內特二前呈一一一」

【婀】

ア　歌　一に娜に作る

○たをやか、しなやか。○婷一は決せざる義。

【婀娜】アダ　たをやかになまめかしきすがた。又其の美女。

【婀娜】アダ　美人のしなやかなる貌。曹植、洛神賦「華容一一、令二我忘レ餐」

【婉】

イン　㊁ 淫に通ず

○たのしむ（逸樂）○あそぶ（遊）○たはむる（戲）

【婦】

婦（女部六畫）に同じ。

【婉】

エン　阮

○したがふ（順）○しとやか（溫和）言葉圓轉にして忤がらはず「一曲」「柔一」○うつくし、うるはし（美好）○わかし（少）○一一はしなやかなる貌。又、龍の飛ぶ貌。

【婉孌】エンレン　柔順なる貌。詩、「武悼楊后、一一有二婦徳一」

【婉変】エンセン　婉孌に同じ。変は美。

【婉約】エンヤク　○すなほ。簡潔章句敍一一以願上、遷巡以避レ患」○しなやかなる貌。南史「一一藤倒垂」＝婉然。○龍の飛び動く貌。班固「賛二八龍之一一一」

【婉曲】エンキョク　しとやか。やさしくかどだたず。

【婉孌】エンレン　うつくしくやさし。宋史、皇后樂章「賛生一一」＝淑婉。

【婉順】エンジュン　やさしくおとなし。漢書、元后傳「一一得二婦人道一」

【婉如】エンジョ　うつくしくやさしき貌。＝婉然。

【婉等】エンタウ　婉曲にして美くしく飾る。唐書、虞世南傳「至二累旬一不二盡揚二文章一一」

【婉然】エンゼン　たをやかなる貌。法書要錄「夫人隸書貌若規矩、鍾公云、辭二玉壺之冰一、爛二瑤臺之月一一一芳樹、穆若二清風一」＝婉孌・婉如。

【婉孌】エンレン　うつくしき貌。梁簡文帝、七勵「歲二命孌之一一一耳二瑤瑞之陸離一」

【婉轉】エンテン　曲折ありてたをやか。謠岳「賦「一一輕利」

【婉娩】エンベン　婦容のおとなしくしとやかなる貌。娩（女部七畫）の字解參看。

【婉挽】エンバン　しなやかにしてやはらぐ。張衡文「溫文潛發、柔順一一」

【婉約】エンヤク　おくゆかしくつづまやか。國語「一一其辭一」

【婉愉】エンユ　やさしくたのしむ。韓詩外傳「居則一一、怒則勝レ敵」

【婉容】エンヨウ　やさしきかたち。禮、祭義「有二溫色一者、必有二一一一」

【婉麗】エンレイ　たをやかにうるはし。晉書「婆容一一、服飾光華」

【婉孌】エンレン　年わかくうつくし。詩、齊風「婉兮孌兮、總角丱兮」

【婢】

カウ　巧

○さいはひ（倖）○したしむ（親）○もとる（很）＝倖。

【婷直】ナンク 剛直にしてもとる。後漢書「一一之風、于ン斯行矣」‖悻直。

【婣】ケン 〔霰〕 やから（親族）漢書、樊噲傳「誅諸呂一國」‖眷。

【婚】コン 〔元〕 昏に通ず 婿に同じ えんぐみする、夫婦になる「大一」「早一」「再一」「結一」「新一」「離一」めとる、とつぐ、よめいり。むこどり。

【婚姻】コイン ○えんぐみ。白虎通「婚者、昏時行レ禮、故曰レ婚、姻者、婦人因レ夫、故曰レ姻」‖婚姻・婚娶・昏姻・婚嫁。○婚は壻の父、姻は婦の父【爾雅】

【婚媾】コイン 前條に同じ。媾は姻。

【資レ婚】コンカウ 嫁娶する時に貨財を求め取る義。史記「山東士人尚二門閥一、嫁娶必多取レ資、人謂二之一一」

【婚嫁】カコン えんぐみをする。又よめいりむこどり【宋史、公孫僧遠傳】

【婚儀】ギコン 婚禮に同じ。

【婚禮】レイコン かさなるえんぐみ。禮は親類とのえんぐみ。易、屯卦「求二一一」

【婚親】シンコン 婚戚に同じ。

【婚娶】シュコン 婚姻に同じ。‖婚嫁。

【婚戚】セキコン えんぐみによりて成りしえんじゃ、縁家。‖姻戚、婚屬・婚親。

【婚媾】コウコン 婚姻に同じ。

【婚嫁】カコン 婚姻に同じ。

【婚媾】コウコン 婚姻に同じ。

【婚姻】イン

ひある女。女子の已に嫁せし者、夫ある女「少ー」「主ー」「貞ー」「賢ー」○をんな(女子)「ー徳」「桑ー」○めす(牝・雌)康熙字典「物類之陰者亦曰ー」○みめよし(美好)荀、樂論「其容ー」

【婦家】フカ　よめのさと、つまの生家。後漢書、高句驪傳「娶婚特就ニーー」

【婦教】フケウ　女子のをしへ。梁書「方論ニーー」＝陰教。

【婦業】フゲフ　をんなのしごと。後漢書、「皆能ニー一」＝論ニ經典ニ曰婦功。

【婦言】フゲン　をんなのことばづかひの心得、女の四行の一。周禮、冢宰、九嬪掌ニ婦學之法ニ、以教ニ九御ニ「婦德・ーー・婦容・婦功」

【婦公】フコウ　妻の父(後漢書、第五倫傳)

【婦功】フコウ　をんなのてわざ。家語「霜降而ーー成、嫁娶者行焉」

【婦寺】フジ　婦女と宦官と。寺は侍、君にはんべる義(詩、大雅)

【婦人】フジン　をんな。＝女子・婦女・婦女子。

【婦人之仁】フジンノジン　極めて小なる慈愛心。史、淮陰侯傳「韓信曰、項王見レ人、恭敬慈愛、言語嘔嘔、人有ニ疾病ニ涕泣分ニ食飲ニ、至下使ニ人有ニ功當ニ封爵一者ニ印刓敝忍不ニ能予ニ、此所ニ謂ーー也」＝小惠。

【婦絰】フジョク　をんなのはたおり。李勤詩「倚レ牀看ニーー」

【婦職】フシキ　女の爲すべきしごと。はたおり、裁縫など。周禮「以ニーー之法ニ、教ニ九御ニ」

【婦道】フダウ　をんなのふむべきみち。

【婦女】フヂョ　婦人に同じ。

【婦女子】フジョシ　○をんな。＝婦人・婦子。○をんこども。丈夫に對して柔弱なるつまらぬ者の喩とす。

【婦人】フヂン　をんなのそなふべき德。禮、郊特牲「信ニ人也、信ニーー也、盛レ之以レ竹、終身不レ改」

【婦之五等】フノゴトウ　婦人の五等の名稱。曲禮「天子之妃曰レ后、諸侯曰ニ夫人ニ、大夫曰ニ孺人ニ、士曰ニ婦人ニ、庶人曰レ妻」

【婦父】フフ　妻のちち。注鉄辞典「実妖攻レ曰、皇帝是ーー」

【婦容】フヨウ　をんなの身だしなみ、婦言を見よ。

【婪】

㊀ラン　㊁ラン　感　覃

㊀むさぼる「貪ー」＝惏。㊁みだり、つつしまず(不謹慎)

【婪尾】ランビ　最後の義。楊萬里詩「破ニ除ーー一巡ニ領ニ略打頭清ニ」

【婪尾酒】ランビシュ　最後に飲む酒。仇池筆記「以レ酒巡匝、至ニ宋坐者ニ連飲三杯ニ爲ニーーー」

【婪尾春】ランビシュン　芍藥ヤクの異名。蘇辞錄「唐末文人謂ニ芍藥ニ爲ニーーー」＝殿春

尾酒、乃最後之杯、芍藥殿レ春故名」

【婁】

㊀ル・ロ　㊁ル・ロ　㊂リョ・ロ　㊃ロウ・ル　㊄ロウ・ル　有　尤　御　虞　慶

㊀ひく(曳)衣を曳く。○ちりばむ(鏤刻)○おろか(愚)くらし(昧)㊁つなぐ、馬を繫ぐを縷、牛を繫ぐをーといふ。㊂しばしば。＝屢。㊃たたみ、足の名。二十八宿の一「ーー宿」㊄部ーはちひさきをか(小阜)＝培塿。

【婁】

婁(前條)の俗字。

九畫

【婀】

㊀アン　㊁エン　哿　銑

㊀ー娜は決せざる義。㊁ーーは女の嫋ひて愁ふ所ある貌。

【媛】

㊀エン　㊁エン　元　銑

㊀ひめ、たをやめ(美女)「才ー」「淑ー」詩、鄘風「邦之ー也」○うつくし(美)たをやか。㊁ひめ、貴女の敬稱「橘ー」「佐保ー」

詩「美女なり、女に从ひ授の省に从ふ、美女は人の攀かんと欲する所の意。

【媛女】エンジョ　美女。梁元帝賦「妖童ーー」

【媧】

クヮイ　クワ　蟹　佳

女ーー氏は人名、五色の石を煉りて天を補ひし上古の帝王。

【婿】

婿(女部八畫)に同じ。

【嫁】

サウ　ソウ　皓

○あによめ(兄の妻)＝嫂。○丘ーは長兄の妻、おほあによめ。

【婿】

壻(士部九畫)の俗字。

【媒】

セツ　屑

○あなどる(慢)○けがす(瀆)狎れて禮を失ふ。○なる(狎)上を慢ひありてなれ近づく。

【媒近】セツキン　君になれちかづく。又、其の者。柳宗元文「不レ宜下謀及ニーー一以忝中王命上」

【媒黷】セツトク　○なれけがれる、媒は狎、黷は汚、一に瀆に作る。漢書、枚乘傳「好ニ慢戯一以故ーー貴幸」○男女の則がみだれる。班昭、女誡「防ニ閨門一、遠ニ嫌ーー一」

【嫺護】ケン 前條に同じ。
【嫺慢】マン なれみだる。漢書「流湎ー、淫殺無レ別」

【嫡】ダ 箇 個
○うるはし、なまめきうつくし（艶美）○おこたる、なまける、不敬なり。‖惰。
【嫡慢】マン おこたりあなどる。漢書、鮑勝傳「ー亡狀」‖惰慢・惰護。

【嫉】テイ シ 齊 支
○やすし（安）○うるはし（美好）
【嫉嫉】ティ ○安き貌。揚雄「ー、安也」○みめよき貌。東方朔、七諫「西施ー而不レ得レ見」

【嫜】テイ 青 迥
ーー嫜ーは美好なる貌。しなやかにして美くしき貌。

【嫩】㊀ドン・ナン 願 ㊁ゼン・ナン 銑
㊀わかし。‖嫩。わかくかほよし。㊁みめよき貌。

【媒】㊀バイ ㊁ベイ・マイ 灰 隊
㊀なかだち、男女のえんぐみをとりもつ者「良ー」○兩者の中間に立ちて事を謀る者（仲介者）○誘ひ出すはたらきをするもの、をとり「鳥ー」○もと（酒の酵）○龍ーは駿馬。㊁ーはくらし。‖昧昧。○むさぼる（貪）
【媒媼】アイ 男女のなかうどをする老女。抱朴子「求ニー之美談一」‖媒婆・媒媼。
【媒婆】バイ 年老いたるなかうどの女。韓愈文「即謀謂ニー一」‖媒婆・媒媼。
【媒介】バイ 兩者の間に立ちて取りもつ。なかだち。唐書「厥女陽曰、古今用レ人、必因ニー一」
【媒合】バイ とりもちて會合せしむ。
【媒蘗】バイ 媒は酒醗ス麴は物ヲーーを以て酒を造る如く、其の謀を醸成して陷害する義。漢書、李陵傳「ーニー其短一」‖媒孽。
【媒氏】バイ 古、男女を媒合する事を掌る官名「周禮」‖媒官。
【媒妁】バイシャク えんぐみのなかだち。白虎通「男不ニ自專一ニ、女不ニ自專一レ嫁、必由ニ父母一、須ニー一何、遵レ恥防ニ淫佚一也」
【媒酌】バイシャク 前條に同じ。酌・妁通ず。
【媒助】バイ とりもちしてたすける。‖媒介。
【媒薬鴆】バイヤクチン いろどめ、布帛などに色を染めつける藥品。明暮・五倍子の類。
【媒鳥】バイ をとり。他の鳥を誘ひ出して捕ふる爲めに使ふ鳥。‖囮。
【媒嬖】バイ 媒嬖に同じ。訓蒙字會「媒妁俗呼レ男曰ニ媒人一、女曰ニー一」總稱ニ中人一」
【媒嫗】バイ なかだちするをんな。青箱記「使ニー一通レ意」‖媒婆・媒媼。
【媒孽】バイゲツ くらき貌。莊、知北遊「ーー晦晦、無心而不レ可ニ與謀一」‖昧昧。

【媚】バウ 號 皓
○いむ（忌）にくむ、ねたむ（嫉）夫が婦を妬む。○いかる（怒）
【媚怨】エン ねたみうらむ。唐書、劉晏傳「由レ是ーー益多」‖媚恨。
【媚嫉】バイシツ ねたみにくむ。大學「人之有レ技、ーー以惡レ之」‖冒嫉。

【嫵】メウ 篠
○みめよし（美好）「娘ー」○うかれめ（妓女）

【嫻】ビ 寘
○こびる、へつらふ（諂）「諛ー」「佞ー」○なまめく、艶にして情を含む。○うつくし（美）「姸ー」「風光明ー」○みめよし（好）○いつくしむ（愛）○したしみしたがふ（親順）○やはらぐ（諧）○まどはす（魅）「魅ー」

【嫻奥】ビ 君主にこびへつらふ。奥は室の西南隅、尊者の居る所。禮、八佾「與ニ其嫻ニ于奥一寧媚ニ于竈一」
【嫻客】カク 蒲萄の異名。中興紀開「張敏叔以ニ蒲萄一爲ニー一」
【嫻媚】ビ 權臣にこびへつらふ。嫻奥を見よ。嫻は五祀の一、孟夏に之を祭る。先づ竈の神を祭り次に尸（かたしろ）を奥、即ち室の西南隅に設けて之に酒食を供す、尸は位地尊きも竈の代理に過ぎず、由りて君主に媚ふよりも寧ろ地位卑くとも實權を握る臣下に媚ふを利とするに喩ふ。
【嫻附】ビ こびへつらひて從ふ。唐書、吉溫傳「溫皆ーニー之一」‖阿附。
【嫻嬌】ビ なまめきたる姿をして人にこびしたがふ。嫻も嫻と同義。元好問詩「妍花紅粉妝、窈窕工ニーー一」‖嬌嫻。

【嫗】婦（女部九畫）に同じ。

【婆】ブ 麻
○ー女は星の名。‖須女。○ー源は縣名、唐代に置く、安徽省徽州府に屬す。

【媮】㊀ユ　虞　㊁トウ　尤　今俗に作る　㊀うすし（薄）うすくす。○たのしむ（樂）愉に通ず。○ぬすむ（偸）○かりそめ（苟且）㊁わるがしこし（巧黠）○ぬすむ。【媮合】ガッ　人の意を迎へて氣に入るやうにする。史記「―一取レ容」＝迎合。【媮居】キョ　苟安をぬすみて空しく位に居る。國語「―一幸生」【媮生】セイ　つとめを忘りてかりそめに生きながらふ。楚辭、卜居「將從レ俗富貴以―一乎」【媮娯】ゴ　たのしむ。東方朔文「朝―一以忘レ憂」

十畫

【媼】アウ　皓　○おうな、ばば（婆）「翁―」「乳―」○はは（母）史、趙世家「―之愛二燕后一賢二於長安君一」○―神は地の神。【媼嫗】アウク　ばば。老いたる女。北史、那邵傳「父老及―一皆連相扶追、號泣不レ絕」

【婆】㊀アウ　㊁エイ　庚　ケイ　青　○―はかほよし（好）○うち（小心）○―媄はこむすめ（幼婦）㊁よし（好）○すがた（態）

【媾】エウ　蕭　○たはむる（戯）○かほよし（美好）○肩を曲げて行く貌。

【嫁】カ　禡　○とつぐ、よめいりする。禮、内則「女子二十而―一」「―娶」「改―」「許―」「婚―」○ゆく（往）列、天瑞「列子居二鄭圃一四十年、人無二識者一將レ―一于衛一」○罪惡を推して他人にぬりつける。災難を他に推しつける。史、趙世家「是欲レ禍於趙也」○國よめ。【嫁期】キ　よめいりするとしごろ。【嫁娶】シュ　よめに行く、とつぐ、嫁・娶二字同義。【嫁禍】カ　己の禍を人にぬりつける。史、張儀傳「內―一安國、此善事也」【嫁資】シ　よめいりのしたく。眞軒筆錄「爲二吾女一營二辦―一」【嫁妝】シャウ　よめいりの仕度。＝嫁資。【嫁殤】シャウ　よめいり前にわかじにする。殤は十九歳以下にて死する。【嫁娶】シュ　よめに行くと、よめをむかへおと。よめいりと、よめとりと【史、三皇紀】【嫁鼠】ソ　ねずみのよめいり。梁玉繩清白士集、嫁鼠詞自注「俗傳除夕鼠嫁二女一、竊レ履爲レ綺、歳作二此詞一」【嫁非】ヒ　あしきことを他人になすりつける。唐書、李嶠傳「自陳二失政一、匄レ罷レ官、無レ所レ―一」【嫁母】ボ　父の死亡後、他に縁づきし母親。再嫁せし母。【嫁奩】レン　よめいり道具を入れる箱、鏡臺・針箱の類、轉じてよめいりの仕度。

【媿】キ　寘　はづ、はぢ、はづかしめ、はづかしむ。○愧。【媿辱】ジョク　はぢ。又、はづかしむ。漢書「先二行誼一無二―一」

【嫉】ケイ　寘　をんなしもべ（女隷）奚に通ず。

【嫌】ケン　豏　○きらふ、いやになる。○うたがふ、うたがひ、うたがはし（疑）「猜―」「―疑」○にくむ、にくみ（惡）「小―」「怨―」「憎―」○うとんず（疎）情薄し。○ここへおと。よめいりと、よめとりと【史、三皇紀】【嫁鼠】ソ　ねずみのよめいり。梁玉繩清白士集、嫁鼠詞自注「俗傳除夕鼠嫁二女一、竊レ履爲レ綺、歳作二此詞一」【嫁非】ヒ　あしきことを他人になすりつける。唐書、李嶠傳「自陳二失政一、匄レ罷レ官、無レ所レ―一」【嫁母】ボ　父の死亡後、他に縁づきし母親。再嫁せし母。【嫁奩】レン　よめいり道具を入れる箱、鏡臺・針箱の類、轉じてよめいりの仕度。【嫁娶】シュ　よめに行くと、よめをむかろよからず。【嫌忌】キ　いみきらふ。後漢書、孔融傳「曹操既積二―一而都讌復構二成其罪一」【嫌疑】ギ　うたがひ。曲禮「夫婦者所下以定二親疎一決中―一、別二同異一明中是非上也」＝疑似。【嫌隙】ゲキ　うたがひてなかがわるい【晉書、孫楚傳】【嫌猜】サイ　いみうたがふ。論語「不レ愛二外一―一」【嫌似】ジ　うたがはしくおもふ。晉書「以二―一而忘二宝公一」＝嫌疑。【嫌貳】ニ　きらひうたがふ、貳は疑。＝嫌似。【嫌怒】ド　きらひいかる。【嫌名】メイ　君父などの名と聲音相近くしてまぎらはしき名。曲禮「禮不レ諱二―一、二名不二偏諱一」

【嫄】ゲン　元

人名、姜ー は周の祖先、棄(后稷)の母。

【媾】 コウ ー 宥

○かさなるえんぐみ、みうち同志の緣組(重昏)「婚ー」「姻ー」○いつくしむ、いつくしみ(親)詩、谷風「彼其之子、不ー其ー」○よしみ(和好)○あふ(合)まじはる、交合する。

【媾合】コウガフ 男と女とまじはる、交接する。‖交合・交媾。

【媾和】コウワ 兩國和をむすぶ。史、平原君傳「不ー如ー發二重使一而益ー媾」注「求ー和曰ー媾」戰國策には講和に作る、媾・講通ず。

【嫂】 サウ 皓

あによめ、兄の妻。‖嫂。

【敬レ嫂】ケイスウ あによめをうやまふ。後漢書、馬援傳「援敬二事嫂一、不レ冠不レ入レ門」

【盜レ嫂】タウサウ あによめをぬすむ。史、陳丞相傳「平居レ家時、盜二其嫂一」漢書、直不疑傳「不疑篤レ行、或者曰、不疑貌雖二美善一ーレー、不疑曰、我乃無レ兄、終不二自明一」

【嫌】 シ 支

○みにくし(醜)妍の對。‖蚩。

○みだりがはし(淫)○おろか(痴)

【嫌妍】ケンケン みにくきと、美くしきと。法書要錄「題二勸美嫌一指示ーー」‖妍嫌。

【嫉】 シツ 質 疾に通ず

○にくむ、ねたむ、そねむ、他人の善事をそねみにくむ。色情に關するを妒、他人の善を忌むをーといふ「妒ー」○にくみ、ねたみ、そねみ「憎ー」「忿ー」

【嫉妒】シツト 嫉・疾・妒等の別は惡(心部八畫)の條を見よ。

【嫉親】シツシン にくみ視る、そねみ見る。‖疾視。

【嫉妒】シツト そねむ。又、そねみ。史、項羽紀「今賊能勝、必ーニー吾功一」‖嫉妬。

【嫉妬】シツト 前條に同じ。詩、周南、樛木序「樛木后妃逮ー下也、言能逮ー下而無ニーー之心一焉」

【嫡】 テキ 陌

よめ(子の婦)「ー婦」

【嫦】 ス 虞

やもめ(寡婦)

【嫦嫦】スス やもめ。崔瑗文「惠二于ーー」

【嫩】 ドン 願

たはむる、なぶる。

【嫣】 デウ 篠 晝に通ず

○ーーは風そよぐ貌。又、たをやか、しなやか、長くして弱き貌、又、ゆるやかにあがる(悠揚)貌。

【嫣嫣】デウデウ ○裊裊に同じ。風そよぐ貌。楚辭、湘夫人「ーー兮秋風、洞庭波兮木葉下」○晉潘のゆるやかに揚る貌。蘇軾、赤壁賦「餘音ーーー」○長く弱き貌。鮑照詩「ーー柳垂レ條」

【嫩】 ビ 紙

よし(善)うつくし(美)

【嫗】 ボ 慶

○はは(母)○めうま(牝馬)

【嫗涇】ボケイ 地名、廣東省の澳門の異稱。

【嫗嫗】ボボ 母をいふ。

【嫓】 ㊀メイ ㊁ミャウ 庚 青

㊀うちき(小心)㊁婛ーはこむすめ(幼婦)○婛ーは明淨なる貌。

【嫽】 ヨウ 篠

○おくる、みおくる(送)○よす(寄)わたす。○こしもと(侍女)嫁に從ひ來りし女。○そばめ(側室)「妾ー」

【嫽侍】ヨウジ よめいりする女子につき從ひて行き、よめと共に先方の人となる侍女(韓愈、董夫人墓誌)

【嫽臣】ヨウシン 嫁に從ひ行く男子。史記「吾ーー百里傒在焉、請以二五羖皮一贖レ之」

【嫽妾】ヨウセフ こしもと、つきそひの女。漢書、平帝紀「詔出ニーー一、皆歸レ家得レ嫁」

【嫽母】ヨウボ 母の嫁ぐ時につきそひ來れる女。後漢書「西夫ーー能倘致レ命」

【嫏】 ラウ 陽

ふみぐら、玉京ー嬛は天帝藏書の處、張華、夢に之に游ぶ。

十一畫

【嫗】 ㊀ウ・ヲ 遇 ㊁オ 皓 ㊂ウ・ヲ 虞

㊀ばば、をうな(嫗)「老ー」「乳ー」○はは(母)漢書、嚴延年傳「延年兄弟五人、皆大官母號二萬石ー一」㊁あたたむ(煦)鳥が雛を伏せあたたむ。禮、樂記「煦ー覆育萬物」

○女　部　〔十一畫〕　嫗・嬖・嬪・嬾・嬰・嬶・嬲・嬴・嬸・嬶・嬾・嬶・嬾・嬶・嬾

【嫋戲】ヂョウ あなどりたはむる。【嫋罵】バウ あなどりののしる。史、高祖紀「上—一曰、豎子能爲ン將乎」‖侵嫋。

【嫪】 ラウ 號 ロウ

○こひしたふ（戀慕）「戀—」○—毐は秦の大陰人（史、呂不韋傳）

【嫠】 リ 支

やもめ（寡婦）婦の夫なきもの「—婦」

【嫠不レ恤緯】クヰフヲメグム やもめが機を織るに、其の横絲の少きを憂ふべきに、それをさて置きて周の世の國家の亡びんことを憂ふ。これ國亡ぶときは、やがて其の禍、身に及ぶべければなり。左、昭二四「抑人亦有レ言曰、嫠不レ恤二其緯一而憂二宗周之隕一、爲レ將レ及焉」【嫠節】セツ やもめの貞操。元史「使レ得レ全二—一」【嫠婦】フ やもめ、夫なき婦。蘇軾、赤壁賦「泣二孤舟之一—一」

【嫘】 ルイ 支

姓、—祖は黄帝の元妃、民に養蠶を教ふ、後世祀りて先蠶と爲す。

十二畫

【嫻】 カン 刪 嫻に同じ

○みやびやか、しとやか（雅）「雅—」○ならふ、なる（習）熟達する。史、屈原傳「屈原—于辭令」【嫻雅】ガ みやびやか。後漢書、馬援傳「能二短步一、辭言—一」【嫻都】トン みやびやか。司馬相如、上林賦「絶殊離俗、妖冶—一」‖嫻雅。

【嬉】 キ 支 紙

嬉（前條）に同じ。

○たのしむ（樂）あそぶ（遊）たはむる（戲）「水—」「春—」「娛—」「遊—」○うつくし（美）○國うれし。喜ばし。

【嬉遊】イウ たのしみあそぶ。【嬉嬉】キ よろこび笑ふ貌。易、家人「婦子—一、終吉」【嬉戲】ギ あそびたはむる。史、孔子世家「—一常陳二俎豆一」【嬉期】キ たはむれとぶ。晉書「二龍交レ首—一、解レ角而去」【嬉笑】セウ ○せせらわらひ。史、淳于髠傳「夫怒因—一」○たのしみわらふ。黄庭堅、蘇軾像贊「—一怒罵皆成二文章一」【嬉樂】ラク よろこびたのしむ。屋鏤「擧直五屋、屬二織女四足一、主レ天子游宮—一之道一」

【嬀】 キ 支

○山西省に在る川の名。○姓、虞舜、—汭に居り、よりて氏と爲す、氏族博考「陳、—姓也」○州の名。唐代置く、今の直隸省懐來縣。

【嬝】 クヮク 陌

○婉—は靜かに好き貌。○矜りて自ら恃む貌。○奔馳する貌。

【嬌】 ケウ 蕭 條

○うつくし、なまめかし（媚）あいぐるし。○なまめかしきなんな（妖女）○むすめ。轅耕錄「關中以二兒女一爲二阿—一」【嬌娃】アイ うつくしき女。劉琨詩「綽羅作二裙歌—一」‖美女。【嬌嚬】ケウヒン あいぐるしき眉くぼ。梁簡文帝詩「夢笑開二—一」【嬌囀】ケウテン なまめきてうるはし。王維詩「筋斗青樓人、二八多二—一」【嬌客】ケウカク はなむこ（老學庵筆記）‖新郎・愛壻。【嬌愁】ケウシウ 嬌嚬に同じ、愁は嚬の義。王世貞詩「丫鬟十五太—一」【嬌聲】ケウセイ なまめかしきひびき、こびてうつくしき美人の聲にいふ。丘亘源、聽二隣妓一詩、「聲聞—一徹、風末豔聲來」【嬌花】ケウクワ なまめきて美くしきはな。陳機詩「—一無レ信誤二東風一」【嬌喉】ケウコウ なまめかしき聲をだすのんど。許有孚詩「陰陰烟翠足レ潤レ身、其奈二—一百囀新一」【嬌柔】ケウジウ なまめかしくやはらか。元好問詩「楊柳青青滿水流、鬢兒學二古弄一二—一」【嬌羞】ケウシウ 愛ぐるしくはぢらひて顔を赤くする。又、其のさま。歐陽原功詩「無限—一不二自持一」【嬌嬝】ケウデウ なまめきたる美人のいかり。唐寅、絡花歌「佳人聞レ語發二—一」【嬌笑】ケウセウ あいぐるしく笑ふ。陳後主詩「小嬌癡—一、新來華燭前」【嬌聲】ケウセイ なまめきてやはらか。蘇軾詩「吳音—一帶二兒癡一」【嬌想】ケウサウ うつくしくなまめきたるすがた。梁簡文帝詩「逐レ節工二新舞一、—一似レ浸レ盧」‖嬌容・嬌容。【嬌癡】ケウチ あいぐるしくして未だ情事を解せざる義。張以寧詩「小姑十二方—一」‖嬌愚。【嬌娥】ケウガ 愛らしきむすめ。李賀歌「東家—一求二對鏡一」

【嬌嗲】ケンなまめかしくさへづる。張說詩「一一鶯亂飛」
【嬌妬】ケウうつくしくしてねたみぶかし。漢書、陰興傳「公主一一」
【嬌童】ケウかぼかたちのあいぐるしきこども。儲光羲詩「一一矯二錦騰一」
【嬌嫩】ケウなまめかしく眉をひそめる、美人の愁をふくめるやうす。梁簡文帝詩「映レ鏡學二一一一」
【嬌面】ケウなまめかしき顏、愛らしきかほ。

【嬈】

㊀ゼウ・ネウ　㊁デウ・ネウ　蕭　條

㊀妖―嬌―はうつくしくなまめかし（妍媚）㊁もてあそぶ。みだる、戲れ弄ぶ。○わづらはしくきびし（煩苛）漢書、晁錯傳「除二苛解一一」

【嬋】

セン　ゼン　先

○うつくし、うるはし（美）たをやか。○一連はつづきあひ（親族）
【嬋娟】センすがたのあでやかに美くしき貌。阮籍詩「秋月夜一一」宜和書「一一美女」

【嫵】

ブ　ム　虞　㊁嵐に同じ

○なまめく、こぶ（媚）○みめよし（好）
【嫵媚】ビなまめきこぶ。司馬相如、上林賦「一一嬪弱」‖媚嫵・嫵媚。
【嫵媚娘】ブビ唐の樂曲の名、舞一に舞、又、武に作る。海錄碎事「一一、古樂府也」

【嫳】

ヘツ　所

○いかる（怒）○からがろし、輕薄なる貌。

【嫽】

㊀レウ　㊁レウ　蕭　嘯　篠

㊀たはむる（戲）㊁みめよし。○たはむる。

十三畫

【嬛】

㊀ケン　㊁ケイ　㊁先　㊁庚

㊀便―はかるくうるはし（輕麗）㊁ひとり（獨）孤・惸に通ず。
【嬛嬛】ケイ　愛ふる貌。詩經「一一在レ疚」‖煢煢・惸惸。

【嬙】

シャウ　ショク・ジキ　陽　職

○女官の名、宮中に仕ふる女「妃―」「嬪―」杜牧、阿房宮賦「妃嬪媵―」○毛―は古の美女。莊、齊物「毛―麗姬、人之所レ美也」○王―は漢の元帝の宮人、呼韓邪單于に嫁し、閼氏と爲りて、昭君と號す。

【嬪】

嬪（女部十畫）に同じ。
【嬪娜】ダヲたをやかなる貌。梁簡文帝詩「洞庭枝――」‖裊娜・嫋娜・婀娜。

【嬖】

ヘイ　霽

○きにいり、賤くして寵を得る臣、又は女子「內―」「外―」○いつくしむ（愛）「寵―」○官の名。―大夫は下大夫。
【嬖豎】ジュ君の氣にいりの美女。唐書、郭皇后傳「後庭多二一一一」
【嬖幸】ケイ賤しくして君王の寵を得るもの。蘇轍文「使二昭帝居二深宮一近二一一一一」‖嬖人。
【嬖侍】ヘイ前條に同じ。後漢書、耿寶傳「阿二附一一一」共爲二不道一」
【嬖近】ヘイきにいりのそばづかへ。劉敞文「毋レ篤二子一一之寵一、毋レ安二子邪佞之說一」
【嬖御】ヘイ氣に入りのそばめ（宋書）
【嬖愛】ヘイ氣にいりのめしつかひ。
【嬖人】ジンきにいり。賤くして君の寵を受くる者。孟、梁惠王「有二一一一臧倉者一」
【嬖臣】ジンきにいりのけらい。漢書、項籍傳「張耳―一也」‖嬖人。
【嬖妾】ジンきにいりのめかけ（左、襄十四）‖嬖御。
【嬖昵】ジツ氣に入りて愛する。北史「煬帝爲二太子一時、一二一之」
【嬖女】ジヨ氣に入りの女。戰國策「左抱二幼妾一、右擁二一一一」
【嬖媵】ヨウ氣にいりのめかけ。劉峻、復二崔尚書一書「希二權門一以媚二一一一」‖嬖妾。

【孃】

㊀ヨウ　㊁ヨウ　蒸　徑

㊀はらむ。‖孕。㊁はへ。說文「蟲之大腹者」‖蠅。

十四畫

【嬰】

エイ　庚

○みどりご。人の始めて生るるをいふ、胸前を嬰といふ、之を一前に抱きて乳養するが故にいふ「一兒」○女のくびかざり。‖瓔。○くはふ（加）貿說、治安策「一之以芒刃」○ふる、さはる（觸）韓非、說難「龍喉下逆鱗、一之則殺人」○めぐる、

めぐらす(繞)後漢書、卓茂傳「―城者相望」○まとふ(纏)○つなぐ(絆・繫)陸機詩「世網」吾身」○むながひ(馬鞅)○かんむりのひも(冠紐)＝纓。○ほとぎ(盂)器に通ず。

【嬰孩】ヨウガイ　みどりご、孩は赤子の初めて笑ふをいふ。杜甫詩「思二最入レ道苦、自晒同二―一」顔氏家訓「教二婦初來一教二兒―一」＝嬰兒。

【嬰罪】エイザイ　つみにふれる。後漢書「叔向ノレ―、郤錡救レ之」

【嬰兒】エイジ　みどりご。一說に女を嬰、男を兒といふ。老子「―之未レ孩者、終日號而不レ嗄」＝嬰孩。

【嬰疾】エイシツ　病にかかる。後漢書、李暬傳「無狀―レ、閉二于所一仰」

【嬰城】エイジヤウ　城を以て自ら繞らして守る。戰國策「酒邯鄲―レ、上蔡召陵不二往來一也」

【嬰守】エイシユ　城にたてこもりて固く守る。

【嬰攝】エイセツ　をさなご。盧生文「滔滔遠郊、捽二我―一」

【嬰繞】エイジヤウ　めぐらしかこむ、とりまく。

【嬴】エイ　庚　俗字

○みつ(滿)盈と通ず。○あまる(餘)○とく(解)禮、月令「天地始肅、不レ可レ以―」○秦の姓。

【嬴秦】エイシン　秦をいふ、嬴は其の姓。

【嬴縮】エイシユク　のぶると、ちぢむと。史、天官書「歲星―一」＝盈縮。

【嬴劉鼾】エイリウカン　嬴は秦の姓、劉は漢の姓、秦も漢も共に滅びたるをいふ。韓愈、桃源圖詩「――了不レ聞、地拆天分非レ所レ恤」

【嬴餘】エイヨ　あまり。＝剩餘。

【嬴劉之閒】エイリウノカン　秦漢の際といふ義、嬴は秦の姓、劉は漢の姓(韓愈、唐故相權公墓碑)

【嬭】㊀ダイ　㊁デイ・ナイ　㊂ジ　紙　霽

㊀つま(妻)○そばめ(妾)

㊀ちち(乳)㊁はは(母)㊂おね(姉)

【嬬】ジュ　虞

○つま(妻)○そばめ(妾)

【嬾】デウ　篠

○直くして好き貌。○みだら(嬈)○―は往き來する貌。○―歌は蠻人の歌。＝巴歌。

【嬲】デウ　篠　皓

○なぶる(嘲弄)○からかふ、なれたはむる(狎戲)

【嬪】ヒン　眞

○よめ(婦)夫につれそふ女。○ひめ、婦人の美稱「貴―」○女官の名。又、君王に侍べる女「妃―」○死せし妻。曲禮「生曰レ妻、死曰レ―」○したがふ(服)つれそふ、夫に服從して妻となる。書、堯典「二于虞一」○―然は多き貌。漢書、王莽傳「―然成レ行」

【嬪機】ヒンキ　宮中の美人。

【嬪御】ヒンギヨ　女官の稱。天子の妾。晉書「―有レ序」＝嬪腰。

【嬪嬙】ヒンシヤウ　宮中の女官。左、昭三「以備二―一寢人之牀也」

【嬪從】ヒンジユウ　宮女のともがら。張說詩「翫二嬪綺庭一―一列」＝嬪牀。

【嬪妾】ヒンセフ　天子のこしもと。＝嬪腰。

【嬪腰】ヒンエウ　天子のこしもと(後漢書、李固傳)＝嬪妾・嬪御。

【嬪蠻】ヒンラン　つれあひ。蔡邕文「夙喪二―一、妾不二嬰御一」

十五畫

【嬸】シン　寢

○俗になば(叔母)をいふ。○俗に兄の妻が夫の弟の妻を呼ぶ稱。

【嬪】トク　屋　演に通ず

○けがす、けがる(汚辱)○なる(狎)

十六畫

【嬿】エン　霰　銑

○うつくし(美)○―婉はやすらかにしたがふ(安順)＝燕婉。

【嬾】ラン　旱

おこたる(怠)ものうし、ものぐさし。＝懶。

【嬾架】ランカ　書物を數せて讀む臺。見臺。三才圖會「晉公作二數架一臥觀レ書、今――即其制也」

【嬾困】ランコン　なまけつかれる。杜甫詩「春光―一倚二微風一」

【嬾捌】ランセツ　ものうくつたなし。杜甫詩「我衰更―一、生事不二自謀一」

【嬾婦】ランフ　○こほろぎの異名。陸璣、詩疏「里語曰蟋蟀鳴、――蠶」○なまけおんな。

十七畫

【嬋】サウ　蕭

やもめ、ごけ(寡婦)夫を喪ひたる婦(寡婦)＝未亡人。

【嬋媚】ソウビ　やもめ。夫をうしなへる女。楊炯文「孤鸞別鵠之哀、杞婦―之泣」

【孀閨】ソウケイ やもめの居る（や。白居易詩「最似―少年婦」

【孀婦】ソウフ やもめ。鮑照詩「寒機思―」秋堂泣二征客一」＝寡婦。

【孅】セン 鹽

○ほそし、鋭くして細し、纖に通ず。○かよわし、たをやか（弱）○へつらふ、おもねる（巧佞）

【孅弱】センジャク ○かよわし。たをやか。司馬相如、上林賦「嫶媚―」○細かにして弱し。歴代名畫記「謝赫筆路―」、不レ副二雅壯之懐一」

【孅趨】センスウ 袖をたをやかにして巧におもねりすすむ。史、日者傳「公所レ謂賢者持可レ羞、卑疵面前、―」＝面言」＝足恭。

【孅妍】センケン こづくりにてうるはし。晉書、崔洁傳「洁、―潔白、如二美婦人一」

【孃】ヂャウ 陽

○娘（女部七畫）に同じ。○母の別稱「爺―」○國女の名の下に添へて敬稱とす。

十九畫

【孍】リ 支

古の國名。史、晉世家「獻公所レ獲―戎之女、曰二驪姫一」左傳・晉語には―を驪に作る。

【孌】レン 銑 綫

○婉―はうつくし（美好）き貌。詩、曹風「婉兮―兮」○したがふ（従・順）○したふ（慕）

【孌童】レンドウ 美くしき童子。水經注「―一弄角」＝美少年。

廿一畫

【孀】ソウ 陽

孀（女部十六畫）に同じ「嫠―」

子部

【子】シ 紙

○こ、こども（兒）○よつぎ「宗―」むすこ（男）むすめ（女）○をとこ。○男子の敬稱、學德、又は爵位ある者の稱「孔―」「孟―」「孟嘗―」○人を呼ぶ敬稱。あなた、君、足下。○學德のすぐれたる人の著書「老―」「荀―」○師の稱。論、公治長「願聞二―之志一」○子孫が其の先人を稱していふ「先―」「先君―」○夫婦互に稱していふ「内―」「外―」○くだもの（果實）「梅―」「李―」○生物のたまご。又、たね「魚―」「雞―」「種―」○金の利息。元金を母錢といふの對「―金」○細小なる者の稱「瞳―」「莽―」○五爵の第四位「公侯伯―男」○ね、十二支の第一位。＝困敦。方位にては正北。時刻にては夜の十二時。○しげる（茂）＝孳。○いつくしむ（慈）○子とす、親みて我が子の如くする。中庸「―庶民」○物の名に添へて用ふ「帽―」「傘―」「金―」「障―」「算―」○般の姓。○國こ、女子の名に添へて呼ぶ稱。

【子愛】シアイ 子の如くにかはゆがる。禮記「敬之以二孝弟睦友一―、明二父子之義、長幼之序一」

【子規】シキ 杜鵑（ホトトギス）の異名。爾雅「江左曰二―一、蜀右曰二杜宇一」

【子金】シキン 利息をいふ。元金を母錢又母財といふの對。＝子錢。

【子宮】シキュウ こぶくろ、女の下腹部に在りて子をはらむ所「―病」

【子月】シゲツ 陰暦十一月の異名。

【子貢】シコウ 孔子の弟子、姓端木、名は賜、其の賢、顏子に次ぐ。

【子午線】シゴセン 地球南北の兩極を通じて引ける想像上の圓線。子は北、午は南。

【子細】シサイ こまかなるわけ。北史、源思禮傳「爲レ政當レ舉二大綱一、何必太―一也」＝仔細。

【子産】シサン 鄭の賢大夫公孫僑の字。

【子史】シシ 老子・荀子などの子類と、史記・漢書などの史類との書。陰書「五經―、綿四千卷」

【子思】シシ 孔子の孫、名は伋、業を孔子の弟子曾參に受く、中庸を著はす。

【子事】シジ 子が親に對する如くうやうやしくつかへる。

【子子孫孫】シシソンソン まごこのする。書、酒誥「―、永保二民一」＝後裔・子孫。

【子城】シジャウ ごまる、木城の分れ城。通鑑、唐德宗紀「―已潤開、惟牙城拒守」

【子爵】シシャク 五等爵の第四位。

【子書】シショ 老子・荀子の如き子類の書をいふ。

【子錢】シセン 利息、利子。

【子息】シソク むすこ。北史、世祖紀「其―皆詣二大學一」

【子孫】シソン 子とまご。轉じてちすぢ。左傳「克敵必示二―一、以無レ忘二武功一」＝後裔。

【子女】シジョ むすこと、むすめと。韓非子「重二賦斂一、以飾二―一狗馬一」

【子弟】シテイ 子とおとうとと。父兄の對。周禮「凡國之貴遊―、學焉」

【子房】シバウ 隱花植物の胚子を包む小嚢。

【子宮】シキュウ ○雌蕊の下部のふくれた

る部。中に胚種を含む。○漢の張良の字。

【子父】フシ　子と父と。孟、滕文公「一一責善、而不二相遇一也」‖父子。

【權二子母一】ケンスル　利附の金を貸して其の利をはかる。柳宗元文「權二其子母一、贏且不レ竭」

【子母錢】シボセン　元金を母錢、利金を子錢といふ（搜神記）

【子本】シホン　利息と元金と。韓愈、柳子厚墓誌銘「一一相侔」侔は等、利息が元金と同額になる。‖子母錢。

【子夜】シヤ　夜の十二時。‖夜半・三更・丙夜。

【子來】シライ　子が親の爲めに、來る如く、招かずして集り來る。詩、大雅、靈臺「經始勿レ亟、庶民一一」

【子路】シロ　孔子の弟子、姓は仲、名は由、路はその字、衛に仕へ（南子の亂に死す。

【擇レ子莫レ如レ父】エラブニコヤフヲシカズ　親はよく其の子の善惡をえらび分ける。左、昭十一「一一、擇レ臣莫レ如レ君」

【教レ子以二義方一】キョウスルニギハウヲモツテス　正義を以て子を教育するをいふ。左、隱三「石碏諫曰、臣聞愛レ子、教之以二義方一、弗レ納二于邪一」馮道文「燕山竇十郎、一一」

【易レ子析レ骸】カヘテコヲカヘ　子をかへて食ひ、骸をさきてかしぐ。籠城して甚だしく困阨す。後漢、左、宜十五「華元曰、敝邑易レ子而食、析レ骸以爨」

【易レ子而教レ之】コヲカヘテコレヲオシフ　己の子と他人の子とを易へて教へる。孟、離婁「古者一一、父子之間不レ責レ善、責善則離、離則不祥莫レ大焉」

【知レ子莫レ若レ父】コヲシルハチヽニシカズ　父親は誰よりもよく其の子を知るをいふ。管子、大匡「鮑叔曰、先人有レ言、一一、知レ臣莫レ若レ君」

【遺二子黃金滿籯一不レ如二一經一】コニコガネミツヲノコスハヒトツノツネニシカズ　子に遺すに箱に滿つる程の黃金を以てするも、一篇の經書を遺すの利益に及ばず、籯は竹器、三四斗を受く（漢書、韋賢傳）

【子爲レ父隱】コハチヽノタメニカクス　子の情として、父の惡事をかくして言はず。論、子路「父爲レ子隱、一一、直在二其中一矣」

【子日】シジツ　圖○十二支の子に當る日、大黑天の緣日。○正月の初子の日。

【子】

㊀ケツ　㊁キョウ　屑　月

㊀かたひぢ、左の臂なき貌。○みじかし（短）㊁子一グツはほうふり、蚊の幼蟲。

【子】

ケツ　屑　通香　ゲツ

○ひとり（單獨）○あまる（餘）○わづかにのこる（遺）のち（後）○すこやか（健）○みじかし（短）○ほこ（戟）

【子遺】シイ　のこり。詩、大雅「周餘黎民、靡レ有二一一一」

【子子】シシ　水中に棲む蟲。ぼうふり、蚊の幼蟲。淮南、說林「一一爲レ蟲」

【子子】シシ　特出せる貌。又、孤立の貌。詩、鄭風「一一干旄」

【子立】シリツ　ひとりだつ。後漢書、蘇不韋傳「蘇子單特一一」‖孤立。

【孔】

コウ　ク　董

○あな（穴）「眼一」「洞一」「毛一」○はなはだ（甚）詩、小雅「德音一昭」○とほる（通）○むなし（空）○すきま（開隙）○姓「一丘」「一安國」

同訓異字　參孔・甚・太・酷等の別は甚（甘部四畫）の條を見よ。

【孔曰成仁】コウシヨウジン　孔は、孔子が殺身以成仁といひしをいふ（論、衞靈公）文天祥、衣帶贊「一一、孟曰取義、惟其義盡、所二以仁至一、讀二聖賢書一、所レ學何事、而今而後、庶幾無レ愧」

【孔婥】コウ　すきま、ひま。戴復古詩「神功巧穿鑿、石壁生二一一」

【孔顏】コウガン　孔子と顏子と。魏書「行藏惟時、一一齊レ軌」

【孔姬】コウ　孔周に同じ、周公は姬姓なるが故。蘇軾詩「何用白首談二一一」

【孔綉】コウシウ　はなはだ急なり。外患の迫るにいふ。小雅、采薇「豈不二日戒一、玁狁一一」

【孔懷】コウクワイ　はなはだしくおもふ。詩經「兄弟一一」

【孔竅】コウケウ　あな。韓非子「知レ事レ天者、其一一虛」‖孔穴。

【孔敎】コウケウ　孔子のをしへ。晉書「老萊愛植、一一提衡」‖聖敎・儒敎。

【孔穴】コウケツ　あな。後漢書「隨防雖レ壑、漸有二一一一」

【孔子】コウシ　儒家の祖、周の春秋の時の魯の人、名は丘、字は仲尼、初め魯に仕へて司寇となる、後仕を致して四方に周流し、魯に歸り、詩書を刪り、禮樂を定め、易を贊し春秋を修す、弟子三千人、身六藝に通ずる者七十二人、周敬王四十一年卒す、年七十三。

【孔子家語】コウシケゴ　十卷、著者明かならず、魏の王肅の註、孔子の言行及び門人の問答の語を錄す。

【孔子貴】コウシキ　米元章の孔子貴、孔子孔子、大哉孔子、孔子以前、旣無二孔子一、孔子以後、更無二孔子一、孔子孔子、大哉孔子」

【孔門】コウモン　孔子と周公と。韓愈詩「生平企二仁義一、所レ學皆一一」‖周孔。

孔姬。

【孔壬】コウ　甚だたくみにへつらふ。壬は佞。書、泉陶謨「何畏二乎巧言令色一ー一」

【孔彰】コウ　はなはだあきらかなり。書、伊訓「聖謨洋洋、嘉言ー一」

【孔釋】コウシャク　孔子と釋迦と。南史、徐勉傳「ー一二教、殊レ途同レ歸」＝孔佛。

【孔樹】コウジュ　大いなる木。任昉文「參差ー一、若木成レ拱」

【孔聖】コウセイ　○はなはだ聖と讀む、大聖の義。詩、小雅「皇父ー一」○孔子の尊稱。司馬遷傳「感二彼ー一歎一、哀二此年命促一」

【孔靜】コウセイ　はなはだしづかなり。楚辭「胸兮洞洞、ー一冥冥」

【孔昭】コウショウ　はなはだあきらか。詩、小雅「我有二嘉賓一、德音ー一」

【孔碩】コウセキ　はなはだ大いなり。詩經「爲レ俎ー一」

【孔席不レ暇レ煖】コウセキフカレダンニ　孔子は道を弘めんとして東西に奔走せし爲め、席の煖まる暇なし。韓愈、與二孟尚書一書「禹過二家門一不レ入、——、而墨突不レ得レ黔、班固、答賓戲「聖哲之治、樓樓皇皇、孔席不レ煖、墨突不レ黔」淮南、修務「孔子無二黔突一、墨子無二煖席一」

【孔道】コウドウ　○大いなる通り道。太玄經「ー一爽如」○孔子のをしへ。韓愈、進學解「孟軻好レ辯、ー一以明」

【孔德】コウトク　老子の唱へたる虚無の大德。一解に孔は空、空虚にして能く容るる德。老子「ー一之容、唯道是從」

【孔方兄】コウホウケイ　錢の異名。其の孔、方形なるが故にいふ。晉書、魯褒傳「褒著二錢神論一曰、親レ之如レ兄、字曰二孔方一」

【孔武】コウブ　はなはだたけし。詩經、魯頌、閟宮「ー一有レ力」

【孔壁】コウヘキ　孔子と曇程と。梁書「抑二揚ー一一流一違釋老一」

【孔孟】コウモウ　孔子と孟子と。蘇軾詩「仕道固應レ慙二ー一、扶顚未レ可レ責二由求一」

【孔明】コウメイ　○はなはだあきらか。詩、小雅「紀事ー一」＝孔昭。○諸葛亮の字。

【孔門十哲】コウモンジッテツ　孔子の門人中、學德のすぐれたる十人の稱、顏淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓（以上德行）宰我・子貢（以上言語）冉有・季路（以上政事）子游・子夏（以上文學）（論、先進）

【孔老】コウロウ　孔子と老子と。後漢書「觀二ー一之論一」＝孔聃。

【孔林】コウリン　山東省曲阜縣の北二支里に在り、泗水に背き洙水に面し、周垣を繞らす、孔子の墓あり。

【孔雀】クジャク　鳥の名、熱帶地方に產す、雄は形大にして美麗なる長尾を有し、雌は形小にして尾も短し。說苑「智子愛レ口、ー一愛レ羽」

【孔雀裘】クジャクキュウ　齊書、文惠太子傳「善製二珍玩之物一、綴二孔雀毛一爲レ裘、光彩金翠過二於雄頭一矣」

【孔雀屛】クジャクヘイ　孔雀を描きしびやうぶ。唐書、竇皇后傳「后父毅常曰、此女有二奇相一、且識不レ凡、何可二妄與一レ人、因畫二ー一開二請婿者便一射二之一矢一、陰約中レ目、則許レ之、射者閱數十一皆不レ合、高祖最後射中二各一目、遂歸二於帝一」張昱詩「清宵酒歷楊花夢、細雨鐙深ーー」

二畫

【孕】ヨウ　梗

○はらむ（妊娠）○物を含みてふくれる「布帆ー一風」

【孕育】イクはらみそだてる。＝孕育。

【孕乳】ニュウはらむと子を生むと。後漢書、烏桓傳「見二鳥獸一ー一、以別二四節一」

【孕婦】フはらみをんな。呂覽「割二ー一、而見二其化一」

三畫

【孖】シ　支

○ふたご（雙生子）○しげし（蕃）＝滋。

【字】ジ　寘

○もじ「文ー一」「正ー一」「古ー一」「梵ー一」「數ー一」○うむ（生）子をうむ、乳する。○いつくしむ、あはれむ（慈愛）「撫ー一」○やしなふ（養）ちちのます。○しげし（滋）○あざな（實名の外の呼び名）曲禮「男子二十、冠而ー一」○あざなす、あざなをつける。儀禮、士冠禮「冠而ー一之」○いひなづけす、いひなづけ（許嫁）○畜類のめす（牝）牉に通ず。

【字彙】ジイ　書名、十二集、明の梅膺祚の撰せし字書、彙は類、字書を以て分類せり、故に名づく。

【字官】ジカン　はぐくみそだてる。＝養育。

【字解】ジカイ　字義の解說。

【字號】ジゴウ　○なまへ、あざな。○圖商店の招牌、又、商號・商標。

【字格】ジカク　文字の法則「用ー一」

【字學】ジガク　文字の學、字體又は字義を研究する學問。研北雜志「晉宋人書法絕妙、未三必盡曉二ー一一」

【字眼】ジガン　句の中にて最も主要とする文字。滄浪詩話「詩家以レ工有二ー一、曰起結、曰句法、曰ー一」

【字義】ジギ　文字の意味。漢書、孫寶嗣傳「專精校考、參二定ー一一」

【字據】ジキョ　證書。

【字劃】ジカク　漢字のよみ。

【字書】ジショ　文字を集成する點書。書苑「―一支錯者、欲二其肆密長短大小勻停一」

【字指】ジシ　文字の意味。魏志、劉劭傳、注「蘇林字孝友、博學多通二古今一字一」

【字旨】ジシ　文字を記したる紙。歸元直指「大明勸善書云、士之隷二書籍一者、皆須レ敬二重一字一」

【字紙】ジシ　文字のかたち。韓愈詩「漸嚴義密讀難レ曉、一一不レ類二隷與レ科一」

【字體】ジタイ　文字を書。

【字典】ジテン　じびき「康熙一一」

【字乳】ジニュウ　ちちをのましてやしなふ。論衡「牛馬則有二數一一之性一」

【字養】ジヨウ　育・生育。

【字挾二風霜一】ジキョウフウソウ　文字の森嚴なるをいふ。西京雜記「淮南王劉安撰二鴻烈二十一篇一、字中皆挾二風霜一」

【字母】ボ　〇發音の基となるべき字。〇活字をつくる基となる模型の文字。

【字民】ジミン　民を愛する。宋史「實祐四年、帝製二一一一訓一」

【字樣】ジヨウ　文字の書きかた、字の範式。歐陽修題跋「唐干祿、一一楷本」

【字孕】ジヨウ　兒をはらむ。元史、世祖紀「勅、禽獸一一時、無二敢獵一」

【存】ソン　ゾン　元

〇あり(在)物が現に在る。亡の反對。〇いきながらふ(保命)「生一」〇たもつ(保)まったし(全)たもたれて殘る。孟、離婁「順レ天者一、逆レ天者亡」〇なぐさめとふ(慰問)あはれみとふ(憐憫)〇みる(察)かへりみる(省)〇國ぞんず、考へる、知る。

【存意】イソン　國おもはく、みこみ。‖意見。

【存恤】イソン　其の儕を失はざるやうに保存しならふ。漢書、禮樂志「河間獻王、獻二所レ集雅樂一、天子下二太樂官一常二一一之一」‖保存恤問。

【存外】ゲガイ　國思ひのほか。‖意外。

【存活】ソンカツ　生命をたもつ。保全して死せざらしむる。後漢書、蓋勳傳「先出二家財一以率レ衆、一一者千餘人」

【存候】ソンコウ　安否をうかがふ。又、其の人。唐書、裴度傳「分二衙兵一護第、一一踰レ路」‖存問。

【存在】ソンザイ　現に在り。亡失の對。禮記、疏「知二體樂所二一一一」

【存身】ソンシン　身を全うしたもつ。易經「龍蛇之蟄、以一一一也」

【存神】ソンシン　精神を操りて存養する。班固賦「守二寂莫一而一一」

【存生】ゾンセイ　生きながらへる。‖存命。

【存恤】ソンジュツ　とひめぐむ。漢書「一一一所レ從之老弱一」‖存問撫恤。

【存遺】ソンイ　安否を尋ねてあはれみをかける。北史、抱嶷傳「嶷天性酷薄、雖二弟姪別垣一、略無二一一一」

【存續】ソンゾク　無くならずに永くつづく、存在して繼續する。

【存念】ソンネン　國かんがへ。‖存慮。

【存廢】ソンパイ　保存すると、すてると。保存と廢止と。

【存亡】ソンボウ　〇存在すると、ほろぶと。出師表「此誠危急一一之秋也」‖興廢。〇生と死と。

【存亡禍福皆在レ己】ソンボウカフクカイザイコ　禍福は皆人自ら之を招く。說苑「孔子曰、一一而已、天災地妖亦不レ能レ殺也」

【存撫】ソンブ　なぐさめ安んず。後漢書「統二三軍之政一、一二幷州之人一」

【存分】ゾンブン　國こころ一ぱい、思のまま「一一に企ふ」

【存問】ソンモン　安否を伺ふ。問は聞。史、孟嘗君傳「使三使一一獻二遺其親戚一」

【存命】ゾンメイ　生きてゐる。北齊書、田益宗傳「僅得二一一一」

【存養】ソンヨウ　本心を失はざるやうにして其の性を養ふ。孟、盡心「存二其心一、養二其性一、所二以事一天也」陳游詩「致一工夫在二一一一」

【存立】ソンリツ　存在して立ち行く。北史「使二嬰弱衆孤得二一一一」

【存錄】ソンロク　〇愛撫して目をかける。後漢書、李固傳「當レ一二大臣寃死者子孫一」〇登錄して記念とする。唐書、疏「一二其神一也」

【孝】カウ　四　畫　子

〇よく父母につかふる行爲「大一」「至一」「忠一」「不一」孝經「夫一天之經也、地之義也、民之行也」轉じて善く祖先に事ふるにもいふ。論、子罕「致二一乎鬼神一」〇俗に喪服をいふ。又、喪に居る義。

【孝行】カウカウ　よく父母につかふる行。說苑「一一感二于內一、而嘉瑞布二于外一」

【孝感】カウカン　孝行の德が神人を感動せしむ。晉書、王祥傳「祥性至孝、母嘗欲二生魚一、時天寒冰凍、祥解レ衣剖レ冰求レ之、魚自解、雙鯉躍出(中略)鄉里驚歎、以爲二一一所一致」

【孝義】カウギ　能く父母につかへて節義

ある裝。唐書「貞觀三年、賜二一一之家粟五斛一」

【孝道】カウダウ　父母によく事へてつつしみ深し。史、萬石君傳「以二訓行一一、官皆至二二千石一」

【孝經】カウキャウ　一卷、孔子と曾子と孝を論じて門人之を筆記せしもの、十三經の一。

【孝敬】カウケイ　父母を大切にしてうやまふ。左傳「一一忠信爲二吉德一」

【孝子】シカウ　○よく父母につかふる子。次條參看。○父母の祭祀に子たる者の自ら稱する語。禮、雜記「祭稱二一一孝孫一喪稱二哀子哀孫一」○㊀父母の喪に服する者の稱。

【孝子不レ匱】トボシカウメン　孝子の行は竭き極る時はあらざる義、一人孝を盡さば他人も之に感化して孝を爲す、匱は竭。詩、大雅「一一、永錫二爾類一」

【孝子愛レ日】ヒアヒシカウシハ　孝子の親に事ふるには、これ日も足らざるが如くするをいふ。法言、孝至「事二父母一、自不レ足者、其舜乎、不レ可二得而久一者、事レ親之謂也、一一」

【孝祀】カウシ　よく先祖につかへて祭をする。詩經「恭弈一一、神嗜二飮食一」

【孝慈】カウジ　善く父母に事へていつくしむ、慈は愛。論、爲政「一一則忠」＝孝愛。

【孝心】カウシン　孝行の心、親に孝をつくす心。禮、檀弓「願二死者之一一一也」

【孝順】カウジュン　善く父母に事へて其の志にしたがふ。國語「一一以納レ之、忠信以發レ之」

【孝孫】カウソン　○善く祖先に事ふるまご。○孫が祖先の祭に自ら稱する稱。孝子參看。

【孝道】ダウ　父母に事ふる道。史、仲尼弟子傳「曾參南武城人、孔子以爲能通二一一一」

【孝立則忠遂】カウタテバチウスイ　孝と忠とは一本なり、故に孝道立てば忠道も亦行はる　文中子「楊元感問二孝子一、曰、始二於事レ親、終二於立レ身、問レ忠、子曰、一一矣」

【孝弟】カウテイ　善く父母に事ふると善く兄長に事ふると。論、學而「一一也者、其爲二仁之本一與」＝孝悌。

【孝弟力田】カウテイリキデン　漢代士を選擧する科目、力田は農業をつとめはげむ。漢書、惠帝紀「舉二民一一者一復二其身一」

【孝悌】カウテイ　孝弟に同じ。悌・弟通ず。

【孝鳥】カウテウ　烏の異名。烏に反哺の孝あり、故にいふ。古今註「烏一名一一」

【孝童】ドウ　父母によくつかふるこども。唐書「段秀實、六歲母病、匀飮不レ入レ口至二七日一、病間乃食、時號爲二一一一」

【孝德】トク　孝道を行ふ德。周禮、地官「師氏以二三德一教二國子一、一曰至德、以爲二道本一、二曰敏德、以爲二行本一、三曰一一、以知二惡逆一」

【孝養】カウヤウ　孝行の心をつくしてよく父母を養ふ。

【孝烈】カウレツ　孝行にしてみさをのはげしく高き義。後漢書、宋弘傳「以二剛強一一一著レ名」

【孝廉】カウレン　孝行にして心の廉潔なる者、漢代の登士の科名。漢書、武帝紀「初令二郡國一舉二一一各一人一」

【孝】カウ　效　孝とは別

みちびく（導）

【孜】シ　攴　孳に通ず

○つとむ（勤勉）○あつし（篤）○いつくしむ（愛）○おもふ（思）

【孜孜】シ　つとめて倦まざる貌。齋、泰誓「爾其一一、奉二予一人一」＝孳孳・汲汲。

【孝養二於妻子一】カウヤウハヲサイシニ　人、妻子あるにより、親に事ふる心弛ぶに至るを戒めたる語。說苑、敬愼「官愈二於官威一、病加二於小愈一、禍生二於懈惰一、——、察二此四者一愼レ終如レ始」

【孝百行之本】カウハヒャクカウノモト　孝行は諸の善行の根本。孝は萬善の本といふに同じ「白虎通」

【孝經】キャウ　孝行なるよめ。漢書、于定國傳「東海一一、養レ姑甚謹」

【孝文匪】キャウブンヒ　あさつき。＝胡蔥。

【孚】フ　爪

○鳥の卵をかへす（孵化）たまご（卵）○草木の種子の皮。○まこと（信）「信一」「感一」○玉のいろつや（玉采）○やしなふ（育）○中一は易の卦名、兌上巽下。

【孚育】フイク　はぐくみやしなふ。韓詩外傳「預伏一一、積日累久」

【孚佑】フイウ　信じてまことにたすける。書、湯誥「上天一一下民、罪人黜伏」

【孚甲】フカフ　種子の外皮。禮、月令「萬物皆解一一一」

【孚信】フシン　まこと。

【孚乳】フニウ　鳥が卵を伏せてかへす。禮記、註「燕巢二人室宇一而一一」

五畫

【季】キ 寘

○すゑ（末）「一月」「一世」「澆一」○兄弟中の最も末の弟「伯仲叔一」○四時の終りの月。轉じて時節の義に用ふ「一節」○わかし（稚・少）わかき者。○ちひさし（小）ほそし（細）

【季夏】キカ なつのすゑ。陰暦六月の異名。‖晩夏。

【季月】キゲツ ○一年の最終の月、極月。陰暦十二月をいふ。○四時の終りの月。卽ち陰暦の三月・六月・九月・十二月の稱。

【季札挂劍】キサツクワケン 信を重んずる譬にいふ。吳の季札上國に使せしとき、徐の國を過ぐ、徐の君、札の劍を欲するの意見ゆ、札之を與ふるの意あり、歸路復び徐を過ぎしに、其の君すでに沒せり、札乃ち劍を墓にかけて去りし故事に本づく（史、吳世家）

【季子】キシ ○すゑのこ。‖末子。○蘇秦の字。

【季指】キシ こゆび。儀禮、特牲饋食「一、小指也」

【季秋】キシウ あきのすゑ。陰暦九月の異名。‖晩秋。

【季春】キシュン はるのすゑ。陰暦三月の異名。‖晩春。

【季世】キセイ 末の世。道義の衰へたる時代。澆季の世。左、昭三「雖吾公室、亦一一也」

【季節】キセツ とき、時節。夏侯湛文「伊朱明之一一兮、景燄赫以盛興」

【季諾】キダク たしかなる承諾。季布が然諾を重んぜしによりていふ。季布一諾の略。史、季布傳「楚人諺曰、得二黃金百斤一、不レ如レ得二季布一諾一」‖金諾。

【季冬】キトウ ふゆのすゑ。陰暦十二月の異名。‖晩冬。

【季父】キフ をぢ。父の兄弟中の末の人。史、項羽紀「其一一項梁」

【季布】キフ 楚の人、項羽の將、しばしば漢の高祖を窘む、羽滅する後、高祖に仕ふ、任俠を以て聞ゆ、當時「得二黃金百斤一不レ如二一一諾一」の諺あり。

【季母】キボ 叔母に同じ。

【季寄】キヨセ 園俳諧に詠み入るべき事物を季節によりて分類せしもの。

【孤】コ 虞

○みなしご、幼にして父なき者「一兒」「託一」「六尺一」○ひとつ、ひとり（特・單獨）○たすけなし「一城落日」○そむく（負）李陵、答蘇武書「陵雖一恩、漢亦負レ德」○いやし（陋）「一臣」○王侯の謙稱。○諸侯の嘗に居る時の自稱。○官の名、三公の次、三一は少師・少傅・少保。

【孤哀子】コアイシ 子が父母の喪中に在る時の稱。開元禮「虞祭文、父喪稱二孤子一、母喪稱二哀子一」文公家禮「父母俱亡、卽稱二一一一」

【孤獨】コドク ただ一片のはなれ〴〵も。李白詩「一一一獨去聞」

【孤雲野鶴】コウンヤカク 隱者に喩ふ。劉長卿、送二方外上人一詩「孤雲與二野鶴一、豈向二人間一住」

【孤燈】コトウ ただひとり身のかげ。後漢書、嚴光對二一一一」

【孤影】コエイ 前條に同じ。

【孤壁】コヘキ 無緣ぢか。黃滔詩「蠻客出來尋二古劍一、野猿相聚叫二一一一」

【孤爺】コヤ ひとりぼっちのおきな。易林「一一寡婦、獨宿悲苦」

【孤介】コカイ 心せまく世と相容れざる義。孤立狷介。宋史、王琪傳「性一一、不二與レ時合一」

【孤客】コカク ひとりたびの者。謝幼度詩「一一傷二逝湍一、徒旅苦二奔峭一」

【孤寒】コカン 微賤にして貧し。晉書、陶侃傳「臣少長一一、始願有レ限」

【孤悶】コモン ひとりたび。韓愈詩「昨來漢水頭、始得レ完二一一一」‖孤客・獨旅。

【孤單】コタン たよりなきくんぜい。

【孤悽】コセイ たよりなきこころ。陳遵詩「忽思穿二兩展一、聊用散二一一」

【孤殘】コザン 助けなくしてはなれそむく。法言「守失二其徵一、天下一一」

【孤孽】コゲツ 遠く君に見棄てられし臣と、身分賤しき庶子と。孟、盡心「獨孤臣孽子、其操レ心也危、其慮レ患也深、故達」

【孤劍】コケン 一口のつるぎ。一本さしたる獨りの旅人。陳子昂詩「一一轉二何託一、長謠塞上風」

【孤坐】コザ ひとりさびしくすわる。崔珪詩「燈暗愁一一、林空想獨眠」

【孤孀】コソウ みなしごと、やもめと。都經詩「只今全二父子一、無二復痛一一」

【孤山】コザン 杭州西湖の上に在り、梅花を以て聞ゆ、林逋（和靖）此に隱居す、放鶴亭あり。

【孤子】コシ ○みなしご。宋玉文「一一孫婦、寒心酸鼻」‖孤兒。○父の喪に居りて母のみ存生する子。孤哀子參看。

【孤兒】コジ みなしご。劉長卿詩「獨聞山吏部、流淚訪二一一」‖孤子。

【孤兒院】コジイン みなしごを收容して之を養育し、又業務を授ける所。

【孤囚】コシウ 一人にてとらはれる。又、其の人。柳宗元詩「況我萬里爲二一一」

【孤舟】コシウ 一つのふね。陶潛詩「一一遊、緬緬歸思縈」

【孤臣】コシン ○君に見棄てられし臣。孤孽を見よ。○君に信ぜられず

て遠くはなれ居る臣。蘇軾詩「山憶二喜歡一勞二魂夢一、地名二憧恐一泣二一一」【孤獨】ジ　ひとりで酒をのむ。韓愈詩「詩成有二共賦一、酒熟無二一一」蘇軾詩「且邀二明月一伴二一一」‖獨酌。【孤掌難レ鳴】コショウナンジ　相手なくては事の爲し難きに喩ふ。水滸傳「單絲不レ成レ線、孤掌豈能鳴」【孤城落日】コジョウラクジツ　ただ一つの城が日の將に沒せんとする邊に在る義。心細き喩。王維、送二韋評事一詩「遙知漢使蕭關外、愁見二一一」【孤竹】コチク　まるき竹。荘子「洞二於橫一一一、縣二於桑榆一」‖略句。【孤弱】コジャク　助けなくしてよわし。呉志、陸凱傳「於二家一一、乃與二撫百姓之志一」【孤孤】ココ　幼くして親なき者。唐書「宗族一一者、皆爲二婚嫁一」【孤樹】コジュ　一つの木。高啓詩「沙村一一晩依微」【孤松】コショウ　一本のまつ。陶潛詩「冬嶺秀二一一一」【孤孀】コソウ　ひとりだちてたかくそびゆ。水經、注「高峯一一」【孤峭】コショウ　ひとり高くそびえ立つ。西征記「古木蒼瘦、怪石一一」【孤峭】コセウ　性情すなほくして流俗と合はず。陰書二潘吉性一一、不レ與二公卿一相沈浮一」【孤孽】コゲツ　己の考のみを用ひて、人の諫を聽かず。後漢書「寡レ己者孤、拒レ諫者塞、一一之政、亡國之風也」【孤村】コソン　はなれたる一つのむら。【孤鳥】コテウ　はなれじま。王維詩「主人一一中」【孤秘】コヒ　親を失ひし幼少の者。張籍詩「親朋有二一一一」【孤忠】コチウ　他人の助けなく、單獨にて忠をつくす。宋史「韓琦曰、如レ琦一一、縁細二神道一相助、幸而多有レ成」【孤注】コチウ　賭博に負け續けて最後に殘のあるだけ出して勝負する義。極めて冒險の意に用ふ。注は投げ出して賭ける。宋史、長編「眞宗澶淵之役、王欽若謀曰、乞幸二以陛下一爲二一一一」【孤燈】コトウ　一つのともしび。白居易詩「夕蟄蚤飛思悄然、一一掩盡未レ成レ眠」【孤特】コトク　ひとりぼっち、孤立して助けなし。又、其の者。唐書「一一自持」【孤獨】コドク　○孤は幼にして父なきもの、獨は老いて子なきもの。史、司馬相如傳「憐二鰥寡一、存二一一一」○ひとりぼっちにてたよりなき者。【孤獨園】コドクエン　後世の孤兒院・養老院の類。南史、梁武帝紀「詔置二一一一一」以憐二孤幼一」【孤憤】コフン　親にはなれたるとうし。莊子「雖レ欲レ爲二一一一、其可レ得乎」【孤蓬】コホウ　一四のぶた、轉めていやしき物に喩ふ「史、莊周傳」【孤芳】コハウ　○ひとりすぐれてかんばし。朱子詩「陸冬惠二百卉一、江梅厲二一一一」○人品の特に高潔なるにいふ。沈約文「眞操與二日月一俱懸、一一隱二山窓一共遠」【孤帆】コハン　一つのふね。李白詩「一一一片日邊來」‖孤舟。【孤負】コフ　そむく。俗に孤を辜に作るは非。李陵文「功大罪小、不レ蒙二明察一、一一陵區區之意」【孤憤】コフン　ひとりいきどほる。己ひとり思を盧して世に容れられざるいきどほり。史、韓非傳「觀二往者得失之變一、作二一一一五蠹、內外儲・說林・說難十餘萬言」【孤臺】コダイ　孤立して事情にくらし。潛夫論「公卿不レ思レ忠、百僚不レ盡レ力、君王一一於上、兆黎冤二亂於下一」【孤標】コヒウ　○一つの高き枝。李林甫詩「一一百尺雪中見」○轉じて特りすぐれたるきりゃう、標は風標。舊唐書、杜審權傳「與二外一一、雲閒獨步」【孤飄】コヒウ　助けなくおちぶれる、飄は飄零レヒヨウ　北史、胡叟傳「一一次壞、未レ有二仕路一」【孤老】コラウ　たよりなき單獨の老人。晉書、劉元敏傳「此公一一、餘年無レ幾」【孤立】コリツ　ひとりだちて動ける者なし。後漢書、竇融傳「一一無レ黨」【孤立義務】コリツギム　法律上權利と對立せざる兵役・納稅の義務をいふ。【孤陋】コロウ　孤獨にて友なく見聞せまし。禮、學記「獨學而無レ友、則一一而寡聞」【孤往】コワウ　ひとり行く。陶潛、歸去來辭「懷二良辰一以一一」‖獨行。

【孥】ド　奴に通ず

○つま、こと（妻子）「妻一」○こ（子）等に通じ作る。○やっこ（僕隷）罪人又は俘虜より沒收せし者。後漢書、楊終傳「太宗至仁、除二去收一」○とらはれ（俘虜）○夫又は父の罪により其の妻子までを罪する刑。孟、梁惠王「罪レ人不一」○烏の尾「烏一」【孥兒】ジ　女子。姑蘇志「俗呼二女兒一曰二一一」【孥稚】ドチ　幼き者。蘇軾文「暴秦無道、殘及二一一一也」‖稚子。【孥戮】ドリク　罪ある者は妻子を合せて罪する。書、甘誓「用レ命賞二于祖一、不レ用レ命戮二于社一、予則一二一汝」

【孟】㊀マウ　㊁マウ　敏　㊂マン　輸

㊀をさ、かしら（長）○めかけばらの長子。禮緯「職長（嫡出

の長子）ヲ伯トイヒ、庶長（妾腹の長子）ヲ孟トイフ。〇はじめ（始・首）「一春」「一冬」〇つとむ（勉）〇大いなり。㊀みだり（虚誕）「一浪」おろそか（疎漏）

【孟夏】ケウ　なつのはじめ。陰暦四月の異名。

【孟軻】カウ　孟子を見よ。

【孟郊】カウ　字は東野、唐の詩人、性耿介、人と合はず、年五十にして進士に及第し、溧陽の尉となる、唯日夕詩を賦し、曹務多く廃す、其の詩理致あり、最も韓愈に推称せらる。

【孟浩然】カウカウネン　唐の詩人、襄陽の人、鹿門山に隠れ、五言の詩に巧なり、年四十、京師に出でて、張九齢・王維等と交る、開元年中に歿す。

【孟尊】カウ　孟子と韓愈と、二人並に文章に長ず、故に此称す。蘇洵、上二田樞密一書「一一之温醇」

【孟光】クワウ　後漢の梁鴻の妻、字は徳曜、賢徳あり、列女伝に出づ。

【孟月】カウ　四季のはじめの月。陰暦の正月・四月・七月・十月をいふ。王篇「孟、始也、四時之首月、曰二一一一」

【孟子】シ　〇人名、名は軻、字は子輿、魯国の鄒の人、業を子思の門人に受く、道既に通じて諸国に歴遊し、道を行ふの地を求むれども、終に得ざりき、蓋し当時周の徳衰へ、天下方に攻伐連衡を務めたりしに、軻は乃ち唐虞三代の徳を述ぶ、是を以て到る所の者合はず、退きて門人萬章等と、詩書を序で、孔子の意を述べて一一七篇を作る。〇書名、七巻、孟軻撰す。

【孟秋】シウ　あきのはじめ。陰暦七月の異名。

【孟嘗君】クワウシャウクン　支那戦国の斉の田嬰の子、名は文、斉の相となり、薛に封ぜらる、客を好み、食客常に三千人あり、史記に傳あり。

【孟春】シュン　はるのはじめ。正月の異名。

【孟嘗】シャウ　孟軻と荀況と。文心雕龍「一一所レ遇、理蹤而辞推」

【孟陬】スウ　正月の異稱、陬は隅。史記集解「正月爲二一一一」

【孟宗】ソウ　三國の呉の江夏の人、性至孝、母、筍を嗜む、冬時筍未だ生ぜず、宗林に入りて哀歎す、筍忽ち迸出す、三國志には母の死後の事とす。呉志「左奮御史一一有二孝道一、母性嗜レ筍、及二母亡一、冬節宗入レ林哀泣、而筍生、得二以供一祭祀一」

【孟宗竹】ソウチク　竹の一種、前條參看。

【孟夏】ケウ　孟軻をいふ（抱朴子）

【孟仲季】チウキ　兄弟の順序、長子・次子・三子の稱。

【孟冬】トウ　ふゆのはじめ。陰暦十月の異名（禮、月令）

【孟東野】ケウトウヤ　孟郊を見よ。

【孟婆】バ　風の神。轉じて、風の異名（堅瓠集）

【孟母三遷】ケウボサンセン　孟軻の母が、三たび居を遷して孟軻を教育せし故事。初め墓地の近所に住みしが、軻が嬉戯するに墓間埋葬の狀をなすを以て、子を教育すべき地にあらずと、市中に轉居せしに、市人賣買の狀をなして遊戯するを以て、亦子を教育するに不適當なりとて、學校の傍に轉居せり、世に之を三遷の教といふ（列女傳）

【孟母斷機】ダンキ　孟軻の母、はたをたちて軻が中途學を廢せんとするを諫めし故事。列女傳「孟子稍長就レ學而歸、孟母方績、問曰、學何所レ至矣、孟子曰、自若也、母以レ刀斷二其織一曰、子之廢レ學、若二吾斷一レ斯機一矣、孟子懼、旦夕勤學不レ息、師二事子思一、遂爲二名儒一」‖斷機之誡。

【孟賁】ホンキ　古、衛の勇士の名。説苑「勇士一一、水行不レ避二蛟龍一、陸行不レ避二猛虎一」帝王世紀には齊の人、能く生牛の角を抜くとあり。

【孟陽】ケウヤウ　正月の異稱。梁元帝纂要「正月爲二一一一」

【孟勞】ケウラウ　魯國の寶刀の名。穀梁傳「一一者、魯之寶刀也」王安石詩「欽哉寶莫二滄海一、詩錄捷二一一」

【孟浪】マウラウ　おろそか。とりとめなし。精要ならざる貌。莊、齊物「一一之言」‖漫漫。

六畫

【孩】ガイ　灰

〇みどりご（嬰兒）「三歳の赤子「嬰一」〇わらふ、嬰兒の始めて笑ふにいふ。〇いとけなし（幼稚）「童一」「提一」「幼一」〇あごのした（頷下）

【孩嬰】エイガイ　みどりご。鮑照詩「安儲無二擔石一、兒女皆一一」‖嬰孩・孩孺。

【孩幼】ガイエウ　ちご。陸機擬詩「御視五嗣圃、殷紫弄二一一」

【孩子】ガイシ　みどりご。嬰子、明鬼「殺二絶一一一」‖孩兒・嬰兒。

【孩兒】ガイジ　孩子・孩童に同じ。

【孩孺】ガイジュ　孩嬰に同じ。沈約文、尼智修行狀「性調和綽、不下與二凡一一同の類」

【孩笑】ガイセウ　みどりごのわらひ。朱熹詩「小兒知二一一一」

【孩稚】ガイチ　幼兒。黄庭堅詩「奴人通二使令一、一一接二孩養一」

【孩蟲】ガイチウ　生れたての蟲。禮、月令「孟春無二殺二一一一」‖幼蟲。

【孩提】ガイテイ　二三歳のみどりご　始めて笑ふことを知りて提抱すべき者。孟、盡心「一一之童、無下不レ愛二其親一也」‖提孩・孩抱。

【孩童】ガイドウ　幼兒。小學、嘉言「我爲二一一、豈敢學二顛孟一哉」‖孩兒。

【孩乳】ガイニウ　いとけなし、ちのみご。轉

漢書、廣延傳「國家女孮、年在二一一」自孩褓乳哺。
【孩提】ガイテイ こどもが人にだかれる。又其の幼き兒。父其の年ごろ。後漢書、李善傳「雖レ在二一一一、奉レ之不レ異二孩抱一」

七畫

【孫】㊀ソン ㊁ソン 魂元

㊀まご、子の子「子一」「順一」「嫡一」○つぐ(續)○のちのちのちすぢ「子一」○天一は織女星。○王一は公子の稱。○烏一は西域の國名、今の伊犁の地。㊁ゆづる、へりくだる。論、衛靈公「禮以行之、一以出之」‖遜。○したがふ(順)○のがる(遁)春秋、莊元「夫人一于齊」

【孫康映雪】ソンカウエイセツ 孫康が、家貧しく油なく、冬夜雪の光にて書を讀みし故事。蒙求「一一、車胤聚螢」注「孫氏世錄曰、康家貧無レ油、常映レ雪讀レ書、少小清介、交遊不レ雜、後至二御史大夫一」
【孫吳】ソンゴ ○孫武と吳起と、共に春秋時代の兵法の達人。史、貨殖傳「一一用レ兵、商鞅行レ法」○孫武・吳起二人の著したる孫子と吳子との兵書。
【孫子】ソンシ ○孫子に同じ。詩經「施二于一一一」○書名、一卷十三篇、周の孫武撰す。兵書中の最も古きもの。
【孫登嘯】ソントウセウ うそぶく聲のすぐれたるにいふ。魏の隱士孫登の故事に本づく。晉書、阮籍傳「籍嘗於二蘇門山一遇二孫登一、與商二略終古一及二栖神道氣之術一、登皆不レ應、因長嘯而退、至二半嶺一聞二其聲若一鸞鳳之音一響二乎巖谷一、乃登之嘯也」‖蘇門嘯。
【孫謀】ソンボウ 子孫の爲めに將來の謀をなす。又、其のはかりごと。詩、大雅「詒二厥一一一」
【孫引】ソンイン 國文章の例を引くに原書によらず、他書に引用せしものより取るをいふ。

【孮】ベン ブン 問阮
子を生む(免身)‖娩。

八畫

【孰】ジュク 屋
○たれ、たれか(誰)○いづれ、いづれか(何)論、八佾「是可忍也、一不可忍也」○みのる(稔)○にえる、にる(煮)熟に通ず。○つまびらか(審)
同訓異義 ヨウ 執與・執者はともに、いづれと訓み、事を上と下とにあげて、二者どちらが、よきぞといふ義なり、與はこれといふ意、下の方が主になるなり、若は、これに若かんといふ意にて、これも下が主になるなり、執與は、何與とも書く、義同じ。
【執若】ヨウ どちらか。兩方を比べて疑ひ問ふ辭。韓愈、送李愿一序「與レ有二其書一於前一一一無レ毀二於其後一、與有二其樂一於身一一一無レ憂二於其心一」
【執與】ヨウ 前條に同じ「史、關相如傳」

【孱】㊀セン ㊁セン 潸 先 刪
㊀よわし(弱)「病一」おとる(卑劣)○うめく、うなる(呻吟)○くるしむ(困)㊁山高し。嶮に通ず。
【孱顏】サンガン 山の峻しき貌。蘇軾詩「採レ衣步二一一一」注「山顏曰レ巉」‖巉巖。
【孱愚】セング かよわくおろか。賈島詩「一一友二道書」
【孱弱】センジャク かよわし。‖孱顏。
【孱羸】センルイ かよわし。方孝孺詩「我生素多病、中歲早一一」‖孱弱。
【孱王】センワウ よわき王。史、張耳傳「吾王、一一也」注「謂二懦弱一孱レ弱」

九畫

【孵】㊀フ ㊁フ 虞 遇
㊀かへる、かへす、卵を子に化せしむ。㊁そだつ(育)
【孵化】フクワ 卵がかへる、卵をかへす。鳥が卵を伏せて雛を生ずる、蟲魚

十畫

【穀】コウ 有
○ちち(乳)○ちちのます、やしなふ(養)○おろか。

【孳】㊀シ・ジ ㊁シ・ジ 支 紙
㊀子を持つ、鳥獸の將に子を生まんとするをいふ。㊁つとむ。‖孜。○ふゆ(殖)
【孳育】ジイク 子を生みてそだてる。晉書「言二陽氣將レ復、萬物一一、而舒生也」
【孳孳】ジジ 勵めて倦まざる貌。孟、盡心「雞鳴而起、一一爲レ善者、蹠之徒也」‖孜孜。
【孳尾】シビ つるみて子をもつ。晉、樂典「鳥獸一一」注「乳化曰レ孳、交接曰レ尾、尾はつるむ。
【孳孕】シイク 動物がはらみて子を生む。嵇琳、鴝鵒賦序「棲息一一之所」

十一畫

【孺】ジュ 遇
○ちいさき兒○したしむ、なづく○やはらかなり○ちち(乳)

の卿から初めて生ずるにもいふ。

【學】ガク　覺

○まなぶ、ならふ（效）「就ー」「勉ー」「講ー」「修ー」○さとる（覺）○まなびや、庠序、學校「大ー」「小ー」○學ぶ人、學者、學生。大學、朱熹卒句「初ー入德之門」○まなぶわざ、がくもん「修ー」「ー業」「ー術」

【學案】ガクアン　學派の源流を記述する書。明の黃宗羲に宋元ー　明儒ーの二書あり。

【學友】ガクイウ　まなびのとも。

【好ン學】コウガクヲコノム　學問を好む。論、公冶長「敏而ーレー、不レ恥二下問一」

【以レ學愈レ愚】ガクヲモツテオロカヲイユ　學問によりて智識を開く。說苑「人皆知二以レ食愈レ饑、莫レ知二以レ學愈一レ愚」

【學海】ガクカイ　○河水の盛夜流れて休まず、終に海に入る義。人の學を勉むるに喩ふ。法言、學行「百川ーレー而至二于海一、丘陵學レ山、而不レ至二于山一」○學問の廣大なるに喩ふ。

【學行】ガクカウ　學問と品行と。南史「隋文帝令下朝臣二日開皇寮一ー、當今無レ比」ー學德。

【學校】ガクカウ　學術を教ふる處。學は國學、校は鄉校。孟、滕文公「設二庠序學校一以教之、庠者養也、校者教也、序者射也、夏曰レ校、殷曰レ序、周曰レ庠、學則三代共レ之、皆所三以明二人倫一也」

【學監】ガクカン　學生、又、學校を監督する職員。

【學規】ガクキ　學校のおきて　朱熹に白鹿洞書院ーーあり。

【學級】ガクキフ　學生の組、學生の班次。

【學宮】ガクキウ　學術を教ふる場所。漢書、何武傳「行レ部、先即二ーー一見二諸生一、試二其誦論一、問以二得失一」

【學窮】ガクキウ　世の用をなさざるつまらぬ學者。白賢編「宋大宗欲レ相二趙普一、或譖レ之曰、普、山東ーー、惟能讀二論語一耳」ー庭偏。

【學科】ガククワ　學問の條目、唐書、儒學傳序「優二ーー一先二經義一」

【學問】ガククワイ　學問を研究するための國體「史ーー」

【學官】ガククワン　○學校の官舍、學校の建物。漢書、文翁傳「修二起ーー一于成都一」○學校の事務を執る官吏。ー教官。

【學館】ガククワン　學術を教ふる所　學校。揚雄詩「海邦務寂寞、ー尚寄レ崇」ー學舍。

【學藝】ガクゲイ　まなびのわざ。唐書、顧宗紀「帝爲レ人、寬仁喜二ーー一、善二辨無レ比」ー學德。

【學業】ガクゲフ　まなびのわざ。晉書「ーー優博」

【學窗】ガクサウ　まなびのまど、學問所。學校家塾など、窗は窓の本字。

【學子】ガクシ　學生をいふ。詩經「青青子衿」注「青衿、青領也、ーー之所レ服」

【學士】ガクシ　○學者をいふ。史、儒林傳「天下之ーー、靡然鄉レ風矣」○官名。唐書、百官志「ーー之職、本以二文學言語一被二顧問一、出入侍從」○國官私立大學、及特種專門學校の本科を修了せし者の稱號。

【學資】ガクシ　學問を修めるもとでの金「ーー金」

【學識】ガクシキ　がくもん智識。又、學問と見識と。

【學籍】ガクセキ　學問するもののいましめ。晉書、李充傳「幼好二刑名之學一、深抑二浮之士一、皆著二ーー一」

【學舍】ガクシヤ　學校の建物。ー學館。

【學者】ガクシヤ　○學問する人。孟、滕文公「北方ーー、未レ能二之先一也」ー學生。○又、學問のすぐれたる人。五代史、史匡翰傳「史氏世爲レ將、而匡翰好讀レ書、尤喜二春秋三傳一、與二ーー一講論、終日無レ倦」

【學匠】ガクシヤウ　ものしり、學者。

【學術】ガクジユツ　學問のわざ。唐書、杜還傳「其爲レ人少二ーー一、故當レ朝議論、時時失二淺薄一」

【學殖】ガクショク　學を積む、殖は生長。左、昭十八「疾ー、ー荒不レ殖將レ落」

【學生】ガクセイ　生徒に同じ。後漢書、董卓紀「光和二年始置二鴻都門ーー一」

【學制】ガクセイ　學問教育に關する制度。

【學政】ガクセイ　○教育上の行政。○圖一省の學務教育の事を管掌する官吏、提督ーーの簡稱。

【學省】ガクセイ　太學をいふ。唐書、歸崇敬傳「古天子學、曰二辟雍一、亦曰二ーー一」張耒、晚雨詩「ーー歸來門巷秋、伴レ讀書史滿二牀頭一」

【學籍】ガクセキ　在學生として學校の名簿に記入する義。

【學則】ガクソク　學校の規則。ー校規。

【學堂】ガクダウ　學校「華陽國志」

【學長】ガクチヤウ　○學生のかしら。能改齋漫錄「眞宗乃命二張耆、爲二ーー一」○圖大學の各分科の長「文科大ーー」

【學庭】ガクテイ　まなびや、學校。晉書、庾峻傳「年盛志美、始涉二ーー一」

【學田】ガクデン　學校を維持し又學生に支給する資本を出す田地。

【學徒】ガクト　をしへご、學生。晉書、貨殖傳「學童」ガクドウ　學問する兒童。漢書、藝文志「漢興太史試二ーー一」ー學徒。

【學德】ガクトク　學問と德行と。

【學派】ガクハ　がくもん上の流派。

【學如レ不レ及】ガクハシキテオヨバザルガゴトシ　學問をするには逃ぐる者を追ひて及ばざるが如く、油斷なく勉むべし。論、泰伯「子曰、ーー、猶恐レ失レ之」

【學須レ靜】ガクハシヅカナルヲモチヰル　學業を修むるには、心を靜にして勉むべし。蜀志、諸葛亮傳「亮戒レ子書曰、君子之行、

靜以修ル身、儉以養レ德、非二澹泊一無二以明レ志、非二寧靜一無二以致レ遠、夫――也、才須レ學也」

【學問】ガクモン 國同一の學校出身者が一致して、勢力を得んとする團結。

【學者如レ登レ山】ガクシャハヤマニノボルガゴトシ 學問は山に登る如く、登れば登るほど高きを覺ゆる喩(徐幹、治學篇)

【學費】ガクヒ 學問するつひえ。‖學資。

【學府】ガクフ 學問のあつまる所。南史、傅昭傳「世稱爲二――一」

【學風】ガクフウ 學校中の習慣風尚。‖校風。

【學僕】ガクボク 學者の家又は家塾等に召使はれて學問を修める者。

【學務】ガクム 教育上に關する事務。

【學名】ガクメイ 學術上統一をはかる爲めに動植物に附したる世界共通の名稱、ラテン語にて記す。

【學問】ガクモン まなびたづねる。動、文言「君子學以聚レ之、問以辨レ之」孟、滕文公「吾他日未二嘗一一一、馳」馬試レ劍」

【學理】ガクリ 學問上の原理。

【學流】ガクリウ 學問の系統源流、學派、學問の流派(北史、魏收傳)

【學侶】ガクリョ 學問上の友だち。徐陵文「一一挹二其精微一、詞宗稱二其妙絶一」‖學徒・學友。

【學齡】ガクレイ 法律上國民教育を受くべき年齡、滿六歳の翌月より起算す。

【學而不レ思則罔】スナヒチガクビテオモハザレバスナヒチクラシ 學問しても己の心に深く思はざれば昧くして明かならず。論、爲政「――、思而不レ學則殆」

【學者如二牛毛一、成者如二麟角一】ガクシャハウノケノゴトクナルモノハキリンノツノノゴトシ 學に志す者は牛毛の如く多けれども、成業する者は麒麟の角の如く稀なり。北史、文苑傳序「――、孔子曰、才難不二其然一也」

十四畫

【孺】ジュ 遇

○ちのみご(乳子)をさなご(幼兒)いとけなし(幼弱)○したしむ(親)したふ(慕)○つく(屬)つき從ふ。

【孺慕】ジュボ ちのみご、をさなご。陶潛、祭二妹文一「慈姐早世、時尚――」‖嬰孺・孺子。

【孺孩】ジュガイ をさなご。孩孺に同じ。‖幼孺。

【孺子】ジュシ ○をさなご。儒、禮弓「見二――一慈者一」‖豎子。○少年を輕蔑していふ。史、留侯世家「――可レ教」

【孺人】ジュジン ○大夫の妻の稱。孺は屬、夫に附屬して敢て自ら專にせざる義。曲禮「大夫曰二――一」○庶く身分ある人の妻をいふ。江淹、恨賦「左對二――一、顧弄二稚子一」

【孺童】ジュドウ をさなご。曹毗文「奇發二幼齡一、輸技二――一」‖童孺。

【孺慕】ジュボ 小兒が親をしたふ如く慕ふ。後漢書「淮人――」

十六畫

【孽】ゲツ 屑 ⿰辥子 孽は俗字

○めかけばらの子(庶子)史、商君傳「商君者衛之庶二公子也一」○賤しきうまれの者。○わざはひ「妖一」書、太甲「天作一、猶可違、自作一、不可逭」○つみ(罪)うれふ(愛)○いたむ(痛)○一一は盛にかざる。

【孽子】ゲツシ めかけばらの子。孟、盡心「孤臣一一」‖庶子。

【孽妾】ゲツセフ 賤しき身分の女。漢書、賈誼傳「庶人一一」

【孽孫】ゲツソン めかけばらの孫。庶出の孫。史記、韓王信、故韓襄王一一也」

十七畫

【孼】 孽(前條)の俗字。

十九畫

【孿】レン 先

ふたご(雙生兒)一乳にして兩子「一子」「一生」

宀部

【宀】ベン 先

○屋根が家をおほふ貌。○ ⿰辥 うかんむり(ウ冠)漢字構造上の稱。

二畫

【宄】キ 紙

よこしま(姦)書、舜典「寇賊姦一」寇盜邪惡の内より起るを一といふ。姦、外より起るを一といふ。

【穴】ジョウ 寢 俗に穴に作る

○むだ、不必要「一官」「一費」○あまり、あまる。○ひま(閑散)「閒一」「散一」○わづらはし、まじる(雜)「一雜」いそがはし(忙)○さまよふ、さすらふ(流浪)後漢書、光武紀「流一道路、朕甚愍之」

【宄民】ジョウミン むだなる人數、餘計なる人員。白帖「捐二不急一、罷二――一」

【宄官】ジョウクワン むだなやくにん、又、閒散にして不必要なる官職。漢書、申屠嘉傳「一一居二其中一」

【宄雜】ジョウザツ 煩多にしてこみ合ふ。晉書、阮籍傳「情懸舟作二小藏竹一、載二三

竿、或百十成レ林、不レ見二其重複一一」

【冗散】ジョウサン　無用にして閑暇である。南史、劉峻傳「峻時貧悴一一、忽謁二紙筆一疏二十餘事一」

【冗冗】ジョウジョウ　入りみだるる貌。又、いそがはしき貌。煩多の貌。五色線「張文成曰、選人一一、甚二于羊羣一」

【冗官】ジョウカン　むだな身分不相應のおごり。宋史、范仲淹傳「斥二游情一、去二一一一」

【冗談】ジョウダン　むだばなし。

【冗長】ジョウチョウ　むだにあまる、くだくだしく長し。陸機、文賦「要二辭達而理擧一、故無レ取二乎一一一」

【冗不レ見レ治】ジョウフルルヲオサメズ　其の職務が閑散なるが故に政治の技倆をあらはすこと出來ず「韓愈、進學解」

【冗費】ジョウヒ　むだなつひえ。唐書、康承訓傳「罷二一一一一市レ馬」

【冗兵】ジョウヘイ　むだな兵、不必要なる兵隊。蘇軾文「爲レ政在レ去二冗一」曰冗官、曰一一、曰冗費」

【冗來】ジョウライ　くだくだしく小さし、いやしく劣る。南史、劉式之傳「人品一一」

【冗逸】ジョウイツ　くだくだしくしまりなし。＝冗長。

【它】タ　歌

〇へび、蛇の古字。〇ことなり(異)ほか、よそ(他・佗の古字)檀弓「或敢有二一志一以辱二君義」

【它所】タショ　ほかのところ。＝餘所。

【宁】チョ　魚

〇門と屏との間。正堂の前に設けたる庭の中にて古、支那の天子が政を聽く時、立つ所。曲禮「天子當レ扆而立」〇たたずむ(佇立)

【宁立】チョリツ　たたずむ。曲禮、注「人君視レ朝、所二一一一處」＝佇立。

【安】アン　寒　三畫

〇やすし。危の對「平一」「一全」曲禮「人有レ禮則一、無レ禮則危」〇やすんず、やすらか、おだやか「又一」「一寧」〇しづか(徐靜)「恬一」「一靜」〇しづまる、さだまる(定)〇しづめる、おちつかす「一民」〇する、置く「一置」〇たのしむ(佚樂)〇とどまる(止)〇いづくんぞ、いづくにか、否定の意をあらはす反語。＝焉。〇圖やすし

【安安】アンアン　天性のままにして、少しも强ひつとむることなき貌。晉、陸機「欲明文思一一、尤莽覓讓」

【安慰】アンイ　やすんじなぐさむ。古詩、焦仲卿妻詩「時時爲二一一一、久久莫二相忘一」＝安撫・慰安。

【安佚】アンイツ　やすらかに遊びたのしむ。孟、盡心「四肢之於二一一一也」＝安逸。

【安逸】アンイツ　前條に同じ。

【偸レ安】トウアン　一時の安をぬすみむさぼる。荀安を貪る。賈誼、治安策「夫抱レ火措二之積薪下一、而寢二其上一、火未レ及レ然因謂二之安一、一レ一者也」

【安穩】アンオン　やすくおだやか。晉書、顧愷之傳「行人一一、布帆無レ恙」

【安行】アンコウ　〇心にやすんじおこなふ。中庸「或安而行レ之」〇ゆくゆるとしづかに行く。詩、小雅「爾之一一、亦不レ遑レ舍」＝徐行。

【安康】アンコウ　〇やすらか。やすく治まる。易林「天福吉祥、永得二一一一」＝安寧・安靖。〇やすらかに治める。吳志、孫綝傳「一二社稷一」

【安閑】アンカン　やすらかに靜か。歐陽修、豐樂亭記「又愛二其俗之一一一」＝安閑。

【安閑】アンカン　前條に同じ。

【安危】アンキ　やすきと、あやふきと。史、項羽紀「國家一一在二此一舉一」史、李斯傳「一一不レ定、何以貴レ聖」

【安徽】アンキ　省の名、江・淮二川に跨り皖山を以て南北に分つ、故に又皖省とも稱す。

【安期生】アンキセイ　古、長生せし仙人。抱朴子「一一賣二藥海邊一卿瑯人、傳世見レ之、計已千年」

【安居】アンキョ　〇やすらかに暮して居る。後漢書、皇甫嵩傳「賴得二皇甫一兮、復一一」〇圖四月十五日より九十日間、僧衆が一所に靜居して修業する。＝夏籠・夏居

【安臥】アンガ　やすらかにねる。梁書、賀瑒傳「惡人日滋、善人日蔵、欲レ求二一一一、其可レ得乎」＝安眠。

【安慶府】アンケイフ　安徽省の首府、揚子江の左岸にあり。江水府城の三面を

部七畫)の條を見よ。

〇ヤス安・寧・康・泰・緩・易〇安は危の反、安樂・安寧・安穩と用ふ。曲禮「人有レ禮則安、無レ禮則危」〇寧は身の息災安樂なる義。〇泰は安定の義、安らかにおちつく義。書經「野無二遺賢一、萬邦咸寧」〇康は安樂の義。〇緩は安くしてゆるやかなる義、安泰・舒泰と用ふ。論語「君子泰而不レ驕」〇緩はやすんずと訓む、車に乘るとき、執る所の繩なり、論語に「正立執レ綏」とあり、綏を執れば、倒れずして安し、又ゆるやかに垂るる意もあり、故に安堵の義に用ふ。〇易は難の反、容易・簡易・平易などと用ふ。史記「平易近レ民、民必歸レ之」

【安堵】アンド　安居して憂なき貌。晉、陸機、辨亡論「百姓一一、各保二其所一」＝安居・安穩。

【安寧】アンネイ　やすらか、おだやか。晉書、王導傳「江東一一、實賴二斯人一」＝安靖・安康。

【安寢】アンシン　やすらかにねる。禮記、曲禮「凡爲レ人子之禮、冬温而夏清、昏定而晨省、在レ喪、事レ斯二者一、以盡二子道一」

【安心】アンシン　心やすし。

【安神】アンシン　心を安んずる。

【安身】アンシン　身を安んずる。

【安人】アンジン　人を安んずる。

【安全】アンゼン　やすらか。

【安泰】アンタイ　やすらか。

【安定】アンテイ　やすらか。

【安否】アンピ　やすきとあやふきと。

【安分】アンブン　分に安んずる。

【安平】アンペイ　やすらか。

【安保】アンポ　やすらかにたもつ。

【安命】アンメイ　命に安んずる。

【安樂】アンラク　やすらか。

【安樂死】アンラクシ　苦痛なく死ぬること。

【安樂椅】アンラクイ　ゆったりと腰かけられる椅子。

【安樂窩】アンラクカ　安樂に暮らす家。

【安樂水】アンラクスイ　安樂に暮らす境遇。

【安樂土】アンラクド　安樂に暮らす境遇。

【安樂鄕】アンラクキョウ　安樂に暮らす境遇。

【安樂國】アンラクコク　安樂に暮らす境遇。

【安樂世界】アンラクセカイ　安樂に暮らす境遇。

【安樂園】アンラクエン　安樂に暮らす境遇。

【安樂窩】アンラクカ　安樂に暮らす境遇。

【安樂死】アンラクシ　苦痛なく死ぬること。

【安樂椅】アンラクイ　ゆったりと腰かけられる椅子。

【安樂窩】アンラクカ　安樂に暮らす家。

【安樂水】アンラクスイ　安樂に暮らす境遇。

【安樂土】アンラクド　安樂に暮らす境遇。

【安樂鄕】アンラクキョウ　安樂に暮らす境遇。

【安樂國】アンラクコク　安樂に暮らす境遇。

【安樂世界】アンラクセカイ　安樂に暮らす境遇。

【安樂園】アンラクエン　安樂に暮らす境遇。

【安樂窩】アンラクカ　安樂に暮らす家。

【安樂水】アンラクスイ　安樂に暮らす境遇。

【安樂土】アンラクド　安樂に暮らす境遇。

【安樂鄕】アンラクキョウ　安樂に暮らす境遇。

【安樂國】アンラクコク　安樂に暮らす境遇。

【安樂世界】アンラクセカイ　安樂に暮らす境遇。

【安樂園】アンラクエン　安樂に暮らす境遇。

同訓異字　安・爲・惡の別は爲(火部七畫)の條を見よ。

補遺　侍なり、女の心下に在る義。(廉價)「一直」「一價」

環る。

【安慎】アンコウ　やすらかにしてつねにかはらず。潘岳詩「立レ德之柄、莫レ非二一一一」

【安坐】アンザ　落ちつきてすわる。莊子「一一定レ氣」

【安産】アンサン　圀やすらかに子を生む。經きさん。難産の對。

【安閑】アンカン　心安くほしいままにして禮なし。禮、表記「君子莊敬日強、一一日怠」

【安史之亂】アンシノラン　唐の安祿山と史思明との叛亂、玄宗帝の天寶十四年より九年間。

【安集】アンシュウ　集は安、やすんじやはらぐ。漢書、曹參傳「相レ齊九年、齊國一一、大稱二賢相一」＝安輯。

【安戢】アンシュウ　おだやかに治まる。＝又安輯

【安輯】アンシュウ　安集に同じ。漢書、高帝紀「共定二天下一、同一二之一」

【安心】アンシン　〇心を安んずる。張華文「一二一恬淡二栖二志浮雲一」〇アンシン圀信仰によりて、心を落ちつける「一一立命」

【安心立命】アンシンリツメイ　佛身を安んじ天命を全くして心に憂ふる所なし「傳燈錄十」

【安神】アンシン　神は心、心を落ちつける。後漢書、仲長統傳「一二一閑房、思二老氏之玄虛一、呼二吸精和一、求二至人之彷彿一」＝安心。

【安車】アンシャ　坐乘の小さきくるま。老人又、女子の用とす。曲禮「大夫七十而致レ事（中略）適二四方一、乘二一一一」

【安車蒲輪】アンシャホリン　蒲輪とはかばといふ草にて車輪を包み、輪轉ずるも甚だしくゆれざるやうにせしもの、老人の待遇を厚くする義。漢書、儒林傳「膠甲公年八十、武帝使二使束帛加レ璧、一一、駕レ駟迎レ之」

【安徐】アンジョ　やすくしづか。莊子「賢者一一正靜、柔節先定」＝安舒。

【安處】アンショ　やすんじて居る。詩、小雅「君子、無二恆一一」

【安舒】アンジョ　やすらかにしてしづか。漢書、匡衡傳「湛靜一一者、戒二于後一レ時」＝安閒。

【安緩】アンカン　やすらか。范鎭詩「方面要二一一一」

【安靖】アンセイ　靖も安、やすし。やすらかに治まる。左、襄二七「慈和而後能一二其國家一」＝安康。

【安靜】アンセイ　やすらかにしづか。後漢書、章帝紀「一一之吏、恒恤無レ擾、日計不レ足、月計有レ餘」

【安石不レ出如二蒼生一何】アンセキフシュツジョソウセイヲイカン　安石は晉の謝安の字、謝安が世に出でざれば、斯の民の苦痛を如何にして救はんかといふ義「世說、排調上」

【安石榴】アンセキリュウ　ざくろ。宋書、張暢傳「求二甘蔗一一一」

【安全】アンゼン　やすらかに全し。後漢書、夏恭傳「擁レ兵固守獨一一」

【安全燈】アンゼントウ　鑛山の坑内などにて使用する提げランプ、瓦斯の發火を防ぐため金網をかぶせしもの。

【安全網】アンゼンモウ　汽鑵の破裂せざるやうに調節する爲め排出口に設けし裝。

【安息】アンソク　〇やすんじいこふ。詩、小雅「豈爾君子、無二恆一一」〇古の西域（中央亞細亞）の國名。今の波斯（史、大宛傳）

【安息香】アンソクコウ　香の名。香錄「一一此乃樹脂、不レ宜二於燒一而能發二衆香一」晉書、佛圖澄傳「燒二一一一、呪願數百言」

【安息日】アンソクニチ　耶蘇教徒が業を休みて宗教上の儀式を行ふ日、神が六日間に此世界を造り、七日目に一日休みしといふ傳說に本づく。＝日曜日・禮拜日。

【安存】アンソン　やすらか。漢文帝賦「或暇豫一一、或窮困側傾」

【安安】アンアン　やすし。安も安。宋史、岳飛傳「湖廣江浙亦非二一一一」＝安康。

【安泰】アンタイ　やすらかにしてゆたか。易林「解二緯倒歷一歷國一一」安康・安安。

【安宅】アンタク　身を處くに最も安全なる場所。仁に喩ふ。孟、公孫丑「仁天之尊爵也、人之一一也」

【安宅正路】アンタクセイロ　安宅は仁、正路は義に喩ふ。孟、離婁「仁、人之安宅也、義、人之正路也、曠二安宅一而弗レ居、舍二正路一而不レ由、哀哉」

【安地】アンチ　やすらかなる地位。晉書、宣帝紀「凡物置二之一一則安、危地則危」

【安置】アンチ　一定の所にすゑおく。搜神記「一二一几前一」＝安放・安頓。

【安知必林】アンチヒリン　盤珠の名、白色椒葉の結晶にて水にとけ易し、鎭痛・殺菌・解熱等に用ふ。

【安質母尼】アンチボニ　もろくして白色の光澤ある金屬。鉛と合して活字を作るに用ふ。

【安著】アンチャク　圀やすらかにつく、無事に目的地に到著する。

【安帖】アンチョウ　やすし。金史、古里甲石倫傳「大興相應、遂獲二一一」＝安安・安靜・帖服。

【安堵】アンド　〇堵は牆、人其の牆内に安んじて動搖せず。史、高祖紀「諸吏民皆一一如レ故」〇心配がない。＝安心。

【安寧】アンネイ　〇やすらか。史、周紀「天下一一、刑錯四十餘年不レ用」＝安康。〇冬の異名「爾雅、釋天」

【安排】アンハイ　ほどよくならべる、親よく加減する、又按排に作る。孟郊詩「弱力謝二剛健一、寒筵賀二一一一」

【安否】アンピ　やすらかなるか、しからざるか。禮、文王世子「今日一一何如」

【安暖】アンダン　やすらか。後漢書、桓帝紀「以爲二一一一」＝安寧。

【安貧】アンニンスルコト まづしきにやすんずること。陶潜、詠二貧士一詩「一レ一守レ節者、自レ古有二歌謳一」

【安撫】アンブ やすめなでなつける。

【安歩】アンポ しづかにあゆむ。戦国策「晩食以当レ肉、一一以当レ車」

【安民】アンミンスルコト 人民の心を安んず。書経「一レ一則惠、黎民懐レ之」

【安眠】アンミン やすらかにねむる。徐陵文「門前漫浅、我且一一」

【安眠妨害】アンミンバウガイ 夜ふけてやかましく騒ぎて他人の安眠をさまたげる。

【安撫】アンブ やすらかにしたのしむ。陸機詩「綿邈隔二一一一」

【安楽】アンラク やすらかにしてたのしむ。孟、告子「生二於憂患一而死二於一一一」

【安楽国】アンラクコク 仏極楽浄土。仏説無量寿経「無レ有二三途苦難之名一、但有二自然快楽之音一、是故其国名曰二安楽一」

【安楽浄土】アンラクジャウド 仏念仏の説、極楽世界をいふ。日安楽国・極楽浄土。

【安楽窩】アンラククワ 宋の邵康節の居所の名。宋史、邵雍傳「富弼・司馬光・呂公著諸賢、退二居洛中一、雅敬レ雍、恆相従遊、為市二園宅一、雍歲時耕鑿、備給二衣食一、名二其居一曰二一一一一、四自號二安楽先生一」

【安利】アン ○やすらかに都合よし。史、匈奴傳「莫レ不レ就二一一一而辟レ危矣」○國 やすあひのやすき利息。日低利。

【安祿山】アンロクザン もと胡人なりしが、唐の玄宗の信任を得、陰に異圖を懐き、遂に反し、後誅せらる。

【安和】アンワ やすくおだやか。宋書、樂志「文帝遵二四時舞一、以明二天下之一一一」日安穏。

【安如二泰山一】アンスルコトタイザンノゴトシ 安らかにして動かざること泰山の如し。漢書、厳助傳「天下之安、猶二泰山而四二維之一也」

【安如二磐石一】アンスルコトバンセキノゴトシ 安泰なること大石の動かすべからざるが如し。荀、富國「國安二于磐石一、措二於旗翌一所謂は、星の名。陸機其、謙守齋記「若二泰山之固、磐石之安一」

【居レ安如レ危】キョアスルコトアタカモアヤウキガゴトシ 安き時も危き時の事を忘れず、常に戒慎す。禮記「君子一一、小人居レ危如レ安」

【安而不レ忘レ危】アンジテアヤウキヲワスレズ 安泰の時にても危急の事あらんことを思ひて、油断せず。易、繋辞「君子一一、存而不レ忘レ亡、治而不レ忘レ乱、是以身安而國家可レ保也」左傳「書曰居レ安思レ危、思則有レ備、有レ備無レ患」

【宇】 ウ 廣

○のき(屋邊)のきした(簷下)「屋一」○やね(屋)いへ(家屋)○おほふ(蔽)○大いなり。○天地四方をいふ「寰一」「海一」「一内」○國の四方のはて(邊土)○たましひ(精神)○きりやう、こころ(度量品性)「器一」○はし(端)局部を指していふ「眉一」

【同レ字而異レ體】ドウジテイタイ 萬物生を字内に受くるは同じきも、其の形體は、異なりとの義。荀子「萬物一一」

【字下】ウカ のきした。論衡「知二屋漏一者在二一一一、知二政失一者在二草野一」

【在二字下一】アリテウカニ 屋宇の下に在り、近く遥る義。左傳「衛在二君之宇下一」

【宇縣】ウケン 漢土の異稱。宇は宇宙、縣は赤縣神州、即ち漢土の異名。史、秦紀「大矣哉一一之中、承二順聖意一」日中國。

【宇内】ウダイ あめのした。史、秦紀「席二巻天下一、包二擧一一一」日天下。

【宇宙】ウチウ 天地古今の稱。淮南、齊俗「往古來今謂二之宙一、四方上下謂二之宇一」一説、天の覆ふ所を宇、地の由る所を宙といふ。即ち天地の義(文選、魯光殿賦、注)

【宇宙論】ウチウロン 天地萬物の根本的原理を論ずる哲學。

【宇中】ウチウ 天地四方の稱。淮南子「一一六合、振二落之末一」日宇内。

【宇量】ウリャウ 器宇度量の義。晉書、武帝紀「帝一一弘厚、容二納讜正一」

【守】 (一)シュ (二)シュ 有 宥

(一)まもる(護)身分、官職などを大切にする。○つかさどる(掌)○をさむ(收)○そなへ(防備)○もちこたへる「固一」「堅一」○位卑くして官の高きをあらはす語。韓愈、與二于襄陽一書「將仕郎一國子四門博士」(二)まもる役人、太一は郡の長官。○古は狩に通用す「巡一」國○まもる、見つめる、凝視する。○まもり、神佛の護符。○かみ、古の官名、一國の長「土佐一」○もり、子守。

【守一】シュイツ ○一事に心を專らにす。五代史「失一萬事之本也、能一一者可二以治二天下一」○道家の術、事物を精思して固く之を守る義(抱朴子)

【守宇】シュウ くにを守る。又、國土の義。左、昭四「或無レ難以喪二其國一、失二其一一一」

【守衛】シエイ ○まもる(警衛)又、其の者。列子「人者爪牙不レ作、以供二一一一」○國 貴族院・衆議院の事務局の小役人。

【守宮】シュキュウ ○やもり(蜥蜴)一説にとかげ(蜥蜴)又、やもり(壁虎)漢武帝の時、端午の日に蜥蜴を取り、丹沙

にて飼ひ、明年の端午に掘り碎きて後宮婦人の臂に塗る。若し男子に關係すれば愈りたる瘡が消え、然らざる者は赤き痣が出になる、故に斯く名づけたりといふ〔事文類聚〕

【守禦】シュギョ　城をまもり、敵をふせぐ。國語、小國諸侯、有二一一之備一」

【守愚】シュグ　智なれども愚なるが如くにする。家語「聰明睿智、守レ之以レ愚」

【守犬】シュケン　夜をまもるいぬ。穆天子傳「一一七十」禮記、疏「一一、守二禦宅舍一者也」

【守令】シュレイ　本官に拜せずして、權りに兼務する。漢書、王莽傳「縣宰缺者、數年一一」＝兼任・署理。

【守謙】シュケン　へりくだる心を守りて失はざる義。晉書、張華傳「持レ盈一レ一五十餘載」荀子「富有二四海一守レ之以レ謙」

【守護】シュゴ　〇まもる。まもり。宋史、築二城壘一置二官兵一一二之」〇國一一職は源頼朝の設けし職名、警備のため國司に添へて置く。

【守宰】シュサイ　つかさ。かしら。謝莊文「親レ民之要、實歸二一一」

【守歲】シュサイ　除夜ふかに眠らずして居る。東京夢華錄「除夕夜、士庶之家、闔レ燈團坐、謂レ旦不レ寐、謂二之一一」

【守雌】シュシ　柔弱の德を守る。老子「知二其雄一守二其雌一」雄は剛強、雌は柔弱。

【守臣】シュシン　一定の土地をまもる臣。諸侯をいふ。左傳「得二罪於王之一一」

【守身】シュシン　己の身を守る。孟、離婁「守レ約爲レ大、一レ一爲レ大」

【守株】シュシュ　舊習を守りて變通を知らず。韓非、五蠹「宋人有二耕レ田者一田中有レ株、兎走觸レ株、折レ頸而死、因釋二其耒一而一レ一、冀二復得一レ兎、兎不レ可レ得、而身爲二宋國笑一」

【守戍】シュジュ　邊境をまもる。又、其の人。宋史、兵志「咸平初、秦州極邊、止二置千人一分番一一」

【守正】シュセイ　正しき道をまもる。易繫、注「修レ仁一レ一、久必悔消」

【守成】シュセイ　成りたる業をまもりて失はず。漢書、「公孫弘傳「一一上レ文」貞觀政要「唐太宗謂二侍臣一曰、帝王之業、草創與二一一孰難」

【守拙】シュセツ　拙く愚なるを守りて、分に安んずる。陶潛詩「一レ一歸二園田一」＝藏拙。

【守節】シュセツ　節操をまもる。漢書「剛直一レ一」

【守錢虜】シュセンロ　吝嗇にして錢をためる一方の者をそしる語。後漢書、馬援傳「凡殖二貨財一實二能施賑一者則——耳」＝守錢奴。

【守歲】シュサイ　歳もり。漢書、高帝紀「一一二十家」

【守田】シュデン　廢田に生ずる蕪夢に似たる一種の草、其の實食ふべし。みのごめ〔爾雅、疏〕

【守望】シュボウ　寇賊をふせぐ爲めにものみを置く。孟、滕文公「出入相友、一一相助、疾病扶持」

【守備】シュビ　まもり、そなへ。左傳「巡二大城一繕一一一」＝防備。

【守文】シュブン　文を守る、成法をまもりて武力などを用ひず。史、外戚傳「帝王及繼體一一之君」

【守分】シュブン　己の分限を守る。文中子「廉者可レ令レ一レ一、不レ可レ令二遏取一」

【守盟】シュメイ　ちかひをまもる。程俱詩「惟有二號巷士一守レ窮如レ一レ一」

【守約】シュヤク　身を約くとりしまる。孟子「一レ一而施博者、善道也」

【守令】シュレイ　太守と邑令と、皆民に親むの官。晉書、詔二內外羣官一擧二一一一之才一」

【守刀】カイトウ　圖護身用の短刀。＝匕首。

【宅】タク　陌

〇すまひ(居宅)〇をる(居)其の位に居る。又、居る所の位置。〇さだむ(定)書、康誥「一一天命」〇つかあな(墓穴)禮、雜記「卜一一」

【宅憂】タクユウ　喪に居る義。書、說命「王一一、亮陰三祀」＝丁憂。

【宅宇】タクウ　いへ。南史、顏延之傳「器服不レ改、一一如レ舊」

【從レ宅而忘二其妻一】タクヲワスル　古の健忘者の喩。通鑑、唐紀「昔魯哀公、謂二孔子一曰、人有二甚忘者一、——、孔子曰、又有二甚者一、桀紂乃忘二其身一、亦猶レ是也」

【宅券】タクケン　官府より其の家宅の所有者に下付する權利證、宅地券。宋史、陶穀傳「李崇自レ北還、因以二一一獻二逢吉一」＝身契。

【宅地】タクチ　やしき(屋敷)枕中書「一一四面」

【宅兆】タクチョウ　はか、墓所。宅は墓穴、兆は塋域。孝經、喪親「卜二其一一一而安二厝之一」

【宅里】タクリ　住處、むらざと。書、畢命「旌二別淑慝一表二厥一一一」

【宋】ソウ　四畫　送　通　俗

又、宗に作る

〇宝の東南の隅。〇おくぶかし(深奥)又、其の處。〇風が穴を通るときおこる聲の形容。韭、齊物「一者咬者」

【宏】カウ　庚　コウ

〇大いなり、閎に通ず「一大」〇ひろし(廣)〇おほいにす、廣くす「恢一」

【宏猷】クワウイウ　大いなるはかりごと。晉書、樂志「一一允塞」‖宏謨。
【宏遠】クワウエン　ひろくとほし。晉書、賈充傳「雅量一一」‖弘遠。
【宏宏】クワウクワウ　ひろくおほいなる貌。又、おく深き貌。集異記「新宮一一」
【宏綱】クワウカウ　おほづな。孔安國文「舉二其一一一撮二其機要一」‖大綱。
【宏規】クワウキ　大いなるはかりごと。揚雄文「仰」贊一一、參二開神算一」‖宏猷・宏謨。
【宏器】クワウキ　大いなる器量。任昉、王儉集序「希世之臨民、瑚璉之一一」
【宏敞】クワウクワツ　ひろく大いなり。待賢文「殿堂恢峻、神機一一」
【宏偉絶倫】クワウヰゼツリン　宮殿の壯大にして美麗なる義（蘇軾、凌虛臺記）
【宏構】コウコウ　大いなるかまへ、建築、又、文詞につきていふ。殷文珪詩「明堂一一集二良材一」
【宏材】クワウザイ　大いなるはたらき。又、其の人。晉書、郭璞傳「景純通秀、夙振二一一一」
【宏壯】クワウサウ　大いにして立派。水經、注「彭城呂一城悉以二磚壘一、一一堅峻」
【宏詞】クワウシ　唐代官吏を選擧するに文三篇を試みるをいふ「博學一一」‖鴻詞。
【宏儒】クワウジユ　大儒の何晏賦「一一碩生」
【宏碩】クワウセキ　大學者。唐書「旁有二一一一、講道藝文」‖宏儒碩學。
【宏大】クワウダイ　ひろく大いなり。‖廣大・鴻大。
【宏通】クワウタウ　心廣くして事理に通達する。班固賦「大雅一一、於レ我篤レ慕」‖恢闊通達。
【宏誕】クワウタン　妄に大言して實なし。‖誇誕・荒誕。
【宏池】クワウチ　ひろきいけ。馬融文「臨二乎一一一」
【宏長】クワウチヤウ　ひろくながし。柳宗元文「智謀一一、辯論恢奇」
【宏圖】クワウト　遠大のはかりごと。韓愈文「啓二中興之一一」
【宏放】クワウハウ　心廣くして氣ままなり。晉書、志氣一一」
【宏博】クワウハク　大いにしてひろし。史、禮書「化隆者一一、治淺者損衰」
【宏濟】クワウサイ　ひろくとほし。度量大いにして遠識あり。晉書、安平傳論「安平、風度一一、器宇高雅」‖宏遠。
【宏裕】クワウユウ　ひろくゆたかなり。晉書「文章一一」
【宏博】クワウハク　ひろくあまねし。韓愈、元和聖德詩「周布一一」
【宏辯】クワウベン　大いなる辯論。蘇軾、上二韓太尉一書「聽二其議論之一一」‖博辯。
【宏謨】クワウボ　大いなるはかりごと。冀宏文「遠贊二一一一、匡二此嗣道一」‖宏猷。
【宏覽】クワウラン　ひろく物事を見て知る。任昉、王儉集序「二一載籍一」‖閎覽・博覽。

【宓】

宜（宀部五畫）の本字。

【完】

クヮン　寒

〇まったし、まったくす（全）そなはる、缺カがない「一全」「一繕」「修一」〇事を畢る「一功」〇たもつ（保守）〇つくろふ（修繕）〇かたくしてよし（堅好）孟、離婁「城郭不一」〇寬（宀部十二畫）の古字。

同訓異義　完・全の別は全（入部四畫）の條を見よ。

【完好】クヮンカウ　十分に備りて立派。葉適詩「橫槊正一一」
【完養】クヮンヤウ　もとのままを保ち守る。左、昭十五「雖二邑二而敎二民愈一、將レ用レ邑、邑以貳レ怠、不レ如レ一一」
【完給】クヮンキフ　十分に足りそなはる。韓詩外傳「獨以一一者、非レ力則儉也」
【完具】クヮングヰ　缺くる所なくそろひととのふ。周禮、註「輦輿一一」
【完完】クヮンクヮン　缺けたる所なき貌。韓愈詩「月形如二白盤一一一上二天東一」
【完計】クヮンケイ　ぬけめなきはかりごと。完全の策。漢書「解二敵中一國一、甘二心匈奴一、非一一一也」
【完結】クヮンケツ　まったくをはる。‖完了・完竣。
【完潔】クヮンケツ　行に缺けたる所なくして心きよし。唐書、餘慶少孤嘱、行已一一」
【完濟】クヮンサイ　借金を悉く返し終る、皆濟。
【完葺】クヮンシフ　つくろひふく。唐庚詩「享傳已一一」
【完聚】クヮンシユ　〇城廓をつくろひ、人民をあつめる。左、隱、元「大叔一一」〇家族がうちそろひて居る。元史「親屬一一」
【完成】クヮンセイ　まったく出來あがる。‖完了。
【完整】クヮンセイ　十分にととのふ。盧思道文「器械一一、貨財充溢」
【完節】クヮンセツ　終始貞節を全うする。唐書、列女傳「中道聞二其一一一、乃遣二後妻一爲二夫歸一如レ初」
【完全】クヮンゼン　まったくして缺けたる所なし。劉禹詩「吟レ詩猶覺力一一」
【完全花】クヮンゼンクヮ　植物の花の蕚・花冠・雄蕊・雌蕊の俱に備はるもの、桃・梅・豆類の如きもの。
【完全說】クヮンゼンセツ　希臘のアリストテレス等の唱へたる倫理學說、人生の目的は天賦の能力を十分に實現するにありとの說。
【完全變態】クヮンゼンヘンタイ　蟲が仔蟲より蛹、蛹より成蟲と順次に三變を經る狀態。
【完善】クヮンゼン　まったくしてよし。史記「示レ不レ如二財貨之一一一也」
【完納】クヮンナフ　租稅などの負擔を殘らず納め終る。

【完備】ヴァン 物事が十分にそなはる。歐陽修文「首尾一一、可レ見二當時之制一也」

【完膚】ヴァン きずなきはだへ。唐書、劉迺傳「迺佯痛不レ答、笑無二一一」

【完璧】ヴァン ベキ 〇たまをまったうす。人の物を返すにいふ。史、廉頗・藺相如傳「相如曰、願奉レ璧往、使二城入一レ趙、而璧留レ秦、城不レ入、臣請一一レ歸レ趙」〇圖俗にむきずの玉の義にて、完全無缺の意に用ふ。

【完補】ヴァン 完全におぎなふ。元好問詩「汲冢遺編要二一一」

【完本】ヴァン 全部の卷數のそろへる書物。缺本・端本等の對。

【完了】ヴァン レウ まったくをはる。‖完成・完結。

【宋】ソウ 宋

〇るる、をる(居)〇國名。周の微子の封ぜられし地、春秋十二列國の一、今の河南商邱縣。〇南北朝時代の南朝の一國、劉裕を祖とし、八主五十九年にして齊に禪る。〇五代の後、趙匡胤、周の禪を受けて帝と爲り、國を一と號す、十八帝三百二十年にして元に滅ぼさる。

【宋音】ソウ 宋代の字音、永安以後、宋の禪僧多く歸化して、我國に傳へたるもの、行在のアンの類。

【宋學】ソウガク 宋の周濂溪・張橫渠・程明道・程伊川・朱熹等の說きし儒教の哲學。(宋代其の學を奉ずる者を宋儒といふ)‖性理學・程朱學・朱子學。

【宋史】ソウシ 四百九十六卷、五代の末の周より以來三百十七年間の事を記す、元の托克托等、勅を奉じて撰す。

【宋襄之仁】ソウジョウノジン つまらぬなさけ。十八史略「宋襄公與レ楚戰、公子目夷、請レ及二其未一レ陣擊之、公曰、君子不レ困二人於阨一、遂爲レ楚所レ破、世笑以爲二一一」詳くは、左、僖二二參看。

【宋玉】ソウギョク 戰國の宋の國の賢大夫の名。博物志「宋有二賢大夫一曰レ鵬」

【宋儒】ソウジュ 宋學を見よ。‖性理學者・道學者。

【宋書】ソウショ 齊の沈約の撰、六朝の宋の歷史、一百卷。

【宋朝之美】ソウチョウノビ 朝は宋の公子にして美色あり。論、雍也「子曰、不レ有二祝鮀之佞一而有レ——、如二難乎免於今之世一矣」

【宋四賢】ソウシケン 韓琦・范仲淹・富弼・歐陽修。

【宋道學五先生】ソウダウガクゴセンセイ 周濂溪・程明道・程伊川・張橫渠・朱晦菴。

【宋濂】ソウレン 字は景濂、潛溪と號す。明初の大儒、文章を以て海內に名あり、明の太祖、召し見て五經の師と爲す、道德を以て太祖を輔佐す、著はす所、宋學士全集三十三卷あり。

【宍】 肉(部首六畫)の古字。

圖にくに肉、ししにーを用ふ。

【宛】エン 五 畫 阮

〇まがる、まぐ(曲)かがむ(屈)〇ゆづる(讓)したがふ(順)〇さながら、あたかも。〇さもにたり、又坐ッに見ゆる貌。詩、秦風「一在水中央」〇小さき貌。詩、小雅「一彼鳴鳩」〇大ーは漢代西域の國名。圖〇あて「名ー」〇つつ「二ッー」

【宛宛】エン 〇龍の屈伸する貌。漢書、司馬相如傳「ーー黃龍」〇柔弱の貌。魏徵詩「ーー藤蘿乘」

【宛丘】エンキウ 〇中央高きをか。爾雅「丘上有レ丘、爲二一一」〇地名、伏羲神農、陳に都す、即ちーーなり、今の河南省淮陽縣。

【宛虹】エンコウ 屈曲せるにじ。司馬相如、上林賦「ーー拖二於楯軒一」注「宛曲之虹也」

【宛然】エンゼン あだかも。さながら。詩、豳風「宛在二水中央一」注「ーー坐見貌」‖依然。〇人に讓りて遜くる貌。詩、魏風「ーー左辟」

【宛轉】エンテン やさしくやはらか(柔和)なる貌。柳宗元、乞巧文「文詞ーー、步武輕便」宛は一に婉に作る、通ず。杜牧詩「好風初婉轉」

【宛轉】エンテン ころぶ貌。ゆるやかに舞ふ貌。やはらかに自由に動く貌。劉廷芝、代下悲二白頭一翁上詩「ーー蛾眉能幾時」

【宜】ギ 支

〇よし、よろし(適理)都合よし、和順なり「歲ー」「使ー」「適ー」「權ー」大學「詩云、ーー兄ーー弟」〇よろしき事物。〇よしとす(可)よみす(善)〇うべ、うべなり(當然)〇よろしく何何すべし(決定の辭)「ーー去」「ーー行」〇土ーは其の地の產物。〇まつりの名。又、まつる。

【宜社】ギシャ 土地の神をまつる。禮記「天子將レ出、類二乎上帝一、宜二乎社一」

【宜昌】ギショウ 地名、湖北省にあり、揚子江に臨める開港場、汽船航路の終點にして、四川省に入る咽喉に當る重鎭。

【宜春】ギシュン 立春をいふ。荊楚歲時記「立春日、寫二一一二字一、貼二子門庭柵枋一」

【宜稱】ギショウ よきとなへ。韓偓詩「還二一一一問二秀人一」

【宜稻】ギタウ いねを植うるにかなふ。周禮、職方「青州ー レー」
【宜男】ギナン 婦人の男子を多く生む者。北史「文宣帝謂ー酒祝曰、新婦ー ー、孝順富貴」
【宜男艸】ギナンサウ わすれぐさの異名。草木記「萱草一名宜男、婦人懐妊佩二其花一生レ男」宜レ男の義によりて人の母を賞堂といふ。

【官】クヮン 平

〇つかさ、やくにん（吏員・職責）「ー吏」「大ー」「高ー」「文ー」「武ー」〇やくしょ（朝廷・政府・廳署）「ー府」「ー衙」〇おほやけ（公）漢書、蕭望之傳「五帝ー天下」〇つかふ（奉仕）〇つかさどる（主・掌視）〇官に任ずる。禮、王制「論定然後ー之」〇耳目鼻口などのはたらき「五ー」「感ー」孟、告子「耳目之ー」
【官位】クヮンヰ 天子より授けらるる位。六韜「授二ー ー一」
【官遊】クヮンイウ 官吏となり、又官命を帶びて遠方に行きて勤める。又、其の事、宦遊の誤用。
【官印】クヮンイン 〇官吏が官署にて用ふるしるしの印。漢書、惠帝紀「佩二千石ー ー一者」〇政府の印章。
【官營】クヮンエイ 政府が交通・産業等の事をいとなむをいふ、政府の營業。‖官業。
【官媛】クヮンエン みやづかへする女、御殿女中。‖官女・宮女。
【官家】クヮンカ 天子。說苑「五帝以二天下一爲レ官、三王以二天下一爲レ家」
【官暇】クヮンカ 官より賜はるやすみ。孔叢仲詩「ー ー更將二講子一學」
【官衙】クヮンガ やくしょ。劉說詩「馬蹄踏レ月趨二ー ー一」‖官廳。
【官海】クヮンカイ 役人のなかま、官吏の社會。
【官廨】クヮンカイ 役所。天中記「以二ー ー喧擾一乃於二城西池小洲上一立二茅茨之屋一」‖官署。
【官權】クヮンケン 政府の專賣。
【官街】クヮンガイ 官職をいふ、街はくつわ、馬を御するもの、轉じて事を正し治める義とす〔家語、執轡〕
【官妓】ギクヮン 官に仕へて歌舞をなす女〔宋史、太宗紀〕‖官娃。
【官紀】クヮンキ 官廳の規律、官吏のとりしまり。唐書、神龍中、ー ー滿然」
【官級】クヮンキフ 官吏の等級。漢書、注「無レ有二差次一、不レ得二流行一、故爲置二ー ー一」
【官給】クヮンキフ 官よりあてがふ。宋史、孝宗紀「貧民生レ子、ー ー錢米一」
【官金】クヮンキン 官府の所有に屬する金。
【官金消費】クヮンキンセウヒ 官吏が其の保管に屬する官金を私につかひこむ。
【官許】クヮンキョ 官のゆるし、政府の免許。
【官軍】クヮングン 天子の軍。賊軍の對。抱朴子「ー ー力不レ能レ傷」
【官契】クヮンケイ 官府のてがた。周禮「掌二ー ー一以治レ職」
【官繫】クヮンケイ 仕官の爲めに身をつながる。白居易詩「ー ー何因得二再遊一」‖官拘。
【官健】クヮンケン 官より衣糧を給する州兵。唐書、德宗紀、注「州兵給二衣糧一者、謂二之ー ー一」
【官蔗】クヮンシャ 〇國家又は政府のおきて。〇役人、官吏。
【官權】クヮンケン 政府の權力。
【官戶】クヮンコ 官府に奉仕する家。宋史、高宗紀「ー ー勢家」
【官拘】クヮンコウ 官職につながる。王安石詩「我方ー ー不レ得レ往、子有二閒暇一宜二能來一」
【官老】クヮンラウ 官のつかひ。范成大詩「野人何苦避二ー ー一、符使追呼擾二道懷一」
【官倉】クヮンサウ 官のこめぐら。隋書「ー ー貯積、以擬二漕運一」
【官私】クヮンシ おほやけと、わたくしと。公事と私事と。官人と私人と。‖公私。
【官使】クヮンシ 官を授けて人をつかひ用ふ。漢書、董仲舒傳「天下之士、可二得而一ー ー也」
【官事】クヮンジ やくしょの事務。論、八佾「ー ー不レ攝」
【官人】クヮンジン 官吏なり。後漢書、和帝紀「惟ー ー不レ得二恣下一」
【官舍】クヮンシャ 〇やくしょ。漢書、何並傳「性清廉、妻子不レ至二ー ー一」〇やくたく。‖官宅・官邸。
【官情】クヮンジャウ 官員かたぎ、役人根性、官情の誤用。
【官守】クヮンシュ 職務上の責任。孟、公孫丑「有二ー ー一者、不レ得二其職一則去」‖職責。
【官書】クヮンショ 政府の公文書、公務上の書類、官文書。周禮、天官「史掌二ー ー一」
【官署】クヮンショ やくしょ（宋史、食貨志）‖官廳・官衙。
【官素】クヮンソ 政府にて鹽を製する。北史、崔昂傳「赤既ー ー、須レ斷二人通一」
【官職】クヮンショク お仕へのつとめ。周禮、天官「ー ー以辨二邦治一」‖官事。
【官制】クヮンセイ 官廳の組織・權限及び官吏の職務權限等を規定せし法則。
【官線】クヮンセン 官有、又、國有の電線又鐵道。
【官租】クヮンソ 官にをさむる租稅。陳逍詩「得レ麥俸是レ債二ー ー一」
【官族】クヮンゾク 官吏となる家がら。晉書、宋靖傳「累世ー ー」
【官宅】クヮンタク 官邸に同じ。
【官治】クヮンチ 官府のまつりごと。韓非子「國家必有二文武ー ー一、必有二賞罰一」
【官秩】クヮンチツ 〇ふち、官吏の俸給。史、秦紀「遂復二三人ー ー一、如レ故」‖官

祿○官位。
【官長】クワンチャウ　官吏のをさ。長官（勵、衛賢）
【爲二官長一捕レ鼠】クワンチャウトナリテねずみヲとラフ　長官にこびへつらふ故事。宋史、寇準傳「初丁謂出二準門一、至レ參二政事一、事レ準甚謹、常會二食中書一、羹汙二準鬚一、謂起徐拂レ之、準笑曰、參政、國之大臣、乃——耶、謂甚愧レ之」
【官報】クワンパウ　やくしょ。孔平仲詩「城上猶吹レ角、——已罷更」‖官府・官衙・官署。
【官女】クワンヂョ　みやづかへのをんな、宮中奉仕の女。‖宮女。
【官廷】クワンテイ　官殿に同じ（後漢書、李通傳）
【官第】クワンテイ　官のやしき。宋史、李用和傳「假以二無事坊之一一」‖官邸。
【官邸】クワンテイ　官より貸與する吏員のやしき。戴叔倫詩「依稀見二州郭一、倉皇問二一一」‖官舍・官宅。
【官牒】クワンテフ　官吏の姓名を記せしふだ。今の職員錄の類（鮑照、謝二朱陵令一表）
【官途】クワント　官吏たる道。又、官吏の地位職務。白居易詩「一一自レ是心長刖」‖官海・官場。
【官等】クワントウ　官職の等級。
【官能】クワンノウ　生物が具有する生理上のはたらき。五官のはたらきの類。
【官房】クワンバウ　圖各省及び他の官廳にて其の長官に直屬し、機密の事務を取扱ふ所「大臣一一」
【官報】クワンパウ　○政府より發行する日刊の公報、法律・敍任等の公事を載するを主とす。○官廳又、官吏が公務のため發する電報。
【官意二於官成一】クワンハクワンナニオコル　官は官職、官はみやづかへ、奉仕の義、官職に居るものは、仕の漸く成るに及ぶときは、怠りの心を生じて、過失を招くをいふ。說苑、敬愼「曾子曰、——、病加二於小愈一、禍生二於懈惰一、孝發二於妻子一、察二此四者一、愼レ終如レ始」
【官門】クワンモン　官位の等級。唐書、張說傳「儒以レ道相高、不下以二一一一爲中先後上」
【官班】クワンパン　官職の位次。白居易詩「一一分二內外一、遊處逐參差」
【官婢】クワンヒ　罪により收められて官の下女となりし女。漢書、刑法志「太倉令淳于公說、當レ刑、小女緹縈上書願下沒入爲二一一一以贖中父」
【官費】クワンピ　官府より出す費用「一一語學生」
【官府】クワンフ　やくしょ。政府。周禮「以二八法一治二一一一」‖官廳・官衙。
【官物】クワンブツ　○おほやけの物。官有物（吳志、陳武傳）○租稅の類。
【官文書】クワンブンショ　官省に同じ。
【官幣】クワンペイ　圖古は神祇官より、今は宮內省式部職より、神社に捧げらるるみてぐら。又、其の資格ある神社を一一社といふ。
【官沒】クワンボツ　人民の所有物を政府に取り上げる、沒收する。又、古、人の自由を剝奪して官の奴隸とするにもいふ。
【官吏】クワンリ　やくにん。史、始皇紀「大臣不レ服、——尙彊」
【官立】クワンリツ　政府の費用にて立てる「一一學校」
【官林】クワンリン　官有の林。
【官倭】クワンヰ　同役のひと。崔融文「一一語二一一三十餘年」‖同僚。
【官僚】クワンレウ　同役、官吏。南眞記「嶌瀨上有二九府一、諸仙皆是九官之一一耳」
【官僚政治】クワンレウセイヂ　政府の權力が强大にして人民を壓服する政治。
【官祿】クワンロク　官位と俸祿と。張耒詩「清閒得レ食學二一一」
【官話】クワンワ　北京の官場用の語。

【宗】ソウ　圖一音シュウ

○むね（主）をさ（長）首位の者「詞一」「一匠」「儒一」「文一」○もと（本源）晉語「禮之一也」○たっとぶ、奉じてかしらとする。史、伯夷傳「天下一周」○たっとし（尊）人の尊びて祭る者、六一は四時・寒暑・日・月・星・水旱。○のっとる（法）○はじめ。○せんぞ、祖先。又、祖先中の有德者。禮、祭法「爲人祖二文王一一武王一」○同姓、同一の祖先より分れ出でたる一族。○一つの本源より分れ出でたる流派「一教」「禪一」○まみゆ（謁見、朝會）○種類。
【宗教】シュケウ　神佛を信仰して安心立命を得しむる教。佛教・耶蘇教の類。
【宗旨】シュシ　○其の宗教の正確なる趣旨。○廣く其の事業のむねとする主義目的。○圖宗教。
【宗制】シュセイ　宗門宗派の制度。
【宗徒】シュト　圖○宗教・宗派の信仰者。‖信徒。○はじめ。主として頭みになる臣。
【宗派】シュハ　宗門のわかれ。又、學藝などの流派。王十朋詩「誰分二一一一故誇傷」
【宗門】シュモン　同じ宗旨を奉ずる一派。
【宗論】シュロン　宗派の優劣是非の爭論。
【宗旨】シュキ　主要なるうつは。左傳、注「一一祭祀之器、樂器鐘鼓之屬一
【宗系】ソウケイ　本家のちすぢ。
【宗國】ソウコク　我が國に對してもとの國の稱。孟子「吾一一、魯先君莫二之行一」
【宗子】ソウシ　本家をつぐ子。詩、大雅「懷德維寧、——維城」‖嫡長子。
【宗祀】ソウシ　たふとびまつる。孝經「昔者周公郊二祀后稷一以配レ天、一一文王於明堂一以配二上帝一」漢書、兒

寛傳「一ニ一天地二薦二禮百神一」

【宗師】シウ 尊ぶべき師匠。漢書、朱浮傳「博士之官、爲二天下一一、使二孔聖之言、傳而不レ絕」

【宗周】シウ 三代の周の創業の地、天子の在す所なれば宗といふ。今の陝西省西安府。又、周の異稱。書、多方「王來レ自レ奄、至二于一一」

【宗室】シツ ○せんぞのおたまや。詩、召南「于以奠レ之、一一牖下」○一族の根本家。戰國策「周、天下之一一也」○君主の一族。後漢書、鄧皇后紀「錄二功臣一賜二一一」

【宗臣】シン 最も重き家來。漢書、蕭何曹參傳「爲二一代一一」

【宗親】シン 同母の兄弟。史、五宗世家「同レ母者爲二一一」‖同胞。

【宗社】シヤ ○宗廟と社稷と。五代史、晉家人傳「安二一一」‖廟社。○轉じて國家の義。

【宗社黨】シヤタウ 滿洲人が清朝を恢復する目的にて結びし黨派。

【宗匠】シヤウ ○大工のかしら（棟梁）。晉宏、三國名臣序贊「一一陶鈞、而羣才繕熙」‖工師。○師宗たる者（隋書、儒林傳）○圍俳諧・茶道・插花などの師。

【宗主】シユ 人の尊びて歸仰する義。晉書、羊祜傳「明德通賢、國之一一」

【宗主權】シユケン 一國が他國を支配する權利。日韓併合以前に日本が朝鮮を支配せし權の類。

【宗正寺】セイシ 唐代、皇族の屬籍を掌る役所。唐書、百官志「一一卿一人、少卿二人、掌二天子族親屬籍一」

【宗戚】シヤク みうち。一門。宋書、臧質傳「權倖之徒、慴二慓一一」‖宗族。

【宗族】ソウゾク 一家、親族、一門。周禮、春官「以二飮食之禮一親二一一兄弟一」

【宗藩】シウハン 宗主としていただく。北史「嵎夏四周始皆諸侯、及二聖德既隆一、萬國一一」

【宗昆】ソウコン 一族のかしら。相鶴經「鎗者、羽族之一一」謝靈運詩「侯伯咸一一」

【宗祧】シウテウ 遠き祖先のおたまや（左、昭四）‖宗廟。

【宗伯】シウハク 禮儀神祇の事を掌る官名、古の六卿の一。周禮「一一主禮之官」

【宗廟】ベウ ○祖先のおたまや。廟は、祖先の容貌を象徴する所以。書、太甲「社稷一一、罔レ不二祇肅一」○轉じて國家。又、社稷の義。

【宗盟】メイ 宗室にて結ぶちかひ。左傳「周之一一、異姓爲レ後」

【宗老】ラウ 同族中の尊長者。梁書、蕭琛傳「高麗每二朝謁一、呼レ琛爲二一一」

【宕】 タウ 唐

○すぐ、度を超える。蕩に通ず「跌一不羈」○いはや（洞屋）○一戸はいしや（石工）集韻「采石工謂之一戸」

【宙】 チウ 有

○そら、あめ、大空（天）「宇一」○無限の時間。淮南、齊俗「往古來今謂之一一」○國ちう、地を離れし所、空中「一返り」「一乘」

【定】 テイ ヂヤウ 徑

○さだむ、さだまる「平一」「安一」きめる（決）「改一」「決一」「確一」○易ふらず、變動せず「一論」「一義」○さだめて、きっと、必ず。史、項羽紀「陳王一死」○おく（置）○とどまる（止）○やすし（安）安んずる。曲禮「昏一而晨省」○しづまる（靜）○ただし（正）○ころ（凝）○ひたひ（額）○すき（鋤）の屬。○星の名。‖營室星。○圍あらゆる念慮を斷ち、心を靜にする修業「入一」○國さだめ（規約）

【定業】ヂヤウゴフ 圍前世よりさだまれるむくい、定まれる業報。

【定石】ヂヤウセキ 圍碁にて一定の法ある打方の石。

【定詰】ヂヤウキツ 圍役所などに始終つめきりてある。又其の人。

【定紋】ヂヤウモン 圍其の家にさだまれるもんどころ。

【定員】テイ 定まれる人數。唐書「正業一一、唯置二三百八十人一」

【定復】テイ さだまりたるあたひ「一一表」

【定格】テイ 事物のきまり。南史、齊豫章王嶷傳「明立二一一」

【定額】テイ さだまれるたか。五代史、劉審交傳「租有二一一、而天下比年無二閒田一」

【定家流】テイカリウ 鎌倉時代の歌人藤原定家のはじめたる書風。

【定期刊行】テイキカンカウ 雜誌其の他の圖書類を一定の時期に印刷刊行すること。‖定時刊行。

【定期取引】テイキトリヒキ 圍取引所にて三箇月以内を定期として履行せらるる賣買契約。

【定期預金】テイキアヅカリキン 圍銀行にて六箇月又は一年等期限を定めてあづかる金。

【定義】テイ 或る事物に關する概念の範圍を說明するもの。‖論理學說。

【定軍山】テイグンザン 陝西省河縣の東南にあり、山下に諸葛亮を葬る。山に因りて墳をつくる。

【定款】テイクワン 社團法人（會社の類）の組織及び其の業務執行上の規定。

【定見】テイケン 定まれる意見、易からざるみこみ。
【定刻】テイコク さだめたる刻限。
【定策功】テイサクコウ 天子を擁立せしいきを。策は竹簡、天子を立つる事を策に書して宗廟に告げる故にいふ。漢書、張安世傳「宣帝立、有ニ――一、拜ニ大司馬一」
【定産】テイサン 定まれる産業。宋史、食貨志「民有ニ――一、産有ニ定稅一」＝恒産。
【定日】テイジツ 豫め定めたる期日。
【定情】テイジョウ 夫婦、又男女の契りを結ぶ。曹植詩「與ニ君初一レ、結髮恩愈深」
【定準】テイジュン きまりたる標準。李白詩「風水無ニ――一」
【定處】テイショ 一定の處にをる。詩經「自レ西徂レ東、靡レ所ニ――一」
【定數】テイスウ きまりたる運命。劉峻詩「榮悴有ニ――一、天命有ニ至極一」
【定省】テイセイ 褥席を定め安んじ、又安否をかへりみ問ふ。朝夕よく父母に事ふる義。曲禮「凡爲ニ人子一之禮、冬溫而夏清、昏定而晨省」＝昏定晨省。
【定說】テイセツ 定論に同じ。
【定型】テイケイ 圖約定書。
【定鼎】テイテイ 都をさだめる。鼎は夏の禹王の九州の金を集めて鑄造せしもの、王位繼承の寶器。左、宣三「成王――ニ――于郟鄏一」＝遷都・遷鼎。
【定評】テイヒョウ さだまりたる批評、世人が一般に認めたるしなさだめ。
【定分】テイブン 自然に定まれる運命。杜甫詩「浮世有ニ――一、難銀豈可レ逃」
【定本】テイホン 誤を訂正せし書物。李淵、校定杜工部集序「得ニ御府一――一校讎、益覺ニ精密一」
【定命】テイメイ ○定まれる運命。○圖 さだまりたるいのち。
【定命論】テイメイロン 人類の意志行爲は豫め一定せられて、自ら選擇するの自由なしとする哲學說。＝定道論。
【定理】テイリ さだまりたるだうり。
【定論】テイロン 動かざる議論。不易の論。淮南子「士有ニ定之論一、女有ニ不易之行一」荀子「百姓曉然皆知ニ夫爲ニ善者一榮而取ニ實于朝一也、爲ニ不善一辱而蒙ニ刑于幽一而羞ニ――一」

【宎】

㊀やすし(安)○とどまる(止)○しづか(靜)○だまる(默)○ひそか(祕)㊁人の名。伏に通ず「――義」
【宓妃】フクヒ 伏犧氏の女、洛水に溺死し、洛水の神と爲る。司馬相如賦「若夫青琴――之徒、絕殊離俗、妖冶嫻都」

㊀ビツ ㊁フク 屋 質

六畫

【宧】イ 支

○室の東北の隅。○やしなふ(養)

【宥】イウ 宥

○ゆるす(寬)「寬ー」「赦ー」「ー免」なだむ、ゆるめる。○たすく(助)○ひきでもの、酒筵にて客に物を贈りて興を助けるもの。○音樂を以て食を勸める。＝侑。○ひろくふかし(宏深)

同訓異字 宥・赦・釋・聽・許・免等の別は赦(赤部四畫)の條を見よ。

【宥減】ユウゲン 罪を輕減する。
【宥坐之器】ユウザノキ 宥は右に通ず、坐右に置きて自ら戒とするうつは「荀、宥坐」＝欹器。
【宥赦】ユウシャ 罪をゆるす。＝宥免・赦宥・赦免。
【宥怨】ユウエン 大目に見てゆるす。王珪文「――ニ――刑獄一、懷ニ保釐意一」＝寬宥・宥免。
【宥貸】ユウタイ 罪をゆるす。魏武帝文「謂其能改、復即ー―」
【宥免】ユウメン 罪をゆるす。北史、郭祚傳「不レ問ニ輕重一皆製ー――一」＝宥恕・宥厥。

【宎】実(宀部四畫)に同じ。

【客】カク キャク 陌

○まらうど(賓)主の對「賓ー」「來ー」「弔ー」○廣く己の相手となるもの「詩ー」「碁ー」轉じて敵軍。李華、弔古戰場文「主ー相搏、山川震駭」○たびびと「旅ー」「行ー」たび「ー遊」○ゐさゝらゝ、寄食者「食ー」○戰國時代、他國より遊說に來りし辯士「說ー」史、李斯傳「請一切逐レ――」○すでに去りしことをあらはす語「ー歲」○哲學上、我が意識に對して外界の義「ー觀」
【客遊】カクユウ 他鄉に客となりてあそぶ。孟浩然詩「惜爾慷ニ其慨一、遂レ――一」
【待ニ客】タイキャク おきゃくをもてなす。史、孟嘗君傳「ーレー坐語」
【客氣】キャクキ からげんき、血氣の勇にて眞の勇にあらず(左、定八)
【客寓】カクグウ 他鄉のかりずまひ。＝寄寓・寓居・僑居。
【客遇】カクグウ 賓客の禮を以てもてなす。
【客館】カクカン やどや(左傳)＝客舍。
【客觀】カクカン 哲學上の語、自己の對象となる一切の外物。主觀の對。

【客卿】カクケイ　他國より來りて卿相の位に在るもの。史、范雎傳「拜二范雎一爲二客卿一」

【客月】カクゲツ　あとげつ（先月）

【客戸】カコ　新に附きて他より移り住みし人戸。唐書「此州若增二一一一、彼郡必減二民人一」‖客寓・寓居。

【客語】カクゴ　〇論理學の命題中にて一般概念を表はす語、例へば石炭は礦物なりの礦物といふ語の類。‖賓辭。〇文法上、他動詞の目的となる語。主語の對。

【客恨】カクコン　他國の客となり居るうらみ。杜牧詩「一一逢レ春劇、鄉愁厭レ思繁」‖客愁。

【客歲】カクサイ　こぞ、去年。‖昨年・客年。

【客作】カクサク　人に雇はれてはたらく。漢書、匡衡傳「乃與一一、而不レ求レ價」

【客棧】カクサン　旅やど。‖旅館・客店。

【客子】カクシ　たびびと。史、范雎傳「得レ無レ與二諸侯一一一俱來上乎」‖遊子。

【客死】カクシ　旅行先にて死す、異境にて死す。

【客次】カクジ　〇來客に應接する所。五代史「進奏官至二一一一通レ名」〇旅客となりて宿する所、やどや。

【客使】カクシ　外國より來れる使者。左傳「無レ憂二一一一」

【客思】カクシ　たびのおもひ。李嶠詩「廻瀾動二一一一」‖客心・旅思・客情。

【客愁】カクシウ　たびのうれへ。儲光羲詩「河州多二青草一、朝暮增二一一一」‖客恨。

【客心】カクシン　たびの心。張說、蜀道後レ期詩「一一爭二日月一、來往預期レ程」‖客思・旅情。

【客舍】カクシヤ　やどや。王維詩「一一青青柳色新」‖旅舍・旅館。

【客車】カクシヤ　〇客の乘るくるま。禮記「一一不レ入二大門一」〇鐵道にて旅客用の車。貨車の對。

【客情】カクジヤウ　たびごころ。溈方生詩「寤言賦二新詩一、聊忘二羈一一一」‖客心・旅思。

【客星犯二帝臣一】カクセイハンスイ　いやしき士が至尊をおかすに喩ふ。後漢書、逸民傳「引二嚴光一入、論二道舊故一、相對累日、因共偃臥、光以レ足加二帝腹上一、明日太史奏、——客急、帝笑曰、朕故人嚴子陵共臥耳」

【客船】カクセン　たびのふね、旅客を載せる舟。張繼詩「夜半鐘聲到二一一一」

【客體】カクタイ　法律上の語、意志又は行爲の目的物、例へば國土又は臣民は國家の一一たる類。

【客地】カクチ　旅行さきの地。張結詩「一一多逢レ酒」‖他鄉。

【客館】カクヤカタ　國客室、應接のへや。

【客店】カクテン　國やどや。‖旅館・客棧。

【屬レ客】ショクカク　屬は付なり、客に勸める。蘇軾、前赤壁賦「舉レ酒一レ、誦二明月之詩一、歌二窈窕之章一」

【客坊】カクバウ　やどや。玉海「寓二止于一一」

【客窓】カクソウ　他鄉にありて死して其の地に葬らる。唐書、褚遂良傳「遂良一二一愛州一」

【客舍】カクシヤ　客作に同じ。後漢書、公沙穆遊二太學一、無二資糧一、乃變レ服一一」

【客臘】カクラフ　除歲にて去年の十二月、臘は冬至の祭、臘にて十二月の異名とす。

【客裏】カクリ　たびにあるあひだ。杜甫詩「一一何遷次、江邊正寂寥」‖客中。

【客路】カクロ　たびのみち。陶潛詩「一一再經レ春」

【客分】カクブン　國おきゃくとして待遇せらるる身分。又、其の人。

【宦】クヮン　諫

〇つかふ（仕）つかへまつる（奉仕）「仕一」つかへ、みやづかへ。〇つかさ（官職・臣隷）「名一」「巧一」「徽一」〇去勢して内廷に仕ふる小吏「一官」「一者」‖奄人。〇まなぶ（學）

【宦遊】クヮンイウ　仕宦して他鄉に住む。史、司馬相如傳「長卿久一一」

【宦學】クヮンガク　〇上に仕ふる道を學ぶ。曲禮「一一事レ師、非レ維不レ親」〇仕宦する。

【宦官】クヮンクヮン　去勢して宮中の奥向に仕ふる小吏。後漢書、宦者傳論「中興之初、一一悉用二閹人一」閹は精氣の閉ぢたる者。

【宦寺】クヮンジ　宦官の役所。轉じて、宦官の義とす。唐書、李石傳「方二逐一一一氣盛陵二暴朝廷一」

【宦者】クヮンジヤ　宦官に同じ。

【宦情】クヮンジヤウ　出仕を思ふ情。又、役人かたぎ。晉書、阮裕傳「晉少無二一一一」

【室】シツ　質

〇いへ（家）すまひ（住居）「宮一」〇へや（部屋）るま「居一」「臥一」「寢一」堂の後ッ論、先進「未レ入レ於一」〇つま（妻）曲禮「三十曰壯、有一」「正一」「側一」〇家族「一家」〇刀のさや（鞘）「刀一」〇むろ「石一」「土一」〇はかあな（墳穴）詩、唐風「百歲之後、歸二于其一」〇星の名、はつゐ、二十八宿の一。

【營室】エイシツ　室二字竝に重に從ふ、人の重りて止まる所の義。

【築二室東坡一】チクシツトウハ　蘇軾が室を東坡に築きしをいふ。宋史、蘇軾傳「以二黃州團練副使一安置、軾與二田父野老一相二從溪山間一一一、自號二東坡居士一」

【室家】シツカ　家族。詩、周南「之子于歸、宜二其一一」

【室堂】シツダウ　すまゐ、堂は前に在り、室は後に在り。禮記「飯二枕簟一、漱二浴一一一」

【室於怒市於色】シツヲイカルニイロヲス 室内にて怒るときは、其の顔色を市人にしめす。怒をうつす義。やつあたり。怒二於室一色二於市一の倒裝。左、昭十九「諺所レ謂——者、楚之謂也」

【入レ室】イツシツ 學問技藝の蘊奥を極むるに喩ふ。論、先進「門人不レ敬二子路一子曰、由也升レ堂矣、未レ入二於室一也」に本づく。

【入レ室操レ矛】シツニイリテホコヲトル 其の人の道を以て、反りて其の人を害するをいふ。後漢書、鄭玄傳「玄字康成、時任城何休好二公羊學一、著二公羊墨守・左氏膏肓・穀梁廢疾一、玄遂作二發墨守・鍼膏肓・起廢疾一、休見而歎曰、康成入二吾室一、操二吾矛一而伐レ我乎」

【室如二懸磬一】シツノゴトシケイ 室中に一物もなきこと。磬をかくるが如し。貧窶のつきたるをいふ。縣は懸、磬は磬に通ず。左、僖二六「——、野無二青草一」

【室老】シツラウ 家老。父、國老。

【室屋】シツオク いへ、室屋。史、平準書「——爲レ廣二宮殿一」‖室第。

【宣】 セン 先

〇のぶ、しく(布)ひろめる、散ずる、通ずる、しめす(示)〇のたまふ、おほせ、みことのり(敕)〇あまねし(徧)〇めす(召)〇のべつくす(盡)書簡の末に「不一」と書くは「不盡」の義。〇あきらか、あきらかにす(昭・明)發揚する。〇一髪は頭髪白黒雜る。〇大いさ六寸の璧。‖瑄。

同訓異字 ノ宣・述・陳・布・展・舒等の訓は述(産部五畫)の條を見よ。

【宣窯】センヨウ 明の宣德間、宣窯(官營のかま)にて製する所の陶器、舞紅を以て最佳とす。

【宣演】センエン のべひろめる。何承天文「——二一道心一」

【宣洽】センカフ ひろくうるほふ。張華文「大和——、通二于圀冥一」

【宣化】センクワ 德化を下に布く。抱朴子「明哲以保レ身、——以濟レ俗」

【宣喚】センカン 君命を奉じてよぶ。晉氏宮祠「小穉嬉近曲池頭、——新臣一試二打毬一」

【宣下】センカ 〇詔を下す。後漢書、明帝紀「——二郡國一」〇圖臨時に宣旨(任官の命令)が下る。又、其の事。

【宣教】センケウ をしへをひろむ。又宗教を說きひろめる「——師」

【宣旨】センジ あまねく布き示す。左、桓二「先——日、司馬則然」

【宣告】センコク 〇あまねくつげる。左、襄二八「——二後人一無レ怠二於德一」〇裁判の言渡、判決の申し渡し。

【宣旨】センジ 〇天子の命令。又君命を傳達する。宋書、柳元景傳「——慰勞」〇圖古、任官の勅を上卿より外記に傳へて下知する。又、其の下知。

【宣示】センジ のべしめす。宣布して衆に示す。魏書、高祖紀「——二一品令一」

【宣紙】センシ 圖書畫仙紙ゼンシ

【宣草】センサウ のべあきらかにす。漢書、張安世傳「——二盛德一、以示二天下一」‖宣昭。

【宣誓】センセイ ちかひをのべ明かにする、ちかひを立てる「——式」

【宣政殿】センセイデン 唐代に四夷の朝貢する者を引見せし宮殿。韓愈、論二佛骨一表「宣政一見」

【宣召】センセウ 君命を以て臣を召し見る。宋會要「遣二宿學士院一、朝夕——、商二榷古今一」

【宣昭】センセウ ひろく世に布きて明かにす。左、隱「——二命名一、韓愈詩「聖賢相遇少、功德令——」

【宣戰】センセン 開戰の理由を天下に明示する。

【宣蘚】センセン こけの一名。述異記「菅謂二之澤愛一、又名二蕳鏡一、亦呼爲二——一」

【宣暢】センチヤウ 事理に明かにしてさとし。宣は通。詩經「——惟人、文武惟后」

【宣傳】センデン 命令を下民に傳へる。北史「——二文武號令一」

【宣廢】センハイ 上意をのべあらはす。晉書、王阮傳「——二詔旨一」‖宣揚。

【宣德】センとく 〇明の宣宗の年號、時に賢臣に任じ海内大に治まる、世に——の治と稱す。〇宣德年中に作りし陶器・銅器の名。

【宣父】センフ 孔子をいふ。唐書、禮樂志「貞觀十一年、追尊二孔子一爲二——一」‖宣尼。

【宣付】センフ 君命を以て下げわたす。付は交付。宋史「伏望——二史館一」

【宣布】センプ 廣くのべしく、あまねく布き及ぼす。周禮、小司寇「乃——二四方一」‖徧布。

【宣命】センメイ 〇みことのり。みことのりす。晉書、何曾傳「——遣レ使」〇圖神事・改元・贈位などの敕を國文にて記せしもの。

【宣揚】センヤウ のべあげる、廣く天下にあらはす。漢書、匡衡傳「材質無下以輔二相禪義一者上」

【宣冀】センキ 道を以て君主をたすける。晉書、汝南王亮傳「——之績、顯二于本朝一」

【宣爐】センロ 明の宣宗の宣德年間に鑄たる火鉢。實德爐の略。行厨集「宣爐明宣德年製者曰——」

【宴】 エン 霰 七 圭

〇さかもり(醼)さかもりする、酒食を以て饗應する「賀——」「遊——」「饗——」「酺——」「曲水——」〇たのしむ、たのしみ(樂)〇やすし、やすんず(安)くつろぎやすむ(息)易、隨卦「君子以

嬉」晦、入一息」

【宴安酖毒】エンアンドク宴安は何事も爲さずして徒に遊びたのしむをいふ。其の禍は酖毒（鴆といふ毒鳥の羽を酒にしたして飲めば人を殺す）に等し。左、閔元「――、不レ可レ懐也」

【宴会】エンカイ 樂む貌。詩、豳風「總角之宴、言笑――」

【宴閣】エンカク さかもりのむしろ「晉唐書、褚亮傳」＝宴席。

【宴歌】エンカ さかもりしてうたふ。北齊書、遊道傳「朝夕――」

【宴飲】エンイン さかもりしてねぎらふ。五代史「――盡レ歡」

【宴酣】エンカン さかもりが半になる、酣はたけなは。宋之問詩「――詩布レ澤」＝宴樂・酒酣。

【宴喜】エンキ 酒宴してたのしみよろこぶ。詩經「晉侯――」

【宴樂】エンラク 酒もりして客をもてなす。晉書、樂志「――有レ樂、所二以教一レ賓」

【宴居】エンキョ 閑暇無事の時。黃庭堅詩「滿眼雲山樂二――一」

【宴曲】エンキョク 圖 鎌倉時代に、宴席などにて謡ひしもの、催馬樂、朗詠などより出づ。

【宴會】エンカイ さかもり。世說「數――以悅二衆心一」

【宴見】エンケン 宴は安なり、帝王のおひまの時にまみゆる。漢書、京房傳「房嘗一一」

【宴娯】エンゴ さかもりし、又音曲歌舞などしてたのしむ。唐書「夜――、盡レ歡乃罷」朱熹文「起居飲食、一一談笑」＝宴樂・燕娯。

【宴語】エンゴ さかもりしてたのしく語る。又、うちとけてはなす。宴一に燕また讌に作る。國語「飲酒一一相說也」沈約、郊居賦「或列レ席而賦レ詩、或班レ觴而一一」

【宴集】エンシュウ さかもりして集まる。晉書、杜預傳「因二一一一、醉臥二牀中一」

【宴席】エンセキ さかもりの席、酒宴の席。

【宴餞】エンセン さかもりして見送る。送別會を開く。梁簡文帝詩「一一臨二華池一」＝飲餞。

【宴息】エンソク 打ちくつろぎ休む。宇解參看。＝安息。

【宴殿】エンデン 酒宴をひらく爲めのごてん。宋史「西有二承慶殿一、一一也」

【宴樂】エンラク さかもりしてたのしむ。易經「君子以飲食一一」

【宴閑】エンカン さかもりがたけなは。謝世南賦「嘉客既醉、高宴將レ闌」＝宴酣。

【家】カ ケ 麻

〇いへ、すまひ、すみか、住居「一屋」「一宅」「山一」「酒一」「富一」「貧一」〇やから（一族）〇をっと（夫）孟、滕文公「女子生而願二爲一之有一」〇己の所有物、妻子財產等。〇大夫の領地。又は大夫。左、襄二六「大夫皆富、政將レ在一一」〇學問の流派。又は其の學者、著作者「法一」「道一」「墨一」「諸子百一」〇いへす、住居する。〇姑と同音義、大一タイは大姑に同じく女の尊稱「曹大一」

【家鴨】アヒル。埤雅「野鴨爲レ鳧、一一爲レ鶩」

【家業】イへのさかえ。韓愈文「祿仕而還、以爲二一一一」

【家誡】カイ 家のいましめ。唐書「乃集二古今一一、爲二牌風一」

【家格】イへがら（家柄）

【家學】其の家に代代つたはれる學問。北史「江式少專二一一一」

【家規】家憲に同じ。韓愈詩「諸郎皆秀朗、幾能守二一一一」

【家畜】いへに飼ふ動物。今は誤りて畜をチクと讀む（畜の音チクは儲蓄の義）大學「伐冰之家、不レ畜二牛羊一」

【家給】月ごとに足る。漢書、貢禹傳「天下一一人足、頗有二羨餘一」

【家給人足】イへイへフソクヒトビトタル 給も足、家富み人稠く、世運隆昌なる義、前條參看。

【家禽】いへに飼ふ鳥類。梁書、何胤傳「有二異鳥一、如レ鶴紅色、集二講堂一、馴狎如二一一一」

【家郷】ふるさと。李中詩「夜來魂夢到二一一一」＝故郷。

【家居】仕官せずして家に居る。史記「李廣、一一數歲」

【家具】イへのだうぐ。晉書、王遜傳「初遜家貧求レ試、宛陵令頗受二贈遺一、而修二一一一」孟郊詩「借レ車載二一一一」＝家什・家財。

【家君】ちちの敬稱。國、個同「一一發レ憲布レ令」＝父君。

【家訓】祖先ののこせし一家のをしへ「顏氏一一」後漢書、邊讓傳「聲飢鳳孤、不レ盡二一一一」＝庭訓・家誡。

【家兄】已のあに。晉書、謝幼度傳「下官不レ堪二其憂一、一一不レ改二其樂一」

【家計】一家のくらしむき。一家の生計。岑參詩「俸錢儘供レ客、一一常清貧」

【拜二家慶一】ハイスイ子が親に謁するをいふ。孟浩然詩「明朝――、須レ著二老萊衣一」

【家業】一家のなりはひ。漢書、楊王孫傳「楊王孫者、孝武時人也、學二黃老之術一、一一千金」

【家眷】家族に同じ。

【家意】一家のおきて。＝家規。

【家公】已の父の敬稱。列、黃帝「一一執レ席」＝家君・家嚴。〇祖父の敬稱。後漢書、注「子孫稱二其祖父一曰二一一一」

【家國】カコク 〇家と國と、又、國家。〇ふるさと。‖故里・故郷・故國。
【家財】カザイ 家のたから。‖家産。
【家祭】カサイ 其の家の先祖祭。陸游、示レ兒詩「王師北定二中原一日、一無レ忘二告乃翁一」
【家相】カサウ 國家の構造・方角・位置などを考へて吉凶の運勢を判斷する。
【家藏】カザウ いへにをさめ置く。又、其の物。唐書、于休烈傳「章述以二其一一國史百三十篇一上獻」
【家山】カザン ふるさと。‖故山・故郷。
【家山癌】カサンガン やまのいも。‖薯蕷・玉
【家相】カサウ 國家の構造・方角・位置などを考へて吉凶の運勢を判斷する。
【家藏】カザウ いへにをさめ置く。又、其の物。唐書、于休烈傳「章述以二其一一國史百三十篇一上獻」
【家山】カザン ふるさと。‖故山・故郷。
【家山癌】カサンガン やまのいも。‖薯蕷・玉
公掌。
【家産】カサン いへのしんだい。晉書、和嶠「一一豐富、擬二于王者一」
【家史】カシ 一家の記錄。隋書、許善心傳「一一舊書在、後焚滅、今止有二六十八卷一」‖家乘。
【家私】カシ 〇一身一家のわたくしごと。王築詩「內不レ顧二一一一」‖家事。〇家財に同じ。漢書、「一一錢至二數千萬一」
【家事】カジ 一家の私事。左傳「夫子之一一治」
【家貨】カカ 家のたから。唐書「臣一一、不レ滿二千錢一」
【家嗣】カシ よつぎ。史記「卒傳二一一、或紹二嘉倫一」
【家資】カシ 身代ダイ一家の財産。一一分散は法律上債務を果さしむる爲めに裁判所が下す宣告、身代限。
【家慈】カジ 己のはは。己の父を家嚴といふの對。
【家什】カジフ 家の常用の什器。其の數一にあらず、故に什といふ（史記、注）‖家具。
【家集】カシフ 其の家の歌のみを集めたるもの。紀貫之集の類。‖別集。
【家人】カジン 〇いへの内の者。史記「惠帝與二齊王一燕飲、元禮如二一一一」〇易の卦の名。易經「一一利二女貞一」〇奴僕をいふ。漢書、班固傳「此一一言耳」〇ケニン 國いへのこ、諸代のけらい。
【家信】カシン 國元よりのおとづれ。北史、劉璠傳「一日畢身遠痛、尋而一一至云、其母病」‖家書・郷信。
【家常茶飯】カジヤウサハン 次條に同じ（五燈會元）
【家常飯】カジヤウハン 有り合せの御飯の義、轉じて普通のなんでもなき事に喩ふ。獨醒雜誌「一一好喫」
【家常話】カジヤウワ 國普通の珍らしからざる話。
【家主】カシュ 〇一家の長。墨子「一一猶知レ愛二其家一、而不レ知レ愛二人之家一」〇やぬし、所有家屋を人に貸して家賃をとる者。
【家從】カジュウ 國皇族、又準族の家臣の名。家扶の次位。
【家衆】カシュウ 家族に同じ。左、襄四「舜猶不レ悛、將レ歸レ自レ田、一一殺而亨レ之、以食二其子一」
【家塾】カジュク 〇周代、二十五家を閭（里）となし、同じく一巷に居る、閭の門側の堂を塾といひ、里中の子弟を教育する所とす。禮、學記「古之教者、家有レ塾」〇國個人の家に設けたる學舍。
【家書】カショ 國元の家よりのおとづれ。杜甫詩「烽火連二三月一、一抵二萬金一」
【家緒】カショ 家の事業。宋史、趙安仁傳「一一綿貲、安仁屬以二金帛一、濟レ之」
【家乘】カジョウ いへの記錄。老學庵筆記「黃山谷有二日記一謂二之一一一」‖家史。
【家數】カスウ 學藝などの一家を成せる人。顯、仙同「天下爲二一一一也甚多」
【家政】カセイ 一家のくらしむき。又、とりしまり。韓無可詩「唯有レ傳二一一家風承發揮」
【家政學】カセイガク 一家の治め方を研究する學問、家事に關する學問。
【家聲】カセイ いへのほまれ。司馬遷、報二任安一書「李陵既生降、類二其一一一」‖家名。
【家祖】カソ 己の祖父。顏氏家訓「潘尼稱二其祖一曰二一一一」
【家疏】カソ てづくりの菜。劉長卿詩「留レ客餉二一一一」
【家族】カゾク やから、一族。張籍詩「文物繼續成二三代一一一輝華在二一身一」
【家屋】カオク 家内の人人。史、盧綰傳「燕王詐論二他人一、以脫二張勝一一一」
【家尊】カソン ちちの敬稱。晉書「謝安問二王獻之一曰、君何二如一一一」
【家大人】カダイジン 己の父の敬稱（與書簡要）‖家君・家嚴。
【家道】カダウ 〇家人のふむべき道。易、家人「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而一一正」〇家のくらしむき。南史、徐孝克傳「陳亡隨レ例入二長安一、一一墜立」
【家宅】カタク いへやしき、すまひ。一一侵入シンニフは故なくして他人の住宅に侵入する義。
【家長】カチヤウ 一家のかしら。一家の主人。墨、天志「盡レ家得二罪於一一一」
【家長權】カチヤウケン 戶主の權利。
【家釀】カジヤウ 自家にて造りたる酒。晉書「見二何次道飲一、使二人欲レ傾二一一一」
【家中】カチュウ 國晉時、大小名の家來。
【家庭】カテイ いへ、一家のうち。王僧孺文「事編二一一一、辭著二同族一」‖家門。
【家第】カテイ すまひ、いへ（唐書、孫偓傳）‖家邸。
【家傳】カデン 〇其の家に代代つたはる。陳書「一一賜書數千卷」〇其の家の記錄（歐陽修、王彥章畫像記）‖家乘。
【家僮】カドウ しもべ、下男下女。史、貨殖傳「卓王孫一一八百人」
【家嗇】カトク 〇長子の稱。一家を監督す

る我。史、趙世家「家有二長子一曰二一一」〇國家のあつめ、父の後を續ぐを一一相續といふ。

【家內】カナイ　〇いへのうち。又、家族。＝家人。〇國己の妻、にようばう。

【家寶】カホウ　家に傳はりたるたから。

【家法】カハフ　〇其の家の掟。清波雜誌「祖宗一一」＝家風・家規・家約。〇家傳の祕法。

【家扶】ソウフ　國〇皇族の會計を取扱ふ官吏。〇華族の家事を取扱ふ者。家令の次位。

【家鳧】カフ　あひる。＝舒鳧。

【家風】カフウ　いへのならはし。庾信、賦序「潘岳之文彩、始遒二一一一」

【家祿】カロク　いへのしあはせ。晉書「上望二積二陰氣一、下資二保二寧一一一」

【家廟】カビョウ　わが先祖のたまや。南史、張緒傳「緒吐納風流、見者嘆然、如レ在二一一一」＝祖廟。

【家母】カボ　はは。顏氏家訓「陳思王、稱二其母一曰二一一一」＝慈母・家慈。

【家務】カム　いへのつとめ。南史「張率嗜レ酒、不レ事二一一一」

【家門】カモン　〇大夫の家。左傳「政在二一一、民無レ所レ依」〇家族をいふ。南史「政可三南行以存二一一一耳」＝家庭。

【家老】カロウ　〇大夫などの家臣のをさ。晉語「吾子之一一」＝家宰。〇一族中の長老。淮南子「漱レ盃而食、洗レ爵而飲、可二以養二一一一、不レ可三以享二三軍一」

【家累】カルイ　妻子奴婢をいふ。晉書、戴洋傳「欲レ迎二其一一一」＝係累。

【家令】カレイ　〇一家をとりしまる者（史、高祖紀）〇皇族又華族の家務を司る者。

【家緣】カエン　いへにつたはれるふち。後漢書、劉般傳贊「居巢好レ讓、遂承二一一一」＝世緣。

【傾レ家】ケイカ　家財を悉く出す。後漢書「一レ一販二鄧九族一」

【擁レ家】ヨウカ　一家族を伴ひて行く。北史、盧光傳「大統六年、一レ一西入、除二永相府記室參軍一」

【家柄】カヘイ　國〇家の地位。＝家格。〇貴き家がら。＝名家・門閥。

【家徒四壁立】カトシヘキリツ　徒は空、空しく四壁の立つのみにして、家中に一物もなし、甚だしき貧家の形容。史、司馬相如傳「文君夜亡奔、相如乃與馳歸、家居徒四壁立」

【家路】カロ　國己の家の方へ還るみち。

【家貧則思二良妻一】カヒンシテハリヤウサイヲオモフ　家貧しくなりて、はじめて、家をよく治むる妻を思ふ。史、魏世家「一一、國亂則思二良將一」

【家貨】カカ　國いへの貨しちん、たなちん。＝房錢・家稅。

【害】ガイ　㊀ガイ　㊁カツ　泰　曷

㊀そこなふ（損）利の對「利一」「毒一」「損一」「患一」きずつく（傷・殘斬）〇さまたげる（妨）「妨一」〇ねたむ（妬）いむ（忌）「忌一」〇わざはひ（禍）うれひ（患）さはり（障）〇要一は險要の地。㊁なんぞ、なにすれぞ、いづくんぞ、いつか。＝曷。疑問の意をあらはす反語。孟、梁惠王「時日一喪」〇いづれか。（何）詩、周南「一濟一否」

【害惡】ガイアク　他をそこなふ惡事。＝惡虐。

【害意】ガイイ　あしきこころ。

【賈害】カイガイ　自ら禍を求める。賈は買（左、桓十）

【害苦】ガイク　わざはひ。潘岳文「一一鋤消」

【害虐】ガイギャク　そこなひしへたぐ。書、武成「暴二殄天物一、一一烝民」

【害心】ガイシン　人又、物をそこなふ心。法苑珠林「猶如二獵師見二後鹿起一、挾有二一一一」

【害蟲】ガイチュウ　穀物果物等をそこなふ蟲。蝗蟲・浮塵子・白蟻など「一一驅除」

【害物】ガイブツ　善き物をそこなふ。惡事。＝害惡。

【宮】キュウ　東　ク

〇みや、いへ（室）古は貴賤の別なく住居をいふ。〇秦の始皇以後專ら皇家の稱とす「一城」「一禁」「離一」「帝一」〇皇妃・皇女等の稱。〇かき（籬・垣）繞・儲行「儒有二一畝之一一」〇たまや（廟屋）〇おく（寢屋）〇五音の中聲「一・商・角・徵・羽」〇生殖機能を去る刑「一刑」＝腐刑。〇めぐる（環）〇國みや。神殿「神一」又皇族の家の稱「有栖川一」

【宮人】キュウジン　に從ひ呂に從ふ、呂は容堆骨卽ち人の意。

【宮娃】キュウアイ　御殿女中の美人。王維詩「座客皆貂錦、一一綺帳服」

【宮闈】キュウイ　宮中の奥向。後漢書、皇后紀「正位一一」晉書「陰教治二于一一」

【宮羽】キュウウ　宮聲と羽聲と。禮記「右二徵角一、左二一一」

【宮掖】キュウエキ　宮庭に同じ。掖は宮門の左右の小門。後漢書、竇憲傳「恃二一一勢一」＝禁掖・旋掖。

【宮苑】キュウエン　宮城内のその。唐書「京都諸一一、總監各一人」

【宮娥】キュウガ　宮中奉仕の美女。隋遺錄「命二一一數千人、昇樓迎侍」

【宮角】キュウカク　宮は五音の中央にあて、角は東方にあてたる聲。

【宮闕】キュウケツ　後宮の小門。又宮中の奥向。張說、上宮昭容集序「決二事一一

一」＝宮闕。
【宮臣】キュウシン　宮中の事を掌る官。唐書、高麗紀「領三晉陽一一」
【宮禁】キュウキン　帝王のごてん。宋書、殷景仁傳「密二謀一一」＝禁闕・宮城。
【宮城】キュウジョウ　宮城内のいけす。晉書、魏明帝不蚕、謀二于一一」
【宮刑】キュウケイ　宮罪に同じ。司馬遷、報二任安一書「諸莫レ大二於一一」＝宮辟・宮閉。
【宮闕】キュウケツ　闕は王宮の正門の傍に設けたる二つの物見楼。轉じて宮城の義とす。易林「一一堅固、君安二其居一」
【宮衢】キュウク　宮中を往來する道。轉じて宮中の裏向。唐書「一一事無レ不レ聽」
【宮罪】キュウザイ　男子は其の勢を去り女子は幽閉するしおき。周禮、秋官「一一五百」＝宮刑・宮辟・腐刑。
【宮詞】キュウシ　宮中の瑣事を詠ずる詩。唐の王建に始まる。
【宮室】キュウシツ　いへ、すまひ。易、繋辭「上古穴居而野處、後世聖人易レ之以二一一」
【宮人】キュウジン　宮中の奥向に仕ふる婦女。淮南子「一一得レ戟、則以刈レ葵」＝宮女。
【宮車晏駕】キュウシャガ　天子の崩御をいふ。晏は晩ソの義。臣下の情、天子の崩御をあきらめる能はず、何故に今日はおでましが晩きかと思ふ意。史、范雎傳「宮車一日晏駕」
【宮商】キュウショウ　五音の中の宮と商との二音。楊方詩「一一靡相和」
【宮商角徴羽】キュウショウカクチウ　音樂の五音。禮、樂記「宮爲レ君、商爲レ臣、角爲レ民、徴爲レ事、羽爲レ物」
【宮城】キュウジョウ　天子のおます所。唐書、地理志「西接二一一之東北隅一」＝帝城・皇城・王宮・宮禁。
【宮簷】キュウエン　〇家のまはりのかき。論、子張「子貢曰、譬二之一一、（中略）夫子之牆數仞、不下得二其門一而入上、不レ見二宗廟之美、百官之富一」〇轉じて師門の義とす。劉鉄賦「屹一一之數仞、接二道義之通衢一」
【宮樹】キュウジュ　宮中に在る樹木。韋應物詩「禁籞春雨細、一一野煙和」
【宮省】キュウセイ　宮中の役所。宮内省。後漢書、顯烈梁皇后紀「一一官屬」
【宮闈】キュウイ　王宮の門。又、王宮の奥向。唐書、陳貴傳「勉生二京師一、益擇二一一」
【宮池】キュウチ　宮中のいけ。淮南子「一一溢則涸、旱則涸」＝宮沼。
【宮徴】キュウチ　五音の中の宮と徴との二音。杜甫詩「金管逐二一一」
【宮中】キュウチュウ　ごしょ。＝禁中、宮掖・大内。
【宮女】キュウジョ　宮中に奉仕する女子。杜甫詩「一一開レ函近二御筵一」＝宮娃・宮娥。
【宮廷】キュウテイ　次條に同じ。史、始皇紀「咸陽人多、先王之一一小」
【宮庭】キュウテイ　帝王の居所。宋史、邢昺傳「翻二其妻一至二一一一、賜以二冠帔一」＝宮城・宮廷。
【宮殿】キュウデン　宮城に同じ。漢書、百官志「郎中令掌レ宮一一掖門戸一」
【宮闕】キュウケツ　宮罪に同じ。書、呂刑「一一之屬三百」
【宮牖】キュウユウ　おたまや。儀禮「築二一一一、歳時使二之祀一焉」
【宮辟】キュウヘキ　宮罪に同じ。書、呂刑「一一疑赦」
【宮裏】キュウリ　宮殿のうち。李白詩「曾照二吳王一一人」＝宮中。
【宮司】グウジ　圖伊勢神宮の神官の職名の一、祭主に次ぐもの。又、官・國幣社の神官の長。
【宮内省】クナイショウ　圖政府の最高機關たる十省の一、帝室に關する一切の事務を掌り、兼ねて華族を監督する官廳。
【宮居】ミヤイ　圖〇神社〇宮城。
【宮家】ミヤケ　圖皇族の御いへがら。
【宮仕】ミヤヅカヘ　圖女官侍女などになりて宮中に奉仕する義。
【宮參】ミヤマイリ　圖初めて生れたる兒が産土神の社に參る儀式。男兒は三十一日目、女兒は三十三日目に行ふ。

【宰】サイ　隔

〇つかさどる（司・主）をさむ（治）きりもりをする「主一」〇つかさ（官吏・職員）〇大名の家臣の長（家老）〇邑里の長「邑一」「里一」〇ほふる（屠殺）にる（烹）肉を料理する「烹一」又、其の人「庖一」「膳一」〇つかさ（冢）「一木」

【宰衡】サイコウ　周公は太宰、伊尹は阿衡となりて天子をたすけて政を爲す。よりて宰相の称號とす。漢書、平帝紀「加二安漢公號一曰二一一」
【宰制】サイセイ　主となりて事を分割處置する。漢書、敘傳「二一諸夏一命立二僞王一」＝宰御。
【宰相】サイショウ　天子をたすけて政治を行ふ最高官、天子を補相し、天下を宰制する義。事物紀原「昔周公位二冢宰一、正百官一以相二成王一、故有二一一之稱一、其事自二秦漢一始」＝宰輔・宰相器。
【宰相器】サイショウキ　宰相たるの器識。漢書、何武傳「如二武有一一一」
【宰制】サイセイ　宰制に同じ。史記「一二萬物一、役二使羣動一」
【宰府】サイフ　〇宰相の役所。後漢書「丙吉、以二年老一優游不レ案二吏職一、於レ是一一習爲二常俗一」＝相府。〇圖九州の太宰府の略稱。
【宰輔】サイホ　宰相輔佐の人をいふ。後漢書、二十八將傳論「一一五世、莫レ非二公侯一」＝宰相・元輔。
【宰木】サイボク　墓所にうゑたる木。公羊傳

「宰上之木拱矣」‖墓木・宰樹。
【宰予】ヨ 孔子の門人、魯の人、字は子我、晉に書經す、孔子朽木糞土を以て之を誨む、齊に仕へて臨菑の大夫となる。‖宰我。
【宰領】リヤウ 〇とりしまる、とりしまり。〇圖貨物を運送する時、保護する爲めに隨ひ行く人。

【宸】シン 圓

〇のき(簷・屋宇)〇奥深き室。〇後世、帝王の居處の專稱「禁ー」「槐ー」「紫ー」「ー扆」轉じて天子の事に冠する語「ー襟」「ー慮」〇おほぞら(虚空)
【宸居】キヨ 天子の御座所の後に立てる衝立(ついたて)轉じて御所(皇居)、王源王濬傳論」
【宸遊】ユウ 天子の遊覽。王維詩「不ニ是ー一玩ニ物華一」
【宸襟】キン 帝王の御心配。
【宸極】キヨク 宮城をいふ。極は正門の左右の門。馬懐素詩「維情恒ニー一」‖仙掖・禁掖。
【宸翰】カン 天子の御筆。宋史、宗室傳「求ニ得上皇之ー一、懐レ之以歸」‖宸筆。
【宸聲】セイ 天子の聲誡。天子の御めがね。王僧辨文「百司拓牧、祈ニ仰ー一」‖聖聲。
【宸綸】リン 天子のみこころ。綸はえり、轉じて胸、又心。何遜詩「ー一動ニ時璟一」‖宸襄・宸慮。
【宸居】キヨ 天子の居所。唐太宗詩「仍ニ故貫一式表ニー一」
【宸極】キヨク 帝王の居所。又、其の位。傅咸、感別賦「瞻ニー一之眇眇ニ寤ニ吾子之徽榮一」
【宸闕】ケツ 宮城。祭ニ峯文「拜ニ表ー一、正ニ位綸廷一」‖天闕・宮闕。
【宸眷】ケン 天子のみめぐみ、眷は思顧。李嶠詩「ー一媚ニ樵漁一」
【宸藻】サウ 天子の御文章又詩賦。沈佺期詩「ー一光盈尺、唐歌樂二歳豊一」‖宸翰・宸章。
【宸算】サン 天子のはかりごとの唐書「春ニ陛下ー一」
【宸旨】シ 天子のおぼしめし。‖聖旨。
【宸聽】チヨウ 天子のおぼしめし。徐元瑞詩「寂寞洞曲靈、猶是薦ニー一」
【宸斷】ダン 天子のおさばき、天裁。金史、李石傳「在ニ陛下ー一耳」
【宸裏】リ 帝王の御心。韋安石詩「梁園關二勝境一、軒駕動ニー一」‖聖裏・宸襟・宸慮。
【宸念】ネン 天子のみこころ。劉禪之詩「徽優ー一遠、禮備國姻榮」‖軫念。
【宸筆】ヒツ 天子の御筆。黄庭堅「徽宗出ニ祖宗御書、及ー一所レ摸名畫一」‖御筆。
【宸謨】ボ 天子の御はかりごと。宋史、呂誨傳「ー一已定、當」使ニ天下共知一」‖宸算・宸謀。
【宸奥】オウ 天子の召し給ふ奥。王維詩「翊贊本ニー一」‖仙奥。
【宸慮】リヨ 天子のみこころ。宋史「願罷ニー一、以折ニ邪謀一」‖軫慮・叡慮・宸衷。

【宬】セイ 庚

物を容るる室、書を藏する室。字彙補「明大内有ニ皇史一、貯ニ列聖御筆實録一秘典」

【宵】セウ 蕭

〇よる、よひ(夜)「良ー」「春ー」「終ー」「通ー」〇ちひさし(小)〇うすぎぬ、絹に通ず。
【宵衣】イ 〇くろきぬの祭服。儀禮、士昏禮「纚笄ー一」‖玄絹衣。〇天未だ明けずして衣を服する。次條參看。
【宵衣旰食】カンショク 夜の未だ明けざる中に起きて衣をつけ、日傾きて後膳につく。天子の政に勤勉したまふをいふ。唐書、劉貫傳「任レ賢傷レ厲、ー一、追ニ三五之遐軌一庶紹ニ祖宗之鴻緒一」
【宵燈】トウ ほたるの異名。淮南子「蟹ニ宵燈一腐化類ニー一」
【宵旰】カン 〇よる行く。詩、豳風「嘯歌ー一〇螢火の異名。‖宵燭。
【宵旰】カン 宵衣旰食の略。唐書、劉貫傳「無ニー一之憂一」
【宵會】クワイ 夜中のあつまり。李端詩「主第辭ニ高飲一、石家赴ニー一」‖夜會。
【宵晨】シン よると、あさと。陶潛詩「淹習忘ニー一」
【宵人】ジン 小人に同じ「莊、列禦寇」
【宵小】セウ 盜盜賊。
【宵旅】リヨ よるのねどこ。王安石詩「ー一連ニ衾幬一」
【宵燭】ショク 螢の異名。南史「賓ニー一之末光一」
【宵越】ヱツ 圓昨日のもちこし、一夜を經る「ー一の金を使はず」
【宵明星】ミヤウジヤウ 圓金星の夕方西方にあらはるるもの。明けの明星即ち啓明の對。ゆふづつ。‖長庚・太白星。
【宵闌】ラン 圓陰暦十六日以後の夜の稱、ゆふやみ。

【容】ヨウ ユウ 冬

〇いる、物を器に入れる。うく(受)つつむ(包)「包ー」もる(盛)ゆるす(宥)〇用ふる、きく(聽)〇かたち、すがた「ー貌」「丰ー」「冶ー」「ー姿」「威ー」「禮ー」「儀ー」「顔ー」〇ありさま「形ー」〇かたちづくる。化粧

する。史、魯仲連傳「女爲說己者ー」〇やすし(安)ゆったりとする「從ー」〇まねする。かたどる(模)〇ーは飛び揚る貌。〇矢を防ぐ小曲屏風の如きもの。〇べし(可・須)あるべき筈である。

同訓異字 容・入・納・内の別は入(部首二畫)の條を見よ。容・可・當・合等の別は可(口部二畫)の條を見よ。

【容易】ヨウイ　たやすし。漢書、東方朔傳「誠何ー」

【容認】ヨウニン　いれかばふ、包庇する義。書、旅獒、疏「今之律令、大功已上得ニ相ー」

【容悦】ヨウエツ　君の意を迎へてこびへつらふ。孟、盡心「爲ニー者也」

【容假】ヨウカ　よく人をいれる。假はゆるすの意。書「嚴詰姦宄之、無ニ所ニー」

【容喙】ヨウカイ　さしでぐち、くちばしをいれる。

【容顏】ヨウガン　かほかたち。韓愈詩「豈有ニ酒直開ニー一」

【容儀】ヨウギ　儀あるやうす。漢書、馮奉世傳「爲ニ人矜嚴、好整ニー一」

【容器】ヨウキ　いれもの。物を入れる器。

【容華】ヨウカ　〇美くしきかほかたち。容色華麗。曹植詩「南國有ニ佳人ー一若ニ桃李」〇漢の女官の名。史、外戚世家「ー一秩比ニ二千石ー」

【容光】ヨウクワウ　〇すきまに入る光。孟、盡心「日月有レ光、ー一必照」〇うつくしき風采。徐幹詩「端坐而無レ爲、多ニ衆君ー一ニ」‖風采

【容止】ヨウシ　かたちづくり。たちふるまひ。孝經「ー一可レ觀、進退可レ度」

【容姿】ヨウシ　なりかたち、すがた。‖姿容。

【容臭】ヨウシウ　にほひぶくろ、裝飾の爲めに帶びるもの。禮、内則「皆佩ニー一」

【容膝】ヨウシツ　わづかに膝をいるるばかりの小室。韓詩外傳「北郭先生妻曰、今結レ駟列レ騎、所レ安不レ過レー一」

【容車】ヨウシヤ　かざりたるくるま。後漢書、祭遵傳、注「ー一、容飾之車」

【容赦】ヨウシヤ　罪をゆるす。陳書、酷吏傳「無レ所ニー一」

【容狀】ヨウジヤウ　やうす。宋史、陳與義傳「義ー一嚴恪、不ニ妄言笑ニ」‖容貌。

【容受】ヨウジユ　きいれる。荀悦文「成帝博ニ識古今、ー一ニ直言」

【容恕】ヨウジヨ　ゆるす。後漢書「相ー一」

【容色】ヨウシヨク　みめかたち。金史「立レ朝峻整、ー一莊重」

【容逸】ヨウイツ　放肆舒緩の貌。詩經「容兮遂兮、垂ニ帶悸兮」

【容成侯】ヨウセイコウ　親の異名。唐の司空圖に——金炯傳あり。

【容積】ヨウセキ　物體のかさ。‖容量。

【容接】ヨウセツ　近づけて交際する、ちかづきにする。後漢書、李膺傳「士有ヲ被ニ其ー一者、名爲ニ登龍門ー」

【容態】ヨウタイ　〇やうす、なりかたち。蘇軾文「天眞雅麗、ー一溫柔」〇病氣のやうす。‖容體。

【容體】ヨウタイ　〇すがたかたち。禮記「禮義之始、在ヲ於正ニー一齊ニ顏色ー」‖容態。

【容匿】ヨウトク　我が家に引き入れてかくす、かくまふ「北史、李義興傳」‖容隱。

【容納】ヨウナフ　ゆるして人をいれる。寬弘にして能く物を容るる義。晉書「性深阻、有レ若ニ城府ー一而能寬緯以ー一レ」‖容受。

【容忍】ヨウニン　がまんしてゆるす。寬容忍耐の義。後漢書、公孫瓚傳「瓚文武才力足レ恃、固宜ニー一ニ」

【容認】ヨウニン　ゆるしみとめる。‖認容。

【容貌】ヨウバウ　かほかたち。論、泰伯「動ニー一、斯遠ニ暴慢ー矣」

【容範】ヨウハン　其の人の容姿と儀範と。沈約詩「徽猷今已合、ー一尚昭昭」‖容表。

【容裕】ヨウユウ　心がひろくゆるやか。北史「寬仁ー一」

【容與】ヨウヨ　ゆったりとせる貌。閒暇自得の貌。徐幹の賦。楚辭「農夫輟レ耕而ー一兮、恐ニ田野之蕪穢ー一」史、司馬相如傳「翔ー一」

【容容】ヨウヨウ　〇苟且にして容れられんことを求むる貌。後漢書、左雄傳「白壁不レ可レ爲、ー一多ニ後福ー」〇雲の出る貌。楚辭「雲ー一兮而在レ下」〇飛び揚る貌。漢郊祀歌「神之行、旌ー一」

【容量】ヨウリヤウ　物をうけ入れるかさ。

八畫

【寅】 イン 呉 支 イ

〇とら、十二支の第三位。爾雅「太歲在ー一、曰攝提格」〇時に配して午前四時。〇方位に配して東北の間。〇つつしむ(敬)書、堯典「ー一賓出日」‖賓。〇同ー一は同僚の義。書、皐陶謨「同ー一協恭、和衷哉」の語に本づく。

【寅畏】インヰ　つつしみおそる。書經「嚴恭ー一、天命自度」

【寅月】インゲツ　正月の異名。

【寅虎】インコ　つつしむ。虎は畏敬。文心雕龍「ー一於神祇」

【寄】 キ 眞 俗字

〇よす、たのむ、ゆだぬ(委託)論、泰伯「可以ー一百里之命」「ー一託」「委ー一」〇まかす(任)〇むける、かたむく(傾)つくす。〇やどる、やどす(寓居)とまる(止)〇やる、おくる(遣)物を

以て人に付す「ー書」「ー語」よる(依)たよる。〇ちかづく(近)せまる(迫)〇やどり、やど(寓)圖〇よる「一合」〇よせる、加へる「ーせ算」〇よる、過訪。〇よせ「ーせ來る波」

同訓熟語 お寄・憑・凭・縋・擦・倚・依・嘉〇寄は寄託・寄寓と用ふ、たよりてつく義。〇憑はもたれかかるなり。書經「憑二玉几一」〇凭は憑に同じ。〇縋はたのみとして、よるなり。大學序「縋二此篇之存一」〇據は物のより所とするなり。後漢書、馬援傳「據レ鞍顧眄」〇倚は憑倚なり、すがりよるなり。左傳「杖レ信以待レ晉不二亦可一乎」〇倚は物にもたれつくなり、倚レ門、倚レ樓の類。〇依は倚に近し、よりそひ離れぬなり。柳文「草木之生也、依二於土一」〇蔭は身の依る所をいふ、たよりて力にするなり。

【寄食】人の妻を姦するをいふ、親は牡猪、姦夫を牡豬に比す。史、始皇紀「夫爲二一一殺レ之無レ罪」

【寄航】船舶が到著港に至るまでの間の港に立寄る。

【寄稿】寄せ贈りたる草稿。草稿を寄せ贈る。

【寄客】かかりうど。抱朴子「爵位勢利、譬如二一一一」〇食客。

【寄居】かりのやどり。曹植詩「人生如二一一一」〇寓居。

【寄居蟲】やどかり。蟹の一種、他の貝殼中に住む故の名。〇蝲蛄。

【寄寓】やどる。又、かりずまひ。國語「司里不レ授レ館、國無二一一一」〇僑居。

【寄情】心におもふ所を物によせ託する。魏氏春秋「阮籍作二蘇門先生論一以寄二所懷一」〇寄情。

【寄歎】まことの心をよせ致す。陸機、思親賦「指二南雲一以一レ一、望二歸風一而效レ誠」

【寄言】ことばをよせる。ことづてする。劉廷芝詩「一レ一金盛紅顏子」〇寄語・傳語。

【寄語】ことづて。鮑照詩「一一後生子」〇寄言。

【寄公】國を失ひて身を他國に寄する君主。儀禮、注「一一者何也、失レ地之君也」〇寓公。

【寄進】圖社寺などに金品をさしあげる。〇奉納。

【寄宿】人の家にかりずまひする。後漢書、郭躬傳「一二鄉亭一」〇寄寓。

【寄書】〇手紙をやる。〇新聞雜誌等に掲載する爲めに寄贈する文。

【寄食】ゐさふらふ。史、淮陰侯傳「常數從二其下鄉南昌亭長一一一」〇寓食。

【寄生】獨立する能はざる動植物が、他の動植物にやどりて生長する。詩經、疏「蔦一一也」

【寄生蟲】他の生物にやどりて生を保つ動物。蛔蟲・條蟲・蚤虱など。

【寄生囊】命をやどすふくろ、即ち人の身。清異錄「梓漳雙燈寺僧書二頌一日、擅來好筒——云云、鉄坐而化」〇龍皮袋。

【寄生木】やどりぎ。他の植物にやどりて生を保つ植物。

【寄奴】ことづて、傳言。漢書「一一謝レ我」〇寄語。

【寄贈】よせおくる、おくり與へる。

【寄託】たのむ。たよる。東方朔文「列子隱レ身而窮處兮、世莫レ可二以一一一」

【寄貿】圖委託販賣、取次販賣。

【寄付】〇物を授け與へる。白居易詩「貧友遠勞君一一」〇たのむ。

【寄附】圖金品を公共事業又は社寺の建築などにさし出して補助する。〇喜捨。

【寄命】〇命は政令、政を委任する。論、泰伯「可レ以寄二百里之命一」〇生命を付託する。劉峻、廣絕交論「流二離大海之南一一一瘴癘之地一」

【寄居】かりずまひ、一時他の所に住居する「一一屬」〇寓居・客寓・寄宿。

【寄席】圖觀客をよせ集めて講談・落語・浪曲などを興行する所。

【寄手】圖攻めよせる敵の軍隊。

【寄人】圖宮内省御歌所に出仕して御歌會の事にあづかる職。

【寇】コウ ク 第

〇あだ(仇・敵)〇あだす、攻め入る。兵の内に起るを亂、外よりするを一といふ「外一」〇盜賊、暴行して人を劫掠するを一、人を殺すを賊といふ。書經「無敢一攘二隣壁一」〇かすむ(掠)「一略」

【寇虐】あだしそこなふ。晉書「内擾二一一外靜二姦宄一」

【寇讎】あだのいましめ。後漢書、祭形傳「自レ是匈奴衰耗、邊無二一一一」

【寇暴】あだする えびす。晉書「一一飲二馬于長江一」

【寇賊】他國より攻め來るあだ。杜甫詩「擬身願難際、張目視二一一一」〇盜賊・寇敵。

【寇準】宋の華州の人、字は平仲、年十九進士に擧げらる、眞宗の時、累官して同平章事となる、たまたま契丹入寇す、準、策を決して帝の親征を請ひ、澶淵の功を成す、丁謂等の讒陷する所となり、雷州に貶せらる、準外は寛にして内は儉なり、薨ずるに一有餘二十年、仁宗の朝、

中書令を贈り、莱國公に封ぜらる。【寇鈔】コウ あだしかすめる。攻劫して略取する。漢書「連年ー一」＝寇掠。【寇掠】コウリャク あだしみだす。後漢書「ー二ー州郡」【寇竊】コウセツ あだしぬすむ。李弘文「永嘉之後、ー一競興」【寇賊衰究】コウゾクカンキュウ 寇は人をおびやかす、賊は人を殺す。姦は惡の外に在るもの、究は內に在るもの（書、舜典）【寇盜】コウダウ むれて亂暴をなしぬすみかすめる。漢書「民俗貿木、不レ恥二ーー一」【寇讎】コウシウ あだのうれひ。漢書「則有二ーー一」【寇侵】コウシン 他國に侵入して、亂暴、又は盜賊をなすもの。韓愈、汴州東西水門記「因二風氣一以閉二ーー一」【寇掠】コウリャク せめかすむ。煙雷「自レ遭二荒亂一諸軍竝起、鍾則ーー、飽則棄レ餘」＝寇擾。

【宿】シュク　屋

○やどる、とまる、夜止まる。「止ー」「屯ー」「再ー」「寓ー」○やどり、とまり。○はたごや（旅舍）○とどむ（止）とめおく。論、顏淵「子路無ー」「諸」ひまがいる（猶豫）○やすんず（安）まもる（守）○とのゐ（直）「ー直」○もとから、ふるし（舊）ひさし（久）「ー痾」「ー志」○はやし、はやくす（早）＝夙。○つつしむ、いましむ（戒）＝肅。○事になれたるひと（老練者）○星のやどり（星座）「二十八ー」○圖しゅく。うまつぎ「ー場」「ー驛」【宿編】シュクヘン 久しくなりしやまひ。＝宿痼・宿疾・久痾。【宿因】シュクイン 前の世よりのいんねん。張喬詩「千燈有二ーー一」＝前因・宿緣・夙緣。【宿雨】シュクウ 前日より降りつづくあめ。王維詩「桃紅復含二ー一、柳綠更帶二朝煙一」【宿衛】シュクエイ とのゐしてまもる。周禮「ー二ー王宮一」【宿營】シュクエイ 兵士のやどる營所。【宿曜】シュクエウ ○二十八宿と九曜と。○二十八宿九曜によりてうらなふ術。【宿怨】シュクエン ふるきうらみ。又、怨をとどめる。孟、萬章「仁人之於レ弟也、不レ藏レ怒焉、不レ一レ一焉、親二愛之一而已矣」【宿緣】シュクエン ふるきいんねん。何承天、答二宗居士一書「愛欲未レ除、ーー是長」＝宿因。【宿戒】シュクカイ 期日にさきだちてものいみする。周禮、註「ーー謂二前レ期書戒一也」【宿好】シュクカウ 久しき以前よりのこのみ。陶潛詩「詩書敎二ーー一」【宿學】シュクガク 久しき經歷をつめる學者。穀學の人。史、莊周傳「雖二當世ーー一、不レ能二自解免一也」【宿艾】シュクガイ 藥草の名、こがねやなぎ。【宿願】シュクグワン 久しき以前よりのねがひ。隋書、張衡傳「得レ謁二ーー一」＝宿望。【宿眷】シュクケン ふるくよりのめぐみ。魏書、恩倖傳「ーー之隆」【宿昔】シュクセキ 日を經たるふるきあか。晉書、禮志、漢儀、季春上巳、官及百姓、皆禊二于東流水上一、洗濯祓除、去二ーー一、而自レ魏以後、但用二三日一、不レ以二上巳一也」【宿構】シュクコウ 前以て作りおく詩文。魏志、王粲傳「善屬レ文、擧筆便成、無レ所二改定一、時人常以爲二ーー一」【宿業】シュクゴフ 佛前世のむくい。業は此の結果を生ずべき原因となる所業。【宿根】シュクコン 冬、草葉枯れて、根のみ生き殘り、翌年萌芽する者「ーー草」【宿債】シュクサイ 久しき以前よりの借金。黃公度詩「千祠債二ーー一」＝舊債。【宿志】シュクシ かねてのおもひ。宿昔の志望。後漢書、列女傳「奈何忘二ーー一而墨二兒女子一乎」＝夙志。【宿食】シュクショク 前日炊きたる飯。北周書、姚僧垣傳「此有二ーー一」【宿疾】シュクシツ 久しきやまひ。北史、裴寬傳「弟漢少有二ーー一、僅帶二虎贏一、水經、注「溫水常熱、沐浴治二ーー一」＝宿痾。【宿執】シュクシフ ふるくよりの執念。【宿心】シュクシン 宿志。嵇康詩「內負二ーー一」＝素志・宿意。【宿舍】シュクシャ とまりやど。【宿將】シュクシャウ 經驗に富める將軍。史、王翦傳「翦爲二ーー一」＝老將。【宿情】シュクジャウ もとの心。禮記、疏「故疏レ謀者、本二其ーー一、立二其恩義一、爲二平量之怨一而免放」【宿主】シュクシュ 寄生動物をやどす動物。【宿儒】シュクジュ 宿學に同じ。漢書、西方道傳「ーー胡常與二方進一同レ經」＝老儒。【宿宿】シュクシュク 一夜とまる。詩、周頌「有レ客ーー、有レ客信信」信は再宿。【宿酔】シュクスイ 二日ふつかよひ。王初詩「銀花殊樹曉來看、ーー初醒一倍寒」＝宿醒。【宿夕】シュクセキ 宿は夜、一夕一夜の義。備の閒の義。戰國策「不レ出二ーー一、人必危レ之矣」【宿昔】シュクセキ むかしから、平生。張九齡詩「ーー青雲志、蹉跎白髮年」【宿題】シュクダイ 前より出しおく問題。【宿諾】シュクダク 諾したることをとどめお

く。論、顔淵「子路無ニ―一」

【宿聴】シュク　ふるく受けしはぢ、積年の恥辱。舊唐書、房喬傳「今往代之―一」

【宿直】シュクチョク　官吏がとのゐする、役所などに更代にてとまる。遼史「百官番宿爲ニ―一」

【宿醒】シュクセイ　二日ゑひ。李中詩「落花風急―一解、芳草雨昏春夢寒」＝宿酔。

【宿哲】シュクテツ　久しき經驗をつみたる賢人。

【宿徳】シュクトク　平素より積みし徳。又、徳高き老人。漢書、武帝紀「名儒―一」

【宿儒】シュクジュ　くひもたれ。史、淮陰侯傳「樗蒲後盤、師不ニ―一」

【宿望】シュクボウ　かねてののぞみ。＝風望・宿願。

【宿負】シュクフ　ふるきおひめ、以前からの負債。〔晉書、武帝紀〕＝宿債。

【宿分】シュクブン　前世より定まりたる運命。吳敬文「命之窮達有ニ―一」＝宿命。

【宿債】シュクサイ　ふるくよりのいきどほり。

【宿弊】シュクヘイ　ふるき弊害、以前からの惡事。國老談苑「蠲ニ―一大興ニ利益一」

【宿墨】シュクボク　すりおきのすみ汁。

【宿命】シュクメイ　〇前世より定まれる運命「―一說」〇シュクミョウ　過去の因緣による運命。能く―一を知る者を―一通といふ。

【宿老】シュクロウ　故事に通じたる老人。北史、陸俟傳「州中有ニ―一、名望素重者、以ニ友禮一待レ之」

【宿痛】シュクツウ　ふるきこと。又、古の賢女の名。列女傳「―一女、齊閔王后也、項有ニ大瘤一、故號ニ―一」

【宿世】シュクセ　俗まへのよ。前世「―一の縁」

【宿儒】シュクジュ　國上古、臣下を親みて呼びし敬稱。後に姓となる。

【宿下】シュクサガリ　國奉公人が暫時の暇をもらひて其のおやもとにかへる義。

【宿】

セキ　シュク

宿（前條）の古字。

【寂】

ジャク　セキ　陽

〇さびし、しづか（靜）聲なし「閑―一」「―寞」「―靜―」〇やすし（安）〇佛死をいふ「圓―一」「―滅」「歸―一」＝涅槃。

【寂照】ジャクショウ　佛しづかにして心の光が明か。楞嚴經「湛然―一」

【寂滅】ジャクメツ　〇物の自然に消滅する義。孫逖詩「苦心歸ニ―一」〇佛死をいふ「―一爲樂」

【寂寞】セキバク　さびしくしづかなる貌。＝寂寂。

【寂寥】セキリョウ　しづかなる貌。莊、天下「莫ニ乎若レ亡、―一若レ清」＝寂然。

【寂閑】セキカン　さびしき貌。皮日休詩「―離鎖清、皎然諸慮滅」＝寂乎・寂寥・寂然。

【寂寂】セキセキ　さびしき貌。劉禹錫詩「月落滿庭人―一、數聲一曲在ニ高樓一」＝寂寞。

【寂然】セキゼン　寂寥に同じ。易、繫辭「无思也、无レ爲也、―一不レ動、遂通ニ天下之故一」

【寂若レ無レ人】セキジャクトシテヒトナキガゴトシ　ひっそりとして人の居らざる如し。世說、德行「傅玄遠泊然靜處、不ニ妄交遊一、裴司徒毎レ經ニ其戸一、輒歎曰、經ニ其戸一――、披ニ其帷一其人斯在、曾得レ非ニ名賢一」

【寂念】セキネン　さびしくしづかなる思。劉孝孫詩「―一啓ニ玄門一」＝寂慮。

【寂寞】セキバク　さびしく靜かなり、靡なし。淮南子「―一者音之主也」＝寂莫・寂漠・寂歷。

【寂慮】セキリョ　しづかなるおもひ。韓偓詩「―一延ニ清風一」＝寂念。

【寂寥】セキリョウ　さびし。楚辭、九歎「聲嘽嘽以―一今」＝寂莫。

【寂漠】セキバク　天の高く遠き貌。漢書「―一上天知ニ厥時一」

【寂歷】セキレキ　さびし。張說詩「空山―一道心生」＝寂寞・寂寥。

【密】

ビツ　質　通音　ミツ

〇ひそか、そっと人に知られず（私）ひめる（祕）「祕―一」「機―一」易、繫辭「幾事不ニ―一則害成」〇ひそかに、そっと。〇ひっそり、しづか（靜）〇こまか（精細）「細―一」「精―一」「緻―一」〇しげし（稠）疎の對「稠―一」つまびらか（審）「詳―一」〇とどまる（止）とづ（閉）「過―一」〇ふかし（深）〇だまる（默）〇ちかづく「親―一」「―接」〇山の形、堂室の如きもの。〇―勿はつとめる（眼勉）

【密移】ミツイ　ないしょの回狀。祕密の移文。

【密意】ミツイ　ひみつのこころ。謝靈運詩「―一無ニ人容一、幽恨遶レ襟洗」

【密友】ミツユウ　至りて仲よき友。宣武盛事「戴弘正毎レ得ニ―一人一、則書ニ手編簡一、焚レ香告ニ子祖考一、號ニ金蘭簿一」＝親友。

【密雲】ミツウン　厚く重れる雲。易、小畜「―一不レ雨」

【密航婦】ミツコウフ　法禁を破りて海外にぬけ出て醜業をいとなむ女子。海外に密航する醜業婦。

【密函】ミッカン　祕密の文書を入れたるはこ。轉じて祕密の手紙。南史「―一去來、日中以レ十數」

【密謀】ミツボウ　ひみつの會議。ないないの相談。

【密會】ミッカイ　〇ひそかにあつまる。崔融文「心靈―一」〇國男女がひそかに

逢ふ。あひびき。‖野合。

【密計】ミツケイ　ひみつなるはかりごと。唐書、張說傳「帝在二東宮一所二與謀一者多」‖秘計・密謀。

【密教】ミツキョウ　佛眞言秘密のをしへ。又、眞言宗。顯教の對。

【密告】ミツコク　ひそかにつげしらせる。又其のしらせ。

【密察】ミツサツ　すきまなく、しげくあつまる。‖密集。

【密書】ミツショ　祕密の書きつけ。又、內證の手紙。‖祕書。

【密接】ミツセツ　〇すきまなく觸れる。‖密著。〇關係が深くして離れぬ。

【密疏】ミツソ　ひそかに內條がきにして意見をたてまつる。又其の書。宋史、王旦傳「先ニ二三四人姓名一」

【密陀僧】ミツダソウ　鑛物の名、黃色の粉末、腫毒を消し、瘡瘍を除く。‖鉛丹・酸化鉛。

【密緻】ミツチ　こまかにぬけめなし。詩經、箋「情性ニ一、操行正直」‖緻密。

【密著】ミツチャク　ぴったりとくっつく、すきまなくくっつく。

【密敕】ミツチョク　ないないのみことのり。梁史、陳慶之傳「慶之別有二一一」‖密詔。

【密通】ミツツウ　男女がひそかに情を通ずる、みだかごと。

【密度】ミツド　物體の單位の容積中にある質量のどれほど、物質疏密の度合。

【密法】ミツホウ　眞言宗の法にて、印を結びて道を弘むるもの。其の僧を密僧といふ。

【密封】ミツフウ　かたく封ずる。王建詩「一一針筵非時奏」

【密勿】ミツブツ　〇つとめはげむ。一說に黽勉と音義相通ずと。漢書、劉向傳「一一從レ事、不二敢告一勞」〇君主に近づく義。又、樞要の政事の義。魏志、杜恕傳「與二聞政事一一一大臣、寧有二懇惻愛レ此者一乎」

【密網】ミツモウ　目のこまやかなるあみ。こまやかなるおきてに喩ふ。史、酷吏傳「天下之網甚密矣」晉書「羅二一一以羅二微罪一」

【密密】ミツミツ　〇こまかなる貌。孟郊詩「臨レ行一一縫」〇しげれる貌。陸游詩「一一疎疎自在花」

【密約】ミツヤク　ひみつの約束。

【密輸】ミツユ　禁を破りてひそかに物品を他國に送り、又は他國より持來りて利益をはかる、輸正音はシュ。

【密猟】ミツリョウ　禁を犯して、ひそかに獵をする。‖一一船」

【寓】 九畫 宀部三畫の篆文。

カン

〇さむし。暑の對。「大一」「酒一」「奇一」「祁一」「嚴一」〇みぶるひする、ぞっとする、おそれる(戰栗)「一心」〇さむさ、冬の季節。〇いやし(賤)まづし(貧)「一門」史、范雎傳「范叔一如レ此哉」さびし(寂)くるしむ(窮困)〇なやむ(艱)〇こごゆ(凍)「饑一」〇大一小一は旬に二十四氣の一。

【寒威】カンイ　さむさのいきほひ「一一凜烈」方干詩「一一半入龍蛇蟄、暖氣全歸草樹根」

【寒意】カンイ　さむさの氣味。張鼎詩「江天一一少、冬月雨仍飛」

【寒儒】カンジュ　さむさと、あつさと。韓愈詩「中州一一與レ南異、常慨梅花開不レ早」

【寒蟬】カンセン　秋のみみず。蘇軾詩「暗潮生レ浦悲一一」

【寒雨】カンウ　さびしき雨。寒き雨。王昌齡詩「一一連レ江夜入レ吳、平明送レ客楚山孤」

【寒烏】カンウ　ふゆのからす。沈約賦「秋鴻分疏引、一一兮繁飛」‖寒鴉。

【寒英】カンエイ　梅の異名。柳宗元、早梅詩「一一坐銷落、何用慰二遠客一」

【寒燠】カンイク　さむげなるけむり。謝朓詩「桑柘起一一」

【寒暄】カンケン　寒さをふせぐには、皮ごろもを重ねるを第一とす。事を處するには各其の宜しきに適すべき喩。徐幹、中論「語稱一一、止レ誘莫レ如レ修レ身、施レ善莫レ如レ親レ沐」

【寒温】カンオン　〇さむさと、あたたかさと。〇時候。又、時候見舞をのべる義。晉書、王獻之傳「獻之一一而已」

【寒暖】カンダン　寒暖の挨拶をするのみの義。

【寒柯】カンカ　〇冬の木。梁元帝纂要「冬

木日ニーー」〇冬の寒き木の枝。陶潜詩「提レ壺揖ニーー」

【寒家】カンまづしきいへ。南史、到溉傳「溉所生母魏本ニーー」‖貧家・寒門。

【寒餓】カンこごえると、うゑると。殷克己詩「豈無三富貴人、粟帛救ニーー」

【寒鴉】カウ鵯鵊の一名。はははってう。本草綱目「天寒欲レ雪飛如レ告、故名ニーー」

【寒客】カン臘梅花の異名。西溪叢語「臘梅爲ニーー」

【寒乞】カンつ みすぼらしきこじき。宋書、王蠻后傳「外舎家ニーー」

【寒雀】カンさむさの爲めに口をつぐむ。李洞詩「高逃避レ磧屋、ーー入レ川人」

【寒郷】カンキャウ〇さむき土地。詩經、疏「ーー率卑寒、北方是也」‖寒國。〇まづしくさびしきさと。鮑照詩「僕本ーー士、出身蒙二漢恩一」‖窮郷。

【寒玉】カンギョク〇竹の異名。陸龜蒙詩「萬條ーー一溪烟」‖綠玉。〇水の清き形容。李賀玉詩「一條ーー走二秋泉一」

【寒苦】カン貧しきくるしみ。後漢書「民得三以免ニーー一」‖貧苦。

【寒薯】カンまづしくやつやつし。唐書、郭景山傳「家ーー」‖貧窶。

【寒空】カンクウさむそら。冬のそら。杜甫詩「蕭瑟洼ニーー」

【寒瓜】カンクワ西瓜スヰカの異名。本草「西瓜、一名ーー」

【寒灰】カンクワイ火のなきはひ。杜甫詩「眼穿當二落日一、心死掃ニーー」

【寒官】カンクワン卑くしてひまなやく。‖散官。

【寒窶】カンシウ蟬の屬、つくつくぼふし。爾雅、郭寒蜩「ーー也、似レ蟬而小、青色」‖蟪蛄・秋蟬。

【寒縮】カンシュクこごえちぢまる。元好問詩「蝶吞已覺空多小、ーー寧作二青生窮一」

【寒俊】カンシュン家まづしくして、才のすぐれたる者。長孫「寇準在二中書一、善用ニーー一」

【寒清】カンシン寒きなぎさ。湖朓詩「秋河曙耿耿、ーー夜蒼蒼」

【寒暑】カンショ寒さと、暑さと。易經「ーー相推而歲成焉」

【寒食】カンショク冬至より一百五日に當る節。この日火食を禁ず、晉の介子推が焚死せし日なるを以て後人悲みて然すといふ。郭中記「冷食三日、作二乾粥一食レ之、中國以爲ニーー一」

【寒翠】カンスイ寒綠に同じ。竹などの冬のみどり。林逋、山村冬暮詩「雪竹低ニーー一風梅落二曉光一」

【寒水石】カンスイセキ大理石の一種。

【寒生】カンセイまづしき書生。湘山野錄「江南一ーー」

【寒清】カンセイひややかにしてすむ。山海經「其上有レ水焉、甚寒而清」

【寒腰】カンヨウまづしくしていやし。‖寒微。

【寒戰】カンセンこごえわななく。水經、注「厚衣孤裘ーー」

【寒蟬】カンセン秋のせみ、ひぐらし。禮、月令「白露降、ーー鳴」

【寒蛩】カンキョウふゆのさむき月。蛩は蟋蟀シツソツ月中に棲むといふによりて月の義とす。郷谷詩「莫レ恨清光盡、ーー即照レ空」‖寒月。

【寒聲】カンセイさむきこけ。劉孝威詩「石岸生ニーー一、沈根漬二水音一」

【寒素】カンソ〇まづしくして貧寒、清貧の義。〇司馬晉の世の士を取る科名。晉書、范喬傳「再舉二清白異行一、又舉ニーー一、一無レ所レ就」

【寒族】カンゾク貧しく輕きいへ。晉書、華譚傳「譚舉ニーー周訪一爲二孝廉一、訪果立二功名一」‖寒門。

【寒帶】カンタイ赤道より南北各六十六度半に始まりて兩極に至るまでの間、寒氣甚だ強きが故の稱。熱帶の對。

【寒暖】カンこごえると、うゑると。北齊書、蘇弘勣傳「位至二高陽太守一、在レ官清素、妻子不レ免ニーー一時議高レ之」‖寒餓。

【寒暖】カンダン寒暖に同じ。

【寒暖計】カンダンケイ氣候のさむさと暑さとを計る器械。‖晒寒暑表。

【寒凉】カンリャウ水のひややかなるふち。源正香シン香タンの時は水、又は州の名なれども今暫く俗語に從ふ。謝靈運詩「淥淥陽卉腓、皎皎ーー潔」

【寒竹】カン 竹の一種、高さ五六尺、節細くして、杖などに造る。
【寒鯽】カンセキ さびしきおもてざしき。倪瓚詩「青燈淡二斜月一、簟枕涼二一一」
【寒天】カン 〇さむそら。‖寒空。〇圖石花菜トコロテンの煮汁を寒夜に晒して製せし半透明の食品。
【寒天版】バンテン 圖寒天或は膠を用ひて造りし一種の印刷版、紫色インキにて刷る。こんにゃくばん。
【寒突】カンとつ ひえたる煙出し。貧家のさま。文同詩「一一無二煖煙一」
【寒熱】カンネツ さむさと、あったかさと。禮記「一一不レ節、民多二疾病一」
【寒梅】カンバイ 寒中にさくうめ。王維詩「已見二一一發一、復聞二啼鳥聲一」
【寒芒】カンバウ さむげなる星のひかり。蘇軾詩「新月皎如レ鉤、疎星弄二一一一」
【寒屋】カンおく さびしきへや。杜甫詩「絕岸風威勁、一一燭影微」
【寒微】カンビ まづしくしていやし、微は徽賤。晉書、晉彦傳「彦出二自一一一、有二文武才幹一」‖寒賤。
【寒氷】カンピョウ さむきこほり。唐明皇詩「瑞露垂二花綬一、一一流二寶輪一」
【寒門】カンもん ひえこごえたるはだ。元稹詩「一一漸舒展」
【寒服】カンフク 寒中にきるきもの。謝瞻詩「風至授二一一一」
【寒風】カンプウ さむきつむじかぜ。謝朓詩「四面一一舉、千里白雲來」
【寒盟】カンメイ 約を守る心を緩める、盟に背く。左、哀十二「盟所二以周一信也、苟有レ盟焉、弗レ可レ改也已、若可レ尋也、亦可レ寒也」尋は修、温むる義。
【寒門】カンもん まづしきいへ。‖寒族。
【寒夜】カンや さむき夜。
【寒瘍】カンよう しもやけ。儒門事親「歛人女陰足有二一一一、俗云二凍瘡一」
【寒往】カンオウ 寒氣の去る義。易經「一一則暑來、暑往則寒來、寒暑相推而歲成焉」
【寒流】カンリウ 〇さむき水のながれ。謝朓詩「一一自清泚」〇地文學にて北極地方より赤道地方に向ひて流れ來る潮流。
【寒林】カンリン 冬枯れのさびしきもり。宣和畫譜「尤喜レ畫二山水一一一」
【寒綠】カンリョク 草木の秋冬の頃に青く茂るをいふ。吳錫麒詩「野燒迷二一一一」‖寒碧。
【寒冷】カンレイ さむくつめたし。
【寒烈】カンレツ さむさはげし。後漢書「時天一一、衆皆饑疲」
【寒露】カンロ 二十四氣の一。陰曆九月の節、陽曆の十月九日頃に當る。
【寒暄】カンケン まづしくいやし。北齊書、裴遵傳「門族一一」‖寒微。
【撥二盡寒爐一】カンロヲハラフ 火の無き寒き爐の灰をかきつくす、呂蒙正少くして貧し、訪謁して遇はず、詩ありふ「十載朱門九不レ開、滿身風雪卻回來、歸レ家羞見二妻兒面一、一一一夜

灰」
【寒泓】カンこう つめたき水たまり、硯の異名。文同詩「風前試二一一一」
【寓】グウ 遇音
〇よす、よる(寄)〇よせ與へる、やる「一書」〇やどす、やどる(宿)「一客」「旅一」〇つく(屬)〇かこつける、ことよせる(假託)「一言」〇かりずまひ、やど、やどや(旅宿)「客一」
【寓意】グウイ 他の物事にかこつけて、其の意をほのめかす。老學菴筆記「淵明之詩、皆卓然一一、而不レ流二于物一」
【寓居】グウキョ かりずまひ、‖僑居。
【寓懷】グウカイ おもひを寄せる。伊洛淵源錄「一二一摩崖之外」
【寓言】グウゲン 事にかこつけていふ。又、其のことば。史、莊周傳「其著書十餘萬言、大抵率一一也」
【寓公】グウコウ 國を失ひて、他國に寄寓する君主、又は諸侯。穆、郊特牲「諸公不レ臣一一」
【寓宿】グウシュク かりずまひ。白居易文「投二山館一以一一、夜躡躡而來」
【寓書】グウショ てがみをおくる。左、襄二四「子產一二于子西、以告二宣子一」‖寄書。
【寓食】グウショク ねさふらふ。元稹詩「我來荊門候、一一公堂肉」‖寄食。
【寓木】グウボク やどりぎ。山海經「龍山上多二一一一」‖寄生木。
【寓目】グウモク めをつけて見る。左、僖二八「得臣與レ一一焉」‖觸目。
【寔】ショク 圖
〇まことに(誠)實と通ず。〇ただ(止)〇これ(是)
【寐】ビ 有
〇いぬ(寢)「假一」「夢一」「寤一」寢は横に臥す、一はねいる、まどろむ。公羊、僖二「寢人夜者寢而不一」〇ふす(伏臥)いこふ(息)〇くらし(昧不明)
同訓異字 寐・寢・瞑の別は寢(六部十一畫)の條を見よ。
【寐語】ビゴ ねごと。たはごと。梅堯臣詩「一一倘不レ誰」續雜篇「醒二理會一醉淡一一」‖囈語。
【富】フウ 有
〇とむ、とみ、財に豐かなり。「巨一」「豪一」「暴一」「菜一」「好一」書、洪範「五福二曰一」〇とます。〇そなはる(備)みちたる(滿足)晉書、夏侯湛傳「文章宏一」あつし(厚)ゆたか(豐)多し「豐一」「繁一」「饒一」「一贍」
【富澄】フウチョウ とみて財があまる。晉書、

閻積傳「生而―一、無二念慮一矣」‖富裕。

【富貴】フウキ　とみてたっとし。貧賤の對。論、顏淵「死生有レ命、―一在レ天」

【富貴花】フウキクワ　牡丹（ボタン）の異名。周敦頤、愛蓮說「牡丹、花之富貴者也」

【富有】フイウ　ゆたかにたもつ。易、繫辭「―一之謂二大業一」‖富裕。

【富益】フミ　ましとます。魏書、高謙之傳「別鑄二小錢一可二以―一一」

【富豪】フガウ　かねもちのだんな。論衡「治レ生積貨、至二於年老一遂成二一一矣一」‖富家翁。

【富家】フカ　大いなる金滿家。漢書、卜式傳「是時―一皆爭匿レ財」

【富給】フキフ　とみてゆたか。後漢書、蔡邕傳「少好二經書一家―一」

【富強】フキヤウ　富みてつよし。史、河渠書）

【富源】フゲン　とみを生ずる本。生產の材料。‖利源。

【富厚】フコウ　ゆたかにあつし。戰國策「人生二世上一、勢位―一、盛可レ忽乎哉」‖富裕。

【富國】フコク　國をとます。又、とめる國。荀子に―一強兵あり。唐書、王銓傳「有二―一術一、寵遇益厚」

【富國強兵】フコクキヤウヘイ　國を富まし兵を強くする。

【富才】フサイ　才にとむ。又、才を長ぜしむ。文心雕龍「積レ學以儲レ寶、酌レ理以―一レ一」

【富饒】フネウ　ゆたかなるとし。孟、告子「―一子弟多レ賴」‖豐年。

【富士山】フジサン　義楚六帖「日本王城東北千餘里、有レ山名二富士一、或云、是蓬萊也、高峻無レ際、三面臨レ海、山頂常有レ烟突起焉」

【富商】フシヤウ　とみたる商人。史、貨殖傳「―一大賈、周二流天下一」

【富春】フシユン　山名、浙江省桐廬縣の西に在り、後漢の嚴光此に耕す。前は―一江に臨む、灘あり嚴陵瀨といふ、嚴光遊釣の處。

【富庶】フシヨ　ゆたかにして人民多し。韓愈「送二李愿一歸二盤谷一序」「居レ平泉之上、―一、地多二詞客一、自風流」

【富飛】フヒ　とみてゆたか。後漢書「高氏蔡氏貨皆―一、鄉人爲而事レ之」

【富盛】フセイ　ゆたかにさかんなり。晉書、習鑿齒傳「宗族―一、世爲二鄉豪一」

【富饒】フネウ　とみてゆたか。易林「―一豐衍、快樂無レ已」‖富裕。

【富贍】フセン　〇文才などが十分に足る。晉書、葛洪傳「才章―一」〇富みて足る。‖富裕。

【富弼】フヒツ　字は彦國、宋の河南の人、寶學にして大度あり、神宗の時、同平章事と爲る、王安石と議合はずして相を罷め、家居する十餘年、卒して文忠と諡す。

【富茂】フモ　ゆたかにさかえる。家語「既―一矣」

【富力】フリク　とみのちから。歐陽修詩「欲下於二一一一

」〇へる(減)〇ひとり(獨)〇やもめ(嫡婦)夫を亡ひし婦「鰥ー」〇やもを(鰥夫)〇よわきもの(劣弱)勢力が衰へし者。〇諸侯の謙稱。德が少しといふ義「一人」又、國人が他國人に對して己の君をいふ謙辭「一君」

同訓異義 寡・少・鮮・尠等の別は少(小部一畫)の條を見よ。

【寡居】クワキョ　やもめぐらし。史記「平陽公主ー」‖寡處。

【寡慮】クワリョ　心配すくなし、處はおもんばかりの意。機、將亡論「封城ー」

【寡君】クワクン　己の君を、他國の人に對していふ謙稱。儀禮、燕禮「ー有二不腆之酒」

【寡見】クワケン　見るところすくなし。揚子「寡聞則無約也、ー則無卓也」

【寡言】クワゲン　ことばすくなし。禮、內則「愼而ーレー者」

【寡鵠】コクワ　やもめ(鰥婦)に喩ふ。黃鵠歌「黃鵠早寡兮、十年不レ雙」白居易詩「暗鏡對二孤鸞一哀弦聞二ーー一」

【寡妻】クワサイ　德すくなき者、即ち寡人の妻の義にて、諸侯が己の妻の謙稱。一說に諸侯の嫡妻なり、嫡妻は惟ー一なり、故に寡といふ。詩、大雅、思齊「刑二于ー一、至二于兄弟一、以御二于家邦一」

【寡識】クワシキ　見識せまし、見聞が少し。東京賦「鄙夫ー一」‖淺識。

【寡人】クワジン　諸侯の自稱。德少き人といふ謙辭。曲禮「諸侯自稱、曰二ーー一」

【寡信】クワシン　まことすくなし。老子「輕諾必ーレー」

【寡處】クワショ　やもめにてくらす。易林「ー一無レ夫」‖寡居。

【寡少】クワセウ　すくなし。晉書、處悝傳「雅器宰謂、舟艦ー一」

【寡小君】クワセウクン　己の君の夫人を、他國の人に對していふ謙稱。論、季氏「稱二諸異邦一、曰二ーー一」

【寡草】クワサウ　すくなし。‖微少。

【寡斷】クワダン　決斷すくなし。列子「扁鵲謂二公扈一曰、汝志強而氣弱、故是二子謀而寡二子斷一」

【寡特】クワトク　孤立してたすけなし。春秋胡傳「人知二其孤危一ー一、可二取而伐一也」‖孤特・寡單。

【寡德】クワトク　德すくなし。晉書、元帝紀「詔曰、惟朕ー一、纘二我弘緒一」

【寡獨】クワドク　寡は老いて夫なきもの、獨は老いて子なきもの。後漢書、安帝紀「其務崇二仁恕一、賑二護ー一、稱二朕意一焉」

【寡薄】クワハク　すくなくうすし。唐書「物產ー一」‖寡少。

【寡婦】クワフ　夫をうしなへる女。やもめ。禮記「ー一不二夜哭一」‖寡女・孀婦・孀婦。

【寡聞】クワブン　見聞せまし。禮、學記「獨學而無レ友、則孤陋而ー一」

【寡默】クワモク　寡は、事を省きて少くする、默は、言を愼みて多く言はず【呂氏家訓】

【寡約】クワヤク　つづまやかにしてうすし。晉書「翠修常侍、儉皆ー一」

【寡欲】クワヨク　欲すくなし。孟、盡心「爲レ人也ー一」

【寤】ゴ　遇

〇さむ(覺)目がさめる。〇さとる、悟に通ず「覺ー」改ー」「開ー」〇さかふ(逆)悟に通ず。左、隱元「莊公ー生驚。姜氏」さかさ産。

【寤言】ゴゲン　眠さめてもの言ふ。詩經「獨寐ー一、永矢弗レ諼」

【寤生】ゴセイ　さかご(逆產)左、隱元「莊公ー一、驚二姜氏一」一說、母寢ぬる時、兒已に生れ寤めて後に覺るをいふ。

【寤寐】ゴビ　めさむると、いぬるとのねても覺めても。詩、周南「ー一求レ之」

【寤寐思服】ゴビシフク　寤めても寐ても思ひ懷ふ、服は懷。詩、周南「窈窕淑女、寤寐求レ之、求レ之不レ得、ー一」

【寤擗】ゴヘキ　目がさめて胸うちて憂ふ。詩、邶風「靜言思レ之、寤辟有レ摽」

【寤夢】ゴム　晝間にありしことを、其の夜みる夢。周禮「四曰ニーー一」

【寒】サイ　泰

〇とりで(塞)‖寒砦。〇まがき(籬離)木を列ね柵となして防ぎ衛るもの。

【察】サツ　セチ　黠

〇あきらか(明)つまびらか(審・詳細)反覆して詳審にする「明ー」「亮ー」「熟ー」いちじるし(著)〇みる(視)「視ー」「觀ー」〇しる(知・識)孟、離婁「ー一於人倫」〇かんがふ(考)〇ーはいさぎよし、きよし(潔)又、くだくだしく煩はしき貌「苛ー」〇國おしはかる「推ー」

【察按】サツアン　あきらかにかんがへる。唐書「今所ニーー一、準二漢六條一而推二廣之一」

【察告】サツコク　あやまちの原因をたづねる。梁武帝文「原レ情ー一、或有レ可レ矜」

【察驗】サツケン　しらべかんがへる。尤侗子「清心省念、ーニー近習」

【察今】サツコン　今の世の事をかんがへみる。呂覽「ーレー則可二以知一古」

【察察】サツサツ　〇いさぎよき貌。史、屈原傳「安能以二身之ーー一、受二物之汶汶者一乎」〇わづらはしく、くだくだし(煩碎)き貌。老子「其政ーー」

其民缺缺」

【察照】サツセウ 心にかんがへて明かにする。晉書、庾翼傳「値二天高聽遠一レ垂二一一一一」

【察度】サツタク 詳かにはかり考へる。大戴禮「一二一情僞一」

【察納】サツナフ あきらかにしらべて聽き入れる。柳宗元文「儻垂二天聽一一二一微誠一」

【察敏】サツビン 心明かにしてさとし。潛夫論「君子貴二眞之實一、一一之才」

【察問】サツモン くはしくしらべたづねる。金史、世宗紀「一二一細微一非二人君之務一」

【實】ジツ 宀

〇みのる、みのり（稔）〇みつ（充・滿）虛の對。たる（足）とむ（富）「富一」「虛一」〇そなはる（備）〇まこと、まごころ（誠）「眞一」「篤一」〇まことに、じつに、けだに。〇まめやか（眞誠）「誠一」「忠一」〇草木のみ（種子）さね（核）「果一」「木一」〇けみす（驗）〇あつ（當）罪をしらべて法律にあてる。書、呂刑「閱二其罪一」〇これ（是）〇物事の正味。名の對。晉語「吾有二卿之名一而無二其一一」〇しなもの、物品。左、莊二二「庭一旅」百」〇物事の存在、ことがら「事一」

同訓異義 詳實・信・眞・誠・允・固等の別は信（二七頁二段）の條を見よ。〇充實・滿・盈・充等の別は滿（水部十一畫）の條を見よ。

【實意】ジツイ 深切なる心。又、本心。蘇軾詩「平生學レ道眞一一、豈與二窮達一俱存亡」

【實印】ジツイン 圖官に屆け置きておもてむきの證明に用ふるいんぎょう。みとめ印の對。

【實益】ジツエキ 實際の利益。

【實而攻レ虛】ジツジテコウキョ 敵のそなへあるをさけて備なきをせめる。管子「一一」孫子「兵之形、避レ實而擊レ虛」

【實價】ジツカ かけねなきねだん、正札つきの價。

【實行】ジツカウ まことにおこなふ、實地に履行する。

【實學】ジツガク 實用のがくもん。

【實況】ジツキャウ 實際のありさま。＝實情。

【實科】ジツクワ 實地のわざ、即ち裁縫手工等を教へる學科。「一一高等女學校」

【實教】ジツケウ 圖眞實の理を究むる教法。權教の對。

【實業】ジツゲフ 農・工・商・漁・鑛業等、すべて實用に屬する事業。

【實現】ジツゲン 實際にあらはれる、實地に行ひしめす。

【實檢】ジツケン 實地に物をあらためる。

【實權】ジツケン 實際の權力。

【實驗】ジツケン 實際にためし見る。顏氏家訓「來二河北一不レ信レ有二二萬解船一、皆一一也」

【實語教】ジツゴケウ 圖一卷、作者詳かならず、經傳の格言又は佛教の意に本づきて作りし昔時の教訓書。

【實厚】ジツコウ 誠の心が十分にある。韓非子「一一者貌薄、父子之禮是也」

【實査】ジツサ 實際上のしらべ、實地調査。

【實在】ジツザイ 實際、世界に存在する、主觀を離れし客觀的世界の存在。

【實相】ジツサウ 圖萬有の眞實のありさま、眞如の本體。法華經「能究二盡諸法一一一」＝眞相。

【實字】ジツジ 實在の事物を表はす文字、即ち名詞など。副詞等を虛字といふの對「一一解」

【實施】ジツシ 實地に布き行ふ。

【實事求レ是】ジツジキウゼ 事物に就きて、其の事の眞相を求め尋ぬる。漢書、河間獻王十三王傳「修二學好レ古、一一」

【實習】ジツシフ 書物、講義等によらず實地に就きて學習する「一一科」

【實正】ジツシヤウ 圖まこと、眞實、確實「信用候處一一也」

【實情】ジツジヤウ 心の中より發するまことの情。冥報記「具述二委曲一一一」

【實踐】ジツセン 實地にふみ行ふ「一一躬行」宋史、孝宗紀「設惟孔子之道、我朝周惇頤・張載・程顥・程頤眞見一一、深探二聖域一」

【實踐哲學】ジツセンテツガク 實踐躬行を主とする哲學。

【實戰】ジツセン まことの戰。演習戰の對。

【實情】ジツジヤウ 戒を保ちて得道せる情。大智度論「釋初品是信四種、有差僧・無差僧・啞羊僧・一一」

【實測】ジツソク 實地に測量する。

【實體】ジツタイ 〇まことの形體。內容、又は本實。形式に對していふ。〇ジツテイ 圖まめやかにして正直。＝實直。

【實地】ジツチ 〇ほんたうの場所、實際の土地「一一踏査」〇轉じてほんたう「一一經驗」＝實際。

【實直】ジツチク まめやかにして正直。＝實體

【實否】ジツピ まことか、うそか。＝虛實。

【實費】ジツピ 實際に支拂ひたる入費。

【實父】ジツプ まことの父、生みのちち。養父の對。

【實物】ジツブツ ほんもの、現品・現物。

【實物交換】ジツブツカウクワン 金錢を用ひず、品物と品物とを互にとりかへる。古代の商賣には多くこの法による。

【實務】ジツム 實際の任務、實地に從事する業務。

【實用】ジツヨウ 實際の入用、實地の用ひ。

【實利主義】ジツリシュギ 實地有益の智識を授け、獨立自治に必須なる技能を修めしむる教育の主義。

【實力】ジツリキ 正味のちから、かけひきなき實際の力。
【實例】ジツレイ 實際のためし。
【實歷】ジツレキ 實地の經歷、實地に見聞すること。
【實錄】ジツロク 事實ありのままの記錄。漢書、司馬遷傳「其文直、其事核、不虛美、不隱惡、故謂二之一一一」
【實布的利亞】ジフテリア 咽喉に白色點狀の膜を生じ、呼吸の困難を感ずる傳染病。小兒に多し。＝馬牌風

【寢】シン 侵

〇いぬ（寢）「晝一」ふす（臥）とここに就く。〇やめる（止息）漢書、刑法志「兵一刑措」〇居室、表ざしきを正一、休息のへやを內一といふ。〇ふしど、ねや（閨）「一室」〇ふしど（臥牀）〇おたまや（廟）「陵一」「園一」また神殿。〇みにくし、貌揚らず（容貌醜惡）＝侵。

同訓異語 寢・寐・瞑 〇寢はねどこに入りたるなり、臥なり。論語「食不レ語、寢不レ言」〇寐はねいりたるなり、寤の反なり。公羊傳「寢而不レ寐」〇瞑は目を閉ぢてねむるなり、眠に通ず。莊子「據二高梧一而瞑」

【寢衣】シンイ ねまき。論、鄉黨「必有二一一一、長一身有半」
【寢園】シンエン 天子のみささぎ。唐書、祇誦二一一一」＝寢陵。
【寢格】シンカク とどめて行はず、廢止する、格もやめる義。
【寢具】シンググ ねる道具、夜著など。司馬相如賦「一一既設、服玩珍奇」
【寢興】シンコウ いぬると起きると。杜甫詩「推忠忘二一一一」＝臥起。
【寢室】シンシツ ねま、ねる〈や。魏書、崔浩傳「一一火作」
【寢所】シンジョ ねどこ、ふしど。甘澤謠「逆及二一一一」＝寢室。
【寢食】シンショク ねたり食したりして常に身を離さず。左傳「賢之如二渴欲一、晉食二其肉一而一二一其皮一矣」其の皮を坐臥の具とする義。
【寢食】シンショク ねむると、くらふと。文中子「北山黃公善レ醫、先二一一一、而後二針藥一」
【寢殿】シンデン 〇おたまや。宋書、禮志「無レ封無レ樹、無二立一一一」＝寢廟。〇ねもてざしき。＝正寢。
【寢殿造】シンデンづくり 國中古時代、貴族の家屋のつくりかたの名。
【寢病】シンビョウ 病にていぬる。後漢書、宋均傳「宋均常一レ一、百姓者老爲二請一」＝臥病。
【寢兵】シンヘイ 兵事をやめる。老子「一一之說勝、則險阻不レ守」
【寢廟】シンビョウ おたまや。古、宗廟の制、前を廟といひ、後を寢といふ。禮記「先廟二一一一」＝寢殿。
【寢門】シンモン おもてざしきのていりぐち。禮記「客至二于一一一、則主人請入爲レ席、然後出迎レ客」
【寢陋】シンロウ 短小にしてみにくし。唐書、鄭注傳「貌一一不レ能二遽親一」＝侏儒。
【寢首】シンシュ 國寢てゐる人を不意に斬りて取りし首。
【寢棺】シンカン 國屍體を橫臥せるまま收むる樣に造りし棺。

【寧】ネイ 青

〇やすし、やすらか、やすんず（安）「安一」「康一」「清一」〇さとがへり、嫁せし女子が父母の見舞に生家へかへる「歸一」〇むしろ、其れよりはいっそ、どちらかといへば。〇願ふことば無一とも連用す、同じ。〇いかんぞ、いづくんぞ、否定の意をあらはす反語。史、陸賈傳「居馬上得之、一可下以馬上治之乎」〇かつて（曾）〇丁一はねんごろ（諄復）くりかへしていひきかせる。＝㊀叮嚀。

同訓異語 寧・無寧・無乃 〇寧はいっそと譯し、安也と註す、二つの物を比べて、それよりは、これに寧んぜんとの義なり。論語に「禮與二其奢一也、寧儉」とある如し。〇無寧は寧に、無乎を用へたるなり、論語に「無寧死二於二三子之手一乎」とありて、大全に曰く、無、無字、乎字あり、故に無寧を訓して、寧と爲すべしとあり、かく反語にすれば、意つよくなる、卽ちむしろ云云することなからんやの意にて云云するに還るなり。〇無乃はむしろと訓むも、乃ち何何するなからん乎より轉ぜしなり。論語に「居二簡而行一レ簡、無乃大簡乎」とあるが如し、毋乃に作るも、亦同じ。〇ヤス 寧・安・康・泰等の別は安〈四八二〉の條を見よ。

【寧一】ネイイツ やすんじて心殺がれず。史、曹相國世家「載二其清淨一、民以一一」
【寧殷】ネイイン やすらかにして盛んなり。荀勗文「修二已濟治一、民用一一」
【寧嘉】ネイカ やすらかによし。韓愈文「舉政宜和、人賴一一」
【寧康】ネイカウ やすらか。易林「千柱百堵、終不二傾傾一周家一一」＝安康。康寧。
【寧居】ネイキョ 心をやすんじて居る。史、五帝紀「披二山通一レ道、未二嘗一一一」
【寧遑】ネイクワウ いづくんぞ。史、張儀傳「蘇君在、儀一一能乎」＝寧遐。
【寧利】ネイリ やすくやはらぐ。齊書、武帝紀「市朝宴遊、中外一一」
【寧親見】ネイシンケン 寧親は晉・宋の閒の俗語「あのやうな」「如レ此」の意、このやうなすぐれたる見といふ義。晉書、王衍傳「何物老嫗、生二此一一」

然誤二天下蒼生一者、未レ必非二此人一也」轉じて人の子を愛める稱とす。
【寧歲】ネイ　やすらかなるとし。國語「自二子之行一、晉無二一―一」
【寧靜】ネイ　やすんじすくふ。魏志、高貴鄉公紀「聖德光隆、一ニ一六合一」
【寧日】ネイ　やすらかなる日。梁武帝文「終無二一一一」
【寧神】ネイ　安心する。次條參看。
【寧親】ネイ　親を安心させる。法言「孝莫レ大二於一レ一、一レ莫レ大二於寧一レ神」
【寧爾】ネイ　安らかにしてしづか。魏志、田疇傳「外胡聞二其威名一、相率來獻、州界一一、百姓懷レ之」
【寧所】ネイ　おちつきてをる所。唐書「天下喝喝、莫レ知二一ニ一一」
【寧處】ネイ　寧所に同じ。左、成六「幸苦勲隆、不レ遑一一一」
【寧靖】ネイ　やすらかに治まる、やすくしづか。晉書、吾彥傳「南州一一」＝寧靜・寧謐。
【寧靜】ネイ　やすらかにしづか。諸葛亮、戒子書「非二一一一、無二以致一遠」＝寧靖。
【寧息】ソク　安らかにやすむ。史、始皇紀「求二其一一一、豈不レ難哉」＝安息。
【寧泰】ネイ　やすらか。梁、昭明太子、七契「六合一一、四宇咸康」＝安泰。
【寧定】ネイ　やすらかに治まる。淮南子「天下一一、百姓和集」＝寧泰。
【寧諡】ヒツ　安らかにして靜か。周書、文帝紀「殷所二以乘拱九載一、實資二元輔之力一、俾二九服一一一、誠賴二嘉賛之功一」＝寧靜。
【寧民】ミン　民を安寧にする。周禮、小宰「二曰敎職、以安二邦國一、以寧二萬民一、以懷二賓客一」＝寧人。
【寧樂】ラク　〇心を安んじたのしむ。易經、疏「此是一一之時」〇㊀國地名、奈良に同じ。
【寧王】ワウ　天下をやすんずる王。晉、大鵬「一一遭二我大資幾一」ここは文王を指していふ。
【寧可二玉碎一何能瓦全】ナンゾタマトシテクダケンモイカデカカワラトシテマタカラン　玉となりて碎くべきも、瓦となりて生存せずとの義。北齊書、元景安傳「世說「寧爲二蘭摧玉折一、不レ作二蕭敷艾榮一」」
【寧爲二雞口一勿レ爲二牛後一】ムシロケイコウトナルトモゴギュウトナルコトナカレ　大いなる者の後につくよりは、小なる者の頭となれとの義。史、蘇秦傳「鄙諺曰、――、今西面交レ臂而臣二事秦一、何異二於牛後一乎」
【寧可下以馬上治之乎】ソモソモイカデカウマノウヘニテコレヲオサムベケンヤ　豈何とて馬上に在りて天下を治むることを得んやとの意。史、陸賈傳「陸生時時前說誦二詩書一、高帝罵レ之曰、迺公居二馬上一而得レ之、安事二詩書一、陸生曰、居二馬上一得レ之、――」

【寞】バク　藥

さびし(寂)しづか(閑)しんとして聲なし「寂ー」「索ー」「落ー」【寞寞】バクバク　靜かなる貌。＝寂寞・寂寥。

【窿】リュウ　東

天の形。＝穹。

【寥】レウ　蕭

〇さびし(寂)「寂ー」〇しづか(靜)「ー一」「廓ー」〇むなし(空虛)〇ほがらか(廓)「廓ー」〇まれ(稀)
【寥廓】レウクワク　ほがらかにして大いなり。廓は大。又、おほぞら(虛空)楚辭、遠遊「上ー一而無レ天」
【寥闊】レウクワツ　ものさびし。杜甫詩「大雅何ー一、斯人衛典刑」＝寂漠・寂寞。
【寥落】レウラク　ものさびしくむなし、餘は空。張衡詩「發軫正ー一」
【寥閒】レウカン　しづかにひっそりとする。閑は沈靜。杜甫詩「人閒夜ー一」
【寥落】レウラク　靜かにしてむなし。謝朓詩「曉星正ー一」
【寥戾】レウレイ　聲の清く遠き貌。謝朓詩「ー一清笳轉、蕭條邊馬鳴」
【寥寥】レウレウ　さびしき貌。又、空虛なる貌。潘岳、寡婦賦「仰二神宇之ー一」＝寥乎・寂寥。

十二畫

【寬】クヮン　寒

〇ひろし、心が廣い、家屋がひろい、ゆったりとして餘地がある。ゆるやか。嚴の對。ゆるし、ゆるくす(緩)ゆるめる。〇ゆるす(宥)手やはらかにする、ゆたか(胖裕)〇いつくしむ(慈)〇めぐむ(仁)

同訓異字　シヨ　寬・廣・博・闊・弘・汎の別は廣(广部十二畫)の條を見よ。〇ユタ寬・豐・饒・裕・優・胖の別は豐(豆部十一畫)の條を見よ。
【寬易】クヮンイ　心ゆったりとしておだやか。歐陽修文「公、爲レ人質重寬易」
【寬雅】クヮンガ　ゆったりとしてみやびやか。南史、沈文季傳「以ニ一一見レ知」
【寬宏】クヮンカウ　心ゆるやかにひろし。＝寬弘。
【寬閑】クヮンカン　ひろくしてのどか。韓愈、答二崔斯立一書「耕ニ一一之野一」
【寬簡】クヮンカン　心寬大にして、事を簡略にする。晉書、嵇康傳「天質自然、恬靜寡慾、含レ垢匿レ瑕、一一有二大量一」
【寬緩】クヮンクヮン　ゆるやか。史、李廣傳「一一不レ苛」＝寬舒・寬緩。
【寬刑】クヮンケイ　しおきをゆるやかにする。又、ゆるき法律。國語「修レ令一レ一、施二民所レ欲、去二民所レ惡一」
【寬緩】クヮンクヮン　ゆるやかなること、きびしきと。宋史「法可レ謂ニ一一適中一」
【寬弘】クヮンクヮウ　心ゆったりとひろし。晉書、庾季才傳「局量一一、衛瓘優博」

【寬厚】クワンコウ ゆったりとしてあつし。
【寬容】クワンヨウ ひろきと、せまきと。李商隱詩「衣帶無レ情有二ニ一」
【寬仁】クワンジン 心ひろくあはれみふかし。史、高祖紀「一一而愛レ人喜レ施」
【寬紓】クワンシヤ ゆるす。史記「上以二親故一常一二之一」＝寬免・寬宥。
【寬敞】クワンチヤウ ひろくほがらか。後漢書、劉毅傳「府寺一一、輿服光麗」
【寬詳】クワンシヤウ ゆるやかにしてつまびらか。後漢書、陳忠傳「用心務在二一一」
【寬綽】クワンシヤク 心ゆるやかに、迫らず。詩經「寬兮綽兮」綽もゆるやか。晉書、宣帝紀「性一一、以能容」＝寬裕。
【寬恕】クワンジヨ 心廣く思ひやりあり。後漢書、魏霸傳「以二謂梓一一爲レ政」
【寬舒】クワンシユ ゆるやか。管子「一一而仁、簡樂二其身一」＝寬緩。
【寬整】クワンセイ ひろくしてととのふ。宋史、汪綱傳「創二營千餘間一一一堅密、增二盜甲兵一威聲赫然」
【寬靜】クワンセイ ゆるやかにしてしづか。禮記「寬而靜、柔而正者、宜二歌頌一」宋史、呂蒙正傳「蒙正至洛、政尙二一一一」
【寬饒】クワンゼウ ゆたか。田況、內帑策「下民一一、大計益給」
【寬疏】クワンソ ゆるやかにして法律があらい。「禁網一一」
【寬大】クワンダイ 〇心ゆるやかに大いなり。漢書、丙吉傳「一一好二禮讓一」＝寬裕。〇手やはらかにする「一一の處分」
【寬大長者】クワンダイチヤウジヤ 度量廣くして、德のすぐれたる人。漢書、高帝紀「沛公素一一」
【寬待】クワンタイ ゆるやかにもてなす。
【寬貸】クワンタイ 刑罰をゆるやかにする。宋史、郭忠孝傳「歲起二大獄一、忠孝活二其首一、餘悉一一」
【寬典】クワンテン ゆるやかなるおきて。唐書、雖レ存二一一、而犯者漸少」
【寬而栗】クワンジリツ 外ゆるやかにして內にきびしき所ある義「書、舜典」
【寬平】クワンペイ ゆるやかにして、えこひいきなし。唐書、刑法志「治以二一一、民樂二其安一」＝寬仁公平。
【寬網】クワンマウ 法律をゆるやかにす。又、ゆるやかなる法律。晉書「時泰則一レ一以將レ化」
【寬猛相濟】クワンマウアヒスクハ ゆるやかなると、たけきと互に其の弊をすくひて、中正を得る。左、昭二十「寬以濟レ猛、猛以濟レ寬、政是以和」
【寬免】クワンメン 〇課をゆるす。元史「大德九年、下二一一之令一」＝免刑。〇租稅をゆるくす。
【寬裕】クワンユウ 心ひろくゆるやか。禮記「敬愼者仁之地也、一一者仁之作也」
【寬容】クワンヨウ 心廣くして能く衆をいれる。韓詩外傳「德行一一、而守レ之以レ恭」

【審】シン 寢

〇つまびらか（詳）くはし、明細、つくす（悉）「詳一」「覆一」「明一」「精一」〇あきらか（明）〇きはめる（熟究）ただす（正）罪をしらべただす「一判」〇きっと、果して、決定の意をあらはす助詞「一如此」の類。
【審交之詩】シンカウシ 人に交際するには、審に其の人物を擇ぶ可きをいへる詩。唐の孟郊の作、詩に曰く「種レ樹須レ擇レ地、惡土變二木根一、結レ交若失レ人、中道生二誘言一、君子芳桂性、春澗寒更繁、小人摧花心、朝在暮不レ存、莫レ踐二冬冰堅一、中有二潛浪翻一、惟當金石交、可下與二賢達一論上」
【審覈】シンカク つまびらかにとりただす。覈は考へしらべる。後漢書「研レ機綜レ微、靡レ不二一一」
【審議】シンギ 十分にくはしく評議する。「一一討論」宋史「大常寺博士、掌レ講二定五禮儀式一、有二改革一則擬レ經一一」
【審求】シンキウ つまびらかにさがす。蔡邕文「一一唐衆、其要者莫レ大二於月令一」
【審査】シンサ つまびらかにとりしらべる「一一員」＝精査。
【審察】シンサツ あきらかにしらべみる。說苑「耳目聰明、愚慮一一」
【審詳】シンシヤウ つまびらか。禮記「君子審レ禮、不レ可レ踰以二審詳一」疏「言君子之人、若能一一於禮一則審詳自歸、不レ可二踰閇一」
【審處】シンシヨ つまびらかにとりさばく。處は處置・處理の義。史、管仲連傳「故定レ計一一之一」
【審正】シンセイ つまびらかにしてただしい。北史「容貌魁偉、風度一一」
【審度】シンタク つまびらかにはかる。錢翊文「承レ命以來、通宵一一」＝審料。
【審端】シンタン つまびらかにただす「禮記」
【審定】シンテイ つまびらかにしらべて定める、詳審して鑑定する義「論衡」
【審諦】シンテイ あきらか。禮記「制度一一、道德著明」
【審判】シンパン つまびらかに是非曲直をさばく。審問して判斷する「一一官」
【審美學】シンビガク 美の本質を研究する科學。＝美學。
【審問】シンモン くはしく問ひきはむ。中庸「博學レ之、一一之」
【審理】シンリ つまびらかにとりしらべる。金史「一一寃獄」＝審處。
【審料】シンレウ つまびらかにはかる。後漢書「一一成敗」＝審度。

【寫】シヤ 馬

〇うつす「謄一」原本の通りにうつす「描一」「摸一」〇のぞく

（除）詩、邶風「焉言出遊、以ー我憂」つくす（盡）かたむく（傾）〇もらす（洩）そそぐ、今、瀉に作る。〇よねる（放效）摹畫する。〇像を鑄る。越語「以ー良金」ー范蠡之狀」

【同訓異語】ハツ寫・摹・描・臨〇寫は、うつすとよみ、うつるとは訓まず、寫ル字の類。〇摹はまねて寫すこと、摹倣・摹寫と連用す。〇描はうつし畫なり、摹よりは輕し。〇臨はそのまま書き取る義、說文に、臨は之を移寫するを謂ふとあり。

【寫意】イシヤ 畫法の一派、形似を求めずして其の精神を寫す。

【寫字】シヤジ 文字をかきうつす「ー生」

【寫實派】シヤジツハ 實際の狀態を其のまま寫し出す文學上の一派。

【寫眞】シヤシン 〇肖像を畫きうつす。盛情集「久之成ル疾、ー レー相苦」杜甫詩「每ル逢ニ佳士一必ーレー」〇圖寫眞機にて形像をうつす。‖圖照相。

【寫神】シヤシン 人の風神を寫す。輕耕錄「錢塘陳鑑如以ニー一、見レ推ニ一時ニ」

【寫象】シヤシヤウ 心理學にて客觀が主觀に知覺せられて心に映じたるもの。

【寫書】シヤシヨ ほんをうつす。漢書、藝文志「置ニー一之官ニ」

【寫生】シヤセイ 實物のままをうつす。徐氏筆精「倪元璐題、始喜ニー一、販ニ畫家蹊徑ニ」

【寫照】シヤセウ 肖像をうつす。畫像をいふ。晉書、顧愷之傳「傳神ー一、正在ニ阿堵中ニ」

【寫本】シヤホン うつしたる書物。印本・版本の對。大學衍義補「唐以前書籍皆ー一、人以ニ繕書ニ爲レ貴」

【寮】レウ 十二畫 宵

〇つかさ（官吏・官僚）通じて僚に作る。〇ともがら（同官・同僚）〇こまど（小窗）轉じて、小さき家「茶ー」陸游詩「屋窄似ニ僧ー」

【寮佐】レウサ したやく（下官）屬官。晉書「鍾會反、ー一皆遇レ害」‖僚佐

【寮屬】レウゾク 屬官。吳志「接ニ待ー一」

十三畫

【寰】クヮン 刪

〇古、封建時代に天子の封畿内の縣。轉じて境域の大いなるものをいふ。天地、天下などの義とす「ー宇」〇場處、一區域をなせる處「仙ー」「區ー」〇官殿の周垣「ー內」「肆ー」

【寰宇】クヮンウ せかい。天下、天地の間。史「駕振ニー一、澤流ニ遐裔ニ」‖圖寰球

【寰瀛】クヮンエイ 天地のかぎり。王勃、拜ニ南郊ニ頌「思周ニ宇宙ニ、樂極ニー一ニ」

【寰內】クヮンナイ 天子の領土全體。天子の畿內。穀梁、隱、元「ー一諸侯」注「寰卽古縣字」

十六畫

【寵】チヨウ 腫

〇めぐみ、めぐむ（恩）いつくしみ、君主の愛「君ー」いつくしむ（愛）「ー愛」「恩ー」「隆ー」「優ー」「榮ー」〇たゝとくさかゆ（尊榮）易、師卦「承ニ天ー一也」〇君主のお氣に入り、おもひもの、俗に妾の義とす「納ー」「內ー」「嬖ー」

【寵愛】チヨウアイ いつくしみ愛する。漢書、董賢傳「ー一日甚」‖寵幸。

【寵渥】チヨウアク てあつくめでる。朱子、靜庵雙鶴賦「受ニ乘軒之ー一、釋ニ籠檻之羈縻ニ」

【寵異】チヨウイ 衆に異にして特別にめでいつくしむ。左傳、注「爲立ニ別號一、所ニ以ー一ニ之也」

【啓レ寵納レ侮】ケイチヨウノウブ 人を寵することに過ぐれば反りて侮をいるるに至る。書、說命「無ニ啓レ寵納レ侮」

【寵幸】チヨウカウ 特に愛せられる。‖寵愛。

【寵姬】チヨウキ 君主のお氣にいりのをんな、おもひもの。

【寵脫】チヨウダツ 愛して物をたまはる。又、其のくだされもの。

【寵過】チヨウクワ てあつきもてなし。後漢書、黃香傳「ー一甚盛、識者譏ニ其過ニ俸」‖恩過。

【寵光】チヨウクワウ 君のあつきみめぐみ。君を天日に比して光といふ。韓愈文「陛下不レ加ニ罪責一、更施ニー一ニ」

【寵顧】チヨウコ 目をかけて愛する。宋史、張洎傳「洎與ニ錢若水一同在ニ翰林一、甚被ニー一ニ」

【寵厚】チヨウコウ 特別にあつく愛せらるる。晉書「受レ遇三世、恩隆ー一」

【寵兒】チヨウジ 特別に愛せらるる子。又、仕合よき人。‖寵子。

【寵賜】チヨウシ 寵錫に同じ。

【寵獎】チヨウシヤウ 特別にめでてほめすすめられる。元稹、同州刺史謝表「陛下察ニ臣無罪一、ー一逾深」

【寵尋】チヨウジン めでられてさかえると、そしりはづかしめらるると。老子「ー一者驚」

【寵辱皆忘】チヨウジヨクカイバウ 已の寵榮も恥辱も皆忘れて心に懸けず。范仲淹、岳陽樓記「登斯樓一也、則有ニ心曠神怡、ー一、把レ酒臨レ風、其喜洋洋者ー矣」

【寵秩】チヨウチツ いつくしみやすんずる。書、泰誓「惟其克相ニ上帝一、ー一四方ニ」

【寵招】チヨウセウ 特別のいつくしみある招待。

【寵錫】チヨウシヤク 愛して物を賜ふ。又、其のくだされもの。張九齡詩「ー一從ニ

仙蔡」‖寵妃。
【寵姜】チョウキョウ　氣に入りのめかけ。史記「景公ー―高姬」
【寵擢】チョウタク　特別に愛してぬき用ふる。白居易文「自惟賤陋、非次ー―、夙夜腆慚」‖寵抜。
【寵秩】チョウチツ　特に愛して官職をさづける。魏史、杜恕傳「陛下復以二冀州一ー二ー呂昭一」
【寵抜】チョウバツ　特別に愛してぬき用ふる。元史、燕鐵木兒傳「受二武宗一ー之恩一」
【寵嬖】チョウヘイ　お氣に入りの身分ひくきけらい。
【寵命】チョウメイ　天子のいつくしみあるおぼしめしの李密、陳情表「ー―優渥」‖恩命。

【寶】寶（次條）の俗字。

十七畫

【寶】ホウ　皓

〇たから、金銀珠玉の如く珍らしく貴ぶべき者「七ー」「珍ー」「財ー」「祕ー」「重ー」「家ー」「國ー」〇たっとし、たっとぶ（貴）愛重する。書、旅獒「所ー維賢」〇おもんず、おもし（重）〇古、天子諸侯の爵位、領土のしるしに玉を用ひしにより て、しるし、おして（符璽）の義とす。〇錢幣をいふ「通ー」〇天子のことにいふ「ー算」は天子の御齢。
【寶愛】ホウアイ　大切にする。後漢書、杜林傳「得二梁孝古文尚書一卷一常ー二ー之一」
【寶鴨】ホウアフ　すぐれてよき香爐。孫紡、夜坐詩「坐久姮娥ー一香」酒確類書「金猊、寶鼎・ー一金兎、皆焚レ香器也」
【寶位】ホウイ　たかみくら、天子の位。易、繫辭「聖人之大寶曰レ位、何以守レ位、曰仁」
【寶駕】ホウガ　天子のおのりもの。大駕、乘輿。
【寶戒】ホウカイ　たふときいましめ。傳燈錄「白樂天久參二佛光一、得二心法一、常以二大乘金剛ー一」
【寶號】ホウガウ　㊀人の店舗の敬稱、貴店。
【寶器】ホウキ　たからもの。史記「晉軍道レ齊至二馬陵一、齊侯請以ニー一、謝不レ聽」
【寶琴】ホウキン　たふときこと。西京雜記「趙后有ニー一、曰二鳳凰一」
【寶鏡】ホウキャウ　たふときかがみ。李白詩「ー似二空水一、落花如二風吹一」
【寶冠】ホウクワン　〇寶玉にて飾りし冠。〇㊀天子が祭の儀式に著けらるる御冠。
【寶冠章】ホウクワンシャウ　㊀國家に功勞ある人に與へられる勳章。八等に分つ、中央に寶冠の形をあらはす。
【寶偶】ホウグウ　佛家の詩句の敬稱。法苑珠林「朝宮ニー一、夕出二苦海一」
【寶玦】ホウケツ　たふとき男子のおびだま。玦は環の少しく缺けたるもの。杜甫詩「扈下ー一青瑯玕」
【寶蓋】ホウガイ　たふときはこ。徐陵文「漢委二珠襲一、秦七ニー一」
【寶劍】ホウケン　たからのつるぎ。孟浩然詩「遊人五陵去、ー一直千金」
【寶庫】ホウコ　寶物ぐら。寶藏、應詔詩「微火不レ戒、延二我ー一」‖寶藏。
【寶座】ホウザ　〇天子のいます所。高御座（タカミクラ）。梁簡文帝文「寘我ー一、郁郁名香」〇㊀佛の座をいふ。
【寶鈿】ホウデン　たふときかんざし。梁嘉文「今致ニー一雙二假值千金」
【寶藏院流】ホウゾウインリウ　㊀槍術の一派、奈良興福寺の寶藏院の僧、胤榮のはじめしもの。
【寶刹】ホウサツ　てらの敬稱。刹は寺塔。白居易詩「晚登西ー一、晴望東精舍」‖寶坊。
【寶山】ホウザン　珍らしきたからを産する山。次條參看。
【入二寶山一空手歸】ホウザンニュウクウシュキ　多く得べき所に至りながら、何物をも得ざる能はざる喩。正法念經「閻羅王爲レ人說レ偈云、汝得二人身一不レ修レ道、如ニー――一」
【寶算】ホウサン　天子のおんとし。徐彦伯、應制詩「五龍歸ニー一、九扈叶二時廐一」‖聖壽。
【寶璽】ホウジ　たふとき天子の印章。宋史「學士院上ニー一、靈光殿賦樂章二」
【寶笈】ホウキフ　たふときこと。何遜詩「羅幅雀紋影、ー一鳳雛聲」‖寶琴。
【寶生】ホウシャウ　㊀能樂ヒの流派の一、觀世の支族、世阿彌より始まる。‖保生。
【寶珠】ホウシュ　たふときたま。維摩經「譬如下不レ下二巨海一、不レ能レ得二無價一ー一」
【寶瑞】ホウズイ　めでたきしるし。梁簡文帝文「嘉祥寶瑞、ー一咸委」
【寶星】ホウセイ　㊀勳章。
【寶石】ホウセキ　たふとく珍らしき石。金剛石・剛玉石の類。五雜俎「珠璣、木蜜、夷國名、其地產ニー一」
【寶惜】ホウセキ　をしみて大切にする。尚書、旅獒「太宗酷好二法書一、ー一者瑪瑙玉爲レ最」
【寶前】ホウゼン　㊀神佛のおんまへ。
【寶扇】ホウセン　寶石にて飾れる美なるあふぎ。陳集詩「翠蓋重重ー一影」
【寶祚】ホウソ　天子のくらゐ。周書、宣帝紀「脫以二眇身一祇承ニー一」
【寶帶】ホウタイ　珍らしき寶玉にて飾りし帶。唐書、錦袍ー一」
【寶塔】ホウタフ　寺のたふの敬稱。僧氏通幽「夜投二鬼神一、碎二七寶末一、造二八萬四千ー一」
【寶地】ホウチ　〇すぐれてよき地。論衡

「獻二其一一」〇佛を安置せる地。王勃文「香城一一、左右林泉」‖佛地。

【資持】ヂ　大切にたもつ。魏文帝文「不レ逢二不若一、永世一一」

【資珍】ヂン　たふときたま。戰國策「一一隋珠、不レ知レ佩レ分」

【資財】ヂザイ　たふときかなへ。史記「黃帝作二一一一、象二天地人一」

【資典】ヂン　最も珍重すべき書物。

【資殿】ヂン　金玉をちりばめたる殿舍。顏子眞詩「金蘭盈二一一一」

【資馬】バ　すぐれし名馬。史、大宛傳「貳子馬宛一一也」

【資馬香車】バカウシヤ　すぐれて立派なる馬や車。沈佺期詩「一一滿消濱、紅桃碧柳峽堂春」

【資貝】バイ　珍らしき貝類（木華、海賦）轉じて廣く物の珍貴なる者の稱とす。

【資煤】バイ　たふとき墨。　劉仲尹詩「一一香散鳳銜空」

【資坊】バウ　寺の敬稱、坊は僧舍。雞跖集「給孤長者、以二黃金一布レ地、爲二伽藍一、故號二一一一一」‖資刹。

【資符】フ　たふときおふだ、すぐれて貴き神符。史、趙世家「吾藏二一一一于常山上一」

【資質】シツ　たふときたま。戰國策「敝邑有二一一一一寶、文馬二駟一、誘致二之先生一」

【資命】メイ　天の命令。書經「無墜二天之降二一一一」

【資物】ブツ　たからもの（漢書、酷吏成宣傳）

【資用】ヨウ　大切に用ふる。史記「白金稍賤、民不二一一一」

【資櫚】ロ　うつくしきてすり。陳旅詩「桂樹吹レ香出二一一一」

【資引】インヒキ　圖正月に行ふ遊戲の一、くじを引きあてるあそび。

【資船】フナ　圖正月二日の夜、枕の下にしきて吉夢をいのる船の圖。

寸部

【寸】スン　圖

〇尺度の稱、一尺の十分の一。〇すこし、僅少の義とす「一陰」「一志」「一鐵」「一滴」〇方一は心をいふ。

【寸意】イ　いささかのこころざし。齊諧記「丹心一一、愁二君未レ知」‖寸志。

【寸陰】イン　すこしの時間。淮南子「聖人不レ貴二尺之璧一、而重二寸之陰一」晉書、陶侃傳「大禹聖者、乃惜二一一一一、至下衆人一、當レ惜二分陰一」

【寸以信レ尺】センヲモツテシヤクヲシンズ　小利を捨てて大利を得る義、誠は屈、信は伸。文心雕龍「一一、枉レ尺以直レ尋、棄二偏善之巧一、學二眞美之績一」

【寸暇】カ　すこしのひま。戰國策「敝邑有二一一一一寶、文馬二駟一、誘致二之先生一」

【寸縑】ケン　すこしのすきま。何先文「譬二彼長堤一、一一必塞」‖寸隙。

【寸簡】カン　みじかきてがみ。簡は書札。‖寸楮・寸書。

【寸幹】カン　わづかのひかげ。潘尼詩「一一難レ資、豈無二瓊瑤一」‖短幹・寸陰。

【寸隙】ゲキ　すこしのひま。薛稷詩「長途有二千慮一、勞生無二一一一」‖寸暇。

【寸刻】コク　わづかの時。‖寸時。

【寸志】シ　わづかなるこころざし。梁簡文帝文「慊慊一一」‖微志・寸心。

【寸紙】シ　わづかのかみ。北堂書鈔「善レ書一一不レ遺」

【寸絲】シ　すこしばかりのいと。傳燈錄「一一不レ掛」

【寸心】シン　心をいふ。杜甫詩「文章千古事、得失一一知」‖方寸。

【寸進尺退】センシンシヤクタイ　得る所少くして失ふ所多し。韓愈、上二李侍御一書「一一、卒無レ所レ成」老子「不二敢進一レ寸而退一レ尺」

【寸謝】シヤ　すこしばかりのお禮。‖薄謝・非儀ヒ

【寸攜尺取】センケイシヤクシユ　すこしづつかすめとる。

【寸寸】スンスン　〇ずたずたに。晉書「一一毀裂」〇少しづつ。唐太宗詩「舉籌漸漸落、溪險一一生」〇一寸毎に。漢書、枚乘傳「一一而度レ之、至レ丈必過」

【寸誠】セイ　わづかばかりのまこと、己のまごころを謙していふ。韓愈詩「終年抱二一一一」‖微衷。

【寸善尺魔】センゼンシヤクマ　世の中の狀態は善事すくなくして惡事おほし。

【寸斷】ダン　寸裂に同じ。

【寸地】チ　すこしの土地。杜甫詩「一一尺天皆入レ貢」‖尺寸地。

【寸楮】チヨ　みじかきてがみ。‖寸簡・寸書。

【寸鐵殺レ人】スンテツヒトヲコロス　一寸許の刃物にて人を殺す、簡短なる警句にて、深く人を感ぜしむる喩。鶴林玉露「曾子之守レ約、——者也」

【寸田】デン　〇すこしの田地。〇心に喩ふ。方寸の田地の義。蘇軾詩「一一無二荊棘一、佳處正在レ玆」

【寸田尺宅】センデンシヤクタク　すこしの財産。蘇軾詩「——今漸耕」

【寸土】ド　わづかなる地。宋史「民勤二耕作一、無二一一之曠一」‖寸地。

【寸膽】タン　寸簡に同じ。膽は書札。

【寸馬豆人】スンバトウジン　畫中の遠景の人物の形容。荊浩、畫山水賦「凡畫二山水一、意在二雄先一、丈山尺樹、——、遠人無レ目、遠樹無レ枝、遠山無レ頭、雖レ似レ眉、遠水無レ波、高與二雲齊一、此其訣也」

【寸白蟲】スンパクチユウ　人の小腸中に寄生し、養料を吸收して人をして衰弱せしむる蟲の名。‖條蟲ジヨウチユウ

【寸法】パフ　圖長短の度合。

【寸碧】スンペキ　すこしばかりのみどり。幹

態詩「遥見出二一一一、遠目将二愛明一」【寸歩】ホン すこしばかりのあゆみ。韓愈文「一一不レ能二自致一」【寸相】ホン わづかなるおぎなひ。范傳詩「緑食無二一一一」【寸鉄殺レ人】シンテツヒトヲコロス 一寸一銖のわづかなるものをもはかる、極めて微細なる事までしらべる。【寸縑】ホン わづかのいとすぢ。元好問詩「室人貧中無二一一、一箭秋猟課二諸女一」‖寸絲。【寸裂】ホン ずたずたにさく。抱朴子「一一之錦繍、未レ若二粲完之常布一」‖寸断。【寸禄】ホン わづかの俸祿。晉書「妻子不レ沾二一一一」‖薄祿。

三畫

【寺】ジ 實

○やくしょ(官廳)唐書、百官表「後魏以来、卿名雖仍レ舊、而所レ掌之局、謂之一、因名二九一」「大理一」「太常一」「鴻臚一」○てら(精舎・梵刹・伽藍)後漢の明帝の時、攝摩騰西域より佛經を白馬に駄して持ち來りしを、鴻臚一におきて遂に一の名を取りて白馬一を創立せしより、遂に浮屠の居る所を皆一と云ふに至れり「一院」「山一」「蕭一」○後宮ホウの事を掌る者。一は侍、近侍の義(官名)「一人」「宦一」「閹一」【寺院】ホン てら(唐書、高僧傳)【寺格】カク てらのくらゐ、寺院の格式。【寺観】カン 寺と道觀(道士の居所)と。魏書、釋老志「表二脩一一」【寺家】ケ 寺中に在る弟子僧の住する家。唐書、高僧傳「乃命二一一」【寺人】ジ 後宮の事を掌る小吏。周禮、天官「一一掌二王之内人及女官之戒令一」‖宦官。【寺社】シャ てらと、やしろと、神社佛閣。‖社寺。【寺社奉行】ブギャウ 國徳川時代の三奉行の一、神社佛寺に關する事のとりしまりをする役人。【寺署】ショ やくしょ。後漢書、蔡邕傳「遠則門垣、近在二一一一」‖官衙。【寺塔】トウ 寺の塔。唐書、五行志「太和八年六月癸未、暴風壞二長安縣署及經行一一」【寺子屋】テラコヤ 國昔時、町人などの兒童に讀書・算術・習字などを教へし私塾。

六畫

【封】ホウ 多

○さかひ(境・疆)境界を定める爲めに土を高く盛りしもの「一境」○諸侯の領地(食邑・采地)「提一」領地を與へて諸侯とする。○土を盛る、もりづち。古、山又は天を祭る爲めに設けたる盛土。○大いなり。○富みて厚し「素一」○とづ(閉)ふさぐ、ふうじる(緘)「一鎖」「嚴一」○ふみ(書翰・上奏文)「一書」「一事」○蟻一はありづか。【封域】ホウイキ 封界に同じ。史記「諸侯各守二其一一」【封印】フウイン 開封を防ぐ爲め、ふうじめに押すいんぎょう。世説、德行「東至二瓦濠一、於二梁上一得レ絲、已數年、塵埃一一如レ故」【封界】カイ 土をもりあげて國界とする。杜甫文「所レ守一一、接二連梓州一」‖封境・封域。【封家姨】カイ 風の神の異名(傳異記)【封緘】フウカン 手紙をふうじる「一一葉書」【封圻】キ 帝都の四方千里の地、圻・畿通ず。逸逸詩「一一洽海合、鄙市窮湖明」‖封畿。【封豕修蛇】シンダ 封豕長蛇に同じ。淮南、脩務「吳爲二一一一、猶二食上國一」【封境】キャウ 封界に同じ。‖封疆。【封疆之臣】ノシンシ 國境を守る臣。禮、樂記「思レ死二封疆一之臣」【封洫】ホクヒ 田間のみぞ。左傳、田有二一一「廬井有レ伍」【封君】クン 諸侯に封ぜられし君。五雜俎「與二富富擬一一一」【封逗】トウ ふうじてかへす。【封穴】ケツ 蟻の塔のあな、蟻垤の口。【封建】ケン 天子が土地を分ち、建てて諸侯とする制。左、僖二「周之有二懿徳一也、猶曰レ莫レ如二兄弟一、故一一一之一」唐の柳宗元に一一論あり。【封建制度】セイド 天子の下に多くの諸侯が土地を領して、各自政治を行ふ組織。郡縣制度の對。【封侯】コウ 諸侯に封ずる。封ぜられし諸侯。後漢書、梁統傳「大丈夫生當二一一死當二劇食一」【封侯骨】コツ 大名に封ぜられる骨相。漢書、程方進傳「有一一一當レ以二經術一進」【封鎖】サ ○ふうじとざす。歐陽修、論二史館日曆一表「封二親入一檻一一」‖閉鎖。○兵力もて敵を圍み、外部との交通を斷つ。【封冊】サク 王侯に封ずるみことのりの書。【封祀】シ 山上にてもり土をして神をまつる。柳宗元文「一一之山、隔成二異域一」‖封禪。【封事】フウジ 密封して上る上書。後書、霍光傳「上令二吏民得レ奏二一一一」‖封章。

【封豕長蛇】ホウシチヤウダ　欲ふかき惡人に喩ふ。封は大なり。左、定四「吳含二――一以荐二食上國一」

【封人】ホウジン　封域を掌る官。左、隱元「潁考叔爲二潁谷一――一」

【封畛】ホウシン　田のあぜ。蘇轍文「濮水堅廬、――相望」

【封章】ホウシヤウ　封事に同じ。揮麈餘話「――――於朝」

【封殖】ホウシヨク　つちかひやしなふ。又、國力を養ひて富強にする。越語「二十――越國一」

【封守】ホウシユ　境界のまもり。書、畢命「申畫二郊圻一、慎固二――一、以康二四海一」

【封授】ホウジユ　土地を封じ官をさづく。晉書「王侯以下皆徙二于長安一――有レ差」

【封樹】ホウジユ　土を高く盛りたるかこひ。樹は牆。後漢書、馬援傳「修二――一、起二祠堂一」

【封植】ホウシヨク　界に土をもりてしるしとする。諸侯に封ずる義。晉綱、六代論「漢鑒二秦之失一、――二子弟一」‖封建。

【封禪】ホウゼン　封は土をもり壇をつくりて天を祭る、禪は地を除ひて山川を祭る。管子「封二泰山一、禪二梁父一者、七十二家」史記に――者の篇あり。

【封疏】ホウソ　ふうじて奉る上奏文。宋史、田錫傳「――凡五十三以上」

【封事】ホウジ　他見を避けん爲めに固くふうじて上書する。又、其の上書。晉書、職官志「――二其姓名一」

【封内】ホウダイ　領分内。史、商君傳「襲二敎――一」

【封套】ホウタウ　ふうづつ、書簡を封ずるふくろ。續事文類聚「鄧二禦啓――一」式」‖封筒。

【封地】ホウチ　諸侯の領地。吳越春秋「吳――百里」‖封土。

【封垤】ホウテツ　ありづか。柳貫詩「微茫一――、欲尋二蓋華一看レ」‖蟻封。

【封土】ホウド　○領地、知行所。漢書「猶受二――一」○高く土をもりたる祭壇。

【封筒】フウトウ　手紙のふくろ。‖封套。

【封拜】ホウハイ　封は地を授ける、拜は官に任ずる、人を大名にする義。

【封彌】フウビ　宋代、試驗官の不公平をふせぐため、受驗者の名を糊ぢにて封じ、暗號を以て答案を出さす。

【封蠟】フウラフ　物のふうじめ、又はびんの口等に塗り氣のぬけざる樣にする一種の樹脂。

【封略】ホウリヤク　領内。左、昭七「――之内、何非二君土一」‖封疆・封域。

【封祿】ホウロク　諸侯のふち。戰國策「飯二――之粟一、而戴二方府之金一」

【封度】ポンド　○英國の通貨の稱。我が十圓程にあたる。又、衡の字を用ふ。○目方の稱。我が百二十一匁餘にあたる。

【尅】七畫

→【剋】(刀部七畫)に同じ。

【射】

(一)シヤ　(二)セキ　(三)ヤ　(四)エキ　(一)(二)の通、吾

(一)弓いる術、古の六藝の一「禮・樂・――・御・書・數」「騎――」「――術」(二)ゆみいる、ねらひてあつ(中)あたる(中)(三)秦の宮名「僕――」○藐姑――は神仙の住めりといふ山の名。(四)いとふ(厭)中唐「別可――思」思は助辭。○無――は十二律の一、陰曆九月に配す。故に九月の異名とす。

【射侯】シヤコウ　○矢のまと。十尺四方ある布、その中に鵠あり。劉克莊詩「瘡塡猶出如二流火一、古壁蜂穿似――」○コウまとを射る義。詩經「終日――レ、不レ出レ正兮」

【射雉】シヤチ　ゆがけ。‖射決。

【射手】シヤシユ　いて、弓又鐵砲をいる者。

【射堠】シヤコウ　あづち。土を築きて、弓を射る的をかくるもの。元史「脫二宋薊山一――開二幕蘇之路一」

【射場】シヤジヤウ　射術を習ふところ。拾遺記「樓下開二――一」

【射的】シヤテキ　○まと。○まとを射る。

【射利】シヤリ　利を得んと望む。晉書「讓むを正とす。唐書「江淮鬻賈――、或時倍レ之」

【射纜】シヤラン　弓にてかりす。史記「李廣、屏二居藍田南山中一――」

【射影】シヤエイ　蜮(ヨク)といふ三足ある怪蟲、水中に在りて沙を含み人の影を射る、射られし者は傷病すといふ。詩、小雅何人斯、注)‖射工・短狐。

【射倖】シヤカウ　まぐれざいはひをめあてとする。

【射工】シヤコウ　いさごむし(蟲)。射影參看。

【射鉤】シヤコウ　おびがねを射る。管子「管遠吾親射二吾人一中レ鉤、今乃用レ之可乎、鮑叔曰、彼爲二其君一動也、君若宥而反レ之、其爲レ君亦猶レ是也」劉琨詩「重耳任二五賢一、小白相二――一」

【射策】シヤサク　經書又は政治の疑義を策に書し、受驗人をして得る所に隨ひて解釋せしむ。漢の世、士を試る一科。漢書、蕭望之傳「以二――甲科一爲レ郎」‖對策。

【射殺】シヤサツ　弓を射て殺す。史、項羽紀

「幅一ニ一之」

【射中】シヤチユウ　いてあてる。史、項羽紀「一一二漢王一」

【射覆】シヤフク　物を盤器の下に置き闇に射て中てしむ（漢書、東方朔傳）

【射干】ヤカン　○ひあふぎ、多年生草、葉は扇を擴げたる如き形をなし、黃赤色の花を著け、黑く小さき實を結ぶ。鳶ばたま。○狐に似たる獸、能く木に登るといふ。‖野干。

【射干玉】ヤカンギヨク　國ひあふぎの實、闇く黑き故、黑髮・夜などの語にかける枕辭として用ふ。

尉 八畫 尸 未 物

㊀おさふ（按）上より下を抑へて正しくす、おす（押）○うかがふ（候）○やすんず（安）○古の司寇の官、姦を除きて良民を安んずる義。轉じて刑獄をつかさどる官「廷一」㊁ひのし（火斗）○一遲は複姓。○國じょう、古の衛門府及び兵衛府の佐の次の官。又、おきな。老翁の稱。

【尉官】ヰクワン　國陸海軍の大・中・少尉の總稱。

【尉繚子】ウツレウシ　一卷、子部の兵家に屬す、周の尉繚撰す。

尋 尋（寸部九畫）の俗字。

將 ㊀シヤウ ㊁シヤウ 蕭陽

㊀おさおさに何何せんとすと、再び返り讀む、事のやがて此くならんとするをあらはす辭「一發」○ほとんど（幾）○はた（抑）上の文意をひるがへす詞、さなくば、屈原、卜居「寧誅鋤草茹以力耕乎、一從大人以成名乎」○かつ（且）詩、小雅「一安一樂」○たすく（助）左、莊二二「鄭伯一王」○やしなふ（養）○ひきゐる（率）○おくる（送）孟、萬章「以君命一之」○うく（承）ささぐ（奉）○おこなふ（行）書、胤征「奉一天罰」○大いなり、さかんなり（壯）○すすむ（進）詩、周頌「日就月一」○したがふ（從）○さる（去）○とる（取）もつ（持）○こふ（請）こひねがふ（冀）○あつまる（集）○ながし（長）○と（與）もって（以）○一一は嚴正なる貌。又、物の聲。㊂兵を率るる人「一帥」「一軍」「一校」「良一」「老一」「勇一」「猛一」「遽一」

同訓熟語　將・正・方・帥等の別は正（正部一畫）の條を見よ。

【將入レ將刈レ旗】ハタヲカルカルヲ　敵將をきり、敵の旗をきり倒す。史、項羽紀「爲二諸君一潛圍、一一、令二諸君知一天亡レ我非一戰之罪一也」

【將レ將擧レ旗】ハタヲアゲル　敵將をきりころして其の旗を拔き取る。李陵文「一一、追レ奔逐レ北」

【將校】シヤウカウ　○軍隊の指揮官。元稹詩「通名參二一一」○國少尉以上の武官。

【將棊】シヤウギ　金將・銀將などの駒を用ひて、盤上に勝敗を爭ひ、王將を屠るを以て勝とする遊戲。‖象棋。

【將軍】シヤウグン　○一軍の總大將。事物紀原「周禮、天子六軍、軍萬二千五百人、其將皆命卿、蓋在レ國稱二大夫一、在レ軍稱二一一一、自二晉獻公一作二三軍一而公將二上軍一故一一之名特出二於此一」○國織守府一一又は征夷大一一の略稱。

【將在レ軍君命有レ所レ不レ受】シヤウアリテハグンニキミノメイモコトヲウケザルトコロアリ　將軍職に臨みては天子の命令に從はざることある義。孫子の語。史記本傳に見ゆ。

【將官】シヤウクワン　國陸海軍の武官、少將以上及同相當官の稱。

【將監】ゾウゲン　國近衞府の判官ジヨウ行等の警衞の又、正月の賭弓の事を掌む。

【將作】シヤウサク　土木建築等を掌る官。史、孝景帝紀「更命二一一少府一爲二一一大匠一」其の役所を一一等といふ（唐書、百官志）

【將指】シヤウシ　手のなかゆび、又、足のおほゆび。左傳「關雎傷二一一一」

【將將】シヤウシヤウ　○嚴正なる貌。詩、大雅「應門一一」○玉の鳴る聲。詩、鄭風「佩玉一一」‖鏘鏘。○一一のやはらぐ貌。詩、周頌「一一厥一一」○能く大將を御する。史、淮陰侯傳「陛下不二能將一兵、而善一一一」

【將相之器】シヤウシヤウノキ　大將とも宰相ともなる器量。晉書、王導傳「此兒容貌志氣、一一也」

【將種】シヤウシユ　將家のちすぢ。史、齊悼惠王世家「臣一一也、請得下以二軍法一行中之」

【將順】シヤウジユン　うけしたがふ。孝經、事君章「一一二其美一匡二救其惡一」

【將帥】シヤウスイ　軍隊をひきゐる者。‖將率・將領。

【將率】シヤウスイ　軍隊をひきゐる大將。率・帥通ず。漢書「如邊境有レ事、左右三人、皆一一也」‖將帥。

【將聖】シヤウセイ　ほとんど聖人に近し、一說に將は大、大聖の義。論、子罕「固天縱レ之一一、又多能也」

【將星隕】シヤウセイオツ　大將の死をいふ。蜀志、諸葛亮傳「諸葛亮病篤、有二大星一、赤而芒、墜二亮營中一、未レ幾亮卒」

【將然言】シヤウゼンゲン　文法の語、動詞の活用の一、未來をあらはすはたらきのことば。

【將息】シヤウソク　體をやしなふ。韓愈、與二

權專一書「一一之道、當三先理二其心一」＝養生。

【爲レ將三世必敗】ナルハカナラズヤブル　大將となること三世に及べば、その子孫は必ず敗北するは先世多殺の報なり。史、王翦傳「王翦之孫王離擊レ趙、客曰、夫——者、何也、以下其所二殺伐一多上矣」

【將無同】ショウムドウ　將に同じきことなからんや、即ち相同じといふ義、四書の阮瞻が王戎より聖人は名教を貴び、老莊は自然を貴ぶ、其の旨の異同をきかれし時、この三字を以て答へしに、王戎が甚だ之を嘆賞せしといふ故事（晉書、阮瞻傳）

【將命】ショウメイ　とりつぎをなす。將は行ふ。論、憲問「爲二命裨諶一、——」相門必有レ將】カナラズアリショウ　將軍の家には必ず將たるべき人材の生るるをいふ。史、孟嘗君傳「——、相門必有レ相」

【將聖】ショウセイ　やしなよの誠苑、貢禹「聖王之子二百姓一也、將レ之養レ之、育レ之長レ之」

【將來】ショウライ　このののち。左傳、序「明二一一之法一」＝後來。

【將領】ショウリョウ　○將帥に同じ。領は統ぶ。陣書、楊玄感傳「陰求二一一」○ひきゐる義。元結詩「老翁八十猶能行、一二一兒孫二行拾レ穗」

【專】セン　先

○もっぱら（壹）もっぱらにす「一一」「精一」○まこと（誠純篤）○わがまま、ほしいままにす（擅）中庸「賤而好二自一」○ひとり（單獨）書、說命「罔下勿阿衡一美有二商一」

【專愛】センアイ　特に其の者のみを愛する。書經文「一二一一官」＝殊愛。

【專意】センイ　心を一事に專らにす。管子「一一一心、守レ職而不レ勞、下之事也」＝專心。

【專有】センユウ　もっぱら一人にて所有す。後漢書、荀爽傳「爲二人之財一猶謂二之盜一、況君子謀取出與乞所レ繫、可レ一二一之二耶」

【專一】センイツ　もっぱら、只管力を一途に專にする。孫子、軍爭「既一一、則勇者不レ得二獨進一、怯者不レ得二獨退一」

【專意】センイ　心を一事に專らにする。＝專一。

【專行】センコウ　ほしいままに行ふ。勝手に事をする。

【專管】センカン　一手にてとりしまる。「一一居留地」

【專決】センケツ　一人にてほしいままにきめる。魏書、「一二朝事」＝專斷。

【專業】センゲフ　專門のしごと。唐書、「律學生以二律令一爲二一一一」

【專攻】センコウ　一事を專門に研究する。韓愈、師說「聞レ道有二先後一、術業有二一一」

【專斷】センダン　ほしいままにころす。孟子「無レ一二一大夫」

【專使】センシ　わざわかひ。＝特使・獨派員。

【專修】センシュウ　わがままにしておごる。東京賦「思二專二其修一以莫中己若上」

【專恣】センシ　ほしいまま。春秋、疏「敎二強臣一以二一一一」＝專橫・專擅。

【專祠】センシ　特に一つの祠を立てて祭る義。清朝の制、民に功德ある者に封號を加へ一一を立つ。

【專修】センシュウ　もっぱら一事を修む。＝專攻。

【專習】センシュウ　專門にまなぶ。宋史、選レ兵一二弓箭一」＝專修・專攻。

【專心】センシン　心を一事に專らにす。孟子「不二一レ一致志、則不レ得也」

【專制】センセイ　ほしいままに事を定める。漢書、文帝紀「立諸呂一爲二王、一擅レ權一レ一」

【專制政治】センセイセイヂ　國家の元首がほしいままに政を行ひて、他の諸種の機關はただ之を執行するに止まるもの。立憲政治の對。

【專精】センセイ　○專一にして純粹。淮南子「陰陽之一一爲二四時一、四時之散精爲二萬物一」○精神を一事に專らにする。後漢書「一レ一務レ本、儒學所レ先」

【專擅】センセン　ほしいままにする。抱朴子「專無二一一、請而後行」＝專恣。

【專屬】センゾク　其れにのみ附き從ふ、つきり「一一俳優」

【專對】センタイ　獨斷にてうけこたへする。論、子路「使二於四方一、不レ能二一一」

【專斷】センダン　己獨りにて事をとりきめる。史、儒林傳「諸侯擅一一不レ報」＝專決・獨斷。

【專橫】センワウ　己の思ふままにする。家語「一一者、事之所二以不一成也」

【專念】センネン　專心に同じ。

【專賣】センバイ　○一手にて品物をうりさばく。○政府が自ら營む一手販賣。

【專賣特許】センバイトクキョ　國發明品等に對して、模造を防ぐために政府が發明者に或期間內の專賣を許す特權。

【專房之寵】センバウノチョウ　女が獨り君主の寵幸を專らにする。晉書、胡貴嬪傳「胡貴嬪名芳、最二專寵一、殆有二一焉」

【專務】センム　ある一つの事を主としてつとめ支配する。又、其の役。

【專務取締役】センムトリシマリヤク　國會社銀行などの取締役中、專ら其の業務を支配するもの。

【專門】センモン　○經書を研究するに或る一種の書を專ら修むる義。漢書、儒林傳「各一一敎授」○後世は經書に限らず、廣く一科の學を專攻するをいふ「一一學校」

【專門學務局】センモンガクムキョク　國文部省の一局、帝國大學及各種の高等學校・

専門學校を管理する役所。【專利】リヤウ　獨りにて利益を占める。周語「榮公好ニ―一」

【尋】　九　畫　ジン　[支]

○たづぬ（繹理）「究ー」「研ー」「精ー」○おとづれる（訪問）「訪ー」「夢中相ー」○さがし求める「搜ー」「探ー」○きゝただす「ー問」○ついで、もとありし事の跡をつきてする。宋書、五行志「ー王業、起ニ兵誅ニ王國寶一」○にはかに（俄）つぐ（繼）かさぬ（仍）○もちふる（用）左、僖五「辟ー師焉」○あたたむ、燠に通ず「ー盟」○尺度の名、ひろ、八尺。孟、滕文公「枉ニ尺而直ニ一ー」「千ー」○なみ、つね「ー常」○ながさ（長）

同訓異語　尋・討・原・繹　○尋は筋道にしたがひ、たづね求むる義、尋求と熟す。漢書「講次尋繹」○討はさぐりたづぬる、吟味する義、尋討と熟す。論語「世叔討ニ論之一」○原は源と通ず、みなもとなり、それより轉用して事の根原を尋ぬるに用ふ。易經「原ニ始要ニ終一」○繹は絲口を引き出す義より、轉じて筋道をたづね求むる義とす。

【尋引】インジン　ものさし（尺度）引はものさし。柳宗元、梓人傳「所ニ職ー一規矩繩墨一」

【尋繹】エキジン　事理をたづね研める。

【尋求】キウジン　たづね求める、搜索する。

【尋矩】クジン　のり、法則。唐書「雜俗有ニ一一一」

【尋思】シジン　心を沈めて思考する。後漢書、劉矩傳「有ニ爭訟一引ニ之予前一詢ニ其曲直一、以爲忿恚可レ忍、縣官不レ可レ入、使ニ歸更ー一」

【尋章】シンシヤウ　こまかき章句の末を穿鑿する。李賀詩「ー一摘ニ句老ニ雕蟲一、曉月當ニ簾掛ニ玉弓一」

【尋常】ジンジヤウ　○尋は八尺、常は一丈六尺。皆かばかりの長さにいふ。韓愈、題ニ李生壁一詩「時與ニ人書一『其不』及レ水、蓋ー一尺寸之間耳」○つねなみ（庸常）杜荀鶴詩「ー一採窗前月」

【尋尋之滿無ニ呑舟之魚一】ジンジンノマンムハドンシウノギヨイラズ　つまらぬ土地には大豪傑なき喩「淮南子」

【尋訪】ハウ　たづね訪ふ。南史、陶弘景傳「徧ニ歷名山一ー一仙藥一」

【尋盟】メイ　誓約をあたたむ。尋は温尋。左、哀十二「異請レ一レ一寒盟」の反對。

【尋問】モン　たづねとふ。＝訊問。

【尊】　ソン　[元]

○さかだる（酒器）＝罇。○たゝとぶ、たゝとし（貴）「追ー」「推ー」易、繫辭「天ー地卑、乾坤定矣」○たゝときもの。孟、公孫丑「天下達ー三、爵一、齒一、德一」あがむ、おもんず（重）うやまふ（敬）○たゝとし（貴）貴き人。○たかし（高）○或語の上に添へてたゝとぶ意をあらはす辭「ー名」「ー顏」○至ーは天子の稱。○世ーは佛の異稱。○天ーは道教の神。○家ーは父の稱。○神佛の像一座を一ーといふ。○國みこと（命）神又は貴人の敬稱。又、其の名の下に添へて呼ぶ稱「日本武ー」

同訓異語　尊・貴・崇・上・尚・右　○尊は卑の反、たゝとび敬ふ意。德と齒と爵とを三達尊といふ。○貴は賤の反、たゝとしと訓むときは、位の高きなり、たゝとぶと訓むときは、上品として重んずるなり、貴ー玉賤ー珉の如し。尊字の如く、敬ふ意は無し。○崇は嵩なり、高貴なり、たゝとび仰ぐ意、尊字に似たり。○上はかみと訓む如く、たゝとびて、上座に置く意。史、魯仲連傳「彼秦者棄ニ禮義一而上ニ首功一國也」○尚は上に同じ、風尚・志尚と熟す。尚徐は徐徳をたゝとぶなり。○右は古は右をたゝとぶによりて轉用す、名門右族・崇儒右文などと用ふ。

【尊長】チヤウ　うやまひおそれる。唐書「韋安石性方重、不レ苟ニ言笑一、其政尚ニ清嚴一、吏民ー一ニ之」＝尊敬・長敬。

【尊意】イ　他人の意思を敬ひていふ。唐武后樂章「追崇夢兆ニ一ー一」

【尊異】イ　たゝとびて特別にあつかふ。列仙傳「司馬承正歷ニ于天台一、唐睿宗屢加ニ一ー一」

【尊榮】エイ　たゝとくさかえる。孟、盡心「其君用レ之、則安富ー一」

【尊行】カウ　めうへの親類。

【尊庚】カウ　あなたのおんとし、他人の年をいふ敬稱「書籍記」＝貴庚。

【尊號】ガウ　尊びて呼ぶ稱。天皇・太上皇など「漢書、昭帝紀贊」

【尊客之前不レ叱レ狗】キヤクノマヘニテイヌヲシツセズ　至賤を以て、身分高き客の前を駈かさざる義「助禮」

【尊師】シ　おてがみ。人の書翰をいふ敬稱＝尊書・尊翰。

【尊翁】オウ　おかほ。ひとのかはをいふ敬稱。

【尊貴】キ　たゝとし。王筠文「據ニ北辰之居所一、正ニ南面之ー一」

【尊君】クン　尊公に同じ。晉書、王濟傳「我知ニ一ー不ニ肖耳」

【尊兄】ケイ　○親友の敬稱。蜀志、馬良傳「ー一雖レ期ニ贊世一、配ニ業光レ國」○已の兄。又、人の兄の敬稱。

【尊嚴】ゲン　たゝとびうやまふ。潛夫論「帝王之所ニ一ー一、天之所ニ共愛一者

民也」‖崇敬。尊崇。

【尊賢】ソンケン 賢人を貴ぶ。管子「—レ—授レ能」

【尊顯】ソンケン たふとびあらはす。又位たかく名あらはる。漢書、高帝紀「賢士大夫、有二肯從レ吾游者一吾能—二之一」

【尊嚴】ソンゲン たふとくしておごそか。容貌が尊重にして威嚴あり。漢書「臨レ朝淵嘿、——若レ神」

【尊公】ソンコウ 〇他人の父の敬稱。晉書、簡文帝紀「帝曰、致二意—一二」‖尊大人。〇他人を呼ぶ敬稱。‖賈公。

【尊神】ソンシン 神をたふとぶ。禮記「殷人—レ—、率レ民以事レ神」

【尊像】ソンザウ 有德のたふとき人の像。元好問詩「人言—神所レ遣」

【尊信】ソンシン 尊びて信賴する。

【尊者】ソンジャ 圖〇昔時大臣の大變の時に正座にすわる人の稱。〇學德のそなはれる僧の敬稱。

【尊號】ソンガウ たふとびたすける。魏志、法正傳「傾二覆寇敵一—二—王室一」

【尊攘】ソンジャウ 周の王室を尊び夷狄をはらふ。論語「一二匡天下一」朱注「匡、正也、尊二周室一攘二夷狄一、皆所以正二天下一也」‖尊王攘夷。

【尊爵】ソンシャク たふときくらゐ。孟、公孫丑「夫仁、天之—一也」

【尊酒相逢】ソンシュアフ 相逢ふて樽酒を酌みかはす。韓愈、贈二張籍一詩「——十載前、君爲二壯夫一我少年、——十載後、我爲二壯夫一君白首」

【尊盛】ソンセイ 位高く勢さかんなり。漢書、宣帝紀「自レ在二民間一聞二知眞氏一—一日久」

【尊戚】ソンセキ たふときみうち、貴きちすぢ。後漢書、鮑永傳「——寵重」‖貴戚。

【尊俎】ソンソ 尊は酒をうくる器、俎は牲肉を載する器。後漢書、孔融傳「起二謀於—一之間一」‖—之間は宴飲の間をいふ。

【尊祖】ソンソ 祖先をたふとぶ。禮記「人道親レ親也、親レ親故—レ—、—レ—故敬レ宗」

【尊崇】ソンスウ たふとびうやまふ。‖尊敬。

【尊屬】ソンゾク 己より目上の親族。卑屬の對。家禮儀節「——謂二伯叔祖父母伯叔父母之類一」

【尊大】ソンダイ おごりたかぶる。後漢書、馬援傳「子陽井底蛙耳、而妄自—一」

【尊大人】ソンタイジン 人の父の敬稱。‖尊公。

【尊中酒不空】ソンチュウノサケカラズ 樽中に酒が常に滿ちて居る。世說、褒爽「孔北海居レ家失レ勢、賓客日滿二其門一、愛レ才樂レ士、常若レ不レ足、歎曰、坐上客常滿、——、吾無レ憂矣」

【尊重】ソンチョウ たふとびて大切にする。

【尊瞻】ソンセン たふとびて目をかける。史記「武帝以二衞青數征伐有レ功、以爲二大將軍一、欲レ—二—之一」

【尊卑】ソンピ たふときと、いやしきと。漢書、古者衣服車馬、貴賤有レ章、以褒二有德一而別二—一」‖貴賤。

【尊父】ソンプ 人のちちの敬稱。‖尊府・尊公。

【尊母】ソンボ 人のははの敬稱。‖尊堂・令堂。

【尊命】ソンメイ 人の命令をたふとびていふ。

【尊來】ソンライ おいで、人の來るをいふ敬稱。‖光來・貴臨

【尊慮】ソンリョ 御心づかひ、人の心づかひの敬稱、御配慮。

【尊王攘夷】ソンワウジャウイ 圖維新前後に行はれし政治上の主義、天皇を尊び將軍を斥け、外國との交通互市を絕つを是とするもの。‖尊攘。

十一畫

【對】 タイ ツキ 圖

〇こたへ、こたふ(答)問に答へる「問—」「專—」むくゆ、むくいる(酬)揚げこたふ。詩、大雅「以—于天下」〇つれあひ(配偶)後漢書、梁鴻傳「擇—不嫁」あひて(敵)「敵—」〇ならべる(竝)「—句」〇あたる(當)〇あはす(配)〇むかふ(向)史、石奮傳「—案不食」〇二つそらふ、つる。

圖解索引 對・答・應等の別は答(竹部六畫)の條を見よ。

【對飲】タイイン むきあひて飲む「矢志、靡——」

【對歌】タイカ むかひあひてうたふ。幽游詩「清夜何人與——」

【對抗】タイカウ 互に相對してはりあふ「——演習」

【對角線】タイカクセン 多角形の相鄰接せざる二つの角の頂點をむすびつける直線。

【對岸】タイガン むかふぎし〔史、張耳陳餘傳〕

【對勘】タイカン 利害を異にする兩人を突き合はせてしらべる。參校筆錄「——以防二虛僞一」‖對質。

【對局】タイキョク さしむかひて碁をうつ。局は碁盤〔北史、魏收傳〕

【對偶】タイグウ ふたつそろひしもの、字句を兩兩相對して作る。卽ち四六文の類。詩家直說「東晉補亡詩、——精切、詞語流麗」

【對峙】タイジ 對等のつれあひ、夫婦をいふ。左傳、疏「宣少美是姿、非二敵身——之人一也」‖仇儷。

【對臥】タイガ 互に向きあひて寢る。韓愈詩「盤樹朝——」

【對外硬】タイガイコウ 圖外交問題に強硬の意見を主張する輩。

【對抗】タイコウ 對等に同じ。

【對峙】タイジ 卽ひ合ひて並立する。搜神記

「孫賓不ㇾ識二天子一與ㇾ帝ㇾ一」

【對策】タイサク　官吏を登庸するに經義政事の間を出して、之に對へしめ、其の學識を試みるをいふ。策は問題を書きし札、漢の武帝が董仲舒を試驗せし時より始まるといふ（漢書、公孫弘傳）＝對詔。

【對質】タイシツ　對審に同じ。

【對審】タイシン　原告と被告とをむかひ合せてしらべる。＝對決・對勘・對質。

【對掌】タイシャウ　相對して事をつかさどる。南史、孔珪傳「珪與二江淹一ㇾ一辭筆一」

【對症療法】タイシャウレウハフ　病源を根治せず、唯病狀に對して療治する法、發熱に對して解熱劑を與ふる類。

【對酌】タイシャク　むかひあひて酒をくむ。李白詩「兩人ㇾ一山花開」

【對手】タイシュ　あひて（相手）（俗餘叢考「凡相二角伎一、彼此均者曰二ㇾ一ㇾ一」＝敵手。

【對證之藥】タイシヨウノクスリ　病症に適したる藥。沈德潛、柳宗元、贈二李賢州一詩序、評「序頗而能詳、筆力斬斬、是大手筆者、――」證は證候なり、或は症に作る。

【對植】タイシヨク　むかひてうゑる。姚合詩「四松相ㇾ一、蒼翠映二中庭一」

【對生】タイセイ　莖幹の各節より二枚の葉が、互に相對して生ずるをいふ。互生の對。

【對照】タイセウ　彼と此とてらしあはす。＝對比。

【對答】タイタフ　こたへる。又、こたへ。

【對談】タイダン　むかひあひてはなす。黃庭堅詩「一炷薰二秋雨一、何時許二ㇾ一ㇾ一」＝面談。

【對峙】タイヂ　むかひて高くそばだつ。楊炯賦「擊二波心一而ㇾ一」＝對立。

【對陣】タイヂン　敵とむかひて陣を攻る。後漢書、寶武傳「與ㇾ武ㇾ一」

【對等】タイトウ　相手と同等にして輕重の差別なし「――の禮」

【對屋】タイヲク　國古、貴人の家の造りかたに、寢殿の前方の左右に相對せしめて作りし離れ家。

【對棒】タイボウ　むかひてささげる。韋莊、使院黃葵花詩「薄莊新著漢黃衣、――金盤傾二露珠一」

【對面】タイメン　顏をむかひ合す。傳燈錄「――不二相識一、千里卻同ㇾ識」＝對顏。

【對揚】タイヤウ　君命に答へ、其の御心を下民に揚げ知らしむ。書、說命「敢ㇾ一ㇾ二天子之休命一」

【對雨】タイウ　敵のとりでに對して設れるとりで。又、敵軍に對してとりでをかまへ對抗する。晉書、宣帝紀「――百餘日」

【對話】タイワ　むかひあひてはなす。薩都剌詩「山僧ㇾ一夜來ㇾ央、不ㇾ知風露濕二衣裳一」＝對談。

【對句】ツイク　構造を同くする二つの句の相對するもの。謝玄暉の詩の「魚戲新荷動、鳥散餘花落」の如し。

【導】ドウ　十三畫　號

〇みちびく、てびきする、案内する。又、案内者「引ㇾ一」「先ㇾ一」〇ひらく（啓）敎ふ「開ㇾ一」「訓ㇾ一」「敎ㇾ一」「輔ㇾ一」〇をさむ（治）論、學而「一ㇾ千乘之國」＝道。

【導誘】ダウイウ　みちびきいざなふ。詩經、疏「敎訓者、所二以一ㇾ一ㇾ人、故爲ㇾ導也」＝誘導。

【導引】ダウイン　〇大氣を導きて體に入る、道家の養生法の一、龜策傳「行ㇾ氣ㇾ一」＝道引。〇あんま。

【導師】ダウシ　佛　〇衆生を佛道にみちびく僧。釋氏要覽「華嚴經云、能爲ㇾ人說二无生死道一、故名二ㇾ一ㇾ一」〇死者に引導をわたす主僧。

【導者】シダウシヤ　てびきするひと、案内者。

【導體】ダウタイ　電氣又溫熱をみちびきつたへる物質「良ㇾ一ㇾ一」

【導火線】ダウクワセン　〇鐵砲などのくちび、みちび。〇事件の生ずる發端。

小部

【小】セウ　縱

〇こ、を、ちひさし（微）大の對「微ㇾ一」〇すくなし（少）「ㇾ一補」〇せまし（狹）「狹ㇾ一」「窄ㇾ一」「褊ㇾ一」書、仲虺之誥「好ㇾ問則裕、自用則ㇾ一」〇いとけなし（幼）〇こまか（細）「細ㇾ一」〇いやし（卑）部〇こども（幼者）〇ちひさきもの（微物）〇ちひさき事。〇ちひさしとする、かろんずる（輕）〇めかけ（妾）詩、邶風「慍于羣ㇾ一」〇一箇月の日數が二十八日（二月）又三十日ある月（陰曆は二十九日の月）

【小怒】セウド　すこしの腹事。雲笈七籤「――宗ㇾ一、必成二大禍一」

【小異】セウイ　すこしのちがひ「大同ㇾ一ㇾ一」

【小遣】セウヅカヒ　ゆばり。漢書、東方朔傳「嘗醉入ㇾ殿中、ㇾ一ㇾ殿上一」＝小便。

【小宴】セウエン　こざかもり、小人數のさかもり。

【小屋】セウヲク　〇ちひさきいへ。魏志「隱士有二獨貧者一、獨居羣牛一ㇾ一」〇國こや。粗造の建物にて農產物其の他器具雜品を入れるところ。又、興行物の建物「芝居ㇾ一」

【小廉】セウカン　すこしくやすらかに治まる（論、禮運）

【小學】セウガク　〇こどもに敎へる學問。大學の對。〇文字の形音訓等を研究する學問。〇こどもに學問を授ける所「ㇾ一校」〇書名、六卷、宋の

朱熹編す、其の實は門人劉子澄の編、古來の嘉言善行を類輯して、內外二篇となす。

【小寒】セウカン 冬至の次の氣節、一月五日頃。逸周書「——之日、鴈北向」

【小閑】セウカン すこしのひま。‖寸暇。

【小技】セウギ つまらぬわざ。杜甫詩「文章本——、於レ道未レ爲レ尊」

【小舅】セウキウ 夫の兄弟。こじうと。

【小君】セウクン 諸侯のつま。穀梁傳「——非レ君也、以三其爲二公配一、可二以稱一レ君也」

【小過】セウクワ ○すこしのあやまち。論、子路「子曰、先二有司一、赦二——一、舉二賢才一」○易の卦の名。艮下震上。易經「——亨、利レ貞」

【小官】セウクワン ○位のひくき官吏。孟、公孫丑「不レ卑二——一」‖微官。○官吏の自稱。

【小計】セウケイ 一部分のしめだか。總計の對。

【小妓】セウギ 年わかきしもべ。妓は奴僕。唐書、李賀傳「賀——奴、背二古錦囊一遇レ所レ得レ詩、投二囊中一」‖小奴。

【小憩】セウケイ ときがし。論、衞靈公「子曰、羣居終日、言不レ及レ義、好行二——一」‖雜炎談」

【小經】セウケイ 易・尚書・春秋公羊傳・穀梁傳の稱。小とは卷數の少き義。大經の對「唐書、選擧志」

【小憩】セウケイ こやすみ。許渾詩「巖回展レ倦、——倚二脩竹一」

【小隱】セウイン 小事をつつしむべき喩。關尹子「勿レ輕二小事一、——」

【小月】セウグワツ 小のつき、陰曆にて日數二十九日の月、卽ち小建。又、陽曆にて三十日の月。

【小絃】セウゲン 琴のほそきいと。淮南、泰族「張レ琴者、一一急、而大絃緩」

【小月】コヅキ 酒盛すくなき人。杜荀鶴詩「酒寒無二——一、清酌誦二行杯一」‖下戶。

【小姑】コヂウト こじうとめ、夫の妹をいふ。王建、新嫁娘詩「未レ諳姑食性、先遣二——嘗一」

【小功】セウコウ 五箇月の喪服。功は布のつくりかた、小は絲の細小なもの。親會「大功——、喪服名、謂二治レ布有二精麤之分一」

【小侯】セウコウ 小國の大名。史、漢諸侯年表「大國不レ過二十餘城一、——不レ過二數十里一」

【小琅】セウラウ わづか。歐陽修文「——目前之利、既不レ足レ爲」‖些細。琅小。

【小妻】セウサイ 妾をいふ。三國志「還二鄉里一求二——一」

【小祥】セウシヤウ 朞の祭の翌日。朞は冬至の後第三の戌の日に行ふ祭。荊楚歲時記「過レ朞一日、謂二之——一」

【小冊】セウサツ 小さき手帳。通鑑、宋紀「以二方寸——一記二兵及糧一」

【小産】セウサン 流產。

【小參】セウサン 圖譜家にて、不時に僧を集めて行ふ示誨。傳燈錄「坐二妙善堂一、受二大衆——一」

【小蘇】セウソ 野生の草の名、のびる。

【小子】セウシ ○こども。○自ら謙して稱す、わたくし。○てし、門人。論、公冶長「晉黨之——、狂簡斐然成レ章」

【小史】セウシ 太史の下なる官。周禮「——掌二邦國之志一」

【小至】セウシ 冬至の前一日をいふ。杜子美に——詩あり。

【小字】セウジ 幼少の時の名。後漢書、傅燮傳「燮慨然而歎、呼二幹——一」‖幼字・小名・幼名。

【小使】セウシ こづかひ(俚)。唐書、宦者傳「捕二詰——一問レ狀」

【小兒】セウジニ ○こども。史、淮陰侯傳「王率嫗無レ禮、今拜二大將一、如レ呼二——一耳」○人を賤しめていふ。晉書、陶潛傳「吾豈能折レ腰、向二鄉里一——一耶」

【小事】セウジ ちひさき事。漢書、王莽傳「親省二——一」‖細事。

【小疵】セウシ すこしばかりのきず。又、わづかなあやまち。‖小過。

【小廝】セウシ こもの、めしつかひ。‖小使。

【小舟】セウシウ こぶね。李中詩「曲岸家家繫二——一」‖小船。

【小秋】セウシウ 秋のはじめ。許渾詩「難忘故園恩、——梨葉紅」‖初秋。

【小人】セウジン ○身分賤しき庶人。孟、滕文公「有二大人之事一、有二——之事一」‖庶民。○徳なきよこしまなる人。君子の對。論、爲政「——比而不レ周」○自ら謙して稱す。左、隱元「——有レ母」‖小子。○身のたけ短き人。「——國」

【小人閒居爲二不善一】セウジンカンキヨイフゼンヲス 小人は仕事もなく獨り居る時は惡事をなす。大學「——、無レ所レ不レ至」

【小人窮斯濫矣】セウジンキウスレバスナハチランス 小人は困窮すれば自ら命に安んずる能はず、常規を越えて惡を爲す。論、衞靈公「子曰、君子固窮——」

【小人之勇】セウジンノユウ 血氣にはやる小勇。荀子「親レ死面暴、是——也」

【小四海】セウカイ 小天下の義。殆ど四海中の珍味を集めたるをいふ。滇異錄「孫承貼在二新右一、嘗饋レ客、指二其盤饌一曰、今日坐中、南之蝤蛑、北之紅羊、東之鰕魚、西之蒲萄、無レ不二畢備一可レ謂二富有一——矣」

【小失】セウシツ すこしのあやまち。荀子「以二——一掩二大美一」‖小過。

【小身】セウシン 身分ひくきもの、少祿の人。

【小不レ忍則亂二大謀】セウフニンバスナハチタイボウヲミダル 婦人の仁、匹夫の勇の如きは忍ぶこと能はず、故に大事を謀るも之を成すこと能はず「論、衞靈公」

【小集】セウシフ 小人數のよりあひ(雜綵錄)

【小人革レ面】セウジンカクメン 小人の性は移らざれども、明主、上に立てば外面は革めて悪を肆いままにせず。易、革卦「君子豹変、――」

【小心】セウシン ○こまかにゆきとどく心。詩、大雅「維此文王、――翼翼」翼翼は恭慎の貌。○せまき心。‖小籠セウロウ

【小酌】セウシャク すこし酒をくむ。趙宧詩「村醸――狂不レ醉」‖小酌・淺斟。

【小憩】セウケイ やすむ座敷、休息するへや。礼記「大夫退、然後適二――一」

【小盡】セウジン 陰暦にて、廿九日にてつくる月。小の月。蠟眞子録「中國以二十九日一爲二――一」大盡は大の月。

【小祥】セウシャウ 一周忌。儀禮、士虞禮「期而――、又期而大祥」大祥は三周忌。

【小酌】セウシャク こさかもり。本事詩「與二名娼一遊三慈恩一――花下一」‖小飲。

【小酌】セウシャク ちひさくしてよわし。史記「天下非二――一也」

【小弱】セウジャク 幼少なるおとうと。柳宗元、桐葉封レ弟辭「成王以二桐葉一與二――一」

【小殿】セウデン 人を卑しみて呼ぶ稱。漢史「侯琅――、頗習二行陣一」‖豎子。

【小春】セウシュン こはる。陰暦十月の異名。荊楚歲時記「十月天氣和暖似レ春、故曰二――一」

【小序】セウジョ 各篇のはしがき。大序の對。

【小暑】セウショ 夏至の次の氣節。七月七日頃。禮、月令「仲夏之月――至、螳蜋生」

【小乘】セウジョウ 圖卑近にして凡夫に解し易き佛教。大乘の對。傳燈錄「譚有二深淺階級一悟二我空偏眞之理一而修二是――禪一」

【小野】セウヤ すこしのはゞ。史記「今見二――一而欲レ死二吏一乎」

【小數】セウスウ ○わづかなるわざ。孟子「今夫奕之爲レ數、――也」‖小術。○すくなきかず。多數の對。○數學にて「よりちひさきかず。整數の對。

【小生】セウセイ ○自ら謙して稱する。韓愈詩「――倘足レ道」○人を卑めて稱す。漢書、張禹傳「新學――、親レ道談レ人、宜レ無二信用一」

【小成】セウセイ すこしく成就する。大成の對。禮、學記「七年視二論レ學取レ友、謂二之――一」

【小姓】セウセイ ○身分の卑き者のむすめ。○セウシャウ圖貴人のそば近く仕へる少年。

【小星】セウセイ 妾の稱。詩、召南「嘒彼――、三五在レ東、肅肅宵征、夙夜在レ公」

【小小】セウセウ すくなき貌。子虛賦「臣之所レ見、蓋其――者耳」

【小照】セウセウ 小なるゑすがた。寫眞。

【小雪】セウセツ 立冬の次の氣節。十一月廿二日頃。詩經、疏「定星昏而正中謂二――一時一者十月之中氣」

【小說】セウセツ 事實を假設して世態人情をうつす戯作文。漢書、藝文志「――家者流、蓋出二於稗官一、街談巷說、道聽塗說者之所レ造也」

【小善】セウゼン すこしばかりのよきおこなひ。易經「小人以二――一爲レ無レ益而弗レ爲也」

【小姐】セウソ 年若き娘、むすめご。西廂記評「請二夫人一――拈レ香」

【小借】セウシャク ○年わかき僧。‖雜借。圖○ショウシャク商店にて使用するわかもの。‖丁稚デッチ○少年を賤しみていふことばなり。‖孺子。

【小族】セウゾク 身分ひくきいへがら。蔡邕文「非二――一陋宗、器量褊狹所二能堪一勝一」

【小隊】セウタイ ○小人數の一隊。○圖軍隊の編制にて、砲兵は砲二門、騎兵は五十人内外、歩兵、工兵は七十人内外。

【小觔】セウキン こぶね。王禹偁詩「妓女穿二輕屐一、筆歌泛二――一」

【小盜】セウタウ こぬすびと。後漢書、光武紀「多爲二――一」‖狗盜。

【小道】セウダウ 農圃・醫ト・たとすべて技藝の道をいふ。人倫の大道に對していふ。論、子張「子夏曰、雖二――一必有二可レ觀者一焉、致レ遠恐レ泥、是以君子不レ爲也」

【小桃紅】セウタウコウ 鳳仙花の異名。‖桃紅。

【小智】セウチ すこしのちゑ。淮南子「有二一一者、不レ可二任以一大功一」

【小斎】セウサイ 易の卦の名。乾下巽上。易經「――亨、密雲不レ雨、自二我西郊一」

【小腦】セウノウ 腦ナウの一部にて背に續く。

【小丈夫】セウヂャウフ ○心いやしき男。孟子「予豈若二是――一然哉」‖賤丈夫。○丈のひくきをとこ。

【小慧大誠】セウケイタイセイ すこしくこらして、大いにいましむ。易經「小懲而大誡、此小人之福也」

【小豆】セウトウ あづき、赤飯に炊き又餡アンに造る。

【小艇】セウテイ こぶね。夢溪筆談「林逋常汎二――一、遊二西湖諸寺一」‖小舟。

【小店】セウテン こみせ。王安石詩「――無レ粧欲レ閉レ門」

【小傳】セウデン 人の概略の傳記。金史、文藝傳「王鶚嘗作二王子一――一、以自敍」‖略傳。

【小篆】セウテン 書體の名。秦の始皇の時、李斯作る。說文「李斯作二蒼頡篇一、皆取二史籀大篆一、或頗省改、所レ謂――者也」

【小斗】セウト ちひさきます。史記「田、常以二大斗一出貸、以二――一收レ之」

【小杜】セウト 唐の杜牧をいふ。唐書、杜牧傳「詩情豪邁、人號二――一、以別二杜甫一」杜甫を老杜といふの對。

【小偷】セウトウ こぬすびと。漢書、張敞傳「――盛來賀、且飲醉」‖小盜。

【小童】ショウドウ 邦君卽ち諸侯の妻が自ら謙して稱す。論、季氏「夫人自稱曰二小童一」

【小憩】ショウケイ こやすみ。書越志「過二浮橋一ニ憩二補陀寺一」＝小憩。

【小腦】ショウノウ 腦髓の後部の一區畫、大腦の下、延髓の上に在りて隨意筋の動作を調節する機關。

【小兒醫】ショウニイ 小兒科の醫者。史、扁鵲傳「卽二秦人愛二小兒一者一爲二——一」

【小兒科】ショウニカ 主としてこどもの病氣を療治する醫術。＝小兒醫。

【小年】ショウネン ○一年にして稍短き歲の唐、庾詩「日長如二一一一」○いのち短し。莊子「一一不レ及二大年一」○年幼し。杜甫詩「陸機二十作二文賦一、汝更一一能綴レ文」

【小壁】ショウヘキ 唐の白居易の妾、舞を善くす。白居易詩「楊柳一一腰」

【小品文】ショウヒンブン みじかき文章。

【小弁髽】ショウベンソウ 石を丸がく鼓法の名。

【小忿棄二舊德一】ショウフンキキュウトクヲス 憤て施せる德も少しの怒にて打ち消される。左傳「今將下以二小忿一棄中舊德上乃不可」乎」

【小便】ショウベン ゆばり。漢書、張安世傳「郎有三醉一ニ——殿上一」

【小補】ショウホ すこしのおぎなひ。曹植文「雖レ無二大益一實有二——一」

【小滿】ショウマン 立夏の次の氣節。五月二十一日頃。

【小恙】ショウヨウ すこしのやまひ。＝微恙。

【小勇】ショウユウ 血氣にはやる勇。大勇の對。孟、梁惠王「王、請無レ好二——一」

【小用】ショウヨウ わづかの用ひ。沈約文「經レ邦御レ遠、幾レ待二大賢一、擢レ錄錐レ納亦衆二——一」

【小吏】ショウリ こやくにん。韓愈文「有下一一持二院中故事節目十餘事一來示上レ余」

【小利】ショウリ すこしの利益。管子「一一害レ信、小怒傷レ義」

【小流】ショウリュウ ちひさきながれ。荀、勸學「不レ積二一一一、無三以成二江河一」＝細流。

【小笠原流】オガサワラリュウ 國足利義滿の時、小笠原長秀のはじめし禮法の一派。

【小忌衣】オミゴロモ 國新嘗會・大嘗會等に奉仕する者の衣服、山藍にて摺り、赤紐をつけ、狩衣に似たるもの。

【小唄】コウタ 國三味線にあはせてうたふ短き俗歌。はうた。

【小筮懸】コウナカケ 國平のさきにかけたる筮を的として射る騎射の法。

【小爲替】コガワセ 國金十圓以下の郵便爲替。

【小切手】コギッテ 國銀行に當座預金ある者が其の銀行を支拂人として振出すてがた。

【小作】コサク 國借地料をはらひ他人の田畑を耕作する「一一人」

【小包郵便】コヅツミユウビン 國少量の貨物をおくる郵便。

【小判】コバン 國昔の金貨、楕圓形にして一枚一兩に通用す。

【小楊枝】コヨウジ 國くろもじの木を、二三寸ばかりに細くけづりしやうじ、つまやうじ。

【少】

㊀セウ ㊁セウ 嘯 篠

㊀すくなし。多の對「多一」「鮮一」「僅一」「寡一」とほし(乏)まれなり(稀)「疎一」「希一」○へる、へらす(減)「減一」○しばらく(暫時)「一頃」「一間」孟、萬章「一則洋洋焉」いささか、やや(稍)○たらず(不足)かく(缺)○そしる(短・訾)非難する。㊁わかし。老の對。わかもの「一年」「惡一」○主たる役を助けるその役(副貳)太師・太傅・太保に副ふるに一師一傅一保を以てするの類。

同訓異字 少・暫・姑・且等の別は暫(日部十一畫)の條を見よ。

○ショウ 少・寡・鮮・尠○少は多の反。數の少きこと。去聲のときは老に對してワカシと訓む。○寡は衆の反、人數の比較的少きなり。孟子「寡固不レ可二以敵一衆」○鮮は盡也、罕也と註す、極めて少きなり。論語「巧言令色鮮矣仁」○尠・鮮は二字同じ、少なり。

【少輔】ショウフ 國古の各省の次官の名。大輔の次に位す「中務一一」

【少監】ショウカン しばらく。礦軒、赤壁賦「一一月出二於東山之上一」＝少頃・少選・少閒。

【少成レ多】ショウセイヲタ 塵を積みて山を成すといふ如し。荀仲舒、對策「一一、積レ小致レ鉅」

【少艾】ショウガイ 艾は美好、容色うつくしき少年少女。孟、萬章「知二好色一、則慕二一一一」

【少閒】ショウカン ○すこしのひま。禮記「侍二坐於君子一、若有二告者一、曰、一一願有レ復也」○病のやや癒えたる義。五代史、袁傳「疾一一、以爲二左衞大將軍一」

【少許】ショウキョ すこしばかり。陶潛詩「個レ身營二一飽一、一一便有レ餘」

【少頃】ショウケイ しばらく。陸佃文「其彩五色、一一百變」＝須臾。

【少憩】ショウケイ すこしくやすむ。暫時の休息。韓愈錄「徐甚、一一輒次」

【少盲】ショウモウ ことばすくなし。後漢書、臧宮傳「光武察二宮勇力一一、故親二納之一」＝寡言。

【少佐】ショウサ 國陸海軍の武官、中佐の次位にて、次尉の上に位す。

【少壯】ショウソウ わかくさかんなり。古詩

「―ー不二努力一、老大徒傷悲一」

【少壯】セウサウ　わかくさかりなる時は幾ばくもなく直ちに老衰に入るを奈何ともなし難し〔漢武帝、秋風辭〕

【少師】セウシ　官名、三孤の一、三公のそ（佐）。書、周官「ー―・少傅・少保曰二三孤一」

【少室】セウシツ　嵩山の九年間面壁せし處、河南省の嵩山に在り。祖庭事苑「嵩山少林、初祖面壁之處、西域記云、其山東爲二太室一、西謂二少室一、高八百六十丈、上方十里、ー―與二太室一相望、但小耳」

【少將】セウシヤウ　國〇古の近衛府の次官。中將の次位。〇今の陸海軍の武官、中將の次位にて、大佐の上に位す。

【少小】セウセウ　年わかくちいさし。賀知章、回鄉偶書「ー―離レ鄉老大回」

【少少】セウセウ　すくなき貌。後漢書、度尚傳「所レ亡ー―、何足レ介レ意」＝少少許。

【少許】セウキヨ　すこしばかり。莊子「以ー―一勝二人多許一」

【少選】セウセン　しばらくの間。呂覽「ー―發而見レ之」＝須臾・少頃。

【少男風】セウナンフウ　雨まさに降らんとする時、急に吹く風。通志、晉略傳、注「清河旱、倪文守問二諸雨期一、輅言、樹間陰鳥和鳴、又ー―起、衆鳥和翔、其應至矣、須臾果大雨」

【少長】セウチヤウ　〇幼童と年長者と。王羲之、蘭亭集序「羣賢畢至、ー―咸集」〇やや年たける。少しく生長する。漢書、匈奴傳「見二能觸レ羊、引レ弓射二鳥鼠一ー―則射二狐兎一食レ肉」

【少女】セウヂヨ　年わかき女、をとめ。

【少女風】セウヂヨフウ　雨のふらんとする前にふく微風。少男風を見よ。

【少納言】セウナフゴン　國古、太政官の判官にて中務省の侍從の事を兼ねし官。

【少貳】セウニ　國古の太宰府の次官。大貳の次に位す。

【少年】セウネン　としがわかし。又、わかもの。史、淮陰侯傳「淮陰屠中ー―有二侮レ信者一」

【少年易レ老學難レ成】セウネンおいやすくがくなりがたし　朱熹、偶成詩「ー―、一寸光陰不レ可レ輕、未レ覺池塘春草夢、階前梧葉已秋聲」

【少年期】セウネンキ　男子は十七歳より二十四歳まで、女子は十五歳より二十一歳までの期間。

【少保】セウホ　少師を見よ。

【少卿】セウケイ　國古の彈正臺の次官。大弼の次に位する。

【少府】セウフ　天子の御料を藏めおく處。史、平準書「皆宜レ屬二ー―一」

【少婦】セウフ　年わかき妻。王昌齡詩「閨中ー―不レ知レ愁、春日凝レ粧上二翠樓一」

【少傅】セウフ　少師を見よ。漢書、賈二三少一皆上大夫也、曰、少保・ー―・少師」

【少府】セウフ　年わかき男。

【少婦】セウフ　年わかき妻。王昌齡詩「閨中ー―不レ知レ愁、春日凝レ粧上二翠樓一」

【少傅】セウフ　少師を見よ。漢書、賈二三少一皆上大夫也、曰、少保・ー―・少師」

【少府】セウフ　國太政官の判官にて左右に分つ「左ー―」「右ー―」

【少牢】セウラウ　羊・豕の牲の備はれる祭饌。禮記「庶人特豚、士特豕、大夫ー―」＝羊・豕を備へたる太牢の對。

【少選】セウセン　しばらくとどまる。宋史「既來安得レ不二ー―一」

【少林寺】セウリンジ　少室を見よ。

【尒】　二畫

爾（爻部十畫）に同じ。

【尓】　三畫

尒（前條）に同じ。

【尖】　三畫　㔾

セン

〇とがる、とがり、さき（端）「筆ー―」「峯ー―」〇末するどし（銳）〇ほそし（小細）〇打ーは旅客が中途に止りて晝食する。

【尖尖】センセン　さきが細くするどし。閩、異二鯖赤魚之類一、首ー―、色黃黑」

【尖角】センカク　とがれるさき。

【尖尖】センセン　とがる、するどし。韋孝寬、小松詩「ー―還似天台新雨後、小峯猶外碧ー―」

【尖鐵】センテツ　とがりてはやし。白居易詩「散餌麥二紅片一ー―嫩二鵝黃一」

【尖端】センタン　とがりたるさき。

【尚】　五畫　㔾

シヤウ　ジヤウ

〇なほ（猶）〇こひねがふ（冀）ねがはくば（庶幾）書、秦誓「ー―亦有二利哉一」のぞむ（望）〇くはふ（加）上に重ねる。中庸「詩云、衣二錦一ー―絅」かざる（飾）〇つかさどる（主）「ー―食」「ー―醫」「ー―武」たかし、たかくす（高）「ー―志」〇公主（天子の女）を娶る。〇めあはす（配）史、司馬相如傳「使二女得一ー―司馬長卿一」〇ひさし（久）ふるし（古）〇むかし（上古）〇ほこる（矜伐）禮、表記「君子不二自ー―其功一」〇上に通ず。

同訓異字　尚・尊・貴・崇・上・右の別は尊（寸部九畫）の條を見よ。〇尚・猶・由・猷の別は猶（犬部九畫）の條を見よ。

【尚友】シヤウイウ　尚は上なり、上りて古人を友とする義。孟、盡心「天下之善士、斯友二天下之善士一、以レ友二天下之善士一、爲レ未レ足、又尚二論二古之人一、頌二其詩一、讀二其書一、不レ知二其人一、可レ乎、是以論二其世一也、是ー―也」

【尚賢】シヤウケン　賢者をたふとぶ。尚齒を

見よ。

【尚古】シャウコ　古の文物をたっとぶ。‖崇古。

【尚志】シャウシ　志を高くす。孟、盡心「何尚ノ一ノミ、曰、仁義而已矣」

【尚侍】ナイシノカミ　圓官の後宮の女官、内侍司の長官、二人あり、常侍・奏請・傳宣等の事を掌る。現制にては、女官を統一宮中の内事に総掌する勅任官。

【尚齒】シャシ　よはひをたっとぶ。老人を敬ふ、齒は齢。一一會は老人を集めて年齢順に坐せしめ宴を開くをいふ。延、天道「宗廟尚ノ親、朝廷尚ノ齒、鄉黨一ノ一、行事尚ノ賢、大道之序也」

【尚齒】シャシ　十干の癸の異名「史記」‖昭陽（陽部）

【尚主】シャシュ　天子の女をめとる。漢書、王吉傳「娶二天子女一曰ノ尚二公主一」

【尚書】シャウ　○官職の名。尚は上なり、上古の官。故事成語考「書經載二上古唐虞三代之事一故曰二一一一」○省は今の内閣、其の長官を一一令といふ、今の總理大臣。

【尚食】シャウ　天子の食事を掌る官。秦代より始まる。宋史、職官志「一一掌二膳羞之事一」

【尚連】シャウ　紙をたっとぶ。論、憲問「君子哉若人、一ノ一哉若人」

【尚方】シャウ　○天子の御物を造る所。又、其の官名。一說に、天子の御物を納むる倉。漢書、朱雲傳「願得二一一斬馬劍一以誅二侯臣一人頭一以厲二其餘一」○藥の配劑を掌る官職。漢書「爲二趙東王一一一」

【尚武】ブシャウ　武をたっとぶ。杜甫詩「此邪今一ノ一、何處且依レ仁」

【尚佯】シャウ　まよふ。淮南子「一二一震北之際一」‖倡佯・仿徉・徜徉・倘佯。

【尚絅】シャウ　○絅をたっとぶ。國語「子貶曰、未レ知レ德、盍二大蒐儀一以一ノ一、以示レ之」○太古の禮儀。禮記「毋レ敢二尚絅一一一然也」

【尚論】シャウ　古人の行迹を論ずる。尚友を見よ。

七畫

【掌】ゲキ　陷

かべのすきま（際孔）‖隙。

十畫

【尠】セン　銑　今、鮮の字を借り用ふ

すくなし（少）

【尟】セン　尠（前條）の俗字。

【尟少】センセウ　すくなし。大唐西域記「伽藍五所、僧徒一一」

尢部（尤・尢）

【尢】ワウ　陽　本、允に作る。今、尪に作る

○まがれるすね（曲脛）○くぐせ、せむし（僂）○せひくし（短小）

一畫

【尢】イウ　尤

○もっとも（最）はなはだ（甚）けやけし（異）第一等にすぐれし者。韓愈、送温處士序「拔二其一一」○とがめ、とがむ（答）論、憲問「不レ怨二天、不一一人」○あやまち（過失）○うらむ（怨）○あやし（怪）○姓一は黄帝の臣。國○もっとも、至極其の通り。○但し、とはいへ。

同訓異字　特尤・最の別は最（日部八畫）の條を見よ。

【尤異】イウ　はなはだすぐれる。漢書「治行一一」

【尤悔】イウクワイ　とがめと、くやみと。論、爲政「言寡レ尤、行寡レ悔」漢書「淺爲二一一深作二敦害一」

【尤龍】イウリウ　とがめはづかしめる。倪瓚詩「願レ使如レ鏡、寧避二一一一」‖恥辱。

【尤最】イウサイ　この上もなくすぐれてゐること（答辱、石勒載記）

【尤著】イウチョ　すぐれていちぢるし。候漢書、功効一一」

【尤物】イウブツ　尤は異なり、人の最もすぐれたる者、後世は美女の義とす。左、昭二八「夫有二一一一是二以惑一レ人」

【尤而效之】コレニナラフ　人の惡事を見てそのならふ。左、莊二十「原伯曰、一一其亦將レ有レ昔」前條參看。

四畫

【尨】ボウ　江　邕に作る

㊀むくいぬ、犬の毛多きもの。詩、召南「無使二尨也吠一」○むくむくと大いなり。○まじはる、まじる（紛雜）㊁一茸ジョウは毛などのみだる（亂）る貌。左、僖五「狐裘一茸、吾誰適從」

【尨犬】ボウケン　むくいぬ。‖狵狗。

【尨雜】ボウザツ　毛などの入りまじる貌。

【尨大】ボウダイ　むくむくと大いなり。

【尨茸】ボウジョウ　毛などの亂るる貌。字解參考。

【尪】ワウ　陽　尢に同じ。尪は俗字

○まがれるすね（曲脛）○せむし、くぐせ（僂僥）○よわし

(弱)「—嵐」

【尬興】ケフ よわくしてねるか。

【尬騎】ケフキ かよわし。唐書「—不レ能レ騎」

【尬病】ケフビヤウ かよわくして病む。晉書、山濤傳「少—、形甚短小、而聰敏過レ人」

【尬弊】ケフヘイ 弱くしてつかれる。晉書、皇甫謐傳「臣以二—一迷二于道一、因レ疾抽レ管、敢二墜林阜一」

【尬氣】ケフキ よわくしてつかれる。韓愈文「人固有二—一而壽考一」

【尬劇】ケフゲキ かよわくいやし。晉書、山濤傳「尤自以二—一不レ肯レ行」

【尪】

尤・瓦の俗字。

【尷】

尤(跛首)に同じ。

【就】シウ 宥

○つく(即)つきしたがふ(從)「去—」「暖—」○なる(成)「成—」をはる、をはり(終)○よく(能)○たとひ、よしや(假令)假設の辭。韓愈、送二孟東野一序「—其能鳴者」「—使」「—令」も同じ。○すなはち(即)○のぼる(上)後漢書、皇甫規傳「急使『軍—道』」

同訓異義 就・即・従・附・付・著・即等の別は糸(糸部十一畫)の條を見よ。

○つく・附・付・著・即等の別は附(阜部五畫)の條を見よ。

【就位】シウヰ 各其の本位につく。晉書「公主以下乃—レ—」‖就班。

【就國】シウコク 往きて諸侯の治理を受ける。三國志、華佗傳「家人車載、欲二往レ—一、佗駐レ車視」

【就學】シウガク はじめて學に就く。北史、韋師傳「初—、始讀二孝經一」

【就正】シウセイ 正しき道に從ひ死すべきに赴きて死す。宋史「先レ我—レ矣」

【就役】シウエキ 往きて役を受ける。李陵賦「—レ—九年」

【就業】シウゲフ 業に從ふ。魏書「擔レ笈負レ書、千里—レ—」

【就任】シウニン 其の事に任ずる。國語「見聞時『經二數月一再召レ之、昉乃—レ—」昉は周昉。

【就視】シウ 近づきて見る。後漢書、馬皇后紀「后常衣二大練裙一、不レ加レ緣、朔望諸姬主朝請、望二見后被衣疏麤一、反以爲レ綺、歎二—一乃笑、后辭曰、此繒特宜二染色一、故用レ之耳」

【就將】シウシヤウ 學が次第に進む。就は成、將は進。日就月將の略。詩、周頌、敬之「日就月將、學有二緝熙于光明一」

【就緒】シウショ ○業につく、緒は業。詩經「不」遑不レ暇、三事—レ—」○事が略出來かかる義。

【就職】シウシヨク つとめにつく。宋書、謝靈運傳「乃出—レ—」

【就蓐】シウジヨク しとねに就く、ねる。

【就世】シウセイ 死する。國語「先人—レ—」‖即世。

【就正】シウセイ 有道の人に就きて其の是非を正す。論、學而「就二有道一而正焉」後世詩文の添削を乞ふを—といふは此に本づく。

【就對】シウタイ 一句の中に對語あるをいふ。詩人玉屑「—、又曰二當句有對一、如二少陵、小院迴廊春寂寂、浴鳧飛鷺晩悠悠、李嘉祐、孤雲獨鳥川光暮、萬井千山海氣秋、是也」‖就句對。

【就枕】シウチン 臥する。韓愈詩「昏昏—レ—」

【就第】シウダイ 官をやめて私邸にかへる。後漢書「復以二列侯一—レ—」

【就任】シウニン 任務に就く。‖就職。

【就縛】シウバク めしうどとなる。晉書「東—レ身—レ、不二敢願望一」

【就木】シウボク 死をいふ。死して棺の中に入るの左傳、僖二三「我二十五年矣、又如レ是而嫁、則—レ焉」

【就眠】シウミン ねむりにつく。

【就養】シウヤウ 左右に侍して奉養する。唐書、李光弼傳「吾滉二軍中一、不レ得二—一、爲二不孝子一、何官哉」

【就吏】シウリ 召されて吏となる。後漢書、王龔傳「資意雖レ不レ周、陳蕃遂—レ—」

【就中】シウチウ 多くのなかにてとりわけ、殊に。杜荀鶴詩「—一個愛レ石」

【尷】ショウ 蒸

すねがはれる、多く下濕の地に生ずる疾、脚氣カッ病の類。詩、小雅「既徹且—」‖尷瘡。

尸 部

【尸】シ 支

○かばね、しかばね(死骸)人死して未だ葬らざる者。屍に通ず。○かたしろ(神象)古、祭の時、神の依る所の人。後世は畫像を用ふ。孟、告子「弟爲レ—則誰敬」○つらぬ(陳)兵をつらねる。○つかさどる(主)詩、召南「誰其—之」○のばす、のぶ(舒・伸)○俸祿のみ受けて職責を空しくする「—位」

【尸位】シヰ 空しく其の位に在りて實を盡さず。書、五子之歌「太康—」

【尸位素餐】シヰソサン 空しく祿を食み位に居りて其の實を盡さず。漢書、朱雲傳「今朝廷大臣、上不レ能レ匡レ主、下亡二以益一レ民、皆——」素餐は詩、魏

風、伐檀に「彼君子兮、不二素餐一兮」とあるに本づく。

【與レリ】ヨシ 戰敗れ尸を齎ひて還る。曷、師卦「六三、師或レ輿レ尸凶」象傳

「師或ー レー、大无レ功也」

【尸解】シカイ 道家の術にて、身體のみを殘して、魂魄の拔け去るをいふ。神仙の化去する義。後漢書、方術傳「北海王和平病歿、後弟子夏榮言二其ーー一」注言「凡今之人、死視二其形一、如レ生、乃ーー也、是不レ腐、皮不レ爛、亦ーー也」

【尸諫】シカン 死後、なほ其の君を諫むる義。韓詩外傳「史魚病且レ死、謂二其子一曰、我爲二人臣一、生不レ能二進賢一面退二不肖一、死不レ當レ治二喪正堂一、殯二我于室一足矣、衞君聞レ之、召二遽伯玉一而退二彌子瑕一、生以身諫、死以レ尸諫、可レ謂レ直矣」大戴禮、保傅には史魚を史蝤に作る。

【尸鳩】シキウ 鳩の一種。⇨布穀・鳲鳩。

【尸居】シキョ かたしろの如くにをる。謹子「ーー而龍見、淵默而雷聲」

【尸官】シクワン ただ其の祿を食みて責を盡さざる者、尸位素餐の役人の意、風俗「義和尸二厥官一、罔二聞知一」

【尸坐齊立】シザセイリフ 坐するにただしきことは、尸の如く、立つに謹むことは、齋戒する時の如し。曲禮「若夫坐如レ尸、立如レ齊」齊・齋通ず。

【尸祝】シシュク ○尸はかたしろ、祝はかんなぎ。莊、逍遙遊「庖人雖レ不レ治レ庖、ーー不レ越二樽俎一而代二之矣一」○轉じて祭祀を掌る義とす。莊、逍遙遊「子胡不レ相與尸二乎其無一而ーー之乎」

【尸素】シソ 尸位素餐の略、位に居りながら、其の責を盡さざる義。潘岳文、魏レ無二獻納一、ーー以甚」

【尸祿】シロク 疑義に纏ちて、深く恐縮する。史、伍子胥傳「伍子胥求二昭王一、既不レ得、乃掘二楚平王墓一出二其尸一、鞭レ之三百然後已」

【尸盟】シメイ 罰をつかさどる文、其の人。周禮、注「珠槃以盛二牛耳一、ーー者執レ之」⇨牛耳。

【尸利】シリ 利祿のみむさぼりて務を果さず。表記「事レ君盡而不レ諫、則ーー也」

【尸祿】シロク 尸官に同じ。漢書、鮑宣傳「以二衰微一當二曲從一爲レ賢、以二拱默一ーー爲レ智」⇨尸利。

【尹】 キン 一畫 イン

○つかさ(官・司)衆官の長「令ー」「閫ー」「閫ー」○つかさどる(司)ただす(正)をさむ(治)○まこと(誠・信)禮、聘義「手ー旁達信也」

【尹宮】インキュウ 周の人、函谷關の令たり、老子の西遊するや、道德經五千言を授けて去る。

【尹祭】インサイ ほじし(脯)正方に割きて祭る義。曲禮「凡祭二宗廟一之禮、牛曰二ーー一」

【尺】 セキ シャク 陌

○ものさし(度器)杜甫詩「寒衣處處催二刀ー一」○一寸の十倍、丈の十分の一。○長さ、たけ。○書鎭の一種、けいさん。

【尺一】セキイツ 詔勅を寫す木板。漢の制、板の長さ一尺一寸、故にいふ。漢書、匈奴傳「漢遺二單于書一以二ーー牘一」

【尺牛尋直】セキギュウジンチョク 小を屈して大を伸ぶる、大を爲すためには小を犧牲にする義。尋は八尺。孟、滕文公、志曰、「ーー、宜レ若レ可レ爲也」

【尺蠖】セキカク てがみ。陳書、蔡景歷傳「ーー勤而聊城下」⇨尺簡・尺書。

【尺簡】セキカン てがみ、書札。南史「爲二ーー一」⇨尺牘。

【尺玉】セキギョク 大きく貴きたま。曹植文「棄者不レ貪二ーー一、而思二短褐一飢者不レ願二千金一、而美二一餐一」

【尺縑】セキケン わづかばかりのきぬ。孟子「無二ーー寸鏑一」

【尺五】セキゴ 極めて近き義。辛氏三秦記「城南韋杜、去レ天ーー」

【尺夭寸楚】セキヨウスンソ 尺山寸水に同じ。夭楚は共に大國の名。寰中郡、由レ天池二至三峽一記「四望所レ覩、目與レ之際、蘇軾黍積、——、少焉霧作、長風捲レ湖而來、心怖乃下」⇨豆人寸馬。

【尺山寸水】セキザンスンスイ 高き處より見おろして、物の小さく見ゆる形容。張協山詩「曾向二華嶽頂上一來、——皆能說」

【尺紙】セキシ ○一尺ほどのかみ。○てがみ。賀鑄詩「ーー爲レ君裁」⇨尺牘・尺簡。

【尺書】セキショ てがみ。史、淮陰侯傳「發二一乘之使一、奉二一尺尺之書一」舉參詩「相思緘レ見レ面、時展二ーー一看」⇨尺牘・尺簡。

【尺水】セキスイ わづかな水。李白詩「潛龍隱二ーー一」

【尺寸】セキスン ○僅少の義。後漢書、鄧禹傳「禹得レ効二其ーー一、垂二功名于竹帛一耳」○のり、法度の義。道德指歸論「我身者彼身之ーー也、我家者彼家之權衡也」

【尺寸之功】セキスンノコウ すこしばかりのてがら、功一に效に作る。漢書「無二ーー一、以得二封邑一」

【尺雪】セキセツ 一尺つもれる雪。大雪。左、隱、八「平地盈尺爲二大雪一」

【尺素】セキソ てがみ。素は帛なり。樂府、飲馬長城窟行「呼レ兒烹二鯉魚一、中有二ーー書一」⇨尺牘。

【尺素往來】セキソオウライ 國二卷、藤原雅良の著、寛文年間の刊行。

【尺組】シャクそ　みじかきくみひも。王維詩「腰垂三十年、腰下無二一尺一」

【尺澤之鯢】シャクタクのゲイ　見る所のせまきに喩ふ。鯢はさんせうを。一說にめだか。宋玉、對二楚王問一「鯤魚朝發二崑崙之墟一、暮宿二於碣石一、暮宿二孟諸一夫――、豈能與レ之量二江海之大一哉」⇨井底之蛙。

【尺地】シャクチ　すこしばかりの地。孟、公孫丑「――莫レ非二其有一」⇨尺土。

【尺楮】シャクチョ　てがみ、楮はかうぞ、紙を製する原料。王邁文「敬題二――一、往自二商洛一」⇨尺書・尺牘。

【尺蠖】シャクカク　短き列もの。管子、管仲對二武王一「兵盡矢窮、人無二――一」⇨寸蠖・蠖兵。

【尺土】シャクド　すこしばかりの地。漢書、律志「亡二――之階一、繇二一劍之任一、五載而成二帝業一」⇨尺地。

【尺度】シャクド　○ものさし。宋資、律志「王制――漸レ差於古一」○すんぱふ、ながさ。

【尺牘】セキトク　てがみ。一尺の方版の義。漢書、陳遵傳「與二人一レ書、主皆藏弄以爲二笑樂一」⇨尺書・尺簡・尺楮。

【尺布斗粟之謠】シャクフトソクのウタ　兄弟の仲悪きそしり。漢の文帝の弟、淮南王長不軌を謀る、文帝殺すに忍びず、蜀に謫しけるに、長食はずして死す、民歌を作りて曰はく「一尺布尚可レ縫、一斗粟尚可レ舂、兄弟二人不レ能二相容一」と（史、淮南衡山列傳）

【尺兵】シャクヘイ　みじかき武器。唐書「行千里不レ持二――一」⇨尺鐵・尺寸兵。

【尺璧】シャクヘキ　直徑一尺ある寶玉。淮南、原道「聖人不レ貴二尺之璧一、而重二寸之陰一」子字文「――非レ寶、寸陰是競」

【尺木】シャクボク　龍の頭上の一物、博山の形に似たる者の名（酉陽雜俎）異志「龍欲二昇天一、先陞二――一者也」

【尺有レ所レ短、寸有レ所レ長】シャクモタンスンモチョウスル　物は用ふる所によりて、優劣あるをいふ（莊子、下居）

【尺蠖之屈以求レ信也】シャクカクのクツしてもってノブをモトムルなり　しゃくとりむしの屈むは、後に伸びんとするお爲めなり。他日の成功を期せんが爲めに暫く身を屈するに喩ふ。信は伸。易、繫辭「――、――、龍蛇之蟄、以存二身也一」

【尺八】シャクハチ　笛の名。唐の呂才の創作。博雅「馬融臨レ終、名二一管一名曰二――一」⇨簫笛。

尸　三畫

【尻】カウ　㊐

○しり、ゐしき、脊骨の盡くる所（轡）○そこ（底）物の地につける所。屈原、天問「崑崙縣圃、其一安在」

【尻坐】ザウ　うづくまり坐する。名山記「昂首一―、作二伏獅狀一」⇨蹲坐。

【尻輿】コシ　圖うまのしりの方に乘るあひのり、轅にて人の後につきて同じことをまねる、雷同する義。

【尻鞘】ザウ　圖太刀のさやを包む毛皮の袋、虎又は熊の皮を用ふ。

【尼】（一）ヂ・ニ　（二）ヂッ　（三）ディ　支・質・霽

○あま（女僧）「僧―」「比丘―」○ちかづく（近）昵に通ず、むつぶ（睦）やはらぐ（和）○さだむ（定）○とどむ（止）孟、梁惠王「止或―之」

【尼院】ニイン　あまでら。白居易詩「――佛庭寬有レ餘」⇨尼寺。

【尼丘】ニキュウ　山名、山東省曲阜縣の東南六十支那里に在り、叔梁紇、顏氏（孔子の母）とこの山に禱りて孔子を生む、故に丘と名づけ字を仲尼といふ。⇨尼山。

【尼姑】ニコ　圖あま、女僧をいふ。⇨比丘尼。

【尼首】ニシュ　あたまの尼丘山の形に似て中くぼく、四方の高きをいふ。後漢書、高獲傳、注「――、首象二尼丘山一、中下四方高也」

【尼父】ニフ　孔子をたふとびていふ。父は甫に同じ、男子の美稱。禮記、魯哀公誄二孔丘一曰、天不レ遺二耆老一、莫レ相二予位一焉。嗚呼哀哉――」

【尼公】ニコウ　圖貴婦人の比丘尼となれる者の敬稱。

【尼寺】ニジ　あまでら。⇨尼院。

【尼房】ニバウ　あまの住むいへ。洛陽伽藍記「瑤光寺講堂、――五百餘間」⇨尼院。

尽　三畫

盡（皿部九畫）の俗字。

局　四畫

【局】キョク　㊎

○つぼね、へや（部屋）○官吏の事務を扱ふ所「官―」○かぎる（限）しきる（劃）わかつ（分）せばめる（狹）○せぐくまる、體をまげる。詩、小雅「不敢不―」蹐に通ず。○かかはる（拘）せまる（促）まがる（曲身）○ちぢまる（縮）小さくなる。漢書、灌夫傳「一趨效轅下駒」○まく（卷）○せまし（狹）○はらまへ、人の器字度量「器―」「―量」○とき、時運「時―」○すごろく、圍碁などのばん（盤）「碁―」「博―」杜甫詩「老妻畫紙爲二棋―一」○事件の一くぎり。○―は大に笑ふ貌。一說、笑ひて聲を出さざる形容。莊子「――然大笑」○はこ（匣）圖○つぼね。へやもちの女官。又、へや

もちの遊女。

【局戲】キョク ごと、すごろくと。急就篇「基局博戲相易輕」

【局外】キョクガイ 圍碁の時、對局者の外の傍觀者、をかめ、轉じて其の事に關係なき位地。劉克莊詩「君看棋中戲、妙不レ出二一一一」

【局外中立】キョクガイチュウリツ 國際上にて、交戰國の何れにも援助をせざる義。

【局子】キョクシ ごはん。南史、何承天傳「文帝賜以二一一及銀裝箏一」

【局紙】キョクシ 圍碁三枝原料を以て造れる上等の島の子紙。印刷局の創製なるが故にいふ。

【局識】キョクシキ せまき見識。梁高僧傳「僻見一一」

【局縮】キョクシュク かがまりちぢまる。韓愈詩「我雖二官在一朝、氣勢日一一」

【局所】キョクショ ○ 全體の中の一部分。‖一局部。○ 身體の一部分「一一施酔」‖局部。

【局署】キョクショ やくしょ。宋史「撫酷之法、所在置二官吏一一」

【局蹐】キョクセキ 局は跼に同じ。天にせぐくまり、地にぬきあしす、甚だおそれて身を容るるに地なきをいふ。詩、小雅、正月「謂二天蓋高一不レ敢不レ局、謂二地盤厚一不レ敢不レ蹐」‖跼蹐。

【局促】キョクソク ○心のちひさき貌。白居易詩「磊落常許レ君、一一應レ笑レ予」○屈する貌。‖局蹐。

【局趣】キョクソク 屈しかがむ貌。史、總其武安傳「一一放二轅下駒一」‖局促。

【局長】キョクチョウ 圍官省の局の長官、局中一切の事務をすべる役。

【局天蹐地】キョクテンセキチ 天にせぐくまり地にぬきあしする、天の高きも背を曲げて行き、地の厚きもぬきあしして歩く、戒愼恐懼の甚だしき形容。‖局蹐參看。

【局度】キョクド 心のはたらき、器量。後漢書、袁紹傳「外寬雅有二一一一」‖器度。

【局枚】キョクバイ 清の同治中、曾國藩、官書局を于寧に創立し、經史を雕印す、江蘇・江西・浙江・福建・廣東・湖南・湖北等も皆倣ひて之を爲す、人呼びて二一一書と爲す。

【局部】キョクブ 身體中の一部分。‖局所。

【局面】キョクメン ごはんのおもてのやうにて平物のなりゆき「一一一變」

【局量】キョクリョウ はらまへ。晉書、裴秀傳「雅器有二一一一、以二幹用一稱」‖器量・局度。

【尿】 ネウ 嘯

のばり（小便）‖溺。

【尿道】ネウドウ 尿の通ふみち、膀胱の下前部より尿の排泄口に至る間の管道。

【尿毒症】ネウドクシャウ 泌尿排泄機の故障によりて尿中の有害物質が血液中に混ずるが爲めに起る病。

【屁】 ヒ 寘

へ、おなら。腹中に在る氣の下りて肛門より泄れるもの「放一一」‖失氣。

【尾】 ビ 尾

○を、動物のしっぽ「首一一」「驢一一」○うしろ、しりへ（後）する意（末）さき（端）をはり（終）○そこ（底）○うるむ、さかる（交）書、堯典「鳥獸孳一一」○あしたれ、星の名、二十八宿の一。

【尾行】ビカウ ひそかに人の後をつけ行く、あとをつける。

【尾撃】ビゲキ おひうち（後漢書、烏桓傳）‖追撃。

【尾生之信】ビセイのシン 約束を固く守りて變らざるをいふ。史、蘇秦傳「信如二尾生一與二女子一期於梁下一、女子不レ來、水至不レ去、抱レ柱而死」

【尾大不掉】ビダイフトウ 動物の尾、餘りに大いなれば、自らふるひ動かすこと能はず、以て君弱く臣强ければ制御し難きに喩ふ。左、昭十一「末大必折、一一一」

【尾骶骨】ビテイコツ 脊柱の末端の三角形の骨、尾閭を見よ。‖尻尻骨。

【尾閭】ビリョ ○大海の底にありて絶えず水を泄らすといふ所、百川の下に在り故に尾といふ、閭は案、水の來る處の義。莊、秋水「北海若曰、天下之水、莫レ大二於海一、萬川歸レ之而不レ盈、一一洩レ之而不レ虛」○轉じてせぼねの下端なる尖れる骨、かめのを。‖尾閭骨・尻骶骨。

【尾鰭】ビキ 圍魚を失ふ。鰭の當字。

【尾生】ビセイ 魚を音讀せしもの。‖不敬・無禮。

【搖レ尾而乞レ憐】ヤウビしてレンをこふ 人の卑屈にして、憐を乞ふさまを犬に喩へていふ。韓愈、應二科目一時與二人書一「者俄レ首帖レ耳、一一者、非二我志一也」

【曳二尾塗中一】ビトチュウにエイす 古は龜の甲を燒きて卜ふ、故に神龜は、死して貴ばるるよりも、生きて其の尾を泥中に曳くの心安きを容ふ、以て仕宦して束縛を受くるよりは、貧賤にして安らかに家居するに如かざるに喩ふ。莊、秋水「莊子釣二於濮水一、楚王使二大夫二人往先一焉、曰、願以二竟内一累矣、莊子持レ竿不レ顧曰、吾聞、楚有二神龜一、死已三千歲矣、王巾笥而藏二之廟堂之上一、此龜者寧其死爲二留レ骨而貴一乎、寧其生而曳二尾於塗中一乎、二大夫曰、寧生而一一、莊子曰、往矣、吾將レ曳二尾塗中一」‖塗は泥。

【尾上】ビジョウ 圍山のいただきの尾は山の裾のひき延びし所。‖山麓・山頂。

【尾花】ビバナ 圍すすきの穗。‖芒花。

【屠】 カイ 卦 灰

俗に屠に作るは非

○いたる(至)書、大禹謨「惟德動天、無遠弗ー」○きはまる、きはむ(窮極)○あたる(當)國○とどけ「一書」とどける(一書を出す)願がかなふ「願意聞ーく」○とどける、送致する、とどく、到著する。

【屆】

屆(前條)の誤字。

【居】

㊀キョ・コ 魚 ㊁キ 支

㊀をる、ゐる、住む「寓ー」「同ー」「僑ー」「雜ー」しめる(占)○すわる(坐)禮、曾子問「一喪語汝」○すまひ「住ー」ゐどころ「ー處」「トー」「山ー」「皇ー」「幽ー」○へいぜい(平生)「ー常」論、先進「ー則曰、不吾知也」○むなしく、ただ。○つむ(積)たくはふ(畜)史、呂不韋傳「奇貨可ー」又、積み貯へて置く物品。書、皐陶謨「化ー」化は交易する義。○とどまる(止)㊁や、語勢を助くる助語。詩、邶風「日ー月諸」

【居易】キョイ ○平正通達の地に安んじ居り、嬰激の行を爲して名を立つることを爲さざる義。中庸「君子ーレー、以俟ー命」○居の白樂天の名。

【居閒】キョカン 兩者の閒に立ちて盡力する。史、灌夫傳「賓客ーレー、遂止俱解」‖居中。

【居居】キョキョ 惡心ありて親まざる貌。〔詩、唐風〕

【居室】キョシツ ○ゐま、部屋。○家にすまひ居る。易經「君子居ニ其室ニ」

【居心】キョシン ○おちつきて安き心。呂覽「無レ有ニー一ー」○心を存す。晉書「卿ーレー不レ淨」

【居常】キョジョウ つね、平生。劉得仁詩「過レ物唯多慾、ー一只是吟」‖居恒。

【居守】キョシュ とどまりまもる。杜甫詩「雖レ無ニ新增態ニ尙邀レ官ー一」‖留守。

【居處】キョショ ○をる、家に居る。論、子路「ー一恭」○おどころ。‖居所。

【居諸】キョショ 日月をいふ。ーーの二字は助辭。詩、邶風「日居月諸、胡逝而微」に出づ。

【居食】キョショク ○すまひをしてくらふ、生活する。○閑ガをながらくらふ、あそびて食ふ。‖徒食・坐食・素餐。

【居水】キョスイ 河海を住居とする。國語「陸人居レ陸、水人ーレー」

【居然】キョゼン ○そのまま坐して動かざる貌。晉書「ーー是出軍之器」○安んずる貌。詩經「ーー生レ子」‖安然。○つれづれ。高適詩「舍下蓬亂嘆、ーー自蕭索」‖徒然。

【居宅】キョタク すまひ。世說「貧無ニーー一」‖住宅。

【居中】キョチュウ 兩者の閒に立ちて盡力する「ーー調停」‖居閒。

【居住】キョジュウ すまふ、すまひ。十二遊經「不レ得ニーー一」

【居貞】キョテイ ただしきをまもる。易經「ーー之吉、順以從レ上也」

【居第】キョテイ やしき。吳兢詩「大田遷ニ阡陌ニーー擬ニ侯王ニ」

【居移レ氣】キョイキ 人は地位境遇により て、其の氣分を異にする。孟、盡心「ーー、養移レ體、大哉居乎」

【居留地】キョリュウチ 開港場などにて外國人にすまひを許す一定の區域の地。‖國租界

【居士】コジ ○道德に達して仕宦せざる士の稱。王溥「ーー錦帶」‖處士。○僧にあらずして佛門に歸依せる男子。祖庭事苑「凡具ニ四德ニ乃稱ニーー一不レ求ニ仕宦ニ一宜欲レ遠レ俗、三居レ勝大窮、四守レ道自悟」

【居合】イアイ 國ぬながら太刀を拔きて敵とわたり合ふ、劍術の一派。林崎重信の夢想流より起る。轉じてあひぬき、刀の曲藝。

【居候】イソウロウ 國かかり人。‖食客。

【居待月】イマチヅキ 國陰曆十八日の夜の月、ゐまちの月。

【屈】

クツ 物

○かがむ、仲の對「抑ー」易、繫辭「尺蠖之ー、以求レ信也」組に通ず、まがる(曲)をれる、くじける(折)たわむ(撓)志が撓む。○へりくだる(謙)「ー下」○つきる(盡竭)漢書、食貨志「用之無レ度、物力必ー」○つよし、倔に通ず、ー彊はもとる(樓尻)貌。○いきごもる(鬱)○きしる(軋)○姓。‖原は楚の賢臣。

【屈曲】クッキョク こしをかがむ。‖折腰。

【屈膂】クツリョ 楚の屈原と漢の賈誼と。史記に二人の合傳あり。杜甫詩「中閒ーー雖レ遭發覓白取」

【屈起】クッキ 特におこる貌。ご屈は倒に通ず。漢書「ーー在ニ此位ニ」‖倒起。

【屈强】クッキョウ いぢつよし。剛直の貌。順從ならざる貌。漢書、賈誼傳「楊信爲レ人、剛直ーー」‖倔强・頑强。

【屈張】クッチョウ 前條に同じ。史記「遷依ニ以ニ新造求レ集之越ニーー一於越ニ」

【屈曲】クッキョク をれまがる。李白詩「人心若ニ波瀾ニ世路有ニーー一」

【屈媾】クッコウ くるしみてつきる。後漢書「公家ーー、賦斂煩數」‖窮竭。

【屈原】クツゲン 名は平、字は原、戰國の時の楚の同姓、懷王に仕へて、三閭大夫となり、國政を執りて信任せらるも、同列の大夫に妬まれて、疎んぜらる、乃ち離騷を作りて、王の惑婚を責ふ、懷王の子襄王立ち、亦讒を信じて屈原を長沙に遷す、終に石を

抱き汨羅に投じて死す。

【祭二屈原一】クツゲンヲ　屈原の入水したる、五月五日に之を祭る故事。續齊諧記「楚屈原不レ見レ用二于君一、而被レ放二于長沙一、以二五月五日一投二汨羅一而死、楚人哀レ之、每レ至二此日一、以二竹筒一貯レ米、投レ水祭レ之」

【屈産之乘】クツサンノジョウ　屈は屈支國、長安の西千五百支那里に在り、一名龜茲ト。名馬を産す、乘は馬四匹。左傳二「晉荀息請以二垂棘之璧一、與二屈産之乘一、假二道于虞一以伐レ虢」

【屈指】クッシ　○指をかがめてかぞへる。‖慶指。○又、指ををりて數へる程の稀なる義。

【屈膝】クッシツ　下りてひざをまげる。人の下風に立つ。晉書「交レ臂一レ」又、史記「交レ臂受レ事、諛レ膝請レ和」諛・屈通ず。

【屈申】クッシン　次條に同じ。班彪賦「行止一レ、與レ時息兮」

【屈伸】クッシン　かがむと、のびると。後漢書「蛇能一レ、配二龍騰蟄一」‖屈信・仲縮。

【屈人】クツジン　草の名、はまびし（蒺藜）海濱の沙地に生ずる蔓生草。‖蒺藜。

【屈從】クツジュウ　屈服に同じ。

【屈脊】クツセキ　身を屈して脊をうく。李康文「駑子驅于駿夏之域一、一一于公卿之門一」

【屈折】クッセツ　をれ〻がむ。李華、三賢論「若二百鍊之鋼一、不レ可二一一一」

【屈節】クツセツ　みさををまげる。家語「今夫子欲二一一レ以救二父母之國一」‖折節。

【屈宋】クツソウ　屈原と宋玉と、並に楚の文學家、詞賦に長ず。

【屈撓】クツダウ　たわむ。又、たわます。易、繫辭、疏「居不レ値レ時、失二其所レ守之志一、故其辭一一不レ能レ申也」

【屈託】クツタク　圖くよくよと心を痛める。

【屈致】クッチ　己を屈して此方へ來らしむ。蜀志、諸葛亮傳「此人可二就見一、不可二一一一也」

【屈蟠】クツバン　かがまりわだかまる。陸機、石扉賦「古木參レ天枝一一、下有二怪石一橫二樹間一」

【屈伏】クツフク　力屈してしたがふ。おそれしたがふ。‖屈從・屈服・俯服。

【屈服】クツフク　おそれしたがふ。力屈して服從する。五代史、桑維翰傳「見者無レ不二一一一」‖屈從・屈伏。

【屈抑】クツヨク　おさへつける。傳燈錄

【屈枉】クツワウ　○屈撓に同じ。○無實の罪。ぬれぎぬ。‖冤枉。

【尻】シ　組　くそ（糞）‖屎。

六畫

【屋】チク　屋

○いへ、や「家一」「一宇」「瓦一」「板一」「陋一」「茅一」「華一」「矮一」○すみか、すまひ（住居）大學「富潤」一、德潤「身」○やね、むね（棟）○やねの形せるきぬがさ（車蓋）史、項羽紀「乘二黃一車傳二左纛一」○圖や、職業又は商號に添へる詞「八百一」「伊勢一」「株一」

【屋宇】オクウ　いへ。後漢書、雷義傳「非二一一一乃得レ金」

【屋烏之愛】オクウノアイ　其の人を愛すれば、其の人の家の上の烏までも愛する義。坊主が憎ければ袈裟まで憎しといふ諺の反對。說苑、貴德「武王克レ殷、召二太公一而問曰、將レ奈二其士衆一何、太公對曰、臣聞愛二其人一者、兼二屋上之烏一、憎二其人一者、惡二其餘胥一」

【屋角】オクカク　やねのかど。陳游詩「北斗挂二一一一西風落雁聲」

【屋下架レ屋】オクカニカオクス　益なきことを重ねてするに喩ふ。顏氏家訓、序致「魏晉來所レ著諸子、理事重複、猶二一一一牀上施二牀耳一」

【屋如二七星一】オクチセイノゴトシ　屋根が破れて、所所に穴があきて北斗七星の如し、貧家の形容。雲仙雜記「郗鑒文、屋室破漏、從レ下望レ之、窓如二七星一」

【屋室】オクシツ　いへ。史、大宛傳「有二城郭一一一」

【屋舍】オクシャ　いへ。陶潛家詩「先生二一一一好一」‖屋宇。

【屋稅】オクゼイ　家屋にかかる稅金。宋史、李惟清傳「奏減二城中居民一一一、民皆悅服」‖家稅。

【屋宅】オクタク　いへ。考工記、注「匈奴無二一一一、田獵逐レ牧、遷二水草一而居」‖屋舍。

【屋像】オクザウ　家のたるき。杜甫詩「發レ地扶二一一一」

【屋樑】オクリャウ　家のむなぎ。吳志、諸葛恪傳「出行之後、所レ坐經事一一中折」

【屋比】オクヒ　きんじょ。いへなみ。史、汲黯傳「家人失レ火、一一延燒、不レ足レ憂也」‖比屋。

【屋梁】オクリャウ　家のうつばり。神女賦「其始來也、耀乎若二日初出照二一一一」‖屋族。

【屋梁落月】オクリャウラクゲツ　友を思ふ情の切なるをいふ。李白、夢杜甫詩「落月滿二屋梁一、猶疑照二顏色一」‖落月屋梁。

【屋漏】オクロウ　すまひ、住宅。韓愈詩「辛勤三十年、以有二此一一一」‖屋室。

【屋漏】オクロウ　室の西北の隅。人なき隱微の處。詩、大雅、抑「相レ在二爾室一、尚不レ愧二于一一一」

【不レ愧二屋漏一】フキオクロウ　隱微の間も戒愼して、鬼神に愧ぢざるをいふ。前條參看。

【屍】シ　支　尸に通ず

かばね、しかばね(死骸)「死ー」【屍體】シタイ 死せしからだ。なきがら。＝死骸・死骸。

【屎】シ 紙
○くそ(糞)莊、知北遊「道在ー溺」＝矢。○殿ーは苦み悲ひて呻く。詩、大雅「民之方殿ー」

【屏】屛(尸部八畫)の俗字。

七畫

【屘】キ 支 屋(尸部二十一畫)の略字
カを作す。

【屐】ケキ 陌 通音ゲキ
けた(木履)「木ー」「輕ー」【著ㇾ屐上ㇾ山】キヲハイテヤマニノボル 木履を著けて山に登る。宋書、謝靈運好ㇾ山水、尋ㇾ山陟ㇾ嶺。必窮ㇾ幽峻、謂陸數十里、莫ㇾ不ㇾ備盡。登躋、常著ㇾ木屐、上ㇾ山則去ㇾ其前齒、下則去ㇾ其後齒。【疲極】ヒキョク 下駄のおと。李商隱詩「洞中ー一省ㇾ分、猶是不ㇾ花迷ㇾ客自迷」【屐齒】ゲシ げたのはのあと。劉長卿詩「晩竹疎籬掩ㇾ春雙ーー」【屐子】ゲシ げたの類、子は助辭。【屐齒】ゲシ げたのは。晉書、謝安傳「心喜不ㇾ覺ニーー之折ㇾ齒」齒を折して喜ぶことの甚だしき形容。【屐痕】ゲコン げたのあと。陸游詩「牆外泥乾無ニーー一」＝屐痕。

【屑】セツ 屑
○いさぎよし、いさぎよしとす(潔)詩、邶風「髮如ㇾ雲、不ㇾ屑ㇾ髢也」○はたらく(勞)つとむ(勉)かへりみる(顧)○かろんず(輕)あなどる(侮)詩、邶風「宴爾新昏、不ㇾ我ㇾ以」○くづ、くづにする(碎末)「玉ー」「銚ー」「竹頭木ー」○ーーはこせつく貌。【屑金】セツキン 星の異名(淵鑑錄)【屑屑】セツセツ ○こせつく貌。左、昭五「ー一焉習ㇾ儀以亟、會ㇾ無ニ予閒ー」＝煩細。○勤める貌。漢書、王莽傳「晨夜ーー、爰咨判事、無ニ時休息ニ」○雨などの細かくふる形容。江淹、神女賦「雨ーー而稍落」【不ㇾ屑之教誨】フセツノキョウカイ 人を啓發せしめん爲めに、態と之に教ふることをいさぎよしとせずして、自ら之を思はしむる教へ方。孟、告子「孟子曰、敎亦多ㇾ術矣、予ーー也者、是亦敎ニ誨之ニ而已矣」

【展】テン 銑
○のぶ、つらねる(舒・陳)ひらく、ひろげる(開)「親ー」「開ー」「披ー」○しく(敷)○ころぶ、ころばす(轉)○ととのふ(整)つまびらか(審)みる(視)丁寧に視る。檀弓「ー墓而入」○しるす(錄)○かさぬ(重)○まこと(誠)○圖發達する「發ー」【同訓異義】ノベル・述・陳・宣・舒・申・延等の別は述(走部五畫)の條を見よ。【展開】テンカイ のべひらく、めさきがうちひらける「局面ーー」【展樂】テンガク 音樂をのべかなづる。陳書「ーー賦ㇾ詩」【展期】テンキ 展限に同じ。宋史「ーー以待者六七日」【展卷】テンカン 書物を開き見る。陸游詩「數盞語得西窗日、更取ニ丹經一ー看」＝開卷。【展玩】テンのべひらきてもてあそぶ。柳宗元詩「八軸ーー忘ニ晨炊一」【展觀】テンカン 展覽に同じ。【展限】テンゲン 期限をのべる、延期する。債務などの約束の期日をのべる。＝展期。【展謝】テンシャ わびる、陳謝する。左傳「以ニ寡君之在ㇾ行、牢禮不ㇾ度、敢ーニ一之ニ」【展縮】テンシュク のぶと、ちぢむと。錄起詩「則知造化源、方寸能ーー」＝伸縮。【展舒】テンジョ のべひらげる。爾雅、疏「舒者ーー徐緩有ㇾ次也」【展性】テンセイ 金屬の如く擊ちたたきてひろげのばし得る性。【展性】テンセイ いけにへをそなへるの周禮「ーー則告ㇾ牲」疏「展、具也」【展轉】テンテン ねがへりする。詩、周南「ーー反側」展一に輾に作る。【展讀】テンドク のべひらきてよむ。秦觀文「發ㇾ函ーー、殆不ㇾ能ㇾ釋ㇾ手」【展眉】テンビ 喜びてまゆをのばす。愁をひらくにいふ。白居易詩「時時强ーー一笑」＝開眉。【展布】テンプ 申し述べる。左傳「使ニ陪臣敢ーニ一之ニ」＝宣布・陳述。【展望】テンボウ 遠くの景色をながめる「ーー車」【展望臺】テンボウダイ 戰時に高處より軍狀をながめる任務に從ふ者。【展降】テンコウ ひとみをのばす、目を放ちて見わたす。＝放瞳。【展慕】テンボ はかまゐりする。檀弓「反ニ其國一不ㇾ哭、ーー而入」注「展、省ニ視之ニ」＝省墓。【展陳】テンチン 品物を陳列して一ーみる「ーー會」＝觀覽。

【屓】ヒ 八畫 未
ざうり(草履)
(一)ヘイ・ビ、ウ (二)ヘイ・ヒ、ウ (三)ヘイ・ヒ、ウ
清 俗字 屏は

㊀かき、へい、ついぢ(牆)門の内外に設けて目かくしとするもの「牆ー」「垣ー」○びゃうぶ「ー風」ついたて「曲ー」「畫ー」○おほふ、おほひ(蔽)㊁おそる(恐)さまよひて落付かず「ー營」㊂しりぞく(卻・斥・退)「ー居」のぞく(除)さる(去)

同訓異義　屏・退・斥・卻・黜等の別は退(辵部六畫)の條を見よ。

【屏氣】ヘイキ いきをころしておそれる。宋史「具二威望一自任、屢史ー氣」‖屏息長嘯。

【屏營】ヘイエイ 次條に同じ。

【屏營】ヘイエイ ついたて、とばり。淮南子「欲啄飛鳴、不レ離二ー營一」‖比喩で室内の喩とす。

【屏營】ヘイエイ ○心安からずしてさまよふ貌。後漢書、清河王慶「風夜ー營」注「ー、彷徨也」○おそる貌。‖惶恐。

【屏翳】ヘイエイ かぜの神。曹植文「ー收レ風、川后靜レ波」一說、雨師「山海經」又、雲師「呂覽」又雷師「拿昭注」

【屏扞】ヘイカン ふせぎ、まもり。北史、魏任城王湝傳、請二假都督一爲二國ー一」‖屏翰・藩屏。

【屏翰】ヘイカン 天子の藩屏となる義。晉華文「荷レ戈執レ銳、爲二王之爪牙一、立レ藩設レ險、爲二國之ー一」詩經の「之屏之翰、百辟爲レ憲」に本づく、翰は幹、國の屏藩植幹たる義。

【屏氣】ヘイキ 息をせざるやうにする。甚だしく恐るる義。論、鄭黨「ー レー似二不レ息者一」‖屏息。

【屏營】ヘイエイ しりぞけすてる。書、泰誓「ー一典刑」‖屏去・屏棄。

【屏居】ヘイキョ 世を退きて隱居する。漢書「劉德免爲二庶人一、ー二ー山田一」

【屏語】ヘイゴ 人をしりぞけて密かに語る。漢書、傅介子傳「入二幄中一ー一」

【屏障】ヘイショウ 内外のへだてとなるしきり、めかくし、屏風と障子と。晉書、阮籍傳「壁二府命一ー一使二內外相望一法令清簡」

【屏迹】ヘイセキ あとをひそめて遠く避ける。晉行錄「素猶ー二、辭聞赫然」‖屏跡。

【屏息】ヘイソク 恐れていきをころす。五代史、李存進傳「羣人ー異レ之」‖屏氣。

【屏退】ヘイタイ しりぞく。北史、于洛拔傳「悉屏避ー一、不二敢進一」‖斥退。

【屏當】ヘイタウ 品物を收めかたづける、收拾して安置する。晉書、阮孚傳「雖約性好レ財、正料二財物一客至、ー一不レ遺」

【屏翳】ヘイエイ しりぞける。北史、李詡傳「ー二ー浮詞一、遏二止華僞一」‖斥逐。

【屏風】ビャウブ ○びゃうぶ。風をふせぐもの、ついたて。漢書「咸頭觸二ー一」○みづあふひ。楚辭「ー一紫莖」注「水葵也」一說に防風バウフウ

【屏面】ヘイメン 面を屏ふ具、團扇の類。漢書、王莽傳「後常騎二雲母ー一、非二親近一莫レ得レ見也」‖便面。

【屏蔽】ヘイヘイ かこひいだく。韓愈詩「三此ー一脩舍小、一溪當轅松陰涼」

【屓】ロウ 有

雨もる。‖漏。

【屠】ト 九畫 戸

屠(戸部十八畫)の俗字。

○ほふる、ころす(殺)「斬ー」○さく(裂・割)○牛馬雞狗などを殺して肉を割くを業とする者「一者」○敵の城を毀ち人衆を殺す。漢書、高帝紀「今ー沛」○浮ーフトは佛、又、佛教・僧寺塔をいふ。‖浮圖。

【屠維】トヰ 十干の己の異名(爾雅)

【屠割】トカツ ほふりさく。淮南子「ー一宰殺、割レ肉燒レ豕、調二平五味一者庖也」‖屠裂。

【屠牛】トギュウ 牛をほふる「ー一坦」

【屠戸】トコ 犬殺しなどを業とする家。

【屠沽】トコ 犬羊の類を殺し、又酒を賣る、共に賤業者の稱とす。屠戸と賣酒者と。後漢書、王柔傳「竝出二ー一ニ

【屠狗】トコウ いぬを殺す、又それを業とする者。史、樊噲傳「以二ー一爲レ事」

【屠宰】トサイ 料理すること。割烹。宋史、眞宗紀「禁二ー一刑罰一」

【屠殺】トサツ ほふり殺す。韓愈文「其含レ生之類、不レ得二輒有二ー一ニ」

【屠見】トケン 犬殺しの類。‖屠者・屠狗。

【屠肆】トシ 牛羊などをほふりて商ふ店、肉屋。

【屠者】トシャ 畜類をほふる人。戰國策「義政勇敢之士也、避二仇隆一于ー一之閒」‖屠見・屠狗。

【屠者炙筆】トシャシャヒツ 牛豚を屠るものは肉を食はずして、豆の葉のあつものを食ふ、紺屋の白袴に同じ。淮南、說林「ー一、爲レ事者步行、陶者用二缺盆一、匠人處二狹隘一」

【屠所之羊】トショノヒツジ 屠殺場に牽き行かるる羊、將に殺されんとする罪人などに喩ふ。摩訶摩耶經、偈「世如レ屠所羅縣レ羊至二屠處一步步近レ死地二人命亦如レ是」

【屠妙】トセウ 人をほふり、家をやく。焚殺するの典、嘉何世家「項王與二諸侯一ー一咸陽一而去」

【屠蘇】トソ 山椒・防風・肉桂・桔梗・白朮等を調合し、酒に浸して元旦に飲用すれば、一年中の邪氣を拂ふといふ。唐瓶「ー一酒、元日飲、可レ除二瘟氣一」

【屠伯】トハク 犬殺しのかしら、屠者の長。

糞者、嚴延年傳「流血數里、河南號二嚴―一」注「言延年殺レ人、如三屠見之殺二六畜一也、長也」

【屠博】トバク　犬ころしと、ばくちうち。屠牲と賭博とを以て業とする者。王績詩「――時爲レ儔」

【屠販】トハン　肉をほふりて賣る。洛陽伽藍記「里内之人盡皆工巧、――爲レ生、貲財巨萬」

【屠腹】トフク　はらをきりて自殺する、割腹する。はらきり、せっぷく。

【屠門】トモン　肉を賣る市。桓譚新論「對二―一而大嚼」＝肉市。

【過二屠門一而大嚼】トモンヲスギテオオニサクラウ　肉屋の前にて大いなる口を開き嚙むまねをする。曹植、與二吳季道一書「―――、雖レ不レ得レ肉、貴二且快一意」

【屠羊】トヨウ　ひつじを殺す。後漢書「―レ一救レ趙、非レ要二爵祿一」

【屠戮】トリク　ほふり殺す。＝屠殺。

【屠龍之技】トリウノギ　龍をほふる技、高尚なれども時の用を爲さざる無用の技藝。莊、說劍、朱泙漫學二屠龍於支離益一、殫二千金之家一三年技成、而無レ所レ用二其巧一」

【屠裂】トレツ　ほふりさく。＝屠割。

十二畫

【屣】シ　紙　㡀　一に躧に作る

○ざうり（草履）わらぢ（草鞋）

○價の甚だ廉なる者なれば惜氣なきものの譬とす。孟、盡心「舜視レ棄二天下一猶二棄敝一―一」

【倒レ屣】サカサマニス　客の來たるを喜び、あわてて草履をさかさまに穿ちて出迎へる義。歡迎の情の切なる形容。魏志、王粲傳「蔡邕聞二粲在一門一、―レ迎之日、此王公孫也」

【躧履】くつ。又、あわて急ぎて履をひっかけて曳きずりながら行く。漢書、鮑不疑傳「―――起迎」註「曳レ之而行、言二其遽一也」＝躧履。

【屢】ル　遇

○しばしば（數）たびたび。○つねに（毎レ）論、先進「億則―中」

同訓異字　屢・數・頻の別は數（支部）の條を見よ。

【屢空】シバシバカラ　貧しくしてたびたび家財が空乏に至る。論、先進「子曰、回也其庶乎、―――」

【屢次】しばしば、たびたび。＝頻數

【屢發】たびたびおこる。漢書「災異―――」

【屢盟】たびたびちかふ。屢次會盟。詩經「君子―――、亂是用長」

十二畫

【屧】セフ　葉

○しきわら（履中藁）○けた（展）杜甫詩「步―隨二春風一」

【層】ソウ　蒸

○かさなる、かさぬ（重累）すべて物の重なるもの「一―」「地―」「峻―」○たかどの、二階以上の建物（重屋）○だん（級）

【層雲】ソウウン　○幾重にもかさなるくも。朱熹詩「絕壑―――許盪レ胸」○地文學にて雲の一種、水平層をなして地面に近くあらはるるもの。

【層檻】ソウカン　かさなれるのき。歐陽修詩「曲欄高榭拂二―――一」

【層巖】ソウガン　巖石の重なりたるがけ。水經、注「―――刺レ天」＝層崖。

【層閣】ソウカク　幾階にも重なれるたかどの。蘇軾詩「―――有二餘清一」＝重閣。

【層觀】ソウカン　かさなりたるものみの唐書「苑中作二―――一、以望二昭陵一」

【層巒】ソウラン　かさなれる山。吳海詩「展レ席對二清池一、倚レ檻對二―――一」＝層巒。

【層檻】ソウカン　二重のふまへ、二階建の枚乘文「連二―四注一、交城―――」

【層巢】ソウソウ　高處にあるす。路史「冬則營レ窟、夏則居二―――一、以避レ雜」

【層岫】ソウシュウ　かさなりたる山のほら。陶韓詩「月夕對二―――一、雲霞映二晴川一」

【層深】ソウシン　かさなりておくぶかし。水經、注「山岫―――、側道褊狹」

【層樓】ソウロウ　幾階にも重なれるたかどの。漢書「更築二三―――一」＝重樓。

【層出】ソウシュツ　かさなりたるらでな。淮南子「高峯―――、人之所レ罷也」

【層巒】ソウラン　かさなりて連なれる峯。文同詩「前對二長江一隔二―――一」

【層纈】ソウケツ　かさなる貌。白居易詩「紅綠―――錦繡斑」

【層重】ソウチョウ　幾重にもかさなる。＝層疊。

【層疊】ソウデフ　かさなる。宋史、五行志「―――高大、衆色成備」＝層層。

【層棟】ソウトウ　長きむなぎ。朱熹詩「誰將二―――一贈二曦皎一」

【層壑】ソウガク　かさなりたるいはほ。景福殿賦「爾乃建二淩レ霊之―――一」

【層巒】ソウラン　かさなりたる山。庾肩吾詩「沈雲隱二喬樹一、細雨滅二―――一」

【層輪塔】ソウリンタフ　輪の數多くかさなれる塔、俗に層を相に作る。

【層累】ソウルイ　かさなる。宋玉賦「道互折而―――」＝層重。層疊。

【層樓】ソウロウ　幾階にも重なれるたかどの。漢書「更築二三―――一」＝重樓。

【履】リ　紙

○くつ（靴）履は麻、革は皮にて造る。○ふむ（踐）足にてふむ。論、鄉黨「行不レ―閾」○はきもの「木―」「草―」「絲―」「珠―」「冠―」○はきものをはかす、履を以て足に加ふ。史、酈侯世家「良強忍下取レ履、父曰、

ー我」○さいはひ(祿)詩、周南「福ー綏之」○あゆむ(歩)○おこなひ(行爲)「ー歷」「操ー」おこなふ「ー行」○易の卦の名、兌下乾上、○ーむ所の土地。領土。左、僖四「賜ー我先君ー」

同訓異語　履・踐・蹈・躡・踏・蹋・憑○履はふみゆく意、履歷・履行の類。又、人の經歷を履歷といふ。○踐はふまへてをること、踐祚の類。(禮記「毋ー踐ー屨」○蹈は足拍子をとり、どしどしふみつけるなり、蹈歌・舞蹈の類。躡は蹈に同じ。○躡は人のあとをふむこと、躡三皇之高蹤、張良躡漢王足一の類。轉じて後より、追ひかくるにも用ふ、追躡の類。○踏はふみつけるなり、踐・履と異れり、踏約は、約束をふみ破るなり、踐約の反なり。○蹋はふみにじる。史記「徐騎相蹋踐」○蹋は蹋に同じ、蹋鞠と連用す。

【履行】カウ　○ふみおこなふ。實際にふみ行ふ。說苑「始誦三之文、今履而行之、是學日從明也」○おこなひ。＝品行。

【履正】セイ　正道をふみおこなふ。後漢書「龍丘先生、躬德ー貞」

【履素】ソ　くつのひも。陳檢詩「毋貪ー組」

【履虛】キョ　虛空を履む、そらを歩く。列子「ー乘ー乘風」

【履屧】ヨウ　草履。大戴禮「千ー杖爲ー銘焉、于ー帶爲ー銘焉、于ニーー一爲ー銘焉、于ニ腦豆一爲ー銘焉」

【履傾】ケイ　國勢の傾ける時、これが恢復に當るをいふ。又、危難・誹謗を受け易き地位にあるをいふ。新語「乘危ーレー、則以ニ聖賢一爲ー杖」

【履端】タン　わらぐつをはく。說苑「知ニ地道一者ーレー」

【履歷之才】リレキノサイ　微細のことにまで才の行きとどくをいふ。晉書、謝玄傳「見ニ其使ー才、雖ニ履歷之閒一、亦得ニ其任ー」

【履謙】ケンケン　謙讓の德をふみ行ふ。後漢書「當ー葉ー積ー善ーレー之福ー」

【履霜之漸】シモヲフムノゼン　霜をふめば、やがて堅氷の時至るが如く、前兆を見て戒愼すべしとの意。易、坤卦「初六、履ー霜堅氷至」左傳「昭公昧ニ於ー一ー」

【履絲】シ　生絲にて作りたるくつをはく、甚だしきおごりをいふ。漢書、食貨志「ーレー曳ー綺」

【履仁】ジン　仁愛の道を履み行ふ。易、繫辭「子曰、祐者助也、天之所ー助者順也、人之所ー助者信也、ーレー思ニ乎順一、又以尙ー賢也」

【履新】シン　新年を迎へる。唐書、禮樂志「ーー之慶、與ニ剏等一同ー之」＝履端。

【履眞】シン　まことの道をふむ。水經、注「ーレー慊ー道、窮ニ數術之美一」

【履踐】シセン　ふみたるあしあと。張協詩「身輕無ニーー一」＝履跡。

【履庶】セイ　くつおと。漢書、鄭崇傳「上目、我識ー鄭尙書ーー」

【履舄】セキ　くつ。舄は二重ぞこのくつ。史、汲黯傳「ーー交錯、杯盤狼藉」

【履跡】セキ　ざうりの跡。裴迪詩「雲光侵ニーー一山裏掃ニ人衣一」＝履痕・履迹。

【履踐】セン　ふみ行ふ。白虎通「履之爲ー言履也、可ニーー一而行一」

【履祚】ソ　天子のくらゐにつく。祭邕文「受ニ玆介福一、ーー孔成」＝踐祚・卽位。

【履道】ダウ　○正しきみちをふむ。易、履卦「ーレー坦坦、幽人貞吉」○地名。唐書、白居易傳「東都所ー居ーー里、疏治種ー樹」白居易詩「歸來ーー宅、下ー馬入ー柴扉ー」

【履蹈】トウ　ふむ。ふみおこなふ。禮記、疏「凡可ニーー一而行一者、必割斷得ー宜、然後可ニーー一」

【履端】タン　正月元日、端は正、正月をふみ初める義。左、文元「先王之正ー時也、ーニ於始一ー辰信賦「天子ーー朔」＝履新。

【履長之賀】チョウガ　冬至の慶賀。歲華紀麗、注「冬至、律中ニ黃鐘一、其管最長、故有ニーー一」

【履薄】ハク　うすき氷をふむ。危きを圖す喩。潘岳、西征賦「心戰慄以兢慄、如ニ臨ー深而ーロー」履氷參看。

【履氷】ヒョウ　薄き氷をふむ。極めて危く恐ろしき喩。詩、小雅「戰戰兢兢、如ー臨ニ深淵一、如ー履ニ薄氷一」吳志、薛綜傳「懷ニーレー之險一」＝履薄。

【履險】ケン　くつと、たびと。後漢書、魯丕傳「特賜ニ冠幘ーー冠衣一襲一」

【履約】ヤク　○儉約の行を踐み行ふ。班固文「居儉ーレー、紹ニ公儀之操一」○約束を履行する。

【履歷】レキ　○これまで經歷せし事跡。封氏見聞錄「蓋欲ー著ニ前政ーー一、而發ニ將來健漢一也」○一身の經來りし行事「ーー書」＝閱歷。

【履霜ー新不ー爲ー冠】カンムリトナイヤモ　賤上下の別を亂すべからざるに喩ふ。史、儒林傳「黃生曰、冠雖ー敝、必加ニ於首一、履雖ー新、必關ニ於足一」

十四畫

【屨】ク　通

○くつ。麻にて造りしはきもの「葛ー」說文通訓定聲「古曰ー舄、曰ー」、漢以後曰ー履、今曰ー鞋」○かはぐつ(革履)＝靴。

【屨賤踴貴】クツハヤスクシテアシノタカシ　踴は刖者(罪ありて足をきられし人)のはくくつ。履の價賤くして、踴の價貴きは、罪を犯す者多きに由る。左、昭三「國之諺市、――」

十五畫

【屩】 キャク 薬

くつ(履)底にて造りしはきもの。史、范雎傳「踐ー掫笠」‖蹻。わらぐつ(草鞋)ざうり(草履)「草ー」「蒻ー」「芒ー」

十八畫

【屬】 シュク ソク 沃 通音ゾク 屬は俗字

○つく(付)「付ー」つきしたがふ「從ー」史、項羽紀「騎能ー者百餘人耳」○つづく(續)史、信陵君傳「使者冠蓋、相ー於魏」つらなる(連)○つくる(作)つづる(綴)「ー文」○むすぶ(結)○よろひのさね。甲札の數。○あつむ、あつまる(會・聚)淮南、天文「龍鳥而景雲ー」○いたる(至)いたす(致)○あはれむ(憐)○たる(足)「ー獻」○ーはうやうやし(恭)き貌。○ともがら(類・儕等)みうち「親ー」「血ー」「戚ー」「疏ー」「算ー」「家ー」○つかさ(官寮)「掾ー」「官ー」したやく「ー僚」けらい「隷ー」○やから。○ふくめおく、たのむ(付託)‖囑。○たまたま、まさに(適)○このごろ(頃者)「ー者」○國さくゐん、古の官制にて第四等官、今の判任官。

【屬意】シゾクイ のぞみをかける。史、叔孫通「禹子啓賢、天下ノー焉」‖屬心。

【屬役】シュクエキ 人足をあつめる。左傳、疏「ーー謂レ屬二衆下役一也」

【屬纊】ショクコウ うらみを結ぶ。晉語「齊桑不レ得二其請一必ーレー焉」

【屬纊】レショクコウ あき足る。左、昭二九「願下以二小人之腹一爲中君子之心上ーー而已」纊一に綿に作る。‖纊足。

【屬筆】シュクヒツ 詩文のしたがきをつくる。史、屈原傳「令屈平屬二草稿一」‖屬文・屬稿。

【屬レ纊】シュクコウ 人の臨終をいふ。纊は新らしき綿、之を口鼻に屬ッけて氣息の有無を驗するの謙、喪大記「ーレー以候二絕氣一」

【屬纊】シュクコウ 日をつける。後漢書「坐者皆ーー」

【屬乎】シュコ あはれむ貌。韓愈文「ーー其言、若レ閔二我窮一也」

【屬耳】シュクジ ○耳をつけてよく聽く。職國策「趙使者來ーレー」○ツヒニ つひにのごろ。漢書「將軍之廣明ー、肆レ郎ーー」

【屬託】タク たのむ。魏志、諸葛誕傳「爲二吏部郎一、人有レ所ニーー一、輒顯二其情一而丞二川之一」‖囑託・付託。

【屬望】バウ のぞみをかける。遼史「文妃生二晉王一最賢、國人皆ーレー」‖屬意。

【屬文】ブン 文章をつづる。漢書、賈誼傳「誦年十八、以ヲ能誦二詩書一ノレー、稱二於郡中一」‖作文・屬辭・屬稿。

【屬命】メイ 一身をまかせてたよる。弘華文「孤生ーレー、奄二有庶邦一」

【屬目】モク めをつけて視る。注目して視る。晉書、秦獻王東傳「其資龍爲二天下所ニーー一」‖矚目。

【屬錄之劍】ショクロクノケン 名劍の名。史、伍子胥傳「吳王乃使二使賜二伍子胥一ーー一曰、子以レ此死」

【屬籍】ゾクセキ 附屬する所の名籍、一門中に屬する戸籍。史、田叔傳「宗室毋二節行一者除二其ーー一」

【屬地】ゾクチ 國家に附屬せる土地、統治權を施し得る土地。

【屬兵】ゾクヘイ 手下に從ふ兵、部下の兵。‖手兵。

【屬吏】リゾク したやく、部下の官吏。‖屬官。

【屬聯】レンゾク つらなりつづく。韓愈詩「薛模數明滅、五色光ーー」

【屬和】ワゾク 屬し和する、他の歌ふ後に附きて歌ふ。宋玉、對楚王問「國中屬而和者數千人」より出づ。

【屬國】コクコク 他國に附屬して其の命令を受くる國。漢書、賈誼傳「何不三試以レ臣爲二一一之官一」

【屬車】ゾクシャ 天子のそへぐるま。漢書、賈捐之傳「屬旃在レ前、ーー在レ後」‖副車・佐車・貳車。

【屬僚】ゾクリョウ したやく。舊唐書、王播傳「ーー數服不レ暇」‖屬吏・屬官。

廿一畫

【屭】 キ 圓 屭は俗字

○さかんなり壯大なる貌。○屭ーヒは力を作す貌。張衡、西京賦「巨靈屭ーー」

少部

【少】

㊀テツ ㊁サウ・ソウ 篠 厥

㊀めばえ、もえいづ（發芽）艸木初生。㊁くさ、艸の古字。

【少茅】サウバウ 草や、ちがや。又、其のしげるるなか。漢書「―― 臣無二識知一」＝草茅・草莽。

【屮】 一 画

之（ノ部二画）の古字。

【屯】

㊀トン ㊁チュン 眞 元

㊀たむろ、たむろす（人衆）兵を衆めて守る「屯―」「雲―」「駐―」又其の所「一營」○どへっ（土苞）「土―」㊁めぐむ（發芽）○なやむ（難）なやみ、くるしみ「一困」「艱―」○をしむ（吝）○易の卦の名、震下坎上。

同訓異字 ㊀屯・聚・集・萃等の別は聚（耳部八画）の條を見よ。

○㊀屯・憫・懊・艱・難等の別は憫（心部九画）の條を見よ。

【屯營】エイ 兵のたむろして居る所。呉都賦「――櫛比、解署基布」

【屯翻】テンパン たむろしてまもる。又、其の所。後漢書「盜道レ客、刺二殺幡於一―之中一」

【屯行】カウ 大兵のあつまり進む兒。史、李將軍傳「大軍行、水草少、其勢不二――一」

【屯耕】トンカウ 兵が守りつつ、農業に從ふ。元史「令二本軍一―以食一」＝屯田。

【屯張】トンチャウ たむろしてよる。後漢書「范容等相聚反亂、――蜚陽一」

【屯衛】トンエイ 兵を衆めて敵をふせぐ。蜀孤及文「要害之地、少置二――一、餘悉休レ之」＝駐屯防禦。

【屯墾】トンコン 屯耕に同じ（清會典）＝屯田。

【屯集】シフ たむろしあつまる。＝屯萃・屯聚。

【屯守】シュ たむろして守る。後漢書「簡二精銳之卒一、發二――之士一」＝屯戍。

【屯戍】トンジュ ○たむろしてまもる（晉書、杜預傳）○たむろ。

【屯宿】シュク 多くの兵がたむろしてとどまる。宋史「二―重兵一」

【屯所】シュ ○兵士の集りて陣するところ。漢書、蕭何傳「諸二――一、爲二將軍副一」＝屯營。○關塞兵・巡査の駐在所、交番所。

【屯萃】スイ たむろしてあつまる。＝屯聚。文「板戸繁富、軍旅――」＝屯集。

【屯政】セイ 屯田の事務。通考「大興二――一、稅粟二十餘萬」

【屯駐】チュウ たむろしとどまる。宋史、孝宗紀「所在――」＝駐屯・留屯。

【屯田】デン 兵士が要害の地を守りつつ農業に從事する。周禮、冬官「有二屯部一、今曰二――一司一」漢書、趙充國傳「乃請二金城一上二――一奏、罷二騎兵一、留二步兵萬餘一分屯二要害處一、條二不レ出レ兵留田便宜十二事一」＝屯耕・屯墾。

【屯防】バウ 兵を衆めて敵をふせぐ。唐書「起二於邊將之一――一者」＝屯衛。

【屯營】エイ 兵卒のたむろせるとりで。唐書、崔寧支傳「多下二――一」＝屯營。

【屯兵】ヘイ たむろせる兵隊。漢書「城門校尉掌二京師城門一――一」

【屯坎】チュンカン ゆきなやむ。坎は行路平かならず、行きなやむ。張仲素文「濟二羣生于――一」＝屯險・屯困。

【屯險】チュンケン 世の中、險惡にして平かならず。南史、傅亮傳「見二世路一――一、著レ論名曰二演慎一」＝屯坎・屯蹇。

【屯蹇】ケンケン なやみくるしむ。蹇は險難。秦嘉詩「人生譬二朝露一、居レ世多二――一」＝屯坎。

【屯困】コン なやみくるしむ。梁書「陰泰相滑、晦明非レ一、皆――而後亨、資多難二以啓聖一」＝屯蹇・屯險。

【屯蹇】ケンケン ふさがりなやむ。韓愈文「當二――之時一、顧レ危無レ營者歟」

【屯夏】カン 次條に同じ、夏一に遲に作る。易、屯卦「屯如邅如」

【屯邅】テンテン 行きて遲まざる貌、ふしあはせ。杜甫詩「生涯已零落、世亦乃――」＝迍邅・屯夏。

【屯難】ナン なやみくるしむ。易、屯卦、疏「屯是――」＝屯困・屯坎。

【並】 三 画

ギャク 陌

○さかふ（逆）○雨のえだあるほこ、戟（弋部八画）の古字。

山部

【山】

サン セン 刪

やま、地の高起せるもの。峯嶺・岳・丘阜・岡等の總稱「丘―」「青―」「火―」「禿―」「名―」「玉―」

【山河】サンカ 山の前り入りたるくま。楊炯詩「探二幽――一」＝山隈

【山隈】アイ やまのもや。呉質詩「――生二朝雨一、江畑作二夕風一」

【山櫻】サンアウ やまざくら。沈約詩「――發レ然、熱は火がもえる。

【山陰】サンイン ○やまのきた。郊祀志「山南曰レ陽、山北爲レ陰」○地名。世說「王子猷居二――一、夜大雪、忽憶二戴安道一、時戴在レ剡、即便夜乘二小船一就レ之」

【山雨】サンウ やまのあめ。岑渾詩「溪雲

初起日沈レ閣、――欲レ來風滿レ樓」

【山家】サンカ　○山中に在るいへ。‖山房・山宅。○圓やまおくに在る家「――育ち」

【山歌】サンカ　○ゐなかのつまらぬうた。白居易、琵琶行「豈無――與二村笛一喧啞嘲哳難レ爲レ聽」○ふなうた、舟人のうたふ歌。‖水謌。

【山獣野鳴】サンジュウヤセイ　ひなうた。姑蘇志、風俗篇「――亦成二音節一、其俗可レ謂レ美矣」

【山海】サンカイ　山と、うみと、洪大なる喩とす。曹植、求二自試一表「裨二以山海之微一、補二益――一、螢燭末光、增二輝日月一」

【山海珍味】サンカイチンミ　山や海より産する珍らしくうまき食品。盛饌をいふ。‖山珍海錯。

【山仰】サンカウ　人を仰ぎ慕ふ、高山を仰ぎ望むに喩ふ。詩、小雅「高山仰止、景行行止」に出づ。

【山肴】サンカウ　山に産せしさかな、わらび・筍など。歐陽修文「――野蔌、雜然而前陳者、太守宴也」

【山河襟帶】サンカキンタイ　山河が襟や帶の如くめぐりかこむ。又、其の要勝の地。王勃、滕王閣序「襟二三江一而帶二五湖一」白居易詩「山河地襟帶、軍鎭國藩維」

【山谷】サンコク　○山中に住む人。王維詩「花落家僮未レ掃、鳥啼――猶眠」‖山人。○つつじの異名。花譜「鬼躑躅爲二――一」

【山峽】サンカフ　兩山の谷あひ。‖谿澗。

【山蛤】サンコウ　やまがへる。本草「――在二山石中一藏蟄、似二蝦蟇一而大、黃色能吞レ氣、飮二風露一」

【山龍】サンリュウ　やまでら、龍は塔なり、また塔下の室をいふ、佛を安んずるところ。沈炯詩「石座應二朝講一、――擬二夜禪一」

【山紙】サンシ　やまのかみ。皮日休詩「勢能擒二土伯一、醜可レ駭二――一」

【山葵】サンキ　圓わさび。溪邊の砂中に生ずる多年生草、葉は錢葵ゼニアヒに似、地下莖は辛味芳香あり。‖山蕗菜。

【山脚】サンキャク　山のふもと。張耒詩「扁舟繞江來、――繫二浮綠一」‖山足。

【山居】サンキョ　かくれて山中に住む。謝靈運に――賦あり。

【山蕗菜】サンキョウサイ　圓蔓草の一、どぶくりやう、根を藥用とす。‖土茯苓。

【山虞】サング　古、山林のことを司る官。周禮、地官「――、掌二山林之政令一」

【山君】サンクン　虎の異名。說文「虎、山獸之君」

【山怪】サンクワイ　山に居るもののけ。宋之問詩「巨石潛二――一」‖山魅。

【山狸】サンリ　やまみち。山中のこみち。

【山嵐】サンラン　山間のこみち。顏延之詩「謁二帝臺一――」

【山經地志】サンケイチシ　山經は山岳の大系を記せし書、地志は地理書。宋史、劉敞傳「學問淹博、自二佛老卜筮天文方藥、――、皆究二知大略一」

【山輿】サンヨ　やまかご。

【山呼】サンコ　天子の萬歲を祝する義。漢書、武帝紀「登二嵩高一、御史乘屬在二廟旁一、吏卒咸聞レ呼二萬歲一者三」‖滋呼。

【山谷之士】サンコクノシ　世を遁れて山中にすむ人。莊子「此――、非二世之人一、枯槁赴レ淵者之所レ好也」‖山林之士。

【山根】サンコン　○ふもと。庾信、明月山銘「風生二石洞一、雲出二――一」‖山脚・山足・山麓。○相術家の語、鼻梁をいふ。

【山妻】サンサイ　己の妻を人に向ひていふ時の謙稱。杜甫詩「理レ生那免レ俗、方法報二――一」‖荊妻。

【山斎】サンサイ　山中の居室、山中の書齋。徐陵詩「竹密――冷」

【山荘】サンサウ　やまにあるいへ、山中の別墅。梁昭明太子詩「棲鳥猶未レ翔、命レ駕出二――一」‖山居。

【山塊】サンカイ　山麓に同じ。

【山査子】サンサシ　圓小喬の一種。高さ四五尺の落葉灌木。果實は食用に供す。‖山楂子。

【山茶】サンチャ　山がむらさき色をする。王勃、滕王閣序「潦水盡而寒潭清、煙光凝而暮山紫」

【山茱萸】サンシュユ　山中に居る。淮南子「蛟龍水居、虎豹――、天地之性也」‖山居。

【山水】サンスイ　○やまと、みづと。南史、王

弘之傳「有二佳ー一、弘之又依レ岩築レ室」謝靈運傳「出爲二永嘉太守一、都有二名ー一」○山水の靈。唐書、李思訓傳「思訓善レ畫、世所レ謂李將軍ー一者」

【山栖】サンセイ やまにすむ。何氏語林「風塵不レ憎ー一、蛟龍不レ羞二泥蟠一」＝山棲。

【山精】サンセイ 山のぬし。山の神。抱朴子「ー一ー一日レ岐、一日超空、一日レ猱、一日飛揚、呼二其名一、不レ敢爲レ害」＝山魈。

【山猷】サンユウ 山の如くつみかさなる。後漢書、崔駰傳「處士ー一、學者川流」

【山椒】サンショウ ○山のいただき。宋史、張俊傳「俊遣二步兵一從二間道一直趨ー一、襲レ伏寨險」＝山頂。○芸香科に屬する木の名。＝蜀椒。

【山椒魚】サンショウギョ 圖深山の溪流に棲み、形ゐもりに似て醜く、肉は食用とす。＝鯢魚。

【山鯨】サンケイ 山中のばけもの。南唐記「山閒有二木客一、形骸皆人也、但烏爪耳、巢二於高樹一、伐レ樹必害レ人、一曰二山臊一」

【山川】サンセン やまと、かはと。詩、小雅「ー一悠遠」

【山川之美】サンセンノビ 山や川のよきけしき。陶弘景文「ー一、古來共談」

【山瀨】サンセン 山のこけ。陸龜蒙、山僧詩「ー一幾重生二草履一」

【山阪】サンハン やまのすみ。又、やまおく。張說詩「登降閱ー一」＝山陽・山阿。

【山蔽】サンヘイ 山と大いなる澤と。一說、山の林藪あるもの。左、宣十四「ー一藏レ疾、川澤納レ汙」盧諶詩「大雅含弘、益包ー一」

【山足】サンソク やまのふもと。詩、大雅、傳「麓、ー一也」＝山脚。

【山賊】サンゾク 山にこもれる賊。旅人等に害を加へる者。南史、謝靈運傳「俊レ未開レ徑、直至二臨海一、從者數百人、臨海太守王琇驚駭、謂爲ー一、徐知二是靈運一乃安」

【山村】サンソン やまざと。蘇軾詩「江南寒不レ到、霜露第ー一」

【山碓】サンタイ 谷間などにかけたる水車のうす。皮日休詩「野爐風自熾ー一、水能舂」

【山島】サンタウ 山より成りたる島。魏志、倭人傳「倭人在二帶方東南大海之中一、依ー一爲二國邑一」

【山澤】サンタク 字は巨源、晉の河内懷の人、器量不羣、少くして阮籍と竹林の友たり、武帝の朝、吏部尚書となる、人物を甄拔するに、各題目を爲す、時に山公啓事と稱す。

【山澤】サンタク やまと、さはと。易經「天地定レ位、ー一通レ氣」

【山丹】サンタン べにゆり、ひめゆり。仙遊志「ー一花一葉百莖、狀如二蒲槖一」＝紅百合。

【山崎】サンキ 山の如く高くそばだつ。李君房、白獄椒賦「椒則靈飛而ー一、獸乃自貫而黑草」

【山紬】サンチュウ やまゆのつむぎ。王禹偁詩「野蠶自成レ繭、繅客爲ニー一」

【山鎭】サンチン 每州名山の大なるものを、其の州の鎭として、地德を安んずる義。周禮「東南曰二揚州一、其ー一曰二會稽一」

【山珍海錯】サンチンカイサク 山海の珍味、盛饌をいふ。韋應物詩「ー一臺二蓬萊一」

【山長】サンチョウ ○隱居して學業を敎授する人の稱。荊湘近事「五代馬殷東、隱二居衡岳一、受レ業者、號爲ニー一」○校長の號（元史、選擧志）

【山頂】サンチョウ やまのいただき。酉陽雜俎、明皇紀「東封二泰山一（中略）禪畢、至二日觀一、觀二萬歲一、傳呼自ー一至二山下一、震二動山谷一」

【山中宰相】サンチュウサイショウ 山中に隱れ居れど、國家の大事の諮詢に預るもの。南史、陶弘景傳「武帝每レ有二大事一、無レ不二諮詢一、月中常有二數信一、時人謂爲ニ一一」

【破二山中賊一易、破二心中賊一難】ハサンチュウノゾクヲヤブルハヤスシ、シンチュウノゾクヲヤブルハカタシ 私心を破るの難きに喩ふ。陽明全書「ー一、區區願二除レ賊寧一、何足レ爲レ異」

【山中無二曆日一】サンチュウニレキジツナシ 山中に住めば日月の移るをも知らず。唐、太上隱者詩「ー一、寒盡不レ知レ年」

【山鼻】サンビ 鼻ばしら、鼻が顏に在るを、築山の庭にあるに比していふ。論語摘輔像「子貢ー一斗視」演孔、齊主碑「珠角擢レ奇、ー一表レ德」

【山鳥】サンチョウ ○山にすむ鳥。＝山禽。○圖雉に似たる鳥。＝山雉・山雞。

【山嵐】サンラン 山頂に同じ。華山記「ー一有レ池、生二千葉蓮華一、服之羽化、因曰二華山一」＝山顏。

【山斗】サントウ 泰山北斗の略語。文天祥文「ー一之望、彌久而彌尊」泰山北斗を見よ。

【山都】サントト ○狒狒の異名。晉灼「狒狒如レ人、被髮迅走、食レ人」○神の名。述異記「南康有レ神、曰ニー一、形如レ人、長二丈餘一、黑色赤目黃髮」

【山東出レ相山西出レ將】サントウシュツレバショウヲサンセイシュツレバショウヲ 山東よりは宰相を出し、山西よりは將校を出す、土地によりて出す所の人材の相違あるをいふ。漢書、趙充國辛慶忌傳贊「秦漢以來、ー一」

【山東諸侯】サントウノショコウ 函谷關以東の諸侯、戰國時代の齊・楚・燕・韓・魏・趙の六國をいふ。

【山房】サンバウ 山中に在る家。溫庭筠詩「ー一霜氣晴、一宿逢二平生一」＝山家・山莊。

【山砲】サンポウ 大砲の一種、山地の戰に用ふるもの。野砲より小にして輕便なり。

【山蔘】サンジン ちんちゃうげ。三柳軒雜識「ー一爲二幽客一」楊萬里詩「離酣月色著花外、梅異ニー一伯仲間」＝七里香。

【山魈】サン　やまのこだま。山のばけもの。能起詩「金鏡透ニ一一、霜風破ニ蟠雲ニ」

【山鷹】サン　山のなれしか。陳陶詩「野鵝思逢ニ岡、一一憶ニ剛棠ニ」

【山阜】フ　山と、をかと、阜は土山の石なきをいふ。詩經「如レ山如レ阜、如レ岡如レ陵」孫綽、天台山賦「融而爲ニ川瀆ニ、結而爲ニ一一ニ」

【山腹】フク　山の頂と麓との間、山の半腹。陸山記「水由ニ一一ニ、挂流三四百丈ニ」ロ山牛。

【山梟】サン　天子のかんむり。荀子「天子一一」

【山姥】ボン　山家に住むばば、やまうば。倉季標、諸葛武侯廟詩「木牛谷落陣圖殘、一一鏡古柏寒」

【山棚】サン　祭禮の時などに出す山ほこ。夢華錄「元宵大內前、綵ニ結一一、結ニ綵山ニ、山上皆畫神仙故事、謂ニ之燈棚ニ」數萬ニ」

【山麻】サン　やまあさ（苧）江均詩「採レ麻採ニ一一ニ」

【山毛擧】サンマウコ　ぶな（橅）深山に生ずる落葉喬木、實を炒りて食ふ。

【山民】サン　山の中に住む人民。中鑒「一一候、市民頒」

【山脈】サンミャク　やまつづき。朱子語錄「震都是天地中間、一一從ニ北中ニ發來」

【山門】サンモン　○圖寺の前の樓門。寺にはすべて山號あるに由る。○圖比叡山延曆寺の別稱。

【山野】サン　○山と野と。宋書、謝靈運傳「銭ニ一一草木水石觀ニ採之事ニ」○ゐなか、やまが。元結詩「一一性所レ安」

【山陽】サンヤウ　やまのみなみ。ロ山南。

【山陽聞レ笛】サンヤウブンテキ　笛聲を聞き懷舊の念を發せし故事。晉書、向秀傳「秀經ニ山陽舊廬ニ、隣人有ニ吹レ笛者ニ、發ニ聲寒亮ニ、秀乃作ニ思舊賦ニ」

【山樂】サンラク　峯猴イモノの異名。

【山藍染】サンランセン　山葵ワサビの漢名。

【山輿】サンヨ　けはしき山路を登る輿。文選「以ニ一一ニ登」ロ山轎。

【山蘊】サンウン　やまかぜの音。鮑照詩「野風拂ニ一一ニ、鳧鳥夜驚離」

【山鶯】サンオウ　やまなしの杜甫詩「一一結ニ小紅ニ」ロ山梨。

【山窓】サンソウ　山の中。王維詩「故レ砌青苔外、絶レ跡窮ニ一一ニ」ロ山中。

【山流宰石】サンリウサイセキ　勉めて止まざるときは如何なる難事をも成し遂ぐるに喩ふ。說苑「泰山之高、穿レ石、水非ニ石之鑽一也、而漸靡使ニ之然ニ」

【山栗】サンリツ　くりの稍小さきもの、しばぐり。蘇軾詩「一一滿レ盤兼ニ白黑ニ、村醪入レ口半酸甜」

【山林】サンリン　山とはやしと。周禮、地官大司徒「辨ニ其一一川澤丘陵墳衍原隰之名物ニ」注「積レ石曰レ山、竹木曰レ林」荀子「川淵者魚龍之居也、一一者鳥獸之居也」

【山林局】サンリンキョク　圖農商務省の一局、森林原野に關することを掌る。

【山林居叟】サンリンキョソウ　歐陽修の綵記旗詩集序の語、豪傑の士の賤役に甘んじて山林市井の間に伏する者をいふ。史記に「奚暗以ニ屠狗一爲レ事」とある類。

【山林之士】サンリンシ　山林にかくれをる士。漢書、王吉傳贊「一一、往而不レ能レ反、朝廷之士、入而不レ能レ出、二者各有レ所レ短」張華詩「隱士託ニ山林一、遯レ世以保レ眞」

【山陵】サンリョウ　○やまと、をかと。史、雅陰侯傳「兵法右倍ニ一一、前左ニ水澤ニ」○みささぎ、天子の墓。

【山陵崩】サンリョウホウ　天子のかくれたまふをいふ。戰國、秦策「王之春秋高、一日一一、大子用レ事」

【山龍子】サンリョウシ　蜥蜴セキエキの異名〔本草綱目〕

【山嶺】サンレイ　やまのかみ、山のぬし。陳遵詩「一一建ニ飛雨一、淨ニ洗綺羅塵ニ」

【山嵐河帶】サンランカタイ　砦を立つる時の語。泰山が礪イシの如く平かに、黃河が帶の如く細くなるとも變らざる義。史、高祖功臣年表「封爵之誓曰、使ニ河如レ帶泰山如レ厲、國以永寧、爰及ニ苗裔ニ」厲、礪通ず。

【山巒】サンラン　やまのふもとのもり、山下の林。杜甫詩「亭午下ニ一一ニ」

【山隈】サンワイ　山のくま。曹植詩「步ニ觀之濱、緣ニ山之隈ニ」ロ山曲・山阿。

【山王】サンワウ　圖近江國坂本の日吉神社。

【山獐】サンショウ　圖ゐのしゝの肉の異稱。

【山靜似ニ太古ニ】サンセイニタイコニ　山居の幽靜なること、太古の時代の如し。唐庚詩「一一、日長如ニ小年ニ」

【山高水長】サンカウスイチャウ　節操の高くして人に仰がるる形容。范仲淹、嚴先生祠堂記「先生之風、一一」

【山長水遠】サンチャウスイエン　遠く隔りたる義。許渾詩「一一無ニ消息ニ」

【山鳴谷應】サンメイコクオウ　聲が山や谷にひびきわたる。後赤壁賦「一一、風起水湧」

【鎔レ山煮レ海】ヨウサンシャカイ　山海の產物の多く出づるをいふ。史、吳王濞傳「卽レ山鑄レ錢、煮ニ海水一爲レ鹽」

【上レ山求レ魚】ジョウサンキュウギョ　決して得べからざるに喩ふ〔易林〕ロ緣レ木求レ魚〔孟子〕

【山芋】サンウ　圖薯蕷ショヨの和名。

【山徑二人面一起雲愁ニ馬頭一生】サンケイジンメンキウンシュウバトウセイ　山の極めて峻險なる形容。李白、送ニ友人入ニ蜀詩「見說蠶叢路、崎嶇不易行、一一、云云」

【山蔘】サンジン　圖○山の神。やまづみ。○薬が山にあたりて起る反響。こだま。

【山蛭】サンシツ　圖蛭の一種、くさびる、深山の樹木の枝葉にかくれ、人畜來れば落ち來りて血を吸ふもの。

【山伏】サンプク　圖山野に伏して神佛の道を修行する者。ロ修驗者シュゲンジャ

【山法師】ヤマブシ 國比叡山延暦寺の僧。‖山徒。
【山鉾】ヤマボコ 國祭禮の時、みこしの上に立てるほこ形の飾り。‖山棚。
【山繭】ヤマユ 國蠶に似たる蟲、楢・柞等の葉を食ひ、淡黄色のまゆを結ぶ。まゆより絹絲をとる。‖山蠶・野蠶。

二畫

【屺】セン 先
やまびと（仙人）山に入りて長生する者。‖仙。

三畫

【屹】キ 紙
はげやま（禿山）山に草木なし。詩、魏風「陟ニ彼一分」

【屹】ギツ 物 通書キツ
○山の高くそばだ（峙）つ貌「一立」けはし（峻）たかし（高）○たけくさかんなる貌。
【屹屹】キツキツ 踴りそびえ立つ貌。蘇舜欽詩「烽臺一一百丈起」
【屹嶷】キツギ きりぎしのそばだてる貌。南都賦「鉄壁一一」
【屹屼】コツゴツ はげ山のたかき貌。元結詩「山一一兮水淪漣」
【屹蜂】キツホウ 高くそびゆる貌。江賦「虎牙蠭竪以一一」
【屹然】キツゼン ○山のそびえたつ貌。○獨立して屈せざる貌。‖毅然。
【屹立】キツリツ 山が高くそびえたつ。隆都賦「鯨崖一一幾千仞」
【屹度】キツド 國○たしかに、しかと。○かならず（必）

【岍】コツゴツ 月
○はげやま（禿山）の貌。○たかくけはし「嶢一」

四畫

【岏】カ 麻 通音ガ
うつろ、谷中の大空なる貌。‖谷。

【岐】キギ 支 通じて歧に作る
○ふたまたにわかる「分一」○ふたまた、えだみち。列、說符「亡羊者曰、一之中、又有一、不知所之」○たかし（高）けはし（峻）詩、大雅「克一克嶷」○山の名、陝西省一山縣に在り、周の太王邠より徙りて此の山下に居る。
【岐嶷】キギ すぐれ秀でる。張說文「性實一一」
【岐嶷】キギ 幼くしてすぐれぬきんでる。峻茂の貌。詩、大雅「克岐克嶷」晉書、簡文帝紀「帝幼而一一」
【岐跱】キチ あしをそばだてる。張衡賦「心猶豫而狐疑兮、卻一一而顧情」
【岐周】キシウ 四周をいふ。其の初、岐山の下に國せしが故。書傳「四土一一之畝」
【岐塗】キト ○岐路に同じ、塗は途。○まぎらはしき條理。
【哭岐泣練】コクキシュレン 岐はわかれ路、練は白きいと、岐路に哭し、白絲を見て泣くは、其の本同じくして末の異るを悲む。淮南、說林「楊子見二岐路一而哭之、爲下其可二以南一可以北上、墨子見二練絲一而泣之、爲下其可二以黄一可以黑上」
【岐陽之鼓】キヨウノコ 岐山の陽に在りし石鼓。歐陽修集古錄「石鼓文、在二岐陽一初不レ見レ稱二於世一、至二唐人一始盛稱之、而韋應物以爲下周之文王之鼓、至宣王刻レ詩爾レ輔退之直以爲二宣王之鼓一、在二今鳳翔孔子廟中一」
【岐路】キロ えだみち。列、說符「隣人曰、多二一一一」‖岐塗。

【岌】キフ 緝
○山の高き貌。○あやふし（危）
【岌峨】キフガ 山の高く聳ゆる貌。朱松詩「九州眼一豁、餘子眞瑣瑣、獨立培塿中、誰此高一一」
【岌岌】キフキフ ○あやふき貌。孟、萬章「天下殆哉、一一乎」○高き貌。思玄賦「高二余冠之一一一兮」
【岌嶪】キフギフ たかくけはし。楊雄、羽獵賦「勢一一以山峙」‖岌峩・嶪岌。
【岌業】キフゲフ 山の高くあやふき貌。張衡、西京賦「狀鬼神以一一」

【岘】グヴン 寒
○けはし（峻）たかし（高）○巉は山の鋭く尖りたる貌。

【岑】○シン ○ギン 侵
㊀みね、山の小にして高きもの「遠一」「嶺一」「碧一」「危一」「尖一」○さがし（阻）けはし（峻）「嶮一」㊁きし（岸）がけ（崖）荘、徐無鬼「未始離二於一」
【岑寂】シンセキ 山の高くして林の茂れる處。大學、朱注「丘隅、一一之處」‖岑閴。
【岑峨】シンガ たかき貌。東方朔、七諫「世沈淖而難レ論兮、俗一一而嶢嵯」
【岑寂】シンジャク 高くけはしきいはほ。江淹賦「嵯一一而蔽レ日、樹靜暝而臨レ泉」
【岑鬱】シンウツ 高くけはしきいはほ。管子「山陵一一、潤泉閒流」

【岑寂】シンジャク　山のけはしき貌。司馬相如、子虛賦「――參差、日月蔽虧」

【岑岑】シンシン　頭の痛める貌。漢書、外戚傳「我頭――也、藥中得レ無有レ毒」

【岑參】シンシン　唐の南陽の人、天寶中の進士、出でて嘉州の刺史たり、退きて杜陵山中に居り、蜀に客死す、詩調最も高く、高適と名を齊うして高岑と並稱す。‖岑嘉州。

【岑嶺】シンレイ　高きみね。‖高峯。

【岑樓】シンロウ　高きたかどの。孟、告子「方寸之木、可レ使レ高二於――一」解に山の頂の銳き者、樓は壞に通ず。

【岔】セツ　屑

やまのくま（山曲）の高き處。

【岔】タ　禡

みつまたのみち（三分路）

【岐】キ　支

岐（山部五畫）に同じ。

【岭】フン　文

さがし（阻）たかし（高）

【岭嶮】ガンケン　山の高き貌（揚雄、蜀都賦）

五畫

【峡】アツ　葉

○ふもと（麓・山足）○おくふかし（深邃）左思、魏都賦「山林―― 圃―」

【岡】カウ　陽　コウ　俗字　嵩は

○をか（小山）○やまのせ（山脊）詩、周南「陟二彼高―一」又、山脊の廣く平かなる處。○崑―は崑崙山。

【岡阜】カウフ　をか、阜は土山。夏侯湛賦「搜二險危巇一覓二區―一」‖丘阜。

【岡巒】カウラン　をかと、やまと。西京賦「華嶽峨峨、―― 參差」‖丘山。

【岡陵】カウリョウ　をか、岡は小、陵は大。詩、小雅「如レ岡如レ陵」

【岳】ガク　覺（山部十四畫）の古字。

山の崇大なる者「五―」

【岳州府】ガクシウフ　湖南省の北部、洞庭湖の東岸に在りて湖南の要地たり、多く茶を輸出す。岳陽樓は府城の西門の樓をいふ、洞庭湖を下瞰し、風景絶勝なり、宋の范仲淹の記あり。

【岳飛】ガクヒ　字は鵬擧、相州湯陰の人、少より氣節を負ひ、左氏春秋・孫吳の兵法を好み、盡忠報國を以て自ら任ず、金人、入寇するや募に應じて起ち、屢強敵を破り、未だ嘗て一敗せず、奸臣秦檜の和を主とするを難じ、紹興十一年竟に檜の爲めに構陷せられて獄中に殺さる、年三十九、後鄂王に追封し、武穆と謚し、後改めて忠武と謚す、浙江省杭縣西湖の上に岳王の墳あり。

【岳武穆】ガクブボク　岳飛を見よ。

【岳牧】ガクボク　四岳と十二牧と。史、伯夷傳「舜禹之閒、―― 咨薦」

【岳陽樓】ガクヤウロウ　岳州府を見よ。

【岬】カフ　洽

○山の旁ハナタ○はざま、兩山の間。○圖みさき、山の海中に突き出たるもの。

【岸】ガン　翰

○きし、きりぎし、厓ガケ峻クツしくして水深し「海―」「對―」「峭―」「斷―」○かぎり。○きざはし（殿階）○ひとや、宿驛に在る獄屋。詩、小雅「宜―宜獄」‖獄狂。○かどかどし、廉稜あり。○額をあらはす「―幘」○魁―はすぐれてぬきでる（雄傑）○傲―はおごりて物に屈せず。

【岸曲】ガンキョク　きしのくま、岸の入りこみし所。

【岸傑】ガンケツ　からだが大きくたくましき。‖魁傑。

【岸幘】ガンゴン　ひとや、鄉亭に在るを岸、朝廷に在るを幘といふ。字解參看。

【岸幘】ガンサク　頭巾をぬぎて頭を露はすは禮法を簡略する義。後漢書、馬援傳「帝―― 見レ援」

【岸芷】ガンシ　岸に生ひたるよろひぐさ。香氣多し。范仲淹、岳陽樓記「――汀蘭、郁郁青青」

【岸狹】ガンキョウ　きしべに生ずるをき。徐陵詩「野燎村田黑、秋江――黃」

【岸頭】ガントウ　きしのほとり。きしべ。‖岸上・岸畔・岸邊。

【岸畔】ガンハン　きしのほとり。宋史、河渠志「治二――一」‖崖畔。

【岸邊】ガンペン　きしべ、岸のほとり。姚合詩「落山晴色來二城裏一、落水寒光出二――一」‖岸畔。

【岩】ガン　銜（山部九畫）の俗字。又、巖（山部二十畫）の俗字として用ふ。

【岩田帶】ガンデンタイ　圖子をはらみし女の肌にしめるはら帶、姙娠後五箇月目に結ぶ。はらおび、結肌帶ユヒハダノオビの訛。

【岩茸】ガンジョウ　圖苔の一種、深山の巖石に生じ、形きくらげに似て食用とす。

【岩戸】ガンド　圖○岩屋ガンヲクの戸。○天の岩戸の略語「――神樂」

【岩檜葉】ガンビヤク　圖山中の石間に生ずる多年生草、葉なくして檜の葉に似たる葉を叢生す。‖雲柏。

【岠】キョ　語

○おほやま（大山）○いたる（至）○さる（去）

【岟】ケツ　屑

やまのあな（山穴）

【岵】 コ 麌

しげやま、山に草木あるもの。詩、魏風「陟彼ー兮」

【岣】 コウ 有

ー嶁は山の名、湖南省衡州府に在る衡山のみねの名、禹玉の廟あり。韓愈詩「ーー山尖神禹碑、字書石赤形模奇」

【岸】 サク 薬

ー峯は山の高き貌。又、山の名。

【岹】 岸（前修）に同じ。

【岫】 シウ 宥

○山のほらあな。爾雅「山有穴爲ー」○いはあな（巌穴）○やま（山）謝朓詩「胸中列ー遠ー」「層ー」「巌ー」

【岫嶁】 シウク 縣名、盛京省鳳凰縣に屬す、美石を産す。

【岫雲】 シウン 山の穴より起る雲。陶潛、歸去來辭「雲無ー心以出ー岫」杜甫詩「落落出ー一、涼涼倚ー天石」

【岨】 ショ 魚

○いしやま（石山）の土を戴けるもの。詩、周南「陟ー彼ー兮」ー崔○そば、けはしき山みち。曹植、九愁賦「踐ー蹊隧之危ー」

【岨峿】 ショシュン けはしく高し。沈約、石僕射范雲墓銘「北京ーー」

【岱】 タイ 隊

山の名。泰山なり、五嶽中の東嶽、山東省泰安府の北に在り。

【岱華】 タイクワ 泰山と華山と。李俊民詩「夢將ー凌ニーー」

【岱山】 タイサン 泰山に同じ。劉義恭詩「金牒封ニ梁甫ー、玉簡禪ニーーニ」ー太山。

【岱宗】 タイソウ 泰山の別名、五嶽の長、故に宗といふ。風俗通「東方泰山、萬ニーー、岱者長也」ー太山。

【岩】 テウ 篠

山の高き貌。

【岩巌】 ケウゲン 山の高き貌。曹植、九愁賦「踰ニ巖隆之危阯ー登ーー之高岑ニ」

【岩岑】 ケウシン 山の高き貌。張衡、西京賦「狀亭亭以ーー」

【岷】 ビン ミン 軫 蚊に同じ

○山の名、四川・甘肅兩省の境に在り「ー山」ニ汶に作る。

【岷江】 ビンカウ 四川省の境に在り、岷山の北より發源し、南流して成都・眉山・犍爲等を經、宜賓縣に至りて江に入る。

【峇】 フツ 物

○やまみち（山脊道）○山のくけはしき貌。

【峇蔚】 フツウツ 特起せる貌。王延壽、魯靈光殿賦「下ーー以璀錯」

【峇巍】 フツギ 山のたかくしてかさなる貌。司馬相如、子虛賦「其山則盤紆ーー」

六畫

【峩】 ガ 哿 或は嵯に作る

○山の高く大いなる貌。○岸ーは山の齊しからざる貌。嵇康、琴賦「岸ー嶄巖」

【峩峩】 ガガ 山の高く大いなる貌。楚辭、九思「山嶽兮ーー」

【峅】 ケン 先

山の名。陝西省に在り、古、吳嶽と名づく。

【峋】 シュン 眞 通音ジュン

嶙ーは山崖の重深カサナリ ラカシの貌。又、山の起伏せる貌。又、ふしきだ（節級）ある貌。

【峙】 チ 紙

○そばだつ（屹立）そびゆ（聳）「列ー」「峻ー」「竦ー」「特ー」「聳ー」「茲ー」「對ー」○京ーはたかきをか（高丘）○そなふ（共・具）つむ（積）「積ー」「儲ー」詩、大雅「以ー其糧」

【峙積】 チセキ そなへ積む。宋史「河北路、商賈貿遷、芻粟ーー」

【峙立】 チリツ そばだつ。吳志、孫權傳、注「吳魏ーー、誰將ー平二海內一者乎」

【峒】 トウ 東 通音ドウ

○蠻人の居る所の名。○崆ーは山の名、嶐（山部八畫）を見よ。

【峒獠】 トウラウ 西南地方の山間に住む苗族。桂海虞衡志「蠻猺諸ーー及西南諸蠻、其遷作賂同」

【峒丁】 トウテイ 峒蠻の壯丁を募りて兵とせし者。宋史「團結以禦ニ我、爲ニーーニ」

【峭】 ショウ 嘯

○さかみち（坂路）○つらなる、つづく（連）山が長く連りつづく。

【峭蒨】 ショウセン ○さかみち、あがりさがりの道。甘泉賦「登ニ降ーーニ」○山の峯く長くつづける貌。法言「觀ニ東嶽一而知ニ衆山之ーー一也」ー邏邏。

【岾】ヒツ　月　嶂に通ず
○きし(岸)がけ(崖)○たかくけはし(高峻)「―峯」

【峠】〔國字〕たうげ、山路の、のぼりはてたる處、手向ケの義、そこにて神に手向すればいふ。‖嶺。

七畫

【峨】ガ　歌　一に峩に作る
○嵯―は山高くけはし。○冠などのいかめしく盛んなる貌。○―眉山の簡稱「三―」

【峨峨】ガガ　○山の高くけはしき貌。列、湯問「伯牙鼓レ琴、志在二高山一、鍾子期曰、善哉―兮若二泰山一」‖嶷峨・巍峨。○儀容のいかめしく盛んなる貌。詩、大雅「奉レ璋――、髦士攸レ宜」

【峨眉山】ガビ　四川省嘉定府峨眉縣に在り、大峨・中峨・小峨の三峰に分る。名山記「峨山相對、如二蛾眉一故名」李白、峨眉山月歌「――月半輪秋、影入二平羌江水一流、夜發二清溪一向二三峽一、思レ君不レ見下二渝州一」

【峩】ガ　峨（新條）に同じ。

【峱】カウ　爽

【峡】カフ　洽　通音ケフ
○はざま、たにあひ。兩山の間。○山、水を夾む。○地文學上にて海水に挾まれる狹き陸地を地ーといひ、陸地に挾まれる狹き海を海ーといふ。○巫ーは四川省の巫山をいふ。

【峡雨】コフ　谷間のあめ。杜甫、曉嘯詩「江虹明遠飲、―雨落猿飛」

【峡間】カフカン　はざま、山と山との間。

【峡谷】カフコク　たに。‖溪谷・峡谷。

【峡中】カフチウ　○たにあひ、兩山の間の地。甫詩「―都似レ火、江上具空書」‖峡間。○四甲乙の國の異稱。

【峪】カン　ゴン　寒
○大いなる谷。○むなし(空)‖谷。

【峭】キン　コン　眞
○―壁は山の連なる貌。

【峴】ケン　銑
山の名、湖北省襄陽府に在り。一名ー首山。

【峴山碑】ケンザンヒ　晉の羊祜の碑。晉書、羊祜傳「自有二宇宙一便有二此山一、由來賢達勝士登レ此遠望、如二我與レ卿者多矣、皆湮滅無レ聞、使二人悲傷一、如百歲後有レ知、魂魄猶應レ登レ此也」祜卒、襄陽百姓、於二峴山祜平生游憩之所一、建レ碑立レ廟、歲時饗祭焉、望二其碑一者、莫レ不二流涕一、杜預因名曰二墮淚碑一」

【峯】シン　眞
神の名、狀狗の如く、角ありて身に五采の文ありといふ。莊、達生「丘有レ―」

【峻】シュン　スン　震
○たかし(高)けはし(嶮)「阻ー」「險ー」「嶄ー」「高ー」「崇ー」「險ー」「絶ー」○きびし(嚴・急)史、酷吏傳「吏務爲嚴ー」○おほいなり(大)大學「克明二德一」

【峻宇】シュンウ　高きのき。又、のきを高くす。書、五子之歌「―彫牆」

【峻厓】シュンガイ　けはしきがけ。西都賦「超二絶峻一、越二―一」

【峻幹】シュンカン　高き木のみき。淮南子「山無二―一、林無二栢梓一」

【峻嶺】シュンレイ　けはしきいはほ。潘岳詩「陶谷茂二纖葛一、―敷二蘩條一」

【峻峙】シュンジ　けはしきえだ道。蜀都賦「義和假二道ー一」

【峻急】シュンキフ　○きびし、性嚴しくして人を容るる能はず。晉書、傳休奕傳「天性ー―、不レ能レ有レ所レ容」‖峻嚴・峻酷・峻刻・峻法。

【峻刑】シュンケイ　きびしきしをき。史、商君傳「殘二傷民一以二ー一」‖嚴刑。

【峻澄】シュンチョウ　はげしくつよし。晉和書「筆力ー一」

【峻魂】シュンコン　たかく大いなる石よみ。陶弘景文「混二玄一ー一」

【峻潔】シュンケツ　志高くしてきよし。韓愈詩「南朝ー―推二弘景一」

【峻狹】シュンケフ　けはしくしてせまし。張載文「山靜巖以ー―、仰二脩天一其如レ帶」

【峻原】シュンゲン　高く廣きはら。國語「高山ー―、不レ生二草木一松柏之地、其土不レ肥」

【峻險】シュンケン　たかくけはしき。西京賦「修路ー―」

【峻嚴】シュンゲン　おごそかにきびし‖嚴峻。

【峻谷】シュンコク　ふかくけはしきたに。劉歆文「臨二ー―一者、必欲レ窮レ墟」

【峻刻】シュンコク　きびしくむごし。宋書「風俗ー―、強弱相陵」‖嚴刻・峻酷・峻

嚴。

【峻酷】シュンコク きびしくむごし（宋史、李繼和傳）‖峻刻・嚴酷・嚴峻。

【峻秀】シュンシュウ ぬきんでひいでる。沈佺期詩「諸嶽皆一一、中峯特美好」

【峻字】シュンジ けはしきみね。劉勰文「不レ登二一一一、不レ知二天之高一」

【峻爵】シュンシャク 高き爵位。江淹文「超居二上流一、選乘二一一一」

【峻嶮】シュンケン たかくそびゆ。水經、注「高峯靈祭、一二一層雲」

【峻削】シュンサク 高きいしだたみ。李嶷文「白闥朱軒、崇基一一」

【峻整】シュンセイ おごそかにしてととのふ。宋史、朱京傳「風神一一、見者懼レ之、目爲二眞御史一」

【峻嶋】シュンタウ ○山がけづりし如くに高し。漢書「領水之山一一、漂レ石破レ舟」‖嶋峻。○寒さがきびしい。‖料嶋。

【峻切】シュンセツ きびしくはげし、嚴處にして迫切なり。魏書、陳奇傳「夢無二濟徵一、但時命一一、不二敢不レ赴」‖峻烈。

【峻折】セツ けはしくしてをれまがる。余靖文「行二十里有二梅嶺一、山道一一」

【峻絕】ゼツ 非常にけはし。‖絕峻。

【峻阻】ソ けはし。甘泉賦「高憎一一、臨眺廣衍」‖嶮阻・阻峻。

【峻厲】ソレイ けはしくかさなる。白敏中文「一一孤危、高無レ有レ倫」

【峻瀨】シュンライ はげしきはやせ。宋之問詩「吼沫銜二急浪一、合流環二一一一」‖激湍。

【峻秩】シュンチツ 高き官位。歐陽修、謝表「道愧二師儒一、乃忝二春宮之一一一」‖峻爵。

【峻直】シュンチョク 高くして直し、崇高にして正直。易林「巖高岱宗、一一且神」

【峻邸】シュンテイ たかくそびえたるやしき。元稹詩「一一儼相望」

【峻擬】シュンギ 高くぬきんでる（張協文）‖擬拔。

【峻訐】シュンケツ きびしく、しひてあばく。漢書、李延年傳「深更爲二一一一」‖深訐。

【峻特】シュンドク すぐれてぬきんでる。柳宗元文「執行一一、器宇弘大」‖峻挺。

【峻德】シュンドク 大いなる徳。大學「克明二一一一」

【峻法】シュンパフ きびしきおきて。漢書、丙吉傳「不レ遵二峻刑一一一」‖峻科。

【峻坂】シュンパン けはしきさか。漢書、文帝紀「帝臨二下一一一」‖嶮坂・急坂。

【峻峯】シュンホウ けはしきみね。南史「湘州城南、臨レ水有二一一一」

【峻密】シュンミツ きびしくしてこまか。魏志、楊阜傳「法禁一一」‖嚴密。

【峻命】シュンメイ 重き命令、君主の大命。

【峻茂】シュンモウ たかくしげる。扈平賦「冀二枝葉之一一一」

【峻樂】シュンラク はげしきくすり。吳師道詩「伐病宜二一一一」‖劇藥。

【峻厲】シュンレイ きびしくはげし。賈書、王濟傳「主者處レ事或不レ當、濟性一一明レ法繩レ之」‖峻刻嚴厲・峻烈。

【峻嶺】シュンレイ けはしきみね。王羲之、蘭亭集序「此地有二崇山一一茂林修竹一」

【峻烈】シュンレツ 峻切に同じ。

【峻棲】シュンセイ たかきたかどの。李尤文「周閣迴庪、一一臨レ門」‖危樓。

【峻嶷】シュンギョク たかきつか。張衡賦「刊二蕪林一鑿二盤石一、超二一一一

「下ニ―～而不二鉄鑿一者、慎二子大一也、跨二阜埠一而好顔鑿者、軽二子小一也」‖岐坂。

【峭壁】セウヘキ　かべの如く、けはしくそばだつ。又、其の山の形容。劍門山記「―中斷、兩崖相峙、如二門斯闢一、如二劍斯植一」

【峭厲】セウレイ　きびしくはげしい詳鋭のはげしく外に現はるるをいふ。論語集註「厳謂二稜角一―一」

【島】タウ　鷓　別に嶋・嶌に作る

○しま、海中に山ありて依り止るべき者。海中の小陸地。水上に出でざるを礁といふ「海―」「孤―」「絶―」○はまべ（海曲）「―夷」

【島國】タウコク　しまぐに、四方に海を繞らす國。

【島司】タウシ　圖島嶼の長官、府縣知事のさしづをうけて島を支配する官名。

【島樹】タウジュ　島の樹木。宋務光詩「天波混二蒼茫一、―一遙疑レ識」

【島散】タウサン　―まのうらわ。秋遊度、自二蟹舟一「烟霧自將レ養、―一徒繁曲」

【島嶼】タウショ　しま、島は大、嶼は小の丘爲詩「春潮平ニ―一、殘雨隔二虹霓一」

【島中】タウチュウ　しまのなか。史、田儋傳「與二其徒屬五百餘人一入レ海、居ニ―一」

【島田】タウデン　圖女の髪の結方、しまだわげ。

【島臺】タウダイ　圖臺の上に松竹梅、翁姥鶴龜などを配合せし飾物、婚禮の時に用ふ、蓬萊島を象りしが故。

【島流】シマナガシ　圖古の刑罰の一、罪人を遠き島に放ち、本土に歸ることを得ざらしむる刑、轉じて遠國に放逐するにもいふ。‖遠島・流罪。

【島原一揆】シマバライッキ　慶永十四年、耶蘇教徒が島原に據りて起したる亂。‖天草騒動。

【島守】シマモリ　圖しまのをさ。今の島司の類。

【狷】ダウ　豪

山の名。山東省青州府臨淄縣の南に在り。詩、齊風「遭我乎―之間兮」

【峯】ホウ　冬

○みね、たうげ（山嶺）○やま（山獄）山の直上して屹きもの「奇―」「危―」「峻―」「秀―」「叢―」「攢―」「絶―」

【峯巒】ホウラン　山のがけ。張穆文「―一刻削、窮二造化之瑰詭一」

【峯嶺】ホウレイ　つづきたるみね。李白詩「―一亦冥寂」

【峯尖】ホウセン　みねのとがりたる所。杜甫詩「華岳―一見二秋草一」

【峯頂】ホウチョウ　みねのいただき。元稹詩「攀レ蘿極ニ―一、遊レ目到二江濱一」

【峯頭】ホウトウ　みねの上。皮日休詩「―一孤家爲二雲穴一」‖峯頂。

【峯巒】ホウラン　山のかさなり連れるもの。戴叔倫詩「―一入レ海青」

【峰】ホウ　峯（前條）に同じ。

【峪】ヨク　沃

○たに（谷）○嘉―關は甘肅省に在り、古、西域の使臣、漢に入るの門戸たり。

八畫

【峻】エン　塩　琰

山の名。

【峻嶺】シュンレイ　日の入る所の山の名。山海經「北鳧同穴山西南曰ニ―一、下有二歳泉一、日所レ入處」遠辭「望ニ―一而勿レ迫」

【崖】㊀ガイ　佳　㊁ギ　支

㊀は崖に通ず

㊀水のほとり（水涯）○がけ、きりぎし（岸）「懸―」「絶―」○さかひ（境）かぎり（限）物事のさかひ、はて「端―」莊子「其來無跡、其往無ニ―一」○―山は廣東省新會縣の南に在り、宋朝置滅の地。㊁崖に同じ。

【崖異】ガイイ　きはだちて人とことにする。崖岸にして衆と異にする。宋史、呂祖謙傳「心平氣和、不レ立ニ―一、一時英偉卓犖之士、皆歸レ心焉」

【崖岸】ガイガン　水邊のきりぎし（水崖）轉じて、かどだちて、人と相和せざる義とす、いっこく。舊唐書、鄭絪傳「天性和樂、不爲ニ―一峭絶之行」康熙字典「不和レ物曰ニ―一、宋張詠、性剛介、自號二乖崖一」

【崖蜜】ガイミツ　けはしき山の蜜。韓愈祖詩「野―一、策高二千―一」

【崖樹】ガイジュ　がけの木。僧道潛詩「玲瓏辨ニ―一、宛轉照二庭柯一」

【崖寺】ガイジ　がけあな。宋史、秦檜傳「檜險險如ニ―一、深阻莫レ測」

【崖畔】ガイハン　きしべ。郭暹叔詩「驚二彼造化抗無ニ―一」

【崖壁】ガイヘキ　きりぎし。蛤興記「―一千仞、猿狖不レ能レ攀」

【崖蜜】ガイミツ　○峻しき崖にあるはちみつ。本草「―一在二高山巖石間一、色青、味小酸」○楊梅の異名。南方草木狀「楊梅青時極酸、既紅味如ニ―一」

【崖略】ガイリャク　あらまし。莊子「夫道難レ言、爲レ汝言二其―一」注「崖、邊際

也、略、粗略也」

【崤】カウ 肴 殽に通ず
○山の名、河南省に在り、古、險要の地。○河の名、河南省盤ー山より出づ。
【崤函】カウカン 崤山と函谷關と、共に河南省に在りて險要の地とす。賈誼、過秦論「孝公據ーニー之固」

【崗】岡（山部五畫）の俗字。

【崎】㊀キ 支 ㊁キ 紙 崎は俗字
㊀けはし、さがし（峻）埼・碕に通ず「嶔ー」「嵚ー」○ー嶇は山路平かならざる貌。㊁あやふし（危）○山のけはしき貌。○安からざる貌。○圖さき（岬）陸地の海中に突き出たる所。
【崎嶇】キク けはしき貌。
【崎嶔】キキン けはしきみね。杜甫詩「小閣背ー嶔」
【崎嶇】キク 山路のけはしき貌。張衡、南都賦「下崇諂而ー」轉じて世渡りの困難なる義とす。宋史、文天祥傳論「天祥ーニー嶺海」兵敗身執」

【崖】ギ 支 通音ガイ
○石の危き貌。○崖（本畫）に同じ。

【崟】キン 侵
○山の高くそばだつ（特起）貌。揚雄、甘泉賦「洪臺ー其獨出兮」○たかし、けはし「鬼ー」
【嶔起】キンキ そばだち起る。＝勃起。
【嶔崎】キンキ 山のけはしき貌。上林賦、注「ー、斗絕也」
【嶔然】キンゼン 起り立つ貌。

【崋】クヮ 麻 華に通じ作る
山の名。四嶽の一、陝西省華縣の南に在り。白虎通「西嶽爲ー山」

【崆】コウ 東 江
○たかし（高）けはし（阻）○ー峒は山の名、甘肅省平涼府に在り。＝空同・空桐。

【崐】コン 元 崑に同じ

【崔】サイ 灰
○たかく大いなり（高大）○山のいただき（山嶺）
【崔嵬】サイクヮイ ○山高くしてけはし。壁畫、初放「高山ーー兮」○功業の高大なる貌。傅玄、樂府「我烏戴二皐材、洪烈何ーー」
【崔嵬】サイクヮイ ○土山の石を戴く者。詩、周南「陟二彼ーー一我馬玄黃」一說、石の土を戴く者「爾雅」○高くして大いなり。何晏、景福殿賦「高殿ーー」
【崔嵬】サイ 高大の貌。詩、齊風「南山ーー」
【崔嵬入】サイワイ 唐の嶽瀆祭、四たび朝に入りて宰相となりし故事。唐書「蘇味道傳」朱全忠「委」心結」之、四拜二宰相一、世謂二ーーー一」
【崔嵬】サイワイ たかし。張衡賦「隆嵏ーー」＝嵯峨。
【崔李蘇杜】サイリソトヒ 唐代四人の文章家。唐書、杜審言傳「少與二李嶠・崔融・蘇味道一、爲二文章四友一、世號二ーーー一」

【崢】サウ 庚
○山がたかくけはし（高峻）「峻ー」「嶸ー」○雲を凌ぐほどの高山。
【崢嶸】サウクヮウ ○けはしき貌。孟郊詩「太行路ーー」○深く險しき貌。蜀都賦「經二三峽之ーー一」○轉じて歲月の積み重なる貌。高啓詩「中年漸佳哉ーー」
【崢嶸】サウクヮウ 山の高くけはしき貌「集韻」

【崚】サウ 庚
たかし（高）けはし、さがし（峻）＝崢。

【崇】シュウ 東 通音スウ
○たかし（高）「隆ー」「ー山峻嶺」○たっとし（貴）「ー高」○たっとぶ（尊）「欽ー」「敬ー」あがむ（敬）「ー敬」○たかさ（高

度）たかめる（高）○おこる、おこす（興）○あつめる（聚）左、隱六「見惡如農夫之務去草焉、芟夷薀崇之」○ます（益）厚くする、かさねる（重）○をはる（終）詩、衛風「曾不崇朝」○みつ、みたす（充）「崇酒」もる（盛）

【崇高】スウカウ　崇・高・隆・豐・鄧の別は高（部首十畫）の條を見よ。○ソウカウ　崇・尊・貴・上・尚・右の別は尊（寸部九畫）の條を見よ。

【崇位】スウヰ　尊き位（晉書、文帝紀）‖高位・崇班。

【崇遠】スウエン　たゞとくしてとほし。晉書、荀勗妾張氏傳「天道ー一」‖崇邈。

【崇牙】スウガ　樂器のかざり、鐘磬を懸くる處。詩、周頌「ー一樹羽」

【崇廈】スウカ　高く大いなる家屋。廣韻「仰ニー一而長息」‖高廈。

【崇墍】スウガイ　たかきがけ。高允詩「控ニ崇一ー嶺」

【崇高】スウカウ　たゞとくたかし。易經「ー一莫レ大ニ乎富貴ー」

【崇巖】スウガン　高きいはほ。晉書、張忠傳「其居依ニー一幽谷ー」‖巖谷。鑒「池爲ニ崇寶ー」

【崇牙】スウガ　樂器のかざり、鐘磬を懸くる處。詩、周頌「ー一樹羽」

【崇廈】スウカ　高く大いなる家屋。廣韻「仰ニー一而長息」‖高廈。

【崇墍】スウガイ　たかきがけ。高允詩「控ニ崇一ー嶺」

【崇高】スウカウ　たゞとくたかし。易經「ー一莫レ大ニ乎富貴ー」

【崇巖】スウガン　高きいはほ。晉書、張忠傳「其居依ニー一幽谷ー」‖崇巒。

【崇寶】スウホウ　たゞとくたかし。李尤、漏刻銘「懸象著明、序以ニー一ー」

【崇丘】スウキウ　たかきをか。東晉詩「瞻ニ彼ー一ー」‖崇岡。

【崇峻】スウシュン　高くしてけはしき貌。‖崇嶮。

【崇朝】スウテウ　一朝。詩、衛風「終不レ可ニ崇朝ー一ー」

【崇敬】スウケイ　あがめうやまふ。漢書、刑法志「故制レ禮以ニー一、作レ刑以明レ威也」‖尊敬。

【崇儉】スウケン　儉約を貴ぶ。隋書、柳昂傳「戒ニ奢ー一レ、率ニ先百辟ー一」‖尚儉。

【崇飭】スウチョク　たゞとくおごそか。晉士海文「紫禁ー一、形庭奥密」

【崇祀】スウシ　あがめまつる。柳宗元、箕子碑「大明宣昭、ー一式孚」

【崇事】スウジ　あがめつかへる。禮、祭統「ー一ニ宗廟社稷ー一則子孫順孝」

【崇秀】スウシウ　たかくひいでる。陳子昂文「景山ー一、北對ニ露郎ー一」

【崇尚】スウシャウ　あがめたゞとぶ。

【崇情】スウジャウ　けだかきこころ。王僧達詩「ー一符ニ遠迹ー一、清氣溢ニ素襟ー一」

【崇奬】スウシャウ　あがめすすめる、奬は勸なり、褒なり、厲なり。宋史、理宗紀「以示ニー一之意ー一」

【崇崇】スウスウ　たかき貌。揚雄、甘泉賦「ー一圖丘」

【崇酒】スウシュ　さけを一ぱいに盛る。儀禮、鄉飲酒禮「拜ー一」

【崇城】スウジャウ　天子の稱。初學記「白虎通曰、天子曰ニー一、言ニ崇高ー一也」

【崇號】スウガウ　高くしておく深し。唐書「陛下厭ニー一ー一」‖崇邈。

【崇】シュウ　スウ　東

○大いにして高くそばだつ山。○たかし（高）○五嶽の中嶽なる嵩山の嵩と通じ用ふ。韓愈詩「三月ー一少步、鬪蹋紅千層」嵩少は嵩山の少室。

【崇高】スウカウ　山の高き貌。詩、大雅「ー一維嶽」

【崇峻】スウシュン　けはしき貌。‖嵩高。

【崇】シュウ　ソウ　㊥　月

けはしくして高し（危高）「徂ー一」「峭ー一」「巍ー一」「巃ー一」「嶵ー一」山峯の頭の巉巖あるなり、爾雅「ー一者壓厭」

【崇乎】シュウ　けはしく高き貌。吳融賦「巃嵸乎ー一、蜂嚮乎、霧絶乎」

【崇嶢】シュウ　山のけはしく高き貌。張祜詩「兩峯高ー一」‖危峻。

【崇崇】シュウ　けはしき貌。沈約文「其篤レ狀也、則巃嵸ー一、喬枝拂レ日」

【崶】セフ　葉

ー巢は山高くして形勝なる貌。張衡、西京賦「崔巍ー一巢」

【崩】ホウ　㊥

○山がくづれる。詩、小雅「如ニ南山之壽ー一、不ニ騫不ー一」○くづれる（壞）「土ー一」「分ー一」やぶる（毀）物事が原形を失ふ。論、陽貨「三年不レ爲レ樂、樂必ー一」○か

くる、みまかる(殂落)天子の死をいふ。山のくづれるに比す。圖○くづす、字畫を省かく「草書にーす」○亂して惡しくす「髮をーす」「膝をーす」○細かくする「百圓札を十圓札にーす」

【崩】ホウ　崩・壞・頹・隤○崩は高き山、又は巖・岸などの、一時にくづるるなり、轉じて天子の死をいふ。○壞は堅などの、次第に少しづつ、くづれ破るるなり。○頹は墜なり、にりにりと、下へうなだるるなり、○隤とは、年老いさらぼへる意、日四頹は、日の入相になれるなり、頹然醉は、醉ひたる貌の、威儀もなくなりたるさまなり、隤に作るも同じ。

【崩殂】ホウソ　くづれみだるる雲の封希顏賦、萬仞ーー、千巖落石」

【崩角】ホウカク　頭を地につける。孟子「若ー崩二厥角一」注「百姓歸レ周、若レ崩二厥角一」＝稽首。

【崩御】ホウギョ　天子のおかくれ。＝登遐・崩殂。

【崩潰】ホウクワイ　くづれつひえる。＝頹潰・崩壞。

【崩摧】ホウサイ　圖よそほひがくづれ失せる、皇后・女院などの死をいふ。

【崩殂】ホウソ　天子のおかくれ。諸葛亮、出師表「先帝創業未半、而中道ーー」＝崩御。

【崩墜】ホウツイ　くづれおちる。論衡「ーー于坑谷之間一矣」

【崩落】ホウラク　くづれおちる。

【崩淵】ホウロク　婦人病の一、こしけ、白帶下・赤帶下など。

【峽】ライ　灰　四川省に在る山の名、眠山の東北に在り、山に九折阪あり。

【崚】リョウ　蒸　山高くけはし(峻)

【崚嶒】リョウソウ　たかくかさなる。徐陵銘「萬拱ーー」

【崚嶒】リョウソウ　山の高くけはしき貌。沈約、鍾山詩「ーー起二青嶂一」

【崘】ロン　元　山の名。＝嵏。崐を見よ。

【嵏】ロン　嵏(前條)に同じ。

九畫

【嵇】ケイ　齊　佳　霽　山高くけはしき貌。○たかし(高)けはし(險)○海參ーは露領の地名、浦潮の一名。

【嵇鬼】ケイキ　けはしき貌。楚辭、九章「嶮石ーー」＝嵯峨。

【嵬】アイ　灰　○たかし(高)けはし(險)○海參ーは露領の地名、浦潮の一名。

【嵬鬼】アイキ　けはしき貌。楚辭、九章「嶮石ーー」＝嵯峨。

【嵐】ラン　覃　山の氣。

【嵓】ガン　咸　巖(前條)に同じ。

【嵌】カン　㊀カン　㊁ガン　咸　㊀㊁嚴　㊀㊁咸　㊀㊁巖に同じ。

【嵌】カン　咸　㊀巖はけはしくして平かならざる貌。㊁ーー嵓は山のけはしき貌。左思、魏都賦「恒碣ーー嵓于青雲」

【嵌巖】カンガン　けはしく平かならざる貌。莊、在宥「大山ーー之下」

【嵌】カン　咸　○山の深き貌。○ふかきたに(深谷)ほら「空ー」「巖ー」○山の開き張れる貌。○けはし(峻)「嶄ー」○はめこむ、ざっがん(象眼)「鑲ー」

【嵌巖】カンガン　山の開き張れる貌。集韻「ーー深谷」

【嵌工】カンコウ　象眼。又、うめ木細工をする職人。

【嵌空】カンコウ　うつろ。朱熹詩「窾石何ーー」

【嵌谷】カンコク　山のほら。武元衡詩「集レ旅布ーー、聽レ禽歷二層巓一」

【嵌嵂】カンサン　山のけはしき貌。白居易詩「ーー落山嶺」

【嵌然】カンゼン　山の開き張りし貌。揚雄、甘泉賦、注「ーー開張也」

【嵌竇】カントウ　うろ、あな。杜甫詩「竹竿挂二ーー一」

【嵒】ガン　咸　俗に、岩に作る　○いはほ、巖に通ず「峯ー」○けはし、さがし(峻)

【嵒峭】ガンセウ　いはほの連れるがけ。郭璞、江賦「碕嶺爲二之ーー一」

【嵒】ガン　嵓(前條)に同じ。

【嵎】グ　虞　通音グウ　○やまのくま(山曲)隅と通ず。○山の重なりて高き貌。

【嵎夷】グイ　日の出る處。書、堯典「宅二ーー一曰二暘谷一」

【負嵎】フグウ　負は依なり、虎が山曲の險に依る、轉じて英雄が一方に割

據して勢の盛んなる體とす。孟嘗心「有」猛逐レ虎、虎一レ一、莫二之敢攖一」

【岍】ケイ　㊐　未に从ふ、俗に禾に从ひて誤に作るは非

○山の名。河南省陝州に在り。○姓「一康」

【岍康】ケンカウ　晉の人、竹林の七賢の一、字は叔夜、性豪邁にして不羈なり、琴を彈じて自ら樂む、老莊の學を好み、養生論を著す。

【岍侍中血】ケンジチウノチ　晉の惠帝の時、嵇紹、侍中たり、帝巳に寇廬し、軍衆皆潰敗す、紹、身を以て御輿を捍ぐ、飛矢雨集し、遂に害に遇ふ、血、帝の衣に濺ぐ、左右之を洗はんと請ふ、帝曰く、これ嵇侍中の血なり、之を去るなかれと。文天祥、正氣歌「爲二嚴將軍頭一、爲二——一」【嵇紹】ケイセウ　前條を見よ。

【崀】ゲン　㊥　一峭は高くけはしき貌。

【崽】サイ　㊦　○こども（子）○圖細一は外國人の僕役をいふ。

【嵷】シウ　㊇　一嵸は山長くして高き貌。

【峭】ショク　㊥　○山の大いなる貌。○嶄一は山連る貌。○齊しからず（參差）

【帽】ビ　㊅　峨一は山の名、蜀の嘉定府に在り。＝峨眉。

【嵐】ラン　㊦　○山氣のあをあをと蒸し潤ほへるもの「烟一」「翠一」「夕一」「晴一」○圖あらし（暴風雨）

【嵐峽】ランカフ　圖山城の嵐山の別稱。

【嵐氣】ランキ　むしうるほへる山の氣。謝靈運詩「夕曛一一陰」

【嵐光】ランクワウ　山氣の蒸してひかりある貌。鄭谷詩「一一蓮嶽迫、酒味菊花濃」

【嵐翠】ランスイ　山の氣のみどりいろなる貌。白居易詩「三十六峯晴、雲銷一一生」

【崔】リツ　㊥　○高く峻しき貌。○高く大いなる貌。

【崔嵬】リツクワイ　山の高くけはしき貌。司馬相如、子虛賦「其山則盤紆鬱律、隆崇一一」

十畫

【嵬】クヮイ　グヮイ　㊅　灰　○高く大いなる貌「磊一」○高くして平かならざる貌。○嵯一は石山の上に土あるもの。詩、周南「陟二彼崔一一」

【嵬峨】クヮイガ　○高くそびゆる貌。儲光羲詩「一一宮殿明」○醉ひて山の頽れんとするに似たるをいふ。歐陽修詩「資歡正喧譁、翁醉已一一」＝傀俄。

【嵬瑣】クヮイサ　高く大いなる貌。揚雄、甘泉賦「前殿一一」

【嵬茂】クヮイモ　高くそびゆる貌。王粲詩「百何登二一一一」

【嵬瑣】クヮイサ　高大なる貌の左思賦「其山澤則一一嶵嵷」

【嵬峩】クヮイガ　すぐれてたかし。郭璞、江賦「巫廬一一而北峙」

【嵬嵬】クヮイクヮイ　高くそびゆる貌。古離歌「兩山石一一」

【嵬瑣】クヮイサ　嵬は狂險の行をなし、瑣は姦細の行を爲す者をいふ。荀子「朱儒者天下之嵬、一時之瑣也」朱は侏の子丹朱、儒は俳の弟。

【嵯】サ　㊅　歌　○山けはし（峻）㊀一峨は山石のけはしく齊しからざる貌。衡恒、論書「山岳一峨而連岡」＝嵯峨。嵯峩。

【嵯】嵯（前條）に同じ。

【嵫】シ　㊅　支　○さがし、けはし（峻險）○奄一は山の名、日の入る處。奄（山部八畫）を見よ。

【嵩】スウ　㊇　東　○たかし（高）○山の名、五嶽の中嶽、河南省河南府登封縣の北に在り。圖○かさ（分量容積）○かさむ、かさばる。

【嵩雲秦樹】スウウンシンジュ　嵩山の雲と秦山の樹と、遠く隔りたるにいふ。李商隱詩「——久離居、雙鯉迢迢一紙書」

【嵩高】スウカウ　嵩山をいふ。爾雅「一一爲二中嶽一」漢書、武帝紀「登二一一一一」＝嵩丘。嵩高。嵩嶽。

【嵩衡】スウカウ　嵩山と衡山と。徐陵文「財輕二嶽鎭一、義重一一一」＝衡嵩。

【嵩丘】スウキウ　嵩山に同じ。宋之問詩「雖有一一山、高枕長在レ目」

【嵩華】スウクワ　嵩山と華山と。張載、劍閣銘「高論二一一一」＝華嵩。

【嵩呼】スウコ　臣民が君主の萬歲を唱ふ

る嶋。漢書、武帝紀「躬用二事華山一、至二中嶽一、親登二譙高一、御史乘屬、在二廟旁一、吏卒咸聞二呼萬歲一者三」張昱詩「千人魚貫拽二一一一」‖山呼

【嵩嶢】スウ　たかき山のほら。抱朴子「登二伊川於一一一」

【嵩嶢】シスウ　たかくしてけはし。

【嵩岱】スウ　嵩山と岱(泰)山と。後漢書「將下臨加二一一一鴻漸之淮海上」

【嵷】タウ　陽　一ㇾ貶ハ山石廣大なる貌。又、山の貌。南都賦「一ㇾ貶嶭剌」

【嵱】ヨウ　陸　○山の名。○一ㇾ嶸ハ山峯の上下衆多の貌。甘泉賦「臨二高峙之一ㇾ嶸兮」

十一畫

【嶇】ク　虞　○けはし(險)山路平かならず「崎一」「嶺一」○なやむ、あやふし。

【嶄】サン　咸　通音ザン　山のけはしき貌。沈約詩「源流挙擧密二隠ㇾ山上一一一」‖嶄嶭。

【嶄】ゼン　○高くけはし。魏に通ず。○山がするどくとがる(鋭尖)

【嶄】　嶄(前條)に同じ。俗に斬新の斬に誤用す。

【嶄巖】ガン　山がとがりてするどし。上林賦「一一巒差」‖嶄巖。

【嶄峯】サンスウ　けはしき貌。江淹賦「劉副一一兮、雲山而碧挙」

【嶄絶】ザンゼン　高くしてけはしき貌。鮑照詩「一一類二虎牙一、巉巌象二龍耳一」

【嶄然】ザン　一だん高くぬけいでたる貌。韓愈、柳子厚墓誌銘「一一見二頭角一、衆謂柳氏有レ子矣」

【嶃】サン　巉　○嶃一は山の屈曲せる貌。東方朔、七諫「望二高山之嶃一一」

【嶒】サン　○一嶒は嶙峋、參差。

【嶂】シャウ　漾　○高くけはしきみね(峻峯)○山峯の連りて屏障の如き者「連一」「列一」「嶺一」「複一」「層一」沈約詩「山一遠重疊」

【嶂巒】山の連りて屏障の如きもの、山に从ひ障の省聲に从ふ。

【嶂】シャウ　漾　○山の高峻なる貌「巍一」○嶂(山部十畫)を見よ。

【嶆】　嶆(前條)に同じ。

【嶋】　島(山部七畫)に同じ。

【嶌】　島(山部七畫)に同じ。

【嶁】ロウ　有　厩　○山の名。韓愈詩「嶁一山尖神禹碑、字青石赤形模奇」嶁(山部五畫)を見よ。

十二畫

【嶔】キン　侵　○山がそびえたつ(聳立)○一一は口をひらきはる(開張)

【嶔巖】ケン　けはしきいはほ。公孫傳「般之一一是文王之所レ辟二風雨一者也」

【嶔崎】キン　山のけはしき貌。王延壽賦「生二深山茂林一、處二嶔巖之一一一」‖嶔巖。

【嶔巍】ギン　山のけはしくそびゆる貌。張衡、南都賦「壯觀瑰瑋、一一屹嶪」

【嶔峯】ギンホウ　山の高くそびえたつ貌。嵯峨、思玄賦「慕二嶔巍之一一一」

【嶔欽】キン　口を開き張れる貌。釋名「開二張其口一一一然」

【嶔嵎】ケン　けはしき貌。陳亮詩「嵎」門巨一一一」‖嶔欽。

【嶔然】ゼン　巉石のけはしくそびゆる貌。柳宗元、鈷鉧潭西小邱記「一一相累、而下者若二牛馬之飲一於溪一」

【嶠】ケウ　嘯　○やまみち(山逕)○山鋭くして高し「峻一」○山の名。列、湯問「渤海之東、其中有二五山一焉、一曰員一」

【嶠路】ケウロ　やまみち。王勃、九成宮頌「廻二陸一一一、逼二陣山楹一」

【嶢】ゲウ　蕭　○たかし(高)「岧一」○嶕一は山高き貌。

【嶢巖】ゲウガン　たかくけはしき貌。李白詩「一一汪公權、突兀陳倉墓」

【嶢嶭】ゲウゲツ　山の高くそばだつ貌。沈約、郊居賦「一一山峙」

【嶢嶢】ゲウゲウ　山高き貌。漢書、揚雄傳「直

―以造ㇾ天」‖嶢屼。
【嶢闕】ケツ　皇居のたかき門。宋史「天仗回ニ―一、皇輿入ニ禁門一」
【嶢屼】ゴウ　山の高くさがしき貌。吳都賦「嵬巍――」
【嶢峭】ショウ　たかき貌。張衡賦「瞻ニ王階之―一」‖嶢崎。

【嶕】セウ　蕭

○―嶢ケウは山の高き貌。○いただき(嶺)概に通ず。
【嶕嶢】セウケウ　山の至りて高き貌。漢書、揚雄傳「泰山之高、不ニ―一則不ㇾ能ニ乎浮ニ雲氣一而散ニ歊蒸一」

【嶒】ソウ　蒸

淩―は山のけはしき貌。何遜詩「絕壁駕ニ淩―一」

【嶟】ソン　シュン　元　眞

○山高し。○けはし(峻)
【嶟峋】ソンシュン　山のけはしく秀づる貌(甘泉賦)‖峻秀。

【嶞】ダ　哿

山の狹くして長き者。詩、周頌「―山喬嶽」

【嶝】トウ　徑

○さかみち、のぼりみち。蘇軾詩「上ニ山絕ニ梯―一」確に通ず。○あふぐ(仰)

【嶸】ヘ　庚

―冢は山の名。二あり、一は陝西省に在り、漢水の源。一は甘肅省に在り。又、漢水に入る。

【嶙】リン　眞　軫

○山がたかく深し。○山にだんだん(節級)のある貌。
【嶙峋】リンユン　山にだんだんありて登ゆる貌。又、山の重りて深き貌(甘泉賦)‖陰游詩「山自ニ未落一增ニ―一」

【嶚】レウ　篠　同じ

崢に山高くしてまつはる「―刺」

十三畫

【嶲】スイ　支

漢(水部十三畫)に同じ。みなと。明朝の頃、作りし字。

【嶧】エキ　陌

○つらなりつづける山。爾雅「屬者―」繹と通ず。○鄒―山は山東兗州府に在り。‖嶧山・鄒山。
【嶧連】連屬せる山なり、山に從ひ絳の省聲に從ふ。

【嶰】カイ　蟹

○たにあひ(山澗間)○崑崙山の北に在る谷の名、黃帝が伶倫に命じて―谷の竹を取りて十二律管を作らしめしこと、漢書、律歷志に見ゆ。嶰一に解に作る。

【嶱】カツ　曷

たかし(高)けはし(峻)
【嶱嶪】カツゲツ　山石高峻の貌(張衡、南都賦)

【嶬】ギ　支　紙　義に同じ　本、厱に作る

岌―崎―は山の高くけはしき貌。

【嶪】ゲフ　業　嶫に同じ

岌―は山高く壯んなる貌。
【嶪嶭】ゲフゲツ　山の高くけはしき貌。景福殿賦「峨峨―――」‖嶪嶫。

【嶮】ケン　琰

○けはし(峻)險に通ず。○たかくさがし(高峻)「峻―」
【嶮隘】ケンアイ　けはしくしてせまし。離騷「路幽昧以――」
【嶮悪】ケンアク　けはしくあし。
【嶮介】ケンカイ　けはし。郭璞、江賦「壯ニ天地之―一―」危くけはし。劉峻、廣絕交書「世路―――」嶮一に險に作る。
【嶮巇】ケンギ　山の高くさがしき貌。蜀都賦、琴賦「丹崖―――」
【嶮峻】ケンシュン　けはし。‖險峻。
【嶮嶇】ケンク　けはしくしてなやむ、阻は難。又、其の所。‖嶮難・嶮岨。
【嶮岨】ケンソ　嶮嶇に同じ。
【嶮路】ケンロ　けはしきみち。‖嶮坂。

【巂】サイ　隨

○さがし(險)○さがしくして齊しからざる貌「―鬼」

【嶵】スキ　紙

巂(雀部十畫)に同じ。

十四畫

【嶽】ガク　覺　岳は古字

○たけ(大山)山の高くして尊き者「喬―」「河―」五―は華山・泰山・嵩山・恆山・衡山(爾雅)○―はかどかどしくいかめしき貌。長き角の貌。
【嶽嶽】ガクガク　妻の父の稱、泰山に丈人峯あり、丈人は長老の稱なるが故。酈田緣「今人呼ニ妻父一爲ニ嶽公一以ニ泰山有ニ丈人峯一、妻母曰ニ泰水一、不ㇾ知ㇾ由ニ何書一也」

【嶽降】カウ　賢き人の誕生をいふ。詩、大雅「維―ー㆑神、生二甫及申一」
【嶽嶽】ガク　かどだちていかめしき貌。漢書、朱雲傳「五鹿―ー、朱雲折二其角一」
【嶽紙】ガク　山のかみ。韓愈詩「ー―巢二許一」＝嶽神。
【嶽公】ガクコウ　嶽翁を見よ。
【嶽神】シン　山の神。嶽降を見よ。詩經、箋「當二ー―之意一而編與二其子孫一」
【嶽色】ショク　高き山の色。杜荀鶴詩「月華星彩坐來收、ー―江壁晴結レ愁」
【嶽雪】セツ　高き山の雪。張喬詩「河冰天際白、ー―眼前明」
【嶽丈】ジョウ　妻の父。黃潛筆記、俗呼二人之婦翁一曰二ー―一曰二泰山一」＝嶽翁。
【嶽父】フ　妻の父。（類書纂要）＝嶽公・嶽翁。
【嶽牧】ボク　四岳十二牧をいふ。後世の公卿諸侯の如きもの。史、伯夷傳「舜禹之間、ー―咸薦」＝岳牧。
【嶽蓮】レン　○華山の上に在るはちす。華山記「山頂有レ池、生二千葉蓮花一、服レ之羽化、因曰二華山一」轉じて華山の異名とす。杜甫詩「震蕩ー―臨二大路一」○國富士山の異名。＝蓮嶽。

【嶷】㊀ギ　㊁ギョク　支　職

㊀九ーは山の名、湖南省に在り、舜葬の陵あり、九峯形相似たり、望みて之を疑ふ、故に名づく。＝九疑。㊁さとし、小兒の知あるなり「英ー」「明ー」詩、大雅「克岐克ー」○たかし（高）「岌ー」「巍ー」「嵬ー」
【嶷嶷】ギョクギョク　高き貌。杜甫賦、洞窟儼以ー―」＝嶷嶷。
【嶷嶷】ギョクギョク　○德の高き貌。史、帝嚳紀「其色郁郁、其德ー―」○小兒の知ある貌。詩、大雅「克岐克嶷」箋「嶷、識也、其貌ー―然、有レ所二識別一也」
【嶷然】ギョクゼン　高くぬきいでたる貌。杜甫詩「ー―大賢後、復見秀骨清」
【嶷立】ギョクリツ　高くぬきんで立つ。儀禮「経ー―于房四」

【嶸】クヮウ　エイ　庚　庚

○峥ーは山の甚だ高き貌。漢書、西域傳「隔二峥ー一不測之深」○歲月の積み重なる貌。高啓詩「清世莫」嗟人寂寞、中年漸怯歲峥ー」

【嶼】ショ　圄

しま、こじま（海の中の洲）上に山石あるもの。島は大、ーは小。

【嶺】レイ　リャウ　梗

○みね、山頂の道路を通ずべきもの、領は衣のえり、故に山頂の義とす「峻ー」「疊ー」「複ー」「危ー」○やまみち（山道）さか（阪）○やまつづき（山脈）○通じて領に作る。漢書、嚴助傳「踰ー領」
【嶺雲】レイウン　みねにかかるくも。柳宗元詩「凝情江月落、屬思ー―飛」
【嶺岑】レイシン　みね。蘇軾詩「小巢依二ー―一」
【嶺上】レイジャウ　たうげの上。陶弘景詩「山中何所レ有、ー―多二白雲一」＝嶺頂・嶺頭。
【嶺樹】レイジュ　山頂の木。張九齡詩「月明看二ー―一、風靜聽二淺流一」

十六畫

【巃】ロウ　東　董

ーは山の峻しき貌。司馬相如、上林賦「崇山巃嵸、ー嵷崔嵬」又雲氣の滃鬱たる貌。楚辭、招隱士「嵐ー嵷兮石巆巇」

十七畫

【巇】㊀キ　㊁キ　支　紙　寘

○嶮ーは山が相對してあやふくけはし「險ー」「嶮ー」○すきま（隙隙）
【巇隙】キゲキ　すきまをねらひ撃つ。他人の虚に乘ずる。鬼谷子にーー篇あり。

【巉】ケン　銑

ー巖は山の屈曲せる貌。盧思道賦「入二雲宮之ー巖一、登二仙觀之宕巆一」＝嶄巖。

【巉】サン　咸　豏　覃　ザン

たかし（高）きりたちてけはし（險絶）さがし（峻）
【巉岸】ガンきりぎし。がけ。
【巉巉】ガンけはしく高き貌。又、其のいはほ。宋玉、高唐賦「登ーー而下望兮」
【巉巖】ガンサン　山高くしてけはし。韓維詩「西游秦函谷、登嶺上ーー巖」

【嶮巇】ケンギ　高く峻しき貌。李華、弔古戰場文「浩浩三伏寒、一一五丁逝」

十八畫

【巍】ギ　國　通じて魏に作る　高く大いなる貌「一峩」【巍峩】ガ　山の高大なる貌。【巍巍】ギ　高大なる貌。論、泰伯「一一乎唯天爲レ大、唯堯則レ之」【巍然】ゼン　○山の高大なる貌。轉じて人物のすぐれて秀でたる貌。○獨立せる貌。

十九畫

【巉】サン　㊥　巗は俗字　一ヲ（ヲ）は鋭くとがりたる山（銳山）楚辭、九歎「登一岌以遠望兮」

【巔】テン　㊥　又、顚に作る　やまのいただき、山の頂上「山一」「巖一」

【巒】ラン　㊥　○ふるきみね（岡峯）楚辭、九章「望二石一以遠望兮」「重一」「層一」「岡一」「峯一」○山小にして鋭し。○山がめぐりつらなる（山紆回綿連）

二十畫

【巖】ガン　國　通に通じ用ふ　岩は俗字　○いはほ（大石）「崇一」「斷一」○いはや（石窟）○けはし（險）けはしくして要害よき地。左、隱元「制、一邑也」制は地名。○きし（岸）がけ（崖）○一一は高く峻しき貌。【巖狖】ガンユウ　岩石の間にすめるきる。許渾詩「果隨二一一一落、裡帶二水禽一流」＝巖猿。【巖邑】イフ　要害のよきむら。字解參看。【巖舍】ガンシャ　木屋ぢの異名。國淸叢話「木屋爲二一一一」【巖竪】ガンジュ　いはほと、たにと。宋書、隱逸傳「一一閒遠、水石清華」【巖下之電】ガンカノイナビカリ　眼光の甚だしく光る貌。晉書、王敦傳「敦眼精劇如二一一一」＝巖電。【巖穴】ガンケツ　いはほのたに。長歌詩「一一洞穴、草間裸蹤、喬木茂草、或高或下」【巖嶢】ガンギョウ　石のかさなりて高く峻しき貌。詩、小雅「節彼南山、維石一一」【巖巖清峙壁立千仞】ガンガンセイジヘキリツセンジン　人品の高潔にして、衆に傑出せる形容。晉書、王衍傳「王敦目二夷甫一、如二珠玉在一二瓦石間一、巖巖之作二寶（二）冰斧一斫曰、――」【巖居川觀】ガンキョセンカン　世を逃れていはあなに住み、水邊に遊びて樂む。史、秦始傳「退而――」【巖寢】ガンシン　いはや。薛綜詩「弱年好二棲遲一、練レ藥栖二一一一」菊は藥。【巖花】ガンカ　いはほにさく花。宋之問詩「水禽泛容與、一一飛的皪」【巖扃】ガンケイ　巖石に依りて作りたる戸。杜甫詩「瑞芝産二廟柱一、好鳥鳴二一一一」＝巖戸・巖扉。【巖桂】ガンケイ　木屋ぢの異名。唐高宗、九日詩「砌間寫二小影一、一一發二金香一」【巖穴】ガンケツ　いはあな。史、伯夷傳「一一之士、誠合二有レ時」棄レ世而一一之士の略語とす。後漢書、逸民紀、贊「一一爲レ先、勿レ取二浮薄一」【巖穴之士】ガンケツノシ　世を遁れて山中に住む高士。前漢、鄒陽傳。【巖根】ガンコン　いはね。皮日休詩「房霊一一數斗泉」【巖陘】ガンケイ　いはほのきは。水經注「魏土地記曰、梁山北有二逕門山一、大馬所二經過一、孟津河口、廣八十步、一一纔レ容レ軌、通功尚存」【巖岫】ガンシュウ　いはのほらあな。閻丘冲、招屋詩「嗟哉一一士、歸來從レ所レ欲」【巖廡之下】ガンモトノシタ　石垣ガンの脚にくづれんとする其の下。孟、盡心「知レ命者、不レ立二乎一一一」【巖邑】ガンユウ　世を逃れて岩穴の間に棲れ居る。史、貨殖傳「舞一一好士之行一、而長貧賤、好爲二仁義一亦足レ羞也」＝巖居。【巖棲】ガンセイ　次條に同じ。宋之問詩、本一一客、旅設慕二王京一」【巖棲】ガンセイ　岩屋の中に住む。禽經「山鳥一一、飛鳥地雞」＝巖栖。【巖棲幽人】ガンセイユウジン　岩屋に棲む隱者のなかま。莊莊詩「欲レ結二一一一一」【巖石】ガンセキ　いはほ。漢書、王吉等傳贊「耕二於一一之下一、名震二於京師一」【巖泉】ガンセン　いはほより出づる水。謝朓詩「巖松千仞直、一一百丈飛」【巖藪】ガンソウ　山のいはほのいただき。白居易詩「誰知中有レ路、盤折通二一一一」【巖洞】ガンドウ　いはほのほらあな。皮日休、茶籠詩「焙然三五寸、生二於一一一」【巖窟】ガンクツ　いはあな。元好問詩「遙遙金門寺、寶焔出二一一一」【巖扉】ガンピ　いはやのとびら、巖穴の士の住む家の戸。白居易詩「眼看過二半百一、早隱二於一一一」＝巖戸・巖扃。【巖壁】ガンペキ　けはしくきり立ちしいはほ。博物志「天門山有二次一一一、或上數千仞」【巖扉】ガンピ　高くいかめしきわたどの、朝廷の義とす。漢書、董仲舒傳「當二舜之時、遊二於一一之上一、垂拱無爲、而天下太平」【巖瀧】ガンロウ　岩から落つるしづく。劉禹

楊詩「幽巒滴ニー一、晴芳鬱二野霞一」

【巘】ゲン　阮　巖（前條）に同じ。

【巚】ケン　阮　○けはしきやま。飯ごうに似たる山「絕ー」「懸ー」「層ー」○みね（山峯）詩、大雅「陟則在ー、復降在原」

【巉巖】ガンガン　山のけはしき貌。謝靈運詩「連峰遠ニー一青翠杳深沈」＝巉崎。

巛部

【巛】川（次條）の本字。

【川】セン　先　○かは、流水の通稱、江水淮水河水漢水の類をすべていふ「大ー」「晴ー」「支ー」書、益稷「予決ニ九ー一距ニ四海一」（河は特に黄河をいふ）○四川省の略稱。

【川芎】センキュウ　傘形科に屬する藥草、四川省（蜀）に出づるを上品とす、故に名づく。おんなかづら（本草綱目）＝芎藭。

【川上】センジョウ　○かはのほとり。論、子罕「子在ニー一曰、逝者如ニ斯夫一」○おほくの川の上流をいふ。

【川柳】センリュウ　圖　狂句の一種にて、滑稽諷刺の意をふくむ、寶曆・明和頃に柳亭ーーの盛に批點せし故の稱。

【川澤】センタク　川の水がすむの意。照詩「霆輕兮翻翔、目瞬兮ーー」

【川施餓鬼】セガキ　圖　川に溺れて死せし者の霊を安んずる爲めに、かはべにて供養讀經する佛祭。

【川蝨】センシツ　圖　魚名。

【川竹】センチク　圖　かはべに生ずる竹、水の増減によりて起き伏しの定まらざるもの、故に遊女の身の上に譬ふ。

川畫

【州】シウ　ス　尤　○しま（島）水中居るべき所、洲に通ず。○くに（國）古、高山大川に因りて區域を分ち九ーと爲す、後に十二ーと爲す、古の一ーは今の一省の如し。○むらざと（邑里）周代、二千五百家ある部落の稱。轉じてなか、地方の義とす。○あつまる（聚）

【州郡】シウグン　一州一郡。又、地方の義。

【州縣】シウケン　一州一縣。又、地方の義。

【州俗】シウゾク　土地の風俗。＝里俗。

【州處】シウショ　あつまり居る。齊語「桓公管ニ仲一一、注「州、聚也」

【州牧】シウボク　州の長官、我が府縣知事の類、舜の時に始まる。牧は人民を養ふ義（事物紀原）

【州里】シウリ　むらざと。州は二千五百家、里は二十五家ある處。論、衛靈公「言不ニ忠信一、行不ニ篤敬一、雖ニー一行乎哉」

【州慶】シウリン　州に設けたるこめぐら。州は周時代、二千五百家ある處の稱。魏書、張昭傳「時年穀不ニ登一、ー一盧舍、民多ニ菜色一」

四畫

【巡】ジュン　眞　○めぐる。○みまはる（視行）「ー視」○あまねし（徧）○遂ーはあとしさり（卻退）の貌。

同訓異字　巡・視・覗・周等は視（承部十二畫）の條を見よ。

【巡按】ジュンアン　國　國をめぐりてしらべる。唐書、燒巻太子琬傳「詔親ニー一龍右一」＝巡視・巡檢。

【巡遊】ジュンユウ　各地をめぐりあそぶ。＝周遊・回遊。

【巡閲】ジュンエツ　みまはりてしらべる。＝巡按。

【巡行】ジュンコウ　めぐりあるく。

【巡幸】ジュンコウ　天子が各國をめぐりみゆきする。唐書「中書門下、應ニー一所ニ過因一」

【巡狩】ジュンシュ　天子が諸國をめぐりて視察する。舜典「五載一ー一」＝巡守。

【巡守】ジュンシュ　天子の諸國をめぐりて視察する。孟、梁惠王「天子適ニ諸侯一曰ニー一、ー一巡ニ所ニ守也一」東都賦、

【巡獻】ジュンケン　船にて各地をのりまはる。

【巡回】ジュンカイ　めぐりあるく。＝巡廻・巡行。

【巡廻】ジュンカイ　めぐり、みまはる。

【巡警】ジュンケイ　○めぐりていましめる。周巡して警察する義。○我が巡査の類。

【巡業】ジュンギョウ　國　各地をめぐり演藝などを興行する。巡回して興業する義。

【巡檢】ジュンケン　○各地をめぐりてしらべる。＝巡按。○支那にて警察事務を掌る官吏。

【巡査】ジュンサ　國　警部の下に在りて人民を保護し警戒などをいましめ掃ふる役人。＝警官・邏卒・巡捕。

【巡察】ジュンサツ　めぐりて觀察する。北史、魏文帝紀「遣ニ侍ニ巡一ー一、問ニ倉賑恤一」＝巡按。

【巡察使】ジュンサツシ　國　昔、諸國をめぐりて風俗及政治の善惡を觀察せし臨時の職名。

【巡視】ジュンシ　みまはる。＝巡按・巡察。

【巡撫】ジュンブ　隋唐の各地をめぐりて政をひろめる義、錫は倍のつく杖。

【巡守】ジュンシュ　天子の諸國をめぐりて視察する義。舜典「五載一ー一」＝巡狩。

【巡狩】ジュンシュ　天子が諸國をめぐりて視察する。孟、梁惠王「天子適ニ諸侯一曰ニー一、ー一巡ニ所ニ守也一」東都賦、

注「ー一者何、巡者循也、狩牧也」＝巡守。
【巡省】ジュンセイ　めぐりて視察する。魏志、明帝紀「車駕ー二洛陽一親ー二祠廟一」＝巡視・巡察。
【巡視】ジュンシ　めぐりゆきて人心をやすんずる。文選「ー二ー裂燕一」
【巡拝】ジュンパイ　國諸方をめぐりて神社佛閣を拜む。
【巡撫】ジュン　○めぐりて人民をなでやすんずる。晉書、劉頌傳「成寧中、詔ー二ー荊揚一○明以後、官名となり、各省に置く。清朝にては、總督の次に位し、一省の民治兵制の事を司る。
【巡捕】ジュン　㊀巡査をいふ「ー一局」は我が警察署。＝巡警。
【巡洋艦】ジュンヨウカン　軍艦の一種、海を乘りまはりて敵の形勢をうかがふもの。
【巡遶】ジュン　みまはりしらべる。
【巡覧】ジュン　みまはる、めぐりて見物する。
【巡禮】ジュン　國諸國の靈場をめぐりて佛ををがむ修業。又、其の人。＝順禮。

八畫

【巢】サウ　㊥

○す、木の上の鳥栖（トリス）「故ー」○すくふ、すをつくる。莊、逍遙遊「鷦鷯ー林不ー過ー一枝一」轉じて盜賊などのすみか「ー窟」「賊ー」○ー車は上にやぐらありて遠望すべき車。左傳「楚子登ー車以望ー晉軍一」＝轒轀。
【巢父】サウ　古の隱者の名、許由と並稱す。後、天下を以て讓る、辭して受けず。檡夫論「伯夷採ー薇而不ー恨、ー木棲而自願」高士傳「ー一者堯時隱人也、山居不ー營ー世利一、以ー樹爲ー巢、而臥ー其上一、故時人號曰ー二ー一」
【巢許】サウキョ　㊥すにこもり居る「堯の
ー一」
【巢立】ス　㊥鳥のひなが生長して、巢をはなれ去る。＝巢起・出窩。
【巢由】サウイウ　巢父と許由と、並に堯の時の高士。漢書「堯舜在ー上、下有ー二ー一」＝巢許。
【巢居】サウキョ　鳥の栖の如く木を構へて其の上にすむ。唐書、室韋傳「苦ー二飛蝗一則ー一而以處」
【巢許】サウキョ　巢由に同じ。杜甫詩「ー一山林志」
【巢窟】サウクツ　すみか。かくれが。南史、謝幾傳「君ー一在ー二何處一」
【巢燧】サウスイ　樹上に巢を構へて住みし有巢氏時代と、ひうちにて火を取りし燧人氏時代との太古時代をいふ。張九齡文「ー一之前、寂寥無ー二紀一、書契而後、炳煥可ー二觀一」
【巢籠】スコモリ　㊥すにこもり居る「鷄の
ー一」

工部

【工】コウ　ク　㊥

○たくみ（巧・匠）じょうず、其の事を善くする。又、其の人、器物を造る職人。國ー一は國中にすぐれたる職人。拙ー一は下手な職人、良ー一は上手な職人。○つかさ（官）役人。○四民の第三位「士農ー一商」
【工役】コウエキ　ふしん、土木などの工事。
【工歌】コウカ　たくみにうたふ。梁簡文帝詩「可ー一悽年紀十三四、ー一巧舞入ー二人意一」
【工學】コウガク　工藝に關する理論、及び實地の上に必要なる要件を研究する學問。
【工銀】コウギン　てまちん。＝賃錢、工賃。
【工藝】コウゲイ　工作藝術。唐書、閻立德傳「父毗爲ー二隋殿內少監一、本以ー二ー一進、故立德與ー二弟立本一、皆機巧有ー二思一」
【工業】コウギョウ　工藝に關する仕事。
【工作】コウサク　ふしん、工事をする、土木の事業。創俠傳「有ー二老人一、方ー一ー」
【工事】コウジ　建築製作などに關するしごと。＝工役・普請。
【工師】コウシ　○もろもろのつかさ。禮記「命ー一ー令ー二百官一」○大工のかしら、匠人の長、魏略「孟、職富王「爲ー二瓦室一、則必使ー一ー求ー二大木一」
【工人】コウジン　さいくにん、だいく。色色の仕事をする職人。韓非子「ー一數變ー二繩則失ー二其功一、作者數搖徙則亡ー二其功一」
【工匠】コウショウ　だいく、たくみ。漢史、霍宗紀「太平五年、蔡ー一ー一、不ー一得ー二銷ー一鑛金銀器一」
【工雀】コウジャク　鵲鵲（ガビチョウ）の異名、巢を作るにたくみなるが故。＝巧婦鳥。
【工手】コウシュ　○さいくをする職人。○たくみにするうでまへ。＝名手・上手（ジョウズ）。
【工欲ー二善ー一其事一必先利ー二其器一】（コウホッセンリキキ）　工匠がその工事を善くせんとするには、先づ其の器を利くして、之が準備を爲す。孔子の語（論語、衛靈公）
【工遲】コウチ　たくみなれどもおそし。唐書、歌擧傳「兵尚ー二捷速一、不ー一ー一ー一」＝巧遲。
【工緻】コウチ　たくみにしてこまかし。唐書、諸公主傳「窮ー二宮省一、而ー一過ー二之一」＝巧緻。
【工場】コウジョウ　しごとば、こうば。
【工女】コウジョ　女の職工。
【工程】コウテイ　○しごとの出來あがりの程度、しごとのはかゆきかた。○㊥しごと。＝工事。
【工房】コウボウ　しごとば。＝工場。
【工費】コウヒ　工作の費用。范成大詩「ー一蠅毛曲」

【工夫】くふう ○色色に思をめぐらす、くふうする。晉書、范寧傳「一一萬計」後漢書、王順傳「太極以前、功夫尚大」工・功通ず。○土木の仕事に使はれる者。にんぷ。

【工部】こうぶ 官署の名。唐書「一一尚書一人、侍郎一人、掌二山澤屯田工匠諸司公廨紙筆墨之事一」

【工兵】こうへい 軍事上の作業に従事する兵卒。

【工車】こうしゃ 車位時間の間に出來あがる仕事のわりあひ。

【工面】くめん 圖色色とかんがへる、工夫する。

【巧】カウ 工 畫

○わざ(技)はたらき(能)○たくみ、じゃうず(上手)拙の反對「奇ー」「天ー」老子「大ー若拙」○よし(能・善)うるはし(美好)○さとし(黠慧)○いつはりかざる(僞)「詐ー」「飾ー」

【巧意】こうい たくみなるかんがへ。雅陶文「製二珍裘一兮、一一無遺」

【巧僞】こうぎ たくみにいつはる。漢書「一一之徒」＝巧詐。

【巧捷】こうせふ わるがしこし。金史、章宗紀「一一之徒、雖レ有二識污一一旦見レ用、猶爲二能吏一」

【巧宦】こうくわん 仕宦にたくみにして上官にとりいることの上手なる輩。鮑照詩「一一賤二農牧一」

【巧慧】こうけい たくみにしてさとし。漢書「持論一一」＝巧敏。

【巧月】かうげつ 陰曆七月の異名、乞巧奠の月の義。

【巧僞】こうぎ たくみにさとし。韓維詩「翰章麗句關二一一」

【巧言亂レ徳】こうげんみだるるをかす 巧言は是非を亂す、故に道徳を壞亂す。論、衞靈公「子曰、一一」

【巧言令色】こうげんれいしょく 言をたくみにし、顏色をよくしてこびへつらふ態。論、學而「一一鮮矣仁」

【巧工】こうこう たくみなる細工人(西京雜記)

【巧詐】こうさ ことばたくみに人をあざむく。次條參看。

【巧詐不レ如二拙誠一】こうさいはつせいにしかず 巧にいつはるは、拙くして誠なるにしかず(說苑、說叢)

【巧妻】かうさい かしこきつま。唐伯虎詩「駿馬毎貼二凝漢一走、一一常伴二拙夫一眠」

【巧者】かうしゃ 巧みなる人、上手。史、貨殖傳「一一有レ餘、拙者不レ足、貧富之道、無二奢儉一與之」

【巧匠】こうしゃう たくみなる大工。史記「一一不レ斲兮、孰察二其揆正一」

【巧手】こうしゅ じゃうず たくみなるうでまへ。

【巧笑】こうせう たくみに愛らしくわらふ。巧は好。論、八佾「一一倩兮、美目盼兮」

【巧夕】かうせき 七夕をいふ、乞巧奠を行ふが故。劉克莊詩「專人貢二一一一、燈火到二天明一」

【巧舌】こうぜつ たくみに口をきく。劉敏詩「一一如レ簧總莫レ聽」＝巧言・巧辯。

【巧拙】かうせつ 上手と下手と。賈丞文「引氣不齊、一一有レ累」

【巧說】こうせつ 言葉たくみにのべる。漢書「便辭一一」

【巧捷】こうせふ たくみにしてすばやし。曹植詩「一一惟萬端」

【巧惠】こうけい うるはしきすがた。南史「麗嵐一一」＝嫺靜。

【巧智】こうち たくみなるちゑ。張鷟詩「爾者多二一一一」

【巧緻】こうち たくみにしてこまか。巧妙にして緻密。

【巧遲】こうち たくみなれどもおそし。李商公問對「兵聞二拙速一不レ聞二一一一」文章軌範、有字集小序「一一者不レ如二拙速一」＝工遲。

【巧祇】こうぎ たくみに巫ひそしる。史、張湯傳「舞文一一」

【巧發奇中】こうはつきちゅう 時に應じて巧に發言し、たまたま適中することある。漢書、郊祀志「少君貴幸レ方、善レ爲二一一一」

【巧敏】こうびん たくみにさとし。荀子「一一伝說、取二龍乎上一」＝巧智・巧慧。

【巧繆】こうびう ○鍼縫などのたくみなる女。白居易詩「一一才人常薄命、莫レ敎二兒女苦二多能一」○鳥の名。次條參看。

【巧婦鳥】こうふてう 鵲鴝の異名。＝工雀。

【巧舞】こうぶ たくみに舞ひおどる。梁簡文帝詩「工歌一一入二人窓一」＝妙舞。

【巧繆】こうびう たくみなる辯舌。魏武文「審詩之士精避二龍鱗一便伝之徒肆二其一一一」＝巧舌。

【巧步】こうほ たくみにあゆむ。梁簡文帝文「疾趨一一、緩袖牙挽」

【巧妙】こうめう すぐれてたくみ。李白詩「其工一一解二絕墨一」

【巧說】こうせつ たくみにへつらふ。沈亞之文「智視而一一」

【巨】キョ 圖

○大いなり。○おほし「一萬」＝鉅。○なに、なんぞ、あに。漢書、高帝紀「公一能入乎」＝詎。

【巨細】きょさい 何・巨・曷・胡・那等の副は何(人部五畫)の條を見よ。

【巨億】きょおく 甚だ多き數にいふ。後漢書、盧植規傳「動資一一」＝鉅億。

【巨海】きょかい おほうみ。史記「齊東有二一一一」＝大海。

【巨靈】きょれい 海中の神仙の居る所の五

山を殺きのするといふ大いなるかめ。列、湯問「渤海東有二大壑一、中有二五山一(中略)五山根無レ所二連著一、常隨二潮波一上下往還、不レ得レ暫峙二帝悉レ流二西極一、命二禺彊一使二十五巨鰲一、首戴レ之、始峙而不レ動」

【巨擘】キョハク 大いなるたに、海の異名とす。元好問詩「得樹不二相假一、壞レ土塡二一一一」‖大陸。

【巨額】キョガク 大いなるたか「一一の金」‖多額。

【巨擘】キョハク 大いなるさかだる。陸游詩「長鯨一一雖二孟浪一」

【巨經】キョケイ 大いなるいくさぶね。五代史「以二一一一絕レ河」

【巨句芻】キョクスウ 顱顙ジョウの異名。

【巨魁】キョカイ 大いなるさかづき。清波雜志「用二一一一無レ算」

【巨擘】キョハク 大いにわるがしこし。又、其の者。晉書「百姓厭レ亂、一一陵暴」

【巨鯨】キョゲイ 大いなるくぢら。抱朴子「見二一一一、而知二寸介之細一」‖長鯨。

【巨儀】キョギ 殷の紂王の倉の名。‖鉅橋。

【巨擘】キョハク 大いなるこぶしの姆踇詩「一一豈爲二雞肋一捨」

【巨拳】キョケン 大いなるこぶしの姆踇詩「一一豈爲二雞肋一捨」

【巨現】キョゲン 大いなるすずり。沈遼文「追琢爲二一一一」

【巨碩】キョセキ おほづつ、頭はもと石を擊つ壁。‖大砲。

【巨口細鱗】キョコウサイリン 大いなる口にこまかなるうろこ、すずきの異名。蘇賦、後赤壁賦「擧レ網得レ魚、一一、狀如二松江之鱸一」

【巨象】キョショウ 大いなる象。

【巨擘】キョハク 大いなるのみ。唐書「怨夢人持二一一一破二其心內一者」‖大指。

【巨刹】キョサツ 大いなる寺。‖大伽藍。

【巨指】キョシ おやゆび。儀禮「右一一鉤レ弦」注「右一一、右手大擘」‖巨擘。

【巨獸】キョジュウ 大いなるけもの。

【巨室】キョシツ ○大いなるいへ。○權力のある大家。孟、離婁「不レ得二罪於一一一」

【巨人】キョジン ○大いなるひと、大男。史、周紀「見二一一一跡一」○すぐれたる人物。‖偉人。

【巨浸】キョシン ひろきさは。春渚紀聞「三御苑浸水一一」‖大澤。

【巨牀】キョショウ 大いなるゆか。唐書「政事堂會食有二一一一」

【巨細】キョサイ ふときなは。蘇軾狀「初如二一線一、忽似二秋蟲鬚一」

【巨擘】キョハク 大いなるともしび。淮海雜錄「夫婦若老、苦海之慈航、昏衢之一一一」

【巨濟】キョサイ 大いなる渡し場。韓愈文「長河一一、異源同濟」

【巨石】キョセキ 大いなる石。子虛賦「外發二菱華若芙蓉、內隱二一一一白沙一」

【巨細】キョサイ 大いなるいさを。吳志、元勳一一、俾二於古人一」‖大功。

【巨族】キョゾク 大いなるいへがら。歐陽修文「雖二名臣一一、未三皆有二家譜者一」

【巨痛】キョツウ 大いなるいたみ。宋書、江夏王義恭傳「乾豐降レ綱、二凶極レ逆、禍酷一一、絕古未レ有」

【巨舫】キョホウ 大いなるふね。劉基詩「濟レ河須二一一一」

【巨砲】キョホウ おほづつ。‖大砲。

【巨蟒】キョボウ をろち、うはばみ。‖大蛇。

【巨艘】キョソウ おほぶね。吳萊詩「富貴一一競二天星一」

【巨擘】キョハク おほゆび(巨指)轉じて、衆にすぐれたる人に喩ふ。孟、滕文公「於二齊國之士一、吾必以二仲子一爲二一一一一」

【巨斧】キョフ ○大いなるをの。○蝮蠍の異名。

【巨木】キョボク 大いなる木。司馬相如賦「深林一一」

【巨萬】キョマン 甚だ多し。史、平準書「京師之錢、累二一一一」‖鉅萬、萬萬。

【巨溟】キョメイ おほうみ。皮日休詩「全吳臨二一一一百里到二黿窟一」‖巨海。

【巨浪】キョロウ おほなみ。水經、注「一一長湍、噓激水耳」

【巨利】キョリ 大いなる利益。漢史「更招二一一一」‖大利。

【巨經】キョケイ 大いなる魚。羽獵賦「入二洞穴一出二蒼梧一、乘二一一一、騎二京魚一」

【巨細】キョサイ ○大と小と。史、田儋傳「政無二一一一」○くはしく、大小となくこまかに。

【左】

㊀サ ㊁サ 圓 俗字

㊀ひだり。右の對。○しょうこ(證據)「一驗」○くだす。しりぞける「一遷」○ひくし(低)くだる(下)漢の時、古法に依りて朝廷の列は右を尊とす。○東の方位(人君は南面する故)山東を山一といふ。○もとる(戻)よこしま(邪)「一道」○ひだりす(左行)㊁たすく。‖佐。

【左右】サユウ ○ひだりと、みぎと。又、そば。書、說命「置二諸其一一一」○たすける(輔翼)意。擧命「周公一二一先王一」‖佐佑。○おそばの者、侍臣。史、陳涉傳「一一欲レ兵レ之」○先方を斥さずして直ちに其の人を斥さず、其の左右にある人を斥していふ義。史、樂毅傳「願二一一之心一」○前後の義。左、莊四、杜注「六十一一」○圖やうす、有樣「御一一何」

【左右其互】サユウキゴ 何事にも通じて能くせざる所なき義。韓愈、進學解「長通二於方一一一」

【如失左右手】ジョシッサユウシュ 極めて悔みとせる者を失ひて惘然たるに喩ふ。史、淮陰侯傳「人曰、丞相何[罵]何)亡、王怒、一一」

【左右先爲之容】サユウセンイシヨウ 左右に

居る人が褒め稱道し、よきやうにとりつくろひて推薦する義。容とはかたちづくりて修飾する義。漢書、鄒陽傳「蟠木根柢、輪囷離奇、而爲二萬乘器一者、何則以三左右先爲二之容一也」＝先容。

【左降】サカ　官位をしりぞけおとされる。北夢瑣言「李德裕ー一至二朱崖一」＝左遷。

【左學】サガ　殷の時に庶人の老いたる者を慰め養ひし所、老を尊ぶ禮を子弟に示す爲めに小學にて行ふ。國老を養ふ所を右學といふの對。

【左雞右酒】サケイウシュ　圖昔、正月十五日に酒漬殺の庭にて、青竹を燒きて悪魔をはらひし儀式。＝爆竹。

【左京】サケウ　圖古、京都の朱雀大路より東の方の稱。其の西を右京といふの對。

【左拒】サキョ　左ぞなへの軍陣、左方の方陣。左、和五、爲二ー一以當二蔡人壻人一」

【左傀】サカイ　圖左大臣の異稱、三公を三槐といふに本づく。

【左光斗】サクワウト　明の桐城の人、字は遺直、萬曆の進士、御史を授けらる、氣節を以て自ら任ず、魏忠賢の爲めに害せられ、獄中に斃る、悲殺と謚す。

【左官】サクワン　○朝臣出でて諸侯に事ふるをいふ。漢書、諸侯王表序、注「人道上レ右、今令二天子一而仕二諸侯一、故謂二之ー一」○圖ヤスリ壁をぬる職人。＝泥工。

【左契】サケイ　契約を二枚の札に書し、之を分ち一をー一とし、一を右契とす、他日引合せて證據とす。老子「是以聖人執二ー一一、而不レ責二於人一」＝左券。

【左計】サケイ　あやまれるはかりごと。謂會、策畫不レ適二事宜一曰ニー一」

【左官】サクワン　理にもとれる官、えびすのことば。左思、蜀都賦「或魋髻而ー一」

【左券】サケン　二分したる左の方のわりふ。證據の義。史、田敬仲世家「公曾執ニー一、以責二於秦韓一」＝左契・左驗。

【左舷】サゲン　へさきの方に向ひて左がはのふなべり。

【左驗】サケン　しょうこ、當時左右に在りて其の事を見たる者。漢書、楊敞傳「ー一明白」一說は左券參看。

【左顧】サコ　○ひだりに向くの古樂府、入門時ー一」○長上の人が目下を愛しかへりみるにいふ。古は長者右に、少者左に居る、故にいふ。又、尊者の來訪を敬ひていふ。漢書、淮陽王傳「幸ー一存恤」

【左顧右盼】サコウベン　左右をみまはす。李白詩「銀鞍照二白日一」——生二光輝一」＝左顧右眄。

【左驗】サゲン　三頭立の馬車の左のそへ馬。左、僖三三「將ニー一、以二公命一贈二孟明一」

【左思】サシ　字は太沖、晉の臨淄の人、傳學能文、辭藻壯麗、賦て齊都賦を作り、一年にして成る。又、三都賦を作らんと欲し、思を構ふる十年、門戸厠るに及びて、人人競ひて相傳寫し、洛陽の紙價之れが爲めに貴きに至る。

【左支右吾】サシユウゴ　○左右兩方をさきへとどむる。宋史、李邴傳「隨預講ニ——之策一」○どちらにもきしつかへる。

【左史右史】サシユウシ　古、人君の左右に史官あり、左史は人君の言を記し、右史は行を記す。漢書、藝文志「左史記レ言、右史記レ事、謂爲二春秋一言爲二尚書一」

【左史右經】サシユウケイ　史書を左に置き、經書を右に置く。宋論、黃氏幾門銘「視二其齎庭一——、踵レ武繼繩」

【左思右想】サシユウサウ　色色、思案をめぐらす。＝左思右考。

【左氏傳】サシデン　春秋——の略。又、略して左傳ともいふ。春秋の經に、魯の史官左丘明の傳したるものなりといふ。

【左衽】サジン　ひだりまへ。夷の衣服の著方。論、憲問「微二管仲一、吾其被レ髮ー一矣」＝左袵。

【左理】サリ　しょうこ。唐書、劉知幾傳「知幾曾聽二學經鄭氏學一非二讓成注一、舉二十二條一ー一ー其經一」

四畫

【左遷】サセン　官位をおとさるる義。史、張丞相傳「吾極知二其ー一ー一」＝左降。

【左道】サダウ　よこしまなるみち。禮、王制「執ニー一以亂レ政殺」＝邪道。

【左袒】サタン　左のかたをぬぐ、助ける、加勢する義。史、呂后紀「太尉周勃入二軍門一、行二令軍中一曰、爲二呂氏一右袒、爲二劉氏一ー一、軍中皆ー一」

【左提右挈】サテイウケイ　左にひっさげ、右に携へ行く、互に手をとりて助け合ふ。史、張耳陳餘傳「況以二兩賢王一、——、而實二殺レ王之罪一、滅レ燕易矣」＝左提右攜。

【左傳癖】サデンペキ　左氏傳を好むくせ。晉書、杜預傳「預常稱、王濟有二馬癖一、和嶠有二錢癖一、武帝聞レ之、謂レ預曰、卿有二何癖一、對曰、臣有二ーー一」＝左癖。

【左纛】サトク　天子の車衡の左方上にたつる羽毛にて飾りし幢。史、項羽紀「乘二黃屋車一、傳ニー一」

【左府】サフ　圖左大臣の異稱。

【左文右武】サブンウブ　文武竝に用ふる義。李咸用詩「——惟二君榮一白鬚緋上懸二清明一」

【左翼】サヨク　○左の方のつばさ。晉書、陶侃傳「壁レ地折二其ー一」○軍陣の左の方の陣。

【巫】 ㄨ　國

○みこ、なんなかんなぎ。舞ひて神を降し人の爲めに祈禱する者（覡は男のかんなぎ）「覡ー」「淫ー」○山の名、四川省に在り、楚の襄王が夢に此山の神女と會せしといふ、山下に神女廟あり。

【巫醫】ㄨ　みこと、いしゃと。論、子路「人而無ㇾ恒、不ㇾ可ニ以作ニー一」

【巫峽】ㄨ　巫山の下を流るるたにがは。荊州記「信陵縣西二十里有ニー一ー」白居易詩「ー一之水能覆ㇾ舟、若比ニ君心ー是安流」

【巫覡】ㄨ　かんなぎ、巫は女、覡は男「楚語」

【巫蠱】ㄨ　巫はみこ、蠱はまじなひをして人をのろふもの。漢文鮮甚「女能以ㇾ舞降ㇾ神謂ㇾ巫、執ニ左道ー以惑ㇾ人謂ㇾ蠱」漢書「江充典ニ治ー一」

【巫山】ㄨ　四川省夔州府ー一縣の東に在る山の名。宋玉、高唐賦「昔者先王嘗游ニ高唐ー、怠而晝寢、夢見ニー一婦人ー曰、妾ー一之女也、爲ニ高唐之客ー聞君游ニ高唐ー願薦ニ枕席ー、王因幸ㇾ之、去而辭曰、妾在ニー一之陽、高丘之岨、旦爲ニ朝雲ー暮爲ニ行雨ー、朝朝暮暮、陽臺之下、旦朝視ㇾ之如ㇾ言、故爲立ニ廟、號曰ニ朝雲ー」轉じて男女の情交を結ぶをー一之夢といふ。

【巫史】ㄨ　かんなぎ、はふり、神事をつかさどるもの。禮記「宗祝ー一」ニ祝祝。

【巫呪】ㄨ　まじなひ、のろひ（種子啓文「冒歸ニ故鄉ー降ニ神ー一」

【巫祝】ㄨ　はふり、かんぬし。杜甫詩「兩有ニ漢王祠ー終朝走ニー一」ニ巫史。

【巫術】ㄨ　かんなぎのわざ。後漢書、徐登傳「徐登者、本女子、化爲ニ丈夫ー善ニー一」

【巫陽】ㄨ　○古の神官の稱。陽は其の名。蘇軾、湖州謝文公廟碑「謫吟下招遣ニー一」○古の占筮を善くせし人の名（楚辭）

七畫

【差】
㊀サ・シャ　麻
㊁シ　佳支
㊂サイ　佳
㊃サ　歌

㊀たがふ、たがひ（舛・違）「ー錯」「舛ー」「乖ー」漢書、東方朔傳「失之毫釐、ー以千里」○えらぶ（擇・簡）○ああ。ニ嗟。㊁しな（等級）○そろはぬ、たがひ　ちがひ（不齊）「參ー」○つづく（次・鱗差）㊂つかひ、つかはす（使）人をやる「ー遣」○けみす（閱）○わかち、けぢめ（區別）○たがふ、たがひ。㊃いゆ、病がいえる（癒）○やや（稍）すこしく。㊄こめあらふ（淅）しろみづ（米泔）○あやまち。あやまつ（過）○つまづく。ニ蹉。○國さす、さし「ー入」「ー支」

同義異語　差・違・爽・舛○差は小なるちがひなり、毫釐有ㇾ差、則失ニ其中正ー之如し。○違は大いなるちがひなり。又、うらはらに、ゆきちがふ義。○爽は差の字に近し、常と相違するをいふ。○舛はあやまるとも訓す、まちがひ、錯誤なり。莊子「惠子多ㇾ方、其書五車、其道舛駁」

○差・稽・較・異・旋の別は稽（禾部七畫）の條を見よ。

【差異】ㄨ　ちがひ、等差をつけて異にするの義。禮、齊王紀「子弟宜ㇾ有ニー一」

【差違】ㄨ　ちがひ、たがひ。ニ相違・差異。

【差役】ㄨ　課役の一法、民家を九等に分ち、上の四等より公用の人夫を徴發し、下の五等は之を免除するもの「宋史」

【差訛】ㄨ　あやまり、ちがひ。韓愈文「亳髮盡備、無ニー一」

【差劇】ㄨ　病のいゆると劇しくなると。南史、庾黔婁傳「欲ㇾ知ニー一、但嘗ニ糞甜苦ー」

【差遣】ㄨ　使をさしつかはす、官吏を地方に出張させる。魏書、于烈傳「可ㇾ爲ニー一ー」ニ派遣・役使。

【差錯】ㄨ　たがふ。ニ雜・疏「謂ㇾ用ㇾ心ー一不ㇾ專一ー」

【差次】ㄨ　さべつ。史「臨淄侯、則ニ尊卑辨秩等級、各以ニー一ー」ニ等差。

【差等】ㄨ　しな、等級。舊唐書「國家班列、自有ニー一ー」ニ等差・差次。

【差式】ㄨ　たがふ、たがひ。顏延之文「衡石日陳、猶恐ニー一ー」

【差配】ㄨ　國所有主に代りて、貸家又貸地の事をとりしまる。又、其の人。

【差謬】ㄨ　あやまり　たがふ。後漢書「無ニー一ー」ニ差訛。

【差品】ㄨ　さべつ、等級。漢書、貨殖傳「各有ニー一ー」

【差別】ㄨ　わかち、けぢめ、同等ならず。陳書、劉師知傳「有ニ何ー一ー」ニ分別・區別。

【差戻】ㄨ　たがひそむく。晉書「姜星ー一、王臣貳」

【差池】ㄨ　燕の高く低く飛び交ふ貌。詩、邶風「燕燕于飛、ー一其羽」

【差押】ㄨ　裁判所の許可を受けて債權者が債務者の財産處分權を奪ふ行爲。

【差紙】ㄨ　國昔時よびだしじゃうをいふ。ニ召喚狀。

【差障】ㄨ　國差支に同じ。ニ故障。

【差支】ㄨ　國都合わるし、さしさは

り、故障。
【強出口】キョウシュツコウ 圖いらざるくちだし、よけいな容喙カヨウ
【強強二人意一】キョウキョウジンイ 少しく氣丈夫におもふ。後漢書、吳漢傳「吳公——、隱若二一敵國一矣」

己部

【己】キ 紙 已・巳は別字
○おの、おのれ（自身）皆、大禹謨「舍レ一從レ人」「知レ一」「正レ一」「修レ一」○わたくし（私慾）論、顏淵「克レ一復レ禮」○つちのと、十干の第六位。＝居維。○をさむ（紀）
【修レ己】シュウキ 己の身を深白にする。論、述而「人レ一以進、與二其潔一也、不レ保二其往一也」
【率レ己而導レ人】ソツキジドウジン 己の身を率くして、人を導く。禮、曲記「——、小レ心而畏レ義」
【恭レ己】キョウキ 己の身を正しく恭やしくする。論、衛靈公「レ一正南面而已矣」
【行レ己】コウキ 己の一身を立て行ふ。論、子路「子曰、レ一有レ恥、使二於四方一、不レ辱二君命一、可レ謂レ士矣」
【屈レ己】クッキ 己の志をまげて人に從ふ。孔叢子「與二レ一以富貴一、不レ若二抗レ志以貧賤一」
【正レ己】セイキ 己の身を正しくする。禮記「レ一而不レ求二於人一則無レ怨」
【枉レ己】オウキ 己の守る所を棄てる。孟、萬章「未レ聞二レ一而正レ人者一也」
【虛レ己】キョキ 己の心を空虛にして、人に問ふ。漢書、五行志「周既克レ殷以二箕子一歸、武王親レ一レ而問焉」
【己欲レ遂而遂レ人】キヨクスイジスイジン 己遂げ遂せんと欲すれば、先づ人を遂げ遂せしむ。論、雍也「夫仁者己欲レ立而立レ人、——」
【克レ己】コッキ わたくしの慾にうち勝つ。字解參看。
【己所レ不レ欲勿レ施二於人一】キショフヨクブッシヲジンニ 己の好まざるところは人も好まざるべければこれを人に施し及ぼすこと勿かれとの義。論、顏淵「子曰、其恕乎、——」

【已】イ 紙 支
○すでに（既）○まもなく、しばらくして。史、高帝紀「一而有レ娠」○はなはだ（太甚）孟、公孫丑「木若レ美然」又、甚と連用す。孟、離婁「仲尼不レ爲レ甚者」○もちて。＝以。○これ（惟）○やむ（止）やんぬるかな、自らあきらめる意を示す語。○をはる（畢・訖）○なる（成）○しりぞく（退黜）さる（去）すつ（棄）○いゆ（癒）呂覽、至忠「王之疾、必可レ一也」○ああ、發端の歎辭。書、大誥「一予維小子」○のみ、句の末に添へて斷定又は其の事ばかりといふ意をあらはす。又、而とも連用す。論、衛靈公「辭達而レ已矣」

関連語 已・既・畢の別は既（无部七畫）の條を見よ。
○已・而已・耳・爾の別は而（部首六畫）の條を見よ。
○已・息・輟・止・歇・罷・弭・廢・休○已は畢なり、全くをはる義、廢く用ふ。三已之無恒色一の已は罷に通ず、秋風鳴不レ已の已は息字に通ず、日暮情何已の已は窮盡の義。又、いやす・いゆと訓むときは、病を治し、又は病の治する義。○息はやみ絶ゆる義、干戈息の如し。○輟は作に對す、作事をやむる義。漢食貨志「輟レ耕之釁上」○止は作に對す、輟に近し、未レ成一簣、止吾止也の如し、もと行に對してゆく・おこなふの反となる字なれば、居止・閑止・禁止・制止と連用す。○歇は息なり、盡くやむなり。左傳「未レ瘳所レ歸、離未レ歇也」○罷は輟に近し、實罷の如し。○弭は止絶の義、弭レ兵と用ふ。息・輟二字と略ニ同じ。○廢は止絶の義、息なり、弛に同じ、兵賊刑措・廢二其業一不二舉行一の如し。○休は俗語詩語に多く用ふ、歇に近し、死不レ休・疲亂幾時休の如し、又やめよと訓むときは勿の字の意なり、休レ說の如し。
【已下】イカ これよりしも。＝以下。
【已降】イコウ それよりのち。＝以降。
【已甚】イジン はなはだしく度に過ぎる。孟、離婁「仲尼不レ爲二一者」
【已上】イジョウ これよりかみ。＝以上。
【已成】イセイ すでにできる。＝既成。
【已然首】イゼンシュ 國文法上の語、活用の過去の形をあらはすに用ふる稱。＝已然段。
【已往】イオウ 今よりまへ。已降の反對。＝以往・既往。

【巳】シ 紙
○み、十二支の第六位。＝大荒落。○方位にては東南方。時刻にては午前十時。○上一は節の名、陰暦三月三日。○おこる（起）

【巴】ハ 麻 書
○うづまき、水流の巴の字形の如く曲折する義。○古の部名。今の四川省重慶地方「一蜀」○いやしき聲音「一調」○

ともる、鞆せにるがきし繪。‖鞆繪。

【巴峽】ハケフ 古の巴の地にある峽流の名、四川省なる揚子江の上流に在り。南史、梁紀「屯ニ――一以拒レ之」

【巴戟天】ハゲキテン ○枝にの異名。‖枸骨。○常綠草の一、山中に生ず、葉厚くして大、根を藥用とす。

【巴人】ジン 巴州地方の人、鄙俗なる民の義とす。巴調參看。

【巴且】ショ 芭蕉ハセウの異名。‖巴蕉。

【巴蜀】ショク 四川の異名、巴は今の重慶地方、蜀は成都地方。史、蘇秦傳「南有ニ――一、北有ニ代馬一」

【巴旦杏】ハタンキャウ 杏アンズの別種、もと大宛より出づ。‖巴擔杏。

【巴調】ハテウ 巴人の歌ふ調にて いやしき調子、俗歌俗曲などの稱、轉じて自作の詩歌の謙稱。陳基詩「竹枝已聽巴人調、桂樹仍聞楚客歌」‖俚調。

【巴渝舞】ハユブ 巴は、地名、渝は、川の名、その地方の舞の名。漢書、高帝紀、注「渝水傍ニ人居、其人剛勇好レ舞、高祖幕レ此以平ニ三秦ニ後使ニ樂府習ヒ之、因名ニ――一」

【巳】 二畫

以（人部三畫）の古字。

【巵】 三畫

シ 支

○さかづき、四升（我が國の三四合）を容るる大きさの杯。史、高祖紀「奉ニ玉――一起ニ為ニ太上皇壽ニ」○べに。史、貨殖傳「巴蜀亦沃野地饒ニ――一」‖烟支・臙脂紅草。

【巵言】ゲン さかづきの酒の如く味のあることば。莊、寓言「――日出、和以ニ天倪一」‖美言。

【巵酒】シュ さかづきに注ぎたる酒。史、項羽紀「――一盛肩」‖杯酒。

【巹】 五畫

キン 咽 又、巹に作る

○のぶ（舒）うく（承）○さかづき、瓢を兩分したる盃、婚禮の時、夫婦各其の一を執りて酒を飲み契を結ぶ「合ニ――一」

【巷】 六畫

カウ 絳

○ちまた、ろぢ、村又は町のこみちっ增韻に「直ニシテ大イナルヲ街ト曰ヒ、曲ニシテ小ナルヲ――ト曰フ」「閭ニ――一」「里ニ――一」「閈ニ――一」「街ニ――一」○むらざと（邑里）○宮中のわたどの「永ニ――一」

【巷里】リ 里中の道、邑に從ひ共に從ふ、皆邑中に在りて共にする所なり。

【巷歌】カカ 町中にて歌ふ。里巷の唱歌。禮記「里有レ――一、不ニ――一」

【巷議】ギ 町内のうはさ。晉書、愍懷太子傳「街談ニ――一」‖世評・巷說・巷論。

【巷犬】ケン ちまたにすむいぬ。陸游、夜飛起坐詩「――一慶如レ約、山童首似レ蓬」

【巷說】セツ ちまたのうはさ。漢書、藝文志「街談ニ――一」

【巷戰】セン まちなかにてするたたかひ、市街戰。五代史、范延光傳「延光先入猶ニ――一、殺傷甚衆」

【巷談】ダン 巷說に同じ。

【巷邑】ユウ 官をしりぞきて里巷にをる。韓愈文「去レ位而ニ――一者、雖與嬉遊」

【巽】 九畫

ソン 願

○たつみ、東南の間の方角。○いる（入）○やはらぐ（柔）ひくし（卑）したがふ（從順）○ゆづる（讓）「謙ニ――一」‖遜。○そなふ（具）○易の卦の名。一下ニ上。

【巽維】ヰ 東南の方。郭璞、山海經贊「地數ニ――一天缺二乾角一」

【巽言】ゲン やさしきことば。‖異之旨參看。‖婉辭。

【巽二】ジ 風の神。易に「巽爲レ風」とあるに本づく。幽怪錄「吾令ニ滕六降レ雪ニ――一起ニ風、即煩使君不レ出矣」滕六は雪の神。

【巽與之言】ゲンヨノ やさしくしてさからはぬやうにさとし導くことば。論、子罕「――一、能無レ說乎、繹レ之爲レ貴」說は悅。

巾部

【巾】 三畫

キン 眞

○てぬぐひ（帨・偵巾）「手ニ――一」ふきん（拭布）「布ニ――一」○えりまき、づきん（頭巾）「葛ニ――一」「綿ニ――一」「綸ニ――一」「帛ニ――一」「角ニ――一」○おほふ（羃）衣を以て車に被せる「車ニ――一」○つつしむ（謹）○かざる（飾）○おりもの（布帛）圖○心幅の略字として用ふ。○古の婦人の冠。

【巾幗】クワク 女のかみかざり、一說に婦人の喪中にかぶる冠。轉じて婦人の輪。晉書、宣帝紀「遺ニ帝ニ――一幗人之飾一」

【巾笈】キフ きぬばりのおひ。武帝內傳「――一中有ニ一卷書一」

【巾箱】キフサウ きぬばりの小さきはこ。元

積計」「備兒携ニ―一こ

【巾箱本】キンシャウ 小形の書物。齊の衛瓘王鈞、手づから五經を細書して巾箱の中に置きたる故事に本づく。事物紀原「南史、齊衛陽王鈞傳、鈞骨親手細書五經二部爲二一卷一置二巾箱中一侍讀賀玠曰、殿下家有二項素一、復何細書別藏二巾箱一、鈞曰、巾箱中檢閲既易、且更手寫、則永不レ忘矣、瓘王聞レ之、爭效爲二巾箱一、今謂二精之細書小本者一、爲二巾箱一、始二於此一也」

【巾幗】キンカク づきん、かしらづつみ、冠の類。北史、隋煬帝紀「武官乎―― 綺羅」

【巾櫛】キンシツ きぬのあふぎ。潘岳賦「覽二―― 以舒レ懐」

【巾笥】キンシ きぬばりのはこ。續竹譜「方竹生二嶺外一、大者如二―― 小者如二界方一」＝巾箱・巾箱。

【執二巾櫛一】シッシンシツ 人の妻となることを謙していふ。巾は手拭、櫛はくし。共に婦人が夫に事ふるに執る所のもの。左、僖二二「寡君使二婢子侍執二巾櫛一」

【巾車】キンシャ ○布帛にておほひかざれる車。陶潛文「或命―― 或棹二孤舟一」○車官の長（周禮、巾車）

【巾者】キンシャ 圓金錢をいれる袋。＝荷包。

【巾帕】キンパ づきん。南史、梁陳章王綜傳「著二烏絲―― 一」＝雲帕。

【巾漉】キンロク 手拭にてふきたるなみだ。白居易詩「―― 濕成レ冰」

一畫

【市】サフ 合 匝は俗字

○めぐる。めぐり（周）一周を―― といふ。○あまねし（徧）「周―」

【市】フツ 物

まへだれ、ひざかけ、蔽に通ず。

新撰 中央の縦畫、上の橫畫を貫く、市（次條）とは別。

二畫

【市】シ 畫 紙

○いち、賣買交易する所「―街」「―井」「夜―」「花―」○人家の多きまち「城―」「都―」○うる（賣）史、項羽紀「以―於齊」○かふ（買）あきなふ（商）うりかひ、取りひき「互―」○あきなひ（商業）○ねだん（價値）○圓行政上の自治團體、人口二萬五千以上ありて内務大臣の指定せし地「―町村」

同訓異義 市・買・沽・賣等の別は貝部五畫）の條を見よ。

【市隱】シイン 世を逃れて市中に隱れゐる人。晉書、劉惔傳「隱之爲レ道、朝亦可レ隱、市亦可レ隱、隱初在レ我、不レ在二於物一」王康琚詩「小隱隱二陵藪一、大隱隱二市朝一」

【市管】シカン 行政上の地方自治團體たる市が商業をいとなむ「―電事」

【市怨】シエン うらみを買ひ求める、人にうらまるる義。戰國策「所謂―― 而買レ讐者也」

【市恩】シオン 恩を賣る、ねんをきせる。唐書、裴耀卿傳「我知二其不一―― 也」

【市買】シバイ ○うりねだん、次條を見よ。○あきうど。唐書「招レ財納レ賄、若二―― 一」＝商賈。

【市儈】シカイ うりねだん。儈もと賈に作る。孟、滕文公「―― 不レ二、國中無レ僞」＝市估。

【市街】シガイ まち。白居易詩「―― 塵不レ到」＝街衢。

【市街戰】シガイセン 圓まちなかでするたたかひ。＝巷鬪。

【市況】シキヤウ 商賣の景氣、商業の情況。

【市區】シク 市街の區域、まちの區劃「―― 改正」

【市儈】シカイ さいとり、市人を會合し賣買の中介を爲して利を得るもの。＝牙儈。

【市虎】シコ 一人が市に虎ありと言ふとも、之を信ずる者はなし、二人が言へば半信半疑、三人まで言へば、終に之を信ずるに至る、無根の浮言も之を言ふ者多ければ人を惑はすに至るに喩ふ。戰國策「市無レ虎明矣、然而三人言レ虎、」淮南、說山「三人成二――一」

【市參事會】シサンジクワイ 圓市參事會員を以て組織し市の事務を取り扱ふ合議制の會。

【市肆】シシ みせ。商店（漢書、食貨志）＝市廛。

【市井】シセイ まち。井の在る所にて市を成す、故にいふ。國語「處レ工就二官府一、處レ商就二――一、處レ農就二田野一」

【市井之臣】シセイノシン 城下に居る庶民をいふ。孟、萬章「在レ國曰二――一、在レ野曰二草莽之臣一」

【市井徒】シセイト 町に居る賤民。西廂記、李惠傳「柴胡――、蔴何刀筆吏」

【市井之人】シセイノヒト まち中のつまらぬ者、衆町人。史、刺客傳「政乃――」政は聶政といふ刺客。

【市征】シセイ 市租に同じ。宋史、扈崇傳「掌二大名―― 一」＝市稅。

【市制】シセイ 市の區域・機關・權限等に關する規定。

【市租】シソ 市民より取立てる租稅の史、李牧傳「―― 皆輸二幕府一、爲二士卒費一」＝市征。

【市長】シチヤウ 一市の長。史、太史公自序「無澤爲二漢―― 一」＝市魁。

【市場】シジヤウ ○あきなひをするばしょ。○圓物品を賣買するために、

商人が一定の日時に集りてあきなひする場所。
【市道之交】シダウノマジハリ利によりて結ぶまじはり。史、滕顔傳「天下以二市道一交、君有レ勢、我則從レ君、君無レ勢則去」
【市朝】シテウ ○朝廷をいふ。市は帯説なり。論、憲問「吾力猶能肆二諸ーー一」○まち、又市井ヤと朝廷と。
【市糴】シテキ 米を買ひ入れる。宋史「連歲大稔、命レ使糴レ粳、增レ價ーー、自レ是率以爲レ常」
【市廛】シテン まちや。文同詩「西岡頗幽僻、愛此遠二ーー一」
【市買】シバイ かふ。市も買。史、武安侯傳「治二宅甲二諸第一、田園極二膏腴一、而ーー二都縣器物一、相二屬於道一」
【市船】シバク 商船（唐書、盧奐傳）
【市脯】シホ 買ひたるほじし。脯は乾肉。論、鄉黨「沽酒ーー不レ食」
【市民】シミン 市中に居る民。申鑒「山民樸、ーー玩、處也」
【市門】シモン まちのもん。史、貨殖傳「刺二繡文一不レ如レ倚二ーー一」
【市里】シリ まち。魏志、華歆傳「無レ不レ游二行ーー一」
【市子】コシ 圖かみおろし・口よせなどの法を行ふ女。‖巫女。
【如レ歸レ市】イチニユクガゴトシ 先を爭ひて至るをいふ。孟子「仁人也、不レ可レ失也、從レ之者、ーー也」
【市松模様】イチマツモヤウ 圖基盤目の交互に色をかへたる布帛の紋様。
【市女笠】イチメガサ 圖昔、婦人用の中高のぬりがさ。

【布】フ 遇

○ぬの、植物の纖維ヰとにて織りたるもの「綿ー」「麻ー」○織物の總稱「毛ー」○しく（施・陳列）廣く行きわたる「流ー」「遍ー」○のべひろげる、敷衍する「宣ー」○ぜに（錢）「泉ー」詩、衛風「抱ー貿絲」○ちらす（分散）「散ー」「葬ー」

同訓異義 フ布・敷・鋪・藉・席・播○布は一面に廣くしく義、流布・宣布・布列と熟す。○敷は布に同じ、布政を敷政とも書く。書經「弘敷五典ー」○鋪はならべしく義、布に近し、蒲團などを數くにも用ふ。禮記「鋪二筵席一、陳二尊俎一」陳ね布く義より轉じて買賣ヰの義に用ふ、鋪は俗字。○藉は草を下にしく義より、廣く下地のしきものにする義とす。易經「藉以二白茅一、愼之至也」○席はむしろ・しとねの義、轉じてしきものにする義とす、藉に近し。○播はひろく施き及ぼす義、傳播・弘播と用ふ、又、たねまきの義にも用ふ。詩經「始播二百穀ーー」

【布衣】フイ ○官位なき人、古は無官の庶人は布を衣る、故にいふ。史、田單傳「王蠋ーー也」○圖狩衣カリギヌの無紋のものをいふ。六位以下の人の服なれば、轉じて六位以下の官人の稱。
【布衣韋帶之士】フイイダイノシ 布の衣をきて、なめしがはの帶を締めたる貧賤の士。漢書、賈山傳「ーー、修二身於內一、成二名於外一」
【布衣之位】フイノクラヰ いやしき身分。史、晉仲連傳贊「多二其在一ーー一、蕩然肆レ志不レ論二手諸侯一」
【布衣之俠】フイノケフ 庶人のをとこだて。史記「ーー、聞二得而聞一矣」
【布衣之友】フイノトモ 平民的に交る友、身分地位に關せずして交る友をいふ。史、范雎傳「願與レ君爲二ーー一」‖布衣之交。
【布衍】フエン のべひろめる。
【布演】フエン のべひろめる。阮籍文「庖羲氏ーー六十四卦之變」‖敷演。
【布基】フキ どいしを盤面にしきならべる。吳子「敎レ士如レ一レー」
【布巾】フキン ○ぬののきれ。宋書、禮志「去元冠、加以二ーー一」○圖物品を拭ひふくきれ。‖拭布。
【布金】フキン ぬのの夜具。漢書、敍傳「ー疏食、以レ儉飭レ身」
【布貨】フクワ ぜに。漢書、食貨志「ーー十品」‖布泉。
【布景】フケイ 畫工が紙幅の廣狹にしたがひて風景を配置する。宣和畫譜「ーレー致レ思、不レ憂二咫尺一而萬里可レ論」
【布敎】フケウ ○をしへをひろめる。平弘、明堂議「弘レ風ーレー、作二範於後一」○宗敎をしき弘める。‖宣敎。
【布告】フコク 廣くふれしめす。史、匈奴傳「ーニー天下一、使二明知一之」
【布穀】フコク 鳩鳩フクコクの異名。杜甫詩「ー處處催二春種一」
【布施】フセ ○人に物を施す。周語「享祀時至、ーー優裕」○圖一切衆生の爲めに、惜まず物を施しめぐむ。又、其の金品。法界次第「擯那秦言二ーー一」
【布政】フセイ まつりごとをしき行ふ。詩經「ーー優優、百祿是遒」‖施政。
【布政司】フセイシ 明清時代各省の行政事務を管せし長官、總督巡撫に直屬す、正三品官。
【布昭】フセウ 明かに天下にしき示す。書、伊訓「惟我商王、ーニー聖武一」
【布散】フサン しきまらくる「ーー水雪」
【布泉】フセン ぜに。周書、武帝紀「更鑄レ錢文曰二ーー一」藏するに泉といひ、通行するに布といふ。‖泉布・布錢。
【布遠】フソク 圖一般に廣く知らしめる、ふれる。又、其のふれ。‖布令。
【布置】フチ くばりおく。しきならべる。左傳、疏「相離者、ーー使二相遠一也」
【布陳】フチン しきならべる。‖羅布。
【布陣】フヂン 陣勢を排列する。唐書、韓延壽傳「用二臨淮王遺法一ーレー」
【布暢】フチヤウ しきのぶ。張協賦「和風穆

以ーー」
【布帛】ハク もめんを布といひ、きぬを帛といふ。
【布帆】ハン ぬののほ。晉書、顧愷之傳「行人安穩、ーー無レ恙」
【布被】ヒ もめんのふとん。倫様の儉。史記「公孫弘、以二漢相一ーー、食不レ重レ味、爲二天下先一」
【布覆】フク 廣くしきおほふ。馬融、長笛賦「氣噴勃以ーー兮」
【布縷】ルノ ぬのと、よりいとと。古、年貢として徴収す。孟、盡心「ーー之征」は稅。
【布令】レイ 命令法令等をひろく一般に示す。又、其の命令など。周語「ーー陳レ辭面又不レ至」
【布海苔】ノリ 圖海藻の一、海中の石に叢生す、長さ二三寸、多くの枝に分る、乾かして漉き板の如く製し、煮て糊を作り、又は髮を洗ふ料とす。‖鹿角菜。
【布袋】タイ ○梁朝の僧、號は長汀子、體肥え腹便便たり、常に杖を以て布の袋を擔ふ、彌勒菩薩の化身といふ。七福神の一。○圖ぬののふくろ。隋書、食貨志「遷二乾臺一、以二ーー一貯レ之」‖布囊。
【布袋竹】タイチク 圖竹の一種、ごさんちく、幹短く節多く、杖などにつくる。‖佛面竹。

巾 三畫

【帆】ハン 國 通じて颿に作る

○ほ、舟上の幔の「布ー」「錦ー」「蒲ー」「征ー」「雲ー」「揚ー」ー○轉じて船の義とす「歸ー」○ほをあげる。韓愈詩「無因」ー江水」
【帆影】エイ ほかげ。李嶠詩「岸遊ーー疾、風逆鼓廻遲」
【帆竿】カン ほばしら。‖帆檣。
【帆檣】ショウ ほばしら。吳志、孫和傳、注「有レ鵲巢二於ーー一」‖舟楫。
【帆席】セキ ほのむしろ。木華、海賦「維二長綃一、挂二ーー一」
【帆船】セン 帆前船に同じ。
【帆布】フ ほもめん、粗造にして堅く厚き布。
【帆掛船】ブネ 圖ほをあげて進むふね。‖帆船。
【帆立貝】ガイ 圖貝の一種、北海に産す、介殼の一片はふくれ、他の一片は平たし、平たき方を上に開きて帆とし、風に隨ひて水に浮び行く、肉は美味なり。‖海扇。
【帆前船】センセン 圖帆をあげて風の力にて進む船。‖帆船。

【希】キ 四畫 㣲

○まれ(罕)‖稀。すくなし(少。寡)殆ど無し。論、季氏「十世ーー不レ失」○こひねがふ(冀)のぞむ(仰望)○とどまる(止。閒歇)○ほ、舟上の幔の「布ー」「錦ー」「蒲ー」「征ー」「雲ー」「揚ー」ー○轉じて船の義とす「歸ー」○ほをあげる。韓愈詩「無因」ー江水」
【帆影】エイ ほかげ。李嶠詩「岸遊ーー疾、風逆鼓廻遲」
【帆竿】カン ほばしら。‖帆檣。
【帆檣】ショウ ほばしら。吳志、孫和傳、注「有レ鵲巢二於ーー一」‖舟楫。
【帆席】セキ ほのむしろ。木華、海賦「維二長綃一、挂二ーー一」
【帆船】セン 帆前船に同じ。
【帆布】フ ほもめん、粗造にして堅く厚き布。
【帆掛船】ブネ 圖ほをあげて進むふね。‖帆船。
【帆立貝】ガイ 圖貝の一種、北海に産す、介殼の一片はふくれ、他の一片は平たし、平たき方を上に開きて帆とし、風に隨ひて水に浮び行く、肉は美味なり。‖海扇。
【帆前船】センセン 圖帆をあげて風の力にて進む船。‖帆船。

【希】キ 四畫 㣲

○まれ(罕)‖稀。すくなし(少。寡)殆ど無し。論、季氏「十世ーー不レ失」○こひねがふ(冀)のぞむ(仰望)○とどまる(止。閒歇)○ほ、舟上の幔の「布ー」「錦ー」「蒲ー」「征ー」「雲ー」「揚ー」ー○轉じて船の義とす「歸ー」○ほをあげる。韓愈詩「無因」ー江水」
【帆影】エイ ほかげ。李嶠詩「岸遊ーー疾、風逆鼓廻遲」
【帆竿】カン ほばしら。‖帆檣。
【帆檣】ショウ ほばしら。吳志、孫和傳、注「有レ鵲巢二於ーー一」‖舟楫。
【帆席】セキ ほのむしろ。木華、海賦「維二長綃一、挂二ーー一」
【帆船】セン 帆前船に同じ。
【帆布】フ ほもめん、粗造にして堅く厚き布。
【帆掛船】ブネ 圖ほをあげて進むふね。‖帆船。
【帆立貝】ガイ 圖貝の一種、北海に産す、介殼の一片はふくれ、他の一片は平たし、平たき方を上に開きて帆とし、風に隨ひて水に浮び行く、肉は美味なり。‖海扇。
【帆前船】センセン 圖帆をあげて風の力にて進む船。‖帆船。

む(仰望)○とどまる(止。閒歇)○ほ、舟上の幔の「布ー」「錦ー」「蒲ー」「征ー」「雲ー」「揚ー」ー○轉じて船の義とす「歸ー」○ほをあげる。韓愈詩「無因」ー江水」
【帆影】エイ ほかげ。李嶠詩「岸遊ーー疾、風逆鼓廻遲」
【帆竿】カン ほばしら。‖帆檣。
【帆檣】ショウ ほばしら。吳志、孫和傳、注「有レ鵲巢二於ーー一」‖舟楫。
【帆席】セキ ほのむしろ。木華、海賦「維二長綃一、挂二ーー一」
【帆船】セン 帆前船に同じ。
【帆布】フ ほもめん、粗造にして堅く厚き布。
【帆掛船】ブネ 圖ほをあげて進むふね。‖帆船。
【帆立貝】ガイ 圖貝の一種、北海に産す、介殼の一片はふくれ、他の一片は平たし、平たき方を上に開きて帆とし、風に隨ひて水に浮び行く、肉は美味なり。‖海扇。
【帆前船】センセン 圖帆をあげて風の力にて進む船。‖帆船。

【希古】コ 古人を以て自ら期する。嵇康詩「抗レ心ーー、任二其所一レ尚」
【希旨】シ 次條に同じ。
【希指】シ 人の意をむかへる。人の氣に入るやうに迎合する。指は旨。漢書、孔光傳「上有レ所レ問、擧二經法一、以二心所一レ安而對、不二ーーレ荀合一」‖希旨。
【希世】セイ ○世にまれなる珍らしきもの。歐陽修詩「家藏有二此ーー珍一」○世におもねりて俗に殉ふ。莊子「ーーレ而行、比周而友」
【希聖】セイ 聖人たらんことをねがふ。希賢を見よ。
【希少】ショウ すくなし。晉、堯典、傳「夏時鳥獸毛羽、ーー改易」‖稀少。
【希代】ダイ ○世にまれなり。高適詩「誰謂行路難、猶當ーー珍」‖希世・稀世。○圖ふしぎ、奇異。
【希圖】ト くはだて。‖企圖・計畫。
【希望】ボウ こひねがひのぞむ。のぞみ。‖冀望。
【希毛】モウ すくなきけ。漢書「鳥獸ーー、其性能レ馴」
【希臘教】ギリシヤ 耶蘇舊教の一派。

【帟】紙(糸部四畫)に同じ。

【帕】ハ 圖

○とばり(帳)○ふろしき。○かしらづつみ、頭巾の類。蘇軾

詩「絳ー蒙頭讀道書」

【帚】 五 畫 シウ 有 通音 サウ

○ははき、塵を掃ふ具、箒の正字「敝ー」曲禮「凡爲長者糞之禮、必加ー于箕上」○はく（掃）はらひ清める。○王ーは、ははきぎ。爾雅、註「王ー似蒲其樹可爲掃」

【帙】 チッ 質

○ふみづつみ（書衣）「書ー」「卷ー」「縹ー」○こぶくろ（小嚢）古の書は皆卷子ニシテにて嚢を以て之を盛る。○轉じて書物の義「梵ー」

【繙ー帙】ヒラクノ 書物を開きて讀む。＝開卷。

【帖】 デフ 葉

○かきもの（帛書署）○陣中の告示文「軍ー」○てがみ（書翰）「乞米ー」○石すり。轉じて手本「法ー」「碑ー」○牀の前のとばり（帷）○つく（著）○したがふ（服）○さだむ、さだまる（定）「安ー」○ふだ、進士の試驗に問題を記せし札。轉じて進士の試驗。唐書、選擧志「記ー括」○國では、紙又は海苔などを一括したる稱。

【帖黃】デフワウ 黃色のはりがみをする、唐代の制、詔勅に改正を要する所あれば、勅旨と同じ色の黃紙の附箋をせしをいふ（石林燕語）

【帖括】デフクワツ ○帖は經中の文字を抜き記して問題とせし紙札、それに對して一經の文を總括して答案を作るをいふ（唐書、選擧志）一說、經書の文に所所紙をはりつけて隱したる文字をあてしめて學力を試みる法。＝帖試。○淸朝にて科擧應試の文をいふ。

【帖經】デフケイ 帖括を見よ。

【帖子】デフシ ちゃうめん。金史「六品以下、則具ニー一以進」＝帳簿。

【帖耳】デフヂ 耳を垂れて馴れ伏する。韓愈文「俛首ー一、搖尾乞ー憐」＝帖伏」

【帖試】デフシ 帖括を見よ。

【帖然】デフゼン おちつきて安んずる貌。晉書、劉琨傳「聚情ー一矣」

【帖息】デフソク やすんじおちつく。宋史、張詠傳「氣遂ー一」＝安靖。

【帖妥】デフダ やすくおちつく。李賀詩「空光ー一水如ー天」＝妥帖。

【帖密】デフミツ はりつける。南史「剪紙方寸、ー一ー鼻孔」＝帖附。

【帖帖】デフデフ ○物のゆったりと垂れさがる貌。釋名「牀前帷曰ー帖、言ー一而垂也」○おちつきて定まる貌。杜牧詩「瓊宇寂ー一」＝帖然。

【帖附】デフフ 帖著に同じ。

【帖伏】デフフク 馴れ伏する。薛季宣詩「請君聽二之政事堂一坐令ー一ー犬與レ羊」

【帖服】デフフク 從順なる貌。王安石文「被遂ー一、皆爲レ用」＝帖伏。

【帑】 ㊀ド ㊁タウ 虞 遇 ド

㊀こ（子）つまこ（妻子）「妻ー」＝孥。○とりのを（鳥尾）左、襄二八「以害鳥ー一」㊁かねぐら（金庫）「府ー」「公ー」「禁ー」

【帑廩】ドリン くら。唐書、張文瑾傳「案二穀數一萬匹、ー一浸虛」

【帑庫】ドコ 貨財ををさむるくら。宋史「選二富家子弟一掌ニーー一」

【帑藏】ドザウ 貨財ををさむるくら。後漢書、桓帝紀「嘉禾生二大司農ーー一」＝帑廩。

【帑廩】ドリン かねぐらと米ぐらと。唐書、王處休傳「性悟敏、節二用度一、既沒、所レ部ー一、皆可レ支二數歲一」

【帛】 ハク 陌

○きぬ（絹）○にしき（錦）○ぬさ「幣ー」禮物に用ふるきぬ。○かとり（縑）古、文字を書くに用ふ。轉じて書冊記錄の義とす。後漢書、鄧后紀「必書二功於竹ー一」（竹は竹簡）

【帛書】ハクショ うすぎぬに書きし文字。又、其のきぬ。漢書、蘇武傳「天子射二上林中一得レ雁、足有レ係ー一ー」

【帕】 ㊀バツ 黠 ㊁ハク 陌

㊀はちまき（抹額）古の軍容「ー首」㊁はらまき（腹卷）「ー腹」

【帕首】バツシュ はちまき。韓愈詩「以レ錦纏レ腰、以レ紅ーレー」

【帕頭】バツトウ づきんの類。＝幞頭。

【帔】 ヒ 寘 支

○もすそ、すそ（帶）○そでなしばおり（褙子）○國むしのたれぎぬ、苧麻の布にて製す、上古の婦人が、外出の時、笠の四檐にさげて身を被ひし布。

【帀】ソウ 圏 太宰府の長官。

【帥先】ソツセン みちびき先だつ。晉書、禮樂志「躬ニ率ヒ禮義ヲ一以ニ一ニ一天下一ニ一率先。

【帝】レン ロン 圏

酒屋のはた(酒旗)。古時、酒店の招牌(カンバン)は旗を懸けて望子(ボウシ)とす「酒ー」鄭谷詩「青ー認ニ酒家一ニ」

六畫

【帝】ニキ 陌

○ちいさきまく(小幕)。○上に在る帳(トバリ)。

【帷】ケン 圏

○底のあるふくろ(嚢)。○たすき。

【帥】㊀シュツ 質 ㊁の通 ㊁ソツ 㔟スイ

㊀ひきゐる(率)。易、師卦「長子ー一師」。○したがふ(循・遵)。禮、王制「命ニ鄉簡ニ不ー一」教者」以告」。○あつまる(聚)。○てぬぐひ(佩巾)。㊁をさ(主)かしら(統領)。しゅぐん(軍之主帥)。「元ー一」「將ー一」「督ー一」「主ー一」「率ー一」。○

【帝】テイ タイ 圏

○みかど、きみ(天皇・天子)。「皇ー一」。○あまつかみ「上ー一」「天ー一」。○神の貴き者「白ー一」「赤ー一」。○あきらか(諦)。大いなり。

【帝位】テイヰ 天子のくらゐ。帝業。

【帝王】テイワウ 天子と諸侯。

【帝王之學】テイワウノガク 天子の學問。

【帝王之業】テイワウノゲフ 天子の事業。

【帝王之道】テイワウノミチ 天子の道。

【帝王之德】テイワウノトク 天子の德。

【帝王之命】テイワウノメイ 天子の命令。

【帝王之位】テイワウノヰ 天子の位。

【帝王之政】テイワウノセイ 天子の政治。

【帝王之治】テイワウノチ 天子の治

都、乃―、公當ㇾ守ㇾ之」＝宮城。
【帝祉】テイシ　天より降したまふさいはひ、祉は福。詩經「既受ニ―一、施ニ于子孫一」
【帝儲】テイチョ　天子のよつぎ。謝朓賦「君奉ニ乘于―一」＝皇太子・東儲・春宮・東宮。
【帝都】テイト　天子のおますみやこ。李白詩「日本晁卿辭ニ―一」＝帝城・帝京。
【帝圖】テイト　天子のはかりごと。北齊書、儒林傳贊「―雖ㇾ綱、儒風未ㇾ純」＝帝猷。
【帝範】テイハン　四卷、唐の太宗親ら撰して太子に賜ふ所、帝王たる者の模範とすべき事を記す。
【帝傅】テイフ　宰相。陸游詩「天爲ニ明時一生ニ―一」
【帝謨】テイボ　帝國に同じ、謨は謀。法言「皐陶以ニ其智ㇾ爲ニ―一」
【帝命溥將】テイメイフショウ　溥は徧ㇾ將は助くる、天子の命を受けて、諸侯が徧く祭祀を助くる義。宋史、樂志「歷化洋洋、――」詩、商頌「我受ㇾ命溥將、自ㇾ天降ㇾ康」とあるに本づく。
【帝旅】テイリョ　天子の軍隊。陰鏗頌「公徒既振、一一飢人」
【帝陵】テイリョウ　天子のみささぎ。
【帝力】テイリョク　帝王の恩德。康衢謠「―何有ニ於我一哉」洪大なる天子の御恩をかうむりながら、其の餘りに大なるを以てそれに氣づかざるなり。
【帝王】テイオウ　てんし。杜甫詩「氣衝ニ星象一、詞感ニ―一聆」
【帝王之兵】テイオウノヘイ　天子が德を以て天下を平定せんとする軍隊。戰國策「――、取用不ㇾ過ニ三萬一而天下服矣」
【帝釋】タイシャク　四天竺の神。須彌山上、忉利天（トウリテン）の中央に居る、三十三天の主、其の居を喜見城といふ。＝帝釋天。

【帕】ハク　四

○かしらづつみ（繰頭）○はちまき。＝帕。

【帛】ハク　七畫

○もすそ（下裳）すそ（裾）＝裙・幅。○中―はばたき（襯衣）

【師】シ　六

○人を敎へ導く人、人の模範となる人「百世之一」○先生とする。○のり（法）ならふ（效）○おほし（衆）もろもろ（諸）○なさ（長）○官の名「太一」「胎一」「少一」○いくさ、周代の軍制にて二千五百人の隊、五―を軍（一萬二千五百人）とす「王一」「六一」「舟一」「班一」○易の卦の名、坎上坤下。○神の稱「雨一」「雲一」○職業「醫一」○しし（師子）＝獅子。○京―は天子の都する所。
【師友】シユウ　師と仰ぐべき友。漢書「唯以ニ同郡荀淑陳寔一爲ニ―一」○先生と友人と。
【師尹】シイン　周の太師の尹氏。詩、小雅、節南山「維―、民具爾瞻」
【班ㇾ師】ハンシ　軍隊を引き還す。書、大禹謨「一ㇾ振旅」
【振ㇾ師】シンシ　軍隊をねぎらひなぐさめる。左、僖二六「齊孝公伐ニ我北鄙一、使ニ展喜一―一」我とは魯國。
【師恩】シオン　先生より受けし恩。
【師家】シカ　先生の家。世說「從ニ―一受ㇾ書還」
【師行】シコウ　軍隊のあゆみ、軍隊の進行。詩經、疏「一―三十里」
【師矩】シク　のり、てほん。唐書、劉禕之傳「爲ニ―家忠孝、訓ニ子姪一以ニ―一」＝師範・師法。
【師曠之聰】シコウノソウ　師曠は晉の樂師、能く音をききわけし人、聰は耳きとし。孟、離婁「――、不ㇾ以ニ六律一、不ㇾ能ㇾ正ニ五音一」
【師敎】シキョウ　先生のをしへ。詩經、簡「碩ニ人一―一也」
【師嚴道尊】シゲンニトナシ　敎師が嚴格なれば、自然に其の傳ふる道も尊くなる。禮、學記「師嚴然後道尊」
【師古】シコ　古を以て法とす。古道をたふとびてのつとる。史記「事不ㇾ―一、而能長久者非ㇾ所ㇾ聞也」
【師祭】シサイ　いくさのまつり。禮、王制、注「謂、――也」
【師氏】シシ　○周代の官名（周禮）○女師。詩、葛覃「言告ニ―一」
【師事】シジ　師としてつかへる。左傳「孟懿子與ニ南宮敬叔一―ニ仲尼一」
【師郎】シロウ　相師としてのつとる。書、舜典「俞父在ㇾ官、百僚―一」傳「―相師法」
【師資】シシ　○先生は己のたすけとなるが故に資といふ（穀梁傳、注）○師匠と弟子と。
【師子吼】シシク　佛　佛者があらゆる迫害を畏れずして說法するをいふ。獅子が吼ゆれば、百獸おそるるに喩ふ。師は獅に同じ。法華經「以ニ大哲顯ニ而――」
【師子國】シシコク　古の國名、今の印度の錫蘭（セイロン）島。宋書、――元嘉五年條」
【師子座】シシザ　佛　佛菩薩の坐する所の座の稱、佛は人中の師子と爲すが故（翻譯名義集）
【師匠】シショウ　○てほんとする人。王筠文「一代一―、四海推崇」○技藝を敎ふる人。
【師承】シショウ　師よりをしへを承ける。黃庭堅詩「我學無ニ一一、欽井可ㇾ窺

ノ底」

【師生】シセイ　教師と生徒と。名山藏李時勉傳「延臣歸老之榮、一一相與之厚、以爲二盛事一」＝師弟・生師。

【師船】シセン　國軍艦。

【師祖】シソ　師として尊ぶべきもの。宋書、謝靈運傳論「異軌同奔、遞相一一」

【師宗】シソウ　○先生としてたっとぶ。○先生。

【師團】シダン　國軍隊編制上の名稱、歩兵二旅團・騎兵及野戰砲兵各一聯隊・工兵及輜重兵各一大隊より成る。

【師壇】シダン　大臣又大將を拜命するには。歴書「四登二一一」

【師檀】シダン　國寺僧と、檀家と。

【師長】シチョウ　先生又は目上の人、尊者。＝先生長者。

【師娘】シジョウ　女の巫。又、男の巫をもいふ。幡耕錄「女巫曰二一一、都下及江南謂二男覡一、亦曰二一一」

【師弟】シテイ　師と弟子と、先生と門人と。

【師田】シデン　師は兵士の調練。田は田獵。共に武藝を練習する體法。

【師傳】シフ　先生よりつたへ授けられる。＝師承。

【師徒】シト　いくさ、軍勢。劉志「一一勤疲、不レ進二寧居一」

【師保】シホ　君主を教へ輔佐する。又、其の職。左、襄三十「一一二其君一」

【師走】シワス　國陰暦十二月の異稱。＝極月・季冬・歳月。

【師法】シホウ　のり、てほん。漢書、魏相傳「相明二易經一、有二一一一」＝師範・師矩。

【師範】シハン　○てほん、師法模範。又、其の人。北史、楊播傳論「恭德慎行、爲二世一一一」＝師表。○國劍道・柔道などの先生。

【師父】シフ　○先生と、ちちと。○先生を父として尊ぶ稱。

【師傅】シフ　○太師と太傅と、共に皆帝王を輔佐する大官。○道ををしへ導くもの。やく。漢書、疏廣傳「父子並爲二一一一」

【師表】シヒョウ　てほん。又、其の人。史、太史公自序「國有二賢相一其將一民之一一也」＝師範。

【師模】シボ　てほん、師表模範。三國志、注、邴原別傳「識學者之一一也」＝師表・師範。

【師旅】シリョ　五百人の軍隊を旅とし、五旅即ち二千五百人を師とす。論、先進「加レ之以二一一一因レ之以二饑饉一」

【帨】セイ　エツ　風　霽

てぬぐひ(佩巾)

【席】セキ　陌

○むしろ(莞蒲・竹等にて織りたる敷物)ござ「筍一」「枕一」「茵一」○すわり場所「筵一」「座一」「一次」「酒一」「末一」○しく(藉)敷物をしく。○とる(資)よる(因)漢書、劉向傳「呂產・呂祿一一太后之寵一」○やすんず(安)○つらぬ(陳)

【席不レ暇レ暖】セキアタタカナルヲイトマアラズ　孔子が四方に奔走して其の座席の暖たまる暇なきをいふ。韓愈、爭臣論「孔一一」

【前レ席】ゼンセキ　熱心に人の話を聞きて次第に坐席を進める。史、賈生傳「孝文帝因レ感二鬼神事一、而問二鬼神之本一、賈生因具說レ所二以然一之狀、至二夜半一、文帝一一レ」

【逃レ席】トウセキ　酒宴の席をはづす。宋事詩「連飛二十數觥一、不レ勝二其困一一レ而去」

【以レ席爲レ門】モッテセキトナス　むしろを門とす。貧家の形容。史、陳丞相世家「平家乃負郭窮巷、以二弊席一爲レ門、然門外多二長者轍一」＝席門。

【席卷】セキケン　むしろを卷く如く、かた端よりまき收める。賈誼、過秦論「一一二天下一、包二擧宇內一」

【席次】セキジ　すわるべき座席の順序。＝座次・席順。

【席上之珍】セキジョウノチン　珍は寶、上古の聖人の美くしき道をならべつらねる。一說、儒者の學識を席上の珍に喩へていふ。礼、儒行「儒有二一一一以待レ聘」＝席珍。

【席卷】セキケン　國よせ、講談・落語などの觀衆を演じて人をよせ集める所。＝寄席。

【席末】セキマツ　○席次のすゑ、末席。儀禮「一一坐啐レ酒」注「啐亦皆也」○已のすわり場所を譲していふ。

【席門】セキモン　むしろにて作りたる貧家の門。宋書、袁粲傳「一一常掩、三逕蒿通」

【席料】セキリョウ　國席をかり入るるために拂ふかね。＝閑代

八畫

【帷】イ　支

とばり(帳)たれぎぬ(幌)ひきまはしたる幕「絳一」「羅一」「揚一」「簾一」「講一」

【帷幄】イアク　帷も幄も幕の類。よりて陣營又は謀臣の義とす。漢書、高帝紀「運二籌一一之中一、決二勝千里之外一」＝帷幕。

【下帷】カイ　とばりを垂れおろす、塾を開きて諸生を教ふる。漢書、董仲舒傳「爲二博士一一レ講誦、三年不レ窺レ園」

【帷月】イゲツ　まく、たれぎぬ。鮑照詩「徘徊一一中」

【帷裳】イショウ　○出仕又は祭祀の時の服、下の裳は正幅を用ひて帷幄の如くす。故にいふ。【綺、海黨】○婦人

の車のひきまく。詩、衛風「車舝ニー一」＝車幃。

【幃牆之制】ノセイ　幃はとばり、牆壁の居る所、幃はかき、臣隷の居る所、即ちはしたものの幔にて、人主たる者が近侍の臣妾に制し抑へられるをいふ。漢書、鄒陽傳「今人主沈ニ諂諛之辭一、牽ニ——一」

【幃闥】タツ　天子の奥御殿。闥は宮殿中の小門。

【幃幄】アク　とばり、幕府の義、將軍の陣營。史、高祖紀「運ニ籌策一ニ之中一、決ニ勝千里之外一、吾不レ如ニ子房一」＝幃幄は幃幕。

【幃房】バウ　とばりの中、ねやのうち。宋書、后妃傳贊「愛止ニ一一、權無ニ外授一」＝閨房。

【幃幕】バク　○まく。周禮、天官、注「在レ旁曰レ幃、在レ上曰レ幕」○幃幄に同じく陣營の義とす。

【幃薄不レ修】ハクフシウ　閨門の亂るる義。薄はすだれ、皆内外を蔽ふもの、閨房の義とす。漢書、賈誼傳「坐ニ汚穢淫亂男女亡ヒ別者、不レ曰ニ汚穢一、曰ニ幃薄不レ修一」＝閨房不レ嚴。

【幃屏】ヘイ　たれたる幕のおほひ。南史、羊侃傳「盛設ニ一一、列ニ女樂一」

【幃幔】マン　たれぎぬ、まく。後漢書、臧洪傳「盛陳ニ一一、大會ニ諸將一」

【幃簾】レン　たれまくと、すだれと。南史、梁元帝徐妃傳「妃嫁夕、雲霞交下、一一皆自」

【幃子】シ　圀幃、又、高にて織りし夏衣。又、其の布。

【常】シャウ　ジャウ　陽

○つね(恒)平生、ふだん、いつも「日ー」「平ー」とこしなへ(永遠)○のり(典・法)「國ー」常に行ふべきみち、萬世不易の道「五ー」○ひさし(久)○もすそ(裳)○こうめ(常棣)＝棠棣。○尋の二倍の長さ即ち、一丈六尺。○なみ、普通、凡庸「尋ー」「異ー」「非ー」○つねに、とこしなへに。○かつて、古、曾と通ず。○西方の神。○日月を畫ける天子の御旗「大ー」○一山は直隸省に在る山名。＝恒山。

同訓異義　常・恒・雅・毎・庸・彝○常はあけくれと譯す、平常の義。漢書「常祭祖以示レ之」○恒はいつもかはらざる義。孟子「人恒過、然後能改」○雅は素なり、平素の義、かねがねなり、もとよりとも訓む、下地からの義。論語「子所ニ雅言一、詩書執禮」○毎は其のたび毎にの義、毎レ年・毎レ人などと用ふ。○庸は尋常なり、常に近し、庸行は目に立たぬ常體の行をいふ。○彝は定りたる常法をいふに用ふるとき、常と同じ。

【常員】ヤウイン　常に定まれる人數。唐書、百官志「職有ニ常守一、而位有ニ一一一也」

【常佳】カヤウ　常にすこやか。王畿之文「知ニ體氣一ニ一、此大慶也」

【常格】カクヤウ　常に定まりたる格式、一定のきまり。宋書、符瑞ニ一一」

【常紀】キヤウ　つねののり。＝常度。

【常軌】キヤウ　つねののり。北史「愚百王之ー一、爲ニ政之所レ先」＝常道。

【常規】キヤウ　つねののり。＝常度。

【常職】シヤウ　定まれる人のみち。左傳、疏「天以ニ光明一爲ニ一一」

【常經】ケイ　永久に守るべきのり。漢書、董仲舒傳「天地之ー一、古今之通誼」

【常業】ゲフ　常に定まれるしごと。宋史、臣有ニ常職一、民有ニ一一、物有ニ常形一」

【常度】ドクヤウ　のり、常に守るべきおきて。書經「先王克謹ニ天戒一、人臣克有ニ一一一」

【常操】サウ　かはらざるつねのみさを、終始一貫せる操守。漢書、上無ニ一一」

【常産】サン　つねの產業。宋史、役レ人必用ニ鄉戶一、爲ニ其有ニ一一一則自重」＝恒産。

【常套】タウ　つねなみのはかりごと、平凡なる謀計。歐陽修、王彥章畫像記「拘ニ束一一」

【常山蛇勢】ジヤウザンノセイ　常山の蛇は、首尾相應じ、左右前後相救ふといふ。以て陣勢に喩ふ。孫子、九地「善用レ兵者、譬如ニ率然一、率然者常山之蛇也、擊ニ其首一則尾至、擊ニ其尾一則首至、擊ニ其中一則首尾俱至」轉じて文章の首尾相照應するに喩ふ。

【常規】キ　常に定まれるきまり。唐書「凡歲之ー一、二十有二」

【常蓄】チク　平生の食物。杜甫詩「救財倍ニ一一、杯盤頗狼籍」

【常式】シキ　○つねののり。管子「國有ニ一一、故法不レ隳」＝常法。○一定の格式。＝常格。

【常識】シキ　圀普通の人の有する理解力。

【常事犯】ジハン　通常の犯罪。國事犯以外のつみ。

【常習】シフ　いつものくせ、平生の習癖。

【常人】ジン　あたりまへの人、尋常の人。＝凡人。

【常常】ジヤウ　つねに。孟、萬章「欵ニ一一而見レ之、故源源而來」

【常寂光】ジヤククワウ　佛の眞身の常住の處。天台觀無量壽經、疏「——者、常卽法身、寂卽解脫、光卽般若」

【常準】ジユン　さだまれるきまり、常に定まれる標準。後漢書「輕ニ棄死之刑一、自レ是以後、著爲ニ一一」

【常驗】ケン　一定の驗據。孟、萬章、施關擊柝者、皆有ニ一一一、以合ニ於上一」

【常數】スウ　○一定せるかず。儀禮、聘

證「燕巢ニ幕無ニ一ー一」〇自然のきだめ、一定の運命。
【常勢】ジャウセイ つねのいきほひ。唐書、一勝一負、兵家之ー一」
【常慢慢】ジャウセイ 平常心が昏昧シクならずして、知識の明かなる貌。慢は醒に通ず。上蔡語録「敬是ー一法」
【常設】ジャウセツ つねにまうけ置く。＝常置。
【常膳加】ジャウゼンカ 食事の平常よりすすむ貌。身の健かになりたるをいふ。閒居賦「常膳載加、蓄疴有ー痊」
【常態】ジャウタイ 常に一定せるやうす。平常の狀態。後漢書「舞無ニ一ー一、歌無ニ常節ー」
【常套】ジャウタウ いつものありふれたるしかた、つきなみ。
【常道】ジャウダウ 常に定まりてかはらざる道。老子「道可ニ道非ニ一ー一」
【常置】ジャウチ つねに設けおく。＝常設。
【常秩】ジャウチツ さだまれるやくめ、一定の官職。＝常職。
【常住】ジャウジュウ 〇佛常にとどまりて何時もかはらず、永久に變ぜず（法華經）〇僧の一寺に定住して遊方せざるをいふ。
【常調選生】ジャウテウセイ 官吏の登用試験に應ずる通常の人人（蘇軾、上ニ神宗ー書」
【常度】ジャウド 〇永久に變らざるのり。史、屈原傳「一ー未ニ聞」＝常規・常紀。〇平常の態度。後漢書、吳漢傳「或多怪懼、失ニ其ー一」〇自然のきだめ、一定の運命。
【常勢】ジャウセイ つねのいきほひ。唐書、一勝一負、兵家之ー一」
【常慢慢】ジャウセイ 平常心が昏昧シクならずして、知識の明かなる貌。慢は醒に通ず。上蔡語録「敬是ー一法」
【常設】ジャウセツ つねにまうけ置く。＝常置。
【常膳加】ジャウゼンカ 食事の平常よりすすむ貌。身の健かになりたるをいふ。閒居賦「常膳載加、蓄疴有ー痊」
【常態】ジャウタイ 常に一定せるやうす。平常の狀態。後漢書「舞無ニ一ー一、歌無ニ常節ー」
【常套】ジャウタウ いつものありふれたるしかた、つきなみ。
【常道】ジャウダウ 常に定まりてかはらざる道。老子「道可ニ道非ニ一ー一」
【常置】ジャウチ つねに設けおく。＝常設。
【常秩】ジャウチツ さだまれるやくめ、一定の官職。＝常職。
【常住】ジャウジュウ 〇佛常にとどまりて何時もかはらず、永久に變ぜず（法華經）〇僧の一寺に定住して遊方せざるをいふ。
【常調選生】ジャウテウセイ 官吏の登用試験に應ずる通常の人人（蘇軾、上ニ神宗ー書」
【常度】ジャウド 〇永久に變らざるのり。史、屈原傳「一ー未ニ聞」＝常規・常紀。〇平常の態度。後漢書、吳漢傳「或多怪懼、失ニ其ー一」
【常逸】ジャウイツ あたりまへのみち、普通の仕事。韓愈、進學解「職ニ一ー一之促促」
【常注】ジャウチウ 常に定まれるのり。一定の法律。國語「棄ニ一ー一、以從ニ其私ー」
【常班】ジャウハン 通常一般の位次。齊書、高祖紀「證給ニ一ー一、冠ニ冕班ー」
【常備兵】ジャウビヘイ 〇平時にそなへある兵。〇現役及び豫備兵の總稱。
【常服】ジャウフク 〇ふだんぎ、平生に著る衣服。蘇軾詩「幅巾ー一、鹿不ニ動ー」〇禮弁の服。
【常分】ジャウブン きまりたるぶんげん。梁書「汝等自有ニ一ー一」＝定分。
【常平倉】ジャウヘイサウ 古、米價の平均を得しめん爲め、官にて設けし倉、價賤き時に買ひ入れて農を利し、價貴き時に賣りて民を利する法（漢書、食貨志）
【常牌】ジャウハイ 一定のおきて。いつも變らぬ刑法。魏書、刑罰志「國有ニ一ー一」
【常俸】ジャウホウ 平常受くる俸給。晉書、簡文帝紀「率ニ一ー一、竝皆減約」
【常羊】ジャウヤウ さまよひあるく。漢書、禮樂志「鼓ニ一ー一」＝逍遙。
【常夜燈】ジャウヤトウ 圖夜どほしつけておくあかり、ありあけの燈。
【常用】ジャウヨウ 平生たえずつかふ。
【常倫】ジャウリン なみなみのなかま。江淹詩「高步超ニ一ー一」
【常綠】ジャウリョク 草木の葉の一年中みどりなる貌。常緑ハ「一ー一灌木」
【常例】ジャウレイ 常のならはし、慣例。北齊書「才高不ニ依ニ一ー一」
【无ニ常】ムジャウ 定りなき貌。書經「民心一ー一、惟惠之懷」＝無常。
【常磐】ジャウバン 圖草木の葉が年中その綠色をかへざる種「一ー木」＝常綠。
【常磐津】ジャウバンヅ 圖淨瑠璃節の一派、延享の頃、——文字大夫の創めしもの。
【常夏】トコナツ 圖野生の撫子ナデシコの異名。＝瞿麥。
【常闇】トコヤミ 圖永久のくらやみ。轉じて長き閉の世のみだれ。
【常世國】トコヨノクニ 圖〇往來の出來ざる遠き國土。＝絕域。〇遠き不變不死の國。〇よみぢ、夜見の國、即ち人の死後往く所。＝黃泉。
【常陸帶】ヒタチオビ 圖昔、正月十四日常陸國の鹿島神社の祭に男女の緣を占ふに用ひし苧の帶、其の占を帶占といふ。

【帶】タイ 泰

〇おび（紳）「衣ー」「冠ー」「韋ー」「博ー」「襟ー」「緩ー」〇おぶ、おびをしめる、はく（佩）「ー劍」〇おびの如くめぐらす「ー山」〇含む、夾み縫ゆ。杜甫詩「顏ー額頻色」〇隨へ行く「ー個」「ー同」〇へび（蛇）〇すぢ（筋）〇へた。＝蔕。〇地球上の區域「寒ー」「熱ー」〇あたり（邊）地の長遠なる者を概括していふ「長江一ー」〇婦人病の名「白ー下」「赤ー下」

【帶圍】タイヰ おびのまはり。列女傳「憂感、ー一減ー尺」
【帶下】タイカ こしけ。婦人病の一種。
【帶下醫】タイカイ 婦人科專門醫。史、扁鵲傳「過ー邯鄲、聞貴婦人、即爲ニ一ー一」
【帶溪】タイケイ うみをひかへる。水經、注「負ー山ー一」
【帶甲】タイカフ 鎧ヨロヒを著けたる兵士。史、蘇秦傳「燕之地方二千餘里、ー一數十萬」＝甲士。
【帶勳】タイクン 勳章を帶びる「ー一者」
【帶經】タイケイ 經書を携へ持つ。漢書、兒寬傳「ー一而鋤」
【帶劍】タイケン 刀劍を身におびる。王維詩「ー一遊ニ維陵ー」＝佩劍・帶刀。
【帶鉤】タイコウ おびがね、かけ合せて帶を締める金具。史、齊世家「射中ニ小白ー一」
【帶笏】タイコツ おびと、しゃくと。又官の朝服。宋史、韓世忠傳「授ニ世忠太尉ー節ー一」
【帶笑】タイセウ 笑を帶びる、五が様をつく

る。李白詩「名花傾國兩相歡、常得二君王一ーレ一看一」
【帶刀】タイタウ ○帶劍に同じ。○タイタウの國たちはきの雅便、古、東宮に仕へたる護衛の士。
【帶同】タイドウ いっしょにつれ行く、同伴する。‖同行。
【帶方】タイハウ 地名。漢書、地理志「樂浪郡、縣一一」楊師道、望海詩「雲驛臨二遼水一、鼇艦出ニ一一一」
【帶分數】タイブンスウ 分數を帶びたる數、整數のはしたのあるもの。
【帶厲之誓】タイレイノチカヒ 山厲河帶の略、功臣の家を永久に絶たずといふちかひ。史、高祖功臣年表「封爵之誓曰、使二黃河如ニ帶、泰山若二厲、國以永存一」泰山が厲即ち砥石の如く平かになりてもの喩。
【帶金】タイキン 國劍を帶びるとき其の組を結びつけるため紺につけし錺ニ‖佩金。
【帶黑】タイコク 國女の帶のとけざるやうに帶の上に締めるひも。

【帳】 チャウ 漢

通じて張に作り俗に賬に作る

○とばり、たれぎぬ(帷)「錦一」「翠一」「綺一」○ちゃうめん(計簿)「一簿」
【帳幄】チャウアク まく。神仙傳「青綾一一、下銷二白環一」‖帳帷。
【帳合】チャウアヒ 國帳面上の勘定、收入支出の帳面上の計算。
【帳飲】チャウイン 送別の宴、祖道の酒もり、供張飲餞。李白詩「一一與レ君別」‖帳餞、餞別。
【帳尻】チャウジリ 國帳簿の終、決算の結果、差引勘定。
【帳中】チャウチウ とばりのうち。史、項羽紀「卽二其一一一斬二宋義頭一」‖帳裏。
【帳場】チャウバ 國商家にて帳面の記入又は會計を取扱ふ所。會計室。
【帳幕】チャウバク まく。大業雜記「井幹二兵器一一」‖帳幄。
【帳簿】チャウボ ちゃうめん。計算簿。
【帳幔】チャウマン とばりと、まくと。市肆記「一一茵席、多用二錦綺一」
【帳面】チャウメン 國ちゃうづら、帳簿のおもて。轉じて帳簿の義。

【帢】 ヘイ 極

○おほふ(覆蔽)○たれぬの(帷)とばり(帳幄)
【帢幄】ヘイアク とばり。旁に在るを帢といひ、上に在るを幄といふ。法言「然後知二夏屋爲一一一」

【帽】 ボウ 號 冒は古字、帽・冒は俗字

帽(巾部九畫)の俗字。

【幄】 アク 覺

○とばり(帳)○たれぎぬ(帷)○陣營の幕。三禮圖「上下四旁悉周曰一一」
【幄帳】アクチャウ 帳なり、帛を以て板に施して之をつくる、形屋の如し、故に屋に從ふ。
【幄帷】アクヰ たれぎぬ。魏志「坐則侍二一一、行則從二輜軿一」‖帷幄・幄帳。
【幄座】アクザ ○たれぎぬを張りて設けたる坐席。魏志、甄皇后傳「望二一一悲喜、感二動左右一」○アクザ國幄舍に同じ。
【幄舍】アクシャ 國神事・祭事などを行ふ爲め庭上に幕を引きまはして設けられる假屋、假設の祭殿。‖幄座。
【幄帳】アクチャウ とばり。南史、何憲傳「謀二一一一」
【幄幕】アクバク 陣中のとばり。左、昭十三「子產以二一一九張一行」注「一一軍旅之帳」‖幄張。

【幃】 キ 微

○ふくろ(囊)にほひぶくろ(香囊)楚辭、離騷「蘇二糞壤一以爲一一兮」蘇は取ル○ひとへのとばり(單帳)「書一一」「風一一」「羅一一」帷に通ず。
【幃帳】キチャウ とばり。蜀志、劉巴傳、注「運二籌策於一一之中一、吾不レ如二子初一遠矣」‖幃幄。
【幃幄】キアク とばり。史、文帝紀「所レ幸嬪夫人、令二一一不レ得二文繡一」‖帷幄。
【幃屏】キヘイ とばり、びやうぶ。潛岳詩「一一無二髣髴一、輪蹄有二餘跡一」‖帷屏。
【幃帷】キヰ とばり。白居易詩「草鋪地茵席、雲卷天一一」

【幅】 フク 屋

ふんどし、こしまき(腰布)‖褌。

【幀】 タウ 敬

○畫繪などを張る。‖幢。○轉じて書畫の一幅を一一といふ。

【帽】 ボウ 號 冒は古字、帽・帽は俗字

かぶりもの「落一」「紗一」「烏一」今は專ら頭に戴くものの通稱、おもに西洋風のかぶりものをいふ、ばうし。
【帽簷】ボウエン ばうしのふち。李商隱詩「酒主江邊側二一一」
【帽子】ボウス ○頭にかぶるもの、子は助語。宋史、輿服志「蠻帶服二一一」國○女のかぶりもの「綿一一」○しゃっぽ、西洋風のかぶりもの。
【帽額】ボウガク 國○すだれの上邊に横に引く幕の如きもの。○敕所の名。宮敕、もっかう。

【幅】㊀フク　㊁ヒョク　職　屋　通音フク

㊀はば、布帛又、すべて物の面積の廣さ「一員」「半一」「全一」○ふち、へり（縁）「邊一」○きれ（布帛）○かけもの。又、かけものを數ふる稱「二十對」㊁むかばき（行縢）○圖はば、はぶりの義。

【幅員】フクイン　ひろさ、次條に同じ。

【幅隕】フクイン　はば、めぐり、隕は員・圓に通ず。詩、商頌「一一既長」＝幅員。

【幅巾】フクキン　一はばのきれにて作りし頭巾、隱士などの用ふるもの。後漢書、鄧永傳「永悉脱ニ兵、但一一與ニ諸將及同心客百餘人一詣ニ河内一」

【幅輳】フクソウ　圖輻輳ス。

【幅助】フクジョ　たすける。

【幂】ベキ　錫

巾にて物をおほふ。おほひ（覆）＝冪。

【幂歷】ベキレキ　雲などのおほへる貌。吳融詩「紫閣高翻雲一一」

【幇】ホウ　江

たすくる（補助）＝幫。

【幇閒】ホウカン　○閑者の閒をとりもちたすける者。黄允交雜纂「子弟窮後遊ニ一一一」○圖酒閒をとりもち遊興をたすける者、たいこもち。＝亡八官。

【幓頭】シツトウ　圖綃頭ス。

【幗】カク　陌

○とばり（幔）すだれ（簾）○おほふ（覆）かほかくし（覆面）十八史略卷一「夫差曰、吾無以見ニ子胥一、爲ニ一冒一以死」冒は帽。

【幗目】カクモク　死者の面をかくす帛。儀禮、士喪禮「一一用レ緇」注「一一覆レ面者也」＝幎目。

十畫

【幎】ベキ　錫

○たれぎぬ（帷幔）とばり（几帳）「雲一」「珠一」「文一」○おほひ（覆）ほろ（被布）今は馬車・人力車などの雨よけ。○一子は俗に酒帛ヲいふ。

【幌】クワウ　養

○はた（幡）○さしもの、のぼり（幟）○しるし、徽に通ず。

【幟】クワク　陌

○婦人のかみかざり、首飾。晉書、宣帝紀「諸葛亮數挑レ戰、帝不レ出、因遺ニ帝巾一婦人之飾」一說に婦人の喪冠。○轉じて巾一を婦人の義に用ふ。

【幘】サク　陌

かしらづつみ（覆髪）髪を包む巾、頭巾。

【幓】㊀シン　㊁サン　震　㊀衣裳。又、毛羽の垂るる貌。㊁はたあし（旌）

【幕】㊀バク・マク　藥　㊁バン・マン　寒

㊀まく、とばり（帷）たれぬの（帳）「帷一」「簾一」○將軍の軍政を行ふ所「一府」轉じて將軍の義「一下」○轉じて軍略又は參謀の義とす。○まとふ（絡）○おほふ（覆）○こて、すねあて（脛衣）兵具の一。史、蘇秦傳「當レ戰則斬ニ堅甲鐵一一」○演劇登場必ず一を開く、故にすべて事の開始を開一といふ。○すなはら（沙地）古、漠に通ず。㊁ぬめ、錢の背面の平かにして文なき處。○圖芝居のひときり。

【幕友】バクイウ　將軍を輔佐する參謀官。＝幕士・幕客・幕僚。

【幕營】バクエイ　將軍の陣營。

【幕燕】バクエン　纏めて危き喩、下の巢幕燕を見よ。元史、外夷傳「鵬魚一一、亡在ニ旦夕一」

【幕下】バクカ　○幕府の下、即ち將軍のひざもと、大將の麾下。轉じて、將軍の稱。左傳「宵攻ニ龍師一、取ニ適莊于子姚之一一」○圖シバイ相撲の幕内の力士の次に位する力士。

【幕議】バクギ　幕論に同じ。

【幕朝】バクテウ　幕は漠、朝は北、沙漠の北の義、戈壁ゴビ沙漠以北の地。漢書、敍傳「龍荒一一、莫ニ不ニ來庭一」＝幕北。

【幕天席地】バクテンセキチ　志氣の壯大なるをいふ。劉伶、酒德頌「有ニ大人先生一、以ニ天地一爲ニ一朝一萬期爲ニ須臾一、日月爲ニ扃牖一、八荒爲ニ庭衢一、行無ニ轍跡一、居無ニ室廬一、幕ニ天席一地、縱ニ意所一レ如」

【巢幕燕】バクニソクエン　極めて危くして安からざる喩。左、襄二九「夫子之在レ此也、猶ニ燕之巢ニ于幕上一」＝幕燕。

【幕賓】バクヒン　入幕之賓の略、機密の謀にあづかる人、幕府の賓客として禮遇せらるる者。黄滔詩「一一數出紫微郎」

【幕府】バクフ　○大將軍の本營、一定の所なく臨時に幕を以て府とするが

故。史、李將軍傳「大將軍使二長史急責二廣一ー一封レ簿」○國武家の政を行ふ所「德川ー一」

【幕北】バク 幕朝に同じ。史、匈奴傳「以二精兵一待二於ー一」

【幕末】バク 國德川幕府のすえつかた、幕府の末路。

【幕僚】バク ○將軍を輔佐する參謀官。宋史「落職ー一勿レ得レ任二監官一」＝幕友。○國陸海軍の司令官・總督等に屬して參謀事務に參與する將校。

【幕論】バク 幕府の人人の主張、幕府の評議。＝幕議。

【幕内】マクナイ 國角力の道にて力士の上級に列する資格、昔、上覽相撲に幕の内に伺候するを得る上級力士の稱。

【幔】 バン マン 寒

○まく(幕)とばり(帳)「羅ー」「帷ー」○おほふ(覆)

字解 幔は漫なり、漫漫として相連る義。

【幔帷】バン まく、とばり。司馬相如、長門賦「張二羅綺之ー一兮」

【幔幕】マンマク ひきまく。名義錄「以二ー一遮蔽、不レ令二相見一」

十一畫

【幟】 サン 早

○きぬがさ(絹蓋)音書、輿服志「功曹史ー一屬騎從」＝繖傘。○かさ(蓋)

【幟】 シ 國

○のぼり、はた(幡)「彩ー」「旌ー」○めじるし(標)「標ー」しるしばた(旗)史、高祖紀「旗ー皆赤」○しるし、はたじるし(記號)後漢書、馬援傳「以二采繒一爲二其指一爲ー」志に通ず。

【幢】 (一)タウ・ドウ 江 (二)タウ・ドウ 絳

(一)はた、旌旗の屬。(二)后妃の車のたれぎぬ、ほろ。

【幢幢】ドウドウ ○ほのぼのとして明かならざる貌。元稹詩「殘燈無レ焰影ー一」○羽毛布帛などの垂れたる貌。張衡、東京賦「樹レ羽ー一」

【幢幡】ドウバン ○はた。後漢書、禮儀志「導二衣持ニー一」○佛堂に飾る旗。法華經「一塔一廟各千ー一」＝幢旛。

【幡】 ハン ホン 元

○はた、のぼり(幟)「旌ー」○かへる(反)ひるがへる。＝翻。

【幡竿】ハンカン はたざを。宋書、武帝紀「ー亦折斷」

【幡旗】ハンキ はた「史、天官書」

【幡然】ハンゼン ひるがへる貌。さらりとかはる貌。孟、萬章「既而ー一改」＝翻然。

【幡蕘】ハンジョウ はたじるし、葆は鳥羽をつけたるはた。四京雜記「如レ擧二繒幡一、如レ飛ニー一」

【幡幡】ハンパン ○ひるがへる貌。詩、小雅「ー一瓠葉」＝翻翻。○威儀を失ふ貌。詩、小雅「威儀ー一、舍二其魚一」＝翩翩。

【敝巾】 ヘイ 霽

○ぬさ、しで、神にささぐる禮物の帛「一帛」にぎて、みてぐら、天子に奉る禮物。○賓客に贈るつかひもの「重ー」○たから(財用)皆、國寶「以二珠玉一爲二上ー一、黃金爲二中ー一、刀布爲二下ー一」○ぜに(錢)「貨ー」「造ー」○國ごへい、ゆふしで。

【幣貿】ヘイボウ みつぎもの。周禮、九貢の一。注「ー一、玉馬皮帛也」＝貢物。

【幣制】ヘイセイ 國家にて規定する貨幣の制度。

【幣束】ヘイソク 國ごへい、ぬさ。

【幣帛】ヘイハク ○神にささぐるぬさ。○天子に奉り、又、賓客に贈る禮物の帛。

【幣物】ヘイブツ おくりもの(禮物)國語「使二下臣奉二其ー一」

【幣聘】ヘイヘイ 禮物を贈りて賢者を招く。

【幞】 ボク 沃 國 按に頭ずきか

○かしらづつみ(帕)○はちまき(帕)づきん(頭巾)

【幞頭】ボクトウ づきん。唐韻「ー一周武帝所レ製、裹二幅巾一、出二四腳一、以レ垂レ後、乃名焉」

十二畫

【幮】 セウ サウ 蕭 篠

○かみづつみ(斂髮之巾)「一頭」○はちまき(絡頭)

【幩】 フン 文

古、馬のくつわにまとひて汗を扇ぐもの。詩、衞風「朱ー鑣鑣」

【幪】 幔(巾部十一畫)の俗字。

十四畫

【幬】 (一)チウ (二)タウ 號 尤

(一)とばり(禪帳)「羅ー」「絳ー」○かや「蚊ー」○くるまおほひ(車帷)○こしきがは(轂革)(二)おほふ(覆)「辟如二天地之無二不持載一、無レ不二覆ー一」

【幪幏】モウ　かや。南史「夏日無二ー一、而夜臥未嘗有二蚊蚋一」＝蚊帳。

【幪】㊀ボウ・モウ　東　㊁ボウ・モウ　董　㊀おほふ。おほひ(覆)㊁ーは茂り盛んなる貌。

【幪幪】モウモウ　茂り盛んなる貌。詩、大雅「瞻卬ーーー」

【幫】ホウ　幇(巾部九畫)に同じ。

十五畫

【幬】チュ　篤　○とばり(帳)「紗ー」○かや「蚊ー」

【幭】ベツ　ベッ　月　屑　○おほひ(覆)○よぎ(禪被)○車のおほひ、てすりかけ、車の覆式。

十六畫

【幰】ケン　阮　ほろ、車上の幌。熱を禦ぐ爲めに設く。倉頡篇「帛張二車上一爲ー」

十七畫

【幱】タウ　皓　○漢綵エを開張する。又、其のふさぎぬ。黄庭堅詩「畫出西樓一ー秋」＝幀。○英語、パノラマの譯語。

干部

【干】カン　寒　○をかす(犯)さからふ。○もとむ(求)自ら進みてをかし求める「ー祿」○たて(盾)矢をふせぐ具。○轉じていくさ道具の總稱「ー戈」○ふせぐ(扞)○たに(澗)みぎは(水涯)ほとり「河ー」がけ(崖)○てすり「欄ー」「闌ー」○みやこのそと(國郊)○あづかる(預參)「ー涉」「ー預」○かわく(乾)○いし。＝玕。○えびすのいぬ。＝豻。○十ーは木火土金水の五行を陰陽に分ちたる稱、えと、甲より癸に至る。＝十幹。○そこばく、若ーは、未定數を示すことば。＝幾許。

同訓異字　干・侵・犯・冒は侵(人部七畫)の條を見よ。

【干羽】カンウ　夏の禹王の舞樂の名、干舞・羽舞。書、大禹謨「舞ニーー于兩階一」七旬有苗格」

【干誅】カンチュウ　いかりにふれる。戮辱「恐ニ犯レ忌而ーセラレ」

【干戈】カンカ　○たてと、ほこと。詩、大雅「ーー戚揚」○轉じて戰爭の義。文天祥詩「ーー落落四周星」

【戴二干戈一】カンカヲ　兵器をさゝげて用ひず、戰のやみしをいふ。詩、周頌「明昭有周、式序二在位一、載ーー二弓矢一」

【倒二載干戈一】カンカヲ　戰をやむるをいふ、兵器を車に載するに、出征の時は刃を前に向け、凱旋の時は刃を後に向く、故に倒載といふ。禮、樂記「ーー、包レ之以二虎皮一」

【倒二置干戈一】カンカヲ　武器をさかさまにしておく、世の太平無事となりし義。史、陳侯世家「ーー、覆以二虎皮一以示二天下不二復用一兵」＝偃武。

【干支】カンシ　えと、十干と十二支との＝幹枝。

【干城】カンジョウ　たてと、しろと、共に外を扞ぎ内を衛るもの、國家を守る武夫に喩ふ。詩、周南、兎罝「赳赳武夫、公侯ーー」

【干將莫邪】カンショウバクヤ　古代の二つの名劍、吳王闔閭、干將に劍を作らんことを請ふ、干將は吳人、其の妻を莫邪といふ、干將、五山の精、六金の英を采りて二劍を成す、陽を干將といひ、陰を莫邪といふ「吳越春秋」莫邪は一に鏌鋣とも書く。○轉じて廣く名劍の義。

【干戮】カンリク　たてと、まさかりと。轉じて兵器の總稱。詩、大雅「干戈戚揚、爰方啓ーセリ行」

【干涉】カンセフ　其の事にあづかる、關係する、さしでて世話をする。金史、撒離喝傳「國不二敢ーー一」

【干扼】カンヤク　夜を警むる者。干は扞、扼は拒。左、襄二五「僖臣ーー有二淫者一」

【干潮】カンチョウ　ひきしほ。

【干霄】カンショウ　をかす。呂温文「ーニ陵獻一」

【干犯】カンパン　をかしさかふ。魏志、蘇則傳「明爲二禁令一、有ーー者一輒戮」

【干滿】カンマン　しほのさしひき、干潮と滿潮と。＝滿干。

【干與】カンヨ　あづかる、關係する。＝干預・參與。

【干預】カンヨ　前條に同じ。

【干樓】カンロウ　たて。禮、檀弓「備有二忠信一以爲二甲冑一、禮義以爲ニーー一」

【干謁】カンエツ　○天祐をもとめる。詩、大雅、旱麓、愷悌君子、ーー不レ回」○仕へて俸祿を求める。論、爲政「子張學ーーー」

二畫

【平】㊀ヘイ・ヒャウ　庚　㊁ヘン　先　㊀の一音　㊁ビャウ　㊀たひらか、たひら(坦)「均

ー」「ー坦」「砥ー」高低凸凹なし、ひらたし「扁ー」○ただし(正)○たひらぐ、たひらかにす、やはらぐ(和)をさまる(治)「升ー」「康ー」「泰ー」「和ー」○なかが直る、和睦が成り立つ。春秋、宣十五「宋人及楚人ー」○なみなみ、尋常「ーー凡凡」○ひとし(齊等)○やすし(易)○みのる(歲稔)○おほいなる野。○漢字の發音上の四聲の一「ー上・去・入」○嘉ーは陰暦十二月の異名。史、始皇紀「更名臘曰嘉ー」㊀ーー(ン)はととのふ(均)辨治する。國○(トウ)切に「ーに御免」○(タビ)「ー椀」○(タビ)盡す「飲みーぐ」○ーー氏は四姓の一、桓武天皇の曾孫高望(カモ)王に始まる。

【平起】(ヒヤウキ)絶句の起句の第二字を平字にして作る。仄起の對。

【平聲】(ビヤウシヤウ)四聲の一、上平・下平の二に分つ、上平は、東・冬・江・支・微・魚・虞・齊・佳・灰・眞・文・元・寒・刪の十五韻、下平は、先・蕭・肴・豪・歌・麻・陽・庚・青・蒸・尤・侵・覃・鹽・咸の十五韻、平聲に關する字は皆平字にて、字の左の下の隅に圏點を付して別つ。

【平仄】(ヒヤウソク)○平韻の字と仄韻の字と。平韻三十、仄韻七十六。仄韻は分ちて上・去・入の三聲とす。○國つちつま、順序「ーーが合はぬ」

【平等】(ビヤウダウ)ひとし、差別なし。涅槃經「悉皆ーー、無ー有二差別一」

【平等界】(ビヤウダウカイ)國萬有の差別なき世界、眞如の世界。

【平安】(ヘイアン)○たひらかでやすらか、無事息災。李嶠詩「馮ー君傳語報ーー」○國京都の異稱。

【平安朝】(ヘイアンテウ)國延暦十三年、桓武天皇が平安郎ち京都に都を遷されてより鎌倉時代に至るまで凡四百餘年間の稱。

【平夷】(ヘイイ)○たひらぐ。七發「ーニー四畔一」○たひらか。

【平易】(ヘイイ)○たやすし、てがる。史、晉世家「ーー近ー人、人民必歸ー之」政お簡易にして、人民に近づき親む。○わけもなし。‖容易。

【平意】(ヘイイ)しづかに平かなるこころ。鬼谷子「虛心ーー」

【平允】(ヘイイン)公平にして、えこひいきがない、公平無私。次條參看。

【平允之士】(ヘイインノシ)公平誠實にして惨刻ならざる士。宋史、仁宗紀、賛「刑法似二縱弛一而決獄多二平允一」

【平衍】(ヘイエン)たひらかにひろし。蘇軾詩「泉勞地ーー」‖平廣。

【平穩】(ヘイヲン)○おだやか。徐照詩「江神應ー念ー我、ーー不ー生ー風」○無事にして安泰なり。

【平廣】(ヘイクワウ)○たひらかにやすし。忠經「人臣和悅、邦國ーー」‖平安。○唐の時の里の名。開天遺事「長安有二ーー坊一、妓女所ー居之地、每年新進士、潛二謁其中一、時人謂爲二風流藪澤一」

【平衡】(ヘイカウ)○正しきはかり(漢書、律歷志)○衡は平なり、人を秤する時、手を挙きて心胸と平かにする義。荀、大略「ーー曰ー拜、下ー衡曰二稽首一、至ー地曰二稽顙一」

【平格】(ヘイカク)公平にして天道に至り通ずる、格はいたる。書、君奭「天壽二ーー一」天は公平無私の人に長壽を授ける。

【平氣】(ヘイキ)○氣を平かにおちつける「虛心ーー」莊子「欲ー靜則ーー、欲ー神則順ー心」○國何とも思はぬ、むとんぢゃく。

【平均】(ヘイキン)○たひらかに、ひとしくす、公平均一。詩、曹風、鳲鳩、傳「下上ーー如一」○ならし、不同なし。

【平居】(ヘイキヨ)ふだんに、いつも。水經、注「有二神穴一、ーー無ー水」‖居常。

【平虛】(ヘイキヨ)心がたひらかにして何物もなし。管子「或以ーーー請論二七主之過一」‖平意虛心・虛心平氣。

【平廣】(ヘイクワウ)たひらかにしてひろし。‖平衍。

【平闊】(ヘイクワツ)たひらかにしてひろし。‖平敞・平廣。

【平寬】(ヘイクワン)たひらかにゆるやかに。朱熹詩「美ー矣君家五畝園、要ー須二胸次亦ーー一」

【平家】(ヘイケ)國○平氏の一門。○平家琵琶の略語。○(ヤ)二階以上の家の對「ーー總」‖平房。

【平家琵琶】(ヘイケビハ)琵琶に合せて平家物語を語ふもの。

【平原】(ヘイゲン)たひらかにひろきはら。漢書、龍錯傳「ーー廣野」

【平原君】(ヘイゲンクン)戰國の趙の武靈王の子、名は勝、平原は其の號、客を好み、其の門下の食客常に數千人に至る、史記に——列傳あり。

【平原督郵】(ヘイゲントクユウ)惡酒の異名。世說、術解「晉桓溫有二主簿一、善別ー酒、有ー酒輒令二先嘗一、好者、謂二青州從事一、惡者、謂二——一、蓋青州有二齊郡一、平原有二鬲縣一、從事謂ー到二臍下一、督郵在二臍上一、住ー美酒ー臍下一下ー、惡酒ー臍上一、滯ー臍ー而ー不ー徹」

【平午】(ヘイゴ)まひる。錄異記「或平旦、或ーー」‖正午。

【平語】(ヘイゴ)平家物語の略。

【平沙】(ヘイサ)たひらかなるすなはら。何遜詩「遠岸ーー合、連山遠ー浮」

【平日】(ヘイジツ)つねのひ。後漢書、鄧皇后紀「ーー儉無二驕貴一」‖平生。

【平瀾】(ヘイラン)たひらかにしてうるはふ。周禮、疏「高平曰ー原、ーー曰ー瀾」

【平身】(ヘイシン)國からだを低く垂れて恐

れ入る。「―低頭」

【平信】ヘイシン　無事なることをしらせるてがみ。平安の通信。

【平常】ヘイジョウ　つねづね。後漢書、光武紀「飲食言笑如二―一」＝平日・平生。

【平敵】ヘイテキ　平かにしてひろし。敵は寇。後漢書、陳紀傳「三輔―一、四面險固」＝平闊。

【平章】ヘイショウ　○庶民をひとしくあきらかにをさめる。書、堯典「―二―百姓一百姓昭明」○公平に品評する。陸游詩「―一寒韭秋菘味」○夫婦を媒合する。太平廣記「吾外甥女、有二姿媚者一、莫有二容質一當二爲兒一―一」

【平出】ヘイシュツ　文章中に敬ふべき人の名などを書く時、行を改めて前の行と同に高さの所より書き出す書式。

【平準】ヘイジュン　○物價の均一公平を保つ法、漢の武帝にはじまる。準は水もり、即ち水平。史記に―一書あり。○たひらか、平均。＝水準。

【平水】ヘイスイ　平日に於ける河海の水かさ。増水・減水の對。

【平生】ヘイセイ　○ひごろ、かって、むかし。論、憲問「久要不レ忘二―一之言一」＝宿昔。○ふだん、つねづね。宋史、司馬光傳「自言吾無二過レ人者一、但―一所レ爲、未レ曾有二不レ可二對レ人言一者一耳」＝平日。

【平政】ヘイセイ　政を公平にする。韓詩外傳「正レ法以齊レ官、―レ一以齊レ下」

【平整】ヘイセイ　たひらかにととなふ。佛國記「師子國屋宇嚴麗、巷陌―一」

【平靜】ヘイセイ　たひらかにしづか。後漢書「宜レ須―一更議二其事一」＝寧靜。

【平生歡】ヘイセイカン　平生のよしみ。史、張耳・陳餘傳「勞苦如二―一」

【平昔】ヘイセキ　ふだん、つね。杜甫詩「書レ此豁二―一回首猶昨夜」＝平生。

【平泉】ヘイセン　荘の名、河南洛陽縣の南に在り、周回四十支那里、唐の李德裕の別野。劇談錄「―一莊、卉木嘉樹、皆選二仙府一」

【平素】ヘイソ　○つね、ふだん。＝平生。○過去。又、往事。陶潛詩「兒レ席延二故老一、掃レ觴追二―一」

【平旦】ヘイタン　よあけ。孟、告子「―一之氣、其好惡與レ人相近也者、幾希」（平旦之氣とは夜のひきあけ頃の未だ物と接せざる時の清明の氣分）＝黎明・平明。

【平坦】ヘイタン　たひらか、地面に高低無し。

【平法】ヘイホウ　次條に同じ。阮籍、樂論「道德―一、故五聲無レ味」

【平癒】ヘイユ　おだやかにしてあはし。晉書、祁鑒傳「遺韻―一、韜鍼冲粹」

【平地】ヘイチ　○平かなる地面。左、隱九「―一尺、爲二大雪一」○地を平かにならす。荀、勸學「―レ一若レ一、水就レ濕也」

【平地起二波瀾一】ヘイチオコスハランヲ　おだやかなる所に強ひてなみかぜを起させる。次條を見よ。

【平地風波】ヘイチフウハ　事を好みて、徒に紛爭を生ぜしむる義。劉禹錫、竹枝詞「長恨人心不レ如レ水、等閑平地起二波瀾一」

【平治】ヘイチ　平かにをさめる。孟、離婁「堯舜之道、不レ以二仁政一不レ能レ―一天下一」

【平章】ヘイチョウ　まひる。阮籍詩「―一整二衣冠一、思レ見二客與レ賓」

【平晴】ヘイセイ　たひらかなるはたけ。陶潛詩「―一交遊レ廢、真苗赤憤レ新」

【平澄】ヘイチョウ　たひらかにすむ。符載文「―一無レ邊、天空晴明」

【平定】ヘイテイ　たひらげさだめる。亂を平げて安んずる。漢書、高帝紀「―一海内一功臣皆受二地食一邑」

【平穀】ヘイコク　價を平かにして米を賣出す。史、貨殖傳「―一糶物、關市不レ乏、治國之道也」宋史、度宗紀「自レ是米價高、即發レ廩―レ一、以爲レ常」

【平珍】ヘイチン　たひらげほろぼす。隋書、音樂志「命レ將出征、―二―北荒一滅二其國一也」

【平頭】ヘイトウ　ちゃうど。白居易詩「火館盛二天明一後、便是―一六十人」＝停頭。

【平年】ヘイネン　○日數のあたりまへのとし。閏年の對。○米のみいりの普通のとし。豐年・凶年の對。

【平方】ヘイホウ　○同じ數を掛け合せる。＝自乘。○相乘積、又正方形の面積。

【平房】ヘイボウ　ひらや（平家）＝平屋。

【平反】ヘイハン　訴訟を繰りかへし、しらべて、前の裁判を改めて公平の宣告を爲す。漢書、鮑不疑傳「多有二所―一、毋寧笑」

【平板】ヘイバン　○たれまきの時、地ならしに用ふる農具。○平かなるいた。○韓じて詩文などの抑揚も變化もなく終始同じやうなる口調なるに喩ふ。＝千篇一律。

【平服】ヘイフク　闕ふだんぎ、平常の服。禮服・制服などの對。

【平復】ヘイフク　病が全くいえる。韓詩外傳「―一如故」＝平癒。

【平文】ヘイブン　散文をいふ。駢客揮犀、往識士人多尚二對偶一爲レ文、穆修・張景輩、始爲二―一、當時謂二之古文一」

【平分】ヘイブン　兩方を公平にわける、眞半分にする。楚辭、九辯「皇天―二―四時一兮、窮獨悲二此源秋一」

【平平】ヘイヘイ　○つねなみ、平凡なる貌。平淡にして他の奇なし。後漢書、班超傳「今所レ言―一耳」○ヘイヘイ均しく治まる貌。辨治する義。書、洪範、王道―一」

【平平坦坦】ヘイヘイタンタン　平坦を重ねたる語、甚だ平かなる貌。又、何等の變化も無きさま。

【平平凡凡】ヘイヘイボンボン　甚だつまらぬさま、

平凡を重ねたる語。

【平勃】ヘイボツ　漢の高祖の功臣、陳平と周勃と。漢書、刑法志「以二孝文之仁、一一之知一、猶有二過刑譏論一如レ此甚也」

【平凡】ヘイボン　つねなみ。宋蘇、書居感興詩序「思致一一、筆力委弱」‖平平凡凡。

【平民】ヘイミン　〇おしなべての民。庶人、平は普、農民をいふ。書、呂刑「蚩尤惟始作レ亂、延及二于一一」〇國族籍上の階級の稱、皇族・華族・士族を除きたる以外の人。

【平民主義】ヘイミンシュギ　貴賤上下の階級に關せずして萬事てがるに行ふ主義。

【平脈】ヘイミヤク　つねの健康の人の脈搏、一分間に凡七十四五うつ。史、倉公傳、注「其脈沈而滑、名二一一一也」

【平明】ヘイメイ　よあけがた。史、酈侯世家「五日一一良往」‖平旦。

【平面】ヘイメン　平かなるおもて。

【平野】ヘイヤ　たひらかなる野はら。杜甫詩「星垂一一闊、月湧大江流」

【平愈】ヘイユ　病がいえること、病氣がなほる、本復する、癒は鹽。‖平復。

【平癒】ヘイユ　前條に同じ。

【平陸】ヘイリク　〇高低なき平かなるくが。盧諶詩「一一引二長流一」‖平地。〇齊の邑の名。孟子「孟子之二一一」

【平良】ヘイリヤウ　〇公平にして善良。書經、傳「惟一一可二以斷一獄」〇陳平と張良と、共に漢の高祖の功臣にて智のすぐれたる人。隋煬帝詩「英名歎二衛霍一、智策羨二一一」

【平和】ヘイワ　たひらかにおだやか。書、天文志「七曜由二乎天動一、則天下一一」‖平穩。

【平和條約】ヘイワデウヤク　交戰國が互に平和に復することを目的として結びしやくそく。

【不レ平】フヘイ　〇ひとしからず、公平ならず。詩、小雅「昊天一一」〇心が平かならず、心が不滿である。

【平打】ヒラウチ　國ひも或は金屬をひらたくうつ「一一の紐」

【平袴】ヒラバカマ　國縫ひをひくくさげて仕立てたる袴。まちだか袴の對。

【平目】ヒラメ　國海魚の一、扁平にして右側白く左側灰黑色、眼は左側につく。比目魚・鮃とも書く。

【平椀】ヒラワン　國底のあさきわん。略して平とも又お平ともいふ。

三畫

【年】ネン　先

〇とし（歲）地球が太陽を一週する三百六十五日間の稱。夏に歲といひ、殷に祀といひ、周に一といふ。一はもと、禾の熟する義、毎歲一熟、故に歲の義とす。〇よはひ（齡）〇みのる（穀熟）「有一」「豐一」五穀が皆よく出來る。左、宣十六「大有一」〇同一は同時に進士に及第せし者が互に呼ぶ稱。又、其の人人の家人の交際を一誼といふ。

【年貢】ネング　〇としのはじめのよろこび、新年の祝賀。‖新禧。〇老人の長壽をいはふいはひ。

【年號】ネンガウ　年に名づける稱號。漢の武帝、建元と號せしを始とす。我國にては、孝德天皇の大化を始めとす。宋書、陶潛傳「義熙以前則書二晉氏一一」

【年額】ネンガク　一年間に於ける總ての計算高。宋史、食貨志「今以二錢銀穀帛、貫石匹兩一定一一」

【年經】ネンケイ　一年中の重要なる事件を集め記せしもの「宋史、藝文志」

【年忌】ネンキ　〇忌みきらふ年齡。襄樞經「凡七歲・十六歲・二十五歲・四十五歲・五十二歲・六十一歲、是謂二一一」〇國年年の忌日の後、人の死後、其の月日に相當する年年の月日に佛事をいとなむ義。‖年回。

【年季】ネンキ　國雇人の奉公する約束の年限「一一奉公」

【年紀】ネンキ　〇よはひ。後漢書、光武紀「不レ計二優劣一、不レ論二一一一」‖年齡。〇年數の義。晉書、愍人傳「但計二秋收之時一、以爲二一一一」

【年金】ネンキン　功によりて終身又は一定の年限間、毎年下賜せられる金。

【年魚】ネンギョ　國香魚の異名。

【年貢】ネング　國〇毎年のみつぎ物。租稅。〇小作人が地主に納める米錢。

【年季】ネンキ　としつき。季は光、光陰。皮日休詩「居レ玆老復老、不レ解歎二一一」‖年光。

【年光】ネンクワウ　としつき、光陰。徐陵文「一一遒盡、觸レ目傷レ心、扶レ力含レ悲、猶不二申具一」

【年契】ネンケイ　二國以上の出來事を年を逐ひ對照せし年表「和漢一一」

【年限】ネンゲン　定めたる年のかぎり。唐書、薛登傳「請覓二一一、以容二脚法一」

【年功】ネンコウ　年來のほねをり「一一加俸」は一一によりて本俸の外に俸を加へ給するもの。

【年穀】ネンコク　こくもつ　五穀。一年に一度熟する故。莊、逍遙遊「一一熟」

【年載】ネンサイ　次條に同じ。載は歲。齊書、猶伯玉傳「抗高木食有二一一一矣」

【年歲】ネンサイ　とし。史、平津侯傳「閒者關東五穀不レ登、一一未レ復」‖年紀・年載。

【年始】ネンシ　としのはじめ。‖年首・年頭・年初・年甫・歲首。

【年紀】ネンキ　とし。紀も年。周書、宇文護傳「吾含二悲感一、多歷二一一一」‖年載・年歲。

【年齒】ネンシ　とし、よはひ。齒は齡。後漢書、順帝紀「不レ拘二一一一」‖年齡。

【年首】ネンシュ　としのはじめ。史、封禪書

「以二冬十月一爲二一一一」

【年壽】ネンジュ　人のいのち。禮、文王世子、疏「一一之數、賦命自然、不レ可レ延二之才陰一、不レ可レ減二之暑刻一」＝年命。

【年終】ネンシュウ　年のをはり。白居易詩「更待二一一後一、支二持歸計一看」

【年所】ネンショ　年數、所は助辭。書、君奭「多歷二一一一」

【年少】ネンセウ　としわかし、としした。戰國趙策「寡人一一、奉二祠祭一之日淺」＝年弱。

【年代】ネンダイ　年數と時代と。禮記、疏「但一一久遠、無レ知二其得失一」

【年長】ネンチャウ　としうへ。年少の對。曲禮「一一以信則父事レ之」

【年中行事】ネンヂュウギヤウジ　圖一年中のそれぞれの季節に行ふ可き定りたる儀式。

【年度】ネンド　〇十二箇月を一くぎりとせしもの、我國の現行の政府會計一一は四月に始まりて翌年三月に終る。

【年登】ネントウ　穀の善く熟するをいふ。唐書、宋務光傳「天下人失レ業、不レ謂二太平一、邊兵未レ解、不レ謂二無事一、水旱爲レ災、不レ謂二一一一、倉廩未レ實、不レ謂二國富一」

【年頭】ネントウ　としのはじめ。林光朝詩「一一月尾無二一事一」＝年首・年始。

【年德俱尊】ネントクトモニタフトシ　年と德と共に高し。後周書、寇儁傳「常親執二其手一曰、公一一、所二欽尚一」＝年德竝高。

【年內】ネンナイ　ことしのうち。宋書、二凶傳「一一何必還」

【年年歲歲】ネンネンサイサイ　としどし、毎年。劉延芝詩「一一花相似、歲歲年年人不レ同」

【年齡】ネンレイ　としごろ、齡はたべひ「同一一」又、年齡と躰行と。淵源錄「揚學士一一與二先生一亦相若」

【年芳】ネンパウ　一年の春の芳ばしきをいふ。喬知之、倡女行「願君駐二金鞍一、暫此共二一一一」

【年報】ネンパウ　一年間の出來事の報告。

【年番】ネンバン　一年毎に交代して、番をする。

【年賦】ネンフ　圖借りたる金品を毎年にわりつけて支拂ふ。月賦の對。

【年譜】ネンプ　人の一代の履歷を年月順に記錄せしもの。宋史、藝文志「洪興祖、韓愈一一一部」

【年物】ネンブツ　年玉の如き新年の始に、人に物を贈るをいふ。又、其の贈品。清嘉錄「家戶爲二宿歲之儲一、新年以餉二戚友一、謂二之一一一、以下元旦至二五日一不レ設レ市也」

【年表】ネンピヤウ　歷史の事項を年月順に表にしたるもの。史記自序「作二十二諸侯一一一第二」

【年秒】ネンベウ　としのすゑ。＝年末・年尾・歲杪。

【年甫】ネンポ　としのはじめ。甫は始。＝年首・年頭・年始。

【年俸】ネンポウ　一箇年にて定めたる給料。月俸の對。

【年豐】ネンポウ　豐年に同じ。左、桓六「奉レ盛以告曰、潔粢豐盛、謂二其三時不レ害、而民和一一一也」＝年登。

【年末】ネンマツ　年のをはり、十二月二十日過の稱。＝歲暮・年杪・歲末。

【年來】ネンライ　としごろ。數年このかた。語林「我一一一恐、饒舌レ經」

【年輪】ネンリン　雙子葉植物、及裸子植物の幹の橫斷面に、毎年一つづつ增してあらはれる輪の形せるもくめ。

【年力】ネンリキ　人の年と精力と。范曄詩「聞レ道讎二已積一、一一之願疎」

【年例】ネンレイ　毎年のきまり。孟浩然詩「園中有二老梅一、一一犯二寒開一」

【年齡】ネンレイ　よはひ「禮、文王世子」庾信文「一一俄頃、風電相摧」＝年齒。

【年男】トシヲトコ　國武家にて新年の儀式進行の豆打などを行はする役。

【年子】トシゴ　國年毎につづきて生れる子の義。

【年寄】トシヨリ　國〇老人。〇相撲の顧問・監督などを務める者。〇若一一は武家にて老中の次に位する役人。

【并】

井（干部五畫）の俗字。

五畫　【幸】　カウ　竝

【幸】　〇さいはひ、しあはせよし、さち（福祿）「一福」「天一」〇こほれざいはひ（僥倖）中庸「小人行險以徼一一」〇さきはふ。〇さいはひす、幸福を與へる。漢書、高帝紀「願大王以二天下一」〇かはゆがる（寵愛）又寵愛を受くる者「佞一」「嬖一」〇よし（好）〇こひねがふ（冀覬）「希一」〇みゆき、天子のいでまし。其の地方の民衆にさいはひがある義「行一」「臨一」「巡一」

同訓異義　幸・福・祐・祿・倖等の別は福（示部九畫）の條を見よ。

【幸運】カウウン　よきしあはせ、幸福なる運命。＝好運。

【幸姬】カウキ　お氣に入りのをんな。史、孟嘗君傳「使下人抵二昭王一一求上レ解」＝寵姬。

【幸慶】コウケイ　しあはせ、よろこび。

【幸臣】カウシン　氣にいりのけらい（韓非子）＝寵臣。

【幸甚】コウジン　〇しあはせ多し。史、雅陰侯傳「願何曰、一一」〇有り難し、手紙の結尾に用ふ。韓愈、再與二鄂州柳中丞一書「不レ憎二時賜一ホ一一不宣」

【幸倡】カウカウ　君の寵を受くるわざをぎ。漢書、注「一一、倡優之見二幸遇一者也」＝幸娼。

【幸生】セイ　○幸をもとめて苟も生きながらへる。國語「偸居ー—」○しあはせに生れ出る。韓愈文「ー—ニ天下無事時ニ承ニ先人之遺業ニ」

【幸便】ビン　國よきついで、よきたより。

【幸福】フク　しあはせ。

【幸免】メン　まぬがれざいはひにのがれる。論、癰也「子曰、人之生也直、罔ノ之生也、幸而免」

【幷】ヘイ　医　并は俗字　幷に通ず

○あはす(合)「合ー」かぬ(兼)「兼ー」おなじ(同)○古の十二州の一、舜、冀州を分ちて幽州・ー州と爲す、今の直隸省の眞定・保定、山西の太原・大同等の地方。

【幷有】ユウ　あはせたもつ。史記「ー—ニ天下ニ」

【幷吞】ドン　あはせて一つにす。史記「秦ー—ニ諸侯ニ」＝兼幷。

【幷州之情】ジョウ　唐の賈島が久しく住せし幷州を去りて後、幷州を望みて第二の故郷の感をなしたる故事、其の詩に曰く「客舍幷州已十霜、歸心日夜憶ニ咸陽ニ、無ノ端更渡ニ桑乾水ニ、卻望ニ幷州ー是故鄉」

【幷州剪】セン　幷州より產する剪刀、いと極めて鋭利なり、故に事の爽利なる者に喩ふ。杜甫詩「焉得幷州快剪刀」＝幷刀。

【幷刀】トウ　幷州剪を見よ。

【幷呑】ドン　あはせのむ。賈誼、過秦論「ー—ニー八荒ニ」＝兼幷。

十　畫

【幹】(一)カン　(二)カン　通

(一)みき、草木の莖「本ー」「根ー」○からだ「軀ー」○もと(本體・主要)易、乾卦「貞者事之ー也」○任に堪へて事をよくする(能事)易、蠱卦、注「ー父之事」其の任に堪ふるはたらき(伎倆)「才ー」「器ー」「吏ー」「武ー」○せぼね(脊骨)わきばら(脅)○え と(干支)○しろ、器具の用材。○つよし(強)(二)ゑぐりた、井上の木欄。莊、秋水「吾跳梁乎井ー之上ニ」＝榦。○管と通ず。後漢書、寶憲傳「内ー機密ニ」

【幹蠱】コン　幹は幹、蠱は事、事を幹する、子が父の失敗せし事を取りかへす。易、蠱卦「初六幹ニ父之蠱ニ、有レ子考无レ咎」考は父。

【幹才】カン　はたらき。伎倆。＝才幹。

【幹止】カン　幹は事、止は居、事とする所に安んじ、居る所に安んずる義。

【幹事】カン　○幹は幹、事を幹くする。易、乾卦、文言「貞固足ニ以ー—ニー」○國主として事務を執る人の職名。

【幹線】セン　主要の線路。支線の對。＝本線・幹路。

【幹部】ブ　事務をとりあつかふ本部。又、其の事務員。

【幹練】レン　物事に熟練する。蔡邕文「ー—ニー機事ニ」

幺　部

【幺】エウ　醫　么は俗字

○ちひさし(小)「微ー」○いとけなし(幼)をさなし(稚)○俗に一を呼びてーと爲す、一は數の初、故に小の義を取りて名づく。○六ーは琵琶の曲名。

【幺麼】エウマ　かよわし。柳宗元、童區寄傳「縛ニ取ーー者ニ」

【幺小】エウセウ　ちひさし。

【幺微】ビウ　ちひさし。＝微幺・幺麼。

【幺麼】エウマ　○ちひさし、麼は細。施肩吾詩「覩機術ーー」＝幺微。○つまらぬもの。班彪、王命論「又況ーー、倘不レ及ニ數子ニ」

【幻】ゲン　一　畫　眞

○まぼろし。金剛經「一切有爲法、如ニ夢ー泡影ニ」○まどはす、くらます(詐惑)「妖ー」○かはる(化)「變ー」○てづま(妖術・魔法)刀を呑み、火を吐く如き奇術の類。或は眩に作る。

【幻影】エイ　○まぼろしと、かげと。はかなき物のたとへ「夢幻泡影」○心理學にて、感覺のあやまりより生ずる現象、幽靈・ばけものの類。

【幻戲】ゲキ　てじな。唐書「禁下人爲ニー—者上」

【幻境】キヤウ　まぼろしの如き、きゃうがい、うき世。

【幻化】ゲカ　○まぼろしの如くに變化する。列子「知ニー—不レ異ニ生死ニ」○轉じて人の死をいふ。

【幻想】ソウ　とりとめなきおもひ。

【幻人】ジン　てじな師。＝奇術師・魔法づかひ。

【幻術】ジュツ　てじな、變幻の技術。＝奇術・妖術・魔法。

【幻世】セイ　まぼろしの如くはかなき世の中。白居易詩「ー—如ニ泡影ニ」

【幻塵】ヂン　まぼろしと、ちりと、生命のはかなきに喩ふ。圓覺經「幻心滅、

故――亦滅」

【幻想】ゲンソウ　うつしみ、かげ。

【幻沫】ゲンマツ　まぼろしと、うたかたと。夢幻と泡沫と。寒山詩「衆散如二浮萍一死生猶二一一」

【幻惑】ゲンワク　まどふ。人をまどはす。＝眩惑。

二畫

【幼】

㊀イウ・ユウ　㊁エウ　通音

㊀いとけなし、をさなし、わかし（稚・穉）「童―」「―稚」「掌―」「孩―」曲禮「人生十年曰―學」〇こども（小兒）〇幼者をいつくしむ（慈愛）孟、梁惠王「―吾幼」㊁くはしくこまか（精微）「―眇」＝窈。

辨疑 幼は少なり、力に从ひ玄に从ふ、玄は少なり、俗に刀に从ひ幼に作るは非。

【孤幼卹レ孤】ニウアイウシンレムコアヘレム　幼兒をめぐみ、又、父なき孤兒をあはれむ。管子「九惠之教、一曰老レ老、二曰慈レ幼、三曰、卹レ孤」

【幼艾】ヨウガイ　容色のうつくしき少年。戰國策「王不二以予一工、乃與二一一一」＝少艾。

【幼孩】ヨウガイ　みどりご。＝嬰孩。

【幼學】ヨウガク　をさなき時の學問。曲禮「人生十年曰レ幼、學」

【幼愚】ヨウグ　をさなくしておろか（汲冢周書）＝幼昧。

【幼君】ヨウクン　をさなき主君。

【幼字】ヨウジ　幼名に同じ。

【幼兒】ヨウジ　をさなご。＝幼童。

【幼志】ヨウシ　をさなごころ。儀禮「始加二元服一、棄二爾―一」

【幼齒】ヨウシ　こども、齒は齡。賈誼、進書賦「南平休元、雄力自全、―結構、老成天然」

【幼弱】ヨウジャク　いとけなし。又、其の者。陳愈文「戰レ兵之卒、四向徒掠、農夫纔婦、指二揮―一、制二于其後一」

【幼主】ヨウシュ　をさなき主人、をさなき君主。＝幼君。

【幼孺】ヨウジュ　いとけなきこども、孺は童子。蕭穎士賦「有二啼呼之―一」＝幼童・幼穉。

【幼少】ヨウセウ　をさなし。稚、月令「養二一一存二諸孤一」＝幼穉。

【幼懵】ヨウモウ　をさなくしてよわし。五代史、楊隆演世家「隆演―一、不レ能二自持一」

【幼稚】ヨウチ　をさなし、いとけなし。漢書、王莽傳「君年―一」＝幼穉。

【幼穉】ヨウチ　をさなし、わかし。穉は稚。＝幼沖。

【幼沖】ヨウチュウ　をさなし。沖も幼。書、大誥「―一人」＝幼稚・幼少。

【幼蟲】ヨウチュウ　昆蟲等が卵よりかへりしままの形せる間の稱。成蟲の對。

【幼帝】ヨウテイ　をさなき天子。

【幼童】ヨウドウ　こども。蔡邕文「叔父親レ之、猶若二一一一」＝童幼。

【幼年】ヨウネン　としわかし。又、其の者。こども「―一學校」漢書、匡衡傳「陛以二一一一」

【幼敏】ヨウビン　をさなくしてきとし。元史、李好文傳「如二漢孝昭後漢明帝一一之類一」＝夙慧。

【幼眇】ヨウベウ　〇くはしくこまやか、精微。漢書、元帝紀贊「窮二極一一一」＝微妙、要眇。〇おくゆかしくたへなる貌。

【幼昧】ヨウマイ　をさなくして才智くらし。阮籍文「學陰一一」＝幼穉。

【幼名】ヨウメイ　をさなな、小兒の時の名。＝幼字。

【幼妙】ヨウメウ　すぐれておくゆかし。司馬相如、長門賦「寥一一而復揚」

【幼穉】ヨウモウ　をさなくして理に昧し、こども。陸機文「誕自二一一一、遠レ事二武皇一」＝童穉。

【幼齡】ヨウレイ　をさなきとし。孟郊詩「一一思二斎飛一、前冠遊二靈臺一」＝幼年・幼齒。

【幺力】

幼（前條）に同じ。

六畫

【幽】

イウ　尤

〇かくろ（隱）ひそむ（潛）證、

〇かすか（微）ほのか、おくふかし。〇しづか、陰氣、くらし（黑黝）〇とらふ、とらはる（囚）一室にとぢこめられる。〇あの世（冥途）〇風景の清勝なる義。杜甫詩「長夏江村事事―」〇古、十二州の一、舜、冀州の東北の地を分ちて一州と爲す、其の北方一味の地に在るを以てと名づく、今の直隸省の順天・永平及び奉天・錦州の西北一帶の地。

【幽愁】ユウシュウ　しづかなるおもひ。江淹賦「必居レ閑而就レ寂、以二一一之深傷一」＝幽思・幽悶。

【幽蔚】ユウウツ　おくふかくしげる。郭璞賦「林薄震二一一一」＝幽茂。

【幽幽】ユウユウ　〇深遠なる貌。詩、小雅「秩秩斯干、一一南山」〇くらき貌。韓愈詩「蟲鳴室一一」

【幽悠】ユウユウ　かすかにとほし。阮籍、大人先生傳「左蒼莽而無レ涯、右一一而無レ方」

【幽憂之病】ユウユウのやまひ　ふさぎこむ病氣、鬱憂病。莊、讓王「我適有二一一一、方且治レ之」

【幽居】ユウキョ　〇世を避けて隠くかくれる。禮記「君子隠而顯」疏「君子身雖二一一、而道徳潜通、遐名顯著、故云二隠而顯一也」〇暗くかくれて顯はれず。漢書、朱博傳「所下以隠二聰明一蔽上耳目一也」

【幽鬱】ユウウツ　〇草木がこんもりと茂る。〇氣のふさぐ貌。柳宗元文「長岭哀歌、舒二憤一ニ一ニ一ニ

【幽囚】イウ　とらはれ。史、管晏傳「吾ー受レ辱」

【幽愁】イウ　人に知られぬうれひ。白居易詩「別有ニー暗恨生ニ」

【幽室】イツ　奥ふかくしてうすぐらきへや。後漢書、張湛傳「居ニ處ーー一心自修整」

【幽人】イウ　世を避けてかくれ居る人。易、履卦「履レ道坦坦、ーー貞吉」

【幽眞】シン　しづかにして自然のまま。仙家をいふ。王安石詩「南堂樓ニーー晨起瞻ニ像圖ニ」

【幽深】シン　〇しづかにしておくぶかし。水經、注「空谷ーー」

【幽棺】クワン　ひつぎ、棺。潘岳、祭ニ庾新婦ニ文「潤形ーー、寤神荒宇」

【幽情】ジヤウ　しづかなる心情。王羲之、蘭亭序「一觴一咏、亦足ニ以暢ニ敘ーー一」

【幽貧】ヒン　しづかにほめ味ふ。李白、春夜宴ニ桃李園ニ序「ーー未レ已、高談轉清」

【幽趣】シユ　しづかにおくふかきおもむき。梅堯臣詩「種レ竹ーー深」

【幽樹】ジユ　おくふかくしげれる樹。錢起詩「暮鳥棲ニーー、孤雲出ニ舊丘ニ」‖幽木。

【幽岐】キ　おくふかくしてけはし。南史、孔淳之傳「性好ニ山水ー、毎レ有レ所レ遊、必窮ニ其ーー一」

【幽處】キヨ　しづかなる處に身を置く。說苑「吾嘗ーー而深思、不レ若ニ學之速ニ、吾嘗跂而望、不レ若ニ登レ高之博見ニ」

【幽勝】シヨウ　しづかにしてすぐれたる景。唐書、裴度傳「沼石林竹、皆繚ーー一」

【幽翠】スイ　おくふかくして青し。王昌齡詩「林色與レ溪古、深篁引ニーー一」‖幽碧。

【幽邃】スイ　しづかにおくふかし。王延壽、魯靈光殿賦「洞房叫窱而ーー」‖幽深・幽遠。

【幽砌】セイ　しづかなる庭のいしだたみ。李商隱詩「ーー欲レ乾殘菊露」

【幽栖】セイ　次條に同じ。

【幽棲】セイ　しづかなるすまゐ。杜甫詩「ーー地僻經過少」

【幽寂】セキ　さびしくしづかの意。謝靈運詩「雲氣轉ーー、溪流無ニ是非ニ」

【幽絕】ゼツ　しづかにかけ離れたる場所。李嶠玉詩「採レ藥歷ニーー一」

【幽然】ゼン　しづかにおくふかき貌。晉書、裴楷傳「山濤若ニ登レ山臨レ下、ーー深遠」

【幽潛】セン　〇水の伏し流るる所。韓愈詩「虎豹伏ニ穴中ー、蛟螭死ニーー一」〇しづかにひそみかくれる。九懷「歸ニ靜兮ーー」

【幽討】タウ　しづかにたづねる、名勝の山水などを尋ね歩く。杜甫詩「殷ー身事ニーー一」‖幽探・幽尋。

【幽堂】ダウ　〇しづかなるへや。張協、七命「ーー遠密」〇はか、墳墓。

【幽探】タン　おくふかき景をさぐる。張籍詩「ーー道侶稀」‖幽討。

【幽澄】チン　しづかなるふち。王勃賦「ーー採レ蓮」澄は正音レ

【幽天】テン　西北の天。淮南子「西北方曰ニーー一」

【幽都】ト　〇晝の時の北方の都。書、堯典「宅ニ朔方ー、曰ニーー一」〇地下の稱。楚辭「君無レ下ニ此ーー一」

【幽洞】ドウ　しづかにおくふかきほらあな。陳子昂詩「石林何冥寂、ーー無レ窮レ行」

【幽念】ネン　しづかなるものおもひ。謝朓、春思詩「ーー雁歸晨」‖幽思。

【幽範】ハン　しづかなる花びら。蘇軾、寒菊詩「輕肌弱骨散ニーー一、眞是清君南軒下」‖幽花。

【幽芳】ハウ　しづかなるにほひ。張九齡詩「欲レ贈ーー歌、行悲ニ若賞移ニ」‖幽香。

【幽房】バウ　しづかにおくぶかきへや。張華詩「清風動ニ帷簾ー、晨月燭ニーー一」‖幽室・幽堂。

【幽漠】バク　かすかにしてしづか。孫綽銘「爾形枯林ー、映ニ心ーー一」‖幽寂。

【幽祕】ヒ　おくふかくひめる。推蘇文「天道ーー、生涯料錯」

【幽憤】フン　人知れぬいきどほり。晉書、稽康傳「性慵ニ言行ー、一旦縲紲、乃作ニーー詩ニ」

【幽明】メイ　〇くらきと、あかるきと。無形と有形と。幽は天地の道、明は萬物の理。易、繫辭「仰以觀ニ於天文ー、俯以察ニ於地理ー、是故知ニーー之故ニ」〇幽は鬼神、明は人。冥土と現世と。禮、祭義「別ニーー一以制ニ上下ニ」〇暗愚にして戒慎惡しきと賢明にして戒慎良きと。書、舜典「三考黜ニ陟ーー一」

【幽寂】セキ　かすかにしてくらし。おくふかくして微妙なり。漢書、劉歆傳「ーー而莫レ知ニ其原ニ」

【幽茂】モウ　草木が深くしげる。吳都賦「瑣碎ーー而瑰瑋」‖鬱茂・幽蔚。

【幽門】モン　胃の腸の下の方のくち、胃より腸に通ずる口。

【幽厄】ヤク　おしこめられてゐるくるしみ、幽閉のわざはひ。

【幽約】ヤク　世俗を離れたる閑雅なる約束。陳高詩「我性亦愛レ山、方期

結ニ一ー一こ

【幽谷】ユウコク おくぶかき谷に生ずる蘭。

【幽明】ユウメイ しづかに、ものうし。暢當、秉筆江州臨物詩「頗君瓊玖贈、一一百無レ成」

【幽林】ユウリン しげりておくぶかきはやし。王建詩「移レ石入ニ一ー一」

【幽閨】ユウケイ くらきひとや。陳繼詩「煩愛恕以去、嘆如レ出ニ一ー一」‖幽囚。

【幽厲】ユウレイ 周の幽王と厲王と。亡國の君の表に用ふ。孟、告子「一ー興、則民好レ善」

【幽霊】ユウレイ ○死者のたましひ。謝惠連、祭古冢文「一ー形滅、欲二我憐一レ誰」○圖死者が形をあらはして人に見えるといふ幻影。

九畫

【幾】(一)キ (二)キ 尾 微

(一)きざし(微)「一微」易、繫辭「知ー其神乎」○ほとんど(殆)ちかし(近)將に及ばんとするの辭。史記「一敗ニ乃公事ニ」○あやふし(危殆)○こひねがふ(尚)‖覬。庶ーとも連用す。○みる(察)○とき、時期。詩、小雅「如ー如式」○時をきめる、期する。○かなめ(主要)○附く、纏ふ。(二)いく、いくばく「何」物の數を料かり問ふ語。同物異名 許幾・殆の別は殆(歹部五畫)の條を見よ。

【幾運】キウン をり、めぐりあはせ、幾は機に通ず、時機をいふ。後漢書、劉玄傳論「亦ー之會也」‖機運。

【見レ幾】ケンキ 事のきざしを見る、幾は機。易、繫辭「君子ー而作、不レ俟レ終レ日」

【幾何】キカ ○いくばく、いかほど、いくら。‖若干。○幾何學の略。

【幾何學】キカガク 物の形、大さ、位置等を研究する科學。‖圖形學。

【幾微】キビ 事にふれざるやうに、すこしづついきめる。論、里仁「子曰、事二父母一ー、見二志不一レ從、又敬不レ違、勞而不レ怨」

【幾希】キキ 殆どなし、まづなし。孟、離婁「不二相泣一者ー一矣」‖無幾。

【幾及】キキュウ ほとんどおひつく。五代史、和凝傳「一騎、追レ環ー一」

【幾許】キキョ いくばく。古詩「河漢清且淺、相去復ー一」‖幾何・若干。

【幾事不レ密則害レ成】キジフミツスレバガイヲナス 幾微の事は、慎密にせざれば漏洩して、禍を致し、事の成就を妨ぐる。易、繫辭「子曰、亂之所レ生也、則言語以爲レ階、君不レ密則失レ臣、臣不レ密則失レ身、——、是以君子愼密而不レ出也」

【幾勝】キショウ ほとんどあやふし。漢書、梁孝傳「沛公ー一」

【幾那】キナ 藥の名。規那樹の皮より製するもの、規那とも書く。

【幾敗】キハイ ほとんどやぶれる。史記「整備ー一乃公事ニ」

【幾亡】キボウ ほとんどほろぶ。左傳「不レ從レ晉、國ー一」

【幾望】キボウ 望に近し、陰曆十四日の月。易、小畜、月ー一」

【幾微】キビ かすかなるきざし。けはひ(先兆)易、繫辭「幾者、動之微、吉之先見者也」韓愈、送二殷員外一序「無ー一出二於言面一」

【幾個】キコ いくつ、どれほど。

【幾重】キヘ いくへにもかさなる。杜甫詩「胡虜障ー一」

【幾般】キハン いくたび、殷は數を數へるにいふ語。戎昱詩「愁至關心事ー一」

十一畫

【幺幺】ヨウヨウ 絶(糸部五畫)の古字。

【幺幺】ヨウヨウ 絲(糸部十四畫)の本字。

广部

【广】ゲン 厓

○屋の一邊の斜に下がれる形。○むなぎ(棟頭)○圖ヤン 漢字の構造を示す用語、庭の字の頭の垂れの義。

二畫

【庀】ヒ 紙

○そなふ(具)左、襄九「官ー其司ニ」○をさむ(治)左、襄二五「楚子木使ー一賦」○おほふ。‖庇。

三畫

【庄】ハッ 圖音シャウ

○たひらか(平)○圖音シャウ 莊(艸部七畫)の字と同義に用ふ。苞し莊の草體より譌りしもの。

【庄屋】ショウヤ 圖なぬし、德川時代の村長、むらをさ。‖里正・莊屋・村甲。

四畫

【庋】キ 紙

○ぜんだな、とだな(食器棚)○おく(置)收藏する。

【庋閣】キカク ○とだな、ぜんだな。集韻「一一藏二食物一」○轉じて總べて棚の義に用ふ。

【床】 牀（爿部四畫）の俗字。○ゆか。圖○ゆね。○臺のしん。○―の間。○―屋は理髪店。

【床褥】圖長病人の體のねどこに觸れる局部に出來るかさ。‖事有。

【床離】圖朝起きてねどこを離れ出る。

【序】 ジョ　通

○かき(牆)家の東西に在りて内外を界するかき。○まなびや、殷代の學校「庠―」「校―」孟、滕文公「殷曰―」○ついで(順次)「順―」「次―」孟、滕文公「長幼有―」ついでる、次第する。詩、大雅「―賓以賢」○のぶ(敍)陳述。○はしがき、書物の巻頭に置く文體。‖敍。○はしがきを書く、―する。○送別又は詩を祝するに用ふる文體「送―」「詩―」○圖ティ其のをり、便宜「諸國の―に立ち寄る」

【序齒】ジシ　文體の名。册府元龜、後漢李仲南、少以二文學一知レ名、二十餘二前漢功臣一一二

【序次】ジジ　○ついで。次第。圖詩「陰陽一一、風雨時至」○ついでる、次第する。

【序齒】ジシ　年齢の長幼を以て席次を定める。中庸「燕毛所二以一レ一レ也」

【序庠】ジショ　鄉里にある學校。漢書「―置二孝經師一人一」‖庠序。

【序錯】ジシャク　東西の縣下のはし。儀禮、鄉飲酒禮「主人坐、奠二觶于―一」‖階はさかづき。

【序傳】ジデン　著作者が自ら著作の旨趣を述ぶるをいふ。‖敍傳。

【序跋】ジバツ　書物のはしがきと、おくがきと。‖通説。

【序文】ジブン　はしがき。‖敍文・緒言・弁言。

【序幕】ジョマク　圖芝居の初のまく。轉じてすべて物事のはじまり。

【序列】ジョレツ　順をたててならぶ。史、伯夷傳「孔子―二古之仁聖賢人一」

【序論】ジョロン　本論の前置として總論につきて論ずる文。‖緒論。

【庇】 ヒ　寘

○ひさし(廡)○かばふ、おほふ(蔽)○よる(寄)○おかげ「一蔭」護りおほふ。禮、表記「有二民之大德一」

【庇蔭】ヒイン　おかげ、かばふ、ひさしや、木かげが雨露をふせぎて物をかばふ如く護り助ける。左、文九「公族公室之枝葉也、若去レ之則本根無レ所二一一一矣」

【庇護】ヒゴ　かばふ。たすけまもる。五代史、王建立傳「明宗賞二一一之以免一」‖庇保。

【庇保】ヒホ　庇護に同じ。

五畫

【庚】 カウ　庚

○かのえ、十干の第七位。‖上章。○西の方位。○よはひ(齢)癸辛雜識「同一者數十」同一は同齢。○かはる、さらに、更(日部三畫)に通じ用ふ。○つぐなふ(償)檀弓「請一之」○みち(道)○倉一はうぐひす。‖商庚。○長一はよひの明星

【庚癸】カウキ　○かのえとみづのと。○軍中にて、飲食を求むるに用ふる隱語。左、哀十三「吳申叔儀乞二糧于公孫有山氏一(中略)對曰、粱則無矣、藜則有レ之、若登二首山一以呼曰二一一乎、則諾」注「庚西方主レ穀、癸北方主レ水」俗に乞貸を呼ぶ「庚呼」癸といふは此に本づく。

【庚申待】カウシン　圖かのえさるの日に夜を守りて寢ねざる行事、此日三尸蟲が人の油斷をねらひて惡事を天帝に密告すると說き、道家にては三尸蟲の神を祭り、佛家にては帝釋天と青面金剛とを祭る。‖庚申會。

【庭】 テイ　靑

○そこ、した、物の下部「水一」「花一」○やまにをる(山居)○器のしり(器臀)「簋―」○くだる(下)○まつ(待)○とどまる(止)とどこほる(滯)○いたる(至)いたす。孟、離婁「醫瞤一一」○と、といし。孟、萬章「周道如一」‖砥。○したがき(文稿)春明退朝錄「公家文書藁、中書謂之草稿、樞密院謂二之一一」○なんぞ(何)疑ふ詞。○助字、こと、又は者の意。小學外篇「天下無二不是一父母一」‖的。

【庭綱】テイコウ　おくそこ。唐書、魏徵傳「屋二極一一無レ所レ陵」‖綱領。

【庭下人】テイカジン　圖しもべ、はしたもの、奴婢。庭下は卑劣の義。‖小廵。

【庭絕】テイゼツ　をはり、きはまり。後漢書「道漫漫兮、無レ所二一一一」‖終絕。

【庭訓】テイクン　庭本に同じ。會典、吏部「查二對一一明白開レ例」

【庭止】テイシ　とどまる。詩、小雅「靡レ所二一一一」

【庭本】テイホン　したがき、ひかへぼん、草稿(宋敏求、春明退朝錄)‖庭訓・稿本。

【庭園】テイエン　といし、庭はきめのこまか

きといし、腐はあらと。轉じて、とぎみがく。漢書、枚乘傳「磨礱ー一」 ‖底礪・砥厲。

【底意】ティイ 圖しんそこの考へ。‖心底。

【底意地】ティイジ 圖しんそこの根性「ーーが惡い」

【底事】テイジ なぜ、いかなれば。唐人の詩に多く用ふ。‖何事。

【店】 テン 霰

○みせ、たな、貨物を陳ね置きて賣る處。宋史、趙普傳「營ニ新ー一規利」○はたごや(旅舍)。杜甫詩「野ー引ニ山泉」○圖ヲ家の義「明きー」「ー子」

【店員】テンイン みせの使用人、商店の雇人。

【店肆】テンシ みせ。隋書、裴矩傳「帝命ヲ三市ーー皆設ニ帷帳一盛列ニ酒食一」

【店主】テンシュ みせのあるじ、商店の主人。唐情集「ーー扣ニ門視レ之」

【店店】テンテン みせなみ。陸游詩「笙歌ーー賣ニ新醪一」

【店頭】テントウ みせさき、みせのほとり。

【店鋪】テンポ ○いへ、へや。舊唐書、食貨志「別有ニ宅舍ーー等所ニ貯レ錢」○俗にみせや(商店)の義に用ふ。

【店請】テンセイ 圖借家人の保證をする。又、其の人。

【店子】テナコ 圖借家に住む人、借家人。

【店立】テダテ 圖借家より、追ひたてる、借家を立ち退かされる。

【店賃】テンチン 圖家賃チン ‖借家料。

【店仕舞】テジマヒ 圖みせをやめる、商賣をやめる。‖廢業・閉店。

【店開】テビラキ 圖みせびらき、開業する。‖開店。

【庖】 ハウ 有

○くりや(厨)だいどころ、炊事場。○料理レウリ割烹「珍ー」又、料理人「良ー」

【庖犧氏】ハウギシ 太昊ーーは、太古三皇の世の初に出でし皇帝、犧牲を養ひて庖廚に充つることを教ふ。‖伏犧氏・炮犧氏。

【庖屋】ハウヲク くりや、料理べや。張耒詩「肥兔與ニ奔鵝一日夕懸ニ一ー一」

【庖宰】ハウサイ 料理をつかさどる人。韓詩外傳「身執ニ鼎俎一爲ニ一ー一」‖膳宰。

【庖人】ハウジン ○周代、膳羞レウの事を掌る官名。○轉じて料理人の義とす。莊、逍遙遊「許由曰、ー一雖レ不レ治レ庖、尸祝不ニ越レ俎而代レ之」

【庖正】ハウセイ 食膳の事をつかさどる官。左、哀、元「爲ニ之ーー一以除ニ其害一」

【庖廚】ハウチウ くりや、だいどころ。孟、梁惠王「是以君子遠ニーー一也」

【庖丁】ハウテイ ○古、名高きれうりにん。莊、養生主「ーー爲ニ文惠君一解レ牛」

【府】 フ 麌

○くら、朝廷の文書、又は財貨を藏するくら「一庫」「祕ー」○財幣を掌る官吏「玉ー」「泉ー」○やくしょ(官廳)百官の居る所「官ー」「公ー」「政ー」○みやこ「都ー」○あつまる(聚)人又は物の聚る所。○唐代の制、州の大いなるもの。○人の邸宅の稱「一第」○はらわた「六ー」‖腑。○ー君は唐の代、太守の稱。○圖縣と共に地方自治團體の最上級、郡及市より成り立つ「東京ー」

【府尹】フイン 府の政を司る長官、府知事。唐書、百官志「ーー各一人、掌レ宣ニ德化一」

【府學】フガク 圖昔、太宰府に設かれし學校。

【府君】フクン ○漢代、太守の尊稱。後漢書、廣陵太守陳登、愚ニ病中煩懣一非ニ他脈一之目、ーー胃中有レ蟲」○尊者の稱。搜神記「胡母班官至ニ泰山侍一爲ニ泰山ーー所レ召」○亡き父の敬稱。朱子語類「無レ爲ニ曰ーー夫人、漢人稱ニ已有一只是尊レ稱之辭、ーー如ニ官府之君一」

【府會】フクワイ 圖府の行政事務を議決する機關。

【府印】フイン 貨財器物等を入るるくら。禮、月令「季春之月、開ニーー一出ニ幣帛一」

【府史】フシ 役所の書記。儀禮、士冠禮、注「周禮三百六十官之下、皆有ニーー一胥徒」

【府寺】フジ やくしょ。後漢書、劉般傳「ーー寬敞」‖官署・府署。

【府人】フジン くらやくにん。

【府生】フショウ 圖古の六衞府の屬官、供奉隨身をつとめ、又衞府の記錄を掌る。

【府署】フショ やくしょ。後漢書、宦者傳序「ーー第館、棊ニ列於都鄙一」

【府帑】フド 政府のかねぐら。後漢書「轉運之貢、空ニ竭ーー一」

【府廳】フチョウ 圖府の行政事務を執る役所。

【府中】フチウ 朝廷の政を行ふおもてむきのやくしょのうち。おくむきを宮中といふの對。諸葛亮、前出師表「宮中ーー、俱爲ニ一體一」

【府兵】フヘイ 宮廷を守護する兵隊、近衞兵。後漢書、竇武傳「ーー漸盛」

【府吏】フリ 役所のやくにん。淮南子「ーー守レ法、君子制レ義」

【庙】 六 畫

廟(广部十二畫)の俗字。

【庥】 キウ　尤

○おほふ(庇)かげ(蔭)○いこふ、木の蔭にやすむ、休に通ず。

【庠】 シャウ　陽

○やしなふ(養)老人を養ふ。又其の處、古、長幼の序を教ふる爲めに學校にて養老の典を行ふ。禮、王制「有虞氏養二國老于上庠一、養庶老于下一」○まなびや、鄉校「序庠孟、滕文公「夏曰校、殷曰序、周曰庠」**【庠序】**シャウジョ　庠序に同じ。梁武帝詔「宜下大啓二庠序一博延中胄子上」**【庠序】**シャウジョ　鄉里の學校。孟、梁惠王「謹二庠序之教一申レ之以二孝弟之義一」

【度】 (一)ト・ド　遇　(二)タク　藥

(一)のり(法制・規則)「制ー」「法ー」「常ー」「矩ー」○ものさし、物の長短を計る器「ー量衡」○どあひ、ほど「程ー」○とき(時・年代)○たび(回數)○天球・地球の周圍を三百六十分せしざみ。○やつす、人がら、風采「態ー」○はらまへ(器量)「ー量」「局ー」「器ー」「識ー」「襟ー」漢書、高帝紀「有大ー」○のっとる(則)○わたる。漢書、西域傳「谿谷不通、以レ繩相引而ー」‖渡。○國すくふ(救)佛の道に入らしむ「濟ー」○僧となる「得ー」○初ーは人の初めて生れし年時をいふ。○用ーは用費イフ　漢書、武帝紀「用ー不レ足」(二)はかる(謀)みつもる「測ー」「忖ー」「揣ー」「臆ー」○國タクク字音を借りて希望を表はすに用ふ「被下ー」

同訓異語　度・計・謀・圖・量・稱・測・料等の別は計(言部二畫)の條を見よ。

【度越】エツ　人にこえてまさる。漢書、揚雄傳贊「必ー二諸子一矣」**【度航】**カウ　船にて水を渡る。梁書、王茂傳「梁武二十萬ー一時ー戰」‖渡航。**【度胸】**ダキョウ　國物事に恐れざる心。**【度曲】**キョク　○歌曲をつくる。漢書、元帝紀「自ー一被二歌聲一」○歌曲を按じて歌ふ。張衡賦「ー一未レ終、雲飛雪起」**【度矩】**ク　のり、きそく。魏文帝錄「百寮師ー、皆二鼓!ー一」**【度外】**ダイ　のけもの、法度ハタの外。除外例「ー一視」後漢書、陳蕃傳「當レ置二此二子於ー一耳」**【度數】**スウ　○めもりのかず、温度・角度などのきざみ目のかず。周禮、天官「日月星辰之ー一天道備焉」○たびかず。‖回數。○しな、定りたる制度。莊子「禮法ー一刑名」**【度脫】**ダツ　衆生を濟度して、煩惱の苦を脫せしむ。南史「ー二一衆生一」**【度牒】**デフ　古、人を僧尼にする時、官より渡したる免許證。唐令拾遺「天寶六載、制二僧尼道士令一、祠部給レ牒度レ之」**【度量】**リャウ　○ものさしと、ますと。周禮「壹二其ー一」○はらまへ、人の器局。韓愈文「ー一不レ敢望二淮淡一」**【度量衡】**リャウカウ　ものさしと、ますと、はかりと「衡、權典」**【度支】**シ　○はかる。‖按度。○ヂのり。祭祀時「乾綱不レ息、章二明ー一」**【度計】**ケイ　はかる。韓非子「人主所二與ー一也」**【度支】**シ　會計をつかさどる官。唐書、百官志「ー一掌二天下賦私物産豐約之宜、水陸道途之利、錢計所レ出、而支二調之一」**【度支部】**シブ　○清朝の末、戶部を改め稱す、民國となりて財政部と改む。○國朝鮮總督府に屬する一局部にて、租稅及會計事務を司る。**【度地】**チ　土地をはかる。禮、王制「司空執レ度、ー一居レ民」**【度量】**リャウ　はかる。大戴禮「決レ之以レ卒而ー一」

【庫】 コ　遇　**七畫**

○くら(藏)兵車ヲ入れおく所「武ー」「兵ー」○轉じて廣く樂器・祭器・文書等のくら「倉ー」「府ー」「書ー」「資ー」○天ーは星の名。**【庫使】**シ　政府のくらのぜに。晉書、陶侃傳「盜二用ー一父死不レ奔レ喪」**【庫絹】**ケン　品質最良の絹ヲ、杭州・江寧等に產す、清朝の時の貢物にして戶部の檢正庫に入るが故。**【庫平銀】**ヘイ　國銀塊の一種、清國政府の標準銀。**【庫吏】**リ　くらばんの役人。魏志、鄧哀王沖傳「太祖馬鞍在レ庫、而盜二取所レ鎧、ー一幘必死一」**【庫掫】**コソウ　武庫の櫓。後漢書、楊由傳「時有二大雀一夜集ー一上一」**【庫裏】**リ　國寺の臺所、寺の廚。‖庫裡。

【座】 ザ　箇

○せき(席)るどころ(席次)すわるところ、ざしき「四ー」「滿ー」「御ー」「高ー」「末ー」「虛ー」○しきもの。○星のやどり「星ー」○國芝居小屋「歌舞伎ー」○ヲ位ヲの義「高御ー」

【座右銘】ザイウ 座右におきて身の戒とする格言。李密文「檄子玉爲二——一」白樂天亦爲二——一」

【倒レ座】ダクザ 一座の衆人の心を引きつける。杜甫詩「一見能——レ一」

【座客】ザカク 同じ席の人、其の席に在る客。

【座興】ザキョウ 其の場のなぐさみ。

【座次】ザジ すわりばしょの順序、席順。

【座敷】ザシキ 圖〇客をとほすへや。‖客間。〇へや。‖室。

【座上客】ザジョウキャク 座のうへ、せきにゅう。後漢書、孔融傳「——客恒滿、樽中酒不レ空」

【座主】ザス 〇席代に、試驗を主る官吏の稱。國語錄「及第人就二中書一見二——一」〇圖比叡山延暦寺の貫主の稱、即ち天台宗の管長。

【座禪】ザゼン 親家にて靜坐して悟道を求むる行。

【座禪豆】ザゼンマメ 圖黑大豆を砂糖醬油にて煮つめたるもの。

【座談】ザダン 〇すわりばなし、對座してするはなし。〇其の場かぎりの談話。

【座長】ザチョウ 集會の席などにて、推されて、其の會の長となるもの。

【座中】ザチュウ ざしきのなか、其の席にゐる人人。顧谷詩「——亦有二江南客一」

【座頭】ザトウ 圖〇芝居などの一組のかしら、一座の長。〇ざ育目の琵琶法師の首席の者の稱。〇轉じてめくら。‖盲人。

【座頭鯨】ザトウクジラ 圖鯨の一種、眼甚だ細く、殆ど盲の如し、紀伊・土佐・肥前等の海に產す。

【庭】テイ ㊀テイ ㊁テイ 梗 靑

㊀には、堂の階の前、門内の地。〇朝廷、宮中「後—」「宮—」「禁—」〇役所「法—」〇なほし(直)〇いへ、家のなか「家—」「—訓」㊁近—は隔りて遠き貌。註、逍遙遊「大有二逕—一」

【庭園】テイエン 〇親の居るへや。東晉、補亡詩「春二慈—一、心不レ遑」安」

【庭訓】テイクン には、その。‖圖庭。

【分庭伉禮】フンテイカウレイ 同じ庭の内にて、席を分ち同等の禮を爲す。註、漁父「萬乘之王、千乘之君、見二夫子一未三嘗不二——一」

【庭柯】テイカ にはにある木のえだ。陶潛、歸去來辭「倚二——一以怡レ顏」

【庭階】テイカイ にはのきざはし。晉書、謝玄傳「譬如二芝蘭玉樹一欲レ使二其生二於——一耳」

【庭訓】テイキン 家庭のをしへ。孔子の子鯉が趨りて庭を過ぎし時、孔子が呼びとめて詩禮の學ぶべきことを敎へたる故事(論、季氏)に本づく。

【庭燎】テイリョウ 古、君主のにはにて焚きしかがりび、にはび。夜中參內の諸臣を照らしたるもの。詩、小雅、庭燎「夜未レ央、——之光」

【庵】アン 江 庵に同じ 庵に通ず

〇いほり、いほ、くさや(小草舍)草ぶきの圓き屋「草—」「茅—」「蓬—」「結—」‖菴。〇僧尼などの佛に奉ずる舍。

【庵洪】アンコウ あつくしてゆたかな漢書、司馬相如傳「滿意—一」

【庫】コ 八 遇

〇くら、たからのくら「寶—」「武—」「文—」「書—」「經—」「藏—」「倉—」「車—」「兵—」「馬—」「府—」「金—」「出納—」「國—」「內—」「外—」「官—」「公—」「私—」「府—」「藏—」「倉—」「車—」「兵—」「馬—」「府—」「金—」「出納—」「國—」「內—」「外—」「官—」「公—」「私—」

【庫裏】クリ 圖寺院の住持の住む家。

【庫司】コシ 庫の役人。

【庫守】コシュ 庫の役人。

【庫吏】コリ 庫の役人。

【庫門】コモン 庫の門。

【庫藏】コゾウ 庫。

【庫倫】コリン 地名。

【庫庫】ココ 擬聲語。

【庫車】クチャ 地名。

【庫什】クシ 地名。

【庫爾喀拉烏蘇】クルカラウス 地名。

【庫爾勒】クルレ 地名。

【庫魯克】クルク 地名

【康強】カウキャウ すこやか、ぢやうぶ。書經「身其一一」‖康強・康健。

【康衢】カウク 往來の繁きちまた、四通を衢といひ、五通を康といふ。列仲尼「堯治二天下一、五十年（中略）微服游二一一一、聞二童兒謠一」‖康莊・康逵。

【康健】カウケン 安康にして壯健なり。金史、張行信傳「父曄以二御史大夫一致仕、猶一一」‖健康・康強。

【康弧】カウコ 瓦にて造れるつぼ、弧は壺。つまらぬ品物をいふ。史、賈生傳「賓二一一兮」注「一一、瓦盆底也」‖瓠。

【康濟】カウサイ 民を安んじ助ける。書、蔡仲之命「普二天室一以和二兄弟一一一小民一」

【康莊】カウサウ 往來繁き街路。康は五逵、莊は六達の道（史、孟子荀卿傳）

【康衢】カウシク からのさかづき。一說、大杯。詩、小雅「酌二彼一一一」

【康勝】カウシャウ すこやか。除陵文「體中何如、願聞二一一一」‖康健・康寧。

【康寧】カウネイ 病なくしてすこやか。書、洪範「五福、一曰壽、二曰富、三曰一一、四曰攸レ好レ德、五曰考レ終レ命」‖安康。

【康復】カウフク 病氣がなほる、本復する。‖廣愈。

【康平】カウヘイ 世治りてやすらか。漢書、宣帝紀「上下和洽、海內一一」‖康寧・平康。

【康樂】カウラク 安んじてたのしむ。漢書、禮樂志「閭閻嫚易之音作、而民一一」‖安樂。

【庶】ショ 御 語

㊀たみくさ（衆民）「黎一」○もろもろ、おほし（衆多）「一物」「衆一」○ぶんけ、支族。○めかけばら、妾腹の子「一子」○ちかし（近）論、先進「回也其一乎」○こひねがふ「一幾」○こゆ（肥）ゆたか（豐）㊁はらふ、毒蟲を驅除す。

同訓異字 庶・庶幾・希・冀・尙・幸 ○庶は衆也と註す、幾と同義なり、庶幾と連用しても、一字づつ別ち用ひても同じ。又、庶乎とも連用す。○庶幾は、こひねがはくはとも、ちかしとも訓む、遠きものは及び難き故、望を絕つも、近きは及ぶべし、されば庶幾、又は近幾と註すれども、意は一なり。孟子「王庶幾改レ此」○希は、まれといふ字なり、故にまれなることの、出來るやうに願ふなり。○冀は然也、望也と註す、觀と普通す、何ひ望む意あり。○尙は庶幾也と註す「黎民尙赤有レ利澤」の如し、尙の字、たゝとぶといふ義あり、たゝび願ふ意なり。○幸は非レ分而得曰レ幸と註す、幸謂二寵太子一如し。

【庶尹】ショイン もろもろの官人の長。書經「一一允諧」

【庶羞】ショシウ ○こひねがふ。詩經「一一二人一」○ちかし。易、繫辭「顯二其德一、以二類一一一」○もろもろのつかさ。江淹文「包二括一一一、總二納儀刑一」‖庶官・庶僚。

【庶吉士】ショキッシ 明以後、翰林院の官名、進士の試驗に及第せし文學優等又善書の者を以て之に任ず。

【庶官】ショクワン もろもろの官吏。書、皐陶謨「無レ曠二一一一」‖百僚・庶僚。

【庶兄】ショケイ 妾腹のあに。史記「紂之一一」

【庶孽】ショゲツ めかけばら、妾腹の子。類書纂要「一一子、衆庶孤庶出之子、非二嫡長一也」史、商君傳「商君者、衛之一一公子也」

【庶乎】ショコ ちかし。論、先進「回也其一一」‖庶幾。

【庶子】ショシ ○めかけばらの子、庶出の子。○官名、東宮職。漢に「太子一一」あり、魏に「太子中一一」あり。

【庶羞】ショシウ 神に供へすすめる諸のうまき物。禮、王制「一一不レ踰レ牲」注「祭以レ羊、則不レ以二牛肉一爲レ羞」

【庶人】ショジン もろもろのたみ。‖庶民。

【庶神】ショシン もろもろのかみ。國語「以約二言於上下一一一」

【庶出】ショシュツ 妾腹に生れる。又、其の子。

【庶政】ショセイ もろもろのまつりごと。易、賁卦、彖傳「君子以明二一一一」

【庶績】ショセキ もろもろのいさを。衆多の功績。書、舜典「允釐二百工一、一一咸熙」

【庶族】ショゾク ○平民のやから。北史、魏孝明帝紀「詔二一一子弟一」○ぶんけ（分家）‖支族。

【庶男】ショダン 妾腹の男の子。史記「高祖長一一」

【庶徵】ショチョウ 多くのしるし、多くのきざし。書、洪範「八、一一、曰雨、曰暘、曰燠、曰寒、曰風、曰時」

【庶品】ショヒン いろいろのもの。多くの階級の官人。陸機文「銓二衡一一一、歷二選有一」

【庶物】ショブツ いろいろのもの。易林「坤厚地德、一一蕃息」‖諸物・萬物。

【庶母】ショボ 父の妾たる己の生母（御雅、釋親）

【庶民】ショミン もろもろのたみ。詩、大雅、靈臺「經始勿レ亟、一一子來」‖衆庶・百姓。

【庶務】ショム いろいろのつとめ、各種の事務。前史「雖レ未二經一一一、而識得二人心一」

【庶老】ショラウ 庶士より以下庶民の年とりたるもの。國老の對。禮、王制「養二一一于下庠一」

【庶類】ショルイ もろもろのたぐひ、多くの物。魏志「東作方興、一一萌動」‖萬物・庶彙。

【庶幾】ショキ もろもろのたみ。崔顥詩「淑雨施二于一一」‖黎庶・庶民。
【庶僚】ショリョウ もろもろの役人。舊唐書「蔵三閻妃俗一儀刑一一」‖庶官。

【庠】ショウ ㊀ヒ ㊁ヒ 紙 支

㊀ひくきいへ（伏舎）屋根卑クし。左、襄三一「宮室卑一㊁ひくし（下・卑）○みじかし（短）周禮、地官「其民黙肉而一」○たすく。‖庇。

【庸】ヨウ 冬

○もちふる（用）「登一」「徴一」○いさを、てがら（功）「功一」「勤一」○つね（常）なみ、おろか（愚）「凡一」○かはらぬ、變動せず。中庸「不易之謂一」○いたはる（労）○やはらぐ（和）○あに（豈）左、莊十四「一非武乎」○なに、なんぞ（何）—何—詞とも連用す。○もって（以）書、說命「王一作書以誥」○こじろ。‖墉。○おほいなるつりがね、鐘に通ず。○やとひ、やとふ。‖傭。○唐代の賦課の名、丁年以上の男子、一年に二十日（閏年は二十二日）の公役に應じ難きときは、一日に絹三尺づつを代納する法「租—調」

【庸調】ヨウチョウ 庸・常・恒・雅・輩等の別は常（巾部八畫）の條を見よ。○庸・何・曷・胡等の別は何（人部五畫）の條を見よ。
【庸暗】ヨウアン おろか。‖暗愚・昏愚・闇愚。
【庸器】ヨウキ やぶいしゃ、平凡なる醫師。陸游詩「一一司二性命一、俗子識二文章一」
【庸行】ヨウコウ つねのおこなひ、平常の行。易、文言「庸言之信、一一之謹」
【庸勲】ヨウクン ○績て人の功績を銘するに用ふる器。周禮「掌」鼓二樂器一一」○凡庸なる才。‖庸才。
【庸愚】ヨウグ おろか。‖庸劣。
【庸君】ヨウクン 愚かなる君、凡庸の君主。
【庸言】ヨウゲン つねのことば、平常の言ふ所。庸行を見よ。
【庸作】ヨウサク 賃錢を受けて働く。漢書、匡衡傳「家貧一一、以供二資用一」‖傭作。
【庸人】ヨウジン つねなみの者、尋常の人。‖凡人。
【庸劣】ヨウレツ 劣りてよわし。唐書、燕代一一」
【庸績】ヨウセキ いさを、てがら。晉書、威略冠二于本朝一一一書二于王府一」‖功績。
【庸浅】ヨウセン おろかにしてあさはかなり。梁昭明太子、疏「意見一一」
【庸和】ヨウワ えだちと、みつぎと、夫役と年貢と。唐書、宋渾傳「取二民一年一一」
【庸愚】ヨウグ おろかにして氣が弱し。‖庸怯。
【庸短】ヨウタン つねなみ、おろか。南史、梁邵陵王綸傳「性頗一一」‖庸劣・庸愚。
【庸中佼佼】ヨウチュウコウコウ なみなみの中にてやや勝れたる者。後漢書、劉盆子傳「光武帝曰、卿所レ謂、鐵中錚錚、——者也」揚は徐宮。
【庸徳】ヨウトク 平常の徳。中庸「一一之行、庸言之謹」‖庸行。
【庸鄙】ヨウヒ 平凡なるやから、愚かなるともがら。宋史、劉儀鳳傳「不レ樂下與二一一一接上」
【庸保】ヨウホ やとはれびと、保は保證人を立ててやとはれる。史、淮陰侯傳「高漁陽樊二名姓一、爲レ人一一」‖傭保。
【庸庸】ヨウヨウ ○平凡なる貌。左思、蜀都賦「超二百王之一一一」‖平平。○微小なる貌（漢書、揚雄傳）
【庸劣】ヨウレツ おろかにしておとる。沈約文「槃固嘉規、猥班二一一一」
【庸何】ヨウカ 次條に同じ。
【庸詎】ヨウキョ なんぞ、なんすれぞ。詎も何。莊、齊物「一一知二晉所レ謂知之非二不知一乎」

【廁】シ ㊀シ ㊁シク 寘 職 ㊀は一に㊁に作る

㊀かはや、べんじょ（厠溷）「一溷」史、項羽紀「沛公起如一」○厠の邊側。漢書、汲黯傳「上常踞一視レ之」○きよし（清）○まじる（間・雜）「雜一」樂毅、上燕惠王書「一レ之賓客之中」○つい（次）○高岸、水を夾む、水のほとり（水涯）漢書、劉向傳「北臨一一」㊁そばだつ（側）「一足」
【廁鬼】シキ 雪隱の神（酉陽雜俎）‖廁神。
【廁溷】シコン べんじょ。歸田錄「雖二一一一閒二蜘蛛成一堆」‖廁圊・溷圊。
【廁牀】シショウ かはや、べんじょ（英雄記）‖廁圊。
【廁籌】シチュウ おかは、おまる。史、萬石君傳「取二親中補一一」身自澆滌」‖虎子。
【廁圊】シセイ かはや、便所。‖雪隱・廁牀・溷廁・圊廁。

【廂】シャウ サウ 陽

○ひさし、正寢の東西にある序「兩一」○わたどの（廊）
【廂軍】シャウグン 宋代、諸州の鎭兵、其の州の本城に隷屬するを以て廂に比して名づく（文獻通考、兵考）‖廂兵。

【廂兵】ヘイ　前條に同じ。
【廂廡】ソウ　ひさし、わたどの。陶弘景文「一一側室、可二以安一身」
【廂車】ヒサシグルマ　圖牛車の一、太上皇又親王等の乘用に供するもの。

【廊】ロウ　陽

○ひさし、堂の下の東西に立てたるへや、東西の序。○堂下の周屋、わたどの「週ー」「修ー」「長ー」「步ー」「晝ー」
【廊廡】ロウブ　わたどの、轉折せる處。杜牧、阿房宮賦「一一縈迴、簷牙高啄」
【廊下】ロウカ　ほそどの、わたどの、週廊。唐書、嚴綬傳「始就二一一一食、在二百官上一」
【廊閣】ロウカク　わたどのと、うてなと。華陽國好賢志「每升二評越一翔二一一之下一、咸容可レ觀」
【廊廟】ロウビョウ　おもて御殿の下に副へて設けたるひさし。漢書、賈嬰傳「賜金無二一一下一」
【廊廟】ロウビョウ　ひさしのあるおもてごてん。政事を執る所をいふ。朝廷の義。史、貨殖傳「賢人深謀二於一一一、論二議朝廷一」
【廊廟之器】ロウビョウノキ　朝政を執る宰相たる才能。蜀志、許靖傳「大較有二一一一一一」‖廊廟具。
【廊廟具】ロウビョウグ　朝政を執る大臣となるに足る才能。杜甫詩「方今一一、構二廈豈云缺一」‖廊廟才。
【廊廟之志】ロウビョウノココロザシ　大臣宰相となりて政を執る志。文中子「山林有二一一一一一」
【廊廟才】ロウビョウサイ　廊廟具に同じ。唐書、張行成傳「行成發言方正、一一一也」

【廇】リウ　宋

○なかには（中庭）○中一は室の中央、一一に當に作る。

【廉】レン　鹽

○いさぎよし（潔）慾がない「清ー」「貞ー」「方ー」○かど（側隅・稜角）○つづまやか（儉）○をさむ（檢斂）○明かにしらべる「一察」○とし（利）○かたはら（側邊）○慾少き義より、轉じて價やすし。春渚紀聞「就一直取二此馬一以代レ步」○一纖は細かき貌。圖○かど。箇條。又、箇所「訊問の一」○ひときは、又、格別の義「一一の學者」
【廉按】レンアン　明かにとりしらべる。唐書、鄧餘令傳「積」薪自焚、試一一、果得二其奸一」‖廉察。
【廉廉】レンレン　いさぎよき德をそなふ。孟、離婁「可二以取一可二以無一レ取、取ー一ー」
【廉貞】レンテイ　やすね、安直。‖廉直。
【廉悟】レンカク　心潔くしてつつしむ。後漢書、公方ー一」‖廉謹。
【廉悍】レンカン　かどだちてつよし。韓愈、柳子厚墓誌銘「備健ー一」

興復漢からずと、使ち胡牀に據り、浩等と談咏竟夕す、其の坦率類ね此の如し〔晉書、庾亮傳〕
【庾樓】ユロウ　舊唐書「東嶺縣卽大ー一、屬二韶州一一名梅嶺」自帖「大ー一上梅、南枝落北枝開」聞見近錄「一一險絕、通レ渠、流泉湧湧不レ絕、紅白梅、夾レ道仰視二青天一、如二一線一然」

十畫

【廈】カ　馬

夏に通ず、廈に作るは非
○いへ（屋）一說に大いなる家「廣ー」「大ー高樓」○ひさし（門之廡）○一門ヲイは福建省に屬する島の名、清の光緒十三年開きて商埠と爲す。

【廋】シウ　ソウ　有　尤

○かくす、かくる（隱）○索、爲政「人焉ー哉」○もとむ（求）さがす（索）
【廋詞】シウシ　次條に同じ。
【廋辭】シウジ　謎ノ隱語。隱伏滿流の言。晉語、有二桑害一一一於朝一

【廄】チ　紙

○のり（法）○解ー一は鹿に似て一角の獸、人君刑罰中るを得ば、朝廷に生ずといふ。漢代法冠の名。又、豕に通ず。‖廨舍。

【廉恥】レンチ 廉恥に同じ。
【廉殺】レンサツ 心いさぎよくつよし。柳宗元文「和扳直方、一一信厲」
【廉儉】レンケン 欲すくなくつつしみぶかし。律疏「もの」〔史、申屠嘉傳〕‖廉慎。
【廉隅】レングウ 物のかど。又、かどだちたる行。儀、儒行「砥二礪一一一」
【廉勤】レンキン 心清廉にして剛直なり、いさぎよくしてつよし。後漢書、寇敦傳「一一不レ阿二權貴一」
【廉潔】レンケツ いさぎよし。人物志、清介「一一」‖廉潔。廉白。
【廉潔】レンケツ 前條に同じ。南史、郭祖深傳「一一者、自進無レ途、貪請者、取レ人多レ徑」
【廉察】レンサツ あきらかにしらべる。後漢書、第五種傳「一二一災害一」‖査察。
【廉士】レンシ 欲少く心清き士、清廉の士。孟、滕文公「陳仲子豈不二誠一一一乎
【廉而不レ劌】レンニフラズ 君子の德の玉のかどだつも破れざる如く堅固にしてやぶれざるをいふ。老子「是以聖人方而不レ割、一一」
【廉悍】レンカン 廉猛に同じ。
【廉謹】レンキン ○欲少なく、能く人にゆづる。潛夫論「世人之論也、靡レ不レ貴二一一一而賤二財利上焉、及二其行一也、多譽二廉而甘レ利」○廉泉讓水の略語。
【廉隅】レングウ 清廉なりといふほまれ。
【廉鹿】ビンロク ○おほふ。おほはれる。職國策「席二藺蔽一、而一二一桑牖一」○かばひ助ける。保護する。又、おかげ。
【廉補】ホレン 廕叙に同じ、補は補任。

【殿】キヤ 宥 俗字 廄は俗字

うまや(馬舍)「外一」
【廄閑】キカン うまや(馬舍)閑はをり「魏書、常爭傳」‖廄舍。
【廄人】キジン 馬を掌る人。韓詩外傳「振河遠、俄而一一以二東野畢馬敗一聞矣」
【廄置】キチ うまつなぎば。馬を置きて驛を傳ふる舍。漢書、田橫傳「田橫與二其客二人一乘レ傳詣二洛陽一、未レ至三十里、至二尸鄉一一一」
【廄馬】キバ うまやの馬。漢書、貢禹傳「一一食レ粟將二萬匹一」
【廄吏】キリ 馬匹の飼養を掌る役人。漢書「長安一一乘二駟馬一車一、來迎二貢臣一」‖廄人。

【廃】廢(前條)の俗字。

【廌】キン 文

○小さきいへ(小屋)○わづかに(纔)‖僅。○おとる(劣)○つとむ。‖勤。

【廓】クワク 藥

○大いなり「宏一」呉志、周瑜

傳「性度恢―」○ひらく(開)廣ける、小を張りて大いならしむる。班固、答賓戲「―帝紘」○むなし(空)漢書、東方朔傳「―然獨居」○くるわ、俗に郭に通ず。○國 一區域又は遊里の義。

【廓開】クワイ　ひろげて大きくする。西京賦「―二一九市」

【廓廓】クワク　空虛なる貌。唐書、李密傳「天下―無ン事矣」

【廓如】クワク　からりと開けて大いなる貌。又、空しき貌。法言「楊雄塞レ路、孟子闢レ之―也」‖廓然。

【廓清】クワセイ　世のみだれをさっぱりとはらひきよめる。後漢書、陳蕃傳「―二一天下」‖肅清。

【廓然】クワクゼン　心むなしく、わだかまりなき貌。漢書、東方朔傳「廓然無レ徒。―獨居」

【廓大】クワクダイ　○ひらけて大いなり。柳宗元文「廟舍峻展、階序―」○廣げて大いにする「――國」

【廓澄】クワクチョウ　からりと、きよくすむ。張仲素、山呼萬歲賦「文物芬郁、養成―」

【廓土】クワクド　地をひろめる。又其の地。後漢書、朱浮傳「六國之時其勢各盛、―數千里、勝兵將二百萬一」

【廓寧】クワクネイ　ひろめやすんずる。魏書「革二翰克儀一―二字內一」

【廓落】クワクラク　○心ひろく大いなり。落は落落。晉書、姚長載記「少聰哲、―任率、不レ修二行業一」○志を失ふ貌。落は零落。宋玉、九辨「―兮、羈旅而無二友生一」

【廓寥】クワクリョウ　ひろき大空。皇甫謐賦「志在二―一、踪依二泥盤一」‖寥廓。

【廖】レウ　姓。又、人の名。

【廔】ロウ　尤　○うしろ、せ(脊)屋脊。○麗しく明か。○俗に樓の借字とす。

十二畫

【廠】㊀キン　㊁ギン　寢　㊀つらぬ(陳)輿服を庭に陳ねる。○おこす(興)㊁ふさがる(塞)○いかる(怒)

【廣】㊀クワウ　㊁クヮウ　養　㊀ひろさ、ひろし(闊)「平―」「弘―」○ひろむ、ひろくする(擴大)「增―」○大いなり。○ゆたか(寬)心がのびのびして安し。大學「心―體胖」○州名、三國の時吳にて置く、今の―東・―西地方。㊁よこ(横)東西を―と爲し、南北を輪と爲す。○むなし。‖曠。ゆたか(泰)○兵車、十五乘を一―と爲す。左、宣二「分爲二―一」

【廣博】クワウハク　廣は狹の反、限り無く廣きこと。中庸「廣大配二天地一」○博は廣也、大也、幅廣き義、博聞・博愛と用ふ。論語「博學二於文一、約レ之以レ禮」○闊は疏也、遠也、廣也、兩方に限りありて、其の間のはば廣き意、濶は俗字なり。○弘は大なり、廣に近し、ひろむるとも濶む、德業心術等に用ふ、寬弘・恢弘の如し、形狀の上には用ひず。論語「人能弘レ道、非二道弘一人一」○汎は泛と同じ、うかぶとも濶む、深入りをせず、ぱっとしてひろきなり。論語「汎愛レ衆而親レ仁」○寬は博に近し、ゆったりと餘裕ありて廣きなり、窄の反にて、容るところある義、寬仁大度の類。

【廣運】クワウウン　○ひろくゆきわたる意、大禹謨「帝德―一、乃聖乃神、乃武乃文」○ひろさ。東西を廣、南北を運といふ。國語「廣二一百里一」‖廣袖。

【廣益】クワウエキ　ひろく益をなす。諸葛亮文「開二張聖聽一、以光二先帝遺一德一」

【廣衍】クワウエン　○ひろくたひらか。四京賦「爰乃―沃野、厥田上上」‖曠衍。○ひろくはびこる。晉書、裴頠傳「虛無之言、日以―一」

【廣漠】クワウバク　ひろめのべる。謝靈運文「―一無悲二鏡二益衆生一」

【廣庭】クワウテイ　ひろきいへ。漢書「―一之下、細論之上」‖大庭。

【廣寒府】クワウカンフ　月のみやこ、月宮殿。龍城錄「上皇與二申天師道士鴻都客一八月望日夜、因二天師作術一三人同遊二月中一、見二一大官府一、榜曰二廣寒清虛之府一」胡寅詩「卻疑身在二廣寒宮一」

【廣軌】クワウキ　鐵道の軌道の間の、四尺八寸以上あるもの。狹軌の對。

【廣義】クワウギ　○意味をひろめる。禮記、疏「此更爲レ解、說二倉說一亦廣二其義一也」○ひろき意味。狹義の對。

【廣求】クワウキウ　ひろくもとめる。漢書「猶二博取而一一一」

【廣居】クワウキョ　ひろきゐどころ、仁に喩へていふ。孟、滕文公「居二天下之一一一」

【廣虛】クワウキョ　廣大なる大ぞら。晉望詩「長軒遡二一一一」‖虛空。

【廣衢】クワウク　ひろきみち。梅堯臣詩「關レ池臨二一一一」

【廣狹】クワウケフ　ひろさと、せまさと。論衡「日體二天下一、遠近一一、難レ得レ量也」

【廣言】クワウゲン　おほぐちをきく。無遠慮にいふ。‖大言。

【廣告】コウコク 新聞雑誌に記載し、又は其他の方法にて廣く衆人に告げ知らす。

【廣坐】コウザ 大勢のすわれる場所。戰國策「衆人一一之中」‖廣座。

【廣濟】コウサイ ひろくすくふ。唐太宗文「神州陰祀、洪恩一一」

【廣袖】コウシウ ひろきひたひ。易經「毀子レ人也、爲二寬髮一爲一一」唐書、楊收傳「收一一澤頤、疏二眉目一、寡二言笑一」‖博額・闊額・廣顙。

【廣肆】コウシ ひろきみせ。高道素賦「通衢一一、大邑都城」

【廣樹】コウジュ ひろやかなるうてな。水經、注「連庭一一、炎暑之日、常以避レ暑」

【廣敞】コウシャウ ひろくほがらか。杜牧、雪中書懷詩「明庭開一一」

【廣成子】コウセイシ 古の仙人の名。莊、在宥「黃帝聞二一一在二空峒之上一、往見レ之、問曰、聞二子達於至道一、敢問レ治レ身、奈何以得二長久一」

【廣饒】コウジョウ 土地ひろくして物産がゆたか。詩經、鄭「齊地一一」

【廣資大幕】コウシダイボ 死者はとこしなへに臥る期なし、故に喩ふ。陸機詩「廣宵何寥廓、大幕安可レ晨」

【廣尿】コウセウ ひろき干潟に尿は鹽濱。廣闊なる尿鹵。曹、禹貢、海濱一一」

【廣結】コウケツ ひろきすなはら。諸葛亮文「長山一一、足二以自衛一」

【廣大】コウダイ ひろく大いなり。史、孔子世家「博辨一一」

【廣宅】コウタク ひろきいへ。後漢書、許武傳「買二一一一」

【廣長舌】コウチャウゼツ ひろく長きした。辯舌のすぐれたるにいふ。維摩經「菩薩以二一一一、一音中現二無量音一」蘇軾詩「溪聲便是一一、山色豈非二清淨身一」

【廣兆穹碑】コウテウキウヒ 廣き墓地と高き墓石と。

【廣莫】コウバク ひろきたかむしろ。許渾詩「河漢秋砧一一涼」

【廣筵】コウエン 幅のひろきみち。蜀都賦「書二方軌之一一一」‖廣途。

【廣莫】コウバク 廣漠に同じ、莫は漠の莊、道焉遊「一一之野」

【廣莫風】コウバクフウ 北方のかぜ。淮南子「天有二八風一、一曰一一」

【廣漠】コウバク 限りなくひろし。書、禹貢、注「一一而平廣」‖廣莫。

【廣眉】コウビ ひろきまゆ。漢書、馬援傳「城中好一一、四方且半額」

【廣被】コウヒ あまねくいづこまでもおほふ。東京賦「惠風一一」

【廣廈】コウカ ひろきひさし、四京雜記「客館皆一一高軒、屏風幹樹青廬」

【廣平賦】コウヘイノフ 宋廣平の作りし梅花の賦。錦字箋、宋璟字廣平、貞操勁質、其鐵腸石心、疑レ不レ能レ吐二嫻雅一、乃作二梅花賦一、則清便豔麗也、其警句云、竜語猶澀、蜂腰未レ暢、猶步二阜春一、自全二其天一」

【廣袤】コウボウ ひろく、東西を廣といひ、南北を袤といふ。史、建世家「一一六里」‖廣輪・縱橫。

【廣目天】コウモクテン 四天王の一、帝釋の外臣、四方を護る。

【廣野】コウヤ ひろきのはら。史、天官書「海旁蜃氣象二樓、臺一一一氣成二宮闕一」

【廣裕】コウユウ ひろくゆるやか。‖寬裕。

【廣覽】コウラン ひろく見る。晉書、郭璞傳「陛下玄鑒一一、欲レ知二其情狀一」‖博覽。

【廣柳車】コウリウシャ 喪に用ふるくるま。喪車。史、季布傳「置一一中一」

【廣輪】コウリン ひろき。東西を廣といひ、南北を輪といふ。周禮「大司徒周知二九州之地域一一之數一」‖廣袤・廣運。

【廣遶】コウゼウ ひろくはるか。雲笈七籤「雲起二大虛一、風生一一一」

【廣間】コウカン 園玄關の次にある廣き座敷。

【廣前】コウゼン 園神社。又、宮殿の前庭。‖大前。

【廠】シ 支 一に廝に作る

○めしつかひ、こもの(賤役者)○薪をとり又は馬を養ふもの。

【廠役】シエキ 奴僕などの賤しきつとめ。又、其の者。漢書「其賓客一一、皆天下俊傑」

【廠下】シカ 下賤の者。世說「出レ自二一一一一一不レ願二名器一」

【廠徒】シント まかなひなどするめしつかひ。史、蘇秦張儀傳「一一十萬」

【廠遽】シキョ 驛を取り、馬を買ふしもべ。史、張耳陳餘傳「有二一一一卒一」‖廝徒。

【廠】シャウ 養

○壁なき家(露舍)○うまや(馬屋)○今は多人數の工商などの業る所の稱「工一」「粥一」「菜一」

【廠獄】シャウゴク 明代勅命によりて捕へられし罪人を收容せし牢屋。廠は明代の官署の名、東廠、西廠あり、恒に內監を以て之を司らしめ、專ら詔獄を錄捕するの事を主る。‖詔獄。

【廚】チュ 厨 厨・廚は俗字

○くりや(庖屋、炊事場)「天一」「御一」「軍一」「庖」孟、梁惠王「君子遠庖一」○ぬし(主)○ひつ(櫃)はこ(箱)「書一」「衣一」○行一はわりご、べんたう(辨當)

【廚下】チウカ だいどころ。晉書、衛恒傳「還經一一一」

【廚娘】チウジョウ だいどころのかまど。李白詩「一一無二青烟一」

【廚人】チュジン 料理人、いたまへ。南史、梁安成王秀傳「一一進レ食」‖廚夫・庖人。
【廚房】チュバウ くりや、だいどころ、炊事場。‖庖廚。
【廚庖】チュバウ 料理の又くりや。長孫佐輔詩「洛來遠ニ一一」‖庖廚。
【廚婢】チュヒ 料理する召使女、めしたき女。膝夫錄「一一數百人」‖廚娘。
【廚貲】チュシ くりやの入費。魏書、甄琛傳「詔給ニ一一一」
【廚夫】チュフ 料理人。
【廚子】チュ 圖○調度書畫などを入れる箱。○佛像の龕を安置する箱。‖佛龕カン

【廛】テン 先 又鄽に作る

○やしき(市鄽)「市ー」「邑ー」「郊ー」一夫の宅地。○みせ、物を賣る店(店鋪)「肆ー」○商店より稅を取る。禮、王制「市ー而不稅」店の稅のみを取りて、商品には稅を課せず。
【廛市】シン みせ、まちや。
【廛肆】シン みせ。宋書、謝莊傳「貨戚競レ利、興ニ貨ー一者、悉皆禁斷」
【廛鋪】ホン みせ。‖廛肆。

【廢】ハイ 霽

○いへかたぶく(屋傾)「頽ー」○すつ、すたる(舍)不用になる「久ー」「隳ー」「棄ー」○かたは(不具)又、不治の病。古、癈に通ず。○やめる(止・罷)とどまる。○はなちおく(放置)○ゆるぶ(弛)「弛ー」禮、學記「敎之所ニ由ー一也」○大いなり。○おとす、おつ(墮)左、定三「ー於爐炭」○ふす(伏)史、淮陰侯傳「千人皆ー」
【廢案】ハイアン 廢止となりて行はれざる議案。又は其の考案。
【廢督】ハイトク すたれたるぢんや。李商隱詩「荒村倚ニ一一」
【廢苑】ハイエン あれすたれしその、荒廢せし園。潘賢詩「一一發花靈、荒寒燕麥生」‖廢園。
【廢屋】ハイオク 住人なきあばらや。‖破屋・廢宅。
【廢家】ハイカ ○家督を相續する人なくして、ちすぢが絶える。‖絕家。○戶主が他家に入りしため其の家をつぶす。
【廢學】ハイガク 學問することをやめる。列女傳「一レ一如レ斷レ機」
【廢格沮誹】ハイカクソヒ 天子の文法を廢止し、上の行爲を沮み誹るをいふ【史、平準書】
【廢刊】ハイカン 新聞雜誌等の刊行をやめる。
【廢棄】ハイキ すてる、やめる。
【廢居】ハイキョ 廢棄すべき物と、貯藏し置く可き物とを分ち、機を見て利を得る義。漢書、食貨志「一一居レ邑」‖廢著。
【廢遲】ハイチ すたれたるみぞ。王維詩「雨水洗ニ荒竹、淡沙填ニ一一」
【廢墟】ハイキョ 城又は家・市街などのほろびしあと。韓維詩「寒花亂ニ一一」‖廢址。
【廢棄】ハイキ 商人が物價低ければ之を廢置して出だざず、高ければ之を擧げ出だす義。史、仲尼弟子傳「子貢訐ニ一一與レ時轉ニ貨貲一」‖廢居。
【廢官】ハイクワン ○廢止せし官職。○官職をやめる。
【廢缺】ハイケツ すたれかく。班昭、女誡「夫不レ御レ鑒、則威儀ー一」
【廢業】ハイギョウ しごとをやめる。後漢書「其輕黠游蕩、ー一爲レ患者」
【廢語】ハイゴ 圖現在通用せざることば。‖死語。
【廢錮】ハイコ 終身仕進の路を塞ぐ義。漢書、息夫躬傳「躬同族親屬、棄所レ厚者、皆免ー一」
【廢后】ハイコウ 皇后の位を奪ひ取る。又、其の處分を受けたる皇后。
【廢興】ハイコウ すたるると、おこると。陳子昂詩「太極生ニ天地一、三元更ー一」‖興亡・興廢。
【廢址】ハイシ 城・家などのすたれたるあと。陳子詩「我儕遭レ此勤ニ一一」‖廢墟。
【廢止】ハイシ やめる。‖廢罷。
【廢疾】ハイシツ 不具のやまひ【禮、禮運】‖痩疾。
【廢惡】ハイアク やぶれたること。鮑溶詩「一一難レ爲レ綵」
【廢娼】ハイショウ 娼妓の公許をやめる。‖廢倡。
【廢書】ハイショ 感ずる所ありて讀みかけし書物を掩ひて讀まず。史、孟軻傳「未ニ嘗不ニ一レ一而歎ニ也」
【廢職】ハイショク 職務を怠るつかさ。張說、喜雨賦「幷驅ニ其ー一」‖祝融悔ニ其遲怠ニ」
【廢絕】ハイゼツ すたれたえる。劉歆文「不レ思ニ一一之闕ニ」
【廢退】ハイタイ 官職をやめ、又はしりぞく【論衡】‖罷退。
【廢刀】ハイトウ 圖士人の帶刀を止むる「一一令」
【廢宅】ハイタク 住む人なきあばらや。‖廢屋。
【廢置】ハイチ やむると、其のままおくと。廢止と、存設と。周禮、太宰「一

ー以叙二其吏一」
【廢黜】官職を廢止する。
【廢嫡】長子の相續者たるべきことを廢止する處分。
【廢罷】官職をとりあげ、しりぞける。晉書「ー二ー功臣一」＝免黜。
【廢除】やめのぞく。
【廢帝】天皇の位をうばはれた人。又、其の處分を受けし皇帝。
【廢朝】天子の凶事又は其の他の事故によりて朝政を視たまはざる義。晉書「咸寧二年正月以疾疫ー一」＝罷朝。
【廢典】〇すたれたる儀式。〇儀式をやめる。後漢書「善人國之紀也、制作國之典也、滅レ紀ーレー、其能久乎」
【廢屈】世にすてられて屈者コヒスとなれる者。戰國策「太公望齊之逐夫、胡歟之ー一」
【廢絀】すてやむ（宋書、周朗傳）＝廢止。
【廢忘】捨てわすれる。儀法決疑經「ー二ー經業一」
【廢藩置縣】（圖）明治四年十一月、諸藩を廢し、改めて全國を、三府七十二縣に分ち、郡縣の制を定めしをいふ。
【廢物】やくにたたぬもの、不用の物「ー一利用」吳越春秋「畢爲二ー一」
【廢優】すたれゆるむ。漢書「今ー一弛」
【廢務】國葬などにて天子の廢朝せらるる時、官吏の政務を執らざるをいふ。文獻通考「ーレー禁レ樂三日」
【廢滅】すたりほろぶる。
【廢立】今の君主をやめさせて別の人を君主に立てる。

【廡】㊀ブ ㊁ブ 廣 麌

㊀ひさし（廂）堂下の周屋「門ー」ほそどの（廊）〇のき、屋宇。漢書「覆以屋ー一」〇おほふ（覆）〇大いなる屋「大ー」㊁蕃ーは草木の盛んに茂る貌。書、洪範「庶草蕃ー」
【廡下】のきした。史、李斯傳「居二大廈之下一、不レ見二人犬之憂一」

【廟】ベウ メウ 㒳

〇おたまや、祖先の神靈をまつる殿堂（霊屋）「宗ー」「祖ー」「高ー」「家ー」「靈ー」古今注「ー、貌也、所以彷彿先人之形容也」〇やしろ、鬼神聖賢を祭れる堂舍。史、封禪書「作二渭陽五帝一」〇王宮の前殿、政を行ふ所「ー堂」「廊ー」〇東西に廂のあるへや「寢ー」
【廟宇】おたまや、やしろ。宋書、禮志「ー一之側」先帝のいみな。唐書、百官志「國忌ー一、卜筮營レ」
【廟議】朝廷の上の評議。唐書、朱子奢傳「歷代ー一」＝朝議。
【廟犧】祭にそなへるいけにへ。隨游詩「ー一烏得レ爲二孤豚一」＝廟牲。
【廟見】婦人が嫁して始めて夫家の廟に參詣するをいふ。儀禮「婦三月而ー一」
【廟算】朝廷のはかりごと。古は宗廟に於て謀を定む、故にいふ。孫子、始計「兵未レ戰而ー一勝者、得レ算多也」＝廟謀。
【廟祠】おたまや、やしろ。水經、注「岸上猶有ニー一祠前有二石碑三所一」
【廟室】おたまや、祖先の靈をまつるへや。南史「ー一頽毀」
【廟焼】おたまや、前に在るを廟、後に在るを寢といふ。晉書、賀循傳「別立二ー一一」
【廟社】やしろ、宗廟と、社稷と。韓愈文「來獻二闕下一、以告二ー一一」＝宗社。
【廟親】廟社内にて香火の事を司る者、はふり。
【廟勝】廟堂に坐して勝つ、戰はずして計略にて克つ。孫子「不戰而屈二人之兵一、ー一之術也」漢書、趙充國傳「非二深定ー一之册一」册は策。
【廟堂】祖先のおたまやにて其の功績を證美する樂歌（後漢書、儒林傳）
【廟食】おたまやに祭られる。後漢書、梁鴻傳「大丈夫居レ世、生當二封侯一、死當二ー一一」
【廟堂】〇宗廟の義。禮、禮運「ー一之上、羣黨在レ阼、綴緒在レ西」〇古、政を議し事を行ふには、宗廟に於てし、之を祖先の靈に告げしが故に、轉じて朝廷の義に用ふ。晉書、類傳「夫修二之於ー一之上一、而折二衝乎千里外一」
【廟塔】佛像を安置するところ。唐書、薛懷傳「武后緯二浮屠一、立二ー一一」
【廟廷】おたまやの庭。儀志、齊王芳紀「太祖ー一」＝廟庭・廟堂。
【廟庭】前條に同じ。
【廟兆】おたまや、兆は墓地。
【廟祧】おたまや。祧は上去なり、七世以上の遠祖の廟は之を遷す、之を遷廟といふ、即ち祧（周禮、春官）＝祧廟。
【廟貌】おたまや、彷彿として死者の容貌を見るの義に取る。諸葛亮文「ーー廢去、使二人獣見一」＝宗廟。
【廟碑】おたまやに立つる石ぶみ。元史、文宗紀「賜二上都孔子ー一一」
【廟謨】朝廷のはかりごと。後漢書、光武紀贊「明明ー一、越超雄圖」＝廟略・廟謀・廟算。
【廟謀】朝廷のはかりごと。杜甫詩

「猛將紛填委、一一書二長策一」‖廟謨・廟略。

【廟廊】ベウラウ　朝廷をいふ。顔延之詩「一一實養成レ絲」

【廟略】ベウリヤク　朝廷のはかりごと。晉書、羊祜傳「外揚二王化一、内經二一一一」‖廟謀・廟圖。

十三畫

【廨】カイ　ゲ　㊥　解は俗字

おほやけのいへ（官舍）やくしょ、公一」

【廨署】クワイシヨ　やくしょ。東都賦「營屯聯北、一一棊布」‖官衙・官廳。

【廥】クワイ　㊥

○まぐさぐら（芻藁之藏）「芻一」「糧一」○一積は星の名。

【廩】シャウ　㊥

○かき。‖廡。○こもの（小臣）「一夫」㊀に通ず。

【廩】リン　㊥　本㊀に作り、或は稟に作る

○こめぐら（米倉）穀藏を倉、米藏をーといふ「官一」「州一」「義一」○米ぐらに入れる。○ふち（俸祿）「俸一」○あやふし（危）懍に通ず。○米一は舜の世の學校の稱。禮、明堂位「米一有虞氏之庠也」

【廩薦】リンセン　おくら米のたくはへ。唐書、劉貫傳「一一不レ乏矣」

【廩倉】リンサウ　米ぐら。漢書、東方朔傳「珍寶充レ内、外有二一一一」

【廩人】リンジン　くらばん。米穀の出納を掌る者。孟、萬章「一一繼レ粟、庖人繼レ肉」

【廩振】リンシン　くらの米を出してすくふ。振は賑。魏志、劉靖傳「蘇寤孤獨、發二一一之實一」

【廩食】リンシヨク　官より給するふち米の漢書、蘇武傳「一一不レ至」

【廩生】リンセイ　○科擧の時、府縣學の生員の食料を給せらるる者の稱。○官費生、舊し古の學校を米廩といひしに本づく。

【廩稍】リンセウ　官より給する食料の稍はやや、少しづつ分ち給する義。宋、送二東陽馬生一序「今諸生學二於太學一、縣官日有二一一之供一」

【廩粟】リンゾク　○くらにあるもみ。宋史、眞宗紀「民饑、貸以二一一一」○官より給するもみ。韓愈、進學解「談藝二一一一」

【廩餼】リンキ　ふち米、俸給。梁書、嚴植之傳「疾後便不レ受二一一一」

【廩庾】リンユ　米ぐら。邑に在るを廩、野に在るを庾といふ。史、平準書「民則人給家足、都鄙一一皆滿」

【廩料】リンリヤウ　あてがひぶち、俸米。唐書「供二筆札一一」

十六畫

【廬】㊀リヨ・ロ　㊁ロ・ル　㊥㊧

○いほり（草庵）「草一」「蝸一」○かりや（假寓）田の中の屋へ○とのゐのへ、宿直の舍。○讀書のへや「精一」○よる（寄）はたごや（候舍）いほりす、草舍を構へて住む。史、孔子世家「唯子貢一于墓上、凡六年、然後去」○山の名、江西省九江府に在り。‖匡廬。

【廬庵】リヨアン　いほり。趙孟頫詩「相期結二一一一」‖廬舍。

【廬墓】リヨボ　死者に事ふる爲めに、墓側に建つるいほり。方干詩「才高登二上第一、孝極致二一一一」‖廬墓。

【廬屋】ロオク　いほり。陶賢、居廬觀詩「環レ郭列二墟市一、繚レ垣構二一一一」

【廬山】ロザン　山の名、字解を見よ。史、河渠書「余南登二一一一、觀二禹疏二九江一」‖匡岑・匡阜。

【廬山眞面目】ロザンシンメンモク　廬山の實際の形狀、轉じて眞ひ知り難き眞相の義とす。蘇軾詩「橫看成レ嶺側成レ峯、遠近高低各不レ同、不レ識――、只緣二身在二此山中一」とあるに本づく。

【廬兒】ロジ　めしつかひのもの。漢書、鄧禹傳「蒼頭一一、皆用致レ富」

【廬舍】ロシヤ　いほり。史、項羽紀「破二釜甑一、燒二一一一」

【廬舍那佛】ロシヤナブツ　毘――の略、其の德普遍にして照らさざるなき佛、大日如來の稱。觀譯名義集「賢首梵、本盧舍那、氏云二光明編照一」

【廬宅】ロタク　いほり、いへ。魏志、文帝紀「殺二人民一築二一一一」‖廬舍。

【廬阜】ロフ　廬山をいふ。高僧傳「慧遠、居二一一一三十餘年、化書二道俗一」

【廬墓】ロボ　父母又は先生長者の死を悲しむ餘り、其の墓の旁にいほりを結びて住む。字解參看。

【廬落】ロラク　人家のあつまれるむらざと、廬舍村落の義。後漢書、應劭傳「一一之居」

【廬陵】ロリヨウ　○兩漢竝に唐宋以後の縣名、今の江西省吉安縣の南、宋の歐陽修・文天祥の鄉里。○歐陽修の號。

十八畫

【廱】ヨウ　多　雍・雝に通ず

○やはらぐ（和樂）○ふさがる。‖壅。○辟一は古の天子の學校。

【廱廱】ヨウヨウ　和み樂む貌。詩、泮水「一一優優、和也」‖雍雍。

廿二畫

【廳】 テイ　チャウ　青

○やくしょ（官署）「公ー」「官ー」「郡ー」「邑ー」古、聽に作る。六朝以來广を加ふ。○いへ（屋）へや（室）洛陽名園記「涼樹錦ー」

【聽事】チャウ　おもてざしき。宋史、李沆傳「ーー前、惟容ン旋ン馬」

廴部

三畫

【廷】 ィン　軫

○ひく（延）＝引。○長く行く。

四畫

【延】 エン　先

○ひく（引）しきのぶる（鋪陳）のべひろげる。○すすむ（進）○ながし（長）○とほし（遠）○ひろさ（廣）○しりぞく（卻退）○とどこほる、のびのびになる（滯）「遷ー」○およぶ（及）書、大禹謨「賞ーー于世」○いる（納）招き呼ぶ「招ー」漢書、公孫弘傳「開東閣以ーー賢人」

同訓異義　ア延・述・陳・宣・展・申・伸等の別は述（述部五畫）の條を見よ。○延・率・引・挽・曳等の別は率（牛部七畫）の條を見よ。

【延引】エンイン　ひきのばす。又、ながく、おくれる、遲延する。通鑑、唐懿宗紀「ーー二歲月、賊勢益張」

【延閣】エンカク　ながくつらなりたる高どの。拾遺記「有ン善ン屋文ン者ン處ン于層樓ーー之上、以望ン氣象ー」

【延眺】エンチョウ　遠くながめる。范浚詩「應擕得ニーーー」

【延企】エンキ　首をのべ足をつまだてて遠くを望む。曹植詩「登ン高丘ン以ーー」

【延期】エンキ　ひのべ、定めたる期限をのばす。＝展期。

【延喜式】エンギシキ　國五十卷、醍醐帝の朝、藤原忠平等、命を受けて撰す、禁中の年中儀式、百官臨時の作法、諸國の恒式を記す。

【延頸】エンケイ　首をのばして待つ、待ち遠く思ふ。漢書、張飛傳「思ン漢之士ーー鶴望」＝翹望・翹首・鶴首・延企。

【延見】エンケン　客を延きて面會する。漢書「數臨ニ正殿ー一ニ羣臣ー」＝引見・接見。

【延請】エンシャウ　ひきつけてすすめる。宋史、文苑傳「並加ニーーー」

【延壽】エンジュ　ながいき。又、いのちをのばす。王延壽、魯靈光殿賦「保ニーー而宜ニ子孫ー」＝延命。

【延壽客】エンジュカク　菊の異名。仙書「菜英爲ニ辟邪翁ー一菊花爲ニーーー」

【延袤】エンバウ　國の一部、後頭窩底部の斜面下にありて下部は脊髓に連る。

【延聲】エンセイ　名譽をしきのべる。宋書「不ニ矯ン俗以ーー一、不ニ依ン世以期ーン榮」

【延燒】エンセウ　近火が及ぼしやける。史記「ーー二千餘家ー」

【延接】エンセツ　人をひきて面接する。宋史、王沔傳「許ン於ニ都堂ーー一ニ延見ー」

【延佇】エンチョ　ながくつつくさいはひ。班固、西京賦「歷ニ十二之ーー一ニ」

【延滯】エンタイ　のびとどこほる。

【延長】エンチャウ　○ながくのびる。詩經、疏「商之先君、受ニ天之命ー一年世ーー」○ながき、ひろさ。

【延竚】エンチョ　首をのべ久しくたたずみて望む。屈原、離騷「ーー乎吾將ン反」＝延企。

【延貯】エンチョ　前條に同じ。楚辭、招ニ桂枝ー兮ーー」

【延眺】エンテウ　頸ュを引きて遠くながめる。唐書、韋弘機傳「ーー其久寮ニ其美ー」

【延登】エントウ　初めて官に拜する時、天子が其の人を延き入れて、殿に登らしめ、親ら詔を下す。漢書、五行志「ーー受ン策」

【延年】エンネン　としをのばす、いのちを長くする。又、ながいき。漢書、李尋傳「ーー益壽」＝延命・長命・長壽・延壽・延齡。

【延命】エンメイ　ながいきする。參同契「養ン性ーン一」＝延壽・延齡。

【延慕】エンボ　其の美をほめて弘く聞えしめる。晉書、張華傳「窮賤之士、有ニ一介之善ー者、咸稱嗟慕、爲ンン之ーー」

【延攬】エンラン　人を延きよせて其の心を收攬する。後漢書、鄧禹傳「方今之計、莫ン如下ーニ一英雄一務悅ニ民心ー」

【延留】エンリュウ　ながくとどまる。宋史、大食國傳「館ーー數月」

【延陵】エンリョウ　地名、今の江蘇省武進縣の治、春秋の時、吳の季札此に居りーー季子と稱す。

【延齡】エンレイ　いのちをのばす。宋之問文「探ン道之期、體ン物貫ン身、尚ニーー之術ー」＝延命・延壽。

【廷】 テイ　庚　青　徑

ゆく（行）＝征。

○まつりごとを行ふ所「朝―」「外―」「縣―」又、裁判をする所「法―」庭に通ず。○なほし(直)たひらか(平)ただし(正)○とどまる(停)

【廷尉】テイヰ ○秦漢の世、刑獄をつかさどる官。廷は平、治獄は平を貴ぶ、故に名づく。史、張釋之傳「―天下之平也」○圖檢非違使の佐ス(次官)の唐名。

【廷毀】テイキ 朝廷にて公然とそしる。史、袁盎傳「今兒――我」

【廷議】テイギ 朝廷の評議、政府の意見。‖朝議

【廷爭】テイサウ 君主の面前にていさめ爭ふ。史、呂后紀「面折―」‖廷諍。庭爭。

【廷杖】テイヂヤウ 前條に同じ。後漢書、王陵傳「于二面折―一、臣不レ如レ君」

【廷叱】テイシツ 朝廷にて君主をしかりつける。史、廉相如傳「夫以二秦王之威一而相如―二之一」

【廷丁】テイテイ 圖裁判所の小使。

【廷辯】テイベン 朝廷にて辯論する。宋史、職官志「大事則―、小事則奏彈」

【廸】 五畫

迪（走部五畫）の俗字。

【廻】 六畫

クヮイ 医 回・囘・廻に同じ

めぐる、かへる。

【廻棨】クヮイケイ めぐる。李白詩「相隨遐訪二仙城一、三十六曲水―一」

【廻廊】クヮイラウ ふりかへる。蘇軾詩「下有二四老人一對レ局不二―一」

【廻國】クヮイコク 圖諸國をめぐり歩く。―一順禮」

【廻斜】クヮイシヤ ななめにめぐる。梁簡文帝、行雨山銘「紫水―一」

【廻狀】クヮイジヤウ 圖名宛を連名にして順次にまはして通知する書狀。‖廻文・移文。

【廻檣】クヮイシヤウ かぢをめぐらし舟をかへす、舟の方向を變へる。燕戀、濟二黃河一詩「!レ―避二近磧一、放レ舳下二前洲一」‖回棹。

【廻旋】クヮイセン ○めぐる。めぐらす。史記「國小地狹、不レ足二―一」○くるくるとめぐる。舊唐書、回紇傳「元和四年、改爲二回鶻一、義取二―輕捷如レ鶻也」

【廻汀】クヮイテイ めぐれるみぎは。李商隱、雨詩「瀟湘夜二―一、依微過二短亭一」

【廻曉】クヮイケウ ふりかへりながめる。李嶠詩「長安望二川阜一、―一窮二原澤一」

【廻天倒日之力】クヮイテンタウジツノチカラ 力の極めて大なる義。陸機、弔二魏武帝一文「夫以二――而不レ能レ攄二彩雲之內一」

【廻天之力】クヮイテンノチカラ 天をめぐらす力の義、天子の心を善き方に轉じさせる力。唐書、張元素傳「張公論レ事、有二――一」

【廻風】クヮイフウ つむじかぜ。杜甫詩「急雪舞二―一」‖旋風・羊角。

【廻鑾】クヮイラン 天子のみくるまをめぐらす。唐太宗詩「―一游二福地一、極目玩二芳辰一」

【建】 ㊀ケン・コン ㊁ケン・コン 阮 願

㊀たつ(立)「新―」「興―」おく(置)○起す、創める、設く。○家を造る「―築」○北斗の柄の指す所、陰暦正月を―寅、二月を―卯といふ。○福建省の簡稱。㊁こぼす、くつがへす(覆)史、高帝紀「猶居高屋之上二―瓴水一也」○鍵(金部九畫)に通ず。

同訓異字 建・立・豎・植・樹・起○建は立てると、始むるとの意を兼ぬ、建レ國とは、國家を開き始むる義。易經「天造草昧、利レ建レ侯」○立はしかとたてるなり。論語「子路拱而立」又、轉用して、立レ身・立レ家などとも用ふ。○豎は横なる物を豎ゆる義、横渡豎設の類、立と通用す。又、たてと訓みて名詞としても用ふ。○植は水を植ゑ立つる義より轉用す。論語「植二其杖一而芸」○樹は植に同じ、樹レ德・樹レ黨などと連用す。○起は坐より身を起して立つ義、詩レ樂則起の如し。作・興の二字、古書には、たつと讀みて起と同じく用ふ。

【建安七子】ケンアンシチシ 建安年間、孔融・陳琳・王粲・徐幹・阮瑀・應瑒・劉楨の七人、皆文章を以て名を齊くす、故にいふ、同じく鄴中に居る、故に鄴中七子ともいふ。次條參看。

【建安體】ケンアンタイ 後漢の獻帝の建安年間に孔融・陳琳等の建安七子が作りし詩の體(古詩紀)前條參看。

【建窯】ケンエウ 磁器の名、福建省建化縣に出づ、其の色白潤、佛像尤も佳なり。‖建化窯。

【建牙】ケンガ 牙旗をたてる、武臣の出でて旗するにいふ。南史、孝武帝紀「―二―於軍門一」

【建業】ケンカウ 兵器をふくろに入れをさめて復用ひず、建は鍵、鎖ざす義、世の治まるをいふ。禮、樂記「車甲蔵二而藏一之府庫一而弗二復用一倒二載干戈一、包レ之以二虎皮一、將帥之士、使レ爲二諸侯一名之曰二――一」‖鍵龕。

【建議】ケンギ 上へ意見を申し上げる。南史、司馬褧傳「所二――一、多見二施行一」

【建極】ケンキヨク 民の法則とすべき人倫の根本たる大中の道をたてる。書、洪範「皇建二其有極一」‖建中。

【建業】ケンゲフ 地名、今の江蘇省江寧縣。‖金陵・秣陵・建康・南京。

【建言】ケン　上に意見を申し上げる。‖建白。

【建功】コウ　いさををたてる。陸機文「立レ徳之基有レ常、而一レ之路不レ一」

【建國】コク　國家のもとゐをたてる。周禮、天官「惟王一レ、體レ國經レ野」‖肇國・開國。

【建造】ゾウ　○つくりたてる。王子先賦「特申二一レ之始一」○建物をたてる。

【建造物】ブツ　家屋・倉庫などの如きつくりたてたるもの。‖建築物。

【建策】サク　はかりごとをたてる。揚雄、解嘲「掉三寸之舌、建二不拔之策一」

【建旌】セイ　はたをたてる。徐幹文「夫登レ高而一レ、則其所レ觀者廣矣」

【建設】セツ　たてまうける。漢書、一一王列「以強二守國一」

【建設】セツ　たておく。晉劉文「樹猶二親戚一、土猶二士民一一不レ久則輕レ下慢レ上」

【建築】チク　家倉等をたてる。‖建立。

【建仁寺垣】ケンニンジガキ　國割竹をならべ、横竹を四・五段に結びつけし垣。京都の建仁寺にて作りしに始まる。

【建白】ハク　上に意見を申し上げる。唐書、宦者傳「每一一必阿邑倡和」‖建言。

【建明】メイ　政事をおこしあきらかにする。楊惲文「不レ能レ以二此時一有レ所一一」

【建蘭】ラン　福建省に産する蘭の一種、葉の上部に數花を開く淡黄綠色にして香氣幽雅なり。

【建立】リフ　○たつ。魏志、注「舒作二政教一以一一名譽一」○國寺院などをたてる。

【建碗】ワン　建は甌、甌は瓶、瓶の水を屋上よりこぼす義、勢の強きに喩ふ。史、高帝紀「猶二居二高屋之上一、一一水上也」

【建具】グ　國戸・障子の類

【建坪】ツボ　國たてものの坪數。一坪は六尺四方の面積。

【廼】

迺（辵部六畫）の誤字。

廾部

【廾】キョウ　㊀

手をこまぬく（拱手）

一畫

【廿】ジフ　㊁

或は卅に作る

はたち、二十を幷せたる字。

【廿日草】グサ　國牡丹の異名。白居易詩「花開花落二十日、一城之人皆如レ狂」とあるに本づく。

二畫

【弁】

㊀ヘン・ベン　㊁ハン　㊂ベン

㊀かんむり（冕）特に武官用のもの「武一」○ののく（戰）おそれる（懼）戰慄する。漢書、嚴延傳「吏皆股一」○いそぐ（急）はやし（疾）○てうちにする（手搏）○赤一丈人は蜻蜓の異名。㊁たのし、たのしむ（樂）詩、小雅「一彼猶斯」‖般。○國辨の略字とするは非。

【弁韓】カン　古の國の名、今の朝鮮の東南部にして、慶尚南道の大部分を據有す。‖弁辰。

【弁言】ゲン　書物のはしがき、書物のかんむりの義、弁を辨に作るは誤。‖序言。

【弁髦】ベウ　弁は元服の時に一度被る編布冠、髦は童子の垂髪、元服の禮は、始に編布冠を加へて垂髪を斂め括り、次に皮弁を加へ、次に爵弁を加へ、三加の後、始冠の弁と垂髪とを棄て去りて、復用ひず、よりて無用の物に喩ふ。左、昭九「文武成康之建二母弟一以藩二屏周一、亦其廢棄是爲也、豈如一一而因以敝レ之」

【弁兵】ヘイ　國下級の武官。‖弁目・武弁。

【弁目】モク　弁兵に同じ。

三畫

【昇】

㊀イ　㊁イ　支　頑

㊀しりぞく（退）○やむ（已）○なげく（歎）㊁異に通ず。

【弁】

四畫

棄（木部八畫）の古字。

【弄】

ロウ　㊀　送

○もてあそぶ、手に持ちて翫む（玩）おもちゃ「玩一」○あなどり。あなどる（侮）からかふ「嘲一」「愚一」○たはむる。たはむれ（戲）左、僖九「夷吾弱不レ好レ一」○音樂のしらべ（樂曲）「曲一」「清一」樂を奏する。

同訓異字　弄・玩・翫の間は玩（玉部四畫）の條を見よ。

【弄戲】ギ　あそびたはむる。國語「夷吾之少也、不レ好一一」

【弄巧】コウ　巧を用ひすぎる、小刀細工。黄庭堅、摸軒頌「一一成拙、猶レ蛇添レ足」

【弄吭】コウ　鳥の囀ずるをいふ。弄一に哢に作る。吭はのど（喉）左思、蜀都賦「雲飛水宿、一一清渠一」

【弄輪】リン　車をもてあそびて書畫をかく。宣和畫譜「用一一遊戲」

【弄玉】ギョク　周代の秦の穆公の女、蕭史に適けり、弄玉、簫を吹き鳳鳴

をなせば、鳳來りて其の屋に止まる、公爲めに鳳凰を作る。

【弄瓦】ロウグワ　女子を生むをいふ。瓦は紡塼ナリ詩、小雅、斯干「乃生二女子一、載寢二之地一、載衣二之裼一、載弄二之瓦一」

【弄花】ロウクワ　○はなをもてあそぶこと。沈佺期詩「啼鳥ノレ一ノレ疎」○圖花合をする。又、はなあはせ。

【弄丸】ロウグワン　○玉を空に投げ、手にうけて弄ぶわざ。莊子「市南宜僚ノレ一、而兩家之難解」○蝦蟆クワの異名。

【弄玩】ロウグワン　愛翫もてあそぶ。幽明錄「得二一大琢徑數十一明耀絕世、帝甚愛ノレ一」＝玩弄。

【弄月】ロウグワツ　月をながめ樂む。宋史、周子傳「程顥曰、自三與見二周茂叔一後、吟ノ風ノレ一ノレ以歸、有二吾與レ點也之意一」

【弄權】ロウケン　私に政權をもてあそぶ。貫師泰詩「縣官出巡防、小吏爭ノレ一」

【弄姿】ロウシ　すがたをかざりて媚る。媚態を作す。後漢書、李固傳「胡粉飾レ貌、搖頭ノレ一」

【弄舌】ロウゼツ　ことをしらべる。

【弄臣】ロウシン　人君のなぐさみものとなる小臣、狎玩の臣。史、鄧通相加傳「以能ニ一ノレ一」

【弄璋】ロウシヤウ　男子を生むをいふ。詩、小雅、斯干「乃生二男子一、載寢二之牀一、載衣二之裳一、載弄二之璋一」璋は玉、德を玉に比せんことを欲す。

【弄晴】ロウセイ　晴天に乘じて遊び樂む。蘇軾詩「且看鵲鵲弄二新晴一」

【弄簫】ロウセウ　ふえをふく。陳陶詩「巫娥ノレ一吾雨收、江綃挹レ愁魚龍愁」

【弄舌】ロウゼツ　しゃべる。歐陽修賦「蠭蜂兮、轉レ喉ノレ一」

【弄法】ロウハフ　おきてをもてあそぶ、法律をまげる。史記「吏士舞レ文ノレ一、劉章倨書」

【弄筆】ロウヒツ　事實をまげて巧に筆をまはして書く。晉書「汝望ノレ一當レ置二吾何地一」＝舞文。

五畫

【弄】キョ　語

をさむ（藏）「藏ノレ一」又、通じて去に作る。漢書、陳遵傳「性善レ書、與二人尺牘一皆藏去以爲レ榮」

六畫

【弈】エキ　ヤク　陌

俗に奕と混用するは非

ごご（圍棋）ばくち「博ノレ一」

【弇】㊀エン　㊁カン　琰　豏

㊀おほふ（蓋）○口小に中寬き器の稱。○せまきみち（狹道・隘路）左、襄二五「行及ノレ一中」○内に向く。㊁おほふ。

十一畫

【弊】　奘（大部十一畫）に同じ。

十二畫

【弊】ヘイ　霽　又、斃に作る

○やぶる（敗壞）やぶれきれる「垢ノレ一」○つかれる（罷疲）つからせる「衰ノレ一」「困ノレ一」「疲ノレ一」左、襄二七「以二證道ノレ一諸侯」くるしむ（困）○あし（惡・害）「宿ノレ一」「時ノレ一」「積ノレ一」○ノレ一は心力をつからして經營する貌。たふる、たふす（仆）「踣ノレ一」○さだむ、きめる（斷）○己の物事を縻していふ「ノレ國」「ノレ店」

同訓異字　弊・破・敗・壞・傷・毀等の別は破（石部五畫）の條を見よ。

【弊法】ヘイハフ　國家の疲弊せる儀を引き繼ぐ。魏志、文帝紀、注「六國力戰、強秦ノレ一」＝承ノレ敝。

【弊屋】ヘイヲク　己の家の謙稱。＝弊宅。

【弊害】ヘイガイ　あしきつひえ、あしきこと。

【弊國】ヘイコク　己の國の謙稱。＝弊邦。

【弊困】ヘイコン　つかれ苦しむ。蕭穎士文「志力ノレ一、未ノレ堪ノレ詣ノレ府」＝困弊・弊憊。

【弊帷】ヘイヰ　やぶれたる帷を千金の價ありとす、身の程を知らざる過失に喩ふ。魏文帝文「典論曰、家有二一ノレ享二之千金一、斯不二自見一之患也」

【弊習】ヘイシフ　よからぬくせ。＝弊風。

【弊袂】ヘイベイ　ふるびたるたもと。宋史、舒璘傳「ノレ一疏帙、總是佳趣、櫛沐風雨、反爲二美境一」

【弊廬】ヘイロ　ふるきわた。世說「法師今日如下著ニノレ一在ニ荊棘中一之」

【弊政】ヘイセイ　あしきまつりごと。＝秕政・惡政。

【弊寶】ヘイホウ　弊害の存する點。寶は穴。

【弊邦】ヘイハウ　己の國の謙稱。＝弊國。

【弊風】ヘイフウ　あしきならはし。＝弊習・弊俗。

【弊弊】ヘイヘイ　骨折りて經營する貌。莊、逍遙遊「ノレ一然以二天下一爲レ事」

弋部

【弋】ヨク　職

○いぐるみ、絲を矢につなぎて飛鳥を射る法（繳射）論、述而「ノレ不レ射レ宿」宿は宿鳥リウト　○いぐるみにて取る。轉じてとる（取）○うかぶ、水に浮きおよぐ。○くひ（杙）○くろ（黑色）「ノレ絳」

【弋獲】ヨククワク　いぐるみにてとる。詩經「如二彼飛鳥一、時ホノレ一」＝射得。

【弋射】ヨクシヤ　いぐるみにて鳥を取る。

宋史、眞德秀傳「盤游―之娯、禽荒狗馬之玩、有一于玆、皆足レ害レ敬」

【弋繳】シャク いぐるみ。敬括賦「畢終―之一」＝繳射・弋矰。

【弋取】シャク いぐるみにて射取る。

【弋矰】シャク いぐるみ。曹潤詩「―何苦繳二寒鴻一」＝弋繳。

【弋綈】ヨクテイ 黒色のつむぎ。漢書、文帝紀贊「身衣二―一」＝皂綈。

【弋釣】ヨクチョウ いぐるみにて鳥をとらへ、つりをたれて魚をとらふ。晉書「惟以二―一爲レ事」

【弋繳】ヨクシャク いぐるみと、あみと。白居易詩「高喜三歸鴻脫二―一」

【弋獲】ヨクカク いぐるみにて鳥を取る。漢書、賈山傳「馳騁―之娯」＝弋射。

【弌】 一 畫

一（部首一畫）の古字。

【弍】 二 畫

二（部首二畫）の古字。

【弎】 三 畫

三（一部二畫）の古字。

【式】 シキ 圖

〇のり、おきて、法則禮法・制度・模範「法―」「楷―」「範―」「程―」〇のっとる（法）法則として從ふ。詩、大雅「古訓是―」〇車の前の横木、敬禮する時に伏してよりかかる。＝軾。又、其の敬禮をする。論、鄉黨「負版者」〇典禮「儀―」「追悼―」「開業―」〇はかる（度）もちふる（用）〇かた（樣）〇それ、もって、發語の辭。詩、邶風「一―微―」〇運算の順序方法等を數字及符號にてあらはしたるもの「算―」

【式外】シキガイ 圖式内を見よ。

【式三番】シキサンバ 圖三人にて舞ふ三番叟

【式事】シキジ 圖しきたりの禮儀、儀式上の行事。

【式日】シキジツ 圖式事を行ふ日。

【式退】シキタイ 圖あいさつ、おじぎする。＝會釋エシャク

【式臺】シキダイ 圖玄關の前にある板じき。

【式内】シキナイ 圖延喜式の神名帳に載れる神社。其の以外を式外といふ。

【式微】シキビ 王室の衰微する義、式ヲハ發語の辭。詩、邶風「―――、胡不レ歸」

【式部官】シキブカン 圖宮内省式部職に屬する官、宮中の儀式・交際上の事などに掌る。

【式部省】シキブショウ 圖古の八省の一、禮儀・賞擧・考課及六位以下の文官の敘任を掌る、其の長官を式部卿といふ。

【式樣】シキヤウ かた、形式。錢氏客二夫衣一詩「長短只依二元―一」＝樣式。

【式敬】シキケイ たふとびうやまふ。周禮、考工記、註「馮依而―一」

【式穀】シキコク 式は用、穀は善、善き數を用ひて子をして善に向はしめる。詩經「數二海爾子一、―レ似レ之」

【式閭】シキリョ 里門を過ぐる時、車の横木によりて禮する。晉、武成「式二商容閭一」

九 畫

【弒】 シ 圖 音便 シイ

しいする、ころす（殺）下（臣又子）の上（君又親）を殺すにいふ、弒は何なり、其のすきまを伺ひて殺す義。易、文言「臣―其君、子―其父、非二一朝一夕之故一、其所二由來一者漸矣」

【弒逆】シギャク 殺害に同じ。歐陽修、春秋論「―大惡也」

【弒虐】シギャク 臣子が君父を殺す大惡。

【弒殺】シサツ 弒虐に同じ。類篇「弒殺也、自レ外曰レ殺、自レ内曰レ弒」

弓 部

【弓】 キュウ 圖

〇ゆみ「勁―」「彤―」荀、解蔽「倕作レ―、浮游作レ矢」〇土地を測量するに六尺を一と爲す。＝歩。時代によりて四尺又は五尺・八尺を一と爲す。〇天―は虹の異名。

【弓鞲】キュウコウ 圖支那婦人臂上用の靴。

【弓衣】キュウイ ゆぶくろ、ゆみぶくろ。詩小雅、疏「藏者―一也」

【弓腰】キュウエウ ゆみの如くにまがれる腰。酉陽雜俎「舞孺―一渾忘卻」

【弓裘】キュウキュウ おやゆづりのわざ。商邑、上三陳左相一詩「相門遵二其緒一、卿族嗣二―一」＝箕裘。

【弓弦】キュウゲン ゆみづる、ゆづる。弓には絲。越絕書「種レ麻以爲二―一」＝弓絃。

【弓靫】キュウユキ ゆみぶくろ。詩經「象弭魚服」疏「其皮以爲二―一矢服一」＝弓衣。

【弓矢】キュウシ ゆみや。詩、大雅「―斯張、干戈戚揚」

【弓師】キュウシ ゆみし。大法句經「―調レ角、水人調レ船」＝弓人。

【弓人】キュウジン ゆみをつくる人。孟、公孫丑「―而恥レ爲レ弓」＝弓師・弓工。

【弓箭】キュウセン いぐるみ。孟、告子「思下搆二―一而射之」＝弓矰。

【弓手】キュウシュ 〇弓を射り、盜賊を防ぐ

者。元史、兵志「郡邑設ニ一ー一以防ル盜也」○弓射る人。○國ユミを持つ方の手、即ち左手ゆみ手綱を持つ右手を馬手メテといふの對。

【弓術】キュウジュツ ゆみのひきかた。＝射法。

【弓勢】キュウセイ ○弓の形。白居易詩「一ー月初三」○ユミイキ國弓が矢をとばす力。＝弓力。

【弓旌召】キュウセイノメシ 高官に採用せらるる義。李元成文「臣素徵ニ經術之術一、謬忝ニ弓旌之召一」

【弓弭】キュウビ 弭一音サ、弓末ユズなり。厥信詩「明月動ニ一ー一」

【弓箭】キュウセン 弓矢に同じ。杜甫詩「車轔轔馬蕭蕭、行人ー一各在ル腰」

【弓刀】キュウトウ ゆみと、かたなと。唐書、吐蕃傳「喜ニ浮屠法一、習ニ祝詛一、多佩ニ一ー一」＝弓劍。

【弓聲】キュウセイ ゆみと、いしゆみと。周禮、夏官、弓矢「中春獻ニ一ー一、中秋獻ニ矢箙一」

【弓馬】キュウバ ○弓術と馬術と。後漢書、陳龜傳「便ニ習ー一ー一、雖ニ於北州一、皆書、王濟傳「好ニ一ー一、勇力絕ル人」＝射騎・弓騎。○轉じて武藝又、武術の義とす。

【弓馬家】キュウバノイエ 國武士の家、武家。

【弓力】キュウリョク 弓を射るちから。宋書、卜天與傳「善射ー一倍」

【弓折箭盡】キュウセツセンツク 力盡きて如何ともする能はざるをいふ。傳燈錄「今日擬ル打ニ龜山柴一、ー一ー」＝矢竭弦絕。

【弓取】ユミトリ 國さむらひ。＝武士・武家。

【弓張月】ユミハリヅキ 國弓のつるを張りし如き形の月、上弦又、下弦の月。＝弦月・彎月。

【弓矢八幡】ユミヤハチマン 國昔の武士が約束などをする時に神にちかふことば。

【引】 一畫

㊀イン ㊁イン 風紗

㊀ひく、はる(張)弓を開く、ひっぱる。○のぶ(演)ひきのばす、ひろげる「一伸」○ながびく「延ー」○みちびく(導)「一導」○ひだす「誘ー」○しりぞく(卻)○すすめる(薦)「薦ー」「辟ー」○ひきうける、負ふ「一責」○長十丈のものさし。○衡ハカリの名、小ーは二百斤、大ーは六百斤。○ひさし(久)○音樂のふし(詞曲)○はしがき、唐以後に始まりたる一種の文體。文體明辨「唐以後始有ニ此體一、大略如ル序而稍爲ニ短篇一」○導ーはあんま。○てがた(手形)「茶ー」「鹽ー」「錢ー」「鈔ー」㊁ひつぎなは(柩車索)「櫬弓「弔ニ於葬者一必執ニ一ー一」

同訓異字 引・率・挽・援・曳・延等の別は率(牛部七畫)の條を見よ。

【引揖】インイフ ひっぱる、ひきあげる。

【引合】ヒキアヒ とがめをわが身にひきうける。吳志、孫權傳「權ル一實ル躬」

【引強】インキョウ 強弓を引く。史、鄒陽周勃世家「勃以ル織ニ薄曲一爲ル生、常爲ル人吹ル簫給ニ喪事一、材官ー一」

【引經】インケイ 經書の文を證據として引くこと。高適詩「匡衡多ー一ル」

【引決】インケツ 責を引きて自殺する。司馬遷、報ニ任安一書「縲紲婢妾、由能ー一」

【引見】インケン 天子がひきよせて面會する。又、ひろく人に面見する義。陳書、度支傳「及ル至卽日ー一」

【引率】インソツ ひく。韓愈詩「日暮不ル能ル散、起坐相ー一」

【引愆】インケン 引咎に同じ、愆は責。蜀志「ー一深自貶抑」

【引業】インゴウ 佛前世に爲したる善惡の所業の報が現世にめぐり來りて苦樂を受ける義、宿世の因緣(俱舍論)

【引伸】インシン ひきのばす、ひろく應用する、本義をうつして他義に及ぶ。易、繫辭「引而伸ル之、觸ル類而長ル之、天下之能事畢矣」より出づ。

【引繭】インケン 繭を商する者、其の稅を引稅といふ、清朝の制、繭者千斤を以て一引とするに由る。

【引繩】インジョウ いぐるみをひく。揣岳賦「牧ル營繩ル援、一ー一擧ル欽」

【引證】インショウ 他より證據を引く。聞見後錄「學者于ル文用ニ一ー一、猶ニ訟事之用ニ一ー一也」＝引例。

【引接】インセツ ○引き入れて面會する。晉書、陶侃傳「一ー一疏遠、門無ニ停客一」＝引見。○インジョウ國彌陀如來が來迎して極樂へ引き導く。彌陀經私記「人恐ニ如來ー一之語一」

【引導】インドウ 人をひきゐる。＝引帥。

【引退】インタイ 身を引きしりぞく。致仕する。北周書「諸將皆ー一」

【引導】インドウ ○みちびく。案内する。南史「有ニ桑魚一躍ル水飛ル空、ー一」○國衆生を引き導きて善道に入らしむ。法華經「無數方便、以ニ一ー衆生一」又死者を淨土に導くため葬式に俗僧の行ふ式。智度論「大愛道比丘尼涅槃、佛自在ル前、擊ニ香鑪一ー一」

【引萬】インカク 仲間をつくる。國語「一ー一以封ル己」

【引致】インチ ○人をひきよせる。周書「欲ー一ニ左右一、國之議政事ヨ」。○ひきたてる。拘引する。

【引重】インチョウ ○互に重んじ合ひて推薦する。史、魏其武安傳「隔人相爲ー一」○重きものをひき行く。易經「服牛乘馬、一ー一致ル遠、以利ニ天下一、蓋取ニ諸隨一」

【引擢】インタク 引きあげて用ふる。北齊書「張景仁遂被ニ一ー一」

【引入】インニュウ 圖ひきいれる。法華經「一二於佛慧」

【引年】インネン ○ながいきする。韓愈文「皆下醫師以二治陽一一之一」＝延年。○圖年老いて致仕する。

【引絃】インゲン 絃をひくつなをひきゆく。呂覽「一レ一者、右左萬人、以行レ之」

【引滿】インマン ○一ぱいに弓をひきしぼる。通鑑、宋順帝紀「貴レ腹爲レ的、自一レ一將レ射レ之」○なみなみと酒を盛る。陶潛詩「提レ壺接二賓侶一一レ一更獻酬」

【引力】インリョク 物理學にて物質の相ひきつける力をいふ。＝牽力。

【引例】インレイ 前例を引く。揮麈錄「一レ一爲レ據」＝引證。

【引領】インレイ くびをひきのばして望む、切に希望する義。孟、梁惠王「天下之民、皆一レ一而望レ之矣」

【引路】インロ みちあんないする。北夢瑣言「有人一一、獲免二崎嶇一」

【引附衆】インプシュウ 圖鎌倉・室町時代の職名、評定衆をたすけ、訴訟及び庶務をとりあつかふ役。

【引而不レ發】インジフハツ 人に教ふるには、ただ之を學ぶの法を授け、學ぶ者をして之を自得せしむるをいふ。孟、盡心「君子——、躍如也、中道而立、能者從レ之」

【引出物】ヒキデモノ 圖饗宴其他の宴會の時、來客におくる品物、ひきもの。

【引繩】インジョウ 圖○圓形を切りぬくに用ふる小さきのこぎり。○徳川時代に死罪以上の罪人を馬に乘せ、見せしめのため町内を引きまはす處刑。

【弔】

(一) テウ 圖 (二) テキ 俗字

弔は(一)の俗字

(一)とぶらふ、とぶらひ、生をーふを唁、死をーふをーといふ「敬ー」「會ー」安否をたづねる。○いたむ(傷)○あはれむ(憫)詩、檜風「中心ー兮」○鰐魚の屬。○圖つる、つるす、釣と音通。○圖トムラヒ葬式の(二)いたる(至)詩、大雅「神之ー矣」

【弔意】チョウイ 悲みとぶらふ心、哀悼の心。

【弔慰】チョウヰ 喪中の人をとぶらひ慰める。梁書、文學傳「劉昭祖伯龍、居二父憂一以レ孝聞、宋武帝數二臺太子諸王一、竝往ー一」

【弔賀】チョウガ とぶらひと、いはひと。左傳「諸侯相ー一」＝慶弔。

【弔客】チョウカク とぶらひに來る客。吳志、注「生無レ可二與語一、死以二青蠅一爲ー一」＝弔者。

【弔旗】チョウキ 弔意を表する爲めに竿の半ばの所にかかぐるはた。＝半旗。

【弔屈】チョウクツ 楚の屈原をとぶらふ、屈原五月五日汨羅(今の湖南省長沙府湘陰縣)に投じて死す、後人每歲此の日に於て之を弔ふ〔荊楚歲時記〕

【弔古】チョウコ 舊事に感じてとぶらふ。宋書、詩「一一寧忘レ恨」

【弔祭】チョウサイ とぶらひまつる。後漢書「使者ー一贈賻甚厚」

【弔詞】チョウシ くやみのことば。人の死を悼みかなしむ意をのべることば。

【弔辭】チョウジ 前條に同じ。

【弔者】チョウシャ くやみに來たる者。＝弔客。

【弔恤】チョウジュツ あはれむ。又、とぶらふ。＝弔愍。

【弔睛】チョウセイ 圖つりあがりし眼。水滸傳、楔子「ー一白額」

【弔電】チョウデン とぶらひをいふ電信、電報の弔詞。

【弔桶】チョウトウ 圖つるべ、釣瓶。

【弔砲】チョウハウ 國家に殊功ありし人の葬式の時、とぶらひの意を表して、はなつ礮砲。

【弔愍】チョウビン あはれみてとぶらふ。詩經、疏「由レ一一其民、故不二久置一レ意一」

【弔問】チョウモン とぶらひなぐさめる。李洞詩「一一難レ知レ主」

【弔詭】チョウキ 死者を哭する。周禮「凡內

【弔合戰】チョウカッセン 圖前役の戰死者のためにかたきをうついくさ。

【弘】 コウ 㮚 ク

○ひろし、ひろむ、ひろまる「恢ー」○大いなり、大いにす。

同訓異義 弘・廣・博・闊・汎・寬の別は廣(广部十二畫)の條を見よ。

【弘願】グヮン 圖弘く大いなる願。

【弘誓】グゼイ 圖佛が弘く衆生を濟度せんとする弘大なるちかひ。法華經「一一深如レ海、歷劫不思議」

【弘誓舟】グゼイシウ 圖佛の衆生を濟はんとする弘大なる誓願を、船の人を乘せて彼岸に渡すに譬ふ。

【弘通】グツ 圖佛法がひろまる。

【弘法】ガフ ○圖佛法の道をひろめる。○圖コウー一大師は僧空海の諡號。

【弘遠】コウエン ひろく遠しの意、郭璞傳「寓有二師操一忠信篤誠一一」

【弘簡】コウカン 心廣くして煩碎ならざる義。宋書、柳元景傳「風度一一、時局深沈」

【弘基】コウキ 大いなるもとゐ。晉書「斯寵光至美、王者之一一也」

【弘毅】コウキ 心ひろく志つよし。論、泰伯「士不レ可二以不一一一」

【弘徽殿】コキデン 圖古の清涼殿の右、登華殿の左に在りし御殿、后妃、女

御などの居。

【弘化】コウクワ　ひろく德をしく。積遂其疏「―ー懿德卽作二元良一」

【弘敎】コウケウ　ひろきをしへ。梁簡文帝文「明二度被之ー一」

【弘侈】コウシ　○大いなる義。國語「私欲ー一、則德義鮮少」弘一に宏に作る。○おごりて大いなることを好む。隋書、宇文愷傳「愷揣二帝心在ー一、乃ノ是東京制度、節二種貶麗一、帝大悅ノ之」

【弘深】コウシン　ひろくふかし。蔡邕文「器量ー一、委度廣大」

【弘敞】コウシャウ　ひろくほがらかにして高し。晉書、地理志「星象麗ノ天、山河紀ノ地、疆被裁二其ー一、暗函剋二其都邑一」‖廣敞。

【弘潤】コウジュン　ひろくうるはふ。沈約文「少而英明、長而ー一」

【弘濟】コウサイ　ひろくすくふ。唐太宗文「ー一萬品、典二御十方一」

【弘宣】コウセン　ひろくのべ、あきらかにする。晉書、禮志「禮經三百、威儀三千、皆所下以ー一天意一、雖中劉人理上ー一廣宣。

【弘大】コウダイ　ひろく大いなり。蔡邕文「至德元功、器量ー一」

【弘道】コウダウ　道德をひろめる。論、衛鞅公「人能ー一ノ、非二道弘一人」

【弘著】コウチョ　ひろくあらはれる。晉書「測二傳東宮一、殿猷ー一」

【弘博】コウハク　ひろくしく。陸雲詩「惠音ー一、清風騰集」

【弘誓】コウセイ　ひろくあまねし。傅休奕、辟雍鄉飲酒賦「知二禮敎之ー一也」

【弘文】コウブン　文學をひろめる。

【弘慶】コウケイ　たまの名。書經「赤刀大訓、ー一璵琰、在二西序一」

【弘辯】コウベン　博大なる辯論。戰國策「天下駿雄ー一之士也」

【弘懿】コウイ　大いにさかんなり。宋書、江夏王義恭傳「德猷ー一」‖弘茂。

【弘茂】コウモ　ひろくさかんなり。晉書「佐ノ命襲レ世、勳業ー一」

【弘麗】コウレイ　ひろくしてうるはし。漢書「ー一溫雅」

【弗】フツ　勿

○ず、あらず、しからず(不)不は輕くー一は重し。いな(否)打消の詞。○はらふ(祓)さる(去)○ただしからず(不正)たがふ(違)○ー素は淡綠黃色の氣體の元素。○國米國の貨幣單位名のあて字、一ーは我が二圓位。

【弗豫】フツヨ　うれへて樂まざる貌。易林「杜ノ口結ノ舌、心中ー一」

【弗乎】フツコ　否といふ義。史、孔子世家「子曰、ー一ー一、君子疾二沒ノ世而名不ノ稱焉」

【弗詘之謀】フツクツノハカリゴト　衆にはからざるはかりごと。賈誼「無稽之言勿ノ聽、ー一勿ノ庸」

【弗弗】フツフツ　○烈しく疾き貌。詩經「南山律律、飄風ー一」‖發發。○否否の義。然りとせず。晉、載士「君必有二ー一之臣一」

【弛】三畫　シ　チ　紙

㊀ゆるぶ、ゆるむ、ゆるくす(緩)とく(釋)弓の絃をはづす。○おく(舍置)○おとろへる(衰)すたれる「廢ー」○やぶる(壞)こはれる。史、河渠書「延道ー分」○ほしいまま(放)「跋ー」「縱ー」○いこふ、いこはす(息)㊁おつ、おとす(落)

【弛禁】シキン　禁制をゆるやかにする。蜀志、諸葛亮ー一ノ

【弛馭】シギョ　馬を御する手をゆるめる、國家を治むる術の手ぬるきに喩ふ、馭は御。晉書、李特載記贊「晉國ー一ノ」

【弛罪】シザイ　つみをゆるべる。韓詩外傳「ー一ノ廢法」

【弛縱】シジュウ　ゆるべ、ほしいまま。魏志「行步ー一、筋不ノ東ノ體」

【弛惰】シダ　心ゆるみておこたる。北史、李士謙傳「李氏宗黨繁盛、每二春秋二社一、必高會極歡、少長肅然無二敢ー一ー一」

【弛柝】シタク　警備をゆるくす。張衡賦「聊城ー一ノ」

【弛擔】シタン　荷物をおろす。春渚紀聞「一日樵歸二於山一、道遇二一道人對ー一ノ就觀」

【弛張】シチョウ　ゆるめると、はれると。韓非子「萬物必有二盛衰一、萬事必有二ー一ー一」‖張弛・興廢。

【弛墜】シツイ　ゆるびおつ。孔叢子「堯舜文武之道、或弛而墜、亦正二其統紀一而已矣」

【弛廢】シハイ　ゆるびすたれる。晉書、儒林傳「應章ー一、名敎頹毀」

【弛緊】シキン　ゆるびみだれる。南史、梁武帝紀「政刑ー一」

【弛力】シリョク　百姓の力を息め、餘裕あらしむ、租稅を輕くし、徭役を省くをいふ。周禮「大司徒四目、ー一」

【弦】四畫　ケツ　眞

ゆがけ、弓を張る時に手に繫くる具。通じて決に作る。

【弟】テイ　ダイ　齊

○おとうと、男子の先に生るるを兄といひ、後に生るるをー一といふ「兄ー一」「愛ー一」「賢ー一」「令ー一」○したがふ、弟が兄に事

ふる柔順の道「友―」＝悌。○やすし(易)「豈―」○師に就きて業を受くるもの「師―」○おとるもの、劣等。○己を謙していふ「小―」○次第の第と通ず。

【弟兄】テイ　おとうとと、あにと。杜甫詩「永結爲二―一」＝昆弟・兄弟・弟兄。

【弟昆】テイ　おとうとと、あにと。＝弟昆。

【弟子】テイ　○年わかきもの、幼年者。論、孟面「―入則孝、出則弟」○でし、をし(こ)。師を父兄に比していふ。論、雍也「哀公問、―孰爲レ好レ學」＝門人。

【弭】ビ　画

ゆづか。弓の中央部の手に執る處。

【弦】ゲン　五　画　先

○つる、弓づる、ゆづる。○ゆみはりづき(半圓形の月)「―月」陰暦の七八日頃の半月を上―といひ、二十二三日頃の半月を下―といふ。○病人の脈の急なるをいふ。○直角三角形の勾股に對する長き一邊。○いと、樂器のいと。＝絃。○琴を鼓する。禮、文王世子「春誦夏―」○古人、琴瑟を以て夫婦に喩ふ、故に妻を喪ふを斷―といひ、續娶するを續―といふ。○圜つる(鉉)鍋の把手トウテ

【弦望】ゲンボウ　ゆみづると、なめしがはと、經急の義に喩ふ。韓非、觀行「四門豹之性急、故佩レ弦以自急、故以有レ餘、補レ不レ足、以レ長續レ短之謂二明主一」

【弦影】エンゲイ　ゆみはり月のかげに喩ふ。李嶠詩「望月驚二―一」

【弦歌】カン　ことをひきてうたふ。論、陽貨「子之三武城一、聞二―一之聲一」＝絃歌。

【弦管】ゲンカン　ことと、ふえと。崔顥詩「翠幌珠簾閉二―一、一奏一彈雲欲レ斷」

【弦月】ゲンゲツ　ゆみはりづき。釋名「弦、半月之名也、其形一旁曲、一旁直、若二張レ弓施レ弦也一」范成大詩「雨餘―上」＝半月。

【弦誦】ゲンショウ　琴をひくと詩歌を誦すると。禮、文王世子「春誦夏弦」より出づ。晉書「東序西膠、未レ聞二於―一」

【應レ弦而倒】ゲンニオウジテタフル　弓のつる音につれてたふれる。弓勢強くして且つ巧なるにいふ。史、李將軍傳「度不レ中不レ發、發即―」

【弦匏】ゲンポウ　絃は弦の樂器、琴瑟の類、匏はひさごの胴の樂器、笙等の類。

【弛】シ　弛(弓部三畫)に同じ。

【弧】コ　書

○ゆみそる(弓反)○ゆみゆるむ(弓弛)

【弢】トウ　豪

○ゆみぶくろ(弓衣・弓囊)＝韜。○はたぶくろ(旌纛)○六―は周代の兵書の名。＝六韜。

【弤】テイ　齊

○赤く塗りたるゆみ(漆赤弓)＝彤弓。○彫刻して飾りたる弓。孟、萬章「琴朕―朕」朕はわれ。

【弩】ド　麌

○いしゆみ、機械にて矢又は石を發射する武器、黃帝の作といふ「強―」「勁―」○おほゆみ。○いかる(怒)

【弩牙】ガ　弩の弦を鉤して、矢を發する機。舊唐書「以二佛寺銅鐘一鑄二―一兵器一」＝弩機。

【弩手】シュ　よくいしゆみを引く者。宋書、宋武傳「募二天下―一、不レ問レ所レ練」＝弓手。

【弦弩剣拔】ゲンドケンバツ　氣勢の凌厲たる形容。靈道生賦「――虎跳龍蟠」

【弩機】ドキ　機を用ひて石を發射する器。宋史、兵志「別置二牀子一―一手一」

【弭】ビ　書　支

ゆづか(弓)曲禮「左手承レ―」

【弥】ビ　弭(弓部十四畫)に同じ。

【弯】ケン　六　画　刪

いしゆみ、おほゆみ(連弩)漢書、司馬遷傳「張レ空―一、旦二白刃一」

【弧】コ　虞

○きゆみ(木弓)「桑―」○はたを張るため竹にて作りしゆみ(張旗弓)○星の名「―星」○圓周又は曲線の一部の稱。○短―はいさごむし。＝蟊。

【弧矢】コシ　木にて作りし弓矢。易、繫辭「弦レ木爲レ弧、刻レ木爲レ矢、―之利、以威二天下一」

【弧燈】コトウ　電燈の炭素棒が白光を放ちて燃え、其の尖端が弧形をなすもの、即ちアーク燈。

【弭】ビ ミ 紙

○つのゆみ。象骨にて兩端を飾りし弓（角弓）○ゆはず（弓末）○わすれる（忘）詩、小雅「心之憂矣、不可ニ弭忘一」○やむ（止息）左、襄二五「自今以往兵其少一矣」とどむ（按）離騷「吾令羲和ニ弭レ節」○やすんず（安）史、田完世家「ニ人民一」

同訓異義 弭・已・息・輟・止・歇・罷等の別は已（已部）の條を見よ。

【弭息】ビソク やむ。宋書、民無二僊貴一、劫盜之患、亦爲ニ一ニ」＝止息。

【弭謚】ビシツトク そしりをとどむ。周語「王喜告ニ召公一曰、晉能ニ一レ矣」＝止謗。

【弭兵】ビヘイ 戰をやめる。左、襄二七「弭ニ諸侯之兵一」＝息兵。

七畫

【弭】セウ 篠

ゆはず、弓の端（弓末）

【弱】ジヤク ニヤク 藥

○よわし（懦）心よわし、力無し「軟ニ」「懦ニ」「羸ニ」「尪ニ」「貧ニ」「虛ニ」よわる、おとる（劣）○やはらか（柔）「柔ニ」○わかし（年少）「老ニ」「幼ニ」○はたち（二十）「ニ冠」○あしなへ（跛）○おとろへる（衰）「衰ニ」○やぶる（敗）○うしなふ（喪）○少しく足らざる義「三里ニ」餘るを強といふの對。

【弱行】ジヤクカウ ○事を行ふに勇氣なし「雅志ニ一」○ちんば（跛）左、昭七「孟孫之足、不レ良ニ一」

【弱草】ジヤクサウ よわくき。卞敬宗文「濛濛綠葉、在レ苒ニ一」

【弱弓】ジヤクキウ はりのよわきゆみ。列子「ニ一繳、乘レ風振レ之」

【弱冠】ジヤククワン 男子二十歳をいふ。禮、曲禮「人生十年曰レ幼、學、二十曰レ一、三十曰レ壯、有レ室、四十曰レ強、而仕」冠は元服。

【弱國】ジヤクコク よわきくに。列子「衛侯曰、晉ニ一也、而攝二乎大國之間一」

【弱歳】ジヤクサイ 少年。又、二十歳。晉書「景國ニ一英奇」＝弱年・弱齡。

【弱妻】ジヤクサイ まよひご、父母の家を見失ひし迷兒。莊、齊物「ニ一而不レ知レ歸者」

【弱子】ジヤクシ をさなご。管、形勢「ニ一下瓦、慈母操レ筆」＝稚子。

【弱志】ジヤクシ よわき意志。淮南子「虛心而ニ一」

【弱質】ジヤクシツ よわきからだ。貫鑒詩「ニ一辭二官貴一、歸心數二辭程一」

【弱者】ジヤクシヤ 力よわき者。

【弱主】ジヤクシユ 幼くおろかなる君。陳琳文「張燕ニ一、趙高執レ柄」

【弱水】ジヤクスイ ○川の名。書、禹貢「導ニ一至二于合黎一」○仙境に在る川。十洲記「鳳麟洲在二四海之中央一、洲四面有ニ一ニ繞レ之、鴻毛不レ浮不レ可レ越也」

【弱小】ジヤクセウ ○よわくして小さき義。史、燕世家「齊二嘑强國之間一、最爲ニ一ニ」○年わか。＝弱少。

【弱息】ジヤクソク 人に對して己の子を稱す。南史、周盤龍傳「小人ニ一ニ」

【弱卒】ジヤクソツ 弱兵に同じ。

【弱孫】ジヤクソン いとけなきまご。王羲之文「抱ニ一ニ」

【弱弟】ジヤクテイ 年わかきおとうと。蔡邕文「上奉二繩親一、下慈ニ一ニ」＝幼弟。

【弱點】ジヤクテン 圓よわみ。

【弱肉强食】ジヤクニクキヤウシヨク 弱きものは强き者に食はる。强者が弱者を併呑する義。韓愈、送二浮屠文暢一序「弱之肉、强之食」

【弱年】ジヤクネン 年わかし。又、二十歳。南史、王僧傳「僧ニ一、便習二意三禮一、尤善二春秋一」

【弱拳】ジヤクケン としわかきともがら、わかものの、あをにさい。＝孔臭兒。

【弱兵】ジヤクヘイ よわき兵卒。孫子「勇將手下無ニ一ニ」＝弱卒。

【弱齡】ジヤクレイ わかきよはひ。少年。魏書、彭城王勰傳「提德ニ一、誕資二重望一」＝弱年。

【弱劣】ジヤクレツ よわくおとる。魏書、崔浩傳「臣稟性ニ一ニ」

【弱不レ好レ弄】ジヤクフコウロウ 幼くして嬉戲することを好まず。左、僖九「奠晉（晉の惠公）ニ一ニ」

八畫

【強】キヤウ・ガウ 陽 ㊀一に强に作る キヤウ・ガウ 養 ㊁又彊に通ず キヤウ・ガウ 漾 ㊂

㊀つよし（彊）心又身體の力がすぐれてつよし「堅ニ」「剛ニ」「精ニ」「雄ニ」○つよめる、つよくす、すこやか（健）「健ニ」「康ニ」○つよき者「弱肉ニ食」○あらし（暴）「暴ニ」史、田延年傳「詠組豪ニ」○こめむし（米中蟲）○およそ（四十歳）人の最も强く盛んなる年ごろ。曲禮「四十曰ニ而仕」○除ある數「十里ニ」㊁つとむ（勉）勉め行ふ。すすめる（勸）勸めてさせる。周禮、地官「正其行而ニ之道藝」○しふ、しひて、無理に。孟、滕文公「ニ而後可」○ためめる（矯）㊂もとる、すねる、柔服せず「屈ニ」「木ニ」○むつき「ニ褓」＝襁。

【強姦】ガウカン 不法行爲を以て女をを

す。「——腰」

【強情】キャウジャウ 図心がすなほならず。＝強情。

【強訴】ガウソ 無理に氣づよくうったへる。又、なかまを組みて訴へる。

【強盜】ガウタウ 凶器又は暴力を以て人をおどし、金品を強奪するぬすびと。窃盜の對。

【強奪】ガウダツ しひてうばひとる。史、樹相如傳「秦王度レ之、終不レ可ニ——一」

【強請】ガウセイ 図てづよくかけあふ。きびしき談判。

【強靭】キャウジン つよくねばりある。

【強弩】キャウド つよいいしゆみ。

【強敵】キャウテキ てづよくもとる。梗はふさがる。又、其の者。淮南、原道「勳二其——一」＝剛梗・強鯁。

【強梗】キャウカウ つよくいひはる。剛直にして屈せず、鯁は魚骨、喉にささはる義より梗ガと同じく用ふ。又、其の者。唐書、白居易傳「居易執レ論——」

【強行軍】キャウカウグン 軍隊が普通の行程（一日六里内外）以上をしひて進軍する義。

【強行偵察】キャウカウテイサツ 公然と危險を冒して敵狀をうかがひ探る義。

【強諫】キャウカン つよくいさめる。爭ひて忠告する。左傳「犯而不レ能ニ——一」＝固諫・切諫。

【強顏】キャウガン あつかましい。つらの皮あつし。戰國策、秦策「不レ知ニ羞恥一、目ニ——一」劉向新序「此天下之——女子也」＝厚顏・鐵面皮。

【強記】キャウキ 物おぼえよし「博聞——」＝強識。

【強穀】キャウコク つよし。周書「莅レ政——、百姓畏レ之」

【強弓】キャウキウ 強力の弓。史、蘇秦傳「——勁弩」

【強固】キャウコ ○十干の丁の異名「困雅」○力多し。楚辭「澆身被服——兮」

【強梁】キャウリャウ わるづよくして善をふせぐ。又、其の者。漢書、敍傳「曾是——、掊克爲レ雄」＝強梁。

【強盜】キャウタウ ゆりの異名。名醫別錄「百合、一名——」

【強獷】キャウクワウ つよくあらあらし。晉書、楊佺期傳「——粗暴」＝凶獷。

【強頑】キャウグワン つよくかたくな。又、其の者。晉書「明心慨ニ——一」

【強堅】キャウケン つよくしてかたし。＝強固。

【強健】キャウケン すこやか。歐陽修詩「乞身當レ及ニ——一時一」

【強項】キャウカウ 項ジの骨のつよきもの。容易に頭を下げざる、剛直の士をいふ。後漢書、楊震傳「楊震孫奇、立レ朝剛直、號帝曰、廷——一、眞楊震之子孫也」

【強項令】キャウカウレイ 剛直にして屈せざる縣令。後漢書、董宣傳「上（光武帝）令ニ小黃門持レ之、使ニ叩頭謝ニ主、宣兩手據レ地終不レ肯、上敕——出」

【強哭】キャウコク しひてなく。莊子「——者雖レ悲不レ哀」

【強壯】キャウサウ つよくさかん、健かにして力つよし、血氣がさかんなり。＝強健。

【強壯劑】キャウサウザイ 身體をつよくするくすり。＝補藥。

【強市】キャウシ おしうり（押賣）＝彊市。

【強仕】キャウシ 四十歲に至りて始めて仕官する義。轉じて四十歲の稱。禮、曲禮「四十曰レ——」

【強死】キャウシ 病なくして死する、非命の死、卽ち殺される。左、文十「三君皆將ニ——一」

【強忮】キャウキ つよく、もとりそこなふ。宋史、王安石性——」

【強恣】キャウシ 勢つよくしてほしいままなり。晉書「是時桓溫——、雖制ニ朝廷一」

【強襲】キャウシフ 馬がつよくあらし。

【強襲】キャウシフ 敵の防禦を冒してつよく攻める。＝強行襲撃。

【強臣】キャウシン 權力のさかんなるけらい。

【強進】キャウシン つとめてすすむ。管子「——則銳士挫」

【強震】キャウシン つよきぢしん、地文學にて、液體がこぼれ、時計の振子が止まる程度の地震。

【強將下無ニ弱兵一】キャウシャウノモトニハジャクヘイナシ 強き大將の下には、弱き兵卒なし。蘇軾、題ニ連公壁一「俗諺云、——、眞可レ信」＝勇將手下無ニ弱兵一。

【強弱】キャウジャク つよきと、よわきと。

【強取】キャウシュ 威力にて、しひてうばひ取る。左、襄二三「可ニ——一也」＝強奪。

【強食】キャウショク ○つとめて飲食を加へとりて身體を養ふ。漢書、雋方進傳「——慎職」＝強飯。○強き者のふるじき「弱肉——」

【強制】キャウセイ ○勢をたのみて人をおしつける。○法律の力によりて人の意志行爲を束縛する處分。

【強制執行】キャウセイシッカウ 裁判の結果により、執達吏が債務者を強制して、其の義務を行はしむる手續。

【強盛】キャウセイ つよくさかんなり。北史「漢武士馬——、肆二志於遠略一」

【強勢】キャウセイ つよきいきほひ。

【強請】キャウセイ ○しひてこひねがふ。○むりに貰ふ、ゆすする。又ゆすり。

【強笑】キャウセウ しひてわらふ、つくりわらひ。遼史「——曰、何敢之虐也」

【強宗】キャウソウ 勢力あるいへがら。漢書、郭伋傳「——右族」

【強貰】キャウタイ つよくしてひきぼる。戰國策「鄒同見ニ趙王一曰、今有ニ——

之國、鴈三王之墳、衆三王之地、告以レ理、則不レ可、說以レ義、則不レ聽、王非二戰國守國之具一、其何以當レ之」【強敵】キャウテキ つよきてき。吳子「三軍服レ威、士卒用レ命、最無二一一一、攻無二堅陣一矣」＝勁敵。【強弩之末力不レ能レ入二魯縞一】キャウドノマツリョクアタハズニロカクニイツヨキおほゆみにて發射せし矢石も其の力の盡きたる末は魯國の薄絹を貫く程の力も無し、英雄も衰へては何事も成し得ざる義、強一に彊に作る〔漢書、韓安國傳〕史、韓長孺傳「彊弩之極矢、不レ能レ穿二魯縞一、衝風之末力、不レ能レ漂二鴻毛一」【強梁】キャウリャウ むつき。史記「成王少在二一一之中一」＝襁褓。【強梁】キャウリャウ つよくあらし。又、其の者。史、三王世家「內寵二有德一、外討二一一一」【強迫】キャウハク しひてせまる、人をおどしつける。＝脅迫。【強牛】キャウギウ なかばすぎ。蘇軾詩「嘗得兒童語音好、一年一一在二城中一」＝過牛。【強飯】キャウハン ○しひてくらひて身を大切にする。史記「行矣、一一勉レ之」＝強食。○圓おこは、赤飯。【強風】キャウフウ つよく吹くかぜ。氣象學にて一秒時間に十米突以上の速力の風。【強兵】キャウヘイ ○つよきへいたい「富國一一」○兵をつよくする。【強勉】キャウベン しひつとめる。董仲舒文「學在二一一一而已矣」＝彊勉・勉強。【強辯】キャウベン しひて言ひはる辯論。北史「諸儒服二其一一一」【強盛】キャウセイ しひてちかふ。左傳「迫二孔悝於廟一一一レ之」【強勇】キャウユウ つよくいさましく。【強覽】キャウラン つとめてひろくみる。宋史、劉琦傳「博學一一、立志峻潔」＝博覽。【強梁】キャウリャウ 多力なり。又、氣力のさかんなるにいふ。梁は棟木を負ふもの。又、橋をいふ、支ふる力の強きに取る。老子「一一者、不レ得二其死一」【強力】キャウリョク ○つよきちから。又、其の者。論衡「長巨之物、一一之人、乃能擧レ之」○圓大力ありて登山の案內する者。

【張】㊀チャウ ㊁チウ 陽

㊀はる、弓に弦を施す。○ひらく（開）のべひろげる「開一」○大いなり。○ほどこす（施）史、武帝紀「一二羽旗、設二供具一、以祀二神君一」○まうける（設）つらねまうける（陳設）「一宴」○一り、又、弛ぶべき物を計ふるに用ふ。ちやう「幕九一」「強弩數千一」○ちりこ、二十八宿の一。○譫―はあざむく（誑）○厥―は足を以て弩を一る。○乖―は相戻る。㊁ほこる（侈大）○ふくれる、服に適ず。○とばり「供一」＝帳。【張飮】チャウイン とばりを引きはしてかもりをする。史、高帝紀「復置止一一三日」【張琴】チャウキン ことのいとをはる。韓詩外傳「治レ國者、譬若二手一一然」＝張瑟。【張旭】チャウキョク 字は伯高、唐の蘇州の人、最も草書を善くし、草聖と稱す、酒を嗜み大醉すれば、時に頭に墨を濡して書す、世に張顚と稱す。【張皇】チャウクワウ 張りて大いにする、皇は大。書、康王之誥「一一六師一」＝張大。【張三李四】チャウサンリシ 張氏の三男李氏の四男、權兵衛、八兵衛といふが如く、平凡なる人をさしていふ。傳燈錄「欲レ會二佛法一、但問二取一一一、欲レ會二世法一、則參二取古佛叢林一」【張翅】チャウシバル つばさをはる。易林「旋レ往レ一」【張巡】チャウジュン 唐の忠臣、安祿山の亂に許遠と共に睢陽城を守り、力盡きて賊の爲めに殺さる。【張大】チャウダイ はりて大いにする。韓愈文「太史氏又能一二其事一爲レ傳繼二二疏躅一否」＝張皇。【張本】チャウホン ○もとへおき、伏線。強め後來の地を爲す義。左、隱五、注「晉內攻伐不レ告レ亂、故不レ書、傳具二其事一、爲二後晉事一一一」○圓首謀者、發頭人。【張目】チャウモク めをみはる。史、扁相如傳「左右欲レ刃二相如一、相如一レ一叱レ之、左右皆靡」【張羅】チャウラ あみをはりまはす。後漢書「一一海內、設二置萬里一」【張良】チャウリャウ 字は子房、五世韓に相たり、韓滅びて主の仇を報ぜんと欲し、鐵椎を以て秦の始皇帝を博浪沙に擊ち誤りて副車に中つ、逃れて下邳に至り、黃石公に遇ひ、其の兵法を授けらる、漢の高祖、兵を擧ぐるに及びて之に從ひ、常に畫策す、高祖卽位するに及び、功を以て留侯に封ぜらる、蕭何・韓信と並びて三傑と稱せらる。

【弼】ハウ ヒヤウ 庚

○弓強き貌。○みつ、みたす（滿）法言、君子「以其一一中而彪外也」道德が心中に滿つれば自ら外にあらはれる。

九畫

【強】強（前畫）に同じ。

【弾】㊀セッ　㊁ケフ　入　葉
ゆがけ（射決）＝韘。

【弼】ヒツ　質
○たすく「匡ー」「保ー」たすけ（輔佐）「良ー」「輔ー」○もとる（戻）＝拂。○ゆみだめ（正弓之器）○ただす（正）○かさぬ（重）○たかし（高）○圀古の官制にて彈正臺の次官、大ーと少ーとに分つ。
【弼違】ヒツヰ　道にそむけるを正したすける。抱朴子「匡ー過ーレー」
【弼匡】ヒツキヤウ　たすけ正す。梁昭明太子、文選序「綴興二於輔闕一、戒出二於ー匡一」
【弼成】ヒツセイ　助けて成す。書經「ー二五服一」
【弼導】ヒツダウ　たすけみちびく。晉書、荀顗傳「實有二佐命ー之勳一」
【弼亮】ヒツリヤウ　輔けてやすらかにす。晉書「能ーニー晉室一、輔二子一人一」

【弼】弼（前條）に同じ。

十畫

【弊】コウ　皆
○はる（張弓）弓を引きしぼる。○やごろ、矢を射るねらひ。孟、告子「羿之教人射、必志于ー」羿は古の弓の名人。○圀滿足の義。
【弊中】コウチユウ　弓を引きしぼりたる矢どころのうち。轉じて、人を籠絡する術中の義とす。撫言「文皇帝幸二端門一、見二新進士、綴行而出一、喜曰、天下英雄入二吾ーー一矣」文皇帝は唐の太宗。
【入二弊中一】コウチユウニイル　わが術中に入る。
【弊矢】コウシ　矢ごろの程限。弓を引きしぼりて的にあてる標準。孟、盡心「羿不下爲二拙射一變中其ーー上」

十一畫

【弧】コ　尤
○ゆはず（弓端）○瑗ヤの屬。
【弧矢】コシ　たまきの四京雜記「戚夫人貝二百錬金一、爲ニーー一隨二見者一」

【弾】ヒツ　質
○いる（射）○ゆみづる（弦）

十二畫

【弾】㊀ダン　㊁ダン　寒　翰
○はじき弓。○はじきだま「ー丸」㊁はじく。○はじき丸ダを發射する。○うつ（擊）たたく「ー劍」○ただす、罪をただす（劾）「奏ー」「糾ー」○ふるふ（掉）○つまはじきする。屈原、漁父辭「新沐者必ー冠」○はねかへす、反撥する。○ひく、かきならす「ー琴」「快ー」
【弾壓】ダンアツ　ただしおさへる。唐書、柳中庸傳「事敗之下、ーー爲レ先、郡邑之治、惠愛爲レ本」＝制服。
【弾雨】ダンウ　雨の如く繁く來る鐵砲だま「砲煙ーー」
【弾劾】ダンガイ　官吏の罪をしらべて、上に告げる。北史、魏收傳「南臺將レ加二ーー一」
【弾洗】ダンセン　はじきがね、ばね。
【弾糾】ダンキウ　悪事をただす。後漢書、史弼傳「州司不二敢ーー一」
【弾琴】ダンキン　ことをひく。王維詩「獨坐幽篁裏、ーー復長嘯」
【弾冠】ダンクワンクワン　○冠の塵を彈き清める。史、屈原傳「新沐者必ーレー、新浴者必振レ衣」○轉じて出仕の準備をする義とす。漢書、王吉傳「王吉字子陽、與二貢禹一友、時稱王陽在レ位、貢公ーレー」貢公は貢禹。
【弾丸】ダングワン　○はじきだま。鳥雀などをうつはじき丸。○轉じて極めて小さきものに喩ふ。史、扁鵲傳「ー之地」○鐵砲のたま。
【弾丸黑子】ダングワンコクシ　はじき玉と、ほくろと、せまき土地に喩ふ。黑子一に黑誌に作る。庾信賦「地惟黑子、城猶二彈丸一」
【弾丸之地】ダングワンノチ　はじき玉の如き狹小の地。戰國策秦策「此ーー、猶不レ予也」
【弾鋏】ダンケフ　主人を諷して祿位を求むるにいふ。釋常談「諷二主人一貧レ食、謂二之ーー一」孟嘗君の客、馮諼が劍のつかを彈じて「長鋏歸來乎」の歌を歌ひし故事に本づく。
【弾劍】ダンケンダンケン　劍を擊ちたたく。史、孟嘗君傳「彈二其劍一而歌」
【弾絃】ダンゲンダンゲン　ことをひく。蜀都賦「巴姬レ一、漢女擊レ節」
【弾箏】ダンサウ　ことをひく。史、李斯傳「退ーー、而取二瑯琊一」
【弾指】ダンシ　○つまはじきする。維摩經「度二百千劫一、猶如ニーー一」○轉じて極めて小なる時間に喩ふ。蘇軾詩「三過門前老病死、一ーー頃去來今」
【弾邪】ダンジヤダンジヤ　よこしまなる者をとがめただす。魏志、注「旌レ善以興レ化、ーレー而矯レ俗」
【弾射】ダンシヤ　言を以て他人の缺點を指摘する。蜀志「孟光曰、吾好二直言一、無レ所二回避一、每ーニ利病一、爲二世人一彈嫌」
【弾正】ダンセイ　○惡しき事をただす。後漢書、仲長統傳「惡可レ得ニーー一者哉」○ダンジヤウ　圀ーー臺（古の八省の一、今

の警察署の類）の官吏。
【彈性體】ダンセイタイ　彈力性を有する物體、即ち瓦斯・護謨・象牙など。
【彈奏】ダンソウ　○事をただして上に奏する。晉書、劉隗傳「陳之ー―、不レ畏二彊禦一、皆此類也」＝彈劾。○圖琴・ピアノなどをかきならす。
【彈道】ダンダウ　發射せし彈丸の空中を通る路。
【彈指】ダンシ　はじきうつ、拳などをかき鳴らす。梅堯臣詩「ー―来レ終暗驚述」
【彈文】ダンブン　他人の罪惡をあばきだしたる文章。＝彈劾文・彈章。
【彈藥】ダンヤク　○たまと、くすりと。○たまぐすり（火藥）
【彈力】ダンリョク　物理學にてはねかへす力、原形に復せんとする力。

十三畫

【彊】㊀キャウ・ガウ　㊁キャウ・ガウ　衰　強に通ず

㊀つよゆみ（弓有レ力）つよし「武ー」「雄ー」○すこやか（健）易、乾卦「自ー不息」かたし（堅）こはし。○あたる（當）○盛んなり（勢盛）○あらし（暴）○しふ。㊁つとむ、しひる。
【彊禦】キャウギョ　しひてさへぎりもとめる。史記「呂澤ー―曰、爲レ我彊レ許」
【彊悍】キャウカン　強情にして人を忌みそこなふ。後漢書、何后紀「后性ー―、後宮莫レ不二畏懼一」
【彊記】キャウキ　記憶力つよし。史記、淳于髡、博聞ー―」＝彊識・彊誌
【彊求】キャウキュウ　しひて求める。呂覽、名號大顯、不レ可ニー―一、必繇二其道一」
【彊張】キャウチャウ　相競ひて飛ぶ貌。詩、鄭風「鴇之奔奔、鵲之ー―」
【彊梁】キャウリャウ　わるづよくして善をふせぐ、彊梁にして善を襲ぐ。又、其の者。詩經「不レ侮二彊禦一、不レ畏二ー―一」＝強梁。
【彊梁】キャウリャウ　強くあらし。崔伯易文「ー相師」
【彊劫】キャウコフ　かすめおどす。史記、彭越ー―ニ外黃一」
【彊國】キャウコク　つよくあらくに。史記「河山以東ー―六」＝強國。
【彊記】キャウキ　つよく、さかんなり。漢書、蘇武傳「武留二匈奴一凡十九歲、始以ニー―一出、及レ還髭髮盡白」＝強壯。
【彊殺】キャウサツ　しひてころす。漢書「ニー―兼降王子嬰一」
【彊市】キャウシ　おしうり。唐書「ー―踊當レ贖」＝強市。
【彊志】キャウシ　おぼえがよし、記憶力強し、志は強。史、屈原傳「博聞ー―」＝彊記・彊識。
【彊識】キャウシキ　前條に同じ。禮記「博聞ー―而讓、敦二善行一而不レ怠、謂二之君子一」
【彊時】キャウジ　しひてこふ。漢書「漢王病レ創臥、張良ー―三漢王一起行勞レ軍」＝強請。
【彊族】キャウゾク　勢力あるやから。南史、薛安都傳「世爲ニー―一」
【彊大】キャウダイ　つよく大いなり。管子「德不レ加二於弱小一、威不レ信二於ー―一」＝強大。
【彊對】キャウタイ　つよきあひて。吳志、劉備天下知レ名、曹操所レ憚、今在二荊州一、此ー―也」＝強敵・勁敵。
【彊直】キャウチョク　つよくして正し。南史、柳津傳「性甚ー―」＝強直・剛直。
【彊弩】キャウド　つよきいしゆみ。＝強弩。
【彊弩絕矢不レ能レ穿二魯縞一】キャウドゼッシフノウセンロコウ　英雄も勢衰へては成すこと能はざるに喩ふ。史、韓長孺傳「ー―、衝風之末力、不レ能レ漂二鴻毛一、非二初不レ勁、末力衰也」漢書、韓安國傳には絕矢を末力に作る。強弩之末力衰看。
【彊落】キャウラク　つよき落齒。唐書「ー―悼將、貴悼レ過二敎レ順」
【強敏】キャウビン　つよくさとし。五代史、章震傳「爲レ人ー―有二口辯一」
【彊富】キャウフ　つよくして富む。吳志、駱統傳「君レ國者、以レ彊二疆土一、富ニー―一制二敵隣一、爲二尊貴一」＝富強。
【彊勉】キャウベン　つとめはげむ。漢書、鄧禹傳「ー―行レ道、則德日起、而大有レ功」＝強勉。
【彊梁】キャウリャウ　才力つよし。詩經、疏「精舒ー―而難レ服」＝強梁。

十四畫

【彌】㊀ビ・ミ　㊁ビ・ミ　紙　支　弥は略字

㊀あまねし（徧）周禮、大祝「ー―祀二天地社稷一」○をふ、をはる（終）○いや、やいよいよ（愈）論、述而「仰之ー―高」ますます（益）○やや（稍）○ながし（長）ひさし（久）○とほし（遠）○わたる（亘）はびこる（延）○つくろふ。○みつ（滿）○おほふ。○極む。○とぢる、つづる、繕ひ補ふ。左、僖二六「ー―縫其闕」○ー陀ダ勒はみな佛の名。○沙ーシャは佛門に入り落髮せる者の稱。善覺要覽「俗落髮後稱二沙ー一」㊁とどむ（止）やむ（息）古、弭に通ず。

同訓異字　彌・愈の別は愈（心部九畫）の條を見よ。

【彌久】ビキュウ　ひさしきにわたる。史、刺客傳「太傳之計、彌レ日ーレ」
【彌月】ビゲツ　次の月にまたがる。草應物

詩「一一頃不ン接」

【彌日】ビジツ　ひをわたる、日かずを經る。遷讓、辭遜に謂ふ「謙一一而消ン憂」

【彌旬】ビジュン　十日間にわたる。仕事詩「追隨不レ暫レ晩、款曲動一一レ」

【彌盛】ビセイ　いよいよさかんなり。北史「伯陽之後、久而一一」

【彌天】ビテン　そらに滿ちる。陰符經「卷ン之藏二于心一、陶二于神一、施ン之彌二于天一、給二于地一」

【彌望】ビボウ　見わたすかぎり。張協、雜詩「沃野一一」

【彌彌】ビビ　少しづつ。漸漸、益益に同じ「一一其失」＝稍稍。

【彌縫】ビホウ　○ぬひ縫ひふさぐ。闕を補ふ。「彌縫二六軍一」＝其闕、過匡二救其失一、昭二前職一也」○轉じて失をおほひて發覺を免るる義に用ふ「一時を一一す」

【彌漫】ビマン　わたりひろがる。宋書、符瑞志「一一二林谷一、年年轉盛」＝瀰漫。

【彌留】ビリュウ　病の久しく身に留りて危篤なる義。書、顧命「疾大漸惟幾、病日臻既一一」

【彌綸】ビリン　つくろひをさめる。彌は遍經、綸は經綸。易、繫辭「易與二天地一準、故能一一二天地之道一」

【彌陀】ビダ　佛阿彌陀如來の略。南史、夷貊傳「舉室咸聞二空中唱一上行先生、已生二一一淨域一矣」

【彌勒】ビロク　菩薩の一、譯して慈氏といふ。釋迦入滅後五十六億七千萬年を經て出現し、衆生を導くといふ佛。＝彌勒佛。

【彌生】ビセイ　陰曆三月の異名。

十五畫

【彏】クヮク　はる。弩をひきしぼる。＝彍。

【彏騎】クヮクキ　唐代の宿衛の騎兵（唐書、兵志）

十九畫

【彎】ワン　○ひく（引）はる（張）弓を引きしぼる。○まがる、弓なりにまがる「案一」

【彎曲】ワンキョク　ゆみなりにまがる。

【彎環】ワンクヮン　圓き形。李遠詩「惟餘坡上一一月」

【彎月】ワンゲツ　ゆみはりづき。白玉蟾詩「天際一鉤明月彎」

【彎人】ワンジン　海水などがゆみなりに陸地に入り込む。

二十畫

【彏】クヮク　きびしくひきしぼる（弓急張）

彐部（互）

【彐】ケイ

○はりねずみのかしら（彙頭）○圖漢字の部首の名稱。

【互】ゴ　彐（前條）に同じ。

六畫

【彖】タン　○ゐのこがはしる（豕走）○うらかたのことば、易の一卦の意義を總べ論ずることばの稱「一辭」「爻一」

八畫

【彗】スイ　○ははき（帚）「帚一」はく。○ははきぐさ（玉帚）○ははきぼし、妖星（孛）＝掃星、長星、妖彗、孛彗。

【彗掃】スイサウ　ははきにてはらひ清める。呂溫詩「過虞若一一、來時如二電激一」

【彗星】スイセイ　ははきぼし。九歌「登二九天一撫一一一」

九畫

【彘】テイ　ゐのこ（豕豬）孟、梁惠王「雞豚狗一之畜、無レ失二其時一、七十者可二以食一肉」

十畫

【彙】イ　○はりねずみ（蝟）豪豬に似て小なり。○たぐひ（類）「品一」「鱗一」○あつめる、類集する。

【彙集】イシフ　類を分ちて種種の事を集め記する「法令一一」

【彙進】イシン　類を以て朝廷に進む。歐陽修詩「朝廷清明天子聖、陽德一一草除劉」

【彙報】イホウ　類によりてとりあつめたる種種の報知。

【彙類】イルイ　同じたぐひ。

十三畫

【彝】イ　彜（次條）の俗字。

十五畫

【彜】イ　支　○宗廟に供へおく常用の器、鐘鼎の類「鼎一」○さかだる（酒樽）○つね（常）いつもかはらぬ五常の道。詩、大雅「民之秉一、好二是懿德一」又、夷に作る。○のり（法）「國一」「皇一」

【秉彜】ヘイイ　人たる常道を執りて履行す、人道をとり守る。字解參看。

【彝器】イキ 常に宗廟に供へおく禮儀用のうつは。在、爽十九「取二其所一レ得、以作二―一」【彝倫】イリン つねののり、憲は法。書、洪範「永弼二乃后於一レ―一」‖常法。【彝訓】イクン さかだる。書經、碑「宗廟―一」‖彝尊。【彝倫】イリン 人の常に守るべきみち。書、洪範「我不レ知二其―一攸一レ敘」

廿三畫

【彟】ワク クワク 藥 のり（度）法度「矩―」

彡部

【彡】サン 咸 ○けのかざり（毛飾）○毛なが し。○國ソクリ漢字の部首の名稱。

四畫

【形】ケイ ギャウ 青 ○かた、かたち「奇―」「能―」○かたちづくる、―を成す。○かたどる（象）○似せてつくりしもの「人―」○さま、すがた（容姿）「貌―」「儀―」○からだ（身體）「裸―」「勞―」○ありさま（狀勢・地勢）「地―」○あらはる（現）大學「此謂二誠於中一、於外一あらはす。○あらはれてゐるもの「―而上」○摺せて骨があらはれる。曲禮「居喪之禮、毀瘠不レ―」○土製の食器。史、秦本紀「吸二土―一」‖鉶。

【形影相同】ケイエイアヒドウ 形・見・現・顯・著・彰・顯・表・章・旌の別は見（部首七畫）の條を見よ。【形影相弔】ケイエイアヒテウ 影の形に從ふ如く、心の善惡は行にあらはれる。列子「列子禦而歸、形枉則影曲、形直則影正」管子「影不レ爲二曲物一直」【形影相弔】ケイエイアヒテウ 己の形體と、かげとが互に相とぶらふ。ひとり身のたよりなき義。李密、陳情表「煢煢孑立、―一」‖形單影隻。【形役】ケイエキ 心を肉體の爲めに使役する。陶潛、歸去來辭「既自以レ心爲二―一」【形容】ケイヨウ おし固めて虎の形に作り祭に供へるしほ（周禮、天官、鹽人）【形解】ケイカイ 仙人などの化去する義。史、封禪書、注「服虔曰、―一、尸解也」【形骸】ケイガイ からだ（肉體）莊、德充符「今子與レ我、遊二於―一之內一」【土木形骸】ケイボクケイガイ 外貌を土木の如くにしてかざらず。晉書、嵇康傳「有二風儀一而―、不二自藻飾一」【形骸之外】ケイガイノソト 人の肉體のほか。莊、德充符「今子與レ我、遊二形骸之內一、而子索二我―一、不二亦過一乎」【形幹】ケイカン からだ。齊書、虎―甚殺」‖形軀。【形軀】ケイク 形にあらはれたるをしへ。禮記、疏「―謂尊卑大小拜伏也」【形語】ケイゴ 口言ふこと能はず、手眞似を以て言語に替へる。佩文韻府、蘇軾怪石供、海外有二―一之國一、口不レ能レ言、相喩以レ形」【形似】ケイジ 形が似る。形貌相似る。圖繪寶鑑「得二其―一、而不レ失二規矩一者、謂二之能品一」【形而下】ケイジカ 有形のものの義、器物をいふ。易、繫辭「―者、謂二之器一」【形而下學】ケイジカガク 形而上學を見よ。【形式】ケイシキ かた、一定のきまり。【形而上】ケイジジャウ 無形の義、道をいふ。易、繫辭「―者、謂二之道一」【形而上學】ケイジジャウガク 無形即ち精神界に關する學問、哲學・倫理學など。有形即ち物質上の科學たる物理學・植物學等を形而下學といふの對。【形質】ケイシツ かたち、からだ、形狀性質。南史「―陋小、若レ不レ勝レ衣」【形狀】ケイジャウ ○なりかたち。南史「――眇小、而後辯善二言論一」○ありさま、狀態。【形象文字】ケイショウモジ 事物の形を本として構成せし文字。日・月・山・川などの類。‖象形文字。【形勝】ケイショウ 地勢のすぐれたるところ、形勢勝便。史、高祖紀「秦―之國」【形制】ケイセイ ○地形を以て人を制服する。史、鄧生傳「示二諸侯―一之勢一」○かたち、こしらへかた。‖形製。【形勢】ケイセイ ありさま、やうす。晉子「――不レ得レ爲レ非」【形聲】ケイセイ 漢字六書の一、半は意義、半は音聲より成る漢字、江は工の聲にて水は其の意義をあらはす類。說文序「――者、以レ事爲レ名、取レ譬相成、江河是也」‖諧聲。【形跡】ケイセキ あとかた、痕跡。【形容】ケイヨウ かたち。ありさま。歷代名畫記「馮紹正善寫二鵰鶚雞雉一、盡二其―一」‖形狀。【形體】ケイタイ なりかたち。漢書「便辭巧說、破二壞―一」【形單】ケイタン ひとりみ。韓愈、祭二十二郎一文「兩世一身、―一影隻」【形兆】ケイテウ かたち、きざし。淺深、息夫躬傳「擧國未形」注「圖、謀也、未レ有二―一而謀レ之」【形貌】ケイバウ なりかたち。世說「―一既偉、雅懷有レ識」‖貌形・容貌。【形骸】ケイハイ からだ。禮記「―一歸二於地一」【形便】ケイベン 地勢がすぐれて便利なり。

形勝にして便利。戦国策「蓄積饒多、地勢—一」

【形様】ケイヤウ やうす、ありさま。老學菴筆記「作二資字一、曰二惣—一」

【形容】ケイヨウ ○人のかほかたち、すがた。‖容貌。○やうす、ありさま。‖狀態・形態。○狀態を言ひあらはす「—詞」

【形容枯槁】ケイヨウコカウ かほかたちがやせおとろへる。屈原、漁父辭「顔色憔悴、——」

【形容詞】ケイヨウシ 文法にて事物のありさま性質等をあらはすことば。‖形狀詞。

【忘形】バウケイ 我が肉體の存在をわすれる。道家の精神修養法の一。莊、徳充符「形有レ所レ忘」

【形格勢禁】ケイカクセイキン 行動の自由ならざる義、格は拒ぎ止む。史、孫臏傳「批レ亢擣レ虚、——」

【彤】トウ 多

○あか(赤・丹・朱)「丹—」「朱—」○あかきかざり(丹飾・朱塗)

【彤雲】トウウン あかいろのくも。李益詩「鏡裏繰顔綾—一」

【彤霞】トウカ 日旁のあか色の雲氣。劉琦詩「—一遍二綺窓一」

【彤管】トウクワン あかくぬりたるさを。王褒と文「—一線筒」

【彤弓】トウキウ あかぬりのゆみ。天子が有功の諸侯に賜るもの。書、文侯之命「—一、彤矢百」

【彤管】トウクワン 赤き管の筆、女史が事を記するに用ふる。詩、邶風「靜女其孌、貽二我—一」注、定九、靜女之三章取二—一義一」

【彤管貽】トウクワンイ 前條の詩句に本づきて、女子の文を贈りて懇懃の情を通ずるをいふ。

【彤弧】トウコ あかくぬりたるゆみ。班固文「—一黄鉞之賜」‖赤弓。

【彤矢】トウシ あかくぬりたるや。彤弓參看。

【彤史】トウシ 明の女官の名、尚宮局に屬し、后妃嬪妾の天子に御することを掌り、其の月日を書す「將之朝、天啓宮詞、註」彤管參看。

六 畫

【彣】ゲン 微

○ひこ、男子の美稱。嬪の對稱。○才徳のすぐれたるひと(美士)詩、鄭風「邦之—一兮」「俊—一」「英—一」「時—一」「諸—一」

【彣聖】ゲンセイ すぐれてかしこし。書、泰誓「人之—一、其心好レ之」

【彧】キク チク 屋

○あや(文)かざり。○—一は茂り盛んなる貌。詩、小雅「禾黍—一」

八 畫

【彩】サイ セイ 賄 采に通ず

○いろどり、あや(文章・色采)「詞—一」○かざる。○やうす(風度)「神—一」○ひかり(光)許渾詩「輪—一漸移金殿外」輪—一は日光。○つや(光澤)「光—一」「芒—一」

【彩霞】サイカ 美くしき雲氣。李白詩「沈吟—一後、夢繞紫芳歌」

【彩鸞】サイラン いろどりたる美くしきすずめ。許渾詩「—一浮雲過、綺窗明月深」

【彩旗】サイキ いろどりしたる旗。

【彩袍】サイハウ いろどり。玉物、乾元殿頌「—一祥雲、夾二朱旗一而鬼レ影」

【彩彩】サイサイ 美くしき貌。詩經「—一玄服」

【彩色】サイシキ いろどる、いろどり。‖采色。

【彩飾】サイショク いろどりかざる。‖采飾。

【彩綠】サイリョク 孔雀の羽などの美くしく光るみどり色。湘山野錄「—一奪レ目」

【彩蝶】サイテフ 美くしきいろどりのてふ。唐庚詩「—一戯二芳園一」

【彩票】サイヘウ 圖色紙に番號を記せしとみくじの札。

【彫】テウ 蕭 一に雕に作る

○ほる、きざむ(刻)ある(琢文)ちりばむ(鏤)「—刻」「—鏤」○かざる(飾)文飾する。○ふがく(書文)○そこなふ(殘)いたむ(傷痍)物事が衰へよわる「—弊」劉滄詩「別來人事殘—一」○しぼむ(零落)‖凋。論、子罕「歲寒然後、知二松柏之後一レ也」○—胡コウはまこものみ、食ふべし。‖菰米。

【彫弓】テウキウ ほりものしてかざりし弓。荀、大略「天子—一」

【彫玉】テウギョク ちりばめかざりたるたま。子虚賦「乘—一之輿一」

【彫胡】テウコ 菰の實、食用とす。‖彫胡米・菰米。

【彫刻】テウコク ほりきざむ、ほりものする。莊子「雕二戴天地一、—一衆形一、而不レ爲レ巧」‖彫斲。

【彫爽】テウサウ おとろへ失ふ、意氣が衰へ弱る。杜甫詩「忍使二肺腸氣—一—一蘇武詩「豈惟傾二老大一、漸復成二—一—」

【彫像】テウザウ 物の形を刻む。又、其の刻みし形。釋氏要覽「優陀延王—一」

【彫題】テウダイ ○そこなひいたむ。杜甫詩「秋葉擁二霜露一、豈敢惜二—一—」○兵亂の後、民力がよわりくるしむ。三國志、蘇則傳、注「內擾二—一、外鴈二

離散ニ」

【彫琢】チョウタク しぼみつく。よわりはてる。左傳「宮室崇侈、民力ニ―」

【彫牆】チョウショウ 美くしくゑりかざりたるかき、宮室の美を極むるにいふ。書、五子之歌「峻宇ニ―」

【彫飾】チョウショク ほりものしてかざる。漢書、張衡傳「雖以ニ―一爲レ好」

【彫圖】チョウト ひたひにいれずみする。礙記「文背ニ―」‖雕題。

【彫琢】チョウタク ほると、みがくと。‖彫刻琢磨。

【彫斲】チョウタク ゑりきざむ、斲はけづる。北史、周武帝紀「ニ―之物、竝賜二貧人一」‖彫刻。

【彫蟲篆刻】チョウチュウテンコク 文を作るに、餘りに字句を修飾するをいふ、小刀細工。彫一に雕に作る。法言「或問、吾子少而好レ賦、曰然、童子―、俄而曰、壯夫不レ爲也」

【彫衆】チョウシュウ すたれみだる。唐書、殷盈孫傳「昭宗時、朝度ニ―」

【彫敝】チョウヘイ 次條に同じ。史、禮書「防二其侈一、救ニ―一」

【彫殘】チョウザン つかれおとろふ。魏志、明帝紀「百姓ニ―」‖彫敝・彫殘。

【彫落】チョウラク ○草木がしぼむ。詩經「如二松柏之茂一、政「如二松柏之葉一、新故相承代常無ニ―一」‖彫殘零落。○おちぶれる。

【彫纓】チョウエイ ゑりきざむ。子虛賦、注「師古曰、以レ王飾レ輿、而ニ―之」

【彪】ヒョウ 尤

○まだら、虎の皮の斑文。○小さき虎。○あや（文・文飾）法言「弼中而ニ―外」

【彪炳】ヒョウヘイ 虎の皮のあやもやうのさかんにうつくしき貌。文心雕龍「清英以惠二其才一、ニ―以文二其質一」‖蔚彪記之分也」

【彪煥】ヒョウカン きらびやか。梁昭明太子、七契「珠簾ニ―」

【彪炳】ヒョウヘイ あきらかにかがやく。梁昭明太子賦「日照二珠簾一、ニ―灼爍」‖炳彪。

【彬】㊀ヒン ㊁ハン 軫 阮

㊀そなはりととのふ（文質備）○さかんなり。㊁あきらか（文采明）

【彬蔚】ヒンウツ 文采彩の盛んなる貌。晉書、文苑傳序「文宗繼起、ニ―之美、競二爽當年一」

【彬彬】ヒンピン 文質兼ね備はる。論、雍也「文質ニ―、然後君子」

九畫

【彭】㊀ハウ ㊁ハウ 陽 庚

㊀つづみのおと（鼓聲）○古の國名、後に一城といふ、今の江蘇銅山縣。○一蠡は江西省に在る湖名。‖鄱陽湖。㊁一は多き貌。詩、齊風「汶水湯湯、行人ニ―」又、行く貌。詩、小雅「四牡ニ―」又、壯んなる貌。詩、大雅「駟驖ニ―」又、衆くの車の聲。‖蠭蠭。○一亨は驕滿の貌。韓愈、城南聯句「苦開腹一亨」○八百歲まで長命せしといふ仙人一祖の名に本づきて、長壽、長壽者の義とす。沈炯詩「一殤無異」葬、夷跖可同朝」

【彭咸】ハウカン 殷の賢臣、其の君を諫めて容れられず、水に投じて死す（離騷、注）

【彭殤】ハウショウ 長命なると短命なると。彭は彭祖、殤はわかじに。王羲之、蘭亭序「固知ニ一死生一爲二虛誕一、齊ニ―一爲妄作一」‖壽夭。

【彭祖之壽】ハウソノコトブキ 人の長命なるをいふ。列仙傳、彭祖論錄、帝顓頊玄孫、至二殷之末世一、年已七百餘歲而不レ衰、少好二恬靜一、憺以二棄レ神治一生爲レ事」

【彭湃】ハウハイ 波の相觸れて戻る貌。司馬相如、子虛賦「沸乎暴怒、洶涌ニ―一」‖澎湃。

十一畫

【彰】シャウ 陽

○あきらか（明）「―一」○あらはる（著）「顯一」「燭一」書、伊訓「嘉言孔ニ―」あらはす（著）著明になる「表一善、惡隱謨「一厥有レ常」○あや（文章）章に通ず、かざり（飾）○一徳は府の名、河南省に屬す、今の安陽縣は其の治、清の光緒三十四年、自ら開きて商埠と爲す。

同訓異字 彰・見・現・顯・著・彪・暴・露・表・雄の別は見（部首七畫）の條を見よ。

【彰義隊】シャウギタイ 明治元年戊辰に、德川幕府の旗下の臣が江戸上野の寛永寺に據り官軍に敵對せし團隊の稱。

【彰顯】シャウケン いちじるし。明かにあらはす。後漢書、王符傳「乃歷居著レ書、三十餘篇、以譏二當時失得一、不レ欲レ―二其名一、故號曰二潛夫論一」‖顯彰。

【彰孚】シャウフ 明かなる貌。

【彰功】シャウコウ 功をあらはす。

【彰示】シャウジ あきらかにしめす。晉權文「―二來世一」‖明示。

【彰彰】シャウシャウ あきらかなる貌。道德指歸論「照二察察一以二奕奕一、顯二的的一以二―一」‖照著。

【彰施】シャウセイ 人の美德をあらはす。施

は族に記して掲げあらはす。‖表揚。

【彰著】シャウチョ あきらかにいちじるし。晉書、賈后傳「威二服內外一、衆惡一一」

【彰德】トク ○德をあらはす。○河南の府名。字解參看。

【彰明】メイ あきらか。‖彰明。

十一畫

【影】エイ 梗

○かげ(物之陰影)「清一」「燭一」「斜一」○ひかげ(日暮)以上古、景に作る。○すがた(形容)おもかげ。○圖像「神一」○國本物。又、本式。又、表向にあらざるもの「一武者」「一祭」

【影響雷同】エイキョウライドウ 影を見て動き、響を聞きて賛ふ。驚懼の甚だしき形容。理國、答客難「使二見レ之者影駭、聞レ之者響應一」

【影向】カウ 佛が此の世に其の身をあらはすをいふ。

【影響】キャウ さしひびき、形のかげに於ける如く、本の利害は必ず末に及ぶ義。書、大禹謨「惠レ迪吉、從レ逆凶、惟一一」惠は順、迪は道。

【影國】エイコク 墨國、影の形に從ふに喩ふ。梁林伐山「後梁爲二北國一一一一猶レ曰二附庸一」

【影前】ゼン 祖先の圖像、位牌などの前。

【影堂】ダウ 先人の遺像を奉祀する所。古今注「廟貌也、所二以彷一佛先人容貌一也、庶人則立二一一一」

【影單】タン ひとりみ。貢奎詩「凍雲封レ壇合、微燈照レ一一」

【影殿】デン 廟寺中、神佛に供奉する所。宋之問詩「一一臨二丹壑一、香臺隱二翠微一」

【影燈】トウ 週り燈籠。雲笈七籤「有二五色蝋紙菩提葉者一、若二沙戲一一一、人物旋轉如レ飛」‖走馬燈。

【影底】テイ かばふ、おかげ、影は陰。册府元龜「投二名於勢要一、以求二一一」

【影本】ホン 石ずり本。北史「周文帝令下趙文深至二江陵一影中寫寺碑上‖摸本。

【影神】シン 國うつしゑ、幻燈。‖影戲・影燈。

【捕レ影】ホエイ かげぼふしをつかまへる義、取り止めが無き譬。谷永、論二神怪一「求之蹟一、如二聖レ風一一レ、終不レ可レ得」

【陰舞廋】ブインシュウ 裏面に立ちては弱きものが、かげにてのみ、強きふりする義。

十九畫

【彫】チ 支

みづち、龍に似て黄色。史、齊世家「非レ龍非一、非レ虎非一羆、所二獲霸王之輔一」‖鄭・地壤。

彳部

【彳】テキ チャク 陌

○あゆむ(歩)少しく歩む。○たたずむ。○國漢字の部首の名稱。‖行人扁。

【彳亍】テキチャク 行く貌。左歩を彳と爲し、右歩を亍と爲す。合すれば行字となる。潘岳、射雉賦「一一中輿」一說に小歩して止まる貌。

三畫

【彷】シャク テキ 錫 陌

○いっぽんばし、まるきばし。蘇軾詩「略一橫二秋水一」‖獨木橋・獨梁孤彷・溪彷。

四畫

【役】エキ ヤク 陌

○國境をまもる(戍邊)又、其の守備「遠一」「戍一」○いくさ(戰爭)軍旅の事をいふ。○えだち、政府の土木事業などにつかはれる、ぶやく「賦一」「公一」「繇一」○つかふ。孟、離婁「小德一大德」「使一」つかはれる「苦一」「服一」○つらなる(列)○めしつかひ「廝一」○つとめ(職務)○一一は、はたらく、勞動する、つとめはたらく。國○やく、つかさ(司)「一所」「一人」○俳優の受持つやくめ。又、一者は俳優の稱。

【董レ役】タウ 工事を監督する、董は正。

【役役】エキ 心力を勞し、求むる所ありて止まざる貌。莊、齊物「終身一一、而不レ見二其成功一」

【役使】シ めしつかふ。後漢書、高獲傳「能一一鬼神一」‖使役。

【役心】エキシン 心をつかふ。曠賦「近取二諸身一一レ一御レ氣」

【役所】ショ ○政府の土木工事をなす所「宋史、王能傳」○シャク國やくば、政府の事務を取扱ふ所。‖官署・官衙・官廳。

【役丁】エキテイ にんそく、人夫。野客叢書「丁晉公治レ第、楊叔宗爲督二一一」‖役夫。

【役徒】エキト 人足ニンをいふ。左傳「殺人爭出、臨二溝一一于山中一」‖役夫。

【役夫】フ ○ぶやくのにんそく、人夫ニンプ○人を賤みていふ。左、文元「呼一一、宜君王之欲二殺レ女而立一職

也」呼は歎辭、嗚呼ア
【役夫夢】エキフノ下の列子の寓言により て富貴のはかなきに喩ふ。列、周穆王「周之尹氏大治レ產、其下趨レ役者、侵二晨昏一而弗レ息、有二老役夫一筋力竭矣、而使レ之彌勤、晝則申呼而卽レ事、夜則昏憊而熟寐（中略）夢爲二國君一、居二人民之上一、總二一國之事一、遊燕宮觀、窓二意所一レ欲、其樂無レ比、覺則復役、人有レ慰二喩其勞一者、役夫曰、人生百年、晝夜各分、吾晝爲二僕隷一、苦則苦矣、夜爲二人君一、其樂無レ比、何所レ怨哉」
【役員】エキヰン 圖會社などにて事務を取扱ふ者。
【役者】ヤクシャ 圖わざをぎ、＝俳優。
【役場】ヤクバ 圖○役所ヤクショに同じ。町村ー」○公證人・執達吏などの事務を執る所。

【彸】ショウ 多

征ーはあわて行く貌。又、おそれてあわてる貌。四子講德論「百姓征ー、無所レ措二其手足一」＝徨惶。

【彷】㊀ハウ ㊁ハウ 陽 養

㊀さまよふ、たちもとほる。㊁ほのか、さもにたり。＝髣。
【彷徨】ハウクワウ ○さまよふ、うろつく。卑、刺客傳「ー一不レ能レ去」＝仿佯・方羊・徜徉・逍遙・徘徊。
【彷彿】ハウフツ たちもとほる。ぶらぶらあるく。＝髣髴、招魂「ー一無所レ倚、廣大無レ所レ極」＝方羊・徜徉・逍遙・徘徊。

【征】セイ 五 畫 庚

○ゆく（行）たびだつ、たびをする「晨ー」○うつ（伐）上が下を伐つ「出ー」「親ー」○とる（取）利益を取る、まうけを獲る。孟、梁惠王「上下交ー利」○かかりもの（賦稅）稅を取り立てる「市ー」「關ー」「ー稅」「漁ー」孟、公孫丑「關譏而不ー」關は關所、譏は見張る。○ー答は自ら安んぜざる義。
同訓異語 征・伐・肘・撃・打・撲・拍・搏・射・撻・扑・捶・殴の別は伐（人部四畫）の條を見よ。
○征・往・行・復・之等の別は往（木部）を見よ。
【征衣】セイイ たびごろも（行衣）許渾詩「朝來有二鄉信一、猶自寄二ー一」
【征夷大將軍】セイイタイシヤウグン 圖○古代、東夷方皇。○蛇の如く、扁頭にして五采の文ある蟲。莊、逍遙「野有二ー一」
【彷彿】ハウフツ 髣髴かに見えざる貌。ぼんやりして明かならざる貌。＝髣髴・時ー一以遺見」＝仿佛・髣髴。
【征伐】セイバツ 遠方（飛びゆくかり。談苑紀聞、注「ー一鳴二南音一」
【征韓】セイカン 韓國を征伐する。＝朝鮮征伐。
【征鴈】セイガン 遠方（行く車に駕するそ（うま。玉勅、桑泉別二少府一序「高林靜而鷹鳥飛、長路曉而ー一動」
【征人】セイジン たびびと。于僖詩「深疑鳴啁聲、中有二ー一淚一」＝游子・征客。
【征戍】セイジュ さきもり、邊境にゆきてまもる。又、其の守備兵。隋書「免二其ー一」
【征巡】セイジュン おそれあわてる貌。王褒文「百姓ー一、無所レ措二其手足一」＝怔營・遑遽。
【征稅】セイゼイ 租稅をとりたてる。禮記、疏「雖レ無二ー一、猶有二譏禁一」＝收斂。
【征戰】セイセン いくさ、たたかひ。王維詩「酣飢二沙場一君莫レ笑、古來ー一幾人回」
【征繕】セイゼン 征は賦、繕は補、賦稅をとりて、甲兵を補ひ修む。左、僖十五「ー一以立二嗣子一」
【征討】セイトウ 王者が反賊の罪を正してうつ。左傳「日尋二干戈一、以相ー一」＝征伐。
【征鳥】セイテウ 遠くとびゆくとり、わたり鳥の類。呂覽、季冬「ー一厲疾」
【征途】セイト ○たびのみち、＝征路。○出征のみち。
【征馬】セイバ 旅にて乘るうま。江淹、別賦「驅二ー一一而不レ顧」
【征伐】セイバツ 征は正、伐ちて罪あるものを正す。王者の討伐。論、季氏「天下有レ道、則禮樂ー一、自二天子一出」＝征討。
【征帆】セイハン 遠く行く舟。孟浩然詩「嶺北通二ー一一、巴東問二故人一」
【征夫】セイフ 遠く行く人、たびびと。陶潛、歸去來辭「問二ー一以二前路一」＝行人。
【征布】セイフ 稅として市場より取りたてる布。周禮、泉布「掌以二市之ー一」
【征賦】セイフ 上に取りたつるみつぎもの。莊子「ー一不レ屬」＝征稅。
【征服】セイフク 征伐して服從させる。
【征利】セイリ 征は取、利益をとる。孟、梁惠王「上下交ー一」＝面國危矣」
【征輪】セイリン 遠方に行くくるま。王維詩

「含ン懐動ニ一ー」【征旅】セイ　征伐に從ふ軍隊。曹植詩「翩ニ我ー一ー」【征路】ロセイ　たびのみち。鮑照詩「鳴雞戒ニ一ー一暮息落日分」‖征途。【征矢】ヤセイ　圖戰陣に用ふる矢。

【徂】ソ　虞

○ゆく（往）詩、豳風「我ー東山ニ○ゐまかる（死）史記「吁嗟ー分、命之衰矣」‖殂。○ねらふ、狙に通ず。漢書、張良傳「良與客ー撃秦皇帝ニ○はじめ（始）

同訓異字　徂・往・之・如・逝・行・征・適・于の別は往（本書）の條を見よ。

【徂撃】ソゲキ　ねらひうつ。又、ねらひうち。‖狙撃。【徂謀】ソボウ　すぎ去りしとし。謝靈運文「晩ニ一騒經」‖徂年。【徂謝】ソシャ　人の死をいふ。長くこの世を辭する義。顏眞卿詩「懐賢久ー一」【徂暑】ソショ　ゆくあつさ、去る暑季、轉じて陰曆六月の異名。詩、小雅「四月維夏、六月ー一」【徂征】ソセイ　ゆきて伐つ。書經「維時有苗弗ン率、汝ー一」【徂年】ソネン　すぎゆくとし。後漢書「ー已流、壯情方勇」【徂徠】ソライ　○ゆき。‖往來・徂來。○山の名。今の山東省泰安縣の東南に在り。宋史「石介字守道、耕ニ一ー山下ニ以ン易教ニ授於家ニ○一ー先生は宋の石介の號、一ー集は其の文集。【徂落】ソラク　天子の死。‖崩御・殂落。【徂旅】ソリョ　進み行く軍隊。

【徂】テイ　齊

一徊は、たちもとほる。‖徘徊・低徊。

【彼】ヒ　紙

○かれ、あれ、あ。此・我・己の對。孫子「凡戰知ー知ニ己、百戰百勝ニ○かしこ。○かの、あの、事物を指していふ。○人をしりぞけいやしめる辭。言ふに足らず、之を外にする辭。又、憎悪「一哉ー哉」○助辭の如く殆ど無意味に用ふ。詩、王風「一其之子、不ン與ン我ン申」【彼我】ヒガ　かれと、われと。漢書「人道不ン親ニ一ー一」【彼岸】ヒガン　圖○對岸の義、煩惱の苦海を脱して涅槃（ネハン）のー一に到る。無量壽經「涅槃名ニ一ー一」○春分と秋分との日を中日といひ、其の前後三日、合せて七日間に行ふ佛事をー一會といふ、轉じて其の季節。【彼岸櫻】ヒガンザクラ　圖櫻の一種。春の彼岸の前後に單瓣淡紅色の花を著く。【彼已】ヒイ　彼に同じ、人を指す辭、己は助辭。韻會「對ン物而言、曰ニ一ー一」【彼蒼】ヒソウ　そら（天）詩。秦風、黃鳥「一ー者天」轉じて天に訴ふるにいふ。韓愈、祭ニ十二郎ー文「一ー者天、曷其有ン極」【彼此】ヒシ　かれと、これと。左、昭元「解場之邑、一彼一此、何常之有」【知ン彼知ン己百戰不ン殆】シレヒチシレキヒャクセンフアヤウシ　彼我の情勢に通ずれば、百たび戰ふも危からず。孫子、謀攻「一一、不ン知ン彼而知ン己、一勝一負、不ン知ン彼不ン知ン己、每ン戰必敗」【彼哉彼哉】カレカナ　人をしりぞけいやしめる辭。字解參看。【彼一時此一時】カレイチジコレイチジ　かの時はかの時、この時はこの時、各其の時に應じて行ひしことにて、決して矛盾にあらず（孟、公孫丑）【彼等】ラ　○かの人たち。○人を賤めていふ、あいつら。史、酷吏傳「如ニ一ー一者、無ン足ニ與計ニ天下事ニ」

【佛】フツ　物

髴（髣髴）に同じ。彷ーは、さもにたり。‖髣髴。

【往】㊀ワウ　㊁ワ　遇　養　俗字往は

㊀ゆく、いぬ（行之）「孤ー」「戞ー」「戞ー星而ー」さる（去）來の對。○いにしへ（古）むかし（昔）過去。「既ー」「古ー」苟、解蔽「不蔇ー」○のち、あと、以後。論、八佾「諫自ニ既灌而ー者」○おくる（致）物を人に送致する。○ーーはときどき、をりをり、これまで唯一つのみにあらざる義。㊁むかふ（歸向）史、孔子世家贊「心嚮ー之」

同訓異字　往・之・如・逝・行・征・適・于○往は來・還・反・復と對す、先へゆきすぎるなり、往年は往き過ぎし年なり。○之は往ン彼曰ン之、到ン此曰ン至、皆其互通と註す、何處へゆくと、指すところありてゆく義。○孟子「去之ニ畧山之下一居焉」○如は之に近し、但、ゆく所までゆき、更に所をかへてゆくに用ふ。酒德頌「蓂ン天席ン地、縱ニ意所ニ如」○逝は往に近し、長逝は死する義、逝水は流れ去りし水なり。○行はあるき進むこと、止の反。留雅「堂上謂ニ之行ニ堂下謂ニ之步ニ」○徂は往に近し、用法せまし。詩經「我徂ニ東山ニ」○征は行に近し、多く行旅に用ふ、征人・征旅の類。○適は之に近く、きす處に、一筋に向ひてゆくなり。孟子「天子適ニ諸侯ニ曰ニ巡狩ニ」○于は用事ありてゆく義。詩經「君子于ン役」

【往燕】エンカ　かへりゆくつばめ。陶潛詩

「――無二遺影一來雁有二遺聲一」

【彰レ往察レ來】ショウワウサツライ　既往の事を明らかにし、將來の得失を察す。易、繫辭「夫易彰レ往而察レ來、而微顯闡レ幽」

【送レ往迎レ來】ソウワウゲイライ　去る人を見おくり、來る人を迎へる。中庸「――、曷レ嘗有二所一レ忒、誠レ者非二自成一而已也」

【告レ往知レ來】コクワウチライ　既に言ひし言を聞きて、未だ言はざることを知る、一を聞いて二を知る。論、學而「告二諸往一而知レ來者」

【觀レ往知レ來】クワンワウチライ　過去を觀察して、未來を推しはかりて知る。列、說符「聖人見レ出以知レ入、觀レ往以知レ來」

【往軫】ワウシン　ゆきて兵をねぎらふ。宋史、狄栄紀「――レ之、乃去」

【往悔】ワウクワイ　往時の悔。戴表元詩「前非――俱勿レ論」＝前非。

【往還】ワウクワン　〇ゆきかへり。列、黃帝「入火――、埃不レ漫、身不レ焦」〇圖道路の義。

【往古】ワウコ　むかし。後漢、班固傳賛「不二自量一其死、雖二――烈士、何以加哉」＝往昔。

【往哉】ワウサイ　すぎしとし。左傳「――鄭伯請二成于陳一」＝往年。

【往事】ワウジ　〇過ぎ去りし事、既往のことがら。白居易詩「――渺茫都似レ夢、舊遊零落半歸レ泉」

【往時】ワウジ　むかし。過去の時。＝昔時・昔日。

【往日】ワウジツ　すぎし日、まへのひ。白居易詩「今日心情如二――一」＝昔日。

【往診】ワウシン　病家にゆきて診察する。史、倉公傳「未二――一時」

【往者】ワウシヤ　過ぎ去りしこと、さきに、かつて。＝曩者。

【往者不レ可レ諫】ワウシヤフカカン　過ぎ去りしことは、諫め止むべからず。論、微子「――、來者猶可レ追」

【往生】ワウジヤウ　〇佛往きて極樂淨土に生れる。淨土論「願見二彌陀佛一、普共二諸衆生一――一安樂國一」〇圖死する。又、あきらめる。屈服する。

【往世】ワウセイ　むかしの世（＝往時）＝往代。

【往聖】ワウセイ　むかしのひじり。陳、陸琛詩「――既莫レ作、後賢孰當レ撰」＝古聖人。

【往昔】ワウセキ　むかし。張衡、西京賦「美二――之松喬一、要二羨門乎天路一」

【往代】ワウダイ　いにしへ、むかしの世。晉書「宜下帥二隨――一、覩中往迹上」＝往世。

【往答】ワウタフ　此方よりたづねゆき、又先方より來り答ふる。互にゆきかよふ。後漢書、李通傳「光武初以二通士君子一相慕也、故――之」

【往年】ワウネン　さきのとし。史、魏布傳「――殺二彭越一、前年殺二韓信一」＝往歳。

【往訪】ワウホウ　ゆきて人をとふ。王遵詩「――超松雪、滿載九峯春」

【往亡日】ワウバウジツ　陰陽道にて外出又は出陣等を忌み禁ずる凶日。通鑑、安帝紀「劉恭攻レ城、或曰、今日往亡、不レ利レ行レ師」注「曆書以二鷄鳴後十四日一爲二――一」

【往復】ワウフク　ゆきかへり。北史、魏明帝紀「陰陽有二――一、四時有二代謝一」＝往返。

【往弊】ワウヘイ　前代よりのつひえ。晉書「革二――一者、則政不レ爽」

【往反】ワウハン　ゆきかへり。五代史、王進傳「――不レ過二五六日一」＝往還・往復。

【往返】ワウヘン　ゆきかへり。＝往反・往還。

【往來】ワウライ　〇ゆきき。ゆくと、くると。曲禮「下尊二――一」圖〇通路、道路。〇手紙の文案を載せたる書「指息――」

【往往】ワウワウ　ときどき、をりをり。前にありし事を約束する辭。史、五帝紀「主二長老一皆各――稱二黃帝堯舜之德一風教一固殊上焉」

六　畫

【徊】クワイ　灰　回・佪に通ず　本、徊に作る、徘―はたちもとほる、進まずしてさまよふ。＝彷徨。

【後】㊀コウ　有　通じて后に作る、通音ゴ　㊁コウ　宥　㊀のち（將來）「爾―」「向―」あと、うしろ、しりへ（後方）前。先の對。〇ちすぢ、子孫「―裔」孟、離婁「不孝有三、無―爲レ大」〇短―はうしろの短き獵夫などの服。㊁おくる（送）論、雍也「非敢―也、馬不レ進也」〇のちにす、あとまはし「先―」「前―」論、衛靈公「事レ君敬二其事一而―其食」

【後胤】コウイン　後の子孫。魏志、齊王紀「陳及二――一」＝後裔。

【後裔】コウエイ　子孫。裔は衣のすそ、轉じて末の意とす。書、微子之命「功加二于時一、德垂二――一」

【後葉】コウエフ　のちのよ。葉は代。晉書、劉波傳「熹投二其生一、勳流二――一」＝後代・後世。

【後援】コウエン　〇うしろだて、後より來るたすけの兵。周書、獨孤信傳「孤軍數千、――未レ接」＝後救。〇あとおし、人の背後に居て助ける「隋書、高宗紀」

【後園】コウエン　うしろのその。王維詩「琴伴前庭月、酒勸―春」

【後學】コウガク　〇あとより進む學者。漢書、董仲舒傳「蓋二心大業一、令二――者有二所二統壹一」＝後進。〇學者の謙稱。

【後覺】コウカク　後知に同じ。孟、萬章「天之生二斯民一也、使二先知覺二後知一、使二先覺覺二――一」

【後獄】コウ のちのくるしみ。詩經「無レ有二一一一」日後難。

【後生】コウセイ 後日のわざはひ。戰國策「公今言二破レ趙太易一、恐有二一一一」

【後宮】コウキュウ 天子のおくどてん。轉じて、后妃の稱。史、周紀「入二王一一一」日後庭。

【後距】コウキョ ○あとぞなへのぐんぜい。漢書、酈食其傳「爲二武師一一一」距は一に拒に作る。日後軍。○うしろのけっぱい。淮南子「前爪一一」

【後矩】コウク 後の世のてほん。北史「惟是酌前王、貽二後一一」

【後悔】コウカイ あとてくやむ。漢書、疏廣傳「宜成名立、如レ此不レ去、懼有二一一」

【後患】コウカン 後日のうれひ。孟、離婁「言二人之不善一、如二一一何」

【後勁】ゴケイ あとぞなへの精兵。左、宣十二「中權一一」

【後景】ケイ ○うしろの方のけしき。○繪畫の後壁に描きし景色。日背景。

【後繼】ケイ ○あとよりつぐ。つづめ。晉書、景帝紀「率二諸將一以爲二一一」○あとつぎ。唐書、韋公肅傳「再娶一一」

【後言】ゴン かげぐちのかげぐそしる。書、益稷「汝無二面從退有二一一」

【後見】ケン 圖うしろみ。禁治産者又は親權者なき未成年者を監督するやくめ。

【後顧】コ うしろをかへりみる。あとの心配。魏書、李沖傳「無二一一之憂一」

【後昆】コン のちのよ。昆も後の子孫。書、伸鷹之誥「以レ義制事、以レ禮制レ心、垂二裕一一一」日昆後。

【後事】ジ ○わが死後の事ども。魏書、司馬紹傳「欲レ屬以二一一一」○後來の事。晉書、閻纘傳「前事不レ忘、一一之戒」

【後嗣】シ あとつぎ。書經「俾レ輔二于朕一一」

【後室】シツ 圖貴人のやもめ。日未亡人。

【後身】シン うまれがはりのからだ。來世の身。鄭谷詩「一一唯願似二師身一」

【後進】シン あとより進み來る。又、其の人。論、先進「一一於二禮樂一、君子也」日後輩。後學。

【後進領袖】ジョウシュウ 後生少年者の中にて頭となるもの。晉書、裴秀傳「秀字季彦、少好學、有二風操一、八歲能屬レ文、時人爲二之語一曰、一一、有二識鑒一」

【後車】シャ ○前の車のあとより行くくるま。後漢書、賈逵傳「前車覆、一一誡」○そへぐるま。孟、滕文公「一一數十乘、從者數百人」日副車。

【後生】セイ ○あとより生れて來る子孫。詩、商頌「保二我一一一」日後嗣。○我より後れて生るる者。論、子罕「一一可レ畏」日後輩・少年・後進。○のちの世に生れかはる。

【後生可レ畏】コウセイおそるべし 後輩は後に如何なる大人物になるかも知れず、故に畏れ敬ふべしとの意。論、子罕「子曰、一一、焉知二來者之不一レ如レ今也」

【後世】セイ ○のちの世。日後代。○のちの子孫。史、管蔡世家「其一一」

【後先】セン あとと、さきと。おくれさきだつ。蘇軾詩「鷸蚌無二一一一」日前後・先後。

【後素】ソ 繪畫をいふ。素は白紛の類。古の繪畫は先づ粉采を布き、最後に素を以て其の間に分布す。論、八佾「子曰、繪事一レ」

【後代】ダイ のちの世。漢書、王莽傳「爲二一一法一」日後世・後葉。

【後代哂】ダイシン のちの世に殘るはぢ。晉書「將レ爲二後代所一レ哂、義不二敢拜一也」

【後知】チ 人よりあとにさとり知る者。孟、萬章「使二先知覺二一一一」日後覺・後進。

【後塵】ジン 後方のちり。人のあとにつく義。賓客に在る謙辭。崔駰文「幸得充二下館一、序二一一、以竭二其拳拳敢進一言一」

【後塵】コウジン 貴人の後に就き從ふ義。古今詩話「莫レ嫌侍レ酒輕二盲語一、曾把二文章一一一」

【後庭】テイ 天子のおくごてん。漢書、王商傳「一一之事、皆受二命皇太后一」日後宮。

【後凋節】コウチョウセツ 松柏の經寒にも凋せず、萬木のしぼむにおくれて、青青たるを、節操の堅きに喩ふ。論、子罕「歲寒然後知二松柏之後レ凋也」

【後哲】テツ 後世の賢人。晉書「求二相于一一一」日來哲・後賢。

【後天】テン ○天におくるる義にて、天運が來りて後、其の事を知り行ふ。先天の對。易、文言「先レ天而天弗レ違、レ一而奉二天時一」○吾人が生れて後、學問經驗などにて得たる智識・習慣など。

【後圖】ト のちのはかりごと、後日の計。淮南子、束脩「仲由レ死猶レ生、不レ願一一一豈有二此節功一哉」

【後難】ナン のちのくるしみ。晉書、杜預傳「不レ慮一一一」日後患。

【後輩】ハイ あとより進む人。舊唐書、劉禹錫傳「王叔文於二東宮一別レ事、一一務レ進、多附二陛之一」日後進。

【後房】ボウ おくむきのへや、婦人の室。漢書、史丹傳「一一妻妾數十人」

【後備】ビ 後のそなへ。

【後備役】コウビエキ 圖陸海兵役を經過せし者の服する役、其の期間は十年、之を經過すれば、國民兵役となる。

【後母】ボ ままはは。史、平津侯主父傳「妻一一、孝謹」日繼母・圖後妻。

【後來】ライ こののち。齊書、陳章王叔傳「貴顯謂レ人曰、一一佳器也」日將來。

【後樂】コウラク 天下の人の樂におくれてたのしむ。范仲淹、岳陽樓記「先二天下之憂一而憂、後二天下之樂一而樂」

【後續】コウゾク軍隊のうしろより供給する兵糧。史、彭越傳「擊レ絶二其一糧一」

【後主】コウシュ 劉禪の諡。

【後漢】コウカン 光武帝より、孝獻帝まで十二世、百九十六年間の稱、洛陽に都す、其の地長安の東にあるを以て一に東漢といふ。

【後漢書】ゴカンジョ 本紀十卷・列傳八十卷、南北朝の宋の范曄撰す、後漢十二帝の事を紀す。

【後光】ゴコウ 佛菩薩のうなじより出づる光明。‖圓光・背光。

【後夫】コウフ 再び娶りし妻、のちぞひの妻の家語「高宗貞二一一殺二孝己一」

【後唐】コウタウ 五代の一、李唐の後、李存勗を祖とす、四世、十四年にして晉の高祖に滅ぼさる。

【很】コン 阮 狠は俗字

○たがふ(違)もとる(戻)聽從せず。○うったふ(訟)せめぐ(閔)あらそふ(諍)爭ひ訴へる「瞋一」曲禮「一毋レ求レ勝」○俗甚の義、一好ハン‖甚好。

同訓異字 很・悖・拂・戾の別は悖(心部七畫)の條を見よ。

【很戾】コンレイ もとる。北史「其性一一」

【徇】㊀シュン ㊁ジュン 眞 通音 ジュン

㊀あまねし(周徧)ゆきわたる。書、公孟「思慮一通」○いとなむ(營)○つかふ(使)使役する。莊、人間世「夫一耳目」㊁とし、はやし(疾)○めぐる(巡)かすむ(略)其の地をめぐりて臣屬せしめる。○となふ(行示)○ふれる(宣令)○したがふ、身を以て物に從ふ。史、伯夷傳「貪夫一財、烈士一名」‖殉。○てらふ(衒)

同訓異字 殉・循・從・隨・循等の別は順(頁部三畫)の條を見よ。

【徇求】シュンキュウ あまねくもとめる。晉書「宜下數引二侍臣一一一議上」

【徇財】ジュンザイ 命がけにて、たからを得んとする。宇解參看。

【徇節】ジュンセツ みさをを守り死に至るまで變らず。魏文帝文「隕レ身一レ一、前代美レ之」‖殉節。

【徇難】ジュンナン 身を以て國難に赴く。南史、齊太祖紀「公投袂一一、超然奮發」徇一に殉に作る。

【徇地】ジュンチ 其の地を巡りて之を臣屬せしめる。史、陳涉世家「諸將之一レ一者、不レ可二勝數一」‖略地。

【徇通】ジュンツウ あまねく行きわたる。字解參看。

【待】タイ 隊

○まつ(竢)まちうける、期する。○あひしらふ、もてなす、遇する「招一」「優一」「厚一」「證一」「款一」「接一」「敬一」論、微子「以孝孟之間一レ之」○そなへふせぐ(備禦)周語「率二大鎚一以憚二小國一、其誰二云一レ之」

同訓異字 竢・俟・竢・遲・徯・須○待は峻なり、來るをまつなり。又、來らばあしらひをする意あり、待レ時は時節の來るを待つなり、待遇と熟す。○俟はせかずに、物が自然とそこへ來るまでまつなり、竣に作る同じ。論語「君命召、不レ俟駕行矣」○竢は俟行なり、轉じて今やおそしと待ちわぶるなり。○徯は望む所ありて待つなり。書經「徯二予后一」○須は互にもとめて相まつなり、需と通用す。

【待賈】タイカ 價を待ちて賣る。時機を待ちて仕ふる義、賈は價。論、子罕「子曰、沽レ之哉、沽レ之哉、我一レ一者也」

【待客】タイカク 來客に接待する。史、孟嘗君傳「一レ一坐語」

【待遇】タイグウ もてなす。禮記、曲禮「是時一一諸國二法竢」

【待月】タイゲツ 月の出づるをまつ。錢起詩「落帆唯一レ一」

【待賢門】タイケンモン 圖昔、平安城の東面に在りし門。一名中御門カドカド。

【待罪】タイザイソウ 過失によりて罪に問はれるを待つ礒、官吏が其の職に在るを謙遜していふ。史、季布傳「臣無レ功幸レ寵、一一河東」

【待終】タイシュウ 死期の來るをまつ。莊子「處レ常一レ一、當何憂哉」

【待制】タイセイ 唐代に始めて置きし官名。文獻通考「學士一一二官、始二於唐一、皆以處二清望儒臣一、俾レ備二顧問一、其初既無二職務一、亦無二定員一、宋因二其制一」

【待詔】タイセウ ○天子に召されて闕下に至り、官命の下るをまつ。漢書、公孫弘傳「一一金馬門一」○漢の世以後の官名、經學文章の士を任用して宴見應對に備ふ。○俗雜髪匠などの稱。

【待接】タイセツ もてなす。史、志「一一察屬」‖接待・待遇。

【待旦】タイタン よあけをまつ。書經「昧爽丕顯、坐以レ一」

【待物】タイブツ 人物をもてなす。晉書「元帝臨軒冲素、容二納直言一、虛二己レ一」

【待命】タイメイ 命令の下るをひかへまつ。上の沙汰をまつ。

【待漏院】タイロウイン 百官參朝の時の控所、朝早く出勤して宮廷の門の開くを

待つ 待つ。漏はみづどけい。事物紀原「唐元和中、方鑑ニ――於朝門外ニ、命ニ百官朝以ニ漏ニ風籟ニ」

【待合】マチアハス 國人又は貸車などをまちあはせる。又、其の家に「――室」を設じて客を招きて遊興する所。

【待女郎】マチジョラウ 國婚禮のとき新婦につき添ひてせわをする女。‖伴始。

【待宵】マチヨヒ 國〇人の來るをまつ夜。〇陰曆十四日の夜の稱。十五日の滿月をまつ夜の義。

【徉】ヤウ 陽

彷ーはたちもとほる、さまよふ。楚辭、招魂「彷ー無所倚」‖方羊・徜徉・翔徉。

【律】リツ リチ 質

〇ておし、笛にて定めたる音樂の調子。音調を陰陽に分ち、陽六を六ー、陰六を六呂といふ、合せて十二ー、之を陰暦の一年十二ヶ月に配して時候の變化を察す。卽ち六律は黃鐘(十一)大簇(正)姑洗(三)蕤賓(五)夷則(七)無射(九)六呂は大呂(十二)夾鐘(二)仲呂(四)林鐘(六)南呂(八)應鐘(十)とす。漢書、律歷志「一有十二陽六爲ー、陰六爲呂、黃帝之所作也」〇のり「格ー」「戒ー」「紀ー」「僧ー」〇おきて「法ー」「新ー」「刑ー」(軍法・刑書)〇つね(常法)〇のぶ(述)中庸「上ー天時」〇くしけづる(理髮)〇爵命の等級。〇法を以て正す。〇一韻八句より成る詩の一體。〇たかし、嶺に通ず。〇佛法上のいましめ。身と口と意とによりて生ずる邪念を斷つ修行。佛國記「至天竺、尊求戒ー」又佛教の宗派、戒ーを守るを主とする宗派「ー宗」「戒ー宗」〇不ーは筆。〇一ーは一擧の義「千篇一ー」

【律紀】リツキ おきて、のり。蘇軾詩、老將練ー兵精ニー二ー紀律。

【律儀】リツギ 〇のり、規範。王襃文「永垂ニ四教ニ宗ニ遵聞之ー一」〇佛 堅く戒法を持し威儀を慎み守り、一切の惡を爲さざるをいふ(雜阿含經)‖律儀斷。〇國 行儀、禮節が堅い。

【律師】リツシ 〇佛 十法を備へたる僧の稱。僧官の一。具ニ足十法ニ名ニー一」〇國 僧官、僧都の次位、正・權の二に分つ、五位に準ず。

【律詩】リツシ 八句より成れる詩の一體。五言と七言との別あり、共に一二の句を起聯、三四の句を前聯(頷聯)五六の句を後聯(頸聯)七八の句を尾聯といふ、前聯と後聯とは對句を用ふ「五律」「七律」

【律宗】リツシウ 佛 佛教の一派。唐の僧鑑眞に始まる、戒律を守るを主とす、我邦にては僧良辨之を傳ふ。

【律書】リツショ 法律書。史、太史公自序「作ニー一第三ニ」

【律律】リツリツ 山のけはしく高大なる貌。詩、小雅「南山ー一、騷風邪邪」‖嶵嶵。

【律呂】リツリョ 六律六呂。音樂の調子。國語「一一不ル易、無ニ姦物一也」‖孚解參看。

【律令】リツリヤウ 〇國家のおきて。大綱を律、條分せるを令といふ。史、酷吏傳「杜周曰、前主所レ是、著爲レ律、後主所レ是、疏爲レ令」〇國 令は民に示す法令、令を犯すものを刑する制を律といふ「一一格式」式は臨務を行ふ心得、格は律令式の三者を時に從ひて改訂するもの。

【律曆】リツレキ こよみ、一年十二箇月の陰陽季節に關する法則。史、歷書「一一天所ニ以通ニ五行八正之氣一」

【律歷】リツレキ 前條に同じ。曆・歷通ず。

七畫

【徑】㊀ケイ 徑 靑 ㊁ケイ 靑

或は逕に作る

㊀車を通ぜず、ただ人及牛馬のあゆむのみのみち(歩道)〇こみち(小路)ほそみち(細路)「小ー」「山ー」「荒ー」「石ー」「蘿ー」「樵ー」「斜ー」「旁ー」「邪ー」ちかみち(捷路)論、孟也「行不由ー」〇よこみち(邪路)曲禮「送喪不由ー」〇ただちに。〇はやし(疾)〇さしわたし「直ー」〇なほし(直)まっすぐ。〇ゆく(行)㊁行き過ぎる、ぬけみちを通る。史、高祖紀「被酒夜ー澤中」〇つひに。史、滑稽傳「不過一斗ー醉矣」‖竟。

同訓異語 ヨク 徑直の別は唯(口部八畫)の條を見よ。

【徑行】ケイカウ 少しも遲滯することなくまっすぐにおこなふ。禮、檀弓「至ニ直情而ー一者ニ」

【徑畛】ケイシン 田間のあぜみち。詩經、疏「此溝上即有ニー一以通ニ大車ニ」

【徑寸】ケイスン 一寸のさしわたし。史、齊世家「固有ニー一之珠、照ニ車前後十二乘ニ者十枚ニ」

【徑庭】ケイテイ 大いに隔りあるさま。徑は狹く庭は廣し、故に比す。莊、逍遙遊「大有ニー一、不レ近ニ人情ニ」徑一本逕に作る、同じ。

【徑畔】ケイハン こみちのほとり。耶律楚材詩「花藏ニー一春泉響」

【徑輪】ケイリン 徑はさしわたし、輪は同周 西京賦「量ニー一、考ニ廣袤ニ」

【徑路】ケイロ　○こみち、ちかみち。易經「長爲ニ山、爲ニ一ー一、爲ニ小石一」＝小路。○圖經來りしすぢみち。＝經路。

【徐】ジョ　魚

○しづか、おもむろ、しづかに、おもむろに「安ー」蘇軾、赤壁賦「清風ー來、水波不ニ興一」○やすらかに行く（安行）のり（威儀）○ーはやすくおだやか（安穩）○ゆるし、ゆるやか（緩）おそし（遲）○のびやか（舒）○やゝやく。○禹貢の九州の一、今の山東・安徽・江蘇諸省の一部に跨る。○古の國名、今の安徽省泗縣の西北に其の故城址あり。

【徐行】ジョカウ　しづかにゆく。孟、告子「一ー後二長者一、謂ニ之弟一」＝徐歩。

【徐歩】ジョホ　しづかにながめる。杜甫詩「晩日ー一繞ニ柴扉一」

【徐緩】ジョクワン　ゆるやか。又、ゆっくりする。楚辭、離騷「大撃之後、將士陳勞、不レ可ニ使用一、且ー一ニ之一」＝安徐。

【徐熙】ジョキ　南唐の鍾陵の人、善く花竹林木草蟲の類を畫く、花果尤も佳なり、宋の太宗嘗て曰く、花果の妙、吾蜀より勝れるを知ると。

【徐徐】ジョジョ　○ゆるやかに進む貌。朱存理詩「松林過雨步ー一」＝遲遲。○轉じて疑ひ懼るる義とす。易、困卦「來ー一、困ニ于金車一」○安穩なる貌。莊、應帝王「其鼠ー一、其覺ニ于于一」

【徐福】ジョフク　秦の方士、字は君房、齊の人、始皇帝の命により、童男女各三千人を率ゐ、三神山に長生不死の藥を求め、遂に返らず、紀州熊野に其の墓と稱するものあり。史記には福を市ノに作る。

【徐來】ジョライ　しづかにきたる。赤壁賦「清風ー一、水波不レ興」

【徒】ト　虞

○かちあるき（步行）「一步」「一行」易、賁卦「舍ニ車而一」○あしがる（步卒）○しもべ（隷）從者。○でし（弟子門人）論、先進「非ニ吾一也」轉じて學生をいふ「學ー」「生ー」○ともがら、なかま（黨與）「酒ー」「飲ー」「僧ー」「釣ー」「義ー」「博ー」「綢ー」○もろもろ（衆）○むなし、から（空）「一手」左、襄二四「舜師一歸」○ただ、ただに（但）○かたぬぐ（袒）○いたづら（無益）○つみびと（罪人）○五刑の一。唐書、刑法志「用ニ刑者有ニ五、其三曰ー、一者奴也、蓋奴ニ隸之一」（徭役）圖○惡戲。○おかち、徳川時代の小身の士、あしがるの上に位す。

同訓異字　徒・唯・惟・只・止・但・第・祇・直・徑の別は唯（口部八畫）の條を見よ。

【徒爲】トイ　むだごと。無益のしわざ。范質、曉ニ従子果一詩「錬進ー一强」

【徒維】トイ　十千の戊の異名（史記）＝著雍（爾雅）

【徒役】トエキ　えだち、義務を以て國家の公事に使はれる。又、其の者（周禮、地官、小司徒）

【徒歌】トカ　なりものなくしてうたふ。（爾雅、釋樂「ー一謂ニ之謠一」）

【徒行】トカウ　かちあるき。論、先進「吾不ニー一以爲ニ之椁一」＝徒歩。

【徒御】トギョ　とものもの、從者、御は爲す。詩、小雅「ー一不レ驚」

【徒杠】トカウ　かちにてわたる小さき橋。車馬の通ずる輿梁（大きの橋。孟、離婁「歲十一月ー一成」

【徒罪】トザイ　ただ身體の自由を束縛するのみにて刀鋸などを加へざる刑に當るつみ（宋史、太宗紀）

【徒死】トシ　いぬに。

【徒閑】トカン　いたづらに。閑は助字。＝徒然。

【徒囚】トシウ　とらはれびと。隋書、刑法志「蠲免ニー一ニ」＝囚徒。

【徒手】トシュ　すて、からて。＝空手・赤手。

【徒取】トシュ　ただとる、功なくして官祿をとる。韓非、飾邪「人臣又以ー一」

【徒答】トシュ　こやくにん。漢史「擢ニー一、禁ニ姦猾一」

【徒食】トショク　かせがずしてくらふ（管子）＝坐食。

【徒涉】トセフ　かちにて水をわたる。白居易詩「大軍ー一水如レ馮」

【徒然】トゼン　○動かざる貌。伍昉文「瞻ニ彼景山ー一望慕」＝居然。○いたづらに。張九齡詩「潛猴捕朱子、ー一泣ニ岐路一」＝漫然。○何事もなし。史、春申君傳「非ニー一也」○つれづれ、無聊。

【徒善】トゼン　空しく其の心ありて、其の政なきをいふ。孟、離婁「ー一不レ足ニ以爲ニ政」

【徒跣】トセン　すあし、はだし。禮記、喪服「ー一、祭則不レ跣」＝徒蹠。

【徒蹠】トセキ　前條に同じ。漢書、五行志「被髮ー一」

【徒卒】トソツ　あしがる。左傳「車兵ー一」＝步卒・徒兵。

【徒黨】トタウ　ともがら、同類の中論、「遊說之士、率ニ其ー一而名謁ニ乎諸侯一」

【徒弟】トテイ　でし、門人。陳摶詩「堪ノ嗟細ノ師無ニー一ニ」

【徒搏】トハク　すてにてうつ。詩、小雅、傳「ー一曰ニ暴虎一」

【徒法】トハフ　徒は空、其の政ありて、其の心なきなり、名ありて實なきお

きて。孟、離婁「―不レ能二以自行一」
【徒費】ヅヒ むだに金品をつかふ、むだづかひ。‖空費。
【徒兵】ヅヘ 歩兵と。陸四「踏倭之師、敢二鄙―一」‖徒卒。
【徒歩】ヅホ 〇かちあるき。宋史「不レ遵二詔百里一―行程之制一」‖徒行。〇あしがる。漢書「登孫弘起二―一、数年至二宰相一封侯」‖布衣。
【徒勞】ヅラウ むだぼねをり。高適詩「遠行今苦レ此、徴緑巣―」
【徒隷】ヅレイ 人に使はれるいやしき者。しもべ。‖奴僕・奴隷。

【御】 八畫

㊀ギヨ・ゴ ㊁ギヨ・ゴ ㊂ガ

緒 畫 御

㊀馬を使ふ(馭)又、其の術「善―」「獨―」〇べつたう(馬丁・馭者)「一者」「僕―」〇すぶ、すべる(統)統べ治める「統―」賈誼、過秦論「振二長策一而―二宇内一」〇すすむ(勤進)〇はべる(侍)つかさどる(主)〇もちふる(用)〇つかさ(官吏)〇めしつかひ、そばめ(近侍・女官・妻妾)「妾―」「嬖―」「女―」〇天子が婦人を寵愛する。〇おん、み、天子の事にいふ敬稱「―衣」「還―」「臨―」〇よる(適)〇ふせぐ。詩、邶風「亦以―冬」‖禦。㊁とどむ(止)㊂むかふ(相迎)詩、召南「百兩―之」〇圖天子の事に限らず廣く敬語に用ふる「―見舞」「―返事」

解說 御に从ふ、俗に、缶に从ひ、御に作るは非なり。

【御衣】ギヨイ 天子のおめしもの。李父詩「密雨迎二仙歩一低雲拂二―一」
【御愛】ギヨアイ 天子のめでさせたまふもの。唐瑣高議「劉蒙菊譜、有二―一菊一」
【御宇】ギヨウ ふよ、宇内を御しをさめる。晉書、武帝紀「握レ圖―レ、馭レ化導レ民」
【御苑】ギヨエン 禁中のその。郭元振詩「―殘鶯啼二落日一」‖禁苑。
【御極】ギヨキヨク 天子の御座、轉じて天子のみゆき、おなりの義にも用ふ。宋史、禮志「謂賜二―一於呂公著私第一」
【御街】ギヨガイ 宮中の通路。李洞詩「一道妍光陳二―一」
【御幸】ギヨカウ みゆき、天子のおでまし。唐律「―舟船」‖行幸。
【御劍】ギヨケン 天子の劍。文獻通考「中使齎二―一」
【御溝】ギヨコウ 宮城のおほり。古今注「長安―謂二之楊溝一」
【御衮】ギヨコン 天子の御服、衮龍の御衣。南史、齊武帝紀「―乗レ旒、深存二政典一」
【御座】ギヨザ 君主のみましどころ、たかみくら。後漢書、陳蕃傳「明日太史奏、客星犯二―一甚亟」
【御策】ギヨサク 馬を御するむち。晉書、天文志「王良之―也」
【御札】ギヨサツ 天子の親ら記されしかきつけ。五代史、唐本紀「―求二直言一」‖御筆。
【御史】ギヨシ 百官の罪を糾正する事を掌る官。唐書、百官志「―大夫一人、正二四品一、掌以二刑法典章一糾二正百官罪悪一」
【御史雨】ギヨシウ 唐の世、久しく旱魃ありて民が苦み居たりし時、顯眞卿が監察御史となりて獄を斷じたりしに、忽ち雨が降りたる故事によりて、喜雨の意に用ふ(唐書、顔眞卿傳)
【御試】ギヨシ 天子みづから行はれる進士の試驗。王禹偁詩「―拜二丹墀一」
【御車】ギヨシヤ 天子の御印。史、秦始皇紀「璽二王―一」
【御寢】ギヨシン 天子のおやすみ。漢書、王莽傳「三夜不二―一」
【御者】ギヨシヤ 〇ともびと、侍從。儀禮「―今時侍從之人」〇馬をあつかふ人。べつたう。淮南子「―非レ唯不レ行」‖馭者。
【御食】ギヨジキ 君主の前にて賜はる食事。曲禮「―二于君一」‖陪食。
【御製】ギヨセイ 天子の作りたまへる詩文。事物紀原「孔子家語、舜作二南風之詩一、此則―之始也」宋史、种放傳「賜二―一五言詩一軸レ之」‖御制・聖製。
【御箋】ギヨセン 天子のおかきつけ。李賀詩「―銀沫冷、長夜風寒斜」‖御札。
【御膳】ギヨゼン 〇天子のめしあがる食事。晉書、武帝紀「以二百姓饒儉、減二―一之半一」〇圖ゴゼン食事。轉じて飯の敬語。
【御題】ギヨダイ 〇天子の書かれし題字。李洞詩「踏レ月趨二金閨一、拂レ雲看二―一」〇天子が出される詩歌文章の題。
【御冬】ギヨトウ 冬をふせぐ用意。詩、邶風「我有二旨蓄一、亦以―レ」‖禦冬。
【御殳】ギヨハウ 天子のおへや。南都賦「―陳二其閫一」
【御批】ギヨヒ 天子が事を裁決し、又は處分せられる義。宋雪錄「宋故事禁中處二分事一付レ外、謂二之内批一、又謂二之―一」
【御批通鑑輯覽】ギヨヒツガンシフラン 百十六巻、清の乾隆三十二年の敕撰、帝の親しく批評を加へしもの、黄帝に起りて明代に終る、編年體にて綱目に分ち記す。
【御筆】ギヨヒツ 天子のお書きになりし書畫「北史、魏彭城王勰傳」‖宸筆。

【御府】ギョフ　天子の御くら、御物を入れるくら。史、平準書「出ニ一ヲ禁蔵ニ、以助ケ之」

【御風】ギョフウ　かぜにのる。荘、逍遙遊「列子ハ一レ而行」

【御物】ギョブツ　天子の御所有の品、御用品。‖御用。

【御米】ギョベイ　天子の供御のこめ。水経、注「江州県北有ニ稲田一、田ニ一ヲ」

【御水】ギョスイ　天子の御通書。文献通考「得レ並ニ一ヲ」

【御名】ギョメイ　天子のみな。宋史、選挙志「時進士卷、有ニ犯ニ一ヲ者ニ一ヲ者ニ一ヲ」

【御用】ギョヨウ　○御物に同じ（元史、儒学伝ニ国ノ官のしごと、政府のつかさ道。○いりよう・入用・使用などの敬称。

【御廩】ギョリン　天子の祖先の祭に供せらるる穀物を入れるくら。春秋、桓十四年「秋八月壬申、一ヲ実」

【御苑】ギョエン　○宮殿にかかげられたるみすの敬称。宋陸ニ天使一輔、風入ニ一ヲ軽」○園ニすだれの敬語。

【御路】ギョロ　天子のみくるま。路は輅。宋之問詩「一ヲ廻ニ中嶽」

【御所】ゴショ　園○宮中をいふ。‖皇城。○後世、偏して将軍・大臣などの居所にもいふ。

【御所事】ゴショゴト　園古、貴人の使用せし、屋形のある牛車。

【御諚】ゴジョウ　園おほせ、おことばの敬語。

【御宴】ギョエン　園○正月二日の夜、吉き初夢を見るために枕の下にしきてねる宝船を畫きし紙。○金銭の異称。

【御悩】ゴノウ　園おんなやみ、御不例、天子の御病気をいふ敬語。

【御息所】ミヤスドコロ　園○禁中の天子の御休息所。○皇子・皇女を生みたる女御・更衣の敬称。○東宮又親王の妃。

【徒】シ　紙

○うつる、引き越す、うつす（移・遷）「遷ー」「轉ー」○改め化する「ー善」○さく（避）○こゆ（踰）礼記、檀弓「一月樂」○辺境にしりぞけ守らしむ（謫戍）漢書、陳湯傳「免ニ湯爲ニ庶人一」「遷」

同訓異語　徙・移・遷・映の別は移（禾部六畫）の條を見よ。

【徙倚】シイ　たちもとほる。楚辞、哀時命「陽ー一而彷徉」‖低個。

【徙貿】シボウ　箭を改めて他に移す。唐書「其先出ニ趙郡一、ニ一萬年」‖遷居。

【徙月】シゲツ　月をこゆ。檀弓「ー一レ樂」‖踰月。

【徙業】シギョウ　これまでのわざを他のわざにとりかへる。轉業する。韓愈文「外墓ー一レ者」

【徙宅】シタクツス　轉居する。通鑑、唐紀「魏徴曰、昔晉哀公、謂ニ孔子一曰、人有ニ好忘者一、一レ而忘ニ其妻一、孔子曰、又有ニ甚者一、桀紂乃忘ニ其身一、亦猶レ是也」

【徙治】シチ　政治を行ふ役所をうつす。史、秦紀「鎮ニ撫遼境一ニ一櫟陽一」

【徙木之信】シボクノシン　欺かざるを示す義。史、商君傳「令既具、未レ布、恐ニ民之不ニ信レ一、乃立ニ三丈之木於國都市南門一、募ニ民有ニ能徙置ニ北門一者ニ上予ニ十金一、民怪レ之、莫ニ敢徙一、復曰、能徙者、予ニ五十金一、有ニ一人一徙レ之、輒予ニ五十金一、以明レ不レ欺」‖移木之信。

【徜】シャウ　陽

ー徉はたちもとほる。又、さまよふ。韓愈、送李愿歸盤谷序「從ニ子於盤兮、終ニ吾生一以ー徉」‖尚羊・尚佯・徘徊。

【從】㊀ジュウ・ジュ　㊁ショウ・ジュ　冬　宋　通音ジュウ、もと从に作る

㊀したがふ「服ー」「適ー」「景ー」「敬ー」「面ー」「脅ー」きき入れる（聽容）可としてーふ。○をさむ（治）「ー政」「ー事」○つく（就）易、乾卦「雲ー龍」○より（自）から。書舜典、明帝紀「不ー朔人ー日邊來」○ー容はおちつく。又、のびやか、舒緩なる貌。○たて（南北）東西を横又衡といふの對。‖縦。○あと。‖蹤。㊁したがひゆく（隨行）人の後につきて行く「陪ー」「騎ー」「隨ー」「扈ー」論、公冶長「ー」我者其由歟」○とも、つきそひ（僕隷）「ー者」○そへ（副）位階の正ーの如し。○ほしいまま。曲禮「欲不ー可ー」‖縦。○はなつ（縦）論、八佾「ー之純如也」

同訓異語　從・隨・隘・循・率・遵等の別は隨（貝部三畫）の條を見よ。○從・由・緣・因等の別は由（部首六畫）の條を見よ。

【從逆】ジュウギャク　したがふと、そむくと。服從すると違背すると。

【從駕】ジュウガ　天子のお供をする、行幸に從ひ行く。後漢書、郭憲傳「ー一南郊」駕は車駕の義。

【從價稅】ジュウカゼイ　輸出入品の價格を標準として課する關税。

【從軍】ジュウグン　軍にしたがひて出陣する。杜甫詩「邊城有ニ除力一、早寄ニ一ー詩」‖従戎。

【從兄】ジュウケイ　己より年長のいとこ。爾雅、釋親「兄之子、弟之子、相謂爲ニ從父昆弟一」年下の方を從弟といふ。

【從子】ジュウシ　をひ、母の姉妹の子。姪。

暢。

【從史】ジュウ 長官に從屬する小役人。史、嚴安傳「皆有ニ一ー一、盛二威嚴一侍兒一」

【從死】ジュウ おひばらを切る、殉ひて死する。漢書、匈奴傳「來降貴レ信而士多ー一」

【從姉】ジュウ 年長の女のいとこ。

【從事】ジュウジ 事にしたがひ治める。詩、小雅「職勉ーレー、不二敢告一勞」又、其の役目の人「青州ー一」

【從祀】ジュウ ○附けて祭る。後世の儒者の孔子の廟に配享せらるるをいふ。○天子の祭に從ひ行く。益部耆舊傳「蜀郡張寬、漢文帝時、爲二侍中ー一ニ甘泉一」‖陪祭。

【從心】ジュウ 七十歳の異稱。論、爲政「七十而ー一所レ欲、不レ踰レ矩」に本づく。

【從者】ジュウ 主君のともびと。論、八佾「ー一見レ之」‖僕從。

【從容】ジュウヨウ たてと、よこと。顏氏家訓「閨門ー一、當不二整齊一」

【從臆】ジュウ すなほにしてしたがよ。禮記「寬而栗、柔而立、愿而恭、亂而敬、擾而毅、直而温、簡而廉、剛而塞、強而義、彰而ー一」‖注頭。

【從政】ジュウセイ ○政事に與り聞く。論、子路「於レ從レ政乎何有」○官職に服する。‖服官。

【從前】ジュウゼン まへかたから、以前より。

【從嫂】ジュウソウ 從兄の妻。晉書「王悉之曰、今上年出二十歳一、垂二婚冠一、反令三ー一臨レ朝示二人君幼弱一」

【從卒】ソツ ともの兵卒。

【從弟】テイ 年下のいとこ。從兄參看。

【從犯】ハン 間接に罪を犯す、正犯者を助けて罪を犯す又、其の者。

【從譯】ジュウ 天子の車につき從ふ。詩、小雅「四牡ー一、周道倭遲」‖扈蹕。

【從父】フ ○をぢ、伯父・叔父（爾雅、釋親）○チチタニ 父の命にしたがふ。儀禮、喪服「婦人有二三從之義一、無二專用之道一、故未レ嫁ー一レ、既嫁從レ夫、夫死從レ子」

【從父兄弟】ケイテイ 同祖の兄弟。爾雅「兄之子、弟之子、相謂爲二從父晜弟一」晜は兄。

【從殿】コウ したがふ。張協、七命「ー一九閑一、橫二制八表一」‖扈從。

【從母】ボ 母方のをば。爾雅、釋親「母之姉妹爲二ー一ー一」

【從妹】マイ 年下の女のいとこ。

【從來】ライ 由りて來るところ。史、西南夷傳「足二蜀布卬竹杖一、使レ問二所ニ一ー一」

【從量稅】リョウゼイ 輸出入品の數量を標準として課する關稅。

【從橫】ジュウオウ ○たて（南北）と、よこ（東西）と。盧倫詩「鼓路自ー一」○戰國の時の蘇秦の合從說と、張儀の連衡說と。衡は橫に通ず。漢書、藝文志「ー一家者流、蓋出二于行人之官一」○攻守和戰の計略の種類。詩「ー一計不レ就」○意のままに自由になる義。杜甫詩「凌雲健筆意ー一」

【從橫說】ジュウオウセツ 前條の解を見よ。戰國策、秦王謂二蘇代一曰、「從一橫、此其說何也」

【從親】ジュウシン 從は南北、戰國の時、南北に列る韓・魏・趙・楚・燕・齊の六國連和せし義。史、蘇秦傳「蘇秦起二閭閻一、連二六國ー一、此其智有レ過レ人者一」‖從約。

【從約】ジュウヤク 戰國の韓・魏・燕・齊等の六國合從して、秦に當る約。史、張儀傳「張儀復說二魏王一、王乃「是、乃倍ニ一ー一、而因レ儀詩二成于秦一」

【從容】ジュウヨウ ○ゆったりとしたる貌。くつろぐ、ゆるやかに和ぐ貌。中庸「ー一中レ道、聖人也」書、君陳「ー一以和」○ひさしき意。禮、曲記「待其ー一、然後盡二其辭一」○勸め誘ふ。史、衛山王傳「日夜ー一」‖慫慂。

【得】トク 職

○う（獲）求めて手に入れる。失の反對「獲ー一」「拾ー一」「購ー一」「一擧兩ー一」○捕へる。史、淮陰侯傳「毋殺二廣武君一、有能生ー一者一購二千金一」○むさぼる（貪）よくばる「貪ー一」論、季氏「戒之在ー一」○能くする、任ふ。○滿足する「自ー一」○恩に感ずる。孟、告子「所レ識窮乏者ー一我與」○人と心の合ふを相ー一といふ。○ー一はー一意の貌。○まうけ「利ー一」

【得意】トクイ ○意の如くなりて滿足する。失意の對。司馬法「天子ー一レ則慢歌」圖○自己の最もなれ熟したること。得手テ○商家にて買ひつけの御客。花客・顧客。

【得意天】トクイテン 人の心に滿足する天氣もやう。袁枚、春日雜詩「千枝紅雨萬重烟、盡出詩人ー一」

【得業】トクギョウ 學業を修め得たる者。韓愈、送二陳秀才一彤歸二覲其一ー一序「秀才、貢士、明經、進士、得業、舉二其名一」‖卒業・畢業。

【得業士】トクギョウシ 圖醫學專門學校などの卒業生にあたへる稱號。

【得罪】トクザイ つみをうる。度綿詩「ー一レ既不レ淵」

【得度】トクド うると、うしなふと。成功と失敗と。韓詩外傳「臨侯不レ言二利害一、大夫不レ言ー一」‖得失。

【得策】トクサク 利益あるはかりごと。‖上計。

【得志】トクシ 志をう、のぞみの如くなる。孟子「ー一與レ民由レ之」

【得失】トクシツ うると、うしなふと。後漢書、和帝紀「帝引二見公卿一、問ニ一ー一」‖得喪・成敗。

【得心】トクシン 圖よく心にわかる、よくする。‖合點・納得

【得所】トクショ 適宜の處置を得る。易經「交易而退、各得二其所一」

【得色】トクショク　したりがほ、得意の色。老學菴筆記「通判欣然有ニ―一」

【得意】トクイ　㊀道の奥義をさとり得る。㊁願は常の中に在るもの。傳燈錄「師曰、汝得ニ吾髓一」

【得道】トクダウ　○正しき道を得る。孟、公孫丑「一レ一者多レ助」○㊀佛の道をさとる。

【得脫】トクダツ　㊀煩惱を脫して佛果を得る。法華經「一ニ一三界苦惱之患」‖得道。

【得度】トクド　㊀○佛門に入りて濟度ドサイを得る。法華經科註「俱發ニ菩提心一、故云ニ一一也」○官より度牒を受けて僧尼となる。

【得得】トクトク　○得意なる貌。王建詩「親故應ニ須一一來ニ○唐人の方言、こときら、わざわざ。貫休詩「千水千山一一來」‖特地。

【得民】トクミン　たみの信頼をうける、人民の心を歸する所となる。易經「以レ資下レ民、大一レ也」

【得手】エモノ　㊀得意のわざ。‖上手・所長・長所。

【徘】ハイ　佳

さまよふ、たちもとほる。‖俳。

【徘徊】ハイクワイ　たちもとほる、さまよひあるく。漢書、高后紀「一一往來」

【徠】

（人部六畫）の古字。

徂一ソライは山名、徂（彳部五畫）の條參看。‖徂來。

九　畫

【徨】クワウ　陽　㊀徨・盌に通ず

彷一はたちもとほる。‖徘徊・彷徉・徨徨。又、ゆききする（往來）

【循】ジュン　眞

○したがふ（順）○よる（依）よりそふ。左、昭二三「一山而南」○めぐる（巡・旋・繞）○なでる（撫・摩）○やすんず（安）なで安んず。○よし（善）すなほ「良一」○一一は順序ある貌。論、子罕「夫子一一然善誘人」○のぶ（述）○因一は、ぐづぐづして決定せざる貌。

同訓異義　循・順・從・隨・率・遵・徇の別は順（頁部三畫）の條を見よ。○ジュン循・繞・環・巡・周・旋・回等の別は繞（糸部十二畫）の條を見よ。

【循行】ジュンカウ　巡りあるく。漢書、宣帝紀「遣ニ使者一一ニ一郡國」

【循環】ジュンクワン　○めぐるたまき。孫、兵勢「奇正相生、如ニ一一之無レ端、孰能窮レ之哉」○たまきの端なき如く、反復して窮らざるに喩ふ。史、高祖紀贊「三王之道、若ニ一一終而復始」

【循循然】ジュンジュンゼン　序ある貌。字解參看。

【循吏】ジュンリ　順良にして法にしたがひて善く民を治むる役人。史記に一一傳あり。

【循理】ジュンリ　道理にしたがふ。史、循吏傳、注「謂ニ本レ法一レ之吏一」

【循良】ジュンリャウ　成法を遵守して良く民を治める。元史、成遵傳「察ニ守令賢否一、得ニ一一者九人一」

【復】㊀フク　㊁フウ　屋　宥　通音　フク

㊀かへる、もどる（反・返・還）往の對「往一」○かへす（反）もどす。○まうす（白）つげる（告）○かへしごと（反命）命を受けて爲したる事を上申する「一命」○くりかへす。論、先進「南容三一白圭」○むくゆ（報）「一仇」○こたへる（答）「敬一」○たまよび（招魂）○かさなる（重）○復に通ず「一道」かへす（反覆）○易の卦の名、震下艮上。○のぞく（除）漢書、高帝紀「皆一其身」○くつがへしおほふ（覆）○平一ハイは病がなほる。㊁また（又）ふたたび（再）大雅、大明序「文王有ニ大德一、故天一命ニ武王一也」

同訓異義　復・歸・還・返・反・返・回・旋の別は歸（止部十四畫）の條を見よ。○フク復・又・亦・還・有・也の別は又（部首二畫）の條を見よ。

【復員】フクイン　軍用語、戰時動員令により召集せし在鄉軍人の服役を解き、軍隊を平時の編制に復するをいふ「一一令」

【復歸】フクキ　もとの位にかへる。左傳「日入復ニ其位一、曰ニ一一」

【復仇】フクキウ　かたきうち。‖復讐。

【復舊】フクキウ　もとにかへす、もとどほりになる。宋書、武帝紀「昔滅ニ半者、可ニ悉一一ニ」

【復活】フククワツ　○いきかへる。晉書、趙含傳「服藥太多陽ニ五臟一耳、今當ニ一一ニ」‖蘇生。○圖一旦衰へ亡びし事が再び興る。‖復興。

【復活日】フククワツジツ　耶蘇基督ヤソキリストが死後復活せしといふ日。陽暦三月二十一日後に來る滿月の日より算へて第一の日曜日。

【復官】フククワン　もとのやくにかへる。‖復職。

【復權】フクケン　法律によりて公權を停止せられし者が其の失ひし權利をとりもどす。

【復古】フクコ　古にかへす、一旦廢せし事をもとにもどす。又、古にかへる。詩經、小序「事攻、宣王一一也」

【復興】フクコウ　再びおこる。後漢書「廢而ー―、絶而復續者也」

【復讐】フクシウ　かたきうち。孟、滕文公「爲二匹夫匹婦一ー―レ一也」‖復仇。

【復習】フクシフ　さらへる。くりかへし習ふ。‖温習。

【復初】フクショ　初の本性にたちかへる。莊子「繕二性於俗一、學以求レ復二其初一、滑二欲於俗一、思以求レ致二其明一、謂二之蔽蒙之民一」

【復飾】フクショク　俗侶の還俗する義。出家するを落飾といふの對。

【復職】フクショク　再びもとの職務に就く。

【復生】フクセイ　よみがへる。晉語「死人ー―不レ悔、生人不レ愧貞也」‖蘇生。

【復性】フクセイ　心の私欲を除き去りて其の本然の靈性にたちもどる、性の初に復る。宋儒の唱道せし說、孟子の性善、莊子の繕性等の說に本づく。

【復性書】フクセイショ　三篇、唐の李翺の門人李湘、字は習之の撰。

【復聖】フクセイ　元の文宗、顏子を封じて兗國ー―公と爲す、明の嘉靖の時、封爵を改めてただ―ー―と稱す。

【復籍】フクセキ　一旦移動せし戸籍を再び舊にかへす。

【復租】フクソ　租稅を納めることを免除する。北史、魏太宗紀「問二人疾苦一、ー―一年」

【復道】フクダウ　上下二重の道。二重の廊下。史、秦始皇紀「爲二ー―一、自二阿房一渡レ渭、屬二之咸陽一」‖複道。

【復答】フクタフ　かへりごと。へんじする。

【復除】フクヂョ　其の徭役を免除する。漢書、宣帝紀「竝受二ー―一、或加以二金帛一」

【復土】フクド　墓穴に棺を下したる上を土にて掩ふ。ほりたる土をもとに復する義。周禮、少司徒、疏」

【復又】フクユウ　漢文を假名交り文に譯したるものを更に漢文にかへす。

【復廟】フクベウ　屋根の上にまた屋根のある構造のたまや。

【復辟】フクヘキ　辟は君、再び天子の位に即くの意、咸有一德「伊尹既復二政厥辟一」

【復命】フクメイ　命を受けて行ひたる事の次第を申し上げる。論、鄭欲「資退必ー―一日、資不レ顧矣」‖反命。

【復用】フクヨウ　二度もちふる。禮記「臨二之府庫一、而弗二ー―一」

【復奚疑】フクケイギ　すでに天命にまかせたればまた何を疑はんや。陶潛、歸去來辭「樂二夫天命一ー――」

【徧】ヘン　一に遍に作る

あまねし（市周）あまねくす、盡く。淮南、主術「則天下ー―爲二儒墨矣」

同訓異字　徧・周・普・洽・浹の別は周（口部五畫）の條を見よ。

【徧至】ヘンシ　あまれく至る。史記「瑞應ー―」

【徧賜】ヘンシ　すべての人にあまねくたまふ。左傳「ー―二大夫一」

【徧周】ヘンシウ　あまねし。嵇康詩「殊類蕃ー―、鄰讒紛二流離一」

【徧搜】ヘンソウ　あまねくさがしもとめる。李神詩「遺基亦ー―」

【徧身】ヘンシン　全身に同じ。無名氏、貧婦詩「ー―綺繡者、不二是養一レ人一」‖遍身。

【徧覩】ヘント　天子のあまねく侯伯を引見する義。周禮「三識ー―」

【徧讀】ヘンドク　あまねくよむ、博く書を讀む。陸游詩「閉レ戸ー―家藏書」

【徧戰】ヘンセン　あまねくむくいかへす。史記「ー―諸所二嘗見一德者一」

【徧歷】ヘンレキ　あまねく經めぐる。南史「ー―二名山一、訪二尋仙藥一」‖遍歷、周遊。

十畫

【徭】エウ　繇・傜に通ず

えだち、えだつ（役）國家の土木工事などに使役せられる、力役の征。「租ー」「賦ー」又、其の人。

【徭役】エウエキ　えだち。國の工事などに義務として使はれる。‖繇役。

【徨戍】ヨウジュ　邊境を守る兵卒。李陵、答二蘇武一書「古戰場ー―文「齊謳ー―、荊韓召募」

【徵稅】チョウゼイ　義務にて公役に服すると、年貢を納めると。唐書、食貨志「轉徙者脫二ー―一」

【徯】ケイ　溪・谿

○まつ（待）孟、滕文公「書曰ー―我后」○こみち。‖蹊。

【徯徑】ケイケイ　こみち。禮、月令「謹二關梁一、塞二ー―一」

【徬】バウ　陽・漾

○よりつく（依附）傍と通ず。○彷に通ず、ー徨はさまよふ。‖彷徨。

【徼】ヨウ　微

○かすか（幽）ほのか、くらし、明かならず。○ひそか、しのびやか、隱れ行く、かくす（匿）左、哀十六「其徒ー―之」○こまか（細）ちいさし（小）「細ー」「至ー」孟、公孫丑「具ー體而ー」○たへ（精妙）「ー妙」○おとろへる（衰）「衰ー」○いやし（卑賤）「ー賤」孟、離婁「子思臣也ー―也」○そぐ（殺）○おほふ（蔽）○うかがふ（伺察）偵察する。漢書、郭解傳「使ー人ー―知賊處」○なし、なかりせば（無）論、憲

問「一管仲、吾其被髪左衽矣」あらず(非)詩、邶風「一吾無酒」〇すくなし(少)〇かさ(脚腫瘡)〇かく(斷傷)〇古の國名、今の山東省東平縣の西、一子の封土。

同訓異字 少微・無・无・罔・亡・莫等の別は無(火部八畫)の條を見よ。

【微痾】ビア わづかなる病。應璩文「乃知郎君賢一一、皆同俗神二蘇軾詩「一一坐二枉勻一、止レ酒則霽矣」‖輕痾・微恙・輕症。

【微閒】ビカン すこしくらし、うすぐらし。北史「室中一一」

【微意】ビイ いささかのこころざし。己が志の謙稱。漢、武帝文「今季二雖舌香五斤一、以表二一一一」‖微志・微衷。

【微陰】ビイン かすかにくもる。又、陰暦五月の異名。後漢書、注「五月陰氣始生、故曰二一一一」

【微婉】ビエン 文辭言語の微妙にしてあてやかなる義、婉は婉曲。史記、索隱序「左氏之一一」

【微雨】ビウ こさめ。陶潛詩「一一從レ東來、好風與レ之俱」‖小雨・細雨。

【扶微】フビ 力屈きものを引き立てる。劉歆文「輔レ弱一一」

【以微知レ明】イビチメイ 些細の點に就きて大なる事實を發見する。荀、非相「以レ近知レ遠、以レ一知レ萬、——」

【微溫】ビオン なまぬるし。蘇軾詩「金鴨一一香縷銷」

【微戒】ビカイ ほのめかして戒める。五代史、李嗣昭傳「初喜嗜レ酒、太祖嘗一レ之、遂終身不レ飲」

【微行】ビコウ 〇しのびあるき。史、秦始皇紀「一一咸陽二〇こみち。詩、豳風「遵二彼一一」‖小徑。

【微香】ビカウ かすかなるにほひ。蘇軾詩「一一暗惹二遊人步一」‖微芳。

【微寒】ビカン すこしのさむさ。黃滑老詩「落月帶二一一一」‖輕寒・薄寒。

【微感】ビカン すこしく心をうごかす。蘇軾詩「人情難二强制一、天性可二一一一」

【微吟】ビギン こゑ低にて詩をうたふ。魏文帝、燕歌行「短歌一一不レ能レ長」

【微漚】ビオウ すこしのひびき。

【微黙】ビモク かすかなる目のあたたかさ。獨孤及詩「積雪消二一一一」

【微駈】ビク いやしきみ。己の身の謙稱。杜甫詩「一一此外更何求」

【微醒】ビセイ ほろ酔ひ。宋史、郭稚傳「晡時酌レ酒三四盃、一一即止」‖微酔。

【微官】ビクワン 地位の卑き官。李密詩「自憐無二舊業一、不三敢恥二一一一」

【微言】ビゲン 〇微妙なることば。漢書、藝文志「仲尼沒而一一絶」〇なぞ、謎。列、說符「人可二與一一乎」

【微謎】ビメイ すこしばかりのつみ、いささかの謫責「舊唐書、楊貴妃傳」

【微慢】ビマン すこしのうらみ。周必大詩「一時抱二一一一」

【微積】ビセキ こまか、いやしと轉じて才器の小なる義。舊唐書、吐蕃傳「臣自顧一一、何以仰答二天恩一」

【微細】ビサイ 〇ささやか、こまか。‖微小。〇こまかにくだくだし。漢書、刑法志「一一之法」

【微爵】ビシャク わづかのつみ。

【微子】ビシ 殷の紂王の庶兄、名は啓、紂淫亂なりしかば、數諫むれども聽かれず、遂に之を去る、周公武庚を誅し一一に命じ、殷の後に代りて宋に國せしむ。

【微志】ビシ 〇わづかばかりのこころざし。韓愈詩「孤稚羸弱抱二一一一」〇己が志の謙稱。‖微意・微衷。

【微旨】ビシ おくふかくたへなるむね、深微なる旨趣。後漢書、徐防傳「孔聖既遠、一一將絶」

【微時】ビジ 以前微賤なりし時。漢書、外戚傳「宣帝詔求二一一故劍一」

【微辭】ビジ むきだしに其の失をいはず、傍にほのめかし言ふことば。公羊傳「定哀多二一一一」

【微震】ビシン わづかの震動、感じ難きほどの輕き地震。

【微笶】ビシャ いやしきもの。

【微傷】ビショウ かすりきず。‖輕傷。

【微睡】ビスイ まどろむ、すこしねむる。

【微酔】ビスイ ほろ酔ひ。李商隱詩「小亭閒眠一一酒」

【微生高】ビセイカウ 微生は姓、高は名、魯國の人、正直を以て名あり。論、公冶長「子曰、孰謂二一一直一、或乞レ醯焉、乞二諸其隣一而與レ之」

【微小】ビセウ ちひさし。わづか。荀、非相「一一短瘠」‖微細。

【微矣】ビヰ すこしくわらふ、ほほゑむ。登徒子、好色賦「含レ睿一一、嫣然流盼」

【微絺】ビチ うすきぬ。潘尼詩「飄風揚二一一一」

【微積】ビセキ 無限小數を研究する微分學と、無限大數を研究する積分學と。‖微分積分。

【微旨】ビシ すこしのいさを。杜陽雜編「郭子儀鳴咽流涕曰、老臣衰老、不レ堪二王事一、賴二陛下之靈一、以成二一一一」‖微功。

【微賤】ビセン いやし。‖卑賤。

【微幾】ビキ かすかに。こまか。韓愈詩「不レ知二已一一」

【微喘】ビゼン かすかなるいき。殘り少き餘年に喩ふ。

【微中】ビチウ それとなくあてこすりて諷する。史、滑稽傳「談言一一、亦可二以解一紛」‖微諷。

【微衷】ビチウ わづかなるまごころ、衷は中心。‖微志。

【微睡】ビスイ ほそく目をあけて見る。

【微塗】ビト かすかなるともしび。‖塗時「一一照二寂寥一、此夕正遲遲」

【微芳】ビハウ すこしのにほひ。呪縛詩「風振二一一一」‖微香。

【微茫】ビバウ かすかにはるかなる貌。蘇

昇欲時「晩色一一至」‖模糊。
【徵白】ボウ ほのじろし。葛長庚詩「一一一鉤天外月、淡青數點海邊山」
【徵班】ハン ひくき位。杜甫詩「通二籍一一叅二」
【徵敎】ビケウ かすかなる貌。張衡、南都賦「清廟嘉以一一」
【徵風】ビフウ そよそよと吹くかぜ。杜甫詩「一一燕子斜」
【徵渴】ビカツ ほのめかす、それとなくあてつける。顧瑛詩「讀奚囊」一一」‖微中
【徵服】フク 服裏をかへて、人目に觸れざるやうにする。孟、萬章「一一而過レ宋」
【徵分學】ビブンガク 吾人の想像すること能はざるほどの細小量につきて研究する數學。
【徵塵】ビヂン すこしのみどり。寇準詩「主家簾一一」‖寸陰。
【徵陀】ビダ かすかにちひさし。史、孝文帝紀「以二一一之身一託二于兆民一」‖微區。
【徵歩】ホ しのびあるき。南史、王筠傳「一一論レ談議」‖微行。
【徵機】ビキ かすかにをぐらし。晉古詩「孤風急三衆柯一、白日漸一一」
【徵妙】ビメウ おくふかくたへなり。老子「古之善爲レ士者、一一玄通、深不レ可レ識」‖玄妙。
【徵志】ビシ すこしの痴。秦觀詩「一一不レ足レ論」‖微痴。
【徵眛】ビマツ 翻故末節の義。禮、檀弓「曾子曰、一一其嗤也可レ去、其謝也可レ食」
【徵瀾】ビラン さざなみ。沈約賦「跨二弱水之一一」‖微漣。
【徵利】ビリ 些細なるまうけ。范成大詩「不レ爭二一一一卽爭レ名」
【徵涼】ビリヤウ すこしすずし。杜甫詩「仲夏苦二夜短一、開レ軒納二一一一」
【徵力】ビリヨク すこしのちから。己の力の謙詞。崔融詩「無庸何以料、倚レ馬申二一一一」
【徵穢】ビヱ ほそきいとすぢ。陳子昂詩「高堂委二金玉一、一一墜二千鈞一」
【徵連】ビレン さざなみ。‖細漣。
【徵蘇】ビソ わづかばかりのふち。高適詩「遠行今欲レ盡、一一果徒勞」‖澤緣。
【徵塵】ビヂン こまかきちり。極めて細き者に喩ふ。法華經「三千大千世界事、全在二一一中、時有二智人一、破二彼一一一」

十一畫

【徵】

徵（前條）に同じ。

十二畫

【徵】

㊀ チョウ
㊁ チ
蒸 紙

㊀ めす「一兵」「一役」「證一」〇めし（召）君主又は官府よりの召し出し。〇あきらかにす（明）〇しるし、きざし、あかし（兆候・效驗・證據）證據を立てて明かにする。論、八佾「宋不レ足一也」〇なす（成）〇とふ（問）左、僖四「寡人是一」〇もとめる（求）〇をさむ（斂）租稅を取り收める。〇むなし（虛）〇こらす、懲に通ず。㊁さいはひ（祉）〇五音の一「宮・商・角一羽」胸より出る音、齒を合せ脣を開きて發する烈しき音、五行に配しては火、時候にては夏に配す。禮、月令「孟夏之月、其音一」

同訓異義　徵・求・索・干・尚・須・要・覓の別は求（水部二畫）の條を見よ。

【徵役】チョウエキ めし出してつかふ。周禮、春官、典祀「一二于司隸一、而役レ之」
【徵歌】チョウカ 命じて歌はしめる。李白、宮中行樂詞「更敎隔二蓬萊一一一出二洞房一」
【徵聘】チョウヘイ めし出して任用する。後漢書、劉愷傳「性篤レ古實二德士一、每レ有二一一一、必先二親穴一」‖徵用。
【徵拔】チョウバツ しるし、よりどころ、證據にする。孫公輪、夏邑門樓記「妖異之說、無二復一一一」
【徵君】チョウクン めされても仕官せざる德士の美稱。後漢書、黃憲傳「天下號曰二一一一」
【徵驗】チョウケン しるし、あかし。荀子「觀二國之强弱貧富一有二一一一一」‖徵證。
【徵候】チョウコウ しるし、きざし。‖兆候。
【徵士】チョウシ 〇學德たかくして官より召さるるも出仕せざる人。舉びて徵君ともいふ。後漢書、周磐傳「一一懷之宗也」〇國朝治の初年、薦舉より期延に召し出されし人。
【徵收】チョウシウ 官が人民より貢を取立てる。
【徵集】チョウシフ 人をつのりあつめる。又、物を取り立てあつめる。
【徵祥】チョウシヤウ めでたきしるし。詩經、疏「無二三辰之災一而有二一一一之瑞一」‖吉兆。
【徵召】チョウセウ ともしびを呼びもとめる。周禮、春官、秩公樂レ之一一」
【徵色】チョウショク かほいろにあらはれる。孟、告子「徵二於色一、發二於聲一」
【徵瑞】チョウズイ めでたきしるし。晉書「一一表レ祥、災異呈レ異」‖嘉瑞・祥瑞。
【徵稅】チョウゼイ 租稅を取りたてる。周禮、注「徵二民之稅一」
【徵招】チョウセウ 〇めしまねく。官より召し出して任用する。韓愈詩「勤レ君謀二養拜一一一」〇齊の惠公の作りし音樂の名、招は韶。孟、梁惠王「齊一一角招是也」
【徵租】チョウソ 租稅を取りたてる。北齊書、蘇瓊傳「州計レ戶一一」
【徵遙】チョウエウ 招きたり、招かれたり、互

に往來する。韓愈、柳子厚墓誌銘「酒食遊戲、相ー」【徼光】ケウクワウ　きざし。漢書、李尋傳「ー見レ之先見」【徼福】ケウフク　人夫を召し出し、又は軍需品などをとりたてる。北史「不レ得三橫有二ー一」【徼兵】ケウヘイ　○兵を召しあつめる。○法律によりてー適齡者をめし出して兵役につかしめる。【徼兵忌避】ケウヘイキヒ　兵役を免れるためにわざと身體をきずつけ、又は逃げ隱れる。【徼聘】ケウヘイ　天子が徳を以てまねく。三傳「王使來ー」‖徼招。【徼辟】ケウヘキ　任用せんとて天子より召すを徼、州府より招くを辟といふ。晉書、王裒傳「三徼九辟、皆不レ就」【徼募】ケウボ　兵士などをめしつのる。【徼用】ケウヨウ　めし出して用ふる。史、循林傳「孝文時、頗ー一」‖徼庸・徴辟。【徼庸】ケウヨウ　前條に同じ。庸は用。書經「壽生三十ー一」

【徹】テツ　㊥

○とほる、とほす（通）「通ー」「貫ー」○突きとほす「透ー」左、成十六「射之ー七札焉」○とどける、達する。左、昭二「ー命于執事」○あきらか（明）「朗ー」○をさむ（治）○さる、すつ（除去）‖撤。○はぎとる（剝取）詩、豳風「ー彼桑土」○こぼつ（毀）詩、小雅「ー我牆屋」○つらなる（列）「ー侯」○周の稅法、井田の法は、百畝の私田を受けし者が、十畝の公田を耕し、其の收穫を官に納る、即ち十分の一の稅、徹は通、天下の通法たる義。論、顏淵「盍ー乎」【徹曉】テツゲウ　夜をあかして翌朝になる。【徹侯】テツコウ　諸大名をいふ、徹は通、其の功德王室に通ずるをいふ。漢の武帝の諱を避け、史記には列侯とし、漢書には通侯とす。一解に徹は列。漢書、百官表、爵級二十、ー金即紫綬‖列侯。【徹昭】テツセウ　よあかしする。陳志、常林傳「叫呼救救ー一」‖徹宵・徹夜。【徹宵】テツセウ　よどほし。徐鉉詩「風來何情ー一者」‖通宵・徹夜・徹曉。【徹膳】テツゼンスル　食膳を取りさげる。詩經、箋「膳夫ー一」【徹饌】テツセン　神佛に供へたる食物をとりさげる。‖撤饌。【徹旦】テツタン　よをあかす。陸游詩「夜控銅壺ー一吟」‖徹昭・徹曉。【徹底】テツテイ　そこまでとほる。北史、宋世良傳「府君非二唯善政一、清亦ー一」【徹頭徹尾】テツトウテツビ　始より終まで、一かも十まで。程子、中庸解「誠者物之終始、猶二俗言一ー一」朱子語類「敬字是ー一工夫」【徹法】テツハフ　周時代の租稅法。孟、滕文公「夏后氏五十而貢、殷人七十而助、周人百畝而徹、其實皆什一也、徹者徹也、助者藉也」字解參看。【徹夜】テツヤ　よどほし。朱熹詩「青燈ー一課二農書一」‖徹宵・通宵。

【徳】トク　㊥　一に悳に作る

○道を行ひて心に得るある義。善行・善道・正義・道義など人の品行の總稱「倫ー」「令ー」「遵ー」「至ー」「謙ー」「露ー」○賢者、君子人、善人。○すべて人の行爲。韓愈、原道「ー有二凶有一吉」○めぐむ、めぐみ（恩惠）「ー澤」「恩ー」恩に感ずる、ーとする。○善きをしへ（敎化）「ー敎」「ー化」○さいはひ（福）禮、哀公問「百姓之ー也」○みさを（節操）○利得。○四時の旺氣。禮、月令「某日立春、盛ー在レ木」○國名、獨逸「ー國」【有レ德者必有レ言】トクアルモノハカナラズゲンアリ　内に德ある者は、よく言ふことある義。論、憲問「子曰、ー、有レ言者、不二必有一ー」【德友】トクイウ　德を以て交る友。莊、德充符「吾與二孔丘一非二君臣一也、ー一而已矣」【德育】トクイク　德義心を養成する敎育。【德音】トクイン　○天子のおことば。漢書、藍伸舒傳「陛下發二ー一下二明詔一」○善言の義。詩、大雅、皇矣「帝度二其心一、貊二其ー一」○善ききこえ、令聞の義。詩、豳風「ー一不レ瑕」‖德聲。【種レ德】トクヲウエ　德惠を施し行ふ。書、大禹謨「皐陶邁ー一レ、德乃降、黎民懷レ之」【特レ德者昌】トクヲタノムモノサカユ　道德をたのみにする者は、益榮える。史、顏君傳「ー一、恃レ力者亡」【度レ德量レ力】トクヲハカリリョクヲハカル　わが德と力とをはかる。左、隱十一「度レ德以處レ之、量レ力而行レ之」【以レ德報レ怨】トクヲモツテエンニムクユ　恩惠を以て怨ある者に報ずる。論、憲問）【累レ德】トクヲカサヌ　人の道德にきづを附ける。禮、旅獒「不レ矜二細行一、終累二大德一」【德行】トクカウ　正道にかなへるおこなひ。孝經「非二先王之ー一、不二敢行一」【德器】トクキ　德行器量、行の成るを德といひ、才の成るを器といふ。漢書、杜周傳贊「ー一自過二前世一」呂氏春秋「ー一成就」

【德義】ﾄｸｷﾞ人の行ふべき正しき義理。左傳「一ー、利之本也」

【德鷄】ﾄｸｹｲ雞の異名。成語考「雞有二五德一、故稱レ之曰二ー一」五德參看。

【德化】ﾄｸｶ 德を以て民を善にみちびく。德教を以て感化する。漢書「謹牧二善民一、而風二ー一」

【德惠】ﾄｸｹｲ いつくしみ。めぐみ。北史「務行二ー一」＝仁惠。

【德行】ﾄｸｺｳ きとき德。孟、盡心「人之有二ー一術智一者、恆存二乎疢疾一」

【德教】ﾄｸｷｮｳ 道德のをしへ。孟、梁惠「沛然ー一、溢二乎四海一」

【德業】ﾄｸｷﾞｮｳ 道德と事業と。後漢書「大尉ー一相繼」

【德不レ孤】ﾄｸﾌﾗｽﾞ 德あるものは孤立することなく、必ず類ありて之に應ずる。論、里仁「子曰、――、必有レ隣」

【德操】ﾄｸｿｳ 道德心の堅固にして變らざるみさを。荀子「學也者、固學一レ之也、生乎由レ之、死乎由レ之、夫是之謂二ー一」

【德稱】ﾄｸｼｮｳ 道德のきこえ。後漢書「ー一日盛」＝德望。

【德色】ﾄｸｼｮｸ 人に恩を施したるをほこるかほ色。漢書、賈誼傳「借二父老一資二諸子一、以與二其ー一」

【德性】ﾄｸｾｲ 人の固有する德義の性、善を善とし惡を惡とする本性。

【德政】ﾄｸｾｲ ○めぐみある政治。後漢書、祖帝紀「先皇ー一可レ不レ務乎」＝仁政。○國足利時代に貸しつけたる錢穀などに對して債權債務共に無效ならしむる義。德川時代には棄捐といふ。

【德政碑】ﾄｸｾｲﾋ 官吏の德政をほめたたへたる石ぶみ。水經、濟水注「昌邑有二成人班孟堅碑一、建和十年、從事椽閿等刊レ石、頌二德政一碑也」

【德星】ﾄｸｾｲ ○めでたきほし。道德ある人に喩ふ。漢書「陳寔字仲弓、荀淑字季和、寔與二子紞・遺一淑父子一討論、于レ時ー一聚、太史奏曰、五百里內、有二賢人聚一」＝景星。○歲星をいふ、歲星の在る所に福ある故。史記「陛下建二漢家一封禪、天其報二ー一云」○木星の異名。

【德聲】ﾄｸｾｲ 仁德あるほまれ。曹植詩「君子在二末位一、不レ能レ歌二ー一」

【德祚】ﾄｸｿ さいはひ。魏志、王朗傳「陛下ー一、嫌二彼二聖一」

【德宗】ﾄｸｿｳ 國鎌倉時代、北條家の總領の知行所「ー一領」

【德澤】ﾄｸﾀｸ めぐみ。史、三皇紀「聖人、ー一廣大」＝恩澤・恩惠。

【飽レ德】ﾎｳﾄｸﾆ 十分消食に飽く義、德は惠レ多レ人に、招かれたる時の謝辭に用ふ。詩、大雅、既醉序「既醉太平也、醉レ酒ー一、人有二士君子之行一焉」

【德不レ孤】ﾄｸﾌﾗｽﾞ 國を治むるは德義に在りて、山川の險阻にあらず。史、吳起傳「魏武侯浮二西河一而下、中流顧謂二吳起一曰、美哉山河之固、此魏國之寶也、起對曰、――」

【有レ德レ德】ﾄｸﾄｸｱﾘﾃﾄｸｽﾙ 德の古人に及ばざるをはづ。晉、仲應之辭、成湯放二于桀南巢一、惟――」

【德輪如レ毛】ﾄｸﾘﾝｼﾞｮﾓｳﾉｺﾄｼ 輪は輕、德の人にあること毛の如く輕し、故に之を舉げ行ふこと極めて易し。詩、大雅、皇矣「人亦有レ言、――、民鮮二克舉一之」

【德望】ﾄｸﾎﾞｳ 德行ありて、人より尊び望まる。北史、楊時傳「ー一日重」

【德目】ﾄｸﾓｸ 國道德の綱目。

【德聲】ﾄｸｾｲ 德のすぐれたるほまれ。魏志、王昶傳「裴潛子中、滿最有二ー一」

【德利】ﾄｸﾘ 國酒・醬油などを入れるつぼの類。とっくり。

【德無レ所】ﾄｸﾅｼ 已に德さへあれば風俗のいやしき所に居ても、德を以て之を敎化するが故に、みにくきことなし。柳子厚、箕子碑「推レ道訓レ俗、惟――、惟人無レ遠」

十三畫

【徼】

㊀ケウ ㊁ケッ・ゲウ ㊂エウ

㊀くにざかひ、とりで（邊塞）木柵を立てて蠻夷の界とする、東北なるを塞、西南なるを徼。○めぐる（循）漢書、百官表「中尉秦官、掌ー一循京師」○ゑまはり（邏卒）巡察する。後漢書、臧宮傳「少爲縣亭長游ー一」○こみち（小道）○たへ（妙・微妙）㊁もとむ（要求）中庸「小人行險以ー一幸」○かすめ（抄）○伺ひ察する。論、陽貨「惡ー一以爲知者」㊂さへぎる（遮）＝邀。

同訓異義 徼・求・索・干・需・須・要・邀・覓等の別は求（水部二畫）の條を見よ。

【徼要】ケウエウ もとめのぞむ。

【徼怨】ケウエン うらみをもとめる。左傳「樂武子曰、我則不德、ー一於楚」

【徼幸】ケウカウ まぐれざいはひをもとめる。中庸「小人行險以ー一」韓詩外傳「ー一者伐ー一性之斧也」＝僥倖。

【徼倖】ケウカウ 前條に同じ。管子文「ー一萬一」

【徼賓】ケウヒン しひてもとめねがふ。宋史、劉安世傳「武夫ー一不レ當之職」

【徼巡】ケウジュン 次條に同じ。＝行巡。

【徼循】ケウジュン 地方を見まはる、巡察する。字解參看。＝徼巡。

【徼福】ケウフク さいはひをもとめる。左傳「寡君願ー一於周公者公」

【徼名】ケウメイ よき名を得んことをもとめる。漢書「不レ能二廉隅一以ー一于

當世上」

【徽】キ　十四畫　冈

○よし（善）「鴻ー」うつくし（美）よくす、善美ならしむ。○おほなは（大索）みつよりなは（三斜繩）○はたじるし（旗章）徽に通ず。轉じて廣く物のしるしにも用ふ。○むかばき、きはん（蔽幅）○琴の絃の下に施して絃を支へ張るに用ふるもの（琴節）○琴をかきならす。○にはひぶくろ、棹に通ず。‖青縣。○州の名、今の安ー省ー州府の地。

【徽猷】キウ　よきはかりごと。詩經「君子有ー」→小人與屬」

【徽音】キン　清き音、よきことば、よきほまれ。詩、大雅、思齊「大姒嗣ー」

【徽號】ガウ　旗じるし。禮、大傳「聚人南面而治二天下一必改二正朔一殊ー」‖旗章。

【徽幟】キシ　うつくしき織。文賦「文ー以綺」‖音治而盈ノ耳」

【徽宵】ガン　よきことぱ。喜、立政「嗚呼我旦已受二人之ー一」成告二嗣子王一矣」‖善言。

【徽纆】キボク　しるしをつけたるはたじるし。漢書「殊ニー一、異二器制一」

【徽章】キシャウ　旗じるし。戰國策、韓子爲變二其ー一、以爲二乘軍一」

【徽柔】キジウ　美くしきいきを。宋史「ー忠謀」

【徽墨】キボク　安徽省、徽州府より產する墨にて其の名高し「湖筆ー一」

【徽纆】キボク　大いなるなは。徽は三つより、纆は二つよりのなは。易、坎卦「上六繫用ニー一、寘二于叢棘一」

心部（中）

【心】シン　五

○こころ（精神）人の肉體を支配し活動の根本となるもの「良ー」「道ー」「盛ー」「善ー」○かんがへ、おもひ（思志望）左、襄三一「人ー不同、如二其面一焉」○しんのざ、五臟の一。左、右兩肺の間に在りて動物の血行の中樞たる機關。‖心臟。○もと（本）○物のまんなか、しん（中央）「中ー」「水ー」「天ー」○むね（胸）史、殷紀「聖人之ー有二七竅一」○なかご、星の名、二十八宿の一。‖大火・商星。

【心胃】シン　しんの臟と、ゐの臟と、腹の中。蘇軾詩「終期自盟滄、冷笑消二ー一」

【心意】シン　こころばせ。史、李斯傳「蜮ニー一、說二耳目一者」

【心印】シン　○佛さとりの道、佛敎の奥儀、佛心の印證する所の義。傳燈錄「遂歷至二少林寺一面壁九年、不言文字、以二袈裟一授二慧可一、曰內傳ー一、以契二證心一、外傳二袈裟一、以定二宗旨一」○心のあと。蘇氣。贈才詩「潔與二謝公一ー一合」

【心猿】シン　心の慾のくるひやすきを喩へていふ。趙州錄、道痩「ー一縱レ跳、意馬休レ馳」

【心香】シン　佛中心の誠をいふ、香を焚き佛に供する如きに喩ふ。梁簡文帝文「窗計意表、宝度ー一」

【心學】シン　○心を修むるがくもん。孟郊詩「誰言招二朋客一、猶自務ニー一」○心の本體を認めて、身を修むる學。陸象山・王陽明等の唱ふるところ。○佛神・儒・佛の三敎をまじへて、平易なる說法を爲して俗人に實踐道德を勸むる敎義。石田梅巖、手島堵庵・中澤道二等之を唱ふ。

【心肝】シン　○心臟と肝臟と。○轉じてまごころ。李白詩「酣然露ニー一」‖丹心・赤心・誠意。

【披二心肝一】ヒシン　我が心の誠を披きて人に示す義。漢書、嚴助傳「臣願ー一」

【心眼】シン　よく物を識別する心のはたらき。肉眼の對。葛洪「元章ー一」

【心意】シン　こころ、きぶん。禮、月令「仲夏之月、節二嗜欲一、定ニー一」

【心悸】キシ　どうき、むなさわぎ、心臟の鼓動「ー一亢進」

【心動】シン　心中に浮くちぎり望む。楊公筆錄「我與二士通一ー一久矣」

【心機】キシ　心の動くはずみ。こころのはたらき。任昉詩「行無二轍跡一、理絕ニー一」

【心勞】シン　心のくまぐま、心中。詩、柔風、小旻「豈念二君子一、温其如レ玉、在二其板屋一、亂二我ー一」

【心君】シン　心をいふ、心は一身の主たるが故。陸游詩「省レ事ー一時」

【心火】シン　○火の如くはげしく激したる心、怒る心の勞、醫者いふのほむら。○星の名。晉書「ー一頒時、喪亂可レ必」‖心宿・大火。

【心花】シン　心を花に喩へていふ。梁簡文帝文「ー一成レ塚、共轉二六塵一」李白詩「登陵愛二惠風一ー一朗二啓筵一」

【心葩】シン　書をいふ、書は書く人の精神を書き出す故にいふ。法言「書心聲也、書ー一也、畫二形、君子小人見矣」

【心灰】シン　こころがひやゝか。欲望なく心の冷靜なるにいふ。白居易詩「ー一不レ似二爐中火一、輕塵過於珊下霜」

【心外】シン　○心のほか。楞迦經「ー一無二別法一」○意外、もってのほか。

○圖殘念・無念。
【心外無別法】シンゲムベッポウ 圖法は心ありての法にて、心の外に別に法あるに非ざるなり。〔楞迦經〕
【心願】シングワン ○心中のねがひ。○圖神佛に心の願をかける。
【心形】シンケイ 心と身と。晉書「不レ覺懷然、一一俱斃」
【心計】シンケイ ○胸ざんよう。史、平準書「桑弘羊洛陽賈人子、以二一一年十三侍中、言二利事一析二秋毫一」〇心に計る。もくろみる。李山甫詩「自慚一一今如レ此」
【心契】シンケイ ただ外貌のみならず、深く心にちぎり合ふ。宋史、劉淸之傳「初淸之既舉二進士一、欲レ聽二博學宏詞科一、及レ見二朱熹一盡取レ所レ習焚レ之、慨然志二於義理之學一、呂伯恭・張栻皆神交一一」
【心候】シンコウ 口の異名。白居易詩「口者、心之候」
【心喉】シンコウ ○むれと、のんどと。○要害の地に喩へていふ。晉書、宣帝紀「夏口東關、城之一一」
【心骨】シンコツ 精神と骨髓と。劉知幾文「劇二一一一而不レ忘」〇心身。
【心魂】シンコン たましひ。徐陵詩「自二君之出一矣、一一遂相隨」
【心材】シンザイ 木のあかみ、木の幹の年を經て赤褐色となれる年輪の部分。
【心喪】シンサウ 心中にて喪に服する、師の死には服喪の制なし、故に一一といふ。史、孔子世家「三年一一畢、相訣而去」
【心臟】シンザウ 胸部にありて血液の循環をつかさどる機關、五藏の一。王逢詩「一一空夢神人割」
【心算】シンサン 心にはかる。むな算用。潘岳、楊荊州誄「强記洽聞、目驗二老耒一一無レ遺」〇心計。
【心旨】シンシ 心におもふむね、かんがへ。齊書「謁略一一、殷勤表奏」
【心耳】シンジ 心と耳と。鮑照詩「追憶樓宿時、寂寥滿二一一」李白詩「松風淸二聽神一石瀨注二一一」
【心志】シンシ こころざし。殺梁傳「一一不レ通、師之罪也」
【心事】シンジ 心中に思ふ事がら。謝靈運詩序「徐幹少無二宦情一有二箕潁之一一」
【心疾】シンシツ きやみ、神經のやまひ。左、宣三「子重病レ之、遂遇二一一一而卒」
【心神】シンシン こころの作用。穆天志「其爲レ敎也、勤二去邪累一、澡二雪一一」
【心野】シンヤ しんの機と、にんの機と。轉じて肝要の義とす。顏氏家訓「文以二理致一爲二一一一、氣調爲二筋骨一、事義爲二皮膚一、華靡爲二冠冕一」
【心匠】シンシャウ こころのたくみ。工夫をめぐらす。白居易文「想入二一一一、寫從二筆精一」〇意匠。
【心像】シンザウ 心理學にて外物の形の意識中に現はるるもの。
【心狀】シンジャウ こころのありさま。
【心情】シンジャウ こころもち、こころばせ。李中詩「寒松肌骨瘦一一」
【心受】シンジュ こころにうけてさとる。參同契、注「口傳一一、華三以盛形二之于壺椿一也」
【心術】シンジュツ こころだて。荀、非相「形相惡而一一善、無害レ爲二君子一也」
【心緒】シンショ こころの動くこぐち。杜甫詩「玉壘浮レ雲一一亂」〇情緒。
【心醉】シンスイ 深く心を傾けて欽慕すること、酒に醉へる如し、みとれてうつとりする。莊、應帝王「列子見レ之一一」
【心隨】シンスイ まんなかにあるずゐ。轉じて、心、又、肝要の義とす。白居易詩「窮レ之在二琴曲一號者假一一」
【心性】シンセイ こころのさが。戴表元詩「青山一一白雲身」〇本心。
【心旌】シンセイ 心の定まらざるを旌旗の搖曳するに喩へていふ。王安石詩「投レ老一一一片醉」心搖搖如二懸旌一を見よ。
【心靡】シンビ 心を靡にあらはしたるもの、言語をいふ。心畫參看。
【心迹】シンセキ ○心と行爲と。杜甫詩「一一喜二雙淸一」〇專ら心のあとの稱。〇存心。
【心戰】シンセン ○恐れてこころをののく。史、韓書「一一未レ能二自決一」○智を用ひてたたかはす。智慧の戰爭。劉志、馬真傳、注「一一爲レ上、兵戰爲レ下」
【心素】シンソ 心のまこと。李白詩「空圖二錦字一表一一」〇素心。
【心窓】シンサウ こころの喩。全詩「窓氣塞一一一」
【心地】シンチ ○圖こころの有樣。禪家「一一者、佛言、三界之中以レ心爲レ主、衆生之心、猶二大地一、五穀五果、從二大地一生、如レ是心法生二世出世善惡五趣三乘一、以二是因緣一、三界唯心、故名一一一」〇圖きもち、氣分。
【心智】シンチ ちゑ。南史「一一薄劣」〇神智。
【心馳】シンチ 身は此に在るも、心は既に彼に馳せゆく義。陶潛文「推レ劍東顧、而心已馳二于吳會一矣」〇神馳。神飛。
【心塵】シンヂン こころのけがれ。梁昭明太子詩「因レ慈開二慧雲一、欲レ使一一伏」〇煩惱。
【心膽】シンタン はらわた。心のうち。鮑照詩「野風吹二草木一、遊子一一斷」
【心中】シンチュウ ○こころのうち。〇意中・心裏。○圖男女合意の上相共に自殺する。〇情死。
【心中有レ心】シンチュウイウシン 心を以て心を制する義。管子「治之者心也、安レ之者心也、心以藏レ心、又「心之中又有レ心焉」
【心中人】シンチュウニン わがおもふひと。徐幹詩「安得二鴻鵠羽一、觀レ此一一」〇宮中人。
【心通】シンツウ 心にがってんする。心に悟る。

【心痛】シンツウ　むねいたむ。心配する。潘夫論「唇亡歯寒、脣傷ー一」
【心底】シンテイ　こころのそこ。こころのうち。‖心裏。
【心適】シンテキ　こころにかなふ。白居易詩「ー一忘二是非一」
【心田】シンデン　こころ。精神。梁簡文帝文「澤雨無レ倚、ー一受レ潤」‖心地。
【心頭】シントウ　こころ。むなさき。李山甫詩「更無二塵事一ー一起、豈有二詩情来一外来」‖念頭。
【心波】シンパ　心の物に感じて動くに喩ふ。釈恵洪詩「ー一不レ興頽二古井一」
【心肺】シンパイ　心臓と肺臓と。転じてこころの義。鮑照詩「更無二外事来一ー一」‖心肝。
【心肺主】シンパイシュ　腸をいふ。白虎通「腸為ニー一心為二皮膚主一」
【心配】シンパイ　國色色と心をくばる、こころづかひ、氣がかり。
【心臓】シンパク　こころ。李白詩「我欲二因レ之赴一ー一」
【心法】シンパフ　○心をねる術。白居易詩「自ニ我學一ー一、萬機感二一空一」○心だて。中庸章句「孔門傳授ー一」
【心非】シンヒ　こころとがとす。心の中にて非とす。史、秦紀「入則ー一、出則巷議」
【心脾】シンピ　しんの臓と、ひの臓と。趙鼎臣詩「感結傷ニー一」
【心府】シンフ　こころ。隋書、醫藝「蘊ー一、誠救殷動」
【心服】シンプク　心底より悦びしたがふ。孟、公孫丑「以レ力服レ人者、非ニー一也、力不レ贍也」
【心腹】シンプク　○むねと、はらと。史、范雎傳「秦之有レ韓也、譬如二木之有レ蠹也、人之有ニー一之病一也」○まごころ。漢書、趙廣漢傳「吏皆輸二寫ー一、無レ所二隠匿一」‖腹心。
【心腹之友】シンプクノトモ　心にへだてなき親友。唐書「杜審言・李嶠・崔融・蘇味道友善、世號二心腹四友一」
【心腹之病】シンプクノヤマヒ　容易に治せざる病、除き難き敵に喩ふ。心腹條看。
【心兵】シンペイ　心の物に感じて動くこと、外敵に應ずるが如し、故に喩ふ。黄庭堅、戯咏二煖足牀一詩「小姫煖レ足臥、或能起ニー一」
【心病】シンペイ　こころうれひ。詩經、疏「毎思二此伯一、使二我ニー一」
【心魔】シンマ　梵　物慾又、愛著の情など、人を邪道に陥れる心の鬼。楞厳經「無レ令ニー一自起二深障一」
【心労】シンラウ　おもひわづらふ。しんぱいする。書經「作レ傷ニー一日損」‖心痛。
【心裏】シンリ　こころのうち。吳融詩「眼前即事靜、ー一故人來」‖心中。
【心理學】シンリガク　心の現象につきて其の理法を研究する科學。
【心慮】シンリョ　おもんばかり。東魏檄梁文「堅二其耳目一、易二其ニー一」
【心膂】シンリョ　○むねと、せぼねと。○最も重き輔佐の臣に喩ふ。書、君牙「今命レ爾于翼、作二股肱ニー一」
【心力】シンリョク　心のちから。書經「罔レ尚ニー一乃ー一、其克有レ勵」孟、梁惠王「盡ニー一而爲レ之」
【心霊】シンレイ　こころ。陶潜、經絡志「詩者所二以導一達ニー一」‖性霊。
【心裡】シンリ　心に道理をわきまへず。列子「心不レ涉レ學、猶二心之裡一」
【心窩】シンワ　みづおち、胸と腹との界目の中央に在るくぼみ。‖鳩尾。
【心搖搖如二懸旌一】ココロノヨウヨウトシテケンセイノゴトシ　心の動きて定まらざること、かけたる旗のゆれて動く如きをいふ。史、秦傳「ー一、而無所二終薄一」
【領レ心】ケイシンスルタメ　幕ら其の方に心をよせる。後漢書「ー一折節」
【割レ心】コロヲワリテ　まごころを示す。心をわりて見せる。赤誠を披瀝する。史、鄭陽傳「ー一析レ肝相信」
【爲レ心】コロノタメニ　おもひを寄せる。後漢書、杜喬傳「天人ー一」‖爲意。
【開レ心見レ誠】コロヲヒラキテマコトヲアラハス　心をひらきてまごころを人に示す。後漢書、馬援傳「ー一、無所二隠伏一」
【心在二鴻鵠一】コロザシコウコクニアリ　鴻を慕めながら心の外物にうつるに喩ふ。孟、告子「弈秋、通國之善レ弈者也、使二弈秋誨二二人弈一、其一人專レ心致レ志、唯弈秋之爲レ聽、一人雖レ聽レ之、一心以爲有二鴻鵠一將至、思下援二弓繳一而射中之、雖二與レ之俱學一、弗レ如レ之矣、爲二是其智弗一與、曰非レ然也」
【心凝形釋】コロコリカタチトケ　心が其の物にひきつけられてかたまり、身體がとらける。柳宗元、西山宴遊記」
【心正則筆正】コロタダシケレバフデタダシ　心は本なり、故に心正しければ筆蹟も亦正し。書法正傳「唐穆宗問二柳公權筆法一、對曰、用レ筆在レ心、ー一」
【銘レ心鏤レ骨】メイシンルコツ　恩を受けたるを心骨にきざみて忘れざるをいふ。書言故事「趙林武云、貧レ心鏤レ骨、李義山云、刻二鏤心骨一」
【心膽俱破】コロモロクワレ　心は膽大寛平にして、膽は舒泰なり。大學「富潤レ屋、德潤レ身、ー一、故君子必誠二其意一」
【心如レ水】コロミヅノゴトシ　心清く淡泊なるをいふ。漢書、鄭崇傳「臣門如レ市、臣ー一」
【心如レ結】コロムスボヽレ　心むすぼれて散ぜず、專心一意なる義。詩、曹風、鳲鳩「淑人君子、其儀一兮、其儀一兮、ー一兮」

【忄】○心（衝傍）に同じ、字畫の偏に限りて用ふ。○國りっしんべん（立心偏）

【必】ヒツ

畫　質

○かならず、きっと、確かに定める辭。論、顔淵「ー一也使無訟

乎」○きっと果たす。かたくあてにする。○つまびらかにす（審）○もっぱら（専）○不又は何の下に置く時はかならずしもと読みて打消しの意となる。論、陽貨「何一公山氏之之也」

【必要】ヒツヨウ きっとなくてならず、缺くべからざるもの。‖必用。

【必携】ヒッケイ かならずたづさへる。是非とも携へざるべからず。

【必至】ヒッシ きっと其の事が到来する。必然其のやうになる。

【必死】ヒッシ 死を決する。しにものぐるひ。漢書、朱博傳「且喜且懼、對日一一」

【必定】ヒッジョウ かならずさうふる。‖必用。

【必勝】ヒッショウ きっとかつ。

【必須】ヒッス 俗 かならずおとろへる。仁王經「盛者一一」

【不レ必】フヒツ きっと履行することを爲さず、たしかに施行せず。韓非、內儲說「刑罰一レ則禁不レ行」

【必然】ヒツゼン 必ずかくなる。きっと。漢書「任レ賢必治、任二不肖一必亂、一一之道也」‖必至。

【必定】ヒッテイ かならず、たしかにかくなる。佛法決疑經「一一得レ近二涅槃一」

【必傳】ヒッデン かならず後世に傳はる。

【必讀】ヒットク かならずよまねばならぬ。

【必罰】ヒッバツ かならずつみに行ふ。漢書、宣帝紀「孝宣之治、信賞一一」

【必無】ヒッム きっとなし、必ず有ることなし。

【必滅】ヒツメツ 俗 かならず亡びる「生者一一」

【必用】ヒツヨウ きっとなくてはならず。‖必要・必需。

忉 トウ 豪

心に憂ふる貌。

【忉忉】タウタウ 心に憂ふる貌。詩、齊風、甫田「勞心一一」

【忉怛】タウタツ うれひかなしむ。李陵、答二蘇武一書「願令二人悲增一一一耳」‖悲痛。

【忉利天】タウリテン 俗 欲界六天の第二にして、三十三天と譯す。須彌山の頂に在りて、帝釋此に居る、喜見城といふ。天台四教儀「二一一、住處忉利、此云二三十三一、往世三十三人、同修二勝業一、同生二此天一」

忏 サン 豔

○みだる（擾）○きはまる（極）

○あづかる（預）

忌 キ 寘

○いむ、いみ（諱）「畏一」○にくむ（憎惡）きらふ（嫌）「嫌一」ねたむ（嫉）「猜一」○はばかる（憚）おそれる（畏）「一憚」○いましむ（戒）○うらむ（怨）音語「小人一而不思」○うやまふ（敬）○親の死せし日に相當する年年の日。親の命日「一日」○喪中に家に在りて萬事をつつしむ一定の期間「一中」○陰陽家の說にていみさける物事。○無意味の助辭。詩、鄭風「叔善射一」

同訓異字 忌・諱○忌は畏れ憚ふ義、いやがる、嫌忌・忌憚と用ふ。小學「如二護レ病而忌レ醫也」○諱は忌みていはぬなり、諱名の義にて知るべし、忌諱と用ふ。

【忌諱】キキ ○いみきらふ、人の氣にさわる。史記、馮唐傳「諱人不レ知二一一」○畏れ避ける。老子「天下多二一一」

【忌月】キゲツ ○事を爲すにいみさくべき月。陰曆九月の稱。晉書「穆帝納レ后、欲レ用二九月一九月是一一」○親の死せし年年の月。南史「張融有二遺表一一一、三月不レ聽二音樂一」

【忌嫌】キケン いみきらふ。

【忌克】キコク 他人の才能をいみて、それに勝たんとする。克は剋に同じ。左傳「今其百多二一一雖殺」‖忌剋。

【忌刻】キコク 人の能あるをきらひて、むごくあたる。晉書、王濬傳「外雖二弘雅一、而內多二一一」‖猜忌刻薄。

【忌恨】キコン きらひうらむ。蜀志、晉宕之所二一一也」

【忌婁】キロウ ねたみ深き妻。晉書「馮有二一一、貞操二井白一」‖妬婦。

【忌祭】キサイ 死せし人の年忌のまつり。

【忌歲】キサイ いみさくべきとし。晉書「若有二忌月一當レ有二一一」

【忌日】キニチ おやの命日。禮、祭義「君子有二終身之喪一、一一之謂也」‖忌辰。

【忌辰】キシン 忌日に同じ。辰は日。

【忌憎】キゾウ きらひにくむ。王令詩「奸子壯士爲二一一」

【忌憚】キタン いみはばかる、遠慮する。中庸「小人而無二一一」也」

【忌中】キチュウ いみにこもり居る期間。

【忌姐】キバ いみれたむ。宋書「一一者飛語」‖忌嫉。

【忌避】キヒ ○いみ避ける。漢書、高車傳「酒價貴賤、無所二一一」○法律上の用語。訴訟關係人が判事、又は書記などの官勤に不公平の事ありと認めし時は其の係り官の裁判を受くることを拒絶する申立。

【忌服】キフク 喪に居る期間。忌は家に籠りて出でず、服は出でて事を執れども、尙ほいみ愼む間をいふ。血緣の親疎によりて長短あり。

【忌明】キメイ 圖 忌服の期が終る。‖除服。

【忘部】ボウ 祭器を作り、又、斎戒して神事にあづかる職。

【忙】 ㊀キツ ㊁ギツ 月物

㊀よろこぶ(喜)史、周紀「棄爲兒時、一如巨人之志」一説、屹(山部三画)の誤。㊁きらふ、いとふ(心不欲)

【志】シ 置

○こころざし、こころばせ(意)心のゆくところ「立ー」「壮ー」「一士」「こころざす。論、述而「ー於道」○のぞみ、ねがひ、目的、めあて「ー望」論、先進「亦各言其ー也」○したふ。○かきしるす(記)＝誌。○しるしたるもの、かきもの(記録)周礼、春官、小史「掌ー邦國之ー」○古書。左、襄二五「一有之」○おぼえこむ(記憶)後漢書、劉殷傳「博見強ー」○はた、幟に通ず。○やじり(箭鏃)○節義、又は見識あること。○英國の銀貨シルリングの音譯。

【志意】シイ こころざし。文中子「ー修而貴、道義重經三王侯」

【志堅】シケン こころざし高くみさをあり。北史、常爽傳「嚴正有ー操」

【志行】シコウ 立志と制行と、すぐれたる志と品行と。漢書、傅喜傳「少好ー學問、有ー操」

【志向】シコウ こころばせ。＝志趣。

【志格】シカク こころざしけだかし。晉書、前燕載記「李産字子喬、少剛厲有ー操」

【志学之年】シガクノトシ 十五歳。論、爲政「子曰、吾十有五、而志ー於學」とあるに本づく。

【志気】シキ こころざし、きしょう。禮記「ー塞ー乎天地」

【志義】シギ 正義にこころざす。禮記「君子聽ー樂聲之察ー、則思ー臨ー之臣」

【志願】シガン こころざしねがふ。許渾詩「丈夫有ー、誰謂我無ー戚」＝志望・希望

【志願兵】シガンヘイ 自ら志願して兵役に服する兵「一年ー」

【志操】シソウ こころざしみさを。南史、陸瑜傳「幼孤好ー學有ー操」

【志士】シシ 正義の爲めに盡す節操ある士。孟、滕文公「ー不ー忘ー在ー溝壑ー、勇士不ー忘ー喪ー其元」

【志尚】シショウ けだかきこころざし。晉書、孔坦傳「雖有ー智局、ー不ー如ー志尚」

【志趣】シシュ こころばせ。晉書「ー不羣」＝志向。

【志業】シギョウ かきもの、記録。

【志性】シセイ こころばへ。魏書、李洪之傳「ー雖慨、多ー所ー堪忍ー」

【志節】シセツ 節操。

【志操堅固】シソウケンゴ 志うつくしく行はげしの後漢書、張堪傳「年十六爲ー」

【志操安一】ー、諸儒號曰ー聖童ー」

【忍】ジン ニン 診

○しのぶ、しのび。○たふ、こらへる(耐)「ー耐」「堅ー」「堪ー」○ゆるす(容)「容ー」「含ー」○むごし、不仁に安んずる(殘刻)孟、公孫丑「人皆有ー不ー人之心」「殘ー」○圖ジン(思・蒼頡)＝偲。○ジンジン 人を避ける「人目をー」「ー術」○ー草ジンサウ 羊齒類の草の名。

【忍愛】ジンアイ 愛情をこらへしのぶ。江淹賦「割ー」、離ー園去ー里」

【忍湯】ニンカウタウ かわきをこらへる。後漢書「孔子ー二子盜泉之水」

【忍蓋】ジンガイ はぢをしのぶ。淮南子「能爲二耐恥一ー」

【忍心】ジンシン むごきこころ。殘忍なる心。詩、大雅「維彼ー」

【忍受】ニンジュ 恥辱などを忍びこらへて受ける。

【忍術】ジンジュツ 圖しのびの術。身を隱して人に知らしめざる術。＝隱身術。

【忍耐】ニンタイ しのびこらへる、辛抱する。＝耐忍・堪忍。

【忍痛】ニンツウ いたみをこらへる。

【忘憂】ボウユウ 憂を忘れる。＝無ー・解ー・消ー

【忘恩】ボウオン 恩を忘れる。

【忘却】ボウキャク わすれる。

【忘形】ボウケイ 形骸を忘れる。

【忘言】ボウゲン 言語を忘れる。

【忘己】ボウコ 己を忘れる。

【忘年】ボウネン 年齢を忘れる。

【忘筌】ボウセン 筌を忘れる。

【忘憂】ボウユウ 憂を忘れる。

【忘憂草】ボウユウソウ 萱草。

【忘憂物】ボウユウブツ 酒。

【忘歸】ボウキ 歸るを忘れる。

【忘却】ボウキャク わすれる。

【忘形】ボウケイ 形骸を忘れる。

【忘言】ボウゲン 言語を忘れる。

【忘己】ボウコ 己を忘れる。

【忘年】ボウネン 年齢を忘れる。

【忘筌】ボウセン 筌を忘れる。

【忘憂】ボウユウ 憂を忘れる。

【忘憂草】ボウユウソウ 萱草。

【忘憂物】ボウユウブツ 酒。

【忘歸】ボウキ 歸るを忘れる。

【忘却】ボウキャク わすれる。

【忘形】ボウケイ 形骸を忘れる。

【忘言】ボウゲン 言語を忘れる。

【忘己】ボウコ 己を忘れる。

【忘年】ボウネン 年齢を忘れる。

【忘筌】ボウセン 筌を忘れる。

【忘憂】ボウユウ 憂を忘れる。

【忘憂草】ボウユウソウ 萱草。

【忘憂物】ボウユウブツ 酒。

【忘歸】ボウキ 歸るを忘れる。

【忍涕】ニンテイ　涙を含む。泣くことをこらえる。宋史「上ー一太息」

【忍土】ニンド　仏　このよ、娑婆世界。

【忍冬】ニンドウ　すひかづら。蔓草の一。夏を生じ、葉は紫色を帯び、葉は尖楕円形、春夏の交、甘く芳しき小花を著ける。本草別録、ーー金銀花」

【忍辱】ニンニク　○仏　外界のはづかしめを忍びて怨まず。法界次第「内心能安忍外所辱境、故名ニーー」○ニンジョクはづかしめをしのぶ。陰符経「安莫レ安ニ乎ーーニ」

【忍孕之衣】ニンヨウノイ　腰巻の異名。江総、楽ニ——ニ入ニ安禅之室ニ」忍辱鎧。

【忍之一字衆妙之門】ニンノイチジシュウミョウノモン　何事も忍耐の力によりて成し得べしとの意。昌本中、官箴「——、当レ官処レ事、尤是先務、若能清慎勤之外、更行ニ一忍一何事不レ済」

【忍勉】ニン　こらへつとめる。鮑照詩「志士惜ニ年力ニ、ーー自強治」

【忍返】ニンピ　鬩などの上に尖りし竹木又釘などを列ねて盗賊の入るをふせぐもの。ロ遺機。

【忍緘摺】ニンカンシュウ　しのぶずり。忍草の葉の形を織物にすりつけしもの。奥州信夫郡より出づ。

【忖】ソン　阮

○はかる（度）おもひはかる。○おもふ（思）○利に通ず。

同訓異字　忖・計・謀・圖・量・度・料等の別は計（言部二画）の條を見よ。

【忖度】ソンタク　他人の心をおしはかる。詩、小雅「他人有レ心、予ーーニ之」

【忒】トク　職

○たがふ、ちがふ（差）「差ー」「ーー」詩、大雅「昊天不ー」○うたがふ（疑）詩、曹風「其儀不ー」○かはる（変更）詩、魯頌「享祀不ー」ーー○俗　はなはだ（太・已甚）「ー殺」殺は助字。

【忘】㊀バウ・マウ　㊁バウ・マウ　漾　㊂

㊀わする「ー恩」「善ー」○ゆるがせにする（忽）心にかけぬ。○記憶せず、善ーはよくわすれる病。㊁わする、心づかず、棄てる、おとす、とりおとす「遺ー」「存ー」

同訓異字　心に从ひ、亡に从ふ会意文字。

【忘愛】バウアイ　うれひをわすれる。論、述而「発レ憤忘レ食、楽以ーレー」

【忘憂物】バウユウノモノ　酒をいふ。陶潜詩「汎ニ此ーーニ」遠ニ我遺世情」

【忘我】バウガ　己の身をわすれる。後漢書「陛下ーレー耶」

【忘懐】バウクワイ　くるしみをわすれる。蘇軾詩「乞レ墨何足レ羨、負レ米可レ忘レ」

【忘機】バウキ　うるさき世事をわすれる。機は心の機械。李白詩「我酔君亦楽、陶然共ーレー」

【忘却】バウキャク　次條に同じ、却は卻の俗字。趙善璵詩「羅彦都ーー、功名盛ーー已拠」

【忘卻】バウキャク　わすれる。卻は俗語の助字。夢遊録「舞袖弓弾渾ーー、翻鞭空度九秋霜」

【忘倦】バウケン　身のつかれをわすれる。稽康詩「老来息レ交思ニ簡単ニ、昏レ子ーレー暦ニ晨夕ニ」ロ忘労。

【忘形】バウケイ　己のからだあるをわすれる、物我の差を超脱する義。荘子「故曼ニ忘者ーレー」杜甫詩「ーー到ニ衡茅ニ」ロ遺形。

【忘形交】バウケイノマジハリ　己の形骸あるを忘れて心を以て親密にまじはる。唐書、孟郊伝「郊性介、少ニ諧合ニ、韓愈一見レ賞ニーーニ」

【忘言】バウゲン　己の身をわすれる。蘇軾詩「覚能主忘レ客、今我亦ーレー」

【忘想】バウサウ　みだりなるおもひ、正しからざる想念。

【忘失】バウシツ　○わすれる。○人のあやまちをわすれる。後漢書、李膺傳「立レ政之要、記レ功ーレー」

【忘足】バウソク　履がよく足に適するをいふ。荘子「ーレー履之適也、忘ニ要帯之適也。忘ニ是非一心之適也」ロ要は腰。

【忘年】バウネン　○年をわすれる。荘子「ーレー忘レ義、振ニ於無竟ニ」○圖年末に其の年を送るにいふ「ーー会」

【忘年友】バウネンノトモ　年の長幼にかかはらずして交はる友。陳寅、江総傳「総、時年少有レ名、綴等雅相推重、毎ニ——ニ」

【忘年交】バウネンノマジハリ　年の長少を忘れて交る。後漢書「禰衡有ニ逸才、少与ニ孔融一交、時衡未レ滿ニ二十、而融已五十、毎ニ——ニ」南史、何遜傳「荒蕪見ニ孫對策、大相稱賞、因結ニ——ニ」

【忘八】バウハチ　○遊里に遊ぶ者の稱。孝弟忠信礼義廉恥の八をわすれる義。一説に王八といふ悪人の名の轉訛。〔陔餘叢考〕幼學須知「言ニ入ニ于花柳之中、其心已忘ニ孝弟忠信礼義廉恥八字ニ、故名ニーー」ロ亡八。○圖　烏の異名。○圖くるわ（遊郭）又、遊女屋。又、遊女屋の主人。

【忘疲】バウヒ　つかれをわすれる。史通「慎ニ其標音、三復ーレー」

【忘貧】バウヒン　身のまづしきをわすれる。文子「楽レ道而忘レ貧、安レ徳而ーレー也」

【忘病】バウビャウ　やまひの苦をわすれる。銭起詩「味レ道能ーレー」

【忘労】バウラウ　身のつかれをわすれる。骨を折りても苦しと言はず。礼記「用ニ恕愛ーレー、可レ謂ニ孝也」

【忘草】ワスレグサ　圖○萱草の異名。○烟草の異名。

【忽】忘（前條）の古字。

【忙】バウ マウ 陽

いそがし、いそがはし、せはし、心追る、事繁し「忽ー」「繁ー」「奔ー」

同訓異義 忙・悶・急・遽○忙は閑の反なり、多用にてひまなきなり、急忙と連用す○悶はにぎやかなり、閑雑と連用す、市人のこみ合ひ、にぎやかなる義、忙に似て多用の義はなし○忽は匆に同じ、せはしく、さうざうしき意○急はせはしき義、緩の反なり、求め貿ふ、官事急の如し○遽は火急にあわてていそがしきなり。小學「雖レ在二倉卒一未二曾挽二青遽色一」遽色はあわてたる顔色なり。

【忙殺】ボウサツ 次條に同じ。

【忙煞】ボウサツ 忙だいそがはし、煞は助字にて、後の俗字。馬機臣詩「ー殺深宮小兒女」

【忙事】ボウジ いそがはしきしごと。范成大詩「姑蘇相呼有ニ一ー一」

【忙忙】ボウボウ いそがはしき貌。高駢詩「浮世一一蝸牛角、莫レ嘲頭上雪紛紛」

【忙裡偸閑】ボウリトウカン いそがはしき間にも、ひまを求めてあそぶ。江湖長翁集「吾輩可レ謂二一一一、苦中作レ樂、逸以二八字一爲レ頌、作二詩八首一」

【恍】カウ 送 養 陽

○なげく(慨)意氣激して不平なり。‖慷。○いたむ(感傷)○誠を竭す。○もとる(很戻)

【恍慨】カウガイ なげきいきどほる。魏書「志節一一」

【恍激】カウゲキ ○心激し昂りてなげき傷むる。史、項羽紀「項王、乃悲歌一一」○誠を竭す貌。漢書、都陽傳「一一不二苟合一」‖慷慨。

【忻】キン 文

○よろこぶ(喜)‖欣。○たのしむ(樂)

同訓異義 忻・欣・喜・悦・歡・怡・懌等の別は喜(口部九畫)の條を見よ。

【忻慶】キンケイ よろこび樂む。莊子「慷惋之恐、一一之喜、不レ監二於心一」‖歡樂。

【忻然】キンゼン よろこぶ貌。史、周紀「妾願二巨人跡一、心一一說、欲レ踐レ之」

【忻荷】キンカ よろこびたのむ。魏志「多レ所二省減一、民以一一」

【忻懌】キンエキ 喜びたのしむ。晉書、潘岳傳「情一一乎悼作二令一」‖忻慨。

【恢】 四畫

【恢】カイ 灰

○こころよし、さわやか「爽ー」「痛ー」「奇ー」氣もちよし、さっぱりする。○よろこぶ(喜)よろこばし、おもしろし。○はやし(急疾)「一車」するどし(鋭利)○ほしいまま(縱逸)

【快意】クワイイ こころよし。蘇軾詩「一一瑞風掃上來」

【快飲】クワイイン こころよく酒をのむ。

【快雨】クワイウ こころよきあめ、旱の時の雨などにいふ。魏志、管輅傳「風雲竝起、竟成二一一一」

【快行】クワイカウ とくはしる。唐書、朱敬則傳「一一無二好步一」‖快走・急行。

【快感】クワイカン こころよきかんじ。

【快暢】クワイチャウ こころよきしわざ。

【快果】クワイクワ 梨の異名。本草「梨、一名一一」

【快活】クワイクワツ いきいきしてこころよし。五代史、劉昫傳「歎呼曰、自レ此我胷一一矣」

【快闊】クワイクワツ こころよくうち開ける。

【快愜】クワイケフ 心に稱ひてこころよし。蘇軾詩「一一聊自沃」

【快哉】クワイサイ こころよくさわやか。宋玉、風賦「一一此風」

【快志】クワイシ 志をほしいままに樂しむ。史、莊周傳「終身不レ仕、以快二吾志一焉」

【快事】クワイジ こころよきこと。

【快駛】クワイシ とくはしる。‖快走。

【快心】クワイシン こころよし。新論「登レ人不レ增二其義一則聞者不レ快二于心一」

【快車】クワイシヤ 急行車に同じ。慢車の對。

【快壻】クワイセイ 氣にいりたる婿きむこ。魏書、劉昶傳「欲レ覓二一快女壻一」

【快晴】クワイセイ こころよくはれわたる。陳與義詩「雨前細二明月一、孤松立二一一一」

【快速】クワイソク すばやし。‖敏捷。

【快箭】クワイセン 極めてはやき矢。張籍愛詩「安得二神弓似一明月一、一一掃下四飛鵰」

【快戰】クワイセン 勇ましく戰ふ。心地よき戰。史、項羽紀「願與二諸君一一一」

【快走】クワイソウ はやくはしる。‖快駛。

【快走船】クワイソウセン はやく走る小船の舸又は蒸氣の力にて競走などに使用するもの、ヨット。

【快速】クワイソク すみやか、はやし。

【快刀】クワイタウ 善く切れる刀物。居家必用「取二新薬一用二一一一切極細」

【快諾】クワイダク こころよく承知する。

【快談】クワイダン こころよくくらふ。繫纏詩「大閧一一飲幾斗」

【快活】クワイクワツ おもしろきはなし、面白く話す。

【快彈】クワイダン 面白く絃をひく。白居易、琵琶行序「遂命レ酒、使レ一一數曲一」

【快樂】クワイラク こころよくのびのびす

る。

【快哉】クワイはやきこぶね。

【快適】クワイテキ　こころよくかなふ。楊慎文「引ニ滿盞ヲ醉夜臥ニ草庵ニ殊覺ニ―ー」

【快讀】クワイドク　こころよくよむ。陳造詩「一ー清窗ニ絢如ノ掃」

【不快】フクワイ　○心よからず。戰國策「澤入揖ニ應侯ニ應侯ー レー」○病あり。後漢書、華陀傳「體有ニ―ー」

【快馬】クワイバ　はやくはしるうま。南史、智遠宗傳「我昔在ニ鄉里ニ騎ニ―ー如ニ龍」

【快方】クワイハウ　圖病がなほりかかる、快き方に向ふ。

【快報】クワイハウ　○こころよきしらせ。○急速のしらせ。‖急報。

【快弄】クワイロウ　よくきれる。するどきをのっ玉帝、謝ニ李常伯ニ詩「寶劍夫子ー ー加ニ吳鉤ニ」

【快活】クワイクワツ　さわやかによどみなき様。‖能活。

【快奔】クワイホン　はやくはしる。‖快走。

【快味】クワイミ　こころよし。

【快眠】クワイミン　こころよくねむる。宋祁詩「游覽ー ー知ニ體好ニ」‖佳眠。

【快癒】クワイユ　やまひいゆ、なほる。癒は癒に同じ。‖快癒。

【快樂】クワイラク　こころよくたのしむ。易林「窟餘豐衍、ー ー無ノ已」‖愉快。

【快樂說】クワイラクセツ　人生の目的は快樂にありといふ倫理說。‖快樂主義。

【怃】グヮン　圖 既に通ず　むさぼる（貪）をしむ（愛）左、昭元「ー歲而惕日」生を愛惜して歲月を貪る。

【怃惕】グヮンテキ　徒に歲月を貪る、爲すこともなくして生をむさぼる義。李斛を見よ。

【忤】ゴ　通 牾・迕に通ず　さかふ、さからふ（逆）もとる（違戻）「乖ー」「舛ー」「很ー」

同訓異字　忤・逆◎忤は迕に作るも同じ、心の互にたがひさかふなり、乖違・違逆と用ふ。○逆は順の反なり、直正面にさからふなり、時にてむかふるとも訓む、逆鱗の類。書經「有ニ言逆ニ于汝心ー必求ニ諸道ー」

【忤逆】ゴギヤク　さからふ。陳書「何得ヲ見ニ佛說ー而信順、在ニ我時ー而ー ー之」

【忤恨】ゴコン　さからひうらむ。樂書、ー ー若讎敵」

【忤耳】ゴニクワク　逆言はみみに逆ひて快からず。韓非、難言「至言忤ニ于耳ー而倒ニ于心ー非ニ賢聖ー則莫ニ能聽ー」‖逆耳。

【忤視】ゴシ　さからひみる。史、荊軻傳「人不ニ敢ー ー」

【忽】コツ　コチ　月

○たちまち（倏）にはか、すみやか「ー然」「ー地」「倏ー」「數ー」○ゆるかせにす、おろそかにす「輕ー」○わする（忘）「忘ー」○ほろぶ（滅）つく（盡）詩、大雅「是絕是ー」○かるし（輕）そそっかしい。○あなどる（慢）○むなし。○一はひとすぢのきぬいと。一纊の口より出る絲。又、蜘蛛網。○極めて小數の名目、絲の十分の一。白居易詩「無秒ー之失」

同訓異字　忽・怠・怱・倏・猝○忽は暴起也と註し、倏忽と熟す、急卒なる義。史記の高祖紀に「人乃以ノ孀爲ノ不ノ誠、欲ノ笞ノ之、嫗因忽不ノ見」とある如し。○怠は、ちゃくとと譯す、不定にして、必ず變ずる意あり、詩の句に「生寒午暖花信晚」淮南子に「將ノ將滅、而怠明」とある如し。○倏は犬走疾也と註す、ちゃいとと譯す。○猝は「有ノ所ニ吹起ー也」と註す、倏・猝二字共に忽に同じ。

【忽忽】コツコツ　たちまちに、ふと、すみやかなる貌。左、莊十一「紓即ノ人、其亡也ー ー」

【忽遽】コツキヨ　にはか、にはかに。南史「實容ー ー」‖卒遽。

【忽悅】コツエツ　ぼんやりとしてとりとめなし。悅は悅に通ず。潘岳賦「室靡ー ー」

【忽荒】コツクワウ　空漠なる貌、慵くしてとりとめなし。賈誼、服鳥賦「寥廓ー ー兮、與ノ道翱翔」‖荒唐・恍惚。

【忽忽】コツコツ　○うっとりする、喪心の貌。素問「ー ー腔留而頭痛」○事を省みざる貌。漢書、蘇建傳「陵始降時、ー ー如ノ狂」○失意の貌。荀卿遊文「居則ー ー若ノ有ノ所ノ亡」○まよふ貌。文選、高唐賦「悠悠ー ー」○速に去る貌。劉向、九歎「年ー ー而日度」‖倏忽。

【忽焉】コツエン　たちまち、たちまちに。‖忽然・忽地。

【忽諸】コツショ　○盡くる貌。忽は消滅、諸は助字。左、文五「皋陶庶堅、不ノ能ー ー」○圖誤用してなほざり。又、ゆるかせにする義とす。

【忽然】コツゼン　たちまちに。‖忽焉・忽爾。

【忽卒】コツソツ　にはか、にはかに。

【忽如二島過一日】コツジヨトウクワイチジツ　人生の須臾なるに喩ふ。張協詩「人生二滄海內ー ー」

【忽地】コツチ　たちまち、地は助字。王建詩「楊柳宮前ー ー春」

【忽然】コツゼン　きはめてかすかに細し。漢書、徐幹志「皆以二正學ー應、無ノ有ニ ー ー」

【忽漫】コツマン　そそっかしい、たちまち。杜甫詩「ー ー相逢是別遲」‖率爾。

【忽略】コツリヤク　おろそかにして詳かならず、なほざりにする。潘岳「哀悼賦」「哀情ー ー、必亂二其敘一」

【忽必烈】コツヒツレツ 元の始祖の名、兵を起し宋を滅し、中國を一統し、燕京に都す。

【忮】シ キ 寘
○そこなふ、やぶる(害)詩、邶風「不ー不求」ねたむ(嫉妬)○もとる(很)「忿ー」さからふ(逆)莊、天下「不ー」＝於衆」
【忮求】シキウ 人をねたみそこなひ、又貪りて得んことを求む。字解參看。
【忮心】シシン 人を忍みにくむ心。莊子「雖ㇾ有ニーー一者ㇾ不ㇾ怨ニ飄瓦ニ」

【忱】シン 寢
まこと(信・誠)「下ー」「悃ー」＝誠・懇。

【忪】シウ 多
○あわつ、あわてる(惶遽)四子講德論「秦時百姓怔ー」○おどろく(驚)○むなさわぎする。(心動不定)

【怃】セツ エイ 屑 霽 屑
なる、ならす(習・狃)「狎ー」

【怀】タイ 泰
おごる(修・奢・驕)張衡、西京賦「有ニ憑虛公子者ㇾ心奢體ー」＝怀。
【怀修】タイシウ おごる。左、昭五「楚王ーー已甚」＝奢侈。

【忸】㊀ヂク ㊁ヂウ 有 屋
㊀はづ、はぢらふ(慚)＝恥。㊁なる、ならす(習)＝狃。
同訓異義 忸・恥・辱・慙・愧・慙・怍等の別は恥(心部六畫)の條を見よ。
【忸怩】ヂヂ はづ。書、五子之歌「顏厚有ニーー」

【忠】チュウ 東
○まめ、まめやか「ー實」「朴ー」○まごころ、まこと(誠實)己のまごころを盡す。○君につかへて二心なし「ー君」「孤ー」○なほし(正直)○わたくしなきこと。○うやまふ(敬)書、伊訓「爲ㇾ下克ー」○あつし(厚)○國ジ古、彈正臺の第三等官「彈正少ー」
【忠愛】チュウアイ まごころをつくしていつくしむ。禮記「敎ニ其ーーニ」
【忠允】チュウイン まめやかにしてまこと。晉書「溫恭ーー」＝忠誠。
【忠益】チュウエキ まごころを盡して世の益になる。諸葛亮文「ーー者其ㇾ大ニ于蓮ㇾ之」
【忠孝】チュウカウ 忠は善く君に事ふるをいひ、孝は善く親に事ふるをいふ。忠義と孝行と。漢書「奉ニ安君父ーー之主也」
【忠孝兩全】チュウカウリヤウゼン 忠と孝との兩道を兼ね全くする。李義山集「貴ニ忠孝之兩全ニ則忠可ㇾ移ㇾ孝、正文武之二道ニ則武可ㇾ輸ㇾ文」
【忠愨】チュウカク まごころありて剛直なり、忠直にして敢言する。北史「操履貞懿、立言ーー」
【忠恪】チュウカク まめやかにしてつつしみぶかし。後漢書、鄧后紀「詔曰、公卿百官、其勉盡ニーー一以輔ニ朝廷ニ」
【忠肝】チュウカン 君に盡すまごころ。宋史、文天祥傳「百鍊若ニ鋼鑑ニーー若ニ鐵石ニ」＝忠膽・忠魂。
【忠奸】チュウカン 忠義と奸惡と。＝忠邪。
【忠悫】チュウカク 前條に同じ。
【忠諫】チュウカン まごころを盡していさむ。漢書、孝武皇帝、好ニーーニ」
【忠規】チュウキ まめやかなるはかりごと。陸機、辨亡論「ーー武節未ㇾ有ニ如ㇾ此其至者ㇾ也」＝忠謀。
【忠義】チュウギ 臣のまごころを君國につくすをいふ。魏志、齊王紀「所ニ以表ニ揚ーーニ」
【忠毅】チュウキ まごころありてつよし。唐書、李綱傳贊「ーー憂ㇾ國」
【忠勤】チュウキン まめやかにつとめる、忠を盡して職務に勤勞する。晉書「石苞在ㇾ位、稱爲ニーー一、帝倚委任焉」
【忠謹】チュウキン まめやかにして、つつしむ。五代史、李存節傳「爲ㇾ人、木强ーー」
【忠經】チュウケイ 一卷、漢の馬融撰と傳ふ、孝經に擬し、十八章に分ち、君に事へて忠を盡くすべきことを說く。
【忠君】チュウクン きみにまごころを致す。戰國策「忠ニ其君ニ天下皆欲ニ以爲ニーー臣」
【忠勤】チュウキン 君につくせるいさを。
【忠果】チュウクワ ○忠義にして果敢。後漢書、夏恭傳「嘉ニ其ーーニ、詔ニ郎中ニ○檄機ゲキの異名。本草「檄機、一名ーーー」＝書果・諫果。
【忠款】チュウクワン まごころ。北史、齊神武帝紀「自明ニーーニ」＝忠誠。
【忠敬】チュウケイ 君に事へてまごころありて、つつしみうやまふ。詩經、箋「臣能夙夜在ㇾ公、盡ニ其ーーニ」
【忠賢】チュウケン まごころありてかしこし。漢書、元帝紀「明王在ㇾ上、ーー布ㇾ職、則寡生和樂、方外慕ㇾ澤」
【忠懇】チュウコン 忠誠にして直言する。晉書「陳元達、在ㇾ位ーー、屢進ニ讜言ニ」＝忠鯁。
【忠肯逆耳】チュウコンギヤクジ 忠直なるまごころを以て諫めらるる言は聞くに快からず。家語、六本「孔子曰、直藥苦ニ於口ニ而利ニ於病ニ、忠言逆ニ於耳ニ而利ニ於行ニ」
【忠厚】チュウコウ まめやかにしてあつし。忠信にして篤厚。詩、大雅、行葦、序

行惡ㇾ一也、周家ㇾ一、仁及二草木一」

【忠告】チュウコク まごころを以て告げさとす。論、顏淵「子貢問ㇾ友、子曰、ㇾ一而善道ㇾ之」

【忠愼】チュウコウ まめやかにして誠なり。＝忠誠。

【忠魂】チュウコン ○忠肝に同じ、魂は精神。○忠義の爲めに死せし人のたましひ。

【忠實】チュウジツ まめやかにして、まこと。唐書、忌直「固紹諛者進、而ㇾ一之語不ㇾ聞矣」

【忠臣】チュウシン まごころをつくすけらい。老子「六親不ㇾ和、有二孝慈一國家昏亂、有ㇾ一ㇾ一」史、樂毅傳「臣聞、古之善ㇾ一者交絕、不ㇾ出二惡聲一、ㇾ一去ㇾ國、不ㇾ潔二其名一」

【忠臣出二於孝子之門一】チュウシンハカウシノモンニイヅ 君に忠なる人は必ず親に孝なるをいふ。漢書、韋彪傳「求二忠臣一必于二孝子之門一」に本づく。

【忠臣不ㇾ事二二君一】チュウシンニキミヲツカヘズ 忠義の臣は二人の君に事へず。史、田單傳「王蠋曰、ㇾ一、貞女不ㇾ更二二夫一、吾與二其生而無一ㇾ、固不ㇾ如ㇾ死」

【忠臣不ㇾ死ㇾ身後ㇾ君】チュウシンハミヲウシナヒテキミヲシナズ 忠臣は其の身を後にして先づ君の爲めに盡す義。史、晉仲連傳「智者不二倍ㇾ時而弃ㇾ利、勇者不二怯ㇾ死而滅ㇾ名、ㇾ一ㇾ一」

【忠信】チュウシン まごころを盡して言にいつはりなし。論、學而「主二ㇾ一ㇾ一」無ㇾ友二不ㇾ如ㇾ己者一」

【忠信篤敬】チュウシントクケイ 言語をまことにし行事をあつくつつしむ。論、衛靈公「子張問ㇾ行、子曰、言忠信行篤敬、雖二蠻貊之邦一行矣」

【忠藎】チュウジン 藎は進なり、忠愛の心篤く、進みて忠を國家に盡す義。蜀志、董和傳、注「胡濟爲二諸葛亮主簿一、有二ㇾ一之數一」

【忠邪】チュウヤ まごころある者と、よこしまなる者と。唐書「ㇾ一既辨」

【忠情】チュウジョウ まごころ。蜀志「致二命期主一、ㇾ一發ㇾ憤」

【忠隕】チュウイン まごころありてつつしみ深し。晉書「ㇾ一在ㇾ公、雖不ㇾ及ㇾ私」＝忠敬。

【忠淳】チュウジュン まごころありて、てあつし（五朝會要）

【忠純】チュウジュン まごころありて、まじりけなし。諸葛亮、出師表、志慮ㇾ一、是以先帝簡拔、以遺二陛下一」

【忠順】チュウジュン まめやかにしてすなほ。論記、孝弟ㇾ一之行立」

【忠恕】チュウジョ まごころをつくすと、おもひやりあると。忠實にして同情心に富む。論、里仁「夫子之道、ㇾ一而已矣」

【忠正】チュウセイ まめやかにしてただし。漢大論「人臣者以ㇾ一ㇾ一爲ㇾ本」

【忠清】チュウセイ まごころありて心清し。晉書「ㇾ一高潔、不ㇾ營二產業一」

【忠清道】チュウセイダウ 朝鮮の地名、京畿道の南、全羅道の北に在りて、南北に分つ。北道の首邑は忠州、南道の首邑は公州。

【忠聖】チュウセイ まごころあるひじり。晉書「古來君子、皆謂二周公ㇾ一」

【忠誠】チュウセイ まごころ。徐陵、勸二進梁元帝一表「ㇾ一貫二於日月一、孝義感二于冰霜一」＝忠實。

【忠切】チュウセツ 忠實にしてねんごろ。漢書「以二言ㇾ事ㇾ一、繫二獄吏一」

【忠節】チュウセツ 君に事ふるまめやかなみさを。漢書、師丹傳「執ㇾ一ㇾ一」

【忠義】チュウギ まごころありてよし。左傳「子產曰、ㇾ一以損ㇾ怨」

【忠膽】チュウタン 君に盡す忠義の心。＝忠肝。

【忠直】チュウチョク まごころありて、ただし。北史、伊婁謙傳「謙性ㇾ一善三辭命一」

【忠貞】チュウテイ まめやかにして、ただし。忠實にして貞正。晉、君爭「乃祖乃父、世篤ㇾ一、服勞王家」

【忠方】チュウハウ まめやかにて方正なり。魏志「梁綝純懿、志行ㇾ一」＝忠正。

【忠孚】チュウフ まこと、孚は信。李本魯文「操行清介、ㇾ一信格」

【忠愼】チュウシン 君に忠義を盡さんとて憤激する。北史「辭旨懇直、文義ㇾ一」

【忠謀】チュウボウ 忠實なるはかりごと。漢岳、夏侯常侍誄「謀首ㇾ一、世祖嘉嘆」

【忠朴】チュウボク まめやかにして、かざらず。蔡邕文「獨是丹誠抱ㇾ一ㇾ一」

【忠勇】チュウユウ まめやかにしていさましい。晉書「英略奮發、ㇾ一絕ㇾ世」

【忠勇義烈】チュウユウギレツ 忠義にして勇氣がすぐれてゐる。

【忠良】チュウリャウ まごころありて善良。書、顧命「小大之臣、咸懷ㇾ一ㇾ一」＝忠正。

【忠烈】チュウレツ まめやかにして功が大いなり。唐書、杜黃裳傳贊「ㇾ一堂然」

【忡】チュウ 東

うれふ（憂）詩、擊鼓「憂心有ㇾ一」

【忡忡】チュウチュウ うれへいたむ。沈約文「ㇾ一在ㇾ念」

【忡悵】チュウチョウ うれへいたむ。吳志、華覈傳「臣不ㇾ勝ㇾ一ㇾ一之情一」

【忡忡】チュウチュウ 心のうれふる貌。詩、召南「未ㇾ見二君子一、憂心ㇾ一」＝憧憧。

【忝】テン 琰 古・悉に作る

○はづかしむ、けがす（辱）詩、小雅「無ㇾ一爾所生」所生は父母。○かたじけなし、かたじけなくす。己の身に受けたる物事を辱かしめる義にて、分に過ぎたる意をあらはす。謙遜のことば「ㇾ一」「僭ㇾ一」書、堯

典「否徳ニ帝位」

【純字】天心に从ふ、會意文字、天を以て心に求め、時に自ら漸愧寫戒する義。

【忳】

㊀トン ㊁ジュン ㊂トン 阮 眞 元 國

㊀もだゆ(悶)○うれふ(憂)みだる(亂)㊁ねんごろ。＝諄。㊂おろか。

【忳忳】トンジュン ○おろかなる貌。老子「我愚人之心也哉ニ＝分」○ジュンジュン人ををしへて倦まざる貌。＝諄諄。

【念】

ネン 豔

○おもふ。常に思ふ「志ニ」書、大禹謨「ニ茲在茲」おもひ「思ニ」「愛ニ」「俗ニ」「世ニ」「宸ニ」○記憶する。論、公冶長「不ニ」善惡」○となへる、誦する、讀む「ニ佛」「ニ經」○廿の字の俗音と混同して廿の字に代へ用ふる。韓愈に後ニ九日復上宰相書あり。○圖極めて短時間。仁王經「一ニ中有ニ九十剎那」○圖きをつける、注意して確める「ニの爲め」

【純字】心に从ひ 今の聲、俗に、念に作るは非なり。

【同訓異語】ネン 念・思・慮・懷・意・想・惟・顧の別は思(次畫)の條を見よ。

【念誓】ネンセイ あやまち無からんことを思ふ。後漢書「思ニ過ニ＝、務消ニ祇悔ニ」

【念蓄】ネンチク 情篤くして故舊を忘れず、已富貴となりても、貧賤の交を忘れず。却掃編「當閑ニ＝之言ニ」

【念慙】ネンザン おもひねがふ。ねがひ。

【念慾】ネンヨク 己のあやまちを思ひて改める。後漢書、光武紀「詔曰、今方ニ＝、庶消ニ厥咎ニ」

【念日】ネンジツ 廿日をいふ。

【念射】ネンシャ 人の意思は光線の如く人體より發散して、寫經の種枚に感ずるといふ作用。

【念呪】ネンジュ 心にいのる。呪文を念ずる「西陽雜俎」

【念珠】ネンジュ じゅず(數珠)念經に用ふる佛具。酉陽雜俎、寺塔記上「僧繇畫ニ＝、手持ニ＝ニ」

【念誦】ネンジュ 圖佛名をとなへ、經文をよむ。念佛讀經する。摩訶止觀「ニ＝云ニ存ニ念ニ資ニ」

【念書】ネンショ 書物を讀む。雙槐雜記「韓忠定過ニ冬寒六命ニ小孫ニ温ニ足、教ニ其ニ＝ニ」

【念書人】ネンショジン 圖儒者、又學者をいふ。＝讀書人。

【念祖】ネンソ せんぞの名を汚さじとおもふ。詩、大雅、文王「無ニ念ニ爾祖ニ、聿ニ修厥德ニ」

【念頭】ネントウ こころ。おもひ。＝心頭。

【念念】ネンネン 常におもひつづける。又、時時刻刻に。蘇軾詩「生ニ世本暫寓、此身ニ＝非」

【念念刻刻】ネンネンコクコク ときのま、時時刻刻。

【念念相續】ネンネンソウゾク 圖前の念と後の念との間に餘念を交へずして相つづく。

【念念生滅】ネンネンショウメツ 圖世界のすべての事物は時時刻刻生じたり滅したりして少しも止むことなき義。＝生滅流轉。

【念佛】ネンブツ 圖專心佛を念じて、南無阿彌陀佛の六字の名號を唱ふる。法華經「以ニ深心ニ＝、修ニ持淨戒ニ」

【念力】ネンリキ 一心に思ひこみし力。道教經「ニ＝堅强、雖ニ入ニ五欲賊中ニ、不ニ爲ニ所ニ害ニ」

【念慮】ネンリョ おもんばかる。おもひ。漢書「ニ＝萬方、不ニ忘ニ元元ニ」

【忿】

ビン 眞

○つとむ(勉强)○くらし。

【忞忞】ビンビン 心に了せざる所ある貌。法言「傳ニ千里之ニ＝者、莫ニ如ニ書ニ」

【忿】

フン ホン 問 阮

○いかる(怒)立腹する「激ニ」「爭ニ」○いきどほる、憤に通ず、うらむ(恨・怨)○いかり、いきどほり「小ニ」「積ニ」

【忿怒】フンヌ いかりうらむ。范質詩「ニ＝容易生、風波當ニ時起ニ」＝忿恨・忿懟。

【忿恨】フンコン いかりを怨ぶこと恕はざる義。戰國策「秦ニ＝含ニ怒之日久矣ニ」

【忿懟】フンタイ 忿怒と私慾とは修德の上に害あり、故に之をこらしふさぎて、心に生ぜざらしむ「易、損卦」

【忿懣】フンマン いかりて、なかたがひする。唐書「厚相結納、ニ＝得ニ解ニ」

【忿鬩】フンゲキ いかりせめぐ。魏書、李沖傳「沖兄弟六人、四母所ニ出、頗相ニ＝ニ」

【忿言】フンゲン いかりていふことば。然をふくむことば。禮記「ニ＝不ニ反ニ于身ニ」＝怒言。

【忿恨】フンコン いかりうらむ。漢書「ニ＝相告ニ」＝忿怨。

【忿爭】フンソウ いかりあらそふ。韓愈詩「勿嗔戒ニ＝、中靜禪ニ朝夕ニ」＝忿諍。

【忿諍】フンソウ いかりあらそふ。魏書「復

致ニ――一ニ‖忿爭。

【忿懣】フンいきどほりさわぎてわだかまる。宋史「蘇古瞻、殊ニ――錫ニ大臣體一ニ」

【忿忮】フンいかりて害する。劉克莊文「君子無ニ識見一之過ニ而小人ニ――一、必致ニ之死一ニ」

【忿疾】フンいかりにくむ。南史「遠近莫レ不ニ――一ニ」‖忿嫉。

【忿嫉】フンいかりにくむ。南史、郡陵王恂傳「賊走ニ――一ニ」‖忿疾。

【忿然】フンいかりて平かならざる貌。

【忿懟】フンいかりて怨嗟シタンをおこす、讒も忿と同義。大學「身有レ所ニ――一ニ、則不レ得ニ其正一ニ」

【忿詬】フンいかりうらむ、詬は怨。宋書、文五王傳「――有ニ怨言一、議免レ官削ニ爵土一ニ」

【忿怒】フンいきどほる。陳琳詩「――緣ニ何事一、號叫可ニ奈薬一ニ」‖憤怒。

【忿鬱】フンいきどほりののしる。南史「――形ニ于辭色一ニ」‖忿罵。

【忿忿】フンいかる貌。阮瑀、爲ニ曹公ニ與ニ孫權ニ書「使ニ仁君赫然自絕、以レ是――」

【忿恚】フンいかる。王勃、三國論「甘ニ――一而忘レ食」‖憤忿。忿怨。

【忿戾】フイ心に激していきどほりわぐ兵隊。漢書「不レ忍ニ憤怒ニ者、謂ニ之――一ニ」

【忿懣】フンいかりもだえる、懣は煩悶。司馬遷文「不レ得ニ舒ニ――一ニ」‖憤懣。

【忿鬱】フンいきどほりののしる。宋書「――形ニ于辭色一ニ」

【忤】ベン　緩

よろこぶ（喜）たのしむ（樂）

【忤懽】クワンよろこぶ。白居易詩「容衰見レ鏡同惆悵、身健逢レ杯且――」

【忤服】クワクよろこびをどる。符載文「仰レ天――、蹈ニ地競一ニ」

【忡】

悁（心部八畫）の俗字。

【怡】イ　五　支

古合に通ず

○よろこぶ（悦）「――」「嬉――」よろこばす。禮、內則「下ニ氣――色一ニ」○やはらぐ（和）○たのしむ（樂）

同訓異義　旨・喜・悦・說・欣・忻・訢・歡・懽・驩・悰・愉・慶・賀・禋の訓は喜（口部九畫）の條を見よ。

【怡怡】イやはらぎよろこぶ貌。次條參看。‖恰然。

【怡怡如】イやはらぎよろこぶ貌。論、鄉黨「出降ニ二等一逞ニ顏色一、――也」論、子路「朋友切切偲偲、兄弟――也」

【怡逸】イ心によろこび樂む。李百藥、筆賦「縱ニ勝氣之道遊一、誉ニ春光一而――」

【怡悰】イよろこぶ、よろこび。戚公銘、李賦「心――而翊羅兮」‖怡悅。

【怡悅】イよろこぶ。陶弘景詩「嶺上多ニ白雲一、只可ニ自――一ニ」‖怡懌。

【怡衍】エンよろこびたのしむ、衍は游衍。宋孝武帝詩「東髮好ニ――一ニ」

【怡顏】カンガロコバン顏色を和げよろこばす。潘岳、歸去來辭「問ニ庭柯一以――」

【怡和】イクよろこびやはらぐ。任昉文「神遽氣懾、無ニ待ニ――一ニ」‖和悅。

【怡情】イジャウロコバス心情をよろこばす。中論「聖也者、所ニ以――一ニ理レ性、聖人之上務也」

【怡色】イジキよろこばしき顏いろ、又、顏色をやはらげよろこばしくする。禮、內則「下ニ氣――一ニ、柔ニ聲以諫一ニ」

【怡然】ゼンよろこび樂む貌。陶潛、桃花源記「黃髮垂髫、並――自樂」‖怡怡。○物の道理のすらすらと順ひ解ける貌。杜預、左傳序「若ニ江海之浚、若ニ澤之潤一、渙然氷釋、――理順、然後爲レ得也」

【怡穆】ボクよろこびやはらぐ。北史、周度世傳「尊卑――、豐儉同レ之」

【怡愉】ユよろこぶ。唐書、柳宗元傳「海內皆欣――」‖欣愉。

【怡悅】イよろこびたのしむ。吳志「有ニ上官之望一、以レ身依レ此、何敢――耶」

【怨】

㊀エン・ヲン　㊁エン・ヲン　元　願

㊀うらむ、うらみ（恨）「憤――」「嫌――」「宿――」「閨――」「構――」孟、萬章「父母愛之、勞而不――」○いかる（恚）○あだ（讎）㊁あだかたき（仇讎）禮、記行「外舉不レ――」

同訓異義　怨・恨・憾・耽・疚○怨は惡の反なり、恚也、恨也、隘也と註す、夫なき女を寡女といふ。孟子「伯夷叔齊不レ念ニ舊惡一、怨是用希」○恨はわが心に殘りて惡の深きなり。史記「王朝謂ニ李廣一曰、將軍自念、豈嘗有レ所レ恨乎。廣曰、羌降者八百餘人、吾詐而盡殺レ之、至ニ今大恨一」○憾は恨に同じくやや輕し。孟子「憂レ生喪レ死、無レ憾、王道之始也」○耽は怨なり、怨の相對する義。

【怨尤】ユウうらみとがめる。論、憲問「子曰、不レ怨レ天、不レ尤レ人、下學而上達」淮南子「――充レ胸、思心盡レ亡」

【怨惡】アクうらみにくむ。‖怨憎。

【怨氣】キうらむこころ。史記「諸侯無ニ異心一、百姓無ニ――一ニ」

【怨咎】キュウうらみとがめ、又、わざわい。戰國策、秦ニ――一ニ、欺ニ魏王一ニ」

【怨懟】タイうらみくやむ。後漢書、卓茂傳「――曷其至哉」‖悔恨。

【怨嘆】エンタン 怨女曠夫の略。曠は空っ
れあひなくして愁みうらむ義。魏
志、武帝紀「家室一一、百姓流離」怨
女多有。
【怨嫉】エンシツ うらみて仲惡し。晉袁宏文
「憎惡一開、卽成二一一」
【怨言】エンゲン うらみことば。蜀唐咨「因
レ醉或有二一一一不レ能二自保一」
【怨憤】エンフン うらみにくむ。後漢書、馮
衍傳「欲下免二讒口一滑中一一上豈不
レ難哉」
【怨恨】コンコン うらむ。周語「莫レ不二一
一一」
【怨嗟】エンサ うらみなげく。何遜詩「臨
レ風自一一」‖怨咨。
【怨猜】エンサイ うらみそねむ。高啓詩「翠
竹無二一一一」
【怨刺】エンシ 人をうらみて、とほまはし
にそしる。漢書、禮樂志「周道始缺、
一一之詩起」
【怨咨】エンシ うらみなげく。書、君牙「夏
暑雨小民惟曰一一」
【怨思】エンシ うらみおもふ。うらむ心。
班固、兩都賦序「西土耆老、咸懷二
一一一」
【怨望】エンバウ うらみて、あだとする。う
らみのあるかたき。左傳「我有二三
怨、一一已多、將何以戰」宋史、孫永
傳「與レ人交、終身無二一一一」
【怨情】エンジヤウ うらむこころ。張九齡詩
「職掌二新意一、繁絃起二一一一」
【怨訴】エンソ うらみうったふ。徐陵文
「非レ欲レ令二君作一此一一一」
【怨憤】エンフン うらみにくむ。晉康文「性
志「一一之氣、發二于歌謠一」‖怨誹。
【怨愁】エンシウ うらみにくむ。曾鞏詩「嗚
嘯豈知レ微、切切如二一一一」
【怨懟】エンタイ うらむ。漢書、王商傳「商
私一一」晉語文「忿不二一一一、喜不二
驕盈一」
【怨歎】エンタン うらみなげく。晉書、郭璞
傳「刑獄充溢、一一之氣所レ致」‖怨
嗟。
【怨女】エンヂヨ ○をっとが出征などにて
家にゐらず、妻たる者寂しく怨を
懐きて家に在るをいふ。孟、梁惠王
「内無二一一、外無二曠夫一」○君の寵
を失へる女。白居易、七德舞詩「一
一三十放出レ宮、死因四百來陪レ獄」
【怨鳥】エンテウ 子規ホトトギスの異名（「禽經」）
【怨笛】エンテキ うらみをふくむふえの音。
楊萬里、子規詩「一一哀吟独不レ如」
【怨怒】エンド うらみいかる。元史「或小
過失、必盡レ言勸止、不レ計二其一一
也」
【怨毒】エンドク 甚だしきうらみ。又、うら
み悪む。史、伍子胥傳「一一之於レ人
甚矣哉」
【怨惡】エンアク うらみて悪しき事をなす。
易林「國人利貞、終無二一一一」
【怨謗】エンバウ うらみそしる。謗はそし
る。怨恨して毀謗する。左傳「民不二
疲勞一、君無二一一一」‖怨誹。
【怨望】エンバウ うらみて不平を抱く。史、
淮陰侯傳「由レ此日一一、居常鞅鞅」
【怨謗】エンバウ うらみそしる。漢書、五行
志「一一之氣、發二于歌謠一」‖怨誹。
【怨咩】エンバイ うらみそむく。咩は叛。
【怨誹】エンヒ うらみそしる。史、屈原傳
「國風好レ色而不レ淫、小雅一一而不
レ亂、若二離騷一者、可レ謂レ兼レ之矣」
‖怨謗。
【怨府】エンフ うらみのあつまるところ。
衆人の怨の集中する所。左、昭十二
「吾不レ爲二一一一」
【怨婦】エンフ 怨女に同じ。呉少微詩「城
南有二一一、含レ情倚二芳叢一」
【怨憤】エンフン うらみいきどほる。後漢
書、趙壹傳「作二刺世疾邪賦一、以舒二
其一一一」
【怨慕】エンボ 君父などの無情をうらみ
ながら、なほしたふ。孟、萬章「何爲
其號泣也、孟子曰、一一也」
【怨言】エンゲン うらみののしる。書經「小
人怨レ汝詈レ汝」
【怨杜】エンヅ うらみしへたぐ。荀悦、漢
論「孟晉橫作、一一繁多」
【怨敵】エンテキ うらみのあるかたき、あ
だ。
【怨讐】エンシウ うらみて死せし者のたま
しひ。
【怨入骨髓】エンニフコツズイ うらむ心の甚
だ深きをいふ。漢書、吳王濞傳「或
不二洗沐一十餘年、——」

【急】キフ 圖

○いそぐ、とし、はやし（疾）緩慢の對「迅一」「火一」○せまし（褊）「狷一」○きみじか「卞一」○せまる（迫切）いそがはし、あわただし「躁一」「迫一」史、刺客傳「時惶一、劍堅、故不可立拔」○およぶ（及）○たしなむ（窘）とぼし（乏）こまる、困難。禮、王制「無二六年之蓄一曰一」○させしめまりし事「一務」

同訓異義 キフ 急・忙・閑・怠・遽の別は忙（心部三畫）の條を見よ。

【急雨】キフウ にはかあめ。杜甫詩「一一
招二漁屋一、斜暉轉二樹腰一」‖驟雨。
【急行】キフカウ 急に行く、いそぎゆく「一
一列車」
【急行無二善歩一】キフカウムゼンポナシ 急ぎて急に歩
行すれば善き歩調なし、急ぎて爲
したることには善き事なき義。論
衡「一一、促柱少二和聲一」‖急擾無二
善跡一（「前漢書」）
【急騎】キフキ はやうち、はやうま。
【急急如律令】キフキフジヨリツレイ 漢代の公文書
に用ひ至急・火急の意をあらはす
語、後に道家者流が悪魔をはらふ
爲めの呪文となる（「靈寶濳珍」）
【急遽】キフキヨ いそぎあわてる。陸機修文
「一一之至、先良二憲哲一」
【急火】キフクワ 近く迫りし火事。‖近火。
【急快】キフクワイ 甚だはやし。‖急速。

【急緩】キフクワン せまると、ゆるやかなると。李充文「新衙在レ手、一一必時」
【急急】キフキフ 光陰の速かなるをいふ。樓鑰詩「正恐一一不レ得レ延」
【急劇】キフゲキ にはかにはげし。
【急激】キフゲキ にはかにはげし。
【急撃】キフゲキ にはかにうつ。史、秦始皇紀「項羽一一三秦軍」‖疾撃。
【急切】キフセツ きびし。唐書「斷レ獄能者名在ニ一一」‖厳刻・峻刻・苛刻。
【急装】キフサウ にはかにしたくする。漢書、趙充國傳「將軍一一、因二天時一誅二不義一」
【急敷】キフフ いそがしくして、しばしばする。晉雜記「甚一一」‖頻数。
【急使】キフシ いそぎのつかひ。
【急疾】キフシツ ○はやし。素問「其氣一一堅勁」○にはかのやまひ。‖急病。
【急進】キフシン いそぎすすむ。後漢書「言不レ失レ正、仕不ニ一一一」
【急進策】キフシンサク 政治其の他の風俗習慣などの現狀にあきたらずして、急に新しき方にうつりかはらんとする主義のなかま。保守黨の反對。
【急手】キフシュ 手をいそがしくつかふ。陳師道詩「一一疾口如レ翻レ盆」
【急所】キフショ 圖かなめなる場處。身體中死命に關する大切なる部分。
【急杵】キフシヨ しげくつくきぬたの音。吳師道詩「誰家一一搗二寒衣一」
【急転】キフテン せまれると、ゆるやかなると。東京賦「齊一一于寒暑」‖急緩。
【急須】キフス ○酒の燗をする小さき鍋。三餘贅筆「吳人呼二暖レ酒器一爲二一一一一者以二其應レ急而用一也」須は用。○圖茶を煎じ出す小さき土瓶、きびしょ。
【急水】キフスヰ せのはやきみづ。杜甫詩「急舟上二一一「猴火落二高林一」‖急湍・急流。
【急性】キフセイ 急に起る病のたち。慢性の對。
【急切】キフセツ いそぎせまる。後漢書、竇憲傳、注「言二當時之一一一而要二所レ聞之事一、則非二濟時之要一」
【急雪】キフセツ にはかにふるゆき。陸游詩「一一打レ窗心共碎」
【急箭】キフセン ○はやき矢。唐太宗詩「喘狼悲二一一一」○矢よりもはやし。孔稚珪文「飛浪衝レ雲、奔湍一レ一」
【急霰】キフセン にはかに降るあられ。何遜明詩「昌盛城雲影、驚看一一催」
【急速】キフソク いそぎあし、はやあし。轉じて、速かなる進みかた。
【急速】キフソク いそぐ、きばやし。晉書、李祚傳「吳俗一一、不レ能二持久一、唯水戰是其所レ便」‖疾速・迅速。
【急湍】キフタン はやせ。吳均文「一一甚レ箭、猛浪若レ奔」杜甫詩「片片輕鷗下二一一一」‖急瀬。
【急瀬】キフライ はやせ。崔道融詩「卻放二輕舟一下二一一一」‖急湍。
【急竹繁絃】キフチクハンゲン 音樂の聲のやかましき絃、繁雜なる絲竹。翁卷詩「一一互催遍」
【急電】キフデン いそぎの電報。
【急転】キフテン にはかに方向がかはる「一一直下」
【急飄】キフヒヤウ せはしくさへづる。蘇頲詩「黃鶯一一春風遠」
【急波】キフハ いそぎわたる。史、項羽紀「經大王一一」
【急難】キフナン さしせまりたる難儀。詩、小雅「脊令在レ原、兄弟一一」
【急場】キフバ 圖さしせまれる場合がば
【急報】キフホウ いそぎのしらせ。戴表元詩「一一傳來又不レ眞、門前翁稚笑鄰頻」
【急拍】キフハク 樂器の一、うちならす板の急なるもの。李商隱詩「一一催二霓掌一」‖快板。
【急迫】キフハク にはかにさしせまる。
【急變】キフヘン ○にはかの出來事。漢書、章帝紀「以二一一一一聞」○病などのにはかにかはること。
【急務】キフム 最も先づ爲すべきつとめ。漢書「反二衰世之陵夷一、振二周氏之絕業一、天下之一一也」‖先務。
【急雨】キフウ はやせ。黃滑詩「層雲抱二幽巢一、一一洗二狂飄一」‖急湍・急瀬。
【急瀧】キフロウ はやせ。馬雄嘗詩「解レ航下二一一一、百夫不レ能レ攖」‖急瀬・急湍。
【急流】キフリウ はやきながれ、はやせ。高適詩「灘上一一擊レ箭」
【急流勇退】キフリウユウタイ 斷然官位を辭し去るに喩ふ。名臣言行錄「一位謂二錢若水一曰、公一一人也、」戴復古詩「一一有二何難一」
【急艣】キフロ いそがはしく漕ぐ舟のろ。艣は櫓。范成大詩「一一潮痕出」

【悦】

㊀ キャツ・カツ　㊁ クヮツ　入聲

㊀くるふ（狂）きぬけしてはんやりする。㊁うっとりする、恍に通ず。
【悦今】クヮツキン ○物事の判然せざる貌。老子「一一忽兮、其中有レ物」○キヤツ・クヮイ 失意の貌。楚辭、大司命「臨レ風一一浩歌」
【悦忽】コツ とりとめなく、うっとりする貌。老子「道之爲レ物、惟恍惟一一」‖恍惚。
【悦惚】クヮツコツ うっとりとする貌。宋玉賦「晡夕之後、精神一一」‖恍惚・恍忽。
【悦然】ゼンクヮツ うっとりとして自失する貌。‖恍然。

【怪】

クヮイ　卦

或は傀に作る。俚は俗字
○あやし（異）くし、めづらし（奇）うたがはし（疑）○あやしむ、不思議に思ふ。○まどふ（惑）淮南、說林「智者不一一」○あやしきもの、ばけもの、へん

げ「妖ー」「山ー」

【怪異】クワイ　ふしぎ。又、其の事。七發「是天下ー之所ー観也」‖怪変・怪奇。

【怪像】クワイ　すぐれて雄大なり。慨詠にして雄壮なる調。王延壽詩「況公文藝善ニ敘ー一大字ー一宜ニ濃墨ー一」

【怪訝】クワイガ　あやしく正しからず。史、武帝紀「海上燕齊ー一之方士」

【怪羽】クワイウ　ふしぎなる鳥。唐書「以ニ此時ー一捕ニ奇禽ー一」‖怪鳥。

【怪訶】クワイカ　あやしみいぶかる、不思議に思ふ。‖怪疑。

【怪惧】クワイク　あやしみおどろく。朝野僉載「ー一良久」

【怪奇】クワイキ　あやしくめづらし。‖奇怪・怪異。

【怪氣】クワイキ　あやしき雲氣。王勃文「楫ニー一于沉澄」

【怪鬼】クワイキ　ばけもの。唐書、方技傳「能服ニ気ー一ー一」

【怪詭】クワイキ　あやしくめづらし。陸放翁詩「雲日互蔽虧、百態呈ニー一ー一」‖怪異・怪奇。

【怪疑】クワイギ　あやしくうたがはし。‖怪訶。

【怪禽】クワイキン　怪鳥に同じ。

【怪魚】クワイギョ　あやしきうを。

【怪火】クワイクワ　因りて起りし原因のわからぬ火。又其の火事。

【怪怪】クワイクワイ　極めてあやし。韓愈文「不レ能ニ專ニ一能、ー一奇奇」

【怪傑】クワイケツ　あやしくすぐれたる人物、怪特なる人傑。

【怪譎】クワイケツ　あやしくして正しからず。山海經「有レ人狀如ニ其狀ー一」

【怪目】クワイモク　あやしきことば。曹植文「辭繁寡レ實、頗有ニー一ー一」

【怪錯】クワイサク　色色と入りまじる。江賦「水物ー一」

【怪事】クワイジ　あやしき事柄。晉書、殷浩傳「作ニ咄咄ー一四字ー一而已」

【怪鵄】クワイシ　梟鵄の異名。古今注

‖角鴟。

【怪聽】クワイチョウ　あやしきことば。韓愈詩「ー一驚レ衆謗不レ已」‖怪言。

【怪獣】クワイジュウ　ふしぎにあやしきけもの。晉書「又畫ニ鵄首ー一于舡首ニ以禦ニ江神ー一」‖奇獣。

【怪説】クワイセツ　あやしきもののたとり。易林「福祿不レ逢、家多ニー一ー一」

【怪哉】クワイサイ　あやしみてわらふ。唐書、陳子昂傳贊「子昂說ニ武后ニ興ニ明堂ー一太學ー一、其言甚高、殊可ニー一ー一」

【怪石】クワイセキ　○あやしき形のいし。方干詩「開花蓄ニ識者ー一笑、ー一無情更不レ言」‖奇石。○玉に似たる石。漢書、注「ー一石之次レ玉者好者也」

【怪說】クワイセツ　あやしき話。荀子「治ニー一、玩ニ奇辭ー一以相娛樂」

【怪蛇】クワイダ　あやしきへび。庾信、孫叔敖逐レ蛇賦「知レ埋ニー一ー一」

【怪談】クワイダン　あやしきそらごと。韓愈詩「卻信靈仙非ニー一ー一」

【怪誕不經】クワイタンフケイ　とりとめなき大言を吐きて正しき道にそむく。漢書、王莽傳贊「ー一、好爲ニ大言ー一」

【怪談】クワイダン　ばけものばなし。‖妖怪譚。

【怪竹】クワイチク　めづらしき竹。唐書、高宗時、道ニ宮者ー一栄ニー一江南ー一將レ薦ニ上苑ー一」

【怪蟲】クワイチュウ　あやしきむし。山海經「柔余之山、其中多ニ怪蛇ー一ー一」

【怪鳥】クワイチョウ　あやしきとり。神仙傳「有下ー一止ニ屋上ー一者上」‖怪禽。

【怪特】クワイトク　あやしくして他とことなり。奇怪絶特。柳宗元「始得ニ西山ー一宴遊記」「來ニ始知ニ西山之ー一ー一」

【怪物】クワイブツ　ばけもの。禮、祭法「山林川谷丘陵、能出レ雲爲ニ風雨ー一、見ニー一ー一、皆曰レ神」

【怪聞】クワイブン　あやしきうはさ。

【怪木】クワイボク　ふしぎなる木。山海經「發丹之山、其中多ニ怪蛇ー一、多ニー一ー一」‖奇木。

【怪味】クワイミ　めづらしきあぢはひ。又、其の物。淮南子「ー一人之所レ美」

【怪力亂神】クワイリョクランシン　怪はあやしきもの、力はすぐれて大いなる腕力、亂は道をみだる悖逆の事、神は鬼神。論、述而「子不レ語ニー一ー一」

【怪我】カイガ　圓○あやまち。‖過失。○あやまちて生じたるきず。思はざる負傷。

【怯】ケフ　入葉

○おそれ、おそる（多畏）勇の反對「ー一懦」○よわし（懦弱）氣おくれする、おそれ易し「恇ー一」史、淮陰侯傳「若雖ニ長大好帶ニ劍、中情ー一耳」

同訓異字　怯・恐・懼・畏・怖・怕・惶・悸・慄の別は恐（恐懼）の條を見よ。

【怯弱】ケフジャク　おそるること狐に似たり。莊子「夫レ狐ニ疑而無レ皮、難レ逃ー一ー一」

【怯懼】ケフク　おそれてよわし。‖怯怖。

【怯言】ケフゲン　おぢおそれることば。又侯瀛文「居レ位看以ニ弱斷ー一爲レ重、以ニー一ー一爲ニ信ー一」

【怯弱】ケフジャク　よわし。臆が小さし。易經、注「沈淺ー一、自守而已」

【怯懦】ケフダ　おぢおそれる。陸龜蒙詩「ー一不ニ敢前ー一」

【怯慢】ケフマン　おくびゃう。懦一に惰に作る。怯なり、弱なり。韓非子「略レ事擾レ意、則日ー一而不レ盡」北史、魏宗室元孚傳「楊果粗疎、蘇威ー一」

【怯懦】ケフダ　おそれおこたる。宋史、李綱傳「軍政久廢、士氣ー一」

【怯惰】ケフダ　おくびゃう。唐書、楊師道傳‖怯慢。

【怯怕】ケフハク　おぢおそれる。舒元輿文「蜜伏夕動、常ニー一人ー一者也」‖怯怖。

【怯勇轉完】おくびやう者は變じて勇者となり、やぶれし城は修復して完全になる「歐陽修、范文正公神」
【怯夫】おくびやう男。史記「猶三軍負之與一一ニ」＝懦夫。
【怯悔】おそれてよわし。＝怯悔。
【怯劣】よわくしておとる。晉書、劉波傳「貪汙者謂二之清勤一愞レ法者謂二之一一ニ」＝懦劣。

【怙】コ　虞

○たのむ、たのみ（恃頼）たよる「依ー」○父。詩、小雅「無父何ー、無母何恃」とあるによりて怙を父、恃を母の義とす。又轉じて兩親（父母）の義にも用ふ。

同訓異字　怙・負・恃・頼・憑の別は負（貝部二畫）の條を見よ。

【怙氣】己の勇氣を恃む。漢書「形容魁健、負レ力ー一レー」＝恃氣。
【怙險】險要をたのむ。晉書、嵇紹傳「乘レ危蜂起、一一レ鴟張」＝恃險・憑險。
【怙恃】○たのみとする。左傳「一一甚衆」＝憑恃。○父母の稱。詩、小雅、蓼莪「無レ父何怙、無レ母何恃」
【怙終】怙は恃む、恃む所ありて罪を犯す者、終は再び犯す者。一說、惡をたのみて身を終へんとする者。晉、舜典「蠻災肆赦、一一賊刑」

【恒】コウ　蒸　恆（次畫）に同じ

○つね。○わたる（竟）

【怍】サク　藥

○はづ（慚）きまりわるく思ふ「慙ー」「羞ー」論、憲問「其言之不レ一、則爲レ之也難」○はぢて顏色がかはる。曲禮「容毋ー」

同訓異字　怍・恥・辱・慙・羞・愧等の別は恥（心部六畫）の條を見よ。

【思】㊀シ　支　㊁シ　寘　㊂サイ　灰

㊀おもふ（念）かんがへる「近ー」「追ー」「沈ー」「靜ー」「熟ー」曲禮「儼若ー一」○おもんぱかる（感）○ねがふ（願）○かなしむ（悲）○ここに、語頭に置く無意味の助字。詩、魯頌「一樂泮水」語尾に置く無意味の助字。詩、大雅「神之格ー、不可度ー」㊁おもひ、かんがへ「一慮」○かなしみ（悲）こころ、おもひ「詩ー」「秋ー」「客ー」「旅ー」「意ー」㊂于思イは語多き貌。左、宣二「于ー于ー、棄甲復來」

同訓異字　思・憶・懐・意・念・想・惟・願○思は思案するなり、慎思・再思の如し、又したひおもふ義、思慕と用ふ、相思とは互に戀ふるなり。○憶は思ひ出すなり、憶昔、憶得の如し。○懐はふところ、いだくと訓む、心にこめて思ふなり。胸懐・懐抱と連用す。論語「君子懐レ刑、小人懐レ惠」○意はこころばせと訓す、おもはくをつける義、志之發也と註す、かくならんかと疑ふ意を帶ぶ。○念は思字より輕し、いつも念頭にかけて忘れぬなり、又誠意を念書ともいふ、口に唱ふる義、念佛・念經とも連用す。○想は心に推ひ、相に從ふ、形相を心にうつし思ふなり、想像と連用するにて知るべし。○惟は只一筋に思ふ義、伏惟・悲惟など、發端に用ふる助語なり。○願は心に願み思ふ義。史記「願二力行何如一耳」

【思案】おもひめぐらす。かんがへ、工夫。＝思索。
【思惟】おもふ。漢書、蕙仲舒傳「一一往古、而務以求レ賢」
【思繹】思ひたづねる。世範「反復一一」
【思憶】おもふ。特牲饋食「每回拈著長ー一」
【思考】かんがふ、かんがへ。＝思慮。
【思議】かかへらんことをおもふ。
【思籌鳥】杜子規ホトトギスの異名「圖書日記」
【思量】おもひはかる「不可ー一」
【思郷】ふるさとをしたひおもふ。李商隱詩「懐レ古ー一共白頭」＝懐郷。
【思顧】おもひかへりみる。漢書「一一藉思、長二分孫一奉養甚謹」
【思想】かんがへ、おもひ。傳燈錄「能騐二百ー一」
【思想界】○學術・宗教などのすべて思想のはたらく範圍。○思想をはたらかせる學者・宗教家などのなかま。
【思索】かんがへもとめる。晉子「一一生知、慢易生レ憂」
【思親】おやを慕ひおもふ。淮南子「祭祀ー一レー不レ求レ福」
【思緒】心の多端にして錯綜ずれの如き義。陸龜蒙詩「江湖ー一筆」
【思政】善き政を布かんことをおもふ。北史、柳儉傳「勗レ精ー一レー」
【思齊】賢を見ては己も亦其の人と齊しからんことをねがふ。論、里仁「子曰、見レ賢ー一レー焉、見二不賢一而内自省也」
【思存】心を屬しよせる。詩經「雖二則如一ー雲、匪二我ー一ニ」＝關窟。
【思潮】時代の思想界の傾向、其の時代に於ける世人の思想の趨勢。
【思念】心におもふ。又、かんがへ。
【思望】おもひてしたふ。詩經、疏

「周人ー二ー仲山甫一也」＝思慕。

【思服】フク 常に心に思ひ忘れず、服は服膺する。詩、周南「求レ之不レ得、寤ー一」

【思辨】シン おもひわきまへる。中庸「博學レ之、審問レ之、愼思レ之、明辨レ之、篤行レ之」

【思慕】ボ おもひしたふ。南史、藤矣恭伝「拜ノ至ニ忌日一ー一不二自堪一」

【思弘】シコウ おもひはかる。蜀志「黄權弘雅ー一、李恢公亮忠業」＝思料。

【思慮】リョ おもんばかる、おもんばかりかんがへ。晉記「ー一不レ違レ叔」

【思料】リョウ おもんばかる、料ははかる。＝思慮。

【思惟】イ おもひしたふ。水經、注「ー二ー本國一」＝思慕。

【思召】オボシメス 國おかんがへ、人のかんがへをいふ敬稱。御意向。

【惟レ思】おもフ かんがへをめぐらす。＝構想。

【思無レ邪】おもヒよこシマナシ 思ふこと深遠にしてきはまりなし。詩、魯頌「ー一、思二馬斯徂一」

【亡二思不レ服一】おもヒフクセズ 恩徳を蒙ひ思うて、皆從はざるものなし「詩、大雅、文王有聲」

【思過半】おもヒスギルカハナカバ 考へて自ら得る所多きをいふ。易、繫辭「知者觀二其彖辭一則ー一矣」

【思無レ邪】おもヒよこシマナシ 心に邪惡なし。詩、魯頌、駉「ー一、思二馬斯徂一」論、爲政「詩三百、一言以蔽レ之、曰ー一」

【思不レ出二其位一】おもヒソノクライヲイヅ 君子は事を思慮するに、各其の所に止まりて、他の分限を越さず「易、艮卦」

【怎】シン

いかで。なんぞ。古文の如何の俗語「ー一地」「ー一生」

【怎生】イカン 如何に。朱子語錄「不レ知後面一段是ー一地」

【怛】

㊀ おごる、ほこる（驕）「肆ー」 ㊁ ソ 遬 御

㊀おごる、ほこる（驕）「肆ー」㊁あらし（心不精）粗に通ず。史、王翦傳「秦王ー而不信レ人」

【性】セイ シャウ 敬

○うまれつき、さが、天賦の氣質「ー一質」「天ー」「理ー」「德ー」「至ー」中庸「天命之謂ー一」○たち（本質）萬物の本質「鳥ー」「藥ー」孟、告子「是豈水之ー一哉」○こころ（心神）「ー一情」○たましひ（魂）○いのち（生命・壽命）からだ（體軀）「男ー」「女ー」すがた（姿容）○勉めずして天理にかなひし心。又、無爲にして安んじ行ふ義。孟、盡心「堯舜ー一之也」

【性合】ガフ 國陰陽家の說にて、人の性を木・火・土・金・水の五行に配當し其の人の性質運命等を考へ定めるもの。

【性戒】カイ 國僧俗を問はず、之を犯さば罪となるべき戒。卽ち、殺生・偸盜・邪淫・妄語。

【性惡說】セイアクセツ 人の本性は惡なりと說く說。荀、性惡「人之性惡、其善者僞也」性善說參看。

【性海】カイ 國こころ。五燈會元「祖曰、汝作ニー一得否」白居易詩「ー一澄清平少レ浪一」

【性行】コウ うまれつきと、おこなひと。

【性格】カク うまれつきのたち、氣ぐらゐ、人がら。李中、贈張拾遺「詩「官資清貴近二丹墀一ー一孤高世所レ稀」＝品性。

【性低】テイ 天然の本心と人爲の禮儀制度など。荀、禮論「ー一合而天下治」

【性急】キフ せっかち、短氣。北史、陳元康傳「神武目、我ー一」

【性業】ゴフ うまれつきと學業と。蜀志、諸葛瑾傳「瑾才不レ及レ兄、而ー一過レ之」

【性根】コン うまれつき。李紳文「如來以二萬門萬行一普示二衆生一、隨二其ー一ー一」

【性質】シツ うまれつき。唐書、柳公綽傳「ー一嚴重、起居皆有二體法一」

【性質】シツ 國本性をいふ。楊慈經「ー一圓融、皆如來藏、本無二生滅一」

【性情】セイジャウ こころだて。易經「利貞者ー一也」元稹詩「鄙無二漢ー一」

【性術】ジュツ こころだて。禮記「聲音動レ静ー一之變盡二於此一矣」＝心術。

【性善說】セイゼンセツ 人の本性は善なりといふ倫理說、孟子の說の類。荀子の性惡說の對。孟、告子「人性之善也、猶二水之就レ下也」

【性體】タイ 心の本體。北史「若論二ー一非レ慮非レ覺」

【性習】シフ ちえ漏衝「ー一開敏、明二達六藝一」

【性天】テン 天より受けたる本然の性。＝天性。

【性度】ド うまれつきと、はらまへと。性質度量の後漢書、劉寬傳「神色不レ異、乃徐言曰、羣鼠二次手一、其ー一如レ此」

【性相近也習相遠也】セイハチカシヒトシケレドモナラヒハアヒトホシ 天より享けたるうまれつきは人人相似たれども、敎育・習慣によりて遠く賢愚の別を生ず。論、陽貨「子曰、ー一」

【性法】ホフ 人類の理性に基きて出でたる法律。＝自然法。

【性分】ブン うまれつき。＝性質。

【性癖】ヘキ くせ。蘇軾雜說「楊朴ー一常騎レ驢」

【性命】メイ ○天より受けしもちまへのたち。性は天より受けたる性質、壽夭遲速の別ある類、命は天より

受けし運命、賦稟天許の類。易、乾卦「乾道變化、各正二其ー一」○いのち。諸葛亮、出師表「荷全二ー一於亂世一」＝生命。

【性慾】セイヨク 男女の肉慾。

【性理】セイリ 性命即ちうまれつきと、理氣即ち天理及氣質との關係に關する學說。＝性理學。

【性理學】セイリガク 性命理氣を說きし儒教哲學、宋の周濂溪・張橫渠・程明道・程伊川・朱熹等の唱へし學說。＝道學・宋學・理學。

【性理大全】セイリタイゼン 七十卷、明の永樂十三年、胡廣等勅を奉じて撰す。宋の道學者一百二十家の說を集む。

【性質】セイシツ ○こころ、たましひ。徐貢詩「出レ水蓮花比二ー一」＝靈性。○こんき、氣質。陶弘景文「任二ー一而直往」

【怔】セイ シャウ 庚

○おそる（懼）○あわつ（遑）

【怔營】セイエイ あわてて自ら安んぜざる貌。後漢書、郎顗傳「ー一惶怖」＝正營・征營。

【怔忪】セイショウ おそれる貌。四子講德論「乘時百姓ー一、無レ所レ措二其手足一」

【怱】ソウ 東

忽（心部七畫）に同じ。

【怱忙】ソウボウ いそがはし。陸游詩「三農

舊レ隙亦ー一」

【怠】タイ 海

○おこたり、おこたる、なまける（懈）「荒ー」「倦ー」「懈ー」○あなどる（慢）氣がゆるむ。かろんずる。

同訓異字 怠・解・懈・惰・慢○怠は心のたるむことなり、怠慢と連用す、敬の反なり。○解は勤の反、精を出さぬなり、又じだらくなり。詩經「風夜匪レ解、以事二一人一」○懈は解に同じ、心のたるむ義。曲禮「臨レ祭不レ惰」○慢は心ゆるみて、なまける義。說苑「偷慢懈怠多二暇日一」

【怠解】タイカイ おこたる。解は懈に同じ。賈誼新書「體ー一、志驕惰皆禁也」＝解怠。

【怠敎】タイキョウ おこたりおごる。孟、公孫丑「今國家閒暇、及二是時一般樂ー一」＝惰傲。一說、敎は遊なり、或は遨に作る。

【怠緩】タイカン おこたりておごる。傲慢にして敬禮せず。漢書、賈捐之傳「諸公稍自引而ー一」

【怠棄】タイキ おこたりてなげやりにする。國語「吾周官之於レ災備也、其所二ー一者多矣」＝情棄。

【怠荒】タイコウ おこたりすさむ。なまけてなげやりにする。曲禮「勿二ー一」＝荒怠・怠廢。

【怠隙】タイゲキ おこたりて防備なきすきま。蜀志「伺二其ー一、選二精銳一、出擊、大破レ之」

【怠倦】タイケン なまけうむ。後漢書「日夜尋誦、未二曾ー一」＝倦怠。

【怠忽】タイコツ おこたりてなほざりにする。賈、周官「ー一荒レ政、不學牆レ面」＝怠慢・怠情慢易。

【怠狀】タイジョウ 圖わび狀、あやまり證文。

【怠息】タイソク やすむ。漢書、于定國傳「君相二腹射一、不二敢ー一」＝休息。

【怠惰】タイダ おこたる。俗語「況有二ー一、其何以遵辟」＝懈惰・懶惰・惰怠。

【怠墮】タイダ おこたりなまける。史記「不敢ー一」

【怠告】タイコク なまけゆるむ。唐書「驕驁ー一」

【怠納】タイノウ 官にをさむべき租稅等をおこたり期日を過す。

【怠廢】タイハイ おこたりてなげやりにする。晉鑿文「勤二其ー一難レ久之情一」＝怠荒。

【怠放】タイホウ おこたりてほしいまま。後漢書「有司不レ察、ー一日甚」

【怠嫚】タイマン おこたる、嫚は慢。漢書、後世ー一故衰耗」＝怠慢。

【怠慢】タイマン おこたりてなほざりにする。左、僖三一「性成而下郊、上ー一也」＝情慢・怠忽。

【惙】ダツ 曷

みだる（亂）「憚ー」

【怛】タン ダツ 旱 黠

㊀いたむ（憯）「惻ー」「忉ー」漢書、武帝詔「支體傷則心憯ー」㊁おどろく（驚）おそる（懼）「驚ー」「震ー」○かなしみ、いたむ（悲慘）つかれる（勞）

同訓異字 怛・悼・傷・痛・障等の條は悼（心部八畫）の條を見よ。

【怛傷】ダッショウ かなしみいたむ。楚辭「心ー一之慘慘」＝傷痛。

【怛然】ダンゼン おどろく貌。列子「ー一內熱、惕然震怖矣」

【怛忉】ダッタウ かなしみつかれる貌。詩、齊風「無レ思二遠人一、勞心ー一」

【怛悼】ダッタウ いたむ。司馬遷文「慘愴ー一」

【怛惕】ダッテキ いたみおそれる。史、文帝紀「萬夫、爲レ之ー一不レ安」

【怩】ヂ 支

怩悒ヂユウは、はぢるいろ（慚色）

【恢】㊀ヂュツ 質 ㊁シュツ 質

㊀おそる、恐怖する「驚ー」○いたむ、かなしむ（悽愴）「悼ー」禮、祭統「心ー而奉之以禮」㊁利を以ていざなふ（誘）＝

誄。

【怵迫】ジュツハク 利の爲めにせまりいざなはれる。賈誼、服鳥賦「一一之徒、或趨二西東一」

【怵然】ジュツゼン おそれる貌。淮南子「一一若レ有レ所二誘慕一」

【怵惕】ジュツテキ 心おそれて安からず。呉志、公孫淵「皆有二一一惻隱之心一」

【怵惕】ジュツテキ おそれて心安からず。孟、梁詩「中心既一一、外物當坑塹」

【怵惕】ジュツテキ おそれる貌。枚乘文「一一惕惕、伏不レ得レ瞑」

【怵惕】ジュツテキ おそれる貌。枚乘文「一一惕惕、伏不レ得レ瞑」

【怵惕】ジュツテキ おそれて心安からず。孟、梁詩「中心既一一、外物當坑塹」

【怵然】ジュツゼン おそれる貌。淮南子「一一若レ有レ所二誘慕一」

【怵迫】ジュツハク 利の爲めにせまりいざなはれる。賈誼、服鳥賦「一一之徒、或趨二西東一」

【怊】テウ 蕭

○いたみかなしむ(悵)○かなしむ(悲)

【怊乎】テウコ かなしむ貌。莊、天地「一一若二嬰兒之失二其母一」‖怊怊。

【怗】㊀チョウ 葉 ㊁セン 豔

㊀したがふ(服)○しづか(靜)○やすし(安)「安一」㊁とどこほる(滯)

【怗滯】チョウタイ とどこほる、爽利ならざる貌。禮、樂記「宮商角徵羽、五者不レ亂、則無二一一之音一」‖怗澀。

【怗沾】チョウテン しづかなる貌。元稹、高荷詩「一生長一一」

【怒】ド 遇 眞

○いかり。いかる(恚)腹を立てる「念一」「怨一」「赫一」「震一」いからす、おこらす。○いきどほる(憤)ふるふ(奮)りきむ。莊、逍遙遊「一而飛」○いきほい(威勢)勢さかんなり「一馬」○すべて強く盛んにして勁急なるものの形容「一髮」「一潮」○あらそふ(訟)○東方の氣。

同訓異字 怒・忿・憤・慍・悶・憾・恚・嗔・嗔・懣・鬱○怒は喜の反、はらたつと訓す、立腹の外にあらはるるなり。書經「帝乃震怒」○忿は立腹して恨むこと、怒の外にあらはれぬなり。易經「君子以懲レ忿窒レ欲」○憤は内に鬱積して發する怒なり。論語「發レ憤忘レ食、樂以忘レ憂」○慍は怒を含みむっとする貌、怒より輕し、憤に近し。論語「人不レ知而不レ慍」○悶・憾は二字同じ、心に煩鬱して、氣のもやもやする貌、鬱悶・煩悶と用ふ。○恚は恨み怒るなり、怒の跡へ殘る氣味あり。○嗔は盛に怒氣の目元に見ゆるなり。○嗔は氣を盛んにして怒るなり、瞋に近し。○懣は恨み怒るなり。左傳「厥二王所一レ懣」○鬱は怒りて鬱結するなり。孟子「晉四鬱然不レ悅」

【忿怒蛙】フンドアス 怒りて頰をふくらかしてゐるかへるに敬禮するは其の勇氣を愛するが故なり。越王句踐が呉を伐つ志ありしにより士氣を振起せんとてなしたる故事。韓非、內儲說「越王慮レ伐レ呉、欲二人之輕一レ死也、出見二怒蛙一、乃爲レ之式、從者曰、奚敬二於此一、王曰、爲二其有一レ氣故也、明年請二以レ頭獻一王者、幾十餘人」

【怒悲】ドヒ いかる。憤書、外戚傳「一一不レ食」‖怒恚

【怒容】ドヨウ いかれるこころ。

【怒怨】ドエン いかりうらむ。古樂府「來歸相一一、俱鑒二羅數一」

【怒哮】ドカウ たけりほゆる。張衡文「千仞之水(中略)排以二巨峽一、道以二高梁一、而後一一、吼聲震二百里一」

【怒號】ドガウ いかりさけぶ。杜甫詩「八月秋高風一一」

【怒氣】ドキ いかれるけしき。呉越春秋「見レ敵而有二一一一」

【怒視湯鏡】ドシカウケイ いかりたけりたる獅子と、のどのかはける千里の馬。草書の迅疾なる形容。唐書、徐浩傳「草隸尤工、世狀二其法一、曰二怒視快レ石、湯鏡奔レ泉云」

【怒擊】ドゲキ 奮ひいかりてうつ。孔子家語「孔子曰、經之曾、怒而擊レ之則武」

【怒言】ドゲン いかれることば。後漢書「不聞二一一一」

【怒譴】ドケン いかりせむ。唐書、杜黃裳傳「醫者誤進レ藥、疾遽甚、終不二一一一」

【怒語】ドゴ いかりかたる。蔡邕文「嘻唷一一、與レ人相拒」

【怒水】ドスイ たけり激するみづ。韓愈詩「一一忽中裂、千翠墜二幽泉一」

【怒生】ドセイ 草木が勢はげしくもえいづる。鬱ひ生ずる。莊、外物「春雨日時、草木一一」

【怒濤】ドタウ たけりたつなみ。孟貫詩「江上秋風捲二一一一」‖鯨海・怒浪。

【怒閙】ドダウ 大聲にていかりさわぐ。歐陽修詩「洶悔若二一一一」

【怒張】ドチャウ はりきれるやうにふくれる。「頭毛一一」

【怒濫】ドラン たけりみなぎる。蘇軾詩「一一爭二茅竹一」

【怒潮】ドテウ たけりたつうしほ。蘇舜欽詩「好約長吟處、霜天看二一一一」

【怒馬】ドバ ○肥えふとりて勢よき馬。後漢書、注「一一謂二馬之肥壯其氣憤盈一也」○いかれる馬。

【怒罵】ドバ いかりののしる。黃庭堅、蘇子瞻像贊「嬉笑一一、皆成二文章一」‖怒詈。

【怒髮】ドハツ いかりてきかだつかみ。宋濂、乘土錄「一一上衝」次條參看。

【怒髮衝レ冠】ドハツシュツクワン はなはだしくいかれる狀。史、藺相如傳「御立倚レ柱、怒髮上衝レ冠」怒にて旬すべきを、古來誤讀して怒を髮の形容詞とす。

【怒臂】ドヒ ひぢを奮ひ張る。莊子、雖二螳螂之一一一以當二車轍一、則必不レ勝

レ任矣」＝奮躍。
【怒吻】フン　脣をむきだす。張耒詩「目光燭雙射、一一呀欲レ噬」
【怒涙】ルイ　はげしく飛びちるしぶき。文徴明詩「一一灑レ空經雨急」
【怒浪】ロウ　さかまくあらなみ。圖畫見聞錄「善寫二驚濤一一一」＝怒濤。
【怒嘗】ヤ　いかりののしる。戾志、漫罵。
【怒罵】バ　一一一統及其父母」＝怒罵。
【不レ遷レ怒】ケンカヅ　甲に向ひていかりしことを、乙にうつさず。やつあたりせず（論語、雍也）
【不レ藏レ怒】ゾウカヅ　怒りたる心をいつまでも胸中に包藏せざる義。孟、萬章「仁人於レ弟也、――焉、不レ宿レ怨焉、親二愛之一而已矣」

【怕】ハ　禡

○おそる（懼）「懼一」「畏一」「驚一」○おそらくは、おほかた。僧浩溪詩「江邊一有二梅花發一」

同訓異字　怕・恐・懼・畏・怖等の別は恐（大畫）の條を見よ。

【怕懼】ク　おそる。詳能詩「嫣發鬢低無二一一、插二人頭上一任二風吹一」
【怕痒樹】ヨウジュ　百日紅ヒャクジツコウの異名。

【怦】ハウ　庚　ヒャウ

○こころがせく（心急）○ただし（直）
【怦怦】ハウ　愚直なる貌。楚辭、九辯「心

【怫】ヒ　㊀　フツ　㊁　ホツ　㊂　ハイ　㊃　物　月　未　遇　曾　フツ

㊀いかる、むっとする。○心安からず。㊁ふさぐ（鬱）氣がむすぼれる。㊂もとる、たがふ。（悖）㊃みだる（亂）＝詩。
【怫鬱】ウツ　いかる。唐書「太后方一一」
【怫異】イ　もとりたがふ。佛は亂る。史、太史公自序「五家之言一一」
【怫鬱】ウツ　心がふさぐ貌。氣がむすぼれる。魏樂府、苦寒行「我心何一一」＝鬱怫・弗鬱・佛鬱。
【怫悦】エツ　出てがたき貌。陸機文「沈辭一一、若二游魚銜一レ鉤、而出二重淵之深一」
【怫然】ゼン　怒る貌。莊、天地「一一作色」＝艴然。
【怫戻】レイ　もとる。唐書、韋皐傳「蕃酋行二于殊俗一則一一者化」＝悖戻。

【悁】ヒツ　質

あなどる（慢）みだら。
【悁悁】ケン　あなどり亂るる貌。詩、小雅「日既醉止、威儀一一」＝狎侮。

【怖】フ　遇

○おそる、おそれ（惶懼）「畏一」「恐一」「驚一」○をののく。○おどす、おどかす（嚇）恐嚇する。後漢書、第五倫傳「詐一愚民」

同訓異字　怖・恐・懼・畏・驚等の別は恐（大畫）の條を見よ。

【怖畏】イ　おそれる。戴信賦「顧望回慈、心情一一」＝畏怖。
【怖駭】ガイ　おそれおどろく。司馬相如喩二巴蜀一檄「卑手一一」
【怖鴟】シ　驚き飛ぶはと。梁簡文帝文「一一擾レ安、驚魚永樂」佛德の鼠魚に及ぶをいふ。
【怖悸】キ　おそれてむなさわぎす。後漢書「征營一一、肝膽塗レ地」
【怖遽】キョ　おそれをののく。魏志「一一氣索、足委レ地不レ能レ起」
【怖懼】ク　おそれる。李密、陳情表「臣不レ勝二犬馬一一之情一」＝怖畏・惶恐。
【怖惶】コウ　おそれる。徐陵文「遠邇歡欣、華夷一一」＝怖懼・怖懾。
【怖伏】フク　おそれてひれふす。
【怖服】フク　おそれてひっくりかへる。宋玉、神女賦「神心一一」
【怖慄】リツ　おそれおののく。後漢書「恐隙玆興、宗親一一」

【恍】ヘイ　㊀　ハウ　㊁　敬

うれふ（憂）
【恍恍】ヘイ　うれふる貌。詩、小雅「未レ見二君子一、憂心一一」

【快】ヤウ　アウ　陽　漾　通じて鞅に作る

○うらむ（恨）情が滿足せず、心に服せず。○あきたらず。
【快快】アウ　心滿足せず、たのしまざる貌。史、淮陰侯傳「居常一一」漢書には鞅鞅に作る、通ず。
【快悒】イフ　心たのしまず。心に不平をいだく。杜甫詩「江洲稍疏散、風景關二一一」
【快懣】アウ　心むすぼれてこころよからず。＝鬱快。

【怜】㊀　レイ　㊁　レン　先　青

㊀さとし、かしこし、あきらか（心了點）㊁あはれむ。＝憐。
【怜俐】シリ　かしこきうまれつき。
【怜悧】レイ　さとし、慧點なり。朱淑眞詩「始知一一不レ如レ癡」＝怜俐・蠢利・慧敏。

【悚】

（國字）こらへる。○堪ふ、忍耐する。○ゆるす、人の罪をかんべんする。

六畫

【恚】イ　ケイ　㊀　寘　㊁　霽　イの音

○いかる、いかり（怒）○うらむ、うらみ（恨）「嗔一」「瞋一」

憤・懣・怨・憤・懣等の別は怒（前畫）の條を見よ。

【悲汗】ヒカン　怒りてあせかく。又、其の汗。唐書、張延封傳「一一不二自處一」

【悲憾】ヒカン　いかりうらむ。徐陵文「反爲二一一一妄相陷辱一」‖悲恨。

【悲恨】ヒコン　いかりうらむ。‖怨恨。

【悲怒】ヒド　うらみいかる。晉書、孫登傳「性無二一一一、人或投二諸水中一、欲レ觀二其怒一、登既出、便大笑」

【悲望】ヒバウ　怒りうらむ。望は怨望。後漢書、楊震傳「震大臣、不レ服レ罪、懷二一一一一」‖悲恨・怨望。

【悲然】ヒネン　いかる。魏書、崔光傳「終日怡怡、未二曾一一一一」‖悲怒。

【悲憤】ヒフン　甚だしくいきどほる。應瑒文「瞩レ目一一、獲レ扃傾潰」

【悲凱】ヒガイ　いかりて心が狂ふ。

【悞】ィ　支

○よろこぶ（悦）通じて支に作る。○たのしむ（樂）

【悅】エツ

悅（心部七畫）の俗字。

【恩】オン　元

○めぐみ（惠）「天一」「君一」「皇一」「主一」「厚一」「洪一」「鴻一」「舊一」「報一」孟、梁惠王「今一足二以及一禽獸一」○めぐむ、いつくしむ。詩、豳風「一一斯勤斯」○いつくしみ（愛）・うるほひ（澤）○いたむ（隱）

【恩愛】オンアイ　いつくしみ。漢書、禮樂志「一一滋澤」

【恩意】オンイ　あつきめぐみのこころ。唐書、宣二布天子一一一、道近惟服」

【恩威】オンヰ　めぐみと、ゐくわうと「一一竝行」

【恩慰】オンヰ　なさけをかけてなぐさめる。後漢書、因獻召見加二一一一

【恩誘】オンイウ　なさけを以ていざなふ。後漢書、祖諷傳「既無二重賞以相一一一」

【恩引】オンイン　おまねぎ、御招待、他より招かれたる敬語。庾信文「非蒙二一一一、曲賜二綵布一一」‖寵招。

【恩荷】オンカ　○なさけ。おかげ。徐陵文「如レ雲如レ雨、天下蒙二其一一一」○君のめぐみが子孫にまで及ぶにいふ。

【恩榮】オンエイ　なさけをかけられし光榮。李白詩「願寄二會稽郡一、將期報二一一一」

【恩怨】オンエン　なさけと、あだと。陳秦詩「百年富貴誰能免、錦繡彤庭詎二一一一」‖恩讐。

【恩遠】オンエン　君のたまはるめぐみのさかもり。庾肩吾詩「接レ醴侍二一一一」

【市恩】シオン　己の爲めにする所ありて人に惠を施す、恩をきせる。唐書、裴度傳「我知二其不一一一」

【推レ恩】スヰオン　いつくしみの心を廣くおし及ぼす。漢書、主父偃傳「願陛下令二諸侯得一一一分二子弟一以レ地侯レ之」

【謝レ恩】シヤオン　恩惠を受けたるを謝する。通典「官已受レ成、皆殿庭一一」

【紓二恩百姓一】ジヨオンヒヤクセイ　人民に仁德を施して其の心をひきよせる。孔叢子「一一、修二禮鄭國一」

【恩覃】オンタン　恩惠がひろくゆきわたる、覃は及なり。謝莊、孝武殿「恩物長成殷阜、一一二四表一被二九有一」

【恩假】オンカ　ありがたく賜ひしやすみ、假は暇。宋書、謝靈運傳「蒙レ賜二一一一、皆違二禁省一」‖恩暇。

【恩暇】オンカ　前條に同じ。

【恩好】オンカウ　いつくしみ、よしみ。周禮、註「睦而遺レ之、所二以結一一一一也」‖厚情。

【恩俸】オンホウ　ひいき、いつくしみめぐむ、俸は幸。唐書、顏至忠傳「一一私惠也」‖寵愛・恩顧。

【恩義】オンギ　なさけある義理。互に愛情を以て相結ぶをいふ。晉書、郗鑒傳「累有レ感二其一一一者」と

【恩捨レ義】オンシヤギ　一家内のことは恩愛を主とす、故に義を蔽ひかくす。禮、喪服四制「門内之治——、門外之治、義斷レ恩」

【恩澤】オンタク　恩義に同じ。

【恩仇】オンキウ　恩讐に同じ。

【恩寵】オンチウ　ふるきよしみ。後漢書、孔融傳「高明祖父、皆與レ備有二一一一」

【恩給】オンキフ　○めぐみて物を與ふ。○多年勤續して職を辭したる官吏に、終身政府より給與する金。

【恩賜】オンシ　あたたかきめぐみ。蘇舜欽詩「金鉞山石烈、一一春色浮」‖恩光。

【恩過】オンクワ　ありがたきあしらひ。張說詩「不レ作二邊城將一、誰知二一一深一」

【恩訓】オンクン　なさけぶかきをしへ。後漢書、鄧騭傳「追二報太后一一一」

【恩化】オンクワ　仁德をもて民をみちびく。なさけを加へて民をなづける。後漢書、宋均傳「吏民思二均一一一」

【恩光】オンクワウ　○草木が春のめぐみを受くる。黃庭堅詩「桃李終不レ言、朝露借二一一一」○君のめぐみ、君恩。王惲詩「百年蓬蒿閑二歩實一、一日一一照二士林一」

【恩惠】オンケイ　めぐむ。めぐみ。南史、王志傳「清謹有二一一一」‖仁惠。

【恩眷】オンケン　あつく目をかける、眷は顧。北史、李彪傳「司文東觀二綢一繆一一一」‖恩顧・恩倖。

【恩顧】オンコ　めぐみて目をかける。韓愈詩「坐叨二一一一厚、命守二璿堰一」‖恩眷。

【恩札】オンサツ　ありがたきかきつけ。儀禮「除二一一子喪一」

【恩師】オンシ　恩を受けし先生。

【恩惠】オンケイ　ありがたきたまもの。融傳「高明祖父、皆與レ備有二一一一乎」

【恩給】オンキフ　○めぐみて物を與ふ。○多年勤續して職を辭したる官吏に、終身政府より給與する金。

【恩賜】オンシ　あたたかきめぐみ。蘇舜欽詩「金鉞山石烈、一一春色浮」‖恩光。

書、李晟傳「爲二宴樂一一使者、相二衛於道一」＝恩錫。
【恩雖】オンシウ　なさけと、あたと。白居易詩「一彈指頃報二一一」
【恩讎分明】オンシウブンメイ　恩を受けし者には恩を報い、あだには仇を以て報いることをはきはきとするは小人の心なり。呂氏童蒙訓「——、此四字、非二有道者之言一也」
【恩人】オンジン　恩になりし人、己が恩惠をうけし人。
【恩赦】オンシヤ　めぐみて罪をゆるす。韓愈詩「前日遇二一一、私心喜遥愛」
【恩情】オンジヤウ　いつくしみ深き心、ねんごろなる愛情。吳少微詩「長夜泣二一一」
【恩奨】オンシヤウ　めぐみてとりもつ。五代史、馮玉傳「願得レ持二晉玉璽一、獻二契丹一、以報二一一」
【恩賞】オンシヤウ　褒美としてたまはる。後漢書、彭寵傳「倶有二重功一而一一竝薄」
【恩借】オンシヤク　なさけによりてかる、人より物をかるをいふ敬稱。＝拜借。
【恩錫】オンシヤク　ありがたきたまもの。隋書、竇榮定傳「上載幸二其第一、一一甚厚」＝恩賜。
【恩恤】オンジユツ　めぐむ。めぐみ。周書、宇文護傳「賴二島齊一一、差安二衰暮一」
【恩詔】オンセウ　ありがたきみことのり。張籍詩「特承二一一新二門戟一」
【恩澤】オンタク　めぐみ。澤はうるほひ。史、律書「一一加二海内一」＝恩惠。
【恩地】オンチ　○めぐみ。地は無意味の助辭。揮麈後錄「官レ之則有レ負二一一」○國譯倉時代に將軍又は大名が、其の臣下に、祖先以來の功を賞して與へし土地。
【恩寵】オンチヨウ　あはれみてかはゆがる。後漢書、召馴傳「一一甚崇」＝恩倖。
【恩田】オンデン　佛父母師長の稱。大藏法數「和尚阿闍梨、生二我法身一者、父母生二我肉身一者、此四名二一一」
【恩典】オンテン　なさけある處置、特典。韓琦文「被二一一之特優一、顧二人言一而甚愧」
【恩德】オントク　めぐみ。なさけ。漢書、高帝紀「施二一一一賜二民爵一」＝恩惠。
【孤レ恩】オンスル　恩惠に負く、恩を受けて何とも思はぬ。李陵、答二蘇武一書「陵孤レ一レ、漢亦負レ德」
【恩波】オンパ　天子のめぐみ。開天遺事「帝曰、鑑前盆池魚數頭、鮮活可レ愛、李林甫曰、賴二陛下一一所二養一」杜甫詩「拜舞銀銅落、一一銅舶舒」＝恩光・恩澤。
【恩霈】オンハイ　君のめぐみ。張良詩「一一及二殊方一」＝恩澤。
【恩義則怨生】オンハギソクレンシヤウス　人になさけをかけることと深ければ、卻りてうらまるるに至る。亢倉子「一一、愛多則憎至」
【恩比】オンヒ　めぐみしたしむ。柳宗元文「周德一一」
【恩惠】オンケイ　めぐみ安んずる。晉書、劉曜載記「妾少養二于叔一一一甚厚」
【恩物】オンブツ　幼稚園にて幼兒を教ふる玩具。父母の恩賜の物の義。
【恩納】オンノウ　あはれみて目をかける。北史、魏宗室元暉傳「侍中盧昶亦寵二一一一」＝恩顧・恩眷。
【恩命】オンメイ　なさけあるおほせ。穆修夫詩「君承二一一一住二天台一」
【恩愛】オンアイ　いつくしみやしなふ。後漢書、楊厚傳「慨然改レ意、一一加レ篤」
【恩賚】オンライ　ありがたきたまもの。宋史、大食國傳「俟二其還一、優加二一一一」
【恩賴】オンライ　めぐみをうける。
【恩綸】オンリン　恩詔に同じ、綸は綸言。蘇軾詩「適見一一臨二定武一」
【恩寵】オウチヨウ　臣下に恩を施して禮遇する義。後漢書「自レ是一一愈篤」

【忉】カイ　カツ　卦　觸
うれひなし（無愁貌）平氣で居る。ゆるがせにする（忽）孟、萬章「公明高以二孝子之心一爲レ不レ若レ是一」公明高は、舜の如き親孝行の人が親に見すてられて、決して此の如く平氣でゐることはなしと思ひし義。

【恔】カウ　效
こころよし（快）孟、公孫丑「於二人心一獨無一乎」

【恪】カク　藥　一に、念に作る
つつしむ。つつしみ（敬・謹）「儆一」「忠一」「靡一」詩、商頌「執レ事有一」」
【恪勤】カクキン　○つつしみてつとめる。國語「朝夕一一、守二以三德一、奉二以二忠信一」＝勤恪。○國譯倉時代、攝家又は貴族の家人より登用せし侍。又、鎌倉・室町時代、營中の雜役に服せし吏。
【恪謹】カクキン　つつしむ。つつしみ。書經「一一克孝」
【恪凌】カクレン　つつしむ。宋書、謝晦傳「一一夙夜」＝敬慤・恪勤。
【恪固】カクコ　つつしみて堅く守る。子華子「人之常情、於二其所一レ愛者一、則必有二一一之心一」
【恪愼】カクシン　つつしむ。書經「一一克孝」唐書、崔元綜傳「性一一坐二政事堂一、東帶終日不二休偃一」＝敬謹。
【恪勵】カクレイ　つつしむ。勵志、後主張皇后傳「一一一一禮祀」＝恪凌。
【恪整】カクセイ　つつしみただす。金史、儀衛傳「一一乃心、式副二陛意一」
【恪敏】カクビン　つつしみふかくして、さとくすばやし。謹愼にして敏捷。唐書、源乾曜傳「性謹重、其始仕已四十餘、歷官皆以二清愼一一一得レ名」
【恪勤】カクキン　つつしみはげむ。劉基文

「道士已來、ー一無ノ晉」

【恰】 カフ 洽

○あたかも(適當)ちやうど。杜甫詩「野航ー受兩三人」○心を用ふる。○ねんごろなり。○ーは鳥の鳴く聲。杜甫詩「自在嬌鶯ー一啼」

【恰可】カフ ちやうどよし。

【恰好】カフ ○あたかもよし。適當。圖○カフカウかたち、すがた。○代價が割合にやすい。

【恰恰】カフカフ 鳥の聲の形容。字解參看。

【恰宜】カフ あたかもよろし。＝恰好。

【恰當】カフタウ ちやうどよし。

【恇】 キャウ 陽

おそる、おづ(怯)

【恇懦】キャウ おそれおどろく。晉書、宗室傳「國境士庶、莫ノ不ニー一」＝惶懦・驚懦・怖懦。

【恇怯】キャウ おそれる貌。梁鴻詩「嗟ー一兮誰留」

【恇怯】キャウケフ おぢおそれる。王禹偁詩「強臣方跋扈、朝廷多ー一」＝畏縮。

【恇擾】キャウ おそれみだれる。程史「騎散皆ー一、不ノ知ノ所ノ爲」

【恭】 キョウ 多

○うやうやし。うやうやしくする、つつしむ「允ー」「溫ー」書、君奭「大弗ノ克ー上下」つつしみ、貌に在りてー敬と爲す。論、季氏「貌思ー」○うく、たてまつる(奉)古、通じて共に作る。左、僖二七「紀不ノ共也」

同訓異語 恭・謹・愼・敬・肅・恪の別は謹(言部十一畫)の條を見よ。

【恭賀】キョウ うやうやしくいはふ。＝謹賀。

【恭行】キョウカウ つつしみて奉じ行ふ。書、甘誓「ーニー天之罰」

【恭餉】キョウ うやうやしく食を進める。朱熹文「男敬ノ學、女ーノー」

【恭澤】キョウ うやうやしくつつしむ。史、蕭相國世家「相國年老素ーー」＝恭贈。

【恭敬】キョウケイ うやうやしくつつしむ、恭は容貌のつつしみ、敬は心のつつしみ。曲禮「君子ー一、撙節退讓、以明ノ禮」孟、告子「ーー之心論也」

【恭虔】キョウケン うやうやしくつつしむ。虔は敬。舊唐書、文宗紀「常懽ノ已以ニーーー」＝恭敬。

【恭愿】キョウゲン つつしみて誠實なり。晉書「爲ノ人ーー」

【恭儉】キョウ つつしみてつづまやか。孟、滕文公「賢君必ーー禮下」

【恭謹】キョウキン つつしみてへりくだる。後漢書、光武帝紀「陛下ーー克讓」＝恭遜。

【恭人】キョウ ○つつしみぶかき人。詩、小雅「溫溫ーー、維德之基」○宋以後、婦人に封贈する號、明清の制、四品官の妻に賜ふ。

【恭愼】キョウシン つつしむ。唐書「性ーー」

【恭護】キョウ つつしみてへりくだる。劉琨文「ーー之節、臣猶庶幾」＝恭謹・恭遜。

【恭順】キョウシュン うやうやしくしたがふ。白居易詩「ーー發至誠」

【恭承】キョウ ○うやうやしくうけつぐ。謝靈運詩「ニー古人愆ニ促裝返ニ柴荊」○うやうやしくうけたまはる。李白詩「ーー鳳凰詔、銜起盛驅中」＝敬承。

【恭遜】キョウソン つつしみてへりくだる。淮、周書「ーー是謂ニ容德ニ」＝恭謹。

【恭遜】キョウ つつしみへりくだりて操遜せず。晉唐書「性ーー無競」

【恭貌】キョウ うやうやしきすがたかたち。論、季氏「貌思ノ恭」＝恭容。

【恭卑】キョウヒ うやうやしくへりくだる。樂府「容止同ニ規矩ニ、賓徒盡ーー」＝恭謹。

【恭聞】キョウブン うやうやしくきく。

【恭敏】キョウビン つつしみてさとし。元史、姚樞傳「ーー而儉勤」

【恭睡】キョウ ○うやまひやはらぐ。逸雅「所ニ以爲ニーー一也」○つつしむ、睡は敬。＝恭敬。

【恭默】キョウモク うやうやしくして寧靜なり。書經「ーー思ノ道」

【恭容】キョウ うやうやしきやうす。禮、玉藻「手容恭」

【恭】 恭(前條)の本字。

【恐】 ㊀ キョウ ㊁ キョウ 宋 腫

㊀おそる、こはがる。孟、梁惠王「齊人將ニ築ニ薛、吾甚ーー」おそれ(懼)「懼ーー」「惶ーー」「愛ーー」○をどす。漢書、淮陽憲王欽傳「今弟光ー王」㊁おそらくは、疑ひおもんぱかる、億度。史、廉頗傳「秦城ー不ノ可ノ得」

同訓異語 恐・懼・畏・怖・怕・慴・怯・慄・懾・慄・悸・慓○恐は未來を恐るるなり、動詞に用ひて、大抵此くならんと氣づかふに、恐くは此の如くならん、といふなり。○懼は恐懼・疾懼・驚懼と連用す、恐怖するなり。○畏はおそるるの甚だしきなり、敬の字の義を帶ぶ、古は威の字と通用す、畏敬・畏服と連用す、敬服せる友を、畏友といふ。○怖はをどすとも訓む、わけもなくお

ちおそるるなり。○怕は懼なり。俗語に用ふ。○惶はおそれあわつるなり。恐惶・驚惶と用ふ。後漢書「百姓惶惶」○怯は臆病なること。後漢書「見二小敵一怯」○悸・驚の二字同じ。恐懼失レ志也と註す。史記「一府中惴惴、莫二敢起一」○慄はおそれて、ぞっとする義。竦縮也と註す。戦慄と用ふ。詩經「鴟二其穴一惴惴其慄」○悸は心動くなり。むなさはぎする義。後漢書「心中動悸」○慴はおそれて氣を失ふなり。文選「猛犬失レ木、豺狼慴窟」

【恐悦】キョウエツ かしこみよろこぶ。己がよろこばしきをいふ謙辞。

【恐縮】キョウシュク おどかしこまる。‖恐喝。

【恐喝】キョウカツ おどかす。威力を以て脅かす。喝一に褐に作る。史、蘇秦傳「日夜務以二奉璧一、一二諸侯一」‖惶縮。

【恐悸】キョウキ おそれて心がをののく。

【恐懼】キョウク おそれる。史、樂書「戰戰一一、善守善終哉」‖怖懼・恐怖。

【恐怪】キョウクワイ 〇おそれる。吳越春秋「諸侯怖懼皆一一」‖恐懼。〇書簡の結局に用ひて敬意を表する語「一一謹言」

【恐慌】キョウクワウ しんぱいしてあわてる。商業上の失敗などにいふ語。

【恐脅】キョウケフ おどしおびやかす。梁武帝文「更相一一、以求二財帛一」‖威脅。

【恠】クワイ 怪の俗字。

【悔】キョウ 図 別に恂に作る

おそる（懼）韓愈會合聯句「謫夢意猶一」

【恂恂】キョウキョウ おそれさわぐ貌。‖洶洶・匈匈。

【恢】クワイ 因

〇大いなり、志大いなり、ひろし（宏）〇おほいにす。ひろくす。左、襄四「不一一于夏家」夏家は夏の王室。

【恢偉】クワイヰ 肥えて大いなり。北史、魏宗室傳「泰王體度一一」‖體偉。

【恢遠】クワイエン ひろくとほし。北史、刁雍傳「才識一一」‖廣遠。

【恢宏】クワイクワウ ひろし、ひろめる。蘇軾詩「胸中幾雲夢、餘地多一一」‖恢弘。

【恢奇】クワイキ 大いにしてめづらし。韓愈詩「勢到二衰佛一尤一一」‖恢偉・奇異。

【恢詭】クワイキ 大いにしてめづらし。宋史「雖一一譎怪自喜者一、悉以名聞」‖恢奇。

【恢恢】クワイクワイ 〇大いにして衆を容るる貌。老子「天網一一、疎而不レ失」〇ゆったりしてゐる貌。莊、養生主「一一乎其於二遊刃一、必有二餘地一矣」‖綽綽。

【恢郭】クワイクワク ひろく大いなり。又、ひろく大いにする。公羊傳「郭者何一一也」‖恢廓。

【恢廓】クワイクワク 〇ひろくおほいにする。漢書、五行志「陛下一一祖業、功德愈盛」〇心がひろく大いなり。吳志、周瑜傳「性度一一」

【恢闊】クワイクワツ ひろし。‖恢豁。

【恢弘】クワイコウ ひろし。ひろめる。書經序「一一王道、示二人主一以二軌範一」‖恢弘。

【恢然】クワイゼン 心の寛やかなる貌。北周書、李遠傳「幼有二器局一、志度一一」

【恢開】クワイカイ 大いにひろめ明かにする。開は明なり。開なり。夏侯湛、昆弟誄「用一一我合葉一」

【恢大】クワイダイ ひろく、大いなり。唐書、惟良傳「忠尚一一」

【恢拓】クワイタク ひろめひらく。後漢書「一一境宇」

【恢卓】クワイタク おほいにしてすぐれる。荀子「其政一一、可三以爲二卿相一」

【恢達】クワイタツ 心が大きくひろやか。北史「畢子仲智性一一」‖豁達。

【恢誕】クワイタン おほいにしていつはる。其の言夸大にして實なし。王坦之、廢莊論「其言譎誕、其弊一一、莊子之利二天下一也少、害二天下一也多」

【恢張】クワイチヤウ ひろめて大いにする。廓めて之を大いにする。宋史「宜下一一一以恢二明主不レ應一以利爲上先」

【恢復】クワイフク 〇衰へたる者をもとのとほりにかへす。王惲詩「薇遠不レ使レ前、一一可三立見一」〇失ひたるものを取りかへす。五代史、南唐世家「荷不レ能一一內地」

【恢文】クワイブン 衰へたる文學を盛んにする。宋史「齊家駿レ族、履レ武一レ一」

【恮】 怪（心部五畫）の俗字。

【恍】 ㊀ クワウ 養 ㊁ クワウ 陽 慌・怳に同じ

㊀うっとりとする、昏ウし、定まらず。○微妙にして測り知り難し。㊁たけし(武)

【恍惚】コウコツ ○微妙にしてはかられざる貌。又、うっとりとしたる貌。老子「道之爲レ物、惟恍惟惚、惚兮恍兮、其中有レ象」○ぼんやりとして自失する貌。＝惚恍。

【恍然】ゼン うっとりとしたる貌。呉船録「發二常州平江一、親戚故舊來相送者、陸二續於道一、一一如二隔世一焉」＝恍惚。

【恢】

㊀コウ・ゴウ 俗字 恢は俗字

㊁つね(常)ひさし(久)永久に變らず。論、子路「人而無レ一、不可二以作一巫醫一」○つねにする。易、恒卦「不レ一其徳」○易の卦の名、巽下震上。㊂ゆみはりづき(弦月)詩、小雅「如月之一」

【恒河沙】シャ 數の極めて多きに喩ふ、恒河は印度の「ガンジス」河(阿彌陀經)略して恒沙ともいふ。張陽詩「深心大浜水、廣願一一」

【恒儀】ギ さだまりたる儀式。＝常儀。

【恒久】キュウ いつもかはらずひさし。易經「天地之道、一一而不レ已也」

【恒言】ゲン 人のつねに口にすることば。孟、離婁「人有二一一一、天下國家」

【恒産】サン 人のつねに變らず。柳宗元文「進止威儀、動有二一一一」

【恒心】シン 人のつねにとり守りて變ぜざる善心。孟、梁惠王「無二恒産一者、無二一一一」

【恒星】セイ ○二十八宿の星の一。○地上より常に一定の位置にありと見ゆる星、太陽も其の一。惑星の對。左傳「一一不レ見夜明也」

【恒則】ソク 人の有する一定して永久變ぜざる則。易、恒卦「不レ恒二其徳一、或承之羞、貞吉」

【恒風】フウ 常に一定の方向に吹く風、地球の自轉の爲めに北半球にては東北風、南半球にては東南風の吹く類。＝貿易風。

【恒例】レイ いつもかはらぬしきたり。＝常例・定例。

【恒】

恒(前條)の俗字。

【恨】

コン 國

○うらみ。うらむ、怨よりも意強し「仇一」「遺一」「怨一」「寃一」「痛一」「憂一」「離一」「客一」○くやむ、くゆ(悔)「悔一」「羞一」自ら咎める。史、李廣傳「廣曰、吾所レ以與二匈奴一戰者、以二其詐降者八百餘人一、吾詐而盡殺之、至二今大一」

【恨鬼】キ うらみをふくむ幽魂。晉書、魯芝傳「寃悲沒レ世長爲二一一一」

【恨悔】カイ うらみくやむ。易林「心多二一一一」＝怨悔。

【恨恚】コンイ うらみ怒る。論衡「言二其一一一レ水爲二滔者一也」＝怨恚。

【恨恨】コン うらみを懐きて已まざる貌。古詩「生人作二死別一、一一那可レ論」

【恨殺】コンサツ うらむ、殺は助字。

【恨事】コンジ うらめしき事柄。殘念に思ふこと。

【恨河】コン うらみのことば。朱葵詩「醜人留二一一一」

【恨紫愁紅】コンシコウ 花の姿のあはれなる形容。陸珍、虞美人花歌「一一游二南園一」

【恨人】コン うらみの多き人。江淹賦「僕本一一、心驚不レ已」

【恨声】コン 甚だうらみいたむ。後漢書、張奐傳「雖二一一在レ心、辭謝レ咎、何嗟及矣」

【恨憤】コン うらみいきどほる。唐書、段秀實傳「朱滔反、以二秀實失レ兵、必一一、且寘有二人望一、使二騎往迎一」

【恨惑】コン うらみまどふ。易林「伯氏歸レ國、多レ所二一一一」

【恨恨】コン うらみかなしむ。唐書、魏京傳「帝一一曰、京與二賀蘭敏之一、至今大一」

同訓異字 恨・怨・憾・憤の別は怨(前條)の條を見よ。

【恣】㊀シ ㊁シ 支 眞

㊀ほしいまま（縱）わがまま「放ー」「專ー」「擅ー」「驕ー」「暴ー」ほしいままにする。㊁―唯は自得の貌。又、意をほしいままにして怒り視る貌。

同訓異義 恣・縱・橫・放・肆・擅の別は縱（糸部十一畫）の條を見よ。

【恣逸】シイツ ほしいままなり。北史「不ㇾ倫二不廣一使二我寇一ー一」

【恣行】シカウ わがままのおこなひ。

【恣睢】シキ 意をほしいままにして怒り視る貌。史、伯夷傳「暴戾ー一」

【恣志】シシ 志をほしいままにする。國語「君若ーレー、以用二重耳一、四方諸侯、誰不三懼惕以從二君命一」

【恣肆】シシ ○ほしいまま（唐書、張鷟傳）＝放肆・放縱。○文の氣勢の盛なるをいふ。

【恣縱】シジウ ほしいまま。元稹詩「謝公ー一顚狂縁、觸處開行許二自由一」＝恣肆。

【恣擾】シジウ ほしいまま。晉陽國志、大將軍維脛二語之一ー一」

【恣放】シハウ ほしいままなり。詩經、雲漢「羣臣ー一、摠二王之職一」

【恣暴】シバウ ほしいままにしてあばれる。宋史「戍卒ー一不法、夜或焚二民舍一爲レ盜」＝肆暴。

【恣欲】シヨク むさぼることを思ふままにする。後漢書、王常傳「負レ強恃レ勇、觸レ情ー一レー」＝縱慾。

【恣樂】シラク ほしいままにたのしむ。晉林「舞紹歌謳、ー一愛レ編」

【恃】ジ 紙

○たのむ「ー險」「矜ー」たのみ（賴）たよる（依）○はは（母）詩、小雅「無父何怙、無母何ー一」に本づく。

同訓異義 恃・負・怙・賴・憑の別は負（貝部二畫）の條を見よ。

【恃愛】ジアイ 人の我を愛して信用するをたのみとする。梁武帝歌「ー一如レ欲レ進、含レ羞未二肯前一」

【恃氣】ジキ 勇氣をたのむ。莊子「方虛憍而ー一レー」＝怙氣。

【恃救】ジキウ すくひをたのみにする。魏志、注「ー一レー不二力戰一」

【恃險】ジケン けはしき要害をたのむ。杜甫詩「公孫初ー一レー、踞レ馬意何長」

【恃憑】ジヒウ たのみよる。王仁裕詩「孫劉亦ー一」

【恃賴】ジライ たのみよる。後漢書、袁安傳「自二天子一及二大臣一、皆ー一ニ之」＝依賴。

【恁】ジン ニン 寢 俗音 イン

○おもふ（思念）○かくのごとし。如此の俗語「ー地」「ー兒」次條に同じ。

【恁地】ジンチ 此の如く、このとほり。朱子語錄、所二以弊得ー一一こ

【恁麼】ジンモ 如何に、どうして。

【恁樣人】ジンヤウジン 此の如き人。＝如レ此人。

【恤】ジュツ 質 一に卹に作る

○あはれむ。あはれみ（憫）めぐむ「憐ー」「憫ー」「優ー」○相愛する、いつくしむ。周禮、地官「六行、孝友睦婣任ー一」○うれふ、うれひ（憂）○をさむ（收）○にぎはす（賑）すくふ（救）貧者老人などを救ひ賑はす「救ー一」「存ー一」

同訓異義 恤・憐・哀・憫・矜の別は憐（心部十二畫）の條を見よ。

【恤民】ジュツミン まづしきものをめぐみあはれむ。國語「修レ刑不ニー一ー一」＝恤貧。

【恤救】ジュツキウ あはれみすくふ。＝救恤。

【恤孤】ジュツコ みなしごをあはれむ。大學「上ー一而民不レ倍」

【恤恤】ジュツジュツ うれふる貌「左、昭十二」

【恤生】ジュツセイ 民をあはれむ。＝恤民。

【恤然】ジュツゼン おどろきおそれる貌。七發「ー一足二以駭一矣」

【恤敗】ジュツハイ やぶれたるをあはれむ。魏志「存レ亡ー一レー、自レ古通典」

【恤貧】ジュツヒン まづしき者をあはれみめぐむ。周禮、大司徒「四曰ニー一ニ」

【恤兵】ジュツヘイ 兵士をいたはりめぐむために金品を贈る、其の事務を取扱ふ所をー一部といふ。

【恤病】ジュツビヤウ 病人をあはれむ。魏志、鍾繇傳「勾踐養レ胎以待レ用、昭王ー一レー以雪レ仇」

【恤民】ジュツミン たみをあはれむ。國語「在レ位者ー一ニ之患二是以國家無レ違」

【恬】㊀シュン ㊁ジュン 眞 震 通音

㊀まこと（信）○たのしむ（樂）○おそる（慄）○ー一はおごそかにつつしむ貌（嚴謹）又、うやうやしくおだやか（溫恭）なる貌。論、鄕黨「孔子於二鄕黨一ー一如也」又、信實なる貌。後漢書、召馴傳「德行ー一召伯春」柳宗元、捕蛇者說「ー一起而視二其缶一」㊁にはかに（遽）○またたく（瞬）

【恂然】ジュンゼン にはか。莊、徐无鬼「ー一棄而走」

【恂目】シュンモク またたく。列、黃帝「今汝惶然有ニー一之志一」＝瞬目。

【恂慄】シュンリツ おそれつつしむ、畏懼する。大學「瑟兮僴兮者ー一也」

【恕】ジョ 御

○おもひやる。又、其の心、己

の心を推して物に及ぼす同情心「忠ー」「明ー」「仁ー」論、里仁「其ー乎、己所ノ不ノ欲、勿ノ施ニ於人ニ」○あはれむ。又、其の心。○いつくしむ。又、其の心。○はかる（忖）○ゆるす「寛ー」「容ー」「宥ー」

【恕宥】ジョユウ　おほめにみてゆるす。人の過失をゆるす。韓愈詩「勃然思ニ排裂ニ撫掩難ニ一ー一」

【恕而行ノ之】ジョジコウスル　おもひやりの心を以て事を行ふ。左、隱十一「ー、德之則也」

【悒】　セイ　サイ　㊥

なやむ（惱）

【悒悒】セイセイ　わづらひなやむ貌。皇甫冉詩「ー一波蓬下」

【息】　ソク　㊥

○いき（呼吸）轉じて極めて短き時間にいふ「瞬ー」史、張耳傳「閒不ノ容ー」○いきをする、いきつく。論、鄉黨「屏氣似ニ不ノ一ノ者」○いきながらへる（生存）「生ー」○あへぐ（喘）○やむ（止）○そだつ（生長）孟、告子「其日夜之所ー」ふえる、ふやす（繁育）○こども「子ー」「賤ー」○いこふ（憩）やすむ（休）「休ー」「安ー」「退ー」○ねぎらふ（慰勞）○ふさぐ（塞）○やすし（安）○金の利子「利ー」○太ー　はためいき。又大聲に歎く。

【息訓表】アキ　息・休・憩の別は休（人部四畫）の條を見よ。

○息・已・罷・止・歇　等の別は已（已部）の條を見よ。

【息晏】ソクアン　晏は安、いこひやすんず。

【息偃】ソクエン　やすみふす。詩、小雅「或ー在ノ牀、或不ノ已ニ于行ー」

【息焉】ソクエン　やすらふ貌。禮、學記「ー一游焉」

【息燕】ソクエン　○巢にいこふつばめ。蘇廻詩「ー一歸ノ檐靜、飛花落ノ院閒」○やすみくつろぐ。考工記、梓人「則王以ー一」＝宴息。

【受ノ息】ソクヲウ　利息を受ける。周禮、注「王莽時、民貸以治ニ產業ニ者、一ノ一無ノ過ニ歲什一ー」

【息交】ソクコウ　世人と交ることをやめる。陶潛、歸去來辭「歸去來兮、請ー一ノ一以絕ノ遊」

【息耗】ソクカウ　○物のふえると、へると。漢貢、董仲舒傳「論ニ政事之得失、察ニ天下之ー一ー」＝消長。○消息の義、おとづれ。唐書「與ニ軍中ー一相聞」轉じて後世は耗の一字にて音信の義とす「音耗」

【息銀】ソクギン　りそく。晉家寶要「計ニ每年ー一ー計ノ之」＝息錢。

【息壤】ソクジョウ　わざはひをやむ。漢書、非ニ天下賢聖ニ其勢固不ノ能ノ息ニ天下之爭ニ一＝息災。

【息警】ソクケイ　軍のいましめを解く。北史、蠕蠕傳「孝莊詔曰、陰山ー一ノ一、弱水無ノ塵」

【息肩】ソクケン　荷をおろして肩をやすめる。左、襄二「請ノ一ニ一于齊ー」

【息災】ソクサイ　佛の力にて一切のわざはひを止める。轉じて、身に病災なき義。

【息止】ソクシ　やみておこらず。北史、江悅之傳「郡中賣酒、好劫ー一、政爲ニ雍州諸郡之最ー」

【息壤】ソクジョウ　森の武王が誓日を信ぜざることを甘茂と誓ひし森の地名、今の湖北江陵縣の南。轉じてかたきちかひの義に用ふ（戰國策）

【息喘】ソクゼン　あへぐ。戴眞、登ニ幾峯ニ詩「ー一倚ニ蒼松ニ潛勝犯ニ霧露ー」

【息錢】ソクセン　りそくのぜに。史、孟嘗君傳「得ニ一ー十萬ー」＝息銀。子金。

【息男】ソクダン　己の生める男子、むすこ。曹植文「封ニ臣一ー苗ニ爲ニ高陽鄉公ー」＝子息。

【息女】ソクヂョ　息は生、己の生める女子、むすめ。史、高祖紀「臣有ニ一ー」顏籍ニ季貧修妾ニ」季は高祖の字。

【息傳】ソクデン　とどまり休む。南史、蕭琛傳「或入ニ春令、便得ニ一ー一」＝休息。

【息訴】ソクソ　そしりを止めやめる。文中子「何以ー一ー」＝止詩。

【息婦】ソクフ　子のよめ。＝媳婦圖子婦。

【息兵】ソクヘイ　戰をやめる。戰國策「甘茂欲ー一ー」

【息民】ソクミン　たみを安息せしむ。左傳「晉侯歸謀ノ所ニ以ー一ー」

【息利】ソクリ　利子。唐書「倍ニ稱ー一ー」＝息錢。

【息圖】ソクロ　やすみとどまる。劉向新序「鴻鵠將ニ遊ニ乎江漢ニ一ー一乎大沼ー」

【恍】　タ　㊦

ー係は心未だ定まらず。又、志を失ふ貌。

【恥】　チ　㊦　俗字

○はぢ。はづ（慚）不正の意思行爲に對する良心のとがめ「愧ー」「廉ー」「深ー」孟、盡心「ー一之於ニ人大矣ー」○はづかしむ。左、昭五「ー一匹夫不ノ可ニ以無ノ一ー」

【詳解】恥なり、心に从ふ。耳の聲。

【同訓異義】恥・辱・忝・愧・媿・慙・怍・羞・惭・愧・靦・腆○恥は自ら悔ひ、はづると訓む、心に恥かしく思ふ義、單き字なり。論語「行ニ己有ノ一ー恥」中庸「知ノ恥近ニ乎勇ー」○辱

は、はづかしめなり。榮の反、外聞惡しきをいふ、轉じて寃谷應酬の辭となりかたじけなしと訓む。降屈の義なり。拜二命之辱一とは、貴人の命の降るを拜する義なり。曲禮「辱子不レ登レ危、懼レ辱レ親也」○忝は辱に近し。詩經「仁レ忝二所生一」○愧は己の見苦しきを、人に對してはづるなり、醜の字の氣味あり、媿に作る、同じ。韓文「仰不レ愧レ天、俯不レ愧レ人、內不レ愧レ心」○慙は慙愧と連用す、愧と同じ、はづると訓む、はぢとは訓まず。孟子「晉接慙二於孟子一」○怍ははぢて心を動かし、色を變ずるなり。禮記「容毋レ怍」○羞ははぢてまばゆく、顏の合せがたきなり、婦女子などの、はづかしげにするなどに多く用ふ。○徂・恥・恧の三字、共に羞づる貌。○僭は大夸なり、さらしものになるなり。○赧ははぢて赤面するなり。○詬は恥辱せられてはづる義、罵に從ひ垢の省に從ふ。

【恥骸】ガイ　はぢてなげく。南史、王籍傳「羞不二爲一レ衆從一所レ欲、皆慙二一一一

どす。與、蘇秦傳「―― 盧嗚、蹶幹而不二敢進一」

【惆恐】チウキヨウ いたみおそれる。史、孫世家「國事皆決二於子之一、三年國大亂、百姓――」‖疑懼。

【惆悵】チウチヤウ いたむ。悵は悵む。賈、康誥「嗚呼小子封――ニ乃身一、敬哉」‖惆矜。

【惆痛】チウツウ かなしみいたむ、悲傷する。惆も痛。

【悴】ボウ 尤 通じて、牟に作る むさぼりをしむ（貪愛）

【悴悴然】ボウボウゼン むさぼりをしむ貌。荀、榮辱「――惟利之見」

【恙】ヤウ 養

○つつが、人をかむ蟲、古代草居の時、人多く此の蟲の害を蒙る、故に互に――なきかと問ふ。風俗通「噬蟲、能食二人心一、古者草居、多被二此毒一、故相問勞曰、無」――」○轉じて、うれひ（憂）又、やまひ（病）の義とす「憂――」「病――」

【憂愁】ユウシウ しんぱい。

【悉病】ナウビヤウ やまひ。

【無ン恙】ナウガ 無事なり。戰國策「趙威后問二齊使一曰、歲亦――ヤ耶、民亦――ヤ耶、王亦――ヤ耶」‖無憂。

【悋】恪（心部七畫）に同じ。

【恋】戀（心部十九畫）の俗字。

七畫

【悠】イウ 尤

○とほし（遠）はるか（遙）「――遠」ながし（長）「――久」○うれふ（憂）○おもふ（思）詩、周南「――哉――哉」○――は行く貌。又、かぎりなくひろく遠き貌。又、閒暇ある貌。又、憂ふる貌。

【悠閒】イウカン 遙かにして分明ならず。荀、議兵「善用レ兵者、感忽――、莫レ知二其所一レ從出一」

【悠悠】イウイウ ○憂ふる貌。詩、小雅、――我思」○遠き貌。詩、鄭風「驟レ馬――」○はてなき貌。詩、唐風「――蒼天、曷其有レ極」○行く貌。詩、大雅「――南行」○閒暇である貌。詩、小雅「――旆旌」○多き貌。後漢書、朱穆傳「――者皆是」

【悠悠閑閑】イウイウカンカン 國ゆったりとしてのんきなる貌。

【悠遠】イウエン ○はるかにとほし。詩經「山川――惟其勞矣」○久し〔中庸〕

【悠陽】イウヤウ はるかにへだつ。晉書「江山――、朝宗無レ階」

【悠紀】ユウキ 國大嘗會の時、新穀を奉る地として選定せらるる二國中の一、其の新穀を左の祭場に祭られるもの。主基の對。‖由基・悠忌。

【悠久】イウキウ 長くひさし。中庸「――所二以成一レ物也」

【悠感】イウカン はるかにとほし。又、ひさし。陸機、思親賦「悲二桑梓之――一、憮二慈晉之弗聲一」

【悠忽】イウコツ おろそかにして歳月を過ごす。淮南子「我誕設而――」

【悠爾】イウジ 心のはるかなる貌。李嘉玉詩「處レ世心――、於レ時思索然」‖悠悠。

【悠然】イウゼン ゆったりとしたる貌。陶潛詩「采二菊東籬下一、――見二南山一」‖悠悠。

【悠長】イウチヤウ ながし。久し。宋書、孝義傳「涉二春夏一、日月――」

【悠哉】イウサイ 思ふ心の長くして、盡きざる義。詩、周南「――――、輾轉反側」

【悠遊】イウイウ はるかにとほし。陶潛詩「良朋――、擢レ首遥佇」‖悠遠。

【悠楙】イウバウ はるかに遠し。李德裕詩「故人在二瘴國一、歳晏路――」‖悠遠。

【悠揚】イウヤウ 長く遠き貌。蕭子暉、冬草賦「日――而少レ色、天陸霧而四下」盛起詩「世事――春夢裏、年光寂莫旅愁中」

【悠陽】イウヤウ 日の沒する貌。潘岳、秋興賦「天晃朗以彌高兮、日――而沒」

【悵】イウ 通じて色に作る

○うれふ（憂）「快――」「――○心安からず。楚辭、天問「武發殺レ殷何所――」

【悵快】イウクワイ 心むすぼれて安からず。快は不滿。宋玉、遠遊聯句「君行步瞩矚、我滯心――」‖快悵。

【悵悵】イウイウ 心むすぼれてうれふる貌。大戴禮、曾子立事「君子終身守二此――一」‖邑邑。

【悵懣】イウマン 心うれひて氣がふさぐ。

【悵惘】イウバウ 心安からずしていきどほる。應瑒文「――不レ逞」

【悦】エツ 屑 古、說に作る 悦は俗字

○よろこぶ。よろこび（喜）「喜――」「愉――」「怡――」氣に入る。○たのしむ。たのしみ（樂）「和――」○したがふ（服）「――服」慕ひよろこぶ。

【悦懌】エツエキ 悦・喜・欣・歡・怿等の訓は喜（口部九畫）の條を見よ。

【悦愛】エツアイ よろこびかはゆがる。韓非子「夫人鄭袖知二王――之一レ也、亦――ニ――之一レ王」

【悦慕】エツボ よろこぶ。詩經「彤管有レ煒、――女美」

【悦康】エツカウ よろこびたのしむ。魏文帝

詩「量ノ宜運ニ權略ニ六軍成ニ一ー」【悅喜】エツキ よろこぶ。又、よろこび。‖喜悅・悅懌。【悅欣】エツキン よろこぶ。應貞詩「率土成序、人胥ニ一ー」‖欣悅・悅懌。【悅玩】エツグワン よろこびもてあそぶ。晉書「三都賦成、安平張載、齊南劉逵、咸皆ー一、爲ニ之訓詁ニ」【悅色】エツシク 顏色をよろこばして氣に入るやうにする。晉書「承ノ顏ー一、寵愛日隆」【悅服】エツブク 心からよろこびしたがふ。晉、武成「萬姓ー一」【悅懌】エツエキ よろこびしたふ。宋史、三佛齊國傳「ー二一皇化ニ」‖欣慕・歡慕。【悅目】エツモク めをよろこばす。韓詩外傳「衣服容貌者、所ニ以ー一ー也」【悅豫】エツヨ よろこびたのしむ。後漢書、何敞傳「恩澤下暢、黎庶ー一」【悅樂】エツラク よろこびたのしむ。諸葛亮文「三軍ー一、士卒忘憊」‖悅豫。

【悁】㊀エン ㊁ケン 先 俗字は悗

㊀うれふ。うれひ（憂）「煩ー」○いかる。いかり（怒）怒を含む、「忿ー」㊁いらだつ（躁急）「輕ー」‖慍。【悁悁】エンエン いかる。【悁急】エンキフ いかりうれふ。【悁邑】エンイフ いかりうれふ。邑一に悒に作る。後漢書、梁諷傳「邑鬱ー一」亂は蔡亂。‖憂憤。【悁悁】エンエン うれふる貌。詩、陳風「靜女其ー一」‖悒悒。【悁忿】エンフン いかる。杜牧文「胸臆間不ニ以ー一ー是非一貯ニ之、邪氣不ノ能ノ侵」‖忿悁。

【悍】㊀カン ㊁カン 早 翰

㊀あらし、氣があらあらし、たけし（猛）「雄ー」○つよし（強）いさまし（勇）「勇ー」「彊ー」するどし（銳）「精ー」「慓ー」○きばやし、せまし。㊁きびし、氣ばやし（性急）○つよくもとる（強很）【悍銳】カンエイ たけくするどし。唐書、吳少誠傳「甲蔡地少ニ馬、乘ノ壓以戰、號ニ驃子軍一ー一」【悍快】カンクワイ あらくしてもとる。宋史、曹利用傳「性ー一」【悍鷙】カンシ わるづよし。魏志、烏丸傳、注「隨ニ水草一放牧、貴ニ少賤ノ老、其性ー一」【悍忌】カンキ 氣づよくして妬む。後漢書「ー一不ノ得ノ言ニ讒妾一」【悍急】カンキフ 心あらく氣せわし、性急なり。【悍戾】カンレイ わるづよくしてもとる。唐書、裕於陵傳「ー一貴肆」‖猛戾。【悍勇】カンユウ あらくしておごる。蘇軾文「吁鬼章世ー一」【悍黠】カンカツ わるづよき會長ノ如ノ宋史「有ニ一ー一臨ノ陣蓋武」【悍意】カンイ 氣づよき妻、凶頑なる妻。南史、劉峻傳「余有ニ一ー一、亦令ニ家道整飭一」【悍氣】カンキ 性急にしておろか。荀子「一ー一舒ノ緩」【悍馬】カンバ あらうま。侯鯖錄「見ニ一ー一」【悍婦】カンフ 心あらき女。聽松盧語錄「一ー持ノ齋誦ノ佛、不ノ如ノ減ニ奴婢之祿錢一」【悍戾】カンレイ 藥性の猛烈なる者、劇藥（史、倉公傳）【悍男】カンダン あらあらしくしていままし。又、其の者。史記「三晉之兵、素ー一、而輕ノ齊」【悍戾】カンレイ わるづよくしてもとる。唐書、裕於陵傳「ー一貴肆」‖猛戾。

【悔】㊀クワイ・ケ ㊁クワイ・ケ 賄 隊

㊀くゆ、くやむ、前非を悟りてくやしく思ふ「後ー」「追ー」○うらむ。㊁くい（咎）しくじり、とがめ（咎）論、爲政「言寡ニ尤、行寡ニ一ー」○易の外卦。内卦を貞といふの對。○圓（クヮイ）死を弔ふ。又、其の贈物。【悔尤】クワイイウ くいあやまち。韓愈詩「庶幾遺ニ一ー一」註、爲政「言寡ノ尤、行寡ノ悔」に本づく。【悔艾】クワイガイ くい改める、艾は治。宋史、李燾傳「ー一無ノ說」【悔咎】クワイキウ わざはひ。あやまち（過失）歐陽修文「守ノ靜輸ノ光、以遠ニ一ー一而已」【悔過】クワイクワ あやまちをくいる。陳琳文「懷ノ恩ー一」【悔懼】クワイク あやまちをくいる。劉基詩「步止辭ニ語默ニ語止絕ニ一ー一」【悔悟】クワイゴ くいさとる。白居易詩「肚裁不ニ歡娛ニ長年當ニ一ー一」【悔恨】クワイコン くいうらむ。神仙傳「忽焉不ノ知ニ所在ニ常甚ー一」【悔心】クワイシン 前非をくゆる心。中說「四風樂極悲來、其ー一之萌乎」【悔謝】クワイシヤ 非をくいてわびる。魏書、魏郡要房氏傳「頗ニ其ー一乃食」【悔悛】クワイシユン くいあらためる。【悔恥】クワイチ くいはづ。顏氏家訓「服然ー一」【悔非】クワイヒ あやまちをくゆ。魏收文「察ニ其ー一、棄ニ其服膺一」【悔吝】クワイリン ○くいうらむ。易經「ー一者憂虞之象也」‖悔悅。○少しのあやまち。法言、修身「ー一不ノ至」‖小疵。【悔尤】クワイイウ とがめ。北史、張普惠傳「自貽ニ一ー一、沈ニ淪幽壤一」

【悝】 ㊀ クヮイ　灰　㊁ リ　紙

㊀たはむる。‖誄。○人名。戰國の時、魏の文侯の臣に李一あり。㊁うれふ(憂)○かなしむ(悲)○やむ(疾)

【患】 クヮン・ゲン　諫　刪

○うれふ。うれひ(憂)「憂ー」「後ー」○やむ。やまひ(疾病)「疾ー」○わざはひ(禍)「禍ー」「凶ー」「水ー」○わづらひ。○くるしみ(苦)○あし(害惡)

同訓異字　患・憂・愁・憊・病等の別は愁(心部九畫)の條を見よ。

【患憂】イクワン　うれひ「內憂外患」‖憂患。

【患害】クワンガイ　わざはひ。阮籍詩「多財爲ニ一ー一」

【患眼】クワンガン　目を病む。北史、韋孝寬傳「末年ー一ー」

【患忌】クワンキ　うれひいむ。魏志「將士鈔掠、紹ー二ー之一」

【患咎】クワンキウ　とがめ。道德指歸論「物類託レ之、無レ有二ー一一」

【患苦】クワンク　くるしみ。晉書、涼武昭王傳「貧勿レ謂レ疎、賤勿レ容レ親、耳目人聞、知二外ー一一」‖疾苦。

【患禍】クワンクワ　わざはひ。‖禍患。

【患悔】クワンクワイ　うれへくゆ。易林「日月之塗、所レ行必到、無二有ニー一一」

【患者】クワンシヤ　病人。

【患難】クワンナン　うれへいたむ。南史、蕭思話傳「降曲英レ不レ一ー二之一」

【患雖】クワンナン　うれひ。なやみ。禮、儒行「ー一相死也」

【患貧】クワンピンラン　まづしきにくるしむ。歲綸詩「始悟逃人志、患レ名非レ一ー」

【患部】クワンブ　身體中の病のある所。

【患累】クワンルイ　わざはひ。梁武帝賦「ー一已除、障礙亦淨」

【悟】 ゴ　遇　通じて寤に作る

○さっかりさとる(會得)さとり(覺)惑が解ける「覺ー」「頓ー」「解ー」○さとす、さとらせる。○さとし、のみこみが早い「穎ー」「英ー」

同訓異字　悟・覺・喩・曉・了の別は覺(見部十三畫)の條を見よ。

【悟悅】ゴエツ　心にさとりよろこぶ。柳宗元詩「ー一心自足」

【悟覺】ゴカク　さとる。元稹詩「ー一智不レ惑、永抱二胎仙居一」‖覺悟。

【悟空】ゴクウ　虛無の理をさとる。沈佺期詩「沈思始ー一レ」

【悟悔】ゴクヮイ　さとりくやむ。後漢書、崔駰傳「懲二誤堂之ー一今」

【悟性】ゴセイ　○さとりよきたち。趙師秀詩「能文兼ニー一、前是惡休身」○智學にて事物を直觀によりて理解し、又、理解を結び合はする心の作用。

【悟禪】ゴゼン　佛禪の道をさとる。范成詩「那有仙郎早ー一レ」

【悟道】ゴダウ　佛道の眞理をさとる。又、其のをしへ。

【悟徹】ゴテツ　すっかりさとる。‖悟了。

【悟得】ゴトク　さとりをひらく。

【悟入】ゴニフ　さとりをひらく。

【悟了】ゴレウ　すっかりさとる。

【悞】 ゴ　遇

○あざむく(欺)○あやまる(謬)‖誤。○まどふ(惑)○うたがふ(疑)

【悃】 コン　阮

まこと(誠)まごころ、一すぢに思ふ誠の心(志純一)「愚ー」「誠ー」

【悃愊】コンビ　玉りてまことにしておろかなばか正直、愚直。

【悃悃】コンコン　ねんごろに誠なる貌。又、志の純一なる貌。楚辭、卜居「ー一款款、朴以忠乎」

【悃愫】コンソ　まごころありてねんごろ。吳澄詩「ー一問二安眠一」‖誠慤・懇悃。

【悃款】クワン　まごころありてねんごろ。款は忠誠。悃悃參看。‖悃愊。

【悃誠】セイ　まごころ。劉向、九歎「愚二忠正之ー一一兮、招二眞貞與一明智一」‖悃愊・懇誠。

【悃望】バウ　ひたすらのぞむ。‖願望。

【悃愊】ヒツ　まごころ、玉誠なり。漢書、劉向傳「發憤ー一、信有二愛國之心一」‖悃款・悃誠。

【悉】 シツ　質

○ことごとく、みな(皆)のこらず、つぶさに。○つまびらかに、つくす(詳盡)「詳ー」○そらんじきはめる(諳究)○すべてしる(盡知)「審ー」

同訓異字　悉・盡・殫・竭・既等の別は盡(皿部九畫)の條を見よ。

【悉皆】シツカイ　すべて、みなのこらず。正法念經「ー一百味、與レ天同等」

【悉查】シツサ　ことごとくはかり問ふ。查

一に諸に作る。諸葛亮文「事無二大小、悉以咨レ之」
【悉心】シンコロヲツクス　十分に心をつくす。鬼谷子「不二一ノ見レ情、不レ能レ成レ名」
【悉盡】シンみな、のこらず。＝盡悉。
【悉達】シッタ　釋迦如來の幼名、頓吉と譯す「元魏靈經私記」＝悉遠多。
【悉曇】シッタン　梵語、成就の義、梵語の母韻。轉じて、梵語又音韻の稱。唐書、天竺國傳「其人皆學二一一章一」
【悉知】シッチ　ことごとくしる。
【悉力】シツリキヲツクス　全力を盡す。漢書、東方朔傳「一レ一盡レ忠、以事二聖帝一」

【慘】シャウ　通じて慘・黲に作る

おそれる（懼）ぞっとする「震一」「慚一」「悼一」おそれあはてる（恓遽）
【慘悸】シャウキ　おそれてむなさわぎする。法書要錄「一一無レ寧」＝慘悸。
【慘懼】シャウク　おそれる。書、大禹謨、疏「憂慮然一一、齊莊戰栗」
【慘怍】シャウサク　おそればづ。王融文「一一之情、夙宵兢惕」＝慙怍。
【慘慙】サンシャウおそればづ。崔行先文「內慘外慙、不レ知レ所レ措」
【慘慄】サンリツおそれる貌。曹霊光殿賦「魂一一其驚駭」＝慘然。
【慘然】サンシャウおそれてぞっとする貌。＝慘慄。
【慘愴】サンシャウ　おそれる貌。＝悽愴。
【慘悽】サンセイ　かなしみいたむ。江淹賦「一一成レ愛、惆然自憐」＝慘愴・悲愴。
【慘悽】サンセイ　○しほしほと憂ふる貌。詩、鄘風、柏舟「憂心一一」＝悄然。○靜かなる貌。曹唐詩「樹影悠悠花一一」
【慘切】サンセツ　うれふる心のしきりなる貌。潘岳、笙賦「詩厲一一、又何磬折」＝凄切。
【慘然】サンゼン　憂ふる貌。＝悄悄。

【悛】セン　シュン　眞先

○あらたむ、前非を悔い改む。○やめる（止）○つぐ（次）○まこと（信）＝悛（心部六畫）○一一は謹厚の貌。史、李將軍傳「一一如鄙人」
同訓異義　悛・改・革・更の別は改（支部三畫）の條を見よ。
【悛改】シュンカイ　こころをあらためる。北史、張彝傳「猶無二一一一」＝改悛。
【悛悔】シュンクヮン　悛改に同じ。魏書、良吏傳「數年之中、一一非レ一」
【悛心】シュンシン　心を悔い改める。書、泰誓「惟受罔レ有二一一一」
【悛容】シュンヨウ　かたちをあらためる。又、過を悔いたる意態。韓非子「孫子無レ疑、亦無二一一一」

【悤】ソウ　東　別に忽に作る　匆は俗字

にはか（遽）いそぐ、あわてる。
【悤遽】ソウキョあわてる。南史「至レ是朝士動遽、寘爲二一一一」＝倉卒。
【悤悤】ソウソウ　○あわてる（急遽）貌。晉書、王鑑之傳「無故一一、先自狼狽」○あきらか（明）呂覽「一一乎其心之堅固也」
【悤卒】ソウソツ　いそがし。歐陽修文「即欲下爲二一書一以貫中多事一一、未レ能也」

【悌】テイ　霽

○兄弟の仲よし（善兄弟）「友一」「不孝不一」○善く兄長に順ひつかへる、弟が兄を敬愛する「孝一」○和ぎよろこぶ「愷一」
【悌友】テイユウ　兄弟なか、又は長幼間の情あつくむつまし。韓愈、元和聖德詩序「堯帝、大孝烝烝一一」＝弟友・篤友。

【悋】

習（口部七畫）の古字。漢書、刑法志「聖人既制二明一之性一」

【悁】ベン　霰

○おそる（怖）○忙に同じ。
【悁然】ベンゼンおそれる貌。列、楊朱「子產一一無二以應一」

【悗】バン　ボン・モン　阮　願

○まどふ（惑）○わすれる（廢忘）一說、匹ヲトコなき貌。莊、大宗師「一乎忘二其言一」

【悖】ホツ　ハイ　月　隊　通音ハイ

○もとる、みだる（亂）さかふ（逆）道理に背き逆ふ「狂一」○盛んに興る貌。勃に通ず。○もとる「凶一」
同訓異義　悖・戾・拂・很○悖は逆亂也、つよくさからふ義、悖に作る、同じ。○戾は和の反、戾氣は、和氣

の反なり、ねぢ曲る意。悖戻・倒戻・乖戻と用ふ。盩に作る、同じ。〇誖は違也、戻也、うらはらにさからひもとること、悖よりは輕し。〇悞は人のいふことを聽かず、あらそふなり、ねぢけて意地わろきなり、狠は俗字。史、項羽紀「貪如レ狼、很如レ羊」孟子「好レ勇鬬很、以危二父母一」

【悖惡】ハイアク　もとりてよからず。詩經、鴻「有二一一之色一」

【悖狂】ハイキャウ　もとりくるふ。易林「昭公失レ常、季女一一」

【悖逆】ハイギャク　もとりそむく。史、樂書「有二一一詐僞之心一」＝悖亂。

【悖戻】ハイレイ　さからひてあらそふ。莊子「盲行之情、一二于胸中一也」

【悖道】ハイダウ　正しき道にもとる。書經「實悖二天道一」

【悖德】ハイトク　德義にそむきもとる。孝經「不レ愛二其親一而愛二他人一者、謂二之一一一」

【悖反】ハイハン　もとりそむく。＝悖戻。

【悖謾】ハイマン　もとりあやまる。漢志、論「龍傳「毀二龍逢老一一一」

【悖亂】ハイラン　もとりみだる。漢書、五行志「一一之氣、近二犬豕之禍一也」

【悖戻】ハイレイ　さからひもとる。易林「明人俱醉、相與一一」＝悖戻。

【悖暴】ハイバク　禮法にそむきもとる。孝經「不レ敬二其親一而敬二他人一者、謂二之一一一」

【悖亂】ハイラン　盛んに興る貌。左、莊十一「其興也一一」＝勃焉。

【悖出悖入】ハイシュツハイニフ　道にもとりたる事を爲さば、また道にもとりたる報を受く。大學「言悖而出者、亦悖而入、貨悖而入者、亦悖而出」

【悞】リン　圓　悋は俗字

しわし、やぶさか「貪一」「愛一」＝吝。をしむ（慳）家語、致思「甚一於財」いやし（鄙）

【悞氣】リンキ　圓やきもち。色情に關するねたみ（嫉妬）

【悞想】リンサウ　やぶさかなるおもひ。法苑珠林「非道求二道心一無二一一一」

【恨】㊀リャウ・ラウ　㊁ラウ　表ほ

㊀かなしむ（悲）〇いたむ（恨）〇かへりみる、いつくしむ（眷）㊁憾一は志を得ざる貌。

【悢悢】リャウリャウ　〇かなしみいたむ貌。蘇武詩「一一不レ能レ辭」＝惆悵。〇いつくしみかへりみる貌。後漢書、陳蕃傳「天之於レ漢、一一不レ已」＝眷眷。

八畫

【惡】㊀アク　㊁ヲ　㊂ヲ　表悪　通

㊀あし、わろし。善の反對「邪一」「姦一」「罪一」「凶一」〇あやまち（過）論、公冶長「不念舊一」〇みにくし（醜陋）美の反對。史、仲尼弟子傳「潛室滅明、狀貌甚一」〇きず（瑕）〇あらし、そまつ（粗）「一食」「粗一」〇あしき行爲。又、其の人。〇あか（垢穢）よごれ、こみ（塵埃）左、成六「以流其一」〇くそ（糞）㊁にくむ、にくし（疾・憎）愛の反對「疾一」「怨一」論、里仁「惟仁者能好レ人、能一レ人」〇いむ（忌）そしる（譏）わるく言ふ。鄒陽、獄中上書「蘇秦相レ燕、人レ之於レ燕王」〇はづ（恥）孟、公孫丑「羞一之心」㊂ああ、歎息の辭。孟、公孫丑「一是何言也」〇いづくんぞ、なんぞ、どうして（何）論、里仁「一乎成レ名」〇諺に同じ。＝池は卽ち諺。

【同訓異義】アク　惡・嗚呼・烏乎・嗟・吁等の別は嗚（口部十畫）の條を見よ。〇ヲ惡・醜・凶〇惡は善の反なり、美惡・醜惡と用ふ。又にくむと訓むときは、音ヲなり。〇醜は形の見苦しき義、好または美の反なり。〇惡は心のあしきなり。邪惡と連用す。〇凶は吉の反なり、いまいましきなり。〇ヲ惡・醜・安は焉（火部七畫）の條を見よ。

〇ヲ惡・憎・疾・嫉・妬・媚〇惡は好めの反、甚しくいやがるなり。大學「如レ惡二惡臭一、如レ好二好色一」〇憎は愛の反、小づらにくきなり、歐陽修に憎二蒼蠅一賦あり。〇疾は嫉と通ず、ねたむとも訓む、りんきしてにくむなり。史記「士無二賢不肖一入レ朝見レ嫉」〇妬・媚の二字は、嫉と同じ、ねたむと訓む、りんきする「婦妬レ夫曰レ妬、夫婦レ婦曰レ媚」また「客レ賢曰レ嫉、客レ色曰レ妬」と註すれども、三字互に通用す。

〇ヲ惡・陋・醜〇惡は美の反、醜陋なり。史記「潛室滅明、狀貌甚惡」〇陋は下品なる義。唐書「盧杞貌陋心險」〇醜は貌の極めてみにくきなり。漢書「形醜醜惡」

【惡槭】アクセキ　けがれ。經記「又水受二一上、故有二朽腐之氣一」

【惡意】アクイ　〇あしきかんがへ。〇あしき方の見かた「一一に解釋する」

【惡衣惡食】アクイアクシキ　そまつなるきものと、たべもの。論、里仁「士志二於道一、而恥レ一一者、未レ足二與議一也」

【惡運】アクウン　〇あしきまはりあはせ。漢書、昌邑哀王傳「舘一一一過二亂原一」〇圓惡事を爲すに都合よき運命「一一强し」

【惡疫】アクエキ　あしきはやり病。流行病。

【惡緣】アクエン ○佛あしき夫婦の縁。又、雙方に不利と知りつつ思ひ切られぬ縁。○佛惡業を助けて惡果を招かしめるもの。縁は資助する義。

【惡行】アクギョウ あしきおこなひ。詩、鄘風、桑中、傳「言三世族在位有二惡一行一」

【惡客】アクカク 酒を飲まざる人、下戸。轉じて大酒家にもいふ。駱賓王檄「元結以不レ飲者一爲二一惡一、後以二痛飲者一爲二一一一」

【惡感】アクカン あしきこころもち。

【惡漢】アクカン わるもの、あしきをとこ。漢は男。輕薄錄「今人謂二眇丈夫一爲二惡子一」＝無賴漢。

【惡鬼】アクキ たたりをなす惡しき鬼。史、始皇紀「以辟二一一一」＝惡魔。

【惡戲】アクギ いたづら、わるふざけ。

【惡金】アクキン 質のあしき金屬。齊語「一一以鑄二鉏夷斤斸一」

【惡逆】アクギャク ○心あしく道にさかふ。漢書、師丹傳「一一暴著」○古の刑の名。八逆の一、君主にあだする罪。○舊刑律十惡罪の一、父母又祖父母を毆打し又は謀殺せし罪。

【惡貨】アクカ 質の粗惡なる貨幣。

【惡語】アクゴ しゃべりてかまびすし。王安石詩「吾兒亦一一、戮レ力事二耕捆一」

【惡月】アクゲツ 陰曆五月の稱。荊楚歲時記「五月俗稱二一一一多レ禁」＝毒月。

【惡業】アクゴウ ○あしきわざ、不正なる所業。史、貨殖傳「博戲一一也」○アクギョウ佛佛道に背きし過去の惡事。又、其の惡事のむくい。大藏法數「一切衆生造二作一一」＝惡劫。

【惡言】アクゲン わるくち、罵言のことば。史、仲尼弟子傳「孔子曰、自二吾得一レ由、一一不レ聞二于耳一」＝惡口。

【惡語】アクゴ わるくち。蘇軾詩「門前一一誰傳去、醉後狂歌自不レ知」＝惡言。

【惡口】アクコウ ○わるくち。漢書、王章傳「一一不信」○佛十惡の一、わる口を言ひて他を惡恨せしむる。

【惡徒】アクト 佛わるもの。＝惡漢。

【惡歲】アクサイ きゝんの年。唐庚詩「現田無二一一一」＝凶年・荒年。

【惡相】アクソウ みにくきにんさう。惡しき人相。

【惡漬】アクシ あしきてきもの。酉陽雜俎「主治二一一」

【惡草具】アクソウグ 野菜ばかり用ひたる粗末なる料理。史、陳丞相世家「以二一一一迎二楚使一」

【惡策】アクサク あしきはかりごと。＝惡計。

【惡札】アクサツ みにくきかきもの、己の手蹟を謙していふ。益公題跋「以上一一、皆予筆也」

【惡子】アクシ 惡事をなす少年。漢書、尹賞傳「雜二羣長安中輕薄少年一一」＝惡少年。

【惡詩】アクシ つたなき詩。唐國史補「淮南邇二崔叔清詩百篇一、德宗曰、此一一何用レ進」

【惡臭】アクシュウ あしきにほひ。大學「如レ惡二一一一、如レ好二好色一」

【惡事行二千里一】アクジセンリヲユク あしき事はすぐ世間に知れ渡る。北夢瑣言「好事不レ出レ門、——」事文類聚には行を傳に作る。

【惡疾】アクシツ ○たちのあしきやまひ。大戴禮、本命「婦有二七去一（中略）有二一一一一去」○らひ病（癩）＝天刑病。

【惡習】アクシュウ あしきならはし。＝惡癖。

【惡心】アクシン あしきこころ。晉語「忘善則一一生」＝惡念。

【惡酒】アクシュ あしき酒。蘇軾詩「一一如二惡人一、相攻劇二刀箭一」

【惡趣】アクシュ 佛あしき行をしたる衆生の墮つる場所。元量壽經「損二就五一一」＝惡道。

【惡所】アクショ 圖○けはしきところ。○よからぬ場所。くるわ、いろざと。＝花街・遊里・遊郭。

【惡鬼】アクキ 佛惡人が死後に墮ちて苦む所。法苑珠林「復何因緣不レ生二一一」＝惡道。

【惡食】アクショク そまつなる食物。史、項羽紀「以二一一食二項王使者一」

【惡水】アクスイ 飲みて害ある水。北史「天雨二一一、其仁レ我乎」

【惡性】アクセイ ○心のあしき生れつき。世說「便殺二一一者一」○アクショウ佛あしきたち。

【惡摩】アクマ よからぬうはさ。わるくち。孟、公孫丑「一一至必反レ之」

【惡少】アクショウ 惡少年の略。荀、修身「無二廉恥一而嗜二乎飲食一、可レ謂二一一者一矣」

【惡舌】アクゼツ わるくち。孟浪說「由來一一關難レ進」＝惡口・惡言。

【惡戲】アクギ はげしくむやみにたたかふ。演義三國誌「請二韓遂一曰、吾見二一一者、莫レ如二許褚、眞虎將也」

【惡緣】アクエン ○質のあしきぜに。隋書、趙綽傳「時上禁レ行二一一一」○佛不正のかね。「一一身に著かず」

【惡俗】アクゾク あしきならはし。＝惡習。

【惡道】アクドウ 佛あしき事をしたる衆生の墮つる場所。卽ち、地獄・餓鬼・畜生・修羅の四惡道。大藏法數「一切衆生、造二作惡業一、而生二其處一、故名二一一一也」

【惡黨】アクトウ わるもののなかま（東觀漢記）＝惡徒。

【惡女】アクジョ ○形のみにくきをんな。史、外戚傳「美女入レ室、一一之仇也」＝醜女。○心の惡しき女、毒婦。

【惡徵】アクチョウ あしきしるし。吉徵の反對。左傳、疏「皆以二一一爲レ辭」

【惡徒】アクト わるものども。史、通二夫子之敎一、矢二聖人之旨一、嫉二邪一一、疑二慢後學一」＝凶徒。

【惡德】アクトク あしき行爲。晉經「許岡レ及二一一、惟其貴」

【惡人】アクニン ○心のあしき人、わる者。○顏のみにくき人。孟、離婁「善

レ有ニ一一、齋戒沐浴、則可ニ以祀ニ上帝一」

【惡念】アクネン　悪心に同じ。

【惡馬】バクバ　たちのあしきうま。北史「殿有ニ一一、神武不レ加ニ鞭策一」

【惡口】アクコウ　心あしきばば。

【惡罵】バクバ　口あしくののしる。顏子家文「一一無ニ復高卑一」

【惡筆】アクヒツ　文字がまづし、描き文字。

【惡病】アクビヤウ　たちのあしきやまひ。＝惡疾。

【惡風】アクフウ　あしきならはし。＝惡習。

【惡習】アクシフ　あしきくせ。＝惡習。

【惡木】アクボク　あしき雑木。管子「夫士懷ニ耿介之心一、不レ蔭ニ一一之枝一」

【惡魔】アクマ　人にわざはひをなす鬼。法苑珠林「一一波旬、將ニ八十億衆一、欲ニ來壞ニ佛」

【惡夢】アクム　あしきゆめ。吉夢の反對。

【惡論】アクロン　荒謬新論「連ニ三夜一有ニ一一一」

【惡名】アクメイ　よからぬうはさ。左、文十八「世濟ニ其凶一增ニ其一一一」＝惡聲。

【惡疾】アクシツ　わるく手あらし、辣はびりびりと辛き疾。

【惡戾】アクレイ　心あしくして道にそむく。史、齊悼惠王世家「驕約一一、虎而冠者也」

【惡寒】カン　病氣の時、ぞくぞくと感ずるさむけ「發熱一一」

【惡辱】アクジョク　恥を受くるをにくむ。孟子「今一一而居ニ不仁一」

【惡阻】ソ　つはり、婦人姙娠の初期に生ずる病、むねわるく嘔氣を催し、酸味を嗜む。回春「一一惡心、阻ニ其食飲一也」

【惟】キ　支

○これ（繫）書、禹貢「濟河一一兗州」＝伊・是。○ただ、ひとり（唯・獨）それのみ。○おもんみる（思）おもんばかる（謀）

同訓異字　惟・思・憶・懷・意・念・想等の訓は思（心部五畫）の條を見よ。

○惟・之・此・是・斯・伊等の訓は之（ノ部三畫）の條を見よ。

○惟・唯・只・止・但・徒・第・當等の訓は唯（口部八畫）の條を見よ。

【惟惟】イヰ　諾する貌。又、諾することば。荀、大略「一一而已者、諛也」＝唯唯。

【惟一】イツ　ただこれ一つ。書、大禹謨「惟精一一、允執ニ厥中一」李嶠賦「遇ニ一一之德一、容ニ吹萬之性一」＝專一。

【惟酒可ニ以忘ニ憂一】タダサケモツテウレヒヲワスルベシ　ただ酒を飲めば胸中の憂悶を忘るることを得る。晉書、顧榮傳「恆縱ニ酒酣暢一、謂ニ次人張翰一曰、——、但無レ如ニ作レ病何一耳」

【惟命是聽】コレメイニシタガフ　何事もただ仰せのままに從はん。左、成二「貢婦人致ニ晉師一曰、若其不幸、敢不ニ——一」

【惟利是視】コレリヲミル　義理の有無を問はず、只利害如何を是れ視るのみ。左、成十三「秦與レ楚盟曰、余雖ニ與レ晉出入一、余——」

【悻】カウ　庚

○一一はもとりいかる（很怒）孟、公孫丑「一一然見ニ於其面一」○通じて婞（女部八畫）に作る。

【悻直】カウチク　心せまく人にさからひて正直なり。悻一に婞に作る。屈原、離騷「一一以忘レ身」

【悸】キ　寘

○をののく、おどろきおそる（驚懼）「惶一」「恐一」「驚一」「愛一」○むなさわぎ、心臟の鼓動「心一」「動一」○帶の下がり垂るる貌。詩、衞風「垂ニ帶一兮」

同訓異字　悸・恐・懼・畏・怖・惶等の訓は恐（心部六畫）の條を見よ。

【悸悸】キキ　おそれてむなさわぎする貌。杜甫、策問「外則一一然求レ賢如レ不レ及」

【悸病】ビヤウ　むなさわぎするやまひ。南史、何偃傳「偃不ニ自安一、遂發ニ一一（中略）備加ニ醫療一、乃得レ差」

【悸慄】キリツ　わななきおそれる。梅堯臣詩「至險可ニ一一一」＝恐懼。

【甚】キ　寢

○そこなふ（害）○いむ（忌）左、哀二七「趙婁子由是一ニ智伯一」○をしふ（敎）左、宣十二「楚人一ニ之脫扃」

【甚閉】カン　そこなひへだてる。左、定四「管蔡啓レ商、一ニ王室一」

【愉】キン　文　コン　通じて欣・訢に作る

よろこぶ、よろこび（喜）

【惧】ケン　霰

懼（心部十八畫）の略字。

【惠】エ　霽

○めぐむ、いつくしむ、恩を施す、めぐみ（仁愛）「仁一」「慈一」「愛一」「嘉一」○なさけ（恩）「恩一」「德一」論、里人「小人懷一」○したがふ（順）普語「一ニ於父母一」○たまふ。又、たまもの（賜）○かざる（飾）○みつめほこ（三隅矛）＝鑓。○さとし。慧に通ず「智一」

【惠愛】アイ　めぐみかはゆがる。杜甫詩「一一南翁悅、餘波及ニ老身一」

【惠遲】アイチ　あつきめぐみ。潘岳賦「承ニ慶雲之光貺一兮、荷ニ寵子之一一一」

【惠賁】アイヒ　めぐみそだてる。後漢書、左雄傳「革ニ所ニ以崇ニ惠明一レ理、一ニ

一元元一也」

【惠雨】ケイウ　よきうるほひの雨。又、君のめぐみのあまねきに喩ふ。

【惠音】ケイオン　めぐみのおとづれ。他人の手紙を敬ひていふ。陸機詩「款誠寄二一一」

【惠肯】ケイコウ　惠然を見よ。人を招請するを仰覗ニ一一」といふ。

【惠康】ケイカウ　めぐみてやすんずる。書、文侯之命「柔ニ遠能ニ邇、一ニ小民ニ」

【惠訓】ケイクン　めぐみをしへる。又、いつくしみある教。左傳「一一不ニ倦者、叔向在焉」＝恩訓。

【惠化】ケイクワ　めぐみを施して民を教化する、恩惠教化。晉書「修ニ德政ニ布ニ一一ニ」＝德化。

【惠和】ケイクワ　○したがひやはらぐ。國語「國之將ニ興、其君齊明衷正、精潔一一」○やはらぎあたたか。范成大詩「春風一一如ニ主人ニ」

【惠顧】ケイコ　めぐみをかけてかへりみる。吳志「君既一一、何以佐ニ之」＝省顧。

【惠施】ケイシ　○めぐみほどこす。○戰國時代の學者の名、莊周と友たり。莊、天下「一一多方、其書五車」

【惠賜】ケイシ　めぐみたまふ。陣子昂文「一ニ一醫物ニ過ニ越典章ニ」

【惠然】ケイゼン　いつくしみ。又、いつくしむ。國語「敬ニ友ニ據ニ而一ニ一ニ慈ニ」

【惠恤】ケイジュツ　めぐみあはれむ。後漢書、祭祀志「恭ニ肅神祇ニ一ニ一耆老ニ」

【惠澤】ケイタク　めぐみ。汝南先賢傳「應頓爲ニ東郡太守ニ一一治著」＝恩惠・恩澤。

【惠書】ケイショ　めぐみとぶらふ。又、人よりとぶらはれしを謝する敬語。國語「一ニ一七臣ニ」

【惠投】ケイトウ　めぐみ與ふ。又、人よりの贈物を敬ひていふ。＝惠與。

【惠念】ケイネン　めぐみのこころ。鮑光義詩「一一及ニ滄浪ニ」＝恩念。

【惠風】ケイフウ　○めぐみのあるはるかぜ。王羲之、蘭亭集序「天朗氣清、一一和暢」○めぐみのかぜ、君のめぐみに喩ふ。張衡、東京賦「一一光被」

【惠與】ケイヨ　めぐみあたふ。＝惠投・惠賜。

【惠來】ケイライ　惠然を見よ。

【惠賚】ケイライ　めぐみたまふ。宋書「光被ニ蒼生ニ、家戸霑ニ一一ニ」＝惠賜。

【惠連】ケイレン　人名、姓は謝、族兄靈運の爲めに稱賞せらる、故に稱じて愛弟の義とす。李白文「羣季俊秀、皆爲ニ一一ニ」

【惠方】エハウ　國曆法にて歲德神（トシノカミ）の在る方角の稱、此の方角に向ひて事を爲せば吉なりといひ傳ふ。あきのかた。

【惠比須】エビス　國七福神の一、多く商家にて祭る福の神。＝蛭子神・衣比須

【惓】ケン　先

○つつしむ（謹）○ねんごろ（懇）しんせつ。○倦（人部八畫）に通ず。

【惓惓】ケンケン　つつしみねんごろなる貌。誠至なり。漢書、劉向傳「一一之義也」

【悾】㊀コウ　㊁コウ　董　東

㊀まこと（誠慤）○一一はおろか（無知）なる貌。論、泰伯「一一而不ニ信ニ」㊁一悾は志を得ざる貌。

【悾款】コウクワン　まこと（誠）任昉文「實有ニ悾誠ニ、不ニ任ニ一一ニ」

【惑】コク　ヲク　職

通じて或に作る

○まよふ（迷）まどひ、まどふ「迷一」「昏一」「憂一」「眩一」○まよはす、まどはす。○みだる（亂）「狂一」うたがふ（疑）「疑一」論、爲政「四十而不一」（此語に本づきて四十歲を不惑（フワク）といふ）○熒一は星の名。

【惑志】ワクシ　心をまどはせる。又、まどはされし心、まどひ。論、憲問「夫子固有ニ一ニ於公伯寮ニ」＝疑心。

【惑亂】ワクラン　人をまどはすわざ。韓非子「恍惚之言、恬淡之學、天下之一一也」＝妖術。

【惑星】ワクセイ　一處に定住せずして常に位置を變ふるほし。恆星の對。＝遊星・行星。

【惑溺】ワクデキ　まよひおぼれる。迷ひて惡道に陷る。世說に一一篇あり。

【惑亂】ワクラン　まどはしみだる。史、始皇紀「今賭生、不ニ師ニ今而學ニ古、以非ニ當世ニ、一ニ黔首ニ」

【惑惑】ワクワク　うたがひまどふ貌。漢書、賈誼傳「衆人一一、好惡積ニ意」

【惚】コツ　月

○思ひこんで心がうっとりする。ほれる、ぼける「恍一」○かすか、ほのか、奥深くして測られず、微妙極致。韓非、忠孝「恍一無法之言也」

【惚恍】コツクワウ　うっとりする貌。注言「神

心ー」＝昏惘・惘惑・惘惚。

【惛】 ㊀コン ㊁コン ㊂ボン　通じて惛に作る　元　凾　凾

㊀くらし（心不明了）昏に通ず。㊁ほける、迷ひ忘れる。㊂もだゆ（悶）呂覽、本生「下爲匹夫而不ー」＝悶。

【惛惘】コンクヮウ　くらくしてぼんやりする。梁書「識慮ー一、久絶二人世一」

【惛惛】コンコン　ぼけてわすれる貌。管子、四時「五漫漫、六ー一、執知之哉」

【惛然】コンゼン　心くらし、明かならざる貌。惛一昔ビン、鈔韻。莊、知北遊「ー一若亡而存」

【惛眊】コンバウ　目がくらむ。上官儀文「風雨之疾、ー一日甚」＝昏眊。

【惛忘】コンバウ　亂れて明かならず。曹植賦「競ー一以營私、害予身之奉公」

【惛惛】コンコン　心がくらく亂るる貌。惛は憒に同じ。南史、謝莊傳「患眼五月來、便不二復夜坐一、惟閉ノ燈避二風日一、晝夜ー一」

【惴】 シャウ　養　愀に同じ

ー倪は意を失ひて悅ばざる貌。潘岳賦「超ー倪以慟懷」

【惴然】ゼンシャウ　失意の貌。莊、則陽「客出、而君ー一若ノ有ノ亡也」＝惴惧。

【悴】 スキ　寘　通じて倅・顇に作る、悴は俗字

〇うれゝ（憂）かじく（瘦衰）〇やつれる。屈原、漁父辭「顔色憔ー一」〇つかれる（疲弊）孟、公孫丑「憔ー於虐政一」〇關せがれ、己の子の謙稱（倅の誤用）

【悴瘁】スイスイ　やつれたるかほ。劉伶詩「陳ノ醜狀ニー一」

【悴陋】スイロウ　衰へていやし。衰弱微陋。鮑照文「緑臣ー一、可ノ傷可ノ哂」

【悴族】スイゾク　おちぶれたるいへすぢ。衰微せる氏族。江淹文「臣寒門ー一」

【悴薄】スイハク　おとろへてうすし。沈約詩「自顧羣ニー一、託意曜二虚閑一」＝衰薄。

【悴容】スイヨウ　やせ衰へたるかほかたち。謝靈運詩「朽貌改二緑色一ー一變二素顔一」

【情】 セイ　ジャウ　庚

〇心の物に感じて動くはたらき、性は心の本體、情は心の作用「性ー」「心ー」「高ー」「禮、禮運「何謂ノ人ー一喜怒哀懼愛惡欲、七者弗ノ學而能」なさけ、心理學にては知・意と竝立す「思ー」「多ー」「薄ー」「無ー」「交ー」〇人欲、欲望、利欲「私ー」〇まこと（實）まごころ「眞ー」論、子路「上好ノ信、則民莫敢不ノ用ー」〇事の實際「ー報」〇ことわり（條理）〇ありさま（狀態）〇あぢはひ、おもむき（趣味）「風ー」「一致」〇俗に男女の愛をいふ「一人」「一書」「春ー」「戀ー」〇まことに（信實）多く詩に用ふる助辭。〇孳ーは寢期を終ることを許さざる義。北史、李德林傳「奪ー起復」

【情愛】アイ　なさけをかけていつくしむ。宋書、何尚之傳「與二叔度母一ー一甚厚」

【情辭力屈】ジンジリキクツ　情實あらはれて勢力盡き、計の施す所なき義。史、淮陰侯傳「頓二兵燕壓城之下一ー一」

【情意】イセイ　〇こころ。人情意氣。吳均詩「君之ー一與ノ我離」〇心理學にて感情と意志との義。

【情殷】インセイ　心あつくさかんなり。舊唐書「慕容視ノ國、ー一撫ノ鏡」

【情懇】コンセイ　こころいかる。晉承傳、晉拳賦「或ー一而顔怡」

【情緒】ジョセイ　男女關係のゆかり、男女のちぎり。

【情歡】カンジャウ　男女の愛の情を述べしうた。戀歌・情詩。

【情交】カウジャウ　〇親情を以て交る。文心雕龍「ー一而雅俗異ノ勢」〇色情の上の交。

【情好】カウセイ　よしみ。蜀志、諸葛亮傳「ー一日密」

【情感】カンジャウ　情が物に感じてうごく。唐書、祖公謙傳「ー一于內一、安有ノ所ノ避」

【情誼】ギジャウ　よしみ、相互の好意。

【情偽】ギジャウ　誠と、いつはりと。易經「聖人立ノ象以盡ノ意、設ノ卦以盡ニー一ー」

【情況】ジャウキャウ　ありさま。＝狀況。

【情火】ジャウクヮ　感情のはげしきを火に喩へていふ。＝情熱。

【情腹】ジャウフク　こころもち。杜甫詩「老夫ー一惡」＝意緒。

【情欲】ジャウヨク　よしみ、ねんごろなる心。梁昭明太子文「功曹在二海陵一、與二淵明一ー一」

【情願】ジャウグヮン　まごころからのねがひ。顔延之、庭誥「施二其ー一一、庇二其衣食一」

【情況】ジャウキャウ　〇けしき、ありさま。〇感情と實景と。

【情語】ジャウゴ　なさけのこもれることば。梅堯臣詩「ー一既不ノ通、豈止勝九譯」

【情緻】ジャウチ　細心の狂ひ易く定まらざるを緻に譬へていふ「法苑珠林」＝意緻・心緻。

【情恨】ジャウコン　うらみ。援助文帝詩「妙工偏見ノ誣、無ノ由ニー一通一」

【情想】ジャウサウ　おもひ。楞嚴經「ー一銷ノ滯、不ノ飛不ノ墜」

【情操】ジャウサウ ○みさを、正しき心がけ。○心理學にて思考・推理等に伴ひて起る最も複雜なる感情、道德的・知的・美的の三種に分る。

【情史】ジャウシ 人情に關する事を敍したる書物、人情本。

【情死】ジャウシ 圓男女が合意の上相共に自殺する、しんぢゆう。

【情至】ジャウシ 交情の至り極る處。楊方詩「一一斷二金石一膠漆未レ爲レ牢」

【情事】ジャウジ いろごと、男女間の愛情に關する事。

【情思】ジャウシ ○こころもち、おもひ。○愛情のおもひ。

【情緒】ジャウショ 物をほしがるこころ。顧延之文「庶竭葫起、一一不レ禁」

【情實】ジャウジツ ○ありのままの事實。史、呂不韋傳「秦王下レ吏治、具得二一一一」○圓人情のかかりあひ、親しき間柄の關係。

【情人】ジャウジン ○ともだち、眞情を以て交はる人。○互に思ひ合ひし人、こひびと。

【情深】ジャウなさけふかし。許渾詩「旅游知二世薄一、貧別覺二一一一」

【情狀】ジャウジャウ ○情は心の內に動く者、狀は其の外に著る者。易經「精氣爲レ物、游魂爲レ變、是故知二鬼神之一一情一」○ありさま。宋史、理宗紀「安南一一叵レ測」○事情の生ぜし次第「一一酌量」‖情實。

【情癡】ジャウシ おもむき。擣靈品「綺羅解レ陣、所レ圖頗有二一一一」‖情致。

【情思】ジャウシ おもひやりてゆるす。晉書「人有レ不レ及、可二以レ一一一」

【情緒】ジャウショ ○心の動くこぐち、感情の發作。江淹賦「閨寂以思、一一留連」○心理學にてやや複雜なる感情、喜・怒・哀・樂・同情・嫉妬などの類。

【情性】ジャウセイ こころ。情は心の作用、性は心の本體。漢書、禮樂志「立二人倫一、正二一一一」

【情勢】ジャウセイ ありさま。事の情狀及趨勢。五代史「決レ勝料レ敵、決レ戰料レ情、一一既得、斷在レ不レ疑」‖情況。

【情素】ジャウソ 心の底の誠、まごころ。史、鄭陽傳「投二腹心一見二一一一」‖本心。

【情疏】ジャウソ こころがおろそか。禮記「一一而貌親」

【情態】ジャウタイ ありさま、こころざま。列子「備知二萬物一一一」‖情形。

【情知】ジャウチ 明かに知る。方言注「張旭詩、一一海上三年別、不レ寄二雲中一雁書」

【情致】ジャウチ おもむき。致は趣。世說「船上有レ詠レ詩、聲甚有二一一一」‖情趣。

【情天】ジャウテン 人の情愛の心。李賀詩「天若有レ情天亦老」に本づく。

【情田】ジャウデン 人情をいふ、情欲を生ずるを田地に喩へていふ。禮記「人情者、聖王之田也」に本づく。

【情投意合】ジャウトウイガフ 圓互に意氣の相投ずる義。‖情意投合。

【情熱】ジャウネツ 感情のはげしき力。‖情火。

【情報】ジャウホウ 事の實際のありさまの知らせ。

【情夫】ジャウフ いろをとこ、まぶ。‖情郎。

【情婦】ジャウフ いろをんな、いろ。

【情文俱ノ稱】ジャウブンとモニクノカナフ 人の行は禮文と相叶ふをたふとぶ。禮、三年問「三年之喪、何也、曰、稱レ情而立レ文、注「稱レ情而立レ文、稱二人之情輕重一而制二其禮一也」

【情文俱盡】ジャウブンとモニツクス 情意と文章と竝び盡くる。荀、禮論

【情弊】ジャウヘイ 情實によりて生ずる弊害、人情にひかされて生ずる害。

【情味】ジャウミ こころもち。人物志「著二乎形容一、見二乎聲色一、發二乎一一一」

【情欲】ジャウヨク ○男女の愛情、いろけ、色情。詩、關雎集傳「一一之感、無レ介二乎容儀一」‖情慾。○圓むさぼり執著する心、色欲・食欲・淫欲とを合せて四欲といふ。大藏法數「欲界衆生、多於二男女情愛之境一而起二貪欲一、故名二一一一」

【情慾】ジャウヨク 男女の愛情によりて生ずる私慾。‖情欲。

【情郎】ジャウラウ いろをとこ。韓偓詩「香中說却平生事、猶疑未レ滿一一意」‖情夫。

【情理】ジャウリ 人情と天理と。唐書「又有レ事率二於外一一一動二於內一」

【情累】ジャウルイ 人情のためにひかされる。情懷牽累の義。陳書、謝貞傳「弱見年甫六歲、名靖、字依仁、一一所レ不レ能レ忘、敢以爲レ託耳」‖情絆。

【情話】ジャウワ 人情のこもれる物語。陶潛、歸去來辭「悅二親戚之一一一」

【悽】セイ 齊

○いたむ(痛)「悽一」○かなしむ(悲)「一愴」

同訓異義 悽・悼・傷・痛・隱・憐の別は悼(本篇)の條を見よ。

【悽苦】セイク かなしみいたむ。世說「張驎酒後、獨歌甚一一」

【悽愴】セイサウ かなしみおそれる。梁武帝賦「踵二霜露一而一一」

【悽愴】セイサウ かなしみいたむ。悽は痛、愴は傷。禮、祭義「秋霜露既降、君子履之、必有二一一之心一、非二其寒之謂一也」‖悽愴・悲愴。悲感。

【悽慘】セイサン かなしみいたむ。武元衡詩「一一別魂驚」‖慘悽・慘愴。

【悽傷】セイシャウ かなしみいたむ。陸機文「獻二弦文一而一一」

【悽如】セイジョ いたましき貌。陸機詩「我思纏綿未レ紓、感時悼レ盛一一」‖悽愴・愴然。

【悽愴】セイサウ ○悲しむ貌。詩經「哀哀一

ー、懊ノ報ノ德也」○うるてやむ（饑病）貌（後漢書、周黃徐姜申屠傳）

【悽戚】セイ いたみうれふ。謝靈運詩「感ノ物方ーー」

【悽然】セイ かなしむ貌。‖悽愴・悽如。

【悽悼】セイ かなしみいたむ。沈約文「永言ーー、發憤經營」‖悲悼・哀悼。

【悽斷】セイ かなしみて絶えなんとする。陳子昂詩「送ノ君一爲ノ別、ーー故鄉情」

【悽愴】セイサウ かなしみなげく。蘇軾詩「西風送二落日一、萬感含ニーー一」

【悽惻】セイソク かなしみてうっとりする。世說「既自ーー、默曰、江山遼遠」

【悽戀】セイレン かなしみしたふ。沈炯文「誰二仰煙霞一伏增ニーー一」‖悲戀。

【悽愴】セイサウ かなしみいたむ。唐書、王勃詩「詞情ーー、當世稱ノ之」

【惜】セキ シャク 陌

○なしむ（愛・惜）しみったれ、をしみ「愛ー」「吝ー」○いたむ（痛）「悼ー」「痛ー」論、子罕「子謂顏淵曰ー乎」○あはれむ（憐）○むさぼる（貪）後漢書、光武紀「諸將貪ー財貨」

同訓異義 惜・吝・嗇・愛・慳の別は吝（口部四畫）の條を見よ。

【惜陰】セキイン 時間ををしむ。晉書、陶侃傳「大禹聖者、乃惜ニ寸陰一、至ニ于衆人一、當ノ惜ニ分陰一」

【惜花】セキクワ はなのちるををしむ。常袞詩「待ノ月水流急、ーノ風起頻」

【惜景】セキケイ 惜陰に同じ。王惲儒、祭ニ禹廟一文「輕ノ壁ーノ、既捨ニ冠履一」

【惜歲】セキサイ 年の暮れるををしむ。全唐詩話「ーノ我今盛、少年應ノ不ノ知」

【惜指失掌】セキシシツシャウ 小ををしみて大を失ふ喩。指（手部六畫）の條參看。

【惜春御史】セキシュンギョシ 唐代の官名、花を保護する事を掌る。玉塵集「穆宗宮中花開、以ニ畫頂帳一罩ニ之一、號曰ニ惜春一」春一に花に作る。

【惜愍】セキビン をしみかなしむ。‖惜閔。

【惜閔】セキビン をしみかなしむ。漢書、劉歆傳「此乃有識者之所ニーー一、士君子之所ニ嗟痛一也」

【惜費】セキヒ 費用ををしみて過分のおごりを爲さざる義。宋史「汝生二長富貴一、當ノ念ノーノー」

【惜別】セキベツ わかれををしむ、離別をなごりをしく思ふ。

【惜暮】セキボ 日の暮れゆくををしむ。趙孟頫賦「驚ーノー而悲叫、鳥辭ノ春而不ノ鳴」

【惜寸如ノ金】セキスンジョノゴトシ 輕く筆を下さざる義。古今名畫記「李成作ノ畫、ーーー」

【惜命】セキメイ いのちををしむ。後漢書「惜二盛ノ德之命一」

【惜吝】セキリン をしむ。史、越世家「輕去ノ之、非ノ所ニーーー一」‖鄙吝。

【悰】ソウ 冬

○たのしむ。たのしみ（樂）「歡ー」謝朓詩「戚戚苦無ー」○おもひ（情緒）「積ー」

【惣】ソウ 送

○いそがはし（悾慒）○國そうじて。すべて總と同じく用ふ。

【悼】タウ 號

○いたむ（傷）かなしみて心動く「傷ー」「嗟ー」「哀ー」「痛ー」「驚ー」（驚ー珍ーは天子のおなけき）詩、邶風「中心是ー」○あはれむ（憐惜）○おそる（懼）○幼者の稱。曲禮「七年曰ー、雖有ノ罪、不ノ加ノ刑」其の知なきを憐む義。

同訓異義 悼・傷・痛・悽・愴・慘・戚・憮・恤・惻・疼○悼は哀悼・傷悼・悲悼などと連用す、人の死をかなしむなり、傷の字に、憐愛の意を兼ぬ。○傷は憂思也、毀傷也と註す、傷心とは心をやぶり傷よ如く、つよく、いたみ哀むなり。司馬遷、報ニ任安一書「悲莫ノ痛ニ于傷ノ心」○痛は痛疼の義、身に痛ある如く、悲哀を感ずることの切なるなり。○憐は惻隱と連用す、心のそこより見て居られぬ程に痛むなり。○慘・愴の二字は共に心に悲しく、感じいたむなり。禮記「君子履ノ之、必有ニ慘愴之心一」○慘は哀れに痛むなり。李華、弔ニ古戰場一文「傷ノ心慘ノ目有ノ如ノ是耶」○戚はうれひ、いたむ義、憂戚・哀戚と用ふ。○憮は殘念に思ひてなげきいたむ、惆悵・悵然・悵恨と用ふ。○恤・惻の二字は、氣の毒に思ひていたむ、惻怛と連用す、怛は驚く意を兼ぬ。○疼は痛に同じ、いたみの終始やまざる義。

【悼歌】タウカ ○死亡せし人を惜み悲む意を述べたるうた。○送葬の時にうたふ歌。‖挽歌。

【悼懼】タウク いたみおそれる。韓非子「哀悼者流涕也、而ーー者民民也」

【悼喪】タウサウ 人の死をいたむ。左傳「小人恥ノ失ニ其君一、而ーノニ其親一」

【悼心】タウシン 心をいたましめる。左傳「孤與ニ其二三臣一、ーノ失ノ國」心の悲むによりて其の計畫を失ふ義。

【悼惜】タウセキ いたみをしむ。人の死をかなしむ。‖悼惜。

【悼悔】タウクワイ いたみおそれる。東方朔、七諫「心ーー而電思」

【悼痛】タウツウ かなしみいたむ。漢書、賈誼傳贊「爲ニ庸臣所ニ害、甚可ニーーー一」

【悼亡】タウバウ 妻の死せしをいたみかなしむ。晉の潘岳、妻死す、ーー詩三

首あり、世の傳誦する所と爲る、故に妻を喪ふを一一といふ。
【悼懼】タウク　いたみおそれる。漢書、王莽傳「夙夜一一、常恐ㇾ汗ニ孝聖朝一」

【悛】㊀ダン　㊁エン　㫖㫖
㊀やく（矯）心に憂ひてやける如き形容。詩、小雅「憂心如ㇾ一」㊁安し「恬一」

【惆】チウ　尤
○かなしむ（悲）うらみかなしむ。○一悵は志を失ひなげく貌。楚辭、九辯「一悵而自悲」‖悲哀。
【惆悵】チウチャウ　かなしみうらむ。白居易詩「一一春歸留不ㇾ得、紫藤花下漸黄昏」

【悵】チャウ　漾
○のぞみうらむ（望恨）楚辭、九辯「惆ニ兮而私自憐」失意にしてなげく。○いたむ（痛）うれふ。
同訓異字　悵・悼・傷・痛・陰・成等の別は悼（本書）の條を見よ。
【悵快】チャウクワイ　なげきうらむ。支遁詩「一一濁水際、幾忘映ニ清堰一」
【悵悔】チャウクワイ　うらみくやむ。易林「伯仲處ㇾ南、不ニ我肯顧一旺婦一一」
【悵恨】チャウコン　いたみうらむ。史、陳涉世家「一一久之曰、苟富貴無ニ相忘一」
【悵想】チャウサウ　なげきおもふ。葛長庚詩「幾箇黄昏勞ニ一一、幾竹皓月遙思憶」
【悵如】チャウコ　次條に同じ。杜甫詩「悵然結ㇾ好、心焉一一」
【悵然】チャウゼン　なげく貌。李白詩「停ㇾ梭一一憶ニ遠人一」
【悵恨】チャウコン　いたむ貌。失意にしてなげく貌。晉書、荀勗傳「及ㇾ爲ニ尚書令一、悲悵恨一一」‖憾恨。
【悵望】チャウバウ　なげきのぞむ。謝朓詩「停ㇾ驂我一一、緩ㇾ轡子爽留」
【悵想】チャウサウ　かなしみしたふ。宋祁詩「弭ㇾ節不ㇾ妨頻一一」
【悵惋】チャウワン　なげきかなしむ。晉書、許孜傳「孜一一不ㇾ已」

【惕】アキ　㫖　昼は古字
○うれふ（憂）「憂一」○おそる（懼）「憧一」「懸一」○うやまふ、つつしむ（敬）おそれつつしむ「一若」
【惕懼】テキク　おそれて泣きさけぶ。易經「一一莫夜、有ㇾ戎勿ㇾ恤」
【惕慴】テキセフ　おそれる。易、乾卦、疏「雖ㇾ至ニ於夕一惟懼一一一」
【惕想】テキサウ　引れひおもふ。李白詩「一一結ニ衡夢一、素心久已冥」
【惕若】テキジャク　おそれつつしむ貌。若は助辭。易、乾卦「君子終日乾乾、夕一一」
【惕慮】テキリョ　おそれる。沈遼詩「至尊所ニ慮佇一、守臣方一一」
【惕唱】テキシャウ　驚きおそれてあへぐ。樊衡文「原幼匿ㇾ章、一一窮ㇾ幅」‖惕息。
【惕息】テキソク　おそれてためいきする。司馬遷、報ニ任安ニ書「親ニ徒隷一則心一一」
【惕惕】テキテキ　○おそれる貌。楚語「豈不ㇾ使ニ諸侯之心一一焉」○愛する貌。詩經「心焉一一」

【惄】デキ　錫
○うれへ思ふ。一説にうゑる（飢）貌。詩、周南「一如調飢」調は朝。

【惙】㊀テツ　㊁テイ　鎋　屑
㊀うれふ。うれひ（憂）「憂一」○愈定まらず。○つかる（疲）㊁短氣の貌、きばやし。
【惙想】テツサウ　うれへかなしむ。後漢書、梁鴻傳「心一一分傷悴」‖忉怛。
【惙惙】テツテツ　心うれひて定まらざる貌。

【惠】惠（ヰ部十二畫）の古字。

【惇】㊀トン　㊁ジュン　眞　元
㊀あつし（厚篤）‖敦。○まこと（信）○すすめはげます（厚相勉）㊁あつし（厚）人情が厚し。‖醇。○まこと、まごころ（心實）
【惇誡】トンカイ　てあつくしてつつしむ。
【惇誨】トンクワイ　ねんごろに敎へる。醇醇として敎誨する「班固賦」
【惇悉】トンシツ　あつきめぐみ。國語「使ニ一一者敎之、使ニ文敏者道ㇾ之」
【惇信】トンシン　あつく信ずる。書經「一一明ㇾ義、崇德報ㇾ功」
【惇德】トントク　あつき德行。書、舜典「一一允元」

【惘】バウ　マウ　養　通じて罔に作る
○あわて（迫遽）る貌。○意を失ふ貌。茫然として自失する貌、うっとりとする「悵一」
【惘然】バウゼン　志を失ひてぼんやりする貌。江淹詩「酒至情轉薄、遇ㇾ境遥一一」‖罔然・惆惘。
【惘惘】バウバウ　○志を失ひてうっとりする貌。韓愈、送ニ殷員外使ニ回鶻一序「出

ノ門ニ―有二離別可ノ憐之色一」‖閨閤。○志を失ひてあわてる貌。楚辭、九章「超ニ―而遠行」

【悲】　支

○かなしむ、物に感じてあはれに思ふ。詩、豳風「女心傷ニ―」なげきいたむ(痛)○かなし、かなしみ。○顧み念ふ。漢書、高帝紀「游子ノ故郷ニ○憐あはれみ、なさけ「慈ニ―」「大慈大ニ―の觀世音」

同訓異義　悲・哀○悲は喜の反、痛なり。又、有ノ壓無ノ誤曰ノ悲と註す。楚辭「離騷ノ長、歎之則悲」○哀は樂の反、あはれがりて深くかなしむなり、哀悼と用ふ、哀はいたみの聲にあらはるるなり、悼はいたみの心に存するなり、哭聲哀哀、狼聲哀の如し。

【悲哀】ヒアイ　かなしむ、かなしみ。史、五帝紀「百姓ニ―」

【悲運】ヒウン　かなしむべきはりあはせ、不仕合なる運命。‖非運・不運・惡運。

【悲笳】ヒカ　軍中にて吹く樂器の名、聲悲壯なるが故、ひちりき。杜甫詩「―一數聲動」‖胡笳。

【悲歌】ヒカ　かなしみて歌ふ。古辭「―可ニ以當ノ泣、遠望可ニ以當ノ歸」

【悲歎慷慨】ヒタンコウガイ　哀れげにうたひなげく。伉は一に慷に作る。史、項羽紀「項王乃―、自爲ノ詩」

【悲悼】ヒトウ　かなしみなげく。王戎之文「何能不ニ痛ノ心ニ―一也」‖憂慟。

【悲感】ヒカン　かなしみなげく。隋書、李安傳、獻歌ニ―、不ノ能ニ自勝ニ」

【悲喜】ヒキ　かなしみと、よろこびと。

【悲喜交至】ヒキコモモタラス　かなしみと喜びとが同時に心に生ずる。

【悲泣】ヒキフ　かなしみなく。後漢書「我俗父母死聴ニ―一、皆騎馬歌呼至」‖悲哭。

【悲境】ヒキヤウ　かなしむべき境遇。

【悲響】ヒキヤウ　かなしきひびき、悲哀なる聲調の音樂。魏文帝詩「絃歌發ニ中流ニ―一有ニ餘音ニ」‖悲曲。

【悲曲】ヒキヨク　かなしく感ずる音曲。

【悲苦】ヒク　かなしみくるしむ。樂歌詩「―一愁ニ我心ニ」

【悲悔】ヒクイ　かなしみくやむ。白居易詩「撑ノ之多ニ慨慷ニ失ノ之又―一」

【悲慨】ヒガイ　かなしきおもひ、かなしみおもふ。劉禎詩「秋日多ニ―一」

【悲願】ヒグワン　慈悲のねがひ。黃庭堅詩「偶然宴坐千百劫、神力―一俱無窮」

【悲歡】ヒクワン　かなしみと、よろこびと。范成大詩「異鄉風物雜ニ―一」‖悲喜。

【悲觀】ヒクワン　哲學にて世事をすべてかなしむべきものと觀る説。樂觀の對。‖厭世觀。

【悲劇】ヒゲキ　世間の悲哀なる情態を筋書とせしばる。喜劇の對。轉じて、かなしむべき世間の出來事。

【悲泣】ヒキフ　かなしくはげし。中論「聲ニ牛角一而歌、歌聲―一」

【悲絃】ヒゲン　かなしげなる絃の音。曹植賦「仰ニ清風一以歎息、寄ニ予思于―一」‖悲絲。

【悲谷】ヒコク　太陽の經過するといふ四南方に在る谷の地、甚だ深くして人をして悲ましむる故。淮南子「日至ニ於―一、是謂ニ鍾時ニ」

【悲慟】ヒコウ　かなしみうらむ。漢書、刑法志「不ノ率ノ教誡、父子―一」

【悲嗟】ヒサ　かなしみなげく。孟郊詩「向ノ物空ニ―一」‖悲歎。

【悲摧】ヒサイ　かなしみて氣がくじける。焦仲卿妻詩「兒實無ニ罪過一、阿母大―一」

【悲壯】ヒサウ　あはれげなる中に意氣さかんなり。後漢書、禰衡傳「聲節―一、聽者莫ノ不ニ感慨ニ」

【悲酸】ヒサン　かなしみいたむ。愴はいたむ。白居易詩「追思多ニ―一」‖悲傷。

【悲慘】ヒサン　かなしみいたむ、慘はいたまし。魏明帝、樂府「―一傷ニ人情ニ」‖慘悽・悲酸。

【悲酸】ヒサン　かなしくつらし、かなしく傷まし。黃濬詩「弔ノ古多ニ―一」‖凄酸。

【悲絲】ヒシ　かなしげなる琴の音。杜甫詩「―一與ニ急管一、感激異ニ天眞一」

【悲秋】ヒシウ　もののあはれを感ずるあき。楚辭「悲哉秋之爲ノ氣也」劉逸詩「閒庭歎ノ秋正―一」

【悲愁】ヒシウ　かなしみうれふ。李白、大鵬賦」‖悲感。

【悲心】ヒシン　かなしむ心。謝尹子「有ニ―一、則聲慷慨然」

【悲辛】ヒシン　つらきかなしみ。李白詩「力盡功不ノ贖、千載爲ニ―一」‖悲酸。

【悲傷】ヒシヤウ　かなしみいたむ。杜甫詩「不ノ須吹ニ急管一、衰老易ニ―一」‖傷悲・悲痛。

【悲悶】ヒモン　かなしみいたむ。後漢書、馮衍傳「不ニ敢顯ニ其―一」‖哀感、悲愁。

【悲惻】ヒソク　かなしみいたむ。梁武帝文「奄然永逝、倍用ニ―一」‖悲傷。

【悲悼】ヒタウ　人の死をかなしみいたむ。蔡邕文「降年不ノ永、民斯ニ―一」‖哀悼・悲痛。

【悲歎】ヒタン　かなしみなげく。曹植詩「―一有ニ餘哀一」

【悲笳】ヒカ　かなしげなるちくの音。陶潛詩「漸離擊ニ―一、宋意唱ニ高聲一」

【悲痛】ヒツウ　かなしみいたむ。‖悲傷。

【悲嗆】ヒソウ　○すきまじくなく、鳴く聲の淒慘なる喩。韓愈詩「誰云蜀虎悲、中路正ニ―一」○かなしみなく。李白詩「金紅青巖照ニ―一」‖悲泣。

【悲調】ひちょう　かなしげなる音曲。謝靈運、山居賦「悼二琵琶之一一、慎二伶倫之哀節一」＝悲曲・悲聲。

【悲田】ひでん　圖悲は慈悲、貧困者を憐む義、八福田の一。田とは其の效果を收むるを田の收穫あるに比していふ。通俗編「釋典以下供二父母一田上爲二恩田一、供レ佛爲二敬田一、施二貧窮一爲二悲一、後世謂二養濟院一曰二悲田院一取レ此」

【悲慙】ひざん　かなしみいかる。陸游詩「亦知此老憤未レ平、萬段爭誰泄二一一」＝悲憤。

【悲報】ひほう　かなしむべきしらせ。＝凶報。

【悲風】ひふう　○ものさびしげに吹くかぜ。李陵、答二蘇武一書「但聞二一一滿レ條之聲一」○秋の風。高適詩「寂寞向二秋草一、一一千里來」

【悲憤】ひふん　かなしみいきどほる。後漢書、蔡琰傳「道懷二一一一、作二詩二章一」

【悲鳴】ひめい　かなしみなく、かなしげなるなきごゑ。李陵、答二蘇武一書「胡笳互動、牧馬二一一」

【悲涙】ひるい　かなしみもだゆ。居喪、號徹傷レ哀、捌之流涕」＝悲嘆。

【悲嘆】ひたん　かなしみと、たのしみと。淮南子「一一者德之邪也」

【悲係】ひけい　幹器用築の本名。玉芝堂談薈「一一事築本名二悲築一、出二於胡中一、其聲悲、胡人吹以驕レ馬、一名鼓レ管、以レ蘆爲レ首、竹爲レ管、居築產也」

【悲涼】ひりょう　前條に同じ（武夷山古記）

【悲涼】ひりょう　かなしくさびし。詩品「曹公古直、甚有二一一之句一」

【悲涙】ひるい　かなしきなみだ。虞照隣詩「儂本多二一一一」

【悲鬱】ひうん　かなしみしたふ。孫住子「復是增二發一一之心一」

【悲悔】ひかい　かなしみいたむ。陳光義詩「懷抱盈二一一一」＝哀悔。

【悲夫】ひふ　甚だしくかなしみ歎く辭。夫は助字。王羲之、蘭亭集序「後之視レ今、亦猶二今之視レ昔、一一」

【悲哉】ひさい　前條に同じ。宋玉、九辯「一一秋之爲レ氣也」

【悱】ヒ　尾

心に略ぼ理解し居れども之を口に言ひあらはさんと欲して未だ言ふ能はず。論、述而「不二一一不レ發」

【悱悱】ひひ　目はんとして未だ能はざる貌。禮、學記、疏「心憤憤、口一一、然後啓レ之」

【悱憤】ひふん　口に出さずして心むすぼれいきどほる。梁武帝、涅槃經序「發二迦葉之一一一」＝憤悱・鬱結。

【悶】㊀ボン・モン　㊁モン　關通音　元モン

㊀もだゆ（懣）うれひくるしむ。易、乾卦「遯世無二一一」思ひわづらふ「煩一」「鬱一」㊁くらし（悶）道理にくらし。

【悶鬱】もんうつ　心もだえふさがる。＝煩鬱・鬱悶。

【悶懣】もんまん　もだゆるおもひ。韓愈詩「一一空抑塞」

【悶死】もんし　もだえしぬ。

【悶絕】もんぜつ　もだえて正氣を失ふ。梁書、王僧辨傳「僧辨一一」

【悶歌】もんか　もだえなげく。楚辭「遂一一無レ名」

【悶著】もんちゃく　圖もめてあらそふ（紛爭）

【悶吐】もんと　心もだえて胸わるく吐かんとする。水經、注「澧蜂最爲二高秀一（中略）而時有二瘴氣一、三月四月遘レ之必死、非二此時一猶令二一一一」

【悶默】もんもく　心しづかなる貌。梅堯臣詩「一一閱二書史一」＝靜默。

【悶悶】もんもん　○心のくらき貌。老子「其政一一、其民醇醇」○心に制禦する所なき貌。老子「俗人察察、我獨一一」○もだゆる貌。水滸傳「回二到家中一、一一不レ已」

【悶惡】もんあく　もだゆ。實誼、旱雲賦「羣生一一、而愁憤」＝煩悶。

【悶懣】もんまん　もだえてむづがゆし。醫牒、文「頭面常一月十五日不レ洗、不二大一一一不レ能レ沐也」

【惋】ワン　圖

○おどろきうらむ（歎恨）○なげく、おどろきなげく（驚歎）もだえなげく「恨一」「歎一」「恨一」「驚一」

【惋傷】わんしょう　なげき驚く。晉書「辭旨危急、憂及二社稷一、省レ之一一、不レ解レ所レ由」＝惋惜驚愕。

【惋恨】わんこん　いたみうらむ。韓愈詩「遂自一一形於書」＝恨恨。

【惋惜】わんせき　かなしみいたむ。漢節文帝文「知與レ不レ知竝懷二一一一」＝憐惜。

【惋傷】わんしょう　かなしみいたむ。杜甫詩「感二時撫一事增二一一一」

【惋惜】わんせき　なげきをしむ。世說「晉武帝賜二王愷珊瑚二尺一、愷以示レ崇、崇以二鐵如意一碎レ之、愷既一一、又以爲レ嫉二己之寶一」＝嗟惜。

【惋怛】わんだつ　驚きかなしむ。晉書、王羲之傳「公私一一、不二須臾安一レ懷」

【惋歎】わんたん　かなしみなげく。魏武帝、善哉行「守レ節者貧賤、一一淚如

レ雨」

【沺滋】エン　いたみもだゆ。魏書、南安王楨傳「肥梁已降、聞レ之ー―」

九畫

【愛】アイ　㊢

○いつくしむ。いつくしみ(仁)「仁ー」「慈ー」「恩ー」「博ー」「親ー」「深ー」○めぐむ(恩惠)○したしむ(親)論、學而「汎ー衆」○かはゆがる、あはれむ(憐)○めづ、かはゆがる(寵)「寵ー」○このむ、めでる(好樂)「賞ー」○をしむ(吝惜)「ー惜」むさぼりをしむ、吝嗇。孟、梁惠王「皆以王爲ー也」○したふ(慕)戀ひ慕ふ「相ー」○圖十二因緣の一、色情財物を欲求する義。

同訓異義　愛・吝・嗇・惜・慳の別は吝(口部四畫)の條を見よ。

【愛育】アイイク　いつくしみそだてる。北史、鮑宏傳「爲二兒孫之所ニーー一」‖愛養。

【愛詠】アイエイ　このみうたふ。又、其の歌。北史「齊人ーー、咸曰、耳目更新」‖愛吟。

【愛悅】アイエツ　かはゆがりよろこぶ。晉書、溫嶠傳「見者皆ーニーレ之」

【愛欲】アイヨク　愛のさかんなるをいふ。梁簡文帝文「染動二心風一、情深ニーー一」‖慾火。

【愛及二屋烏一】アイオヨボス　人を愛して其の物にまで及ぼすをいふ。說苑、貴德「愛二其人一者、兼二屋上之烏一、憎二其人一者、惡二其餘胥一」

【割レ愛】カツアイ　愛情を制する。又、をしき心をたちきる。徐陵詩「ーレー遠和親一」

【愛恩】アイオン　めぐみ、いつくしみ。韓愈詩「君臣相與加ニーー一」‖恩愛。

【愛好】アイコウ　めでこのむ。南史、謝靈運傳「郡有二名山水一、靈運素所ニーー一」

【愛幸】アイカウ　めでいつくしむ。史、五宗世家「膠西王端、有ニーー少年一爲レ郎」‖寵幸。愛寵。

【愛弭】アイビ　いつくしみなれる。南史「骨相善爲二諸論一、上亦ーニーレ之」

【愛姬】アイキ　きにいりのをんな。史、孫子傳「見レ且レ斬ニーー一大駭」‖寵姬。

【愛吟】アイギン　このみて詩歌をうたふ。又、其の詩歌。

【愛鄉】アイキヤウ　ふるさとを大切に思ふ「ーー心」

【愛玉】アイギヨク　人のむすめをいふ敬稱。類書纂要「稱二人女一曰二令愛一、又曰ニーーー一」‖令嬡。

【愛活】アイクワツ　めぐみて生活さす。顏氏家訓「儲二穀器用一、ーニー黎民一」

【愛玩】アイグワン　このみもてあそぶ。晉書、樂廣傳「愛二其淸虛一、與レ之談レ道、名理辭約而旨暢、甚爲二時人一所ーー一」‖愛翫。

【愛敬】アイケイ　○いつくしみうやまふ。仁愛と長敬と。孝經「ーー盡二子事一レ親、而德敎加二于百姓一」○圖アイケイ　人ずきよし。‖愛嬌。

【愛惠】アイケイ　いつくしみめぐむ。徐陵文「ーー以撫二孤貧一、威刑以禦二强猾一」‖恩惠。

【愛嬌】アイケウ　圖かはゆらし、人ずきがよし。‖愛敬。

【愛顧】アイコ　めでかへりみる、ひいきにする。楊修文「豈ーー之隆、使二衆仰之情深一耶」

【愛護】アイゴ　だいじに守る、大切に保護する。顏氏家訓「僧二人典籍一、皆須ニーー一」

【愛國】アイコク　己の國を大切にする。戰國周策「周君豈能無ーレー哉」

【愛子】アイシ　かはゆがりて養ふ子。左、宣二「趙盾請二以括一爲二公族一、曰君姬氏之ーー也」

【愛兒】アイジ　かはゆき子。‖愛子。

【愛使】アイシ　目をかけてかはゆがりつかふ。

【愛親】アイシン　いつくしみて目をかける。唐書、賀蘭后傳「諸子中、ーー最篤」

【愛晴】アイセイ　このむ、このみ。沈約文「生平ーー、不レ在二人中一」

【愛日】アイジツ　○冬の日。左、文七、注「冬日可レ愛、夏日可レ畏」○日を惜む。孝子が親に事ふる心がけ。注官、孝至「不レ可二得而久一者、事レ親之謂也、孝子ーレー」

【愛敬】アイケイ　圖愛著に同じ。

【愛心】アイシン　いつくしみの心。禮、樂記「其ーー感者、其聲和以柔」

【愛情】アイジヤウ　かはゆがる心。又、戀愛の心。

【愛樂】アイラク　めでほめる。唐書、文藝傳「李華ーニー士類一、名聞以重」

【愛惜】アイセキ　○大切にしてをしむ。朱浮文「臨レ民親レ職、ーニー倉庫一」○ものをしみする。古詩「愚者ーニー貴一、但爲二後世嘻一」

【愛妾】アイセフ　氣に入りのめかけ。後漢書、臧洪傳「欲レ殺二其ーー一、以食二兵將一」‖寵妾。

【愛染】アイゼン　圖物に心がしみこむ、愛著心の深き義。楞嚴經「心生ニーー一」

【愛染明王】アイゼンミヤウワウ　圖明王の一、もと印度の神、眞言密敎中の尊とす、三目六臂を具へて忿怒の相をあらはし、迷者の愛欲をひるがへして絕對眞理の愛となさしむる事を司る。

【愛憎】アイゾウ　いつくしむと、にくむと。史、韓非傳「彌子瑕之行、未レ變二於初一也、前見レ賢而後獲レ罪者、ーー之至變也」‖憎愛。

【愛戴】アイタイ　愛していただき尊ぶ。范唐書「治二三輔一ーー之情一」

【愛物】アイブツ　からだを大切にする。南齊書「重レ軀ーレー、彼我無レ異」

【愛他主義】アイタシュギ　倫理學にて、他人の

幸福を増進することを以て行爲の標準とする主義。利己主義の對。‖利他主義。

【愛著】アイチャク 圖物をいつくしむ心の執著して離れざる義。淨住子「種種ー、纏ニ迫於我ー」‖愛執。

【愛憎】アイゾウ かはゆがる。憐む、杜欽傳「好憎之心一生、則ー一偏ニ于一人ー」‖愛幸。

【愛重】アイヂウ 好みてよむ。「ー一書」‖愛語。

【愛念】アイネン いつくしみの心。‖愛心。

【愛梅】アイバイ 梅の花を愛する。王勃詩「平生ー一顧成ノ癖、踏ノ雪行穿一雙展」

【愛憫】アイビン いつくしみあはれむ。‖愛憐。

【愛博】アイハク かはゆがる心が廣くゆきわたる。韓愈、與ニ陳給事ニ書「ー一而情不ノ專」

【愛撫】アイブ いつくしみなでる。宋史、范仲淹傳「號令明白、ー一士卒ニ」

【愛別離苦】アイベツリク 圖八苦の一、親しき者と別るるかなしみ。楞嚴記「常所ニ親愛一之人、乖違離散、不ノ得ニ共處ニ、是爲ニ——ニ」

【愛慕】アイボ いつくしみしたふ。後漢書、卓茂傳「故舊雖ニ行能與ノ茂不ノ同、而皆ー一欣欣焉」‖愛戀。

【愛網】アイマウ 愛情の爲めに束縛せらるる義。出曜經「其有ニ衆生墮ニー一者ニ必敗ニ正道ニ」

【愛樂】アイラク めでやしなふ。老子「ー一萬物ニ而不ノ爲ノ主」‖愛育。

【愛欲】アイヨク 愛情と慾心と。又、戀愛を遂げんとする欲。瑞應經「感ニ傷世間浪ニ於ー一之海ニ」

【愛惜】アイシャク をしむ。梁昭明太子文「徒深ニー一情ニ」‖愛吝。

【愛憐】アイレン いつくしみかはゆがる。史、趙世家「太后曰、丈夫亦ー一少子ニ乎」‖憐愛。

【愛戀】アイレン こひしたふ。又、こひ。曹植、聖皇篇「沈吟有ニー一ー一」‖戀愛。

【愛蓮說】アイレンセツ 宋の周惇頤の作りし文、蓮を以て君子に比す。明一統志「南康府（今の江西省に屬す）愛蓮池在ニ府治後ニ、宋守周敦頤鑿ニ池種ニ蓮其中ニ」

【意】イ 支 質

㊀こころ、こころばせ（心之發動也）「心ー」「ー志」「意ー」「眞ー」大學「欲ニ正ニ其心ニ先誠ニ其ー一」○おもふ（思念）はかる（度）おもはく、かんがへ。○おもふに、度るに、己の考へるには。柳宗元、桐葉封弟辨「吾ー不然」ー者とも連用す。○そもそも。古抑に通用す。○わたくしのこころ、私情・私慾。論、子罕「子絕ニ四、毋ニ毋ー、毋ニ必、毋ニ固、毋ニ我」○うたがふ（疑）○のぞみ、かんがへ。○おもむき、いきほひ「筆ー」○ー大利は歐州南部の王國、卽ち古の大秦。‖伊太利。㊁ああ、感歎の辭。‖噫。

同訓異字 意・思・憶・懷・念・想・惟・顧の別は思（心部五畫）の條を見よ。

【意到筆隨】イタウヒツズイ 詩文などが我が思のままにすらすらと出來る。春渚紀聞「東坡曰、吾生平作ノ文、意之所ノ到、則筆力曲折隨ノ之」

【候ノ意】コウヲイ 人の心をうかがひ迎へる。‖迎ノ意・承ノ意。

【承ノ意】ショウヲイ 人の心を察して氣に入るやうにする、迎合する。‖迎ノ意。

【寓ノ意】グウス 心を寄せる、他の物ごとにかこつけて思ひをほのめかす。

【屬ノ意】ゾクヰ 心を寄せる、のぞみを屬する。史、夏紀「天下ー一ノー一焉」

【留ノ意】リウイ 氣をつける、注意する。史、樂毅傳「敢獻ニ書以聞、惟君王ー一ノー一焉」

【執ノ意】シツイ 己の意見を堅く執りて屈せず。魏書、蕩寇實傳「ー一ノー一抗ノ言」

【防ノ意如ノ城】ボウイジヨノジヤウ 私欲をふせぐことの堅きに喩ふ。癸辛雜識「富鄭公有ニ守ノ口如ノ瓶、——之語ニ」

【守ノ意】シユイ 志を堅くまもる。晉書「夢ノ受ニ流放ニー一ノー一不ノ移」

【意向】イカウ こころばせ。心のむかふところ。南史「要是ー一如ノ此」‖志向。

【意幹】イカン 心のはたらき。宋書、猪奴度傳「謹實有ニー一ニ」‖志幹。

【意思】イシ 人をうたがひきらふ。史、陳悉相世家「項王爲ノ人ー一信ノ讒」

【意氣】イキ こころもち、いきごみ。氣概。後漢書、江表傳「一以ニー一許ニ知己ニ、死亡不ニ相負ニ」

【意氣自如】イキジジヨ 平氣にして驚かず。自如は自若に同じ。史、李將軍傳「吏士皆無ニ人色ニ、而廣ー一、益治ニ軍事ニ」

【意氣揚揚】イキヤウヤウ 大いに得意なる貌。史、婁敬傳「擁ニ大蓋ニ、乘ニ駟馬ニ、——、意自得也」

【意饒】イネウ わけ。神仙傳「嚼ノ靈瞰ノ之、曾成ニ文字ニ滿紙各有ニー一ニ」‖意味。

【意外】イグワイ おもひのほか。‖意表。

【意見】イケン ○かんがへ、心に思ふこと。新唐書、高宗紀「天后上ニー一十二條ニ、○圖人を諫める義「親のー一」

【意想】イサウ おもひ、かんがへ。‖思想。

【意而】イジ 蕪の異名「蕪蒻記」

【意志】イシ ○おもひ、かんがへ。○心理學にて思慮・選擇・決行などをする心のはたらき。

【意思】イシ おもひ、かんがへ。近思錄「異ニ自家ー一ニ一般」

【意指】イシ こころばへ。指・旨通ず。史記「乃斬二司馬一、識二一一一」＝意旨。

【意識】イシキ 心理學にて心の覺醒して知覺ある狀態、卽ち知覺・情意等すべての心狀作用の總稱。

【意匠】イショウ ○心のたくみ。くふう。杜甫詩「一一縱橫經營中」○工藝・美術品等の考案。

【意匠登錄】イショウトウロク 圖意匠の案出者、又は其の繼承人の請願により、特許局長が原簿に記入して其の專用權を保護せしむる法。

【意趣】イシュ ○おもはく。こころばせ、意思の趨行するところ。南史「其一一不レ常如レ是」○圖うらみ（恨）「一一がへし」

【意緒】イショ 心のいとぐち、思の緖の如く紊き義。江總詩「遊人一一多」

【意錢】センセン ぜにうち、あないち、ぜにを投げて遊ぶ一種の遊技。後漢書、梁冀傳「蹴鞠一一之屬」＝擲錢。

【意態】イタイ こころざま。孔平仲詩「開レ花又結レ子、一一何煌煌」＝情意。

【意地】イヂ ○こころ、地は心の在る場所。俱舍論頌釋「一一有レ喜有レ憂」○圖我がかんがへを通さんとする心「一一惡し」

【意表】イヒョウ 心のそこ、心のうち。＝意中。

【意中人】イチュウジン ○わが心におもふ人。陶潛詩「念二我一一一」○こひびと。＝情人。

【意適】イテキ こころにかなふ。適正者は蘇軾詩「一一忽レ返、路窮乃歸休」

【意中】イチュウ 人の心にかなふ。漢書、江充傳「所レ言一一」

【不レ介レ意】フカイイ 心にかけず、介はさむ。＝不レ爲レ意。

【掛レ意】カイイ 心にかけて忘れず、氣にとめる。唐書、同昌公主傳「公主薨、上日夕惋レ心一一」

【先レ意】センイ 人の心をあらかじめ迎へ知る。禮記「孝者一一承レ志」

【適レ意】テキイ 氣に入るやうにする。心にかなふ。晉書、張翰傳「張翰曰、人生貴レ得一一」

【不レ如レ意】フニョイ わが思ふやうにならず。ままならぬ。晉書、羊祜傳「天下一一者恒十居二七八一」

【意願】イガン ねがひ、のぞみ。後漢書、王允傳「自詩伐、既失二一一一」

【意馬心猿】イバシンエン 心情の制しがたきに喩ふ。安樂集「諸凡夫、心如二野馬一、識如二猿猴一、馳二騁六塵一、何曾停息」

【意必固我】イヒツコガ 意は私意、必は己の意見を必ず通さんとすること、固は既往のことにつきて執念ぶかきこと、我は我意のつよきこと。字解參看。

【意表】イヒョウ 思の外、讓想外。宋史、英宗紀「每レ有二戰決一皆出二羣臣一一一」＝意外。

【意味】イミ 事のわけ「一一深長」杜牧詩「始覺空門一一長」＝意義。

【意味深長】イミシンチョウ 詩文などの意味の極めて深き義。論語、序說「覽二一一一」

【意譯】イヤク 外國文を其の大體の意味をとりて飜譯する義。直譯の對。

【意慾】イヨク 得んとおもふ心。

【意料】イリョウ おもひはかる。＝臆度。

【不レ意】フイ 思ひがけが無かりき、料らざりき。幸延年詩「一一レ一金晉子、嬋娟過二我廬一」

【慍】（一）ウン・オン 吳 （二）アン・オン 慶 長

（一）一一は聲の安らかにやはらぐ貌。左、昭十二「新招之一一、式昭二德音一」斷招は音曲の名。又、深くしづかなる貌。稽康、琴賦「一一琴德」（二）だまる（默）唐書、杜讓能傳「朕不能一一度一日」

【慍】（一）ウン・オン 同 （二）カツ 物 ウン 物 慍は本字

（一）いきどほり、いきどほる（恚）心の中にむっとする、怒氣を含む「憤一」論、舉而「人不知而不一、不亦君子乎」○うらむ（怨・恨）（二）むすぼる（鬱積）

【慍憤】ウンフン 慍・怒・忿・瞋等の別は怒（心部六畫）の條を見よ。

【慍見】ウンケン 不平の意を含みて面會する。論、衛靈公「子路一一曰、君子亦有レ窮乎」高適詩「感激多一一」

【慍色】ウンショク いきどほり怨む顏つき。論、公冶長「三已」之、無二一一一」

【慍怒】ウンド いきどほる。吳越春秋「三年不二一一、而無二恨色一」

【慍憤】ウンフン いきどほる。柳宗元、弔二屈原一文「獨一一而增レ傷」

【慍容】ウンヨウ いかれるやうす。列子「踧踖丘閭常無二一一一」

【惲】ウン 物

○あつし（重厚）○はかる（謀）○人名、楊一は漢人。

【惲謀平】ウンショウ 漢の武遷の人、名は格、字を以て行はる、自ら東園朱衣生と號し、又白雲外史と號す。畫に南田老人と稱す。古文詞に工にして畫は尤も精絕、初め山水を畫き、後花卉を畫き、沒骨花の一派を創む、自ら題識を爲りて之を書す、世に南田三絕と稱す。

【惲南田】ウンナンデン 前條をを見よ。

【惲】カク 隔

○かざる（飾）○つつしむ（謹）かふ（變更）

【悸動】キドウ　感動して容色を變へる。荀、禮論「——唱俛」

【愕】ガク　ゴ　遇　藥

○あわてる(遽)○あわておどろく(驚遽)「錯ー」「驚ー」

【愕視】ガクシ　驚きて相視る。李華賦「——沈沈」

【愕然】ガクゼン　おどろく貌。史、留侯世家「張子下取ル履、良ー欲ル毆ル之」

【愕胎】ガクタイ　おどろき視る貌。班固、答賓戲「雖三親迅興二霆挺一、猶ー而不ル能ル階」文選には愕を跼に作る。

【感】㊀カン　㊁カン　勘　感

㊀うごく、うごかす(動・搖)心が動く「一動」「百ー」「孝ー」○いたる(格)書、大禹謨「至誠ー神」○ふる(觸)文選、七發「夏則雷霆霹靂之所ー也」○こたへひびく。○になふ、恩に感ずる「ー恩」㊁うらむ(恨)憾と通ず。

【感咽】カンエツ　心に感じてむせびなきす。任昉、王儉集序「因便ー、若ル不ニ自勝一」

【感悦】カンエツ　心に感じてよろこぶ。楊雄、美文「得ニ其和一、則煙然ー」

【感應】カンオウ　○物にふれて心にひびきこたへる。後漢書、張綱傳「泰誓自消、和氣ー」○信心の誠が神佛に通ずる、感通する。○導體が磁石、發電體等に接近して電氣又は磁氣を感じ起す。

【感恩】カンオン　めぐみをありがたくかんずる。海錄碎事「惟冒、千ー」、萬ー」

【感荷】カンカ　めぐみにかんじてありがたく思ふ、感激する。韓愈詩「ニー君子德ニ」

【感慨】カンガイ　心にかんじなげく。史、季布傳「婢妾賤人、ー而自殺」李白詩「知音不ル易ル得、撫ル劍增ニー慨ニ」憤慨。

【感慨悲歌之士】カンガイヒカノシ　國を憂ひ世を思ふのあまり、悲しき歌を詠じて鬱結せる憂をもらす士。韓愈、送ニ孟郊南一序「燕趙古稱ル多ニ——一」

【感抵】カンテイ　感慨に堪へず、一說に意氣に感じて節操を立つる義。ニ感嘆。

【感嘆】カンタン　感動してかなしみむせぶ。晉書、煬帝紀「念ル茲在ル茲、興言ー」

【感愕】カンガク　心うごきておどろく。人物志「微見ニ予外一ー以明」

【感覺】カンカク　外界の刺戟を心に感受する。

【感覺中樞】カンカクチュウスウ　感覺を主どる神經の本幹、大腦・延髓・脊髓の總稱。

【感愧】カンキ　他の德に感じて己の及ばざるをはづる。晉書、鄭郎ー」

【感激】カンゲキ　昔を思ひ出して心にかんずる。後漢書「先人懷ニーー之哀一」ニ念舊。

【感泣】カンキュウ　深く心にかんしんしてなく。宋史、蘇軾傳「宣仁后與ニ哲宗一永訣、左右皆ー」

【感吟】カンギン　國感歎してよむに足る傑作の詩歌、俳諧など。

【感興】カンキョウ　おもしろみ、興味。劉基詩「ーー詩成聊自繪、忘ル憂花好爲ル誰開」

【感化】カンカ　○感じて善に遷る。晉康、琴賦序「美ニ其ーー、則以ニ蕩滌一爲ル貴」○俗には惡しき方に化するにもいふ。

【感化事業】カンカジギョウ　不良少年などを感化して善人たらしめるしごと、それ等の人を收容する所を感化院といふ。

【感悔】カンカイ　心に感じてくやむ。唐書、陳子昂傳「他日入ニ鄉校一ーー、即痛修飾」

【感慨】カンガイ　心にかんじおもふ、かんずるおもひ。杜牧詩「卿婆ニーー韻ニ」

【感官】カンカン　外界の刺戟を受けて腦に傳ふる機關、耳・目・舌・鼻・皮膚の類。ニ感覺器官。

【感激】カンゲキ　深く心にかんじて氣が奮ふ。諸葛亮、出師表「由ル是ーー、遂許ニ先帝一以驅馳ニ」

【感悟】カンゴ　心に感じてさとる。史記「夫子既以ーー而屢ル我」

【感恨】カンコン　心をうごかしうらむ。漢書「內無ニーー之隙一、外無ニ疑侮之漸一ニ」

【感想】カンソウ　心にかんじおもふ。晉書、賈充傳「大ーー發ニ于寤寐一ニ」

【感疾】カンシツ　やまひに罹される。宋史「至ル暮自不ル暇ル食、遂ーノー」

【感心】カンシン　心にしみこみて深く感みする。ニ感服。

【感謝】カンシャ　ありがたくかんじてれいをいふ。韓愈詩「ーー情至ル骨」

【感狀】カンジョウ　國戰功を賞して主將より與ふる書附。ニ勳狀。

【感情】カンジョウ　○かんじて心をうごかす。劉伶文「不ル憂ニ無墨之切ル肌、利欲之ーロー」○心理學にて苦樂・美・醜等を感ずる心のはたらき。

【感傷】カンショウ　心をうごかしいためる。感觸して心を傷める。阮籍詩「悅懌未ニ交接一、晤言用ーー」

【感賞】カンショウ　○感心してほめる。○善行をほめて賜はる褒美。

【感覺】カンカク　心理學にて外界の刺戟を感覺神經によりて知得する心のはたらき。

【感觸】カンショク　外物に觸れて心にかんずる。宋史「辱氣之所ニーー一ニ」

【感染】カンセン　他の物の性が深くしみてうつる。惡習又病氣がうつる。

【感戴】カンタイ　ありがたくおしいただく。白居易文「殊恩特奬、非次陞遷、ーー驚惶、隕越無ル地」ニ欣戴。

【感歎】カン 深く心にかんじてためいきをつく。張九齢詩「附情多二一一、清景暫登臨」
【感歎詞】カンタン 文法にて喜怒哀樂等の感情をあらはす語「嗚呼」「吁」などの類。＝感嘆詞・感嘆詞。
【感通】カンツウ 心にかんじて知る。韓愈詩「豈非二正直能一一一」＝感應・感徹。
【感染】カンセン 心に銘じて忘れず、筆文にて刻する義。＝感銘・銘肌。
【感動】カンドウ ふかく心にしみて感ずる。後漢書、江革傳「辭氣懇款、有二足レ一一一人一者一」
【感動】カンドウ 深くかんじなげく。梁書「服制雖レ除、每盲輒一一」＝哀慟。
【感得】カントク 神佛にまごころの通じてさとり得る おつげをうける。
【感佩】カンパイ 深く心にかんじて忘れず、佩は身に帶びる。＝感銘・感荷。
【感冒】カンボウ 寒氣に觸れてかぜをひく。水滸傳「小人於レ道一一風寒未二曾症可一」＝風邪。
【感附】カンプ めぐみに感動して慕ひつく。唐書「故夷夏一一」
【感服】カンプク 深くかんしんしてしたがふ。梁凝文「王者所二以一一天下一者、惠與レ威也」
【感奮】カンフン 心にかんじてふるひ起る。唐書、朱思禮傳「聞者莫レ不一一一」＝感激。
【感憤】カンフン 心にかんじて振ひ起る。後漢書「雍丘之圍、敵洪之一一壯矣」＝感奮。
【感奮】カンプン 心にかんじてこひしたふ。隋書、獨孤盛傳「后早失二二親一、常懷二一一一」
【感銘】カンメイ 心にかんじてわすれず。心に銘刻して忘れず。陳師道文「書間見レ貽、一一斯切」＝銘感。
【感悶】カンモン 心にかんじてもだえる。王襲文「刺史一一、舒レ昔而詠二至德一」
【感涙】カンルイ 深く心にかんじて出づる涙、られしなみだ。＝感激。

【愚】グ 虞

○おろか(癡)ばか、才智のはたらき鈍し「蓋一」「迂一」「下一」又、其の人。○くらし(昧闇)「闇一」○馬鹿正直。論、先進「柴也一」○ばかにする、あなどる「一弄」○かたし(難)○おほふ(蔽塞)○自己の謙稱「一按」○自己に關する事物に添へて謙遜の意をあらはす「一見」「一僧」「一弟」
【愚案】グアン 己のかんがへをいふ謙稱。＝愚考。
【愚闇】グアン おろかにしてくらし。蜀志、法正傳「一一策淺、精誠不レ感、以至二於此一」淨住子「一一滅則難光發」＝闇愚・愚暗。
【愚意】イグ 己の考の謙稱。魏書「一一所レ及、不レ能二自已一」＝愚見。
【愚ル愚】グマモグ 知をかくして愚なるが如くする。推殺、應有銘「無レ使二名迹二實、一レ一聖所レ慮」
【愚駑】グド おろか。駑は痴、闇愚にして事理を知らず。北史、魏宗室傳「阿倪一一」＝愚昏。
【愚效】グカウ おろかなるてがら、己の功の謙稱。王融文「食二及明時一、展二愚一一一」
【愚陋】グロウ おろかにしてまことの後漢書「其人性一一、少二嗜慾一」
【愚狂】グキヤウ おろかにしてくるふ。又、其の者。魏徵詩「徑欲二追蹤一忘二一一」
【愚計】グケイ ○おろかなるはかりごと。＝愚策。○己の考の謙稱。北史「一一可レ錄、請爲二明公一前驅」
【愚見】グケン おろかなる考、己の考の謙稱。晉書、王渾傳「敢陳二一一一、觸二犯天威一」
【愚猶】グユウ 愚かにしてゆるところある義、猶は諸侯「有レ所レ不レ爲也」と注す。後漢書、第五倫傳「不レ勝二一一、昧死自表」猶一に禮に作る。
【愚弟】グテイ おろかにしてくらし。晉親、疏「其人一一之子」
【愚公移レ山】グコウイヅス 勉めて已まざれば大事も必ず成功すといふ譬。北山の愚公、年九十に垂んとして、己の家の前に峙てる山を他に移さんとて貧春を以て其の土を運ぶ、河曲の智叟、其の愚を笑ひて、之を止めけるに、愚公われ死すとも子子孫孫、殫ちて窮らずんば、何ぞ山の移らざることあらんやとて聞かず、上帝其の誠心に感じ、夸娥氏の二子をして二山を負ひて他に移さしむ〔列、湯問〕
【愚圃】グホ おろかなるまごころ。范成大詩「一一無事敢自欺」
【愚相】グサウ ○おろかなる容貌。○おろかなる宰相。史記「夫以二聖主一賁二一一、君受レ國不レ久矣」
【愚察】グサツ 己の推量の謙稱。
【愚志】グシ おろかなるこころざし。己の志の謙稱。劉向文「故使二使者陣二一一」
【愚人】グジン おろかなる人。老子「我一一之心也哉」＝愚者。
【愚者千慮必有二一得一】グシヤセンリヒツイウイットクアリ おろかなる者も、たまには良き考を出すをいふ。史、淮陰侯傳「廣武君曰、臣聞知者千慮必有二一失一、——」
【愚生】グセイ 自己の謙稱。
【愚淺】グセン おろかにして智あさし。梁昭文「臣一一小才、竊二假階級一」
【愚蒙】グモウ おろかにしてかよわし。司

馬光詩「山林付ニ一一」

【愚叟】ソウ　○おろかなるおやぢ。又、老人の自身の謙稱。○愚公に同じ。李德裕文「謹ニ一一之復生ニ焉能移ニ其毘歩ニ」愚公移ニ山条有。

【愚情】ジョウ　僧の自身の謙稱。＝野衲。

【愚息】ソク　己のせがれをいふ謙稱。＝豚息。

【愚痴】チ　おろかにしておとる。何承天文「誠非ニ一一所ニ能究盲ニ」

【愚蒙】モウ　○次條に同じ。○圖己の不平を訴へる、なきごと。

【愚癡】チ　おろか。癡は痴、不慧。阿毗曇論「一一耶見」＝愚痴・愚昏・愚鈍。

【愚忠】チュウ　おろかにして忠誠。又、己の忠誠の心の謙稱。漢書、張湯傳「臣固一一、若ニ張湯ニ乃詐忠」

【效ニ愚忠ニ】コウ　己がまごころをつくしいたすことの謙辭。枚乘文「臣願披ニ腹心ニ而——」

【愚頑】ガン　おろかなるまごころ。又、己の心の謙稱。洛陽伽藍記「乞放ニ愚頑ニ以免ニ一一ニ」

【愚直】チョク　おろかにして直し。己の正直なることの謙稱。朱史、李綱傳「惟陛下赦ニ其一一ニ而取ニ其拳拳之忠ニ」

【愚俗】ゾク　おろかにしてかろがろし。陳琳文「一一短咯、輕進易退」

【愚鈍】ドン　おろかにぶし。鈍は鈍。後漢書、皇甫規傳「明詔不ニ以ニ臣一ニ、急使ニ」軍」＝愚魯。

【愚魯】ロ　おろかにしてにぶし。元結詩「僻居愛ニ一一ニ」＝愚昏。

【愚朝】チョウ　におし。朝は鈍。魏書、劉文靜傳「泣曰、臣一一、理絕再見無レ期」＝愚鈍・愚昏。

【愚溝】コウ　おろかにして智うすし。檀徳輿文「以ニ臣一一、累奉ニ恩榮ニ」

【愚益愚】エキエキ　おろかなるものはますますおろかとなる。韓愈、師說「今之衆人、其下ニ聖人ニ也亦遠矣、而恥レ學ニ於師ニ是故聖益聖、愚——」

【愚鄙】ヒ　おろかにしていやし。又、己の才能の謙稱。唐書「備ニ位保傅ニ實得レ效ニ一一ニ」＝愚陋・愚劣。

【愚懦】ダ　おろかにして事を誤る。典論「古今一一、豈惟一人哉」

【愚夫愚婦】フフ　おろかなる男女。書、五子之歌「予視ニ天下——、一能勝レ予」

【愚物】ブツ　おろかなる人、ばかもの。＝愚人・愚者。

【愚蔽】ヘイ　おろかにしてくらし、蔽は事理に昧し。二十四孝「彼二人一一者、愛與レ欲也」＝愚昧・愚蒙。

【愚昏】コン　おろかにして才智くらし。鮑照文「實非ニ一一所ニ宜ニ循踐ニ」＝愚蒙・愚昧。

【愚闇】アン　おろかにしてくらし。馬融詩「直道若ニ一一ニ」＝愚蒙。

【愚模】ボ　おろかにして飾なし、樸は朴。顏師古「況我一一愛、强盤ニ利名場ニ」

【愚昧】マイ　おろかにして事理に暗し。唐彦謙、賈耽傳「臣據ニ一一ニ、風皆ニ師範ニ、異蒙ニ抜擢ニ」

【愚蒙】モウ　おろかにしてくらし、蒙は無知。杜甫詩「此語亦足レ爲ニ一一ニ」＝愚昧。

【愚老】ロウ　老人自身の謙稱。

【愚慮】リョ　己のおもんばかりの謙稱。漢書、梅福傳「臣平生之一一ニ」

【愚劣】レツ　おろかにして才にぶし。漢書、谷永傳「永等一一」

【愚魯】ロ　おろか。魯は鈍。蘇轍詩「東方書生多ニ一一ニ」＝愚騃・愚蒙。

【愚弄】ロウ　あなどりてばかにする。左、襄四「施ニ賂于外一一ニ其民ニ」＝弄弄。

【愚陋】ロウ　おろかにしていやし。韓愈、潮州謝表「臣受レ性一一」＝愚鄙・愚劣・愚陋。

【愚惑】ワク　おろかにしてまどふ。史、日者傳「夫一一之人、豈能以ニ一言一而知レ之哉」

【惶】　クヮウ　㊐通じて皇に作る

○おそる（恐）おそれ「恐一」「震一」「兢一」○あわてる（遽）「鶩一」「駭一」

同訓異字　惶・恐・懼・畏・怖・悸等の別は恐（心部六畫）の條を見よ。

【惶懼】ク　おそれおどろく。唐書、裴行儉傳「煬壓溺、天而雨、尿候一一」＝惶駭・怖駭。

【惶汗】カン　おそれてあせを流す。國異志「仁軌一一久之」

【惶悸】キ　おそれて心をののく。王逸、九思「一一兮失氣」＝恐悸。

【惶急】キュウ　おそれあわてる。＝惶遽。

【惶遽】キョ　おそれてあわたゞし。宋史「聞レ有レ變、一一而陽」

【惶恐】キョウ　おそれる。漢書、朱博傳「對曰一一」＝恐惶。

【惶恐灘】キョウキョウタン　地名、江西省贛江中の最も險惡なる灘の名、萬安縣の境に在り。＝皇恐灘。

【惶懼】ク　おそれる。周書「軍至一一」＝惶恐・悚懼・長懼。

【惶惶】コウコウ　おそれる貌。北史、王慕傳「臣庶一一無ニ復情地一」＝恐惶。

【惶悚】ショウ　おそれる。鮑照文「執レ啓涕結、伏追一一」

【惶援】エン　おそれみだれる。後漢書、杜詩傳「兵士暴積、民間百姓一一」＝惶擾。

【惶恒】コウ　おそれていたみかなしむ。晉書、荀晞傳「奉ニ被手詔ニ委ニ臣征討ニ伏覩跪獻、五情一一」

【惶惕】テキ　おそれうれふ。柳宗元、陳情啓「下情至レ今猶增一一ニ」

【惶怖】フ　おそれをののく。後漢書「皆一一至ニ京ニ」＝惶恐。

【惶惑】ワク　おそれまどふ。後漢書、光武紀「一一不ニ知レ所レ之」＝惑惑。

【愒】 ㊀ケイ 霽 ケツ 屑 ㊁カイ 泰

㊀いこふ、やすむ（休息）‖憩。㊁むさぼる（貪）左、昭元「忱辭而ー日」生を貪る義。○にはか、いそぐ（急）

【惸】 ケイ 庚

○うれふる（憂）○ひとり（單）ひとりもの（獨）兄弟のなき者。‖煢。

【惸惸】ケイケイ うれふる貌。詩、小雅「憂心ー〻」‖煢煢。

【惸獨】ケイドク ひとりもの。詩、小雅「哀此ー〻」鰥は子孫のなき者。‖煢獨。

【惸嫠】ケイリ やもめ。王禹偁詩「萬家呼二文母一百里擁二ー〻一」

【愜】 ケフ 葉 別に慊に作る

○こころよし（快）「和ー」○あきたる、志滿足す。漢書、文帝紀「天下人民、未レ有二愜志一」

【愜志】ケフシ あきたる心、滿足する志。字解參看。‖慊志。

【愃】 ケン 阮

○ゆたか、ひろし（寬）心の寬裕なる貌。詩、衞風「赫兮ー兮」 先 又、儇に作る

【愆】 ケン 先

○あやまる、あやまち（過失）書、伊訓「惟玆三風十ー」○とが、つみ（罪）「罪ー」○たがふ（差）○あしきやまひ、惡疾。左、昭二六「王ー于厥身」

同訓異字 愆・誤・謬・訛・錯・過・失の別は誤（言部六畫）の條を見よ。

【愆尤】ケンユウ あやまち、とがめ。張衡、東京賦「庶以昭二其ー一一」李白詩「功成身不レ退、自二古多ー一一」

【引愆】インケンヒク 罪を身にひき受ける。蜀志「街亭之役、咎由二馬謖一而君ー レー、深自貶抑」‖引咎。

【愆期】ケンキ 時期をたがへ、あやまる。易、歸妹「歸妹ー レー」

【愆義】ケンギ 正しき義理をあやまる。左傳「於二德爲一ー一、於レ人爲二失禮一」

【愆過】ケンクワ あやまち。

【愆悔】ケンクイ とがあやまち。宋書、沈演之傳「上怒、下詔徙二勃西陲一、令三一思ー一于レ是徙二梁州一」

【愆序】ケンジョヲヤブル 時序の調和を失ふ。南史、宋文帝紀「五年春正月、以二陰陽ー一、求二讜言一」

【愆滯】ケンタイ あやまりて滯る。錯誤留滯する。蜀志、費禕傳「蓋允代二費禕一爲二尚書令一、旬日之中、事多ー一一」

【愆忒】ケントク あやまち、過失。揚雄箴「匪レ愆匪レ忒、公尹攸レ宜」

【愆謬】ケンビウ あやまち。唐書、周用之傳「一日糾ー一不法數十事」

【慣】 ㊀コン 願 元 ㊁ボン 願

㊀心くらし。孟、梁惠王「吾ー不レ能レ進二於是一矣」‖惛。㊁もだゆ（悶懣）

【慣慣】クワン くらくおろか。管子「桓公問二於管仲一曰、寡人幼弱ー一」‖昏愚・惛愚。

【想】 サウ 養

○こひねがひおもふ（冀思）○おもひ「思ー」「情ー」「冥ー」「積ー」「妙ー」おもふ（意）後漢書、王符傳「夢ー賢士」○おもひやる、おしはかる「ー像」「豫ー」「縮ー」

同訓異字 思・思・憶・懷・意・念・惟・顧の別は思（心部五畫）の條を見よ。

【想憶】サウオク 考へおもふ。おもひ。王獻之、尺牘「卽日如何、深ー一」

【想起】サウキ 前の事を思ひおこす。

【想見】サウケン おもひみる。水經、注「ー二其人一」

【想像】サウザウ ○おもひやる。楚辭「思二靈修一故、以ー一兮」○心理學にて、既知の觀念に本づきて新觀念を構成する心のはたらき。

【想奈】サウナ おもひやる。

【想念】サウネン 意識に印象せる一切の心的現象。

【想望】サウバウ おもひしたふ。後漢書、趙壹傳「士大夫ー二其風采一」‖思慕。

【想夫憐】サウフレン 箏の曲の名。楊維楨詩「專來馬上曲、猶唱ー一」もとは相府蓮に作る、俗に憐を愚に作る。

【想昧】サウマイ かみわけ考へる。梁簡文帝文「ー一之懷、轉復無極」

【愁】 シウ 尤

○うれふ。うれへ（憂）「別ー」「離ー」「旅ー」「憂ー」○かなしむ（悲）なげく（歎）「悲ー」○おもんばかる（慮）

同訓異字 愁・憂・悲・愴・悶・惆・悵・惋・病○愁は物さびしく、浮かぬ貌、旅愁・客愁などと用ふ。○憂は心の中に苦勞するなり、憂ひと用ふ、病・憂とは、病中のことなり。○悲は病・災難などを、苦にするなり、災悲・苦悲などと用ふ、憂主レ心悲主レ事と註し、憂は內を主とし、悲は外を主とし、內憂外患と熟す。史、始皇紀「臣主一レ心、而憂二海內之患一」○愴は、あはれむとも訓む、ふびんに思ふ義。小爾「悲離相愴」○悶・惆・悵の三字、同じく、あはれむとも訓む、氣の塞におもふ

義、愴と略ㇾ同じ。○悄は憂なり、さびしく憂ふる義。詩、邶風「憂心悄悄」○病は苦にして憂ふる義。證記「病ㇾ不ㇾ得ニ其死一也」

【愁意】シウイ　うれふるこころ。温庭筠詩「平明花木有ニ一一」

【愁悒】シウイフ　うれへて心ふさがる。書經、疏「一一不ㇾ寧、目恆鰥鰥然」

【愁音】シウイン　かなしきこゑ。高適詩「耿耿酒前、聽鹿鳴ニ一一」

【愁怨】シウエン　うれへうらむ。後漢書、明帝紀「百姓一一、情無ニ告訴一」

【愁海】シウカイ　うれへの甚だしきを海に喩へいふ。孟郊詩「醒時不ㇾ可ㇾ過、一一浩無ㇾ涯」耶律楚材詩「萬里西行愁似ㇾ海、千山東望遠如ㇾ天」

【愁看】シウカン　うれへてみる。杜甫、見ニ螢火一詩「滄江白髮一一ㇾ汝」

【愁顏】シウガン　うれへがほ。吳萊詩「洞府寂遠多ニ一一」

【愁歎】シウタン　うれふる心。陸龜蒙詩「我有ニ一一無ㇾ可ㇾ那」

【愁苦】シウク　うれへくるしむ。李陵、答ニ蘇武一書「身之窮困、獨坐一一」＝愁困。

【愁苦辛勤】シウクシンキン　甚だしきうれへくるしみ。白居易、王昭君詩「漢ㇾ面胡沙滿ㇾ鬢風、眉銷ニ殘黛一臉銷ㇾ紅、——顦顇盡、如今卻似ニ畫圖中一」

【愁懷】シウクワイ　うれふるおもひ。＝愁心・愁思・憂懷。

【愁見】シウケン　うれひみる。王維詩「遙知漢使蕭關外、一一孤城落日邊」

【愁困】シウコン　うれへくるしむ。後漢書、公孫述傳「百姓一一、不ㇾ堪ニ上命一」

【愁恨】シウコン　うれへうらむ。杜甫詩「蕭ㇾ條風雨夜、人共ㇾ頭併ニ我秋一」＝愁緒。

【愁霜】シウサウ　しんぱいのあまり白髮となりしを霜に喩ふ。白居易、朱陳村詩「悲火燒ニ心曲一、一侵ニ雙鬢一」

【愁殺】シウサツ　うれふ、殺は助字。孟浩然詩「江風白浪起、一一渡頭人」

【愁思】シウシ　うれふるおもひ。長門賦「援ニ雅琴一以寫ㇾ志、奏ニ一一之不ㇾ可ㇾ長」＝憂思・愁心。

【愁容】シウヨウ　うれふる貌。楚辭「心一一而思ニ蓄邦一」

【愁疾】シウシツ　うれへにくむ。北史、王孝傳「一一甚ニ乎厲鬼一」

【愁人】シウジン　心にうれへある人。戴叔倫詩「沅湘日夜東流去、不ㇾ爲ニ一一住ニ少時一」

【愁心】シウシン　うれふる心。＝愁思・愁腸。

【愁辛】シウシン　かなしみつらし。杜甫詩「索居猶寂寞、相遇益ニ一一」

【愁城】シウジヤウ　愁へ苦しむ境遇。張養浩詩「一退ニ一一萬里降」

【愁傷】シウシヤウ　うれへいたむ。＝愁痛・憂傷・悲傷。

【愁緒】シウショ　うれふる心、緒は緒の動く端緒。孟浩然詩「淚ㇾ君不ニ相見一、日夢獨ニ一一」＝憂思。

【愁色】シウショク　うれふるやうす。＝憂色。

【愁慘】シウサン　かなしみいたむ。楚辭「意荒忽而流蕩兮、心一一而增ㇾ悲」

【愁慘】シウサン　かなしきこゑ。＝哀慘。

【愁訴】シウソ　うれへてうったへる。楊萬里詩「江山一一盡爲泣」

【愁歎】シウタン　うれへなげく。唐書、荀攸傳「民去ニ一一而就ニ安安一」

【愁嘆】シウタン　心をうれへしむ。又、うれふる心。劉禹錫詩「一一正遇ニ斷猿時一」

【愁痛】シウツウ　うれへいたむ。左傳「夫人一一、不ㇾ知ニ所ㇾ底」＝愁傷。

【愁啼】シウテイ　うれへてなく。傅休奕詩「青雲徘徊、戴ニ我一一」＝悲啼。

【愁悼】シウタウ　うれひおそれる。韋應物詩「收ニ此遷ニ我家一、特ㇾ還復一一」

【愁痛】シウツウ　うれへいたむ。後漢書、楊秉傳「四方一一」

【愁眉】シウビ　うれへてひそむるまゆ、しんぱいげな顔つき。漢書「梁冀妻孫壽、善爲ニ一一啼粧一」劉兼詩「强隨ニ綠柳一展ニ一一」

【愁怖】シウフ　うれへおそれる。鮑照詩「始得忘ㇾ憂消ニ一一」

【愁憤】シウフン　うれへいきどほる。蘇舜欽詩「一一徒滿ㇾ胷」

【愁眠】シウミン　うれひねむる。張繼詩「江楓漁火對ニ一一」

【愁夢】シウム　しんぱいのあまりに見るゆめ。高適詩「淚城夜夜多ニ一一」

【愁悶】シウモン　かなしみもだゆ。嫦合詩「一官無限日、一一欲ニ何如一」

【愁滴】シウテキ　うれひ、もだえる。王逸、招魂章句「一ニ山澤一」

【愁容】シウヨウ　愁色に同じ。

【愁霖】シウリン　平御覽、纂要曰、久雨曰ニ苦雨一、曰ニ一一一。朱熹詩「浮雲蔽ニ中天一、一一隔ニ秋園一」＝苦雨。

【愁淚】シウルイ　うれへのなみだ。常建詩「一一盡ニ楚竹一、蛾眉妾ニ湘川一」

【慳】ジン　㊥

○まこと（誠）＝謹。○斷ㇾはたゆたふ（遲疑）

【惹】㊀ジャ　㊁ジャク　麻　藥

㊀ひく（引苦）羅鄴詩「微香暗ㇾ遊人步」○みだる（亂）㊁ひく（掣）

【惹起】ジャキ　ひきおこす。感情を引き起す。

【惷】シュン　㊥　通じて蠢に作る

○おろか（愚）一說に惷の誤用「愚一」○みだる（亂）動き擾れる。

【惷惷】シュンシュン　うごきみだれる貌。左、昭二四「今王室實一一焉、晉小國懼矣」

【惷窒】シュンチツ　愚にして通ぜず。皮日休、博貿文「蔽ニ滯儒之一一ㇾ今」

【惻】 ショク　㊥ 通音 ソク

○いたむ(痛)痛み悲む「悲ー」「悲ー」○かなしむ(愴)

同訓異義 惻・悼・傷・痛・隠・悽・慘・戚等の別は悼(心部八畫)の條を見よ。

【惻隠】ソクイン　あはれむ、あはれみ。惻は傷の切なるなり、隠は痛の深きなり。孟、公孫丑「ー之心、仁之端也」

【惻愴】ソクソウ　いたみかなしむ。荷悦文「貫誼過二湘水一弔二屈原一、ー動レ懐。劉基詩「感慨思二古人一、ー淚沾レ纓」

【惻心】ソクシン　いたみあはれむこころ。＝惻隠之心。

【惻楚】ソクソ　いたみくるしむ。韓愈、元和聖徳詩「侍祠之臣、助二我ー一」

【惻隠】ソクイン　いたみかなしむ。傅成賦「痛二両肚之殺別一、心ー以情傷」

【惻切】ソクセツ　甚だいたみせまる。傅成賦「心ー以興レ思、思有レ感二于聖明一」

【惻然】ソクゼン　あはれみいたむ貌。＝惻隠。

【惻測】ソクソク　あはれみいたむ貌。後漢書「同聞ー一、出二于誠心一」

【惻怛】ソクタツ　いたみかなしむの證、問喪「ー之心、痛疾之意」＝切怛。

【惻痛】ソクツウ　いたみかなしむ。論衡「召レ醫和レ藥者、ー一懇惻、實レ有レ験也」

【惻悶】ソクビン　いたみあはれむ。梅堯臣詩「取レ樂在二須臾一、我心真ー一」

【惴】 ズイ　㊦

○おそれる(懼)○うれふ(憂)

【惴慄】ズイリツ　おぢおそれる。王安石文「親友ー一羣」

【惴恐】ズイキョウ　うれひおそれる。史、項羽紀「楚兵呼聲動レ天、諸侯軍、無レ不二人人ー一一一」＝惶恐。

【惴縮】ズイシュク　おそれちぢむ。唐書、劉洎傳「猶恐聖臣ー一不二敢進一」

【惴惴】ズイズイ　びくびくとおそれる貌。詩、秦風「臨二其穴一、ー一其慄」

【惴蟄】ズイチツ　足のなき蟲のうごめく貌。莊子「ー一之蟲、有レ知之物、莫レ不レ失二其性一」＝惴慄。

【惴惕】ズイテキ　おそれうれふ。柳宗元文「惨惨然歎歔ー一」

【惴慄】ズイリツ　おそれふるふ。＝惴惴を見よ。

【惺】 セイ　㊦

○さとし、さとる(悟)心を靜かにして道理をさとる。○しづか(靜)心がおちつく。

【惺悟】セイゴ　心さとし。了慧なる貌。

【惺忪】セイショウ　動きて定らざる貌。元稹詩「桐花暗淡柳ー一」

【惺惺】セイセイ　○心さとき貌。昧からず。上蔡語錄「敬是常ー一法」劉基銘「昭昭生二于ー一」○憒憒出二于冥冥一」○鶯の聲。陸游詩「鶯語ー一野蠻驕」

【愀】

㊀セウ　㊁シウ　㊂シウ　㊃ 櫛 有 宥 尤

㊀かほいろがかはる、容色變ずる、しほれる。○愁ふる貌。○つつしむ(謹)㊁いろかはる。㊂さびし、ものさびし(蕭條)

【愀慘】シウサン　悲みていたむ。楊德祖、傷二馴烏一賦「怨ー一以類報」＝悽慘。

【愀然】シウゼン　○かほ色を變ふる貌の續、哀公問「ー一作レ色」○うれひかなしむ貌。赤壁賦「ー一正レ襟危坐」

【愞】

㊀ゼン・ネン　㊁ダン・ナン　㊂ダ　㊃ 銑

㊀よわし(劣弱)㊁おそれる、よわし(怯)＝懦。漢書、武帝紀「大守坐畏ー一棄市」

【惰】

㊀タ・ダ　㊁ダ　㊂ 哿 箇 歌 通じて靖に作る

㊀おこたる、おこたり(懈怠)なまける「意ー」「怯ー」「昏ー」「遊ー」「敖ー」書、金縢「股肱ー一哉」○つつしまず(不敬)○あなどる(易)輕んずる。㊁なまり(訛)正しからざることば。曲禮「言不ー」

同訓異義 惰・怠・解・慢の別は怠(心部五畫)の條を見よ。

【惰游】ダユウ　なまけてあそぶ。禮、玉藻「ー辟五寸、ー一之士也」＝嬉游。

【惰氣】ダキ　なまけたるきぶん、いやき。

【惰肆】ダシ　なまけてほしいまま。宋史、隱逸傳「語音脫易、擧止ー一」

【惰慵】ダヨウ　なまけて心よわし。

【惰窳】ダユ　なまけてなげやりにする。陸游詩「兒童勿ニー一一」＝怠惰苟且。

【惰農】ダノウ　なまける農夫。書經「ー一自安、不レ警二作勢一」

【惰廢】ダハイ　事をおこたりすてる。周禮、地官注「起二其勤等樂業之心一、不レ使二ー一一」＝怠廢。

【惰窳】ダユ　なまけてまづし。乞食をいふ。靚允明猥談「率化有二再戸一、偕臥二之ー一一」＝惰民。

【惰慢】ダマン　おこたりあなどる。史、樂書「ー一邪僻之氣、不レ設二于身體一」＝怠慢。

【惰眠】ダミン　なまけてねむる。

【惰窳】ダユ　なまける。論衡「ー一之人不レ力レ農」＝懶惰。

【惰容】ダヨウ　なまけてしだらなきかた

ち。北史「自ㇾ旦至ㇾ暮、略無二一一こ

【惕】㊀タウ 養 陽 ㊁シヤウ 陽

㊀ほしいまま(放)㊁一一(シヨウ)は直く疾き貌。韻、王褒「行容一一」

【惕怵】(カン)ほしいままにしてあらし。荀、榮辱「一一惕慄」

【惵】テフ 葉

○おそれる(懼)○一一はあやぶみおそれる。後漢書、寒朗傳贊「一一楚黎」○しづか(靜)

【惵息】(ソクソク)おそれていきをころす。後漢書、賈后紀「宮房一一」

【惱】ナウ 皓

○なやみ。なやむ、苦慮する「憂一」韓偓詩「春一情懷身覺瘦」なやます、苦める。○うらむ、恨みわづらふ。○懊一は昔の時の民間の歌謠の名(晉書、樂志)‖懊惱。○【惱煩】一(ナウバン)はうき世のほだしに心の引かれるわづらひ。○【醫】「御一」は天子の病氣。

【同訓異語】惱・悩・腦・瑙・堖・垴・壖・蝳○惱はくるしみなやむ、苦惱・憂惱・煩惱と連用す。○懊は恨み惱む義、懊惱と連用す。○腦・瑙の二字共に事のなんぎなる義。○阻は險なり、難なり、むつかしくして、思ふやうにゆかぬ義。書經「黎民阻ㇾ飢」○垴・壖・蝳の三字共に、なやむと訓す、垴は晉チュン草木の土を破り出でんとして出で難き貌、轉じてさわりありて進み得ざるにいふ、壖に同じ、壖は晉テン、ゆさなやみ、たちもとほる義、垴・壖と通用す。○蝳は晉ケンあしなへなり、轉じて險難の義に用ふ。

【惱害】(ナウガイ)くるしめそこなふ、くるしみ。法苑珠林「以ㇾ善利ㇾ生、徒無二相一一一」

【惱苦】(ナウク)なやみくるしむ、なやみ。‖苦惱。

【惱殺】(ナウサツ)なやむ。なやます。李白詩「千杯綠酒何辭ㇾ醉、一面紅粧一二一人」

【惱悶】(ナウモン)なやみもだえる、なやみ。

【愍】ビン 軫 通じて閔に作る

○あはれむ(憐憫)「憐一」「慈一」「惜一」「弔一」○いたむ(痛)○うれふ(憂)○かなしむ(悲)謹法「使民悲傷曰一」

【愍惀】(ビンビン)ふびんにおもふ貌。いたましくあはれなる貌。漢書、宣帝紀「脤恤一一」‖愍然・憫然。

【愍然】(ビンゼン)前條に同じ。

【愠】ヒヨク 職 通音フク

○まこと、まごころ(誠志)漢書、劉向傳「發憤悁一」○心むすぼれる(鬱結)

【愠憶】(フクオク)まごころのいきどほり、憶は臆なり。漢書、陳湯傳「狼屬一一、鷙勇奮發」

【愠憶】(フクオク)心むすぼれる貌。後漢書、馮衍傳「心一一而紛紜」李華、弔二古戰場一文「一一誰訴」‖鬱結・腦瞹。

【愠抑】(フクヨク)かなしみいきどほる。潘岳文「一一失ㇾ聲」‖哀憤。

【愎】ヒヨク 職 通音フク

もとる(戻很)かたいぢ「剛一」「狠一」

【愎諫】(ヒフクカン)いさめにもとる。諫言を用ひず。左、僖十五「一ㇾ一違ㇾ卜、固敗是求」

【愎戾】(ヒフクレイ)ねぢけもとる。王融文「風土之思深、一一之情動」‖悖戾。

【愊】ヘン 銑 通じて褊に作る

○こころせまし。○きみじか(性急)

【愊狹】(ヘンケフ)こころせまし。‖褊狹。

【愊心】(ヘンシン)せまきこころ、器量が淺く狹し。莊、山木「有二虛船來觸ㇾ舟、雖ㇾ有二一一之人一不ㇾ怒」‖褊心。

【愍】ボウ 皓 常

おろか(愚)

【愉】㊀ユ ㊁トウ ㊂ユ 虞 尤 虞

㊀やはらぎよろこぶ(和悅)「一悅」「怡一」「欣一」「恬一」よろこび(悅懌)よろこばす。呂覽、禁塞「以一其意」○たのしむ、たのしましむ(樂)○したがふ(服)いたはる(勞)㊁かりそめ(苟且)周禮、大司徒「則民不一」‖偷。㊂ものうし(懶)つかれる(勞)‖瘉。

【同訓異語】愉・喜・欣・悅・歡・怡等の別は喜(口部九畫)の條を見よ。

【愉逸】(ユイツ)たのしみやすんず。荀子「爲二愚禹一則常一一、爲二工匠農賈一則常煩勞」‖安樂。

【愉悅】(ユエツ)よろこぶ。人物志「聽二言說一則擬錄而一一」‖喜悅・愉懌。

【愉快】(ユクワイ)こころよし。史、酷吏傳「非二武健嚴猛、惡能勝二其任一而一一乎」

【愉歡】(ユクワン)愉悅に同じ。

【愉色】(ユシヨク)よろこばしげなるかほ色。禮、祭義「有二和氣一者、必有二一一一、有二一一一者、必有二婉容一」

【愉絕快絕】(ユゼツクワイゼツ)この上もなくここ

ちよし。
【愉愉如】ジュジョ　顔色のやはらぎよろこぶ貌。論、郷黨「私覿、——也」
【愉樂】ユラク　よろこびたのしむ。楚辭、九章「踥蹀志而——」

【愈】ユ　㊀ユ　㊁ヨ　虞

㊀まさる(勝)孟、告子「丹之治水也——於禹」○すぐ(過)○かしこし(賢)論、公冶長「女與回也孰——」○すすむ(進)○まず(金)○いゆ(癒)病がなほる「平——」孟、公孫丑「昔者疾、今日——」㊁いよいよ。○よろこぶ。愉に通ず。

同訓異字　愈・瘉○愈はまさると訓む、いやましと譯す、一段を上ぐれば、又、一段といふ如く、きき〳〵とこゆる意なり。○瘉は、わたると訓む、段段に滿ちて、一ばいになりたる意なり、弟子瘉衆といへば、四方より衆り來る弟子が、いやまし多くなりたる義なり。○愈・優・勝・賢の別は優(人部十五畫)の條を見よ。

【愈愚】グヰイグ　おろかなる心をいやす。說苑、說叢「人皆知二以食一レ飢、莫レ知二以學一レ愈」
【愈愈】ユユ　愚ふる心の甚だしき貌。詩、小雅「憂心——、是以有レ侮」

十畫

【慇】イン　㊀殷に通ず

○いたむ(痛)○ねんごろ「——懃」
【慇懃】インギン　思ひいたむ貌。詩、小雅「憂心——」＝殷勤。
【慇懃】インギン　ねんごろ(委曲)人と相親みて懇にする。司馬遷文「未下嘗銜二杯酒一接中——之歡上」＝殷勤。
【通二慇懃一】ツウインギン　男女思慕の情を通ずる。漢書、司馬相如傳「相如乃使下侍人重二賜文君一通中慇懃上」文君は卓氏の女、後に相如の妻となる。

【慍】ウン　慍(心部九畫)の本字。

【慆】トウ　㊁

○むなさわぎ(悸)○よこしま(邪)○まどふ(惑)○みだる(亂)○——は愛へてうつたふる所なき貌。郊雅、釋訓「——愛無告也」

【愷】カイ　㊀ガイ　通　豈・凱に通ず

○やすし(康)やはらぐ「和——」○たのしむ(樂)○かちいくさの樂(軍勝之樂)○みなみかぜ(南風)
【愷歌】ガイカ　かちどきのうた。司馬法「得レ意則——、示レ喜也」＝凱歌。
【愷樂】ガイラク　かちいくさに奏する音樂。周禮「——獻二於社一」＝凱樂。
【愷悌】ガイテイ　やはらぎたのしむ。孝經「詩云、——君子、民之父母」＝凱弟・豈弟・樂易。
【愷風】ガイフウ　みなみかぜ。楚辭「願二——一以從遊」＝凱風。

【慤】カク　㊀愨は俗字

○つつしむ(謹)「嚴——」「謹——」すなほ(愿)實樸實實「愿——」○まこと(誠)「端——」「誠——」○よし(善)
【慤士】シカク　誠實なるさむらひ。荀、不苟「若レ是則可レ謂二——一矣」

【愾】㊀キ・ケ　㊁カイ　㊂ガイ　未　泰　隊

㊀ためいき(太息)ためいきをつく貌。祭義「出戸而聽、——必有レ聞二乎其歎息之聲一」
【愾然】ケイゼン　氣が滿つる、ためいきをつく貌。祭義「出戸而聽、——必有レ聞二乎其歎息之聲一」
【愾憤】ガイフン　いきどほる。敵愾心をいふ。晉語文「二——逢戎、徘徊孤劍」＝憤慨・悾愾。

【愧】キ　㊀もと媿に作る

はづ。はぢ(慙恥)「慙——」「羞——」「感——」詩、大雅「尚不——于屋漏」
同訓異字　愧・恥・辱・忝・慙・怍・羞等の別は恥(心部六畫)の條を見よ。
【愧長】キチョウ　はぢおそる。白居易詩「胸レ心無二——一、臨レ口有二詩讖一」
【愧赧】キタン　はづると、なげくと。北史、魏宣武帝紀「有レ慙二——一」＝慙慨。
【愧悸】キキ　はぢおどろく。晉書、賈充傳「驚起而散、充甚——」
【愧汗】キカン　はぢてあせかく。李商隱詩「羞衣沾二——一」＝慙汗。
【愧慴】キショウ　はぢおそれる。白居易「犯者——、遂改レ節爲二廉士一」
【愧寤】キゴ　はぢさとる。江淹文「——銘朝、慙夢流夜」＝愧悟。
【愧恨】キコン　はぢうらむ。吳越春秋、心氣快快、常有二——之色一」＝慙恨。
【愧慙】キザン　はづ。韓詩外傳「田子——、走出造レ朝遺レ金」＝慙愧・愧恥。
【愧死】キシ　はぢて死する、深くはぢ入る。＝慙死。
【愧羞】キシュウ　はづ、はぢ。＝羞恥・愧恥。
【愧心】キシン　內に省みてやましき心。左傳「其說史鰌信無二——一矣」
【愧沮】キソ　はぢて氣がはばむ。唐書、曹確傳「縮縮——」

【愧色】クワイショク はづるかほいろ。後漢書、郭泰傳「無ニ一一一」‖慙色。
【愧笑】クワイセウ はぢわらふ。後漢書、明帝紀「令ニ人一一一」
【愧赧】クワイタン はぢて顔を赤らむ。曹植文「五情一一」‖赧愧。
【愧恥】クワイチ はづ。はぢ。書經「其心一一、若レ趨ニ于市一」‖愧羞。
【愧傷】クワイシャウ はぢおそれる。魏志、注「中心一一、敬賜ニ厚情一」‖慚傷。
【愧覩】クワイト はぢてかほを赤くする。蘇軾文「公私一一、風夜憂惶」‖愧赧。
【愧負】クワイフ はぢる。蘇軾詩「倒レ裳起謝レ客、夢覺兩一一」
【愧服】クワイフク はぢて屈ししたがふ。宋史、程之邵傳「使者一一」
【愧慾】クワイヨク はぢうらみて怒る。宋史、何承矩傳「契丹一一、故有ニ此役一」
【愧憤】クワイフン はぢいきどほる。晉書、王敦傳、疏「慚ニ慨于遐邇一、一ニ于門宗一」‖慚憤。
【愧慄】クワイリツ はぢておそれる。韓愈詩「鄙夫忝ニ縣尹一、一一難レ爲レ情」

【愾】

㊀キク ㊁チク 庚 通じて喜に作る

㊀やしなふ（養）詩、邶風「不一我能一」〇おごる（驕）〇あつむ（衆）つむ（積）㊁うらむ（恨）

【慌】

㊀クワウ ㊁クワウ 養 陷 又、慌に作る

㊀くらし（昏）分明ならず、うっとりとする貌。‖恍慌。〇あわただし（急迫）〇おそれる、恐懼の意「恐一」㊁わすれる（忘）〇あわただし（急遽）

【慌惚】クワウコツ うっとりとしたる貌。又、微妙にして測られざる貌。蜀志、劉琰傳「失レ志一一」‖恍惚。
【慌忙】クワウバウ あわてる貌。狼狽する。

【愾】

ケツ 薛 通じて喜に作る

〇おそる（怯）〇おびやかす、威力にておどす。魏志、曹植傳「劫ニ一使者」

【慊】

㊀ケン ㊁ケツ・カツ 㒳 琰 銑

㊀うらむ（恨）あきたらず、不満足に思ふ「一一」孟、公孫丑「吾何一乎哉」〇こころよし（快）あきたる（足）莊、天運「盡去而後一一」‖嫌。〇まこと（誠）「誠一」㊁あきたる（足）こころよし（快）㊂きらふ、きらひ「避レ一一」‖嫌。うたがふ、うたがひ（疑）

【慊然】ケンゼン 〇あきたらず、満足せず。‖慊如。〇あきたる貌。
【慊慊】ケンケン 心に満足せざる貌。又、恋ふる貌。後漢書、五行志「一一常若レ不レ足」
【慊如】ケンジョ あきたらざる貌。物の不十分なる形容。陸機文「初都ニ離業一、策臣請レ備ニ禮秩一、天子辭而不レ許曰、天下其謂ニ朕何一、宮室輿服、益一一也」
【慊容】ケンヨウ をしむ。世說「應レ辭便許、略無ニ一一一」

【慝】

古、原に作る

〇つつしむ（謹）「謹一」書、皐陶謨「一一而恭」〇よし（善）論、泰伯「侗而不一」〇すなほ（愿）「敦一」

【慝婉】ゲンエン 律儀にしてすなほなる義。韓詩外傳「一一竭忠、則合レ之以ニ禮樂一」
【慝隱】ゲンカク すなほにしてまことあり。愿は誠實の意。荀子「上誠誠、則下一一」
【慝謹】ゲンキン すなほにしてつつしむ。史、儒林傳「一一不レ好ニ外交一」‖謹愿。端愿。
【慝恭】ゲンキョウ つつしみてうやうやし。書、皐陶謨「愿而恭」‖恭愿。
【慝款】ゲンクワン 謹みて誠あり。後漢書、江革傳「辭氣一一、有レ足レ感ニ動人者一」‖愿款。
【慝朴】ゲンボク つつしみてかざりなし。後漢書、劉寵傳「山民一一、乃有ニ白首不レ入ニ市井一者一」

【慵】

㊀ヨウ ㊁ヨウ 冬 通じて庸に作る

㊀いたむ。いたみ（傷）「悲一」「惻一」「一一」〇かなしむ、かなしみ（悲）禮、祭義「霜露既降、君子履レ之、必有ニ悽一之心一非ニ其寒之謂一也」㊁一悦は失意の貌。

【慵悦】ヨウエツ 悼・悼・痛・愍・悽・愾等の別は悼（心部八畫）の條を見よ。
【慵然】ヨウゼン かなしき貌。曹植文「心之云苦、一一其悲」
【慵恨】ヨウコン いたみうらむ。梁鍾嶸「孤ニ帆川一以一一兮」
【慵愴】ヨウサウ かなしみいたむ貌。柳宗元文「儒士人、頗識ニ古今理道一、獨一一

【慣】

ケツ 屑 古、原に作る

【慣忙】ケツバウ 〇おそれる貌。後漢書、五行志「一一常若レ不レ足」
【慣如】ケツジョ あきたらざる貌。物の不十分なる形容。陸機文「初都ニ離業一、策臣請レ備ニ禮秩一、天子辭而不レ許曰、天下其謂ニ朕何一、宮室輿服、益一一也」
【慣容】ケツヨウ をしむ。世說「應レ辭便許、略無ニ一一一」

【慍】

ウン 問

〇つつしむ（謹）「謹一」書、皐陶謨「一一而恭」〇よし（善）論、泰伯「侗而不一」〇すなほ（愿）「敦一」

【慍婉】ウンエン 律儀にしてすなほなる義。韓詩外傳「一一竭忠、則合レ之以ニ禮樂一」
【慍隱】ウンカク すなほにしてまことあり。愿は誠實の意。荀子「上誠誠、則下一一」
【慍謹】ウンキン すなほにしてつつしむ。史、儒林傳「一一不レ好ニ外交一」‖謹愿。端愿。
【慍恭】ウンキョウ つつしみてうやうやし。書、皐陶謨「愿而恭」‖恭愿。
【慍款】ウンクワン 謹みて誠あり。後漢書、江革傳「辭氣一一、有レ足レ感ニ動人者一」‖愿款。
【慍朴】ウンボク つつしみてかざりなし。後漢書、劉寵傳「山民一一、乃有ニ白首不レ入ニ市井一者一」

【慳】

ケン 刪 通じて牽に作る

〇おしむ（惜）〇ともしむ（貧）〇うらむ（恨）

【慳悋】ケンリン 〇おしむ。〇ともしむ。
【慳貪】ケンドン 貪欲なる義。

【慷】

カウ 陽 通じて康に作る

【慷慨】カウガイ 〇いきどほる。〇なげく。
【慷慨】カウガイ 〇いきどほる。〇なげく。
【慷慨】カウガイ 〇いきどほる。〇なげく。

【慢】

マン 諫 通じて嫚に作る

〇おこたる（怠）〇あなどる（侮）〇おごる（驕）〇ゆるやか（緩）〇みだる（亂）〇うとし（疎）〇ほしいまま（恣）〇ながし（長）

【慢易】マンイ 〇おこたる。〇あなどる。
【慢怠】マンタイ おこたる。
【慢侮】マンブ あなどる。
【慢遊】マンイウ ほしいまま。
【慢游】マンイウ ほしいまま。
【慢令】マンレイ ゆるやかなる令。
【慢緩】マンクワン ゆるやか。
【慢亂】マンラン みだる。
【慢疎】マンソ うとし。
【慢恣】マンシ ほしいまま。
【慢長】マンチャウ ながし。

【慚】

ザン 咸 通じて慙に作る

〇はぢる（恥）〇はぢ。

【慚悸】ザンキ はぢおそれる。
【慚恚】ザンイ はぢいかる。
【慚恨】ザンコン はぢうらむ。
【慚赧】ザンタン はぢて顔を赤らむ。
【慚愧】ザンキ はぢる。
【慚懼】ザンク はぢおそれる。
【慚悚】ザンシャウ はぢおそれる。
【慚色】ザンショク はぢるかほいろ。
【慚汗】ザンカン はぢて汗を流す。
【慚服】ザンフク はぢて屈ししたがふ。
【慚負】ザンフ はぢる。
【慚忸】ザンジク はぢる。
【慚媿】ザンキ はぢる。
【慚恥】ザンチ はぢる。
【慚羞】ザンシウ はぢる。

【慙】

ザン 咸 通じて慚に作る

〇はぢる（恥）〇はぢ。

【慙悸】ザンキ はぢおそれる。
【慙恚】ザンイ はぢいかる。
【慙恨】ザンコン はぢうらむ。
【慙赧】ザンタン はぢて顔を赤らむ。
【慙愧】ザンキ はぢる。
【慙懼】ザンク はぢおそれる。
【慙悚】ザンシャウ はぢおそれる。
【慙色】ザンショク はぢるかほいろ。
【慙汗】ザンカン はぢて汗を流す。
【慙服】ザンフク はぢて屈ししたがふ。
【慙負】ザンフ はぢる。
【慙忸】ザンジク はぢる。
【慙媿】ザンキ はぢる。
【慙恥】ザンチ はぢる。
【慙羞】ザンシウ はぢる。

【慘】

サン 感 通じて憯に作る

〇いたむ。いたみ（傷）「悲一」「惻一」「一一」〇かなしむ、かなしみ（悲）禮、祭義「霜露既降、君子履レ之、必有ニ悽一之心一非ニ其寒之謂一也」㊁一悦は失意の貌。

【慘悦】サンエツ 悼・悼・痛・愍・悽・愾等の別は悼（心部八畫）の條を見よ。
【慘然】サンゼン かなしき貌。曹植文「心之云苦、一一其悲」
【慘恨】サンコン いたみうらむ。梁鍾嶸「孤ニ帆川一以一一兮」
【慘愴】サンサウ かなしみいたむ貌。柳宗元文「儒士人、頗識ニ古今理道一、獨一一

【情】

ジョウ 庚

こころみだる（心亂）漢書、息夫躬傳「心結一分傷肝」

【恩】

コン 元 又、慁に作る

〇うれふ（憂患）左、昭六「主不一一寡」〇はづかしむ（辱）けがす（汚）禮、儒行「不一一君王」〇みだす（亂・擾）迷惑をかける。史、范雎傳「足下以ニ寡人一、先生」

【愴】

㊀サウ ㊁サウ 養 漾

㊀いたむ。いたみ（傷）「悲一」「惻一」「一一」〇かなしむ、かなしみ（悲）禮、祭義「霜露既降、君子履レ之、必有ニ悽一之心一非ニ其寒之謂一也」㊁一悦は失意の貌。

【愴悦】サウエツ 悼・悼・痛・愍・悽・愾等の別は悼（心部八畫）の條を見よ。
【愴然】サウゼン かなしき貌。曹植文「心之云苦、一一其悲」
【愴恨】サウコン いたみうらむ。梁鍾嶸「孤ニ帆川一以一一兮」
【愴愴】サウサウ かなしみいたむ貌。柳宗元文「儒士人、頗識ニ古今理道一、獨一一

如ㇾ此」吳質詩「一一懷二殿委一」

【慅】

㊀サウ　㊁サウ　㊂サウ　呉　漢　唐

㊀うごく（動）さわぐ。‖騷。○おこる（起）㊁つかれる（労）㊂うれふ（愁）

【慅勞】サウラウ　つかれる貌。詩、陳風「勞心一一」

【慅慅】サウサウ　○うれへる貌。嵇康詩「今日不ㇾ樂心一一」○恐懼する貌。晉書、李雄林傳「軍中一一」

【慈】ジ　支

○いつくしむ。いつくしみ（愛）なさけをかける「仁一」「孝一」父母の子を愛するにいふ。左、昭二六「父一子孝」○やはらぐ（柔）禮、內則「必求其ㇾ柔一裏」よし（善）○めぐむ。めぐみ（仁）○佛の垂れるあはれみ「大一大悲」○竹の一種、めだけ。○一石ジシャクは鐵を吸ふ石の名。○父の嚴に對して母のことにいふ「家一」

【慈愛】ジアイ　いつくしみ。左、僖二七「夫戰樂一一、戰所ㇾ蓄也」

【慈姑】ジコ　いつくしみあるはは。梅堯臣詩「持歸奉二一一」

【慈悲】ジヒ　いつくしみの心。淨住子「若以二一一一視二衆生一者、得二佛淨目上下眴相一」

【慈育】ジイク　いつくしみてそだてる。梁簡文帝文「覆二載若生一二一一黎首一」

【慈雨】ジウ　めぐみのあまねく多きに喩へていふ。梁簡文帝、請三武帝御講一啓「油然慧雲、霈然一一、光二斯盛業一、潤二彼苦生一」

【慈烏】ジウ　烏の異稱。梁武帝、孝思賦「一一反哺以報ㇾ親」烏は成長の後、其の親に餌を與へて、養育の恩を報ず、之を反哺といふ。

【慈雲】ジウン　㊀めぐみの普く及ぶに喩ふ。雜譬集「如來慈心、如二彼大雲、隨二衆世界一」‖慈雨。

【慈悦】ジエツ　いつくしむ。張君祖詩「庶方振二德化一、飛類蒙二一一」

【慈恩】ジオン　めぐみ、あはれみの深之意。詩「慈遲膺二寵御一、一一泰二翰林一」‖慈惠。

【慈恩寺】ジオンジ　長安に在る寺の名。貞觀、追二生母一神龍一後、期集二一一塔下一、題ㇾ名」

【慈航】ジカウ　㊀慈悲の心を以て衆生を濟度するに喩ふ。柳宗元文「譬二一一一登二彼岸一者」

【慈眼】ジゲン　○なさけあるまなこ。李子卿賦「一一如ㇾ歸」○ジヒのまなこ。法華經「一一視二衆生一」

【慈顏】ジガン　いつくしみあるかほ。尊長者の容姿を稱する語。張萬頃詩「宦遊偏不ㇾ樂、長爲二憶二一一一」

【慈訓】ジクン　いつくしみ深きをしへ。又、母の敎。庾信文「母氏一一、寘二於勞苦一」

【慈海】ジカイ　なさけふかきをしへ。胡元瑞詩「紫極流二宸渥一、清規佇二一一一」‖慈訓。

【慈惠】ジケイ　いつくしみめぐむ。慈悲恩惠。左傳「享以副二其儉一、安以示二一一一」‖仁惠、惠慈。

【慈惠醫院】ジケイイイン　無料にて貧民の病氣をなほす爲めに設けし病院。

【慈儉】ジケン　めぐみふかくして費を省く。荀悦書「愛之以二一一一」

【慈姑】ジコ　くわゐ、水草の一、球根を食用とす。梁劉諶「一一根歲生二十二子一、歲閏則十三子、如二慈母之乳諸子一也」

【慈氏】ジシ　㊀佛をいふ、慈悲を以て主とするが故。

【慈旨】ジシ　めぐみふかきおぼせ。唐書、劉洎傳「陛下降二一一一」

【慈膝】ジシツ　いつくしみふかきひざ。兩親のひざもと。隋煬帝文「感二動晨情一、痛深二一一一」

【慈心】ジシン　いつくしみのこころ。

【慈仁】ジジン　いつくしみめぐむ。韓愈文「天子神聖、威武一一」

【慈親】ジシン　いつくしみふかきおや。呂覽、擧立爲二天子一、夏民大說、如ㇾ得二一一一」

【慈胖】ジタク　いつくしみありて善し。儀禮、士相見禮「恭信一一」注「胖、善也」黃庭堅文「想二見其人一、髣髴一一」‖慈善。

【慈獎】ジシャウ　いつくしみてほめすすめる。梁簡文帝表「切逢二一一一、事出二希世一」

【慈石】ジシャク　鐵を吸ふ性ある石。郭璞文「一一吸ㇾ鐵、母子相戀也」俗に磁に作るは非。

【慈憮】ジブ　いつくしみあはれむ。賈至文「一一惠愛、以養二百姓一」‖慈仁。

【慈恕】ジジョ　あはれみておもひやる。宋史、趙師民傳「忠倘清遠、性極一一、勤于吏治」

【慈善】ジゼン　なさけをかけてめぐむ。北史、崔光傳「寬和一一、不ㇾ作二於物一」

【慈竹】ジチク　㊀叢生、子母相依、曰二一一一」

【慈孀】ジソウ　なさけふかきいつくしみ。梁武帝文「特經二一一一」‖慈愛。

【慈念】ジネン　いつくしみおもふ。唐書「一一幼子一」

【慈悲】ジヒ　○あはれみ、いつくしみ。‖仁愛。○㊀苦を救ひ樂を與ふる。法界次第「能與二他之樂心一名ㇾ之爲ㇾ慈、能拔二他之苦心一名ㇾ之爲ㇾ悲」

【慈悲心鳥】ジヒシンテウ　鳥の名、佛法僧の異名。其の鳴き聲、慈悲心と呼ぶが如し、故に名づく。‖三寶鳥。

【慈愍】ジミン　いつくしみあはれむ。樂

貴、丹丹國傳「一ニー貧生」＝慈憫。
【慈憫】ジビン いつくしみあはれむ。張衆之文「德自天縱、一ニー元元」
【慈父】ジフ いつくしみあるちち。北史、蘇綽傳「愛レ人如ニー一」
【慈撫】ジブ めぐみやすんずる。宋史「民所ニ安樂、惟日ー一」
【慈問】ジモン いつくしみて、目をかける。晉書、石勒載記「ー一如レ子也」＝恩問。
【慈母】ジボ ○いつくしみあるはは。趙岐、孟子序「幼被ニー一三遷之教」○めのと。又、養母。儀禮、喪服「ー一如レ母」
【慈母有ニ敗子ー】ジボイウハイシ 慈愛に過ぎたる母の下には、反りてやくざなる子が出來る。史、李斯傳「ーー、嚴家無ニ格虜ー」
【慈睦】ジボク いつくしみむつぶ。禮記「敎以ニー一、而民貴レ有レ親」
【慈敢能勇】ジカンノウユウ 慈愛の心厚し、故に自然に勇氣を生ず。老子「ーー、儉故能廣」
【慈陰】ジイン あはれみの心を以て下にのぞむ。齊書、蔓玩之傳「玩之以ニ久宦衰疾、上表書レ退曰、伏願ー一、賜ニ臣骸骨ー」
【慈力】ジリキ 佛なさけぶかき功德の權能。經「與ニ佛如來同一ー一」
【慈涙】ジルイ なさけあるなみだ。白居易詩「ー一隨レ身盡、悲腸過レ物來」
【慈憐】ジレン いつくしみあはれむ。晉箋文「豈意ニー一、更加ニ褒遷ー」
【慈和】ジワ ○君はよく臣をいつくしみ、臣はよく和合する。左傳「上下ー一、ー一而後能安ニ靖其國家ー」○なさけぶかくやさし、慈愛緩和。辨亡論「ー一以結ニ士民之愛ー」

【愼】 シン 震

○つつしむ。つつしみ（謹）「敬ー」「貞ー」「明ー」「謹ー」「戒ー」「清ー」書、益稷「一乃在位」○まこと（誠）誠にする。詩、小雅「ー爾言ー也」○しづか（謐靜）○おもふ（思）○つつしみて、禁戒の辭。史、吳王濞傳「上謂濞曰、ー無レ反」

同訓異字 愼・謹・敬・恭・肅・格の訓は謹（言部十一畫）の條を見よ。

【愼戒】シンカイ つつしみいましむ。大戴禮「ー一必恭、恭則壽」＝戒愼。
【愼機】シンキ 事のきざしをつつしむ。崔琦、外戚箴「愚生ニ不識、福有ニー一」
【愼謹】シンキン つつしむ。呂覽「淳淳乎ー一」＝謹愼・敬愼。
【愼刑】シンケイ 刑を行ふことをつつしみて輕輕にせざる義。隋書、音樂志、自帝歎「厲レ兵詰レ暴、敎法ー一、明神降レ祐、國步惟寧」＝愼罰。
【愼言】シンゲン 言を謹みてみだりにいはず。家語、觀周「有ニ金人ー一、三緘其口、而銘ニ其背ー一曰、古之ー一人也」
【愼愿】シンゲン つつしみてすなほ。唐書「張介然猜氏人、性ー一長ニ計慮ー」＝恭愿。
【愼厚】シンコウ つつしみぶかくおもおもし。＝篤厚・愼篤。
【愼終】シンシュウ ○事の終を全くせんとつつしむ。賈、仲應之謚「愼ニ厥終ー、惟其初」○父母の葬祭、忌服などをあつくする。論、學而「ー一追遠」
【愼選】シンセン つつしみえらぶ。宋史、太祖紀「當ニ愼ニ其選ー」以見ニ陛寢ー」程子、論ニ經筵事ー疏「ー一賢德之人ー」
【愼擇】シンタク つつしみえらぶ。白居易文「環衛之官、無ニ妓ー一ー」
【愼重】シンチョウ つつしみおもおもし。五代史、安彥威傳「當時稱ニ其ー一ー」＝愼厚。
【愼獨】シンドク ひとりをつつしむ。人の見聞せざる所にても心を正しくする。大學「故君子愼ニ其獨ー也」
【愼罰】シンバツ 愼刑に同じ。荀子「明レ法ー一ー」
【愼微】シンビ 小事を忽にせずしてつつしむ。後漢書、陳寔傳「明者ー一レー、智者識レ幾」
【愼密】シンミツ つつしみぶかし。易、繫辭「是以君子ー一、而不レ出也」
【愼慮】シンリョ 謹みておもんぱかる。禮記「君使ニ其臣得レ志、則ー一而從レ之」

【愆】 ケン 先

愼（前條）の古字。

【愈】 ユ 遇 ユ 麌

㊀うつたへ。論、顏淵「唐受之ー一」うつたへ、うつたへ告ける、ざんげんする（證）論、憲問「公伯寮ー一子路於季孫」＝訴。㊁おどろきおそれる（驚懼）

同訓異字 愈・愬・訴・訟・獄の訓は訴（言部五畫）の條を見よ。

【愈愈】サク おどろきおそれる貌。易、履卦「履ニ虎尾ー一終吉」

【愫】 ソ 遇 通じて素に作る

○まこと（誠）○まごころ（眞情）○まめやか（情實）漢書、鄒陽傳「披ニ心腹ー見ニ情ー」

【態】 タイ 泰

○さま、ありさま、やうす、すがた、なりふり、形狀、容姿「容ー」「姿ー」「形ー」「舊ー」「異ー」「俗ー」「世ー」○こころばへ（意）「情ー」○國わざ、わざと、ことさら。特別「ー使」
【態度】タイド ○ありさま。身ぶり。荀子「容貌ー一、進退趨行」○やうす、おもむき。韓愈詩「君詩多ー一ー」
【態態】タイタイ 國ことさら、特別に。

【愉】㊀タウ ㊁トウ 尤 豪

㊀よろこぶ(喜悦)○あなどる、ほしいまま(慢)「淫ー」○ひさし(久)又、久しき貌。○うたがふ(疑)左、昭二七「天命不ー久矣」天命のまちがひなき義。○かくす(藏)左、昭三「以樂ー憂」㊁すぐ(過)過ぎ去る。詩、唐風「今我不ー樂、日月其ー」

【愉憂】ユウ うれへをかくす。左、昭三「以ー樂ーノー」

【愉淫】ユン ほしいままにしてみだら、放縦にして度なし。書、湯誥「無ー於ー一」‖淫愉。

【愉愉】タウタウ 久しき貌。詩、豳風「我徂ー東山、ー一不ー歸」

【慆】ヨウ 豪 音・央に通ず

慾ーはときすすめる。己は喜ぶことを欲せざるに他人が勧めて之を喜ばしめ、己は怒ることを欲せざるに他人が之を怒らしむるをいふ。

【慄】リツ 質 通じて栗に作る

○おそれる(懼)おそれてふるへをののく、おそれちぢむ(竦縮)「戰ー」「惴ー」「股ー」「縮ー」○かなしむ、いたむ(悽愴)○おそれてぞっとする(寒心)書、大禹謨「懍懍齊ー」懍懍は懼れる貌。○さむし、寒氣が身にしむ「寒ー」古詩「孟冬寒氣至、北風何慘ー」

同訓異字 慄・恐・畏・懼・怖・惴等の別は恐(心部六畫)の條を見よ。

【慄然】リツゼン 慄慄に同じ。

【慄慄】リツリツ ○おそれる貌、ものの貌。書、湯誥「ー一危懼、若ー將ー隕ー于深淵ー」‖畏懼。○悲ださむき貌。‖栗栗・慄然。

【慄烈】リツレツ さむさ甚だしき貌。‖栗烈・慘慄。

十一畫

【慰】ヰ 未

○なぐさむ、心を安んじ情を樂ましむ「安ー」「恩ー」なぐさみ。○人をなぐさめいたはる「弔ー」○園なぐさむ、玩弄する、もてあそぶ。

【慰安】アン なぐさめやすんずる。漢書、魏相傳「ー一元元、便二利百姓一」

【慰藉】シャ きずつけるをいたはりなぐさめる。顏延之文「勉ー傷ノー、撫二循飢渇一」

【慰誘】イウ なぐさめいざなふ。後漢書、順帝紀「ー一日南叛蠻一」

【慰勞】ラウ 勞苦をなぐさめる。黃帽成詩「然ノ薪燎二我衣一、取ノ酒慰二我勞一」‖慰勞。

【慰問】モン なぐさめたづねる。魏志、張后傳、注「無ノ當者ー一之一」

【慰撫】ブ 心をなぐさめる。陶潛詩「何以慰二吾懷一、唯有二古賢一」

【慰勉】ベン なぐさめはげます。魏志、陳矯傳「所三以ー一之一、眞厚」

【慰諭】ユ なぐさめさとす。‖慰論。

【慰藉】シャ なぐさめ助ける。後漢書、

【慰悦】エツ なぐさめめぐむ。魏志、注「盡二心ー一、効二力行陣一」

【慰釋】シャク 心をなぐさめ憂を解く。蘇軾文「手足舞蹈、以自ー一」

【慰答】タフ いたはりて報ゆ。晉書、石勒載記「應是三以ー一存ノ亡申ノ孤之心一也」

【慰恕】ジョ 慰め憐れむ。風俗通「嘉二其孚敎一ー一契闊一、爲二之先後一」

【慰撝】キ やすんじなでる。宋史、克明ー一出二衣服一遺レ之」‖慰撫。

【慰撫】フ いたはりなでる。漢書、上疏以二記書一ー一不ノ許」

【慰問】モン なぐさめまふ。後漢書、宋均傳「帝使二中黃門一ー一」‖存問。

【慰問使】モンシ 軍隊などをなぐさめいたはる爲めに天子の遣はされるつかひ。

【慰勵】レイ なぐさめはげます。魏志、趙儼傳「盡呼二所ノ從人一喩以二成敗一、ー一懇切」

【慰勞】ラウ なぐさめねぎらふ。晉書、李特載記「持ノ節ー一」

【慰勵】レイ なぐさめはげます。魏志、趙儼傳「盡呼二所ノ從人一喩以二成敗一、ー一懇切」

【憂】イウ 尤

○うれふ。うれへ(愁患)心配する「隱ー」「近ー」「先ー後樂」「內ー外患」論、子罕「仁者不ー」○おそれる(懼)呂覽、知分「余何ー於龍焉」○うれへおもふ(愁思)かなしみ。○やまひ(疾)曲禮「某有二負薪之一」○姙娠してわづらふ、つはる。晉語「文王在胎、母不ー」○はづかしむ(辱)○おもんばかり(慮)○喪に居る。書、說命「王宅ー」父母の喪に居るを丁ー一といふ。

同訓異字 憂・愁・患・恤・悶・悼等の別は愁(心部九畫)の條を見よ。

【憂長】チャウ うれへおそれる。梁昭明太子文「豈能感戚勞子ー一」

【憂慌】クワウ うれへて心ふさがる。晉書「遇ノ風停二浦中一、累ノ日ー一」

【憂鬱】ウツ 氣ふさがる。曾子「ー一生

ン病」＝憂結。

【憂慌】ユウクワウ　うれへいさどほる。文同詩「師士辱失レ官、未三始有ニ一ト」

【憂斃】ユウヘイ　うれへなげく。元經傳「一ー疾レ病而卒」＝憂憤。

【憂耿】ユウカウ　うれへ、心配する、耿は不安。梁武帝敕「省レ疏增ニ一ー」

【憂煩】ユウハン　うれへがほ。鮑照詩「遇レ檀數二酷歡一酒遇ニ一ー」＝憂色。

【憂悸】ユウキ　うれへて心おののく。唐書、皇甫無逸傳「一ー不レ能レ食」

【憂喜】ユウキ　うれふると、よろこぶと。史、淮陰侯傳「賞賤在二於骨法一、一ー在二於容色一、成敗在二於決斷一」

【憂悗】ユウケン　うれへはづ。蘇軾詩「困來風二逐箇一、一ー自不レ眠」

【憂恐】ユウキョウ　うれへおそれる。荀子「心一ー則日銜二鉤索一而不レ知二其牽一、耳聽二鐘鼓一而不レ知二其聲一」漢書「淡王一ー、與二鄙食其一謀撓二楚權一」

【憂苦】ユウク　うれへくるしむ。史、文帝紀「陰風興夜雨、勤二勞天下一、一ー爲民一」

【憂虞】ユウグ　うれへおそれる。易經「悔吝者、一ー之象也」＝憂懼。

【憂懼】ユウク　うれへおそれる。陸游詩「書詩錄二一ー一、危亡坐二積媿一」

【憂憒】ユウクワイ　心がうれへみだれる。王襃之文「疾久一ー、當レ思二平理一也」

【憂懷】ユウクワイ　うれふるおもひ。王邁、琴思九歌「一ー感結重歎噫」

【憂世】ユウセイ　世の中の事をなげきうれふる。＝憂時。

【憂煎】ユウセン　うれへいたむ。杜甫詩「城郭洗二一ー一」＝憂感。

【憂感】ユウカン　うれへていたむ。南史、姚察傳、「累居二一ー一」＝愁慼。

【憂慼】ユウセキ　うれへおそれる。呂氏、貧無二衣食一而不二一ー一」＝憂懼。

【憂悴】ユウスイ　うれへおそれる。盧思道、孤鴻賦「窘二東籠笑一、二ー刀俎一」

【憂歎】ユウタン　うれへなげく。後漢書「每慷二一ー一」＝憂嘆。

【憂愒】ユウケイ　うれへいたむ。蜀志、蔣琬傳「臣既闇弱、加嬰二疾疢一、規方無レ成、夙夜二一ー」

【憂思】ユウシ　うれふる心。禮記「其一ー有二如レ此者一」

【憂時】ユウジ　時勢をうれへなげく。＝憂世。

【憂囚】ユウシウ　うれへにとぢこめられる。周盤詩「翻作二一ー一病翁一」

【憂愁】ユウシウ　うれふ。うれへ。史、屈原傳「二一ー幽思、而作二離騷一」

【憂心】ユウシン　うれふるこころ。詩、邶風「一ー悄悄、慍二于羣小一」

【憂痛】ユウツウ　うれへいたむ。詩經「豈不二爾思一、我心一ー」

【憂惱】ユウナウ　うれへなやむ。白居易詩「去何有二顧戀一、住亦無二一ー一」

【丁憂】テイイウ　次條に同じ。北史、李鉉傳

【宅憂】タクイウ　喪に居る。宇解參看。

【居憂】キョイウ　前條に同じ。書、太甲「一ー一」＝憂心。

【憂念】ユウネン　うれへ。劉基詩「鰥鰥秋二一ー一」＝憂心。

【憂悶】ユウモン　うれへいたむ。詩經「戡黽載一ー」疏「我心則一ー」

【憂怖】ユウフ　うれへおそれる。後漢書、袁紹傳「家在レ鄴者皆一ー失レ色」

【憂慎】ユウシン　うれへいきどほる。晉書、龍遜傳「屢三內懷二一ー一、而圖二遠取一不レ報」蘇舜欽詩「一ー後漢レ賀」

【憂病】ユウビョウ　うれふ。

【憂民】ユウミン　人民の事をきづかひ思ふ。張協詩「寤主正二一ー一」

【憂悶】ユウモン　うれへもだえる。＝憂懣。

【憂隨】ユウズイ　うれへわづらふ。漢書、薛王目傳「王一ー置二酒漢第宮一」＝憂悶。

【憂勞】ユウラウ　うれへわづらふ。史記「三王之一ー二天下一久矣」＝憂苦。

【憂樂】ユウラク　うれふると、たのしむと。申鑒「爲レ世一ー者、君子之志也」

【憂慮】ユウリョ　うれへおもんばかる。諸葛亮、出師表「受レ命以來、夙夜一ー」

【慨】ガイ　國　通じて慨に作る

○なげく。なげき(歎)歎息する「歎一」いきどほる(憤激)「感一」「憤一」○かなしむ(悲)うれふ(憂)なげきうれふ、いたむ(悼)

【慨然】ガイゼン　深くうれへかなしむ貌。＝慨然。

【慨慷】ガイカウ　なげきおもふ。梁簡文帝文「分別已來、每增二一ー一」＝慨想。

【慨嘆】ガイタン　なげく貌。劉向、愍思賦「情一ー而長慨兮」

【慨嘆】ガイタン　なげく。嵇康詩「俗厚喜二豐侈一、氣侠存二一ー一」＝慷慨・抗慨。

【慨慎】ガイシン　なげきうらむ。晉書、殷仲

堪傳「永爲二鄰廟之資一而忽爲二荊楚之珍一所レ以ー一」
【慨想】ガイ　なげきおもふ。葛長庚賦「登二江山一以ー一」
【慨世】セイ　世をなげきうれふ。
【慨然】ゼン　○甚だしくうれひかなしむ貌。禮、檀弓「既葬ー一如レ不レ及」＝慨歎。○いきどほりなげく貌。後漢書、范滂傳「ー一有二澄二清天下一之志」と
【慨息】ソクガイ　なげきてためいきする。北征賦「撫二長劍一以ー一兮」＝歎息。
【慨歎】タン　なげく。王昌齡詩「主人就レ我飲、對レ我還ー一」
【慨憤】フン　なげきいきどほる。傅亮文「誓雪二國恥一、ニー陵夷」＝憤慨。

【慷】 カウ　陽　養

なげく、感じ憤る。＝忼。
【慷慨】カウガイ　○いきどほりなげく。後漢書、齊武王縯傳「性剛毅ー一」＝忼慨・慨慷。○節を用ひて吝惜する所なき義。
【慷慨赴レ死易】シニヤスシ　一時の怒に乘じて死することは易し（謝得、卻穌書）もと稽頭の言、近思錄に「伊川先生曰、感慨殺レ身者易、從容就レ義者難」とあるに本づく。
【慷明】カウ　なげきてためいきする。孔叢子「發憤ー一、忘二己貧賤一」

【慬】 ガウ　ゴウ　號　慬に通ず

おごる、おごり（倨）後漢書、崔駰傳「生而貴者ー一」
【慬誕】ガン　おごりてほしいままに大言を好む。晉書、王恬傳「恬性ー一、不レ拘二禮法一」
【慬遌】マイ　おごりたかぶる。晉書、王恬傳「神氣ー一、竟無二賓主之禮一」
【慬傲】ゴウ　おごりたかぶる。＝傲慢。

【慤】 慤（心部十畫）の俗字。

【憧】 キン　文

○うれへかなしむ（憂哀）○いさむ（勇）

【慣】 クヮン　諫　或は貫に作る

なれる、ならふ、ならはし（習）「習ー」左傳「譬如二畋獵射御一、ー則能獲禽」
同訓異字　慣・倣・習・傲・肆・閑の別は倣（人部十畫）の條を見よ。
【慣行犯】カウハン　同一の所業を數回行ふによりて成立する罪。
【慣卿】カウケイ　なれしたしむ、卿は近づきしたしむ（管子、民相親、注）
【慣習】シフクヮン　なれる、ならはし。杜甫詩「ーニー炎蒸二歲編緒」＝習慣。
【慣習法】シフクヮンハフ　法律上效力を有する世間のならはせ。＝不文法。
【慣熟】クヮンジュク　よく手なれる。
【慣手段】クヮンシュダン　圖なれたるてだて、いつものしかた。＝慣用手段。
【慣性】クヮンセイ　物體が永久に靜止し又は永久に動かんとする性質。＝惰性・習慣性。
【慣用】クヮンヨウ　使ひなれる。
【慣例】クヮンレイ　いつものしきたり、ならはし。＝常例。

【慧】 ケイ　エ　圖　通じて惠に作る

○さとし（敏）「智ー」「聰ー」「巧ー」「敏ー」「早ー」○さとる（了、曉解）○ちゑ（智）○かしこし（賢）○小ーはこりこう、ここがしこ。＝黠。衛靈公「好行二小ー一」
【慧遠】ヱヱン　晉の僧、廬山に住し、陶淵明等と白蓮社を結ぶ（蓮社高賢傳）
【慧可】エカ　僧の名、初の名は神光、北魏の人、達磨大師嵩山少林寺に居る時、神光道を請ふこと甚だ懇なり、雪夜に其の左臂を斷つ、達磨感じて之を許し、名を二ーと改め、禪宗の法統を受け第二祖と爲る。
【慧觀五敎】ゴケウクヮン　圖上元の道場寺の僧慧觀、如來の說きし一代聖敎を、施化の次第に約して立てたる五つの敎、卽ち、有相敎・無相敎・抑揚敎・同歸敎・常住敎。
【慧身】シン　圖五分法身の一。大藏法數「二乘因修二无漏智慧一、得レ證二此身一、故名二ーー一」
【慧命】ミヤウ　圖本具の法性を持續せしむる智慧（刊定記）
【慧力】リキ　圖五力の一ちゑの力　獨孤及文「大悲自定之二ー一」
【慧敏】ビン　すぐれてさとし。
【慧解】ゲ　かしこくさとし。晉書、鳩摩羅什傳「什在レ胎、其母ー一倍レ常」＝慧悟。
【慧黠】ケツ　こざかしこ。敏捷にして機智あり。北史、馮淑妃傳「ー一善彈二琵琶一」＝黠慧。
【慧眼】ゲン　○さときまなこ。＝活眼。○ヂエン　圖實在界の眞理を識別する心のまなこ。金剛經「如來有二肉眼一、如來有二天眼一、如來有二ーー一」
【慧悟】ゴ　かしこくさとし。＝慧敏・慧解。
【慧察】サツ　さとく明か。＝明慧・察慧。
【慧山】ザン　江蘇省無錫縣の西に在る山の名、西域の僧慧昭此に居る、因て池あり、唐の陸羽、其の水を以て第二泉と爲す。＝惠山。
【慧性】セイ　さときうまれつき。劉禹錫詩「色身豈吾寶、一ー非二形軀一」
【慧聖】セイ　すぐれてさとし。又、其の者。淮南子「ー一而好レ治」
【慧智】チ　さときちゑ。
【慧鳥】チウ　鸚鵡ムの異名（郭璞圖贊）
【慧敏】ビン　さとし。＝聰慧・慧悟・敏慧。

【慶】 ㊀ ケイ・キャウ　㊁ キャウ　敬　陽　通音　ケイ

㊀よろこぶ、よろこび(賀)「餘ー」「休ー」「吉ー」「嘉ー」いはふ(祝)「ー賀」行きて人を賀す。○よし(善事)書、罰刑「一人有ー」○さいはひ(福)○たまもの(賜)ほめる(賞)禮、月令「行ー施惠」○重ーは府名、四川省に屬す、開きて商埠と爲す。㊁さいはひ(福)易、坤卦「積善之家、必有餘ー」

同訓異字　慶・喜・悦・欣・歓・悟等の別は喜(口部九畫)の條を見よ。

【慶庵】ケイアン　國奉公人を世話する者。又、其の營業。もと人名より出づ。＝慶安・桂庵。

【慶雲之瑞】ケイウンのシルシ　めでたき五色の雲のしるし。太平の瑞兆をいふ、慶は瑞又景とも書く。瑞應圖「景雲者太平之應也、一曰慶雲」

【慶悦】ケイエツ　めでたきしるしとなるけむり、えんぎのよき煙。謝莊、舞馬賦「泛ニ慶風一而浮ニー一」＝祥煙。

【慶賀】ケイガ　いはふ、いはひ。周禮、秋官、小行人「若國有ニ福事一、則令ニー一之」＝賀慶。

【慶幸】ケイカウ　しあはせ、めでたきさいはひ。金史、宗室宗憲傳「奏曰、莫レ非ニ王臣一ー一、豈可レ有レ閑耶」＝慶福。

【慶會】ケイクワイ　めでたき會合。春清紀聞「章申公父銀青公、年七十樂ニ賓親一爲ニー一ー一」＝嘉會。

【慶暉】ケイキ　よろこび祝ふことと、災をとむらふこととの。陸游詩「一朝窮途異、相遇忘ニー一」＝慶弔。

【慶事】ケイジ　よろこびごと。鶴林玉露「不レ得レ預ニー一」

【慶祥】ケイシヤウ　めでたきしるし。宋史、樂志「盛仁博博、品物蕃滋、ー一回復、秀發神芝」

【慶賞】ケイシヤウ　めでほめる。周禮、族師「刑罰ー一、相及相共」

【慶誕】ケイタン　天子の誕生日のいはひ「文獻通考」

【慶瑞】ケイズイ　めでたきしるし。宋史、禮志「凡國有ニ大ー一及出師勝捷、樞密使率ニ內職軍校一入賀」＝祥瑞・休徵・慶祥。

【慶祚】ケイソ　めでたきさいはひ。魏志、王朗傳、注「稽古先民、聞ニ誕ー一ニ」＝慶福。

【慶弔】ケイテウ　よろこび事と、くやみ事と。荀、大略「慶者在レ堂、弔者在レ門、禍與レ福鄰、莫レ知ニ其門一」よろこびをいふ者が堂に在るかと思へば、くやみをいふ者が門に在る、人生の禍福の常なきをいふ。

【慶福】ケイフク　めでたきさいはひ。＝慶幸。

【慶拝】ケイハイ　よろこびて手をうつ。劉禹錫文「ー一矣レ國、捧戴相賀」

【慳】ケン　刪

○をしむ。朱熹詩「倒ニ壺詩囊」未レ許ー一」やぶさか(悟)吝嗇。○文字を省き減する。韓愈詩「辭義卓關」

同訓異字　慳・吝・慾・惜・愛の別は吝(口部四畫)の條を見よ。

【慳貪】ケンドン　やぶさか、しはし。蘇軾詩「及ニ此陰晴開ニ悉致レ一ー霖」

【慳貧】ケンヒン　慳をしみむさぼる、しはし。法華經「衆生垢重、ー一嫉妬」

【慳吝】ケンリン　やぶさか、けち。原化記「老人曰、ー一未レ除、衛何由成」＝慳嗇・鄙嗇。

【慨】サウ　號　通音ガイ

○ーーは篤實の貌。中庸「君子胡不ニー一爾」○國たしか、たしかに(確實)

【慘】サン　ソン　感　寢

○いたむ、いたましい(痛傷)「悲ー」「悽ー」「傷ー」○そこなふ(害)しへたぐ(虐)むごし(苛酷)「ー刻」

同訓異字　慘・悼・傷・痛・哀・憐等の別は悼(心部八畫)の條を見よ。

【慘澹】サンタン　うすぐらく、さびしき貌。錢起詩「掃ニ乾坤之ーー一、清ニ品物之屯蒙一ニ」＝慘憺。

【慘苛】サンカ　むごたらしくしてからし。陳琳文「細政ーー」＝慘酷・苛慘。

【慘害】サンガイ　いたましくそこなふ。

【慘戚少恩】サンセキショウオン　法を用ふること嚴しくして恩少し。戚は親。史、韓非傳贊「韓子引ニ繩墨一切ニ事情一、明ニ是非一、其極ーー」

【慘急】サンキフ　甚だきびし。法を用ふること嚴刻にして峻急なり。漢書「吏益ーー、而法令繁」＝刻急。

【慘況】サンキヤウ　むごきありさま。＝慘狀。

【慘虐】サンギヤク　むごくしへたげる。顏氏家訓「ーー孤遺、離ニ間骨肉一、傷心斷腸者、何可ニ勝數一」

【慘戮】サンリク　むごきいましめ。唐書「楚掠ーー、鍛ニ成其罪一」

【慘刑】サンケイ　むごき刑罰。

【慘酷】サンコク　いたましきさしばう、むごたらしき出來事。

【慘刻】サンコク　むごくきびし。金史「第以ニーー貨一爲レ事」＝慘酷・慘急。

【慘獄】サンゴク　多人數をむごく殺す大獄。後漢書「除ニーー之科一」

【慘酷】サンコク　むごくきびしき苛斂にして殘忍なり。史、酷吏傳「羅ニーー一、斯稱ニ其位一矣」＝殘忍・慘刻。

【慘恨】サンコン　かなしみうらむ。宜和畫譜「以ニ離別ーー一、爲ニ人之常情一」

【慘嗟】サンサ　かなしみなげく。舊唐書「取レ陷救レ溺、能無ニーー一」

【慘愴】サンサウ　かなしみいたむ。王粲詩「喪ニ亂東路一、ーー一增レ感」＝悲愴。

【慘殺】サンサツ　むごくそこなひころす。杜牧文「睦州、處勝ーー也」

【慘慘】サン　いたみかなしむ貌。詩、小弁「愛心ー〻」

【慘怒】サン　むごたらしき有様。‖慘記。

【慘傷】サン　かなしみいたむ。杜甫詩「吾臨二劉氏一寂二長安一、雖レ視未レ改神ー〻」

【慘慄】サン　いたみうれふ。宋史、王旦傳「膽レ酒、且以ニー〻不レ進レ食」

【慘愴】サン　かなしむ、いたむ。杜甫詩「適レ越宗顏回、遊レ梁莫ー〻」‖慘悽。

【慘切】サン　かなしみの心がせまる。江淹詩「仲冬正ー〻、日月少二精華一」

【慘絕】サン　苦だむごくいたまし。

【慘然】サン　いたむ貌。郭經詩「佇立無二人語一、遥ー〻寄レ思ー〻」

【慘沮】サン　かなしみて心ふさがる。石介詩「五石固無情、爲レ我亦ー〻」

【慘惻】サン　いたみかなしむ。陳琳文「街レ仙哀傷、作レ賦以紓ニー〻之感一」‖悽慘。

【慘切】サン　きびしく痛む。黄滔詩「仍聞悲二鞭箠一、ー〻傷二濟皮一」

【慘怛】サン　いたまし。史、屈原賈生傳「疾痛ー〻」

【慘淡】サン　ものすごくうすぐらし。歐陽修文「其色ー〻、煙雲突兀」‖慘澹。

【慘澹】サン　○ものすごくうすぐらし。晁補之詩「ー〻天雲欲レ雨低」‖慘淡。○意を極めて思索する。杜甫詩「窺匠ー〻經營中」

【慘憺】サン　心をいためうごかす。蘇軾詩「南方舊戰國、ー〻意猶存」

【慘惕】サン　いたみうれふ。魏書「父兄繫レ獄、子弟無ニー〻之容一」

【慘毒】サン　むごたらしくそこなひくるしめる。漢書、陳湯傳「郅支單于ーニー於民一」‖慘害。

【慘慄】サン　いたみおそれる、いたまし。晉少孫賦「感二予志一兮ー〻」

【慘凄】サン　きむくすさまし。揚雄賦「下陰沍以ー〻」陸游詩「髮毛ー〻誰復支」

【慘綠】サン　ふかみどり。通俗文「色暗曰レ慘」幽閨鼓吹「末座ー〻少年何人」‖深綠。

【慘烈】サン　きびしくはげし。張衡、四京賦「雨雪飄颻、冰霜ー〻」

【慙】ザン　㊀或は慚に作る

はづ、面目なく思ふ。はぢ(愧)「ー愧」

同訓異語　慙・恥・羞・赧・愧・怍等の訓は恥(心部六畫)の條を見よ。

【慙恚】サイ　はぢいかる。論衡「高者得レ榮、下者ー〻」‖慙忿・慙憤。

【慙憤】ガイ　はぢなげく。江淹文「ー〻愛灼、罔レ識二其際一」

【慙悸】ザン　はぢて心うごく。蘇軾文「惶駭戰慄、周章ー〻」

【慙愧】ザン　はづ。漢書「終亡二以報一厚德一、日夜ー〻而已」‖慙怍・愧慙。

【慙懼】ザン　はぢおそれる。錢瑞文「無レ補二艱難一、方懷ニー〻」

【慙悼】ザウ　はぢおそれる。蕭后、述志賦「雖レ沐二浴於恩光一、內ー〻而累息」‖悼愧。

【慙恨】ザン　はぢうらむ。程顥文「爲二仲通所一貴、則其人必ー〻」‖愧恨。

【慙怍】サク　はづ。はぢ。潛夫論「曾無二慚惕ー〻哀矜之意一」‖慙愧。

【慙羞】シウ　はづ、はぢて顔を赤くする。韓愈詩「嗣婁抱二稚子一、出拜忘二ニー〻」

【慙謝】シヤ　はぢてわびる。南史、臧質傳「倫之ー〻、貿拂レ衣而去」

【慙慄】シウ　はぢおそれる。梁昭明太子文「ー〻交并、震興無レ寘」‖愧慄。

【慙沮】ソ　はづかしく思ひてはばみよわる。謝靈運詩「調笑輒酬答、嘲謔無ニー〻」‖愧沮。

【慙恩】ヲン　はづる。漢書、王莽傳「敢爲二激發之行一、盛レ之不ニー〻」

【慙痛】ツウ　はぢくるしむ。韓愈詩「百年ー〻淚闌干」

【慙惕】テキ　はぢおそれる。隋書、楊素傳「驚食ー〻」

【慙赧】ダン　はぢて顔を赤らむ。韓愈文「ー〻再拜」‖赧慙。

【慙德】トク　德の古人に若かざるをはづ。書、仲虺之誥「成湯放二桀于南巢一、惟有ー〻」

【慙伏】フク　はぢてうつぶす。史記「上嫚罵曰、豎子能爲レ將乎、四人ー〻」

【慙服】フク　はぢてしたがふ。北史、李賢傳「忠孝之道、寔銘二于心一、聞者ー〻」

【慙怒】ド　はぢていかる、怒は怒。‖慙憤。

【慙憤】フン　はぢいきどほる。柳宗元文「過二成功之民一、ー〻空積」

【慚】

慙(前條)に同じ。

【慫】ショウ　國

ー慂は誘ひすすめる(勸)　揚子方言「己不レ欲レ喜、而勞人說レ之、己不レ欲レ怒、而勞人怒レ之、謂二之ー慂一」

【慵】ショウ　㊀通音ヨウ

○おこたる(惓)○ものうし。ものぐさし(懶)「疎ー」白居易詩「行ー擧足遲」

【慵起】キ　あさおきるにものうし。吳融詩「漫遊多下レ夜、ー〻不レ知レ晨」

【慵惰】ダ　おこたる。王禹偁詩「自得レ放ニー〻一」‖怠惰・懶惰。

【慵懶】ラン　ものうくなまける。白居易詩「經過莫ニー〻、相去兩三坊」‖慵惰。

【慼】セキ　㊀慽

慽に作る、又通じて戚に作る

○うれゝ。うれひ（憂）「憂ー」「愁ー」○いたむ（痛）

【慨】 惡（前條）に同じ。

【慴】 セフ・テフ　シフ　緝　葉

○おそれる（懼怯）ふるへおそれる「震ー」「怖ー」○おどす。○ひれふす（伏）

同訓異字　慴・恐・懼・畏・怖・惶等の訓は恐（心部六畫）の條を見よ。

【慴悸】セフキ　おそれて心をのゝく。後漢書、劉瑜傳「懼ニ以觸忤ニ征營ー一」

【慴慴】セフセフ　ふるへおそれる。杜牧詩「屯田數十萬、隄防常ー一」

【慴懾】セフタン　おそればかる。宋書、恩倖傳「權倖之徒、ニニ宗盛ニ」

【慴伏】セフフク　威勢におそれて屈伏する。史、項羽紀「一府中皆ー一、莫ニ敢起ニ」

【慴服】セフフク　おそれてしたがふ。＝懾服・疊服。

【憊】 タイ　卦

○とけ（刺棘）心に滯る所ありて粗然たらざるにいふ。＝滯悱。

【憊芥】カイ　小さきとげ、心にすこしのさはりある譬。司馬相如、上林賦「曾不ニ一ー一ニ」＝蔕芥・悠芥。

【憮】前條に同じ。史記「無故一一号、何足ニ以疑ニ」

【憮】 憮（前條）に同じ。

【憮然】心安からざる貌。

【憃】 タウ　ショウ　江　多　懵に同じ

○おろか（愚）○くらし（暗）「騃ー」にぶし。

【憃愚】ショウグ　おろか。禮、哀公問「寡人ー一頑冥」

【慱】 タン　セン　先　琰

うれゝ（憂）

【慱慱】タンセン　うれへつかれる貌、憂勞。詩、豳風「勞心ー一兮」

【慟】 トウ　送　通吾　ドウ

○かなしみ、かなしむ。哀がこゝに過ぎる「一哭」「哀ー」論、先進「子哭ニ之ー」○なげき。なげく。

【慟泣】トウキフ　甚だしくなげきてなく。前史、顧歡傳「歡早孤、讀ニ詩至ニ哀哀父母、輒執レ書ー一」

【慟哭】トウコク　甚だしくかなしみ、大聲をあげてなく。李白詩「餘來愴ニ途窮ニ、日暮還ー一」＝慟泣。

【慝】 ㊀トク　㊁デキ　職　錫

㊀あし（惡）書、畢命「旌ニ別淑ー一」わるもの。○惡の心に隱るる者（隱惡）「醜ー」○けがれ。けがす（穢）「穢ー」禮、樂記「世亂則禮ー而樂淫」○よこしま（邪）「讒ー」詩、鄘風「之死矢靡ー」矢は誓。○わざはひを爲す惡しき氣、陰氣。左、昭十七「ー未作」○わざはひ（災害）「妖ー」○なまり（訛言）㊁いつはる、いつはり（隱情飾非）

同訓異字　慝・惡・醜・凶の訓は惡（心部九畫）の條を見よ。

【慝惡】トクアク　よこしま。

【慝姦】トクカン　よこしま。＝姦慝。

【慝邪】トクジヤ　よこしま。

【憂讒】ユウゼン　あしくけがれたるれい。禮、樂記「淫樂ー一、不レ接ニ心術ー一」

【憑】 憑（心部十二畫）の俗字。

【慓】 ヘウ　篠　嘯　通じて剽・剽に作る

すばやし（急疾）

【慓悍】ヘウカン　すばやくあらし。漢書、高帝紀「項羽爲レ人ー一滑賊」＝慓悍・剽悍。

【慓疾】ヘウシツ　すばやし。＝剽疾。

【慕】 ボ　遇

○したふ「欣ー」「悅ー」「敬ー」「景ー」「羨ー」「仰ー」○其の人品を愛して手本として習ふ。史、司馬相如傳「一藺相如之爲レ人、更名相如」○おもふ（思）なつかしく思ふ、戀ひて忘れず「思ー」「懷ー」孟、萬章「大孝終身ー一父母」又、特に男女相ー一ふにもいふ「戀ー」

【慕悅】ボエツ　したひよろこぶ。韓愈、柳宗元墓誌銘「平居里巷相ー一」

【慕效】ボカウ　德をしたひて之にならふ。漢書、成帝紀「吏民ー一、競以成レ俗」＝慕傚。

【慕儻】ボタウ　正しき正道をしたふ。漢書、田儋傳贊「賓客レ、猶不レ能ニ自立ニ豈非レ天乎」

【慕化】ボクワ　德をしたひて敎化に從ふ。書經、傳「四夷ー一、貢ニ其方物ニ」

【慕心】ボシン　したふこころ。闕子「有ニ一ー一、則靡悲悲然」

【慕傚】ボカウ　したひならふ。唐書「後衆翕然ー一」＝慕效。

【慕朋】ボホウ　大人物をしたふ義。藝林伐山「司馬長卿、ニニ相如ニ」

【慢】 マン　諫　或は漫・謾に作る

○おこたる、なまける（惰）「忘ー」「惰ー」○ゆるし、おそし（遲）詩、鄭風「叔馬ー忌」叔は人名、忌は助字。○わがまゝ、

ほしいまゝ(放肆)○あなどる(易)「侮ー」「輕ー」○うすし(薄)おろそか(粗略)○ほこる、おごる(傲)「驕ー」「傲ー」史、淮陰侯傳「王素ー而無ー禮」○ゆるし(緩)「緩ー」

同訓異義　慢・侮・易の別は侮(人部七畫)の條を見よ。○慢・怠・懈・惰の別は怠(心部五畫)の條を見よ。

【慢易】マンイ　あなどりかろんず。易は侮。史、張耳傳「高祖箕踞罵、甚ー之」‖慢侮・輕易。

【慢尤】マンイウ　とがめ。梅堯臣詩「坐ー事君長ー無ー一」

【慢遊】マンイウ　きままにあそぶ。慢は放縱。晉經「惟ー是好」

【慢訓】マンクン　ゆるゆる説むふね。輕舸の對。暢當詩「ー一不ー知ー移」

【慢郎】マンラウ　あなどりなれる。夢溪筆談「人不ー知ー其使者ー也、或ー一ー之」

【慢藏】マンザウ　あなどりすてる。左傳「貨ー藏盜伸、ー一ー誨ー盜」

【慢言】マンゲン　たかぶりあなどることば。‖誕言。

【慢藏】マンザウ　くらの戸じまりをおこたる。易、繫辭「ー一誨ー盜、冶容誨ー淫」

【慢心】マンシン　おごりたかぶる心。華嚴經「起ー一ー、自高陵ー彼」

【慢世】マンセイ　世におごりてつつしまず。

【慢性】マンセイ　ながびく病氣のたち。急性の對。

【慢漫】マンマン　おごりあなどる。唐書、武三思傳「ー一相矜、無ー復禮法」

【慢嫉】マンシツ　あなどりけがす。唐書、齊澣傳「談ー一不ー恭」

【慢忘】マンバウ　あなどりおこたる。魏志「詔曰、鞭作ー官刑ー所ー以糾ー一ー」‖慢忘・忘慢。

【慢悟】マンゴ　あなどりてほしいまま。離騷「攬ー椒蘭ー以ー一ー号」

【慢罵】マンバ　人をあなどりてののしる。

【慢悸】マンキ　おごりて道理にもとる。石介文「敢侮ー大國ー、其詞ー一」

【慢侮】マンブ　あなどりかろんずる。漢書、魏豹傳「漢王ー一ー人、罵ー詈諸侯羣臣、如ー奴耳」‖慢易・侮慢。

【慾】ヨク　㊀もと欲に作る

むさぼる、ほしいと思ふ心(情所ー好)「嗜ー」「貪ー」「情ー」

【慾界】ヨクカイ　㊀三界の一、慾望の多き現世界をいふ。大藏法數「欲有ー四種、一者情欲、二者色欲、三者食欲、四者經欲、下極ー阿鼻地獄、上至ー第六他化天、男女相愛多ー諸染欲、故名ー一ー」‖欲界。

【慾火】ヨククワ　情慾の甚だしきを火に喩へていふ。楞嚴經「十方一切如來、色目行ー婬、同名ー欲火ー」欲・慾に通ず。

【慾念】ヨクネン　ほしいと思ふこころ。‖慾心・欲念。

【慾望】ヨクバウ　ねがひ、のぞみ。‖欲望。

【慮】㊀リョ　㊁ロク　㊁虞

㊀おもんばかる。おもんばかり(謀思)「謀ー」「計ー」「深ー」「短ー」論、衛靈公「無ー遠ー、有ー近憂ー」○おもふ「思ー」○うれふ(憂)○戒め備へる。左、宣十二「前茅ー無」○うたがふ(疑)○もろもろ(衆)○すべて‖無慮。亡慮。㊁しらべる。唐書、百官志「凡繫囚五日一ー」‖錄。

【慮外】リョグワイ　○おもひがけず。晉書、毛璩傳「事乖ー一ー」‖意外。○國もってのほか。無禮。

【慮周】リョシウ　かんがへがあまねく行きとどく、思慮周備。文心雕龍「平子淹通、故ー一而藻密」藻密は文采完密。

【慮無】リョム　事前持つ所の幅ゐをいふ。左、宣十二「前茅ー一」有無をおもんばかり備へる義。

【慺】ル　㊀屢

○よろこぶ(悦)○うやうやしく、つつしむ(恭謹)○ねんごろ(懃懇)

【慳】㊀カン　㊁カン　㊁刪　㊁悭に作る

㊀よろこびたのしむ(愉)○こころしづか(心靜)㊁安からざる貌。○つよくいかる(勁急)貌。

【慳然】カンゼン　○心安からざる貌。史、文帝紀「ー一念ー外人之有ー非」○勁く怒る貌。唐書、王叔文傳「ー一以爲ー天下無ー人」

【慼】カン　㊀感

おろか(愚癡)文心雕龍「正平狂ー以致ー戮」

【慼慼】カンシン　十分にねる、熟睡する。冷齋夜話「淨几兀然、僮僕ー一」

【憐愍】レンビン　ねんごろなる貌。後漢書、賜傳「豈敢愛ー諸生ー沒之年ー、而不ー憐ー一之心ー哉」‖懇に恭護の貌。

【憀】㊀レウ　㊁リウ　尤　蕭

㊀たよる、たのむ(賴)○こころさびし。○ー亮リョウは聲音の清らかなる貌。嵇康文「新聲ー亮」‖瀏亮。㊁かなしむ、うらむ(悲恨)

十二畫

【憊】ヒ　㊀ベイ

○つかれる(疲)○よわる(弱)○やむ(病)○やぶる(敗)○ほろぶ(滅)○にげる(逃)○ふるへる(戰)○おそれる(懼)○ねむる(睡)○ねぶる(睡)○ねぶたし(睡)○ねむたし(睡)○ねむけ(睡)○ねぶたげ(睡)○ねむたげ(睡)○ねむたがる(睡)○ねぶたがる(睡)○ねむたがり(睡)○ねぶたがり(睡)○ねむたがる(睡)○ねぶたがる(睡)○ねむたがり(睡)○ねぶたがり(睡)

【憨笑】カンセウ 笑ふべからざるに笑ひて已まず。元好問詩「只緣一一無二人會一」

【憨態】カンタイ なまめかしくおろかなる貌。嬌癡の態。全唐詩話「多二一一一」

【憙】キ 未 ㊀ 憘に同じ

○よろこび。よろこぶ(悦)史、周紀「無不ㇾ欣一」○このむ(好)○たのしむ(樂)

【憝】ギン ㊀ 憖は俗字

○しひて、なましひに(強)心に欲せずして自ら強ひる辭。左、哀十六「不一一遺一老」○しばらく(且)○かく(然)左、文十二「晉君之士、皆不一也」○あゝ、歎息の辭。左、昭二八「一使我君闇勝與臧之死也」○いたむ(傷)○ねがふ(願)晉語「一庶朝聞道」○とふ(問)○つつしむ(敬謹)

【憝遺二一老一】ヤクヲノコスイチラウヲ せめて一人の老成人なりとも殘し置きたしとの義。詩、小雅「一一、俾ㇾ守二我王一」

【憒】クワイ 隊 ㊀

○こころみだる(心亂)「憂一」「愁一」○くらく愚かなり。

【憒憒】クワイクワイ 心のみだれる貌。荀志、蔣琬傳「事不ㇾ當ㇾ理、則一一矣」

【憒悼】クワイタウ みだれけがれる。詩經、箋「衣之不ㇾ澣、則一一無二照察一」

【憒亂】クワイラン くらし、昏亂して明かならず。漢書「小夫懷ㇾ臣之徒、一一不ㇾ知ㇾ所ㇾ爲」

【憒亂】クワイラン 心昏くみだれる。金史、私心一一、其ㇾ此有ㇾ矣」

【憒】クック 陷 ㊀

○おろか(不慧)○そむきもとる(乖戻)○かたくな(頑)

【憩】ケイ ㊀ 憇は俗字

もと揭に作る

いこふ、やすむ(休息)「休一」「遊一」詩、召南「召伯所一」

【憩休】ケイキウ いこひやすむ。陸機、感時賦「盤石暫一一、泓泉助二吟漱一」ㇾ休憩、熱息。

【憩駕】ケイガ やすみとどまる。捜神記「於二路旁樹陰一一一」ㇾ休駕。

【憩止】ケイシ やすみとどまる。晉書、劉寔傳「寔少貧儉、敝ㇾ策徒行、每所二一一、新水之平、不ㇾ累二主人一、皆自營給」ㇾ休止。

【憩息】ケイソク いこふ。杜甫詩「平生一一處、必種二數竿竹一」ㇾ休息・休憩。

【憩泊】ケイハク やすみとまる。水經、注、乘騎所二一一一也」

【憬】ケイ 梗 ㊀

○さとる(覺悟)「一悟」○とほし(遠)遠く行く。一解に廣大の義。詩、魯頌「一彼淮夷」○俗にあこがれる「憧一」

【憍】ケウ 蕭 ㊀

○のがる(逸)○あはれむ(憐)○ほしいまま(恣)○おごる。驕に通ず。

【憍】ケッ 屑 ㊀

いつはり。いつはろ(權詐)

【憲】㊀ケン 霰 ㊁ケン 銑 憲は俗字

㊀のり、てほん(表式・模範)おきて(法則・法律)「風一」「刑一」「法一」又特に國體・政體に關する根本の法律「一法」「邦一」「國一」○のっとる、手本とする、法に從ふ。○とし(敏)○しめす、あらはす。○命令。穆天子傳「天子出一」○主要の地位に在る官吏「官一」○俗吏が上官を稱する語「大一」「一臺」○一一は欣ぶ貌。㊁顯れさかんなる貌、興り盛んなる貌。

【憲綱】ケンカウ 大いなるのり。又、法律の條文。晉史「一一日弛、漸以爲ㇾ俗」

【憲官】ケンクワン 主要なる役人。ㇾ官憲。

【憲憲】ケンケン ○興り盛んなる貌。中庸「一一令德」ㇾ顯顯。○欣ぶ貌。詩、大雅「天之方難、無二然一一一」ㇾ欣欣。

【憲司】ケンシ 訟獄又勸業などを掌るやくにん、今の司法官。元結詩「復來官二一一一」

【憲章】ケンシャウ ○のり、おきて、法度典章。晉書「稽二古一一、大啓二制度一」○のっとりて明かにする。中庸「仲尼祖二述堯舜一、一一文武一」

【憲政】ケンセイ 憲法によりて行ふまつりごと。立憲政治の略。

【憲制】ケンセイ 國家のおきて。晉書、孔坦傳「王命無ㇾ貳、一一宜ㇾ信」

【憲則】ケンソク のり、おきて。唐書「永垂二一一一、貽二範後昆一」ㇾ法則。

【憲臺】ケンダイ ○御史は國憲を掌る、故に御史臺の異稱とす。通典「唐御史臺、龍朔二年、改爲二一一一」文選、陳琳檄、李善注「漢官儀曰、御書爲二中臺一、御史爲二一一一」謂ㇾ書爲二外臺一」○後世は廣く上官の稱とす。

【憲典】ケンテン 國のおきて。晉史、孔琳之傳「酌二遠一一一」ㇾ典憲。

【憲法】ケンポウ ○國のおきて。晉語「賞ㇾ善罰ㇾ姦、國之一一也」○立憲政治の國にて統治權の主體・政體及び其の機關の作用權限等を規定せし國家の大法。

【憲範】ケンパン のり、てほん、法式。魏志、后紀傳評「足下以爲二百王之規典、垂二一一一平後世一矣」ㇾ典範。

【憲兵】ケンペイ　軍事及び行政司法の警務を掌る兵。

【憲命】ケンメイ　國家のおきて。宋史「一一既成、天下亦莫ㇾ如ㇾ之何」＝憲令。

【憲律】ケンリツ　のり、おきて　後漢書、杜林傳「今一一輕薄、故姦軌不ㇾ勝」

【憲量】ケンリヤウ　寛恕の度量の廣大なりしより、度量の大いなる義となす。後漢書「黄憲字叔度、郭林宗曰、叔度汪汪若ㇾ千頃波、澄之不ㇾ清、濁之不ㇾ濁、不ㇾ可ㇾ量也」書言故事「望二人之寛容一謂ㇾ觀二一一一含弘一」

【憲令】ケンレイ　國家のおきて。周語「以為二一一一」

【憧】シヤウ　タウ・ドウ　紙　多　腫

○こころさだまらず（意不ㇾ定）あこがれる。○おろか（騃昏）

【憧幢】シヤウシヤウ　心さだまらざる貌。易、咸卦「一一往來」

【憧擾】ドウジヤウ　あこがれる。

【憔】セウ　蕭　朝と通ず

○やす（痩）やせおとろへる、やつれる。かじける。○うれふ（憂）

【憔悴】セウスイ　○やせおとろへる。屈原、漁父辭「顔色一一、形容枯槁」○つかれくるしむ（困苦）孟、公孫丑「民之一一於虐政一」

【憟】ソウ　蕭

○にくむ、にくみ（惡）「一惡」曲禮「一而知ㇾ其善」愛又好の反對「愛一」○國にくし、難し「讀みー」

同訓異字　憎・惡・嫉・嫌等の別は惡（心部九畫）の條を見よ。

【憟愛】ソウアイ　にくむと、かはゆがると。後漢書、劉梁傳「不ㇾ在一一、以ㇾ道爲ㇾ貴」＝愛憎。

【憟怨】ソウエン　にくみうらむ。歐陽修詩「讒類從一一、譖語防二孔敬一」

【憟惡】ソウヲ　にくむ。爾雅「居居究究惡也」注「皆相一一也」＝憎嫉・嫉惡。

【憟忌】キ　にくみいむ。北齊書、宋遊道傳「朝貴中有一一者一」＝憎嫉。

【憟疑】ソウケン　にくみきらふ。韓愈詩「指嫡爾一一」＝厭惡。

【憟疾】シツ　にくむ。後漢書「海内一一英哲一」＝憎惡・憎嫉。

【憟嫉】シツ　にくみそねむ。北史、郎茂傳「元預兄弟、本相一一」＝憎妒。

【憟妒】ト　にくみそねむ。妒は妬。顧野王詩「那思他人不二一一一」

【憟蠅】ソウヨウ　蠅をにくみきらふ。歐陽修に憎二蒼蠅一賦あり、古文眞寶後集に載す。

【憜】

憜（心部九畫）に同じ。

【憝】タイ　隊　一に憞に作る

○うらむ（怨）書、康誥「凡民罔ㇾ一一」○にくむ（惡）わるもの。書、康誥「元惡大一」

【憚】㊀タン・ダン　翰　㊁タ　箇

㊀はばかる。はばかり（忌惡）「忌一」○おそれる、おそれかたんず（畏難）論、擧而「過則勿ㇾ一ㇾ改」○うれへおそれる（憂愼）㊁つかれる（勞）つかれやむ（勞病）くるしむ（苦）＝瘴。○國はばかり、恐縮する。

【憚長】タンチヤウ　はばかりおそれる。後漢書、度尚傳「與戰破ㇾ之、我狄一一」＝畏憚。

【憚改】タンカイ　あらためることをおそればかる。論、擧而「過則勿ㇾ一ㇾ改」

【憚行】タンカウ　すすみゆくを、はばかりきらふ。詩經「豈敢一ㇾ一」

【憚忌】タンキ　はばかりきらふ。＝忌憚。

【憚避】ヒ　はばかりさける。唐書、皇后武氏傳「施施無二一一一」＝忌避。

【憚服】タンフク　長れはばかりて從ふ。唐書、李元諒傳「居ㇾ軍十年、士心一ㇾ一」

【憊】㊀ハイ　㊁ヘイ　卦　霽

㊀つかる、つかれ（勞極）「困一」「老一」「罷一」「衰一」㊁やむ、やみくるしむ（困病）韮、山水「貧也、非一也」

【憊乱】ハイラン　つかれよす。高士談詩「幕歸唯一一、筋力殊不ㇾ任」＝困亂。

【憊喘】ハイセン　つかれてあへぐ。孔平仲詩「悲號與二一一一、遍汗成二流川一」

【憊薄】ハイハク　つかれわづらふ。洪希文詩「桃笙寄二一一一」

同訓異字　憊・憐・衰・矜・憫の別は憐（本篇）の條を見よ。

【憫察】ビンサツ　あはれみ思ひやる。轉じて、上の下を思ひやるをいふ敬稱。冀陸下謹慎修ㇾ德、一一生民一」＝憐憫。

【憫笑】ビンセウ　愚かなるをあはれみわらふ。＝閔笑（韓愈文）

【憫惻】ビンソク　あはれむ、哀憐すること。顔延之「香二燈生業一一一親危」

【憫然】ビンゼン　あはれむ貌。ふびんに思ふ貌。＝愍然。

【憫悼】ビンタウ　あはれみいたむ。元稹詩「天子深哀空一ㇾ一」

【憑】 ヒョウ 蒸 遡じて馮に作る、憑は俗字

○よる(依)よりかかる。書、顧命「一玉几」○たのむ(託)○たよる、よりたのむ(頼)○たたる(祟)ばかす、のりうつる「狐ー」陸游詩「俄若有物ー」○みつ(滿)○さかんなり(盛)○おほいなり(大)○あかし、よりどころ(證據)「文ー」「ー照」○公ーは官府のかきつけ(官牒)

同訓異義 ムノ 憑・負・恃・恬・賴の別は負(貝部二畫)の條を見よ。○ムノ 憑・倚・依・藉・據・仗・倚・依・藉の別は寄(宀部八畫)の條を見よ。

【憑依】ヒョウイ ○よりたすく、よりかかる。○のりうつる。左傳「神所ニー一、將在ー德矣」

【憑妖】ヒョウエウ かこつけてあやしきことを說く。王令詩「ー一開誕相樹立」

【憑據】ヒョウキョ 多大の義、憑は滿、據は大なり。漢平都侯相碑「餘恩ー一」

【憑河】ヒョウカ かちにて河をわたる。詩經「不二敢ー一」ー馮河。

【憑高】ヒョウカウ タカキニノゾム 高き處に臨む。莊子「由來多感莫レー一」ー臨高。

【憑幾】ヒョウキ 正義にしたがひよる。後漢書、黨錮傳序「假レ仁以効レ己、ー一以濟レ功」

【憑據】ヒョウキョ よりどころ。歐陽修詩「文章自レ古無二ー一」ー憑照。

【憑肩】ヒョウケン 互に親みてかたによりかかる。范成大詩「空記ー一語」

【憑險】ヒョウケンニヨル 要害をたのみて據る。南史「ー一作レ守、兵食猶委」

【憑恃】ヒョウジ よりたのむ。金史、蕭肆傳「ー一恩侈、僭二親同列一」

【憑信】ヒョウシン たよりて信ずる。憑據して信用する義。宋史「以二敵國誕謾一、爲レ可二ー一」

【憑照】ヒョウセウ よりどころ、照はてらし合せて證する。ー憑據。

【憑單】ヒョウタン 證保證狀。又、證書、單はかきつけ。

【憑弔】ヒョウテウ 古跡などに立ちよりて弔ふ。

【憑跳】ヒョウテウ 高き地に據りて遠方をながめる。張九齡詩「ー一玆爲レ美」

【憑怒】ヒョウド 大いにいかる。左傳「今君奮ー一、震雷ー一」ー馮怒。

【憑凌】ヒョウリョウ 盛んなる貌。李白詩「雲ー一兮欲二吼怒一」ー馮凌。

【憑欄】ヒョウラン てすりによりかかる。陳旅詩「應レ驚何日ー一レー」ー凭欄・倚欄。

【憑陵】ヒョウリョウ 盛んなる勢をたのみて人に迫る。左、襄二五「介二恃楚衆一、以ー一我敝邑一」ー馮陵。

【憮】 ブ ム 虞

○いつくしむ(愛)○なづ(愛撫)○失意の貌、ぼんやりとする貌。○あやしみおどろく(怪愕)

【憮然】ブゼン ○失意の貌。孟、滕文公「夷子ー一爲間曰、命レ之矣」○驚く貌。論、微子「夫子ー一」

【憤】 フン 吻

○いかる、いきどほる、はらをたてる、もだゆ(悶)自ら心をはげましてもだえる「憂ー」「激ー」論、述而「不ー不啓」○いきどほり「鬱ー」「發ー」「公ー」「忠ー」「私ー」○つむ(積)心むすぼれ積む、氣充つ。

同訓異義 ムノ 憤・怒・慾・慍・志等の別は怒(心部五畫)の條を見よ。

【憤志】フンシ いきどほりいかる。後漢書「每レ讀二張宋傳一、未二嘗不ニー一」

【憤悶】フンモン いきどほりて心もだえる。謝惠連詩「如何阻二行止一、ー一結二心胸一」

【憤怨】フンエン いきどほりうらむ。後漢書「皆側レ目ー一」ー怨怨。

【發憤忘レ食】フンヲハフレバショクヲワスル 道理の解すべからざるときは、憤を發して食事を忘れる。論、述而「子曰、其爲レ人也、ー一、樂以忘レ憂、不レ知二老之將一至云爾」

【憤惋】フンワン いきどほりうらむ。後漢書「未二嘗不二痛矣ー一之一」ー憤懣。

【憤懣】フンマン いきどほりなげく。晉書「士民ー一于下」

【憤怒】フンド いきどほりいかる。ー怨怒。

【憤發】フンパツ 氣をふるひおこす。ー奮發・發憤。

【憤悱】フンヒ 心の結ぼれて解けざる貌。礼記「心憤憤、口悱悱、然後啓レ之」論意の辭色に見はるる貌。論語、朱注「憤者、心求レ通而未レ得之意、悱者、口欲レ言而未レ能之貌」蘇軾文「言不レ待ー一而發」

【憤惋】フンワン いきどほる貌。後漢書、劉瑜傳「常ー一、懷二社稷一之慮」

【偵邏】テイラ いきどほりもだゆ。司馬遷、報二任安一書「不レ得下舒二ー一、以鬱中左右上」

【偵躡】テイジフ ふるひはげむ。＝奮勵。

【慇】 ヘツ 屑

○すみやか（急速）○きばやし（性急）○あし（惡）

【慇懃】ヘツケツ あしき心。後漢書、董卓傳「羌胡ー一狗態」一本、敦煌に作る。

【憭】 ㊀レウ ㊁レウ 蕭 篠

㊀さとし（慧）あきらか（明了）○こころよし（快）㊁むなしき貌。○ー慄はいたみ、おそれる貌。楚辭、九辯「ー慄兮若レ在二遠行一」＝悽愴。

【憐】 レン リン 先 眞

俗に怜に作る

○あはれむ、あはれみ（哀）氣のどくに思ふ「哀ー」「乞ー」吳越春秋「同病相ー」○いつくしむ、めでる（愛）「愛ー」○かなしむ。

同訓異字 憐・哀・憫・矜・憮○憐はいとしがる義。韓文「搤レ尾乞ー、非二我志一也」又、花月を愛賞するをも云ふ、花月はやさしき物なる故、いとしがる也。○哀は樂の反なり、父母の死したるをかなしむ類にて、意強し。○憫は心に不便と思ふ義、憫世の如し。憫・愍は同字なり。○矜は憫と同じ、哀矜と連用す。○憮は愛字の意なり、憐愍に思ひて愛ふるなり。

【憐愛】レンアイ あはれみあいする。

【憐嗟】レンサ あはれみなげく。徐陵詩「高才被二擯壓一、自レ古共ー一」

【憐察】レンサツ あはれみて思ひやる。韓愈、應二科目一時與レ人書「閣下其亦ー二一之一」＝憫察。

【憐情】レンジヤウ あはれみのなさけ。

【憐愍】レンミン あはれみて物を施す。

【憐恕】レンジヨ あはれみてゆるす。

【憐惜】レンセキ あはれをしむ。秦觀詞「無情柔櫓相見、見了無限ー一」

【憐悼】レンタウ あはれみいたむ。齊書「人應ニー一」＝哀悼。

【憐閔】レンビン あはれむ。漢書、功臣表「聖朝ー一」

【憐憫】レンビン あはれむ。韓愈文「陛下ー一京師之人、應レ其乏食」＝憐閔。

【憐愍】レンビン あはれむ。蘇軾、書二金剛經後一「如來、ー二一衆生一爲設二方便一」

十三畫

【懊】 アウ オウ 皓

○なやむ（惱）うれへもだえる「悔ー」○うらむ（恨・怨）

同訓異字 懊・惱・煩・擾等の別は惱（心部九畫）の條を見よ。

【懊歎】アウタン うらみなげく。南史、顧覬之傳「ー一彌レ日」

【懊惱】アウナウ ○うらみもだえる。白居易詩「ー一何人能咽多」○樂曲の名。晉書、樂志「隆安初、有二ー一之曲一」

【懊憹】アウヌ ○くやみうらむ。素問「甚則發聞ー一」○樂曲の名（晉書、五行志）＝懊惱・懊惱。

【懌】 エキ 陌

よろこぶ、よろこばしむ、よろこび（悅）「和ー」「悅ー」「欣ー」「怡ー」書、康誥「則予一人以ー」

同訓異字 懌・喜・悅・欣・忻・歡・怡等の別は喜（口部九畫）の條を見よ。

【懌懌】エキヤク 心をよろこばす。文心雕龍「條暢以任レ氣、優柔以ー一」

【應】 ㊀オウ ㊁オウ 蒸 徑

㊀まさに（當）まさに何何すべしと返して讀む。杜甫詩「此別ー須二各努力一」料度（ハカリ）の辭。㊁こたふ、こたへ（答）「一對」「呼ー」むくいる「一報」○したがふ（順）和して起る「感ー」「響ー」易、乾卦「同聲相ー」○鼓の小なる者。○天子の正門「ー門」

同訓異字 應・答・對・譽の別は答（竹部六畫）の條を見よ。○應・可・當・合・宜・須・宜の別は可（口部二畫）の條を見よ。

【應唯】オウユイ はいと返事する。禮記「在二父母舅姑之所一、有レ命之、ー一敬對」

【應接】オウセフ みかたとなりてたすける。諸葛亮新書「四隣和睦、大國ー一」

【應眠】オウミン 心が物に應じてうごく。張湖文「尋二其ー一之符一、測二乎冥通之數一」＝感應。

【應矩】オウクヰ のりに當てはまる。魏明帝詩「旋躰指ー一、進退ー一」

【應急】オウキフ いそぎの場合に間に合ふ。

【應化】オウクワ 佛、應現の化身、佛が衆生を濟度するため、色色の形に化して出現する。四城記「隨レ迹ー一、爲二一老夫一」

【應現】オウゲン 佛、佛・菩薩が衆生を濟度する爲めに世にあらはれ出る、化身を出現する。溫子昇、定國寺碑「ー一託レ生、方便開レ敎」

【應驗】オウケン きめ、行ひたる事に對してあらはれるしるし。

【應鼓】オウコ 小さきつづみ。周禮、春官「擊ニー一」

【應護】オウゴ 佛、ごりやく、佛・菩薩が衆生の所願に應じて加護する。

【應時】オウジ ○時に應じて行ふ。荀子「ー一而待レ之孰與ー一」○即時に同じ。曹植文「有二不善一

者、一一改定」

【應試】オウシ　しけんをうける（受驗）

【應酬】オウシュウ　むくゆ。むくい。返禮する。陳陶詩「老來萬事總、不三復酬二一一一」‖應答酬酢。

【應身】オウジン　佛如來三身（法身・報身・一一）の一。佛が衆生を濟度する爲め、物に應ひて種種の形を現じて法を說く。大乘法數「一一者應二周萬物一化二洽衆生一、隨二其心量一、現二種種身一」

【應眞】オウシン　羅阿羅漢をいふ（道山清話）

【應鐘】オウショウ　十二律の一、陰曆十月に配す。禮、月令「孟冬之月、律中二一一一」‖應鍾。

【應瑞鳥】オウズイチョウ　鳳凰の異名（格物論）

【應世】オウセイ　○世に應じて移り轉ずる。公羊傳、注「一レ一黠巧奸僞多」○世とともに周旋する義。

【應制】オウセイ　天子の命によりて詩文を作る。唐時、遇に其の例あり。‖應詔。

【應召】オウショウ　めしにしたがふ。元稹詩「一レ一逢二鴻澤一、陪レ游值二賜酺一」

【應詔】オウショウ　天子のみことのりに應ずる。徐陵文「論二經於白虎之殿一、應二詔於金馬之門一」

【應接】オウセツ　人をあひしらふ、面會してうけこたへする。世說、言語「從二山陰道上一行、山川自相映發、使二人一一不レ暇」

【應振不レ暇】オウシンフカ　いそがしくして一一應接するひまがない、山水の景色のすぐれて變化多き形容。前條參看。

【應戰】オウセン　敵より挑まれてたたかふ。

【應訴】オウソ　法律上、原告の提起したる訴訟に對して被告となる。

【應對】オウタイ　言語のうけこたへ。史記「出則接二通賓客一、一一諸侯」‖應答、酬答。

【應諾】オウダク　うけがふ。‖應唯・承諾。

【應答】オウトウ　うけこたへ。梁書、徐摛傳「簡較縱橫、一一如レ響」

【應報】オウホウ　佛行の善惡に應じて來るむくい。「因果一一」

【應符之兆】オウフノキザシ　天子となるべきしるし。後漢書、蘇竟傳「大運蕩除之祥、聖帝一一也」

【應分】オウブン　身分に相應する。

【應辟】オウヘキ　めしに應じて官吏となる。劉基詩「一レ一思レ濟レ世」

【應變】オウヘン　勢の變化に應ずる（晉書、孫楚傳）「臨機一一」

【應募】オウボ　上のつのりに應ずる。漢書「張騫以レ郎一レ一使二月氏一」

【應命】オウメイ　おほせにしたがふ。前史、嚴忌傳「不レ得レ已一レ一」

【應門】オウモン　○宮城の正門。詩、大雅「迺立二一一一將將」○門衆に應ずる義、來客の取次をする者。李密、陳情表「內無二一一五尺之僮一」

【應用】オウヨウ　學理を實地にあてはめて用ふる「一一化學」

【應龍】オウリュウ　翼あるたつ（爾雅）王褒文「泥蟠而天飛者、一一之神也」

【應和】オウワ　互にこたへあふ。白玉蟾詩「琴笛一聲、前後一一」

【憶】オク　職

○おもふ。おもひ（念・思）「追一」○おぼえる（記）「記一」

同訓異字　憶・思・懷・意・念・想・惟・慮の別は思（心部五畫）の條を見よ。

【憶鄉】オクキョウ　ふるさとをおもふ。曹鄴詩「遠水猶歸レ壑、征人合レ一一レ‖懷鄉。

【憶想】オクソウ　おもふ。おもひ。唐庚詩「耕田佩印兩徒然、一一半世只去年」

【懈】カイ　ケ　卦

古、解に作る

○おこたる、なまける。○おこたり（怠）「怠一」

同訓異字　懈・怠・惰・慢の別は怠（心部五畫）の條を見よ。

【懈意】ケイイ　なまけるこころ。朱熹文「未レ嘗以二酣適一自高、而有二一一一惰容一也」

【懈倦】ケイケン　おこたりてうむ。南史、宋彭城王傳「無レ有二一一一」

【懈弛】ケイシ　おこたりて心ゆるぶ。子部文「勤レ身而不レ怠、未三嘗有二一一一」

【懈怠】ケタイ　おこたる。注雜記「汝筭勤作、勿レ得二一一一」‖怠懈、解怠。

【懈式】ケシキ　おこたりたがふ。後漢書、傅燮傳「契闊夙夜、庶不二一一一」

【懈慢】ケマン　おこたる。後漢書、楊震傳「一一弛通一一」‖怠慢、弛緩。

【罷レ懈】ヒケ　なまけず。孝經「夙夜一一レ一」‖罷解。

【憾】カン　感

○うらむ。うらみ（恨）「私一」「宿一」○ものたらず思ふ。中庸「人猶有二所一一」

同訓異字　憾・怨・恨・懟の別は怨（心部五畫）の條を見よ。

【憾恚】カンイ　うらみいかる。徐陵文「反爲二一一妄相陷擠一」

【憾怨】カンエン　うらむ。新論「天無二情子生死一、固不レ可二以情而一一一」

【憾悔】カンカイ　うらみくやむ。戰國策、義之所レ在、身雖レ死無二一一一」‖恨悔。

【憾恨】カンコン　うらむ。‖怨恨。

【憾事】カンジ　うらめしき事。あやまちありて永く悔い恨む事。‖恨事。

【懃】キン　文　もと勤に作る

ねんごろ、委曲、丁寧、深切「慇一」

同訓異字　懃・慇・殷・丁寧・款・慤の別は慇（本書）の條を見よ。

【懃格】ねんごろにしてつつしむ。宋書「蒞ノ職ー一、有二匪躬之稱一」【懃懃】ねんごろなる貌。忠款の貌。司馬遷、報二任安一書「意氣ー一懇懇」【懃懇】ねんごろ、深切丁寧。柳宗元文「詞旨切直意氣ー一」

【慥】キョ 魚

○よわし(怯)○おそる(懼)○はつ(懇)「懇ー」

【慳】ケン クヮン 銑 諫

○心さわがし(性躁)きびし(急)「ー促」‖獷。○もとる(戻)【慳急】心さわがし。史、貨殖傳「民俗ー一」‖操急。

【懇】コン 阮

○ねんごろ(款悃)「忠ー」「勤ー」「精ー」しんせつ(深切)○まこと(誠・信)「誠ー」○切に人に求むるに添へる語「ー請」「ー託」

【懇切丁寧】懇・慇・懃・丁寧・款・苦○懇はしんせつにする義、悃也、誠也、まごころを以てわりなくするなり。○慇・懃の二字は連ねても用ふ、かへすがへすも、おろそかに思はざる義。○丁寧は二字連用す、叮嚀に作るも同じ、くりかへしいふ義にて、國語に用ふる丁寧の義とは異れり。後漢書「丁寧再三、謂二神於此一」○款は誠を盡して人に交るをいふ、說文に、意有レ所レ欲也とあり、懇に近し。○苦は無理に求むる義、懇とは異り、懇求はわりなく請求するをいひ、苦求は是非ともに請求するをいふ。

【懇意】コン ○ねんごろなる心。法苑珠林「必須ニー一用心徹到一」○親密の心。

【懇諫】コン ねんごろにいさめる。三國志「貴賜不レ從、數ー一」‖懃は田舍。【懇所】コン ねんごろにいのり求める。【懇遇】グウ ねんごろなるもてなし。‖懇待。

【懇款】コン ねんごろにして誠。韓愈、論二變相公一表「無レ任二ー一之至一」‖懇款、懇誠。

【懇願】グヮン ねんごろにねがふ。呂溫文「齊獻二至誠一、泣數二ー一一」‖懇願、懇望。

【懇惻】コン ねんごろにしてまこと。韓愈、論二變相一表「無レ任二感激ー一之至一」

【懇懇】コン ねんごろなる貌。司馬遷、報二任安一書「意氣勤勤ー一」‖懃懃、懇懇、款款、誠懇。

【懇志】コン 親切なるこころざし。賈至文「宜下遂二其ー一一退守中本官上」

【懇親】シン ねんごろにしたしむ「ー會」‖親睦。

【懇謝】シャ ねんごろにれいをいふ。唐書、李勣傳「頓首ー一」

【懇情】ジャウ ねんごろなるなさけ。

【懇書】ショ 親切なるてがみ。人の書簡の敬稱。

【懇誠】セイ ねんごろにしてまこと。四子講德論「陳ニー一於末朝之上一、行二話談于公卿之門一」‖懇悃。

【懇請】セイ ねんごろに乞ふ。宋史「將吏悉盡、乃屬二於臣一ー一愈堅」

【懇切】セツ ねんごろ、深切丁寧。魏志、高貴鄉公紀「志意ー一」‖切實。

【懇側】ソク 親切にしてあはれむ。朱熹時「問レ俗莫ー一、懷レ賢增二慷慨一」

【懇待】タイ ねんごろなるもてなし、人のもてなしの敬稱。‖懇遇。

【懇到】タウ ねんごろに十分行きとどく。唐書、陸贄傳「ー一深切」

【懇談】ダン ねんごろにうちとけてはなす。‖懇話。

【懇話】ワ ねんごろにして手あつし。

【懇望】バウ 切なるのぞみ。‖切望・懇願。

【懇命】メイ ねんごろなるおほせ、人より命ぜられし敬稱。

【懇諭】ユ ねんごろなるさとし。‖懇敎。

【懇話】ワ ねんごろなるはなし。‖懇談。

【慅】㊀サウ ㊁サウ 豪 晧

㊀憂へて安からず、憂ふる貌。㊁むさぼる(貪)【慅慅】憂へて安からざる貌。時、小雅「念レ子ー一、瞬レ我遑遑」

【愆】セン ケン 銑 霰

○へつらふ、おもねる(佞)○よこしま(譎)「姦ー」「凶ー」【愆巧】よこしまにしてたくみにへつらふ。五代史、段凝傳「凝爲レ人ー一、昔寵二迎人意一」【愆人】心ねぢけてへつらふ人。唐、閻伯「爾無レ昵二于ー一一」‖佞人。

【愆王】おもねる。唐書、后妃傳「左右附レ之、ー一惡レ之」‖愆伐。【愆邪】よこしま。舊唐書「覺宜下更縱二ー一一復行中赴墓上」‖奸邪。【愆伐】よこしまにしておもねる。又、其の小人。唐書「ー一無レ功」‖愆王。

【憧】㊀タン ㊁タン 江 絳

㊀やすし(安)しづか(恬)謝靈運詩「游子ー一忘歸」㊁うごく、うごかす(動)漢書、李廣傳「威振ー一乎鄰國」【憧憧】おそれる(畏懼)唐書「吐蕃ー一、不二敢犯一邊」

【憧憧】ショウ うごく貌。楚辭「悲夷猶」而冀進兮、心怵惕而―ー」

【憧】トウ 董

○憧ーは心みだれる(心亂)○圖明白の義。不ー(トン)は官話、わからず(不可解)の義。

【懊】㊀ノウ ㊁ノウ ㊂ノウ 皓 豪 江

㊀心みだれる。㊁悩ーはいたみくやむ(痛悔)㊂うらみなやむ。‖惱。

【憬】ボウ 有 務・茂に通ず

【懋】モ

○つとむ(勉)書、舜典「惟時ー哉」○さかんなり、盛大。書、大禹謨「予ー乃德」

【懋勤】ボウキン 懋・勉・勉・力・努・攻・励・務の別は勤(力部十一畫)の條を見よ。

【懋績】ボウセキ つぐれて盛んなるいさを。書書「崇勳ーー」‖殊功。

【懋遷】ボウセン 交易を勉める。書、益稷「ーニー有無二化居」‖貿易。

【懋典】ボウテン 盛典に同じ。梁武帝詔「宜下增二峻禮秩一式昭中ーー上」

【懋懋】ボウボウ つとむる貌。詩雅「ーー慎

慎、勉也」

【憬】慢(心部十一畫)に同じ。

【慄】㊀リン ㊁ラン 感 寢 俗字

㊀おそれる(畏懼)○つつしむ(敬)つつしみ畏れる。○あやぶむ(危)心配する「危ー」㊁さむし(寒涼)○いたむ(痛)○くるしむ(苦)

【慄烈】リンレツ さむくをののく貌。杜甫詩「那無識中帛、救二汝寒ーー一」

【慄畏】リンイ おそれる。‖恐畏。

【慄慄】リツリツ ○おそれる貌。書、泰誓「百姓ーー、若ー臨二深淵一」○危ぶむ貌。漢書、食貨志「直爲二此ーー一」

十四畫

【慭】㊀エン ㊁エン 銑 阮 願に通ず

㊀やすし(安)○ひさし(久)㊁たる(足)

【慭慭】エンエン 安き貌。詩雅、注「ーー舒人安詳之容」‖願願。

【憯】㊀サン ㊁セン 寒 銑 又憯に作る

㊀いたみ、いたむ(痛)「ー痛」○かって(曾)詩、小雅「ー莫懲嗟」㊁いたみ、いたむ。

【憯酷】サンコク むごたらし。漢書「又好用二ーー之吏一」‖殘酷・慘酷。

【憯悽】サンセイ 甚だしくいたみ愛ふる貌。詩經「曾我暬御、ーー日瘁」

【憯悽】サンセイ いたみかなしむ。楚辭「霜露ーー而交下兮」‖慘悽。

【憯傷】サンショウ いたみかなしむ。王粲、登樓賦「心悽愴以感發兮、意忉怛而ーー」

【憯怛】サンダツ かなしみいたむ。漢書、武帝紀「蓋君者心也、民猶二支體一、支體傷則心ーー」‖痛悼。

【憯恨】サンコン いたみかなしむ。任昉文「懷二人望一古、ーー久之」‖悵恨。

【憯痛】サンツウ いたむ。牛希濟、刑論「殺二其父母之遺體一、固不ーニ一於心者一也」

【憯慟】サンドウ いたみなげく。梁簡文帝、大同哀辭序「ーー結二于心一、悲屑慘二于外一」‖哀慟。

【懦】ジュ ダン 遇 銑 ゼン 圏 ダ 箇 銑

○よわし(弱)勇氣なし。漢書、兒寬傳「善屬文、然ーー於武」○にぶくしてよわし(薄弱)「柔ーー」「怯ーー」荀、修身「偸ーー惰」事」‖懊。

【懦夫】ダフ よわくおろか。韓非子「君懦而閒、則羣臣詐」

【懦怯】ダキョウ ひけよ、おくびょう。宋史、辛炳傳「以二炳ーー一、不能レ制レ之」‖長懦・怯懦。

【懦弱】ダジャク おくびょうなることば。宋史、吳璘傳「ーー沮レ軍可レ斬也」

【懦弱】ダジャク よわし。左、昭二十「水ーー、民狎而翫レ之、則多死焉」‖柔弱・脆弱。

【懦鈍】ダドン よわくしてにぶし、薄弱にして遲鈍なり。梁書「比見二京師文體、ーー殊レ常」

【懦淺】ダセン 氣弱くオうすし。楊德祖文「書生見識、ーー無レ堪」

【懦夫】ダフ 氣の弱き男。氣節なき男子。孟、萬章「聞二伯夷之風一者、頑夫廉、ーー有レ立レ志」

【懦劣】ダレツ よわくおとる。唐書、劉貫傳「臣才志ーー」

【懦王】ダオウ おくびょうなる君。史記「吾王ーー也」

【懧】ダ 懦(前條)に同じ、本、懈に作る。

【懧愚】ダグ よわくおろか。戰國策「慢二於愛一而性ーー」

【惰】セイ 霽 圏

○いかる(忿怒)詩、大雅「天之方ー」○ーー疑はそねみうたがふ(猜疑)

【懠】セイ テイ 霽

音が敗れて調和せず。禮、樂記「五者不レ亂、則無二怗ーー之音一矣」

【懟】 ツヰ タイ 眞 隊 もと懟に作る

うらむ、うらみ（怨）「怨ー」

【憶】 チ 寘

いかる（怒）大學「身有所忿ー」

【憧】 サウ 尤

うれへ、いたむ（悲痛）

【憧憧】サウサウ うれへいたむ貌。王褒、九懐「決蕤兮究ン志、懼ン吾心兮ー一」

【慢】 ㊀ボウ ㊁ボウ ㊂ボク 㔾 寒 㔾 通じて慢に作る

㊀もだゆ（悶）○くらし（暮）明かならず。㊁くらし（闇）こころみだれる（心亂）㊂ーーはおろか、無知の貌。「ー惘惘。

【懞】 ボウ モウ 東

○つつしみあつし（慤厚）○昏くして明かならず。

【懞懂】ボウトウ 昏明了ならざる貌。盧綸「善畫無根樹、能描ーー山」

【懣】 ボン・モン 阮 早

○もだゆ、もだえ（煩悶）「憂ー」「憤ー」○わづらふ（煩）「煩ー」史、倉公傳「使ン人煩ー食不下」

【懣懣】モンモン もだえわづらふ貌。陸游詩「胸次ーー思二同魏一」

【懺】 ㊀ラン ㊁ラン 㔾 寒 㔾 㔾

㊀貪ーはたしなむ（嗜）㊁むさぼる（貪）

十五畫

【懮】 ㊀イウ ㊁イウ 尤 有

㊀おそし（遅遅）○しづか（靜）㊁うれへ（憂）愛に通ず。

【懮懮】イウイウ うれへる貌。楚辭「傷二余心之ーー一」

【憯】 シ チ 眞

○いかりもとる（忿戻）

【懲】 チ・ウ 蕭

○こらす、こりさせる（創戒）「勸善ー惡」○こる（自戒）

【懲惡】チョウアク あしきをこらし戒む。漢書、張敞傳「無以勸善ーー」

【懲役】チョウエキ 舊刑法の重罪犯の主刑、懲しめの爲め罪人を監獄に入れて定役に服せしめる、輕重の二種あり。

【懲戒】チョウカイ こりていましむ。漢書、諸侯王表「漢興之初、ーー亡秦孤立之敗」

【懲戒令】チョウカイレイ 官吏の服務規律に違背せし罪を罰する法令。

【懲改】チョウカイ こりて行をあらためる。後漢書「頃雖二頗糾正一猶未ーー一」

【懲羹吹ン虀】チョウカンスイセイ 熱きあつものをすすりて口を焼きたるに懲りて、冷たきなますを見ても恐れて之を吹く、即ち戒懼の甚だ過ぎたる喩。楚辭「懲二於羹一者而吹ン虀兮、何不ン變二此之志一也」

【懲粛】チョウシュク 寇をこらしめふせぐ。唐書、來瑱ーー、去則謹ン備」

【懲過】チョウカ あやまちを質めこらす。劉勰、新論「貴貝勸ン功、罰貝ーー一」

【懲誡】チョウカイ あだを伐ちこらす。

【懲罪】チョウザイ つみある者をこらす。說苑「子孫在ン朝、何貝ーー一」

【懲創】チョウサウ 他人又は己を戒めこらす。創も懲と同義。書經、疏「聖人之制二刑罰一、所貝ーー二一罪過一」韓愈詩「生還眞可ン喜、剋ン己自ーー一」

【懲止】チョウシ こらしとどむ。易經、注「ーー二一忿怒一」

【懲肆】チョウシ わがままをこらす。左傳「ーー一而去ン貪」

【懲治】チョウチ 罪をこらしめて善き方にみちびく「ーー一監」

【懲治監】チョウチカン 不論罪にあたる幼者、又痞啞者を懲治する爲め設けし監獄。

【懲窒】チョウチツ 懲をこらし欲をふさぐ。易、損卦「懲ン忿窒ン欲」疏「懲欲皆有二往來一、故ーー互文以相足也」

【懲罰】チョウバツ こらしつみす。北史、西域于闐傳「餘罪各隨二輕重一ーー二之一」

【懲悪】チョウアク ○こりつつしむ、忿は慎。詩、周頌「予其懲而毖二後患一」○ーー錄チョウアクロク 書名、十七卷、豐太閤の征韓役の事を朝鮮の左相、柳成龍の記せしもの。

【懲毖】チョウヒツ こらしておとす。唐書、盧懐慎傳「組示ーー一」

【懩】 ヤウ 養

○心に欲する。○猴と通ず、猿ありて遠くせんと欲するを技ーといふ。潘岳、射雉賦「徒心煩而技ー」

【懰】 ㊀リウ ㊁リウ 尤 有

㊀ーー慄はかなしみいたむ（哀愴）貌。漢書、孝武李夫人傳「ーー慄不ン言」又、うらむ（怨）㊁かほよし（好）詩、陳風「月出皓兮、佼人ーー兮」

十六畫

【懿】 懿（心部十八畫）に同じ。

【懷】 クワイ　佳

○おもひ、おもふ（念思）論、里仁「君子ー」徳」○なつく、なつき、きたす（來）なつき歸す。書、大禹謨「黎民ー」之」○やすし（安）「榮ー」○いだく（抱）ふところにす。○をさむ、かくす（藏）論、陽貨「ー其寶而迷」其邦」○いたむ（傷）○なぐさむ（慰）○いたる（至）○とどまる（止）○ふところ。論、陽貨「子生三年、然後免於父母之ー」○かぬ、つつむ（包）書、堯典「ー山襄陵」○こころ（心）むね（胸臆）「胸ー」「孤ー」「中ー」韓愈文「豈能無介ー乎」

同訓異字　懷・思・憶・意・念・想・惟・顧の別は思（心部五畫）の條を見よ。

【懷柔】クワイジウ　なつけいざなふ。後漢書、西域傳論「兵威之所ニ震服一、財利之所ニー一」

【懷抱】クワイパウ　おもひをのべる。文心雕龍「寔得則ー一、以命ノ筆」

【懷恩】クワイオン　めぐみになつく。後漢書「人納ニ其訓一、更懷ニ其恩一」

【懷瑕】クワイカ　きずをもつ。後漢書、蔡邕傳「或有ニ抱ノ誹ー一」

【懷向】クワイカウ　なつきむかふ。唐書、賈敦頤傳「爲ノ政寬恕、人心ー一」

【懷危】クワイキ　あやぶむ心をいだく。漢書、王嘉傳「中材苟容ノ全、下材ー一內願」

【懷奇】クワイキ　奇才をいだく。韓愈文「ー一負ノ氣、不ニ肯隨ニ人」

【懷疑】クワイギ　○心にうたがひをいだく。○哲學にて人智は確かなる者にあらずとして認識を否定し、眞理の存在をうたがふ思想。

【懷時】クワイジ　かへりたしと思ふ。詩經「豈不ノー一、畏ニ此簡書一」

【懷古】クワイコ　むかしをしのぶ。李中詩「感ノ時ー一思悽愴」‖憧古。

【懷襄】クワイジャウ　ふところ、むね。周禮「仗ノ劍従ノ此別、狄風滿ニー一」‖懷古。

【懷鄉病】クワイキャウビャウ　ふるさとを想ひしたふあまり頗ふやまひ。

【懷化】クワイクワ　徳になつきうつる。晉書、張邨武王伷傳「百姓ー一」

【懷荒】クワイクワウ　邊地のものをなつけ來たす。晉書「ー一弭ノ暴、開ノ國化ノ家」

【懷卷】クワイクワン　才能をかくしてあらはさず。張鎰行史記「ー一而同ニ其塵一」

【懷劍】クワイケン　圖ふところにする護身用の短刀。‖匕首。

【懷古】クワイコ　むかしをしのぶ、古昔を追懷する。北史、常景傳「經ニ涉山水一、悵然ー一」‖懷舊。

【懷顧】クワイコ　おもひかへりみる。詩經「瞻ー一」

【懷想】クワイサウ　おもふ。李陵、答ニ蘇武一書「望ノ風ー一、能不ニ依依一」

【懷藏】クワイザウ　心に思ひかくす。‖包藏。

【懷山】クワイサン　水が山をつつむ。書、堯典「滔滔洪水方割、蕩蕩ー一襄ノ陵」

【懷紙】クワイシ　圖和歌・連歌を正式に書くときに用ふる紙、檀紙また引合紙を用ふ。

【懷胎】クワイタイ　二心をいだく。齊書「沈攸之事起、袁粲ー一」

【懷柔】クワイジウ　なつけ來たす。詩、周頌「ー一百神、及ニ河喬嶽一」

【懷抽】クワイチウ　はらふこころをいだく。趙壹詩、失意自ー一」

【懷集】クワイシフ　なつけ安んずる。陸雲文「ー一四方」‖懷輯。

【懷輯】クワイシフ　てなづけ安んずる。後漢書、竇融傳「ー一羌虜」‖懷集。

【懷妊】クワイニン　ふところ。妊はおくみ。韓非子「忠ニ其父母ー一之中、生來三皆見ニ寵耳」

【懷邪】クワイジャ　邪心をいだく。後漢書「ー一之臣」

【懷沙賦】クワイサフ　楚の屈原が、身を江中に投ずる時、作りし賦。史、屈原傳「乃作ニ一一、於ニ是懷ノ石、遂自投ニ汨羅一」

【懷春】クワイシュン　青年男女が婚姻をおもふ、男女の戀愛（古、仲春に結婚せしによる）詩、召南「有ノ女ー一、吉士誘之」

【懷祖】クワイソ　せんぞをおもふ。杜篤文「慘然有ニー一之恩一」‖念祖。

【懷素】クワイソ　唐の長沙の僧、范氏、字は藏眞、酒を嗜み最も草書に巧なり、貧にして紙なし、芭蕉萬餘株を種ゑて揮灑に供す、七十四歳にして寂す。

【懷胎】クワイタイ　はらむ。‖懷姙・懷孕。

【懷道】クワイダウ　道徳を心にいだく。南史、許亨傳贊「亨ノー一古」‖抱道。

【懷中】クワイチウ　○ふところのなか。梁書「其一鈴落入ニ裘ー一」○圖ふところ。又、ふところに入るる紙入れをいふ「ー一物」

【懷寵尸位】クワイチョウシヰ　君の愛になつき退くべきに退かず、位をぬすむ。孝經、諫諍章、注「見ノ可ノ諫而不ノ諫、謂ニ之戸位一見ノ可ノ退而不ノ退、謂ニ之懷寵一」

【懷土】クワイト　○居る所の安きを思ふ。論、里仁「小人ー一」○故郷を慕ひ思ふ。陸機ニー一賦あり。

【介懷】カイクワイ　心にかける。南史「生資皆壘、不ニ以ー一」

【從ノ懷知ノ流】クワイニンクワツトルガコトレ　わがおもひのままにして少しの制裁もなき義。晉語「ー一、民之下也」

【懷姙】クワイニン　はらむ。後漢書「詔令ニ諸ー一者ニ贖ニ論妻殺人三歳一」‖懷妊。

【懷抱】クワイハウ　○いだく。又、ふところ。後漢書、陳忠傳「三年乃免ニ子ー

一」心に思ふ意見。王羲之文「或取二諸一一一、晤二言一室之内一」
【懷附】クワイフ　なつきつく。後漢書、寶融傳「國富政簡、士兵一一」
【懷撫】クワイブ　なつけやすんずる。後漢書、神祕傳「誠心一一、信賞分明」
【懷風】クワイフウ　菅笠ガサの異名。四京雜記「百笠、一名一一」
【懷風藻】クワイフウサウ　圖一卷、淡海三船編す、我國詩集の最も古きもの。
【懷服】クワイフク　なつきしたがふ。馬祖常詩「上國崇一一一」‖懷附。
【懷慕】クワイボ　なつかしくおもひてしたふ。王粲文「概我一一思、君子所レ同」‖思慕。
【懷民】クワイミン　たみをなつける。漢書「劉二瀛河山一保レ此一レ」
【懷念】クワイネン　おもふ心。杜甫詩「予實苦二一一一」‖綿綴。
【懷柔】クワイジウ　はらむ。後漢書、吳祐傳「要遂一一」‖懷妊。
【懷樂】クワイラク　なつきたのしむ。史記「天下一一、敬愛而尊二慕之一」
【懷袖】クワイシウ　圖ふところに入れて攜帶する防寒用の穴いれ。

【懸】ケン　先　もと縣に作る

○かく、かかる（掛繫）ひきかける、上に繫ヵけて下、空際に垂る「倒一」○かかげ示す「一賞」○遠くへだたる「一隔」「一軍」○倒一はさかさにつるし下げる。轉じて非常の苦に譬ふ。孟、公孫丑「猶二解倒一一也」
同訓異義　懸・係・掛・挂・罣・繫・縣・繩の別は係「人部七畫」の條を見よ。
【懸鍼】ケンシン　かかりくびくくる。
【懸河】ケンカ　○かはの水を注ぎかく。鹽鐵論「一一注レ火、奚有レ不レ滅」○辯舌の流るるが如く竭きざるに喩ふ。晉傳正、李白墓誌銘「辯如二一一一、筆不二停綴一」
【懸河之辯】ケンカノベン　水の流るるが如くによどみなく竭きざる辯舌。晉書、郭象傳「王衍雅云、聽二象語一、如二懸河瀉一水、注而不レ竭」
【懸崖】ケンガイ　次條に同じ。方回詩「一一樵屋小」
【懸屋】ケンヲク　きりたちたるがけ。鮑照詩「一一度二歸月一」‖斷崖。
【懸崖撒手】ケンガイサツシュ　禪がけより手をはなして落つる勇猛心を奮ひて決然と事をなすにいふ。
【懸解】ケンカイ　つりさげたる物を解く、甚だしき困苦を脫する義「莊、養生主」後漢書「當二此時一天下一一矣」
【懸賞】ケンシャウ　金をかけて物をあがなふ。史、刺客傳「購二一一之一」
【懸隔】ケンカク　はるかにへだたる、かけはなれる。史、高祖紀「秦形勝之國、帶二河山之險一、一一千里」‖懸絕。
【懸旌】ケンセイ　かけたるはた、はたをかける、轉じて心の動くに喩ふ。鮑照詩「飛念如二一一一」‖懸旆・懸旌。
【懸金】ケンキン　懸賞に同じ。後漢書「下二部國一、遣二捕虜人一、或有二逃遁不一獲、皆一レ一購募、使者四出、相二望於道一」
【懸魚】ケンギョ　棟木ムナギの端につくる魚の尾の形せるもの。白居易詩「一一挂二青銼一、行馬護二朱闌一」圖ケサと讀む。
【懸軍】ケングン　軍隊を遠く出す。又、其の軍隊。張耒廷文「能二金甲之一一」
【懸磬】ケンケイ　磬石を懸けたる如く家貧しく一物の見るべき者なき義。晉語、注、「室屋皆褰漏、椽桷在、如二一一一」‖懸罄・懸罄。
【懸罄】ケンケイ　前條に同じ。左、僖二六「室如二一一一、野無二青草一、何恃而不レ恐」
【懸掛】ケンクワ　つりばし。李嬌詩「花開二深洞一仙門小、路過二一一羽節輕」
【懸懸】ケンケン　心の安んぜざる貌。王建詩「妾思常一一、君行復緜緜」‖懸懸心。
【懸弧】ケンコ　○かけたるひさご。薛能詩「一一蘚落似二村居一」○城の名、今の河南省汝南縣治。‖懸壺。
【懸弧之辰】ケンコノシン　男子の誕生日、男子生るれば、弧矢を門に懸けて射の道あるを示すが故。禮、郊特牲「孔子曰、士使二之射一、不レ能則辭以レ疾、縣弧之義也」注「男子生而設二弧於門左一示レ有二射道一」又、桑弧蓬矢を以て天地四方を射て、將來四方に功を立てんことを祝す。禮、內則「男子生、桑弧六、蓬矢六、以射二天地四方一、天地四方男子所レ有レ事也」
【懸袖】ケンシウ　かきをかける。庾肩吾詩「臺前疑レ挂レ鏡、簷外似レ懸レ一」
【懸針】ケンシン　書法にて點の畫の下端の尖りてかけたる針の如きをいふ。法書要錄「善一一垂露之法一」
【懸進】ケンシン　深く敵地にすすみ入る。晉書、羊祜傳「官軍一一」
【懸車】ケンシャ　○老いて官を辭するにいふ。漢書、薛廣德傳「俱乞二骸骨一、皆賜二安車駟馬黃金六十斤一」師古曰、懸車謂二致レ仕、太守謂二之懸車上、沛以爲レ榮、懸二其安車一、傳二子孫一」後書「章世匡謂二子弟一曰、吾即功達身退、古人常道、今年將二耳順一、志在二一一一」○年七十をいふ。白虎通「臣七十一レ致レ仕」
【懸賞】ケンシャウ　賞をかけて募り求める。鹽鐵論「一一以待レ功」
【懸首】ケンシュ　人を殺して其の首級をかけ曝す。丘遲文「擊二頭鑾郎一、一二一蔑街」
【懸殊】ケンシュ　はるかに違ふ　大いなる違がある。‖懸絕・軒輊ケンチ・逕庭。
【懸珠】ケンシュ　眼のうるはしきに喩ふ。漢書、東方朔傳「目若二一一一、齒若二編貝一」

【懸鶉】ケンジュン やぶれ衣の形。大略「子夏、貧、衣若ニ―一」＝懸鶉・鶉衣。
【懸旌】ケンセイ かけたる旗。心の動きて定まらざるに喩ふ。戰國策「心搖搖如ニ―一、而無レ所ニ終薄一」
【懸絕】ケンゼツ かけへだたる。易經、注「重險ニ―一、故水流至也」＝懸隔・絕異。
【懸泉】ケンセン たき。柳宗元詩「―瀉成レ瀑」＝懸泉・飛泉・瀑布。
【懸淙】ケンソウ たき。淙は水流の音あるもの。沈約詩「百丈注ニ―一」
【懸樓】ケンロウ つり下げたるこしかけ。客を做ひて待遇する處。庾信詩「倒レ屣迎ニ―一、停レ琴聽ニ解嘲一」
【懸瀑】ケンバク たき。水經、注「―一趨注、崩浪雲レ山」＝懸淙。
【懸胄】ケンチウ 郤人、晉の悼公の兜を魚門に懸けて呼かしめたる故事により敵を呼かしむるにいふ。左傳「井陘之戰、郤人獲ニ公胄一、懸ニ諸魚門一」
【懸注】ケンチウ 水が高き所より流れおつ。水經、注「石泉ニ―一」
【懸梯】ケンテイ はしご。南史「張綱修ニ攻具一成ニ設飛樓ニ―一木幔板屋一」
【懸藤】ケントウ かかりたるふぢ。宋之問文「落花覆レ沼、―掃レ砌」＝蘿蔓。
【懸旆】ケンハイ ○垂れさがりし旗。○轉じて、心のうごきて定らざるに喩ふ。杜牧詩「我心―一正搖搖」懸旌參看。
【懸倍】ケンバイ 甚だしくかけはなれて多き義。張說詩「始知晉商開、優劣相―一」
【懸漾】ケンヤウ たき。陳傳良詩「懸漾―一徑レ天下、傑立蒼崖夾レ道陳」
【懸邈】ケンバク かけはなれて遠し。晉書、王羲之傳「位遇―一」＝懸絕。
【懸圃】ケンポ 仙人の居る所。＝玄圃。
【懸命】ケンメイ ○いのちをまかす。後漢書、陳龜傳「守悉候望、―一錄儲一」○圖いのちがけ「一所―一」
【懸羅】ケンラ かかりたるかづら。潘岳詩「依レ水結ニ浮萍一寄レ松假ニ―一」
【懸瀨】ケンライ たき。陶弘景賦「絕壁飛流、萬丈―一」＝懸瀑・瀑布。
【懸溜】ケンリウ 流れ下る水のしたたり。陶潛文「深深―一」
【懸厭】ケンレン すだれをかける。李賀詩「紫院―レ―隔ニ御光一」
【懸腕直筆】ケンワンチョクヒツ 腕を擧げ宙に懸け、筆を垂直にもちて字を書く法。古今法書苑「腕法有レ三、有ニ枕腕一、有ニ懸腕一、有ニ提腕一、枕腕者、以ニ左手一枕ニ右手一而書レ之、提腕者、肘著レ案、虛ニ提手腕一而書レ之、懸腕者、懸ニ著空中一而書レ之、枕腕以書ニ小字一、提腕以書ニ中字一、懸腕以書ニ大字一」
【懸想】ケンサウ 圖おもひをかける、男女がこひしたふ。
【懸念】ケンネン 圖氣にかける、しんぱい、不安心。

【憯】 慘（心部十四畫）に同じ。

【憯憒】サンクワイ 心くらくしてみだる。潘夫論「―一員名也」

【懶】 ラン 早 泰

○ものうし、なまける、おこたる（怠解）「困ー」「老ー」「廢ー」南史、范曄傳「吾少ー學問」＝嬾。○つかれふす（倦臥）柳貫詩「借得小窗容ニ吾ー一五更高枕聽ニ春雷一」
【懶意】ランイ ものうきこころ。許月卿詩「半生ー一琴三疊」
【懶性】ランセイ ものうきたち。杜甫詩「ー一從來水竹居」
【懶惰】ランダ ものうくしておこたる。陶潛「阿舒已二八、ー一固無レ匹」
【懶不自惜】ランシンアヅ ものうくして自分の才智を世に示し名を博することをせず「歐陽修、釋秘演詩集序」
【懶纏】ランテン なまけるつま。石林詩話「槐花黃、梟子忙、促織鳴、ー一驚」
【懶慢】ランマン おこたる。宋史「韓熙載性ー一、朝直多レ闕」＝怠慢。

十七畫

【戇】 イン 侵 オン 吻

○うれへやむ（憂病）○かなしむ（哀）

【戇】 キ 寘

○つよし（強）○ー忮はもとる（很）史、貨殖傳「人民矜ー忮好氣任俠爲姦」

【戇】 サン センン 四

くゆ、くい（悔）自らあやまちを悔い告白して改める「愧ー」
【戇悔】サンクワイ 圖罪過をくい改める。梁簡文帝文「今日此來、誠心ー一」
【戇洗】センセン 罪惡をくいあらためて心を清める。符載文「四ー一、昔與二一二善友一、跳レ身此來」＝懺除。
【戇禮】サンレイ 圖佛に懺悔ざんし禮拜して福を求める。南史「比來慕レ法、普天信向、家家齋戒、人人ー一」

十八畫

【懿】 イ 寘

○うるはし、よし（美）專一にして美くし。○あつし（醇美）○溫柔聖善をいふ、故に多く女德の稱とす。○抑に通ず「ー戒」
【懿蓮】イレン ○芳はしき貌。劉向、九歎「芳ー一而終敗兮」○美くしく善き

貌。班固、周勃銘「――太尉」

【懿戒】カイ　よきいましめ。又、懿は抑に通ず、卽ち大雅抑篇をいふ。楚語「於レ是乎作二――一自儆」

【懿行】カウ　善き行。唐書「實踐――、人未二必信一」

【懿軌】キ　よきのり。善美なる法則。傅亮感物賦「仰二前修之――一」

【懿業】ギフ　善きわざ。薛道衡文「――遠大、豈遽二揄揚一」

【懿旨】シ　うつくしきおぼせ。皇后又は皇太后の命をいふ。

【懿親】シン　親族の間の至りて美くしきしたしみ。左、僖二四「兄弟雖レ有二小忿一、不レ廢二――一」‖至親。

【懿戚】セキ　皇室のしたしき外戚。晉書、荀崧載記「荀融以二――一贅二經綸一」

【懿績】セキ　善美なるいさを。晉書「――克宣」

【懿德】トク　うつくしき常の德。醇美なる德。詩、大雅、烝民「民之秉レ彝、好二是――一」

【懿孚】フ　美くしき人望。三國志、注「殿下――」‖美望。

【懿範】ハン　美くしき模範。王勃文「宇文新州之――」

【懿文】ブン　うつくしき文章。又、學藝。白居易、策度中書令人制「茂學――」

【懽】クヮン　通　省して雚に作る

○おそれる、おそれ（恐）「畏―」「驚―」「慙―」論、子罕「勇者不―」をののく、わななく。○おどす（威嚇）史、齊世家「―士卒」○守なき貌。○つつしみいましむ（敬戒）「戒―」「敬―」論、述而「必也臨レ事而―、好レ謀而成者也」○あやぶむ（危）「危―」うれへ（患）左、成十六「盡釋二楚以爲一外―乎」

同訓異字　懼・恐・畏・悚・怖・慴等の別は恐（心部六畫）の條を見よ。

【懽愛】アイ　おそれふるふ。漢書、萬石傳「伏、莫レ不二――一」‖尊懼。

【懽慌】コウ　おそれつつしむ。李尤、舟楫銘「安レ不二――一、終無二不可一」

【懽喘】ゼン　おそれあへぐ。沈約文「停レ讌――、既弘二道於世務一」

【懽然】ネン　おそれる貌。漢書、惠帝紀、贊「聞二叔孫通之議一、則――」‖懼然。

【懽內】ナイ　倡夫が妻を罵れる。

【懽惶】クワウ　おそれる。常袞文「――夏深」

【懽怕】ハク　おそれる。續搜神記「聞二人馬鎧甲聲一、――」

【懽懼】ク　おそれもだゆ。後漢書「內懷二――一、而未二敢陳一諫」

【權】クヮン　勸　よろこぶ（悅）＝歡。

同訓異字　權・喜・悅・欣・忻・歡・怡等の別は喜（口部九畫）の條を見よ。

【權悅】エツ　よろこぶ、よろこび。韋應物詩「衆賓皆――」‖悅懌・欣懌。

【權頲】ガン　よろこべるかほ。杜甫詩「天下寒士皆――」‖權容。

【權欣】キン　よろこぶ、よろこび。晉書「飾二其――一、止二於衰思一者也」

【權娛】ゴ　よろこびたのしむ。杜甫詩「感事盡付形骸外、百年未レ見――顰」

【權心】シン　よろこぶこころ。孝經「得二萬國之――一」

【權愜】シフ　よろこばしきおもむき。何遜詩「幽居多二――一」

【權暢】チヤウ　よろこびやはらぐ。晉書、劉毅傳「人人――、莫レ不二悅附一」

【權踴】ヨウ　よろこびたのしむ。鑿齒賦「既――而不レ倦、願窮レ晝而繼レ夜」

【懽】ケイ　通　ふたごころ（二心）あり「―貳」

【懷】シュウ　サウ　通　通じて雙に作る

○おそれる（懼）朱熹詩「―然心神竦」○おどす。‖悚。

【慴】セフ　葉

○おそれる（怖）おそれて氣を失ふ「―怖」「愒―」「愕―」○おどす。

同訓異字　懾・恐・懼・畏・悚・怖等の別は恐（心部六畫）の條を見よ。

【慴畏】イ　おそれる。元載文「千里爲レ之震動、百蠻爲レ之――」‖恐怖。

【慴栗】リツ　おそれおどろく。唐書、陸贄傳「貽二謳謀勁識一、則――讒情」

【慴伏】フク　おそれさけぶ。

【慴服】フク　おそれてをる。史、張儀傳「黙居――、不二敢動搖一」

【慴竦】シヨウ　おそれてぞっとする。晉志、忠義傳、注「勇不二――一」

【慴惕】テキ　おそればかる。宋書、戴法興傳「――尤甚」‖畏懼。

【慴怖】フ　おそれをののく。史、秦始皇紀贊「陵二賈徒一越、尉佗――」

【慴伏】フク　おそれ從ふ。戰國策「趙楚――不二敢攻一秦者、白起之勢也」

【慭】キン　ゴン　寢　欽

㊀つつしむ、うやまふ（敬）㊁おそれる（懼）詩、商頌「不」―不

十九畫

【懾】㊀ダン・ナン　㊁ゼン　琰　豏

「悚」

【戀】レン　㊥

こひ、こふ「愛ー」「思ー」したふ（慕）後漢書、姜肱傳「兄弟相ー」

【戀愛】アイ　男女のこひ、相思。＝愛戀。

【戀慕】ボ　めぐみに心をひかされる。

【戀思】シ　萬唐書「ー一方切、陳ノ誠至難」

【戀泣】キフ　したひなく。北史「齊州人、追隨ー一者數百里」

【戀闕】ケツ　宮闕をこひ慕ふ。君を忘れざる義。韓愈詩「朝陽南去倍二長沙一、ーノー那堪更憶レ家」

【戀情】ジヤウ　こひしたふこころ。王粲詩「誰能無ニー一」

【戀枕】チン　臥して起きるにものうき義。帳藍浩詩「ー一嫌二多夢一」

【戀著】チヤク　こひ慕ふ心が執著する、深くこひこがれる。阿欲經「女色者世間之枷樸、凡夫ー一、不レ能二自拔一」

【戀慕】ボ　男女がこひしたふ。王融詩「閨中空ー一」

【戀戀】レン　心にしたひ思ふ貌。依り思ひて見捨てざる義。史、范曄傳「綿絶ー一有二故人之意一」

【戀歌】コエ　圖　思愛の情を述べし和歌。

二十畫

【懼】クヲク　㊦

○おどろく（驚）○あわてみる（遽視）

【懼然】ゼン　驚きあわてる貌。史、姜肱傳「姜子ー一擁二衣冠一謝」＝聖恐。

廿一畫

【戇】トウ（次條）の俗字。

廿四畫

【戇】タウ・トウ　コウ　㊥江　㊦送　意に同じ

○おろか（鈍）ばかしゃうらき（愚直）「ー愚」○いっこく（剛直）史、汲黯傳「甚矣汲黯之ー也」

【戇狂】キヤウ　おろかにしてくるふ。韓愈文「余戇而狂」

【戇愚】グ　ばか正直。韓愈、潮州刺史謝上表「臣以二狂妄ー一、不レ識二禮度一」

【戇直】チヨク　ばかしゃうぢき。漢書、汲黯傳「汲黯爲レ人、ー一好二直諫一」

【戇朴】ボク　おろかにしてかざりなし。盧全賦「予小子ー一、必不レ能レ濟」

【戇突】トツ　おろかの呂晦文「伏念臣ー一、所賦愚朴」＝戇愚。

戈部

【戈】クワ　㊥

○ほこ（戟）古の兵器、枝の旁出せる兩刃の劍を長き柄の先につけたるもの、單枝なるをーと爲し、雙枝なるを戟と爲す。後漢書「任城何休好公羊學、著公羊墨守・左氏膏肓・穀梁廢疾・康成乃發二墨守一鍼二膏肓一起二廢疾一、休欵曰、康成入吾室、操吾ー以伐吾乎」○いくさ、たたかひ（戰）「干ー」「兵ー」「偃ー」「解ー」呉志「止ー興レ仁」

【倒戈】タウクワ　味方にやいばを向ける、うらぎりする。書、武成「前徒ーレー、攻二于後一以北」

【止戈】シクワ　兵亂を治め止める、武の字を分てば戈・止となる、故に戈を止めるを武の本義とす。左、宣十二「楚子曰、ーレー爲レ武」

【戈矛】クワボウ　ほこ。劉基詩「五戟橫ニー一」

【戈盾】クワジユン　ほこと、たてと。詩經、疏「戎兵、ー一矛戟之類」＝盾戈。

【戈戚】クワセキ　ほこと、をのと。酉陽雜俎「操ニー一而舞不レ止」

【戈船】クワセン　鮫龍などの害をふせぐ爲めに船の底の下面にほこを施せる船、一解に戈を載せし船をいふ。漢書、孝武紀「ー一將軍」

【戈兵】クワヘイ　武器。易經「爲レ日、爲レ電、爲二中女一、爲二甲胄一、爲ニー一」

【戈矛】クワボウ　ほこ、矛は枝のなきほこ。詩經「修二我ー一、與レ子同仇」唐書、禮樂志「長者持二弓矢一、短者持ニー一」

【戈鋌】クワテイ　ほこさき。陳厚耳詩「礪レ天隨二擊道一、駐レ日返ニー一」

【偃レ戈】エンクワ　ほこをふす。戰をやめる義。陳彭年、大寶箴「不レ懈二于位一、俗乃ーレー」＝偃革・偃甲・偃武。

【戈壁】ビ　蒙古にて沙漠の稱。

一畫

【戊】エツ　ヲチ　㊥月　今は鉞に作る

まさかり。儀仗に用ふる大いなる斧。

【戊】ボウ　モ　㊥茂　通音ボ

○つちのえ、十干の第五位。方角にては中央、五行にては土に屬す。＝著雍。○しげりさかんなり。茂盛。

二畫

【戍】ジユ　㊦遇

○まもる、まもり（守）干戈を持ちて國境を守る。又、其の守備兵「征ー」「屯ー」○とどむ（留）○守備兵を屯せしむる兵舍。

邊を守るなり、人の戈を持つに從ふ。
【戍衛】ジュエイ 國境をまもりかためる。又、其の兵。南海古蹟記「宋紹興間、皆置二一一一」
【戍衛】ジュエイ まもりのえだち。史記、賦斂愈重、一一無レ已」＝戍役。
【戍役】ジュエキ 邊境をまもるえだち。又、其の兵。詩、小雅、采薇、序「遣二一一一以捍二臨中國一」＝戍衛。
【戍甲】ジュカフ 國境をまもる甲兵。史、大宛傳「益二發一一卒十八萬一」＝戍卒。
【戍旅】ジュリョ まもりの兵のたつるはた。王粲詩、翩翩飛二一一一」
【戍鼓】ジュコ 戍兵の聲つつづみ。杜甫詩「一一斷二人行一」
【戍守】ジュシュ 國境の要害をまもる。又、其のまもり。宋史、李曦和傳「以爲二一一一」＝屯守・戍衛。
【戍卒】ジュソツ 國境をまもる兵卒。王命論「悟二一一之言、斷二復土之情一」＝戍兵・戍甲・戍人。
【戍兵】ジュヘイ 戍卒に同じ。
【戍邊】ジュヘン 國境を守る。杜甫詩「歸來頭白還レ一」
【戍樓】ジュロウ 敵兵を見張る爲めに設けしやぐら。城のものみ。儲光羲詩「寒雲隱二一一一」

【戌】ジュツ 圓

○いぬ、十二支の第十一位、方角にては西北の間、時刻にては午後七時より九時までの間。＝閹茂。
語源 戊に從ひ、一を含む。

【戎】ジュウ 東

○つはもの(兵)軍器の總稱。禮、月令、註「五一、弓・殳・矛・戈・戟也」○轉じて兵器を持つる人、つはもの(軍人)易、同人「伏レ戎于莽」莽は森林。○いくさぐるま(兵車)大を元一、小を小一といふ。詩、小雅「元一十乘」○大いなり。○えびす、西方の蠻族「東夷西一南蠻北狄」轉じて廣く野蠻人の義に用ふ。○たたかひ(戰爭)軍旅。家語、弟子行「材任治一」○あらそひ、なかたがひ。書、大禹謨「惟口興二好出一」○そなへ(軍備)○なんぢ(汝)○たすく、たすけ(相)○ぬく(拔)
【戎衣】ジュウイ 戰の時きる衣服。又、軍服を身につける。書、武成「一一一天下大定」＝戎服。
【戎夷】ジュウイ えびす、野蠻の國、夷は東方のえびす。禮、王制「中國一一五方之民」＝戎狄。
【戎右】ジュウウ 兵車の右方に乘りて武器を執る者、勇者を選びてこれに充つ。＝車右。
【戎行】ジュウカウ ○軍隊を進める、進軍。唐支宗詩「三軍臨二朔野一、駟馬御二一一一」○軍隊のなかま。晉書、臨機傳「拔二呂霊於一一一」
【戎羯】ジュウケツ 匈奴の別種のえびす。轉じて廣くえびすをいふ。唐書、禮樂志「明皇好二羯鼓一、謂本一一之樂一」＝戎狄。
【戎艦】ジュウカン いくさぶね。＝軍艦・戰艦。
【戎寄】ジュウキ 軍務の委任。柳宗元文「忝承二一一一」
【戎器】ジュウキ 武器をいふ。＝兵器・武器。
【戎馬】ジュウバ いくさに用ふるさしづめた、軍旗、轉じて軍隊。晉書、明帝紀「推二誠將相一、以總二一一一」
【戎華】ジュウクワ 戎はえびす、華は禮文の盛なる地、即ち中國。陰書、晉樂志「協二同内外一、混二一一一」＝華夷。
【戎軒】ジュウケン ○いくさぐるま。陰書、高祖紀「一一大駕、長二驅晉魏一」＝兵車・戎車。○戰爭。陳徴詩「投レ筆事二一一一」
【戎功】ジュウコウ 大いなるいさを。詩、周頌「念二茲一一一」
【戎裝】ジュウサウ いくさのよそほひ、出征の仕度「北史、楊大眼傳」＝軍裝。
【戎服】ジュウフク 大衆。醜は衆。詩、大雅「一一攸行」
【戎車】ジュウシャ いくさぐるま。事物紀原「一一周日二元戎一」
【戎陣】ジュウヂン いくさのちんだて。晉志「一一整齊」
【戎狄】ジュウテキ えびす。狄は北方のえびす。詩、晉頌、閟宮「一一是膺、荊舒是懲」
【戎毒】ジュウドク 大いなる害毒。書、舜典「乃不レ與二一一于遠邇一」
【戎馬】ジュウバ 兵馬に同じ、戎は兵車の戎。信文「一一之驅、不レ妨二餘裕一」
【戎蠻】ジュウバン ○えびす、蠻は南方のえびす。○春秋の時の小國の名、楚の爲めに滅ぼさる。
【戎伍】ジュウゴ とりこ。＝俘虜。
【戎服】ジュウフク 戎衣に同じ【左傳】
【戎兵】ジュウヘイ 軍服と兵器と。＝兵戎「我二一一車馬弓矢一一」
【戎路】ジュウロ いくさぐるま。路は輅の假書、「皆服二金甲一、乘二一一一」＝戎軒。

【我】ガ 圓 書

○わ、われ、おのれ(自稱)又、自國を稱す「一邦」春秋、隱八「一入」勸春秋は魯の史、故に魯を謂ひて一といふ。○特に親みていふ。論、述而「竊比於一老彭」○わたくし(私意)が强る。論、子罕「毋レ固毋一」○固己に執著する「一見」「一

執」

【我】ガ 圖 ㊀我・吾・予・余○我は自身なり、彼に對して稱する辭なり、我國・我君の如し。論語「太宰知レ我乎、吾少也賤」○吾は人に對して自ら稱す、己を主としていふ。論語「如有二復レ我者一、則吾必在二汶上一矣」○予は說文に「予相推予也」とあり、予余の說文に「詞之舒也」とあり、予よりは緩なり。史記「余誰ニ爲レ之執ニ轡一、所ニ欣慕一焉」離騷「名レ余曰ニ正則一兮、字レ余曰ニ靈均一」

【我愛】ガアイ 圖我に愛著する心。四煩惱の一。他愛の對。

【我意】ガイ 己のかんがへ、わがまま。㊁私意。

【我見】ガケン 圖七見の一、自分勝手のかんがへ、己の私見に執著する謬見。

【我執】ガシフ 圖かたいぢ、我意を張る。

【我的】ワガテキ 圖私の。

【我田引水】ガデンインスイ わが田に水をひき入れる、自分勝手のことをする。

【我儘】ワガママ 自己をいふ。他人を指して退儕といふの對。宋・黃庭堅詩「一一一日還到レ家、倘儻何日到ニ鳧州一」

【我慢】ガマン ○圖七慢の一、自ら己の能を恃みて他人をしのぐ。四十二章經「除ニ滅一一離一」㊁自慢。○轉じて、我意を張るにいふ。かたいぢ。㊁我執。○圖こらへしのぶ。

【我們】ガモン 圖わたくしども。㊁我輩、我等。

【我聞】ガモン 圖我はききたり「如是一一」

【我欲】ガヨク よくばり。㊁我利。

【我利】ガリ 自分ばかりの利益。㊁我欲。

【我流】ガリウ 圖自分がってに定めたる流儀。㊁自己流。

【我所レ思兮】トガオモヒヲ 我が心に思ふところ、兮は助辭。張衡、四愁詩「——在ニ太山一」

【後ニ我后一后來其蘇】コウガコウノキタリテソセン 民が仁者の軍の來るを喜ぶ辭。孟、梁惠王「誅ニ其君一而弔ニ其民一、若ニ時雨降一、民大悅、書曰、——」書、仲虺之誥「室家相慶曰、後ニ予后一后來其蘇」

【我心匪レ石不レ可レ轉】ワガコヽロイシニアラズヽベカラズテン 石は轉ずべきも、我が心は眞確にして動かすべからず。詩、邶風、柏舟「——也、我心匪レ席、不レ可レ卷也」

【我心ニ我心一】ワガコヽロニワガコヽロ 他人の爲したる言行が自分の意思と符合して喜ばしく思ふ。詩、邶風「我思ニ古人一、實——」

【我心如レ秤】ワガコヽロハカリノゴトシ 心公平無私なるをいふ。楊升菴文集「諸葛孔明語云、——、不レ能ニ爲レ人作ニ低昂一」㊁秤心。

【我曹】ワガトモ わがともがら。徐幹詩「一一盍是沽歟者」㊁我輩。

【我輩】ワガラ 圖われら。陸游詩「少舒一一胸中氣、一掃羣兒分外愁」㊁我曹。

【我武惟揚】ワガブコヽニアガル 我が國の武威が盛んになる。書、泰誓「——、侵ニ于之疆一」

【我儕】ワガトモ 圖かつて、きまま。㊁故緯。

【我見猶憐】ワガミナホアハレム われが見てさへなほ愛すべき心地する。世說「晉祖逖納ニ李勢女一爲レ妾、其妻妒ニ往殺一レ之、及レ至、見ニ女姿貌絕麗一、乃撫ニ刀於地一抱レ之、曰——、何況老奴」

【自レ我作レ古】ミヅカラワレヨリコヲナス 古禮に拘らず、自ら故事となるべき禮を作り出す。宋史、禮志「孝宗欲レ不レ用ニ易レ月之制一曰、——何害」

【自レ我得レ之自レ我捐レ之】ミヅカラワレニエシヲミヅカラワレニスツ 己の得たるものを己が失ふなれば、恨む所なし（史、劉其武安侯傳）

【我忘レ吾】ワレワレヲワスル 心がうっとりとして、己の存在に氣附かず。蘇軾詩「豈惟主忘レ客、今我亦忘レ吾」

【戒】カイ ケ 卦

○いましめ「古一」「法一」「明一」「遣一」○いましむ、氣をつける（警）「警一」「勸一」「鑑一」「懲一」○さとす（敎諭）「敎一」○つぐ（告）いひつける（命）孟、梁惠王「大一於國」○つつしむ（愼）「愼一」○禁止する「五一」「一酒」「一殺」○そなふ、そなへ（具備）患を防ぐ。○ものいみ（齋）「齋一」ものいみする。○まもる（守）○文體の名。箴の類。文體明辯「按、宇書云、一者、警敎之辭、字本作誡」「堯一」○さかひ。唐書、天文志「江河爲ニ南北兩一」㊁界。○圖佛法上のいましめ「五一」「一律」

【戒】シヤイ 戒・誡・警・儆・箴・敕○戒は誡と音義通ず、但し戒は、此の言を忘るるな、此の場を去るなと、何か目當ありて、きっとこれをかくせよと命ずるなり。論語「戒之在レ色」○誡は警敎之辭目レ誡と註す、必ずしも目當の有無を問はず、用心をさするに用ふ。易繫「小懲而大誡、此小人之福也」○警は目をさまし驚かす意、警レ後は、よまはりして人人に氣をつけさす義。歐文「目欲レ瞑而復警」○儆は警と通ず。○箴は規戒なり。玉海に「箴者諫辭之辭、若ニ箴之療ニ疾、故名レ箴」とあり、針にて病をなほす如く、急度ヤツ人をいましめ、惡しきを正すなり。箴言・箴諫と熟す。○敕は警戒の意を兼ぬ、勅また勅に作る、筋と通用す。

【戒禁】カイキン ○いましめ。おきて。周禮「掌ニ其政教與ニ其一一」○圖一切の惡を戒めて制止する。

【戒行】カイギヤウ 圖佛尼が戒律を守る操行

をいふ。洛陽伽藍記「一一汎苦、莫レ可二捴揚一」

【戒具】カイグ　圏囚人の逃亡又は暴行などを防ぐに用ふる具。手錠・足枷などの。

【戒慎】カイシン　いましめおそれる。左傳「百官于是一一而不二敢易一紀律一」

【戒厳】カイゲン　敵の攻め寄する時、厳しく警戒する。正字通「敵将レ至、厳レ備曰二一一一、敵退弛レ備、曰二除厳一」

【戒示】カイシ　いましめを垂れ示す。漢書「一二一子孫一」

【戒指】カイシ　ゆびわ。三餘贅筆「世俗以二金銀一為レ環、置二婦人指間一、謂二之一一一」

【戒師】カイシ　圏授戒の師僧、傳戒師。心地観経「應レ請二一一佛菩薩一」

【戒心】カイシン　不慮に備ふる心、用心する。孟、公孫丑「予有二一一一」

【戒慎】カイシン　いましめつつしむ。中庸「君子一二一乎其所レ不レ睹」

【戒終】カイシュウ　をはりを全うせんことを戒める。漢書、枚乘傳「善レ始以一一レ一」

【戒善】カイゼン　仏三編の第二、小乗・大乗の戒律威儀。＝戒編。

【戒刀】カイタウ　○圏袈裟を截つに用ふる刃物。○身だしなみに僧侶のもつ刀。釋氏要覽「一一皆是道具」

【戒旦】カイタン　夜の明けたることを警告して用意を為さしむ。晉書、趙至傳「雞鳴一一」＝戒晨。

【戒壇】カイダン　圏戒法を授くる式場。釋門事物紀原「漢魏之僧雖二剃染一、而戒法未レ備、唯受二三歸一、羅平正元中、既傳二戒律一、立二太倉揭磨法一、斯蓋比丘立二一一一之始也」

【戒杖】カイジャウ　圏山伏などの持つつゑ。＝錫杖。

【戒定慧】カイヂヤウエ　圏戒律・禪定・智慧の略稱。法華經科註「眞珠瓔珞者、即——陀羅尼三昧四禪珞也」

【戒勅】カイチョク　いましめる。釈をつけさせる。北史、蘇綽傳「每レ至二餞首一、必一二一部人一」＝戒飭。

【戒飭】カイチョク　いましめととのふ。宋史、史彌遠傳「一二將士一、固守二封圻一」

【戒牒】カイテフ　僧尼が戒を受け し證證ショウコ＝度牒。

【戒名】カイミヤウ　○圏戒法を受けたる後につくる名。＝法號。○死後につくる名。＝法名。

【戒文】カイモン　圏戒律の條文。

【戒力】カイリキ　圏戒律を持して得たる功徳力。

【戒律】カイリツ　圏戒と律と。僧尼の守るべき規則。翻譯名義集「以二魏嘉平一、至二雒陽一立二羯磨受法一、中夏一一始也」

【成】セイ　ジャウ　庚

○なる、なす（就）「作一」「落一」○をはる（畢）功卒り業就るにいふ「大器晩一」○をはる（終）業の了終するを一一といふ。書、金縢「籥詔九一」○たひらぐ（平）和解す、和睦する。左、文七「惠伯一之」○たひらぎ、和睦。詩、大雅「厥丙質厥一」○よし（善）○かならず（必）呉語「勝未可一一」○あはす（併）○かさぬ（重）○さかんなり（盛）呂覽、先己「松柏一而塗之人已蔭矣」○なる、爲るに同じ。劉希夷詩「更聞桑田變一海」○のり（品式）○十の數に充つる。又、計數にて十分の七を七一、十分の八を八一といふ。圏の七割八割の割に當る。○方十里の地。左傳「田有一一」

同訓異語　成・爲・就・濟・作の別は爲（爪部八畫）の條を見よ。

【成劫】ジャウコフ　圏四劫の一、世界が出來あがりて人類の生殖する時代。

【成實宗】ジャウジツシュウ　圏佛教の一派、阿梨跋摩バツマの成實論に本づきて立つ。我國にては南部の僧道昭に始まる。

【成就】ジャウジュ　出來あがる　なしとぐ。史、呂后紀「五年六年一一」

【成道】ジャウダウ　圏さとりをひらく　佛道を會得する。＝成佛得道。

【成佛】ジャウブツ　○圏衆生が發心修行してさとりを開き佛果を成就する。○轉じて死ぬ、往生する。

【成案】セイアン　實行の出來るやうに立てたるみこみ。又、出來あがりしみつもり。

【成衣】セイイ　圏衣服を仕立てる。淮南子「先レ縫而後レ鍼、不レ可二以一一一」に本づく。＝製衣。

【成育】セイイク　そだてて大きくする。王褒、四子講德論「胎卵得二以一一一、草木遂二其零茂一」＝成長・育成。

【成戒】セイカイ　動かすべからざるいましめ。魏志「窮レ兵黷レ武、古有二一一一」

【成效】セイカウ　事物の功果を見る證。

【成規】セイキ　○きまりを成す規定。莊、田子方「昔之見レ我者、還退一一レ一一成レ矩」○正圓のかたちをなす。周禮「天子之弓、合レ九而一一」

【成器】セイキ　よきうつは。禮、王制「錦文珠玉一一、不レ粥二於市一」＝善器。

【成均】セイキン　成就してよくととのへる。轉じて古の大學の名。周禮、春官「大司樂、掌二一一之法一、以治二建國之學政一」

【成句】セイク　出來あがりたる句、前人のつくりおきたる句。

【成蹊】セイケイ　美くしき桃李の下には、人來りて自らこみちが出來る、徳ある人は沈默して居ても、人自ら之に隨するに喩ふ。史、李廣傳「諺曰、桃李不レ言、下自一レ一、此言雖レ小、可二以喩一レ大也」

【成憲】セイケン　先王の法憲ノリ書、說命「監二于先王ノ一ー、其永無ノ愆」
【成業】セイゲフ　仕事をなしとげる。史、賈逵傳「部署郭縱以二職治一ー」
【成語】セイゴ　完全にまとまりしことば。‖熟語。
【成功】セイコウ　○事業を成し遂げる。できあがり。論、泰伯「巍巍乎其有二ー一也」○秋のとりいれ。左傳「三務ノ一ー」‖秋收。
【成功之下不ノ可二久處一】セイコウノモトハヒサシクスベカラズ　功成りて退かざれば、總を受け禍を招くに至る、故に久しく處るべからず。史、蔡澤傳「書曰、――」
【成國】セイコク　大國。左傳「ー一不ノ過ノ半二天子之軍一」
【成婚】セイコン　男女の結婚をいふ。‖成昏（左傳）
【成就】セイシュ　○事を成就せしむるはかりごと。○已に成立せしはかりごと。
【成算】セイサン　なし遂ぐるみこみの王逢詩「經二略江淮一有二ー一」
【成準】セイジュン　○事をしとげる。史、高祖紀「劉季固多二大言一、少二ー一」○已に出來上りたる事。論、八佾「ー一不ノ說」
【成周】セイシウ　三代の時の周の美稱。又、其の都なる洛邑の稱。書經「以二ー一之衆一、命二畢公一」
【成人】セイジン　○學德の完き人。論、憲問「子路問二ー一」‖全人。○二十歲以上の人、一人前になる。晉祠、絕交書「男子八歲、未ノ及二ー一」
【成章】セイシャウ　あやをなす、文理の成就する義。論、公冶長「狂簡斐然ー一」
【成熟】セイジュク　○十分にみのる。方岳詩「江鄉十月稻ー一」○學藝などが十分に出來あがる。
【成遂】セイスイ　なしとげる。文子「不ノ慈不ノ愛、不ノ能二ー一」
【成績】セイセキ　いさを、できばえ。績は功。書經、萬邦咸休、惟王有二ー一」
【成竹】セイチク　事を爲すに當りて先づ其の計畫を立てる。蘇軾、文與可畫二篔簹谷偃竹記一「畫ノ竹、必先得二ー一于胸中一、執ノ筆熟視、乃見二其所ノ欲ノ畫者一、急起從ノ之、振ノ筆直遂、以追二其所ノ見、少縱則逝矣」
【成長】セイチャウ　おひたつ。‖成育。
【成蟲】セイチウ　昆蟲が仔蟲より變態して親蟲と同じ形になりしもの。幼蟲の對。
【成丁】セイテイ　二十歲以上の壯者。北史、隋文帝紀「人以二十一一ー一ノ一」‖成人。
【成都】セイト　四川省の首邑、三國の蜀漢の都、唐玄宗蜀に幸し、遂てて南京と爲す。
【成童】セイドウ　十五歲以上の少年。禮、內則「ー一舞ノ象、學二射御一」
【成德】セイトク　德を成就す。又、成就せしとく。易經「君子以ノ一ー爲ノ行」
【成年】セイネン　二十歲以上の齡、成人となりし年齡。
【成敗】セイハイ　○なると、やぶれると。勝つと負けると。史、高祖紀「天下匈匈、苦戰數歲、ー一未ノ可ノ知」○國政をとり行ふ。又、しおき。盧綸「喧嘩聞ー一」
【成否】セイヒ　事の成ると成らざると。書經、虞「三年一閱天道成、人亦可二以成一功一故以二三年一考二其功之ー一」‖成敗。
【成美】セイビ　人をはげまし勸めて美德をなさしむ。論、眞淵「子曰、君子成二人之美一、不ノ成二人之惡一、小人反ノ之」
【成鳳】セイホウ　人に對する文の添削を乞ふにいふ。莊、徐無鬼「郢人聖二漫其鼻端一、若二蠅翼一、使二匠石斲一之、匠石運ノ斤ノ一、聽而斲ノ之、盡ノ堊而鼻不ノ傷、郢人立不ノ失ノ容」とあるに本づく。‖郢斧・郢正。
【成分】セイブン　物體を組織する原質。
【成文】セイブン　書きあらはして文を成す。
【成文律】セイブンリツ　すでに法文となれる法律規則。不文律の對。‖成文法。
【成名】セイメイ　名譽をなしとげる。易經「晉ノ積、不ノ足二以ー一」
【成立】セイリツ　○なりたつ、なりたち。柳氏家訓「ー一之難、如ノ升ノ天、履ノ堅之易如ノ墜ノ屯」○成就する。後漢書、郭禹傳「兼ノ學淹緯之功、猶恐無ノ所二ー一」
【守成】シュセイ　なり立ちたるを守りて失はざるやうにする。貞觀政要「帝王之業、草創與ノ一ー孰難」

四　或　キ

【或】　㊀コク・ワク　㊁キ　職　職

㊀あるひは、あるは、もしくは。中庸「ー一學而知之、ー一困而知之」疑ひて未だ定めざるの辭。○あるもの。又、あるひと。論、爲政「ー一謂二孔子一曰」‖或人。○ある、あり（有）後漢書、郭泰傳「ー一勸二林宗仕進一者」○うたがふ（疑惑）○まどふ。‖惑。○あやしむ（怪）孟、告子「無ー一」㊁くに、土地。國の古字。口と戈とに從ふ。以て其の一を守る、一は地なり。‖域。

同訓異語　或・有・在の別は有（月部二畫）の條を見よ。

【或問】ワクモン　或人の間に答ふるに擬して作れる文の一體「大學ー一」

【戔】　㊀ザン　㊁セン　先　寒

㊀そこなふ（傷賊）‖殘。○ーーは委積の貌。㊁ーーはすくなし（淺小）

【殘害】ザンガイ 連小なる貌。晏、黃卦「東帛ニ―、貴二於丘園一」

【戕】 シャク サン 陽

○ころす（殺）○そこなふ（殘）「―害」「搶―」

【殺害】サツガイ ころす。＝殺害・戕賊。

【戕虐】ショウギャク そこなひしへたげる。唐書、忠思明傳「――似二思明一」＝殘害。

【戕殺】ショウサツ ころす。金史、完顏伯嘉傳「―ニ―無辜一」

【戕賊】ショウゾク そこなひころす。孟、告子「將ニ―ニ人一以爲二仁義上與一」＝戕害・殺賊。

【戕殺】ショウサツ ころす。＝殺戮。

七畫

【戛】 カツ 黠 戞は俗字

○ほこ（戟）ながきほこ（長矛）○うつ（擊）樂器を輕くうつ。○する（爲）「摩ー」すりてならす。○ー―は、くひちがふ（齟齬）○のり（常禮）書、康誥「不率大ー」○わらふ。結構に通ず。

【戛戛】カツカツ ○くひちがふ貌。韓愈、答二李翊二書一「ー―乎其難哉」○相撃つこゑの形容。

【戛撃】カツゲキ 音をさせて輕くうつ。奏

【戛然】カツゼン 金石のうち合ふこゑの形容。

【戚】 ㊀ セキ ㊁ ソク 沃 屋

㊀斧の（斧）まさかり。孟、梁惠王「干戈ー揚」○したしむ、ちかし（親）○みうち（親類）「外ー」「親ー」（六ーは父・母・兄弟・妻・子）○いたむ（傷）かなしむ（哀）「哀ー」「悲ー」論、八佾「喪與二其易一也寧ー」○うれふ（憂）うれへなやむ（煩惱）「憂ー」○いきどほる（憤）㊁とし（疾）せまる（促）＝蹙。

【戚族】セキゾク みうち、つづきあひ。又、戚里に同じ。劉禹錫詩「軍家誅ニ―一」

【戚屬】セキゾク 母や妻のみうち。晉書、武帝紀「宗室ー―、國之枝葉」＝戚族。

【戚夫人】セキフジン 漢の高祖の寵姫、趙王如意を生む、後に呂后の爲めに殺さる、其の耳目手足を去り、名づけて人彘といふ。

【戚揚】セキヨウ をのと、まさかりと。詩、大雅「干戈ー―、爰方啓レ行」＝斧鉞。

【戚里】セキリ 天子の母方の親類の居る所。轉じて外戚の義とす。史、萬石君傳「從二其家長安中ー―一、以三姉爲二美人一也」＝戚畹。

【戚促】ソクセキ せまりて急なり、度量が狹く小なり。李白詩「嗷嗷空倉雀、身計何ー―」

【戚速】セキソク せまりてはやし。＝急速・促促。

八畫

【戞】 戛（前畫）の俗字。

【戟】 ゲキ 陌 戟は俗字

兩旁に枝の出たるほこ「劍ー」「矛ー」事物紀原「呂氏春秋云、蚩尤造二五兵一、其一也」

【戟架】ゲキカ ほこをかくる具。唐書、柳仲郢傳「鳥集二升平第一、庭樹ー―皆滿、五日乃散」

【戟叉】ゲキサ さすまた。後漢書、楊政傳「施二鐵叉一以ニ―一」

【戟楯】ゲキジュン 次條に同じ（宋史、輿服志）

【戟盾】ゲキジュン ほこと、たてと、盾は楯。漢書、李陵傳「前行持ニ―一、後行持二弓弩一」

【戟鉾】ゲキボウ ほこのきっさき。裴度文「鋒劍鋩、ー―鍔」

九畫

【戡】 ㊀ カン ㊁ チン 覃 侵

㊀かつ（勝・克）敵に勝ち亂をしづめる。○ころす（殺）○さす（刺）○とる（取）㊁すこしくきる（小斫）

同訓異義 戡・勝・克・捷・亂の別は勝（力部十畫）の條を見よ。

【戡亂】カンラン たひらげしづめる、爽は平。晉槇、武帝誄「撃雄ー―、拯二民于下一」＝平定。

【戡難】カンナン 國家の危難をたひらげさだめる。後漢書、無志在ニ―一」

【戡定】カンテイ 敵に勝ちて亂を定める。

雲、康王之誥「一二一厥功」
【戩珍】カン 敵をほろぼしつくす。珍は絕。晉書、載記「乃是一一之要」＝殲珍。

【戕】 キ 支

○ほこのたぐひ(戟屬)書、顧命「一人冕執一」○孔子の子孫の名。韓愈、孔公誌銘「孔子之後三十八世、有"諱"曰一」

【戢】 シフ 緝

○をさむ(藏)兵器を藏ヲサめる。詩、周頌「載一二干戈」○をさめる(斂)詩、小雅「鴛鴦在梁、一其左翼」○あつむ、あつまる(聚)○とどむ、とどまる、やめる(止)左、隱四「兵猶火也、弗"將"自斃"也」戰を止めざれば卻りて自滅する。○かくれる(隱)
【戢羽】シフ 鳥がはねを收めて飛ばず。陶潛、歸鳥詩「翼翼歸鳥、一二爾條」＝戢翼。
【戢楹】シフエイ かぢをとどめる。陶潛詩「飢鳳負二我心一、一一守二窮湖一」
【戢兵】シフヘイ をさめつつむ、武器を藏して復た用ひず、戰爭をやめる義。詩、周頌「載戢二干戈一、戢櫜二弓矢一」より出づ。
【戢兵】シフヘイ たたかひをやめる。左、隱四「兵猶レ火也、不レ戢將二自焚一也」薛稷詩「深恩乃一一」＝戢戈。
【戢翼】シフヨク 鳥が羽ををさめて飛ばず、致仕して歸隱するに喩ふ。郭璞詩「一一棲二椒極一」＝斂羽・戢羽。
【戢鱗潛翼】シフリンセンヨク 志を抱きて時を待つを魚鳥の靜止するに喩ふ。晉書「一一、思屬二風雲一」

【截】 十畫 セツ 屑

○たつ(斷)「橫一」「斷一」＝絕。○きる(切)○一然は物事の區別のはっきりとする貌。○一一は辯給ベンキフマヘの貌。書、秦誓「惟一一善編言」
同訓異字 截・斬・斫・劈・鑽・切・伐の別は斬(斤部七畫)の條を見よ。○截・斷・絕・裁・製の別は斷(斤部十四畫)の條を見よ。
【截腹】セツ はらをきる。晉書、石季龍載記「一レ一剖レ心、誦レ野刳レ孕」
【截斷】セツダン きりたつ。徐陵詩「流來天際水、一一世間塵」
【截肉】セツニク きりみ。又、にくをきる。後漢書、毋丘一レ」
【截截】セツ きりやぶる。謝宗可、雁陣詩「風驅一一湘烟闊」
【截髮】セツハツ かみをたちきる。＝斷髮。

【戩】 センジン 霰 銑

つく、つくす。詩、小雅「俾一爾一穀」天の福祿を受け盡さしむる。○轉じて一穀の二字にて福祿の義とす。金壺字考「戩亦晉薦、福祥也」○ことごとく(盡)○ほろぶ、ほろぼす(滅)＝翦。

【戮】 十一畫 リク 屋

一に僇に作る
○ころす(殺)罪人を刑し殺す「刑一」書經「不用命、一於社」○さらす(陳尸)かばねをさらしものにする。晉語「殺其生者而一其死者」○つみ(刑罰)論、公冶長「邦無道免於刑一」○おろかなり(癡行)○はづかしむ(辱)「一辱」○力をあはす。＝勠。○かり(野獵)
【戮力】リクリョク ちからをあはす。書、湯誥「律求二元聖一、與レ之一レ一」＝竝力・勠力。
【戮笑】リクセウ はづかしめ笑はれる。戰國策「爲二天下一一一」
【戮辱】リクジョク ころすと、むちうつと。孟子「一一所レ施、必加二於有罪一」

【戲】 十二畫 戲(戈部十三畫)の俗字。

【戰】 センシ 霰

○たたかふ、たたかひ(鬪)「征一」「會一」「累一」「連一」「苦一」○凡そ勝負を較する者皆一といふ「酒一」「商一」「笨一」「茗一」○をののく(慄)法言、吾子「見二財而一一」おそれる(懼)「心一」○ふるふ「寒一」○そよぐ。ゆれうごく。白居易詩「怯レ教蕉葉一一」
同訓異字 戰・鬪・格・鬨○戰はたたき合ふ義。史記「漢王挑レ戰」○鬪は勝をあらそふ義、爭鬪・格鬪などと用ふ。○格は兩方よりつき合ふ義。周語の「穀洛二水鬪」の注に「二水格也」○鬨はときの聲をあげて戰ふ。孟子「鄒與レ魯鬨」
【戰友】センユウ 戰爭に出でし同隊のなかま。

【戰雲】センウン　戰の始まらんとするくもゆき。又、戰爭のはげしきありさま、殺伐の氣の形容。
【戰役】センエキ　戰のつとめ、戰爭。
【戰汗】センカン　をののきてひやあせが出る。隨手錄「驚箱ー一淡ノ體」
【戰艦】センカン　いくさぶね。晉書、陶侃傳「侃乃以二運船一爲二ー一一」＝軍艦・艦艦。
【戰紀】センキ　次條に同じ。
【戰記】センキ　戰爭の勝負の記錄。＝戰紀・軍記。
【戰悸】センキ　おそれをののく。晉書、禮志「猥承二大禮一、憂懼ー一」＝震悸。
【戰機】センキ　○いくさのはかりごと。＝戰略。○戰爭の起る機會、機はをり。
【戰況】センキョウ　戰爭のありさま、戰爭の狀況。＝戰狀。
【戰兢】センキョウ　おそれて謹む。戰戰兢兢の略。後漢書、鄧皇后紀「承二事陰后一、夙夜ー一」＝惕兢。
【戰局】センキョク　たたかひのなりゆき。戰爭の大勢。
【戰懼】センク　ふるひおそれる。四征賦「心ー一以兢慄」＝震懼・戰慄。
【戰慄】センリツ　ふるひおそれる。法苑珠林「遍體ー一、身毛悉竪」
【戰擊】センゲキ　たたかふ。新論「能ー一者、教習之功也」＝鬪擊。
【戰後】センゴ　いくさののちで張喬詩「故里行人ー一疎」
【戰國】センゴク　○交戰中のくに。史、蘇秦傳「凡天下ー一七」○周の威烈王より秦始皇の天下を統一せしまで二百四年間の稱。○國足利氏の末、應仁・文明の亂より德川氏の初期に至る百餘年間の稱。
【戰國策】センゴクサク　三十三卷、撰者未詳、周の安王の世より秦の始皇に至るまでの事を國別に記す。
【戰國七雄】センゴクシチユウ　支那戰國時代の七強國、齊・楚・燕・韓・趙・魏・秦。
【戰爭】センソウ　たたかふ、たたかひ。事物紀原「爲二ー一起二炎黃之際一也」
【戰象】センゾウ　戰に用ふる象。舊唐書、憲宗紀「獲二ー一兵械一」＝鬪象。
【戰艘】センソウ　いくさぶね。吳藥詩、東都晉無識、南海紛二ー一一」＝戰艦。
【戰士】センシ　いくさびと、軍人。史、秦紀「招二ー一、明二功賞一」＝鬪士・兵卒。
【戰史】センシ　いくさの事實を記せし書。＝戰紀・戰記。
【戰死】センシ　うちじにに。史、秦紀「動二ー一之賞罰一」＝陣沒・戰沒・陣亡。
【戰時禁制品】センジキンセイヒン　公法上又は條約上、戰時に當りて交戰國に輸入することを禁ずる物品。
【戰術】センジュツ　戰爭の仕方、作戰の術策。＝戰法・用兵術。
【戰慄】センショウ　ふるひおそれる。晉書、羊祜傳「夙夜ー一、以ノ榮爲ノ憂」＝震慄・戰竦。
【戰竦】センショウ　をののき恐れてすくむ。＝戰慄。
【戰勝】センショウ　戰捷に同じ。
【戰色】センショク　をののきおそれる顏色。論、鄉黨「物如ー一」
【戰捷】センショウ　たたかひてかつ。對志、諸葛亮傳「亮在二南中一、所在ー一」＝戰勝。
【戰慴】センショウ　をののきおそれる。晉書、桓溫傳「當時咸有二位望一者、咸ー一失ノ色」＝震慴・戰慄。
【戰船】センセン　いくさぶね。晉書「作ー一、通二水道一」
【戰線】センセン　戰爭の行はれる區域。＝戰關線。
【戰戰】センセン　おそれる貌。書、仲虺之誥「小大ー一」
【戰戰兢兢】センセンキョウキョウ　戰戰はおそれる、兢兢は謹む。詩、小雅、小旻「ー一、如ノ臨二深淵一、如ノ履二薄氷一」＝戰兢。
【戰戰慄慄】センセンリツリツ　ふるひおそれる。淮南子、人間訓、堯戒「ー一、日愼二一日一、人莫ノ踐二於山一、踐二於怪一」＝戰慄・戰兢慄慄。
【戰端】センタン　たたかひのはじめ。戰爭の發端。＝鬪衅。
【戰地】センチ　たたかひの場所。孫子「先處ニー一、而待ノ敵者佚」＝戰場。
【戰智】センチ　ちえをきそふ。中說「彊國戰ノ兵、霸國ー一」
【戰陣】センジン　いくさのぢんだて。博奕論「求二之子ー一、則非二孫吳之倫一也」＝戰陳。
【戰陳無ノ勇非ノ孝也】センジンニユウナキハコウニアラズ　戰爭に勇なければ名を損ず、故に不孝となる。曾參の語（禮、祭義）
【戰塵】センジン　いくさ場にたつちりほこり、戰爭のさわぎに喩ふ。
【戰場】センジョウ　たたかひの起れるばしょ。唐書、李碧傳「著ノ甲二古ー一ノ文上」＝戰地。
【戰鬪】セントウ　たたかふ、たたかひ。品字箋「持ノ戈相向爲ノ戰、攘ノ臂而前曰ノ鬪、語云、勇二于公戰一而怯二于私鬪一」左傳「喜有二施舍一、怒有ニー一二史、始皇紀「天下苦ニー一不ニ休」＝戰爭。
【戰鬪艦】センカン　いくさぶね、軍艦の中、最も有力にして海軍の主力となるもの。
【戰鬪力】センリョク　戰爭に堪へる力。攻擊の實力。
【戰敗】センパイ　まけいくさ。いくさにまける「ー一國」
【戰亡】センボウ　うちじにする。宋書「爲ニー一將士二擧ノ哀」＝戰死・戰沒。
【戰袍】センポウ　古の陣羽織の類。又、戰場に著る衣服。本事詩「ー一經ノ手作、知落二阿誰邊一」＝戎衣。
【戰壘】センルイ　とりで、ちんや。蘇轍詩「城外羅ニー一一」＝營壘。
【戰報】センポウ　戰のしらせ、戰況の報知。
【戰伐】センバツ　たたかひうつ。吳越春秋「子胥力二于ー一、死二于諫議一」
【戰法】センポウ　たたかひの方法、兵士の坐

作遁退などのしかた（周禮、注）‖戰術。

【戰備】セン　戰爭のそなへ、用意。漢書「行必爲ニ一ニ止必堅ニ營壁ニ」

【戰筆記】センピツキ　ふでをふるはし動かして盡く繪畫、隋の孫尚子始めて此體を創む。

【戰怖】センフ　ふるひおそれる。錢志、晉寧傳「不ニ能ニ仰答ニ陛下恩養之厚ニ、夙宵ニ一、無ニ地ニ自措ニ」‖戰慄。

【戰鋒】センホウ　たたかひのほこさき。漢書、淮陰侯傳「漢兵遠鬪、窮寇ニ一不レ可レ當也」‖軍鋒。

【戰沒】センボツ　次條に同じ。

【戰殁】センボツ　うちじに。北史、賀泰傳「泰父兄ニ一ニ」‖戰沒・戰死・陣亡。

【戰亂】センラン　いくさのみだれ。‖兵亂。

【戰栗】センリツ　をののきおそれる。論、八佾「周人以レ栗曰、使ニ民ニ一ニ」‖戰慄、股慄。

【戰慄】センリツ　をののきおそれる。‖戰栗。

【戰利品】センリヒン　よんどり品、戰に勝ちて分捕せし品物。‖鹵獲品。

【戰略】センリヤク　いくさのはかりごと、作戰計畫。鄭畋文「習ニ起翦之兵書ニ、用ニ關張之ニ一ニ」

【挑レ戰】チヨウセン　我より敵に戰を求める。左、宣十二「趙旃請レ一レ弗レ許」

【好レ戰】コウセン　戰爭をすき好む。孟、梁惠王「孟子對曰、王ニ一レ、請以レ戰喩」

【卜戰】ボクセン　戰の吉凶をうらなふ。

【戰勝而將驕卒惰者敗】センシヨウシカウシユツダセルモノハヤブル　戰に勝ちて大將がおごり、兵卒が怠るときは、必ず敗れる（漢書、項籍傳）。

【戰勝易レ守レ勝難】センシヨウハヤスクシユシヨウハカタシ　戰爭に勝つは易く、戰勝を持ち續くるは難し（吳子、圖國）

【戰如ニ風發一攻如ニ河決一】センジヨフウハツノゴトクコウジヨカケツノゴトシ　戰爭は風の發する如く速に、攻撃は河の決するが如く時を移さず（三略、上略）

【戰必勝攻必取】センカナラズカチコウカナラズトル　善く兵を用ふるにいふ。史、高祖紀「連百萬之衆ニ一ニ、吾不レ如ニ韓信ニ」

十三畫

【戲】㊀キ・ギ　㊁ギ　㊂ケ　戲は俗字

㊀たはむれ、たはむる（嬉）「兒ニ一ニ」「奇ニ一ニ」「幻ニ一ニ」史記「嬉ニ常陳ニ俎豆ニ」おどけ（謔）〇もてあそぶ（弄）〇しばゐ（芝居）演劇。史、孔子世家「優倡侏儒爲ニ一ニ而前」〇角技（ワザ）㊁於ニ一ニはあ、歎息の聲。大學「詩云、於ニ一ニ前王不忘」〇戲に通ず、伏羲は古の帝號。莊子に伏ニ一ニに作る。‖伏犧。〇族の屬。‖麾。

【戲園】ギエン　㊀劇場。‖戲館。

【戲下】ギカ　大將のはたもと、戲は麾に通ず、大將の旗。漢書、高帝紀「諸侯罷ニ一ニ各就ニ國ニ」‖麾下・旗下。

【戲弭】ギビ　たはむれなれる。史、循吏傳「竪子不ニ一ニ、疏自不ニ提擊ニ」

【戲毬】ギキウ　まりをもてあそぶ。夢溪筆談「晉夢至ニ一歲ニ、水殿中觀ニ宮女ニ一ニ」

【戲謔】ギギヤク　おどけ。中論「君子口無ニ一ニ之言ニ、言必有レ防」‖謔謔。

【戲曲】ギキヨク　芝居の脚本、芝居の筋書、即ち淨瑠璃院本の如く節譜をつけ、芝居に演ずる爲めに作りし文章。輟耕錄「唐有ニ傳奇ニ、宋有ニ一ニ、金有ニ院本雜劇ニ、其實一也」

【戲玩】ギガン　たはむれもてあそぶ。開元天寶遺事）‖戲弄。

【戲館】ギクワン　㊀しばゐ。‖戲園・劇場。

【戲言】ギゲン　たはむれのことば。史記「史佚曰、天子無ニ一ニ」‖漫語。

【戲鴻】ギコウ　文字の雄勢の形容。法書要錄「羅紹威、意氣密麗、若ニ飛鴻戲レ海、舞鸞遊レ天」

【戲鴻堂帖】ギコウダウデフ　明の董其昌の刻せし所の叢帖の名、草率にして成る、未だ善本と爲さず。

【戲子】ギシ　㊀俳優。

【戲書】ギシヨ　ざれがき。又、らくがき。齊家法要「ニ一視面及几案上、最爲ニ不雅ニ、切宜レ戒レ之」

【戲水】ギスイ　川の名、陝西省臨潼縣の東に在り、驪山より出でて渭水に入る、項羽鴻に入り過みて此に至る。

【戲蝶】ギテフ　たはむれなれる。唐書「一ニ無レ度」‖戲狎。

【戲惹】ギジヤク　たはむれおこたる。晉語「無ニ一ニ、懼ニ大命ニ」

【戲嗚】ギオ　ふざける、じやうだんをいふ。蜀志、李譲傳「體輕脫、好ニ一ニ」

【戲談】ギダン　たはむれの談話。詩經「受ニ心如レ惔、不ニ敢一ニ」

【戲文】ギブン　〇たはむれに書きたる文。〇芝居の筋書。莊嶽委談「優伶一ニ」‖傳奇。

【戲謔】ギギヤク　たはむれたのしむ、謔は謎。詩經「敬ニ天之怒一、無ニ敢一ニ」‖謎樂。

【戲弄】ギロウ　たはむれもてあそぶ。魏文帝文「余于ニ他一ニ之事一、少レ所ニ喜」

【戲作】ギサク　たはむれに作りたる文章。小說脚本の類「一ニ者」

十四畫

【戴】タイ　㊀

〇いただく、頭上に物をのせる「頂ニ一ニ」「負ニ一ニ」〇奉戴する、たふとびて推しいただく「推ニ一ニ」〇己の君主とし仰ぐ「奉ニ一ニ」書、大禹謨「衆非ニ元后何ニ一ニ」〇

あふ(値)○たまものを受ける。柳宗元文「拜ー皇恩」○謝恩又は尊敬の意を表す「贈ってーく」「教へてーく」

【戴安道】ダイアンダウ　名は逵、安道は其の字、晉の人、性高潔にして博學能文、善く琴を鼓し、書畫に工なり、太宰武陵王晞その琴を善くするを聞きて、人を遣して之を召す、逵、使者に對し琴を破りて曰く「――不レ能レ爲二王門伶人一」と。

【戴逵】タイ　前條を見よ。

【戴冠式】タイクワンシキ　四洋にて天皇即位の時、帝王のかんむりをかぶる大典。＝即位式。

【戴勝】タイショウ　○農耕を勸めるといふ鳩鳩ブツの異名。禮、月令「季春之月、ー降二于桑一」＝布穀。○タイショウ勝は婦人の首の飾、それをいただく。司馬相如、大人賦「觀二西王母一皤然白首、戴レ勝而穴處兮」

【戴星】タイセイ　星をそらに戴く。早く家を出で晩く歸るにいふ。呂覽「密子賤爲二單父宰一彈レ琴不レ下レ堂、而單父治、巫馬期爲二單父宰一、星出レー入、而單父亦治」

【戴星馬】タイセイバ　白額卽ち前の額に白毛ある馬（爾雅）

【戴天】タイテン　天をいただく「不俱ーーの仇」

【戴日】タイジツ　としより、白髮を戴く義。

漢書、嚴助傳「ーー之老、不レ見二吳越之使候一也」文心雕龍「越世高談、自開ーーー」

【戸】コ　グ　㊥　戸・户は俗字

○と、とぐち、家室の出入口「扉ー」「蓬ー」「窗ー」論、雍也「誰能出不レ由ーー」とびら、一扉をーといひ、兩扉を門といふ。○轉じて蟲の穴をいふ。禮、月令「蟄蟲咸動、啓ー始出」又、鳥の巢の氣を通ずる處。詩、豳風「綢繆牖ー」○いへ（住家）「漁ー」「樵ー」「萬ー」○家の數をかぞへるにいふ「千ー侯」○けんべつ、家毎に「ー說」家毎に說く。○ひきとめる、とどむ（止）左、宣十二「屈瑕ー之」○飲酒の量「大ー」「小ー」白居易詩「一大嫌甜酒」ーー大は上ーコウ○湯の樂の名、濩と通ず。

【戸扉】コヒ　門を戸といふ。象形。

【戸】コ　㊥　戸・户は俗字

○と、とぐち、家室の出入口「扉ー」「蓬ー」「窗ー」論、雍也「誰能出不レ由ーー」とびら、一扉をーといひ、兩扉を門といふ。○轉じて蟲の穴をいふ。禮、月令「蟄蟲咸動、啓ー始出」又、鳥の巢の氣を通ずる處。詩、豳風「綢繆牖ー」○いへ（住家）「漁ー」「樵ー」「萬ー」○家の數をかぞへるにいふ「千ー侯」○けんべつ、家毎に「ー說」家毎に說く。○ひきとめる、とどむ（止）左、宣十二「屈瑕ー之」○飲酒の量「大ー」「小ー」白居易詩「一大嫌甜酒」ーー大は上ーコウ○湯の樂の名、濩と通ず。

【戸扉】コヒ　門を戸といふ。象形。

【戸】コ　㊥　戸・户は俗字

○と、とぐち、家室の出入口「扉ー」「蓬ー」「窗ー」論、雍也「誰能出不レ由ーー」とびら、一扉をーといひ、兩扉を門といふ。○轉じて蟲の穴をいふ。禮、月令「蟄蟲咸動、啓ー始出」又、鳥の巢の氣を通ずる處。詩、豳風「綢繆牖ー」○いへ（住家）「漁ー」「樵ー」「萬ー」○家の數をかぞへるにいふ「千ー侯」○けんべつ、家毎に「ー說」家毎に說く。○ひきとめる、とどむ（止）左、宣十二「屈瑕ー之」○飲酒の量「大ー」「小ー」白居易詩「一大嫌甜酒」ーー大は上ーコウ○湯の樂の名、濩と通ず。

【戸扉】コヒ　門を戸といふ。象形。

【戈】【戩】ク　㊥　通じて戩に作る

ほこ（戟）四出の矛。

戶部

十八畫

【戴】タイ

【戸】コ　グ　㊥　戸・户は俗字

○と、とぐち、家室の出入口「扉ー」「蓬ー」「窗ー」論、雍也「誰能出不レ由ーー」とびら、一扉をーといひ、兩扉を門といふ。○轉じて蟲の穴をいふ。禮、月令「蟄蟲咸動、啓ー始出」又、鳥の巢の氣を通ずる處。詩、豳風「綢繆牖ー」○いへ（住家）「漁ー」「樵ー」「萬ー」○家の數をかぞへるにいふ「千ー侯」○けんべつ、家毎に「ー說」家毎に說く。○ひきとめる、とどむ（止）左、宣十二「屈瑕ー之」○飲酒の量「大ー」「小ー」白居易詩「一大嫌甜酒」ーー大は上ーコウ○湯の樂の名、濩と通ず。

【戸扉】コヒ　門を戸といふ。象形。

【戸】コ

【外戸而不閉】トヲトザサズ　天下太平の象なり。禮、禮運「是故謀閉而不興、盜竊亂賊而不作、故――、是謂二大同一」

【戸】戸（前條）の誤字。

一畫

【厄】ヤク　陌　又厄に作る、阨に通ず

○なやむ、なやみ（艱）○くるしむ（困）「困ー」史、季布傳「兩賢豈相ー哉」○わざはひ「災ー」○せまる（隘）○くぐりもん（小門）

四畫

【戽】コ　虞　くむ（抒）

【戽斗】ト　舟中にて水を汲ツヘる器（廣韻）

【所】ショ　ソ　語

○ところ（處・飲）「住ー」「屯ー」「治ー」「行在ー」○る、らる、受身の詞。史、高祖紀「ー殺蛇白帝子、殺者赤帝子」又、爲ーと連用す。史、項羽紀「爲ー虜」ところと爲るとも讀む。又、ー見と連用す。韓愈、潮洲謝表「實爲二時難一ー見推許」動詞形容詞の上に添へて語勢を強むる助詞。論、八佾「君子無」ー爭」○誓の辭。論、死也「予ー否者」○ほど、ばかり（許・程）漢書、張良傳「父去里ー復還」

同訓異字　所・被・見の別は被（衣部五畫）の條を見よ。

【所以】ゆゑん　なすところ、ゆゑ、ゆゑん。中庸「慥厚ー二載一物也」

【所爲】スルトコロ　なすところ、しわざ。莊、盜跖「父ー世俗之ー一也」‖所作。

【所謂】いはゆる　いふところ、いはゆる。大學「ー一誠二其意一者、毋二自欺一也」

【所由】ヨリテイヅ　○よるところとも讀む、其の事の由りて來るところ。論、爲政「子曰、視二其所一以、觀二其ー一、察二其所一安、人焉廋哉、人焉廋哉」○所代、官物の出納を掌る官（通鑑、唐穆宗紀、注）

【所有】アルトコロ　○持ちてゐる。○ユルありとある、有る限りの。

【所有權】ケンリ　法律の範圍内に於て、自由に其の物の使用收益及處分を爲すを得る權利。

【所愛】イツクシムトコロ　いりよう。又、いるだけの「ーーの金」

【所縁】ユカリ　しるべ、ゆかり。

【所縁】オヨブトコロ　其の管轄するところ、轄は主管。‖所管。

【所感】カンズルトコロ　心にかんじ思ふところ。儀禮、傳「妊レ子之時、必謹レーレ」

【所期】キスルトコロ　めあて、目的。南史、蔡約傳「今用レ卿爲二近職上佐一、想副二我ーー一」‖期待。

【所欽】ウヤマフトコロ　○心に敬ひ望むところ。李嶠詩「丘壑信多レ美、煙霞得ニーー一」○謙敬、願言懷ニーー一」

【所行】オコナフトコロ　ふるまひ。法苑珠林「ーー惡事」

【所懷】オモフトコロ　心に思ふところ。王令詩「南來日訪二人才一、始得清詩副ニーー一」

【所管】シカンスルトコロ　管理するところ、すべてつかふところ。

【所歡】カンズルヒト　己のなじみの人、私に暱シタシむ人。古樂府「風吹窗簾動、疑是ーー來」

【所化】ケスルトコロ　佛僧の弟子。又、佛法に歸依せし者。法華經「如レ是等大士華光佛ーー」

【所業】ギョウスルトコロ　○しわざ。‖所爲・所作。○業務とするところ。陶潛詩「ーー在二樂田一」

【所見】ケンスルトコロ　其の見るところ、みこみ。晉書「何所レ聞而來、何ーレ而去」

【所作】サスルトコロ　○しわざ。‖所爲。○園からだのこなし、身ぶり「ーー事」

【所在】ザイスルトコロ　○ところどころ、至るところ。後漢書、陳蕃傳「數レ令二赤子爲一レ害、掠非二ーー一貪虐便二其然一乎」‖所所。○己の住する所の地。

【所藏】ゾウスルトコロ　己の所有として藏める。

【所子】シ　子とするところのもの、養子。

【所司】シ　園足利時代の侍所サムラヒドコロの又其の長官。

【所司代】シダイ　園織田氏より始まりし官、京都に在りて宮中一切の事務を掌る役。

【所思】シ　おもふところ、おもひ。‖所懷。

【所信】シンスルトコロ　自分が心にたしかなりと思ふところ。

【所親】シン　したしき人。又、親切の人。杜甫詩「ーー驚二老瘦一、辛苦賊中來」

【所所】ショショ　ところどころ。‖所在。

【所生】セイ　父母の養。詩、大雅、文王「凡厥夜寐、無レ忝二爾ーー一」忝は辱。

【所詮】センスルトコロ　つまるところ、歸するところ。法苑義林章「所レ說法者、ーー謂也、名句字者、能詮文也」

【所屬】ゾクスルトコロ　其の從屬するところ。

【所存】ゾンスルトコロ　園心に存するところ、即ちかんがへ、みこみ。

【所帶】タイ　園○身におびるところのもの、即ち財產。○一家のくらし、生計。又、一家「ーー持」

【所持】ジ　携へもつ、所有する。

【所天】テン　いただき敬ふ所の人、天は人の仰ぎ賴むもの、故に喩ふ。即ち、臣は君を指していふ。後漢書、

梁娥傳「昧死自陳二―一」妻は夫を指していふ。潘岳、寡婦賦序「適ノ人而―又殉」

【所傳】ショデン　受け傳ふるところ。

【所得】ショトク　えたるところ、收入、利錢。智度論「一入二佛法寶山一、都無二一所一一」

【所得稅】ショトクゼイ　一箇年の收入を標準として課する稅金。

【所望】ショボウ　のぞむところ、欲するところ、のぞみ、ねがひ。

【所務】ショム　務とするところ。

【所用】ショヨウ　使ひ用ふるところ。佛本行經「任二王一一」

【所勞】ショロウ　國わづらひ、病氣。

【所領】ショリョウ　自分の所有する土地。北魏書、甄琛傳「邊外小縣一ノ不ノ過二百戸一」＝領地・領土。

【房】ハウ　陽

○へや（室）堂の旁に在る小さき室「東―」「西―」「室―」○すべてへやの形せるもの。○す（巢窠）○「蜂―」はちまくりの貝殼。○いへ（家）「山―」「禪―」○ふさ。○やつつ（箭室）○ふさ。又、ふさの形せるもの「蜂―」「蓮―」「乳―」○まないた、半體の俎。○そひ、東南方の星の名、二十八宿の一。晉書、天文志「一星明則王者明」＝天關・房宿。○國ふさ。絲をあつめて一端をしばり一端をちらしたるもの。＝流蘇。

【房子】バウシ　いへ、宇はのき。魏書、鄭道昭傳「敦營二塾館一一既修」

【房屋】バウヲク　いへ。＝房宇。

【房事】バウジ　ねやの中のこと、閨中の祕事。＝交合。

【房室】バウシツ　へや。後漢書、龐參傳「遂起二太學一、更開二拓一一」

【房主】バウシュ　國家主、大屋。

【房錢】バウセン　國やちん。宋劉斧、靑瑣雜說「小小國林矮矮屋、一日一一一貫足」＝房租。

【房租】バウソ　國店賃・家賃。＝房貸。

【房中】バウチュウ　へやのなか、室内。漢書、禮樂志「一一樂楚聲也」＝房内。

【房杜姚宋】バウトヨウソウ　唐代の四人の賢明なる宰相。房喬、字は玄齡、杜如晦、字は克明（以上太宗の朝）姚崇、字は元之、宋璟、字は廣平（以上玄宗の朝）唐書、姚崇傳「前稱二房杜一、後稱二姚崇一」

【房内】バウナイ　ねま、寢所。拾遺記「一一自涼」＝房中。

【房櫳】バウロウ　れんじまど。班婕妤賦「一一虛兮風泠泠」＝窗櫺。

【戻】レイ　ライ　霽

○もとる（很）○そむく（乖背）たがふ、道理にそむく「乖―」「背―」「違―」「暴―」「悖―」○とが、つみ（罪）「罪―」左、文四「以自取―」○まがる（斜曲）○いたる（至）中庸「詩云、鳶飛―天」○きたる（來）○とどむ、とどまる（止）書、康誥「未―厥心」○さだむ、さだまる（定）平定する。詩、大雅「民之未―、職盜爲寇」○あらし（暴）しへたぐ（虐）○勁疾なる貌。秋興賦「勁風―而吹帷」○國もとる、かへる（返）○もどす（嘔吐）

【戻車】曲なり、犬の戸下より出づるに從ふ。戻は、身曲戻するなり。

【同訓異義】戻・至・到・臻・謂・造・格等の別は至（部首六畫）の條を見よ。○戻・悖・拂・很の別は悖（心部七畫）の條を見よ。

【戻止】レイシ　來り至る。詩經「咎伏―一」今は人の來臨の義に用ふ。

【戻獸】レイジュウ　虎の異名、暴戻なる動物の義。戰國、秦策「虎者―一」

【戻天】レイテン　天に至る。詩、大雅「鳶飛―一、魚躍二于淵一」

五畫

【扁】ケイ　靑

○くゎんぬき、戸じまりの横木。曲禮「入戸奉―一」○ちひさい（錠）○とざす（閉）○車の前に在りて武器をしばりつける横木。左、宣十二「脫―」○門戸の通稱。高適詩「翻然憶柴―」○烟と通ず。―は明察の貌。

【扁鑰】外閉の關なり、戸に從ふ。同の意。

【扁關】ケイクワン　戸と、まどと。劉伶、酒德頌「日月爲二一一、八荒爲二庭衢一」

【扁關】ケイクワン　門戸をとざす橫木、くゎんぬき。白居易詩「門戸無二一一」

【扁鍵】ケイケン　くゎんぬきと、かぎと、轉じて、戸じまり。唐書、后妃傳「一一牢鑰」＝關鎖。

【扁鎖】ケイサ　ちゃうまへ。西陽雜俎「見二草中一一一甚固」

【扁扉】ヒヒ　○とぼそ。○とびらをしめる。張衡賦「方卷ノ舌以幽居、且ニ一一而絕ノ駟」

【扂】テン　琰

○とのしまり（戸牡）○ちゃうまへ（錠）○くゎんぬき。

【扂楔】テンセツ　とざしと、ほうだて（門關傍木）と。韓愈、進學解「櫟桷ニ一一、各得二其宜一」適材を適所に用ふるに喩ふ。

【扁】㊀ヘン　㊁ヘン　先　銑

㊀しるす（署）門戸にしるす文

字「一額」俗に匾に作る。○ひくし(卑)○ひらたし(平)厚みが少くして幅が廣い「一平」又圓き物をつぶした形「一圓」㊂ちひさし(小)○こぶね「一舟」

辨字 扁は署なり、戸間に从ふ。

【扁額】ヘンガク　門戸に掲げたる額ガク程史「吳山有二伍員祠一、殿二閣閎一、都人敬二事之一、有二富民一捐二貲爲一レ一レ金碧装修」

【扁倉】ヘンサウ　扁鵲と倉公と。共に春秋戰國時代の名醫。‖倉扁。

【扁舟】ヘンシウ　こぶね。史、貨殖傳「乃乘二一一浮二于江湖一」

【扁鵲】ヘンジャク　春秋戰國時代の名醫、史記に一一倉公傳あり。‖鹽鐵論「一一不レ能レ肉二白骨一、微箕不レ能レ存二亡國一」微箕は、殷の微子・箕子。

【扁桃】ヘンタウ　からももの異名、李の一種、一名、あめんどう(葡萄牙語)

【扁桃腺】ヘンタウセン　口腔の奥の左右に一つ宛ある扁桃の形せし淋巴腺「一一炎」

【扁豆】ヘンタウ　豆の一種、ふぢまめの類。‖藊豆。

【扁柏】ヘンパク　檜ヒノキの異名。

【扁平】ヘンペイ　ひらたし。‖匾平。

【扁衣】ヘンイ　ふだをかけあらはす。後漢書「爲二民法式一者、皆一一其門一以興二善行一」

【扁蝶】ヘンテフ　蜆シジミの異名。隋書、劉臻傳「好啖二蜆、以二父諱顯一、因呼レ蜆爲二一一一」

六畫

【扉】ヒ　戸　紙　微

○絳を質となし、斧の形をぬひとりにせしついたて(屏風)高さ八尺、東西の戸牖の間に置く、古、天子の諸侯に對する時、後方に立てて、南面せしもの。禮、明堂位「天子斧一一南鄉而立」通じて依に作る。曲禮「天子當レ依而立」

【扆】イ　支

扉一ヒはとざし(戸扇)とびらの開くを止める鍵前。

【扇】セン　センン　霰

○とびら(扉)「門一」「戸一」○うちは(箑)「涼一」「團一」「紈一」「羽一」古今注「舜作二五明一」○あふぐ、あふりて風を吹き起こす。東觀漢記「黄香至孝、暑月則一レ枕、寒則身温二枕席一」‖煽。○團あふぎ、せんす。

【扇眼】センガン　圖あふぎのかなめ。

【扇箑】センセフ　うちは。揮麈後錄「令下人有二物外之興一而忘中一一之勞上」

【扇子】センス　○うちは。子は助辭。閒元遺事「有二一皮一一一」○圖あふぎ。

【扇動】センドウ　あふぎて物を動かす、轉じて人をおだてる。魏志、梁習傳「更相一一、往往基時」‖煽動。

【扇風器】センプウキ　電流によりて回轉して風を起さしむる機械。

【扇面】センメン　圖あふぎの地紙。

【扇惑】センワク　おだててまよはす。郭璞文「小人愚喚、共相一一」

七畫

【扈】コ　虞

○したがふ、君主の後に從ひ行く。○とも、從者。○かふむら(被)かふむるもの。○一一は廣く大いなる貌。禮、檀弓「爾毋一一爾」○山卑くして大いなり。○とどむ(止)○竹にてつくりしやな、水中に置きて魚を捕へる具。○跋一はわがままのふるまひをする、大魚が竹のやなを跳越して逃ける義。‖強梁。○桑一は鳥の名、鳩の屬、まめまはし、いかるが。

【扈駕】コガ　君主のりものに從行する、おともをする。陸游詩「百萬雄師一一回」‖扈蹕。

【扈從】コジュウ　天子のおともして行く。司馬相如、上林賦「一一横行」

【扈蹕】コヒツ　天子の行幸におともする。蹕は行幸の道路の警戒。五代史「一一東歸」‖扈駕。

【扈從】コジュウ　ともびと、從者。公羊、宣十二「斷後一一、死者數百人」

【扈蹕】コンニュス　天子のみくるまに從ひ行く。賈至詩「平明出二金屋一、一一上林中」‖扈蹕・扈駕。

八畫

【扉】エン　ぢゃう(錠)　銑

【扉扉】イン　ぢゃう、門扇を閉づる具。百里奚妻、琴歌「逐二伏雌一炊二一一一」‖剡移。

【扉】ヒ　微

○とびら(戸扇)「柴一」「荆一」○黄一は古、宰相の居る所の稱。唐書、郭承嘏傳「承嘏久在二黄一」

【扉戸】ヒコ　とびら。水經、注「一一設二牖互悉文石也」

手部（才）

シウ　シュ　有　一音ズ

○て、人體の上肢、臂・肘・肱・腕・

掌指の総称。○たなごころ、てのひら「睡ー」「拍ー」「拱ー」「束ー」○てづから、自分の手でする「ー植」「ー書」○てに持つ。公羊、荘十三「ー劍而従之」○てを加ふ、ーにて撃つ。漢書、司馬相如傳「ー熊羆」○技藝に長ずる者の稱「名ー」「書ー」「老ー」○或事をつとめる者の稱「能ー」「技ー」○筆の跡。漢書、郊祀志「天子識其ー」「ー跡」圖○て、とりて、器の柄「把ー」○組合、仲間「新ーの軍勢」○てだて、術「奥のー」「角力のー」

【手押】シュ　○つめ印、拇印。○かきはん。‖摩押。

【手下】カシュ　てした、部下の兵。呉志、大史慈傳「先君ーー兵數千餘人」

【手械】カイ　てかせ、罪人の手にはめて自由を束縛する具。‖手枷・銬。

【手絞】カシュ　てづから頸くくる。韓非子「史執而問之、則ーニー其夫一者也」

【手格】カク　てうちにする。史、司馬相如傳「乃使二專諸之倫一ニー此獣一」

【手額】ガク　敬ひ仰ぐ額。宋史、司馬光傳「衛士望見、以レ手加レ額曰、司馬相公也」‖額手。

【手簡】カン　てがみ。老學菴筆記「淳熙末、朝士以二小紙高四五寸、闊尺餘一、相往來、謂二之ーー一」‖手翰・書牘。

【手翰】カン　てがみ。韓愈、再與二鄧州柳中丞一書「曾二惠ーー一還答、益增二忻慊一」‖手簡・手札。

【手技】ギ　てにてするわざ。史、張安世傳「家童七百人、皆有ニーー一作レ事」‖手工・手藝。

【手記】キ　○てづからしるす。朱熹文「同二人之善一必ーー一」‖手書。○ゆびわ。

【手巾】キン　○てぬぐひ。世說「殷浩語二左右一取ニーー一」○はんけち。‖手帕。

【手葵】キ　○てづから植う。唐書「兄弟隙レ墓、ーニ松柏一」藝一に蒔に作る。‖手蒔・手植。○てわざ。柳宗元、梓人傳「會二其ーー一、專二其心智一」‖手工。

【手劍】ケン　つるぎをてにす。公羊傳「莊公登レ壇、曹子ーレ而從レ之」

【手語】ゴ　てまねにてはなしをする。唐朱撝紋小志「生謁二一品一、問二其妾一、與レ之ーー」‖手話。

【手工】コウ　てにてするわざ、土工・金工・織物・刺繍など。‖手藝・手技。

【手箱】ソウ　てばこ、てまはりの物を入れる小ばこ。手文庫。曾典「離金ー、聚二藥乎內一」

【手札】サツ　てがみ。白氏長慶集「ーー八行詩一篇」‖手翰。

【手册】サツ　持ちあるきて事を筆記する小さきちゃうめん。手帳ヂャウ。‖手帖。

【手刺】シ　なふだ、官職を記入せし名刺。朱熹、跋二伊川先生帖後一「ーー謁謝、爲レ禮亦簡」

【手實法】ジツホフ　○唐代、人民に其の年齢財產等を申告せしめし法〔唐六典〕○宋代、人民をして其の家族の數、財產などを申告せしめ、之に課稅せし法〔文獻通考、戰役考〕

【手習】ならひ。論衡、文吏幼、則筆習ーー」‖習字。

【手書】ショ　○てづからかく。又、其かきもの。西陽雜俎「書跡官橫、ーー不レ如レ也」○てがみ。‖手簡。

【手燭】ショク　てに持つあかり、てしょく〔周禮、閽人、注〕

【手織】ショク　てづから織る。于濆詩「窗下捲レ機女、ーー身無レ衣」

【手勢】セイ　てぶり。北史、柳諧傳「善鼓レ琴、以二新聲一ーー二京師士子一、翕然從學」

【手抄】ショウ　てづからぬきがきする、手寫すること。唐書、柳仲郢傳「仲郢嘗ーニーー六經一」

【手詔】ショウ　天子の自ら書きたまへるみことのり。後漢書、霊帝傳「帝常ーー問レ之、數加二賞賜一、甚見二親信一」

【手戰】セン　○空手にてたたかふ。淮南子「弃二干將莫邪一而以ーー則俘矣」

【手疏】ソ　自ら筆を執りて條陳する。又、其の書。宋史、趙普傳「久未レ遂レ師、嘗ーー諫レ之」

【手足】ソク　てあし。兄弟に喩ふ。李華文「誰無二兄弟一、如レ足如レ手」

【無レ所レ措二手足一】ソクトコロナシ　あぶなくして身を置くの地なき義。論、子路「刑罰不レ中、則民ーー」

【啓二手足一】ソクトヲヒラク　身體を毀傷して孝道にそむくことなきを示す。轉じて死する義。論、泰伯「曾子有レ疾、召二門弟子一曰、啓二予手、啓二予足一」

【手足異レ處】ソクトコロヲコトニス　腰から二つに斬られる。史、孔子世家「有司加レ法焉、ーー」

【手足之愛】ソクノアイ　兄弟のいつくしみ。禮記「骨肉之恩、ーー」後漢書、宋均傳「兄弟者左右手也」

【若二手足之扞一頭目一】ソクノカンヲトウモクノゴトシ　臣下の心を盡くして君をまもるに喩ふ。漢書、刑法志「仁人在レ上、爲二下所一レ仰、猶二子弟之衛一父兄一ーー、何可レ當也」荀子には足を臂に作る。

【手澤】タク　圖てぶくろ、手袋。

【手澤】タク　てのうるほひ、てあか。禮、玉藻「父沒而不レ能レ讀二父之書一、ーー存焉爾」

【手澤本】タクホン　生前愛讀せし藏書。

【手答】タフ　てづから書きて答へる。晉書、陶侃傳「遠近書疏、莫レ不ーーー筆輪如レ流」

【手段】シュダン　てだて、しかた、てだん。事を処置する方法。○呉梁詩「酒客心情辟二酒兵一、茶僧一一侵二茶品一」

【手談】シュダン　碁をかこむ。書言故事「対坐無レ言、以レ手答レ碁、故曰二一一一」○世説、巧藝「支道林以二圍基一為二一一」

【手中】シュチュウ　てのうち。其の手。○漢書、酷吏傳「成二于一一」

【手拝】シュハイ　手、地に至り、頭其の上に在る敬礼。○礼記「不二一一一一而拝」

【手簡】シュカン　てづから書きしかきつけ。○元史、良吏傳「林興祖以二一一一験レ之」

【手鉢】シュハツ　はんけちの類。（後蜀何光遠鑑戒録）＝手巾。

【手搏】シュハク　○てうちにする。○孔叢子「骨臨肉飛、一二一猛獣一」＝手格。○手にてうち合ふ。今の柔道・拳闘の類。正字通「一一両人交撃、角二勝負一也」

【手板】シュバン　笏をいふ。位階ある人の束帯の時に持つ板。○文献通考、王禮考「笏、晉宋以来、謂二之一一一」○晉書、温嶠傳「嶠因俛酔、以二一一一撃二鼠頭一」＝手版。

【手筆】シュヒツ　手迹に同じ。（後漢書、趙壹傳）

【手臂扞二頭目一】シュヒトクモッテ　下の者の上をまもるに喩ふ。○荀子「下之子上也、若二子之事一父、弟之事一兄、若下手臂之扞二頭目一、而翼中胸腹一也」

【手舞】シュブ　てを動かしてまふ。○周禮、注「人舞者一一」

【手作】シュサク　てをうつ。○裴度文「一一目駭令、裴賞二歌於大寮一」

【手錬】シュレンスル　こてをでにす。○韓愈、圬者傳「一一一衣食三十年」

【手民】シュミン　○大工をいふ。○清異録「木匠總謂二運斤之輩一、又曰二一一一」○轉じて彫刻師・活版職工などをいふ。

【手容】シュヨウ　手の作法。○礼記「一一恭」

【手理】シュリ　てのひらのすぢ。○韓非子、説使「卜筮視二一一一」＝手文。

【手裏剣】シュリケン　圖手に持ちて敵になげつけて殺す武器。＝親。

【手力】シュリョク　自分の手のはたらき。○魏志、常林傳、注「少單貧、自非二一一、不レ取二之于人一」

【手令】シュレイ　てづから書きし命令。○南史、沈攸之傳「得二太后一一一、曰、國家之事、一以委レ公」

【手腕】シュワン　○うで、かひな。○晉書、淳于智傳「智乃以レ朱書二一一一」○俗にうでまへ、技倆の義。

【手水】ズイ　圖○手をあらふみづ。○轉じて小便＝小水。

【炙レ手可レ熱】ヤクテアツベシ　権勢の甚だ盛んなるをいふ。○杜甫、贈人行「一一勢絶倫、慎莫二近前一丞相嗔」

【執レ手】シュシュ　手をひっこめる。てだしをせず、おそれつつしむ義。○後漢書、鮑永傳「黄成且一レ一」

【額レ手】ヒタイニアテ　手額を見よ。

【反レ手】テノヒラヲカヘス　事の極めて易きをいふ。○孟、公孫丑「以二齊王一由レ一レ一也」

【仮レ手】カリテ　人の手をかる。○書、伊訓「天一一一于我一」

【下レ手】テヲクダス　手を著ける。○傳燈録「慧藏對二馬祖一曰、若教二某甲自射一直是無二一一一處一」＝著手。

【挟レ手】テヲコマヌク　○両手をこまぬく、人を敬ふ貌。○曲禮「遵二先生之道一、雖二前進一、正立一一」○何事もなさず、無為なる形容。○後漢書「天水隗囂一一自服」

【垂レ手過レ膝】テヲタレテヒザヲスグ　両手の長きをいふ。○荀子「先王身長七尺五寸、垂レ手下レ膝、回顧自見二其耳一」

【束レ手】テヲツカネ　手をつかねて用ひず、てだしをせぬ、轉じて抵抗せず。又、屈服する。○晉書、杜預傳「所レ過城邑、莫二不一一一」

【著レ手】テヲクダス　手を下だすといふに同じ。○晉書、杜預傳「無二復一一一處一也」＝下手。

【握レ手】アクシュスル　親みを示すために、互に手を握る。○史、滑稽傳「一一一無レ厭、游目不レ禁」○史、陳頴爾相如傳「燕王私握二臣手一曰、願結友」

【翻レ手作レ雲覆レ手雨】テノヒラヲカヘセバクモトナリテヲヲカヘセバアメトナル　人情の軽薄なる喩。○杜甫、貧交行「一一、紛紛軽薄何須レ数、君不レ見管鮑貧時交、此道今人棄如レ土」

【手形】テガタ　圖○文書に押して後日のあかしとするかたち。おして、印。もと掌に墨を塗りて押したるが故。轉じて其の文書。＝券。○一定の時期に一定の場所にて記入の金額を支拂ふべき有價證券。為替一一・約束一一・小切手の三種に分つ。＝圖讀契。

【手紙】テガミ　圖ふみ。＝信書・書状・書簡。

【手不レ釋レ巻】テハケンヲステズ　学を勧めて倦まざるをいふ。○事物原講「司馬光家規不レ釋レ巻、裴晋公雖レ不レ釋レ巻」

【手代】テガイ　圖○徳川時代の代官の下役。○商店の召使、番頭と丁稚との中間の者。○法律にて商業使用人の一、委任せられし事件につきて一切の権能を有する者。

【手附】テツケ　圖賣買の契約を違へざる擔保として對手に交附する金。

【手掘レ汗】テデカク　甚だしくあやぶみおそれるにいふ。○投壺雑録「元史、憲宗、召二趙璧一問曰、天下何如而治、對曰、請先誅二近侍尤不善者一、憲宗不レ悦、璧退、世祖曰、秀才汝握二兵柄一、身都是膽邪、我亦為レ汝握二兵柄一、汝手掘レ汗也」

【入レ手】テニイル　己の有に歸するをいふ。○白居易詩、「白髪生」頭速、青銭一一遅」

【離レ手】テヲハナル　別離にはらふ。○史、淮陰侯傳「吾今日死、公亦一一

矣」

【掌子】ダニ　重き物など持ち上げる時、掌に唾をつける。轉じて、勇氣を起して容易に事を爲すにいふ。後漢書、公孫瓚傳、注「始天下兵起、我謂ノレー可ノ決」

【手提二萬鈞一而後多力見焉】ヲサゲテバンキンヲヒキテノチニオホキノチカラヲアラハスヲミル　悲緑に處して勇氣のあらはるるをいふ。新論「――、處ノ難踐ノ患、而後貞勇出焉」

【信手】マカス　手の動くままにまかせる。信は任。白居易、琵琶行「低ノ眉ノレー續續彈」

【手握二王爵一口含二天憲一】テニオウシャクヲニギリクチニテンケンヲフクム　重責なる臣下の天子を左右して、國政を擅にし官吏の黜陟を爲すをいふ（後漢書、宦者傳）

【手自煎】テヅカラ　自分で茶を煮る。蘇軾、煎茶歌「君不ノレ見昔時李生好ノ客――」

【手拭】テヌグヒ　圖てふき。‖手巾。

【不ノレ知二手之舞足之蹈一】テノマヒアシノフムヲシラズ　非常に歓ばしきにいふ。禮、樂記「嗟二歎之一不ノレ足、歌不ノレ知二手之舞之、足之蹈之一也」孟、離婁「不ノレ知二足之蹈之手之舞之一」

【扌】

手（前條）に同じ。字の偏になる時の形。圖てへん（手偏）

【才】サイ　灰

古、材に通ず

○ざえ、はたらき（能力・技能）「吏ー」「口ー」「天ー」論、子罕「既竭ノ吾ー」○はたらきある人、賢人、智者「英ー」「秀ー」○たち（質性）素質。孟、告子「非二天之降一ー殊也」○はじめ（始）晉書、夏侯湛傳「ー生魄」○わづかに（纔）晉書、謝混傳「ー小富貴、便豫二人家事一」‖財。○はかる、はかり定める、裁に通ず。圖○イますめ、勻の十分の一。○材木の長さ又は容積の單位。○年齢の歳の略字として用ふる。

同訓異語　カツ・才・僅・纔・劣・財・裁の別は僅（人部十一畫）の條を見よ。

【才有ノレ餘而識不ノレ足】サイアリテアマリヲシレドモシキアシラズ　才氣は餘りあれども、見識は足らず。蘇軾、貫誼論「嗚呼、賈生志大而量小、――也」

【才雄】サイ　才氣のすぐれたる者。盧照鄰詩「公業負二奇志一、結ノレ交義ー一」

【才額】サイ　はたらきとして。晉書、潘岳傳「岳少以二ー一見ノレ稱」‖才絞。

【才媛】サイ　才あるをんな、詩文などに秀でたる女。‖閨秀。

【試ノレ才】シサイヲココロミル　はたらきをこころみる。後漢書、自二左雄任一事　限ノレ年ーノレー」

【才格】カイ　はたらきのある性格。杜甫詩「ー一出二尋常一」

【才學】サイ　才智と學問と。漢書、趙孝傳「皆有ニー一」

【才學識】サイガク　才と學と識と。唐書、劉知幾傳「謝部尚書賜惟忠書問、自ノレ古文士多、史才少何耶、對曰、史有二三長一、――、世學ノレ鮮ノレ之、故史者少」

【才覺】カイ　圖○きてんが利く。○かんがへ、くめん。

【才幹】カイ　ち幹、はたらき、幹は才能。

【才伎】サイ　うでまへ。‖伎倆。

【才氣】サイ　はたらきある氣質。史、項羽紀「籍長八尺、力能扛ノレ鼎、ー一過ノレ人」

【才器】サイ　はたらきありて役に立つ。晉書、周浚引ノレ譚爲二從事一、愛二其ー一」

【才華】サイ　はなやかなる才。顏氏家訓「ー一不ノレ爲二妻子所一レ容」

【才慧】サイ　才ありてかしこし。晉書、載記、段豐妻慕容氏有ニー一、善二書史一、能二鼓琴一」

【才藝】サイ　ち藝と、わざと。才智技藝。

【才識】サイ　才智と學識と。蘇軾詩「如ノレ君ー一眞堪ノレ用、顧我衰遲不ノレ足ノレ論」

【才彦】サイ　才のひいでたる人。衆聰物詩「明世重ニー一」

【才識】サイ　才智と文識と。又、文才の識。宋書、王謐傳「少有ニー一」

【才子】サイ　○才徳の備はれる人。左、文十八「昔高陽氏、有ニー一八人」○圖氣がきてじょさいなき人。

【才思】サイ　才のすぐれたるかんがへ。南史「仲寶少孤貧、篤ノレ志好ノレ學、有ニー一」‖才情。

【才秀】サイ　才智がひいでる。晉書「舉二朝榮一則敬ニー一之士」

【才覺】サイ　はたらきと、うまれつきと。晉書、賈充傳「充女ー一令淑」

【才人】サイ　○後宮の女官（漢代に始まる）杜甫詩「燕趙佳ノレ人出二侏儒一、宮闈不ノレ關選ニー一」つすぐれる人。○才子。

【才情】サイ　才思に同じ。世說「ー一過二於所一聞」

【才術】サイ　はたらきと、學術と。北史、燕鳳傳「ー一俱美」

【才俊】サイシュン　才がすぐれる。又、其の人。晉書「君性烈而ー一、其能免乎」

【才色】サイ　すぐれたる才と美くしき容貌と。晉書、阮籍傳「兵家女有ニー一、未ノレ嫁而死」

【才敵】サイ　才智はかりごと。魏志、鍾會傳、及ノレ壯有ニー一技藝一」

【才捷】サイ　才智さとし。魏志、注「臨淄侯植、以ニー一愛幸」‖才穎。

【才鈍】サイ　才の淺き鈍、鈍もと鍾に作る、淺なり。史、李斯傳「能難而ー一」‖才劣。

【才狙】サイ　心のはたらきが劣る。世說「伯仁爲ノレ人、恵大而ー一」

【才地】サイ　ち藝と、いへがらと。晉書、

王敦傳「清操過ノ人、自負ニ一一高ノ輩ニ、恆有ニ安輔之望ニ」
【才智】サイ　才氣と、ちゑと。漢書、匡衡傳「一一有ノ餘」
【才調】サイ　才のすぐれたるおもむき。晉書、王接傳論「一一秀出、見ノ賞ニ知音ニ」＝才氣。
【才哲】サイ　ちゑありて事理に明か。白居易詩「內媿ノ非ニ一一ニ」
【才德】サイ　才智と德行と。
【才取】サイ　國買買の周旋をなして口錢を取る。又、其の人。＝牙儈・牙保。
【才能】サイ　ちゑと、はたらきと。史、佞幸傳「非ノ有ニ一一ニ、徒以ニ婉佞ニ貴幸ニ」後漢書、班固傳「性寬和容衆、不ノ以ニ一一ニ高ノ人」
【才幹】サイ　はたらきと、ほまれと。晉書、陸機傳「負ニ其一一ニ、恃ノ國ニ世雄ニ」
【才髦】サイ　才の秀でたる者。白帖「李季卿在ノ朝、薦ニ進一一ニ」
【才貌】サイ　才能と容貌と。蔡邕別傳「張衡死日、蔡邕毋始懐孕、二人一一其類、人云、邕是衡後身」
【才筆】サイ　才のすぐれたる文章。北史「延傳涉ニ覽墳史、頗有ニ一一ニ」
【才分】サイ　うまれつき。魏志、楊俊傳「與ニ論文帝臨薨一一所長ニ」
【才略】サイ　ちゑと、はかりごと。晉書、明帝紀「性至孝有ニ文武一一ニ」
【才力】サイ　ちゑはたらき。晉書、長沙王乂傳「一一超ノ人、虛ノ心下ノ士」

【扎】一　サツ　書

○ぬく（拔）抜き取る。＝摭。○圖書札の札、包紫の紫に通用す。

【打】一　テイ・チ・ウ　二　ダ　俚　俗

○うつ（擊）たたく（扣）「亂一」「撲一」○まりをける（蹴鞠）○俗語にては種種の義に用ふ「一那裏走」は「向ふ」の義「一糧」「一魚」は「取る」の義「一船」「一車」は舟車を作る義。又、動詞の上に添へる無意味の助字「一睡」「一聽」「一算」○圖英語の音譯、十二箇一そろひの稱。

圖解　打・征・伐・討・擊・撲・拍・搏・射等の別は征（イ部五畫）の條を見よ。

【打埃塵】ダアイチン　煤掃（スヽはらひ）即ち年末の大掃除をいふ。清嘉錄「臘將ノ殘、掃ノ書宜ノ揚ニ分字一日ハ去ニ庭戸塵穢、或有ノ在ニ二十三日、二十四日及二十七日一者ト俗呼ニ一一ニ」
【打毬】ダアチウ　まりうちの戲。荊楚歲時記「寒食一一」＝蹴鞠。
【打魚】ダアユイ　あみにて魚を取る。汪元量詩「半揭ノ遊窗ノ看ニ一一ニ」
【打壞】ダアワイ　うちこはす。南史「奪取一一、亦復不ノ惜」
【打擊】ダアキ　うつ。葛洪、登涉符錄「岩無ノ故自障落、一一煞ノ人」煞は殺。
【打碎】ダアスイ　うちくだく。晉書、謝石傳「帝謂ニ石一一ニ」
【打鬼】ダアクイ　けいさん、かんぢゃう。打は助字。錢塘遺事「賈似道忌ニ者一時位ノ事閫臣ニ行ニ一一法ニ以汙ノ之」
【打診】ダアチン　醫師が指頭又は打診器にて胸腹部をたたき、其の音にて病を診察する術。
【打酒】ダアチウ　俚酒を買ふ。
【打水】ダアスイ　俚水を汲む「歸田錄」＝汲水。
【打睡】ダアスイ　ねむる。打は助字。
【打尖】ダアチエン　俚旅行の途中にて食事する。又、中途にて休息する。
【打稻】ダアタウ　いねをうつ。陸游詩「一一家家舂晚晴」
【打仗】ダアチヤン　圖戰爭。
【打電】ダアテン　圖電報を發する。
【打頭】ダアタウ　○かしらをうつ。蘇軾詩「常時低ノ頭誦ニ經史一、忽然欠伸屋一ノ一」○いしもち（鰾稱語）＝石首魚。
【打頭風】ダアタウフヨン　逆風をいふ。元稹詩「船怕——」
【打破】ダアポー　うちやぶる、ぶちこはす。
【打包】ダアパオ　行脚僧の三衣（大衣・七條・五條の製裁）を入れたるふろしき包。又、其の包を負ひたる僧。陸龜蒙詩「契檐人沽ニ村市酒一一僧趁ニ寺樓鐘一」
【打鎖】ダアソー　假の支度をする。歸田錄「役夫鎖飯曰ニ一一、本作ノ投」
【打碑】ダアペイ　碑文を石ずりにする。張文潛詩「時有ニ遊人一一ノ賓ニ」
【打扮】ダアパン　いでたち、裝飾して形貌を變へる。正字通「今俗以ニ裝飾一爲ニ一一、演劇者飾ニ其面一謂ニ之扮戲一」
【打撲傷】ダアポーシヤン　うちきず。
【打量】ダアリヤン　はかりしらべる。打は助字。宋史、有ニ爭訟經官之處一、并行ニ一一ニ」
【打擂】ダアレイ　人をうちたたく（出曜經）＝擂打。
【打步】ダアプ　圖○命銀貨と紙幣との間に生ずる價格上の差。○銀行の營業費の手數料。

【扒】ハイ 卦

○ほりあばく、發掘。○ぬく（拔）【扒手】ポケットに物ぬすびと、竊盜。

【扑】ボク 屋 一に撲に作る

○うつ（打）史、刺客傳「舉ㇾ築撲ㇾ秦皇帝不ㇾ中」すこしうつ。（小擧）○たたく（扣）○つゑ（杖）古、教育に用ふるしもと。師が弟子をうちて戒めるむち。書、舜典「一作ㇾ教刑」‖榎楚。

同訓異義 ソ。扑・征・伐・打・撲・抽等の別は征（彳部五畫）の條を見よ。【扑撻】ボクタツ むちうつ。後曉「以ㇾ一ㇾ手中庭一而已」‖鞭撻・笞撻。

【扔】ロク 屋

易道にて、筮竹を數へる時に、餘りし筮竹を左手の無名指と小指との間にはさむ。易、繫辭「歸奇於ㇾ扐」

【扛】カウ・コウ 江 陽

○あぐ（擧）兩手にてもちあげる、ささげる。○俗に兩人共に一物を擧ぐるにいふ。

同訓異義 扛・擧・揚・稱・昂・抗等の別は擧（臼部十一畫）の條を見よ。【扛擧】もちあげる、さしあげる。【扛鼎】○かなへをもちあげる。力の極めて強きをいふ。史、項羽紀「籍長、八尺餘、力能ㇾ扛ㇾ鼎」○筆力の強きにいふ。韓愈、贈ㇾ張籍一詩「籀文百斜鼎、筆力可ㇾ扛」【扛夫】カゴカキ 駕籠を舁く人夫。拍案驚奇「倩ㇾ了幾個ㇾ扛ㇾ抬出去殯葬了」

【扞】カン 翰 或は捍に作る

○ふせぐ（拒）とどむ（止）ふせぎまもる「一衛」「一禦」まもり（衛）○もとる（枝）○あたる（抵）物に突きあたる。ふれる（觸）史、游俠傳「時」當世之文罔」○こて（臂衣）○いしづき（矛鐏）‖鉾。○一格は堅くして入るべからざる貌。‖格。學記「發然後禁、則一格而不ㇾ勝」

同訓異義 扞・防・禦・捍・拒・閑の別は防（阜部四畫）の條を見よ。【扞衛】ふせぎまもる。後漢書、袁紹傳「身自一一」‖捍衛。【扞格】さはりさかふ、堅くして入る可からざる貌。禮、學記「發然後禁、則一一而不ㇾ勝」【扞拒】ふせぐ。漢書、丙吉傳「吉一一大難、不ㇾ避ㇾ嚴刑峻法」‖捍禦・抵拒。【扞禦】ふせぐ。列子「人者爪牙不ㇾ足ㇾ以供ㇾ守衛、肌膚不ㇾ足ㇾ以自一一」‖扞拒。【扞制】ふせぎとどめる。漫叟詩話「江淹有ㇾ才、以一一泛濫」【扞蔽】ふせぎおほふ、おほひ。史、田敬仲完世家「趙之於ㇾ齊壁一一也」‖蔽屏。

【扣】コウ 有

○うつ（擊）たたく。孟子「抽ㇾ矢一ㇾ輪去ㇾ其金」‖叩。○ひかふ、ひく（牽）馬を牽く。ひきとめる。○物を盡く與へざる義「剋一」「折一」○圖ほたん（鈕釦）又ほたんをかける。○圖ひかへ、ひかふ（控）「一帳」

同訓異義 扣・敲・叩・敲の別は敲（支部十畫）の條を見よ。【扣舷】ふなばたをたたく。又、其の音。李參詩「夜深聞ニ一一」【扣制】ひきとめる、おさへとどめる。‖牽制・抑制。【扣持】ひかへもつ。【扣除】ひきさる、差引く。【扣問】たづね問ふ。魏了翁、題政「音鄉楊君爲ニ問辯一、以質ニ諸師一、此最得ニ爲ㇾ學之要一、後生初學、咿然自是躡ニ手一一者、視ㇾ此亦可ニ以少警ニ矣」‖叩問・質問。

【抗】○コウ ○キョウ 陽 物 月

○する（摩）○踊ひ舞ふ貌。又、よろこぶ（喜）莊、讓王「子路、一一然執ニ干而舞」

【扤】ゴツ・ゲツ 月 一に兀に作る 通じて杌に作る

○うごく、うごかす（動搖）詩、小雅「天之一我、如ニ不ニ我克」○あやふし、安からず。【扤隉榮惧】エツゲツ 扤隉は安からず、隉は絕に同じ、榮惧は榮えて安しき貌、榮惧「邦之扤隉、曰由ニ一人一、邦之榮墳、亦尙一人之慶」‖安危。

【扠】サ 麻 通じて叉に作る

○はさみとる（挾取）○やす、水中の魚鼈を刺して捕ふる漁具。韓愈詩「饑一飽活ニ聲一」○圖發語の詞。‖偖。

【托】タク 藥

○ひらく、おす。‖拓。○掌を以て物を擧げる。轉じて物をのせる盞「一盤」「茶一子」○不一は鐏銳に通ず。五代史、李茂貞傳「一日食ニ不一」‖湯餅。○

圖託に通じ用ふ、委託を俗に委ーと書く。

【托葉】タクヨウ　葉脚即ち葉柄と莖枝と連接する處に生ずる小さき葉片。

【托子】タクシ　ちゃたく、茶盞。資暇錄「製爲二茶ーー一」＝茶托。

【托身】タクシン　己の身をよせ置く、棲止する義。孔平仲詩「乾坤是處ーー安」

【托出】タクシュツ　物をのせて出す。水滸傳、第三回「行童ーー二ー茶一來」

【托處】タクショ　身をよせおく。漢書、賈山傳「皆不レ得二棄逐而ーー一焉」

【托鉢】タクハツ　僧侶のゆくゆく俗家より食を乞ふ。僧雅則詩「ーー船歸業有レ餘」

【扼】アク　ヤク　四畫　手部

○おさふ、とりひしぐ。＝捥。捉。○くびき。莊、馬蹄「加之以衡ー」＝軛。

【扼腕】ヤクワン　えりもとをおさふ。周邦彥文「ーレー控レ咽、解二羅表裏一」

【扼捥】ヤクワン　たもちよる。吳衡文「ーニ岐嶺二緊レ徒嘯レ侶」

【扼虎】ヤクコ　とらをとりひしぐ。漢書、李陵傳「力ーレー、射命中」

【扼喉】ヤクコウ　のどをおさへつける、急所を押へ、死命を制する、咽喉の地を占め守る。晉書、宣帝紀「扼二其喉一而撻二其心一」楊浚詩「ーー兵易レ守」

【扼腕】ヤクワン　いきどほりてうでをにぎりつめる。曹郎賦「劇談龍論、ーレー抶レ掌」＝握腕。

【抑】イヨク　四畫　手部　通音ヨク

○おさふ(按)壓へつける。○なさむ(治)孟、滕文公「昔者禹ーニ洪水一」○ふさぐ(塞)○せまる(迫)○へりくだる(屈下)「ー損」○かがまる、かがむ(屈)「屈ー」○とどめる(止過)○やむ(過)○うつくし(美)○しりぞく(退)○けなす、おとす(損貶)○ーーはつつしむ(愼密)○そも、そもそも、發語の辭。左、昭十三「ー齊人不レ與」○反語の辭。孟、梁惠王「ー王興二甲兵一」○轉換の辭、亦然の辭。それともまた。論、學而「求レ之與、ー與之與」

【抑遏】ヨクアツ　おさへとどむ。陳遺詩「宿雲忽披散、霽靄與ーー」＝抑制。

【抑壓】ヨクアツ　おさへつける。唐書、李德裕傳「否則ーー、以退二仲尼之徒一、有レ是乎」

【抑按】ヨクアン　おさへる。晉康、琴賦「或徘徊慕、擁鬱ーー」

【抑挫】ヨクザ　抑損して恐れつつしむ。書經「維我大王王季、自ーー」

【抑強】ヨクキャウ　強くわがままなる者をおさへつける。魏志「ーレー扶レ弱」扶弱は弱き者をたすける。

【抑屈】ヨククツ　おさへてかがむ。

【抑詘】ヨククツ　おさへしりぞける。荀悅文「董仲舒推二崇孔氏一、ーニー百家一」

【抑挫】ヨクザ　おさへくじく。魏志、倉慈傳「ーニー摧右、懲二強貪一」

【抑止】ヨクシ　おさへとどめる。＝抑制。

【抑情】ヨクジョウ　慾情をおさへ制する。養生論「ーレー忍レ欲、割二愛榮願一」

【抑首】ヨクシュ　首を屈してさげる。漢書、叔孫通傳「諸侍二坐殿上一、皆伏ーー」

【抑制】ヨクセイ　おさへつけとめる。＝抑過。

【抑絕】ヨクゼツ　おさへたつ。蘇洵文「韓子之文、如二長江大河一、魚龍鮫龍、萬怪惶惑、而ーー藏掩、不レ使二自露一」

【抑塞】ヨクソク　○おさへてふさぎとめる。元稹詩「ーー周遮恐二君見一」○おさへられて心むすぼる。沈佺期詩「我能拔二劍ーー蓋落之奇才一」

【抑揚】ヨクヤウ　おどる心をおさへてへりくだる。史、晏嬰傳「其後夫自ーー」

【抑退】ヨクタイ　○おさへてしりぞかしむ。晉唐書「漢明德馬皇后、不レ能ーニー外戚、令二其常レ朝貴盛一」○抑損に同じ(魏志、武帝紀)

【抑黜】ヨクチュツ　おさへしりぞく。北史「減二削封秩一、ーニー勵人一」

【抑糴】ヨクテキ　政府の力にてむりに低價にて米を買ひ上げる。宋史、食貨志「元符以後、有二低價ーー之糴一、詔禁二止之一」

【抑配】ヨクハイ　利息をとる爲め政府がむりに人民に金をかしつけ、又人民にわりつけて金を出さしめ、或は失役に從はしめる(宋史、神宗紀)

【抑武】ヨクブ　武道をおさへとどむ。李尤文「ーレー揚レ文」

【抑貶】ヨクヘン　おさへしりぞく。漢書、鄧丹傳「ーニー尊號一、節二損孝道一」

【抑揚】ヨクヤウ　○琴瑟の音調にいふ。おさへたり、あげたり。嵇康、琴賦「左手ーー、右手裝回」○文勢のあげさげ。柳宗元、答二韋中立一書「抑レ之欲二其奥一、揚レ之欲二其明一」文章軌範、將字集小序「有ーー一、有二頓挫一有二操縱一」○ほめたり、けなしたりする、褒貶の義。北齊書、甄琛傳「外相ーー、內實附會」○浮沈ゲンの義。漢書、叔孫通傳「與レ時ーー」

【抑抑】ヨクヨク　つつしむ貌。詩、小雅「威儀ーー」＝愼密。

【抑留】ヨクリュウ　強ひてひきとどむ。宋史「有司憚二於供費一、ーニー遠方一」

【抑勒】ヨクロク　おさへつける、勒は馬勒ロクにて馬の進退を制するもの。

【抃】㊀ベン　㊁キン　四畫　手部

㊀うしなふ(失)戰國策「寡人愚闇守二齊國一、惟恐二失レ之一」㊁くだす(下)おとす。史、東越傳

「不戰而ー、利莫大焉」‖隕。

【抉】 ㊀エツ 厥 ケツ 厥 ㊁ケツ 厥

㊀くじる、ゑぐる(指)史、吳世家「ー吾眼、置之吳東門」○あばく、かかく(挑發)隱れたるものを手にてかき出す。韓愈、進學解「爬羅剔ー」○さく(剔)「剔ー」㊁ゆがけ(縱弦彍)‖決。

【抉出】シュツ くじりいだす。蘇軾詩「ー雖三強成、徒使二腸胃沸一」‖剔抉。

【抉摘】ケツ かくれたるものをかゝげ出す、精義をさぐり出す。陸龜蒙、甫里先生傳「就レ中樂二春秋一ーニ微旨一」

【抉目】モク 目をゑぐり出す。唐書「爭ーレ鏟レ肝、磔二其肉一」‖抉眼。

【於】 於(方部四畫)の俗字。

【抗】 カウ 漢

○あぐ、あがる(擧)「高ー」禮、樂記「歌者上如ー、下如レ墜」○あたる(抵・敵)○はりあふ「抵ー」同等の位置を保つ「ー禮」○たかし(高尚)○ふせぐ(扞・禦)「支ー」○ふるふ(振)

同訓異字 ㋐抗・擡・揭・掲・扛・昂等の別は擧(臼部十一畫)の條を見よ。

【抗行】カウ 氣高き行。楚辭、九辨「竭誠ー二君一」

【抗衡】カウ 互に讓らずしてはりあふ、對抗する、衡は車のくびき、兩車がくびきを相對して互に下らざる義。史、陸賈傳「以二區區之趙一與二天子一ーー」

【抗顏】カン たかぶれるかほ。柳宗元、答二章中立一論二師道一書「ーー而爲レ師」

【抗疏】カソ 反對の意見をいひ張る。後漢書、何敞傳「大臣方忠貴任二公正レ色在レ上、樂何之徒、ーー在レ下」

【抗拒】カウ はりあひふせぐ。齊書、張融傳「融立レ義無二師法一、而神解過レ人、高談解二能ーー」

【抗禦】カウ 敵に抵抗してふせぐ。晉書、鄧季魏郭等傳論「招二集義勇一、ーニ仇讎一」

【抗俠】カウ 權威に屈せずをとこだてをなす。漢書「ーー好レ交」

【抗言】カウ はりあひて議論する。北史、盧辯傳「ーー酬答、守レ節不レ撓」‖抗論、抗辯。

【抗告】カウ 裁判所の判決に服せずして上級の裁判所に上訴する。

【抗爭】カウ はりあひ爭ふ。

【抗策】カウ むちをあげて馬を驅る。洛神賦「攬二轡一以ーレ」

【抗章】シャウ 文書を上に奉る。倭游錄「歐陽在二蔡州一屢ーー乞二致仕一」‖上書。

【抗首】シュ くびをあぐ、抗は擧。漢書、朱雲傳「登レ堂ーー而請」

【抗聲】セイ こゑをはりあげる。柳宗元、文「奇謀高議、左右ーー」

【抗節】セツ 高く操をまもりて屈せず。隋書「ーー彌厲」

【抗戰】セン 敵對して戰ふ。

【抗直】チョク 屈せずして正し。北史、柳慶傳「天性ーー、無レ所二迴避一」

【抗敵】テキ まけずにはりあふ。近異錄「則六臂齊擧、奮擊莫二能ーー一」

【抗吻】フン はりあひて議論する。何遜、文「竝ーー以除レ煩」

【抗憤】フン はりあひていきどほる。潘岳、文「奚ーー以二庇酒一咀二說屑一以澈レ腸」

【抗表】ヘウ 意見を書きし書を上に奉る。唐書、房喬傳「疑レ疾ーー諫二太宗一」‖上表・上疏。

【抗辯】ベン 抗言に同じ。

【抗禮】レイ 對等の禮。漢書、貨殖傳「無レ不二分レ庭與レ之ーー一」

【抗論】ロン はりあひてあげつらふ。晉書、孫盛傳「與ーー者惟盛而已」

【技】 ギ 俗 伎 通じて伎に作る

○たくみ(工巧)○わざ、てわざ(藝術)「ー藝」「奇ー」○うでまへ、はたらき(才能)晉、泰誓「斷斷兮無他ー」

【倚レ技而賤レ卑】キニヨツテヒヲイヤシム 技能を倚びて、器物をいやしみ、貧賜するに吝ならざる義。禮記「ーー、則民興レ鄙、貨レ人而賤レ絲、則民興レ讓」

【技巧】ギカウ たくみなるわざ。技一に伎に作る。魏志、三少帝紀「詔罷二尚方御府百工ーー靡麗無益之物一」

【技藝】ギゲイ 技師の上にありて技術に關する一切の事務を監督する職。

【技藝】ギゲイ てわざ。國語「ーー畢給則賢」‖技術。

【技擊】ギゲキ ○擊劍をいふ。○拳法即ち柔術。

【技師】ギシ 專門の技術を有して其の事に任ずる官吏、又は會社員の資格。次條參看。

【技手】ギシュ 技師の下役。師・手の音近く、まぎらはしき故、俗にギテといふ。

【技術】ギジュツ てわざ。漢書「漢興有二倉公一、今其ーー晦昧」‖方術・藝術。

【技能】ギノウ はたらき、うでまへ。‖才能・伎能。

【技癢】ギヤウ 己のうでまへを施すこと能はずして心にもどかしく思ふ、癢は痒。風俗通「高漸離變二姓名一傭二保于人一、閒二堂上擊一筑、ーー不レ能レ無二出レ言」‖伎癢。

【技倆】ギリヤウ うでまへ、はたらき。‖伎倆。

【抆】 クワ 俗音 サウ

○さをさす、ふねをすすむ。‖划。○足らざるを補ふ。○節ねもとめる（諏覓）

【抏】 ㊀グヮン ㊁グヮン 寒

㊀くじく（挫）漢書、司馬相如傳「一士卒之精」へらす（耗）史、平準書「百姓一敝以巧法」㊁もてあそぶ。‖玩・翫。○もむ、さする（按摩）○まるくけづる（圓削）‖㊀。

【捐】 ダツ グヮン 寒月

○くじく、をる（折）○うごかす（動）晉語「故不可一也」

【抆】 ㊀コツ ㊁ケツ 月 抆は誤字

㊀物を牽きて動かし轉ずる。○うがつ（穿）あばく。○さく（裂）○みだる（亂）‖滑。㊁ほる、あばく。‖掘。

【抓】 サウ 肴

○かく（搔）「一頭」○つまむ（摘）爪を以て物を取る。○つつねる。

【抄】 サウ セウ 肴 鈔は本字

○さじにてすくひとる（叉取）○かすめとる（略取）「侵一」後漢書、郭伋傳「匈奴數一部界」○文書をうつす（謄寫）「手一」○かきぬく、ぬきがき「一錄」「詩一」○葉の名、十圭を一と爲し、十一を撮と爲す。○すく（漉）紙をすきて造る。

【抄掠】サウリヤク すこし（些少）の分量。新論「鈞石雖レ平、不レ能レ無二一一之較一」

【抄紙】サウシ かみをすく。天工開物「一一條」

【抄集】サウシフ かきぬきて集める。又、其の集めたるもの。魏志、武帝紀、注「太祖博二覽羣書一、特好二兵法一、一一諸家兵法一名曰二接要一」

【抄襲】サウシフ ○敵の備へなきに乘じてひそかに攻め入る。○古人の文詩を剽竊して己の作とする。

【抄寫】サウシヤ ぬきがきす。事文類聚、梁貴嵓「一一日課五十紙」‖鈔寫・抄錄。

【抄書】サウシヨ ○書物をぬきがきする。南史、王筠傳「好一一、假見晉紙、皆細疏記、未一皆備」人假手、竝躬自錄」蘇軾詩「自首循一一」○ぬきがきせし書物。

【抄撮】サウサツ うつしとる、ぬきがきする。撮は拾ひ取る（唐書、儒學傳）‖抄寫。

【抄沒】サウボツ 財產を官に沒收する。明律「依レ律一一」

【抄本者】サウホンシヤ ぬきがきばん。巖棲幽事「一一、如二古帖一不二必全帙一、皆是斷墨殘痕」

【抄掠】サウリヤク 次條に同じ。魏志、武帝紀「賊無二輜重一、惟以二一一一爲レ資」

【抄略】サウリヤク かすめとる。魏志、太祖紀、注「一一諸軍」

【抄錄】サウロク ぬきがきする。王筠文「剔白一一、大小百餘卷」

【扱】 ㊀サフ ㊁キフ 緝 拾

㊀をさむ（收）塵などをはらひ取る。曲禮「以箕自鄉一之」鄉は向。○う（獲）○ひく（引）○あぐ（舉）○とる（取）○いたる（至）手をつく、拜して手、地に至る。儀禮、士昏禮「婿拜一地」○はさむ（插）衣服の裾をあけて帶にはさみこむ。詩、周南、傳「一衽曰襜」㊁をさむ。○とる、う（獲）○をさめとる（斂取）圖○あつかふ。又、あつかひ、待遇する「取一」○こく、しごく「稻を一く」

【抵】 ㊀シ ㊁テイ 紙 薺

㊀うつ、側から擊つ。揚雄、解嘲「一巇侯而代之」○やぶる（毀）㊁古、抵に通じ用ふ。

【扯】 撦（手部十二畫）の俗字。ひきさく（裂開）

【承】 シヨウ 蒸

○うく（受）うけ頂く。禮、禮運「一天之祜」うけたまはる。○うけつぐ（繼續）「一統」さゝぐ、捧持する。詩、小雅「一筐是將」○とどむ（止）詩、魯頌「則莫我敢一」○たすく、たすけ（佐）‖丞。○すくふ、古、拯に通ず。列、黃帝「竝流而一之」○ついで（次第順序）左、哀十三「子產爭一」註「一貢賦之次也」○圖ウケバル聞くの敬語。

同訓異義 承・受・享・稟の別は受（又部六畫）の條を見よ。

【承意】ショウイ 人の氣に入るやうに機嫌をとる。史、孟荀傳「一一觀色爲レ務」‖迎合。

【承引】ショウイン うけひく、承知する。魏書、刑罰志「或拷不二一一一依レ實而科」

【承恩】ショウオン 君の惠恩を受ける。杜甫詩「開元之中常引見、一レ一數上林賦殿」

【承家】ショウカ　家をうけつぐ。易經「開レ國ー レー」

【承顏】ショウガン　○他人のかほ色を見てさからはぬやうにする。晉書、孝友傳「柔色ー レー、怡怡盡レ樂」○接見を得る義。漢書「今乃ー ー接レ顏」

【承句】ショウク　絕句の詩の第二句、第一句即ち起句の意をうけて敷衍する句の義。

【承誨】ショウカイ　をしへをうく。孔叢子「幸今ー レー」

【承歡】ショウクワン　君主又は父母のよろこびの心をうけたすける。白居易詩「ー レー侍レ宴無二閒暇一」

【承繼】ショウケイ　うけつぐ。白虎通「天子ー ー、當レ知二共數一」‖繼承・承襲。

【承教】ショウケウ　をしへを受ける。孟子「嘉人願安ー レー」

【承嫩】ショウゲン　まはし文をうく。晉書「乘レ輿ニー レー濫巾幘、推二功於讓一」

【承業】ショウゲフ　仕事をうけつぐ。

【承候】ショウコウ　めうへの人の、ごきげんをうかがふ。魏書、楊播傳「ニー安否一」

【承旨】ショウシ　仰せをうけたまはる。

【承志】ショウシ　○他人の氣に入るやうにうけ迎ふ。書經「先レ意ー レー」‖承意。○他人の志をうけつぐ。書經「大統未レ集、予小子其承二厥志一」

【承襲】ショウシフ　うけつぐ。襲は繼。‖承繼。

【承順】ショウジュン　うけしたがふ、命令に從ひ服する。史、始皇紀「宇縣之內、ニー レー聖意一」

【承緒】ショウショ　事業のつづきを受けつぐ。晉書、安平獻王孚傳「陛下ー レー、遠人率賓」‖承統。

【承承】ショウショウ　子孫がつぎつぎにうけつたへる。韓愈文「聖子神孫、繼繼ー レー」

【承接】ショウセフ　前をうけてつづく。羅隱詩「雁影相ー ー、龍圖共始終」

【承前】ショウゼン　前からうけつづく。

【承禪】ショウゼン　ゆづりをうける、帝位を譲られてうけ繼ぐ（陸雲、晉惠帝誄史夏侯湛表）

【承諾】ショウダク　うべなふ。‖承知。

【承知】ショウチ　○うけたまはりて知る。詩志、我詩傳「ニー消息一慨然永歎」○知遇を受ける。蘇易簡詩「小子最ー ー同叢薄改レ觀」○圖うべなふ、承諾する。

【承塵】ショウヂン　○ごみの落ちざるやうに座所の上に設くるもの、ちりよけ。三輔決錄「有レ鳩從ニー ー上、飛下二几前一」○圖なげし（長押）鴨居などの上に横にわたす木。

【承寵】ショウチョウ　君の寵幸を受ける。王昌齡詩「平陽歌舞新ー レー、簾外春寒賜二錦袍一」‖承恩。

【承傳】ショウデン　うけつたへる、前者の爲したる通りにうけつたへる。宋史、禮志「典儀曰再拜、贊者ー ー皆再拜」

【承統】ショウトウ　世をうけつぐ、帝位をつぐ。漢書、公孫卿貝傳贊「孝宜ー レー、纂二修洪業一」

【承認】ショウニン　承知して認諾する、みとめゆるす。諸史「誤斷二此獄一、宜乎其不ニー ー也」‖認可。

【承乏】ショウバフ　人員のとぼしきをうけて補ふ、官に任ずといふ謙辭。左、成二「敢告不敏、攝レ官ー レー」

【承命】ショウメイ　命令をうける。後漢書、吳漢傳「躬擐甲冑、不二相ー ー一」躬は謝形。

【承風】ショウフウ　上の敎化を受ける。家語「殺之爲レ君也、其敢好レ生而惡レ殺、是以四海ー レー」

【承服】ショウフク　罪人が其の罪に服從する、服罪する。諸史「不ニー ー一」

【承平】ショウヘイ　太平の世を永く受けつぐ。漢書、食貨志「今累世ー ー、蓄積京師、巨萬一」

【承敝】ショウヘイ　次條に同じ。史、高祖紀「漢興ー ー」

【承弊】ショウヘイ　國家の疲弊の餘を受けつぐ（魏志、文帝紀、注）‖承敝。

【承奉】ショウホウ　人の意をうけて氣に入るやうに事へる。晉書、容超載記「入則盡レ歡ー ー、出則倒レ身下レ士」

【承命】ショウメイ　命令をうけたまはる。左傳「荀列定矣、敢不ー レー」

【承露盤】ショウロバン　漢の武帝が建章宮に建てたる銅盤、甘露を受ける爲めに設く（漢書、郊祀志）

【扮】ショウ　㊥

○あぐ（上衆）○ぬく（拔）○たすく（助）すくふ（救）財を人に與へる。‖拯。

【折】セツ　㊥

○をる、をり取る「ー枝」「探ー」○くじく（挫）「挫ー」「摧ー」ーりひしぐ、おさへつける。○人の過をせめる「面ー」○たつ（斷截）○さだむ（斷定）是非をわかちきめる。論、顏淵「片言可以ー獄者其由也歟」○わかつ「ー中」○まける（曲）意志をまげ屈する。漢書、伍被傳「ー節下レ士」○かがむ（屈）○とどむ（止）○やぶる（毀敗）破毀する。漢書、高帝紀「ー券棄債」借金の證文をやぶりすてる。○わかじに「短ー」「夭ー」○損をして賣る。○割引する。七ーは七掛に割引する。○草木枯れそこなふ。○土をもり上げたる祭場。○木を方形に連ねて牀の如く作りたる器具、壁に横たへ互して上に瓶を加ふるもの。圖○をり、嶮

期・機會。○をり、菓子箱の類。○をり、切に、ひたすら「一入って賴む」

【折衝】セツシヤウ 折・挫の別は挫（手部七畫）の條を見よ。

【折頤】セツイ おとがひををく。戰國策「刺レ臏一レ」

【折銳】セツエイ 銳き氣をくじく。劉向文「一レ摧レ矜」

【折腰】セツエウ こしを折る、腰を屈して人を拜する。晉書、陶潛歌曰、吾不レ能レ爲二五斗米一レ事二鄉里小兒一」

【折閱】セツエツ 損をして賣る、折は損、閱は兌にて賣なり。荀、終身、貨殖不レ爲二水旱一不レ耕、貨寶不レ爲二一一不レ市」

【折膠】セツカウ 膠が堅くなり、折れ易くなる秋の期節、卽ち、秋は膠が固まりて弓が强くなる故、戰爭の好時節とす。匈奴常に此の時を以て軍を出す。漢書、鼂錯傳「欲レ立レ威者、始二於一一一」

【折角】セツカク ○頭巾のつのををる。後漢書、郭泰傳「嘗行遇レ雨、巾一角墊、時人乃放折二巾一角一以爲二林宗巾一」○高慢の鼻をくじく。漢書、五鹿充宗傳「五鹿嶽嶽、朱雲折二其角一」朱雲が五鹿と易を論じて五鹿を屈せしめし故、時人が朱雲の剛力能く鹿の角を折るとしやれたる故事に本づく。○圖骨を折る、むだに力を勞する。又、隨分に「一一御大切に」

【折簡】セツカン 全紙を二つ切りにして認めたる手紙、短き手紙、簡は竹の札、古、紙に代用す、故にいふ。晉書、宣帝紀「王淩面縛迎レ帝曰、淩若有レ罪、公當二一一召而淩、何苦自來耶」

【折檻】セツカン ○强く諫むる。漢書、朱雲傳「觸レ檻二御方斬馬劍一斷二佞臣一人一、上問雲、對曰御史將レ雲下、雲攀二殿檻一檻折、呼曰、得下從二龍逢比干一遊中地下上足矣」○國きびしく叱責する。

【折脚鐺】セツキヤクサウ 脚のまがりたるかなへ。蘇軾詩「——澄機二淡粥一」

【折橋】セツケウ 木を方形につられて牀の如く作りたる舁具。儀禮「一一覆レ之」

【折桂】セツケイ 桂の枝を折る、科第に登るをいふ、晉の郤詵が己の及第を桂林一枝、崑山片玉に比せし故事。溫庭筠詩「猶喜故人先一レ、自憐羈客尙飄蓬」

【折戟】セツゲキ をれたるほこ。杜牧詩「一一沈レ沙鐵半銷」

【折券】セツケン 借用證書をやぶりて返濟を賞めず。史、高祖紀「兩家レ一一爲レ賈、賈は債。

【折脇】セツケウ 非常の勤苦を重ぬる。左、定十三「三一レ一知レ爲二眞盜一」

【折獄】セツゴク うったへをさばく。論、顏淵「片言可二以一一一者其由也歟」○斷獄。

【折骨】セツコツ 骨ををりて身體を勞す。荀子「一レ一絕レ筋」

【折挫】セツザ くじく。後漢書、寶融傳「外則一一羌胡、內則百姓騷擾」○摧挫・挫折。

【折枝】セツシ あんま、技は肢、一說にたゞををる。孟、梁惠王「爲二長者一一レ」

【折辭】セツジ 人のことばをくじく。大戴禮「不レ唱二流言一、不レ一一」

【折訟】セツシヨウ うったへを判決する。北史、楊椿傳「一一公正」○折獄。

【折衝】セツシヨウ ○敵の衝き來るをくじく。晏子春秋、孔子曰、不レ出二樽俎之閒一、而一一千里之外一、晏子之謂也」○敵と對抗してひけを取らず。蘇洵、送二石昌言一引「一一千口舌之閒一」

【折辱】セツジヨク くじけ屈する、くじきはづかしむ、輕蔑する義。史、項羽紀「一一一乘更卒一」○摧辱・挫辱。

【折節】セツセツ ○己の主持する節を屈ぐる。戰國策「以二秦之强一、一一而下二與國一、臣恐三其害二於東周一」○國をりふし、ちやうど其の時、をりから。○折柄。○時季、季節。

【折還】セツクワン かどだちて折れめぐる、還は旋と通ず。禮、玉藻「周還中レ規、一一中レ矩」○折旋。

【折レ足】セツソク 足を折る。易鼎「鼎一レ一覆二公餗一」鼎の足を折るときは鼎實を覆へす、小人を大臣に任ずれば、重任に堪へずして、國家を覆すに喩ふ。

【折挹】セツイフ くじき損する。徐陵詩「橋斜直似安排得、古怪多因一一一來」

【折撓】セツデウ をれたわむ。又、くじけよわる。○屈撓・枉撓。

【折衄】セツジク くじけ敗れる。後漢書、殷穎傳「臣兵累見一一一」○敗衄。

【折杖法】セツヂヤウハフ 杖は杖罪、從來の杖數を輕減する法律（宋史）

【折中】セツチウ 次條に同じ。漢書、賈禹傳「徵二孔子之言一亡レ所一一一」

【折衷】セツチウ 衷は中、事を取捨折斷して其の中を定める。史、孔子世家「中國言二六藝一者、一一於夫子一可レ謂二至聖一矣」○折中。

【折硫】セツリウ くじきやぶる、くじけ破れる。

【折半】セツパン 半分にわかつ。太眞外傳「折二其半一授二使者一」

【折盤】セツバン 舞ふ貌。南都賦「般二四京之一一一」

【折伏】セツブク ○敵をくじきしたがはせる。○佛語佛說を說き惡人を折伏せる。攝受の對。○破邪。

【折謀】セツボウ 謀がくじける、籌策が行はれず。魏志、徐奕傳「汲黯在レ朝、淮南畏レ之一一」○挫謀。

【折北】セツホク やぶれてにげる 北は敗。史記「一一不レ救」○敗北。

【折本】セツポン ○元金を損する。○圖を

り疊みて作りし書册。
【折楊柳】セツヤウリウ 客を送りて、水邊に至り、楊柳を折りて、別を爲す時の情景を敍したる詩、古樂府に——曲あり。
【折柳】セツリウ ○樂曲の名。李白詩「此夜曲中聞ニ——一、何人不レ起ニ故園情一」＝折楊柳。○旅人を見送る時、柳を折りて別れし故事。三輔黃圖「灞橋在ニ長安東一、跨レ水作レ橋、漢人送レ客、至ニ此橋一ー折贈レ別」
【折紙】ガリ 圖○奉書又は鳥の子紙等を二つ折りにせしもの、進物の目錄又刀劍などの鑑定をかきしるすに用ふ。○轉じて刀劍・古書畫・骨董品などの鑑定書。
【折檻】セツカン 圖ちゃうど其の時。＝折檻。
【折句】セツク 圖和歌の一體、題の假名を每句の首又は尾に詠みこむもの。
【折介】セツスケ 圖武家の最も卑しき奉公人。

【扭】チウ 有

○まろばす、手にて轉ずる。○おさふ（按）○つかぬ、たばぬ。

【抒】チヨ シヨ 語 通音ヂヨ

○のぶ（舒・陳）心に思ふことをうちあける。漢書、王褒傳「ー二情素一」○くむ（挹）○とりだす（取出）○もらす（泄）漢書、劉向傳「一ー二愚意一」○とく（解）○のぞく（除）左、文六「雖レ必ー矣」
【抒情】ヂヨジヤウ おもひをのべる。後漢書、鄧皇后紀「以抒ニ幽隔鬱滯之情一」
【抒情詩】ヂヨジヤウシ 感情をのべたる詩。敍景詩・敍事詩の對。

【投】㊀トウ ㊁トウ 有 尤

㊀なぐ、なげうつ（擲）「ー石」○すてる（棄）やめる、さしおく。魏徵詩「一筆非ニ戎軒一」○いる（納）○おくる（贈）「ー恵」詩、衞風「ー我以ニ木瓜一」○たよる（託）たちよる、身をおちつける。後漢書、張儉傳「望門ー止」○かなふ（適）あふ（合）「ー機」「一合」○おほふ（掩）○はらふ（振）「ー袂」㊁とどまる（止）杜甫詩「遠ー二錦江波一」＝返。○文の讀みきり、古、句讀の讀に通ず「句ー」○酒を再び醸す「ー酒」＝酘。
【投網】トウバウ 圖あみをなげ入れて魚を捕へる。又、其の網。
【投影】トウエイ ○物體のかげ。○物體を或點より見たる形の平面圖「ー一畫法」
【投降】トウカウ 來りて敵にくだる。降參する。
【投稿】トウカウ 新聞・雜誌社などに原稿を送りやる。＝寄稿・投書。
【投錨】トウビヤウ 舟をねんごろに置むるにいふ、錨は舟のくさび、輪をはめて軸頭に插すもの。漢書、陳遵傳「遵嗜レ酒、每二大飲一賓客滿レ堂、輒關ー門取二客車轄一投二井中一、雖レ有レ急、終不レ得レ去」
【投合】トウガフ 兩方の心が相あふ「意氣ー」
【投竿】トウカン さををなげる。嵇康文「放レ懷ー、優游卒レ歲」
【投函】トウカン 郵便函に手紙を入れる。又、手紙をさし出す。
【投獃】トウシン なやみを與へる。書經「ー二手毀身一」
【投輪】トウリンズ 筆をなげおく。劉楨詩「ー一長歎息、綺麗不レ可レ忘」
【投閒置散】トウカンチサン 身を閑散の地位に置く爲、要職に居らざるをいふ。韓愈文「ー——乃分之宜」
【投奇】トウキ おくる、おくりよせる。元稹文「律詩以相ー一」
【投棄】トウキ なげすてる。沈佺期文「予ー二南裔一、承レ恩北闕」
【投機】トウキ ○機會につけこむ。萬一を僥倖してまうけごとをする。○株券米穀などの相場を利用して取引をする「ー一業」
【投金】トウキン 金をなげすてる。吳越春秋「乃ー二水中一而去」
【投戈】トウクワ 戰をやめる。後漢書「ー一ー講レ藝、息レ馬論レ道」＝休兵・偃武。
【投荒】トウクワウ 遠く窮逐せらるる義。柳宗元詩「一身去レ國六千里、萬死ー一ー十二年」
【投瓜得瓊】トウクワトクケイ 少しの物を贈りて、厚き返禮を得る。詩、衞風「投レ我以ニ木瓜一、報レ之以ニ瓊琚一」
【投纓】トウエイ くびくくり。品字箋「明環也、以レ索貫レ纓、而自縊、謂ニ之ー一」
【投壺】トウコ 古、宴飲の際、才藝を競ふ。壺を數り盛中に投ずる。負けた方で酒を飲む。禮、投壺「ー一之禮、主人奉レ矢、司射奉レ中、使二人執一レ壺、主人請曰、某有ニ枉矢哨壺一、請以樂レ賓」
【投筋】トウキン しゃくをなげすてる、官をやめる。韋應物詩「ー一遠辭丹鳳闕」＝致仕・挂冠。
【投子】トウシ 博奕に用ふるさい。＝投・骰子。
【投止】トウシ 立ちよりて足を止める。
【投刺】トウシ ○名刺をさし出して面會を求める。梁冀「朱晉ー二邦宰一」○名刺をなげすてる、世と交渉を絶つ義。梁武帝文「ー一ー解レ職、以遠二踈賤一」
【投資】トウシ もとでをおろす、事業のために資本を投ずる。
【投身】トウシン 身なげ。＝入水。

【投簪】官を棄てる義。簪は冠の飾かざるやうに固めるもの。左思、招隱詩「朝市迫ニ喧囂一、山林隱ニ輪奐一」陶宏景、ー レー 高蹈」

【投射】物理學にて音又、光などの波動が、一の物質内を通過し、他の物質との境界面に到著する時。

【投宿】とまる。劉向、九歎「平明發ニ兮蒼梧一、夕ーニー兮石城一」

【投書】○文書をなげこむ。魏志「太祖時有ニー ー誹謗者一、○新聞・雜誌社などへ草稿を送る。又、其の草稿。＝投稿。

【投誠】誠心を以て歸服する義。蘇軾文「不レ若歸命ーレー 控ニ告於君父一」敵に降服するにもいふ。

【投石】○いしをなげる。史、王翦傳「ーレー 超距」○いしになげつける。漢書、刑法志「以ニ榮辱一勸ニ善一、若ニ卵ーレー」

【投杼之疑】杼をなげすてる、讒言の人も讒にあふこと數度に及べば、他の疑ひを招くに至る喩。又、君主がたび重なれば遂に讒言を信ずるに至るに喩ふ。史、甘茂傳「昔曾參之處レ費、魯人有レ與ニ曾參一同ニ姓名一者ニ殺レ人、人告ニ其母一曰、曾參殺レ人、其母織自若也、頃之、一人又告之曰、曾參殺レ人、其母尚織自若也、頃又一人告之曰、曾參殺レ人、其母投レ杼下レ機、踰レ牆而走」

【投擲】なげうつ。韓愈詩「中盤遇ニ巉巖一ーレー 傾ニ輪轅一」＝抛擲。

【投報】男女互に相思の情を通ずるにいふ。詩、衛風「投レ我以ニ木桃一、報レ之以ニ瓊瑤一」に本づく。

【投筆】ふでをなげすつ。魏徵詩「中原還逐レ鹿、ーレー 事ニ戎軒一」＝擲筆。

【投狀】たもとをふるふ、書記する狀。左、宣十四、楚子聞レ之、ーレー 而起」＝奮袂。

【投票】選擧又は採決などに、選擧せんとする人名又は己の意志を記したる札を箱になげ入れる、いれふだ、入札。

【投錨】いかりを下し、ふなどまりする。

【投命】いのちをすてる。晉書「誓命ニーレー 以報ニ所レ受」＝授命。

【投老】老年に至る義。後漢書「毋守レ寡婦孤、苦レ身ーレー」

【投綸】つりいとを下す。列子「ーレー 沈レ鉤、手無ニ輕重一」

【投機】つぼをなげる。蘇軾詩「須レ防ニ厭童子ニーレー 犯ニ清玲一」

【抖】トウ　有

○ー擻は振ひ擧ける貌。又、さっぱりとはらひつくす。王炎詩「ー擻胸中三斗塵」○ふるふ。圖ー擻。

倫が行脚して物を乞ふ。又、其の僧。釋氏要覽「梵語、杜多、華言ーー擻」＝頭陀。

【把】ハ　馬　ヒ　八　麻　ハ　遇

㊀にぎる（握）にぎり（握）又、掴る程の大さ。孟、告子「拱ー之桐梓」○とる（執）戰國策「左手ー其軸」○もつ（持）○器物の柄、とって「刀ー」「劍ー」○たば（束）「一ー」「菜ー」○圖まもる（守）「ー門」㊁かく（掻）爬に通ず。○ひく（引）○批ーに は樂器。＝琵琶。㊂ゆづか（弭）靶に通ず。

同訓異義　把・取・執・秉・操・採等の別は取（又部六畫）の條を見よ。

【把握】○にぎる。又、ひとにぎり程の量。漢書「其寶ー物輕微易ー藏、在ニ手ーーニ」○人の操守をいふ。子華子「其平居ーー」

【把火】ともしびをもつ。白居易詩「中宵ーレー 行人發」

【把玩】手にとりてもてあそぶ。陳琳文「譬之喜笑、ーー無レ厭」＝把弄。

【把盞】把酒に同じ。＝把琖。

【把子】矢の的ぬ（李呈芬、射經）＝圖靶子。

【把柚】そでをとる。史、刺客傳「左手把ニ其袖一、右手揕ニ其胸一」

【把手】器物のとって、弄などの柄。

【把酒】酒杯をとる。孟浩然詩「ーレー 話ニ桑麻一」＝把琖、把盞。

【把捉】○とらへる。韓愈文「優ニ柔饜飫一、涵ニ泳乎仁義之中一、ーニー 其實一、咀ニ嚼乎六藝之腴一、ーニー 其華一」○心を堅く定めて放佚せざる義。吳澄、敬銘「ーニー 于中一、精神心術、檢ニ束於外一、形骸肌膚」

【把持】手に物をとりもつ、專ら一手に執り持つ義。白居易詩「中宵ーレー 行人發」

【把住】心理學にて已に經驗せし事を永く意識の中にたもち、隨時に再現し得る心の作用。

【盃レ把之水】一とにぎりの小木。韓詩外傳「ーー、無ニ合拱之枝一」

【把臂】ひぢをとる、互に親しみあふ義。後漢書、呂布傳「臨レ別ーレー 肖謂」世說に「ーレー 入レ林」とあるは同じく隱るるをいふ。

【把袂】そでをとる、互に親しく相接見する義。梁元帝文「何時ーレー、共抵ニ心膜一」＝握手。

【把弄】てにとりてもてあそぶ。陸游詩「明年即八十、日月蘇ニーーニ」

【扳】ハン　刪

○ひく（挽・援・引）○よづ。＝攀。

【扶】㊀フ ㊁ホ 漢 國

㊀たすく、たすける（佐・相）論、季氏「顚而不ー」ー力をかして支へる。荀、勸學「蓬生麻中、不ー而直」又、助けられる。○まもる（護）支へて保護する。○よる（縁）○幼小なる貌。○かたはら（旁）○ー藥は荷ハスノーは芙に通ず。○ー桑は木の名。○大風。‖槐。○手の四指を竝べたる長さ。‖膚。㊁はらばふ。左、昭二二「ー伏而擊之」‖匍。○ちかよる（附）

関連語 ㊀扶・助・輔・弼・翼・佐等の別は助（力部五畫）の條を見よ。

【扶育】フイク たすけそだてる「ー一料」

【扶搖】フエウ ○神木の名。莊、在宥「雲將東遊、過ニー一之枝一而適遭二鴻蒙一」○暴風。ーーの二字を反切すれば飄。即ち暴風となる。莊、逍遙遊「摶ニーー一羊角而上者、九萬里」‖桑。○勢よくうごきおこる貌。淮南子「ーー而登レ之」

【扶起】フキ たすけおこす。司空圖詩「ーニー絲衛二承一早露一」

【扶持】フヂ 義によりて相助くる義。漢書「不レ如下更遣二長者一ーレー而四上」‖杖義。

【扶救】フキウ たすく。たすけ。魏書、證志「是以晉室衛ニーー之仁一」

【扶筋】フキン 藥草の名。本草「狗脊、一名強脊、一名ーー」

【扶臥】フグワ たすけて縁ねしむ。漢書、游俠傳「因留宿爲二侍婢一ーー」

【扶倡】フシヤウ かたぶきたるを、たすけおこす。韓偓詩「一半擬レ一レー」

【扶搖】フエウ たすけたづさふ。黃鎭成詩「ーー數百人、夜宿二夏山顚一」

【扶翼】フヨク たすけもつ。蘇軾詩「ーニー老幼一相遮攀」

【扶挾】フケフ たすけて世話をする、挾は兩方からはさみすける。後漢書、皇紀志、註「兩從者ーー」

【扶桑】フサウ ○東海の中にありといふ大いなる神木。山海經「湯谷之上、有ニーー一十日所レ浴」‖扶木。○轉じて、其の神木の在る國。十洲三島記「ーー在二碧海之中一、地多二林木一、葉皆如レ桑、又有二椹樹一、長者數千丈、大二千餘圍、樹兩兩同レ倶、偶生更相依倚、是以名爲二ーーー一」○支那人、日本を斥していふ。王維、送二晁監一詩「鄉國ーー外、主人孤島中」○花の名、粵中（支那の南方の地）に產す、葉は桑に似て稍小、大紅淺紅、黃の三色あり、大なる者は芍藥の如し、佛桑花と相似たり（嶺南雜記）

【扶桑拾葉集】圖三十卷、徳川光圀の撰、我國古今の假名文三百十三篇を集む。

【扶蘇】フソ ○小木の名。詩、鄭風「山有ニーー一、隰有二荷華一」‖扶胥。○秦の始皇の長子の名、直諫を好む。

【扶持】フヂ ○たすけて介抱する。孟、滕文公「守望相助、疾病相ーー」‖扶護。○國ヲ背、米にて給與せし士大夫の祿、大抵一人一日四合の割。

【扶竹】フチク 節高くして中の實てる竹。山海經「龍山多ニーー一」

【扶杖】フヂヤウ つゑにたよる。漢、賈山傳「ーレー而往觀レ之」

【扶風】フフウ はやて。淮南子「疾風曰ニーー一」

【扶伏】フク はらばふ、字解を見よ。‖匍匐。扶服。

【扶服】フク ○力をいたす。又、はらばふ。衛、檀弓「ーー救レ之」‖匍匐。

【扶匐】フク はらばふ、手を地につけて行く。齊書「ーニ道路一」‖扶服。

【扶病】フビヤウ やまひの介抱する。又、病をしひておす。劉禹錫詩「舊レ君ーレー到二芳山一」‖扶羸。

【扶木】フモク 扶桑木。淮南、地形「ーー在二陽州一日之所レ出」

【扶木朝暾】フモクテウトン 扶桑の木の上に朝日が昇る、扶桑木は、古、日本に在りきと傳ふ。隋書、音樂志「扶木上ニ朝暾一、崑山洗二瀛渠一」

【扶養】フヤウ 自活する力なき者をたすけやしなふ。

【扶掩】フエン 劍の名。吳都賦「ーー屬鏤」注「扶ーー屬鏤皆劍名」一說あげ

る。‖掃攘。

【扶輿】フヨ　○佳き氣。韓愈文「氣之所ㇾ鍾盛而不ㇾ過、必磅礴ー一踴躍而噴薄」○はやて。楚辭「登羊角兮ー一」‖扶搖。

【扶搖】フエウ　たすけいだく。蘇軾詩「遠知句黥路、老稚相ー一」

【扶翼】フヨク　たすける。晉書、孫惠傳「抗二辭金門一、則塞諮之言闕、ー二扇紫闥一、則匡主之功著」‖匡翼。

【扶老】フラウ　○としよりをたすける。漢書、揚幼ー一ㇾ以錦二聖德一○老人の杖。古詩考略「老人所ㇾ持杖、曰二ー一」○竹の名、節高く中實す、杖とするによろし、故に名づく。‖節竹。○鳥の名。古今注「ー一、秃秋也、狀如ㇾ鶴而大」

【扶羅】フラ　薩ヴの異名の吳都賦、石帆水松、東風ー一」

【扮】

㊀フン　㊁ハン・ヘン　諸　㕚　通音フン

㊀にぎる(握)○うごかす(動)○まく(撒)かきまぜる(拌和)史、貨殖傳、註「以椒薑ー一之」○あはす(幷)㊁打ー一は俗語、よそほふ(裝飾)いでたち。

【扮戲子】ファンシ　種種の形によそほへるやくしゃ(俳優)傳習錄「若只是那些儀節求二得是當一便謂二至善一、即如二今ー一、扮二得許多盛清奉養的儀節一是當、亦可ㇾ謂二之至善一矣」

【扮裝】ファンヂヤン　よそほふ、よそほひ、いでたち。

【扮飾】ファンシ　よそほひかざる、みづくろひする。

【抆】

フン　㕚　㕚　通音

○ぬぐふ(拭)楚辭、九章「孤子唫而ー一淚」○する(摩)

㊀ハイ　㕚　㕚　㕚

一歳に

【折矢】ヲリヤ をる。又、折れし矢。射様子、制敵「一レ一折矛」＝折矢。

【折怒】ヲリイカリ いかりをおさふ、怒を抑制する。班固、四都賦「乃一レ一而少息」

【折音】ヲリオン 二行の音が他の音と合して生ずる熟音。ちゃしゃきょくわの類。

【折體】ヲリタイ 一定の平仄の式によらざる近體詩、即ち絶句律詩の變格の一體、杜甫の詩に最も多し。「鄭縣亭子潤之濱」の類の如し、三體詩に一一の部あり。

【捉】アク ヤク 陌

○とる（把捉）にぎる（握）○おさふ（抑）「一撃」＝扼撃。

【押】㊀アフ ㊁カフ 洽 狎

㊀かきはん（署）さゝな（草名）「花一」「署一」○おす、おさふ（按壓）○判をおす、捺印する。○あつかる、とらへあつかる（管拘）おさへつける、檢束する「一送」「一收」○ふむ、詩の韻字を用ふる「一韻」㊁簾額をいふ。徐陵、王臺新詠「珠簾以玳瑁一爲一」○のり（規律）○よる（相因）○なる（習）漢書、息夫躬傳「羽檄重迹而一至」＝狎。○圖おす、無理に強ひる「一賓」

【押韻】アフイン 詩の韻をふむ。宋史、藝文志「張孟一一十卷」

【押宴】エンアフ めつけ役をおきたる鄭重なるさかもり、宴席を管理する義。宋史、歐陽修傳「修還二翰林學士、使二契丹一、其主、合二貴臣四人一一一曰、此非二常制一、以二朝名重一故耳」＝管燕。

【押衙】アフガ 官名、天子の護衛兵の長をいふ、衙は儀仗侍衛の義。舊唐書「金吾天子一一」

【押後兵】アフヘイ おさへの兵。紀効新書「——二十五名、各用二長短器一」

【押字】アフジ かきはんの文字。歸田錄「今俗謂二草書名一爲二一一一也」註會「押、署也、今人書二文字一押署一是也」

【押收】アフシウ 官にて人民の財産をさしおさへる。＝沒收。

【押署】アフショ 印をおし名を書く、署名捺印する。註會「押置也、今人書二文字一一是也」

【押送】アフソウ 罪人を護送する。

【押丁】アフテイ 圖監獄署の最下級の役人。

【押班】アフハン 百官の位次をとりしまる。又、其の官名。唐書、百官志「朝會監察御史二人一一」

【押領使】アフリヤウシ 圖王朝時代に諸國の亂暴人をとりしまる爲めに派遣せし官吏。

【拙】エイ エツ 屑 霽

ひく（引）＝拽。

【抗】エウ イウ 尤 梗

あぐ。臼より物を舉ぐ。詩、大雅「或舂或一」

【拐】カイ 蟹

○て（手）あし（足）○えだ（枝）俗に杖の義とす。○かたる、かどはかす、人を誘ひ出して他に賣る「一騙」「誘一」

【拐去】カイキョ かどはかす。

【拐兒】カイジ かたり、かどはかし。黃允文、雜纂「暗歡喜、一一嫌二媒人一得レ手」

【拐人】カイジン かたり、かどはかし。＝拐兒。

【拐帶】カイタイ かどはかす、かたりて物をもちにげる。

【拐杖】カイヂヤウ 圖つゑ。

【拐子馬】カイツマ 元の兀朮の軍中にて拿來を以て馬隊三人づつを連ね敵に向ふをいふ。宋史、岳飛傳「三人爲レ聯、號二一一一」

【拐騙】カイヘン かたり、かどはかす。政刑大觀「強盜竊賊、一一犯姦」

【拒】㊀キョ ㊁ク 語 麌

㊀ふせぐ（捍禦）防禦する「扞一」孫子、九地「敵不及一一」○ふせぎ、そなへ「右一」「後一」○こばむ、ことわる、きき入れず「一諫」○あたる（抵）○たがふ（違）論、子張「其不可者一之」㊁方形。＝矩。○方陣、方形の陣。左、桓五「爲右一」以當「陣人」

同訓異字 拒・防・禦・扞・捍・閑の訓は防（草部四畫）の條を見よ。

【拒扞】キョカン ふせぐ、ふせぎ。蜀志、先主傳、注「率二精兵一一一先主于涪」＝禦扞。

【拒諫】キョカン いさめをこばむ。後漢書、申屠剛傳「一一一考塞」＝距諫。

【拒霜】キョサウ 芙蓉ヲの異名（本草）蘇軾に「和二陳述古一一花」詩」あり。

【拒止】キョシ 防ぎとめる。＝阻止。

【拒絕】キョゼツ ふせぎこばむ。＝拒否。

【拒否】キョヒ 拒絕に同じ。

【拒斧】キョフ 螳螂カマキリの異稱（埤雅）

【抾】㊀キョ ㊁ケフ 魚 葉

㊀一摸バクは持ち去る。○ささぐ（捧）㊁もつ（持）○くむ（掬取）○おびやかす（劫）

【拘】 ㊀ タ・コ　㊁ コウ・ク　尤　國　通音コウ　拘は俗字

㊀とどむ(止)手にて止む。○とる、とらふ(執)「執ー」とらはる。○まがりさはる(曲礙)かかはる、なづむ。顧みて忌む所多し。史、汲黯傳「不ー文法」法律規則などにー泥せず。㊁かかふ(擁)曲禮「以ー扶ー而退」○かがむ(曲)＝句。○とる(取)曲禮「不ー然則自下ー之」○ひきあつめる(摟聚)○國かかはらずと打消しに用ひて、反対の結果を生じたる意をあらはす。

【拘引】コウイン　警察官が現行犯又は嫌疑者を警察署にひき立てつれ行く。＝勾引・引致。

【拘忌】コウキ　かかはりいむ、氣にかけて遠慮し、はばかる。晉書、蔡克傳「服飾鮮異、無ー所ー」

【拘禁】コウキン　とらへてとぢこめる。＝拘引監禁。

【拘繫】コウケイ　とらへつなぐ。唐律、疏「主ー當ー刑殺ー者」＝拘束・拘縛。

【拘牽】コウケン　かかりむひ、なづみひかされる。朱熹詩「煩憂絕ー」

【拘拘】コウコウ　かかはる貌。又、屈して伸びざる貌。吳澄詩「丈夫落落志四海、俗士ーー守ー途」

【拘鉗】コウケン　拘圍してくきりでつなぐ。宋史、刑法志「法無ー之條」

【拘殺】コウサツ　とらへころす。元史、廉希賢傳「ーー使者」

【拘士】コウシ　變通を知らざる士。實語、服烏賦「ー一絜ー俗」

【拘囚】コウシウ　とらはれる。又、とらはれたる人、即ち囚人。韓愈詩「早知省是自ー」

【拘執】コウシツ　めしとらへる。後漢書、包咸傳「遂見ー」ー十餘日」

【拘制】コウセイ　とらへて自由をさせぬ。後漢書、光武紀「ー不ー還」

【拘束】コウソク　○とらへつなぐ。＝拘繫。○官職に束縛せられて自由を得ず。北史「上知ー其不ー願ー」ー以ー禮發遣」

【拘俗】コウゾク　世俗にからまれなづむ。唐書、眞ーー之人哉」

【拘致】コウチ　とらへきたる、めしとりて來る。後漢書、虞詡傳「內以ーー防ー其邪計」＝拘引。

【拘泥】コウデイ　物事にかかはりなづむ。融通がきかぬ。程史「剪剪ーー、不ー得ー郎決」

【拘攣】コウレン　からみまきつく。杜甫詩「蕘草易ーー」

【拘牽】コウケン　とらへつなぐ。世の中のきづな。王禹偁詩「離ー知識足ー」

【拘窘】コウキン　かかはりつながる。釋惠洪詩「此生一寄耳、夢幻相ーー」＝拘束・束縛。

【拘文】コウブン　法律に拘泥する。嚴安、政論「俗人ーー之ー古、不ー建ー興制」

【拘攣】コウレン　てすり。古今注「悉爲ー扶老ーー」＝句闌。

【拘留】コウリウ　○とらへてとめおく。漢書、匈奴傳「單于亦遣ーー漢使、以相報復」＝勾留。○法律にて、罪人を拘引して、監獄所に留め置く。

【拘圍】コウイ　ひとや、牢獄。又、とらはれ。韓愈詩「守官類ーー」

【拘礙】コウガイ　禮儀にかかはりて變通の才なし。劉向文「ーー之人、不ー足ー與官ー事」

【拘攣】コウレン　○物事にかかはりひきつけられる。揚雄、大支賦「湯然肆ー志、不ーー一ー号」○手足のひきつけられて痛む病の名。

【拑】 クン　カン　鹽

○骨ぬきし持つ、檢束する。○はさむ。○つぐむ(緘束)＝鉗と通ず。

【拑口】ケンコウ　口をつぐむ。漢書、鼂錯傳「天下之士ーー、不ー敢復言ー矣」＝箝口「漢書、袁盎傳」

【拧】 レン　ケン　銑　靈

○ひきねぢる(引戻)○つく、持ち著く。

【拧抱】レンパウ　いだき持つ。淮南、精神「離ー天地ー、亦不ー與ー之ーー矣」

【拄】 チュ　遇　國　通音チュウ

○ささふ、ささへ(支)「支ー」「撐ー」○そしる(譏刺)○ふせぐ(距)○さす、旁より指す。○柱に通ず。

【拄頰】チュケウ　おとがひをささへる。戰國策「大冠若ー箕、脩劍ーー」

【拄頬】チュケウ　ほほづゑをつく。韓愈詩「人愁方ーー」

【拄笏】チュシャク　しゃくにてほほづゑをつく、手版を以て頰を拄へる。＝拄頰。詩「朝來ーー看ー四山」

【拄杖】チュジャウ　○杖をつく。魏略「乃就ー床ーー」＝扶杖。○轉じて杖をいふ。幻影傳「ーー何在、可ー擇ー之」＝拐杖。

【招】 ㊀ セウ　㊁ ケウ・ゲウ　蕭　篠

㊀まねく、手にて呼ぶ、手を以てするを、口を以てするを召。○招きて來らしむ「徵ー」「嘉ー」「ー賢」「ー牌」「ー諷」○もとめる(求)「ー賢」○ほだす(賈)しばる、ひきつなぐ(牽繫)孟、告子「又從而ー之」○あつち(埻)○まと(的)○舞の樂「徵ー」

「角ー」〇ー搖はぶらぶらとさまよふ貌。又、星の名。㊁あける(擧)周語「好盡言以ー人過」〇かかげる、かかげあげる(揭)莊、駢拇「有虞氏ー仁義以撓天下」

【招慰】セウヰ まねき來らしてなぐさめる。後漢書、班超傳「今可二遣ー使一、與共合レ力」‖招撫。

【招誘】セウイウ まねきいざなふ。晉書、江統傳「或ーー安撫、以爲二己用一」

【招引】セウイン まねく。北齊書、韓軌傳「韓軌字普明、有二俠氣一好レ酒豪縱、一ニー賓客一、一席之費、動至二萬錢一」

【招飲】セウイン まねきよせて酒をくむ。‖招宴。

【招隱詩】セウイン 左思、字は太沖の作、文選に出づ、天下の溷濁を思苦す、故に隱者を招導し、退きて仕へざらんことを欲するの意を述ぶ。

【招要】セウエウ 〇招きて來らしめる。趙冬曦「江外多二山水一、ーー步馬來」‖招邀。〇邀ムかへ求める。杜甫詩「ーー思禮玉、崇重力難レ勝」

【招搖】セウエウ 〇さまよふ貌。揭揺、甘泉賦「徘徊ーー」‖逍遙。〇ぶらぶらと動く貌。漢書、禮樂志「體ーー若二永望一」〇北斗の第七星。淮南、時則「ーー指レ寅」

【招邀】セウエウ 〇まねきむかへる、邀は迎、宴會などに招きよぶ。李白詩「滅二掃黃金壘一、ーニー青雲客一」‖招要。

【招延】セウエン まねきひく。漢書、梁孝王傳「ーニー四方豪傑一」‖招引。

【招降】セウカウ 敵をさとして降參をすすめる。

【招樓】セウカウ 吉を招き凶を禦ぐ。周禮「掌二以レ時ーー緡曦之事一、以除二疾疢一」

【招諫鼓】セウカン 臣下の諫言を求むる爲めに設くる投書箱。宋史、高揚傳「揚徒步詣二ーーー上書」

【招賢】セウケン さしまねく。荀、成相「呂尙ーー殷民懷」‖招致。

【招詐】セウサ わざはひをまねく。張說、獄箴「唐則ーレ、寬則納レ慢」

【招會】セウクワイ よびあつめる。論衡「待レ士下レ客、ーニー四方一」‖招集。

【招喚】セウクワン よぶ。册府元龜「令ニーー不レ得二輒傷害一」

【招賢】セウケン 賢人を招き求める。戰國策「燕昭王即レ位、卑レ身厚レ幣、以招二賢者一」

【招呼】セウコ まねきよぶ。蘇軾詩「ーニー明月一到二芳樽一」

【招魂】セウコン 〇死者のたましひをまねきかへす「儀禮、士喪禮、注」〇生者の精神を招き復す。史、屈原傳贊「余讀二離騷一天問ーー哀郢一、悲二其志一」

【招魂社】セウコンシヤ 國國家の事に殉死せし人の靈をまつる神社。今の靖國神社の舊名。

【招募】セウボ 死人にゆくゎんを使はせる牒。

【招刺】セウシ えらびとる。宋史、高宗紀「命ーニー三千人一賜二名必勝軍一」

【招集】セウシフ まねきあつめる。後漢書、馬援傳「ーニー發儁二魂二誘羌戎一」‖招會。

【招輯】セウシフ まねきあつめて安んぜしむる。宋書「ーニー流民一」‖招緝。

【招邵】セウシヤウ まねく、おとづれる。駱賓王詩「柳外狎ニーー一」

【招商局】セウシヤウキヨク 支那にて政府所轄の汽船の事を掌る役所、清朝の同治十一年より始まる。

【招呼】セウコ はづかしめをまねく。大戴禮「言有レ招レ禍、行有ーレ」

【招請】セウセイ 人を招待する。魏志、張範傳「備ーレ禮ーー」

【招召】セウセウ まねく。詩、邶風「招招舟子」疏「以レ手曰レ招、以レ口曰レ召」

【招招】セウセウ 手にてよぶ貌。前條を見よ。

【招待】セウタイ まねきてもてなす「ーー狀」‖招請。

【招提】セウダイ 寺をいふ。梵語、拓鬪提舍の轉訛、四方僧侶の集り住する處。僧史「後魏始光元年、創二立伽藍一、號二ーーー之堰一」‖拓提。

【招討使】セウタウシ 戰時中、歸順する者を招き、敵する者を討つ官。招レ降討レ叛の職「唐書、百官志」

【招數】セウスウ まねき來らしむ。史、孟嘗君傳「ーニー任俠養人一」‖招來。

【招帖】セウデフ 招請待狀。又、引札、廣告。

【招牌】セウパイ かんばん(看板)莊、胠篋「有虞氏招二仁義一以撓二天下一也」注「招猶三今人言ニーー一」

【招賓】セウヒン 賓客をまねく。林景熙、翼月堂賦「主人垂レ手レ、賓已在二四山之西一」

【招撫】セウブ 招きやすんずる。後漢書、四域傳「千餘人、屯二伊吾一、以ーニー之一」

【招聘】セウヘイ 禮を厚くしてまねく。晉書、武帝紀「上以レ時ーー」

【招辟】セウヘキ 官よりまねきめす。辟は召。禦覽文「前後ーー使二人曉諭一」

【招募】セウボ まねきつのる「又、其のつのられたる兵士。後漢書、光武紀「ーニー猛士一」‖召募。

【招來】セウライ 人をまねき來らしむ。史、大宛傳「大夏之屬、皆可ニーー而賓二外臣一」‖招致。

【招攬】セウラン まねきて其の心をひきよせる。陸機、辨亡論「長沙桓王、遺才命世、弱冠秀發、ーニー遺老「與レ之遊レ樂」

【招涼】セウリヤウ 〇すずしさをひく。拾遺記「燕昭王時、有二黑鮮珠一(中略)王嘗懷二此珠一當二隆暑一體自輕涼、號二銷暑ーー之珠一」〇顧の異名。

【拓】㊀セキ ㊁タク 陌 入

㊀ひろふ（拾）○をる（折）張衡賦「一若華而躑躅」㊁ひらく（斥開）ひろげる「開ー」○ひろし（廣）○うく（承）○おす（推）手にて物を推しつける。轉じて手にて碑を搨ㇾる義「宋ー」「明ー」＝搨。

【拓開】タクカイ　拓・闢・啓・披等の訓は開（門部四畫）の條を見よ。

【拓殖】タクショク　開墾と殖民と「ーー銀行」＝拓地殖民。

【拓提】タクダイ　寺をいふ。後人誤りて拓を招に作る。杜甫詩「更宿ーー境、開若秋風晩」

【拓地】タクチ　土地をひらく。一國の領土を擴張する。唐書、吐蕃傳贊「明皇有二欲徳一而ーレー太大」＝開地。

【拓本】タクホン　いしずり、古の碑帖を摹印せし本。法帖譜系「壯年ーー、猶有二典刑一」＝搨本。

【拓落】タクラク　○ふしあはせ（不遇）おちぶれる。揚雄、解嘲「何爲官之ーー也」＝落魄。○廣大なる貌（魏都賦）

【拙】セツ　屑

○つたなし、へた。巧の反對「迂ー」「愚ー」○かがむ（屈）○己の謙稱。＝愚。○己の物事に添へて謙辭とす「ー文」「ー妻」

【拙誌】セツイ　拙吟に同じ。

【拙レ指】セツスル　拙きを歷してあらはさず。世說、輕詆「徐常侍聘ㇾ齊、時魏收文學、北朝之秀、收錄二其文集一以示ㇾ徐、令ㇾ傳二之江左一。徐遠濟ㇾ江沈ㇾ之曰、晉爲二魏公一ーレー」

【守レ拙】シュセツ　つたなきを守りて己の分に安んずる。陶潛詩「開ㇾ荒南野際、ーレー守二園田一」

【拙劣】セツレツ　つたなくおろか。抱朴子「以二切磋之重言一爲ーー一」

【拙鳩】セツキュウ　はとをいふ。巢を營むに拙き故。禽經「拙者莫ㇾ如ㇾ鳩、巧者莫ㇾ如ㇾ鵲」＝斑鳩。

【拙吟】セツギン　つたなき詩歌。＝拙詠。

【拙宦】セツカン　仕宦の術に拙くして下位に在るをいふ。宋之問詩「以予慚二ーー一朝子遇二良媒一」

【拙計】セツケイ　つたなきはかりごと。晁補之詩「ーー安足ㇾ爲」＝拙策。

【拙荊】セツケイ　己の妻の謙稱。水滸傳、第六回「與二ーー一同來」荊はいばらの釵ㇾにて貧賤の義。＝荊妻・拙妻。

【拙業】セツギョウ　つたなき生業。史、貨殖傳「田農ーー也、賈樵小業也」

【拙工】セツコウ　つたなき職人、へたな大工。孟、盡心「大匠不ㇾ爲二ーー一改廢繩墨上」

【拙婦】セツフ　己の妻の謙稱。李白詩「ーー好ㇾ乘ㇾ駒」＝山妻・荊妻・拙荊。

【拙作】セツサク　つたなき出來、己の詩畫などを謙していふ。

【拙策】セツサク　つたなきはかりごと。＝拙計　拙謀。

【拙修】セツシュウ　道德は、天才劣れる者も久しく之を修むれば、自然に上達するをいふ。詩人玉屑「東坡詩云、貧家淨掃ㇾ地、賢女巧梳ㇾ頭、下士晩聞ㇾ道、剛以ㇾ拙自修」

【拙者】セツシャ　○才能のつたなく劣れる人。漢書、貨殖傳「ーー不ㇾ足」○圖己の謙稱。＝小生。

【拙手】セツシュ　へた。古詞「微物雖ㇾ輕、ーー所ㇾ作」

【拙誠】セツセイ　つたなけれともまごころあり。說苑、說叢「巧辭不ㇾ如二ーー一」

【拙僧】セツソウ　僧侶が自分をいふ謙稱。＝愚僧。

【拙速】セツソク　つたなけれどもはやし。孫子、作戰「兵聞二ーー一、未ㇾ覩二巧之久一也」

【拙訥】セツトツ　辯舌のつたなきをいふ。謝靈運詩「ーー謝二浮名一」

【拙澁】セツジュウ　巢つたなく忠弱し。何遜詩「ーー終難ㇾ化」

【拙筆】セツヒツ　○つたなきふで。東觀餘論「字無二錄額一、若ーー書」○粗末なふで。白孔六帖「李繁下ㇾ獄從ㇾ吏、求ーー一著二家傳一」○己の書きし文字の謙稱。

【拙謀】セツボウ　つたなきはかりごと。＝拙計。

【拙味】セツミ　つたなくおろか。陽雪詩「ーー雖ㇾ容ㇾ世」

【拙劣】セツレツ　つたなくおとる。白居易詩「ーー才何用」＝劣薄。

【拖】タ・ダ　歌　哿

ひく（曳）　或は施に作る

【拖舟】タシュウ　ふねをひく。漢書、嚴助傳「與ㇾ輸而論ㇾ績、ーレー而入ㇾ水」

【拖】タ

拕（前條）に同じ。

ひく。論、鄉黨「加二朝服一ーレ紳」

【拖曳】タエイ　ひく。魏志、注「犬不ㇾ能ㇾ行、復令二步人一ーー一」

【拖沙魚】ダサギョ　比目魚の異名（續雲錄）

【拖紫】タシ　むらさきの印綬をひく。高位に登る義。晉書、儒林傳、論「紆ㇾ青ーレ、服ㇾ冕乘ㇾ軒」

【拏】ダ・ナ　麻　馬

㊀通音ㇾ挐に通用す。拿は俗字

㊁つかむ（攫）つかみ合ふ。○ひく（牽引）○とらふ（捕）罪人を拘捕する。㊂ひきからまる（連引）漢書、嚴安傳「禍ーー而不解」○もむ（揉）

【拏攫】ダカク　つかみ合ふ。西京賦「頡虎升而ーー」

【拏捕】ダホ　とらへる。＝拿捕。

【拆】㊀タク　陌　㊁セキ　陌

㊀一に擇に作る

㊀ひらく（開）「開ー」○さく（裂）われる。易、解卦「百果草木皆甲ー」種子の殻皮がさけて芽ぐむ。○こぼつ、やぶる（毀）わかる（判）○とく（解）○上海語、ー梢は詐りて財を取る。○ー字は占卜の一種。二老堂雑志「謝石善ー字」字を分ちて占ふ、松を十八公、貨泉を白水眞人と呼ぶ類。王莽の時に劉字を卯金刀といひしに始まる。㊁うつ（擊）

同訓異語 拆・開・綻・辟・啓・發・披等の別は開（門部四畫）の條を見よ。

【拆落】かひこのすをわかつ。陸游詩「月戸哭蠶ー一時」

【拆裂】さく。張融、海賦「鼓怒則九裂ー一」（後漢書、五行志）

【抯】 ㊀タン ㊁ケツ 旱 屑

㊀はらふ（拂）○うつ（擊）○俗に借りて撻に通用す。㊁あぐ、あがる（擧）○かかぐ、揭に通ず。

【抯搖】あがる。楚辭、遠遊「意恣睢以ー一」（軒擧。

【抬】 チ 支

○うつ、むちうつ（擊）（答。○俗に音イ兩人以上にて共に物を擧ぐる、擡擧の擡と同用。

【抳】 ヂ デイ 薺 紙

○ゆびさす（指）（手指物）○とどむ（止）

【抽】 チゥ 尤

○ひく（引）引き出す。○ぬく（拔）抜き取る「ー矢」○のぞく（除）除き去る。詩、小雅「言ー其蓛」ばらのとげを除去する。○をさむ（收）○植物の芽を出すをいふ。束晳詩「木以秋客、草以春ー」○俗語、全部中に就きて若干を取る義。

同訓異語 抽・擢・挺・拔・摭・脫の別は擢（手部十四畫）の條を見よ。

【抽芽】ヌキ 草木のめをぬき出す。又、ぬきでたるめ。茶苑總錄「嫩葉ー一」

【抽黃對白】種種の色をとり合はす。四六文の對句を作るにいふ。柳宗元、乞巧文「——嚆哨飛走」

【抽劍】つるぎをぬく。⇒拔劍。

【抽矢】やをぬきとる。詩、鄭風、清「ー一以射」

【抽進】衆人の中よりぬきだして すすめのぼす。南史、後紀「ー一」

【抽象】心理學にて、個個別別の具體的觀念より共通の點をぬき出し、之を綜合して一の新らしき觀念とする心のはたらき。具體の對。

【抽象名詞】文法にて箇箇別別の具象より引き出したる性質をあらはす名詞、例へば美・惡・黑・白などの類。

【抽獎】衆中よりひきぬきてほめる。呂温文「皆未ン踰ン年、忽蒙ニー一」⇒超獎。

【抽貫】前條に同じ。

【抽出】ぬき出す、ひき出す。

【抽筍】たけのこが出る。歐陽修詩「新篁ー一」

【抽籤】○くじをひく、くじひき。○神佛を祈り籠を引きて吉凶を判斷する。幸蜀記「ー一得ニ逆ン天者殃四字ニ」

【抽擢】衆中よりぬき用ふる。⇒拔擢。

【抽斗】ひきだし、斗は枓でますの形せしものにいふ。⇒抽屜。

【抽頭】圖手數料。

【抽讀】多くの書物の中から或書をぬき取りてよむ。杜頭詩「架書ー一亂、庭果摘實稀」

【抽拔】衆中よりひきぬき用ふる。異志、陸遜傳「乞ニ普加ニ簡載ー一之恩ニ」⇒抽擢。

【抽烈】ひきさく。魏書、子柴傳「剣ニ刺支體ー一ニ心藏ニ烈ハ裂、藏ハ臟。

【抶】 チッ 質

むちうつ（答擊・撻）左、襄十七「ー其不勉者ニ」

【抵】 ㊀テイ ㊁シ 薺 紙

㊀おす（推）おしおとす（擠）○ふる（觸）觸れをかす。○さからふ（忤）○あつ、あたる（當）⇒觝。角ーは角觝。○いたる（至）漢書、禮樂志「ー冬降霜」○いたす（致）○おくる（歸）○よりたのむ（憑託）○なげうつ（擲）後漢書、禰衡傳「毀以ー地」○ふせぐ、こばむ（拒）排して相距ぐ。○大ーは大凡の義。史、酷吏傳「大ー盡詆以不道」⇒大概。㊁うつ（擊）漢書、朱博傳「箠ー一」⇒抵。

同訓異語 抵・中・丁・直・方・亨の別は中（一四三頁）の條を見よ。

○ふ抵・至・到・臻・詣・造・格・戾等の別は至（部首六畫）の條を見よ。

【抵抗】はりあふ、てむかふ「ー一力」

【抵牾】いましめををかす。漢書、匡衡傳「吏民鉤法ー一」

【抵牾】ふれさかふ。漢書、司馬遷

傳、賈「其多二疏略一或有二一一一一」‖抵觸。

【抵罪】ティザイ　罪の輕重にしたがひて相當の刑にあてる。史、高祖紀「傷レ人及盜一レ一」

【抵死】ティシ　死に至る。又、死罪に當てる。

【抵掌】ティショウ　たなごころをうつ。勢よく手をうちて話す。戰國趙策「一一而談、趙王大悅」抵一に作る。‖鼓掌。

【抵觸】ティショク　○ふれあたる、ふれをかす。周禮、封人、注「橦衝所二以令一不レ得レ一二人一」○兩事互に矛盾するをいふ。

【抵當】ティタウ　○ひきあて（擔保）しちぐさ。‖抵押。○法律にて一一價の目的物。

【抵突】ティトツ　つきあたる。後漢書、臧宮傳「內國愛二其一一一」‖唐突。

【抵破】ティハ　うちやぶる。後漢書、劉聖公傳「一一二一書案」

【抵排】ティハイ　おしのける、抵抗し排斥する。

【抵罔】ティバウ　さからひをかす、刑律を觸犯する義。漢書、禮樂志「習俗薄惡、民人一一」

【拈】デン　ネン　豐

○ひねる（撚）○つまむ「一香」

杜甫詩「舍西柔桑葉可一一」

【拈香】ネンカウ　香をつまみくゆらす。禪庵事苑「釋氏之作二佛事一、未レ嘗不レ以二一一一爲レ先」‖換香。

【拈華微笑】ネンクワミセウ　㊀釋迦、蓮華を拈りて衆に示しに、衆其の意を解せざりしが、迦葉破顏微笑せり、これ其の意を悟りしにて、以心傳心の妙處なり、よりて釋迦は之に佛教の眞理を授けたる故事。五燈會元「世尊在二靈山會上一、拈レ華示レ衆、是時衆皆寂然、惟迦葉尊者破顏微笑、世尊云、吾有二正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙法門一、不立文字、教外別傳、付二囑摩訶迦葉一」

【拈出】ネンシュツ　ひねり出す、謀計、又、字句を案出する。楊萬里詩「一一老謀二開二學宙一、本來清尙只雲泉」

【拜】ハイ　卦

○ながむ、おじぎする、體をかがめて敬意を表する「伏一」「起一」「迎一」「遙一」「謁一」○おじぎ。周禮、春官、太祝「太祝辨二九一一」○かがむ（屈）かがめ折る。詩、召南「勿翦勿一」○官を授ける。いただく、ありがたく受ける「一恩」○手紙又は談話の時などに敬意を表する爲めに添へる「一覩」「一啓」「一呈」

【拜位】ハイヰ　官を授けられる。易林「遯二於嘉國一、一一一遯レ時」

【拜揖】ハイイフ　兩手を上下し、又、兩手を推して胸につける禮。唐書、王綰傳「性簡放、不レ喜二一一一」

【拜謁】ハイエツ　つつしみてまみえる（史、貨殖傳）

【拜恩】ハイオン　めぐみをかたじけなくうける。北史、王晞傳「受二辭天朝一一二一私室一」

【拜賀】ハイガ　つつしみてよろこびを申す。通鑑、後梁均王紀「帥二羣臣一一一」

【拜額】ハイガク　お目にかかる。對面の敬語。‖拜眉・拜芝。

【拜跪】ハイキ　をがみてひざまづく。十六國春秋「留拜跪、而不レ感レ命、斯小臣之罪矣」

【拜金宗】ハイキンシウ　金錢をあがめ尊む主義。

【拜拱】ハイキョウ　兩手をこまぬきて禮を爲す。朱松詩「衰病靦二一一」

【拜具】ハイグ　つつしんでつぶさに申し陳べる。手紙の尾にかく語。‖敬具。

【拜火敎】ハイクワケウ　火を神としてをがむ宗敎、波斯のゾロアスター敎の類。

【拜官】ハイクワン　官に就く時、君の前に拜す、故に任官の義とす。夢溪筆談「唐制丞郎一レ、卽二龍門一謝、今三司副使已上一一、則拜二舜手階上一」

【拜觀】ハイクワン　觀るの敬語「賞物一一」

【拜迎】ハイゲイ　禮拜してむかへる。禮記「不二敢一一、而拜送一」

【拜啓】ハイケイ　つつしんで申し上げる。手紙の首にかく語、啓は陳述。‖拜白・無啓。

【拜見】ハイケン　○貴人にまみえる。史、封禪書「敬一一焉」○みることの敬稱「貴體一一」

【拜迓】ハイゲイ　拜顏に同じ。芝は芝眉、人の顏色をいふ敬稱。‖拜眉。

【拜賜】ハイシ　たまものをいただく。禮記「君賜二車馬一、乘以一一レ一」

【拜辭】ハイジ　○ことわるの敬語。謹しくじたいする。○わかれ去るの敬語。つつしんで御暇乞をする。

【拜章】ハイシャウ　官職を授けられし時に奉る御うけ書。南史、蕭子雲傳「自製一一、便有二文采一」

【拜借】ハイシャク　借るの敬語。

【拜手】ハイシュ　頭を手の邊まで下げる。公羊、宣六「趙盾逡巡北面、再拜稽首」注「頭至レ地曰二稽首一、頭至レ手、曰二一一一」‖拜首。

【拜受】ハイジュ　たまものをいただく。禮、玉藻「大夫親レ授レ士、士一一」‖拜戴。

【拜首】ハイシュ　拜して頭、手に至る。書、益稷「皐陶一一稽首颺言」

【拜授】ハイジュ　官をさづけあたへる。漢書、霍方進傳「卽二軍中一一一」

【拜趨】ハイスウ　拜してはしる。貴人の前に進み、又は其の家を訪ふにいふ。陸、鄒生詩「奉レ觴酌酒前一一」

【拜舞】ハイブ　立奉を賀する禮。清嘉錄

「立春日爲春朝、士庶交相慶賀、謂之ー一ー」

【拜誦】ハイ人の文書を讀むにいふ敬語。‖拜讀。

【拜謁】ハイつつしみてみことのりをうける。北齊書、宋世良傳「除二清河太守一、辭問甚高、齊天祿中、大赦、郡先無二一囚一、繫吏ー一而已」

【拜石丈人】ハイセキジヤウジン宋の米芾（元章）をいふ。石林燕語「米芾好二奇石一、知二無爲軍一、初入二州解一、見二立石頗奇一、喜曰、此足三以當二吾拜一、遂命取二袍笏一拜レ之、毎呼曰石丈、爲二詈者所一レ彈、時人呼爲二米顚一、曰ー一」

【拜戴】ハイつつしんでいただく。‖拜受。

【拜跽】ハイをがみいのる。宋史、列女傳「呂仲深女名二延子一、父得レ疾、女禱二香祝一天、請以レ身代二父弟細延一、亦相從ー一」

【拜擢】ハイ官にぬき用ひられる。後漢書、蔡邕傳「其未レ及者、亦復陽嘉皆見ニー一」

【拜答】ハイつつしみてこたへる。唐書「諫者ー一不レ罪」

【拜塵】ハイ石崇の故事より、貴人に阿ねり事ふるにいふ。晉書「石崇與二潘岳一諂二事賈謐一、欲レ成、君、每レ出、崇降二車路左一、望レ塵而拜」

【拜聽】ハイつつしみてきく。‖敬聽。

【拜除】ハイ官に任ず。前官を除きて新官に拜するをいふ。後漢書、第五倫傳「刺史太守以下ー二京師一」

【拜殿】ハイ神社の本殿の前面にある建物、參拜を行ふ所。

【拜冬】ハイ冬至の日に行ふ賀禮（清嘉錄）

【拜讀】ハイ讀むの敬語「貴翰ー一」‖拜誦。

【拜納】ハイつつしみてをさめる。戰國策「願ー二之於王一」

【拜年】ハイ新年拜賀の禮。經朝樂事「正月元旦、夙興盥漱（中略）姻友投レ刺、互拜謂二ー一」

【拜倪】ハイ首を垂れて禮をする、おじぎする。唐書、禮樂志「ー一伏興之節」

【拜伏】ハイをかみふす。北史、齊孝昭帝紀「唯泣ー一、竟無二所言一」

【拜復】ハイこたへるの敬語。つつしんでお答へ申す、手紙の用語。‖敬復。

【拜物教】ハイブツケウ庶物を神としてをがみまつる宗教。

【拜掬】ハイぬかづきて兩手をささげて受ける、恭しく受けとる。甘鑒詩「ーニ恩書二寵滿レ顏、馬蹄遙望二斗杓一證」‖拜受。

【拜命】ハイ○おほせをうけたまはる。李參詩「ーレ官皇猷」○官に任ぜられる（南史、歐陽顏傳）‖拜官。

【拜面】ハイ拜顏に同じ。‖拜眉。

【拜覽】ハイ見るの敬語。‖拜觀。

【拜領】ハイ○禮物を受ける。顏書纂要「ーニ人禮一曰ニーニ」○圖賞人よりのたまものをいただく。

【拜禮】ハイおじぎをする。又、其の敬禮。史、孔子世家「將二往ーニ」

【抛】ハウ 俗 拋は俗字

○なげうつ（擲）○すつ（棄）

【抛擲】ハウテキなげすてる。‖拋擲。

【抛車】ハウシヤ古、軍中にて投石の用に供へし車。康熙字典「軍中以レ機發レ石曰ニーー一」‖礮擊車。

【抛青春】ハウセイシユン酒の名。唐人酒に名づくるに青、春といふ。韓愈詩「百年未滿不レ得レ死、且可二勤買一ーー」

【抛擲】ハウテキなげうつ、なげやりにする。白居易詩「落下田園久ー一、吳中歌酒莫二謂違一」

【抛物線】ハウブツセン數學にて圓錐曲線の一、平面上の一定點と一定直線とより等距離の諸點を連ねたる曲線。物を斜に抛つ時、其の物が地球の引力に感じて曲り進く曲線。

【抔】ハウ ヒヤウ 庚

○罪をあばきただす、彈劾する。○しむ、せしむ。‖俾使。○したがふ（隨）

【抔勦】ハウセウ罪をしらべあぐ。劉克莊文「其ー一也、霜威之凌厲、其吹噓也、泰窓之發生」‖拂擊。

【抱】ハウ・ホウ 皓 號 ○ハウ 者 ○捂・捊に同じ。

㊀だく、いだく（懷）かかへる、兩手にてかこむ。○持ちまもる（持守）「ー一」「ー一義」○さしはさむ（挾）○もつ（持）とる（執）○むね、かんがへ「一負」むねにおもふ（胸懷）「懷ー一」○雲氣が日に向ふ。㊁すつ（棄）なげうつ。‖抛。○圖へだてる。㊂はひ入れる、家來イリにする。○ヘつやとひ入、家來。

同訓異義 抱・擁・懷○抱は手にてかかへ持つ義、抱子・合抱之木などと用ふ、懷抱と連用す、物に限らず事にもいふ。禮記「抱レ義而處」○擁はまはりへ兩手を引きまはす義、取り圍む義にも用ふ、擁衾は我が身のまはりへふすまを引きまはすをいふ。韓愈詩「公擁ー一旄圍馬不レ前」又抱と同じく、かかへる義にも用ふ。史記「帝方擁二戚姬一」○懷はふところへ入れる義、懷子は小兒をふところへ入れるなり。又、物を祕藏するにも用ふ。左傳「匹夫無レ罪、懷レ璧其罪」

【抱病】ハウビヤウ病にかかりゐる。朱熹詩「ーレー守二窮廬一」

【抱關】ハウクワン いだきかこむ「ーー攻擊」

＝包圍。

【抱一】ハウイツ　一をいだき守る。道をたもつ。老子「聖人ハ一ヲ爲二天下式一」一說、守約に同じ。一は少の極なり。

【抱合】ハウガフ　○だきあふ。＝抱圍。○化學にて異種類の物が物質上の變化なくして一つの物になる。

【抱義】ハウギ　正しき義理をいだきたもつ。禮記「ハレ一而處」

【抱玉】ハウギョク　○たまをかかへもつ。劉向、新序「荊王立、和抱二其玉一、晝夜哭」○轉じて心に智德をいだくに喩ふ。後漢書「ハレ一乘レ龍」

【抱懷】ハウクワイ　心に思ふ。又、こころざし、かんがへ、抱負。＝懷抱。

【抱關擊柝】ハウクワンゲキタク　關は門の閂をするかんぬき、門番と柝は木を打ちて夜を警むる者と。其に位ひくき役。荀、榮辱「——、而不二以爲一レ辱」孟、萬章「——者、皆有二常職一」

【抱月】ハウゲツ　月をいだく。夏侯湛、贈婦「朝春挺レ艷、夕霞ハレ一」

【抱膝】ハウシツ　ひざをかかへる。白居易詩「郎歸騎竹逢二冬至一、一醉前抱レ膝」

【抱節君】ハウセツクン　竹の異名。蘇軾の詩に見ゆ。

【抱素】ハウソ　飾らざるきぢを保つ。漢書「飛民反レ本、ハレ一撲レ樸」＝抱樸。

【抱住】ハウヂウ　住は止。だきとめる。仕學大乘「妻蔡氏ハレ一之」

【抱朴子】ハウボクシ　八卷、晉の葛洪撰す、內篇は神仙修煉の事を論じ、外篇は時世の得失、人事の是非を論ず。

【抱冰】ハウヒョウ　自ら刻苦勉厲する義。吳越春秋「日臥則攻レ之以レ襲、足寒則流レ之以レ水、冬常ハレ一、夏還握レ火」

【抱負】ハウフ　物をいだくと、おふと。後漢書、儒林傳序「四方學士、莫レ不下ハレ一壎篪、雲會京師上」轉じて心にいだくかんがへ。

【抱腹】ハウフク　捧腹の誤。

【抱樸】ハウボク　其の本來の眞性を守りて物欲に煩はされざる義。老子「見レ素ハレ一、少レ私寡レ欲」＝抱素。

【抱甕】ハウヨウ　だきかかへてそだてる。管子「傅太后ハレ一之」

【抱末】ハウマツ　すきをもつ。陸遊詩「ハレ一新湖荇、燒レ餘古廟塔」

【拍】ハク　ヒヤク　陌

○うつ（拊搏）たたく、手のひらを打ち合せて聲を出す「一手」○樂曲の節ッ「舞ハレ一」「胡笳十八ハレ一」○時に同じ。周禮「饋食之官、其實豚ハレ一」○一說は競賣ヒ

【拍掌】ハクシャウ　てのひらをうつ。蔡琰悲詩「笳ハレ一悲鳴」

【拍手】ハクシュ　てをうつ。晉書、藝術傳「我昨夢舍中馬舞數十人向レ馬ハレ一、此何祥也」＝鼓掌。

【拍手喝采】ハクシュカッサイ　てをうちてほめそやす。

【拍刀】ハクタウ　○もはの刀（通鑑小品）○並だ長き佩刀（大雲山房雜記）

【拍賣】ハクバイ　せりうり。＝圍競賣。

【拍拍】ハクハク　ばたばたとうつ貌。鳥の羽音などにいふ。韓愈詩「青泥掩二兩翅一ハレ一不レ得レ離」

【拍板】ハクバン　拍子を取る爲め打ち鳴らす板、堅木三片を用ひ、其の二を束ね、一片を以て之を拍ち、以て樂を節するもの（野記）元史、禮樂志「ハレ一制以レ木爲レ板、以レ繩聯レ之」

【拍髀】ハクヒ　○股をうちたたく。後漢書「ハレ一仰レ天而笑」○佩刀の短きもの（王晫、兵仗記）

【拍浮】ハクフ　水をおよぐ。樂善錄「少年時三其善ハレ一、解レ衣趁レ水」＝浮拍・泅水。

【拔】

㊀バツ　㊁バツ　㊂ハイ

入　易　陌

俗字　拔は

㊀ぬく（抽）引きぬきて取る。韓愈、送二溫處士序一「朝取二人一ハレ一其尤一」ぬきんづ（擢）「ハレ一」○うつす（移）易、乾卦「確乎其不可ハレ一」○はなる（離）たつ（絕）史、孝武紀「龍騫ハレ一」㊁めぐる（回）○とし、はやし（疾）○にはか（猝）○ひとりだつ（特立）○やはず（矢末）○のぞく（除）史、淮陰侯傳「ハレ一趙幟」○城を攻め落す。攻めて之を擧ぐ「攻ハレ一」○やどる（舍止）＝茇。㊂木が柯と葉とを生ずる。

【拔河】バツカ　綱引きの遊戲。荊楚歲時記「中宗幸二梨園一命二侍臣一爲二ハレ一之戲一、以二大麻繩兩頭一繫二十餘小索一、每索數人執レ之以拽、力弱爲レ輸」

【拔解】バツカイ　官吏の無試檢にて採用せらるる義。隨園隨筆「外府不レ試而貢者、曰ハレ一、見二國史補一、大抵即免解也」

【拔角股距】バツカクコキョ　距は雞のけづめ、角は獸の角、反賊の利器を奪ひ取るに喩ふ。韓愈詩「或拔二其角一、或脫二其距一、長驅洋洋、無有二顧慮一」

【拔起】バツキ　にはかにおこる。拔は猝。漢書、陳項傳「ハレ一隴畝之中一」

【拔距】バツキョ　人をぬき取る遊戲、距は拒、防禦を除して捕へる義。漢書、甘延壽傳「投石ハレ一、絕二于等倫一」

【拔萃】バツスイ　羣衆中よりぬき出でてまさる。梁書、劉顯傳「聰明特達、出

レ類ーレー」‖冠軍・超羣・拔萃。
【拔劍】ケツケン つるぎをぬく。呂覽「要離中江ーレー、以刺二慶忌一」‖拔刀。
【拔山蓋世】ガイセイ 勇壯なる氣象を形容する。史、項羽紀「項王乃悲歌慷慨、自爲レ歌曰、力拔レ山兮氣蓋レ世、時不レ利兮騅不レ逝兮、騅不レ逝兮、可二奈何一、虞兮虞兮奈レ若何」
【拔識】バツシキ 衆人中よりみとめしる。子華子「ーニ俊髦一」
【拔進】バツシン 衆人中よりぬきすすめる。漢書、周二紹私路一ーニ英儁一」
【拔舍】バツシャ のじゅく。野宿。左、僖十五「梁饑二晉侯一以糴、大夫反首ーレ従レ之」注「反首、亂髮下垂也、拔、草也、舍、止也」
【拔擢】バツテキ ひきあげて官をさづける。曹植文「親二陛下之所一ーニ」
【拔出】バツシュツ ぬきでる。又、衆中よりえりぬく。
【拔萃】バツスイ 多くの衆まれる中より特にぬきんでる、拔は特起、萃は聚。孟、公孫丑「出二於其類一、拔二乎其萃一」‖出羣。
【拔遢】バツタツ ぬきえらぶ。唐書、陸贄傳「勞二神于一ーニ、端二拱于委任一」
【拔俗】バツゾク 俗人の上にぬき出る。後漢書、仲長統傳「至人能變、達士一レー」‖超俗。
【拔刀】バツトウ 刀をぬく。又、ぬきみ。
【拔擢】バツテキ 衆中よりぬき用ふる。漢書、孔光傳「今復一ーニ、備二內朝臣一」
【拔錨】バツビョウ いかりをあげて船出す。‖解纜・開帆。
【拔本塞原】バツポンソクゲン ねもとをぬく、根源にさかのぼりて正しく處置する。原は源。左、昭、九「伯父若裂レ冠毀レ冕、——」
【拔來】バツライ 疾くに來る。禮、少儀「毋二拔來一ーニ」

【抹】 バツ 曷 通音 マツ

○なつ(摩)○ぬる「塗抹」なする、亂れぬるを塗といひ、長く線を引きてけすを一といふ「塗ー」「一ー」「濃ー」杜陽雜編「卽濃筆一之」○けす、はらふ(掃滅)○末に通ず、こな「ー茶」「ー香」
【抹香】マッコウ ○粉末にせしから。‖末香。○國しきみの葉と皮とを乾かして細末にせしもの。○からをたく。‖燒香・拈香。
【抹殺】マッサツ ○ぬりけす。釋名「塗塗曰二ーニー一」○消して無くする。漢書、谷永傳「一ニ災異一」‖抹摋。
【抹摋】マッサツ けす、はらふ。韓愈、孟東野墓誌「僅其大氣二於酔一而與レ世一ーレー」‖抹殺。
【抹摋】マッサツ すりつける。
【抹茶】マッチャ ひきちゃ、石臼にてひきて細末にせし茶。
【抹滅】マツメツ ぬりけす。
【拔冊】バツサツ かんの蔵を開く。心をうちあける。魏志「盛二知己一而一ーニ願一、狥二辭名一而立レ節」‖披二腹心一。
【拔擢】バツテキ 拔擧に同じ。
【拔摘】バツテキ 胸襟をひらく、心をうちあける。陸機、辯亡論「一ーレー遠レ己」‖拔擢。
【拔荒】バツコウ あれ地をひらく。太平廣記「一ーレー立レ舍、便開二経營之路一」
【拔卷】バツカン 書物をひらき見る。唐太宗詩「一ーレー覽二前經一、撫レ躬愛二既往一」
【拔經】バツケイ 聖人の經書を開き見る。顧雲文「一ーレー開レ史、無レ忘二子光陰一」
【拔扶】バツフ ○ひらきあらぐる、かきわける。孫紘詩「一ニ混沙一取二細碎一」○隱れたる人の祕密をあばく。漢書、薛宣傳「一ニ其閨門一」
【拔見】バツケン 開き見る。太平廣記、劉根「發二事上一ーレー」
【拔檢】バツケン 書物などをひらきしらべる。北史「一ニ一書史一」
【拔編】バツヘン 墨染の僧衣をきる、初めて僧になる。高啓詩「一ー別二家人一」
【拔鍼】バツシン はばり、外科醫療に用ふる平たくして刃のつきし針。‖拔針。
【拔針形】バツシンケイ 細長くして尖りし葉の形の稱、柳・桃等の葉の類。‖拔鍼形。
【拔絹】バツケン くるひはしいまま。又、さけやぶれる貌。北齊書、王晞傳「萬一ーレー、求レ退無レ地」‖放猖。

【拌】 ㊀ ハン ㊁ バン 早 寒 ハン 翰

㊀すつ(捐棄)なげうつ(揮棄)俗に誤りて捋を用ふ。㊁わかつ(分析・割)「一ー鮮」‖制。○わる(割)○俗に調和する義、かきまぜる。
【拌鮮】ハンセン はまぐりをわりて珠を取る。史、鄒陽傳「錯石レ一ー、傳賢二于市一、聖人得レ之、乃爲二大寶一」

【披】 ㊀ ヒ ㊁ ヒ 紙 支

㊀ひらく(開・發)史、五帝紀「黃帝一山通レ道」ひろげる、うちあける。漢書、鄒陽傳「一心腹見二情素一」○わかつ、分けてやる。左、昭五「一其邑一」わかる(分析)○きる、衣服を著る(被)○なびく(靡)○一ーは長き貌。又、解け亂るる貌。㊁さく(裂)史、范雎傳「木實繁者一ー其枝一」○一靡はふるひおそれる。又、ばらばらになる。
【披靡】ヒビ 披・開・闢・辟・啓・發等の別は開(門部四畫)の條を見よ。
【披閱】ヒエツ ひらきけみす。唐書、段成式傳「勝閱書籍、一ー晉邁一」‖披覽。
【披誦】ヒショウ 國詩歌の會にて其の作りし詩歌を開きて讀みあげる。

【披撥】ヒハツ　ひらきはらふ。草莽を開き國を平げる。劉禹錫、劉禹錫碑銘「草武皇帝、一一經營凡十四年」

【披覽】ヒラン　まどころをうちあける。草應物詩「一レ一語二玉卮一」＝披肝。

【披剃】ヒテイ　僧衣を衣、頭髪を剃り落す。初めて僧となる。梁陰比事「一一髮年」＝披緇剃髮。

【披展】ヒテン　ひらきのべる。練嗣文「早擬二芳紙一來レ請二一一」

【披讀】ヒトク　ひらきよむ。南史、張纘傳「讀後一一、皆不レ輟レ手」

【披拔】ヒバツ　ながき貌。斜向、丸數「服二雲衣之一一」＝被披。

【披離】ヒリ　○草木が風に吹かれて散り亂れる貌。司馬相如賦「旌旗之一一、吐レ芳揚レ烈」○ひらきなびく、靈ひ伏す貌。史、項羽紀「羽大呼驅下、漢軍皆一一」

【披服】ヒフク　きものをきる。又、著物。北史、李公緒傳「露髻一一、略無二少長之禮一」＝被服。

【披拂】ヒフツ　枝葉が風に動きて分れる。博異志「綠衣一一綺羞盤、淡染羅脂一朶輕」韓愈詩「秋風一一一」

【披瀝】ヒレキ　ちゃうめんをひらく。北史「或忘二其年名一者、一レ一以誨レ之」

【披麻】ヒマ　繪畫の皴法の名、麻の葉を披きたる如き石の皴ニ南宗畫家皆之を用ふ。

【披覽】ヒラン　ひらき見る。北史、周明帝紀「性好二典籍一、一一聖賢餘論一」＝披見。

【披離】ヒリ　○ばらばらにひきはなれる。宋玉、風賦「至二其將一衰也、被服一一」○枝葉の散り亂れる貌。吳均詩「細葉能一一」

【披瀝】ヒレキ　心の中を少しも隱さずうちあける「肝膽を一一す」上官儀、請二致仕一表「一一丹懇、誠非二矯飾一」

【披露】ヒロ　○ひらきあらはす。後漢書、郎顗傳「一一肝膽」○國ひろく人に發表する、ひろめる。又、ひろめ。

【拊】

㊀フ　㊁フ　虞　㊂フ　虞

㊀なつ、なでやすんずる「慰一」云、宣十二一一而勉之」＝撫。○うつ（擊・拍）かるくたたく「一心」「一石」○にぎり（握）○つか、つまみ、刀の柄。○樂器、草を以てつくり、中に穗を入れる、形鼓の如し。㊁つく（附著）手を物につける。㊂俞一は人名、黃帝の時の名醫。

同訓異字　拊・打・撲・拍・征・討・擊等の別は征（彳部五畫）の條を見よ。

【拊征】フセイ　つけ加へる。＝附益。

【拊絃】フゲン　琴をしらべる。秦賦「一一安歌、新聲代起」

【拊循】フジュン　なでやすんずる。史、司馬遷傳「身自一一之」＝撫循・慰撫。

【拊搏】フハク　擊ちならす。禮記「一一玉磬」

【拊膺】フヨウ　○ももをうつ。勇み奮ふ貌。後漢書、陽球傳「一一發レ憤」○ももをうちて喜び勇む貌。莊、在宥「鴻蒙一一而雀躍不レ輟」

【拂】

㊀フツ　物　㊁ヒツ　質　一番

㊀はらふ、はらひ（除）「除一」○さる（去）はらひ去る。曲禮「進二几杖一者一之」○ぬぐふ（拭）「拭一」○たつ（絕）○夜がさっぱりと明け放れる「一曉」○ためる（矯）○さかふ（逆）たがふ（違）もとる（戻）そむく（背）大學「一人之性」○斜にかすめて過ぐる「春風一檻」○蠅などを追ひはらふ具。一子（ホッス）㊁たすく（輔）「一士」＝弼。○かぜそよぐ貌。○國ハラフ代價を渡す「支一」災厄をはらひ除く「厄一」又追放する「追一（ハラヒ）」

同訓異字　拂・掃・撥・攘・祓・祓除・撥の別は掃（手部八畫）の條を見よ。

【拂曉】フツギョウ　掃子（ホッス）をいふ。古、麈尾を用ひて作りし故。

【拂拭】フツショク　○けがれをはらひ去るふきさうぢをする。南史、殷景仁傳「便一一衣冠」○君主の恩遇を蒙る義。器物を取りて用ひんとする時は、必ず先づ其の塵埃を去るが故。李白詩「一朝君王重一一」

【拂曙】フツショ　よのあけがた。張說詩「一一聽清笳、披レ雲覩二綠岑一」＝拂曉。

【拂旦】フツタン　よのあけがた。沈佺期詩「一一雞鳴偏衆陣」＝拂曉。

【拂底】フツテイ　國いれものの底をはらふ義。轉じて甚だ少く、乏しき義。

【拂撒】フツサツ　はらひすてる。南部賦「一一殘腥」

【拂天】フツテン　そらを掃ふ。天を摩するほどの甚だ高き形容にいふ。王粲、三輔論「建一一之旌、鳴二振地之鼓一」

【拂面】フツメン　かぼをはらふ。楚辭「長歎一レ一、善窗一客只」只は助字。孟、告子「入則無二法家一一、出則無二敵國外患一者、國恆亡」

【拂拂】フツフツ　風うごく貌。李賀詩「曉風何一一、北斗光闌干」

【拂レ衣】フツイ　奮ひ起つ狀。左傳「一一從レ之」

【拂去】フツキョ　はらひさる、掃除する。曲禮、疏「一一塵埃一也」

【拂曉】フツギョウ　よのあけがた。＝拂旦・拂曙。

【拂士】フツシ　君主を輔弼する賢士。

【拂戾】フツレイ もとる、さかふ（馬融、長笛賦）＝乖戾・背戾・悖戾。
【拂子】フッス はぐまの長毛を束ねて、柄を附けたる佛具。比丘、蚊蝱を患ふ、佛、一一を作ることをゆるさる（釋氏要覽）＝麈尾ヒッ・拂塵。

【拗】（一）ヘッ 屋 （二）ヒ 薺

（一）ねぢる（捩）○うちたふす（擊仆）（二）うつ、批に通ず。

【拚】（一）ヘン （二）ヘン・ホン 問 元 阮 （三）フン

（一）うつ、てをうつ（拊手）＝抃。○まふ（手舞貌）（二）ひらがへる、ひらひらと飛ぶ。ひるがへす。＝翻翻。（三）はらふ、塵を掃ふ。ちりとり「一箕」

【拚箕】フンキ ちりとり。＝糞箕。
【拚飛】ヘンヒ ひるがへりとぶ。詩、周頌「一一維鳥」＝翻飛。

【拐】ヘイ 梗 或は柄に作る

もつ（持）とる、秉に通ず。

【拂】フ 物 佛に通ず

○さぐりもつ（捫持）○しきる（布散）「一徧」○のぶ（舒）

【拇】ボウ・モ 有 通音 慶 ボ・モ

○おほゆび、おやゆび（大指・將指）○特に足の大指にいふ。莊、駢拇「駢一枝指」

【拇印】ボウイン つめばん、つめいん。おやゆびのさきを印章に代用しておしたるもの。

【拇指】ボシ おやゆび。南方草木狀「甘蕉有三三子一大如二一一一一」＝巨指・擘指。

【拇陣】ボチン 拳をうつ。＝拇戰・搳拳。

【拉】ラフ 合 促音ラッ 揖に同じ

○くじく、ひしぐ（摧・折）「摧一」○やぶる（敗）○まねく（招）人を邀へて同行する、ひきつれて行く。○風の聲。○一薩は前藏の都、達賴喇嘛の居所。

【拉朽】ラフキウ くちたるものをくだく、物事の容易なるに喩ふ。晉書「將軍之舉二武昌一若レ摧一朽一」

【拉脅】ラフケフ わきばらをくじく。漢書「范雎一一折二脇於魏一」＝折脅。

【拉枯】ラフコラク 枯木をおる、事の易きに喩ふ。晉書「設行面前、猶レ一一耳」＝拉朽。

【拉殺】ラフサツ 手にてひしぎころす。左、桓十八、注「拉二公幹一而殺レ之」

【拉丁】ラテン 種族の名。＝臘丁・羅甸。

【拉丁語】ラテンゴ 古、羅馬の盛時、拉丁民族の方言、今各國學術上に之を通用す。

六 畫

【按】アン 寒 諫

○おさへる（抑）○くだす（下）手にて抑へて下らしめる「抑一」○よる（據）○とどむ（止）ひきとめる、抑止する。史、周紀「王一兵册一出」○ひかふ（捺）○あぐ（舉）○なでる（撫）「一劍」もみさする「一摩」○しらべる（巡察・考驗・糾問）「收一」「考一」「巡一」○かんがへる、通じて案に作る。

【按察】アンサツ 書を講說せんとする前に、講義の練習をなす。續通鑑綱目「當二講夕前一一一其處一」

【按據】アンキョ 其の地におちつかせる。史、自起傳「趙軍二長平一以一一上寫民一」

【按絃】アンゲン 琴の絃を撫でる、琴を彈く。宋書、周朗傳「一一拭徽」

【按劍】アンケン かたなのつかに手をかけておさへる。史、平原君傳「毛遂一レ一歷階而上」

【按驗】アンケン 調べて證據だてる。

【按獄】アンゴク 按治に同じ。

【按殺】アンサツ 罪をしらべてころす。吳志、潘濬傳「沙羨長職掾不レ修、濬一一一之「一郡震竦」

【按察】アンサツ しらべ考へる。後漢書、百官志「一一奸宄」

【按察使】アンサツシ ○地方の政治風紀等をみまはり調べる役人。唐代に始まる。○（日）同上の事をつかさどる古の官名「一一府」

【按針】アンシン 磁石の針を按じかんがへて、船の進路を定むるもの、水先案内。

【按司】アンス 維新前、琉球にて王子に次ぐる高官。

【按治】アンチ 罪をしらべをきむ。唐書、兵志「下二御史一一一」

【按排】アンパイ ○よきほどに物の順序を定める。○料理のかげん。＝調排。

【按摩】アンマ たづなをひかへとめる。史、絳侯世家「天子乃一レ一徐行」

【按腹】アンフク はらをなでさする、あんま。

【按問】アンモン 罪をしらべたづねる。宋史、王欽若傳「就レ第一一、欽若惶恐伏レ罪」

【按分比例】アンブンヒレイ 或數を種種の割合に比例して分つ算法。

【按兵】アンペイ 兵をとどめて發せず。

字解參看。

【按摩】アンマ あんまとり。春秋繁露「有二一一法一、按者以レ手捏二捺病處一也、謂者按二徙之一也」孟、梁惠王、趙注

「一一折二手節一解二體枝一也」
【按脈】アンミャク　血液の循環を診察する。素問「善診者、察レ色一レ一」
【按抑】アンヨク　おさへる。蘇軾詩「至平無二一一一」＝抑按。
【按曆】アンレキ　こよみをしらべる。後漢書、律曆志「一レ一而候レ之」＝考曆。

【拽】エツ　エイ　厲　本、掣に作る

ひく（曳・引・拖）地をひきずり行く。
【拽身】エイシン　身をひく。朱子語類「康節凡事縄墨レ一レ便一レ一退」

【捐】

捐（手部七畫）の俗字。

【挍】カウ　校に同じ

○くらぶ（比・角）彼と此とをくらべる。○はかる（計・量・度）数をはかる。漢書、賈捐之傳「貴朽不可」一」○むくゆ（報）論、泰伯「犯而不」一」○かんがふ（撿・考）學者の徳行道藝などの優劣をはかり考へる。禮、學記「中年考一」正字通「明末、熹宗ノ諱ヲ避ケテ、校省シテ挍ニ作ル」
同訓異義　挍・計・較・圖・量・度・稱・測・料・忖等の別は計（言部二畫）の條を見よ。

【拷】カウ　コウ　陷　通音　ガウ

○かすむ（掠）○うつ（打）罪を白狀さす爲めに打つ。
【拷掠】カウリャク　拷問に同じ。
【拷問】ガウモン　苦めてきびしく罪をしらべる。＝糾問・按問。
【拷掠】カウリャク　○かすめとる。＝奪略。○うちてしらべる。＝榜掠。

【挌】㊀カク　㊁カク　藥　陌

㊀うつ（撃）格に通ず。魏志、任城王傳「手一猛獣」○たたかふ（鬪）○とどむ（止）○あぐ（舉）㊁捉一はひく（牽引）
【挌殺】カクサツ　うちころす。後漢書、董宣傳「叱レ奴下レ車、四一二之」
【挌鬪】カクトウ　つかみあふ、くみうちする。唐書、常袞傳「與二軍人一一一」＝搏鬪。

【拮】㊀キツ　㊁カツ　質　陌　ケツ　屑

㊀はたらく、手と口と共にはたらく。○とる、もつ（掲持）㊁する（轢）○せまる（逼）戰國策「句踐終一而殺之」
【拮据】キッキョ　手と口と共に作す狼、いそがしく働く形容。詩、豳風「予手一一」

【拱】㊀キョウ　㊁キョウ　腫　或は省して　宋　共に作る

㊀こまぬく（斂手）兩手の指をくみ合せて敬禮する。論、微子「子路一而立」○とる（執）兩手で合せ持つ。又、それ程の大さ。左、僖三二「椑棺七寸、一木之一矣」○大いなる雙手に通ず。㊁をさむ。○こまぬく。
【拱把】キョウハ　次條に同じ。把は握。
【拱揖】キョウユウ　兩手をこまぬきてうやうやしくする。揖は手を胸に著けて敬禮する。宋史、呂端傳「端然一一」＝拱抱。
【拱辰】キョウシン　四方の民が天子の徳化に歸する義。論、爲政「子曰、爲レ政以レ德、譬如二北辰居二其所一而衆星共一之」に本づく、共・拱通ず。宋史、式傳「一一之志」＝拱極。
【拱手】キョウシュ　○兩手の指を合せてこまぬく、人を敬ふ禮。曲禮「遭二先生於道一趨而進、正立一レ一」○手を組みて何事をもせず。後漢書、公孫述傳「天水隴西、一レ一自服」
【拱樹】キョウジュ　兩手もて圍む程の大きの木。陳子昂文「宿草滋蔓、一一荒涼」
【拱鼠】キョウソ　鼠の一種、人を見ればこまぬき立つが如くするによりて名づく。關尹子「即二一一一立レ禮」＝禮鼠。
【拱把】キョウハ　拱は兩手にて圍む、把は片手にて握る。孟、告子「一一之桐梓、人苟欲レ生レ之、皆知下所二以養一之者上」
【拱璧】キョウヘキ　大いなる玉。左、襄二八「與二我其一一一」＝珙璧。

【挈】キョウ　キョク　屑　通

てかせ（兩手共に一木）周禮、秋官「上罪梏一而桎」

【挂】㊀クワイ・ケ　㊁ケイ　卦　通音　ケイ

㊀かく、かかる（掛・懸）ひっかける「一一冠」「懸一」○かぎる（限）○さまたげる（礙）＝罣。㊁わかつ（別）分ちて明かにする。莊、漁父「一功名」一解にとる（鉤取）
同訓異義　挂・掛・係・懸・繋等の別は係（人部七畫）の條を見よ。
【挂錫】ケイシャク　錫杖をかく、僧の一處に留まるにいふ。釋氏要覽「僧止所レ住處、名一一一」僧の遊行を飛錫といふの對。
【挂漏】クワイロウ　もれる、挂は登記、此を記して彼を漏らす義。周伯琦詩「紀勝猶一一」
【挂冕】クワイベン　かんむりをかく、官を退くにいふ。韓鴻勳、與レ人書「東都有二一レ一之臣一」＝挂冠。
【挂衣】ケイイ　みの、蓑。江爲詩「春雨隔二

ー一」＝雨衣。

【挂冠】クヮイ　かんむりをかく、官を退くにいふ。後漢書、逸萌傳「前謂二次人一曰、三綱絕矣、不レ去將レ及レ人、卽解レ冠挂二東都城門一、將二家屬一浮レ海、客二於遼東一」＝解冠。

【挂齒】クヮイ　歯牙にかける。史記「何足レ挂二牙齒間一」論ずるに足らざる義。

【挂綬】クヮイ　官の印の紐を懸く、官を退くにいふ。元稹詩「陶君三十七、一レー出二都門一」＝挂冠。

【挂席】クヮイ　むしろの帆を揚げる。謝靈運詩「一ー拾二海月一」

【挂帆】クヮイ　ほをあぐ。杜甫詩「一レー遠色外、驚浪謁二吳楚一」＝挂席。

【挂龍雨】クヮイリョウ　暴雨の旋風ツムジを帶ぶるもの。洪覺範詩「已收一婆來一」會合する。＝恬。〇もとどり、髻に通ず。

【括】クヮツ　㊀

〇くくる「包ー」むすぶ(結)しめくくる(約束)〇ひきくるめる。ひとまとめにする。賈誼、過秦論「發ー四海一」天下を統一する。〇とづ(閉)〇いたる(至)詩、王風「日之夕矣、牛羊下ー」〇そりしまる(檢)しらべる。〇たづねきはめる(根刷)〇はず(矢末)＝筈。〇あふ(會)あつまる。詩、小雅「德音

【括香】クヮツカウ　括春を見よ。

【括結】クヮツケツ　すべくくる。易繫「一ー吾閉、賢人乃隱」

【括弧】クヮツコ　文章又は數學に用ふる符號。(　)〔　〕｛　｝「　」『　』の類。

【括春】クヮツシュン　とばりにて花を護る義。玉燭寶典「隋宗室申花開、則以二重頂帳一蒙二薇欄檻一、謂二惜春御史一掌レ之、號曰二一一一一、雲仙雜記、作二括香一」

【括囊】クヮツナウ　嚢の口をとづる。轉じて口を閉ぢて言はず。易、坤卦「六四ー一、无レ咎无レ譽」

【括約】クヮツヤク　しめくくる。

【括約筋】クヮツヤクキン　生理學にて環狀の筋の名、兩種の纖維あり、一は寛放の用を爲し、一は收束の用を爲す、膀胱の口、肛門等にあるもの。

【挈】㊀ケツ　㊁ケイ　㊀㊁屑

㊀ひっさげる(提)「扶ー」ー壺」禮、王制「班白者、不二提一」かけもつ(懸持)〇ととのふ(修整)〇手をひきてたすける(相扶持)「左提右ー」㊁かく(缺)〇たつ(絕)〇わりふ、契に通ず。〇板に書したる文書。

【挈起】ケツキ　手にて持ちあげる。

【挈瓶智】ケツヘイチ　ひっさげる瓶に喜れる位の智慧、智の小なるに喩ふ。左、昭七「雖レ有二挈瓶之智一、守不レ假レ器」

【拳】㊀ケン　㊁クン　㊂クン　阮元先

㊀こぶし、にぎりこぶし、五指を屈して握り固めしもの「空ー」「握ー」「揮ー」〇こぶしをにぎる。漢書、鉤弋倢伃傳「兩手皆ー」〇かがむ(屈)〇ーーはうれふ(憂)又まごころある貌。又、ねんごろ(懇懃)又いとをしむ(愛)又うやうやし(恭)又ささげもつ貌。〇やはら、武技の一「一法」武備志「一者卽古之手搏也」㊁ちから(力)詩、小雅「無ー無勇」㊂ゆみ。＝拳。〇關ン手指を種種の形に動かして勝負を決する遊戲。

【拳ン拳】ケンケン　こぶしをふるふ。王延壽、夢賦「揮ン手一ー、留發若舒」＝揮拳。

【揮ン拳】クワンケン　前條に同じ。唐詩「歐陽詢書、若二草隸結體、雲開電發一者二金剛之瞋目、力士之一ー」

【拳曲】ケンキョク　かがまりて拳ケンの如し。莊子「其小枝ー一、而不レ中二規矩一」

【拳拳】ケンケン　〇さげもつ(奉持)貌。中庸「得二一善一則ー一服膺、而弗レ失レ之矣」一解、まごころある貌。＝惓惓・款款。〇ねんごろに至る貌、忠誠の義。漢書、賈禹傳「不レ勝二ー一一、不二敢不一盡二愚心一」＝惓惓。〇人を愛する貌。後漢書、馬皇后紀「遵二聖母之一ー一乎」

【拳銃】ケンジュウ　ピストル。＝短銃。

【拳打】ケンダ　こぶしにてうつ。南史、魚復侯子響傳「每二入朝一輒恣二ー一車騎一」

【拳大】ケンダイ　こぶしほどの大さ。

【拳闘】ケントウ　こぶしにてたたかふ。

【拳法】ケンポウ　やはら、こぶしにて打ち合ふ技。柔術の類。

【拳匪】ケンピ　清代祕密結社の一、拳又、棒を以て人を撃つ術を練習し、外人及異教徒に危害を加ふるを目的とする亂賊。＝義和團。

【拳勇】ケンユウ　技撃を善くし、勇ましく力つよし。詩、小雅「無レ拳無レ勇、職爲二亂階一」管子、小匡「有二一ー一股肱力勇一出于衆一者、有則以告二有司一」

【拳蠊】ケンレン　蜚蠊ヒレンの異名。

【拳縮】ケンシュク　こぶしの如き大いなるもの。孔平仲詩「一ー自東越」

【拳攣】ケンレン　こひ慕ふ、攣は戀。石介詩「胸中一ー蟠二殷蠅一」＝眷戀。

【根】コン　元

〇念に引く。〇おす、しりぞく

（排擠）

【拶】サツ　㊥

○せまる（迫）韓愈詩「瀰瀾相排ー雪の降る形容。○挨ーは推しのけて進む。○國挨ーアイはるしゃくする、答禮、應對。

【指】シ　紙

○ゆび「手ー」大ーは拇ー、第二は食ー、第三は中ー、又、將ー、第四は無名ー、第五は小ー。○さす（斥）ゆびさす、さししめす（示）大學「十手所ー」○さしまねく（麾）○おもむき（歸趣）趣旨。孟、告子「言近而ー遠者、善言也」○むね、こころばせ（意向）「意ー」「要ー」漢書、孔光傳「不希ー苟合」㊥旨。

同訓異語　指・刺・倩・盤の別は刺（刀部六畫）の條を見よ。

【指意】イ　むね。史、孟子荀卿傳「四發明序其ー」㊥旨意。

【指甲花】クワ　鳳仙花ホウセンクワの異名。其の花にて指甲を染めるが故。

【指揮】キ　さしづする。史、淮陰侯傳「避レ有二違背之智一、嘿而不レ言、不レ如二猜聲之ー一也」㊥指麾。

【指揮官】クワン　軍隊を指揮する長官。

【指麾】キ　さしまねく。旌ハタの類にてさしづするにいふ（荀、成相、注）孫楚、爲二石仲容一與二孫皓一書「謀力雲合、ー一風從」㊥指揮。

【指畫】クワク　○手指にてゑがきて、意に示しをしへる。禮、玉藻「凡有レ言ー於君前一用レ笏」○グワ指先にゑをつけてゑがく、唐の張璪に創まる。

【指環】クワン　ゆびわ。南史、阿羅單國傳「獻二金剛ー一」㊥戒指。

【指顧】コ　○ゆびさしかへりみる。陳師道詩「句與江山險ニー一」○轉じて手に取る如く近く見える義に用ふ「ー一の間に在り」○過速をいふ。張衡賦「ー一倏忽」

【指爪】ツマ　指のつめ。後漢書、戴就傳「以二大戟一刺ニー一中一」唐書、文藝傳、李賀七歲能二辭章一通二眉長ー一」

【指支】シ　ささへる。唐書「首尾ー一」

【指示】シ　○ゆびさししめす。漢書、蕭何傳「發二踪ー一ニ跡起一者、人也」○さしづする、命令。

【指示代名詞】メイシ　文法にて事物をゆびさししめすことば、其・此・彼などの類。

【指使】シ　事を指さして人を使ふ。南齊、六十四ノ書、ー一」

【指事】ジ　六書の一、其の字の形が直に其の意義を示すもの、上・下・本・旦などの類。

【指針】シン　○磁石ジシャクのはり。○磁針は常に北を指して方角を示すによりて、轉じて、しるべ、教導の義とす。

【指掌】ショウ　たなごころをゆびさす。事の甚だ爲し易き義。禮、仲尼燕居「治レ國其如レ指ー諸掌一而已乎」

【指授】ジュ　さし示してをしへさづける。晉書、文帝紀「奇畫ー一、制二勝千里一」

【指趣】シュ　おもむき、むね、宗旨意義。孝經序「會二五經之ー一」㊥旨趣。

【指斥】セキ　ゆびさす。嫉言「ー一實傳ニ不二顧忌一」

【指嗾】ソウ　さしづして使ふ。けしかける。蘇軾詩「北伐二夫戎一陽ニー一」

【指導】ドウ　をしへみちびく。㊥教導。

【指彈】タン　つまはじき、指を曲げ急に伸ばして物をはじく。轉じて不正の行ある人を忌み嫌ふ義。㊥指斥。

【指定】テイ　それときしてきめる、ー一旅館」

【指摘】テキ　○ゆびにて掻カく、ひきかく摘一に摘に作る。列、黃帝「ー一無二痛癢一」○人の過失又は書物の誤謬などをあばきいだす。北史、王劭傳「ー一經史謬誤、爲二讀書記三十卷一」

【指點】テン　一一ゆびさし示すこと、點をうつが如し、故にいふ。杜甫、少年行「ー一銀瓶索レ酒嘗」

【指頭】トウ　ゆびさき。㊥指尖。

【指南】ナン　指南車の方角を知らしむる如く、人ををしへみちびく。張衡、東京賦「予嘗レ非二而遂迷也、幸見ー一於吾子一」㊥指針。

【指南車】シャ　上古、方角を指示する機を裝置せし車の名。古今注、輿服「其制如二鼓車一、設二木人於車上一、舉レ手指レ南、車雖二回轉一、所レ指不レ移、其始周公所レ作、以送二蠻外遠使一」古今注には黃帝の創作とす。

【指撥】ハツ　ゆびにてかきならす、つめびき。陳子昂詩「一絃ー一春風前」

【指名】メイ　其の人の名をさす。史、項羽紀「非二世所ニー一也」

【指目】モク　手にてゆびさし目にて見る。史、陳勝傳「皆ー一陳勝」

【指紋】モン　ゆびのはらにあらはるる渦巻、又は彎曲のすぢー一法」

【指令】レイ　何書又願書に對する官の命令、ー一書」

【希指】キシ　指は旨に同じ、人の氣に合ふやうに勉める、迎合する「漢書、外戚傳」㊥希旨。

【惜指失掌】シッショウ　僅かなる物ををしみて、大事をあやまるをいふ。侍兒小名錄「宋阿侯有レ妓、曰二張蓮英一、美而有レ能、元佃夫見愛之、頗求二手帙一不レ可レ得、佃夫怒曰、——、遂諷二有司一、以二公事一彈レ妖坐死」

【壓指】オウシ　寒氣厲しくして指を落す。漢書、高帝紀「會大寒、士卒ー一者什二三」

【僕指】ボクシ　ゆびをかがめて數へる。荀、儒效「雖レ有二聖人之智一、未

レ能レ一レ一也」‖屈指。
【屈レ指】クッシ　ゆび折り数へる。‖慢指。

【拾】シフ　ジフ　緝

○ひろふ、とる(摭)○をさむ(收斂)「一收」○ゆごて(射韝)弓を射る時、左の臂に著くる具。○と、とを、十に通用す、官文書、證書類に多く用ふる。

同訓異義　拾・摭・摭・摭・摭○拾は採り收むる義。漢書「其取二青紫一如二俛拾一地芥一」○摭は拾ひ取る義、多くひろふに用ふ。‖經「采二采芣苢一薄言掇之」○摭・摭の二字同じ、多くひろひ集める義。史記「荀卿・孟子・韓非之徒、往往摭二拾春秋之文一以著レ書」○摭は摭に同じ。

【拾遺】シフ　○おちのこれるをひろふ(史、太史公自序)○君主の心づかざる過失などをひろひあげて諫める。史、汲黯傳「願下出二入禁閤一ー補中過」○同上の事を掌る官名。唐書、百官志「補闕一ー、掌二供奉諷諫一」

【拾遺記】シフ　十卷、苻秦の方士、王嘉撰す、伏羲・神農・黄帝以下、晉代に至る遺事を記す。

【拾芥】シフ　取り得るの安きをいふ。漢書、夏侯勝傳「其取二青紫一如二俛拾二地芥一耳」

【拾級】シフ　階段をひろひて登る。曲禮「一レ一聚レ足、連歩以上」

【拾收】シフ　ひろひをさめる。又、亂れたるものを集めもとの如くに收める。‖拾斂。

【拾集】シフ　ひろひあつむ。

【拾薪】シフシン　たきぎをひろふ。後漢書、承宮傳「爲二諸生一ー執レ爨數年、勤學不レ倦」

【拾取】シフ　ひろひとる。

【拾掇】シフ　ひろひとる。‖掇。

【拾遺】シフ　ひろひ取る。王令詩「寒禽冬儲喙レ地食、一ニ一穀種一無二餘遺一」

【拾掇】シフ　ひろふ。錄異記「李膳一ニ一小石一用爲二書鎭一」

【抾】シン　震

○きよむ(清)○ぬぐふ(拭)○かわかす(燥)○ふるふ「一レ衣」‖振。

【拯】ショウ　蒸　通音　ジョウ

○すくふ(救濟)たすく(助)左、宣十二「目于智井而一レ之」智井は水の無きるど。○あぐ(擧)

同訓異義　拯・救・援・濟の別は救(支部七畫)の條を見よ。

【拯救】ショウキウ　たすけすくふ。宋書「馳往一ー」‖救護。

【拯濟】ショウサイ　すくひめぐむ。晉書、孝武帝紀「宣時一ー救二其彫困一」

【拯贍】ショウセン　救ひにぎはす。北史、魏宣武紀「以二災饉大飢一開レ倉一ー」

【拯拔】ショウバツ　すくひいたはる。晉書「陰レ宣一ー」

【拯弊】ショウヘイ　衰へたるをすくふ。北史「深有二匡一レ時一之志一」

【拭】ショク　職　シキ

○ふく、ぬぐふ(摺)巾にて垢を去る「拂一」「拔一」「洗一」○きよめる(清)

【拭目】ショクモク　めをぬぐひ見る。詳かに觀察する義。漢書、張敞傳「天下莫レ不二一レ傾レ耳觀レ化聽レ風」

【拭淚】シキルイ　なんだをぬぐふ。‖拭涙。

【拭清】ショクセイ　ふきよめる。‖拭淨。

【拭拂】ショクフツ　ぬぐひ去る。韓愈「一ニ一朝蕩二滌眼一待二拭拂一」

【拿】ダ　ジョ　麻

前條又、拏(手部五畫)の俗字。

【拿獲】ダクワク　罪人などをつかまへる。續憲全書、卷二十三「一ニ一盜賊逃人一」

【拿捕】ダホ　前條に同じ。

【拽】イ　ヂ　祭

○わかつ、さく(析)○さる(去)○うつ(拍)

【持】チ　ヂ　支

○もつ、とる(執)「把一」「支一」にぎる(握)(射義「一弓矢一」○まもる(守)「護一」○たもつ(保)「保一」もちこたへる、保存する。○たすける(扶)「匡一」「扶一」○ただす(制)苟、正名「猶引二繩墨一以一ー曲直一」○住一は寺のあるじの僧。○軍一は水を汲む具。‖餅。○もつ、負擔「受一」又所有の義「所一」

【持盈】ヂエイ　十分の地位を保ちて失はず。淮南子「孔子見二欹器一曰、善哉ー乎者乎」宋史「願陛下ー守レ成、慎レ終如レ始」薛易簡の語。‖持滿。

【持戒】ヂカイ　佛の徒が、邪淫・妄語・殺生・飲酒の五つの戒をとりまもる。法華經「ー清潔、如二淨明珠一」‖持律。

【持衡】ヂカウ　○はかりざをもつ。唐書「天下之勢、猶レ一レ」○人才を評量する。杜甫詩「ー一時豪俊」

【持論】ヂロン　己の議論を執り守る。宋史、苗授傳「遇レ事、一レ不二苟合一」‖持説。

【持久】ヂキウ　長くもちこたへて變ぜず「ー之計」東方朔、答客難「曉日ー一、歳二數十年一」

【持玩】ヂグワン　手にもてあそぶ。白居易詩「欲レ得二魂夢一ー何器物」

【持穀】ヂコク　ほこをもつ。又、其の兵士。史、平原君傳「今楚地方五千里、ー百萬、此誠王之資也」

【持劍】ヂケン　つるぎをもつ。戰國策「子路ー一」

【持國天】ヂコクテン　佛四天の一。東方の天國の一。王は四天王の一、東方の天國を守り善を賞し惡を罰する佛。

【持齋】ヂサイ　○ものいみを持し守る。唐高僧傳「ー布施」○佛の戒律を守りて斷食する。白居易詩「白日ー一夜半齋」

【持參】ヂサン　圖もってくる。

【持參金】ヂサンキン　圖結婚する時、持ちて行くかね。

【持正】ヂセイ　ただしき道をとり守る。晉書、三人齊レ位、足二相ー一」

【持說】ヂセツ　己の意見を固くとり守る。又、其の言論。‖持論。

【持節使】ヂセツシ　天子より節ヲを賜はりて出づる使者。韓愈文「丞相其選二宗室四品一人、ー節往使二君長一」

【持贈】ヂゾウ　もち行きておくる。陶弘景詩「不レ堪二ー一君一」

【持綬】ヂジュ　永くもちつづける　いつまでもつづく。‖永綬。

【持重】ヂヂウ　おもおもしくする。後漢書、任隗傳「同レ心畢レ力　ー一國世」

【持平】ヂヘイ　ふでをもつ。魏志、注「提レ綱ー一」‖執筆・把筆。

【持病】ヂビヤウ　永くわづらひて治せざる病氣。‖痼疾、宿痾。

【持佛】ヂブツ　圖自分の居間にする又は身につけて常に信仰する佛「ー一堂」

【持平】ヂヘイ　公平にして偏らず。漢書、杜延年傳「議論ー一、合二和劉延一」

【持病】ヂビヤウ　○弓を十分ひきしぼる。史、周亞夫傳「彎二弓如二滿月一ー一」‖引滿。○十分なる地位をたもちこたへる。淮南子「周公可レ謂二能ー一矣」‖持盈。

【持藥】ヂヤク　圖持續して常に服用する藥。

【持牢】ヂラウ　とりまもることかたし。獻帝傳「監軍之計、計在二ー一」

【持論】ヂロン　己の固く執り守る議論。漢書、儒林傳「ー一巧慧、易家不レ能レ難」

【挃】

チツ　質

○つく(搗)○禾をかる聲。

【挃挃】チツチツ　禾を刈るこゑ。詩、周頌「穫レ之ー一」

【挑】

㊀テウ　㊁テウ　㊂タウ　豪　篠　號

㊀かかぐ(揭)「ー燈」○たわむ(撓)○うつ(操)○すする(啜)○うすし(薄)佻に通ず。○になふ(肩荷)杖を以て物を擔ふ。○とる(取)○えらぶ。○くじる(穿抉)○めぐる(宛轉)㊁ひく(引)○もてあそぶ(弄)○いどむ、人の心を興奮さす。史、司馬相如傳「以琴心ー一之」又、しかける、いざなふ(誘)「ー戰」○たはむれる(戲)○ふるふ。‖掉。㊂ー達タウは輕くはねをとる貌。ーは輕儇跳躍の貌、達は放恣。又、往來して相見る。詩、鄭風「ー一分達兮」

同字異體　挑・撟・撓○挑ははねあげる。又、かきたてる義、挑レ燈と用ふ。○撟は高くあげる義。文選「撟レ竿爲レ旗」○撓は衣のつまをとる義、褰・搴・蹇と用ふ。

【挑戰】テウセン　たたかひをいどむ。左、宣十二「趙旃卻レ一レ」

【挑郎】テウラウ　かかげなげうつ。梅堯臣詩「一盤月必紛綸、絲車必ー一」

【挑燈】テウトウ　○ともしびの火をかきたてる。盧綸詩「ー一更情在」○ランプ　圖提灯テウチンの別字。

【挑撥】テウハツ　かかげあげる。又　しかける。李昇詩「主人若也勤ニー一一」‖挑發。

【挏】

トウ　董　東

○かかへひく(擁引)○うごく(動)「ー擾」

【挹】

ハク　陌　本字

うつ(擊)

【挵】

弄(井部四畫)の俗字。

圖かせぐ(國字)

【拶】

圖字。

むしる、つかみてちぎり離す、毟る。

七畫

【挨】アイ 佳

○うつ(撃)○おす(推)次を以て相推す。○おしひらく(旁排)○しひてすすむ(強進)○あひちかづく(物相近)○躬身に受ける義「一打」「一罵」○國十拶アイはことわり。又、ふしゃくの義。

【挨拶】アツ ○前に在るものをおしのけて進む。○蔣長庚、鶏林問答篇「昔者天子登封二泰山一、其時士庶一一、備百二騶從一行幄、而前呼且、官人來、衆皆靡然」○國答禮・應對などの義。

【挹】イフ 緝

○くむ(抒酌)「一水」詩、大雅「一彼注茲」○ひく(引)部璞、詩「左一浮兵軸」○こまぬく、揖に通ず「敬一」「拱一」○おさふ(抑)しりぞく(退)荀、在宥「所謂一而損之之道也」わがままを抑へ退ける。

同訓異字 挹・汲・酌・酔の別は汲(水部四畫)の條を見よ。

【挹揄】ユユ 手にてすくふ。又、くむ。蘇賦「盈虧自一一」

【挹酌】イシャク くむ。潘岳、司空鄭袤誄「所下以一二洪流一、含中嘘英芳上」

【挹損】イソン おさへてへりくだる。魏志、甄皇后傳、注「后雖一寵盛一、而猶自一一」字解參看。‖損挹・抑損。

【挹注】イチウ くみそそぐ。詩、大雅「洞二酌彼行潦一、挹二彼注一茲」

【挹婁】イロウ 古の國名、今の奉天省治の東北及吉林・黒龍江は皆其の地、今の奉天鐵嶺縣の南六十支那里に其の故城址あり。

【捐】エン 先 捐は俗字

○すつ(棄棄)漢書、賈誼傳「侯自一我得之、自一我一之、無所一恨」○のぞきさる(除去)○へらす(損)史、吳起傳「一不急之官」○救助の爲め、己の金品を差出す「義一」○官位を得る爲め、金錢を政府に納める「一班」○税法の名「蠲一」「蠲一」

【捐金】エンキン 金をすてる。後漢書、乃一二于野一而遠遊一師學」

【捐館】エンクワン みをすつ。曹植表「憂一國忘一家、一一一濟一難」一身をすてて國難をすくふ。

【捐館】エンクワン 住みしやかたをすてる、貴人の死をいふ。戰國趙策「今李陽君一二一舍一」

【捐生】エンセイ いのちをすてる。潘岳賦「甘一一一而自引」‖捐命。

【捐瘠】エンセキ 棄てられて、飢ゑてやせ衰へる。漢書、食貨志「堯禹有二九年之水一、湯有二七年之旱一、而國亡二一一者一、以二蓄積多而備先具一也」

【捐腹】エンフク すてて用ひられず。晉瑛詩「流離成二鄙賤一、常恐二復一一一」

【捐忘】エンバウ すてわすれる。阮籍詩「吹噓誰以益、江湖相一一」

【捐命】エンメイ いのちをすてる。漢書、諸葛豐傳「故常願一捐二一旦之命一」‖捐生・隕命。

【捂】カン 刊

かきみだす、みだる(亂)‖擾。後漢書、馬融傳「散毛族、一羽鱗」

【捃】(一)カク・コク 覺 (二)サク 陌

(一)つのとる(角)「摭一」(二)さす、つきさす(刺)‖籍。

【捍】カン 翰

○ふせぐ。禮、祭法「能一大患一則祀之」‖扞。ふせぎまもる(衛)○ゆごて(拾)弓を射るに弦のはじき當るを防ぐ爲めに左臂にはめるもの。○たけし(猛烈)史、貨殖傳「民雖一少一慮」‖悍。

同訓異字 捍・防・禦・拒・閑の別は防(阜部四畫)の條を見よ。

【捍衛】カンエイ ふせぎまもる。

【捍塞】カンソク ふせぎふさぐ、防止する。魏書、常景傳「詔一景山中險路之處、悉令一一一」

【捍撥】カンバツ ばち、樂器の絃をかきならすもの、捍は弦をはじく義。唐書、禮樂志「撥木爲一面、象牙爲二一一」

【捍邊】カンペン 國境を防ぎ守る。魏書、薛虎子傳「且耕且守、不一妨一一一」

【掏】キョク 沃

つちふご、昇土ショウドの器。左、襄九「陳一畚一具鍬缶」

【掏畚】キョクホン もっこ。土を運ぶふご。字解參看。‖畚掏。

【掬】(一)クク (二)キク (三)キウ 沃 尤 屋

(一)もる、土を桴コの中に盛る。○かきあつめる(捋)(二)細長き貌。詩、周頌「有二一其角一」(三)すくふ。漢書、谷永傳「扶服一之」‖救。○とどまる(止)○まもる(護)

同訓異字 掬・救・拯・援・濟の別は救(支部七畫)の條を見よ。

【据】クン 問 吻

ひろふ、ひろひとる(拾取)‖

擄。

【同訓異義】拉・拾・掇・摭の別は拾（十部六畫）の條を見よ。

【拉操】ラフサウ　ひろひとる。北史、周世宗紀「一一柴實」＝拾取・拉摭。

【拉葉】ラフエフ　なをとる、つみなをする。說苑「使二王子慶忌一一之」

【拉拾】ラフシフ　ひろひあつめる。蘇味道詩「野童來一一、田叟去謳吟」

【拉摭】ラフセキ　ひろひとる。拉は一に摧に作る。史、十二諸侯年表「一一春秋之文、以著レ書」＝摭摭・摧摭・摭操。

【挶】

㊀ クッ
㊁ クヮン
㊂ クッ

㊀けづる（刮）する（摩）㊁うつ（擊）㊂する（摩）、けづる。周禮、冬官、注「一摩之工、謂二玉工一也」＝刮。

【挾】

㊀ ケフ
㊁ セフ

㊀はさむ、さしはさむ、物と物との間にはさむ。○もつ（夾持）おびる（帶）所持する。○わきばさむ（脇）こわきに抱へる。○持みてほこる。孟、萬章「不レ一レ貴」○おびやかしもつ（脅持）蜀志、諸葛亮傳「一二天子一以令諸侯」○たすける（輔）○をさむ（藏）ー書は藏書。○まもる（護）○いだく（懷）○あふ（合）㊁あまねし。＝洽。めぐる（匝）荀、禮論「方皇周一」○十干を日に配して甲の日より數へて次の甲の日に至る迄の十日間の稱「一旬」

【同訓異義】挾・夾・插○挾は物を兩方よりはさむなり。孟子「一二泰山一而超二北海一」○夾は左右持也、夾輔と連用す。挾に通ず。○插はさしこむ義、苗をうゑるを插秧といひ、本文の行間に註を入るるを、插註といふにて知るべし。

【挾義】キフギ　正しき道を心にいだく。韓詩外傳「周衆賊、總貢レ仁、抱レ忠一レ一」

【挾貴】キフキ　富貴をたのみて人にほこる。孟、萬章「不レ挾レ長、不レ一レ一」

【挾琴】キフキン　ことをかかへたづさへる。江總詩「風流一レ一婦」

【挾纊】キフクワウ　わたを身につけ持つ。左、宣十二「楚子伐レ蕭、申公巫臣曰、師人多寒、王遍三軍一撫而勉レ之、三軍之士、皆如レ一レ一」＝恩惠を施して喜をわすれる。

【挾際】キフサイ　敵をはさみうつ。＝夾撃・夾攻。

【挾功】キフコウ　いさををたのみほこる。陸機、羣士賦序「一レ一震主、自古所レ戒」

【挾術】キフジユツ　策略をいだきもつ。蘇軾文「慢レ詐一レ一、以欺二其君一」

【挾奏律】キフソウリツ　秦の始皇の定めし書物を藏することを禁ずる法律。漢の惠帝四年に除く（漢書、惠帝紀）

【挾勢】キフセイ　勢威をたのむ。唐書、柳仲郢傳「一レ一肆貪、前帥不レ能レ制」

【挾持】キフヂ　○兩方よりはさみもつ。○心にいだきもつ。史、商君傳贊「以二帝王術一一浮說一」蘇軾、諸侯論「此其所二一一一者甚大」＝懷抱。

【挾提】キフテイ　菅公讒記、注「今人或謂レ簪爲二一一一」

【挾扶】キフフ　兩方より支へ持つ。晉書、辛謐傳「扶二夫人一令起、予レ是兩人一一以立」

【挾輔】キフホ　かかへたすける、補佐する。後漢書、劉陶傳「宜下選二本朝一一中一王室上」＝夾輔。

【挾日】キフジツ　十日間の稱。周禮、天官、大宰「一一而斂レ之」＝挾旬。

【挾旬】キフジユン　十日間。旬は一日から十日までの＝挾日・浹旬。

【捂】

ゴ　通　通じて梧に作る

○ふる、さはる（抵觸）「抵」○さかふ、さからふ（逆）儀禮、既夕「若無器、則一而受之」○ささふ（支拄）

【捆】

コン　阮　園

○しめる、うつ、たたく（叩椓）しめたたきて堅くする。○しまる。○ひとし（齊等）

【捆屨】コンクヰ　わらぐつをしめたきて堅くする。孟、滕文公「皆衣レ褐、一レ一織レ席以爲レ食」

【捆逼】コンヒツ　しまりかたまる。詩、大雅、疏「一一而密緻」

【挫】

㊀ ザ
㊁ ザ

㊀くじく、くじける（摧）「頓」をる（折）くだく。○勢力をくじき弱める。史、酷吏傳、註「暴虐以一人」○こなふ、へらす（損）荀、解蔽「則一其精」○はづかしめる（屈辱）孟、公孫丑「思以二一己一於人」○かくらむ（搦）○とる（捉）㊁おさへる（案）

【同訓異義】挫・折○挫はとりひしぐ、摧なり、摧折・摧挫と連用す。○折は挫なり。史、項羽紀「諸侯吏卒、乘レ勝、輕折二辱梁吏卒一」

【挫針】ザシン　次條に同じ。

【挫鍼】ザシン　はりをおさへきす。晉、人間世「一一治繕足二鬪ヒ口」＝挫針。

【挫傷】ザサウ くじきずつく。
【挫辱】ザジョク くじけ屈する。又、くじきはづかしむ。後漢書「夫人情一一、則義節之風損」‖屈辱。
【挫折】ザセツ くじける。後漢書、馮異傳「虜兵一一」‖摧折・頓挫。
【挫北】ザホク くじけてにげる。北は敗。杜牧文「戰必一一」‖挫敗。

【捎】

㊀ セウ・セウ 平 蕭
㊁ シャウ 入 藥

㊀えらぶ(選)○かる(芟)草を芟り取る。○かすめる(掠)杜甫詩「花安蕊一蝶」○はらふ(拂)㊁のぞく(除)○動く「掉一」

の則は取（又部六畫）の條を見よ。
【提縣】ダイケン 州縣の富人官命を受けて郵遞をあつかふ者。唐書、劉晏傳「初州縣取富人一督二漕輸一謂二之船頭一主郵遞一謂二之一一」
【提奚】ダイケイ 手づから結ひかける髮をにぎりて起つ、急迫の貌だしきにいふ。淮南子「馮之時、具二五音一聽治、一饋而十起、一沐而三一一」‖握髮。
【提筆】ダヒツ ふでをとりて書く。唐書「一一賦詩」‖把筆。
【提補】ダホ とらへる。元稹、提補敕「一復一、莫レ超二遷與一免」
【提進】ダイシン めかくしの遊戲、中に一目を裏み、摸索して人を捉ふる戲。致虛閣雜俎「明皇與二玉眞一、恒於二閑月下一以二錦帕一裹レ目、在二方丈內一相捉戲、謂二之一一一」‖迷藏。〔過庭錄〕

【振】

㊀ シン
㊁ シン
㊂ シン
震 眞

㊀ふるふ(震)箱ひ起る。○ふるひをののく、懼に通ず。○にぎはす、すくふ(救・濟・拯)賑に通ず。孟、滕文公「一一德之」○さく(裂)○うごく(動)ふるはせる、震動さす。詩、豳風「六月莎雞一羽」○とし(迅)○ととのふ(整)「一旅」○ひらく(發)「一蒙」○をさむ(收)をさめ入れる。中庸「一一河海而不レ洩」○やむ(止)○いにしへ(古)「一古」○鳥のむれ飛ぶ貌。㊁一一は心あつし(仁厚)詩、周南「一一公子」又、さかんなる貌。左、僖五「均服一一」㊂ひとへぎぬ(禪)衫に通ず。

同訓異義 振・奮・震・揮・戰・顫・篩の別は奮（大部十三畫）の條を見よ。

【振衣】シンイ こころもをふるひはらふ。左思、詠史「一一千仞岡、濯レ足萬里流」
【振鈴】シンレイ ○ふるひおどろく。王粲文「驚一一、魂亡氣奪」‖振駭。○浪がわきあがる。晉書、夏統傳「風波一一、雲霧杳冥」‖震驚。
【振旅】シンリョ ふでを振ふ。宋書、周朗傳「整二衆一一、已齒於幡旌之上一」‖揮毫。
【振救】シンキウ ほどこしすくふ。漢書、元帝紀「開二府扉一一」‖振卹・賑救。
【振筆】シンヒツ ふるひひびく。齊書、劉祥傳「一一大地一」
【振窮】シンキウ まづしき者を賑はし助ける、貧民を救助する。周禮、地官、三日、一一」‖賑窮・振貧。
【振恐】シンキョウ ふるひおそれる。史、刺客傳「秦舞陽色變一一、羣臣怪レ之」振一に震に作る。司馬遷、報二任安一書「猛虎在二深山一百獸震恐」
【振驚】シンケイ ふるひ驚かす。史、五帝紀「一一朕衆」
【振撃】シンゲキ ふるひうつ。蔡邕、豪勢「揚波一一、龍鼉鳥驚」
【振拳】シンケン ことばしをふりまはす。王延壽賦「揮二手一一、雷發電舒」
【振古】シンコ おほむかし。詩、周頌「匪二今斯今一一如レ茲」一說、振は自、古よりの義。
【振興】シンコウ ふるひおこす。又、ふるひおこる。‖振作。
【振奮】シンフン にぎはしすくふ、濟は數。孫志、楊俊傳「一一貧士一無二共有一無一」‖振救。
【振作】シンサク ふるひおこる、作は興起。‖振興。
【振刷】シンサツ 志をはげまして塵をさっぱりとはらひおとす。蘇軾、北狄論「一一唐洋、不二自量一」‖刷新。
【振子】シンシ ○下振子裸の婦におもりをつけてつるしおき、左右に運動させるもの。○童男女をいふ。史記、注に張衡賦を引きて「一一萬童」文選には僮子に作る。
【振施】シンシ にぎはしほどこす。漢書、厚恤傳「一一貧客「家無レ所レ給」‖振救。
【振迅】シンジン ふるひたちて勢はげし。魏照、贈劉琨「奮迅燕趙」一一鴻鵠」
【振振】シンシン ○仁厚の貌。詩、周南「麟

子孫ー々今」○盛んなる貌。左、僖五「均服ー々」

【振鷺】シンロ ○ふるひおそれてつつしむ。北史、齊神武帝紀「機略敏明、事無二疑滯一、于是朝野ー々」○亂れたる規律などをきびしく改めただす「官紀ー々」

【振卹】シンジュツ あはれみめぐむ。南史、吳平侯景傳「會二年荒一、計口ー々」‖振恤・振救。

【振宣】シンセン ふるひのべて明かにす。柳宗元文「ー二幽光一」

【振貸】シンタイ にぎはしかす。漢書、文帝紀「隨レ所三以ー二之一」

【振盪】シンタウ ふりうごかす。盪は動。‖振動。

【振鐸】シンタク すずをふり鳴らす。鐸は古、敎令を宣する時振りし大鈴の周禮「司馬ー レー、軍東作レ旗」

【振掉】シンタウ ふるひうごく。蘇軾詩「海水ー一魚龍驚」‖振動。

【振天】シンテン 聲が天上にまでふるひ響く。家語「子路曰、願得ニ白羽若レ月、赤羽若レ日、鎭鼓之音、上振二於天一、旌旗繽紛、下蟠二於地一」

【振天府】シンテンフ 國 明治天皇の思召を以て日清戰役の戰利品及戰爭に關係あるものを陳列したまへる宮城内の建物。

【振動】シンドウ ○ふるひうごく。又、ふるひうごかす。史、留侯世家「天下ー一」‖振掉・振盪。○物理學にて物體が一定の路を上下前後に往復する運動。

【振德】シントク すくひめぐむ、德は惠施。孟、滕文公「ー二之一」

【振筆】シンヒツ 勢よく筆をふるひて疾書がする。廣川書跋、張長史時ー 一大呼、以發二其鬱怒不平之氣一」

【振貧】シンヒンスル 貧者をすくひにぎはす。漢書「虛二郡國倉廩一以レ振レ貧」‖振窮。

【振武】シンブ 武勇をふるひあらはす。國語「ー二ー于外一」

【振怖】シンフ ふるひおそれる。戰國策「燕王ー二大王之威一」‖震怖。

【振撲】シンボク すくひなでやすんずる。晉書「曰二陰德陽報一、主周急ー一」

【振慴】シンセフ ふるひいきどほる。韓非外傳「ー一者、不レ可二勝數一」

【振奮】シンフン ふるひ勇む。梁簡物詩「ー一士卒曉」

【振揚】シンヤウ ふるひあげる。晉書、謝琰傳「宜ー二仁風一、闡二其自新之路一」

【振貧】シンヒン にぎはしたまふ。北史、袁翻傳「翻請悉二西軍死亡將士一、ー 存而還者、竝加ー一」‖振救。

【振慄】シンリツ ふるひをののく。史、司馬穰苴傳「三軍之士皆ー一」‖慄懍。

【振廩】シンリン 倉をひらきて救助米を與ふ。振は發。左、文十六「ー レ一同レ食」

【振旅】シンリョ 振は整、旅は衆、いくさに勝ち兵をととのへ整へて還る。左、隱五「三年而治レ兵、入而ー一」

【振鈴】シンレイ 合圖又は事を警告する時にすずをふりならす。又、其のすず。

【振鷹】シンヨウ 勇みふるひて勢はげし。范曄文「威ー一、氣勃勃」

【振鷺】シンロ 鷺が勢よく羣り飛ぶ。詩、周頌「ー一于飛、于二彼西雝一」

【振出】フリダス 國 ○爲替せ又は手形を出す。○藥を袋に入れ湯に浸して藥氣をだす。又、其の藥。○雙六の采をふりはじめる場所。

【挺】 セン 先

○ながし（長）○ひく（引）○のがる（遁）

【掟】 ソン シュン 阮 雲

掟（方部七畫）の俗字。

○おす（推）○おしひらく（擠推排）○おしつける、つかむ（掐）左、定八「涉佗ー。術候之手ニ○おさへる（按）

【挼】 ㊀ダ ㊁キ 支 歌 ㊂ダイ 灰

○ぬく（拔）吳語「ー鈹指」鋒」ぬきんづ（特拔）すぐれる、まさる「ー秀」「英ー」○なほくもつ（直持）○ゆるやか（寬）○盪、月令「ー重罰、從其欲」○ひく（引）引き出す「ー身」○なほし、ただし（直）まっすぐ。○俗に直立して屈せざる義。○脫に通ず。儀禮、鄉飲酒禮「鱄脯五ー」○梃に通ず。韓愈文「南溟鍛竹千ー」

同訓異字 挺・掟・拔・抽・拔・脫の別は掲（手部十四畫）の條を見よ。

【挺確】カクテイ すぐれてただしくたしか。唐書「入對ー一」

【挺傑】テイケツ すぐれてぬきんでる。又、其の人。晉書「英姿ー一」‖挺特。

【挺劍】テイケン つるぎをぬく。戰國策、唐雎ー レ而起」

【挺挣】テイサウ 身をぬきんでてあらそふ。

【挺身】テイシン ○身をぬきんでる。○身をすてる。○身一つ。

【挺然】テイゼン ぬきんでる。

【挺特】テイトク ぬきんでる。

【挺拔】テイバツ ぬきんでる。

【挺立】テイリツ ぬきんでる。

【挺出】テイシュツ ぬきんでる。

【挺秀】テイシウ ぬきんでる。

【挺英】テイエイ ぬきんでる。

【挺生】テイセイ ぬきんでる

徐陵、與二楊僕射二書「羣凶ー一、諸賢戮力」
【挺槍】テイ　やりをぬき出す。唐書、羅ー槍ー一、刺二於馬衆中一」
【挺秀】テイ　ぬきいでてすぐれる。卓然として不羣なり。晉書、王承傳論「英姿ー一、容止一時」‖特秀。
【挺身】テイ　○身を引きぬく。漢書、劉ー一逃、亡二其印綬一」潜リ身を引きて難を逃れる。○自ら衆に先だちて進み出る。戰國策、荊軻傳「拔ー劍而起、ー一前擊」
【挺進】テイ　獨りぬきんでてすすむ。
【挺出】テイ　特にぬきんでる。杜甫詩「自謂頗ー一、立登二要路津一」
【挺然】テイ　稻の穂がぬき出でる。又、其のぬき出でたる穂。潘岳、秋興賦「蕤ー一之傾穎一」
【挺動】テイ　堅く節操を持して屈せず。唐書、杜甫傳論「數賞二遭亂、ー一一無レ所レ汙」
【挺然】テイ　衆人にぬきいづる貌。晉書、劉毅傳「方正亮直、ー一不レ撓」
【挺戰】テイ　身をぬきんでて真先に進み戰ふ。南史、宗越傳「單身ー一、衆莫二能當一」
【挺挺】テイ　ただしくなにき（正直）貌。左、襄五「周道ー一、我心悁悁」
【挺特】テイ　特に衆にぬきんでる。班固表「英姿ー一」
【挺拔】テイ　ぬきんでる。宋史、沈遼傳「幼ー一不羣」‖挺秀。
【挺立】テイ　ぬきんでたつ。南史、徐孝嗣傳「孝嗣幼而ー一」‖挺秀・挺特。

【捏】デツ　ネチ　屑　通音ネツ　捏は譌字

○ひねりあつめる（捻聚）土をこねて種種の物を造る。轉じて牽合附會して無根の事を構成する義「ー造」○おす（捺）
【捏造】デツ　○土などをこねて物の形をつくる。○轉じて根も葉も無き事實を構成する。

【揑】

捏（同上）の譌字。

【揣】ダイ　賄

おさほる（食）楚辭、天問「穆王巧ー一」

【捌】ハツ　ハチ　黠　もと扒に作る

○やぶる（破）○うつ（擊）○わかつ（分）○やっ、數字の八に代用す、主に官文書、證書等に用ふ。○さらひ、禾穀を掻き聚める具「ー一把」○圖さばく、物を賣りて片づける。又、是非を判斷する。

【捐】ヘン　元

○ひるがへる。‖翻。○俗に掉又掉に通用す。

【捞】

撈（同上）の俗字。

【捕】ホ・ブ　遇

㊀㊁に拇に同じ。

【捗】チョク　㊀ホ　㊁チョク　嗄　遇

㊀をさむ（收斂）㊁うつ（打）○圖はかゆく、はかどる「進ー一」

同訓異義　捕・取・執・操・把・採・探・提帝の別は取（又部六畫）の條を見よ。

【捕捉】ホソク　とらへてしらぶ。漢書「不レ遑ー一貲賊一以ー一」‖捕治。
【捕影】ホエイ　影をとらへる、とらへどころなきに喩ふ。漢書、郊祀志「求レ之濊渡、如二係レ風ー一、終不レ可レ得」
【捕魚】ホギョ　魚をとらへる。與謝「司馬自能結レ網、手以ー一レ」
【捕獲】ホカク　とらへる、いけどる。梅堯臣詩「津頭吏卒羅ー一、官司直惜二傷衣裳一」‖捕拿。
【捕鯨】ホゲイ　くぢらをとらへる「ー一船」
【捕繫】ホケイ　とらへつなぐ。捕縛して獄に繫ぐ。漢書、杜周傳「ー一案驗」
【捕斬】ホザン　とらへきる。
【捕獸】ホジュウ　けものをとらへる。
【捕捉】ホソク　とらへる。陸遊、祭二宗一登一貴位一敕文「ー一未レ遑」‖捕捉。
【捕拳】ホケン　おさへとる、拳は拳の俗字。‖拿捕・捕獲。
【捕治】ホチ　罪人をとらへてしらべる。漢書「廣漢使二東ー一」
【捕鳥】ホチョウ　とりをとらへる。
【捕亡】ホボウ　にげたる者をとらへる、逃亡せし罪人をとらへる。
【捕虜】ホリョ　とらへてしばる。
【捕風】ホフウ　風をとらへる、とらへどころなきに喩ふ。捕影に同じ。韓愈詩「持レ案ー一識時得」事の證左なきものをー一捉影といふ。
【捕吏】ホリ　とりて、罪人をとらへる役人。
【捕虜】ホリョ　とりこ。‖俘虜。
【捕獵】ホリョウ　狩りとる。遼史、道宗紀「咸雍六年、禁二漁人ー一」

【挼】ナ　ワ　麻

手を以て掬ひ聚める。抔に通ず。

【挽】ベン　バン　阮　願　銑　輓に通ず

○ひく（引）引き張る「ー一強」強はつよ弓。○すすむ（進）前か

らひっぱりて進める「ー車」○死者を葬る時、其の棺の縄を牽き送る「ー歌」○圖ひく、鋸ノコギリにて木材をきり割く「木ー」ざ」○ろくろ鉋カンナにて器物を造る「ー物細工」

同訓異字 牽・挽・引・援・曳・延・惹等の訓は牽（牛部七畫）の條を見よ。

【援引】エンイン 牽き物などをひく。禮記、曲禮「力政、ー一染作之事」

【挽歌】バンカ 葬る時に柩の車の綱を牽く者のうたふ歌。とむらひうたう。晉書、樂志「ー出二乎漢武帝一」古今注「薤露・蒿里二章、李延年分爲二二曲一薤露送二王公貴人一蒿里送二士大夫庶人一使レ挽レ柩者歌レ之、世呼爲二ー一」ー一」ー一」

隱す。漢の谷儼文「誠實ノ躬而告ゲ已ノ覆藏ノ瑕而ーレー」

【掩襲】エンシフ　敵の不意をうつ。晉書、羊祜傳「祜每與二吳人一交レ兵、不レ爲二ーー之計一」＝掩撃・掩討。

【掩葬】エンサウ　風が物を吹き掩かす貌。柳宗元文「提二勁大木一ーニー衆草一」＝偃仆。

【掩塞】エンソク　おほひふさぐ。吳越春秋「上天蒼蒼、不可ニーー一」＝掩閉。

【掩討】エンタウ　敵の不意を襲ひてうつ。魏志「ーニー逆節一、折二衝四海一」＝掩撃。

【掩涕】エンテイ　泣き顏をおほひかくす。離騷「長太息以ーレー涕、哀二民生之多艱一」

【掩鼻】エンビ　臭氣の耐へがきにふさぐ。孟、離婁「西子蒙二不潔一、則人皆ーレー而過レ之」

【掩閉】エンヘイ　おほひとぢる。後漢書、竇固傳「毋ニ令使自ーニー」＝掩塞。

【掩蔽】エンヘイ　おほひかくす。轉じて見聞の出來ざるやうにへだてをする。

【掩袂】エンベイ　おほはれかくれる。唐川書鈔「羅歷ーー、故不二復得一ニ其全文一ニ」

【掩目】エンモク　目をおほひかくす。後漢書「陳蕃曰、諺有ニーー捕雀、雖物尚不レ可レ欺以得レ志、況國家大事乎」＝掩耳盜レ鈴と同じく自ら欺くに喩ふ。

【掞】

㊀エン・セン　㊁剡（刀部八畫）に同じ。

㊀のぶ（舒）。又、おほふ（蓋）。左思、蜀都賦「掞ニ天庭一」○かがやく。＝談。㊁するどくとがる（銳利）

【掞藻】エンサウ　詞藻を舒べ發する。文辭の典麗なるをいふ。柳顧言詩「ーー麗三繁星一」＝揚藻。

【掐】

カフ　㊥

つめにてさす（爪刺）つめにておさへる（爪按）

【掐摘】カフテキ　爪にてかきとる。顏氏家訓「吳郡陳寡父閑、被レ刑、終身布衣、疏食蔬菜、有二幼割一、皆不レ忍レ食、居家惟以ニーー供レ膳」

【掔】

カン・ケン　㊥先　㊦銑

○かたし（固）○あつし（厚）○ひきさる（牽去）＝牽。史、鄭世家「ーー詐以迎」○もつ（持）○うつ（擊）

【掎】

キ　㊥紙　㊦支

○かたかたひく（偏引）かた方を引く。○あしとる。一脚を牽くの漢書、班固敍傳「秦失其鹿、劉季逐而ーー之」○はなつ（發）班固、西都賦「機不ニ虛ーニ○したがふ。○ぬく。

【掎止】キシ　後より引き止める。晉語「ーニー憂棄ニ慕」

【掎摭】キセキ　引きよせて收め取る。詩品「鮮ニ彰清潤一、ーニー病利」＝摭拾。

【掎角】キカク　つのとり、あしとる。鹿を捕ふるに前のつのをとり、其の後の足をとる。前後相應じて敵に當るにいふ。左、襄十四「譬如レ捕レ鹿、晉人角レ之、諸戎掎レ之」轉じて兵を駢めて敵を制する義。角一に捕に作る。

【掬】

キク　㊥屋　㊦同じ

○すくふ、むすぶ、兩手にてすくふ。左、宣十二「舟中之指、可ニーレ也」○轉じて心情の十分に外に見はるるにいふ。すくひ取るべき義「眞情可ニーー」杜子春傳「饑寒之色可ニーー」○左右のたなごころ。○はなれる（離）○一升の量、又、二三合の量、左右の掌に滿つるほどの量。

【掬月】キクゲツ　水中の月をすくひ取る。掬水發看。

【掬圓】キクエン　一つかみの土くれ。抱朴子「龍門沸騰、非ニーー所ニ遏」

【掬水】キクスイ　水を兩手にてすくふ。又、すくひたる水。于良史詩「ーレー月在レ手、弄花香滿レ衣」

【掬泉】キクセン　手にていづみをすくふ。徐照詩「過レ景因開レ書、思レ茶亦ーレー」

【掬弄】キクロウ　水をすくひもてあそぶ。謝靈運詩「掬映砌下花、ーー瀉底泉」

【据】

㊀キョ　㊁キョ　㊥魚　㊦御

㊀はたらく、拮ーは口と手と共に作す。○手を擧げて持つ。㊁よる、據に通ず。しっかりと持つ。漢書、酷吏傳「趙禹ーー法守ニ正一」○てのやまひ（手病）○すぐなるうなじ（直項）がうじゃう。司馬相如、大人賦「ーー以驕驁」○圓する。現狀のままにするおく。

【据置】スエキ　圓現狀の儘に爲し置く。現狀維持。

【掘】

㊀クツ　㊁コツ　㊂ケツ　㊃ゴツ　㊥月　㊦月　㊧月　㊨物

㊀ほる（指）○つく（突）○ひとりぬき出る（特起）＝崛。○つくす（盡）㊁あく（揚）○あな、いはや。窟に通ず。うがつ（穿）㊂穴をあける。㊃兀に同じ。兀然として動かざる貌。莊、田子方「ーー若ニ槁木一」

【掘開】クツカイ　ほりひらく。

【掘起】クツキ　特にぬき出て起る。＝崛

起。
【掲金】ケイキン かねを地よりほり出す。述異記「使二人一ヒー」
【掲竈】ケイソウ ほりうがつ。＝鑿穿。
【掲井】ケイセイ ゐどをほる。孟子「有レ爲者、譬若レ-レー」
【掲穿】ケイセン ほりうがつ。＝鑿穿。

【掛】ケイ　卦 通音ケイ

○かく、かかる。＝挂。ひっかかる、ひっかける。○わかつ（別）國○ヲ事務の擔任「戸籍ー」又費用「ー り負け」又、家屋の構造ニ○ル手はじめ、着手する「仕事にとりーる」○カかけ賃。
同訓異字 掛・挂・係・懸・繋等の別は係（人部七畫）の條を見よ。
【掛金燈】ケイキントウ 釵環などの異名（救荒本草）＝結延楽・燈籠見。
【掛冠】ケイクワン 官にて制定せし冠をかけてかぶらず、辭職する義。後漢の逢萌が王莽に事ふるを欲せず、冠を東都の城門に掛けて家族をつれて遼東に客となりし故事（後漢書、逢萌傳）に本づく。陸游詩「已能二彈冠一欲二掛一ー一」（彈冠は冠の塵をはらふ、出仕の用意）＝挂冠。
【掛錫】ケイシャク 遍行の僧のしばらく止り住する義。飛錫の對。釋氏要覽「今僧止所レ住處、名二ー一一者、凡四矢比丘、行必非二錫杖一、非レ錫有二十五威儀一、凡至二室中一、不レ得レ著レ地、必掛二於壁牙上一、故云二ー一一」
【掛鐘】ケイショウ 掛け時計。
【掛軸】ケイジク 書畫のかけもの。思陵書畫記「唐五代皇朝等名畫ー一」

【捲】㊀ケン　㊁ケン・クワン　先 緩

㊀いきほひ（氣勢）「一勇」○いさむ。○こぶし「拳ー」拳に通ず。○ー一は力を用ふる貌。㊁まく、卷に通ず「席ー」○をさむ（收）
【捲握】ケンアク 手ににぎる。後漢書、張讓傳、注「ー一猶二拳握一也」
【捲結】ケンケツ まきむすぶ。釋名「氣在レ外ー一ニー之一也」
【捲捲】ケンケン 力を用ひて勞する貌。莊、讓王「ー一乎后之爲レ人、孫力之士也」
【捲紗】ケンサ うすきしゃをまきあげる。蘇軾詩「翠袖レ-紅映レ肉」
【捲手】ケンシュ にぎりこぶし。淮南子「五指之更彊、不レ若二ー一之一拄一」
【捲土重來】ケンドチョウライ 土を卷く勢を以て攻めて來る、一旦衰へたる勢力を回復して再び襲ひきたる義。捲一に卷に作る。杜牧詩「江東子弟多二才俊一、ー一未レ可レ知」
【捲髮】ケンパツ かみを鬟髮にくむ。
【捲勇】ケンユウ 腕力強し。捲は拳。齊語「有二ー一一股肱之力一」＝拳勇。

【捲簾】ケンレン すだれをまく。王勃、滕王閣詩「珠簾暮捲西山雨」
【捲尺】ケンシャク 地面を丈量するに用ふる尺。布革を以て帶の如くに作り、自由に卷舒すべし。＝圖皮帶尺。

【掀】㊀ケン　㊁キン　文 元

㊀あぐ（擧）かかぐ、手を以て高くさし擧ける。左、成十六「ー一公以出於淖」○ー一は高くそびゆる貌。韓愈詩「蛇鳥首ー一」㊁ひく（引）＝揭。
同訓異字 掀・擧・揚・稱・扛・昂・舉・抗の別は擧（臼部十一畫）の條を見よ。
【掀動】シンドウ ふくれあがる。腫脹して値起する。清異錄「一日復作、左膊ー一」
【掀翻】ケンポン 瀑の大いなる貌。陸龜蒙詩「海上風雨來、ー一捲二飛雷一」
【掀簸】ケンハ あふりあがる。又、あふりあげる。韓愈詩「颶風有レ時作ー一」蘇軾詩「風颶助二凝冽一、韓幢困ー一」＝顚簸。
【掀搖】ケンヨウ あがる。梁簡文詩「我將二巨艦一、ー一滄海欲ー一」
【掀翻】ケンポン あがりひるがへる。指月錄「大地ー一無二覓處一」
【掀舞】ケンブ まひあがる。朱熹詩「空翼ー一晴曛、龍鱗共ー一」

【控】㊀コウ　㊁コウ　㊂カウ　江 銑 送

㊀ひく（引）弓を引く。○ひかへる、引き止める、ひかへて制する「ー馬」「提ー」○とどむ（止制）○つぐ（告）告げうったへる。詩、鄘風「ー于大邦」○なげる（投）莊、逍遙遊「ー於地而已」㊁ひく（引）引き去る、のぞく（除）○ひく、弓を引く。㊂うつ（打）莊、外物「ー其顙」○國ヲひかへめにする。書きとめ置く、しばらく待つ「ー所」○〈ヒカヘ〉原本のうつし（副本）
【控馬】コウバ ひかへおきへる。杜牧詩「ー一平江十萬家」
【控喉】コウコウ のどをしめつける、要所をおさへる義。周邦彥文「拠レ據ーレ、屏二落表裏一」
【控鶴】コウカク ○仙人の乘じて天に昇るに喩ふ。張華賦「王喬ーレ以冲レ天」○宿衛近侍の臣の稱、唐の武后ー一府を置く。天子宿衛の兵をー一鶴と稱す。
【控御】コウギョ 馬をひかへて制使する如くに人の自由を制して治める、御は馭。晉書「善于懷撫、短二于ー一」＝控馭。
【控馭】コウギョ 控御に同じ。庾信詩「ー一

五十州、風行數千里」

【控要】コウ　ひき止めてふせぐ。宋史、李綱傳「一一以扼二其衝一」

【控弦】コウゲン　弓を引く。又、其の兵士。漢書、婁敬傳「一一四十萬騎」

【控制】コウセイ　おさへてとりしまる。操制する。唐書、王忠嗣傳「帶二四將印一、勁兵重地、一一二萬里一」＝控御。

【控訴】コウソ　第一審の裁判に對して不服の時、再び裁判を求める爲めに裁判所に訴へ出る義。＝控告。

【控除】コウジョ　ひき去る、さしひく。俗に扣除とも書く。

【控帶】コウタイ　たづなをひかへて制する。轡はたづなと呂覽「約二轡之一而以控二其轡一」＝控馭。

【控勒】コウロク　控馭に同じ、勒はくつわ。＝控轡・控制。

【掬】コク　ワク　職

○まどふ、惑に通ず。○くらし（惛）

【掍】コン　阮

○まじふ。＝混。○あはす、合同する。王褒、洞簫賦「帶以象牙一其會合」○おこる、おこす（起）振起する。

【採】サイ　㨗　古、采に作る

○とる（取）手に取る「收一」「博一」「訪一」「摘一」○きこる（樵）大なる者を薪といひ、小なる者を一といふ。戰國策「芻牧薪一、莫敢闚東門」○えらぶ、擇び取る。○つむ（摘）

同訓異義　採・取・執・秉・把・操・撮・捕・捉の別は取（又部六畫）の條を見よ。

【採掇】サイタク　水などをくみとる。水經、注「一一一河流一醒二成芳酎一」

【採荷】サイカ　はちすをとる。梁書、江革傳「年十七作二一一詞一」

【採掘】サイクツ　鑛石を地よりほり出す。

【採光】サイクワウ　ひかりを取る、あかりをとり入れる。又、あかりとり。

【採鑛】サイクワウ　あらがねを掘り取る、鑛物を採掘する「一一冶金」＝採礦。

【採獲】サイクワク　とり得る。唐書「一一刊綴爲二五十篇一」

【採決】サイケツ　議長が議場にて議案の可否をとりきめる。

【採摭】サイセキ　○つまみとる。謝朓詩「遇レ君時一一、玉座奉二金巵一」○衣の裾ヲをかかげ折りて帶に插み、物を其の中に貯へる。＝采摭・採摭。

【採工】コウ　かねほり（天工開物）＝採礦夫。

【採拾】サイシフ　○薪をとり木の實をひろふ。後漢書、江革傳「嘗一一以爲レ養」○ひろひ取る。＝採集・採摭。

【採集】サイ　とりあつめる「植物一一」

【採斫】サイシャク　てにとりてきる。蘇軾詩「窮探到二峯背一一二黃楊子一」

【採珠】サイシュ　水に入りて眞珠を取る。唐の元稹に一一行あり。晉書「合浦郡百姓、惟以二一一一爲レ業」

【採摭】サイセキ　ひろひとる、摭は拾。晉綏、序「一一二羣言一」＝摭採・采摭。

【採琢】サイタク　とりてみがく。晉書、戴邈傳「荊璞發二一一之榮一」

【採擇】サイタク　とりえらぶ、多くの中よりえり取りて用ふる。

【採摘】サイテキ　つまみとる。李益詩「一一愧二芳鮮一奉レ君歲暮節」

【採點】サイテン　○試驗の答案に點數をつける。○投票又は勝負どとなどの數をしらべる。

【採銅】サイドウ　地を掘りて銅をとる。唐書「元和中、歲一一二十六萬有奇一」

【採納】サイノウ　人を引き入れ用ふる。取り上げる。又、うけ入れる。後漢書、鄭師傳「宜下一一良臣一以助中聖化上」

【採訪使】サイハウシ　官名、唐玄宗、諸道——を置き、官人の善惡を考課し、三年に一褒せしむ。

【採伐】サイバツ　林木をきり出す。＝伐採。

【採藥】サイヤク　くすりの草をつみとる。晉書「康昔一一遊二山澤一」＝采藥。

【採用】サイヨウ　○とりもちふる。○人をとり用ふる。＝錄用・登用。

【採掠】サイリャク　財をかすめ取る。晉書、石勒載記「一一無レ所レ獲、軍中大飢」

【採蓮】サイレン　○はちすを取る。○樂曲の名。樂府集、樂府江南弄曲、梁武帝製、曲和云、一一清、窈窕舞二佳人一、曲名取レ此」

【掃】サウ　皓　號　もと埽に作る

○はらふ、はく（除）はらひきよめる「灑一」「淨一」○さっぱりとなくなる、全くなくなる。「一地」○なでる（抹）する（刷）。杜甫詩「淡一一蛾眉朝至尊」○すつ（弃）

同訓異義　掃・拂・擦・刷・祓・殺・除・掃○掃は帚にてはくなり、酒掃掃除などと用ふ、轉じて何にても、一いきにさらりと掃ふに用ふ「十里脩篁衆掃レ天」の類。○拂はばっぱっと少しづつはらふなり、拂子にて、拂ふやうにする義。禮記「進二几杖一者拂レ之」○擦は推し除ノけてやる義、盜賊蟲蛇などをはらふに用ふ。○祓はいのりて、はらひのぞく。左傳「有二水旱疾疫一則禱レ之」○祓は災を除き、福を求むる意、はらひきよめる。國語「祓レ祓」○殺はみそぎして災をはらふ義。修禊と熱す。○除はよそへかたづけること、除レ惡・除レ草・除レ災などに用ふ、不潔などを除きてさっぱりとする義。○殺はおか（す）こと。書經「殺レ亂反レ正」曲禮「衣毋レ撥」

【掃雲帚】サウウンソウ　竹の異名〔竹譜〕
【掃海】カイ　兵用語、海中に敷設せられ又は沈没せし危險物をとりはらふ作業。
【掃除】ジョ　はきて水すすぐ。後漢書、趙孝傳「一一待之」李白詩「爲レ余一一石上月」‖灑掃・酒掃・掃除。
【掃帚】ソウ　はは。書苑「取二一一一沾二泥汰一書壁」
【掃刷】サツ　はらふ、刷も掃。爾雅、注「拭掃一一、皆所三以爲二潔清一」‖掃除・掃拭。
【掃塵帚】サウヂンソウ　うれひをはらふはは き、酒の異名。蘇軾、飲酒詩「應レ呼二釣詩鉤一亦號二一一一」釣詩鉤も酒の異名、詩趣をつり出すつりばり。
【掃拭】サウシキ　はらひぬぐふ。李白詩「一一青玉鞭、爲レ余著二金鐙一」‖掃拭・掃除。
【掃拂】サウフツ　ははき。爾雅、注「其形似二一一一一」‖掃帚。
【掃清】サウセイ　はききよめる。李白詩「長嘯萬里風、一一胸中塵」
【掃晴娘】サウセイジャウ　てりてりばうず、晴を祈るまじなひに紙にて人形を作り、軒につるすもの。陳維崧考「吳俗久雨後、閨閣中有下剪レ紙爲二女形一、手持二一帚一、懸二簷下一、以祈レ晴、謂二之一一一」按元初、李俊民有二一一一詩一、卷レ袖拳レ裳手持レ帚、挂向二陰空一便掃レ手、其形可二想見一也」
【掃蕩】サウタウ　○さっぱりとはらふ。○盗賊などを平げほろぼす。○害蟲・鼠害などを除き去る。晉書、劉琨傳「一一仇恥」
【掃榻】サウタフ　榻カケの塵をはらふ、人を歡迎する義。陳遊詩「南臺中丞一レ一見、北門學士倒レ屣迎」
【掃地】サウチ　○地をはらひきよめる。國史補「草應物立性高潔、鮮食寡欲、所在焚レ香一レ一而坐」○轉じて全く盡きて殘るものなき義。漢書、魏豹傳、贊「秦滅三六國一、而上古之遺烈、一レ一而盡矣」
【掃除】サウヂョ　ちりをはらひのぞく。史、信陵君傳「趙王、一一自迎」‖掃清・掃刷。
【掃蕩】サウタウ　はらひきよめる。蕩は水をそそぐ。南史、宋高祖紀「百年檜機、一朝一一」‖掃除・掃酒。
【掃殄】サウテン　はらひほろぼす。殄は滅。‖掃滅。
【掃墓】サウボ　墓參り、墓祭をいふ〔清通禮〕
【掃滅】サウメツ　はらひほろぼす。元好問詩「溫柔與二敦厚一、一一不二復留一」‖掃殄。
【掃部寮】カモンレウ　國官、宮中の掃除を司る役所、其の長官を掃部頭カモンノカミといふ。

【捨】シャ　㊐省して舍に作る

○すつ、すてる（弃・棄釋）。うち捨て走りいそがはしくして容儀を正す暇なきを狽一といふ。詩、小雅「或王事狽一」
【捨身】シャシン　○いのちをすてる。○㊐出家をすてて出家する。韓愈文「一一施レ佛」‖舍身。
【捨離】シャリ　施しすてる。隋煬帝、寶鏊經願文「一一淨財、從可二稱計一」
【捨宅】シャタク　㊐物をすてるやっに安くうる、なげうり。
【捨假名】シャケミャウ　㊐漢文を和讀するために、字の右旁にそへることば。
【捨子】シャシ　㊐すてられし小兒。‖棄子・棄兒。
【捨印】シャイン　㊐すてぜりふ。かへりがけに首ひ放す綸旨。
【捨扶持】シャフチ　㊐德川時代にみより無き者に恵與せし扶持米。

【掌】シャウ　㊥

○てのひら、たなごころ（手心）「抵一」「反一」「合一」○つかさどる（主）「分一」「兼一」「典一」書、周官「冢宰一邦治」○つかさどる事。つとめ「職一」○さ（捧持）詩、小雅「王事鞅一」鞅は荷、一は捧げ持つ。荷ひ捧げて走りいそがはしくして容儀を正す暇なきを鞅一といふ。詩、小雅「或王事鞅一」
【掌握】アク　○掌中ににぎる。漢書、張敏傳「海內之命、斷二于一一」○ひとにぎり。又、それ程の少許。列、湯問、注「鄒子之所レ言蓋其一一耳」
【抵レ掌而談】テイシャウノダン　掌をうちて盛んに談ずる。戰國策「蘇秦見、說二趙王于華屋之下一、——」
【反レ掌】ハンシャウ　てのひらをかへす、事の極めて易きに喩ふ。說苑、正諫「一所レ欲爲、易二於一一」
【指レ掌】シシャウ　事の明白にして且つ容易なる義。論、八佾「其如レ示二諸斯一乎、指二其掌一」
【掌故】ショコ　○禮樂の故實などをつかさどる官。東方朔、客難「使二蘇秦張儀與レ我並生二於今之世一、曾不レ得一一一」○故實掌例。史、龜策傳「因二掌一一一未レ遑二講試一」
【掌跡】ショセキ　てのひらのあと。述異記「其一一猶在焉」
【掌大】ダイ　手のひら程の大さ。
【掌中珠】ジュ　手の中のたま、人の愛子をいふ。杜甫詩「掌中探見一珠新」
【掌典】テン　㊐宮內省式部職の職員、祭典の事をつかさどる。
【掌統】トウ　つかさどりすべる。唐書

「將軍各二人、一ニ一北衙禁兵」【運二於掌上一】ニングラス手中に取扱ふ、容易に己の思ふ通りにする。孟、公孫丑「治二天下一可レ運二之掌上一」【掌握】サウ掌中に同じ、握は中。

【授】ジュ 宥

○さづく、あたへる(予)「天一」「神一」「褒一」○つたへる、教へる「口一」「傳一」「教一」「訓一」「指一」わたす(付與)○さづけ、さづかり。史、淮陰侯傳「陛下所謂天一、非二人力一也」【授衣】ジュ 陰暦九月の異名。ながつき。詩、豳風、七月「七月流火、九月レ一レ」【授戒】ジュカイ 佛門に入りし人に五戒、十戒、具足戒等の戒律を授ける。【授業】ジュ ○學業を教へさづける。漢書、張仲舒傳「孝景時爲二博士一下レ帷講誦、弟子傳以二久次一相一一、或莫レ見二其面一」○生産の業をさづける。‖授産。【授産】ジュ 生活する爲めに産業をさづける。【授賞】ジュシャウ ほうびをあたへる。公羊傳、注「明君見レ勞一レ一」【授爵】ジュシャク 爵位をあたへて華族に列せしめる。【授受】ジュ 授けると受けると、うけわたし。孟、離婁「男女一一不レ親」【授首】ジュ 殺される、己の首を人にあたへる義。諸葛亮文「擧レ兵北征、夏侯一レ一」【授時曆】ジュジ 元代のこよみ、農民に稼穡の時節を授ける義(元史、曆志)書經の「敬授二人時一」の語に本づく。【授命】ジュメイ いのちをなげ出して盡力する。論、憲問「見レ利思レ義、見レ危一レ一」‖致レ命・捐レ軀。【授與】ジュ わたしあたへる「證書一一式」

【捶】㊀スイ ㊁タ 寘 紙

㊀うつ、むちうつ(以杖擊)「鞭一」「輕一」‖棰。○つく(搗)證、內則「欲乾肉則一而食之」○馬をうつむち「馬一」‖箠。㊁はかる(揣)物の輕重をはかる。

同訓異字 捶・扑・撻・笞・伐・討等の前は征(子部五畫)の條を見よ。【捶楚】スイソ むちうつ。史記「一一問レ之」‖捶撻。【捶殺】スイサツ むちうちころす。北史、王文同傳「小有二違逆一者、輒覆二面手地一、而一一之」【捶楚】スイソ むちうつ。漢書、路溫舒傳「一一之下、何求而不レ得」【捶打】スイダ むちうつ。南史、劉瑀傳「奴辨驅一一一之」‖捶撻・捶扑・棰打。【捶撻】スイタツ むちうつ。晉書、樂志「嬉一一一婢一過レ苦」‖棰撻・笞撻。【捶鳳】スイホウ むちうちてののしる。釋惠洪詩「枉枉遭一一一」【捶拊】スイフ むち。史記「執一一一以撻二笞天下一」‖箠策。【捶扑】スイボク むちうつ。魏志、何曾傳「加二其一一之罰一」‖敲扑・捶打。

【推】㊀スイ ㊁タイ 灰 支 通音 スヰ

㊀おす。○うつる、おしうつる。うつす(遷移)易、繫辭「寒暑相一而歲成焉」○えらぶ(擇)○上としてたふとぶ、奉じいただく「一戴」○すすむ(奬進)えらびて上に薦める。書、周官「一賢讓能、庶官乃和」○たづねる、究める(尋繹)「一本」○なしる(窮詰)㊁おす、おしおとす(排擠)○おしひらく「一開」○すすむ(進)おし進める。後より送りて前に進める。左、襄十四「或一之、或輓之」輓は前よりひっぱる。○うつす(移)移し去る。○ゆづる(讓)己の有る所を讓りて人に與ふ。史、淮陰侯傳「一食食我」○ゆだぬ(託)「一辭」○圖すと強ひて、たって、敢て。‖押。【推移】スイ うつりかはる、おしうつる。屈原、漁父辭「聖人不レ凝滯於物一而能與世一一」【推讓】スイジャウ 己の責任を他人におしつける、己の義務を他に嫁する。讓は託ぐ。【推右】スイイウ おしたふとぶ。宜和書諸「爲二時人所一一一」‖推尚。【推挽】スイバン おし進める、薦んじておしたてる。南史、任昉傳「北約一代辭宗、深所二一一」【推引】スイイン 人を引き立て用ひる。唐書、顧祖士傳「以一一一後進一爲二己任一」【推衍】スイエン 次條に同し、衍は敷衍。【推演】スイエン おしひろめる。漢書、外戚傳「不レ知下一一一聖德上遠中先帝之志上」蜀志、諸葛亮傳「一一一兵法作二八陣圖一」‖敷衍・推衍。【推恩】スイオン 恩愛を人におし及ぼす。孟、梁惠王「故一レ一、足二以保一四海一」【推勁】スイケイ 罪を吟味する。宋書「官吏一一累三百日一獄未レ具」‖推問。【推解】スイカイ 食を推し衣を解きて人に與ふ。恩惠を施す義。史記「漢王解レ衣衣レ我、推レ食食レ我」【推校】スイカウ おしかんがへる。柳宗元文「一一一千古一無レ所二與讓一」【推敲】スイカウ 詩句を鍛煉する。湘素雜記「劉公嘉話云、賈島初赴二擧京師一、

一日於三省上一得レ句、云、鳥宿池邊樹、僧敲月下門、始欲レ著二推字一、又欲レ著二敲字一、煎レ之未レ定、遂於二馬上吟哦一、時時引レ手作二推敲之勢一、時韓愈吏部權京兆、島不レ避二衛道一、第三節、左右擁至二尹前一、島具對二所レ得詩句一云云、韓立馬良久、謂レ島曰、作二敲字一佳矣、遂與並轡而歸」【推賢】スイケン　賢人をおしすすめる。書、周官「一レ一讓レ能」【推讓】スイジョウ　人を推したふとびて自らへりくだる。南史、宋彭城王義康傳「興二王弘一共輔二朝政一、弘既多レ疾、且每レ事一レ、白レ是內外政務一斷二之義康一」【推轂】スイコク　○車のこしきをおす、人をおしすすめる義。史、魏其武安傳「一レ一趙綰、爲二御史大夫一、○人を助けて事を成さしめる。史、荊燕世家「一レ一高帝一就二天下一」【推察】スイサツ　○おしはかる。後漢書、劉陶傳「斯固原レ情比レ迹、所レ宜二一審也一」□推考・推量。○おもひやる、想像する。【推參】スイサン　圖自分から進んでまゐる、參上する。【推辭】スイジ　おしてことわる、辭退する。【推刃】スイジン　やいばをおす。魏志「不レ能下一レ一爲二天下一報中仇」【推薦】スイセン　能人をおしすすめる。吳志「多レ所二推薦一」【推尚】スイショウ　おし尚ぶ。唐書、呂溫傳「濮翰精博、一時流望一レ一」□推尊。【推奬】スイショウ　ほめすすめる。杜甫詩「平生遲二一レ一」□推奬。【推譲】スイジョウ　他人をおしすすめて自らゆづる。史記「免二富有一、而後二一レ一」【推須】スイシュ　人をおしすすめてほめる〔韓愈、何蕃傳〕□推奬。【推誠】スイセイ　まごころを人に移し及ぼす。中說「推レ之以レ誠、不レ官而信」【推乐】スイラク　おししりぞける。劉禹錫詩「四節相一レ一、冬季風且涼」【推薦】スイセン　人を上におしすすめる。晉書「時賢並相一レ一」□推舉・推轂。【推選】スイセン　推しえらぶ。【推測】スイソク　おしはかる。李商隱、進賀狀「驗二一レ一則成如二周卜一」【推移】スイイ　すすめたふとぶ。顏九畤詩「費史一レ一爲二第一一」□推尚。【推戴】スイタイ　上におしいただく。宋史、王彥昇傳「爲レ衆二一レ一」【推盪】スイトウ　おしうごかす。王曾賦「樓二陰陽之一一、我實難レ移」【推擇】スイタク　人を登用する、擇は下より推舉する、擇は上より選拔する。史、淮陰侯傳「不レ得二一レ一爲レ吏」【推知】スイチ　おしはかりてしる。□揣知。【推治】スイチ　罪をおしはかりただす。周禮「一レ一獄レ實」□推問。【推重】スイチョウ　おしおもんずる。又、たふとび重んぜられる。宋書「賈恩少有二志行一、爲二鄉曲一所二一レ一」□推尊。【推挽】スイバン　次條に同じ。【推輓】スイバン　車を後より推し、前より輓く。轉じて、人をおしすすめる義。左、襄十四「衞君必入、夫二子者、或輓レ之、或推レ之、欲レ無レ入得乎」□推挽・汲引。【推服】スイフク　たふとびて心から從ふ。南史、陳武帝紀「明達果斷、爲二當時一所二一レ一」【推分】スイブン　己の分限をおしはかりてそれに安んずる。晉書、毛寶傳「任レ眞一レ一、渾如也」□揣分。【推歩】スイホ　天文學の語。日月五星の運行の度數をおしはかりて曆をつくる術。抱朴子「黃帝精二一レ一」【推本】スイホン　もとを究めたづねる。漢書、劉向傳贊「有レ意其二一レ一之二也」【推命】スイメイ　十一星の運行を以て、人の運命を推し究める術。開學紀聞「以二十一星行歷一推二人命貴賤一、始於唐貞元初、都利術士李顒者」【推問】スイモン　罪を取調べる。晉書「其父推尋訪得二李氏一、一一皆符驗」□推治・推究審問。【推奬】スイショウ　すすめほめる。鮑欽止文「昨書一レ一、皆過二其實一、謹避レ席、不二敢當一」【推來】スイライ　未來のことをおしかんがへる。揚雄文「因レ往以一レ一、雖二千世一無レ不レ可レ知也」【推量】スイリョウ　おしはかる。□推察・推測。【推理】スイリ　道理を推しきはめる、理によりて推しはかる。【推曆】スイレキ　曆をおしはかり定める。漢書、律曆志「一レ一生レ律」

【推論】スイロン ○次第に厳く論じ及ぼす。○或事理に本づきて更に他の結論におしうつる。

【捼】セイ サイ 俗字 ㊀揍の

すむ、すみか。謝靈運詩「恣此永閑ノ」＝栖。

【掣】㊀セイ ㊁セツ 廣 霽

㊀ひく(曳)ひきとめて自由を得しめず「牽ー」「ー肘」㊁ぬく(抜)「ー簪」

同訓異義 掣・牽・引・挽・援・曳・延等の語は牽(牛部七畫)の條を見よ。

【掣曳】セイエイ ひきとめて妨げる。韓非、疏「掣臣小人、無ニ敢我ー一ー」

【掣肘】セイチウ 人の肘をひきて自由をさまたぐ。人の事に干渉して妨げる義。肘は臂の節。呂覽、審應「宓子賤治ニ亶父ー一、恐ニ魯君之聽ニ讒人一而令ニ己不ー得ー行ニ其術一也、請二使ニ二人子君ー俱至ニ亶父ー、令ニ之書ー、子賤從ニ旁時ー擊ニ搖其肘ー、書之不ニ善、則子賤笑ニ之怒、東面而辭、歸報ニ于君ー、君貝、宓子以ニ此諫ー寡人之不ニ肖ー也」に本づく。家語には、亶を單に作る。唐書、陸贄傳「不ニ宜ー一ー於內ー也」

【掣電】セイデン 時の極めて短きにいふ。杜甫詩「走過ー一傾ニ城知ー」朱熹詩「回ニ首十年塵ニ一ー一」

【掣肘】セイチウ ひぢをひきおさへる。宣和畫譜「ー一ー者數四」＝掣肘。

【捷】セフ 葉

○かち、かつ(克勝)「克ー」「戰ー」○ぶんどりもの、戰利品。左、莊三一「齊侯來獻ニ戎ー」○かちじらせ(勝報)「奏ー」○かり(獵)○すばやし、とし(速・敏疾)「敏ー」○ちかし(近)○つづく(接續)

同訓異義 捷・勝・克・贏・戡の別は勝(力部十畫)の條を見よ。

【捷巧】セフカウ すばやくしてたくみ。管子「有ニ大略一者、不ニ可ニ一ー以ニ一ー」

【捷黠】セフカツ すばやくしてさかし。周禮、注「鴟鴞是小鳥、一ー者也」＝敏慧。

【捷給】セフキフ 應對がすばやくして窮する所なし。漢書、張釋之傳「豈效ニ此嗇夫喋喋利口ー一哉」

【捷勁】セフケイ すばやくしてつよし。北史、眞臘國傳「爭髮垂ニ耳、性氣ー一」

【捷徑】セフケイ ○捷は速、ちかみち。離騷「夫唯ー一以窘ニ步」○轉じて或事物に通達し得る簡易なる方法「詩學ー一」

【捷疾】セフシツ すばやし。史、殷紀「帝紂資辨ー一、聞見甚敏」＝捷敏。

【捷書】セフショ かちいくさのしらせぶみ。蘇軾詩「ー一夜到甘泉宮」＝捷報。

【捷成】セフセイ すみやかに成る。荀子「君子事業ー一」

【捷捷】セフセフ 衆動のすばやき貌。詩、大雅「征夫ー一」

【捷足】セフソク はやあし。史、淮陰侯傳「秦失ニ其鹿ー、天下共逐ニ之、高材ー一者先得ニ之ー」＝疾足。

【捷速】セフソク すばやし、さとし。南史、謝莊傳「其ー一如ニ此ー」＝捷疾。

【捷捷】セフタフ すばやきましら、猿は猱。甘澤謠「飛走者ニ一ー登ニ木無ニ有ニ蹶失ー」

【捷報】セフハウ かちいくさのしらせ。潘水燕談「未ニ過ニ月、而ー一聞」

【捷敏】セフビン すばやし、さとし。劉向新序「聰明ー一、人之英才也」＝機敏、敏捷、敏敏。

【捷歩】セフホ すみやかにあゆむ。後漢書「ー一深林ニ倘苦ニ不ー密」

【捷路】セフロ ちかみち。＝捷徑。

【接】㊀セフ ㊁セツ 葉 ㊀㊁通音 洽

㊀まじはる(交)○あふ、あはす(合・會)呉語「兩君偃ニ兵ー一好」○うける(承)史、平準書「漢興ー一秦之敝」○招きもてなす、招待する「迎ー」「款ー」○もつ(持)○つぐ、つづく(續)「隣ー」つらねる(連)「連ー」曲禮「堂上ー一武」○ちかづく(近)「近ー」○はやし(捷)㊁とる(扱)○棺のはねかざり。＝翣。

同訓異義 接・交・雜・錯・混・參・閒等の別は交(一部四畫)の條を見よ。

【接意】セツイ 他人の心にかなふやうにする。曹植文「承ニ顏色ー以ーレー」

【接延】セツエン 人を引き入れてもてなす。晉唐書、請ニ於ニ私居ー一ー賓客ー」

【接界】セツカイ さかひがつづく。史記「楚魏與ニ秦ーレー」＝接境、接壤。

【接好】セツカウ 五によしみをまじへあはす。呉語「兩君偃ニ兵ーレー」

【接合】セツガフ つながりあひて一つになる。又、つぎあはせる。

【接近】セツキン ちかづく、ちかよる。向秀文「余少與ニ嵇康呂安ー、居止ー一」

【接脚夫】セツキヤクフ 入夫をいふ。居家必用「——謂ニ以ニ異姓ー一贅ニ寡婦ー者ー」

【接遇】セツグウ もてなしあしらふ。史、扈原傳「入則與ニ王圖ニ議國事ー、以出ニ號令ー、出則ー一賓客ー應ニ對諸侯ー」

【接見】セツケン 人をひき入れて面會する。白虎通「以ニ時ー一也」＝引見、延見。

【接殺】セツサツ こしきを接す、車の近く相連るをいふ。漢書、游俠傳「萬章與ニ中書令石顯ー相善、亦得ニ顯權力ー門車常ー一」

【接骨】セッコツ　手足などのほねの折れたるをつぎあはせる。

【接骨木】セッコツボク　にはとこ。山野に自生する灌木。葉は對生して臭氣強し。四月頃小白花を著く。

【接膝】セッシツ　ひざをつきあはす。閑談。閑情賦「願一レー以交レ言」

【接刃】セッジン　○はものをあてる。漢書「爭一レー于公之腹一以復二其讐一而成二其功名一」○戰をひらく。晉書「大軍相臨、交レ鋒一レー」‖開仗。

【接軫】セッシン　車の前後の橫木の連接する義にて、多くの車の連り行くをいふ。洛陽伽藍記「雲車一レー、羽蓋成レ陰」‖連輪。

【接手】セッシュ　○手をつらねる。戰國策「一レー俛レ首欲レ言而不レ敢」○圖受け取る。‖落手。

【接樹】セッジュ　つぎ木。又、木をつぐ。王維詩「一レー溫封泥」‖接木・騈樹。

【接踵】セッショウ　かかとをつづける。轉じて物事の續發と起りて絕えざる義。戰國策「韓魏父子兄弟一一而死於秦者世奚」

【接續】セッゾク　ちかづきふれる。

【接線】セッセン　幾何學の語、圓の一點に觸れる線。

【接觸】セッショク　啻に近づきてたたかふ。庾信文「河橋一一、秋水則三日不レ流」

【接續】セッゾク　つながる、つづく。

【接續詞】セッゾクシ　圖文法上の語、語句又は文章を接續する詞、又、且、及、與の類。

【接待】セッタイ　○あしらひもてなす。晉書、胡奮傳「甚見二一一一」○圖人に飲食物を施す。佛祖統記「法師宗曉、醴二義井於城南檟社一、曰二法華泉一、以飲二行者一、作二茶其上一、施二湯茗一、無レ問二道俗一、結二屋數楹一、創爲二一一一」

【接納】セッノウ　近づけて其の言を聽き入れる。後漢書、岑彭傳「光武深二一一之一」

【接比】セッピ　ちかづきつらなる。漢書、地理志「吳越與レ楚一一」‖親比。

【接武】セップ　武は跡、後者の足、前者の跡の半をふむ、故に接といふ。曲禮「堂上一レー、堂下布レ武」

【接物】セツブツ　人に交る、物は人物「處世一一」淡書、司馬遷傳「敎以慎手一一」

【接助】セツジョ　人の勞又は手などに己の勞を當て助ひて、親愛の意をあらはす文法上の語。英語キツスの譯語。

【接木】セツボク　木をつぐ、つぎ木。金史、曹望之傳「栽花一レー」‖接樹。

【接伴】セッパン　賓客をもてなす。又、其の事をつかさどる人。宋史、李繼昌傳「至二境首一一一」

【接引】セツイン　ひきよせてちかづける。宋書、張敷傳「少有二盛名一、高祖見而愛レ之、以爲二世子中軍參軍一、數見二一一一」

【措】㊀ソ　㊁サク　㊀遇　一に厝に作る。錯に通ず　㊀おく（置）○あぐ（擧）○なげ置く、投ける。論、子路「民無レ所レ」‖手足」○しきほどこす（施布）○もちふる（用）○やめる、すておく（委置）中庸「學之弗レ能、弗一也」○まじはる。○ふるまひ「擧一」「失一」○はかり辦する「一辦」㊁とらへる（追捕）○せまる（迫）‖笮。○はさむ。

【措畫】ソカク　とりはからふ、處置計畫する。又、とりはからひ。宋史、李植傳「一一有レ方、廷議倚重」

【措止】ソシ　事の始末をつける。‖措置。

【措辭】ソジ　文詩の詞づかひ。‖錯辭。

【措大】ソダイ　書生をいふ。能く大事を處措する義。老一一は老書生、窮一一は貧書生。五雜俎「今人以二秀才一、爲二一一一」宋史、杜衍傳「某本一一一耳」

【措置】ソチ　事をはかりて始末をつける。宋史「親往一一」‖措止・措辦・所置。

【措辦】ソベン　はかりて處置する。‖辦。

【揿】㊀ソウ　㊁ソウ　有　尤　㊀よまはりする。又、よまはり（行夜）左、昭二十「賓將一主人辭」㊁うつ（擊）○あさがら（麻幹）一說、たきぎ（薪）

【揪】㊀ソッ　㊁サイ　㊀シュッ　㊀もつ（持）とらへる（捉）頭髮を持つ。淮南、氾論「猶則一其髮而拯」○てにもつ（手持）○ぬきとる（拔取）○むかひ當る（交對）抵觸する。晉語「我夏交一」○する（摩）㊁おす（推）

【揪胡】ソッコ　くびすぢをつかむ。漢書、金日磾傳「一レー投二何羅殿下一」注「胡頸也、揪二其頸一而投二殿下一也」

【揪撲】ソッボク　頭髮をつかみ手にて擊つ。荀子「晉侮一一、捶笞脅脚」

【揉】ダ　㊀くだく（摧）○する、兩手にて相切摩する。‖按。

【掏】タウ　○えらぶ（擇）○とる（抒）○俗に手さぐりで物を取る義。轉じてする、人の懷中物などをすり取る。

【掏兒】タウジ　すり、ちぼ。‖掏摸

【掏摸】タウモ　○手さぐりで他人の物を盜み取る。○すり、きんちゃくきり。‖掏兒・摸客。

【掟】タウ　チャウ

○ふるひはる（捕振）○圓ヲおきて、規則。

【振】タウ チャウ 庚

○ふる（觸）手を以て物に觸れる「一撥」○つく（撞）

【掉】㊀タク ㊁トク 覺 國 通じて棹に作る

㊀うつ（擊）○なげうつ（擲）㊁ふるつこころ。

【掇】タツ テツ 屑 錫

○とる、ひろひとる（拾取）「采ー」「拾ー」詩、周南「采采采菖、薄言ー之」○かすめとる。史、張儀傳「燒ー於秤君之國」

【掇遺】テツ 先人の遺事をひろひあつめる。文獻通考、經籍考「聖宋ー一卷」

【掇摭】タクセキ ひろひとる。＝採摭。

【掇拾】シフ ○ひろひとる。楊基詩「明朝貝ヶ魚期二再酌、我自ー一山中薪」＝收掇。采掇。○採り集める。宋史、歐陽修傳、周漢以降、金石遺文、斷簡殘編、一切ー一、成二集古錄一」＝拾掇。

【掇翠】シフセイ たきぎを拾ひ取る。唐書「漢ヶ唯ーレー」

【捺】ダツ ナツ 屑 黠 通音ナツ

○おす、手にて重く按ずす「一印」○からめとる（擒捕）○書法の名、微しく右の方に斜に書きさげる字體、卽ち、人・大などの類。

【捺印】イン 印をおす、はんをつく。又、其のおしたる印形。

【捺落】ナク 圓地獄。名義集、「一迦、或那落迦、此云二不可樂一」＝奈落。

【採】タン 覃

○さぐる、さがす、手にてさがし求める。○遠くさぐり究める「窮ー」易、繫辭「ー賾索隱」○うかがふ（伺）「ー偵」○おしはかる、推測する。○もとめる（索）たづねもとめる「ー勝」「一梅」「國ー」○こころみる（試）「ー湯」「試ー」

【採擷】セン 詩を作るに適字を採りて分ち取る。

【採閱】エツ さぐりけみす。李翺玉詩「洞宮四百目、玉籙忽二ー一」

【採海燈】カイトウ 軍營・要塞などに備へ付け、夜中海上を照して敵艦の來襲などを防ぐに用ふるあかり、英語サーチライー。＝探照燈。

【採騎】サンキ 敵狀を探偵する騎兵。張鎬詩「軍中ー一暮出レ城」

【採求】サイグ さぐりもとめる。孫奕文「且於二ー一爲レ歡」

【採究】サイキウ さぐりきはめる。蘇軾詩「高人固多レ暇、ー一亦頗熟」＝探討。

【採花】サイクワ ○はなをさぐる。皮日休詩「野客正閑移レ竹遠、騷人多病ー一稀」○科擧時代、殿試に第三番目に及第せし人の稱（陔餘叢考）

【採拾】サイシフ さがしえぐる、さがし出す。柳宗元文「ー一遺隱」

【採險】サイケン 危險の地を冒しさぐる。

【採檢】サイケン さぐりしらべる「南極ー一」

【採索】サイサク さぐりもとめる。晉、潘尼詩「採賾索レ隱、鉤レ深致レ遠」

【採賾】サイサク 深く隱れたる事をさぐり求める。探索を見よ。

【採子】サイシ 圓軍事探偵。

【採摭】サイセキ さがしたづねる。法書要錄「ー一源流、志逸肥遁」

【採賞】サイシヤウ 勝景をさぐり賞す。梅堯臣詩「在昔ー一猶可レ數、深景秀句今得レ傳」

【採浚】サイシユン 春のけしきをさぐりもとめる。蘇軾詩「東郊欲レ一レ、未レ見二鶯花迹一」

【採春之遊】サイシユンノアソビ 唐代、春初に郊外に遊ぶをいふ。天寶遺事「長安士子、春時鬪レ花、以二奇多者一爲レ勝、皆以二千金一市二名花一植二於庭中一、正月各乘二車馬一郊宴、謂二ー一一」

【採薪】サイシン よき景色の地を尋ねて遊ぶ。

【採測】サイソク さぐりはかる。高啓詩「中閒得二深泉一、ー一費二修綆一」

【採題】サイダイ ○詩歌の會の席上にて題をさぐりて分ち取る。○圓役僧の名、經典の論題の題を出し又判斷する者。○圓鎌倉時代の地方官、其の地の內治を司り、又外寇をふせぐ「筑紫ー一」

【採討】サイタウ さぐりたづねる。孟浩然詩「ー一忘二未レ窮、遊魚夕陽晩」＝探究・探尋。

【採湯】サイタウ ○熱湯をさぐり、試みる。恐れ戒しむる義。論、季氏「孔子曰、見レ善如二不レ及、見二不善一如レ探レ湯」○圓古、正邪を判する爲め、神に誓ひて熱湯に手を入れしめしこと、邪なる者はただれるといふ。

【採端】サイタン 事のはじめをさぐる。禮記、疏「廳法云、ー一知レ緒」

【採知】サイチ さぐり知る。

【採偵】サイテイ さぐりうかがふ。又、其の人。

【採偵物】サイテイモノ 圓犯罪人逮捕の顚末を筋書とせし小說又は演劇の類。

【採梅】サイバイ うめの花をさがしめづる。

【採訪】サイハウ 出來事をさぐりたづねる。又、其の人。

【採卵之患】サイランノウレヒ たまごをさぐるうれひ。己の住家を襲はるるにいふ。北史、齊孝昭帝紀「驚鳥捨

レ巢、必有二――一」【探歷】タンレキ あまねくさぐる。謝靈運詩「林泉深二――一、風景暫徘徊」

【掉】 テウ ダウ 蕭 豪 通音タウ

○ふるふ(振)左、昭十一「尾大不レ――」○うごかす(搖)「レ舌」「レ頭」○ただす(正)整頓する。左、宣十二「――鞅而還」【掉舌】タウゼツ したをふるひて辯論する。史、淮陰侯傳「伏レ軾掉二三寸舌一下二齊七十城一」蘇軾飲詩「一レ一滅二西寇一、盡レ地收二幽燕一」【掉尾】タウビ ○尾をふるふ。上林賦「擢レ鯨一レ、振レ鷺奮レ翼」○最後の活動の勢よきにいふ。文章の結尾の力あるにもいふ。孔武仲詩「悠然一一波開去、須レ信人生不レ及レ魚」【掉轡】タウヒ むちをふるふ。李白詩「雙――レ行、遊獵向二秦隅一」

【捻】 ㊀デフ・ネフ 㐮 ㊁デッ 屑

㊀ひねる(指捻)ねぢる。○よる(搓)「紙ヒ――」○つまむ、ひねる(拈)「一香」○こねる(捏)○一一紅は詞曲の名。○一子、又、一匪は清の咸豐の時、賞を結びて北方の數省を擾掠せし亂賊。㊁おさふ(按)

【排】 ㊀ハイ ㊁ハイ 佳 卦

㊀おす(推)おしひらく「一難」史、樊噲傳「迺一闥直入」○しりぞく(斥)おしのける。「詆レ」「一斥」「一黜」○つらぬ、ならべる(列)「一列」○ならび、一は一列。○おく(安置)○彭一はたて(楯)㊁ふいがう、轡に通ず。

同訓異義 排・擠・斡・幷・駢・比・雙の別は擠(立部五畫)の條を見よ。○排・開・隔・辟・啓・發・拓等の別は開(門部四畫)の條を見よ。

【排幹】ハイカン おしめぐらす。韓愈詩「力雖二能一一、需電怪二詞臣一」【排行】ハイカウ ○一族中にて齒序竝、又年齡の順によりて排列し、某一某三などと呼ぶ。義。柳宗元、與二韓愈一論レ史書「十八史退之傳者」㊁發行。○列をなしてならぶ。陳與義詩「一一立二曉晴一」【排闥】ハイタツ しりぞけおとしいる。後漢書、陳蕃傳「一一思レ王」㊁排擠。【排悶】ハイモン おしのけてきらふ。五代史「內相一一」【排毀】ハイキ しりぞけそしる。拾遺記「妙年者爭嫉レ之、競相一一」【排卻】ハイキヤク おししりぞける。晉同契「一一衆陰邪、然後立二正陽一」㊁擯卻。【排擊】ハイゲキ おししりぞけてうつ、排斥殺撃する。漢書「一一剝割、而衆理解也」【排二】ハイジ 國次男、排三は三男、以下之に準ず。排行參看。【排字】ハイジ 國活字を植うる。【排出】ハイシユツ そと「おし出す。【排擠】ハイセイ おしのけておとしいる。史、酷吏傳「張湯爲二廷尉一、治二淮南獄一、一一莊助一」㊁排陷。【排斥】ハイセキ おしのけしりぞける。後漢書、宦者傳序「竟見一一」㊁排斥。【排泄】ハイセツ 無用の廢物を體外へおし出す、汗・尿・屎の類。【排泄器】ハイセツキ 排泄を掌る器官。腎臟・尿管など。【排闥】ハイタツ 勢よくとびらをひらく(史、項羽紀)闥は小門。【排置】ハイチ 順序正しくならべおく。梅堯臣詩「一一屋角邊」【排除】ハイヂヨ はらひのぞく。㊁排去。【排詆】ハイテイ おししりぞけそしる。北史、元諧傳「性剛愎好一一一」㊁詆排。【排突】ハイトツ おしわけつきあたる。南史、裴之禮傳「武帝設二無遮會一、僕豫驚、一一陸衝」【排入】ハイニフ さまたげる者をおしのけて入る。晉書「一一羽儀」【排比】ハイヒ 順序よくならべる。唐會要「編卷錯亂、總爲レ缺一一」【排撥】ハイハツ おししりぞける。李綺文「西漢則王氏擅レ朝、一一宗室一」㊁排斥・擯斥。【排挑】ハイテウ おしひらく。陳書「必一一異家一」㊁排斥。【排悶】ハイモン 心のうさをはらひ遣る。杜甫詩「故林歸未レ得、一一强賦レ詩」【排擺】ハイバイ 布帛等の一り。宋史、儀衛志「凡簇旗皆錯采爲レ之、一一以二黃紫赤三色一」【排律】ハイリツ 詩の一體、五言又は七言の對句を八句以上偶數にならべしもの、古は長律といひ、唐以後一一といふ。文體明辯「一一原二於類延之・謝朓諸人一」【排列】ハイレツ 順序よくならべつらねる。

【捭】 ㊀ハイ 蟹 ㊁ハク 陌

㊀ひらく(開)擺に通ず。○うつ(兩手勞擊)○なげうつ(擲)㊁さく、分ちさく。檗、檗通「燔黍一豚」㊁擘。【捭闔】ハイカフ 開き閉づ、巧に捕揚操縱する辯論術。鬼谷子、捭闔「一一之者、料二其情一也」

【掬】 掬(手部十畫)の古字。

【揆】キ 㕓 あたふ(予)＝畀。

【掤】ヒョウ 蒸 やづつ(箭筒)又、其のふた。

【掤】㊀フ・ホ 虞 ㊁撫(手部十二画)の古字。

【掊】㊀ふせぐ(捍)㊁なづ「一循」

【掊】㊀ホウ ㊁ホウ・フ 有 尤 ㊂フ 遇 ボク 燭 ㊀とる(把)地中よりほり取りて出す。漢書、百官志「鹽官一坑而得鹽」○をさむ、あつめる(聚斂)「一克は税を多くむさぼり取る。○ふかし(深)○へす(減)かく。㊁うつ(撃)「一撃」○さく。非、胠篋「一斗折衡」＝剖。㊂たふす、たふる。史、呂后紀「一兵罷去」兵は武器。＝仆。路。

【掊撃】うつ、うたれる(攻撃)非、人間世「自一一於世俗」

【掊克】ホッコク 苛しく税を取り立てる、聚斂する。詩、大雅「曾是一一」又、其の事を為す人。孟、告子「一一在レ位則有レ讓」讓は責。

【掊擊】あつめひろふ。文心雕龍「一一千里、其為一矣」

【捧】ホウ 腫 ○ささぐ、両手にてうやうやしく物を承ける「承一」「拝一」○すくふ(掬)○俗に奉(大部五畫)に同じく用ふ。

【捧檄】ホウゲキ 任官の召し状をささげもつ。親の為めに志を屈するにいふ。後漢書、毛義家貧、以二孝行一稱、南陽人張奉慕二其名一往候レ之、坐定而府檄適至、以レ義為二安陽令一義一レ而入、喜動二顔色一、奉心薄レ之、後義母亡、遂不レ仕

【捧持】ホウジ 両手にてささげもつ。杜牧詩「大人親一一」

【捧讀】ホウドク 恭しくささげよむ。柳宗元、謝二李夷簡一書、過蒙二存問一、一一寵懼、浪然滿流」＝奉讀。

【捧腹】ホウフク 手にてはらを抱へる、大いに笑ふ貌「一一絶倒」俗に抱腹に作るは非。史、日者傳「司馬季主レ一而大笑」

【捫】ボン モン 元 ○なでもつ(撫持)○さぐる、なでる(摸)さする、ひねる。史、高祖紀「漢王傷胸乃一足」

【捫蝨】モンシツ しらみをひねる、蝨は一に虱に作る。晉書、荷堅載記「桓溫入レ關、王猛被レ褐而謁レ之、一面談二當世之事一、一レ一而言、旁若レ無レ人」この故事に本づき、只だ無頓著の義とす。

【捫著】モンチャク 圏ごたごた、もめ、紛議。＝悶著。紛爭。

【捫渡】モンド はらをさする。蘇軾詩「散步逍遙自一一」

【捫蘿】モンラ つたをつかみひく。孟浩然詩「一一一亦踐レ苔」

【掠】㊀リャク ㊁リョウ 薬 略に通ず ㊀かすめる(抄掠)「寇一」「殺一」○他人の物をうばひとる(奪取)「一奪」「侵一」「剽一」「劫一」○かする、すれちがひて過ぎる(排過)赤壁賦「一予舟而西也」○書法の名、左に出でて鋒の軽からんことを欲するもの。＝長撇。㊁罪人をむちうつ(搒笞)○うばひ取る。

【掠治】リャクチ むちうちて罪を治める。漢書、陳萬年傳「下レ獄一一」＝拷治。

【掠笞】リャクチ 罪人をむちうつ。史、張儀傳「一一數百不レ服」

【掠勁】リャクケイ かすめおびやかす。世說「輔重甚盛、戴淵使二少年一一一」

【掠治】リャクチ 前出。

【掠水】リョウスイ みづの上をかすめる。杜牧詩「沙上驚鴻一一分」

【掠盜】リャクタウ かすめぬすむ。北史、賈翻傳「唯以一一一為レ資」＝剽掠。

【掠奪】リャクダツ かすめうばふ。中鑒「最迫而取レ之、謂二之一一一」＝略奪。

【掠美】リャクビ 他人の美をかすめ取りて己の美と為す。左傳「己惡而一レ一為レ忠」

【掾】㊀レイ ㊁レツ 霽 屑 ㊀ばち、琵琶の撥。梁簡文帝詩「插一皐琵琶」＝撥。㊁ねぢ、ねぢれる(拗)韓愈、送窮文「一手翻銭」ねぢる、もとらす(紾)戻に通ず。○をる(折)○圜ねぢ(螺旋)

【掾柁】レイダ かぢをねぢて舟を繰ずる。杜甫詩「牙檣一一青樓遠」

【掄】ロン リン 眞 元 えらぶ(擇)人材を選ぶ「一賢」

【掄材】リンザイ 人才を選ぶ。唐書、文部始一一、終授一位」

【掄擇】リンタク えらぶ。歐陽詹詩「一一期二精專一」

【捥】㊀ワン ㊁ワン 寒 翰 ㊀

㊀うで。史、封禪書「捥ー」＝腕。㊁ねぢる(捩)

九畫

【握】㊀アク ㊁ヲク 屋 覺

㊀にぎる、にぎり(掫)もつ(持)「把ー」掌中ににぎり持つ、外に在るは持、内に在るはー。○にぎりこぶし(拳)○てのうち(手裡)「掌ー」○とばり、幄に通ず。○古の算法の名。○ひとにぎり程の量。㊁そなへ、そなふ(具)○一ー巌はこせこせする貌。＝局促。

【握月擔風】アクワツタンフウ 風月を愛する情の甚だしき義。春宴錄「臞松方ー春宵、——、日留二後日一、存ー花臥レ酒、不ー可レ過ー時」

【握管】アククワン 書を手にもつ。齊書、孝義傳「夜讀ー書隨二月光一ーレー升レ屋」

【握拳】アクケン にぎりこぶし。易林「空手ーー」

【握權】アククワンケン 權力をにぎりて自由にする。揚雄、解嘲「且ーレー爲二卿相一、夕失レ勢、則爲二匹夫一」

【握齪】アクサク 心せまくこせつく貌。史、司馬相如傳「委瑣ーー拘レ文牽レ俗」＝偓促・握齷・局促。

【握齷】アクアク 前に同じ。史、酈食其傳「其將皆ーー、好二苛禮一自用、不レ能レ聽二大度之計一」＝齷齪。

【握】㊀アク ㊁ヲク 屋 覺

【握手】アクシュ 互にてをにぎりて親愛の情を示す。後漢書「馬援與二公孫述一少同二里閈一相善、以爲既至當ーレー、如二平生歡一」歐米人にも此の作法あり。

【握持】アクヂ にぎりもつ。後漢書、杜林傳「林前於二西州一得二漆書古文尚書一一卷一常寶二愛之一、雖レ遭二艱困一、ーー不レ離レ身」

【握髮】アクハツ 賢者を見るの急なる義、周公の故事(史、魯世家)吐哺握髮(三〇八四頁)參看。韓愈文「周公之爲二輔相一、其急二於見一賢也、當二一食一、三吐二其哺一、方二一沐一、三握二其髮一」＝捉髮・掘沐。

【握臂】アクヒ ひぢをにぎる。戴復古詩「新交ーレー行、肝膽倍楚起」

【握符之尊】アクフノソン 天地の符瑞を握りて天子の位に在る。班固、東都賦「聖皇乃握二乾符一、闡二坤珍一、乾符坤珍は天地の符瑞。

【握沐】アクモク あらひ髮を結びげるを待たず、髮をにぎりながら士を見たりし周公の故事によりて、政治に精勵する義。又、賢者を優待する義。世說「昔周公猶ーレー吐レ食、以接二白屋之士一、天下歸レ德」＝握髮。

【握力】アクリヨク 物をにぎるちから。

【握腕】アクワン かひなをにぎる。親む義。晉子夜秋歌「ーレー同遊戲」

【揑】アッ 黠

ぬく、ひきぬく(抜)孟、滕文公「宋人有レ閔二其苗之不レ長而ーレー之者一」苗のしんをひきぬく。

【揑】㊀イフ 緝 一音 ㊁シフ 緝 イツ

㊀ふしゃくする、兩手を胸にあてる、手をこまぬきて、或は上下にし、或は左右にする禮法、手の上よりして下に極るを長ーといふ「拱ー」「答ー」○轉じてゆづる(遜讓)の義とす。○すすむ(進)○くむ。王禹偁文「平ー江瀕」＝挹。㊁あつめる、幅に通ず。○あつまる(聚)○あはす(合)

【揑客】イフカク 平揑して拜せざるの客、即ち主人と庭を分ちて抗禮する者。漢書、汲黯傳「夫以二大將軍一有二ー一、顧不レ重耶」大將軍は衛青。

【揑讓】イフジヤウ ○拱手の禮をなしてへりくだる。論、八佾「子曰、君子無レ所レ爭、必也射乎、ーー而升下而飲」○位を讓りあふにいふ。征誅の對、堯の舜に授け、舜の禹に授くる如きはーーなり、湯の桀を放ち、武王の紂を伐ち、兵力を以て國を得たる如きは征誅なり。

【揑遜】イフソン へりくだる。宋史、上二徽號一表「ーー之美、放勳比レ隆」

【揑揑】シフシフ あつまる貌。詩、周南、葛覃「羽ーーヲ」＝翕翕。

【揾】エン 感

○したやく(官屬)漢書、蕭何傳「爲二沛主吏一ー」正をーといひ、副を屬といふ。○國々の求の音を借用す「常陸大ー平國香」

【揾史】エンシ 屬官。後漢書、百官志「郡國皆置二諸曹一ーー」＝掾史。

【揾】エン 感 琰

○おほふ(掩)孟、萬章「從而ーレー之」おほひて一ぱいになる。○禮器「豚肩不ー豆」＝掩。○閉ぢ藏す、おほひ隱す。大學「ーー其不善一而著二其善一」○くるしみせまる(困迫)禮、表記「篤以不ー」○ーー然は疾く歸る貌。

【揾取】エンシユ おほひとる。般若傳、註「ーーニー衆食ー」

【援】㊀エン ㊁エン ㊂エン 寒 元

㊀ひく(引)「引ー」ひっぱる。孟、離婁「ーー之以手」○ひきと

ろ（引取）手に取る「一筆」○ぬく（拔）○牽き持つ、すがり攀づる「攀一」中庸「在下位不一」「上」○刀の直くして上に達するもの。○たすく（扶）すくふ（拯）㊁たよる。○たすく、たすけ（救助）「應一」魯語「爲四鄰之一」○まじはる（接）㊂ひきもつ（引持）晉語「侏儒不可使一」

同訓異字 援・助・輔・弼・扶・佐等の別は助（力部五畫）の條を見よ。○援・牽・引・挽・曳・延・惹・彈・摟・攀の別は牽（牛部七畫）の條を見よ。

【援引】エンイン ○ひく、ひっぱる。後漢書「其有ア更相一一、希ル附二權強一者上」○證を引く。公羊傳、序「一一他經、失二其句讀一」

【援應】エンオウ あひ應じてたすけあふ。‖應援。

【援救】エンキウ すくふ。又、すくひ。後漢書「求一一以濟二其患一」‖救援。

【援據】エンキョ 證據を引く。國雅疏、序「事有二證據一一一徵レ之」

【援兵】エンペイ すくひの軍隊。‖援軍。

【援繫】エンケイ よりすがりて榮達を求める。晉語「蕭叔坐二於范氏一、曰將以求一一一也」

【援護】エンゴ たすけまもる。又、たすけ。‖援庇。

【援助】エンジョ たすけ。後漢書「招二匈奴一、迎二爲祖一、以爲一一一」‖援救。

【援拯】エンジョウ たすけすくふ。晉書「左右一一、後得二累居二郡守一」‖援救。

【援庇】エンヒ たすけかばふ。元稹文「無二親黨爲一臣一一一」‖援護。

【援筆】エンピツ 筆をとりてかく。魏志、陳思王植傳「一レ一立成、可レ觀」

【援兵】エンペイ すくひの兵士。‖援軍。

【援糧】エンリョウ すくひの糧食。

【援路】エンロ すくひのみち、援兵の來るみちすぢ。

【揩】

㊀カイ ㊁カイ ㊂カッ

黙 封 佳

㊀ぬぐふ、する、こする（摩拭・擦）「淨一」「磨一」㊁一排はつよくつく（強突）○つづみの一種「一鼓」㊂たたく、うつ。○樂器の名、之を撲りて以て樂を止むるもの。禮、明堂位「拊搏玉磬一柷」‖敔。

【揩磨】カイマ すりみがく。桂海虞衡志「一一去レ皮」

【揀】カン

簡 簡に通ず

○えらぶ（選擇）選拔する「選一」「料一」范益謙、座右誡「凡喫飲食、不可一一擇去取」○わかつ（分別）

同訓異字 揀・撰・選・擇・簡の別は選（手部十二畫）の條を見よ。

【揀選】カンセン 人才をえらぶ。清會典「欽派一一大臣司レ之」

【揀擇】カンタク わかちえらぶ。魏志、袁紹傳「博愛容レ衆、無二所一一一」‖選揀。

【揮】キ

微

○ふる、ふるふ（奮振）振りまはす「一刀」「一筆」○ふるひあらはす「發一」○うごかす（動）○そそぐ（灑）そそぎすてる。左、僖二三「奉匜沃盥、既而一之」○つくす（竭）○ふりまきちらす（散）○さしづするはた、さいはい（麾）采配ヲヒをふる、さしづする「指一」○しるしばた（幡）○一筆は疾き貌。

同訓異字 揮・奮・震・振・戰・顫・篩の別は奮（大部十三畫）の條を見よ。

【揮羽】キウ はねうちはをふるひうごかす。曹植詩「一レ一邀二清風一」

【揮毫】キガウ 筆をふるひて書畫をかく、毫は筆。杜甫、飲中八仙歌「一レ一落レ紙如二雲煙一」‖揮筆。

【揮汗】キカン あせをふりそそぐ。戰國策、臨淄之途、車轂擊、人肩摩、連レ衽成レ帷、舉レ袂成レ幕、一レ一成レ雨」人の盛だ衆き形容。

【揮霍】キクワク ○疾き貌。陸機、文賦「紛紜一一」一說、手を揩かすを揮、手を反へすを霍といふ。○輕がるしく財物を散ずる義。

【揮擧】キキョ こぶしをふりまはす。

【揮酒】キシュ 次條に同じ。

【揮灑】キシャ 筆をふるひ墨をすすぐ。書畫をかく義。宣和畫譜「岩宗且得レ酒輒醉、長嘯一一、以爲二消樂一」‖揮洒。

【揮洒】キシャ 勢よく筆をふるひはらひて書畫を書く。陸游、草書歌「忽然一一不二自知一」

【揮散】キサン ふるひちらす。柳宗元文「論說辨問、貫二穿上下一一一而成同、幽悟而大明」

【揮尿】キニョウ 恣しいまま（放縱）にふるまふ、一切を指揮して勞に人なきが如きをいふ。又、奮迅なり。莊、田子方「至人者上闚二青天一、下潛二黃泉一、一二八極、神氣不レ變」其の氣度の大いなるをいふ。

【揮染】キセン 筆をふるひ紙をそめる、書畫をかく。唐書、懷素傳「無二紙可レ書、種二芭蕉一供一一一」‖揮灑。

【揮涕】キテイ なみだをふるひ落す。晉書、姚襄載記「莫レ不二北望一レ一」‖揮淚。

【揮掉】キテウ ふるひすてる。文同詩「郡兵眠二寶玉一、得レ此只一一」

【揮拂】キフツ かきならす。張協、雜詩「賦「振二素手一以一一」

【揮發】キハツ 化學にて、被體が常溫の溫度にて氣體となりて飛びちる義

「一一油」＝揮散。

【揮筆】キヒツ　筆をふるひ書をかく。李頎詩「興來灑二素牕一、一レ一如二流星一」＝揮毫。

【揮涙】キイたもとをうちふる、勢よくふるまふ形容。阮籍詩「一レ一撫二長劍一」

【揮霍】キクワク　ひちをふるふ。蔡邕文「不レ動二干戈一、一レ一而定」

【揮揚】キヤウ　ふるひあげる。晉書、祖逖「立レ志濟レ世一ニ一仁風一」＝發揚。

【揮涙】キルイ　なみだをふりちらす「一レ一斬二馬謖一」は慈愛の心を割きて軍法に行ふ義。劉表、諸葛亮傳に見ゆ。

【揆】キ　㊥

○はかる（度）はかり知る「測一」「度一」○はかりごと、のり（法）みち（道）孟、離婁「先聖後聖其一一也」○百一は堯舜時代の官名、宰相の職。書、堯典「納二于百一一」百事を一度する義。轉じて後世宰相を一といふ「首一」○㊀人民が黨を結びて上に反抗する擧動「百姓一一」

同訓異字　揆・計・謀・圖・量・度・稱・測・料・揣・商等の別は計（言部二）の條を見よ。

【揆一】キイツ　其の道皆同一なる義。孟、離婁「先聖後聖、其揆一也」

【揆策】キサク　はかりどと。又、はかりごとを運らす。聖主得二賢臣一頌「圖レ事一レ、則君不レ用二其謀一」

【揆敍】キジョ　はかりついづ。孟子題辭解「包二羅天地一、一二萬類一」

【揆水】キスイ　みづの深さをはかる。陸機文「臨レ淵一レ、而淺深難レ察」

【揆測】キソク　はかる。曆志「三代之興、皆一二天行一、考二正星次一」＝揆度。

【揆度】キタク　はかる。禮經、傳「一二一優劣一」＝測度・度揆。

【換】クワン　㊥

○かふ、とりかへる（交易）「交一」晉書、阮孚傳「晉以二金貂一一酒」○あらためかへる「改一」「易一」○かはる、うつりかはる（交替・變移）「物一星移」○あらためる（改）○畔一・叛一は強くはしいまま（恣睢）

同訓異字　換・變・化・易・替・代・更・渝等の別は變（言部十六畫）の條を見よ。

【換衣】クワンイ　きものをきかへる。ころもがへ。事文類聚「遇士新及第、一レ一、以二故衣一予レ人」＝更衣。

【換易】クワンエキ　とりかへる。殺梁傳、注「擅相一一」＝更換。

【換鵝】クワンガ　王羲之が道德經を書きて鵞と交換せし故事。晉書、王羲之傳「羲之性愛レ鵞、山陰有二一道士一、養二羣鵞一、羲之往觀焉、意甚悅、因求レ市レ之、道士云、爲寫二道德經一、當レ爲二一羣相贈一耳、羲之欣然寫レ畢、籠レ鵞而歸、甚以爲レ樂、其任率如レ此」

【換氣】クワンキ　新らしき空氣を入れかへる。

【換錢】クワンセン　りゃうがへ。＝換錢・兌換。

【換刑】クワンケイ　法律上、罰金・科料等を納めざるかはりとして拘留に處する。

【換言】クワンゲン　いひかへる、他の言葉にて言ひあらはす。

【換骨奪胎】クワンコツダツタイ　古人の詩文の意を取り、其の語を換へて己の作とする。冷齋夜話「文章雖レ不レ要レ謂二古人一言一句一無二自有一奪胎換骨等法一、所レ謂雖レ用二一粒一點レ鐵成レ金也」

【換算】クワンサン　○單位の異なる數量に計算しかへる。○りゃうがへ。

【換姓】クワンセイ　めうじをとりかへる。＝改姓。

【換錢】クワンセン　りゃうがへ。それを業とする家を錢莊といふ。＝換錢・兌錢。

【揭】㊀ケツ　㊁ケイ　㊥　㊐月

㊀かかぐ、たかくあげる（高擧）質誼、過秦論「一竿爲レ旗」○になふ（擔）おふ（負）戰國策「遽煖于是、乘二其車一一其劍一」○一はながし（長）○しるし（表標）○かかげしらせる（表示）「一示」「表一」○車の疾きさま、偈に通ず。㊁かかぐ、からげる。衣をかかげて淺き水を渉る。詩、邶風「淺則一一」

同訓異字　揭・挑・褰の別は挑（手部六畫）の條を見よ。

【揭竿】ケイカン　○さををたてる。賈誼、過秦論「斬レ木爲レ兵、一レ一爲レ旗」倉卒に事を擧げ、僞に竿を掲げて以て號召す。○轉じて後世、亂を倡ふる義と爲す。

【揭曉】ケイギョウ　揭示してきとす。曉は諭。

【揭載】ケイサイ　新聞雜誌等に詩文などをのせる。

【揭示】ケイジ　政令をかかげしめす。宋史、食貨志「一一不レ實者、民得二自言一」＝揭帖・揭貼。

【揭帖】ケイチョウ　次條に同じ。古、帖・貼通ず。通雅「納二戰攻一分合二諸房一一」

【揭貼】ケイチョウ　かかげはりだす。宋史、高宗紀「書二之屏風一以レ步一一」＝揭帖。

【揭榜】ケイバウ　看板をかかげる。周伯琦詩「明朝一レ一醉二黃封一」

【揭斧】ケイフ　をのをかかげる。淮南

子「操ル釣上ル山、ーレー入ル澗」物を用ふるに其の所を得ざる喩。

【揭陽】ケイヤウ 縣の名、漢代に置く、其の故城は今の廣東省ーー縣の西に在り。

【揭櫫】ケイケツ すだれをかかげる。韓愈詩「半身映ル竹疑ル簾ノ語、一手ーレー叡ル轅ノ頭」‖褰開。

【揭竿】ケイカン ○いちじるしく明か。○そばだつ貌。張衡、西京賦「懸ル垂珍御、ーー中蜂」

【揭溪斯】ケイケイシ 元の人、字は曼碩、翰林に入り侍講學士たり、遼金宋三史を總修す、最も文時に長ず。

【揭揭】ケイケイ ○長き貌。詩、衛風「碩人ーー」○高き貌。劉向、九嘆「服ル常酌ル其殊ル俗分、貌ーー以巍巍」○疾く驅る貌「漢書、注」

【揭】 ㊀ケン ㊁ケン 阮 先

㊀あぐ（舉）司馬相如、上林賦「ー鰭掉ル尾」○になふ、肩にて物を持ち擧ける。㊁とづ。とざし（閉）○ふさぐ（塞）○まじふ（接）○かたし（難）○せき、水決の口を塞ぐ處に竹を樹て其の中に草と土とを塡めたるもの。漢書、溝洫志「下ル淇園之竹ル以爲ーー」○封界を立てる。

【揲】 ㊀セフ ㊁セフ 葉

【揲蓍】セフシ 蓍（手部十一畫）の俗字。

【揲】 ㊀サク ㊁セフ 藥 葉

㊀人の髀のほそ長くうるはしき貌。㊁さけて小さき貌。

【插】 サフ 洽 插は俗字

○さす、さしはさむ、刺し入れる「亂ーー」「種ーー」○になひほう（擔棒）○すき。‖鍤。

同訓異字 サフ 插・挿・夾の別は挾（手部七畫）の條を見よ。

【插秧】サフヤウ 稻の苗をうう、田植をする。高適詩「淇水堪ル垂ル釣、江田耐ルーレー」

【插羽】サフウ 兵の召狀に鳥の羽をさす、其の速かならんことを示す。漢書、高帝紀「羽檄徵ル天下兵ー」注

【插花】サフクワ ○花をかんざしにさしはさむ。張耒詩「ーレー野婦抱ル兒至、曳ル杖老翁扶ル背行」○いけばな（活花）

【插畫】サフクワ 畫をさしはさむ、さしえ。

【插刺】サフシ ○さす。さしはさむ。元稹詩「ーニー頭髮」相誇張」○衙なひ棒にて禾束をつきさす。急就篇、顏師古注「ーニー禾束ー」

【插嘴】サフツイ 口差し出口する。

【插入】サフニフ さしはさみいれる。

【插紛】サフフン 文書の中に圖解する爲めに加ふる繪畫。‖插畫。

【插木】サフモク 植物の枝を切り、其の一端を土中に埋めて根を生ぜしめる法。

【揣】 ㊀シ ㊁タン 紙 寒

㊀はかる（量度）おしはかる。高さをはかる。孟、告子「不ーレー其本而齊其末」○さぐる（探）「ー知」○さだめる（定）○さぐりこころみる（探試）○のぞく（除）㊁聚める貌、まるくあつまる。馬融賦「冬雪ー封乎其枝」‖摶。

同訓異字 揣・計・謀・圖・量・度・料・忖・商等の別は計（言部二畫）の條を見よ。

【揣骨】シコツ 骨をなでさぐる、相術の一法。劇談錄、開成中、有ニ醫復本者ー、無ニ目、善聽ル聲ーレー、言ニ休咎ー必中」

【揣度】シタク おしはかる。柳宗元文「退自ーー、惕然汗流」‖忖度。

【揣知】シチ さぐりてさとる。漢書、雋方進傳「ーニー其指ー、不ニ敢發ー言」

【揣摩】シマ ○己の心を以て人の心をおしはかる。戰國策「蘇秦乃夜發ル書、陳ル篋數十、得ニ太公陰符之謀ー、伏而誦ル之、簡練以爲ニーー」○轉にて古人の文字を玩索して之に倣效するにもいふ。

【揣篇】シヘン 筒を手にてなでさする。蘇軾、日喩「猶ル日ル揣ル日也」

【挼】 ソウ 尤

○さがす（索）‖搜。○たづねる（討）文義を窮討する。韓愈、進學解「獨旁ー而遠紹」○おほくのこころ（衆意）○あつまる（聚）○つよくはやし（勁疾）○やさけび（矢行聲）

【揉】 ㊀ジウ ㊁ジウ 有 尤

㊀みだれまじる。史記「百家競列、事跡錯ー」○もむ、手にてひねり柔ける。王氏談錄「手自和ー」○したがふ（順）やはらける、柔順ならしめる。詩、大雅「ー此萬邦」‖柔。㊁ためる、木を矯めて屈伸する。易、繫辭「ー木爲末」かがむ（屈）○闕すごたごた。○身體をもみひねる「ー療治」

【揉輪】ジウリン 車の輪をためてまるくする。管子「不ル明ニ於化ー、而欲ニ變ル俗易ル敎、猶ニ朝ーレー而夕欲ニ乘車ー」

【揗】 ㊀ジュン ㊁ジュン 眞 軫

㊀なでる（摩）㊁なでて、なぐ

さめる（安慰）

【解字】恩を以て相撫し、心を以て相恤むを普撫といふ。字、盾に从ふ、捍衛の意あり。

【揲】セツ　テフ　葉　厥

○一つ一つ持ちてかぞへる（持數）易、繫辭「一之以四、以象四時」○はかる（度）

【揳】㊀セツ　㊁ケツ　㊂カツ　㊃ゲキ　屑　厥　黠　錆

㊀ふさぐ（塞）○ひねる（撚）○ぬぐひけす（拭滅）㊁はかる。荀、非相「不揣長、不一大」＝絜。㊂うちならす。史、貨殖傳「一鳴琴」＝鼓。㊃うつ、擊に通ず。後漢書、申屠剛傳「捶一牽曳於前」

【揃】㊀セン　㊁セン　霰　銑

㊀きる、はさみきる。史、魯世家「周公自一其蚤沈之河」（蚤は爪）＝翦。○たつ（斷）○わかつ（分別）○えらぶ（擇）○しるす（箋識）書翰の末に某一と用ふるは某識といふに同じ。㊁しるし（驗）○するどし（銳）○つらぬく（貫）○圓そろふ、そろへる。

【揃平】セン　きりたひらげる。魏書、明亮傳「拓二定江表一一一蕩衍」

【揃剪】セン　さきわかつ、剪も亦分。史、四南夷傳「四夷後一一、分二二方」

【揎】セン　先

○うでをまくる、袂をかかげ臂を出す。○手にて衣を發く、からく。蘇軾詩「玉腕半一雲碧袖」○ちぢむ（縮）

【揕】㊀チン　㊁チン　寢　祕

㊀ねらひうつ（擬擊）史、荊軻傳「右手持二匕首一之、未レ至レ身」○さす（刺）㊁木を斫る。

【揕胸】サクキョウ　むねをつく。戰國策、左手把二其袖一、右手揕二其胸一」

【揥】テイ　タイ　霽

○さしぐし、象骨にてつくりし梳。詩、鄘風「象之一也」○すつ、すてる（捐棄）

【提】㊀テイ・ダイ　㊁ティ　齊　㊂シ　支

㊀さげる、ひっさぐ（挈）詩、大雅「匪面命之、言一其耳」○あぐ（舉）○つづみ、曲りたる木に釣り下げ、馬の鬣の上に立つる鼓。○一一は行歩安らかにしてつまびらか（安諦）なる貌、ゆっくりと行く。詩、魏風「好人一一」○攝一は星の名。爾雅「大歲在寅、曰一一格」○もつ（持）手にてさげ持つ。○すべ持つ、すべ治める「一督」「一學司」○たすける（扶）○ひきゆく（牽行）ひきつれ行く「左一右挈」○招一は寺。○闍婆一一は樹の名、畢鉢羅樹、釋迦牟尼佛の其の樹の下にて佛果を得たりしよりいふ。轉じて正覺正道、佛果の義とす。无量壽經「菩一、正覺佛果異稱」㊁たつ（絕）○なげうつ（擲）戰國秦策「以藥囊一一荊軻」㊂一一は烏の翠り聚まりて飛ぶ貌。詩、小雅「騋飛一一」○朱一一は縣名、四川省に屬す、善き銀を出す、因りて銀を朱一といふ。

【提握】テイアク　たづさへ持つ。高適詩、吹噓成二羽翼一、一一動二秀拳一」

【提案】テイアン　議案をもち出す。又、其の議案。

【提要】テイエウ　要領をあげる。韓愈、進學解「記レ事者、必提二其要一、纂レ言者、必鉤二其玄一」＝摘要。

【提拔】テイバツ　たすけてひき用ふる。唐書、許孟容傳「孟容方勤有二識學一、每所二折衷一、咸得二其正一、奸一一士」＝揚拔。

【提孩】テイガイ　いとけなきこども、提は手をひっさげる、孩は初めて笑ふ年頃。韓愈詩「莫レ煩二相勸勉一、傳示及二一一一」

【提綱】テイカウ　おほづなをひっさげろ、事の大要を擧げる。宋史「一レ一而衆目張、振レ領而衆毛理」＝提要。

【提衡】テイカウ　衡は平、兩兩相共に等しき義。韓非子「貧賤不二相羞一、貴智一一而立、治之至也」

【提挙】テイキョ　地方の學事をすべ司る官名、宋代、提擧學務司を置く、清末一一使と改む、今は廢す。

【提起】テイキ　○もちあげる。＝提擧。○もちだす「訴訟一一」＝提出。

【提語】テイゴ　議題をもち出す。又、其の議題。

【提琴】テイキン　樂器の名。＝胡琴。

【提擧】テイキョ　○管理の義、宋代、一一常平倉、一一水利、一一茶鹽等の官あり。○轉じてひろく監督官の職に用ふ。

【提供】テイキョウ　さし出す、もちだす。

【提刑】テイケイ　地方の刑獄をとりしらべる官、宋代に置く、明清は一一按察使といふ。

【提擊】ティゲキ　持ちささげる。劉卻履、贈句「兩賢荷二辭酌一、挾中慨二一一」

【提攜】ティケイ　○互に手をひく。曲禮「長者與レ之二一一、則兩手奉二長者之手一」＝提挈。○互に相たすける義。孟郊詩「小儒悶二章句一、大賢高二一一」

【提挈】ティケツ　劍をひっさげうつ。漢書、王莽傳「拔レ劍四面二一一」

【提挈】ティケツ　○手をひきて互にたすけあふ。史、張耳陳餘傳「以二兩賢王一、左提右挈、而責二殺レ王之罪一、滅レ燕易矣」＝扶持。○手にてひっさげる。禮、王制「班白不二一一一」

【提控】ティコウ　ひきとどめて制御する。金史、章宗紀「各具以二聞見官一、常加二一一一」

【提契】ティケイ　文書をたづさへる。西京雜記「揚子雲好レ事、常攜レ鉛二一一」

【提示】ティジ　ひっさげ出してしめす。

【提身】ティシン　みをぬきんづ。

【提耳面命】ティジメイ　事を諭すに詳切なる義。詩、大雅、抑「睠二面命一之、言提二其耳一」

【提唱】ティショウ　○事に先だちてとなへ導く。＝提倡。○倡意義を說き示す「碧巖錄一一」

【提出】ティシュツ　もち出す「題案一一」

【提撕】ティセイ　○ひっさげる。○振作する義。韓愈詩「所レ職事無レ多、又不二自一一一」○後進の人をしへ導く。

【提然】ティゼン　ひいでぬきんでる貌。

【提訴】ティソ　訴訟を提起する。＝起訴。

【提持】ティジ　ささげもつ。

【提題】ティダイ　かしらをもちあげる、文中にて、天子に關する文字を別行にして上に掲げ出して書くをいふ。名山畧「翁萬迪傳、萬迪謝疏中、有二一人字矣一一一、爲二不敬一、斥爲レ民」

【提督】ティトク　軍隊をすべる人「水師一一」

【提拔】ティバツ　ひきぬきて用ふる。寒素を提擧し、淹滯を拔擢する。陳信文「天澤沛然、譯垂二一一一」

【提筆】ティヒツ　ふでをたづさへる。王禹偁詩「一一一入二廣場一、辭氣千二斗牛一」

【提封】ティホウ　知行の地、提は擧、大いに其の封疆を擧ぐる義。漢書、刑法志「一同百里、一一萬井」

【描】ベウ　蕭

○うつしゑがく（摹畫）白一一はすみゑ。圖繪寶鑑「白一荷花」○手本に依りて摹寫する。

【描金】ベウキン　まきゑ（詩繪）漆と金銀粉とにて畫く。

【描畫】ベウクワ　ゑがく。鄭玉詩「丹青花草春一一、水墨林泉秋寫成」

【描寫】ベウシャ　ゑがきうつす、にせてゑがく。圖繪寶鑑「一一飄逸」＝描摹。

【描摸】ベウバク　ゑがきうつす。周密詞「丹青自是難二一一一」＝描摹。

【挪】ナ　麻

からかふ。＝挪。

【挪揄】ユ　からかふ、手をあげて嘲弄する。元稹詩「郎郎笑二鄒衍一、燕劇受二一一一」＝邪揄・揶揄。

【揚】ヤウ　陽

○あがる、高く飛び擧る「升一」「鷹一」漢高祖、大風歌「大風起兮雲飛一」○おこす（發）○あぐ（擧）○ひらく（披）○あらはす、あらはれる（顯）名高くなる「顯一」○高くする。曲禮「將上堂、聲必一」○盛んになる、勢がよくなる。書、泰誓「我武惟一」○激する。詩、唐風「一之水、白石皓皓」○ほめたたへる（稱說）「稱一」「贊一」「褒一」禮、祭統「稱二其先祖之美一」○つぐ（繼）書、立政「以二武王之大烈一」○をの、まさかり（鉞）詩、大雅「干戈戚一」○まゆ。又、眉の上。○一一は自ら足れりとする貌。○禹貢の九州の一、今の江蘇・安徽・浙江・江西・福建は皆古の一州の地。

同訓異語　揚・擧・稱・抗・昂・騰・抗・掀・翹の別は擧（白部十一畫）の條を見よ。

【揚帆】ヤウハン　かぢをあげ舟をやる。江淹詩「緩步遵二汀渚一、一レ一泛二蒼瀾一」

【揚歌】ヤウカ　聲をあげてうたふ。孫綽、登樓賦「舟人鼓レ檝而一一」

【揚搉】ヤウカク　揚はあげる、搉は引く、證據を擧げひきて陳べる。漢書、鼂錯傳「一二一古今一一說、大概の義、大略をあげる。

【揚言】ヤウゲン　聲をはりあげていひふらす。大言壯語する。逸周書「一一者寡レ信」＝颺言。

【揚沙】ヤウサ　すなを吹きあげる。春秋緯「月離二于箕一則風一一」

【揚州之鶴】ヤウシウノツル　多くの欲を合せ受けんと欲するに喩ふ。蘇軾、綠筠軒詩「可レ使二食無レ肉、不可二居無一竹、無レ肉令二人瘦一、無レ竹令二人俗一、人瘦尚可レ肥、俗士不可醫、俗人笑二此言一似レ高還似レ癡、若對二此君一仍大啖、世間那有二揚州鶴一」注「昔有レ客、冒レ志、或願爲二揚州刺史一、或願多二財貨一、或願二騎レ鶴上昇一、其一人曰、腰纏二十萬貫一、騎レ鶴上二揚州一、善頌二三人之欲一也」

【揚子法言】ヤウシホウゲン　十三卷、漢の揚雄撰す。論語に擬して作る。

【揚心流】ヤウシンリウ　圍棋術の一派、秋山龜時はじむ。

【揚鞭】ヤウベン　○こぶをはりあげる。曲禮「將上堂、鞭必揚」○ほまれのある義。孔融文「一二一紫徽二亞二光

如故」
【揚撫】ヤウブ あげなげうつ。蘇軾書「米芾京師、號收漆瓶觚、鐘二乎其間、開元初、詔、使ニ一一而較二其虛實一」
【揚月皙】ヤウゲツセキ 揚は眉上の闊きなり。皙は膚の白きなり。詩、鄭風「揚且之皙也」
【揚播】ヤウハ あふられあがる。呂覽、舟中之人盡ー一入二于河一」
【揚簸】ヤウハ あふられあがる。王禹偁詩「慚糾任ニー一」
【揚旆】ヤウハイ はにをあげる。沈約詩「推ニ殺二晴嘯一、ー一九河陰」
【揚帆】ヤウハン ほをあげる。劉禹錫詩「ー一乘二浪華一」＝擧帆。
【揚眉】ヤウビ まゆをあげて見る。列子「ー一而望レ之、弗レ見二其形一」
【揚眉吐氣】ヤウビトキ 志を得る形容。李白文「何惜二階前盈尺之地一不レ使二白——、澄江靑雲耶」
【揚袂】ヤウベイ たもとをあげる。李白詩「ー一正二北辰一、開ニ襟攬二衡漳一」
【揚鞭】ヤウベン むちをあげる。勢よく馬をかるにいふ。潘岳應詔詩「降ニ上ー一烟霄遂」
【揚名】ヤウメイ なをあげる。孝經「立レ身行レ道、ー二ー手後世一」
【揚揚】ヤウヤウ 得意なる貌。史、晏子傳「意氣ー一、甚自得也」
【揚雄】ヤウユウ 字は子雲、漢の蜀郡成都の人。同賦に長ず、口吃にして劇談すること能はず。而して沈思を好む、方言・法言・太玄經等の著あり。
【揚厲】ヤウレイ 高く發揚する。韓愈文「ニー無前之偉績一」

【揄】

㊀ユ ㊁エウ ㊂イウ・ユ ㊃トウ
尤 尤 蕭 虞

㊀ひく(引)ひきずる(曳)史、貨殖傳「ー長袂躧利疑二〇ー揚はほめそやす。〇邪ーは手を擧げてからかふ、邪は揶。㊁ー狄は翟を畫きたる夫人の服。＝褕。㊂あぐ(擧)米を臼より出す。詩、大雅「或舂或ー」㊃ひく(引)〇たる(垂)
【揄狄】ヨウテキ 雉子を畫きたる衣、古、三夫人及上公の妻の命服。禮、玉藻「夫人ー一」＝褕狄。
【揄袂】ヨウベイ そでを長く引き垂れる。莊、逍遙遊「披ニ裂ー一」
【揄揚】ヨウヤウ 引き擧げる、轉じてほめそやす、譽め言ふ。班固、兩都賦序「雅頌ー一、著二於後嗣一」

【揖】

㊀アク・ヤク ㊁エッ 葉 緝

㊀とる(捉)もつ(持)捉へ持つ、しめつける。史、劉敬傳「ー一天下之吭」急所をおさへる。〇にぎる(握)「ー腕」史、周本紀「彎ニ弓ー一劍」〇てにみつ(滿手)㊁もつ(持)
【揖咽】イツイン のどをつかむ、急所をおさふるに喩ふ。解嘲「揖二其咽一、尤二其氣一」＝捽吭。
【揖吭】イツコウ のんどをしめつける、要害の地に據りて敵を制する義。史、劉敬傳「今陛下入關而都、案二秦之故地一、此亦揖二天下之吭一而搤二其背一也」＝捽吭。
【揖殺】イツサツ にぎりてしめころす(詩、齊風、南山小序、注)
【揖腕】イツワン うでをきびしくにぎる、奮ひて意氣ごむ貌。史、刺客傳「偏袒ー一而進」＝捽腕・掬腕。

【搖】

エウ 蕭 蕭

〇うごく、うごかす(動)ゆるぐ、ゆるがす「漂ー」「蕩ー」「震ー」〇おこる(作)〇步ーはくびかざり(首飾)〇ーはおちつかず、託する所なし。又、颱ふる貌。〇扶ーは暴風。〇遙に通ず、消ーは逍遙。

同訓異字 搖・動・蕩の別は動(力部九讀)の條を見よ。

【搖曳】エウエイ ゆらゆらと動かしひく貌。鮑照詩「颱戾長風振、ー一高帆擧」
【搖搖】エウエウ 〇心うれへておちつかざる貌。詩 王風「行邁靡靡、中心ー一」〇舟などのゆらゆらとうごく貌(歸去來辭)
【搖漾】エウヤウ うごかしひらく。常袞文「投二捐丹草一、ー一脅蘇」
【搖揺】エウエウ うごく。うごかす。宋史、蘇轍傳「多起二邪說一、以ー一在位」
【搖兀】エウゴツ ゆりうごく。范成大詩「竹輿ー一走墜岩」
【搖膝】エウシツ ひざを動かす。北史「ー一吟咏」
【搖車】エウシヤ 小兒を容れて牽き動かし眠らしむる車。戴善夫詩「古人製二小兒睡車一、曰ー一」
【搖櫓】エウロ 櫓をうごかす。李華詩「ー一隨江流、江清山復直」
【搖旌】エウセイ ゆらめくはた、心のおちつかざるに喩ふ。白居易詩「年光同二激箭一、鄕思極ー一」
【搖蕩】エウタウ ゆれうごく、ゆりうごかす。史、司馬相如傳「隨レ風澹淡、與レ波ー一」＝搖動・搖盪。
【搖盪】エウタウ 前條に同じ。盪は震動。
【搖橹】エウロ かいをゆり動かして船をやる。常建詩「春風又ー一」
【搖動】エウドウ ゆるぎうごく。北史、章世康傳「扮綽前走周齊分界、恐生ー一」＝搖蕩。
【搖尾乞憐】エウビコツレン 人の卑屬にしてこびへつらふこと、狗の如くなるに喩ふ。韓愈文「若二使ー一首帖レ耳、搖レ尾而乞レ憐者、乘二我忘一也」

【搖吻】ヨウフン くちびるを動かす。甘論する義。宋史、徐鉉伝「汝且爲二陛人一作二說客一耶」

【搖揚】ヨウヨウ うごかしあげる。うごきあがる。張耒、井詩「寒槽下鉄、泛二迸葉一以ー」

【搖漾】ヨウヨウ ○水のうごく貌。鮑照文帝誄「江ー而生レ風」○糸などのおよぎ動く貌。温庭筠詩「游魚自ー」

【搖籃】ヨウラン ○小兒を容るるたけかど、縄にて空にかけ、ゆり動かして眠らしむる。荊楚歳時記「今眠二小兒一竹籃、名二ーー一」○轉じて故郷、又は嬰兒時代の儀とす。

【搖櫓】ヨウロ ろをうごかし舟をやる。徐鉉詩「ーレー過江遅」

【搵】ワン

ゆびにておさへる（指按）

【搉】㊀カク ㊁クワク 薬 覺

㊀たたく、たたきうつ（敲擊）○はかる、はかりかんがへる（商量）北史、崔孝芬傳「商ー古今」○ひく（引）○もっぱらにす、心を專一にする。班固、答賓戲「般輪ー巧於弄斤」般輪は人名。○專賣して利を獨占する「ー利」權に通ず。㊁てのうらをかへす。＝擢。

【搉過】カクカ 貿貨を監督するところ。宋史、眞宗紀「景德二年置二權州安撫軍ーー一」

【携】攜（手部十八畫）の俗字。

【搴】ケン 先 銑

○とる（取）○ぬく（拔）抜き取る「抜ー」＝搳。○かかぐ。○ちぢむ（縮）

同訓異語 搴・取・執・秉・把・操・採・摘等の別は取（又部六畫）の條を見よ。

【搴旗】ケンキ 敵にかちて旗をぬき取る。漢書、季布傳贊「身陷軍レー者數矣」

【搴摘】ケンテキ ぬきとる。釋無可、秋胡詩「蕙均昔ーー、紉佩挂二衡裳一」

【搴擢】ケンタク かかげとる。王冷然、初月賦「ーー而不レ盈」

【搆】コウ 尤 別字構とは別字

○ひく（牽）○ー搆は事を解せざる義。

【搩】コツ 月

○ほる（掘）○あばく（發）吳語「狐埋レ之、而狐ー之、是以無成功」○ーーは力を出してはたらく統。○にごす（濁）みだす（亂）かきまはす。呂覽、本性「水之性清、土者ー之」

【搩搩然】コツコツ 力を用ふる貌。莊、天地「ーー馬レ力甚多、而見レ功寡」

【搓】サ 歌

手でもみ碎く「ー挼」手にて相摩す。陸游詩「柳細ー雜似」

【搔】㊀サウ ㊁サウ ㊂サウ 巧 號 豪

㊀かく（手爬）爪にてかく「爬ー」○する（摩）なでる（刮）○さわぐ、さわがす、さわがし。騒に通ず。㊁つかむ（攫）㊂つめ（爪）手足の甲。＝蚤。○つめきる。

【搔爬】サウハ しらみの爲めにかゆきをかく。易林「亂頭多レ憂、ーレー生レ愁」

【搔首】サウシュ 頭をかく、心おもひつかず。思ふ所あり。又、憾あるときなどの動作。詩、邶風「愛而不レ見、ーレー踟躕」＝搔頭。

【搔擾】サウジョウ さわぐ。吳志、陸凱傳「所在ーー、更爲二煩苦一」＝騒擾。

【搔頭】サウトウ ○あたまをかく。後漢書、李固傳「固搔二頭踞一レー弄レ姿」○轉じてかんざし（簪）の異名。劉禹錫詩「蜻蜓飛上玉ーー」＝插頭。

【搔癢】サウヨウ かゆきをかく。詩話總龜「詩不レ著レ題、如二隔レ靴ーレー痒一。

【搘】シ 支

ささふ、つっぱる、支持する（捂）＝樴。

【搘柱】シチュウ ささへる。唐書、南詔傳、初鳳迦異築二拓東城一、諸葛亮石刻故在、文曰、碑即仆爲二漢奴一、夷長レ誓常以レ石ーー」＝樴梧。

【搜】㊀シウ ㊁サウ 尤 尤 通音

㊀さがす、さぐる「搏ー」「窮ー」もとむ（索）＝捜。㊁みだる（亂）

【搜提】ソウテイ ○みだれる。韓愈詩「狄風日ーー」○かきみだす。方岳詩「ーー平生書五車」＝擾亂。擾亂。

【搜求】ソウキュウ さがしたづねる。韓愈詩「雕刻文刀利、ーー智網紙」

【搜狼】ソウロウ けしきのよき處をさぐる。韓愈詩「ーー誰識入香冥」＝探勝。

【搜檢】ソウケン さぐりしらべる。唐史、郭祖深傳「ーニ姦慝一、不レ遺二強弊一」

【搜採】ソウサイ さがしてとる。梁書、孔休源傳「自二漢魏一至於齊梁一、竝皆ーー」

【搜索】ソウサク さがしもとめる。漢書、西域傳「提接ーー、問以レ所レ聞」

【搜集】ソウ　さがしあつめる。南史、梁安成王秀傳「一一經記」

【搜獎】ソウ　さがして引きたてる。劇史、宋高祖紀「一一忠烈」

【搜索】ソウ　さがしあつめる。隋書、經籍志「後齊遷ル鄴、頗更一一」

【搜選】セン　さぐりえらぶ。後漢書「太子官屬、宜ル一一令德」

【搜討】ソウ　さがしもとめる、討は探。韓琦詩「求者如ル麻逾百年、宜乎今日精二一一」

【搜採】サイ　さがしさぐる。韓維詩「奄二有勝跡一窮二一一一」‖搜索。

【搜剔】テキ　隱れたる物事をさがし出して悉しきをのぞく。晁沖之詩「一一發二清新一」

【搜爬】ハ　さがしてかきあつめる。孔平仲詩「擇決盤流錯、一一堂廉汙」

【搜訪】ホウ　さぐりとふ、人才をさがしたづねる。晉書、山濤傳「甄二拔隱屈一、一一賢才一」‖綠訪。

【搜覽】ラン　さがして取る。宋史、張浚傳「以ル一一豪傑一爲二先務一」

【搾】

〔國字〕音サク。しぼる、おして汁を取る「壓一」「一取」

【搦】シウ　尤

○とる（拘）○つめびき（手彈）樂器を搦奏する「一琵琶」

【搢】㊀シン　㊁セン　震　霰

㊀はさむ、さしはさむ（插）束帶の時、笏を帶にはさむ。‖縉。○ふるふ（振）「一鐸」㊁さしはさむ、膓に通ず。

【搢笏】シツ　しゃくを大帶にさしはさむ（禮、內則）

【搢紳】シン　古、官人が笏を大帶に插むをいふ。轉じて貴顯の人の稱。晉書、輿服志「所ル謂一一之士者、搢ル笏而垂二紳帶一也」‖縉紳・薦紳。

【搶】㊀シャウ・サウ　㊁シャウ・サウ　㊂シャウ・サウ　㊃サウ　庚　養　漾　陽

㊀つく（突）突きあたる。○こばむ（拒）○あつまる（集）とびかすむ（飛揚）莊、逍遙遊「飛一」楡枋に㊁帆に風を受けてのぼる「槍一」㊂かすめ取る、爭ひ取る。○ふれる（觸）○つく（突）㊃一攘はみだれる（亂）貌。○攙一は、ははきほし（彗星）‖槍。

【搶攘】ジャウ　みだれる貌。漢書、賈誼傳「國制一一、非二甚有一紀」

【搶奪】ダツ　かすめうばふ。康熙字典「今律法有二白晝一一一」

【搶地】チ　地を突く。戰國策、齊「布衣之怒、亦免ル冠徒跣、以ル頭一ル一耳」

【搶風】フウ　帆に風を受けて上る。閻賦「鷁子一ル一、榜人逸ル浪」

【損】ソン　阮

○へる、へらす（減）少くする「加一」「增一」「減一」「虧一」史、呂不韋傳「有ル能增二一一字一者、予二千金一」○おとす（貶）へりくだる「抑一」晉書、平安王孚傳「常自退一」○うしなふ（失）不利益。易、謙卦「滿招一一」○そこなふ、やぶる（傷）つかれる。吳志、樓玄傳「勞二聖慮一」○易の卦名、兌下艮上。○國そこなふ、しそんじる、しくじる「書きー一ず」

【損友】ユウ　交りて益なき友。論、季氏「損者三友、友二便辟一、友二善柔一、友二便佞一、損矣」

【損抑】ヨク　おさへしりぞける、慢心を抑へてへりくだる（後漢書、光武帝紀）‖抑損。

【損益】エキ　○へると、ますと、少くすると增し加へると。論、爲政「子曰、殷因於夏禮、所二一一一可ル知也」‖增減・增損。○そんと、まうけと、損失と利益と。

【損害】ガイ　へされそこなはれる。利益をそこなひへらす。

【損耗】コウ　へる、へらす。南史、傅縡傳「貨賄公行、幣藏一一」‖損失。

【損缺】ケツ　そこなひかく。荀悅文「清節毀傷、公義一一」

【損減】ゲン　○おとしへす。史、樂書「君子以ル誠退一爲ル禮、以二一一一爲ル樂」○そんをする。‖損失・減損・缺損。

【損失】シツ　そこねうしなふ、そんをする。後漢書、和帝紀「勉業若ル有ル所二一一一」‖失損。

【損傷】ショウ　そこなひやぶれる。劉禹錫詩「危根易二一一」

【損省】セイ　へらしはぶく。後漢書、桓帝紀「詔曰、其與服制度、有二踰ル侈長ル飾者一皆宜二一一一」

【損消】セウ　そこなひへる。阮籍詩「顏色改二平常一、精神自一一」

【損壞】エ　おとろへやせる。蘇軾文「一一相仍、流庸莫ル返」‖痩損。

【損膳】ゼンセン　食膳の費をへらす。史、平準書「天子乃一一ル一」

【損敗】ハイ　そこなひやぶれる。隋書、食貨志「每年收積、勿使二一一一」

【損貶】ヘン　へらしおとす。唐書「日膳惟鮮無二一一一」

【損名】メイ　名をおとす、評判のあしくなる義。唐書「急刻少ル恩、由ル是一一ル一」

【損抑】ヨク　おさへしりぞける、おさへてへりくだる。宋書、王惠緯傳「懼二其太盛一、勸令二一一一」‖損挹・抑損。

降損。

【損料】ソンリョウ 圖衣服・物品などの賃し賃、即ち使用料「一一貸し」

【搥】㊀タイ 灰 ㊁ツキ 支 ㊀なげうつ（擲）法言「一ー提仁義」㊁うつ（擣）搥にて撃つ。唐書、禮樂志「日未明、四刻」「一鼓爲二一嚴一」

【搥牀】ツイショウ 手にて其の坐具を撃つ。古詩「阿母得レ聞レ之、一ノー便大怒」

【搥背】ツイハイ せなをたたく。白居易詩「小奴搥二我足一、小婢搥二我背一」

【搪】タウ 陽 ○はる（張）○つく（突）＝唐。○ふせぐ（抵禦）

【搪突】トウトツ つきあたる。＝唐突・抵觸。

【搗】タフ 皓 ○つく。＝擣。○圖かてる、つけ加へる「一ーて加へて」

【搗亂】トウラン かきまぜる。秩序を紊亂する。＝擾亂。

【搯】ドウ 豪 或は掏に作る ○かかぐ。○たたく（叩）○とりいだす。

【搯撮】タウサツ かかげいだす。韓愈、孟郊墓誌「銘章棘句、一ニー胃腎一」

【搥胸】ツイキョウ 胸をうちたたく。嵇賦「一ー擗踊」

【搗】タフ 皓 ○うつ（手打）○おかす（冒）○する、うつす（臨摹）しきうつし「摹ー」「臨ー」○紙墨を用ひて古碑法帖などを摹拓スルする。韻會「今用紙墨磨摸古碑帖曰ー、有二宋ー・薄ー一」

【搗地錢】タウチセン 唐代茶商より收めたる稅。唐書、食貨志「茶商所レ過州縣有二重稅一、謂二之過境一、有二散商中一、諸道置レ邸以收レ稅、謂二之——一」

【搗本】タウホン いしずり、摹搗せし本の資。京持訪錄「唐太師顏眞卿乞米帖、眞蹟在二蘇滿處一、士人多有二臨ーー一」＝拓本。

【搭】トフ 合 又、搭に作る ○うつ（擊）○かく（挂）○つく（附）其の上に附加する義より俗にのる（乘）のす（載）の義とす「一車」「一船」○うつす（寫）梅堯臣詩「韓幹馬本模一時」＝摸。○短き衣。林逋詩「中有二病夫披一白ー」

【搭鉤】トウコウ 物をつりかけるかぎ。

【搭載】トウサイ ふねにのせる。船に積みこむ。

【搭乘】トウジョウ 船車にのる。＝搭船。

【搭船】トウセン ふねにのる。龍圖公案「可下搭二我船一而去上」

【搐】チク 屋 ○うごきていたむ（動而痛）身體がひきつけていたむ。漢書、賈誼傳「一二指一、身盧レ」「聊」○ひきつける（牽制）

【搦】ヂャク ヂョク 陌 篤 覺 ○おさへる（按）史、扁鵲傳「一ー髓腦」○なでる（摩）○とる（捉）江賦「舟子於是一棹」とらへる（捕）舊唐書、代宗紀「切加二捉一ー」○圖ムラ 捕へてしばる。○一手ノナは城の裏門。追手の對。

【搌】テン 先 ○うつ（急擊）○あぐ（揚）○ひく（引）

【搒】㊀ハウ ㊁ハウ 敬 漢 梗に通ず ㊀おほふ（掩）○ふねをこぐ（進レ舟）さをさす。㊁むちうつ（捶擊）罪人を笞ムチうつ「笞ー」

【搒人】ボウジン せんどう。＝榜人・舟人。

【搒笞】ホウチ 罪人をむちうつ。漢書、張耳傳「更ー一數千」＝笞掠。

【搒掠】ボウリャク 罪人をむちうつ。史、李斯傳「一ー千餘、不レ勝レ痛自誣服」

【搏】㊀ハク 藥 ㊁フ 虞 ㊀うつ（拍・拊・手擊）手にてばちばちとたたく「拊ー」史、李斯傳「彈箏ー髀」○もとめもつ（索持）○いたる（至）○とる（取）○くみうちする（格鬪）左、僖二八「晉侯夢與二楚子一ー」○つかむ（攫）つかみ取る。史、李斯傳「鑄金百鎰、盜跖不ー」㊁とらへる（捕）○うつ（擊）

【類音辨誤】搏の右方は、專卽ち甫すに从ふ。專に从ふ摶字と同じからず。

【同訓異義】搏・拊・擘・征・伐・討・擊等の別は征（彳部五遊）の條を見よ。

【搏影】人の陰影をうつ、事の爲し得べからざる喩。漢書、主父偃傳「匈奴猶二衆而爲一敵、從レ之如ーレ」「敵は影に同じ。

【搏影】前條に同じ。管子「善者之爲レ兵也、使二敵若レ擾レ虞、若ーレ」

【搏擊】うちとる。後漢書「貫二精縱之功一、搏二ニー之實一」

【搏擊】ハクゲキ ○うつ、たたく、手又は物

にてうつ。〇ひどくうちこらす。漢書、雋方進傳「方進爲二京兆尹一ー二豪强一、京師畏レ之」【撲滅】ボクメツ 手にてうち足にてける。論衡「手不レ能レ撲、足不レ能レ蹶」【撲盪】ボクタウ うちかむ。陶潛擬古詩「虎豹爭ー一」＝搏噬。【撲虎】ボクコ とらを手うちにする。轉じて無謀の勇の義。孟、盡心「晉人有二馮婦者一、善ー一レ、卒爲二善士一」【撲殺】ボクサツ 手うちにしてころす。左傳「撲而殺レ之」＝搏殺。【撲執】ボクシツ 召し捕へる。孟子「有レ故而去、則君ー二ー之」【撲塁】ボクルイ つかみくらふ。曹植文「試二之狡兎之捷一、以爲二ー一之用一」＝搏噬。【撲戰】ボクセン くみうちしてたたかふ。漢書、李陵傳「步見二漢軍少一、直前就レ敵、陵ー一攻レ之」＝搏鬪。【撲鼓】ボクコ ももをうちて節を爲す。史、李斯傳「彈レ箏ー一レ」【撲拊】ボクフ ○うつ。○樂器をいふ、鼓の如くにして小、項に懸け左右の手にて擊つ、單に拊とも稱す。【撲風】ボクフウ 屋の翼、即ち屋の切妻の端の雨下して山形を爲す處、俗に破風と書く。

【撇】ハン 麥

○はらふ。○のぞく、はらひ除く。○はこぶ「運ー」○うつす（移）＝擊。【撇演】ハエン 故事即ち古き歴史物などを演する芝居。＝演戲。

【撓】ネウ ネウ 肴 一音ラウ 篠

○手を反〻して擊つ。○琴などをひく「擾ー」＝批。

【撙】ラン 一音ラツ

くじく（摧）公羊、莊元「ー幹而殺之」＝拉。

十一畫

【捻】イン 先

○やすくやはらぐ。＝憎。○ふかくしづか。【捻捻】イン 安らかに靜かなる貌。淮南、兵略「推二其ー一ー、撫二其掻掻一、此謂レ因レ勢」

【撼】カイ 隊

○そそぐ（灌）＝漑。○ぬぐふ（拭）○あらふ（濯）「濯ー」

【擊】ガウ 豪

うつ（擊）【擊殺】ガウサツ うちころす。公羊、宣二「趙宰熊曜不レ執、公怒以レ斗擊而殺レ之」

〻之〻

【撩】ネウ リウ カウ ダウ 巧 蕭 尤 左

㊀くくる、しめる（絞）かたく物をしめくくる。○もとめる（求）張衡、思玄賦「ー天道其爲知」㊁とる（將取）㊂めぐる（繞）○つかぬ（來）○まとふ（纏）○むすぶ（結）「ー結」㊃みだる（擾）＝撓。

【撚】クヮ 銑

ゆたか、ひろし（寬）撚の大いなる貌。左、昭二二「今鋟ー矣」

【撊】カク 陌

○うつ（批・打）手のひらにて打つ。○國つかむ（摑）にぎり持つ。

【擘】ケン 先 擘は俗字

とぐ、みがく（磨）きはめる、研究する「ー經」＝研。

【摳】コウ ク 虞 尤

○ひっさぐ、かかぐ（提）衣服を手にてかかげもつ。曲禮「ー衣趨隅」○さぐる（探）隱しおきたる物をさがし出す。列、黃帝「以レ瓦ー者巧」

【摧】サイ ザ 灰 哿

㊀くだく、くじく（挫）をる（折）物をくじき折る。劉廷之詩「已見松柏ー爲レ薪」他の勢力をとりひしぐ。史、季布傳「能ー剛爲レ柔」○おす、おしおとす（擠）○ひく（捐）○はばむ（沮）そしりはばむ。詩、邶風「室人交徧ー我」○おさへる（抑）○ほろぶ、ほろぼす（滅）○かなしむ（悲）心がくじけかなしむ「悲ー」司馬光詩「空使ー寸心」○しりぞく（退）○いたる（至）㊁まぐさ、馬の食料とする細く切りし藁（斬藁）＝莝。○まぐさかふ。詩、小雅「ー之秣之」

同訓異字 摧・碎・齏の別は碎（石部）の條を見よ。

【摧衂】サイジク 心くじけすとふ。柳宗元文

「此心未レ慊、祇益ニ一一」
【摧輪】サイリン　車のながえをくだく。中論「至三于覆レ車而一ヒレ一」
【摧膺】サイヨウ　胸をくじく。孫楚文「遂陷レ首以一レ一」
【摧咽】サイエン　かなしみてなきむせぶ。王叔之、感安帖「臨レ紙一一」
【摧枯】サイコ　かれ木をくだく、槁は枯、碎り易きに喩ふ。徐陵文「戰而北、若レ一レ一」＝摧枯・摧朽。
【摧陷】サイカン　くだきおとしいれる。挫折し破壊する。南史「軍中多二萬鈞神弩一、所レ至無レ不二一一」
【摧陷廓清】サイカンカクセイ　摧陷は敵兵をくだきやぶる、廓清はさっぱりと掃ひきよめる。
【摧座】サイ　氣おくじけ心がうごきかなしむ。吳志、孫登傳「精爽以一一、百則限レ滿」
【摧朽】サイキュウ　くちたる木をくだく、物の破れ易きに喩ふ。北史「六軍電發、有若レ一レ一」＝摧枯・拉朽。
【摧撃】サイゲキ　くだきうつ。陳與義詩「一一竟自碎、映レ空白燦走」＝撃摧。
【摧堅】サイケン　敵の中堅をくじきやぶる。宋史「一レ陷レ敵、未二嘗妄殺一人一」
【摧枯】サイコ　摧槁に同じ。晉書「將軍之舉二破呂一、若二一レ一拉朽、何所二顧慮一乎」＝摧朽・拉朽・摧二枯朽一。
【摧折】サイ　くだけうごく。劉孝綽詩「不レ見山嶽樹、一一下爲レ薪」
【摧折】サイセツ　くじく　くだける。錢はきりくだく。蘇轍詩「空記樂二峽船一、行嶮被二一一」＝摧折。
【摧挫】サイ　くじける。後漢書、馮異傳「異幟一一之」＝摧折・摧折。
【摧砕】サイサイ　くだく。魏志、許褚傳「飛レ石擲之、所レ値皆一一、賊不敢進」＝摧折・摧破。
【摧殘】サイザン　くだけそこなふ。殘はそこなふ。陳後主詩「一一枯樹影、岩落枯蟬聲」＝摧折。
【摧敗】サイハイ　くだきそこなふ。詩經「羽毛皆一一」
【摧辱】サイジョク　くじきはづかしめる。漢書、汲二入其車騎一一一宰相」＝挫辱。
【摧折】サイセツ　くじける。漢書、賈山傳「雷霆所レ擊、無不二一一」＝摧挫・挫折・摧破・摧碎・摧拉・摧剝・摧殘。
【摧焼】サイショウ　をれまがる。陳琳文「一一棟梁、孤二弱漢室一」
【摧滅】サイメツ　くじきうばふ。王褒「神臂弓銘」、電激星流、敵胆一一」
【摧殄】サイテン　くじきほろぼす、くだきつくす。隋書、音樂志「一一侯景、克二復河南一也」
【摧頓】サイトン　くじきやぶる。論衡「千將之刀、人不二一一」
【摧破】サイハ　くだきやぶる。後漢書、伏隆傳、莫レ不二一一」＝摧折。
【摧剝】サイハク　くづれはがれる。陸游詩「芙蓉過二吳宮一、一一觀二萬穴一」
【摧敗】サイハイ　くだけやぶれる。唐書、韓滉傳「若一一、績之則已、安敢改作、以傷二倹德一」
【摧壓】サイアツ　くじきなびく。唐書、哥舒翰傳「翰之、無レ不二一一」
【摧鬱】サイウツ　くじきたふす。魏志、注「過二朔天威、一一二姦凶一」
【摧北】サイホク　くじけ敗れて逃げる。唐書、李嗣業傳「每レ戰必爲二先鋒一、所レ嚮一一」＝摧敗・摧破。
【摧抑】サイヨク　心をくだきおさへる。鮑照詩「一一多二曉思一」
【摧落】サイラク　碎けおちる。王粲、羽獵賦「山川手レ是摧藏、草木爲レ之一一」
【摧拉】サイラツ　くじきひしぐ。潘尼、火賦「林木一一、沙粒竝爆」
【摧輪】サイリン　わをくだく。新論「車一レ一則無二以行一、舟無レ楫則無二以濟一」
【摧裂】サイレツ　くだけさける。蔡琰詩「悲レ我獨得レ歸、哀叫聲一一」
【摧艫】サイロ　舟のともをくだきる。賓宇記「迅川奔注、溪險石壞、跳波激射、レ一碎レ艫」

【摵】サク　陌

○かすめる（捎）○木葉の落ちる聲。秋興賦「庭樹一以灑落兮」○はらふ（拂）
【摵摵】サクサク　水の葉のおちるこえ。孟郊詩「一一疎更陋」＝蕭瑟。

【掇】㊀サツ　㊁サフ　曷　㊁は俗字

㊀抹一はらひけす（掃滅）とりけす。＝末殺・抹殺。○ふるひちらす（揮散）○うつ、手を側ててて擊つ。㊁うつ（擊）淮南、原道「不二與物相弊一」

【撦】サン　刪　㫃

かりのぞく（芟除）禮、禮器「君子之於レ禮也、有二一而播一也」

【摻】㊀サン・セン　威　㊁センソン　㊂サン・セン　勘　寒　塵　威

㊀しなやか、女の手の細き貌。＝攕。㊁とる（取執）詩、鄭風「一一執子之袪兮」○ほそし（細）○しなやか。㊂鼓曲の名。＝參。
【摻摻】サンサン　女の手のほそく好き貌。

詩、秋風「一一女手、可二以縫一裳」‖縫織。

【執手】 シフ 圓 ○にへ、物を執りて相見るの禮と爲す、面會の時の禮物。‖贄。○とる(執)○いたる(至)○きはむ(極)轉じてまこと、ねんごろの義とす「眞ー」「懇ー」○すすむ、すすめる(進)いたす(致)「ー詔」○やぶる(傷)くだく(折)禮、月令「雪霜大ー」○たけし(猛)「ー獸」鷙に通ず。○姓、ー虞は晉人。

【執拘】 シフ とらへる。つなぎとどむ。韓愈詩「富貴自ー、貧賤亦照焦」

【執獄】 シフ あらあらしきけもの、虎豹の屬。曲禮「前有ー一、則載二虓鼾一」

【掣】 シャウ 圖 ○つく(衝撞)左、文十一「ー一其喉、以戈殺之」○うつ(撞)とる、ひろひとる(拾取)「採ー」「收ー」漢書、司馬遷傳「采ー經ー傳」‖拓。

同訓異字 掇・拾・撰・摘の別は拾(手部六畫)の條を見よ。

【掇採】 タイ ひろひ取る。‖採摘・摭采・摘掇。

【掇拾】 シフ ひろひとる。‖採拾・摭採・摘採。

【掇拭】 シフ とりぬぐふ。李白詩「ー一欲ー顧ー之、申屠路無ー梯」

【摺】 ㊀セフ ㊁ラフ・ロフ 合 葉 ㊀たたむ(疊)折りたたむ。○紙を折りたたみしもの、奏ーは上奏文を書きし本。○ひだ。○やぶる(敗)㊁をる(折)くじく(挫)‖拉。○圖する、印刷する。

【摺疊】 セフ あふぎ、せんす。‖摺疊扇・摺叠扇。

【摺奏】 シフ 上奏文の天子に直達するもの。‖摺子。

【摺疊】 タフ たたむ。文苑傳楷「此乃折卸ー一之亭也」

【摺本】 セフ をりでほん。王氏書苑「智永千文、唐粉蠟紙ー一、內一幅麻紙、是眞迹」

【摺脇】 タフ わきばらをくじく。淮南子「ー一ー傷ー幹」

【摺曲】 セフ 曲をくじく。史、范雎傳「折ー脇ー一」

【摺拉】 タフ とりひしぐ。庾信文「硎谷ー一」

【摺】 セン 先 さしはさむ(插)俗に扦に作る。

【摠】 ソウ 董 俗字 ○すぶ、聚め束ねる。‖總。○すべて、みな(皆)○おほし(衆)○むすぶ(結)離騷「ー余轡乎扶桑」

【摶】 ㊀タン ㊁セン ㊂テン 銑 先 寒 ㊀ひねりあつめる(捏聚)○まろし(圓)手にてまろめる。曲禮「毋ー飯」○よる。よりかかる、憑藉。莊、逍遙遊「ー扶搖而上者九萬里」一說、搏に作る。㊁ほしいままにす(擅)古、專に通ず。○にぎる(握)握り領する。史、田齊世家「ー三國之兵」㊂たば(把束)

【摶心】 シン 心をもっぱらにする、摶は專。史、始皇紀「ー一壹ー志」

【摶沙】 サ 團結力のうしきに喩ふ。鹽鐵論「ー一傷ー幹」

【摶】 チョ 虞 ○のぶ(舒)○樗に通ず、樗蒱は賭博ダクの戲。

【摘】 テキ タク 陌 錫 通音 チャク ○あばく(發)他人の惡をあばきあらはす。‖摘。○うごかす(動)さわがす(掉)○ひろふ(拓)○つむ、つまむ(手取)「ー瓜」說文「ー、拓果樹實也」○

多くの中よりつまみ取る「一要」「一出」○さす(指)指ーは指さし示す。傳毅、舞賦注「指」行列使整齊也」

【揯愛】ケツアイ　多くの中の要所をつまみとる。又、其のかき物。

【揯蓼】ケツリョウ　きずをひろひだす。後漢書、陳元傳「挾レ瑕ー レ人、掩二其弘美一」

【揯花】ケツクワ　花をつみとる。‖摘英。

【揯肭】ケツゾツ　あばきだす、缺は抉。漢書、孫寶傳「故欲ニー以揚二我惡一」‖摘抉・揯發・擷發。

【揯發】ケツハツ　要點をつまみて書き發せる。‖揯記。

【揯草】ケツサウ　くさをつみとる。つみくさ。韋應物詩「凌レ露揯二幽草一」

【揯插】ケツサフ　つまみはさむ。宋石城樂「ーー環髻前」

【揯書】ケツシヨ　ぬきがき。

【揯茶】ケツチヤ　ちゃをつむ。僧寶洪詩「ー一時節亂山間」

【揯撥】ケツハツ　つまみとる。元稹詩「ーー園蔬美」

【揯芳】ケツハウ　花をつみとる。江淹賦「ー レ拾レ蕤」‖摘花。

【揯髮】ケツハツ　隱れたる髮をあばき擧げる。後漢書、賈復傳「相監司以ーニー其姦一」‖摘發・揯肭。

【揯問】ケツモン　ぬきだしてとふ。唐書、鄭澣傳「試泰三館錄ニーニー之一」

【揯錄】ケツロク　要點をつまみだしてしるす。‖揯記。

【揆】キ

㊀さぐる、さがす　さがしもとめる(索)手にて掘る。○つかむ(摑)㊁うつす(寫)のっとる「描ー」‖摹。

【揆擬】キギ　なぞらへまねる。蘇軾詩「紛紛ーー倶堪レ笑」

【揆索】キサク　てさぐりにてさがす。隋唐佳話「暗中ーー、亦可レ識」

【揆寫】キシヤ　手にてまねてうつす。後漢書、蔡邕傳「碑始立、其觀視及ーー者、車騎日千餘兩」揆一本摹に作る。

【揆摘】キテキ　碑文などをすりうつす。北史、崔浩傳「舒人多ーニー之」

【揆稜】キリヨウ　事を臆揆にして是非を決せざる貌。唐書、蘇味道傳「味道爲レ相、嘗謂レ人曰、決レ事不レ欲ニ明白一、誤則有レ悔、ーー持二兩端一可也、故世諺ニーー手」稜は四角の木、之を摸す、右すべく、左すべし、故にいふ、俗に秧に作る。一說、蘇味道が國事を問はれたる時には應答せず、唯牀稜ヲ撫でるのみ、故にいふと。

【揆稜】キリヨウ　前條を見よ。

【撈】ヒヨク　㊥

さく(割)韓非、顯學「不ー一極則衰益」極は纔。

【摽】ヒヤウ　㊥

㊀うつ(擊)左、哀十二「長木之毬、無不ー一也」‖戰。○おちる(落)草木が枯れおちる、實が熟して落ちる。○うれひて、むねうつ(捌心)詩、邶風「寤辟有ー一」㊁きっさき(刀末)「ー末」○すてる(捐)○さしまねく(麾)孟、萬章「ー使者一」○高く舉る貌。㊂なげうつ。‖拋。

【摽擊】ヒヤウゲキ　うつ。左、哀十二、注「長木毬二陪于地一、不ニ揮レ物而後ーー一」

【摽然】ヒヤウゼン　高く舉る貌。晉子、修曦ーー若ニ秋雲之遠一」

【摽梅】ヒヤウバイ　梅が熟し過ぎて落ちる女子の嫁期のすぎたる貌。詩、召南「摽有レ梅、其實七兮、求レ我庶士、迨二其吉一兮」

【摽揚】ヒヤウヨウ　其の善を表し揭げる。後漢書「海內希レ風之徒、遂共相ーー」‖標揚。

【摽挍】ヒヤウカウ　うつ。淮南子「擾援ーー、手若ニ蔑蒙不レ失ニ一莖一」

【摽末】ヒヤウマツ　刀のきっさき。僅少の喩とす。漢書、王莽傳「ーー之功、一百之勞」

【摹】モ　㊥

通じて模・模に作る

○のっとる(規)ならふ(倣)「規ー」○うつす、手にて書畫などをうつす(手寫)「臨ー」「鉤ー」「傳ー」‖摸。

【摹倣】モハウ　まねびならふ。淵天淸緣集「淵ーニー之、遂得ニ天趣一」‖摸倣。

【摹本】モホン　原本をまねうつしたる書物。盧朝類苑「今傳二樂毅論一者、皆ーー也」‖摸本。

【摹臨】モリン　手本にまねてうつす。宣和畫譜「故俗畫ーー、其ニ克髣髴一」‖臨摹・摸臨。

【摹寫】モシヤ　まねてうつす。‖摸寫。

【摍】ホウ　㊂

○ささぐ(奉)捧に通ず。史、絳策傳「ー策定數」○ぬふ、針にて衣をぬふ。‖縫。○おほひなり(大)莊、盜跖「ー衣淺帶」‖逢。

【摩】　㊁古、唐ゝ通ず

○する、こする(揩)○なでる(撫)「案ー」○すりけす(消滅)すりへらす。史、平準書「姦民盜ー鑄錢ー鑄寖取鉛」○みがく(研)「研ー」「切ー」○とぐ(研)

○せまる(迫)ちかづく(近)「—天」○轉じて殆ど匹敵する「—李杜筆」○揣ーシはおしはかる。

【摩訶】マカ 梵語、大・多・勝などの三義あり〔智論〕

【摩崖】マガイ 名山の巖石上に刻みし碑文。泰山に多し「—一碑」‖磨崖。

【摩竭】マカツ すれ合ひて音を發する。晁補之、新城遊北山記「窓開竹數十竿、相ー—、聲切切不已」

【摩乾乳坤】マケンジュコン 天地に近づき迫る義。劉基文「於赫帝度之蜚摩ー乾乳ー坤、魁ー堅山ー而獨尊」

【摩挲】マサ 手にてこする。撫はする。韓愈、石鼓歌「誰復著ー手更ー—」

【摩擦】マサツ する、こする。

【摩切】マセツ ○すりみがく、轉じて、人をはげますにいふ。宇文之邵文「以ー礪節庶馳、ー—ー臣下」○せまりちかづく。王庭珪詩「劍戟相ー—」

【摩訶】マカ 梵○酒をいふ。印度には、穀酒・果酒・藥酒の三種あり。○美地と譯す、切利に對する天の名〔翻譯名義集〕

【摩頂】マチョウ 頭上をなでる。孟、盡心「墨子兼愛、ー—ー放ー踵、利ー天下ー爲ー之」

【摩天】マテン 天にせまりちかづく。天をこする。李白詩「吾觀ー—ー飛、九萬方來ー已」‖摩乾。

【摩竭】マカツ 梵作惡業と譯す。解陀羅族にして卑賤の業を營む男子の通稱。

【摩竭陀】マカツダ 梵惡作業と譯す。解陀羅族にして卑賤の業を營む女子の通稱。

【摩尼】マニ 梵珠の通名、摩尼寶珠の略、龍王の腦中にありといふ、清淨なる珠。翻譯名義集「—ー、圓曜鈔、又云如意、謂意中所ー須財寶衣服飲食種種之物、此珠悉能出生、令ー人皆得ー如ー意、故名爲ー寶」‖如意珠。

【摩撫】マブ なでてさする。蘇軾詩「欲ー把ー翡翠ー手ーー上」‖按摩。

【摩拂】マフツ すれあふ。詩疏廣要「牝牡飛鳴、翼相ーー」

【摩滅】マメツ すれてきえる。孔安國、尚書序「錯亂ーー、弗ー可ー復知ー」‖磨滅。

【摩那】マナ 梵○摩訶縻耶の略。唐に大術或は大幻と譯す〔西域記〕○ーー夫人は淨飯王の后、釋迦の母。

【摩羅】マラ ○梵華鬘。翻譯名義集「西域結鬘師、多用ー蘇ーー華」○百合ーの異名〔本草〕

【摩羅伽陀】マラガダ 梵七寶の一、金剛石の一種、緑色の珠、能く一切の諸毒を避く、世に希有なるを以て貴となす〔智度論〕

【摩利支天】マリシテン 梵印度の神、火星の女神、國を護り兵戈を救ふ大力あり、故に武士・力士等の守り神とす。

【摩壘】マルイ ○敵壘に接近する。左、宣十二「ーー而還」○他人の詩文などの古の大家に匹敵するを稱揚していふ「摩ー李杜壘ー」

【摙】レン 銑

おふ(負)になふ(擔)擔ひて物を運ぶ「ー水」

【摟】ロウ 尤

○ひく、ひきあつめる(曳集)孟、告子「五伯者ー諸侯以伐。諸侯者也」○ひく(牽)ひっぱる、つれ出す。孟、告子「踰東家牆而ー其處子」

【擄】ロ 虞

ふる(振)うごかす(動)周禮、夏官「三鼓ー鐸」

【擠】セイ・アイ 霽

おし・く、おしゃくする、手をこまぬき上下して敬意を表する。‖揖。

【擐】カン 刪

通じて幻に作る

○たけし(猛)○つよく怒る(勁忿)貌。

【擐然】カンゼン ひどくいかる貌。左、昭十八「今執事ーー授ー兵登ー陴」‖儼然。

【擒】キ 支

㊀さす、さしまねく「ー日」‖麾。○ふるふ(揮)○さく(裂)㊁たすける(佐)

【擒捉】キソク へりくだりしりぞく。王儉、褚淵碑文「功成弗ー有、固秉ーー」‖謙挹・捐讓。

【擒讓】キンジョウ へりくだる。捐は讓をさしまねき表ーす、一說、讓總を發揮する。晁、讓卦「六四、无ー不ー利ーー」‖謙遜。

【撅】㊀ケイ 月 ㊁ケツ 月

㊀かかぐ、衣をかかぐ。禮、內則「不ー涉不ーー」‖揭。㊁ほる(掘)うがつ。杜牧註、孫子序「ー其城郭」○とる(把)○うつ(擊)唐書、褚遂良傳「ー高昌櫻突厥」○なげる(投)

【撟】㊀ケウ 篠 ㊁ケウ 嘯

㊀ほしいまま(擅)○いつはる(詐)かこつける(託)漢書、高

五王傳「一制以令天下」‖矯制。○強き貌。○せのびする。○手をあぐ（擧手）○たむ（矯）曲ッを正す。漢書「一枉過其正」○まげる、屈曲させる。㊁あがる（擧）

【搔然】ゼウ　○強き貌。荀、臣道「一一剛折焉立而無二傾側之心一」○あがる貌。史、扁鵲傳「舌不レ下」

【撮】

㊀サツ　㊁サイ　㊂サン

呉　左　上　去

○もつ（持）○うつ（擊）史、孫子傳「救鬪者不レ搏レ」

【撮】

サツ　入

○とる、つかむ、つまむ（摘）兩指又は三指にてつまむ「把」又其のつまむ程の少量。中庸「今夫地、一一土之多也」又量名、圭の四倍、一圭は黍六十四粒。○あつめる（聚）○すべてとる（總取）漢書、司馬遷傳「」名法之要」㊁もとどり（髻會撮）㊂のりもの（乘輿器）尸子「行險以一レ」○圖とる、うつしとる「一レ影」

同訓異字　撮・取・執・秉・把・挿・採・捕・提等の別は取（又部六遺）の條を見よ。

【撮影】サツエイ　圖寫眞をとる。

【撮土】サツド　ひとつまみほどの少しの土。字解參看。‖撮壤。

【撮壌】サツジョウ　つまみてこする。楞嚴經「如下以二手掌一一レ虛空上」

【撒】

サツ　入

○ちらす（散）○まく（播）まきちらす「一水」○はなつ（放）○なげうつ（擲）

【撒金】サツキン　金銀の粉末を、梨子の皮の疵點の如くちらしたる塗物、梨子地。

【撒火】サツクワ　字書の名、火を灬と書く時の稱。‖連火。

【撒壞】サツクワイ　ばらばらにこはす。宋志、潘濟傳、註「出見二難繫一手自一一」

【撒嬌】サツケウ　まめをまく。陸游詩「風聲如二驟雨一而點加二一一一」

【撒水】サツスイ　みづをまく「一一車」

【撒播】サツハ　せんす。‖撒種播。

【撒布】サツフ　ふりまく、ふりかける。

【撿】

俗〔手部十一畫〕の俗字。撿字部十三畫の俗字。

【撰】

㊀サン・セン　㊁セン　㊂サン　㊃セン

清　氣　早　藏

㊀えらぶ、詩文をつくる（述作）或は等ッ課に作る。○のり（則）易、繫辭「體二天地之一」○こと（事）○そなふ（具）論、先進「異乎三子者之一」○のぶ（述）㊁えらぶ、よりわける。‖選。○やる（遣）○もつ（持）曲禮「君子欠伸一杖屨」㊂かぞふ（數、計）‖算。はかる（計）㊃あつむ（集）

同訓異字　撰・譔・選・撮・簡・揀○撰は述也と註す、文章を作るには、譔撰何れにてもよし、撰述と連用す。唐書、百官志「史館修撰、掌レ修二國史一」○譔は善言也と註す、すぐれて善き言を、えらび錄するなり。禮記、古之君子、論二譔其先祖之美一而明二著之後世一者也」○選はよりすぐること、文選、詩選は、詩文のよきものをよりぬく意なり、撰述には用ひず。論語「選二於衆一舉二於陶一不仁者遠矣」○撰はよしあしをよること。中庸「擇レ善而固執レ之」○簡は擇よりは一層すぐれて、善き方を取るなり。八家文序「於二賈董班馬之後一而簡二此八大家者一」○揀は簡に同じく、又擇の意を兼ぬ、揀擇と連用す。

【撰次】サンジ　順序を立ててえらぶ、えらびて編次する。後漢書「一一天子至二于庶人一冠昏吉凶終始制度上」

【撰集】サンシフ　えらびあつめる、文をえらびて集め錄する。後漢書、班固傳「令二班固一一二其事一」

【撰人】センジン　次條に同じ。文獻通考「周公謀法一卷、不レ著二一一名氏一」

【撰者】センジャ　詩文、又、書物などの作者。‖撰人・著者。

【撰述】センジュツ　書物をえらびつくる。著書。孔衍傳「凡所二一一百餘萬言一」‖著述・著作。

【撰答】センタフ　君命により作りて報答する。齊書、陸厥曉傳「一二詔草一」

【撰著】センチョ　撰述に同じ。

【撰定】センテイ　えらびさだめる。晉書、張華傳「一二一官書一」

【撰碑】センヒ　いしぶみの文をえらび作る。‖宋撰述「近レ一レ獲二潤筆二百千一」

【撰文】センブン　文章をえらびつくる。又、其の文。

【撰歷】センレキ　こよみをつくる。劉歆文「張衡一レ、皆成二于雒都一、貫二于王門一」

【撰錄】センロク　えらびしるす、えらび集めて著錄する。南史、王詔之傳「當時詔命褒奏、輒手自書寫、泰元末安時、大小悉一一」

【撙】

ジン　サン　セン

慶　早　寒

○とる（取）○つまむ（摘）つまみとる。○ひきさく（搾）

【擡】シャ　馬　俗に扯に作る

○ひらく（開）○さく（裂）

【擡裂】ジサ手にてひき裂く。梅堯臣詩「日長ー一防二惡技一」＝扯裂。

【撜】㊀シュウ　㊁タウ　㊀㊁庚　徑

㊀たすく、すくふ。＝拯。㊁ふる（觸）＝振。

【撕】㊀セイ　㊁シ　㊀支　㊁齊

㊀ひっさける（提）○提ーは手を携へる。轉じて教へ導く義〔漢書、賈誼傳、注〕㊁さく（析）手にて物を裂く。＝斯。

【撋】㊀ゼン　㊁ジュン　㊀㊁眞　先

㊀くだく（摧）○もむ、もみくだく。㊁ぬぐふ（拭）

【撙】ソン　阮

○おさふ（抑）へりくだる、抑損する。○法度にしたがひ、趨ムク。○くじく（挫）○ーはあつまる貌。甘泉賦「齊總總以ー一、其相膠葛兮」

【撙節】ソンセツ節制をなしおさへる。抑損して節制する。曲禮「君子恭敬ー一、退讓以明レ禮」

【擔】㊀タン　㊁ダン　㊂カイ　㊀寒　

○つきうつ（擊・撞）「擊ー」「衝ー」

【擔當】タントウ擔・衝・突・撞・搏・當・擔の別は衝（行部九畫）の條を見よ。

【擔球】タンキウ玉突の遊戲。＝撞子。

【擔壞】タンクワイつきくづす。晉書「欲レ一ー之邪」

【擔擊】タンゲキつくと、うつと。論衡「夫以レ莖擔レ鐘、以レ算擊レ鼓、不二能鳴一者、所レ用ニー一之者小也」

【擔鐘】シュシンツク　かねをつく。禮、學記「善待レ問者如レ撞レ鐘」

【擔拄】ソウうちあたる。韓愈詩「峽山逃二颶風一雷電助ニー一」

【擔撞】タウ物をつき撃つ貌。李益詩「仙鐘ー一迎二海日一、海中離離三山出」

【擔著】チャクつきあたる。○あとさきがそろはず。著は助字。禪林類聚、看經門「須彌山高不レ見レ嶺、大海水深不レ見レ底、簸レ土揚レ塵無レ處レ覓、回レ頭ー一自家底」

【擔突】トツつきあたる。王起任賦「若乃飛二鑿刀一以ー一」

【擔入】ニフつきいる。漢書、樊噲傳「噲直ー一」＝突入。

【擔木】しゅもく、鉦をならすに用ふる丁字形のつち〔文獻通考〕

【擔情】ジョウ情をまげる。後漢書「ー一レ則違二朝禁典一」

【擔挫】ザアくるしめさわがす。後漢書、仲長統傳「ー一ニ百姓一」＝擾亂。

【擔折】セツくじく。後漢書、袁紹傳「ー一棟梁、孤三弱漢室一」＝摧折・挫屈。

【擔直】チョクすぐなるものをたわめ曲げる。荀悅文「ー一レ爲レ曲、新レ方爲レ圓」

【擔敗】ハイみだれやぶれる。字解參看。

【擔亂】ランみだる。左、成十三「ー一レ心」

【撓】ジョウ　㊀ダウ　㊁ニョウ　㊂ネウ　㊀巧　㊁篠　㊂蕭

㊀うごく、うごかす。○みだす（擾）みだる、みだれ敗れる。左、成二「師徒ー一敗」㊁かく（搔）○つまむ（抓）○かがむ（屈）まがる（曲）「屈ー一」「折ー一」正しからず。呂覽、知度「枉辟邪ー一之人至矣」○ためる、正當にせず（矯）史、酷吏傳「ー一法治之」○よわし（弱）㊂みだる、かきまぜる（攪）㊃たわむ（撓）○うごく（動）㊄めぐる。＝繞。㊅ー一挑はめぐりまとふ（宛轉循環）莊、大宗師「ー一挑無極」

【撓曲】ダウキョクたわめまげる。＝曲撓。

【撓屈】クツたわめかがむ。秦觀文「不レ爲二利害之所ニー一者、所謂人節也」＝屈撓。

【撓攪】カウカウくるしめさわがす。後漢書、仲長統傳「ー一百姓一」＝擾亂。

【撓折】セツくじく。後漢書、袁紹傳「ー一棟梁、孤三弱漢室一」＝摧折・挫屈。

【撓直】ナウチョクすぐなるものをたわめ曲げる。荀悅文「ー一レ爲レ曲、新レ方爲レ圓」

【撓敗】ハイみだれやぶれる。字解參看。

【撓亂】ランみだる。左、成十三「ー一レ心」

【撓】ゼウ　㊀ダウ　㊁カウ　㊂ゼウ　㊃ゲウ　㊀篠　㊁㊂㊃效

○おさふ（抑）○ためる。○ふせぐ。○ふるふ。○ふるひ動かす。○ふるひ動く。○ふるひ落す。○ふるひ去る。○ふるひ出す。○ふるひ入る。○ふるひ上る。○ふるひ下る。○ふるひ開く。○ふるひ閉ざす。○ふるひ合はす。○ふるひ離す。○ふるひ集む。○ふるひ散ず。○ふるひ亂す。○ふるひ治む。○ふるひ正す。○ふるひ直す。○ふるひ曲ぐ。○ふるひ折る。○ふるひ續ぐ。○ふるひ絶つ。○ふるひ生ず。○ふるひ死す。○ふるひ殺す。○ふるひ活かす。○ふるひ養ふ。○ふるひ育つ。○ふるひ長ず。○ふるひ老ゆ。○ふるひ若返る。○ふるひ變ず。○ふるひ變ぜず。○ふるひ變ぜしむ。○ふるひ變ぜざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしむ。○ふるひ變ぜざらしめず。○ふるひ變ぜざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめざらしめ

ー我同盟ニ」＝攪亂。

【撘】 撘（手部十畫）に同じ。

【撣】 ㊀ タン ㊁ タン 寒 早

㊀ふる（觸）○はじく、塵を拂ひ去る、彈に通ず。㊁ひっさげもつ（提持）○ーーはいましむ（徹戒）又、つつしむ（敬）

【撣揮】ダンキ 提げ持つ。又、いましめつつしむ。晉太玄經「何ー揮肩、提ー綱ーー」何は荷。

【撢】 タン 早 勘

さぐる。＝探。

【撤】 テツ 屑 古、徹に通ず

○すてる（捨）のぞく（除去）論、鄉黨「不ー薑食」やめにする、廢する「廢ー」「ー去」○とりのける「ー膳」○ひらく（發）○ぬく（抽）○はぐ、むく（剝）

【撤去】テッキョ とりのける。宋史「每ー至ー官、有司例設ー供帳、悉命ーーー」＝撤廢。

【撤回】テッカイ 一度出したるものを取戻す「議案をーーす」

【撤廢】テッパイ 神にそなへたる供物をさげる。

【撤退】テッタイ すてて其の場をしりぞく。

【撤廢】テッパイ とりのけやめる。

【撤備】テッビ そなへの兵をひきあげる。唐書、回鶻傳「閉ー營ーレー、乃縱ー擊之」＝撤兵。

【撤兵】テッペイ 出陣せし兵をひきあげる。

【撤簾】テッレン 天子年幼なれば、太后簾を垂れて政を聽く、既に政を天子に歸すをーーといふ。唐魏徵之政事書。

【撚】 デン ネン 銑

○ひねる、指にてひねる、ねぢる、よりをかける。○ふみにじる（蹂）○したがふ（從）○とる（執）○琵琶を彈く指の運びかた。白居易詩「輕攏慢ー抹復挑」

【撚紙】シン こより。＝捻紙・撚子。

【撚絲】シン よりいと。＝綟絲。

【撚斷】ダン ひねりきる。盧延讓詩「吟成一箇字、ーー數莖鬚」

【撚挫】ダン ひねりなでる。葛長庚詩「挑撚ーー緩復急」

【播】 ㊀ ハ ㊁ ハ 箇 禡

㊀しく（布）しき及ほす。編く施行する「流ー」「傳ー」「弘ー」○まく、たねをまく、うう（種植）「ー種」○あぐ（揚）左、昭四「ー於諸侯」○のぶ（舒）○はなつ（放）○すてる（放棄）周語「ー其淫心」○ちらす（散）○うつる（遷）のがる（逋）さすらへる。書、大語「伐殷逋ー臣」○唐の州名、今の貴州遵義縣の西。韓愈、柳子厚墓誌銘「劉禹錫當謫ー州」㊁しく（布）○あふる、ゆりうごかす（搖）論、徵子「ー鼗武」＝鞉。○國音バン

ー州は播磨。

【播越】ハエツ 所を失ひて遠方ににげさすらふ。左、昭二六「不穀、震盪ーー寘在ー荊樊」＝播蕩・流離。

【播蕩】ハトウ すてる。書、泰誓「力行無ー度、ーー黎老」

【播化】ハクワ 廣く萬物を生ずる。魏徵賦「覽ー大鈞之ーー、察ー草木之蕃類」

【播告】ハコク ひろくつげ知らす。書、盤庚「王ーー之」＝布告。

【播遷】ハセン まきそそぐ。又、まきちらす。管子「掌上則ーー」

【播種】ハシュ たねをまく。孟、告子「今夫蒔麥ーレー而覆ー之」

【播植】ハショク まきうゑる。南史、陳蕤洗傳「性好ーーー、躬勤ー耕穫」

【播殖】ハショク まきうゑる。國語「周棄ーーー百穀」＝播植。

【播遷】ハセン 遠方にさすらふ。韋詞立詩「相逢共ーー」＝流離遷徙。

【播蕩】ハトウ さすらふ、流浪する。左、襄二五「夏氏之亂、成公ーー」＝播越。

【播揚】ハヨウ しきあがる。嘯賦「散ー積ー面ーー」

【撲】 ㊀ ハク・ボク ㊁ ボク 屋

㊀うつ（擊）たたく「亂ー」○うちあふ（相撲）○たふす、たふる（踣）㊁つゑ（杖）申鑒「桎梏鞭ーー、以加ー小人」＝扑。○かすめうつ（拂著）岑參詩「花ー玉缸春酒香」○すこしうつ（小擊）○未だ調習せざる。荀臣道「若駕ー馬」○國相ーーは角紙。

【撲滅】ボクメツ つまづく狼。躓跌する。水滸傳「雄兔脚ーー雌兔眼迷離」

【撲殺】ボクサツ うちころす。唐書「何不ーレーニー此鼠」

【撲打】ボクダ うつ。南史「左右失ー旨者、手加ニーーー」＝打撲。

【撲滅】ボクメツ うちたひらげる。魏志「遂駐二大軍一、分レ兵ー一」
【撲殄】ボクテン うち滅ぼす。唐書、李抱傳「賊既敗、當二乘レ機ー一」‖撲滅。
【撲破】ボクハ うちこわす。岑參已詩「到頭須ニー一卻散與二他人一」
【撲落】ボクラク 來だ調習ならざるうまっ字解參看。
【撲罰】ボクバツ うちたたく刑罰。後漢書、左雄傳「孝明皇帝始有ニー一、皆非二古典一」
【撲簽】ボクセン ふでをなげうつ。韓愈詩「推レ書ー一取二撲撻一」‖撲落。
【撲滿】ボクマン 錢を貯ふる器、土にて作り、口小にして、入れれば復た出だす可からず、錢滿つれば撲ち毀して之を出だす。隆領集ニー一卻今小兒積受雖、以二土爲レ之、喬錢之具、可レ入不レ可レ出、滿則撲レ之」
【撲滅】ボクメツ うちほろぼす。又、撲ち消す。書、盤庚「若二火之燎二于原一、不レ可二嚮邇一、其猶可ニー一」‖撲殄。
【撲落】ボクラク 散り亂るる意。成彦雄詩「猶兒蜉蝣喚不レ回、新窗ニー一銀幣影」

【撥】ハツ　㊀ハタ ベチ　㊁ヘツ　月

㊀のぞく（除）ける。○をさむ（治）公羊、哀十四「ー一亂世、反二諸正一」○ねぢひらく（振開）○はねひらく、發揚する。曲禮「衣毋ー一」○はなつ（發）○めぐらす（轉）○たゆ（絕）○はらふ（拂）○そる（反）はねかへる「反ー一」○あぐ（揚）○ばち、絃を鼓する具。白居易詩「曲終收ー一當心畫」○ひつぎなは（綍）○ひく、かきならす「弄ー一」㊁たて（大楯）史、孔子世家「矛戟劍ー一」‖戚。
【撥棄】ハツキ はらひすてる。杜甫詩「要路津頭亦ニー一不レ疑レ道」
【撥去】ハツキョ のぞき去る。漢書、司馬遷傳「秦ニー一古文一、發二滅詩書一」
【撥剌】ハツラツ かきのける。崔道融詩「酒醒ニー一殘灰火」
【撥鏡法】ハツケイホウ 書法の名、鐙を挑ぐるが如く、急ならず徐ならざる處。鐙は燈火。僧鏡詩「李王深得ー一、筆力遒勁堪二江東一」一說、鐙はあぶみ、人の鐙びて馬に乘り、鐙の相犯さざる如くする義（廣川書跋）
【撥忙】ハツボウ 忙しき事を掃ひ除く。楊萬里詩「ー一也到池亭上、昨日巡衙今未開」
【撥剌】ハツラツ 弓をひき張る聲。張衡、思玄賦「野二蟲弧之ー一分」
【撥亂反正】ハツランハンセイ 亂を平げ除きて治平にかへす。漢書、高帝紀「帝起二細微一、撥二亂世一、反二之正一、平二定天下一」
【撥棄】ハツキ すてれをかかげる。白居易詩「香爐峰雪ー一看」

【撫】ブ　㊀ 通じて抚に作る

○なでる（摩）なで安んずる、愛しいたはる「愛ー一」「存ー一」「綏ー一」「恩ー一」論語「鎭ー一敢邑」○なぐさめる（慰勉）「慰ー一」○よりたもつ（據有）○したがふ（循）○もつ（持）○うつ（拍）○よる（據）よりかかる。曲禮「國君ー一式」○おほふ（掩）○おさへる（按）
【撫安】ブアン なでやすんずる。吳志「孫策命レ慕、往ー一之一」
【撫慰】ブイ やすんじなぐさめる。吳越春秋「修レ德行レ惠、ー一百姓一」‖綏慰・撫勞・慰撫。
【撫有】ブユウ なで安んじてたもつ。穀梁傳、注「臨ー一之一也」
【撫育】ブイク いつくしみやしなふ。後漢書、齊武王傳「ー一恩愛甚篤」‖撫字・撫養。
【撫運】ブウン むねをなでさする。陸機文「ー一論レ心、布レ時而躁」
【撫機】ブキ てすりをなでる。王褒賦「ー一兮遠望、念二君兮不レ忘」
【撫鞠】ブキク なでやしなふ。潘岳文「賭爾母氏劬勞ー一」‖撫育。
【撫琴】ブキン ことをひく。王粲詩「翫夜不レ能レ寐、攝レ衣起ー一」‖撫箏。
【撫御】ブギョ いたはりてすべ治める。いつくしみ使ふ。宋史、高繼勳傳「性謙有二機略一、善ー一士卒一」‖撫馭。
【撫馭】ブギョ いつくしみてつかふ。いたはりつかふ。南史、扈欽傳「善ー一得二人死力一」‖撫御。
【撫劇】ブゲキ なでをしへる。北史、李賢傳「ー一諸弟、友愛甚篤」‖撫教。
【撫軍】ブグン ○軍の總督、太子の稱。左傳「太子君行則守、有レ守則從、從曰ニー一、守曰二監國一、古之制也」○將軍の名號。魏、司馬師を以てー一大將軍と爲す。○明清の世、巡撫の別稱。
【撫教】ブキョウ なでをしへる。史記「ー一農民一而利二諸之一」
【撫結】ブケツ したしみて交をむすぶ。後漢書「ー一雄傑、懷二柔羌虜一」
【撫劍】ブケン けんをなでる。孟、梁惠王「夫ー一疾視曰、彼惡敢當レ我哉、此匹夫之勇、敵二一人一者也」
【撫絃】ブゲン 琴瑟をかなでる。淮南子「撫レ琴ー一」
【撫箏】ブソウ 琴をかなでる。晉書、桓伊傳「ー一而歌二怨詩一」‖撫琴。
【撫字】ブジ なでいつくしむ、字は愛育。後漢書「程妻燕愛温仁、ー一益篤」‖撫育。
【撫柔】ブジュウ なでやすんずる。柳宗元文「統二制三軍一、ー一萬人一」‖撫和・撫輯。
【撫提】ブテイ 次條に同じ。五代史、魏繼傳「ー一ニ兵民一」‖安輯。
【撫輯】ブシュウ なでやはらげる。宋史、理

宗紀「深入二蠻地一、――有レ方」‖撫和・撫柔。

【撫心】ブシン　心をなでをさめる。宋玉賦「―レ―定レ氣」

【撫掌】ブショウ　手のひらをうつ。陳信文「陸士衡閉而―レ―、是所二甘心一、張平子見而酒レ之、倘其宜矣」

【撫恤】ブジュツ　やすんじめぐむ。北史、原賀傳「有二惠政一、善―レ―」‖撫卹。

【撫循】ブジュン　なでしたがへる。‖捄循。

【撫軾】ブショク　車の前のよこぎをなでて據る。王褒文「―レ―歎号作レ詩」‖撫式。

【撫綏】ブスイ　民をなでやすんずる。書經「―二―萬方一」

【撫世】ブセイ　○世人をなぐさめ安んずる。莊子「以レ此進爲而―レ―、則功大名顯」○世を撫ふ。荷、宰坐「勇力―レ―」‖蓋世。

【撫接】ブセツ　したしみちかづく。宋書、袁顗傳「惟賦レ詩談レ義而已、不レ能レ―二―緒將一」

【撫存】ブソン　なでいつくしむ、存は慰問ふ。後漢書、張純傳「修二復祖宗一―二―萬姓一」

【撫慰】ブイ　なでしづめる。北史「選二豪右一爲二守令一以―二―之一」‖鎭撫。

【撫定】ブテイ　やすんじしづめる。漢書「項梁立二韓公子橫陽成一爲二韓王一、欲三以―二―韓地一」‖撫鎭。

【撫納】ブナフ　なでてとりいれる。吳志、步騭傳「事レ制遣レ使、宜レ恩―一」

【撫摩】ブマ　なでやすんずる。晉書「―二―四海一、保二有康年一」‖撫安・撫綏。

【撫抱】ブホウ　なでいだく。宋史、燕王德昭傳「或中夜啼號、必自起―一」

【撫養】ブヨウ　なでやしなふ。後漢書「―二―百姓一、同二之赤子一」‖撫育。

【撫劣】ブラツ　なでねぎらふ。後漢書、吳漢傳「車駕親幸―一」

【撫弄】ブロウ　なぐさみもてあそぶ。晉書、陶潛傳「陶潛善二素琴一、每レ有レ酒輒―一」

【撫和】ブワ　なでやはらぐ。張衡、東京賦「―二―戎狄一」‖撫柔。

【撫子】ブシ　園山野に自生する草、葉は披針狀對生にして淡紅色の花を開く。‖洛陽花・瞿麥。

【撈】ラウ　うををすくひとる。‖漁撈。

【撈採】ラウサイ　水をくぐりて物を取る。元史、食貨志「聽レ民於二梅村直沽口一――上」

【撩】レウ　蕭

○をさむ(理)をさめ整へる。○なぶる、いどむ、からかふ(挑弄)○かすめとる、かすむ(掠取)○みだる。‖綾。

【撩戰】レウセン　戰をいどむ。魏志、龐德傳「但持二長矛一――」‖挑戰。

【撩撥】レウハツ　つまみとる。元稹、春詩「―芳情遍、搜求好處終」

【撩亂】レウラン　みだれあふ貌。元稹詩「閑雞――驚」‖繚亂・紛亂。

【撩理】レウリ　をさめととのふ。段玉裁文「理レ亂謂二之―一」‖整理・勝料理。

十三畫

【撾】㊀カツ　㊁エフ　黠　鴨

㊀けづる(刮)○擲―は屈折する貌。○むちうつ(撻)㊁箕の物を掃き入れる處(箕舌)

【撼】カン　感

○うごく、うごかす(搖)ゆるがす「震―」韓愈詩「蚍蜉―二大樹一」‖撼。○さわがす、ごたつかせる。宋史、蘇軾傳「元豐馬黨、多起二邪說一以搖―二在位一」○心をうごかす。感に通ず。

【撼動】カンドウ　ゆりうごかす。‖搖撼。

【撼頓】カントン　うごきたふれる。動搖顚躓。韓愈文「天雪冰凍指レ汝、蹉跌―一險阻、不レ得二少息一」

【撼陷】カンカン　うごかしせまる。嚴下放言「排二雲雨一―二―牛空一」

【撼給】カンキフ　すずをならす。頓況、彈箜篌一歌「一絃一絃如レ―レ」

【撼龍搜沙】カンリョウソウサ　をかを動かし沙を掲げる。墓所の地を相する語、龍は墓に過ず、丘阜をいふ、山陵の形勢に九星を配して吉凶を卜する、其の事を記したる書を撼龍經（一卷）といふ。

【擒】キン　侵　通じて禽に作る

○とりこ、とらはれ(捕虜)「就―」○とらふ(捉)「縛―」とりこにす。いけどる「生―」漢晉春秋「七縱七―」

擒拿・四・俘・虜の別は四（口部二畫）擒拿の條を見よ。

【擐斷】カン とりこにすると、きり殺すと。又、とらへて斬る。宋史、太祖紀「一二一三十八人」＝捕斬。

【擐縱】カンショウ とりこにすると、ゆるすと。李邕、隋鴨賦「逸爲二一一、更相觸撞」

【擐捉】カンソク とらふ。捕獲。釋名、疏「鳥力小、可二一一而取之」

【擐賊】カンゾクスル 賊をとらへる。杜甫詩「射人先射馬、一レ一先擐レ王」

【擐捽】カンソツ とらへる。韓愈文「皆以二錢穀刑獄搏撃一一爲レ職」

【擐總】カンソウ いけどりしばる。金剛經鳩異「逆一二一五六人」＝捕縛・縛擐。

【據】キョ 通 ○よる（依）「依一」よりかかる。○たよる（依託・賴）論、述而「一於德、依於仁」○より保つ「割一」○よりどころ「根一」「典一」「援一」○まもる（拒守）史、趙奢傳「先一北山上者勝」○おく、おさへる（按）○やすんず（安）○ひく（引援）證を引く「證一」○圖よんどころ。よんどころなしは、やむを得ざる義。

【據杖】杖持コヲなり、手に从ひ席の撃、俗に右旁を處に作るは非。

【同訓異義】據・寄・憑・依・賴・仗・倚等の別は寄（宀部八畫）の條を見よ。

【據有】キョユウ よりたもつ。

【據義】キョギヤ 正道にしたがひよる。唐書、孫伏伽傳「至誠據レ理、懇切指二朕失一無レ所レ諱」＝仗義。

【據火】キョカ 螢ホタルの異名。本草「螢火、一名一一、一名挾火」

【據經】キョケイ 聖人の經書を根據とする。宋書「一一審疑」

【據膝】キョシツ ひざにもたれよる。莊子「左手一レ一、右手持レ頤」

【據城】キョジョウ 城にたてこもる。

【據軾】キョショク 車のまへの横木による。莊子「一一レ低レ頭」

【據梧】キョゴ 腰掛にもたれよる。唐書「初詔瑣使二高麗一、其王一レ一召見」

【擐】クヮン 訓 つらぬく（貫）きる、主として甲冑をきるにいふ。

【擐甲】カンカフ 甲ヒをきる。左、成二「一レ執レ兵」

【擊】ケイ 俗 ○ささぐ（捧）○あぐ（擧）「提一」○ゆだめ、弓を正しく矯タめる器。

【擊天】ケイテン 樹などの高くそびゆる義。宋史、劉永年傳「生四歲、仁宗使レ賦二小山詩一、有二一一柱一レ一之語一」

【撤】撤（前條）に同じ。

【撐】撐（手部十八畫）の俗字。

【擒】撐（手部十八畫）の俗字。

【撤】ケキ カク 俗 通音ゲキ

うつ（擊）莊、至樂「一以馬捶」

【擊】ケキ 俗 通音ゲキ

○うつ（打・撲）たたく（扣）書、益稷「一石拊石」○うちならす「一鼓」「一柝」「一磬」○ころす（殺）せめころす（攻殺）「攻一」「突一」史、高祖紀「急一之勿失」○ふれる（觸）「日一」○あたる、抵觸する「肩摩轂一」○おそふ（襲）○ささふ（支）○くじきおさへる（摧抑）○なじり責める「駁一」漢書、翟方進傳「搏一豪強」○やいば（兵刃）○男のかんなぎ（男巫）＝覡。

【同訓異義】擊・打・撲・征・伐・討等の別は征（彳部五畫）の條を見よ。

【擊蒙圖】ケイモウ 宋の司馬光が、幼時擊童と戲れ居りし時、一兒誤りて水甕中に墜ちしかば、直に甕を擊ち破りて、之を救ひたる故事を畫きたる圖【冷齋夜話】

【擊毬】ケイキウ てまりをうちなげて優劣を競ふ技。唐書、睿宗皇帝紀「其レ樂縱飲、一一關雞鬪レ樂」＝打毬。

【擊琴】ケイキン ことをかなでる。皮日休詩「天籟如レ一一レ」＝鼓琴。

【擊鼓】ケイコ 鼓をうつ。論、微子「一一臺入二于海一」

【擊劍】ケイケン 劍をつかふわざ、劍術。漢書、司馬相如傳「少時好二讀書一、學二一一」

【擊鼓】ゲキコ つづみをうつ、進軍の時に鼓をうつ。詩、衞風「一一其鏜、踴躍用レ兵」

【擊殺】ゲキサツ うちころす。魏志、許褚傳「一一一他等一」

【擊斬】ゲキザン うちてきりころす。史、高祖紀「乃前拔レ劍一二一蛇一」＝撃殺。

【擊壤】ゲキジョウ 古の遊戲、壤は木にて造り、形履の如し、其の一を地にたて、三四步を去り、他の一壤にて之をうつ。史、五帝紀「帝遊二於成一、老人一レ一面歌二于路一」

【擊壤集】ゲキジョウシフ 二十卷、宋の邵雍の詩集、其の詩俗流に超脫す、衡山始得より出づといふ。

【擊攘】ゲキジョウ うちて追ひはらふ。＝撃退。

【擊刺】ゲキシ ○兩軍が戈矛を以て相攻める。○劍を用ひて人をきし殺す。又、其の術、劍術。晉書、劉聰傳「十五學二一一、猿臂善射」＝撃劍。

【擊節】ゲキセツ ひざうしをとる。鮑都賦「巴

姫彈レ絃、漢女一レ一」

【擊鮮】ゲキセン 獣の肉を屠るをいふ。鮮は新殺の肉。晉書、孝友傳「一一就養、盡養志レ而」

【擊賊】ゲキゾク 賊をうつ。文天祥、正氣歌「或爲二一レ一笏、逆豎頭破裂」

【擊退】ゲキタイ うちしりぞける。＝撃攘。

【擊柝】ゲキタク ひゃうしぎをうちて、夜まはりする。孟、萬章「抱關一一」

【擊斷】ゲキダン ○刑罰をほしいままにする。史、范雎傳「湯陽箠陽、一一無レ論」○うちてたちきる。史、仲尼弟子傳「一二子路之纓」

【擊筑】ゲキチク 筑（樂器の名）をうち鳴らす。戰國策、高漸離一レ一、荊軻和而歌レ

【擊沈】ゲキチン 敵の軍艦などを大砲にてうちしづめる。＝撃沈。

【擊撞】ゲキトウ うつ。韓愈詩「文章自娛戲、金石日一一」

【擊破】ゲキハ うちやぶる。漢書、高帝紀「漢王引レ兵、北一二一絳公」

【擊搏】ゲキハク うつ。宣和畫譜「如レ出二鷹隼一、使二人見レ之、則有二一一之意一、然後爲レ工」

【擊缶】ゲキフ ほときをうつ。史、藺相如傳「秦王爲一一レ一缶一に飯に作る。

【擊拊】ゲキフ 樂器などをうちたたく（唐書、禮樂志）＝撃搏・撃拍。

【擊拍】ゲキハク 撃拊に同じ（蘇軾、石鼓歌）

【擊滅】ゲキメツ うちほろぼす。史、始皇紀「擊レ兵一二一之」＝討滅。

【撿】ケン 檢に通用す

○つかぬ（束）しめくくる、とりしまる。○かんがへる（按）○とどむ、とらへる（拘）○あぐ（擧）○かぎる（局）○さがす（搜）○はかりかんがへる。晉書、周顗傳「王導料一中書故事」○めぐりしらべる（巡察）○いがた（模型）

【撿按】ケンアン しらべる。

【撿校】ケンカウ ○唐代の官名（唐書、百官志）＝檢校。○國 法事を點檢する僧職。○古の官名。

【撿束】ケンソク ○とりしまる。○警察官が公力を以て一時人の自由を束縛する。

【撿點】ケンテン 心をしめくくりていましめる。（劉心、賈逵傳、注「告二子弟一、使二各自一一」

【操】㊀サウ・ソウ ㊁サウ・ソウ 豪 號

㊀とる（把）もつ（持）手にとりて持つ「一刀」○あやつる、はたらかせ使ふ「一舟」㊁みさを、堅く執り守る所の志行「貞一」「節一」「松柏一」「歲寒一」○おもむき（風調）南史、袁粲傳「清整有二風一」○琴の曲調「琴一」○國 人を程よくあやなす。又、あやつり芝居。

同訓異字 操・取・執・秉・把・採・撮・捕・提等の別は取（又部六畫）の條を見よ。

【操縵】サウマン みさをと樂譯、宋史、文同傳「同以二學名一レ世、一二高潔、自號二笑笑先生一」＝操守。

【操芋】サウウ 芋は筐の類、それをとる、齊の宣王芋を好む、故に一二は君の好に適する傳とす。王安石詩「一一入レ齊人、雅鄭亦復殊」

【操行】サウカウ おこなひ、みさを。南史「一爲二鄉里一所レ稱」＝操履・操行。

【操琴】サウキン ことをとる。蔡邕文「舅姑若命二之鼓一レ琴、必正坐一レ一、而奏レ曲」

【操業】サウゲフ みさをと、わざと。晉書「猶當二操二其一一、以弘中風尚一」

【操堅】サウケン みさをがかたい。東方朔文「操意堅而不レ衰」

【操檢】サウケン 心のしめくくり。南史、孝義、何子平傳「幼持二一一、乖二風二名行一」

【操觚】サウコ 觚は木の方なる札、古、事を記すに用ひしもの、故に筆をとり文を作る義。陸機、文賦「或一レ一以率爾、或含レ毫而邈然」

【操作】サウサク はたらく、仕事をする。後漢書、梁鴻傳「著二布衣一二一而前」

【操舟】サウシウ ふねをあやつる。莊、達生「津人一レ一若レ神」

【操樹】サウジュ かぢをあやつる。後漢書「將軍兄弟一レ一者也」

【操心】サウシン 自ら其の心を持ち守る。孟子「其一レ一也危、其廬レ慮也深」

【操舍】サウシャ とりて堅く守ると、すつると。孟、告子「操則存、舍則亡、出入無レ時、莫レ知二其鄉一、惟心之謂與」

【操尙】サウシャウ 品行がすぐれて高し。晉書、羊祜傳「祜數レ德沖虛、一一清遠、德高而體卑、位優而行恭」＝節操。

【操守】サウシュ とりまもる。又、みさを。唐書、裴度傳「神觀邁爽、一一堅正」＝操持・操調。

【操縱】サウジュウ あやつる。操はとる、縱ははなつ、巧に人を使ふ。

【操縵】サウマン 書きつけをもつ。陸雲賦「一一染レ翰、思盈情煩」

【操柁】サウダ かぢをあやつる。晉書、夏統傳「一一正レ楫、折二旋中流一」

【操揉】サウジュウ うつ。宣和書譜「一一之次、忽見二浮雲在レ空」

【操持】サウヂ とりまもる。李商隱詩「李杜一一非二略齊一」＝操守・操植。

【操植】サウショク みさを、植は意志。晉書、裴秀傳「淑少有二一一一」＝操守。

【操柄】サウヘイ たづなをとる。後漢書、崇帝紀「帝覽二四隤一、躬自一レ一」

【操筆】サウヒツ ふでをとる。後漢書「陳廷尉宜二便一レ一」

【操矛】サウボウ ほこをとる。後漢書、鄭太傳「關西諸郡、婦女猶能レ戰一

レ一挟レ弓負レ矢」‖執矛・挟矛。
【操柔】サウジウ　すきを取る。徐幹文「有レ客能一レ一、面捨二其長田一」
【操履】サウリ　おこなひ。履はふみ行ふ。北史、庾信傳「一一貞篤、立言忠規」‖品行・操行・操守・操行。
【操練】サウレン　兵をねる（訓練）‖練兵。
【操弄】サウロウ　あやつり弄ぶ。後漢書、賈武傳「一一二國權、獨二亂海内一」

【擉】サク　ショク・ソク　呉　質

○さす、水中の魚などをやすにてつきさして取る。莊、則陽「冬則一讙於江」‖箠。○やす、魚を刺して捕ふる具。

【擦】セツ　屑

かぞへる（數）‖撰。

【擅】セン　㊥

○もっぱら（專）○ほしいまま、ほしいままにする、わがまま。己の意に任せて事を處置する「專一」「獨一」「一權」○よりたもつ（據有）

同訓異字　擅・縱・横・放・肆・恣の別は縱（糸部十一畫）の條を見よ。

【擅誅】セン　ほしいままにはかりさだめる。漢書、漢宗廟之禮、不レ得二一一一

よ。左傳「子產之從ㇾ政也、一ㇾ一而使ㇾ之」

【擇拔】タクバツ　よりぬく。＝選拔。

【擇筆】ヒツ　ふでをえらぶ。廣川書跋「余案二前人論ㇾ書、必先ㇾ一ㇾ筆、平動作皆得ㇾ如ㇾ意、非ㇾ是則未二暫書一也」

【擇木】タクボク　木をえらぶ。左、哀十一「鳥則一ㇾ一、木豈能擇ㇾ鳥」臣が主を擇びて仕ふるに喩ふ。新論「鳥有二一ㇾ一之性一、魚有二選ㇾ淵之情一」

【擇耳】タクジ　よきものをえらぶ。宋書、謝靈運傳「非ㇾ自非ㇾ氣、一ㇾ一選ㇾ音、翦ㇾ棟開ㇾ窗、尋ㇾ石覓ㇾ逕」

【擇鄰】タクリン　近所をえらぶ。景福殿賦「偉二孟母之一ㇾ一ㇾ＝擇里。

【擇滅无爲】タクメツムヰ　佛三无爲の一。擇力所得の滅といふ義。大藏法數「擇即揀擇、滅即寂滅、謂ㇾ聖人用ㇾ智揀擇、證二離見思繫縛一、即證二寂滅眞空之理一、是名二一ㇾ一」

【擇言】タクゲン　むちうちはづかしめる。漢書「未ㇾ得二一ㇾ一人一」＝答辱。

【擇答】タクタツ　むちうつ。白虎通「或曰、一ㇾ一之刑也」＝笞鞭・扑撻。

【擇刻】タクコク　むちうちつみ。又、其の刑罰。元稹詩「誅求與二一ㇾ一、誓乃不二遵遏一」＝扑刑。

【擇戮】タクリク　うちてはづかしめる。周禮「一ㇾ一而刑之」＝辱。

【擔】

㊀タン　㊁セン　㊂タン　動　轉　卓

㊀かつぐ、になふ、肩にになふ。背にになふは負。○轉じて自分にひきうける「一任」○武一は山名、成都城内の西北隅に在り。蜀志、先主紀「即皇帝位於成都武一之南」㊁かす（假）㊂にもつ（荷物）左、莊二二「弛二于負一」○か、荷物の數。湘山野錄「置宮醵十一爲一貲」

【擔荷】タンカ　○にもつをになふ。管子「負任一ㇾ一」○にもつ。

【擔架】タンカ　傷病者を載せて運ぶ具。

【擔笈】タンキフ　本箱をおふ。北史、高允傳「允性好二文學一、一ㇾ一負ㇾ書」＝負笈。

【擔鼓】タンコ　牽牛星の異名。留推、注「今荊楚人呼二牽牛星一爲二一ㇾ一擔者荷也」

【擔屋漢】タンオクカン　肥桶を荷ふ男、屋は貧人をそしりていふ。大藏一覽「文殊普賢是——」＝擔糞漢。

【擔當】タンタウ　擔任に同じ。

【擔任】タンニン　責任を負ひて任務を引き受ける。又、其のうけもち。＝擔當。

【擔板漢】タンバンカン　板をになふ者の、一方は見ゆれども他方は見えざる如く、一を知りて、其の二を知らざる者に喩ふ。漢は男「碧巖錄」

【擔夫】タンフ　荷をかつぐ男。唐書、李白傳「見二公主一一爭ㇾ道」＝擔簍。

【擔負】タンフ　になふ。詩經「百祿是荷」箋「詞ㇾ一ㇾ天之多福一」＝負擔・荷負。

【擔簍】タンル　肥桶を荷ふ。南史、到溉傳「以二一ㇾ一自給」

【擔保】タンポ　ひきあて。抵當の物品。

【擔僕】タンボク　荷物をになふしもべ。范成大詩「一ㇾ一與夫盡勞悴」

【擘】

ハク　ヒヤク　陌

○さく（裂）分け割く、つんざく（劈）○弓を張る。康熙字典「弓弩手張曰一」○おやゆび（大指）轉じて一番すぐれたるもの。孟、滕文公「吾必以二仲子一爲二巨一」爲

同訓異義　擘・劈・裂・割・剖・析の別は裂（衣部六畫）の條を見よ。

【擘蓼】ハクリウ　きりもりして處分する。

【擘擂】ハクライ　つんざきつかむ。皎然「雜遇ㇾ人、則擘而擂ㇾ之」

【擘窠】ハククワ　篆隸に用ふる書體。一說大いなる文字。湖錄類纂「顏眞卿請乞二御書題一放生池碑額一表曰、臣今謹擘ㇾ石一一大書一本隨ㇾ表奏進」

【擘指】ハクシ　おやゆび。爾雅、釋魚、注「頭大如二人一一一」＝擇指・巨指。

【擘牋】ハクセン　紙を裁ちきる。北夢瑣言「羅紹威一ㇾ一起草、下ㇾ筆成ㇾ文」＝擘箋。

【擘張】ハクチヤウ　手にていし弓をはる。又、其のいしゆみ。漢書、申屠嘉傳、注「今之發以ㇾ手張者、曰二一一」

【擘肩】ハクケン　はだをつんざく。樂章詩「烈風擘二我膚一」

【擘柳風】ハクリウフウ　春の疾風。風土記「河朔春時、疾風數日、一作三日乃止、曰二吹花一一」

【擘裂】ハクレツ　ひきさく、つんざく。孟郊詩「一一少室峰」＝劈裂。

【擗】

ハク　陌

てごたへ。

【擗擗】ハクハク　射て物にあつる聲。張衡、西京賦「流鏑一ㇾ一」

【擗】

㊀ヘキ　㊁ヘキ　錫　陌

㊀うつ、むねをうつ（拊心）通

じて辟に作る。○かがむ、手足を屈折する。莊、馬蹄「摘ー篤ㇾ轡」＝躄。㊁さく（析）ひらく（開）

【擗踊】ヘキヨウ　むねうちてかなしむ。孟、告子「親喪固所ㇾ自盡、七命「號咷爲之ー踊」＝辟摽。

【擗地】ヘキチ　甚だしくかなしみてむねをうち、をどりあがる。季鷹、寄親「ー一哭泣」

【撲】

ボク　撲（手部十二畫）に同じ。

【撇】

ヘツ　捨（手部九畫）に同じ。

【擁】

㊀ヨウ　㊁ヨウ　㊂腫

㊀いだく、かかへる（抱）○おほふ（蔽）とりかこむ。○もつ（持）「ー書」「ー帚」○まもる（衛護）たすける「ー立」○くま（曲隈）○かこひ（範圍）○取りしたがふ（隨從）㊁さへぎる（遮）ささへる（障）禮記「女子出門必ー蔽其面」○ふさぐ、塞に通ず。

【擁抱】ヨウホウ　擁・抱・擁の別は抱（手部五畫）の條を見よ。

【擁閉】ヨウヘイ　ささへとどむ、ふさがる。史、朝鮮傳「足ー一不ㇾ通」＝壅塞・壅遏。

【擁塞】ヨウソク　たすけそだてる、誠は實。漢書、敍傳「ー一孝昭」

【擁衛】ヨウエイ　かばひまもる。後漢書、廣陵傳「常懷二甲冑一、ー一親族」

【擁護】ヨウゴ　たもちまもる。晉南譙文「ー一函夏」

【擁笏】ヨウコツ　しゃくをもつ。唐書、輿紫衣ーレー」

【擁劍】ヨウケン　○劍を手にする。○はさみの個大なる鑿。

【擁篲】ヨウスイ　とりかこみてたすけまもる。漢書、陳湯傳「郅支僭ー漢ー一呼韓邪一而不ㇾ助ㇾ己」＝擁衛。

【擁膝】ヨウシツ　ひざをいだく。駱賓王詩「伏ㇾ枕愁思深、ーレー獨長吟」＝抱膝。

【擁樹】ヨウジュ　木をいだきかこむ。杜甫詩「返照入ㇾ江翻二石壁一、歸雲ーレー失二山村一」

【擁書】ヨウショ　書物をかかへ持つ。蔡邕、楊復傳「ーレー抱ㇾ籍」＝藏書。

【擁書萬卷】ヨウショバンカン　多くの書册を藏する。北史、李謐傳「丈夫——、何假二南面百城一」

【擁腫】ヨウショウ　はれあがる、木のふしこぶなどにいふ。擁は腫の假借字。莊、逍遙遊「其大本ーー、而不ㇾ中二繩墨一」

【擁鑪】ヨウロ　ははきをかかへもつ。漢書、高帝紀「太公ー一迎ㇾ門卻行」＝擁帝。

【擁柱】ヨウチュウ　はしらをいだく。史、齊世家「ーレー而歌」

【擁旄】ヨウボウ　はたをもつ。晉書、陶侃傳「長沙勤王ーニー義場一」

【擁抱】ヨウホウ　かかへいだく。宋史、燕王德昭傳「太祖命二黃門一ーー出入常從」

【擁蔽】ヨウヘイ　○おほひかくす。禮、大學「此好惡所二以逆一ㇾ流而處士所二以危ーー一也」＝壅蔽。○さへぎりおほふ。禮、內則「女子出ㇾ門、必ーニー其面」

【擁立】ヨウリツ　たすけ守りておしたてる。

【擂】

㊀ライ　㊁ライ　㊂灰

㊀する（磨）みがく（研）物を研磨する。㊁石を上よりおとす。＝礮。○うつ（擊）莊、至樂「ー以馬捶」○㊂する、すりつぶす「ー鉢」

【擂鼓】ライコ　つづみをうつ。＝擊鼓。

【擂槌】ライツイ　すりこぎ、れんぎ。

【擂木】ライボク　㊂れんぎ、擂鉢にて物をすりつぶす木棒。＝擂粉木。

【擂鉢】ライバチ　㊂物をすりくだくに用ふるはち。

【擄】

㊀ロ　㊁ロ　㊂虞

○う（獲）虜に通ず。○かすむ（掠）「ー掠」

十四畫

【擪】

エフ　㊂葉　アフ　㊂治

㊀おさふ（按）一本の指にて按へる。＝壓。㊁もつ（持）

【擸】

ロウ（前條）に同じ。

【擸管】ロウカン　指にてふえをおす。南都賦「彈ㇾ琴ーレー、挑ㇾ鼻餅」

【擷】

カツ　㊂屑　手にてはなをかむ（手拾鼻膿）

【擱】

カク　㊂屑　閣の俗字　おく　さしおく。手に持ちし物を下に置く。

【擱筆】カクヒツ　ふでをさしおきて書きやめる。＝閣筆。

【擬】

ギ　㊂紙

○おしはかる（度）推測する。○かたどる（像）○まねる（摹倣）「模ー」くらべる（比）「比ー」○にる、まがふ（似）漢書、王孫宏傳「修ー於君」○なぞらふ、あてがふ。適用する「倫ー」「準ー」「一律」「一判」○欲する、爲さんとする勢を示す。

【擬議】ギギ　おしはかる、度度する。易、

繁辭「一一以成二其變化一」

【擬經】ギケイ　經書にまねて作る。擬は模倣。梁陵文「七十之歳、揚雄一一、六十之年、平津對策」

【擬古】コギ　古體になぞらへて作る。「一一文」揚子新話「一一詩騷二於近似一」

【擬作】ギサク　にせてつくる、まねて作る。又、其の作品。

【擬人法】ギジンホウ　修辭法の一、感情の物を人類にみたてていふ法、竹を「此君」松を「十八公」又「花笑ふ」「鳥歌ふ」の類。

【擬態】ギタイ　動物學の語、己の身を保護せんために、他物の形態に擬似せしめる、即ち尺蠖トリシャクが枯枝の狀をなせる類。

【擬度】ギタク　なぞらへはかる。易、繫辭、疏「一一之二而後言」＝酸郷。

【擬定】ギテイ　かりにはかりてさだめる。

【擬把】ギハ　わりあててとる。羅隱詩「一一金錢一贈二歌謳一」

【擬判】ギハン　假定の事實に對して如何に裁判すべきかを決斷する職。

【擬律】ギリツ　法律を事實にあてはめる。

【擧】

擧（白部十一畫）の本字。

【擦】サツ　㊥

○さする。○なでる。摩の急なる義「摩一」

【搖】

㊀ジュ　㊁ゼン　先　㊇　ズキ　支

○そむ（染）韓愈文「耳一目染、不二學以能一」㊁ひたす（擐）濡に通ず。○もむ。＝揉。

【擠】セイ　㊥　㊍

○おす（推）おしおとす。○おしのける（排）「排一」○おとしいれる（陷）韓愈、柳子厚墓誌銘「反一之又下二石焉一」○そこなふ（毒）○おつ、おちいる（墜）左、昭十三「小人老而無レ子、知一于溝壑一矣」

【擠害】セイガイ　人をおとしいれそこなふ。元史「刑見怯不花曾與二阿魯圖一謀、一二一殿殿一」

【擠陷】セイカン　照管を以て人を罪におとしいれる。唐書、李祕傳「楊炎罪不レ至レ死、祀一二之一」祀は盧祀。

【擠排】セイハイ　おしのけおしりぞける。又、おしひらく。馮子振文「擠二斥日月一」＝排一一燈讌一」＝排擠。

【擠抑】セイヨク　人をおとしいれおさへつけて、進み登ることを得させぬ。唐書、曾爲二張延賞一一一、內經望」

【撞】ドウ　㊁

○あぐ、もたぐ、もちあげる（擧）○うごかす（動）

【撞傴】ドウク　ねだんを高くする。

【撞擧】ドウキョ　さしあげる、人物を抜きすすめる。元稹詩「大都只在二入一一一」

【撞頭】ドウトウ　文中にて貴人の姓名の上を一字分だけあけて尊敬の意を表する書式。明律附解「第一一一、第二一一」

【擣】

㊀タウ・トウ　㊁チウ　尤　緝

○うつ（擊）○きつく（築）○つく（衝）「一盧」攻撃する。○たたく（敲）○うすつく（舂）米をうすつきしらげる。＝搗。○よる（依）㊁あつまる（聚）＝稠。

同訓異字　搗・衝・突・搗・撞・舂・搶の別は衝（行部九畫）の條を見よ。

【擣衣】トウイ　きぬた。又、衣を砧にてうつ。李白、子夜吳歌「長安一片月、萬戸一一聲」

【擣虛】トウキョ　敵の備へなきすきまに衝き入る。史、孫武傳「批レ亢一レ一」

【擣劍】トウケン　こまかにつきくだく。齊東野語「麥飴以レ布、一一作レ紙」

【擣絹】トウケン　きぬをうちて練る。韓愈詩「砧聲未レ一レ一」

【擣碪】トウチン　砧にて衣をうつ、碪は砧。陳鴻詩「典盧衣未レ暇、閨家夜一レ一」

【擢】タク　㊁　覺　㊇　ヂキ

○ぬく（拔）○ひく（引）○ぬきだす（抽出）抜き出して登用する「拔一」「選一」「超一」梁綴、上書「一二之于賓客之中一」○ぬきんづ、獨り出づる貌。○あぐ（擧）○そびゆ（聳）高く立つ。班固、西京賦「一雙立之金莖」そばだつ。○さる（去）すつ（徹）

同訓異字　擢・挺・拔・抽・擢・脫○擢は同じものの中よりぬき出すなり。戰國策「擢二之乎賓客之中一而立二之乎羣臣之上一」○挺は自らぬけ出るなり、挺身逃亡は、獨り身をぬきて逃るなり。○拔はぬき出すなり、拔レ刺・拔レ軍などと用ふ。易經「確乎不レ可レ拔」○抽は引き出す意なり、抽斗は簞笥のひきだしなり。孟子「抽レ矢扣レ輪」○擢はしんをぬくなり。孟子「宋人有下揠二其苗一而長者上」揠刀も同じ。○脫はぬけてはだかになるなり、ぬぐと訓む、蟬脫・殼の類。

【擢拔】タクバツ　ひきぬきてあげ用ふる。＝拔擢。

【擢賢】タクケン　賢者をぬき出し用ふる。後漢書、一二一于衆愚之中一」

【擢秀】タクシウ　○人にすぐれひいでる。又、其の人。徐勉文「雄州一一、弱冠

升レ朝、寧二綜百家一〇草木の榮え反ずる貌。沈演之、頌「一二辰唯二【擢榮】ヂョウ 衆中よりぬきだしてほめる。陳書、宣帝紀「戸有二增進一、即加二一一」

【擢授】ヂュ 順序によらずぬき出して高官を授ける。晉書、左思傳「以レ能一二一殿中侍御史一」

【擢出】ヂュツ ぬきいだす。

【擢昇】ヂュショウ ぬきあげて官位をのぼす。梁唐書「自レ古郡守縣令、皆妙二選賢德一、欲レ有二一一一、宰相必先試以縣レ人」‖升擢・超擢・擢登。

【擢第】ヂダイ 及第する。北史、柳寧之傳「以二明經一一一」‖登第。

【擢登】ヂトウ ぬきあげて官位をのぼす。後漢書、徐穉傳「若使下二一三事一協中亮天工上、必能翼二宣盛美一、增二光日月一」‖擢昇・登擢。

【擢能】ヂノウ 能ある者をぬき用ふる。劉子「昔時人君拔二奇于凡處一、一二于屠販一」

【擢髮】ヂハツ かみの毛をぬく。史、范雎傳「擢二賈之髮一以數二賈之罪一、尚未レ足也」極めて多きをいふ。

【擢用】ヂヨウ 衆中よりぬき出して用ふる。後漢書、公孫述傳「程烏率育以レ有二才幹一、皆一二之一」‖選用。

【擯】 ヒン 眞

〇すつ（棄）「一棄」〇しりぞく（斥）のけものにする「一斥」〇賓客をみちびく（導）‖儐。

同訓異字 擯・退・屏・斥・卻・黜・貶の別は退（走部六畫）の條を見よ。

【擯斥】ヒンセキ しりぞけさる。柳宗元、新論「一一箝巻二不レ交二四鄰一」

【擯介】ヒンカイ 主人と客との間に立ちて周旋する者。儀禮、士冠禮、注「擯者有司位レ禮者、在二主人一曰レ擯在レ客曰レ介」

【擯棄】ヒンキ しりぞけすつ。崔寔、政論「嘉不レ勝レ衆、遂見二一一」‖擯斥。

【擯卻】ヒンキャク しりぞける。卻は却の本字。漢書、中山靖王傳「宗室一一、骨肉冰釋」‖擯斥。

【擯相】ヒンショウ 賓客の事を司る官。出でて賓客に接するを擯といひ、入りて禮を贊くるを相といふ。周禮、司儀「掌二九儀之賓客一一之禮一」

【擯斥】ヒンセキ しりぞけてのけものにする。宋史、王禹偁傳「爲二流俗所一不レ容、故屢見二一一一」‖排斥・排擯。

【擯落】ヒンラク しりぞける。謝靈運、盛法師誄「慨然有下一一榮辱一、棄二濟物我一之志上」

【擩】 ラン 豏 一に捼・撋に作る

〇とる（採）屈原、離騷「夕一二洲之宿莽」〇つまみもつ（攝持）史、袁盎傳「竝車一轡」〇すべもつ（總持）すべくくる。蜀志、諸葛亮傳「罰二十以上皆親一焉」〇とりもつ（執持）

【擩取】ランシュ 手にとる。後漢書、鄧子訓傳「母不レ覺一一、乃竊見也」

【擾】 ジョウ（前條）に同じ。

【攫】 ㊀ ワク ㊁ クヮク 藥 禹 クヮク 藥

㊀にぎる（握）〇とる（手取）㊁獸を捕るわな（機檻）中庸「驅而納諸罟一陷阱之中」罟はあみ、陷阱はおとしあな。

十五畫

【擴】 クヮク 陌 藥

おしひろめる、小を張りて大ならしむ。

【擴充】クヮクジュウ おしひろげて十分に滿たす。孟、公孫丑「知二皆擴而充レ之」仁義禮智の素質は我心に先天的にそなはれるものゆゑ、之をおしひろげて十分に發達せしむるを要する義。

【擴大】クヮクダイ おしひろげる。‖擴張。

【擴張】クヮクチャウ おしひろげる。‖擴大。

【攜】 ケツ 屑

攜（手部十八畫）の略字。

【擷】 ケツ ケチ 屑

〇とる（持取）つむ、つまみとる「採一」許有壬詩「笑童一滿筐」〇はさむ、つまばさむ、衣のおくみを折りかかげて帶にはさみ、其の中に物を入れる。‖襭。

【擷芳】ケツハウ 香草を採る。劉禹錫詩「何人事二一一」

【擦】 サツ 易

〇まく「一沙」‖撒。〇ちらす（散）〇する（摩）〇足にて草を動かす聲。

【攢】 ㊀ ゼウ ㊁ ゼウ 蕭 條

㊀みだる、みだす（亂）「紛一」「騷一」〇わづらはし（煩）さわがし。〇したがふ（順）〇すなほ。〇なる、ならす（馴）「一龍」「教一」〇やすんず（安）周禮、天官、太宰「以一萬民」㊁家に飼ふ動物（家畜）周禮、夏官「掌二邦其畜宜六一」六一は馬牛羊豕犬雞。‖六畜・六性。

同訓異字 擾・亂・紊・紛の別は亂（乙部十二畫）の條を見よ。

【擾柔】ジウジウ ならしなつける。韓非子

「龍之爲ㇾ蟲也、可ニ一一而騎一」
【擾攘】ジョウ さわぎみだれる貌。漢書「倒倒ー二ー楚魏之閒一」後漢書、盧芳傳「因二時ー一、荷悉縱而已耳」＝擾亂。
【擾擾】ジョウ ごたごたとみだれる貌。國語「唯有二諸侯一故ー一焉」＝紛紛・紛擾・紛亂。
【擾攘】ジョウ みだしうばふ。唐書、逆臣傳「樹黨相望、ー二ー梁宋間一」
【擾拔】ジョウ みだれそむく。詩經、疏「思不レ由二其位一、無レ復ー一一」
【擾弊】ジョウ みだれやぶれる。王勃詩「晉暦崩坂、衣冠ー一」
【擾亂】ジョウ みだれさわぐ。史、項羽紀「門下大驚ー一」

【撇】ソウ 有

抖ーソウはあぐ(擧)又、振ひ動かす。王維詩「抖ー擻貧里」又、悄侶の行脚。又、其の僧。釋氏要覽「梵語杜多、華言抖ー二ー擻一」

【擻】サウ 魚 通じて抖に作る

〇のぶ(舒)班固、答賓戲「獨ー意乎宇宙之外一二〇しく(布)司馬相如、封禪書「一之無レ窮」〇ちる、ちらす(散)〇のぼる、のぼす(騰)〇なぞらふ(擬)

【擻懷】ソウクワイ おもひをのべる。擻は舒。唐太宗、翠微宮詩「ー一俗塵外、高跳白雲中」＝舒懷。

【擲】テキ チャク 陌

〇なげる(投)なげうつ(拋)「棄ー」「投ー」「拋ー」音書、孫綽傳「卿試ー」地、當作金石聲也」＝擿。〇なげやる、放棄する。〇ふるふ(振)西陽雜俎「吼ー而前」〇圖なぐりうつ「打ー」

【擲金】テキキン 金をなげうつ。韓愈詩「六義驚二擲漢、三臺聳ニー一」
【擲去】テキキョ なげうちすてる。世說「促而ー二之一」
【擲梭】テキサ 〇ひをかよはし機を織る。子濵詩「窗下ー一女」〇光陰の速なるに喩ふ。雲笈七籤「紅顏三春樹、流年一ー一」
【擲殺】テキサツ なげうちころす。金史、紇石烈執中傳「執中方飼レ鷂、惡ー二ー之一」
【擲鉢】テキハツ 鉢(僧の食器)をなげる。三昧經「菩薩ー二ー於空中一、自然飛來」

【擿】㊀テキ・ヂャク ㊁テキ・チャク 陌 錫

㊀なける(投)なげうつ、なげつける。史、荊軻傳「引匕首一以ー秦王一」＝擲。〇なげすてる。莊、胠篋「ー玉毀ー珠小盜不レ起」〇かく(搔)〇かんざしのあし、みみかき(簪股)〇とる(取)つむ。＝摘。㊁あばく、悪事をあばき出す「發ー」「指ー」漢書、趙廣漢傳「發ー伏姦」神」あぐ、かかぐ(挑發)〇いしなけ。

【擿抉】テキケツ 隱れたる悪事をかかげ出す。抉一に缺に作る。漢書「欲ニ一以揚二我惡一」＝擿發・挑發。
【擿發】テキハツ 隱れたる惡事をあばきだす。後漢書、賈復傳「相監司以ー二其姦一」＝擿發・發擿。
【擿伏】テキフク 裁判するに能く隱れたる罪をあばき出す。宇解參看。

【擺】ハイ 蟹 通じて排に作る

〇ひらく(發・開)おしひらく(排)〇ふるふ(振)ふるひ動かす「搖ー」〇圖陳列の義「ー布」「ー樣」
【擺擺】ハイハイ ふるひうごかす。孔平世詩「草木困ニー一、枯葉半不レ全」
【擺製】ハイセイ ひらきひく。顧雲詩「波濤ー一魚龍殘」
【擺脫】ハイダツ 〇ひらきのぞく。宣和書譜「李嶠ー二書習一筆力一新」〇身をぬけして去る。韓偓詩「ー一是眞僧」
【擺相】ハイサウ ひらきすてる。世說「望二柳ー二一常務一」
【擺落】ハイラク はらひのぞく。陶潛、飲酒詩「ー一悠悠談」
【擺拉】ハイラ とりひしぐ。李陽冰文「得ニー一摧一之勢一」
【擺弄】ハイロウ ひらきもてあそぶ。韓愈詩「別來楊柳街頭樹、ー二春風一只欲レ飛」＝播弄。

【攫】ハク 陌 麻

〇うつ(擊)〇摶ーは射て物に中てる聲。

【攀】ハン 刪

〇よづ、下から上へつかまりのぼる「跼ー」「登ー」「仰ー」〇ひく(扳引)つかまる。〇たすけ(扳)すがりつく。
【攀援】ハンエン 〇たよる、勢力ある人をたのみにする。漢書、程方進傳「欲二相ー一、死而後已」〇よぢのぼる。莊、馬蹄「鳥鵲之巢、可ニー一而閲一」＝攀緣。
【攀緣】ハンエン よぢのぼる、緣は因る。吳融詩「ー一可レ到玉峰頭」＝攀援。
【攀躋】ハンセイ よぢのぼる。岑參詩「不レ得二日ー一」＝攀登。
【攀登】ハントウ よぢのぼる。曹植、九愁賦「願ニー一而無階」＝登攀・攀躋。
【攀附】ハンフ すぐれたる人にすがる、よぢつく。舊唐書「ニー明主一」

【攀龍附鳳】ハンリウフホウ　龍につかまり鳳凰につきしたがふ、英主に從ひて功名を立てる、驥尾に附する。漢書「―、竝乘二天衢一」後漢書「攀二龍鱗一附二鳳翼一」龍・鳳は天子に比す。

【攀緣】ハンエン　よぢのぼる、攀は拘牽。＝攀援。

【攀轅】ハンエン　車をよぢて泣ふ、史民が賢明なる長官の去る時などに用ふ。北史、伊婁謙傳「吏人―ト、行數百里不レ絕」

【擂】ライ　㊀　○うつ（擊）急に鼓をうつ。○石をころばす（轉石）

【擽】㊀　リヤク　㊁　レキ・リヤク　㊀　ラク　㊁　○うつ（擊）＝格。㊁うつ（擊）○はらふ（掃）○こえる（超踰）○國こそぐる、くすぐる。

【攇】㊀　レフ・ロフ　㊁　ラフ・ロフ　㊀　㊁　㊀わかちもつ（理持）＝掲。㊁をる（折）○やぶるおと（破壞聲）

十六畫

【攌】カン　ワン　㊀　㊁　○しがらみ、やらい（木柵）ませがき。○とらへつなぐ（拘繫）賈誼、服賦「拘士繫俗兮、―如囚拘」

【攦】クン　㊀　㊂　㊃　捃・攈に作る　ひろふ（收拾）

【攫】ケツ　ひろひあつめる、攫は取。漢書、刑法志「簿何―ニ―柔法」

【攉】㊀　クック　㊁　カク　㊀　㊁　㊀てをかへす（反手）韻會「搖手曰揮、反手曰―」㊁揮權と通ず、はかる（商）「商―」又、利をもつばらにする（專利）

【攘】ケン　㊀　㊁　○ちぢむ（縮）○衣をかかぐ（攝）淮南、人間「可―裘而越也」裘に通ず。

【攏】ロウ　㊀　㊁　○はかる（謀）○もつ（持）○つかぬ、くくる（括）○あはす（合）○かすむ（掠）うつ（擊）琵琶の指法、○國舟を泊する。又、泊せし舟。○をさむ（理）

【攏燃】ロウネン　琴の絃をかすりひねる。白居易、琵琶行「輕攏慢燃抹復挑」

【攝】セフ　㊀　㊁　㊂　㊃　㊄　通じて懾に作る　○しめる（迫）○せまりちかづく（迫近）孟、盡心「虎賁嘗、莫二之敢一」○ひねる（拈）○みだる（亂）○つながる（繫）むすぶ（結）まとふ（纏）

【攫】ケン　㊀　㊁　○とる（取）○かかぐ「一雲」＝搴。

【攙】サン　㊀　○さす（刺）＝搠。○するどし（銳）○たすく（挾）○ひく（牽挽）○おす（推）○―搶ははきぼし。爾雅、釋天「妖星爲二―一」＝槍。

【攙搶】サンはははきぼし。爾雅、釋天「妖星爲二―一」＝槍。

【攘】㊀　ジヤウ　㊁　ジヤウ　㊂　ダウ　㊀　㊁　㊂　㊀ぬすむ（竊）他人の物が己の處に來りしをぬすむ。論、子路「其父―羊、而子證之」○はらふ（除）詩、大雅「―之剔之」おひのける。排去する「―夷」○しりぞく（卻）○おす（推）○かかぐ（擡）○衣服などをはらひまくる「―袂」「―臂」㊁みだる、みだす「狂―」＝擾。㊂ゆづる「揖―」＝讓。

同訓異字　攘・盜・竊・簒の別は盜（皿部七畫）の條を見よ。○攘・掃・拂・祓・除・掃の別は掃（手部八畫）の條を見よ。

【攘夷】ジヤウイ　○外夷をはらひ逐ふ。左傳「內修二政事一、外―ニ―狄一」○國德川幕府の末、西洋人を追ひ拂ひて交通互市を絕たんとする主張「尊王―ー」

【攘卻】ジヤウキヤク　はらひしりぞける。＝攘斥。

【攘袖】ジヤウシウ　そでをはらふ。曾楓時「―見二素手一」

【攘攘】ジヤウジヤウ　ごたごたみだれる、紛雜の貌。史、貨殖傳「天下―、皆爲レ利往」

【攘斥】ジヤウセキ　はらひしりぞける。＝攘卻、進學解「詆二訾異端一、―ニ―佛老一」

【攘竊】ジヤウセツ　ひそかにぬすむ。權德輿文「損レ精耗レ神、―ニ―文字一」＝剽竊。

【攘伐】ジヤウバツ　うちはらふ。莊子「諸侯暴亂、權相―ー、以殘二民人一」

【攘臂】ジヤウヒ　しりぞき避ける。曲禮「君出就レ車、則鞅井攘授レ綏、左右―

―」【攜手】ケイシュ　てをひく。李陵詩「―上河梁」黃庭堅詩「一百八盤―上、至ル今歸夢繞二羊腸一」【攜帶】ケイタイ　たづさへおびる、所持する。

【攜持】ケイヂ　たづさへもつ。阮籍詩「王子一何好、猶懸相―」【攜抱】ケイホウ　手をひき又ふところにいだく。南史、袁昂傳「乳媪―匿二於臥牀山一」【攜扶】ケイフ　たづさへたすける。眞德秀詩「願官視二同社一若レ力相―」

【攜】ケイ　携・擕は俗字　○たづさふ、手に持つ「―杖」○ひっさぐ（提）○ひきゆく（乖行）つれる、つらなる（連）○はなる、はなす（離）又、其の物。左、僖七「招―以二禮一」【攜幼】ケイヨウ　幼兒の手をひく。陶潛、歸去來辭「―レ―入レ室」

【攜玩】ケイグワン　手にとりてもてあそぶ。韓愈詩「何人可二―一」【攜貳】ケイジ　そむきはなれる、攜は離れ之、貳は疑ふ。左傳、我德則睦、否則―」

十八畫

【攫】セン　鹽　鹹　○ぬぐふ（拭）○―はしなやか、女子の手の好き貌。又、白き貌。‖擐擐。

【攀】ヘン　刪　通じて關に作る　○しきり。○さへぎる（遮）「遮―」

【攔】ラン　寒　○ぬく（挺）○そばだつ（竦）杜甫詩「―身思狡兔」

【攝】㊀セフ　葉　㊁デフ　業　通叅　㊀セツ　葉　○かかぐ（擐）衣の裳をひきあげる。論、鄉黨「―齊升レ堂」ひきもつ（引持）○ととのふ（整飭）をさむ。○たすける（佐）○やしなふ（養）「―生」○引く。顏氏文「磁石、―鐵、不」ー鴻毛」○をさむ（收斂）○とらふ（捕）○かはる（代）代理する「―位」左、隱元「不書二即位一也」○おふ（追）せまる（切迫）論、先進「―乎大國之間」○むすぶ（結）○かる（假）○かぬ（兼）兼務する。論、里仁「官事不―」○すぶ（總）○おそる（恐）㊁やすらか（謐）○しづか（靜）

【攝衣】セフイ　きものの裳のみだれたるをととのへる。史、高祖紀「沛公起―謝二賓客一」【攝位】セフヰ　かりに君位を攝持す。左、隱元「不レ書二即位一攝也」史記「今二於百姓一―レ行レ政」【攝藥】セフヤク　ちぢまる。楚辭「衣―以儲與兮」【攝行】セフカウ　かりに政をおこなふ。史記「代二成王一―二一政事一」【攝官】セフクワン　官を兼務する。左、成二「敢告不敏、―レ―承レ乏」【攝政】セフセイ　國攝政と關白と。【攝家】セフケ　國攝政關白に補せらるる家格ある家柄。九條・二條・一條・鷹司・近衛を五―といふ。【攝心】セフシン　心ををさめて散らさず。遺敎經「常當二―レ―在レ心」【攝取】セフシュ　○からだのやしなひにとり入れる。○佛をさめ取る、佛の衆生に對するすぐれしはたらき「大無量壽經」【攝承】セフショウ　兼務にて乏をうく。前庭堅文「輒以二他吏一―一」‖攝官。【攝生】セフセイ　からだをやしなふ。老子「善レ―レ者」‖養生。【攝政】セフセイ　○天子に代りて政を行ふ。又、其の人。史、五帝紀「疑得レ舉、用レ事二十年、而堯遂使レ―」歐陽修文「所レ謂―レ者、臣行二君事一之名也」○國古、天子をたすけて政を行ひし大臣。‖攝錄。【攝錄】セフロク　ふるひおそれる、恐れて志氣を失ふ。漢書、霍去病傳「輔重人衆、―レ者弗レ取」【攝祚】セフソ　かりに帝位にある義。揚雄、籌「周公―レ、白雉是獻」‖攝位。【攝息】セフソク　いきををさめて心を靜かにする。易林「靜氣―一」【攝津職】セフシンシキ　國つのつかさ、難波の離宮を管し、且つ攝津の國を治むる職「大寶令」【攝提格】セフテイカク　寅の歲の異稱。爾雅「太歲在レ寅曰―一」【攝政】セフセイ　朝官にして他の職を兼ねる。隋書、長孫熾傳「尋以二本官一―二東宮一」【攝養】セフヤウ　からだをやしなふ。庾信詩「小人乖二―一、岐路阻二逢迎一」【攝理】セフリ　他人にかはりて事ををさめ處置する。左傳「士服景伯如レ楚、

叔魚ー一」
【摠錄】ソウロク　圖籙は符、天子に代りて符を取る義。摠政の異稱。
【摠受折伏】ソウジュシャクブク　摠受は苦修練行して、其の心を修攝する義。折伏は願速二緣に對して、たとひ杖木の難にあふとも、佛法の義を說きかする義。
【摠然】ゾウゼン　やすらかなる（靜謐）貌。漢書、敍傳「天ー一、人安二其生一」

十九畫

【攫】クン　㊐　㊎
とる、ひろふ「ー遮」＝攫捕。

【攢】㊀サン　㊁サン　㊐　㊎　攢は俗字
㊀あつまる（聚）○むらがる（簇）○おほふ、葬らずして其の柩を掩ふ。宋史、哲宗孟皇后傳「遺命擇地ー殯」○えらぶ（擇）㊁をる（折）
同訓異義　攢・聚・集・簇・輯・萃等の別は聚（耳部八畫）の條を見よ。
【攢起】サンキ　あつまりたつ。夏侯湛文「長笹ー一、柔條列布」
【攢宮】サンキュウ　天子の殯く殯する所の稱。宋史、高宗紀「以二孟忠厚一充二ー一按護使一」
【攢攢】サンサン　あつまれる貌。漢唱喑歌「樓下何ー一、榮華各有レ時」
【攢聚】サンシュウ　むらがりあつまる。李適詩「石林上ー一、金澗下明滅」
【攢簇】サンソウ　あつまる。江淹、拂槐賦「ー一石徑二森茂山道一」
【攢眉】サンビ　眉を蹙めて舒べず、憂ある狀。楚辭「ー一向レ月兮擥二雅琴一」
【攢米】サンベイ　あつまりかさなれるみね。騷賓王詩「ー一街二宿霧一」＝攢峰。
【攢絲】サンシ　ほこさきをあつめる。顏延之文「ー一成レ林、按レ鉸爲レ圖」
【攢立】サンリツ　むらがりたつ。史、司馬相如傳「ー一叢倚」

【攤】㊀タン　㊁ダン　㊐　㊎
㊀ひらく（開）「ー書」○ゆるむ、ゆるし（緩）○ちらす（散）「ー錢」㊁おさへる（按）
【攤戲】タンギ　攤錢に同じ。唐史「見二後閣小兒ー一」
【攤書】タンショ　書物をひらく。世說「王戎滿牀ー一」
【攤錢】タンセン　ぜにうちのあそび（博戲）杜甫詩「白壹ー一高浪中」＝攤賭・攤戲・攤蒲。
【攤飯】タンパン　飯後のひるね（晝睡）詩人玉屑「東坡謂二晨飲一爲二澆書一、李黃門謂二午睡一爲二ー一一」

【攀】ヒ　㊐　㊎　支
バ

○やぶれる（弊）○鐘のしゅもくのあたるところ（鐘受擊處）
【攦】レイ　㊀リ　㊁シ　㊐　㊎　紙　㊎　紙
○をる、くじく（折）○さく（撕）

【攣】㊀レン　㊁レン　㊐　㊎　銑　先
㊀かかる、つながる（係）相牽繫して絕えず。○ひく、ひきつながる（牽繫）○きびし（急）㊁かがまる（拘牽）○ひきつる「痙ー」手足のかがまる病。史、蔡澤傳「蹙齃腸ー」○こふ、したふ「拳ー」戀に通ず。
【攣病】レンビョウ　手足のまがりて、のびざる病。柳宗元、捕蛇者說「可下以已二大風ー一瘣癘上去二死肌一殺中三蟲上」
【攣拘】レンコウ　つなぎしばられる。束縛せられる。後漢書、曹褒傳「帝知二褒累ー一ニ載愈詩「ー一屈二吾眞一」＝拘攣・拘束。
【攣子】レンシ　ふたご。戰國策「夫ー一之相似者、惟其母知レ之而已」
【攣如】レンジョ　引きつながりて絕えず、如は助字。易、中孚、九五、有レ孚、ー一无レ咎」
【攣踠】レンエン　手足まがりて伸びず、ねざり。陸游詩「ー一豈不レ苦、寄語在二四支一」
【攣攣】レンレン　こひしたふ貌。漢書、李夫人傳「上所二以ー一顧一念我一者、乃以二平生容貌一也」＝綣綣・戀戀。

二十畫

【攬】カン　㊐　巧　㊎　感
ケン　㊎　豏
○みだす、みだる（亂、撓）「亂ー」詩、小雅「祇ー我心」○かきまはす「ー拌」
【攬撓】カンカク　かきみだす。元稹詩「攀動皆ー一、化作二流津一」＝攪亂。
【攪攪】カクカク　いりみだれる貌。韓愈詩「ー一爭附託、無二人角一雌雄」
【攪亂】カクラン　かきみだす。郝經詩「ー一羈思一爲レ脹」＝亂攪。
【攪拌】カクハン　かきまぜる。

【攫】㊀クワク　㊁ワク　㊐　㊎　陌　㊎　藥
㊀うちとる（撲取）總、攝行「驚蟲ー一搏」○つかむ「拳ー」爪又は指先にて掘り取る。㊁とる（取）
【攫捉】クワクソク　琴の絃をつかみひく。雅南子「ー一擾拂」
【攫者】クワクシャ　掏摸に同じ。
【攫金】クワクキン　金をつかみかすめる。列、說符「因攫二其金一而去」

【攫說】クワイ　かんざしをつかむ。宋史「有二猶卒一、白晝攫二婦人金釵於市一」
【攫撮】クワツサツ　つかむ。木彬文「探搦―、日不レ暫レ手」
【攫攫】クワクワク　らってまくりする。蘇軾文「雖レ余亦得レ―二其佐一也」
【攫噬】クワイ　つかみくらふ。王粲詩「譬如二虎豹一羣―一」
【攫鳥】クワウ　他の動物をつかみ殺すたけき鳥。道徳指歸論「被レ道含レ德、與二天地一同、則蜂蠆虫蛇、無レ心レ施二其螫毒一、―狐獸、無レ意レ加二其攫搏一」＝猛鳥。
【攫肉】クワク　にくをつかむ。魏古詩「豺狼―レ髑髏鳴」
【攫搏】クワク　つかみうつ。禮、儒行「鷙―一、終二其腳取レ之、謂二之攫一、以レ爪擊レ之謂二之搏一」

【攫】タク　㊥
○ともがら、黨に通ず。○うつ（擊）捕にて打つ。

廿一畫

【攬】ラン　㊥　㊦
㊀ラ　㊁レイ
㊀はだか、毛羽なし。㊁わかる、わかつ（分判）

【攬】ラン　毛羽のなき貌。荀、賦論「―兮其狀靡化如レ神」

【攬】ラン　㊥　㊦　㊦　擥に通ず
○とる、手に持つ「收―」六韜「主將之法在レ於レ―二英雄之心一」○すべくくる「總―」
同訓異字　攬・取・束・把・操・探等の別は取（又部六畫）の條を見よ。
【攬秀】ラン　勝れたる景色をつらねおさめる。丁復詩「―レ目題顯」＝攬勝。
【攬勝】ランシン　たづなをとる。後漢書、范滂傳「登レ車―レ轡、慨然有二澄清天下一之志一」＝執轡。
【攬轡】ランヒツ　ふでをとる。＝揮筆、執筆。

支部

【支】シ　㊥　㊦

○ささふ（柱）ささへたもつ。左、定元「天之所レ―、不可レ墳也」ささへ。○もつ（持）もちこたへる。○ふせぐ（拒）○わかつ、わかれる、わかれ（分）○はかる、かぞへる、かんぢゃう（計算）「度―」○えだ、草木の枝。詩、衛風「芄蘭之―」＝枝。○えだ（庶）妾腹の子。○本家よりわかれしちすぢ、分家。詩、大雅「本―百世」○わりふ（券）○てあし「四―」肢に通用す。○てあて（給與）わかち與へる「―給」○はらふ、仕拂ふ「―出」○えと「干―」十二―は十干に配する、子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の十二辰の稱。○支那の略語「日―兩國」○燕―は一に焉支に作る。又、臙脂に通用す、紅色を取る草の名。古今注「燕―西方土人以染レ紅」○國、さはり「差―」
【支移】シイ　わかちうつす。宋史、食貨志「移レ此輸レ彼、移レ近輸レ遠、謂二之―一」
【支頤】シヰ　ほほづゑをつく。白居易詩「薄晩―レ坐」
【支葉碩茂】シエフセキモ　枝も葉も、大きく茂る、碩は大。本家も分家も榮える喩。漢書敘傳「侯王之祀祚、及宗子公族蕃遊、――」
【支配】シハイ　㊥仕拂。
【支解】シカイ　其の四支即ち兩手兩足を解く、古の酷刑。漢書「―二人民一」
【支抗】シカウ　ささへふせぐ。晉書「攻無二堅城一、戰無二支抗一」
【支給】シキフ　ねぎらひの金品を分ち與ふ。宋史、禹先傳「―二軍民一」
【支干】シカン　えと。十二支と十干と。互に相配して年月日時方位等に當てる。史、歷書、索隱、甲子是陽氣、―之首」
【支給】シキフ　わりあててはかりあたへる。明律「收受―二官物一」
【支計】シケイ　かんぢゃう、けいさん。晉書、安平王孚傳「置二度支仙曹一、專掌二軍國一一」＝會計。
【支撐】シタウ　妾腹の子。史、呂后紀贊「大臣疏離、――葵夷」＝庶孽、支子・支庶。
【支券】シケン　支は兩分せし一片。てがた。＝左券。
【支音】シヰン　ささふ。ささからふ。朱熹文「不レ可二一一一」＝枝梧に同じ、枝は斜杜。史、項羽紀「諸將偏裨、莫二敢枝梧一」
【支子】シシ　○妾腹の子。曲禮「―不レ祭、祭必告二於宗子一」＝庶子・孽子・支庶。○本妻腹の長子外の子。
【支障】シシヤウ　さしさはり、さしつかへ。＝放障。
【支出】シシユツ　○金錢のしはらひ（支拂）○妾腹の子。
【支庶】シシヨ　妾腹の子。漢書「封二宋肉庶子二人一爲二列侯一、故賀曰二慶流二十一一」＝支子・支孽。
【支節】シセツ　骨節に同じ。羅隱、碌鬼論「混沌氏以二一一爲二山嶽一、以二腸胃一爲二江河一」
【支川】シセン　えだながれ、本流よりわか

れたる水。莊子「九州名川三百、一一三千、小者無數」‖支流。

【支線】シセン 汽車などのわかれの線路。えだみち。本線・幹線の對。

【支族】シゾク 次條に同じ。

【支屬】シゾク わかれのつづきあひ。分家の一族。漢書、辛慶忌傳「宗族一一五三千石二者、十餘人」

【支給】シキフ 本俸より分れし軍隊。‖分隊。

【支度】シタク ○はかる。北周書、王悅傳「一一路程」國○あらかじめ物事の用意する。‖準備。○身じたくする。○食事する。

【支持】シヂ ささへもつ。杜甫詩「形容真漸倒、答效莫一一」

【支吾】シゴ わかれのちすぢ。唐書、賈敦頤傳「自レ魏乾ノ唐、一一扶疏」

【支廳】シチヤウ わかれの役所。‖支部・出張所。

【支柱】シチウ ささへばしら。つっかひぼう。‖枝柱。

【支店】シテン 國こみせ。本店の對。‖分店。

【支途】シト 金錢のつかひみち、支出のみち。‖費途。

【支部】シブ から、もろこし、漢土、唐土、事の筋書の音訓(慈恩傳)‖震旦。

【支派】シハ ○えだ川、本流より分れし小川。‖支流・支川。○本部のわかれ。北齊書「是以具書二其一一」‖支部。

【支配】シハイ 事をそれぞれ手配して處置する。北史、崔亮傳「文襄別、事出二倉卒一、文武部二分將校一、令レ二處四方一、夜中召レ亮一一、逍次便了、帝甚異レ之」

【支配人】シハイニン 會社商店等の事務をすべくくりて支配する人。

【支拂命令】シハライメイレイ 債權者が債務者に債務の辨濟を要求する爲め區裁判所に申請せし時、裁判所が債務者に對して發する命令、此命令を受けて支拂はず、又抗辯せざる時は强制執行せらる。

【支部】シブ 本部より分れしもの。‖支派。

【支分】シブン 細かに分ちて取る。戰國策「一一方城青腴之地、以薄レ鄰」

【支分節解】シブンセツカイ 書物を解釋するに支體を分ち、關節を解く如く、詳悉なる義。宋孫、大慧尊句序「此書之旨、——、脈絡貫通、詳略相因、巨細畢擧」

【支別】シベツ わかれ。後漢書「其先魏之一一、食二采馮城一、因以氏焉」

【支辨】シベン 金錢を仕拂ふ、勘定をすます。

【支派】シハ 山などのわかれ出でたるもの。

【支用】シヨウ わりあてて用ふる。宋史、職官志「錢物庫掌下受二內外錢輸之物一、以備中一一上

【支撥】シハツ ○分れ散りて全からず「一一滅裂」王延壽賦「一一分赴」○かたは、不具者。莊、人間世「一一其形者、器足下以養二其身一終中其天年上」

【支離滅裂】シリメツレツ ちりぢりばらばら。めちゃめちゃ。晉書王時「生遭一一滅裂、紀綱幾徘徊」前條參看。

【支流】シリウ ○本流より分れながれる川。唐書、閻鑒傳「一一三百六十」‖支川・枝流。○本家より分れ出でたる別家。

【支路】シロ えだみち、わきみち。幹路の對。‖岐路・旁徑。

六畫

【枝】シ 國 俗字

○なっとう。○しほまめ。五味を調するに用ふ、みその類。史、貨殖傳「一一千合」

八畫

【攲】キ 支

○かたむく(傾)「斜一」「傾一」○そばだつ。○たひらかならず。○もちさる(持去)

【攲架】キカ 机の上の板の斜になりたるもの、見臺等の類。三才圖會、雜法「盲切韻曰、書公作二一一凭レ几者、今攲架即其制也」‖杖案。

【攲攲】キキ 物のそばだつ貌。矢鏃、江行「一一側側海門帆、亂亂蘆蒲岸艇檣」

【攲器】キキ 金屬にて作る容器、水を八分目程入れるやうに作る。滿つればくつがへる、以て中庸の訓戒とす。家語、三恕「孔子觀二於周廟一、有二一一一焉、使子路取レ水試レ之、滿則覆、中則正、盡則傾」荀、宥坐、註「一一傾侍器之器」

攴部 (攵)

【攴】ホク 國 或は朴・樸に作る

○うつ すこしくうつ(小擊)○國しぶん。攴と攵との中間の字形なるが故。

【攵】攴(前條)に同じ、文とは別。

二畫

【收】(一)シウ (二)シウ 尤

(一)をさむ、をさまる、とり入れる。作物を取り入れる「田一一千字文「秋一冬藏」○とる(取)あつめ取る「一一斂」○とらふ、とらへる(捕)罪人を捕へる。○やむ、とどむ(息)○事の結末「一一上」「一場」○あつむ、あ

つまる(聚)ととのへる(整齊)禮、樂記「夏楚二物、ー『其威』也」夏楚は學生を訓する鞭。○車の後の横木(軾)○夏の時の冠。髮をー斂する所以。○をさまりたる財物。㊁かりいれおほし(穫多)禮、月令「農事備ー」

【收拾】シフシフ　とらへて其の罪を吟味する。漢書、趙廣漢傳「ー致レ法」

【收繩】シフジヤウ　釣糸などをひきあげる。周易集解「貝二繳繩一ー之一也」

【收斂】シフレン　をさめうつめる、をさめ葬る。北史、東魏帝紀「ニニー餓骨一」＝收葬。

【收益】シフエキ　○利益ををさめる。とり入れる利益。○法律にて物より生ずる天然又は法定の果實を收めとるにいふ。

【收穫】シフクワク　えびをとる。劉基詩「守卒ー一層後池」

【收藥】シフヤク　わらをとりいれる。史、蕭相國世家「毋ー一爲二衆獄食一」

【收監】シフカン　とらへて牢にいれる。獄につなぐ。＝下獄。投獄。入監。

【收穫】シフクワク　穀物をとり入れる。穀物のとり入れ。書經「一一有二多少一」

【收容】シフヨウ　罪人を保管する。明律「凡婦人犯レ罪、除二犯奸及死罪收禁一外、其餘雜犯責付二本夫一ー一」

【收擊】シフゲキ　捕へて獄につなぐ。漢書、王章傳「下二廷尉獄一妻子皆ー一」＝拘禁。

【收斂】シフレン　とりあげてをしへる。周禮「任レ之以レ事、而ー一レ之」

【收檢】シフケン　とりまとめる。後漢書、張衡傳「ー一遺著一舉レ力補綴」

【收採】シフサイ　をさめ取る、又とりあげ用ひる。北史、梁彥光傳「不レ謂天恩復垂ニー一一」＝採收。

【收債】シフサイ　貸金をとりたてる。史、孟嘗君傳「馮公無二他伎能一、宜可レ令ー一レ」

【收藏】シフザウ　とりをさめてのせる。史記「滕公常下ー一レ之」

【收斂】シフレン　をさめはうむる。魏志「袁譚死、王粲諡二太祖一、乞ニー一云、受二袁氏恩一、得ニー一就レ戮無レ悔」

【收藏】シフザウ　をさめたくはへる。文子「ー一蓄積、而不レ加レ富」

【收藏家】シフザウカ　書畫古物書籍などを愛して集め藏める人。

【收支】シフシ　金穀などの收入と支出と。宋史、食貨志「其五曰ニー一」＝出納。

【收事】シフジ　賦稅と使役と。漢書、宣帝紀「毋ニー一聽二四年一」

【收囚】シフシウ　とり上げて朝官に列せられる。歐陽修文「蹊蹶二甄擢一、遂見ニー一」

【收拾】シフシフ　ひろひをさめる。散りたる者を一處にあつめる。歐陽修詩「殘章與二斷藁一、草草各ー一」

【收集】シフシフ　をさめあつめる。後漢書、班固傳「總二攬賢才一ニニー明智一」

【收耕】シフカウ　とりあつめる。朱熹文「收ニー一遺文一、藏二之家廟一」＝收集。

【收受】シフジユ　うけいれる、うけ取る。＝收納。

【收熟】シフジユク　とり入れてよきやう、十分にみのる。陳子昂文「白露時降、百穀ー一」

【收縮】シフシユク　ちぢまる。ちぢめる。詩經、傳「霜降而ー一萬物」

【收恤】シフジユツ　貧人をおさめめぐむ。史、文帝紀「賞二賜長老一ニニー孤獨一」

【收族】シフゾク　族を取りをさめる。齊楠、七啓「ー一レ弛レ施」＝收族。

【收稅】シフゼイ　稅をとりいれる。唐書「定二天下酤戶一、以レ月ー一レ」＝徵稅。征稅。

【收生婆】シフセイバ　とりあげばば、產婆をいふ(五雜俎)婦一に媪又婆に作る。＝穩婆。

【收拾】シフシフ　とりあげひろふ。申鑒、運至漢興、ニニー散滯一」＝收拾。

【收攬】シフラン　をさめてほしいままにしめ有する。魏書、李崇傳「世習爲二相州刺史一、亦無二清白狀一、鄴洛市廛ー一ー其利一、爲二時論所一鄙」

【收族】シフゾク　家族をまとめて世話する。禮記「效レ宗收ー一レ」

【收葉】シフエフ　もみをとりいれる。唐書「歲ー一レ二十萬石」

【收穫】シフクワク　とりえらぶ。歐陽修文「往往棄レ見ニー一」

【收取】シフシユ　圖受取證。＝收受。

【收得】シフトク　穀類などをとりいれる。

【收納】シフナフ　とりいれをさめる。

【收入】シフニフ　金穀などををさめいれる。又とりいれ。詩經、魏「年豐ー一穰レ前也」

【收旆】シフハイ　はたを取りをさめる。王逸詩「樂師ー一レ亦四還」＝收旆。

【收縛】シフバク　とらへしばる。三輔黃圖「ー一考問」

【收綸】シフリン　つりいとををさめる、釣をやめる。杜甫詩「釣艇ー一レ歸、沙禽接レ翅飛」＝收綸。

【收米】シフマイ　とりいれし米。張耒詩「淮頻耕田信ニー一」

【收沒】シフボツ　財產又は或物件を官にとりあげる。唐史「復加ニー一ー」＝沒收。

【收養】シフヤウ　ひきとりてそだてる。後漢書、任隗傳「賑二恤宗族一、ニニー孤寡一」

【收用】シフヨウ　とりあげてもちふる。「土地ー一法」

【收容】シフヨウ　とりいれる、ひきとる。

【收攬】シフラン　とりあげてたもつ。をさめとる。攬は持つ。晉書、周嵩傳「ニニー英奇、遂纘二漢業一」

【收繫】シフケイ　ともづなをひきあげ

て出帆する。鮑照詩「―レ―辭二帝鄉一」
【收綸】シウリンつりいとをおさむ、釣をやめる。陰鏗詩「林寒正下レ葉、釣晩欲レ―レ―」＝收繩。
【收掠】シウリャクをさめかすめる。晉書、石勒載記「分遣二諸將一―二―野穀一」
【收斂】シウレン　○穀物果實などをとりいれる。陸游詩「霜晴――少レ在レ家」＝收穫。○租稅をとりたてる。禮記「命二百官一始――」○ひきしめる。
【收斂藥】シウレンヤク下痢を止むるくすり。
【收殮】シウレンとりおさめ、死人のとりおさめをする。
【收拾】シウシフまひなひを取る、賄賂ワイロをもらふ「――罪」

【攷】

考（老部）の古字。

【改】

三畫　革

イ　紙　改とは別

殺―は大剛卯、以て鬼魅を逐ふ。

【攸】

㊀イウ　㊁イウ　有　尤

㊀ところ（所）大雅「爲韓姞二相レ其―一」又、助語として用ふる。書、洪範「彝倫―レ斁」○―は遠き貌。○水を行く。○―然はゆ〻たりとして自得する貌。悠に通ず。㊁かかりて危き（險危）貌。
【攸攸】イウイウ遠き貌。漢書、敘傳「――外宅」＝悠悠。
【攸好】イウカウかかりてあやふき貌。左、昭十三「漸乎―レ―」
【攸然】イウゼンはやく水中を行く貌。又、ゆったりと自得する貌。孟、萬章「始舍レ之圉圉焉、少則洋洋焉、―レ―而逝」＝悠然。

【改】

カイ　海　改に作るは非

○あらたむ「―過」「悛レ―」易、益卦「有レ過則レ―」○あらたまる。「一歲」○かふ。かはる（更）「修レ―」「刪レ―」「變レ―」
【改正】已に過あれば之を久ッちて改むる曾意。
【改革】改・革・更・悛○改は下地あるものを除きて、新にするなり、改歲・改過などの如し。○革はさとりと速に變へること。易經「湯武革レ命、應レ天而順レ人」○更は改と略ゝ同じ、更代・更衣などの如し。○悛は我が過惡を止め改むるに用ふ。梁武紀「鴨以二禍福一、如其不レ悛、以レ順討レ逆」
【改異】カイイ特別なる者としてもてなす。後漢書「特加二―一」
【改易】カイエキ○あらたまりかはる、あらためかへる。漢書、何武傳「―二―大臣一」＝改變・改革。○國體川時代に士分に科せし刑罰。其の家祿を沒收し士籍を除く。
【改嫁】カイカ改醮に同じ。後漢書、列女傳「呼レ―柴欲レ―二之一」
【改葬】カイサウ名をあらためる。春秋、注「荊始―レ―曰レ楚」
【改革】カイカクあらためかへる。又、あらたまる、革は易。＝改易。
【改刊】カイカンけづりただす。曹植詩「古人篇二鳥跡一、文字無二―一」
【改善】カイゼンふるきしきたりをあらためる。周書「稽二諸典故一、創二新一レ―、方始備焉」
【改化】カイクワ改めてよき教に從ふ。史、始皇紀「黔首一レ―、遵二遷同一レ度」
【改レ科】カイクワ法律の條目を改む。晉書、刑法志「改二投書要市之科一」
【改過】カイクワあやまちをあらためる。書、仲虺之誥「一レ―不レ吝」
【改悔】カイクワくやみあらためる。論衡「蹴然起坐、心覺二―一」
【改換】カイクワンかへる。かはる。魏收文「一二―朝章一」＝易換・更換。
【改觀】カイクワンみえをあらためる、今までとはみかへる。北夢瑣言「朱温盛禮郊迎、人士一レ―」
【改元】カイゲン元年、又、年號を改めるっ中說「一レ―立レ號非レ古也」
【改弦】カイゲン琴の調子を改める。法度を變へるに喩ふ。董仲舒文「賢レ之孝不レ謂甚者、必解而更二張之一、乃可レ改也」に本づく。宋書、樂志「琴瑟殊レ―、一レ―當二更張一」
【改弦易轍】カイゲンエキテツ前條に同じ。易轍は車の路をかへる。晉書「愛二易轍之動一、而得二指車之軌一」＝改絃易轍。
【改悟】カイゴ過をきとりてあらためる。＝改悛。
【改寤】カイゴ前條に同じ、寤は悟（淮書、五行志）
【改機】カイキあらためかまへる。陳書「一二亭字一、修二山池卉木一」
【改選】カイセン改年に同じ。
【改造】カイザうあらためつくる。宋史、律歷志「請レ―二一新曆一」＝改作。
【改裝】カイサウよそほひをあらためる。後漢書、禰衡傳「鼓史何不レ―レ―、而輕二敝衣一乎」
【改葬】カイサウあらためてはうむる。左、隱元「―二―惠公一」
【改作】カイサクあらためつくる、つくりかへる。事進「何必―レ―」
【改札】カイサツ切符をしらべる義、ふだをあらためる二―一掛」
【改竄】カイザン文章の字句をあらためる、竄は易。晉書、阮籍傳「無レ所二―一、辭甚清壯」
【改修】カイシウあらためなほす。晉書、高陽王睦傳「退靜思レ愆、―二其德一」
【改心】カイシンこころをあらためる、心を入れかへる。＝改過。
【改遷】カイセンあらためすゝむ、善き方に

改め進行する「ー行篇」
【改鋳】カイチュウ　あらためている。後漢書「宜ー二ー大錢」
【改宗】カイシュウ　しゅうしがへ。今まで信仰せし宗旨をかへて他の宗教に入る。
【改稱】カイショウ　となへをかへる。
【改色】カイショク　いろを變へる。李德林詩「歲寒無ー二ー、年長有二剛枝一」
【改正】カイセイ　あらためただす。漢書、谷永傳「無レ所ニー二ー」＝更正。
【改醮】カイセウ　二度のよめいり。醮はしうげんの杯。晉書「李密父早亡、母何氏ー二ー」＝再嫁・再醮。
【改悛】カイシュン　過ちをくいあらためる。＝改悟・改悔。
【改悟】カイゴ　あらためてえらぶ。舊唐書「故復請ー二ー貢舉一」
【改俗】カイゾク　惡しき習俗をあらためる。東觀漢記「鄧訓拜二張掖太守一、以レ身率レ下、河西ー二ー」
【改題】カイダイ　だいもくをかへる、題號を改める。
【改道】カイダウ　これまで行ふ所の道をあらためる。白虎通「王者有ニー二ー之文一」
【改置】カイチ　あらためおく。周書「ー二ー宿衛官員一」
【改築】カイチク　家などを建てなほす。
【改轍】カイテツ　車の通る路を改めかへる、以前の仕方を改めるに喩ふ。晉問、六代論「觀二前車傾覆一而不レ改二其轍一也」＝易轍。
【改部】カイブ　みやこをうつしかへる。左傳、疏「文王ー二ー于鄷一」＝遷都。
【改圖】カイトクワム　計畫を變ずる。左傳「鄙不レ足三以孚二誅一、請其ー一」＝變計。
【改年】カイネン　あらたまりたる年。太平廣記「ー一多感、故想同レ之」＝新年・改歲。
【改廢】カイハイ　あらためると、やめると、改正と廢止と。
【改定】カイテイ　あらためて葬むる。南史、許亨傳「凡七柩皆ー一焉」＝改葬。
【改名】カイメイ　なまへをかへる、姓名を改める。
【改命】カイメイ　〇これまでの行ひし事をあらためる。左傳「ー一吉」〇名をかへる。左傳「ー一曰レ生」＝改名。
【改型】カイケイ　約束をかへる。左傳「晉人許ニー一、弗レ許」
【改容】カイヨウ　容貌を動かして敬ふ。漢書「今自王侯三公之貴、皆天子之所ニー一而畏レ之也」
【改良】カイリヤウ　よき方へあらためる、あらためて善くする。＝改善。
【改勵】カイレイ　志をあらためてはげむ。晉書、周處傳「慨然有ニー一之志一」
【改曆】カイレキ　〇こよみをあらためる。史、封禪書「漢ー一、以二正月一爲二歲首一」〇こよみがあらたまる。＝新年。

【攵】コウ　東

○せむ。○兵力にてせめうつ(伐・擊)「火ー」「夾ー」「環ー」「遠交近ー」○おかす(侵)人の過失をせめる。三國志「勤ー吾闕則事可」定」○をさむ(治)主として其の事を修める「專ー」○かたし(堅)詩、小雅「我車既ー一」○よし(善)○つくる(作)○ならふ(習)○とぐ、みがく(研)詩、小雅「他山之石、可レ以ー一レ玉」

同訓異義　攻・責・譴・讁・數○攻は城をせめるなり、轉じて人の過失をとがめ、又病をせむる等にも用ふ。○責は其の罪を責め正すなり。漢書「痛自剋責」○譴は責に同じ、譴責と連用す。○讁は譴責以レ辭、譴二之讁一と註す、何故かくしたぞと問ひ糺すなり。○數は罪過を一一數へ立ててせめるなり。

【攻擊】コウゲキ　せめかこむ。晉君彥文「四面ー一、千里援絕」
【攻脚】コウキヤク　病を攻めて火にて患部をあたためる。轉じて治療の義。柳宗元文「日思三砭針ー一ニ」
【攻陷】コウカン　せめておとしいれる「晉書、文帝紀」
【攻究】コウキウ　事理をきはめきはめる＝討究。
【攻處】コウキヨ　敵の備へなき處をせめる。管子「擇レ實而ー一」＝擊處。
【攻玉】コウギヨク　たまをみがきをきめる。詩、小雅、鶴鳴「他山之石、可二以ー一レ」
【攻苦食レ啖】コウクシヨクタン　苦境に遇ひて粗末のものを食ふ、啖は淡。史、叔孫通傳「呂后與二陛下一、——」
【攻獲】コウクワク　敵國をせめて物をかすめとる。戰國策「臣恐下其ー一之利、不下如二所レ失之豐一也」
【攻堅】コウケン　○兵力にてせめる。＝攻伐。韓非、喩老「天下無レ道、ー一不レ休」○言論にてせめうつ。
【攻研】コウケン　みがきはめる。王建詩「詩禮不二外學一、兄弟相ー一」
【攻堅】コウケン　強き敵をせめる。魏志、賈詡傳、注「ー一易二於折一枯、摧レ銳甚二於湯一雪」
【攻蹂】コウジウ　せめてふみにじる。宋史、胡舜陟傳「擧ー一無二全城一」
【攻心】コウシン　智力を以て敵を服せしめる。蜀志「用レ兵之道、ー一爲レ上、攻レ城爲レ下」
【攻城野戰】コウセウヤセン　城をせめ野にてたたかふ。史、陳順傳「我爲二趙將一、有二——之大功一」
【攻守同盟】コウシユドウメイ　二國以上同盟して、其の中の一國が同盟以外の國と戰を開くときは、同盟せる國が之を

助けて攻め守る事を同じくする。
【攻彫】コウチョウ せめる方のいきほひ。守勢の對。
【攻戰】コウセン 攻め戰ふ。又、城を攻めると野に戰ふと、攻城野戰の略。
【攻討】コウトウ せめうつ。吳志、呂岱傳「一一年破之」＝攻伐。
【攻奪】コウダツ せめうばふ。朱熹詩「駒欲互一一、孤根孰能任」
【攻伐】コウバツ せめうつ。伐は罪ある者をうつ。國語「有二刑罰之辭一、有二一一之兵一」
【攻狀】コウジョウ 敵の城を攻め取る。
【攻剝】コウハク 人を攻めおびやかして物を奪ふ。史、酷吏傳「一一爲二羣盜一」
【攻疕】コウヒ いしばりにて病を治療する。宋史「若復加二一一一、必傷二元氣一矣」
【攻拾】コウシュウ ○せめうつ。＝攻伐。○治療に同じ。宋濂詩「盛暑濕熱時、良劑急一一」
【攻略】コウリャク 土地をせめとる。
【攻療】コウリョウ やまひを治めいやす。孔叢子、嘉言「獻二一一之方一」＝治療。

四畫

【政】㊀セイ・シャウ　㊁セイ・シャウ　支　敬

㊀まつりごと「仁一」「德一」「苛一」論、爲政「爲一」以德」○國家の法制禁令。同書「道」之以一」、齊」之以刑」○轉じて物事を整へをさめる方法「家一」「籠一」○ただす(正)詩文などの添削「乞一」「郢一」○まさに、助語、まさしくの義、正に通ず。㊁みつぎ(賦稅)＝征。

同訓異義 政・正・方・適・祇等は正(止部一畫)の條を見よ。

【政要】セイヨウ 行政の要領。後漢書、宦者傳「論得失、指中陳一一」
【政綱】セイコウ まつりごとのおほづな、政治の綱紀。
【政局】セイキョク 政治の局面、政海のなりゆき。
【政化】セイカ 政を施し民を敎化する。政治と敎化。○後漢書、伏湛傳「禮樂一一之本」
【政刑】セイケイ 政事と刑罰と。＝刑政。
【政績】セイセキ 政事ののり。李彭年文「一一有レ序、無治二人心一」＝政道。
【政敎】セイキョウ ○まつりごとと、をしへと。○史、申不害傳「內修一一」○政治と宗敎と。
【政見】セイケン 政事上の意見。
【政機】セイキ まつりごとを行ふ權力。＝政柄。
【政策】セイサク 政事上のはかりごと。＝政略・政術。
【政事】セイジ 政は大いなるまつりごと、事は小なるまつりごと。詩、邶風「一一一埤二益我一」
【政事堂】セイジダウ 政を議する所、今の內閣。文獻通考、職官考「開元中、張說奏、改二一一一爲二中書門下一」
【政社】セイシャ 政事上意見を同じくする者の組織せる團體。＝政黨。
【政術】セイジュツ まつりごとのてだて。後漢書、安帝紀「詔擧下明二一一一、達二古今一、能直言極諫者、各一人上」＝政策。
【政權】セイケン まつりごとの要。忠書「勤乘二一一一、傳逮二謀猷一」＝政要。
【政解】セイカイ 善き政を行ふといふほまれ。後漢書、杜根傳「位至二邑郡太守一、並有二一一一」
【政績】セイセキ まつりごとのいきを。南史、章叡傳「所レ在必有二一一一」
【政體】セイタイ まつりごとのたてまへた。國家が主權を行使する形式。晉書、劉頌傳「詳二斟刑名一、以二一一一」
【政道】セイダウ まつりごとを施すみち。後漢書、安帝紀「寬令二一一一」＝治道・政治。
【政黨】セイタウ 政治上、同じ意見の人が相集まりて組織する團體。＝政社。
【政黨內閣】セイタウナイカク 主義を同くする政黨員が組織する內閣。
【政談】セイダン 政事に關する談論。＝政論。
【政治】セイヂ ○まつりごと。＝政事。○まつりごとがよく行はれる。書經「道洽二一一一、澤二潤生民一」
【政治家】セイヂカ ○國家の政を施す人。○政治上の事にたづさはる人。
【政治學】セイヂガク 國家の起源・組織及性質其他政策等を研究する科學。
【政廳】セイチャウ 政を取扱ふ役所。主に屬國又は海外の領地にあるものの稱。
【政條】セイデウ 政令法律の類。元史、馬惟中傳「宜二頒二一一一

「朝章宴閒」ー＝疎闊」＝法紀。
【政務】セイム まつりごとのつとめ。後漢書、仲長統傳「寤ノ此以爲ニー一」
【政略】セイリャク ○政事上のはかりごと。＝政策。○國盧くかけひきの意。
【政令】セイレイ まつりごとのおきて。憲法・法律規則など。又、政府の命令。
【政論】セイロン 時の政事の是非得失につきての議論。＝政談。
【政如二蒲盧一】セイジョノゴトシ 蒲盧に葉ノ盧は蘆に通ず、生長極めて速かなれば、政の擧がること速かなるに喩ふ。一說に、蒲盧は細腰蜂をいふと。中庸「夫政也者、蒲盧也」
【政如二登衛一】セイジョノゴトシ まつりごとの和似たるにいふ。魯の祖周公、衛の祖康叔は兄弟なりしによる。論、子路「魯衛之政、兄弟也」漢書、馮奉世傳「兄弟繼踵相因、聰明賢智更ニ東民一」ー＝」
【政所】ドコロ 國 ○昔公家などの邸にありて財政及雜事を掌りし所。○檢非違使廳の役所。

【放】

㊀ハウ ㊁ハウ 㕛

㊀はなつ、はなちやる、ゆるしてにがす。にげる(逸)。孟、壺心「如ニ追ニ豚一」○おふ(逐)。島ながしにする、流罪に行ふ「流ニ一書、舜典「ー＝驩兜于崇山」○はなたれる。屈原、漁父辭「屈原既ニー、游ニ於江潭一」○ほしいまま(肆)「ー肆」○しまりなし「意ー」「任ー」○ちらす(散)○發する「ー光」○のべる(展)「ー大」○さる(去)○おく(置)○すつ(捨棄)○すたる(廢)○ゆるす(縱)○外に出る「ー洋」㊁よる(依)論、里仁「ー乎利而行」○まなぶ(學)ならふ＝倣。○くらぶ(比)○いたる(至)孟、離婁「ー乎四海」○いたす(至)

同訓異字 放・縱・橫・肆・恣・擅の別は縱(糸部十一畫)の條を見よ。

【放伐】ホウバツ ほしいまま、伐は逆。正法念經「此ニー過、一切過中最爲ニ勝上一」＝放逸。
【放逸】ホウイツ ○きまま。後漢書、仲長統傳「豪ニー一而赴ニ束縛一」＝放伐、放縱。放逸。○佛國大頌僧地法の一として、二十隨煩惱の一に數ふ。正法念經「此ニー過、一切過中、最爲ニ勝上一」逸一本快に作る。
【放恣】ホウシ ほしいままにして法度にはづれる。魏志、高堂隆傳「綱紀不レ制、則ニー無レ極」＝放逸・放肆。
【放遠】ホウエン はなちとほざける。王珪文「如ニ追ニ豚一」○おふ(逐)島ながしにする、流罪に行ふ「流ニ一書、舜典「ー＝驩兜于崇山」○はなたれる。屈原、漁父辭「屈原既ニー、游ニ於江潭一」○ほしいまま(肆)「ー肆」○しまりなし「意ー」「任ー」○ちらす(散)○發する「ー光」○のべる(展)「ー大」○さる(去)○おく(置)○すつ(捨棄)○すたる(廢)○ゆるす(縱)○外に出る「ー洋」㊁よる(依)論、里仁「ー乎利而行」○まなぶ(學)ならふ＝倣。○くらぶ(比)○いたる(至)孟、離婁「ー乎四海」○いたす(至)

同訓異字 放・縱・橫・肆・恣・擅の別は縱(糸部十一畫)の條を見よ。

【放伐】ホウバツ ほしいまま、伐は逆。正法念經「此ニー過、一切過中最爲ニ勝上一」＝放逸。
【放逸】ホウイツ ○きまま。後漢書、仲長統傳「豪ニー一而赴ニ束縛一」＝放伐、放縱。放逸。○佛國大頌僧地法の一として、二十隨煩惱の一に數ふ。正法念經「此ニー過、一切過中、最爲ニ勝上一」逸一本快に作る。
【放恣】ホウシ ほしいままにして法度にはづれる。魏志、高堂隆傳「綱紀不レ制、則ニー無レ極」＝放逸・放肆。
【放遠】ホウエン はなちとほざける。王珪文「開ニ救俊賢一ニー邪惡一」
【放翁】ホウオウ 宋の陸游の號。宋史、陸游傳「范成大帥レ蜀、游爲ニ參議官一、以ニ文字一交、不レ拘ニ禮法一、人譏ニ其類放一、因自號ニー一」
【放下】ホウカ ○すておく。＝放棄・放置。○手からはなち出す、投ずる。
【放衙】ホウガ 役所がひけて、官吏が散りて退く。蘇軾詩「擁レ傳ー一人寂寂、脫レ巾選ニ酒髮蓬蓬一」
【放歌】ホウカ 大聲にてうたふ。杜甫詩「白日ー須レ縱レ酒」＝高歌。
【放效】ホウカウ 人の行に見ならふ。漢書、貢禹傳「亦相ー一」＝倣效。
【放校】ホウカウ 學校から放逐せられる、退學を命ぜられる。
【放懷】ホウクワイ 高ぶりてほしいまま。洛陽伽藍記「性愛ニ栖靜一、丘園ー一」
【放學】ホウガク 學課終りて休みとなる。陸游詩「食看忠勤還ニ家假一、恰似ニ兒童ー一時一」＝放課。
【放街】ホウガイ くつわをはなつ。易林「ー一レ轡、奔馬不レ制」
【放樂】ホウガク ○ゆるしはなつ。春秋、疏「寬ニ其罪一而ー一之一也」＝放免。○なげやりにしてすてる。吳越春秋「大王ー一忠直之言一」＝放擲。
【放牛兒】ホウギュウジ 牛かひわらは。＝牧童。
【放吟】ホウギン 聲をはり上げて詩を吟ずる。＝高吟。
【放禽】ホウキン 鳥をはなつ。梁簡文帝文「解レ網ー一レ、穿レ泉掩レ穽」
【放殛】ホウキョク おひはらひの罪にする。又、其の刑。殛は誅實。書、舜典、疏「誅則ー一不レ赦」
【放勳】ホウクン 堯臣が帝堯を賛美する語、其の德業の四達する義。因りて堯の號と爲し、或は其の名とす(書、堯典)
【放火】ホウクワ ひをつける、つけび。島林「從レ風ー一、狄芝俱死」
【放課】ホウクワ 其の日の課業がをはる。＝放學。
【放曠】ホウクワウ ほしいままにして心ひろし。晉書、桓石秀傳「性ー一、常弋ニ釣林澤一」＝放逸。
【放言】ホウゲン ほしいままにいふ、ほしいままなることば。論、季子「隱居ー一」＝放論。
【放言高論】ホウゲンコウロン 思ひのままに言論する。文章軌範、侯字集、小序「ー一、唯論不ニ容悉一」
【放逸】ホウイツ はなちにがす。後漢書、李恂傳「恂到ニ田舍一、爲レ所ニ執獲一、羌素聞ニ其名一、ー一之」
【放古】ホウコ 古にならふ。晉書「宜ニ少ー一レ以自節一」
【放蹕】ホウヒツ 馬のおもがひをはなつ。白居易詩「ー一體安騎ニ種馬一」
【放債】ホウサイ 金を人に貸して利を取る、かねかし(容齋隨筆)
【放殺】ホウサツ おひはらふと、うちほろぼすと、堯舜の聖德に對して湯武の業紂を討伐せしをいふ。＝放伐。
【放散】ホウサン ○わがまま。阮籍文「其爲ニー一清亂、嚴嵐深居一」○ちらす。＝發散。
【放士】ホウシ 放人に同じ。山海經「其鳥

多ニ一一」
【放志】ほしいままなる志。又、志をほしいままにする。陸賈賦「眇ニ四外一而一レ一兮、睿ニ天路一而恰レ頤」
【放恣】ほしいまま。孟、滕文公「諸侯一一、處士横議」‖放肆・放縦。
【放資】もとでをおろす、資本を投下する。‖投資。
【放肆】ほしいまま。陽尹子「一鄙至徴、亦能一ニ一乎大海一」‖放恣・放縦・放逸。
【放囚】囚人をゆるしやる。
【放人】世をのがれて志をほしいままにする人。中說「陽元亮一一也、歸去來有ニ遺レ世之心一焉」
【放心】〇うっかりとしてゐる心。放逸せし良心。書、畢命「維レ收ニ一一四レ之繼繩」〇安心する。り放神・放意・放念。
【放神】〇心をほしいままにする。掌應物詩「一レ一遺レ所レ拘」〇安心。‖放心・放慮。
【放生】佛功德を積むため、魚鳥などをはなちやる。列、說符「正日一レ一、示レ有レ恩也」蘇軾詩「一一魚鼈遂レ人來」
【放生會】佛魚鳥を放ちて法を修する法會、唐の肅宗天下に詔して放生池を置くこと金石錄に見え、我國にては、元正天皇養老四年、石清水にて行ひしに始まる。乾淨佛時記「四月八日、爲ニ佛誕生日一、諸寺各有ニ浴佛會一、是日西湖作ニ一一小舟競ニ買鱗魚螺蚌一令ニ放生一」
【放蕩】ほしいままに錢る。漢書、食貨志「使ニ民一一」
【放率】うまれままにてさっぱりとしてかざらず。晉書、桓伊傳「帝彌賞ニ其一一」
【放縱】わがまま。王僧孺文「天然一一、極有ニ淮力一」‖放肆・放逸。
【放辟】ほしいままにふるまふ。白居易詩「尋レ春一一尚ニ稚齒一」
【放倩】ほしいままにしておこたる。杜牧文「疲愚一一」
【放蕩】〇ほしいまま、檢束シなし。魏志、武帝紀「少機警有ニ權數一、而任俠一一、不レ治ニ行業一」‖放逸。〇圖酒色などの慾をほしいままにする。
【放逐】心をほしいままにして物に拘らず。世說、任誕「劉伶恆縱レ酒一一」‖放曠。
【放誕】ほしいままに大言する、放縱にして安言する。南史、檀超傳「少好ニ文學一、一一任レ氣」‖縱誕。
【放膽文】文法字句などには拘だしく拘泥せずして、大膽に思ふままにかきたる文。小心文の對（文章軌範、小序）
【放置】すておく、なげやりにしておく。
【放逐】おひはらふ。史、項羽紀贊「一ニ一藩帝ニ而自立」
【放翔】はなちしりぞける。晉經「崇ニ信巫鬼一、一ニ一鄭保一」‖放逐・貶黜。
【放擲】なげやりにする、うっちやる。‖放棄。
【放任】自然のなりゆきにまかせる、なげやりにする。干渉の反對。
【放念】心をやすくする。‖放心・放慮。
【放伐】おひはらふと、うちほろぼすと（顧璘、鳴蛙賦）‖放殺。
【放飯流歠】大いに食ひ、流しこむ如く飲む。曲禮「毋ニ放飯一毋ニ流歠一」
【放紛】もつれる。蘇軾詩「收ニ拾散亡一理一一」
【放辟邪侈】ほしいままにして心がねぢける。孟、梁惠王「苟無ニ恒心一、一一無レ不レ爲已」
【放歩】きままにあるく。朱熹詩「出レ門一一人爭看」
【放烽】のろしをあげる。唐書「其一レ一有ニ一炬二炬三炬四炬一」
【放牧】牛馬などをはなしがひにする。後漢書、光武紀「牛馬一一」
【放逸】ほしいままにしてすぐれる。北史「容貌魁偉、一一自高」
【放民】ほしいままなるたみ。謝綽詩「狂歌作一一一」‖放人。
【放免】〇はなちゆるす「無罪一一」唐書、高俅傳「王因一一」〇圖古、檢非違使などの職に使はれし下役、もとゆるされし罪人が勤めたるが故。
【放夜】城門を開きて夜遊をゆるす。四都雜記「正月十五夜、勅ニ金吾一弛レ禁、前後各一日、謂ニ之一一一」
【放洋】船にて海外に行く。淸淸紀聞「安禄陳隨、奉ニ使三韓一、一一之日、海濤大湧」‖出洋。
【放鷹】たかがり、たかを使ひて小鳥などをとる。北魏書、島夷傳「一一走狗」
【放浪】きままにきまよふ。金史、元德明傳「一一山水間一」‖放蕩不羈。
【放捋】圖ほしいままにして酒色などにふける。馬が捋を放れる義、捋は馬場のかこひ。
【放流】ほしいままにしてみだりなり。後漢書、蔡茂傳「賓客一一」
【放懷】ほしいままにしてものうし。白居易詩「悟レ寒一一日高臥」‖放情。
【放縱】ともづなをはなつ。韓維詩「野艇時一レ一」
【放流】罪を得て逐はれきまよふ。史、屈原傳「屈平疾ニ一一、憂ニ愁ニ楚國一、繫ニ心懷王一」
【放慮】心をゆるす、安心する。‖放心・放念。
【放論】ほしいままにあげつらふ。

史記「莊子散三道德一一」＝放言。【放下僧】ソウ　國禪宗ノ僧ノ稱。木ヲ鳴らして、歌舞などする俳形の者。田樂法師の類。＝放下師ハウカシ

【攷】ハン　俗

わかつ（分）＝頒。

五　畫

【叟】　更（日部三畫）の本字。

【故】　古

○ふるし（古・舊）「一國」○ことさらに、わざと。史、信陵君傳「朱亥一不レ復謝」○こと（事）ことがら「大一」「細一」「他一」「世一」易、繫辭「知二幽明之一」○むかし（昔）いにしへ（古）○もと（本）以前。○ふるき物事「稽一」「法一」○ゆゑに、かるがゆゑに、上を承けて下を起す語。論、子罕「吾少也賤、一多能鄙事」左、隱元「太子少、葬一有レ闕」○たくみ（巧）○しりあひ（知人）「一舊」○なくなる、死する「物一」○ならはし（先例）○ゆゑ。○ときあかし、意味（訓詁）○常ならざる事がら（喪病災難の類）曲禮「君無一一日不レ去レ身」

同訓異義　ソレ故・陳・古・舊の別は陳（阜部八畫）の條を見よ。○故・本・原・舊・元・素・雅・固等の別は本（木部一畫）の條を見よ。

【故衣】イ　ふるきもの。新衣の對。古雅「新衣誰常補、一一誰當レ綻」

【故意】コイ　わざとする心、有心故造。楊萬里詩「繭兒有二新舌一、六學無一一」

【故宇】ウ　昔住みし家。楚辭「謝何慮二乎一一」

【故縣】ケン　昔のしゅくば。

【故業】ゴフ　ふるきは。張正見、賦「風落二新枝一霜飛二一一」

【故苑】エン　ふるきその。韓洪儒詩「龍田留二一一、潤水結二餘波一」＝故園。

【故堰】エン　ふるきみぞせき。晉書、孔愉傳「修復一一、溉二田二百餘頃一」

【故園】エン　○ふるさと。柳宗元詩「憑寄還鄉夢、殷勤入二一一一」＝故山・故里・故鄉。○ふるきその。＝故苑。

【送レ故迎レ新】ヲクリムカフ　前官を送りて、新任を迎ふる。漢書、王嘉傳「孝文時、吏或居レ官數月、而——、交二錯道路一」

【故家】カ　ふるくよりつづけるいへ。孟、公孫丑「一一遺俗、流風善政」＝舊家。

【故澤】コタク　ふるき城のほり。柳宗元詩「阿城逢二一一一」

【故記】キ　ふるきかきもの。呂覽「昏讀二一一一」＝舊記。

【故業】ゴフ　ふるきくつのひも。梁簡文帝詩「菩薩汲二一一」

【故舊】キウ　むかしよりのなじみ。論、泰伯「一一不レ遺、則民不レ偸」＝故人。

【故琴】キン　ふるきこと。盧照鄰詩「一一無二復聲一、新樹但生レ煙」

【故鄉】キヤウ　ふるさと。史、高祖紀「威加二海内一兮歸二一一一」＝故里・故國。

【故墟】キヨ　むかしの城あと。詩譜「成王封二母弟叔虞於堯之一一一」＝故址・廢墟。

【故吾】ゴ　むかしの自己。今吾の對。莊、田子方「雖レ忘二乎一一一、吾有二不レ忘者存一」

【故物】ブツ　ふるきはかま。列子「卜子使二其妻爲レ褲、妻問曰、今褲何如、夫曰、象二吾一一一」

【故國】コク　○ふるくよりあるくに。孟、梁惠王「所謂一一者、非下有二喬木一之謂上也」＝舊國。○ふるさと。杜甫詩「相逢一一人」＝故園・故鄉。

【故歲】サイ　ふるきとし。まへのとし。喬知之詩「一一雕梁燕、雙去今來隻」＝舊歲。

【故巢】サウ　ふるす。晉書、呂光載記「燕雀何徘徊、意欲レ還二一一一」

【故紙】シ　ふるきかみ。北齊書、韓軌傳「安能作二刀筆吏一、返披二一一一乎」＝反故。

【故絲】シ　ふるきいと。梁簡文帝詩「羅鋏臨二一一一」

【故資】シ　もとからの資財。漢書、婁敬傳「因二秦之一一、萬美膏腴之地、此所謂天府」

【故式】シキ　ふるきしきたり。舊き儀式。潘尼頌「弛二嬉燕一、反二一一一」＝舊式。

【故實】ジツ　○ふるき事實。答論「必問二於遺訓一、而咨於一一一」＝故例・先例・掌故。○國古の儀式禮法などの後世のてほんとなるもの「一一家」

【故人】ジン　○ふるきとも。史、范睢傳「綈袍戀戀有二一一之意一」○朋友に對して自ら稱す。後漢書、楊震傳「一一

怒に乘じて人を殺す類。＝謀殺の對。

【故山】サン　ふるさと。謝靈運詩「一一日既遠、風波豈還時」劉子翬詩「一一終勝二他山好一、新來不レ如二舊好一」＝故鄉・故國・故里。

【故志】シ　○もとのこころざし。○ふるき記錄。後漢書「皆懷下歸二鄉澤一、修中其一一上矣」＝故記・舊記。

【故址】シ　ふるき城、又、家のあと。賈鍾詩「人生物數不二相待一、摧頽一一秋風前」＝故墟。

【故事】ジ　ふるごと、昔ありし事實。漢書、蘇武傳「明二習一一」＝古事。

【故絳】コカウ　むかしの絳侯。＝故吾。

【故交】カウ　ふるくからのまじはり。

【故人】コジン　ふるくからのまじはり。

【故人】コジン　ふるくからのまじはり。

【故人】コジン　ふるくからのまじはり。

知レ君、君不レ知二一一何也」○死せし人、物故せし人。
【故人疎】ふるき友の情もうとくなる。孟浩然詩「不才明主棄、多病――」
【故人之意】むかしなじみの親しき心。史、范雎傳「以二綈袍恋恋有二――一故一レ之」
【故心】ひさしく思ひゐたる心。何遜詩「一一不レ存レ此」
【故榻】ふるきうてな。温庭筠詩「芳筵想像情難レ盡、一一荒涼路已迷」
【故粧】もとのとほりのよそほひ。梁簡文帝詩「一一猶累目」
【故陸】㊀さしつかへ、きしさはり。㊁非故。○不服の申したて。
【故紙】ふるきわた。晉書、周顗傳「收二得數枚率麗一盛二一一而已」
【故蹤】ふるきあしあと、もとの形跡。謝朓詩「牧羊尋二一一」
【故様】もとのすがた。孟郊詩「縦為思二一一」
【故俗】ふるきならはし。漢書、張去病傳「因二其一一一以二属国一」
【故栗】ふるきもみ。管子「陵二一一」
【故態】むかしのやうす。後漢書、蔵光傳「帝笑曰、狂奴一一也」
【故道】ふるきとほりみち。漢書「五月漢王、則レ兵從二一一一出襲レ雍」
【故宅】昔のいへ。水經「孔廟即夫子之一一也」
【故地】むかし所有せし地。殷堯藩詩「此去多應レ收二一一一」
【故池】ふるいけ。謝靈運詩「一一不二更穿一」
【故智】前人のちゑ。史、韓世家「秦王必疑二張儀之一一一」
【故智】ふるき計略にならふ。前條參看。
【故侶】ふるきとも。徐彦伯詩「洛歌向二隣清一、婉想一一心」
【故時】もと作りしはたけ、畦はあぜ。陸雲賦「望二一一之迴遠一兮」
【故寵】昔にかはらぬ寵愛。漢史、晉仲連傳「將軍又何以得二一一一乎」
【故程】もと楽しみち。劉言史詩「偶隨二下山雲一往、尋失二一一一」
【故轍】前に通りし車のあと。轍じて、ふるくよりしきたりの道。陶潜詩「量レ力守二一一一」
【故都】ふるきみやこ。史、項羽紀「韓王成因二一一一、都二陽翟一」○晉郡・古郡。
【故槐】ふるきひつ。蘇軾詩「清歸親二一一一」「靜夜珠當レ灰」
【故敗】ふるびてやぶれる。魏書、劉仁之傳「衣服一一」
【故貿】けいずかひ、不正ぬと知りながら買ひ入れる「一一犯」
【故方】ふるき藥方。史、扁鵲傳「盡
レ棄二其一一一、更悉以二禁方一與レ之」
【故屋】ふるくすまひし（や。李白詩「新寵方嫉レ好、掩レ涙出二一一一」
【故舶】ふるきおほぶね。王褒詩「波生從二一一一、沙漲湧二新潮一」
【故法】ふるきおきて。詩經、箋「紂之亂、乃不レ用二先王之一一一之所レ致」
【故夫】もとのきっと。李商隱詩「不レ許文君憶二一一一」○先夫・前夫。
【故府】ふるきくら。國語「君若使二有司求二諸一一一、其可レ得也」
【故繁】ふるびてやぶれる。又、其の物。南史「衣被二一一一」○故敗。
【故崩】ふるきやしろ。韓愈文「因二其一一一、易二面新一之」
【故窓】ふるきつかあな。唐書、崇厚吳氏傳「合二葬建陵一改二一一一」
【故編】ふるきしょもつ。楊萬里詩「長亭夜濯レ足、吹レ燈呼二一一一」
【故歩】もとのあゆみぶり。後漢書、班固傳「嘗陵餘子、有下學二歩于邯鄲一者上未レ得二髣髴一、失二其一一一、匍匐而還」
【故墟】ふるきとりで。耶律楚材詩「顧瑶臺二一一一」
【故老】としよりて事に明かなる人。後漢書、胡廣傳「國有二大政一、必謀二之於耆訓一、謀二之於一一一」○古老。
【故吏】舊時の屬官。漢書、尹翁歸傳「悉召二一一五六十人一」
【故里】ふるさと。白居易詩「二疏返二一一一、四老歸二商山一」○故山・故園・故郷。
【故侶】ふるき友だち。劉禹錫詩「一一不レ可レ追」○故友・故人・故儔。
【故墨】ふるきとりで。晉書、李矩傳「屯二于陳王一一一」
【故例】昔の事がら。○先例・故實。
【故郷】もとのうまや。杜甫詩「馬嘶思二一一一、歸鳥識舊巢」
【故路】もとのみち。劉洗詩「白髪涉レ江潭二一一一」○故道。

六畫

【效】カウ　㊀、効は俗字

○いたす（致）さづける（授）左、文八「一節於府人」○のっとる（法）「則一」○いさを（功績）「勳一」「殊一」○かたどる（象）○ならふ、まなぶ（學）○徴。○しるし、きめ（功驗）「驗一」「瞼一」荀、議兵「彊弱存亡之一」○つとむ（力）○そなふ（具）
【效尤】人の悪事をまねする。尤はとがめ。左、莊二十「原伯曰、鄭伯一レ、其亦將レ有レ辞」
【效驗】正しき證をいたす。北齊書、高乾傳「正是英雄一レ一之會也」

【效逆】ケウギャク　不順なることをいたす。友得「去レ順―レ、所二以速一禍也」

【效忠】チウ　まごころをつくすことの譬。

【效果】クワ　できばえ、しあげ。

【效驗】ケウケン　しるし、きめ。潛夫論「論士必定於志行、毀譽必參二於―一」

【教官】キョウカン　○教化に從事する役人（周禮）○官學の教員。

【教勸】キョウカン　をしへすすめる。杜牧文「廣二狹俗所一レ未レ習、一レ成レ之」

【教義】キョウギ　㊀一宗の教旨たる教相と各宗旨の眞理の觀得と。

【教刑】キョウケイ　學校にて行ふ刑罰。書、舜典「扑作二一一一」

【教外別傳】キョウゲベツデン　經典又は言語などによらず、以心傳心を旨とする禪宗の教義、卽ち直指人心見性成佛といふ特別の傳（祖庭事苑）

【教唆】キョウサ　をしへそそのかす、教へてわる智慧をつける。品字箋「以言弄レ人、謂二之唆一一一」

【教相判釋】キョウソウハンジャク　教判を見よ。

【教示】キョウジ　をしへしめす。元稹詩「父兄相一一、求レ利莫レ求レ名」

【教師】キョウシ　○教員に同じ。○耶蘇教の傳道師「宣一一」

【教習】キョウシュウ　○教へ習はす。梁簡文帝文「黎レ徒一一、學個成レ翠」○教師。

【教主】キョウシュ　宗教をはじめし人の敬稱。

【教授】キョウジュ　○をしへさづける。史、仲尼弟子傳「子夏居二西河一一一、爲二魏文侯師一」○學官の職名。晉官故事「宋元嘉、始興二三舍一、諸大郡府始置二一一一人一」○國高等學校以上の教師の職名。

【教訓】キョウクン　をしへならす。漢書、公孫弘傳「及二一一服習之至一、可二率持一レ服」＝教授。

【教書】キョウショ　○大統領の施政に關する意見を國會に通告する書。○國時軍の命令書。

【教機】キョウキ　はたおるわざををしへる。古樂府「十三教二汝織一」

【教授】キョウジュ　教へならす。周禮「服不氏掌レ養二猛獸一、而一一之」＝教訓。

【教戰】キョウセン　戰爭の法ををしへる。蘇軾文「旦暮一レ」

【教道】キョウドウ　次條に同じ。韓詩外傳「謹二其一一一」＝訓道。

【教導】キョウドウ　をしへみちびく。又、をしへ「一一職」「一一團」＝教道。

【教治】キョウチ　をしへをさめる。周禮「平二一一則宗率レ之」

【教敕】キョウチョク　たしへいましむ。參同契「嚴父施レ令、一二子孫一」＝教戒。

【教程】キョウテイ　教範に同じ。

【教典】キョウテン　○教育を掌り玉を佐けて邦國を安んずる法則。又、人民を敎へる法令。周禮、天官「二曰、一一」○宗教上の經典。

【教育】キョウイク　をしへ、ただす。漢書、光治レ內、君侯治レ外、宜下有二以一一一使中光母負二天下一」光は霍光。＝教訓督察。

【教坊】キョウボウ　歌舞ををしへる所。唐書、百官志「開元二年、置二一一於蓬萊宮側、京都置二左右一一、掌二俳優雜劇一」

【教例】キョウレイ　㊀教相判釋の略、釋迦一代の教理を其の宗派の見地より分類する義。例へば天台宗にて五時八教となす類。

【教範】キョウハン　敎へるのり、敎育の方法。又、其の形式。＝教程。

【教鞭】キョウベン　○兒童を敎へるため敎師の執りて指示するむち。○轉じて敎師となるを「執二一一一」といふ。

【教本】キョウホン　をしへのはじめ。禮記「祭者敎之本也」

【教命】キョウメイ　皇后のおほせ。五代史、唐劉后傳「皇太后及皇后、交二通藩鎭一、太后稱二詔令一、皇后稱二一一一」＝令旨・懿旨。

【教喩】キョウユ　をしへさとす。禮記「是以一一而德成也」＝敎諭。

【教諭】キョウユ　○前條に同じ。○中學程度の學校の敎師の職名「中學校一一」

【教練】キョウレン　兵卒ををしへねる。＝訓練。

【教勵】キョウレイ　をしへいましめる。後漢書、馬援傳「慶性寬緩、不レ能一二一子孫一」＝敎戒。

【教學半】キョウガクハンバナリ　人を敎ふるも亦我學を助くる故に、其の學ぶ業の半に居るとの義。禮、學記「兌命曰、敎學半」敎は敎。

【敖】

㊀ガウ・ゴウ　㊁ガウ・ゴウ　遇　豪

㊀たはむる（戲）あそぶ（遊）遊戲「意一」「遊一」詩、邶風「以一以遊」＝遨。○おごる。＝傲。○かまびすし。＝敷。○蟹のはさみ。＝螯。○いる。＝熬。○一一は身の長き貌。又、欣ぶ貌。詩、衛風「碩人一一」又、おごる貌。爾雅「仇之一一」○よろこばし。㊁おごる。おごり（倨）＝傲。○あなどる（慢）「一慢」○なぶる（調弄）

【敖遊】ゴウユウ　あそぶ。詩、邶風「以敖以遊」蘇軾賦「挾二飛仙一以一一、抱二明月一而長終」＝敖翔。

【敖敖】ゴウゴウ　字解を見よ。

【敖倩】ゴウセン　おごりおこたる。大學「辟二其所一一一而辭焉」

【敖蔑】ゴウベツ　おごりあなどる。王洗、釋時論「一一道素、慢二時幢門」

【敖民】ゴウミン　なまけ遊ぶたみ。漢書「朝無二廢官、邑無二一一一」註「敖謂二逸遊一」

【敖不レ可レ長】ゴウスベカラズ　おごる心は、增長すべからず。曲禮「一一、欲不レ可レ縱、志不レ可レ滿、樂不レ可レ極」

【救】

キウ　有　或は球に作る

○すくふ、苦む者を助ける「一助」「一援」すくひ。○たすく。たすけ（助）○まもる（護）○いましむ（禁）○とどむ（止）過を匡し止める「匡一」論、八佾「女弗能一與」○をさめる（治）呂覽、勸學「是一病而飲

之以」薑也」

【救援】キュウエン 救・援・拯・援・済○救は助けまもり、また防ぎ止むる意あり、兵敗求レ救・匡二救其惡一の如し。○援は救に同じ。○拯は助けて引き寄ぐる意、拯レ溺の如し。○援は引なり、引きよせて助くるなり。孟子「嫂溺、援レ之以レ手」○済はわたすとも訓む、わたれぬ場をわたしてやる意。韓文、原道「爲二之醫藥一、以濟二其天死一」

【救援】キュウエン すくひたすける。‖救助・援救。

【救解】キュウカイ 人の罪をすくふ爲めにいひわけする。宋史、孫思恭傳「歐陽修出二政府一、思恭盡レ力ー」

【救荒】キュウコウ すくひてふせぎまもる。册府元龜、命二左右一ー護レ之」

【救急】キュウキフ きふばをすくふ、危急の難を救ふ。

【救窮】キュウキュウ すくひふせぐ。國語「如レ壅二大川一、潰而不レ可ニー一也」

【救火】キュウクワ 火をすくふ、火事を消し止める。鄧析子「不レ治二其本一而務二其末一、譬如二拯レ溺錘レ之以レ石、ー一レ投レ之以レ薪」

【救火夫】キュウクワフ 消防夫。頑體集「九城郭村鎭、公設二ー一數十名一、使二其晝夜巡邏一」

【救荒】キュウクワウ 飢饉をすくふ、凶年の困苦を助けすくふ「ー一本草」‖救凶。

【救荒植物】キュウクワウショクブツ 飢饉などに穀類野菜の代用食料に供せられる植物。

【救護】キュウゴ すくひまもる。救助保護。周禮、疏「ー一、使二天下得二其所一也」

【救災】キュウサイ わざはひをすくふ。左傳「ー一恤レ鄰道也」

【救濟】キュウサイ すくふ。吳志「思下平二世難一、ー一黎庶上」‖救恤・濟救・拯救。

【救時】キュウジ 時世をすくふ。時弊を匡救する。唐書、姚崇傳「崇爲二ー一宰相一」‖救世。

【救恤】キュウジュツ すくひあはれむ（唐書、蘇世長傳）‖救濟。

【救助】キュウジョ すくひたすける。戰國策「王其相ー一如一也」‖救恤。

【救世】キュウセイ 世をすくふ。唐書、儒學傳「武爲二ー一砭劑一」砭は醫の用ふる石針ハリ劑は藥。

【救世軍】キュウセイグン 耶蘇教の一派、軍隊組織にて傳道するもの、英人ブースの首唱。

【救世主】キュウセイシュ 世をすくふぬし。罪惡によりて滅亡する人類を救ふ主の義、耶蘇ヤソの異稱。‖救主。

【救療】キュウリョウ なんぎをすくふ。史記、倉出二奇計一、數二紛糾之難一」‖拯難。

【救弊】キュウヘイ 衰へやぶれたるをすくふ。宋史、黃震傳「安有二先儒爲レ法、不レ思レ救二其弊一耶」‖拯弊。

【救命】キュウメイ 人命をすくふ。

【救命帶】キュウメイタイ 水に溺るるをふせぐ爲めブック製の環狀の袋の中にコルクをつめしもの。‖救命浮環。

【救藥】キュウヤク すくふ。又、病をなほす。詩、大雅、板「多將熇熇、不レ可ニー一」

【救療】キュウリョウ すくひいやす。北史、李元忠傳「性仁恕、無二貴賤一、皆爲ニー一」‖療救・救藥。

【敔】ギョ 語

○いましむ（禁）○とどむ（止）○樂器の名。木にて作り、長さ一尺、形、伏虎の如く背に二十七のきだきだあり、音樂を止むる時の合圖に用ふる「柷ー」

【敍】ジョ 調

敘は俗字、通じて序に作る

○ついで（次第）「秩ー」ついづ。次第順序をつける。書、舜典「百揆時ー」○物事のいとぐち（緒）○はしがき。‖序。○のぶ（述・抒）「暢ー」○つらぬ（陳）陳述する「ー別」○官位を進める「ー位」○圖衆會をいふ。王羲之、蘭亭記「亦足以暢ー幽情」の意に本づく。

【敍位】ジョイ ○位記を授ける。○國昔、正月五日に諸臣に位を賜ひし公事。

【敍勳】ジョクン 勳等を授け勳章を賜ふ。

【敍景】ジョケイ けしきをのべ記する、風景をのべ作る。

【敍次】ジョジ ついて、しだい。‖順序・序次。

【敍事】ジョジ 事實を其のままのべる。又、其の文詩。

【敍事詩】ジョジシ 議論などを交へず、主として事實をのべたる韻文の一種。敘情詩の對。

【敍情詩】ジョジョウシ 自己の感想を表べらす韻文の一種。敘事詩の對。‖抒情詩。

【敍爵】ジョシャク ○爵位をさづける。○國古、始めて從五位下に敘せられるをいふ。

【敍述】ジョジュツ 次第を立ててのべる。‖敘說。

【敍說】ジョセツ 次第をたててとく。又、其の文章。‖敘述。

【敍任】ジョニン 位を授け官に任ずる。

【敍別】ジョベツ わかれをつげる。元稹詩「遠遊來ノー、頭白顏色驚」‖告別。

【敍論】ジョロン ○次第を立てて說を立てる。又、其の論說。○書物の初に出す議論。

【敘】

敘（前條）の俗字。

【敓】ダツ 屋

ぬすむ、うばふ（強取）奪に通ず。

【敕】 チョク 圖

本、勅に作る、一に勅に作る（熟語は勅（力部七畳）を見よ）

○いましむ（誡・警）○ただす（正）○かたむ（固）○をさむ（理）○つつしむ（謹・飭）「一身」○みことのり「詔ー」○つぐ（詔）○すすむ（勧）○いそぐ（急）○しろす（書）○こころむ（試）○ととのふ（整）○つかる（労）○せむ（責譲）○ー勒（チョクロク）はえびすの種族の名「ー勒歌」

【敗】 ハイ 卦

○やぶる。やぶれ（破）成の反対「成ー」○まける。勝の対称「勝ー」「大ー」○そこなふ、こぼつ（毀・損）「損ー」○くづれる（頽）「頽ー」○くつがへる（覆）○つひゆ（潰）○くづす（壊）○しほむ（萎）「丁卯集「葉殘花ー尚維舟」○くさる（腐）「腐ー」論、郷黨「魚餒而肉ー」○ほろぼす（滅）○わざはひ（凶戮）○司ーは官名、陳・楚にては司寇を司ーといふ、

【敗】ハイ　卦

○やぶる。やぶれ（破）成の反対「成ー」○まける。勝の対称「勝ー」「大ー」○そこなふ、こぼつ（毀・損）「損ー」○くづれる（頽）「頽ー」○くつがへる（覆）○つひゆ（潰）○くづす（壊）○しほむ（萎）

奮翼于滹池、皆能――」史、管仲傳「其爲ㇾ政善轉ㇾ敗爲ㇾ功」【敗亡】ハイバウ　やぶれほろぶ。＝敗滅・敗喪。【敗舫】ハイハウ　やぶれたるふねに溫庭筠詩「荷塾平橋閒、萍稀ー一汎」【敗報】ハイハウ　まけたるしらせ。＝敗聞。【敗績】ハイセキ　ちびふで、つかひふるしのふで。太平廣記「僧智永學ㇾ書、ー一如ニ丘山一」＝退筆・禿筆。【敗鼎】ハイテイ　やぶれくさる。宋史、謝德權傳「唐積多出ニ地下一、德權累鑿爲ㇾ窖、以藏ㇾ之、遂無ニー一一」＝腐敗。【敗闕】ハイケツ　まけたるしらせ。＝敗報。【敗兵】ハイヘイ　戰にまけたる兵。＝敗卒。【敗敝】ハイヘイ　やぶる。やぶれ。貫休文「衣服ー一」＝敗壞・破敝。【敗壁】ハイヘキ　やぶれたるかべ。孫覿詩「破扉風自掖、ー一雨先穿」＝破壁。【敗艇】ハイテイ　やぶれたる底浅く平かなる舟。盧山記「踏逢雲船山頂、今有ニー一一」【敗北】ハイボク　まけてにげる、北は陰にて背く故に敗走の義とす。史、項羽紀「未ニ嘗ー一一」＝敗走・敗亡。【敗沒】ハイボツ　まけてほろぶ。魏志、王粲傳「皆以ニ傾邪ー一一」＝敗亡。【敗滅】ハイメツ　敗亡に同じ。【敗績】ハイセキ　まけたるあと。【敗爛】ハイラン　やぶれただる。朱子題跋「此紙零脫二字ー一之中」＝腐敗壞爛。【敗柳】ハイリウ　枯れかかれるやなぎ。韓偓詩「ー一凋花松不ㇾ知」＝殘柳・衰柳。【敗礼】ハイレイ　禮をやぶる。書經「欲敗ㇾ度、縱ー一」

【敏】ビン　ミン　軫

○とし、はやし、すばやし（疾）すみやか（速）「精ー一」「明ー一」「銳ー一」「捷ー一」論、學而「ー一於事」而愼ニ於言一」○おごそか（莊）○つつしむ（敬）○つとむる（勉）○さとし、かしこし（聰）「聲ー一」「察ー一」「聽ー一」「穎ー一」論、公冶長「ー一而好ㇾ學」○おほゆび、足の拇指。【敏銳】ビンエイ　さとくするどし。唐書、張鷟傳「鷟ー一有ニ文辭一」＝銳敏・頴敏。【敏黠】ビンカツ　さとくわるがしこし。遼史、大祖紀「謂ニ左右一曰、諸弟性雖ニー一而善ㇾ好ㇾ稽ニ古、皆内柔ㇾ有ニ由ㇾ人之智一」【敏給】ビンキフ　さとくしてくちまへがうまし（史、夏紀）＝捷給・辯給。【敏活】ビンクワツ　さとくしてはたらきあり。＝敏慧。【敏慧】ビンケイ　さとし。五代史、謝彦章傳「悔ニ其ー一一、以爲ㇾ子、授ニ之兵法一」＝機敏・慧敏・鋭敏。【敏悟】ビンゴ　さとし。宋史、元絳傳「生而ー一五歲能作ㇾ詩」＝悟敏。【敏捷】ビンセフ　さとくしる。賈至文「雅志沖遊、ー一精通」【敏疾】ビンシツ　すばやし。高適文「懷ニ果斷之洗濯一、任ニ性情之ー一一」＝敏速。【敏政】ビンセイ　まつりごとを勉め行ふ。中庸「人道ー一」【敏切】ビンセツ　さとくして適切なり。魏志、王粲傳「辭義ー一、辨而有ㇾ禮」【敏捷】ビンセフ　すばやし。蜀志、張裔傳「幹濟ー一」＝捷敏。【敏贍】ビンセン　さとくして智が十分に足る。南史、臧盾傳「爲ㇾ人、ー一有ニ風力一」【敏速】ビンソク　さとくすみやかなり。晉書、車胤傳「機悟ー一、甚有ニ綺曲之變一」＝敏疾。【敏達】ビンタツ　さとくして事理に通達する。漢書、京房傳「ー一好ㇾ改、欲ニ爲ㇾ國忠一」＝通敏。【敏智】ビンチ　さとし。又、さとき智慧。劉攽文「ー一通達」＝聰敏。【敏有ㇾ功】ビンアリコウアリ　すばやく事を勤むれば成功あり。論、陽貨「篤則得ㇾ衆、信則民任焉、敏則有ㇾ功、公則說」【敏邁】ビンマイ　すぐれてかしこし。東軒筆錄「歐陽永叔之詩、才力ー一」【敏腕】ビンワン　圖うでき。すばやき手腕「ー一家」

【敎】　八畫

勃（力部七畫）に同じ。

【敢】カン　感

○あへて、あへてす、おしきってする。ー不は反語。不ーは打消し。轉じて失禮ながらの意。○おかす（犯）いさむ（勇）進取する「勇ー一」「ー爲」「果ー一」

同訓異義　敢・肯○敢は進爲也と註し、果敢・勇敢などと連用す、憚らざる義なり、敢司之士とは、憚らずして直言する士をいふ。又、うやまひの意に用ふ、敢告ニ天地之神一の如し、天地の神に告ぐることは、憚り多きことなれども、憚ることなくといふ意なり。○肯は可也と註す、得心する義なり、肯諾とはうなづきて、うけがふ義なり、非ㇾ不ニ敢言一乃不ニ肯言一爾、とかけば、憚りて言ふことを得ざるにはあらざれども、言ふことをうけがはずといふ義なり。

【敢爲】カンヰ　思ひきりて行ふ。韓愈、進學解「勇ニ於ー一一」【敢毅】カンキ　おしきりてつよし。唐書、石雄傳「ー一善戰、氣壓ニ軍中一」＝果毅。【敢決】カンケツ　おしきって決斷する。杜甫

詩「壯夫思ニ一ー一、哀詔惜ニ精靈ニ」‖果決・敢斷。

【敢爭】カンすすみてあらそふ。思ひきって爭ひいさめる。

【敢死】カンシ しにものぐるひ。‖必死・殊死。

【敢然】カンゼン 思ひきってしっかりする貌。‖斷乎。

【敢戰】カンセン 心を決して劇しく戰ふ。（五代史、唐廢帝紀）‖血戰。

【敢斷】カンダン 思ひきりて決斷する。大戴禮「誠立而ー一」‖勇斷・果斷・剛斷・敢決。

【敢直】カンチョク 心勇ましくして正し。唐書、段平仲傳「朝廷有ニ得失ニ未ニ嘗不ニ論奏ニ、世推ニ其ー一ー」

【敢往】カンオウ おもひきり勇往して顧みず。漢書、雋疏傳「治ー一」

【散】㊀サン ㊁サン 早 寒

㊀ちる。ちらす「分ー」曲禮「積而能ー」○はなればなれになる（分離）衆の對「離ー」○はなつ（放）外に出る「放ー」○ひま（閒暇）「閑ー」韓愈、進學解「投閒置ー」○しく（布）○むだ。○ほしいまま（放）自ら檢束せず「ー人」「ー儒」○こぐすり、藥石の粉。○さかだる（酒傘）㊁琴曲の名。晉書、嵇康傳「廣陵ー」○足がひろめく。史、信陵君傳「槃ー行汲」‖跚。○國ちる、にじみ廣がる「墨がー」

【散位】サンイ 國くらゐのみありて職掌無きもの、さんに。

【散筆】サンヒツ 心を他の方にちらす。阮瑀文「抱憫數年、未ニ得ニ一ー」

【散佚】サンイツ 次條に同じ、佚は逸。

【散逸】サンイツ ○四方にちり失せる。北史「山東寇亂、學者ー一」‖散佚・散軼。○世事に關係せずしてひまである。南史、梁思烈世子方傳「性愛ニ林泉ニ、好ニ一ー一」

【散軼】サンイツ ちり失せる、軼は逸。‖散佚・散逸。

【散員】サンイン 定りたる任務なき人數。又、其の人。隋書、李德林傳「既是四省ー一、非ニ其所ニ好」白居易詩「ー一足ニ庇ニ身、薄俸可ニ資ニ家」‖閑員。

【散懶】サンラン きばらし、らさはらし。‖散漫・閑ニ北夢瑣言ー

【散漫】サンマン ちり解ける。齊民要術「下ニ水十日、塊既ー一」

【散樂】サンガク ○俗間野人の音樂の周禮、旅人「掌ニ教ニ舞ニ一ー一」○國後世の能樂の源をなせる古の舞樂。さるがく（猿樂）

【散花】サンクワ ちる花。又、花をちらす。陸游詩「釣魚ー一洲」

【散會】サンクワイ 集會が終りて各自退散すること、おひらき。

【散官】サンクワン 常職なくひま多き官（通鑑、唐玄宗紀、注）‖散職・閑職。

【散關】サンクワン 一名大ー一、陝西省寶雞縣の西南に在り、秦・蜀往來の要道たり。‖崤谷。

【散缺】サンケツ ちりてかけ失せる。魏書、樂志「樂章ー一、倫官失ニ守」‖殘缺。

【散見】サンケン あちらこちらに散りて見える。

【散在】サンザイ 諸所にちりてある。

【散材】サンザイ 無用の木。やくにたたぬ人に喩ふ。陸游詩「社櫟終然幸ニ一ー一」‖散木。

【散財】サンザイ ○錢財をわかちやる。書經「散ニ鹿臺之財ニ」○國ぜいたくなる失費。

【散齋】サンサイ 古、七日閒のものいみ。齊は齋。禮記「故ー一七日以定ニ之」

【散策】サンサク 杖を曳きてそぞろあるきする。蘇軾詩「ー一歷ニ外遊」

【散吏】サンリ 民閒にありて文筆に從事する人、在野の文人又歷史家。

【散志】サンシ こころざしを他に馳せる。禮記「齊者不ニ樂ニ音、不ニ敢散ニ其志ー也」

【散絲】サンシ いとをちらす。ちらしたるいと。張協詩「密雨如ニ一ー一」

【散糞】サンフン たくはへをちらす。五代史「勸ニ其ー一ー以糞ニ之」

【散賜】サンシ わかちあたふ。漢書、儒林張山傳「ニ一九族ニ田獵不ニ一ー益」

【散失】サンシツ ちりてなくなる。‖散逸。

【散人】サンジン 自ら檢束せざる人。又、世の用をなさざるひまびと。晉司故事「唐陸龜蒙以ニ舟載ニ茶鼎筆牀釣具ニ往ニ來江湖ニ號ニ江湖ー一ー」

【散盡】サンジン ちらしつくす。李白詩「ー一空掉ニ臂」

【散樣】サンヤウ ちりとける。後漢書「神色自若、辭對無ニ變、事遂ー一」

【散珠】サンジュ いろいろにことなる。禮記「天高地下、萬物ー一、而禮制行焉」

【散儒】サンジュ 自ら檢束せずして世の用とならざる儒者。荀、勸學「陸ニ禮雖ニ未ニ明、法士也、不ニ陸ニ禮、雖ニ散儒ー一也」

【散掌】サンショウ わたをちらす。ちりたる綿。李建勳詩「狂酒玉壺初ー一」

【散究】サンキウ 務なくひまなり。王禹偁詩「平生好ニ泉石ニ、況復官ー一」‖閑散。

【散駙】サンシュク 定まりたる務なき官妻。白居易詩「ー一無ニ拘束ー」‖散官。

【散錢】サンセン ○ぜにをちらす。晉書「蒙遜升ニ南樓門ニ一ー一以賜ニ百姓ー」○ぜにざしにとほさざるばら錢。西陽雜俎「根下大蟹二、ー一貫ニ之」

【散地】サンチ ○無用の地。白居易詩「ー一閒居少ニ禍胎ー」○自國內にて戰ふ時は、兵士家を思ひて散じ易し、之をー一といふ。孫子、九地「諸侯自戰ニ其地ー者、爲ニ一ー一」

【散置】サンチ ちらしおく。晉書、麻襦傳

「乞得二米數一不レ食、輒一二大路一」【散策】サンサク　竹くじをちらす。世說「桓與二夫人一燭下一レ算計」【散茶】サンチャ　國ひきちゃ。＝抹茶。【散撒】サンサツ　ちらしなげる。蘇軾詩「石間一一如二風雨一」【散敗】サンパイ　ちりやぶれる、ちらしくづす。南史、垣護之傳「一一而歸」【散芳】サンパウ　かをりをちらす。謝靈運文「酒觴レ清而一レ一」【散樸】サンボク　きぢのままにてかざりなき古の風を失ひなくす。吳均詩「三皇已一レ一、五帝初倘レ質」【散髮】サンパツ　○かみをちらす。後漢書、嚴光傳「終一レ一絕レ世」○國ざんぎり（斬髮）結髮の對。【散布】サンプ　ちりしく。韓愈詩「擺生猶有レ限　一一忽無レ垠」【散文】サンブン　字數・平仄・韻・對句などに制限なき文、即ち有韻及駢儷の文に非ざる普通の文。韻文の對。【散粉】サンプン　ちりたるこな。宋陳詩「一一初成レ蝶、翻綠作二新梅一」【散漫】サンマン　ちりみだれる。文心雕龍「憲敵一一、姦倫攸レ斁」＝散亂。【散兵】サンペイ　まばらに兵を配置する。晉書「馬步隊與二軍中一一、交爲二兩番一五日而代」【散步】サンポ　そぞろあるき。金史、太祖紀「一一二門外一兩望二高早一」柳宗元記「古之老人、飯後必一一」＝散策・漫步・閒遊。

【散木】サンボク　用に適せざる木。莊、人間世「一一也、以爲レ舟則沈、以爲二棺槨一則速腐、以爲レ器則速毀、以爲二門戶一則液樠、以爲レ柱則蠹、是不材之木也、無レ所レ可レ用」【散漫】サンマン　ちらばりてとりとめなし。唐書、五行志「朱全忠決二其堤一、因爲二二河一、一二千餘里一」【散閑】サンカン　冬時に陽氣の藏まらざる義。國語「天無二伏陰一、地無二一一一」【散藥】サンヤク　こなぐすり（粉藥）【散亂】サンラン　ちりみだれる。史、始皇紀「天下一一」＝散亂。【散吏】サンリ　閑散なる官吏。平準書、晉紀總論「王彌者青州之一一也」＝散官。【散虛】サンキョ　心のうきをはらふ。張九齡文「林泉之閒、聊足レ一レ一」【散階】サンカイ　下級の官吏。又、務少くひまなる官吏。萬歷書「夫御二宰相一當委レ之信レ之親レ之禮ちと、如子事不レ効、乎國無レ獎、則置二之一一、黜二之遠郡一」【散錄】サンロク　順序次第を立てず、筆にまかせて書きとめたるもの、そぞろがき。＝漫錄・漫筆・隨筆。

【敞】

レ・ウ　圖二

○たかし（高）土地高く見はらしよし。史、淮陰侯傳「行營高一地」○たかく、たひらか（高平）「夷一」「平一」○ほがらか。○ひろし、寬大なる貌。○ひらく、平かに開く。○あらはれる（露）【敞豁】キョカツ　ひろくうちひらける。杜甫詩「客舍隨二高下一、一一當二清川一」＝弘敞・廣敞。【敞廳】ショウチョウ　ひろくうるはし。洛陽伽藍記「修梵寺北有二永和里一、里中皆高門第屋、甚館一一」

【敦】

㊀トン　元　㊁タイ　隊　㊂タン　寒　㊃チウ　尤　㊄トン　阮　㊅トン　願　㊆トン　願

㊀あつし（厚）人情あつくして輕薄ならず「一厚」孟、盡心「薄夫一」○さかんなり（盛）○一一昵は十二支の午、困一は十干の子〔爾雅、釋天〕○つとむ（勉）○せまる（迫）詩、邶風「王事一一我」○大いなり。㊁黍稷を盛る器。周禮、天官「若合諸侯則共二珠槃玉一」古、槃を以て血を盛り、一を以て食を盛る。㊂聚りむらがる貌。㊃ふるる（彫）○ふかく（叢）㊄平地に在るをか。○たつ（竪）「一杖」㊅くらし、渾一は開通せざる貌。左、文十八「天下之民謂二之渾一」＝混沌。

同訓異義　敦・厚・篤・淳・渥・醇の別は厚（厂部七畫）の條を見よ。【敦悅】トンエツ　あつくよろこぶ。後漢書、鄭興傳「執レ義堅固、一一二詩書一」【敦睦】トンボク　あつく丁寧にしらべる。潘尼文「留二精備術一、一一古訓一」【敦雅】トンガ　てあつくしてみやびやか。蜀志、糜竺傳「雅容一一」【敦樂】トンラク　あつく好む。聖賢羣輯錄「退二隱山谷一一二詩書一」＝敦好。【敦學】トンガク　あつく學ぶ。蘇頲詩「用レ儒今作レ相、一レ一薦レ師」【敦圉】トンギョ　盛んにいきまく、敦は大、圉は强、大いに氣が激する。左思、魏都賦「白虎一二平見嵩一」【敦化】トンカ　てあつきをしへ。又、篤厚の風に化する。中庸「小德川流、大德一一」【敦業】トンギョウ　仕事に乎あつくする。晉子「上惠二其道一、下敦二其業一」【敦慰】トンイ　人情あつくしてすなほ。史、貨殖傳「政卻二忠樸一、猶有二先王之遺風一、頴川一一」【敦固】トンコ　あつくしてかたし。後漢書、吳良傳「齊質一一、公方廉恪」【敦厚】トンコウ　人情あつし。禮、經解「溫柔一一、詩教也」＝敦篤・敦龐。【敦至】トンシ　てあつくいたる。後漢書、鄭均傳「恩禮一一」【敦實】トンジツ　○すなほにしてあつし。＝敦厚朴實。○稻の異名。春秋繁露「宗廟之祭、冬上二一一稻

也、冬之所二畢藏一也」

【敦倚】トン　あつくたっとぶ。圖畫見聞志「高麗國―二文雅一、漸染二華風一」‖敦崇。

【敦崇】トンシュウ　あつくたっとぶ。晉書、載記「祇禮自修、―二儒學一、工二談論一、善屬レ文」

【敦愨】トンカク　心あつくして誠あり。史記「婦直―一、事業有レ常」

【敦篤】トン　てあつし。後漢書、朱穆傳「感二時薄俗一、慕二尚―一」‖敦厚・敦實。

【敦龐】トン　風俗厚し、庶は厚、一に龐に作る。左、成十七「民生―一、和平以聽」‖敦厖・敦厚。

【敦厖】トン　前條に同じ。

【敦勉】トン　あつくつとめる。史、始皇紀「安和―一、莫レ不二順レ命」

【敦朴】トンボク　てあつくしてすなほ。史、文帝紀「示二―一一爲二天下先一」‖敦樸・質朴・敦慤。

【敦睦】トン　あつくむつまじ。宋史、寶傳「傳「閨門―一、人無二間言一」

【敦穆】トンボク　人情てあつくやはらぐ。史、吳弟語「―二于九族一」‖敦和・敦睦。

【敦喩】トン　ねんごろにさとす。晉書、李胤傳「宣旨慰詔―一」‖敦諭。

【敦和】トン　あつくやはらぐ。禮記「樂者―一、率レ神而從レ天」‖敦穆。

【敝】ヘイ　㡀　或は弊・獘に作る

○やぶれる（敗・壞）論、子罕「衣―縕袍一」○やぶれごろも（敗衣）○すつ（棄）○つかれる、つからす（罷）苦める「罷―」「勞―」左、襄九「以―楚」○まける、敗られる。左、僖十「―於韓」○おほふ。おほひ、蔽に通ず。○ひとはばきれ（一幅巾）○政惡しく風俗が衰へる「衰―」「弊」禮、禮運「刑肅而俗―」○自己の物に冠していふ謙辭「―邑」「―屋」「―國」

同訓異字　敝・破・敗・壞・傷・毀等の別は破（石部五畫）の條を見よ。

【敝惡】ヘイアク　やぶれてきたなし。唐書、張鷟傳「生者不レ庚、祭器―一」

【敝衣】ヘイイ　やぶれたる著物。史、范雎傳「范雎聞之、爲微行、―一間步」

【敝蟒】ヘイボウ　やぶれたるとばり。禮、檀弓「―一不レ棄、爲レ埋レ馬也」

【敝邑】ヘイユウ　わが國といふ謙辭。左、隱四「衛告レ宋曰、君爲レ主、―一以レ賦從」‖敝國。

【敝縕】ヘイウン　やぶれたるどてら。崔融文「賢織休慶、―一謂如」‖敝縕袍。

【敝縕袍】ヘイウンホウ　やぶれたるどてら。字解參看。

【承敝】ショウヘイ　國家の疲弊せし後を引き受ける。史、項羽紀「秦攻レ趙、戰勝則兵銳、我承二其敝一」‖承レ弊。

【敝屋】ヘイオク　敝廬に同じ。

【敝帚】ヘイソウ　やぶれはばき。魏文帝、典論「里語曰、家有二―一一、享二之千金一、此不二自見一之患也」人各自ら其の有する所のものを善と爲すに喩ふ。‖敝帚。

【敝廬】ヘイロ　次條に同じ。

【敝敗】ヘイハイ　○やぶれ衣服。○盡心「―親レ棄二天下一、猶レ棄二一―一也」‖敝屣。○惜むに足らざる廢物に喩ふ。

【敝屣】ヘイシ　○やぶれたるはきもの。‖敝帚。○惜むに足らざる譬に用ふ。孟浩然詩「南山歸二―一」○己の家の謙辭。左傳「相如之妻曰、有二先人之―一在」‖弊廬・敝屋。

【敝甲】ヘイカイ　やぶれたるよろひ。史、楚世家「我有二―一、欲三以觀二中國之政一」‖弊甲・弊繒。

【敝鬼】ヘイキ　物をやぶる惡鬼。後漢書「生爲二惡吏一、死爲二―一」‖厲鬼。

【敝衲】ヘイノウ　草木が茂りて日光を蔽ふ。司馬相如、上林賦「羣芝參差、日月―一」‖蔽虧。

【敝衣】ヘイイ　やぶれたるかはごろも。李白詩「自愛悲明鏡、嘗春換二―一」

【敝袴】ヘイコ　やぶれたる竹かご。揮麈記「崔文子學二仙于王子喬一、子喬化爲二白蜺一而持二其妻一、文子驚怪引レ戈擊レ蜺中レ之、因墮二其妻一、俯而視レ之、王子喬之尸也、置二之室中一、須臾化爲二大鳥一、翻然飛去」‖破袴。

【敝廬】ヘイロ　敝屋に同じ。

【敝筥】ヘイキョ　やぶれたるはこ。易林「破袴一―、棄二捐于道一」‖敝篋。

【敝篋】ヘイキョウ　○やぶれたるわらぐつ。‖敝蹝・敝屣・敝履。○つまらぬ物の譬にいふ。劉志、董和傳「猶下棄二―一而獲中珠玉上」

【敝屣】ヘイシ　破れげた。梅堯臣詩「每愛前峰好、開窗二―一登」‖弊屣。

【敝履】ヘイリ　やぶれたるはこ。宋史、章鑑傳「―貯二玉杯一」

九畫

【敬】ケイ　キョウ　攵

○うやうやし（恭）「恭―」「愛―」爾語「―者禮之本也」○うや

まふ。うやまひ、つつしみ、つつしみの貌に在るを恭、心に在るをー（といふ。○いましむ。○つつしむ（齋・慎）論、子路「執事ー」○俗に物を人に贈る義。一意を致すの意「贄ー」

同義語 敬・謹・慎・恭・粛・恪の別は謹（言部十一畫）の條を見よ。

【敬愛】ケイアイ うやまひいつくしむ。應場詩「公子ー客、樂飲不レ知レ疲」

【敬畏】ケイイ 特別にうやまふ。東觀漢記「編當士大夫、莫レ不レニー之」

【敬虔】ケイケン うやまひのこころ。部齢詔策賦「昭ニー於後進」

【敬禮】ケイレイ たっとびうやまふ。晉史、王廙之傳「衆人江畔候レ之申二儀禮一、儀見レ輒レニー焉」＝敬揖。

【敬遠】ケイエン ○うやまひてとほざける。論、雍也「敬二鬼神一而遠レ之」○國語用して表面は敬ふ如く見せて實は嫌ふ義「ー主義」

【敬應】ケイオウ つつしみしたがふ。書經「誰敢不レ讓、敢不ニーー」

【敬意】ケイイ 敬ふ心をいだく。鮑照文「助レ人爲レ善、豈加ニーー」

【敬同】ケイドウ 君と親とに事ふるには敬意を同じくす。孝經「資於事レ父以事レ君、而ーー」

【敬戒】ケイカイ いましむ。左傳「吳二三子ニ生在ニーー、不レ在レ富也」

【敬勤】ケイキン うやまひて力を盡す。韓愈、衡州君墓銘「克自ーー」

【敬謹】ケイキン うやまひつつしむ。宋臺太子冠樂章「拾階而升、ーー將レ冠」

【敬共】ケイキョウ つつしみうやまふ。左傳「ーー朝夕」＝敬恭。

【敬恭】ケイキョウ つつしみうやうやし。詩經「ニーー明神」＝恭敬。

【敬具】ケイグ つつしみて申しのべる、うやうやしく具陳する。手紙の文の終に置く語。

【敬慴】ケイショウ うやまひおそれる。書經、傳「有士之君、不レ可レ不ニーー」＝敬畏。

【敬白】ケイハク 賜者より尊者に呈する書翰の末尾に書する語。補維曰、前世尊者致書于卑、書尾作ニー字、如二薛綜與弟一書」

【敬遇】ケイグウ うやまひもてなす。國學紀聞「武王出門迎、ーニー賀客、賢愚無レニー」＝敬待。

【敬虔】ケイケン つつしむ。つつしみ。虔日休詩「閒レ卷讀數行、爲レ之加ニーー」

【敬賢】ケイケン 賢人を敬ふ。漢書、谷永傳「ーレー下レ士、樂レ善不レ倦」

【敬語】ケイゴ 敬意を表する爲めに用ふることば。

【敬厚】ケイコウ うやまひてあつくもてなす。後漢書、桓榮傳「帝笑指レ之曰、此眞儒生也、以レ是愈見ニーー」＝敬重。

【敬祭】ケイサイ 祭事をつつしみうやうやしくする。史、封禪書「晉巫祠、祭二其先一、而ーレー」

【敬止】ケイシ つつしみてとどまるべき所にとどまる。詩經「穆穆文王、於ーレー」

【敬事】ケイジ ○事をつつしみておこなふ。論、學而「ーレー而信」○うやまひつつしみて君父につかへる。

【敬親】ケイシン つつしみてみる。禮記、醫家之說、必ーニー之」

【敬服】ケイフク うやまひてしたしむ。北史、王薄傳「竝ーニー之」＝敬嗤。

【敬身】ケイシン 身をつつしむ。禮記、君子無レ不レ敬也、ーレー爲レ大」＝謹身。

【敬神】ケイシン かみをうやまふ。禮記、夏道尊レ命、事レ鬼ーレー、而遠レ之」

【敬慎】ケイシン つつしむ。又、つつしみ。禮記「ーー者仁之地也」＝愼慎。

【敬親】ケイシン おやをうやまふ。孝經「ーレー者不二敢慢一於人一」

【敬護】ケイゴ つつしみてゆづる。孝經「先レ之以ニーー」

【敬若】ケイジャク うやまひしたがふ。後漢書、明帝紀「ーニー昊天一以綏二兆人一」

【敬終】ケイシュウ 事の結末をつつしみてなくする。禮、表記「事レ君慎レ始、而ーレー」

【敬從】ケイジュウ うやまひしたがふ。吳志「大小ーー、不二以爲一恨」

【敬順】ケイジュン つつしみしたがふ。左傳「兄愛而次、弟敬而順」

【敬承】ケイショウ ○つつしみてうけつぐ。孟、萬章「堯能ーー二繼禹之道一」○他人の言をつつしみてうけたまはる。後漢書、光武帝紀「昊天大命、不レ可二稱謂一、敢不ニーー」

【敬稱】ケイショウ 人をうやまひて呼ぶことば。閣下・足下の類。

【敬職】ケイショク 職務をつつしみて大切にする。忠經「天下ーレー、萬邦以貞」

【母レ不レ敬】ケイなし 禮は敬を以て主とするをいふ。曲禮「ーー、儼若レ思、安二定辭一、安レ民哉」

【敬禪】ケイセン つつしみて位をゆづる。任昉文「今便ーニ子蓼」

【敬草】ケイソウ うやまひたふとぶ。禮記「君子雖二自卑一、而民ーニー之」＝尊敬・敬重。

【敬選】ケイセン つつしみてえりくだる。漢書、匡衡傳「聖王謹二慕ーー一、承レ親之禮也」

【敬待】ケイタイ うやまひあしらふ。後漢書、杜根傳「酒家知二世貴一、厚ーニー之一」＝禮待・敬遇。

【敬勝レ怠則吉】ケイタイにかつものはキチなり 恭敬の心が懈怠の心に打ち克つ時は吉なり。荀、議兵「ーー怠勝レ敬則滅」

【敬諾】ケイダク つつしみてうけがふ。戰國傳「世子曰、ーー」

【敬慤】ケイカク うやまひおそれる。史、周昌傳「昌公太子家臣、素所ニーー」乃可」＝敬畏。

【敬厭】ケイエン うやまひてほめる。隋手雜

綫「候吏皆ー一」
【敬慎】ケイシン　つつしみてきく。蔡邕文「率留苗民、慎不ニー一」
【敬忠】ケイチュウ　敬ひて忠をつくす。論、爲政「使ニ民ー一以勤」
【敬重】ケイチョウ　うやまひおもんず。＝尊重。
【敬寵】ケイチョウ　敬ひ愛する。漢書、宣元六王傳「ー一異二于他國一」＝敬愛。
【敬弔】ケイチョウ　死者をうやまひ弔ふ。李嶠、祭文「臨レ風ー一、願與レ神遊」
【敬白】ケイハク　つつしみて申す。多く書簡文の末尾に置く語。＝謹言・頓白。
【敬啓】ケイケイ　つつしみてきとし。周禮「書二其ー一任協者一」
【敬敷】ケイフ　つつしみてひろく布き及ぼす。書、舜典「ー一五教一在レ寛」
【敬服】ケイフク　うやまひて心から從ふ。搜神記「百姓ー一、從者如レ歸」
【敬復】ケイフク　つつしみてお返事を申す。多くは書翰文の冒頭に置く語。＝拜復。
【敬慕】ケイボ　敬ひしたふ。南史、劉穆傳「學徒ー一、不二敢倍戻一」＝欽慕。
【敬以直レ内】ケイイチョクナイ　敬愛もて心の内を正しくする。易、文言「ー一、義以方レ外」
【敬覽】ケイラン　つつしみてみる。蘇軾文「新詩幸得ニー一、不レ空餘生復見ニ斯作一」
【敬禮】ケイレイ　つつしみて禮する。又、其の禮「最ー一」

【數】俗に數（支部十一畫）の略字とす。

十畫

【敲】ガイ　灰
○をさむ（治）○賢ー一は人名、昔、高陽氏の八才子の一人。

【敲】カウ　看
○たたく（叩）「ー一門」「推ー一」うつ（擣・舂）○すつ。○しもと、むち。短き杖、扑は長き杖。賈誼、過秦論「執レ扑以鞭ニ笞天下一」

同音異義　敲・叩・扣・款○敲はたたきて音聲を出す、叩より重し、敲レ金・敲レ門と用ふ。○叩は擊也、たたきうつ、叩レ門・叩レ者と用ふ。論語「以レ杖叩ニ其脛一」○扣は叩に通ず。晉書、張華傳「扣レ之則鳴矣」○款はたたきておとづれる。說文に、叀有レ所レ扱也と註す。柳文「有ニ梓人一款ニ其門一願レ陳」

【敲打】カウダ　○むち。賈誼、過秦論「履ニ至尊一而制ニ六合一、執ニ一一以鞭ニ笞天下一」○罪人をむちうつ。
【敲門】カウモン　門をたたきて人を訪ふ。賈島詩「鳥宿池邊樹、僧敲月下門」＝叩門・款門。
【敲折】カウセツ　たたきをる。蘇軾詩「鏘然ー一青珊瑚」
【敲扑】カウボク　○むち。賈誼、過秦論「履ニ至尊一而制ニ六合一、執ニ一一以鞭ニ笞天下一」○罪人をむちうつ。
【敲撃】カウゲキ　うつ、たたく。李紳詩「秋風動衡神女佩、月明ー一水晶盤」
【敲琅玕】カウロウカン　たたきをる。蘇軾詩「鏘然ー一青珊瑚」

【敲】敲（前條）の俗字。

十一畫

【敵】驫（馬部十一畫）の古字。孟、離婁「爲レ淵ー一魚者、獺也」

【敻】㊀ケイ　㊁ケン　敬　銑
㊀はるか、とほし（遠）「懸ー一」李華、弔古戰場文「ー一不レ見レ人」＝迥。○ながし（長）○ーーはみる（視）㊁もとめる（蒼求）
【敻古】ケイコ　遠きいにしへ。晉書、愛自ニーー一追ニ元妃一」＝遠古。
【敻絕】ケイゼツ　はるかに遠し、絕は遠。顏延年賦「別レ鄴越レ鄭、夐絕ーー」
【敻然】ケイゼン　遠き貌。＝寥乎。

【數】㊀シュ　㊁ス　㊂サク　㊃ソク　㊄シュク・ソク　廣韻　㊀㊁の通音スウ　廣韻　㊂㊃の通音サク　廣韻　㊄の通音シュク

㊀かぞふ（算）はかる（計）計算する。○しらべる（閲）○せむ（責）罪を責める。○ーへられる程の、一二三の、五六の、若干の「ー月」「ー人」㊁かず、多少の量。○量をつもるに用ふる記號。○しな（差異）○まはりあはせ、人の運不運（運命）「歷ー一」○ことわり、すぢみち（條理）○ありさま（情勢）○わざ（技術）孟、告子「夫奕之爲ー一、小ー一也」○はかりごと（謀略）「術ー一」○算術「ー一學」「禮樂射御書ー一」㊂しばしば「頻ー一」しばしばする。論、里仁「事君ー一斯辱矣」○ちかし（近）はやし（疾）○うながす。㊃ーはせまりうながす（迫促）○すみやか（速）㊄こまかし（細密）「ー一密」

同音異義　數・屢・亟○數はたびたびと讀し、頻數・頻數などと熟す。論語「朋友數斯疏矣」○屢は每每なり、數と同じくして、稍緩なり。論語「數ー一人以ニ口給一、屢憎二於人一」○

亟は、すみやかと訓し、急亟と連用す、極めてせっせっと、せわしき意なり。孟子「亟餽二鼎肉一」

【數窮】スウキュウ　しばしばくるしむ。老子「多言ー一、不レ如レ守レ中」

【數興】スウコウ　しばしばおこる。後漢書、梁統傳「征二伐遠方一、軍役ー一」

【數見】スウケン　○たびたび。白居易詩「乘レ閒ー一來相訪」‖屢次。○ソクいそがはしき（迫促）貌。進、逍遙遊「彼其於レ世未ニー一然一也」

【數脈】サクミャク　たびたびかむ。禮記「ー一毋レ爲二口容一」

【數白】サクハク　しばしば申しあげる。漢書「往者ー一、三光垂レ象、變動見レ端」

【數沉】スウチンカン　しばしばうかぶ。荊湘「ー一明月沼二頻遊一向日潛一」

【有レ數存二焉于其間一】スウアリテコレヲソンス　自然の道理の其の間に存するにいふ。莊、天道「得二之于手一應二之于心一、口不レ能レ言、有レ數存二焉于其間一」

【數家】スウカ　○五六の家。劉長卿詩「菩對三經絕、獨向ニー一通」○術數を修めたる人。漢書、東方朔傳、注「ー一、術數之家也」

【數行】スウコウ　○はらはらと落ちる涙など。柳宗元詩「今來ー一淚」○五六くだり。羊士諤詩「蜀國魚牋ー一字」

【數學】スウガク　計算の理論・法式等を研究する學問。‖算道・算數。

【數奇】スウキ　ふしあはせ、數は運命、奇は偶の對にて相合はざる輩。史、李將軍傳「以爲李廣老ー一、毎レ令レ當二單于一恐不レ得レ所レ欲」

【數器】サッキ　權衡の周禮、注「同二其ー一、使二權衡之輕重無二異同一也」

【數口】スウコウ　五六人。又、其の家族。孟、梁惠王「ー一之家可二以無一レ飢矣」

【數罪俱發】スウザイトモニアラワル　一人にて二つ以上の罪を犯したることのあらはれる義。

【數四】スウシ　みつよつ。又、三四たび。裴度文「斷蓬之風ー一」‖再四。

【數詞】スウシ　文法にて數又は量を示すことば。

【數斟】スウシン　二三杯酒をくむ。陸游詩「琉璃松樹下、ー一已復醉」‖數酌。

【數描】スウビョウ　はかりごと。劉志、陳祇傳「多二技藝一、挽ニー一」‖術數。

【數戰】スウセン　たびたびたたかふ。韓詩外傳「ー一則民疲」

【數多】スウタ　たくさん、あまた、多數。‖夥多。

【數百】スウヒャク　二三百、又は五六百。史記「騎ー一」

【數量】スウリョウ　○かずと、ぶんりゃうと。○かさ、分量。

【數寄】スキ　國○ものずき。‖好奇・好事。○みやび、風流・風雅「ー一者」○茶の湯の技「ー一屋」

【數珠】ジュズ　佛數箇の珠を貫きて環とし、念佛を唱ふる時、つまぐりて度數を計ふるに用ふる具。釋氏要覽「梵語鉢塞莫、梁云ー一、此乃是引二接下根一、準二課修業一之具也」‖念珠。

【數罟】サッコ　目のこまかきあみ。孟、梁惠王「ー一不レ入二洿池一」

【敵】テキ　㊥

○あひて、我にてむかふもの「ー國」「ー軍」孟、梁惠王「仁者無ー一」○あたる（相當）我と對等のもの「匹ー」「棋ー」「酒ー」楚語「且夫自ー一以下」○たぐふ、むかふ（對）○あだ、かたき（仇怨）「仇ー一」○ともがら、たぐひ（輩匹）

【敵意】テキイ　仇敵とする意思。又、あだをするかんがへ。

【敵應】テキオウ　相對してこたへる。易經「上下ー一、不二相與一也」

【敵愾】テキガイ　君の恨み怒る所に當る。左、文四「諸侯敵二王所一レ忿、而獻二其功一」

【敵仇】テキキュウ　敵のいつはりたくめるはかりごと。韓非子「參伍既用二於內一、調虛又行二於外一、ー一得」

【敵國】テキコク　○己の國にあたをなす國。史、吳起傳「君不レ修レ德、則舟中之人皆ー一也」○對等の力ある諸侯の國。孟、盡心「征者上伐レ下也、ー一不二相征一也」

【敵國外患】テキコクガイカン　外に在りて我に害を爲すもの。孟、告子「入則無二法家拂士一、出則無ニー一者、國恆亡、然後知レ生於憂患一而死於安樂一」

【敵視】テキシ　敵と見なしてにくむ。

【敵軍】テキグン　あた、かたき。書經「小民方興、相ニ爲ー一」宋史、張復傳「臣竊感慨、自期三報ニー一」‖讐仇・仇敵。

【敵情】テキジョウ　敵軍のやつす。‖敵狀。

【敵手】テキシュ　あひて、己と五分五分の者「好ー一」晉書、謝安傳「安棋劣二於玄一、是日玄懼二兵至一、遂僞ニー一」

【敵戰】テキセン　敵としてたたかふ。國語「夫吳之與レ越也、仇讐ー一之國也」

【敵前上陸】テキゼンジョウリク　敵軍の守備せる地に船をつけ危險を冒して上陸を強行する。

【敵對】テキタイ　敵としてはむかふ、敵として對抗する。

【敵彈】テキダン　敵のうちだす銃砲のたま。‖敵丸。

【敵場】テキジョウ　敵兵の出沒する地。又、敵の領土。吳志、張紘傳「斬レ將察レ旗、誠震ニー一、此乃偏將之任、非二主將之宜一也」‖敵地。

【敵背】テキハイ　敵軍の背後。

【敵伴之國】テキハンノクニ　力の相ひとしき國、對等の國。戰國策「韓與レ魏、——

也」【遠度】ヲン かたきのえびす。魏文帝詩「不ン戢屈ニ―一」【敵禮】テキ 對等の禮。四敵の禮。左傳、隱「王以ニ―一待ン之」

【敷】フ 遇

○しく(布施)布き及ぶ、分ち布く、ひろがる。書、大禹謨「文命ー于四海」○つらぬ、つらなる(陳)○ちらす(散)○あまねく(徧)ひろく(廣)詩、大雅「罔ニ求先王」○圖「愛をーく」○しく物「一金」「一地」「一居」○フの語に借用す「膠陶！天氣ニ宜ー」

【通性】考は數の古字、甫に從ひ方に從ふ。

【同訓異字】ン數・布・鋪・施・陳・設・擺の訓は布(布部二畫)の條を見よ。

【數芟】フサイ 盛き處がりて、花さく。王義之文「脩禊ニ敘其ー盛ー」【數榮】フエイ 草木が茂り榮える。王逸、離騷注「仰ニ視屋梠ー、樹ニ高厦ー而舒ー藻」【數舒】フジョ ○廣くしきのべる。舊唐書、代宗紀「擇ニ除珍氣ニ一ニ一錄音ー」‖數陳・流播。○意義などを廣く引きのばして說く。宋史、荒神傳「一ニ一經旨、因以規諫」‖數演。【數演】フエン 弘くしきのばす。成公綏文「分ニ賦物理ニ一ー無ン方」【數求】フキュウ 廣くさがし求める。晉經「一ー二百人」【數化】フカ 敎化をあまねく布く。宋書「一ー所ン被、惠訓最遠」‖布化。【數敎】フケウ ○をしへをしき弘める。敎育を普及せしめる。書、舜典「敬敷ニ五敎ー在ン寬」○宗敎を傳へひろめる。‖布敎。【數弘】フコウ しきひろめる。晉書、出繼裏賊「一ニ一五敎ー」‖弘敷。【數告】フコク あまねくつげる。晉書、劉曜載記「可ー二一天下ー、使ニ知ニ區區之朝恩ー而聞ニ過也」‖普告・布告。【數奏】フソウ のべたすける。宋書、劉穆之傳「實ニ新王化ー二一百揆ー」【數枝】フシ ひろがれるえだ。神異記「一ー一果餘」‖數條。【數施】フシ あまねく政敎をしきほどこす。書、泰誓「發ー一」傳「施、合也」‖布施・普施。【數秀】フシュウ しげりさかえる。宋書「數ン榮ー」【數敎】セイ まつりごとをしく。詩、商頌「一ン一盛德、百祿是遒」【數設】フセツ しきまうける、かまへおく「經道ー一」‖布設。【數息】フソク あまねくのべしめす。晉書、卞壼傳「一ニ一五經ン實ニ在ン任ン人」【數奏】フソウ 數は陳、奏は進。忠言などをのべすすめる。書、舜典「一ー以ン言、明試以ン功」‖奏聞。【數道】フドウ 道を數きひろめる。晉書、成帝紀「王以ニ明德茂親ニ居ニ宗師之重ー、宜ニ一ン一ン奏ン德、靜ニ一其操ー」【數治】フチ まつりごとを布く。孟、滕文公「躬ン耕而ー一焉」‖施政。【數陳】フチン しきのべる。謝靈運詩「析ン理賞ー一」【數暢】フチョウ しきのべる。晉紹、序「約ン文申ン義、ー二一旨」【數症】フショウ 木の枝が茂りひらがる。應場賦「朝ー一ン以誕ン節、夕綽ン秀而垂ン華」‖數枝。【數天之下】フテンシノカ 普き天下をいふ。詩、周頌、般‖普天之下。【數納】フノウ 言を以て數き弘めて、君の心に納れる。書、益稷「一ー一以ン言、明庶以ン功」【數數】フフ ひろくつらなる貌。謝靈運詩「一ー花披ン等」【數揚】フヨウ のべあらはす。柳宗元文「陛下奉ニ承前規ー一ニ一盛典ー」【數居】フキョ 圖引戸・引違子などを設きみぞに承けてあけたてするもの、しきみ。‖圖。【數金】フキン 圖借家人が預け置く保證金。【數島道】フトウ 圖やまとうたのみち、和歌の道。

十二畫

【敲】クヲ 篠

つながりつらなる(繫連)

【整】セイ 梗 俚字

○ととのふ、ひとしくす(齊)物事が亂れずして正しくそろふ。○をさむ(理)ととのへる。孟、梁惠王「爰ニ其ー旅」○俗に完全にして未だ分解せざる義。○一數は除ン盡すことの出來る數。分數及小數の對。【同訓異字】支に從ひ、東に從ひ、正に從ふ、之を來ね、又、少しくを支ふもて正しからしむる意。【同訓異字】整・調・治・句の別は調(言部八畫)の條を見よ。【整殺】セイサツ 正しくととのひてつよし。唐書、范希朝傳「治ン軍ー一」【整粧】セイシャウ 粧を正して容儀をととのへる。陳傳玉詩「蕤ン入強ー一ー」‖正裝。【整束】セイソク 軍隊をととのへそなへる。左傳「子姑ー一ー而經ン武乎」‖整旅。【整齊】セイ 正しくととのふ。宋史、馬從先傳「從先能ー一、號ニ整齊ニ不ニ祖跣ー」‖榮整・整飭・調整。【整飭】セイチョク しくを正しく持つ。謝朓文「一ー侍ニ丹牛之禮ー」【整妝】セイシャウ よそほひととのへる。【整頓】セイトン ととのひてねごろか。晉賦「顧ニ形影ー、自ー一」

書、何曾傳「曾性至孝、閨門一一、自ㇾ少及ㇾ長、無二聲樂嬖寵之好一」‖整然。

【整理】セイリ　正しくして治むること。禮、學記「發ㇾ慮憲ㇾ善、謂ㇾ之ー一ー」‖修整・方略。

【整飾】セイショク　ととのへかざること。李光、贊銘「ー一容顏一」

【整齊】セイセイ　正しくととのへる貌。賈誼、論積貯疏「今殷富大抵皆三小安一而重困之人、何以ー一之一」‖整然。

【整然】セイゼン　ととのへる貌。‖整齊・正正。

【整頓】セイトン　軍のせいぞろへ。

【整飭】セイチョク　ととのへる、事に條理ある貌。唐書、呂諲傳「少力二於學一、志行ー一」‖整頓。

【整齣】セイケツ　國雜劇ドラにて能手の次に居て滑手の氣勢をととのへる役者。

【整頓】セイトン　ととのふる。又、ととのへる。史、張耳陳餘傳「宜ㇾ一一其士卒一」‖整飭。

【整武】セイブ　いくさの備へをととのへる。楊戩、諫高承相賀「愛ㇾ遣二岡衡一ー一ー齊ㇾ文」

【整民】セイミン　民をととのへて秩序あらしむる。左、莊十三「夫禮所二以ー一ー一也」

【整理】セイリ　正しくをさめととのへる。左、莊十三「疏ー一ー天下之民一」‖整頓。

【整旅】セイリョ　軍勢をととのへそろへる。高思元文「敎ㇾ陣ー一ー、必務成ㇾ師」

【整列】セイレツ　正しくならぶ。左傳「建鼓ー一ー、二臣死ㇾ之」‖齊列。

【整】十三畫

攵（前條）の俗字。

【斂】十三畫

㊀エキ　㊁トク　㊂俗字

㊀いとふ（厭）あきる、うむ（倦）詩、周南「服之無ー一」おこたる（解）○をはる（終）㊁やぶる（敗）「耗ー一」書、洪範「彝倫攸ー一」

【斂】十三畫

レン　國斂に作るは非

○をさむ（收）戸に衣きせるを小ー一といひ、戸を指に入れるを大ー一といふ。○やめる、しまふ「ー一手」○あつむ（聚）とる（取）集め取る。○ひきしめる「收ー一劍」

同訓異字　斂・斂・治・理・收・藏・納・御の別は斂（人部八畫）の條を見よ。

【斂去】レンキョ　手ををさめて去る。宋史、何薄傳「斂ㇾ容以待ㇾ神、遶巡ー一」

【斂容】レンヨウ　容貌をととのへてつつしむ。漢書、霍光傳「虛己ー一ー」

【斂翼】レンヨク　○つばさををさめる。白居易詩「晨雞纔發ㇾ聲、夕雀餓ー一ー」○退きちぢかまるに喩ふ。王粲賦「就二隅角一而ー一ー」

【斂手】レンシュ　手を出さず、おそれつつしみてほしいままにせず。後漢書、鮑永傳「世祖回、賈復且ー一ー以避二鮑一」‖東手。

【斂迹】レンセキ　あとををさめ、おそれてほしいままにせず。唐書、劉栖楚傳「宿姦老蠹ㇾ一ー」

【斂足】レンソク　足をつつみて進まず。陸機、擬古詩「駑駘羣ㇾ一ー遲」‖竦足・斂歩。

【斂藏】レンゾウ　をさめたくはへる。周禮「以ㇾ時斂而藏ㇾ之」

【斂膝】レンシツ　ひざを正しくして坐する。晉書、陶侃傳「終日ー一危坐、髀外事、千緒萬端、罔ㇾ有二遺漏一」

【斂衽】レンジン　えりをただしくしてつつしむ。漢書、張耳傳「南面稱ㇾ伯、楚必ー一ー而聽」‖整襟。

【斂手】レンシュ　手を出さず、おそれつつしみてほしいままにせず。後漢書、鮑永傳「世祖回、賈復且ー一ー以避二鮑一」‖東手。

【斂迹】レンセキ　あとををさめ、おそれてほしいままにせず。唐書、劉栖楚傳「宿姦老蠹ㇾ一ー」

【斂足】レンソク　足をつつみて進まず。陸機、擬古詩「駑駘羣ㇾ一ー遲」‖竦足・斂歩。

【斂容】レンヨウ　容貌をととのへてつつしむ。漢書、霍光傳「虛己ー一ー」

【斂翼】レンヨク　○つばさををさめる。白居易詩「晨雞纔發ㇾ聲、夕雀餓ー一ー」○退きちぢかまるに喩ふ。王粲賦「就二隅角一而ー一ー」

【斂】十四畫

レン　あつめはうむる。唐書、裴寂傳「王鉷死、李林甫方用ㇾ事、僚屬皆引去、獨寂爲二一一一、由ㇾ是賢知ㇾ名」

【斂藏】レンゾウ　をさめたくはへる。周禮「以ㇾ時斂而藏ㇾ之」

【斂膝】レンシツ　ひざを正しくして坐する。晉書、陶侃傳「終日ー一危坐、髀外事、千緒萬端、罔ㇾ有二遺漏一」

【斂衽】レンジン　えりをただしくしてつつしむ。漢書、張耳傳「南面稱ㇾ伯、楚必ー一ー而聽」‖整襟。

【斂手】レンシュ　手を出さず、おそれつつしみてほしいままにせず。後漢書、鮑永傳「世祖回、賈復且ー一ー以避二鮑一」‖東手。

【斂迹】レンセキ　あとををさめ、おそれてほしいままにせず。唐書、劉栖楚傳「宿姦老蠹ㇾ一ー」

【斂足】レンソク　足をつつみて進まず。陸機、擬古詩「駑駘羣ㇾ一ー遲」‖竦足・斂歩。

【斂容】レンヨウ　容貌をととのへてつつしむ。漢書、霍光傳「虛己ー一ー」

【斂翼】レンヨク　○つばさををさめる。白居易詩「晨雞纔發ㇾ聲、夕雀餓ー一ー」○退きちぢかまるに喩ふ。王粲賦「就二隅角一而ー一ー」

【斃】十五畫

ヘイ　國

○たふす。たふれる（朴・踣）殺し仆す。檀弓「射二一一一人一」○死する。○ほろぶ（滅）やぶれる（敗）左傳「多行ー一不義ー必自ー一」

【斃死】ヘイシ　たふれしぬ。‖僵死・僵仆。

【斃踣】ヘイハク　たふれる。司馬光、劄子「天威逾ー一顏不二咫尺一、隕越ー一爲二聖朝羞一」‖僵斃・顚躓。

【斃而後已】ヘイジゴイ　死に至るまで勉めて止まず。禮、表記「鳧鳥日有二孳孳一、ー一ー一」‖死而後已。

【斃】十五畫

カウ　攷　本、學文、斅に作る

○をしふ、をしへ（敎）みちびく（導）さとす。書、盤庚「盤庚ー一于民一」○さとる（覺悟）

【斅學半】カクガクハンナリ　人に敎ふるも亦我が學を助くることあるが故に、

【斃】十五畫

ケツ　㊀エキ　㊁トク　㊂俗字

㊀いとふ（厭）あきる、うむ（倦）詩、周南「服之無ー一」おこたる（解）○をはる（終）㊁やぶる（敗）「耗ー一」書、洪範「彝倫攸ー一」

【斂】十三畫

レン　國斂に作るは非

○をさむ（收）戸に衣きせるを小ー一といひ、戸を指に入れるを大ー一といふ。○やめる、しまふ「ー一手」○あつむ（聚）とる（取）集め取る。○ひきしめる「收ー一劍」

同訓異字　斂・斂・治・理・收・藏・納・御の別は斂（人部八畫）の條を見よ。

【斂去】レンキョ　手ををさめて去る。宋史、何薄傳「斂ㇾ容以待ㇾ神、遶巡ー一」

【斂容】レンヨウ　容貌をととのへてつつしむ。漢書、霍光傳「虛己ー一ー」

【斂翼】レンヨク　○つばさををさめる。白居易詩「晨雞纔發ㇾ聲、夕雀餓ー一ー」○退きちぢかまるに喩ふ。王粲賦「就二隅角一而ー一ー

其の學よ樂の半に居るとの義。書、說命「惟――、念二終始一典二于學一」禮運「脩二其學一」

文部

【文】㊀ブン・モン 文 ㊁ブン・モン 問

㊀あや、はなやか（華）質の對。禮儀作法などになれて優雅なる義。論、顏淵「君子質而已矣、何以二文爲一」○つや（光澤）○いろ（彩色）衆くの彩色をあつめてよく調和せるもやう。禮、樂記「五色成レ章而不レ亂」○かた（形象）事物の現象「天ノ――」「地ノ――」○すぢ（條理）○もじ「一字」○ことば（語句）○語句の集りて成るもの「一辭」「一章」「一奇ノ」「雄ノ――」○一章の一體。文體明辨「此類獨以一名者、蓋一中之一體也、其格有二散ノ一、有二韻語一或傚二楚辭一或爲二四六一」○ふみ（書籍・記錄）○がくもん、一學。道藝。武の對「斯ノ――」「修ノ――」論、學而「行有餘力、則以學レ文」○のり（法度法律）「舞ノ――」○禮樂制度・教育などの十分に調和して、發達する義「一明」論、八佾「郁郁乎ノ――哉」○よし（善）うつくし（美）○みやびやか。○錢の枚數「受二一ノ一」㊁かざる、うはべをかざりつくらふ。過を掩ふ。論、子張「小人之過也、必ノ――」○修めととのへる（修飾）論、憲問「一之以二禮樂一」○塗る。○關ノ手紙・書物。○一厘の穴錢の稱。

【文案】ブンアン ○つくゑ。世說、任誕「騎二驢ノ――一」○文を作るかんがへ、文章の草案。

【文意】ブンイ 文章の意味。元史、韓性傳「作二大幾一操レ筆立就、一一皆古」

【文會】ブンイ 文學の社會。蘇軾文「綴二橫武集一、爲二詩ノ――一」＝文苑・文團。

【文運】ブンウン 文學の盛んになる運命。寶鼎詩「清廟關ニ一一、覩二彼古帝都一」

【文運】ブンウン 日・月・星辰の類。晉書、天文志「一一麗二乎天一」

【文章】ブンショウ うつくしきひかり。劉勰文「雕二三光之一一、視二山河之分流一」

【文鰩魚】ブンヨウギョ とびのうを、體背黑色、長一尺許、ひれ長大にして翼の形をなし、よく海面に出でて飛ぶ。

【文苑】ブンエン 多くの能文者、又文學上の社會、一一傳」

【資レ文爲レ活】ブンヲタスケテカツヲナス 文章を以て生活の資とする。杜甫詩「故人開二都去一、去索作レ碑錢、本――、謝舍二窮倒一」

【屬レ文】ソクブン 文章を綴る、文を作る。

【文章】ブンショウ ○文學ありてみやびやか。文事に長けて風流なり。晉書、文苑傳論「一一斯盛」＝風流。

【文巧】ブンカウ かざりいつはる（管子）

【文行忠信】ブンカウチュウシン 文藝・德行・忠誠・信を言はず、この四つは孔子の人を教へし道。論、述而「子以二四教一、――」

【文豪】ブンガウ 文章にすぐれたる人。宋名臣言行錄「眞一代之一一也」＝文雄・文傑・文宗。

【文格】ブンカク ○文章の品格。予頌文「翠論二前一一一」○文のきそく。＝文則・文體。

【文樂】ブンガク 文道の音樂。武樂の對。公羊傳「婦人無二武事一、備二一一一」

【文學】ブンガク ○學問の總稱。史、灌夫傳「不レ喜――、好二任俠一」＝學藝。○詩文・小說等に關する學問。○學問に關する官職、儒官（史、儒林傳）

【文甲】ブンカフ 琉球ライの異名。漢書、西域傳「明珠一一、通犀翠羽之珍」

【文給】ブンキフ はまぐり、文は殼にうつくしき小紫斑ある故。

【文輪】ブンリン かきもの、輪は雉。晉書、溫嶠傳「詔命一一亦悉採焉」＝文書・文詞。

【文義】ブンギ 文章の意味。南史、陸澄傳「澄レ易三年、不レ解二一一一」＝文意。

【文綺】ブンキ うつくしきかざり、あやもやう。吳志、華覈傳「美貌者、不レ待二一一一以崇レ好、醜姿者、不レ待二一一一以致レ愛」＝文繡。

【文蓁】ブンシン あやあるくつひも。楊維楨文「大聖之所レ履、豈減二美一一一」

【文魚】ブンギョ うつくしき模樣あるかめ。圖推「五曰二一一一」

【文禽】ブンキン あやある羽毛の鳥、山雞の異名。陸璣詩「一一藏二綠水一」

【文錦】ブンキン あやあるにしき。淮南子「管子一一也」＝文繡。

【文魚】ブンギョ あやあるうを。山海經「睢水其中多二一一一」

【文具】ブングヒ ○法文のみそなはる。漢書、酷吏傳「其體徒一一、亡二恻隱之

寶ニ〇國文房具、筆墨硯の類。

【文化】ブンクワ　〇學問進歩して文明の世となる。東晳文「一一內輯、武功外悠」〇刑罰威力を用ひずしてさとし導く、文德を以て感化する。說苑「凡武之興、爲ニ不ニ服也ニ一一不ニ改、然後加ニ誅」

【文化史】ブンクワシ　學問・藝術・政治・教育・風俗・經濟などを系統的に研究して社會の發達を明にする歷史。＝文明史。

【文火】ブンクワ　ぬるび。烈火を武火といふの對。釋皎然詩「一一香偏勝」

【文華】ブンクワ　文明の光。後漢書、班彪傳「敷ニ一一一以緯ニ國典ニ」

【文會】ブンクワイ　文學に關するあつまり。晉書、楊師道傳「一一之盛、當時莫ニ比」

【文穢】ブンクワイ　あやあるとばり。賈宏詩「一一曜ニ瓊扃ニ」

【文官】ブンクワン　文を以て仕ふる役人。武官の對。後漢書、禮儀志「立春遣ニ使者ニ齎ニ束帛ニ以賜ニ一一ニ」

【文藝】ブンゲイ　文學藝術。中論「謀德之士、一一必衆」

【文教】ブンケウ　文學のをしへ、文治を以て民を導く。晉、馬眞、撰ニ一一ニ」

【文樓】ブンケウ　ふれぶみ。晉書、劉超傳「專掌ニ一一ニ」

【文鷁】ブンゲキ　天子の遊樂に用ふるうつくしき舟。鷁は水鳥、其の象ヲを舡首に畫く。司馬相如、子虛賦「游ニ於清池ニ浮ニ一一ニ」＝龍舟。

【文憲】ブンケン　がくもんのみち、文學ののり。張靖文「多才之英、篤藝之彥、役ニ心精微、馳ニ此一一ニ」

【文獻學】ブンケンガク　民族の言語文學を研究して其の文明の性質を明にする學問。

【文獻不ニ足】ブンケンタラズ　文は典籍、獻は賢人、徵證すべき典籍と賢者とに乏しい論、爲政「子曰、夏禮吾能言ニ之、杞不ニ足ニ徵也、殷禮吾能言ニ之、宋不ニ足ニ徵也、——故也、足則吾能徵ニ之矣ニ」

【文狐】ブンコ　あやあるきつね。曹植文「曳ニ一一一掩ニ狡兎ニ」

【文庫】ブンコ　〇書物を納めおくくら。宋史、金履祥有ニ一一ニ藏ニ三司帳簿ニ」〇文書、筆紙などを入れる手箱。

【文語】ブンゴ　〇文字と、ことばと。論衡「故其一一與ニ俗不ニ通ニ」〇國文章に用ふることば。口語の對。

【文穀】ブンコク　あやあるちりめん。曹植文「輕ニ一一之華衣ニ」

【文采】ブンサイ　あやかざり、文章光彩。連文釋義「采爲ニ文之質ニ、文爲ニ采之飾ニ」＝文綵・文彩。

【文犀】ブンサイ　あやある角を有する犀イ後漢書、馬援傳「援征ニ交趾ニ、載ニ薏苡ニ還ニ、人以爲ニ明珠一一ニ」

【文綵】ブンサイ　あや。古詩「一一雙鴛鴦、裁爲ニ合歡被ニ」＝文采。

【文藻】ブンサウ　〇文章。唐書、裴矩傳「有ニ一一智數ニ」〇あやもやう。＝文綵。

【文札】ブンサツ　かきつけのふだ。

【文士】ブンシ　文學に長ずる人。韓詩外傳「君子宜ニ遊ニ三端ニ一一之雄端、武士之鋒端、辯士之舌端」

【文史】ブンシ　文章と歷史と。隋書、劉炫傳「敢ニ一一ニ以拾ニ紳、閭ニ魚魯ニ」以敖ニ儒」

【文事】ブンジ　文學のをしへ、學問上のことがら。書經、傳「武功成、一一修」【有ニ文事ニ者必有ニ武備ニ】ブンジアルモノハブビアリ　文學の事ある者は、必ず武藝のそなへがある、孔子の語。史、孔子世家「臣聞——、有ニ武事ニ者必有ニ文備ニ」

【文思】ブンシ　作文の思考。文を作るかんがへ。楊基詩「酒酣一一湧」

【文梓】ブンシ　木目うつくしきあづさ。史、優孟傳「以ニ雕玉ニ爲ニ棺、一一爲ニ槨ニ」

【文詞】ブンシ　文辭に同じ。

【文駟】ブンシ　うつくしき四頭立の馬。顏延之文「一一列ニ乎都廬ニ」

【文辭】ブンジ　文章のことば。史、孔子世家ニ＝文詞・文章。

【文德】ブンドク　あやのぬひとり。禮、月令「一一有ニ常ニ」

【文質彬彬】ブンシツヒンピン　あやと質とが適度に雜りて均しき貌。論、雍也「一一、然後君子」

【文集】ブンシフ　文章を集めたる書。古今原始「一一起ニ子虛武帝ニ」

【文人】ブンジン　〇文德ある人。書、文侯之命「追ニ孝于前一一ニ」〇文學ある人。典論「一一相輕、自ニ古而然ニ」

【文人相輕】ブンジンサウケイ　文章家は互に相輕んじあなどる。典論「一一、自ニ古而然ニ」

【文身】ブンシン　いれずみ（刺青）禮、王制「東方曰ニ夷、被ニ髮一一、有ニ不ニ火食ニ者ニ」

【文簀】ブンシン　作文上のいましめ、作文の心得。唐詩記事「李德裕嘗爲ニ一一ニ」

【文臣不ニ愛ニ錢】ブンシンフアイセズ　文臣は高潔にして金錢を愛惜せず。宋史、岳飛傳「或問ニ岳飛ニ天下何時太平、飛答曰、——、武臣不ニ惜ニ死、則天下平矣ニ」

【文昌】ブンシヤウ　北斗星の魁前に在る六つの星。五雜俎「俗以ニ魁故、祠ニ一一ニ以祈ニ科第ニ」

【文昭】ブンセウ　〇あや、かざり、もやう。史、禮書「刻鏤一一、所ニ以養ニ目也ニ」〇禮樂制度などの一國の文明を形成するもの。又、文德の完全にして美くしき德。論、泰伯「煥乎其有ニ一一ニ」〇文字をつらねて思想を表すもの。典論「一一經國之大業」

【文章四友】ブンシヤウシイウ　李嶠・崔融・蘇味道・杜審言（唐書、杜審言傳）

【文章宿老】ブンシヤウシユクラウ　文壇界の老先生。唐書「李嶠富ニ才思ニ、然其仕前與ニ王勃・楊炯・盧照隣ニ接、中與ニ崔融・蘇味道ニ

齊ノ名、晩諸人没、而為二――一時擧者取ノ法焉」

【文墨縄唱】ブンボクセウショウ　文の美にして類なき者の称。林玉露「太史公伯夷傳、蘇東坡赤壁賦、――也」

【文章一小技】イッセウ　文学は一小技。盛んに杜甫が激する所ありて作りし句なりといふ。杜甫詩「――、於レ道未レ為レ尊」

【文章経国之大業】ブンショウケイコクノタイギョウ　文学は国家ををさむる一大事業。典論「――、不朽之盛事、年壽有レ時而盡、樂樂止二於其身一、二者必至之常期、未レ若二文章之無一窮」

【文明】ブンメイ　知となしくしてよわし。世説、管輅「士雖為レ人、一一可レ愛」＝注略。

【文酒】ブンシュ　詩文を作り酒を飲む。清史、江蘇傳「優游閒放、見二一一古雄一」＝詩酒。

【文伯】ブンハク　文学に秀でる学者。晉書、儒林傳「遷二于孝武一為二祭酒一」

【文筆】ブンピツ　あやある印の紐。歴世宝物文「帶二一一而登一」

【文書】ブンショ　かきもの。公用書類。漢書、刑法志「一一盈二于几閣一」＝公牘。

【文章】ブンショウ　文章のしるし。礼記、序「一一詳悉、倫理備審」

【文飾】ブンショク　○おやかざり。宋史、滕元發傳「官無二一一一洞二見肝肺一」○あやまちを掩ひかざる。論史、孔穎傳「毎レ有二過事一、輒必曲為二一一」

【文場】ブンジョウ　○官吏を登用する試験場。又、文壇の義。劉孝綽文「藝府一一、詞人騁レ士」○文壇に同じ。

【文場元帥】ブンジョウゲンスイ　文壇の大将。事文類聚「唐張九齡第二詞入之冠一、又號二――一」

【文章家】ブンショウカ　文章の草稿を埋めしつか。

【文通】ブンツウ　圓おとづれ、たより。＝書信・書信・消息・通信。

【文典】ブンテン　文章に關する法則。＝文法。

【文不レ加レ點】ブンカテンス　一點の加筆すべきなし。文を作りて全く美なる義。摭言「李白在二翰林一、詔草二白蓮花序及宮詞二方大酺、中貴人以レ水沃レ之、稍醒索レ筆、一一」

【文天祥】ブンテンシャウ　字は宋瑞、文山と號す、宋末の忠臣、元兵と戰ひ、兵敗れて執へられ、屈せず、正氣歌を作りて志を見はし、遂に死に就く。

【文恬武嬉】ブンテンブキ　天下太平にして文武の官吏安逸嬉遊する義。韓愈、平淮西碑「相臣將臣、――」

【文同】ブンドウ　宋人、字は與可、墨竹及山水を善くす。

【文棟】ブントウ　文人なかまのかしら、文壇の棟梁。棟はむなぎ。鶺鴒文「平原兄弟、鄂為二一一」＝文宗。

【文徳】ブントク　學問の徳、文教の力。漢書、刑法志、「一一者帝王之利器」

【文賦】ブンフ　公務上のかきもの。通鑑詩

【文燄】ブンエン　南天燭の異名。

【文縁】ブンエン　あやあるおりもの。周禮、春官、玉府「金玉兵器一一」

【文政】ブンセイ　文治を主とするまつりごと。後漢書、南匈奴傳論「帝方獻二兵開一、修二一一一未二之許一也」＝文治。

【文聖】ブンセイ　文に巧なりとのほまれ。宋史、孔文仲傳「文仲與二弟武仲・平仲一、皆以二一一一一起、江西時號二三孔一」＝文學・文名。

【文石】ブンセキ　あやあるいし、石の文理あるもの。山海經「譽諸之山、其陽多レ金、其陰多二一一一」

【文籍】ブンセキ　書物。孔安國、偽書序「遍二書契一、以代二結繩之政一、由レ是一一生焉」

【文帝】ブンテイ　漢ノ高祖ノ第四子、名ハ恒。孝悌儉素ヲ以テ治ム。

【文徳皇后】ブントクコウゴウ　唐ノ太宗ノ后、長孫氏。

【文選】ブンセン　圓もんぜん。わつじひろひ、活版所にて活版を組立てる爲めに活字をよせあつめる者。

【文宣王】ブンセンワウ　孔子のおくりな。唐の玄宗開元二十七年八月、孔子を先聖と稱し、追諡して――といふ。

【文楼】ブンロウ　うつくしきあやあるたるき。七略、彤軒繡柱、一一華梁」

【文祖】ブンソ　陶冶の始祖。書、舜典、注「――者堯始祖之廟」

【文祖】ブンソ　學問に長ずとも、之を實行せざれば、一震の錢にも及ばず。後漢書、趙壹傳「河清不レ可レ俟、人命不レ可レ延、順風激二揚聲一、富貴者稱レ貴、――、伊盛北堂上、抗顔倚二門邊一」

【文体】ブンタイ　文章のすがた、文の體裁。隋書、經籍志「一一三變、邪正或殊」

【文旦】ブンタン　柚の別種。漳州府志「柚最佳者曰二一一一」＝香櫞。

【文談】ブンダン　文章に關するはなし。＝文話。

【文壇】ブンダン　文學上の社會。＝文苑・文林・文園・文場。

【文治】ブンチ　文を以てをさめる。杜牧詩「朝廷用二一一大開二官職場一」

【文致】ブンチ　○かざる。漢書「一一二太平一」＝文飾・潤色。○法律を弄びて人を罪するの義。漢書、武帝紀「――欺レ罔之法、悉蠲除」

【文陣】ブンジン　文學上の社會。戰場の陣だてに比していふ。玉堂遺事「張九齡為二一一雄帥一」＝文壇・文場。

【文陣雄帥】ブンジンユウスイ　文章の大家。唐書、畫廻傳「張九齡嘗贈二廻文卷一謂二同列一曰、蘇生之後、斯無レ敵、眞……――也」＝文場元帥。

「――日完繕、民力無疲塲」‖公牘。

【文馬】ブン　うつくしく飾れるうま。史、宋世家「兵車百乘　――四百匹」

【文房】ブン　○文書を作るへや。南史、江革傳「――之職、機命是委」○讀書のへや。杜牧詩「形弓掛二武庫一、金印泥二――一」

【文如二春首一】ブンハシュンシュ　文詞のはなやかなる譬。曹植文「――、思若二湧泉一」

【文起二八代之衰一】ブンハハダイノスイヲオコス　蘇軾の潮州韓文公廟碑中の語、韓愈が古文に復古せし功を稱していふ。八代とは、東漢・魏・晉・宋・齊・梁・陳・隋。

【文法】ブン　○法律規則。漢書、雋方進傳「知能有レ餘、倹通二――一吏事一」○文章の規則。‖文典。

【文法吏】ブンポフリ　法律に通ずる吏。漢書、元帝紀「宣帝所レ用多二――一、以二刑名一稱レ下」

【文綵】ブンサイ　文章のてほん。

【文者貫レ道之器也】ブンハカンダウノキナリ　文章は道を載せて、千載につらぬくうつは（李漢、韓昌公文集序）

【文皮】ブン　あやあるかは。虎豹の皮。淮南子「東北方之美者、有二斥山之一――一焉」

【文備】ブンビ　學問上の用意。史、孔子世家「有二武事一者、必有二――一」

【文憑】ブンピョウ　證書をいふ。文書の憑證たる者。

【文武兼備】ブンブケンビ　文と武とを兼ね備へる。唐書、裴行儉傳「行儉提二孤軍一、深入二萬里一、兵不レ血レ刃、而振二黨金一夷、可レ謂二――一矣」

【文物】ブンブツ　文化に關する、禮樂典章など。李白詩「朝野盛二――一、衣冠何翩翩」

【文武之勵】ブンブノレイ　文と武とのいましめ。蔡邕文「昭二公――一焉」

【文武兩道】ブンブリャウダウ　文と武との二道。李義山集「資二忠孝之兩全一、則忠可レ移レ孝、正二文武之二道一、則武可レ輔レ文」

【文柄】ブンペイ　文學上、又は文治上の權力。韓愈詩「相府執二――一」

【文豹】ブンペウ　まだらのあやある豹。後漢書、滅國傳「國多二――一」

【文廟】ブンベウ　孔子廟。明永樂八年、先師廟を改稱して――と爲す。

【文辭】ブンジ　文章と辭說と。淮南子「治レ國有レ理、不レ在二――一」

【文紙】ブンシ　紙の異名。

【文囿】ブンイウ　文學をまなぶところ。又、文學の社會。騷經王逸「馳二――一以遊レ魂」‖文囿・文苑・文林。

【文簀】ブンサク　かきもの、ちらめん。晉書「――盈積、斷決如レ流」

【文墨】ブンボク　○詩文書畫などのわざ（史、蕭相國世家）‖文筆。○證書など（史記、杜周傳「並起二――一小吏一」

【文囹】ブンレイ　おきて、罔は網に同じ、法繩なり。史、游俠傳「雖三時扞二當世之一――一、然其私義廉潔退讓、有二足レ稱者一」‖文網・法網。

【文網】ブンマウ　前條に同じ。

【文脈】ブンミャク　文章上のすぢみち。‖文理。

【文無害】ブンムガイ　刑法を濫用して人を害する所なき義。文は刑法。史、蕭相國世家「以二――一、爲二沛主吏掾一」

【文名】ブンメイ　文學に同じ。

【文明】ブンメイ　○あやありてあきらか、人文が十分に發達して光明ある義。易、文言「見龍在レ田、天下――」○文德の輝ける義。書、舜典「濬哲――」

【文明史】ブンメイシ　文化史に同じ。

【文命】ブンメイ　天子の文德の敎命。書、大禹謨「――敷二于四海一」

【文面】ブンメン　○かほにいれずみする「唐書、南蠻傳」○國手紙のおもて。

【文野】ブンヤ　世のひらけると、ひらけぬと、文明と野蠻と。

【文雄】ブンユウ　文章にひいでたる人。唐明皇文「有レ典有レ則、是爲二――一」‖文宗・文豪。

【文藝】ブンエイ　文に巧なるほまれ。宋史、陳宜中傳「少甚貧、而性特俊拔、既入二大學一、有二――一」‖文名・文墨。

【文綵】ブンサイ　ほらがひ。殺にあや模樣がある故。唐書、四域傳「瑪瑙――石班」

【文吏】ブンリ　○文官をいふ。武官の對。後漢書、光武紀「帝退二功臣一而進二――一、戢弓矢而散二馬牛一」○主として法律を司る官吏。漢書、何武傳「武疾二朋黨一、問二――一必於二儒者一、儒者必於二――一、以相參穀」

【文理】ブンリ　文脈に同じ。

【文林】ブンリン　○文學者のなかま。‖文境。○詩文をあつめたるもの。

【文綾】ブンリョウ　あやぎぬ。唐書、地理志「河南府河南郡、土貢二――一、絞綾綿藥」‖文綵。

【文綵】ブンレン　あやあるねりぎぬ。禮知之詩「平砧搗二――一」

【文話】ブンワ　文章に關するはなし。‖文談。

【文王之囿】ブンワウノイウ　周の文王の動物を畜へる園。孟、梁惠王「――、方七十里」

【文字】ブンジ　○文と字と。說文序「依レ類象レ形謂二之文一、形聲相益謂二之字一、著二於竹帛一謂二之書一」○文章、章句「不朽の大――」

【文字飮】モジノミ　詩文などを作りながら酒をのむ。韓愈詩「不レ解二――一、惟能醉二紅裙一」

【文字交】モジノマジハリ　詩文などの交。宋史、龍遊傳「范成大帥レ蜀、游爲二參議官一、以二文字一交、不レ拘二禮法一」

【文殊】モンジュ　圓妙吉祥と譯す。曼殊師利ともいふ。明かに佛性を見て法身・般若・解脫の三德を具足し、不可思議の智慧を具す。放鉢經「――乃佛

道中父母也」

【文選個秀才牛】ブンセンコノシウサイノギウ　宋代科擧の士、競ひて四六駢儷の文を學び、皆文選を誦せり、故に文選に爛熟せば試驗に及第し、秀才となるべき資格の半分を得たりとの戯。老學庵筆記「國初尚二文選一、當時文人專相授習、故草必稱二王孫一、梅必稱二壽使一、月必稱二皎夜一、山水必稱二清暉一、至二慶曆後一、惡二其陳腐一、語作者始一二洗之一、方二其盛時一、士子至爲二之語曰一ニ一、鑑炎以來、尚二蘇氏文一、學者翕然從レ之、而知二士元盛一、亦有レ語曰、蘇文熟、喫二羊肉一、蘇文生、喫二菜羹一」

【文含】ブンガン　圓あきめくら、無學の者。

【文月】フヅキ　圓陰暦七月の異稱。

三畫

【孑】ケツ　學子部十一畫）の俗字。

四畫

【斉】セイ　齊（部首十四畫）の略字。

六畫

【斎】サイ　齋（齊部三畫）の略字。

七畫

【斌】ヒン　[眞]彬に通ず　文と質とが程よく調和する。【斌斌】ヒンピン　文と質と相雜りて均しき貌。禮、王制、注「竝行一一然」＝彬彬。

八畫

【斑】ハン　[刪]　○まだら、ぶち。種種の色がまざりし模様（雜色、駁文）○轉じて總體中の一部分「一一」【斑衣】ハンイ　あやもやうのある派手やかなきもの。蒙求「老萊一一」＝斑爛之衣。【斑鳩】ハンキウ　小鳥の一、いかるか、しめより稍大、背黃色、頭黑し、一名まめはし。＝鵤・桑鳲。【斑石】ハンセキ　滑石の異名。【斑爛蝦】ハンランカ　くるまえびの異名。【斑然】ハンゼン　まだらなる貌。禮弓「狸首之一一」【斑竹】ハンチク　まだらの紋ある竹。唐書、地理志「嶺南雷州、土貢二一一一」【斑秃】ハントク　頭髪がまだらにはげる。唐書、吳烏后傳「順宗在二東宮一、李林甫陰構二不測一、太子內憂嬪嬖一一」【斑白】ハンパク　白髪まじりの老人。一說、斑は班の誤。禮、王制「下一之者、不二提挈一」＝頒白（孟、梁惠王）【斑駁】ハンバク　種種の色彩の雜れる貌。後漢書、五行志「五色大鳥、見二于新城一、衆鳥隨レ之、時以爲二鳳皇一、衆鳥之性、見二非常一一、好聚二觀之一」【斑斑】ハンパン　まだらなる貌。李白詩「挑レ燈夜一一」【斑文】ハンブン　虎豹などの皮のまだら。上林賦「被二一一一、跨二野馬一」＝斑紋。【斑猫】ハンミョウ　蟲の名、體一寸許、灰黑色にして赤や青又は黑の斑點あり、みちしるべ。＝斑蝥、斑猫。【斑紋】ハンモン　斑文に同じ。【斑枝花】ハンシクワ　熱帶地方の植物の一、果實は桃に似、中にわたの如き者をふくむ、採りて木棉の代用とす。【斑鳩】ハンキウ　あやある貌、まだらにて美くしの高士傳「老萊子孝二養二親一、行年七十（中略）身著二五色一一之衣一」＝嫣爛・嫣斑。

【斐】ヒ　[尾]　○あやある貌。あやありてうるはし。大學「有一君子一匪に通ず。○うるはし（美）【斐然】ヒゼン　あやある貌。論、公冶長「狂簡一一成レ章、不レ知レ所二以裁一之」＝斐如・斐爾・斐斐。【斐斐】ヒヒ　文采ありある貌。楊載文「藻飾辭理、一一有レ光」＝斐尾。【斐裡】ヒリ　文采ある貌。孫綽賦「彤雲一一以異レ幟」【斐文】ヒブン　うつくしきあや。王融文「不レ器二其德一、有二斐斯文一」

九畫

【斕】ハン　[刪]　まだら、色雜にして純ならず。【斕斑】ハンハン　まだらにて美くし。拾遺記「有二一一自然雲霞龍鳳之狀一」＝斑斕・斕爛。

十七畫

【爛】ラン　[刪]　斕一はまだら（雜色）又文采ある貌。蘇軾詩「曉得渓石青一斑」＝斑爛。

斗　部

【斗】トウ　[有]　通音ト　○ますめ（量目名）とます、十升ます。○ます、量器の總稱。史、李斯傳「平一斛度量」○少しの量。沈佺期詩「筍一愧相貽」○ひしゃく、酒を酌む器物「玉一」○南北に在る星宿の名「南一」「北一」○たちまち（忽）韓愈詩「一覺霜毛一半加」○ますの隅の如くかどだちて鋭き狀「一入」○どら。○ひつき（二十八宿の一）○科一はおた

まじゃくし（蝦蟆子）○蚪ーはひのし。○刁ーはどら。

【斗栱】ケウ　ますかき。⇒栱。

【斗格】カク　ますかき、とかき。⇒概。

【斗覺】カク　たちまちおぼゆ。韓愈詩「哈二君詩一罷看二雙鬢一ー一霜毛一半加」

【斗宿】シュク　二十八宿中の斗星と箕星と。

【斗牛】ギウ　北斗星と牽牛星と。晉書、張華傳「初吳之未レ滅也、ーー之間、常有二紫氣一」赤壁賦「徘二徊於ーー之間一」

【斗栱】キョウ　柱上のますがた、梁棟を挟持する所以の者「爾雅」⇒枓栱。

【斗漏】ロウ　時計、もと漏の形を作りて時刻をしらしめたるに起る。

【斗斛】コク　量の名、ます。斛は十斗。管子「衡石也ーー也」

【斗筲】ショウ　㊀斗は一斗ます、筲は一斗二升を入れる竹器。○轉じて人の器量の小なるにいふ。論語「ーー之人、何足レ算也」

【斗室】シツ　一斗ます程の（や、極めてせまきをいふ。黃庭堅詩「ーー何來狗脚蚊、脛如二雷霆一聚如レ蜜」

【斗升活】トショウクワツ　少しばかりの恵に命がたすかる。莊、外物「我東海之波臣也、君豈有二斗升之水一而活レ我哉」

【斗酒】シュ　一斗のさけ。世說、言語「戴仲若（名は顒）春日攜二雙柑ーー一、人問二何之一、答曰往聽二黃鸝聲一、此俗耳絶俗、詩膠鼓吹」

【斗出】シュツ　突き出る。

【斗稱】ショウ　ますと、はかりと。淮南子「令二官市一同二度量一、約二衡石一、角ーー一、縄二權謀一」

【斗筲】ショウ　けはしくそばだつ。水經、注「二陵爭レ高、ーー相亂」

【斗食】ショク　一日に一斗餘を受けて之を食む少祿の者、賤吏の稱。戰國策「邑中自ーーー以上、至二尉内史及王左右一」

【斗絶】トツ　山勢ますの隅の如く急に角だちて突き入る。斗入を見よ。

【斗折蛇行】トセツダカウ　北斗星の折れ曲れる如く、蛇のうねり行く如き狀。柳宗元、小石潭記「潭西南而望、ーー、明滅可レ見」

【斗藪】トソウ　さっぱりとはらふ。皮日休詩「百緣ーー無二塵土一」⇒抖擻。

【斗大】ダイ　一斗ますほどの大いさ。蜀志、姜維傳、注「維死時見レ剖、膽如ーーー」晉書、周顗傳「取二金印如ーーー」

【斗膽】タン　一斗ます程の大いなるも、廣き度胸。胡曾文「推二窮寇之心一、負二姜維之ーーー」斗大を見よ。

【斗帳】トチヤウ　ちひさきとばり。韓名「小帳曰ーーー」

【斗儲】トチヨ　すこしのたくはへ。左思詩「內顧無ーーー」

【斗刁】トテウ　どら。蘇軾文「弓箸ーーー」⇒刁斗。

【斗柄】ヘイ　十升を盛る器。史、商君傳「平ーー權衡丈尺一行レ之」

【斗南一人】トナンイチジン　北斗星以南の第一人の義。唐書、狄仁傑傳「關仁基曰、狄公之賢、北斗以南一人而已矣」⇒天下一人。

【斗入】トニフ　とますの曲れる如く、かどだちて入る。史、封禪書「成山ーー海」注「謂二斗絶曲入レ海」

【斗米】トベイ　一斗のこめ。史、廉頗藺相如傳「一飯、ーー肉十斤」

【斗柄】トヘイ　北斗星の杓子形の柄に當る星、即ち第五より第七に至る三星。鶡冠子「ーー指レ東、而天下知レ春」⇒斗杓。

【斗杓】トヒヤウ　斗柄に同じ「晉書、天文志」

【斗量】トリヤウ　○斗ますにてはかる。○轉じて斗升にて量る程多くあるの義。吳志、吳主傳「孫權遣二趙咨一使レ魏」注「咨博聞多識、應對辯捷、魏文帝善レ之曰、吳如二大夫一者幾人、咨曰、聰明特逈者八九十人、如二臣之比一、車載ーー、不レ可二勝數一」

【斗糧】トリヤウ　わづかの兵粮。戰國策「不レ費ーーー、不レ煩二兵一」

【斗祿】トロク　すこしのふち。歐陽修詩「試問塵埃勤ーーー」

【料】レウ　六畫　斗部

○はかる（量）○かんがへはかる（度）おしはかる（推測）史、李斯傳「君侯自ーー、能孰與蒙恬」○かず、かぞふ（數）升目を數へはかる。○はかり、ますめ。史、孔子世家「嘗爲季氏史、ーー量平」○をさむ（理）○なでる（待）莊、盜跖「ーー虎頭」編「虎須」○小さきふりつづみ（小鼓）○しろ、たね（材質）「資ー」「材ー」○てあて、あてがひ（給與品）「給ー」「食ー」

同訓異義　料・計・謀・圖・量・度・稱・揆・測等の別は計（言部二畫）の條を見よ。

【料峭】セウ　はかりえらぶ。韓愈詩「歸驌恣ーー」⇒料簡。

【料簡】レンケン　○はかりえらぶ。蘇軾文「沙二汰虛完一ーー負責一」⇒料揀・料檢。○かんがへ、意見、又は宿怨の義。⇒了簡。

【料峭】セウ　春風の寒き貌。蘇軾詩「漸覺東風ーー寒」

【料度】タク　はかりかんがへる。⇒忖度。

【料地】チ　使用に供する土地「御ーー」

【料得】トク　おしはかる。杜甫詩「蒸天變化誰ーー」

【料理】リ　○事をはかりをさめる、きりもりする。晉書、王敦之傳「相神

清曰、卿在ル府日久、比當二相一一」○國食物をにたきする、劇烹。又、其の食品。

【料量】リャウ ますにてはかる、ますめ。轉じて會計の義。史、孔子世家「嘗爲二季氏吏一一一平」

【料力】リャクリキ ちからをはかる。史、仲尼弟子傳「句踐頭首再拜曰、孤皆不レ一レ、以與レ吳戰、國於會稽、流入二于骨髓一」

【斛】 コク 国 十画

○量目の名、斗の十倍(一石)○はかる、ますめ。史、李斯傳「平二斗一度量一」○石に同じ。木一は竝に槃の名。

【斜】 ㊀シャ ㊁ヤ 通 十画

㊀ななめ、はすかひ「橫一」○かたむく、さか「傾一」○正しからず。○よこさま(嶺)陸游詩「日淡風一江上路」○狹一は花柳の巷、いろざと。古樂府「長安有二狹一道狹不レ容レ車」㊁谷の名、陝西省漢中府に在る、終南山の谷。西口を褒、東口を一といふ「褒一」○圖ななめならずと打ち消しに用ひておほかたならず、甚だしき義とす。

【斜雨】シャウ ななめにふるあめ、はすかひにふる雨。林逋詩「細風一不レ堪レ聽」

【斜影】シャエイ ななめなるかげ。王僧孺詩「翠枝結二一絲水散二圓文一」

【斜簟】シャテン ななめにまつはる。梁簡文帝詩「北窗向二朝鏡一、錦帳復一一」

【斜漢】シャカン 天の河。謝朓詩「玉繩隱二高樹一一一駐二層巒一」

【斜倚】シャイ ななめにかたむく。杜甫詩「舟楫任二一一一」‖傾倚・傾斜。

【斜暉】シャキ ゆふ日のひかり。徐陵詩「岸烟起二黃色一、岸水帶二一一一」‖晩暉・夕暉・斜照・斜曛。

【斜曛】シャクン ななめにうかがふ。向子諲詩「一一秋水上、秋色茶蘼近」

【斜照】シャセウ ななめによる。

【斜暉】シャキ 斜暉に同じ、暉はいりひ。‖夕暉。

【斜貫】シャクワン ななめにうがつ。北戸錄「一一一一一溪」

【斜徑】シャケイ ななめなるこみち。元行恭詩「草深一一沒、水繞曲連空」

【斜傾】シャケイ ななめにかたぶく。温庭筠詩「千巖高絶壁二側傾一海水一一四二武關一」‖傾斜。

【斜月】シャゲツ ななめにかたむくつき。子夜歌「流風開レ窗牖、一一垂光照」

【斜巷】シャカウ いろざと、狹斜の巷の略。長安の大道の裏なるななめにせまき遊里より出づ。‖遊里・遊郭。

【斜插】シャサウ ななめにさしはさむ。白居易詩「水邊一一一漁平」

【斜視】シャシ ○ななめに見る。何遜文「托二一一于遺簪一」○やぶにらみ「一一眼」‖斜眼。

【斜日】シャジツ ゆふひ。盛世南詩「綠野四二一一、青山淡二晩煙一」‖夕日・夕陽・斜陽・斜照・斜暉。

【斜簪】シャシン ななめにさしたるかんざし。沈約詩「一一映二秋水一、開レ鏡比二春妝一」

【斜斜】シャシャ ○正しからざる貌。杜牧詩「整整復一一、隔レ旗疎二晩沙一」○雨雪などのよこにふる貌。劉克莊詩「鱗風翻細雨一一」

【斜竪】シャジュ ななめに立つ。梁簡文帝文「石磴危橫、崖隙一一」

【斜睨】シャゲイ ななめに見る。劉岐詩「前部若龍門、一一白馬館」‖斜窺・斜視。

【斜對】シャタイ ななめに相向ふ。

【斜盞】シャサン ななめにそびゆる孫綽詩「接高一一酒旗風」

【斜上石】シャジャウセキ 斜柱狀をなして多量に雨雪を含める長石。‖晉建長石。

【斜紋】シャモン よこ目にちりとみる。漢典「倚二銀牙一一一」

【斜封】シャフウ ななめにふうじる。唐代、讒謗によりて官に除する時の辭令書に用ふる。唐書、邊鎬「中宗時、韋后及太平安樂公主幷用レ事、於二側門一降二斜敕一一一授レ官、鎬二一

【斝】 カ 俗字 十画

【斟】 シン 寒 十画

○くむ(勺)くみとる(酌取)「一一酒」「共一」「淺一」○ます(盃)○はかる(計)○物事をほどよくはかる「一酌」

同訓異語 斟酌・酌酒・挹の別は汲(水部四畫)の條を見よ。

【斟酌】シンシャク ためらひ、うたがふ(遲疑)後漢書、馬援傳「志一一而不レ濟」

【斟酌】シンシャク くみはかる、事を量りて理に中るる、又、取りて行ふ。周語

「委艾條之、而後王――焉」＝参照。

十　畫

【斡】カク　㊇

はかる(量)＝角・較。

【斡】㊀ヲツ　㊁クツ　㊂アツ　㊀㊁の通音

㊀しゃくのえ(鑿柄)○車の轂。○めぐる。めぐらす(轉・旋)㊁つかさどる(主領)漢書「在縣官」幹に通ず。

【斡運】めぐり行く。張華詩「大儀――」＝旋轉運行。

【斡旋】めぐる。めぐらす。轉圓の機。事を程よくとりもつ。蘇軾、祭二司馬温公一文「一二卿士、代レ天――、萃梦如レ絲、衆比如レ櫛、治亂之機、間不レ容レ髮」＝周旋。

【斡流】めぐりながれる。賈誼賦「――而還兮、或推而遠」幹は轉。

斤部

【斤】キン　㊈

○はかり(權・輕重之器)○めかたの稱、十六兩。○まさかり、大をの。孟、梁惠王「斧――以時入二山林一」○きる、木を斫る(斫)○――はあきらか(明察)又、いつくしみ(仁)○國めかたの稱、普通は百六十匁、肉類等は百二十匁。

【運レ斤成レ風】極めて巧妙なる工匠の形容。莊、徐無鬼「郢人堊漫其鼻端若二蠅翼一、使二匠石斲一レ之、匠石――、聽而斲之、盡レ堊而鼻不レ傷、郢人立不レ失レ容」

【斤斤】○あきらかに察する貌。斤は昕の假借字。詩、周頌「自二彼成康一、奄二有四方一」――其明」○つつしむ貌。後漢書、吳漢傳「――謹慎」○細意を細事に注く貌。――較量」

【斤斲】きる、けづる。歐陽修詩「昨日丁丁斤且斲、今朝朱櫚橫二梁棟一」

【斤斗】とんぼがへり。○筋斗。

【斤斧】まさかり。淮南子「草木不レ落、――不レ得レ入二山林一」＝斧斤。

【斤量】○はかりにてめかたをはかる。又、其のはかり(衡)○りゃうめ、目方。

【斥】㊀セキ　㊁タク　㊂タク　㊀㊁㊂の通音

㊀しりぞく(屏・卻)おふ(逐)○おしのける、とほざく(遠)「排ー」○はかる(度)○あらはる(見)「充ー」○さす、ゆびさす(指)○ひらく(開)○ひろげる(廣)「ー土」○うかがふ(候)ものみ。○のぞむ(望)○ひがた、鹽氣ある地(鹹地)「ー鹵」「廣ー」○ちひさき澤。○きし(崖)○ー蠖は屈蟲＝尺蠖。㊁さく(裂)＝坼(土部五畫)㊂揮ー――はほしいまま(放縱)莊、田子方「揮ー八極」

同訓異字　斥・退・屏・卻・黜・遠・貶の別は退(辵部六畫)の條を見よ。

【斥鷃】小鳥の名。斥は澤、鷃は文のなきうづら。莊、逍遙遊

【斥鹵】しりぞけすつ。韓愈詩「――奠レ吾居」

【斥騎】ものみの騎兵。

【斥逐】しりぞけはなつ。韓愈文「――浮華、鮮二此綸紼一」

【斥逖】しりぞけ貴める。後漢書、李固傳「黃門宦者、一皆――」

【斥候】ものみ、戰情を探偵する兵。左、襄十一「納二――一、禁二侵掠一」＝斥兵。

【斥賣】しりぞけられて遠方に流される。漢史、耶律石柳傳「柳上書曰、臣前爲二姦臣一所レ陷、――遠郡」

【斥逐】しりぞけおふ。史、始皇紀論「聖主レ――、非レ私二其利一」

【斥地】土地を開拓する。鹽鐵論「聖主レ――、非レ私二其利一」

【斥絕】しりぞけて交をたつ。史、天官書「君臣――不レ知」

【斥退】しりぞける。後漢書、伏湛傳「微過――、久不二復用一」

【斥候】しりぞけおふ。史、始皇紀「西北――匈奴」

【斥黜】しりぞける(後漢書、陳蕃傳)＝斥棄。

【斥賣】品物をしりぞけ賣る。史、貨殖傳「畜牧及レ衆、――求二奇珍物一、間二獻戎王一」開獻は私獻。

【斥罷】退け廢する。漢書、名宦臣傳「輒――之」

【斥兵】ものみの兵。史、白起傳「犯二我――一」

【斥鹵】しほ氣ある不毛の地。鹹地の東方なるを斥、西方なるを鹵。史、夏本紀「海濱廣潟、厥田――」

【斯】シ　サ　㊇

○なの、柄をさす孔の、方形なるをの。詩、豳風「取二彼斧一―」○そこなふ(戕)

【斧】フ　㊆

○をの、よき、まさかり、木を伐る具ニ一斤」「巨ー」「樵ー」○兵器ー鉞」○きる(斫)をのにて物をきる「ー其吭」

【斧扆】フ 屏風の赤地に柄のなき斧を畫がけるもの、天子の背後に立てて南面し、以て諸侯に對す。斧は威を示す、柄なきは設けて用ひざる義。前漢「天子負ニ扆而立」注「天子ー、南鄉而立」=斧依。

【斧鉞】フエツ ○をのと、まさかりと、金斧と黄鉞と。逸文探玄「賊爲レ斧、殺爲レ鉞、斧小ニ于鉞ー鉞大ニ于斧」○傳じて、重刑の義。國語、注「ー大刑也」○天子が出征の大將に授くる刑具。=鉄鉞。

【斧柯】カ をののえ。六韜「兩葉不レ去、將ニ困ニーー一」=斧柄。

【斧斤】フキン をの、まさかり。孟、梁惠王「ーー以レ時入ニ山林一、材木不レ可ニ勝用一也」=斤斧。

【斧鉞】フエツ 重刑の名、斬罪と、かまにて煮られるとの。徐陵文「甘從ニーー」

【斧藻】フサウ けづりかざる、修飾する義。法言「吾未レ見ニ好レ辭ー一其繪ニ若レ一ー一其藻ニ者ー也」

【斧鑿痕】フサクコン 詩文書畫に彫琢(チヨウタク)のあとあるをいふ。鑿はのみ、小刀細工のあと。韓愈詩「徒觀ニ——」宣和畫譜「遠鶯長ニ于花鳥、精ニ于設色ニ、如ニ其工之無ニ斧鑿之痕ー」

【斧質】フシツ 斧は刑具、質は鑕(チ)古、罪人を斬るには鑕上に加(斧にて之を斬るの史、間相如傳「廉頗肉袒伏ニーー」=斧鑕。

【伏斧質】フクフシツニ 斬罪に處せらるをいふ。前條參看。

【斧鑕之刑】フシツノケイ 死刑をいふ。鑕は質に同じ。元稹文「——坐追、椎鬲之氣外論」

【斧政】フセイ そのにてただす、人に詩文の添削を乞ふ謙辭。=斧正・郢政。

【斧斲】フタク 畫家の用語、石のしわを畫くに斧にてきたるあとの如き筆を用ふるもの。顧古錄「皴法、董源麻皮皴、范寬雨點皴、李將軍小ーー皴、李唐大ーー皴、云云」

【斧木】フボク けづりたるままの木。南史、劉善明傳「善明身長七尺九寸、質素不レ好ニ靡色ー所レ居茅齋ーー而已」

【揭レ斧入レ淵】ケイフクニイル 物を用ふるに其の所を得ざるに喩ふ。淮南子「以ニ其所ー修、而游ニ不用之鄉ー、猶ニ樹ニ荷山上ー、畜ニ火井中ー、操レ鈞上レ山、揭レ斧入レ淵」

五畫

【斫】シヤク 俗 又、斵に作る

○きる「刀ー」「ー木」「ー營」「ー斬」○うつ(擊)

同訓異字 斫・斬・斷等の別は斬(次項)を見よ。

【斫營】シヤクエイ 敵營中にきりこむ。吳志、甘寧傳「愛レ勳、出斫ニ敵前營ー」

【斫膾】シヤククワイ なますをつくる。傳毅臣詩「冷氣射ニ屋汗收レ顏、便數ニーー傾ニ大白ー」

【斫斬】シヤクザン きる、刀にてきる。枚乘文「ーー以爲レ琴」=斬斫。

【斫刺】シヤクシ きりころす。後漢書、戚洪傳「何罪復見ニーー」=斫斬。

【斫水】シヤクスイ 刀にて水をきる。能はざるに喩ふ。韋應物詩「持レ案捕レ風幾時得、將レ刀ーー幾時斷」

【斫脍鏤】シヤククワイルヒカリ きると、うつと。列子「入レ火不レ熱、ーー無ニ傷痛ー」

【斫斷】シヤクダン きりたつ。四庫雜記「在レ船者ニーー其綫ー」

七畫

【斬】(一)ヤン 俗 (二)サン 通 ザン

(一)きる(截)きりはなす「ー首」「ー一(截)○つく(斲)たつ(絕)孟、離婁「君子之澤、五世而ー」○きりころす「ー殺」「ー擒ー」○喪服「ー衰」○ーー新は極めて新しき義。(二)かる(芟)

同訓異字 斬・斫・斷・截・鏨・切・伐

○斬は人を斬殺するなり、轉じて何物にても、斬りはなすに用ふ。礎記「爲ニ室屋ー不レ斬ニ於邸木ー」○斫は斬に略ニ同じ、ひといきに、きりおとす義、斫レ首・斫ニ竹木ー一の類。○剪はそろへてきるなり、はさみを用ひてきるなり、はさみを用刀といふ、剪は俗字。○截はたつ也も訓む、寸寸に斷ちきるなり。○鏨はきりにてもみ込むなり。孟子「鏨レ燧改レ火」○切は刀にて刻みきるなり、雁而切レ之爲レ論とは、さしみ庖刀にて、さしみをつくることをいふ、論はさしみなり。○伐は斬り倒すこと。詩經「伐木丁丁」

【斬刈之哀】ザンガイノ 喪中のかなしみ。禮、雜記「三年之喪如レ斬、期之喪如レ剡」刻も斬。

【斬刈】ザンガイ ○草木をかる。周禮「山野草萊、錦鎌ーー、乃戒ニ道路ー也」○きりころす。金史、移剌敢傳「整レ兵奮擊、ーー其衆」=斬刈。

【斬奸】ザンカン わるものをきる、奸惡を斬り殺す。

【斬奸狀】ザンカンジヤウ 次條に同じ。

【斬姦狀】ザンカンジヤウ 惡人をころす趣意を認めしかきつけ。=斬奸狀。

【斬級】ザンキフ 敵のからべをきる、級は首級。宋史、徽宗紀「西邊用レ兵、能招ニ納羌人ー者、與ニーー一同レ賞」

【斬戮】ザンリク 敵人のくびをきる。陸游文「被レ堅執レ銳提レ戈ーー」=斬首。

【斬決】ザンケツ きりやぶる。揚雄、博士箴「秦作ニ無道ー一ニ天紀ー」

【斬衰】ザンサイ 喪服の最も重きもの、下邊

を截ちしままにて縄ツめ縫はざるを斬といふ。喪は愛に對して上衣をいふ。礼記「一一括レ髪以レ麻」縄め縫ふを斉衰シといふ。

【斬罪】ザン　髪をかる、ざんぎり。

【斬】【断】ダン　断（斤部十四画）の俗字。

八画

【斬】サク　シ、ク　第　斜　剤（刀部八画）に同じ。

○きる（斬）＝析。○たつ（断）○けづる（削）

【新】シ　支　刻（刀部八画）に同じ。

【斯】○この。論、雍也「一人而有二一疾一也」これ、代名詞。論、公冶長「一焉取レ一」ここ。論、子罕「有レ美玉於一」かく（此）○すなはち（即）論、公冶長「再一可矣」○さく（析）詩、陳風「斧以レ之」○あざやか（鮮）しろし（白）○いやし（賤）○無意味の助字。詩、召南「翬一羽」説説号」○一須はしばらく、又俄頃の義。

【斯道】シダウ　○仁義の道、聖人の道。論、雍也「子曰、誰能出不レ由レ戸、何莫レ由二一一一也」○轉じて、各自が其の奉ずる道、又技藝。

【斯文】シブン　この學、この道。論、子罕「天之将レ喪二一一一也、後死者不レ得レ與二於一一一也」＝斯道。

【斯民】シミン　このたみ。孟、滕章「子将レ以二斯道一覚中一一上也」

【斯人而有二斯疾一】コノヒトニシテコノヤマヒアリ　深く其の病に罹りしを惜むにいふ。論、雍也「伯牛レ疾、子問レ之、自レ牖執二其手一曰、亡レ之命矣夫、斯人也而有二斯疾一也、斯人也而有二斯疾一也」

【斯須】シシュ　しばらく。礼、祭義「礼楽不レ可二一一去一身」＝須臾・俄頃・暫時。

【斯界】シカイ　圏この道の社会。

【斯学】シガク　○あらたに倡へ出したる學説。文心雕龍「一一之說則謬而失レ正」○初學をいふ。朱熹文「年少一一、未レ能レ有二以扣一也」

【斯様】シヤウ　かやう。

【斯道】シダウ　○仁義の道、聖人の道。論、雍也「子曰、誰能出不レ由レ戸、何莫レ由二一一一也」○轉じて、各自が其の奉ずる道、又技藝。

【斯文】シブン　この學、この道。論、子罕「天之将レ喪二一一一也、後死者不レ得レ與二於一一一也」＝斯道。

【斯民】シミン　このたみ。孟、滕章「子将レ以二斯道一覚中一一上也」

【斯人而有二斯疾一】コノヒトニシテコノヤマヒアリ　深く其の病に罹りしを惜むにいふ。論、雍也「伯牛レ疾、子問レ之、自レ牖執二其手一曰、亡レ之命矣夫、斯人也而有二斯疾一也、斯人也而有二斯疾一也」

九画

【新】シン　○あらた、あたらし。陳・舊の反對「鮮一」「斬一」○あらたにす、舊を改める。易、大畜「日一」其徳」○あたらしきものごと。論、爲政「温故知一」○はじめ（初）「一年」「嘗一」○開墾してより二年目の田畝の稱。○西漢の末、王莽の簒立せし國號。

【新案】シンアン　あたらしき工夫。＝新意匠。

【新衣】シンイ　あたらしきもの。古財「一一誰常補、故衣誰當レ綻」

【新院】シンヰン　圏上皇の二人以上ある時、其の新しき方の稱。本院・中院等の對。

【新婦】シンプ　あたらしき木かげ。白居易詩「春禽鎖弄在、夏木一一成」

【新雨】シンウ　あたらたにふりしあめ。謝略「時天一一、地有二泥濘一」岑參詩「殘雲收二夏峯一、一一帶二秋風一」

【新英】シンエイ　あらたに開きたる花。元稹詩「一一蜂採掘」

【新醅】シンバイ　あたらしきさけ【周禮、疏】＝新酒。

【新屋】シンヲク　新に作りし家。蘇軾詩、共入二一一一「長子孫」＝新家。

【新柯】シンカ　あたらしきえだ。劉昚、枯樹湖歌「一一花萼舊柯趺」

【新開】シンカイ　新製に同じ。

【新学】シンガク　○あらたに倡へ出したる學説。文心雕龍「一一之說則謬而失レ正」○初學をいふ。朱熹文「年少一一、未レ能レ有二以扣一也」

【新嫁娘】シンカジャウ　はなよめ。王建、新嫁娘詩「三日入二廚下一洗レ手作二羹湯一、未レ諳姑食性、先遣二小姑嘗一」＝新婦。

【新街】シンガイ　新らしき位、あらたに授かる位階。街は位階。元稹詩「飽永授二一一一」

【新奇】シンキ　あたらしくめづらし。宋史、賴縁傳「上疏進レ言者多矣、今皆以爲二陳腐一、而別取二一一之說一」

【新鬼】シン　あらたに死せし人。左、文二「晉見ニ一一大、故鬼小ニ杜甫詩「一一頭寃蒼鬼哭」

【新規】シン　○あたらしきのり。文獻通考「立ニ一一」‖新律。○園あらた、あたらし。

【新義】ギ　あたらしき說。晉書、王接傳「接注ニ公羊春秋ニ多有ニ一一」

【新禧】キ　新年のよろこび「恭賀ニ一一」‖新祉。

【新舊】シンキウ　あたらしきと、ふるきと。晉書、張華傳「撫ニ納ニ一一ニ、戎夏懷レ之」

【新菊】キク　あらたに芽を出したるきく。詩經詩「一一赤從レ鞠」

【新機軸】シンキジク　今までのものとちがひて一さは新らしき工夫。‖新案。

【新笙】シンシヤウ　あらたに生じたるくき。續齊諧詩「一一未レ編半猶結」

【新曲】シンキヨク　あらたに作りたる音曲。魏文帝詩「絃歌奏ニ一一ニ、雜變俯ニ升堂ニ一‖新聲・新調。

【新聲】セイ　はつほたる。賈島詩「一點一一報ニ秋信ニ」

【新教】シンケウ　基督教の一派、羅馬ニ舊教に反對して獨逸のルーテル等が唱へしもの、プロテスタント。

【新月】シンゲツ　○陰曆三四日頃のつき、みかづき。‖初月。○色のあざやかなる月。白居易詩「三五夜中ニ一色」

【新建】シンケン　あらたにたつ。後漢書「時許都ニ一、賢士大夫、四方來集」

【新民】シンミン　あたらしき世帶もち。北史「詔給ニ內徙ニ一一新牛、計レ口受レ田」

【新古】シンコ　新故・新舊に同じ。

【新園】シンコク　あらたに建てたるくにの總記「維興之日、從ニ一一之法」

【新穀】シンコク　今年あたらしく出來たる穀類。論、陽貨「舊穀既沒、ニ一一既升」

【新婚】シンコン　新婚に同じ「詩、邶風」

【新墾】コン　あらたに耕す。

【新墾】コン　あらたに土地をひらく。

【新採】サイ　新しく取る。采は採。司馬光、遷居詩「廚美知ニ一一、近レ根宿帶レ泥」

【新妝】シヤウ　つくりたてのけしやう。杜甫詩「借問漢宮誰得レ似、可憐飛燕倚ニ一一」‖新粧。

【新鮮】シンセン　あらたにはじめつくる。沈亞之詩「ニ一一仙李二覆ニ石壇ニ」‖新創。鮮は鮓の正字。

【新造】シンザウ　○あらたにつくる。漢書、陸賈傳「乃欲下貶ニ一一未レ集之起ニ、屈強乎此ニ」又其の物「一一船」‖新製。○若き妻女。○遊女に附き添ひて世話をする女、なかゐ。

【新相知】シンサウチ　あたらしきしりびと。楚辭「樂莫レ樂ニ兮一一」

【新參】シンサン　○あらたに參政となる者。東都事略「補中書文、乃ニ一一也」○園あらたに仕へる。古參の對。

【新詩】シン　あたらしく作りたる詩。杜甫詩「一一改罷自長吟」

【新秋】シンシウ　はつあき。‖初秋・孟秋。

【新柔】シンジウ　あらたに出でたる草木の芽。孫顗詩「野果拆ニ奇殼ニ、畦蔬摘ニ一一ニ」孟郊詩「野蔬拾ニ一一ニ」

【新式】シキ　あたらしき法式。北史「不レ依ニ一一ニ者、悉追停之ニ」

【新習】シフ　あらたに習ふ。又、あたらしきならはせ。孟郊詩「時文有ニ一一ニ」

【新人】シンジン　○新婚の人。○基督教カトリクにてこれ迄の罪を除かれて新しき生命を得たる人。

【新進】シン　新たに仕籍に入りし者。元稹文「江湘間多有ニ一一小生ニ不レ知ニ天下文有ニ宗主ニ」

【新粧】シンサウ　つくりたてのよそひの意。蘇軾詩「我愛剛愎驚、曉鏡開ニ一一ニ」

【新甞】シンジヤウ　○新穀を廟にすすめて神を祭る、にひなめ。杜甫詩「野舍及ニ一一ニ」○園天子が新穀を食したまふ儀。又、其の祭、每年十一月二十三日に行ふ。

【新疆】シンキヤウ　あたらしきおもむき。武少儀文「不レ易ニ舊所ニ別成ニ一一ニ」

【新錦】シン　あたらしにいる。舊唐書、貨志「乾封ニ一一之錢、今有司貯納、更不レ須レ鑄」

【新設】シンセツ　あたらしく設く。舊唐書、武宗紀「ニ一一成、同進」

【新鮮】シンセン　あたらし。李咸用詩、贈ニ一一ニ「陶侃得漢民應「湛氏乃撤ニ所レ飯ニ一一自對給ニ其馬ニ」

【新卒】シンソツ　あら手の兵卒。通鑑、唐紀「更發ニ一一以征レ之」

【新苦】シンク　あたらしきくるしみ。李德裕詩「松逕長ニ一一ニ」‖新辛。

【新胎】シンタイ　はじめてはらむ。庾信、謝レ賚ニ龍子巾一啓「解レ角ニ一一、戴レ蘂初孕」

【新體】シンタイ　あたらしきていさい。王惲詩「舊歌今漸遠、ニ一一此無レ加」

【新體詩】シンタイシ　園新しき體の詩、近時西洋の詩に擬し作り初めし長歌。

【新腔】シンカウ　あたらしくして柔かき樂詞「夏果敬ニ一一ニ」

【新晴】シンセイ　あらたにはれる。杜甫詩「久雨巫山暗、ニ一一餘孀文」

【新婿】シンセイ　はなむこ。金唐詩話「嫣家ニ一一是房郎」‖新郎。

【新案】シンアン　あらたに作る。陶穀詩「玄裘無ニ一一ニ」

【新聲】シンセイ　新曲に同じ。

【新梢】シンセウ　あたらしきこずゑ。杜甫詩「綠竹半含レ籜、ニ一一纔出レ牆」

【新改】シンカイ　あらたにつくりまろける。

【新說】シンセツ　あたらしき言說。

【新撰】シンセン　あらたにえらぶ。舊唐書、武宗紀「ニ一一成、同進」

【新鮮】シンセン　あたらし。李咸用詩、贈ニ一一ニ「陶侃得漢民應「湛氏乃撤ニ所レ飯ニ一一自對給ニ其馬ニ」

【新帥】シンスイ　あたらしきおさ。晉書、陶侃傳「湛氏乃撤ニ所レ飯ニ一一自對給ニ其馬ニ」

【新正】シンセイ　改まりし年の始、新年の正月。

【新刀】シンタウ　〇あらたにきたへしかたな。〇國慶長以後に作りし、かたな。古刀の對。
【新狩】シンガリ　あらたにみのりたるいね。蘇軾詩「一一香可ノ飯」
【新逕】シンケイ　あらたにきたけのかは。程棨詩「竹紛新ニ一一滑花試ニ靚妝一」
【新知】シンチ　あたらしきしりあひ。‖新相識。
【新竹】シンチク　ことしだけ、わかたけ。司空圖詩「數竿一一當ノ軒上」
【新衆】シンシュウ　あたらしくきづく。戴叔倫詩「東山有ニ遺堂一、南野起ニ一一一」
【新陳代謝】シンチンタイシャ　ふるきものは去りて、あたらしきものこれに代る。陳は塵。
【新茶】シンチャ　あらたに製したるちゃ。劉禹錫詩「松花酒枕試ニ一一一」‖新茗。
【新帝】シンテイ　あらたに即位せられし天子。‖新皇。
【新條】シンデウ　〇あらたに制定せし法令。白居易、食貨志「一依ニ舊法一、不ノ用ニ一一一」〇あたらしき枝。姚合、楊柳枝詞「江上東西離別饒、舊條折盡折ニ一一一」‖新枝。
【新調】シンテウ　〇新曲に同じ。〇國あらたにこしらへる、新規に調製する。
【新田】シンデン　あらたにひらきたる田。韻會「田一歲曰ノ畬、二歲曰ノ新、三歲曰ニ一一、四歲則曰ノ田」
【新内節】シンナイブシ　國淨瑠璃節の一種、鶴賀新内のはじめしもの、しんない。
【新年】シンネン　あらたなるとし。後漢書、百官志「太史令一人、掌ニ天時景曆一、凡歲將ノ終、奏ニ一一一曆一」
【新年宴會】シンネンエンクワイ　國〇一月五日宮中にて羣臣に酒饌を賜はるさかもり。〇新年のいはひの宴會。
【新任】シンニン　あらたに官に任ぜらる。
【新醅】シンパイ　あらたにかもせるもろみざけ。陸游詩「一笑舉ニ一一一」
【新方】シンパウ　〇あたらしきしかた。‖新式。〇新らしき調劑。耿湋詩「老醫逐ニ舊疾一、朽藥誤ニ一一一」
【新報】シンパウ　あたらしきしらせ。伊洛淵源錄「一人云有ニ一一一云」‖新聞。
【新法】シンパフ　〇あたらしき法律。‖新律。〇あたらしき方式。‖新方。〇宋の王安石が始めたる青苗法・保甲法などの法律（宋史、王安石傳）
【新版】シンパン　あたらしくおこしたるはんぎ。又、其のはんぎにてすりし印刷物。‖新板・新刻。
【新婦】シンプ　〇子のよめ。〇はなよめ（花嫁）少室山房筆叢「今俗以ニ新婚時一、男稱ニ新郎一、女稱ニ一一一」‖新嫁娘。
【新聞】シンブン　みみあたらしき話。安得長者言「吳俗坐定、輒問ニ一一一、此游閒小人入ノ門之漸」
【新兵】シンペイ　あらたに入營せし兵士。
【新浮】シンプ　あらたに生じたるうきぐさ。王融賦「一一泛ノ泚、華桐發ノ蕾」
【新羅】シンラ　あらたにあみ作る。又、其の書物。李商隱詩「蕙香思玄賦、一一雜擬詩」
【新發意】シンホツイ　國發意は上來菩提、下化衆生の大心を發せし義。新に佛門に入りたるにいふ。法華經「一一一菩薩、供養無數佛」
【新米】シンマイ　〇今年はじめて出來たるこめ。北史、劉懷傳「人有ノ餉ニ一一一斛一者」‖新穀。〇國あらたに仲間入りしたる者。‖新參。
【新味】シンミ　はつもの。王維詩「一一瓜初剖」
【新民】シンミン　民を敎へて惡を去り善に遷りて面目をあらためしむ。大學「康誥曰、作ニ一一一」
【新茗】シンメイ　新茶に同じ。趙師使詩「一鐵水沈香散後、半甌一一味回時」
【新陽】シンヤウ　あたらしきはる。陸游詩「一一蘇醒春酎柳」‖初春・新春。
【新樣】シンヤウ　あたらしきかた。唐書、柳公權傳「書法有ノ名、劉禹錫稱爲ニ柳家ニ一一」
【新羅】シンラ　古、朝鮮の一國。南史、新羅國傳「一一在ニ百濟東南五十餘里地一」
【新郎】シンラウ　はなむこ。新婚參看。‖新壻。
【新律】シンリツ　あらたにつくられたるおきて。北史、周高祖紀「初頒ニ一一一」
【新立】シンリツ　あらたに位につく。左傳「晉公一一、鄭國及ノ時來朝」
【新涼】シンリヤウ　はじめて催すすずしき氣。朱熹詩「晝永徒ニ殘暑一、宵分喜ニ一一一」
【新涼入ニ郊墟一】シンリヤウイルコウキヨ　あたらしき涼風が村里におとづれ來る。韓愈詩「時秋積雨霽、一一、燈火稍可ノ親、簡編可ニ卷舒一」
【新涼燈火】シンリヤウトウクワ　新らしき涼氣生じ、燈火に對して讀書するによろし。朱松詩「新涼宜ニ燈火一、前綠參看。
【新綠】シンリヨク　初夏の若葉のみどり、わかみどりの老綠の對。白居易詩「風吹ニ一一一草芽折」
【新屏】シンペイ　〇あたらしく出來しよみ（書、屈志）〇太陽暦の太陰暦を區別といふの對。
【新醅】シンパイ　あらたに釀きしはちす。孫覿詩「一一夾ノ岸紅」
【新沐者必彈ノ冠】シンモクモノハカナラズカンヲダンズ　新たにかみ洗ふ者は、冠の塵をはらふ、外物に汚さるるを懼るる義。史、屈原傳「一一、新浴者必振ノ衣」列子「新浴者振ニ其衣一、新沐者彈ニ其冠一」

十畫

【斲】タク　覺

〇けづる（削）「刻ニ一一」「鄧ニ一一」〇きる（斬）木をきる。孟、梁惠王「匠人ニ一一而小之」

【斷給】リタク わをけづりてつくる。莊、天道「桓公讀二書於堂上一、輪扁一ニ於堂下一」

【斷書】タク きりてみがく。國語「趙子發ノ室、斲二其椽一、而縣ノ之」‖縣斲。

【斷】 斷（斤部十四畫）の俗字。

十三畫

【斲】 斲（前畫）の俗字。

十四畫

【斷】 ㊀ タン・ダン 早 ㊁ タンダン 寒

㊀たつ（絕）きる（殺）きりはなす「一頭」「擊ー」○きれ（片段）○見すてる、交を絕つ。㊁たゆ（絕）さめる、さだむ（決）「決ー」「獨ー」「裁ー」「專ー」○わかつ（分）易、繫辭「剛柔ー矣」○ーは守りて變ぜざる統。又、專一にして善を守る貌。○國ことわる、わけを述べる。謝絕する。

同訓異義 タン・斷・絕・截・裁・割○斷は物を二つにたちきること、又物の中たえたることにも用ふ、斷絃・斷橋・斷雲の如し、轉じて決斷の義に用ふ、斷獄の如し。○絕は絲のきれたる義、物のきれてあとの無きをいふ、絕命・絕筆・絕交の如し。論語「在ノ陳絕ノ糧」論語「隱二絕世一」○截はきりたつ義、絕と略ゝ同じ、絕句を截句とも書く。○裁・製の二字は共に衣服などをたつことなり。轉じて事をきりもりして決斷するを裁斷・裁決と連用し、天子の詩文などを御製・製製といふ、製一に制に作る、同じ。

【斷案】ダンアン○判斷、斷定。○論理にて前提より推論せられたる斷定、結論。

【斷雲】ダンウン ちぎれたるくも。朱超詩「孤生如ニー一」

【斷蟬】ダンエン 車のながえをきる。又、ちぎれたるながえ。杜甫詩「摧折如ニー一」

【斷岸】ダンガン きりたちたる如きがけ。崖・岸同じ。周賀詩「ー一登向壁中禪」‖斷岸・絕壁。

【斷行】ダンコウ ○おしきりておこなふ。‖決行・敢行。○きれぎれになりて列をなさず。陳信詩「濕雁ー一來」

【斷梗】ダンコウ 飄轉して定まらざる貌。元好問、出京詩「半生無ニ根者一、飄轉如ニー一」

【斷港絕潢】ダンコウのゥ 港は支流、潢は池、連絡の絕えたるに喩ふ。韓愈、送ニ王埙一序「學者必慊ニ其所ロ道、道ニ於楊墨老莊佛之學一而欲ノ之ニ聖人之道一猶下航ニ――、以望ニ至ニ於海一也」

【斷割】カツ 刀にてたつ。又、物どとをきりもりする。書經「水能潤ノ濕、火能烹ノ飪、金能ー一、木能興ノ作、土能生ノ殖、穀能養ノ育」

【斷岸】ダンガン きりたちたるきし。赤壁賦「江流有ノ聲、ー一千尺」‖斷崖。

【斷斷】ダンダン きれぎれになりしかきもの「ー一零墨」‖斷簡・殘編。

【斷巖】ダンガン きりたちたる如きいはほ。戴叔元詩「ー一蒼龍角、飛ノ流繫ノ雲根」

【斷案】ダンアン たちすてる。交をたちて見すてる。書、盤庚「乃ー一汝」

【斷絃】ダン うたがはしきを裁決す。易、繫辭「以斷ニ天下之疑一」

【斷機之戒】ダンキノカイ 學問を中途にて廢するいましめ。列女傳「及ニ孟子稍長就ノ學而歸ニ孟母方績、問曰、學何所ノ至矣、孟子曰、自若也、母以ノ刀斷ニ其織一曰、子之廢ノ學、若ニ吾斷ニ斯機一矣、孟子懼、日夕勤學不ノ息、師ニ事子思一遂爲ニ名儒一」

【斷金】ダンキン 極めて固きまじはり。易、繫辭「二人同ノ心、其利ーレー」

【斷金契】ダンキンケイ 極めて固きちぎり。水經、注「嵩字仲山、宛人、與ニ山陽范式一有ニ――一」前條參照。

【斷金侶】ダンキンリョ 固きちぎりの友。吳融詩「此中――」

【斷壞】ダンクワイ きれくづれる。陶潛歸ノ去來「有ニ絃琴一ー一者一絃ノ之」

【斷橋】ダンケウ とぎれたるはし。杜甫詩「ー一無ニ復板一」

【斷決】ダンケツ とりきめる。後漢書、馮異傳「時以ニ私心一ー一、未ニ嘗不ニ有ノ悔一」‖斷定。

【斷言】ダンゲン いひきる。

【斷限】ダンゲン さかひをさだめる。史通にー一論あり。‖限斷。

【斷絃】ダンゲン ○つるいとをきる。元稹詩「孤琴在ニ幽匣一時逝ー一聲」○妻の死をいふ。

【斷續】ダンゾク 切れはしのかとり。蘆襯「往往ー一片紙、皆可ニ珍惜一」

【斷乎】ダンコ きっぱりしたる貌。蘇軾文「斷斷乎如ニ泰石必可ニ以俟一ニ」‖斷然。

【斷害】ダンガイ あみをたちきる。國語「里革斷ニ罛罟一而棄ノ之」

【斷獄】ダンゴク 罪を裁判する。鹽鐵論「今ーレー歲以ノ萬計、犯ノ法滋多」

【斷魂】ダンコン 甚だしく心をいためる。草莊詩「自是春愁正ー一」‖斷腸。

【斷梗】ダンコウ きれぎれとなりたるいかだ。陸游詩「低昂泛ニー一」

【斷察】ダンサツ よくしらべて決斷する。後漢書、王吉傳「能ニー一疑獄一發ニ起姦伏一」

【斷斬】ダンザン たちきる。後漢書「未ノ有下不ニー一以示ニ武威一者上也」

【斷綫】ダンセン とぎれたるかけはし。蘇軾詩「馬經ニー一危無ノ路」

【斷私】ダンシ 私慾をたつ。諸葛亮文「ーレー降ノ意、以委ニ將士一」

【斷肚】ダント あしをきる。唐書、刑法志

「太宗曰、肉刑前代除レ之久矣、今復斷二人肢一、吾不レ忍也、於レ是除二二一法一」

【斷髓】ダンズイ　けはしくきりたてる山のほら。皇甫松賦「歷二二一一而神曠」

【斷食】ダンジキ　ある日限内、食をたちて食はざる。佛本行經「若因二二一齋一得二大福一者、其罪猶等、應レ得二大福一」

【斷而敢行鬼神避レ之】ダンジテカンコウスレバキシンサク　斷じて行へば障碍に打ち勝ち得るをいふ。史、李斯傳「願レ小而忘レ大、後必有レ害、狐疑猶豫、後必有レ悔、——、後有二成功一」

【斷章取義】ダンショウシュギ　詩文を解するに、作者の本意に拘らず、取りて己の用となす。孟子、萬章、孔傳「斷レ章取レ義、上下相成」

【斷取】ダンシュ　たちきりて取る。王安石、寄蔡天啓詩「頗疑道人三昧力、異域山川能一一」

【斷酒】ダンシュ　禁酒する。白居易詩「病來斷レ酒、老去可レ禁レ慈」

【斷樹】ダンジュ　木をきる。禮記「斷二樹木一以二其時一」‖伐木。

【斷續】ダンゾク　絶えたり續いたりする。周邦彥詩「荒碑一一悉與致」

【斷腸】ダンチョウ　詩文の斷續するをいふ。盧枚詩「一一花在二夕陽西一」

【斷絃】ダンゲン　はたをたちきる。孟母の故事。半途に學を廢するを戒むるにいふ。列女傳「孟母以レ刀斷二其機一」斷機之戒參看。

【斷水】ダンスイ　水の出がとまる。又、水道などの水をとめる。

【斷正】ダンセイ　裁決して是非をただす。晉書「凡一一臧否、宜レ先稽二之證律一」

【斷獄理訟】ダンゴクリショウ　貧にして力學するをいふ。書言故事「范希文修學最貧、在二長白山僧舍一、煮レ粟二升一、作二冷一器一、經レ宿遂凝、以レ刀畫爲二四塊一、早晚取二一塊一、斷二齏數十莖一、而啗レ之、齏はなづな。

【斷截】ダンセツ　たちきる。魏書、高宗紀「一一官物一以入二於己一」‖殺戮。

【斷絕】ダンゼツ　○たえる。杜甫詩「厚祿故人書一一、饑腸雖子色凄涼」○家の祭がたえる。後漢書、王符傳「不レ能レ使二其一一一」

【斷然】ダンゼン　きっぱりとしたる貌。‖斷乎。

【斷線】ダンセン　○きれたる絲。孟郊詩「一一無二長縷一」○電氣のはりがねがきれて電氣が通ぜず。

【斷箭】ダンセン　をれたる矢。五代史、契丹誌「殺傷相半、陣開一一遺戰、布厚寸餘」

【斷壁】ダンペキ　ちぎれたるいしずゑ。周邦彥詩「荒碑一一悉與致」

【斷送】ダンソウ　うしなひすてる。送り過ごす。韓愈詩「一一一生一唱有レ酒」‖拋棄。

【斷續】ダンゾク　たえて又つづく。唐太宗詩「宮箭時一一」

【斷綻】ダンタン　ほころぶ。ほころび。韓維詩「補二裝一一搜二尺寸一」

【斷斷】ダンダン　守りて變ぜざる貌。專心なる貌。齊、秦誓「一一猗無二他技一」

【斷腸】ダンチョウ　○はらわたを絶ちきる。魏志「病苦レ在二腸中一、便一一一瀉」○甚だしく心を痛むる。魏文帝詩「念二君客遊一思一一」

【斷腸花】ダンチョウカ　秋海棠の異名。錦字箋「薛傳昔有二女子一、懷レ人不レ至、淚酒レ地、遂生二此花一、色如二美婦一、而葉銷、名二——一」

【斷定】ダンテイ　たしかにきめる。袁宏道詩「一一今年不レ看レ花」‖斷決。

【斷腕】ダンワン　くびをきる。戰國策「一一一決レ腹」

【斷頭將軍】ダントウノショウグン　殺頭の故事。劉志、張飛傳「殺頭爲二劉璋一守二江州一、劉備遣二張飛一襲取二巴郡之地一、璋レ頭、飛呵曰、何不早降、須臾、卿等無狀、使二吾我州一、我州但有二——一、而無二降將軍一」

【斷念】ダンネン　おもひきる、あきらめる。

【斷梅】ダンバイ　梅雨のさはり。陸游詩「細雨梢頭一一初」自注「鄉人謂二梅雨有一雨、曰二一一」

【斷髮文身】ダンパツブンシン　頭髮を剪りいれずみす。左、哀七「仲雍嗣レ之、——、蠻以爲レ飾、豈禮哉」贏は裸。

【斷碑】ダンピ　かけたる古きいしぶみ。黃庭堅詩「一一零落臥二秋風一」

【斷髀】ダンピ　ひちを絶ちきる。歐陽修文「京師識早、有二浮屠人一一レ一薦レ甫」

【斷裂】ダンレツ　きれぎれなるみどり。范成大詩「行雲飛二一一」」

【斷片】ダンペン　きれはし、かたわれ、かけ。

【斷續】ダンゾク　きれぎれの文章。宋史、歐陽修傳「凡周漢以降、金石遺文、一一殘簡、一切綴拾、謂二之集古錄一」‖斷簡。

【斷岸】ダンガン　けはしくとぎれたるみね。江淹文「臨二江上之一一一」‖絶岸。

【斷末魔】ダンマツマ　梵　意識の明了位より閻魔位に移る間の苦、卽ち、臨終の苦。俱舍論「臨二命終時一、多爲二一一一苦受所レ逼」醉一に歷に作る。

【斷面】ダンメン　物のきりくち。

【斷落】ダンラク　○文章の一章一段のくぎり。品字箋「篇章一一亦曰レ節」‖段落。○轉じて物事のひとくぎり。

【斷爛朝報】ダンランチョウホウ　王安石が春秋をそしりたる語。馬鱗之、春秋經解跋「王荊公初欲レ釋二春秋一以行二天下一、而孫莘老之書已出、一見而忌之、自知レ不レ能二復出一其右一、遂詆二聖經一、而廢之曰、此——也、不レ列二於學官一、不レ用二於貢舉一云」莘老は孫覺の字、春秋經解を著す。

【斷例】ダンレイ　罪人を處分したる例。晉書、杜預傳「法者蓋斷獄之一一、非二窮理盡性之書一也」

【斷脰】ダンズ　うでをきりはなす。韓翃詩「一レ一来レ屢レ駭」

廿一畫

【斷】チ・ク　㊀　劂は俗字

きる（斫誅）

方部

【方】ハウ　陽

○しかく（四角）ましかく。○轉じてただし（正）「一正」「端一」○かたむき、方角「一位」「四一」「他一」○むかふ（向）向ふ所、行くさき。論、里仁「遊必有一」○みち（道）禮、樂記「樂行而民鄉一」○てだて（法術）○義の宜しきなり「義一」○ことがら。○しな、種類。孟、離婁「立賢無一」○あや（文）○いた（板）四角の板。中庸「布在二策一」○いかだ（附・筏）いかだす、筏に乘りてわたる。詩、周南「漢之廣不可一」○ひとし（齊）○いま（今）○まさに（且）○くらぶ（比）「比一」論、公冶長「子貢一人」○わかつ（別）區別する。史、五帝紀「民神雜糅、不可一物」物は名狀する義。○かたはら（旁）○ならぶ（竝・併）「一軌」○さかふ（逆）孟、梁惠王「一命虐民」○あたる（當）○まさに、いま「一今」○ちやうど、恰も。○たもつ（有）○おほいなり。○くに（國）○神仙の術。○醫術。○仿に同じ。國○かた、仕樣「書きー」○人を指して呼ぶ尊稱「殿ー」

同訓異字　方・中・當・丁・直の訓は中（一部三畫）の條を見よ。○方・正・政・適・的・誠・多・將の訓は正（止部一畫）の條を見よ。

【方策】ハウサク　方法の工夫。‖考案。

【方位】ハウヰ　方向位置。朱子語錄「孤虛以二一一一

一ー、疾ニ惡強藥ニ」○紙の異名。
【方幅】ハウ　四角なるはば。梁書、太宗紀「ーー豐下、髭鬢如ニ畫」
【方言】ハウゲン　一地方に行はるる土語。漢の揚雄方言を著す。王維詩「因ニ人見ニ風俗ニ入ニ鬼關ニーーー」＝土語。
【方檢】ハウケン　しめくくりありてただしきおこなひ。北史、裴駿傳「弱冠通ニ涉經史ニ、ーー有ニ識度ニ鄉里宗敬焉」
【方嚴】ハウゲン　ただしくしておごそか。晉書、王雅傳「王恭風神閒貴、志氣ーー」＝端嚴・方峻。
【方壺】ハウコ　○神仙の住むといふ島。列、湯問「渤海之東有ニ大壑ニ焉、其中有ニ五山ニ焉、一曰岱輿、二曰員嶠、三曰ーー、四曰瀛州、五曰蓬萊」○腹脹くして口の四角なるつぼ。
【方紘】ハウコウ　こしきをならべる。魏文帝獻「列ニ衆星陳ニ、夜車ーレー」＝方轂。
【方今】ハウコン　ただいま。魏志、齊王傳「詔曰、ーー百姓不ニ足、而御府多作ニ金銀ニ」
【方劑】ハウザイ　くすりの調合。又、調合せし藥。唐書「虛著ニーー、終無ニ益ニ於世ニ」＝藥方。
【方相】ハウサウ　古の神に像りて疫を逐ふ者。四目なるをーーといひ、兩目なるを供といふ、送葬にも亦之を用ふ「周禮」
【方類】ハウ　四角なるひたひ。五代史、東漢世家「郭無爲棣州人、ーー烏喙、好ニ學多聞ニ」＝方額。
【方册】ハウサク　しょもつ。曉諭文「布在ニーーニ」＝方策。
【方策】ハウサク　しょもつ。方は木の版、策は竹簡。中庸「文武之政、布在ニーーニ」＝方册。
【方山冠】ハウザンクワン　○古の樂人の用ひしかんむり。後漢書、輿服志「ーー、制似ニ進賢ニ、前高七寸、後高三寸、縱長八寸、似ニ進賢冠ニ、五采穀爲ニ之ニ、祠ニ宗廟ニ、天子八佾、四時五行、樂人服ニ之ニ、冠衣各如ニ其行方之色ニ」○唐宋時代は隱士の冠とす。
【方士】ハウシ　○仙術を行ふ人、方術の士、道士に同じ。史、始皇紀「○周代の官名。裁判官の類、采地の獄を司る者。
【方志】ハウシ　○ただしきこころざし。○一地方の事柄を記したる書。皇甫謐文「其爲ニ風土、則驗ニ之ニーー」
【方舟】ハウシウ　ふねをならべる。史、蘇秦傳「ーレー而下」
【方式】ハウシキ　かた、一定の形式。
【方人】ハウジン　○人と己とを引きくらべる。論、憲問「子貢ーレー」○同一味同心の者の稱。
【方針】ハウシン　○羅針盤の方位をきしめす針。＝指南。○めざす一定の目的「教育のーー」
【方慎】ハウシン　ただしくしてつつしむ。北史、李孝伯傳「性ーー忠孝」＝貞慎。
【方社】ハウシャ　四方の神と土地の神と。詩經「新ニ年孔夙、ーー不ニ莫」箋「新ニ豐平蕃早、祭ニ四方與ニ社ニ、又不ニ晚ニ」
【方林】ハウリン　四角なるとこ。南史、賀革傳「革有ニ六尺ーーニ」
【方術】ハウジュツ　方士のわざ、長生不死の法。又、卜筮・占驗星相など。史、始皇紀「召ニ文學ーーニ之士ニ甚衆」＝仙術。
【方峻】ハウシュン　心ただしく志たかし。唐書、楊於陵傳「器量ーー、進止有ニ常度ニ、節操堅明、始終不ニ失ニ其正ニ」
【方書】ハウショ　○方術の書。又、醫書。唐書、李聽傳「聽好ニーーニ」○四方の文書。漢書、張湯傳「湯時爲ニ御史ニ、主ニ往下ーーニ」
【方諸】ハウショ　月より水をとる鏡。晉書、天文志「ーー可ニ以取ニ水于月ニ」
【方寸】ハウスン　○一寸四方の面積。漢書、食貨志「黃金ーー而重ニ一斤ニ」○心をいふ。列、仲尼「吾見ニ子之心ニ矣、ーーニ之地虛矣、幾聖人也」
【方寸之木可使高於岑樓】ハウスンノボクカツシカウシンロウヨリタカカラシム　比較の標準を失ふときは、至卑のものも至高のものより高き事あるにいふ。岑樓は樓の高く銳くして山に似たるもの。孟、告子「不ニ揣ニ其本ニ而齊ニ其末ニ、ーーニ」
【方寸地】ハウスンチ　○一寸四方程の土地。唐書、員半千傳「陛下何惜ニ玉陛ーー、不ニ使ニ臣披ニ露肝膽ニ乎」○心をいふ。方寸を見よ。
【方正】ハウセイ　ただし。漢書、董仲舒傳「臨ニ下擧ニ賢良ーーニ之士ニ」
【方枘圓鑿】ハウゼイエンサク　枘は柄、鑿は穴、四角の柄に圓き穴の義。物の相合はざる喩。史、孟軻傳「持ニ方枘ニ欲ニ內ニ圓鑿ニ、其能入乎」＝圓鑿方枘。
【方折】ハウセツ　四角にまがる。尸子「水圓折者有ニ珠、ーー者有ニ玉」
【方礴】ハウハク　四角なるいしずゑ。元稹詩「ーー荊山採、態樣鄙匠鋤」
【方俗】ハウゾク　地方の風俗。宋書「可ニ分ニ遣大使、巡ニ省ーーニ」
【方內】ハウナイ　くにのうち。史、孝文紀「ーー安寧」＝國內。
【方楫】ハウシフ　四角なるゆか。宋書、長沙景王道憐傳「自ニ非ニ三署ーー不ニ得ニ上ニーーニ」
【方陳】ハウヂン　方形のおんだて。陳は陣。國語「以ニ萬人ニ爲ニーーニ」
【方丈】ハウジャウ　○一丈四方。孟、盡心「食前ーー、侍妾數百人、我得ニ志不ニ爲也ニ」○維摩の室方一丈ありしにより寺院の正寢の稱。釋氏要覽「ーー蓋寺院之正殿也、唐顯慶年中、敕ニ王玄策ニ往ニ西域ニ、至ニ毗耶黎城東北四里許ニ、維摩居士宅、示ニ疾之室遺趾、壘ニ石爲ニ之、玄策躬以ニ手板ニ縱橫量ニ之、得ニ十笏ニ、故號ニーーニ」○轉じて僧の稱。○神仙の住むといふ海島の名（史、封禪書）
【方童】ハウドウ　方正にしておもおもし。後漢書、李融傳「懿勤ーー、甚得ニ大臣節ニ」＝端重。

【方直】ただしくなほし。晉書、郭琦傳「琦少一一有二雅量一」

【方程】數學の名。一一式は代數學にて同價の關式から未知數を索め出す算法。算經「九章名義、八曰、一一」

【方底而圓蓋】四角な底の器に圓きふた。物の相合はざるに喩ふ。顏氏家訓「使二疎薄之人而節二量親厚之恩一、猶二一一一、必不レ合矣」‖圓蓋方底・圓鑿方枘。

【方田】田圃の縱橫を等分の長さにする法。通典「宋熙寧五年、修二一一一」‖均田。

【方田均稅法】宋の王安石のはじめし新法、東西南北各千步を一方田とし、地味によりて租稅を五等に分つ制。「宋史、王安石傳」

【方土】地方のくに、一地方。書經、疏「謂二其一一所レ生之物一」

【方冬】十月の異名。杜甫詩「一一變所レ爲」‖初冬。

【方鰧】四角なるひとみ。拾遺記「有二父老五人一一握二青竹杖一」

【方頭魚】あまだひ、額骨隆起して稍方形をなす海魚の名。

【方袍】僧をいふ。金華子「一一且多、其中必有二妙通易道一者」

【方伯】周代、一地方の諸侯の上に立つ大諸侯。次條參看。

【方伯連帥】周代に諸侯の上に位して一方を支配せし官。疇、王制「千里之外設二方伯一、五國以爲レ屬、屬有レ長、十國以爲レ連、連有レ帥」

【方法】しかた、事を行ふ條理。韓愈文「相二原關之宜一、指二授一一一」

【方幘】たづなを竝べる。晉書、劉聰載記「侯人一一レ、竝レ后戰馳」

【方物】○其の地方に產する物。書、旅獒「無レ有二遠邇一、罔レ不二一一一」○方は別、物は名、多くの物を各別に分ち名つける。史、五帝紀「民神雜糅、不レ可二一一一」

【不レ可二方物一】多くの物、混亂して別け名づくべからず。前條參看。

【方開】道ただしく智ひろし。漢書、儒林傳「詳延二天下一一之士一」注「方、道也、開、博聞也」

【方便】○圖便宜にしたがひて人を導く方法。大智度論「方謂二方法一、便謂二便宜一、狹善巧一也」維摩經「以二無量一一、饒二益衆生一」○てだて、臨機の處置。

【方便簸】手さげばこ。くるゝ。衣車。圖繪。香藥・詞册などを入れるもの。清異錄「唐季王侯、競作二一一一、重錦爲レ之」

【方命】王命にさからふ。書、堯典「僉曰於鯀哉、帝曰吁咈哉、一レ一圮レ族」

【方面】○一方面の地。後漢書、馬融傳「一一重寄」○四角ばりたるか。後漢書、高獲傳「爲レ人尼首一一」

【方面寄】一方面を引きうける大將の任務。名臣言行錄「自謂當二一一一一、次二戰辭一」

【方羊】○勞苦の狀。左、哀十七「衛レ流而一一」○さまよふ。‖彷徉。

【方奧】地をいふ、奧は物を藏する義。宋玉賦「方地爲レ奧、圓天爲レ蓋」‖坤奧。

【方里】たてよこ各一里の面積、一里四方。

【方略】はかりごと。漢書、霍去病傳「顧二一一如何一耳、不レ至レ學二古兵法一」

【方席】ただしくしていさぎよし。陳詩外傳「一一而好レ禮」‖方潔・方正席。

【於】

四畫　魚

㊀ヲ　㊁ヨ・オ

㊀ああ、歎息。又、感歎の詞。書、堯典「一一鯀哉」又、一一戲一乎と連用す。大學「一一戲前王不レ忘」‖烏。㊁に。論、學而「敏一一事而愼一一言」‖乎・于。○にて、おいて「一一是」○より、比較をあらはす。戰國策「使二趙重一一九鼎大呂一」‖于乎。○ゆく（往）○かはる（代）○ここに（此）○おける、兩者の關係比較をあらはす詞。韓愈、送二高閑上人一序「秋之一一一、奕伯倫之一一一酒」○お。○よる（依）○難きこと多き貌。

同訓異字　於・于・乎・嗚呼・烏乎・嗟・吁等の別は嗚（口部十畫）の條の嗚呼を見よ。

○於・于・乎・語○於・于・乎・語の四字は、共に、にと譯し、漢文の返る所に置く字なり、於は輕く、于は重し、于は下にかかり、於は上下にかかる、孟子に「吾聞下出二於幽谷一遷二于喬木一者上未レ聞下下二喬木一而入二於幽谷一者上」とあるが如し。○于は主として下に在る字に係る、於は體と用とを兼ぬれども、于は體のみに係る、論語に「友二于兄弟一施二於有政一」とあるが如し、春秋に「戰二于宋一」など、大抵地名には、于を用ひたり、論語に「入二于海一」の類も、于の字、體に屬するを知るべし、于はここにと譯す、在の字の義あるによる。○乎は疑歎の意を含めり、主として上の字にかかる。論語「浴二乎沂一、風二乎舞雩一、詠而歸」○語は之乎の二合字なり。論語に「子張書二諸紳一」とある如し。

【於邑】かなしみむすぼれる、煩鬱悲苦する。史、刺客傳「大呼レ天者三、卒一一絕喜、而死二於之旁一」或は嘉歎。

【於越】ヲエツ　越の國。於は發語。春秋、定十四「五月—王敗二吳于檇李一」注「—、越國也」‖于越。

【於戲】ヲアア　○ああ、感歎の辭。詩、周頌「—前王不レ忘」‖於乎。○歎息の聲。東方朔、非有先生論「—可乎」

【於乎】ヲアア　ああ、感歎の辭。詩、大雅「—小子、未レ知二臧否一」‖嗚呼。於烏。

【於菟】ヲト　虎の異名。楚國の方言。左、宣四「楚人謂二乳穀一謂二虎—一」疏「—神獣、雖列二四北一」

【於皇】ヲアア　ああ、感歎の辭。詩經「—武王、無レ競維烈」‖於戲。

【方】

旁(方部六畫)に同じ。

【旂】五畫

㊀イウ　尤　㊁リウ　尤

㊀はたのながれ、旗の垂れさがる所、はたあし。‖游。㊁晃の飾、垂れたる玉。‖旒(方部九畫)

【旂旒】イウはたあしのあるはた。後漢書、輿服志「建二其—一一」

【施】

㊀シ　支　㊁シ・セ　㊂イ　眞　㊃シ　紙　㊄ヨウ　眞

㊀ほどこす、しく「普—」○まうく(設)○わかつ(賦)○つく(著)○もちふる(用)○くはふ(加)○はる(張)○つらねしめす。○—は進み難き貌。又、喜悦の貌。○ゆるむ。弛と通ず。○かふ(易)○すつ(捨)㊁いさを、てがら(功勞)○めぐみあたふ(惠與)○ほどこす。布—‖㊂うつる(移)詩、周南「—于中谷」○およぶ(及)「博—」詩、大雅「—于子孫」○ひく、のぶ(延)㊃すつ(捨)○かふ(易)

【施恩】シほどこしすくふ。後漢書、馬援傳「凡殖二財產一、貴二其能—一也」

【施行】カウ　○政をおこなふ。史、蕭相國世家「便宜—‖」○ヤウ　貧窮・貧者などに金品をほどこし與ふる。大法句經「雖二復—一‖與レ身招レ患」

【施設】シセツ　ほどこしいたす。漢書、進士不レ得二—一、辰逐又非二其意一」

【施化】クワ　萬物をそだてる。淮南子「天地之—レ一也、噓レ之而生、吹レ之而落」

【施罟】コ　あみをはる。撃虞文「—レ一設レ網、人用不レ饒」

【施鞚】コウ　くつわをつける。陸游詩「赤手騰レ空鎮不レ—レ一」

【施施】シ　○進みがたき貌。詩、王風「彼留子嗟、將其來—一」○イイ　自得の貌。又、喜悦の貌。孟、離婁「—一自得自レ外來」

【施眼】レンほどこしすくふ。後漢書、馬援傳「凡殖二財產一、貴二其能—一也」

【施縑】シンからだにはりをする。宋史、王克明傳「魏安行妻風疾、十年不レ起、克明—一、而歩履如レ初」

【施舍】シヤ　○恩徳を布く、舍も施と同義。左、昭十三「—一不レ德」‖施捨。○旅客の荷物をおろす所、はたご。國語「縣無二—一一」○與ふると與へざると。國語「聖人之—一也議レ之」

【施從】レンジュウ　見えがくれに跡をつけゆく。孟、離婁「蚤起—一二良人之所一レ之」

【施政】セイ　政令をしく。賈誼、傳「陷二行先王光大之道一一二于我童子一」‖行政。

【施設】セツ　しきまうける。史、孫子吳起傳論「吳起兵法世多有、故弗レ論、論二其行事所一一一者一」

【施行】カウ　あみをしく。元稹詩「等中方時、桂、木上莫レ—レ一」‖施罟。

【施髢】テイ　そへがみを加へる。莊子「—而市レ之」

【施展】テン　しきのべる。白居易詩「平生宿心事、一一十未レ一」

【施博】ハク　ほどこすことひろし。淮南子「聖之所レ施者博、則感之所レ行者遠」

【施法】ハフおきてを布く。周禮「一二於官府一」

【施鞶】バン　大帶をつける。儀禮「庶母及二門內一—レ一」

【施物】ブツ　僧寺に施す品物。魏書、任城王澄傳「—一勸至二萬計一」

【施與】ヨほどこす。吳志、孫靜傳「家富二于財一、性好—一一」‖惠與。

【施用】ヨウほどこしおこなふ。史、封禪書「各乘二異雄一一一」‖施爲。

【施餓鬼】セガ　圖無緣の亡者の靈を弔ひて讀經供養する。

【施主】シュ　圖○佛又は僧に物を施す人。‖檀那。○葬式・法事などの供養をなす主。釋氏要覽「梵語陀那譯底、唐言二—一一」

【施療】リヤウ　無料にて治療する。

【旂】六畫

キ　微

○すずあるはた。爾雅、釋天「有二鈴曰一一」「大—」○のぼり龍と、くだり龍とを畫きし赤色のはた「龍—」

【旂夾旗】キヤウ旗竿ばさみ。

【旂常】キヤウ　はた。日月を畫けるを常といひ、交龍を畫けるを旂といふ。周禮、謝賜文「銘二彼—一一、勳二于旂常一」

【旂旒】リウ　旂は龍を描けるはた。旒は龜蛇を描けるはた。詩、小雅「出車彭彭、—一央央」

【旃】

セン　先　或は旜に作る

○はた、幣柄のはた、士衆を招くに用ふ。孟、萬章「應人以ー」○けおりもの「毛ー」＝氈。○あらはす（表）○これ、之爲二字の合音。詩、魏風「上愼ー哉」○ー蒙は十干の乙（爾雅）

【旃茵】センイン 毛おり物のしきもの。淮南子「席二ー一褥二旄裘一」

【旃裘】センキウ けおりのころも。史、匈奴傳「被二ー一」

【旃旌】センセイ はた。班固、南巡頌「涯二天官之法駕一、建二日月之ー一」

【旃檀】センダン 印度・交趾等の熱帶の地に產する香木（晉書、穆帝紀）＝栴檀、檀香。

【旃陀羅】センダラ 殺者と譯し、四姓中の下等なるもの、性凶惡、行、禽獸にひとし。

【旃裘】センキウ あらはす。說文「一ー士飛」＝旌表。

【旃毛】センモウ けおりものの毛。漢書、蘇武傳「錯二雪與一ー一並咽レ之」＝氈毛。

【勉レ旃】ソクレンコレツ 勉めよと、勵ます語。高適詩「行矣各ー一レ、吾當レ捲二鉛刻一」

【旆】ハイ

旆は俗字

○はた（旗）種種の色の帛にてつくりし旗「大ー」「錦ー」○旗の總稱。詩、小雅「白ー央央」○ーは長き貌。又、旗の垂れ下る貌。又、飛び揚る貌。

【旆レ旌】ハイセイ 軍旗を後にかへす。顏延之、詩「立二渾天儀一表「大軍ー一レ、淮儀在レ路」＝反旆。

【旆旌】ハイセイ はた。詩、小雅「蕭蕭馬鳴、悠悠ー一」

【旆旆】ハイハイ ○旗の飛れ下る貌。又、飛び揚る貌。詩、小雅「胡不二ー一一」○長き貌。詩、大雅「崔萩ー一」

【旄】（一）バウ（二）バウ 旁

○㈠犂牛。又、其の尾。○はたほこ（幢）旄牛の尾を竿頭につけたる旗「干ー」「羽ー」㈡髦の毛ながし。○おいほれ「老ー」老に通ず。

【旄鉞】バウエツ 旄はたほこ、鉞はまさかり。皆天子の命を受けたる大將のもつもの。書、牧誓「左杖二黃鉞一、右秉二白旄一」

【旄丘】バウキウ 丘の前方高く後方低きもの。國風「前高ー一 後高陵丘」

【旄牛】バウギウ からうし。山海經「潘侯之山有レ獸焉、其狀如レ牛、而四節生レ毛、名曰二ー一一」＝犛牛。

【旄倪】バウゲイ 老人と小兒と。孟、梁惠王「反二其ー一一」＝老幼。

【旁】（一）ハウ・バウ（二）バウ・バウ（三）ハウ

旁は俗字 庚 陽

㈠ほとり（邊）○わき、かたはら（側）「路ー」○かたよる（偏頗）○つくり、漢字の右方の稱「偏ー」以上は傍に通ず。○大いなり。○ひろし（廣）○あまねし。○ー薄は、まじる（混同）又、ひろがる。㈡よる（依）莊、齊物「ー日月」○ー午は交り横はる。又、分れ布く。㈢ーーは馬の馳騁して息まざる貌。又、馬の盛んなる貌。○國つついで、兼ねて。

【旁引】バウイン ひろく考證する。杜牧文「尙宜二ー一曲緣、褒寵擇擇」＝旁搜博引。

【旁行】バウカウ ○あまねくゆきわたる。易、繫辭「ー一而不レ流」○橫書き。史、大宛傳「與レ華ー一、以爲二書記」

【旁格】バウカク あまねくきはめる。南史、齊太祖紀「昔我祖宗英叡、ー一幽明、未業不レ遺、仍多二世故一」

【旁求】バウキウ あまねくもとめる。書、太甲「ー一俊彥、啓二迪後人一」＝旁招。

【旁觀者審レ局者迷】バウクワンシヤシンキヨクシヤメイ 身を利害の外に置く旁觀者の判斷は公平にして、當局者の心の部りて迷ふをいふ。韓愈論「從レ旁觀者易レ是、其當二局則亂一」唐書、元澹傳「當局者迷、旁觀者審」

【旁采】バウサイ わかれたるちすぢ。直系の對。

【旁午】バウゴ ○往來の繁きをいふ。交り橫はる義。一縱一橫をいふ。漢書、霍光傳「使者ー一」○轉じて事の煩雜なるをいふ。

【旁妻】バウサイ 漢書、元后傳「多取二ー一一」＝側室。

【旁枝】バウシ わきに出でたるえだ。西陽雜俎「山石二寶玉、木ー一皆下垂」

【旁震】バウシン 四方にひびく。東京賦「撞二洪鍾一伐二靈鼓一、ー一八鄙」

【旁舍】バウシヤ かたはらの小屋。史、高祖紀「高祖適從二ー一一來」

【旁若無人】バウジヤクブジン 人を人とも思はざる擧動をなす。史、刺客傳「高漸離擊レ筑、荊軻和而歌二於市中一相樂也、已而相泣、ー一」

【旁洞】バウトウ あまねくうるほふ。潘尼文「和氣四充、惠澤ー一」

【旁皇】バウクワウ あまねくてらす。漢書「明哲煌煌、ー一無レ疆」

【旁臨】バウリン あまねくみる。蘇軾文「延レ英ー一、念二故老之不レ來」

【旁搜】バウサウ 旁引に同じ。韓愈、進學解「窮ー一而遠紹」

【旁綏】バウスイ あまねくすべあつめる。旁

書「加以二一歲深、博聞彊識」
【旁側】ボウソク　君のそば近きところ。又、侍臣。漢書、孝元皇后傳「內備二事一一」＝近習・近臣。
【旁居】ボウキョ　廣がりはびこる。唐は廣。長笛賦「聊田二一」
【旁証】ボウショウ　あまねくのぶ。史、始皇紀「武威二一、振二動四極一、禽二滅六王一」
【旁註】ボウチュウ　本文の側に書き入れする文、其の註釋文。＝旁注。
【旁通】ボウツウ　つぶさに盡くす。易、文言「六爻發揮、二一ノ情也」
【旁牌】ボウハイ　たて（盾）蘇軾詩「是刀殺二一一」
【旁午】ボウゴ　駈せて息、まざる貌。詩、鄭風「駟介二一」
【旁魄】ホウハク　ひろく下に被りおよぶ。漢書、司馬相如傳「大漠之鎭、二一四塞」
【旁薄】ホウハク　混同して一にする。又、みちひらがる。莊、逍遙遊「之人也、之謂也、物二一一萬物一以爲レ一」＝旁礴。
【旁礴】ホウハク　＝旁薄。
【旁聴】ボウチョウ　證かたはらをみる。漢岳賦「睹二憚臣一以二一一」

【旅】リョ　魚

○たび（客）「商二一」○たびびとたびする。一行する。○おほし（衆）○もろもろ（衆）○ならぶ（陳列）左、莊二六「庭實一百」○ついづ（序）順序を立てて竝べる。○ともにす（倶）禮、樂記「進二退一」○よろひのさね。○やまつり（祭山）論、八佾「季氏一於泰山」○えびすのをさ、西戎の長。○軍兵五百人の稱。轉じて廣く軍隊の稱「軍一」「師一」「禁一」○振一は衆を整へてかへる。○播種に因らずして生ずる。○易の卦の名、艮下離上。
【旅衣】リョイ　たびごろも。崔湜詩「清霜換二一一」＝客衣・征衣。
【旅行】リョコウ　たびする。
【旅行券】リョコウケン　旅行免狀に同じ。
【旅行免狀】リョコウメンジョウ　海外へ旅行する者に對し外務大臣より下附する許可證。＝旅行券・旅券。
【旅獒】リョゴウ　○西旅に產する犬の一種。○書經の篇名。周、旅獒序「西旅底レ貢厥二太保乃作二一一」
【旅客】リョカク　たびびと。易林「路多二枳棘一、步刺二我足一、不レ利二一一」＝旅人・旅客・客子・遊子。
【旅鴈】リョガン　たびのかり、遠方へ飛び行く鴈。何遜詩「霧洲一一渡、朔風吹二宿莽一」＝征雁。
【旅宮】リョキュウ　やどや、たびのやどり。元稹詩「一一難レ堪レ託、官僚自可レ鄰」＝旅次。
【旅館】リョカン　やどや、旅人宿。高適、除夜詩「一一寒燈獨不レ眠、客心何事轉悽然」＝旅舍・旅亭・客館・旅次・旅宿・旅寓・逆旅・旅店。
【旅越】リョエツ　たびぢにてやすむ。李白詩「醉來臥二資劍一、一一高堂眠」
【旅券】リョケン　旅行免狀に同じ。＝旅行券。
【旅魂】リョコン　たび人のこころ。杜甫詩「空山聞夜一一驚」＝旅情・客心・旅思。
【旅愁】リョシュウ　たびじたく。
【旅次】リョジ　たびのやどり。杜甫詩「老夫轉不レ樂、一一滋二百憂一」
【旅思】リョシ　たびのかなしきおもひ。駱賓王詩「肯臨芳春斷、黃沙一一催」＝客心・客愁・旅愁・旅魂。
【旅懣】リョモン　たびのうれへ。杜甫詩「日出清江望、喧和散二一一」＝客愁・羈愁・旅思。
【旅人】リョジン　旅客に同じ「易、旅卦」
【旅人宿】リョジンヤド　旅館に同じ。
【旅遯旅退】リョトンリョタイ　衆と共に遯退する。王禹偁、待漏院記「有二無レ毀無レ譽、——、竊位而苟レ祿、備レ員而拿レ身者、亦無レ所レ取焉」縮、樂記「今夫古樂、遯旅退旅」
【旅舍】リョシャ　旅館に同じ。
【旅情】リョジョウ　たびごころ。揚愼詩「坡老一一是歌酒、雅陶鄉思未棄花」
【旅樹】リョジュ　旅は道、樹は屏、道に設けたる屏。魏、郊特牲「蕭門而一一」
【旅宿】リョシュク　○旅館に同じ。張籍詩「一一今已遠」○たびのやどり。＝旅次。
【旅食】リョショク　飽郷にてくらす。蘇復古詩「一一思二鄉味一、砧聲起二客愁一」
【旅炊】リョスイ　たびにてかしぐ。陸游詩「一一雖二沙土一、得レ飽何暇レ擇」
【旅生】リョセイ　禾の種を播かずして生へたるもの。後漢書、光武紀「野穀一一、縁求充盛」
【旅前】リョゼン　むれをなしてすすむ。易林「蒼蠅單行、相得一一」
【旅團】リョダン　二個聯隊の兵にて編成せし軍隊。
【旅亭】リョテイ　やどや。＝客亭・客舍・逆旅・旅館。
【旅程】リョテイ　たびの道のり。
【旅店】リョテン　やどや。項斯詩「一一開偏早、鄉帆去未レ收」＝旅館。
【旅途】リョト　たびのみち、たびぢ。劉滄詩「一一誰見客青眼」＝客途。
【旅拜】リョハイ　竝びつらなりてをがむ。宋書、見者皆一一」
【旅抱】リョホウ　たびのこころ。李商隱詩「歸期無二雁報一、一一有二猿愁一」＝旅思・客心・旅情。
【旅百】リョヒャク　おほくの品をならべる。百品をならべる。左、宣十四「藏實一一、奉レ之以二玉帛一」
【旅泊】リョハク　たびやどりす。ふなどまり。博異志、欣二此一一、接事不レ得二鄉書一耳、惶惶而別」
【旅愛】リョアイ　ろぎん。略用

【旅力】リョク せぼねのちから。旅は脊。一解、旅は衆、衆力の義。詩、小雅「一一方剛」註二膂力方一。

【旅商人】ショウニン 國諸國を廻り歩きて商賣する者。＝行商人。

【旅稼】カセギ 國でかせぎ。他國へ行きてかねまうけをする。

【旅館】リョカン 國○道中馬のかひばを盛るかご。又、たびの荷物を容れるかご。○はたごやの略。＝旅館・旅人宿。

七畫

【旂】

旗（方部十畫）の略字。

【旌】セイ シャウ 圏

○はた（旗）旒竿の上に旄（ヤク）の尾をつけ、之に析きたる鳥羽をつけたる旗。○旗の總名。「師一」○あらはす（表示）賢人・孝子・義僕などを表彰する「一忠」「一義」「一賢」「表一」○しるす（記別）表識して明かにする「一別」

同訓異義 旌・見・現・顯・著・形・表・露・表・彰の別は見（部首七畫）の條を見よ。

【旌引】セイ あらはし引き上ぐ。宋書、戴顒傳「前太尉參軍戴顒、辟士章元、乘レ輿幽遠、守レ志不レ倫、宜下加二一一以弘中止退上」

【旌旄】セイボウ はたと、きぬがさと。齊書、宗室蕭昌傳「一一飄颻、進逼二淮圍一」

【旌竿】セイカン はたざを。常建詩「落日一一懸」

【旌節】セイセツ あらはしえらび。章曜、博奕論「博選二良材一、一一髦俊一」

【旌旃】セイセン はたの總稱。揚雄「凡旗之名雖レ異、一一爲二之總稱一」

【旌旗】セイキ はた。漢書、梁孝王傳「賜二天子一一一」＝旗幟。

【旌麾】セイキ はた、麾はさしづばた。江總詩「北窗命二新製一、南館列二一一一」＝旌旗。

【旌旆】セイハイ はた。王安石詩「夾レ砌陳二一一一、裝レ艦進二侵暉一」

【旌揚】セイヤウ あらはしかかぐ。又、しるし（表揚）す。謝朓「志二轅門一而一一」

【旌賢】セイケン 賢人をあらはす。後漢書、胡廣傳「德以一一、辭以建レ事」

【旌顯】セイケン あらはす。後漢書、公孫述傳「忠節志義之士、竝蒙二一一一」＝旌表。

【旌鼓】セイコ はたと、つづみと。晉書、輿服志「陳二乘輿車輦一於其殿庭一」

【旌賞】セイシャウ 善行又は功績をあらはしほむ。宋書、孝武帝紀「一二一波異一」＝旌褒。

【旌表】セイヒョウ あらはして次第をつけて定む。孫綽文「國無二逸民一、而賢善之流、必見二一一一矣」

【旌節】セイセツ 使者の持ちゆく旗じるし。周禮、秋「一一以宣二布于四方一」王昌齡詩「前騎引二一一一千里陣雲圍」

【旌揚】セイヤウ あらはしてぬき用ふる。北齊書、辛術傳「未レ蒙二一一一」

【旌旋】セイセン あらはしめぐる。後漢書、朱穆傳「守レ死善レ道、宜レ蒙二一一一」

【旌旒】セイリウ はた。隋煬帝文「一一風飄而從レ風」

【旌旆】セイハイ はた。宋書、鄧琬傳「一一拖レ雲、舳艫相レ海」＝旌旗・旆旌。

【旌旄】セイボウ はた、きしづばた。杜甫詩「漢苑入二一一一」＝旌旗。

【旌褒】セイホウ あらはしほむ。＝旌賞。

【旌表】セイヒョウ 善行を賞めあらはす。晉史、郡榮傳「八世同居、一二門閭一」

【旌別】セイベツ あらはして善人と惡人とをわかつ。晉、畢命「一二淑慝一、表二厥宅里一」

【旌命】セイメイ 賢才を明かにして能吏に任ず。晉書、山濤傳「搜二訪賢才一、二三十餘人一皆顯二名當時一」

【旌銘】セイメイ 死者の名をしるせるはた、銘旌。後漢書、趙壹傳「表以二一一之儀一」

【旌門】セイモン 祭祀宴會などの時に設くるはたにてつくりたる門。周禮、天官「爲二雜官一設二一一一」

【旌揚】セイヤウ あらはしかかぐ。王勃文「垂二一一之期一、崇二獎旅之道一」

【旌厲】セイレイ いさををあらはす。庾信文「勞德一レ、異レ亡顯レ紀」

【旌勞】セイラウ 功勞をあらはす。元史、順帝紀「右丞相脫脫、治レ河功成、宜レ有二異數以旌二其勞一」

【旌閭】セイリョ 善行の人の名を里門にかきあらはす。唐書、張道源傳「所レ居堂、產二芝草一、犬乳二鄰舍一、中宗以爲二孝感一、旌二其閭一」

【旌綸】セイリン あらはししるす。顏延之文「光二昭茂緒一、二二揚勳一」

【旋】

㊀セン ㊁セン 圏先 職

㊀めぐる、めぐらす、まはる、まはす「轉一」○かへる、かへす（反）還に通ず。○まとふ（遶）○まろし（圓）○りゅうづ（鐘懸）○ゆばり（小便）左、定三「夷射始一爲」夷射始は人名。○やや（差）○しばらく（俄頃之間）○また、かへって。史、始皇紀「一遂之琅邪」○璇に通ず「一璣」○便一ビンはたちもとほる。＝徘徊。㊁めぐる、まとふ（繞）借用嗨時「東郊十里香塵」

同訓異義 旋・廻・還・反・返・復・回の別は歸（止部十四畫）の條を見

よ。

○ソ旋・繞・遶・環・行・巡・周・回等の訓は繞（糸部十二畫）の條を見よ。○ヤ旋・稍・差・較・其の訓は稍（禾部七畫）の條を見よ。

【旋幹】センカン　めぐらす。めぐる。陸游詩「上天何眷我、四序浩ー〻」‖斡旋。

【旋渦】センカ　ふかくうづまくふち。淮南子「湍瀨ー〻」

【旋歸】センキ　めぐりかへる。古詩「客行雖レ云レ樂、不レ如二早ー一レ」

【旋曲】センキョク　めぐりまがる。淮南子「能遁退履繩而ー〻中レ規」

【旋軍】セングン　いくさをかへす。‖還軍・旋師。

【旋渦】センクワ　うづまき。黃庭堅詩「敎レ民風俚レ俗、撫レ俗水ー〻レ」‖盤渦。

【旋花科】センクワクワ　植物分類法にて、花又數の螺旋狀に卷く植物の總稱、朝顏の類。

【旋回】センクワイ　旋轉に同じ。‖旋廻。

【旋環】センクワン　めぐらす。めぐる。班固「賓ー〻乎舞歌」

【旋乾轉坤】センカンテンコン　天地を回轉する義。威武を振ひ國家を平定するにいふ。韓愈、潮州謝上表「陛下卽位以來、躬聽斷、旋レ乾轉レ坤、天戈所レ麾、莫レ不二率服一」

【旋止】センシ　かへりさだまる。曾植文「今我ー〻、崇卑云殊」

【旋師】センシ　いくさをかへす。‖還師・旋軍。

【旋踵】センシャウ　くびすをめぐらす、暫時の間。史、吳起傳「其父不レ一レ、遂死二於敵一」

【旋泉】センセン　うづまくいづみ。水經、注「昭山下有二ー〻一深不レ可レ測」

【旋轉】センテン　まはる、めぐる。北史「儀表見二大鳥一射之、正中、其廻狀如二車輪一ー〻而下、乃鵰也」‖旋回。

【旋旆】センハイ　はたをめぐらす、軍をかへす義。顏延之表「大軍ー〻レ、淹留在レ路」‖反旆。

【旋反】センハン　めぐりかへる。詩經「既不二我遐一不レ能二ー〻一」

【旋盤】センバン　陶器をつくるろくろ。

【旋遶】センネウ　めぐりさける。蜀度文「神魚鼓レ舞而ー〻」

【旋轡】センピ　馬をひきかへす、轡はたづな。

【旋風】センプウ　つむじかぜ。高適詩「一日千里如二ー〻一」‖旋飈。

【旋風筆】センプウヒツ　文筆を從橫自在に作る才能。方鎭揭年「用レ兵謀二治文案一如二流水一、文人相謂曰、世學レ有二此一ー〻」

【旋覆花】センプククワ　草花の名、をぐるま。

【旋舞】センブ　つむじかぜ。宋祁、朝元宮白牡丹詩「瑤圃瓊葩嶺高、靈旗豹節候二ー〻一」‖旋風。

【旋毛】センモウ　つむじ、うづまきたるけ。閑見後錄「碧裝驄駿馬也、莊憲太后、臨レ朝以賜二荊王、王愛二其ー〻一」

【旋律】センリツ　めぐるあわ。李嶠詩「ー〻繞成二碧玉池一」

【旋頭歌】センドウカ　國和歌の一體、上の句も下の句も五七七の三句より成る、本かと思へば末となり、末かと思へば本に旋るが故に名つく。

【族】

㊀ゾク　㊁ソウ　遊　竹

㊀やから、みうち、ともがら（類・處）「宗ー」「親ー」「疏ー」「戚ー」「皇ー」「貴ー」二ー は、父・子・孫。九ー は上高祖に至り、下玄孫に至る稱。○一人の罪の爲めに父母妻子までも罪する。又、其の刑。書、泰誓「罪ー人以ー」○たぐる（類）「水ー」「羽ー」○むらがる（叢）あつまる（聚）○物事の交錯して結ばれる所。莊、養生主「每至於ー、吾見其難レ爲」○やじり（矢鋒）‖鏃。○周代にて百家の稱。○うぢ（姓氏）㊁けしかける。‖嗾。○あつまる。‖族。○ふし、音樂の節奏。‖奏。○太ー は正月の律の名。‖太簇。

【族】　ソウ　麻　平

【族姻】ゾクイン　むこ、又はよめの家族。張華文「隆禮崇二親戚一、旁施惇二ー〻一」‖姻類。

【族殺】ゾクサツ　みうちを合せて殺す。五代史、司空頌傳「以爲レ通二書於梁一、莊宗ー〻之」

【族子】ゾクシ　○親類のこども。漢書、嚴助、會稽吳人嚴夫子子也、或曰族家子也」○兄弟の子、姪。

【族稱】ゾクショウ　國人民の身分のとなへ。華族・士族・平民の區別のとなへ。

【族生】ゾクセイ　むらがりおふ。生は産なり。爾雅「水ー爲レ萍」

【族姓】ゾクセイ　○同姓と異姓と。禮、呂刑「王曰、嗚呼敬レ之哉、官伯ー〻」注「族、同族、姓、異姓也」○同じやから。晉書、諸葛恢傳「王導晉與レ恢戮力二ー〻一」

【族雜】ゾクザツ　族稱と本稱と。

【族誅】ゾクチュウ　一人の罪によりて一族を誅する。

【族望】ゾクバウ　氏族と門望と。南史、周敷傳「倚二數ー〻一深求二交結一」

【族譜】ゾクフ　一族のけいづ、氏族の系譜。南史、賈希鏡傳「ー〻合百帙、七百餘卷」

【族別】ゾクベツ　○親族のわかち。周禮「掌二三族之別一」○種類によりて分つ。道德指歸論「物以レ一ー〻」‖類別。

【族味】ゾクミ　鵝の異名。清異錄「鵝捕レ之者、多論綱而獲二故雛雛翠子、同被二鄙如一、世人文二其名一、爲二一ー〻一」

【族滅】ゾクメツ　罪ありて一族をほろぼす。同じやから。史、秦申君傳「ー〻離散」

【旌】 チ 紙

○旖―は旌旗の風に従ふ貌。又、しなやかなる貌。又、雲のたなびく貌。又、盛んなる貌。

【旒】 旗（方部九畫）に同じ。

八畫

【旐】 テウ 篠

○はた、龜蛇を畫きし旗「玄武―」○吊の長さ八尺ある旗。

九畫

【旃】 セン 先

はたあし。旌旗の旒。漢書、揚雄傳「建二光耀之長一兮」

【旒】 リウ 尤 琉は旂、旗に作る

○はたあし、旌旗の垂れ下る者、ふきながし。禮記「龍旂九―」○かんむりのたれ、冕の前後に垂るる玉のかざり「冕―」

【旒旗】リウキ たれのあるはた。潘岳文「敢託二―一、爰作二斯誄一」

【旌旌】セイセイ 十二のふきながしのあるはた。高唐賦、注「―、謂レ建二太常十二旒一」

【旒纊】リウクワウ 緑にて玉を貫きて前後にたれたる貴人のかんむり。隋書、樂辟「穆穆―、蘊レ誠率レ敬」

【旒冕】リウベン 緑にて玉を貫きて前後にたれたる貴人のかんむり。隋書、樂辟「穆穆―、蘊レ誠率レ敬」

【旖】 イ 支

○―旎は旌旗の風に従ふ貌。しなやか。史、司馬相如傳「―旎從風」○盛んなる貌。宋玉、九辯「紛―旎乎都房」○雲のたなびく貌。漢書、揚雄傳「乘二雲霓之―旎一兮」

【旗】 キ 支

○はた。古は熊虎を畫き、大將の建てしもの、衆と其の下に期するもの。周禮、大司徒「以レ―致二萬民一」後は廣くはたの總名とす「牙―」「義―」○しるし（表標）左、閔二「佩玦之―也」さし物は中心を示す目標の義。○東北の星宿。○二十八宿の一。○箕。○清朝の軍隊の稱「滿州八―」

【旗下】キカ はたもと、大將の旗の下の義、大將に直屬する兵。後漢書、耿弇傳「―一萬餘十餘萬」＝麾下。

【旗蓋】キガイ はたと、きぬがさと。潘岳、關中詩「―相望、偏師作レ援」

【旗竿】キカン はたざを。晉劉記「有二軍私一泊二於―一上一其鳴甚哀」

【旗艦】キカン 司令長官の坐乘せる軍艦。

【旗旂】キキ はた。劉放詩「風雲齊二命令一、龍虎會二―一」

【旗魚】キギョ かぢきまぐろの異名、長さ丈餘、口端鋭く尖りて角狀を爲し、船の舵木を穿つことありといふ。

【旗旄】キバウ いくさばた。宋書、武帝紀「―首レ塗則八表響震、偏師先レ路則多壘委徹」

【旗戟】キゲキ はたぼこ。韓愈詩「晶光蕩相射、―開以森」

【旗鼓】キコ 軍用のはたと、つづみと。史、淮陰侯傳「信建二大將之一―一」

【旗鼓相當】キコアヒタル 互に軍勢を張り合ふ。轉じて技倆をくらべる。晉略別傳「太守單子春、欲レ試二略之才疑一、謂略曰、吾欲二自與レ卿――一」

【旗幟】キシ はた、幟は旗じるし。史、高祖紀「―皆赤」

【旗章】キシャウ はたじるし。禮、月令「以爲二―一、以別二貴賤等級之度一」晉書、禮志「諸侯親二天子一、各建二其―一」

【旗手】キシュ ○はたもち。○軍旗を捧持する者、職隊附の少尉が之をつとめる。

【旗色】キショク ○はたいろ、はたじるし。○圖軍の勢。

【旗旌】キセイ はた。宋之問詩「和風吹二鼓角一、佳氣動二―一」＝旌旗。

【旗纛】キタウ はた。唐書、張仲武傳「獲二馬牛橐駝一―一、不レ可レ計」＝旗旄。

【旗亭】キテイ 酒屋、料理店、旗を立ててしるしとするが故。史、三代世表「會二―下一」集異記「開元中、詩人王昌齡・高適・王之渙齊レ名、一日天寒微雪、三詩人共詣二―一、酒小飲」

【旗旌】キセイ はた。唐書、禮樂志「戎通閒雜鎭、稍復舞二破陣樂一、然舞者各執二雉尾一、執二―一、纔十人而已」

【旗纛】キタウ 軍旗がたふれ、敗軍にいふ。呂覽「賢主之擧也、豈必二―將鼓一、而乃知二勝敗一哉」

【旗頭】キガシラ 圖昔時、一地方のさむらひの長。勢ひて仲間の首領ヲ

【旗本】キモト 圖德川時代將軍直參の士にて目見え以上禄石以下の者、旗下の士。

十四畫

【旛】 ヘン 元

○はた（旗）幅の下に垂れ下れるしるしばた。○はたじるし。○旌旗の總名。後漢書、禮儀志

「建旐―」○―は飛揚する貌。石鼓文「左驂――」【旖旎】は。蘇軾詩「天風吹――」

十五畫

【旛】 クヮイ　泰

○はた(旗)大將のさしづばた。左、桓五「―動而鼓」＝麾。○いしゆみ、石を發して敵をうつしかけの車。

【旞】 スキ　寘

はた。全き羽を旌の上に繋ぐもの。

十六畫

【旟】 ヨ　魚

○はた、鳥隼等を畫きし旗、其の勇健に象る。州里にて建つる所「干―」○あがる(揚)詩、小雅「鞗則有―」【旟旐】はた。晉筮詩「君子往守東南圻、―旐錯如二翔鳧一」

无部

【无】 ブ　虞

なし(亡)＝無。

同訓異義　ム無・無・靡・罔・亡・莫・勿・毋・沒・微の別は無(火部八畫)の條を見よ。

【无告】なし　とがめを免る。易、乾卦「―者普捕レ過也」【无咎】かぎりなし。易經「坤厚載レ物、德合二―一」＝無疆・無窮。【无妄】易の卦の名。震下乾上、至誠にして邪心なし。易經「―之疾、勿レ藥有レ喜」【无妄之災】故なくして咎を得る災。【易无妄、六三爻辭】【无咎】きこえず。

【旡】 キ　未

○のどつまる。○いきつまる。飲食氣通不得息。

五畫

【既】 既(次條)の譌字。

七畫

【既】 丶　未　既は譌字

○すでに(已)もはや。○をはる(畢)「終―」○つく、つくす(盡)「告―」左、桓元「日有」食之―」○うしなふ(失)○すこしくらふ(小食)○俸月の給米【既廩】小食なり、已に从ふ、死の委。

同訓異義　ム既・已・業・業已○既は盡也、訖也と註す、過去の辭、將の反、もはやと譯す。○已は未の反、事の現にかくなりたる義なり、月已望といへば、十五夜をいひ、既望といへば、十六夜をいふにて知るべし、兵卒が、此方の岸に居りて、一人も川に入らざるをば、未レ濟といひ、一人にても渡り始めたれば、已濟といひ、全軍が渡り終れば、既濟といふ。劉容傳「親既以二天年一下世、妾已嫁レ夫」○業は已然日レ業と註す、已の義輕く、然の字重し、事の然る上を主としていふ、既は過去にかかり、已は過去より現在にかかり、業は未來にもかけていふ、史記に「張良業爲取レ履、因長跪履レ之」の如し、もはや老人の履を取る賤役を甘んじて爲したる上は、勞已む可きにあらずと、翩々恭しく長跪して、履かしめたりとの意。○業已の二字連用するときは、意稍緩し。

○スッ既・盡・殫・竭・索・落・墨の別は盡(皿部九畫)の條を見よ。【既已】すでに、とくに。莊子「―爲レ一矣、且得レ有レ言乎」【既濟】易の卦の名。離下坎上。易經「―享小、利レ貞、初吉終亂」【既成】すでに出來あがる。【既生魄】陰曆十七日の異名【書、武成】【既望】陰曆十六日の書、召誥「惟二月―」＝哉生魄。【既廩】俸月の給米。中庸「―稱レ事、所二以勸二百工一也」【既往不レ咎】すでに過ぎ去りし事はとがめ立せず、既往は過去。論、八佾「成事不レ說、遂事不レ諫、―」【既設】すでに設けおく。【既倒】すでにたふれる。韓愈、進學解「障二百川一而東レ之、瀾二狂瀾於―」【既知數】代數學にてすでに値の知れてゐる數。未知數の對。【既定】すでに定まる。【既得】すでに得たり。【既得權】正當の手段にて、すでに得てゐる權利＝先取得權。【既望】陰曆十六日の書、召誥「惟二月―」赤壁賦「壬戌之秋、七月―」＝哉生魄。【既廩】俸月の給米。中庸「―稱レ事、所二以勸二百工一也」【既往不レ咎】すでに過ぎ去りし事はとがめ立せず、既往は過去。論、八佾「成事不レ說、遂事不レ諫、―」

九畫

【既】 既(前條)の俗字。

日部

【日】 ジツ　ニチ　質

○ひ(太陽)「旭―」「烈―」「落―」

○ひかげ（晷影）詩經「春ノ―遲遲」○ひる（晝）朝から晩まで「―夢」孟、離婁「夜以繼ノ―」○ひとひ（一日）一晝夜、二十四時間の稱。○ひび、毎ノ―。史、司馬相如傳「―往而朝ニ相如ニ」○さきに（先日）○のちのひ（來日）○こよみ（曆數）左、桓十七「天子有ニ日官ニ」○ノ―者は時ノ―を占候する者。○天子の象。○國ひ、天照大御神がノ―の神なるが故に、天皇の御事を申すに用ふる語「ノ―嗣」

【日脚】ひかげがうつる。潘岳、生涯「酒酣走漫、樂闋ノ―」

【日永】ひがながい。陽都劉詩「願ニ接林塘閒ニ前ニ此閒ノ―」

【日御】曆を掌る官。左、桓十七、天子有ニ日官ニ、諸侯有ニ日御ニ」

【日月】○日と月と。易、乾卦「與ニ―ノ―合ニ其明ニ」○一日又一月。論、維也「其餘則ノ―至焉而已矣」○つきひ。＝光陰。

【日月欲ノ明晉蛍雪之】人の本性の動もすれば私慾の爲めに蔽はるるに喩ふ。又、奸臣が君の明を掩ふにも喩ふ。〔文子〕淮南子には蔽を蠹に作る。

【日月無ニ私照ニ】公平に恩を施すに喩ふ。魏、孔子閒居「天無ニ私覆ニ地無ニ私載ニ―ノ―」

【日月麗ノ天】日月の天に在るをいふ、麗は附。漢書、武帝紀「―、高明所ニ以表ニ德、山岳題ノ地、柔博所ニ以成ニ功」

【與ニ日月ニ爭ノ光】道德功業の盛んなるをいふ。史、屈原傳「推ニ此志ニ也、雖ニ與ニ日月ニ爭ニ光可ニ也」

【日月不ニ當ニ一物ノ一勝ニ其明ニ】明王は一人の爲めに法を枉ぐべからざるに喩ふ。古文孝經、三才章、傳「――、明王不ニ爲ニ一人ノ一枉ニ其法ニ」

【日月逾邁不ニ我與ニ】歲月の人を待たざるをいふ〔論、陽貨〕

【日月逾邁】逾は益、邁は行なり、年老いて死期の近づくをいふ。書、泰誓「我心之憂、――若ノ弗ニ云來ニ」

【日毋】ひ、太陽。日は陽德の母なる義。枚乘文「流覽無窮、駕ニ神ノ―ニ」

【日晡】ひぐれ、晡は申の刻、今の午後四時。白居易詩「但惜春將ノ晩、翛然日漸晡」＝日餔。

【日餔】前條に同じ。史、呂后紀「ノ―時、驚擊ノ產」

【日蒸】陽氣が陰氣に蔽はるる義、臣下の勢の强きに喩ふ。後漢書、鄧禹傳「ノ―則有ニ地裂ニ」

【日力】日出から日沒まで、光陰をいふ。孟、公孫丑「去則極ニ日之力ニ而後宿焉」宋史、李綱傳「愛ニ惜ノ―ニ」

【日曆】日日の出來事を書きしるす〔大戴禮〕＝日記・日誌。

【日域】○日の出づる處。支那人、朝鮮を呼してノ―といひ、日本を呼して日東といふ。揚雄、東楊賦「東發ノ―ニ」○日の照らす域内、天が下。魏書、李孝伯傳「世祖太武皇帝、英叡自ノ天、龍ニ翔ノ―ニ」

【日暈】ひがさ、雲氣が太陽をとりまきて環狀を爲す現象。晉書、天文志「白虹貫ノ日、ノ―五重」

【日景】ひかげ。周禮「正ノ―ニ以求ニ地中ニ」＝日晷。

【日午】まひる、正午。柳宗元詩「ノ―獨愛無ニ餘暑ニ山風隔ノ竹敲ニ茶臼ニ」

【日次】ひなみ。又、日のやどり。北齊書、北郊歌「ノ―月紀、方極ニ九州ニ」

【日常】つねひごろ、ふだん。＝平常。

【日乘】ひびの記錄。＝日記・日誌。

【日晡】太陽が南方に至る。周禮「ノ―則景短多ノ暑、日北則景長多ノ寒」

【日日】まいにち。漢書、賈山傳「ノ―射獵」＝毎日。

【日暮】ひぐれ。孟浩然詩「ノ―孤舟何處泊、天遲一望斷ニ人歸ニ」

【日北】太陽が北方に至る。周禮「日南則景短多ノ暑、ノ―則景長多ノ寒」

【日沒】日が入る。日の入り。

【日夜】ひるとよると。起、發起「ノ―哭泣」

【日用】ひごとにつかふ。易、繫辭「百姓ノ―而不ノ知」

【日來】○ひごろ。來は助語。○日に來る。蜀仲舒文「更化則可ニ善治ニ善治則災害日去、福祿ノ―ニ」○日が出て來る。易、繫辭「日往則月來、月往則ノ―」

【日落】ゆふひが入る。鮑照詩「ノ―望雲歸」

【日輪】ひ、太陽。韓愈詩「中夜起ノ視、溟渤翻ノ―ニ」

【日蓮宗】國日蓮の始めたる宗旨、法華經一部を所依とすれば、俗に法華宗ともいふ。

【日錄】ひびの出來事をしるす。又、其の帳面。王氏雜記「王安石既罷ノ相、惟其錄政日無ニ廢狀ニ乃撰ニ神宗ノ―ニ、歸ニ過于上ニ、掠ニ美于己ニ」＝日記・日誌。

【日和】○日光がうららか。歐陽修文「風悟ノ―」○國ひより。天氣模樣、空もやう。

【日行】○ひあし。孟浩然詩「冬面ノ―遲」○一日の行程。禮記「ノ―百里」

【日角】額の中央の骨の隆起して

日の如き状を為す、貴人の相。後漢書、光武帝紀「光武隆準―」隆準（リュウセツ）は鼻すじが通ってゐる。

【日下五色雲見】（ニッカゴシキウンアラハル）瑞雲のあらはるるをいふ。宋史、韓琦傳「弱冠擧二進士一、名在二第二一、方唱レ名、太史奏、――、左右皆賀」

【日刊】（ニッカン）日日出版発行する「―新聞」

【日記】（ニッキ）ひびの事を書きしるす。又、其の帳面。新序「周舍事二趙簡子一（中略）曰、願爲二諤諤之臣一、墨レ筆操レ牘、隨二君之後一司二君之過一、而書レ之、日有レ記也、月有レ效也、歳有レ得也」日誌・日錄・日暦・日乗。

【日蝕】（ニッショク）太陽の通過するみちすぢ。五代史、司天考「黄道者―也」

【日晷】（ニッキ）ひかげ。隋書、天文志「撰二測―一、求二其證驗一」

【日旗】（ニッキ）日を書きたるはた。杜牧詩「―翩翩想二鴈揚一」

【日勤】（ニッキン）毎日役所など（へ）出てつとめる。

【日興】（ニッキョウ）ひびのたのしみ。杜甫、飲中八仙歌「左相―費二萬錢一」

【日課】（ニッカ）ひびの仕事のわりあて。陸游詩「老人無二―一、有レ興即題レ詩」日程。

【日光】（ニッコウ）ひのひかり。魏書、孝文昭皇后高氏傳「初后、幼曾夢在二堂内一立、而―自二窗中一照レ之、灼灼而熱」

【日官】（ニッカン）曆を掌る官。左、桓十七「天子有二―一、諸侯有二日御一」

【日觀】（ニッカン）泰山の頂上、日出を觀る峯の名。漢官儀「泰山東南山頂、名曰二―一」

【日計不足歳計有餘】（ニッケイフソクサイケイアリヨ）目前の利なきも、久しくして其の益を見るをいふ。文子、精誠「莊、虞樂楚「吾日計レ之而不レ足、歳計レ之而有レ餘、庶幾其聖人乎」

【日限】（ニチゲン）ひきり、日數の限り。

【日魂】（ニッコン）日の神。參同契「陽神―一、隆神月魄」

【日祭】（ニッサイ）まひにちまつる。國語「蔡公謂父曰、――月祀、時享歳貢」

【日際】（ニッサイ）太陽のはとり。何遜詩「天末望二淪浪一、――數二烟雲一」日邊。

【日削】（ニッサク）いきほひが日日に減ずる。史、屈賈傳「屈原既死之後、楚日以削」

【日參】（ニッサン）圀神佛へ毎日參詣する。

【日子】（ニッシ）○ひづけ。南史、劉之遴傳「今本無二上書年月一―一」○日數。○日輪の子。北史、高句麗傳「我是―一河伯之外孫」

【日支】（ニッシ）○毎日支給する。宋史「人―一錢二百、米二升」日給。○日本と支那と。

【日誌】（ニッシ）ひびの出來事を記す。又、其の帳面。荀子「王者之功名、不レ可レ誇二日志一也」志は誌に同じ。日記。

【日蝕】（ニッショク）日月が日と地球との間に來りて日をおほふ。禮記「―則天子素服、而修二六官之職一」日食。

【日食】（ニッショク）前條に同じ。史、天官書「春秋二百四十二年之間、―一三十六」

【日星】（ニッセイ）ひと、ほしと。指掌接記「―隱レ霧、山搖レ形」

【日精】（ニッセイ）菊の異名。羣芳譜「菊有二兩種一、花大氣香、葉紋者、爲二甘菊一、花一此―一也」

【日抄】（ニッショウ）日日ぬきがきする。又、其の書名。宋史「所レ著―一百卷」日鈔。

【日永】（ニチエイ）ひるよる。王榮、從軍詩「―涼風發、閑關遠二音信一」日夜。

【日常】（ニッジョウ）圀日給に同じ。

【日月】（ニチゲツ）あさゆふ。大戴禮「―就レ業、而夕自省思、以致二其身一」

【日長】（ニッチョウ）○日が長い。白居易詩「―晝加レ餐、夜短朝偏レ睡」日永。○年月ながし。晉書、李密傳「臣盡二節於陛下之一―」

【日中】（ニッチュウ）○まひる。又、其の前後。說苑「社而祈レ穀、如二―一之光一」○春分の日。書、堯典、傳「―一謂二春分之日一」

【日程】（ニッテイ）毎日する仕事の見つもり。元史「考試以二論及經義詞賦一分爲二三科一、作二三―一」日課。

【日東】（ニットウ）日本國の稱。

【日邊】（ニッペン）日のほとり。李白詩「孤岸

青山相對出、孤帆一片日——來」

【日俸】ニチホウ　ひびの給料。白居易詩「爲レ貧逐ニ——一」日給。

【日本】ニホン　やまと、わが國名。宋史、日本國傳「——國本倭奴國也、自以ニ其國近ニ日所ニ出、故以ニ——一爲レ名」

【日本硯】ニホンケン　日本製のすずり。宋景濂集「——銘、表面華、四海一家、此非ニ文明之化一邪」

【日本紀】ニホンギ　日本書紀の略稱。次條參看。

【日本書紀】ニホンショキ　三十卷、神代より持統天皇に至る編年史、元正天皇の養老四年、舍人親王撰す。

【日出三竿】ヒイデテサンカン　日出でて三竿餘ち三丈程の高さに至る。午前八時頃。南齊書「——、朱黃色赤氣」

【日出而作日入而息】ヒイデテサクヒイリテイコフ　終日勞作して、日沒に至りて休むの帝王世紀「——、鑿レ井而飲、耕レ田而食、帝力于レ我何有哉」

【晉レ日并レ行】ヒニツイデテコウス　晝夜つづけざまに疾く行く義。史、孫子傳「率ニ其步軍一與ニ其輕銳一、——逐レ之」日倍レ道倉レ行。

【日不レ移レ晷】ヒニカタヌ　時を經ざるにいふ。漢書、王褒傳「人不レ還レ顧、——」

【日暮途遠】ヒクレテトエンシ　年已に老いて期する所なほ遠きに喩ふ。史、伍子胥傳「吾——、故倒行而逆ニ施之一」蔚縣子「日薄ニ西山一」ニチハクセイザン　年老いて死に垂んとするをいふ。薄は迫。李密、陳情表「但以劉——、氣息奄奄、人命危淺、朝不レ慮レ夕」

【日中則移月滿則虧】ヒナカスレバスナハチウツリツキミチレバスナハチカク　盛極まれば必ず衰ふるに喩ふ。史、蔡澤傳「——、物盛則衰、天地之常數也」

【日中則昃月盈則食】ヒナカスレバスナハチカタブキツキミチレバスナハチカク　盛んなる者は必ず衰ふるに喩ふ。易、豐卦、彖傳「——、天地盈虛、與レ時消息、而況於ニ人乎、況於ニ鬼神一乎」

【不レ日成】ヒナラズシテナル　日數を費さずして成就す。詩、大雅、靈臺「庶民攻レ之、不レ日成レ之」

【日改月化】ヒニアラタニツキニカワル　日日月月にうつりかはる。莊子「一晦一明、——、日有所レ爲、而莫ニ見其功一」

【日削月割】ヒニサクツキニワル　日日月月におとろへゆく。六國論「——、以趨ニ於亡一」

【就日望雲】ヒニツキクモヲノゾム　太陽の光に就き、雲のおほふを望む如く、天子の德を仰ぐをいふ。史、五帝紀「放勳其仁如レ天、其知如レ神、就レ之如レ日、望レ之如レ雲」

【日就月將】ヒニナリツキニスス　日日月月に進歩する、就は成る、將は進む義。詩、周頌、敬之「維予小子、不ニ聰敬一止、——、日有ニ緝ニ熙于光明一」

【昧レ旦】マイタン　蜀の地は霧深く日を見ること少きが故に、犬は日を見てほゆ。見識狹き小人が君子の嘉言善行に接して騒き謗るに喩ふ。韓愈文「蜀申山高霧重、見レ日時少、每レ至ニ日出一、則驚ニ吠疑而吠レ之」

【日陵月替】ヒニリョウツキニタイス　日日月月におとろへる。貞觀政要「——、以至ニ危亡一」

【日下開山】ニチカカイサン　國武藝又は相撲道にて天下無敵の者に與へる稱。日下は天下、開山は草創、過去現在に類無き義。

【窮ニ日之力一】キワメニチノチカラヲ　朝より暮までせい一ぱいつとめる。孟、公孫丑「去則——、而後宿哉」

【日日新又日新】ニチニアラタニマタニチニアラタナリ　日日悪習の源を去りて自らあたにす。大學「湯之盤銘曰、苟日新、——」

【日亦不レ足】ヒモマタタラズ　終日之を爲すも、爲し盡す能はず。書、泰誓「我聞吉人爲レ善、惟日不レ足、凶人爲ニ不善一、亦惟日不レ足」詩、小雅、天保「降ニ爾遐福一維日不レ足」

【日外】ニチガイ　國かつて。日前日。

【日本魂】ヤマトダマシイ　我が國民固有の精神、我が國民性。日大和心ヤマトゴコロ和魂。

【旦】タン　一　畫　日部

○あした（朝）「元ー」あかつき（曉）「平ー」「清ー」「早ー」○つとに（早）○ーーはあきらか（明）又、懇ろに誠ある義。○演劇にて婦女に扮する者、女形ヲヤマ○元ー正ー歳ーは正月元日のあさ。

【旦暮】タンボ　明なり、日が一の上に見はるるに從ふ、一は地なり。

【待レ旦】タイタン　夜の明けるをまつ。書、太甲「先王昧爽丕顯、坐以ニ——一」

【旦昏】タンコン　旦暮に同じ。李密文「ーー交謝」日旦暮。

【旦日】タンジツ　あした。史、項羽紀「ーー饗ニ士卒一爲擊ニ破沛公軍一」日明朝。

【旦夕】タンセキ　あさばん。白居易詩「ーー秋風多、宴衎半傾倒」日朝夕。旦暮。

【旦暮】タンボ　あしたと、ゆふべと、昔は夕。暮子「ーー從ニ事於此一」日夕。

【旦旦】タンタン　○あさなあさな、每朝。孟、告子「ーー而伐レ之」○あきらかなる貌。又、ねんごろに誠ある貌。詩、檜風「信誓ーー」日恒恒。

【旦晝】タンチュウ　ひるま（晝間）孟、告子「ーー之所レ爲、有レ梏ニ亡之一矣」

【旦朝】タンチョウ　あさ、あした。宋玉、高唐賦「ーー親レ之如レ言、故爲立レ廟、號曰ニ朝雲一」巫山（五六〇頁一段）參看。

【旦潮】タンチョウ　あさしほ。鮑照詩「浸淫ーー廣、瀰漫宿雲滋」

【旦那】タンナ　○梵陀那 dāna 飯食の略、僧侶に施しをする人。日施主・檀家・檀越・

檀那。國○主人をいふ。○をつと、亭主。‖夫人。○商家のとくいさき。○身分卑き人が上流の人を呼ぶ稱。

【旦那】ダンナ　○あしたと、ゆふべと。又、あけくれ。顧氏家訓「古人云、千載一聖猶二一一一也」‖旦暮。○迫りて急なるにいふ。史、管世家「當二是時一、一一之人、皆不レ能レ待、而欲レ救レ之」‖旦夕。

【旦朝】チョウ　よあけがた、旦日翼明の條。儀禮「宗人曰、一一行レ事、主人曰諾、乃退」‖平明。

【旭】キョク　沃

○あさひ(朝日)「初一」「朝一」「紅一」○日の旦に出づる貌。○あきらか(明)○一一はおごれる貌。又、自得の貌。又、鼓動する聲。

【旭暉】キョクキ　旭光に同じ。暉は日光。

【旭旦】キョクタン　日の丸のはた。‖日章旗。

【旭旭】キョクキョク　○小人志を得ておごれる貌。陶潛「一一踽踽惟也」○自得の貌。漢書、揚雄傳「唯唯一一」○鼓動の聲。漢書、揚雄傳「淵淵一一」

【旭光】キョクコウ　あさひのひかり。‖旭暉。

【旭日】キョクジツ　あさひ、初出の日。詩、旭風「一一始旦」

【旭旦】キョクタン　日の出。韋應物詩「開レ門臨二廣陌一、一一車馬喧」

【早】サウ　國　促音　サッ

○はやし「一朝」「一旦」○すみやか(速)「人一計」○あした(晨旦)○つとに。○未だ其の時に及ばず「尚一」さきんずる(先)○柞栗の屬。‖皁。

【早鴉】サウア　あけがらす。李白詩「東方日出時一一、城門人開掃二落花一」‖曉鴉。

【早晏】サウアン　はやきと、おそきと。元結詩「設置無二遠近一、漫樂無一一一」‖早晩。

【早開】サウカイ　はやくひらく。‖早發。

【早行】サウカウ　朝はやく出立する。書言故事「一一曰二戴レ星而出一」劉禹錫、早行詩「馬上摘二殘夢一、馬斷時復驚」‖早發。

【早晏】サウアン　はやまなび。

【早起】サウキ　はやおき。‖蚤起・晨起・夙起・夙興。

【早歸】サウキ　はやくかへる。

【早急】サウキフ　いそぐ。‖火急・迅急・速速。

【早計】サウケイ　はやまる。莊、齊物「汝亦太一一一」

【早慧】サウケイ　幼にして知慧さとし。北史、王紘傳「奇其一一」‖夙慧。

【早晩】サウバン　よあけがた。‖挽晩・早旦。

【早昏】サウコン　次條に同じ。文中子「一一少婚、敎レ人以レ倫」

【早婚】サウコン　年わかくして結婚する。詩經、疏「文王十五、生二武王一、武王有二兄伯邑考一、故知二人君一一所二以重一一繼嗣一」

【早歲】サウサイ　としわか、わかきよはひ。蘇軾詩「一一便懷齊物志」

【早早】サウサウ　はやばや。杜甫詩「南楚青春異、喧寒一一分」‖匆匆。

【早霜】サウサウ　はやく降りたるしも。易林「一一晩雲、傷レ禾害レ稼」

【早朝】サウテウ　おきる。禮記「擢子一一、惟所レ欲、食無レ時」

【早熟】サウジュク　○はやくじゅくす。北史、高頻傳「江南土熟、水田一一」○國　ませる、幼くしておとなぶる。

【早出晩入】サウシュツバンニフ　朝はやく出で行き、日暮れてかへる。國子「賢者之治レ邑也、一一」

【早春】サウシュン　春のはじめ、はつはる。‖初春・孟春。

【早穗】サウスイ　わせのほ。范成大詩「一一已垂垂、晩苗猶剪剪」

【早世】サウセイ　わかじに。左、昭三「無緑一レ隕レ命、寡人失レ望」‖夭死。

【早成】サウセイ　はやくおとなぶる。蜀志、諸葛瑾傳「亮與二兄瑾書一曰、瑾已八歲、瞻視可レ愛、然二其一一一、恐不レ爲二遠器一」‖夙成。

【早霽】サウセイ　はやく降りたるゆき。

【早稻】サウタウ　わせ。白居易、晩歸二湖上一詩「碧穗線頭抽二一一、青莖稍帶展二新滿一」

【早達】サウタツ　はやく出世する。少年にして榮達する。呂温詩「纔使能時能一一、定知不レ作二黑頭人一」

【早旦】サウタン　早朝に同じ。

【早朝】サウテウ　あさ、つとめて。五經通義元「金果一一猿摘去、玉莖晩後鳳銜來」‖早旦・昧旦・早晩。

【早潮】サウテウ　あさしほ。陶翰詩「鏡裏孤二一一一、潮來如二風雨一」

【早梅】サウバイ　はやざきのうめ。唐太宗詩「繁華偏二落岸一、零落聞二一一一」

【早白】サウハク　いそぎて申す。漢書「公不一一一、與俱受戮矣」

【早蒜】サウサン　○朝早く出發する。‖早行。○早くひらく。‖早開。

【早晩】サウバン　○はやきと、おそきと。‖早晏。○おそかれはやかれ、いつか。李白詩「不レ知馬伯起、一一與二誰酒一」○あさばん。白居易詩「一一驪山有二此聲一」‖旦暮。

【早涼】サウリャウ　はやくすずけだつ。劉禹錫詩「碧梧宮二一一一」

【早速】サウソク　すぐに、すみやかに。

【旨】シ　紙　音は俗字

○うまし(美味)詩、邶風「我有一一蓄」○うまきもの、論、陽貨

「食ー不甘」○よし、うつくし（美）うまい。書、說命「王曰ー哉」○むね。易、繫辭「其ー遠」こころもち「大ー」「聖ー」「經ー」「立ー」「徹ー」「密ー」○こころざし（意志）

【旨意】シイ　かんがへ、おもむき。晉、緊「ー深遠」＝旨趣・意旨。

【旨趣】シシュ　むねおもむき。晉、緊「言寡而ー、隱約而義微」

【旨酒】シシュ　うまさかな。詩、仲尼燕「ー一勺」＝美酒。

【旨甘】シカン　うまきくひもの。人の子が、親を養ふ美味。宋史、劉恕傳「家素貧、養二母一給ニー一」＝美味・甘旨。

【旨蓄】シチク　うまきたくわへ。詩、小雅、鹿鳴「我有ニー一、以燕ニ嘉賓一之心」＝美酒。

【旨酒嘉殽】シシュカコウ　旨き酒、美き肴。（戰國策、外傳「雖ニ有ー一ー一、不ニ嘗不ニ知ニ其旨一」

【旨哲】シテツ　むね、おもむき。準擬、序「參ニ六家之要旨一、合ニ五經之ー一ー」

【旬】ジュン　日

○とをか（十日）○轉じて十年の義。白居易、呈劉夢得詩「且喜同年滿七ー」○あまねし（徧）○ひとし（均）○みつ（滿）

○あした（朝）○あさひ、日初めて出づ。○大いなり。

【易】四　畫　日

（一）エキ・ヤク　陽　質

（二）イ

㊀かふ、とりかへる（換）「交ー」流、梁惠王「以小ー大」これ逆のものなかへる「變ー」「改ー」易、繫辭「聖人ー之以書契」○かはる（變）○ゆるもの（寄宮）「蜥ー」○五經の一、三十二卷。連山、歸藏、周ー。○うらなひ、うらなふ。卦爻の象によりて事物の變化を知る古代の法。又、其の學。○場に同じ。㊁やすし。難の反對「容ー」「平ー」「主ー」○しがる「簡ー」孟、離婁「事在ー而求諸難」○安らか、安全。中庸「君子居ー以俟命」○おこたる（怠）○あなどる（慢）かろんず（輕）「慢ー」「輕ー」○なさむ（治）ととのへる。論、八佾「雖ー與其ー也寧戚」○はぶく（省）○やはらぐ（和）

同訓異義　易・疑・化・替・代・更・遞・途・後の別は變（言部十六畫）の條を見よ。

○易・安・寧・康・泰・綏の別は安（宀

部三畫）の條を見よ。

【易易】イたやすき貌。禮記「知二王道之一ー一也」

【易簡】かんてがる。易經「ー一天下之理得矣」‖易直。簡易。

【易行道】ぎやうだう 佛陀の弘願力により て佛となる義、他力本願。自力の修行にて佛果を得る難行道の對。龍樹菩薩論「菩薩求二阿毘跋致一有二二種道一、一者難行道、一者ー一」

【易植】しよくうえつけやすし。管子「濕地應ー一、則樂麻ー一也」

【易直】ちよくてがるにしてなほし。周禮、考工記「取二諸ー一也」

【易蜴】えきとかげの異名。揚子方言「守宮、秦晉西夏、謂二之守宮一、其在二澤中一者、謂二之ー一一」

【易牙】がせき 斉の桓公の宦者、善く庖厨の事を司る。孟、告子「至於味一天下期二於ー一一」‖狄牙。

【易氣】きやすし 新しき氣を吸ひかへる。管子「練ー一、染骨柔ー一筋」

【易簀】せきやすし 風林をとりかふ、賢人の死をいふ。曾參が臨終の時、敷きあたる季孫から貰ひし大夫用の簀を身分に相應せずとて取り易へさせて死せし故事。禮、檀弓「元起ー一」

【易次】じしきやすし 時節の順序をかへる。絕書、四時ー一、寒暑失ー一常」

【易者】えきしやうらなひしや。八卦見。‖占者・卜者。

【易象】えきしやうえきのうらかた。

【易水】えきすゐ 直隸省の順天府と保定府との間を流れ白河に合する川。燕の始皇を刺さんとて、荊軻、燕の太子丹と別れし處。荊軻、易水歌「風蕭蕭兮ー一寒、壯士一去又不ー一還」

【易數】えきすう 易理によりて吉凶をわきまへ知る術。宋書、陳暘傳「還二于ー一、宜二關二家大事一、校多ー一驗」

【易聖】えきせい 易道にすぐれし人。唐書、楊太經傳「還二於易一、人謂二之ー一」

【易簀】えきさく うらなひ。晉書、淳子智傳「智有二思鑑一能ー一」

【易占】えきせん 易にてうらなふ。雲笈七籤「巨君傳、季山筮決、遂準二于ー一」

【易俗】えきぞく 惡しき風俗を改めかへる。禮記、樂記「移ー一風ー一、天下皆寧」

【易斷】えきだん ○易にて判斷する。○かんたんなぎれやすし。陳後主詩「柯新零ー一」

【易地】えきち 居る所の地位をかへる。孟、離婁「禹稷當二平世一、三過其門而不ー一入、顏子、ー一則皆然」

【易從】えきじう とりかへおく。史、扁鵲傳「趙簡既代二雍頗一、悉更二約束一、ー一一如二其吏一」

【易轍】えきてつ 車のわだちをかへる、施政の方針を改めるに喩ふ。晉書「愛二ー一之勤一、而得二覆車之轍一」

【易之憂患】えきのゆうかん 易經を作りし人の憂患ありしをいふ。歐陽修、送二楊寘一序「ー一、詩之怨刺」易、繫辭「易之興也、其於二中古一乎、作レ易者其有二憂患一乎」

【昂】カウ 陽

○あがる。あがる（腹）仰ぐ。揚ぐ。揚ぐ「蒸熱頭低、麥熟頭ー一」○氣があがり激する。激ー一「軒ー一」○たかし（高）物價があがる。唐書、崔神基傳「物價騰ー一」○ーー一は馬の行く貌。又、志行の高き貌。○日がのぼる（日升）

同訓異字 昂・卬・揚・翔・抗・翹・擡・抗・歟の別は歟（白部十一畫）の條を見よ。

【昂昂】かうかう ○馬のいさみ行く貌。楚辭、卜居「寧ー一若二千里之駒一乎」○轉じて志行のすぐれて高き貌。晉書、郗紹傳「昨於二閑人中一、始見二郗紹一、ー一然若二野鶴之在二雞羣一」

【昂揚】かうやう たかくそびゆる貌。晉書「振心ー一上二青漢一」

【昂然】かうぜん 自負する貌。禮記「大難ー一來、小疑釁而待」‖昂昂然。

【昂騫】かうけん たかくあがる。物のねだんがあがる。‖騰貴・上騰・騰昂。

【昕】キン 文

○ひので（日出）あさ、よあけ。禮記、文王世子「天子齊ー一、大ー一鼓徹」○あきらか（明）

【明】ミン 庚 陽 靜に同じ

○あきらか（明）○あかきあや（赤文）

【昕昕】きんきん あきあや。張衡、西京賦「赫ー一以弘敞」

【昕晨】きんしん 昕旦。

【昕旦】きんたん ○ほのぐらし（曙冥）○よあけ（旦明）

【昕明】きんめい よあけ。旦明。

【昕爽】きんさう よあけ。爽は明。漢書、郊祀志「ー一」注「卽古旦、謂二日欲レ出未レ明之時也」

【智爽】ちさう 昕（前條）に同じ。

【智】ちさう よあけ。漢書、司馬相如傳

「一一開眛」注「一一、早朝也」

【昏】コン　〔元〕或は昏に作る　○くらし（不明）「一暗」「一黑」日がくれてくらくなる。○ひぐれ「黃一」「飲一」○おろか「一愚」「老一」○へる（減）○かはる（代）晝の明に代る。○つとむ（强）○みだる（亂）○めとる（娶）＝婚。○人生れて未だ命名せざる内に死ぬる、古、生れて三ヶ月にして命名す。左、昭十九「札瘥天一」○妻の父。左、昭二五、註「妻父曰一」、壻父曰姻」

同訓異義　昏・暗・昧・冥・晦・暝の別は暗（日部九畫）の條を見よ。

【昏鴉】くれがたのからす。杜甫詩「獨鶴歸何晚、一一已滿林」＝暮鴉。

【昏聞】くらし。後漢書、范冉傳「吾生於一一之世、無爭澤偸之俗」＝昏暗。

【昏姻】夫婦のちぎりを結ぶ。白虎通「昏時成禮、故曰昏、婦人因夫而成、故曰因」＝婚姻。

【昏庶】くもりてくらし。陳子昂詩「一一無盡夜」

【昏季】年わかくしておろか。晉書、王祥傳「臣昔在一一、猶且用心、況逢聖明、敢不盡節」

【昏憊】心暗くみだれて事をなげやる。晉、牧誓「一一不一厥肆祀」弗答」

【昏晦】くらし。馬瑒、修清夜泊詩「遠色變一一、卸帆依二漫沙一」＝昏闇・昏黑。

【昏黃】たそがれ。韓偓詩「拗月愁一一」＝黃昏。

【昏曉】夕と朝と。杜甫詩「造化鍾二神秀一、陰陽割一一」＝朝夕・昏晨。

【昏眩】目くらくしてくるめく。桂海虞衡志「疼痛日一一」

【昏黑】日くれてくらし。杜甫詩「秋天漠漠向一一」

【昏困】目くらみ、氣力つかれる。甲申雜錄、「忽一一如レ夢」＝昏憒。

【昏昏】くらき貌。孟、盡心「今以二世一一、使二人昭昭」

【昏札】わかじに、人生れて未だ名を命ぜずして死するを昏といふ、天死を札といふ。柳宗元、黔州江運記「飢饉一一」字解參看。

【昏恣】心くらくしてほしいまま。元結文「忍行一一、獨樂二其身一」

【昏晨】あさばん。後漢書、劉平等傳論「賤二于里門一、一不レ廢二晨餘一」＝昏曉・朝夕・昏旦。

【昏暗】ゆふべと、あしたと。楊凌詩「孤舟大江水、水涉無一一」＝朝夕・昏曉・昏旦。

【昏鐘】ひぐれのかねの音。張九成詩「一一發二林杪一」＝晚鐘・夕鐘。

【昏睡】うとうととねむる。南史、劉劍傳「一一不レ可レ愛」

【昏眊】目くらし。歐陽修、謝二陽二漢書一表「兩目一一」

【昏憊】おひぼれる。又、其の人。宋史、魏成信傳「年已一一」

【昏暴】理にくらく、あらあらし。又、其の者。書經「嚚二有禮一、讒二一一」

【昏築】つかれてよくねる。顧況文「發二當暑之濟吟一、滌二通宵之一一」

【昏眸】くらきひとみ。摯綸詩「逸二我一一十年病」＝昏瞳。

【昏蒙】目くらし。劉基詩「使二我一見開二一一」

【昏督】くらし。賈、益稷、傳「天下民一一墊溺、皆因二水災一」

【昏墨】いれずみ。梁武帝、定律銘「殺傷有レ法、一一有レ刑」

【昏昧】○くらし。宋史、五行志「山氣遇レ夜曀一一、蛇鼈始明」＝昏晦。○おろか。＝愚昧・昏愚・闇愚。

【昏盲】くらし、事理に暗し。＝昏暗・昏蔽・昏闇。

【昏明】くらきと、あかるきと。周禮、秋官、注「日入三刻爲レ昏、未レ盡三刻一爲レ明」

【昏逵】心くらくしてきよよ。書經「一一不恭」

【昏夜】よるの賊志。王與傳「時帝幸出遊獵、或一一還レ宮」

【昏亂】心暗くみだれる。＝昏惑。

【昏禮】結婚の儀式。禮、郊特牲「一一、萬世之始也」＝婚禮。

【昏惑】道理にくらくまどふ。張衡賦「通人閎二于好惡一兮、豈一一而能剖」＝昏迷。

【昆】 コン　元

○のち、あと(後・子孫)「後ー」○あに(兄)「ー弟」○あきらか(明)「ー明」○おほし(衆)○おなじ(同)「ー嗚」○山の名、崑に通ず。ー侖は崑崙に同じ。

【昆夷】コン　古、昆吾といふ西戎の國。

【昆吾】コン　歐陽修、日本刀歌「ー鐵遠不二復過一、世傳二切玉一誰能窮」‖混夷。

【昆季】コン　兄弟をいふ、季は末の弟。徐陵文「孤二三ー一、方可二戴天一敢二此懇懇一」

【昆後】コン　あとつぎ、子孫。祭邕文「仰二遵古一嘯ニーー一」‖後昆。

【昆吾】コン　古史考「夏時昆吾氏、作ー冶」

【昆吾劍】コン　昆吾の爲國にて作りたる利刀。黃眉故事「周穆王有ー一、割ー鍛如ー泥」

【昆孫】コン　來孫の子、即ち玄孫の孫。曾雖「來孫之子爲ニーー一」‖曠孫。

【昆刀切玉】コントウ　昆吾の國より出づる利刀は、善く堅き玉をも切る。列、湯問「西戎獻二鍛鐵之劍、火浣之布、其劍長有尺、練銅赤刃、用ー之切ー玉、如ー切ー泥焉」銀錯は昆吾。

【昆池】コン　うみ。江總詩「玉軸ー一浪」

【昆蟲】コン　多くの蟲類。昆は衆、一說に昆は明、明蟲とは陽に生じて陰に滅びる義。漢書、成帝紀「草木ー一、感得二其所一」

【昆弟】コン　あにと、おとうと。昆は兄。高允文「怡怡ー一、穆穆家庭」‖兄弟。

【昆布】コンブ　海草の名、洗き者を海帶といふ。本草「綸布、一名ー一、出二高麗一如二捲麻一、黃黑色、柔韌可レ食、今海岱皆樂レ綸、恐卽是也」

【昆明池】コンメイチ　支那の西南夷の地にある池の名。西南夷傳「昆明國、有レ池方二百里、武帝欲レ伐二昆明一、作レ池象レ之、以習二水戰一」

【昔】 時(日部六畫)の古字。

【昌】 シャウ　陽

○さかんなり(盛)「隆ー」「盛ー」「繁ー」○よし、美くし「ー言」○あたる(當)○ひのひかり(日光)○もの(物)莊、在宥「百ー皆生於土」○うつくし、姣好なる貌。○あやめ、しゃうぶ(菖蒲)‖菖。○猖に通ず、ー披は亂れる。

【周訓解】 昌・猖・倡・肚・娼の別は盛(皿部七畫)の條を見よ。

【昌運】シャウ　さかんなる時運。自居易賦「叶二聖人之ーー一、飛而上レ天」‖隆運。

【昌言】シャウ　よきことば(美言)一解に理に當ることば。書、皐陶謨「禹拜二ー一、曰俞。

【昌手】シャウ　さかんなる貌。

【昌歜】シャウ　しゃうぶの葅(ツケモノ)、左、僖三十「王使二周公閱來聘一享有ニーー一」‖昌蒲菹。

【昌機】シャウ　さかんなり。說苑「夫發者國家所以ーー一、士女所二以姣好一」‖昌盛。

【昌昌】シャウ　さかんなる貌。李商隱詩「春風無二自好一、春物太ーー」

【昌盛】セイ　さかんなり。南史、齊高帝紀「子孫當ニーー一」‖盛昌。

【昌朝】シャウ　さかゆる當代の朝廷。鮑照文「以當ニーー一、早値二風治一」‖熙朝。

【昌披】シャウ　しまりなく亂るる。昌一に狙に作る。離騷「何榮紛之ーー兮、夫唯捷徑以窘ー步」

【昌阜】シャウ　さかんに富む。左傳「韓氏其ーー一乎、晉一乎、鮮不レ失レ舊」‖昌富。

【昌富】シャウ　さかんにとむ。易林「充二滿帝室一、家國ーー」

【昌平】ヘイ　○國運さかんにして世たひらか。‖承平・升平。○孔子の生れし鄕名、山東省曲阜縣の東南に在り。

【昌平黌】シャウヘイコウ　國昌平坂學問所の一名、江戸湯島に在り、德川幕府の學問所、元祿三年忍岡より移し、孔子の鄕の名に因みて昌平と改む。‖芝蘭・聖堂。

【昌本】シャウ　しゃうぶの根、藥用とす(儀禮、公食大夫禮)說苑「文王好食ニーー一」

【昌陽】シャウ　しゃうぶ、長生の藥とす。雜錄、進學解「跌宕昭陵、遊戲二ーー一引上レ年、欲レ進二其說一也」‖菖陽・昌九・昌羊。

【昌狼】シャウ　さかえたのしむ。史、匈奴傳「壯ー兵休ー卒養レ馬、世世ーー」

【昇】 シャウ　職　升に通ず

○のぼる「上ー」あがる(上)日が上る。○のぼす、あぐ。○たひらか(平)「ー平」

【周訓解】 昇・升・陞・登・上・騰・躋・陟の別は升(十部二畫)の條を見よ。

【昇降】シャウカウ　のぼると、くだると。あがりおり。

【昇級】シャウキフ　○官位又地位が進みのぼる。‖昇任・昇進。○等級がのぼる。‖昇等。

【昇給】シャウキフ　給料があがる、俸給が增す。‖增俸。

【昇汞】シャウコウ　藥品の一、鹽化第二水銀。‖猛汞。

【昇進】シャウシン　官位又地位があがる。‖昇級。

【昇敍】シャウジョ　官位をのぼす。元稹文「文武並用、必推二其才一、久次不レ遷、則有ニーー一」

【昇騰】ショウトウ のぼる。孟郊詩「鬱出幽隧幢、氣象皆一一」
【昇陟】ショウチョク のぼる。水經、注「緬紫之士、多泛ル舟一一、取レ樵二山情一」
【昇天】ショウテン ○天に登る。後漢書、虞延傳「延初生時、其上有レ物、若二兩繩一、遠上ニ一一、古者以爲レ吉」‖升天。○基督教にて信者の死をいふ。
【昇殿】ショウデン 國語、宮中の御殿へのぼる、四位以上及藏人の六位の者には其の資格を與へられる。
【昇平】ショウヘイ 世が平かにしてしづか。‖升平。

【昃】ショク

通音 ソク　職　陌

○かたぶく、日が西に傾く。易、豐卦「日中則一一」○ひるすぎ(午後)日が午を過ぐ。

【昔】

㊀セキ・シャク　㊁サク

㊀むかし(古)今の對「在一」「往一」「古一」○きのふ(昨日)又、四五日前。ゆふべ。‖夕。○よる(夜宵)壯、天運「通一不レ寐矣」○さきに、以前。○ひさし(久)○ほじし(乾肉)㊁まじはる(錯)
【昔者】セキシャ 前代のすぐれたる士。王維詩「錦瑟感ニ一一、湘水謝二前修一」‖前賢・先哲・前彦。
【昔在】セキザイ そのむかし。‖在昔。
【昔歲】セキサイ こぞ、去年。左傳「一一入レ陳、今玆入レ鄭」
【昔時】セキジ むかし。騷、賈生傳「一一人已沒、今日水猶寒」‖古時・往時・昔日。
【昔愁】セキシュウ むかしのうれへ。賀知章詩「送レ子成ニ今別一、令三人起ニ一一」
【昔日】セキジツ ○むかし。‖昔時。○さきの日、前日。
【昔人】セキジン むかしの人。崔顥、黃鶴樓詩「一一已乘二白雲一去、此地空餘黃鶴樓」‖古人。
【昔者】セキシャ ○むかし、以前、往年。論、泰伯「一一吾友嘗從二事於斯一矣」○きのふ、昨日の義、者は助語。孟、離婁「日、子來幾日矣、曰一一」
【昔宵】セキショウ 夜夜といふに同じ。列、周穆王「精神定散、一一夢爲二國君一、又一一夢爲二人僕一」‖夕夕・每夜。
【昔談】セキダン むかしばなし。顏延之文「琢レ玉成レ器、無レ爽ニ一一」
【昔年】セキネン むかし、まへのとし。杜甫詩「一一有二狂客一」‖往年・前年。
【昔氣質】セキキシツ 國老人のかたくるしく律儀一方なる氣風、昔堅氣。

【晛】トン

元

あさひ。‖暾。

【昉】ハウ

養

○あきらか(明)○はじめて(始)○まさに(適)

【昄】ハン

ヘン　寒　潸

大いなり。詩、大雅「爾土宇一一章」‖章は大明の義。

【昈】ビン

眞

はやはらぐ(和)

【昈昈】ビンビン やはらぐ貌。史、司馬相如傳「一一穆穆、君子之態」

【昏】ビン

ミン　眞

○そら(天空)「穹一」「九一」「蒼一」○のきのそら(秋天)○あはれむ(憫)
【昏天】ビンテン ○秋のそら。草木枯落してあはれなるそらの義。爾雅、釋天「秋爲二一一」○そら(天空)あはれみめぐむ義。書、大禹謨「日躔二次于一一、予欽奉レ天」

【明】メイ

庚　㊟關は葉字

○あきらか(昭)「昭一」「鮮一」○あきらかに。○あかし。○よあけ、夜があける、「平一」○あす、あした「一日」○てる、てらす(照)○たふとし(尊)○とほる(通)○そなはる(備)○はじめ。○あきらむ。○いさぎよし(潔)○つまびらか(審)疑なし。○あらはす、あきらかにす。大學「在一一明德」○日の精。檀弓「子夏喪二其子一而喪二其一一」○かみ、神靈「神一一」○賢人。○晝。○現世。幽の對「幽一一」○朱元璋の建てし王朝の名、十六帝、二百七十八年間、元の次、清の前。○啓一一はあけがたに東方にかがやきあらはる星の名、よあけの明星。詩經「東有啓一一」○關の空になる、一星。‖檐。

【同訓異字】明・昭・炤・皎・晰・晧・炳○明は皆・關・晦・昧・暝などの反なり、廣く用ふる字なり、著明・明德・分明と連用す。○昭は明よりは義狹し、多くは道德の上に用ふ。左傳「光二昭先君之令德一」○炤は火の燃え立つ如く明かなるなり。詩經「桃之夭夭、灼灼其華」○皎は白けて清し。詩經「月出皎兮」○晰は明なり、昭晰・明晰と連用す。○炳は著しく明かなる義、炳者二日星一、其文炳也の如し。
【明史】ミンシ 三百三十二卷、目錄四卷、二十四史の一、清の張廷玉等、世宗の勅を奉じて撰す。
【明七才子】ミンシチサイシ 明代の七人の詩

人。學山錄「隆萬間、李于鱗・王世貞・吳國倫・徐中行・宗臣・梁有譽・謝茂秦・總三七才子、見二藝苑巵言一」

【明十才子】ミンジフサイシ 明代に相結びて詩をつくりし十人の詩人。學山錄「李夢陽、吳三同レ時者、何景明・徐禎卿・邊貢・顧璘・郭登春夫・陳沂・朱應登・康海・王九思、總二十才子、見二李夢陽傳一」

【明星】ミヤウジヤウ あけのみやうじやう。金星。詩、鄭風「一一有レ爛」＝太白星。時明。

【明夕】ミヤウセキ あすのばん。儀禮「厥一一宰二羞門之外一」

【明礬】ミヤウバン アルミニウム及びカリウムの硫酸鹽、無色透明の結晶體、酸叉工染上に用ふ。

【明礬石】ミヤウバンセキ 明礬製造の原料とする硫酸及び鹽土の化合物。

【明晰】メイセキ 次條に同じ。

【明悟】メイゴ あきらかなると、くらきと。論衡「一一不レ能二竝知一」＝明暗・明闇。

【明衣】メイイ 布にて作りたる浴衣、喪戒の時に著る。論、鄉黨「齊必有二一一一一一一布一」

【明灰】メイクワイ 昆の卦の名、離下坤上、賢人が暗君に遭ひて闇を裝ることを說く、爻は箕、明にして傷はれる義。易、明夷卦「箕子之一一利レ貞」

【明界】メイカイ 〇現世と冥土と。韓愈詩「病眩臥二牀蓐一分知隔二一一一一一一

鵾鷄賦「一一聽善」

【明敎】ミンケウ　○あきらかなるをしへ。史、蘇秦傳「魏王曰、寡人不肖、未二嘗得一聞二一一一

使之楷ニ」

【明酬】メイシウ あきらかにして整ふる。南史、江革傳「爲レ政ー一、豪強憚レ之」

【明主愛二一顰一笑一】メイシュアイイチヒンイチセウ 顰は愛ひて顔をしかめる、明君は一たび笑ふをもみだりにせず、羣臣の己の意を迎へんことを力むるを以てなり。韓非、內儲說「吾聞、明主之愛二一顰一笑一、顰有二爲顰一而笑有二爲笑一」

【明詔】メイセウ あきらかなるあかし。潘夫論「曲水巡二直圖一、重譯慕二ー一」

【明燭】メイショク あかるきともしび。ともしびをあかるくす。抱朴子「ー一宵驅、飛蟻翠起」

【明扇風】メイセンフウ 東方よりふくかぜ。史記「ー一居二東方一、業物盛出也」

【明水】メイスイ 神に供ふるみづの周禮、秋官、取二明水於日一、取ニー於月一」

【明制】メイセイ 公明なる法制。申鑒「王之政（中略）五曰ニー一」

【明清】メイセイ ○あきらかにしてきよし。○シンシン明朝と清朝と。

【明旌】メイセイ ○あきらかにあらはす。子革子「ニー善類一而謀二勦醜一」○喪具の一、死者の名を書く旗。‖銘旌。

【明盛】メイセイ 道あきらかにしてさかんなり。王融詩「幸哉ー一世、壯矣帝王居」

【明聖】メイセイ 知徳明かにしてきよし。主に天子の智徳を稱す。又、其の人。漢書、谷永傳「陛下發ニー一之德一」

【明劭】メイセウ あきらかにしてうつくし。齊書、樂志「昌烈載揖ニー一」

【明詔】メイセウ あきらかなるみことのり。藍仲舒文「陛下發二德音一、下ニー一」

【明宣】メイセン あきらかにしめす。崔瑗、東觀箴「辛尹順訪、文武ー一」

【明鮮】メイセン あきらかにあざやか。韋應物詩「夏緑綠已衰、朱蕖綴ー一」

【明蟾】メイセン 明月をいふ、蟾はひきがへる、月中に在りといふ。劉基詩「永夜涼風吹二碧落一、深秋白露洗ニー一」‖銀蟾。

【明聽】メイチャウ 日あきらかに耳さとし、才智のすぐれたる義。宋之問文「天高難レ訴、遠負ニー一」‖聰明。

【明堂】メイダウ ○古、天子巡狩の時、諸侯を朝受せしめし殿堂の名。孟、梁惠王「ー一者、王者之堂也」○天子が政を聽く所、陽に向ひて建て八窗を開く、故に明といふ。周禮、考工記」‖朝廷。

【明道】メイダウ ○あきらかなるみち。○みちをあきらかにす。漢書、董仲舒傳「明二其道一、不レ計二其功一」

【明道先生】メイダウセンセイ 宋儒程顥をいふ。十駕齋養新錄「程伯淳之歿也、文潞公題二其墓一曰二大宋ーー程君之墓一」

【明駝千里足】メイセンリソク 健脚なる駱駝。駱は臥するに腹、地に貼せず、足を屈して明を漏す、故に明駝といふ。木蘭辭「願馳ニーー、送レ兒還二故鄉一」

【明達】メイタツ あきらかに事理に通ずる。漢書、高帝紀「性ー一好レ謀能聽」

【明旦】メイタン あくるあさ。張說詩「故歲今宵盡、新年ー一來」‖翌朝・明朝。

【明暖】メイダン あかるくあたたかなり。白居易詩「ー一眞可レ愛」

【明斷】メイダン あきらかなる判斷。後漢書、孔奮傳「爲レ政ー一、甄レ善疾レ非、見レ有二美德一愛之如レ親」

【明治】メイチ ○あきらかにおさむ。易、說卦傳「聖人南面聽二天下一、嚮レ明而治」○あきらかにをさまる。

【明哲】メイテツ あきらかなるちゑの崔駰文「哀二英鄧於ー一」

【明暢】メイチャウ ○晉壁があきらかにしてのぶの宋史、王沔傳「吾吐ー一」○論旨がよくとほる。‖明快。

【明著】メイチョ あきらか。晉書、王沈傳「功勳ー一、賞勳隨レ之」‖著明・顯著。

【明徵】メイチョウ あきらかに證明する。‖明證。

【明朝】メイテウ あすのあさ。高適詩「霜鬢ー一又一年」‖明日。

【明哲】メイテツ 事理にあきらかにしてかしこし。又、其の人。書、說命「知レ之曰ニー一、ー一實作レ則」

【明哲保レ身】メイテツホシン 理に順ひ事を處して身を全うする。詩、大雅、蒸民「既明且哲、以保二其身一」

【明徹】メイテツ 水が澄んですきとほる。‖澄澈・澄明。

【明天】メイテン 明日。

【明天子在レ上】メイテンシジャウ 聰明なる天子が朝廷に在す（史、建元侯者年表序）韓愈、送二董邵南序一「爲レ我謝曰、ーー、可二以出而仕一矣」

【明殿】メイデン 墓の側に立つる殿堂。五代史、契丹錄「ー一者二中國陵寢下宮之制一」

【明度】メイド あきらかなる才器。晉書、山濤傳「君之ー一、豈當レ介レ耶」

【明瞳】メイドウ あきらかなるひとみ。元稹詩「醉圓雙媚靨、波溢兩ー一」

【明德】メイトク ○あきらかなる德行の士、君陣「黍稷非レ馨、ー一惟馨」○天よりうけたるくもりなき本性。大學之道、在レ明ニー一」

【明年】メイネン あくるとし、來年。劉廷芝詩「ー一花開復誰在」

【明眸皓齒】メイボウカウシ あきらかなるひとみと白き齒と、美人の形容。杜甫、哀江頭「ー一今何在、血汚遊魂歸不レ得」

【明白】メイハク あきらか、はっきり。六韜「ー一顯問」

【明發】メイハツ 夜のあけんとするころ、先明開發の義。詩、小雅「ー一不レ寐、有レ懷二二人一」

【明法】メイハフ ○法律をあきらかにする○あきらかなるのり。莊子「四時有ニー一而不レ論」○法律を主とす

る官吏登用試験の科目の名。○ハ十ノ一ノ一ノ一

【映塵】ヨウヂン すだれにうつる。

【昤】 チン 元

いつくしむ、いつくしみ(仁)

【昡】 ゲン 霰

ひのひかり(日光)「一曜」

【昫】 ク 虞 遇

○あたたむ(温・暖)＝煦。○日出でて暖か。

【昫嫗】クオウ あたためる。淮南、原道「一ー覆育」註「昫、温也ノクダム也」＝煦嫗。

【昏】 昏(日部四畫)に同じ。

【昨】 サク 藥

○きのふ(前日)「一日」一宵ショウを隔つる義。○さきに(過去)陶潛、歸去來辭「覺今是而ー非」

【昨今】コン きのふけふ、ちかごろ。＝近來・近日。

【昨日】サクジツ きのふ。史、滅失傳「吾ー一醉」許渾詩「高歌一曲掩二明鏡一、ー一少年今白頭」

【昨朝】サクテウ きのふのあさ。高適詩「靜然顧二遺塵一千載如二ー一」

【昨年】サクネン きょねん、こぞ。

【昨晩】サクバン きのふのくれ。崔顥詩「ー一南行ノ舟、今朝北浜ノ河」＝昨宵・昨夕。

【昨非】サクヒ 昔日の非なりし事。歸去來辭「實迷ノ途其未レ遠、覺二今是而ー一」陸游詩「已築二茅茨一以ニー一名レ之」自注「余築二小軒一、以ニー一名レ之」

【昨夢】サクム 昨夜のゆめ。又、過ぎ去りし事がらに喩ふ。陸游詩「化レ蝶飛時嗟ニー一」

【是】 シ 紙 通音ゼ

○ただし(正)なほし(直)よし(善)非の反對の陶潛、歸去來辭「覺今ー而昨非」○この。論、學而「夫子至於ー邦也」これ、上を承けて下を結ぶことば。孟、公孫丑「ー集義所生」○ここに(此)「於ー」

【解字】もと昱に作る、天下の物、日より正しきはなし、故に日正に从ふ會意文字。

【同訓異字】是・之・此・惟・斯・諸・伊・時の別は之(ノ部三畫)の條を見よ。

【是レ是非レ非】ゼヒヒヒ 善き事を善しとし、惡しき事を惡しとする。荀、脩身「ー一、謂二之知一非レ是是非、謂二之愚一」

【是非】ゼヒ ○よしあし。歐陽傳序「ー紛錯」＝善惡・臧否。○圖ゼヒ必ず、どうあっても。

【是非之心】ゼヒノ 善を是とし惡を非とするこころ、善惡を辨別する本性。孟、公孫丑「無ー一非レ人也」また「ー、智之端也」

【是耶非耶】ゼヤ 是非に惑ひて決し難き意。史、伯夷傳「余甚惑焉、儻所謂天道ー一」＝是歟非歟。

【是正】ゼセイ ただし。又、ただす。後漢書、安帝紀「詔二五經博士一、ー一文字一」

【是認】ゼニン よしとみとめる。又、承知する。

【有二是父一斯有二是子一】コノチアルヲアリテコノコアリ 子の賢なるは父の賢なるに由る義。孔叢子、居衛「子思曰、有二此父一、斯有二此子一、道之常也」一本、此を是に作る。

【昶】 ○ シャウ 養 ○ チャウ 篠 養

㊀日ながし(日長)○あきらか(明)○かよふ(通)○ひさし(久)○のぶ(舒)㊁達する、のぶ。＝暢。

【解字】日長し、日永に从ふ、會意文字。

【春】 シュン 眞

○はる、四時の第一、立ーより立夏に至るまで、陰暦の正月・二月・三月の九十日間(陽暦の三月・四月・五月)「三ー」「九ー」「青ー」「陽ー」爾雅「ー爲二青陽一」○男女の情欲。詩、召南「有女懷ー」、吉士誘之」○よはひ、年齢「ー秋鼎盛」○としつき、歲月「三十ー」○唐人多く酒に名つく。司空圖、詩品「王霊買ー」○小ーは陰暦の十月、こはる。

【春黄騮】シュンクワウリウ 樂曲の名。唐敎坊記「ー、高宗賜二盧懷慎一騮駿、命二樂工白明達一寫レ之、遂有二此曲一」

【春意】シュンイ はるの長閑なるこころ。杜甫詩「碧草逸ニー一流湘萬里秋」

【春陰】シュンイン 花ぐもり。韋應物詩「晴天無二纖翳一郊野春ニー一」

【春蚓秋蛇】シュンイン 文字の細く曲りてカなきにいふ。晉書、王羲之傳「子雲近世稱二名工一、觀得レ成レ書、如二丈夫之氣一、行行如レ欲二飛動一、字字如レ蟠二秋蛇一」

【春雨】シュン はるさめ。陸游詩「深巷明朝賣二杏花一、小樓一夜聽ニー一」

【春江】シュンカウ はるのかは。蘇軾詩「竹外桃花三兩枝、ー一水暖鴨先知」

【春郊】シュンカウ はるののべ。＝春野・原郊。

【春塞】シュンサイ はるのさむさ。杜甫、人日詩「冰雪爲レ銷レ葉、ー一花較遲」

【春芳】シュンハウ はるのくさ。潘岳文帝文「秋蘂下レ葉、ー一含レ芳」

【春季】シュンキ ○はるのすえ。○春の時節。‖春期。

【春季皇霊祭】シュンキコウレイサイ 圖春分の日（三月二十日又は二十一日）に宮中にて歴代の天子のみたまを祭られる大祭。

【春昕】シュンキン はるのいのり。論衡「春二月号、秋八月穹赤、——二殽雨、秋祈二穀實一」

【春祺】シュンキ はるのきざはひ。漢書、楽志「惟春之祺」注「祺、福也」‖春福。

【春嬉】シュンキ はるのたのしみ、陽気に浮かれて戯れ遊ぶ。

【春愛】シュンアイ ○春の日に織るはた。温庭筠詩「文君機得——紅」○圖いろけ、男女間の情慾。

【春韭】シュンキュウ 春のやはらかきにら。杜甫、贈二衛八處士一詩「夜雨翦二——一、新炊間二黄粱一」

【春宮】シュンキュウ ○皇太子の御殿。又、皇太子。竹書紀年「周穆王九年築二——一」‖儲宮・東宮。○圖東の音を借りてグウと読む、義は同じ。

【春興】シュンキョウ 春のおもしろさ、春のたのしみ。

【春愁】シュンシュウ 圖まくらさうし、わらひ草。

【春光】シュンコウ はるのけしき。林下清錄「——且莫レ去、留與二醉人一看」

【春官】シュンカン 周代、禮法・祭祀のことを掌る官。周禮「——宗伯、曰二禮官之屬一」

【春暁】シュンギョウ 上巳の節に行ふみそぎ。王維詩「故事修二——一」

【春慶塗】シュンケイヌリ 圖木地の見えるやうにうすく黄褐色にぬる漆塗、和泉の堺工春慶の發明せしもの。

【春暁】シュンギョウ はるのあけぼの。

【春暄】シュンケン はるのあたたかさ。詩、正義「人遇二——一則四體舒泰」‖春暖。

【春恨】シュンコン 春のもの思ひ。王昌齢詩「欲レ遣二朱顔一——長」‖春愁。

【春草】シュンソウ はるのくさ。謝霊運詩「萋萋——生、王孫遊有レ情」

【春袋】シュンタイ はるのよそほひ。王士熙詩「海邊餘史促二——一」

【春風】シュンプウ 春まゆを作るかひこ、はるこ。

【春山如レ笑】シュンザンジョショウ 春の山の温雅なる形容。郭熙、山水訓「春山淡冶而如レ笑、夏山蒼翠而欲レ滴」

【春事】シュンジ はるのしごと、農事。書、堯典、傳「——既起、丁壯就レ功」

【春秋】シュンジュウ ○はると、あきと。禮、學記「——教以二禮樂一、冬夏教以二詩書一」○孔子の書はしたる魯國の歴史「——左氏傳」○孔子の春秋にしるされてある時代、周の平王より威烈王に至る時期。○としつき、歳月。又、よはひ、年齢。

【春秋高】シュンジュウコウ 年老いたる義。新序「先生老矣、——矣、何以教レ之」

【春秋富】シュンジュウフ 年わかき義。史、齊悼惠王世家「皇帝——、未レ能レ治二天下一」‖春秋長。

【富二春秋一】フシュンジュウ 年の幼きをいふ。將來の年齢に富む義。後漢書、樂恢傳「陛下——、纂二承大業一」

【春秋鼎盛】シュンジュウテイセイ 年齢が方々に壯なり、鼎は方なり。漢書、賈誼傳「天子——」

【春蒐秋獮】シュンシュウシュウセン 春の狩と秋の狩と。左、隱五「臧僖伯曰、春蒐夏苗、秋獮冬狩」

【春信】シュンシン はるのたより、春の來るしらせ、花開き鳥鳴くなどのたより。劉克莊詩「——分明到二草堂一」

【春霧】シュンム 春のをはり。書、堯典、疏「——之日、與二立夏之初一時相交也」

【春社】シュンシャ 春の社日。月令廣義「立春後五戊爲二——一」

【春情】シュンジョウ ○うはき、いろけ、色情。‖春心。○春ののどかなる心をいふ。李白詩「——不レ可レ狀、酩酊合二人醉一」‖春意。

【春首】シュンシュ はるのはじめ。韓愈文「去歲冬閒、雨雪頗多、今年——、宿麥未レ滋」‖春初。

【春樹暮雲情】シュンジュボウウンジョウ 遠方に在る友の相思ふにいふ。杜甫、春日憶二李白一詩「渭北春天樹、江東日暮雲、何時一樽酒、重與細論レ文」渭北は杜甫の居る地、江東は李白の居る地。

【春笋】シュンジュン ○春のたけのこ。盧瓌詩「——方解レ籜」○美人の指に喩ふ、筍同じ。蘇軾、佳人詞「十指纖纖——細長」‖春筍。

【春初】シュンショ はるのはじめ。齊書、周顒傳「——早韭、秋末晩葵」‖春首。

【春水】シュンスイ はるのみづ。陶潛、四時詩「——滿四澤、夏雲多二奇峯一、秋月揚二明輝一、冬嶺秀二孤松一」

【春蚕】シュンサン はる生ずるなづな。陸游詩「——忽已花、老筭欲レ成レ竹」

【春宵】シュンショウ はるのゆふべ。蘇軾詩「——一刻直千金、花有二清香一月有レ陰」‖春夕・春夜。

【春泉】シュンセン はるのいづみ。顧閲詩「手澡——潔、日脚陽酣酔」

【春蘿】シュンラ 春のこけの靡は昔盛唐詩「——綠レ巌上」

【春醸】シュンジョウ はるづくりのさけ。孟貫詩「石泉——レ酒、松火夜煎レ茶」

【春潮】シュンチョウ 春のうしほ。王勃詩「江曠——白、山長曉畳青」

【春蔥】シュンソウ はるのはな。劉禹錫、新論「——含レ日似レ笑、秋葉泫レ露如レ泣」‖春花・春華。

【春坊】シュンボウ 皇太子の御殿。又、皇太子。官儀備要「太子宮曰二——一」晉書、懿傳太子傳論「繼二明宸極一守二器——一」‖東宮・春宮。

【春芳】シュンホウ はるのにほひまる草。魏元帝詩「盛盛——動、日日春禽啼」

【春牛】シュンギュウ はるのなかば。杜牧、憎春

詞「一一年已除」

【春盤】シュン　立春の日に、盤に食物を盛る。四時寶鏡「立春日、唐人作二春餅生菜一號二一一一」

【渉二子春冰一】ショウシシュンピョウ　春の冰をわたる。危險の甚だしきに喩ふ。書、君牙「心之憂危、若下踏二虎尾一渉中于春冰上」

【春服】シュンフク　はるぎ。論、先進「莫春者、一一既成」莫は暮。

【春分】シュンブン　二十四氣の一、晝夜の次に來る氣節、晝夜平分の時なり、三月二十一日頃。周禮、典瑞、註「天子當一一朝レ日、秋分夕レ月」

【春眠】シュン　春夜のねむり。孟浩然詩「一一不レ覺レ曉、處處聞二啼鳥一」

【春夢】シュン　はるのゆめ。物事のはかなきにいふ。侯鯖錄「內翰昔日富貴、一場一一」

【春陽】シュン　はる。晉書、樂志「經二一一而自宴、遇二秋彫一而不レ悅」

【春祠】シュン　天子の行ふはるまつり。祠・祭同じ。禮、王制「天子諸侯宗廟之祭、春曰レ祠」

【春融】シュン　はるの氣ののどかなるさま。沈佺期詩「烟景共一一」

【春餘】シュン　はるのすゑ。任昉詩「麗景餘二一一、清陰澄二夏首一」‖春杪ビョウ

【春關秋菊俱不レ可レ廢】シュンカンシュウキクトモニフカハイス　各特色ありて棄てがたきにいふ。事文類聚「裴子餘、補二郭縣尉一、時同列李朝隱・程行謀、皆以二文法一著稱、子餘獨以二文學一知レ名、或問二長史陳崇裴三子優劣一、崇裴曰、一一也」

【春霖】シュン　はるのながあめ。韓琦詩「咫尺東郊路、一一絕未レ通」

【春王正月】シュンワウセイグワツ　春正月に同じ、王の字は王者の天下なる義を表はす。春秋「隱公元年、一一」

【星】セイ　シャウ　㊥

〇ほし「明一」「列一」「景一」「晨一」〇ほしの光。〇日月等諸天體の總稱「恒一」「衛一」〇一一は星の如く白き色の點點たる貌「一散」「一羅」〇ほとほり、二十八宿の一つ。〇三台一一を三公に比するによりて顯要の人に喩ふ「諸一相會」〇天文。晉書、鳩摩羅什傳「博覽二五明諸論一及陰陽一算、莫不二畢盡一」

【星移】セイイ　星の位置が移りかはる。年月がうつる。王勃、滕王閣詩「物換一一幾度秋」

【星槎】セイサ　あかりとり。藝林伐山「小者曰二一一一」

【星聲】セイセイ　夜の陣營。薩都剌詩「露幄旌旗天接レ水、一一鼓角月連レ山」

【星軺】セイエウ　遠方へ行く使者の車、軺は遙なり、四向して遠望する車。張謂詩「一一計レ日赴二幽州一、雲樹連レ天阻二笑歌一」‖使軺。

【星河】セイカ　あまの川。河圖括地象「川絡布レ綺、上爲二一一一一」‖銀河・銀漢・星漢。

【星行】セイカウ　〇夜未だ明けず星を戴きて行く。魏志、高貴鄉公髦紀「晨夜一一、遣二本州一忠節可レ嘉」〇極めて急ぎ行く。風俗通、十反「一一電征、數日歸」‖星馳。

【星行電征】セイカウデンセイ　いそぎてゆく。前條參看。

【星學】セイガク　日月・星辰等、總べて天體に關する事を研究する學問。‖天文學。

【星漢】セイカン　あまのがは。魏文帝詩「一一西流夜未レ央」‖星河。

【星期】セイキ　〇婚姻の期日。七夕の傳說に本づく。蕭統「報二戚ノ婚日一」詩「一一一一」〇日曜の休日。

【星火】セイクワ　〇流星の光の轉じて、事の急なるに喩ふ。李密、陳情表「郡縣逼迫、催二臣上道一、州司臨レ門、急於一一一」〇極めて小なる燒火。薛能詩「一一爐邊夜坐寒」

【星光】セイクワウ　ほしのひかり。朱熹詩「微月墜二西嶺一、爛然衆一一」‖星輝。

【星官】セイクワン　天文を司る官。

【星座】セイザ　ほしのやどり〔史、天官書、注〕‖星次・星宿。

【星槎】セイサ　遠方に航行する舟、槎はいかだ。宋之問詩「寓直一一落、仙來月宇空」‖星査。

【星彩】セイサイ　ほしのひかり。杜荀鶴詩「月華一一坐來收」‖星采・星芒。

【星霜】セイサウ　歲星は一年に天を一周し、霜は年每に降る。轉じてとしつきの義。杜牧集「經二幾年一、曰二幾換一一一」文天祥詩「干戈歷落五一一」

【星散】セイサン　星の分ち布く如く四方に散ずる。蜀志、王平傳「爲二諸大敗一、手街亭一、衆盡一一」

【星算】セイサン　天文と算數と。梁書、陶弘景傳「尤明二陰陽五行風角一一一」

【星次】セイジ　星のやどり。唐書、曆志「考二正一一一、爲二一代之制一」‖星座。

【星使】セイシ　天子の御つかひ。後漢書、李郃傳に勅使二人を益州に派遣せし時、天象に應じて二使星が益州の分野に向ひしといふ故事に本づく。今の全權公使などにも用ふ。高適詩「一一出二詞臣一」‖勅使・欽差大臣。

【星辰】セイシン　ほし、辰は日月星のやどり。書、堯典「曆二象日月一一一、敬授二人時一」

【星津】セイシン　星のやどり。陳後主詩「一一雖レ可レ望、誰得レ假二人情一」‖星次。

【星讖】セイシン　天文と未來記と。晉書、石季龍載記「禁二郡國一不レ得三私學二一一」

【星宿】セイシュク　ほしのやどり。漢書、劉向傳「數論二奇傷一、夜觀二一一一、或不レ窮二竟旦一」‖星座・辰宿。

【星象】セイシャウ　天文によりて吉凶を占ふ

わざ。五代史「周傑恥ヲ以ニ一ー一事上レ人、稱レ病不レ起」

【星星】セイ ほつぽつと白き貌。謝靈運詩「感戚感物歌、一ー白髮垂」＝點點。

【星馳】セイ いそぎてはしる。潘岳文「羽檄一ー、征伐日戒」

【星傳】セイ 急を要する官報の馬。はやうちの馬。權德輿詩「一ー指二湘江一」

【星躔】セイ 星の躔次。宋史、韓顗胄傳「一ー曉然易レ辨」＝星度。

【星斗】セイ ほし。斗は北斗。又南斗星。晉書、元帝紀論「騰章殿レ親、高霊成レ險、一ー呈レ祥、金陵表レ瑞」

【星度】セイ 星辰運行の度合。

【星芒】セイ ほしの光のはさき。張正見詩「都レ凝二月影一、夢レ劍動二一ー一」

【星変】セイ 夜の中にいでたつ。

【星布】セイ ほしの如く散布する。後漢書、張衡傳「屯騎連而一ー一」＝星羅・星散。

【星落】セイ いそぎてはしる。傅休奕文「流霊一ー」＝星馳。

【星夜】セイ ほしのある夜。潘岳文「昏晨盛夏蠶熱又衆二一ー一」

【星羅】セイ ほしの如くつらなる。四都賦「列二平周匝一、一ー棋布」

【星曆】セイ 天文曆法。史、歷書「黄帝考二定一ー一」＝星曆。

【星列】セイ 星の如くに列る。陳琳賦「羣國攸臨、一ー碁布」

【戴レ星而往】ユクタイセイ 早朝に出で行く。呂覽「孔子曉爲二單父宰一、辭レ拳不レ下レ堂而單父治、巫馬期爲二單父宰一、戴レ星出、戴レ星入、而單父亦治」

【昭】セウ 暮

○あきらか(日明)「一ー明」「一ー」照りかがやきてあかるし。○あきらかにす、著明にする。論、堯曰「敢一ー告於上帝」○みる(見)○ひかる(光)○あらはる(顯・著)○剛ゴウの坐次にて太祖の廟を中央に置き、それに次ぎて左に置くもの。右を穆といふ、即ち一ーは太祖の子にして、穆の父にあたる、天子は七廟。○姓。

同訓異字 昭・明・的・皎・晰・炯の別は明（日部四畫）の條を見よ。

【昭昭】セウセウ くらきをあきらかにす。又、愚かなる心をさとく明かにする。傅毅詩「誰能一ー一、啓二我蔀昧一」

【昭晰】セウセキ 明かにかがやく。光明なり。漢書、王莽傳「一ー章明、以著二黄虞之烈一焉」

【昭曠】セウクワウ あきらかにこたへる。いちじるしく感應する。顏延之、曲水詩序「昌緒一ー、山瀆效靈」

【昭儀】セウギ 漢代、位の最も高き女官の名。漢書、外戚傳「一ー位視二丞相一」

【昭君】セウクン 王昭君の略、琴曲に「一ー怨」あり。

【昭回】セウクワイ ひかりが天に圍ひてめぐる。詩、大雅、雲漢「倬彼雲漢、一ー于天」

【昭光】セウクワウ あきらかなるひかり。漢書、揚雄傳「一ー振耀」

【昭煥】セウクワン 明かに輝やく。宋史、陳王傳「宗祀延洪、史策一ー」＝炳煥。

【昭敬】セウケイ をしへをあきらかにす。又、明かなるをしへ。蜀志文「一ー一於辟雍」

【昭晰】セウセキ あきらかにあらはれる。晉記總論「昔周之興也、后稷生二於姜嫄一而天命一ー」

【昭晉】セウシン あきらかなるとくらきと。老子「俗人昭昭、我獨若レ昏」

【昭示】セウジ あきらかにしめす。張衡文「一ー二萬嗣一、永永不レ朽」＝明示。

【昭昭】セウセウ ○あきらかなる貌。韓詩外傳「一ー乎若二日月之光明一」○小にしてあきらかなるもの。中庸「天斯一ー之多也」＝耿耿。

【昭前】セウゼン 古の邵貨に對し悪ありて光を放つ。劉琬文「在昔既無二堂構一ー之績一、中レ規不レ衷、明神弗レ貽」

【昭然】セウゼン あきらかなる貌。漢書、董仲舒傳「重德一ー、施二于方外一」＝昭如・昭昭。

【昭昭】セウセウ せんぞの功をあらはす。晉書、禮志「一ー揚二祖、封諸侯一首」

【昭蘇】セウソ よみがへる。禮、樂記「鼓鼙一ー」注「昭、曉也」＝回生・蘇醒。

【昭代】セウダイ ○よく治まれる御代。羣盛詩「不レ疑逢二一ー一、悠悠過二此生一」＝聖世・聖代・明時。○現代を頌する辭。積完時「慶華摘二一ー一」

【昭著】セウチヨ あきらかにいちじるし。漢史、齊高帝紀「驗往況レ今、若レ斯一ー」＝昭明。

【昭懋】セウマウ あきらかにして盛んなり。宋史、樂志「皇儀一ー」＝懋は茂。

【昭穆】セウボク ○宗廟の制、中央に太祖の廟あり、左に昭、右に穆あり。昭は一世、穆は二世。禮、王制「天子七廟、三昭三穆、與二太祖之廟一而七」○族人を次序するにも一ーの位を以てす。

【昭明】セウメイ あきらか。禮、祭義「其氣發二揚于上一爲二一ー一」＝昭著。

【昭朗】セウラウ あきらか。唐高宗、册二代王一爲二皇太子一文「器業英秀、仁孝一ー」

【昵】ヂツ ヂイ 書 質 もと暱に作る

㊀ちかづく(近)ちかづけなれさす「狎一ー」「嬖一ー」○したしむ(親)「親一ー」○むつぶ(睦)○したしみふかき者。㊁亡父のたまや(禰廟)

【昵交】ヂツカウ したしみなれしくす

る変友。陸機贈「一一密友」
【昵狎】ジツカフ なれなれしくしたしむ。北史、斉後帝紀「自レ非二親私一一一、未二嘗交二語一」
【昵戚】ジツセキ ちかづきたはむれる。宋書、紫微宗傳「紫微尚書常免二一一一」
【昵近】ジツキン したしみちかづく。又、其の者。北斉書、安徳王傳「殺二其一一九人一」
【昵昵】ジツジツ 親しく心やすし。‖入魂
【昵懇】ジツコン
【昵寵】ジツチョウ 王室に深きしたしみある諸侯。又、其の國。十六國春秋「晉王明徳一一、先帝所レ寵」‖親寵。
【昵比】ジツヒ したしみちかづく。書、泰誓「一一二一罪人一」

【昼】

書(日部七畫)の省文。

【昳】

㊀アツ ㊁イツ 質

㊀ひかたむく(日昃)午後二時頃、未の時。漢書、游俠傳「至日一一皆會」㊁逸(走部八畫)に通ず。
【昳麗】イツレイ 容貌がすぐれてうるはしき貌。昳は逸に通ず、光艶なり。戦國、齊策「鄒忌、修八尺有餘、而形貌一一」

【昧】

バイ 隊 通音マイ

○くらし(冥・昧・闇)「冥一」屈原、離騒「路幽一以險隘」○くらます。○よあけがたのほのぐらき時、天の將に明けんとして未だ明けざる時「一旦」「一爽」○おろか、事理にくらし(昏愚)「蒙一」「愚一」○をかす(冒)「一死」○むさぼる(貪)○樂の名、東夷の樂。○佛三一は專一・一心などの義。金剛經註「道云眞一、倫云救一、釋云三一」

同訓異字 昧・暗・昏・冥・昧・晦の別は暗(日部九畫)の條を見よ。

【昧谷】マイコク 日の入る處。昧は冥、日入りて天下くらし、故に名づく。書、堯典「宅二西曰一一」‖虞淵。
【昧爽】マイソウ 昧は暗、爽は明、天明けんとして未だ明けざる時、朝まだき。書、太甲「先王一一丕顯、坐以待レ旦」
【昧死】マイシ 上書に用ふる語、昧は冒、死をかす、冒ふ所不當ならば死を以て謝すといふ義。漢書、高祖紀「一一拜表、賀二大王陛下一」
【昧者】マイシャ おろかなるもの。‖愚人。
【昧旦】マイタン あさまだき、未明。詩、鄭風「女曰二雞鳴一、士曰二一一一」‖昧爽。
【昧茫】マイボウ くらし。陶宗儀詩「或雨而或晴、至レ晩天一一」‖茫昧。
【昧昧】マイマイ くらくいやし。虚構詩「駒齢一一、過レ盛惟求レ止」
【昧昏】マイコン くらし。おろか。楊徳祖文「碌碌一一」‖昧蒙・昏昧・愚暗。
【昧没】マイボツ 意味くらくして明かならず。柳宗元文「吾每レ爲二文章一、未レ嘗敢以二養氣一出之、懼二其一一而雜也」
【昧昧】マイマイ くらき貌。楚辭、漁父「日一一其將レ暮」
【昧蒙】マイモウ くらし。おろか。‖蒙昧。

【昴】

バウ 巧

すばる、二十八宿の一。詩、召南「嘒彼小星、惟參與一一」
【昴畢】ボウヒツ 二星の名。史、天官書「一一爲二邊兵一」漢書、地理志「趙地一一之分野」

【昧】

バツ 易

くらし(日中不レ明)

【昺】

ヘイ 梗 同レ炳

○あきらか(明)‖炳。○人名。宋代最後の皇帝。

【晒】

晃(前條)に同じ。

【晛】

ケン ハイ 銑 月

○ひので(日出)日將に曙ならんとす。○一ケン は日始めて出でて未だ明かならず。楚辭、九思「時一一兮旦日」

【昜】

ヤウ 陽 陽の古字

○ひらく(開)○とびあがる(飛揚)○ながし(長)○ひかり(光)○おほし(衆)

六畫

【晏】

アン 諫 驗

○そらがきよし(天清)○くもなし(無雲)○くれる(落)○おさやかにして盛んなる貌。○おそし(晩)論、子路「何一也」○一はやはらぐ(和柔)○やすし(安)「請一」「靜一」○たがふ(弐)○姓。一與、宇は本仲、春秋の時の齊の相。
【晏晏】アンアン やはらぐ(和柔)貌。詩、邶風「談笑之宴、言笑一一」
【晏嬰】アンエイ 春秋齊の賢人、名は嬰、字は平仲、齊の靈公・莊公・景公に仕へて相となり、節儉力行を以て齊に重んぜられ、其の名、諸侯に聞ゆ。
【晏嬰之狐裘】アンエイノコキウ 極めて節儉なる喩。齊の相、晏嬰(字平仲)が一枚の狐裘を三十年間着用せし故事。禮記「有若曰、一狐裘三十年、晏子春秋レ禮」

【晏駕】カ 天子の崩御をいふ。天子は常に晨起おそくして朝を視るべし、而るに崩じて出でず、臣子の情、之を死せりとするに忍びず、宮車晏ヲ駕して出づべしと思ふ義。戰國秦策「秦王老矣、一日ー一、雖レ有二子異人一、不レ足二以結一レ秦」史、范雎傳「宮車一日ー一、是事之不レ可レ知者」‖晩駕。

【晏起】キ おそくおきる。禮記「孺子早寢ー一」

【晏婉】エン やすんじてたのしむ。高適詩「莫レ負二春酣ー一」

【晏子春秋】シュンジュウ 八卷、單に晏子ともいふ、晏嬰の言行を錄せしもの、作者未詳。

【晏子之御者】ギョシャ 齊の相晏子（名は嬰）の御者が、晏子の馬を御し意氣揚揚たるを見て、妻去らんことを乞ひしにより、御者自ら恥ぢ其の後大いに抑損せしといふ故事（史、晏嬰傳）

【晏出】シュツ 時に後れておそくいで來る。史史「ー一蚤休者訓二勵之一」

【晏如】ジョ 安んじておちつける貌。高適詩「四時常ー一、百日無二歡年一」‖晏然。

【晏清】セイ やすらかに清くをさまる。雲仙雜記「每レ生二神芝一、則天下ー一」‖晏靜。

【晏然】ゼン やすらかなる貌。史、管仲連傳「梁王安得二ー一而已一乎」‖晏如・安然。

【晏息】ソク やすんじいこふ。詩、小雅「嗟爾君子、無二恆ー一」‖安息。

【晏兮】ケイ あざやかにして盛んなる貌。詩、鄭風「濃霞ー一、三英粲兮」

【晏朝】チョウ やすらかにをさまれる朝廷。杜甫詩「海內久戎服、京師今ー一」

【晏寢】シン やすらかに宋書、禮志「方今中外ー一、政刑清簡」‖安寢。

【晏眠】ミン 朝おそくまでねむる。王建詩「橫草無レ功日ー一」

【晃】 クヮウ 養

○あきらか（明）○ひかる、ひかり（光）○かがやく、てる（耀）

【晃昱】イク ひかりかがやく。拾遺記「仙宮則ー一明燭也」

【晃曜】ヨウ かがやく。曹植頌「光榮ー一、配二彼朝日一」

【晃耀】ヨウ 前條に同じ。宋書「榮華相ー一、光彩曄若レ神」

【晃晃】コウ かがやく貌。郭璞、盤地賦「光肝肝以ー一」

【晃山】サン 國日光山の異稱、日光の合字。

【晃蕩】タウ 光の定まらざる貌。蘇軾詩「臨風舍二高筆一ー一射二前壁一」

【晃朗】ロウ 明かなる貌。潘岳賦「天ー一以彌高兮」

【晄】 晃（前條）に同じ。

【皎】 ケウ 篠 或は皎に作る

○あきらか。○月白し。

【皎皎】ケウ 月の白き貌。楚辭、九歌「夜ー一今既明」‖皦皦。

【時】 シ ジ 支 古字は旹

○とき、過ぎ行く月日のひま「一間」○一年の區分。書、堯典「敬二授人一」四ー一は春・夏・秋・冬。○をり（期）適當の期節。孟、梁惠王「斧斤以ー一入二山林一」○其の可に當る。孟、萬章「孔子聖之ー一者也」○よ（世）年代。漢書「司馬相如傳「朕獨不レ得下與二此人一同ー一哉」○辰、一日間の區分「十二ー一」○よし（善）○この。孟、梁惠王「一日害レ之」○これ（是）書、堯典「黎民於變ー一雍」○中。○ここに。孟、梁惠王「于ー一保レ之」○うかがふ（伺）をりをはかる。論、陽貨「孔子ー一其亡也、而往拜レ之」○ねぐら。‖塒。○哲學にて無始より無終に亙る長さ、空間の稱。○文法にて動詞・助動詞の示す過去・現在・未來の稱。

【時雨】ウ ○ふるべき時にふるよき雨。禮記「天降ニー一、山川出レ雲」○國秋冬の際に、降りみ降らずみする雨。

【時雨之化】ウノカ 敎化の普く及ぶをいふ。草木の好雨を得て發生するに喩ふ。孟、盡心「君子之所二以敎一者五、有下如二時雨化一之者上」成語考「學無二師之道一成、日仰二鉆二ー一」

【時遷】セン 其のときのまはりあはせ。班彪賦「誠ー一之所」爲兮、永伊雒其謹慰」

【時英】エイ ○梅の異名。○時彥に同じ。

【時疫】エキ はやりやまひ。‖流行病。

【時下】カ このごろ。‖目下・現今。

【時假】カ ときの相場。名山藏「有司市二供祀粢一、但準二洪武ー一ー」

【時好】カウ 其の時のはやり。新論「非二苟適一性、隨ニー一也」

【時効】カウ 法律上、一定の期間、ある事實の繼續するによりて、權利を生じ、又は消滅する義。

【時勢】セイ 其のときの勢力ある者。晉書、王沈傳「爲ニー一所レ抑」‖時世。

【時艱】カン 時局の艱難。漢延之、從

行「若設遠征人、畢力幹ニ一ニ」‖時患・時屯。

【時宜】ジギ　其の時の宜しきにかなふ義。漢書、食貨志「動欲レ慕レ古、不レ度ニ一ニ」‖時中。

【不レ逮ニ時宜ニ】フタイジギニ　時勢の宜しき所を辨へ知らず。漢書、元帝紀「俗儒ニ——」

【時氣】ジキ　にこう。後漢書、明帝紀「務順ニ一ニ、無レ使ニ煩擾ニ」

【時機】ジキ　はづみ、をり。晉、益稷「帝庸作レ歌曰、勅ニ天之命ニ、惟時惟幾」

【時機】ジキ　をり。時のはづみ。魏徵文「應ニ一ニ以敢レ之、越ニ擧策ニ以決レ之」‖機會。

【時急】ジキフ　時に應じて鳴くとり。朱熹詩傳「——投ニ新陽ニ、潛魚躍ニ輕冰ニ」‖時鳥。

【時局】ジキョク　其の時の形勢。ニ時勢の局面。

【時令】ジレイ　ときを定めて會合する。周禮、大行人「——以發ニ四方之禁ニ」

【時望】ジボウ　其の時世のわづらひ。元結詩「不レ能レ救ニ一ニ、諷諭以全レ意」‖時病・時弊・時難・時艱。

【時敎】ジカウ　時を以て敎ふるをしへ。又、其のときのをしへ。禮、祭記「——必有ニ正業ニ」

【時傑】ジケツ　其の時代に秀でたる人物。獨孤及詩「明主命ニ使臣ニ、皇華得ニ一ニ」‖時豪。

【時彦】ジゲン　其の時代にすぐれたる士。晉書、庾冰傳「廣引ニ一ニ、訓ニ於政道ニ」‖時哲。

【時候】ジコウ　とき、時節に同じ。高適詩「——何蕭索、鄉心正鬱陶」

【時刻】ジコク　限りたるとき。宋書、孝武帝后傳「每旦入ニ朝太后ニ、未ニ嘗失ニ一ニ」

【時祭】ジサイ　時祀に同じ。檀弓「望レ墓而爲レ壇、以レ——」

【時哉】ジサイ　ときの齊書、高帝紀「春秋遷運、——之當存」

【時祀】ジシ　四時のまつり。呂覽「——盡レ敬而不レ新レ端也」‖時祭。

【時事】ジジ　其のときに起る事がら。史、六國表「表ニ六國ニ一ニ」

【時時】ジジ　をりをり。傳燈錄「心如ニ明鏡臺ニ一ニ勤拂拭」

【時羞之奠】ジシウノテン　其の時節の食物を神前に供へる。韓愈、祭ニ十二郎ニ文「使下能中遠具ニ——、告ニ汝十二郎之靈ニ上」

【時日】ジジツ　○ときと日と。曲禮「卜筮者、先聖王之所ニ以使ニ民信ニ一ニ、敬ニ鬼神ニ畏ニ法令ニ也」○ヒノ是日に同じ。孟、梁惠王「——害喪」

【時習】ジシフ　○ときどき復習する。論、學而「學而ニ一ニ之、不ニ亦說ニ乎」○其の時世のならはせ。‖時俗。

【時人】ジジン　其の當時の人。晉史、陸機傳「群竝雅麗、——歎服」

【時辰】ジシン　ときと。又、とけい。

【時辰儀】ジシンギ　時計ケイ

【時宗】ジシュウ　圓淨土宗の一派、一遍上人のはじめしもの。‖六時往生宗・遊行派。

【時稱】ジショウ　ときのほまれ、時人の稱譽。金庭詩話「渾在ニ翠樓ニ一ニ」‖時譽。

【時世】ジセイ　其の時代。荀子「——不レ同、譽何由生、不レ得レ爲レ政、功安能成」‖時代・時序。

【時世粧】ジセイシャウ　當時の流行のよそほひ。白居易詩「——、自ニ出ニ城中ニ傳ニ四方ニ」‖時世妝。

【時政】ジセイ　其の時のまつりごと。晉續詩譜「繇ニ孔孟之淵源ニ、臻ニ一ニ之要道ニ」

【時勢】ジセイ　ときのなりゆき。戰國策「權藉者、萬物之率也、而——者、百事之長也」

【時節】ジセツ　其のとき、其のをり。杜甫詩「落花——又逢レ君」

【時俗】ジゾク　ときのならはし。張衡、西京賦「登ニ——之足レ慕」

【時代】ジダイ　ときと年代と。宋書、禮志「歷ニ晉至レ宋、——移改」‖時世。

【時代思想】ジダイシサウ　當時一般の思想を代表し得べき最も勢力ある思想。

【時代物】ジダイモノ　圓○年代を經たる品物。○歷史上の事實をしくみし芝居の狂言。又は小說。

【時態】ジタイ　其のときのありさま。鄭谷詩「——懶ニ隨レ人上下ニ」

【時中】ジチウ　時に應ひて其の宜しきを得る。中庸「君子之中庸也、君子而ニ一ニ」

【時鳥】ジテウ　○時節に應じて鳴く鳥。陳拾、悲哉行「——多ニ好音ニ」○圓杜鵑ホトトギスの異名。

【時牌】ジハイ　ときを示す爲めに揭げる札。王禹偁詩「壁上——催ニ畫夜ニ」

【時望】ジバウ　當代の人望。王儉文「貽厥之寄、久屬ニ一ニ」

【時評】ジヒヤウ　時人の批評。

【時服】ジフク　其の時節の服。檀弓「其敝以ニ一ニ」

【時文】ジブン　○魏晉以後科擧に用ひし四六駢儷體の文。古文の對。歐陽修文「是時天下學者、摸ニ倣時文ニ一ニ、能者取ニ科第ニ、擅ニ歷名ニ、以誇レ榮」○圓現代に行はるる普通文。

【時病】ジビヤウ　其の當時の弊害。宋史、陳瓘傳「瓘疏ニ三十條ニ、皆切ニ於ニ一ニ」‖時弊。

【時弊】ジヘイ　その時代のあしきならはし。晉書、姚萇載記「省ニ非急之費ニ、以救ニ一ニ」

【時勉】ジベン　つとめる。書經「咨汝平ニ水土ニ、惟ニ一ニ哉」

【時務】ジム　其の時のつとめ。蜀志、先主傳、法儀生爺士、豈識ニ一ニ、識ニ一ニ者在ニ後傑ニ」

【時夜】ジヤ　雞が鳴いて夜の時をつげる。又、其の時。莊、齊物「見レ卵而求ニ一ニ」

【時務】ジム　時勢に同じ。晉書、傅元傳「以二一一一一選入二著作一」

【時雖】ジスイ　民やはらぎてやすし。雖は陽。舜、堯典「黎民於變一一」錄起詩「漢家無事樂二一一一」

【時令】レイ　○年中の行事の後漢書「百僚師尹、其勉修二厥職一順二行一一一」

○轉じて時節の義とす。

【時論】ロン　其のときの論議、時人の評論の魏志、常林傳「一一以二林節操清儉一敬レ之公館一」

【致レ時】イタス　時代の弊を救ふ、時の衰運をひきかへす。唐書、姚崇傳「崇乃一一一宰相一」

【時異事異】コトナレバ　時節が違へば、人の行事も亦隨ひて異なり。漢書、眭弘劉傳「使二秦儀與レ儀並生於今之世一、豈不レ得二擧故一安敢望二當侍郎一乎、故曰、——」

【時殊風異】コトナレバ　時節が違へば、風俗も亦從ひて異なり。宋書、徐湛之傳「一國之事、本之二人一、雖二世代不レ同、——一、至二於主運臣賢一、古今一レ揆」

【時乎】カナ　今はよき時なりと嘆歎する語。史、淮陰侯傳「功有難レ成而易レ敗、時有難レ得而易レ失也、一一時不二再來一」

【時哉】カナ　時乎に同じ。晉、秦誓、「一一不レ可レ失」

【不レ過レ時】カズ　よき時節に出合はぬ、運がわるし。史、李將軍廣傳「惜乎——」

【時不レ可レ失】ウシナフベカラズ　よきをりの逃すべからざるをいふ。戰國策、齊策不レ可レ易、——」

【時者難レ得而易レ失】エガタクシテヤスクウシナフベシ　よきをりの逃すべからざるをいふ。晉、孫楚、石仲容誄「一一一、悲二夫子之不一レ留」

【時俗】ゾク　時世の風に從ひてうきしづみする、世につれる。通鑑、宋紀、志慮忠純、不二與レ時俯仰一」＝與レ時浮沈。

【晉】シン　國　晉は俗字

○すすむ(進)ー謁」○さしはさむ(插)○おさふ(抑)○ー鼓は長さ六尺六寸ある兩面のつづみ(周禮、地官)○王朝の名、司馬炎、魏の禪を受けて建つ、西ー東ー合せて十五帝、一百五十六年にして宋に禪る。○春秋時代の國名、周の成王、其の弟叔虞を唐に封す、其の子徙りてー一に居る、今の山西太原縣の東北に當る、後、山西・直隸の兩省に割據し、春秋の末、其の大夫趙・韓・魏三家に分割せらる、故に三ーとも稱す。○地名、今の山西省の異稱。○易の卦の名、坤上離下。

【晉】晉(前條)の俗字。

【晌】シャウ　俗

○まひる(正午)○半ーは少しの時間。＝片時・片晌。

【晒】ソウ　晞(日部九畫)の俗字。

【晁】朝(月部八畫)の省字、又、龜に作る。

七畫

【晧】カウ　皜　又、皓に作る

○ひので(日出)の貌。○しろし(光白)○あきらか(明)

【晞】キ　俗

○かわく(乾)詩、秦風「白露未ー一」○ひので(旦)あける、夜明けんとして光氣升る。詩、齊風「東方明」ー」○さらす(暴)

【晦】クワイ　隊

○つごもり(月盡)みそか(月終)陰曆の月の最終日、二十九日、或は三十日。○くらし(昏)明・又顯の反對「ー明」「顯ー」○くらます、かくす「韜ー」「隱ー」○かすか(微)左、成十四「志面ー」○よる(夜)左、昭元「陰陽風雨ー明」○きり(霧)○しほむ(彫萎)江淹詩「寂歷百草ー」

【晦晦】クワイクワイ　くらき貌。莊子「謀雖ー一、無心面不レ可二與謀一、彼何人哉」

【晦顯】クワイケン　くらますとあらはすと。世に知られざると、知られると。歐陽修、吳元猷公神道碑「其世次ー一、徙遷不レ常」＝隱顯。

【晦藏】クワイザウ　くらましかくす。歐陽修文「以レ人關領不二矜飾一、能自ー一」＝韜晦。

【晦朔】クワイサク　つごもりとついたちと。莊、逍遙遊「朝菌不レ知ー一一」

【晦澀】クワイシフ　文字の意味明かにとほらず。

【晦匿】クワイトク　己の才智などをくらましかくして人に知らさぬ、愚かなる人の風を裝ふの謂。唐書、高祖紀「高祖其懼、深自ー一」＝晦藏・韜晦。

【晦昧】クワイマイ　くらし、やみ。又、暗愚の譬。疏「識物衰老、取二ー一之義一也」

【晦盲】クワイマウ　日くらしの又、世みだれてくらやみとなるの譬。「曙予天下之ー一也」

【晦名】クワイメイ　名をくらます。錄鬼記「草服素冠、一レ匿レ位、織レ履自給」

【晦明】クワイメイ　夜と晝と。字解參看。

【晦冥】くらし。冥は晦。漢書、高帝紀「雷電ー」＝晦暝。
【晦夜】やみよ。十洲記「ー」＝卽見二此山一」
【晦惑】理にくらくまどふ。蔡邕文「蔽ー之路」＝昏惑。

【晥】クヮン 潤

○あきらかなる貌。＝皖。○縣名、廬江郡に屬す。

【晛】ケン 霰 先

○ひのはる(日見)○ひかり(日光)○あきらか(明)

【晤】ゴ 遇 通 露に遇す

○あきらか(明)「英ー」「神ー」○ふ(遇)むかふ(對)相會する「相ー」○とく(解)

【晤言】ゴゲン 晤・遇・遭・值・合・會の別は遇(通部八畫)の條を見よ。
【晤歌】相對してうちとけてうたふ。詩、陳風「彼美淑姬、可二與ー一ー」
【晤言】ゴゲン 遇ひてかたる。詩、陳風、彼美淑姬、可二與ー一ー」＝晤語。
【晤語】ゴゴ 相對してうちとけてかたる。詩、陳風「彼美淑姬、可二與ー一ー」＝晤言。
【晤對】ゴタイ あふ、面會する。謝靈運詩「ー一無二限歡一、聚散成二分離一」

【晜】コン 元 昆に通ず

○のち(後)○あに(兄)

【晜孫】ソン 來孫の子(爾雅)
【晜弟】ティ あにと、おとうとと。爾雅「父之ー一」＝昆弟。

【晨】シン 眞

○あした、あさ、しののめ、つとに(早旦)「清ー」「霜ー」○夜のひきあけ、よあけ(昧爽)○あしたす、雞が夜あけをしらせて鳴く。書、牧誓「牝雞之ー、惟家之索」○あきらか(明)○二十八宿の一なる房星の異名。
【晨雞】シンケイ あさのけぶり、あさがすみ。魏武之、陳徵士誄「ー一蓼蓼、春露霏霏」
【晨炊】シンスイ あしたのめし。杜甫詩「ー一朝可ノ繼」
【晨行】シンコウ あさはやくゆく。周禮、掌二行者一ー一者、掌二宵行者夜遊者一」＝晨征。
【晨起】シンキ あさはやくおきる。潘岳、寡婦賦「ー一動二征鑣一、客行悲二故鄉一」＝晨興・夙起。
【晨昔】シンセキ あしたの日の光。謝莊、宋明堂歌「ー一促二夕漏一」＝晨光。
【晨暉】シンキ あさひのひかり。宋書、樂志「潔誠夕禮、端服ー一」＝晨光。
【晨禽】シンキン あさのとり。鮑照詩「飢猿其二下食一、ー一不二敢飛一」
【晨光】シンクヮン あさ日のひかり。歌辭、郊廟歌「ー一內照、洗拔外延」＝晨暉。
【晨鐘】シンショウ 朝早く鳴く鐘。陳叔達詩「鼓聞猶未レ絕、此夕待二ー一」」
【晨粧】シンショウ あしたのしたく。王融詩「孥雲月流、曉鬢ー一結」
【晨妝】シンショウ あさめし。東晉、補亡詩「磬二朝夕一、潔二ー一一」＝晨食。
【晨鍾】シンショウ よあけのかね。杜甫詩「欲レ慢二ー一、令二人疑一深省一」
【晨炊】シンスイ あさはやくかしぐ。史、淮陰侯傳「寄食數月、亭長妻患之、乃ー一早食、食時信往、不二爲具一食」
【晨征】シンセイ あさ早く出て行く。つとにゆく。通典、與二鄰友書一「嚴裝成レ旦、晨征爾ー一」＝晨往・晨行。
【晨星】シンセイ ○あけがたのほし。衆物詩、「幾竹促二飛鵬一、夜闌送二ー一一」＝晨星。○物のすくなきに喩ふ。次條參看。
【晨星落落】あけがたの天に星の疎に二三點見ゆるが如く、女人の次第に少くなるにいふ。落落はまばら。劉禹錫文「所レ謂同年之友、當二其盛時一、逢レ衰ノ鎩(中略)今來落落、如二晨星相望一」
【晨省】シンセイ 早朝父母の安否をたづねる。曲禮「昏定而ー一」
【晨雞】シンケイ あさ雨がはれる、あさばれ。草廬物詩「ー一泄二景光一」＝曉霽。
【晨昏】シンコン あさ日のひかり。宋孝武帝文「俟二玉羊之ー一」
【晨旦】シンタン あした。梅堯臣、梨二圖難一詩「願言激二猛毅一、皆獨存二ー一一」＝晨朝。
【晨朝】シンテウ あさまだきも杜甫詩「ー一降二白鷗一、遙憶蓬萊宮闕」＝晨旦・早朝。
【晨潮】シンテウ あさしほ。番禺記「ー一下、晩潮上」
【晨歌】シンカ あさひの出る時、千鳳數二夕陽一、百鳥明二ー一」＝晨歌・晨唱。
【晨入夜歸】朝早く官衙に入り、夜家に歸る。韓愈、上二張侯相一書「見二執事之接一於食一者、非レ爲二其能ー一也」
【晨入夜出】おそくいづる神仙譚「淮南王劉安、每二旦見二侍中一、及獻二金馬碧雞一、ー一」
【晨牝】シンヒン 牝雞晨の略語。牝雞晨鳴、牝雞女主が政に與るにいふ。周禮、酒正注「鄭大夫讀「酌」爲ー一、謂二夜鳴一」
【晨風】シンフウ ○朝かぜ。○鳥名。詩、秦風「鴥彼ー一、隰彼北林」
【晨飆】シンヒョウ あさのつむじかぜ。謝靈運詩「影亂ー一、急、香多夜雨晴」
【晨暮】シンボ あした、いふべし。杜甫詩「天台獨二江風一、風波無ー一ー一」

晨昏・朝夕・晨管。
【晨炊】シンスイ　あけがたのきり。楊倫文帝、梅花嶺「報二雲霧之一一」注曉霧。
【晨明】シンメイ　あけがた。淮南子「日出于暘谷、浴于咸池、拂於扶桑、是謂一一」注曉明。
【晨門】シンモン　もんばん。門番のこと。論語「子路宿二於石門一。晨門曰、奚自」注門を掌る者。論、憲問「一一曰、孰自」注門人。晨人。

【辰】シン　㊥㊦

○あさ(朝)。明け(明)。○てもと。○はしのひかり(星光)。
【辰星】シンセイ　水星の別名。孟子「三宿而後出一」注「一一、大火也」
【辰砂】シンシャ　ひる耕作する。魏書、崔光傳「一一夜誦、儕等貝黄二父母一」
【辰刻】シンコク　ひるのあひだ。日中。
【辰錦】シンキン　石貢にして故郷にかへるに喩ふ。北史、毛遇傳「明帝改二北地郡一爲二雍州一、酒賀爲二刺史一、謂曰、此只二一一段錦一、朱の轄埼（魏公）一堂を作る。
【辰極】シンキョク　ひる見る。雨無二外物一、百一一不レ若二夜視之美一」
【辰巳】シンシ　ひるま。後漢書、逸民傳「論曰、一一倶隠」
【辰駅】シンエキ　ひるね。論、公冶長「宰予一一」注晝寝。
【辰旦】シンタン　ひると、よると。淮南子「宰予晝寝」注晝。
【辰夜】シンヤ　ひると、よると。淮南子「宰予晝寝」注晝夜。
【辰良】シンリョウ　ひるま。後漢書、逸民傳「論曰、一一倶隠」
【辰如】シンジョ　ひると、よると。淮南子「宰予晝寝」注晝夜。
【辰如】シンジョ　ひると、よると。淮南子「進者如一一、不レ舎一一」
【辰如】シンジョ　花の咲きそろう形容。李白詩「咸陽三月時、千花一一」

【晨】シン　㊥㊦

○ひる。日出より日没までの稱。夜の對「平一」「旦一」「辰一」「酉一」「未一」ト其後、不レ敢」○ひるま（日中）まひろ（日正中）○齊の邑名。孟子「三宿而後出一」
【晨耕】シンコウ　ひる耕作する。魏書、崔光傳「一一夜誦、儕等貝黄二父母一」
【晨朝】シンチョウ　ひるのあひだ。日中。
【晨錦】シンキン　石貢にして故郷にかへるに喩ふ。北史、毛遇傳「明帝改二北地郡一爲二雍州一、酒賀爲二刺史一、謂曰、此只二一一段錦一、朱の轄埼（魏公）一堂を作る。
【晨錦夜夢】シンキンヤム　榮の愚が夜の夢となるの意。列禦寇「一一神遇所レ對」
【晨興】シンコウ　ひる見る。雨無二外物一、百一一不レ若二夜視之美一」
【晨昏】シンコン　ひるま。後漢書、逸民傳「論曰、一一倶隠」
【晨旦】シンタン　ひると、よると。淮南子「宰予晝寝」注晝。
【晨夜】シンヤ　ひると、よると。淮南子「宰予晝寝」注晝夜。
【晨如】シンジョ　ひると、よると。淮南子「進者如一一、不レ舎一一」
【晨如】シンジョ　花の咲きそろう形容。李白詩「咸陽三月時、千花一一」

【晝】チュウ　㊥　昼は俗字

○ひる。日出より日没までの稱。夜の對「平一」「旦一」「辰一」「酉一」「未一」ト其後、不レ敢」○ひるま（日中）まひろ（日正中）○齊の邑名。孟子「三宿而後出一」
【晝耕】チュウコウ　ひる耕作する。魏書、崔光傳「一一夜誦、儕等貝黄二父母一」
【晝錦】チュウキン　石貢にして故郷にかへるに喩ふ。北史、毛遇傳「明帝改二北地郡一爲二雍州一、酒賀爲二刺史一、謂曰、此只二一一段錦一、朱の轄埼（魏公）一堂を作る。
【晝錦夜夢】チュウキンヤム　榮の愚が夜の夢となるの意。列禦寇「一一神遇所レ對」
【晝興】チュウコウ　ひる見る。雨無二外物一、百一一不レ若二夜視之美一」
【晝昏】チュウコン　ひるま。後漢書、逸民傳「論曰、一一倶隠」
【晝旦】チュウタン　ひると、よると。淮南子「宰予晝寝」注晝。
【晝夜】チュウヤ　ひると、よると。淮南子「宰予晝寝」注晝夜。
【晝如】チュウジョ　ひると、よると。淮南子「進者如一一、不レ舎一一」
【晝如】チュウジョ　花の咲きそろう形容。李白詩「咸陽三月時、千花一一」

【晩】バン　㊥　通常バン、或は勉に作る

○ゆふべ（夕）「昨一」○くれ、ひぐれ（暮）○おそし（後）早の對「早」史、李斯傳「君何見之一」○する（末）「一春」「一唐」
【晩景】バンケイ　ゆふぐれのながめ。劉禹錫詩「滄水殘雲帯一一」
【晩鴉】バンア　ゆふぐれのもや。黄庭堅文「與晁無咎書」「一一揺巻、觀之」
【晩鳥】バンチョウ　ゆふぐれのからす。劉禹錫詩「吴苑荒臺一一」
【晩照】バンショウ　ゆふがすみ、ゆふげのけむり。唐太宗詩「一一含二樹色一、棲鳥」
【晩春】バンシュン　なつのすえ、陰暦の六月。駱賓王詩「荷香留二一一一、蘭気入二清秋一」
【晩秋】バンシュウ　おそくうえたるいね。張説、喜雨詩「稍及二秋田一一青」
【晩禾】バンカ　天子の崩御をいふ。通鑑、周紀「宮車一一」注「晩、晏也、猶二晏駕一同」晏駕參看。
【晩駕】バンガ　ゆふやけ、ゆふばえ。沈佺期詩「聖澤延二寒谷一、御林落二一一一」
【晩学】バンガク　中年以後に至りて學を始める。陳書、儒林傳「一一鎮仰、生深二荷地之歎一」
【晩菜】バンサイ　おくれて待つつぼみ。梁蕭里諺「里有二桃花一一開」
【晩唱】バンショウ　ゆふ方の日のひかり。李嶠祐詩「花木遍二衡序一、子笙歌二一一一」
【晩照】バンショウ　おそく咲く花。杜甫文「秋興早蕊、春則一一」
【晩木】バンボク　おくてのいね。劉長卿詩「黄雀啾啾春二一一一」
【晩果】バンカ　おくれてみのりたるこのみ。李嶠祐詩「一一經レ秋久、芳蕤近レ冬存」
【晩花】バンカ　おそ咲きのはな。杜甫文、詩「蘭葉與二芳露一共鮮、一一與二紫蕚一俱落」
【晩光】バンコウ　ゆふひのひかり。晋恩祐詩「漫前朝影也、樓上一一静」
【晩景】バンケイ　○ゆふぐれのけしき。張説、文詩「銀賦」「一一幽秀、映二紅蕤一」○夕日の光。
【晩悟】バンゴ　おくれてさとる。蘇軾詩「猶慙二前失一、眞犬悲二一一一」
【晩婚】バンコン　年たけて結婚する。中年以後の結婚。早婚の對。
【晩歳】バンサイ　老いたるよはひ。北史、艶傳「荷有二眞田一、何変二一一一」
【晩節】バンセツ　次條に同じ。蘇軾詩「素質

爲ニー一、安識肉與レ酒」

【晩餐】バンサン　ばんめし。何景明詩「茗葉松花進ニー一」‖晩餉・晩飧。

【晩菊】バンキク　なつかひこ。許渾詩「籬上青黄持ニー一」

【晩就】バンシュウ　晩成に同じ。陸機賦「感二流安之ー一」

【晩秋】バンシュウ　あきのすゑ、陰暦の九月。

【晩進】バンシン　後進に同じ。唐書、張鷟傳「大有二時ー一英レ不レ薄記」‖晩輩・後進。

【晩酌】バンシャク　ばんめし。陸游詩「野居殊稍供ニー一」‖晩餐。

【晩酔】バンスイ　夕方に飲むさけ、おさけ。白居易詩「朝睡足始起ー一傾即休」

【晩秀】バンシュウ　おそくみのる。陰暦九月令「仲夏之月、行二春令一、則五穀ー一」

【晩春】バンシュン　はるのすゑ。陰暦三月。「三月曰二末春一ー一」

【晩節】バンセツ　夕ぐれのかれの景色。草木物語、蔡洸愛色題、詩遲ー一嘆」‖暮鐘。

【晩食以当レ肉】バンショクヲモッテニクニアテ　おそく食事するときは、空腹の爲めに粗食も肉の如くうまきをいふ。顔觸が善く勢に處せし法、戦國策、——、安歩以當レ車」

【晩蚕】バンサン　冬枯の時にも變らざるみどり。范質、戒二従子某一詩「遲遲澗畔松、翳翳含ニー一」

【晩生】バンセイ　あとから生れたる者の義、同輩に對して己を卑下するの稱。‖小生・小弟・拙生・後生。

【晩成】バンセイ　おそく出來あがる。老子「大方無レ隅、大器ー一」

【晩渡】バンセイ　ゆふがたのものさびしさ。孟郊詩、寄竹舍ニー一」

【晩晴】バンセイ　ゆふがたにはれる。杜甫詩「潤關傘二衆峰一、獨孤關ニー一」‖晩霽。

【晩霽】バンセイ　夕方の雨あがり。宋之問詩「ー一江天好」‖夕霽。

【晩涼】バンリョウ　夕方のすずしさ。杜甫詩「ー一看二洗馬一、林木亂二鳴蜩一」

【晩登】バンノボル　○夕方に高き處にのぼる。高啓詩、ー一臨滄觀、惆悵懷古情」○おそくみのる。錢令、菊花賦「早植ー一、君子徳也」

【晩年】バンネン　老いたるよはひ、老後のよはひ。高適詩「ー一學二垂綸一」‖晩歳。

【晩梅】バンバイ　○實を結ぶこと晩き梅。范成大詩、「黄透ー一紅的曉、展開新萼早找蕊」○おそ咲の梅。早梅の對。

【晩泊】バンパク　日暮に舟を泊めて宿する。孟浩然詩、「向暮晩泊郎」

【晩帆】バンパン　日暮れて行く舟のほ。陰鏗詩「天際ー一孤」

【晩飯】バンパン　ゆふめし。顧煩詩、「人家炊煙裏、ー一結微前」

【晩風】バンプウ　ゆふかたのかぜ。陳子昂詩「ー一吹二畫角一、春色滿二孤城一」

【晩苗】バンビョウ　おそくうゑしなへ。范成大詩、「早苗已堪蓮、ー一猶翦翦」

【晩景】バンケイ　ゆふぐれ。轉じて、晩年の義。李尤詩「年歳ー一時已斜、安得力士翻二日車一」

【晩陽】バンヨウ　ゆふひ。錢起詩「微雨侵ニー一」‖夕陽。

【晩來】バンライ　日くれがた。杜甫、喜雨詩「ー一急不レ絶、應レ得夜深聞」

【晩霞】バンカ　ゆふかたに鳴るかみなり。杜審言詩、「日氣含二殘雨一、雲陰送ニー一」

【晩涼】バンリョウ　夕方のすずしさ。杜甫詩「ー一看二洗馬一、林木亂二鳴蜩一」

【晡】ホ　國　餔に通ず

○さるのとき（申刻）今の午後四時。○ゆふべ、くれがた。白居易詩「朝ー一頭餅餌」

【晡下】カ　午後四時すぎ、なゝつさがり。

【晡時】ジ　午後四時。雑雨、天文訓「日至二於悲谷一、是謂ニー一」

【晡夕】セキ　ゆふがた。朱王陽安贈、ー一之後、精神恍惚、若レ有レ所レ喪」‖薄暮。

【暁】ギョウ　ゲウ　ケウ　ケウ

○アン　○エン

○くらし（冥）‖暗。○さとし（暗）（三）ーーは日に光なし、くらし。

【暁露】ロ　樹木のしげりてくらき貌。王安石詩「翠幕碧參差、木樹青ー一」

【暁露】ロ　露たちこめてくらし。曹植「揚二雲霓之ー一矣」

【暁暗】アン　くもりてくらし。姚希孟賦

「白ー一面晃幌、又幌幽而玲瓏」【暗昧】アン　くらし。漢書「深惟二其故一而反ー一」＝暗昧。【晻曖】アン　日に光なき貌。楚辭、九歌「日ー一西下頽」

【晩】　エン　阮

ひかげかたむく。【晩晩】エン　日がくれる。楚辭、哀時命「白日ー一其將レ入兮」

【昜】　キ　紙

○ひかげ（日景）日の光「日ー」「寸ー」「短ー」＝韓愈、進學解「焚二膏油一以繼レ晷」＝燈光と日光とつづけて晝夜勉強する。○はしらかけ（柱景）表を立てて日を度る。○はかる（規）

【晷景】キエイ　ひかげ（史、天官書）何承天、請レ改二漏刻一奏「更增二損舊刻一、參以ニー一、測定晷レ經」【晷刻】キコク　とき。梁書、賀琛傳「每下見二高祖一與語、常移ニー一」＝光陰・時刻。

【景】　㊀ケイ・キャウ　梗　極　㊁エイ

㊀ひかり（光）○さかひ（境）○あきらか（明）○おほひなり（大）○しろし（白）○したふ（慕）○あふぐ（仰）「ー慕」「ー仰」○かたち（像）○けしき、やうす、おもむき「風ー」「勝ー」「佳ー」「絕ー」「好ー」「光ー」○うつはぎ（上衣）○星の名。○うつくし（詔）○南方より吹く風。○ー教は、波斯國にて火を拜する宗教。＝丙教。㊁かげ（物之陰影）「日ー」＝影。

【景從】ケイジュウ　影が物の形につきまとふ如く附き從ふ。賈誼、治安策「天下雲會輻湊、瀕レ救而ー一」＝響應。【景倒】ケイタウ　影がさかしまに水中にうつる。杜甫詩「忽風翻而ー一」【景雲】ケイウン　めでたきくも。晉書、天文志「ー一太平之瑞」＝慶雲。慶雲。【景曜】ケイエウ　太陽。晉書、律歷志「撰二天行一而序ニー一」【景行】ケイカウ　大いなる道。高明なる德行に喩ふ。詩、小雅「高山仰止、ー一行止」＝大道。【景氣】ケイキ　○やうす、ありさま。＝景況。○元氣、意氣。○圖畫寫上の狀況、貨物のさばけぐあひ。【景況】ケイキャウ　ありさま、やうす。＝情況。【景仰】ケイギャウ　あふぎしたふ。金史、熙宗紀「孔子雖レ無レ位、其道可レ尊、使二萬世ー一」＝景行參看。【景光】ケイクワウ　○めでたきひかり。又、恩德・榮譽等の義に用ふ。後漢書、郎顗傳「可下垂ニー一致中休祥上矣」＝祥光。○としつき、光陰の義。蘇武詩「願君崇二令德一、隨レ時愛ニー一」【景刻】ケイコク　とき。謝靈運詩「愛レ客不レ告レ疲、飲讌遺ニー一」【景象】ケイシャウ　○けしき。＝景色。○かげと形と。【景色】ケイシキ　宋之問詩「芳辰ー一佳」＝風景・景趣・景物・風致。【景初曆】ケイショレキ　魏の明帝の時、撰みたることよみ。景初は其の年號。晉書、武帝紀「改ニ——一爲二太始曆一」【景風】ケイフウ　けしきがすみてきよし。文選、廬山賦「ー一則巖岫開レ鏡、風生則芳林流レ芬」【景星】ケイセイ　めでたきほし。史、天官書「天端而見ニー一」＝瑞星・德星。【景星鳳凰】ケイセイホウワウ　めでたき星と鳳凰と。賢人に喩ふ。韓愈、與二李拾遺一書「朝廷之士引頸東望、若ニ——之始見一也、皆先觀之以爲レ快」【景迹】ケイセキ　○おこなひ、行跡。又、候淇水文「遡遡ー一、君子攸レ欽」○蹤の一種。歐陽修、憎二蒼蠅一賦「尤忌二赤頭一蟲爲ニー一」【景福】ケイフク　おほいなるさいはひ。晉書、樂志「施ニー一二萬世一」＝景祚。【景致】ケイチ　けしき、致はおもむき。＝風致・景趣・景色。【景德】ケイトク　めでたきしるし。謝靈運文「龍筮元謀、符瑞ー一」＝休徵・瑞徵。【景天】ケイテン　儀鳳の異名。古今註「儀火、一名曜夜、一名ー一」【景風】ケイフウ　○みなみかぜ。史、律書「南方ー一炎至」○四南の風（淮南、天文訓）○四時の和風（爾雅、釋天）＝詳風。【景福】ケイフク　大いなるさいはひ。詩、小雅、小明「神之聽之、介二爾ー一」＝景祚・大福。【景物】ケイブツ　○けしき。杜審言詩「三春ー一盛」＝風景。○圖畫を添ふる爲めに贈品に添へて贈品するもの。＝景品。【景慕】ケイボ　あふぎしたふ。柳宗元詩「凝レ情空ー一」＝仰慕。

【晶】　セイ　ショウ　庚

○ひかり（精光）○あきらか、きらきらと明るく光る。宋之問詩「八月涼風天氣ー一」○するしやう二水ー一」晶精通ず。○結ー一ジャウは純粹なる結物が特有する一定の形象。

【晶耀】ショウエウ　あきらかにひかる。宋之問詩「ー一日何在、澄鑒心欲レ無」【晶光】ショウクワウ　きらめくひかり。韓愈詩「ー一滿相射、旗幟翻以鮮」＝光晶。【晶晃】ショウクワウ　あきらかなるひかり。謝朓詩「ー一浮二輕蹕一」【晶熒】ショウケイ　あきらかにひかる貌。韓愈詩「堆金疊玉光ー一」

【晴嵐】セイラン　はれたるけしき。瀧陸璣、詠二山雞一詩「石徑新ニ一雨、山含陸二晴嵐一」

【晴雪】セイセツ　はれたるあさぞらの雪。陳陶詩「白塔界ニ一一」

【晴川】セイセン　はれたる川ぞらの雪。崔顥詩「一一歴歴漢陽樹」

【晴日】セイジツ　はれたるひる。又、晴天。「明朝雨雨閉ニ一一」

【晴天】セイテン　はれたるひるの意。或ハ「主掌晴雨ノ神」ト云フ。

【晴光】セイクワウ　はれたるそらの光。轉じて晴天。

【晴空】セイクウ　はれたるそら。李白詩「回溪十六度、碧嶺盡ニ一一」ニ晴天、晴嵐。

【晴景】セイケイ　はれたるけしき。瀧陸璣、詠二山雞一詩「石徑新ニ一一、山含陸二晴嵐一」

【晴彩】セイサイ　ほがらかなるはるの縁谷。「山城多二晴彩一、溪閣少ニ一一」

【晴雲】セイウン　はれたるあさぞらの陳陶詩「白塔界ニ一一」

【晴川】セイセン　はれたる川ぞらの崔顥詩「一一歴歴漢陽樹」

【晴日】セイジツ　はれたるひる。又、晴天。「明朝雨雨閉ニ一一」

【晴天】セイテン　はれたるひるの意。或ハ「主掌晴雨ノ神」ト云フ。

【晴光】セイクワウ　はれたるそらの光。轉じて晴天。

【晴空】セイクウ　はれたるそら。李白詩「回溪十六度、碧嶺盡ニ一一」ニ晴天、晴嵐。

【晴景】セイケイ　はれたるけしき。瀧陸璣、詠二山雞一詩「石徑新ニ一一、山含陸二晴嵐一」

【晴彩】セイサイ　ほがらかなるはるの縁谷。「山城多二晴彩一、溪閣少ニ一一」

【晴雲】セイウン　はれたるあさぞらの陳陶詩「白塔界ニ一一」

【晴川】セイセン　はれたる川ぞらの崔顥詩「一一歴歴漢陽樹」

【晴日】セイジツ　はれたるひる。又、晴天。「明朝雨雨閉ニ一一」

【晴天】セイテン　はれたるひるの意。或ハ「主掌晴雨ノ神」ト云フ

「諸侯乗二其弊一而起、――亥」
【智者一失】ちしゃのいっしつ　智者も時には過失あるに喩ふ。史、淮陰侯傳「廣武君曰、臣聞、智者千慮、必有二一失一、愚者千慮、必有二一得一」
【智者見二未萌一】ちしゃはみもうをみる　ちえある人は事の未だ起らざる前にさとり知る。戦国策「愚者暗二於成事一、智者見二於未萌一」
【智将】ちしょう　智謀すぐれたる大将。東軒筆録「魏公曰、――不如二潘将一」
【智術】ちじゅつ　ちえはかりごと。国志、諸葛亮傳「欲下信二大義一于天下一而――殫中」
【智数】ちすう　ちえありて謀に長ず。魏志、文徳郭后傳「后有二――一、時有二所匡諫一」⇒智謀。智識。
【智小而謀大】ちしょうしてぼうだい　小智の人、徒に大謀を為すをいふ。易、繋辞「――、力小而任重」
【智慧】ちえ　ちえ多き人。史、趙奢子傳「非下智慧多而、識人能曰二――一」
【智能】ちのう　ちえにたらきある事。漢唐傳「得二――一」
【智伯】ちはく　国名。智氏。晋の六卿の一。智宣子の子、瑤。智伯は、国郡活殺にして万事に専ぜんことを欲し、行は、方正経格にして、物に合せんことを欲す。淮南、主術訓「凡人之論、心欲小而志欲大、――」
【智謀】ちぼう　ちえあるはかりごと。漢書、元后傳「忠信質直、――有レ餘」
＝智略・智計・智術・智数・智算。
【智略】ちりゃく　〇才智と機略と。〇賢き日まで。＝智智。
【智謀短識】ちぼうたんしき　ちえあさしき識見、孔光傳「臣光――」
【智過二萬人一】ちえはばんにんにすぐる　ちえの非凡なるをいふ。淮南、脩務訓「――者謂二之英一、千人者謂二之俊一、百人者謂二之傑一」
【智勇兼】ちゆうけん　智謀と勇気とをあはせかねる。史記「智勇可レ謂レ兼レ之矣」
【智略】ちりゃく　ちえはかりごとと。六韜「無二――一、懦謀」＝智計・智謀。
【智慮】ちりょ　ちえあるかんがへ。＝知慮。
【智力】ちりょく　ちえのはたらき。「竭二其――一、以経二営天下一」＝人レ就レ之」
【普】ふ
○あまねし（形）＝偏」＝天率上」○ひろし（形）○大いなり。○【普請】の略。＝普門」の略。＝仏教」
【普請奉行】ふしんぶぎょう　普・請・奉・行の項を見よ。
【普請】ふしん　ひろくゆきわたる。潘岳賦「傳二玄澤之一、――嘉二植物之処一敷」
【普恩】ふおん　あまねきめぐみ。＝普徳」
「欲レ識――無二過近一」
【普洽】ふこう　あまねしの異字「大化一一」
＝普徳。
【普及】ふきゅう　あまねくおよぶ。仏偈「願以二此功徳一一一於一切」＝普遍。
【普化僧】ふけそう　禅宗の一派、普化宗の僧。一に、虚無僧ともいふ。尺八を吹きて托鉢するもの。雲の普化禅師を開祖とす。我国にては、鎌倉時代に法燈国師之を伝ふ。
【普現】ふげん　あまねくあらはる。范成大詩「光満世界網、一一無二邊際一」
【普賢】ふげん　〔仏〕普賢の菩薩。衆生を済度するものの名。常に白象に騎る所を図す。一に悲首といふ。大日経疏「普是通二一切処一、賢是勝妙義」
【普告】ふこく　あまねくつげる。綸旨、院宣「帝紀「可二一一令レ知」」＝布告。
【普施】ふせ　あまれくほどこす。史、五帝紀「徳幸一一刑」物、不レ於二其身一」
【普請】ふしん　〔国〕〇あまねく同志に請ひて共に事を為す。法苑珠林「一切聖凡、亦皆一一」〇諸人に寄附を請ひて建築する。転じて、建築の義。梓氏雑話「佛令、唤二檀那一、捐集共修之、此一一之始也」
【普事】ふじ　普天率土の略。＝普天之下」
【普陀】ふだ　山名。浙江省定海県の東海中に在り、気候温和、風景奇特、四洋人の避暑地たり。＝補陀山・補陀落迦。
【普寧】ふねい　普天之下率土之濱」事は循環は渥、天の普く覆ふ所、聖の普くせるかぎりの義。詩、小雅「溥天之下、莫レ非二王土一、率土之濱、莫レ非二王臣一」孟子、万章篇に引き、詩を書に信る。
【普化】ふけ　大体に同じ。＝普遍。普汎。
【普徧】ふへん　あまねくゆきわたる。＝徧は遍に同じ。＝編普・普汎。
【普遍】ふへん　前條に同じ。
【普通】ふつう　〇よのつね。＝通常。〇一般。特別・専門等の対「一一学」〇一般に、おしなべて。
【普通教育】ふつうきょういく　国民として必要なる普通学の知識を授ける教育。初等教育と中等教育とをいふ。専門教育の対。
【普天之下率土之濱】ふてんのしたそっとのひん　普天率土之濱」事は循環は渥、天の普く覆ふ所、聖の普くせるかぎりの義。詩、小雅「溥天之下、莫レ非二王土一、率土之濱、莫レ非二王臣一」孟子、万章篇に引き、詩を書に信る。
【普徧】ふへん　あまねくゆきわたる。＝普遍。普汎。
【普汎】ふはん　あまねくゆきわたる。＝普遍。普徧。
【普門】ふもん　〔仏〕一切に通ずる門。＝普化僧」
【普門品】ふもんぼん　観音経の一品。観世音菩薩普門品。
【普門示現】ふもんじげん　観音菩薩が、一切衆生を救ふために、種々の姿を現ずること。
【普門寺】ふもんじ　観音菩薩を本尊とする寺。
【普門律】ふもんりつ　普通教育の知識を授ける教育。初等教育と中等教育とをいふ。専門教育の対。
【普門】ふもん　〔仏〕普門品」の略。
【普門品】ふもんぼん　観音経の一品。観世音菩薩普門品。
【普門示現】ふもんじげん　観音菩薩が、一切衆生を救ふために、種々の姿を現ずること。
【普門寺】ふもんじ　観音菩薩を本尊とする寺。
【普門律】ふもんりつ　普通教育の知識を授ける教育。初等教育と中等教育とをいふ。専門教育の対。

【暗】アン　日
○くらし、明かならず（日無レ光）「一黒」○おろか（愚）智慧がない「一愚」「迷一」○くらがり

り、やみ「一夜」〇おくぶかし（深奥）〇かすかにかくれる（幽隱）〇あんに、それとなく、人知れず。〇そらんず、諳に通ず「一記」「一算」

【暗】アン　くらき・まど。薛道衡詩「一壁三蛛網、空牕落二燕泥一」【暗雲】くらき日がさ。王安石詩「殘燈生二一暈一、重露集二寒條一」【暗香】どこからとなく來るかをり。許渾詩「高竹動二疎翠一、早蓮飄二一一」【暗香浮動月黃昏】梅の香がどこともなくにほひ來てたそがれの月が出る。林逋、梅花詩「疎影橫斜水淺淺、——」【暗溝】暗渠に同じ。‖地下溝。【暗號】符牒ヲ以テ爲ス合圖のしるし。又、其の符牒ヲ云ヒ出ス外記「與二士人一相約爲二一一一」【暗合】アン　圖ラズ期セズシテ一致スル。禮記、山澤儒「謀不レ與二孫吳一而暗合ス二其中一圖一合。【暗記】そらんじおぼゆる後漢書、應奉傳、見所二經歷一、輒不レ忘一一」‖諳記。【暗渠】地下ヲ通ルみぞ。梅堯臣詩「古寺入二深樹一、野泉鳴二一一一」‖暗溝。【暗愚】グン　事理ニ暗クおろか。‖愚昧・蒙昧・暗昧・闇愚。【暗吾】おろかなきみ、暗愚ナル君主。明君の對。【暗黑】アンコク　〇まっくら。‖闇黑。〇俗ニ公明正大ならざる義「一一面」〇世が亂れる「一一時代」【暗黑時代】アンコクジダイ　世が甚だしく亂れて戰爭のたえまなき時代。【暗恨】コン　人知れぬうらみ。白居易詩「別有二幽愁一一生一」【暗殺】サツ　やみうち、ひそかにころす。【暗算】アンサン　むなざん、算盤などを用ひずして心の中にてかんぢうする。‖暗數。【暗示】ジ　それとなく示す。又催眠術などにて被術者に與へる一種の豫告。【暗室】シツ　幽暗にして人なきへや。南史、阮孝之傳「一生不レ修二一一一」【暗綠】ロク　蓮莉ノ花ノ異名。格物叢話「夜莉花一名暗綠花一名玉奴花」【暗弱】ジャク　闇よわく性おろか。‖闇弱。【暗誦】ショウ　そらんじて讀む。杜甫詩「一一萬卷常一一」【暗數】スウ　こころのうちにてかぞへる。方回詩「一一香梅立二樹陰一」【暗藻】ソウ　かくれいは、水面下にかくれてゐるいは。【暗射】アンエキ　〇的なくして弓いる。元好問詩「長箭不二一一一一」〇そらでいひあてる「一一圖」【暗疏】ソ　そらにて書きうつす。唐書、度世南傳「一一二一之、無二一字誤一」【暗灘】タン　うすぐろくして鮮かならざる貌。白居易詩「一重一一將何比、淺碧鮮紅漸二染中一」【暗中飛箭】ヤミ　闇やみの中にてとびはねる、人知れず活動する。【暗中摸索】モサク　やみの中にて手さぐりにて物をさがす。隋唐佳話「許敬宗性輕傲、見レ人多忘レ之、或謂二其不聰一曰、卿自雖レ讀、書遇二何訓一沈謝一一著亦可レ識、何但何遜、訓は訓詁、沈は沈約、謝は謝朓。【暗燈】ヤミ　くらきともしび。張耒詩「童子持二燈守一一一」【暗夜】ヤミよ。宋書、謝景仁傳「兵敗衆散、時已一一」【暗涙】ルイ　人知れぬなみだ。賈島詩「白蟻相逢出、一一兩行分」【暗合】アイ　あいことば。武備要略「若近レ賊處、欲レ行二一一一、聽二中軍傳一遞一人一」

【曛】キン　尾　壎に同じ

〇ひかりの盛んなる貌。〇日のひかり。【曛曛】ひかりの盛んなる貌。曹植文「玄素之一一」

【暈】ウン　圓

〇かさ、ひがさ、つきがさ「日一」「月一」〇轉じてぼんやりと、ひがさ・つきがさの如き形したる模樣。韓愈詩「夢覺燈生一」〇めまひ、くらむ、船など

に酔ふ(乾)「眩ー」「船ー」

【曚曨】日月の旁に氣ありて圍繞すること軍營の相圍むに似たり、故に日に从ひ軍に从ふ。

【曚昽】日月のまはりに生ずるかさ。韓非子「日月ー之於外」‖日暈。

【暗船】ふなるひ、ふねに酔ふ。

【暎】エイ　映に同じ

○てる。てらす(照)○うつる。うつす。

【暍】エツ　月　曷

○あつさあたり(傷暑中熱)○ーは熱氣の極めて盛んなる狼。

【暍死】あつさにて死する。淮南、武帝紀「夏大旱、民多ー」

【暍人】炎熱を病む人。淮南子「武王蹈ー子堤下、左推而右扶之」

【暇】カ　遇　麻　或は假に作る

○ひま、いとま(閑暇)やすみ、無事閑散の時「休ー」「賜ー」「官ー」「閒ー」○閑ーは別なり。‖訣別。

【暇逸】ひまにてあそびをる。書、酒誥「不ー自暇自逸」戴表元詩「不ー許私ー」‖逸樂・暇豫。

【暇日】ひまにして無事の日。孟、梁惠王「壯者以ー修二其孝弟忠信一」

【暇豫】いとま、てすきの時。‖餘暇。

【暇豫】ひまにてあそぶ。景福殿賦「旭二經始之黎民一、幷二殷功之ー一」‖暇逸。

【暉】キ　微　又、煇に作る

○ひかる、ひかり(光)「素ー」「落ー」「晩ー」「斜ー」○かがやく。

【暉煜】ひかりかがやく。梁簡文帝文「ー金鏡、陸隴資勳」

【暉映】かがやきうつる。晉、左貴嬪「東扇ー」‖暉映。

【暉暉】○日光のかがやく貌。○雲の晴れて明かなる貌。江總詩「二月春ー」

【暉芒】ひかりの鋩。韓詩「大白ー」、雖必夜鳴」‖光芒。

【暉耀】ひかりかがやく。晉、左貴嬪「性苑春ー」、花蹊綺樹紅」

【暌】ケイ　支　齊　睽とは別字

たがふ(違)はなれる。

【暌違】はなれ(だたる。何遜詩「萬里就ー」‖離隔。

【暌合】はなれると合ふと。謝靈運賦「究二風波之ー一」‖離合。

【暌携】離れ散ずる。蘇舜欽詩「一旦又ー、千里或關疎」‖離散。

【暗】ケン　元

○あたたか(溫)日煖ダンか「春ー」「負ー」○はるのすゑ(春晩)○敍寒ー」カンケンは時候の挨拶をのべる。

【暗燠】あたたか。混庾肩吾「書成二訓誤一信比ニー一」

【暗寒】時候の挨拶をいふ。南史、裴雅傳「及二其引進一但ー一而已、此外無二言餘一」‖寒暄・暄涼。

【暗和】暖かくのどか。陶潛、田園雜興「春日ー、氣力何微」‖暖和。

【暗妍】あたたかにして景色ようつくしい。張九齡詩「靈境滋岡經、芳時屬ー一」

【暗暖】あたたかい朱光。詩「春寺暮ー一」‖温暖・温煦・温熱。

【暗風】春のあたたかきかぜ。梁元帝纂要「春風曰ー一、陽風」

【暑】ショ　語

○あつし、あつさ(熱氣)易、繫辭「日月運行、一寒一ー」「炎ー」「隆ー」「殘ー」「避ー」○大ー・小ーは夏の季節。○轉じて夏の義に用ふ。千字文「寒來ー往」

【暑底】あつさのいきほひ。‖炎威。

【暑雨】夏の炎天に降る雨。書、君牙「夏ー、小民惟日怨咨、冬祁寒、小民亦惟日怨咨」

【暑鬱】むしあつし。抱朴子「ー陰降、不ー能ー消二雪山之凍一」

【暑暍】あつさにあたる。論衡「盛夏暑行、ー一而死、熱極爲ー暍也」

【暑氣】あつさの淮南子「ー多レ天、寒氣多レ殺」

【暑月】あつき季節。左傳「ー多レ衣、所二以示一レ儉」

【暑湯】あつくしてしめる、濕一に濕に作る。礼、月令、蕨、薇、菫、葵、膳、藿、蓼、唯ー去レ氣、或爲レ羹」‖暑濕。

【暑濕】むしあつし。徐陵、答二傅人書一「蒸鬱方扇、ー一增劇」‖暑氣。

【暑中】夏のあつき間。又、夏の土用十八日間の稱。ー一見舞」

【暑襲】夏時に用ふるたかむしろ。蘇鶚詩「ー臥二清風一」

【暑熱】あつし、あつさ。漢書、酈食其傳「烏弋地ー華平」‖炎熱。

【暑蒸】なつのひでりがみ。ひでりの范成大詩「ー方建行」

【暑伏】夏の土用。暑月三伏の時。水經、注「楊溪水清冷、甚二於大暑一、縱ー一之民、尚無二能澡一其津也一也」

【暑夜】夏のあつき夜。戴叔倫詩「ー宿二城南一懷」人夢不レ成」‖暑

夕、夏夜。

【暖】㊀ダン　㊁ケン　元　早　㫖

㊀あたたむ、あたたかし「―氣」「春―」「温―」「飽―」‖煖。㊁やはらか(柔)なる貌。莊、徐無鬼「有二―妹者一」

【暖昧妹妹】ケンマイ　柔懦にして物に逆はざる貌。莊、徐無鬼「有二暖昧者一、學二先生之言一、則――、而私自喜也、自以爲レ足矣」‖暖妹。

【暖衣】タン　あたたかにきる。論、陽貨「食レ旨不レ公「飽食―レ、逸居而無レ教、則近二於禽獣一」

【暖香】カウ　暖かなる氣のかほり。安徳鐘記「寶雲溪有二僧舍一、冱冬若二春生一、則然二薪火一―一庭、滿室如レ春」

【暖氣】キ　あたたかき。張華「暖氣重衾無二一人一」「挾纊如レ懐レ炭」

【暖日】ジツ　あたたかきひ。陸游、冬晩山房書レ事詩「凍雲偪レ水封二複岸一、暖日烘レ窗釋二凝氷一」

【暖翠】スイ　春の晴れたる山の色。吳融詩「江上數峯浮二―一」

【暖席】セキ　せきをあたたむ。又、あたたかき席。淮南子「墨子無二―一、孔子無二黔突一」無二―一は東四に奔走して席の暖まる暇なき義。

【暖然】ゼン　あたたかし。蘇軾詩「暖欵一曲圍二陽春一、坐使二高堂生一―一」

【暖屋】オク　家を移して宴を開く、やうつりのさかもり。王融、宮詞「太儀前日―一來」‖煖屋。

【暖飽】ホウ　あたたかに著、あくまで食ふ。飽食暖衣の略、暖衣飽食。

【暖風】フウ　あたたかきかぜ。禮、月令「行二春令一則―一來至」

【暖燈】トウ　○ゐろり。東京夢華錄、十月朔、有司進二―一爐、民間皆傳酒、作二―會一」‖煖燈。○国洋家具の一、ストーブ。

【暖和】ワ　あたたかにやはらぐ。

【暖簷】エン　日光をふせぐ爲めに垂れる布帛のとばり、商家にて店の入口に垂れる。

【暘】㊀ビン・ミン　㊁ビン・ミン　陽　軫

㊀つよし(強)者、康誥「―不畏死」㊁もだゆ(悶)‖悗。

【暘】ヤウ　陽

吳(日部七畫)の俗字。

○ひので(日出)○あきらか(明)○はれ(晴天)○かわかす(日乾)物)書、洪範「曰雨曰―」

【暘烏】ウ　日の異名。劉基詩「扶桑未レ換―一彩、腐草猶爭螢火光」‖陽烏。

【暘谷】コク　東方の日の出づる所。書、堯典「分命二羲仲一宅二嵎夷一曰二―一、寅賓二出日一」

【暘暘】ヨウ　○のぶ、のびる(舒)○のびのびする、のどかになる「和―」「舒―」「―適」「酣―」○とほる(通達)易、坤卦「美在二其中一而暢二於四支一」○文章言論などの意味がよく通達する「通―」「流―」○みつる(充)長ずる。

同訓異字　暢・舒・逸・陳・宣・展・申・伸等の別は逸(走部五畫)の條を見よ。

【暢洽】コウ　あまねく物にゆきわたる。薛道衡、隋高祖頌「玄功―一、不レ局二於形器一」

【暢外】ガイ　養生の一法。天隱子「手常摩擦、肌膚温熱、去二滯氣一、謂二之―一」

【暢月】ゲツ　陰曆十一月の異名。一陽來復して、陽氣ののび充つる義。‖暢は充。呂覽、仲冬紀「仲冬之月(中略)命之曰―一」

【暢茂】モ　のびついづる。王義之、蘭亭集序「一觴一詠、亦足二以―一幽情一」‖敍暢。

【暢達】タツ　草木がのび長じて其の性を遂ける。唐無名氏、律呂相召歌「草木以レ之而―一、乾坤於焉交接」‖暢茂。

【暢達】タツ　のびて通ずる、のび長ずる。吳越春秋「執知二其非一―一之兆一」

【暢適】テキ　心がのびやかにたのしむ。陸機、居室記「讀書取レ―一性靈一不二必終一卷」

【暢茂】モ　のび長じて盛んなり。孟、滕文公「草木―一、禽獣繁息」‖暢達。

【暝】㊀ベイ・メイ　㊁ベイ・メイ　徑　青　もと冥に作る

㊀かすか(幽)○くらし(晦)㊁よる(夜)

同訓異字　暝・暗・昏・昧・晦・冥の別は暗(日部九畫)の條を見よ。

【暝天】テン　夜のくらきそら。伍喬詩「山磬數聲敲―一」

【暝投】トウ　日暮れてやどる。李白詩「―一淮陰宿」

【暝帆】ハン　をぐらく遠く見ゆる舟の

ほの陰陰詩「天際一一孤」
【暝叫】行　さびしき鳥の鳴く聲。韓愈詩「誰能對二寥落一一守二空房一」＝寂寞。

【暉】

日部十畫に同じ。

【暝】

カン　㊥　或は㬎に作る

○かわく（乾）「旱一一かわかす（乾）○おかし（燥）○さらす（暴曝）○しはむ（皺）乾きてしにむ。○詩、王風「其乾矣」【暝暝】ゆっくりと。ゆるやかに。【暝暝】ゆっくりと。ゆるやかに。

【暗】

ゲン　㊥　㬎に作るは非

○しばし、しばらく、不久（須臾）○久の反對○わづかのあひだ、よろなく。○にほかに（率猝）一面は突然面するも。宗欽詩「被掠一面宅文一言」

【同訓異字】暫・姑・且・少・漸○暫は不久也と註す。少しの間の意なり。暫時と熟す。中庸或問「驟一世驟俗之事、則可一暫而不一得一長一常矣」○姑は且也と註す。暫の意はなし、まあと譯す。孟子「姑舍二汝所一學而從一我」○且は姑に近し。○少はすこしの間といふ義、少時の時を省きたるなり、少間・少選と連用しても、しばらくと訓む。○漸は今しばしの意、いささかとも訓む。詩、召南「漸漸之石」○漸次・漸漸・少間・少時・間なともしばらくと訓む。

【暫逢】ガウ　しばらくあふ。李中詩「新秋暫會二一宵星」＝一宵星會秋夜に

【暫時】ザジ　しばらくの間。白詩「暫時相見更無因」＝少時。

【暫時分手】ザジブンシュ　しばらくの間わかれる。高適、送李少府貶二峽中一王少府貶二長沙一詩「聖代即今多二雨露一——莫二悲路一」

【暫且】ザンショ　しばらくの間。

【暫留】ザンリウ　しばしとどまる。しばらくの間逗留する。

【暫】

セツ　㊥

なる（狎媟）日日押れらかうくる。

【暫御】セツギョ　なれちかづく侍臣。詩、小雅「曾我一一燕燕日疎」＝侍御。

【暱】

ヂツ　㊥　昵に同じ

○ちかづく（近）○したしむ（親）「親一」詩、小雅「無一自一焉」なじむ。

【暱愛】ヂツアイ　したしみあいする。謝惠連詩「泗川四一一、依洛暱二清芬一」

【暱近】ヂツキン　○近きにある者をしたしむ。左傳「親一親一ノ尊賢、德之大者也」○したしみちかづける。

【暱就】ヂツシウ　したしみつく。左傳、是用痛心疾首、一一寡人一」＝親近。

【暴】

㊀バウ　㊁ボク　㊂ホク　㊥㊁の通音ベク

○あらす、そこなふ（害）○あらし、てあらし「颶一」「猛一」「強一」しへたく（壓）のし（熨）孟、告子「因歲子弟多一一」○みだす（亂）又、其の音○とし、はやし（疾）はけし。詩、豳風「終風且一」○てうちにする、卒手にて搏つ（手搏）「一虎」○にはか（猝）㊁さらす（曬）日光にあてる（日乾）孟、告子「一日一之」○俗に曝に作る。○さらし出す、露出する。李華、弔古戰場文「一一骨砂礫」○かわく、かわかす（晞・乾）○あらはす（顯）○あらはる（露）知れる「一一路」㊂おこる、うごもつ（憤起）

【同訓異字】暴・見・現・顯・著・形・露・表・彰・旌の別は見（部首七畫）の條を見よ。

○暴・遽・倏・驟・頓・卒・猝の別は遽（辵部十三畫）の條を見よ。

【暴惡】バウアク　あらくれてわるしこと。其の人柳宗元文「傳暗一一者」

【暴戾】バウレイ　非道なるいきほひ。

【暴雨】バウウ　みなぎる雨。史、陳後主紀「淮海一一、漂沒舟楫」＝驟雨。

【暴虐】バウギャク　むやみに酷もつひやす。

【暴斂】バウレン　甲の暴を除く。暴に乙の緩を以てするに似て、乙の緩を以てするに似て、甲の暴を除く。白、長慶集、甲の武士を殺りし時。史、白居易傳「一一不一加一誅」

【暴露】バウロ　無法にしてあらくさびし。宋史、陳堯佐傳、徐州宇一一、以二細過一送二民部一家二一暴露。

【暴行】バウカウ　あらあらしきおこなひ。

【暴惡】バウコ　あらくつよし。史記、會與二一之能一同一類」

【暴客】バウカク　あばれ者、盜賊など。易、繫辭「重門擊一柝一、以待二一一」＝暴漢。

【暴悍】バウカン　あらあらし。顏氏家訓「素一一者、欲下其觀二古人之少一心耳上、肇一賢容一耳」

【暴漢】ばうかん　暴客に同じ。漢はをとこ。
【暴起】ばうき　にはかにおこる。杜陽雜編「眠而忽ー一」‖暴興。
【暴貧】ばうひん　にはかにたふとし。魏書、王遵傳「當ー有ー一者」
【暴棄】ばうき　自らそこなひすてる。孟、離婁「自絶者、不ー可ー與ー有ー言也、自棄者、不ー可ー與ー有ー行也」
【暴逆】ばうぎゃく　てあらくして理にさからふ。又、其の者を曰ふ、高祖紀「誅ー一逆者天下」
【暴虐】ばうぎゃく　そこなひしへたぐ。書、泰誓「紂ー一ー一、臣民罹ー一、殺而無ー悔者、皆不ー勝ー數也」
【暴恣】ばうし　てあらくほしいまま。蘇軾詩「古人難ー一、作ー事今世論」‖暴縱。
【暴疾】ばうしつ　〇あらくはやし。詩經、蓼「既見日月ー兮、而又ー一」〇にはかに病。唐書、李勣傳「貴ー一」‖暴病。
【暴著】ばうちゃく　〇めだちてあらはれる。唐書「政績ー一、等治二稼令一」〇知れる、顯著する。後漢書、賢良傳「皆近事ー一」‖顯著。
【暴逸】ばういつ　〇あらはる、鉢は顯。〇風日雨露にさらされる。映園集「終身、ー一ー於外一」

【暴蔵】ばうぞう　あらあらしくないがしろにす。左傳「ー一ー其君、而歩ー其親一」
【暴慢】ばうまん　あらあらしくほしいままにして人をあなどる。論、泰伯「動二容貌一斯遠ー一ー矣」
【暴勇】ばうゆう　あらあらしき勇氣。
【暴落】ばうらく　物の價がにはかに下落する。
【暴戻】ばうれい　あらくしてみだりなり。後漢書、鄧禹傳「政刑ー一、衆異尤歎」
【暴利】ばうり　むやみにむさぼる利益。
【暴掠】ばうりゃく　あばれて物をかすめとる。史、高祖紀「懷王約二入ー一秦無二ー一ー」‖暴略。
【暴露】ばうろ　あらあらしく露にもとる。史、伯夷傳「ー一ー窮餓」
【暴雄】ばうゆう　あらあらしくはげし。唐書、張公謹傳「性ー一、辭予多ー自」
【暴橫】ばうわう　あらあらしくしてほしいまま。後漢書、馮衍傳「今諸謝皆肚ー一、期起多ー一ー」‖橫暴。
【暴肌】ばうき　はだへをあらはしさらす。揚雄文「沐ー體ー一」
【暴骨】ばうこつ　骨を原野にさらす。左傳「ー一ー以逞、不ー可ー以爭ー一」
【暴師】ばうし　軍隊を日光、雨露にさらす、兵を原野に露營させる。漢書、貨殖傳「ー一ー關上、以待二大王一」
【暴露】ばうろ　野ざらしになる。韓詩外傳「召伯ー一ー遠野一」
【暴棄】ばうき　ちをあらはにす。後漢書、崇翻傳「ー一ー難ー世、因以干ー誅」

【暴】ボ　國　來、裘に作る

〇くる、月夜して冥くなる「朝ー」「潦ー」史、伍子胥傳、吾日ー一暮遠」〇ひぐれ、ゆふべ（夕）よる（夜）「夜ー一夜」〇過じて年の末「歳ー」「年ー」「冬ー」論語、雍也「恐ー夫人之ー」〇おそし（晩）〇闇「月日を送る、生計をいとなむ。

【暮境】ぼきやう　ゆふぐれのかなすみ。白氏詩「門掩蘿扉暮ー一」‖晩景。
【暮鐘】ぼしやう　ゆふぐれのもの。杜牧詩「ー一生二深樹一斜陽下二小樓一」
【暮雨】ぼう　ゆふぐれのかげ。謝莊詩「夕天霽二晩氣一輕陰抱二ー一」
【暮羽】ぼう　ゆふぐれの鳥。王維詩、空林鳴ニー一、虛谷應二朝鐘一」‖暮鳥。暮鳥。
【暮雨】ぼう　ゆふぐれのあめ。李泰詩「山靜秋雲冷、江帆ー一低」
【暮雲春樹】ぼうんしゅんじゅ　遠く隔たりたる友

を思ふ情にいふ。杜甫、春日憶二李白一詩「渭北春天樹、江東日暮雲、何時一樽酒、重與細論レ文」‖渭樹江雲。

【暮雨】ボウ　次條に同じ。

【暮途】ボト　ゆふけむり。呂温詩「鳥棲[暮]一一」

【暮夏】ボカ　なつのすゑ。‖晩夏。

【暮蟬】ボセン　日ぐれに吹く蝉の聲。劍南詩「一一吹二殘月一曙甲帶二朝霜一」

【暮霞】ボカ　ゆふぐれのもや。王昌齢詩「一一照二高樹一」

【暮角】ボカク　ゆふぐれに吹く角笛のね。角は笳中にて用ふる樂器。劍南詩「一一哀鳴徹四一一絶、蕭蕭白髮有二新添一」

【暮鴉】ボア　ゆふぐれの日かげ。傷寒、陰陽易差後勞復「病人陽氣衰、陰氣盛、夜半後、陰氣盛極、陽氣衰、陰氣反出二陽分一、與レ陽氣相搏、陽氣不レ勝レ陰、陰氣入二陽中一」

【暮靄】ボアイ　ゆふぐれのもや。王維詩「一一起二柴門一」‖晩烟。

【暮景】ボケイ　○日暮の景色。杜甫、送二李卿一詩「一一思二悠悠一」‖晩烟。

【暮雲】ボウン　ゆふぐれのくも。王維詩「一一相與還」‖晩烟。

【暮雲春樹】ボウンシュンジュ　○日暮の景色。杜甫、送二李卿一詩「一一思二悠悠一

らはる。

【曉】ケウ ゲウ 篠

○あかつき、あけぼの、よあけ（曙）「清ー」○遇ふ。○あきらか（明）○しる（知）さとる（通）「通ー」さとす（喩）「ー喩」教へ知らしめる。史、西南夷傳「指ー南越」○まうす（白）漢書、元后傳「未ー大將軍」○とく（說）○さとし（慧）

【曉看】カウ あかつきに見る。杜甫詩「ー紅濕處、花重錦官城」

【曉起】ケウ 朝早くおきる。溫庭筠詩「ー動二征鐎一」‖早起・夙興・晨起。

【曉光】ケウクワウ よあけのあかり。蘇頲詩「ー霽外流、晴色雨餘滋」

【曉敎】ケウ さとしをしふ。陸雲「故鴻鳴二一、以ー二之一」

【曉月】ケウグワツ あけがたのつき。沈佺期詩「ー臨レ窗近、天河入レ戸低」

【曉悟】ケウ さとる。さとす。列子「窮年不二相ー一」‖了解・曉解。

【曉鼓】ケウ あかつきを報ずるつづみのおと。李咸用詩「ー軍砦動」五代史、司天考「熙寧元年正月庚寅、有二大星一墜有レ聲、如レ雷、牛馬皆驚、京城以爲二一晴伐レ鼓以應レ之」‖曙鼓。

【曉告】ケウ さとしつぐ。北史、韋珍傳「ー愛民二酒脯一代レ爪」

【曉坂】ケウ あさのけしやう。沈佺期詩「斜光映二ー一」

【曉霜】ケウ あかつきのしも。謝靈運詩「ー一楓凍折」‖晨霜。

【曉山】ケウ あけがたのやま。杜甫詩「鼓角悲二荒塞一、見河落二ー一」‖曉岑・曉巒。

【曉巒】ケウワン あかつきのあらし。梁簡文帝詩「ー飛二銀闕一、浮雲暗未レ開」

【曉示】ケウ さとししめす。魏書「王澄道レ人ー二情禮一」‖諭示・曉諭

【曉習】ケウ さとりならふ。後漢書「每存二愛撫一、又ー二遵事一」

【曉色】ケウ あけがたのあかるき色。孟郊、送レ人詩「ー一聲二明月一、征人遂二寢動一」

【曉星】ケウ あかつきのほし。張嘉貞詩「深將二春雪一比、文共ー一連」‖晨星。

【曉霞】ケウ あけがたの雨あがり。皇甫冉詩「ー一心始安、林端見二初旭一」‖晨曦。

【曉夕】ケウ あさと、ゆふべと、もさば人。漢書、「ー一號泣」‖朝夕・晨夕。

【曉雪】ケウ あけがたのゆき。溫庭筠詩「換綿衾差殘ー一」

【曉箭】ケウ よあけの時刻。よあけを告げるとき。箭は漏刻ロウコクの壺の中の矢、時刻を示すもの。杜甫詩「五夜漏聲催ー一」

【曉達】ケウ あきらかに通ずる。南史、沈攸之傳「ー一吏事、自强不レ息」‖曉暢・曉通・通達。

【曉旦】ケウ あけがた。阮瑀詩「ー一發二京縣一、落日次二高密一」

【曉暢】ケウ 明かにさとり通ずる。通達する。梁志、諸葛亮傳「ー一軍事」‖曉達。

【曉天】ケウ あけがたのそら。陳子昂詩「明月照二高樹一、長河沒二ー一」

【曉嘯】ケウ あさひ。劉宰詩「要レ上二扶桑一看ー一ル」‖旭日・朝暾・晨曦。

【曉飯】ケウ あさめし。岑參詩「夜眠趁二煙潮一、ー一湖山寒」

【曉瞥】ケウ あきらかにさとす。後漢書「ー一曲直、退無二怨者一」‖曉喩。

【曉風】ケウ あかつきのかぜ。唐明皇詩「馬色分二朝影一、雞聲遠二ー一」

【曉然】ケウ あさの證經のこゑ。晉魚豢詩「ー一陽烏當二石磬一」

【曉絲】ケウ よあけのきり。韋應物、對レ雨詩「城至池館涼、靉然和二ー一」

【曉喩】ケウ さとす。漢書「欲三以ー二紫庶一不二亦難一乎」‖曉警・曉諭。

【曉諭】ケウ ○前條に同じ。○圖告示文。

【曉了】ケウ 明かにさとる。莊子「ー一因緣法」‖了解。

【曉籌】ケウ あさのつゆ。白居易、荷珠賦「宿雨猶在、ー一莫前正鮮」

【曉漏傳】ケウロウ あけがたの水時計（漏刻）の聲が聞える。梁武帝、圓圓篇「新門ー一」

【暹】セン 圏

○ひのぼる（日光升）ひので。○ー羅ラは國名、亞細亞の東南に位し、緬甸ビルマの東、安南の西に在り。

【曎】タイ 圏

○暖ーは明かならざる貌、く

らし（暗）○おほふ。○かざす（翳）

【曇】 ドン 寒

○くもる、雲が天に布く。晴の反對。○くもり。○黒雲の貌。○禿―は神經の稱。○圖ははっきりせぬ、光がぼんやりする、うやうやしい貌。

【曇天】 ○陰雲の空。江淹詩「野外陰雲低」○くもる貌。○鮑照賦「望―」

【曇華】 ○優曇華、梵語の音譯。三千年生、蓮の如き四五尺、見れば花開く、色紅にして艶やかなり、月を經て枯れず、一名、天人福の徴―○の略稱。

【曇天】 くもりたる空、晴天の對。

【曈】 トウ 東

○ひので（日出）○―曨は日が明かならんとする貌。李商隱詩「風池春淺淺、雞樹曉―曨」轉じて心情の明かになりかかる貌。陸機、文賦「情―曨而彌鮮」

【曈曨】 日の明かならんとする貌。李商隱詩「海日高――」

【暾】 トン 元

あさひ（旭）「朝―」「曉―」「海―」ひので（日始出）楚辭、九歌「―將出兮東方」○晴。

【暾暾】 ○日光の圓滿なる貌。李參詩「風暖日――」○火の光の盛んなる貌。唐書、五行志「火熾赤―飛來」

【暸】 レウ 篠 瞭とは別

あきらか（明）

【曆】 レキ リャク 錫 歷に通ず

○こよみ、日月星辰の運行を推算して季節、時令を定める法「日―」「新―」「舊―」又其の定めたる法の記錄。○まはりあはせ（運命）「―數」「―命」○年齡、詩、詩命。○年代。漢書、諸侯王表「周過其―蓋不及期」○日月星辰の行度。○としつき（歲月）○日記。○かず（計數）○かたどる（象）「―象」

【曆紀】 こよみ、日月が天に行曆して、二十八宿三百六十五度の分紀を生ずる義。樂問「上應二天光星辰――」

【曆官】 こよみの事をつかさどる役人。日曆正。

【曆日】 ○こよみ。事物紀原「物理論曰、曆昔神農正節氣一春二寒溫、以爲早晚之期、故立――」○こよみにて定められたる日。太上隱者詩「山中無―、寒盡不レ知レ年」

【曆象】 ○こよみを推し天文を觀る、象は天文を觀察する器。書、堯典「―ニ―日月星辰、敬授二人時一」○日月星辰の稱。易經「――調二日月星辰一也」

【曆書】 こよみに關する書の史記、自序「作―――第四」日曆書。

【曆數】 ○こよみの書繙「五日―」○帝王相繼ぐ、まはりあはせ（運命）論、堯曰「天之―、在二爾躬一」

【曆正】 曆官に同じ。左傳「臧烏氏―也」

【曆年】 ○としつき、歲月。○こよみにて定めたる一年、太陽曆にては三百六十五日。

【曆法】 こよみのつくりかた。唐書、曆志、―――篇。

【曆尾】 こよみの終。宋都詩「―無二發日一」歲除。

【曆命】 曆數と天命と、運命の義。文選、辨二命論一「―――應レ化而徵、王師順レ運而擾」

十三畫

【曖】 アイ 隊

○おほふ（蔽）日が明かならず。○かざす（翳）おほひかくす「曖―」○暗―は暗き貌。

【曖曖】 ○くらき（昏昧）貌。柳子春秋「星之昭昭、不レ如二月之―一」○

【曖乎】 情意のこもれる貌。韓非子「明君之行レ賞也、――如二時雨一、其行レ罰也、長乎如二震雷一」

【曖然】 うす暗き貌。沈約期詩「―清軒幕、浩思非レ所レ任」

【曖昧】 おほふ、おほはれてくらし。

【曖昧】 あきらかならず、物のまぎらはしきにいふ。晉書、杜預傳「不レ敢以二一―之見一自取中後悔上」

【曉】 曉（日部十六畫）の略字。

【曛】 キャウ・カウ 文 シャウ 寒

○さきに、現前前日（昨夜）の向晩。○むかふ。同。○あきらか（明）明かにす。莊、秋水「證二其今一」

【曛黑】 前日の夜。呂覽、觀表「―右榮設色之觀、吾子也」

十四畫

【曜】 ヨウ 嘯

○ひかり、かがやき、ひのひかり（日光）○かがやく、ひかる（燿）○てる（照）○日月星の總稱。日、月と火水木金土の五星

とを日にわりあてて呼ぶ稱「日ー」「水ー」又其の七ー日即ち七日間を一週間といふ。○靈ーは天をいふ。ー鐘は日の別稱。

【曜威】エウヰ　威光をかがやかす。東京賦「三靈之際、ニー中原に」

【曜煌】エウクワウ　ひかりかがやく。漢朗文帝詩「離堅卻ー〻」‖炳煜・照曜・見曜。

【曜曜】エウエウ　光のかがやく貌。陶潛之、郊祀歌「遙興遠慕、ー〻振振」

【曜魄】エウハク　北斗星。尚書大全、北辰調二ー〻一

【曜野】ヤウ　のにかがやく。王延文「揚レ輝吐レ火、ー〻レ赫レ澤」

【曜靈】ヤウ　日。太陽の靈餘。天問「列宿未レ旦、ー〻安藏」

【曛】クン　文

○夕日の光（日入餘光）○赤黒色。○日がくれる。李華「弔古戰場二文「風悲ー日ー」（ひぐれ、たそがれ）（黄昏）訓蒙通詩「夕ー風雲陰」

【曛黄】クワウ　ゆふやけ。‖晩霞。

【曛黄】クワウ　たそがれ。晴典、後漢傳「御史中丞、帥ー〻」‖黄昏・薄夕・昏黄・昏黄（通用）

【曛黒】クコク　日くれてくらし。酒席曲、李渤傳「時日ー〻、不レ問二色目一」

【曛日】クンジツ　ゆふひ。謝靈運詩「夕慮曛月流、朝忌ー〻驅」‖夕陽・落暉・斜照。

【曛照】クンセウ　黄色を帶びたるきり。飽照詩「ー〻被二九天一」‖黄霧。

【曙】シヨ　魚

○あけぼの、あかつき（曉）あした（旦）夜のひきあけ「拂ー」○あける、夜があける、東方明か。

【曙鐘】ショシヨウ　あけがらす。楊巨源詩「唯有二微鄉客一、夜來聞ー〻」‖曉烏・曉程。

【曙鷰】ショエン　よあけになくうぐひす。李頎、宿二香山寺一詩「東林ー〻滿、偶聽二曙鷰一旋」‖朝燕・曉鷰・晨燕。

【曙烏】ショウ　あけがらす。宋之問詩「採レ花驚ニー〻一」‖曉烏。

【曙影】ショエイ　あけぼのの日かげ。王褒詩「ー〻初分地、雨色始成レ光」‖曙色。

【曙色】ショシキ　あけはのくれて後日の出をする。管子「ー〻勿レ怠」

【曙更】ショカウ　あけがたの時刻。錢起詩「曙鐘不レ斷レ聲、風急ー〻殘」‖曙候。

【曙光】ショクワウ　あさひの光。韓詩、天門開ー〻一‖朝暉。

【曙光】ショクワウ　○あけぼのの日かげ。

【曚】モウ　東

○あきらか（明）陳設物無くして明かなる貌。後漢書、竇融傳「ー如發矇」○ひろし（豁）「開ー」「宏ー」○むなし（空）「空ー」○大いなり。○むなしくす、あける、からにする。孟、離婁「ー安宅不レ居」缺く。むだにする「ー日彌久」おろそかにする「ー官」「ー職」○すたる、すつ（廢）○男子の壯年にして妻なきもの「ー夫」○とほし（遠）○ひさし（久）「久ー」「ー久」

【曚昧】モウマイ　○くらし。窈冥、窈正傳、昔在混覺、ー〻事初」○目がくらし。‖曚昧（蔡邕、警師箴）

【曚曨】モウロウ　日の光未だ明かならず（集韻）

十五畫

【曠】クワウ　陽

○あきらか（明）陳設物無くして明かなる貌。後漢書、竇融傳「ー如發矇」○ひろし（豁）「開ー」「宏ー」○むなし（空）「空ー」○大いなり。○むなしくす、あける、からにする。孟、離婁「ー安宅不居」缺く。むだにする「ー日彌久」おろそかにする「ー官」「ー職」○すたる、すつ（廢）○男子の壯年にして妻なきもの「ー夫」○とほし（遠）○ひさし（久）「久ー」「ー久」

【曠】ボウ　東　モウ　東

○あきらか。曚に同じ。三畫の條を見よ。

【曠夷】クワウ　ひろくしてたひらか。唐賈知章傳「性ー〻、善二談說一」

【曠衍】クワウエン　うち開けてひろし。劉歆文「高翔峻阻、臨眺ー〻」

【曠恩】クワウオン　廣大なるめぐみ。孔稚珪文「宜下賜ニー〻一、備二寵榮一」

【曠蕩】クワウタウ　ひろきうみ。陳琳「曚曨ー〻無二依處一」

【曠快】クワウクワイ　ひろくして心よし。飽遊

時「耳目豁ー」。
【曠怡】クワウイ ひろく心のびる。又、心をひろくする。杜甫詩「ー一禁二紛紜一」。
【曠遠】クワウエン ひろびろしたる貌。奥、日者傳「天地ー」。
【曠原】クワウゲン ひろく大いなり。白居易詩「ー一了如レ空」。
【曠官】クワウクワン 官職を怠りてむなしくする。韓愈、陸渾山火詩「曠官之恥生、ー一之刑發」。
【曠風】クワウフウ ひろびろしたるはらの風。王子淵「自二西王母之邦一、北至二于ー一之野一」ー野。
【曠古】クワウコ 古を空しくする。前例のなき義。ー未曾有・空前。
【曠日】クワウジツ 年月をむなしく過ごす。又、久しき歳月。宋史、ー一持レ久。
【曠士】クワウシ 心ひろくしてゆったりと自得せる士。李白詩「幽レ居ー一襟、超然合二太清一」。
【曠日持久】クワウジツヂキウ ながくもちこたへる。淺書、韓信傳「曠二日持レ久、糧食單竭」。
【曠日彌久】クワウジツビキウ 空しく日を過ごして久しきにわたる。事のなかびくにいふ。史、扁鵲傳「太倉之前、ー一、心慊然、恐不レ能二須臾一」。
【曠職】クワウショク ○職務を怠りて空しくす。ー曠官。○官職の缺けたるままに置く。北史、隱逸傳「設レ官分レ職、本庶二時務一、苟非二其人一、不レ如二ー一」。
【曠世之度】クワウセイノタク 職は空、當世にたぐひなしと自負する程の大いなる度量。晉書、郗超傳「卓犖不羈、有二ー一ー一」。
【曠絶】クワウゼツ むなしくたゆ、後がなくなる。江淹、傷二友人一賦「叔世而ー一」。
【曠代】クワウダイ 曠世に同じ、一世を空ぐしてならぶものなし。陸游、賀二喬丞相一啓「具二父子之親一、而行二堯舜ー一之事一」ー絶代。
【曠遠】クワウエン ひろびろしたる貌。後漢書、馬融傳「胸襟弘曠、志明ー一」。黃庭堅詩「人生要二得意一、萬事不レ多ー一」。
【曠達】クワウタツ 心ひろくして通ずる。晉書、張翰傳「時人貴二其ー一」。
【曠蕩】クワウタウ 心ひろくして淡泊なる。孫綽文「情ー一、世志隱直」ー曠遠。
【曠土】クワウド むなしくあらして、耕作せざる地。禮記「無ー一、無二游民一」。漢書、食貨志「朝無二廢官一、邑無二敖民一、地無二ー一」。
【曠野】クワウヤ ひろびろしたるのはら。「曠野和風、綠綺ー一」ー荒野。廣雅。
【曠年】クワウネン 久しき歳月。東晉文「ー一累積、不レ暇二重悲一」ー曠歲。
【曠廢】クワウハイ なむしくすたる。又、すたれること。宋史、諫臣「太宗尙二儒雅一、勤二於政事一、修二明典章一、大抵ー一レ弛レ染」。
【曠放】クワウハウ 心ひろくはしいまま。晉書、向秀傳、「雖二意識曠放一、留心曠而故」ー不羈。
【曠望】クワウバウ ひろきながめ。高適詩「遲遲海隅ー一滄波間」。
【曠遠】クワウエン ひろくとほし。楊炯「登二閭丘之ー一ー一」ー悲涼。
【曠夫】クワウフ 曠は空、壯年にしてめなき男。孟、梁惠王「內無二怨女一、外無二ー一ー一」。
【曠野】クワウヤ ひろくしてあをし。沈亞之、七夕文「天ー一似レ幕」。
【曠野】クワウヤ ひろびろしたるのはら。史、小雅「罷レ虎罷レ熊、率二彼ー一ー一」ー廣原。
【曠朗】クワウラウ ひろびろとほがらかなり。晉書、張協傳「野ー一而無レ塵」。

【曝】 暴（日部十一畫）の俗字。

【曝衣】バクイ 衣を日光にさらす。項斯詩「船裏雖レ曝二沙頭一ー一レ」。
【曝書】バクショ 書物のむしぼし、土用干。四民月令「七月七日、曝二經書及衣裳一、不レ蠹」ー曬書。
【曝背】バクハイ ○せなかを日にさらす。南史、小人常日ー一レ、此不レ足レ爲レ恥。○せなかを日光にて煖める。蘇軾詩「ー一談二金鑾一」。
【曝露】バクロ 風雨にさらさる。杜甫詩「ー一墻壁外」ー暴露。

【曦】 ギ 支

○日のいろ（日色）○日のひかり（日光）「丹ー一」「朱ー一」「赫ー一」「朝ー一」「曙ー一」。
【曦光】ギクワ 日のひかり。韓愈詩「ー一雲間物、景耀鑽二脊皮一」。

【曨】 ロウ 東

○ひので（日出）○くらし、曚ーはほのぐらし、日の明かならんとする貌「曚ー一」。
【曨曨】ロウロウ うすぐらき貌。劉孝威詩「ー一日欲レ沒、前山見二微雨一」。

【曩】 ダウ ナウ 養

○さきに、前日。ー昔・徃。○むかし（既往・前者）○ひさし（久）
【曩勳】ナウクン さきにたてたるいさを。陸機文「知ー一之可レ紹」。
【曩時】ナウジ 曩日に同じ。賈誼、過秦論「非レ及ー一之士一也」。
【曩日】ナウジツ さきのひ、さきごろ。梁簡文帝文「北窻無レ山、登レ自高ー一ー一」ー曩時・曩昔。
【曩者】ナウシヤ さきの日、者は助辭。左、襄二四「ー一志レ入而已」ー曩昔・昔

著・新者。
【義雪】ギセツ さきの日の雨雪賦「遇恩―遂冬之厚」感恩而降」

【曦】

シ　テイ　俗に省きて暗に作る

さらす（晒）日にさらす。曝。
【曦衣】イ　日にさらす、曝干。
【曦書】ショ　日にさらす、曝干。世説、郝隆、七月七日、出て家皆曝二衣於庭一、隆、仰臥日中、人問二其故一、答曰、我腹中、書耳。

【曩】

ノウ

【曩】

ノウ

【二】部

ニ　日は（ニチ）

○いふ（云）いはく、日に聞くてものいふ。○斯くのはなしである。孟、滕文公「昔者、我先君、周公・太公、相二王天下一、其施二於諸侯一者、豈非二所謂一有二明徳一者乎」
【云爾】ウンジ　如此くいふの意。論「各言二其志一也」
【云云】ウンウン　しかじかといふ。
【云為】ウンイ　言語と行為。
【云謂】ウンイ　いふ所。
【云亡】ウンボウ　死。詩、大雅「既生既亡」
【云為】ウンイ　言語と行為。
【云謂】ウンイ　いふ所。
【云亡】ウンボウ　死。詩、大雅「既生既亡」

【互】ゴ　たがひに。かはるがはる。
【互市】ゴシ　国と国との間に行はれる貿易。
【互相】ゴソウ　たがひに。
【互通】ゴツウ　たがひに通ずる。
【互文】ゴブン　二句の文意を合せて一句の意味をなすもの。
【互用】ゴヨウ　たがひに用ゐる。
【互角】ゴカク　力の相等しいこと。
【互譲】ゴジョウ　たがひに譲る。
【互市】ゴシ　国と国との間に行はれる貿易。
【互相】ゴソウ　たがひに。
【互通】ゴツウ　たがひに通ずる。
【互文】ゴブン　二句の文意を合せて一句の意味をなすもの。
【互用】ゴヨウ　たがひに用ゐる。
【互角】ゴカク　力の相等しいこと。
【互譲】ゴジョウ　たがひに譲る。

【五】ゴ　いつつ。
【五倍子】ゴバイシ　ぬるでの虫こぶ。
【五百】ゴヒャク　数の多いこと。
【五倫】ゴリン　人の守るべき五つの道。父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり。
【五穀】ゴコク　米・麦・粟・豆・黍。
【五行】ゴギョウ　木・火・土・金・水。
【五官】ゴカン　耳・目・口・鼻・心。
【五経】ゴキョウ　易・書・詩・礼・春秋。
【五味】ゴミ　甘・酸・辛・苦・鹹。
【五色】ゴショク　青・黄・赤・白・黒。
【五音】ゴオン　宮・商・角・徴・羽。
【五臓】ゴゾウ　肝・心・脾・肺・腎。
【五体】ゴタイ　頭・両手・両足。
【五常】ゴジョウ　仁・義・礼・智・信。
【五倍子】ゴバイシ　ぬるでの虫こぶ。
【五百】ゴヒャク　数の多いこと。
【五倫】ゴリン　人の守るべき五つの道。父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり。
【五穀】ゴコク　米・麦・粟・豆・黍。
【五行】ゴギョウ　木・火・土・金・水。
【五官】ゴカン　耳・目・口・鼻・心。
【五経】ゴキョウ　易・書・詩・礼・春秋。
【五味】ゴミ　甘・酸・辛・苦・鹹。
【五色】ゴショク　青・黄・赤・白・黒。
【五音】ゴオン　宮・商・角・徴・羽。
【五臓】ゴゾウ　肝・心・脾・肺・腎。
【五体】ゴタイ　頭・両手・両足。
【五常】ゴジョウ　仁・義・礼・智・信。

【井】セイ　ショウ　ジョウ　ゆ（湯）わかす。
【井水】セイスイ　井戸の水。
【井戸】イド　水を汲む為に掘つた穴。
【井井】セイセイ　整つてゐる。
【井水】セイスイ　井戸の水。
【井戸】イド　水を汲む為に掘つた穴。
【井井】セイセイ　整つてゐる。

【亜】ア　つぐ。
【亜聖】アセイ　聖人に次ぐ賢人。
【亜相】アショウ　大臣に次ぐ官。
【亜流】アリュウ　模倣者。
【亜聖】アセイ　聖人に次ぐ賢人。
【亜相】アショウ　大臣に次ぐ官。
【亜流】アリュウ　模倣者。

【亡】ボウ　モウ　ほろぶ。
【亡国】ボウコク　国を滅ぼす。
【亡者】モウジャ　死者。
【亡父】ボウフ　死んだ父。
【亡国】ボウコク　国を滅ぼす。
【亡者】モウジャ　死者。
【亡父】ボウフ　死んだ父。

【交】コウ　まじはる。
【交易】コウエキ　売買。
【交会】コウカイ　出合ふ。
【交換】コウカン　とりかへる。
【交際】コウサイ　つきあひ。
【交易】コウエキ　売買。
【交会】コウカイ　出合ふ。
【交換】コウカン　とりかへる。
【交際】コウサイ　つきあひ。

【亦】エキ　また。
【亦是】エキゼ　これまた。
【亦是】エキゼ　これまた。

【亥】ガイ　ゐ（猪）。
【亥年】ガイネン　ゐどし。
【亥年】ガイネン　ゐどし。

【亨】コウ　キョウ　とほる。
【亨通】コウツウ　とほる。
【亨通】コウツウ　とほる。

【人】ジン　ニン　ひと。
【人倫】ジンリン　人の守るべき道。
【人間】ニンゲン　世の中。
【人倫】ジンリン　人の守るべき道。
【人間】ニンゲン　世の中。

【亮】リョウ　あきらか。
【亮察】リョウサツ　推察。
【亮察】リョウサツ　推察。

【仁】ジン　ニ　なさけ。
【仁義】ジンギ　仁と義。
【仁慈】ジンジ　なさけ深い。
【仁義】ジンギ　仁と義。
【仁慈】ジンジ　なさけ深い。

【仇】キュウ　あだ。
【仇敵】キュウテキ　あだ。
【仇敵】キュウテキ　あだ。

【仏】ブツ　ほとけ。
【仏教】ブッキョウ　釈迦の教。
【仏教】ブッキョウ　釈迦の教。

【仕】シ　つかへる。
【仕官】シカン　官に仕へる。
【仕官】シカン　官に仕へる。

【他】タ　ほか。
【他人】タニン　ひと。
【他人】タニン　ひと。

【付】フ　つく。
【付与】フヨ　あたへる。
【付与】フヨ　あたへる。

【代】ダイ　タイ　かはる。
【代理】ダイリ　かはつて事をする。
【代理】ダイリ　かはつて事をする。

【令】レイ　リョウ　いひつけ。
【令嬢】レイジョウ　他人の娘の敬称。
【令嬢】レイジョウ　他人の娘の敬称。

【以】イ　もつて。
【以上】イジョウ　それより上。
【以下】イカ　それより下。
【以上】イジョウ　それより上。
【以下】イカ　それより下。

【仮】カ　ケ　かり。
【仮令】タトヒ　もしも。
【仮令】タトヒ　もしも。

【仲】チュウ　なかだち。
【仲介】チュウカイ　なかだち。
【仲介】チュウカイ　なかだち。

【伊】イ　これ。
【伊太利】イタリア　国名。
【伊太利】イタリア　国名。

【伍】ゴ　いつつ。
【伍長】ゴチョウ　兵卒の長。
【伍長】ゴチョウ　兵卒の長。

【伎】ギ　わざ。
【伎倆】ギリョウ　わざ。
【伎倆】ギリョウ　わざ。

【伏】フク　ブク　ふす。
【伏兵】フクヘイ　かくれた兵。
【伏兵】フクヘイ　かくれた兵。

【伐】バツ　うつ。
【伐木】バツボク　木を切る。
【伐木】バツボク　木を切る。

【休】キュウ　やすむ。
【休暇】キュウカ　やすみ。
【休暇】キュウカ　やすみ。

【伯】ハク　ヒャク　おさ。
【伯父】オジ　父の兄。
【伯父】オジ　父の兄。

【伴】ハン　ともなふ。
【伴侶】ハンリョ　つれ。
【伴侶】ハンリョ　つれ。

【伸】シン　のばす。
【伸縮】シンシュク　のびちぢみ。
【伸縮】シンシュク　のびちぢみ。

【伺】シ　うかがふ。
【伺候】シコウ　うかがふ。
【伺候】シコウ　うかがふ。

【似】ジ　にる。
【似而非】ジニヒ　にて非なるもの。
【似而非】ジニヒ　にて非なるもの。

【佐】サ　たすく。
【佐幕】サバク　幕府を助ける。
【佐幕】サバク　幕府を助ける。

【佛】ブツ　ほとけ。
【佛教】ブッキョウ　釈迦の教。
【佛教】ブッキョウ　釈迦の教。

【作】サク　サ　つくる。
【作文】サクブン　文を作る。
【作文】サクブン　文を作る。

【佳】カ　よい。
【佳人】カジン　美人。
【佳人】カジン　美人。

【使】シ　つかふ。
【使者】シシャ　つかひ。
【使者】シシャ　つかひ。

【侍】ジ　はべる。
【侍女】ジジョ　女中。
【侍女】ジジョ　女中。

【供】キョウ　ク　そなへる。
【供給】キョウキュウ　そなへる。
【供給】キョウキュウ　そなへる。

【依】イ　よる。
【依存】イソン　よる。
【依存】イソン　よる。

【侵】シン　おかす。
【侵略】シンリャク　おかす。
【侵略】シンリャク　おかす。

【便】ベン　ビン　たより。
【便利】ベンリ　都合よし。
【便利】ベンリ　都合よし。

【係】ケイ　かかる。
【係累】ケイルイ　つながり。
【係累】ケイルイ　つながり。

【促】ソク　うながす。
【促進】ソクシン　うながす。
【促進】ソクシン　うながす。

【俄】ガ　にはか。
【俄然】ガゼン　にはか。
【俄然】ガゼン　にはか。

【俊】シュン　すぐれる。
【俊秀】シュンシュウ　すぐれる。
【俊秀】シュンシュウ　すぐれる。

【俗】ゾク　ならはし。
【俗世】ゾクセ　世の中。
【俗世】ゾクセ　世の中。

【保】ホ　たもつ。
【保存】ホゾン　たもつ。
【保存】ホゾン　たもつ。

【信】シン　まこと。
【信仰】シンコウ　信じ仰ぐ。
【信仰】シンコウ　信じ仰ぐ。

【修】シュウ　おさめる。
【修学】シュウガク　学問をする。
【修学】シュウガク　学問をする。

【俳】ハイ　わざおぎ。
【俳優】ハイユウ　わざおぎ。
【俳優】ハイユウ　わざおぎ。

【倉】ソウ　くら。
【倉庫】ソウコ　くら。
【倉庫】ソウコ　くら。

【個】コ　カ　ひとつ。
【個人】コジン　ひとり。
【個人】コジン　ひとり。

【倍】バイ　ます。
【倍加】バイカ　ます。
【倍加】バイカ　ます。

【倒】トウ　たふれる。
【倒産】トウサン　たふれる。
【倒産】トウサン　たふれる。

【倚】イ　よる。
【倚子】イス　こしかけ。
【倚子】イス　こしかけ。

【倫】リン　ロン　みち。
【倫理】リンリ　みち。
【倫理】リンリ　みち。

【倹】ケン　つづまやか。
【倹約】ケンヤク　つづまやか。
【倹約】ケンヤク　つづまやか。

【偉】イ　えらい。
【偉人】イジン　えらい人。
【偉人】イジン　えらい人。

【偏】ヘン　かたよる。
【偏見】ヘンケン　かたよる。
【偏見】ヘンケン　かたよる。

【停】テイ　とどまる。
【停車】テイシャ　とどまる。
【停車】テイシャ　とどまる。

【健】ケン　すこやか。
【健康】ケンコウ　すこやか。
【健康】ケンコウ　すこやか。

【側】ソク　かたはら。
【側近】ソッキン　かたはら。
【側近】ソッキン　かたはら。

【偶】グウ　たまたま。
【偶然】グウゼン　たまたま。
【偶然】グウゼン　たまたま。

【偽】ギ　いつはる。
【偽善】ギゼン　いつはる。
【偽善】ギゼン　いつはる。

【傍】ボウ　かたはら。
【傍観】ボウカン　かたはら。
【傍観】ボウカン　かたはら。

【傑】ケツ　すぐれる。
【傑作】ケッサク　すぐれる。
【傑作】ケッサク　すぐれる。

【傘】サン　かさ。
【傘下】サンカ　かさ。
【傘下】サンカ　かさ。

【備】ビ　そなへる。
【備考】ビコウ　そなへる。
【備考】ビコウ　そなへる。

【傷】ショウ　きず。
【傷害】ショウガイ　きず。
【傷害】ショウガイ　きず。

【傾】ケイ　かたむく。
【傾向】ケイコウ　かたむく。
【傾向】ケイコウ　かたむく。

【働】ドウ　はたらく。
【働人】ドウニン　はたらく。
【働人】ドウニン　はたらく。

【僅】キン　わづか。
【僅少】キンショウ　わづか。
【僅少】キンショウ　わづか。

【僧】ソウ　ほうず。
【僧侶】ソウリョ　ほうず。
【僧侶】ソウリョ　ほうず。

【像】ゾウ　かたち。
【像画】ゾウガ　かたち。
【像画】ゾウガ　かたち。

【儀】ギ　のり。
【儀式】ギシキ　のり。
【儀式】ギシキ　のり。

【億】オク　おほい。
【億万】オクマン　おほい。
【億万】オクマン　おほい。

【儒】ジュ　まなぶ。
【儒学】ジュガク　まなぶ。
【儒学】ジュガク　まなぶ。

【優】ユウ　すぐれる。
【優秀】ユウシュウ　すぐれる。
【優秀】ユウシュウ　すぐれる。

【元】ゲン　ガン　もと。
【元来】ガンライ　もと。
【元来】ガンライ　もと。

【兄】ケイ　キョウ　あに。
【兄弟】キョウダイ　あに。
【兄弟】キョウダイ　あに。

【充】ジュウ　みつる。
【充実】ジュウジツ　みつる。
【充実】ジュウジツ　みつる。

【先】セン　さき。
【先生】センセイ　さき。
【先生】センセイ　さき。

【光】コウ　ひかり。
【光線】コウセン　ひかり。
【光線】コウセン　ひかり。

【克】コク　かつ。
【克己】コッキ　かつ。
【克己】コッキ　かつ。

【免】メン　まぬかれる。
【免許】メンキョ　まぬかれる。
【免許】メンキョ　まぬかれる。

【入】ニュウ　いる。
【入学】ニュウガク　いる。
【入学】ニュウガク　いる。

【全】ゼン　まつたし。
【全部】ゼンブ　まつたし。
【全部】ゼンブ　まつたし。

【八】ハチ　やつ。
【八百】ハッピャク　やつ。
【八百】ハッピャク　やつ。

【公】コウ　おほやけ。
【公平】コウヘイ　おほやけ。
【公平】コウヘイ　おほやけ。

【六】ロク　むつ。
【六合】リクゴウ　むつ。
【六合】リクゴウ　むつ。

【共】キョウ　ともに。
【共同】キョウドウ　ともに。
【共同】キョウドウ　ともに。

【兵】ヘイ　つはもの。
【兵士】ヘイシ　つはもの。
【兵士】ヘイシ　つはもの。

【具】グ　そなへる。
【具体】グタイ　そなへる。
【具体】グタイ　そなへる。

【典】テン　のり。
【典型】テンケイ　のり。
【典型】テンケイ　のり。

【兼】ケン　かねる。
【兼用】ケンヨウ　かねる。
【兼用】ケンヨウ　かねる。

【内】ナイ　ダイ　うち。
【内閣】ナイカク　うち。
【内閣】ナイカク　うち。

【円】エン　まるい。
【円満】エンマン　まるい。
【円満】エンマン　まるい。

【冊】サツ　ふみ。
【冊子】サッシ　ふみ。
【冊子】サッシ　ふみ。

【再】サイ　ふたたび。
【再生】サイセイ　ふたたび。
【再生】サイセイ　ふたたび。

【冒】ボウ　おかす。
【冒険】ボウケン　おかす。
【冒険】ボウケン　おかす。

【冗】ジョウ　あまる。
【冗談】ジョウダン　あまる。
【冗談】ジョウダン　あまる。

【写】シャ　うつす。
【写真】シャシン　うつす。
【写真】シャシン　うつす。

【冠】カン　かぶる。
【冠婚】カンコン　かぶる。
【冠婚】カンコン　かぶる。

【冥】メイ　くらい。
【冥福】メイフク　くらい。
【冥福】メイフク　くらい。

【冬】トウ　ふゆ。
【冬季】トウキ　ふゆ。
【冬季】トウキ　ふゆ。

【冷】レイ　ひえる。
【冷却】レイキャク　ひえる。
【冷却】レイキャク　ひえる。

【凄】セイ　すさまじい。
【凄惨】セイサン　すさまじい。
【凄惨】セイサン　すさまじい。

【凍】トウ　こほる。
【凍結】トウケツ　こほる。
【凍結】トウケツ　こほる。

【凝】ギョウ　こる。
【凝固】ギョウコ　こる。
【凝固】ギョウコ　こる。

【凡】ボン　ハン　おほよそ。
【凡庸】ボンヨウ　おほよそ。
【凡庸】ボンヨウ　おほよそ。

【凶】キョウ　わるい。
【凶悪】キョウアク　わるい。
【凶悪】キョウアク　わるい。

【出】シュツ　スイ　でる。
【出入】シュツニュウ　でる。
【出入】シュツニュウ　でる。

【刀】トウ　かたな。
【刀剣】トウケン　かたな。
【刀剣】トウケン　かたな。

【刃】ジン　やいば。
【刃物】ハモノ　やいば。
【刃物】ハモノ　やいば。

【分】ブン　フン　わかつ。
【分析】ブンセキ　わかつ。
【分析】ブンセキ　わかつ。

【切】セツ　サイ　きる。
【切実】セツジツ　きる。
【切実】セツジツ　きる。

【刊】カン　けずる。
【刊行】カンコウ　けずる。
【刊行】カンコウ　けずる。

【刑】ケイ　のり。
【刑罰】ケイバツ　のり。
【刑罰】ケイバツ　のり。

【列】レツ　つらなる。
【列車】レッシャ　つらなる。
【列車】レッシャ　つらなる。

【初】ショ　はじめ。
【初期】ショキ　はじめ。
【初期】ショキ　はじめ。

【判】ハン　わかつ。
【判決】ハンケツ　わかつ。
【判決】ハンケツ　わかつ。

【別】ベツ　わかれる。
【別離】ベツリ　わかれる。
【別離】ベツリ　わかれる。

【利】リ　するどい。
【利益】リエキ　するどい。
【利益】リエキ　するどい。

【刻】コク　きざむ。
【刻苦】コック　きざむ。
【刻苦】コック　きざむ。

【前】ゼン　まへ。
【前後】ゼンゴ　まへ。
【前後】ゼンゴ　まへ。

【剛】ゴウ　つよい。
【剛健】ゴウケン　つよい。
【剛健】ゴウケン　つよい。

【剣】ケン　つるぎ。
【剣道】ケンドウ　つるぎ。
【剣道】ケンドウ　つるぎ。

【剰】ジョウ　あまる。
【剰余】ジョウヨ　あまる。
【剰余】ジョウヨ　あまる。

【割】カツ　わる。
【割引】ワリビキ　わる。
【割引】ワリビキ　わる。

【劇】ゲキ　はげしい。
【劇場】ゲキジョウ　はげしい。
【劇場】ゲキジョウ　はげしい。

【力】リョク　リキ　ちから。
【力学】リキガク　ちから。
【力学】リキガク　ちから。

【功】コウ　いさを。
【功績】コウセキ　いさを。
【功績】コウセキ　いさを。

【加】カ　くはへる。
【加入】カニュウ　くはへる。
【加入】カニュウ　くはへる。

【劣】レツ　おとる。
【劣等】レットウ　おとる。
【劣等】レットウ　おとる。

【助】ジョ　たすく。
【助力】ジョリョク　たすく。
【助力】ジョリョク　たすく。

【勇】ユウ　いさむ。
【勇気】ユウキ　いさむ。
【勇気】ユウキ　いさむ。

【勉】ベン　つとめる。
【勉強】ベンキョウ　つとめる。
【勉強】ベンキョウ　つとめる。

【動】ドウ　うごく。
【動作】ドウサ　うごく。
【動作】ドウサ　うごく。

【勘】カン　かんがへる。
【勘定】カンジョウ　かんがへる。
【勘定】カンジョウ　かんがへる。

【務】ム　つとめる。
【務所】ムショ　つとめる。
【務所】ムショ　つとめる。

【勝】ショウ　かつ。
【勝利】ショウリ　かつ。
【勝利】ショウリ　かつ。

【勢】セイ　いきほひ。
【勢力】セイリョク　いきほひ。
【勢力】セイリョク　いきほひ。

【勤】キン　つとめる。
【勤務】キンム　つとめる。
【勤務】キンム　つとめる。

【勲】クン　いさを。
【勲章】クンショウ　いさを。
【勲章】クンショウ　いさを。

【勿】ブツ　なかれ。
【勿論】モチロン　なかれ。
【勿論】モチロン　なかれ。

【匂】ニオイ　におひ。
【匂ひ】ニオイ　におひ。
【匂ひ】ニオイ　におひ。

【匠】ショウ　たくみ。
【匠人】ショウニン　たくみ。
【匠人】ショウニン　たくみ。

【匹】ヒツ　ハチ　たぐひ。
【匹敵】ヒッテキ　たぐひ。
【匹敵】ヒッテキ　たぐひ。

【区】ク　オウ　わかつ。
【区別】クベツ　わかつ。
【区別】クベツ　わかつ。

【医】イ　いやす。
【医師】イシ　いやす。
【医師】イシ　いやす。

【十】ジュウ　とを。
【十分】ジュウブン　とを。
【十分】ジュウブン　とを。

【千】セン　ち。
【千万】センマン　ち。
【千万】センマン　ち。

【升】ショウ　ます。
【升目】マスメ　ます。
【升目】マスメ　ます。

【午】ゴ　うま。
【午前】ゴゼン　うま。
【午前】ゴゼン　うま。

【半】ハン　なかば。
【半分】ハンブン　なかば。
【半分】ハンブン　なかば。

【卑】ヒ　いやしい。
【卑怯】ヒキョウ　いやしい。
【卑怯】ヒキョウ　いやしい。

【卓】タク　すぐれる。
【卓越】タクエツ　すぐれる。
【卓越】タクエツ　すぐれる。

【協】キョウ　かなふ。
【協力】キョウリョク　かなふ。
【協力】キョウリョク　かなふ。

【単】タン　ひとつ。
【単純】タンジュン　ひとつ。
【単純】タンジュン　ひとつ。

【博】ハク　ひろい。
【博士】ハカセ　ひろい。
【博士】ハカセ　ひろい。

【卜】ボク　うらなふ。
【卜占】ボクセン　うらなふ。
【卜占】ボクセン　うらなふ。

【占】セン　うらなふ。
【占領】センリョウ　うらなふ。
【占領】センリョウ　うらなふ。

【卵】ラン　たまご。
【卵黄】ランオウ　たまご。
【卵黄】ランオウ　たまご。

【印】イン　しるし。
【印刷】インサツ　しるし。
【印刷】インサツ　しるし。

【危】キ　あやぶむ。
【危険】キケン　あやぶむ。
【危険】キケン　あやぶむ。

【即】ソク　すなはち。
【即座】ソクザ　すなはち。
【即座】ソクザ　すなはち。

【却】キャク　しりぞく。
【却下】キャッカ　しりぞく。
【却下】キャッカ　しりぞく。

【厚】コウ　あつい。
【厚生】コウセイ　あつい。
【厚生】コウセイ　あつい。

【原】ゲン　もと。
【原因】ゲンイン　もと。
【原因】ゲンイン　もと。

【厳】ゲン　おごそか。
【厳重】ゲンジュウ　おごそか。
【厳重】ゲンジュウ　おごそか。

【去】キョ　コ　さる。
【去年】キョネン　さる。
【去年】キョネン　さる。

【参】サン　まゐる。
【参加】サンカ　まゐる。
【参加】サンカ　まゐる。

【又】ユウ　また。
【又従兄弟】マタイトコ　また。
【又従兄弟】マタイトコ　また。

【及】キュウ　およぶ。
【及第】キュウダイ　およぶ。
【及第】キュウダイ　およぶ。

【友】ユウ　とも。
【友人】ユウジン　とも。
【友人】ユウジン　とも。

【反】ハン　ホン　タン　そる。
【反対】ハンタイ　そる。
【反対】ハンタイ　そる。

【収】シュウ　おさめる。
【収入】シュウニュウ　おさめる。
【収入】シュウニュウ　おさめる。

【取】シュ　とる。
【取得】シュトク　とる。
【取得】シュトク　とる。

【口】コウ　クチ　くち。
【口頭】コウトウ　くち。
【口頭】コウトウ　くち。

【古】コ　ふるい。
【古代】コダイ　ふるい。
【古代】コダイ　ふるい。

【句】ク　センク　まがる。
【句読】クトウ　まがる。
【句読】クトウ　まがる。

【叫】キョウ　さけぶ。
【叫喚】キョウカン　さけぶ。
【叫喚】キョウカン　さけぶ。

【召】ショウ　めす。
【召集】ショウシュウ　めす。
【召集】ショウシュウ　めす。

【可】カ　よい。
【可能】カノウ　よい。
【可能】カノウ　よい。

【台】タイ　ダイ　うてな。
【台風】タイフウ　うてな。
【台風】タイフウ　うてな。

【史】シ　ふみ。
【史学】シガク　ふみ。
【史学】シガク　ふみ。

【右】ウ　ユウ　みぎ。
【右翼】ウヨク　みぎ。
【右翼】ウヨク　みぎ。

【号】ゴウ　さけぶ。
【号令】ゴウレイ　さけぶ。
【号令】ゴウレイ　さけぶ。

【司】シ　つかさどる。
【司会】シカイ　つかさどる。
【司会】シカイ　つかさどる。

【吐】ト　はく。
【吐露】トロ　はく。
【吐露】トロ　はく。

【吸】キュウ　すふ。
【吸収】キュウシュウ　すふ。
【吸収】キュウシュウ　すふ。

【吹】スイ　ふく。
【吹奏】スイソウ　ふく。
【吹奏】スイソウ　ふく。

【呉】ゴ　くれ。
【呉服】ゴフク　くれ。
【呉服】ゴフク　くれ。

【周】シュウ　まはり。
【周囲】シュウイ　まはり。
【周囲】シュウイ　まはり。

【味】ミ　あぢはひ。
【味覚】ミカク　あぢはひ。
【味覚】ミカク　あぢはひ。

【呼】コ　よぶ。
【呼吸】コキュウ　よぶ。
【呼吸】コキュウ　よぶ。

【命】メイ　ミョウ　いのち。
【命令】メイレイ　いのち。
【命令】メイレイ　いのち。

【和】ワ　やはらぐ。
【和平】ワヘイ　やはらぐ。
【和平】ワヘイ　やはらぐ。

【唐】トウ　から。
【唐突】トウトツ　から。
【唐突】トウトツ　から。

【問】モン　とふ。
【問題】モンダイ　とふ。
【問題】モンダイ　とふ。

【喜】キ　よろこぶ。
【喜劇】キゲキ　よろこぶ。
【喜劇】キゲキ　よろこぶ。

【喝】カツ　しかる。
【喝采】カッサイ　しかる。
【喝采】カッサイ　しかる。

【喫】キツ　くらふ。
【喫煙】キツエン　くらふ。
【喫煙】キツエン　くらふ。

【単】タン　ひとつ。
【単純】タンジュン　ひとつ。
【単純】タンジュン　ひとつ。

【博】ハク　ひろい。
【博士】ハカセ　ひろい。
【博士】ハカセ　ひろい。

【卜】ボク　うらなふ。
【卜占】ボクセン　うらなふ。
【卜占】ボクセン　うらなふ。

【占】セン　うらなふ。
【占領】センリョウ　うらなふ。
【占領】センリョウ　うらなふ。

【卵】ラン　たまご。
【卵黄】ランオウ　たまご。
【卵黄】ランオウ　たまご。

【印】イン　しるし。
【印刷】インサツ　しるし。
【印刷】インサツ　しるし。

【危】キ　あやぶむ。
【危険】キケン　あやぶむ。
【危険】キケン　あやぶむ。

【即】ソク　すなはち。
【即座】ソクザ　すなはち。
【即座】ソクザ　すなはち。

【却】キャク　しりぞく。
【却下】キャッカ　しりぞく。
【却下】キャッカ　しりぞく。

【厚】コウ　あつい。
【厚生】コウセイ　あつい。
【厚生】コウセイ　あつい。

【原】ゲン　もと。
【原因】ゲンイン　もと。
【原因】ゲンイン　もと。

【厳】ゲン　おごそか。
【厳重】ゲンジュウ　おごそか。
【厳重】ゲンジュウ　おごそか。

【去】キョ　コ　さる。
【去年】キョネン　さる。
【去年】キョネン　さる。

【参】サン　まゐる。
【参加】サンカ　まゐる。
【参加】サンカ　まゐる。

【又】ユウ　また。
【又従兄弟】マタイトコ　また。
【又従兄弟】マタイトコ　また。

【及】キュウ　およぶ。
【及第】キュウダイ　およぶ。
【及第】キュウダイ　およぶ。

【友】ユウ　とも。
【友人】ユウジン　とも。
【友人】ユウジン　とも。

【反】ハン　ホン　タン　そる。
【反対】ハンタイ　そる。
【反対】ハンタイ　そる。

【収】シュウ　おさめる。
【収入】シュウニュウ　おさめる。
【収入】シュウニュウ　おさめる。

【取】シュ　とる。
【取得】シュトク　とる。
【取得】シュトク　とる。

【口】コウ　クチ　くち。
【口頭】コウトウ　くち。
【口頭】コウトウ　くち。

【古】コ　ふるい。
【古代】コダイ　ふるい。
【古代】コダイ　ふるい。

【句】ク　センク　まがる。
【句読】クトウ　まがる。
【句読】クトウ　まがる。

【叫】キョウ　さけぶ。
【叫喚】キョウカン　さけぶ。
【叫喚】キョウカン　さけぶ。

【召】ショウ　めす。
【召集】ショウシュウ　めす。
【召集】ショウシュウ　めす。

【可】カ　よい。
【可能】カノウ　よい。
【可能】カノウ　よい。

【台】タイ　ダイ　うてな。
【台風】タイフウ　うてな。
【台風】タイフウ　うてな。

【史】シ　ふみ。
【史学】シガク　ふみ。
【史学】シガク　ふみ。

【右】ウ　ユウ　みぎ。
【右翼】ウヨク　みぎ。
【右翼】ウヨク　みぎ。

【号】ゴウ　さけぶ。
【号令】ゴウレイ　さけぶ。
【号令】ゴウレイ　さけぶ。

【司】シ　つかさどる。
【司会】シカイ　つかさどる。
【司会】シカイ　つかさどる。

【吐】ト　はく。
【吐露】トロ　はく。
【吐露】トロ　はく。

【吸】キュウ　すふ。
【吸収】キュウシュウ　すふ。
【吸収】キュウシュウ　すふ。

【吹】スイ　ふく。
【吹奏】スイソウ　ふく。
【吹奏】スイソウ　ふく。

【呉】ゴ　くれ。
【呉服】ゴフク　くれ。
【呉服】ゴフク　くれ。

【周】シュウ　まはり。
【周囲】シュウイ　まはり。
【周囲】シュウイ　まはり。

【味】ミ　あぢはひ。
【味覚】ミカク　あぢはひ。
【味覚】ミカク　あぢはひ。

【呼】コ　よぶ。
【呼吸】コキュウ　よぶ。
【呼吸】コキュウ　よぶ。

【命】メイ　ミョウ　いのち。
【命令】メイレイ　いのち。
【命令】メイレイ　いのち。

【和】ワ　やはらぐ。
【和平】ワヘイ　やはらぐ。
【和平】ワヘイ　やはらぐ。

【唐】トウ　から。
【唐突】トウトツ　から。
【唐突】トウトツ　から。

【問】モン　とふ。
【問題】モンダイ　とふ。
【問題】モンダイ　とふ。

【喜】キ　よろこぶ。
【喜劇】キゲキ　よろこぶ。
【喜劇】キゲキ　よろこぶ。

【喝】カツ　しかる。
【喝采】カッサイ　しかる。
【喝采】カッサイ　しかる。

【喫】キツ　くらふ。
【喫煙】キツエン　くらふ。
【喫煙】キツエン　くらふ。

【曲道】キョクドウ　こまごまとときつくす。北史、王劭傳「繁略曲盡」（二一頁）

【曲説】キョクセツ　まげて道理にそむいた説。

【曲説】キョクセツ　一方にかたよりて正しからざる議論。管子「可以一一而不可以服服」

【曲全】キョクゼン　よくまがりて後にまったきを得との老子の語。老子「曲則全」後漢書「老氏一一、誘以道若退」

【曲説】キョクセツ　つぶさにこまごまとくあたる。荘子「其於論一一、猶將有餘也」

【曲知】キョクチ　一隅のみを知りて大道に通ぜざる僻（荀子）

【曲説】キョクセツ　つぶさに道理をつくす。朱熹、大学序「一一而詳說」

【曲直】キョクチョク　まがれると、なおきこと。書経、傳「木可以一一」（二一頁）正邪、善悪。

【曲躬】キョクキュウ　まげて人の前に従ふ意。游俠傳「衣見乞家一一」

【曲突】キョクトツ　煙出のまがりたる煙突。漢書、霍光傳「客有一一徙其竈」

【曲水】キョクスイ　まがれる水の流れ。晉書、王羲之傳「修一一之飲」

【曲尺】キョクシャク　かねざし。和漢三才圖會「一一、三月三日の節句を祝ふ」

【曲折】キョクセツ　○こまかにまがりくねること。○こみいりたることがら。史、李將軍傳「漢幸欲一一上書報天子」

【曲説】キョクセツ　一方にかたよりて正しからざる議論。管子「可以一一而不可以服服」

【曲全】キョクゼン　よくまがりて後にまったく得との老子の語。老子「曲則全」後漢書「老氏一一、誘以道若退」

【曲説】キョクセツ　つぶさにこまごまとくあたる。荘子「其於論一一、猶將有餘也」

【曲知】キョクチ　一隅のみを知りて大道に通ぜざる僻（荀子）

【曲説】キョクセツ　つぶさに道理をつくす。朱熹、大学序「一一而詳說」

【曲直】キョクチョク　まがれると、なおきこと。書経、傳「木可以一一」（二一頁）正邪、善悪。

【曲躬】キョクキュウ　まげて人の前に従ふ意。游俠傳「衣見乞家一一」

【曲突】キョクトツ　煙出のまがりたる煙突。漢書、霍光傳「客有一一徙其竈」

【曲水】キョクスイ　まがれる水の流れ。晉書、王羲之傳「修一一之飲」

【曲尺】キョクシャク　かねざし。和漢三才圖會「一一、三月三日の節句を祝ふ」

【曲折】キョクセツ　○こまかにまがりくねること。○こみいりたることがら。史、李將軍傳「漢幸欲一一上書報天子」

【曲説】キョクセツ　一方にかたよりて正しからざる議論。管子「可以一一而不可以服服」

【曲全】キョクゼン　よくまがりて後にまった

清廉而便體」

【曲筆】キョクヒツ　事実をまげて書く。後漢書、臧洪傳「受型不一降三志于自刃、南史不一一一以求一存」

【曲阜】キョクフ　山東省兗州府の縣名、太古の神農氏及び魯の周公旦の部、又孔子閥里の古迹、洙泗兩水其の北を流る、縣城内に孔子の廟庭墳墓あり。

【曲譜】キョクフ　諸物の奴音樂の調子の如く高低を記したるもの。＝樂譜。

【曲説】キョクセツ　よこしまにしてかたよる。

【曲浦】キョクホ　まがれる入江。薛道衡詩「一一縈二迴沙」

【曲水】キョクスイ　まがれる水の流れ「一一二流觴」

【曲直】キョクチョク　上に向ひてそとる。先傳「一一三者」陳編纂詩「四夫能一一治騎可橫行」

【曲隆】キョクリュウ　こまかなる彫式。禮記、樂文「一一、安閒之論之事」又、それを記せし禮記の篇名。

【曲集】キョクシュウ　樂子の一種。寺院などにて用ふ。

【曲物】キョクモツ　圓へぎ板をまげてまろく造りしいれもの、わげもの。

【史】

史（自部二畫）の俗字。

三畫

【更】

㊀カウ・キャウ　㊁カウ　庚　要は本字

㊀かふ。かはる（換・變）あらたまる　あらためる（改）綸、子張「其一也人皆仰之」○つぐ（繼）○つぐのふ（償）○ふ（經・歷）○すぐ（過）經過する。史、太宛傳「必一匈奴中」○かはるがはる。○夜間の時刻のかはりめ、一夜を五一に分つ稱、初一は今の午後八時、二一は十二時、三一は午前二時、四一は午前四時、夜を警むるが如くにして守る。○前後の次第の稱。○更代。○更迭。○更番。○更生。○更始。○更衣。○更張。○更化。○更易

【更革】カウ さらにあらためる。革は改。‖更始。
【更換】カウクワン とりかへる。徐賓詩「使至――恨難ノ勝」‖交換。
【更互】カウゴ かはるがはる「中原草句序」‖交互。
【更漏】カウロウ 夜中時刻をしらせる為めにうつ太鼓。東軒筆録「――分明、必有二実政一也」
【更衣】カウイ かはるがはるおこる。後漢書、祖謙傳「威儀――、文武遵用」
【更始】カウシ 百きものをあらため新らしくはじめる。又、あらたまりてはじまる。礼記「其在二天地之中一者、莫レ不二――一新」‖更新・革新。
【更事】カウジ 世事を経歴する。隋書、李雄伝「吾見二世少一、レ――来レ多」
【更新】カウシン 改めてあらたにす。陳書、代祖紀傳「興二天下一――」‖更始。
【更生】カウセイ 死にたる者がさらにいきかへる。拾遺記「仙人寇封、食二飛魚一而死、二百年――」‖蘇生・回生・再生。
【更正】カウセイ あらためなほす。
【更張】カウチャウ 改めてうらなふ。礼記、疏「卜不レ吉則止、不レ得レ因二――一こと」
【更籌】カウチウ 夜のふけゆく時刻。籌は漏刻の矢。羅鄴詩「枕邊漏永催二――一」
【更選】カウセン あらためてえらぶ。後漢書、班超傳「更如二班超一何故不レ遣而二――一乎」‖改選。
【更始】カウシ 事のいとぐちをかへる。礼記「君子問レ――、則起而対」
【更籌】カウチウ 夜の時を計る器、とけい、籌はかずとり。庾肩吾詩「遠客知二夜漏一、刻箭験二――一」
【更張】カウチャウ 琴の絃をあらためはる、今までゆるみたるもの事を改めおこす「改絃――」
【更定】カウテイ あらためさだめる 改正する。漢書、張騫傳「――二律令一」
【更迭】カウテツ かはるがはる交代する。易経「剛柔相摩」疏「陽剛而陵柔、故剛柔共相切摩、――変化也」‖更選。
【更迭】カウテツ 互にいれかはる。詩経、疏「――列宿一而見」‖交替・更遷。
【更番】カウバン かはるがはる番にあたる、交代して勤る「唐書、張説傳」‖交番。
【更僕】カウボク 僕は擯相、それをあらため代ふるは時刻の永きをいふ。礼、儒行「遽数レ之不レ能レ終二其物一悉数レ之乃留、――未レ可レ終也」留は久、擯相が久くして倦み疲れたるにより、之を代へるも、皆ひ疏す可からざる義。
【更老】カウラウ 三老五更をいふ。潘岳賦「養二――一以保レ年」
【更漏】カウロウ 時を報ずる漏刻「唐国史補「初蕭遘以二山中不レ知二――一、乃取二銅葉一製レ器」
【更紗】サラ 紅色の模様を押して染めた金巾。ポルトガル語のあて字。

四画

【曷】カツ 日部（心部四画）に同じ。

五画

【曷】カツ 日部（曰部六画）の俗文。
〇いづくんぞ（盍）なに、なんぞ（何）〇いつか、何の時か。左、昭元「吾子其一歸」〇蟲の名、すくもむし、蛇蝎の蝎に同じ。史、范雎・蔡澤傳「先生一鼻巨肩」
曷・何・胡・盍・那等の別は何（人部五画）の條を見よ。

六画

【書】ショ
〇かく、しるす、記録する。論、衛霊公「子張一諸紳」〇もじ（文字）六一は、指事・象形・諧聲・会意・轉注・假借。〇かきかた（書法）「楷一」「草一」〇ふみ、ほん「一籍」「史一」「兵一」「字一」「佛一」〇てがみ「一簡」「手一」「雁一」「信一」「返一」「家一」「一札」「尺一」〇書物「読一」「一巻」「一冊」「一生」「一肆」「一林」「一屋」「一斎」「一室」「一房」「一舗」「一店」「一坊」「一堂」「一院」「一楼」「一閣」「一館」「一局」「一会」「一社」「一楽」「一学」「一科」「一道」「一法」「一体」「一風」「一家」「一流」「一派」「一人」「一生」「一士」「一客」「一癖」「一痴」「一魔」「一虫」「一蠹」「一厄」「一劫」「一禍」「一難」「一災」「一妖」「一怪」「一祟」「一崇」「一祥」「一瑞」「一兆」「一徴」「一験」「一効」「一益」「一利」「一福」「一運」「一命」「一数」「一理」「一義」「一道」「一徳」「一行」「一業」「一善」「一悪」「一罪」「一過」「一失」「一誤」「一損」「一害」「一毒」「一薬」「一病」「一症」「一疾」「一患」「一憂」「一愁」「一苦」「一悩」「一痛」「一傷」「一創」「一死」「一滅」「一亡」「一敗」「一北」「一走」「一逃」「一遁」「一隠」「一匿」「一蔵」「一伏」「一潜」「一没」「一沈」「一浮」「一漂」「一流」「一転」「一移」「一遷」「一動」「一揺」「一震」「一驚」「一恐」「一怖」「一懼」「一慄」「一戦」「一闘」「一争」「一論」「一議」「一説」「一談」「一話」「一言」「一語」「一句」「一章」「一節」「一段」「一篇」「一編」「一巻」「一冊」「一部」「一本」「一通」「一封」「一函」「一箱」「一包」「一束」「一把」「一束」「一束」「一束

樣。

【學ノ書如ノ派二急流一】ガクノショジョハキュウリュウニハスルガゴトシ　書を學ぶは急流に派るが如く容易に進み難き喩。蘇軾文「——、用二盛氣力一不ノ離二寸陰一」

【以ノ書御者不ノ表二亂之情一】ショヲモッテギョシャヲアラワサザルノジョウ　御者も不ノ表二亂之情一ノ何事も實地に就きて研究せざれば、役に立たざるをいふ。臧榮緒「晉書」曰、——、以ノ古制ノ今者、不ノ表二事之變一」

【讀ノ書ヲ亡ス】ショヲヨムヲボウス　讀書に耽りて食を忘れる。轉じて讀書に熱心なるをいふ。

【書奴】ショド　書物の奴隷となる意。讀書に耽溺して、書物を愛護するに汲々たるをいふ。

【書痴】ショチ　書物に熱中して、常軌を逸する人。

【書生】ショセイ　○學問をする人。學生。「——多貧賤」○未だ學問を積まない人。「——何知二稼穡艱一」○世事に通じない人。「——之論」

【書籍】ショセキ　書物の總稱。

【書堂】ショドウ　書物を入れておくところ。書庫。

【書道】ショドウ　書法。

【書肆】ショシ　書物を賣る店。本屋。

【書記】ショキ　○かきしるす。又、書物。漢書、賈山傳「秦二世——、不ノ能ノ爲二前傳一」○かきやく。白居易詩「青衫——何年去、紅旆將軍昨日歸」

【書痙】ショケイ　性んばこ。主安貞、勤學文「——」

【書經】ショケイ　書物を入れておくはこ。

【書契】ショケイ　文字。「——之興、蓋取二諸夬一」○證文。「——取二其半一」

【書劍】ショケン　書物と、つるぎと、古の書生の常に事とするもの。陳子昂、送別出塞詩「平生聞二高義一、——百夫雄」

【書庫】ショコ　○書物ぐら。宋史、職官志「淳化五年始置二——監官一」○文庫。○博學の人の稱。北史、公孫彧傳「少好二學、博覽群經史一、時人稱爲二——一」

【書估】ショコ　かきやく。漢書、王章傳「太守舍之、除補二——一」○書子。

【書淫】ショイン　書物を讀むこと。杜牧詩「——幾見二秋」

【書院】ショイン　書物をつかさどる人。唐書、百官志「——、掌二經籍圖書一」

【書院】ショイン　書物を藏する家。轉じて學校。

【書物】ショモツ　書物ばこ。春秋後語「夜發二——一、數十乘」得二周書陰符一而讀ノ之」

【書圖】ショト　てがみ。陸機、詩疏「蝶蝀取二其蟲一頁ノ之、于二木空中一成二筆筒中一、七日而化、爲二其子一」○書物。書札

【書題】ショ　かかげしるす。〓〓〓

これを踵ぎ成さしむ。數〻召して宮に入れ、后妃諸貴人をして御事せしむ、流して――といふ、家は姑と同じ、大家は女の尊稱。

【曹長】サウ　陸軍下士官の一、特務曹長の下、軍曹の上に位す。

【曹洞宗】サウトウ　佛禪宗の一派、六祖の弟子行思にはじまる、道元禪師のはじめて本邦に弘めしもの。

【曹偶】サウ　ともがら、なかま。南史、臧洪傳「客貌甚偉、――皆敬之」

【曹孟德】サウモウトク　魏の武帝をいふ、曹は氏、名は操、孟德は其の字、漢の相國曹參の後、操少くして機變、權數あり、任俠放蕩にして行狀を治めず、漢に仕へて戰功あり、漢帝操を以て丞相と爲し、冀州牧を領せしめ魏公に封ず、已にして爵を進めて王と爲し、天子の袞服を用ひしむ、後漢安二十六年薨ず、年六十六、子曹丕漢の禪を受くるに及び、追尊して太祖武皇帝と謚す。

【曹輩】サウ　魏の曹操の幼字を阿瞞といふ、故に曹操を――といふ。蘇軾詩「欲下將二鼓鼙一事上――」

【曹劌】サウ　○曹植と、劉楨と。文心雕龍「觀班之論、――以下、國二狀山川一、影二寫萬物一」○曹操と、劉備と。辨亡論「――之時、非二一世所一レ圖」

【曼】

㊀バン・マン　㊁バン・マン　㊂バン・マン　㊃バン・マン　呉　呉　漢　漢

㊀ひろし（廣）ながし（長）○きめこまかく、かろし（輕細）○ひく（引）○うつくし（美）○つく（突）○のぶ（延）○なし（無）　㊁一衍は極り無しっ　㊂一濃は分別なき貌。㊃――は遠き貌。

【曼衍】マン　○かぎりなし。莊子齊物「因レ之以二――一」○分ち布く。揚雄賦「鮮文縟而――兮」

【曼姬】マン　長き貌。

【曼妙】マン　うつくしき女。漢書、司馬相如傳「――女――」注「曼者言二其色理細澤一也」‖美姫。

【曼漫】マンマン　分別なき貌。蘇軾詩「圖書已――」‖漫漫。

【曼頌】マンショウ　きめこまかなるほほ。淮南俶真「――皓齒、形容佳」

【曼辭】マンジ　うつくしく飾れることば。漢書、司馬遷傳「――以自解」

【曼珠沙華】マンジュシャゲ　野草の名、しびとばな、てんがいばな、幽靈花、彼岸花。‖石蒜。

【曼聲】マンセイ　長きこゑ。列、湯問「韓娥因――哀哭、一里老幼、悲欷垂レ涕」

【曼聲】マンセイ　音調を長くしてうたふ。飛燕外傳「慨然――」

【曼然】マンゼン　長き貌。‖曼曼。

【曼燈】マンタウ　かろくあたたか、曼は輕細。枚乘文「衣裘則輕煖――」‖輕煖。

【曼陀羅】マンダラ　梵語、雜色の義。又、輪圓具足の義。‖曼荼羅・滿荼羅。○淨土の實相を寫したる圖。

【曼陀羅華】マンダラゲ　○佛白蓮華の雜。法華經「天雨二――一」○毒草の一種、きちがひなすび。葉葉は茄子に似る。

【曼衍】マンエン　おりめのこまかききぬ。淮南子「絲綿――、溫二煖子身一」

【曼聲】マンセイ　なまめきてうるはし。梁昭明太子、七契「與二金石一而鏗鏘、共二絲竹一而――」‖曼妙。

【曼妙】マンミョウ　つやありてきめこまかきはだ。楚辭、天問「平脇――、何以肥レ之」

【曼曼】マンマン　ながき貌。離騷「路――其脩遠兮」‖漫漫。

【曼目】マンモク　とぼくみわたす。楚辭「――余目一以流觀兮」

【曼理皓齒】マンリコウシ　きめこまかく美くしきはだと白き齒と、美人の形容（韓非、主道）

【曼膚】マンフ　きめこまかに柔かにしてうるはし、柔婉にして艷麗。後漢書、杜篤傳「――之容、不レ供二于目一」

八畫

【最】サイ　俗　最は俗字

○もっとも、いとも、第一、至高にして上なし。○第一にすぐれたるもの。後漢書、崔寔傳「常爲二邊――一」‖邊功第一たる殿。○官吏の成績のすぐれたる殿。殿の反對「殿一」○あつむ（聚）すべて（都凡）史、鋒候世家「――從二高帝一」

辨字　最は犯して取るなり、曰に從ひ取るに從ふ、曰に從ふは人前を冒犯するなり、故に上功を最といふ、俗に曰に從ふは非。

同訓異語　もと最・尤○最は最上・最初などと熟す、國語のいとと同じ、又殿最といふは、殿は、最のしんがり、最はさきがけなり。○尤ははなはだの意、けやけしと訓す、すぐれて異なれるをいふ、韓文に「惟回賢於二衆庶一、奉レ職尤謹」とあるにて、最・尤二字の用法を辨知すべし。

【最愛】サイアイ　もっともかはゆがる、いちばん大切にする。陸龜蒙詩「――筆調開二北里一」

【最下】サイカ　もっともした。最上の反對。

【最好】サイカウ　もっともよし、韓偓、三月詩「四時――是三月、一去不レ回唯少年」

【最勝】サイショウ　もっとも大いなり。晉書文「海於二天地間一、爲レ物――」‖最大。

【最惠國】サイケイ　國際上通商等に關して最も利益ある條約を締結せる國。

【最敬禮】サイケイ　もっとも鄭重なる敬禮法、直立不動の姿にて、予を膝の下までたれ、うやうやしく腰を屈する禮式。

【最後】サイゴ　最終に同じ。漢書、張萬傳「一一出而貴官」

【最期】サイ　國しにぎは。末期サイ＝臨終。

【最上】サイジョウ　もっとも（〇唐國史補「蘇州並ベ稱、其一一者、名曰二優劣一、或云、業貴爲レ最所レ爲」

【最終】サイシュウ　をはり。

【最初】サイショ　はじめ、一番はじめ。最後の反對。

【最小】サイショウ　もっとも ちひさし。劉向新序「延陵季子兵甚强人、季子一一」

【最少】サイショウ　〇もっともすくなし。〇もっともわかし。

【最前】サイゼン　國さきに、まへかた、先刻。

【最多】サイタ　もっともおほし。南史、何思澄傳「東海三阿、子朝一一」

【最大】サイダイ　もっともおほいなり。＝最強。

【最中】サイチュウ　〇もなか。まんなか（正中）〇國なかば一一の月に似せる菓子の名。

【最早】モハヤ　國〇いまは、もう。〇かくなる上は、とても「一一詮方なし」

【最寄】モヨリ　國近き所。

【會】ソウ　エ

〇かつて（經）＝曾。これまでに、過去の事を言ひあらはす辭。＝曾。〇すなはち（乃・則）論、學而「一是以爲レ孝乎」〇かさぬ。かさなる「一祖」「一孫」「一城」＝屆。〇あぐ。あがる（擧）〇する（末）〇增に同じ。〇ます。＝增。

同訓異字　曾・嘗の別は曾（曰部十一畫）の條を見よ。

【會遊】ソウユウ　まへかたあそぶ。＝曾遊。

【會益】ソウエキ　ましふやす。孟、告子「一二一其所レ不レ能」＝增益。

【會孫】ソウソン　字は子固、宋の建昌南豐の人、李友を以て聞ゆ、官、中書舍人に至る、文章は歐陽修と名を齊うす、世に南豐先生といふ、唐宋八家の一人。

【會國藩】ソウコクハン　清朝の名臣、字は伯涵、湘鄉と號す、湖南湘鄉の人、道光十八年の進士、官、武英殿大學士に至る、長髮賊を平定して功あり、同治十一年卒す、年六十二。

【會子】ソウシ　曾參を見よ。

【會臣】ソウシン　末の臣、諸侯なり。左、襄十八「一一朝聘下準二諸侯一以討上焉」＝末臣。

【會參】ソウシン　孔子の門人、名は參、字は子輿、曾點の子、魯の南武城の人、孔子より少きこと四十六歲、志孝道に存す、孔子之に因りて孝經を作る。＝曾子。

【會城】ソウジョウ　二階以上かさなりたるろ、崑崙山、三級あり、上を一一といひ太帝の居と爲す。後漢書、張衡傳「登二閬風之一一一兮」＝層城。

【會祖父】ソウソフ　ひぢぢ、ひいぢぢ、祖父の父。＝曾大父・曾祖王父。

【會祖母】ソウボ　ひばば、ひいばば、祖母の母。＝曾祖王母。

【會孫】ソウソン　ひまご、孫の子、曾は重ぬる義。爾雅「孫之子爲二一一一」

【會陪】ソウバイ　かつて陪隨する。蘇軾詩「他日一一探二禹穴一、白頭還見賦二南山一」

【會閱儀】ソウエツギ　曾參と閔損とに等しき孝行のともがら。二人は孔子の門人共に孝を以て聞ゆ。元稹詩「曾公孝二父母一、行與二曾閔一儔」

【替】テイ　タイ　圖

〇かはる。かふ（代）「交一」〇すつ。すたる、すてらる（廢）〇ほろぶ（滅）魯語「令德一矣」〇やむ（廢止）晉語「薦」可而一不」不は否。

同訓異字　替・變・化・易・代・更・換の別は變（言部十六畫）の條を見よ。

【替辭】タイジ　やめおこたる。北夢瑣言「世之干レ謁、先資二名第一、既得レ之後、辭レ不二一一一」

【替換】タイカン　かふ。又、かはる。楊萬里詩「新歲年頭將二一一一」＝易換。

【替人】タイジン　前の人にかはるべき人。

【替衰】タイスイ　すたれおとろふ。＝衰替。

九

【會】クワイ　エ　畫

〇あふ（合）であふ、めぐりあふ、行きあふ「再一」「一者定離」〇あつまる（集）よりあふ、一つになる「一合」「集一」〇周代諸侯の相見禮「一同」〇ちかひ（盟）〇あつまりの團體「青年一」「講習一」〇をり（機）「機一」〇さとる（理解）「一得」「了一」〇一歲の計算、計算。又、其の帳簿。孟、萬章「孔子嘗爲委吏矣、曰一計當而已」〇むれ、くみ。〇かならず（必）きっと、決定の意。顏氏家訓「人生在世一當有レ業」〇たまたま、ちゃうど。史、司馬遷傳「一東從」上來」〇ゑ、いろどる、繪に通ず。〇ふた（蓋）〇かんむりのぬひめ。詩、鄭風「弁如二星一」

同訓異義 「會・遇・逢・遭・值・合・晤」の別は「遇（辵部九畫）」の條を見よ。○「會・儈・適」の別は「人部九畫」の條を見よ。

【會合】エ 陰門と陽門との界、蟯門後ろ。

【會式】エ 開○寺院にて行ふ佛事のより。○日蓮宗にて毎年十月十三日祖師日蓮の忌日に行ふ法會。＝御會式。

【會釋】シャク 關あいさつ、おじぎ。

【會者定離】エシャジョウリ 佛曰ふものは、亦必ず別れることある譬。世の無常を觀じたる語。○遺教經「世皆無常、會必有ノ離」

【會得】エトク 心にさとりしる、おてんする。○十國春秋「宋太宗時、或言劉乃言二國語、恐奚對難會、太宗曰、我自ー一」＝會了・領會。

【會通】クワイ ○心にわふ。○詳審、周悉博「每有ニー一、欣然會ノ意」＝會ふ。○漢字の構造法の名、六書の一、字と字とを合せて一つの文字を成すもの、人言を會とし、日月を明とする類。

【會合】クワイ 同志の友を集める。○論語「曾子曰、君子以ノ文ー一、以友輔ノ仁」

【會飲】クワイ ともありて酒をのむ。○後漢七經「鄭康成遍注三禮州閭鄉黨二門客ー一」

【會議】クワイ 多數の人が集りて議物を講ずる。○齊家寶要「ー一・會食・會茶、擧ノ版如ノ前」

【會合】クワイ あつまり合ふ。○曹植詩「浮沈各異ノ勢、ー一何時諧」

【會通】クワイ あつまりて相談する。○國語「凡祭卓書啓封、其有ニ疑事ニ公廻百官ー一」＝會商。

【會商】クワイ めぐりあふ。○史、孔子世家「以ニー一之禮ー相見、揖讓而登」

【會計】クワイ 出納を計算する。○孟、萬章「孔子曾ニ委吏ー一矣、曰、ー一當而已矣」

【會稽山】クワイ 浙江省紹興府城の東南に在り、古、吳王夫差の越王句踐を困みし所。

【會稽之恥】クワイケイ 戰敗の恥辱、越王句踐の父、允常三年間に攻られ、句踐因りて國を傳る、闔閭の子夫差、又句踐を攻めて之を會稽山に困む、句踐夢つきて遂に和を乞ふ、之を——といふ、其の後、越王、范蠡を謀臣となし、臥薪嘗膽の苦を積み、遂に又、夫差を敗りて——を雪ぎぬ。○史、貨殖傳「句踐十年謀ニ會稽ー一、遂報ニ強吳ー一」

【會見】クワイ あふ、面會する、對面する。

【會悟】クワイ さとる。○南史、羊元保傳「ー一多通」＝領會・解悟。

【會葬】クワイ はうむりにあつまる。○左、隱元「鄭伯奔ニ共ー一」

【會集】シュウ あつまる。○春秋紀聞「子弟每ー一」

【會心】シン 心によく適ふ。○世說「ー一處不ニ必在ニ遠」

【會社】シャ 多人數が集りて營利事業をいとなむ法人組織の團體。＝商公司。

【會商】ショウ 會議に同じ、會合して協議する。○商ははかる。

【會樂】ラク よりあつまる、よせあつむ。○公羊傳「古者諸侯、必有ニー一之事」○漢書、董仲舒傳「入有ニ父子兄弟之親、出有ニ君臣上下之義ー一相遇、則有ニ書考長幼之施ー、燕然有ノ文以相接、燕然有ノ恩以相愛、此人之所ニ以遇ー一也」＝會集。

【會所】ショ あつまり場所。○南史、宋武帝紀「亟ニー一ー」

【會食】ショク あつまりて食ふ。○詩「高堂ー一延ニ子夫ー一」＝會飯。

【會茶】チャ あつむ。○宋史、瀛奎律髓「今讀官ー一古今典誥一篇ー、名曰ニ會書ー」

【會政】セイ 政の成績を考へる會議「ー一ノー一致ノ事」

【會席】セキ ○よりあひのむしろ。○會の席。○圖ー一料理の略、茶の湯の懷石風につくりし料理、精じてひろく上等の料理をいふ。

【會戰】セン 雙方出合ひてたたかふ。○孫子「知ニ戰之地、知ニ戰之日、則可ニ千里而ー一ニ」

【會堂】ドウ ○衆人のよりあひをする家「公ー一」○耶蘇教の寺。＝教會。

【會屋】オク 國爲替手形、小切手、支拂命令書。

【會話】ワ あつまりて話す。＝會語。

【會戰】セン あつまりてこまか（密）な筆文「ー一密圖、絕無ノ閒」

【會社】シャ 寄り合ひてとむらふ。○後漢書、周紫陽「令ニ時二大夫以下ー一ー一ニ」

【會同】ドウ ○會は時見即ち常朝なく事あれば來朝する義、同は殷見即ち衆見の義。○詩、小雅、車攻「赤芾金舄、ー一有ノ繹」○二水合して一となる。○書、禹貢「雷夏既澤、灉沮ー一」

【會讀】ドク あつまりて讀書する。

【會反】ハン よりあひをするに要する人數。

【會賦】フ 數を計りて其の稅を賦すの淮南子「財用嗇子ー一」

【會通】ツウ 會合してちかふ。左、昭三「有ノ宰而會、不ニ協而盟」

【會面】メン であふ。面會も社甫詩「昔知二十載、再ふ君子堂、主稱ー一雖、一擧累ニ十觴」

【會立】リツ あつまりたつ。史、張釋之傳「三公九卿尚ー一」

【會了】リョウ よくわかる。＝了會・領會。

【會釋】シャク ○より合ひてかりをする。○戰爭を中しこむことを婉曲にいふことば。魏武帝遺ニ孫權一書「與ニ將軍ー一ー於吳ー」

【會話】クワイ　○むかひ合ひてはなしをする。‖對談・對話。○國外國語にてはなす。又、其のはなし。

十畫

【揭】ケツ　屋　曷

○さる(去)○武くして壯んなる貌。乾榮の借字。詩、衛風「庶士有ㇾ一」

【揭來】ケツライ　去ると來ると。漢書、司馬相如傳「倜ㇾ乘ㇾ一兮」‖去來。

月部

【月】ゲツ　月　遇書　ケツ

○つき、太陰、地球の衛星「明ㇾ」「皓ㇾ」「涼ㇾ」「曉ㇾ」○つきかげ、太陰の光影。○一年を十二分したる間の稱、月を數へる單位の稱。蘇軾詩、「連來三ㇾ食無ㇾ魚」○月ごとに、每月。中庸「日省ㇾ試」

【月城】ゲツ　西のはての遠きくにの異書、樂志「ㇾ來賓、日際奉土」

【月除】ゲツ　○つきかげ。潘岳運詩「ㇾ淸三野色、日華麗二池光」‖中月影。○月がくもる。江淹詩「良辰隨風盡、圓團明ㇾ」

【月旦】ゲツ　つきのかさ、月のまはりに生ずる環狀の雲氣(史、天官書)孟浩然詩「太虛生ㇾ」

【月下】ゲツ　○月の光のさすところ。文同、蕉賦「張ㇾ翠帷於ㇾ」‖月。○月かくだり代れる。王勃賦「景沈二四溟一」‖東溟」

【月下氷人】ゲツカヒョウジン　むすびの神、轉じて婚姻のなかうど、次の月下老の故事と、晉の令狐策が夢に氷の上に立ちて氷下の人と語りたるを占ひて、氷上の陽と氷下の陰と言を交へるは媒介の事なりと解きし故事とに本づく。晉書、藝術傳「索紞字叔徹、善二術數占候一。令狐策夢立二氷上一、與二氷下人一語。紞曰、氷上陽也、陰陽事也。君當與二人作ㇾ媒、氷消而婚成、會大守田豹、以ㇾ妹爲ㇾ子求二張公微女一、仲春而成ㇾ婚」

【月下老】ゲツカロウ　縁結びの神。續幽怪錄「韋固於二宋城一遇二異人一、倚ㇾ囊坐、向ㇾ月下ㇾ檢ㇾ書(中略)固問二囊中何書一。曰、天下之婚牘耳。固問二己妻安在一。曰、君將ㇾ來十年、妻ㇾ店北賣ㇾ菜陳婆女一。仲春而成ㇾ婚」

【月下老】ゲツカロウ　縁結びの神。續幽怪錄「韋固於二宋城一遇二異人一、倚ㇾ囊坐、向ㇾ月下ㇾ檢ㇾ書(中略)固問二囊中何書一。曰、天下之婚牘耳。固問二己妻安在一。曰、君將ㇾ來十年、妻ㇾ店北賣ㇾ菜陳婆女一。仲春而成ㇾ婚」

【月令】ゲツレイ　樂器の一。琵琶の形に似て四絃十二柱あり。‖阮咸。

【月宮】ゲツキュウ　つきのみやこ。天寶遺事「明皇與二申天師一、中秋夜遊二ㇾ」劉禹錫詩「青鳥去時雲路遠、紫娥歸處一ㇾ深」‖月府。

【月宮殿】ゲツキュウデン　つきのみやこの中にありといふ御殿。‖廣寒宮。

【月窟水】ゲツクツスイ　月の中の巖窟中より湧き出づといふ水。李白、蘇武詩「湧飮二ㇾ一、飢餐二天上雪一」

【月華】ゲツカ　つきのひかり。晉元帝詩「共向二江頭一眺二ㇾ」‖月光・月影。

【月暉】ゲツキ　つきのひかり。李白詩「林間有ㇾ一、疑是地上霜」‖月華。

【月光燈書】ゲツコウノトウショ　月の光にて書を照らして讀む。齊賢、江總傳「逕少貧、晝斫ㇾ屨、夜讀ㇾ書、隨二月光一擁ㇾ卷升ㇾ屋」

【月計】ゲツケイ　一箇月の勘定。經鉏堂雜志「有二一ㇾ、然後歲計可ㇾ知」

【月桂】ゲツケイ　○つきかげ、月光。月中に桂樹ありといふ傳說による。○科第(高等官試驗)に及第するをいふ。避暑錄「世以二登科一爲二折桂一、其後以二月中有ㇾ桂、故以謂二之一ㇾ」‖折桂。

【月桂冠】ゲツケイカン　月桂樹の葉にてかざれる冠、古、希臘羅馬にて競技の優勝者にかむらせたるもの。轉じてひろく勝利のしるしとする。

【月桂樹】ゲツケイジュ　披針狀の葉を有し、黃白の花を着ける、實は卵形にて葉とともに香料とす。ローレル。

【月閣】ゲツカク　○戰政の大臣の書齋。「瑯琊代醉月」に本づく。爲經常詩「行觀諸俗期二星使一、歸來謁二盛拜一ㇾ」○國三位以下の公卿。「一ㇾ公卿」

【月經】ゲツケイ　つきやく、めぐり。‖月事・天癸。

【月彩】ゲツサイ　つきのひかり。沈約文「日靡ㇾ一、組二燿天幹一」‖月華。

【月朔】ゲツサク　つきのはじめの日、五子之歌「季秋一ㇾ」諸書、百官志、五品以上一ㇾ奏二記室一」‖月書。

【月參】ゲツサン　每月まゐる。北史、薛愼傳「每月一ㇾ」

【月子】ゲツシ　月をいふ、子は助辭。汪元量詩「一ㇾ凝眸ㇾ裏見」‖月兒。

【月氏】ゲッシ　一に月支に作る、漢の世に、蔥嶺の西に國を建てし種族の名(史、大宛傳)

【月次】ゲツジ　○つきなみ、每月。○月のやどり、月の天空に於ける位置。陸倕、刻漏銘「嚴候ㇾ一、一始洗」

【月姉】ゲツシ　月の異名、月を嫦娥といふによる。司空圖詩「一ㇾ殷勤留不ㇾ住」‖月娥。

【月事】ゲツ　月経に同じ。黄帝内経「一一以レ時下、謂二婦人天癸応月而至一也」

【月樹】ゲツ　つき見のうてな。陸龜蒙之詩「風観要二幷景一一卿二月光一」

【月俸】ゲツ　毎月俸に納める禄金。‖授業料。

【月歩】ゲツ　月月に進歩する、時はすすむ。詩、周頌「維予小子、不レ聡敬レ止、日就月将レ学有レ緝二熙于光明一」

【月宮】ゲツ　月蝕に同じ。礼記「一一則后宮不レ脩二六宮之職一」

【月蝕】ゲツ　地球が日と月との間に挟まりて、日の光を遮ぎる為めに、月光の全部又は一部隠るる象。宋書「朔則蔵会、望則一一」‖日食。

【月夕】ゲツ　〇つきのあるゆふべ。謝霊運詩「火逝首秋節、新明弦一一」‖月夜。〇陰暦八月十五夜の称。（提要録）

【月旦】ゲツ　〇ついたち、朔日。〇評論の故事により人物の批評。後漢書、許劭傳「劭與二従兄靖一俱有二高名一、共覈二論郷党人物一、毎月輒更二其品題一、故汝南俗有二一一評一焉」

【月團】ゲツ　上等の茶の名。蘇軾、謝二孫諫議恵二茶歌一「開レ緘宛見二諫議面一、首重二一一一一」

【月兎】ゲツ　月の異名。黄滔詩「光交一一一兎」‖玉兎・銀兎・銀蟾。

【月波】ゲツ　つきかげのうつりたるなみ。王惲詩「満庭風竹一一涼」‖金波。

【月桂】ゲツ　つきにてらされるうめの花。陳與義詩「一一疎影浅香閑」

【月魄】ゲツ　月の異名。梁簡文帝、相宮寺碑銘「珠生二一一一一、鏡匿二秋霜一」‖月魂・月精。

【月白風清】ゲツパクフウセイ　月はしろく風はすずし。赤壁賦「一一、如二此良夜一何」

【月半】ゲツ　〇月のなかば、即ち十五日。書経、疏「日月相望、故以二一一一一為レ望」〇上弦・下弦の月。釋名「弦、一一之名也、其形一旁曲、一旁直、若二張レ弓施レ弦也」

【月賦】ゲツ　或さとぎりし金額を月におわりあてて小分けして払ふ。一一一払」

【月給】ゲツ　図月と、すっぽんと、似もつかざる程の大いなるちがひある譬。‖雲泥・雲壌。

【月俸】ゲツ　月月の給料。周禮、注「禄若二今月俸一也」宋史、眞宗、祥符年間、加二文武職官一一一」等・奉通ず。‖月奉・月給。

【月末】ゲツ　月の終り。通鑑考異、梁武紀「今移二之於一一一」‖月尾。

【月明】ゲツ　つきよのあかるき晩。

【月面】ゲツ　〇月のおもて。〇月の如くろるはしき顔。梁簡文帝、千佛願文「紺髪日光、蓮眸一一」‖玉顔。

【月夜】ゲツ　つきよ。魏書、李謐傳「或林三嬉於一一、或宴三於景納一」‖月夕。

【月案】ゲツ　次條に同じ。唐書、王鳥傳「諫言一一簿二以勤一士心一為レ亂」

【月俸】ゲツ　月月にあてがふ扶持米。宋史、兵志「給二官馬一一一」元史、世祖紀「命二省衛一受二一一一」‖月案。

【月輪】ゲツ　つきの異名。岑參詩「一一吐二山郭一、夜色空清澄」

【月令】ゲツ　毎年定め行ふべき政令を十二ヶ月に區別して記録したるもの。禮記に一一篇あり。傳にて時候の義とす。

【月齢】ゲツ　新月の正中時より経過せし時間の稱。陰暦の日のよりどころとなるもの。

【月蝕】ゲツ　月の異名。梁簡文帝、一一一一

㊀ある、あり、物の實在。無の反對。孟、梁惠王「庖ニ肥肉、廐ニ肥馬ニ」○う(得)○とる(取)取得する。詩、周南「采ニ采ニ芣苢ニ薄言ニ之ニ」○たもつ、もつ(保)「一ニ國」「所ニ」「奄ニ」○州の義。詩、商頌「奄ニ有九ニ」○國號又は他の語の上に冠する助辭「一ニ周」「一ニ衆」「一ニ政」○何の字の下に置きて何かあらんと調み、何程の事もなし、又、たやすしの義とす。論、里仁「能以ニ禮讓ニ爲ニ國乎、何ニ」又、何とも思はぬ義。左、僖二四「薄人狄人於ニ余何ニ爲」○大ニは易の卦の名、乾下離上。㊁また、又に通ず。書、堯典「春三百ニ六旬ニ六日」再び。孟、滕文公「邪說暴行ニ作」

同訓異語「有・在」或○有は無に對して用ふ。左傳「有ノ文在ニ其手ニ曰爲ニ爾夫人ニ」○在は沒または去と對す、有の字の下は物なり、在の字の下は居處なり「市有ノ人」「人在ノ市」また「死生有ノ命、富貴在ノ天」などにて其の則を知るべし、在は俗に、にありといふ。○或は、あることならばと疑ふ意にて、もしくはとも訓す、字書に「未ノ定之辭」と註せり「或ニ緩ノ周者ニ」の如し。

○有・又・復・還・也の別は又(部首二畫)の條を見よ。

【有爲】イウヰ ○爲す所の事あり。孟、公孫丑「騎ニ大ニ一ニ之君、必有ニ所ノ不ニ召之臣ニ」○職務がある。李白詩「英ノ懷濟機則、人生各ニ一ニ」

【有意】イウイ　こころありの兒、蘇泰傳「今乃ニ一ニ西面而事ニ秦ニ」

【有益】イウエキ　やくにたつ、ためになる。漢書、婁敬傳「日ニ一ニ、月有ノ功ニ」ⅱ有利。

【有夏】イウカ　支那本國の稱。有は助辭。夏は大の義。書經「肇ニ我邦於ニ一ニ」ⅱ中國・中華。

【有害】イウガイ　どくになる、弊害がある。不利益になる。漢書、淮南志「通ノ達有ニ三利ニ不ノ通有ニ三害ニ」

【有效】イウカウ　○きゝめがある、有驗。○其の物のやくに立つ效力がある

「一ニ期限」

【有價證券】イウカノ時價にて賣買する證券。

【有閒】イウカン ○しばらくありて。東京賦「儻然ニ一ニ、乃莞爾而笑」ⅱ有頃。○疾の少しく癒ゆる義。左傳「晉侯ニ一ニ」

【有機】イウキ 動植物の如く機能ありて、生活結死の變りあるもの「一ニ物」

【有脚陽春】イウキャクヤウシュン 到る處に恩德を施す義。春は仁にして萬物を發生せしむ、故に足ある春といふ。閻元遺事「宋璟愛ノ民懷ノ物、時人號ニ二一ニ」

【有感氏】イウカンシ 舜をいふ、堯の禪を受けて天子となる、其の先、虞(今の山西省平陽縣)に國するを以て——と稱す。有は助辭。

【有光】イウクワウ　ひかりあり、ほまれあり。書經「予論ニ一ニ」

【有形】イウケイ　かたちあり。文子「一ニ一則有ノ壞、無ノ形則無ノ壞」

【有頃】イウケイ　しばらくありて。戰國策「居ニ一ニ、倚ノ柱彈ニ其劍ニ」ⅱ有閒。

【有隙】イウゲキ　すきまあり、仲惡し。戰國策、與ニ燕人ニ一ニ」ⅱ有郤。

【有限】イウゲン　かぎりあり。徐陵文「敢ニ一ニ之微財、供ニ無期之久客ニ」

【有限責任】イウゲンセキニン 商人の特殊上損失の責任、ただ出す所の一定の資本に限らるる者をいふ。

【有口】イウコウ　くちやかまし。漢書、呂后紀「欲ニ王ニ諸呂ニ、與ニ大臣ニ一ニ者ニ」

【有功】イウコウ　いさをあり。漢書、溝洫行ノ道則德日起、而大ニ一ニ」

【有罪】イウザイ　つみがある。又、其の者。詩、小雅「舍ニ彼ニ一ニ」

【有造】イウザウ　造は爲す、造成する所ある義。詩、大雅、思齊「肆成人有ノ德、小子ニ一ニ」

【有司】イウシ　やくにん。書、立政「文王罔ノ攸ニ兼于庶言庶獄庶慎、惟ニ一ニ之牧夫、是訓用違、庶獄庶慎」ⅱ官吏。

【有志】イウシ　こころざしあり。又、其の人。禮記「孔子曰、大道之行也、與ニ三代之英ニ一ニ未ニ之逮ニ一也、而ニ一ニ焉」

【有私】イウシ　公平ならざる心あり。無私の對。後漢書、第五倫傳「或問ノ倫曰、公ニ一ニ乎」

【有事】イウジ　○しごとあり。論、爲政「一ニ一ニ弟子服ニ其勞ニ」○平生と變りたることあり、事件がおこる。

【有司】イウシ　よき收穫イウクワクありの意。書經「若農服ノ田力ノ穡、乃亦ニ一ニ」白居易詩「海內時無ノ事、江南歲ニ一ニ」ⅱ有年。

【有識】イウシキ　ものしり、見識ある人。後漢書、朱浮傳「凡庶ノ事好ノ爲ニ一ニ者所ニ笑、而爲ニ有識ニ一ニ者。

【有識之士】イウシキノシ 事理に明かなる人。後漢書、何皇后紀「——、心痛ニ怪ノ之」

【有識者】イウシキシャ 見識ある人のあざけりの詞。書、蘇軾傳「顧爲ニ有識所ニ一ニ」

【有心】イウシン ○わざとする。ⅱ故意・故意。○心に思ふ所がある。詩、小雅、巧言「能人ニ一ニ、予忖ニ度之ニ」

【有信】イウシン　まことあり。漢書、高帝紀「上曰、諸當爲ニ吾使ニ一ニ」

【有章】イウシャウ　文行あり。詩經「其容不ノ改、出ノ言ニ一ニ」左傳、動作有ノ文、言語ニ一ニ、以臨ニ其下ニ謂ニ之有ニ威儀ニ也」

【有倩】イウセン　妾怒哀楽などの情あり、なさけあり。無情の対。荘子「夫道ーー有信、無為無形」

【有趣】イウシュ　おもむきあり。孟浩然詩「沿溯自ーレー、何必五湖中」

【有終】イウシュウ　をはりを全うす。易、謙卦「勞亟、君子ーレー、吉」詩、大雅、蕩「靡ーレー不ー有ー初、鮮ークーヒーレー」

【有衆】イウシュウ　たみ、人民。朝廷又君主より人民をよぶ稱。有は助辭。書、胤征「嗟予ーー」

【有初】イウショ　はじめあり。始終参看。

【有餘】イウヨ　○つかさどるところあり。荀子「治ーレー国有ーレー道、人主ーレー」○国イウショク放寛おしらぶる學問。又、其の人。日放寛癖。

【有数】スウ　○数ふるに堪ふかり、少なし「ーーの人物」白居易詩、如二我與ーレー君心相知底ーーニ」日居指○自然の道理がある、数は術。荘子「ーレー存ニ乎於其間ニ」

【有待之身】イウタイ　○後来事を為さんと時機を待つ身の謂。「與ニ其身ニ以ーレー有ーレー待也、喪ニ其身ニ以有ーレー為也」○ライタイ凡夫の身。法華經有漏ニ死心有待、若得ニ佛慧ニ所ーレー修事成」

【有道】ドウ　道徳あり。又、其の人。論、學而「就ニーーニ而正焉」

【有道之士】ドウノ　道徳ある人。列、楊朱「列禦寇、壁ーー也」

【有智無智校三十里】ムチカウ　智ある者と智なき者との差の甚だしきをいふ。世說「魏武曾過ニ曹娥碑下ニ、楊脩從、碑背上題作ニ黄絹幼婦、外孫虀臼八字ニ、魏武問ニ脩解不ニ、答曰解、魏武曰、卿未ーレー可ーレー言、待ニ我思ニ之、行三十里、魏武曰、吾已得、令ニ脩別記ニ所ーレー知、脩曰、黄絹色絲也、于ニ字為ーレー絶、幼婦少女也、于ニ字為ーレー妙、外孫女子也、于ニ字為ーレー好、虀曰受辛也、于ニ字為ーレー辞、所謂絶妙好辞也、魏武之記與ーレー脩同、歎曰、我才不ーレー及卿、乃覚ニ三十里ニ」

【有土】ユウド　国をたもつ。又、其の国君。書經「建ニ子上下、敬徳ーレー」

【有罪】ユウザイ　悪事あり。左、僖二二、就文仲曰、君無ーレー罪、郡小ー邾亜ーレー、況国君乎」

【有徳】ユウトク　道徳ある人。論、堯曰「天命ーレー、五服五章哲、荘子「綴ニーレー」則国安」

【有年】ユウネン　五穀皆熟す。春秋、宣十六「冬大ーレー」日有秋・凶年。

【有望】ユウバウ　のぞみがある、みこみがある「ーレーの青年」

【有苗】ユウビョウ　古、南方の蛮民。書、大禹謨「誕時ーレー弗ーレー」日三苗。

【有朋】ユウホウ　朋友がある。論、學而「ーレー自遠方ニ来、不ニ亦樂ーレー乎」

【有北】ユウホク　極北の地。莊經「投ニ弊ーレー」跡「ーレー太陰之郷」

【有無】ユウム　○あると、なきと。史、越世家「変ニ易ーレー之道通」○国ユウいやおう、諾否。

【有名】イウメイ　名高し。韓愈文「徳也道不ーレー加ーレー修、而文日益ーレー」

【有名無実】ユウメイムジツ　名前のみ美にして実質の伴はざる義。漢書、黄覇傳「漢浮散横、並行偽號、ーーー」

【有餘】ユウヨ　あまり、ありあまる。史記「貧富之道、莫ニ之予奪ニ而巧者ーレー、拙者不ーレー足」

【損ニ有餘ニ】ソンユウヨ　餘りあるを減らす。老子「天之道、ーー、補ニ不足ニ」

【有用】ユウヨウ　つかひみちがある、やくに立つ。無用の対。荘、人間世「人皆知ニーー之用ニ而莫ニ知ニ無用之用ニ也」

【有隣】ユウリン　同類のもの集り来る義。論、里仁「子曰、徳不ーレー孤、必ーレー」

【有力】ユウリョク　○ちからがある。晋、大宗師「夜半ーレー者負ニ之而走ニ」○勢力「有ニ力者ニ」勢力ある人。日暗「ーーー武、無徳者帰」

【有為轉變】ユウヰテンペン　国うきよの移物のうつりかはり易きをいふ、有為は諸縁の因縁の生ずる現象。金剛經「一切有為法、如ニ夢幻泡影ニ」

【有卦無卦】ユウケムケ　国陰陽師のいふ幸運の年まはりに當ると當らざると。

【有象無象】ユウザウムザウ　○天地間に存する有形無形の物の總稱。日萬物・森羅萬象。○たくさんにあるつまらぬ物。

【有蓋僧】ソウ　国未だ得道せざる僧。大智度論「持戒不ーレー破、身口清淨、能制ニ好醜ニ未ーレー得ーレー道、是名ニーーー」

【有頂天】テン　○国九天中の最も高き處、無色界の最高天。法華經「從ニ阿鼻獄ニ上至ニーーー」日非想天。○国うはのそら、夢中。

【有難僧】ソウ　かみをそらざる僧。客嗇志、等屋盡倒、能一ーー在」

【有耶無耶】ヤ　国どっちつかず、あいまい。日不分明。

【有漏】ウロ　煩悩の中に迷ふ、世俗の凡夫の智。漏は過をもらす義、如露をいふ。無漏の對。金剛經、註「菩是ーー之因、而无ニ煩惱之漏ニ」

【有明】アリアケ　○よあけまである月あかり。又、其の月輪。○よどほしともすあかり。日常夜燈。

【有様】ヤウ　国ものごとのなりゆきのさま、おもむき。日容態・情態・狀況・狀況。

【有體】タイ　国事實どほり、ありのまま「ーーに白狀する」

肭　四畫　肉

【肭】ダク　国　肭の俗字

縮ーはついたちに月の東方に見られる義。

【服】

㊀フク　国

㊁御ニ乃部九畫ニ同じ。

㊀きもの「衣ー」「美ー」「禮ー」「儒ー」「朝ー」「法ー」〇廣く身に著くるもの、冠・履・劍など「冕ー」〇もふく、喪中に著るきもの「喪ー」五ーは斬衰・齊衰・大功・小功・總麻。又、喪に居る。〇きる（著）佩ぶ、轉じて身につける、肌を離さぬ、忘れぬ「ー膺」〇おもふ（思）〇したがふ（從）聽從する「心ー」「敬ー」「悅ー」〇くだる（降）「降ー」「臣ー」「賓ー」「悅ー」〇つかさ（職）つとめ、職務。職業。使命歷其ー」〇つとむ。其の職務をつとめる「ー政」「ー官」「ー田」〇をさむ（治）〇もちふる（用）〇藥を飲む「ー藥」俗に藥を數ふるに一ー二ーといふ。〇えびら、矢を盛る器「矢ー」筒。〇四頭だての馬車の中央に在りて轅ながえをはさむ馬。他の左右の馬を驂といふ。詩、鄭風「兩ー上襄、兩驂雁行」〇こと（事）〇ならふ。ならす（習）「ー習」漢書、鼂錯傳「ー其水土」〇ふくろふ（梟）＝鴟。〇周代の王畿の外の區域の稱、五ーは侯ー甸ー綏ー要ー荒ー。㊁はらばふ。

【服役】フクエキ 〇兵役に從ふ。罪囚の苦役につく。〇つかはれてつとめる。韓愈詩「ー一不ー辭告不ー遽」

【服忌】フクキ ふくとく、いみと。＝忌服。

【服義】フクギ 正義に從ひよる。孔子家語「ー其ー天而敬ー人、ー一ー而行ー信」

【服御】フクギョ 天子の御用の衣服車馬の類。戰國策「無ー非ー天王之ー一」

【服王】フクオウ かんむりをかざるたま。周禮、注「ー一冕飾十二旒」

【服翫】フクガン つるぎを翫ぶ。おびたるつるぎ。淮南子「ー一者期ー乎結利」

【服玩】フクガン つつみにしたかひ置す、忘れ入る。淮南、注「皆玉器ー一ー物」

【服官】フクカン みなり、よそほひ。

【服冠】フクカン 〇事につく。官すー一ー仕ー官」〇官服しつかへる。從ひつかへる。詩、柏舟「二子乃ー一、不ー一ー一」

【服喪】フクサウ したがひなれる。隨從して習熟する。左傳「安其教訓而ー一ー其政」＝居喪。軍不ー一ー三也」

【服車】フクシャ 公事に用ふるくるま、公用の車。周禮、車ー一之乘」

【服飾】フクシキ 衣服のかざり、裝束のしるし。後漢書、注「漢明帝備ー其ー一ー」

【服從】フクジュウ 服ーしたがふ。禮記「明君在ー上、則諸臣ー一」＝率從。

【服色】フクシキ 著物のいろ、支那にては時代のかはると共にー一をあらため、夏の黑色、殷の白色、周の赤色を尙ぶの類。禮、大傳「改ー正朔、易ー一ー」

【服食】フクショク 〇服用する飲食物。書、旅獒「旅ー方物」＝器用。〇道家の養生法、丹藥を服用する法「神仙ー一方」は書名、十卷あり。

【服飾】フクショク 〇衣服のかざり。漢書、王莽傳「ー一皆偉」〇祭服につけるしるし。周禮、春官「設ー其ー一ー」＝服章。

【服制】フクセイ 衣服の制度。又ひろく上下の身分相當の衣服のきまり。賈誼、治安策「ー一僭上」

【服罪】フクザイ 〇したがふ。漢書、鼂錯傳「開使兵皆ー一誅一者、以ー布數以少貶ー減也」＝從罪。服從。〇忌服のかかるみより。梁武帝詔「凡是宗戚有ー一者、並可ー賜ー泳食」

【服裝】フクサウ 御服と裝束と。晉書、百官志「僕射ー一印綬、與ー今同」

【服田】フクデン 耕作に從ふ。書經、若ー一ー力ー穡、乃亦有ー秋」

【服匿】フクトク 倒奴にて酒醋を盛る器。樂器に代用す。缶の類。漢書、鼂武傳「ー一武馬嗇ー一容廬」

【服念】フクネン おもふ。書經「要因ー一、五六日至ー于旬時」

【服之不ー衷身之災也】フクノフチュウシンノサイナリ 衣服の身に相當せざるは、人に怪まる、故に、身の災となる喩、衷は適。左、僖二四「鄭子藏出ー奔宋、野ー衆鬬、鄧伯聞而還ー之、使ー一ー」＝遽ー之、八月、殺ー之於陳宋之門、君子曰、ー一ー」

【服馬】フクバ 四頭立の馬車の中央にありて轅ながえをはさむ馬。他の左右の馬を驂といふ。詩、鄭風「兩ー上襄」＝兩驂雁行」

【服飾】フクヘキ 身につける衣、心に銘して忘れず。＝佩服。

【服物】フクモツ すべて身につける衣服器物の總稱。禮記「以ー一ー」＝車ー」

【服矢】フクシ 兵隊をそろへる時、中衣乃ー一ー」＝箙中、僕ー一ー百ー大乘ー」

【服務】フクム つとめにつく「ー一現代」

【服藥】フクヤク くすりを飲む。唐書「ー一以求ー一長年」

【服用】フクヨウ 〇身に著けもちふる。禮記「獻ー其上面后敢ー一ー其次」〇圖藥を飲む。

【服膺】フクヨウ 胸に著く、膺はむね、記憶して片時も忘れず。中庸「得ー一善、則拳拳ー一」

【服翼】フクヨク 蝙蝠の異名。揚子方言「蝙蝠自ー關而東、謂ー之ー一」

【服勞】フクラウ ほねをりの仕事にしたがひつとめる。論、爲政「有ー事弟子服ー其勞ー」

【朋】 ホウ ボウ 去

○とも、ともだち、師を同うする學友、同門のあひでし(友は同志のとも)「一友」「交ー」「親ー」○道藝・性行・事業を同うする者。易、坤卦「西南得ー」○なかま(輿)むれ(群)○たぐひ(類和)ー」は鳳の古字、鳳飛べば衆鳥之に從ふ、故に一羣の義とす。○つるのたる(兩爵)「一酒」○古、貨幣に用ひし二つの貝。詩、小雅「錫我百ー」

【朋愛】ホウアイ いつくしむとも。張說詩「主恩臨二一一」【朋遊】ホウイウ 御遊」

【朋友】ホウイウ ともだち。論、公冶長「願車馬衣輕裘、與二一一一共、敝之而無レ憾」【朋友講習】ホウイウカウシフ 同志の友相集りて學問を研究する。易、兌卦「麗澤兌、君子以ー講ー」

【朋儕】ホウサイ ともだちのみち。韓愈詩「尤貝二一一數」

【朋故】ホウコ ともだち。盧照隣詩「對レ酒憶二一一」【朋知】ホウチ ともだち。謝靈運詩「再與二一一一辭」

【朋儕】ホウサイ ともがら。元稹詩「銀鞍風二一一一」【朋儕】ホウサイ 同輩。

【朋曹】ホウサウ なかま、ともがら。何遜詩「樞機慎二僕隸一、媒孽畏二一一一」【朋儕】ホウサイ 朋輩・朋類。

【朋執】ホウシフ ともだち。盛唐「不レ可三相視如二一一一」【朋比】ホウヒ かたよりに親みくみする。唐書、諫諍志「羣臣一一、莫レ敢レ言」

【朋輩】ホウハイ ともだち、なかまの親志。鄧析子「君子之心、忠二而性剛急、不レ能レ爲二同一一」【朋儕】ホウサイ なかまの意。晉書「摯虞二一一、稱爲二高雅一」【朋儕】ホウサイ 朋輩・朋儕。

【有レ朋自二遠方一來】トモアリテエンポウヨリキタル 學問上遠ければ關係遠方よりたづね來りて教を請ふ。論、學而「ー一一、不二亦樂一乎」

五畫

【朐】 ク 虞

くびき(車軛)左、昭二六「繫二一一一」【朐偪】クヒキ 汰齡」ー朐。

【朏】 ヒ ホウ 月尾 ヘイ 隊

みかづき(三日月)

六畫

【朔】 サク 藥

○ついたち、月の第一日「一旦」「月ー」釋名、釋天「ー、蘇也、月死復蘇生也」○轉じてはじめ(初・始)證、證運「皆從二其ー」○こよみ、古、天子が歲末に諸侯に頒ち與へたる來年十二個月のこよみ。論、八佾「子貢欲レ去二告ー之餼羊一」轉じて天子の政令「奉二一一」○きた(北)の方「一方」「一北」「陰ー」書、堯典「ー、北方也」ー、虛也、北方萬物盡、故言ー也」

【朔漠】サクバク 北むきのまど。陸雲、登臺賦「圖二南窗一而蒙レ曜兮、啓二一一一而授レ箱」

【朔氣】サクキ 北方の氣。王官傑、詠レ雪詩「禁園凝二一一一、瑞雪掩二長曛一」

【朔禽】サクキン 雁の異名、北方の鳥の義。謝靈運、山居賦「ー一避レ涼」【朔雁】サクガン 雁。

【朔晦】サククワイ 陰曆のついたちと、みそかと。漢書、李尋傳「ー一正二終始一、弦爲二關鑰一、望成二君德一」魏志、高堂隆傳「技望ー一」

【朔月】サクゲツ 月のついたち(儀禮、士喪禮、注)禮、玉藻「ー一少牢五俎四簋」【朔日】サクジツ ついたち。陰曆の月の第一日。詩經「十月之交、ー一辛卯」

【朔氣】サクキ 北方のえびすの地のゆき。李白詩「迢迢五原關、ー一亂二邊花一」

【朔旦】サクタン ついたちのあさ。書、大禹謨「正月ー一、受二命于神宗一」史記「ー一冬至、與二黃帝時一等」

【朔旦冬至】サクタントウジ ついたちのあさ、冬至の節に會ふ。十一月甲子朔旦冬至は、曆と制する起元となるなり【宋書、曆志】

【朔地】サクチ 北方のえびすの地、朔北の地。【朔土・朔野】

【朔方】サクハウ ○北の方。書、堯典「申命二和叔一、宅二一一一」【朔北】○北方の地名、ー一郡は今の內蒙古の鄂爾多斯。

【朔望】サクバウ 陰曆の月のついたちと十五日と。後漢書、岑彭傳「以二ー一一問二大夫人起居一」宋史、岳飛傳「ー一設二祭于其家一」

【朔漠】サクバク 北方流沙の地、北方の沙漠の地。雪賦「河海生レ塵、ー一飛レ沙」杜甫詩「一去紫臺連二ー一一」

【朔風】サクフウ きたかぜ。夏侯湛詩「ー一動二秋草一、邊馬有二歸心一」【朔吹】北風・朔吹。

【朔気】サク 北方のつめたい気。「一一吹二窮辺一」

【朔風】サク 北方のかたよりたる地。張衡詩「北望二朔漠一」杜審言詩「辺地多二風沙一」

【朔北】サク 北方の地。李陵書「幾死二一一之野一」

【朓】チョウ 朔の正字

○つい立ちつき。陰暦の朔日に東方に見える月。○縮(ちぢ)むは、ちぢまる。心宮ふかく伸びざる貌。淮南子、五行訓「一縮而不伸」

【朕】チン 我(われ)(我)おのれ。古は上下貴賤の別なく自称に用ひしが、秦の始皇の二十六年以後、定めて天子の自称とす。獨断「古者上下共之。秦始皇以来、天子独以為二尊称一。臣下不レ得レ以相レ呼也」

【朕兆】きざし。しるし。温庭筠「一一二禽字一」

【朖】テツ 明

○みそかつき、晦日に西方にあらはれる月。○月かたむく（月側）

【朗】ロウ 明 朗

ちぢまる、ちぢむ(縮)へる。漢書、遊俠伝「民日削月一」人民が日日月月に弱る。

【朘】セン 朘

【望】ボウ・マカ ボウ・マカ 望

○のぞむ、遠く見わたす「遠一」「瞻一」○ねがふ(願)「希一」「企一」○のぞみ「志一」○ねがひ「欲一」○やうす(外観)○一一はばう(幅輻)一説に、立ちおりて後を顧みざる貌又、心から失ふ貌○うかがふ(視)「窺一」○ほまれ、人に仰がれる人一「徳一」○うらむ、うらみ、にくむ、怨一」史、袁紹傳「絳侯一一震恐」○もち、陰暦十五日の夜。此日、日月相望み向かふ、故にいふ。酵転、後赤壁賦「正統十月之一」○柴をたきて山川の神を祭る。又、其の祭。書、舜典「一于山川」

【望衡】ボウコウ 望・臨・泊・落・眺○望は高きをのぞみ、遠きを望むなり、又人に仰ぎて、見上げられるにも用ふ、人望・名望の類なり。詩經「成民所一」また高遠を望むより、心に不満に思ひてうらむ義にも轉用す、絶望・失望の如し。○臨は高きより見下すなり。詩經「戦戦就就、如レ臨二深淵一」又身分の尊き人が、卑き人にのぞむにも用ふ、君臨・臨レ政の類。○泊は近に同じ、臨と同義にしてせまし。孟子「在二中國一而逼二四夷一」○眺は遠くをながめ望むなり、同二以遠眺之一の類。

【望衡之情】子の親を思ふこころ。晋書、狄仁傑傳「仁傑至二太行山一、反顧、見二白雲孤飛一、謂二左右一曰、吾親舎二其下一、瞻仮久之」

【望岳】とほきをのぞむ。韓愈文「遠臨二衡山一、作二南嶽一」

【望気】遠距離にある物體を明かに見るに用ふるめがね、反射——と屈折——との二種あり、と進めがね。千里鏡。

【望気】雲の形状を見て吉凶を占ふ術、武帝紀「下方士一一候二其気一云」

【望郷】ふるさとをこひおもふ。故郷・両郷・郷晩駅・遠民一一一孤客倚二高樓一」思郷・懐郷。

【望鮪】たちのうを。太刀魚。

【望外】おもひのほか、期待せし以上「一一の幸」

【望梅】切に望む意。孟、梁恵王「民望レ之、若二大旱之望二雲霓一也」

【望月】○もちづき、満月、陰暦の十五夜の月。○月をながめる。李白、物詩「西樓一一裴回國」

【望見】はるかにのぞみみる。漢書、郊祀志「天子自二雍中一一一焉」

【望祭】山川のまつり。宇解参看。書、舜典、傳「九州名山、大川五嶽、四瀆之属、皆一時一二之」

【望子】かんばん。風俗「青帘、酒家一一」帘は旗の一種。

【望紀】柴を燔きて山川をまつる。周禮、夏官「男巫掌一一一」史、秦始皇紀「至二湘山一、逢二大風一、幾渡不レ得。上問二博士一曰、湘山祠何神。対曰、聞二堯女一葬二於此一。乃伐レ樹、赭二其山一」

【望春】辛夷の異稱。

【望舒】月の取者の運転する御者。離騒「前一一一使二先駆一兮」

【望色】顔色をながめ見る。史、扁鵲傳「越人入レ秦、秦人之為二方也一、不レ待二切脈一、一一望レ色」

【望気】刻を食りて見ることを知らざる所に居るまにもなほ足らんことを求むる。後漢書、陳寵傳「司馬懿王於前掠一日、今克二漢中一、益州震動、遣兵臨レ之、勢必瓦解、掠曰、人貴レ無レ足、既得レ隴復レ一一」

【望族】郷黨に推重せらるる家がらの栄観文「王陽二兵、最為二一一、江左以来、公卿将相、出二其門一者十七八」

【望塁】ものみやぐら。望楼。

【望進】世をのぞむ。栄達を希望

する。陳子昂文「臣本蜀之西夫、官不ノレ一」

【望秩】バウ　望祀に同じ。漢書、郊祀志「―ニ山川」

【望塵】バウ　○ちりの起るを見る。五代史「周德威勇而多ノ智、能ノレ一知ニ敵數」○客の來るを待つ譬。晉書「石崇與ニ潘岳ニ諂ニ事賈謐ニ一ニ黨成君ニ、每ノレ出崇降ニ車路左ニ一ノレ一而拜」

【望帝】バウ　杜鵑ボトトギスの異名。華陽國志「周失ニ綱紀ニ一蜀王杜宇稱ノレ帝曰ニ一ニ爲ノレ鱉除ニ水患ニ一有ノレ功、後禪ノレ位、升ニ西山ニ隱焉、時適ニ二月子規鳴、因名ニ子規ニ一曰ニ杜宇ニ一曰ニ一ニ一ニ一ニ成都記ニ一ニ魂化爲ノレ鳥、名曰ニ杜鵑ニ」

【望洋】バウ　○失意の貌。論語、檀弓「ニ一焉、如ニ有ノレ從而弗ニ及ニ」○惹づる貌。孟、公孫丑「ニ一然歎ノレ之」

【望風】バウフウ　○風采を想望する。李陵文「ニ一ノレ懷想」○風聲バウを仰ぎ望む。陳籍文「ニ一ノレ震慄」

【望夫石】バウフセキ　遠方に行く夫の離別を悲み、遂に其後姿を望み、こがれ死にて化せしといふ石。神異經「武昌北有ニ望夫山、化而爲ノレ石」

【望梅】バウ　のぞみしたふ。魏武詩「ニ一給不ノレ解、點ニ酥新詩文ニ」＝仰慕。

【望羊】バウ　遠く視る、とりとめなし。史、伸尼世家「其爲ノレ人、黯然而黑、潭然而長、眼如ニ一ニ一」＝望洋。

【望洋】バウ　廣くしてあてもなき貌。莫詩「寄ノレ言漆園叟、此去眞ニ一ニ」＝望羊。

【望屋】バウ　長者貴人に謁せんことを願ふ譬。面を拜すといふを誰して其の屋を望むといふ。陸游詩「柚ノレ詩即ニ東府ニ拜ニ求ニ一ニ」

【望楫】バウ　ものみやぐら。左傳、注「樓車、車上ニ一ニ」＝望樓・望櫓。

【望樓】バウ　○ものみやぐら。鄧讓詩「唯有ニ一ニ對ニ明月ニ」○國遠望に適する海岸に設ける海軍用の物見臺。

【朗】

明（日部四畫）の古字。

【朗】

ラウ　淺　又、眼に作る

○ほがらか、あきらか（明）「清ニ一」「高ニ一」「爽ニ一」「明ニ一」「疏ニ一」○清くほがらかに歌ふ。孫綽、遊ニ天台山ニ一賦「ニ一長川ニ」＝朗吟。國○古、漢詩文の秀句を訓讀に和げて誦ひし節ノ○和漢ニ一集は四條公任撰、和歌と漢詩文との類似の者を拔擧しニ一の書とす。

【朗吟】ラウ　ほがらかにうたふ。鄭谷詩「恨有ニ一ニ一ニ晩景ニ」＝朗詠。

【朗月】ラウ　あきらかなるつき。陸機詩「ニ一照ニ閨房ニ」＝明月。

【朗悟】ラウ　智あきらかにさとし。宋史、高宗紀「姿性ニ一、博學强記」＝敏悟・朗達・開悟・明悟・英朗・聰朗。

【朗照】ラウ　ほがらかにひかりてらす。雲笈七籤、三元ニ一ニ一、五神靈清」

【朗暢】ラウチヤウ　ほがらかにうそぶく。王褒文「高吟ニ一、擧ノレ槍攘ノレ臂」

【朗然】ラウゼン　ほがらかなる貌。晉書、衛玠傳「若ニ明珠之在ニ一側、ニ一照ノレ人」＝朗朗。

【朗達】ラウ　ほがらかにしてひろく通達する。晉書、孫盛傳「神情ニ一、常有ニ世外之懷ニ」＝通朗・明達。

【朗旦】ラウ　夜がからりとあけたる頃。支遁詩「鳴禽戒ニ一ニ」

【朗徹】ラウテツ　ほがらかにしてのびやか。文賦「論精微而ニ一ニ」＝朗通。

【朗笛】ラウ　ほがらかなるふえの音。陸機賦「鼓鼓密而舍ノレ響、ニ一疎而吐ノレ音」

【朗誦】ラウ　ほがらかによむ。賈壹詩「閉ノレ門謝ニ塵鞅、展ノレ卷自ニ一ニ一」＝朗誦。

【朗抱】ラウ　くもりなきこころ。抱は懷抱。李翺玉詩「ニ一雲開ノレ月、高情難見ノレ秋」

【朗拔】ラウ　あきらかにしてすぐれる。陸機文「風度蕭曠、器識ニ一」

【朗朗】ラウラウ　ほがらかなる貌。世說、容止「時人目ニ夏侯太初ニ一ニ一如ニ日月之入ノレ懷ニ」＝朗然。

【朖】

八　畫

朗（前條）の本字。

【期】

淺

○あふ（會）會ふべき時。○ときめたる日時「約ニ一」「弛ニ一」○とき（時）「花ニ一」○あてる（當）目あてをつける。○かならず（必）左、哀十六「ニ一死、非ノレ勇也」○をはる（卒）○まつ（待）○ちぎる（約）「心ニ一」詩、鄘風「ニ一我乎桑中」○まこと（信）○かぎる（限）約束の日を限る。○さだめる。○ひとまはり（一周）＝朞。○百年。曲禮「百年曰ニ一」○一年の喪「ニ一服」○ニ一はどもる（口吃）

【期頤】キイ　百歳の齡。曲禮「百年曰ニ一ニ一」頤は養、飲食居處皆人に養はれる。

【超ノレ期】テウキ　期限を定める。後漢書、龐參傳「解ニ徙程栝一與ニ一ノレ俱至」＝刻ノレ期。

【逾ノレ期】ユキ　期限をのばす。韓詩外傳「事臣請ニ一ノレ」

【期閏】キジュン　限め定めし年月日時の閏。

【期期艾艾】キキガイガイ　口のどもる貌。晉書、故事「口訥曰ニ――」史、張丞相傳「周昌爲ノレ人吃、又嫌怒曰、臣口不ニ能言、然臣期期知ニ其不可ニ」期は必。世說、言語「鄧艾口吃、語稱ニ艾艾ニ」

【期會】キクワイ　時を約して集る。又、其の

史、項羽紀」——而擊ノ楚」
【期月】キゲツ　〇満一箇月。中庸「擇ニ乎中庸ニ而不レ能ニ一ー守レ也」〇満一周年。論、子路「有レ用レ我者」ーー而已可レ也」
【期限】キゲン　時間のかぎり。劉孝威詩「乗除無ニー」想ノ歸安可レ論」
【期日】キジツ　日を定める。又、定めたる日、日限。周禮「令ニ萬民時斬ノ材、有ニーー」
【期成】キセイ　必ずなさんと志す「ーー同盟會」ニ必成。
【期待】キタイ　當然の結果を生ずること。
【期節】キセツ　きり　時節。ニ季節、時候。
【期日】キジツ　あてにしてまつ。王維詩「ーー猶ニ落花一徒過」ーー」
【期内】キナイ　一定の時限内。周禮「ーー」
【期年】キネン　満一箇年。史、燕世家「不ニーー」千里馬至矣ニ」ニ一周年。
【期望】キボウ　あてにしのぞむ、期待して望むこと。劉治詩「ーー秋風回、一婦無ニ消息ー」
【期服】キフク　一箇年の喪。ニ斉衰
【期満免除】キマンメンジョ　法律上一定の期限を経過することによりて刑の執行又は義務の履行を免ぜられること。
【期門】キモン　〇後漢の時の天子の護衛兵「後漢書、儒林傳」〇軍門。李華、弔古戰場文「主將驕ノ敵、ーー受レ戰」
【期約】キヤク　やくそく。詩經、疏「男子之初、與ニ婚人ニ有ニーー一ニ矣」ニ契約。
【碁】キ　支　めぐる(匝)一周。書、堯典「ー三百有六旬有六日」期に通ず。
【碁子】キシ　一周してまた其の月に復ること、故に其月の合字。
【碁月】キゲツ　〇満一箇年。ニ期月。〇満一ケ月。
【碁年】キネン　満一箇年。晉書、周處傳「志存ニ義烈ノ言必忠信、克レ己ーー」
【朝】テウ　簡　又、晁に作る　〇あした、あさ(旦)轉じて一日、一時などの義に用ふ。論、顔淵「一ー之慾忘ニ其身ニ」〇つと(早)〇めす(召)〇とふ(訪)等ねる。史、司馬相如傳「臨邛令謹爲ニ舉敬、日往ニ相如ニ」〇あつまる(會)禮、王制「耆老皆ニ于ニ庠ニ」〇君主が政をとり行ふ所「ー廷」論、鹽鐵「與ニ下大夫言ニ」〇やくしょ(官廳)〇我が君主の治下。〇一人の君主在位間の稱。〇一系の君主がつづきて統御する間「漢ー」「唐ー」「南北ー」〇朝廷へ出る、參內する、臣が君にまみえる「參ニ」〇向かひ行く、至る。書、禹貢「江漢ー宗于海」〇花ーは花ざかりのあさの義にて陰暦二月十五日の異稱。
【朝衣】チョウイ　朝廷に出づる制服。ニ朝服。
【朝威】チョウイ　天子の威光。後漢書、趙岐傳贊「郤隱出レ處、寄命ニーー」
【朝意】チョウイ　朝廷の意思。又天子のおぼしめし。ニ朝旨。
【朝儀】チョウギ　朝廷ののり。武后文「上不レ泪於ーー、下無レ損ニ於官誡」ニ朝憲。
【朝右】チョウウ　朝廷の高官。南史、何承天傳「性剛儁、不レ能ニ屈意ーー」
【朝隱】チョウイン　朝廷に仕官すれども隱士の心操を守る義。揚子法言、淵騫「或問、柳下惠非ニーー者歟」
【朝雲】チョウウン　〇あさのくも。宋玉、高唐賦「旦爲ニーー、暮爲ニ行雨ニ」〇蘇軾の妾の名。蘇軾、朝雲詩序「予家有ニ數妾、相繼辭去、獨ーー隨レ予南遷」
【朝雲暮雨】チョウウンボウウ　男女のちぎり、情交、前條參看。巫山(五六〇頁一段)の故事に本づく。
【朝謁】チョウエツ　朝廷にて君に謁見する。杜甫詩「權門頻ーー、何如穩蜜眠」
【朝宴】チョウエン　朝廷のさかもり。顧延之詩「陪ニ顧ニ天顧ニーー留ニ歡情ニ」
【不レ暇レ朝】イトマアラズチョウス　朝の間、朝はあさ起きてより食事するまで。詩、衞風「誰謂ニ河廣ニ一ニ葦ニ不レ容レ刀、誰謂ニ宋遠ニ一ニ舍ーー」
【朝恩】チョウオン　朝廷のめぐみ。後漢書、李元通傳「吾荷ニーー作ニ藩東夏ニ、當レ守ニ臣節ニ以ニ忠報ニ國ー」
【輟レ朝】テッチョウ　廢朝に同じ、朝廷の政事を休む。日本紀略「唐會要、開元十八年十一月、張說薨、ーレ朝ニ元會ニ」
【朝家】チョウカ　帝王のいへ。殘唐古詩「ーー遣レ使賜ニ紀典ニ」ニ皇家、皇室、帝室、王家。
【朝賀】チョウガ　朝見して賀詞を述べること。又、其の賀詞、よごと。韓愈詩「大明ニ朝堂ニ受ニーー」
【朝衙】チョウガ　おき早く朝廷に出勤すること。白居易詩「城上晨鼓發、ーー聞晩衙」ニ早衙。
【朝綱】チョウコウ　朝廷ののり。ニ綱紀、國ニ無用ーー自有レ倫」
【朝暾不レ出レ門】チョウトンモンヲイデズ　朝やけに用ふる飛、故に門を出でずといふ譬。范成大詩「朝暾不レ出レ門、春寒行千里ニ」春宮は晴れる飛。
【朝歌夜絃】チョウカヤゲン　朝夜の別なく音樂を奏する義。杜牧、阿房宮賦「ーー、擧ニ宮人ニ」
【朝紀】チョウキ　政府ののり。朝廷の風紀。ニ朝綱。
【朝規】チョウキ　朝廷のおきて。沈約文「必能學ニーー、手邊籍ニ」ニ官規。
【朝飢】チョウキ　あさうう、朝の空腹。李白

詩「他鄉不レ下レ箸、此席忘二一一」
【朝寄】ヂウ　朝廷よりの委任。晉書、謝安傳「安雖レ受二一一一、然東山之志、始末不レ渝」
【朝貴】ヂウ　貴くして權勢ある朝臣。晉書、王莽之傳「未二嘗詣二一一一」
【朝暉】ヂウ　あさひのひかり、暉は日光。杜甫詩「千家山郭靜二一一一」沈仲濟、洛陽橋記「一一夕陰、氣象萬千」‖晨暉。
【朝儀】ヂウ　朝廷に於ける儀式、典禮。周禮、夏官「正二一一之位、辨二其貴賤之等一」
【朝議】ヂウ　朝廷の相談。歐陽修詩「前年斷議罷二一一一不レ容レ乞」‖閣議。
【朝暾】ヂウ　あさひ。李頎詩「含情望二於夕一、並二希露手一」‖朝旭。朝暘。
【朝菌】ヂウ　あさ生えて晩に枯れるといふきのこ。轉じて極めて短命なる者に用ふ。莊子「一一不レ知二晦朔一、蟪蛄不レ知二春秋一」‖蜉蝣・槿花・朝露・朝槿。
【朝樣】ヂウ　むくげ、朝に開き夕にしぼむ。故にうつろひ易きものに喩ふ。王衍雜詩「逝意在二寒松一、君心逐二一一一」‖木槿。
【朝覲】ヂウ　天子にまみゆ。孟、萬章「一一訪二試者一、不レ之レ益、而之レ歷」
【朝旭】ヂウ　あさひ。馮子振賦「一一曾而照透明」‖朝暾・曉暾。
【朝化】ヂウ　朝廷の敎化。隋書「申二國威于萬里一、宣二一一于一隅一」
【朝命】ヂウ　臣下が朝廷にあつまる。晉書「元熙元年、改レ元不二一一一」
【朝光】ヂウ　あさひのひかり。宋史、律歷志「鷄唱詞、一一發、萬戶開、擧二臣賀一」
【朝官】ヂウ　今の勅任官以上。宋史新編「凡一品以下、常參之者、謂二之一一、總書郎以下、未二常參一者、謂二之京官一」
【朝服夕弊】ヂウフクセキヘイ　朝夕にみる。張玄述、名畫記「高平公進二書畫一表曰、前代帝王、多求二道逸一、——、收二臨于朝一」
【朝聞】ヂウ　帝王の居所の李中詩「錄性疑二一一一、道涉二路塵一」‖宮闕。
【朝見】ヂウ　臣下が參內して天子に拜謁する。‖朝謁・朝覲。
【朝省】ヂウ　朝廷のめぐみ。魏書「寄二一一一來敬伸從」‖朝恩・天恩。
【朝恩】ヂウ　朝廷ののり。梁書、謝覽傳「從二道歸一、會レ意便行、不レ拘二一一一」‖朝旨。
【朝權】ヂウ　まつりごとの權力。晉書、胡況傳「況季年恢二正足之分一、不レ與二一一一」‖政權・政柄・朝柄。
【朝謁】ヂウ　お上へのしかり。‖天譴。
【朝貢】ヂウ　諸侯又隣國などが天子に來朝してみつぎものをたてまつる。‖朝獻。
【朝服】ヂウ　朝廷の席次。宗文翬詩「東班蓋二一一西桃獻二後宮一」
【朝裁】ヂウ　朝廷のさばき。‖天裁。
【朝霞】ヂウ　あさしも。左思詩「秋風何烈烈、白露霑二一一一」
【朝參】ヂウサン　官人が朝廷にまゐる。杜甫歷志「鷄唱詞、一一發、萬戶開、擧二臣賀一」
【朝散大夫】ヂウサンタイフ　朝官のみにして其の職掌なき大夫、文武官吏の德望ある者に賜はる資格。文獻通考、職官考「——、隋置散官、唐因レ之」
【朝三暮四】ヂウサンボシ　宋の狙公の故事により、詐術を用ひて人を愚弄するにいふ。列、黃帝「宋有二狙公者一愛レ狙、養レ之成レ羣、能解二狙之意一、狙亦得二公之心一、將レ限二其食一、先誑レ之曰、與二若芧一、朝三而暮四足乎、衆狙皆起而怒、俄而曰、與二若芧一、朝四而暮三足乎、衆狙皆伏而喜、物之以二能鄙一相籠、皆倣二此也一、聖人以二智籠二衆狙一也、名實不レ虧、使二其喜怒一哉」
【朝士】ヂウ　〇周代の官名。周禮、秋官「一一掌二建邦外朝之灋一」〇朝廷に仕官せる士。劉禹錫詩「休レ唱貞元供奉曲、當年一一已無多」
【朝市】ヂウ　〇官府と市場と。〇朝開く市。周禮、司市「一一朝時而市、商賈爲レ主」
【朝次】ヂウ　朝廷の席次。後漢書、馮行襲、應レ在二一一一」‖朝列。
【朝旨】ヂウ　朝意に同じ。
【朝臣】ヂウ　〇朝廷に出仕する役人。史、灌夫傳「上問二一一一」〇國姓の名、第二等に位するもの。又四位以上の階位ある人の敬稱。
【朝秦暮楚】ヂウシンボソ　住所の定らざる義。朝は秦に在りて暮には楚に在る。晁補之、北渚亭賦「托二生蓬于四方一、固朝秦而暮楚」
【朝正】ヂウ　朝廷と社稷と。王微詩「社情非二騙驄一、猛氣操二一一一」
【朝章】ヂウ　朝廷の典章。後漢書、胡廣傳「達二練事體一、明二解一一一」
【朝從】ヂウ　朝見と扈從と。參內とお供と。史、淮陰侯傳「信知二漢王長二惡其能一、常稱レ病不二一一一」
【朝宿邑】ヂウシュクユウ　諸侯の大功ある者に對し、入朝する時、宿泊する爲めに賜はる京師の采地。公羊傳「天子之制、諸侯貴右二一一一」
【朝稱暮稱】ヂウショウボショウ　朝うそをついてくれにかゝる、時日の無き喩。晉書、祖納傳「一一、善惡未レ定矣」
【朝餉】ヂウ　〇あさめし。朝の食事。‖朝飧。朝餐。〇かれひ。國朝飯、又天子の朝の供御。
【朝升】ヂウ　あしたに官位がのぼる。張耒詩「終身軒冕亦何須、況有二一一而暮黜一」
【朝鐘】ヂウショウ　あさつくかねの音。李咸用詩「一一暮鼓不レ到レ耳、明月孤雲長挂レ情」‖長鐘・曉鐘。
【朝政】ヂウセイ　朝廷のまつりごと、廟堂の政治。張衡、東京賦「詢二一一一」

【朝陵】ちょうりょう　朝早く陵墓に上る。詩、曹風「薈兮蔚兮、南山ー」

【朝生暮死】ちょうせいぼし　朝生は木槿の類。朝咲き夕に死す。人の短命に喩ふ。戰國策「君危二於累卵一而不レ安二於朝生一」

【朝夕】ちょうせき　〇あさゆふ。左、昭三「小人近レ市、ー得レ所レ求」〇旦暮。朝暮。朝晡。〇あさづとめと、夕づとめと。周禮、夏官「道僕」注「朝見曰レ朝、暮見曰レ夕」〇あけくれ。ふだん。平生。

【朝餐暮飧】ちょうさんぼそん　朝にはなづなを食ひ、暮には糟をなむ。極貧の生活。韓愈、送窮文「大厦四年、ー」

【朝宗】ちょうそう　〇諸侯の天子に謁見する義。春見を朝、夏見を宗といふ。〇轉じて、多くの河水の海にあつまり注ぐにいふ。書、禹貢「江漢ー二于海一」

【朝奏夕召】ちょうそうせきしょう　朝上奏して夕に召される。早く任用せらるる義。唐書、魏元忠傳「布衣之人、儻レ奇抱レ策、而望二ー一、豈易レ得哉」

【朝妾暮召】ちょうしょうぼしょう　前條に同じ。史、主父偃傳「乃上二書闕下一、ー一、入見所言九事、其八事爲二律令一所レ施行一」

【朝然】ちょうぜん　あさめし。杜甫詩「ー一是葦根、葬食乃樹皮」〇朝餉。朝餐。朝食。

【朝宴】ちょうえん　前條に同じ。

【朝飯】ちょうはん　朝めし。蘇軾詩「御到二龍山一未ー一」

【朝服】ちょうふく　朝廷に出づる制服。論、鄉黨「吉月必ー一而朝」〇朝衣。

【朝聞夕改】ちょうぶんせきかい　朝に過を聞けば、夕に改める。晉書、周處傳「古人貴二ー一、君前途尚可三且忠志之不レ立、何憂二名之不一彰」

【朝聞夕死】ちょうぶんせきし　あさ人道の教を聞きて知れば其の夕に死しても遺憾はない。論、里仁「子曰、朝聞レ道、夕死可矣」に本づく。

【朝柄】ちょうへい　政の權力。漢書、劉向傳〇朝權。

【朝聘】ちょうへい　諸侯が天子の御機嫌をうかがふ。左、襄八「公如レ晉、朝且レ聘ー一之數一」

【朝晡】ちょうほ　あさの膳。陳子昂文「ー一夕膳、餘色亦レ歡」〇朝餐。

【朝晡】ちょうほ　あしたと、ゆふべと。魏志、董卓傳、注「ー一上レ飯、何用レ米爲」自居易詩「ー一頻二餅餌一、寒暖賜二衣裳一」〇朝夕。朝作。朝暮。

【朝漠】ちょうばく　朝廷のはかりごと。沈約文「ー一謀猷、策略選霞」

【朝暮人】ちょうぼじん　命の旦夕に迫れる人。罪ありて、間もなく死に就く人。漢書、楊惲傳「大僕定有二死罪數事一、ー一也」

【朝務】ちょうむ　朝廷のまつりごと。南史、齊武帝王融傳「融不レ參ー一而言レ事、密謀多見二信納一」

【朝暮】ちょうぼ　あさのきり。七命「霧ー一、越二赤霄一」唐太宗詩「寒野凝ー一、霜天散二夕霞一」〇晨霧。

【朝命】ちょうめい　朝廷の命令。耶律楚材詩「奉レ表遥ー一、尊レ王應二詔旗一」

【朝名市利】ちょうめいしり　名を爭ふは朝廷に於てし、利を爭ふは市上に於てす。戰國策「張儀曰、臣聞、爭レ名者於レ朝、爭レ利者於レ市、今三川周室、天下之市朝也」

【朝野】ちょうや　朝廷と民間と。晉書、杜預傳「ー一清晏」張協詩「昔在西京時、ー一多二歡娯一」

【朝陽】ちょうよう　〇山のあさひに向ふ處。爾雅「山東曰ー一」詩、大雅、卷阿「梧桐生矣、于二彼ー一一」〇あさひ。呂温詩「晉晉ー一薦、心憐暮鳥還」〇旭日。朝旭。朝暾。朝曦。晨暉。

【朝螻蛄蚊】ちょうろうこぶん　朝には螻あつまり、蚊には蚊さわぐ、小人のはびこるに喩ふ。韓愈、雜詩「朝螻不レ須レ驅、蚊蚊不レ可レ拍」

【朝來】ちょうらい　あさはやくより。世說、「四山ー一、致二有二爽氣一」

【朝令暮改】ちょうれいぼかい　朝に命を下して夕にあらためる。法令の頻繁に改まる義。鼂錯、論レ貴レ粟、「急政暴虐、賦斂不レ時、朝令而暮改」

【朝列】ちょうれつ　朝官の列位。謝靈運詩「脫レ冠謝二ー一一」〇朝班。

【朝露】ちょうろ　あさのつゆ。はかなきものの喩。漢書、蘇武傳「人生如二ー一」

何久自苦如ㇾ此」

【朝顔】ガホ　圀つる草の一種。夏時淺斗狀の美花を著ける。〓牽牛花。

【朝聞ㇾ道夕死可】ニチブンニシテセキニシスベシ　朝に人道を聞ふれば、夕に死すとも憾なし。道徳の人生に必要なることを切言せしなり。論、里仁「子曰、――矣」

【朝不ㇾ謀ㇾ夕】アシタニシテユフベヲハカラズ　事急にしてあふるに暇なき義。左、昭元「――、何其長也」李密、陳情表「人命危淺、朝不ㇾ慮ㇾ夕」

十二畫

【朧】トウ　東

〇つきのでしほ（月初出）〇月あきらかならんとす。

【朧朧】トウ　おぼろなる貌。陶潛詩「湖色漸瀲灩、海光漸――」〓朦朧。

【朧魄】トウ　月の初めて出でて明かならんとする貌。潘岳、秋興賦「月――以含ㇾ光」

十四畫

【朦】ボウ　東　通音モウ

おぼろ、月の將に入らんとする義。

【朦朧】モウロウ　〇おぼろなる貌。〇空がうす暗くして雨の降らんとする貌。晁補之、求志賦「冬――將ㇾ雨」

【朦朧】モウロウ　おぼろなる貌。月の將に入らんとする貌。李嶠詩「――烟場晩」

十六畫

【朧】リウ　東

つきので（月初出）おぼろ。

【朧月】ガツ　おぼろづき。范成大詩「紙窗淨色如ㇾ――、又了浮生一夜眠」

【朧光】コウ　おぼろ月の光。張籍詩「明月曜ニ高景一、――照ニ衣裾一」

【朧明】メイ　おぼろなる狀の光線。杜詩「對ニ牖前山樹一、野花娯ニ亂月一――」

【朧朧】ロウ　おぼろなる狀の光線。李嶠詩「非ㇾ明非ㇾ暗――月、不ㇾ辨ニ平蕪遠近一」〓朧朧。

木部

【木】ボク　屋

〇き、立ち木の總稱。草ニ對シ、樹ニ「高ー」「果ー」「林ー」枝幹長大なるを喬木、枝幹短小なる者を灌木といふ。〇ざいもく「ー材」〇木材にて造りしもの「ー像」「ー刀」「ー主」〇すなほ（質樸）ありのままにしてかざりなし「ー訥」〇ー彊はごつごつして柔和ならざる貌。〇五行の一「ー火土金水」「ー曜日」〇八音の一、木造の樂器。祝敔の類。〇棺。左、僖二二「則就ニ――一焉」〇三ーは刑具、手足首のかせ。漢書、司馬遷傳「關ニ三ー一」

【木異】ボクイ　木にて作れる瓶。史、淮陰侯傳「以ニ――一壺一漿ニ遺ニ軍吏一」

【木階】ボクカイ　木のはしご。李物緒珠「棧、――」

【木爭】ボクソウ　〇きこり。玉篇遺篇「神仙傳有ニ――一、避ニ於山中一」〓樵夫。〇山に棲む怪物の名。狒狒。

【木假山】ボクカザン　自然木にて山の形をなせるもの。又、通俗の語。五雜俎「今在ニ通平一、高貴寶玩中、見ニ――一、靡ニ不ニ寘閣一」

【木簡】ボクカン　書代、木を削りて文字を書せし者。漢書、蘇武傳「膚ニ――一、以通ニ尺素一」

【木綿】ボクメン　かるわざ。淮南子「――者、多ニ結ニ繩一」

【木牛流馬】モクギウリウバ　牛馬に象ㇾり機械仕掛にて運行する車。兵糧運搬の用に供ㇾ、諸葛亮の創作。蜀志、諸葛亮傳「亮長於巧思、損ニ益連弩、――、皆出ニ其意一」

【木強】ボクキョウ　素樸にしてかざりなし。史、周勃世家「勃爲ニ人、――敦厚一」強は一に彊に作る。

【木彊】ボクキョウ　前條に同じ。史、張耳傳「周昌、――人也」

【木瓜】ボクカ　〇ぼけ、落葉灌木、花櫻に似たる果樹、花は紅白の二種あり、顏の美なり、實は形小瓜の如く酸味強し。詩、衞風「投ㇾ我以ニ――一報ㇾ之以ニ瓊瑤一」〇圀紋所の名、もかう、窠の紋。〓帽額。

【木丸】ボクガン　さるぐつわ（猿轡）唐書、郭子儀傳「以ニ――一塞ㇾ口」

【木忠子】ボクチウシ　なくろじの實、喬木の一、黑色の核ある實を結ぶ、もくげんじ。〓木槿樹、無患子、木槿樹。

【木槿樹】ボクキンジュ　なくろじの木。

【木屋】ボクヲク　木にて造りしはきもの、下駄の類。

【木劍】ボクケン　木にて作れるつるぎ。鴻鐵、陳起「取ニ朝服一――以進」

【木公】ボクコウ　松の異名。夷堅志「――松也、木母侮也」潮海新聞「――正做ㇾ設、木母止含ㇾ春」

【木狗】コウ　くろ犬に似たるけもの。齧越集「――生ニ嶺東左右江山中一、形如ニ黑狗一、能登ㇾ木」

【木索】ボクサク　手がせ、足がせ、刑具。司馬遷文「今交ニ手足一、受ニ――一、暴ニ肌膚一、受ニ檢笞一」

【木實繁者披ニ其枝一】ボクジツシゲキモノハソノエダヲヒラク　其の臣强き者は、其の主をあやふくするに喩ふ。史、范雎傳「――、披ニ其枝一者傷ニ其心一」

【木人】ボクジン　木偶に同じ。史、蘇秦傳

「爲ニ一ニ」以寫二寡人一射二其面一」
【木人石心】ボクジンセキシン　感情なき人をいふ。晉書、夏統傳「此吳兒、是——」
【木匠】ボクショウ　たいく。清異錄「一一總號二運斤之巧一、又曰二手民・手貨一」‖木工。
【木賊子】ボクゾクシ　圖材木屋。村木置物。
【木主】ボクシュ　おはい（位牌）史、周紀「爲二文王一一、載以レ車爲二中軍一」‖神主。
【木處而顚土處而痟】ボクショジテンドショジテキ　人が鳥の如くに木上に棲めば風にあひて顚狂し、又獸の如くに土穴の中に住めば濕氣に犯されて病にかかる（韓愈、原道）
【木燧】ボクスイ　木の火きり。白虎通「鑽二一一、取レ火救レ民」‖鑽火木。
【木石】ボクセキ　○木と石と。無心「與二一一居、與二麋豕一遊」○情なきものに喩ふ。司馬遷、報二任安一書「身非二一一、獨與二法吏一爲レ伍」
【木石爲レ徒】ボクセキトナス　世に求むる心なく、僻地にわびすまひする義。柳宗元文「用レ是更樂二猜黙一、與二木石一爲レ徒、不二復致一意」
【木屑】ボクセツ　おがくづ、のこぎりくづ。晉書、陶侃傳「造レ船——及竹頭」
【木刀】ボクトウ　木剣に同じ（唐書、地理志）
【木桃】ボクトウ　○山査子ザンシの異名。詩、衛風「投レ我以二一一、報レ之以二瓊瑤一」‖楔子。○一說に桃の大なる者（逸異記）
【木鐸】ボクタク　木の舌ある鈴、古、政教を布く時、振りて衆をいましめしより、教を施し人を指導する學者に喩ふ。論、八佾「天將下以二夫子一爲中二一一上也」
【木丹】ボクタン　梔子クチナシの異名。本草「一名二鬱子一」‖梔丹・山梔。
【木炭】ボクタン　○すみ、生木を蒸し焼きにして作りし炭。○繪の下畫をかくに用ふるすみ、やきぶで、ほほづは樹の木を焼きて造る。論衡、量知「古人以二一一書一簡、隨レ圖而點レ之」
【木長官】ボクチョウカン　松の異名（杭州志）‖木公。
【木通】ボクツウ　あけび、蔓草の一、初夏三瓣花を著け、形瓜に似たる實を結ぶ‖山女・通草。
【木天蓼】ボクテンリョウ　またたび、深山に自生し、枝葉くして波狀をなし、辛味の實を結ぶ、なつうめ。木草集解「——所在皆有、生二山谷中一」
【木兎】ボクト　つく、梟ケウの一種、顏猫の如く耳ある鳥、みみづく。‖木菟。
【木訥】ボクトツ　飾りけなくすなほ、質朴遲鈍にして口才なし。論、子路「剛毅——近レ仁」
【木柿】ボクシ　○こっぱの晉書、王濬傳「詔修二戰艦一、一一蔽レ江而下」○木の札。說文「柿、削レ木札也」‖木簡。
【木版】ボクハン　木の板に書畫などをほりて刷物ズリモノのたね板とするもの。
【木筆】ボクヒツ　○辛夷コブシの異名。本草「辛夷初發如レ筆、北人呼爲二一一」○ふで。唐書、以レ木爲レ筆、玉爲レ印」○圖繪筆。
【木杪】ボクビョウ　木のすゑ、こずゑ。謝靈運、山居賦「緣二一一一面長臨」‖木末。
【木本】ボクホン　もゝき、木質の植物。草を草本といふの對、喬木・灌木の二種に分つ。
【木末】ボクマツ　こずゑ。‖梢・木杪。
【木魅】ボクミ　老木の精、木の怪。酉陽雜俎「山精一一之能爲二人形一者」鮑照賦「一一山鬼、野狐城狐」
【木蜜】ボクミツ　けんぼなしの異名。本草「根莖一名一一、其木皮溫無レ毒」
【木野狐】ボクヤコ　基盤ゴバンの異稱。指掌錄「人目二棋枰一爲二一一、言下其如二意人一如二狐也一」
【木隱雄】ボクインユウ　女丈夫木蘭が男子に扮して戰兵に應じ、職を畢へて遠く鄉里に歸りたることを敍べたる七言古詩。滄浪詩話「木蘭歌最古、然朔氣傳二金柝一、寒光照二鐵衣一之類、已似二太白一矣」
【木理】ボクリ　もくめ、一年に一輪を增すもの、木材の年輪。酉陽雜俎「屋怪」「其一一成形一問レ之」
【木履】ボクリ　○木製のくつ。轉名「履乃一一之下有レ齒者」‖木屐。○圖二枚の高き齒をつけたる下駄、あしだ。
【木蔴】ボクリン　こかげ。玉篇「雀巢、一一鳥巢」‖樹陰。
【木梗之患】ボクコウノウレイ　異域にて客死し墓に還るを得ざる難。說苑「孟嘗君將二西入一レ秦、有レ客入曰、臣之來也、過二于淄水上一、見下一土偶人與二木梗一人上語上、木梗謂二土偶人一曰、子先土也、持レ子以爲二偶人一、偶夫大雨、水潦並至、子必浪壞、歷日、我浪乃反二吾眞一耳、今子東國之桃也、刻レ子以爲レ梗、遇二天大雨水潦並至一、必浮レ子泛泛乎不レ知所レ止、今秦四塞之國也、有二虎狼之心一、恐其有二——一于」是孟嘗卒不二敢西將一レ秦」
【木琴】ボクキン　樂器の一、わくの上に長短ある板を并べて叩くもの。
【木樨】ボクセイ　むくげ、濕木の一、夏秋の交に朝開暮落の花をつける。酉陽雜俎、月令、仲夏之月、一一榮」‖朝榮・木蓮・舜。
【木魚】ボクギョ　讀經する時、たたき鳴らす佛具、魚は晝夜目を閉ぢず、故に不斷勤修の意を寓す。釋作原始「隋設二一一一、僧志林逸」蘇軾詩「一一呼レ粥亮且清」‖魚梳。
【木偶】ボクグウ　でく、木製の人形の史、孟嘗君傳「見下一一人與二土偶人一相與語上」‖木像・木人。
【木履】モクリ　木製の足駄アシダ。後漢書、五行志「延熹中、京都長者、皆著二一一」
【木工】モクコウ　○たいく、たくみ、もく。‖木匠。○工事を掌る官名。漢書、百官表「更名二東園主章一爲二一一」

【木鮮】ボク ○石斛に似たる草の名。本草「一一中有如小木、長尺餘、但色深而光澤耳」○常綠喬木の一種、庭に栽えて賞玩す、夏、四瓣の小白花を著く、樹皮は染料とす、漢名厚皮香。

【木居士】コジ 自然木にて造れる神佛の像。韓愈、詩「一一——詩「火透波穿ボク計春、根如二頭面一軀如レ身、偶然題作二一個有二無窮求一漏人一」

【木造】モクゾウ 木にてつくる「一一家屋」

【木像】モクゾウ 木造の偶像。木造の偶像の約言「一一人開、而汗流」

【木耳】モクジ きくらげ。本草「一一生二于朽木之上一、無二枝葉一」

【木食】モクジキ 圖にたきしたる食物を食はず、木の葉又は實ばかりくふ「一一仙人」

【木芍藥】モクシャクヤク 牡丹ボタンの異名〔通志〕

【木星】モクセイ 太陽系中の第九に位する最大遊星、五個の衛星を有す。‖歲星。

【木賊】もくぞく、軒ノキの一種。楊萬里詩、登來龍外一一風」

【木蘭】モクラン 木蘭科の落葉喬木。

【木蘭】モクラン 木蘭科の落葉喬木。

【木蘭】モクラン 木蘭科の落葉喬木。

【札牘】サツ　てがみ。＝札翰。

【朮】㊀ジュツ　㊁チュツ　㊂ソツ　㊃ショツ

㊀もちあは（黏粟）＝稌。㊁をけら、うけら、やまあざみ（山薊）山野に自生する薬用植物の一、白赤二種あり「白ー」「赤ー」「蒼ー」

【末】バツ　㊃通音マツ

○すゑ。本の對。こずゑ（梢）＝木杪。○物事の大切ならざる部分、枝葉の事がら。論、子張「抑ー也、本之則無」○あきうど（商買）史、始皇紀「上」農除ー」○はし（端）はて「天ー」○をはり（終）「一世」「始ー」「頭ー」「篇ー」○おゆ（老）老年、晩年。中庸「武王ー受命」○てあし（四肢）「一疾」○いただき（頭）○くづ、こな「粉ー」「細ー」○なし（無）論、憲問「果哉ー之難也」○よわし（弱）○とほし（遠）○つひに（終）書、立政「我則ー惟成徳之彦」彦は賢人。○なかれ（勿）禮、文王世子「命膳夫曰、ー有原」原は再びする。○うすし（薄）あさし（淺）○ひくし（低）いやし（微陵）○戯劇ﾔｸﾞの脚色の名、老生に扮する者。

【末裔】マツエイ　子孫、裔は衣のすそ、故に末孫に喩ふ。急就篇、注「楚左史倚相、ー一爲二左氏一」＝後胤・後裔・末葉。

【末葉】マツヨウ　すゑの世。漢書、徐業傳「何謂二王胤一、葉之ー一是也」＝末世・末流・後胤・末代。

【末学】マツガク　○浅薄なる學問、未熟の學問。陳書、儒林傳「沈不書上書曰、臣ー一小生、詞無レ足レ算」＝淺學。○學者の謙稱。＝後學。○重要ならざる枝葉の學問。

【末香】マツコウ　細末の香。與起行經「雨檜檜ー一」

【末学膚受】マツガクフジュ　淺薄にして本なきの學、僅に皮膚に及ぶ義。張衡賦「客所レ謂ー一」

【末技】マツギ　實用にならざるわざ。漢書「潁川之民、好ー一、不二田作一」張華、勵志詩「ー之妙、動物應レ心」

【末季】マツキ　すゑの時。曹植文「子生ー一、沈二溺流俗一」

【末光】マツコウ　日月の末光、天子の威光の餘りをいふ。淺書、顧何晉參傳贊「漢興依二日月之ー一」＝餘光。

【末官】マツカン　いやしき役。江淹詩「ー一至二南荊一」＝末吏。

【末宦】マツカン　卑き官職。任昉文「往乘ー一、緑不二代耕一」

【末藝】マツゲイ　つまらぬわざ。王僧孺文「章句小才、雕蟲ー一」＝末技・小技。

【末言】マツゲン　あさはかなる言葉。

【末減】マツゲン　末は薄、減は輕、刑罰を輕くする義。左、昭十四「三數二叔魚之惡一、不レ爲二ー一一」

【末期】マツゴ　圀しにぎは。＝臨終。

【末座】マツザ　しもざ、すゑの座席。嘉禮詩「小儒ー一頗傾レ耳」

【末造】マツゾウ　すゑの世に造りし事、轉じて末世の義とす。禮、郊特牲「諸侯之有二冠禮一、夏之ー一也」＝末代・季世。

【末作】マツサク　商工等の業、農を本となすが故の稱。食貨志「農夫苦二其業一而ー一不レ可レ禁也」

【末産】マツサン　商工の産業。管子「故ー一不レ禁、則野不レ辟」＝末作。

【末子】マツシ　すゑの子。＝季子。

【末寺】マツジ　本山より分れたるてら。

【末疾】マツシツ　手足のやまひ。左、昭元「風淫ー一、雨淫腹疾」

【末臣】マツシン　身分卑き家來の謙遜文「惟我ー一、頑蔽無レ聞」

【末社】マツシャ　圀○本社に付屬せる小社。○遊客の興をとりもつ者、たいこもち「幇間ー一」

【末書】マツショ　つまらぬ注釋の書。

【末世】マツセイ　○道徳のすたれたる時代。又、滅びかかりし時代。左傳「叔向曰、齊其如何、晏子曰、ー一也」＝濁季世・季世。○すゑの世。後漢書、杜喬傳「臣聞古之明君要聞必以二動過一ー一闇主諛賞各緣二其私一」＝末代・末葉。

【末梢】マツショウ　木の末端、こずゑ。○物の先端「神經ー一」

【末席】マツセキ　しもざ。姚合詩「自慙陪ー一、便與二九卿一論」＝末座。

【末成】マツセイ　遠きしんるゐ、とほえん。杜甫詩「孤陋漸ー一」

【末節】マツセツ　枝葉のことがら。禮、樂記「鏘二鏘席一、陳二樽俎一、列二籩豆一以升降、爲レ禮者、禮之ー一也」＝末事。

【末俗】マツゾク　末世のあしきならはせ。漢書、朱博傳「今ー一之弊、政事煩多」

【末孫】マツソン　遠き子孫。大戴禮、禹閒、十世乃有二ー一葉一」

【末代】マツダイ　すゑの世。拾遺記「ー一猶學孫」＝末世・末葉。

【末端】マツタン　はし、すゑ。

【末裔】マツエイ　後世の子孫。劉向、九歎「伊尚爲之ー一兮」＝末胤・末裔。

【末派】マツハ　○すゑのながれ。羅隱詩「正宗ー一論二滄海一」＝末流。○或流儀のわかれ。

【末班】マツパン　下につくやから。＝末流・末流。

【末班】マツパン　すゑの位次。潘岳、西征賦「俄命レ予以二ー一一」＝末席。

【末尾】ビツ　する。
【末富】マツ　商人が利を逐ひて富を致す義。史記「本富爲レ上、一一次レ之」
【末法】マツ　佛滅後の時期に立てたる三名目の一、正法五百年、像法千年の後、一萬年の間の稱。末法燈明記「於二一一中一、但有二言教一而无二行證一」
【末民】マツ　工商のたみ。農を本とするに對していふ。漢書、食貨志「育二末富一、而一一困」
【末利】マツ　する利、商工の利をいふ。後漢書、桓譚傳「理レ國之道、務二本業一而抑二一一一」
【末流】マツ　○子孫、又、末派、末裔。人物志「一一之貿、不レ可二勝論一」○末俗をいふ。班固賦「唯子頭讖二舊典一、又徒騁二騁乎一一一」
【末僚】マツ　下級の官吏。朱陽文「早造二一一一、預參二下席一」＝僚末。
【末路】マツ　○一生の終りの時。＝晩年。○なれのはて「英雄一一」漢書、鄒陽傳「梁作二曲臺之宮一、懲二衡天下一、至二其晩節一一一、張耳陳餘、連二徙兵一以卽二函谷一、誠陽遠危」
【末喪】マツ　（俚）斷末摩の略、命の終らんとする時、多く斷末摩苦受に逼られ、別物あることなきをいふ。翻譯名義集「梵語一一此云二死穴一、或云二死節一、以三纏觸二此處一有レ斷二絕生一、故雖レ死而心頭熱也、緣二第八識未一捨故」
【末大必折】マツダイカナラズセツ　枝葉大なれば本根が折れる。以て支族大にして本家を亡ぼすに喩ふ。左、昭十一「一一、尾大不レ掉」

【未】ビ　㊥

○ひつじ、十二支の第八位、時刻にては午後二時、方角にては西南。爾雅「太歲在一一、曰二協洽一」○いまだ、いまだし、まだすまぬ。已に然るの對稱「一一然」論、季氏「學詩乎、對曰一一也」○あらず、ず（不）不よりは語勢強なり。○いまだ、何何せずとかへり詞みて打消す語。論、子罕「子曰、一一之思也、夫何遠之有」○いなや（否）王維詩「寒梅著花一一」○將來「一一來」
【未月】ビゲツ　陰曆六月の異名。
【未央】ビオウ　○いまだなかばならず。詩、小雅「夜如何、其夜一レ一」○未だ盡きず、央は盡。漢武帝、李夫人賦「惜二美人之一一一一」○漢の宮殿の名、陝西省長安に在り。三輔黃圖「一一宮、周圍三十八里」
【未雨綢繆】ビウチウモウ　禍を未だ萌さざる前に防ぐ義。詩、豳風、鴟鴞「迨二天之未一レ陰雨一、徹二彼桑土一、綢二繆牖戶一」に本づく。
【未開】ミカイ　○いまだ人智又は土地が開けず。○いまだ花が開かず。元稹詩「丁寧採芳侶、須レ識一一蕾」
【未敢】ミカン　いまだあへてせず。左傳「寡君猶一一一、況下臣君之蘇也」
【未完】ミカン　いまだ全たからず、まだ十分に出來ず。
【未決】ミケツ　いまだきまらず「一一四」
【未決監】ミケツカン　いまだ罪の定まらざる囚人をいれておく監獄。
【未見書】ミケンショ　いまだ見たることなき書物。五雜俎「讀レ未二曾見一之書一、如レ未二曾到一之山水一、如レ獲二至寶一、嘗レ異味一、一段奇快、雖二以語一レ人也」
【未婚】ミコン　いまだ結婚せず。杜甫詩「昔別君一一、兒女忽成レ行」
【未濟】ミサイ　○いまだすまず。○易の卦の名。坎下離上。易經「一一亨、小狐汔濟、濡二其尾一、无レ攸レ利」
【未死心】ミシンノ　死後なほ忠義奉公の心の存する義。馬子才、岳王墓詩「可レ怜一片西湖土、埋二卻英雄一一一」
【未詳】ミショウ　いまだつまびらかならず。
【未曾有】ミゾウウ　未だかつて有らず。孟、盡心「修身、可二以爲一レ士於天下一者、未二曾有一也」＝未曾有。
【未熟】ミジュク　○いまだみのらず。禮記「五穀不レ時、果實一一」○修業がまだたらず。因果經「觀二諸衆生熟與二一一一」
【未衰】ミスイ　いまだおとろへず。蘇軾詩「當年我作二褒忠碑一、坐覺江山氣一一」
【未遂】ミスイ　いまだ成しとげず、未だ實行し得ず「一一犯」劉淸詩「東西一一蹄田計、海上青山久暇レ耕」
【未成】ミセイ　いまだ出來あがらず。史記「毛羽一一、不レ可二以高擧一」
【未成年】ミセイネン　いまだ一人前にならぬ。又、其の者、現制にては男子二十一歲、女子十七歲を以て成年とする。＝未丁年。
【未然】ミゼン　いまだ然らず、いまださうならざる前。漢書、劉向傳「明者起二於無形一、消二患於一一一」文中子「昭二治亂於一一一」
【未曾有】ミゾウウ　昔より絕えてなし。觀元最壽經「歎二一一一、郤然大悟」＝未曾有。
【未知】ミチ　いまだしらず。
【未著】ミチャク　いまだつかぬ、未だ物が屆かぬ。
【未定】ミテイ　いまだ定まらず。尹文子「雉兎在レ野、衆人逐レ之、分一一レ一也」
【未丁年】ミテイネン　いまだ丁年に達せず、卽ち二十歲未滿。
【未遍】ミヘン　いまだしばまず。隨游詩「秋菜紅一一」
【未納】ミノウ　租稅などをいまだをさめず。
【未亡人】ミボウジン　寡婦の自稱、夫死すれば、己も共に死すべきに未だ死亡せずとの義、しにそこなひの人。

左、昭二八「夫人聞レ之、泣曰、先君以二是舞一也、習二我儛一也、今令尹不レ尊二諸仇讎一而於二己一——之側一不二亦異一乎」俗に、他人の尊屬の敬稱とするは誤れり。

【未發】ミハツ　○いまだ外に發せず、事がいまだ起らず。○喜怒哀樂が未だ起らず。

【未萌】ミボウ　○いまだ草木が芽を出さず。○いまだ事故のきざさざる義。漢書「所レ以安二社稷一延二——一也」

【未遂】ミスイ　いまだ定數にみたず「十歳——」

【未聞】ミブン　いまだきゝしことなし。「前代——」法言、淵騫「七十子之於二仲尼一也、日聞レ所レ不レ聞、見レ所レ不レ見」

【未敷蓮】ミフレンゲ　開かざる蓮花。和漢念佛抄「觀音手執二——一、作二開數勢一、卽此表示也」

【未返】ミヘン　いまだかへらず。賭賀王文「逝將二歸而一レ——」↔未歸。

【未明】ミメイ　夜未だ明けざる時の稱書、虛想道傳「——而行」↔黎明。

【未來】ミライ　○まだ來らざる時。來心錄「——心不レ可レ得」↔將來。○佛死後の世。世界を過去・現在・——に分つ。地持論「菩薩——世爲二衆生一故云云」

【未來永劫】ミライエイゴウ　いつまでも、とこしへ。↔永久・永遠・無限。

【未來記】ミライキ　未來の事を豫め知りて書き置きし記錄。↔豫言書・讖書。

【未了】ミリョウ　まだをはらず。李白詩「江上相逢借二問君一、語聲——風吹斷」貫休詩「三千功——、大道元無程」

【未了因】ミリョウイン　佛前世の因緣を現世に於て、未だ結びつくさざる義。酵賦詩「與レ君世世爲二兄弟一、更結來生——」

【未練】ミレン　○いまだなれず。↔未錬。○心殘り、あきらめられず。

【未レ易レ才】イマダヤスカラザルノサイ　未だ得やすからざる才。晉書、王荊傳「王濛當レ作二衆頭公一、——也」↔未レ易レ得才。

【未レ入二城府一】イマダジョウフニイラズ　隱地に居住して未だ官に仕下に行きたることなし。後漢書、龐公傳「龐公者、南郡襄陽人也、居二峴山之南一、——」

【未レ有レ仁而遺二其親一者上】イマダジンアリテソノオヤヲワスレタルモノアラザルニ　仁心あるものは、必ず其の父母に孝なる義。孟、梁惠王「——也、未レ有レ義而後二其君一者也」

【未レ測二深淺一】イマダシンセンヲハカラズ　○江河の深淺の知れざる如く、事情の測り知り難きにいふ。吳質文「卽以二五日一到レ官、初至承レ前、未レ知二深淺一、然觀二地形一、察二土宜一云云」○人の心の測り知るべからざるにいふ。北史、魏高陽王雍傳「少俶儻不レ羈、孝文曰、吾亦未レ能レ測二此兒之淺深一」

【未レ能レ免レ俗】イマダゾクヲマヌカレズ　いまだ世俗と縁を絶つこと能はず。晉書「——、聊復爾爾」

【未レ辨二東西一】イマダトウザイヲベンゼズ　未だ方角をもわきまへず、物の道理に通ぜざる義。白居易詩「——過二一生一」

【讀二未レ見書一】イマダミザルショヲヨム　未だ見たることなき書物をよむ。後漢書、黃香傳「尚書部香、謂二東觀一讀二所レ未レ見書一」↔見書參看。

【未レ知二鹿死一誰手一】イマダシカノシスルタレノテナルヲシラズ　天下が誰の手に歸するかを知らずといふ義。中原の鹿を獵師が逐ふ狀を諸豪傑が天下を得んと爭ふに比していふ。晉書、石勒載記「勒遇二光武一嘗以二鹿於中原一——」

【本】ホン　医

○もと。末の對。○草木のね「根——」○草木の一株を一——といふ。○木、植物「草——」「木——」「一草」○物事のはじめ。又、大切なる部分。孟、離婁「家之——在レ身」○はじまり、根源。禮、郊特牲「報——反レ始」○もとづく(原)——をたづねる。論、子張「——之則無」○むかし(舊)元來、其の以前。○書物。後漢書、延篤傳、注「借——讀之」○もときん、元金「子——」子は利子。韓愈、柳宗元墓誌銘「子——相伸」○自稱の詞「——國」「——官」○或語に添へて「其」又「當」の字の義「一月」「——校」○圖或語に添へて眞正の義「——妻」「——式」

【本下】ホンカ　木下を本と曰ふ、木に从ひ一其の下に在り、草木の根抵なり。

【本末】ホンマツ　本・原・初・故・元・柔・端・因・職・主○本は末に對していふ、同じ事物の上にて、あときを正していふ。衛稚老、木玄水胡人」の如し。○原は水源の義より所辭とす。根元をたづねていふ。舍人志に「義邪不レ可レ禁、原起二於錢一」とあるが如し。○舊はまへかどと訓す、新の反なり。貴經「百少子、舊學二于甘盤一」○故は舊也、昔也と註す、今に對して以前はかやうであつたといふ義、舊よりは輕し。漢書、伏生傳「故爲二秦博士一」○元は始也、首也と註す、元年・元日などと熟す。○柔は白弟のことなり、下地ヲからと訓し、平素と熟す。史記、高祖本紀「沛公素寬大長者可レ愛」○雅は雅素と熟す、素に同じ、もとよりと訓む、またつねにとも訓む「太后雅愛レ之」の如し。○因は本然之辭と註す、まことにとも訓む、もちろんと譯す、孟子に「固所レ願也」とあり。○職は專也、主也と註す、主管にと譯す、專ら其の事をつかさどる義より轉用す。

左傳「言語溷溟、則職女之由」○主はもととして訓む。本意の在る所をいふ。史記「主爲二趙王一報レ德復レ怨」

【本惡】ホンアク　わるもののかしら。禮記、疏「雖レ觸二刑禁一而非二其本一一」‖元惡。

【本位】ホンヰ　基本とする標準「金貨本位」

【本意】ホンイ　根本のこころ。後漢書、強華傳「孔子垂二經典一、皐陶遵二法律一、原二其本一一、皆欲レ禁二民爲一非也」

【本營】ホンエイ　總大將の居るちんや「大本營」‖本陣。

【本家】ホンケ　○さと、おやもと、實家の後漢書、梁商傳「妻無二子者須レ還二本家一」○ホンケ　圖おほもとのいちすぢの家。分家・別家の對。‖宗家。

【本綱】ホンカウ　おほもとのすぢみち。くりの韓非子「吏者民之二本一也」

【本覺】ホンガク　圖本來の妙理をさとり知るさとり。始覺の對。

【本幹】ホンカン　ねもと。史、諸侯年表「强二本幹一弱二枝葉一之勢也」

【本紀】ホンキ　紀傳體の歷史にて帝王の事を記せし部分。史記に十二本紀・十表・八書・三十世家・七十列傳と分けたるに始まる。

【本氣】ホンキ　圖しゃうき、まじめ、眞面目の‖正氣。

【本義】ホンギ　○文字の最初の意義。轉義の對。○書物の本來の意義。宋史「朱熹易二十二卷一」○義にもとづく。荀子「萬變レ一レ勝レ信、而天下治」

【本據】ホンキョ　本來のおもひ。ほんまう。晉書、載記「今公二一相一以開二一一」

【本官】ホンクワン　○もとのやく、已の主として掌る官職。兼官の對。○官吏が他に對して己をいふ自稱。

【本貫】ホンクワン　原籍地。正字通「一一猶レ言也」‖本籍。

【本願】ホングワン　もとのねがひ。晉書、涼武昭王傳「今日之舉、非二一一一也」‖本懷。

【本教】ホンケウ　人の根本となるをしへ。呂覽、孝行「民之二一一一」

【本卦還】ホンクワカン　圖其の人の生れたる干支にめぐりかへる、卽ち六十一歲。‖還曆　華甲。

【本業】ホンゲフ　○農業。商工を末業といふの對。後漢書「修二神農之一一一」今、學に從事する業。副業の對。史、商君傳「大小擧レ力、二一耕織一」

【本源】ホンゲン　おほもと、おこり。舊唐書、儒學傳序「窮二法度之一一一」杜甫詩「衆」心識二一一、於レ事少二滯礙一」‖本原・根本。

【本悟】ホンゴ　眞正のさとり。楞嚴經「所レ得二密書一、遂同二一一一」‖眞悟。

【本國】ホンゴク　わがくに。列、周穆王「及レ老而還二一一一」‖祖國・本邦。

【本根】ホンコン　おほもと。舊唐書、狄仁傑傳「一一一搖、憂患不レ淺」‖根本。

【本妻】ホンサイ　正當のつま。妾などの對。冥祥記「遂娶二一一一」‖正妻・嫡妻。

【本草】ホンザウ　木と草と、くさき「一一學」

【本草綱目】ホンザウカウモク　三十九卷、明の李時珍撰す。十六部、六十類に分ち、一千八百九十二種の動植鑛物を記述す。

【本草學】ホンザウガク　支那の藥物學。

【本山】ホンザン　圖○一宗のおほもとの寺「淨土宗一一」○この寺。‖當山・當寺。

【本支】ホンシ　本家と分家と。本は宗子、支は庶子。詩、大雅、文王「文王孫子、一一百世」

【本支百世】ホンシヒヤクセイ　本家と分家との子孫の永く榮ゆる義。前條參看。

【本志】ホンシ　もとよりのこころざし。韓愈文「悼二一一之變化一、中夜涕泗交レ頤」‖本心・本懷。

【本旨】ホンシ　本來のむね。蔡邕文「前儒特爲二章句一者、皆用二其意一、傳非二其一一一」‖本指・本意。

【本始】ホンシ　もと、はじめ。史、始皇紀「原二念休烈一、追二議一一」‖本初。

【本事】ホンジ　圖佛又は菩薩の本傳本紀をいふ。法華經「或說修多羅伽陀及一一」

【本指】ホンシ　本來のむね、もとの意旨。指は旨の史、張耳傳「良道二一一一」‖本旨。

【本師】ホンシ　本宗としてたふとび從ふ師匠。史、樂毅傳「樂臣公學二黃帝老子一、北一一號曰二河上丈人一」

【本質】ホンシツ　本來のたち。固有の性質、實質。

【本心】ホンシン　人人固有の眞心。孟、告子「此之謂レ失二其一一」

【本眞】ホンシン　本來のまこと。漢書、揚雄傳「事有二一一一」

【本莖】ホンケイ　もとからのむね。晉書、阮籍傳「此亦莊之嗣響一一也」‖本旨・本指。

【本初】ホンショ　はじめ。‖本始。

【本色】ホンショク　圖より有せろいろ。轉じて特色又、本領、本來の面目の義。晉書、天文志「凡五星不レ出二其一一一」

【本職】ホンショク　○其の人の主なる職業。‖本業。○官公吏などが職務上の自稱。‖本官。

【本性】ホンセイ　○もとよりのうまれつき。本來の性質。荀、性惡「是人之一一也哉」○圖ひたしかな心「一一を失ふ」‖正氣。

【本姓】ホンセイ　生家のみうじ。漢書、高帝紀、注「寧有二劉媼一一實存、史遷不二肯詳載一」

【本籍】ホンセキ　已の身分を登錄してある

戸籍。寄留籍の對。‖原籍・本貫。
【本然】もとより然るべき理。
【本然之性氣質之性】程朱學にて本然の性は、純然たる天より附與せられたる性、氣質の性は、血氣混淆して後、生ずる性なりと說く。朱子語類「有二天地之性一、有二氣質之性一、天地之性、則大極本然之妙、萬殊而一未也、氣質之性、則二氣交雜而生、一本而萬殊也」
【本錢】○もときん。‖元金・母財。○資本金の舊唐書、明皇紀「各與二一千貫一、收二別倉一」
【本祖】せんぞにもとづく。禮記「萬物本二於天一、人本二乎祖一」
【本宗】一族中の本家の父、ひろくおほもとの義に用ふ。
【本則】おほもとの規則。
【本俗】昔時よりのならはし。
【本尊】‖梵にしてあがめまつる所の佛、即ち寺の本堂の中央に安置する佛菩薩。聖衆來迎圖「見二一一」
【本態】もとのすがた。自居易詩「一一自尊一一」
【本然】○まことのすがた。その物の正體。金鏡、神武紀「遂二一一」‖日本身の○哲學にて現象の根柢となるもの。‖眞如・實相。
【本堂】寺院内にて主たる佛堂。‖本宮。
【本宅】○わがすまひ、自宅。宋書、徐湛之傳「歸居二一一」‖本邸。○常住のすまひ。別莊などの對。
【本地垂跡】‖日本の神は、天竺なる本地の佛の跡をこの地に垂れて出現せしものとし、天照大神を阿彌陀佛の垂跡なりと唱ふる如き佛家の說、兩部神道の說も此に本づく。
【本陣】本營に同じ。
【本朝】○わが朝廷。又、わがくに。孟、萬章「立二天子一、一一、而道不レ行恥也」‖異朝・隣朝。○地方の州郡に對して君主の朝廷をいふ。漢書、嚴安之傳「堂之羅道在二一一」
【朕本朝】我が本朝を盛大にする。宋の趙鼎自ら銘を旌に書して曰く、「身騎二箕尾一歸二天上一、氣作二山河一――」
【本朝文粹】‖三五卷、藤原明衡が延喜天皇の弘仁年中より一條天皇の寛弘年中までの文を編輯せしもの。
【本統】おほもとのちすぢ。宋史、禮志「所レ以一一一、明二本統一也」
【本能】哲學にて生來自然に有する一定の作用、教育經驗等の力をからずして自らはたらく能力、飲食男女の欲など。
【本能主義】哲學にて本能の要求を肉體上の嗜欲を滿足するを以て人生の目的なりとする倫理說。‖享樂主義。
【本人】たうのひと。‖當人。
【本邦】わがくに。唐書、「讓皇帝曰、羞レ見二一一一人將レ身投二外裔一」‖本國。
【本復】‖病がなほる、治癒する。‖全快・平癒。
【本分】○己の本來の地位。分は去聲に讀む。荀、非相「見レ端不レ如レ見二一一一」○身にそなはる分際。
【本望】もとよりののぞみ。宋書、劉粹傳」‖本願・本懷。
【本末】もとと、すゑと。はじめと、をはりと。大學「物有二一一一、事有二終始一」
【本丸】‖おもての、城の中にて總大將の居る所。‖本城・牙城。
【本名】本來のなまへ。唐高駢傳「后三其一一」
【本命】生れたる年の干支。白居易詩「夢得君知否、俱過二一一年」
【本務】必ずつとむべきつとめ。隋書、序「夫孝三皇五帝之一一、萬事之紀綱也」
【本文】‖註釋文などに對してその○もとの文。後漢書、徐防傳「一一略存」‖正文。
【本門】‖衆生本有の妙理を明かにする法門。法華經科註「一一破二執レ近之情一、生二本地深信一」
【本來】もとより。‖元來。
【本來面目】天然自然にして一點の人慾をまじへざる心の本性。傳燈錄「道明求二法于六祖一、六祖曰、那箇是明上座、――、六祖法壇經「不レ思レ善、不レ思レ惡、時聽二――一」
【本來無一物】心はもと虛無にして、一物をも存せざる義。傳燈錄「菩提本非レ樹、明鏡亦非レ臺、――、何處惹二塵埃一」
【本領】○木の根本と衣の領とより、よりて大本の義とす。劉賓客嘉話「一一何難」○‖昔時よりの領地。
【本論】‖おほもとの議論、主要なる論說。
【本立而道生】‖五倫の道は孝弟の本立ちて而る後に生ずるをいふ。論、學而「君子務レ本、――、孝弟也者、其爲二仁之本與一」
【報レ本反レ始】‖其の恩に報謝する幾禮、婦特牲「嘏辭」、丘乘供二粢盛一所二以報レ本反レ始也一」注「謝二其恩之謂一、報、歸二其功之謂一、反」

【机】キ　書　紙

○つくゑ、おしまづき、ひぢつき。俗に几に通ず。○木の名、さるなし。
【机案】つくゑ。‖几案。
【机下】‖手紙の名あてのわきにかく

敬語、直接に其の人に手わたしせず、先づ机下まで致す時。＝几下・案北・梧右。

【机上之論】ジジャウノロン　實地に適せざる空論。

【机木】ガボク　さるなし、にれに似たる木。山海經「單狐之山多ニ―一」注「狀如レ榆、可ニ燒以糞レ田」

【朽】キウ　有

○くつ、くさる、木が腐る「枯ー」「腐ー」「敗ー」○おとろへる、老衰「老ー」「衰ー」晉書、張忠傳「年―齒落」○ほろびる、つきる「三不ー」左、襄二四「死而不ー」何謂也」○くさし（臭）＝殘。

【摧レ朽】サイキウ　くち木をくだく、力を用ひず、容易に出來る喩。北史、高閭傳「六軍電發、有レ若レ摧レ朽」＝拉朽・摧枯。

【拉レ朽】ラフキウ　くさりたるものをくだく、物事のたやすきに喩ふる言葉。晉卓傳「將軍之舉ニ誠昌ニ若レ摧レ枯ー一、何所ニ顧慮ー乎」＝摧朽。

【朽株】キウシュ　くちたるひのき。李商隱詩「ー―枝斜綠愛遲」

【朽壞】キウクワイ　くちやぶれる。晉書、樂志「軍事ニ軍旅、樂器在レ廐、全非ー一」＝朽敗・朽腐。

【朽貫】キウクワン　錢を積むこと久しくして錢ざしがくちる。又、其の錢ざし。後漢書、王符傳「寧見ニ―千萬、而不レ忍レ使ニ一錢ー」

【朽骨】キウコツ　くちたるほね。晉書、元帝紀「生繁華于枯荑、育ニ豐肌于ー一ニ」

【朽索】キウサク　くちたる繩。書、五子之歌「予臨ニ兆民ニ、懍乎若ニ―一之馭ニ六馬ニ」六馬は六頭立の馬車の馬、甚だ難くして危きに喩ふ。

【朽株】キウシュ　くちたるかけはし。韓愈詩「慎若レ乘ニ―一ニ」

【朽索】キウサク　くさりてぼろぼろになりし土の國語「由有ニ―一而自崩」

【朽株】キウシュ　くちたる木のかぶ。司馬相如文「結木ー一」

【朽樹】キウジュ　くさりたる木。陳與義詩「空中ー一抱ニ竜鱗ー一」＝朽木。

【朽折】キウセツ　くちて折れる。白居易詩「蕊破ー一紅窗破」

【朽鈍】キウドン　才が衰へて鈍き喩。王謐之傳、伊尹ー一」

【朽斷】キウダン　縄などがくちてきれる。歐陽修、催試舉人書、簡編多ー一」

【朽釘】キウテイ　くちたるくぎ。李白詩「蒼苔沒ニ―一物ー、如ニ一ー一」

【朽索】キウサク　くちたるなは。易林「ー一腐索、不レ堪ニ施用ー」＝朽索。

【朽鈍】キウドン　くちてにぶし、おいぼれて遅鈍なり。王榮詩「顧利ニ―一資ー」

【朽敗】キウハイ　くさりくづれる。後漢書、劉平等傳序「器物取ニ―一者ー」＝朽壞・朽腐。

【朽廢】キウハイ　腐りて用に立たなくなること。

【朽腐】キウフ　くちくさる。易林「冬藏ー一、當ニ風于道ー」＝朽敗。

【朽壞】キウカイ　くちやぶれる。易林「山石ー一、稍崩墮落」＝朽壞。

【朽木】キウボク　くちたる木、無用の人に譬ふ。論、公冶長「宰予晝寢、子曰、ー不レ可レ雕也、糞土之牆、不レ可レ杇也、於ニ予與何誅ー」

【朽木糞牆】キウボクフンシャウ　くちたる木や腐りし壁は彫刻もぬりかへも出來ず、志氣の昏惰なる人には教を施すべからざるに喩ふ。前條參看。漢書、董仲舒傳「今漢繼ニ秦之後ー、如ニ――ー糞、雖ニ欲ニ善治ー之、亡レ可ニ奈何ー」＝朽木糞土。

【朽滅】キウメツ　くちほろぶ。李白詩「功利ニ生人ー、天地同ニ―一ー」

【朽老】キウラウ　年老いて氣力がおとろへる。又、其の者。南史「ー一筋力盡、徒步還ニ南門ー」＝衰老・老朽。

【朽綱】キウカウ　くちただれる。通典「沈レ水者ー一、而心節獨生」＝朽腐。

【朽蝕】キウショク　くちけがれる。韓愈文「今無故取ニ―一之物ー」

【杓】キウ　尤　有

○高き木。○下りて曲れる木。＝樛。

【朱】シュ　虞

○あか、あけ（赤）論、陽貨「惡ニ紫之奪ー一也」あかし。○しゆみ、あかいろの塗料。○あかいろのもの（口ー はくちべに）○赤心木、松柏の屬。○侏儒の株に通ず。○ー提は縣名、四川省建爲郡に屬す、善銀を出す、因りて銀をー提といふ。○圖錄の略字とす「ー銀」

【朱秩】シュチツ　赤きたづな。薛昭蘊、喜ニ遷鶯ニ詞「花色嬌人競賞、盡是纏綿ー一」

【朱櫻】シュアイ　あかきゆすらうめ。唐本草「熟時深紅者、謂ニ之ー一ニ」

【朱殷】シュアン　あかぐろし、殷は赤黒、血の少しく日を經たる色。左、成二「余折以御、左輪ー一」李華、弔ニ古戰場ー文「蒿里ー一」

【朱蜂】シュ　赤き色のとばり。陶潛、閑情賦、裏ニ―一而正坐」＝朱幃。

【朱衣紫笏】シュイシカツ　あかきころもと、象牙のこつと。唐の制、侍御史、國家に大事あれば、朱衣揔帶を著く。又、五品以上の官は象牙の笏を執る。韓愈、送ニ殷員外使ニ回鶻ー序「選ニ尚書度部員外郎ー、兼ニ侍御史ー、――、承ニ命以行」

【朱衣點頭】シュイテントウ　試驗に應じたる文章の選に中るをいふ。點頭はうな

うく侯歸錄「歐陽公知貢擧、每遇ヒ試卷、墨後皆覺ニ朱衣人時復點ニ、然後其文入ル格、始疑ニ侍史、及ル回ル視之、無ル所ル見、因語ニ其事於同列ニ云ヒ云ヒ歌」

【朱衣吏】シュイリ　朝廷の文官の吏書、貢擧の事ニ關係ル文官の吏書、「前漢書、朱買臣傳、拜ニ會稽太守ニ之官ニ、——前導」

【朱印】シュイン　○朱肉をつけて押すいんさやう。○武家時代、官許の證印「御——之印」——船は外國貿易の證札ある船。

【朱欒】シュラン　ざぼんの色の印のひもを身に帶ぶる後漢官、官章「高冠長劍、——侯公卿、帶ニ綬金印紫綬ニ」

【朱夏】シュカ　なつ、夏の氣は赤し、故にいふ、木性風、木性風、遷ニ——ニ而居ニ夏ニ」ヒ朱明。

【朱器】シュキ　赤きぬかきの土器、時、終經「吐血、——如ル振ル袁」

【朱槿】シュキン　赤ぬりのたるき。魏都賦「——森和而支離」

【朱絃】シュゲン　赤きはなぶさ。王勃文「觀ル廬冷調、奏ニ——之音ニ」

【朱干】シュカン　赤くぬりたるたて。禮、明堂位「——玉戚、冕而舞ニ大武ニ」

【朱汗】シュカン　血のいろなるあせ、勞する甚だしき喩。杜甫詩「馬騰ニ——落、胡舞自廻斜」ヒ汗血。

【朱櫃】シュキ　赤ぬりのてすり。杜甫詩「滂沱ニ——淚」白居易、百花亭詩「——在ニ空虛ニ涼風八月初」ヒ朱欄。

【朱顏】シュガン　○年わかく顏あかし。李端詩「勿ル貝ニ——好ニ而忘ニ白髮侵ニ」○酒に醉ひたるあからがほ。宋玉、招魂「美人既醉、——酡顏」

【朱鷺】シュロ　字は元晦、一の字は仲晦、謚して文といふ、其の學大抵理を窮めて以て其の知を致し、躬に反して以て其の實を踐み、而して居敬を以て主となす、慶元六年卒す、年七十一、徽國公に追封し、孔子の廟庭に從祀せらる「宋史、道學傳」

【朱櫻】シュオウ　赤ぬりのひさご。笈七籤「餐ニ元天之——ニ」

【朱暍】シュカツ　夏の日、夏は日色殊に赤し、故にいふ。郭璞、遊仙詩「——賈小ニ而色炎の如きたちばなの樹、元覽賦「三色黃柑、千戶——」

【朱桂】シュケイ　赤きむくげの花。王維、瓜園詩「黃鸝轉ニ深木ニ、——照ニ中園ニ」ヒ紅桂、朱槿。

【朱宮】シュキュウ　赤ぬりのごてん。楚辭、九歌「紫微居ニ帝宮ニ、紫貝闕兮——ニ」一本、朱を珠に作る。

【朱鳥】シュチョウ　南方の異名「事物合璧ニ李白詩「於焉擒ニ——ニ」

【朱華】シュカ　赤き色のはな。曹植詩「——ニ日ニ綠池ニ」ヒ朱顏。

【朱光】シュクワウ　○赤きひかり。曹植詩「揮ル羽遵ニ清氣ニ、悍目發ニ——ニ」○太陽。謝朓、七夕賦「——既夕、涼雲始浮」

【朱組】シュソ　赤ぬりのつくりがは。詩經「載驅薄薄、簟ニ——ニ」

【朱綸】シュリン　赤ぬりの宮門。左思、吳都賦「——雙立、驰道如ル砥」ヒ禁門、宮闕。

【朱覩】シュト　しゅすずり。米芾硯史「花菜石作ニ小——ニ」

【朱戶】シュコ　門戶を赤く塗る資格、古、天子が功ある諸侯に賜ひし九錫の一。漢書、王莽傳「——納陛」

【朱口】シュコウ　美人のあかき口。古詞「——皓ニ齒歌ニ玉指弄ニ絲絃ニ」

【朱公】シュコウ　鯉の異名「風俗通」

【朱砂】シュシャ　しゅとするすな。南史、陶弘景傳「神丹可ル成、而苦ル無ル藥物、帝給ニ黃金ニ——百斤ニ雇ニ——ニ」一說に雄を呼ぶ。

【朱子】シュシ　宋の朱熹の敬稱。ヒ朱文公。朱熹參看。

【朱子學】シュシガク　宋の朱熹の唱へし學說、理を窮め知を致し、躬行實踐を倘び、理氣心性の研究を主とす。ヒ道學、程朱學、宋學。

【朱子文集】シュシブンシュウ　宋の朱熹の文集一百卷、續集十一卷、別集十卷、其の文は大抵六經に原づき、理を以て勝る。

【朱紫】シュシ　衣服や官印のひもの朱や紫のもの、高位高官の人の喩。白居易詩「賢愚已班貴、衣紱方ニ——ニ」高適詩「部曲皆公侯、輿臺亦ニ——ニ」

【朱提】シュテイ　四川省の地名、善き銀を出だすによりて、銀の異名とす。五雜俎「今人銀謂ニ之ニ——ニ、按、漢書地理志注、——出ル銀」漢書、食貨志「——銀重八兩、爲ニ一流ニ」

【朱實】シュジツ　草木のあかき實。阮章賦「——離離」

【朱脣皓齒】シュシンカウシ　あかきくちびると、しろきはと、美人の容貌。楚辭、大招「——、豐肉微骨」

【朱雀】シュジャク　四方の星のやどりの中にて南方に配せられるもの。雀一に鳥に作る。三輔黃圖「甘泉、自虎ニ——、玄武、天之四靈、以正ニ四方ニ」王肅制ニ宮閤殿閣ニ取ル法焉ニ」

【朱鳥】シュチョウ　雞の異名「風俗通、雞本朱氏舍所ル化、故呼ル雞曰ニ——ニ」一說に雞を呼ぶ。

【朱之瑜】シュシユ　朱舜水を見よ。

【朱儒】シュジュ　短小なる人、一寸ばかり。

〔左傳〕ヒ侏儒。

【朱樹】シュジュ　あかまつの山海經「崑崙山上有ニ——ニ」

【朱舜水】シュシュンスイ　明の浙江餘姚の人、名は之瑜、字は魯璵、舜水と號す、明亡びて我が邦に歸化し、水戶侯の賓師たり、天和二年沒す、年八十三、私謚して文恭といふ、舜水文集の著あり。

【朱絲欄】シュシラン　あかいろの界紙の兩端に「句容縣崇明寺大藏經五千函、普贊紙——書、函在ニ輪藏殿ニ」

【朱絲】シュシ　赤きかんむりのひも。柳宗元文「駟駿之駒、結以ニ和鈴ニ、繫以ニ

ーーに】

【朱紱】シュフツ　赤きうすもの。儀禮、士昏禮、注「素衣ーー」韓愈詩「ーー數幅垂二中堂一」

【朱組】シュソ　赤きくみひも。禮、玉藻「玉ーー纓、天子之服也」ー朱紘。

【朱陳村】シュチンソン　支那の徐州の朱陳村は朱・陳の兩姓のみにて世世婚姻をなす、故に兩家婚姻を通ずる義とす。白居易、朱陳村詩「徐州古豐縣、有レ村曰二朱陳一、去レ縣百餘里、桑麻青氣富、一村惟兩姓、世世爲二婚姻一」

【赤鏡子】シャクシ　朱ずみ。

【朱鳥】シュテウ　○赤色の鳥。○南方の星宿の名。史、天官書「南宮ーー」淮南子「南方火也、其獸ーー」

【朱夏】シュカ　四南の天。淮南、天文「四南方曰二ーー一」

【朱殷】シュアン　赤ぬりのごてん。梅堯臣詩「石機ーー藏二林中一」

【朱彤】シュトウ　あかの王冠。傅咸詩「侯柄飾二ーー一」

【朱顏】シュガン　古の大富豪、陶朱・猗頓の二人。轉じて大富豪の義。ー陶猗。

【朱肉】シュニク　國朱色の印肉。

【交レ朱則赤】コウレシュスレバセキ　國朱に交はれば赤くなる、人は友人の善惡により感化せられる喩。傅休奕、太子少傅箴「近レ墨必黑、近レ朱必赤」に本づく。

【朱髦】シュバウ　あか馬のたてがみ。瑞應圖「王者不二誅戮一、則龍馬乘黃、澤馬ーー並集」

【朱紋】シュモン　朱裳に同じ、裳に繡の文を畫くもの。漢書、韋賢傳「赭衣ーー」注「ーー爲二朱裳一、畫爲二繡文一也、亞古黻字也」

【朱紱】シュフツ　赤色のこな。南史、王裕之傳「飾以ーーー」ー丹紱。

【朱文公】シュブンコウ　朱熹の敬稱、文は其の諡。朱熹參看。

【朱陛】シュヘイ　赤く塗れる朝廷のきざはし。梅堯臣詩「大樓崇嶷ーー煌煌」

【朱鳳】シュホウ　夏の熱きつむじ風。抱朴子「ーー燬レ石、不レ能レ燋二滄丘之木一」

【朱鐘】シュセウ　あかきいろのくつわ。潘岳詩「ーー既鏤、四牡既載」

【朱陰】シュイン　○しゅずみ。墨池編「有二墨一ーー一法」蘇軾詩「末路益可レ羞、ーー手自研」ー朱錠子。○物事の異なるに喩へいふ。魏志、王肅傳、注「更作ーーー別異」○朱と墨とにて帳簿にしるす。轉じて、官務を執る義。北史、高綽傳「始制二文案一、程式一歸レ畫、及二計帳戸籍之法一」とあるに本づく。劉禹錫、古詞「吾愛二蕭令綽一ーー一何工」

【朱明】シュメイ　○夏の異名。爾雅「夏爲二ーーー」注「氣赤而光明」ー朱夏。○説明朝をいふ、天子の姓朱なるが故にいふ。

【朱門家】シュモンカ　高貴の人は門扉を赤ぬりにす、故に顯官貴人の邸をいふ。郭璞、詠レ仙詩「苦吟莫レ向二朱門一裏、滿耳笙歌不レ聽レ君」杜甫詩「出入ーー、輦轂列二鮫螭一」

【朱楊】シュヤウ　赤き幹のかはやなぎ。孫楚、登樓賦「俯依二青川一、仰翳二ーーー一」

【朱閣】シュカク　次條に同じ。

【朱欄】シュラン　赤ぬりのてすり。李嘉祐詩「高閣ーー不レ窺レ遊、蒹葭白水繞二長洲一」ー朱檻。

【朱輪華轂】シュリンクワコク　漢の制、高貴の人は馬車の輪を赤ぬりにし、轂をはなやかに飾る。漢書、劉向傳「王氏一姓、乘二ーーー一者三十三人」

【朱路】シュロ　帝王乘用の大車。禮、月令「乘二ーーー一駕二赤騮一」路は輅。

【朱樓】シュロウ　赤ぬりのうてな。後漢書、馮衍傳「伏二ーーー一而四望兮」ー朱閣。

【朵】タ　㊥朶に同じ

○しだれる、花實の垂るる貌。○えだ、花の枝「千ー」「萬ー」「花ー」○垂れさがれるもの「耳ー」○うごかす(動)易、頤卦「觀レ我ー」顧。○手にて物を提ふ。

【朵朵】ダダ　樹木の垂れる貌。説文「樹木垂ーー」

【朶】タ　朵（前條）に同じ。

【朶頤】ダイ　あごを動かして物を食はんと欲する貌。強國が弱國を併呑せんとするさまなどにいふ。易、頤卦「觀レ我ーー」ー朵頤。

【朶雲】ダン　人のてがみの敬稱。唐賈、乘陵傳「常以二五采牋一、爲二書記一、使二侍妾主之、其隨答授レ意而已、皆有二箱法一、隨唯署レ名、自謂所レ書隨字、若二五ーー一時人莫レ之、號二郭公五雲體一、隨は郭國公に封ぜらる、故にいふ。

【朶朶】ダダ　おほくのえだ。又、枝のたれる貌。

【朴】ハク　ホク　㊥樸　㊥ボク　通音

○きのかは(木皮)○うはべをかざらず「質ー」ー樸。○喬木の一種、ほほ、花大にして香氣あり、皮厚くして藥材とす、故に一名厚ーといふ、四川省の産佳なり、故に川ーといふ。○大いなり。○未だ臘とならざる鼠。

【朴騅】ボクスイ　かざりけなくすなほにしておろか。抱朴子「四会ーー」ー朴魯。

【朴實】ボクジツ　かざりけなくまこと。ー朴慤。

【朴漫】ボクマン　かざりけが無くぐづぐづする㊀南史、龍度傳「爲レ人―ー」【朴硝】ボクセウ　藥の名、狀食鹽に似、水を以て溶解して結晶を成す、色は淡黄にして形頗る清化粉とし、鍼ねて牛馬の革を柔かにするに用ふ。【朴素】ボクソ　かざりなし。きぢのままにてうはべを飾らず。後漢書、馬皇后傳「車騎一ー、無二金銀之飾一ー」＝樸素・質朴。【朴忠】ボクチュウ　かざりなくして誠實の㊀漢書、卜式傳「上以二式一ー一、拜爲二齊王大傅一」＝愚朴・醇朴・樸誠。【朴直】ボクチョク　かざりなく正直。杜甫詩「忠誠貴二直一ー一、致レ君一ー一堯」【朴茂】ボクモ　かざりはなくてあつし。實也、漢藝志「士以二繩明一ー之美、而無二敬學遜順之法一此取レ士之蔽敝一辭念文「吾子始自レ由出、有二一ー之美一ー」＝樸厚。【朴野】ボクヤ　かざりなく、いやしく、素朴にして野卑。宋史「安石性不二一ー一、中藏二巧詐一ー」＝朴陋・鄙朴。【朴愚】ボクグ　かざりけなく愚かの意、史、地理志「東人皆一ー一純直」【朴陋】ボクロウ　かざりなくいやしく、質にして文なし。尚書故實「佛像本自二西域一來、一ー一人不レ生レ敬、今之藻繪雕刻、自二戴顒一始也」＝朴野。

【朽】リウ　リキ　尾

○もくめ（木理）年輪。○いへのすみ（屋隅）○圖あふこ、物をになふに用ふる棒、てんびん棒。

【杆】カン　寒

○みづのみ、ゆのみ（飲水器）荀、君道「一方則水方」○ゆあみだらひ（浴器）○一ーは自ら足れりとする貌。荀、儒效「一ー富人」＝于。

【杼】チョ　魚

○こて（泥鏝）壁をぬる具。○ぬる。論、公冶長「糞土之牆、不レ可レ一也」

【杠】カウ　江

○はたざを、旗竿。○こばし、小橋。孟、離婁「歲十一月徒一ー成」○星の名。○牀の前の横木。

【杆】カン　寒

○たて（盾）漢書、尹賞傳「被二鎧一ー一」＝干。○てこぼう（梃）○倒れたる木。○圖てすりの義、欄一ーは闌干。

【杏】キャウ　梗

○あんず。梅に似たる果樹、質は梅より大にして甘し。格物叢話「一實味香於梅、而酸不及、核與肉自相離」○銀一ーは白銅。

はいてふの木、ぎんなん。【杏園】キャウエン　陝西省長安縣の西、曲江池邊に在り、唐時、新に進士の試に及第せし者、多く此に遊宴す。劉詧、及第後宴二曲江一ー詩「及第新春選二勝遊一ー一初宴曲江頭」【杏花】キャウクワ　あんずのはな。戴叔倫詩「一汀煙雨一ー一客」【杏菜】キャウサイ　前條に同じ。張籍詩「處處曲房閑一ー一」【杏壇】キャウダン　學問所をいふ。講堂の前、遂公、孔子遊二乎緇帷之林一、休坐二乎一ー之上一、弟子讀レ書、孔子弦歌鼓レ琴一ー一の遺址は山東省曲阜縣の聖廟の殿前に在り。【杏仁】キャウニン　あんずの核の中の肉、藥用とす。本草綱目「一ー氣薄味厚」【杏林】キャウリン　董奉の故事により、醫家をいふ。神仙傳「董奉居二廬山一、爲レ人治レ病、重者種二杏五株一、輕者種二一株一、如レ此數年、計得二十萬餘株一、鬱然成レ林、杏子大熟、號二董仙一ー一」

【杞】キ　紙

○枸一ーは灌木の一、一名仙人杖、嫩葉は食ふべし、根皮を地骨皮といひ藥用とす。○一ー柳はかはやなぎ。○一種の喬木、豫章ノ以に似て木理細滑、器具に造るべし。○周代の國名、夏の後、今の河南省開封府一縣。論、八佾「一ー不レ足レ徵」【杞憂】キイウ　無用のしんぱい、とりこしぐらう。列、天瑞「杞國有二人憂二天崩墜一身無二所レ寄慶一食一者一、又有二憂二彼之所一憂者一、因往曉レ之曰、天積氣耳（中略）奈何憂二崩墜一乎、其人曰、天果積氣、日月星宿、不レ當レ墜耶、曉之者曰、日月星宿、亦積氣中之有二光耀一者、只使レ墜、又不レ能レ有レ所二中傷一、其人曰、奈二地壞一何、曉者曰、地積塊耳（中略）奈何憂二其壞一、其人舍然大喜、曉レ之者亦舍然大喜」【杞梓】キシ　二木の名、共に良材、杞は樹柳の如く葉麤にして白色、梓ヅサは秋に似たる喬木。孔叢子「聖人官レ人、猶二大匠用一レ木、取二其長一棄二其短一、故一ー連抱、而有二數尺之朽一、其工不レ棄」【杞人之憂】キジンノウレヒ　前の杞憂を見よ。【杞柳】キリウ　かはやなぎ、こぶやなぎ、こりやなぎ、白楊の一種、木質柔靭に

して杯棬又行李ニ製すべし。盖、皆子「性猶ニ杞一ノ一也、義猶ニ栝棬一也」注「一ノ一栝柳也」

【杓】 杓（木部二畫）の誤字。

【杌】 ㊀ゴツ　㊁ゲツ　月　月

㊀樹に枝なし。○木の短く出づる貌。○一陧は安からざる貌、あやふし。㊁きりかぶ（株）○檮一ノ一は惡獸の名。又人名とす。

【杌陧】ゴツヂツ　あやふく安からざる貌、陧は危。書、泰誓「邦之一ノ一、日由二人一ニ」

【杈】 ㊀サ　㊁サ　麻　佳

㊀えだ（枝）○また、さんまた（叉枝）○やす、先端がまたになりてゐる漁具、捕魚の具。周禮、天官「鼈人」注「以ノ一刺泥中捕取之也」○一把はさらへ、掻器。○一牙は參差たる貌。㊁やらひ。‖行馬柵。

【材】 サイ　ザイ　灰

○さいもく、まるた、木の勁直にして用ふるに堪へる者（木挺）「木一」○廣く建築又は什器などに用ふる材料「鐵一」「石一」○木の質、榛栗の屬。○はたらき、ちゑ、技能「俊一」「茂一」書、咸有一德「任官惟賢一」‖才。○たから、財に通ず。○うまれつき、たち（性質）中庸「必因ニ其一而篤焉」○だうぐ（具）○もと、しろ、物品をつくる原料「一料」皮・革・歯・牙・骨・角・羽・毛など。左、隱五「其一足以備器用」○はかる、きりもりする、適宜に處置する。論、公冶長「無所取一」○裁に通ず。

【角ノ材】カクザイ　才力をたたかはすの意、晉、賈謐傳「非ニ親一ノ一而居ニ其位一ヲ也」

【材伎】ザイギ　○はたらき、うでまへ、幹は俊傑。史記「大將軍一ノ一絕ノ人」「大將軍は衛青。後漢書「程烏李育以ノ有ニ一ノ一善ニ用之一ニ」‖材器。○材木をいふ。漢書「一ノ一器械之資」

【材器】ザイキ　はたらき、せりやう。漢書、王吉傳「一ノ一名譽、稍不ノ能ノ及ノ父、而祿位過ニ之一也」‖材幹・才能。

【材伎】ザイギ　はたらき。荀子「選ニ陽一ノ一之士一」‖材藝。

【材官】ザイクワン　材幹ある騎士の官。史、申屠嘉傳「以ニ一ノ一踶張一從ニ高帝一」

【材藝】ザイゲイ　ちゑと、わざと。藝は又、藝に作る。漢書、定陶共王康傳「長多ニ一ノ一、習ニ知書數一」五代史「多ニ一ノ一、能射ニ錢中孔一」‖才藝・才能。

【材能】ザイノウ　前條に同じ。

【材士】ザイシ　體格のつよき者。史、始皇紀「盡徵ニ其一ノ一五萬人一」

【材臣】ザイシン　はたらきある家來。晉子「豪傑一ノ一、不ノ務ノ竭ノ能」

【材大難ノ用】ザイダイナンモチヰガタシ　才あれども不遇なる譬。杜甫詩「志士幽人莫ニ歎嗟一古來材大難ノ爲ノ用」

【材能】ザイノウ　はたらきと藝能と。史記「上以ニ韓信一ノ一所ノ王皆天下勁兵處一」‖材藝。

【材武】ザイブ　はたらきと、武勇と。

【材幹】ザイカン　しろもの。史記「水火一ノ一」

【材木】ザイモク　もと、もとで。‖資本。

【材才】ザイサイ　書、梁文製作用の木の通稱。梁書「一ノ一不ノ可ニ勝用一也」‖木材。

【材望】ザイバウ　はたらきと勇氣とのある聲望、張方傳「世貧賤、以ニ一ノ一得ニ幸于河間王顒一」‖材武。

【材吏】ザイリ　うでまへのある官吏。唐書、酷吏之傳「張一ノ一」‖能吏。

【材料】ザイレウ　物を作るたね。宋史、職官志「曰ニ營造一曰ニ一ノ一」

【杉】 サン　咸

すぎ、常綠喬木の一、幹直く、針狀の葉を有し、其の材は種種の用に供せられ、皮は屋根を葺くに用ふ「老一」「一材」「一檜」

【杉檜】サンクワイ　すぎと、ひのきと。韓愈詩「夜風一何嘐、一一雜檜鼠」

【杉蘿】サンラ　すぎの生垂ガケ李商隱詩「伊人下築自幽深、桂巷一ノ一不ノ可ノ尋」

【束】 ㊀ソク　㊁シュ　遇　沃

㊀たばぬ、つかぬ。晉書、庾翼傳「宜ニ一之高閣一」○しばる（縛）くくる「一縛」「縛一」「拘一」○つなぐ（絆）○たば。又、たばねたる物を數ふるにいふ、布帛五疋。又、矢五十本。又、脯ホシ十脡の稱。○縮まる、迫まる「窘一」○斂まる、聚まる「斂一」○謹み戒む。㊁ちぎる（約）○謹み戒む。㊁ちぎる（約）「約一」史、高祖紀「待ニ諸侯至一定要一耳」國○そく。稻百把。又、紙十帖の稱。○つか、指四本を竝べたる長さの稱、一握。又、其の長さ。○轉じて短き義「一の閒」

【束矢】ソクシ　やをつかぬ。つかねたる矢。詩經「角弓其觩、一一其搜」

【束修】ソクシウ　約束修整の略、品行を正しくする義。後漢書、鄧后紀「先公既以ニ武功一書ニ之竹帛一、垂以ニ文德一敎ニ化子孫一、故能一一不ノ解ニ經綸一」

【束筍】ソクジュン ○つかねたる脯ほしの肉、進物に用ふ。漢書、朱邑傳「無二謝外之交一」○始めて師に見ゆる時の贄礼、述而「自レ行二束脩一以上、吾未二嘗無一誨焉一」轉じて入學の時納むる謝金。

【束濕】ソクシツ しめりたるものを束ぬ。濕物は束ね易し、下を治むるの緩急なるに喩ふ。漢書、竇成傳「操レ下急、如レ束レ濕」

【束身】ソクシン 其の身を守りて謹む。後漢書、卓茂傳「一一自修、執レ節汲汲」＝束躬。

【束躬】ソクキュウ たばねたるたけき。詩、唐風「綢繆一一」

【束裝】ソクソウ よそほひを著く。陸游詩「客枕何時穩、匆匆又一一」＝裝束。

【束手】ソクシュ ○手をつかぬ、何事をも爲さざる義。史、春申君傳「父子老弱、係レ虜一レ」○抵抗せずして歸服する。晉書、杜預傳「所レ過城邑、莫レ不一レ」

【束芻】ソクスウ まぐさをつかぬ。つかねたる一たばの秣。詩、唐風「綢繆一レ、三星在レ隅」詩、小雅「生芻一束、其人如レ玉」賢人の出るを惜み、生芻一束を以て其の乗る所の白駒にまぐさかふ、其の人の徳の美なること玉の如し。轉じて賢人の死を悼むにも用ふ。

【束篠】ソクショウ つかねたるしの竹。魚孟威文「雜二一一一爲レ堰、閉二散木一爲レ門」

【束帶】ソクタイ 冠を著け帶をむすぶ、威儀を整ふる義。論、公冶長「赤也一一立於朝一可レ使與二賓客一言一」

【束脩】ソクシュウ つかねたる組み紐。郡程文「黃衣一一、豈乎如レ生」

【束馬】ソクバ 馬をつなぐ。左傳「士皆釋レ甲一レ、而飲酒且觀レ優」

【束帛】ソクハク 絹十綱を一束とせるもの。漢書、儒林傳「武帝使二使一一加レ璧、安車蒲輪、駕レ駟迎レ之」

【束縛】ソクバク しばる。又、かせ。史、酷吏傳「誅進以二仁義一一一以二刑罰一」

【束髮】ソクハツ ○始めて冠する義。又、成童の年をいふ。大戴禮「一一而就二大學一」漢書、蘇傳「一一修レ學、偕レ列二名臣一」＝結髪。○圖婦人の西洋風の髪の結方。

【村】ソン 元 通じて邨に作る

○むら、さと(里)「一落」「一里」「山一」「江一」「漁一」圖潛詩「曖曖遠人一」○ゐなか(聚落)○俗に鄙野の義「一氣」「一漢」○圖むら、地方行政上の區劃の一、郡の下に在り「町一」

【村娃】ソンアイ ゐなかの美女。陸龜蒙詩「海俗謠編室、一一練束レ衣」

【村邑】ソンユウ むら、邑は大村。宋書、潘綜傳「攻二破一一一」

【村圖】ソントウ ゐなかの家のその。雍陶詩「一一門巷多相似、盛處春風枳殼花」

【村媼】ソンオウ むらざと、ゐなかの土手。杜甫詩「窮行盡日無二一一一」

【村翁】ソンオウ むらのとしより。杜甫詩「歲時伏臘走二一一一」＝村老・村叟。

【村媼】ソンオウ ゐなかのばば。

【村家】ソンカ 村舍に同じ。方干詩「日與二一一事漸同、燒レ松暖レ茗學二鄰翁一」

【村歌】ソンカ むらの人の歌ふ歌。白居易詩「一一與二社舞一客晒主人碑」＝山歌・俚歌。

【村郊】ソンコウ むらざと、郊は城外。唐彦謙詩「一一多二父老一面堀頭如レ蓬」＝村野。

【村巷】ソンコウ むら。又、むらのこみち。柳宗元詩「雞鳴一一白、夜色絡二菲田一」＝村閭・村里。

【村校】ソンコウ ゐなかの學校。元稹、白氏長慶集序「昔於二平水市中一見二一一諸童競習レ詩」＝鄉校。

【村學】ソンガク ゐなかの學校。盧仝詩「莫レ學二一一生、粗氣强呼吼」＝村校。

【村學究】ソンガクキュウ 淺薄なるゐなかの學者。瑯琊代酔編「楊用修曰、杭州有二杜拾遺廟一有二一一一、題爲二社十娘一遂作二女像一以配二劉伶一」＝村儒・村學師・村夫子。

【村甲】ソンコウ しゃう(莊屋)無寃錄、注「一一如二本國里正頭一」＝村長・里正。

【村漢】ソンカン むらのをとこ、ゐなかもの。客窗閑話「落劫九、一日、入二一一手一」＝田舍漢。

【村妓】ソンギ ゐなか藝者。白居易詩「一一不レ辭出、恐君輕然怕」

【村氣】ソンキ ゐなかびたるふう。隋唐嘉話「薛騎馬一一」

【村墟】ソンキョ むらざと。高適詩「一一日落行人少、酔後無レ心怯二路岐一」＝郊墟。

【村會】ソンカイ 圖一村の自治に關する事を議決する機關。一一議員」

【村落】ソンラク むらにて奪つたいこの音。杜甫詩「一一時時急、漁舟箇箇輕」

【村市】ソンシ ゐなかのまち。白居易詩「燈火寥一一一笙歌上二層樓一」

【村神】ソンシン むらの神。又、其の社。賈島詩「孤震臨二石鏡一、極澗映二一一一」

【村舍】ソンシャ ゐなかのいへ。方干詩「雨天一一未レ催レ置」＝村家・村屋。

【村社】ソンシャ 圖むらの鎭守の社。鄉社に次ぐ社格の社、村にて奉幣する。

【村酒】ソンシュ ゐなかざけ。張籍詩「寂寞逢二一一一漁家一醉吟」＝村醪・村醞。

【村樹】ソンジュ むらの樹木。梁元帝、登二隨望一水詩「旅泊依二一一一、江槎擁二戍樓一」

【村儒】ソンジュ ゐなか學者。事文類聚「逆旅中遇二一一一」＝村夫子・村學究。

【村書】ソンショ つまらぬ書物、俗書。陸游詩「授二簡一一一閉二門睡一」＝兒園冊。

【村叟】ソンソウ　村翁に同じ。叟は長老。開河記「訪二問一一一こ」
【村俗】ソンゾク　みなかのいやしきならはし。‖俚俗・鄙俗。
【村醪】ソンザウ　みなかにて造りたる酒。陸游詩「細傾二一一一醪一新絹一」‖村酒・村醪。
【村笛】ソンテキ　みなか人の吹くふえの音。白居易、琵琶行「豈無二山歌與一一一」
【村店】ソンテン　みなかのみせ。羅隱詩「一一酒旗沽二竹葉一」
【村童】ソンドウ　みなかのこども。杜甫詩「築レ場憐二穴蟻一、拾レ穗許二一一一」
【村坊】ソンバウ　むらざと。唐書、食貨志「凡稅斂之數、書二於縣門一一一、與レ衆知レ之」
【村夫子】ソンプウシ　みなかの先生。陸游詩「今朝偶遇二一一一、借二得齊民一卷書一」
【村茗】ソンメイ　ばんちゃ、みなかの茶。
【村野】ソンヤ　みなか。劉禹錫詩「別墅落城外、月明一一通」‖村郊・村里。
【村老】ソンラウ　みなかのとしより。‖村翁・村叟。
【村落】ソンラク　むらざと、落は聚落。元稹詩「農收一一盛、社樹新開圖」
【村閭】ソンリョ　むらの入口の門。又村ざと。白居易詩「回觀一一閉、十室八九貧」‖里閭。
【村路】ソンロ　むらのみち。張謂、早梅詩「一樹寒梅白玉條、迥臨二一一一傍二溪橋一」‖村徑。

【杖】㊀ヂャウ　㊁ヂャウ　遇　養

㊀つゑ、歩行を扶くる所以の具。○喪式の時に攜へるつゑ「直一」○つゑつく。禮、王制「五十二於家一、六十一於鄉、七十一於國、八十一於朝」○人をむちうつ棒。○五刑の一、五刑は笞一徒・流・死。○てこ（木梃）○ほこのえ、戈戟の柄。○うつ、たたく。㊁とる、もつ（持）‖伏。○よる（憑倚）左、襄八「一信以待晉」
【杖鉞】ヂャウエツ　まさかりをつゑつく。漢書、五行志「把レ旄一レ鉞二士衆一抗二威武一」
【杖家】ヂャウカ　五十歳をいふ。字解參看。
【杖鄉】ヂャウキャウ　六十歳をいふ。字解參看。
【杖策】ヂャウサク　つゑ。又、竹のつゑをつく。孫綽詩「一手攜レ書一一レ一」
【杖擊】ヂャウゲキ　むちうつ。晉書、陶侃傳「閑者以一一レ之」‖撻擊。
【杖劍】ヂャウケン　ただ一劍のみをたよりとする義。史、陳秀相世家「平身閒行、一一レ亡渡レ河」
【杖國】ヂャウコク　七十歳をいふ。字解參看。
【杖屨】ヂャウク　つゑにてむちうつ刑に當るつみ。宋史、太宗紀「一一鄉レ之」
【杖策】ヂャウサク　つゑ。又、むちをつゑつく。後漢書、鄧禹傳「禹一一一軍門一、試二上延一攬英雄一」
【杖殺】ヂャウサツ　つゑにてうちころす。唐書、重潤傳「后怒一一一之一」‖笞殺・撻殺。
【杖錫】ヂャウシャク　錫杖をつゑつく。權德輿詩「傳燈遇二部邑一一一遊二王公一」
【杖節】ヂャウセツ　旌節をつゑつく。晉書、宣帝紀「一レ一立二軍門一」
【杖鍾】ヂャウセウ　むちうつ。列子「數罵レ一、無二不レ至也一」‖杖擊。
【杖竹】ヂャウチク　たけをつゑつく。水經、注「有レ人、著二大冠絳單衣一一レ」
【杖朝】ヂャウテウ　八十歳をいふ。字解參看。
【杖頭百錢】ヂャウトウヒャクセン　晉の阮脩が酒を買ふ爲め、常に百錢を杖頭に掛けたる故事。晉書、阮脩傳「性簡任不レ修二人事一、常步行以二百錢一掛二杖頭一、至二酒店一便獨酣暢、雖二富世貴一而不二肯顧一、家無二儋石之儲一、晏如也」
【杖鉢】ヂャウハツ　僧の持つ錫杖ヂャウと食鉢ハツと。又巡錫托鉢の僧。李嶠詩「荊南旋一一一こ」
【杖罰】ヂャウバツ　杖で打つ刑罰。北史、魏帝山王傳「遂加一一一、令二其致一レ死」
【杖扶】ヂャウフ　つゑつく、たすける。杜甫詩「緩歩仍須二竹一一一こ」
【杖矛】ヂャウボウ　ほこをつゑつく。史、鄭生傳「沛公遨レ客一レ一曰、延レ客入」
【杖棒】ヂャウバウ　つゑ。周書、梁企傳「力戰相守、矢盡、以二一一一抒レ之」
【杖藜】ヂャウレイ　あかざのつゑをつく。杜甫詩「一一徐歩立二芳洲一」
【泣レ杖】キフレヂャウ　漢の韓伯俞、性至孝、或時母嘗ちちに、大いに泣けり。母故を問ふ、伯俞答へて曰く、前日笞たるる毎に常に痛めり、母の健康なるを知る、今や痛まず、力の衰へたるを知る、故に泣くと（說苑、建本）俞一に愈に作る。

【杖】㊀ティ・ダイ　㊁タイ　霽　寄

㊀木獨生す。詩、唐風「有一一之杜」木盛んなり。㊁かち、船尾の小楫。

【杜】ト　麌

○あまなし、やまなし、こりんご（甘棠）山野に自生する果樹、春五瓣の小白花を著け、秋楼の實に似たる小果を結ぶ。○ふさぐ（塞）とづ。史、商君傳「一一門不レ出」○一蘅は香草の名、葵の屬、冬花開く。

補遺 【杜】・【塞】・【堰】・【堅】の別は【塞（土部十畫）】の條を見よ。
【杜宇】トウ　杜鵑ホトトギスの異名。もと蜀王望帝の名、其の魂化して此鳥となる

との傳說に本づく〔蜀王本紀〕倉頡「江左曰子規」蜀右曰ニー一」‖子規・杜鵑・杜魄・蜀魂。

【杜康】カ　古、酒を作りし人。轉じて酒の異名。魏武帝、短歌行「對レ酒當レ歌、人生幾何、譬如二朝露一去日苦多、慨當二以慷一憂思難レ忘、何以解レ憂、唯有ニー一」

【杜衡】カ　香草の名、かんあふひ。‖杜蘅。

【杜蘅】カク　ふさぎへだてる。

【杜漿】ト　かんあふひの異名。

【杜鵑】トケン　○子規ホトトギス　の異名。郗氏聞見錄「蜀二歩天津橋上一聞ニー一啼一」‖杜宇。○杜鵑花の略「紅ー一」

【杜鵑花】トケンクワ　つつじの一種、さつき。

【杜甫】ホ　杜鵑一名蜀魂、一名山石榴、一名映山紅、有二深淺紅及紫者一、白居易詩、九江三月杜鵑來、一聲啼得一花開、蓋花開正應二杜鵑之候一」

【杜口】コウ　口をふさぐ。史、范雎傳「ー一レ事、足、莫二背鄉一榮耳」‖緘口。

【杜狗】コウ　蠐螬ゴクソウの異名〔揚子方言〕

【杜穀樹】コクジュ　楠の異名。

【杜子美】トシビ　杜甫を見よ。

【杜若】ジャク　○やぶめうがの異名。李中詩「鷓鴣啼二竹樹一ー一綠二汀洲一」○圖誤りて燕子花かきつばたの異名とす。

【杜如晦】カイ　唐の創業の功臣、字は克明、少くして英邁、大節あり、太宗即位後、右僕射となり、房元齡と共に朝政を管す、房能く謀り、杜善く斷ず、世に房杜といふ、蔡國公に封ぜらる、貞觀四年卒す。

【杜少陵】トセウリョウ　杜甫を見よ。

【杜絕】ゼツ　ふさぎたつ。ふさがりたゆ。後漢書「ニー一那僞謂託之原一」

【杜塞】ソク　ふさぐ。ふさがる。吳越春秋「貧無レ所レ惜、奠邪ー一」‖杜閉。

【杜撰】セン　ふさぎ退ぞける。後漢書、資紹傳「ニー一忠功、以疑二衆望一」

【杜魄】ハク　子規ホトトギスの異名。李遠詩「ー一呼レ名語」‖蜀魂・杜宇。

【杜父魚】ホギョ　いしぶし〔石伏〕かじか。はぜに似て小、清流の石間に棲み味甚だ美なり。

【杜甫】ホ　唐代の詩人、字は子美、少陵と號す、其の詩雄渾沈痛にして、忠厚の情を見る、李白と詩名を齊しうし、李杜といふ、代宗の太曆五年卒す、年五十九、杜工部集二十卷あり。

【杜牧】ボク　晩唐の詩人、字は牧之、樊川と號す、官、中書舍人に至り、大中六年卒す、年五十、世、小杜といひ、以て杜甫（老杜）に分つ。

【杜門】モン　もんをふさぐ。史、商君傳「ニー一不レ出、已八年矣」

【杜蓮】レン　やぶみやうがの異名。本草「杜若、一名ニー一」

【杜撰】サン　著作に誤多きをいふ。野客叢談「杜默爲レ詩、多不レ合レ律、故目二事不レ合レ格者一爲ニー一」

【杜多】ズダ　頭陀をいふ。名義集「我說二彼人一、名爲ニー一、今訛稱二頭陀一」‖沙門・桑門・抖擻。

【杲】カウ　俗

○杲の省字にて、梅の古字、又、某に作る。○俗に、癡獃の獃となすは誤。○圖あきれる。

【杗】ボウ　陽

○うつばり（梁）韓愈、進學解「大木爲ー一」○むなぎ（棟）

【杓】シャク　藥　ヘウ　蕭　テキ　嘯

㊀え（柄）○星の名、北斗星の第五より第七に至るをいふ「斗ー一」○ひく（引）淮南、道應「孔子勁ー一關門之關而不レ肯以力聞一」○つなぐ（繫）㊁まと（標的）㊂ひしゃく。水などをくむ器「梧ー一」○まるきばし（橫木橋）「略ー一」

【杙】ヨク　職

くひ（樁）牛馬等をつなぐくひ。周禮、牛人、注「ー一可レ以繫レ牛」‖橛。

【以レ杙爲レ橛】ケツ　小さきくひを大黑柱に使ふ、人材の任用を誤まる譬（韓愈、進學解）

【李】リ　紙

○すもも、桃に似たる果樹。春、白色五瓣の花を著け、實は甘くして酸味あり「桃ー一」「苦ー一」「ー一樹」○をさむ、理に通ず、行ーは使者、行きて事を理むる者、行理に同じ。左、僖十三「行ー之往來」○姓「ー一淵」「ー一白」

【李下之冠】カカン　うたがひを受け易き事がらをいふ。古樂府「君子防二未然一不レ處二嫌疑間一、瓜田不レ納レ履、李下不レ整レ冠」

【李花】カ　すももの花な。劉詵、春陰詩「北窗晴雨裏、一樹ー一明」

【李四】シ　すももは植ゑて四年目に果を結ぶをいふ。埤雅「諺曰、桃三ー一梅子十二」

【李耳】ジ　○周の老聃をいふ、李は姓、耳は名〔史、老子傳〕○虎の異名。風俗通「俗說虎本南郡李氏翁所レ化、呼ニー一則喜、呼レ班則怒」‖李父。

【李斯】シ　楚の上蔡の人、荀卿を師とす、楚の客卿となりて、始皇帝を輔けて天下一統の功を立て、郡縣の制を創立す、二世皇帝立つに及び、讒に遇ひて棄市せらる。

【李商隱】インイン　字は義山、玉溪子と稱す、唐の詩人、開成二年の進士、詩

文瑰邁奇古、尤も律詩に長ず、溫庭筠と名を齊しくし溫李と稱す、後世其の詩派を號して四昌盛といふ。

【李成】リセイ　宋の吳の人、五代の末、詩酒を以て公卿の間に遊ぶ、善く山水を畫く、酒酣にして筆を落せば、煙景萬狀、世傳へて以て寶となす。

【李唐】リタウ　○王朝の名、唐をいふ、李は其の高祖李淵の姓、二十世、二百八十九年にして滅ぶ。周朴詩「羅王才名冠二一一」○宋の畫人。畫史「李唐不レ凡」

【李桃】リタウ　櫻桃ワウタウの異名。續名「櫻桃俗名二一一、又名二朱櫻一」

【李杜】リト　○後漢の李固と杜喬と（後漢書、李固杜喬傳）○後漢の杜密と李膺と（後漢書、杜密傳）○唐の李白と杜甫と（唐書、文藝傳）

【李杜韓柳】リトカンリウ　唐の李白、杜甫、韓愈、柳宗元の略稱、李杜は詩に長じ、韓柳は文に長ず。

【李侯】リコウ　南宋の學者、字は願中、延平に住す、朱熹之に師事す、世に延平先生と號す。

【李廣】リクワウ　もと、うめとの雜說論「一一家ノ實者、來年爲レ之蹊」

【李白】リハク　唐代の詩宗、字は太白、青蓮と號す、性、酒を嗜み、終日醉ふ、玄宗召して翰林學士とす、其の詩、高妙清逸、杜甫と竝稱して李杜といふ、寶應元年卒す、年六十二、李太白集三十卷あり。

【李父】リフ　虎の異名。揚子方言「陳魏間謂レ虎爲二一一一江淮間二之李耳一」

【李氏】リシ　晉人、字は令伯、父早く沒し、母、人に再嫁せしを以て、祖母劉氏に從はる、武帝徵して太子洗馬と爲す、詔書屢〻下る、密、陳情表を上りて固辭す、帝詔を下し、嘉褒して、其の終養を許す、天下其の孝を稱す。

【柚】〔國字〕
○そま(樵)○山林より伐り出したる材木、そまき。○きこり、そまびと。＝樵夫。

【李】〔國字〕
もく(木工)

四

【杏】エウ　梗
○くらし(冥)○ふかく、ひろし(深廣)はるか「一一」「一然」「深一」○さびし(寂)「一無二消息一」

【杳冥】ヤウメイ　冥レうなり、日の木下に在るに從ふ、會意文字。杲杳の反對。

【杳杳】エウエウ　くらくしてはるかなる貌。張衡、思玄賦「日一一西匿」＝窅窅。

【杳冥】エウメイ　深遠なる貌、窅は深遠。鮑溶詩「一一青雲望」＝杳窕。

【杳乎】エウコ　ふかくして廣き貌、はるかなる貌。曾子、內業「果乎如レ登二於天一」「一一如レ入二於淵一」

【杳窕】エウテウ　おくぶかし。水經、注「四周一一」＝幽邃・杳冥。

【杳然】エウゼン　はるかなる貌。李白詩「桃花流水一一去、別有二天地非二人間一」＝杳乎・杳冥・窅然。

【杳冥】エウメイ　はるかに遠き貌。杜甫詩「一一入二雲漢一」＝杳杳・杳窕・杳渺・杳然・杳乎。

【杳窕】エウテウ　ふかくして遠き貌。楊德興詩「窅窕窮一一、新澄漾二淪漣一」＝杳冥。

【杳渺】エウベウ　はるかに遠き貌。白居易詩「拳石苔汀渠、尺波湖一一」

【杳昧】エウマイ　はるかにしてくらし。拾遺記「悠哉一一」＝杳冥。

【杳冥】エウメイ　おく深くしてくらし。楚辭「一一兮蓋曀」張衡、西京賦「雲霧一一」＝杳昧・窈冥・窅冥。

【杭】カウ　陽
○ふなわたし。又、船にて渡ふ。詩、衛風「誰謂河廣二一葦一之」＝航。○州名、浙江省に屬す、日清馬關條約により開きて商埠と爲す。○國くひ(杙)

【杲】カウ　皓
○あきらか(明)日光の明かなる貌。○たかし(高)

【杲杲】カウカウ　日のあきらかなる貌。詩、衛風「一一出日」

【杲乎】カウコ　高き貌。曾子、內業「一一如レ登二於天一」

【果】㊀クワ　哿　㊁ラ　箇
㊀くだもの、このみ(木實)「一實」「碩一」「珍一」「嘉一」「茶一」草の正字。○むくい(應報)原因より生ずるなりゆき「結一」「因一」○かつ(勝)○はつ。はたす(決)おもひきりよし。論、子路「行必一」○はたして、あんのごとく、豫期せし通り。○いさむ(勇敢)「一敢」「勇一」○をはり、はて。○はては、つひ

に。○飽ㇰく貌。○さる。猿に通ず。○じがばち、蠃に通ず。㊁はんべる(侍)孟、盡心「二女ー」‖蠃。

【果銳】クワエイ　思ひ切りよく心するどし。南史、朱超石傳「超石亦ー」

【果ノ果満ノ車】クワカマンクワシャ　満果位は勇なる故、外出する時、車に盛つ。世說、注「安仁至美、每ㇾ行、老嫗以ㇾ果擲ㇾ之、滿ㇾ車」

【果悍】クワカン　おもひきりありて強し。漢書、義士ー、卽引ㇾ弁雄之」

【果敢】クワカン　おもひきりてはたす。王安石、祭ニ歐陽文忠公ー文「ー之氣、卽正之節」

【果毅】クワキ　○勇氣ありて敵を殺し、功を立てる。書、泰誓「陶乘士、其倘迪ニー「以登ニ乃辟ニ○決斷ありてつよし。抱朴子「奮ニー之壯烈」‖剛果・勁果。

【果刑】クワケイ　罪ある者を必ず處刑す。沈亞之、賢良方正策對「ー信賞、國之筋幹也」‖必罰。

【果勁】クワケイ　思ひ切りよくして氣力つよし。魏志、袁紹傳「北兵數倍、而ー不ㇾ及ㇾ南」

【果決】クワケツ　おもひきりよし。潘岳賦「遺ニ子嬰之ー」敢討ㇾ賊以紓ㇾ禍」歐陽修詩「遲疑與ニー」‖果斷。

【果敢】クワコウ　あらあらしくかるはづみ。奚志、孫堅傳評「輕佻ー」、隕ㇾ身致ㇾ敗」‖剛躁・果輕。

【果實】クワジツ　木のみ。‖木實。

【果樹】クワジュ　くだもののなる木。‖果木。

【果然】クワゼン　○鮑ㇰく鵝。蘇、逍遙遊「腰猪ー」○をながざる。宋國史補「揚州取ニー」數十ー」可ㇾ得」‖猩然・禺・狖・尾猿。○はたしてしかり、あんのごとく「史、汲黯傳」

【果斷】クワダン　思ひ切りよし。書、周官「性克ー」、乃圍ニ後艱」陳書、高祖紀「帝多ニ武略ニ明達ー」」‖果決。

【果報】クワホウ　○むくい。北史「齊國富強、皆爲ㇾ有ニ佛法ニ設ㇾ以ニ罰緣ー之理ニ晉史、汪革傳「ー不ㇾ可ㇾ不ㇾ信、革因乞受ニ菩薩戒」‖因果應報。○國しあはせ「ー者ワカ」‖幸運・善果。

【果腹】クワフク　はら一ぱい、飽ㇰく。酉陽雜俎「食緑ニ數人、尤能食ㇾ鯸、常盲餘味未ニ嘗ー」」

【果木】クワボク　くだもののなる木。潘岳運詩「ー有ニ蔭行」‖果樹。

【果勇】クワユウ　おもひきりよくしていさむ。晉書、輿服志「剛性ー、其闘到ㇾ死乃止」‖勇果・雄果。

【果蓏】クワラ　果は木の實。蓏は草の實、卽ち瓜類。周禮、地官「ー之屬」

【果蓏】クワラ　天瓜ヲカラスの異名。急就篇「栝樓」注「ー、一名王瓜」

【杰】ケツ　屑

○人の名。○豪傑の傑(人部十畫)の俗字。

【杭】㊀ゲン・グヮン　㊁グヮン・ゲン　諫　元

㊀一種の喬木、皮厚く、味苦澁、煎たる汁にて衆果を藏すれば腐敗せずといふ。○ふぢもどき(草の名)㊁もむ(按摩)〔史、扁鵲傳〕

【杶】ゴ　遇

○やらひ、木を交互にして以て遮闌と爲すもの。○樓ー はこのままよせ、うまとめ。‖行馬。

【枸】コウ　尤

○かうぞ(楮)紙を製する原料。‖構。○まがる(曲)荀、性惡「檃栝之生、爲ニ木也」

【枝】㊀シ　㊁キ　支　支

㊀えだ(條)木の幹より分れ生ずるもの。支に通ず。○てあし(手足)孟、梁惠王「爲ニ長者折ニ」按摩をとる。‖肢。○物事のわかれ、えだは「ー流」○ふし(手節)○わかる(分)ばらばらになる、支離する。易、繫辭「中心疑者其辭ー」○ちる(散)○ー梧はささふ(支持)抵巇する。○つっかひばしら(支柱)○十二支。幹ーは干支。㊁むつゆび(手足多指)‖跂。

【枝旅】シリョ　わかれのたびぢ。牛僧孺文「ー茂苑、累累而設」

【枝葉】シヨウ　○えだと、はと。國語「人之有ニ枝葉、猶ニ木之有ニー也」○子孫の義。左傳「公族、公室之ー也、若去ニ之則本源無ニ所ニ庇蔭ニ矣」○轉じて、事の主要ならざる義、えだは。

【枝折】シセツ　國○山路などに道しるべのため木の枝を折りてめじるしとすること。轉じて案内、道しるべの義。○讀みかけたる書物の間に挟みてしるしとするもの。‖栞。

【枝柯】シカ　えだ、柯も枝。晉書、石崇傳「皆以ニ珊瑚樹ニ賜之、高二尺許、ー扶疎、世所ニ罕比ニ」‖枝條。

【枝解】シカイ　四肢を切りはなす刑。史、黥布傳「功已成矣、而卒ー」

【枝幹】シカン　○十干と十二支と。呂覽「ー相配以成ニ六旬ニ」後漢書、律曆志「作ニ甲乙ニ以名ニ日、謂ニ之幹ニ作ニ子丑ニ以明ニ日、謂ニ之枝ニ」‖支干・干支。○えだと、みきと。世說「ー扶疎」○手足と軀幹と。釋名「五行

脚の木、故其體狀有二一一也」
【枝梧】シゴ　草木のえだと、くきとの參同契「一一相連」
【枝指】シシ　さゝふ。さゝもふ。抵抗する。枝に小枝、梧は斜柱、撐支つかの義あり、因りて抵禦に喩ふ。楊文公談苑「楊文公嘗作詩、用事多在三上、馬上・一一・廁上也」
【枝情】シジヤウ　えだと、こずゑと。白居易詩「一一暗棲知鵲意」
【枝蔓】シマン　われのしんるの、別家。沈約宋書「皇家一一、莫不茂育江東」
【枝梢】シセウ　えだのさき。梢は枝端。
【枝條】シデウ　えだとえだとのつゞきめ。
【枝幹】シカン　きだとみき。枝は枝より分れたる部分。幹はみき。
【枝陵】シリヨウ　丘陵。
【枝河】シカ　本流より分れたる河。
【枝津】シシン　本流。一一幹流。
【枝派】シハ　一一幹流。
【枝分】シブン　一一幹流。
【枝葉】シエフ　一一幹流。
【枝江】シカウ　一一幹流。
【枝江】シカウ　一一幹流。
【枝江】シカウ

春之間」孫一に沙に作る。
【杵聲】ショセイ きぬたの聲。謝靈運、擣衣詩「擣長——哀」＝砧聲。

【松】ショウ 𣏌 古、案に作る、或は俗字

○まつ、常緑の針葉樹、其の材、用途甚だ廣し「孤——」「喬——」「老——」「勁——」○まつの木の長壽にして歳寒にも色を變へざるより、節操・長壽などの譬に用ふ「——柏操」○江の名、蘇州の太湖に出で上海を經て黄浦江と合し海に入る「——江」
【松阡】ショウセン まつと、たけとの儒光義詩「衡陽方二——」＝松竹。
【松韻】ショウイン まつかぜのおと。白居易詩「——徒煩聽、桃夭下足觀」＝松濤・松聲・松籟。
【松影】ショウエイ まつのかげ。鶴林玉露「每二春夏之交一、蒼蘚盈レ堦、落花滿レ徑、門無二剥啄一、——參差、禽聲上下」
【松楹】ショウエイ まつの造植詩「霧露二青——一、鑿出二狹苑一」＝松樹。
【松下】ショウカ まつの木のした。孫革、詩「半夏師二詩一、——問二童子一、言師采レ藥去」
【松脂】ショウシ まつのやに。本草「松脂別名——」＝松膏・松肪・松香。
【松江之鱸】ショウコウのスズキ 吳松江（今の江蘇省松江府華亭縣にあり）に產するすずき、美味を以て聞ゆ。赤壁賦「巨口細鱗、狀如二——一」＝松、一音ズン。
【松毬】ショウキュウ まつぼくり。＝松子。
【松菊】ショウキク まつと、きくとの歸去來辭「三徑就レ荒、——猶存」
【松菊主人】ショウキクのまつと、きくとのある じ。唐書、韋表微傳「時爲二——一、不レ愧二陶淵明一」
【松有操】ショウユウソウ 松と菊とを愛する因縁。朱松詩「規模慕二古賓一、料理——」
【松菌】ショウキン 松の根に生するきのこ。殷仲文詩「海言寄二——一」＝松蕈。
【松蛆】ショウショ たいまつの蛀月休、入林屋洞二詩「忽然白蝙蝠、來樓——明」＝松虫。
【松魚】ショウギョ 圖かつを（鰹）＝鮪鰹魚。
【松黄】ショウコウ まつのはなの本草綱目「松花釀——、掃取正月二三月黄酒」服、令二輕レ身延レ年」
【松喬之壽】ショウキョウのことぶき 赤松子と王子喬とのことぶき、二人は共に仙人。漢書、王吉傳「心有二慕レ仙之志一、則體有二——一」＝喬松之齡。
【松鼠】ショウソ 松の實、又は松の實に似たる故り栗等雜識「凡松葉皆雙股、故世以爲二——一」
【松杉】ショウサン まつと、すぎと。劉長卿詩「猿鳥鳴啾啾、——雨庭多」＝松蒼翠、游二定林寺一詩「穿二壑一行二盡石、一壑猶隔白雲岑」
【松子】ショウシ まつの實。杜甫詩「風落松二——一、天寒割二蜜房一」＝松實。
【松煤】ショウバイ まつを焚きて得たるすす。洞天清錄「墨二魏晉一、始有二漆丸、乃漆煙一——爽和爲レ之」
【松柏】ショウハク 松と、このてがしはと。論、子罕「歲寒然後知二——之後一凋也」
【松柏操】ショウハクソウ 松柏の四時其の色を變へざるに比して、人の操の堅きにいふ。晉史、樂廣傳「與二裴楷一比レ操、風範等レ邈、皆不レ爲レ輔」
【松明】ショウメイ 松の木の心の油ある者をもやすをいふ、たいまつ。謝石鄰詩「——夜窗レ燈」＝松炬。
【松腴】ショウユ 菜若ヴァクの異名、松根に生じ藥用とす。蘇軾詩「結二茅窮山一謀二——一」
【松蘿】ショウラ 蔦ちょうの一種。本草「——名女蘿」詩、小雅「蔦與二女蘿一」＝女「女蘿在レ草、曰二兎絲一、在レ木曰二——一」
【松顏】ショウガン まつかぜのおと。元曉、越亭詩「——韻宮商」＝松濤・松聲。
【松蓋】ショウガイ ○松のつゆ。上林賦「南陽椒緑早、——麥菜深」○圓松の木の下の砂に生ずるもの、球狀にして食用に供す。＝茯苓。

【柅】ゼイ 圖

○ほぞ、壓木に插し入れる栓、楚辭、九辯「圓鑿而方レ枘、吾

固知其組織而離入」【枘鑿不二相容一】ジセイノ 四角なるほぞは圓きほぞ孔にはまらぬ。宇解參看。

【析】セキ　錫

○さく、わる（破木）○わかつ。わかる（分）「分一」「剖一」「條分縷一」○分れ居る。書、堯典「厥民一」○とく（解）「解一」

同訓異字　析・分・別・判・頒・班・訣の訓は分（刀部二畫）の條を見よ。

【析肝】セキカン きもをさく、まごころを示す。赤誠を披瀝する。史、鄭陽傳「剖レ心一レ肝相信」

【析薪】セキシン たきぎをわる。詩、齊風「一レ一如レ之何」

【貧二析薪一】ヒンセキシン 父祖の業を失墜せざる義。貧苛を見よ。

【析出】セキシュツ 化學にて化合物を分析し、或物質を分離して出す。

【析別】セキベツ わかれはなれる。後漢書、馬皇后紀「太后感二一一之懷一、各賜二王赤綬一」＝離別。

【枏】ダン・ナン　覃　ゼン　寒　俗に楠に作る

○うめ（梅）○ゆづりは（交讓木）一說に豫章ヨショウに同じ、楠の正字なりと。廣雅芳譜「一生南方、故又作楠」

【杻】チウ　有

○てかせ（手械）「鉗一」○もちのき（櫟）葉は杏に似て尖り、皮は赤く、木理は曲多くして直少し。

【杶】チュン　眞

うらしに似たる木。＝椿。

【杶幹】チュンカン 漆に似て、古昔多く琴の材に用ひし木。書、禹貢「一一桓桓、瓊琯琴丹」

【杼】㊀チョ・ト　㊁ジョ。　㊂ジ。　語　御　薬

㊀ひ、はたおりの具、よこいとを通はす具（機之持緯者）＝箄。○うすし（薄）㊁水を汲み出す桶ヲケ○くむ、出す、排泄する。管、禁藏「一非易」水」㊂どんぐり、櫟クヌギの實。栗の屬。＝予。○つるばみ（栩）

【投レ杼】トウチョノ 投杼之疑（七三三頁二段）參看。

【杼柚】チョジク ひと、はたと。はたを織るに用ふる具。郭泰詩「寒女雖二妙手一、不レ得レ棄二一一一」＝機杼。

【杼樓】チョロウ ひと、をさと。又、はたを織る義。梅堯臣詩「歲レ莫レ勤二蠶機一、生計非二一一一」

【杼柚】チョジク 杼はひ、機の緯イを持する具、柚はをさ、經イトを受くる具。轉じて文章を組み立つる義とす。陸機、文賦「猶レ一於予懷一、恤二他人之我先一」＝杼柚。

【杼栗】チョリツ とちの實と、くりの實と。莊、山木「衣二裘褐一、食二一一一」

【東】トウ　東

○ひがし、ひんがし、日の出る方。禮記「大明生二於一一」○ひがしす、一方へ行く。左傳「秦師遂一」○はる（春）五行說にては春に當るが故。○一君は日。又春の神。○一宮は世子又太子。○安一は縣名、奉天省に屬す。○活一トウカツはおたまじゃくし（科斗）○圖一西ヒガシは物の義、一西南北に產する所の物の義。○國あづま。相模國箱根以一の八國の總稱「關一八州」

【東日】トウジツ 日、木中に在るを東と曰ひ、上に在るを杲と曰ひ、下に在るを杳と曰ふ、木は若木なり、日の昇降する所。

【東夷】トウイ ○東方のえびす、東の方の野蠻人「一一四戎南蠻北狄」○圖一古代東國の人を呼びていふ。

【東關】トウカン 東宮の門。白居易詩「提幡下二南山一、關吟入二一一一」

【東堂】トウドウ ○ひがしのくも。宋書、貨殖傳「廷二首一一一」○圖しののめ、あけがた。

【東榮】トウエイ いへの東方にあるのき。禮、喪大記「一一」注「榮、屋翼也」

【東瀛】トウエイ ひがしのうみ。王融、淨行頌「河被流水趨二一一一」

【東宛】トウエン 箏トの異名。道德「箏、一名一一」

【東垣執戟】トウエンシュゲキ 鼠ネズミの異名（河東記）

【東家】トウカ ○雇人より其の主人をいふ語。古時、主位は東方に在り、賓位は四方に在りし故。○ひがしどなりの家。漢書、王吉傳「一一有二大槐樹一」

【鄰二東家牆一】トウカノショウ 東隣の垣根を越えて其の處女を挑む。孟、告子「一一而摟二其處子一、則得レ妻、不レ摟則不レ得レ妻、則將摟レ之乎」

【東家丘】トウカキュウ 丘は孔子の名、孔子の四隣に住せし人が、孔子の聖人たることを知らずして、東家の丘と呼びし故事。孔子家語「當人不レ知二孔子聖人一乃曰、一一者知レ之矣」

【東階西階】トウカイセイカイ 東西のきざはし。客は西階より昇り、主人は東階より昇る。曲禮「主人爲レ客而入、主人就二東階一、客就二西階一」

【東海揚レ塵】トウカイヨウジン 海の陸に變ずるにいふ。神仙傳「麻姑謂二王方平一」

曰、自二接持一以來、見二東海三變一爲二桑田一、向到二蓬萊一、水乃淺二於往者一、略半也、豈復爲二陵陸一乎、方平乃曰、東海行復揚レ塵耳」

【東海夫人】トウカイフジン 淡粲ヒガの異名。

【東郷】トウキョウ 東方に向ふ、郷は嚮。史、淮陰侯傳「王曰、丞相數言二將軍一將軍何以數二寡人一計策、皆謝、因レ王曰、今一舉二破天下一、要二功三須臾一郷」‖東向・東嚮。

【東行西走】トウコウセイソウ いそがはしく東西に奔走する。易林「——、喪二其大馬一」‖南行北走・東奔西走。

【東漢】トウカン 後漢の別稱、東京都ち洛陽に都したる故。前漢を西漢といふの對。

【東去西來】トウキョセイライ 東に去り西より來る、東西に奔走する義。‖東奔西走。

【東宮】トウグウ 太子をいふ。東は易の卦、震は長男にして東に屬す、故に太子は一一に在り。詩、衛風「一一之妹」疏「太子居二一一一一」‖青宮・春宮・東儲。

【東君】トウクン ○日の異名。史、封禪書「晉巫祠、五帝一一雲中司命之屬」注「一一、日也」○春の神。王初、立春後詩「一一珂環響珊珊」‖東帝。

【東皇】トウコウ 春の神。又、春。尚書緯「春爲二一一一、又爲二青帝一」‖東帝。

【東郭履】トウカクリ 東郭先生の履は底破れて皮なく足にて地を踐む、貧の甚だしきこと。史、滑稽傳「東方朔號二東郭先生一、久待二詔公車一、貧寒衣弊履不レ完、雪中行、履有レ上無レ下、足盡踐レ地、道中之人笑レ之」

【東觀】トウカン 漢代の祕書監、卽ち宮中藏書の處。後漢書、竇章傳「鄧騭聞二其名一、請入二一一一一、校二書郎一」

【東京】トウキョウ ○洛陽のみやこの異名。長安を西京といふの對。○佛蘭西ランスの東洋植民地、安南・遏羅シヤムに接す。○國ベトナムの首府の名。‖東都。

【東丘】トウキュウ 東方の諸侯。書、舜典「柴望、肆二覲東后一」

【東西】トウザイ ○東と西と。周禮、地官、大司徒職「一一爲レ廣、南北爲レ輪」○東洋と西洋と。○國物の義、字解參看。○國與行物などにて口上を述べる時、客をしづめるためにいふ語、もと相撲に始まる。

【東西南北人】トウザイナンボクジン 住居の一定せざる人。禮、檀弓「今丘也——也」

【東作】トウサク 春の耕作、農作の義。書、堯典「寅賓二出日一、平二秩一一」

【東三省】トウサンショウ 支那の東北部、卽ち吉林・黑龍江の三省。

【東山】トウザン 世の俗塵をさけて山中に隱居する。晉書、謝安傳「屢違二朝旨一、——」

【東牀】トウショウ 女壻、卽ちむすめのむこ。太尉、郗鑒、門生をして女壻を王導の家に求めしむ、王氏の子弟みな矜持す、唯一人一一に在りて坦腹して食ひ、獨り聞かざるが若し、鑒曰く、正に此れ、佳壻なりと、之を訪へば乃ち羲之なり、遂に之に妻はす、羲之は王導の從子（晉書、王羲之傳）

【東序】トウジョ 古の大學、王宮の東にあるによる。禮、王制「夏后氏養二國老于一一、養二庶老于西序一」‖西序は小學。

【東司】トウス 佛家にてかはや。登司卽ち廁カハヤの神の名の轉訛。

【東陸】トウリク 國のひがしのはて、陸は遠。‖東塞・東隅・東隅。

【東遷】トウセン ○東方にうつる。○周の平王が都を雒鎬地方より東方の洛陽に遷したるをいふ。左、隱六「我周之一一、晉鄭焉依」

【東瞻西望】トウセンセイボウ あちこちみまはす。‖東眺西望。

【東漸】トウゼン 東方にすすむ。書、禹貢「一一于海、西被二于流沙一」

【東岱】トウタイ 岱は泰山、東方に在り、故にいふ。後漢書、桑甫規傳「鳥風至二于一一一」‖東岳。

【東道主】トウドウシュ 東は主人の位、主人となりて來客の世話する義。左、僖三十「燭之武、見二秦伯一曰、若舍レ鄭、以爲二一一一一、行李之往來、共二其乏困一、君亦無レ所レ害」

【東旦】トウタン ひがしの天が明ける。支遁詩「圓光朗二一一一、金雲艷二春精一」

【東儲】トウチョ 皇太子をいふ。南史、齊文惠太子傳「及二正位一一、鈐立レ名」

【東帝】トウテイ 春の神。‖東皇・東君。

【東天】トウテン ひがしのそら。又、あけがたのそら。‖曉天。

【東天紅】トウテンコウ 國○ひがしが赤らむ。○轉じて雞のなきごゑの形容にいふ。

【東都】トウト ○河南府洛陽の稱。‖東京。○國東京の異稱。

【東坡】トウバ 宋の蘇軾字は子瞻の號、もと黃州に謫居せし時、其の地名「湖北省黃岡縣治の東に在り」に取る「一一巾」「一一肉」「一一全集」

【東方朔】トウボウサク 前漢の人、字は曼倩、武帝に仕へ、常に諧謔を以て帝に愛せられ、又、帝の過を救ふ、最も詞賦に長ず。

【東風】トウフウ こち、春の風。禮、月令「孟春之月、一一解レ凍」‖春風。

【東風吹二馬耳一】トウフウウマノミミヲフク 漠然として感動する所なき譬、馬の耳に念佛。李白詩「世人聞レ此皆掉レ頭、有レ如二東風吹二馬耳一」

【東平】トウヘイ 漢の國の名、山東省泰安府に屬す「一一王蒼」

【東壁】トウヘキ 文章を司る二星の名。轉じて文學の義とす、壁一に辟に作る。晉書、天文志「一一二星、主二文章一、天下圖書之腋府也」

【東北】トウホク ○ひがしと、きたと。○東北

の間、うしとらの方位。易、說卦「艮一一之卦也」＝艮位。

【東奔西走】トウホンセイソウ 東行西走に同じ。

【東銘】トウメイ 宋の張載が書齋の東まどに掲げたる文、言行を謹むべきことを述ぶ。

【東洋】トウヨウ 亞細亞アジア大陸のひがしの方の稱、即ち我邦及支那の汎稱。＝大東。

【東萊博議】トウライハクギ 四卷、宋の呂祖謙の著、左傳の評論なり、東萊は著者の號。

【東離】トウリ ○ひがしのまがき。○一一君子トウリは菊の異名。晉の陶潛明の故事。陶潛、飲酒詩「采二菊一一下一、悠然見二南山一」

【東流】トウリュウ ○ひがしにながれる水。書、禹貢「一一入レ漢」○支那の川はみな東流するを以て、單に川の稱とす。莊子「海不レ辭二一一一、大之至也」○ひがし。轉じて東方に弘まる。譯名等集「大法一一、爲レ日既久、雖二風移改變一弘之不レ易」＝東漸。

【東魯】トウロ 周代、魯の國を由東と山西との二に別ちていふ。北山移文「學二遊一一一、書二隱南郊一」

【杷】ハ 麻 ヘ 禡

㊀さらひ、土をならし、又は穀類をかきあつめる農具（平田器）（收麥器）「鐵一一」○枇一ハは果樹、高さ丈餘、葉は馬耳に似、冬、白花を著け、其の實は黄色にして味甘美なり。又樂器、もと胡人が馬上にて彈するもの。＝批把琵琶。㊁え、つか（柄）＝欛。

【栃】ハ 卦

○はな、蔯ヨモギの總名。○あさ（麻紵）

【杯】ハイ 灰

もと、桮に作る、盃・盃は俗字

○さかづき（飲酒器）「玉一」「金一」「螺一」○ひろく液體を盛りたる器物。又其の器物を數ふるにいふ「酒三一」「一一奠」

【奉レ杯】ハイヲタテマツル さかづきをとりあげる、酒を飲む。李白詩「一レ一邀二明月一」＝擧レ杯。

【領レ杯】ハイヲリョウス さかづきをかたむけて酒を飲む。蘇軾詩「一レ一不二敢辭一」

【銜レ杯】ハイヲフクム 酒を飲む。劉伶、酒德頌「一レ一漱レ醪」杯酒參考。

【杯圈】ハイケン 次條に同じ。

【杯棬】ハイケン 木をまげて作りしさかづき。礙、內則「毋渡而一一不レ能レ飲焉、口澤之氣存焉爾」＝杯圈。

【杯心】ハイシン さかづきのまんなか。陳遵詩「晴日倒レ紅生二笑頰一、羅裾搖レ綠墮二一一」

【杯盤】ハイバン さかづき。劉禹錫詩「白家慵有二一一興一」

【杯酌】ハイシャク さかもり。戴叔倫詩「莫レ怪沙邊倒、偏將二一一餘一」＝杯讌。

【不レ辭二杯約一】ハイヤクヲジセズ のみ過ごして酒席に居るにたへられぬ。史、項羽紀「沛公一一、不レ能レ辭」

【杯酒】ハイシュ さかづきのさけ。漢書、司馬遷傳「未下曾銜二一一一、接中慇懃之歡上」

【杯水】ハイスイ さかづきのみづ。孟、告子「今之爲レ仁者、猶下以二一一一車薪之火上也」

【杯洗】ハイセン 圖酒席にて杯をあらふ器。＝盃洗。

【杯池】ハイチ さかづきの如き小さきいけ。李賀詩「一一白魚小」

【杯中蛇影】ハイチュウノダエイ 神經質にてうたがひまどふ心ある喩。晉の樂廣、河南の尹に遷る、昔て親客あり、久闊また來らず、廣其の故を問ふ、答へて曰く、前に座にありて酒を賜ふことを蒙る、飲むに方りて忽ち盃中に蛇あるを見て、意甚だ之を惡む、既に飲みて疾むこと、時に河南の壁上に角弓あり、漆畫もて蛇を作る、廣窓ふ、盃中の蛇は即ち角弓ならんと、また前處に置酒し、客に謂ひて曰く、盃中また見る所ありや不やと、答へて曰く、見る所初の如しと、廣乃ち其の所以を告ぐ、客豁然として意解け、洗爾に愈ゆ（晉書、樂廣傳）

【杯中物】ハイチュウノモノ さかづきの中のもの、即ち酒。陶潛、責子詩「天運苟レ如レ此、且進二一一一」

【杯盤狼藉】ハイバンロウセキ 酒席の終に近づきて、酒杯・器皿などの散亂するにいふ。史、滑稽傳「一一、堂上燭滅」蘇軾、前赤壁賦「殽核已盡、一一」

【栃】ハイ 隊

別に柿に作る

○きふだ（木櫃）こけら。○こっぱ（木片）晉書、王溶傳「木一一藏二江南下一」○へぎ、薄くそぎたる板。

【柿】

梹（前條）に同じ、果樹の柿（木部六畫）とは別。

【枚】バイ マイ 灰

○みき、もと（幹）說文「枝曰レ條、幹曰一一」○かず、ひとつひとつかぞへる「一一擧」＝箇。○うまのむち（馬箠）左、襄十一「以一一數レ闖」○鐘の乳。○狀、箸の如く、口に橫にふくませ、紐にて頂にむすび盤を發するを防ぐもの。漢書、高帝紀「章郎衣衛一一擊二項梁一定陶」○一一はこまか（細密）なる貌。圖○ひら、薄く平たき物を數へるに添へる語「紙一一」「板三一」

○昔、金銀貨幣を數へるに用ひし語、金一ー は七兩二分、銀一ー は四十三匁。

【銜ー枚】カイバイ 字解參看。楚辭「願ー ー而無言兮」

【枚數】マイスー ○かず。左傳「識二其ー ー一」 ○國スイ紙・板倚の物數のかず。

【枚舉】マイキョ 其の事と指ざさずしてひろく言圖をうらなふ〔左、昭十二〕

【枚枚】マイマイ こまかき貌。詩、魯頌「閟宮有ー ー、寢寢ー ー」

【枚卜】マイボク 一一かぞへうらなふ。書、大禹謨「ー ー功臣、惟吉之從」

【枚擧】マイキョ 一一かぞへあげる。書、無逸、傳「周之先後文武、而ー ー之辭也」

【枋】ハウ バウ 陽

○ふしづけ。○車の材に適する木。‖檀木。○蘇ー ー は果印度に産する喬木、葉に刺あり、黄色の花開く。其の幹の煎汁は、紅色の染料と爲すべし。‖蘇木。

【板】ハン 潸 通音バン 又、版に作る

○いた(片木)「平ー」「負ー」又、ーの如く薄く平たきもの「鐵ー」○はんぎ「出ー」‖版。○ふだ(判・籍)○みことのり(詔書)「詔ー」○ふみ(書牘)○繩を築く者一丈をーといふ、一解、八尺をいふ。○手ー は笏ク 東帶の時に持つもの。晉書、王坦之傳「倒執ー手ー」○拍ー は樂器、打ちて拍子を取るもの。○ーー はそむく(反側)又道を失ひてみだれる。詩、大雅、板篇「上帝ー ー」

【板幹】ハンカン いたびさし。晉書、桓彝傳「彝ー作ー ー、命以ー字代ー之」

【板屋】バンオク いたぶきやねの家。詩、秦風「在ー其ー ー、慰ー我心曲」

【板行】バンカウ はんにほりて世にひろめる、板刻して發行する。‖版行・印行・出版・上梓。

【板鋸】バンキョ ついぢを支へる柱。柳宗元文「斬ー ー解ー荘壁」

【板本】バンホン 國はん、文字・圖畫などをほりつけたる木。‖印板・刻板・版本。

【板蕩】バンタウ ひらめ(鮮)北戸錄「比日魚、南越志謂ニ之ー ー」

【板刻】バンコク 書籍を版にきざむ。經耕錄「南亭甲集十二刻、内有二定武ー ー一」‖版刻。

【板蕩】バンタウ 國がみだれうごく、詩經に板と蕩との二篇ありて共に政道の亂れたるをいふによる。唐書、蕭瑀傳「疾風知二勁草一ー ー識二誠臣一」

【板榜】バンバウ いたのふだ。張綖詩「宣廊標ニー ー、高殿鎖二金環一」

【板本】バンホン はんにほりたる書物、印刷せし本。ー ー は五代の馮道に始まる。舊本の對。‖版本・刻本・印本。

【板金】バンキン 國板の如くに薄くしたる金屬。

【板子】バンス 國舟ぞこにあるあげいた。

【枇】ヒ 支

ー杷は果樹、一名、盧橘。杜甫詩「ー杷樹樹香」又、樂器。‖琵琶・批把。

【杕】ヲ 虞

ー疎ソは枝葉の四邊に布く義。陶潛詩「遠ー樹ー疎」ー は通じて扶に作る。

【枌】フン 文

○にれの一種、白楡。本草綱目「楡有赤白二種、白者名ー」○むなぎ(楝)科に通ず。○國そぎ、木を薄くそぎし板。こけらよりは大いなり。

【枌楡】フンユ ○にれ。證、内則「蓬艾ー ー」○故郷の稱。漢書、郊祀志「高祖勝ニ雍ー ー社一」もとーを植えて社神とせしによりて鄉名とす。西京賦「豈伊不ー懷ー鄛二于ー ー」

【杪】ベウ 篠

○こずゑ(梢)木のさき。韋應物詩「高齋出ー林ー」○ちさし(小)木の細き枝。○いただき、はし。○する、歲又は月の末「秋ー」「歲ー」「月ー」

【杪歲】ベウサイ としのすゑ。晉書、桓溫傳論「交二霜雪於ー ー、晩二風雨於將歲一」‖歲杪・歲暮・歲尾。

【杪秋】ベウシウ あきのすゑ。魏徵詩「首夏別二京輔一、ー ー澄二三河一」

【杪春】ベウシュン はるのすゑ。李端詩「江上花開盡、南行見二ー ー一」

【杪冬】ベウトウ ふゆのすゑ。梁元帝纂要「冬曰ー ー一」‖季冬・末冬・晩冬。

【杪頃】ベウケイ こずゑ。いただき。傅毅賦「未レ升ー ー而九息、何時逝二乎ー ー一」

【杪杪】ベウベウ 細小なる貌。漢昭武王、遺志賦「ー ー金鉦、遑遑四郊」

【林】リン 侵

○はやし、もり、平土に叢木あるをいふ「山ー」「上ー」「茂ー」「深ー」「森ー」「花ー」「春ー」○樹木。○盛んなる貌。詩、小雅「有ー ー有ー」○おほし(衆)「ー ー立」○物の多く從り集まる義、事物の淵藪をいふ「儒ー」「藝ー」「群ー」○野外。○緣ー は荊州の山名。後漢書、劉玄傳「諸ー」命衆義於綠ー ー中ー」轉じて盜をい

ふ。○吉ーは省名、東北は露領に連り、南、奉天に連り、西、黒龍江に接す。

【林園】リンエン はやしに立つもや。草露物詩「則月分ニーー」‖林霏。

【林衣】リンイ はやしの木の葉。衣は衣服に比す。宋之問詩「ーー掃ル地軽」

【林檎】キンゴ はやしのこかげ。檎は樹蔭。王筠「楚辺二両木交ル蔭之下一曰レ檎」王勃文「遂披ニーー」

【林園】リンエン 樹の茂りたるその。西唐書、路嗣恭傳「子恕私第、有ニ佳ーー」

【林下】リンカ はやしのもと。王維詩「客来深巷中、犬吠寒ーー」

【林下風】リンカフウ 山林に幽棲せる隠士の風。世説「王夫人神情散朗、故有ニ林下風ーー」

【林学】リンガク 森林の培養・保護・林政等の事を研究する学術。

【林閒】リンカン はやしのあひだ。白居易、送ニ王十八歸ル山寄ニ題仙遊寺一詩「ーー暖レ酒焼ニ紅葉一、石上題レ詩掃ニ緑苔一」

【林坰】リンケイ 野外の地。杜甫詩「朝倫限ニ香漢一、客思廻ニーー」

【林檎】リンゴ 果樹の名、幹枝花葉すべて海棠に似、果は光澤ありて味美なり。東京夢華録「銀杏栗子ーー之類」‖柰。

【林慕澗愧】リンボカイ 節操なき偽隠者が山中に居れば林も澗も皆之を恥づる義。孔稚珪、北山移文「其林慕無レ塵、澗愧不レ歇」

【林趾】リンシ はやしの木の下。潘岳詩「落英隕ニーー」

【林樾】リンエツ さかんに多き貌。李子卿賦「戈矛ーー、士馬櫛比」

【林鐘】リンショウ 十二律の一、陰暦六月に配す。禮記「律中ニーー」注「季夏氣至、則ーー之律應」‖林鐘・百鐘。

【林政】リンセイ 山林に關する行政。

【林泉】リンセン 山林泉石、庭園。賀知章詩「主人不ニ相識一、偶坐為ニーー」

【林藪】リンソウ ○草木の茂れる所、草深きなか。後漢書、儒林傳「四方學士、多懐ニ挾圖書一、遁ニ逃ーーニ」‖林藪。○物の多く聚る所。典引「仁義之ーー」‖林府・淵藪。

【林叢】リンソウ 草木のしげみ。‖林藪。

【林藪】リンタウ はやしと、つつみと。趙壹詩「数畝ーー繞ニ一家一」

【林中多ニ疾風一】リンチュウシツフウオオシ 鹽鐵論「ーー、富貴多ニ讒言一」

【林中不レ宜レ薪】リンチュウフヨロシカラズ 林の中には薪多し、故に賣るとも買ふ者なし。すべて物は需用者ある所に用ふべしとの諭。淮南、齊俗訓「ーー、湖上不レ宜レ魚、所レ有餘也」

【林沸】リンフツ ○草木のむらがりしげれる所、湖はくさむら。西京賦「落ニ川澤一兮ーー」○草木のしげれる野外。晉書「士諤レ登レ朝、競赴ニーー」

【林霤】リンリウ はやしに立つもや。歐陽修、醉翁亭記「日出ーー開、雲歸而巖穴暝」‖林霏。

【林府】リンフ 物の多く集れるところ。陸機、文賦「遊ニ文章之ーー一、嘉ニ麗藻之彬彬一」‖林藪・淵藪。

【林杪】リンバウ はやしの木のこずゑ。柳宗元詩「繁疆出ニーー一」‖林梢。

【林木】リンボク はやしをなせる木。陳倩詩「綿天ーー燥、秋氣風雲高」

【林逋高ル越】リンポカウエツ 宋の隠君子林和靖の故事。世説、棲逸「林逋隠ニ居孤山一、常畜ニ二鶴一、縱レ之則飛入ニ雲霄一、盤旋久之、復入ニ籠中一、逋常泛ニ小艇一、西湖諸寺、有ニ賓至一、遣ニ所レ居一、則一童子應レ門、延レ客坐、為開レ籠縱レ鶴、良久、逋必棹ニ小船一而歸、蓋常以ニ鶴飛一為ニ客至之驗一」

【林莽】リンモウ 草木の深く茂れる地。野はくさむら。揚雄、長楊賦「羅ニ千乘于ーー一、列ニ萬騎于山阿一」

【林務官】リンムクワン 國大林區署の高等官、森林に關する事務を掌る。

【林立】リンリツ 林の如くむらがり立つ。

【林林】リンリン むらがる貌。柳宗元、元良碑「總總而生、ーー而羣」

【林藪】リンソウ 平地の林と、ふもとの林と。禮記「ーー川澤、以レ時入而不レ禁」

【林深則鳥棲】リンシンスレバトリスム 人仁義を積めば、萬物招かずして歸趣するに喩ふ。貞觀政要「ーー、水廣則魚遊、仁義積則物自歸レ之」

【枉】 ワウ。 佳

○まがる。まぐ、ゆがめる(屈。曲)孟、萬章「ーー尺而直レ尋」○しへたげ、抑へ屈する。無實の罪におとす「冤ーー」「誣ーー」唐書、高仙芝傳「軍中皆呼ーー」‖冤罪。又、しへたげにあへる者。○よこしま(邪曲)又、其の者。「姦ーー」「邪ーー」「奢ーー」論、為政「舉レ直錯ニ諸ーー一」○曲げて就き從ふ「ーー駕」「ーー車」

【矯レ枉過レ直】キョウワウクワチョク 曲りたる者を矯めなほして、眞直ぐに過ぐ。仲長統、昌言「論ニ理亂一、則復入ニ於ーーニ之弊一」

【枉駕】ワウガ のり物をまげる、貴人の來訪を敬ひ稱す、御來車。蜀志、諸葛亮傳「將軍宜ニーー顧レ之」‖枉車。

【枉己】ワウキ まげて己の守る所を棄てる。孟、萬章「未レ聞ニーー一而正レ人者一」

【枉曲】ワウキョク ○まぐ、法を曲げて誤する。後漢書「鄭弘東部、亦有ニ枉決斷一者一而頗多ニーー一」○よこしま。‖邪曲。

【枉屈】ワウクツ ○貴人の身を屈して、來り臨む義。諸葛亮、出師表「猥自ーー、三顧ニ臣於草廬之中一」‖枉顧・枉駕。○抑へつけられて風快する。冤罪におとされる。

【枉顧】ワウコ まげてかへりみる、貴人の來訪の敬稱。賀士元詩「ーー問芳塵

書事」＝左頭・枉駕。
【枉告】ワウコク　事実をまげていつはりつげる。＝枉訴・誣告。
【枉誣】ワウブ　むじつのつみ、ぬれぎぬ。＝窮邪・窮枉。
【枉矢】ワウシ　○直からざる矢、己の矢を謙していふ語。我寇「主人謂曰、某有一一哨寇、請以樂之」○火射に用ふる矢。○星の名。漢書、天文志「一一狀類二大流星一蛇行而倉黒」
【枉事】ワウジ　枉駕に同じ。戰國韓策「聶政曰、仲子不遠二千里一枉二車騎一而交レ臣」
【枉道】ワウダウ　其の道をまげて人に媚びる。論、微子「一レ一而事レ人、何必去二父母之邦一」
【枉橈】ワウダウ　まげて罪におとしいれる、無實の罪におとす。禮、月令「申二嚴百刑一毋二或一一」
【枉駕】ワウガ　おびやかしうばふ。後漢書、竇融傳「帝召レ憲切責曰、今資主倚見二一一何況小人哉」
【枉法】ワウハフ　おきてをまげ用ふる。南史、韓秀傳「未二皆一一レ申二想」
【枉案】ワウアン　事をまげみだる。李陵文「縄二縛其一一」
【枉歩】ワウホ　歩をまげて譲る。唐書、朱敬則傳「兄仁軌常誨二子弟一曰、終身謙路、不レ枉二百歩一、終身讓レ畔、不レ失二一段一」
【枉欲】ワウヨク　むさぼる心をおさへる。後漢書、荀爽傳「人能一一レ從レ禮者、則禰師レ之」＝克己。
【枉箭】ワウセン　おきてをまげてつみする。魏志、董卓傳「豈可レ虚二其簡一已、而一一中一濫入哉」

【枅】〔国字〕

○ます。＝升。○芝居などの觀覽席の方形のしきり。

【枠】〔国字〕

○わく。絲をまきつける具。をたまき。○細き竹木を組み合せて造りしもの、器具の外縁となるもの。＝木匡。

五畫

【柚】㊀イウ・ユ　㊁ヂク　屋

㊀ゆず、柑類の一種、冬、芳香酸味ある黄色の實を結ぶ「一子」「橘一」㊁機の經ヘをまく具。詩、大雅「杼一其空」軸に通ず。

【柷】㊀エイ　㊁セツ　霽　屋

㊀かい、かぢ（楫）舟を行る具「停一」「揚一」屈原、漁父辭「鼓一」而去」＝桅。㊁ゆだめ。弓を正す器。荀、非相「檠一、正弓弩之器」＝檠。

【柍】㊀エイ　㊁ヤウ　陽　庚

㊀うめ（梅）○あんず（杏）㊁なかば、屋の中央。

【架】カ　禡

○たな（棚）物品を載せ置き又は掛け置く臺「書一」「筆一」○くひ（杙）○ころもかけ、いかう「衣一」○のき、やね（屋宇）「門一」○かけ渡、空中にかけわたす「一橋」○一は鳥の翼。○かまふ（構）組み立てる。詩、周南「鵲巢」箋「鵲作レ巢、冬至一之、至春乃成」
【架架】カカ　鳥の屋の形容。荊楚歲時記「有レ鳥如レ烏、先レ雄而鳴、一一格格」
【架空】カククウ　○そらにかけ渡す。唐太宗詩「飛簷迴レ一一」○よりどころなき說「一一の論」
【架橋】カケウ　はしをかけわたす。隋書「一一築レ道村落事」
【架構】カコウ　木のかけひ（木樋）＝木架水樋。
【架上】カジヤウ　たなのうへ「一一の書」
【架松】カセウ　棚をかけたる如く横にはひし松。王十朋詩「一一卻二烟暴一、樹竹來二清風一」
【架設】カセツ　かけわたす「橋梁を一一す」
【架築】カチク　橋をかけ堤をきづく。徐賢妃文「非レ無二一一之勞一」

【柳】カ　麻

○からざを、かり取りたる稻麥などの穗をたたきて其の實を落す具「連一」○くびかせ（項械）罪人の首にはめる刑具。○ころもかけ、いかう。曲禮「男女不レ同二椸一」○架（前條）に通ず。
【柳鎖】カサ　くびかせと、くさりと、共に罪人をつなぐ刑具。
【柳脰】カトウ　くびかせをつける。脰はうなじ（頸）韓愈文「取二之江中一、一一械手」

【柯】カ　歌

○え、をのえ（斧柄）詩、豳風「伐一伐一、其則不一遠」○えだ（枝）枝の大いなる者「枝一」「庭一」「高一」「幹一」杜甫、古柏行「一如二青銅一根如レ石」○くき（草莖）○三尺の長さの稱（考工記）
【柯葉】カエフ　えだと、はと。隋書「一一自摧折、根株浮二滄海一」＝枝葉。
【伐レ柯伐レ柯】カカカカ　斧の柄にする木

をきり取りて柄を作る、其の大小長短は現に持つ所の斧の柄を標準とす、人の道も遠く求めずとも近く眼前にあるとの喩。字解参看。
【柯條】ダウ えだ。詩経、疏「松木雖レ生二高山一而一一枯槁」‖枝條。

【枴】カイ クワイ 麻
つえ、老人の杖。五代史、漢紀「賜以二一木一」

【枻】カフ アフ 治
○をり(楫)動物などを捕へ入れるもの。論、季氏「虎兕出於一」○をりに入れる、おさへとどめる、強制する。罪人を拘へて檻に入れる。管、中匡「一以予齊」○はこ。‖匣。又箱に入れる。荘、刻意「有二干將之劍者一而藏之」○香木の名。

【柑】カン 覃
かうじ、みかん。蜜柑の一種、葉は楕円形、花は白色五瓣、冬、黄赤色の實を結ぶ「一子」「一橘」「黄一」

【柬】カン 潸
○えらぶ(擇)分別して選擇する。‖揀・簡。○てがみ、書簡「書一」○なふだ(名刺)

【枳】㊀キ・シ ㊁シ 支 紙
㊀からたち、きこく、橘に似たる一種の樹、葉は橙の如く、枝に刺多し、花は五瓣白色、秋球狀の實を結ぶ、生垣に作り、實を藥用とす。考工記「橘踰レ淮而化爲一」「南橘北一」○そこなふ(害)㊁また(股)‖歧。
【枳棘】からたちと、いばらと、共に惡木。後漢書、循吏傳「一非二鸞鳳所一棲、百里豈大賢之路」寓言は共に靈鳥にて一一の如き惡木には棲まず、卑下の地は賢才の居るべき所に非ざるに喩ふ、百里は縣。
【枳椇】けんぼなし。‖木蜜・雞爪子。
【枳句】からたち、きこく。‖枳殻。
【枳殻】からたちの木。橘に似て刺多く、籬とす。陸龜蒙詩「處處春風一一花」‖枸橘・臭橘。
【枳首蛇】頭のへび。爾雅、釋蟲「一一、岐蛇也」‖兩頭蛇。

【柩】キウ 有
○ひつぎ、はやをけ。人の死體を入れる箱「靈一」「一輿」轜名「在」牀曰レ尸、在」棺曰一」
【柩車】ひつぎを載せるくるま。
【柩肉未レ冷】はやをけの中の死體がまだひえきらぬ、死後時を經ざる喩。

【枵】ケウ 蕭
○むなし(空・虚)○へる、すく(饑耗)
【枵空】むなし、から。宋史、比屋一一」‖空虚。
【枵然】おほいなる貌。文選、注「一一、大貌」
【枵腹】○うつ、すきはら(空腹)正字通「凡物饑耗曰レ枵、人饑曰一一」○器がからになる。范成大詩「匏瓜譏一一、蒲柳無二貞姿一」

【柷】ケツ カツ 屑 易
○きりかぶ、伐りたる木の株ガ「枯一」○ひこばえ。きりかぶより生じたる芽。‖蘖。
【柷去】きりきる。‖斬伐。

【枸】㊀コウ・ク ㊁コウ・ク 有 麌 ㊂ク 麌 虞
㊀からたち、きこく「一橘」○木の枝曲がる。㊁一杞コは瀧木の一、高さ七八尺、淡紫色の花を著け赤き實を結ぶ、葉を食用とし、根を藥用に供す。‖苦杞。地骨。㊂わだかまる(盤鬱)

【枸櫞】エン 橼樣シモの一名。‖香櫞。
【枸櫞酸】エン 柑類の果實中にある無色無臭の結晶にして水に溶解す。
【枸橘】キツ からたち、きこく。‖枳殻。
【枸杞】コ 瀧木の一、字解参看。唐書、地理志「貢一一黄精」
【枸木】まがれる木、枸は曲。荀、性惡「夫一一必待二檃括烝矯一然後直」‖曲木。

【枯】コ 虞
○かる、かれる、草木の生氣が絶える「凋一」○轉じて人の死をいふ。曹松詩「一將功成萬骨一」○水かわく「乾一」「涸一」周禮、天官、疏「山澤無レ水爲一」○からす。○おとろへる(衰)「榮一」○からだがやせおとろへる「一槁」「偏一」○かれき(槁木)
【枯榮】かれると、さかえると。又衰えると盛んなると。李白詩「如何同枝葉、各自有二一一」白居易詩「離離原上草、一歲一一一」‖榮枯・盛衰。
【枯葉】かれた葉。陳扁吾詩「一一落二古社一、寒鴉歸二孤城一」
【生レ枯起レ朽】時に死せんと

する者を活すに喩ふ。抱朴子「雖レ有二一之藥一、猶調不レ及二和鵠之所一レ合也」‖起レ死回レ生。

【拉レ枯】ラフコ かれ木を折る義、極めてたやすき時。晉書、劉元海載記「鼓行而進、猶二レ拉レ枯耳一」‖摧レ朽・摧レ枯・拉レ朽。

【摧レ枯】サイコ 朝餉に局に。宋史、曹彬傳「以二國家兵甲精銳一、圖二太原之孤壘一、如二レ拉二朽枯一耳、何爲不可」

【摧枯拉レ朽】サイコラフキウ かれたる木をくだき、くちたる木をつぶす、物の破り易きに喩ふ。晉書「將軍之舉二武昌一、若二摧レ枯拉レ朽、何所二顧慮一乎」。

【枯荷】カ かれたるはちす。梅堯臣詩「一一復送レ雨、度風零如レ數」

【枯槁之士】コカウ おちぶれたる士。莊子「兵革之士樂レ戰、——宿レ名」

【枯澗】コカン 水かわく。謝靈運詩「儻靈壓不レ興、渴波水一一」

【枯旱】コカン 草木がかれる程の大ひでり。漢書、于定國傳「太守論殺二孝婦一、郡中一一」

【枯幹】コカン かれたるみき。梁書、侯景傳「大風一振、一一必摧」

【枯朽】コキウ かれくちる。史、諸侯表「摧二一一一者、易レ爲レ力」後漢書、陳龜傳「雖レ含二生氣一實同二一一一」‖枯腐。

【枯腐】コフ 木がかれて倒れる。漢書、昭帝紀「柳樹一一自起生」

【枯魚】コギョ ほしたるうを、ひもの。家語「一一銜レ索、幾何不レ斃」‖枯鰒。

【枯竭】コケツ かれつきる。雨史、孫法宗傳「腥臂無二完皮一、血脈一一」‖枯涸。

【枯硯】コケン つかひふるしたるすずり。陳與義詩「獨煩懷古句、一一生二明珠一」

【枯骨】ココツ 死人のかれくちたるほね。蜀志、先主傳「冢中一一、何足レ介レ意」

【枯槁】コカウ かれたるしば。

【枯燥】コサウ かわく。放翁題跋「地一一不レ可レ耕」

【枯索】コサク かれて生氣なし。論衡「穀草一一」

【枯死】コシ かれる、かれて死ぬ。

【枯塹】コザン 水氣なくして草木の生ぜざるやせ地、塹はとち。‖瘠土・不毛之地。

【枯株】コシュ かれたるきりかぶ。事文類聚「風雷昨夜破二一一、借問天公有レ意無」

【枯樹】コジュ ○かれたるき。‖枯木。○葉の落ちし樹。「寒鴉一一」晉書「觀二其宇勢一、疎瘦如二隆冬之一一一」

【枯松】コショウ かれたるまつ。皇甫曾詩「石狀埋二幾堅一、山路倒二一一一」

【枯焦】コセウ かれかわく。搜神記「天地否隔、萬物一一、百姓嗷嗷、無レ所二控訴一」

【枯槁】コカウ 荒れはてたる不毛の沙原。顧況詩「黃沙一一無二寸草一」

【枯折】コセツ かれてをれる。杜甫詩「葵荷一一臨二風濕一」

【枯蜋】コセン せみのぬけがら。‖蟬蛻ゼイ

【枯篠】コケウ かれたる竹の皮。鮑照詩「君不レ見一一走二階庭一」

【枯淡】コタン 活氣なくさっぱりとしてゐる、無欲にして淡泊。宋史、鄭樵傳「平生甘二一一一、樂二施與一」

【枯池】コチ 水のかわきたるいけ。李白詩「窮魚守二一一一」

【窮枯竹一護二朽骨一】コフキウヲマモル 古人にくみして固く盟說を守る、古、紙なかりし時代に竹簡ケンに文字を書す、故に枯竹といふ「柳宗元、謝文通墓表」

【枯冢】コチョウ あればてたるはか。杜甫詩「斯人各一一」

【枯腸】コチョウ かれたるはらわた、文藻の乏しきにいふ。盧仝詩「三椀搜二一一一、惟有二文字五千卷一」

【枯凋】コテウ かれしぼむ、物事の衰ふるにいふ。孟郊詩「執レ手復執レ手、惟言無二一一一」

【枯條】コデウ かれたるえだ。陶潛詩「烹風拂二一一一、落葉掩二長陌一」‖枯枝。

【枯萩】コシウ かれたるをぎ。北史、賀若弼傳「造二戰船一以レ黃、與二一一一同レ色」

【枯腴】コイ かわきたるはいの肉、かれて乾きたる胸。朱松詩「汲レ井洗二一一一」

【枯廢】コハイ おとろへて役に立たず。徐陵文「風患彌留、半體一一」

【枯悴】コスイ かれたるむぎ。杜甫詩「老雁忍二寒露一、哀號待二一一一」

【枯腐】コフ かれくさる、すたれ失せる。陸龜蒙詩「一一尚求レ律、齊宣猶謂レ竽」‖枯朽・腐朽。

【枯吻】コフン 詩句のたやすく口に浮び出でざる義。顧瑛詩「坐來詩句生二一一一」‖燥吻。

【枯蓬】コホウ かれたるよもぎ。陸文盛詩「不レ勝二清淚漏一一一」

【枯木】コボク かれたる木。又、葉落ちたる木の形容。曹植、七啓「綺旨之艷、使二窮禪生一流、一一發レ榮」‖枯樹。

【枯木發レ榮】コボクフェイエイ 衰へたる者を再び盛んならしめる喩。又、死を起して生に回す義。前條參看。

【枯木死灰】コボクシクワイ かれ木と、つめたき灰はひと、人の無欲無爲の有樣にたとふ。

【枯木窮關】コボクキウクワン 多年の心願の屆きたるに喩ふ。博物志「昔有レ人好レ道、而不レ知二求レ道之方一、唯每朝拜跪向二一枯木一不レ倦、枯木一旦、忽然生レ華」

【枯蔓】コマン かれたるつる。錢復古詩「客風不レ到處、一一挂二疎籬一」

【枯楊生レ稊】コヤウセイテイ かれたる柳よりまた、穉を生ず、老夫が少妻を得て、よく生育の功をなすに喩ふ。稊は穉。易、大過「——、老夫得二其

女妻二無レ不レ利」

【枯落】コラかれおつ。中論「草木猶有二一一而興レ時謂者一」

【枯林】コリン 薬のかれ落ちたるはやし。杜甫詩「大抵霜雪幹、歳久爲二一一一」

【枯槁】コカウ ほしたるを、ひもの。隋書、王孝籍傳「咳嗽足二以招一一一、吹噓可二用飛一翦羽一」‖枯魚。

【査】サ　麻

○いかだ、うきき。‖槎・楂。○みる、かんがふ、しらべる（考察檢點）「檢一」○かす、沈澱物「一滓」俗に渣に作る。國○調一ラはしらべる「戸口調一」○一公は巡査の俗稱。

【査牙】ガけはしくかどかどしき貌。蘇軾詩「枯腸得レ酒芒角出、肺肝一生二竹石一」‖楂牙。

【査滓】シかす。張遠詩「無レ因レ滓一一、衆共上堂鐘」‖渣滓。

【査定】テイしらべさだめる。‖檢定。

【査點】テン 國しらべる、檢査する。‖檢點。

【柴】㊀サイ ㊁シ　佳

㊀しば、山野に自生する小さき雜木（小木散材）大にして折つべき者を薪といひ、小にして合せ束ぬべき者を一といふ「一荊」「薪一」「茅一」○ふさぐ（塞）○まもる（護）淮南、道應「一衽子之門」○まがき（籬）唐の王維に、鹿一の詩あり。○しばを燔きて天を祭る。書、舜典「至二于岱宗一」‖柴。㊁つむ（積）積み重ねなれる物。詩、小雅「助レ我擧一」

【柴毀】サイ 喪にあひて悲のあまり、やせおとろへる、易の說卦の卦象によりて柴に瘠の義あり。晉書、許孜傳「一骨立、杖而能起」‖哀毀。

【柴火】サイ ○そだの火、しばを焼く火。○國たきぎ（薪）

【柴扃】サイ 柴戸に同じ、扃は門戸。杜牧詩「新城非二故里一、終日想一一」

【柴荊】サイ ○しばや、いばらなどの雜木。○轉じて、あばらやの義。謝靈運詩「悲承故人意、促裝返一一一」

【柴戸】サイ しばにて造れる戸。顧非熊詩「廬跡入二一一一樹身穿二草亭一」‖柴門・柴扉・柴扃。

【柴桑】サイ 山の名、江西省九江縣の西南九十支那里に在り、漢は取りて縣名とす。晉の陶潛此に家す。入蜀記「晩（八月二日）抵二江洲一、州治二德化縣一、即唐之潯陽縣、一一栗里皆其地也」

【柴市】サイ 北京の我忠坊の西北隅に在り、宋の文天祥殉國の地。

【柴薪】サイ そだ。しばと、たきぎと。‖薪柴。

【柴車】サイ ○かざらざる車。通鑑綱目集覽「一一、車之不二裝飾一者、卽棧車也」○醜惡なる車。後漢書、趙壹傳「一一草屨、露二宿其旁一」

【柴壇】サイ 天を祭る時に柴を焚くには。宋書、禮志「大祝令以レ案奉二玉璧性體諸饌物一登二一一一」

【柴望】サイ 柴はしばを焚きて天を祭る、望は山川を望み其の神を祭る。書、武成「一一大告二武成一」‖柴望。

【柴龍】サイ しばの戸びら。王維詩「山中相送罷、日暮掩二一一一」‖柴扃・柴戸。

【柴門】サイ ○しばにて造れる門。隱者の家などにいふ。杜甫詩「白沙渡竹江村暮、相送一一月色新」‖柴戸・柴扉。○門をとぢる。後漢書、楊震傳「子レ是一レ絕二賓客一」‖杜門。

【柵】サク　陌　又、櫛に作る

○やらひ、ませがき、竹木を結びてたてたる垣「豚一」「籬一」「柴一」○しがらみ、水中に立てたる垣「水一」○とりで、こじろ（砦）「城一」「堡一」○かけはし（棧）

【柵塘】サクタウ しがらみをたてたるつつみ。梁書、殿植之傳「晉縣二一一行、見二患人队二塘側一」

【柵門】サクモン さくを結びたるもん。

【柵壘】サクライ 木のやらひをたてたるとりで、壘は土壁。北史、楊津傳「土衆勞敝、一一未レ安」

【柵】　刪

柵（前條）に同じ。

【柞】㊀サク　㊁サク　陌　藥

㊀ははそ、いす、常綠喬木の一、葉は野蠶の飼料とす。㊁かる、きる（伐）木を伐り除く。詩、周頌「載芟載一」艾は草をかり除く。○せまし（陋狹）

【柞蠶】サクサン 蠶の一種、形、野蠶に似、色は初め綠色、後、黃褐色に變ず、柞又櫟の葉を食して褐色のまゆを作る。

【柞櫟】サクレキ はは そ。陸機文「櫪、今一一也 徐州謂レ櫟爲レ柞、或謂レ之爲レ栩」

【柿】シ　紙　柿とは別

かき、果樹の一、葉は楕圓形にして闊く、花は淡黃色、秋末、赤色甘美の實を結ぶ「霜一」「雁翼」「一有二七絕一」「一一奇、二多レ陰、三無二鳥巢一、四無二鳥巢一、五霜葉可レ玩、六佳實可レ啖、七落葉肥大、可二以臨書一」

【柄】柿（前條）の俗字。

【枲】シ　紙　からむし、麻の一種、夏、青色の小花を著く、莖の皮より纖維をとりて織物の原料とす。

【枲耳】シジ　卷耳（オナモミ）の異名。

【枳】シ　紙　○すき（鋤）＝耜。○てぐるま、土を徙して運ぶ車。

【柿】シ　實　さじ（匕）兩頭の屈曲せるさじ、飲食物をすくひとる具。儀禮、聘禮「加二于柿一」

【柔】ジウ　尤　通音ニウ　○やはらか。しなやか（軟弱）かたくない。剛の反對「一軟」○やさし、おだやか「一順」「一和」○身體又心が、よわし「一弱」「一惰」「一懦」○やはらぐ、やすんず（安）「懷一」書、舜典「一遠能邇」○したがふ（服從）○わかめ（草木新生）○一日は十干の乙・丁・己・辛・癸に當る日。剛日の對。

【柔婉】ジウエン　やさしくしてすなほ。北史、齊宣恭后傳「后性一一不二矯忌一、嬪御等、咸愛而仰レ之」

【柔遠】ジウエン　遠方の民を安んじなつけて服從せしむ。書、舜典「一レ能レ邇、惠二康小民一」＝懷遠。

【柔脆】ジウセイ　やはらかくあでやか。李白詩「芳草歌二一一一」

【貴レ柔】キジウ　やはらかなる德をたふとぶ。呂覽「老聃一レ、孔子貴レ仁」

【守レ柔】シュジウ　柔順を守るは強の道なる義。老子、五十二章「見レ小曰レ明、一レ一曰レ強」

【柔色】ジウショク　やはらかなる毛。洞賓記「固名二一一一一」＝柔毛。

【柔翰】ジウカン　筆の異名。左思詩「翦羽飾二一一一一」

【柔金】ジウキン　金をやはらかにす。書經、疏「鍮所二以一一一也」

【柔謹】ジウキン　やはらかにしてつつしむ。後漢書、東夷傳「以二一一一一爲レ風」

【柔強】ジウキョウ　やはらかにしてつよし。唐書、筋力一一」＝強靭。

【柔訓】ジウクン　女のをしへ。梁貞蘭文「各廢二一一一一常貽二話言一」＝柔範。

【柔惠】ジウケイ　柔順に同し、惠は順。

【柔懷】ジウクワイ　やさしくしてつつしみ深し、服は謹。唐書「一一力レ田」

【柔滑】ジウクワツ　やはらかにしてなめらか。西京雜記「肌膚一一如レ脂」＝軟滑。

【柔靡】ジウビ　やはらか、暖も柔和。揚雄「鵾毛一一而性冷」

【柔染】ジウセン　染のわかば。詩、豳風「爰求二一一一一、蚕一一柞桑也、蠶始生宜二柞桑一」

【柔日】ジウジツ　十干のうち、乙・丁・己・辛・癸にあたる日。其の餘を剛日といふの對。曲禮「外事用二剛日一、內事用二一一一一」＝內事とは冠婚葬祭など。

【柔聲】ジウセイ　しとやかなる音の筝の琴。李白詩「含レ情奏二一一一一」

【柔質】ジウシツ　よわよわしき體質。李中詩「一一自多情」

【柔情】ジウジヤウ　婦人のやさしきこころ。洛神賦「一一綽態、媚二于語言一」

【柔弱】ジウジヤク　よわし。女中子「一一者生之幹也、堅強者死之徒也」＝軟弱。

【柔遠】ジウエン　やはらかにしてうるほふ。劉禹錫文「別二去剛正一、納二之一一一」

【柔液】ジウエキ　女のすなほにして貞良なる義。化書「有二一一之德一、則萬事可レ以行二婦道一」

【柔術】ジウジユツ　圖やはら、やはらとり、から手にて敵を制する武藝。徒手にて擽撃する技。＝柔道・拳法。

【柔順】ジウジユン　やはらかですなほ。易經「一一利レ貞、君子攸レ行」

【柔荑】ジウテイ　やはらか。韓非子「綏心而無レ戚、一一而寡レ斷」

【柔性】ジウセイ　やはらかなるたち。宋之問詩「望レ水知二一一一一」

【柔脆】ジウセイ　やはらかにしてもろし。老子「萬物草木之生也一一」

【柔毳】ジウゼイ　○やはらかなる細き毛、にこげ。蘇子賦「一一以爲レ裘」＝柔毛。○やはらか。

【柔粒】ジウリフ　やはらかにして毛色の艶なるいけにへ。殷濬、宋享廟樂歌「神鑒孔昭、嘉二是一一一」

【柔然】ジウゼン　種族の名、古の北狄の一。＝蠕蠕。

【柔情】ジウジヤウ　よわくしておこたる。＝柔弱惰慵。

【柔懦】ジウダ　心よわく、氣小さし、柔弱にして膽病の國史補「李吉甫任二相國一八年、多智一一」

【柔蔬】ジウソ　やさしきかたち。李山甫詩「強扶二一一一一酒雜レ醒」

【柔道】ジウダウ　○やはらかなる道、柔順の道。後漢書、光武紀「若殘二天下一亦欲レ以二一一一一行之」○圖柔術に同じ。

【柔膚】ジウフ　やはらかにしてあぶらぎる。酉陽雜俎「一一如二芭蕉一」

【柔荑】ジウテイ　やはらかなるつばな、女子の手の白く美くしきに喩ふ、莫はつばなの穗の出たて。詩、衞風「手如二一一一一、膚如二凝脂一」

【柔兆】ジウテウ　十干の丙の異名（爾雅）

【柔嫩】ジウドン　やはらか。圖農業經「蠶宜二一一一一」

【柔軟】ジュウナン　やはらか。‖柔順。
【柔軟体操】ジュウナンタイソウ　体操の一、から手にて行ひ身體の發育・矯正・强健を目的とするもの。
【柔顔】ジュウガン　やはらか、顔は軟の正字。南史、蕭介傳「身體ー弱、顔色如處子」‖柔軟。
【柔順】ジュウジュン　柔順を旨とする婦女のをしへ。晉書、后妃傳序「温ニ容儀一而修ニ閨徳一」‖順從ニ從ヒ一。
【柔媚】ジュウビ　やはらかにしてこびへつらふ。唐書、庾準傳「準無ニ學術一以ニー一貴進」‖曲撓。
【柔撓】ジュウドウ　やはらげ安んずる、慰薬して慰撫する。宋書、高隆之傳「ー一四封ー」
【柔毛】ジュウモウ　○やはらかなる毛。列子「一朝盡以ニー一給萬ニ」○草木の異名。曲禮「見ニ祭ニ宗廟一之禮、羊曰ニー一ニ」
【柔曼】ジュウマン　はだがやはらかにしてきめがこまかなり、愛は皮膚が美くしくして澤アり。漢書、倡幸傳贊「ー一之傾ン意、非ニ獨女弟・鑒亦有ニ男色一焉」
【柔亦不ン茹剛亦不ン吐】ジュウエキフジョゴウエキフトカズ　柔かなりとて食はず、剛しとてはき出さず。弱き者をも侮らず、強き者をも畏れざるにいふ。詩、大雅、烝民「維仲山甫、ー一、不ン侮ニ矜寡一、不ン畏ニ彊禦一」
【柔厦】ジュウカ　柔順にして善良なり。淮南子「温惠ー一者詩之風也」
【柔能制ン剛】ジュウノウセイス　弱き者が反りて強き者を制する義。三略「ー一、弱能制ン強」老子「柔勝ン剛、弱勝ン強」
【柔擾】ジュウジョウ　しづかに滑ぐ撓。傅洪憲詩「夢醒ニー一到ニ西興一」‖柔懦。
【柔和】ジュウワ　やさし、おだやか。史、張釋之傳「組ニ者馬ー一」‖温和・温順・柔順。

【柒】シツ　漆（水部十一畫）の俗字。俗に七の字に借用す。

【栖】セイ　○やどる、巣の一種「棲ー」○通ー　はなたうきび。‖甘蔗。○圖ー　樓ロウは石榴の誤用。

【栓】シュカ　シュ　東
○ひひらぎ、ひらぎ、常綠喬木の一、葉はかたくして光澤を有し、緣邊、尖りて針狀をなす、花は白色。‖巴天戟・杠谷樹・枸骨・剛穀。○ー樸シュクはつち、さいづち（椎・槌）

【柷】シュク　屋
樂器の名、形、桶の如く、左右に動く柄をつけしもの、音樂を始むる時、合圖ガトにならす具。
【柷敔】シュギョ　共に樂器の名、柷は音樂を始むる時に、敔は終る時に鳴らす。書、益稷「合止ー一」

【桾】　松（木部四畫）に同じ。

【染】ゼン　琰　豏　通ー　セン
○そむ、布帛の類に色をつける。○そまること、しみ、よごれ「汗ー」○しむ、ひたす「浸ー」「漸ー」○筆を墨などにひたして書畫を書く。李白詩「灑ー中山毫」○ことなる、習俗に化せられる。書、風俗「異ー汗俗」○病がうつる「感ー」「傳ー」○けがす。‖染汙・汚染・穢染。○花ー　はやはら（柔）げる貌。○圖愛ー　アイは明王の一、三目六臂にして、頂に獅子の面あり、威怒の相をなす。○圖しむ、はげしく感ずる「丹にー一みて赤し」
【染愛】センアイ　心のふかきいつくしみ。白居易詩、題ー何處者、ー一沾無ン際」
【染汚】センオ　けがす。‖染汙・汚染・穢染。
【染家】センカ　染戸に同じ。列仙傳「嘗ニ與ー一」
【染感】センカン　そまる、しみこむ。‖感染。
【染翰】センカン　筆を墨にそめて字を書く。南史「ー一便成ン文　無ン加ン點」
【染指】センシ　うつりが、かをりにそむ。禮閨文帝文「傍ン玉流温、徐ン陰ー一」‖薫染。
【染化】センカ　感にしみうつる、教えにどこして善に化する。感化する。晉書、衛瓘傳「魏ー一日久、風教遂成」
【染官】センカン　ふをかく。漢商文帝文「汚罪ー一、猶高ニ賢勲一」
【染戸】センコ　そめものや、からやの北魏、食貨「有ニー一許隸ニ一旦爲ン平」‖染家。
【染工】センコウ　そめものや、染色を業とする者の北史「ー一王神歡者、以ン賂自進」‖染人・染戸。
【染草】センソウ　そめくさ。周禮、掌ニ以ニ春秋ー一之物ニ‖染料・染料。
【染指】センシ　指を物の中に入れる。其の物の味を試むる義。左、宣四「子公怒ー一于鼎一嘗ン之而出」
【染筆】センピツ　ならはし。宋史「亦猶ニ人慕ニ之善惡、以ニー一而成ニ也」‖習慣。
【染漬】センセキ　色にそまる。柳貫詩「雲霞棲觀互隱見、花竹羽毛工ー一」‖漬染。
【染髭】センシ　ひげをそめる、年老いて壯者に近せんがため。范邦賢勵錄「武臣黃鑑入朝、帝憎ニ其老一命ニ火醫院一使ン染ニ其鬚一」漢書、王莽傳「莽染ニ其須髮一進ニ所ン做杖一及史氏女ニ爲ニ皇后一、偏ニ賜御等百二十人一」日夜

與二方士一考二驗方術一、綴二淫樂一」須は誤。

【染板】セン　南天燭ナンテンの異名（本草綱目）

【染色】セン　いろをつける。又、そめいろ。後漢書、馬融后紀「此蓋特宜二ー一」

【染織】セン　そめものと、おりもの。又、染めると織ると「ー一學校」

【染筆】セン　書翰を書く。＝潤筆。

【染緣】セン　みどりにそめる。梁元帝詩「路沾疑ー一」

【染料】セン　そめくさ、物をそめる原料。

【柁】タ　哿

かぢ（正舟木）＝舵柁。

【柁樓】ロウ　かぢをとる船室のやぐら。劉子翬詩「路窮二煙渚一靜、山入二ー一青」

【柂】

柁（前條）に同じ。

【柂柁】ダイ　ふねのかぢ。拾遺記「以二紫文柱一爲二ー一」

【柰】ダイ　ナイ　㊀泰　㊁泰

通音ナ、俗に奈に作る

○なに、なんぞ、いかん、いかに。＝那。散文には一何と連用すれども詩賦には多くは一の一字のみを單用す「無一」「不一」の如し。王維詩「強欲從君無一」老」○からなし。廣韻「一有二青白赤三種一」

同訓異義　ナイ　奈何・如何・何如・何若・柰の別は如（女部三畫）の如何の條を見よ。

【柰何】ナイカ　○どのやうに、いかんぞ。楚辭、九辨「君不レ知兮、可二ー一」○二字の間に他の文字を入れて用ふることあり。司空圖詩「春色年年柰レ我何」＝如何・何如・若何。

【柝】タク　㊀

○ひゃうしぎ（拍子木）合圖又は警戒のために擊ちならす、二個の角材。○ひゃうしぎを擊ちて夜を警むる「擊一」「警一」「寒一」「夜一」易、繫辭「重門擊一以待二暴客一」

【擊柝】ゲキタク　夜まはりの柏子木をふせて用ひず、世が治まりて盜賊の警戒を要せざる義。鮑照、河清頌序「逸城一レ」＝殭柝・解柝。

【殭柝】キョウタク　夜まはりの拍子木を擊つことをゆるやかにする、警戒をゆるめる。張衡文「聊城一レ」

【柈】

枰（木部四畫）に同じ。

【柅】㊀ヂ　㊁ヂッ　㊀紙　㊁質

㊀質は梨の如き一種の木。○車の下に在りて輪を止むる木。○ー一は茂りて盛んなる貌。左思、吳都賦、總萃ー一、蓼蓼蓁蓁」○明かに察する。唐書、王彥威傳「捷二姦宄一」㊀とどむ（止）「ー杜」は杜絕の義。

【柷】㊀チン　㊁セッ　㊀震　㊁屑

㊀しきみ（閾）門限。㊁桔ー＝鄭の城門の名。

【柱】㊀チュ　㊁チュ　㊀麌　通音チュウ

㊀はしら（樑）屋根を支へる垂直の材。漢書「腐木不可以爲ー」○廣く物を支へるものの稱「支ー」○ことぢ（琴柱）琴瑟などの絃を支へて音調を節するこま。㊁ささふ（支持）柱と通ず。韓愈、王適墓誌銘「鼎也不可以ー車馬」○そしる（刺）漢書、朱雲傳「進ー五鹿君」

【柱杓】カシャウ　はしらと、たるきと。＝柱椒。

【柱下史】カシャウシ　○老子をいふ。史、老子傳「周守藏室之史也」注「老子爲二官名一」＝柱史。○漢の侍御史の別稱（漢官儀）

【柱國】チュウコク　家は柱によりて支持す、因りて國の柱となりて守る要地に喩ふ。戰國策、安邑者魏之ー一也、晉陽者趙之ー一也、鄢郢者、楚ー一也」

【柱質】シュシツ　はしらの石ずゑ、質は礎。戰國策「公宮之室、皆以二錬銅一爲二ー一」＝柱礎。

【柱石】チュウセキ　○はしらの石ずゑ。又、はしらと、いしずゑと。＝柱礎・柱質。○轉じて國家の重任を負ふ大臣。大將に喩ふ。漢書、霍光傳「田延年曰、將軍爲二國ー一」

【柱石之寄】チュウセキノキ　おもき任務。後漢書、朱浮傳「委以二大郡一任以二威武事一、有二ー一」

【柱石臣】チュウセキシン　はしらいしずゑと頼む重臣。漢書、元后傳「位歷二將相一、國家ー一也」

【柱礎】チュウソ　はしらの下のいしずゑ。晉書、大秦國傳「琉璃爲二牆壁一、水精爲二ー一」

【柱梠】チュウロ　はしらと、むなぎと。

【柱扃】チュウケイ　はしらと、とびらと。

【柱梁】チュウリャウ　はしらと、うつばりと。

南子「望主之用ノ人也、猶三巧工之制ノ木也、大者以爲二舟航一一、小者以爲二柙櫂一」

【柱聯】チュウレン はしらかけ、はしらかくし。又、其れに書く聯句。甲乙剩言「康慶御史巡關事、寫ア李獻吉、天涵隙塞收二禾黍一、日落渠山散二馬羣一、爲二一一、但改ノ落爲ノ轉、眞所ノ謂點ノ金成ノ鐵也」

【膠ノ柱而鼓ノ瑟】コトヲフンデコウスル ことぢにかかはして瑟をひく。變通の才なきに喩ふ。史、藺相如傳「王以ノ名使ノ括、若二膠ノ柱而鼓一レ瑟耳」括は趙括、老子には馘を調に作る。

【杼】

ヂョ 魚 語

梭（木部九畫）に同じ。

【柢】

テイ 霽

○ね（根）木の根「深根固ー」○ねざす、根を生ずる。又、本づく。○轉じて物事のもと「根ー」○ねざす、根を生ずる。又、本づく。

【柮】

トツ 月

楫ノ如はほだ、きりかぶ（木頭）

【柏】

ハク ヒャク 陌 栢は俗字

○側ノ一扁ノ如の類の常綠喬木の總稱。○四時色を變へざるによりて松と共に師操の堅きに喩ふ「松ー操」○大いなり、伯に通ず。○せまる、迫に通ず。○圖かしは（櫟）又、かしは餅の略語「おー」

【柏葉酒】ビャクヨウシュ 屠蘇ノ酒の如き酒。之を飲めば邪氣をはらふといふ。庾肩吾詩「卿閨——、試筵五辛盤」＝柏酒。

【柏葉詩】ビャクヨウシ 柏の葉は常綠なるを以て、長命の義に用ふ。武平一詩「願持二——一、長奉二萬年歡一」＝松柏壽。

【柏舟操】ハクシュウノ 柏舟は詩經の篇名、衛の太子共伯の妻共姜が、夫の死後、操を守りて再嫁を肯んぜずして作る、よりて夫死して節を守るにいふ。詩、鄘風、柏舟、序「柏舟、共姜自誓也、衛世子共伯蚤死、其妻守ノ義、父母欲二奪而嫁一レ之、誓而弗ノ許、故作二是詩一以絕ノ之」

【柏車】ビャクシャ 山にて用ふる大車。周禮「車人ノ一、載長一柯」

【柏酒】ビャクシュ 邪氣を拂ふために元日に飲む酒（荊楚歲時記）＝柏葉酒。

【柏寮】ビャクリョウ ○御史臺の別稱。漢代、御史府中に柏樹を列植せし故。○清代、按察使の別稱。

【柏白皮】ビャクヒ このでがしはの根の皮。

【柏梁臺】ビャクリョウダイ 漢の元鼎二年、武帝の築きたる臺の名（史、平準書）漢武故事「——以二香柏一爲レ臺、香聞二數十里一」

【柏梁體】ビャクリョウタイ 詩號の名、七言にして毎句に韻を押す、漢の武帝が柏梁臺の落成せし時、羣臣を集めて作らしめたる七言聯句の詩に始る。陵餘叢考「漢武宴二柏梁臺一、賦ノ詩、人各一句、句皆用ノ韻、後人遂以二每句用ノ韻者一爲二——一」

【柏樹】ビャクジュ 圖松に似たる一種の常綠樹、たけ低くして枝橫出し、庭木とす。＝柏心・柏身。

【柏手】カシハデ 圖○飲食の膳部、古昔、かしはの葉に食物を盛りたる故にいふ。○禮拜の時に兩手をうち合せて鳴らす。拍手の誤訓か。

【柈】

ハン ベン 寒

はち、物を盛る器。＝盤槃。

【柲】

ヒ ヒツ 寘 質

○六尺六寸あるほこのえ（戟柄）周禮、考工記「戈ー六尺有六寸」○ゆだめ（弩）弓材のゆがみを正す具。＝檠栝。

【枹】

㊀フ 虞 ㊁フウ 尤

㊀たいこのばち。鼓槌、鼓を擊つ杖。左、成二「左執ノ鼙、右援ノ枹而鼓」＝桴。㊁むらがり生ずる木（叢生木）＝苞。

【枹鼓】フコ ばちと、つづみと。圖訓「執ー一千軍門一、使二百姓加二勇爲一」

【柑】

㊀カン 覃 ㊁ケン 豏

㊀器のあし（圜足）○いかだ（桴）管、兵法「方舟投ー」＝桴。○はなぶさ、うてな（萼）㊁樂器。＝拊。㊂つく（注）○ゆづか（弓弣）＝弭。○つか（刀弣）○俗ー一は古の良醫。漢書、藝文志「太古有ノ岐伯・兪ー」

【柈】

ヘイ ビョウ 庚

ごばん（碁局）又、すごろくばん（博局）「碁ー」「一局」

【柈碁】ヘイキ 碁局なり、木に從ひ平に從ふは上平かなるによる會意。

【柄】

ヘイ 敬

○え（柯・欘）器物のとって（把）○轉じてとりて材料とする「談ー」「話ー」「笑ー」○もと（本）○ちから、いきほひ（權力）「文ー」「政ー」「威ー」左、襄二三「既有ノ利櫃又執ノ民ー」○圖がら。體格、又身分。又布帛の

模様恰好。

【柄臣】ヘイ 政の権力をにぎれる臣。漢書、朱雲傳「賊人國ニ―ニ」

【柄用】ヘイおもく用ひられて政権を握る。漢書、谷永傳「永知ニ王鳳方見ニ―一、陰欲ニ自托一」

【某】

㊀ボウ
㊁バイ

有 某は 灰 俗字

㊀それ、それがし、名を知らざる人、又は事物の代名詞。○しかじかの事。○自己の謙稱。㊁うめ、梅の古字、別に楳に作る。

【某某】ボウボウ たれそれ、名を指さずして二人以上の人をいふ時に用ふることば。‖某某。

【柳】リウ

宥

○やなぎ、落葉喬木の一、葉は披針狀、枝は絲の如く細長くして垂れ下る。○しだれやなぎ（枝の垂れざるを楊といふ）「垂―」「楊―」「―岸」○星の名、ぬりこ、二十八宿の一、南方に在り「―宿」‖鶉火。○―谷は日の入る處（書、堯典、疏）‖昧谷。

【柳陌】リウハク 柳の茂りてくらき處。溫庭筠詩「―山犬吠、清流水禽立」‖柳暗。

【柳暗花明】リウアンクワメイ 柳がくらく茂り、花の色あきらか、田舍の春の美くしきけしきをいふ。陸游詩「山重水複疑ニ無ニ路一、――又一村」

【柳営】リウエイ 柳の意思、詩人が想像していふ。李商隱、向ニ晩詩「花情蓋厭厭、――恨微微」

【柳陰】リウイン やなぎのかげ。司空圖、詩品「碧桃滿樹、風日水濱、―ニ路曲、流鶯比鄰」

【柳影】リウエイ やなぎのかげ。梁簡文帝詩「――長橫ニ路」

【柳営】リウエイ 幕府の異稱。漢の將軍周亞夫、細柳に軍して胡に備へ、號令嚴明なりしかば、文帝大いに歎賞せし故事に本づく。劉禹錫詩「―― 蓮府遞相歡」

【柳腰】リウヨウ ○柳のしなやかなる枝の形容。庾信詩「上林―ニ細、新豐酒酒多」○美人のしなやかなるこしに喩へていふ。溫庭筠詩「輕盼如ニ波眼、嬝娜似ニ―一」‖細腰。纖腰。

【柳葉】リウエフ やなぎのは。戰國周策「楚有ニ養由基者一、善射、去ニ―一百歩而射ニ之百發百中一」

【柳葉眉】リウエフビ 柳の葉の如く細く美くしき眉。楊維楨詩「湖上女兒――」‖柳眉。

【柳煙】リウエン やなぎにたなびくけむり。杜牧詩「春風野岸名花發、一道帆檣送ニ―一」

【柳下惠】リウカケイ 周の世の賢人。魯の人、博學洽聞の士にして、文章に長ず。孟子、萬章之下「―ニ―、不ニ羞ニ汚君一、不ニ辭ニ小官一」

【柳巷】リウカウ 柳の茂りたる巷。花柳の巷。

【柳絮】リウジョ ○やなぎのわた。柳の實の熟して裂れ飛ぶこと、綿の如きもの。晉書、王凝之妻謝道韞傳「謝安嘗内集、俄而雪驟下、安曰、何所ニ似也、安兄子朗曰、撒ニ鹽空中一差可ニ擬一、道韞曰、未ニ若ニ――因ニ風起一」○轉じて雪の異名とす。

【柳色】リウショク やなぎのみどり色。劉長卿詩「―ニ孤城裏、鶯聲細雨中」

【柳宗元】リウソウゲン 字は子厚、柳州と號す。唐の河東の人、博學洽聞の科に及第し、累進して監察御史に拜し、禮部員外郎となる、後、王叔文の黨に坐して永州司馬に貶せられ、元和十年、柳州刺史に徙され、同十四年卒す、年四十七、文名一時を蓋ふ、韓愈と竝稱して韓柳といふ。

【柳蔭】リウイン やなぎの枝ぶり。轉じて、しなやかなるすがた。柳渓、聽ニ箏詩「似ニ逐春風知ニ――一、如ニ隨啼鳥識ニ花情一」‖柳容。

【柳塘】リウタウ やなぎのあるつつみ。古今詩話「梅聖俞曰、詩最難ニ――春水滿、花塢夕陽遲、則天容時態、覺不ニ如ニ在ニ目前一」‖柳隄。

【柳堤】リウテイ 次條に同じ。

【柳隄】リウテイ やなぎのあるつつみ。溫庭筠詩「不ニ語垂ニ鞭上一ニ――一」‖柳塘。

【柳條】リウデウ やなぎのえだ。梁簡文帝詩「――竹著ニ地、楊花好上ニ衣一」‖柳枝。

【柳眉】リウビ 美人のまゆに喩ふ。李商隱、贈ニ柔濕薛一詩「――顰吐欲ニ顰ニ兼、機絲舒ニ更笑ニ鏡」‖柳葉眉。

【柳絮】ジョ やなぎの木のほとり。杜甫詩「退朝花底散、歸院―邊」
【柳州】リュウシュウ 唐の柳宗元、柳州の刺史に貶せらる、故に稱す。楊萬里、次三主簿雪飢二詩「舍人遺憶―――、解道千山絕二飛鳥一」
【柳雜喬蛤】ヤナギバハマグリ 柳の絲は垂下し蛤の殼はこびる、卷の景色の美くしき形容。李參詩「――花復殷」
【柳樽】リュウソン 圖○酒樽の類、祝儀に用ふる酒樽。○川柳の句集。
【柳綠花紅】リュウリョクカコウ 物の天然のままにして少しも人工を加へざるにいふ、禪家にてさとりを開きし形容の語。就詩「――眞面目」

【桋】 レイ 〔青〕 楸ーはひさかき、楠に似て低き樹。

【栂】 〔國字〕 とが、つが。常綠喬木の一、葉は細長、果は毬狀にして扁平、木理は緻密にして建築、又は器具を造るに用ふ。

【栃】 〔國字〕 とち、一に、杤に作る、深山に生ずる喬木の一、葉は七枚の小葉を具へ、又、淡黃色の花を著け、果は栗に似て食用とす。

【桎】 〔國字〕 まさ、まさめ、材の木理ゞの正しく通りたるもの「桐の一」

【案】 アン 六 〔輔〕 又、按に作る

○つくゑ、ひちつき、几の屬「書ー」「几ー」○わん(椀・盌)こばち、ぜんなどの食器。○さかひ(界)○ついで(次第)「一堵」○かんがふ。漢書、賈誼傳「一之當今之務」かんがへ(考)○なでる(撫)「一劍」○よる(依據)○みる(視・診)「一脈」○とどむ(頓)○おさふ(按)○しらべがき、したがき「文ー」「草ー」○官府の文書の成例及訟獄の判決文。
【案府】アンフ 延び爵がる貌。史、司馬相如傳「其南則有二平原廣澤一登降陁靡、――境曼、緣以二大江一限以二巫山一」
【案行】アンコウ ○しらべあるく。‖巡察。○行くことをひかへる。史、司馬相如傳「車ー」、騎就ー隊」
【案考】アンコウ ○かんがへる。○圖試驗する。
【案外】アンガイ 圖おもひのほか、想像せしよりも。‖意外。
【案件】アンケン ○うったへのかでう、訴訟事件。○しらべ議すべき事がら。
【案几】アンキ つくゑ。丘爲詩「抑ー無二僮僕一、窺レ室惟ー――」‖几案。
【案置】アンチ かんがへはかる。後漢書、律歷志「ー以求二諸律一、無レ不二如レ數而應一者上矣」
【案檢】アンケン 次條に同じ。
【案驗】アンケン 證據だてでしらべる。漢書、丙吉傳「民無レ所ー――」‖案檢。
【案功】アンコウ てがらの有無を考へただす。管子「案二其功一而行レ賞」
【案問】アンモン つみをしらべる。
【案察】アンサツ しらべみる。‖按察・檢察・按驗・案檢。
【案山子】アンザンシ かかし、鳥おどし。案山は几の如く平たく低き山の義、山田なり、山田を守る主たる義(傳燈錄、道膺禪師傳)
【案上】アンジョウ 机の上。歌應物詩「幸無二職事來一、且覺ー――書」‖案頭・几上。
【案籍】アンセキ こせきをしらべる。後漢書、馮異傳「追二錄勳烈一、按圖ー――」
【案致】アンチ 罪をしらべきはめる。漢書、魏相傳「收捕ー――其罪」
【案牘】アンドク やくしょの帳面。唐書、陸贄傳「吏員指繩、則ー――業浦、鷹門案眞、吏練以爲レ姦」‖案帳・官簿。
【案堵】アンド 次第をみださず、各自職の內に安んじて動搖せず。史、高祖紀「吏民皆ー――如レ故」‖安堵。
【案頭】アントウ つくゑの上。杜甫詩「窮巷悄然車馬絕、――乾死讀書監」‖几上・案上。
【案牘】アンドク とりしらべを要する書類。唐書、李勉傳「天資長二於吏事一、治レ家亦勾檢――簿書一如二公府一」
【案內】アンナイ 圖○てびき、みちしるべ、あない。○しらせ、通知「――狀」
【案比】アンピ 年次をかんがへくらべる。案驗して比較する。後漢書、江革傳「每レ至二歲時一、縣當ー――」
【案撫】アンブ なでやすんずる。漢書、郊祀志「嗚呼孝哉、――我國」
【案文】アンブン ○文章を作らんとして考へる。又、文意を考へる。梁書「ー――讀之、無有二滯礙一」○官府などのしたがきの文書。
【案壓】アンアツ からだをなでさする、もみほぐす。案摩「經絡不レ通、病生二于不仁一、治レ之以ニー――一」孟、梁惠王「折レ枝」趙注「ー――折二手節一解二體枝一也」枝は肢。
【案問】アンモン 罪をしらべとふ。‖按問。

【桉】 案（前條）に同じ。

【棟】 ㊀イ ㊁テイ 〔支〕 ㊀さねぶとなつめ（赤棟）㊁めぐは（女桑）

【桜】 案（前條）に同じ。

【栘】 イ　支

○にはうめ(棠棣)白楊に似たる木、一名、夫ー。○ー中監は官名、ーは地名。漢書、昭帝紀「ー中監蘇武」

【栘楊】イヤウ　柳の一種、葉まるし、してやなぎ。古今注、ーー亦曰ニ移柳ー、亦曰ニ蒲柳ー」＝楊柳。

【栘柳】イリウ　してやなぎの異名。

【栲】 槁(木部五畫)に同じ。

【桁】 ㊀カウ・キャウ　㊁カウ　㊂カウ　深　鴻　支

㊀けた、家又は橋などの外廻りの柱上にわたす材。○そろばんの珠を貫く串又其の位どり。㊁かせ(械)あしがせ。○うきはし(浮橋)＝航。㊂こころもかけ、いかう(衣架)「衣ー」

【桁衣】カウイ　いかうにかけたる衣。庾信、對燭賦「燈前ー疑レ不レ発」

【桁上】カウジャウ　こころもかけのうへ。古樂府「還視ニーー無ニ懸衣ー」

【桁楊】カウヤウ　足がせ首がせを加へらるる者。莊、在宥「ーー者相推也、刑戮者相望也」

【校】 カウ　ケウ　図　古、挍と通用す

○まなびや(學宮)「學ー」「ー舍」「鄉ー」「ー堂」孟、滕文公「夏曰ーー」○かせ(刑械・木囚)罪人の手足又首などにはめる刑具。○きそふ(角)○くらぶ(比)優劣を較べる。禮、學記「比年入學、中年考ー」○むくゆ(報)しかへしする。論、泰伯「犯而不ーー」○かんがふ(考)○しらべる(檢)漢書、食貨志「貢朽而不可ー」○かぞへる(計)○ただす(正)書物の誤を正す「正」「ー勘」○とどむ。○たたかふ(交戰)○てすり(欄格)○鎧の垂又ませを結びて禽獸を遮る物。○陣營中のしきり、他人の妄に出入するを防ぐ爲めに將師の居る所に設ける、轉じて將師の義とす「將ー」

【校尉】カウヰ　天子の宮城をまもる武官。漢書、百官公卿表「司隸城門ーー」

【校長】カウチャウ　學校にて嘱託して常備する賭者。＝學校醫。

【校友】カウイウ　學校ともだち。＝學友・同窗。

【校閲】カウエツ　しらべけみす。魏書、太宗紀「巡ニ行諸州ーニー守宰ー」＝檢閲・檢査。

【校學】カウガク　諸侯の國に設立せる學校。漢書、平帝紀「ーー置ニ經師一人ー」

【校覈】カウカク　かんがへしらべる、覈は考究。梁昭明太子、答ニ湘東王書ーニーー仁義ー」

【校勘】カウカン　數種の異本を比べかんがへて定める。阮元の十三經注疏ーー記の類。

【校簿】カウボ　たくらべきそふ。北史、獨孤羅傳「亦不ニ與諸弟ーーー上」

【校次】カウジ　かんがへて順序をさだめる。胡綜、注「ーニー其人之在否ー」

【校試】カウシ　しけん。唐書、選擧志「ーー不レ以ニ貲蔭ー、皆有レ試」＝考試。

【校讎】カウシウ　かんがへしらべる、讎は兩人相對してひき合せ誤を正す。宋史、鄭樵傳「校ニ書數千卷ー、皆自ーー」

【校習】カウシフ　かんがへならふ。吳志「宜下講ニ論術學ーニー射御ー、以周ニ世務ー上」＝究習。

【校人】カウジン　○池沼澤などの事を司る小やくにん。孟、萬章「使ニーー畜ニ之池ー」○王の馬政を掌る者「周禮」

【校舍】カウシャ　まなびや。後漢書、儒林傳序「別立ニーー、搜ニ選高能ー、以授ニ其業ー」＝學舍。

【校書】カウショ　○書物をくらべ合せて正す。蜀志「向朗年踰ニ八十ー、猶手自ーー、刊ニ定譌誤ー」○妓女の異稱、唐の元稹、使して蜀に在りし時、妓女薛陶(陶一に濤に作る)辭辯あり、稹の側に侍りて書を校せし故事に本づく「全唐詩話」胡曾詩「萬里橋邊還ーー、枇杷花下閉ニ門居ー」

【校序】カウジョ　がくかう、序も校。＝庠序。

【校數】カウスウ　くらべ合せてかぞへる。

【校正】カウセイ　くらべ合せて正す、主に印刷物又は在來の書物の誤を正すにいふ。＝校勘・校訂。

【校戰】カウセン　力をくらべたたかはす。李昂詩「羽林練士拭ニ金甲ー、將軍ーー出ニ玉堂ー」

【校則】カウソク　學校にて定めたるきそく。

【校度】カウタク　かんがへはかる。柳宗元文「評ニ析是非ー、ニー古今ー」＝稽度。

【校定】カウテイ　書物をくらべ合せて正す。唐書、章述傳「述著ニ書萬卷ー、皆手ーー」＝讎定。

【校訂】カウテイ　校正に同じ、訂は正。

【校比】カウヒ　かんがへくらべる。周禮「以ニ歲時ー比ーー」＝比較。

【校武】カウブ　武力をくらべかんがふ。揚雄、長楊賦「麗ニ力狡獸ーニー裏禽ー」

【校本】カウホン　誤を正したる書物。＝校定本。

【校覽】カウラン　しらべ見る。北史、魏太宗紀「帝臨ニ百登ー、躬自ーー」

【校理】カウリ　書物の誤をかんがへただして整理する。班固、西都賦「ーニー篇文ー」

【校力】カウリキ　力をくらべる。晉書「藝ニ

與一ニ一、當二以レ計破一之一」＝角レ力。【校了】カウ 校正しをはる。訂正ずみ。【校機】カウキ 綜かをつくり閙みて禽獣をかる。漢書、成帝紀「從二胡客一大一一」【校合】カウガフ 校正に同じ。【校倉】カウサウ 圖古、角材を積みて閙みたるくら。

【栲】 カウ コウ 餘 巧

○樗ナラに似たる一種の喬木。＝山樗。○一桃カウは柳條を曲げて作り、物を盛る器。盧延讓詩「一桃量二金買一斷春一」○圖古、かぢの木の皮の纖維にて織りし白布「白一」「一衾」

【格】 ㊀ カク・キャク ㊁ カク・キャク 陌 藥

㊀いたる(至)きたる(來)實、舜典「一汝舜」「來一」我が誠意に感動して來るに用ふ。中庸「神之一思」思は助字。○とほる、感通する。書、說命「一于皇天一」○かはる(變革)○きはむ(窮究)「一物」○のり、きそく(法式)「字一」「正一」證、細玄「言有レ物而行有一也」○ただす(正)書、冏命「一其非心一」ただし。論、爲政「有レ恥且一」○のほる(登)○さからふ、くひちがふ(抵牾)○ころす(殺)○あぐ(擧)○たな(庋架)○あたる、てむかふ、敵する。史、張儀傳「騙羣羊攻猛虎不一明矣」○とらふ(捕)○めあて(標準)○さだめ(格例)○文法上、名詞代名詞等が他の語に對して有する關係「主一」「目的一」○ぶんけん、くらゐ「資一」○はかる(度)○うつ。＝挌。○しな(階段)○線を縱橫に畫して界とせしもの「一天井」「一子」○一は鳥の聲。○樹の高く長き枝。㊁やむ(廢)とどまる、中止する「廢一」○はばむ(阻)「阻一」○すまふ(角戲)○くひ(杙)○樹の枝。○扞一カンは互にそむきて相入らず。○圖古、律令を發布する爲めに、其の時勢に適するやうに發布せし命令「三代一」

同訓異義 格・至・到・臻・詣等の訓は至(部首六畫)の條を見よ。○格・正・規・繩・糾・匡・訂等の訓は正(止部一畫)の條を見よ。

【格格】カクカク 鳥の聲。荊楚歲時記「有レ鳥如レ烏、先レ雞而鳴、架架一一」【格訓】カククン ただしきをしへ。梁武帝文「用二天之道一、分二地之利一、垂二先聖之一一也」【格外】カクグワイ なみはづれ、常例以外。南史、王綸之傳「一一之官、便今日爲レ重」【格擊】カクゲキ うちあふ。漢書、五行志「其等一一、或死或傷、皆鬪也」＝挌擊。【格言】カクゲン 道にかなひて法戒となることば。魏志、崔琰傳「此周孔之一一、二經之明義」＝金言・至言。【格五】カクゴ 圍碁の一法、五目ならべ。漢書、吾丘壽王傳「以レ善二一一一召待詔」【格虎】カクコ とらをてうちにす。唐書、孫逖傳「高祖獵親一レ一」＝暴虎。【格殺】カクサツ 手にてうちころす、手うちにする。後漢書、董宣傳「叱レ奴下レ車、因二一一之一」＝挌殺。【格子】カウシ 縱橫に四角なる木を組みたるもの。【格獸】カクジウ 獸を手うちにす。魏志、任城王彰傳「膂力過レ人、手格二猛獸一」【格式】カクシキ ○のり、きそく。北史、蘇威傳「律令一一多威所レ定」唐書、蘇瓌傳「一朝一一、皆所二刪正一」○圖身分、階級。【格心】カクシン ○ただしきこころ。禮記「數レ之以レ禮、齊レ之以レ禮、則民有二一一一」○心をただしくす。【格尙】カクシャウ けだかし、高尙。魏志、王粲傳評「風節一一」【格制】カクセイ くらゐ、かく。野老遺聞「唯一一高耳」＝品位・資格。【格調】カクテウ ○詩歌の體裁と、てうしと。○人の品格。方干、贈二吳人一詩「心路玲瓏一一高」【格的】カクテキ まと、めあて。淮南子「夫射儀度不レ得、則一一不レ中」＝貫的。【格鬪】カクトウ くみ合ひたたかふ。北齊書「親兵一一、終莫二肯從一」＝挌鬪。【格納庫】カクナフコ 圖飛行機などを入れる建物。【格範】カクハン ただしきのり。參同契「司レ天者、立レ表測レ影、以爲一一」【格物致知】カクブツチチ 事物の理をきはめて、我が知を致しきはむ。大學「欲レ誠二其意一者、先致二其知一、致レ知在レ格レ物」＝格致。【格別】カクベツ 圖とりわけ、特に。＝格段・特別・別段。【格殺】カクサツ 主命を拒みて奉ぜざるやつこ。史、李斯傳「嚴家無一一」【格令】カクレイ きそく。宋史、陳彭年傳「三日編一一」＝律令。【格例】カクレイ きまり、しきたり

○このみのさね、果物の實の心にありて仁を含むもの、又其の形したるもの「一子」曲禮「賜果於君前、其有」一者、懷其」○くだもの、梅桃の如く果の中央に一あり、一の中に仁あるもの。○遽に盛るもの、遽實「殽一」殽は豆實。○かたし（堅實）「精一」漢書、司馬遷傳「其文直而其事一」○きびし（深刻）○すぶ、かぬ（綜）○ただす、きはむ、しらべる、覈に通ず。漢書、宣帝紀「綜一名實」○まこと、ただし。

【核果】カククワ　果實の肉果皮の堅硬にして核を成すもの、梅桃の類。

【核桃】カクタウ　胡桃（クルミ）の異名（本草綱目）

【核膜】カクマク　細胞核をつつむ薄き皮。

【栞】カン　寒　刊に通ず

○しをり（枝折）山林を行くに木の枝を折りて道のめじるしとするもの。○みちしるべ、てびき。○しをる。木の枝を折りて道しるべとする。書、禹貢「隨山一木」○圖しをり、讀みかけたる書物の中にはさみてめじるしとするもの。‖枝折。

【栞木】カンボク　木を折りて路しるべとする。字解參看。

【槍】（一）キ　（二）クヮイ　灰　雄

㊀黄木の名、染料とす。㊁ほばしら（帆竿）

【柏】キウ　有

烏一ウはたらはぜ。葉は秋に入りて紅葉す、實は蠟燭を製す。‖烏臼。

【框】キャウ　四

○かまち、牀の端にわたす横木。又、戸障子などの周圍のわく。○ひつぎの口（棺門）

【棋】キゥ　尾

○大いなるくひ（大杙）○ますがた、柱の上に置く方形の木「枓一」「斗一」

【棋枰】キヘイ　ますがた。蘇軾詩「忽行二縦木中一跨二空飛一一一」

【栩】ク　虞

○くぬぎ（櫟）○一はよろこぶ貌。莊、齊物「夢爲二栩蝶一一然蝴蝶也」

【桃】クヮウ　陽

一柳（クヮウばくろつけ、暖地に産し、高五六丈、棕櫚に似たる木、材は黒褐色の斑條ありて堅く、種種の用に供す、皮毛は繩又は刷毛などに作る。‖桃根。

【梏】クヮツ　屋

○びゃくしん、檜の一種。書、禹貢「梏幹ト柏」○たむ。ためぎ、物の邪曲を正し直くする器。‖桎一。

【梏楔】クヮツケツ　きからすうり（黄烏瓜）

【桓】クヮン　寒

○漢代、宿驛のしるしに雙び立てたる木、郵亭の表。○古、棺を穴に下すに便するため、四隅に立てたる柱。禮、王制「三家視一槨」○一は勇武なる貌。○盤一は進み難き貌、たちもとほる。○葉は柳に似、實は棟に似て皮は黄白色の木の名。

【桓表】クヮンペウ　木をけづりて石碑の如くし墓穴の四隅に立てて棺を下すもの。字解參看。

【桓温】クヮンヲン　字は元子、東晉の人、荊・梁等の軍事を都督し、軍功あり、官、大司馬に至り、九錫を加へらる、簡文帝を立て、陰に篡奪を謀る、勢成倒赫たり、遂に廃を以て卒し、宣武と諡せらる。

【桓桓】クヮンクヮン　たけき貌。詩、周頌、桓「一一武王、保二有厥土一」

【桓圭】クヮンクヰ　長さ九寸の玉、周代、公爵の人が其の位のしるしとしてもちしもの。周禮、春官「公執二一一一、侯執二信圭一」

【桓山之鳥】クヮンザンノトリ　家語「回聞——生二四子一焉、羽翼既成、將レ分二四海一、悲鳴而送レ之」

【桓撥】クヮンハツ　武を以てをさめる。撥は治。詩經「玄王一一」

【桓表】クヮンペウ　古、驛亭の入口などに立つる木のはしら、我が國の鳥居に似たるもの。‖華表・和表。

【桂】ケイ　霽

○かつら、香木の名、肉一樹（木犀）等の總稱「芳一」「月一」○一林は郡名、今の廣西省の治、轉じて廣西省を簡稱して一といふ。

【桂庵】ケイアン　國李公人の世話をするもの。又、其の輩、口入屋。もと人名なりといふ。‖慶庵・慶安。

【折一桂】セツケイクヮイ　進士の試驗に及第す

る。桂林一枝、參看。濃庭筠詩「猶喜故人新一レ」＝登第・及第・登科。

【桂醑】ケイセイ　肉桂ニクケイと、しゃうがと。文心雕龍、夫一一同レ地、幸在二本性一、文章由レ學、能在二天賦一」

【桂玉之歎】ケイギョクノタン　○他國にて、桂よりも炊き薪と、玉よりも貴き食とにて暮すくるしみ。戰國策「蘇秦曰、楚國之食貴二於玉一、薪貴二於桂一」○轉じて物價の高き都會にて苦學するにもいふ。

【桂花】ケイクワ　もくせいの花。王建詩「冷露無レ聲濕一一」黃花の者を金桂、白花の者を銀桂、赤色の者を丹桂といふ。＝桂華。

【桂月】ケイゲツ　つきの異名。王起、蟾池賦「蟾風已歇、一一初陽」＝桂魄・桂輪・桂魂。

【桂子】ケイシ　○かつらの實。宋之問詩「一一月中落」○人の子をいふ美稱。五代史「竇禹鈞五子、儀・儼・侃・儕・僖俱及第、號二五龍一、馮贄レ詩云、燕山竇十郎、教レ子有二義方一、靈椿一株老、丹桂五枝芳」○にくけい「一一油」

【桂芝】ケイシ　靈芝の異名。搜神記「彭祖（中略）服レ豆而至二商末一、顏二七百歲一、常食二一一一」

【桂秋】ケイシウ　もくせいの咲く秋の時節。李郢詩「石室煙含古一一」

【桂荏】ケイジン　紫蘇ソの異名「水蘇綱目」

【桂漿】ケイシャウ　かつらのかぢ。轉じて美くしき樽。陳基詩「沙棠爲レ舟桂爲レ楫、猶起鴛鴦飛兩兩」

【桂殿】ケイデン　皇后のみうち。蔡邕文「有二椒房一一之託一」

【桂籍】ケイセキ　進士に及第せし人名簿。蘇軾詩「飛二騰一一一舊年事」

【桂竹】ケイチク　桂陽縣に產する竹。山海經、中山「雲山無二草木一、有二一一一蒼蒼、傷レ人必死」

【桂魄】ケイハク　つきの異名。無名氏、管中窺天賦「一一未レ圓」＝桂月。

【桂粉】ケイフン　おしろい、桂州の產、最も名あるが故（桂海虞衡志）＝鉛白・鉛霜・鉛粉。

【桂輪】ケイリン　月の異名。唐中宗文「澄二一一而含レ影」＝桂魄。

【桂林一枝】ケイリンイッシ　○進士に及第せしを讓して俺に桂の一枝を手折りしに過ぎずといひし故事。晉書、郤詵傳「詵對策上ノ第（中略）武帝問曰、卿自以爲二何如一、詵對曰、臣舉二賢良一、對策爲二天下第一一、猶二桂林之一枝、崑山之片玉一耳」○轉じて人品の清貴にして俗を拔くに喩ふ。

【枅】ケイ　齊　先　ケン

けた、ますがた、柱の上にわたし棟を承ける角材。淮南、主術「短者以爲二朱儒一一櫨一」＝屋櫨。

【桀】ケツ　屑

○棹ケツに同じ　○一棹は水を汲むはねつるべ。○一梗は藥草、きき。う、初秋、紫又白色の花を著ける。戰國策「求二柴胡一一梗于沮澤」

【桔槹】ケツカウ　井の上のはねつるべ。莊、天運「子獨不レ見二夫一一者一乎、引レ之則俯、舍レ之則仰」

【桀】ケツ　屑

○あらし、わるがしこし（凶暴）「一黠」「姦一」○になふ（擔）「一石」○すぐれる、ひいでる（秀）「一俊」姓名記「千人曰英、萬人曰一」「萬人にすぐれるをいふ。古、傑に通ず。○ねぐら、雞のとや（雞棲）詩、王風「雞栖于一一」○夏の最後の天子の名、暴君の代表とす「一紂」

【桀驁】ケツゴウ　わるづよし。晉書、江統傳「幷州之胡、本實匈奴一一之寇也」＝獰惡。

【桀黠】ケツカツ　暴君を助けて民を虐ぐるをいふ（史、留侯世家）あれ馬。轉じてわるづよし。唐書、契丹傳「虞寄龍中、部酋比能、稍一一」＝悍驁。

【桀點】ケツカツ　わるがしこし。史、貨殖傳「一一奴、人之所レ患也」

【桀桀】ケツケツ　おどる貌。詩、齊風「維莠一一」傳「一一猶二驕驁一也」一解に秀づる貌。

【桀髮】ケツハツ　秀で立つ。水經、注「立石數百丈、亭亭一一、競レ勢爭レ高」

【桀俊】ケツシュン　才智のすぐれたる者。禮記「選二士厲レ兵、簡二練一一一」＝俊傑・傑俊・桀駿。

【桀駿】ケツシュン　前條に同じ。

【桀石】ケツセキ　石をになふ。左、成二「齊高固、一レ以投レ人」

【桀紂】ケツチウ　夏の桀王と殷の紂王と、共に暴君の代表者とす。仁君を堯舜といふの對。

【桀之犬吠レ堯】ケツノイヌガギョウヲホユ　人は各主にかかはらず、住ふ所の主に忠を盡すに喩ふ。鄱陽、獄中上二梁王一書「桀之犬可レ使吠レ堯、而蹠之客可レ使レ刺レ由」＝跖之狗吠レ堯（跖は盜跖）

【桀歩】ケツホ　螃蟹の異名。備要「螃名二一一」

【根】コン　元

○ね、もと、草木のねもとの地下にある部分「草一」○轉じて物の下部、つけね「舌一」「巖一」「山一」「籬一」韓愈詩「髻一鬆慢

玉鉉筆」○物事のはじめ（始）もと（本）「一本」「一源」○ねざす（根生）孟、告子「仁義禮智、…於心」○しょうね、本来の性「利一」「鈍一」○數學にて平方、又立方を開きて得たる數。○㊥こん。物事に堪へ得る力。‖精魂。

【根蒸】コンねと、はと。もとと、すゑと。江淹、蓮花賦「華實各名、一一異一」

【根幹】コンねと、みきと。詩經、疏「以…爲子比一一、以子比二支幹一」‖本幹。

【根氣】コン㊥こん。ものごとに堪へ得る心の力。‖精魂・精力。

【根源】コン人のうまれつきと、はたらきと。傳燈錄「…一一而說法」‖根性・習性。

【根本】コンをきはめる。宋无詩「一一愚見後、參同混沌初」

【根底】コンよる、よりどころ。漢書、霍光傳「宣…連…綱、一一于朝廷」

【根據地】コンキョ根據となす場所。

【根系】コンケイ本の正しき血統。晉書、劉頌傳「…後嫡庶陳田、本同一一」

【根莖】コンケイ地の中を横にはふ根狀の莖、普通には根と稱す、蓮根の類。

【根元】コンゲンもと、おほもと。‖根原。

【根源】コンゲン木のねと、水のみなもとと。轉して事のおほもと。親書、崔光傳「此乃學者之一一」‖根原・根元。

【根窮而土易】コンキュウジドコロ根がこよしのごとくにまがりてのびず、土はこれまでの土の質とかはる、移植の法にそむく義（柳宗元、郭橐駝傳）

【根腐】コンフ年來の不治の病。ぢびょう。顏延之、白陳表「一一漸劇」‖宿痾・痼疾。

【根菜】コンサイ主として根を食用とするやさい、大根・蕪・牛蒡の類。

【根性】コンジョウ㊥しょうね、人の生れつき。法苑珠林「一一輕利」‖性質。

【根株】コンシュねもと。唐書、柳仲郢傳「徐行文學爲一一」‖基礎・根本。

【根柢】コンテイおほもと。元包經「其不變之一、爲天地之一柔一剛二物之一一也」‖本原。

【根證】コンショウ或說などのよりどころとし證據とする所。唐書、藝文志「一一議論、一一淺薄」

【根絕】コンゼツねだやしする、根本より絕滅する。

【根帶】コンタイ○ねもと、へたと。老子「固…根固帶、長生久視之道」○物事のよだい。陶潛「人生無一一、…奚如二隨上座一」

【根治】コンチ○もとからねほしをさめる。宋史、兵志「手詔提刑司一一一」○病を根本から療治する。

【根塵】コンジン㊥六根の塵。佛覺經「一一虛妄」六根は眼・耳・鼻・舌・心・意。

【根著】コンチャク根もとがしっかりとつく、しっかりと根ざす。朱熹、題跋「是以無所一一一」

【根柢】コンテイ○ねもと、低も根。○棒にて事物のもと、よだい。盤庚、奚都賦「爾王之所一一、開國之所二基肇一」

【根本】コンポンねもと、事のもとはじめ。史、律書「六律爲二萬事一一一焉」陸贄文「王業一一於是在焉」

【根株】コンシュ根本をすてて、枝葉にそそぐ。本を棄てて末を事とする喩。淮南子「不レ如レ事レ修二其本一而務レ治二其末一、是擇二其根一而灌二其枝一也」

【栽】㊀サイ・ザイ　㊁サイ　㊥灰

㊀うう（植・種）移しうゑる。殖ゑき苗を植うるをいひ、成木を植うるを樹といふ「分一」「移一」○わかめ、ひこばえ（稚生）杜甫詩「爲乞椎一二百根」㊁ついぢいた（築レ牆長板）○㊥うえこみ「前一」

㊥栽・種・植・樹・蔓の別は種（禾部九畫）の條を見よ。

【栽插】サイソウうえつける、插は地にさしこむ。蘇軾詩「爲レ翁一一萬松岡」

【栽植】サイショク草木を移し植う。元稹詩「太子知二一一一」‖栽植・蓺植。

【栽竹】サイたけをうゑる。韓愈詩「一一通二萬竿一」‖種竹。

【栽培】サイバイうえつちかふ。中庸「故栽者培レ之、傾者覆レ之」

【桑】サウ　㊥陽

○くは、葉は多くは心臟形をなし、春花さき夏紫黑色の實を結ぶ、葉を蠶の飼料とし、材は器具を造るに用ふ。史、貨殖傳「齊魯千畝一一、…其人與二千戶侯一等」○くはをとる（採桑）一の葉を摘む。○くはをうゑ、蠶を養ふこと。漢書、揚雄傳「世以農一爲一業」○一林は殷の天子の樂の名。又地名、殷の湯王の雨を禱りし處。

【桑梓】サウシこがひと農作と。後漢書、明帝紀「詔二百姓一、勉務二一一一、以備二災害一」‖農桑・桑耕。

【桑港】サウカウ㊥米國のサンフランシスコの異稱。

【桑下】サウカ三宿桑下佛者は、桑の樹の下に三夜續けて宿せず、恩愛を生ずることを欲せざる意。後漢書、襄楷傳「政官老子入二夷狄一、猶二浮屠一浮屠——、不レ欲レ久生二恩愛一、精之至也」

【桑乾河】サウカンカ山西省馬邑縣に出で東流して直隸に入る。‖盧溝河・渾河・永定河。

【桑柱】サウチウ むくげの一種、桑に似たるもの。酉陽雜俎「一重皇華相似、桑、南中呼爲ニ一一一」

【桑苧】サウチヨ 苧をかふわざ。晉書、石季龍載記「徙國有ニ田畴不レ開、一一不レ修者一」

【桑蟲】サウチウ かひこの異名。爾雅「蜮、一一」疏「食ニ桑葉一作レ蟲者名レ蠋、即今蠶也」

【桑戶】サウコ 桑の枝をまげて戸樞とす、貧家の形容。戰國策「蘇秦持窮困掘門、一一棬樞之士耳」ll桑樞。

【桑弧】サウコ くはの木のゆみ。禮、射義「男子生、一一六、蓬矢六、以射ニ天地四方一」

【桑皃】サウバウ ○浜萬（イカウ）の異名。まめまはし。左、襄四「一一、臧脂爲ニ證ニ雀著也一」○官名。周禮「一一氏、農正、趣ニ民養蠶一」

【桑孔】サウコウ 桑弘羊と孔僅と、共に漢代の理財家。宋史「就使下韓白復生、一一繼出、能爲ニ陛下ニ強ニ兵理ニ財、何補ニ治亂安危之數一」

【桑殼】サウカク くはと、かちの木と、殻は格。晉經序「一一共生ニ于鍋一」漢書、郊祀志「帝太戊有ニ一一生ニ於庭一、一暮大拱、懼、伊陟曰、妖不レ勝レ德、太戊修レ德一一死」

【桑葚】サウジン 桑をつみ、かひこをやしなふ。漢書、五行志「皇后一一以治ニ祭服一」ll桑桒。

【桑耳】サウジ くはの木に生ずる茸。本草「一一、一名桑蛾」

【桑科】サウクワ くはと、あつさと、古は對下に桑と梓とを栽う、子孫より見れば、其の父祖の栽ゑし所なるが故に之を敬ふ。轉じて故郷の義とす。詩、小雅、小弁「維桑與梓、必恭敬止、靡ニ瞻匪ニ父、靡ニ依匪ニ母一」

【桑苴】サウソ くはの實。詩、衞風「吁嗟鳩兮、無レ食ニ一一一」註一に椹に作る。

【桑拓】サウタク やまぐは。禮、月令「季夏之月、命ニ野虞ニ毋レ伐ニ一一一」

【桑繭】サウケン くはを植ゑ機をおる。禮、德指歸論「衣食耕蚕、一一有レ餘」ll養蚕紡織。

【桑脹】サウチヤウ 貧しき人のいへ、桑戸に同じ。莊、讓王「原憲居ニ一一一、不レ完、桑以爲レ樞、甕以爲レ牖、上漏下濕、坐而絃歌」

【桑中之喜】サウチユウノヨロコビ 男女不義の樂み。詩經、鄘風の桑中篇は淫奔の事をそしりて作りしが故。左、成二「有ニ三軍之懼一而有ニ一一一」

【桑弧】サウコ あさと、からむしと、養蚕紡績の料。宋史、陳堯叟傳「勸ニ諭民間ニ廣植ニ一一一」ll桑麻。

【桑田】サウデン くはばたけ。神仙傳「已見ニ東海三變ニ一一一」

【桑田碧海】サウデンヘキカイ 桑田變じて碧海となる。時勢の變遷の甚だしき義。盧照鄰詩「——須臾改」劉延芝詩「已見松柏摧爲レ薪、更聞桑田變成レ海」

【桑門】サウモン よすて人、僧侶。陳書、陳詳傳「出家爲ニ一一一」ll沙門。

【桑野】サウヤ ○ひがしの方。淮南子「日至ニ於一一一、是謂ニ晏食一」○くはをうゑたる野。孟浩然詩「一一就ニ耕父、荷鋤隨ニ牧童一」ll桑郊。

【桑榆】サウユ ○夕ぐれの日かげ、日暮。後漢書、馮異傳「失ニ之東隅一、收ニ之一一一」○轉じて、老人の死期に迫れるにもいふ。舊唐書、太宗紀「筋骨將レ盡、一一且レ迫」

【桑林】サウリン 殷の天子の樂の名。左傳「宋公享ニ晉侯於楚丘一、請レ以ニ一一一、荀罃辭」

【桒】 桑（前條）の俗字。

【楘】ジ 支

○ますがた（斗栱）ll櫨。○しばぐり、栗の屬。○きのこ、芝の屬。

【桱】シツ 質

○あしかせ（足械）械の足に在るはー、手に在るは梏。○苦められる、しばられる。莊、達生「故其靈臺一而不ー」靈臺は心。○ふさぐ（窒）さす（剌）○くさび（楔）

【桱陛】シツヘイ 足かせして獄にいれる。抱朴子「鴻吾ー一、而逢ニ匡合之績一、應儒光武詩「獨往不レ可レ屆、滄海成ニ桑田一」ll桑田變成ニ碧流一。

【桑蠶】サウサン くはのきくひ蟲。爾雅「蜮、一一」注「即蛣蜣」

【桑土綢繆】サウドチウビウ 風雨の來らんとする前に鳥が桑の根をとりて巢の穴をふさぎて風雨を防ぐ。燕巢を未發に防ぐに喩ふ。桑土は桑の根。詩、豳風「迨ニ天之未ニ陰雨一徹ニ彼桑土一、綢ニ繆牖戸一、今女下民、或敢侮レ予」ll未雨綢繆。

【桑年】サウネン 四十八歳の稱、桑の俗字桑を分てば十十十八となる故に云ふ。揚子方志、楊洪傳、注」

【桑飛】サウヒ みそさざいの異名。揚子方言「一一謂ニ鷦鷯一也」

【桑婦】サウフ くはの葉をつむ女。列子「道見ニ採ー一、悅而與言」陶潛、歸農詩「ー一曾興、農夫野宿」

【桑蓬之志】サウホウノこころざし 男子四方に遊遊する志。禮、射義「男子生、桑弧六、蓬矢六、以射ニ天地四方一、天地四方者、男子之所レ有レ事也」

【桑濮音】サウボクノおと 淫亂の音、昔、衞君が濮水の上、桑林の間に聞きしといふ琴の音。禮、樂記「鄭衞之音、亂世之音也、比ニ於慢一矣、桑間濮上之音、亡國之音也、其政散其民流」

【桑麻交】サウマノまじはり 田園に閒居して桑や麻の話などする世外の交。杜甫詩「雖レ作ニ尚書郎一、不レ及村野人、湯湯——、公侯爲ニ等倫一」

困苦辛而著二入棄之勳一」＝囚桎。【桎梏】コウ　足かせと手かせと。孟、盡心「一一死者、非二正命一也」＝桎梏。

【栒】シュン　㊥
鐘磬を懸くる横木。＝簨。

【柆】セイ　㊥
○くひ、小さき杙。○國もみぢ。＝紅葉。

【栖】セイ　サイ　㊥　或は棲に作る
○すみか、ねぐら、とや、鳥類がすみかとして居る、棲息する。○轉じてひろくすみかの義に用ふ。○すむ、止息する。陶潛詩「聊得二於一君一」○一遲はいこふ、やすむ。○一一は忙がしき貌。

【栖遑】セイ　ねぐらのからす。王士禎詩「一一流水空蕭瑟」＝栖烏。

【栖烏】セイ　ねぐらにとまるからす。李賀詩「一一上二井梁一」＝棲鴉。

【栖遑】セイ　すみやすらふ。陶弘景文「官私行止、皆有二一一一」＝栖息。

【栖鵲】セイ　くまたか（蘇軾、赤壁賦）

【栖心】セイ　○心をやすめる。魏書、頌祖紀「一一一浩然」○やすらふ心地。

【栖栖】セイ　いそがはしき貌。急迫の貌。論、憲問「何爲是一一者歟」＝棲棲。皇侃。

【栖息】セイ　すみいこふ。何遜詩「一一同二蝸舍一、出入共二荊扉一」＝棲息・棲遑。

【栖遑】セイ　官職などにしばられず、遊息してゐる。晉書、潘岳傳「遂一一十年」＝棲遑。

【栖泊】セイ　とまる。高適詩「流櫪屬一一」

【栓】セン　先
○きのくぎ（木釘）穴にさしこみて物の動かざるやうにするもの。○つらぬく（貫）物）○俗に甁などの口を塞ぐもの。○國アイヌ北海道に産する喬木、建築用とす。

【栓子】シン　びんの口にさせん。又、其の形せるもの「膽肪一一」

【梅】セン　歳
○たてしば、魚を捕ふる具。○まがき（籬）○かこむ（圍）左、襄十「一一之以二棘一」

【梅】セン　先　或は櫏に作る
一檀ダンは印度・交趾等の熱地に産する香木の名、色紫なるを紫檀といふ。＝旃檀。

【桷檀】セン　○香木の名。字解參看。釋佛三昧經「一一根芽、漸漸生長、縄欲レ成レ樹、香氣最盛」＝檀香。○國栴檀の一名。

【桷檀從二葉一香】セン　國栴檀の水はふたばの時よりすでに香し。英雄は小兒の時より常人に異るに喩ふ。前條參看。

【桃】タウ　蕭
○もも、果樹の一、葉は披針狀、春、五瓣紅色、又白色の花を開く、夏、秋の交に甘美の實を結ぶ「天一」「扁一」「碧一」譚、月令「仲春一始華」○含一は櫻一ユスラノ○胡一はくるみ。○一林は華山の東に在る地名。書、武成「放牛於一林之野」

【桃夭】タウ　嫁期にあたる義。詩、周南「桃之夭夭、灼灼其華、之子于歸、宜二其室家一」より出づ。歸は嫁、夭夭はわかく美くしき貌、よめに行く女を桃の美くしきに比す。

【桃蕤】タウ　ものは。又、晉の王獻之の愛妾の名。王獻之詩「一一復一一、誤レ入二江不一レ還」

【桃園】タウ　○ももぞの。○蜀の劉備が、關羽・張飛と三人義を結びし處。

【桃膠】タウ　ももやに。嵇雅「虎魄生二地中一、初時如二一一一」＝桃膏。

【桃花臉】タウクワシン　もも色の美くしきかほ。梁伸詞「爲問——、一笑爲レ誰容」＝桃臉。

【桃花酒】タウクワシュ　桃花を漬したる酒。之を飲めば病を除き、色を好くするといふ。

【桃花水】タウクワスイ　桃の花の開く頃、冰解けて漲り流るる水。漢書、溝洫志「來春——盛、必決溢」杜甫詩「春岸——、雲帆風樹林」

【桃花馬】タウクワバ　白毛にして紅點ある馬。杜審言詩「——上石榴裙」

【桃花粉】タウクワフン　べに。雲麓漫鈔「燕脂以二紅藍汁一、搗爲レ之、宮人呼レ之、胭脂一一」＝燕脂。

【桃花面】タウクワメン　うすべに色の顏。

【桃枝】タウ　ものの實の冬にいたりてなほ枝にあるもの。本草「桃實已乾三著木上一、經レ冬不レ落者、名二一一一」＝桃奴。

【桃源】タウゲン　世間を離れたる別天地。陶潛、桃花源記「晉太元中、武陵人、捕レ魚爲レ業、緣レ溪行、忘二路之遠近一、忽逢二桃花林夾一岸、林盡水源得二一山一、有二小口一、從レ口入、行數十步、豁然開朗（中略）男女衣著、悉如二外人一、黄髮垂髫、怡然自樂、見二漁人一乃大驚（中略）自云、先世避二秦亂一、率二妻子邑人一來二此絶境一、不レ復出レ焉、乃不レ知有レ漢、無レ論二魏晉一」

【桃弧】タウ　ものの木のゆみ、災をはら

ふに用ふ。桃は仙木にて、古、邪氣不祥をはらふに用ふ。左、昭四「唯是一一棘矢、以除二其災一」

【桃氏】タウシ かたなかぢ。周禮、冬官「段氏爲二鎛鍾一一爲レ刃」＝刀匠。

【桃牀】タウシヤウ ねだい。＝眠牀、臥牀。

【桃雀】タウジヤク 鶺鴒セキレイの異名。易林「一一、羅網、巢二宇小枝一、搖動不レ安、爲レ風所レ吹」

【桃蟲】タウチウ みそさざいの異名。爾雅「一一、鷦」

【桃腦】タウナウ ももの樹のやに。＝桃膠。

【桃仁】タウニン ももの實のさね、桃の核中の肉。

【桃符】タウフ おふだ、どふう、神符。桃の木にて作る。山海經「海中有二鬱壘山一、山有二桃木一、桃下有二二神一、能縶二百鬼一、故今元旦設二一一於門一」

【桃李】タウリ ○ももと、すもも。詩經「何彼穠矣、華如二一一一」○薦擧せる賢士。又、門弟子の義。唐書「姚元崇擧數十人、皆狄仁傑所レ薦、或謂二仁傑一曰、天下一一、盡在二公門一矣、仁傑曰、薦レ賢爲レ國、非レ爲レ私也」

【桃李不レ言下自成レ蹊】タウリハゲンセザレドモシタヨリオノヅカラケイヲナス 桃李は華實あるを以て、招かざれども、人爭ひ赴きて徑ゝを成す。德ある人は言はざれども、人自ら慕服するに喩ふ。史、李將軍傳贊「太史公曰、傳曰、其身正、不レ令而行、其身不レ正、雖レ令不レ從、其李將軍之謂也、余睹二李將軍一、悛悛如二鄙人一、口不レ能二道辭一、及二死之日一、天下知與レ不レ知、皆爲盡レ哀、彼其忠實心、誠信於士大夫一也、諺曰、——、此言雖レ小、可二以喩一レ大也」

【桃林塞士】タウリンシ 牛の異名。史、周本紀「武王已克レ殷、維二馬於華山之陽一、放二牛於桃林之虛一、偃二干戈一、振レ兵釋レ旅、示二天下不一レ復用一也」事類全書「寓因假二宿大慮莊南山下一、月夜有レ叩レ關、稱二桃林塞特健士一、因訪二纏商南山斑皮將軍來謁一、因爲置酒、及レ明視、門外唯牛蹄庋跡而已」

【桃列】タウレツ ももの木と、あしの穗と、不祥をはらふに用ふ。檀弓「君臨二臣喪一、以二桃茢一一執レ戈、惡人辟レ之、喪、練レ祥二佛者一表「亟視不レ先、——不レ用」

【桌】

卓（十部六畫）に同じ、俗に几案をいふ。

【株】 チュ シュ 魔

○かぶ、木の幹の最下部、根に近き所、土中に在るを根、土上に在るを一といふ。○木を伐り倒せし下部ののこり、きりかぶ（斷木）○木の數をかぞへるにいふ「桑八百一」○圖かぶ、特に限られたる商工上の營業權。又、銀行會社などに於ける出資者の權利「一券」「一式」「一金」

【株梅】シュバイ かれ木のきりかぶ。

【株杭】シュコウ きりかぶ、きりくひ。

【株儡】シュライ くひ、かぶ（列子）

【株守】シュシュ 何時までも舊習を守りて變通を知らざる者を嘲りていふ。昔、宋に一農夫ありて、たまたま兎の株にふれて死せしを見、耕作を罷めて株を守り、また兎を得んと欲して世の笑草となりし故事（韓非、五蠹）に本づく。王建詩「乃知兎一一、殊勝虎穴探」＝守株。

【株數】シュスウ 連累してみなごろしにする。唐書、路嗣恭傳「一一船商、及二其財數百萬一私二有之一」

【株連蔓引】シュレンマンイン かぶをつらね、つるをひっぱる如く、手づるによりて殘らず連累者を罪する義。＝株蔓。

【株券】カブケン 株式を見よ。＝圖股票。

【株式】カブシキ 圖數多の人が資本金を出し合ひて銀行會社等を組織したる資本の單位の稱。＝圖股分。又、其の會社を一一會社、資本主を株主、資本に對する權利の證書を株券といふ。

【株主】カブヌシ 株式を見よ。

【杶】 チョク ショク 屋

楓子粟の心木にて作りたる吉凶を占ふに用ふる具。或は式に作る。

【桐】 トウ 東

○きり、落葉喬木の一、葉は大いに、花は脣狀淡紫色、材は白く柔かくして輕く、箱下駄等の製作に適す。禮、月令「仲春之月、一始華」○梧一ゴ一は青桐ゲリ。○一城は縣名、安徽省安慶府に屬す。

【桐城派】トウセイハ 清の方苞、姚鼐は皆桐城の人、其の古文自ら一派を成す、世よりて——の稱あり。

【桐油紙】トウユシ 圖油桐アブラギリの實をしぼりとりたる油をひきし防水紙。合羽などに用ふ。

【桐遠】トウエン 圖昔、葉中にありし殿舍の一。

【栢】

柏（木部五畫）の俗字。

【桃】 ヘツ 月 通音 ベツ

いかだ。＝筏。

【桂】 ラウ 篠

栲一はやなぎごり、栲（木蘆）の字解參看。

【栾】

欒（木部十九畫）の俗字。

【栗】 リツ　図　虫は古字

○くり、果樹の一、葉は長楕圓形、初夏、穗狀の花を著け、秋、とげある殻に包まれたる褐色の實を結ぶ「ー房」「ー子」○つつしむ(謹敬)書、舜典「寛而ー」○かたし(堅)○いかめし、おごそか、きびし(威嚴)司馬法「位欲ー」殿、政欲ー」○おそる、ものく(戰)、論、八佾「使民戰ー」○ー烈は風寒し。○ちぢむ(縮)○くしけづる。○ーはおほし(栗)又、おそれる。○穀物の貯入りよし。○行ーは道しるべの神(公道通)

【栗階】階級を超えて急ぎおもむく、栗は登、階を登むる階、盡禮「ー而上」、禮記二節

【栗烈】くりのかはの如き、ー烈之風(烈、士喪反哭酒掃「栗」并欽之)

【栗子】くりの實。

【栗鼠】くりのいぬ。

【栗扶】くりの實のしぶかは。

【栗里】晉の陶潛の住せし地名(梁昭明太子、陶淵明傳)王維、白二建昌舟一遊經二香廬山下一記「過醉石觀、即陶靖節故居ー也」

【栗栗】○おほき貌。詩、周頌「雝之

桎梏、積レ之ー」○おそれる貌。漢書、元帝紀「股肱戰ー」日夜思二過失一」ー慄慄・戰栗。

【栗烈】風の甚だしくきびき貌。詩、豳風、七月「一之日觱發、二之日ー」

【栗冽】きねずみ、常に樹上に棲む小獸。埤雅「鼠類、一名鼯、今ー似レ之」

【栗薪】火中に入れて栗をやく。又、其のやきし栗。漢枚乘「ー」ー語二祝詞一」

【栗毛】國馬の毛色の名、赤は淡赤色、たてがみの赤褐色の馬。ー騮。

【椋】 リョ　図

○やがらに用ふる木。○ー松(リョウは松の一種。南史、孝義傳「庾沙彌母亡、喪後遇病、恐忽生ー松百餘株」

【絆】 〔國字〕

かせ、かせひ、かせぎのつむに取りし絲をかけて束ねる具。

書

【楴】 エイ　テイ　図

○さるがき。ー柿。○柿に似たるなつめ(棗)司馬相如、子虛賦「植梨ー栗」

【械】 カイ　卦

○かせ、かし(桎梏)罪人の手足首などにはめる刑具「手ー」○いましめ、かせをはめて自由を束縛する「ー繫」○うつは、器具の總稱「器ー」○たくみ(巧術)○からくり、しかけ「機ー」○つはもの、兵器、武具「兵ー」

【械器】うつは。孟、滕文公「以レ粟易二ー一者」ー器械。

【械繫】かせをはめ獄につなぐ。史、滑稽列傳「乃下二制詔一拘二ー二千石一」

【械梏】かせ。ー桎梏・械扼。

【械扼】かせ、組に手かせ。蘇軾詩「劫命四二股閒一鎖二五馬一ー二」

【械枷】かせ。ー械扼。

【械用】だうぐ、器物をいふ。荀子「農夫不二蘇創一不二閒治一而足二ー二工賈不二耕田一而足二菽粟一」ー器用。

【梗】 カウ　キャウ　図

○やまにれ、木に刺があり(山枌楡)○木の枝。草の莖。○やまし、やまひ(病)詩、小雅「於ー今爲ー」○ふせぐ、災を禦ぐ。○ただし、なほし(正直)○おほむね、あらまし(大略)「ー槩」○たけし(猛)強し「頑ー」○とげあるもの。○ふさぐ。ふさがる(阻塞)「ー塞」○とげ、のぎ。○土ーはでく(土偶)韭、山子方「吾所學者土ー耳」○桔ーは蚊草の名。桔(木部六畫)を見よ。

【梗概】(梗・概・杜・塞・窒の別は塞(土部十畫)の條を見よ。

【梗塞】あらまし。槩は概に同じ。張衡、東京賦「言非ー一如レ此」ー梗概。

【梗梗】ただしき貌。孔叢子「ー一亮直」

【梗花】桔梗の異名(本草綱目)

【梗死】喉がつまりて死ぬ。

【梗阻】ふさがる。晉書、王承傳「道路ー一、人懷二疲懈一」ー梗塞。

【梗正】强くしてただし。南史、蔡撙傳「風骨ー一、氣調英邁」

【梗塞】ふさがりて通ぜず。梁觀所レ述文「道途ー一、物價翔踊」

【楠】 カク　覺

○たるき(椽)圓きを椽、方なるをーといふ「朱ー」「椽ー」○木の枝の平かなるもの(平柯)易、漸卦「鴻漸二于木一、或得二其ー一」○國ごりんご(菓梨)の一

種、材を黄色の染料とす。

【桿】 杆（木部三畫）の俗字。

【桐】 キク 屋

かんじき。山に登る時、すべらぬ爲めに鐵の釘を履の下にうちつけしもの。又、それをはく。漢書、溝洫志「禹治水、山行則ー」‖圖釘鞋。

【梱】 クン 文

ー樞はさるがき、柿の小なる者。

【梱】 クヮン 早

○まないた、四本足の俎。○斷りたる木。

【梟】 ケウ 蕭

○ふくろふ、みみづくの一種、毛角なく、晝はかくれ、夜出でて鳥鼠の類を捕食す、長じて母を食ふといふ、不孝の鳥。‖梟・鴟鴞。○たけし（健）‖驍。あらくつよし、すぐれる（雄）「ー雄」「ー猛」淮南、原道「爲ニ天下ー」○いただき（山巓）○すぐれたるもの（雄傷）○さらす。さらし、罪人の首を斬りて獄門にかける、古の極刑「ー首」○ー蘆は轤蒲の栄の名。

【梟悍】 カン あらあらしくつよし。

【梟驍】 ケウ たけき驕兵。漢書、高帝紀「致ニー一」助レ漢」

【梟健】 ケウ あらあらしくたけし。

【梟驍】 シウ ふくろふ。抱朴子「ー一也雖、則驚風翦集」‖鴟梟。

【梟將】 シャウ 勇猛なる大將。史、留侯世家「九江王黥布遣ニー一」

【梟首】 シウ 首をさらす。さらしくび。漢書、梁布傳「貴以ニ謀反ニー一雒陽ニ」

【梟悍】 ハン あらあらしくして理にもとる。北史、李平傳「天迷ニ其心ニ、梯ニ此ー一」

【梟破獍】 ケウ 梟は、ふくろふ、母を食ふといふ鳥、破獍は父を食ふといふ獣、よりて惡人に喩ふ。漢書、郊祀志「古天子常以ニ春解レ祠、祠ニ黄帝ニ用ニ一一ニ」

【梟木】 ボク 首をさらす木、ごくもん臺。

【梟猛】 マウ あらくたけし。南史、龐安都傳「容貌世ー一、威雲萬人敵」

【梟名】 メイ 驍勇なるほまれ。後漢書、劉焉傳「劉備有ニー一ニ」注「梟即驍也」‖驍名。

【梟勇】 ユウ あらあらしくつよし。

【梟雄】 ユウ あらくつよし。後漢書、袁紹傳「除レ忠害レ善、專爲ニー一ニ」

【梟鳶】 エン 梟はふくろふ、惡鳥。鳶は鳳凰に似たる靈鳥。よりて小人と君子とに喩ふ。

【梟鷹】 ヨウ ともに樗蒲のさいのめの名。よりて、ばくちの譬とす「呼レ梟呼レ盧」は賭博をなすをいふ。

【梟師】 シ 圖上古の野蠻人の長の稱。

【梧】 ㊀ゴ ㊁ゴ 遇 遇

㊀あをぎり、桐の一種、樹皮の青くして滑澤なるもの「碧ー」○枝ー はささふ（支持）漢書「莫敢枝ー」㊁魁ー（クヮイ）は北大なる貌。史、留侯世家「魁ー奇偉」○逆に通ず、抵ーは相觸迕する義。

【梧除】 ジョ あをぎりのかげ。顧瑛詩「竹色ー一積二潔風一」

【梧右】 ユウ 机のそば、人に送る手紙の宛名の脇付に書く語。‖梧下・梧前。

【梧葉】 ヨウ あをぎりの葉。韋應物詩「況玆風雨夜、蕭條ー一秋」

【梧下】 カ 梧右に同じ。

【梧樓】 カ あをぎりと、ひさぎと、共に良材。孟、告子「舍ニ其ー一樂ニ其械棬一則爲ニ賤場師一焉」

【梧前】 ゼン 梧右に同じ。

【梧竹】 チク あをぎりと、たけと。羊士諤詩「蕭條ー一月 秋物映二園廬一」‖碧梧脩竹。

【梧桐】 ドウ あをぎり。詩、大雅「ー一生矣、于二彼朝陽一」邵雍詩「ー一月向二懷中一照、楊柳風來二面上一吹」

【梧桐一葉】 ドウイチヨウ 青桐の一葉に立秋を知る。禮考譜「立秋之日、如二某時立秋一至レ期一葉先墜、故云ー一落、天下盡知レ秋」‖一葉落知二天下秋一「文錄、唐人詩」

【梏】 コク 沃

○てかせ、てかし、刑罰の具（手械）「桎ー」「ー械」○くびをつらぬく（貫頸）左、襄六「以ー一」‖ー弱於朝」○みだす（亂）○しばる、つなぐ、束縛して自由をさせぬ。

【梏械】 カイ てかせ。

【梏桎】 シツ ○手かせと、足かせと。漢書、刑法志「中罪ー一」‖桎梏。○轉じて、拘束して自由をさせぬ義。

【梏亡】 バウ みだしほろぼす。梏は亂、しばりて草木の成長を害する。孟、告子「有レ牿ー一之矣」

【梱】 コン 阮

○しきみ、門の内外のしきり（門橛）曲禮「外言不レ入ー一、內言不レ出ー一」‖閫・門限。○うつ（扣・叩椓）○圖こり、こう

り、竹又は柳などにて造りしいれもの。‖行李。○包裝せし荷物、又それを數へるにいふ。【棚外之任】ホウガイノニン 將帥の職務。周禮、大司徒、軍形、疏「棚外之事、將軍裁レ之」‖閫外之寄。

【梭】サ　㊀

ひ、織機ハタの具、くだを入れて緯ヨコイトを通はすもの。‖杼。

【梭巡】サジュン 往來してしらべる、梭の緯ヨコイトを行ヤリ往復して已まざるに喩ふ。‖邏察・巡察。

【梭杼】サチョ はたのひ。江淹詩「流黃夕不レ織、空閨一一音」‖梭杼。

【梭投】サトウ はたのひをかよはす、光陰の經過の急なるに借りて喩ふ。陳造詩「病念レ遲レ家可レ奈レ慈、客中日月急一一」‖擲梭。

【梓】シ　㊁

○あづさ、あかめがしは、楸の屬、喬木の一、葉は互生し、芽の色甚だ赤し、初夏黃白色の花開き、秋實を結ぶ。埤雅「一爲二百木長一、故呼一爲二木王一」○さかづき（杯）○文書を板に彫刻する。又、其の版ヲ「上一」「一行」○木製の器を治むる職「一人」○桑一は二木共に父の植うる所、よりて故鄉の義とす。○椅一は父子の義。尚書大傳「椅者父道也、一者子道也」

【梓樞】シスウ 梓宮に同じ、柩はひつぎ。

【梓宮】シキュウ 天子のひつぎ、あづさにて造る故。漢書、成帝紀「成帝崩、未レ幸二一一一」

【梓材】ザイ ○あづさの材。張華文「如二彼一一一、兆レ勤二丹漆一」○尚書の篇名。

【梓人】シジン 大工の棟梁リョウの梓は百木の長。周禮、考工記「一一爲二羽族一」○柳宗元に一一傳あり。

【梓匠輪輿】シショウリンヨ 梓人匠人は木工、棺槨を造る工人。輪人・輿人は車工。孟、滕文公「子何棄二一一一一而輕下爲二仁義一者上哉」

【上梓】ジョウシ 文書を版木にほりつける。轉じて書物を出版する。

【梓木】シボク あづさの木。搜神記「有二大一一一生二一家之編一、根交二於下一、枝錯二於上一」

【梓里】シリ ふるさと、父母が植ゑて置きし桑梓のある所の義。詩、小雅「維桑與レ梓、必恭敬止」劉逸詩「吾不レ愛二錦衣一、榮歸舊二一一一」‖桑梓。

【梓弓】アズサユミ 圖梓にて作る弓「引くし「張る」などの枕詞として用ふ。

【梔】シ　支

くちなし、灌木の一、初夏白色六瓣の花を著け、黃赤色六稜の實を結ぶ、實は黃色の染料とす。‖梔子・山梔木丹。

【梔子】シくちなし。三柳軒雜識「一一爲二譯客一」‖越桲。

【桼】シツ　シチ　㊀

漆（水部十一畫）に同じ。

【楑】シン　㊁

とねりこ（靑皮木）其の皮を秦皮といふ、色靑く、藥用とす。

【梫】シン　㊂

かつら（桂）白き花の桂「一桂」

【梭】ズキ　支

たら（楸）‖楼。

【梢】セウ　㊃

○こずゑ（杪）「枝一」○樂人の執る竿、音樂を調節する具。○こしば（小柴）○擊ちて之を去る。○はたあし、旗の旒。○かぢ（舵尾）‖綃。○一一は小なり。又、こずゑの風にそよぐ聲。又、尾を垂れる貌。

【梢子】セウシ せんどう。宇彙「今人謂二篙師一爲二一一一」

【梢梢】セウセウ ○こずゑの風に動く貌。鮑照賦「風一一而過レ樹」○ちさし、わづか。博雅「一一、小也」○尾の垂るる貌。李賀詩「竹馬一一搖二綠尾一」

【梳】ソ　㊄　虞

㊀くだち、うだつ、梁上の短き柱。論、公冶長「山節藻一一」に藻の圖をゑがく、貧澤なる建築の義。㊁ほう、つゑ（大杖）淮南、說山「揮一一而呼狗」

【梳】ソ

○くし（櫛）齒の疏なる者を一、密なる者を篦といふ。○くしけづる（理髮）揚雄文「頭蓬不レ一」○轉じて理め導く。韓愈文「蜂屯蟻雜、不レ可二一一」

【梳篦】ソヒ 髮をくしけづり、手をあらふ。蘇軾詩「傳聞使者來、策レ杖就一一」‖梳篦。

【梳櫛】ソシツ ○髮をくしけづる。晉書、禮

儀志「醴泉詔太守前ー一」○くし。【梳洗】セン　くしけづりあらふ。崔湜詩「ー一懶無ン情」＝梳沐。【梳頭】トウ　梳髪に同じ。白居易詩「終年不ン向ン鏡、過ン午始ー一」杜甫詩「百年潘鬢ン醜、一月不ンレー一」【梳髪】ツ　髪をくしけづる。唐書、五行志「居未京都婦人ノレー、以二堕ン髻一為ン面」＝理髪・梳頭。【梳沐】ツ　くしけづりかみあらふ。瑞桂堂暇錄「夫人方ニー一、有二詩友来訪一」＝梳沐。【梳櫛】ツ　鳥がはねをそろへる。類詩「風動櫛ーレー」

【栫】ダ　ナ　歌

○枸ーダは楊柳に似たる木。夏、淡紅花を開く。○國ナ　菜は對生にして其の形竹に似たる常緑喬木。＝竹柏。

【梯】テイ　ダイ　齊

○はしご（木階）きざはし「一階」虎韜「視城中則有ン一ー飛樓」○階ーは上の階級に進む手引の義とす。國語「毋ン曠二其衆一以為ン亂ー一」○よる（凭）○突ートツは隅角なき者。【梯階】ダイ　はしご。＝階梯。【梯航】ダイ　○はしごをかけて登り、船にてわたる。海山を越えて遠方に行く。梁簡文帝、大法頌序「航ン海梯ン山」賈知章詩「寰宇中華客、ーー異境区」○轉じて手引・案内の義。金丹大要、蓄之一字、乃入ン道之ーー也」【梯形】ケイ　はしごだた。數學にて四角の或一邊の相對する邊が互に平行するもの。【梯峻】シュン　山にのぼるだんだんのみち。蘇軾詩「上ン山絶二ーー一、墮ン海逐二非涯一」＝梯磴。【梯梁】リョウ　はしごと、かけはし。元結文「非ニーー以通ン險、當ン無二路可一レ入」【梯子】シ　國高き所に登る爲めにかける屋梯。＝木階・梯階・雨梯。

【梃】テイ　チョウ　青

○すぐなるまるき棒（木枚）つゑ（杖）孟、梁恵王「可ン使ン制ー一、以撻二秦楚之堅甲利兵一矣」○てこ（槓杆）○ー然はつよくただしき（勁直）貌。○幹莖又長さのあるものを数ふるにいふ。魏書、李孝伯傳「酒二一器、甘蔗百ー一」【梃銀】テイ　國發長年中に作る、銀のべ棒、又は板を貨幣として切りて通用せしもの。＝丁銀。

【楫】シュウ　ティ　書

○つくゑ（几）○はしら、柱の類。○さを（杠）○牀の横木。

【條】デウ　蕭

○えだ（小枝）詩、周南「伐二其ー一枚」枚は幹。○ながし（長）書、禹貢「厥木惟ー一」○すぢみち「ー理」書、盤庚「若二網在ン綱、有ン條而不ン紊」○嘯アツく貌。詩、王風「ー其歎矣」○とほる（達）○のぶ（暢）のびのびする「ー達」漢書、禮樂志「聲氣遠ー一」○をしへのかでう「教ー一」○箇條書きになりてゐる規則。おきて「ー例」「ー約」○一一ならべ擧げて其の理由を明かにのべる「ー奏」「ー陳」○なは（繩）○えだをきりおとす（枝落）詩、豳風「七月ー一桑」○柚ユウの類。詩、秦風「有ン杶有梅」○東北の風。○ーーはみだれる（撓）國○ゲ故に、よりて等の義、書傳文の用語「何何に條ー一」○細く長き物を数ふるにいふ。【條桑】ソウ　箇條によりて分類する。店舗、倒學傳「ーー粗立」【條項】コウ　條目に同じ、項はかど。＝條款。【條規】キ　箇條書にしたる規則。【條畫】カク　すぢみちを立てて計り定める、一一箇條を逐ひて畫策する（宋史、河渠志）【條貫】カン　すぢみち、貫はすぢがつらぬき通る。左傳、序「經之ーー、必出二於傳一」史、屈原傳「明二道徳之廣崇、治亂ーー一」＝條理。【條款】クヮン　くだり、箇條。＝條目。【條決】ケツ　すぢみちを明かにしてきめる。【條件】ケン　○くだり、事件の條目。北史、郎基傳「衆遂ニーー、申二表省一」○定めたる約束の事がら。【條舒】ジョ　のびやか。＝舒暢。【條制】セイ　法律の箇條。【條析】セキ　すぢみちを明かにして、わかつ（唐書、張荐傳）【條對】タイ　一一箇條書にして答へる。漢書、梅福傳「詣二行在所一ーー會政一」＝條答。【條達】タツ　○木の枝のつぴる如く四方にのび通ずる。戰國策「地四平、諸侯四通、ーー輻湊」○のびやか。悠廣文「悟愉緩ン遇、而暢氣ーー」【條答】タフ　一一箇條を立ててこたへる。蜀志、費禕傳、注「舉事ーー」＝條對。【條暢】チョウ　一つ一つ條を逐ひてのべる。漢書、李尋傳「臣竊ーニ所ニ聞」

【條暢】デウチヤウ のびやか。漢書、律歷志「指類取レ象、然後陰陽萬物、靡レ不二一一該成一」‖條達。

【條暢】デウチヤウ 前條に同じ。禮記「感二一一之氣一」‖條暢。

【條條】デウデウ ○みだれる貌。孟郊詩「一一髮如レ絲」‖錄錄。○圖一一の箇條。

【條風】デウフウ 八風の一、東北より吹き來る風。萬物に條達する義。山海經、注「東北風爲二一一一」

【條文】デウブン かでうがきにしたる文。

【條目】デウモク 法律などの箇條、目次。漢書、公孫賀傳贊「增二成一一一」‖條款。

【條約】デウヤク ○條文を以て約束する。又、其の約束。唐書、南蠻南詔傳「數改二一一一衆不レ悅」○國と國との間の相互の權利義務を定めたる約束「一一國」

【條理】デウリ すぢみち。孟、萬章「始二一一一者、智之事也」

【條例】デウレイ ○一つ一つすぢみちをたてて例をかぞへ擧げる。晉書、劉寶傳「撰二春秋一一二十卷」○箇條書にしたる法令。

【條列】デウレツ 一つ一つ條理を明かにしてならべ立てる。後漢書、張堪傳「率一一上官、秋毫無レ犯」

【梃】テン 先

ながし、木の長き貌。詩、魯頌「松桷有一」

【桶】㊀トウ ㊁ヨウ 腫 董

㊀をけ、水を盛る器、もと六升を受くる木製の方器。今は圓器をいふ「水一」「飯一」の如し。○うるしをけ。㊁ます(斛)史、商君傳「平二斗一」に同に通ず。

【梧】ハイ 灰 孟は俗字

さかづき。‖杯(木部四畫)

【梧巵】ハイシ 木をまげて作りし盃器、さかづき、木のまげもの。孟、告子「性猶二杞柳一也、義猶二一一一也」

【梧勺】ハイシヤク さかづきと、酒をくむ杓と。‖梧杓。

【不レ勝二梧杓一】フシヨウハイシヤク 十分に酒に醉ひて、飲酒のあひてが出來ず。史、項羽紀「張良入謝曰、沛公——」

【梅】バイ マイ 灰 或は楳・某・槑・棄に作る

○うめ、果樹の一、早春、葉に先ちて香氣ある美花を著け、梅雨の頃、實が黃熟する「白一」「紅一」「寒一」「早一」「探一」「野一」○つゆ、さみだれ、梅の實の黃熟する頃のながあめ「一雨」「入一」又、其の期節の稱「一天」「一節」○一一ガは寢に居る時の容。‖昧昧。

【梅熬】バイガウ うめにらぐひす。王維詩「紫梅發初遍、黃鳥猶猶囀」

【梅雨】バイウ つゆ、さみだれ。歲華紀麗「四月一一」注「梅熟時雨」一說、梅は黴と音通、つゆの頃は衣服柱礎等に黴ビが生ずる故に黴雨とも書く。‖梅子雨・黃梅雨。

【梅夏】バイカ つゆ、梅雨の節。唐明皇文「喜二遂秋之有一登、玩二一一之無一事」

【梅杏】バイカウ うめと、あんずと。杜甫詩「櫰梨且緣碧、一一半傳黃」

【梅花】バイクワ 梁の何遜が梅花の盛開せる下に吟味せし故事。梁書「何遜、字仲言、東海郯人、爲二梁法曹水部員外郎一揚州廨宇有レ梅盛開、遜嘗吟二咏其下一後居二洛陽一思レ梅不レ得、請再任二揚州一、從レ之、既至、適花盛發、大開二東閣一延二文士一、嘯傲終日」

【梅花園】バイクワエン 梅花の多くある土地。徐渭詩「萬樹——、垂レ簾試一看」

【梅花粧】バイクワシヤウ 壽女が額上に梅花を貼するにいふ。粧は妝に同じ。初學記、宋武帝女壽陽公主、人日臥二於含章殿簷下一、梅花落二額上一、成二五出之花一、拂レ之不レ去、皇后留レ之、自後有二一一一」

【梅花村】バイクワソン ○梅花を多く栽ゑたる村。○地名。廣東新語「一一在二山口一、前對二麻姑玉女一峯一、深竹寒溪、一徑幽折、人多以レ藝レ梅爲レ生、牛羊之所二踐踏一皆梅也」

【梅兄】バイケイ 梅と、ぢんちゃうげとを兄弟に見立てていふ。黃庭堅詩「山礬是弟梅是兄」山礬は瑞香ズイカウ

【梅妻鶴子】バイサイクワクシ 林和靖の故事。詩話總龜「林逋隱二于武林之西湖一、不レ娶無レ子、所レ居多植レ梅蓄レ鶴、泛二舟湖中一、客至則放レ鶴致レ之、因謂二一一一一」

【梅市】バイシ 梅を賣る市。成都古今記「十一月有二一一一」

【梅信】バイシン うめの花がさき初めたるより、二日休詩「一一徵侵地陳紅」

【梅漿】バイシヤウ うめず【醯、內則、注】

【梅醬】バイシヤウ うめびしほ【本草集解】

【梅菹】バイソ 梅の實の漬けたるもの、うめぼし。醯、內則、疏「王肅云、桃菹一一」

【梅天】バイテン さみだれのそら。圖繪寶鑑「非レ陰非レ雨如二一一一」

【梅雨】バイウ かさ、梅は黴と音通。‖黴雨。

【梅霖】バイリン つゆ、さみだれ。異瑞詩「冥冥長雨如レ長虎、不レ道一一是時雨」‖梅雨。

【梅林止レ渴】バイリンシカツ 梅林あるを聞きて、渴を醫したりといふ故事。世說「魏武帶行役、與二軍士一失二汲道一、軍

皆渴、乃令曰、前有二大梅林一、饒レ子甘酸可二以解一レ渴、士卒聞レ之、口皆出レ水」

【梅梅】ビビ　衰に居る時の貌。禮、玉藻「親容齎齎ーート」‖昧昧。

【梅酢】メヅ　圖鹽漬の梅の實の汁。‖梅鹽・梅漿。

【梅童】ツボ　圖青、禁中に在りし殿舍の名。

【梅干】ボシ　圖鹽漬にしたる梅の實、紫蘇の葉を加へてつけしもの。‖鹽梅・鹽梅。

【根】コン　眞

ーー多はばいたら、印度地方に産する常綠喬木の一。彼の土の佛經、多く此の葉に寫す。故に貝葉經と名づく、ーは通じて貝に作る。‖貝多・貝多羅葉。

【梆】ハウ　江

○木を斲り、背上に孔を穿ち、若くは竹を截り筒を作り、兩頭に節を留め、旁に孔を穿つ、古、官府にて之を擊ちて人民を號召する合圖とす。○ひやうしぎ（柝）○圖敔ーハウは聲柝の義。

【梶】ビ　尾

○こずゑ（木杪・梢）○圖かぢ、楫の一種、製紙の原料とす。又、船を進める具。‖楫。又、車の前にある木、手に持ちて牽く所、かぢぼう。

【桴】㊀フウ・フ　㊁フ　尤　虞

㊀むね（棟梁）○ばち（擊鼓杖）禮、禮運「蕢ーー而土鼓」‖枹。○ーー炭はけしずみ。‖浮炭。○ーー思ふはへい（屛）禮、明堂位、注「屛謂二之樹一、今ーー思也」㊁いかだ、竹木を編みて舟に代用するもの。大を筏といひ、小をーーといふ。論、公冶長「乘ーー浮於海」

【桴鼓】コフつづみをばちにてうつ。

【桴筏】フバツいかだ。北史「可ニーーー一」

【棲】セイ　齊

○ーー栖はすまよせ。‖行馬。○ひとや（牢獄）

【梓】シ　月

○からざを、穀物を打つもの。（連枷）○つゑ（杖）○禮ーーフは林檎に似たる果物、まるめろ。

【梵】ボン　豏

○けがれなき清淨の義。○しうみやう、つとめ。○婆羅門教の眞理。○ーー天王、轉じて、佛教寺・僧又印度の事にいふ「ーー鐘」「ーー唄」「ーー刹」○ーー語は印度古代の語。

【梵音】ボンオン　○佛のこゑ、如來清淨の音聲。○佛經をよむこゑ。○梵語。

【梵家】ボンカ　てら。白居易詩「早晩移栽到ニーーー一」‖寺院・伽藍・佛寺・梵刹・梵宮・梵坊・梵王宮。

【梵閣】ボンカク　てら。白居易詩「洛城秋曉後、ーー暮鐘時」‖梵宮・佛堂・佛殿。

【梵樂】ボンガク　印度の音樂、佛教の音樂。宋之問詩「天歌將ニーーー一、空裏共裴回」

【梵學】ボンガク　佛法の學をいふ。甘澤謠「ーーー之外、香律大通」

【梵行】ボンギヤウ　圖佛門五行の一、清淨なるおこなひ。

【梵宮】ボンキユウ　てら。朱慶餘詩「流水離ニ繙閣一、閒雲入ニーーー一」‖梵刹・梵王宮。

【梵偈】ボンゲ　佛法の詩詞、偈は讃美の詩。

【梵磬】ボンケイ　佛寺にて用ふる石の樂器、けい。馬祖常詩「鵝湖看ニーーー一、猫定聽ニ晉藥ー」

【梵夾】ボンケフ　佛教の經文をきやう、貝葉に經を書き板を以て之を夾む故。通鑑、唐德宗紀「於ニ獄中一自唱レ經、手ニ錄ーーー一」

【梵語】ボンゴ　印度古代の言語、サンスクリット。李嘉祐詩「禪心超ニ忍辱一ーー問ニ多羅一」

【梵妻】ボンサイ　僧侶の妻、だいこく。‖梵嫂。

【梵僧】ボンソウ　僧のつま。輟耕錄「京師大相國寺僧有レ妻、曰ニーーー一」‖梵妻。

【梵册】ボンサツ　佛教の書物。睦玉集「ーーー整齊」‖佛書・梵本・梵帙。

【梵刹】ボンサツ　てら、刹は竿、幡柱ばんちうを立てて僧の居る處を表示するが故。張耒詩「傳警軍城靜、鳴鐘ーーー清」‖佛寺・梵宮・梵王宮。

【梵讃】ボンサン　梵語にて唱ふる佛德を頌する文。

【梵字】ボンジ　印度の古代の文字。其の母字を悉曇シツタン子字を體文、點畫を摩呼マヘといふ。段成式詩「翻了四天偈、燒餘ーー香」

【梵唱】ボンシヤウ　○佛法のうたひもの。○讀經をいふ。‖梵唄。

【梵衆】ボンシユ　色界初禪天なる梵王の民、轉じて佛徒、僧衆をいふ。劉禹文「端肅殿脩、儼ニ刑ーーー一」

【梵鐘】ボンシヨウ　寺のつりがね。樊阜詩「半樹晨陽又ーーー一」‖寺鐘。

【梵天】ボンテン　○圖ーー王の略、宇宙創造の主、大梵・梵輔・梵衆の三天の總稱「淨名經」○佛の住む世界「ーー圖」○圖修驗道にて新誦に用ふ

る儀式。
【梵典】ボンテン 梵字にて書きたる經文。‖梵冊。
【梵殿】ボンデン てら。何景明詩「梁暗秋燈ー一梁、花香晩飯齋廚靜」‖佛殿。
【梵納】ボンナフ 僧侶、衲はころも。王維文「ー一之行、楞伽之心」
【梵貝】ボンバイ ほらがひ。文獻通考「貝之爲ノ物、其大可ノ容ニ數升一、義之大者也（中略）今之梵樂用ノ之以和ニ鍼一、釋氏所ノ謂法螺」
【梵唄】ボンバイ 經を讀むこと、唄は誦。楞嚴經「ー一咏歌、自然敷奏」
【梵坊】ボンバウ てら。梁觀詩「餬口就ニー一」‖梵宮・梵王宮。
【梵本】ボンホン 梵字の書。嬾眞子「翻ニ譯四天所ノ得ー一經論一」‖梵冊。
【梵王】ボンワウ 佛梵天王の略、色界初禪天の主、又三界の主。法華經「爾時諸ー一、諸天帝釋」

【梦】

夢（夕部十一畫）の俗字。

【梛】ナ 歌

やし、果樹の名（椰子）ーは椰又椰に作る。張堯封詩「ー花好爲酒、誰伴醉如泥」

【根】コン 陽 又、椰に作る

○たかきき（高木）○桃ーターウ

はくろつけ、桃（木部六畫）を見よ。

【梨】リ 支 棠に同じ

なし。果樹の一、春晩、葉に先ちて白色五瓣の花を著け、夏秋の交、甘美の實を結ぶ。
【梨雲】リウン 梨の花の多きを白雲に比していふ。陳樵詩「ー一柳絮共微花」
【梨園】リエン もと俳優の技を習ふ所。轉じてしばゐ、又、やくしゃの仲間の義とす。唐の玄宗の故事に本づく。唐書、禮樂志「明皇既知ニ音律一、又酷愛ニ法曲一、選ニ坐部伎子弟三百一、教ニ于ー一、謂ニ皇帝ー一弟子一」
【梨園弟子】テイシ 俳優。前條參看。
【梨花】リクワ なしのはな。蘇軾詩「ー一淡白柳深青、柳絮飛時花滿ノ城」
【梨花一枝春帶ノ雨】リクワイツシチュンタイユイ 美人の涙を帶べる形容。白居易、長恨歌「玉容寂寞淚闌干、ー一」
【梨雪】リセツ なしの花を雪に喩へていふ。韋莊詩「隔ノ樹ー一又玲瓏」
【梨棗】リサウ なし、なつめと。草廬物詩「貧居煙火濃、歲熟ー一繁」
【梨無ノ主】リウシュ 梨の樹に所有主なし。元史、許衡傳「過ニ河陽一、渇甚、道有ノ梨、衆爭取咲ノ之、衡獨危ニ坐樹下一自若、或問ノ之、曰、非ニ其有一而取ノ之不可也、人曰、世亂此無ノ主、曰、ー一、吾心獨無ノ主乎」
【梨地】リヂ 圖うるしぬりの名、梨の實の皮の如くに金銀の粉を蒔き散らしたるもの。
【梨園】リエン 圖昔、禁中にありし殿舍の名。‖昭陽舍。

【梩】リ 支

○つちぐるま（畿）土を徙すくるま。一說に、ふご、かご。○すき、くは（鍤）孟、滕文公「反ニ其ー一而掩ノ之」

【梁】リャウ 陽

○はし、車馬の通ずるを得る水橋。孟、離婁「十二月興ー一成」○つつみ（隄）○石を以て水を絕ち其の中を空にして魚の往來を通ずる所「石ー一」○やな（水堰）河中に木を竝べ立てて水を塞ぎ魚を捕へる仕掛。孟、梁惠王「澤ー一無ノ禁」詩、小雅「飯ノ筍在ノ一」「魚ー一」○うつばり、はり、屋の棟木を支へる大なる橫木「屋ー一」「ー一棟」○朝代の名、武帝蕭衍建つ、四代五十五年にして陳に禪る。○五代の時、太祖朱溫建つ、二代十六年にして後唐に亡ぼさる、前者に對して後ーといふ。○國名、戰國の時、魏の惠王都を大ーに徙し、亦ーと號す。○州名、古の九州の一。禹貢「華陽黑水惟ー一州」今の四川・雲南・貴州の地。○冠ーは冠上の橫脊。○陸ーは亂れ走る貌。
【梁棟】リャウトウ うつばりと、大いなるはしらと。又、重任を負ふ人に喩ふ。唐書、韋皐傳贊「皆爲ニ國ー一、光ニ當ニ一時一」
【梁苑】リャウエン 次條に同じ。苑は花園。李白詩「荊門倒ニ屣宋ー一、倘ニ鄒枚一」
【梁園】リャウエン 漢代、梁の孝王の名高きその。杜甫詩「醉舞ー一夜、行歌泗水春」‖梁苑。
【梁楹】リャウエイ うつばりと、たるきと。韓愈、新修滕王閣記「棟楹ー一、板樞之腐黑撓折者」
【梁材】リャウザイ うつばりにする材。鮑雅「今太廟ー一用ニ此木一」
【梁山】リャウサン 山の名、今の山西省離石縣の東北なる、呂梁山。詩、大雅「奕奕ー一、維禹甸ノ之」奕奕は大いなる貌、甸は治、禹、ー一を治めて水災を除く。
【梁山泊】リャウサンパク 卽ち梁山濼濕濼をいふ、北宋の劇賊宋江、砦を結びし

處、山東省濟寧縣の東南、梁山の下に在り、卽ち古の鉅野澤、下流汶濟二水、合して瀦ヲ成す、宋代黃河決して其の中に匯入し、綿亙數百里、後、黃河南に徙り、歲久うして塡淤し、遂に平陸と成る。

【梁棧】サンサン かけはし、きんばし。陸集詩「復著ニ―一橫二淸溪一」

【梁津】シンシン わたしば。渡船「歷」絞船「只ニ―今」ニ津梁ス

【梁上君子】リョウジョウクンシ 盜賊をいふ。陳寔の故事。後漢書、陳寔傳「時歲荒、有ル盜夜入ニ其室一、止ニ于梁上一、寔陰見レ之、呼ニ子孫一正レ色訓レ之曰、夫人不レ可レ不ニ自勉一、不善之人、未ニ必本惡一、習レ以ニ性成一、遂至ニ於此一、――盜大驚、自投ニ於地一稽顙」

【梁書】リョウショ 五十六卷、唐の太宗貞觀年中、姚思廉、勅を奉じて撰す、本紀六卷、列傳五十卷、志表なし、五代の梁の歷史。

【梁脚】リョウキャク うつばりのもり、肱木の等きを言ひて、梁棟を動すとよ。劉向別錄「魯人慶公、好ニ築室一、越、歌動ニ―一」

【梁使】リョウシ うつばりと、かなぎと。重任を負ふ人に喩ふ。魏書、李神傳「位當ニ樞機一、身任ニ―一」ニ棟梁。

【梁父】リョウホ 泰山の支阜、山東省新泰縣の西に在り、古の天子、泰山に封じ、―に禪す。

【梁父吟】リョウホギン 諸葛亮の詩。梁父一に梁甫に作る。曰く「步出ニ齊城門一、遙望ニ蕩陰里一、里中有ニ三墳一、纍纍正相似、問是誰家冢、田疆古冶氏、力能排ニ南山一、文能絕ニ地理一、一朝被ニ讒言一、二桃殺ニ三士一、誰能爲ニ此謀一、相國齊晏子」ニ桃殺ニ三子一（七七頁四段）參看。

【梁米】リョウベイ うつばりにする木。哲人に喩ふ。禮、檀弓、泰山其頹乎、―其壞乎」

【梁麗】リョウレイ うつばり、麗は棲ニ―一說に車の名。莊、秋水「―可ニ以衝一ニ城、而不レ可ニ以窒一穴」

【棁】リョ 【魚】 ひさし、のき。屋根の端「屋―」

【棚】【國字】 しきみ（榊）山中に自生する常綠有毒性灌木、芳香あり、枝葉を佛前に供す。〓多香木樒香。

【椹】【國字】 ふもと、やまのすそ（麓）

【椹】 八 【豐】 〇ア 〇ア 【禹】 【哥】

【椅】 〇イ 〇イ 【紙】 【支】 ㊀いひぎり。桐に似たる木、梓の一種。詩、鄘風「―桐梓漆」 ㊁いす、こしかけ、後方により かかりあるこしかけ。〓椅子。

【椅几】イキ けそく、おしまづき。蘇軾詩「願君如ニ此木一、環瀛做ニ霜雪一斲爲ニ君―一、滑滑不レ容レ刮」

【椄】エツ 【陷】 木の名。

【椋】エン 【琰】 〇木の名、實は紅林檎に似て赤く味よし。〇梓―は大木、材は耐朽にして船を作るに堪ふ。

【棄】キ 【寘】 弄は古字 〇すつ、すてる（捐）、「放―」、「委―」、「屛―」、「拋―」、「遠―」、「自暴自―」〇わすれる（忘）かまはずしてすて置く。詩、召南「不我遐―」〇周の先祖后稷の名。〇―臣は君主の死をいふ。

【棄捐】キエン すつ。劉向、戰國策序「孟子・荀卿儒術之士、―ニ於世一」〓捐棄。

【棄餘】キヨ すてたるかばね。蘇軾詩「遶レ湖巡レ城拾ニ―一」

【棄毀】キキ 破りすてる。南史、沈約傳「閉レ門卻掃、無レ所ニ交接一、時有ニ文章、碑銘一、不レ令ニ流布一」〓破棄。

【棄疑】キギ うたがひをすてる。荀子「知莫レ大ニ乎―一、行莫レ大ニ乎無ニ過」

【棄卻】キキャク 〇うちすてる。搜神記「將ニ欲纔ニ安頭上一、便捨レ之落者―一」〓棄去。〇法律の語、上訴を裁判所にて取り上げず。

【棄去】キキョ すてさる。韓愈詩「是非煩何有、―非ニ吾儕一」〓棄卻。

【棄暇】キカ ひいのちをすてる。蘇軾詩「豈レ鏡白嫌欲レ―一」〓捐軀（晉書）

【棄灰刑】キカイケイ 灰を道路に棄つる者を罰する刑。韓非子「殷之法、棄ニ灰於衢一者刑」

【棄業】キギョウ 仕事をやめる。宋曜文「廢レ事―一、忘ニ寢與一」〓廢業。

【棄擯】キヒン 己の權利をすてる。

【棄逐】キチク 逐ひ出きれし妻。孔融贈「放出還子、―離去」〓棄婦。

【棄市】キシ 殺して屍を市中にさらす。史、秦紀「有ニ敢偶ニ語詩一者、―一」

【棄兒】キジ すてご。通典、唐紀「―揚レ路」

【棄世】キセイ 〇世俗を超脫する。莊子「夫欲免レ爲レ形者、莫レ如レ―一レ。

レバ則無レ累」○人の死をいふ。李白詩「至公希代寶、一一一何早」

【棄唾】ダ　吐きたるつばき、すてて惜げも無きものに喩ふ。韓愈詩「向來名宦輩、同レ前如二一一一」‖唾壺。

【棄逐】ダ　すて遁ける土地。柳宗元文「同二其主一曰、庶民之一一、實而不レ世」

【棄擲】ダ　すてなげうつ、うちやる。‖棄捐・投棄。

【棄背】ダ　すててそむき去る。王羲之文「固嫂一一、切割二心情一」

【棄捨】ダ　すてて用ひず。又、すたれたる事から。宋史「太宗尚二儒雅一、勤二於政事一、修二前典一、大抵一一衆炎」‖捐棄・廢棄・遺棄。

【棄法】ダ　おきてをすてる。新論「未レ有二一一一而成二治也」

【棄筆】ダ　ふでをすてる。文事にたづさはることをやめる。庾信文「非レ有二班超之志一、遂以一一」‖投筆。

【棄婦】ダ　夫に離別された婦人。

【棄物】ダ　廢物に同じ。老子「聖人常善救レ物、故無一一」

【棄養】ダ　父母の死をいふ。人の子は父母を孝養すべき者なるが故。

【棄約】ダ　約束したる事をなげやりにして守らず。詩經、疏「棄二其約一」

【棊】キ　ギ

支　或は碁・棋に作る

○こま、將棋、又、すごろくのこま。○ごいし（碁石）「奕一、博物志「堯造圍一、丹朱善レ之」○ごをうつ。

【棊局】ダ　どうち。韓偓詩「日閑二一一一」‖博局。

【棊子】シ　ごいし。王羲之文「石首魚、腦中有レ石、如二一一一」‖碁石。

【棊戰】セン　碁をうちて勝負を爭ふの闘ひの爭。陸游詩「僧招二一一一」‖碁戰。

【棊峙】ダ　次第に同じ。魏書、李孝伯傳「宜擾而海沸、亦岳立而一一」

【棊跡】セキ　ごいしの如くに竝び立つ、時には峙の字志、陸機傳「方今英雄一レ、豺狼國紀」‖碁峙。

【棊敵】テキ　この對手ヲ黃庭堅、雨中花詞「誰共茗邀二一一一」

【棊盤】バン　ごばんの意。史「雅量一一」‖碁局。

【棊布】フ　ごいしの如くちらばる。陳譲、管山亭賦「羣圍牧豎、星列一一」‖碁散。

【棊枰】ヘイ　ごばん、枰は博局。陸龜蒙、幽居賦序「仲宣方玩二于一一一、叔夜遂眠二于鍛竈一」宋史、王禮恩傳「執二博局一一一自隨」‖碁局・碁盤。

【棊列】レツ　ごいしの如く竝ぶ。後漢書、宦者傳「府署第館、一二于都鄙」

【棋】キ

碁（前條）に同じ。

魚　賦

【椐】キョ　コ

○まがき（疎籬）○ふしこぶある木、杖と爲すべし、卽ち靈壽杖。○一一は相隨ふ貌。枚乘、七發「一一彊彊」

鳴

【棘】キョク

○いばら、うばら、灌木の一、莖堅く刺多く、生垣に造る。○刺のある小木の總稱「荊一」○こなつめ（小棗）○すみやかに、せまる（急）詩、小雅「獵狁孔一」‖亟。○やす、つかる（羸）○かなしみてあわてる、哀遽の貌「一人」今、新に父母の喪に遭ふ者、自ら稱して一人といふ。○ほこ。左、隱十一「子都拔一而逐之」戟に通ず。○ひとや「牢獄」囚を執へ繋ぐ所、周圍に一を植ゑたる故。○九一は外朝。又、外朝の位階。一木之聽を參看。○圖事の理ゞめ難き者を一手といふ。

【棘圍】キョクイ　進士の試驗場。隋府「歳永貽詩、蓬巷幾時聞二語一一一何日免二盧來一」唐、禮部開試の日、棘を以て之を圍むが故。

【棘刺】キョクシ　棘刺を見よ。

【棘矢】キョクシ　いばらにて造りたるや。左、昭四「桃弧一一、以除二其災一」

【棘剌】キョクラツ　いばらのばら。韓非子「商人有レ能以二一一之端一畫二母猴一者、必三月齋然後能視レ之、燕王因以二三乘一養レ之」

【棘茨】キョクシ　いばら、茨は荊棘。陸游詩「繁路讀奏レ積、石縛生二一一一」‖茨棘。

【棘者】キョクシャ　やせたるもの。呂覽「一一欲レ肥、肥者欲レ棘」

【棘麥】キョクバク　いばらのむらがり生じたるところ。孟郊詩「投二彼霜雪令一覇除荊一一」

【棘皮動物】キョクヒドウブツ　背と腹との區別あるのみにて左右前後の別なき動物の總稱。うに・なまこなど。

【棘木之聽】キョクボクノチョウ　罪狀を糾問する義。禮、王制「史以二獄成一告於正、正聽レ之、正以二獄成一告於大司寇、大司寇聽二之棘木之下一」註に左の九棘は孤卿大夫位一、右の九棘は公侯伯子男位す。

【棘門】キョクモン　ほこ・やりなどをならべたる門。周禮、掌舍、注「一一以レ矛爲レ門」

【棘鰒魚】キョクフクギョ　鯛の異名「國寶、南産志」

【棬】 グ 虞

○まげる。まがる、たわむ（曲撓）○殷代に用ひし、脚の曲りし俎。禮、明堂位「殷俎以ー」○椀ーはけんほなし、實の形珊瑚の如く色は褐色、甘くして食ふべし。＝石李・雞距子。

【椁】 クヮク 藥

○はかる（度）○うはひつぎ、そとぐゎん、棺を入れる外ばこ「棺ー」論、先進「顔路請子之車以爲之ー」＝槨外棺。

【棺】 ㊀ クヮン ㊁ クヮン 寒 諫

㊀ひつぎ、屍をぢかに藏めるはこ、くゎんをけ、うちぐゎん。漢書、刑法志「諺曰、『殺人者欲其ー之疫』」㊁死骸をひつぎにをさめる。左、僖二八「ー而出之」

【棺ノ槨事定】クヮンノカクコトサダマルヲ 人の善惡は死後に初めて定る。晉書、劉毅傳「丈夫蓋ー槨事方定」

【棺槨】クヮンクヮイ ひつぎをおほふ布。

【棺槨】クヮンクヮク ひつぎ、槨はそとぐゎん、棹・郭に作る。孝經「ーー衣衾」＝棺槨・柩郭。

【棺櫝】クヮンドク ひつぎ。北史、魏孝文紀、輸ニ衣衾ーー一ヲ葬ノ之、不ノ得ニ藏舞ニ」

【棨】 ケイ 霽

○はたほこ、赤油の絹にて包みし木の戟、王公以下の儀仗兵の前驅者の持つもの（油戟）「ー戟」○わりふ（刻木爲符合）「ー信」＝傳信ノ符○たてやり。

【棨戟】ケイゲキ 王公などの前驅の持つほこ「漢書、匈奴傳」王勃文「ーー遙臨」

【棬】 ㊀ ゲイ ㊁ ゲツ 屑 薛

㊀くびき。＝軛。㊁杌ーはあやふし、安からざる貌。＝杌陧。○あし（凶）○のり（法度）

【棬】 ㊀ ケン ㊁ ケン 先 元

㊀まげもの（盂）木を曲げて作りし容器、或は圈に作る「梧ー」㊁牛の鼻木。＝棬。

【棬】 コ 遇

ねずみおとし、鼠を捕へる器「ー斗」

【棬】 棬（木部七畫）に同じ。

【棍】 コン 阮

○たばぬ、木を束ぬ。漢書、揚雄傳「ー申椒與菌桂兮」○ぼう（棒）「ー棒」○俗に無賴の徒をいふ、わるもの「賭ー」「惡ー」「訟ー」通俗編「閭巷惡少年、死箱散衣、聚爲葉關（中略）里言謂之打ーー、士庶苦之」とある。○ー成は自然。

【棍徒】コントウ 無賴の徒をいふ。＝惡漢。

【棌】 サイ 賄 駭 又、采に作る

○かしは（櫪）○くぬぎ（櫟）

【棌樠不ノ刮】サイリツフノカツ 山より伐り出したるままのかしの木材をたるきとする。一說に棌・樠香通、山から採りたるままの材木のたるき、棌ーに采に作る（史、始皇紀）

【棗】 サウ 皓

○なつめ、果樹の一、夏、小白花を開き楕圓形の實を結ぶ、食用又藥用とす「梨ー」「乾ー」○圖ダッ茶器の一、抹茶ダッを入れる器、形のーの實に似たるによりて名づく。

【棗東】ソウトウ 東ッに從ひ東ッに從はず。

【棗花】ソウクワ なつめのはな。李紳詩「四月南風大麥黃、ーー未ノ落桐陰長」

【棗樹】ソウジュ なつめの木もて作れる矛。宋史、呼延贊傳「揮ニ鐵槊ーーー、旋ニ挽廷中一數四」

【棗本】ソウホン なつめの木の根本。劉克莊詩「ーー流傳客ノ有ノ餌、編家寧ロ鬻ニ苦ノ求ノ奇」

【棗栗】ソウリツ なつめと、くりと。晉語「婚賄不ノ過ニーー一、以告ノ慶也、男贄ニ玉帛禽鳥一以章ノ物也」

【棧】 ㊀ サン 潸 諫 ㊁ セン 銑 霰

㊀たな（棚）○かけはし（閣）險阻の所に木をかけてつくりし道「ー道」○竹木にて作れる車。○ひつぎぐるま（柩車）○はたごや（旅館）「客ー」又、商品を貯藏し置く所「ー房」「貨ー」○音樂に用ふる小さき鐘。○車の行く貌。○かしのき（櫪木）○ーー蟠は高峻なる貌、けはし。㊁ーーは物の衆く盛んなる貌。㊂やらひ、木を編みて柵となし、牛馬などを養ふ所「馬ー」「羊ー」

【棧雲】サンウン ○空の雲に入る如き高き山道。杜甫詩「ーー亂干峻、捫石始攀

牢」○かけはしの邊に起れる雲「一峽雨」

【棧閣】サンカク　棧道に同じ。水經、注「下臨二深淵一、張子房燒二絕一レ、示レ無レ還也」

【棧徑】サンケイ　棧道に同じ。徑はこみち。

【棧道】サンダウ　かけはし、險阻なる處に棚の如く作りたる道。史、留侯世家「說二漢王一、燒二絕一レ一」‖棧閣・棧徑。

【棧橋】サンケウ　圖岸より水の方に、つき出して作れるはし、人、又は貨物を船に上下せしむる路。

【棧敷】サンジキ　圖さじき、芝居などのもの見のために高く構ふる牀。

【棧車】サンシャ　竹木の材のままにて、飾らざるくるま。周禮、春官、巾車「士乘二一一」

【棧道】サンダウ　かけはし、險阻なる處に棚の如く作りたる道。史、留侯世家「說二漢王一、燒二絕一レ一」‖棧閣・棧徑。

【棧豆】サンドウ　岩石の高くけはしき貌。張衡、西京賦「一一崚嶭」

【棧敷】サンジキ　圖さじき、芝居などのもの見のために高く構ふる牀。

【棧車】サンシャ　竹木の材のままにて、飾らざるくるま。周禮、春官、巾車「士乘二一一」

【棧道】サンダウ　かけはし、險阻なる處に棚の如く作りたる道。史、留侯世家「說二漢王一、燒二絕一レ一」‖棧閣・棧徑。

【棧橋】サンケウ　圖岸より水の方に、つき出して作れるはし、人、又は貨物を船に上下せしむる路。

【棧豆】サンドウ　俗藏敷料。

【棧捷】サンセフ　物の多くさかんなる貌。漢書、藝文志「叢雜一一」

【森】シン　平　侵

○盛んなる貌。○しげる貌、樹木が盛に生ひしげる。○ならぶ(竝立)○おごそかにしてぞっとする貌。○木の長き貌。○物の來き貌。○蕭一は木の多き貌。潘岳賦「蕭一繁茂」○陰一はくもりていたましき(黯慘)貌。○圖や樹木の多く叢生する所。林の字の義。

【森羅】シンラ　○木がしげり竝ぶ。張九齡詩「喬木自一一」○地上の萬物。次條參看。

【森羅萬象】シンラバンシャウ　宇宙間に羅列する一切の現象。法句經「森羅及萬象、一法之所レ印」

【森立】シンリツ　○高くならびたつ。‖森挺。○いかめしくたつ。

【森林】シンリン　○茂れるもり。蔡希寂詩「翠色綿二一一一一」○圖もり。

【森列】シンレツ　おごそかにならぶ。韓愈文「天地鬼神、昭布一一」

【森羅】シンラ　○木がしげり竝ぶ。張九齡詩「喬木自一一」○地上の萬物。次條參看。

【森羅萬象】シンラバンシャウ　宇宙間に羅列する一切の現象。法句經「森羅及萬象、一法之所レ印」

【森立】シンリツ　○高くならびたつ。‖森挺。○いかめしくたつ。

【森林】シンリン　○茂れるもり。蔡希寂詩「翠色綿二一一一一」○圖もり。

【森列】シンレツ　おごそかにならぶ。韓愈文「天地鬼神、昭布一一」

【森羅】シンラ　○木がしげり竝ぶ。張九齡詩「喬木自一一」○地上の萬物。次條參看。

【森羅萬象】シンラバンシャウ　宇宙間に羅列する一切の現象。法句經「森羅及萬象、一法之所レ印」

【森立】シンリツ　○高くならびたつ。‖森挺。○いかめしくたつ。

【森林】シンリン　○茂れるもり。蔡希寂詩「翠色綿二一一一一」○圖もり。

【森列】シンレツ　おごそかにならぶ。韓愈文「天地鬼神、昭布一一」

【森嚴】シンゲン　おごそか。唐書、文藝傳「韓愈柳宗元等、排二逐百家一、法度一一」‖莊嚴。

【森森】シンシン　○木の高く聳ゆる貌。晉書、和嶠傳「嶠一一如二千丈之松一」杜甫詩「丞相祠堂何處尋、錦官城外柏一一」○盛んなる貌。

【森梢】シンセウ　木の高く立つ貌。樹も森。馬融、長笛賦「林籟戞兮、一一柞樸」

【森竪】シンジュ　怒り又は恐れて頭髮がさかだつ。豎は竪の本字。唐書、李德裕傳「我毛髮爲一一」‖森立。

【森衰】シンスイ　物のおとろへる貌。江賦「蝟縮一一以垂レ翹」

【森然】シンゼン　○樹木のこんもりと茂り立つ貌。○ならび立つ貌。舊唐書、禮儀志「頒學通儒、一一在レ列」○するどき貌。白居易、劉禹錫詩集序「其鋒一一、少二敢當者一」

【森挺】シンテイ　高くぬきんで立つ、挺は拔。遊二天台山一賦「八桂一一以凌レ霜」‖屹立。

【森竦】シンセウ　しげりてひろがる。貫泰詩「人家稍相接、林木何一一」

【森羅】シンラ　○木がしげり竝ぶ。張九齡詩「喬木自一一」○地上の萬物。次條參看。

【森羅萬象】シンラバンシャウ　宇宙間に羅列する一切の現象。法句經「森羅及萬象、一法之所レ印」

【森立】シンリツ　○高くならびたつ。‖森挺。○いかめしくたつ。

【森林】シンリン　○茂れるもり。蔡希寂詩「翠色綿二一一一一」○圖もり。

【森列】シンレツ　おごそかにならぶ。韓愈文「天地鬼神、昭布一一」

【植】㊀ショク　㊁チ　入　職

㊀うゑもの、草木「動一一物」○たつ(樹立)論、徽子「一其杖而芸」○うう(栽種)草木をうゑつける「列一」「移一」「培一」「耕一」○はしら(柱)○よる(倚)○おく(置)其の所に定著させる「一字」○そばだつ(竦)○なみ(行列)㊁たつ。○おく(置)○かひこのすばしら、蠶簿を懸ける柱「曲一」○工事を主としてとりしまる人。左、宣二「華元爲一一」○塀のおやばしら(植幹)

同訓異字 ◎植・種・栽・樹・藝の別は種(永部九畫)の條を見よ。

○◎植・蒔・立・竪・樹・記の別は建(又部六畫)の條を見よ。

【植藝】ショクゲイ　草木をうゑる。

【植字】ショクジ　活字をくむ、活字をうゑつけ其の所に置く。

【植耳】ショクジ　みみをそばだつ。淮南子「諸侯必一レ」‖竦耳。

【植杙】ショクヨク　草木をうう。水經、注「閉二稻田一、敎二民一一」

【植樹】ショクジュ　○草木をうう。雲笈七籤、種レ德圖「一一、根深果亦繁」○樹をうゑる。

【植物】ショクブツ　草木の總稱。周禮、地官「其一一宜二穀物一」

【植物學】ショクブツガク　植物の構造・形態・生理などに關する事を研究する學術。‖本草學。

【植木】ショクボク　○木をうゑる。○うゑき。

【植類】ショクルイ　植物のたぐひ。竹譜「一一中、有レ物曰レ竹」

【棲】セイ　平　齊

○すむ。すみか、鳥の宿。又、山居ぐらし「雞一」「山一」「閑一」「故一」

【棲遑】セイクワウ　むちうつ、しもと。漢書、路溫舒傳「一一之下、何求而不レ得」

【棲】スキ　入　緝

捶(手部八畫)に同じ。○しもと、むち、つゑ、罪人を打つつゑ「笞一」○むちうつ(以杖擊)

栖。○やすむ、いこふ（息）○ゆか、ねどこ（寝牀）孟、萬章「二嫂使治ニ牛羊一」○一は車馬を簡閲する貌。又、安からざる貌。‖逶遲。○一屑はゆきかひ（往来）する貌。

【棲息】セイソク ○鳥などが木にやどる。‖棲宿。○すむ、生存する。

【棲遑】セイコウ あそび息ふ。詩、陳風、衡門「衡門之下、可ニ以ニ棲遑一」‖栖遑・游息。

【棲止】セイシ すむ。李頎詩、曽同一一地、揚去來鴻渚」

【棲神之域】セイシンノイキ おくつき、父祖の墓地。晉書故事「陳逸在レ郡終、自誌ニ其墓一曰、有ニ宋顕川生逸佐字希元、年八十二、不レ爲レ夭、官一品、不レ爲レ貴、卿相納レ綬、不レ爲レ尊、祖禰同ニ一丘一、可三歸息ニ父母一矣」

【棲宿】シュク とまる。阮籍詩、驚鳥時一一、惟命有ニ自然一」‖栖宿。

【棲棲】セイセイ ○車馬をしらべる貌。詩、大雅「六月一一、戎車既飭」○安からざる貌。班固文「是以聖哲之治、一一遑遑」‖栖栖・遑遑。

【棲屑】セイセツ 往來のわづらはしき貌。後魏書、裴安傳「京師遼遠、冀憚ニ一一一」‖栖屑。

【椒】セウ 通

○さんせう、いたはじかみ（山椒）落葉灌木の一、葉は羽状にして芳香あり、幹枝共に刺多く、殻に包まれたる漆黒粒状の實を結ぶ。○いたゞき（山頂）「山一」○かぐはし（芳香）き貌。詩、周頌「有一其馨」○一酒はとそ（屠蘇）の酒。

【椒花】セウクワ 椒房に同じ。北史、齊高祖紀「一一之内、造御以レ序」

【椒房】セウバウ 椒房に同じ。後漢書、后紀「一一之寵、盛二於時一」

【椒花頌】セウクワノショウ 新年の祝詞。晉書、列女傳「劉臻妻陳氏、臨海臨海人、晉正旦獻ニ一一一一一、其辭曰、長夏開天、三朝肇建、青陽散煖、澄景戒炎、標英雲絶、爰採爰蘭、聖容映レ之、永壽於萬」

【椒觴】セウシャウ 椒酒に同じ。觴はさかづき。荊楚歳時記、月令「元日進ニ椒柏酒一、椒是玉衡星精、服レ之令ニ人卻レ老、相是仙藥、故舉次列、以ニ年少者一爲レ先、各進ニ此酒於尊長一、稱レ觴擧レ觴、欣欣如也」‖椒杯。

【椒酒】シュ 山椒其の他の藥を調合してひたせる酒、とそ酒の類。荊楚歳時記「正月一日長幼以レ次拜賀、進ニ一一一」

【椒庭】セイ 椒房に同じ。薛道衡詩「我本良家子、充レ選入ニ一一一」‖後宮。

【椒房】セウバウ 皇后のおます宮。漢官儀「皇后稱ニ一一一、取ニ其實蕃延盛ニ升、以レ椒塗レ室、取ニ温暖除ニ悪氣一也、猶ニ天子朱ニ漆殿上一曰ニ丹墀一也」‖椒屋・椒庭・椒闈・椒闥。

【椒壁】セウ さんせうを塗りこめたる壁。宋史、樂志、退思金殿、一一丹楹」椒房に同じ。

【椒酸】セウサン 共に香のよき酢きもの。史、禮書「稻粱五味、所ニ以養ニ口也、一一芬馥、所ニ以養ニ鼻也」

【椒聊】セウリョウ 詩經唐風の篇名、山椒その實の多きを以て子孫の衆多なるに喩ふ、一一は即ち椒。

【椄】セツ 一音 ショウ

○つぐ、木を繋ぎ合せる。○くさび、兩者を接續するかすがひ。○一楫はかせ（枻）

【棕】ソウ 櫚（木部九畫）に同じ。

【棠】タウ 國 或は楾に作る

○甘一カンタウはこりんご、やまなし。詩、召南「蔽芾甘一」○海一カイタウは花樹の名、春、葉と共に櫻花に似たる淡紅五瓣の美花を著く。○沙一サタウは果樹の名、味、李の如く、核なし、材は舟と爲すべし。李白詩、木蘭之櫂沙一舟」○一蜂は常棣。

【棠棣】タウテイ 戰國の時、韓の地名、名劍を出す。轉して名劍の義とす。楚辭「執一一以刺レ蓬」箱一に溪に作る。劍名は前出「棠溪之劍、天下之話也」用二此義一、皆不レ如二劉邕之功一也」鎧は蜂。

【棠梨】タウリ からなし、べにりんご。梨芳譜「一一野梨也、圃種所謂杜甘棠也」

【棹】㊀トウ ㊁タク 國 漢

㊀さを、かい、船を進める具。‖櫂。○さをさす、さをにて船を進める。㊁いす（倚卓）‖桌。國○ウタリの日を盛りである所。○三絃の杆。○簫笛・長持などをかつぐ棒。○策筒などを數ふる稱。

【棹唱】ふなうた。劉長卿詩「愛君清川口、弄ノ月時一一」‖櫂唱・棹歌・櫂歌・棹謳。
【棹歌】舟のかいの音。白居易詩「客浪一一急、夕陽孤影疾」‖櫂聲。
【棹郎】せんどう。白居易詩「停驂樵子徑、遠聽一一謳」

【棖】タウ チャウ 庚

○はうだて、ほこだち、門の両旁に立てたる長き木にて扉をおしつけるもの（槐）○つえ（杖）○物を以て物に觸れる「一觸」○だいだい（橙）○中一は孔子の弟子の名。

【椓】タク 覺

○うつ（撃）たたく。詩、周南「一之丁丁」○去をうちかためる。詩、小雅「一之橐橐」○陰部を去る刑。書、呂刑「劓刖一黥」‖宮刑。

【椎】㊀ツイ ㊁スイ 支

㊀つち、物をうつ具。槌・鎚に通ず。○うつ（撃）戦國策「引ノ椎一破之」○すき（耒）○鈍くして曲り撓まざる義。漢書、周勃傳「樸一少ヒ文」㊁しひ。常緑喬木の一、葉は櫟に似、秋末、開錐形の實を蔵する苞果を結ぶ。

【椎結】束ねた髷に作る、結は髻、さいづちまげの漢書、四南夷傳「此皆一一斜ノ田有ニ色染一」‖魋結・椎髻。
【椎擊】つちと、のみと。荘、天道「輪ニ一而問ニ桓公一」‖鎚撃。
【椎政】上古の質樸なる政治。韓非、八説「行ニ椎政一高ニ慈惠一而道ニ仁厚一、皆一一也」
【椎打】つちにてうつ。法苑珠林「若ノ是都舎利、一一不ノ破」‖椎撲。
【椎破】つちにてうちやぶる。戦國策「引ノ椎一破ニ之」
【椎剖】人をうち殺して金品を奪ひ取る。漢書、地理志「一一通ノ家」
【椎埋】つちにて打ち殺して埋める。漢書、王温舒傳「少時一一為ノ姦」‖椎剖。高誘論「一一屠狗之人」
【椎輪】○輪のなき車輪、車の質素にして粗末なるもの。○轉じて物事のはじめの譬とす。梁昭明太子、文選序「一一為ニ大輅之始一、大輅寧有ニ一一之質一」
【椎魯】ばかにして、愚鈍のオなし、うまれままにておろか。蘇軾、戦國任俠論「其力耕以奉ノ上、皆一無ニ能為一者」

【棣】㊀テイ ㊁タイ 霽 賄

㊀とほる（通）「一通」○常一はにはざくら、櫻桃に似たる果を結ぶ。○唐一は李の一種。‖郁李・雀梅。○一棠はやまぶき（山吹）㊁一一はならふ（閉習）貌。舉動のゆったりとしたる貌。

【棣鄂之情】兄弟のうつくしき愛情を常棣の美くしきに喩へていふ。詩、小雅、常棣「常棣之華、鄂不ニ韡韡一、凡今之人、莫ノ如ニ兄弟一」鄂は外に見はれる貌、韡韡は光明華美の貌。
【棣通】とほる。漢書、律歴志「萬物一一、旅出ニ於寅一」
【棣棣】閑習する貌。詩、邶風「威儀一一、不ノ可ノ選也」

【棟】トウ 送

○むね（屋脊）家屋の最高部をなす處、人のせすぢの如し。易、繋辭「上一下字」「飛一」「一樑」○むなぎ、屋脊を形つくる爲めに横にわたす主要なる材。○轉じて主要なる人物に喩ふ、かしら「一梁」「國一」○屋の名。‖大角。

【棟宇】○むなぎと、のきと。王延壽、魯靈光殿賦「神靈扶ニ其一一、歴ニ千載一而弗ノ墜」○家屋をいふ。宇解參看。
【棟折榱崩】むなぎが折れれば、たるきもくづれる。上官が屈ければ、下僚隨ひてたふれるに喩ふ。左、宣三「子手鄧國一棟也、一一、國將ノ壓焉、不ニ敢盡ニ言」鄧は公孫僑、即ち子產。
【棟幹】むなぎの用材。轉じて、すぐれたる才能の譬。南史、劉穆之傳「穆之識量局致、一一之器」
【棟星】ほしの名。晋書、天角論「大角謂ニ之一一一」
【棟樑】○むながはら。主要なる人物に喩ふ。後漢書、謝夷吾傳「誠社稷之元龜、大漢之一一」
【棟梁】○むなぎと、うつばりと。○轉じて、重任を負ふ人に喩ふ。晋越審秋、句踐入臣外傳「大夫文種者、國之一一、君之爪牙」國○大工のかしら。‖匠長・梓人。○ひろく大工の稱。‖木匠。
【棟梁之器】棟は棟を負ふ材、うつばり。重任に耐ふる材器を稱す。南史、陸凱傳「宰相之門、譬ノ猶ニ梧柏、雖ノ小已有ニ一一一」
【棟木】家屋の棟に用ふる材木。

【棚】ハウ ボウ 庚

○たな（架）物を載せ置く爲めに板をわたしたるもの。○かけはし（棧）長木を城の女牆（ヒメガキ）の上にかけたるもの。唐書、韓游瓌傳「大治（戰）一雲橋」○清代、陸軍の編制にて兵十四人を一ー（組）と爲す。○圖上に木を架けわたして下を蔽ふ者をいふ「涼ー」「帳ー」

【棚閣】（サン）棧橋（カケハシ）（サン）沈遼詩「牛羊閑ニー（下）ー」

【棚機】（ダナバタ）圖七夕に祭る星の名。牽牛星に對する女星。‖織女。

【棓】ハウ ボウ 講 深

○つゑ（杖）‖棒（次條）○からざを、殺を打つ具。‖連枷。○うつ（擊）○ふみいた（踏板）ふみつぎ。公羊、成二年「踊於ー（板）而觀客」‖脚踏。○天ー（星）は星の名。

【棒】ハウ ボウ 講 深

○ぼう（棍）つゑ（杖棹）○うつ、たたく（打）梃にてうつ。

【棒喝】（カツ）圖禪家の問答にてさとりをひらかぬ者をしかりて棒にてうつ修行。五燈會元「杜撰三棒一無ニー（下）ー」

【棐】ヒ 尾

○ゆみだめ（弓檠）○たすく（輔佐）書、大誥「天ー（輔）沈辭」沈辭は誠信の辭。○かや。‖榧。○はこ、竹製の容器。‖篚。

【棐几】（キ）かやの木のつくゑ。晉書、王羲之傳「見ニー（下）ー潛（因書）之、眞草相半」

【棼】フン 文

○みだる（亂）左、隱四「猶治絲而ー（益）之也」○木が多く交り茂る。○むなぎ（棟屋棟）○あさぬの（麻布）周禮、春官、巾車「素車ー（棼）蔽」

【棼亂】（ラン）【棼絲】（シ）【棼糸】（シ）【棼絮】（ジョ）【棼糸】（ベン）亂・絲・絮・紛・擾の別は亂（乙部十二畫）の條を見よ。

【棼錯】（サク）木の多く交れる貌。說文「林木ー（交）錯」錯は相まじはる。

【棼棼】（フン）みだるる貌。書、呂刑「泯泯ー（棼）棼」‖擾擾・紛紛。

【棻】フン 文

香木の名。

【棟】ヘイ 敬 柄（木部五畫）に同じ

○え（柯・柄）○もと（本）○いきほひ、ちから（權）「君ー」

【柄】ヘイ 庚

ー（楓）（ハシラ）はしゐろ。張衡、南都賦「楯柄ー（楓）」註「皮可ー（爲）案」

【棹】㊀ヘイ 嘯 ㊁ヒ 支 ㊂ヘキ 陌

㊀たる、酒器の則きもの。○斧の柯。○こばんがた、橢圓。○さかづき。㊁しぶかき、實大さ杏の如く、其の汁を搾きて漆と爲す。㊂うちくゎん（棺）

【棉】メン 先

わた、きわた、もめん、もと交阯に出づ、布に製すべし、草ー（類）木ーの二種あり、草ーは宋の時、始めて江南に入る、木ーはもと印度に產し、福建・廣東地方にも亦產す、葉は掌狀對生、花は黃色、種子は柔かく長き白毛にて包まる、此の毛を績ぎて綿を製す。‖木棉。

【棷】ヨ 御

さかだるの臺（アシ）（案）の如くにして足なし（承樽器）‖登几。

【棪】ヨク 屋 職

○たらのき、とりとまらず、一種の叢生小木、葉莖共に刺（トゲ）多し。‖白棪。○一說に、はは（柞）そ○一ー（楊）は漢の宮殿の名。

【梨】リ レイ 支 齊

梨の本字

○なし、果樹の名、梨（木部七畫）を見よ。○としより、老人の面に梨の實に見る如き黑色の斑點卽ち浮垢を生ずるにいふ。‖凍梨。○かはぐ、さく（裂）‖瘃。

【椋】リャウ 陽

○ちしゃのき、葉は柿に似て對生す（來・棟）○圖むく、むくのき。落葉喬木の一、けやき又は榎に似、葉は剛く粗糙にして木賊（トクサ）の如く物を磨くに適し、實は小く圓く、熟すれば黑變す。‖糙葉木。

【椑】㊀レイ ㊁レツ 屑 質

㊀ばち、琵琶を彈ずる撥（バチ）○からくり（機關）機械のばね、ぜんまい「關ー」「機ー」㊁ねづ（紵）韓愈、送窮文「ー（紵）手羅」

【棱】ロウ　蕭　或は楞に作る、俗に稜に作る　通音レウ

○かど、木の四隅（柧）「衣ー」○しかくなるき（四方木）○いきほひ、みいづ（神靈之威）威嚴がきは立ちていちじるし。漢書、李廣傳「威ー憺乎列國」○ーはひときはかどだちて勢ある貌「俠骨ーー」○模ーどうは兩端を持して決斷せざる義。

【棱棱】レウレウ　かどだちて勢ある貌。唐書、崔從傳「爲ン人嚴偉、立ン朝ーー有二風望一」

【椀】ワン　㊥　碗は俗字

○こばち（小盂）「玉ー」「木ー」＝盌。○國わん、木製にて漆をぬりし食器「膳ー」○わんに盛りし料理、わんもり、おわん。

【棖】（國字）すぎ（杉）

【椛】（國字）もみぢ（紅葉・楓）

【柵】（國字）くぬぎ（櫟）

九畫

【椸】イ　支

ころもかけ、衣服をかける家具（衣架）「ー架」

【椸架】カイ　ころもかけ。曲禮「男女不ン同ニーー一」＝衣桁・衣架。

【楹】エイ　庚

○はしら（柱）圓く大いなる柱「雕ー」「華ー」○家屋の數をかぞへるにいふ。屋一列を一ーと爲す。○梁ーはなめらかなる貌。＝潘岳。

【楹桷】エイカク　大いなるはしらと、たるきと。宋史、樂志「ーー競二雲霧一」

【楹柱】エイチウ　はしら。詩經「有二覺其楹一」疏「有二覺然高大者一、其宮殿之ーー也」拾遺記「雕二斲衆寶一、以飾二ーー一」

【楹帖】エイテフ　聯句を書きて柱にかけるもの。國北詩鈔「金于友來乞二ーー一」＝柱聯。

【楹梲】エイテツ　○はしらと、むなぎと。魏書、源懷傳「ーー平正、基壁完牢、風雨不レ入足矣」○轉じて、最も主要となる者に喩ふ。梁昌文「輔佐重臣、國之ーー」＝棟梁・柱石。

【楷】カイ　灰　佳

○のり、てほん（法式模範）○ただし、なほし（直）○書法の三體の一「ー書」「ー行草」＝眞書。○一種の木、曲阜の孔林に子貢手植のーあり、枯れたれども朽ちず（山東通志）淮南、草木「ー木生二孔子家上一、其幹枝疎而不レ屈」

【楷書】カイシヨ　書體の一。晉書、衛恒傳「上谷王次仲、始作二楷法一、書斷「八分・本韻二之ーー一」今いふ隷書に同じ。＝眞書。

【楷式】カイシキ　のり、てほん、法度、式は則。老子「以レ智治レ國國之賊、不二以レ智治一レ國國之福、知二此兩者一、亦ーー」＝儀式・範式・楷則。

【楷法】カイハフ　てほん。國雅、注「儒林之ーー也」

【楷則】カイソク　てほん。後漢書、北海靖王興傳「善二史書一、當時以爲二ーー一」＝楷式・儀則・模範・楷模・典則。

【楷書】カイシヨ　楷書と篆書と。北史、裴景駿傳「從二司徒崔浩一學二ーー一」

【楷法】カイハフ　○楷書の書法。轉じて楷書をいふ。○てほん。＝法度・楷則。

【楷模】カイモ　木のかた、てほん。後漢書「士之ーー、國之楨幹也」＝楷則・模楷。

【楷隸】カイレイ　書體の名、楷書をいふ。後漢の王次仲、始めて隸字を以て楷法を作る、亦ーーと稱す、後人之を正書といふ、俗に眞書といふ。

【槭】㊀カン　㊁カン　感　覃

㊀いる（容）ふくむ（含）○今、信封はがきをーといふ。＝函。㊁はこ（匱）

【楑】㊀キ・ギ　㊁キ　紙　支

㊀柣ーシツ・はつち。㊁はかる（度）＝揆。

【楎】キ　クン　文　微

いかう、衣を懸くる具。

【楎檥】キイ　ころもかけ、いかう。禮、內則「不二敢縣二于夫之ーー一」註「直曰レ楎、橫曰レ檥、同類之物」

【極】キヨク　ゴク　職

○むね、むなぎ（屋棟）又、家のしんばしら。○たかし（高）○とほし（遠）○きはむ。きはまる、きはみ。○はて、かぎり、宇宙のはて、四方を四ー、四方上下を六ー、八方を八ーといふ。○いたる（至）○つく（盡）をはる（終）物事の最上又は最終。○最も正しき道、大中至正の公道「皇ー」「坤ー」○惡事を十分に窮極する。書、洪範「六ー、一曰凶短折、二曰疾、三曰憂、四曰貧、五曰惡、六曰弱」○やむ

（已）○くるしむ（困）○きはめて、はなはだし（甚）○とりとどむ（取止）○せまる（急）○はなつ（放）○つかれる（疲）○てん（天）○天子のみくらゐ（天位）「登ー」○さかひ（境）○星の名「南ー星」「北ー星」○地球の軸端。○太ーは天地の未だ分れざる以前。又、天地の本體。易、繫辭「易有二太ー一是生二兩儀一」○最上の原理、三ーは天地人の三才。易、繫辭「三ー之道」國○きまり（決定）○きはめ（鑒定）○きめ（約束・約定）○きめる、決定する。

同訓異字 極・窮・究の別は窮（穴部十畫）の條を見よ。

【極惡】ごくあく きはめてあし。潛夫論「下愚ー一之人也」

【極已】きょくい ゆきつきるところは て、已は止。宋史「不レ知二ー一」

【極擾】きょくじょう きはめてもたたかなり。詩經、疏、南方ー一」

【極銳】きょくえい きはめてするどし。魏志、荀彧傳、注「研精ー一、以推二理事一」

【極遠】きょくえん ○とほきをきはめる。禮記「窮レ高ー一レ、而測二深厚一」○甚だ遠し。

【極レ極】きょくのきょくを しんばしらを立てる。道德の大本をたてる。書、洪範「皇建二其有極一」

【極行】きょくこう 極めて善き操行。晉書、此在三之大節、臣子之ー一也」

【極諫】きょくかん てづよくいさめる。史、文帝紀「擧二賢良方正直言一ー者一」

【極窮】きょくきゅう きはまる。きはめる。＝窮極。

【極光】きょっこう 地文學にて地球の南北極に於て夜、空中にあらはれる弧形の美くしきひかり。＝電氣。

【極歡】きょっかん よろこびの心を十分につくす。詩經、疏「當二盡レ禮レ！以待レ之、則賢者自至矣」

【極刑】きょっけい 極めて重き刑。＝極罰。

【極媾】きょっこう きはまりつく。きはめつくす。漢書、鮑宣傳「願賜二數刻之閒一ー二罷電之思一」＝窮極。

【極甘】きょっかん 十分に甘ひつくす。後漢書、陰識傳「入經ニー一正說一、及下與二賓客一語未二嘗及一レ國事一」

【極限】きょくげん はて、かぎり。＝限極。

【極圈】きょっくん 地文學にて、南北同緯線より各二十三度半の所に畫せし圓線、北にあるを北ー一、南を南ー一といふ。

【極際】きょくさい かぎり、はての處。信矣、盛德揚之法、未二極ニー一」＝極限。

【極摯】きょくし きはまり至れる道、摯は至。漢書、敍傳「伏二周孔之軌躅一、馳二顏閔之ー一、既繫二鞅于世教一矣」

【極盡】きょくじん きはまりつく。きはめつくす。＝極竭。

【極終】きょくしゅう はて、どんづまり。

【極端】きょくたん 至りてめでたきしるし。又、其のしるしを十分にきはめつくす。後漢書、班固傳「嘉殺震章、奇獸神禽、應レ圖合レ諜、窮レ祥ー一」

【極星】きょくせい 北極にある星。史、天官書「中宮天ー一、其一明者太乙常居也」

【極戰】きょくせん 必死にたたかふ。荀子「上下一レ心、三軍同レ力、與レ之道敵、ー一則不可」

【極尊】きょくそん すぐれてたふとし、父母をいふ。書經、疏「父母尊之極、兄弟親之甚、緣二其施二孝於ー一、乃能施二友於甚親一」

【極端】きょくたん ○きはめのはて。○中正を失ひて極めてかたよる。

【極致】きょくち きはみ、至極せるむね。公羊傳、注疏序「昔孔子有レ云、吾志在二春秋一、行在二孝經一、此二學者、聖人之ー一、治世之要務也」

【極天】きょくてん そらのはて。文心雕龍「言レ峻則嵩高ー一レ、論レ狹則河不レ容レ船」

【極點】きょくてん 圓ゆきつまり、どんづまりの所。

【極度】きょくど はて、どんづまり。

【極東】きょくとう 東のはての義、日本及支那を四洋人の稱する語。＝大東。

【極南】きょくなん 南方のはて。五代史、後蜀世家「蜀雖レ屬レ梁、乃ー一之衰」

【極罵】きょくば 甚だしくののしる。世說「肆二百ー一、要三王谷一」

【極望】きょくぼう 遠くまでながめる。漢書「窮目ー一、不レ見レ所レ識」

【極刑】きょっけい 最重の刑罰。北史、魏文成后傳「大忿將レ加ニー一」＝極刑。

【極祕】きょくひ きはめて祕密にする、深く祕する。

【極微】きょくび きはめてかすか。

【極品】きょくひん ○最もよき官位。宋史、職官志「遙授二內臣之ー一」○圓最上の品物。

【極浦】きょくほ 遠きうらべ。楚辭「望二洋陽兮ー一」＝遠浦。

【極目】きょくもく 目のとどく限り。＝窮目。詩「梁園日暮亂飛鴉、ー一蕭條三兩家」

【極陽】きょくよう 十月が發に當りたる月の稱。開雅、疏「十月得レ發、則曰ニー一」

【極欲】ごくよく よくを恣ままに取る。史、陳賢傳「酒食ー一レ十日而更」

【極樂】ごくらく ○たのしみをきはめ盡くす。四部賦「方レ舟遊樂、俛仰ー一」○圓阿彌陀佛の居る所の國にて、きはめてたのしき處、佛家の理想の世界。柳宗元、淨土院記「佛言曰、西方過二十萬億土一有二世界一、曰ニー一」＝極樂世界。

【極力】きょくりょく 力かぎり、せいいっぱい。

【極麗】キョクレイ ○きはめてうるはし。‖極美。○美麗を極めつくす。漢賈、揚雄傳「游觀侈靡、窮ン妙ーレ一」

【極論】キョクロン 十分に論じつめる。

【極意】キョクイ 圖おくのて。藝術などの奥儀。

【極寒】キョクカン 甚だきむし。又、其の季節。

【極彩色】ゴクサイシキ 圖絵畫にきはめて美くしくえのぐを施す。又、其の絵。

【極樂】ゴクラク のり、てほん。屋根、雛壁「求ニー之所ニ同」‖法度。

【極暑】ゴクショ 前條に同じ。鄭俠詩「不二惟子三人ニ蒸古同ニー一ニ」

【極月】ゴクゲツ しはす、陰暦十二月の異名。

【楬】ケツ 月 厥

○たてふだ、事がらを書きて掲げる木札、へらさつ。○表識する。

【榘】矩（矢部四畫）に同じ。

【業】ゴフ 陷

○鐘鼓をかける横の棒（桷）を飾り飾る大いなる板。○わざ、つとめ「事ー」「本ー」「世ー」「正ー」○仕事をする「ー」「農」「ー」「醫」○なりはひ、くらし「生ー」○學問技藝「學ー」「授ー」○いさを「功ー」○すでに（已然）もはや、爲し了へたる意をあらはす、「已」とも連用す。史、留侯世家「良ー爲取履」○ちなみ（因緣）圖善惡のむくいをひき起す行爲。○ーはさかんなり（壯）又危き貌。○建ーは地名、今の南京。‖秣陵。

同ジ業已・業・既・已の用は既（元部七畫）の條を見よ。

【創ル業垂ル統】ソウギョウスイトウ 人君が帝業の基を定めて其のいとぐちを後の子孫に傳へる。孟、梁惠王「君子ーー、爲可ン遺也、若夫成功則天也」

【業業】ゴフゴフ ○あやふき貌。書、皐陶謨「兢兢ーー、一日二日萬幾」○つよく盛んなる貌。詩、小雅「彼車既攻、四牡ーー」

【業次】ゴフジ 生業の次序、日日の家業の順序。韓愈、論二佛骨一表「老少奔波、棄二其ーー一」

【業習】ゴフシフ ならはし。顔延之、庭誥「ー移二其天識一、世服沒二其性一」

【業精二於勤一】ゴフセイヲキンニ學問は勤むるに隨つて、ますますくはしくなる。韓愈、進學解「ーー、荒二於嬉一」

【業務】ゴフム つとめ、しごと。

【業力】ゴフリキ ○事業につとむる力。宋書、蔡廓傳論「蔡廓庸ニー弘正一、而年位未レ高」○ゴフ 圖果報をひき起す業因の力。

【業因】ゴフイン 圖善惡の果報を受くる原因たる行。成實論「一切生法、皆屬二ーー一」

【業苦】ゴフク 圖惡業のむくいにより受けるくるしみ。法要典據「解脫不レ救ニー一」

【業火】ゴフクワ 圖○惡の甚だしきを火に喩へていふ。○惡業の苦報たる地獄の猛火。

【業果】ゴフクワ 業報に同じ。

【業障】ゴフショウ 圖過去の惡業が今生の障礙となる義。

【業報】ゴフホウ 業因によりて受くるむくい、過去の惡業によりて現在の惡しき報を得たる類。‖業果。

【業風】ゴフフウ 圖業因の力を風に喩へていふ。

【業已】ゴフイ もはや、已に然る意をあらはす助辭。業の一字にても同じ。

【楗】ケン 阮 圜

○くゎんぬき（限「門木」門戸などをとざしかためたる横木（門）「閑ー」○せき、隄防のきれし所を塞ぐに、竹をならべたて、草と土とを中にうづめたるもの。史、河渠書「下淇園之竹以爲ー」

【棶】コ 虞

○あし（惡）器物のこしらへ方の惡しきをいふ。器物の堅好なるを功といふの對「巧ー」○刑ケイに似て赤き木、矢幹ヤがらを作るに用ふ、をどろ「楛ー」

【棶矢】コシ 天論「ーー傷レ楹」

【楛矢】コシ 楛木にて作りたる矢。晉語「肅愼氏、貢ニーー石砮一」

【楛木】コボク 箭の幹に用ふる木。

【楂】サ 麻

○いかだ「浮ー」「星ー」‖槎。○こほけ。‖粗。○ーーは鵲の聲。韓愈、雜詩「鵲鳴聲ーー」

【楸】シ 支

たらあづき（相思樹）大樹にして、材理堅くして、文あり、器に作るべし、其の實珊瑚の如くにて、年を歴るも變ぜずといふ。‖文梓木。

【楩】㊀ジ ㊁セン 銑 支

㊀きくらけ（楠）‖楩。㊁べにばな（紅藍）○さるがき（梔棗）

【楫】 シウ イウ 尤 尤 なら、かしはの一種、樹皮は染料、材は車輪に用ひ、又薪炭とし、或は香聚（シュク）を作る材とす。

【楸】 シウ 尤 ○ひさぎ（槚）葉は桐に似、花は管狀をなし、花後十六ささけの如き尺餘の莢（サヤ）を結ぶ。きささげ、梓の屬。○一梓（ヘイ）はごばん（基局）温庭筠詩「閒對一梓（ヘイ）局」‖碁枰。【楸局】（シウキョク）ごばん。鄭谷詩「梨窗一一靜、相顧思皆凝」‖碁枰・碁局。

【楱】 ジウ 有 たわむ、ためる。木を屈する。‖揉。

【楫】 シフ 緝 ○かい（櫂）かぢ、水をかきて船を進める具。長きを櫂といひ、短きを一といふ。‖楫。○轉じて、水運の義。易、繫辭「舟一之利、以濟不通」○林木の貌。○あつむ（聚）やはらぐ、輯に通ず。漢書、兒寬傳「躬發聖德、統一黎元」

【楫櫂】（シフせんどう）左思賦「築工一一」‖舟子。

【楛】 ジャク 藥 ○大木の奇蹙なるもの（山海經、注）‖若。○一檣は、ざくろ。‖安石榴（一說に柰（ナ））

【楯】 ジュン 軫 ○てすり、おばしま、横のてすり（闌檻）「欄一」○たて（干）「矛一」‖盾。○ぬく（拔擢）○ひつぎぐるま。‖蜡。【楯矛】（ジュンのたてと、ほこと。韓非子「楚人有下鬻二楯與一矛者上‖盾矛。

【楔】 セツ ケツ 屑 屑 ○くさび、兩材を接合し、又接合せしものの拔けざるやうにはめこむ栓。○轉じて、小說戲曲などにて此事より彼事を引き出すために別に一節を爲すもの「一子」○ほこだち、はうだて。門の兩旁の木の柱。韓愈、進學解「根閎（コウ）奥一」‖楔。○ささへる（柱）○ゆすらうめ（櫻桃）

【楶】 セツ 屑 櫛に同じ ますがた。‖節・科栱・柱櫨。

【楬櫫之材】（ケツシツのマヽ）楬はますがた、櫫は梁上の短柱、うだち。小才に喩ふ。班彪、王命論「一一、不（ル）可二棟梁之任一」

【楡】 隆（片部八畫）の古字。

【楚】 ソ 語 ○いばら、うばら（荊）○つる、しもと、むち（扑撻之具）「夏一」○うつ、たたく。○いたむ（辛痛）かなしむ（悲）「苦一」「酸一」○一一はあざやかなる貌。又、いばら等の叢り生ずる貌。○翹一は秀でて他と異る。春秋序「實爲二翹一一」轉じて人才の衆に秀でたる者をいふ。○國名、周の成王、熊繹を封ぜし地、今の湖北に在り、春秋戰國の時、强大となり、今の湖南・湖北・南江・浙江及河南の南部の地を有す。後、秦に滅ぼさる。○五代の時、馬殷の建てし國、湖南廣東西部の地。南唐に滅ぼさる。

【楚腰】（ソヨウ）美人のほそやかなるこし、楚王が細腰の美人を愛せし故事に本づく。楚王愛二細腰一」を參看。李商隱詩「無愛漢殿髻、第一楚宮腰」‖纖腰。

【楚歌】（ソカ）楚の項羽が漢軍の爲めに圍まれ、四面に一一の聲するを聞き、漢皆已に楚を得たるか、何ぞ楚人の多きやと歎ぜし故事「史、項羽紀」四面楚歌（三六三頁四段）を見よ。

【楚蘅】（ソコウ）香草の名、かんあふひ。廣雅「一一杜衡也」‖杜蘅。

【楚葵】（ソキ）芹（セリ）の異名。陸璣、疏草「芹、一一」

【楚棘】（ソキョク）いばら。‖荊棘。

【楚材晉用】（ソザイシンヨウ）楚と晉とは春秋時代の國名、楚國の材を晉人が用ふる。他のものを己に利用する譬、他國の人才を用ふるに喩ふ。左、襄二六、「維楚有レ材、晉實用レ之」

【楚騷】（ソソウ）楚の屈原の作りし離騷。郎經詩「月滿二空庭一露一一」

【楚三戶】（ソサンコ）少數にても倘ほ敵を亡ぼすに足る義にいふ。史、項羽紀「楚南公曰、楚雖二三戶一亡レ秦必楚也」

【楚辭】（ソジ）漢の劉向編す、周末の楚の大夫屈原の詞賦を主とし、其の門人及後人の作とを輯めたるもの。

【楚囚】（ソシウ）○楚國の囚人。左、成九「晉侯觀二於軍府一、見二鍾儀一問レ之曰、南冠而絷者誰、有司對曰、鄭人所レ獻一一也」○轉じて虜くとらはれて他鄉に在るものをいふ。文天祥、正氣歌「一一纓二其冠一」傳來送二劉北一」

【楚雀】（ソジャク）てせんうぐひす。揚子方言「凡鷾二之黃鳥一、或謂二之一一一」

【楚切】ソツ　苦調の悲しくいたましき義の傳成。庾鳩賦「聲ーー以懷郷」

【楚楚】ソソ　○あざやか（鮮明）なる貌。詩、檜風「蜉蝣之羽、衣裳ーー」○いばらの茂りたる貌。詩、小雅「ーー者茨、言抽二其棘一」

【楚撻】ソツタツ　むちうつ。後漢書、曹世叔妻傳「ーー既行、何義之存」＝笞擊タツ

【楚痛】ソツ　いたみくるしむ。史、文帝紀「夫刑至ー斷二支體一刻二肌膚一終身不レ息、何其ーー、而不二德也一」

【楚毒】ソク　くるしみ、いたみ。後漢書、黨錮傳「常レ懐ーー所レ迫」＝痛苦。

【楚狂接輿歌】セフキヤウシヨクヨノウタ　楚人接輿、佯狂して歌をつくり、孔子の無道の世に際るを諷りし故事。論、微子「ーー而過二孔子一曰、鳳今鳳今、何德之衰、往者不レ可レ諫、來者猶可レ追、已而已而、今之從レ政者殆而」

【楚起二章華之臺一而黎民散】ソキシヤウクワノダイヲシテレイミンチル　楚王、章華の臺上、無用の土木を起して、下民疲弊離散するをいふ。漢書「ーー、楽二阿房之殿一而天下亂」

【楚尾吳頭】ソビゴトウ　楚と吳との中間に當る地。方輿勝覽「豫章之地、爲二ーー一」朱熹詩「雪擁山腰洞口、春過ーー」

【楚囚】ソシウ　楚囚に同じ。

【楚扑】ソボク　人をむちうつに用ふるいばらのしもと。儀禮「ーー長如レ笴」

【楚王好二細腰一宮中多二餓死一】ソワウコウサイエウキウチウオホクガシスル　楚の靈王、宮女の腰の細きを好みしより、宮女食を減じ、餓死する者多かりし故事より、上の好む所、下其の意を迎ふる義に用ふ。後漢書、馬廖傳「傳曰、吳王好二劍客一、百姓多二創瘢一、ーー」

【楚王失レ弓楚人得レ之】ソワウシツキウソヒトヨクコレヲウ　度量の狹きを譏るに用ふ。家語、好生「楚恭王出遊、亡二烏嗥之弓一、左右請求レ之、王曰、止、ーー、又何求レ之、孔子聞レ之曰、惜乎其不レ大也、不レ曰二人失一レ弓人得レ之而已、何必楚也」

【楸】シウ　東　又檟に作る

たら、たらのき、山野に自生する灌木の一、とげ多き幹を有し、高丈餘に至る。葉は羽狀複葉、わかめを食用とす。

【椶】ソウ　東　或は棕に作る　通音シユ

ー櫚ロは常綠喬木の一、幹直立して枝無く、幹頂に破扇狀大形の葉、むらがり生ず、葉柄甚だ長し、春黃白魚子狀の花さく。玉篇「ー櫚一名蒲葵」

【椶竹】シウチク　しゅろちく（益部方物記）

【椿】

精（木部十二畫）の省字。

【椴】タン　寒

○白楊に似たる一種の喬木。○むくげ、もくげ、はちす。落葉灌木の一、葵に似て白或は淡紫色の花を著く。＝木槿。○圖えぞまつ、松の一種、寒地に自生す。

【椹】㊀チン　㊁ジン　侵　寒

㊀あてぎ、木などを斫るだい「ー質」＝鑕。○人をきる臺。○矢のまと（射正）㊁桑の實。＝葚。○圖さはら。常綠喬木の一、幹と葉とは共に檜ヒノキに似る、材は建築用とし、又、桶類の製作に適す。

【椹酒】ジン　桑の實にて釀したる酒。本草綱目「四時月令云、四月宜レ飲二桑ー一」＝能理二百種風熱一」＝葚酒。

【椹質】チンシツ　○きりだい。＝鑕椹。○矢のまと（周禮、司弓矢）

【椿】チユン　シユン　眞　通音チン

○常綠喬木の一、高三四丈、葉大にしてわかばは色紅く香甘食ふべし、俗に香ーといふ。樗を臭ーといふの對。花は小にして白く、材は堅く、器具と爲すべし。＝椿。○上古にありきといふ大木の名。莊、逍遙遊「上古有大ー者、以二八千歲一爲レ春、八千歲爲レ秋」轉じて長壽の喩とす「ー壽」賈島詩「腰數等二松ー一」○圖ツバキ　常綠喬木の一、葉は厚く表面滑かに、花は紅白單瓣重瓣種種あり、實は油を採る。＝山茶花。○莊子の寓言、大ーの說に本づきてかはりたる事の義とす、一說に珍と音通「ー說」「ー事」

【椿萱】チンケン　椿堂と萱堂と、父母をいふ。椿は長壽の木、故に父に比す。萱は北堂即ち主婦の居る所に栽うる艸によりて母に比す。萱堂ケンを見よ。類資纂要「稱二父母一曰二ーー一」李商隱詩「知君此去情偏切、堂上ーー雙誚レ顏」

【椿事】チン　圖不意のできごと、めづらしき事がら。＝珍事。

【椿齡】チンレイ　ながいき。杜甫詩「但求ーー永二莫レ違二祀天期一」＝長命・高齡・長壽。

【椿堂】チンダウ　父の稱。字解の大椿の說に本づき長壽を祝していふ。萱堂に對す。＝椿府・椿庭。

【椿庭】チンテイ　父の稱、椿堂に同じ。

【椿萼】チンガク　椿壽に同じ。＝椿起時、帝力

曾何有、一一喜漸長」
【椿府】チン　椿堂に同じ。范仲淹、老人星賦「會茲椿盤、應二乃一一」＝椿年。

【緒】 チョ　圖

○かうぞ、叢生する落葉灌木の一、樹皮より紙を製す。＝穀。○轉じて紙。又紙に書せし手簡の類「すー」○さつ（紙幣）「一幣」＝鈔。
【楮券】チョケン　紙にてつくれるわりふ。又紙幣。宋史、席旦傳「蜀用二鐵錢一、以二其難一於轉移一、故權以二一一一」＝楮幣。
【楮冊】チョサツ　次條に同じ。
【楮策】チョサク　紙にてつくれる書冊。策は冊。費章待訪錄「一一小楷」
【楮先生】チョセンセイ　紙の異名。韓愈、毛穎傳「穎與二陳人陳玄、弘農陶泓及會稽——」友善」
【楮幣】チョヘイ　かうぞの貨。＝楮子・楮貨。
【楮墨】チョボク　紙にてつくれるさつ。宋史、賈氏婦矣傳「遺二一一一、以券二五券之鴈丁一」＝紙幣・楮券。
【楮衣】チョイ　紙のおもて（紙面）
【楮墨】チョボク　紙と、すみと。董越、朝鮮賦「有二一一一以供二鳴酬一」＝紙墨。

【椇】 テイ　青

やまなし（山梨）左思、吳都賦「橿柿樗ー」

【楨】 テイ　庚

○ねずみもち（女貞）つばきに似たる常綠喬木、夏白花を著く、ひめつばき。＝鼠梓木。○塀の兩端に立てる木。＝貞。
【楨幹】テイカン　○楨は築の兩端にたてる木、幹は築に同じ、牆の兩邊に立てる木、共に牆を築くに大切なる者。書、費誓「峙二乃一一」○轉じて物の根本となる義。漢書、匡衡傳「朝延天下之一一」＝貞幹。

【楴】 テイ　霽

かんざし、かうがい（整髮釵）「象ー」＝搔。

【椽】 テン　先　般

たるき（榱）棟より檐にかけわたして屋瓦を承ける材。圓きを一、方なるを桷といふ。
【椽桷】テンカク　たるき。三輔黃圖「一一皆化爲二龍鳳一、從二風雨一飛去」＝榱桷。
【椽大之筆】テンタイノフデ　たるきの如き大いなるふで。大文章を關する才にいふ。晉書、王珣傳「珣夢人以二大筆如一椽與之、珣語二人一曰、此當レ有二大手筆事一、俄而武帝崩、哀册諡議、皆珣所レ草」今、他人の文章を稱して椽筆・大手筆といふは此に本づく。
【椽筆】テンピツ　前條に同じ。

【楠】 ナン　覃

○柑（木部四畫）に同じ。○圖くすのき。常綠喬木の一、材は樟に似、芳香を放つ　材は器を造るに適し、又、樟腦を採る。＝樟樹・豫章。

【楳】 バイ　灰

梅（木部七畫）に同じ。

【楣】 ビ　支

○のき（檐）○はり（梁）轉じて門第又門戸を門一といふ。○なげし。○圖まぐさ、門戸の上の横の梁。

【楅】 ㊀ヒク　㊁フク　屋　覺

㊀つかぬ（束）○つのよけ、牛の角の人に觸れるを防ぐ爲めに、其の端に束ぬる木「一衡」㊁つのよけ。○やづつ（承矢器）

【楓】 フウ　東

○かへで、落葉喬木の一、葉は掌狀、霜を經て紅色に變じ美觀を呈す、材は緻密にして用途多し「霜一」「紅一」「一錦」○圖もみぢ。＝槭。說文「厚葉弱枝、善搖、一名欇」
【楓葉】フウヨウ　かへでの葉。謝靈運詩、曉霜一一丹、夕曛鳳氣陰」
【楓香脂】フウコウシ　かへでの木のやに（本草）＝楓香。
【楓香樹】フウコウジュ　かへでのき（爾雅、注）
【楓岸】フウガン　かへでの木のある岸。賈至詩「一一紛紛落葉多、洞庭秋水晚來波」
【楓錦】フウキン　かへでの赤く美くしきを錦に喩へていふ。李商隱詩「吳衣一一翻レ階葉」
【楓橋】フウキョウ　蘇州に在る橋の名。唐の張繼の楓橋夜泊の詩によりて名高し。明一統志「一一在二蘇州府城西七里一、面レ山臨レ水、可二以遊息一、南北往來、必經二於此一」
【楓落吳江】フウラクゴコウ　見る所の聞くところに及ばざるにいふ。唐書、崔信明傳「鄭世翼過二信明江中一、謂曰、聞公有二楓落吳江一之句、願見二其全一、信明欣然多出二歌篇一、世翼覽未

ノ終日、所ノ見不ノ遠ノ所ノ間、引ノ舟去」

【楓人】フウジン 楓樹のこぶの人の形せるもの。南方草木狀「五嶺之間多ニ楓木ニ、歲久則生ニ瘤癭ニ、遇ニ暴雷驟雨ニ、其樹皆暗長ニ三五尺ニ、謂ニ之ー一ニ」十道記「楓樹數千年者、有ニ人形ニ眼鼻口脣ニ、而無ノ髓、或有ニ斫ノ之者ニ、皆出ノ血」

【楓宸】フウシン 帝王の宮殿、宸は帝王の居。說文解字「楓（中略）漢宮殿中多植ノ之、故稱ニー一」

【楓林】フウリン かへでのはやし。儲光羲詩「遶園多ニ綠樹ニ、遠岸盡ー一」杜牧詩「停ノ車坐愛ー一晚、霜葉紅ニ於ニ月花ニ」

【梗】ベン 先 銑

豫章ノ樟ニ似たる木の名。子虛賦「ー楠豫章」

【棻】ボウ ム 有 茂の古字

○盛んにしげる「ー盛」‖茂。○ほけ（木瓜）春日五瓣の紅花を著ける、實は梨に似て長く、味は澁くして食ふべからず。

【椰】ヤ 麻

やし、椰榔ロウに似たる木、熱地に產す「ー樹」‖栖椰。

【椰葉】ヤエフ やしの葉。左思、吳都賦「ー無ノ陰」

【椰子】ヤシ やしの實。七命「剖ニー一之殼ニ」齊東野語「ー一花亦可ノ釀ノ酒」

【椰酒】ヤシュ 椰子の實より採りたる酒。廣東新語「瓊人每以ニ椶椰ニ代ノ茶、椰代ノ酒、以款ニ賓客ニ」‖椰子酒。

【椰樹】ヤジュ やしの木。その實を椰子といふ。

【楊】ヤウ 陽

やなぎ、かはやなぎ、ねこやなぎ、多く水邊に生ず、春葉に先ちて花を著け、蕊ヅイは白毛を被る。枝の垂るるは柳、垂れずして揚起するはー。

同音 やなぎの枝の垂れざる者、木に从ひ揚ヨウの省に从ふ、會意。

【楊葉】ヤウエフ やなぎのは。漢書、枚乘傳「養由基、楚之善射也、去ニー一百步、百發百中」

【楊貴妃】ヤウキヒ 名は太眞、唐の玄宗皇帝に愛せられ、安祿山の亂に殺されし美人、貴妃は女官の名。

【楊弓】ヤウキウ 圖玩具の弓、長さ三尺許、集して射る、尚の距離は七間半を定式とす。

【楊巨源】ヤウキョゲン 字は景山、唐の蒲州の人、貞元の進士、詩を善くす、長慶中、河中の少尹となる。‖楊少尹。

【楊花】ヤウクワ やなぎのはな。李白詩「ー落盡子規啼」

【楊枝】ヤウシ ○齒のあかを去る具。隋書、眞臘傳「每旦澡洗、以ニー一淨ノ齒、說ニ誦經呪ニ、又澡瀡乃食、食訖還用ニー一淨ノ齒、又說ニ經呪ニ」○やなぎのえだ。戴表元詩「ー一不ノ耐秋風吹、薄交易ノ結還易ノ離」○圖こやうじ、つまやうじ、くろもじ。

【楊震】ヤウシン 後漢の人、字は伯起、博學にして淸廉なり、關西の孔子と稱せらる。四知（三六二頁四段）參看。

【楊朱泣ノ岐】ヤウシュキフノ 周末の賢人楊朱がえだみちのある所に來りて悲みし故事、足の向け方によりて南にも北にも行かれる如く、人も心の用ひやう如何によりて善人ともなり惡人ともなる故。淮南、說林「楊子見ニ逵路一而哭ノ之、爲ノ其可ニ以南ノ可ニ以北ニ、墨子見ニ練絲一而泣ノ之、爲ノ其可ニ以黃ノ可ニ以墨ニ」注「憫ニ其本同而末異ニ」

【楊子江】ヤウスコウ 支那第一の大河、單に江と呼び、又、長江・大江といふ、源を靑海地方に發し、雲南・四川・湖北・江西・安徽・江蘇等の諸水を合せ、東流して黃海に入る、長さ二千八百海里。楊もと揚に作る。

【楊誠齋】ヤウセイサイ 楊萬里を見よ。

【楊隧】ヤウスイ やなぎのあるつつみ、隧は堤。許渾詩「ー一情別巷潮晩」

【楊梟】ヤウケウ みさごの異名。爾雅「ー白鷹」

【楊梅】ヤウバイ やまもも、葉ヤナギに似たる實を結ぶ果樹。南方草木狀「ー一其子如ニ彈丸一正赤、五月中熟、熟時其味酣酸」李白詩「江北梅花開、江南ー一熟」

【楊萬里】ヤウバンリ 字は廷秀、誠齋先生と稱す、宋の吉州の人、紹興二十四年の進士、三朝に際遇し、始終一節、愛君憂國の心厚し、詩は陸游・范成大と竝稱せらる、年八十三卒す、文節と諡せらる、著す所ろ、誠齋集あり。

【楊墨】ヤウボク 楊朱と墨翟と、楊は爲ノ我（卽ち利己主義）を道とし、墨は兼愛を道とす。孟、滕文公「能言距ニー一者、聖人之徒也」

【楊墨之學】ヤウボクノガク 楊朱・墨翟の說きたる學說。論衡「ー一、不ノ亂ニ傳義一、則孟子之辨不ノ作」

【楊柳】ヤウリウ かはやなぎと、しだれやなぎと。詩、小雅「昔我往矣、ー一依依」

【榆】ユ 虞

○にれ（白粉）寒地に產する喬木の一、赤白二種あり、赤ーは先づ莢を著けて、後に葉を生ず、白ーは先づ葉を生じて、後に莢を著く、莢の狀、錢の如し、外皮を藥用とし、汁を塗料に供す。○桑ーはひぐれ（喚

景）○地ー＝は草の名、われもかう。

【楡莢】ヨウ　あきにれの異名。

【楡莢錢】ヨウセン　錢の名、形の似たるによりて名づく。淡書、食貨志「錢二品、重難レ用、更鑄二ー＝一」＝莢錢・楡錢。

【楡莢雨】ヨウウ　暮春のあめ。余靖詩「農家ー＝、江國鯉魚風」

【楡錢】ヨセン　○にれの水の莢ヨウ錢に似たり、故にいふ。孔平仲詩「春盛ー＝堆二筵路一、曉陰花雨作二輕寒一」○錢の名。楡莢錢を見よ。

【楔】セツ　國　廢

ねずみもち、樹の屬。＝鼠梓木・楨。

【棗】　棗（木部六畫）の古字。

【棟】レン　國

あふち、高さ丈餘、葉は密にして槐エンの如くにして尖り、夏、紅紫色の花開く、實は小鈴の如く、金鈴子と名づく、藥用とす、せんだんの木。

【棟花】ヨウ　あふちの花、二十四番花信風の最後の花。歲時雜記「穀雨一候牡丹、二候酴醾、三候ー＝、ー＝竟則立夏」

【楞】　棱（木部八畫）に同じ。

佛經のー嚴經には特に此字を用ふ。

【楞嚴】　佛經の名。白居易詩「人間此病治無レ藥、惟有ニー＝四卷經一」

【楊】　〔國字〕

かつら（桂）

【楜】　〔國字〕

こまひ（木舞）壁の下地、しの竹又は割竹を縱橫に絡みつけたるもの。

【楾】　〔國字〕

はにざゝ、はんざゝ（匾）水をつぎ入れる器、柄に水の通路あり。

【椶】　〔國字〕

むろ、圓柏ハクに似たる針葉喬木の一、葉は柔く、老樹は青き實を結ぶ、材は水濕に堪ふ。杜松の屬。

十畫

【楓】　㊀ウン・ヲン　㊁チン　㊂チヲ　月　元　同

㊀やまなし（杜）○はしら（柱）㊁すぎ（杉）㊂ー柿ハクはまるめろ。葡萄牙ポルトガル語、こほけ又りんごに似たる果樹、花は淡紅色五瓣、醸味芳香ある實を結ぶ。

【榮】エイ　庚

○あをぎり（青桐）きり（桐）○のきづま、やねづま、屋根のひさしのそりあがりし所（屋翼）＝飛檐・挑角。○はな、草の花。○さかゆ。さかえ、草木がさかんに茂る（茂盛）枯の反對「ー枯」轉じてひろく物事の隆盛なる義とす。○ほまれ、名譽が高くなる義。「光ー」等の反對。孟、公孫丑「仁則ー、不仁則辱」○あらはれる（顯）「尊ー」「顯ー」○いろつや（色華）○ひかり。○ー衛は血氣。○姓、ー啓期は春秋の時の賢人。

【榮榮】エイ　さかえる貌。元稹詩「獨孤綰四十、仕宦方ー＝」

【榮衛】エイ　血氣、榮は血、衛は氣。唐書「人有二四支五藏一、一覺一寐、吐納往來、流爲ニー＝、章爲二氣色一」內經「ー＝不レ行、五藏不レ通」

【榮曜】エイ　はえかがやく。詩經、魯、閟宮「赫ー＝」曹植、洛神賦「ー＝秋菊、華茂春松」

【榮福】エイフク　○前條に同じ。曹植、王仲宣誄「ー＝當世」○國はて、おどり。＝榮華・榮曜。

【榮貴】エイキ　さかえて位たふとし。杜甫詩「ー＝如二寄土一」＝榮顯。

【榮勤】エイ　名譽あるいきを。陸雲文「光二東州之國休一、流ニー＝於編野一」

【榮華】エイクワ　○草木がさかえしげる。○身分又家がさかゆ、さかえ。淮南子「有ニー＝者、必有二憔悴一」史、外戚世家「丈夫當レ時富貴光寵ー＝、貧賤之時、何足レ累レ之說」＝榮貴・榮耀。

【榮華物語】エイガモノガタリ　國　四十一卷、宇多天皇の寛平年間より堀河天皇の寛治六年に至る、凡そ二百餘年間の雜史、作者未詳。

【榮懷】エイクワイ　さかえてやすし。書經「邦之ー＝、亦尙一人之慶」

【榮光】エイクワウ　○ほまれ。＝光榮。○はえあるひかり。瑞氣をいふ。尙書中候「ー＝出レ河、休氣四塞」晉、賈王詩「照日ー＝淨」

【榮顯】エイケン　宮中のものみやびやかな。老子「雖有ニー＝、燕處超然」

【榮慶】エイケイ　めでたきさいはひ。晉書、戚悲杜烏后傳「遊享ー＝」書經、傳「上下同ニー＝」

【榮顯】エイケン　さかえあらはれる。隋書、楊素傳「高位重爵、ー＝一時」＝顯榮。

【榮枯】エイコ　○しげれると、かれると。

杜甫詩「濃淡樹ー一」‖榮凋。○さかゆると、おとろへると。李賀詩「一一過轉急如ノ箭」‖盛衰・盛替。

【榮枯盛衰】エイコセイスイ　さかへると、おとろへると。

【榮進】エイシン　さかえすすむ。陸機文「擢ノ自ニ寒素ニ一ニ榮ニ一一ニ」

【榮爵】エイシャク　たかきくらゐ。盛旗、管樂論「一一所ノ願、必謀ニ盛德ニ」

【榮潤】エイジュン　家がさかえうるほふ。蜀志、郤正傳「朝含ニ一一ニ、夕爲ニ枯朖ニ」

【榮辱】エイジョク　さかえと、はづかしめと。名譽と恥辱と。易、繫辭「言行、君子之樞機、樞機之發、一一之主也」

【榮幸】エイコウ　げんきよくさかえると、やせつかれるとの。韓愈詩「何能辨ニ一一ニ且欲ノ分ニ賢恩ニ」‖榮疼。

【榮疼】エイトウ　前條に同じ。

【榮盛】エイセイ　さかえてさかんなり。江淹文「都野宗ニ其一一ニ視聽爲ニ其炎貴ニ」

【榮勢】エイセイ　位高くしていきほひあり。南史、流父傳「黃金白璧、重利也、駟馬高蓋、一一也」

【榮泉】エイセン　光華あるよきいづみ。漢書、宣帝紀「食ニ甘露ニ飲ニ一一ニ」

【榮澤】エイタク　ほまれありて人にうらやまれる。李德裕文「恩禮特深、踰ニ一一ニ」‖榮寵。

【榮祚】エイサ　さかんなるさいはひ。榮福。

【榮利】エイリ　榮進と利益と。後漢書、周盤傳「不以ニ一一ニ滑ニ其生術ニ」

【榮祿】エイロク　高き祿位。蔡邕、釋誨「才美者荷ニ一一而寵ノ賜」‖榮秩。

【榮秩】エイチツ　高き官職、又其の扶持ぶち。又、名譽と位と。後漢書、陳龜傳「過受ニ國恩ニ一一ニ榮優」‖榮祿。

【榮寵】エイチョウ　君に愛せられてたふとき地位に在る。後漢書、李通傳「欲ノ避ニ一一ニ以ノ病上書乞ノ身」

【榮凋】エイチョウ　さかえるとしぼむと。新論「一一有ノ命、困通有ノ期」‖榮悴・榮枯・盛衰。

【榮悴】エイスイ　みだりに高き官職に在るにいふ。杜牧文「一一既積、愛憾實深」

【榮典】エイテン　榮譽ある褒賞、國家に功勞ある者に賜ふ所の勳位勳章など。

【榮轉】エイテン　これまでよりは高き官職にすすむ。宋書、武帝紀「未ノ嘗ニ一一者」‖榮進。

【榮任】エイニン　光榮ある任務。吳志、魯肅傳、註「委以ニ腹心ニ遙荷ニ一一ニ」

【榮班】エイハン　たふとき位、班は位の義。韓愈詩「致ノ君超ニ列辟ニ得ノ道在ニ一一ニ」‖榮品・榮位・高位。

【榮美】エイビ　さかえてうつくし。傅休奕、桃賦「豈惟ニ一一之足ノ言」

【榮品】エイヒン　ほまれある官位の義。林「萬國咸喜、子孫ニ一一」

【榮敷】エイフ　草木がさかえひろがる。賈誼疏、學園吟「種藝者ニ一一」

【榮問】エイモン　榮名に同じ、聞は聞に同じ、きこえ。李陵、答ニ蘇武ニ書ニ一一休暢」‖令聞。

【榮華】エイカ　人にほめられ、したはれる〔魏志、杜恕傳〕‖榮譽。

【榮名】エイメイ　さかんなるほまれ。史、游俠傳「豈若ニ卑論儕俗、與ノ世浮沈、而取ニ一一一說」古詩「一一以爲ノ寶」

【貌ニ榮名ニ】バイエイメイ　榮名を以て容貌のかざりとす。史、游俠傳「諺曰、人——、豈有ノ既乎」

【榮茂】エイボウ　しげりさかんなり。漢書、宣帝紀「醴泉湧流、枯槁ニ一一、神光並見、咸受ニ嘉祥ニ」韓愈詩「大哉陽德盛、一一振留ノ春」

【榮養】エイヨウ　衣食等を十分にして身體をやしなふ。晉書、趙至傳「吾小未ノ能ニ一一ニ使ニ老父不ニ免ニ勤苦ニ」父に美服甘旨を進めて孝養すること能はず。

【榮懿】エイイ　ほまれ。常建詩「一一矣二本異ニ」‖榮名。

【榮螺】エイラ　さざえ、海產の貝の一種、螺狀にして角のある殼と平たき蓋とを有す。‖蠑螺。

【榮落】エイラク　さかえるとおちぶれると。さかえると、おちぶれると。宋之問、太平公主山池賦「春秋寒暑兮歲一、林樾沼沚兮日芳鮮」‖榮凋・榮枯。

【榮覽】エイラン　人の文などを見るにいふ。榮は光榮とする。歐陽修、與ニ吳給事ニ書、能ニ惠顧細ニ得ニ遍一一ニ

【榱】エン　元

○いとまき、わく、絲をまきつける具。○鐘・磬などの樂器を懸ける具。

【榎】カ　馬

○ひさぎ(楸)古、卦體の刑具を作る。‖夏・檟。○國え、えのき、落葉喬木の一、葉は椋に似て闊く、初夏淡綠色の花開き、粒狀の小さき實を結ぶ。

【槁】カウ　豪　又、藁に作る

○かる、からす(枯)「凋一」孟、梁惠王「苗則一矣」かわく(乾)○かれたるき(枯木)○ひもの(乾魚)○つむ(積)

【折ノ槁振ノ落】セツカウシンラク　槁は枯、枯木をくだき、落葉をはらふ。事の甚だ易きに喩ふ。淮南子「劉項興ニ義兵ニ誅而定、若ニ折ノ槁振ニ落」

【槁項】カウコウ　やせほそりたるくびすぢ。莊、列禦寇「一一黃馘者、商之所ノ羞也」

【槁魚】カウギョ　ひもの、槁は乾。曲禮「祭一

一曰ノ商」‖橘蔗。

【橘梧】キツゴ 皋の異名。枯れたる桐にて伯牙が故。莊、徳充符「惠子據二一一而吟」注「據ノ梧而睡也」

【橘死】キツシ 枯れて死ぬ。‖枯死。

【橘枝】キツシ かれえだ。莊子「右撃二一一而歌」‖枯枝。

【橘壌】キツジョウ かわきたるつち。孟、滕文公「上食二一一下飲二黄泉一」

【橘悴】キツスイ ○草木がかれしぼむ。楚辭「草木搖落時一一」○やつれる。

【橘木死灰】キツボクシカイ 形は枯木の如く、心は死灰の如く絶えて生意なし。人の無心無爲なるに喩ふ。莊、齊物「形固可ノ使ノ如二槁木一而心固可ノ使ノ如二死灰一乎」

【棄】

槁（前條）に同じ。

【権】カク 麌

○まるきばし（獨木橋）○政府にて物品を專賣する。又其の事「茶一」「酒一」「官一」○稅を賦課する「征一」「稅一」漢書、武帝紀「初一一酒酤」○からたち、柚メの如き實あるもの（枳）

【権会】カクワイ 賣買兩者の間に介して其の利を壟占する、會は儈。漢書、景十三王傳「趙王擅ノ権、使二使即ノ姦爲二賈人一一一」

【権管之利】カククワンノリ 管は幹、商估のことに干與し、其の利を專ら官に收める、権は丸木橋、其の利を壟占すること、猶ほ此の橋に由らざれば、行くことを得ざるが如し、官榷酤賣の利益。漢書、霍千秋傳「桑弘羊爲二御史大夫一八年、自以爲二國家興一一一」

【権酤】カクコ 政府にて酒を專賣する。漢書、昭帝紀「罷二鹽鐵一一一」

【椵】カ 麻

○さね（核）「杏一」○大車のくびき、轅に通ず。蜀都賦「商旅聯一」

【榼】カフ 合

○たる、かめ、さかだる（酒器）「酒一」「殘一」左、成十六「使行人執一一承飲」○水を貯ふる器、かめ「瓶一」○器物のおほひ、ふた（蓋）○一藤クワツは蔓生植物の一種、もだま、あけびに似たる藤。本草拾遺「一藤如二通草一其實三年方熟」

【榦】カン 翰

○獄の兩端のはしら「楨一」○もと、みき。‖幹。○井一は井の上の木闌スヰリをかけた。又、漢武帝の樓の名、をかけた狀に築き、高さ五十丈ありきといふ（漢書、武帝紀）○え（柄）○やまぐは（桲）書、禹貢「桲一梏桲」○ただす（正）

【桶】㊀カン 㐌 ㊁カン 㐌 咸 㐌

㊀桮（木部八畫）に同じ。㊁とひ、水を通ずる具。

【橿】キ 支 㐌

カイ はんのき。

【橿樹】キジュ 生長すること速かにして、三年ならずして大樹となるといふ木。杜甫詩「範際一一三年大、會致二溪邊十畝陰」

【槐】クワイ 灰

○ゑんじゅ。葉は羽狀複葉、花は蝶形黄白色、秋、管狀の莢を結ぶ。材は堅緻にして建築用とし、又器を造るに用ふ「老一」「猴一」○周代、朝庭に三株の一を植ゑて三公（大臣）の座位とせし故事によりて三公の位に喩ふ「台一」「一鼎」「一位」禮記、秋官「面二一一三公位焉」

【槐安國】クワイアンコク 蟻のみやこ。淳于棼の故事。大槐安國に南柯郡（二七五九頁）參看。

【槐安夢】クワイアンユメ 淳于棼の故事、轉じて夢の喩に用ふ。淳于棼、宅南に一大古槐あり、一日其の下に醉臥す。夢に大槐安國に入りて王に見ゆ、王曰く、わが南柯郡、卿を風して守となさんと、凡そ二十年にして使者送りて出づ、途に窟む、古槐の下を尋ねしに蟻穴あり、乃ち槐安國、又一穴あり、直に南枝に上る、即ち南柯郡なり（異聞集）

【槐安王】クワイアンワウ 蟻の異名。前條參看。

【槐位】クワイ 三公の位。黄崇、嘏會賦「蜜二勞一一」‖槐鼎。

【槐影】エイ ゑんじゅの木のかげ。陳信、四門助敎詩「菊花題ノ酒甕、一一向ノ窗臨」

【槐鼎】ガクテイ 高位高官。後漢書、百官志、注「童穉幼子、遡登二一一之位」

【槐國】クワイコク ゑんじゅに生ずるきのこ。本草「槐樹之菌、名二一一」‖槐耳。

【槐數】クワイスウ ○ゑんじゅと、いばらと。三槐九棘（二六四三頁）の略、三公九卿の喩。任昉、樹宣城碑銘「將登二一一法掾ノ稱上」

【槐花】クワイクワ ゑんじゅの花。白居易詩「一一雨濕新秋地、桐葉風翻欲ノ夜天、盡日後園無二一事、自頭老監牧ノ書眠」

【槐花黄舉子忙】クワイクワワウキヨシバウ 陸暢七月、槐の花が黄ばむ頃に擧士の試

驗が始まる故にいふ。鼇子は應試者。清・中識時記「進士下第、當年七月、復獻二新文一、求二援解一、故曰、——」

【槐公】クワイ　三公のくらゐ。鉉は鼎の耳を貫きて揚げもつる。江淹、爲二蕭領軍一讓二司空一啓「——之任、百王故事、具司是屬、寔冤式瞻」‖槐鼎・台槐・槐位。

【槐卿】クワイ　三公のくらゐ。韓愈詩「——方虛位」‖槐位。

【槐宮】クワイ　ゑんじゅに生ずるきくらげ。本草「——、槐樹上菌也」

【槐秋】クワイ　進士の試、卽ち官吏登用試驗に應ずる年、陰曆七月槐花の黃ばむ頃に試驗を行ふ故にいふ。又其の試驗に赴くを踏槐といふ（書言故事）

【槐宸】クワイ　帝王の宮殿。杜萬里詩「蒼龍觀開啓——、白玉墀除拱二槐一」‖槐庭・槐宸。

【槐樹】クワイ　ゑんじゅの木。周書、韋孝寬傳「爲二雍州刺史一、先レ是路側一里置二一土堠一、經レ雨頹毀、每須レ修レ之、自二孝寬臨一レ州、乃勒二部內一、當レ堠處、植二一槐一、代レ之、既免二修復一、行旅又得二庇蔭一」

【槐庭】クワイ　朝廷をいふ。晉書、王戎王衍傳論「登二——一列一」‖槐宸・槐旅。

【槐鼎】クワイ　三公の位、鼎に三足ありて鼎を支ふるを三公が天子を輔佐するに比していふ。次條參看。‖槐位・槐座・槐鉉・台鼎。

【槐鼎之任】クワイテイノニン　三公のやくめ。後漢書、方術傳論「越登二——一」

【登槐賞レ元】トウクワイシャウヲシテクワンニ　宰相の位に登りて天子の政を佐ける。元は元化、卽ち天地の化育をいふ（韓愈、河南府同官記）

【槐門】クワイ　三公の家の異稱。

【槐】　クワイ　㊥

○ふづくゑ（文几）讀書の肱。○ついたて。○まど（牕）あかりとり。○卦を以てあかりとりの窗かけとする。晉書「左棟鎌一」○ひさし「軒一」○㊀ウル（胡桃）

【櫰】　ケツ　㊥所

○くひ（杙）○雞のねぐら（雞棲）‖桀。

【構】　コウ　㊥搆とは別

○かまふ、家屋などをくみたてる（架屋）かまへ。○つくる、くみたてる、詩文などを思案して作る「一思」「宿一」○むすぶ。孟、梁惠王「一怨於諸侯」むすぼる（結）ごたごたと爭ふ。孟、告子「我聞秦楚一兵」○あはす（合）易、繫辭「男女一精、萬物化生」○こじつける、もと其の事なきに附會して成す、揑造する。左、桓十六「宣姜與二公子朔一構二急子一」○はかる（謀）○やね（屋宇）○たるき。○かぢのき（楮）㊀○かまふ、武器を持ちて敵を待つ「身を——ふ」○かかはる、關係する「先方に——はず」○かまへ、やづくり、家屋のつくりかた。

【構怨】コウエン　互にうらみを結ぶ。字解參看。‖結怨・構釁。

【構陷】カンン　計を以てかまへて人を誹におとしいれる。後漢書「——二太子一」北史、張士遷傳「——善良一」

【構禍】コウクワ　わざはひをかまへむすぶ。詩經「我日——」‖結レ禍。

【構會】クワイ　ざんげんせられて罪を得る。阮瑀、爲二曹公一與二孫權一書「爲二侯人所一——一」

【構釁】コウキン　構怨に同じ。釁は隙、北史、楊素傳「太后問レ狀、具具對二元氏一——之端一」音玉衆切」

【構造】コウザウ　かまへつくる、くみたてる。宋書、恩倖傳「——同異一、興二檜鷁隙一」‖造作。

【構想】コウサウ　○構成したる思想。○思想を組み立てる。‖構思。

【構殺】コウサツ　無實の罪をかまへつくりて殺す。北史、高熲傳「以二北海王祥位居二其上一、——之一」‖誣殺。

【構刺】コウシ　事をかまへて責めそしる。魏書、田豫傳、論皆——、慨然、使二凶邪之謀不一遂」

【構思】コウシ　かんがへをくみたてる。藏榮緒、晉書「左思欲レ作二三都賦一、——十稔」‖構想。

【構誣】コウブ　無實の罪をかまへてそしる。唐書、李淳傳「初密在二東宮一、李林甫數——」

【構成】コウセイ　○くみたてつくる。○無實の罪を成り立たせる。

【構扇】コウセン　色色と事をかまへておだて騷がす、扇は煽。齊書「——異論」魏書、議時政「——構成煽動。

【構築】コウチク　かまへきづく。蘇軾詩「古邑居民半海濱、歸來——便能爲」

【構雜】コウザフ　互に釁をかまへひすぢ、紛雜を構成する。戰國策「樂趙——而天下皆悅」史記、楚世與レ秦——、戰二于淲中一」‖構亂。

【構筏】コウバツ　いかだを結び作る。宋史、薛弼傳、乃進二——投蕩之說一」

【構兵】コウヘイ　いくさをする。孟、告子「晉、楚——」‖交戰。

【構亂】コウラン　いくさをする。唐書、崔植傳「劉總懼二部將一——、乃先錄二表叙不レ檢者一、發二京師一」

【槓】　コウ　㊥

てこ、ぼう（棒・梃杆）橫さまに

支へて物を起す具。
【槓杆】カウ ○てこ。ぼう。○物理學にて、支點・力點・作用點により、物の抵抗力に打ち勝つしかけに用ふる棒の稱。

【穀】コク コウ 屋 有
穀物の穀とは別
かうぞ(楮)皮の白き楮。
【穀桑】コウサウ かうぞの木。詩經「其下維穀」疏「幽州人謂二之一一一」

【槓】コッ 月
○ひひらぎ「枸一」○ほた。きりかぶ。戴復古詩「地爐燒二一一一、瓦釜煮二梨薪一」韋莊詩「一一墟前捶二布衣一」
【槓火】ヒタ 國こっぱのたきび。

【椄】(一)サ (二)サ 馬 麻
(一)うきき(浮木)いかだ(桴)杜甫詩「奉使虛隨八月一」査。楂に通ず。(二)きる(斬)木を斜にきる、そぐ。
【椄牙】ガ 木の枝のかどだちて入りくみし貌。＝椄杼。
【椄杼】ガ 前條に同じ。牙・杼音通。
【椄桁】ガカ 斜にそぎきりし木より生ずる芽、ひこばえ。張衡東京賦「山無二一一一」注「斜曰レ椄、斬而復生曰レ桁」
【椄髭】ガ 前條に同じ。髭は桁に同じ、ひこばえ(世說)
【乘レ椄】ジョウガツ いかだに乘る。博物志「多賣レ椄、一レ一而去、在二一處一、有二城郭狀一、屋舍甚嚴、遙望二宮中一、多二織婦一」

【樝】サ 卦 禍
もと酹に作る
○しめぎ、油又酒をしぼる具。○さけをこす「一」酒」＝簞。

【槍】(一)サウ (二)サウ 陽 庚
鎗は別字
(一)やり、對手を突き傷ける武器。○くさかり(樵)○いたる(抵)漢書、路溫舒傳「兄獄吏則頭一地」(二)掠一サウ
はははきぼし(彗星)
【槍號】ガウ 槍標に同じ。
【槍旗】ヤウ 槍は茶の芽、旗は茶の葉。葉石林避暑錄「茶極品、惟雙井頭焙、其初萌如二雀舌一者、謂二之槍一、稍敷而爲レ葉者、謂二之旗一」歐陽修詩「一一幾時綠」
【槍攘】ジャウ みだれる貌。池成大詩「一一塵土薄吉冥、見二此纖藉天球温一」
【槍手】ジュ やりを使ふ兵士「宋史、兵志」＝槍隊・槍班。
【槍銃】サウジュウ てっぱう。＝火槍。
【槍術】ジュツ やりをつかふ武技。＝槍法。
【槍標】サウヒョウ やりにつけるめじるし、やりじるし。＝槍號。
【槍桑】サウサウ 木を尖らして立てたるとりて、壘一に桑に作る。唐書、渾瑊傳「引レ衆擁レ險、設二一一自營」

【朔木】サク 處
○ほこ、特に長さの周尺にて一丈八尺ある矛「刀一」「劍一」＝稍。○すごろく(雙陸)又、すごろくのばん。＝博局・棊局。
【槍ル梁賦ル詩】ソウリョウフノシ 魏の曹操が戰場にて矛を横へて詩を賦せしといふ風流の故事。元稹、老杜墓誌銘「曹氏父子、往往——」蘇軾、赤壁賦「釃レ酒臨レ江、——、固一世之雄也」

【楮】シ 支
○はしらのどだい、いしずゑ(柱礎)○ささふ(支)ささへ。家の傾かざるやうに支へる柱、つっかひぼう。
【楮梧】ゴ ささへる、楮は枝に通ず。＝枝梧。
【楮柱】シュク ささへる、つっかひ棒をかふ。爾雅、釋訓、註「相一一也」又其の棒、又は柱。

【榛】(一)シン (二)セン 眞 先
○はしばみ、いばらに似て叢生す、葉は圓形闊大、花は黃色にして葉に先だちて咲く、實は柴栗に似たり。○雜木が衆り生ずる貌。○一一は草木亂生する貌。○國はりのき、はんのき(赤楊)山地自生の落葉喬木、葉は長橢圓形、實は松かさに似て小さく、樹皮と共に染料とす。
【榛蕪】シンブ 次條に同じ。柳宗元、萬石亭記「剗二園杇壤一、翦一發一一」
【榛蕪】シンブ 雜草が生ひしげる。轉じて惡しき習俗、又は政事にいふ。南史、梁武帝紀「百年一一、一朝掃盪」
【榛蔓】シンマン しげれる木蔓。宋之問詩「浩歌步二一一一、栖鳥隨レ我還」
【榛荊】シンケイ しげれるくさき。宋書、謝靈運傳「橫二一一一以蔓除」
【榛菅】シンカン 生ひしげれるかや。韓愈詩「稱多益レ少鑿栽密、豈念幽桂遺二一一」
【榛荊】シンケイ いばらなどが亂れしげる。柳宗元詩「放池想二蕪沒一、遺獄當二一一一」＝榛棘。
【榛笄】シンケイ 婦人の喪中に用ふるかんざし。禮、檀弓「榛以爲レ笄、長尺而總八寸」
【榛草】シンソウ 茂れる草。後漢書、寶武傳「有二大蛇一、自二一一一而出」＝莽草。
【榛刺】シンシ いばらのとげ、いばら。李華

玉詩「權薪桂三桂玉六大道生ニ一一ニ」＝樵刺。

【樵樵】シンシン 草木のみだれしげる貌。揚雄、反騒「枳棘之一一兮」

【樵蔚】シンソウ 雜木のしげる澤。謝靈、樂府期賛「放二志一丘一滅二景一一一」

【樵叢】シンソウ 雜草の生ひ茂れるくさむら。杜甫詩「寡婦沒二混一時菊碎ニ一一」

【樵莽】バウ 草木の亂生するやぶ。くさむら。黃庭堅詩「吳郎楚國材、幽蘭秀ニ一一ニ」＝樵蕪・樵叢。

【樵蕪】ブ ○草木がみだれ茂る。梁武帝詔「時事浸遠、宿草一一、望二古興一懷、言念悼然」＝荒蕪。○邪惡の正道を害するに喩ふ。小學外篇、程明道語「正路之一一、聖門之厳塞」○徹底に喩ふ。杜甫詩「君能徹感激、赤足慰ニ一一」

【樵楽】ソウ ○しばかり、薪く小さくして燎火の資の如きくり。＝樵楽。○はしばみと、くりと。詩、鄭風「樹レ之ー一、椅桐梓漆」

【樵蒼】ソウ 草木が亂れ生ずる、香はくさむら。韓維詩「出レ門步ニ一一、徵逐不レ可レ窮」＝蒼蕪。

【樹】シュ 禡

○うてな（屋ある臺）＝水ー」「月ー」「亭ー」「臺ー」「舞ー」書、秦誓「惟宮室臺ー、陂池侈服」一說に、土を高く築きたるを臺といひ、木を用ひたるをーといふ。○内室なき廟。公羊、宣十六「廟有二室曰一一、無二室曰一」○武技を講ずる屋。左、成十七」

【榱】スイ 支

たるき（屋椽・桷）「華ー」「文ー」

【榱桁】スイカウ たるきと、けたと。法苑珠林「乃至ニ一一藻井、無レ非二寶花間列一」

【榱桷】スイカク たるき、桷は四角のたるき。史記文「仰瞻ニ一一、伏槫二几筵一」

【榱題】スイダイ たるきの頭ナガ孟、盡心「堂高數仞、ー一數尺」

【榱端】スイタン たるきのさきの華飾ヲヲミ＝輔黃圖「飾壁ー一」

【榱椽】スイテン たるき、椽は圓きたるき。晉書、諸葛傳「物各有レ所レ施、ー一之材、木レ合以爲二落落一也」

【榛】セキ 眞

ーー柿セイはひさかき、常綠樹の一、榊サカキの代用とし、又燒きたる灰汁を染料とす。

【榊】

楣（木部六畫）に同じ。

【榻】タフ 陽

○しで（移棟）○わん、椀。

【榻】タフ 合 又、楊に作る

○ゆか、こしかけ、ねだい、狹く長くして低き牀「臥ー」「譚ー」事文類聚續集「陳蕃爲豫章太守、不レ接二賓客一、唯徐孺子來、特設ー一、去則懸レ之」この故事によりて特に賓客を敬待するを懸ーといふ。○ー布フタはきめあらくして厚き布。史、貨殖傳「ー布皮革千石」＝答布。

【榻牀】タフシャウ こしかけ、ゆか、ねだい。張籍詩「出則騎レ驢馳、寢則對ニ一一」

【榻登】タフトウ ふみだい（辭名）

【槌】ツイ 支 縋に通ず

○つち（椎）物を打ちたたく具「木ー」「鐵ー」「棒ー」○うつ（擊）つちにてうつ。

【槌碎】ツイサイ つちにてうちくだく。李白詩「我且爲レ君ー一黃鶴樓」

【槌擊】ツイゲキ つちと、のみと。雜助「魏明帝好ニ一一聲」＝椎鑿・鎚鑿。

【槌杵】ツイショ つち。于志寧詩「鉗鑿緣二其身一、ー一在二其手一」

【槓】㊀コウ ㊁レン 銑 先

㊀こする（木杪・木梢）○仆れたる木「一木」顯に通ず。㊁木がしける（木密）○圓まき、常綠喬木の一、葉剛くして細長く、夏、葉間に實を結ぶ。＝羅漢松。

【槎】ドウ 有

地を刺して草を除く具（塲器）

【槑】

梅（木部七畫）の古字。

【榜】㊀ハウ 敬 漾 ㊁バウ 養 通音

㊀むち。むちうつ（笞撻）○かぢ、かい、舟をこぐ具。○こぐ、船を進める。㊁きふだ（札）たてふだ（表札）かんばん（看板）○かかげ示す、表識する「標ー」○官吏登用試驗の及第者の姓名を掲示する表札。

【放レ榜】ハウバウ 官吏登用試驗の及第者の名をかきしるしたる表札を掲示する。杜牧詩「平明ー一未二花開一」

【榜歌】バウカ ふなうた、榜人の歌。蕭穎士詩「ー一天際聞」劉長卿詩「越客孤舟裏ニ一一」

【榜額】バウガク かけがく。盛弘之荊州記「王舒設二劍ー一、字要必勝二主之一出二新意一自立レ名」＝匾額。

【榜眼】バウ 進士の試郎ち官吏登用試験に第二番の成績にて及第する、榜は掲示札、眼は二の意語、眼は必ず二ある故。雲笈漫鈔「世目二狀元第二人一爲二一一一」

【榜具】バウ 囚人を拷問する具。唐書、敬羽傳「還以二一一一」

【榜札】バウ ふれを掲示するたてふだ、制札。

【榜示】バウ たて札を立てて人に示す、掲示する。

【榜人】バウ せんどう。張協、七命「一一奏二採菱之歌一」舟人・舟子。

【榜歌】バウ 船をこぐかぢの音。賈師泰詩「一一催」曉渡二江心一驚鴛鴦雙雙酒時曲」

【榜給】バウ かいにて船をこぐ。南史、永百年傳「自一一一逆一流」棹ノ約。

【榜楚】バウ 人を罰してむちうつ、楚もむち。司馬光詩「符移空浩浩、一一鎖二撃撃一」榜笞。

【榜笞】バウ むちうつ。史、張耳傳「一一數千」榜楚。

【榜服】バウ むちうちて罪に伏せしむ。漢書、淮南王傳「張一一之」

【榜掠】バウ 囚人をむちうちて拷問する。史、李斯傳「趙高治ノ斯、一一千餘」榜笞。

【榜令】バウ 木の札にかき記したる命令書。

【槃】ハン バン 寒

○たらひ（承水盤）手に持つ小さき盤。禮、内則「少者奉レ一、長者奉レ水」槃盥面盆。○たのしむ（樂）般の借字。詩、衡風「考一在澗」考は成ス○一侈はとどまる、進まず、とどこほる。

【槃匜】ハン 水を注ぎ手をあらふ器、盥器。國語「奉二一一一以隨二諸御一」

【槃盂】バン 黄帝の史官、孔甲の作りし銘、凡二十六篇を一一中に書して法戒とせしもの。史、魏其武安侯傳「田蚡若二貴日一、奉二一一酒前一」

【槃散】サン びっこひく、跛者の歩む貌。散一に跚に作る。史、平原君傳「右脚者一一行跛」蹣跚。

【槃跚】サン 前條に同じ。

【槃礴】バク 両足を前に出して箕の如くに坐す。莊、田子方「公使二人視一レ之、則解レ衣一一」箕踞・箕坐。

【槃辟】ベキ へめぐる、たちふるまひする。漢書、何武傳、法「一一猶レ言二槃旋一也」盤旋。

【槃木】バン ひろがりわだかまれる木。山海經「有二先民之山一、又有二一一千里一」

【榧】ヒ 尾

かや、常緑喬木の一、葉剛く尖り、雄樹は枝立ちて花咲き、雌樹は枝垂れて棗の如き實を結ぶ、食用とし又油をしぼるべし。〓柴。

【榧】ヒ 支 齊

のき（楣）ひさし、椽ヅルの端に在るもの。西京賦「鏤檻文一」

【榧】ヒ 賞

ぬるで、ふしのき、山野に自生する、漆ジルに似たる木。山海經「葉山多一木一」白膠木・勝軍木。

【榑】フ 虞

日の出づる所にありといふ神木の名。扶桑の扶に通ず。說文「一桑神木、日所レ出也」

【榑桑】フウ ○神木の名、扶桑。淮南、覽冥「朝發二一一一」○我國の異稱、日の出る處に在るが故。次條參看。

【榑木之地】フボク 榑木は扶桑に同じ。淮南子「東方之極、自二碣石山一過二朝鮮一貫二大人之國一、東至二日出之次一、榑木之青土樹木之野一」

【榠】ベイ ミョウ 青 通卷 メイ

一種は木葉花實、木瓜ボケに酷似せる喬木、くわりん。〓木李・木梨・榲樝。

【榕】ヨウ 多

あこうの木の一種、熱地に生ず、幹より枝を生じ、枝垂れて又根を生じ、漸次四周に蔓延す。

【榕葉】ヨウ あこうの木の葉。柳宗元詩「一一滿庭驚亂啼」

【榕樹】ヨウ あこうの木。南方草木狀「一一南海桂林多植レ之」

【榔】ラウ 陽

○椰ヤシは熱地に産する木の名、高さ四五丈、枝なく、葉は木巓に生ず、實は房をなして葉中より出づ。○杭ラウはくうつげ。杭（木部六畫）を見よ。

【榔】 椰（木部六畫）に同じ。

【榔梧】ラウゴ はねつるべ。王維詩「草際成二藥局一、林端聚二一一一」〓桔槹。

【榴】 榴（木部十二畫）の俗字。

【榊】 （國字）さかき。

十一畫

【檃】イウ 有 梗

○やく、たく(燎)もやす、薪を積みてやく。詩、大雅「薪之ー之」○かがり、柴をやきて天を祭るにはべ。

【檃括】イウクワツ にはび。周禮、春官「以ー一ー」記ニ司中司命飄師雨師ニ」觀は風の古字。

【檉】ニイ 梗

こくたん。古今注「出交州、色黒而有文亦謂之烏木」

【概】カイ カイ 隊 又、槩に作る

○とかき、ますかき、ますにてはかる量を過不及なきやうにかきならす棒。○はかる(量)○ならす(平)○おほむね、あらまし、ほぼ「大ー」「一略」「一要」○みさを(節操)「節ー」○きりやう(識量)○人品のけだかきやうす(風度)「風ー」○おもむき(趣致)「勝ー」○なげく、慨に通ず、心に感動する。史、季布傳「感ー而自殺」○たる(委貯)○そそぐ。=溉。○一ーは一切の義。

【概要】ガイエウ あらましのかなめなる所、大體の要所。=大要。

【概況】ガイキヤウ あらましのやうす、大略の情況。

【概括】ガイクワツ 類似の事物をひとまとめにくるめる、大きくすべくくる。

【概見】ガイケン ○ざっとみる、おほよそ見わたれる。史、伯夷傳「其文辭不ニ少ー一」○ざっとあらましの見積り。

【概言】ガイゲン あらましをあげていふ。又、其のことば。

【概乎】ガイコ あらまし。莊、天下「ーー皆有ニ聞者ー也」

【概見】ガイケン ざっと見つもりの勘定ヤウ 精察の對。

【概論】ガイロン みさを。北史、劉芳傳「芳、沈雅方正、ーー甚高」

【概說】ガイセツ あらましの說明。

【概則】ガイソク 大體の規則。細則の對。

【概念】ガイネン 心理學にて個個の事物より共通點を抽き出して得たる觀念。

【概量】ガイリヤウ ますにてはかる。又、其のはかりかた。宋史「平ニーー」

【概略】ガイリヤク おほよそ、あらまし。=大略。

【概論】ガイロン あらましにつきての論說。=概說。

【槩】 概(前條)に同じ。

【槔】カウ 巧 又、橋に作る

桔ーケツカウははねつるべ(汲水機)

【樂】 ㊀ガク 覺 ㊁ラク 藥 ㊂ガウ 效 ㊃ラウ 豪

㊀おんがく、音曲のしらべ「古ー」「一曲」「武ー」「妓ー」○音樂を奏する。孟、梁惠王「獨ー樂、與ニ人ー樂、孰樂」○姓。=毅ガは燕の人。㊁たのしむ。苦の反對「苦ー」「歡ー」「娛ー」「行ー」「和ー」「喜ー」「僧ー」○たのしみ。○よろこぶ(悦)○やすんず(安)㊂このむ(好)願ふ。愛する。論、雍也「知者ー水、仁者ー山」㊃伯ーラクは古、善く馬を相し人の名。轉じて廣く馬を相する人をいふ。=博勞。

同訓異字 樂・娛・嬉・熙・悰○樂は苦の反なり、心に苦み憂ふることなきなり、先憂後樂と連用す。○娛はなぐさみなり。莊子「敖遊乎ニ以自娛ニ」○嬉は遊びなぐさむ義、兒嬉は小兒のあそび、水嬉は水あそびなり。韓文「業繕ニ于勤ニ荒於嬉ニ」○熙は和ぎたのしむ、また嬉の字と通用す。○悰は樂なり、心に歡びたのしむ。謝朓詩「戚戚苦ニ無ン悰」

【樂編】ガクヘン わざはひあらんことをねがふ。左傳「歌舞不ン倦、ーレー也」

【樂歌】ガクカ 音樂に合はすうた。=樂章。

【樂說】ガクセツ 周の人、燕の昭王の亞卿となり、齊を伐ちて七十餘城を下す、後ち惠王と合はずして趙に奔る。趙之を觀津に封じ、樂毅君と號す。

【樂器】ガクキ 音樂に用ふる器の總稱。

【樂曲】ガクキヨク うたのふし。樂府古題「遊傳以爲ニーーニ」=音曲。

【樂官】ガククワン 朝廷の音樂を奏する官吏。=伶官。

【樂師】ガクシ 樂人に同じ。=伶人。

【樂人】ガクジン 音樂を奏する人。禮天子傳「大饗ニ廣樂ニ、是日ニーーニ」=伶人、樂師。

【樂章】ガクシヤウ おんがくに用ふるうた。曲禮「毀復ニ常讀ニーーニ」=樂歌。

【樂書】ガクシヨ 音樂の書物。宋史、藝文志「陳暘ーー二百卷」

【樂正】ガクセイ 樂官の長。

【樂隊】ガクタイ ○軍中又國事に奏する音樂のくみ。○西洋風の音樂隊。

【樂典】ガクテン 音樂ののり、音樂の詞歌曲節などを說きしもの。

【樂府】ガクフ ○漢詩の一體。漢書、禮樂志「至ニ武帝ニ、定ニ郊祀之禮ニ、乃立ニーー一ニ、采ニ詩夜誦ニ」○圖ガ義は同じ。

【樂譜】ガクフ 音樂のふしに關する書物。貞觀政詩「六月度船泛ニ御河ニ、大平ーー自調隊」

【樂屋】ガクヤ 圖芝居能樂などの藝人が舞臺に出るしたくをする處。=樂房。

【樂容】ラクヨウ 音樂に合する身ぶり、即ち舞ひ。

【樂律】ラクリツ 音樂の調子。

【樂易】ラクイ やすらかにたのし。荀子「安レ利者常一一、危レ害者常憂險」

【樂遊】ラクイウ 次條に同じ。‖樂侠。

【樂飲】ラクイン たのしくあそぶ。史、燕召公世家「燕國殷富、士卒一一」‖遊樂。

【樂園】ラクエン ○たのしくよろこばしき場所。○人界を離れし快樂鄉。‖天國・極樂。

【樂郊】ラクカウ たのしき場所「詩、魏風、碩鼠」‖樂境。

【樂康】ラクカウ たのしみやすんず。楚辭、九歌「五音紛兮繁會、君欣欣兮一一」

【樂欣】ラクキン たのしみよろこぶ。張協、洛禊賦「悅二聚歩之一一」

【樂郷】ラクキヤウ たのしきところ。蘇軾詩「嗟哉此一一、無二乃姜子敎一」

【樂境】ラクキヤウ ○たのしき場所。‖樂土・樂地・樂鄉・樂園。○たのしき身分境遇。‖順境。

【樂事】ラクジ たのしきまとゐ。陸機詩「一一喜自レ古、悼レ別益傷レ今」

【樂推】ラクスイ たのしむ。たのしみ。晉書、王義之傳「恆恐二見責一於其一一之趣」‖歡樂・樂歡・樂欣。

【樂歡】ラククワン 前條に同じ。‖歡樂。

【樂親】ラクシン 哲學にて世事をすべて快樂なりと觀ずる義。悲觀の對。‖樂觀。

天觀。

【樂今】ラクケイ よろこばし。たのし。今は助字。夏人歌「一一、一一、四牡騑騑、六轡沃今」‖樂只。

【樂業】ラクゲフ 仕事をなすをたのしむ。漢書、成帝紀「衆庶一レ一、咸以康寧」

【樂古】ラクコ 古の道を樂しむ。後漢書、安帝紀「篤學一レ一、仁惠愛レ下」‖好古。

【樂娛】ラクゴ たのしみ。易林「居者無レ憂、保二我一一」‖娛樂。

【樂國】ラクコク うれへなくたのしき土地「詩、魏風、碩鼠」‖樂鄉。

【樂歲】ラクサイ 豐年。孟、滕文公「一一終身飽」

【樂善好施】ラクゼンカウシ 何事にも快活ならずしてぐづぐづする義。鶡冠子「一一、則徒隸之人至矣」

【樂山】ラクザン やまをたのしむ。一說に樂は音ガウ、好む。論、雍也「知者樂レ水、仁者レ一」

【樂只】ラクシ たのし、只は助字。詩、小雅「一一君子、萬壽無レ期」

【樂志】ラクシ 志を樂します。禮記「獨樂二其志一」

【樂事】ラクジ たのしきこと、愉快なる事。謝靈運、擬魏太子鄴中集詩序「天下良辰美景賞心一一、四者難レ并」

【樂所】ラクショ たのしきばしょ。易林「乾作聖男二坤爲二智女一配合成就、長住二一一一一一」‖樂地。

【樂胥】ラクショ たのしみよろこぶ。詩經「君子一一、受二天之祜一」

【樂水】ラクスイ みづをたのしむ。一說に樂は音ガウ好む。樂山を見よ。

【樂生】ラクセイ 此世に生存するを喜ぶ。漢書、刑法志「民亦新免二兵革之饑一、人有二一一之慮一」

【樂善】ラクゼンラクシヨク 善を行ふをたのしむ。五代史、和凝傳「性一レ一好稱二道後進之士一」

【樂戰】ラクセン 氣もちの苦いいくさ。史、楚世家「得二一一一一一

【槻】キ 支
○とねりこ。○つき、つきけやき、欅ケヤキの一種、弓材に用ふ。

【樛】キウ 尤
○まがる、くねる、木が下がり曲る。○くくる、むすぶ（絞）纏に通ず。○むすぼる（交）○めぐる。めぐらす（周繞）○圓木の名、つき。
【樛結】まとひむすぼる。漢書、五行志「天雨二草葉一相一一、大如二彈丸一」＝纏結・糾結。
【樛枝】まがれるえだ。謝朓詩「一一鏡復低」
【樛木】枝の下り曲れる木。詩、周南「南有二一一一、葛藟纍之」
【樛流】めぐりゆく貌。北征賦「渉二長路之縣縣一兮、遠紆迴以一一」＝周流。

【槿】キン 吻
むくげ。落葉灌木の一、葉は三裂し、夏秋の間、赤又は白色五瓣の花を著く、朝開きて夕にしぼむ、故にはかなき喩とす、はちす、きばちす、あさがほ「芳一」「朝一」玉篇「木一朝生夕隕」
【槿域】朝鮮の異稱、むくげの花多きが故。古今記「君子國、地方千里、多二木槿花一」元中記「君子之國、地方千里、多二木蓳花一」一說にむくげは朝開きて色鮮かなるによりて比すと。
【槿花】むくげの花。說文「舜、木槿也、朝花暮落」よりて移り易りの速なるに喩ふ。孟郊、審交詩「小人一一心、朝在夕不レ存」
【槿花一日榮】むくげの花は朝さきて夕にしぼむ。人の榮華のはかなきに喩ふ。白居易、放言詩「松樹千年終起朽、槿花一日自成レ榮」
【槿籬】むくげのいけがき。沈約詩「一一疎復密、荊扉新且故」＝槿牆。

【樞】クヮ 歌
鏡が横ばりて大いなり。左、昭二一「一則不レ容、今鐘一矣」

【樞】クヮイ 隊
○はこの底（筐當）○圓くぬぎ（櫟）

【槨】棹（木部八畫）に同じ。
【槨柩】ひつぎ。槨は棺の外郭。韓愈詩「又如レ遊二九原一、墳墓包二一一一」

【樓】ロウ 尤
○たかどの、二階造の家。○物見。○ものみやぐら。○城門の上の櫓。○ものみやぐらの如きもの。○ものみやぐらの如く高きもの。○ものみやぐらの如く高く積みたるもの。○ものみやぐらの如く高く積みたるもの。○ものみやぐらの如く高く積みたるもの。

【樓閣】たかどの。
【樓觀】たかどの。
【樓船】たかどの。
【樓臺】たかどの。
【樓櫓】たかどの。
【樓閣】たかどの。
【樓觀】たかどの。
【樓船】たかどの。
【樓臺】たかどの。
【樓櫓】たかどの。

【樗】チョ 魚
○あふち、せんだん、木の一種、葉は羽状複葉、夏、淡紫色の花を開く、果は球形、黄熟す、材は器具に用ふ。○樗蒲の略。○樗蒲の采。○樗蒲の采。○樗蒲の采。

【樗蒲】ばくち。
【樗蒲】ばくち。
【樗蒲】ばくち。

【樘】タウ 庚
○はしら。○支柱。○支柱。

【樘】タウ 庚
○はしら。○支柱。○支柱。

【樘】タウ 庚
○はしら。○支柱。○支柱

【樔】㊀サウ 看 ㊁セウ 篠

㊀澤の中の番人の居りて守る草樓（クサヅクリ）○すくひあみ（撩罟）又それにて魚を捕ふ、すくふ。㊁たゆ。たつ（絕）漢書、外戚傳「命一絕而不長」

【樓】シフ 緝

○くさび（楔）何晏、景福殿賦「一似瓊英」○木の名、材質堅し。

【椮】㊀シン 侵 ㊁サン 寒 ㊂サン 咸

㊀木の長き貌「椮一」又、華葉落ちて幹のみ獨り立つ貌。○ふしづけ。柴を水中に積みて魚を取る。㊁木の長き貌。

【樟】シャウ 陽

くす、くすのき。常綠喬木の一、肉桂の屬、葉は卵形、花は小にして淡黃色、材質は緻密にして香氣あり、樟腦及び油を製す。‖普通樟樟香木。【樟腦】ナウ くすのきより取りし芳香ある白き結晶、香料又藥用とす。本草綱目「一一一名龍腦」

【樣】シャウ 養

かい、かぢ（楫）船をこぐ具、舷邊にあり、長大なるを櫓といひ、短小なるを一といふ。蘇軾、赤壁賦「桂棹兮蘭一」

【樞】シュ 虞 ス 通音

○とぼそ、くるる、ひらきどを開閉する軸となる所（樞）「戸一」○轉じてかなめ（主要）大切なる所。○からくり、しかけ（機械）「一機」○まんなか（中央）ねもと（根原）はじめ（始）○大政、大權。○やまにれ、枝に刺ありて、葉は楡に似、葉を食用とす。詩、唐風「山有一」‖刺楡。○天一は北斗の第一星、北極星。‖樞星。

【樞奧】スウオウ 事物の主要なる所。又、重まりて祕密なる所。晉書、陸雲傳「啓レ絵及レ階、遠外二一一」‖盛奧。

【樞要】スウエウ かなめの後漢書、韋彪傳「天下一一、在二於尚書一」‖肝要。

【樞機】スウキ 宮庭をいふ、掖は掖門。宋之問詩「一一調梅暇、林園藝柳初」‖禁掖・掖掖。

【樞衡】スウカウ 樞要の職、衡は、はかり、國家の平を司る重職に喩ふ。魏書、韓子熙傳「職綜二一一、位居二輸道一、擅二忠貞一以奉レ公」

【樞紐】スウカウ ○かなめ、大切なる所、緒は車のくさび。文心雕龍「雅文之一一也」‖樞要。○政事上のかなめなる所。又、其の重職。魏書、高道悅傳「職維一一」‖樞管・樞軸。

【樞機】スウキ ○機は弩（イシ）の引き金、かなめとなるもの、事の肝要なる所の喩。易、繫辭「言行君子之一一、一一之發、榮辱之主也」○國家の大政。

【樞近】スウキン 天子に接近する要職即ち大臣など。李嶠、陳情表「外二之家司一、擬二九流之銓管一、委以二一一一、參二萬機之損益一」張籍詩「遠人望二一一一、常與二醍醐一同」‖樞臣。

【樞密】スウミツ 次條に同じ。轉じて國家の大政。晉書、蕭鴻傳「帝委以二一一一、內外百務、悉稟關決」

【樞管】スウクワン 事のかなめなるにいふ。傳亮、演慎論「非二知レ之難一、愼レ之惟銀、愼也者、言行之一一乎」‖樞要。

【樞憲】スウケン 肝要なる國政ののり。梁書、徐勉傳「自掌二一一一多レ所二刪潤一」

【樞臣】スウシン 宰相をいふ。王禹偁詩「先皇愛二獨醒一二一一」

【樞相】スウサウ 樞密使の異稱。文獻通考、職官考「樞密使、帶二相印一爲二一一一」

【樞星】スウセイ 北斗の第一星。宋書、符瑞志「見レ大電光繞二北斗一一一照二郊野一」‖天樞。

【樞屬】スウゾク 樞密院の屬官。楊萬里文「一一與二宰屬一異二劇易一暇也」

【樞紐】スウチウ 文章中の主眼なる所。紐は結びめ。文心雕龍「文之一一、云亦極矣」

【樞軸】スウヂク とぼそと車の心木（シンギ）と、轉じてかなめ、肝要の義とす。朱熹詩「憑此南北極、一一通相當」‖樞要。

【樞庭】スウテイ 樞府に同じ。王溥「蘇頌李レ紹、遷二同一一」

【樞密】スウミツ 大切にしてひそむべきこと。又、其の政。李嶠文「入總二一一一」

【樞府】スウフ 宋の樞密院の異稱、肝要なる軍政を掌る官府。蘇軾文「位在二一一、才爲二文師一」宋史、李諮傳「在二一一、專務二革濫賞一抑僥倖」

【樞柄】スウヘイ 政治上の權柄。唐書、太宗文德順聖皇后長孫氏傳「無レ爲二一一、以二外戚一參二朝請一足矣」

【樞密】スウミツ ○政事上、祕密にすべき大いなる事がら。唐六典「典二兵禁中、故名二一一一」‖機密。○祕密にすべき大政を執る所。即ち一一院。北史、劉潔傳「潔久在二一一一」‖樞府。

【樞密使】スウミツシ 唐代は內侍の官。五代は宰相の職。宋代は天下の武事を掌る最高官。便は樞密院の長官。‖樞相。

【樞務】スウム 最も大切なる政務、樞要の國務。白居易詩「當レ國慙二一一一」

【樞路】スウロ 政治上のおもき位地。‖要

路・常路。

【櫬】㊀シュク　㊁サク　㊂遲　㊃晉　㊄セキ

㊀もみぢ、楓の一種、我國にていふ紅葉（コウヨウ）㊁しほむ、木の葉が落ちる。潘岳、閑居賦「庭樹一以灑落」

【樅】ショウ　多

○もみ、常緑喬木の一、葉は羽狀に排列して細く剛く、材は建築及器物を作るに用ふ。○うつ（撞）鐘や鼓などをうち鳴らす。史、司馬相如傳「一金鼓」○一は峻峙（シュンジ）する貌。又木の高く茂る貌。

【樅樅】ショウ　樹の高くしげり合ふ貌。黃庭堅詩「夏木已一一」

【櫆】セイ　圏

ひつぎ、棺の小なる者。漢書、高帝紀「令從軍死者、爲一一歸其縣」

【櫆車相望】セイシャ　櫆は小棺、軍に從ひて死する者は、櫆を以て其の屍を鄉に送る。櫆を載する車、道路に相望むは、戰死者の多きをいふ。漢書、韓安國傳「士卒傷死、中國——」

【櫆櫆】セイ　小さきひつぎ。漢書、成帝紀「民爲二水所一流壓死、不レ能二自葬一、令二都國一給二——一」顏師古注「——小棺」

【斲】セン・ゼン　㊀遲　㊁晉　㊂ザン

○古、紙筆なかりし時、文字を書くに用ひたる木のふだ（牘様）○轉じて、文書・讀書・著書などの義とす「鉛一」西京雜記「揚雄懐鉛提一、從諸計吏一訪殊方絕俗之語、作方言」○てがみ（簡札）王令詩「幸由西南風一時作寄我一」

【斲人】ゼンジン　ほんよみ、讀書する人。法言、淵騫、叔孫通一一也」＝儒者。

【斲本】ゼンボン　板にすりし書物、すりまき。東觀餘論「此帙所レ錄、杜子美詩、頗與二今行一一一小異」＝版本・印本・刻本。

【樕】ソク　圏

樸一ボク）は叢生（ムラガリ）する小木、柴の類。詩、召南「林有樸一」一說に、櫟の別名。

【椿】㊀タウ・トウ　㊁シュン・ショ　多　江

㊀くひ（杙・橛）韓愈詩「斬拔椿與一」㊁つく。晉書、宣帝紀「挫二其喉而一其心」＝搗。

【樗】チョ　クヲ　魚　祃

○一種の惡木、樹皮あらく漆に似、葉に臭氣あり。ごんずる（權萃）莊、逍遙遊「吾有二大樹一、人謂之一、其大本擁腫不中繩墨、其小枝卷曲不中規矩」○轉じて無用のものに喩ふ。○あふち（楝・樗）「山一」

【樗材】チザイ　自己の才を謙していふ、不材の義。樗櫟之材を參看。

【樗散】チサン　役に立たぬ人の喩。樗櫟散木の略、樗櫟は用ふる所なき大木、卽ち、散木なり「莊、逍遙遊・莊、人間世」杜甫詩「蒂落仍汲引、一一衞恩憐」＝樗散。

【樗蒲】チョホ　ばくち。晉書、陶侃傳「一一者、牧豬奴戲耳」＝博奕・樗蒱。

【樗里子】チリシ　秦の惠王の弟、樗里に居る、故に號とす、滑稽多智、秦人號して智囊といふ、越差を伐ちて功あり、右相と爲る「戰國策秦」

【樗櫟】チレキ　二者共に役に立たぬ惡木、櫟は櫪に同じ、轉じて無用の人物に喩ふ。又、自己の謙稱。晉書、故事「自謙曾曰二一一之材一」＝樗櫟。

【樗櫟】チレキ　前條に同じ。晉書、李十讓傳「昔有二松柏後身化爲二一一一」歐陽詹詩「桃李有二奇質一、一一無二妙資一」

【樗櫟之材】チレキノザイ　樗櫟に同じ。莊、逍遙遊「惠子謂二莊子一曰、吾有二大樹一、人謂二之樗一、其大本擁腫而不中二繩墨一、其小枝卷曲而不中二規矩一」莊、人間世「匠石之一齊（中略）見二櫟社樹一、其大蔽レ牛（中略）是不材之木也、無レ所レ可レ用、故能若レ是之壽」

【樋】トウ　東

○木の名。○圏ひ、とひ、かけひ、竹木等にて作りし水道。

【樋代】ヒシロ　圏伊勢の神宮の神殿をさめおくはこ。御一一に

【樊】ハン　元　凡

○かご、とりかご（籠）「一籠」○かこふ（圏）かこひ。○かき、まがき（籬）詩、小雅「止於一」榛に通ず。○馬のはらおび、鞅に通ず。○一然ゼンは紛雜なる貌。莊、齊物「一然殺亂、吾悪能知其辨」○姓。一於期は戰國の燕の將。一噲は漢の高祖の臣。

【樊川】ハンセン　○陝西省長安の近南に在る樊川の別名。○唐の杜牧の號。「杜ー」「ー文集」

【樊然】ハンゼン　ごたごたとみだれる貌。字解參看。

【樊素小蠻】ハンソセウバン　唐の白樂天の二妾の名。白居易詩「櫻桃樊素口、楊柳小蠻腰」（新小志「白樂天有二妾、樊素善歌、小蠻善舞」

【樊中】ハンチュウ　鳥かごのなか。莊、逍遙遊「澤雉十步一啄、百步一飲、不ル期レ蓄二于ー一」＝籠中。

【樊籠】ハンロウ　○とりかご。劉兼詩「羣禽爭肯戀ニー一」○轉じて自由を束縛するもの、官職などに喩ふ。北史、楊休之傳「此官清華、但煩劇、妨二我賞適一、眞是ー一」

【樊籬】ハンリ　○まがき、かき。資牢詩「窮居積雨壅ニー一」○學術文章などの門戸に喩ふ。史通「馮衍評劉不レ足レ窺二班范之藩籬一」藩、樊通ず。

【樒】ビツ　ミチ　質　通音ミツ

○ぢんかう、熱地に產する香木。＝密香樹。○國しきみ、佛に供へる木の名。＝櫁（國字）

【標】ヘウ　蕭

○こずゑ（木末・梢・杪）又、高き枝。○しるし（標識）○めじるし、しるし（表識）「商ー」○はた（旌旗）○まと、めあて（準的）「目ー」「ー的」「ー準」○てほん（程式）「ー本」○はしら（柱塾）○しな、位置（品格）きり。う（器度）○かく（書）しるす（記）「ー題」○あらはす、表識する。あらはる（表出）

【標格】ヒョウカク　高くめじるしとすべきかた。又、其の品格。杜甫詩「早年見ニー一秀氣沖二星斗一」＝標準・風範。

【標榜】ヒョウバウ　人の目に立つ、目だちてあらはれる、榜は鏡にうつる。袁宏文「與ル才不レ以ニー一、故久之而後顯」

【標季】ヒョウキ　物又時の末。漢書、谷永傳「當二陽數之ー一」＝末季。

【標記】ヒョウキ　しるしをつける、めじるしとする。＝記號・符號・標章。

【標旗】ヒョウキ　めじるしに立てるはた。

【標儀】ヒョウギ　外面にあらはれたる樣子。孫楚銘「ー一條暢、起棲開直」

【標挹】ヒョウユウ　めじるしとしてかかげる。杜牧文「ー一峙倚、巍乎二紀」

【標顯】ヒョウケン　しめしあらはす、特に目立つやうにする。唐書「仁貴恃二驍悍一、欲レ立二奇功一、乃著二白衣一自ー一」

【標候】ヒョウコウ　道程を示す爲めに道傍に立てたる一里塚、里程標。天中記「ー一ニ于道傍」

【標札】ヒョウサツ　門戸に掲げるなふだ、戸主の姓名番地族籍等を記す。＝門牓・表札。

【標枝】ヒョウシ　木の最も高き枝。莊、天地「上如ニー一、民如二野鹿一」

【標指】ヒョウシ　主要とするむね、指は旨。宋史、程頤傳「以二大學・語・孟・中庸一爲ニー一、而達二于六經一」

【標紙】ヒョウシ　めじるしにつける小ぎれの紙、ふだがみ。

【標幟】ヒョウシ　めじるし。後漢書、皇甫嵩傳「張角等一時俱興、皆書二黃巾一爲ニー一」＝標識。

【標識】ヒョウシキ　めじるし。宋史、禮志「植レ木繫レ彩、以爲ニー一」＝符號。

【標秀】ヒョウシウ　めじるしとなりてひいでる。晉書、楊裕載記「此兒非二惟吾門之ー一、乃佐レ時之眞器也」＝標挺。

【標章】ヒョウシャウ　しるし。＝記號・符號・標記・標幟。

【標樹】ヒョウジュ　氣高く、あらはれて立つ。唐書、王義方傳「性嗜特、高自ー一」

【標峻】ヒョウシュン　めだちてたかし。陶弘景文「神擬ー一、精輝卓逸」＝標高。

【標準】ヒョウジュン　てほん、めあてとすべきのり、準はみづもり、それに依りて水平のめあてとする。韓愈、伯夷頌「聖人乃爲世之ー一也」杜甫詩「示レ我百篇文、詩家ー一ー一」

【標準語】ヒョウジュンゴ　一國内の標準たるべきことば。我國にては教育ある東京市民の語。

【標準時】ヒョウジュンジ　經度に依りて異なる地方時の不便を避ける爲め、一定の子午線上に於ける地方時にもとづき、之を一定の區域内に於ける時の標準とするもの。

【標注】ヒョウチュウ　前條に同じ（宋史、藝文志）＝頭注。

【標稱】ヒョウショウ　てほん、のり。（後漢見閻志「三家鼎峙、百代ー一」＝標準・模範。

【標擢】ヒョウテキ　めだちてぬきんでる。吳均文「像二玆竹之ー一ー一」＝標秀。

【標的】ヒョウテキ　めじるし、めあて。唐書、宗室傳贊「可レ謂二宋室ー一ー一焉」＝目的。

【標牌】ヒョウハイ　たて、敵の矢石を防ぐ具。一說に標は楯にして、牌は盾なりと。蘇軾詩「長刀擁ニー一」宋史、兵志「多是硬弩手及ー一手」＝旁牌。

【標榜】ヒョウバウ　○標識の爲めに立てる木の板。○人の善事を書きあらはす。○ほめる。○ほめそやす。○ほめて人に推薦する。○ほめて人を引き立てる。○ほめて人を引き立てる。○ほめて人を引き立てる。

【標榜】ハウ ○かんばん、札を立てて表する。史、酷俠世家、注「ニ＝其里門ニ」○名目をつけて、ほめたてる。後漢書、黨錮傳「海内希レ風之流、途共相ー＝」＝稱揚。○己の主義主張をあらはしてかんばんにする。

【標本】ヘウ みほん「博物ー＝」＝標品の

【標名】ハウ 名をしるす。後漢書、儒林傳「若下師資所レ承、實ニノー爲ト證者上乃著レ之云」

【模】 ボ モ 國

○のり(法)かた(法式)てほん(軌範)○かたち(形)○かた、いがた(樣型)もやう。○のっとる、象ドル、にせる、墓に通ず。○おしひろめる。○なでる(撫)○木の名。淮南、草木「ー木生ニ周公冢上、其葉蓉青夏赤、秋白冬黑、以ニ色得ニ正也」

【模楷】カイ てほん、のり 楷は法式。後漢書、李膺傳「天下ー＝李元禮」元禮は膺の字。北史、長孫紹遠傳「其容止堂堂、足レ爲ニ當今ー＝ー＝」＝模表・模則。

【模倣】ボウ かたどりまねす。＝模倣。

【模憲】ボン 由り從ふべきてほん。典型文「誕ー＝ニ示レ世作レ敎」

【模則】ソク てほん。魏志、阮瑀傳「倜儻放蕩、行レ己疎欲、以ニ莊周ニ爲ニ一ー」＝儀則・模楷・模表。

【模倣】ハウ ○一定のしかた、かた、のり。○かたち。＝形式。

【模樣】ヤウ 形式。閱見後錄「得ニ一黃磁小碗絣、ー＝甚ト

【模錢】タウ たねせん(種錢)見本のぜに。大淸會典「順治十八年頒ニ發康熙通寶ー＝于各省局ニ專鑄ニ康熙錢ニ」

【依レ樣畫ニ葫蘆ニ】ヤウニエガキコロヲカク 樣式に隨ひてふくべを描く、何等の發明する所なきをいふ。續湘山野錄「陶尚書穀乞レ罷ニ禁林ニ、太祖曰、依レ樣葫蘆且作且作、不レ許ニ罷職ニ、復不ニ進用ニ、穀因題ニ玉堂ニ云、堪レ笑翰林陶學士、年年ーー」葫蘆は一に瓠瓜に作る。

【樣米】ヤウ 淸代、米穀の檢査に備へる見本の米。

【樣式】シキ ○一定のしかた、かた、のり。○かたち。＝形式。

【樣制】セイ かたち、形式。閱見後錄「得ニ一黃磁小碗絣、ー＝甚ト

【樣錢】セン たねせん(種錢)見本のぜに。大淸會典「順治十八年頒ニ發康熙通寶ー＝于各省局ニ專鑄ニ康熙錢ニ」

【樣】 ヤウ 漾

○のり(法)てほん(法式)○いがた(模形)○かたち、ありさま(狀態)やうす。○如くの義「鏡ー＝」○あやもやう(文樣)「花ー＝」○一ー＝は一色の義。王建、宮詞「新珍一ー殿頭黃」○人の姓名の下に付ける敬稱。○可クの義「忘れざるー注意せよ」

【樣子】ヤウ ○かた。形式の義の俗語。朱子語錄「小學書、做ニ人底ー＝」○なりふり。＝容姿。○ありさま。＝狀況。○わけ、仔細。＝理由。

【樣】 ヨウ 養

㊀木の名、松の屬「松ー＝」○木から出るやに(木脂)莊、人間世「以爲ニ門戶ー則液ー＝」㊁あきにれ、楡の屬。

【樣木】ボク あきにれ。左、莊四「楚王卒ニ于ー＝之下ー＝」

【樓】 ロウ 尤

「其夫人欲レ去、作ニ賦字ー＝曰、惡ー＝」○國あや、かた。＝紋樣。

【樓】 ㊀マン 寒 ㊁マン 翰 寒

㊀こて(杇)壁を塗る具。○のき(椽)㊁にんじんぼく(荊)

【槾】 ㊀モン 元 ㊁ラウ 養 マン 寒

㊀木の名、松の屬「松ー＝」○木から出るやに(木脂)莊、人間世「以爲ニ門戶ー則液ー＝」㊁あきにれ、楡の屬。

【槾木】ボク あきにれ。左、莊四「楚王卒ニ于ー＝之下ー＝」

【槾】 ヤウ 養

○のり(法)てほん(法式)○いがた(模形)○かたち、ありさま(狀態)やうす。○如くの義「鏡ー＝」○あやもやう(文樣)「花ー＝」○一ー＝は一色の義。王建、宮詞「新珍一ー殿頭黃」○人の姓名の下に付ける敬稱。○可クの義「忘れざるー注意せよ」

【槾子】ヤウ ○かた。形式の義の俗語。朱子語錄「小學書、做ニ人底ー＝」○なりふり。＝容姿。○ありさま。＝狀況。○わけ、仔細。＝理由。

【棵】 ルオ 支 紙 果

○かんじき、禹が山行に乘りし所のもの。○國ユキ雪中を行くに踏込まざるやうに編みて作りし履物

【棲】 ㊀レン ㊁レン 先 銑

㊀器物の名、瑚璉の璉に通ず。㊁くゎんぬき、横の閂木。○枇杷の類。

【樓】 ロウ 尤

○たかどの、重屋、二階だての建物「高ー」「玉ー」「ー閣」「登ー」○やぐら、ものみやぐら「望ー」城のやぐら（城観）「城ー」「譙ー」○岑ーは山の巓の鋭きもの。○凡そ重りて居をなすものをいふ「一車」「ー船」

【樓屋】ロウオク　たかどの。宋史、呉志「居ニ此ー一、沃以ニ泥漿ニ」

【樓下】ロウカ　二階のした。後漢書、王恂傳「殺ニ妾家十餘口ニ埋在ニーー」

【樓角】ロウカク　たかどののすみ。杜甫詩「ーー臨レ風迴、城陰帶レ水昏」

【樓閣】ロウカク　たかどの。西京雜記「ーー窗櫺、轉相連注」白居易、長恨歌「ーー參差五雲起」‖樓臺。

【樓臺】ロウダイ　二階づくりのいくさぶね。南史、王琳傳「乃大營ニーー一、將ニ圖ニ義陽ニ」

【樓宮】ロウキュウ　二階づくりの宮殿。潘子眞、十八公賦「謀數ニーー於紫陌ニ」

【樓居】ロウキョ　たかどののすまひ。史、孝武紀「公孫卿曰、仙人可レ見、仙人好ニーーニ」

【樓觀】ロウカン　たかどの、ものみ。謝、月令「仲夏之月、可ニ以居ニ高明ニ」注「高明、謂ニーー一也」

【樓月】ロウゲツ　たかどののつき。白居易詩「ーー織織早、波風婆婆新」

【樓閣】ロウカク　やぐらのある門、二階づくりの門。史、蘇秦傳「前有ニーー軒轅、後有ニ長城美人ニ」‖樓門。

【樓戟】ロウゲキ　やぐらに備へたるつづみ。曹伯啓詩「隣砧催ニ海暮ニーー辨ニ深更ニ」

【樓子】ロウシ　たかどの、二階家、子は助字。僧惠祥詩「幾レ塘ーー十三扉」

【樓車】ロウシャ　ものみやぐらのつきたるくるま。左、宣十五「登ニ諸ーー一、使レ呼ニ宋人一而告レ之」

【樓榭】ロウシャ　たかどのと、うてなと、榭は屋根ある臺。德宗實錄「京師ーー之臨レ衢者、皆墮」

【樓上】ロウジョウ　二階のうへ。史、平原君傳「美人居ニーーニ」

【樓松】ロウショウ　枝葉の笠の形をなせるまつ、かさまつ。抱朴子「ーー、偃蓋松也」

【樓簫】ロウショウ　たかどのにて吹く笛の音。李洞詩「一聲歌望玉ーー」

【樓前】ロウゼン　たかどのの前なり。薛稷詩「野外煙初合、ーー花正飛」

【樓船】ロウセン　○二階づくりの大ぶね。史、平準書、大能ニ昆明池ニ治ニーー一、高十餘丈」○將軍の名、漢の武帝、楊僕を以てーー將軍と爲し、南越を擊つ。○ーー軍は水軍。王海「招ニ募習レ水善レ波搏レ舟便利之人ニ就ニーー軍ニ」‖水師。

【樓望】ロウボウ　たかどの。史、天官書「海旁氣、氛ニーー」岑參詩「ーー重ニ疊氣ニ邑里雜ニ殽人ニ」

【樓中】ロウチュウ　たかどののなか。雜體詩「雨過晚涼生、ーー枕簟清」

【樓櫓】ロウロ　物見のやぐらと城上のひめがき。宋書、桂陽王休範傳「裝ニ治城池ニ修ニ起ーーニ」‖樓堞。

【樓殿】ロウデン　樓と宮殿と。齊書、林邑國傳「起ニ城池ーー一、王服ニ天冠ニ如ニ佛冠ニ、身被ニ香纓絡ニ」

【上レ樓】ジョウロウ　次條に同じ。白居易、春江詩「閑レ階只聽朝暮鼓、ーレー空望往來船」

【登レ樓】トウロウ　たかどののにのぼる。盧僕詩「去レ國三巴遠、ーレー萬里春」

【登レ樓清嘯】トウロウセイショウス　樓に上りて清く嘯く。晉書、劉琨傳「徘徊ニ胡騎所レ圍數重、城中窘迫無レ計、琨乃乘レ月ーー、誤聞ニ之者悽然長歎」

【樓門】ロウモン　二階造りのもん。‖樓閣・樓觀。

【樓闕】ロウケツ　西城の闕名。漢書、西域傳「都善國、本名ニーー一、王治ニ扜泥城ニ、去ニ陽關ニ千六百里」

【樓櫓】ロウロ　敵を望むために設くる城のやぐら。後漢書、公孫瓚傳「ーー千里」‖譙樓。

【樞】ロク　屋

ーー樞はろくろ、はねつるべ（井上汲水器）。庾信詩「道險臨ニーー樞ニ」

十二畫

【樋】エツ　月

○こむら（木叢）○こかげ（樹陸）「林ー」「深ー」「ー下」○なみき（行路樹）「道ー」

【橄】カン　感

ーー欖は熱地に産する果樹の一、葉は橢圓形、春、小白花を開く、實は食用とし、又油を製す。三輔黃圖「漢武帝破ニ南越ニ、得ニーー欖百餘本ニ」

【機】キ　微

○からくり、しかけ「ー械」「ー關」○石弓のばね（弩牙）○かなめ（主要）○たくみ（巧）たくむ。○きざし（兆候）事の起るきっかけ。○氣運の變化、萬物の自然の變化「天ー」莊、至樂「萬物皆出於ー」○をり、しほ「ー會」「乘ー」○あふ（會）○こまやか、かすか（密）「ー密」○いとぐち、はし（端緒）○あやふし（危）○星の名、北斗魁星の第三。○はたらき（活動）發動の由る所。大學「其ー如ニ此ニ」○みち（道理）○はた、はたお

り「一織」又其の具。

【機紙】キシ　國家のはかりごと。紙は謀。醉翁談錄「選二駙馬一既協二賢一一」

【機運】キウン　時のめぐりあはせ。魏書、申纂傳「一一可レ乘、實在二茲日一」‖時運・機運。

【機要】キエウ　かなめ、肝要。魏志「紹二吉今子胸懷一包二計謀之一一」

【機緣】キエン　佛道のさとりをひらくべき因緣。

【失レ機】シツキ　ておくれになる。機會をとりはづす。

【見レ機】ケンキ　物ごとのきざしを知る。機會をきとる。易、繫辭「君子見レ幾而作、不レ俟レ終レ日」幾は機、事の兆の微かなに先づあらはるるもの。

【先レ機】センキ　世の中のうるさき機事をうちわすれて心しづかなる義。李白詩「陶然共一レ一」

【機械】キカイ　からくり、巧なるしかけによりて運轉する具。莊、天地「有二一一者、必有二機事一」

【機械水雷】キカイスイライ　敵の船艦をうちしづめる爲め海中にしづめ置く水雷。

【機械之心】キカイノシン　巧にいつはるこころ。淮南子「一一、忘二其自不一粹、神德不レ全」‖機心。

【機巧】キカウ　機械のたくみ。後漢書、張衡傳「衡善二一一一、尤致二思于天文一」

【機檻】キカン　からくりのしかけあるを

り。書經、疏「設以捕二虎豹一、穿レ地爲二深坑一、又設二機於上一、防二其躍而出一也」劉基詩「虎豹落二一一一、坐服興卓前」

【機宜】キギ　場合に適して宜しきを得る。盛唐、絕交書「不レ識二人情一、關於一一」

【機撰】キセン　機密にして肝要なるはかりごと。魏書、李平傳「內參二一一、外寄二折衝一」

【機會】キクワイ　をり、はづみ。輿鑑、與二鄂州柳中丞一書「勳皆中二一一一、以取二勝於當世一」

【機關】キクワン　はかる、はかりごと。五代史、鄭仁誨傳「軍中一一、仁誨多レ所二參決一」‖機略・機謀。

【機發】キクワン　次條に同じ。元、管岡じ。唐書、裴垍傳「中外一一、垍多レ所二參與一」

【機管】キクワン　まつりごとの管理。晉書、劉聰載記「淫穢無レ度、一一不レ修」

【機關】キクワン　○からくり、活動のしかけを施したる機械。一一砲○からくりとなりて活動を助けるもの。鬼谷子「口者、一一也、所三以開二閉情意一也」○國できとなりて活動する「一一新聞」

【機關砲】キクワンハウ　からくりじかけにて一分間に數百發の彈丸をうちだす火砲。

【機警】キケイ　さとし。魏志、武帝紀「太祖少一一有二權數一」

【機關】キクワン　いつはり。唐書、劉晏傳「任一一爲レ政」‖機詐。

【機業家】キゲフカ　はたおりを機業とする人。

【機嫩】キゼン　あひ子の思はく。轉じて、北方の氣分。

【機悟】キゴ　さとり。さとし。晉書、劉柩傳「爲二後進領袖一、一一多能」‖機警。

【機根】キコン　さとりをひらくべき心。

【機梭】キサ　はたのひ。又、はたをおるわざ。白居易、朱陳村詩「一一聲札札、牛驢走紜紜」‖機杼。

【機絲】キシ　はたのいと。杜甫詩「織女一一虛二夜月一」

【機事】キジ　○秘密の政務。晉書、荀勗傳「久在二中書一、專管二一一一」○巧に詐ること。次條參看。

【有二機事一者必有二機心一】キアルモノハカナラズキカイアリ　機巧の事を爲すものは機巧の心あり。莊、天地「有二機械一者、必有二機事一、——」

【機事不レ密則害レ成】キジフミツスレバスナハチガイナル　機微の事は愼密なるべし、然らずば他に洩れて禍を致し、成功を敗る。易、繫辭「幾事不レ密則害レ成、是以君子愼密而不レ出也」幾・機同じ。

【機心】キシン　いつはりたくめるこころ。莊、天地「有二機械一者、必有二機事一、有二機事一者、必有二一一一」

【機熟】キジク　物事のはづみが十分にととのふ。范成大詩「一一兩忘情」

【機樞】キスウ　かなめ、からくり、樞は戶のくるる。緊要なる官職地位。蔡邕獨斷文「遷入二京輦一、途升二一一一」‖樞機。

【機敏】キビン　はかりごと。數は術數。管子「明二于一一一者、用レ兵之勢也」

【機穽】キセイ　たくみて陷れる、穽はおとしあな。唐書、李紳傳「猛山多レ虎、擒レ菜者病レ之、詔二一一一一一、然竟信讒改、射、不レ能レ止、紳至盡去レ之、虎不レ爲レ暴」

【機政】キセイ　主要なるまつりごと。唐書「帝還三自力一一、然竟信讒改、擒二於終南一」

【機先】キセン　事の起らざる前。宋史、鮮于侁傳論「早識二安石敗亡事、與二呂誨一同見二一一一」

【機綜】キソウ　はたのをさ（筬）黃庭堅詩「溪毛亂二鄧艾、鉄蒺藜二一一一」

【機速】キソク　すばやくさとし。南史「詩云、天保下報レ上也、時服其一一」

【機智】キチ　機に臨みてきをきかせるはたらき、きてん、とんち。

【機軸】キヂク　○からくりと、事の心木と、物事のはたらきの起る中心。轉じて國の政に喩ふ。世說、識鑑「裴悅有二口才一、能二短長說一、亦有二理一、既下說二司馬孚文王、大見二親待一、識鑑二一一、餘面見レ珠」○しくみ、工夫、「新一一」

【機杼】キチョ　○機ははた、杼ははたのひ、機なり。古詩「機雜聲二相和一、札

札弄ニーー」‖機鏡。○轉じてはたおりのわざ。虞綸詩「路入二寒村一ーー鳴」○轉じて工夫ノ巧の義。魏書、祖瑩傳「疑以二文學一見レ重、常語レ人曰、文章須下自出ニーー一、成中一家風骨上、何能共レ人同二生活一也」

【機光】キクワウ　きざし。陰符經「ーー將レ成、心以圖レ之」歐陽建詩「古人述ニーー一、策レ馬遊二近郊一」‖機一に幾に作る。‖機兆。

【機弩】キド　仕掛けある石弓。方回詩「跋足逸ニーー一、甕頭取荷レ戈」

【機能】キノウ　身體各部機關の活動力。

【機樞】キスウ　大切にしてひむべきことがら。潘尼文「執二機衡一握ニーー一」

【機微】キビ　かすかなるきざし。幾微に同じ。

【機敏】キビン　○すばやくさとし。魏書、程駿傳「性ーー好レ學、盛夜無レ倦」‖警敏・機警。○氣が利きて善く要領を得る。唐書、長孫無忌傳「應對ーーレ」

【機變】キヘン　臨機のはかりごと。孟、盡心「爲ニーー之巧一者、無レ所レ用レ恥焉」‖權謀。

【機辯】キベン　機に臨みて巧なる辯口。魏書、蕭賁傳贊「ーー文雅、猶有レ可レ觀」晉書、馮紞傳「紞少博二涉經史一、識悟ーー」

【機鉾】キホコ　心氣の向ふきっさき、源家にて禪を談ずる首腦の鋒鉦銳利なるをいふ。

【機謀】キボウ　こみいりたるはかりごと。‖機策・機略。

【機密】キミツ　重要にしていりこみたるひみつの政。漢書、劉向傳「深留二聖意一、審二固ーー一」

【機密近臣】キミツキンシン　いりこみたる大政の祕密に參與する臣。後漢書「何敞疏薦二郅壽一曰、臣愚以爲、壽ーー、匡求爲レ職」

【機密費】キミツヒ　政府の機密の事件につかふ金。

【機務】キム　いりくみて大切なるまつりごと、機密の政務。宋書、王弘傳「參二讚ーー一」

【機利】キリ　よきはづみに乘じて得る利益。史記「齊趙設二智巧一、仰二ーー一」

【機略】キリャク　機に應じて宜しきを制するはかりごと。「ーー縱橫」‖機謀。

【橘】キツ　キチ　質

○たちばな、柑子カウジ・蜜柑カン等の果樹の總稱「甘ー」「金ー」書、禹貢、注「小曰ー」、大曰柚」‖木奴。○橘ーカツは枇杷の異名。○國カチ四姓の一、敏達天皇の子孫葛城王諸兄エに始まる。

【橘柚】キツユウ　○たちばなと、ゆずと。書、禹貢「厥包ーー錫貢」○密柑類の稱。杜甫詩「荒庭垂ニーー一」

【橘花】キツクワ　たちばなのはな。齊民要術「異物志曰、橘樹、白花而赤實」

【橘顆】キツクワ　橘包に同じ。顆はつぶ。‖橘子・橘實。

【橘井】キツセイ　醫者をいふ。類書集要「晉蘇耽種ニーー一井、以療二人疾一、時投病者、食二橘葉一飲二泉水一即愈、號ニーー一」に本づく。

【橘中之樂】キツチュウノタノシミ　葬をうつたのしみ。幽怪錄「巴邛人、家有二橘園一、霜後橘盡收斂、有二大橘一、如二三斗盎一、巴人異レ之剖開、每橘有二一叟一、鬚眉皤然、肌體紅明、皆相對棊戲、談笑自若、一叟曰、——、不レ減二商山一、但德下不レ得二深レ根固レ蔕一、爲二思人一摘下耳」幽冥錄にも出づ。

【橘包】キツホウ　橘の實。後漢書、楊由傳「獻二橘數包一」蘇游詩「ーー霜後美」

【橘化爲レ枳】キツカスルトキトナル　淮南の橘を淮北に移植すれば枳になる。人も境遇によりて其の氣質の變ずるに喩ふ。晏子春秋「晏子曰、嬰聞レ之、橘生二淮南一則爲レ橘、生二淮北一則爲レ枳、葉徒相似、其實味不レ同、所二以然一者、何、水土異也」

【樺】クワ　麻　祭

かば、かばざくら、喬木の一、葉は桑に似、樹皮は白く、夏白花開き、冬實を結ぶ。

【樺燭】シカウ　かばの皮を以て蠟を卷きて燭火とせしもの。沈佺期詩「無レ勞二乘ニーー一」

【樺太】カラフト　北海道の北に在る島、明代、黃夷と稱す、一名庫頁。‖庫太。

【橫】一　クワウ・ワウ　敬　二　カウ

㊀よこ、衡に通ず、よこさま、ぬき、東西をいふ。南北を縱といふの對。○よこて、よこがは、よこあひ、かたはら（旁側・側面）○よこたはる、よこたふ、よこに帶びる「ーー刀」「ーー槊」○よこぎる、よこに過ぎる。○しきりに設ける木（關木）○たつ（斷）流を絕ちて渡る。後漢書、杜篤傳「東ーー乎大河」○學舍。‖黌。㊁よこしま、ほしいまま（放縱）理に順はず亂暴なり「ーー暴」勢がさかんにしてわがままなり「ーー行」

同訓異字　橫・縱・放・肆・恣・擅の別は縱（糸部十一畫）の條を見よ。

【橫舍】オウシャ　次條に同じ。後漢書、鮑德傳「修二起ーー一」

【橫塾】オウジュク　學校、橫は黌。後漢書、儒林傳論「遊二庠序一、聚二ーー一者、蓋布二之子弟盛一矣」‖學舍・黌舍。

【橫佚】オウイツ　次條に同じ。

【橫逸】オウイツ　思ふままに行ふ、勝手にふるまふ。晉書、石勒載記「赤眉黃巾ーー二宇宙一」

【橫溢】オウイツ　水がみなぎりあふれる。‖

橫梁。

【橫雲】ワウウン よこにたなびくくも。錢起詩「一一嶺外千重樹、流水聲中一兩家」

【橫夭】ワウエウ 天命を全うせずしてわかじにする。雲笈七籤「百病一一、多由二飲食一」‖夭死・短折。

【橫柯】ワウカ よこにのびたる枝。吳筠文「一一上蔽、在レ晝猶昏」

【橫艾】ワウガイ 壬ハヱの稱。史、歷書「一一涒灘、太始元年」注「一一、壬也、涒灘、戌也」

【橫街】ワウガイ よこまち。まちに橫たはる。張說詩「一一敞二御樓一」

【橫海鱗】ワウカイリン 海をよこぎる大魚。轉じて大人物に喩ふ。李白詩「登國一杯水、雖レ容——」

【橫行】ワウカウ ○ほしいままにゆく。史、季布傳「樊噲曰、臣願得二十萬衆一、一一匈奴中一」‖衝行。○橫さまにあるく。本草「蟹」注「以二其一一一、則曰二螃蟹一」

【橫行介士】ワウカウカイシ 蟹の異名。蟹譜「出レ卽下レ砦之際、忽見レ蟹、稱爲二一一一、以安二衆心一」

【橫行闊步】ワウカウクワツポ おほでを振ひてほしいままにあるきまはる。

【橫隔膜】ワウカクマク 胸腔と腹腔とのへだてをなせる筋肉膜。

【橫看】ワウカン よこさまに見る。蘇軾詩「一一成レ嶺側成レ峰、遠近高低無二一同一」

【橫絞】ワウカウ よこのえだみち。王褒詩「河橋兩陸絕、一一數路分」

【橫議】ワウギ ほしいままに論議する。孟、滕文公「諸侯放恣、處士一一」

【橫求】ワウキウ ほしいままにむさぼる。漢書、王嘉傳「絞レ私一一、恩已過レ厚」

【橫恣】ワウシ ほしいままにしてしへたげる。唐書「鉄関忠後出、一一最甚」

【橫逆】ワウギヤク よこしまにして理に順はず。孟、離婁「有レ人於此二其待レ我以二一一一、則君子必自反也」

【橫渠學派】ワウキヨガクハ 宋の張載（橫渠先生）の學派。

【橫戈】ワウクワ ほこをよこたへ撫ふる様。唐書、馬璘傳「一一而出、入賊陣者數四、賊因披靡遁去」

【橫臥】ワウガ よこさまにふす。晉史、賈陽傳「有二六尺方牀一、思レ義未レ通、則一一二、其上一不レ盥二其義一、終不レ肯食一」

【橫禍】ワウクワ 受けるべき理由なくして受けし、不慮の悲慘なるわざはい。淮南、繆稱訓「內能極而一一至者、天也非レ人也」

【橫潰】ワウクワイ くづれみだれる。梁書、沈約傳「高祖義旅二一一、志寧二區夏一」

【橫廊】ワウラウ あまねくひらく。淮南子「一一六合、操二賢萬物一、此聖人之遊也」

【橫賈】ワウコ よこよりつらぬく。唐書、郭子儀傳「悉レ軍道一一其營一」

【橫截】ワウセツ ほこをよこたへて持つ。李商隱詩「羅敷莫得レ夸、一一寔能當」

【橫擊】ワウゲキ よこあひからうつ。南史、臨川王道規傳「一一大破レ之」

【橫疫】ワウエキ よこれ、多く梅雨に由りて生ずる病。

【橫肱】ワウコウ ひぢを橫たへる。禮記「室中不レ翔、竝坐不レ一一」

【橫酷】ワウコク むごたらしく苦しめる。唐書、劉知幾傳「時史一一、淫及二善人公卿一被二誅死一者、醜相及」‖殘酷。

【橫財】ワウザイ 不正なるたから。獨異志「一一我無一一緡、豈可レ蘊哉」

【橫草之功】ワウサウノコウ 原野を跋渉する功勞、卽ち戰場の草をふみわけて橫さまに僵ッせしむる義。漢書、終軍傳「無二一一一得レ列二宿衞一食レ祿」

【橫斃】ワウヘイ ほこをよこたへ持つ。南史、梁桓祖傳「曹操賈丕、上レ馬一一、下レ馬談論」

【橫門】ワウモン くわんぬき。

【橫死】ワウシ いぬじに、天命を全うせずして死す（變死）。老死・病死などの對。南史、陸襲傳「人無二一一一、報二陸君一」

【橫死九法】ワウシノキウホフ 圖非命の死の九法。釋氏要覽「僧祇律云、一知レ非二餚益食一而貪食、二不レ節レ量食、三內未レ消更食、四强縱吐、五已飽欲レ出而强噉、六食不レ調レ病、七醫レ病不レ隨レ量、八顚二服藥一、九无二智慧一不レ能レ調レ心」

【橫恣】ワウシ 次條に同じ。史、魏其武安傳「武安盛暨二溫夫所一レ偽一一、卽遣不レ道一」

【橫肆】ワウシ ほしいまま。唐書、杜希全傳「頗越レ法一一」‖橫恣。

【橫斜】ワウシヤ よこざまになめに出る。林逋詩「疎影一一水淸淺、暗香浮動月黃昏」

【橫行】ワウカウ まるきばし。柳貫詩「一一橋通一徑幽、方山湧レ梁似二鼇虬一」

【橫吹】ワウスイ えびすの樂の名。古今樂錄「一一胡樂也、張騫入二西域一傳二其法於長安一」

【橫生】ワウセイ さかんにおこる。庾信文「逸態一一、新情振起」

【橫政】ワウセイ 法度にはづれたるほしいままなる政。孟、萬章「一一之所レ出、橫民之所レ止、不レ忍レ居也」‖暴政・惡政・虐政。

【橫制】ワウセイ ほしいままに命令して治める。唐書、劉賢傳「方宜二人擾レ兵、一一海內一」‖苛制。

【橫勢】ワウセイ 連衡の勢。晉書、皇甫謐傳「蘇子出而六主合、張儀入而一一成」

【橫絕】ワウゼツ よこぎりわたる。史、留侯世家「鴻鵠高飛一擧千里、羽翮已就、一一四海一」

【橫截】ワウセツ よこにたちきる。晉書、王濬傳「吳人於二江頭要害處一、以二鐵鎖一一一之一」‖橫斷。

【橫說豎說】ワウセツジユセツ 縱橫自在に說く。蘇

苑「――、猶未知尚上關候子」【横堅】ワウ よこぼり。隋書、長孫晟傳「南北四百里、掘為二一一横塹一」【横奏】ワウ よこからふさぎとめる。【横帯】ワウ 腹によこたへ持つ。戦國策「將軍黄金一鎰、賜二乎諸侯之間一」【横刀】ワウタウ 刀を腹によこたへる。後漢志、武紹傳「一レ一長揖而去」【横道】ワウ ○みちによこたはる。漢書、孫寶傳「侯文曰、財寃一レ、不レ宜三復問二狐狸一」○よこしまなるみち、不正の道。法苑珠林「一一作レ賊、劫二奪人衣一」＝邪道。【横奪】ワウ ほしいままによこどりする。說苑「時レ有二罪而一一、非レ所二以禁一暴也」【横談】ワウ ほしままにはなす。王惲詩「妓筵即適意、他日盛一一」＝縦談。【横斜】ワウ よこさまにたつ。魏志、公孫瓚傳「乃築二京磯一一一江路一」【横陣】ワウ よこに敷す。司馬相如賦「花容自獻、玉體一一」陸機擬詩「倚レ檻當レ戸自一一」＝横臥。【横長】ワウ 横物にて細長き圖巻。許子閑叢傳に、其の讃式あり。【横苦】ワウ 圖○わがままかって。○なまける。○正直でなくずるい。【横徴】ワウ ほしいままに租税をとりたてる。元稹文「一一暴賦、不レ奉二典常一」【横墜】ワウ 涙が盛んに落ちる。王粲賦「悲二蓄郷之難一隔一兮、涕一一而弗レ禁」【横逆】ワウ 心を十分にほしいままにする。韓嘉彙詩「才闕直欺文字飲、風騒一一士夫筵」【横笛】ワウ よこぶえ。唐書、禮樂志「寧王善吹一一、遷官大臣募之」【横難】ワウナン 思ひがけなき災厄。論衡「不レ出二一一一、不レ得二從說一」【横波】ワウ 紵に視る、横目で見る、秋波の波の喩。傳毅、舞賦「眉連娟以増橈兮、目流漸而一一」【横放】ワウ ほしいまま。気志、孫和何姫傳「子弟一一、百姓患レ之」＝放肆。【横暴】ワウ ほしいままにあらし。晉書、江統傳「師役煩殷、寇賊一一」【横陌】ワウ はちまき。【横披】ワウ 書畫などのよこに開く巻物。許渾詩「桃溪風景宮一一、渾似二秦人避レ亂時一」＝横長。【横被】ワウ あまねくおほふ。班固、西都賦「一一六合一」【横覆】ワウ みだりにつひやす。後漢書、梁節王傳「不二敢復有一所一一」【横幅】ワウ よこはばの廣ききれ。晉書、侯人傳「男子衣以二一一但結束」【横文】ワウ よこもじ、西洋の文字。＝歐文。【横分】ブン 首をきる、身と首と處を異にす。漢書、梅福傳「雖二伏レ質一一、臣之願也」【横矛】ワウボウ ほこをよこたへ持つ。蜀志、張飛傳「瞋レ目一レ一、目身是張翼徳也、可二來共決一死、敵皆無二敢近者一」【横陣】ワウ 次條の略。李化龍詩「一一十萬吐二霜花一、風攪二軍聲一咽二暮笳一」【横磨剣】ワウマ 磨きたる剣を腰に横たへたる兵卒。宋濂、郭弼傳「編二十萬一一役レ之、則東西止二日所一出入、莫レ非二王土一矣」【横民】ワウ よこしまなるたみ。横政を見よ。＝暴民・悪民。【横目】ワウモク 人の眼の横、人の目は横になりゐる故。荘、天地「夫子無レ窮二于一一之民一乎」【横遊】ワウ はびこりあふれる。孔武仲詩「鯨奥復指二天涯一去、長川一一殊浩浩」＝横溢。【横流】ワウ 水がほしいままにあふれながれる。孟、滕文公「洪水一一」＝氾濫。【横殺】ワウ 罪にあらざる者をみだりに殺す。晉書「無罪一一、冤痛已甚」【横領】ワウリヤウ 圖他人の物をよこどりする「一一罪」【横恣】ワウシ ほしいままにはげし。後漢書、息夫躬傳「廣布一一、懼徘徊兮」【横臥】ワウ ほしいままにねる。＝横長。【横行】ワウカウ ほしいままにあるく。戦國策「伏レ軾撫レ衝、一一天下一」＝横行。【横裂】ワウレツ よこざまにさく。李昭文「中斷一一、鳥銷腸」【横綱】ワウカウ 圖相撲行司吉田追風より力士中、體格技量の抜群の者に授ける白麻の綱、又其の資格ある本人。

【橋】㊀ケウ ㊁カウ 廣 集

㊀はし（水梁）水を横ぎりわたして造りし道路。○よこぎ。○もとる（戻）○たかし（高）○高に通ず。○わたす。○山行に用ふる車。史、河渠書「山行乘一一」○木の名、高くして仰ぐ。故に父の道に喩ふ。○一説はあなどる（慢）荀、榮辱「一一世者、人之殃也」㊁つよき貌、勁起の貌。【橋起】キヤウ つよくおこる。莊、則陽「欲去就、於レ是一一」【橋彫】テウ はしのかげ。白居易詩「晴虹一一出、秋鷹橫空來」【橋架】カ はしのけた。【橋閣】カク 川又は谷にかけたるはし。魏志、郭艾傳「鑿二山通一レ道、造二徑一一」【橋梓】シ 二木の名、橋は南山の陽に在り、高くして仰ぐ、以て父の道に喩ふ。梓は北山の陰に在り、實して俯す、以て子の道に喩ふ「尚書大傳、周傳」【橋津】シン はしと、わたしと。盧照隣詩「悠悠天下士、相送落一一」＝津梁。【橋約】シヤク まるきばし。王禹偁詩「山泉何濺濺、切裂無一一」【橋松】シヤウ 高き松。一説、枯れて枝なき松。詩經「山有一一」

【橋頭】キョウ はしのほとり。舊唐書、望夫阿「自家夫壻無二消息一、卽恨ー賣卜人」‖橋畔・橋邊。
【橋畔】ハン はしのたもと。薛能詩「御溝ー曲江亭」‖橋頭。
【橋邊】ペン はしのほとり。劉禹錫詩「落水ー春日餘、碧流清淺見二瓊沙一」‖橋頭。
【橋梁】リョウ はし。馬融、圍陵、注「川澤之阻、則ー二之一」王充論衡「魚鱉浮而爲ニーー一」
【橋掛】ガカリ 能樂の樂屋から舞臺へとほる廊下、はしの形に造る故。

【橇】ケウ セツ ゼイ 舊 或は橋・蹻・蹻に作る

そり。形、箕の如く、雪中、又は泥土を行くもの。史、夏紀「泥行乘ー」

【橛】ケツ 月

○くひ(杙)○とじきみ、門のしきみ(門閫)○かぶ、木のきりかぶ(斷木)○しんぎ(車鉤心木)○くつわ(馬銜)史、司馬相如傳「猶時有二銜ー之變一」○つち(槌)鼓を擊つ槌。

【橾】 (前條)に同じ。

【槭】シ 國

なつめ、さねぶとなつめ(酸棗)果は核が太く酸味あり。孟、告子「養其ー棘」

【橡】シャウ ザウ 異 栃は國字

○とち(七葉樹)樹實は鈍色の染料とし、又食ふべし。列、說符「夏食二菱芰一、冬食ニ橡栗一」つるばみ。○ー皮樹は護謨の木、多く阿拉伯印度等に産す、其の肥を以てー皮を製す、革に似たるを以て像皮とも稱く。
【橡栗】シャリツ ○とちの實と、くりの實と。字解參看。○しばぐり、栗の小なるもの、橡の實に似たり。‖橡栗・芧栗・橡栗・櫟茅栗。

【樹】㊀ジュ ㊁シュ 通 俗に樹に作るは非

㊀き、たちき(木)「果ー」「綠ー」「深ー」○くさき、植物の總名、草木。淮南、原道「薄ー根于水、木ー根于土」○かき、へい(屛)論、八佾「邦君ー塞門」おほひ。○ゆか(牀)○うゑつけ(稼)呂覽、尊師「務種ー」㊁うう、木をうゑる(植)易、繫辭「不ー不ー」○たつ(立)書、說命「ー后王君公」
【樹木】ジュボク 樹・種・植・栽・藝の則は種(禾部九畫)の條を見よ。○ヲ樹・建・立・竪・植・起の則は建(支部六畫)の條を見よ。
【樹陰】ジュイン 木かげ。北史、魏收傳「折ー節讀ー書、夏日坐二板牀一、隨ニーー一講誦」‖樹蔭。
【樹蔭】ジュイン 前條に同じ。
【樹腰】ジュヨウ 樹木の根にちかき所。杜甫詩「斜暉轉ニーー一」
【樹怨】ジュエン うらみをむすび立てる。樹恩の反對。戰國策、ニー於齊桑一」
【樹恩】ジュオン めぐみを立てる。後漢書、馮衍傳「ーレー布ー德、易二以周洽一」
【養樹】ヨウジュ 樹木を培養する。柳宗元、種樹郭橐駝傳「吾閒ーレーー得ニ養ー人術一」
【樹藝】ジュゲイ 樹を吹く風のひびき。黃庚詩「ーー秋先到、窓虛月正涼」
【樹立】ジュリツ 木のうつろ。詩經「碩儀」疏「人遠則走入ニーー中一」‖樹洞。
【樹勳】ジュクン いさをを立てる。杜甫詩「將軍ーレー起二安西一」‖立功・樹功。
【樹蕈】ジュジン 木耳の大いなる者。蘇軾詩、黃蕊養二土黴一老精生ニーー一」
【樹藝】ジュゲイ 草木をうゑる。孟、滕文公「后稷敎ニ民ー稼穡ニーー五穀一」‖種藝。
【樹敎】ジュケウ をしへを立てる。書、案傳「當ー宜ー化ーレーー爲ニ準則一」
【樹功】ジュコウ いさをを立てる。漢書、鄧騭傳「枯木朽株、ーレーー而不レ后」
【樹穀】ジュコク 穀物をうゑる。管子「一年之計、莫レ如レーレー」
【樹子】ジュシ 諸侯の嫡子、天子の命を以て嗣ぎしもの。孟、告子「無レ易ニーー一」注「樹立也、已立世子ニ不レ得ニ擅易一也」
【樹私】ジュシ 公平ならざることを爲す。晉書、羊祜傳「入臣ーレー則背レ公、是大憝也」
【樹脂】ジュシ 木のあぶら、木のやに。
【樹人】ジュジン 人才を養成する。管子「一年之計莫レ如レ樹レ穀、十年之計莫レ如レーレー」
【樹木】ジュボク 草木をうゑる。漢書、貨殖傳序「敎ニ民稼ニ穡樹ニ藝五穀六畜一」‖種樹・樹藝。
【樹樹】ジュジュ きぎ、どの木も、どの木も。王維詩「ーー皆秋色、山山唯落暉」
【樹植】ジュショク ○たつ、たてる。○樹子方言「ーー、立也」○うゑる‖樹藝。
【樹聖】ジュセイ やなぎの異名。
【樹椿】ジュシュン こずゑ。謝靈運詩「石壁穿ニ林隈一、飛泉發ニーー一」‖樹杪。
【樹篤】ジュトク 徒黨を組み立てる。宋書、恩倖傳「挾レ朋ーレーー、政以レ朋成」
【樹帖】ジュチョウ つぎきの臺木。
【樹蕈】ジュジン 木のいただき。杜甫詩「黃鳥在ニーー一正百二囀度守一」‖樹頂・

樹上・樹頭。
【樹德】トクヲウ 徳を樹る立てる。書、泰誓「一レ務レ滋、除レ惡務レ盡」
【樹碑】ヒジュ いしぶみを立つ。後漢書、桓彬傳「共一レ一而頌焉」＝立碑。
【樹杪】ベウジュ こずゑ。王維詩「山中一夜雨、一ニ百重泉」＝樹梢。
【樹末】マツジュ こずゑ。貫密詩「一ニ吹レ煙綠、人家住ニ洞西一」＝木末。
【樹木】モクジュ たちき。禮、月令「季夏之月、一ニ方盛」
【樹立】リツジュ ○たすけてたたしむ。魏志、注「以レ此深奇レ之、而一ニ之意定」○堅く自ら立つ。後漢書、陳蕃傳「一ニ一風塵ニ、抗ニ志塵俗一」
【樹欲レ靜而風不レ止】キシテカゼヤマズホッスレドモ 子が親を養はんとするも、親死して世に在らざるに喩ふ。韓詩外傳「一ニ、子欲レ養親不レ待矣」

【樗】㊀シュ 虞 セウ 篠 ㊁樞（木部九畫）に同じ。㊀長き木の貌。㊁ひさぎ。
【樗爽】シュクサウ 草木の盛んなる貌。西京賦「一ニ楩楠」
【樗蒱】チョホ 竹木の長くして直き貌。蜀都賦「一ニ森萃」

【樅】ショク 職 イキ
くひ（杙）牛をつなぐ杙。

【樂】ズキ 紙
○たる（垂）○しべ、はなしべ。＝蘂。
【樂樂】ズイズイ ○垂れさがる貌。盧諶詩「一ニ芬敷蕊」○しべ毎に、どのしべも、どのしべも。杜甫詩「枝枝捷到レ地、一ニ自開レ春」

【樵】セウ 蕭
○ざっき、たきぎ（雜木散材）○きこる（采薪）詩、小雅「一ニ彼桑薪」又其の人、きこり「一ニ夫」「一ニ戸」○やく、たく（焚）公羊、桓七「一ニ之者何、以レ火攻レ之也」○やぐら、ものみ。＝譙。
【樵隱】セウイン 深山に住むきこりと、隱者と。陳信詩「一ニ悔同レ路、人禽或對レ巢」
【樵謳】セウオウ きこりのうた。方回詩「農謳通ニ稗史一、騷詠入ニ一ニ一ニ」＝樵唱・樵歌。
【樵柯】セウカ をのえ。陸游詩「一ニ爛遊棊方劇」
【樵家】セウカ きこりのいへ。劉滄詩「棊園地遠ニ山色一近、一ニ路入ニ樹煙一微」＝樵戸。
【樵歌】セウカ きこりのうた。朱徳潤文「一ニ牧唱、相與應ニ答於翠微空曠之間一」＝樵唱。
【樵流】セウリウ きこりと、すなどりと。李紳詩「路交ニ村陌一混ニ一ニ一ニ」＝漁樵。
【樵徑】セウケイ きこりのかよふこみち。李都詩「捨レ事入ニ一ニ一、雲木深ニ谷口一」
【樵月】セウゲツ きこりのいへ。趙抃詩「一ニ人家閒處見」＝樵家。
【樵采】セウサイ たきぎをとる。魏略「夏侯覇從妹年十三四、在ニ本郡一出行一ニ」＝采樵・采薪。
【樵子】セウシ きこり。白居易詩「靜聞一ニ語」＝樵人。
【樵唱】セウシャウ きこりのうた。王勃詩「郊童一ニ返、漁叟釣歌還」＝樵歌・樵謳。
【樵蘇】セウソ きをこり草をかる。史、淮陰侯傳「一ニ後爨、師不ニ宿飽一」注「取レ薪曰レ樵、取レ草曰レ蘇」
【樵叟】セウソウ きこりのおきな。沈佺期詩「伐木丁丁一ニ一ニ」＝樵父・樵翁。
【樵女】セウジョ きこりの女。宋之問詩「一ニ越吟歸」
【樵笛】セウテキ きこりの吹くふえ。周權詩「數聲一ニ人何處」
【樵童】セウドウ きこりのわらべ。杜甫詩「落雜生ニ野徑一、斤斧任ニ一ニ一ニ」
【樵夫】セウフ きこり。史、孟嘗君傳「一ニ牧豎」
【樵荒】セウクワウ きこりのをの。温庭筠歌「丹丹山雞紅尾長、一聲一ニ驚飛起」
【樵林】セウリン はやしにきこる。郭武詩「一レ一者樵子、樵歌入ニ雲曜一ニ」

【樺】クワ 麻 ケ
○たる（垂）○しべ、はなしべ。＝蘂。
【樺樺】クワクワ ○垂れさがる貌。盧諶詩「一ニ芬敷蕊」○しべ毎に、どのしべも、どのしべも。杜甫詩「枝枝捷到レ地、一ニ自開レ春」

【樸】ボク 屋 ハク 覺
○ざっき、たきぎ（雜木散材）○きこる（采薪）詩、小雅「一ニ彼桑薪」又其の人、きこり「一ニ夫」「一ニ戸」○やく、たく（焚）公羊、桓七「一ニ之者何、以レ火攻レ之也」○やぐら、ものみ。＝譙。
【樸樕】ボクソク 深山に住むきこりと、隱者と。陳信詩「一ニ悔同レ路、人禽或對レ巢」
【樸謳】ボクオウ きこりのうた。方回詩「農謳通ニ稗史一、騷詠入ニ一ニ一ニ」＝樵唱・樵歌。
【樸柯】ボクカ をのえ。陸游詩「一ニ爛遊棊方劇」
【樸家】ボクカ きこりのいへ。劉滄詩「棊園地遠ニ山色一近、一ニ路入ニ樹煙一微」＝樵戸。
【樸歌】ボクカ きこりのうた。朱徳潤文「一ニ牧唱、相與應ニ答於翠微空曠之間一」＝樵唱。
【樸流】ボクリウ きこりと、すなどりと。李紳詩「路交ニ村陌一混ニ一ニ一ニ」＝漁樵。
【樸徑】ボクケイ きこりのかよふこみち。李都詩「捨レ事入ニ一ニ一、雲木深ニ谷口一」
【樸月】ボクゲツ きこりのいへ。趙抃詩「一ニ人家閒處見」＝樵家。
【樸采】ボクサイ たきぎをとる。魏略「夏侯覇從妹年十三四、在ニ本郡一出行一ニ」＝采樵・采薪。
【樸子】ボクシ きこり。白居易詩「靜聞一ニ語」＝樵人。
【樸唱】ボクシャウ きこりのうた。王勃詩「郊童一ニ返、漁叟釣歌還」＝樵歌・樵謳。
【樸蘇】ボクソ きをこり草をかる。史、淮陰侯傳「一ニ後爨、師不ニ宿飽一」注「取レ薪曰レ樵、取レ草曰レ蘇」
【樸叟】ボクソウ きこりのおきな。沈佺期詩「伐木丁丁一ニ一ニ」＝樵父・樵翁。
【樸女】ボクジョ きこりの女。宋之問詩「一ニ越吟歸」
【樸笛】ボクテキ きこりの吹くふえ。周權詩「數聲一ニ人何處」
【樸童】ボクドウ きこりのわらべ。杜甫詩「落雜生ニ野徑一、斤斧任ニ一ニ一ニ」
【樸夫】ボクフ きこり。史、孟嘗君傳「一ニ牧豎」
【樸荒】ボククワウ きこりのをの。温庭筠歌「丹丹山雞紅尾長、一聲一ニ驚飛起」
【樸林】ボクリン はやしにきこる。郭武詩「一レ一者樵子、樵歌入ニ雲曜一ニ」

【樸】ボク 屋
つけ（黄楊）常緑喬木の一、材は帶黄色にして緻密、梳又は印材とす。
【樸樕】ボクソク つげのくし。禮、玉藻「櫛用ニ一ニ一ニ」
【樸約】ボクヤク つげのさかづき。禮、禮器「犧尊一ニ一ニ」

【樸】ボク 屋
○をり、ぶたのをり（圈）○ぶたのしきわら（豕蓐）○薪柴を聚めて其の上に居る。○屋なきたかどの。
【樸巢】ボクサウ 薪をあつめてつくれる巢居。禮、禮運「昔者先王未レ有ニ宮室一、冬則居ニ營窟一、夏則居ニ一ニ一ニ」
【樸椓】ボクタク 屋宇なきたかどの。張衡、西京賦「一ニ重茅、鱗鱗列列」

【樸】ボク 屋
叢（又部十七畫）の古字。

【樽】ソン 元
別に罇に作る。罇は古字。

○さかだる「酒ー」「金ー」「芳ー」○圓すべて酒だると同じ造りの容器の稱「醬油ー」

【樽架】ソンカ 酒樽を置くに用ふる臺。

【樽俎】ソンソ さかだる、俎もたる。王安石詩「扁舟信ㇾ所ㇾ過、行不ㇾ厭ニー一」

【樽罰】ソンバツ さかだるの栓をぬくきり。

【樽約】ソンヤク さかだると、さかづきと。白居易詩「田翁逢ㇾ我喜、默起具ニー一」＝酒樽俎約。

【樽酌】ソンシャク さかだると酒をくむ器と。韋應物詩「須臾在ニ今夕一、ー一且稽留」

【樽酒】ソンシュ 樽のさけ。後漢書、孔融傳「常歎曰、坐上客常滿、樽中酒不ㇾ空、吾無ㇾ憂矣」＝樽酒。

【樽前】ソンゼン 酒だるのまへ。杜牧詩「身外任ニ塵土一、ー一極ニ歡娛一」白居易詩「花下忘ㇾ歸因ニ美景一、ー一勸ㇾ酔是春風」

【樽俎】ソンソ 酒だると牲を載せるつくゑと。史、樂書「陳ニー一列ニ籩豆一」

【樽俎折衝】ソンソセッショウ 平和の交際の間に敵の衝車をくじく、外交上の談判にひけをとらず、國威をかがやかすにいふ。晏子春秋「孔子曰、不ㇾ出ニ樽俎之間一而折ニ衝千里之外一、晏子之謂也」に出づ。

【樽畔】ソンハン さかだるのほとり。元結詩「醒醉在ニー一、始爲ニ吾性情一」＝樽前。

【樽壺】ソンコ たると、はこと。潘尼、釋奠頌「設ニー一于兩楹之閒一、陳ニ罍洗于阼階之左一」

【樽彝】ソンイ さかだる、彝は雲雷を畫きし樽。白居易詩「ー一盛ニ九醞一、水陸羅ニ八珍一」

【橢】ダ 俗字 俗 橢は

○ほそながし（狹長）○こばんがた（長圓形・扁圓形）○木の枝なきこと。

【橢圓】ダエン ○こばん形。○數學にて圓錐曲線の一種。

【橡】タウ 俗 今、概に作る

○ささふ。ささへ（支）○つかばしら、つっかひばしら（支柱・斜柱）

【橡制】タウセイ 舟にさをさす。韓琦詩「乘ㇾ興命ニ輕舟一、縱賞經ニー一」

【橙】㊀タウ ㊁トウ 俗 俚

○だいだい、蜜柑の一種、實は大きくして酸味強し「黃ー」「ー黃橘綠」㊁几ケ又、朮ケの屬、俗に発に作る。

【橙黃橘綠時】タウクワウキツリョクノトキ だいだいが實色を帶び、蜜柑が綠色を呈する、初冬小春の時節。蘇軾、初冬作贈ニ劉景文一詩「一年好景君須ㇾ記、正是ー一」

【橙黃色】タウクワウショク 橙の實の如く少しく赤みを帶びたる黃色。

【橈】㊀ダウ ㊁ゼウ・ネウ 通 俗 效

㊀まがりたるき（曲木）○まがる。まぐ、かがむ（曲・枉）○たわます、たわむ。○よわらす。漢書、高帝紀「謀ー楚權」よわる（弱）易、大過「棟ー凶」よわし、たわみやすし。○みだる（亂）○くじく、くだく（摧折）○ちらす（散）易、說卦「ー萬物者莫ニ疾乎風一」㊁ふねのさを、かい、かぢ（楫）陳子昂詩「停ー問ニ土風一」

【橈酌】ダシャク ためまげる。轉じて變更する。唐書、鄭注傳「ニー朝法一」

【橈撓】ダウ 曲りてたわむ貌。元結賦「楹ー兮未ニ堅、棹根根兮可ニ屈一」

【橈直】ダウチョク すぐなるものをたわめ曲げる。荀悅漢紀「ー一曲、對方直一」

【橈敗】ダウハイ くだけやぶれる。左、成二「卻能ー一」

【橐】タク 圓

○ふくろ（囊）小をー、といひ、大を囊といふ。一解に底なきふくろ「垂ー」「龍ー」○ふいご、ふいがう（鞴）○ー一は杵にてたたく聲。詩、小雅「椓ニ之ー一」

【橐缶】タクフ ふくろのかね。紫鹿詩「ー一均數心如ㇾ水」漢書、陸賈傳「賜ニ陸生橐中裝直千金一」＝囊缶。

【橐吾】タクゴ つはぶき、款冬に似て葉は深綠、單瓣黃色菊花狀の花さく、食ふべし。急就篇、注「ー一似ニ款冬一、而腹中有ㇾ絲、生ニ澁地一、華黃色、一名獸蘇」

【橐駝】タクダ ○絡駝の異名、背に封肉あり、ふくろ（橐）に似たり、故に名づく。史、蘇秦傳「秦說ニ楚王一曰、大王誠能用ニ臣之計一、燕代ー一其馬、必實ニ外廐一」○植木屋の銭。柳宗元、郭橐駝傳「郭ー一不ㇾ知ニ始何名一、病ㇾ僂隆然伏行、有ㇾ類ニー一者一故鄉人號ニ之駝一、駝聞ㇾ之曰、甚善、名ㇾ我固當、因捨ニ其名一、亦自謂ニー一」に本づく。＝橐駝師。○せむし、くぐせ。＝佝僂。

【橐橐】タクタク ○きねにてたたく聲。字解參看。○履ぐつの聲。明史「太祖聞ニ履聲ー一」

【橐筆】タクヒツ 文筆に從事する。漢書、特ㇾ筆ㇾ侍」注「秉ㇾ筆、管筆、插ニ筆于首一以紀ㇾ事」とあるに本づく。＝執管筆「侍臣ー一皆福厲」

【橐籥】タクヤク かぢやの用ふるふいがう（鞴）の外箱、籥は內

部の管。老子「天地之間、其猶ニ一ニ乎」

【橦】㊀トウ 東 ㊁ショウ 多 ㊂タカ・トウ 江 ㊀花をつむぎて布とする一種の木の名「一華」㊁きぎれ。○敵陣を衝き破る戦車。㊂とばりの柱(帳柱)○はたざを(旗竿)＝幢。○ほばしら(帆檣)

【樸】㊀ハク ボク 屋 覺 ㊁ボク 沃に通ず ㊀きぢ(木素)木材の地質のままにて加工せざるもの。○あらき、山から伐り出したままにてけづらざる材木。○轉じて天真・質素の義とす「質一」「素一」㊁むらがる(叢)しげる(茂)○一屬ショクは堅く附著する義。

【樸素】イソバク すなほにしてまじめ。堯は專一。荀子「民不ニ一淫ニ衆目一則民一一」

【樸斲】ボクタク 削らざるあら木のたるき。淮南子「斲ニ一不ニ騈、枿題不ニ枅一」

【樸學】ボクガク ○上古樸實の學にして、後世の用に適せざる雅。漢書、儒林傳「武帝曰、吾始以ニ倪寬一爲ニ一一一弗ニ好一」○轉じて、名譽利益などを目的とせざるちみな學問。蘇軾詩「我家六男子、一一非ニ時新一」

【樸鈍】ボクトン かざりけなくして愚鈍がつよい。唐書、張孝忠傳「天性一一」＝木強。

【樸愚】ボクグ かざりけなくおろか。漢書「道里遼遠、類ニ蔽一一ニ」＝樸魯。

【樸質】ボクシツ かざりけなし。論衡「上世一一、下世文薄」＝質樸・樸素。

【樸實】ボクジツ かざりけなくすなほ、質樸にして誠實。宋史、李燔傳「直諒一一、處レ事不レ苟」＝樸直。

【樸愼】ボクシン 質素にしてつつしみぶかし。孫楚賦「絕ニ彼淫飾一、安ニ此一一」

【樸淳】ボクジュン かざりけなく篤し、周伯琦詩「郡治頗清曠、民俗亦一一」＝樸醇・淳朴。

【樸鈍】ボクドン かざりけなくつたなし。宋史、蘇軾傳「近歲一一之人愈少、巧詐之士益多」＝樸魯。

【樸素】ボクソ 木地のままにてかざりけなし。＝素樸・朴素・質朴。

【樸樕】ボクソク ○小木の稱。詩、召南「林有ニ一一、野有ニ死鹿一」○轉じて小才凡器に喩ふ。

【樸斲】ボクタク あらけづり(書、絆材)

【樸遫】ボクソク かざりけなくおもおもし。唐書、高崇文性一一寡言」

【樸直】ボクチョク かざりけなくして實直。＝樸實。

【樸椎】ボクツイ 質素にしてばか正直、椎は風撓せざる喩。漢書、周勃傳「一一少レ文」

【樸銳】ボクエイ ○なまくら、器が鋭利ならず。漢書「兵刃一一」○性質がすなほにしてにぶし。魏志、龐統傳「少時一一、未レ有ニ識者一」＝樸愚・樸鈍・樸魯・不敏。

【樸馬】ボクバ 未だならさざるうま、未だ調習せざる馬。荀子「若レ駕ニ一一」

【樸鄙】ボクヒ かざりけなくいやし。莊子「一一之心、重レ今未レ去」＝樸陋・樸野。

【樸野】ボクヤ かざりけなくいやし。宋史、呂誨傳「外示ニ一一、中藏ニ巧詐一」

【樸魯】ボクロ かざりけなくしておろか。＝樸愚・樸鈍・朴魯。

【樸陋】ボクロウ かざりけなくいやし。由だしものにて行儀作法などの、いやしき義。＝樸野・樸鄙。

【橑】ラウ レウ 篠 皓 筱 ○たるき(椽)○きぎれ、たきぎ(薪)○きぬがさのほね。

【櫚】リョ ル 尤 櫚は俗字 ざくろ。果樹の一、枝に刺あり、葉は數枚づつ叢り生ず、初夏、赤き花さき、厚き外皮に包まれたる球狀の實を結び、熟すれば破裂して數百の美くしき赤粒子をあらはす(丹若)＝「石一」「若一」「安石一」

【櫚火】リョクワ ざくろの花の赤きを火に喩へていふ。馬祖常詩「園紅一一鍊、沼綠夾盤絲」

【櫚花】リョクワ ざくろのはな。西陽雜俎「衡山祝融峯下法輪寺、有ニ石一一、春秋皆發」韓愈詩「五月一一照レ眼明」＝安石榴花。

【櫚彈散】リョダンサン 彈丸の内部にざくろの實の如く數十個の小彈を裝填し、著彈の際、爆發するやうに仕掛けしもの、ざくろだま。

【櫚樹】リョジュ ざくろのき。元稹詩「紅艷猶存一一花」

【櫚彈】ダン 櫚散彈に同じ。

【橉】リン 軫 しきみ(門限)みぎり(砌)

【楹】ロ 遇 ○きり(桐)○國ひらぎ。

【樫】(國字)かし(櫧)

十三畫

【檾】イン 吻 又、檈に作る ○ためぎ、曲木ハガネをためて圓くする具。○たむ、ためぎにて

眞直にためなほす。【檠栝】カイクワツ ためざ、檠は曲を矯める、栝は方を正すもの、栝は一に括に作る。荀、勸學「楡木必待ニ檠栝一而後直」‖矯栝。

【檐】㊀エン ㊁タン 鹽 豔 ㊀ひさし、のき（屋垂）「屋ー」「茅ー」‖簷。○屋根のふきおろしたる端。‖軒。○物のひさしの形せし所「帽ー」「笠ー」㊁かつぐ、になふ「ー等」‖擔。【檐雨】エンのきにしたたる雨。杜甫詩「ー亂ニ簾櫳一、山雲低度ル牖」【仰レ檐】エンタンのきを仰ぎ見る。宇文虛中詩「停レ策ーレ朝覽ル句、披レ襟穿レ檐晩追レ涼」【檐頭】エンのきば。陳禪、皆山軒賦「空翠飛來ニ几上一、白雲棲ニ於ー一」‖簷端。【檐鈴】エンふうりん。

【櫾】オク イ 眞 職 もちのき、弓材と爲すべし（純）考工記「取レ幹之道、栝爲レ上、ー次レ之」‖冬青。萬年木。

【櫃】カ 馬 ○ひさぎ（楸）棺材とす。左、哀十一「伍員曰、樹ニ吾墓一」○茶の一種。爾雅「ー、苦荼」

【檞】カイ 卦 ○まつやに（松楠）○木の名。溫庭筠詩「ー葉落ニ山路一」○圖シカ（大葉櫟）櫪の誤用。

【檜】クヮイ 泰 ○ひ、ひのき（桧）常綠喬木の一、葉は厚く鱗狀に重りて分岐す、材は一切の器具、又は建築、造船用として最も良し。‖圓柏。○棺の上のかざり。左、成二「棺有レ翰一」○國名、祝融の後、詩經にー風あり、左傳に鄶に作る。【檜花】クヮイひのきの花。陸游詩「山蜂卻是有ニ風味一、偏采ニ一ー一ニ蜜材一」【檜花蜜】クヮイクヮ蜜蜂の檜の花を采りて蜜を作るもの。老學菴筆記「檜香而味帶ニ微苦一、謂ニ之ー一ー一」【檜皮】クヮイひのきのかは、きはだ、屋根をふき、又、藥用とす。【檜扇】クヮイ圖○檜のうすき板を綴にてとぢたる扇、古、貴族が裝束の時もつもの。○草の名、葉が檜扇に似たる故にいふ。からすあふぎ。‖射干。

【檥】ギ 支 紙 又、艤に作る ふなよそほひ、舟を岸に著けて出す用意をする。史、項羽紀「烏江亭長ー舟待」

【檎】キン 侵 林ーはりんご、果樹の一、枝葉海棠ダイに似て稍大きく、春帶紅色五瓣の花を著け、實は李に似て大いなり。左思、蜀都賦「其園則有ニ林ー枇杷一」‖奉。來禽。

【檯】キャウ 陽 ○え（枋）鋤の柄。○もちのき、車の材とすべし（萬年木）‖櫾。冬青。○ーーは强く盛んなる貌。揚雄、太玄經「左右ーー」○圖かし（櫧）

【檠】ケイ 庚 梗 又、檄に作る ○ためざ（栝）ゆだめ、弓を矯め正す具。淮南、修務「弓必得ニ檠一而後能調」○ともしびだい（燈架）「燈ー」「短ー」○轉じてともしび（燈火）

【檄】ゲキ 陌 ○めしぶみ、さとしぶみ、ふれぶみ、ふだ、廻狀クワイジヤウ古、一尺二寸の木札に書して徵召に用ひしもの、急ぐ時は雞の羽を插みて速疾の意を示す「羽ー」「飛ー」ーー文」○轉じて通告文を發する。○枝なき木。【傳檄】デンゲキ戰時に文書を以て事を報ずる。史、淮陰侯傳「三秦可ニ一レー而定一也」【飛レ檄】ヒゲキバク急ぎの廻狀を四方にふれまはす。范成大詩「昨者臘章奏ニ發倉一、今茲ーレ議ニ賑糶一」‖傳レ檄・馳レ檄・移レ檄。【檄書】ゲキショふれぶみ。劉長卿詩「孔璋才業優、早晩ーー成」‖羽書。【檄召】ゲキセウ檄文にて召す。‖檄致。

○かんじき（楊樑・橇）○直き轅エダの車。

【檄致】ゲキチ 檄召に同じ。
【檄繳】ゲキキヤウ 疾き貌。潘岳、笙賦「檄ー以奔遊」
【檄文】ゲキブン 急に兵などを徴し、又は同意を得んとする時に用ふる通牒。＝檄書。

【檢】ケン　豏

○ふう、ふうずる、ふういん、文書を封じて印を押す「ー印」○とりしまる、しめくくる、ただす、制しとどめる「ー制」孟、梁惠王「狗彘食ー人食而不知ー」○たづねきはめる、とりしらべる「ー査」「査ー」○おなじ、ひとし（同等）「ー同」○のり、てほん（法式・法度）「一式」○おこなひ（行儀）「行ー」○ためぎ。○かんがへる。○書物の上の題目（書帙之簽）けだい。楊升庵集「卷帙之簽曰ー、又曰ー排」
【檢過】ケンクワ しらべてとどめる。唐書、黃巢傳「皆ニ諸道兵ニーー」
【檢押】ケンアフ とりしまる。漢書「ーー旁開」注「ーー猶ニ檢括一也」後漢書、仲長統傳「昌言曰、是婦女之ーー」
【檢按】ケンアン しらべただす。錢書、甄琛傳「臨レ罪ーー」
【檢印】ケンイン 檢査したる證として押す璽印、みとめ印。
【檢疫】ケンエキ 傳染病を豫防する爲め、旅客の診察消毒等を行ふ。
【檢閱】ケンエツ ○しらべみる。＝檢察。○陸海軍にて軍事上のことがらを實地檢査する「ーー使」
【檢考】ケンカウ しらべかんがへる。後漢書、隗囂傳「愈其流行、財入ニ公輔ニ、上下貪レ財、莫ニ相ーーニ」＝檢校・檢覈。
【檢校】ケンカウ ○とりしらべかんがへる。王建詩「騎レ馬城西ーニ花ニ園ニ○ケンカウ僧職の一、一寺の統領にて法事を取り調べる役。○貴、盲人の官名。
【檢革】ケンカク しらべ改める。唐書、崔琪傳「天子思ニ材望威烈者、ーー其弊ニ」
【檢格】ケンカク しめくくりありてただし。顏氏家訓「繁欲性無ニーーニ」
【檢猥】ケンクワイ しらべきはめる。後漢書、劉陶傳「詔下ニ州郡ーニ其事ニ」＝檢考。
【檢究】ケンキウ しらべきはめる。晉樂文「ーニ源流ニ」
【檢禁】ケンキン しらべてきしとめる。唐書、元結傳「無ニ今日ーー、而無ニ亡命ニ」
【檢鏡】ケンキヤウ顯微鏡に照してしらべる。
【檢擧】ケンキヨ 犯罪の證據をしらべあげる。
【檢驗】ケンケン とりしらべる。晉書、束晳傳「此漢明帝、顯節陵中策文也、ーー果然」＝考驗・案驗。
【檢句】ケンク 訓釋をとりしらべる。又、とりしらべ。唐書、蕭抗傳「訊覆ーー、而處レ事平」
【檢査】ケンサ しらべかんがへる。
【檢裁】ケンサイ 身をしめくくりて程よくする。北史、司馬子如傳「性清稱、不レ事ニーー」
【檢索】ケンサク しらべみる。後漢書、百官志「什主ニ十家ニ、伍主ニ五家ニ、以相ーーニ」＝檢察。
【檢算】ケンサン 運算の正否をしらべる算法。
【檢子】ケンシ 文書のしたがき（謄會）＝草稿。
【檢死】ケンシ 變死人の死體を役人がしらべる。＝檢屍。
【檢字】ケンジ 漢字字引の索引の一法、文字を總畫數順に排列し、其の字の所屬の部首を示すもの。
【檢屍】ケンシ 檢死に同じ。
【檢使】ケンシ ぎんみし見とどける使者。
【檢事】ケンジ 國法官の一、罪人を訴へ又訴訟の手續、裁判執行の監督をなし、必要の場合には裁判上の意見をのべる司法行政官。＝國檢察官。
【檢視】ケンシ しらべみる。後漢書、杜根傳「使ニ入ーーニ」
【檢繩】ケンジヤウ 兩者をひき合せてしらべる。唐書、褚無量傳「更相ーー、栄ニ天下遺書ニ、以益ニ圖文ニ」＝校讐。
【檢診】ケンシン 取調のために診察する。
【檢審】ケンシン しらべあきらかにする。
【檢情】ケンジヤウ 事情をとりしらべる。
【檢出】ケンシユツ ○しらべ出す。○化學にて化合物中にある元素又根等を見出す。
【檢書】ケンシヨ 書物をしらべる。杜甫詩「ーー燒レ燭短、看レ劍引レ杯長」
【檢證】ケンショウ 裁判官が證據物件を得る爲めに現場に臨みて取り調べる。＝臨檢。
【檢式】ケンシキ てほん。椎南子「人主立レ法、先自作ニーー儀表ニ」＝法式・法度。
【檢正】ケンセイ しめくくりありて、ただし。又、とりしまりただす。晉書、杜輿傳「輿雖レ無ニーー、而有ニ力致ニ」
【檢制】ケンセイ さしとめる。晉書、范粲傳「珍玩充積、粲ーニ之ニ、息ニ其奢修ニ」
【檢錄】ケンロク 簿册をしらべる。
【檢束】ケンソク ○とりしまる。○しばりて自由をさせぬ。元好問詩「去作ニ山中客ニ、放浪誰ーー」○法律にて警察官が、官權を以て一時人の自由を束縛する。
【檢測】ケンソク しらべはかる。宋書、五行志「大慺ーニ之事ニ、事了無レ形」
【檢覈】ケンカク 檢査のため實地をふみてしらべる。元史、刑法志「不ニ以レ時ーー、皆罪レ之」＝圖踏査。
【檢斷】ケンダン しらべてとりさばく。

【檢斷】ケンダン 國鎌倉時代、裁判の事をつかさどる役目。
【檢地】ケンチ 國土地の測量。
【檢定】ケンテイ しらべさだめる、檢査して決定する「ー官」
【檢摘】ケンテキ 蚤をあばき罪をしらべる。唐書「能ー一ニー耗歛、屬以レ故肥」
【檢點】ケンテン 一一しらべる。＝點檢。
【檢訪】ケンボウ しらべ尋ねる。南史、希錢傳「ー一果然」
【檢番】ケンバン 國藝妓屋のとりしまりをする事務所。＝見番。
【檢比】ケンピ しらべくらべる。周禮、疏「ー一ニー人民之數ー」
【檢覆】ケンフク 幾度もしらべてつまびらかにする。崔融、諫レ稅二關市一疏「當レ納レ稅則必ー一、ー一則遲留」
【檢分】ケンブン しらべわける、檢査分別する。
【檢封】ケンホウ 手紙を封じ檢印を押す。
【檢見】ケンミ 國年貢の率を定める爲め、田を巡視して米の出來を調べる。
【檢約】ケンヤク しめくくりて節約す。唐書、李鐘傳「自ー一、以給二州財一、贍レ兵」
【檢非違使】ケビイシ 國王朝時代、非法の事などを檢察する役所の名、淳和天皇の時始めて置かる。今の警視總監の如きもの。

【檜】

カイ 齊

組（木部九畫）に同じ。
【檜師】カイシ かぢとり。孟浩然詩「放溜下二松滋一、登舟命ー一ー」＝組師。
【檜楫】カイシフ かぢと、かひと。賈誼、六代論「浮二舟江海一、捐二弊ー一ー」＝楫棹。

【檣】

シャウ 陽

ほばしら（帆柱）「帆ー」「ー船」
【檣柱】シャウチウ ほばしらと帆をかける檣木と。
【檣竿】シャウカン ほばしら。劉禹錫詩「好日起二ーー一」＝帆檣・船檣。
【檣樓】シャウロウ 軍艦の檣の上部にあるものみ臺。

【樓】

ス 有

○やまなし。○したがふ（順）

【樞】

タ 麻

むち（箠）「鐵ー」うまのむち（馬箠）

【檔】

㊀タウ ㊁タウ 篠 皓

○木のゆか（木牀）㊁ふち、かまち（框）

【檀】

タン 寒

○まゆみ、枝葉共に對生し、春、淡紫色四瓣の花を著け、秋紅葉す、材强く、車、又は弓を作るに用ふ。○旃ー（センダン）は熱地に產する喬木「紫ー」「白ー」などの總名。○國施主の義に用ふる語、又、旦に作る「ー家」「ー徒」「ー那」
【檀越】ダンヲツ 國僧が佛道に歸依する信者を呼ぶ稱。祖庭事苑「ー一檀那、此云二施主一、越謂レ度二越彼岸一」＝檀那。
【檀家】ダンカ 國信徒の家、檀那の家の義。
【檀香】ダンカウ せんだんの異名。本草「ー有二數種、黃白紫之異一、今人盛用レ之」＝栴檀香。
【檀香梅】ダンカウバイ 蠟梅（ロウバイ）の異名（本草綱目）
【檀君】ダンクン 朝鮮の始祖、名は桓雄の朝鮮世紀「帝堯氏帝二天下一二十有五年、戊辰ー一立、始都二平壤一、國號二朝鮮一」
【檀槽】ダンサウ 紫檀づくりの琵琶の胴
唐後主詩「餘愛在ニー一」李商隱詩「ー一抹唐陵春」
【檀紙】ダンシ 國古、檀（まゆみ）の皮にて製せし上等の紙、みちのくがみ、まゆみのかみ。
【檀車】ダンシャ 兵役のにぐるま、まゆみの木にて車のやを造る故にいふ。後漢書、劉陶傳「耳不レ聞ニー一之聲一」
【檀度】ダンド 國佛に歸依する信者、即ち度越の義。＝施主・檀那。
【檀越】ダンヲツ 國檀家の人人。
【檀特山】ダンドクセン 中天竺健馱羅國に在る山。昔賢菩薩誓明功德經「於ニーー六年苦行一」＝彈多落迦。
【檀那】ダンナ ○國施主の義。名義集、梵語陀那鉢底、唐言二施主一、今稱ニー一訛レ陀爲レ檀、去二鉢底一留レ那也」＝檀家・檀越。國○一家の主人を呼ぶ敬稱「大ー一」「若ー一」○他人を呼ぶ敬稱。○妻が夫を呼ぶ敬稱。
【檀板】ダンバン 樂器の名、拍子（ひやうし）をとる木の板、もと、まゆみの木にて造る。張船山詩「一聲ー一當二總歇一」＝拍板。
【檀木】ダンボク 黑檀・白檀などの總名。西域記「國有二佛浴牀一、赤眞ー一作レ之」
【檀那】ダンナ 妻妾の夫を呼び、僕婢の主を呼ぶに用ふる敬稱、檀は其の香に喩ふ。趙嘏詩「雲繞二平泉一歸路長、謝家聽レ句待ニーー」
【檀欒】ダンラン 細くしてながき竹の貌。枚乘、兎園賦「修竹ー一、夾レ水碧鮮」
【檀林】ダンリン 國○栴檀林の略、布施により衆僧の住する處。又、其の學問所。○多くの末寺を有する本寺。王融、法樂辭「ー一樂所レ樓」○ひろく寺をいふ。李紳詩「世人遠禮二ーー」

【檉】

テイ 庚

かはやなぎ（河柳）ぎょりう（御柳）落葉樹の一、葉は針狀

にして極めて小さく、枝は絲の如くにして下垂し、五六月頃、淡紅紫總狀の小花を著く。＝三春柳。

【檗】㊀バク・ビャク　陌　㊁ヘキ　錫　俗に蘗に作る

㊀きはだ（黃木）寒地に產する喬木の一、葉は漆に似、夏、黃花開き、五稜ある實を結ぶ、樹皮は苦くして藥用とし、又、黃色の染料とす「黃ー」「苦ー」㊁たらひ（槃）

【櫢】ケツ　屑（前條）に同じ。

【櫟】レキ　錫（木部十二畫）に同じ。

【櫑】ライ　灰　○木の名。○石を推して高きより下す。＝礌。

十四畫

【檹】イ　支　ー機は木の長き貌。又正しからざる貌。

【檼】エン　㒳　やまぐは。山桑の一種、柘の屬、點狀の斑ㇷ゚あるもの「ー桑」

【檼弧箕服】やまぐはにて作りし弓と、箕（竹の名）にて作りし箙ㇷ゚とと、共に周の亡ぶる前兆となりしもの。周語「宣王之時、有二童謠一、――實亡二周國一」

【檼桑】やまぐは。爾雅「ー―山桑」注「似レ桑、材中レ作二弓及車轅一」

【檼絲】やまぐはの葉にて飼ひたる蠶の絲。琴瑟の絃に用ふ。書、禹貢「厥貢ー―」

【櫪】レキ　錫（前條）に同じ。

【檻】カン　㒳　○てすり、おばしま（欄干）「欄ー」「折ー」○れんじ（欄）れんじまど（檻）○ゆあみだらひ（浴槃）註、則陽「同ー而浴」○正しく下から湧き出づる泉。濫に連ず。○ーー車の行く聲。○をり。動物又は罪人を捕へおく所。又其のをりに入れる。

【檻車】カンシャ　車の行くこと。詩、王風「大車ーー」

【檻外】カンガイ　てすりのそと。王勃、滕王閣詩「閣中帝子今何在、ーー長江空自流」

【檻獄】カンゴク　ひとや、＝牢獄。

【檻穽】カンセイ　ひとや、らうや。＝監獄。

【檻猩】カンセイ　器に組長く刻りたるみぞ。

【檻車】カンシャ　板にて四方をかこひーをりぐるま、猛獸或は罪人を入れるに用ふ。漢書、陳餘傳「貫高與二趙王一ーー詣二京師一」

【檻穽】カンセイ　をりと、おとしあなと。漢書、司馬遷傳「及在ーー之中、揣レ尾而求食」

【檻泉】カンセン　正しく下から湧き出づる泉。詩、小雅「檻泉ーー、百卉二具茂一」

【檻送】カンソウ　檻致に同じ。唐書、高崇文傳「追貢レ之、ーー二京師一」

【檻車】カンシャ　かこひをしてふさぐ。漢書、谷永傳「中尚書官官、ーー二大異一、皆譴說歸レ天者也」

【檻致】カンチ　罪人ををりに入れて送りつける。＝檻送。

【檻邊】カンペン　てすりのほとり。徐陵詩「ーー綾笑東籬菊、沿折金風待二降霜一」＝檻前。

【檻檻】レイレイ　おばしまのかっし。徐陵、太極殿銘「漢座雕屏、周人ーー」

【櫃】キ　寘　ひつ、はこ。＝匱。

【櫃槨】ヒツカク　ひつ、はこ。棺槨臣詩「心煩敢拾二ーー一」＝棺槨・貴賤。

【櫃函】キカン　圖帳場。

【檮】㊀タウ　㊁チウ　皓　尤

㊀木のきりかぶ（斷木）○おろか、無知の貌。㊁ーー杌ㇷ゚はめでたきくさ（瑞草）の名。史、紀箋傳「上有ー蓍、下有二伏龜一」

【檮杌】トウコツ　○一種の惡木の名。韻會「ーー惡木、取二其記一レ惡以爲レ戒也」○轉じて、楚國の史書をいふ。孟、離婁「晉之乘、楚之ーー、魯之春秋一也」○惡人をいふ。左、文十八「顓頊氏有二不才子一、不レ可二教訓一、天下之民、謂二之ーー一」○瑞獸ケモノの名。一說に惡獸の名とす。周語「商之興也、ーー次二于丕山一、其亡也、爽羊在レ牧」

【檮昧】トウマイ　無知なる貌。＝昧檮、爾雅序「僕不レ揆ニーー一、少而習焉」

【櫂】㊀タウ　㊁タク　篠　㒳　テキ　錫

㊀かぢ、かひ。舟行に取りつけて船をこぐ具、短きを楫といひ、長きをーといふ「楫ー」「搖ー」楚辭、九歌「桂ー兮蘭枻」＝棹。○轉じて船の義「孤ー」○かひにて船をこぐ。㊁樹の枝の直ㇷ゚に上ㇷ゚れる貌。又、其の枝、こずゑ（梢）

【櫂歌】トウカ　ふなうた。漢武帝、秋風辭「儛歌鳴兮發ニーー一」注「ーー引レ棹而歌」＝棹謳・棹唱・棹歌・棹鼓。

【櫂舟】トウシュウ　船にかいをつけてこぐ。方

千時、海邊津吏櫂ノ舟迎」【櫂唱】シタウ 櫂歌に同じ。晉王詩「一ー臨ノ風歌、樵謳入ノ聽哦」

【檸】ダウ 梗

ーー檸檬はれもん（英語のあてる字）熱地に産する果樹、花葉は共に橘に似、實は楕圓形にして兩端尖り、芳香あり、果皮より香油を製す、飲料藥材、又香水の原料とす。‖宜母子。

【檳】ヒン 眞

ーー榔は熱地に産する常綠喬木の一、高さ三四丈、枝なく、葉は芭蕉に似て、幹頂に生じ、葉間に總狀の實を結ぶ、食用とし、又は藥材として健胃・利尿・強齒の效ありといふ。びんらうじ、びらう。

【檬】ボウ 東 通音モウ

○檸ーはれもん。檸（本篇）を見よ。○槐に似て葉の黃なる木の名。‖黃槐。

【樸】ボク 屋 樸・樕に同じ

○なつめ（棗）○かたし（堅）○むらがる（叢）しげる（茂）

【櫁】

櫁（木部十一畫）に同じ。

十五畫

【櫌】イウ 尤 又、耰に作る

○田を摩する器。○又其の器にて地面をならす。○鋤の柄。○塊を打ちくだく槌。

【櫞】エン 先

枸ーは檸檬の一種、實大いにして、香烈しく、食用又藥用とす。よるぶしゅかん。‖香櫞佛手柑。

【櫜】カウ 豪

○ゆみぶくろ、ゆぶくろ、ゆみづつみ、弓を容れ藏する袋（弓衣）左、昭元「請垂ー而入」○よろひぶくろ、よろひづつみ（甲衣）○やづつ、矢を容れ藏する器（受箙器）○ひろく武具卽ち兵器をつつむ袋「建ー」「戰ー」‖韜。○車の上の大囊。○つつみ。○つつむ（韜）兵器をつつみ藏める。詩經「載ー弓矢」○建ーは干戈を包むに虎皮を以てする義にて戰の息むをいふ。

【櫜鞬】カウケン ゆみぶくろと矢ぶくろと。櫜は矢を受け鞬は弓を受ける具。左、僖二三「右關ーー」

【櫜韜】カウタウ 弓や劍などの武器を入れ置く袋、韜は武事の袋（周禮、地官、大司徒、注）

【櫜箙】カウフク ゆみぶくろ。櫜・箙同義。

【櫝】トク 屋

櫃（木部十九畫）に同じ。

【櫛】シツ 質

○くし、髮をすく具。○くしけづる、くしにて髮の毛をすき整へる（理髮）「ー梳」「ー風」曲禮「父母有疾、冠者不ー」○轉じてけづりのぞく（剔除）義とす。韓愈文「ー垢爬痒、民獲寧醒」○ー比はくしの齒の如く密にならぶ。詩、周頌「其比如ー」

【櫛雨】シツウ あめにくしけづる。莊、天下「沐甚ー風、置萬國」萬の洪水を治めし苦をいふ。

【櫛圈】シツケン 髮をくしけづり、手をあらふ。蘇游詩「晨興未ーー」

【櫛縰】シツソウ くしけづると、髮をつつむと。禮、內則「子事ー父母」雞初鳴、咸盥漱ーー」

【櫛櫍】シツチツ くしけづる。後漢書、吾肅傳「母沒不ーー、不二蓄資一、絕二酒肉一、垂二二十年一」‖梳沐。

【櫛髮】シツハツ かみをくしにてすく。淮南子「聖人之用レ兵也、若ニーー一レ髮而所レ去者少而所レ利者多」‖理髮。

【櫛比】シツヒ くしの齒の如くならぶ。詩、周頌「其崇如レ墉、其比如レ櫛」四子講德論「甘露滋液、嘉禾ーー」

【櫛風沐雨】シツフウモクウ 風にくしけづり、雨にゆあみす、外に在りて艱苦を嘗むる義。晉書、文帝紀「ーー、周旋征伐、勤二勞王室一、二十有餘載」唐書、狄仁傑傳「仁傑謂二武后一曰、文皇帝櫛レ風沐レ雨、貫二野蠻一以定二天下一」‖風櫛雨沐。

【櫛沐】シツモク くしけづり髮あらふ。晉書、庾闡傳「母沒不ーー、不二蓄資一、絕二酒肉一、垂二二十年一」‖梳沐。

【櫝】トク 屋

○器物の脚（樹・闕足）○かなどこ、きりだい、物を斷ちきる臺（椹）古、刑具の一、罪人其の上に伏して斧を受けしもの「斧ー」‖質・鑕。

【櫝】トク 屋

○ひつ（匱）はこ（函）「玉ー」「金ー」論、季氏「龜玉毀二於ー一中一」○ひつぎ（棺）「椁ー」「貴」櫝還レ珠」貴ぶべきものを貴ぶ喩。を賤みて、賤むべきものを貴ぶ喩。

櫃は櫃。韓非、外儲「楚人有下賣二其珠於鄭一者上爲二木蘭之櫃一、薰二桂椒之櫃一、綴以二珠玉一、飾以二玫瑰一、輯以二翡翠一、鄭人買二其櫃一而還二其珠一、此可レ謂二善賣一櫃矣、未レ可レ謂二善鬻一レ珠也」

【櫂】㊀ライ　㊁ライ　㊀㊁灰

㊀さかだる、雲雷の形を彫りつけたる酒樽。‖巵。㊁劍の頭の飾、劍の頭を玉にて飾り、其の上に山形の木ぼりの飾をはめしもの。漢書、馬不疑傳「帶二具劍一」

【櫂具】ライグ　劍首のろくろ（鐔屬）の飾。字解參看。

【櫚】リョ　㊀

○樓ーシュは木の名。樓（木部九畫）を見よ。○くわりん（花櫚）は熱地に産する喬木の一、材堅く紫紅色にして、美くしき花文あり、器具を造るに良し「華ー」又、果樹の一、ほけに似、秋、黃色にして酸味ある果を結ぶ。‖棕櫚。

【櫱】ルキ　ライ　㊀㊁

○ふぢ（藤）○かつら（桂）‖蘗。

【櫟】レキ　㊁ヤク　㊀㊁錫

㊀くぬぎ（柞・栩・杼）どんぐりの木、落葉喬木の一、樹は栗に似、樹皮あらく、われ目を生じ、秋、圓き果即ちどんぐりを結ぶ、材は薪炭と爲すに適す。○やくにたたぬ木（散木）不才無用の人（散人）に喩ふ。櫟（木部十一畫）を見よ。‖櫪。○櫟に通ず、ならす、こする、かきならす。㊁ー陽ヤクヤウは縣名、雍州に在り。

【櫟散】レキサン　役に立たぬものの義。櫟樗散木の約。櫟樗は共に用なき木、即ち散木（莊、人間世）魏書、宗欽傳「伊余ー一、才至庸微」‖櫟散。

【櫟樗】レキチョ　やくに立たぬ木。轉じて無用の人に譬ふ。司馬光詩「自愧ー一非二盛器一」‖樗櫟。

【櫟釜】レキフ　釜のそこをこすり鳴らす。史、楚元王傳「高祖微時、時時與二賓客一過二嫂食一、嫂厭レ之、與二客來一、嫂佯爲二竈盡一レ、竊客以レ故去、已而視二釜中一、尚有レ魚、高祖由レ此、怨二其嫂一」櫟一音ラク。漢書には櫟を轢に作る。

【櫑】ライ　㊀㊁佳

○おほだて（大盾）大形の楯「楯ー」○ものみやぐら（城上望樓）屋根のなき者「望ー」「樓ー」○ろ。船を進ましむる具。船尾に在るは柁、旁に在るは「柔ー」「搖ー」‖櫓・艪・艫。國○やぐら。城の壁や門の上に設けたるものみ。○木を組み上げて高く構へたる棧敷「ー太鼓」○炬燵の上に覆ふわく。

【櫓聲】ロセイ　船を行る櫓の聲。白居易詩「晴虹橋影出、秋雁ー一來」

【櫓櫂】ロトウ　ろと、さをと。洞冥記「以二沙棠一爲二櫓櫂一、以二木蘭文柘一爲二ー一ー一」

十六畫

【櫚】エン　㊀

○のき「飛ー」‖檐。○みぎり（砌）○わたどの、ほそどの（廊）楚辭「曲屋步ー」步ーは步して通ふべき廊ロウ‖步廊。

【櫰】クワイ　佳㊁

いぬぐんじ「ー槐」

【櫱】ゲツ　ガツ　屑㊁

○ひこばえ、木のきりかぶより生ずる芽。‖蘖枿。○一旦絕えたる物事の復び發生するもの。

【櫬】シン　㊀

○くわんをけ、はだつきのひつぎ（親・身棺）○あをぎり（梧桐）

【櫬棘】シンレフス　棺を背に負ふ、古、降伏の禮、死罪に服する意を示す。左、僖六「許男面縛銜レ璧、大夫輿レ櫬、士ーノー」輿は荷、銜璧は璧を以て贄とするも、手を縛せられたるが故に、口に銜む。

【櫬宮】シンキウ　天子の御棺。‖梓宮。

【櫧】シヨ　魚　櫧は國字

いちひ、かし、いちひかし、常綠喬木の一、葉は栗に似、春、花を著け、椎シヒの實に似たる果を結ぶ、材堅く用途多し。

【櫟】レキ 圖 ○馬屋のねだ（廐棧）魏武帝詩「老驥伏櫪、志在千里」○馬のかひをけ（馬槽）「槽ー」○くぬぎ、どんぐりのき、櫟（木部十五畫）を參看。‖櫟。○かひこのす（蠶薄）○ー柳はゆびひしぎ、十指をならべ、木にて縛る刑具。

【櫟陽】うまや、牛馬を畜ふをり。方言「秦宋齊燕之間、謂ㇾ櫪曰ㇾ阜」一解に牛馬のかひをけ。‖阜櫪。

【櫪馬】うまやにつながれてゐる馬。白居易詩「一一非ㇾ不ㇾ肥、所ㇾ苦當ㇾ槽縻」束縛せられて自由ならざる譬とす。‖籠禽。

【櫨】ロ 圖 ○柱の上のますがた（斗栱）「柱ー」○ぴは（枇杷）「甘ー」盧に通ず。‖盧橘。○はぜ、はじ「黄ー」落葉喬木の一、樹は漆に似、葉は羽狀、霜を經て紅葉す、花は黄綠色小形、實は扁平にしてむらがり結ぶ、蠟を製するに用ふ。

【櫳】ロウ 東 ○へやのまど、房屋の窗牖。れんじまど「窗ー」班婕妤賦「房ー虛兮風洽洽」○をり（檻）獸を容れて養ふかこひ。

【櫳檻】れんじまど、格子窗。

【櫟】櫪（前條）に同じ。

十七畫

【櫻】アウ 庚 ○ー桃はゆすらうめ、灌木の果樹の一、葉はさくらに似て、しわ多く、花は白色五瓣、夏、赤色球狀の實を結ぶ。‖含桃。鸎桃。○國落葉喬木の一、高三四丈に至り、春、薄紅單瓣又は重瓣の美花を著け豆大の實を結ぶ。山櫻・一重櫻・八重櫻・吉野櫻など種類多し。

【櫻實】國さくらの花を白雲に見たてていふ。

【櫻狩】國處處のさくらの花をたづねてながめる。

【櫟】キ 圖 櫟（木部十三畫）に同じ。

【櫸】國 櫸に通ず。

【櫸】ケツ 屑 ○たるき（椽）一解に壁の柱。○ますがた、柱の上に立てる方形の木（斗栱）「ー櫨」‖櫸。

【櫸櫨】ますがた。禮、雜記、注「ー刻ㇾ之爲ㇾ山、曰ㇾ山節」謂ㇾ柱上方木ㇾ也」韓愈、進學解「ー侏儒」

【櫸】國 岡に通ず

【欄】ラン 寒 ○てすり、らんかん、おばしま「干」○をり、牛を養ふかこひ（牛圈）○文書などを罫線にて圍みし輪廓。又、其の線「ー外」「鳥絲ー」

【欄干】てすりの曲りかど。梅堯臣詩「靖樂立ニー一」

【欄干】てすり。蘇軾詩「長明燈下石ー一、長共ニ松杉一關ニ歲寒一」‖欄干・欄杆・欄檻。

【欄杆】前條に同じ。

【欄檻】てすり。後漢書、爰延傳「昔朱雲、廷ニ折一ー一」‖欄干。

【欄外】○てすりのそと。庾信文「ー一將ㇾ花、居然俱笑」○書物の輪廓のそと「ー一書」

【欄檻】○てすりと、まどと。○家の出入口。吳少微詩「漸出ニ一一外一、萬里秋景煙」

【欄子馬】籠狀を偏察する駿馬（宋史、宋琪傳）‖偏騎・遍騎。

【欄楯】てすり。南史、梁武帝義傳「廣ニ其路一旁施ニ一一一」阿彌陀經「七重ー一、周匝圍繞」‖欄檻。

【欄前】てすりのまへ。李東陽賦「初住ニ侍兒一ー一、暫徘ニ徊句戸外一」

【欄干】欄干にもたれる。李中詩「月在ニ高樓一倚ㇾ一ー一」‖欄杆・倚ㇾ欄。

【欄畔】てすりのほとり。盧照鄰詩「一一綠青楊繞ニ玉樓一、牛車ニ一一半垂ㇾ溝」‖欄邊。

【欄邊】てすりのほとり。薛能詩「ー一清酒落花多」

【欄間】國天井と鴨居との間に在るすかしぼりのある板。又格子づ

くりのあかりまど。

【欖】 攬（木部二十一畫）の俗字。

【櫺】 レイ　リョウ　唐　又、欞に作る

○れんじ、窗にとりつけるかうし「疎ー」○のき(桁)

【櫺檻】カン　れんじのてすり。何晏、景福殿賦「ーー琢張」

十八畫

【欟】 ク　眞

○さらへ、くまで(四歯耙)○わだかまる、木の根の盤錯せる貌。淮南、說林「木大則根ー」

【權】 ケン　ゴン　先

○おもり、はかりのおもり(稱錘)○はかり。物の重量をはかる具。論、堯曰「謹ー量」○めかた、輕重の標準。○はかりごと(謀計)臨機應變のはかりごと。經の對「ー謀」孟、離婁「嫂溺援之以手ー也」○たひらか(平)物事のつりあひ「ー衡」○いきほひ、ちから「ー力」「ー柄」「專ー」○はかる、目方をはかる。孟、梁惠王「然後知輕重」○かり(假設)○そへ、正に對する副。○かぬる(兼)「ー官」○かりそめ(苟且)○ー與はじめ(始)○しばらく。○のろし(烽火)權に通ず。○ほぼ(頗)權に通ず。

同訓熟語 稱・計・謀・圖・量・度・稱・測・料・忖・攜・衡等の訓は計(言部二畫)の條を見よ。

【權威】ケンイ　○權力と威勢と。○國最高重要の標準となるもの、泰斗の義。

【權右】ケンウ　權力ありて地位ある人。晉書、周札周顗傳贊「始見ー疑于朝廷、終獲ー戾于一一」＝權門右族。

【權要】ケンエウ　權力ある樞要の地位。南史、徐湛之傳「江湛爲吏部尚書、與ー湛之竝居ー一、世謂ー江徐」

【權家】ケンカ　權力あるいへがら。南史、袁昂傳「依ー事勢奏、不ー憚ー一、當時號爲ー正直ー」＝勢家・權門。

【權幸】カンカウ　權勢ありて君の寵をほしいままにする者。唐書、楊汝士傳「交ー通ー一、四方賂遺滿ー門」＝權寵。

【權衡】カンカウ　○はかりのおもりと、さをと。中子「君必有ー明法正義、若ー懸ー一以稱ー輕重ー所ー以一一事臣也」○轉じて、つりあひの義とす。

【權奇】ケンキ　たくみたるはかりごと。漢書、禮樂志「志個儻、綢ー一ー」＝跳計。

【權宜】ケンギ　場合に應じて、適宜の處置をなす。後漢書、四羌傳「計ー日用之ー一、以ー經世之遠略ー」

【權貴】ケンキ　權力ありて位高し。又、其の貴人。齊書「三世不ー事ー一ー」韓愈、柳子厚墓誌銘「以ー不ー能ー細ー一ー失ー御史ー」

【權近】ケンキン　勢力ありて王者に近侍する者。唐書、高適傳「ー一側ー目」

【權官】ケンクワン　○權力ある官吏。○かりに他の官を兼ねる。權攝の官。○國ケンクワンその時限りの官吏。又正官に對する副ツの官吏。

【權勁】ケンケイ　中軍は大將ありて謀を制するを權といひ、後軍は殿をなしてつよきを勁といふ。左、宣十二「前茅慮ー無ー中權、後勁」

【權謊】ケンコウ　いつはりのはかりごと、謊は詐。漢書、王吉傳「各取ー一切、一ー自在」

【權限】ケンゲン　法令又は約束によりて其の人にまかせし仕事の範圍。

【權詐】ケンサ　はかりいつはる。抱朴子「高ー一而下ー道德」

【權爭】ケンサウ　權謀を以てあらそふ。謝靈運文「懷ー元王之冲粹、丁ー戰國之一ー」

【權使】ケンシ　計略を以て人を使ふ。史、晉連傳「ー一其士、陽ー使其民ー」

【權臣】ケンシン　いきほひあるけらい。

【權首】ケンシュ　首謀者。史、吳王濞傳「毋ー爲ー一、將ー受ー其咎ー」

【權術】ケンジュツ　權謀術數の略。宋史、徐誼傳「三代聖王有ー至誠、而無ー一ー」

【權稱】ケンショウ　はかり、重をはかる。荀子「聖人備ー道全美者也、是懸ー天下之一ー一也」＝權衡。

【權數】ケンスウ　場合に應じてたくむはかりごと。權謀術數の略。魏志、武帝紀「太祖少機警有ー一ー、而任俠放蕩不ー治ー行業ー」

【權制】ケンセイ　○威權と法制と。蜀志、諸葛亮傳「約ー官職ー、從ー一ー、開ー誠心ー、布ー公道ー」○權力を以て制しをさめる。

【權勢】ケンセイ　他人を服せしむる勢力。又其の官位。又、其の人。南史、徐孝嗣傳「器量弘雅、不ー以ー一ー自居ー」＝權力。

【權威】ケンヰ　權力ある外戚。宋書、蕭惠開傳「幸ー法流親、不ー阿ー一ー」

【權準】ケンジュン　頻と、はなはだしと。

【權攝】ケンセフ　かりに他の者をして官を兼ねしむる。金史、孛迭傳「天下輕重係ー宰相ー、近來每每令ー一ー、甚無ー謂也」＝假攝。

【權道】ケンダウ　臨機應變のはかりごと、方便。

【權智】ケンチ　臨機のはかりごとをするちゑ。宋史、呂公著傳「唐太宗能以ー一ー、御ー臣下ー」

【權勝】ケンショウ　權力ある地位。南史、范曄傳「志在ー一ー、而所ー懷未ー滿」

【權寵】ケンチョウ　權力ありて君寵を受ける者。後漢書、寇榮傳「以ー此見ー害ー于

ー一」＝權幸。
【權度】ケン ○はかり。ものさし。周禮「以ニー一受レ之」○ケン ○はかりにて輕重をはかる。
【權内】ケンナイ 權利の範圍内。
【權能】ケンノウ 其の人の力によりて爲し得るはたらき。權利と能力と。
【權佞】ケンネイ 威權をほしいままにする佞人。唐書、裴度傳「ー一側レ目」
【權柄】ケンペイ いきほひ。ちから。權はかりのおもり、柄は斧の柄、共に事を處理する具、以て人の上に居る者の有する生殺與奪の權力の義とす。漢書、劉向傳「夫大臣操ニー一、持ニ國政一」杜甫詩「掌握有ニー一、衣馬自肥輕」＝權力。
【權變】ケンペン 場合に相當せるはかりごと。後漢書、賈逵傳「左氏發ニ于君父一、公羊多ニ任ニ于ー一」＝權略。
【權便】ケンベン 都合よくはかる。後漢書「臨レ時量レ宜、不レ失ニー一」＝適便。
【權謀】ケンボウ 場合に應じてたくらむはかりごと。說苑「道逆時反、而後ー一生焉」＝權略。
【權謀術數】ケンボウジュッスウ 巧に人をあざむくはかりごと。＝權術・權數。
【權門】ケンモン 權力あるいへがら。後漢書、明帝紀「ー一請託」＝權家。
【權輿】ケンヨ 衡を造るには權より始め、車を造るには輿より始む。よりて物の始の義とす。詩、葛屨「于嗟乎不レ承ニー一」
【權利】ケンリ ○權力と利益と。史、鄭世家贊「語有レ之以ニー一合者、ー一蛮而交疎」＝利權。○法律の保護によりて各人の意志を主張し得る力。
【權量】ケンリョウ はかりと、ますと。周禮「掌ニ染羣一、以ニー一受レ之」
【權略】ケンリャク 臨機のはかりごと。晉書、祖逖傳「多ニー一」＝機略。
【權力】ケンリョク 他人をおさへつけ從はしむる威力。漢書、賈誼傳「況莫ニ大諸侯ー一月十レ此者一乎」
【權柱】ケンチュウ 權力ありてよこしまなる者。後漢書、楊震傳論「抗ニ直方一以臨ニー一、先ニ公道一而後ニ身名一」
【權衡】ケンコウ 權威をたのみてほしいままにす。宋史、吳及傳「今后紀無ニー一之家」
【權化】ゴンゲ 佛・菩薩が衆生を濟ふ爲めかりに人間世界にあらはれる義。又、其の出現せし體。
【權教】ゴンキョウ 大乘に入る方便の佛道。大乘を實敎といふの對。＝權化敎。
【權現】ゴンゲン ○佛・菩薩が衆生を濟ふ爲めかりに人間世界にあらはれるをいふ。最勝王經「世尊金剛體、ー一於化身一」楊炯、孟蘭盆賦「菩薩之ー一、如來之化生」○國昔時、神の尊號として用ふ「東照大ー一」
【權妻】ゴンサイ 國かりのつま、妾をいふ。
【權萃】ゴンスイ 珊瑚樹に似たる一種の喬木の名。臭氣あり、きつねのちゃぶくろ。

十九畫

【欑】サン 寒
○つゑ（杖）○あつむ。あつまる（積聚）○ほこのえ、矛戟の柄。

【欐】ラ 歌
○やまなし（樝木）○梨ーうは崑崙山に生ずる木の名。＝婆羅。

【欒】ラン 寒
○あんず（杏）○ひぢぎ、ますがた（曲枡）○國ーはまどか（圓）陸羽詩「披書寅直月團ー」○ーは船の搖せたる貌。轎の假字。○檀ーは竹の叢生じて長き貌。
【欒枝】ランシ ひぢぎ。景福殿賦「ー一天矯而交結」
【欒荊】ランケイ 楝の異名。
【欒欒】ランラン やせたる貌。詩、檜風「棘人ー一兮」
【欒櫨】ロ ひぢぎ、杜上のますがた。左思、吳都賦「ー一蟠結」

【欐】レイ 霽 國 通じて礪に作る
○はり、うつばり（梁）「梁ー」

列、湯問「雍門ー一歌、餘音遶ニ梁ー一、三日不レ絕」○むね（屋棟）

廿一畫

【欖】ラン 國 橄欖（木部二十一畫）の國字。

【欔】シュク 屋 ボク 覺
㊀斧のえ（斤柄）㊁すき（鋤）土を掘りおこす農具。＝斸。

【欟】ヘイ 霽 もと把に作る
○刀のつか（刀柄）○すべて物の柄をいふ。
【欟柄】ヘイ 刀のつか。丹鉛錄「得ニ此ー一ニ」

【欖】ラン 寒 國
櫓ーロは木の名、櫓（木部十一畫）を見よ。

【欄】ラン 寒
もくれん。＝木蘭。

【欒】ルキ 支
かんしゃ（梔）＝檟（木部十一畫）

廿二畫

【欝】鬱（鬯部十九畫）の俗字。

廿四畫

【欞】櫺（木部十九畫）に同じ。

欠部

【欠】ケン 陷 俗に缺の略字として用ふるは誤

○あくび、氣が倦みし時に自然に出る大いき。あくびする。「一伸」○不足する。かける。「一缺」「虧一」○かり。おひめ（負債）○納（納稅）をおこたる。「逋一」○疏漏、論「積欠」狀「自小民已上、大率皆有積一」

同訓異語 欠・缺・闕・虧・砧の別は缺（缶部四畫）の條を見よ。

【欠款】あくび。通俗文「張口運氣、謂二一一」

【欠字】文章中の不足せる字。老學菴筆記「晏尚書景初作二一集説、以示二朱希眞一、希眞曰、甚妙、但似欠二四字一、景初苦問レ之、希眞指有二文集十卷一示レ之曰、此處欠、又問、欠二何字一曰、當レ增不レ行、于レ世四字、景初遂增レ之、示二希眞一」

【欠日】外出を忌むといふ日。＝坎日。

【欠伸】あくびと、のびと。志倦めば欠びし、體倦めば伸びす。曲禮「侍二坐於君子一、君子一、撰二杖屨一」＝欠申。

【欠稅】つもれる年貢等の不足。＝積欠。

二畫

【次】㊀シ ㊁ジ 眞 通 支

㊀つぎ、第二番目、又つぎの番、又一段劣りし等級「一席」左、襄二四「太上有レ立レ德、其一有レ立レ功、其一有レ立レ言」○つぐもの。○つぐ、つづく。○ついで「一序」ついう、順序をつける「一第」○たび（度）度數、回數をあらはす語「第三一內閣」○ならび、ならぶ。○とどまる（止）○とどむ。○いたる（至）たつす、とどく。○とまる、やどる（宿）軍隊の宿營にいふ。書、泰誓「王一于河朔」○やどや、はたごや「旅一」○ばしょ、ところ（所・處・位置）○星のやどり（星座）○もや（倚廬）○しゅくば、ものみ。○うち、なか（中）「胸一」○あひだ（間）○造一は急遽の貌。＝草次・倉卒。㊁一且は進み難き貌。＝趑趄。

同訓異語 二に从ひ に从はず。

同訓異語 次・第・編・綱・紹・繼・接・襲・尊・亞・貳の別は第（竹部十五畫）の條を見よ。

【次韻】他人の詩と同じ韻字を用ひて詩を作る義。劉貢父詩話「唐人賡和詩、有二一一、依二其韻一所レ賦、有二依韻一、同在二一韻中一、有二用韻一、用二彼之韻一、不二必次一之」

【次期】つぎのをり、つぎの時期（次回）

【次官】國 副貳の官、各省の長官即ち大臣の副＝勾次長。

【次骨】○刑罰を重くする義。次は至。史、酷吏傳「內深一レ」注「其用レ刑深刻至レ骨也」○轉じて人を恨むことの甚だしき義とす。

【次舍】宮中の宿衛者の退息する所。周禮、天官「以レ時比二宮中之官府一之衆寡一」

【次且】前まんと欲して前まざる貌。易、夬卦「其行一一」＝趑趄・趑趄。

【次序】ついで。淮南子「遇二于堂上之陰一、而知二日月之一一一」＝順序。

【次第】ついで、じゅんじょ。後漢書、第五倫傳「以二一一一爲レ民」＝次序。

【次男】長男につぐ弟。＝二郎・次郎。

【次配】うはなり、後妻。類書纂要「一一、再娶之妻」

【次副】そへ。宋實、明帝紀「副御一一」

三畫

【欥】イ 紙

しはぶき（欬）

四畫

【欽】㊀キン ㊁キツ 侵 未 物

㊀こひねがふ。＝覬。○むせぶ。㊁どもる。＝吃。○あたふ（予）

【欣】キン コン 文 忻・訢に通ず

○よろこぶ、笑ひ喜ぶ「一喜」「一悅」「懽一」○よろこぶ貌「一一」「一然」

同訓異語 欣・喜・悅・說・忻・懽・怡・懌・愉等の別は喜（口部九畫）の條を見よ。

【欣懌】よろこび。劉基、甘露頌序「於レ是羣臣莫レ不二一一一」＝欣悅・欣豫。

【欣悅】次條に同じ。

【欣說】欣懌に同じ。禮記「慶賜爵行、無レ不二一一一」＝喜悅。

【欣躍】キン　喜ぶと、きらふと。謝靈運、曇隆法師誄「一一逃來、終歸二憂苦一」陸游詩「一一兩俱非」＝好惡。
【欣遽】キン　よろこびよみす。陸雲詩「赤阨至止、上下一一」
【欣慨】キン　よろこび感動する。よろこばす。韓愈文「一一之誠、實倍二常品一」
【欣企】キン　よろこびて仰ぎ望む。呂温文「參拜寸誠、夙夜一一」＝欣喜仰望。
【欣喜】キン　よろこぶ。國語「邪ノ神保ノ民、莫ノ不二一一一一」＝欣懌・歡喜・喜說・欣歡。
【欣欣】キン　○よろこぶ貌。詩、大雅「旨酒一一」＝欣然。○草木のいきいきしたる貌。謝去來辭「木一一以向レ榮」
【欣然】ゼン　欣然に同じ。孟、梁惠王「一一有二喜色一」
【欣懌】キン　よろこぶと、おそれると。洞冥記「一一変レ心、無二以自厝一」唐は猜。＝欣悚。
【欣玩】グワン　よろこびもてあそぶ。南史、明僧紹傳「一二一水石一、竟不二一入二州城一」
【欣想】ソウ　よろこびおもふ。晉書、阮种傳「一二一聖德一、而幸二聖休風一」
【欣讚】サン　よろこびほめる。齊書、扶南國傳「雖二殊レ俗異レ化、遙深一一」＝欣歎。
【欣賞】シャウ　よろこびほめる。陶潛、祉居詩「奇文共一一、疑義相與析」＝欣歎・欣喜賞玩・欣玩。
【欣慷】シャウ　よろこぶと、おそれると。韓愈文「一一之心、無二以自厝一」唐は猜。＝欣悚。
【欣暢】チャウ　よろこぶと、おそれると。韓愈文「一一無レ量」＝欣懌。
【欣晤】ゴ　よろこび見る。陽はみつめる。王融詩「慙顏愛一一一」
【欣戚】セキ　よろこぶと、かなしむと。胡長孺詩「人間萬得喪、一一隨レ所レ制」＝悲喜。
【欣然】ゼン　よろこぶ貌。史、周紀「老幼見二巨人跡一、心一一說欲レ踐レ之」＝欣欣。
【欣瞻】セン　よろこびみる。江總文「自識二終期一、一一瑞應一」＝欣睹。
【欣待】タイ　よろこびてあしらふ。張說詩「望レ塵遠見レ迎、拂レ館其一一」
【欣戴】タイ　よろこびて君としていただく。國語「一二一武王」
【欣歎】タン　よろこびほめる、歎は歎賞。吳志「遐邇一一」＝欣賞。
【欣暢】チャウ　よろこびて心がのびのびする。北史、李元護傳「憂二賜村老一、莫レ不二一一一一」
【欣晴】セイ　次條に同じ。隋煬帝詩「一一明堂亮、喜見泰階平」
【欣抃】ベン　よろこびみる。淨住子「五色是人所二一一一、而棄レ之不レ顧、八音是人所二競聞一、而絕レ之不レ聽」＝欣睹・欣瞻。
【欣服】フク　よろこび從ふ。桂陽書、寶融傳「一二一高義二顧レ從二役於將軍一」＝悅服。
【欣羨】セン　よろこびしたふ。陳琳文「海內企レ踵、一二一提攜之德一」＝悅慕・欣仰。
【欣躍】ヤク　よろこび見る。謝靈運、曇隆法師誄「一一逃來、終歸二憂苦一」陸游詩「一一兩俱非」＝好惡。
【欣悚】ソク　よろこびよみす。陸雲詩「赤阨至止、上下一一」
【欣感】カン　よろこび感動する。よろこばす。韓愈文「一一之誠、實倍二常品一」
【欣企】キ　よろこびて仰ぎ望む。呂温文「參拜寸誠、夙夜一一」＝欣喜仰望。
【欣喜】キ　よろこぶ。國語「邪ノ神保ノ民、莫ノ不二一一一一」＝欣懌・歡喜・喜說・欣歡。
【欣欣】キ　○よろこぶ貌。詩、大雅「旨酒一一」＝欣然。○草木のいきいきしたる貌。謝去來辭「木一一以向レ榮」
【欣然】ゼン　欣然に同じ。孟、梁惠王「一一有二喜色一」
【欣懌】エキ　よろこぶと、おそれると。洞冥記「一一変レ心、無二以自厝一」唐は猜。＝欣悚。
【欣玩】グワン　よろこびもてあそぶ。南史、明僧紹傳「一二一水石一、竟不二一入二州城一」
【欣想】ソウ　よろこびおもふ。晉書、阮种傳「一二一聖德一、而幸二聖休風一」
【欣讚】サン　よろこびほめる。齊書、扶南國傳「雖二殊レ俗異レ化、遙深一一」＝欣歎。
【欣賞】シャウ　よろこびほめる。陶潛、祉

居詩「奇文共一一、疑義相與析」＝欣歎・欣喜賞玩・欣玩。
【欣慷】カウ　欣懌・欣悚に同じ。
【欣然】ゼン　よろこぶと、かなしむと。
【欣戚】セキ　よろこぶ貌。史、周紀「老幼見二巨人跡一、心一一說欲レ踐レ之」＝欣欣。
【欣瞻】セン　よろこびみる。江總文「自識二終期一、一二一瑞應一」＝欣睹。
【欣待】タイ　よろこびてあしらふ。張說詩「望レ塵遠見レ迎、拂レ館其一一」
【欣戴】タイ　よろこびて君としていただく。國語「一二一武王」
【欣歎】タン　よろこびほめる、歎は歎賞。吳志「遐邇一一」＝欣賞。
【欣暢】チャウ　よろこびて心がのびのびする。北史、李元護傳「憂二賜村老一、莫レ不二一一一一」
【欣晴】セイ　次條に同じ。隋煬帝詩「一一明堂亮、喜見泰階平」
【欣抃】ベン　よろこびみる。淨住子「五色是人所二一一一、而棄レ之不レ顧、八音是人所二競聞一、而絕レ之不レ聽」＝欣睹・欣瞻。
【欣服】フク　よろこび從ふ。桂陽書、寶融傳「一二一高義二顧レ從二役於將軍一」＝悅服。
【欣羨】セン　よろこびしたふ。陳琳文「海內企レ踵、一二一提攜之德一」＝悅慕・欣仰。
【欣躍】ヤク　よろこぶ。李華、無疆頌「父喪子疑歸二于國都一、無レ不二一一一一」＝歡愉・怡愉・欣慰・欣說。
【欣愉】ユ　よろこぶ。李華、無疆頌「父喪子疑歸二于國都一、無レ不二一一一一」＝歡愉・怡愉・欣慰・欣說。
【欣躍】ヤク　よろこびしたふ。陳琳文「海內企レ踵、一二一提攜之德一」＝悅慕・欣仰。
【欣羨】セン　よろこびしたふ。陳琳文「海內企レ踵、一二一提攜之德一」＝悅慕・欣仰。

五畫

【欽】㊀キン　㊁ク　侵　尤

㊀ふく(吹)○わらふ(笑)○あくびす(欠)㊁よろこぶ(悅)○あたたむ(溫)＝昫・煦。
【欽悅】エツ　わらひよろこぶ。盛唐、翠斌「其庭樂有レ聞レ之、則一一歡釋」

六畫

【欸】㊀カイ・ガイ　駭　㊁キ　薺　㊂アイ　卦

㊀せき、しはぶき「一嗽」＝咳。○せきの出る病。○せきばらひ、こわづくろひ。○擊一ガイは言笑の聲。㊁おくび。＝噫。
【欸逆】ガイ　○せきあげる。晉書「當レ暑煩悶、加以一一、或若二溫瘧一、或頭痛悪二食一」○のぼせてせきの出る病。傷寒論「一一上氣也」
【欸痰】シイ　せきのでるやまひ。疏、月令、注「因レ風致二一一一也」
【欸嗽】ソウ　せき、しはぶき。魏志、華陀傳「便苦二一一一、欲レ臥不レ安」
【欸唾擬レ珠】コイタヅツ　○せきやつばが皆美玉となる、勢力の盛んなるに喩ふ。欸・咳同じ。趙壹、疾レ邪賦「諂諛多レ所レ宜、咳唾自成レ珠」○詩文に巧みなるを稱する語。晉書「江淹謂二郭璞一曰、咳唾成二珠玉一、吐レ氣作二虹霓一」李白詩「咳唾落二九天一、隨レ風生二珠玉一」

【欸】㊀アイ　灰　㊁アイ　隊　㊂アイ　卦

○しかり(然)又、然らずとする、事の然らざる者を見てにはかに聲を出すをいふ。○嘻じてあ、ああ、歎く聲。＝咳。○なげく(歎)㊁一乃はふなうた。漁夫のうたふ欸。㊂いかる(怒)又、其の聲。
【欸乃】ナイ　ふなうた。唐照字典、一一謳中節レ歌聲、唐元結、有二一一

七畫

【欸】カフ　合

○するする(歎)○あふ、あはす(合)○をさめうける(收受)○一納は容納レの義。

曲」「柳宗元詩「一一一望山水綠」」「一舟に、船を行る棹の並。

【欸】 キ　㊀未

〇むせぶ、むせび泣く。〇すする、すすりなく、泣きたる餘聲「歔ー」「泣ー」〇なげく、かなしむ(悲)〇おそれる貌。

【欸泣】すすりなきする。

【欸歔】すすりなき。韓詩外傳「孟嘗ー一就之」‖歔欷。

【欸吁】なげく、嘆歎する聲。張敬儀「仰長歎以ー一」

【欵】 款(欠部八畫)の俗字。

【欲】 ヨク　㊀沃

〇ほっす。〇ねがふ(願)のぞむ(望)「願ー」「一望」〇貪りをしむ。又、其の心「貪ー」「利ー」論、憲問「克伐怨一不行焉、可以爲仁矣」願ひ求める。〇をしむ、あいす、めづ(愛)又、其の心「情ー」「淫ー」「貪ー」「慕ー」‖慾。〇七情の一。禮、禮運「何謂人情、喜・怒・哀・懼・愛・惡ー」〇しとやか、すなほ、婉順なる貌。〇このむ(好)〇將に然らんとするの辭「天一明」「天一雨」

【欲有】㊀三有の一、欲界をいふ。釋氏要覽「婆娑論云、一一一、二色有、三無色有」

【欲界】㊀財・色・食・名・睡等の欲を以て充たされたる世界。大藏法數「欲有二四種一、一者情欲、二者色欲、三者食欲、四者婬欲、下極二阿鼻地獄一、上至二第六他化天一、男女相夢多二諸染欲一、故名二一一一」

【欲界三欲】㊀飲食・睡眠・婬の三欲。俱舍論「欲界衆生具二三事一、故名二欲界一」

【欲海】情欲の人を陷るに喩ふ。温子昇文「源二論一一一」梁武帝文「度二苦迷于一一一」

【欲求】ねがひもとめる、ほしがる。‖欲望。希求。

【欲火】欲望の熾情を火に譬へていふ。

【欲剌】㊀財・色・食・名・睡の五欲は人をなやますこと、針の情を刺すが如し、故にいふ。元氣森絡「拔二諸一一、以安二羣生一」

【欲情】欲しねがふこころ。‖慾。

【欲望】のぞみ願ふこころ。‖欲求。

【欲不レ可レ從】私欲を抑へ制すべきをいふ。從は縱。曲禮「敖不可レ長、——敖は傲。

【欲利】利益を得たしとおもふ。管子「凡人者莫レ不二一レ一而惡二害一」

八畫

【欹】 イ　㊀支

器に滿たず、俗に敧と通用するは非

一歎は歎美の辭、ああ。‖猗與。

【欹】 カン　㊀感

〇あきたらざる貌(不滿足)〇あな(坑)左、襄十六「一用二牲一」盟約の時の犧牲を穴に埋める。‖坎。〇憾ふる貌。

【欹慨】志を得ざるうらみ。楚辭「志一一而不レ懲」

【欹然】心に滿足せざる貌。孟、盡心「如二其自視一一一」

【欺】 キ　㊀支

〇あざむく。〇うそ、いつはり(詐)「詐ー」〇自ら其の心を昧ます、惡事をして恥と思はぬ。大學「毋二自一一一也」〇あなどる(侵)〇しのぐ(陵)

【欺瞞】㊀欺・瞞・詒・給・誑〇欺はあなどりて、だます義。大學「誠レ意者、毋二自欺一也」〇瞞はばっとしたる事をいひて、だます義、謾と同じ。〇詒・給は二字同じ、だます義。史記「田父詒曰、左、乃陷二大澤中一」〇誑はたぶらかすとも訓む、だましてまよはす義。

【欺庇】だます、あざむきたぶらかす。韓愈詩「森猪畏二彈射一尿遁窓一一一」

【欺詭】あざむきたぶらかす。沈遼詩「甘言事一一一」

【欺詐】あざむく。魏志、倉慈傳「一一俚鄙、多不レ得二分明一」‖詐欺。

【欺殆】あざむき危くす。王珣詩「推レ心屏一一一」

【欺詒】あざむく、詒も欺。揚夫論「皆紀二民不一誠信一而數相一一也」

【欺誕】あざむく。後漢書、南匈奴傳「外示二畜強一以相一一」

【欺謾】あざむき(つらふ。後漢書、吳良傳「佞邪之人、一一無狀」

【欺罔】あざむきおかす。宋史、夢溪紀「主帥核二實車輔一一一以蹴論」

【欺負】〇あざむきそむく。漢書、韓延壽傳「被一一一之一者」〇しのぎだます、欺は陵。李翊文「見レ陵二於人一一一一」

【欺誣】あざむきしふ。荀子「今與二不善人一處、則所レ聞者一一詐偽也」‖誣欺。

【欺蔽】あざむきかくす。後書、鄧禹傳「人主知レ所二以驅一レ言受一レ事、則不二一一一」

【欺騙】あざむきかたる。

【欺罔】あざむきしひる。漢書、郊祀志「懷二詐偽一以一一一世主」‖欺誣。

【欺慢】キン　あざむきあなどる。申緘「事在而難ㇾ實者、一一必衆、奸僞必作、爭訟必繁」

【欺誕】キン　あざむきあなどる。漢書、宣帝紀「上計簿、具ㇾ文而已、務爲二一一以避一其課一、三公不二以爲一意、朕將何任」‖詐欺。

【欺左】キヨ　あざむきもてあそぶ。

【欺惑】コク　あざむきまどはす。五代史、吳越世家論「惑其一一愚衆、有二以用一之歟」

【欽】㊀キン・コン　㊁キン　㊀侵　㊁沁

㊀つつしむ、うやまふ（敬）おそれうやまふ。書、舜典「一哉一哉」○轉じてしたふ（慕）うらやむ（羨）○御と同じく、天子に關する物事に冠し用ふる字「一定」「一差」○なげく、ああ、あ。○一一は鐘の聲の節ある貌。又、思ひ望む義。又、憂ひて忘れざる貌。㊁おさへる（按）

【欽挹】キン　人をうやまひて自らへりくだる。晉書、樂廣傳「裴楷許引」廣共談、自ㇾ夕申ㇾ旦、雅相一一、歎曰、我不ㇾ如也」

【欽仰】キンギヤウ　うらやみあふぐ。

【欽鈺】キン　○鐘の聲の節ある形容。詩、小雅「鼓ㇾ鐘一一」○思ひ望む貌。一解に憂ひて忘れざる貌。詩、秦風「未ㇾ見二君子一、憂心一一」

【欽差】キン　天子の御つかひ。正字通「御音曰二欽敎一、御使曰二欽命一、俗曰二一一一、皆取二敬意一」

【欽奇】キン　つつしみてはかる。漢書、文帝「詔故老、一一聖君」

【欽問】キンウン　うやまひたふとぶ。南史、阮孝緒傳「爲二名流一所二一一一如ㇾ此」‖欽崇。

【欽若】キンジヤク　つつしみ順ふ。書、堯典「一一昊天」‖恭順。

【欽崇】キンシウ　うやまひたふとぶ。書經「一一一天道、永保二天命一」

【欽遵】キンソン　事をつつしみ人をあはれむ。劉敞文「奉二一一之意一」

【欽羨】キン　つつしみうらやむ。魏書、楊播傳「時人莫ㇾ不二一一一焉」‖欽美。

【欽敕】キンチヨク　天子のみことのり。正字通「今御音曰二一一一」

【欽定】キンテイ　敎命にてさだめる「一一四經」‖御定。

【欽天曆】キンテンレキ　五代の時に出來しこよみ。五代史、王朴傳「步二日月五星一爲二一一一」

【欽念】キンネン　つつしみおもふ。書經「一一以忱」‖恭惟。

【欽鴉】キンアン　みさご。‖鶚・雎鳩。

【欽服】キンフク　つつしみて服從す。‖敬服。

【欽慕】キンボ　其の人となりをうやまひしたふ。‖仰慕。

【欽味】キンミ　ほめあぢはふ。魏書、趙柔傳「徵二濱時儁俗一所二一一一焉」

【欽命】キンメイ　天子の御つかひ。正字通「御音曰二欽敎一、御使曰二一一一」

【欽明文思】キンメイブンシ　堯の徳をほめたたへし語、欽は身をつつしむ、明は道理に明か、文は文章が外にかがやく、思はかんがへがふかい。書、堯典「一一安安」

【欸】クツ　物　又、欻に作る

○たちまち、にはかに（忽）「一忽」○おこる、風が吹き起る。○一一はうごく（動）○かすか（幽）○くらし、ほのか。○一一暗鴨は疾き貌。江淹詩「一一暗鴨鳴」○奄一一は去來の定まらざる貌。左思、吳都賦「慌忽奄一」

【欸款】クワン　欵・忽・乍・倏の別は忽（心部四畫）の條を見よ。

【欸欸】クワツ　うごく貌（元包經）

【欸忽】クワツ　たちまち、にはかに。東觀餘論「飛刃一一若ㇾ神、而器不ㇾ離ㇾ身」

【欵】クヮン　早　欵は俗字

○まこと、まごころ（忠誠）「悃一」「忠一」○よろこぶ（歡）たのしむ（樂）○よしみ「通一」「交一」○いつくしむ（愛）○いたる（至）西京賦「繞二黃山一而牛首」○とどまる（留）○こまやか（委曲）○ひとつがき、約束　又は規則書などの條書「約一」「借一」○むなし、うつろ（空）‖竅。○凹入の文字。○きざむ（刻）金石に文字を刻みしるす。凹入の文字にて記す「一識」「落一」○ゆるし（緩）ゆるやか。○たたく（叩）門をたたき通ぜんことを求める「一門」「一關」

【納欵】ナフクワン　他國によしみを通する。敵に內通する。魏敎、移梁文「有苗一一、未ㇾ勞二征伐一」‖通欵。

【通欵】ツウクワン　納欵に同じ。北史、盧柔傳「舉二三萬之地一、一一梁國一」

【披欵】ヒクワン　まごころをうちあける。晉書、姚興載記「主辱臣憂、故重繭一一、惟陛下亮之」

【寄欵】キクワン　人にまごころをよせる。陸機賦「指南雲一以一一、望二歸風一而効誠」

【款項目】クワンカウモク　大別と中別と細別と。

【款狎】カウカフ　うちとけてなれしたしむ。南史、袁顗傳「一一過ㇾ常」

【款曲】クワンキヨク　○うちとけてねんごろなる心。後漢書、光武紀「文叔少時謹ㇾ實、與二人不一一一」○いりくみし委曲の事がら。謝靈運詩「辛勤風波事、一一洲渚首」

【款慤】クワンカク　誠實のこころ。南史、宋武帝紀「忠貞―一、待レ物以レ公」

【款款】クワンクワン　○まこと（忠實）なる貌。屈原、卜居「寧悃悃―一朴以忠乎」　○ゆるやかなる貌。杜甫詩「點レ水蜻蜓―一飛」＝緩緩・徐徐。

【款款之愚】クワンクワンのグワン　己のまごころをいふ謙辭。漢書、司馬遷傳「欲レ效二其―一」

【款閑】クワンカン　款門に同じ。史、商君傳「由余聞レ之、―レ―請レ見」

【款言】クワンゲン　ねんごろと、そらごと。漢書、司馬遷傳「――不レ聽、姦乃不レ生」＝空言。

【款語】クワンゴ　うちとけて面接して語る。蘇頌文「首與レ余―一」

【款話】クワンワ　款語に同じ。

【款塞】クワンサイ　塞門をたたく、蕃の來り降るにいふ。漢書、宣帝紀「百蠻―レ―來享」

【款識】クワンシキ　鐘鼎の銘、凹字に刻む（陰文）を識、凸字に刻む（陽文）を款といふ。史、封禪書「無二―一」

【款署】クワンショ　落款をする。

【款誠】クワンセイ　まごころ。＝忠實・赤誠。

【款洽】クワンカフ　したしみてうちとける。宋史、晉居簡傳「初居潤與二太祖一同事二世宗一情好―一」

【款接】クワンセフ　よろこびもてなす。宋史、何承矩傳「有二客使一者、款二於左右一與レ之―一、無レ所二猜忌一」＝款待。

【款然】クワンゼン　うちとけて人に接する貌。宋書、庾炳之傳「炳之先與二劉德願一殊惡、德願自持二甚嚴一、莅職、遇レ之便得―一」

【款惻】クワンソク　ま心よりいたむ。魏志、注「王雄悼辭激揚、情趣―一」＝懇惻。

【款待】クワンタイ　あつくもてなす。＝款接・優遇・優待。

【款段】クワンダン　足おそき馬。後漢書、馬援傳「乘二下澤車一、御二―一馬一」

【款冬】クワントウ　ふき、草の一、葉大きく葉柄長大なり、食用とす、款はよろこぶ、冬を歡びて花さく義。一解、款は叩、凍氷を叩きて生ずる義。蕭仲舒文「―一花二於嚴寒一」＝漢東・款凍。

【款東】クワントウ　前條に同じ。急就篇、注「―一即款冬也」

【款凍】クワントウ　款冬に同じ。

【款扉】クワンヒ　とびらをたたく、人を訪ふ義。陸游詩「逢二著園林一即―レ―」＝款門。

【款服】クワンフク　まごころより從ふ。北史、魏紀論「郡人聞レ之、咸自―一」＝心服・悅服・欣服・歎服。

【款門】クワンモン　門をたたく。人を訪問する義。晏子、雜篇「前驅―レ―」　賢―レ―而謁」＝叩レ門・叩レ關。

【款話】クワンワ　うちとけて語る。癸辛雜識「一日內宿、召對二天顏一甚喜、曰、欲二與レ卿―一」＝款語。

歌 九畫 欠部

キン　【慶】

○うく（受）祭事が神の意にかなひて、神が供物をうけたまふ。○うごく（動）詩、大雅「履二帝武敏一」○うらやむ（欣羨）○よろこびしたがふ（欣服）周語「民―而德之」○むさぼる（貪）楚語「楚必―レ之」

【歌艷】キンエン　うらやむ。唐書、朱克融傳「貴厚與二祿位一、使二北方―一」＝歆羨。

【歌嘗】キンショウ　神に物をすすめまつる。崔駰、北巡頌「禋潔享祈、―二百神一」

【歌羨】キンセン　情を動かしてうらやむ。詩、大雅「無二然泮援一、無二然―一」

【不レ歌】フカ　神が祭の供物を受納せず。左傳「鬼神非二其族類一―レ二其祀一」

歇 十畫 欠部

ケツ　【月】

○やむ。左、襄二九「難未レ―也」とどむ、とどまる、いこふ、やすむ（息）「休―」「憩―」○つく、つくす（竭）「耗―」「消―」○―なる貌。王延壽、魯靈光殿賦「―欻幽靄」

【歇後】ケツゴ　後尾の語を略していはざる一種の隱語「友二于兄弟一」を友于といふの類。唐書、鄭綮傳「綮本善レ詩、其語多二俳諧一、世共號二鄭五―一體一」

【歇息】ケツソク　やすむ。白居易詩「農牛冬―一」＝休息・休憩・憩息。

【歇息牌】ケツソクパイ　やすみの札。＝歸牌「掛二―于門首一」

歃 十畫 欠部

サフ　【洽】

又、唼・啑に作る

すすら（啜）吸ひ飲む。一解に盟約のしるしに犧牲の血を口の旁に塗る。

【歃血】サフケツ　盟をする時、ちをすする。一說に　血を以て口の旁に塗る。史、平原君傳「王當二―一而定一レ從」＝唼血。

欸 十畫 欠部

ア。　【陽】

しゃくりなき、むせびなき。

【欸唱】アショウ　むせびなきす。淮南、覽冥「雍門子援レ心發レ聲、孟嘗君爲レ之增レ歔―一」＝嗚唱。

歈 十畫 欠部

【歌】 カ　歌 又、謌に作る

○うたふ(詠)曲節フシの音樂に合するをーといひ、徒歌タヽシを謠といふ。○うた「詩ー」「騷ー」「漁ー」○韻文(詩)の一種「大風ー」「天馬ー」○國うた、やまとうた「和ー」「國ー」

【歌詠】カエイ 歌・謠・謳○歌は聲を長く引き、ふしをつけてうたふ時、歌謠と對言すれば、樂器に合するを歌といひ、徒歌を謠といふ。されども、必ずしもこれに拘せず。○謠はわけなくうたふ、俗歌なり、すうた。○謳は同音にうたふなり、謳歌と熟す。歌は總名にして、謳は歌の別調なり、ちょっとしたる短きひとふしの歌をいふ。

【歌謠】カヨウ うたふ。又うた、樂器に合せてうたふを歌、すうたひを謠といふ。

【歌妓】カギ 歌妓に同じ。沈立詩「翻曲歌ニー一」＝歌姫。

【歌筵】カエン きかもりに歌ひて酒を侑スヽめる。又其のむしろ。徐陵詩「舞席秋來後、ー一無數塵」

【歌唱】カショウ うたをうたふ。又うた、唱は謳。漢書、朱買臣傳「毋ー一道中ー」＝歌謳。

【歌謳】カオウ 前條に同じ。

【歌袴】カコ 國うたのしたがき。＝袿

草。

【歌學】カガク 國歌道の學問、和歌の學。

【歌妓】カギ うたひめ。孟浩然詩「當ニ杯巳入レ手、ー一莫レ停レ盃」＝聲妓。

【歌姫】カキ うたひめ。唐書、河閒王孝恭傳「孝恭置ニ遊宴ー一舞女百有餘人」＝歌妓。

【歌戲】カギ うたひたはむる。魏志、高柔傳「國中邑落、葬復男女雜坐、相就ー一」＝唱歌遊戲。

【歌曲】カキョク うたのふし、歌謠の音譜。宋史「高宗命ニ學士沈遘中ー作ニ一其詞ー于太淸樓右明堂ニ」

【歌合】カアワセ 國和歌を作るよりあひ。

【歌呼】カコ 大聲にて歌をうたふ。史、晉帝世家「ー一與相應和」＝放歌。

【歌兒】カジ 歌童に同じ。陳信詩「月晴掩ニー一」

【歌集】カシュウ 國和歌をあつめたる書物。萬葉集、古今和歌集などの類。

【歌人】カジン 國和歌を作る人、うたよみ。

【歌唱】カショウ うた、又、うたふ。鮑照詩「ー一青齊女、彈箏燕趙人」＝謳唱、唱歌。

【歌書】カショ 國和歌のことを記せし書物。

【歌劍】カケン いさををほめたたへたる歌。史、樂書「寬而靜、柔而正者、宜ニー一」＝咏頌。

【歌吹】カスイ 歌をうたひ笛を吹く。鮑照、蕪城賦「廛開撲地、ー一沸レ天」

【歌吟】カギン うたひほめる。蜀志、譙周傳「故北州ー一、擧布二四道ニ」

【歌女】カジョ ○うたひめ。孟郊詩「生恥ー一嫣」＝歌妓。○みみづの異名。古今註「蚯蚓、江東謂ニ之ー一ニ」

【歌聲】カセイ 歌をうたふわらべ。韓愈詩「春風紅樹裏、眠處、似レ拍ニー一作ニ鸚鵡ニ」

【歌僮】カドウ 唱歌になれたるめしつかひ。晉書「ー一舞女、週旋ニ一時ニ」

【歌榜】カボウ 船うたを歌ひてかいをこぐ。張說詩「絲管轉ニー一ニ」

【歌板】カバン うたの拍子をとるに用ふるいた。紫檀又は黒檀にてつくる。故に檀板ともいふ。顧況詩「懶慢辭亭ー一舒」

【歌舞】カブ ○うたひまふ。史、樂書「ー一宗廟」○うたと、まひと。

【歌舞伎】カブキ ○歌舞をする藝人。唐書、宗室傳「ー一百餘」○國出雲の阿國クニが慶長中にはじめし舞曲。

【歌舞地】カブチ 全盛繁華の樂を極めし場所。王維詩「寂寞空餘ー一、王孫歩絶風歸レ天」

【歌扑】カボク 歌をうたひ手をうちてよろこぶ。齊書、張敬兒傳「善天年主、誰不ニー一」

【歌篇】カヘン うた。晉唐書、吳均傳「所ニ著ー一傳二于京師ニ」同、李寶傳「手筆敏捷、尤長二于ー一ニ」

【歌縷】カル うたの法式。葛立方詩「小歌低處傳ニー一ニ」

【歌樓】カロウ うたをうたふたかどのっ又、げいしゃ屋。王偉詩「ー一暖春雲風翻」＝妓樓。

【歌袋】カタイ 國うたのしたがきなどをいれるふくろ。

【歌枕】カチン 國和歌の枕詞としてよみこむによろしき名所の名。

【歔】 キョ　歍 通じて煦に作る　欠

○ーは氣の上がり出づる貌。又、氣の盛んなる貌。○熱き氣「炎ー」

【歐鬱】オウウツ 氣の盛んなる貌。漢書、敘傳「曲陽一ー、赤朱二其堂一」
【歐氣】オウキ むしあつき氣。漢書、揚雄傳「浮二溢雲一而歐ニー一」

【歉】ケン カン・ケン 豏 嚴・儉に通ず

○あきたらず(食不二滿一)不滿足に思ふ。○穀物がみのらず、きゝん、凶年「饑ー」○すくなし(少)ふそくする。○かく。○うらむ(恨)「抱ー」
【歉歲】ケンサイ 穀物のみのらざる年。宋史、黃廉傳「使下民遇二豐年一而思二ー一也一」‖惡歲・凶年。
【歉然】ケンゼン あきたらざる貌。
【歉收】ケンシウ 穀物みのらずしてくるしみつかれる。宋書、明帝詔「年久不レ登、公私ー一」

十一畫

【歐】(一)オウ (二)オウ 尤 有

(一)はく(吐)あげる、へどつく、もどす。‖嘔。○吐く聲。○うつ、杖にて打つ(擊)殿に通ず。(二)ー一はこゑ(聲)○うたふ「ー歌」‖謳。○くびきりがたな、人を刑するに用ふる刀。○ー冶子は古の善く劍を鑄る者。越絕書「吳有二干將一、越有二ー冶一」‖區冶。○五大洲の一、歐羅巴ヨーロッパの略「ー米」「ー亞」○西洋「ー風」「ー文」
【歐亞】オウア 歐洲と亞細亞洲アジアと。西歐と東亞と。‖亞歐。
【歐歐】オウオウ 鳥のこゑ。魏繆襲元射「鸞鳴ー一、明煌煌」
【歐九】オウキウ 歐陽修の號。行は第九に當る、故にいふ。劉克莊詩「ー一平生許可難」
【歐逆】オウギヤク 歐吐に同じ。急就篇、註「ー一、吐而不レ下レ食也」
【歐陽】オウヤウ 歐陽詢と、虞世南と、竝に有名の書家。集古錄「暗龍藏寺碑、不レ著二書人名氏一、宋道弼、有二ー一之語一」
【歐化】オウクワ ○歐羅巴ヨーロッパ諸國の風俗習慣思想に感化せられて其の風になる。○歐洲の文化。
【歐洲】オウシウ 歐羅巴洲ヨーロッパシウ‖西歐。
【歐泄】オウセツ 腹中の物をはき出すと、はらくだけと、上は吐き下は瀉ダす。漢書、酈助傳「ー一霍亂之病、相隨腳也」杜甫詩「ー一風雨日」
【歐打】オウダ たたく。
【歐刀】オウタウ 罪人を刑するに用ふる刀。後漢書、虞詡傳「鄧伏ニー一以示二遠近一」
【歐精】オウセイ 歐陽詢と精遂良と、竝に書の名家。梅堯臣詩「ー一遺墨非レ因レ帳」
【歐吐】オウト はく。北史、李諤子士謙傳「事レ母以レ孝聞、母嘗ー一、親二中夜一、因跪嘗レ之」‖歐逆。
【歐文】オウブン よこもじ、西洋文字。
【歐米】オウベイ 歐洲と亞米利加洲アメリカと「ー一の物質的文明」
【歐陽修】オウヤウシウ 字は永叔、晚に六一居士と號す、宋の廬陵の人、文章を善くし、一代の泰斗たり、其の眞事を知するや、痛く時文を抑ふ、宋の文章炳然として古に復す、著す所、新唐書・五代史あり、神宗の熙寧五年卒す、文忠と謚す。
【歐陽詢】オウヤウシウ 字は信本、唐の臨湘の人、博く經史に通ず、王羲之の書を學び、遒勁は之に過ぐ、貞觀の初、太子率更令・弘文館學士に至る、陳叔達等と藝文類聚を撰す、貞觀十九年卒す、年八十五。
【歐冶子】オウヤシ 古の名高き刀かぢ、字解參看。吳越春秋「干將吳人也、與二ー一同レ師、俱能爲レ劍」

【歎】(一)タン (二)タン 翰 嘆に通ず

(一)なげく、うめく、ためいきをつく(吟息)「長ー」「一息」曲禮「當食不レ一」○いきどほる(慷慨)憤慨する。○いたむ、かなしむ(哀痛)○歷心してほめる(稱美)「感ー」「一美」「一賞」禮、郊特牲「孔子廣ー之」(二)たすけ和する(讚和)歌ふ調子をたすける爲めに末尾に聲を曳きて唱へる。禮、樂記「愛俱而二ー」
【歎息】タンソク 感心してすぐれて他と異りと思ふ。北史、齊武帝紀「帝年八歲、冠服端嚴、神情閑遠、雅成ー一」
【歎嘉】タンカ 心に感じてよみす。歐陽修文「益彰二材敏一、尤用二ー一」
【歎慨】タンガイ なげきいきどほる。史、屈原傳「永ー一兮」‖歎嗟・慨歎。
【歎息】タンソク なげきて心をうごかす。王令詩「置案不二復收一ー一退自旋」‖感歎。
【歎嘆】タンタン なげく。王令詩「出レ門千里到何時、母送拊二背父一ー一」
【歎願】タンガン なげきねがふ「ー一書」
【歎恨】タンコン なげきうらむ。杜甫詩「勳レ君休ニー一、未二必不一レ爲レ編」
【歎嗟】タンサ なげく。何遜詩「撫レ絃空二歎娛一、臨レ觴獨ー一」‖嗟歎・歎慨。
【歎傷】タンシヤウ なげきいたむ。温庭筠詩「愴背幾遊集、今來倍ー一」‖歎悼。
【歎賞】タンシヤウ ためいきをつきてほめる。元史、馬祖常傳「祖常應レ制賦レ詩、尤被二ー一」‖歎譽・歎賀。
【歎稱】タンショウ 感心してほめる。‖歎賞・歎譽。
【歎聲】タンセイ ためいき。又、なげくこゑ。
【歎逝賦】タンセイフ 晉の潘岳の作、歲月の匆

勿として過ぎ去り、人生の老い易く、忽ちに死亡するを歎ず。文選に載す。

【歎美】タン　心に感じうらやむ。文関文「使二人ー一不二能已一」

【歎息】ソク　○なげきてためいきをつく。潘岳、寡婦賦「歸二空館一而自憐兮、撫二衾裯一而ー一」○甚だしく感心する。晉書、和嶠傳「三軍ー一、咸震二敵人一」

【歎悼】タウ　なげきいたむ。蔡邕、碑文「追遡ー一、痛心失レ措」‖歎傷・痛悼。

【歎津】タン　なげきてなく。九歎、望高丘而ー一兮」

【歎美】ビ　深くほめる。‖稱美・歎賞。

【歎伏】フク　心に感じてしたがふ。世說「ー一以爲レ不レ能」加」‖感服・敬服。

【歎服】フク　前條に同じ。楊載詩「仲余走二海内一、一見輒ー一」

【歎慨】ガイ　なげきいきどほる。宋書、拓跋氏傳「莫レ不二ー一一」主命詩「屈降心已甘、ー一志亦願」

【歎息】ソク　心に感じてほめる。宋史、孫永傳「貫盈感爲二御史一以二母老一不レ就、韓琦演其詩ー一二之一」

【歎惋】タン　なげく。遊史、耶律石柳傳「聞者莫レ不二ー一一」‖嗟惋・悲惋。

十二畫

【歙】㊀キフ　㊁セフ　㊀㊁

㊀すふ、をさむ、氣を體内に吸ひこむ（歙レ氣）○あふ、あはす。あつまる、ひとつになる。‖翕。○そびやかす。‖肅。○鼻を縮める。㊁縣の名、安徽省徽州府に屬す。

【歙肩】クヱン　かたをそびやかす。後漢書、張衡傳「手迫荷容、我不レ忍二以ー一ー」

【歙然】ゼン　一つになる、一致する貌。漢書、匡衡傳「ー一歸レ仁」同、韓延壽傳「郡中ー一」‖翕然。

【歙硯】ケン　安徽省婺源の歙溪より産出するすぐり、南唐の時、すでに世に聞ゆ、名を得ることは端溪よりも古し、宋代已に佳石なく、今は多く他處の岩石を以て偽りて之に充つ「ー一說」一卷は洪適の刻せし硯譜三種の一。

【歔】キョ　魚

○なく、なげく、むせびなく、すすりなき（欷）泣きて鼻から氣を出す。○おそれる（懼）

【歔欷】キキ　○すすりなく、むせびなく。陳琳詩「惆悵忘二寢返一、ー一滋沾レ襟」東方朔、七諫「泣ー一而霑レ軾」‖歎欷。○かなしみ憐れる貌。離騷「曹ー一余數息兮」

【歔泣】キフ　すすりなく。むせびなき。江淹詩「一聞清琴奏、ー一方留連」

【歔】キョ　歔（欠部八畫）の本字、其の條參看。

【歔吸】キフ　風雲などの吹き過ぐる貌。謝朓、高松賦「卷二風飈之ー一、積二霞霧之飛霏一」蘇軾詩「遨遊二南山雲ー一如二飛過一」

【歔忽】コツ　たちまち、にはかに。‖歎忽・飄忽。

【歔欷】キキ　たちまちにいたる。杜甫賦「ー一二手長樂之舍一、鬼入二乎皇猶之丘一」

【歔】キョ　噓（口部十二畫）に同じ。○ふく（吹）○うそぶく、うめく（吟）

十三畫

【歛】カン　勘　覃　歛とは別

○おもふ、ねがふ、欲する。○あたふ（予）

【歜】㊀シュク　㊁サン　㊀㊁　㊀氣を盛んにして怒る。○人名。顏ー一は戰國の人。㊁昌ー一は菖蒲の菹

十四畫

【歟】ヨ　魚　麻　虞　通して與・欤に作る

○氣が緩くして安し。○轉じて語尾に置きて、疑問・推測不定などの意を表はす助字。か、や「猶ー一」「歸ー一」

同訓異義　歟・乎・邪・耶・與の別は乎（ノ部四畫）の條を見よ。

十五畫

【歠】セツ　屑

○する、のむ、流ー一「餔ー一」屈原、漁父辭「ー一其醨」○のみもの、飲料「熱ー一」

十八畫

【歡】クヮン　𣎵　又、懽・驩に作る

○よろこび、たのしみ「ー一喜」「ー一樂」○よろこび、たのしむ（喜樂）

同訓異義　歡・喜・悦・欣・懌・怡・愉・賀等の別は喜（口部九畫）の條を見よ。

【歡愛】アイ　よろこびいつくしむ。晉記「欣喜ー一、樂之官也」

【歡遊】イウ　よろこびてあそぶ。白居易詩「去歳ー一何處去、曲江西岸杏園東」

【歡榮】クワンエイ よろこびと、さかえと。草廬物詩「賢愚共ニ一ー」‖歡樂榮華。

【歡娛】クワングヰ よろこびの至くばた。陳休奕詩「巧笑倩ニ一ー」張華詩「巧笑倩ニ一ー」、難娟眸與レ眉」

【歡宴】クワンエン 喜ばしき酒もり。晉書、王羲之傳「歡ニ與ニ親和一時共ニ一ー」

【歡】歡【歡】クワンクワン よろこびの心をたすける。唐書、三宗諸子傳「賜ニ金帛一ー」、世謂天子友悌、古無レ有者」

【歡思】クワンシ むつまじきめぐみ。曹植文「叙ニ骨肉之一ー一、全ニ怡怡之篤義一」

【歡呼】クワンコ よろこびてよぶ。韓愈、元和聖德詩「踴躍一ー、失喜噎歐」‖歡呼。

【歡暇】クワンカ うれしきいとま。陸倕詩「追惟ニ昔時一、朝府多ニ一ー」

【歡諧】クワンカイ よろこびやはらぐ。顏氏家訓「竟日一ー、詞人滿レ席」‖歡和。

【歡顏】クワンガン よろこびおどろく。唐書、吳融傳「左右一ー」

【歡康】クワンカウ よろこびて、やすんじたのしむ。東京賦「君臣一ー、具醉乘レ黑」曹植詩「陛下臨レ軒笑、左右成一ー」

【歡客】クワンカク ○よき賓客。晉林「喜樂賜レ臨、來迎ニ一ー」‖佳客・嘉賓。○草の異名。三柳軒雜識「一莖草花爲ニ一ー」

【歡狎】クワンカフ よろこびてなれしたしむ。步非烟傳「永泰ニ一ー」

【歡感】クワンカン よろこびて心をうごかす。漢武昭王交「一ー循環而相求」

【歡喜】クワンキ よろこぶ。戰國策「武安君曰、秦克ニ趙軍一秦人一ー」‖欣喜・歡愉。

【歡喜天】クワンキテン 圖もと惡神なりしが、佛の教をうけて善神となり、人に幸福平和を與へるといふ神。金銀にて男女淫交の狀を鑄るもの。‖歡喜佛・大聖天。

【歡訟】クワンセウ よろこび戲れる。韓愈詩「儻不ニ忍ニ辜勤一何由遂ニ一ー」

【歡會】クワンクワイ たのしきつどひ。杜甫詩「人生一ー一壺有」陳」白居易詩「黃雞與ニ白酒一ー一不ニ隔レ旬」

【歡迎】クワンゲイ よろこびむかへる。陶潛歸去來辭「僮僕一ー、稚子候レ門」

【歡敬】クワンケイ よろこびうやまふ。傳咸文「攘ニ一ー于藍下」

【歡悃】クワンコン 心によろこび滿足する、悃は心にかなふ。蘇軾詩「一ー史傷レ此、春股殊念レ玆」‖歡適。

【歡養】クワンヤウ よろこびてかへりみる。楓窗小牘「九重一ー、六宮避レ虛」‖歡愛。

【歡呼】クワンコ よろこびて聲をあげる。元稹文「萬姓一ー、四方來賀」‖歡呼。

【歡娛】クワングヰ よろこびたのしむ。白居易詩「只ニ逢ニ新飲客一豈復ニ一ー」蘇軾詩「一ー在ニ今夕一」‖歡樂。

【歡語】クワンゴ たのしくはなしあふ。‖歡話。

【歡媾】クワンコウ よろこびいつくしむ。又、よき縁組。曹植賦「悲ニ良媒之不一レ顧、懷ニ一ー之不レ厭」

【歡心】クワンシン よろこぶこころ。孝經「得ニ百姓之一ー」【以事ニ其先君一】

【歡情】クワンジヤウ よろこぶこころ。神女賦「一ー未レ接、將ニ辭而去」

【歡悚】クワンシヨウ よろこびの心と、おそれる心と。李嶠文「結ニ厚遇一而一ー」

【歡醉】クワンスイ よろこび盡ふ。列仙傳「劉商東游ニ廣陵一、逢ニ一道士賣レ藥、擧上ニ酒樓一、開讀一ー」

【歡笑】クワンセウ よろこびわらふ。謝惠連、武帝紀「相ニ手一ー」‖喜笑。

【歡慈】クワンジ よろこびと、かなしみと。陶潛詩「一ー亦殊レ音」‖悲喜。

【歡愛】クワンアイ よろこびたのしむ。何遜詩「近識ニ既爲レ疎、一ー苦來レ纏」

【歡待】クワンタイ よろこびもてなす。張祜詩「榮歡情不レ盡、一ー總無レ違」‖欣待。

【歡會】クワンクワイ よろこびやすらか。宋書「朝野一ー、日躋ニ光康」李嶠玉文「還國ニ昇平一率土一ー」

【歡適】クワンテキ よろこびて心にかなふ。白居易詩「先務ニ身安閑一次要ニ心一ー」‖歡愜。

【歡天喜地】クワンテンキチ 天に歡び地に喜ぶ、よろこびの十分に滿つる義。

【歡膳】クワンゼン よろこびてをどりあがる。王褒「踏筆一ー、觀者山時」‖歡躍。

【歡伯】クワンパク 酒の異名。易林「酒爲ニ一ー、除ニ憂來」樂」

【歡服】クワンフク よろこびしたがふ。後漢書、羊續傳「百姓一ー一」‖悅服。

【歡慕】クワンボ よろこびしたふ。傳休奕詩「華下仰ニ清風一海內同ニ一ー一」‖悅慕。

【歡羅】クワンラ よろこびておどる。喜びの甚だしき義。易林「舞蹈一ー一」‖歡騰・歡喜拜躍。

【歡愉】クワンユ よろこぶ。よろこび。韓愈文「一ー之辭難レ工」‖怡愉・欣愉。

【歡樂】クワンラク よろこびたのしむ。孟、梁惠王「與ニ民一ー一之」

【歡樂極兮哀情多】クワンラクきはまりてかなしみ多し 樂しみが至り極ると、かなしみの情を生ずる義。漢武帝、秋風辭」

【歡和】クワンワ よろこびやはらぐ。馮衍文「思ニ厚一ー之節、樹ニ定金石之固」

止部

【止】シ 編

○とどむ、とめる（留）論、微子「一ニ子路一ニ宿」とどまる。○やむ（已）論、子罕「一ニ吾一ニ也、進吾進也」やすむ（休息）○心の安ん

ずる所。心をおちつける。大學「在ㇾ於至善」○をる(悶)○しづか(靜)動かぬ、靜まる。禮、玉藻「口容ー」○いたる(至)臨む。○ね、ねもと(根幹)○あし(足)漢書「當ㇾ斬。左ー」者、笞五百」‖趾。○とらはれる。とりこにする。左、僖十五「諸ㇾ秦伯將ㇾ之」○師營に行く。いくさにゆく。○かたちづくり、たちるふるまひ「容ー」「舉ー」「動ー」詩、鄘風「人而無ㇾ儀ー」○あつまる。あつむ(集)○せず、おこなはず、爲さず。○さしとめる、禁ず、制す「禁ー」「中ー」「停ー」「諫ー」「ー諸」○をはる(畢)○つく(盡)○やどる(宿)○のり(則)○祝を設つ椎ッ○ただ、ただに(啻)わづかに。莊、天運「ー可ㇾ以一宿、以不ㇾ可久處ニ」○無意味の助字。詩、周頌「百室盈ー、婦子寧ー」

同訓異字 止・唯・只・但・徒・第・啻・遑・直の別は唯(口部八畫)の條を見よ。

○詳止・留・駐・停・過・逗・陰○止はやめとどまる意、止者、必至ㇾ是而不ㇾ遷之謂と註す○留は去に對す、其の場にゆるりと留り居るなり、逗留・滯連・滯ㇾ客などと用ふ。衍義「留ニ意典籍一」○駐は馬をとどむる意、何にても疾く過き去るを、引きとどむるなり、駐ㇾ舟・駐ㇾ兵・駐ㇾ春の類。○停は中止なり、停水はたまり水なり、停雲は、雲が動かすに止り居るなり。杜牧詩「停ㇾ車坐愛楓林晩」○過はとどむると訓む、せきとめて向うへやらぬことなり、過ㇾ雲は、向うへゆかんとする雲を、ゆかさぬなり。書經、過二蜜八音一」止は、やめさせて動かさぬこと、留は、逗留さすこと、駐は行列などを、其の場にとどむるをと、停は、しばらくまたすこと、過は、おしとむるなり、以て其の別を知るべし○逗は途中に滯り留まる義、逗留と熟す○稽は久しく、ぐづをあけず留むる義。後漢書、何足ㇾ久稽二天下士一」

○**止**・已・息・輟・歇・罷・休の別は已(己部)の條を見よ。

【止遏】ヲツ　とどめる。晉書、華譚傳「爲二賴荼所一ー一」‖禁遏。

【止渴之計】シカツノ　のどのかわきをとどむるはかりごと。魏の武帝の故事、方便の計をいふ。世說、假譎「魏武行役、失二汲道一、軍皆渴、乃令曰、前有二大梅林一饒ㇾ子、甘酸可ㇾ以止ㇾ渴、士卒聞ㇾ之、口皆出ㇾ水、乘ㇾ此得ㇾ及二前源一」

【止軍】シグン　軍隊をとどむ。史、項羽紀「漢王乃追二項王一、至二陽夏南一ー一ㇾ」

【止戈】シカ　ほこをとどむ、戰爭をやめる義。左傳「夫文、ー一爲ㇾ武」止戈●二字を合すれば武の字となるをいふ。吳志、孫皓傳「ー一興ㇾ仁」

【止遏】シアツ　あやまちをとどむ。商子「斷二人之足一、與二人面一、非ㇾ求ㇾ傷」民也、以禁ㇾ姦ー一也」

【止戲】シギ　多くの妄念を制し止めて、萬有の眞理を觀しきる。

【止艮】シゴン　とどまる、艮は易の艮卦、一陽が二陰の上にありて、止の義あるによる。李梴蒙泉賦「胡ー一而不ㇾ前ニ艮止。

【止邪】シジャ　よこしまなる心をふせぎとどむ。史、酷吏傳「禁ㇾ姦ー一」

【止酒】シシュ　酒をやむ、禁酒する。高適詩「淵明方ー一、王粲亦登ㇾ樓」

【止宿】シシュク　とまる、やどる。漢書、王尊傳「因ー一」

【止水】シスイ　○たまり水。莊、德充符「仲尼曰、人莫ㇾ鑑二于流水一、而鑑二于ー一ニ」○轉じて心の靜かにして動かざるに喩ふ。

【止息】シソク　とどまりいこふ、やむ。史、孟嘗君傳「未ㇾ知ㇾ所ニー一也」‖息止・休止・休息。

【止畜】シチク　とどむ。易、經傳「六五居ニ君位一、ー一ニ天下之邪惡一」

【止頓】シトン　とどまる、軍隊の一所にとどまる義、頓は止舍。吳志、潘璋傳「ー一便立ニ軍市一」

【止誘】シユウ　そしりをとどむ。徐幹、中論「當稱ㇾ救ㇾ寒莫ㇾ如ㇾ重ㇾ裘、ー一ㇾ莫ㇾ如ㇾ修ㇾ身」

【止墓】シボ　顯墓の名をおさへとどむ。陳後主文「惟刑ー一、惟德成ㇾ物」

【止泊】シハク　とまる。又、おちつき休む。陶潛詩「前途當幾許、未ㇾ知ニー一

【止息】シソク　とどまりいこふ、やむ。史、孟嘗君傳「未ㇾ知ㇾ所ニー一也」‖息止・休止・休息。

【止畜】シチク　とどむ。易、經傳「六五居ニ君位一、ー一ニ天下之邪惡一」

【止頓】シトン　とどまる、軍隊の一所にとどまる義、頓は止舍。吳志、潘璋傳「ー一便立ニ軍市一」

【止誘】シユウ　そしりをとどむ。徐幹、中論「當稱ㇾ救ㇾ寒莫ㇾ如ㇾ重ㇾ裘、ー一ㇾ莫ㇾ如ㇾ修ㇾ身」

【止暴】シボウ　顯墓の名をおさへとどむ。陳後主文「惟刑ー一、惟德成ㇾ物」

【止泊】シハク　とまる。又、おちつき休む。陶潛詩「前途當幾許、未ㇾ知ニー一

【止罷】シヒ　みくるまをとどむ。天子の一所に車をとどむるをいふ。謝朓文「皇仁閔ㇾ下馬ー一」

【止步】シホ　足をとめる。沈約文「ー一凝思、空明屬念」

【止戾】シレイ　とどまる。時經「宗周既滅、祭ㇾ而ニー一」‖戾止。

【止可ㇾ遂ㇾ風月】シカスイフウゲツ　ただ風流のことのみを語るべし、名利の念なき義。南史、徐勉遷ニ吏部尚書一居ニ選官一、曾與ニ門人一夜集、客有ニ干ㇾ請ㇾ求ニ於事官一勉正色云、今夕ー一、不ㇾ宜ㇾ及ニ公事一、時人服ニ其無ㇾ私」

【正】一　畫

㊀セイ・シャウ　㊁セイ・シャウ　漢　戰

㊀ただし、なほし。邪の反對。○ただす、あらためる、ただしくす、みだれて正しからざる者をただしく整ヘる。論、堯

日「ー」其衣冠」〇事の是非を問ひただす。論、學而「就ニ有道一而ー」〇よし（是）「是ー」〇まさに、まさしく、あたかも（恰）ちょうど。論、述而「ー唯弟子不レ能及也」〇そなはる（備）〇たる（足）〇をさ、かしら、役人のかしら（官長）の義、王制「史以ニ獄成一告ニ於ー」〇主たるもの。副の對「ー使」〇官位の上なるもの。從の對「ー一品」〇罪を治める。〇つね（常）孟、滕文公「以レ順爲レ一者、妾婦之道也」〇ただしくして賢き人「先ー」〇ほんもの、表向のもの「ー妻」〇いましめ（訓戒）〇あきらかにす。〇わきまふ（辨）〇ただしき道、ただしき事。〇のり（標準）〇なか、まなか（中極）〇つかさ（主任）〇まつりごと、政に通ず。〇あらかじめ期す、あてにする。孟、公孫丑「必有ニ事焉而勿レ一」㊁歳の第一月「ー月」「ー朔」一說に去聲敬語に入る。〇射候の中、弓の的の中の星「ー點」詩、齊風「終日射レ侯、不レ出ー兮」〇ひつき、征に通ず。〇室の明かなる方に向ふ處。

【周語】スジ 正・規・繩・斜・格・匡・直・訂・質 〇正は邪の反、ゆがめるを、眞直スグにただすなり。論語「就ニ有道一而正焉」〇規は以レ法正レ人曰レ規と註す、ぶんまはしにて、ゆがみを直す義なり。小學「德業相勸、過失相規」〇繩は墨繩にてゆがみを正す義、書經「惠迪」惠斜」遐、格ニ其非心一」〇糾はあやまちを糺げて、厳しくただすなり。〇格は正なり、法度、格式に合ふやうに正すなり。書經「格ニ其非心一」〇匡は救ひ正すなり。孝經「君子事レ君、匡ニ救其惡一」〇董は督正なり、多くの人を勵したたすなり。董役は、普請奉行をすることなり。〇訂は文字の誤をただし定むる義、訂正・訂疑の如し。〇質は問ひてただす義。中庸「質ニ諸鬼神一而無レ疑」

〇正・方・適・祇・多・鮮・將 〇正は まさしくと訓す、正面の義、偏の反なり、花正開といへば、花が十分の見頃になりたるなり、政に作る、同に。〇方は方位の方にて、其の方に向ふ義、まさかりと訓す、花方開といへば、花が今をさかりと開けるなり、又方今と熟し、さしあたってと訓す。左傳、小遼方降「疾甚方起」〇適は適當と熟し、てうどと訓す。的に作る、同じ。漢書「陛下所ニ以爲ニ愼夫人一適所ニ以納ニ之也」また、たまたまとも訓む。周本紀「適會ニ山林多ニ人」〇祇は適也と註す。適と同用の字面なり。揚子法言「玆著也、祇其所ニ以爲ニ樂也歟」孫に作る、同じ。〇多は祇と同じ、論語に「多見ニ其不ニ知ニ量也」とありて、釋文に、多或は祇に作るとあり。〇鮮は方に同じ。漢書「天子春秋鼎盛」〇將は既の反なり、欲レ然也と註す、まさに何何せんとすとかへり訓む。論語「將レ入レ門、策ニ其馬一曰、非ニ敢後一也、馬不レ進也」

【正位】セイイ ただしき位置。體に喩ふ。孟、滕文公「居ニ天下之廣居一、立ニ天下之ー一、行ニ天下之大道一」

【正意】セイイ ただしきこころ。說苑「檢ニ其邪心一、守ニ其ー一」ニ正心。

【正達】セイタツ たがひたるをただす。左傳「愼其出」而補ニ其闕一、正ニ其違一而治ニ其煩一、所ニ以爲ニ聖主一」

【正友】セイイウ ただしきともの。素書、柱士無ニー一」ニ益友。

【正員】セイイン 其の事のおもなる人數。又、其の者。唐書「能通者依ニー一」

【正懲】セイチヤウ おそれる、過恐不安の義、正は恒、懲は周旋往來。漢書、王莽傳「人民ー一、無レ所レ錯ニ手足一」

【得ニ正而斃】セイヲエテタフル 正しき道を得て死する。禮、檀弓「吾何求哉、吾ー一焉斯已矣」

【正衙】セイガ 朝廷、政を行ふ役所、唐代、宣政殿を以て前殿と爲し、之をー一といふ。舊唐書、憲宗紀「明道之會有ニ武成殿一、即ー一聽政之所也」

【正號】セイガウ ただしき名稱。後漢書、公者仁德之ー一」

【正格】セイカク ○ただしき格式、正しきのり。夢溪筆談「詩第二字側入、謂ニ之ー一、第二字平入、謂ニ之偏格一」ニ正則。○圍文法にて、動詞の活用の一定のかたに合するもの。變格の對。

【正樂】セイガク ただしき音樂。崔日用詩「咸英調ニー一、雅頌陳ニ秋室一」

【正學】セイガク ○正しき學問、曲學、異端などの對。史、儒林傳「務ニー一、以言、無ニ曲學以阿レ世」○明の方孝孺の書齋の名「方ー一」

【正眼】セイガン 圍劍術の語。敵の眼をまともにして刀をかまへる身がまへ。

【正速】セイソク 正しくしていさむ。漢書、東方朔傳贊「ー一似レ直、疏德似レ隘」

【正顏】セイガン かんばせを正しくする。論語「子罕由ニ其家一來訊ニ於孔子一、孔子ー一舉レ杖、磬折向立」

【正己】セイキ 己の行を正しくす。禮記「ー一而不レ求ニ於人一則無レ怨」

【正軌】セイキ ただしきのり、正當なる法軌。潛夫論「明君臨レ衆、必以ニー一」ニ正道。

【正氣】セイキ ○萬物の根元たる至正至大の氣。文天祥、正氣歌「天地有ニー一、雜然賦ニ流形一」○ただしき氣。邪氣の對。文子、符言「君子行ニー一、小人行ニ邪氣一」

【正氣歌】ハイキ 宋の文天祥が元に囚はれし時、作りし五言の古詩、三十韻、備に忠節の事を述ぶ。我が藤田東湖・吉田松陰等も最に擬して作る。

【正義】セイギ ○ただしきすぢみち。漢書、律暦志「則二其儀辭一、取二正義一、著二於篇一」＝正道。○倫理學にて公平の義。○正しき注解。又其の名。易經・詩經・禮記等皆一一あり、唐の孔穎達著す。

【正道】セイダウ 前條に同じ。董仲舒文「夫仁人者、正二其道一、不レ謀二其利一、明二其道一、不レ計二其功一」

【正路】セイロ ただしきうつは。淮南子「法者、天地之二一也」

【正謎】セイメイ ただしき言論。漢書、東千秋傳「不レ能二一以輔二宰相一、阿意苟合、只說二其上一」

【正近】セイキン 近きをただす。新語「治レ外者必調レ內、平レ遠者必二レ一」

【正裝】セイサウ えりをただし容儀を整へる。開見錄「願道爲講二論語一、晉伯一一爲レ正二容服一之」

【正貨】セイクワ ほんたうの貨幣、即ち金貨・銀貨など。紙幣や公債等に對していふ。＝正金。

【正會】セイクワイ 正月元日朝廷に參内する。

【正系】セイケイ ただしき系統。＝正統。

【正計】セイケイ ただしきはかりごと。譏計の對。漢書、鄒陽傳「雖レ聖二智子吳一、非二其一一也」注「謀猶レ失也」

【正經】セイケイ 十三經の稱。

【正歌】セイカ ただしきをしへ。晉書、衛玠傳「子證レ父、或稱二父母一、聞二子所在一、展以爲恐傷二一一、奏除レ之」

【正月】セイゲツ むつき、陰暦にて一年の首の月の稱。＝太祖・正歲・正陽。

【正言】セイゲン ○ただしきことば。後漢書、翟酺傳「自見二正容一、耳聞二一一一」趙來文詩「天聽納二一一一」＝直言。○ただしくいふ。＝直言。

【正攻】セイコウ 奇計反間等を用ひず、正正とせめ撃つ。又正面より攻め入る。

【正鵠】セイコク 弓のまと（射的）布に鵠くを正といひ、皮に棲ましむるを鵠といふ。禮、射義「發而不レ失二一一」者、其唯賢者乎」中庸「射有レ似二乎君子一、失二諸一一、反求二諸其身一」

【不レ失二正鵠一】フシツセイコク 的にはづれず、正も鵠も的。前條參看。

【正笏】セイコツ しゃくをただしくもつ。歐陽修文「垂レ紳一レ一、不レ動二聲色一」

【正妻】セイサイ ほんさい（本妻）＝嫡妻・正室。

【正邪】セイジャ つみをただす。又、明かなる罪。潛夫論「民人之請二謁于吏一也、可二以解一微過一、不レ能レ說二一一一」

【正裝】セイサウ 正服を著る。又、其のよそほひ。

【正朔】セイサク ○正は年の始、朔は月の始。よりて曆數の稱とす。一說正月元日の稱。禮、大傳「改二一一一、易二服色一」史、曆書「王者易レ姓受レ命、必慎レ始、初改二一一一」○王者革命すれば必ず曆を改む、其の曆の行はるる處は、其の統治權の及べる所以なり。故に臣民となることを「奉二一一一」といふ。

【正士】セイシ 行の正しきむらひ。元倉子「聖主貴二忠臣一一一」

【正史】セイシ ○史記・漢書の如き紀傳體の歷史、平常の史の稱。歷代必ず作るに由る。隋書、經籍志「皆撰二班馬一以爲二一一、作者尤廣」○歷史をただす。王勃詩「蔡レ俗删レ詩、依レ經一レ一」○正確なる歷史。雜史・稗史などの對。

【正字】セイジ ○字體のただしき文字。俗字・譌字・省文部ち略字などの對。○官名、書籍の文字を校正するを掌る。事物紀原「漢桓初置二祕書監、掌二圖書古今文字一、考二合同異一、今一一之官、蓋其遺意也」

【正始】セイシ はじめをただす。又、ただしきはじめ。詩經、序「周南・召南、一一之道、王化之基」

【正辭】セイジ ○ことばを正す。蔡邕文「一一節嘱レ行、直レ道一レ一」○正しきことば。＝正言。

【正式】セイシキ ほんたうのしかた（本式）略式の對。＝正格。

【正嗣】セイシ ○ほんさい（本妻）側室の對。北史、崔暹傳「文襄愛嬖王昭儀、欲レ立爲二一一一」＝正妻・嫡妻。

○嫡子。周禮、春官「一一謂二之門子一」

【正人】セイジン 正しき人。書、冏命「其侍御僕從、其匪二一一一」＝善人。

【正眞】セイシン まこと、いつはりなし。僞贋の反對。白居易詩「常嫌竹葉猶凡濁、始覺櫻花不二一一」

【正遂】セイスイ もてさしき。唐書、魏徵傳「徵家初無二一一一」＝正殿・路寢。

【正邪】セイジャ ○ただしきと、よこしまなると。王海「著論一篇、敍二御史一一得失一」＝是非・曲直。○よこしまなる心を正す。左傳「政以治レ民、刑以一レ一」

【正出】セイシュツ 本妻の腹に生れる。又其の人。＝嫡出。

【正閏】セイジュン ○もとからありて正しきものと、よけいのものと。正統と閏統と。晉至、虎牢關銘「盛衰千載、一一更王」○平年と閏年。

【正書】セイショ 書體の一、楷書に同じ。隋書、經籍志「前人多能二一一一、而後草書」＝眞書。

【正色】セイショク ○顏いろをただしくする。書經「一レ一事下、罔レ不レ戒二師旨一」○正しく純粹なるいろ。青・赤・黃・白・黑の五色。禮、玉藻「衣一一、裳間色」

【正紱】セイフツ 君王の車に乘る時、執りて乘る紐。禮記、疏「一一謂二君之升一」

【正座】セイザ ○ただしきこと。禮記「一一慤人、順風聽レ人」○座の稱。子を

ただす。

【正正之旗堂堂之陣】セイセイノキドウドウノジン　旗旗の整ひ治まれるを正正といひ、行陣の盛大なるを堂堂といふ。孫子、軍爭「無レ邀二正正之旗一、勿レ擊二堂堂之陣一、此治レ變者也」

【正席】セイセキ　席をただしくしてすわる。論、鄉黨「君賜レ食、必ー レー、先嘗レ之」

【正則】セイソク　○正しきのり。○其の法則を正し改める。張衡賦「辨二方位一而ー レー」

【正大】セイダイ　ただしくおほいなり「ー ー高明之論、先遇、朱注「子路之學、已造二乎ー ー之域一」

【正内】セイナイ　○家にありて正しく婦道を守る。易經「女正二位乎内一、男正二位乎外一」○周代、王の正殿即ち路寢を掌る官。周禮「王之ー ー五人」

【正對】セイタイ　ただしくむかへる。後漢書、趙典傳「朝廷每有二疾異疑議一、輒諮二問之一、典據レ經ー ー、無レ所二回撓一」

【正論】セイロン　ただしき形の書。法書要録「右軍ー ー、如二陰陽四時寒暑溫暢、晨曦宏敞、晉祠雄穆一」

【正當】セイトウ　○さうあるべき、ただしきこと。○圖セイトウしからざるにしてまめ。‖實直。

【正當防衛】セイトウボウエイ　法律の用語、他人が不法を以て自己或は他人の身體財産を侵害せんとする時、之を防禦して其の權利を保ち衛ぐる義。

【正道】セイドウ　ただしきみち。邪非、疑「隱ー ー而行二私曲一」‖正義。

【正旦】セイタン　○正月元旦のあさ。後漢書、陳紀傳「ー ー朝賀」‖元旦。○戲劇脚色の名、古の裝旦「莊岳委談」

【正徵】セイチョウ　ただしき徵音。徵は五音の一。唐書、樂志「國二變徵一爲ニ ー ー一」

【正晝】セイチュウ　まひる。韓愈詩「ー ー當レ谷眠」‖日中。

【正中】セイチュウ　まんなか（眞中）

【正直】セイチョク　ただし、しゃうぢき。詩、小雅「好二是ー ー一」左傳「神聰明ー レ、而享者也」

【正殿】セイデン　儀式を行ふおもてごてん。維摩詰經「須明帝貝天早二證ー ー一、滅常燈二日正殿、遍照諸夢。

【正度】セイド　○のりをただす。史、曆書「明レ時ー レ、則陰陽調」○ただしきのり。晉康文「行二性情之所一貞、而合二變生之ー ー一」‖正則。

【正統】セイトウ　ただしきすぢのつづき、特に天子の系統にいふ。蘇軾、正統論「ー ー之爲レ言、猶レ曰二有二天下一者之謂」

【正徳】セイトク　○ただしき徳。書、大禹謨「ー ー利用厚生惟和」○己の德を正しくする。國語「先王之子レ民也、茂正二其德一而厚二其性一」○明の武宗の年號。

【正方】セイホウ　○方向をただす。曲禮「立必ー レ、不二倾聽一」○ただし。

【正月】セイゲツ　○ただしきつき。書、堯典「ー ー上日」‖元月。○一年の第一月。

【正本】セイホン　○ただしきもとのほん。副本・謄本・寫本等のもととなる文書。維摩經序「請二羅什法師一重二譯

書畫「宮壁ー ー而好レ養、角聲堅實而準レ證」‖方正。

【正法】セイホウ　正しき法門、正しき教義。人心を惑はし、國家に害を及ぼす如き邪法即ち外道の對。僧家にて佛の教法。

【正犯】セイハン　二人以上共同して罪を犯したる時、其の主たる者をいふ。從犯の對。

【正妃】セイヒ　ほんさい、妃は後世は君主又は皇族のおくがたにいふ。史、五帝紀「嫘祖爲二黃帝ー ー一」‖嫡妻。

【正否】セイヒ　ただしきと、ただしからざると。‖正邪・是非。

【正風】セイフウ　○正しき國風だの詩、詩經の周南召南二十五篇の稱。邶風、鄘風以下を變風といふの對。○圖セイフウ松尾芭蕉の創めし俳諧の流派。

【正服】セイフク　儀式の時に著る規定の禮服。‖制服。

【正副】セイフク　○本來のものと、そへもののとほんものと、ひかへとの。○正本と謄本と。

【正文】セイブン　本文。注釋又は但書・附記等の對。

【正平】セイヘイ　ただしく、たひらか。唐書、孔殘傳「守レ節清苦、論疏ー ー」

【正帶】セイタイ　きまりたる幣物。禮記、疏「若土地無ニ ー ー一則時物皆可也」

【正本】セイホン　○ただしきもとのほん。副本・謄本・寫本等のもととなる文書。維摩經序「請二羅什法師一重二譯一ー ー一〇法律にて、正規の法式に依りて原本を寫したる文書。○圖登記所の類帳。

【正味】セイミ　○ただしきあぢの意。潘詩「采采珍蔬不レ待レ畦、中原ー ー壓二蔓緑一」○圖なかみ、風袋だを引き去りたる風の分量。

【正脈】セイミャク　正當なる系統。宋書、蔡元定傳「此孔孟ー ー也」‖正系・正統。

【正名】セイメイ　名をただして名實相かなはしむ、名分を明かに正す。論、子路「子曰、必也ー レー乎」

【正命】セイメイ　ただしき壽命、天壽を全くし又は正義の爲めに死する。孟、告子「盡二其道一而死者、ー ー也」

【正面】セイメン　まむき、まっかう、ましめん。

【正門】セイモン　おもてもん（本門）裏門の對。

【正陽】セイヨウ　○まひる、陽は南。‖正午。○陰曆正月。

【正陽門】セイヨウモン　北京城内の正南の門、俗に前門といふ、即ち元の麗正門。

【正容】セイヨウ　かたちをただしくす。禮記「正二顏容一、聽必恭」

【正陽】セイヨウ　冬至の後、第三の戌の日に行ふ祭（漢書、酷吏傳）‖臘祭。

【正利】セイリ　ただしき道によりて得る利益。戰國策「尊二上交一、接二ニ ー ー一、聖王之事也」

【正立】セイリツ　ただしくまっすぐにたつ。曲禮「遵先生於道一、緩而遊、ー ー

捉ふ手に論、郷黨「升レ車、必一一執レ綏」
【正因】シヤウ　ただしきみち。磁に喩よ。孟、離婁「仁人之安宅也、義人之一一也」
【正論】セイ　たたしき議論。又、正しく議論する。漢書、夏侯勝傳「人臣之論、當二直言一一」
【正因】シヤウ　佛二因の一。緣因の對。物の本有、即ち理論。又、根本。法華經科註「得二清淨眼一見レ理、即一一義也」
【正因緣】シヤウインエン　佛六根を因とし、六塵を緣として、一切諸法を生ずる理。邪因緣の對。
【正客】シヤウキヤク　おもなるきやく。＝正賓。
【正忌】シヤウキ　しをうつきめいにち。其の人の死せし月日と同じ年の月日。
【正金】シヤウキン　○正貨に同じ。紙幣・小切手などの對。○現金、現なま。
【正見】シヤウケン　佛八正道の一、理を見ることの明かなる義。正しきことわり。邪見の對。江總文「探曉二一一、妙盡二衆巢一」
【正午】シヤウゴ　まひる。晝の十二時。＝亭午。
【正札】シヤウふだ　圖かけねのなきねだんをしるしたふだ「一一附」
【正覺知】シヤウカクチ　佛佛の十號の一。知一に智に作る。大疏法數「具二一切智一、於二一切法一无レ不二了知一、故號二一一」

―こ

【正米】シヤウマイ　圖相場上の實賣にあらずして實際に取引する米。空米の對。

二畫

【此】シ　紙

○こ、これ、この、これに近き事物を指す。彼の對。詩、周頌「在レ彼無レ惡、在一一無レ斁」○ここ(玆)に近き場所を指す。○かく。指定の辭「如一一」＝斯。

同訓異字　此・之・是・維・斯・伊の別は之(ノ部三畫)の條を見よ。

【此君】シクン　竹の異名。晉書、王徽之傳「嘗寄二居空宅中一、便令レ種レ竹、或問二其故一、但嘯詠指レ竹曰、何可二一日無一一耶」

三畫

【步】ホ　遇

○あゆむ、あるく(行)かちあるき、乘物にのらずして行く、「一一行」「徒一一」○おこなふ。○およそたにあゆむ、すすむ(進)○程度をいふ「進一一」「退一一」○人の處る所の地位「地一一」○ひきゆく(乘行)○みぎは(水際)○おしはかる、天文曆數を推測する「推一一」○まはりあはせ(運命)をり(機運)「大一一」「國一一」○はとば、わたしば、ふなつき。＝埠。○裁害ガイを爲す神。○さかづきをめぐらす。○土地丈量の尺度の名目、六尺又は六尺四寸の長さ。○改一は踐祚、即位。○かちあるきの兵卒「一兵」○一師は師を行る。○一馬は馬を習ふす。圖○つぼ、六尺平方の地。＝坪。○ブ(割合)＝率。○ブ口錢

同訓異字　行なり、止少相背く、即ち二止相背きて先後する意。俗に少に從ひて步に作るは非。

【步韻】ホイン　他人の詩の韻を用ひて、和して詩を作る。
【步搖】ホヨウ　婦人の冠上のかざり、步むにつれて搖ぐ故にいふ「採閭雜志」
【學二步於邯鄲一】ニホヲアンタンニマナブ　邯鄲は、趙國の都、其の俗能く步行す、燕國の少年來りて其の方を學びしに、學び得ずして、反りて己の固有の步行法をも忘れたる故事。己の本分をすてて他の行爲に倣ふは卻りて所ながら失ふに喩ふ。步とは步行の法「莊、秋水」漢書、敘傳「昔有二學一步於邯鄲一者一皆未レ得二其髣髴一、又復失二其故步一、遂匍匐而歸耳」
【步行】ホカウ　かちあるき。史、項羽紀「下レ馬一一」
【步兵】ホヘイ　ひかげをはかる。機會の僥レ天一レ、而修理可レ廢」
【步驟】ホシユ　くつのひも。通鑑、晉「孟昶常行遊二新紅溝一一一」
【步騎】ホキ　步兵と騎兵と。晉書、李密傳「以一一會二河內一」
【步驟】ホシユ　けまり。楊子法言「擾二善者一衣二打一一」＝蹴鞠・步打。
【步虛聲】ホキヨセイ　空中を步行して、佛經を誦する聲。李白、贈二隨州紫陽先生一詩「步虛吟二眞聲一」注「襄瀛、陳思王遊レ山、忽聞二空裏誦レ經聲一、清遠淸亮、解レ音者則而寫レ之、爲二神仙聲一、道士效レ之、作二一一一」陳思王は曹植。許渾詩「天風吹下一一」
【步屧】ホセフ　尺蠖シヤクワクの異名【捕子方言】
【步光】ホクワン　古の名劍の名。越絕書、句踐乃被二鎧夷之甲一、帶二一一之劍一」
【步搖】ホヨウ　步調を整ふる爲めに身に帶ぶる玉のわ。大戴禮「一一中レ規、折還中レ矩」
【步徑】ホケイ　かちにて行くこみち。魏志、張遼傳「濡中有二大柱山一、高峻二十餘里、道險狹、一一纔通」
【步月】ホゲツ　月影をふみてあゆむ。白居易詩「一一倚二淸欵一、眠レ松愛二綠陰一」
【步士】ホシ　步卒に同じ。漢書、酈二一萬人一屯田」唐書、李嗣業傳「提二一一一升レ山」

【步驟】ホヽ あゆむと、はしると。驟は疾走。史、禮書「―一馳騁」

【步障】ホヽシヤウ 〇竹を立て幕を張りて、屏障とするもの。晉書、石崇傳「漢作二錦―一五十里一」〇蠶蛹絹タンヨウケンを古、女が外出する時、顏を覆ふ爲めにかぶりし者、木のわくに絹を垂れて作る。

【步調】ホヽテウ きかづきをめぐらす。禮、少儀「未レ―レ、未レ嘗レ差」＝行伍。

【步水】ホヽスヰ 川をかちにてわたる。潘尼詩「臨レ崖濯二素手一、―レ寒二輕衣一」

【步趨】ホヽスウ 〇步は闊行オホマタ趨は促行ニユクヂ莊、田子方「夫子步亦步、夫子趨亦趨」運文釋義「堂上謂二之步一、門外謂二之趨一」〇轉じて相隨ふの意。

【步哨】ホヽセウ 步兵のみはりばん。

【步涉】ホヽセフ 陸をかちにて行くと水をかちにてわたると。後漢書、仲長統傳「舟車足二以代一―一之艱一」

【步戰】ホヽセン 步兵にて戰ふ。後漢書、東海傳「便持レ矛―一」

【步走】ホヽソウ かちにてはしる。史、伍子胥傳「獨身―一、幾不レ得レ脫」

【步卒】ホヽツ かちにて戰ふ兵。＝徒士、步士、步兵。

【步隊】ホヽタイ 步兵の隊伍。唐書、兵志「每校爲二一―一十、騶除一一」

【步遞】ホヽテイ 宿驛にて交代する飛脚。宋史、徳州薦賦二民馬一以給レ驛、又役レ民爲二一―一」

【步調】ホヽテウ あるくてうし、足どり、あしなみ。

【步登】ホヽトウ かちにてのぼる。曹植詩「―一北邙阪一、遙望二洛陽山一」

【步頭】ホヽトウ 水ぎはの地、はとば。蘇舜欽詩「―一浴鳧驚出沒」＝船埠頭。

【步馬】ホヽバ 馬のあしどりを調ととのはす。左、襄二六「左師見二夫人一―一者」

【步搖車】ホヽヤウシヤ てぐるま。通鑑、晉紀「涼主纂醉乘二――一」＝步輦。

【步武】ホヽブ 〇僅かのへだたり。步は六尺、又は六尺四寸、武は半步。周語「日之察レ度也、不レ過二一―一尺寸之閒一」〇あゆみ、武は足跡アシアト蘇軾詩「穿レ竹鳥驚二一―一」〇轉じて人の後に追隨して之を學ぶ義とす。

【步兵】ホヽヒヤウ 步卒に同じ（晉書、阮籍傳）

【步步】ホヽホ あゆむ、一步一步。南史、齊鬱帝東昏侯紀「鑿レ金爲二蓮華一以帖レ地、令二潘妃行一其上一曰、此―一生二蓮華一也」

【步廊】ホヽラウ あゆみて行く廻廊、わたどの（渡殿）＝步櫩。

【步履遲】ホヽリチ あゆむことゆるやか。白居易詩「坐對鍾簴久、行觀―一」

【步量】ホヽリヤウ 天文を推測する術。唐書、孔穎達傳「幷屬レ文通二一―一」

【步盪】ホヽタン 人が步してひくてぐるま。晉書、山濤傳「帝嘗講二武於宜武場一、濤時有レ疾、詔乘二一―一從」

【步往】ホヽワウ かちにてゆく。史、信陵君傳「公子聞二所在一、乃聞―一」＝步行。

【步合】ブアヒ 圖百分の進つかに當る割合。

四畫

【歧】キ 支 岐に通ず

〇むつゆび（足多指）＝跂。〇ふたまたみち、えだみち「一路」ふたまた。〇―一は飛び行く貌。＝蚑蛾。

【歧歧】キヽ 飛びゆく貌。潘岳、笙賦「翾翾―一」翾翾は少しく飛ぶ貌。

【歧路】キロ わかれみち。後漢書、張堪傳「參理南歧」注「一至爾種、如二一二逢一」

【武】ブ ム 虞

〇たけし（健）つよし「剛―」「壯―」「神―」〇いきほひ。〇おどす（威）〇人を凌ぎ侵すこと。〇いさましい。いさむ（勇）「勇―」〇いくさ（兵事）文の對「―備」「尚―」〇つはもの、もののふ、軍人「―人」「―士」〇冠に巻き附くるもの。又、冠の名。〇つぐ（繼）〇あと、あしあと（足跡）曲禮「堂上接―」〇半步の長さ。三尺。周語「不レ過二步一尺之閒一」〇戰爭の術、兵法、劍道、馬術など。〇一夫は玉に似たる石。＝珉玟。〇八音の中の金屬製の樂器。禮、樂記「始奏以レ文、復亂以レ―」文は鼓。〇周の武王の音樂の名。論、八佾「謂レ―、盡美矣、未レ盡レ善也」

【武威】ブヰ 武力のいきほひ。史、始皇紀「―一旁擾」＝武力。

【武夷九曲】ブヰキウキヨク 武夷は山名、今の福建省建寧府崇安縣に在り、山中に九曲溪あり、風景絶佳、宋の朱熹曾て九曲歌を作る。事類統編、卷二一、注「武夷山在二崇安縣南三十里一、道書以レ此爲二第十六洞天一、相傳昔有二神人曰二武夷君一者一居レ此、故名、漢武嘗祀レ之」

【武運】ブウン 〇武道の運命。潘勝、九錫賦「奉二―一之方昌」〇武士の運命「―一長久」

【武衛】ブヱイ 〇武士にてつよく天子をまもる。晉、禹貢「二百里、蔡二―一」〇圖王朝時代の兵衛府ヒヤウヱフの唐名。

【武英殿】ブヱイデン 北京城内に在り、清の乾隆年間、十三經二十一史を此に校刻す。

【武備】ブビ 武器をそなへ。轉じて戰を止むる義とす。王起文「我皇仁洽道贊、文修―一」＝文德・武武。

【繼レ武】ツグブ 足跡をつづける。禮、玉藻「君與レ尸行接レ武、大夫―レ、士中

ン武、徐廣曰用ン是」

【匿ン武】ブッブス 僵武（一五三頁四段）を見よ。

【用ン武之地】ブブモダ 兵を用ふるに適する地。晉書、姚襄載記「洛陽雖ン小、山河四塞、亦是——」史、留侯世家「雖ン陽雖ン有二此固一、其中不ン過二數百里一、田地薄、四面受ン敵、非二用ン武之國一也」

【武衆】ブカ 武道の晉榮。文學の對。公羊傳「聖王貴ン之、以爲二——一」

【武學】ブガク 武士の修める學問「——七書」＝軍事教育。

【武幹】ブカン 武道のはたらき、武藝のうでまへ。晉書、桓伊傳「伊有二——一、標悟簡率、爲二王濛劉惔所一知」

【武鑑】ブカン 圖德川時代の大名の姓名・紋章・知行高及家來の姓名等を記せし書物。

【武伎】ブギ いくさに關するわざ、敵手をたふす力わざ、劍道・弓術・馬術など。唐書、衛伯玉傳「少習二——一、爲ン有ン力」＝武技・武術・武藝。

【武技】ブギ 前條に同じ。

【武器】ブキ いくさ道具。後漢書、仲長統傳「修二——一以存二守戰一」＝兵器・武具。

【武戲】ブギ 武事のたはむれ、又ちからくらべ。漢書、哀帝紀贊「時覽二——一、注「手搏爲ン戲、角力爲二——一也」

【武彊】ブキャウ たけくしてつよし。文弱の反對「唐書、地理志」＝武強。

【武勇】ブユウ 武藝に習熟せるものを擧げ用ふる義。唐の則天武后の時に始まる「唐書、選擧志」

【武具】ブグ いくさ道具。干戈又、よろひ・かぶとなど。＝兵器・武器。

【武勳】ブクン いくさのてがら。＝軍功・武功・武烈。

【武火】ブクワ 強きひ、熾盛なる火力。ぬるき火を文火といふの對。

【武官】ブクワン ○兵事に關する官吏。漢書、百官志「古者重二——一」○陸海軍の將校。

【武家】ブケ 圖武士の家がら、鎌倉以後の將軍大小名及其の家人。公家の對。＝武臣。

【武刑】ブケイ 武事上の刑罰。柳宗元、平淮西雅「鋪二其——一、論二我德心一」

【武經】ブケイ 兵法の書「——七書」宋史、樂志「聖朝稽古、崇致——一」＝兵書。

【武藝】ブゲイ 武道に關するわざ。＝史、河南王曜傳「——絕ン人」＝武技。

【武藝十八事】ブゲイジフハチジ 武藝の十八箇條、即ち、一弓・二弩・三槍・四刀・五劍・六矛・七盾・八斧・九鉞・十戟・十一鞭・十二簡・十三棍・十四叉・十五又・十六把頭・十七繩套索・十八白打「讀書記數略」

【武敎】ブケウ ○軍事のをしへ。○圖武士道のをしへ。

【武庫】ブコ ○武器を入れおくくら。史、三王世家「能賜有二——一敎倉」○轉じて博學の人に喩ふ。晉書、杜預傳「杜預爲二尚書一、損二益萬機一、不ン可二勝數一、朝野稱美、號曰二杜——一、實二其無所ン不ン有」

【武功】ブコウ 軍事上のてがら。詩、閟宮「戎狄是——」＝戰功・武勳・武烈。

【武克】ブコク 武を以てかつ、武力にて他を制する。王安石、田公墓銘「文闕——、內外固施」＝武勝。

【武劇】ブゲキ 前條に同じ。

【武裝】ブサウ いくさのしたく、身體・軍艦などの戰爭準備をする「——解除」

【武士】ブシ もののふ。史、蘇秦傳「——二十萬」＝武夫。

【武士道】ブシダウ 圖武士の守るべき道。忠義・廉恥・禮儀等を重んずる、我國固有の大和魂ヤマトダマシヒが、更に儒敎及禪學などによりて發揮せし實踐道德。＝武道。

【武周】ブシウ 周の武王の德をたたへたる樂の名「後漢書、註」

【武厩】ブキウ 馬の異名「格物總論」

【武人】ブジン もののふ。詩、小雅「——東征」＝武夫・武士。

【武臣】ブシン 武を以て事ふる臣。禮記「君子聽二鼓鼙一、則思二——一」宋史、岳飛傳「——不ン愼死」

【武車】ブシャ いくさぐるま。禮記「——綏ン旌」＝兵車。

【武昌】ブシャウ 湖北省鄂城縣治、もと江夏といふ。＝鄂城。

【武將】ブショウ いくさの大將。漢書、韓方進傳「遣二——一征伐」

【武將感狀記】ブショウカンジャウキ 圖十卷、鵜澤正興著、天文永祿年間より、元和寬永の頃までの武將の事蹟を纂集す。

【武衆】ブシウ 周の武王の德をたたへたる音樂「禮記、註」＝武周。

【武備】ブビ いくさのわざの醞達年詩「偃閉——閑二揚文令一」＝武技。

【武成】ブセイ たけきいさををなしとげる。書、武成「越三日庚戌柴望、大告二——一」

【武斷】ブダン 情理を辨別せず、武力にておさへつけて事をとりきめる。史、平準書「彙計奏傑之徒、以二——于鄕曲一」

【武德】ブトク 武道のとく。文德の對。史、始皇紀「奮二揚——一」

【武備】ブビ 軍事上のそなへ。史、孔子世家「有二文事一者、必有二——一」＝兵備。

【武夫】ブフ ○もののふ。詩、周南「趯趯——、公侯干城」○玉に似たる美石。史記「猶二——于美玉一」＝斌玞・碔砆。

【武弁】ブベン ○武官の被る冠。魏志、「辭」遵遊「蔵二——一、解二朱紐一、佩二青綬一」○轉じて武士の義とす。儲光羲詩「——一朝事」

【武邊】ブヘン 圖武道に關する事がら。

【武步】ブホ 步は六尺、武は半步（三尺）わづかの長さ。北史、令狐整傳「但

一日千里、必基二一一」‖步武。

【武猛】ブマウ　たけし。後漢書、安帝紀「擢下二一一堪二將帥一者各五人上」‖勇猛。

【武門】ブモン　武人のいへすぢ（武家）

【武揚】ブヤウ　武威があがる。書、泰誓「我武惟揚」

【武勇】ブユウ　たけくいさましい。又、其の者。史、淮陰侯傳「天下一一」

【武陵桃源】ブリョウタウゲン　○武陵は今の湖南省、常徳府、武陵縣の西に在りて、名高き仙境。陶潛、桃花源記の略に曰はく「晉太元中、武陵人、捕レ魚爲レ業、緣レ溪行、忘二路之遠近一。忽逢二桃花林一、林盡水源、得二一山一、有二小口一、彷彿若レ有レ光、便捨レ船、從レ口入、行數十歩、豁然開朗。其開男女、衣着自レ外、悉如二外人一。黄髪垂髫、並怡然自樂。見二漁人一、大驚、自云、先世避二秦亂一、來二此絶境一、不レ復出焉、遂與二外人一間隔。問今是何世、乃不レ知レ有レ漢、無レ論二魏晉一。此人一一爲二具言所聞一、皆歎惋。餘人各復延至二其家一、皆出二酒食一。停數日、辭去。此中人語二云不足爲二外人一道一也。既出、得レ船、便尋二向路一、處處誌レ之、及レ郡下、詣二太守一、説如レ此。太守即遣二人隨往一、尋二向所レ誌、遂迷不二復得レ路。○轉じて世間とかけ離れたる別天地の義とす。‖別世界。

【武略】ブリャク　軍事上のはかりごと。後漢書、梁慬傳論「一一之士、無レ所レ奮二其力能一」唐書、玉忠嗣傳「雄毅寡言、有二一一一」

【武旅】ブリョ　ぐんぜい。梁書、元帝紀「分勒二一一一、百道同趨」儲光羲詩「一一趨二前旌一」‖軍旅・師旅。

【武力】ブリョク　たけきちから、戰鬪力。○說苑「聖人之治二天下一也、先二文德一、而後二一一一」‖兵力。

【武烈】ブレツ　たけくいさをしあり。後漢書、馮衍傳「上書陳二八事一、其一曰、顯二文德一、其二曰、奮二一一一」‖武功。

【武王】ブワウ　周の第一世の明君、姓は姫、名は發、文王の子、殷の暴君紂を伐ち、遂に天下を治む、在位七年、大に德化を布く。

【武者修行】ムシャシュギャウ　㊀武士が諸國をめぐりて仕合ひをなし、武藝をきたへる稽古をする。

【武者所】ムシャドコロ　㊀御所にては滋目ダイ院の御所にては下北面の武士の詰所

五畫

【此】キ

○ととむ、とどまる（止）○つく（搗）○たがふ（違）○もとる（戻）○いたる（至）‖距。

【歪】ワイ　エ　㊥

○ゆがむ、ななめ○ただしからず（不正）よこしま。

六畫

【時】

㊀チ・ヂ　㊁チ・ヂ　㊥支

㊀ためらふ、たちもとほる　㊁ととまる。㊂そなふ、たくはふ。書、費誓「一一乃糗糧」峙に通ず。

【時雖】ヂスイ　すすまず、しりごみする。説文「一一不レ前也、通作二踟躕一」

八畫

【歸】

歸（止部十四畫）の簡文。

九畫

【歲】セイ　サイ　㊥歲は俗字

○とし、地球が太陽を一周する間の爾雅、釋天「唐虞曰レ載、夏曰レ歲、商曰レ祀、周曰レ年」○みのり（豐作）左、哀十六「國人望レ之、如レ望レ一焉」○ふはひ（年齢）「五十一」「百一」○ある歳の開、年限、つきひ、光陰「一月」○としどし「一一」○一箇年、一年間。韓愈、上張僕射書「一一九遷其官」○木星。‖太歲。○萬一は頗祝のことば。戰國、齊策「民稱二萬一一」後世は特に天子を祝するに用ふ。

【歲陰】サイイン　十二支。歲陽は十干（國語、釋天）庾信詩「年華改二一一一」

【歲寒三友】サイカンサンイウ　○松と竹と梅との稱。高士奇、金鰲退食筆記「五龍亭、萬爲二太素殿一、創二于明天順年一、在二太液池西南一、向レ後有二草亭一、植二松竹梅子上一、曰二歲寒門一」○山水・松竹・琴酒（陸餘叢考）

【歲寒松柏】サイカンショウハク　松や柏は冬の霜雪に風せず、常に緑色なり、君子の逆境に在りて節操の堅固なるに喩ふ。論、子罕「子曰、歲寒然後、知二松柏之後レ凋也」に本づく。

【歲刑】サイケイ　陰陽家のいふ八將神中の地神、此の神の居る方位に向ひて、耕作・たねまきなどを忌む。

【歲華】サイクワ　としつき。華は日月の光。蘇軾詩「一一來無レ窮、老眠久已靜」‖年華。

【歲計】サイケイ　一年中の收入と支出との計算。

【歲月】サイゲツ　○としつき。陶潛詩「一一不レ待レ人」‖年月。○或る一定の期間。史、鄭生傳「未レ可二以一一一一破一レ也」

【歲月不レ待レ人】サイゲツフタイヒトシカラズ　歲月は速に去りて人を待たず。光陰の輕んずべからざるをいふ。陶潛、雜詩「盛年不二重來一、一日難二再晨一、及レ時當二勉勵一」——」

【歲月催】サイゲツモヨホス　としがよる。騷賓王詩「心賞風煙隔、容華——」

【歲功】サイコウ　○一歲の時序。漢書、律歷志「立レ圖定レ時、以成二一一一」○農事をいふ。漢書、天使三陽出布二施於上一而主二一一一」

【歲貢】サイコウ　屬國などより毎年みつきものを納めるをいふ。

【歲差】サイ　春分點が毎年五十秒づつ黄道を逆行するによりて、春分の期が年毎に少しづつ進む度の名。四溟瑣話「天運八十一、一一一度」

【歲在】サイ　歲星のやどり。左、襄二八「絳侯曰、一一二星紀而淫二于元枵一」＝歲次。

【歲歲】サイ　としとと、としどし。劉廷芝詩「年年一一花相似、一一年年人不レ同」＝年年・毎歲・毎年。

【歲次】サイ　歲星（木星）のやどり、次は宿、年まはり「一一一甲子」＝歲在。

【歲時】サイ　○とき、時間。＝歲月。○一年と四時と「一一記」

【歲時記】サイ　一年中、四時の季節に應じて有る事がらを列記せし書物「荊楚一一」

【歲首】サイ　としのはじめ。史、秦始紀「以二正月一爲一一一」＝年首・年始。

【歲終】サイ　としのをはり。左傳「朝二正于晉一、以會一一一」＝歲末・歲杪。

【歲出】サイ　一箇年に出す金。

【歲星】サイ　五星の一、木星。史、天官書「一一一曰二攝提一曰二重華一」

【歲絞】サイ　陰陽家のいふ八將神の一、此の神の居る方に向ひて、よめどり或は鍬はじめを忌む。

【歲旦】サイ　年首のあした。後漢書、吳良傳「初爲二郡吏一、一一與二縣吏一入賀」＝元旦・歲辰。

【歲除】サイ　おほみそか（天晦日）除は易、年の交代。孟浩然詩「白髮催二年老一青陽逼一一一」＝除夕・除夜。

【歲朝】サイ　新年のあさ。後漢書、周燮傳「一一會二集諸生一講論經日」范成大詩「一一爆竹傳レ自レ昔、吳儂正用前五日」＝元旦。

【歲德】トク　としとく、一年中有德の方位に居るといふ神。越絕書「太陰在レ酉、一一在レ卯」

【歲入】ニフ　一年間の收入。歲出の對。宋史、眞宗紀「帝曰、苟便二於民一、何顧二一一一也」

【歲破】ハ　八將神の一、水神、陰陽家の說にて、此の神の居る方に向ひて移轉又、船ののりはじめするを忌む。王充論衡「負二太歲一名曰二一一一」

【歲晚】バン　としのくれ。越語「今一一矣、子將二柰何一」＝歲暮。

【歲費】ヒ　○一箇年間の入費。＝歲用。○國貨衆商院議員が一箇年間にうける手當。

【歲幣】ヘイ　毎年一定の額を定めて贈る金品。北宋の時、毎年錢幣を契丹に納れたるをいふ。宋史、鄭居中傳「一一五十萬」

【歲杪】ビョウ　としのくれ、杪は木末ニ王勃賦「負笈帝前、腰鎌一一」證、王制「冢宰制二國用一、必於二歲之杪一」＝歲晚・歲末。

【歲莫】ボ　としのくれ、莫は暮に同じ。詩、唐風「蟋蟀在レ堂、歲聿其莫」＝歲晚。

【歲暮】ボ　○としのくれ。白居易詩「一一天地閉、陰風生二破村一」＝歲莫・歲末・歲杪。○國年末の贈品。

【歲末】マツ　としのくれ。＝歲暮。

【歲陽】ヨウ　十干「閼逢、釋天」歲陰參省。

【歲餘】ヨ　一年あまり。

【歲用】ヨウ　一箇年のつひえ。後漢書「不レ加二譴怒一、但絕二一一一而已」

【歲闌】ラン　歲が將に盡きんとする、闌はたけなは。梁簡文帝詩「一一嘉宴罷、車騎各東西」

十畫

【歷】シフ　縅　或は澀・澁に作る

○ゆきなやむ、しぶる、通利ならず、滑ナメかならず。○どもる（吃）○しぶし。

【歷舌】ゼツ　口どもる。

十一畫

【歷】レキ　リャク　縅

○ふ（經）わたる、すぐ、すごす（過）○つたふ、つたはる（傳）順次に傳へる。○これまでに經來りし事がら「經一」「履一」○つぐ、ついづ（次）○ゆく（行）○こゆ、こえる（踰）とびこす。孟、離婁「不」位而相與言」○つく、つくす（盡）○あまねく、ことごとく。○まばら（疎）○まじふ（交・錯）莊、天地「交一一指」○一亂はみだれる貌。○寂一はさびし。○一一は行列する貌。又、分明なる貌。○かま（釜・鬲）○こよみ。＝曆。○しきいた。又、かひをけ。＝櫪。○轢轢ニの轢に同じ。

【歷位】イ　坐位をとび越す。孟、離婁「不二一レ一而相與一」

【歷遊】ユウ　遠處をあそびまはる。

【歷階】カイ　一階毎に片足づつかけて上る。史、平原君傳「毛遂按レ劍一一而上」

【歷劫】コフ　多くの年をふる。維摩七難「一一無數齡」

【歷歲】サイ　年をへる。劉安文「一一レ一經レ年、則士卒罷勞」＝歷年。

【歷山】ザン　舜の耕したる山の名。山東省歷城縣の南に在り。山上に舜の祠あり。史、五帝紀「舜耕二一一一漁二雷澤一陶二河濱一」＝舜耕山・千佛山。

【歷史】シ　○世世の出來事を書きたる記錄。○こしかた、來歷。

【歷仕】シ　二代以上の天子に續き事へる。晉書、李密傳「臣自二一一一、歷レ非二清異一之衆、而家無二儋石一」

【歷亂】ラン　まばらになれる貌、歷は疎。後漢書、列女傳「蓬髮一一、未レ知二禮則一」

【歷日】レキジツ　としつき、こよみ。蘇軾詩「老去怕ㇾ看新ㇾ年」范成大詩「秣頭新ㇾ年、衣上花塵埃」＝暦日。

【歷巡】レキジュン　へめぐる、諸方をまはりあるく。

【歷世】レキセイ　よよ、だいだい。元經「懃勤必行、ㇾ年長久」＝歷代・累世。

【歷涉】レキセフ　へわたる。蔣伸文「ニ―清途、翻開二直道一」

【歷代】レキダイ　歷世に同じ。

【歷朝】レキテウ　代代の朝廷。又其の天子。唐書、袁顗傳「ㇾ佐ㇾ命有ㇾ功」

【歷年】レキネン　年をへる。又、へたる年。南史、宋文帝紀論「文帝正位南面、ㇾ長久、綱紐備擧」＝歷歲。

【歷訪】レキハウ　家家をまはりおとづれる。戸別訪問。南史、梁南平王偉傳「ニ―閭里人士ニ」

【歷落】レキラク　〇參差（シンシ）としてならぶ貌。蘇軾文「初ㇾ以星峙」〇疎昔の絶えざる貌。唐本詩「風水眞堪笑、ㇾ太古閒」

【歷亂】レキラン　みだれて次第なき貌。鮑照詩「憂來無二行伍一、ㇾ如二草莽一」

【歷覽】レキラン　一一みる。謝靈運詩「江南倦ニ―ㇾ」

【歷歷】レキレキ　〇一一分明なる貌。搜神記「前世之事、ㇾ可ㇾ聞」李白詩「分明楚漢事、ㇾ王霸道」〇行列する貌。古樂府「天上何所ㇾ有、ㇾ種二白楡一」

【歸】キ　十四畫　戌

〇かへる（還）もどる。〇かへす、もどす。〇借りたる物を返却する。孟、盡心「久假而不ㇾ」〇おくる（饋）物を贈り與へる。論、陽貨「ㇾ孔子豚」〇したがふ、服從する「ㇾ附」「ㇾ服」論、顏淵「天下ㇾ仁焉」〇くみす（與）〇ゆるす（許）〇よる（依）〇とつぐ（嫁）よめに行く。詩、周南「之子于ㇾ」〇いたる。〇まかす、ゆだねる（委）他人の所爲にまかせる。左、襄三「請ㇾ死于司敗」〇をはり（終）物事の結局。〇むね、おもむき（指趣）易、繫辭「殊ㇾ途而同ㇾ」〇あふ（合）〇をさむ（藏）〇おもむく（趨）「ㇾ往」「ㇾ向」〇珠算にて、法一術でわること。

同訓異語　〇歸・赴・趨・趣の別は赴（走部二畫）の條を見よ。

〇歸・還・反・返・復・回・旋〇歸は歸宿と用ふ、もと出たる所に、歸りおちつく意「歸ㇾ家」「歸ㇾ鄉」の類。〇還は往の反、往き先よりめぐりかへるなり。晉センと訓むときは、旋に通ず「ㇾ師」〇反はひっくりかへす義にて、折りかへりにかへすなり。孟子「反二齊疆之路一」〇返は反に同じ。〇復は二度もとの路をかへるなり、反復とは二度くりかへす義。〇回はぐるぐるとめぐりかへるなり。俗に回章と用ふるが如し。唐高宗紀「李勣爲ㇾ姊養ㇾ粥、風回雪亂不ㇾ歸」〇旋はめぐるとも訓む、回と同じ。

【歸巢】キサウ　ねぐらにかへるからす。杜甫詩「過雁ㇾ錯回ㇾ首」

【歸一】キイツ　歸著するところ同一なり。荀子「百王之法不ㇾ同、所ㇾ歸者一也」＝一揆。

【歸依】キエ　歸信仰して慕ひ依る。歸は歸投、依は依杖、歸投は子が父に歸する、依杖は長がわれにたよる。譚岡彌陀佛偈「若聞二阿彌陀經一、歡喜讀仰心ㇾ」＝歸順依遵。

【歸嫁】キカ　とつぐ、よめにゆく。よめいりに。

【歸向】キカウ　心を寄せる、なづきつく。劇談錄「多士翕然ㇾ」＝歸嚮。

【歸航】キカウ　かへりのふなぢ。又、其の船。個峽然詩「長發泛ニ―ニ」

【歸降】キカウ　歸伏に同じ。溫庭筠詩「今日欲ニ―ㇾ」

【歸耕】キカウ　歸田に同じ、致仕の義。漢書、夏侯勝傳「學ㇾ經不ㇾ明、不ㇾ如二歸ㇾ―ㇾ」＝歸農。

【歸格】キカク　かへりいたる。書、舜典「ㇾ于藝祖一用ㇾ特」特は一牛。

【歸雁】キガン　〇春、北にかへるかり。唐詩選に錢起の「ㇾ」の詩あり。蘇軾詩「醒來送ニ―ㇾ一寄千里月」〇夕方ねぐらにかへるかり。休子來詩「數行ㇾ下ニ秋空一」

【歸期】キキ　かへる時期。李白詩「反安如二夢裏一、何日是ㇾ」李商隱詩「君問ニ―ㇾ未有ㇾ期、巴山夜雨漲ニ秋池一」

【歸客】キカク　罪を歸する。左傳「禍成而不ㇾ返、無ㇾ所ㇾ」

【歸休兵】キキウヘイ　定期の現役を終へすして特に家にかへりやすむことを許されし兵士。

【歸禽】キキン　夕方ねぐらにかへる鳥。崔塗詩「落日渡ニ―ニ」

【歸鄉】キキヤウ　故鄉にかへる。水經、注「父老傳言、屈原既流放、忽然晉ㇾ」＝同鄉。

【歸去來】キキライ　かへりさる、來は助辭。陶潛「歸去來辭」――今、田園將ㇾ蕪、胡不ㇾ歸」かへりなんいざと諷む。

【歸去來辭】キキライジ　晉の陶潛明が官を辭して、鄉に歸る時作れる賦。晉書「陶潛爲二彭澤令一、義熙二年、解ㇾ印去ㇾ縣、乃賦ニ――ㇾ」

【歸化】キクワ　〇他國の國籍に入りて其の臣民となる。魏志、鄧艾傳「發ㇾ使告以二利害一、吳必ㇾ可ㇾ不ㇾ征而定也」＝伏服。〇教化に服し從ふ。

憎傳「感德一一者、十有二七八」【歸臥】キ故郷にかへりて休息する。歸郷して、隠居する。李山甫詩「一一東林一事閑」【歸行】クヮンカウ つみを人に負はす。後漢、陳寔傳「削跡一レ、請」命乞レ身」【歸根】キン 本にかへりおちつく。老子、十六章「夫物芸芸、各復二歸其根一」【歸裝】キサウ かへりの身じたく。歐陽修詩「又就二東一州一作裝貨一一」【歸郊】キカウ 故郷にかへりはうむる。史、曹叔世家「悼公死二於宋一一」【歸藏】キザウ 殷の易の名。周禮、春官「掌二三易之法一一曰連山、二曰一一、三曰周易」【歸奈】キナン 圖ひまをもらひし奴婢などが、再びもとの主人に奉公する。【歸舟】キシウ 郷里にかへる船。杜甫詩「眼前今古意、江漢一一一」【歸州】キシウ 漢の南郡の地、唐の武徳二年巴州といひ、亦巴東郡といふ、秭歸等の縣三を領す、今は荊州府に屬す。【歸心】キシン ○故郷に歸らんと思ふ心。韓翃詩「過レ江秋色在、詩興與二一一一」○なつきしたがふ、中心より悦服する意。老子、六十四章「一一、三日周易」【歸寂】キジャク 死をいふ。禮記「衆生必一一、死必一レ」【歸川】キセン 名は有光、字は熙甫、明の崑山の人、其の文體歸に本づき、法度謹嚴なり。【歸殺】キサツ 圖僧の死をいふ。蓮社高賢傳「遠公一一、乃入二石郎山一」【歸首】キシュ 降服する。後漢書、李固傳「賊帥又遣等、並共魁黨六百餘人、自縛一一、固皆原レ之」【歸宿】キシュク とどまる、宿は止、歸著する點。荀子「物莫レ所二歸著一一」【歸趣】キシュ 來りてしたがふ。杜甫詩「蓬萊方一一、乾坤欲二晏如一」【歸順】キジュン おもむき、方向、むき。【歸省】キセイ 家に歸りて親をみまふ。朱慶餘詩「一一及二花時一、行吟落第詩」【歸潔】キケツ 圖皆潰。【歸汐】キセキ ひきしほ。戴良詩「乘レ風遊二來潮一、侍レ月候二一一」【歸寧】キネイ 祭祀の肉をおくる。左傳「太子祭二于曲沃一、一二于公一」【歸孫】キソン 姪の生みたる子。爾雅「謂二姪之子一爲二一一」【歸程】キテイ かへりの道のり。王炎詩「不レ如二歸計一一、來夢繞二一一一」【歸眞】キシン ○本來のうまれつきたる、まことの心にかへる。戰國策「一一反レ墟則終身不レ辱」○圖死をいふ【歸著】キチャク ○かへりつく。○識見などのせんじつめたる點に達する。【歸艇】キテイ かへることぶね。陸游詩「城西小市放、一一滿二斜陽一」【歸舟】キシウ 歸船。【歸朝】キテウ ○外國よりかへり來る。○遠き地方より朝廷にかへる。若唐書、張茂昭立二功河朔一、舉レ族一一」【歸糧】キリャウ 米をおくる。國語「是故汎二舟于河一、一二于晉」【歸田】キデン 官を罷め郷に歸りて農を業とす。沈炯詩「閉レ門翦巷裏、靜詠一一」【歸途】キト へりみち。孔德紹詩「今日桃源客、相顧失一一」【歸路】キロ 歸途。【歸土】キド 死をいふ。禮記「衆生必死、死必一レ」【歸納法】キナフハフ 一つ一つの事實より、一般に通ずる原理を發見する論理法。演繹法の對。【歸任】キニン 官吏が其の在勤地にもどる。【歸寧】キネイ よめがさとがへりして父母の安否を問ふ、寧は安。詩、周南「一二父母」【歸農】キノウ 游民をすすめて農業に從はしむ。漢書、食貨志「驅レ民歸二之農一」後漢書、李固傳「悉罷遣一レ、以二恩信一招二誘之一、咸遂散」【歸馬放牛】キバハウギウ 戰をやめる義。書、武成「乃偃レ武修レ文、歸二馬于華山之陽一、放二牛于桃林之野一、示二天下弗レ服」【歸附】キフ 心をよせて從ふ。後漢書、鄧禹傳「皆開レ門一一」【歸降】キカウ とりこをかへす。春秋「執二人來歸一」衛孚」【歸伏】キフク 歸順降伏。晉書、祖約傳「此所二以一一大王一也」【歸降・歸順】キカウ 圖古、印度の最敬禮、己の最尊の頭を地につけて拜する。開覺經疏「以レ己最勝之頂、禮二佛最卑之足一、敬之至也」【歸服】キフク なつきしたがふ。後漢書、李固傳「四海欣然一二聖德一」【歸命】キメイ ○圖佛の教命にしたがふ。法華經「成佛首一二無上尊一」○イ歸順に同じ。新書「一二天子一」【歸命頂禮】キメイチャウライ 【歸夢】キム 故郷に歸りしゆめ。謝朓詩「一一相思夕」

【歸沐】キ休暇を得て家にかへり髪をあらふ。劉禹錫詩「五日恩ニ—ニ【歸見】キ（クヮン）かへることを促す語。論、公治長「子在レ陳曰、—ニ—ニ—」【歸來】ライ○かへりきたる。○かへりきたれ、かへれ。宋玉、招魂「—ニ—！—ニ、不レ可ニ以久ニ」【歸洛】ラク 國京都にかへる、洛は支那の首都たる洛陽に比していふ。

歹部

【歹】ガツ 〔易〕又、歺・肉に作る ○肉をけづりたるあとのほね（殘骨）＝歺。○あし。好の反對。集韻「惇德遠行曰レ—」

一畫

【歺】歹（前條）に同じ。

二畫

【殀】キウ 〔有〕くつ、くさる（腐）ル、湯問「—ニ其肉ニ」＝朽。

【死】シ 〔紙〕○しぬ、生命を亡ふ「—亡」「戰—」「夭—」「餓—」「病—」○前・瀕・辛などに對して身分の無き人の死。曲禮「庶人曰レ—」○はつ（果）つく（盡）「風—」をはる（終）活動をやめる。孟、告子「—於安樂ニ」○ころす（殺）史、高祖紀「殺レ人者—」○かる（草枯）草木の生氣が盡きる「枯—」「—草」○ほろぶ（亡）○ちる（散）○俗に活動せざる者をいふ「—灰」○燈火が消える。陸游詩「破驛夢回燈欲レ—」○—守シュは、しにものぐるひになりて守る。○—地は極めて危き場所。【死或重於泰山】シアルヒニオケルタイ人の生命は場合によりては最も貴重すべき義。司馬遷、報ニ任安一書「人固有ニ一死ニ——、或輕ニ於鴻毛ニ用之所レ趨異也ニ」【死友】シウ ○死すとも相背かざる親友。列士傳「羊角哀、左伯桃爲ニ—ニ」後漢書、趙岐傳「出行乃得ニ—ニ」○すでに死せし友。齊家寶要「貢ニ—ニ者之害レ義、比ニ負ニ生友ニ者ニ爲ニ尤甚ニ、交レ友者戒レ之」＝亡友。【生レ死而肉レ骨】シシニクヲ 人の大恩を受くること、已に死して又生き、白骨再び肉つく如きをいふ。左、襄二二「平子目、荀使ニ臣如得ニ改事ニ君、所レ謂——也」【貳レ死】シヲ みだりに死なざる義。荀子「—レ—持レ義而不レ撓、是士君子之勢也」【決レ死】ケッシ 次條に同じ。【必レ死】ヒッシ いのちがけになる、死を決する。漢書、朱博傳「對曰、—レ—」＝決死。【視レ死若レ歸】シシジャクキ 從容として死を樂むこと家に歸るが如し。大戴禮、曾子制言「君子——」孫武子「三軍既成レ陣、使ニ士視レ死若ニ歸ニ」【視レ死如レ生】シシジョセイ 死を懼れざるをいふ。莊子「白刃交ニ於前ニ、——者、烈士之勇也」【死骸】シガイ 死體に同じ。【死交】シカウ 死すとも變ぜざる固きまじはりの北齊書、宋遊道傳「一面便定ニ—ニ」＝刎頸交。【死肌】シキ くさりて生氣なきはだへ。柳宗元、捕蛇者說「去ニ—ニ殺ニ三蟲ニ」【死期】シキ 死する時、いまは。＝臨終・末期ニア・臨末魔。【死義】シギ 正義の爲めにしぬ。史、汲黯傳「守レ節—レ」中說「君子不レ愛ニ虛聲ニ、不レ所ニ妄偏ニ、不レ避レ—レ」【死去】シキョ 死して此世をさる。陸游詩「—ニ元知萬事空ニ」＝逝去・卒去・往生。【死句】シク 意深く人を感ぜしめ難き句。活句の對。陸游詩「我得茶山一轉語、文章切忌參ニ—ニ」【死灰】シクワイ 火氣なきはひ。韓愈「人の心の無欲にして名利に冷かなるに喩ふ。莊、齊物「形固可レ使ニ如ニ槁木ニ而心固可レ使ニ如ニ—ニ乎」【死灰復然】シクワイフゼン 勢力を失ひし者の再び燃ゆんになるに喩ふ。史、韓長孺傳「安國君ノ法抵レ罪、宗獄吏田甲辱ニ安國ニ、安國曰、死灰獨不ニ復然ニ乎、甲曰、然卽溺レ之」然は燃の正字、灰は縣名。【死活】シクワツ ○しぬると、いくると。＝生死。○悼じて死生に關する一大事の義とす「—問題」【死刑】シケイ 生命を斷つしおき。＝死罪。【死語】シゴ 現代に用ひざる古きことば。【死罪】シザイ ○死刑に當るつみ。宋史、高宗紀「—レ、有レ延、及情理可レ憫者」○臣が君に對して上奏する時、恐れ入るといふ義の謙辭。史、馮唐傳「臣誠愚戇ニ忘諱ニ—レ—」【死相】シサウ 死に近づけるにんさう。影の薄きさうがら。【死草】シサウ かれくさ。＝枯草。【死子】シシ ○死せしこども。＝死兒。○碁のあげいし。酉陽雜俎「拾ニ蔵—レ空處如ニ龍鳳形ニ」【死士】シシ いのちがけの士、決死の士。史、春申君傳「伏ニ—レ于於棘門之內ニ」＝敢死之士。【死屍】シシ 死體に同じ。【鞭ニ死屍ニ】シシニ ○死體をむちうち

て生前の恩をはらす〔史、伍子胥傳〕○轉じて死人の冥福行爲を攻撃するにもいふ。

【死伯二閻羅王一】シハクニエンラオウ 陰の韓擒虎が、豪氣を示したる語、閻羅王は閻魔王。陰書、韓擒虎傳「生爲二上柱國一、——」

【死後二酒盞一】シゴニシュサン 死して酒盞となる、酒を好むの甚だしきをいふ。世說「鄭泉臨二卒時一、語二同輩一曰、必葬二我於陶家側一、底百歲後化成レ土、幸被レ取爲二酒盞一、實獲二我心一」

【死而後已】シジノチヤム 死に至るまで勉めて止まらざる義。論、泰伯「仁以爲二己任一、不二亦重一乎、——、不二亦遠一乎」‖既而後已。

【死後】シゴ しぬると、きずつくと。

【死者不レ可二復生一】シシャハフカヘンセイ 一度死せし者は再び蘇生せしむること能はず、尙書大傳に、孔子の語として引く。

【死守】シシュ 死を決してまもる、いのちがけで守る。

【死所】シショ しにばしょ。戰國策「妾不レ知二其一一矣」路頭に迷ひて死するかも知れず。

【死處】シショ しにばしょ 死すべき處。‖死所。

【死水】シスヰ ○たまりみづ。○圖が死する時に飲む水、まつごの水。

【死且不レ朽】シスイテカヅメズ 死しても名は末代までも朽ちず。左、僖三十三年傳「臣之以爲レ戮、——」

【有二死之心一而無二生之氣一】アルシスルノココロアリテシヤウノキナキノ 死を決して生を希はざる義。戰國齊策「將軍有二死之心一而士卒無二生之氣一」

【死生有レ命】シセイアリ 死生は天命にて、人力にて如何ともすべからず。論、顏淵「——、富貴在レ天」

【死生亦大矣】シセイモマタオホイナリ 死生は、人生の大事件〔莊子〕

【死節】シセツ いのちをすててみさをを立てる。胡安國、春秋傳「春秋重二一レ之臣一」‖死義。

【死孔明走二生仲達一】シセルコウメイソウセイチユウタツ 諸葛孔明の死後も司馬懿が逃り伐たざるを見て百姓の作りし諺、仲達は懿の字〔通鑑綱目〕

【死縛】シバク むくろ、しかばね。‖死骸、死屍。

【死鬪】シトウ 死力を出して徒黨を組む。又、其の徒黨〔漢書、翟方進傳〕

【死地】シチ 逃るべき路たき處、極めてあやふき地、必死の地。孫子、九地「陷二之一一一然後生」

【死中求レ活】シチウニカツヲモトム 次條に同じ。後漢書、岑彭傳「男子當二死中求レ生、可二坐窮一乎〔劉基詩〕——是高基」

【死中求レ生】シチウニセイヲモトム 窮境に陷りて活路を見出す、失敗を再びとりかへす。晉書、呂光載記「乞伏乾歸曰、——、正在二今日一」

【死維】シヰ 國難の爲めに命をすつ。唐書、李訓傳「無二伏レ節一レ一者一」

【有レ死】シアリ 死にせまる、濱は近。齊語「桓公曰、夫管夷吾射二寡人一中レ鉤、是以濱二於死一」‖瀕死。

【死人】シジン しびと。晉語「一一復生」‖死者。

【起二死人一】シニヒトヲオコス 大いに人に恩惠を施すをいふ。契語「——而肉二白骨一也」

【之レ死】シスルニ 死にせまる、之レ死際レ他 死するに至りても他心無し。詩、國風、柏舟「髮彼兩髦、實維我儀、之レ死矢靡レ他、母也天只、不レ諒二人只一」

【死之五等】シノゴトウ 人の身分によりて、死の名稱に五等あり。曲禮「天子死曰レ崩、諸侯曰レ薨、大夫曰レ卒、士曰二不祿一庶人曰レ死」

【死亡】シボウ しにうせる。‖死去。

【死魄】シハク 陰曆の朔日をいふ。魄は月の輪廓の光なきところ、死は月光の蔽はれて消えろ義。書、武成「惟一月壬辰、旁一一」

【買二死馬骨一】シバノホネヲカフ 用に立たぬものを買ひて、用あるものの來るを待つ義。戰國策、郭隗曰、古之人君有二千金一、使二涓人求二千里馬一者、馬已死、買二其骨五百金一而歸（中略）幕年千里馬至者三」

【死法】シホフ 實際に行はれざるきそく。‖徒法。

【死物】シブツ 死して生氣の無きもの、活動せざるもの。

【死別】シベツ しにわかれ。杜甫、夢二李白一詩「——已呑レ聲、生別常惻惻」

【死魔】シマ 圖十魔。又、四魔の一。大藏法數「業報已畢、捨二離現生之處一、障礙修道、遂失二智慧之命一、之名二一一」

【死命】シメイ しぬるいのち、「一一を制す」

【死靈】シレイ 圖死人のをんりやう、死してうかばれぬ者のたましひ。生靈の對。

【死力】シリク ありたけのちから、必死の努力。漢書、李陵傳「得二士一一一」

四畫

【妖】エウ 〔幺〕 ○わかじに（短折）‖夭。○きる、きりころす（斷殺）禮、王制「不レ殺胎、不レ一レ夭」

【妖詩】エウシ わかじにと、なかいきと。孟、盡心「一一不レ貳、修レ身以俟レ之」‖夭壽。長壽短命。

【殉】ジュン ㊀ボツ 月 ㊁コツ 月 ㊂ブン 吻 ㊀死す、をはる（終）‖殁・沒。㊁つく、つくす（盡）㊂きる、たつ（斷）くびはねる。‖刎。

【殁】ボツ 沒（水部四畫）に同じ。‖隕

ー」「戦ー」

【殃】 五畫 ア。 陽

○とが(咎)○わざはひ(禍)「天ー」「餘ー」書、伊訓「作不善、降之百ー」○わざはひする。そこなふ(害)やぶる(敗)孟、告子「謂之丁民」○つみす(罰)【同訓異字】(下部九畫)の條を見よ。【殃害】わざはひとがめ。左傳「哀樂失ノ時、ー必至」‖殃禍。【殃禍】わざはひ。‖殃害。【殃戮】わざはひにあひて殺される。漢書、貴盛德「君臣亂、六親ー」【殃及池魚】○古、楚國の城門火を失せし時、池水を汲み盡したれば、魚皆死せり、よりてわざはひの故なくして他に及ぶ義。杜臆、檄梁文「楚國亡レ猿、禍延林木、城門失レ火――」呂覽、必己には、宋の桓司馬が其失ひたる寶玉を得んために池の水を汲み干し魚の死せし事を記す。○轉じて火災の義。‖池魚之殃。

【殂】 ソ 國 徂に通ず

しぬ(死)ゆく(逝)死して逝く。をはる、ほろぶ。

【殂落】ソラク 天子のおかくれ。後世は正統外の僭竊の君主の死にいふ。落は落葉の義。書、舜典「帝乃ー、百姓如ノ喪二考妣一」‖徂落。

【殆】 タイ 隊

○あやふし(危)「危ー」不安心。論、爲政「多見闕ー」○そこなふ(害)○はじめ(始)○ほとんど、十中の八九。漢書、李夫人傳「夫人病甚、一將レ不レ起」○ちかし。孟、離婁「ー於不可」○おこたる(怠)○やぶる。○つかれる(疲)「困ー」「疲ー」曹植賦「日既西傾、車ー馬煩」【同訓異字】(歹部四畫)の條を見よ。○殆始・殆危○殆は近き意、危也、近也、將也と訓す、八九分までそれになりて、あぶなき場合の義。易經「顏氏之子、其殆不レ孫乎」○幾は幾微の意より轉用して、動靜とす、通鑑の漢紀に「幾傾覆而公事」とあり、殆と大差なし、されば孔明出師表には、幾敗北出、始死二漳濱一と互用したり。

【珍】 チン 眞

○たゆ、たつ(絕)書、畢命「餘風未ー」○つく、つくす(盡)○やむ、やます(病)○よし(善)あつし。‖腆。○たやす、ほろぶ。ほろぼす「勦ー」「剋ー」【珍悴】チンスイ 病みつかれてほろぶ。詩、大雅「人之云亡、邦國ー」【珍殘】チンザン ほろぶ、ほろぼす、殘はみなごろし。書、泰誓「誕以二爾衆士一、ー二紂躬一」【珍滅】チンメツ ほろぶ。徐陵文「宗姬ー一、翦滅猶レ餘」‖殄滅。【珍殲】チンセン 危難をたやす。沈約、樂宗頌「受レ敵「百」天命」我、殲レ凶ーレー」【珍殺】チンサツ ほろびやぶれる。後漢書、陽球傳「月二九江太守一、球到殺レ法略、凶賊ー一」【珍滅】チンメツ のこらずほろぶ。のこらずほろぼす。書、盤庚、遇二爽死一我乃劇ー一之、無二遺育一」‖殄殘。

【殖】 六畫 ケキ 陌

さく、卵裂けて孵化せず。禮、樂記「卵生者不ー」

【殊】 シュ 國

○たゆ、たつ(絕・斷)たやしつくす。左、昭二三「斷其後之木而弗ー」○しぬ(死)ころす(誅)○さだむ、きめる(決)「ー死」○わかつ(別)ことにす、ことなり(異)易、繫辭「天下同歸而ー塗」○すぐ(過)後漢書、梁竦傳「母氏年ー七十」○ことに、とりわけて、甚だしく。史、儒侯世家「良ー大驚、隨目之」○大いに傷つきて未だ死せず。【同訓異字】(歹部四畫)殊・異・特の別は異(田部七畫)の條を見よ。【殊渥】シュアク とりわけてあつし。杜甫詩「文彩承ニー一、流傳必絕レ倫」【殊位】シュイ 特に尊きくらゐ。歐陽修、論二交王議一「ー一盛禮」【殊異】シュイ ことなり。又、ことにす。韓愈「醜二觀古今功名士一、皆有二殊異ー一之迹一」‖特異。【殊尤】シュユウ 特別にすぐれる。白居易賦「彼皆瑣細、此實ー一」【殊域】シュイキ 遠く隔りたるよその國。晉書、樂志「ー一既賓、陳遺禮、淮民魚米餘、百貨仰ー一」‖異域・殊境。【殊音】シュイン ことなりて珍らしき音樂。後漢書、西南夷傳論「ー一異節之使、列二唱於門外一」【殊絕】シュゼツ 遠きはてのくに、蕃は末。晉書、陸機傳「化協ー一、風衍二遐垂一」‖遠裔。【殊榮】シュエイ 特別の光榮。江總文「世荷ニー一」【殊越】シュエツ ぬきんでてこえる。夢溪筆談「勳德降重、殊倚ー一」

【殊恩】シュオン　特別なるめぐみ。謝偃、觀舞賦「承二置醪之一一」‖殊寵。

【殊佳】カシュ　すぐれてよし。王羲之文「僕近修二小園子一一」‖絶佳。

【殊好】コウシュ　すぐれてよし。世說「王祥家有二李樹一結レ子一一」

【殊效】シュコウ　○すぐれたるてがら。魏書、子楽碑傳「彰二一一」‖大功・殊功・偉勳・殊勳。○すぐれたるきめ。‖特效。

【殊號】シュガウ　特別なるとなへ。後漢書、皇后紀論「雖二呂氏專レ政上官臨レ制、亦無二一一」

【殊技】シュギ　○すぐれたるわざ。‖殊伎。○爲す所のわざをことにす。莊、秋水「騏驥驊騮、一日而馳二千里一、捕レ鼠不レ如二狸狌一者レ也」

【殊境】シュキャウ　よそのくに（外國）晉書、禿髮利鹿孤載記「中二分天下一、威振二一一一」

【殊郷】シュキャウ　よその地。王勃序「餞二仙客子一一一、適二長朋一于異縣」‖異鄉・異境。

【殊遇】シュグウ　とりわけてあつきもてなし、特別の優待。嵇志、諸葛亮傳「蓋追二先帝之一一一、欲レ報二之于陛下」

【殊勳】シュクン　とりわけすぐれたるいさを。李德林、天命論「立二一一于魏室一、襲二盛業于周朝一」

【殊傑】シュケツ　衆人にすぐれてぬきんでる。晉書、單道開傳「法師幾行、一レ一」‖冠傑・拔傑・出傑・絶傑。

【殊科】シュクワ　しなを異にす。陳琳文「强弱レ一、衆寡異レ論」

【殊怪】シュクワイ　ふしぎにあやしきもの。拾遺錄「瑰寶一一之物、充二于王庭一」

【殊荒】シュクワウ　遠きえびす、荒は荒服。魏志、陳留王興紀「宣二揚武功一、則威蓋二一一一」

【殊刑】シュケイ　特別に重きしおき。晉書、刑法志「大辟之罪、一一之極」

【殊棄】シュキ　特別なるひきたて。北史、柳莊傳「深被二梁主一一一」‖殊恩・殊寵。

【殊功】シュコウ　すぐれたるいさを。張纘賦「論二一一於百王一」‖殊勳・殊效。

【殊操】シュサウ　すぐれたるみさを。晉書、阮种傳「翁冠有二一一、爲二德康一所レ重」‖異操。

【殊死】シュシ　○死を決する。史、淮陰侯傳「韓信張耳已入二水上軍一、軍皆一一戰、不レ可レ敗」○死罪に當る囚人。莊、在宥「一一者相望也」

【殊死刑】シュシケイ　死刑をいふ。殊は絶。文獻通考「漢景帝經二一一八十一事一」

【殊蹟】シュセキ　すぐれたるよきあとはひ。傅休奕、桑椹賦「嘉味一一、食レ之無レ數」‖殊味。

【殊絆】シュハン　ことなるめでたききずな。司馬光文「休氣充塞、一一輪湊」

【殊狀】シュジャウ　○形をことにす、ことなれる形。後漢書、禰衡傳贊「一レ一共レ體、同レ靡異レ氣」○めづらしくかはれる形。丘遲詩「嶺絕峯一一」‖奇狀・異態。

【殊常】シュジャウ　尋常よりはすぐれる。晉書、張載傳「處二守平之世一、欲レ建二一一之勳一」‖超常・非常。

【殊奬】シュシャウ　特別にすすめたすける。徐陵文「遂蒙二一一、歸嗣二本朝一」

【殊勝】シュショウ　○とりわけてすぐれる。朱熹、梅花詞「天然一一、不レ關二風與冰雪一」○圓けなげ、奇特。

【殊稱】シュショウ　すぐれたるとなへ、よき名。孫覿詩「先生築上宅、華榜有二一一」

【殊職】シュショク　役目をことにす、ことなる役目。莊子「五官一レ一、君不レ私故岡治」

【殊辱】シュジョク　こゝをことにす。西京賦「飛形一一、不レ可レ勝レ論」

【殊績】シュセキ　すぐれたるいさを。晉書、王宏傳「花郎有二一一一」‖異績。

【殊絕】シュゼツ　ことにすぐれる。諸葛亮文「聞採智計二一一于人一」

【殊選】シュセン　ことなるくはしきえらび。崔駰文「資二爾令猷一、副二我一一一」‖特選・妙選。

【殊宗】シュシュウ　異なれる宗派。又、異なる教旨。「五燈會元」

【殊俗】シュゾク　○風俗をことにす。詩經、序「國異レ政、家一一、而變風變雅作」○風俗を異にする他國。史、始皇紀「餘威振二乎一一一」‖絕域。

【殊族】シュゾク　ちすぢのことなれるやから。王粲文「初交二一一一、本越二國盟一」‖異族。

【殊致】シュチ　歸する所をことにす。草應物詩「出處似レ一一、喧靜兩皆禪」

【殊智】シュチ　すぐれたるち恵。高適詩「直道事一一、先驅忽抗行」

【殊珍】シュチン　とりわけ珍らしき物。宋史、外國傳「不レ貴二一一、惟貴二良馬一」

【殊寵】シュチウ　すぐれたるいつくしみ。李白詩「龍顏恵二一一、齟齬邈二天居一」‖殊恩。

【殊廷】シテイ　○仙人の居る廷。史、封禪書「冀二至二一一一焉」○他國の朝廷。

【殊庭】シテイ　蓬萊にある仙人の居處。‖殊廷。

【殊幅】シフク　ことなるわだち。韓非、ことなる道路。陳傳良詩「總角相看五十年、行藏一一各瞞然」

【殊等】シトウ　しなをことにす。ことなりたる等級。後漢書、楊賜傳「增設一一、物有二服章一」

【殊闕】シュケツ　いのちがけにてたたかふ。唐書、郭孝恪傳「窮討一一、願二取其國一、願一鹿來一然」

【殊特】シトク　とりわけて異り。南史、梁武帝紀「帝生而有二異光一、狀貌一一」‖梁隨文帝一、菩提樹頌「國界一一」‖特異。

【殊塗同歸】シトドウキ　道を異にして歸を同

じくする、ゆく道は異れども終のおちつく所は一つ（異、類）
【殊能】シュノウ すぐれたるはたらき。晉書、王戎傳、「嗇ㇾ無二―一、而庶績修理」
【殊方】シュハウ ○方法を別にす。又、ことなるむき。漢書、董仲舒傳「今師異ㇾ道、人異ㇾ論、百家ㇾ一、指意不ㇾ同」○ことなる土地。班固賦「一一異類、至二于三萬里一」＝異域・異境。
【殊品】シュヒン ○品類をことにす。左思、蜀都賦「水物一ㇾ、鱗介異ㇾ族」○すぐれたる品。曹植、七啓「靈草文植、一一珍類」
【殊服】シュフク ○衣服をことにす。漢書「戸異ㇾ政、人一ㇾ」○習俗を異にせる遠きはての國。張衡、西京陳公誄「萬邦既協、一一來同」＝殊荒。
【殊妙】シュメウ 極めてすぐれる。陶潛詩「神力既一一、傾河焉足ㇾ有」＝絶妙。
【殊容】シュヨウ すぐれたるかたち。又、かたちを異にす。嫦娥、日中有二王字一賦「煥爾一一、照然異質」
【殊量】シュリャウ すぐれたる度量。弱志、諸葛亮傳「陳壽上二言劉備一、以二亮有一一、乃三顧亮于草廬之中一」
【殊力】シュリキ すぐれたるはたらき。北史、侯莫陳順傳「渭橋之戰、輒有二一一」
【殊類】シュルイ 類をことにす。又、ことなるたぐひ。司馬相如、子虛賦「異方一一」＝異類。
【殊禮】シュレイ ○其の禮を異にす。史記「帝王者各一ㇾ而異ㇾ務」○特別の禮遇。後漢書、陳寔傳「光武素聞二其風解一、報以二一一」

【殉】

㊀ジュン ㊁シュン 眞 靈

㊀したがふ(從)○死者に從ひて死す(用ㇾ人送ㇾ死)○身を以て物に從ふ。賈誼、服鳥賦「貪夫一ㇾ財兮、烈士一ㇾ名」○いとなむ(營)○もとむ(求)○めぐる(巡)㊁むさぼる(貪)書、伊訓「敢有一ㇾ于貨色」

同訓異字 殉・徇・順・從・隨・循・率 逆の別は順(頁部三畫)の條を見よ。

【殉敎】ジュンケウ 宗教のために命をすてる。
【殉國】コクジュン 國難に從ひて死す。漢書、李陵傳「常奮不ㇾ顧ㇾ身、以二一一家之急一」＝殉難。
【殉葬】ジュンサウ ○物を用ひて死を送る。明器卽ち塗車芻靈などを用ひて共にうめる「禮、檀弓」○後世は人を用ふ、おひばら、秦穆公の死に子車氏の三子が殉死せし如し。
【殉死】ジュンシ おひばら、主君の死を追うて死す。王棨詩「自ㇾ古無二一一」＝從死。
【殉道】ジュンダウ 正義の爲めに命を棄てる。孟、盡心「天下有ㇾ道、以ㇾ道殉ㇾ身、天下無ㇾ道、以ㇾ身一ㇾ」
【殉難】ジュンナン 國難に從ひて死す。溫嶠文「嶠閭弱不武、不ㇾ能ㇾ一ㇾ」＝殉國・殉難。
【殉名】ジュンメイ ただ名のみにあこがれて身を以て之に從ひて死す。殉利を見よ。
【殉利】ジュンリ ただ利益のみ圖りて身を以て之にしたがふ。莊、駢拇「小人則以ㇾ身一ㇾ、烈士則以ㇾ身殉ㇾ名」

【殍】

七畫 フ へウ 蕭 錫

うゑじに(餓死)又、其の者。隋鐵論、水旱「野有二餓一ㇾ」＝孳。
【殍莩】ヘウフ うゑじに。梅堯臣詩「中州無二一一、南土謠二脂膏一」＝餓殍。
【殍殣】ヘウキン うゑじに。張廷珪文「天災所ㇾ降、年穀莫ㇾ登、在二于貧窮一、或至二一一」

【殛】

八畫 キョク 職

○やむ(病)○かれる(枯死)

【殪】

エイ 支 又、瘞に作る

○一殪は、やむ(病)かすか(微)○かさなる(重)左思、吳都賦「重疏一葉」

【殘】

サン ザン 寒

○そこなふ(賊害)○やぶる(毀)こはす。○ころす(殺)○しへたぐ。○あらし(暴)むごし「一虐」○滅ぼす。戰國衞策「欲一ㇾ中山」○凶惡、害毒。○多く殺傷する。○かく(缺)「一缺」漢書、劉歆傳「專己守一」○あまる、あます(餘)のこる、のこす、後にとどめ置く。○餘たる肉。○くひのこり(食餘)

同訓異字 殘・遺・貽・剩 ○殘はそこなふとも訓む、あれのこる義。杜詩「殘杯與二冷炙一」○遺は形見にのこす義、遺物・遺言の類。又洩れのこる意、遺逸・遺賢の類。○貽は人の爲めになるやうに、物をのこしおくる義。詩經「貽二厥孫謀一」○剩は滿ちて尙ほ殘るにいふ、餘なり。杜詩「剩水殘江破、殘山碣石開」

【殘骸】サンガイ 呑過ぎて後にも鳴くうぐひす。白居易詩「別花何用レ作、勸レ酒有二一一」＝老驅・晩驅。
【殘燼】ザンジン のこれるあつさ。韓愈與詩「宿雨滴二一一、惠風與レ之俱」
【殘雨】ザンウ のこりのあめ。杜審言詩「日氣含二一一、雲陰逆二晩雷一」

【殘雲】ザン　のこれるくも。孟浩然詩「嵩嶽有二ー一」

【殘英】エイ　殘花に同じ、英ははなぶさ。尹廷高詩「欲レ覓二ー一片一」

【殘壘】ルイ　そこなはれたる墓。高啓詩「古路斜陽廢壘、斷碑荒草ー一」

【殘營】エイ　すたれてもちひざるとりで。方干詩「涼風吹二古木一野火燒二ー一」

【殘煙】エン　消えのこりのけむり。周弘正詩「菊潭留二餘水一、丹竈起二ー一」

【殘餤】エン　のこれるほのほ。白居易詩「晨紅耿二ー一、宿閣凝二微香一」

【殘夏】カ　なつのをはりの周楞詩「野寺渡二ー一、空房欲レ暮時」

【殘荷】ザン　むごたらしくきびし。周堡傳昭詩「爲政ー一無亦飢」ー殘酷。

【殘害】ガイ　そこなひころす。書、泰誓「ー二于倒萬姓一」ー殘賊。

【殘更】カウ　よふけ。范成大詩「掃レ雪烹レ餌閙二ー一」ー深更。

【殘香】カウ　〇のこりのかをり。ー餘香。〇そこなはれたるかをり。

【殘紅】カウ　消えかかりしともしび。紅は火皿。蘇軾詩「閉レ門孤枕對二ー一」ー燈檠。

【殘骸復】カウク　遺風餘香の喪、體は餘、餘澤といふが如し。唐書、杜甫傳贊「他人不レ足、甫乃厭餘。——、沾二丐後人一多矣」

【殘顧】ガク　さしひきして殘りし金品の高。

【殘植】カン　飲みのこしの酒樽。陸游詩「卯酒倒二ー一」ー卯酒は朝ざけ。ー殘樽・殘罇。

【殘棺】カン　かけちぎれたるかきもの。宋史、歐陽修傳「金石遺文、斷編ー一、一切綴拾謂二之集古錄一」ー斷簡。

【殘暉】キ　ゆふひのひかり。許渾詩「風前猶鼓送二ー一」ー殘照・殘陽。

【殘毀】キ　そこなひやぶる。郭璞、封畧讚「有レ物貧婆、號曰二封豕一、饕食無レ厭、肆二其ー一」ー殘壞。

【殘糗】キウ　のこりのほしひ。梁簡文帝文「尚悲二ー一、獨飲二餘漿一」

【殘菊】キク　霜にそこなはれたるきく。孔平仲詩「凍蝶依二ー一、幽禽立二臥枝一」

【殘虐】ギャク　むごたらしくそこなふ。元經傳「貪侈ー一、百姓苦レ之」ー殘害・殘酷。

【殘兒】ジ　生きのこれるわるもの。

【殘燄】ジン　ゆふひ。ー夕照・殘照・斜曛。

【殘花】カ　ちりのこりて色香の失せたるはな。庾信詩「荷開憔悴長、一ー嫋漫舒」劉克莊詩「ー一落盡樹陰多」ー餘花・殘蕊・殘英。

【殘果】カ　のこりそこなはれたるくだもの。劉閲詩「鳥喧ー一落、闌散爰花開」

【殘壞】クワイ　そこなひやぶる。これる。北史、裴寧傳「ー二一富宅一」魏志、荀彧傳「今華二ー一、猶易二以自保一」ー殘毀。

【殘月】ザン　ありあけのつき。陳子昂詩「飛箱遙度レ海、ー一屢臨レ邊」顧況詩「起行ー一最徘徊」ー殘輪。

【殘枿】ゲツ　きりかぶ。張耒詩「ー一寒餘燼」

【殘缺】ケツ　そこなはれかける、不足する。漢書、藝文志「周室既微、載籍ー一」

【殘縑】ケン　のこりそこなひしきぬ。顧愷之畫論「人有二ー一販素、繪二一山水一、愛レ之若レ寶」

【殘紅】コウ　ちりのこりの赤きはな。王建詩「樹頭樹底覓二ー一」

【殘酷】コク　むごくしへたぐ。詩經、箋「天下邦國之君、不レ爲二ー一」ー殘虐。

【殘恨】コン　のこるうらみ。孟郊詩「登レ來ー一深」ー遺恨。

【殘恨】コン　のこれるあと。陸游詩「遺餘野水有二ー一」

【殘茶】サ　のみあまりのちゃ。白居易詩「ー一冷酒慇二殺人一」

【殘殺】サツ　むごくころす。孟簡贈詩「ー一非レ不レ痛、古來良有レ由」

【殘山剩水】サンジャウスイ　山水のあまりもの、山水のつまらぬ景。范成大詩「——一人心」ー殘山賸水。

【殘山賸水】サンジャウスイ　のこれる山河、國土分裂して版圖の全からざるにいふ。杜甫詩「賸水淪江破、殘山鴈石開」

【殘秋】シウ　あきのをはり。趙嘏詩「殷吟二紅葉一對二ー一」

【殘漱】シウ　のこりのしわ。郭經詩「生全餘二小穉一、展盡帶二ー一」

【殘謀】シウ　そこなひふみにじる。宋史、高宗紀「詔下汀漳泉建四州、經二賊ー一、民戶賦役上」

【殘醜】シウ　のこれるわるもの。後漢書、桓帝紀「幸賴二股肱謀海之助一、ー一消蕩」ー餘醜・遺醜。

【殘日】ジツ　〇ゆうひ。汪元量詩「雲橫二古峰一杳二ー一」ー夕陽・斜陽・殘照・殘暉。〇のこりのひ。ー餘日。

【殘醪】シャウ　のこりのみそ。

【殘酒】シュ　のこりのさけ。皮日休詩「安得瑤池飲二ー一」

【殘春】シュン　はるのをはり。李嘉祐詩「汀花餘二殘水一、山木暗二ー一」

【殘暑】ショ　立秋後のあつさ。白居易詩「ー一蟬催盡、新秋雁帶來」

【殘曙】ショ　あけぼの。溫庭筠詩「ー一微星當戶沒」

【殘生】セイ　のこりのいのち。杜甫詩「江村獨歸去、寂寞養二ー一」ー殘年・餘命・老年。

【殘星】セイ　あけがたのほし。王貞白詩「中宵分二曉月一、當レ枕落二ー一」

【殘政】セイ　まつりごとをそこなひやぶる。汲冢周書「君王滅レ道ー一レ、小民遭矣」

【殘照】セウ　ゆふひのひかり。李中詩「江淨ー一閒、雲散亂山横」ー殘暉・

斜照。落暉。

【殘雪】ザンセツ　春のきえのこりのゆき。杜甫詩「掩花落處疑ニ殘雪一、柳葉開時任二好風一」郭伯濬詩「一一寒梅未レ吐レ花」

【殘喘】ザンゼン　のこりのいき、死にかかれるいのち。宋元詩「草蘆穿レ無繫二柴扉一一一無二人問一是非一」郎經詩「老吟寄二一一一」‖餘喘・餘命・殘息。

【殘蟬】ザンセン　秋の末までないてゐるせみ。‖殘蟬。

【殘租】ザン　とりたてのこりのみつぎ。陸游詩「一一不レ待二急符催一」

【殘息】ザンソク　生きながらへたるいのち。陸游詩「數匙淡飯支二一一一」‖殘喘。

【殘賊】ザンゾク　〇そこなひしへたげる。又、其のわる者。漢書「漢王數レ羽曰、吾以二義兵一從二諸侯一誅二一一一」〇仁義をそこなひ傷つく。又、其の者。孟、梁惠王「賊レ仁者謂二之賊一賊レ義者謂二之殘一一一之人、謂二之一夫一」〇のこれる賊。

【殘燈】ザンとう　次條に同じ、草は標の杜甫詩「一一下二馬復同傾一」

【殘燈】ザンとう　酒のかすのこれるたる。陸游詩「餘年似二一一一、欲レ盡不レ禁レ漉」‖殘醪・殘醅。

【殘菊】ザンきく　のこりのともがら、討ちもらされたるやから。唐書、裴度傳「一一畏レ誅」

【殘害】ザンがい　くれのこる日、ゆふぐれに近き時。張耒詩「古寺秋雨昏二一一一」

【殘蝸】ザンくわ　おはりのせみ。周伯琦詩「蓋滿深二深影一、柳桃啼二一一一」‖殘蟬。

【殘滴】ザンてき　のこりのしづく。庾信南詩「歸雲半入レ嶺、一一尚懸レ枝」‖殘醪。

【殘冬】ザンとう　ふゆのをはり。吳寬詩「愛眠不レ覺過二一一一」

【殘燈】ザンとう　消えのこりたるともしび。元稹詩「一一無レ焰影幢幢」‖殘釭。

【勝レ殘去レ殺】ショウザンキョサツ　殘暴の人を化して惡をなさざらしめ、民を善に化して刑殺を用ひず。論、子路「子曰、善人爲レ邦百年、亦可二以勝一殘去一レ殺矣」

【殘忍】ザンニン　むごし、無慈悲。‖刻薄。

【殘熱】ザンねつ　のこりのあつさ。白居易詩「早陰江上散二一一一」‖殘炎。

【殘年】ザンねん　老いぼれて生きのこれる壽命。韓愈詩「背レ日二衰朽一惜二一一一」‖餘命・餘年。

【殘念】ザンねん　圖〇おもひがのこる。‖遺憾。〇くちをしい、くやしい、むねんに思ふ。

【殘醅】ザンばい　吹きのこれるはな、蕊ははなびらの。柳宗元詩「貯レ愁聽二夜雨一、隔レ淚數二一一一」‖殘花。

【殘杯】ザンぱい　飲みのこりのさかづきのさけ。顏氏家訓、雜藝「人不レ可レ見二勤貧一處二之下座一、取二一一冷炙之學一」

【殘杯冷炙】ザンぱいれいしゃ　飲みのこりの酒と焼き冷ましの肉と。轉じて、馳走を受くるに喩ふ。杜甫詩「殘杯與二冷炙一、到處潛悲辛」前條參看。

【殘梅】ザンばい　ちりのこりのうめ。釋貫休詩「曉風吹不レ盡、江月落二一一一」

【殘暑】ザンしょ　いき遺れるたみ、民は殘民。齊書、王融傳「北地一一、東都遺老」

【殘伐】ザンばつ　敵をうつ。國語「盛怒風レ兵、將レ二一越國一」

【殘醪】ザンろう　のこりのかゆ。醪は粥。韓愈詩、「桁掛二新衣盡一、巢窠二食一一」

【殘病】ザンびょう　そこなはれやむ。不具となる重きやまひ。魏志「癈疾一一、所レ謂天民之窮者也」‖癈疾。

【殘部】ザンぶ　のこれるくみ。唐書、吐蕃傳「一一皆二

【殘兵】ザンぺい　のこりのつはもの。‖餘兵。

【殘夢】ザンむ　見のこしたるゆめ。蘇軾、早行詩「馬上纔二一一一、不レ知二朝日升一」

【殘猛】ザンもう　むごくてあらし。楊維楨詩「實錄勳二一一一」

【殘滅】ザンめつ　そこなひほろぼす。史、高祖紀「項羽諸所レ過、無不二一一一」

【殘夜】ザンや　よあけ。杜甫詩「四更山吐レ月、一一水明レ樓」

【殘照】ザンしょう　ゆふひ。耶律楚材詩「飢看一一補二斷霞一」‖斜陽・殘日・殘照。

【殘餘】ザンよ　のこり。歐陽修詩「野烟斷斷、狐猪鳥鼠爭二一一一」

【殘留】ザンりゅう　あとにのこる。‖殘存。

【殘戮】ザンりく　そこなひころす。後漢書、盧植傳「聖朝普無二殘宥一、而仟被二一一一、天下之人、咸知二其寃一」

【殘掠】ザンりゃく　そこなひかすめる。そこなひて強奪する。唐書、張建封傳「一二一鄉縣一」‖殘略。

【殘淚】ザンるい　なみだのあと。劉長卿詩「點點留二一一一、枝枝寄二此心一」

【殘醜】ザンしゅう　のこりのしづく。歐陽修憎二蒼蠅一賦「醯形玉盤、餘欲易レ盈杯盂一一、砧几餘腥」‖餘瀝。

【殘橫】ザンおう　そこなひほしいまま。南史、曹景宗傳「部曲一一、部下厭レ之」

【殖】ショク　職

〇うう（種）植物を植ゑ付ける「耕一」「墾一」左、昭十八「夫學一也、不レ學將レ落」書、呂刑「農一嘉穀」〇おふ（生）〇たつ（立）周語「以一義方」〇つちかふ（培）そだつ、長ずる。〇しける（蕃）「蕃一」「滋一」左、昭元「其生不一」〇ふゆ、ふやす（息）生物が男女牝牡雌雄の作用によりて子孫を生ずる「生一」又、元金が利息を生じて增大する「貨一」「富一」〇財利を興生す

る。列、楊朱「子貢一ー于衛」○ーーは平かにして正し。

【殖貨】ショククワ　たからをふやす。孔叢子「平原君曰、夏館ーー、故欲レ任レ之」＝貨殖・殖財。

【殖穀】ショクコク　こく物をうえつける。韓詩外傳「夫關上レー者后稷也、決レ江疏レ河者禹也」

【殖財】ショクザイ　かねをためる、財産をふやす。＝貨殖・殖産・殖貨。

【殖産】ショクサン　○財産をふやす。唐書、李憕傳「通二左氏春秋一、頗レー」＝殖財。○産物をふやす。

【殖殖】ショクショク　平かにして正しき貌。詩、小雅「ーー其庭、有二滲其楹一」＝平正。

【殖民】ショクミン　荒無の地方に人民を移住せしむる。又、其の民「ーー地」＝植民。

【殖利】ショクリ　かねまうけ。書、仲虺之誥「不レ殖二貨利一」＝利殖・殖産。

【殕】ボク　覆　たふる、たふす（僵）＝踣。

九畫

【殛】キョク　職　○ころす（誅）罪を以て殺す。又、其の刑罰「誅ー」「流ー」書、舜典「ー鯀于羽山」○せめる、譴責する。

【殜】エフ　テフ　葉　殪ーはすこしく病む（微恙）

十畫

【殞】ヰン　ウン　軫　隕に通ず　○おつ、おとす（落下）潘岳、秋興賦「橘葉夕ー」○をはる、しぬ（歿・死）

【殞越】ヰンヱツ　死にたふれる、蹶は顚に同じ。賴賦「毛羣ーー、羽族殲剝」

【殞涕】ヰンテイ　なみだをおとす。徐陵伯賦「望二天街一以ーー」＝落涙・流涕。

【殞命】ヰンメイ　いのちをおとす。王君齡詩「臣欲二千誠一、稽首期ニーーニ」＝殞命。

【殞石】ヰンセキ　天から降り落ちたる石、流星の燃えきらずに地上に落ちしもの。＝隕石。

【殞帶】ヰンタイ　菓のへたをおとす。牛弘、白帝歌「嚴風鼓レ葉、繁霜ーレー」

【殞懣】ヰンマン　たふれ死ぬ。北史、賀拔勝傳「不幸ーー、微志不レ申」魏志、高貴鄕公紀「願陛下ーー、殺レ身清レ君」＝殞蹶。

【殞命】ヰンメイ　いのちをおとす、死ぬ。

【殟】ヲツ　月　○もだゆ（心悶）○はらごもりがやぶれる（胎敗）○ー歿ボツはゆるやか（舒緩）なる貌。傳毅、舞賦「縱弛ー歿」

【殞】シウ　キウ　有　臭に通ず　○くされてあしきにほひ（腐氣）○くさし。

【殞惡】シウアク　くさし。漢書、楊惲傳「單于得二漢美食好物一、以爲ニーーニ」＝臭惡。

十一畫

【殥】イン　眞　とほし（遠）淮南、地形「九州之外、乃有二八ー八ー之外一、而有二八紘一」

【殣】キン　震　○うゑじに（餓死）又、其の者「行ー」「歿ー」左、昭二「道ー相望」○うづむ（埋）屍を埋める。詩、小雅「尙或ー之」○まみゆ、覲に通ず。

【殤】シャウ　陽　わかじに（夭死・短折）年十六以上十九に至る間に死するを長ー、十二より十五に至るを中ー、八より十一に至るを下ー、八歲未滿にて死するを無服之ーといふ（儀禮、喪服傳）

【殫】タイ　寒　つかれくるしむ（極困）

十二畫

【殪】エイ　霽　○しぬ、たふれしぬ「陷ー」○たふす、ころす、一矢にて直ちに射殺す「射ー」詩、小雅「ー此大兕」○つく、つくす（盡）左、宣六「將可ー也」○うづむ。○たゆ、たつ（絕）

【殪仆】エイフ　たふれ死す。

【殫】タン　寒　通じて、單に作る　○つく、つくす（盡）○取り盡す。柳宗元、捕蛇者說「ー其地之出」○ことごとく。

【殫悉】タンシツ　殫・盡・竭・索・罄・旣・殲・悉の別は盡（皿部九畫）の條を見よ。

【殫極】タンキヨク　盡きはてる。枚乘、諫二吳王一上書「ーー之縫斷レ幹」指れ切れ

る経糸ふ釣瓶縄が終にねげたの水をもたちきるに至る。殍一本草に作る。

【殍道】ヒョウ つくす。盡也。後奏裁記儲用ー一、山林有ー役」＝餓死・殍莩。

【殍殪】ヒョウ つくしそこなふ。莊子「ー二ー天下之準法而民始可與論議」＝珍滅。

【殍神】ヒョウ こころをつくす、精神をつからし盡す。唐書、温彦博傳「彦博以ー竭國敝「耗ー慝ー」」

【殍盡】ヒョウ 殍道に同じ。淮南、覽冥「ー一大事」

【殍斂】ヒョウ 我が身の財をつくす。唐書、崔弘禮傳「ー一ー爲治ー裏、雖ー乃去」

【殍亡】ヒョウ 盡き失せる。韓愈、送二石處士序「日窮ー一＝道」「空ー」

十三畫

【殲】キャク 陽 陌 ○死にたる蟲、しろこ。○しかばね（屍）○死して朽ちず。

【殲滅】キャク 一寸の長じて、糸を吐かず、白く乾きて死するにいふ。

【殮】レン 琰 ○をさむ。○殯ーはかりもがり（入棺）經史に通じて斂を用ふ。

十四畫

【殯】ヒン 震 ○かりもがり、屍を棺に入れて將に葬柩に遷さんとする間、之を賓として遇する。論、鄭然「朋友死無所歸、曰於我ー」○轉じて埋没する、使用せずしてしまひ置く義とす。孔稚圭、北山移文「道帙長ー、法筵久埋」殯一に擯に作る。○虞ーは葬を送る歌。

【殯宮】ヒンキュウ 天子のかりもがりのとてん、かりもがりのみや。天子の御棺を葬場の時まで安置する御殿。＝殯殿。

【殯葬】ヒンソウ かりもがりのあな。任昉文「禹平洪途、ー一既辨」

【殯殿】ヒンデン 殯宮に同じ。

十五畫

【殰】トク 屋 流産、子が未だ生るるに及ばずして胎が敗れる。禮、樂記「胎生者不ー」

十七畫

【殲】セン 鹽 殲は俗字 ○つくす（盡）みなごろしにする。春秋、莊十七「齊人ー於遂」○ほろぼす（珍滅）同音異義 殲・盡・殫・竭・殛・殞・殖・殯・既・悉の別は盡（皿部九畫）の條を見よ。

【殲扶】セン つくしうつ、うちほろぼす。徐陵文、薦湘東ー表、痛蜀賊ー弓、凡厥兇徒、誰不ニー一」＝鏖撲。

【殲滅】セン つくしほろぼす。東方朔、七諫「清冷而ー兮、溷濁濁而日多」＝珍滅・珍殲。

殳部

【殳】シュ 虞 ○ほこ、周尺にて長さ一丈二尺ある無刃のつるほこ。戈・ー戟・矛・矢・矛を五兵といふ「戈ー」詩、衛風「伯也執ー、爲王前驅」○ほこのえ（戟柄）＝柄。○ー書は書法の名、八體の一。說文、序「秦書有八體（中略）七曰ー書、八曰隸書」○圖ガ字書のとなへ、ル又。

【殳矛】シュボウ つるぼこと、てぼこと。催德與詩「ー一方啓ー路、征鼓正交ー音」

五畫

【段】タン 翰 ○しきり。○わかち。○かたは し、きれはし（斷片）○布帛類を數ふるにいふ。匹の半。張衡詩「美人贈我錦繡ー」○こわけ（小分）○しな、たぐひ。○きだ、きざみ。○きは（際）屢の義。王羲之、十七帖「一一奇事」○きたへる。＝鍛。○ほどし、脚に通ず。圖○タ大人一人分の衣服とする布帛、鯨尺にて長二丈八尺、幅九寸。又反・端に作る。○三百歩の地積。＝反。○シだんだん「階ー」○棊道・圍碁などの優劣の等級「初ー」「五ー」○書簡の用語、件・次第などの意「此ー御屆」

【段階】ダンかい きだはし、等級。＝階級・品位。

【段丘】ダンきゅう 地文學にて河岸より起りてきざはしの如くだんだんに高くなれる平地。

【段段】ダンダン 圖○きざはし。＝階段。○次第次第に、漸次に。

【段通】ダンつう 圖 麻・木綿などを原料とし、羊牛の毛を交へて織りし敷物。毯子の唐音のあて字。

【段別】ダンベツ 圖○田畑を一段ごとに分ける。＝反別。○轉じて土地のひろさ、土地の面積。＝地積。

【段物】ダンもの 圖○一段一段になってるおりもの。轉じて廣く織物をい

ふ。‖反物・端物。○ダン幾段にも分けてある話りもの、浄瑠璃の類。【段落】ダンラク ○文章のきり「大―」「小―」○事件のきまり。‖結局。

六畫

【殷】 ㊀イン 文 ㊁アン 刪 ㊂イン 吻

㊀さかんなり（盛）○大いなり。○おほし（衆）○もろもろ。○ただし、ただす（正）書、堯典「以―仲春」○あたる（當）○まんなか（中）○―はうれふる貌。○―勤はねんごろ。‖慇懃。○朝代の名、湯王より二十八世六百四十四年にして周に滅ぼさる。‖商。㊁あかぐろき色。左、成二「左輪朱―」㊂―は雷のこゑ。又、音のさかんにとどろく貌。

同訓異義 殷・赤・紅・丹・絳・緋の別は赤（部首七畫）の條を見よ。

【殷憂】インイウ 深きうれへ。陸機、歎逝賦「在――而弗ル遵、夫何云乎哉」

【殷殷】インイン ○憂ふる貌。詩、邶風「憂心――」○音の盛んなる貌。史、蘇秦傳「鞠鞠――、若レ有二三軍之衆一」

【殷鑒不レ遠】インカンフトホカラズ 滅亡の先例は遠く古代に求めずとも近く前代に在りとの意。詩、大雅「―――、在二夏后之世一」夏の桀王は暴虐なりし故に、殷に滅ぼさる、殷も其れに鑒みて徳を修め、夏の二の舞をせざるやうに戒めざるべからず、即ち殷のかがみは近く前代の夏の世に在る。‖商鑒不レ遠。

【殷起】インキ さかんにおこる。馬融、廣成頌「金山石林、―ニー乎其中一」

【殷勤】インキン ねんごろ、しんせつ。又、丁寧。李白詩「餞レ雕陸二高鴈一惜」別室―ー」‖慇懃。

【殷阜】インフ さかんなるおもひ。陳琳詩「―ー從レ中發」

【殷遣】インケン 繙をてあつくしておくりつかはす。若唐書、狐孤皇后傳「備二百物一以―ー」

【殷盛】インセイ さかんなり、盛は盛。魏志、高堂隆傳「六國之時、天下―ー」‖殷昌・殷盛。

【殷賞】インシヤウ さかんにみつ、物の多く充つる義。後漢書、竇恂傳「河内帶レ河爲レ固、戸口―ー」

【殷軫】インシン 盛んににぎはし、衆多なる貌。淮南子「畜積給足、士卒―ー」揚雄、羽獵賦「殷殷軫軫、被レ陵緣レ阪」

【殷賑】インシン にぎはし。張衡、西京賦「郊甸之内、郷邑―ー」

【殷昌】インシヤウ さかんなり。晉楨、漢景帝贊「省レ役薄レ賦、百姓―ー」‖殷富・繁昌・殷盛。

【殷商】インシヤウ 湯王の創めし王朝の名、商の盤庚、殷の墟に遷りて國號を殷と改む。

【殷正】インセイ 殷の正月。轉じて殷時代に用ひし曆。史、曆書「夏正以二正月一、―ー以二十二月一、周正以二十一月一」

【殷盛】インセイ さかんなり。史、李斯傳「孝文用二商鞅之法一、移レ風易レ俗、民以―ー」‖殷昌。

【殷薦】インセン さかんにすすめる。易經「先王以作レ樂崇レ徳、―ニー之二上帝一以配二祖考一」

【殷汰】インタ さかんにあつまる。魏志、朝典始改、衆務―ー」‖繁湊。

【殷足】インソク 財がゆたかにして十分に足る。後漢書、杜詩傳「廣二拓土田一、郡内比室―ー」

【殷大】インダイ さかんにして大いなり。後漢書、酷吏傳「宰守賜遠、戸口―ー」

【殷盤】インバン 殷の天子盤庚の作りたる誡、即ち書經の盤庚の一篇。韓愈、進學解「周誥―ー、佶屈聱牙」

【殷繁】インハン さかんに多し。南史、孔休源傳「神州都會、雜類―ー」

【殷阜】インフ 財がゆたか、阜は大。晉書、食貨志「草樹―ー、牛羊彌望」‖繁盛・繁茂。

【殷富】インフ さかんにして富む。詩經、序「百姓悦レ之、國家―ー焉」

【殷滿】インマン さかんにみつ。黄瓊文「羽毛齒革、明珠南金之貢、―ニー其室一」

【殷賞】インシヤウ さかんに鳴るかみなり。詩、召南「殷其雷、在二南山之陽一」

【殷紅】インコウ くろずんであかし。杜甫詩「―ー瑪瑙盤」

七畫

【殺】 ㊀サツ・セツ 黠 ㊁サツ 怪 ㊂サイ 卦

㊀ころす（殲）いのちを絶つ。○死する。○う（獲）獵して禽獣を獲る。○わすれる（忘）莊、大宗師「―生者不レ死」○ほろぼす（亡）○のぞく（除）○かる（薙）草）○からす（枯）しもがれ。左、桓五「始―而嘗」○火にてあぶる（炙）○する、なでる、ぬぐふ（刷）○ちる（散）○いけにへ（犧牲）○陰氣「一氣」○意味を強める爲めに添へる助辭「愁―」「笑―」㊁はらひほろぼす（掃滅）○ちる（墜）㊂けづる、そぐ（減削）論、鄉黨「非二精鑿必一之」○たちそぎぬふ（剪縫）○くだす（降）次第に等級を降す、差等をつける、等差。中庸「親親之―」○やぶる（毛羽敝）○おとろふ（衰）○とし、はやし（疾）○はなはだ、はなはだし（太）○くさる（腐）

【殺意】サツイ 人をころさんとするここ

ろ。

【殺氣】サツキ ○秋冬のものすごき氣。禮、月令「仲秋之月、――浸盛」‖陰氣。○戰爭などの殺伐の氣。杜甫詩「西南背二和好一、――日相續」

【殺菌劑】サツキンザイ 飲食物の黴菌ビキンを殺すに用ふる藥。

【殺獲】サツクワク ころすと、いけどると。塚固、西都賦「親三臨軍之―一」

【殺草】サツサウ 霜がくさをからす。春秋、僖三三「隕霜不レ―レ」

【殺矢】サツシ 近き距離の物を射るに用ふる矢。又、獵に用ふる矢。周禮、考工記「治氏爲二―一」

【殺死】サツシ ころす。‖殺害。

【殺人】サツジン ひとをころす。ひとごろし。

【殺身】サツシン 生命をすてる。論、衛靈公「子曰、志士仁人、無二求一生以害レ仁、有二―一レ―以成レ仁」

【殺傷】サツシヤウ ころすと、きずつけると。梁武帝文「―一有レ法」「―一過當」は敵の殺傷の方が味方の殺傷よりも割合に多き義。

【殺青】サツセイ 竹を火にあぶりて青みを去る、古、紙なかりし時、竹の札を用ひて字を書くに、書き易く且つ蟲クヒを防ぐ爲めに火にあぶりて青みを去る。後漢書、吳祐傳「欲下―二一簡一以寫中經書上」‖汗簡。

【殺到】サツタウ 勢つよくよせきたる。演義三國志「混戰遙遙、―二一神堂嶺下一」

【殺入】サツニフ 勢よくつきいる。演義三國志「二―一晉兵塞邊」

【殺伐】サツバツ ○ころす。嵇康文「威武―一、功利爭奮」○あらあらし。

【殺風景】サツフウケイ 風雅のおもむきを失ふ、俗惡なる義。李義山の雜纂の殺風景の條に「花間喝道・看レ花淚下・背二錦一席」などを擧げたり。

【殺戮】サツリク ころす、戰は罪し殺す。書、泰誓「作レ威―二一善三痛四海一」金史「狂竄肆レ―、―二一無辜一」

【殺掠】サツリヤク ころしかすむ。史、韓長孺傳「匈奴入二隃門一、所二―一數千人」‖殺略。

【殺略】サツリヤク 人をころし物をうばふ。晉書、武帝紀「―二一五千人一」‖殺掠。

【殺下】サツカ やせこけたる頭。淮南子「深目高眉、豐上而―一」

【殺禮】サツレイ れいぎを降し略す、殺は減削。周禮、秋官、象胥「凶荒レ―レ」

【殺生】サツシヤウ 佛十惡の一、生きものを殺す。大藏法數「―一者、謂二自殺亦敎二人殺一、隨中害一切衆生之物命上也」

【殺】 八 畫

㊀ カウ
㊁ カウ 俗 杣

㊀まじる、まじふ（錯雜）‖濁。○みだる（亂）○さかな。俎豆のもりもの。又、酒のさかな。すべて殺物以外の食物「嘉―」‖肴。○骨つきのまま煮たる肉。曲禮「左―右」敵㊁ならふ、象カタる。禮、禮運「禮必本於天、―於地」‖效。

【殺核】カウカク さかな、もりもの、殺は豆に盛りし實、核は籩に盛りし實。詩、小雅「――維旅」

【殺函】カウカン 殽山と函谷關と、共に秦の要害の地。賈誼、過秦論「秦孝公據二―一之固一」

【殺雜】カウザツ いりまじる。于郎文「風流更代、紛然―一」‖混淆駁雜。

【殺舛】カウセン みだれ誤る。唐書、薛又傳「值二長起一國隙一―一」‖錯舛・訛謬。

【殺亂】カウラン みだれまじる。‖混亂・錯亂・亂殽。

【殼】 カク コク 俗 殼に同じ

○から、貝又卵などのから「介―」「卵―」「蛹―」○すべて物の表を被ふ外皮「地―」「蟬―」

【殼族】カクゾク 介類。張說詩「鎭宗―一媚ニ海府一」‖殼物。

【殼物】カクブツ 貝類。梅堯臣詩「―一怪二瑣屑一」

【殼漏子】カクラウシ 人の肉身。傳燈錄「洞山瓦价和尙、將二圓寂一、曰、離二此――一、向二什麼處一、與レ衆相見」

【毀】 キ 九 畫 俗

○こぼつ、こはす（壞）詩、豳風「無ニ我室一」こぼたれる、こはれる「一損」○かく（缺）やぶる（敗）「破―」「顚―」○そしる（譭）「譽―」「誘―」「詆―」論、子張「仲尼不可―一也」そしられる。○さる、すつ（去）―齒シは小兒の齒のぬけかはる義。○くじく（折）○かなしみてやせる（瘠）「哀―」孝經、喪親「―不レ滅レ性」○祈りて殃を除く、はらふ。

同訓異義 毀・誹・非・誘・論・謗・詆・訾・譏・讒・短の別は誹（言部八畫）の條を見よ。

○ブツ毀・壞・敗・壞・傷・隳・敝・敝・弊・圮の則は破（石部五畫）の條を見よ。

【毀垣】キエン やぶれたるかき。

【毀惡】キアク そしりにくむ。北史、崔光傳「有下―二一之者上必善言以報」‖誹謗・詆毀。

【毀壞】キクワイ ○やぶれ壞。後漢書、光武紀「在二隋堕一―一之下一」○家をこぼつ。唐書、五行志「元和八年六月庚寅、京師大風雨、―レ―瓦」

【毀瑕】キカ きず。韓非子「貧二其百金一而―二一雨得二千鎰一者」

【毀棄】キキ そこなひすつ。屈原、卜居「黃鐘―一、瓦釜雷鳴」

【毀義】キヲヤブル 義をやぶる。說苑「衆人以レ毀レ形爲レ恥、君子以レ一レ一爲レ辱」

【毀玉】キヲク たまをこはす。左傳「殺レ馬一レ一以葬」

【毀絃】キゲン 琴のいとをたちきる。長笛賦「伯牙一レ一」

【毀碎】キサイ やぶれくだける。やぶりくだく。謝靈運賦「傷二龜玉之一一一」

【毀譽】キヨ そしりておとしいれる。漢書、劉向傳「復見二一一一一」二譖毀。

【毀棹】キタク 販木をこぼつ。棹は販木。

【毀謗】キバウ そしる。管子「一二賢者一之謂レ謗」二毀訾・誹毀。

【毀齒】キシ ○小兒の乳齒がぬけかはる。白虎通「男八歲一一女七歲一一」○轉じて其の年頃をいふ。

【毀舟】キシウ 舟をこはす。淮南子「心所レ說一レ爲レ伏、心所レ欲毀レ鐘爲レ鐻」伏は舟尾の小梢

【毀疾】キシツ 喪に居てかなしみの餘に病を致す。北史、陽固傳「丁二母憂一、號慕一一、杖而能起」

【毀謂】キヰ わるくいひつげる、ざんげんする。漢書、孔光傳「共一二一光」二譏毀・毀譏。

【毀傷】キシヤウ やぶりきずつく。孝經「身體髮膚、受之父母、不二敢一一、孝之始也」二毀壞傷損。

【毀沮】キソ やぶる、沮は壞。淮南子「止如二丘山一、毀如二風雨一、所レ凌必破、靡レ不二一一一」

【毀瘠】キセキ 喪に居りて甚だしくかなしみてやせおとろへる。師曠「居喪之禮、一一不レ形、視聽不レ衰」晉書、桑虞傳「一一過レ禮」

【毀折】キセツ やぶれくじける。周禮、春官「巾車一一」

【毀損】キソン ○やぶりそこなふ（南史、齊宗室傳）○きずつける「名譽一一」

【毀短】キタン 他人のおちどをそしる。唐書、王鉷后傳「武昭儀與二后舅良嬪一爭寵、更相一一」二譽短・誹短。

【毀詆】キテイ そしる。舊唐書、裴延齡傳「好二慢罵一、一二朝臣一班行爲レ之側レ目」二詆毀・誹毀。

【毀陷】キカン きず。後漢書、伏湛傳「自レ行二東條一、乞無二一一一、焦信好一、守一死善一道」二瑕陷。

【毀頓】キトン こぼちやぶる。韓愈文「祠宇一一、遷附之貿、丹青之飾」

【毀敗】キハイ ○そこなひやぶる。○やぶれたるをそしる。郭正文「凡人之談、常譽レ成一レ一、扶高抑下」

【毀廢】キハイ そしりしりぞける。史、孟嘗君傳「齊王一二一孟嘗君一」

【毀謗】キバウ そしる。後漢書、黃瓊傳「百行所レ守、亦無レ所レ缺、而一一布流」二毀詆・毀譽・謗毀。

【毀薄】キハク ○くづれてうすくなる。南史、孝義傳「自逸風一起、人倫一一」○そしる。唐書、孔述睿傳「嘗草レ檄一二一太宗」二譽薄。

【毀病】キビヤウ わづらひやせる。後漢書、樊儀傳「哀思過」禮、一一不二自支一」

【毀壞】キクワイ こはし破る。又、こはれ敗れる。二毀敗。

【毀慕】キボ からだのやせ衰ふるほど甚だしくしたふ。唐書、柳公綽傳「居レ喪一一、三年不二澡沐一」

【毀滅】キメツ こはしほろぼす。喪に居て甚だしく悲み、形をこぼち性を滅ぼす。禮記「毀不レ滅レ性」王儉文「喪過二乎哀一、謂將二一一一」

【毀面】キメン 顏をきづつく。晉書、列女傳「事二叔姑一甚謹、其家欲レ嫁レ之、此婦一レ一自毀」二傷面。

【毀譽】キヨ そしりと、ほまれと。又、そしると、ほめると。淮南子「一一之文「明主舉レ士、不レ待二近習一、聖君用レ人、不レ拘二一一一」二褒貶・刺美。

【毀譽褒貶】キヨホウヘン ほめると、そしると、毀・貶はそしり、譽・褒はほまれ。

【毀櫬】キシン やぶれくさる。册府元龜「舊廟既一一、不レ堪二修理一」

【殿】テン デン 【震】

○との、ごてん、貴人の家、金一玉樓又は社寺などの立派なる建物。○おさへ（軍後）の左、裏二六「實諸戎車之一」しんがり、退軍の時に後にふみ止まりて追擊をふせぐ軍勢。又、しんがりする。論、雍也「孟之反奔而一」○しづむ（鎭）さだめる（定）詩、小雅「一二天子之邦」○最下等の功績。最上の功を最といふの對。○擊つ聲。○一屎はうめく（呻吟）聲。○貴人の尊稱、古、諸侯を呼ぶ尊稱。○夫一一御一」又男子を呼ぶ稱「一方」○他人の姓名の下に添へて敬意を表する語。

【殿宇】デンウ ○神體佛像等を安置する家。おみや、おだう。杜荀鶴、題二廢山寺一詩「一一秋草壞、打松野火燒」二殿堂。○ごてん。二殿舍・宮殿。

【殿下】デンカ 貴人の敬稱、漢以後、皇太子諸王を稱するに用ふ「事物紀原」高允、諫二東宮一書「一一國之儲貳、四海屬レ之」

【殿省】デンセイ 役所。朱熹詩「好趁二春風一入二一一」

【殿階】デンカイ ごてんのきざはし。唐書、褚遂良傳「玆物一一、叩頭流血曰、願二陛下此物一、丐レ歸二田里一」

【殿角】デンカク ごてんのやねのかど。宋史、禮志「一一皆垂レ鈴」

【殿閣】デンカク 高大なるごてん。閣は二階建。三輔黃圖「未央宮有二一一一三十有二一」

【殿樓】デンロウ ごてんのてすり。漢書、朱

鬱傳「鬱勃ニー一、摧折」

【殿軍】デンしんがりの軍隊。晉書、王濬之傳「孟反范蠡、一一後入、而全レ身如レ此」＝殿後。

【殿後】デン ○しんがり。＝軍後。○ごてんのうしろ。殿前の對。宋書、符瑞志「甘露降ニー一桃李樹ニ」

【殿最】デンサイ官吏の下功を殿といひ、上功を最といふ。漢書、敘傳「猶無レ益ニ於一一ニ」

【殿試】デンシ 天子の親ら行ふ進士の試驗。通俗編「漢書蕭望傳、有司奏「實其文學士、錯在ニ選中一、上親策問レ之、拔、後世一一之制、蓋昉ニ于此一矣」

【殿舍】デンシャ ごてん。魏志、衞臻傳「帝方降意手一一、孫數切諫」＝殿宇。

【殿上虎】デンジョウコ 殿上にて天子を直諫することの喩だしき者を指す。宋史「劉安世字器之、遇ニ歷言政事一正色立レ朝、以下進ニ君子一退ニ小人一爲レ急、其面折廷諍、雷霆之怒至ニ赫然一（中略）故時人稱ニ安世一ニ

――ニ」

【殿上人】デンジョウビト 圖昔、清涼殿又は紫宸殿の階上にのぼることを許されし身分の人、五位以上の臣及六位の藏人ヲヒトの總稱。

【殿戰】デンセン しんがりしてたたかふ。

【殿堂】デンドウ ○ごてん。魏志、鍾繇傳「不下ニー一之上、而決ニ勝千里之外一」○おみや、おだち。＝殿宇。

【殿閣】デンカク 王宮中の小門。轉じて王宮の奥むき。陸機詩「形遊ニー一、景陟ニ帝居一」＝宮闕・禁闕・帝闕。

【殿中】デンチュウ ごてんのうち。後漢書、丁鴻傳「時人歌曰、一一無雙丁孝公」＝宮中・殿上。

【殿中省】デンチュウショウ 殿中にて最も優れたる者。梅溪筆「御史一一、指摘生ニ疵瑕一」

【殿陛】デンペイ 殿階に同じ。楊維楨賦「曾未レ念ニ其一一ニ」

【殿廡】デンブ 宮殿又は殿堂などのわたどの。宋史、禮志「設ニ黃麾仗于五百人于一一ニ」

【殿閘】デンコウ ごてんのてすり。閘は欄。唐書、舒元輿傳「帝親注ニ丹墀ニー一、面賦、授ニ泣下一」＝殿檻。

【殿欄】デンラン 前條に同じ。

【殿御】トノゴ 國女が男子を親み呼ぶ稱。

十 畫

【殽】カク カウ 覺 肴 又殽に作る

うつ、頭を擊つ。左、定ニ二「毎ニ之杖以ニー一之」

十一 畫

【殴】オウ 有 毆とは別

うつ、むちうつ、たたく、杖にて物を擊つ「一打」「一擊」

【殿】デン 霰 ○つよし、こはし（剛）「剛ー」たけし、おもひきりよし（果決）「果ー」○妄りに怒る。○ヤマヒダレの異名。

【毅然】ゼン つよくたけき貌。

【毅鳥】ボクチョウ 鶚ミサゴの異名。張華、禽經「鶚伸ニー一、謂ニ其性敢ニ於闘一也」

【毅魂】キコン つよくたけき精神「英魂ー一」

【毅武】ブ つよくたけし。牧乘、七發「ー一孔猛、祖楊身薄」＝勁武。

【毅勇】ユウ たけくいさましき〔五代史、朱友寧傳〕＝剛勇・剛毅沈勇。

十三 畫

【殻】カク コク 覺 屋

卵が孚化する。又、已に孚化せし卵。

十五 畫

【殽】 肴（四部十一畫）に同じ。

毋部

【毋】ブ・ム 虞 ○横に穿ちて之を持つ。○貫に通ず。○一丘は地名。

毋は、毎に似て同じからず。毋は、下畫右に出づ、毋は下畫止まりて出でず。貫・實・摜などは毋に从ふ。

【毋】㊀ブ・ム 虞 ㊁ボウ 尤 毋（前條）とは別

㊀なかれ（勿）禁止の辭。曲禮「一不ー敬」○なし（無）論、子罕「一意ー必」○將ー一乃と連用する時は發問の詞、己の意を以て之を斷じて未だ敢て其の必然を決せざるなり。㊁ー一追は夏の世の綿布冠の名。

【毋忘】ブボウ 毋・無・罔・亡・莫・勿・沒の別は無（火部八畫）の條を見よ。

【毋望之福】ブボウノフク 望まずして忽ち至る幸、もうけのさいはい。史、春申君

傳「朱英謂二春申君一曰、世有二一一、又有二毋望之福一、今君處二毋望之世一、事二毋望之主一、安可レ以無二毋望之人一乎」戰國策には毋望を無妄に作る。

【毋望之世】ボウバウのヨ　人世の事は豫期通りなきをいふ。前條參看。

【母】ボウ　有

○ははは、ははおや「父ー」「慈ー」「生ー」○轉じて物の出りて生ずる本の義とす、ー財は元金、子財は其の利子金。酵ー・酒ーは酒をかもす料のもと。○女子の尊長の稱「叔ー」○うば、めのと（乳母）○禽獸の牝「ー雞」

【母音】ボイン　次條に同じ。

【母韻】ボイン　文法にて單純なる發音。父韻と結合して子韻を生ずる音。日母音。

【母校】ボカウ　圖己の出身せし學校。

【母岩】ボガン　鑛脈を含有する岩石。

【母儀】ボギ　母たる人のてほん。後漢書、皇后紀「對レ紳而儉、有二ー一之德一」日母範。

【母兄】ボケイ　同じ腹から生れしあに。公羊傳「ー一稱レ兄」白居易詩「ー一未レ開レ口」日同母兄。

【母教】ボケウ　母が子女を教育するをいふ。易林「失レ持二ー一」

【母后】ボコウ　皇太后。三國志、綵因二漢法一、ー一之號皆如二舊制一」

【母國】ボコク　圖○分れ出たる或一國から其のもとの國を指していふ稱。○海外に居て其の生國を呼ぶ稱。日本國。

【母財】ボザイ　もときん。日母錢・本錢・元金。

【母子】ボシ　○ははと、こと。左、隱元「遂爲二ー一如レ初」○元金と利息と。日元利。

【母氏】ボシ　ははの尊稱、郷風「ー一聖善」

【母字】ボジ　反切（二九二頁三段）の第二字。

【母錢】ボセン　もときん（元金）利子を子錢又息錢といふの對。宋史、杜衍傳「所部縣ニー一、願出二官緡一助レ之」

【母堂】ボダウ　圖他人の母を呼ぶ尊稱。日北堂。

【母道】ボダウ　母たる道。漢書、王莽傳「后誼明ニー一、得二流和慈篤之化一也」

【母黨】ボタウ　ははかたの親類。

【母弟】ボテイ　同じ腹から生れしおとと。漢書、季布傳「ー一丁公」日同母弟。

【母範】ボハン　母儀に同じ、範はのり。宋史、后妃傳「內助之賢、ー一之正」

【母妹】ボマイ　同じ腹から生れしいもうと。晉治通鑑、唐紀「ー一者、李惟誠同母之妹也」日同母妹。

【母夜】ボヤ　圖○昔の武具の一、馬上にて背に負うて矢を防ぐもの。○馬車人力車などの雨よけのおほひ。日幌。

【毒】ドク　屋　沃

おこなひあし（人無行）みだらなる品行。一說に秦の嬴ー一が始皇の母と淫せしを以て誅せらる、故に淫者を罵りて嬴ー一と曰ふ。

【毎】㊀バイ・マイ　賄　㊁バイ・マイ　灰　隊

㊀つね、つねに（常）諸葛亮、出師表「ー一與二臣論一此事」○ごと、ごとに、其のつど。莊、知北遊「ー一下愈況」○おのおの（各）○およそ（凡）○いへども（雖）詩、小雅「ー一有二良朋一」○むさぼる（貪）冒の轉音。㊁かず（數）○ー一は田美くし。又草が盛んに生ずる貌。

【毎回】マイクワイ　毎次に同じ。

【毎度】マイド　おもふたびに。詩經「ー一嘆」及

【毎月】マイゲツ　つきごとに、月月。毎日・毎夜・毎年・毎歳等も同例「北史、荒紹傳」

【毎次】マイジ　其のたび毎に、其のつど。日毎度・毎回。

【毎生】マイセイ　生命をむさぼりていきながらへんことを願ふ。漢書、賈誼傳「衆庶ー一」

【毎天】マイテン　圖毎日。

【毎日】マイニチ　毎次に同じ。王建詩、ー一報朝恩二入閣一」

【毎毎】マイマイ　○つねづねに、いつもいつも。莊、胠篋「天下ー一大亂」○草の盛んに生ずる貌。左、僖二八「原田ー一」一說に田の美くしき貌。

【毒】㊀トク・ドク　沃　㊁トク　屋

㊀あし（惡）○そこなふ（害）「ー害」○物の人を害する者「ー藥」「ー蛇」「ー霧」「梅ー」「病ー」○ーを物に置く。○ーを人に飲ます。どくを物に入れる。左、襄十四「秦人ー一涇上流」○いたむ（痛）○くるしむ（苦）○うらむ（恨）「憤ー」「怨ー」○をさむ（治）○亭ーはそだてる（化育）老子「亭之ー一之」○つかふ（役）易、師卦「以レ此ー一天下一而民從レ之」○あしきこと。あしきもの。㊁天ー一又、身ー

は天竺(テンヂク)即ち今の印度の古名〔漢書、張騫傳〕
【毒惡】ドクアク　はなはだわるし。＝兇惡。
【毒液】ドクエキ　どくを含めるしる。＝毒汁。
【毒牙】ドクガ　かみつきて毒液を注ぎこむきば、毒獸の牙。
【毒害】ドクガイ　○いためそこなふ。梁武帝勅＝曰倘二惡悲、心懷ニ一一一〇毒藥にて人を殺す。後漢書、馬援傳「欲レ行ニ一一」＝毒殺。
【毒蟲】ドクチュウ　どくあるまむし。虺蜴、地理志「舒州桐城地、多二猛虎一一一」＝毒蛇・毒蟲。
【毒氣】ドクキ　人を害するあしき氣。漢書、王莽傳「無レ復一一一」＝毒痒。
【毒虎】ドクコ　そこなひしへたぐ。龍城錄「以ニ一一一弄二正幢一」
【毒惡】ドクアク　なやみくるしむ。晉書、石季龍載記「道路無レ度、尤苦レ彈ニ弦彈レ人、軍中以爲ニ一一一」
【毒百】ドクヒャク　人を誹り傷つくることば。
【毒熱】ドクネツ　人を病害する氣など。周禮、庶氏「掌レ除ニ一一一」
【毒草】ドクソウ　毒を含めるくさ。＝惡草の對。
【毒箭】ドクセン　毒をつけたるほこ。西陽雜俎「南蠻有ニ一一、無レ刃狀如二杓鐵一、中レ人無レ血而死」
【毒殺】ドクサツ　毒藥を飲ましめて殺す。元史、世祖紀「一ニ一雲南王一」＝毒害。
【毒矢】ドクシ　どくを鏃(やじり)にぬりたるや。韓愈文「張弓一一」＝毒箭。
【毒刺】ドクシ　蜂などの尾端に在りて物を害する針の如きとげ。又、すべて害をなすもの。梁簡文帝文「一一爭興、惡蛆競起」
【毒獸】ドクジュウ　わろきけもの。道德指歸論「蠶蟲不レ作、一一不レ生」
【毒刃】ドクジン　凶行者のやいば。
【毒蛇】ドクジャ　どくの有るへび、人をかみて危害を與へるへび、まむし。北史、陳侯傳「諸將不レ見ニ一一一乎」
【毒痍】ドクヨウ　害をなすあしき氣。杜甫詩「一一未レ足レ憂、兵戈猶二滿徹一」＝毒氣・瘴氣。
【毒手】ドクシュ　○人を害するわる者の手。＝兇手。○憎むべきわるだくみ。
【毒酒】ドクシュ　毒藥を入れたるさけ。列湯問「扁鵲遂飲ニ二人一一一」
【毒暑】ドクショ　甚だしきあつさ。白居易詩「驪陽逢ニ一一一」＝酷暑・毒熱。
【毒水】ドクスイ　のみて害あるみづ。陸倕詩「翻疑承ニ一一、忽似過ニ昌蒲一」
【毒噬】ドクゼイ　毒蟲にかまれる。左思蜀「見蟲一一」
【毒舌】ドクゼツ　人を害しそこなふ言を吐くくちまへ、ざんげん。
【毒箭】ドクセン　毒矢に同じ。
【毒蟲】ドクチュウ　どくむし。老子、十五章「一一不レ螫」
【毒熱】ドクネツ　はげしくあつし。杜甫詩「開州入レ夏知二涼冷一、不レ似雲安一一新」＝毒暑。
【毒藥】ドクヤク　人をそしりきずつける文章。
【毒蝮】ドクフク　女のわるもの。＝惡婦。
【毒蝮】ドクフク　どくのあるまむし。癸辛雜識「戒爲ニ一一所レ噬」＝毒蟲。
【毒蟒】ドクボウ　どくあるをろち、有毒の大蛇。劉克莊詩「一一噴時林盡黑」
【毒霧】ドクム　毒氣をふくむきり。騷賓王詩「川原饒ニ一一、谿谷多二淫雨一」
【毒藥】ドクヤク　○どくを含むくすり。韓非、內儲說「用ニ一一賊レ君殺レ之」○藥種の一、中毒作用の極めてきびしきもの。普通藥及劇藥の對。

九畫

【毓】イク　屋　育の古字
○そだつ、やしなふ、はぐくむ「養一」說文「養レ子使レ作レ善也」○をさなし(稚)○郁一イクは盛んに多き貌。

比　部

【比】㊀ヒ　㊁ヒ　㊂ヒ　組　支　眞
㊀くらぶ(方・校)彼と此とをくらべあはせる「一較」○ならぶ(竝)○たぐひ(類)ともがら。○なれる(狎)荀、不苟「交親而不一」○したがふ。○しきり(頻)史、呂后紀「一殺二趙三王」○詩の六義の一、他の事物にたとへ比べて述べる。○ためし、のり、かた(典例・先例・故事)○つづる、あつむ(綴緝)書史を綴緝する。漢書、儒林傳「公孫弘一緝其義」○をさむ(治)そなふ(具)＝庀。○一丘(ビ)は僧をいふ。㊁したしむ(親)ちかづく(近)○ちかし(近隣)○周代、五家を一組とする稱。周禮、地官「五家爲一、使二之相保一」○やはらぐ(和)○したがふ(從)○およぶ(及)漢書、高帝紀「自度一至皆亡レ之」○いたる(至)○ひとし(齊)○あふ、かなふ(合)禮、射義「其容體一于レ禮」○くみす、おもねりつく(阿黨)○かんがへる(考)くらべる(校)○さきだつ。○しけし。○やはず(矢括)○かはる(代)○つぐ(次)○ころ、ころほひ。○齒のしげき櫛。○たすける(輔)○しきりに、しばしば。○易の卦の名、坤下坎上。○每に同じ一年」㊂ならぶ(竝)となり(鄰)○皐一ひは虎の皮。

【比丘】ビク　比・竝・併・井・聯・雙・排

の部は並（立部五畫）の條を見よ。

【比屋】ヒヲク かどなみ、比は列ぬ。漢書、王莽傳「堯舜之世、一一可レ封」比屋可レ封とは人の皆善なる義。

【比行】ならび行く。史、蘇秦傳「騎不レ得二一一一」＝並行。

【比校】くらべなぞらへる、比例する。

【比較】ヒカク 前條に同じ、俗に較をカクの音に讀むは非。

【比干】ヒカン 殷の紂王の諸父、紂を諫めて殺さる。

【比擬】ヒギ くらべなぞらへる、比例する。

【比境】ヒキヤウ 領地がならびつづく、土地の境を接する。史、諸侯王表「諸侯一一」注「地相接次也」

【比居】ヒキヨ 組合を結びてすむ、五人組。周禮、注「一一謂二伍籍一也」

【比丘】ビク 圓僧。釋氏要覽、梵語云二一一一、此言二乞士一謂上於二諸佛一乞レ法、資二益慧命一、下於二施主一乞レ食、資二益色身一」女僧を一一尼といふ。

【比丘尼】ビクニ 圓尼僧の稱。釋氏要覽「尼梵音具云二一一一、亦名二除饉女一」唐書、藝文志に「釋寶唱撰、一一傳四卷」あり。前條參看。

【比郡】ヒグン 近郡に同じ。漢書、敞延年傳「及二一一爲二守一」注「比、接近也」

【比肩】ヒケン ○かたをならべる。白居易詩「步步一一行」○轉じて同等の地位を保つ義。

【比肩隨踵】ヒケンズイシヨウ 肩をならべ、跡につづきて至る、つぎつぎに多く出る。韓非、疎勢「堯舜桀紂千世而一出、是比レ肩隨レ踵而生也」＝比肩繼踵。

【比歲】ヒサイ まいねん。禮、王制「諸侯之考校、至レ今又四十載」＝比年・每歲。

【比載】ヒサイ しきりにころす。史、呂后紀「一一三趙王一」

【比次】ヒジ 次第をたてる、順序をついでる。周禮、注「猶二一一一也」

【比舟】ヒシウ ふねをならべる。柳宗元文「一一爲レ梁」

【比周】ヒシウ ○周は正しき道を以てかたよりず親む。論、爲政「君子周而不レ比、小人比而不レ周」○轉じて厚く公私の別なくしたしみあふ義とす。左傳「頑嚚不友、是與一一」

【比輯】ヒシフ つづりあつめる。宇館參看。

【比順】ヒジユン やはらぎしたがふ。管子「一一以徵」

【比陳】ヒチン かかとをならぶ、續きて出る義。皇甫謐文「史臣接」踵、文人一レ一」＝接踵。

【比數】ヒスウ くらべかぞへる。

【比疎】ヒソ 比余に同じ（漢書、匈奴傳）

【比黨】ヒタウ かたよりくみす。中論「諫二個時之說一、若二比周之黨一、更相歎揚、迭爲二表裏一」

【比竹】ヒチク ふえ、篳篥の類。莊、齊物「地籟則衆竅是已、人籟則一一是已」

【比重】ヒヂウ 物理學にて或容積の物體の重さと、同容積の攝氏四度の蒸溜水の重さとの比。

【比年】ヒネン まいねん。禮、王制「諸侯之於二天子一也、一一一小聘」＝頻年・比歲・每年。

【比方】ヒハウ くらべる、方も比。

【比比】ヒヒ しばしば。しきりに。漢書、成帝紀「郡國一一地動」＝頻頻。

【比附】ヒフ つきしたがふ（元史、劉秉忠傳）ちかづきしたしむ。

【比部】ヒブ 詔令律令の校正其の他會計の事をつかさどる役人。

【比物】ヒモノ 色色の物をくらべて考へる。禮、學記「古之學者、一レ一醜レ類」

【比竝】ヒヘイ 順序よくならぶ。顧況詩「山中多少樹、可レ憐無二一一一」

【比倖】ヒヘン くらべる、たぐひ。倖は齊ヒト韓愈詩「雷遠助二光怪一氣衆難二一一一」

【比謀】ヒボウ はかりごとをあはす。國語「孩童一一」

【比目魚】ヒモクギョ 鰈ヒラなどの類。爾雅「東方有二一一一一焉、不レ比不レ行、其名謂二之鰈一」

【比喻】ヒユ くらべたとへる。又、たとへ。＝譬喻。

【比余】ヒヨ 匈奴單于ゼンの用ふる機。史、匈奴傳「一一一、黃金飾具帶一」漢書には比踈に作る。

【比翼】ヒヨク ○比翼連理を見よ。○圓衣服の仕立方の名。

【比翼鳥】ヒヨクチョウ 二つあはせるうちは。楊方詩「景摶一一」

【比翼連理】ヒヨクレンリ 比翼は一鳥一翼の鳥にて二鳥相並びて始めて飛ぶ。連理は兩木の枝が木理を連ねる義。夫婦の睦じきに喩ふ。白居易、長恨歌「在レ天願作二比翼鳥一、在レ地願爲二連理枝一」

【比來】ヒライ このごろ、ちかごろ。＝近來。

【比倫】ヒリン たぐひ、同じなかま。宋仁宗贊章、勸學文「無二物堪二一一一」＝比類。

【比鄰】ヒリン となり、のきならび。王勃詩「海內存二知己一、天涯若二一一一」＝四鄰・近鄰・鄰里。

【比閭】ヒリヨ 比は五家、閭は二十五家の組合、村里の義。周禮、地官「令二五家爲レ比、使二之相保一、五比爲レ閭、使二之相授一」

【比類】ヒルイ たぐひ。本行經「無二一一者一」＝比倫・匹儔。

【比例】ヒレイ ○ためし、他の例。○なぞらへる、先例による。○二數の割合が他の二數の割合と同じき關係。又、其の計算法。

【毗】ヒ 五畫 田部 支

○あつし(厚)○たすく(輔)助力する。詩、小雅「天子是ー」○あはす(幷)○扉ーは胡人の革帶の鉤

【毗侈】たよる。晉書、王祥傳「武帝詔曰、太保元老高行、股所ーー以隆二政道一者也」

【毗益】たすけて益する。後漢書、劉聖公傳「望下其ーー萬分一、報上化致之理」日輔益・毗補。

【毗賛】たすける、賛は助。晉書、荀勗傳「ーー朝政」日翊賛・翼賛。

【毗補】たすけおぎなふ。後漢書、馬后傳「言及二政事一、多レ所ーー一」日毗益。

【毗翼】助ける、翼は助。晉書、文帝紀「ーー前人、仍臨二大政一」日輔佐。

【毘】

毗(前條)に同じ。

【毘沙門】○佛多聞天と譯す、四天王の一、北方を護り、財寶を掌る。法華經科註「此云二多聞一、居二須彌北面一、即護世四天王之一也」日多聞天。○圖七福神の一。

【毘首羯磨】佛天竺の工匠、善く佛像を刻む、今、佛として祭る。正理論「音云、毘濕縛羯磨、此云二種種工業一、西土工巧者、多祭二此天一」

【毖】

ヒ　㊥

○つつしむ(愼)「懲ー」詩、周頌「予其懲而ー後患」○つかる、いたはる(勞)○泉の流れる貌。詩、邶風「ー彼泉水」

十三畫

【毚】

サン　㊥

ずるきうさぎ(狡兎)詩、小雅「躍躍ー兎」

毛　部

【毛】

バウ　㊥　通 晉 モ・マウ

○け、動物の表皮にむらがり生じて體温を保護する細きすぢ「一髪」「牛ー」「鵝ー」○人の髭や髪。禮、檀弓「不レ被二ーー一」黒白二ーのまじれる老人。○頭髪の色の白黒によりて長幼の席次を定める。又、其のこと。中庸「燕ー所以序二齒也一」燕は宴會。○けがは。○けもの、すべての獣類「ー物」○すべての草木。左、隱三年「澗谿沼沚之ー」又、特に桑麻五穀の類「土ー」又、草木が生ずる。諸葛亮、出師表「深入不ー」不ーは草木の生ぜざるあれ地。○毛を去る。○毛色のまじりけなき牲ニイヘ○竹の一種。○物事の煩瑣クダクシ「ー事細故」○圖稻麥などのみのり「二ー作」

【毛衣】けどろも。唐彦謙詩「華屋撚レ絃彈レ鼓舞、綺窗含レ筆證ニーー一」

【毛羽】○獣の毛と鳥のはねと。左傳「良弓折レ牙、骨角ーー」○轉じて、鳥獣の義。日羽毛。

【毛紈】筆の異名。穎は尖、唐の韓愈、史記列傳に擬して毛穎傳を作る、唐宋八家文讀本に出づ。

【毛楊】けどろも。孫綽賦「投ニーー之森秀一、振二金策之鈴鈴一」

【毛起】おそれて身の毛がよだつ。韓非子「人見レ蝟則ーー」

【毛毬】刺のある穀ういが。

【毛義奉レ檄】毛義は貧にして母老いたるを以て、府の召狀の來るを見て深く喜びたる故事、檄は召書ア後漢書、趙孝子江劉周趙傳序「應江毛義、少節家貧、以二孝行一稱、南陽張奉慕二其名一、往候レ之、坐定而府檄適至、以義守令、義奉レ檄而入、喜動二顔色一、奉心賤レ之、固辭而去、及二義母死一、去レ官行レ服、後舉二資貲一、公車徵、遂不レ至、張奉歎曰、賢者固不レ可レ測、往日之喜、迺爲レ親屈也」

【毛擧】毛ほどの小罪までも擧げる。漢書、刑法志「徒鉤二攇微一ーニ數事一」

【毛狗】獣の異名「本草綱目」

【毛裘】けものの毛。蜀都賦「ー蹠離、羽族紛紜」

【毛孔】けあな。維摩經「佛以二四大海水一入二ーー一」

【毛莫】毒草の一、きんぽうげ。

【毛細管】○物理學にて極めてほそきくだ「ー引力」○生理學にて血管の端の網狀に分岐せし極めて細き管。

【毛刺】○蝨の異稱「爾雅」○草木の莖に生ずるとげなど。詩經、邶「葉厚而長、有二ーー一」

【毛詩】魯の毛亨と趙の毛萇との傳へたる支那古代の詩、今の詩經の別名。後漢書、儒林傳「魯曼卿著二ーー一」

【毛嬙】○むかしの美人の名。管子「ー西施、天下之美人也」○轉じて美人の稱。莊、齊物論「ーー麗姬、人之所レ美也」

【毛錐】極めてわづかの分量。晉書、郗鑒傳「所レ得未二ーー一、所レ費如二山岳一」

【毛髭】細くやはらかなる毛、にこげ。孫覿詩「凍雨落二ーー一」日毛毳。

【毛錐】筆の異名、次條を見よ。

【毛錐子】筆の異名、錐はきり、形似を以て名づく。五代史、史弘肇傳「弘肇有二大志一、嘗謂レ人曰、安二朝

近ニ定ニ納亂一、直須ニ長槍大劍一、著ニ――一、安是ノ用哉」

【毛織】モウシキ　細く柔かなるけ、にこげ。魏志、注「食ノ肉飲ノ酪、以ニ――一爲ノ衣」

【毛毬】モウキウ　鳥獸の毛落ち、更に新毛を生じて潤澤鮮好なる義。○にこげ。書、堯典「鳥獸ノ――」

【毛氈】モウセン　獸毛と綿絮とをまじへ壓しかためて作りし織物。＝毯。

【毛族】モウゾク　けもののたぐひ。馬融、廣成頌「散ニ――一於ニ羽羣一」＝獸類・毛類・毛物。

【毛毯】モウタン　けむしろ、まっせん（郁瑯代醉編）＝毛褥・毯子。

【毛鄭詩】モウテイシ　詩經をいふ、毛は毛公、鄭は鄭玄共に詩經に注せし人。韓愈、施先生墓銘「明ニ――一」＝毛詩參看。

【毛蓋】モウガイ　けむし。蝟猬、釋蟲「蝟ノ――」

【毛頭】モウトウ　圓毛のさきほど、すこしも、いささか。＝毫末。

【毛髮】モウハツ　かみのけ、かみ。

【毛筆】モウヒツ　獸毛にて穂を作りし普通の筆。鉛筆・石筆等の對。

【毛布】モウフ　けっと、まっせん、

【毛物】モウブツ　けもの。周禮、地官、大司徒「一曰ニ山林ニ其動物宜ニ――一」＝獸類。

【毛類】モウルイ　けもの。曹植文「野無ニ――一、林無ニ羽羣一」＝毛族。

【毛剛】モウガウ　○とりのはね、翎は羽。凡照鄭詩「――頓悴飛無ノ力」＝羽毛。○獸と鳥と。＝翎毛。

【吹ノ毛求ノ疵】スイモキウシ　毛の中の疵をさがし求むるが如く、小過をきびしく摘出して吟味する。韓非、大體「不ニ吹ノ毛而求ニ小疵一、不ニ洗ノ垢而察ノ瑕知」

【以ノ毛相ノ馬】モウソウバ　毛色によりて、馬の良否を相するの譯れる如く、言貌を以て人を擧ぐるの誤なるをいふ。鹽鐵論「以ノ言擧ノ人、若ニ以ノ毛相ノ馬」

【謹ノ毛失ノ貌】キンモシツバウ　毛の小なるものを謹みて、貌の大なるものを失ふ。意を小事に留むる時は、卻りて大體を失ふに喩ふ。淮南子「道者――」

【毛猶有ノ倫】モユウリン　毛は細物なるも猶其の形體の比すべきものあるをいふ（中庸、十三章）

四畫

【毧】〔國字〕
むしる、毛などをつかみて引き抜く。

六畫

【毨】セン　豔
毛羽があらたまり生じて、整ひ理まる。書、堯典「鳥獸毛ノ――」

【毦】ジ　寘
○けかざり（羽毛飾）○一種の香草の名。

【毳】ボク　バク　屋　覺
○よし、うるはし（好）○――は思ふ貌。又憂ふる貌。又、謹愿なる貌。又、風の貌。

【毳毳】バクバク　○思ふ貌。又謹愿なる貌。漢書、鮑宣傳「願賜ニ數刻之閒一、極ニ竭ニ――之思一」○風の貌。柳宗元、龍城錄「去舟同如ノ飛、但覺ニ風――而過一」

七畫

【毫】カウ　ガウ　豪　古、豪に通ず
○け、ほそけ（細毛）長く鋭き毛。○すこし、いささか、獸毛は秋に至りて極めて細くなる、故に物の微細をいひて秋――といふ「一末」「纖一」「絲一」○ふで（筆）「揮一」「含一」「禿一」「彩一」○極めて少しの分量の名、一釐の十分の一。

【毫光】ガウクワウ　光線が四射して毛の如きをいふ。職小編「水樂頌佛經ニ至ニ大報恩寺一、當日夜本寺塔、現ニ舍利光如ニ寶珠一、次現ニ五色――一」

【毫釐】ガウリ　極めて細小の義、釐は絲のけば。張仲甫賦「法設刑於牧宰、察ニ醜惡於――一」＝纖毫・毫髮。

【毫楮】ガウチョ　筆と紙と。陳機叟「唯――之所ノ擬」

【毫端】ガウタン　ふでさき。韓愈詩「下視ニ九州、一塵集ニ――一」＝筆端。

【毫楮】ガウチョ　ふでと、かみと。蘇軾詩「若ニ人富ニ天工一、春色久ニ――一」＝紙筆。

【毫芒】ガウバウ　毛と、のぎと、極めて微小の義。陸機、文賦「定ニ去留於――一」＝毫髮・毫釐・毫毛。

【毫髮】ガウハツ　すこし、わづか。韓愈詩「――盡備無ニ遺訛一」

【毫二髮盤一】ガウハツクワンヲ　筆鋒を弄びて書戲をかく。王僧孺詩「安能對ニ兒女一、垂ノ帷――」

【毫毛】ガウマウ　すこし、わづか。戰國策「周書曰、綿綿不ノ絕、蔓蔓若何、――不ノ拔、將ノ成ニ斧柯一」樹木は細小の時に拔かざれば斧を用ひて伐るに至る。漢書、鮑宣傳「有ノ益ニ――一」＝毫髮・微少・毫芒。

【毫末】ガウマツ　毛のさき、細小の義とす。老子「合抱之木、生於ニ――一、九層之臺、起ニ於累土一」晉書、律歷志「不ノ得ノ不ノ有ニ――之差一」＝毫盭。

【毫末之利】ガウマツノリ　わづかばかりの利益。歐陽修文「有司履ニ其法一、以爭ニ――一」

【毫釐之失差以千里】始に少しく差へば、終には大いに謬るに至る（晉書、慶預傳）史、太史公自序「失二之毫釐一、差以二千里一」

【毬】 キウ　尤

○まり（鞠）「打ー」○すべてまりの如く圓きもの、たま（球）「氣ー」「庭ー」○蹴ーはけまり。‖蹴鞠。

【毬工】けまりを製する職工。唐書「敬宗善二擊毬一、陶元皓等以二ー一、得レ見二便殿一」

【毬子】○まり、子は助字。○すべてまりの如くまるきもの。范成大、菊賦「ー深黃、千葉尖細」

【毬燈】まるがたのとうろう。王世貞詩「中夜ー出二來央一」‖球燈。

八畫

【毳】 ㊀ セイ　霽　㊁ セツ　屑　通音 ゼイ

㊀やはらかきけ、にこけ、むくけ、又それにて織りし毛布。王褒、聖主得賢臣頌「夫荷旃被ー者」○やはらかにして美なる肉。史、乖政傳「旦夕得甘ー以養親」‖脆。○ー衣は僧服の名。○鳥の腹の毛、翼ー。○細くやはらかにして斷ち易し。○ー毳は子・男爵の著用するかんむり。㊁そり。漢書、溝洫志「泥行乘ー」‖橇。

【毳冕】翬毛にて織りたる織物。唐書、突厥傳「牧馬之童、乘羊之誅、齎二ー一、邀レ利者、相二繼於路一」‖翬冕・褕褘。

【毳帳】けおりのまく。唐書「其俗有二城郭廬舍一、不レ肯處、聚二ー一以居」‖氈帳。

【毳衲】毛織りの僧衣。陸游詩「ー一年補、紗燈夜夜明」

【毳幕】毛氈をたれたるまく、匈奴の幕。李陵、答蘇武書「氊裘ー一」‖氈幄。

【毳冕】周代の冠の一種。周禮、春官、司服「四望山川、則ー一」

【毳毛】鳥の腹のやはらかき毛、にこげ。周禮、天官「共二其ー一一爲レ氈」

【毯】 タン　感　通じて氈に作る

けむしろ、まっせん（毛席）

【毯子】まっせん、子は助字。

九畫

【毾】 カツ　黠

○けおりもの（毛布）褐に通ず。○ー雞は雞の一種、雄に似て大いに、青色にして毛角あり、鬪を好み、敵死すれば則ち止む（山海經、注）‖鷤鴂。

【毹】 シュ　虞　或は氈に作る

ーはけおりもの、まっせん、かも。

十一畫

【毵】 サン　覃

○毛の長き貌。○物の細長き貌。

【毵毵】○毛の長き貌。詩、陳風、硃「白紵青脚高尺七八寸、頭上有二毛十數枚一、長尺餘、一一然與二衆毛一異」○柳の枝などの細長く垂れる貌。孟浩然詩「綠岸一一楊柳垂」‖毿毿・毵毵に作る

【毷】 ㊀ リ　支　㊁ ベウ　豪　ライ　灰　作る

㊀からうし（旄牛）又からうしの尾。○まじり毛（雜毛）○長き毛。後漢書、岑彭傳「足下生レ」こはけ（剛毛）強くして曲れる毛。漢書、王莽傳「以ー一裝レ衣」○馬の尾。○けおりもの。○毫釐の差に通ず。漢書、律歷志「不レ失二毫ー一」㊁からうし（旄牛）

【氈】 セン　先　俗字は氊に作る

けむしろ（毛席）毛を踩みて片と成す、まっせん。‖旃。

【氈案】もうせんを敷きたる机。

【氈裘】匈奴人の服する毛織のかはごろも。故に其の君長を一一之君といふ。司馬遷、報二任安一書「ー一之君長、成二羣怖一」

【氈帳】まっせんをはりたるとばり。青書、芮芳傳「土氣早寒、所レ居爲二穹廬一ー一」‖氈帳・氈幕。

【氈毳】翬毛にて織りたる織物。又、其の衣服、卽ち奏狄の服。隋煬帝文「奏レ依ー一、遵爲二冠帶之國一」

【氈幄】毛織の帷子。南史、末賀傳

十二畫

【氅】 シャウ　養

○鳥のはね、羽毛。○けごろも。世說「王恭著二鶴ー一」

【氆】 ジウ　ゼン・ネン　㊁ 虞　㊁ 銑

○毛、盛んなり、けぶかし。○毛があたたかに、やはらか。○むくけ、わたけ、にこけ（細毛）書、堯典「鳥獸ー毛」

十三畫

【氌】 セン　先　俗字は氊に作る

けむしろ（毛席）毛を踩みて片と成す、まっせん。‖旃。

「土人剪レ髮、著二一一一

【民設】ミンセツ　人民の力にて設置する。‖私設。
【民選】ミンセン　人民が適任者をえらびだす。官選の對。「―議員」
【民俗】ミンゾク　人民のならはし。禮記「君ノ民者、章ノ好以示ニ―一」‖民風。
【民則】ミンソク　衆民の從ひ守るべき法。書經「弘敷ニ五典一式和ニ―一」
【民族】ミンゾク　人類の種族。
【民賊】ミンゾク　たみの害をなすわるもの。孟、告子「今之所謂良臣、古之所謂ニ―一也」
【民團】ミンダン　○地方人民が團結訓練して盜賊を防ぐ組合。○國外國の一定の區域に住する本國人民を以て組織する法人團。
【民度】ミンド　人民の智識又は貧富の程度。
【民德】ミンドク　たみの德義。論、學而「曾子曰、愼ノ終追ノ遠、―一歸ノ厚矣」
【民望】ミンボウ　○たみのねがひ、人民の希望。○後漢書、陳勝傳「適值ニ公子扶蘇項燕一從ニ―一也」○民の仰ぎ望む義。曹植、七啓「―一如ノ草、我澤如ノ春」‖人望。○人民のてほん。孟、離婁「定ニ亜則先去以爲ニ―一」‖民表。
【民瘼】ミンバク　たみのくるしみ。瘼は病。宋史、魏了翁傳「臣ニ吏姦、詢ニ―一」‖民隱。
【民法】ミンポウ　私權を規定したる法律。
【民部】ミンブ　官名、人事戸籍の事などを掌る。後周に始り、隋は度支を改めて―一と爲し、唐は―一を改めて戸部と爲す（通典）北魏書、程駿傳「祖父肇昌光―一尚書」
【民部省】ミンブショウ　國王朝時代の八省の一、土地・人民・租稅等のことを掌る。
【民風】ミンフウ　人民のならはし。禮、王制「命ニ太師一陳ノ詩以觀ニ―一」‖民俗。
【民兵】ミンペイ　人民の自ら編制する兵。玉海「凡軍有ニ四、四曰ニ―一」
【民瘼】ミンバク　たみの則るてほん、民の師表。漢書、文帝紀「廉吏、民之表也」
【民母】ミンボ　父の正妻。漢書「―一之子、皆奴ニ畜之一」注「―一嫡母也」
【民約說】ミンヤクセツ　國家は人民の契約によりて成るといふ說、佛蘭西のルッソーの首唱。
【民力】ミンリョク　たみのちから。孟、梁惠王「文王以ニ―一爲ノ臺爲ノ沼」
【民力休養】ミンリョクキュウヨウ　人民の勞をいたはり租稅をかろくして其の力をいこひ養はす。
【料ノ民】リョウノタミ　人民の口數を料る。周語「―ニ―于太原一」
【視ノ民如ノ傷】シノタミノゴトクニショウス　ふかく民をいたはみ愛するをいふ。孟、離婁「文王―一」左傳「國之興也、―一、是其謂也」
【勞ノ民】ロウノタミス　人民をいたはりつかふ。論、子張「君子信而後勞ニ其民一」
【民草】タミグサ　國人民、あをひとぐさ。‖民庶・蒼生・黔首。
【與ノ民同ノ樂】タミトトモニノガクス　王者は人民と樂を共同にする。孟、梁惠王「此無ノ他、――也、今王與ニ百姓一同ノ樂則王矣」
【民之司命】タミノシメイ　五穀をいふ、命のつかさの義。管子「五穀食米、――也」
【樂ニ民之樂一者民亦樂ニ其樂一】タノシムヒトノタノシムヲタノシムモノハヒトモマタソノタノシムヲタノシム　王者が國民と共に樂む。孟、梁惠王「――、愛ニ民之愛一者、民亦愛ニ其愛一」‖與ノ民同ノ樂。
【恤ニ民之瘼一】タミノヤメルヲアハレム　人民の疲れ痩せたるをあはれむ。國語「夫固閭口不ノ貪ニ嘉味一、耳不ノ樂ニ逸聲一、目不ノ淫ニ於色一、身不ノ懷ニ於安一、朝夕勤ノ恣、――、是故得ノ民以濟ニ其志一」

【氓】ボウ　四　庚　耕

○たみ（庶民）「野―」「耕―」詩、衛風「―之蚩蚩、抱ノ布貿ノ絲」‖氓。○他より歸化せし民、故に亡民に從ふ。
【氓俗】ボウゾク　○たみのならはし。‖民俗。○たみくさ、人民。韓愈詩「――爭相先」

气　部

【气】キ　未

○氣（气部六畫）に同じ。○雲の氣。

【氛】フン　四　眞　文

○氣、吉凶の先づ見ハるる氣「祥ノ―」「妖ノ―」○あしきき（惡氣）左、襄二七「楚ノ―其惡」凶をいひ吉を祥といふ。○わざはひ（凶事）○ノ―氣は氣の盛んなる貌。
【氛埃】フンアイ　けがれたるほこり。庾信文「君臣一體、可ニ以靜ニ―一」‖塵埃。
【氛塊】フンカイ　ちり。許有孚詩「晴空散ニ餘霞一、秋水淨ニ―一」
【氛氳】フンウン　氣の盛んなる貌。謝惠連、雪賦「散漫交錯、――瀰零」‖氤氳。
【氛曀】フンエイ　くもる。くもり。湛貴、日五色賦「敍ニ天字之ノ―一」
【氛霧】フンム　あしき氣。李祁詩「自從煙塵生ニ湖海隔ニ―一」
【氛妖】フンヨウ　わざはひ。徐陵文「江左ノ―」
【氛囂】フンゴウ　かまびすし。うるさくやかましき凡俗。荷載、幕府諸公寓眞覺「風塵期ニ振拔一―一」
【氛氳】フンウン　空中の雲煙の如き氣。九懷「揚ニ―一兮爲ノ旌」

【氣垢】コウ はこり。王維詩「極目無二一一」

【氣邪】ジャ あしき氣。漢書、元帝詔「一一歲增、侵二犯太陽一」

【氣鮮】シャウ 不吉の氣と、めでたき氣と。凶氣と吉氣と。國語「妖不レ過レ望二一一一」‖祥氣。

【氣禋】イン うすぐらく土よる。元好問詩「四望無二一一一」

【氣參】シン あしき氣。唐太宗詩「一掃一一靜、再擧掩現滅」

【氣厲】レイ あしきやまひ。‖疫厲。

六畫

【氤】イン 通 烟に同じ

天地の氣の合ひて盛なる貌。

【氤氳】ウン 氣の盛んなる貌。拾遺記「吐二五色之氣一一如レ雲」杜甫詩「佳氣日一一」‖細縕。

【氤縕】ウン 前條に同じ。易、繫辭「天地一一、萬物化醇」氳一に細に作る、同じ。

【氣】キ ケ 未 本、气に作る

〇いき(息・呼吸)「一息」〇が す、風の體「一體」「空一」〇形質の見るべきなくして相感應するもの「一運」「一象」「一味」「一韻」〇こころもち(意思・感情)〇うまれつき(性質)劣、湯問「汝志彊而一弱」「一質」〇ありさま、おもむき(景情)〇萬物生成の根源「元一」〇風雨寒暑の如き自然界の現象「天一」「暑一」六一は陰・陽・風・雨・晦・明(左、昭元)〇一年を二十四分したる一期間の稱「二十四一」轉じて時候の義とす「一候」〇おくる(饋)義に通ず。〇いきほひ、ちから、活動力。〇鼻をつけて嗅ぐ。禮、少儀「洗盥執二飲食者一勿一」

【氣候】コウ 空氣の壓力・陰晴風雨等すべて氣象の變化をおこす原因となるもの。

【氣意】イ こころもち、きぶん。管子「一一得而天下服」‖意氣。

【氣韻】イン 人物又詩文絵畫などのけだかきおもむき。荊溪新鳴「文章以レ氣爲レ主、一一不レ足、雖レ有二辭藻一、要非二佳作一也」

【氣字】ジ きりょう、けんしき、字は器量。陶弘景、尋山啓「一一關暢」

【氣概】ガイ 氣分がしづみふさぐ「一一症」‖氣結。

【氣運】ウン めぐりあひ。曹植文「慕二一一之和順一樂二時澤之有レ成」

【氣燄】エン 〇人の心の堅正ならざるに喩ふ。左、莊十四「人之所レ忌、其一一以取レ之、妖由レ人興也」〇火氣のもゆる如く勢の盛んなる義。唐書、二劉殷許諸傳贊「其威嚴一一、有二以動レ物者一」

【鋏レ氣】キョウ 天候地氣を觀察する。漢書、天文志「一レ一之法、竹爲レ管云云」

【負レ氣】フキ いきほひをたのむ。五代史、周太祖紀「爲レ人一レ一好使レ酒」

【下レ氣】クダス わが意氣を下して、人に へりくだる。禮記「一レ一怡レ聲」

【使レ氣】シキ いきごみにまかせてはやる。南史、劉穆之傳「一レ一倘レ人」陸游詩「可レ憐一一倘未レ城」

【倍レ氣】バイキ 勇氣をます。

【氣溫】オン 空氣のあたたかみ、地上の温度。

【氣海】カイ 〇大空の氣、大氣。‖雰圍氣。〇臍の下一寸五分の所、古、呼吸の根本とせし所。

【氣竪】ガイ 氣象すぐれてみさを高し。宋史、蕭貫傳「俊邁能レ文、尚二一一」‖志槩・氣節・節槩。

【氣格】カク きだて。宜和書譜「杜牧作二行草一一一雄健」‖氣品。

【氣化】カ 液體が熱又は壓力の作用にて氣體に變化する。‖蒸發。

【氣管】カン 呼吸器の一部、呼吸の通ふ道、一一支は其のえだ道。

【氣候】コウ をとこだて。又、其の人。後漢書、張邁傳「皆以二一一一立レ名」‖任俠・勇俠・游俠。

【氣圈】ケン 地球を圍むすべての大氣。‖氣團氣。

【氣孔】コウ 〇昆蟲などの體の側面にありて呼吸作用をなすあな。‖氣門。〇植物の葉莖の表皮にありて呼吸作用をなす小さき孔。

【氣候】コウ 時候、氣節。一年を二十四氣(五日を一候、十五日を一氣)七十二候に分つ。謝靈運詩「昨日變二一一一、山水含二清輝一」

【氣成レ虹】ナス 宦氣の盛んなる形容。晉楯、七啓「慷慨則氣成二虹蜺一」李賀、高軒過「入門下レ馬氣如レ虹、云是東京才子文章鉅公」

【氣骨】コツ 正義を守りて屈せざる氣象。吳融詩「近來衆解作二歌詩一、百語明快有二一一一」‖俠骨。

【氣根】コン 〇事を成すに堪へる力。こんき。‖精力。〇植物の根の一種、風蘭・石斛などの如く、地上に在りて空氣中より水分を取るもの。

【氣死】シ きおちして死ぬる。

【氣使】シ 氣を以て人を使ふ。漢書、貢禹傳「家富勢足、日指一一」

【氣質】シツ 〇きまへ。朱子語類「學至二伯恭一、可レ謂二能變二化一一一」‖氣稟・氣性。〇圏身分相應のきまへ。

【氣尚】ショウ けだかき人格。北史、甄琛傳「順涉二經史一、雅有二一一一」

【氣象】ショウ 〇きだて、きまへ。‖氣質。〇風雨陰晴などのすべて空中

の現象「―一臺」范仲淹、岳陽樓記「朝暉夕陰、―一萬千」

【氣象萬千】キシヤウバンセン　氣象を雄渾するもののみ。＝天文學。

【氣湧】キヨウ　氣がはげむ。梅堯臣詩「―心衰計欲睡、夢想先到頭洛前」

【氣性】キセイ　きだて、きまへ。＝氣質。

【氣勢】キセイ　いきほひ、げんき。論衡「勳作巧便、―一勇榮」

【氣成岩】ガンキセイ　支那の黃土の如く、風化作用によりて生じたる厚き地層。

【氣絕】キゼツ　いきがたえる、絕息する、めをまはす。晉書、荀菘傳「被二四創一―一」

【氣節】キセツ　○けだかくして操かたし。意氣と節操と。史、汲黯傳「黯好レ學游俠、任二―一」褚德與、文「勇敢―一、根二於公廉一」＝氣槩。○時節の義。＝季節。

【氣息】キソク　いき「―一奄奄」＝呼吸。

【氣體】キタイ　物體三種の一、空氣・瓦斯・水蒸氣の如く放散性ある氣狀物體。

【氣嚢】キノウ　○飛鳥類の胸腹部にあるふくろ、其の中に空氣を出入して體重を加減する。○瓦斯をつめたふくろ。飛行船などに備ふる。

【氣胞】キホウ　肺臟の氣管の小枝の末端にあるふくろ、吸入せし空氣と呼出する瓦斯との更代するところ。

【氣稟】キヒン　うまれつき。稟は天賦。中庸章句「性道雖レ同、而―一或異」＝氣性。

【氣風】キフウ　きだて。＝氣質。

【氣分】キブン　きまへ、きだて。家語「―一不レ同、而凡人莫レ知二其情一」

【氣毋】キブ　虹ニの異稱「清異錄」

【氣味】キミ　○おもむき、けはひ。蘇軾詩「平生來レ省爲レ人忙、貧賤安閑―一長」○圖きもち、感じ。

【氣脈】キミヤク　○血液のかよふすぢ。靈樞論「―一調和、而邪氣無所レ留」○轉じて相互の聯絡「―一を通ず」

【氣勇】キユウ　事をなすにいさむ。後漢書、周澤傳「以二節介一―一自行」

【氣燄萬丈】キエンバンジヤウ　意氣の盛んなる形容。項羽垓下歌「力拔レ山兮―一、時不レ利兮騅不レ逝、騅不レ逝兮可二奈何一、虞兮虞兮奈レ若何」

【氣量】キリヤウ　はらまへ。杜甫詩「此鄉之人―一窄」

【氣力】キリヨク　こんき、事を行ふに堪ふるちから。史、呂后紀「朱虛侯劉章有二―一」

【氣類】キルイ　氣味の相投合する人。南史、陸厥傳「吳興沈約・陳郡謝朓・琅邪王融、以二―一相推毂」

【氳】ウン　十　氣　4畫　又　總に通ず

氣の盛んなる貌「氤―」「氛―」

【氳氳】ウンウン　氣の盛んなる貌。孟郊詩「皎皎何皎皎、―一復―一」＝氛氳。

【氳氛】ウンフン　前條に同じ。李白詩「煙光草色俱―一」＝氛氳。

水部（すい）

【水】スヰ　4畫　純

○みづ、酸素と水素との化合して成る液體。○かは（河川）「湘―一」「漢―一」「易―一」○おほみづ（洪水）其の災害。春秋、桓元「秋大―一」○北の方位。○橫にたひらか「平―一」「―一準」○うるほふ（潤）○水を汲む、みづ仕事「薪―一」○星の名、八大行星の一、太陽系の第一位に在り。○明―は祭祀に供する水。○―銀は鑛物の一種、一名汞。○風―は陰陽家の語、山脈水流を以て墓地の吉凶に關係ありと爲す說。

【水阿】スイア　みづのくま。山海經、注「木禾穀類也、生二黑水之阿一可レ食」

【水壓】スイアツ　水の壓す力。

【水鴨】スイアフ　かも。急就篇、注「鳧者水中之鳥、今所レ謂―一者也」司空曙詩「高僧靜坐山童逐、走更喧來―一洗」

【水衣】スイイ　青きこけ。張協詩「紫土―一生」

【水飲】スイイン　水を飲む。禮、喪大記「大夫之喪、主人室老子姓皆食レ粥、衆主疏食―一、妻妾、疏食―一、士亦如レ之」＝飲水。

【水陸】スイリク　川の南方。草木子「水以レ北爲レ陰、南爲レ陽」

【水運】スイウン　水上のうんさう、船にて物を運ぶ。漢書、地理志「皆便二―一」

【水泳】スイエイ　およぎ、すゐえい。＝游泳。

【水英】スイエイ　岸々の異名。＝水岸。

【水縣】スイケン　水邊のふなつぎば。唐書、百官志「―一有レ舟」杜甫詩「微冥―一孤」

【水煙】スイエン　みづけむり、水上に立つもや。梁簡文帝詩「―一浮レ岸起、遙筱遥レ霧征」

【水害】スイガイ　大水のわざはひ。史、律書「順項有二共工之陳一、以乎二―一」

【水源】スイゲン　みづぎは。後漢書、光武帝紀「有二赤草一生二於―一」＝水庄・水湧。

【水行】スイカウ　○みづの上を行く。史、夏本紀「隨行乘レ車、―一乘レ船」○みづの流れ。韓偓詩「遠田人靜聞二―一」

【水蛟】スイカウ　みづち。東方朔賦「從二―一而爲レ徒兮、與二神龍一乎休息」

【水蒼】スイサウ　ひしの花の異名。三柳軒雜識「菱花爲二―一」

【水閘】スイカフ　水邊のたかどの。李白詩

「登レ楼坐ニ――一吐レ論多ニ英音一」

【水干】スイカン ○みづぎは。‖水潤・水濕。○圀糊を用ひず水張にしたる絹。

【水旱】スイカン 大水と、ひでりと。莊、秋水「春秋不レ變、――不レ知」‖澇旱。

【水蚓】スイキン みづの蚓。沈炯詩「詔歸――驚」

【水蛟】スイカウ みづへび。述異記「――五百年化爲レ蛟、蛟千年化爲レ龍」

【水葵】スイキ 蓴菜ジュンサイの異名。劉禹錫詩「千里――羹」

【水嬉】スイキ ふなあそびしてたのしむ。述異記「日與二西施一爲ニ――一」

【水牛】スイギウ 印度地方に産する牛の一種、體長八尺許、角は半透明にして大きく、形刻に適す（漢書、西域傳）

【水芹】スイキン せり、濕地に生ずる香草、食用とす。爾雅、疏「本草、――一名水英」‖紫芹・楚葵。

【水禽】スイキン みづとり。後漢書、馬融傳「――鴻鵠鴛鴦鷗鷺」

【水銀】スイギン みづがね、銀白色の液體金屬、晴雨計・寒暖計等の器械を造るに用ふ。本草綱目「其狀如レ水似レ銀、故名ニ――一」‖汞。

【水郷】スイキャウ 水村に同じ。陸機詩「余固――士、戀レ郷臨ニ清淵一」‖水郭・水國。

【水鏡之人】スイキャウノヒト 人の師となるべき人。晉書、樂廣傳「衛瓘見レ廣而奇レ之曰、此人之水鏡、見レ之瑩然者ア

接ニ雲霧一、而覩中青天上也」

【水脚】スイキャク ふなあし、船の水につかる部分。‖喫水・吃水。

【水渠】スイキョ みぞ。酉陽雜俎「捉ニ鼈四足、擲過ニ――一數歩」‖溝渠。

【水玉】スイギョク ○水晶の異名。山海經「堂庭之山多ニ――一」○玻瓈ハリの異名〔本草〕○圓ラウソクの水が小さく球狀をなしたるもの、露・涓滴など。

【水魚之交】スイギョノマジハリ 特別にしたしみの深きに喩ふ。蜀志、諸葛亮傳「先主曰、孤之有ニ孔明一、猶ニ魚之有レ水、願勿ニ復言一」

【水軍】スイグン ふないくさ。續志、張郃傳「司馬宣王治ニ――一於荊州一」‖水師。

【水化】スイクワ 地文學にて岩石地質等が水の作用を受けて起す變化。

【水火】スイクワ ○みづと、ひと。馬祖常詩「極擇免ニ――一「少長傳レ知レ倫」○性の相反するに喩ふ。潛夫論「邪之與レ正、猶ニ水與レ火」‖氷炭。○勢の盛んなるに喩ふ。蜀志、魏延傳「延以爲ニ至然二有レ如ニ――一」○一日も無かるべからざる大切なものとする。孟、盡心「民非ニ――一不ニ生活一」○甚だ危險なるものとする。論、衛靈公「――吾見ニ蹈而死者一矣」

【不レ避ニ水火一】スイクワヲサケズ 危險を冒す。韓愈、後十九日復上ニ宰相一書「――者之求ニ免于人一也」論、衛靈公「水火吾見ニ蹈而死者一矣」

【水火無レ交】スイクワマジハルナシ 少しも交際せず。隋書、循吏傳「轉ニ齊州刺史一、水火不レ與ニ百姓一交」

【水花】スイクワ ○うきくさ。本草「萍、一名――、一名水鮮」○大蓼に同じ。

【水葩】スイハ 蓮花ハスの異名。古今注「荷花、一名――」‖水花。

【水怪】スイクワイ 水中の怪物。木華、海賦「天孫――、鮫人之室」

【水郭】スイクワク 水のほとりなる城外の村。李紳詩「――津橋曉景澄」‖水村・水鄉。

【水患】スイクワン 洪水のわざはひ。後漢書、明帝紀「克像之人、多被ニ――一」‖水災・水害。

【水雞】スイケイ くひな、水禽の一、長嘴長脚、其の鳴く聲、恰も戸を叩く如く聞ゆ。杜甫詩「――叩レ戸來去飛」‖秧雞。

【水源】スイゲン みなもと。劉長卿詩「過ニ雨晉山到ニ――一」‖水原。

【水虎】スイコ かっぱ（河童・河太郎カハタロ）水中の怪物。裏河記「河水中有レ物、如ニ三四歳小兒一、甲如ニ鎧鯉一、秋曝ニ沙上一、縮頭似レ虎、爪甚渡レ水、名曰ニ――一」

【水攻】スイコウ みづぜめ、河水をせきて城をみづびたしにする攻城法。

【水狗】スイコウ ○猫科ネコカの一種（爾雅）○猴の異名〔本草〕

【水國】スイコク 湖沼河など多き土地。孟浩然詩「――無ニ邊際一、舟行共使レ風」

【水滸傳】スイコデン 元の施耐庵の著、宋末に成りし宣和遺事に本づき、宋の徽宗の時に起れる、盜賊の事蹟を描寫せしもの、全篇百八十回より成る、三國演義・西遊記・金瓶梅と並稱して、支那小説の四大奇書といふ。清の金聖歎の批評本、世に行はる。

【水災】スイサイ 水患に同じ〔書、堯典、疏〕

【水彩】スイサイ 水より放つ光彩。王褒賦「――旁射、蟾蜍下映」

【水彩畫】スイサイグワ 畫風の一種、水にとかしたる繪具を用ひて書く西洋風の畫。

【水星】スイセイ 水に住む鼈の一種。蜀志「夫蓋衣ニ――之甲一者」

【水際】スイサイ みづぎは。王禹偁詩「――岸畑中失、長天――垂」‖水崖・水涯・水畔・水邊。

【水草】スイサウ ○みづと、くさと。史、匈奴傳「遂ニ――一遷徙、毋ニ城郭常處耕田之業一」○みづくさ。詩經、鴛「魚之依ニ――一、猶ニ人之依ニ明王一也」

【水蛭】スイシツ みにんこ（蛭座子）溝などの濕水中に生ずる微蟲、ぼうふりに似て更に小、全身赤し、金魚の餌とす。

【水葬】スイサウ みづの中に投げはうむる。齊書、林邑傳「取ニ骨燒レ灰、投ニ海

中一一」
【水楢】スイウ　みづをけ。
【水楢】スイウ　しがらみ。斉書、馬山國傳「造二樓楢一立二一一」
【水綾花】スイキヤウクワ　僧家にて魚の異名。東坡志林「僧謂レ酒爲二般若湯一、魚爲二——一、雞爲二消遥菜一、人有レ爲二不義一、而文レ之以二美名一、與レ此何異」
【水産】スイサン　水中に生ずる産物。魚介海藻の類。毛詩陸疏廣要「琴高乘レ魚、浮二於河海一、——必究」
【水死】スイシ　みづにおぼれてしぬる。
【水司】スイシ　祭法「冥勤二其官一而——」冥は水官。‖溺死。
【水芝】スイシ　蓮スヰの異名「古今注」‖水且。
【水師】スイシ　○ふないくさ。宋書、孝武紀「於二元武湖一大閲二一一」‖水軍。○せんどう。宋史、謝景温傳「遣二義工一一一」‖水手。
【水師提督】スイシイトク　艦隊を指揮する長官。水師はふないくさ。‖艦隊司令長官。
【水蕪菁】スイブセイ　おもだか、みづぐわね。
【水蛭】スイシツ　みづびる。
【水心】スイシン　水面のまんなか、水の中央。晉書、東晳傳「見二金人拳一一之劍一」
【水神】スイシン　みづのかみ。史、始皇紀「一一不レ可レ見」
【水車】スイシヤ　○みづぐるま、田に水を注ぎ込む車。‖龍骨車・翻車。○水力にて回轉させて動力を起すしかけの車。○輕快なる舟。水馬參看。
【水樹】スイジュ　みづに臨めるうてな。林泉高致「風雪平遠、絶澗松雪、松軒醉翁、——吟風、皆冬題也」‖水亭。
【水流】スイリウ　水くだり、はげしきはらくだり。
【水麝】スイジヤ　香の名。香譜「天寶中、流人獲二一一、謂二香皆麝也一、爲取以レ針刺レ之、香倍二肉麝一」
【水上】スイジヤウ　○水のほとり。‖水邊。○水面。○かはかみ、川の上流。
【水城】スイジヤウ　○水邊の城。唐書、酷吏傳「破二其一一一、取二樓船數千一」○圖　まはりに水をたたへたる城、天智天皇の時、筑紫に築かれたるもの。
【水晶】スイシヤウ　寶石の一種、石英の類。本草「水精、一名一一、一名水玉」
【水晶花】スイシヤウクワ　うつぎ。宋史、王銍傳「太宗即位、敘貢二塗金銀香臺龍腦檀香床銀假果——凡數千計一」
【水晶體】スイシヤウタイ　眼球の角膜の後にある凸形の透明體、光線を屈折せしむるもの。
【水漿】スイシヤウ　みづと、こんずと。禮、檀弓「曾子謂二子思一曰、伋吾執二親之喪一也、一一不レ入二於口一者七日」
【水尺】スイシヤク　みづもり。‖水準。
【水手】スイシユ　せんどう、かこ。蘇軾詩「便合與二官売一一、此生何止略知レ津」‖篙人・篙師。
【水宿】スイシユク　舟中に宿する。杜甫に一一遣興詩あり。
【水準】スイジユン　みづもり。元史、曆志「舊法揆二地平折一、設二一一繩墨一、植二表其中一、以度二其中景一」
【水雄器】スイユウキ　みづもり。‖水準。
【水且】スイシヤ　蓮スヰの異名「古今注」‖水芝・水芸。
【水鹿】スイロク　水上にすむ。又、其の者。淮南子「一一者流、山處者木」‖水居。
【水松】スイシヨウ　みる。海藻の一種、海底の岩に生ずる草。郭璞、江賦「隱綸一一」‖海松。
【水訟】スイシヨウ　みづあらそひのくじ、水論スイロン
【水雕】スイチヨウ　みづぶくれ。後漢書、韓歴志、注「病二少氣五疸一一一」
【水色】スイシヨク　○みづのいろ。林泉高致「一一春綠夏碧、秋青冬黒」○圖　薄きあをいろ。‖淡青色。
【水蝕】スイシヨク　雨又は水流が土石をけづり去り或は崩壊させる作用。
【水正】スイセイ　古の水を治むる官。左傳「一一曰二玄冥一」
【水青】スイセイ　たむらさう。本草「鼠尾、一名烏草、一名一一、以二穗形一命レ名」
【水星】スイセイ　太陽系統に屬する衛星中最も小さく、最も太陽に近きもの、八十八日に太陽を一週す。
【水勢】スイセイ　水の流れるいきほひ。齊書、垣崇祖傳「一一奔下」
【水精】スイセイ　○月の異名。春秋元命苞「太陰一一爲レ月」旨書、天文志「夫日火之精也、月水之精也」○スイセイ水晶の異名。
【水仙】スイセン　○石蒜科に屬する多年生草花の一、葉は細長肥厚、花は白瓣黄蕊、春初に開きて芳香を放つ。本草「一一鄒名、金蓮銀盞」○水中にある仙人。天曜子「在レ天曰二天仙一、在レ地曰二地仙一、在レ水曰二一一」
【水戰】スイセン　ふないくさ。後漢書、岑彭傳「大司馬習二用步騎一、不レ曉二一一」‖舟戰。
【水蘚】スイセン　うきくさ。本草「萍、一名水花、一名一一」
【水素】スイソ　元素の一、無色無味にて最も輕き氣體、酸素と化合して水となる。
【水鼠】スイソ　どぶねずみ。雲仙雜志「一一穴二水旁岸隙一、似レ鼠而小、食二蚤灰魚蝦一」
【水族】スイゾク　水中に在るやから、魚介の類。晉書、温嶠傳「其下多二怪物一、嶠遂燃二犀角一而照レ之、須臾見二一一」‖南史、何遠傳「車服尤鄙素、器物無二銅漆一、江左一一甚賤、遠爲貪不レ過二乾魚數片一而已」
【水村】スイソン　水に沿へるむら。杜牧詩「一一山郭酒旗風」‖水郭。
【水碓】スイタイ　水力にてつくからうす。閨情詩「寧レ踐二一一、燒レ薪起二山田一」
【水龍】スイリユウ　みづの流るるかたち。元稹詩「山容一一使二君知一」‖水容。

【水蟹】スイカイ　蜻蜓トンボの異名〔淮南子〕
【水道】スイダウ　○ふねのとほるみち、ふなぢ。‖水路。○水の流れるみち、溝渠など。後漢書、岑彭傳「絶二其ー一」○飲料水を引き込むみち。
【水澤】スイタク　みづさは。史、淮陰侯傳「兵法右背二山陵一、前阻二ー一」
【水蠆】スイダ　蛭ヒルの異名。
【水底】スイテイ　みづのそこ、みなそこ。杜甫詩「眼花落レ井ー一眠」
【水亭】スイテイ　水邊に構へたるちん。杜審言詩「薜蘿山逕入、荷芰ー一開」‖水榭。
【水程】スイテイ　水上のみちのり。杜甫詩「宿槳依二農事一、郵籤報二ー一」元史、世祖紀「沿二黄河一詣二ー一」
【水鳥】スイテウ　みづとり。春秋、僖十六「六鷁退飛」注「鷁ー一、高飛遇レ風而退」‖水禽。
【水調】スイテウ　なまめかしき歌。明皇雜錄「使二中人歌二ー一」
【水滴】スイテキ　○みづのしづく。‖滴。○硯の水を入れる具、みづさし。類書纂要「ー一俗名二水礁一、又名二水注一、又曰二玉蟾蜍一」
【水田】スイデン　みづた、水を注ぎて作る田。朝鮮にて俗に畓の合字を用ふ。旱田・陸田の對。魏志、徐邈傳「廣開二ー一、募二貧民一佃レ之」李嘉祐詩「ー一飛二白鷺一、夏木啼二黄鸝一」
【水殿】スイデン　みづに臨めるとの。宋史、禮志「射二於ー一、盡レ歡而罷」
【水天一碧】スイテンイッペキ　暗れわたりて水もそらも、ひとついろに青く見える。
【水天彷彿】スイテンハウフツ　水と天と相接して見分け難き形容。彷彿は髣髴ホウフツに同じ。
【水天髣髴青一髪】スイテンハウフツセイイッパツ　水とそらとの間、即ち地平線が青く髪の毛をのばしたる如く見える〔賴襄、天草洋詩〕
【水土】スイド　河と陸地と。書、舜典「帝曰、咨禹汝、平二ー一惟時懋哉」
【水母】スイボ　いさごむし（蛾）水中に棲みて沙を含み人影を射れば人即ち死すといふ怪物、蜮（虫部八畫）參看。張協詩「漢行逢二ー一、野店遲二山驛一」‖射影・射工。
【水賓】スイヒン　みづ。事物紀原「溝渠謂二之ー一」
【水樓】スイロウ　水を田にそそぎて耕耘する。史、平準書「江南火耕ー一」
【水雉】スイチ　みづのわざはひ。韓非、喩老「是以白圭無二ー一」‖水災。
【水波】スイハ　なみ。蘇軾、赤壁賦「ー一不レ興」‖波浪。
【水馬】スイバ　○水上に浮游する小蟲、長き四足を有す。みづぐも、みづすまし。韓琦詩「ー一成レ羣股脚長」‖水黽。○水中に棲む馬に似たる獣。山海經「求如之山、滑水出焉、其中多二ー一、其狀如レ馬、文臂牛尾、其音如レ呼」○輕き舟。荊楚歲時記「競渡者、泊二其舟一、使二輕利一、謂二之飛鳧一、又名二水車一、又名二ー一」○圖馬に乘りて水を泳ぎわたる武藝。
【水泡】スイホウ　○みづのあわ、うたかた。人生のはかなきに喩ふ。大乘經「身如二浮沫一（中略）又如二ー一」○むだごと。「ー一に歸す」
【水俸】スイホウ　みづのほとり。易經、疏「沙是ー一之地」‖水邊。
【水龍】スイリウ　水馬もみに同じ。本草「ー一墓二遊水上一、水涸即飛、長寸許」
【水伯】スイハク　みづの神。山海經「朝陽之谷神曰二天吳一、是爲二ー一」‖水神。
【水珀】スイハク　琥珀コハクの一種。本草「ー一多無レ紅、色如二淺黄一多二蹙文一」
【水葬】スイサウ　みづのきし。白居易詩「ー一竹林邊、閒居二十年」‖水邊・岸畔・水涯・水涘。
【水盤】スイバン　大いなる水ばち。
【水帝】スイテイ　水上のかみ。王廷相詩「曦寒生二ー一」
【水筆】スイヒツ　ほきに墨をふくませて書くふで。ペン・鉛筆などの對。
【水泗】スイシ　川のほとり。左、僖四「昭王之不レ復、君其問二諸ー一」‖水涯・水湄。
【水夫】スイフ　かこ、ふなこ。‖篙夫・舟人。
【水府】スイフ　○星の名。晉書、天文志「井西南四星曰二ー一、主レ水之官也」○水神の居處。姚合詩「探レ玉上二山巔一、撈レ珠入二ー一」○圖水戸藩の異稱。
【水分】スイブン　みづけ。‖水氣・濕氣。
【水平】スイヘイ　○水面の平かなる義。轉じてすべて、物の表面のたひらかなるにいふ。○みづもり。通典「水清長二尺四寸、兩頭及中間鑿爲二三池一（中略）謂二之ー一」‖水準。
【水兵】スイヘイ　舟師シウシの兵卒。
【水深】スイシン　○うきくさ、水面に浮きて生ずる水草。歐陽脩詩「身即飛蓬共二ー一」‖水鏡。○慈姑クワイの異名〔本草綱目〕
【水豹】スイヘウ　みづちの類（海豹アシカとは異り）張衡、南都賦「追二ー一兮、擾二鮫螭一」‖蛟蛇。
【水沼】スイセウ　水玉の類。山海經「耿山無二草木一、多二ー一」
【水邊】スイヘン　河海池沼などに沿うてゐる地。楊巨源、和二練秀才楊柳詩一「ー一楊柳絲嫋絲、立レ馬煩レ君折二一枝一、唯有二春風最相惜一、慇懃更向二手中一吹」
【水母】スイボ　くらげ、海面に浮游する動物の一、形は傘に似、數多の觸手あり。郭璞、江賦「ー一目蝦」‖海月・水月・海舌。
【水歩】スイホ　水軍と歩兵と。吳志、陸遜傳「舟船機械、ー一軍資、一時略盡」
【水碓】スイタイ　あをかくに用ふる薄づみ。轉じてすみ。鄭谷詩「名盡先求ー一山」‖碓蓋。
【水際】スイサイ　みづにてはす石うす。宋史、河渠志「近畿京城外、創置二ー一」

【水脈】スイミャク ○地中に在る水のすぢみち。後漢書、許楊傳「開三楊曉ニ一一、召與語レ之」‖水理。○水のながれ。葛長庚詩「小池ニ一一漲ニ春波ニ」‖水流。

【水面】スイメン みづのおもて、水の上面。宋史、河渠志「西湖ニ一一、唯務ニ深闊ニ」‖水上。

【水綿】スイメン あをみどろ、青き綿の如くたまり水に浮く藻の名。

【水門】スイモン ゐせきの口。漢書、召信臣傳「開ニ通溝瀆ニ起ニ一一ニ」‖開門。

【水紋】スイモン みづの上のなみもやう。

【水陽】スイヤウ 川の北方。草木子「水以レ北爲レ陽、南爲レ陰」‖水北。

【水松】スイセウ かはやなぎ。古今注「一一蒲楊也、枝勁細」

【水厄】スイヤク 水の災、溺死をいふ。厄・尼同じ。洛陽伽藍記「今日有ニ一一ニ」

【水藥】スイヤク みづぐすり、水を加へて配合せしくすり。散藥・丸藥等の對。

【水浴】スイヨク 水をあびる、つめたき水にて身體を洗ふ。‖冷水浴。

【水雷】スイライ 水中にて爆發して敵の船艦などをくだきしづめる爲めのしかけ、沈設ー一と發射ー一とあり「一一艇」は敵艦に水雷を發射する船。

【水漿】スイシャウ あまみづ。曲禮「一一不レ入ニ口ニ」

【水利】スイリ 水の便利、田園の灌漑、船舶の往來などに都合よし。史、河渠書「用レ事者、爭言ニ一一ニ」

【水流】スイリウ みづのながれ。‖河流。

【水陸】スイリク みづと、くがと、河海と陸地と。李商隱詩「錦瑟與ニ鸞羽ニ、一一有ニ傷殘ニ」

【水栗】スイリツ ひしの異名。武陵記「兩角曰レ菱、三角・四角曰レ芰、通謂ニ之一一ニ」‖菱芰。

【水龍】スイリュウ みづかさ、水の分量。

【水力】スイリョク みづのおすちから。新論「河發ニ眞溜ニ江起ニ氷山ニ、一一盛多」

【水蓼】スイリョウ みづたで。白居易詩「一一殘花寂寞紅」

【水龍】スイリョウ ○たき。元好問詩「黃華一一天下絕」○うきくさ。本草「水萍、一名一一」

【水練】スイレン 圖およぎ、游泳のわざ。

【水路】スイロ ○船の通ふみち。‖航路。○水の流れるすぢみち。‖水脈。

【水樓】スイロウ 水邊のたかどの。許渾詩「未レ知南陌誰家子、夜半吹レ笙入ニ一一ニ」‖水閣・水榭。

【水到魚行】スイタウギョカウ 水が流るれば魚は其の中を行く。時節到れば物の成るに喩ふ。餘冬序錄「東坡與ニ人書、朋及ニ生レ事不ニ一一ニ、水到渠成、不レ須ニ預慮ニ思謂ニ一一ニ、水到渠成、其意同也、皆事任ニ自然ニ時至輒濟之意」

【水至清則無魚】スイシセイソクムギョ 人餘りに明察なれば、畏憚せられて友なきに喩ふ。東方朔、客難「一一、人至察則無レ徒」後漢書、班超傳「任尚代ニ一一ニ」‖水陸。

【水仙】スイセン 水の四つの德。尹子「一一沐浴重生、逸ニ流萬物ニ仁也、揚ニ清激ニ濁、蕩ニ去滓穢ニ義也、柔而難レ犯、弱而難レ勝勇也、通レ江疏レ河、惡レ盈流レ謙智也」

【水陸ニ方圓器ニ】スイリクホウエンノキ ○民の善惡は君の善惡に隨ふに喩ふ。荀、君道「君者槃也、槃圓而水圓、君者盂也、盂方而水方」○國人は善惡の友によりて感化せらるる喩「俚諺」

【水引】スイイン 圖○芝居の舞臺に張る細長き幕。○進物をしばる紅白又は黑白のこより。○草花の一種、秋穀狀の紅花をつける。‖金線草。

【水鷹則魚遊】スイヨウソクギョユウ 德あれば人自ら歸服するに喩ふ。貞觀政要「林深則鳥棲、一一」淮南子「水廣者魚大、山高者木脩」

【水能載レ舟又覆レ舟】スイノクヨクフネヲノセマタフネヲクツガヘス 君は民によりて立ち、又、民によりて亡ぶるに喩ふ。荀、王制「君者舟也、庶人者水也、水則載レ舟、水則覆レ舟」

【氵】

水が字畫の偏になる時の形、圖訓さんずい、三水の義。

【永】エイ 一畫 水部

○ながし(長)距離が長し。詩、

周南「江之一矣」時間がながし「一久」「一遠」書、大禹謨「萬世一紐」○ながくす。書、舜典「歌一言」○とほし（遠）はるか、ひさし（久）

同訓異義　永・長・脩の別は長（部首八畫）の條を見よ。

【永永】エイエイ　甚だながき貌、いつまでも。漢書、匡衡傳「一一不易」

【永遠】エイエン　ながくとほし。書經「我亦不敢寧于上帝命、弗一一念天威」

【永巷】エイカウ　○宮中の長廊下。○轉じて宮女。又、其の居る所。後漢書、宦者傳論「掖庭一一之職」○宮女の罪ある者を幽する後宮の獄。漢書、外戚傳「恐其作亂、幽之一一」

【永康】エイカウ　ながく安らか。博物志「進用忠直、社稷一一」

【永久】エイキウ　ながくひさし。晉康文「玩陰陽之變化、得長生之一一」＝長久。

【永慨】エイガイ　ながくおもふ。詩、周南「我姑酌彼金罍、維以不一一」

【永訣】エイケツ　ながきわかれ、死別。江淹、別賦「誰能摸二黯銷之狀、寫一一之情一者乎」

【永日】エイジツ　ながくなげく。詩、衛風「伯兮朅兮、邦無一一」

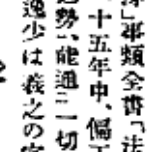
【永誓】エイセイ　ながくおもふ。詩、周南「我姑酌彼金罍、維以不一一」

【永懐】エイクワイ　ながくおもふ。詩、周南「我姑酌彼金罍、維以不一一」

【永訣】エイケツ　ながきわかれ、死別。江淹、別賦「誰能摸二黯銷之狀、寫一一之情一者乎」

【永日】エイジツ　○ながきひ。又、のどかなる春の日。○樂みて日を永くくらす。詩、唐風「且以宴樂、且以一一」

【永字八法】エイジハッポフ　永の一字にて運筆の八法を說明するもの、晉の王羲之が衛夫人より授かりし法。衛夫人授二王羲之一永字八法「側、不レ貴レ趯、勒、常患レ平、努、過レ直而力敗、趯、當レ存而勢生、策、仰收暗揭、掠、左出而鋒輕、啄、倉皇而疾奪、磔、趯趯而開撑」事類全書「法苑曰、王逸少工レ書、十五年中、偏工二永字一、以二其八法之勢一、能通二一切字一也、永字八畫也」逸少は羲之の字。



【永世】エイセイ　ながき世。書經「作二寶于王家一、與レ國咸休、一一無レ窮」＝永代。

【永生】エイセイ　ながいき。＝長壽・長生。

【永逝】エイセイ　長くゆく、死する。史、司馬相如傳「拾二九天一而一一」＝長逝。

【永噫】エイセイ　口をつぼめて長くうそぶく。盧思道文「良書濁酒、一一長吟」＝長嘯。

【永祚】エイソ　ながきさいはひ。晉書、樂志「保二玆一一、與レ天比レ崇」＝遐祚。

【永續】エイゾク　物事がながくつづく。

【永代】エイダイ　ながき世。魏武帝文「受二賜千金一、一朝散レ之、故一一流レ慶」＝永世。

【永秋】エイシウ　ながくためいきする。詩、大雅「既順迺宜、而無二一一一」＝長歎・長太息。

【永夜】エイヤ　ながきよ。李如璧詩「遙遙一一思茫茫」

【永日】エイジツ　日のながきひる。楊載詩「鳴レ琴消二一一一」

【永住】エイヂウ　一つところにながくすむ。

【永圖】エイト　永遠のはかりごと。書經「愼乃儉德、惟懷二一一一」＝長計。

【永訣】エイケツ　久しくたすける。漢武帝文「方隆二遠猷一、一一二庶政一」

【永眠】エイミン　死する。

【永夜】エイヤ　ながきよ。李如璧詩「遙遙一一思茫茫」

【永誓】エイセイ　いつまでもの名譽。詩、周頌「庶幾夙夜、以一一レ譽」

【永終】エイシウ　後までながくのこる。詩、周頌「庶幾夙夜、以一一レ譽」

【永絕】エイゼツ　ながく安んずる。書經「弘二乃烈祖一、律二乃有民一、一一二厥位一」

【永世】エイセイ　ながき世。書經「作二寶于王家一、與レ國咸休、一一無レ窮」＝永代。

【永生】エイセイ　ながいき。＝長壽・長生。

【永逝】エイセイ　長くゆく、死する。史、司馬相如傳「拾二九天一而一一」＝長逝。

【永噫】エイセイ　口をつぼめて長くうそぶく。盧思道文「良書濁酒、一一長吟」＝長嘯。

【永祚】エイソ　ながきさいはひ。晉書、樂志「保二玆一一、與レ天比レ崇」＝遐祚。

【永續】エイゾク　物事がながくつづく。

【永代】エイダイ　ながき世。魏武帝文「受二賜千金一、一朝散レ之、故一一流レ慶」＝永世。

【永秋】エイシウ　ながくためいきする。詩、大雅「既順迺宜、而無二一一一」＝長歎・長太息。

【永夜】エイヤ　ながきよ。李如璧詩「遙遙一一思茫茫」

【永日】エイジツ　日のながきひる。楊載詩「鳴レ琴消二一一一」

【永住】エイヂウ　一つところにながくすむ。

【永圖】エイト　永遠のはかりごと。書經「愼乃儉德、惟懷二一一一」＝長計。

【永眠】エイミン　死する。

【永夜】エイヤ　ながきよ。李如璧詩「遙遙一一思茫茫」

【永誓】エイセイ　いつまでもの名譽。詩、周頌「庶幾夙夜、以一一レ譽」

【永終】エイシウ　後までながくのこる。詩、周頌「庶幾夙夜、以一一レ譽」

【永絕】エイゼツ　ながく安んずる。書經「弘二乃烈祖一、律二乃有民一、一一二厥位一」

【永樂錢】エイラクセン　明の永樂年間につくりし錢、文に「一一通寶」といふ。

【氷】

氷（冫部四畫）の俗字。

【汎】キ　畫　紙

いづみ、側面から出る泉。正面から出る濫の對。爾雅、釋水「側出一泉、正出濫泉」

【汎濫】キカン　水が湧き出る。又、其の泉。字解參看。後漢書、黃憲傳「郭林宗曰、準高之器、譬二諸一一、雖レ清而易レ挹」本高は深閑の字。

【汎泉】キセン　旁より湧き出づるいづみ。詩、小雅「有二洌一一」＝側出泉。

【求】グ　キウ　尤

○もとむ（覓）さがす、たづぬる（索）「探一」「訪一」○こふ（乞）「請一」ねがふ（願望）論、述而「富而可一」○もとめ、ねがひ。○せめる（責）せめもとめる「要一」「追一」論、衛靈公「君子一諸己」○むさぼる（貪）論、子罕「不一仗不」○ひとし（等）○球に通ず、流一は琉球。○裘の古字。

同訓異義　求・索・干・需・須・要・徵・邀・覓・覯・徵○求は乞也、索也、と註

す、なき物を、有るやうにほしがり求め、又はさがし求むる義にて、意廣し、求ル女・求ニ遺書一の類。○索はさがし求むるなり。通鑑「梁主臥ニ淨居殿一、百官索レ之、不レ得、遂殂」○干は犯也、求也、無理に求むるなり、おかすとも訓む。史記「韓信數以レ策干ニ項羽一、羽不レ用」○需・須の二字、音義通ず、まつとも訓む、無くてはならぬと、まち求むるなり。赤壁賦「以待ニ子不時之需一」○要はまちかまへて、ぜひにと求むるなり。孟子「修ニ其天爵一、以要ニ人爵一」○徼は要と音義同じ。中庸「小人行レ險以徼レ幸」○邀は、徼と同字「貪レ地邀レ功」○覓はさがし求むるなり、捜索の義、覔は俗字なり。晉書「是猶下欲レ覓ニ山者一、涉ニ舟就一而覓上路」○尋は、尋問に同じ。左傳「晉侯夢ニ厲鬼一、髮被レ地、搏レ膺而踊曰、殺ニ余孫一、不レ義、余得レ請ニ於帝一矣、拊レ心曰、在レ此、在レ此、夢中自覚」○索は索と音義通ず、ゆくさき、あて無きことを索り求むる義、泰の嶓冢山は、長年を索り求むる意。莊子「索レ生」○覃は、めすとも訓む、己の方へひきつけもとめる義。

【求愛】キウアイ　愛をもとむ。左傳「子之愛レ人傷」之而已、其誰敢ニ二於子一」

【求友】キウユウ　友をもとめる。東方朔賦「飛鳥翔ニ其羣一兮、施鳴求ニ其友一」儲光羲詩「同聲既レ一、不レ貳亦懐レ賢」

【求取】キウシュ　きずをもとめる。歐陽修文「善人少　過、雖レ爲ニ二一二一上レ」＝求疵。

【求蔕】キウタイ　ふるきをもとめる。晉、盤庚「人惟レ一、器非レ一レ一惟新」

【求刑】キウケイ　刑罰に處せんことを要求する。

【求跡】キウセキ　こみちをたづねる。趙至文「涉レ澤一レ一、披レ榛覓レ路」

【求志】キウシ　己の志を行はんことを願ひ望む。論、季氏「隱居以求ニ其志一、行レ義以達ニ其道一」

【求師】キウシ　師をもとめる。後漢書、宋多ニ隱逸一、輕擧求ニ善師一」

【求心力】キウシンリョク　回運動をなす物體を其の圓心に引きつける力。遠心力の反対。

【求積】キウセキ　平面形の線の長さ・面積・體積を算出する。又、其の算法。

【求全之毀】キウゼンノキ　全きことを求むるは卻りて毀らるることある義。孟、離婁「有ニ不レ虞之譽一、有ニ一一」

【求道】キウダウ　○宗教によりて安心立命をもとめればふ。○正しき道理をたづねもとめる。

【求田問舍】キウデンモンシャ　一身の利益のみを貪りて、國家の事には少しも心を用ひざるをそしる語。魏志、呂布張邈臧洪傳「劉備謂ニ許汜一曰、君有ニ國士之名一、今天下大亂、帝王失レ所レ望、君憂ニ國忘レ家、有ニ救世之意一、而君——、言無レ可レ采」

【求譽】キウヨ　ほまれをもとめる。班固文「不ニ狗一レ名以ニ一レ一、不ニ虚驚一以要ニ一レ一」

【求療】キウレウ　治療をもとめる。後漢書、郭佗傳「有レ疾者、詣レ佗一レ一」

【汁】シフ　ジフ　圓

○しる(液)「米一」「乳一」「肉一」○つゆ、吸物「啜一」○みぞれ(雨雪雜下)○圓ルビ味噌しるの略。

【汁液】シフエキ　しるかす。杜甫詩「新酒來近レ市、一一宛相俱」

【啜レ汁】スルタ　甘き汁をすする、他の力によりて利を得るに喩ふ。史、魏世家「彼勸ニ太子擊一攻レ欲レ一レ一者衆」

【汁粉】シルコ　圓しるこもちの略、あんのしるの中にもちをいれたる食品。

【汀】テイ　青

○みぎは(水際)水邊の平地、なぎさ(渚)「一曲」「一渚」「沙一」「長一」「煙一」○きし(水岸)○す(洲)

【汀岸】テイガン　みぎは。祖詠詩「砌分池一一」

【汀曲】テイキョク　みぎはのくま。謝靈運詩「一一舟已陸」

【汀花】テイクワ　みぎはのはな。貫休詩「沙鳥似レ雲雖外去、一一如レ火雨中開」

【汀沙】テイサ　みぎはのすな。李嶠詩「開宴坐ニ一一一」

【汀草】テイサウ　水際に生ずる草。杜甫、渡江詩「渚花張ニ綵錦一、一一亂ニ青袍一」

【汀洲】テイシウ　水中に土砂の積りて出來たる地、す。屈原、九歌「檥ニ一一兮杜若一」

【汀渚】テイシヨ　みぎは、なぎさ。丁稚賦「一一錯落、林木依稀」

【汀濆】テイフン　みぎは。陳子昂詩「出沒同ニ州島一、栖泊異ニ一一一」

【汀蘭】テイラン　みぎはに生へたる蘭ニ芭仲淹、岳陽樓記「芸芷一一、郁郁青青」

【汀柳】テイリウ　みぎはのやなぎ。許棠詩「浪倒長一一、風歌遠岸檣」

【汎】ハン　圓

○波の相激する聲「澎一」○水のながれる貌。

【汜】ヘン　陷

○ひろがる、はびこる、水が延び漫ぶる。漢書、武帝紀「河水一ニ郡十六」○あまねし(普)「普一」ひろし(博・廣)＝汎。○ただよふ、ゆりうごく(搖動)○川の名、漢の高祖、一水の陽に即位す、今の山東曹縣の北。

【汜乎】ジコ　動揺して定らざる貌。漢書、賈誼傳「―若二不レ繫之舟一」‖泛乎。

【汜博】ジハク　廣大の義。左思、魏都賦「雜糅紛錯、衆說―一」‖泛博。

【汜汜】ジジ　○浮遊して定まらざる貌。楚辭「將―若二水中之鳧一乎」○水にうかぶ貌。蘇軾詩「光風―一初浮レ水、紅稍離離欲レ綴レ條」‖汎汎・泛泛。

【汜濫】ジラン　水があふれみなぎる。孟、滕文公「水逆行―ニ一于中國一」

【汜論】ジロン　ひろく大體につきて論說する、淮南子に―一訓あり。‖泛論。

【汗】

三畫　㊀ヲ・ウ　㊁ヲ・ウ　㊂ワ　遇　通　麻

又、污・洿に作る

○けがれ、けがす、けがれる。漢書、昌邑王傳「王行―二於庶人一」○くぼみ、低き地。○みづたまり、たまりみづ（停水）濁水流れず、濁れる池。左、隱三「潢―行潦之水」○行濁る。○むさぼる（貪）「貪―」「暴君―吏」○はづかしめ（辱）「―辱」○くぼむ（窪下）○くだる（降）衰へる「―隆」○そぐ（殺）○くだれる地位。○―邪は低き田。○勞役。㊂まぐ（曲）意をまげる。孟、公孫丑「―不レ至」阿二其所レ好一」○あらふ、けがれを洗ひ去る（去垢汙）詩、周南「薄二我私一」私は平常服（フダン）㊂土地をほりてくぼめる（鑿レ地）禮、禮運「―尊而抔飲」

同訓異義　汙・汚・洿・穢・濊・瀎・穢・點・涴・污・窪・穢○汙はたまり水なり、濁水不レ流と註す、轉じて人の行の汚りて、清からぬをいふ、洿に作る、同じ。書經「舊染汙俗」○汚は汙に同じ。○穢は畑の草だらけにきたなきをいふ、蕪穢・荒穢と連用す、また轉じて穢德・穢行などと用ふ、汚よりは重し。○濊は圖也、重複也と註す、心やすだてに、無禮に流れる義にて、褻瀆と連用す、又また煩に作る、同じ。○點は汙なり、墨にて點をうつ如く、潔白なるものをけがす義、點汚と熟す。○涴は汙なり、物に觸れてけがされる義、泥涴・汗涴などと用ふ。孟子「若レ將二涴君一」○污は泥の物に著くなり、汙なり、池に近し。韓愈詩「勿レ使二泥塵汚一」○穢は汙血なり、轉じてけがす義とす。列女傳「靈穢穢レ面」

【汗邪】カンジャ　きたなきみぞ。韓愈詩「二十瀕洄張、清溝決二一一」

【汗垢】コウ　あか、けがれ。儀禮、既夕、註「渦沐所二以洗一去一一一」‖垢汙。

【汗泉】センカン　生れしままの氣性を

【汗簡】カンカン　○けがしはづかしむ。司馬遷、報二任安一書「二一先人一」○はづかしめ「榮二一一」‖恥辱・垢辱。

【汗染】センセン　けがれそまる。鄒說文「臣以二染穢一、頃遭二一一、知レ臣者、或哀二其過切一」

【汗俗】カンゾク　あしきならはし。書、胤征「舊染一一、咸與維新」

【汗賤】カンセン　官職を汚しそこなふ。唐書、呂諲傳「詔盡繫二羣臣之一一者一」

【汗濁】カンダク　けがれにごる。‖濁汙。

【汗池】カンチ　みづたまり。孟子「壞二宮室一以爲二一一一」‖汚池。

【汗泥】カンデイ　どろ。‖染泥。

【汗點】カンテン　○よごれ、しみ。‖汗染。○あしきことがら、きず。‖瑕疵。

【汗蔑】カンベツ　けがし害する。楊雄原文「崇二墓虛謚一、二一時風一」

【汗漫】カンマン　○けがれたるみぞ。史、莊周傳「我將遊二一於一一之中一」自快」○小さきみぞ。賈誼、弔二屈原一賦「偶二一俗一之一一兮、豈能容二吞舟之魚一」○けがる、けがす。

【汗蝕】カンショク　○血を流してけがす、けがす。漢書、高五王傳「亡レ益二于治道一、二一宗室一」○轉じて人の名譽を傷ける義とす。元史、許有壬傳「故轍二浮辭一、二一有壬一」

【汗垢】カンコウ　けがれよごれる。

【汗名】カンメイ　けがれたる名、不名譽。

【汚】汗（前條）に同じ。

【江】

カウ　コウ　江

○揚子―の稱、西藏（チベット）の山中より發源し、東流して黃海に

注ぐ。‖大江・長江。○大川の總名「松花ー」「鴨綠ー」○河・湖などの汎稱「一山勝ー畫」○國え、いりえ、河海湖水等の陸地に入り込める所。

【江霧】カウアイ　水上のもや。謝朓詩「野花同ニ越ー一雜ニ朝曦一」

【江煙】カウエン　かはの上のみづけむり。徐彦伯詩「妾家越水邊、旅ー艇入ニ一ー一」‖江靄。

【江風】カウフウ　いりえにすむかもめ。南越志「ー一名海鷗、在ニ漲海中一、隨レ潮上下、常以ニ三月風至一乃還ニ洲嶼一若ニ羣飛至一岸、漁者以レ此爲レ候」雍陶詩「初時山大翻驚レ主、久別ー一卻避レ人」

【江河】カウ　○揚子江と黄河と。尉雅「ー一淮濟爲ニ四瀆一」○大いなるかは。莊子「丘山積レ卑而爲レ高、ー一合レ水而爲レ大」

【決ニ江河源一猶レ之以レ手】ケツコウガノミナモトヲスルニコレヲスルガゴトシ　勞して效なきに喩ふ。淮南子「今夫儒者不レ本ニ其所一以欲一而禁ニ其所一ニ欲、不レ原ニ其所一ニ以樂一而閉ニ其所一ニ樂、是猶レ決ニ江河之源一而障レ之以レ手也」

【江海】カウカイ　かはと、うみと。書經「沿ニ于ー一達ニ于淮泗一」莊、讓王「身在ニ一ー之上一、心居ニ乎魏闕之下一」‖河海。

【江漢】カウカン　揚子江と、漢水と。孟、滕文公「ー一以濟レ之、秋陽以暴レ之、皜皜乎不レ可レ尚已」江漢二水の清きにあらひて秋のつよき日にさらす、布をさらすに喩ふ。

【江雀】カウカン　かはにのぞめるてすり。杜甫詩「ー一俯ニ鳧鷖一」

【江月】カウゲツ　かは水にうつるつき。杜甫詩「ー一去レ人只數尺、風燈照レ夜欲ニ三更一」

【江湖】カウコ　○三江五湖の略、かはと、みづうみと。史、貨殖傳「乘ニ扁舟一、浮ニ于ー一」○轉じて、世間の義、世の中。陶潛詩「ー一多ニ貶賦一」

【江湖之氣】カウコノキ　民間の人の氣風。李燕龍、與ニ宗子相一書「雖然各有ニ一ー一也」

【江湖之人】カウコノヒト　民間に居るもの。後漢書、皇甫規傳「上疏曰、ー一、宜爲レ盜」

【江左】カウサ　揚子江の左方、卽ち、江南地方、今の江蘇省の地。晉書、王覽傳「爰世多才、興ニ於ー一」‖江東、江表。

【江山】カウザン　かはと、やまと。蘇軾、後赤壁賦「ー一不レ可ニ復識一矣」‖山河。

【江山之助】カウザンノタスケ　山水の風景、人の詩情を助くるをいふ。唐書、張說傳「說旣見レ謫ニ岳州一、詩態愁悵、人謂得ニ一ー一」

【江心】カウシン　かはのまんなか。李嘉祐詩「ー一澹澹芙蓉花」‖水心。

【江艦】カウシン　艦は口、頷下に在る大魚、かぢきの類。爾雅、釋魚、疏「鱘長鼻魚也、重千斤」庾肩吾詩「海鷗時出浸、ー一乍喧鳴」

【江城如ニ畫裏一】カウジヤウハエノゴトシ　江邊に在る城の景は、醜はしくして畫の如し。李白詩「ー一、山晚望ニ晴空一、兩水夾ニ明鏡一、雙橋落ニ彩虹一」

【江珠】カウシユ　琥珀の異名。博物志、琥珀、一名ー一」

【江渚】カウシヨ　○揚子江のみぎは「蘇軾、赤壁賦」○川のほとり。王勃詩「滕王高閣臨ニ一ー一」‖江汀・江湄。

【江水】カウスイ　○揚子江のみづ。漢書、呂后紀「ー一溢、流民四千餘家」○かはのみづ。‖河水。

【江船】カウセン　揚子江を上下するふね。杜甫詩「野裸雲俱黑、ー一火獨明」

【江村】カウソン　かはに沿ふむら。謝朓詩「暖暖ー一見、離離海樹出」

【江汀】カウテイ　かはのみぎは。高啓詩「ー一每恨無ニ舟渡一」

【江亭】カウテイ　えのほとりのちん。王勃詩「ー一明月帶ニ江流一」

【江潮】カウテウ　揚子江に起るしほのさしひき。劉長卿詩「ー一通ニ驛舍一」

【江東】カウトウ　揚子江の東岸、卽ち昔の吳國の地方、楚の項羽が兵を起したる地。杜牧、題ニ烏江亭一詩「勝敗兵家事不レ期、包レ羞忍レ恥是男兒、ー一子弟多ニ才俊一卷ニ土重來未レ可レ知」

【江頭】カウトウ　かはのほとり、頭はほとり。劉長卿詩「猿啼客散幕ー一」

【江豚】カウトン　海豚の別稱。‖國水猪。

【江南】カウナン　地名、揚子江の南に在り、古の揚州、卽ち楚越地方。杜甫詩「今日ー一老、他時淚北章」

【江南一枝春】カウナンノハル　江南より梅花一枝を友人に贈りし故事。荊州記「陸凱與ニ范曄一相善、自ニ江南一寄ニ梅花一枝一、詣ニ長安一與レ曄、并贈レ詩曰、折レ梅逢ニ驛使一、寄與隴頭人、江南無レ所レ有、聊贈一枝春」

【江南橘化爲レ枳】カウナンノタチハカハツテカラタチトナル　人は境遇によりて性情を變化するに喩ふ。晉雅「江南種レ橘、江北爲レ枳」淮南子「故橘樹之江北一則化而爲レ枳」

【江畔】カウハン　かはのほとり。張若虛詩「ー一何人初見レ月、江月何年初照レ人」‖江濱・江邊・江頭・江岸。

【江靡】カウビ　かはのみぎは、隰は濕、邊なり。史、司馬相如傳「明月珠子、的ニ皪ー一」的皪はあざやか。‖江畔・江頭。

【江蛇】カウビン　揚子江の源なる岷山のある巴蜀地方。魏志、鄧艾傳「武擊ニ揚子ー一」

【江濱】カウヒン　○揚子江の岸。倪瓚詩「結レ茅依レ竹住ニ一ー一」○えのほとり。‖江畔・江汀。

【江風】カウフウ　かはかぜ。梁元帝詩「ー一當レ夏清」

【江楓】カウフウ　かはの邊のかへで。張繼

詩「一一流火對二愁眠一」【江氛】カウ　かはの上のもや。韓愈詩「蠻俗生極痩瘴蒸、一一濕疑昏若レ凝」‖江霧・江靄。【江表】カウ　揚子江の左岸地方。吳志、陸遜傳「陛下承二運、拓二定一一一」‖江左・江東。【江流】カウ　○かはのながれ。張九齡詩「花開直二桃路一草際曲二一一一」‖河流。○揚子江のながれ。蘇軾、後赤壁賦「一一有レ聲、斷岸千尺」【江樓】カウ　かはぶりのたかどの。杜甫、秋興詩「千家山郭靜二朝暉一、日日一一坐二漁磯一」

【汗】㊀カン　㊁カン　寒　翰

㊀あせ「流一」「一珠」「一液」○あせをかく、あせが出る。○水の廣き貌。波の長き貌。○しみの出づること。○盜一はねあせ。○汗一は水の廣くして涯なき貌。㊁可一カンは突厥の酋長の稱。【汗波】カンエキ　あせ、肝臟より分泌する液汁。【汗汗】カンカン　水の廣大なる貌。江賦「一一浩浩」【汗簡】カンカン　文書。又書籍をいふ。古書、紙の無かりし時、青竹を火にあぶりて汗を出させ、青みを去りたる札に文書をかきしに本づく。黃庭堅詩「今代誰班馬、能書二一一青一」‖殺青・汗青。【汗顏】カンガン　はぢて顏にあせをかく。韓愈、祭二柳子厚一文「不二善貨一而逝、血レ指一レ、巧匠旁觀、縮二手袖一閒一」【汗牛充棟】カンギウジウトウ　牛に汗かかせ、棟木までとどく、藏書の多きにいふ。柳宗元、陸文通墓表「其爲レ書、處則充二棟宇一、出則汗二牛馬一」【汗血馬】カンケツバ　西域地方より出る血の如き汗を出す駿馬、今のアラビヤ馬。漢書、武帝紀「將軍李廣利斬二大宛王首一獲二一一一一來、作二西極天馬之歌一」‖千里馬。【汗臥】カンガ　あせ出でて目くらむ。柳宗元文「蒸炎當レ日一一」【汗垢】カンコウ　あせ、けがれ。王褒、責二髮奴一文「一一流離、汗穢泥土」【汗衫】カンサン　○夏衣の一、あせとりの類。談藪「漢王與二項籍一戰、汗透二中單一改二一一一一」○圖かざみ、中古、宮女・童子等の初夏に用ひしうはぎ。【汗疹】カンシン　あせも、汗によりて肌に生ずる瘡。‖痱子。【汗酒】カンシュ　燒酎ヂウの異名。氣の極めて烈しき酒（通俗編）‖燒酒。【汗襦】カンジュ　はだぎ、はだじゅばん。‖襯衣・甲襦。【汗青】カンセイ　古、竹を火にてあぶり青色を發して文字を書く、故に書籍の稱とす。文天祥詩「留二取丹心一照二一一一」‖汗簡。【汗嘯】カンセン　あせながれて、あへぐ。韓琦、苦熱詩「鮫龍宮二潭穴一一一不二敢雨一」【汗腺】カンセン　皮膚中に在りて汗を分泌しこれを體外に排出する腺。【汗背】カンハイ　はぢて背にあせかく。史、陳丞相世家「周勃不レ能レ對、汗出沾レ背」【汗馬】カンバ　○汗血馬の略。徐幹詩「一一躍二銀鞍一」○馬に汗をかかせて驅使する。【汗馬之勞】カンバノラウ　馬に汗かかせたるいさを、即ち戰功。史、蕭相國世家「蕭何未レ嘗有二一一一一一戰鬪策一、里數難レ多、不レ費二一一一一」【汗漫】カンマン　○遙かに廣き貌。關尹子、九藥「勿下以二一一一一曰中道之廣上○知るべからざる貌。淮南子「吾與二一一一期二乎九垓之外一」○轉じて放浪して檢制なき義。唐書「閑淨一一」【汗下】カンカ　はぢてあせが出る。蘇舜欽詩「一一如二流漿一」

【汍】ワン　寒　翰

わかる、みなまた（水岐流）

【汕】サン　㊀セン　諫

○すなどる。○すくひあみ。○魚の游ぐ貌。【汕汕】サンサン　すなどりす。詩、小雅「爾有二嘉魚一、烝然一一」一說、魚およぐ。

【汜】シ　㊀イ　紙　㊁紙

○とどまる（止）○別れたる水が復た本流に入る。詩、召南「江有一一」○流れ道の無き川。‖窮瀆。○かぎり（水涯）○川の名。河南省一水縣の西境に在り。

【汝】ジョ　語

○なんぢ（爾）そなた、古は女に作る。○川の名。河南省嵩縣の老君山より發し、東南流して州・許州・光州を經て淮水に注ぐ。

語源　汝・若・女・爾・乃・迺・而　○汝・若は共に我に對する稱、互に通用す。古人若字を讀みて汝と爲す、故に傳記文に、多く若を以て汝と爲すものあり。史、項羽紀「吾聞師若翁」の若を漢書には汝に作れ

る、亦證とすべし。○女は汝に同じ。論語「女與レ回也孰愈」○爾は汝に同じくして輕し。論語「以二吾一日長二乎爾一毋二吾以一也」○乃は彼なり、そちと譯し、人を指していふ、用法せまし。書經「誕以二爾衆士一爽二乃攸一乃謀一」また乃公と連用す。○迺は乃に同じ、迺に作るは非なり。○而は爾・汝に近し。左傳「余而所レ嬴蟁入之父也」

【汝南】ジョナン　郡名、漢代に置く、今の河南省汝南縣の地。「一一月旦」は月旦（八九二頁一段）を見よ。

【汝陽三斗始朝レ天】ジョヤウサントシハジメテテンニチョウス　汝陽王璡が酒を好み、三斗の酒に醉ひて參朝せし故事、汝陽は今の汝南縣。杜甫、飲中八僊歌「——、道逢二麴車一口流レ涎、恨不レ移レ封向二酒泉一」

【汝曹】ジョサウ　おまへたち。馬援、戒二子弟一書「吾愛レ之重レ之、願二——效一レ之」‖爾曹・若曹・汝輩。

【汝輩】ジョハイ　おまへたち。隋書、章世康傳「——以爲二云何一」‖若輩・爾輩。

【汝萬里長城】ジョバンリノチャウジャウ　名將が平常身を以て大敵を防ぐこと汝（君主を斥す）をまもる長城の如くなるに、今之を壞れりと罵る語。宋書、檀道濟傳「道濟立二功前朝一、威名甚重、太祖忌レ疾、彭城王義康、傳二宮車晏駕、道濟不レ可二復制一、於レ是收二道濟及其子一、竝於二廷尉一伏レ誅、初道濟見レ收、脫レ幘投レ地曰、乃復壞二汝萬里之長城一」宮車晏駕は天子の崩御。

【汐】セキ　陌

○ゆふしほ、夕に起るしほのさしひき。潮汐の對。○ひきしほ。潮汐の對「潮一」「暮一」

【汏】㊀タイ・ダイ　㊁タ　泰　祭　或は汰（大蓋）に作る

㊀みなぎる。○あらふ（洗）○なみ（濤）○よなぐ（漸）○自らほこる（自矜）㊁よなぐ（漸）

【池】チ　支

○いけ、たまりみづ、地を掘りて水をたくはへる所（停水）湖よりは小「一沼」「蓮一」「浄一」○おほり、城のまはりのほり「城」孟、公孫丑「一非二不深一也」○棺のかざり。○柩を埋むるあな。○琴瑟の上面。○戚一は黄帝の樂の名。○差一は鳥の飛ぶ貌。詩、邶風「燕燕于飛、差二其羽一」

【池苑】チエン　いけと、そのと。白居易詩「歸來一一皆依レ舊」‖池囿・池園。

【池荷】チカ　いけのはす。梁簡文帝詩「林花初墮レ帶、一一欲レ吐レ心」‖池蓮。

【池閣】チカク　池に臨めるたかどの。鮑照詩「月光麗二一一一野氣浮二林園一」‖池館。

【池館】チクワン　いけす、養魚場。山堂肆考「一一池中編二竹籬一以養レ魚者」

【池魚之殃】チギョノワザハヒ　○わざはひが他の物に及ぶをいふ。呂覽、必已、宋桓司馬有二寶珠一、弧父罪出亡、王使二人問一珠之所在一、曰、投二之池中一、於レ是竭レ池而求レ之、無レ得、魚死殆、此言二禍福之相及一也」○又、火災の義とす。太平廣記「城門失レ火、禍及二池魚一」

【池魚籠鳥】チギョロウテウ　いけのうをと、かごのとりと。身の不自由なるに喩ふ。潘岳、秋興賦「譬猶二——一、有二江湖山藪之思一」

【池陛】チヘイ　しろのからぼり。池の水なきを陛といふ。李綱詩「開軒俯二吳會一、蜂窠綴二一一一」‖城池。

【池漢】チカン　いけ、漢は水たまり。張九齡詩「孤鴻海上來、一一不二敢留一」

【池樹】チジュ　池のほとりのうてな、池上の樹。劉禹錫詩「一一堪二臨泛一、偏然散二幽閑一」‖池亭・池臺。

【池沼】チセウ　いけと、ぬまと。新序「周文王作二靈臺一、及レ昏一一、掘レ地得二死人之骨一、吏以聞、文王曰、更葬レ之」

【池塘春草夢】チタウシュンサウノユメ　謝靈運が夢中にこの句を得たりといふ故事。南史、謝惠連傳「年十歲能屬レ文、族兄靈運嘗賞之云、對二惠連一輒有二佳語一、嘗於二永嘉西堂一、思レ詩竟レ日不レ就、忽夢見二惠連一、即得二池塘生二春草一、大以爲レ工」

【非二池中物一】ヒチチュウノモノニアラズ　英雄は久しく屈するものにあらず、時を得ば勢に乘じて必ず爲すあるに喩ふ。吳志、周瑜傳「周瑜上疏曰、劉備以二梟雄之姿一、而有二關羽・張飛熊虎之將一、必非二久屈爲二人用一者上（中略）恐蛟龍得二雲雨一、終——也」

【池亭】チテイ　池のほとりのちん。白居易詩「活計纔資長潔淨、一一畢レ小頑幽深」‖池榭。

【池頭】チトウ　いけのほとり、池のはた。王維詩「凝碧一一奏二管絃一」‖池畔・池邊・池上・池濱。

【池畔】チハン　池のほとり。白居易詩「帶林下地、開疏一一泉」‖池干・池邊。

【池濱】チヒン　いけのほとり。三輔黃圖「復遊二一一一得二明珠一雙一」

【池風】チフウ　いけのおもを吹くかぜ。楊炯詩「一一泛二早涼一」

【池邊】チヘン　いけのほとり。盧多遜詩「太液一一月上時、好風吹動萬年枝」賈島詩「鳥宿一一樹」‖池畔。

【池面】チメン　いけのおも。白居易詩「低風洗二一一一、斜日斫二花心一」

【池蓮】チレン　いけのはちす。王融詩「一一照二曉月一、幌錦拂二朝風一」‖池荷・池藕。

【汇】 ベウ　陽

あわただし(忽遽)茫に通ず。

【汇若】ベウジャク　忽遽たるの貌。莊、天地「―ニ―於天子之旨ニ」

【汎】 ㊀ ハン　㊁ ヒュア・フ　㊂ ヘフ　洽　東　梗

㊀水に浮かぶ貌。○風波のままにただよふ貌。詩、邶風「亦―其流」○かろし(輕)○そそぐ(灑)○ながれる貌。○ひろし、あまねし、普く博し。漢書、谷永傳「永於經書、―爲通達」㊁―泛は聲の微なる貌。又、波の急なる貌。

同論同義　汎・氾・博・圃・弘・賞の別は廣(广部十二畫)の條を見よ。

【汎愛】ハンアイ　ひろくあいする。論、學而「―ニ―衆」‖博愛。

【汎遊】イウ　○ひろくわたる。王僧孺文「專心六典、精頤必深、―ニ―墳籍ニ、菁華無棄」○うかぶ。儲光羲詩「晦日望ニ清渡ニ相與期ニ―ニ」

【汎溢】ハンイツ　水のあふれる貌。

【汎海】ハイ　うみにうかぶ。晉書、謝安傳「安曾與ニ孫綽等ニ―ニ―、風起浪湧」

【汎採】ハンサイ　ひろく取る。文心雕龍「呂氏鑒達而體周、淮南―ニ―而文麗」‖博採・博收・博取。

【汎濫】ハンラン　あまねくそそぐ。班固賦「爾郎―ニ―」‖編醼。

【汎舟】ハンシウ　ふねをうかべる。‖泛舟・汎舶。

【汎稱】ハンシウ　ひろくいふとなへ、ひきくるめていふ名。‖總名・總稱。

【汎說】セツ　ひろくすべとく、ひきくるめて說明する。‖總說。

【汎涉】セフ　ひろくわたる。齊書、周顒傳、宮商朱紫、登ニ口成ニ句ニ、―ニ百家ニ、長ニ于佛理ニ」‖博涉。

【汎沛】ハンハイ　盛んなる貌。揚雄、河東賦「雖ニ蓋條其區域ニ、滔ニ―ニ以豐隆ニ」

【汎舶】ハンハク　大船をうかべる。一統志「梁時有ニ天竺僧自ニ西來ニ―ニ―普通ニ」

【汎汎】ハンハン　○水のひろく流れる貌。一解に疾くして疎ならざる貌。詩、邶風「二子乘ニ舟ニ、―ニ―其景ニ」‖泛泛。○水にうかぶ貌。屈原、卜居「將ニ―ニ若ニ水中之鳧ニ乎」

【汎沫】ハンマツ　浮けるあわ。盧世南詩「―ニ衆沙鷗ニ、寒漪擁ニ急流ニ」

【汎濫】ハンラン　○水のあふれ流れる貌。孟子、滕文公「洪水橫流、―ニ―於天下ニ」○ひろくわたる。‖博涉。○うきたることば。史、韓非傳「―ニ―博文」‖浮辭。

【汎瀾】ハンラン　涕を流す貌。韓愈詩「報ニ國心較淺、念ニ時淚ニ―ニ」

【汎論】ハンロン　事物の全般にわたりて論述する。又、其の論說。‖總論・概論。

【汎汎】ヒョウ　志ハレバイに浮ぶ貌。司馬相如、上林賦「―ニ―泛濫、隨ニ風瀺灂ニ」

四畫

【汨】 キツ　質　通音イツ

○とし(疾)はやき貌。○きよし(淨)○水が疾くながれる。

【汨逸】イツ　はやあしにてあるく、かける。揚子方言「―ニ―疾行也」

【汨越】ヲツ　光明の貌。何晏、景福殿賦「羅ニ疏柱之―ニ―」

【汪】 ウン　コン　元　文

○めぐりながれる(轉流)○ひろし(沆)○衆くして盛んなる貌。○沸き上る貌。

【汪汪】ワウワウ　○水の轉流する貌。杜甫詩「―ニ―萊浪ニ」○沸き流れる貌。王逸、九思「流水兮―ニ―」○ひろびろとしたる貌。柳宗元賦「浚ニ洞庭之洋洋ニ兮、派ニ湘流之―ニ―」

【汽】 ㊀ エン　鹽　㊁ イン　㊂ キ　侵　緝

㊀流れ行く貌。○充(凡部七畫)に通ず。○川の名、河南省濟源縣王屋山より出づ。書、禹貢「道ニ―水ニ東流爲ニ濟ニ」㊁―溶は水が谷間を流れる貌。司馬相如、上林賦「―ニ溶ニ―」溶は安らかに流れる。

【汽流】イン　流れ行く貌。漢書、禮樂志「―ニ―四塞」

【沆】 ㊀ カウ　㊁ カウ　養　陽

㊀たぶりみづ。○ひろし、大いなり。○瀣―カウは大水。○―瀣カイは北方夜半の氣。一說に露の氣。一說に海の氣。楚辭、遠遊「餐ニ六氣ニ而飲ニ―瀣ニ兮」㊁わたる(渡)水の流れる貌。

【沆瀣】カウカイ　字解を見よ。

【沆茫】バウ　水草の廣大なる貌。揚雄、羽獵賦「鴻濛―ニ―」

【沆漾】カウヤウ　水の深く廣き貌。木華、海賦「沖融―ニ―」‖沆瀣。

【沂】 ㊀ ギ　㊁ ギン　眞　微　㊀の通音キ

㊀川の名。山東省に在り、江蘇省邳州に至り運河に入る。論、顏淵「浴ニ于―ニ」㊁ふち(器の新)○がけ(崖)漢書、敘傳「張良受ニ書於邳ニ」○ふえ(大笳)

【浴ニ乎沂ニ風ニ乎舞雩ニ】ヨクコヲキフウコヲブウ　沂は魯の城南に在る川の名、舞雩は天を祭り雨を祈る處、風は涼む。論、先進、莫春者、春服既成、冠者五六

人、童子六七人、——、詠而歸」

【汽】 ㊀キツ 物 カイ 隊 ㊁キ 未

㊀ちかし（近）ほとんど。‖汔。㊁みづけ（水氣）○ゆげ。熱を受けて蒸發する氣。○圖蒸溜水を一水といふ、ラムネの類。○圖蒸氣力を借る機の義とす「一車」「一船」

【汽機】キキ ゆげの膨脹力にて動力を起す仕掛けのきかい。‖蒸氣機關。

【汽罐】キクワン 水を蒸氣に變ずる仕掛のかま。

【汽車】キシヤ ○圖自動車。○圖蒸氣の力によりて軌道の上を運轉するくるま。‖火輪車・蒸氣車・火車。

【汽船】キセン 蒸氣の力にて進行する裝置の船。‖火輪船・蒸氣船。

【汽笛】キテキ 汽車・汽船等にてゆげにて吹き鳴らす發聲器。

【汲】 キフ 緝

○くむ、水をくみ上げる。莊、至樂「緼袍、敝衣、以—魏王」○ひく、引き入れる。轉じて人物を引きあげ用ふる。○——は休まざる貌。又、いそがしき貌。

同訓異義 汲・酌・斟・挹○汲は井戸の水をくむなり。○酌は酒をくむなり、斟に同じ。○斟は酒をくみたすなり、酌酌と連用して、うめあはせするなり、ひかえる義に解するは非なり。○挹は酌に同じ、靜かにそっとくむなり。

【汲黯】キフアン 字は長孺、漢の濮陽の人、性僻にして直少く、人の過を容れず、景帝の時、太子洗馬となり、嚴を以て憚からる、武帝の時、謁者となり、面折廷諍するを以て、武帝之を憚り、稍して古の社稷の臣に近しと爲す。‖汲長孺。

【汲引】キフイン ○水を汲み上げる。郭璞、江賦「——一一沮漳」○轉じて人を引きあげ用ふる。漢書、劉向傳「馬稷與二辜陽一傳相一一、不レ爲二比周一」‖引進。

【汲綆】キフカウ 井戸のつるべ縄。陰書、食貨志「城內糧盡、布帛山積、乃以レ絹爲二——一、然布以裂」然はもやす。

【汲汲】キフ 休まずつとめる貌。漢書、揚雄傳「不レ——一於富貴一、不レ戚二戚於貧賤一」‖孜孜・乾乾。

【汲汲忙忙】キフキフバウバウ 極めていそがしき貌。論衡「——、何暇二著作一」

【汲古】キフコ 古書を耽讀する義。深き井の水を汲むに喩ふ。韓愈詩「一レ一得二修綆一」

【汲古閣】キフコカク 明季、常熟の人毛晉の藏書閣の名、晉蒐めて書を收め、積むて八萬四千冊に至る、經史子集の四部の書、翻雕せざるなし、毛氏の書、天下に流行す。

【汲深】キフシン つるべなは。左傳、注「綆、——一」‖汲綆。

【汲水】キフスイ みづをくむ。みづくみ。南史「負レ薪一レ一、井レ日而食」

【汲泉】キフセン いづみをくむ、谷川の水を汲む。蘇軾詩「——何愛一夫忙」

【汲道】キフダウ 水くむみち。魏志、張郃傳「郃絕二其一一、大破レ之」

【汲長孺】キフチヤウジユ 汲黯を見よ。

【汲冢】キフチヨウ 書籍の名、晉の太康二年、汲郡の人不準が、魏の襄王の墓を掘りて得たるものなりといふ。隋書、經籍志「——書并竹書同異一卷」‖逸周書・汲冢周書。

【汲路】キフロ 水をくむみち。元史、李恒傳「貫以二巨索一爲レ機、以自固、恒遣二斷其一一、其勢日迫」‖汲道。

【汰】 クワウ 泰

○はやきながれ、はやせ（迅流）‖湍。○かちわたり（渉）○泓は水勢の回旋スルする貌〔江賦〕

【決】 ケツ 屑 決は俗字

○さく、ひらく（開）○きる、堤がきれて水があふれる。堤をきりて水を導く。書、益稷「予一九川一距二四海一」○齒でくひきる、たつ（斷）○たゆ（絕）○やぶる（破）○きめ、きまり、きめる、さだめる「一定」○わかつ、是非曲直をさばきわける「一獄」○思ひきる「一斷」「一然」○わかる、訣に通ず。漢書、蘇武傳「李陵與二蘇武一一去」○ゆがけ、弓を射る時、右の手の大指にはめて弦をひく具。○疾き貌「一起」莊、逍遙遊「我一起而飛搶二檢枋一」○すきま、缺に通ず。史、秦始皇紀「過一隙一也」○かならず（必）きっと。

【決意】ケツイ こころをきめる。宋史、呂端傳「太宗曰、端小事糊塗、大事不二糊塗一、一レ一相レ之」

【決裂】ケツレツ あふる。論衡「溝渠一一、散二在丘墟一矣」

【決雲見】ケツウンケン 驚カの異名〔天寶遺事〕

【決行】ケツカウ 思ひきっておこなふ。‖斷行。

【決河之勢】ケツカノイキホヒ 堤ツツがきれて水がみなぎる如きすさまじき勢。國語「勢之加也、如レ決レ河」

【決起】ケツキ ただちにたつ、勢よく急に身をおこす。‖蹶起。字解參看。

【決疑】ケツギ うたがひをさだめきめる。左傳「卜以一レ一、不レ疑何卜」

【決議】ケツギ ○評議してきめる。漢書「按レ劍延二此羣臣一、即日一一」○斷決せし案。

【決去】ケツキヨ 別れさる。字解參看。

【決潰】ケツクワイ 堤がきれて水があふれ

る。又、腐れたる物がやぶれつひゆ。歐陽修詩「癰瘍暫喜發、一一終當ノ涸」‖潰決。

【決瘞】ケツエイ 前條に同じ。

【決隙】ケツゲキ ひま。史、始皇紀「夫人生二世間一也、譬猶下駟二六騏一過中一一上也」‖缺隙。

【決決】ケツケツ 水の流れる貌。王建詩「溫泉一一出ノ宮流」

【決獄】ケツゴク 罪を判決する。淮南子「湯始皇盡一レ一、夜理ノ書」漢書、陳平傳「天下一歲一一幾何」‖斷罪・斷獄。

【決策】ケツサク はかりごとを決行する。史、高祖紀「一レ一東鄉、爭二權天下一」

【決算】ケツサン ○しあげ、かんじょう、總勘定。○會社・銀行などにて年度の半期又は年度末に行ふ收入支出の總計算。

【決死】ケツシ 死ぬる覺悟「一一隊」‖敢死・必死。

【決志】ケツシ 志をきめる。易經「持ノ疑猶豫、未二敢一一レ一」

【決背】ケツハイ まなじりをさく、眼をいからす。曹植、雜詩「張ノ目一レ一、髮怒脊ノ冠」

【決眥】ケツサイ 疾くはしる。莊、齊物「麋鹿見ノ之而一一」

【決拾】ケツシュウ 決はゆがけ、象牙にて作る。拾は皮を以て作る。左臂に著けて弦を遂ぐる具。詩、小雅「一一既依、弓矢既調」‖抉拾。

【決心】ケッシン 心をきめる。‖決意・決志。

【決訟】ケッショウ 訴訟を判決する。‖決獄。

【決勝點】ケッショウテン かちまけの定まるところ、勝負のきまるさかひめ。

【決絕】ケツゼツ たちきる、きりはなす。

【決然】ケツゼン ○おもひきってする貌。‖斷乎。○にはかに、急に。

【決戰】ケッセン 勝敗を定めるたたかひ。史、項羽紀「願爲二諸君一一一、必三勝之一」

【決選】ケッセン 選擧の結果數人を得たる時、再び其の中に就きて當選者を決定するをいふ「一一投票」

【決答】ケツトウ はっきりとこたへる。又、其のこたへ。‖確答。

【決斷】ケツダン とりきめる。とりきめ。史、淮陰侯傳「願客在二予麾一、成敗在二于一一」‖斷決・決定。

【決斷所】ケッダンショ 圖後醍醐天皇の中興の時、置かれし裁判訴訟をつかさどる役所の名。

【決著】ケッチャク きまりがつく。又、きまり、つまり。‖畢竟・結局。

【決定】ケッテイ ○とりきめる。史、殷紀「一一於家室一」○佛の教を固く心に信ずる。圓覺經「生二一一信一」

【決鬪】ケットウ 勝敗を定めるたたかひ。續書、侯莫陳說傳「欲下待二明日一一上」

【決敗】ケッパイ きりやぶる。晉書、陸友傳「見ノ衆大服如ノ吹、因一一二之、更作二皮囊二枚一」

【決鼻】ケツビ 鬼ザルの異名。鼻の下がきれてゐる故。‖缺鼻。

【決腹】ケップク はらをきる（割腹）戰國策「斷ノ股一レ一」

【決平】ケッペイ 訴訟を公平に決する。漢書、杜周傳「客有ノ謂ノ周曰、君爲二天下一一レ一、不ノ循二尺法一、專以二人主意指一爲ノ獄、獄者固如ノ是乎」

【決裂】ケツレツ ○さきわかつ。戰國策「穰侯使者操二主之重一、一一諸侯一」‖破綻。○やぶりこはす。史、裴澤傳「商君一二阡陌一、以靜二生民之業一、而一二其俗一」

【沅】ゲン グヮン 元 阮

川の名、湖南省の大川、貴州より湖南省に入り、一州・常州・常德を經て洞庭湖に入る。

【沅湘】ゲンショウ 沅水と湘水と。戴叔倫、湘南即事「一一日夜東流去、不下爲二愁人一住少時上」

【沍】

㊀コ・グ 遇 ㊁カク ㊂カク 藥 陌 通

通音 ゴ

㊀とづ（閉）ふさぐ、ふさがる（塞）㊁こほる（凍）列、湯問「霜雪交下、川池暴一」かたきこほり（冰結）㊂つく（竭）かる。‖涸。

【沍陰】ゴイン 陰氣が固くこほり結ぶ。子華子「玄武一一」

【沍寒】ゴカン きびしくこほりとぢてさむし。左、昭四「深山窮谷、固陰一一」

【沙】サ 麻 一番シャ 砂と混用す

○すな、いさご、まさご、水中のこまかき石。○みぎは、沙のあるはま。詩、小雅「鳧鷖在一」○すなはら「一漠」○よなぐ（淘）「一汰」○する（摩）○極めて細微なる量の稱。十塵を一となし、十一を纖と爲す。○一市は地名、湖北江陵縣に在り、長江に濱し、水陸の便あり。‖沙頭。○梵語シャの音のあて字「一彌」「一門」

【沙鷗】サオウ すなはまにゐるかもめ。范仲淹文「一一翔集、錦鱗游泳」

【沙金】シャキン すなに雜りて產する黃金。元史、地理志「一一江、出一一」、故云」

【沙禽】サキン すなはまに棲む水鳥。孟浩然詩「一一近方識、浦樹遙莫レ辨」‖沙鳥。

【沙魚】サギョ きめ（鮫）魚の胎生するもの。

【沙果】サカ 林檎リンゴの異名。

【沙戶】サコ 洲の上に在る農家。蘇軾詩「時有三一一新二春蔓一」注「謂二水中

可レ田者ニ爲レ沙」

【沙虹】サコウ　鰕ヒの異名〔博物志〕

【沙鯉】サリ　ごかい、海邊の泥中に棲む細長き赤色の蟲、釣魚の餌とす。

【沙鷁】サゲキ　すさき、すなはらの海に突き出たる所、鷁は鳴ウ李中詩「魚行細浪分ニ一一」‖沙頭。

【沙洲】サシウ　すなのす、すはま。李嶠詩「岸花明ニ水樹ニ川鳥亂ニ一一」

【沙仔魚】サシギョ　臺湾語にてふか。‖鮫。

【沙參】サシン　つりがねさう、山野に自生する多年生草、秋、風鈴ツリガネソウに似たる花を著く、根を藥用とす。つりがねにんじん。

【沙壤】サジョウ　すな地。唐書、李勉傳「晉樂二胡邊ニ骨黄ニ一一」‖沙土。

【沙鞋】サセイ　鰕リの異名〔爾雅〕

【沙書】サショ　すながき、沙を以て地上に書く一種の遊戯。東京夢華錄「元宵百戲、一一地走」

【沙汰】サタ　沙汀に同じ。謝靈運詩「哀鴻鳴ニ一一、悲猿響ニ山椒ニ」

【沙汰】サタ　すなはま。王融、淨水曲「日鷹ニ一明、風泉動ニ華燭ニ一」

【沙石】サセキ　すなと、いしと。又、まさご。

【沙磧】サセキ　すなはら。杜甫詩、今君渡ニ一一」‖沙漠。

【沙蟶】サソウ　海參ナマコの異名。

【沙汰】サタ　○米を淘ユリて沙石を去る。○轉じて善と惡とをえり分ける。吳志、朱據傳「疾ニ貪汙在ニ位、欲レ一ニ一之ニ」○圍しらせ、おとづれ。又、うはさ卽ち評判の義。

【沙棠】サタウ　果樹の一種、材は船を造るべし。山海經「崑崙之丘有ニ木焉、其狀如レ棠、黄華赤實、其味如レ李而無レ核、名曰ニ一一、可ニ以禦ニ水、食レ之使ニ人不ニ溺、爲レ舟不レ沈」李白詩「木蘭之櫂ニ一舟」

【沙糖】サトウ　砂糖に同じ。甘蔗ショ等より採る沙狀の甘味料。老學庵筆記「一一、中國本無レ之、唐太宗時外國貢至、自レ此中國方有ニ一一」‖蔗糖。

【沙鹿】サロク　○すなちり。宋書、樂志「秋風揚ニ一一、寒露霑ニ衣裳ニ」○縮めて少しの意の字解參看。

【沙場】サジョウ　○すなはら。無選文「一一爲レ敵、清風當レ陣」‖沙漠。○すなはらの戰場。王翰詩「醉臥ニ一一君莫レ笑、古來征戰幾人回」

【沙蚕】サコウ　支那南方にある蟲、水中に棲み、人の影を見て沙を射る、人若しそれに中るときは、忽ち疾を作すといふ。抱朴子「周穆王南征、一蚕皆化、君子爲ニ猿猴ニ小人爲ニ一一」‖蜮・射工・水弩。

【沙中偶語】サチュウグウゴ　臣下がひそかに謀反の相談をする、漢の高祖が功臣二十餘人を封じて他の臣下に及ばざりし時、諸兵士が沙地の上に集りてひそかに語りあへるを高祖が見て張良に問ふ、張良對へて、彼等は論功行賞の事につきて不平を抱き、謀反の相談を爲しつつありといひし故事に本づく〔史、留侯世家〕

【沙箆】サヘイ　うみやなぎ。續表錄異「一一生ニ於海岸ニ春吐レ苗、其心若レ骨、白而且勁、可レ爲ニ酒鍼ニ、凡欲レ採者、須ニ輕步急拔ニ之、不レ然縮入ニ沙中ニ」

【沙汀】サテイ　みぎはのすなはら。李中詩「一一月冷帆初卸、蘆岸風多人未レ眠」

【沙泥】サデイ　沙漠に同じ。韓愈文「塡ニ死於ニ一一、吾寧樂レ之」

【沙島】サトウ　沙禽に同じ。王禹偁、竹樓記「第見ニ風帆ニ一一煙雲竹樹而已」

【沙漠】サバク　すなはら。魏志、任城王彰傳「丈夫一爲ニ衝冠ニ將ニ十萬騎ニ馳ニ一一驅ニ戎狄ニ」

【沙幕】サバク　沙漠に同じ。史記・漢書皆一一に作る。

【沙木】サボク　杉ヤマスギの異名〔本草綱目〕

【沙渋】サジュウ　沙と泥と、渋は澁滓濁泥。宋史、河渠志「元祐中于ニ新溼塘ニ置レ牌、後因ニ一一ニ廢毀」‖沙泥。

【沙礫】サレキ　すな、こいし。漢書、霍去病傳「大風起、一一撃面」

【沙園】サエン　隰氣ある沙はま。漢書、匈奴傳「胡地一一多、乏ニ水草ニ」同、四域傳「都善國、治ニ扜泥城ニ西北至ニ車師ニ千八百九十里、地一一少レ田」

【沙漏】サロウ　すなどけい、すな　少しづつ落して時間を測る器。博物志補「五輪一一、北方水善凍、壺漏不レ下、新安俗希元以ニ沙代レ水、人以爲ニ古未ニ有也」

【沙彌】シャミ　梵語、出家して修行未だ熟せざる初心の僧、比丘となるまでの稱。釋氏要覽「此始落髮後之稱謂也、梵音訛也」

【沙門】シャモン　梵語、一一那の略、勤息・止息などと譯す、僧尼をいふ。釋氏要覽「超ニ過衆著ニ名一一ニ」玄應經「一一之爲レ道、舍ニ妻子ニ一捐ニ愛欲ニ一也」‖桑門。

【沙羅雙樹】シャラソウジュ　梵語、高遠、又は堅固と譯す、夏冬共に凋まざる樹、佛說に經迦牟尼此の樹下にて涅槃に入る、二本づつ竝び生ず、故に雙樹といふ、沙一に娑に作る。

【飛沙走石】ヒサソウセキ　大風の形容。搜神記「武王時、雍州城南有ニ大樹一爲レ妖、以ニ兵圍伐ニ之、乃有レ神、一一雷電霹靂、無レ合レ得レ近」

【泚】シ　紙

なぎさ（小渚）水中止息すべき地「洲ニ一一」詩、召南「于ニ沼于ニ一一」

【沁】シン　寝

ひたす、しむ、しみこむ（浸）

【沁骨】シンコツ　骨にしみこむ。‖沁ニ肌骨ニ。

【沁腹】シンフク　しみこみたるあと。范成大詩「一一猶有淚臙脂」

【汭】 ゼイ 霽

○水のめぐり流れる内面（水内）○みづのくま「淮ー」「洛ー」書、堯典「釐降二女于嬀ー」嬀水のくま。○小水が大水に入る。○水の北。

【汰】 タイ 泰 通音ダ 汏に同じ

○よなぐ、えらびわける「沙ー」「淘ー」晉書、孫綽傳「沙之ー之、瓦礫在後」○すぐ（過）左、宣四「射王ー軷」○にごる（濁）○うるほす（潤）○あらふ（洗濯）○おごる、ほこる。分に過ぎておごる「奢ー」

【汰挍】カタ えらぶ。張衡詩「曆二君古音一ー寄二明辨一」

【汰金】タイキン 水によなげて沙金を採る。韓偓詩「厭手何妨課ー一」

【汰虐】タイギャク おごりてしへたげる。左、襄十四「ー一已甚」

【汰沙】タイサ ○よなぐ。庾肩吾詩「從令阿谷履、停レ流不ー一」○轉じて無用の物をよりわけて去る義とす。＝沙汰・淘汰。

【汰侈】シタ 身分不相應のおごり。左傳「ー一故不レ免」＝奢汰。

【沓】 タフ 合

○かさなる（重）「重ー」まじり合ふ「雜ー」「複ー」○あふ（合）「合ー」「一合」揚雄賦「天與地ー」○おかす（冒）むさぼる（貪）「貪ー」「一墨」○ーーはゆるむ（弛緩）おこたる。＝泄泄。又、語多き貌。又、疾く行く貌。○あふる。○水のよどまずして流れる貌。○ーー風は風病の名「史、倉公傳」○國くつ。＝鞜。

【沓合】タフガフ かさなり合ふ。江淹賦「山ーー而霓ノ一」＝合沓・重疊。

【沓雜】タフザフ とみあふ。枚乘文「壁鼎重堅、ーー似二軍行一」＝雜沓・紛雜。

【沓至】タフシ かさなりいたる。齊東野語「值二刺諮ーー一、自レ早至レ晡、凡視二二十餘草一」

【沓沓】タフタフ ○語多き貌。說文「語多ーー、苦二水之流一」○ゆるやかなる貌。孟、離婁「混混猶二ーー一也」○疾く行く貌。漢書、禮樂志「騎ーー」

【沓潮】タフテウ ひきしほと、みちしほと相雜り合ふ。劉禹錫詩「淫波不レ歸成二ーー一」

【泜】 チ シ 支 紙 泜とは別

○つく（著）○とまる（止）○ーーは齊へる貌。

【泜泜】シチ ととのへる貌。後漢書、蔡邕傳「ーー庶類」

【沈】 ㊀チン・ヂン 侵 ㊁シン 寢 ㊂タン 覃 又、沉に作る

㊀しづむ、水中に深く沒する。○おぼる（溺）水に身を投げて死する。○酒色にふける「ー溺」「ー湎」○とどこほる ○ふす。○くだる。くだす。○かくす、かくる（隱）○あまみづ、おり（汚泥）○ひかた、水が干て鹽分を含める地。○ふかし（深）○心がおちつきてしっかりする「深ー」「ー勇」「ー重」○九天の一。○ーー㊂は盛んなる貌。又深き貌。㊁しる。＝瀋。○姓、ー德潛は清人、唐宋八家文讀本の撰者。㊂ーー㊂は宮室の深邃なる貌。

【沈痾】チンア 久しきやまひ。晉書、樂廣傳「豁然意解、ーー頓愈」＝沈痼・痼疾。

【沈匿】チントク しづめおきへられる。陸機文「士抱二奇才絕識一、ーー擯廢、不レ得二少出一ーー」＝埋沒。

【沈憂】チンイウ 深きうれへにしづむ。張協詩「感レ物多レ所レ懷、ーー結二心曲一」

【沈鬱】チンウツ 氣分がしづみふさがる。韓維詩「端居散二幽抱一、ーー久未レ平」

【沈鬱】チンウツ ひそみかくる。荀爽、孔子贊「河圖ーー、鳳鳥幽藏」

【沈冤】チンエン 無實の罪にしづむ。張商英文「雖レ有ーー一、莫二能往愬一」

【沈遠】チンエン おちつきて考がふかし。北史、趙彥深傳「司徒器度ーー、有二宰臣之量一」＝沈遠。

【沈香】チンカウ 熱地に産する香木。又、其の木にて製せし香の名。ぢん。續漢名義集「其心堅者、置レ水則沈、故曰ーーー一」＝沈水香。

【沈悍】チンカン おちつきて氣づよし。王安石文「爲レ人ーー鷙實、不二苟爲一夷語一」＝沈毅。

【沈酣】チンカン 十分に酒にふける。宣和書譜「每レ欲レ作二圖畫一、必待ーー一之後一」＝沈醉。

【沈疑】チンギ 深くうたがひおもふ。遲疑して深慮する。江淹詩「幻情本浮說、長思多ーー一」

【沈毅】チンキ おちつきてつよし。沈著にして剛毅。魏志、明帝紀、注「明帝天姿秀出、口吃少レ言、而ーー好レ斷」唐書、樓懷恩傳「姿狀ーー、每盛服、妻子不二敢仰視一」

【沈吟】チンギン ○おもひにしづむ。古詩「ーー躑躅」＝沈思。○遲疑して決せず。後漢書、陳囂傳「得レ書、ーー十餘日」○かすかに口ずさむ。杜甫詩「物微意不レ淺、感動一ーー」

【沈金】チンキン 國漆器に畫などを毛刻ケボリにして、金粉を入れたるもの、赤地なるを金朱といひ、黑地なるを金黑といふ。＝鏤金。

【沈玉】チンギョク　川の神を祭るに玉を水にしづめる禮の又、其の玉。元稹詩「一ー在二驪泥一」

【沈魚落雁】チンギョラクガン　美人の形容。莊、齊物「毛嬙麗姫、人之所レ美也、魚見レ之深入、鳥見レ之高飛」宋之問、院紗篇「鳥驚入二松蘿一魚畏沈二荷花一」

【沈酣】チンカン　酒に醉ひてくるふ。書經「我用ー二ー于酒一」

【沈屈】チンクツ　しづみかがむ。魏書、閻元明傳「雖レー二兵伍一而操尚彌高」

【沈果】チンクワ　おちつきてたけし。唐書、李光弼傳「光弼、嚴毅ーー有二大略一」

【沈剤】チンコ　ながく痛えざるやまひ。劉楨詩「余嬰ニーー疾一窺レ身清淨漬」＝沈痼。

【沈厚】チンコウ　おちつきて、てあつし。晉書、陳騫傳「ーー有二智謀一」＝沈重・沈著。

【沈猜】チンサイ　おちつきてそねみ深し。北史、王世充傳「ーー多二詭詐一」

【沈壯】チンサウ　おもおもしくおちつきてつよし。宋史、宋綬傳「楊億稱二其文ーー淳雅一曰、晉殆不レ及也」

【沈蛯産レ龍】チンタンサン　水に浸されたる窟の中に蛙兒を生ず、人家久しく水中に沈めるにいふ、龍は蛙。晉語「襄子走二晉陽一、晉師圍而灌レ之、ーー、民無二叛意一」

【沈思】チンシ　ふかくかんがへる。南史、傅縡傳「爲レ文、未レ嘗起レ草、ーー者無二以加一焉」

【沈浄】チンジョウ　しづめるかす、おり。隋書、音樂志「房俎飾庶、山罍ーー」＝沈澱。

【沈鷙】チンシ　沈重にしてたけし。唐書、李光弼傳「ーー有レ守」

【沈舟】チンシウ　船を水中にしづめる。戰國策「積羽ーレー」

【沈愁】チンシウ　深く思にしづむ。白居易詩「莫レ遣ニーー結成レ病」

【沈質】チンシツ　おちつきて質朴。後漢書、杜密傳「密爲レ人ーー」

【沈心】チンシン　思にしづむ。靈寶七籤「ーー冥思、人莫レ知レ之」＝沈思。

【沈浸】チンシン　漸くにひたす。韓愈文「ニーー醲郁以含レ英咀レ華」＝漸漬。

【沈湮】チンイン　落ちつきて慮ふかし。後漢書、鄧禹傳「ーー有二大度一」＝沈遠。

【沈毒】チンドク　おちつきて明か。北齊書、北平王貞傳「ーー寡慾、帝常曰、此兒得二我眞毛一」

【沈冥】チンメイ　すぐれたる名香の名。蘇軾詩「ーー不レ換金鴨冷、淡雲籠レ月照二梨花一」

【沈情】チンジョウ　心をしづめる。齊書、吳苞傳「ーレー味レ古、自首彌厲」

【沈翔】チンシャウ　水にしづむと、空をかけりとぶと。轉じて魚と鳥と。拾遺記「ーー之類、自相馴擾」

【沈詳】チンシャウ　おちつきて善し。神女賦「性ーー而不レ煩」

【沈朱】チンシュ　こき赤色。四京雜記「上林苑有ニーー李一」

【沈珠】チンシュ　たまをしづむ。轉じて貴人の死にいふ。東都賦「捐二金於山一、ニーー于淵一」

【沈粋】チンスイ　おもおもしくして心純一なり。晉書、殷浩傳「殷浩體レ德ーー、識レ理淹長」

【沈酔】チンスイ　十分に酒にゑふ。晉書、華嶠傳「性嗜レ酒、率常ーー」＝酩酊・沈酣。

【沈遂】チンスイ　おちつきておくふかし。唐書、實威傳「ーー有二器局一、貫二覽羣言一」＝深沈。

【沈正】チンセイ　おちつきてただし。後漢書、任隗傳「以ニーー見レ重二于世一」

【沈斥】チンセキ　ひかた、斥は鹽氣ある地。漢書、刑法志「山川ーー」＝斥鹵。

【沈寂】チンセキ　しづか。文心雕龍「子雲ーー、志隱而味深」＝蕭寂。

【沈綫】チンセン　水雷又は電線などを水中に取りつける。

【沈船】チンセン　舟を水にしづめる、必死を期して戰ふをいふ。史、項羽紀「引レ兵渡レ河、皆ーレー、破二釜甑一燒二廬舍一」

【沈潜】チンセン　○水底にしづみかくれる。○轉じて心おちつき性やさしくして思にしづむ。書、洪範「ーー剛克、高明柔克」

【沈塞】チンソク　しづみふさがる。

【沈退】チンタイ　しづかにおちつきて妄りに進まず。晉書、東晳傳「性ーー、不レ慕二榮利一」

【沈滞】チンタイ　○しづみとどこほる、物事がはかどらず。○地位がいつまでも進まず。

【沈沈】チンチン　○夜のふけゆく貌。李白詩「月寒天清夜ーー」○茂れる貌。謝朓詩「喬柳倚ーー」○クラ宮殿の奥深き貌。史、陳涉世家」

【沈著】チンチャク　おちつく。法書苑「吳皇象善二行草書一、世稱ニーー痛快一」＝沈重。

【沈重】チンヂウ　おちつきておもおもし、深沈にして厚重。陶弘景文「賀直居レ本、ーー樹レ志」

【沈痛】チンツウ　○深く心にうれへる。謝靈運詩「誓言懷二君子一、ーー切二中腸一」＝深痛。○轉じて文詩の痛切なるものにもいふ。

【沈湎】チンメン　○溫氣のやまひ（溫疾）左、成六「有ニーー重腠之疾一」○しづみおぼれる。盧綸詩「芝木自芳香、泥沙殺ーー」○物事にふけりおぼれる。後漢書、陳元傳「今論者ニーー所習一」○困難に陷る。司馬相如、難二蜀父老一「拯二民子ーー一、奉二重輦之休德一」

【沈天】チンテン　九天中の第八。太玄經「九

天、八篇ニ――」

【沈澱】チンデン ○水中にしづみよどむ。○おり。‖沈滓シン

【沈頓】チンドン 氣沈み衰へて引きただず。

【沈南蘋】チンナンピン 名は銓、清の吳興の人、善く、花卉鳥獸を畫き、筆法精緻、賦色妍麗、其の妙を極む、享保十六年長崎奉行の聘によりて來り、十八年歸國す。沈の音シンを正しとす。

【沈年】チンネン 久しき年、ながねん。杜甫詩「多病――苦ノ無ノ健」‖多年。

【沈鈍】チンドン おちつきてさとし。晉書、涼武昭王傳「性――寬和、美ニ器度ニ」

【沈浮】チンフ ○しづむと、うくと。○轉じて榮枯盛衰の義とす。儲光羲詩「靜言念ニ終始一、安坐看ニ――ニ」‖浮沈。

【沈伏】チンプク 志を得ずして埋もれる。晉書、段灼傳「試用無ノ績、――數年」

【沈謀】チンボウ 深くはかる。忠經「夫忠者在ニ乎――謀遠、正ノ國安ノ人」

【沈木】チンボク 水にしづめる木。後漢書、西南夷傳「――化爲ノ龍」

【沈沒】チンボツ しづみ失せる。南史、沈攸之傳「夜當風浪、米船――」

【沈湎】チンメン しづみあなどる。魏志、三少帝紀「耽ニ淫內寵一、――ニ女樂ニ」

【沈眠】チンミン いびきをかきてよく眠る。李商隱詩「覺ノ芳不ノ覺醉ニ淺深一、倚レ樹――日已斜」‖熟睡。

【沈迷】チンメイ ふかくよひおぼれる。藝文類聚「――ニ――遠路ニ」

【沈酒】チンシュ 酒色におぼれしづむ。晉、泰誓「――ニ――色、敢行ニ暴虐ニ」

【沈默】チンモク おちつきて口をつぐむ。晉書、嵇康傳「――自守、無ノ所ニ言說ニ」

【沈約】シンヤク 字は休文、南北朝の時、梁の吳興武康の人、博く羣籍に通じ、善く文を屬す、梁に事へて左光祿大夫侍中少傅に至る、天監十二年卒す、約聰明人に過ぐ、墳典を好み、書を聚むること二萬餘卷、著すところ、晉書一百卷あり、また四聲譜を撰す、平上去入の四聲を分つことは約より始まる。

【沈勇】チンユウ おちつきていさましき。漢書、趙充國傳「爲ノ人――有ニ大略ニ」‖沈果。

【沈鬱】チンウツ ふさぎしづむ。屈平賦「情――而不ノ遂兮、又蔽而莫ニ之白一」‖沈屈。

【沈厄】チンヤク おぼれみだれる。晉、胤征「惟時羲和、顚ニ覆厥德一、――于酒ニ」

【沈李浮瓜】チンリフクカ 李を沈め瓜を浮べてひやす。曹丕文「浮ニ甘瓜於清泉一、沈ニ朱李於寒水一」唐書「都人伏天、於ニ風亭水榭一――」

【沈淪】チンリン しづむ、おちぶれる。杜甫詩「書飛超ニ等級一、容易失ニ――一」‖淪落・沒沒。

【沈綿】チンメン しづめたるつりいと。抱朴子「飛ニ高繳一以下ニ輕鴻一、引ニ――一以拔ニ潛鱗一」

【沈慮】チンリョ しづかにかんがへる。諸葛亮新書「――可ニ以容ニ衆力一」‖沈思。

【沈寥】チンリョウ ひっそりとしてさびし。荀勗文「寒之發舒、秋之――」‖寥沈。

【沉】

沈（前條）に同じ。

【沖】チュウ 東

○わきかうごく（湧搖）○むなし（虛）「虛ー」○やはらぐ、やはらか（和）○ふかし（深）○ひひる、高くとびあがる（飛而直上）史、滑稽傳「一飛ー天」○いとけなし（幼小）「幼ー」わらんべ（童）○ー―はこみ（盛）の形容。又垂れ飾れる貌。○圖おき、湖海などの岸より遠く隔りたる水面。

【沖挹】チュウユウ やはらぎ、へりくだる。晉書、恭帝紀「雖倘ー―」‖謙退。

【沖氣】チュウキ 沖和之氣に同じ。老子「萬物負ニ陰而抱ニ陽一、ー――以爲ニ和一」

【沖虛】チュウキョ 心むなし。‖虛沖。

【沖虛眞經】チュウキョシンケイ 列子の異稱。

【沖人】チュウジン をさなきもの。書、盤庚「予ー――」傳「沖、童也」

【沖養】チュウヨウ 心をむなしくしてへりくだる。左傳、注「謙道ー――、故飛不ニ遠翔一」‖沖謙・沖退。

【沖沖】チュウチュウ ○垂れ飾る貌。詩、小雅「鑑革ー――」○物の聲。詩、鴻鳳「聲ニ聞于ー――一」

【沖天】チュウテン 高く天に飛びあがる。史、滑稽傳「此鳥不ノ飛則已、一飛ー――レ」

【沖奧】チュウオウ おく深くしてしづか。‖沖寂。

【沖和】チュウワ ○おだやかにやはらぐ。晉書、阮瞻傳「神氣ー――」○調和せる天地の氣。夏侯湛、東方朔畫贊「呼ニ吸ー――一、吐ニ故納ニ新一」‖沖氣。

【沖和之氣】チュウワノキ 天地間の調和せる元氣。‖沖氣。

【沌】

㊀トン 阮 ㊁トン 元

㊀ふさがる、開通せず。○くらし。○渾ーコンは元氣の未だ判だる（柳宗元、箕子碑）‖沖損・沖退。

【沖齡】チュウレイ いとけなし。梁簡文帝文「吾ー――嬴ニ龍一」‖幼稚。

【沖寂】チュウセキ むなしくしづか。孔安國文「道本ー――、非ニ有ニ名言一」‖沖寞。

【沖損】チュウソン 心をむなしくしてへりくだる、損は卑下。顏氏家訓「謙虛ー――」‖沖謙。

【沖退】チュウタイ 心をむなしくしてへりくだる。左傳、注「謙道ー――、故飛不ニ遠翔一」‖沖謙・沖損。

【沖沖】チュウチュウ ○垂れ飾る貌。詩、小雅「鑑革ー――」○物の聲。詩、鴻鳳「聲ニ聞于ー――一」

【沖天】チュウテン 高く天に飛びあがる。史、滑稽傳「此鳥不ノ飛則已、一飛ー――レ」

【沖奧】チュウオウ おく深くしてしづか。‖沖寂。

【沖和】チュウワ ○おだやかにやはらぐ。晉書、阮瞻傳「神氣ー――」○調和せる天地の氣。夏侯湛、東方朔畫贊「呼ニ吸ー――一、吐ニ故納ニ新一」‖沖氣。

【沖和之氣】チュウワノキ 天地間の調和せる元氣。‖沖氣。

かれざる貌。又、自然に喩ふ。㊁——は水の勢の形容。又ぐるぐるめぐる（轉）㊂おろか（愚）＝惇。

【沌沌】トン　○水勢の相隨ふ貌。枚乘、七發「——混混、狀如二奔馬一」○ぐるぐるめぐる貌。孫子、兵勢「渾渾——、形圓而不レ可レ敗」○おろかにして分別する所なき貌。老子「我愚人之心也哉——兮」

【沛】ハイ　泰

○さは、草が水中に生ずる「——澤」○行く貌。楚辭、湘君「——吾乘二兮桂舟一」○盛大なる貌「——乎」○水の流るる貌。○餘裕ある貌。○雨の盛んにふる貌。○多き貌。○はた（旆）○はやし、すみやか（疾）○たふる（偃仆）ぬく（拔）「顚——」○一種の竹「——竹」○地名、漢の高祖の鄉里、今の江蘇省一縣。

【沛艾】ハイガイ　○姿容俊偉なる貌、高大なる貌。司馬相如、大人賦「——走レ霧」○はねくるふ馬。駿馬の轉音。張衡、東京賦「奇騏驥而——」＝沛芥。

【沛乎】ハイコ　盛大なる貌。文天祥、正氣歌「——塞二蒼溟一」

【沛公】ハイコウ　漢高祖の未だ帝位に登ざる前の稱、高祖姓は劉、名は邦、兵を沛に起す、衆共に立てて——と爲す。

【沛然】ハイゼン　○大いなる貌。漢書、五行志「——自大」○雨の盛んにふる貌。孟、梁惠王「——下レ雨」○轉じて惠のあつきにいふ。舊唐書、段秀傳「發二——之恩一」○感動する貌。漢書、司馬相如傳「——改レ容」

【沛澤】ハイタク　さは、草の水に生ずる處。孟、滕文公「園囿汙池——多、而禽獸至」

【沛竹】ハイチク　竹の一種。神異經「南方荒中有二——一、（中略）可三以爲二大船一」

【沆】ハウ　陽

○ならびたるふね（併船）○滂（水部十畫）に同じ。

【沆沆】ハウハウ　盛んに流るる貌。荀、高國「——如二河海一」

【汐】㊀ブツ　㊁ビツ　質　物

㊀ふかくかすか（深微）なる貌。㊁ひそみかくれる（潛藏）

【汐滴】イツテキ　水の流るる貌。史、司馬相如傳「——漫衍」

【汐惚】ブツコツ　深微なる貌。實誼、鵩鳥賦「——無レ窮兮」＝汐汐惚惚。

【汾】フン　ブン　文

川の名。山西省に在り、黃河に注ぐ。

【汾陽王】フンヤウワウ　唐の郭子儀をいふ、功を以て爵——を封ぜらる。汾陽は山西省の地名。

【汶】㊀ブン・モン　㊁ビン・ミン　㊂ボン・モン　元　眞　冏

㊀川の名、山東省に在り。論、公冶長「在二——上一矣」㊁四川省の山の名、岷に通ず。㊂けがれ、はぢ、はづかしめ（汗辱）

【汶汶】ボンボン　けがれはづかしめ。一說、暗くして明かならざる貌。屈平、漁父辭「安能以二身之察察一受二物之——一乎」

【汨】㊀ベキ　㊁コツ　月　錫

㊀川の名、羅水と合して一羅といふ。㊁をさむ（治）○みだる、みだす（亂）○しづむ（沒）○通ずる。○波浪の聲。○涌く波。

【汨羅】ベキラ　屈原の沈みたる川の名。一統志「——江名、在二湘陰縣北十里一、源出二羅章一、流經二湘陰一分二二水一、一南流曰二汨水一、一經二古羅城一曰二羅水一、至二屈潭一復合、故曰二——一、西流入レ湘」

【汨活】コツクワツ　水流の遲かなる貌。馬融、笛賦「——澗瀨」＝澎湃。

【汨汨】コツコツ　○波の聲。木華、海賦「滾滾——」○沈みはてる貌。埋沒する。林逋詩「一擧等閒世——」

【汨沒】コツボツ　しづみかくれる貌。杜甫詩「聲名從レ此大、——一朝伸」蘇軾、上二張密樞大閤一書「悉遣——、故決然捨去」

【汴】ヘン・ベン　ハン・バン　霰　襇

もと汳に作る

○川の名、泗川の支流。○——梁は都の名、今の河南省開封府。○——省は河南省の簡稱。

【汴京】ベンケイ　北宋の都、今の開封府。宋无詩「北人偏悵望、曾見二——一來」＝汴梁。

【汴洛】ベンラク　汴は河南省開封府。洛は洛陽「——鐵路」

【沔】ベン　メン　銑

汎に作るは非

○川の名、漢水の揚子江に入る處を——口といふ、卽ち今の湖北の漢口。○みなぎる（水流滿）詩、小雅「——彼流水」○おほる、湎に通ず。

【沐】ボク　モク　屋

○かみあらふ（濯レ髮）○漢代、

官吏に十日毎に家に歸りて沐浴（ユアビスス）せしむ、よりて休暇の義とす「休ー」「暇ー」沈約詩「晩ー臥"郊園"」やすみ、ひま。○うるほふ（潤澤）又、其のめぐみを受ける「ー恩」

【沐雨櫛風】（モクウシツフウ）雨（部首八畫）の條の——を見よ。

【沐恩】（モクオン）めぐみにうるほふ。許敬宗詩「ー"レ"聖改」紫、將"レ"何謝"二"夏成"一"」＝浴恩・霑恩・露恩。

【沐猴】（モクコウ）毛を洗ひたる如くあせをかく。新論「士未"レ"戰而震慄、馬未"レ"馳而ー"レ"」

【沐猴而冠】（モクコウジクワン）さるがかんむりをかぶる、衣冠のみ美なれども、心は操念にして人にあらざるに喩ふ、沐猴は獼猴（びこう）の轉音。史、項羽紀「說者曰、人言、楚人——耳、果然」

【沐浴】（モクヨク）かみあらひ、ゆあみする。澡はあらふ。＝沐浴。

【沐日】（モクジツ）休日、休沐の日。漢書、孔光傳「——歸休、兄弟妻子雜語、終不"レ"及"二"朝省政事"一"」＝休沐日。

【沐櫛】（モクシツ）髮あらひ、くしけづる。唐書、禮樂志「乃ー——、東"レ"髮用"レ"組」

【沐洗】（モクセン）かみあらひ、ゆあみす。水經、注「溫水冬夏常熱、其源可"レ"以"二"雞豚"一"下湯ー——能治"二"宿疾"一"」

【沐髮】（モクハツ）あらひがみ。又、髮を洗ふ。

【沒】ボツ 月

○しづむ（沈）○おぼれる（溺）「覆ー」「沈ー」○をはる（終）つく、つくす（盡）論、鄉黨「ー」階趨、翼如也」○つきてなくなる。○入論、陽貨「舊穀既ー」○すぐ、すごす（過）○ほろぶ。○むさぼる（貪）○かくれる、かくす。○政府が人民の物をとりあげる「ー收」圖○なし（無）「ー有」○死ぬ。＝歿。

同訓異字 沒・無・无・亡等の別は無（火部八畫）の條を見よ。

【沒意義】（イギ）其の理由が無し。＝無意味。

【沒交涉】（ボツカウセフ）かかはりが無し。傳燈錄＝無關係。

【沒葬】（ボツソウ）やがらを埋める。高啓詩「邊城雪埋深ーレー」

【沒骨】（ボツコツ）畫法の一、輪郭ち骨をあらはさずして描く。彩墨畫譜「徐熙之子、乃效"二"諸黃之格"一"、更不"レ"用"二"墨筆"一"、直以"二"粉色"一"圖"レ"之、謂"二"之ー——圖"一"」

【沒造化】（ボツザウクワ）圖不運、不仕合。

【沒齒】（ボツシ）○いっしょうがい、沒は終、齒は年齡。論、憲問「ー"レ"無"二"怨言"一"」＝沒世、終身。○男子八歲、女子七歲をいふ、齒のぬけかはる年（柳宗元、童區寄傳）＝毀齒。

【沒收】（ボツシウ）人民の物を政府に取り上げる。＝沒入。

【沒膝】（ボツシツ）ひざをうづめる。蘇軾詩「汪汪春泥已ー"レ"」

【沒字碑】（ボツジヒ）文字のなきいしぶみ、沒は無。文字を知らざる者を嘲りていふ、あきめくら。五代史、任圖傳「任圖曰、天下皆知"レ"猶"二"不"レ"識"二"文字"一"而猶有"二"儀表"一"號"二"——"一"」＝無字碑。

【沒人】（ボツジン）水に入るを業とする者、あま、檣水夫（莊、達生）蘇軾、日喩「南方多ニーー"一"」＝白水郎。

【沒常識】（ボツジヤウシキ）普通の知識なし、常識なし。＝非常識。

【沒趣味】（ボツシユミ）物の面白みがない。＝無趣味。

【沒書】（ボツシヨ）新聞・雜誌に寄せたる原稿が掲載せられずに仕舞ふ。

【沒世】（ボツセイ）○いっしょうがい、沒は終。論、衞靈公「子曰、君子疾"二"ー"レ"、而名不"レ"稱焉"一"」＝沒齒。○永久。大學「此以ー——不"レ"忘也」

【沒葬】（ボツサウ）葬儀を沒收して平民とする。

【沒戲】（ボツギ）やにりをうづめる。史、李廣傳「見"二"草中石"一"以爲"レ"虎而射"レ"之、中"レ"石ー"レ"、沒"レ"之石也」

【沒地】（ボツチ）地に沒す、死する。左傳「若莫"レ"人得"レ"復"二"子地"一"」江淹文「爾"レ"志ー"レ"、長懷無"レ"已」

【沒溺】（ボツデキ）水におぼれる。說苑「不"レ"臨"二"子深淵"一"、何以知"二"ー——之患"一"」

【沒頭】（ボツトウ）くびをつきこむ、專ら其の事に熱中する。

【沒入】（ボツニフ）○罪ある人民の物を官府に取り上げる。漢書、食貨志「私鑄"二"鑛器"一"、鑄者、鉗"二"左趾"一"、"二"其器物"一"」＝沒收。○古、罪人を收めて政府の奴隸として使役する。漢書、刑法志「ー——爲"二"官婢"一"」

【沒年】（ボツネン）死せし年齡「ー——不"レ"詳」＝行年。

【沒風流】（ボツフウリウ）みやびなるおもむきがない、ふうりうでない。＝無風流・殺風景。

【沒分曉】（ボツブンケウ）わきまへさとりが乏し、無分別（ムフンベツ）——漢」

【沒沒】（ボツボツ）○しづみ淪れる。左、襄二四「晉國壞、則子之家壞、何ー——也」＝沈淪。○うづもれかくれる。法書要錄「書之爲"レ"用、簡"二"於竹帛"一"、千載不"レ"朽、智愚ニーー而無"レ"聞」＝埋沒。

【沒沒求活】（ボツボツキウクワツ）爲すことなくして生きながらへんことを欲す。南史、王僧辯傳「大丈夫寧當"二"玉碎"一"、

宝可二以沒一求一活一哉」

【沒落】ボツラク ○ほろぶ。滅亡。世家紀「一一者、復二勝田一粗」○おちいる。唐律釋文「一一、謂三中華人一二一蕃中一」

【沒利】ボツリ 利益をうしなふ。戰國策「一一二于前一而易二患于後一也」‖失利。

【沒了】ボツレウ 無くなってしまふ。水滸傳、楔子「驚二得下官一魂魄都一一」

【沃】ヨク 沃

○そそぐ(灌漑)○水をかけて手を洗ふ。○人の心につぎこみて教へ導く。書、說命「一朕心」○盛んなり。○やはらか、木の葉がわかわかしく(柔)詩、小雅「其葉一一有一一」○土地肥えて穀物よくみのる。又、其の地。○圖一度一樂品の名、英語の音譯。

【沃衍】ヨクエン 沃・肥・腴の別は肥(肉部四畫)の條を見よ。

○ヨク沃・注・澆・灌・溉・酒・瀉の別は注(水部五畫)の條を見よ。

【沃衍】ヨクエン 土地がこえて平か。肥沃にして平坦。詩、邶風、谷風、疏「平地一一之土、宜レ生二草木一」

【沃盥】ヨククワン 水をそそぎて手を洗ふ。

【沃灌】ヨククワン そそぐ。漢書、王莽傳「一一雪除修減無レ餘矣」

【沃日】ヨクジツ 日にそそぐ、大海の形容。木華、海賦「湯レ谷一レ一」

【沃壤】ヨクジヤウ こえたるとち。潘岳賦「耕二重拳之一一一兮、繪二黍稷之餘稅一」‖沃土・沃地。

【沃若】ヨクジヤク ○あざやかにしてつやある貌。若は助語。詩、小雅「我馬維騏、六轡一一」○みづみづしくしてつやあり。詩經、衞風「其葉一一」

【沃饒】ヨクジヤウ こえて産物多し。王粲論「軍中多二一一一人馬皆溢肥」

【沃焦】ヨクセウ 地のこえたると、やせたると。宋孝武帝、報在牲「一一異レ壤、舒慢殊レ時」‖肥瘠。

【沃注】ヨクチウ さかづきをそそぎあらふ。

【沃洗】ヨクセン そそぎあらふ。梅堯臣詩「田野豈指法、蒲葉思二一一一」

【沃澤】ヨクタク こえたるはたけ、肥沃なる澤。潘岳、西征賦「陵二西園一而降眺、召清分一一一」

【沃田】ヨクデン 肥えたる田地。潘岳「其の壺石一篇二一一一」‖肥田。

【沃土】ヨクド こえたる土地。管子、一一之民、不材、淫也」‖沃地・沃壤。

【沃美】ヨクビ 土こえてよし。後漢書、西南夷傳「土地一一、宜二五穀蠶桑一」

【沃民】ヨクミン 沃土に住むたみ。山海經「西有二沃之國一一一是謂一」

【沃滅】ヨクメツ 火に水をそそぎて消す。漢書、外戚傳「更卒以レ水一一」

【沃野千里】ヨクヤセンリ 肥えたる原野が廣く千里もつづく。史、留侯世家「夫關中左二殽函一、右二隴蜀一、一一」

【沃腴】ヨクユ 土地こゆ。戰國策、土地一一一」‖肥腴・肥沃。

【沃沃】ヨクヨク きかんにしてうつくしき貌。詩、衞風「其葉沃若」疏「沃若、一一然盛也」

【沃袋】ヨクラン 田地をこやすよきながあめ。梅堯臣詩「赤地有二焦土一、烈野無一一一」

【沃化銀】ヨクカギン 沃素と銀との化合物、寫眞術に用ふ。

【沃素】ヨクソ 臭素に似たる一元素。‖沃度

【沃度加里】ヨクドカリ 沃度とカリウムとの化合物、醫術又は寫眞術に用ふ。‖沃剝・沃化カリウム。

【沃度丁幾】ヨクドチンキ 沃度のアルコール溶液。防腐劑・解凝劑として醫療に用ふ。英語ヨヂユームのあて字。

【沃度仿謨】ヨクドホルム 沃度より製せし黃色の結晶粉末。防腐劑に用ふ。

【汪】ワウ 陽

○水がふかくひろし(深廣)○大いなる貌。○濁りたる池。

【汪瀗】ワウエン 字は、苔文、鈍翁と號す、清の長洲の人、晩に蘇峯に居り、因りて自ら號とす、順治十二年の進士、康熙十八年鴻博に舉げられ、編修を授けらる、詩は王新城と名を齊うす、時に汪王と稱す、文は歸史に根柢し、清朝三家の一たり、康熙二十二年卒す、年六十五。

【汪漾】ワウエウ 廣く深き貌。司馬相如、蘇二蜀父老一「滋恩一一」

【汪虎榮】ワウクワエイ 汪瀗を見よ。

【汪然】ワウゼン ○淚の盛んに流るる貌。柳宗元、捕蛇者說「一一出レ涕曰、君將二哀而生一之乎」○廣く深き貌の形容、南、徽說「一一平靜、寂然淸澄」

【汪茫】ワウバウ 水の廣大なる貌。唐玄、杜甫傳贊「浩瀚一一、千葉萬狀」‖洋洋。

【汪洋】ワウヤウ 大いにして廣き貌。蘇軾詩「新秋忽已晴、九陌傷一一」

【汪漾】ワウヤウ 淚の多き貌。陳子昂詩「可レ望不可レ即、血淚墮一一」‖汪浪。

【汪浪】ワウラウ 淚のながき貌。柳宗元賦「魂悅惘若二有亡一」兮、淚一一隕レ軾」‖汪洋。

【汪汪】ワウワウ ○水の廣く深き貌。○轉じて度量の廣きに嚙ふ。後漢書、黃憲傳「叔度、一一若二千頃之陂一」

【泱】五 畫 ㊀アウ 陽 ㊁エイ 庚

㊀一は水がふかくひろし、又、大いなり(宏大)㊁雲の起る貌。㊂一漭は廣大なる貌。馮衍賦「覽二河華之一一一漭」

【泱漭】オウバウ　○水の深くして廣き貌。詩、小雅「維水一一」○流れる貌。杜牧詩「湖漢春盡碧一一」○安大なる貌。左、襄二九「一一乎大風」○行雲の貌。潘岳、射雉賦「天一一以垂雲」‖莫莫。

【泱鬱】オウウツ　盛んなる貌。漢書、息夫躬傳「玄象一一、將二安歸一今」

【油】イウ　ユ　尤

○あぶら(膏)○一一は和ぎ謹める貌。又、不黍などのつやある貌。又、從容として迫らざる貌。又、徐に流れる貌。○雲の盛んに起る貌。

【油衣】イウ　かっぱの防雨具、禹貢紀「帛織レ油遇レ雨、先布進二一一一」‖桐油。

【油油】イウ　○徐に流れる貌。楚辭、惜賢「一一湘江長流汨兮」○和み謹める貌。唐、王維「三韓而一一以退」○從容として迫らざる貌。孟、公孫丑「一一然與之偕」‖浩浩。○不黍の光悦ある貌。東晉、補亡詩「麥草一一」

【油雲】イウ　あまぐも。劉孝綽詩「擬飲花上鮮、一一葉裏盛」

【油然】イウ　あぶらじみて生ずるさま。雲仙雜記「墨紋如二履皮一、磨之有二一一者一、一兩可レ染二三萬筆一」

【油塗】イウ　油をぬりたるまくにして、雨潤を防ぐもの。程史「雖二風雨一亦張二一一一布レ沙除レ地」‖油幕。

【油煙】イウエン　油が燃えて生ずるすすけむり、それにて墨を作る。東坡集「以二一一墨二丸一見レ餉」

【油繒】イウサン　油紙にて張りし傘、あまがさ「宋史、儀衛志」

【油紙】イウ　○あぶらがみ「瑯邪代酔編」○あぶらと、かみと。宋史、食貨志「一一薪炭」

【油然】ゼンイウ　○遒まざる貌。家語「一一若レ將二可レ越而終不二可及一」○雲の興る貌。孟、梁惠王「天一一作レ雲」

【油遊】イウユウ　貴人の春日觀花の遊をいふ。開天遺事「長安貴游子弟、每二至春時一、遊宴供二帳于花間中一、謂二行樂以三油幕一、或遇二陰雨一、以レ幕覆之、謂二敞面錦一」

【油幌】イウクワン　油をぬりたるまく。唐書、馬璘傳「璘在レ軍、守者寢以二一一一」

【油桃】イウタウ　桃の一種、ずばいもも。

【油單】ユタン　器物を蔽ふに用ふる布。法苑珠林「買二取一領氈及一一一」

【油斷】ユダン　氣をゆるす。漢樂經「善男子、譬如下世間有二諸大衆一、滿二三十五里一、王勅二一臣一持二一油鉢一、經二由中一過、莫レ令二頃覆一、若棄二一滴一當レ斷二汝命一、復遣二一人一捉レ刀在レ後、隨而怖レ之、臣受二王敎一、盡レ心堅持經歷上」

【油團】ユン　圖油紙製の座蒲團。ヲヅ

殿物。シキ

【油綸】エイリン　圖亞麻仁油にてねりたる絲具を以てえがきし西洋畫。

【油桐】イウトウ　圖木の名、其の油を絞りて桐油を取り、傘・合羽などに塗る。‖虞子桐。

【油鼠】イウソ　圖○家の臭所等にわく一種の小昆蟲、全身油色にして、悪臭を放つ。‖蝨蟲。○俗に附著ありて妨となる者を罵りていふ。蚜アブラムシが植物の葉の養液を吸ふが故。

【決】㊀イツ　㊁テツ　質　屑

㊀あふる、こぼれる。下溢。○みだら(淫)左、隱三「驕奢淫一」‖佚。○ほしいまま(放恣)㊁みだら、ほしいまま「一蕩」

【決陽】イツ　豹頭馬尾の獸。一說に、神の名。莊、達生「四北方之下者、聞一一鬼レ之」

【泄】㊀エイ　㊁セツ　霽　屑

㊀洩に通ず　㊁ちる(散)○一一はゆるやかなる貌。又、人衆き貌。㊁のぞきさる(除去)おし出す「排一」「歐一」○もる、もらす(漏洩)内部の事情が外部に露顯する「漏一」○おこる、おこす、あぐ、あがる(發越)○あなどる(嫚)「慢一」‖渫。

【泄泄】エイ　○舒徐ジョなる貌。一解に、鳥が羽を鼓する貌。はばたき。詩、邶風「雄雉于飛、一一其羽」○人衆き貌。詩、魏風「桑者一一今」○怠緩悦豫の貌。ゆるやか。孟、離婁「一一猶二衆容一也」

【泄散】セツ　もらしちらす。蔡子「夏文「塘路塵蕪、湯源一一」

【泄洩】セツエイ　笑貌ケイの異名。

【泄漏】セツロウ　いきどほりをもらす。徐彦伯賦「張二虎牙一以一一」

【泄利】セツリ　次條に同じ。俚名「一一膏」其出血泄而利一也」

【泄瀉】セツ　腹くだし。北齊書、司馬消之傳「患二一一一、積年不レ起」‖泄利。

【泄露】セツロ　もれあらはれる。荷載、進二嘉禾一表「上玄與レ之獻酬、后土爲レ之一一」

【泳】エイ　敬

およぐ、およぎ、水中をもぐりおよぐ、水中を潛行する、泗は水上を浮びおよぐ「游一」「水一」

【泬】エツ　ケツ　月　月

大水の貌。

【泬漻】エツロク　水勢の激湧する貌。郭璞、江賦「遒渡一一」

【沿】エン　先　沿は俗字

○そふ、よる、水流又は道路によりしたがふ。書、禹貢、傳「順流而下也」○したがひよる（因）從來の物事に因る。禮、樂記「故明王以相一也」

同訓異義語　沿・循・副・貳・傍の別は添（水部八畫）の條を見よ。

【沿改】エンカイ　沿革に同じ。唐書、韋叔夏傳「凡所二一一一一皆叔夏等所二裁酌一」

【沿海】エンカイ　○海によりそふ。國語「一一一濟レ淮、以絕二吳路一」○うみべ「一一一州」

【沿革】エンカク　うつりかはり、沿は從來のままによりしたがふ、革はさっぱりと改めうつる。柳宗元、陳京行狀「禮家一一」‖沿改・因革。

【沿岸】エンガン　きしべ、岸によりそふ。沈佺期詩「淇上風日好、綺紛一一多」

【沿習】エンシフ　昔よりのならはし、因襲する習慣。避暑錄話「五方風俗一一、與三其家法所二從來一各異」

【沿襲】エンシフ　ふるきしきたりにより從よ、襲は因、舊慣に因る。禮、樂記「五帝殊レ時不レ相二沿樂一三王異レ世不レ相二襲禮一」唐、承華篇「百代一一」‖因襲。

【沿涉】エンセフ　流にしたがひわたる。裴通詩「瀟灑臨二極浦一一一白南津」

【沿道】エンダウ　みちばた。

【沿泛】エンハン　ながれに從ひて舟を浮べる。高適詩「一一多レ所レ宜」

【河】カ　ガ　歌

○川の名、黃河の稱、西域の崑崙山に發源し、甘肅・陝西・山西・河南を貫流し山東を經、渤海に注ぐ、其の水黃濁、故に黃一と名づく。○かは（川）「運一」「名山大一」○あまのがは（天漢）「銀一」

【河域】カヰキ　河系を見よ。‖流域。

【河雲】カウン　あまのがは。盧綸詩「一一凝不レ流」‖天漢・銀河・雲漢。

【濟レ河焚レ舟】サイカフンシウ　敵を攻むるに當り、河を渡りて後、舟を燒く、必死を示す義。左、文三「秦伯伐レ晉、渡レ河焚レ舟、取二王官一、反レ鄗」王官・鄗は並に晉の地名。

【河海】カカイ　○黃河と海と。史、李斯傳「太山不レ一一細流一故能就二其深一」○かはと海と。禮、學記「三王之祭レ川也、皆先レ河而後レ海」

【若レ撮二於河海一】ジャクカツヲカカイニ　物の盡くることなきに喩ふ。管子「此所謂用一一」

【河海不レ擇二細流一】カカイフタクサイリウニ　度量廣くして衆を容るるに喩ふ。河海を見よ。

【河鼓】カコ　黃河と五穀と。文天祥、正氣歌「下則爲二一一一上則爲二日星一」

【河干】カカン　○黃河のほとり、干は崖。詩經「坎坎伐レ檀兮、寘二之河之干一兮」○かはのほとり。李商隱詩「車馬逶一一一」

【河岸】カガン　○かはぎし。孟郊詩「策レ馬黃一一」○關カ川のふち。又魚市場「魚一一」

【河漢】カカン　○黃河と漢水と。魏志、明帝紀「九月大雨、伊洛一一水溢」○あまのがは。宋之問詩「八月涼風天氣晶、萬里無レ雲一一明」‖銀漢。

【河漢之言】カカンノゲン　とりとめなきことば、河漢はあまのがは、遠く天空にあるが故に喩ふ。莊、逍遙遊「吾驚二怖其言一猶二河漢而無一極也」

【河魚】カギョ　かはうを、まみづに棲む魚。史、秦始皇紀「一一大上」‖淡水魚。

【河魚之疾】カギョノシツ　腹中のやまひ。左、宣十二「申叔展曰、有二麥麹一乎、曰、無、有二山鞠窮一乎、曰、無、河魚腹疾奈何」

【河系】カケイ　川の本流と支流とを含む全體の稱、其の地域を河域といふ。

【河傾】カケイ　河の水をうつしかたぶく。大雨にいふ。管幹別傳「嵐臭大雨一一」元稹詩「安得天上雨、奔渾河海傾」

【河源】カゲン　○黃河のみなもと（史、大宛傳贊）○河のみなもと。‖水源。

【河鼓】カコ　牽牛星の異名。權德輿詩「鵲橋臨二片月一一一地二輕雲一」

【河濟】カサイ　かはのほとり、濟は岸上の平地、水を去ること稍遠きもの。詩、王風「在二河之濟一」

【河口】カコウ　川の海に注ぐところ、かはぐち。孟郊詩「帆影明二一一一」

【河朔】カサク　黃河の北。書、泰誓「王次二于一一一」‖河北。

【河朔之飲】カサクノイン　避暑のさかもり。初學記「光祿大夫劉松北徼二寶紹軍一與二紹子弟一日共宴飲、常以二三伏際一晝夜酣飲、極醉以避二一時暑一、故河朔有二避暑之飲一」

【河蝨】カシツ　圓蛙の一種、多く山間の溪流に棲み、美音を出して鳴く。‖石雞。

【河心】カシン　川のながれの中央、川の中流。

【河身】カシン　かはすぢの水のある部分。

【河上】カジャウ　○かはのほとり。かみ。○かはのうへ。○かはかみ。○かはのほとり。かはばた。‖河邊・河畔・河濱。

【河潤】カジュン　めぐみ、おかげ。莊、列禦寇「一一九里、澤及三族一」

【俟二河清一】マツカセイ　黃河は水常に濁り、千歲に一度清むといふ、之を俟つとは空漠なる望の譬。左、襄八「周詩有レ之、曰、俟二河之清一、人壽幾何」

【河清海晏】カセイカイアン　太平の世をいふ。鄭綮賦「一一、時和歲豐」

【河宗】カソウ　かはの神。穆天子傳「得二白鼉支骼一、以祭二一一一」‖河伯。

【河圖】カト　伏羲の世、黃河より現れた

りといふ龍馬（丈八尺以上ある馬）の背に負ひたる圖にて、易の八卦の源となりしもの。易、繫辭「河出レ圖、洛出レ書、聖人則レ之」

【河不レ出レ圖】カフトイヅルヲ　聖代には黄河より河圖を出したるが今は亂世にてかかる奇瑞なしとの歎息、孔子の言（論、子罕）

【河圖洛書】カトラクショ　洛書は禹の時に洛水より出たる神龜の背にありし文にて、洪範の基源となりしもの。前條參看。

【河童】カドウ　水中の怪物、かっぱ。形人に類し其の聲小兒の泣聲に似るといふ。日水虎。

【河東三鳳】カトウノサンポウ　人の兄弟のそろひて賢きをほめていふ。唐書、薛收傳「元敬與二收及族兄德音一齊レ名、世稱二——一」

【河東獅子吼】カトウノシシコウ　人の妻の嫉悍（ヒン）なるをいふ、陳慥（字は季常）の妻、河東の柳氏性嚴悍にして姉なり、客至る時、或は詬罵座を發す、季常佛を好み、常に參禪す、東坡故に禪語を借り詩を作りて之を嘲る、詩中に「龍丘居士亦可レ憐、談レ空說レ有夜不レ眠、忽聞——、拄杖落レ手心忙然」の句あるに本づく。

【河東道】カトウダウ　地名。唐書、地理志「——、蓋古冀州之域、漢河東・太原・上黨・西河・雁門・代郡及鉅鹿・常山・趙國・廣平國之地」

【河豚】カトン　ふぐ、海魚の一、體扁長、鱗なく、頭は嚢狀をなす、肉は美味なれども肝臟と卵巢とに劇毒を含む。蘇軾詩「蓬蒿滿地蘆芽短、正是——欲レ上時」日河魨・豚魚・鮐。

【河南】カナン　地名。爾雅「——曰二豫州一」

【河南道】カナンダウ　地名。唐書、地理志「——、蓋古、豫・兗・青・徐之域、涉河南・弘農・潁川・汝南・陳留・沛・泰山・濟陰・濟南・東萊・齊山陽・東海・琅邪・北海・千乘・東郡及梁楚魯東平・城陽・淮陽・當川・高密・泗水等國、暨平原・渤海・九江之境」

【河馬】カバ　アフリカ南部に產する大獸、體長一丈餘、體重六百貫以上、其は水に潛み、夜出でて作物の害をなす。

【河貝子】カバイシ　蛭（ヒル）の異名。

【河伯】カハク　水の神。史、滑稽傳「爲二——一娶レ婦」抱朴子「——是率陰人、以二八月上庚日一渡レ河溺死、天帝補署爲二——一」日河宗。

【河濱】カヒン　黄河のきしっ史、五帝紀「舜耕二歷山一、漁二雷澤一、陶二——一、器皆不レ苦窳」

【河羨夫】カセンフ　惡姑（ヲバ）の異名。

【河北道】カホクダウ　地名。唐書、地理志「——、古幽冀二州之境、漢河內、魏渤海・清河・平原・常山・上谷・涿・漁陽・右北平・遼西・眞定・中山・信都・河間・廣陽等郡國、又冬二有東郡・河東・上黨・鉅鹿之地」

【河目】カモク　目が蓋だしくくぼみて上下のまぶたが平かにならず。家語「或謂二子貢一曰、東門外有二一人一焉、——隆顙」

【河洛】カラク　○河圖洛書の略語。○黄河と洛水と。

【河柳】カリウ　ぎょりう（御柳）爾雅「檉、——」注「今河旁赤莖小楊」

【河梁】カリョウ　かはにかけたるはし。日河橋。

【河梁之詩】カリョウノシ　李陵と蘇武とが匈奴にて別れる時、李陵の作りし五言の詩の初句に「攜レ手上二河梁一」とあり、轉じて、送別の詩の意に用ふ（漢書、李陵傳）

【河梁別】カリョウベツ　○人を送りて橋の上まで行きてわかれる。○轉じてわかれ、離別の義とす、前條參看。

【河靈】カレイ　かはの神。揚雄、河東賦、注「——巨靈也」日河伯。

【河漏】カロウ　そば。王禎農書「北方多磨二蕎麥一爲レ麵、或作二湯餅一、謂二之——一、以供二常食一、細滑如レ粉」

【河骨】カコツ　圖水草の一、葉は狹心臟形、花は黄色五瓣、觀賞用とす。日川骨・萍蓬草（本草）

【泊】ハク　㊀カン　㊁カン　感　覃

㊀こめのしる（米汁）しろみづ、こめかしみづ（潘）○にる（煮）荷、大略「食レ子食レ魚、有レ餘曰レ之」㊁ー淡はみつ（滿）

【泣】キフ　緝

○なく、聲を立てずに涕（ナミダ）を出す。一解に聲と涙と俱に下るをいふ。○なみだ「垂ー」

同訓異義　ク泣・鳴・啼・嘵・哭・哮の別は嘯（嘯部三畫）の條を見よ。

【泣感】キフカン　感じてなく。范仲淹文「嬖使異日授二美衣一、對二盛饌一尚當ア二ー一風樹之思一無レ窮」日感泣。

【泣諫】キフカン　なきていさむ。漢書、文三王傳「梁王使二人刺一殺袁盎及他諸臣二（中略）丘豹及內史安國皆ー一」

【泣血】キフケツ　甚だしくなきかなしむ、涕が盡きて血の出る程なく。檀弓「ー三年、未二嘗見一齒」李陵、答二蘇武一書「此陵所二以仰一天椎レ心而ー一也」

【泣哭】キフコク　なきかなしむ。日哭泣。

【泣訴】キフソ　なきていのる。宋史、卿約傳「天姓重孝、母病甚、ーー二于天一」同、查道傳「事レ母以レ孝聞、母病思二鯽魚一、方レ冬苦寒、市レ之不レ獲、ーー二于河一、鑿レ氷取レ之、得二鯽尺許一以歸」

【泣數】キフスウ　なきなげく。

【泣涕】キフテイ　なみだを流してなく。詩、邶風「瞻望弗レ及、ーー如レ雨」

【況】キャウ　漾　カウ

況は俗字

○たとふ（譬）「比ー」匪、知北遊「毎下愈ー」○まして、いはんや（矧）乎と結びてをやと訓む。易、繋辞「ー於鬼神乎」○いよいよ、ますます（益）○ここに（茲）詩、小雅「ー也永歎」○たまふ、たまもの（賜）説と通ず。○ありさま、やうす（状態）「老ー」「情ー」「近ー」○来ーは他人の来訪をたふとびていふ辞。司馬相如、子虚賦「足下不遠千里来ー齊国」

同訓異義　況・矧二字同義なり、また詩と註す「純大夫猶然、況幸相乎」「荀悦、義強ー仁者、皆愛惜焉、矧蘇超之士、由乎其性ー者乎」の如し。

【況塞】空虚なる貌。楚辞、九辯「ー今天高而気清」

【況】キョウ　漾

○さむし（涼・寒）○とほし（遠）■廻。○ふかくひろし（深廣）

【洞酌】ケイシャク　詩経、大雅の篇名、遠くくみ取る義。詩、大雅「ー彼行潦」

【汴】ケツ　屑

○水、孔より疾く出る。○即ーはよこしま（邪僻）○むなしき貌。

【況】ケイ　梗

【洞】キョウ　送

【況】ケン　銑

○ながれる。○露が光る。謝霊運詩「花上露猶ー」○露の垂れる貌。○況を流す貌。

【況況】ケンケン　水の湧きて流るる貌。張衡賦「水ー而汤汤」

【況況】ケンケン　○況の流れる貌の異越春秋「心懐慇懃若ー割、涙ー今雙墜」■況然。○露の垂れる貌。謝恵連詩「ー露盈ー條」

【況然】ケンゼン　涙の流れる貌の慣用。「孔子ーー流ー涕」

【況潸】ケンサン　おつるつゆの王維詩「ーー青苔濕、遥渡泌泌光」

【沽】（一）コ　（二）コ　麌　虞

（一）うる（賣）論、子罕「求善賈而ー」諸○かふ（買）酒を買ふ。論、郷党「ー酒市脯」■酤。○大ーは海口、即ち直隷省白河の口、北京天津の咽喉に當る。（二）おろそか（略）○物があらくあしき（麁悪）○酒をうる者。又、あきうど「屠ー」

同訓異義　沽・賣・售・買・糴の別は貝部八畫）の條を見よ。

○沽・買・酤・市・賈・貿・糴の別は貝（貝部五畫）の條を見よ。

【沽激】ケキ　清を矯めて譽を求める。唐書、李泌傳「泌孤操自将、不ー苟合ー於世、人成謂ー之ーー」

【沽借】コシャク　うりかひ。舒元輿文「雖ー欲ー求ーー、不ー渇ー楽其義ー士ー」■沽賖。

【沽酒】コシュ　○買ひたるさけ、字解參看。■市酒。○賣る酒。白居易詩「青旗ーー趁ー梨花ー」

【沽賈】コカ　ひさぐ。■商賈。

【沽賖】コショ　うりかひ、あきなひ。■賈買。

【沽名】コメイ　誉れを賣る、名を街ふの意。逸民傳、序「彼雖ー抱ー其志ー、有ー所ーー不ーー」■賣名。

【泗】シ　寘

○はなしる、なみだと共に鼻より出る液「涕ー」（涕は目より出る液）○川の名、山東省に在り、運河に入る。

【泗涘】シジ　魯國にある二川の名、孔子其のほとりにて子弟を教ふ、故に轉じて、孔子の學を尿す。周伯琦詩「行行望ーー」■洙泗。

【泗上】シジョウ　泗水のほとり、孔子は泗上にて教授す、故に孔門の稱とす。晉書、桓彝等傳論「首陽高節、事ー仁而得ー仁、ーー徽音、朝聞而夕死」

【泅】シュウ　尤

およぐ。うかぶ。列、説符「人有ー窃ー河而居者ー習於水ー、勇於ー」

【泅泳】シュウエイ　およぐ。泅は水上を浮び行く、泳は水中をもぐり行く。

【泗上十二諸侯】シジョウノジュウニショコウ　泗水のほとりに國せる十二の諸侯。戦國策、秦下ー兵攻ー衛陽晉、必關ー天下之匈ー、大王悉起ー兵以攻ー宋、不ー至ー數月ーー而宋可ー取、則ーー、盡王之有矣」

【泗上弟子】シジョウノテイシ　孔子の門人。史、孔子世家「孔子　雖ー魯城北ーー、諸侯三年」

【泗上亭長】シジョウノテイチョウ　泗上亭のやくにん。漢書、高帝紀「試ー吏爲ーー」

【泅流浮磬】シュウリュウノフケイ　泗水の中より出でて磬に作るべき石。書、禹貢「ー濱ー孤桐、ーー」

【注】（一）シュ　遇　（二）チュ　遇　通音チュウ

（一）そそぐ（灌）水をかける「灌ー」つぐ、水がそそぎ入る。○あつむ（聚）○うつ（撃）（つく（屬）むかふ（意所向）「一意」「一目」○つがふ「一矢」○しるす（記）ときあかす。（二）くはしくときあかす。又其のときあ

かし、ー解」「評ー」「標ー」＝註。
【類語】注・沃・澆・灌・瀉・濺・漬・漉〇注は川の流れそそぐなり、水入を水注といひ、酒をつぐ銚子を注子といふ、何にても一筋につぎうつすをいふ。〇沃・澆・灌・瀉の四字、略ゝ同じ、草木などに、水をかけそそぐ義。〇濺はとばしりの、そそきかかるなり、故に激也と註す。史記「以ニ頸血一濺ニ大王一」〇酒は水を庭などにうつなり、酒掃と連用す。詩經「弗レ酒弗レ掃」〇瀉は傾也と註す、どっと一時にそそぐなり、注に似たれども、注はゆるゆるそそぐ、瀉は高き處より急にそそぐなり。韓偓詩「擂荷忽被ニ激風觸一、瀉下清香露一盃」
【注義】ちゅう　氣をつけてまかす。元史、張志明傳「不レ貳ニ於ー一ー」＝委注。
【注意】ちゅう　きをつける。史、陸賈傳「天下安ー一ニ相ニ天下危ー一ニ將一」＝留意。
【注解】ちゅう　字句の下に書き入れる解釋。晉書、杜預傳「預與ニ賈充等一定ニ律令一既成、預爲ニ之ー一ー」＝注釋。
【注擬】ちゅう　はかりなぞらふ。唐書、選舉志「今選者衆、請四時ー一ー」
【注脚】ちゅう　ときあかし、本文の間に入るるを注、本文の下に置くを脚といふ、二行に細書するが故。困學紀聞「日用是根株、文字是ー一ー」宋史、陸九淵傳「六經皆我ー一ー」
【注訓】ちゅう　本文の間に入れたる解釋。訓はよみかた。後漢書、何休傳「ー一ニ家經・論語ー一」＝注解。
【注述】ちゅう　すをつぎこむ。唐書、來俊臣傳「鞫レ囚不レ問ニ輕重一、皆ー一ニ於鼻ー一」
【注視】ちゅう　目をつけて見つめる。韓愈詩「天陽熙ニ四海ー一ー首不レ領」
【注進】ちゅう　圖事變などを上へ告げしらせる。又、其のことがら。＝申告・申報。
【注射】ちゅう　〇つぎこむ。唐書、陸贄傳「居ニ上厲レ辭、敏速若ニ一ー一ー一然」〇血管中に藥をつぎこむ「皮下ー一」
【注瀉】ちゅう　そそぐ。論衡「口齒以嚼食、孔竅以ー一」
【注釋】ちゅう　書物のときあかし。＝注解・注訓・註釋。
【注疏】ちゅう　經書の解釋、疏は注を更にくはしく說きたるもの「十三經ー一ー」
【注錯】ちゅう　つぎこむと、ひかへ置くとゝとりはからひ。荀、傷政「ー一習俗、所ニ以化ニ性也ー一」＝措置・處置。
【注入】ちゅう　つぎこむ。
【注文】ちゅう　〇注釋の文。＝註文。〇圖あつらへる、あつらへ「ー一の品」＝誂定製。
【注意】ちゅう　氣をつけてしたふ、意を專らにして仰慕する。呂溫文「其爲ニ物情所ニ一ー一」如レ此」
【注目】ちゅう　氣をつけてみる。陶弘景文「非ニ但字字ー一、乃書盡抽レ心」＝注視・屬目。
【注連】ちゅう　〇水を注ぎ清めて連ね張る繩、出棺後に家の入口に張りて亡鬼の再び家に還らざるやうにするもの（飯氏家訓）〇圖しりくめ繩、しめかざり。＝標繩・七五三繩。

【沮】

㊀ショ・ソ　㊁ショ・ソ　㊂ショ・ソ　錦　鍾　魚

㊀とどむ（止）さへぎりとどめる「ー止」〇はばむ、勢がなくなる「ー喪」〇こぼつ（壞）〇やぶる（敗）〇もる（泄漏）〇おどす、恐怖せしめる。禮、儒行「ー之以兵」㊁しめりけ多き地（下濕地）㊂長ーは人名。論、微子「長ー桀溺、耦而耕」〇川の名、陝西省鄜州に在り、洛水に注ぐ。＝漆水。
【沮遏】そあつ　はばみとどめる。＝沮止。
【沮害】そがい　はばみそこなふ。
【沮格】そかく　はばみとどめる。唐書、張說傳「長ニ其擾ー一ニ之ー一」
【沮議】そぎ　議をはばみとどめる。王褒文「二將雖ニ異計ー一」何傷」
【沮壞】そくわい　くじけやぶれる、くづれる。說苑「遇ニ天大雨ニ子必ー一」
【沮勸】そかん　惡をとどめ善をすすめる。左傳「賞罰無レ章、何以ー一」＝勸善懲惡。
【沮喪】そさう　氣がはばみうしなふ、氣おちする「士氣ー一」顏延之文「當盛向之夸慢、祇足ニ以成ニ今之ー一ー耶」
【沮洳】そじょ　沮洳と莽莾との二人、共に文字を造りし者。蒼一に倉に作る。晉史「上列ニ一ー一、按ニ史發ー論」
【沮索】そさく　はばみつく、索は盡。唐書、朱泚傳「泚遂入レ府、氣ー一、目色色、被レ病」＝錯愕。
【沮散】そさん　はばみ止められてちり失せる、阻止せられて退散する。柳宗元文「ー一遠去」
【沮止】そし　遮りとめる。＝防止。
【沮喪】そさう　はばみそしる。唐書、傅奕傳「爲レ衆ー一、不レ得レ行」
【沮洳】そじょ　ぬかるみ（漸洳）の地。詩、魏風「彼汾ー一、言採ニ其莫ー一」
【沮色】そしょく　はばめる顏色。元稹文「初餘ニ湘東一妻有ニ一ー一、因以ニ四韻一嘲レ之」
【沮懦】そだ　はばみおそれる。唐書、裴行儉傳「屹然不ニ一ー一」
【沮授】そじゅ　氣くじけて心みだれる。晉書、石勒載記「人情ー一、甲士無ニ鬭志ー一」
【沮泄】そせつ　もれ出る。禮、月令「地氣ー一、是謂レ發ニ天地之房ー一」＝泄漏。
【沮懦】そだ　くじけおそれる、懦は怖。宋史、李寶傳「以ニ一介一說レ身退レ朝、無ニ一毫ー一ー一」＝沮懼。
【沮濕】そしつ　低くして、濕氣多き地。又、水草ある處。禮、王制「山川ー一」左

思、劉郁賦「潛龍蟠二于一一、鼈二鳴技一與一雨」‖沮洳。

【沮洳】ジョ　さまたげそしる。唐書、陸贄傳「贄孤立一意、爲二左右權幸一一所一」

【沮齒】ソシ　きもをつぶす。鹽鐵論「莫レ不二一一レ一挫折遠遁一」

【沮喪】ソウ　はばみくじける、勢を失ひて敗れる。晉書、蘇峻傳「由レ是義衆一一、人懷二異計一」‖挫敗。

【沮敗】ハイ　はばみとめられてやぶれる。杜篤、論都賦「一人奮戰、三軍一一」

【沮誹】ヒ　はばみそしる。史、平準書「廢格一一、窮治之獄用矣」‖沮謗。

【沮抑】ヨク　とどめおさへる。張九齡文「雖レ有レ所レ長、一皆一一」

【泌】ヒツ　セイ・サイ　シ　寘　紙

○きよし「清一」○あきらか、あざやか（鮮明）詩、邶風「新臺有一一」○汗の出る貌。孟、滕文公「其顙有一一」

【泲】セイ　サイ　寘

すめるさけ（清酒）

【沼】セウ　篠

ぬま、いけ、一說に園きを池といひ、曲れるを一といふ。

【沼氣】セウキ　池のどぶの中より發生する燃性の瓦斯‖炭化水素。

【沼上】セウジヤウ　ぬまのほとり。孟、梁惠王「王立二於一一一」‖沼畔・沼邊。

【沼澤】セウタク　ぬま、さは。

【沼池】セウチ　ぬま。韓詩外傳「一一不レ如二川澤一所レ見博也」字解參看。

【沼澤】セウヘイ　ぬまのうらくさ。溫庭筠詩「細雫鳴二林葉一、圓文破二一一一」

【泉】セン　先　銑

○いづみ、みなもと（水源）孟、蘇婆「原一混混」○ぜに（錢）泉の如く廣く地に流布する義「一布」○立一は瀑布。班固賦「立一落落」‖飛泉。

【泉下】センカ　地下、めいど、黃泉の下。周書、晉蕩公護傳「死若有レ知、冀奉二見於一一一爾」

【泉貨】センクワ　ぜに。歷代名畫記「不レ惜二一一一、要レ藏二黃泉一」‖泉布・泉貝。

【泉源】センゲン　いづみのみなもと。荀、笛賦「財貨渾渾如二一一一、汸汸如二河海一」‖泉原。

【泉壤】センジヤウ　泉下の地、黃泉。北史、隋煬帝紀「恩加二一一一、澤及二枯骨一」‖泉路。

【泉水】センスイ　○いづみ。詩、小雅「相二彼一一一、載清載濁」○園庭の池。

【泉聲】センセイ　いづみの音。王維詩「一一咽二危石一、日色冷二青松一」‖泉韻。

【泉石膏肓】センセキカウクワウ　深く泉石即ち山水を愛する癖習の如き、療し難き義。晉說、言語「田游談、頻召不レ出（中略）高宗問、先生比佳否、游談對曰、一一、烟霞痼疾」作肓は不治の病。

【泉布】センフ　ぜに。周禮、天官、外府、注「布、泉也、其藏曰レ泉、其行曰レ布、取二名於水泉一、其流行無レ不レ徧」陳造詩「居人賣二菱芡一、行客乞二一一一」

【泉府】センフ　市税をとり立て、又公費にて物品を買ひあげ、更に原價を以て賣り下げる役所「周禮、地官、泉府」

【泉幣】センヘイ　泉布に同じ。宋史、蔡京傳「今一一所二積蓄一五千萬」‖貨幣。

【泝】ソ　遇　溯・遡に同じ

○さかのぼる（逆流而上）左、文十「沿レ漢一レ江」○むかふ（向）張衡賦「一レ洛背レ河」

【泝遊】ソユウ　川をくだる。泝洄を見よ。

【泝洄】ソカイ　泝は流れに逆ひて上る、洄は流れに順ひて下る。伏挺詩「行舟逐二一一一」

【泝洄】ソカイ　流にさかのぼる。爾雅、釋水「逆レ流而上曰二一一一、順レ流而下曰二泝游一」‖遡洄。

【泝流】ソリウ　流にさかのぼる。蜀志、先主紀「時レ吳一レ」

【沱】タ　歌

○漏の垂れる貌。○滂一は大雨の貌。詩、小雅「俾二滂一一矣」○川の名、揚子江の一支流、四川省に在り。○滂一は直隸省に在る川の名。

【沱若】タジヤク　漏の流れる貌、若は助字。易、離卦「六五出レ涕一一」‖潸然・泫然。

【泊】ハク　薄　陌

○淡一は波に隨ふ貌。‖澹泊。

【泰】タイ　泰　卦　古、太に通ず

○大いなり。○とほる（通）易、繫辭「天地交一一」○なめらか（滑）○はなはだし（甚）はなはだ。詩、大雅「昊天一慘」○ゆたか（豐）○ひろし、ゆるやか（寬）やすし（安）論、子路「君子一而不レ驕」○おごる、おごり（侈）孟、滕文公「舜受二堯之天下一不レ以爲一一」○易の卦の名、乾下坤上。○たる（爾）○丘の名。○西の風。○山の名（岱宗）

補説　泰・其・太・酸・絕・孔・已の別は甚（甘部四畫）の條を見よ。○泰・安・寧・康・綏・易の別は安（宀部三畫）の條を見よ。

【泰安】タイアン ○やすらか。潅夫論「居二累卵之危一而圖二泰山之安一」○府の名、漢の泰山郡、今の山東省濟南道に屬す。

【泰一】タイイツ 天神の最も貴き者。漢書、郊祀志「以二太牢一祠二三一一」注「天一、地一、一一者、天地未レ分元氣也」＝太一。

【泰山】タイザン ○五嶽の一、山東省泰安縣の北に在り。廣雅「岱宗謂二之一一」＝岱山・岱泰・東嶽。○妻の父の稱。黃霧筆記「俗呼二人婦翁一曰二泰丈一曰二一一一」蓋し泰山に丈人峰あるに由る。

【泰山巖巖】タイザンガンガン ○巖巖は高くけはしき貌。詩、魯頌「一一、魯邦所レ詹」○轉じて人品のすぐれてつよきに喩ふ。程子語錄「仲尼天地也、顏子和風慶雲也、孟子——之氣象也」

【泰山頽梁木折】タイザンクヅレリョウボククジル 泰山は山の最も尊きもの、梁木ヤナは家屋の重要なるもの、よりて其の頽折は一代の尊ぶべき人の死に譬ふ。孔子が「泰山其頽乎、梁木其壞乎、哲人其萎乎」といふ歌をうたひて間もなく歿せられし故事（禮、檀弓）

【泰山之霤穿レ石】タイザンノアマダレイシヲウガツ 微力も之を積まば大功をなすに喩ふ、霤は雷、水の滴り。枚乘、諫二吳王一書「——、飛絰之緻斷レ幹、水非二石之鑽一、索非二木之鋸一、漸靡使二之然一也」

【泰山不レ讓二土壤一】タイザンハドジョウヲユズラズ 泰山は小さき土くれをも厭はず包容する故、其の大を成す、人の度量廣く衆を容るるに喩ふ。戰國策「——、故能成二其深一」李斯の諫「——、故能成二其大一、河海不レ擇二細流一、故能成二其深一」李斯の諫。

【泰山府君】タイザンフクン 俗に鬼を治むる神とす。後漢書、烏桓傳「其俗謂二人死則神遊二赤山一、如二中國人死者魂歸二岱山一也」

【泰山北斗】タイザンホクト 泰山と北斗星とは衆人の常に仰ぎ見るもの、故に人の仰ぎ尊ぶものに譬ふ。唐書、韓愈傳「當時學者仰レ之如二——一」＝泰斗。

【泰山崩二於前一而色不レ變】タイザンマエニクヅルルトイロカハラズ 泰山が眼前に崩壞するも、顏色變ぜず。蘇洵文「爲レ將之道、當二先治レ心、——」

【泰山壓レ卵】タイザンノタマゴヲオス 泰山の重きを以て卵をつぶす、事の甚だ容易なるに喩ふ。晉書、孫惠傳「猛獸吞レ狐、——」

【泰日】タイジツ やすく治まれる時。晉書、劉頌傳「一一少、亂日多」＝寧日。

【泰初】タイショ 氣のはじめ、宇宙の原始、上古をいふ。莊、天地「一一有無」＝太初。

【泰西】タイセイ 四洋諸國の稱、泰はたなはだ、即ち極の義。泰東の對。＝太西。

【泰然】タイゼン ゆったりとしたる貌。元史、許衡傳「家貧躬耕（中略）處レ之一一」

【泰斗】タイト 泰山北斗の略。人を尊びていふ。

【泰風】タイフウ にしかぜ。爾雅「西風謂二之一一」四風は物を成熟せしめて豐かなる義。

【泰平】タイヘイ 世をさまりて靜か（漢書、食貨志）＝太平。

【治】

㊀ チ・ヂ 支
㊁ チ・ヂ 寘

一說㊀はをさむ㊁はをさまる

㊀をさむ（理）㊁をさむ、政を布きて民をすべをさめる。○こらしをさむ（懲處）罪をこらして處分する「鞫一」「一罪」○ととのふ、整理する「修一」○ただす（正）亂れさるやうにする。○をさまる、ただしくなる。○ならふ（慣習）○とりしらべる、とりしまる（監督）○まつりごと「政一」○政治の才多し。左、莊九「管夷吾一乎高傷」○いさを（功績）○みち（道義）○都する。漢書、高帝紀「又一秦中」又其の地。○地方官のやくしょ（政廳）又、其の役所に在りて政務を行ふ。○諸家にて靜室の稱。

関連 ㊀治・修・理・收・斂・納・御の別は修（人部八畫）の條を見よ。

【治安】チアン をさまりてやすらか。漢書、賈誼傳「陳一一之策」＝謀事擇務」

【治安策】チアンサク 前漢の賈誼が天下を平治する策略を述べたる文章（漢書、賈誼傳）

【治安防害】チアンバウガイ 社會の安寧秩序を破る行爲。

【治育】チイク をさめて發育せしむ。漢書、文帝紀「陛下不レ能一一一軍生」

【治要】チエウ 國を治める大切なること がら、治國の要道。

【治下】チカ 其の支配した。＝管下。

【治纏】チガイ ふるぎ（故衣）をきめつくらふ。莊、人間世「挫鍼一一、足二以補一曰」一說に纏は袗衣タンイ

【治行】チカウ 旅行の準備をする。史、曹相國世家「趣ニ一一」

【治廉】チカド をさまりてやすし。歐陽修文「博求二俊乂一、以清ニ一一」＝治安。

【治紀】チキ のりををさむ。韓非子「明君守レ始以知二萬物之源一、一レ一以知二善敗之端一」

【治強】チキョウ 國をさまりてつよし。韓非、外儲說「一一易レ爲レ謀、亂國難レ爲レ計」

【治躬】チキュウ 身ををさむ。禮記「敬レ禮以一レ一」

【治具】チグ ○接待の準備をなす。史、灌夫傳「將軍昨日宰許レ過二魏其一、魏其夫妻一レ一、自旦至レ今未二敢嘗

食」○國を治むるに必要なるそな
へ、法令。史、酷吏傳「法令者、治之
具」
【治軍】ヂグン 軍ををさむ。吳子「凡制レ國
レ一、必教之以レ戰、勵之以レ義」
【治化】ヂクワ 民を治めて善に導く。魏書、
李先傳「三桑五雉一一之典」
【治外法權】ヂグワイハフケン 外國に居住しなが
ら、其の在住國の法律に從はずし
て、自國の法律に支配せらるる特
權。
【治縣】ヂケン ○縣ををさむ。漢書、薛宣
傳「宣子惠自知レ一不レ稱二宣
意一」○縣知事。
【治國】ヂコク くにををさむ。大學、古之
欲レ明二明德于天下一者、先治二其
國一」‖治邦。
【治國平天下】ヂコクヘイテンカ 國を治め天下を
平かにする、國家を安泰にする。大
學「國治而后天下平」
【治忽】ヂコツ をさまると亂れると。書、
益稷「予欲レ聞二六律五聲八音一在二
一一一以出二納五言一」‖治亂。
【治最】ヂサイ 政治を行ふ成績が第一等
に居る。唐書、狄仁傑傳「以二一一一
擢二給事中一」
【治水】ヂスヰ つみをしらべ ただす。唐
書、孔琇之傳「付レ獄一レ一」
【治産】ヂサン 產業ををさめる。史、越王
勾踐世家「父子一レ一、居無二幾何一、
致二產數千萬一」
【治絲】ヂシ もつれたる絲ををさめる。
左、隱四「猶二一レ一而棼之也」
【治革】ヂカク 家屋の屋壁などをつくろ
ふ。任昉文「將レ加二一一一」‖繕葺・
完葺。
【治人】ヂジン ○人ををさむる。孟、滕文
公「勞レ心者一レ一、勞レ力者治二於
人一」○國を治める人、次條參看。
【有二治人一無二治法一】ユウヂジンムヂホフ 國を治む
る人はあれども、治むる法はなし、
法は死物、之を活用するは人にあ
る意。荀、君道「有二亂君一無二亂國一、
有二治人一無二治法一」
【治者】ヂシヤ 民を治める人、政治家。‖
治人。
【治所】ヂショ 政廳のある所。劉禹錫文
「孟秋至二一一一首冬遷レ衆、拜章入
覲」
【治水】ヂスヰ みづををさめ害を除く。水
經、注「王景字仲通、好學多藝、善
能二一一一」‖治河。
【治生】ヂセイ くらしの道を立てる。抱朴
子「古人欲レ遠勤誦レ經、今人欲レ速
勉一レ一」‖治產。
【治世】ヂセイ ○よく治まれる世。魏志、
武帝紀、注「太祖常問二許子將一我何
如人、子將不レ答、固問レ之、子將曰、
子一一之能臣、亂世之姦雄、太祖大
笑」○其の君主の在位年間。
【治績】ヂセキ 政のをさまりたるいさを。
蜀志、鄧芝傳「所在治嚴有二一一一」
【治船】ヂセン 船を修理す。漢書、食貨志
「築レ台一レ一、費直二萬萬餘」
【治體】ヂタイ 世のをさめかた。任昉文
「明二練庶務一、識二達一一一」
【治中別駕】ヂチウベツガ 治中は中に居て政
をすべる者、刺史の參佐、別駕は刺
史（地方長官）に隨ひて巡視する時
に別の車に乘る資格ある役人。魏
志、倭土元非二百里才一、使レ爲二一一一、
乃得レ展二其驥足一」
【治定】ヂテイ をさめさだめる。禮記「王
者功成作レ樂、一二一制禮」‖制定。
【治第】ヂダイ いへ（やしきを聽てる、邸宅
を造營する（唐書、裴度傳）
【治典】ヂテン 太宰の職、轉じて、治國の
法典。周禮、太宰「曰、一一以經二邦
國一、以治二官府一、以紀二萬民一」
【治田】ヂデン 田をたがやしをさめる。漢
書、食貨志「一レ一夠乎則晦益三
升一不レ謹則損亦如レ之」晦は畝。
【治內】ヂナイ 內ををさめる。禮記「天子
治レ外、皇后一レ一」
【治不レ忘レ亂】ヂフバウラン 治りたる世
にありても亂れん時のことを思ひ
て、戒愼する易、繫辭「君子安而不
レ忘レ危、存而不レ忘レ亡、治而不レ忘
レ亂、是以身安、而國家可レ保也」
【治任】ヂニン 旅行の準備、治は整理、任
は行李の擔。孟、滕文公「背者孔子
沒、三年之外、門人一レ一將レ歸」‖
治行。
【治方】ヂハウ をさめかた。梁書、武帝紀
「陝以二寡薄一、昧二於一一一」‖治術。
【治邦】ヂハウ 治國に同じ。
【治法】ヂハフ 國ををさむる方法。荀、君
道「有二亂君一無二亂國一、有二治人一無二
一一一」
【治病】ヂビヤウ やまひをなほす。漢書、高
帝紀、注「醫レ家一レ一」
【治賦】ヂフ 賦稅を整理する。論、公冶長
「由也千乘之國、可レ使レ治二其賦一
也」由は子路。
【治平】ヂヘイ 國家が太平なり。漢書、王
嘉傳「記二人之功、忽二於小過一、以致二
一一一」
【治兵】ヂヘイ 軍隊を操練する。左、隱五
「三年而一一、入而振旅」
【治辨】ヂベン をさめわかつ。韓詩外傳
「識者一一之極也」史、樂書「其功大
者其樂備、其一一者其德具」
【治命】ヂメイ 人の未だ病氣に陷らざる
前の命令、即ち平時の命令、結章を
見よ。
【治癒】ヂユ 病氣がなほる、本復する。
癒は愈、愈に同じ。‖平癒。
【治亂】ヂラン をさまると、みだれると。
‖治忽。
【治亂興亡】ヂランコウバウ 世の治まると亂れる
と、興ると亡ぶとの歷史。‖興衰論
「曉夫一一之途、爲二人君一者可二以
懲一矣」‖治亂存亡。
【治理】ヂリ をさむ、政がをさまる。漢
書、趙廣漢傳「壹切一一、盜名流聞」
【治禮】ヂレイ れいををさめ行ふ。劉向、
雜言「孔子困二于陳蔡之閒一七日、
一一一不レ休」‖修禮。

【治療】ヂレウ 病をなほす。周書、姚僧垣傳「誠ニ一一之方ニ」‖療治。

【洫】 チュッ 屋

水の流れ出る貌。

【洫洫】ヂヂ 水の流れ出る貌。文子、道原「原流一一、沖而不」盈」

【汀】 チョ 漾

○すむ(澄)○あはし(淡)

【泜】 ヂイ 紙 シ 支

川の名、直隷省に在り、槐河(卽ち滹水)に入る。

【泥】 ㊀ デイ 霽 ㊁ デイ 齊 ㊂ テツ 屑 ㊃ デイ 霽

○どろ(水和レ土)○ぬかるみ、どぶどろ。○けがす、けがれる。○易、井卦「井一不」食」○よごし。○糊をつけて張る「一窗」○南海に棲むといふ一種の蟲、骨なくしてぐだぐだしてゐる故、大いに酒に醉ふを一醉といふ。○どろの狀をなしたるもの「金一」「朱一」㊁なづむ、とどこほる(滯)澁滯する。論、子張「致レ遠恐一」㊂くろむ。‖涅。㊃一一は路のこまやかなる貌。又、柔くして澤ある貌。

【泥途】ヂト どろ。宋史、汪綱傳「使ニ一一卑濕得レ入レ河」‖泥濘。

【泥孩】ヂイ でく、土人形。周必大詩「爭騎二竹馬一弄ニ一一」

【泥行】ヂカウ どろ路をゆく。史、夏本紀「一一乘レ橇」

【泥牛入レ海】ヂギウニフカイ 一たび去りて返らざるに喩ふ。傳燈錄「我見二兩箇泥牛鬪入レ海、直至二如今一無二消息一」

【泥金】ヂキン ○金のこな。唐代、新に及第せし者、家書に一一帖字を附けて鄉里に報ず。天寶遺事「新及第以二一一帖字一、題二家書一簡一報、謂二之報信一」○轉じて及第の報知を一一報といふ。

【泥滓】アヂ ぬかるみにてすべる。杜甫、贈比部蕭郎中詩「不三敢數一朝天」

【泥古】ヂイ いにしへにのみなづむ。宋史、劉凡傳「儒者一一致詳於形名度數間、而不レ知二論語德重之用一」

【泥漿】ヂイ すゐぎん。‖漿水。

【泥汚】ヂイ どろのみぞ。韓愈詩「陷レ身一一間、誰往稟二指揮一」

【泥痕】ヂコン どろのつきたるあと。項斯詩「草帶一一過二鹿塲一」

【泥沙】ヂイ ○どろ。劉峻文「魚潛二淵下一、窟穴一一」○沈みて下位に在るに喩ふ。陳世南詩「達」恩僧二羽儀一、失レ路悉一一」○拘んじ惜まざるに喩ふ。杜牧賦「用レ之如ニ一一」

【泥像】ヂザウ でく、土人形。唐書、傳休奕傳「今佛尼十萬刻綵一一、以塗二天下一」‖泥塑人。

【泥津】ヂシン ○どろと、かすと、けがれて清からざるに喩ふ。歷代名畫記「今之畫人、筆墨混二於膠埃一、丹青和二其一一」○卑下シタクシンに喩ふ。北史、魏長賢傳「士之立レ身、其路不レ一、堵塞二一一一、自致二青雲一」

【泥鰌】ヂシウ どぢゃう、淡水産の小魚、形うなぎに似て小。

【泥蛭】ヂシツ ひる。本草「一一生二泥中一」

【泥漉】ヂロク ぬかりてしめる。古今註「沈臍不レ長二一一一也」

【泥人】ヂジン 泥塑人に同じ。

【泥首】ヂシュ 首を泥土につける。謙元帝、檄文「任約一一於安南、化仁面二縛於漢口一」‖叩首。

【泥酔】ヂスイ 泥醉のぐだぐだしてゐる如くはげしくゑふ。異物志「南海有レ蟲無レ骨、名曰レ泥、在レ水則活、失レ水則醉如二一堆泥一」一說に醉態を泥土に比していふと。陸游詩「一一醒常少」

【泥塑人】ヂソクジン でく、土人形。近思錄「明道先生坐如二一一一」‖土偶・泥人・泥像。

【泥塗】ヂト どろ。蘇舜欽詩「一一沒二馬鼻一」‖泥濘。

【泥炭】ヂタン 石炭の一種、未だ十分に炭化せざるもの。燃料又肥料に用ふ。

【泥中蓮】ヂチウレン どぶどろの中に清くきけるはすの花、にごりにしまぬはちす、はきだめの鶴【維摩經】

【泥塗】ヂト ○轍の濺かなる貌。詩、小雅「蓼彼蕭斯、零露一一」○柔くして澤ある貌。詩、大雅「維葉一一」

【泥土】ヂド どろ。宋書、禮志「雖レ有二糜粥一、糠粃一一相和、半不レ可二飲食一」

【泥塗】ヂト ○どろ、ぬかるみ。後漢書、黃瓊傳「抵二金石於沙礫一、碎二珪璧於一一一」○賤しき境遇。杜甫詩「曾淚暗二往主一、一一任此身」○いやしくつまらぬ義。范伸淹文「一一軒冕」

【泥濘】ヂネイ どろ、ぬかるみ。左思、吳都賦「流汗霡霂、而中逵一一」‖泥濘・泥塗。

【泥蠖】ヂワク どろの中にひそみわだかまる。班固、答賓戲「一一而天飛者、應龍之神也」

【泥鰍】ヂシウ こて、さくわんの用具。

【泥塗】ヂト どろ、ぬかるみ。五代史、杜重威傳「兵行二一一中一」

【泥犂】ヂイ 梵地獄。名義集、文句云、地獄此方名、梵稱二一一一一」‖泥黎。

【泥論】ヂロン どろにしづむ。抱朴子「非二漢濱之人一、不レ能レ料二明珠于一一之鮮一」

【沾】 ㊀ チン ㊁ セン・テン 鹽 豔 ㊂ テン 豔

㊀さす、そふ。‖添。○淇水の一支流。㊁ひたす（漬）うるほす（潤）‖霑。○みる（視）うかがふ。‖覘。㊂自ら繋ふる貌。○ーーはかろくうすし、輕薄なる貌。

同源詞 祜・湛・潤・澤・滿・渦の別は湛（水部十四畫）の條を見よ。

【祜祜】輕薄なる貌。一說に自ら整ふ貌。史、魏其傳「ーー自喜耳、多レ易、難二以爲レ相持一乘、遂不レ用」

【祜汙】うるほひけがる。高倩傳「釋氏始遊二化關中一、足自二于面一、既二涉泥水一、未レ曾ーー一、時稱二自足和尙一」

【祜鏡】むねをうるほす。何遜詩「蕩子行未レ歸、啼粧坐ーレレ」

【祜泥】うるほふ、うるほし。柳貫詩「ーー時雨足」

【祜句】餘れる潤を受ける。唐書、杜甫傳「奏計謬誤、ーニ後人一多矣」

【祜洽】○あまねくうるほふ、廣くゆきわたる。南史、杜慧慶傳「威惠ーー、盜竊不レ起」○學問が博くゆきわたる。三國志、胡沿傳「雖二學不二ーー一、然卓犖强識」‖洽博・博洽。

【祜矜】えりをうるほす、衿は襟。家語「反レ袂拭レ面、涕泣ーレレ」

【祜濕】うるほふ、うるほす。晉書、光逸傳「家貧衣單、ーー無レ可レ代」

【祜染】うるほひそまる、性質を變化する義。晉書、楊方傳「委質已耳、但ーー未レ足耳」

【祜背】背をぬらす。史、陳承相世家「汗出レレ、愧不レ能レ對」‖霑背。

【波】㊀ハ ㊁ヒ 支韻

㊀なみ、水が湧き流れる。○なみだつ、波が起る。○うるほふ（潤）○うごく、動搖する。莊、外物「其孰不ーー」○目の光「秋ーー」○弄ーは勞役の義。韓愈、論佛骨表「老少奔ーー、棄二其業一」○金ーは月光。○物理學にて水面の一點よりして環狀のなみが四周に傳はり廣がる如き現象にいふ「音ーー」「光ーー」「電ーー」㊁つつみ「雷ーー」‖陂。

【波逸提】㊀六聚戒の一。大藏法數「梵語ーー、此言レ墮、謂犯二此罪一者、當レ墮二八寒八熱地獄一也」

【波及】波のうつ如く潤の次第に、及ぶ義。左、僖二三「其ーニ晉國一者、君之餘也」

【波瀾】いけす。馬融、廣成頌、注「ーー、池澤也」

【波光】なみのいろ。道潤詩「ーー淸泠無レ痕」‖波色。

【波栗】波梭栗に同じ〔本草綱目〕

【波際】なみま。皮日休詩「ーー擲二果殼一」‖波間。

【波斯】亞細亞アの一國、ペルシャ。隋遺錄「螺子落出ニーー國一、每顆值十金」

【波斯草】はうれんさう〔本草綱目〕‖波梭栗・菠薐草。

【波心】なみのまんなか。白居易詩「月點ニーー一顆珠」‖水心。

【波臣】魚の異稱。莊、外物「莊周顧視、車轍中有二鮒魚一焉、周問レ之曰、鮒魚來、子何爲者邪、對曰、我東海之ーー也」注「ーー猶レ曰二水官一也」

【波寘】なみが起る。水經、注「濤湧ーー、雷激電洩、震天動地」

【波旬】惡者の義。法華音義〕‖惡魔。

【波水】なみだつみづ。傅休奕詩「草上飛雷起、ーー自生レ冰」

【波蕩】ゆれうごく。後漢書、公孫述傳「方今四海ーー、匹夫橫議」

【波濤】なみ、濤は大波。杜甫詩「天地暗慘忽異レ色、ーー萬頃堆二琉璃一」‖波浪。

【波底】なみのそこ。岑參詩「漢水天一色、寺樓ーー看」‖水底。

【波動】○なみのうごき、波が動く。蔡邕賦「風靜ーー、若レ飛若レ浮」‖波搖。○音又は光等の刺めに、空氣又はエーテルが振動を起して上下四方に傳はる狀態。

【波止場】㊀國水中に築き出したるどて、舟つき場とする。‖埠頭・碼頭。

【波文】次條に同じ。白居易詩「池有ニーー一水盛開」

【波紋】なみのあや、波のもやう。‖波文。

【波涌】なみがわきたつ。後漢書、馮衍傳「風靡ーー、更相駈薄」

【波羅】虎の異名〔玉溪編事〕

【波羅夷】㊀六聚戒の一、極惡の罪。大藏法數「梵語ーー、華言レ棄（中略）故名二極惡一也」

【波浪】なみ。晉書、張華傳「光彩照レ水、ーー驚沸」岑莊詩「ーー不レ知深幾許」

【波羅蜜】○果の一種。本草「ーー梵語也、因二此果味甘一故借用レ之」○㊀生死の境を渡して彼岸に到達する。華嚴經「以ニーー船一、於二生死流中一、不レ依二此岸一、不レ著二彼岸一、不レ住二中流一、而度二衆生一、无レ有二休息一」

【波瀾】○なみ、瀾は大波。王維詩「人情反覆似ニーー一」○文勢の一段生動するにいふ。杜甫詩「秀髮無二遺憾一、ーー獨老成」○ことたとへ、平穩ならず「平地にーーを生ず」

【波流】○水の流れ。○轉じて世の變遷のきはまり無きに喩ふ。莊、盜蹠「世事ーー」

【波稜菜】はうれんさう、野菜の

一。‖茨萩草・波菜・波斯草。

【沫】 ㊀ バイ 隊 ㊁ クワイ 隊

㊀ほのぐらし（微明）○地名、古の衛の邑。殷の都の朝歌をいふ。今の河南省淇縣。詩、鄘風「一之鄕矣」㊁かほあらふ。‖顏。

【泡】 ハウ 看

○あわ、水の上のうたかた（水上浮漚）○―は水の流れる貌。又、水の噴き涌く貌。○さかんなり（盛）

【泡影】ハウエイ かげと。世のはかなきに喩ふ。金剛經「一切有爲法、如二夢幻一―一」劍俠詩「彭澤寫臨其南窗、幻緣―一夢魂中」幻はまぼろし。

【泡幻】ハウゲン あわと、まぼろしと、世のむなしくはかなきに喩ふ。王禹偁詩「身世嗟二―一」‖夢幻。

【泡泡】ハウハウ 水の流れる貌。山海經「其源滂滂―一」

【泡沫】ハウマツ あわ。葛長庚詞「嘆二紅人間事、一―風燈、阿誰背倣二飛仙一」

【浮】 ハウ ヒョウ 虞 又、汢に作る

○川の名。○水の勢の盛んなる貌。又、其の聲「瀰―」

【浮評】フヒョウ 水勢の盛んなる貌。薩都剌詩「萬古楚二地雷二峽瀉一―一」

【泖】 バウ 巧

○ふち、水のよどみて流のおそき所。○川の名、江蘇省松江府に在り、上―中―下―あり、之を三―といふ、太湖より出で吳淞江に注ぐ。

【泊】 ハク 藥

○とまる、舟を止める、船が岸に附く、とどまる、とどむ。○しづか、さっぱり、利慾に迷はず。「恬―」「澹―」○うすし（薄）○ふなつき、ふなやどり。○絡―は衆多なる貌。○漂―・飄―はさすらひすむ（流寓）貌。

【泊懷】ハククワイ さっぱりとして世事に煩はされざる心。韋應物詩「一一遠二塵想一」

【泊乎】ハクコ 心しづかに欲うすき貌。老子「一―其未レ兆」‖泊如。

【泊如】ハクジョ ○心しづかにして無欲なる貌。淺香、揚雄傳「有二以自守一―一也」‖泊乎・泊然。○水の廣き貌。漢郊祀歌「一―四海之池」

【泊然】ハクゼン 心しづかに欲うすき貌。南史、庾荔傳「一―靜退」‖泊乎・泊如。

【沫】 バツ 曷

○あわ「浮―」「泡―」「飛―」○つばき（唾）よだれ（涎）「涎―」○とばしり、みづたま、ゆばな（湯華）○やむ（已）○あせの流れる貌。

【法】 ハフ ホフ 洽 灋は古字

○のり、かた「一式」○おきて（制令・制度）○れいぎ、作法「禮―」○つね（常）○けいばつ（刑罰）○てほん。○かたち（象）○さだめ。○てだて、しかた。○したがふ。○のっとる、てほんとする、手本としてならふ。易、繫辭「崇效二天、卑二地一」○佛道の義に用ふ「傳―」「說―」「一師」「一燈」○割算の割る方の數、除數。○佛蘭西フランの貨幣フランのあて字。○國名、―蘭西フランスの簡稱「普―戰記」

【法案】ハフアン 法律の案文。

【法意】ハフイ 法律の精神。蘇軾文「申二嚴一―一、消二盜賊于未萌一」

【法院】ハフヰン 朝鮮及臺灣總督府・關東都督府にある裁判所「高等一―」

【法約三章】ハフヤクサンシャウ 漢の高祖が秦の苛法を除きて、之を三ヶ條につづめたる故事。史、高祖紀「與二父老一約二法三章一耳、殺レ人者死、傷レ人及盜抵レ罪、餘悉除二去秦法一、秦人大喜」

【撓法】ダウハフ 私意を以て法律を曲げる。史、酷吏傳「所レ愛者、一レ一活レ之」

【法家】ハフカ 法律を修めたる學者。漢書、藝文志「一―者流、蓋出二于理官一」

【法衙】ハフガ 裁判所、衙は役所。

【法制】ハフセイ 天子ののりもの。漢書、文帝紀「本天子一―一、迎二代邸一」

【法戒】ハフカイ てほんいましめ。漢書、劉向傳「數上疏言二得失一、陳二一―一」

【法儀】ハフギ のっとりならふ。詩經、傳「是則是傚、胥レ可二一―一也」

【法學】ハフガク 法律・政治・經濟等の原理を研究する學問。

【法規】ハフキ 國家の定めたる命令、おきて、法律上の規定。

【法禁】ハフキン はっと、さしとめのおきて。漢書、功臣表「陷二一―一、殞レ命亡レ國」‖刑法。

【法宮】ハフキウ 正殿をいふ。漢書、景帝傳「五帝神聖、處二一―一之中一」

【法界】ハフカイ ○おきての箇條。蔡子良文「心識二理裁一、行越二一―一」○法律學

の學科。

【法貨】ハフクワ　國法によりて通用せしむる貨幣。

【法外】ハフグワイ　○法度にはづれる。‖度外。○りくつに合はぬ。‖不合理。

【法官】ハフクワン　裁判官。唐書、百官志「應隨事允、爲ニ一一之最ニ」

【法盛】ハフ　おきて。後漢書、北海靜王傳「永平中、一一頗峻、睦乃謝ニ絕賓客ニ、放ニ心書藝ニ」

【法言】ハフ　○ただしきことばの孝經「非ニ先王之一一ニ不ニ敢言ニ」‖法語之言。○揚子一一（書名）の略。

【法故】ハフ　法則故事、古よりの正しきしきたり。總、月令「論ニ課文章、必以ニ一一ニ」

【法語之言】ハフゴノゲン　正しく最かに述ぶることばをいふ。論、子罕「——、能無レ從乎、改レ之爲レ貴」

【法師】ハフ　○正しき師。漢書、梅福傳「當ニ爲ニ陛下一一ニ、盡ニ平生之愚慮ニ」○教の道を說く僧。王褒文「文帝乃升ニ一一ニ、說ニ玄言ニ」

【法曹】ハフサウ　法官に同じ。唐六典「一一掌ニ推ニ按獄訟ニ法ニ用刑獄等事ニ」‖法吏、秩官。

【法式】ハフ　のり、てほん。呂覽「夏桀貪詐無レ方、不レ循ニ一一ニ」‖格式、法度。

【法臣】ハフ　法度をよくまもる臣。管子「謂ニ臣貴、而一一疑」

【法人】ハフ　人類又は物件の集合體を法律上、個人と同樣に權利義務の主體と見たるもの。

【法相】ハフシヤウ　國司法大臣の異名。

【法酒】ハフシユ　禮式を正して飲むさかもり。史、叔孫通傳「經畢復置ニ一一ニ」注「一一者、猶ニ言ニ禮酌ニ謂レ不ニ飲レ之至レ醉」

【法服】ハフフク　法律を具て國を治めるてだて。史、韓非傳「案ニ刑名一一之學ニ」

【法書】ハフ　○おきてのかきもの、法律書。晉、王羲之「與ニ人一一ニ」○習字手本のこと。法帖。

【法規】ハフキ　おきてた具て正す。晉書、王濬傳「性嫉厲、陽レ一一レ之」

【法綫】ハフセン　法律を學るやく。齊書、孔稚珪傳「即便指明、使レ遵ニ一一ニ」

【法制】ハフセイ　○おきて。‖法律。○法律と制度と。禮記、命ニ有司ニ修ニ一一ニ、經ニ國制ニ」

【法制局】ハフセイキヨク　國內閣に直屬して法令の起草、法案の取調修正等を掌る役所。

【法則】ハフソク　おきて。又、法律規則。周禮、大宰「一一以馭ニ其官ニ」‖軌則。

【法治】ハフヂ　法律を以て國ををさめる。「一一國」

【法廷】ハフテイ　しらす、裁判所。

【法定】ハフテイ　法律にて定める。又、其の事項。

【法程】ハフテイ　のり、おきて。淺書、賈誼傳「立ニ綱陳ニ紀、輕重同得、後可ニ以爲ニ萬世一一ニ」‖法則、法式。

【法帖】ハフデフ　法則とすべき習字手本。法帖譜系「黃伯思有ニ一一刊誤二卷ニ」‖法書。

【法典】ハフテン　のり、おきて。又、其の書きもの。

【法度】ハフド　○はっと、のり、きそく。賈、大禹謨「敷ニ政無レ倦、罔レ失ニ一一ニ」‖法則。○國おきてさしとめ。‖禁制。

【法服】ハフフク　○制定せられた正式のきもの。孝經「非ニ先王之一一ニ不ニ敢服ニ」‖制服。○僧侶のころも。法華經「剃ニ除鬚髮ニ而被ニ一一ニ」‖法衣、袈裟。

【法備】ハフビ　諸規則整ひそなはる。管子「名正一一、則聖人無レ郷」

【法馬】ハフバ　はかりのふんどう。‖衡銖。

【法網】ハフマウ　法律のあみ、法律、罪人を捕へてのがさざるを漁獵のあみに比していふ。

【法吏】ハフリ　法官に同じ、裁判官。

【法理】ハフリ　おきてのすぢみち、法律の原理。魏志、明帝紀、注「帝好學多識、特留ニ意于一一ニ」

【法律】ハフリツ　國家の規定せしおきて、國法。淮南、主術「一一度量者、人主之所ニ以執ニ下」

【法令】ハフレイ　國の法律と命令と。又、おきて「一一全書」‖律令。

【法例】ハフレイ　おきて。又、すべての法令に通ずる規則。晉書、刑法志「改ニ舊律ニ爲ニ一一ニ」

【法王】ハフワウ　○佛法のかしら、即ち釋迦如來。維摩經「一一法力超ニ衆魔ニ」○羅馬教の主權者。

【法印】ハフイン　○佛のみちを世にひろめる、印は世に印象する。法華經「我此一一、爲レ欲レ利ニ益世間ニ」故說」○第一等の僧位、僧正の官に相當す。○山伏の稱、修驗者。

【法雨】ハフウ　佛法のめぐみを雨の物をうるほすに喩ふ。慈恩傳「引ニ慧雲於四極ニ、注ニ一一於東垂ニ」

【法衣】ハフエ　ころも。‖僧衣、法服、袈裟。

【法會】ハフエ　○佛法を說く爲めに衆を會する。陳書、岑之敬傳「預ニ重雲殿ニ一一ニ」法華經「聞ニ其經ニ已、從ニ一一出、至ニ於餘處ニ」○轉じて佛式にて追福を營むにいふ。‖法事、佛事。

【法筵】ハフエン　佛法を說く席。張九齡詩「擊石開ニ精舍ニ、金光照ニ一一ニ」

【法莖龍象】ハフケウリユウザウ　佛法を說くむしろの大有力者。龍は水中の大力者、象は陸上の大力者、故に喩ふ。黃庭堅詩「高居大士是龍象」注「今以ニ負ニ荷大法ニ者ニ比ニ之龍象ニ、傳燈錄、達磨傳、波羅提、法中龍象」

【法界】ハフカイ　○佛ほとけの道の世界。金剛經新註「一一混然」蘇軾詩「俯仰一一、逍遙寄ニ人寰ニ」○佛教徒の

社界。‖佛門。

【法海】ホフカイ　佛の道、海は其の廣きに喩ふ。王筠詩「三緣解二智門一、六塵淸二一一」

【法號】ホフガウ　圖戒名ケミヤウの類。謝小娥傳「竟以二小娥一爲二一一一、不レ忘レ本也」‖法名。

【法燈】ホフトウ　法燈に同じ。梁簡文帝、重請二佛講一啓「智林一一、人人竝持」

【法供】ホフグ　佛のまつり。華嚴經「諸供養中、一一最重」

【法業】ホフゲフ　佛法のわざ。謝靈運文「一一日廢、隨喜何極」

【法眼】ホフゲン　○圖佛道を悟りたる義。猶ほ盲人の眼を開ける如し、故にいふ。金剛經「如來有二一一一」註「開レ法自悟名二一一一」○圖法印に次ぐ僧位、僧都の官に相當す。

【法事】ホフジ　圖○佛法上の事がら。梁書、阮孝緒傳「悉以充二一一一」○佛式の追福。又、其のあつまり。‖法會。

【法身】ホフシン　のりの身、佛法を悟りたる身、佛三身の一、佛の本體にして三千世界にみちわたるもの。涅槃經「離レ無レ有、所謂一一」

【法親王】ホフシンワウ　圖出家せられたる後に親王宣下ケンゲのありし親王の稱。

【法主】ホフシュ　圖○佛教の主、釋迦をいふ。‖法王。○佛教の一派の長。ほっしゅ「本願寺一一」

【法體】ホフタイ　圖○宇宙萬有の眞相。○僧侶のすがた。‖僧形。

【法道】ホフダウ　のりの道。釋氏稽古略「五祖弘忍大師（中略）毎請二于四衢一曰、一一可レ得レ聞乎」

【法燈】ホフトウ　圖のりのともしび、佛法を以て迷執を破ること、燈火の暗を照すが如し、故に喩ふ。劉孝綽、栖嚴寺碑「一一永傳、靜因長久」‖法炬。

【法味】ホフミ　佛教のおもむき。梁昭明太子詩「已知二一一樂一、復悅二支官淸一」

【法名】ホフミヤウ　法號に同じ。

【法門】ホフモン　圖佛法に入る道、門は門戸の義。舊唐書、高瑤傳「梁武窮二心于釋氏一、頗文飾二意于一一」‖佛門。

【法樂】ホフラク　○圖佛法を信仰してよろこびたのしむ。維摩經、菩薩品「汝等已發二道意一、有二一一一可二以自娛一、不レ應二復樂一五欲樂一也」‖法悅。○圖なぐさみ、保養。

【法輪】ホフリン　圖佛法をいふ、佛の說きたる正法が邪見を破し外道を服することを輪寶聖王の持てる寶輪のよく山岳を碎き、敵をも平かにする威力あるに比す（寶輪は圖の輪寶ホウ）

【法侶】ホフリョ　僧侶に同じ。梁武帝文「恆沙衆生、皆爲二一一一」

【法類】ホフルイ　圖同宗旨の僧侶の互に呼ぶ稱。

【法力】ホフリキ　圖佛法の能力。白居易文「一一所攝、歸レ不レ論レ心」

【法臺】ホフダイ　圖佛門に入られたる太上天皇。

【法華】ホフケ　○經文の名、ほけきゃう。南史、徐孝克傳「夜講二誦一一經一」○圖日蓮宗の別名。

【法華經】ホフケキヤウ　妙法蓮華經の略、天台宗・日蓮宗の正依經にして、羅什三藏の譯せるもの、分ちて二十八品とす。

【法橋】ホフケウ　○圖佛法を說きて人を濟度ドイする。蕅峩經「興二造一一、度レ人不レ休」○圖法眼に次ぐ僧位。

【法相宗】ホフサウシュウ　圖一切萬有の性相を說明し三界唯一心なることを明かにせし宗派、印度の戒賢に始り、我國にては孝德天皇の時、道昭が唐の玄奘より受け來りしもの。

【法師】ホフシ　僧侶の通稱。法華經「常修二梵行一、皆爲二一一一」

【法螺】ホフラ　○佛寺、又は修驗者の吹き鳴らすほら貝。王勃文「鳴二一一一一而再唱」○圖其の聲の大いなるによりてうそ大言の義とす「一一を吹く」

【法被】ハッピ　圖牛被の轉說、勞働者の服、もと武家の中間チウゲンなどの著たるもの。

【泛】

㊀ ハン・ホン　㊁ ホウ・フ　㊂ 陷　㊃ 勘

㊀うかぶ（浮）○ひろし。‖汎。○浮ーは、俗に切實ならざる義とす。㊁くつがへす（覆）「一一」

【泛濫】ハンラン　水があふれる。北史、高隆之傳「起二長隄一、以防二一一一」‖汎濫。

【泛菊會】ハンキクエ　九月九日の節句に菊花を酒に浮べて飲む會、晉陽の宴。風土記「俗說以二重九一相會、登レ山飲二菊花酒一、謂二之登高會一、又謂二之一一一」‖登高會。

【泛觀】ハンクワン　ひろくはしいままに見る。司馬相如賦「於レ是乎周覽一一」

【泛浚】ハンシュン　うかべひたす。水經、注「河水盛溢、一一甑子、金隄決陵」

【泛使】ハンシ　海を渡りて來る外國の使臣。

【泛舟】ハンシウ　船を浮べる。唐書、閻立本傳「一一昌苑池」‖汎舟。泛艇。

【泛艇】ハンテイ　さかうきを浮ぶる儀光義詩「落東一レ遊」‖流觴。

【泛稱】ハンショウ　ひろくとなへ、おしなべていふ。‖汎稱。

【泛漲】ハンチャウ　水がみなぎる。王褒之文「陂湖一一、船不レ能レ渡」

【泛艇】ハンテイ　小舟をうかべる。宋祁詩「晴湖一レ鷗衝レ槳、夜郎聽レ燈馬卸レ鞍」

【泛清酒】ハンシンシュ　端午の節句に菖蒲を酒にうかべて飲むをいふ（荊楚歲時記）

【泛濫】ハンラン　ただよふ。江淹詩「桑蓋萬葉下、一一百流前」

【泛覽】ハンラン　ひろく見る。梁昭明太子文「集二羣文一圖、一一辭林一」‖泛觀。

【泛論】ハンロン　ひろく全體にわたりて論說

する。三國志「一ニ一物理」＝泯論。
【泛駕之馬】ハンガノウマ　泛は覆、逸氣ありて軌繩に循はざる馬。常軌に從はざる英雄に喩ふ。漢書、武帝紀「夫ニ一、跅弛之士、亦在レ御レ之而已」

【泮】ハン　㵎

○ちる(散)とく、氷がとける。詩、邶風「迨二冰未一レ泮」＝泮。○わかつ「剖ニ一」＝判。○きし。＝畔。涯。
【泮汗】ハンカン　水の廣大にして、はてしなき貌。左思、吳都賦「滄溟ニ一、瀇瀁森漫」
【泮宮】ハンキュウ　古、諸侯の鄕射を習はす處にして、諸侯の學校。東西門以南は水をめぐらし、以北は水なし、故に泮といふ(天子には辟雍といふ)詩、魯頌「明明魯侯、克明二其德一、既作ニ一ニ、淮夷攸レ服」＝頖宮。
【泮散】ハンサン　氷がとけちる。易林「冰將ニ一ニ一、鳴鴈雍雍」
【泮水】ハンスイ　泮宮の水。詩、魯頌「思樂ニ一レ

【泌】㊀ヒ ㊁ヒツ　質　寘

㊀いづみのはやく流れる貌。㊁ながれ。○しむ、にじみ出る「分ニ一」「ニ一尿」
【泌尿器】ヒニョウキ　小便を排出する機官、腎臟・輸尿管・膀胱・尿道の總稱。

【沸】㊀ヒ ㊁フツ　未　物　通音フツ

㊀わく、にえたぎる、水が熱を受けて煮えたぎる「鼎ニ一」「煮ニ一」㊁そそぐ(濺)○わく、泉がわき出る、噴水する「醪ニ一」○水のはげしくわき立つ聲。○解に怒る貌。
【沸羹吹レ齏】フツカウニスヰセイヲフク　熱きあつものをすすりて、口中を燒きたるに懲りて、冷たきあえものを見ても、恐れて之を吹く。懲戒に過ぎたるをいふ(唐書、韓愈傳)＝懲。羹者吹レ齏。
【沸聲】フツセイ　ものの煮える音。高啓詩「ニ一還疑灑レ竹鳴」
【沸流】フツリウ　波がさか立ちて堤がくづれつひゆ。木華、海賦「跳岸溝漢、ニ一流溢」
【沸鬱】フツウツ　湯のたぎりたるかま。文同詩「六月日正卒、大暑若ニ一ニ一」
【沸官】フツクワン　湯がわきあがる。漢書、注「如二蝸螬之鳴、湯之ニ一、熬之將レ熟」
【沸粥】フツシュク　わきたつかゆ。唐書、瘴孤及傳「百瘡腦刺、如ニ一ニ一紛麻一」
【沸水】フツスイ　わき出る水。拾遺記「蓬萊山有ニ一ニ一、飲者千歲」＝噴水。
【沸泉】フツセン　わき出るいづみ。齊書、祥瑞志「郡擁深三尺、得ニ一ニ一」＝湧泉。
【沸湯】フツタウ　わきたるゆ、にえゆ。晉山方興俗考「儀國女子不レ淫不レ顧、訊獄置二小石於一ニ一、合二狐レ法者探レ之、云理曲手觸」＝熱湯。
【沸騰】フツトウ　水のわくふち。高適賦「龍吼二乎一ニ一、魚噴二乎湯泉一」
【沸騰】フツトウ　○水がわきあがる。詩經「百川一ニ一」○轉じて人がさわぎたつ。又議論がやかましくおこる。
【沸騰散】フツトウサン　炭酸曹達と酒石酸とを調和し、之に清水をそそぐときは、泡立ちてわく、胃病藥として服用す。
【沸騰點】フツトウテン　水のにえたつ温度、攝氏寒暖計の百度。＝沸點。
【沸熱】フツネツ　わきてあつくなる。東方朔賦「身被レ疾而不レ聞兮、心一ニ其若レ湯」
【沸沫】フツマツ　わき立つあわ。拾遺記「一ニ一流二於數十里一」

【泯】㊀ビン・ミン　軫　㊁ベン・メン　銑　眞

㊀ほろぶ(滅)つきる(盡)○一ニはひろく暗くして分明ならず。○水の流の清き貌。㊁眩ニは目の安からざる貌。
【泯棼】ビンフン　ほろびすたる。詩、商頌、譜「夏之號事既以一ニ、喪有二商頌一而已」
【泯絶】ビンゼツ　ほろびたゆ。魏書、孫惠蔚傳「設密爭術二禮經一ニ一」＝滅。
【泯然】ビンゼン　ほろびる貌。方孝孺文「其肯一ニ、與二庸衆人一爭乎」
【泯泯】ビンビン　○水の廣く清き貌。杜甫詩「野日莽莽白、江流一ニ清」○茫茫としてくらき貌。○衰、呂刑「民興胥漸、一ニ棼棼」一解に將に滅びんとする貌。又、亂るる貌。
【泯沒】ビンボツ　ほろぶ。五代史、一行傳論「一ニ而無二聞者一」＝淪沒・泯滅。
【泯滅】ビンメツ　ほろぶ。鑑誡文「生民之命、棼二于一ニ一」＝泯沒・泯棼。

【泐】ロク　屋

○石がくだける、石が其の脈理に因りて解散する。周禮、考工記「石有」時而一ニ○今人、手畫ヲを手一といふ、蓋し勒の字の假借、勒は刻、卽ち之を刻識する義。

【泝】ソ　遇

いかだ(小筏)＝桴。

【珍】㊀レイ　㊁テン　先　㊁デツ　屑

㊀やぶる、そこなふ(害)陰陽の氣和せずして物を害する。漢書、五行志「惟企一ニ木」文天祥、正氣歌「百一ニ自辟易」○惡氣、妖氣「妖一ニ」「氣一ニ」㊁しのぎ

みだる（陵亂）莊、大宗師「陰陽之氣有ㇾ」
【滲氣】シンキ　惡しきき。庾信賦「――朝浮、妖精夜隕」
【滲薄】シンハク　わざはひ。柳宗元文「消二伏――一、揚二光輝一」＝妖孽。

【泠】レイ　リャウ　青

○――は清く涼しき貌。又、音聲の盛んに溢れる貌。又、水又は風の清らかなる聲。○風が和ぐ。○音樂師。左、成九「閻二其族一、曰――人也」古、冷に通ず。
【泠然】レイゼン　○きよ、ひやかなる貌。又、水の清き貌。風の聲。○輕妙の貌。莊、逍遙遊「列子御レ風而行、――善也」
【泠風】レイフウ　おだやかなる風。呂覽、任地「子能使二子之野盡爲二――一乎」＝和風。
【泠泠】レイレイ　○水の清き聲。陸機詩「山澗何――」○風の聲。宋玉、風賦「清清――、拂二拂衆一レ窺」○清く涼しき貌。東方朔、七諫「下――而來風」○音聲の盛んに溢れる貌。陸機、文賦「音――而盈レ耳」
【泠洌】レイレツ　ひやゝかにして清し。韓愈詩「酒味既――、酒氣又氛氳」

【泓】ワウ　庚

○水清き貌「――澄」○水がひくくふかし（下深）○ふち（淵）○――宏は聲の大なる貌。
【泓涵】ワウカン　水の深くたたへる貌。韓愈、藍田縣丞廳壁記「――演迤」演迤は水の廣き貌。
【泓澄】ワウチョウ　水が深くしてすむ。梁簡文帝詩「雜色見清水、――鏡百尋」
【泓渟】ワウテイ　深き水たまり。柳宗元文「散爲二森林一、圍二合清池一、窪郭――」
【泓量】ワウリャウ　深くみづかさがある。郭璞、江賦「極二――一而海運」
【泓渺】ワウビョウ　水深き貌。又、水清き貌。范成大文「清泉――、殺桂覆二其上一」

【泪】涙（水部八畫）に同じ。

六畫

【注】㊀アイ　㊁ヲ　麻佳　支

㊀渥――は川の名、甘肅省に在り。㊁くほむ。又、其の地。＝窪。○ふかし（深）○たまり水（淨水）○まがる（曲）

【洩】㊀イ　㊁テイ　支　霽

㊀はなしる（鼻液）目より出るは涕、鼻より出るは――。＝鼻。㊁なみだ。禮、內則「不二敢唾一レ――」＝涕。

【浦】㊀ユイ　㊁ユン　虞　眞　或は泄に作る

㊀――はのびちる（舒散）心ののびのびする貌。又、とび翔ケる貌。又、風に順ひ任す貌。㊁やむ（歇）左思賦「士怒未ㇾ――」○もる、もらす（漏泄）○除ケ去る、さらふ（潔）○へる、へらす（減）左、昭二十「濟二其不一レ足、以――其過」
【浦浦】ユイイ　○舒び敬る貌。心がのびのびする。左、隱元「其樂也――」○飛翔する貌。又、浮沈する貌。木華、海賦「翔霧連レ軒、淫淫――」○風に順ふ貌。海賦「或擊二――一于裸人之國」
【浦命】ユイメイ　祕密なる君命をもらす。左傳「――重刑」注「漏二泄君命一、罪之重」
【浦漏】ユイロウ　もる。もらす。陳書、姚察傳「侍二奉機密一、夫二言――一」＝漏洩。

【洟】㊀チ　㊁コ　虞　遇　汚・汙に通ず

㊀くほみ（窪下）○くぼたまり、たまりみづ、水濁りて流れず。○たまる。○地を掘りてくぼくす。㊁ふかし（水深）○はびこる（繁）○そむ。そまる（染）○けがる（穢）
【洟池】チチ　たまり水のいけ、みづたまり。孟、梁惠王「數罟不ㇾ入二――一」
【洟澤】イタク　ぬかるみ。抱朴子「捐二懸黎于――一、非二夜光不一レ眞也」

【洋】カウ　コウ　陽

おほみづ。＝洪。
【洋水】カウスイ　おほみづ。書、大禹謨「帝曰、來禹――儆予」孟、告子「水遊行謂二之――一」――者洪水也」
【洋洞】コウトウ　大水の貌。孟子「洋水」注「水之遊行、――無ㇾ涯、故曰二洋水一也」

【洽】カフ　ケフ　治

○あまねし（徧）廣くゆきわたる「普ㇾ――」「博ㇾ――」「浹ㇾ――」○やはらぐ（和合・和協）「一比」「驩ㇾ――」「重熙累ㇾ――」○うるほふ（潤）ひろくしみこむ。書、大禹謨「好生之德、ㇾ于民心」○協ㇾ――は未の歳。

治・周・普徧・浹の別は周（口部五畫）の條を見よ。

【洽汗】コウカン　あまねくあせかく。西陽雜俎、韓弘在二中書一、盛暑ㇾ――寫ㇾ經」
【洽驩】コウカン　やはらぎよろこぶ。史、孝文帝紀、論二德惠天下一、感二撫諸侯一、四夷皆ㇾ――」＝驩洽。

【洽滿】コフ　あまねくうるほふ。論衡「沛而雨、物之莖葉根葉、莫ㇾ不ニ一ニ一ㇾ洽洪。

【洽洪】カフセフ　○あまねくひろし、博くゆきわたる。漢書、谷永傳「不ㇾ能ニ一ニ一如ニ劉向父子及揚雄一也」○うちとけてしたしむ。〓洽洽・洽和。

【洽暢】カフチヤウ　編ねくのびる。晉書、文明王皇后傳「履ㇾ信居ㇾ順、練行ニ一ニ一」漢書、終軍傳「是澤雨洽而威北暢也」

【洽著】カフヂヤク　ひろくあらはる。獨志、楊戩傳「初自ニ幾代一、則仁聲ニ一ニ一」

【洽博】カフハク　あまねくひろし。晉書、左思傳「經學ニ一ニ一、才章美茂」〓博洽。

【洽比】カフヒ　やはらぎしたしむ。比は親、和協親近の義で說、小雅「ニ一ニ一其鄰ニ」

【洽普】フラ　あまねし。魏志、文帝紀、注「聖人以ㇾ德、親ニ比天下一、仁恩ニ一ニ一」〓普洽・周普・洋普。

【洽聞】ブンブン　物事をひろく聞きて知る、見聞博し。漢書、劉向傳贊「博物ニ一ニ一、通ニ達古今一」〓博聞・多聞。

【洽覽】ランラン　あまねく見る。東晉文「潛則通ㇾ微、ニ一ニ一深識」〓博覽。

【洽和】カフワ　心がうちとけてやはらぐ。大戴禮「周時德澤ニ一ニ一」漢書、董仲舒傳「五帝三王之道、改ㇾ制作ㇾ樂、而天下ニ一ニ一、百王同ㇾ之」〓洽和。

【洎】キ　㊁

○うるほふ(潤)管子、水地「越之水、重濁而ニ一」○そそぐ(濺)水を釜に添へ入れる。○およぶ(及)○にくのしる(肉汁)左、襄二八「以ニ其ニ一餚」

【洎及】キフ　洎・及・逮・迨・暨・與の別は及(又部二畫)の條を見よ。

【洎夫蓉】フヨウ　外國より舶來せし藥草の名、蘭語の音譯、洎は帕ノの誤。〓番紅花。

【洶】キョウ　㊁　冬

○わく(涌)水勢がわきあがる。又、其の聲。○鳴り動く、どよめく、衆人がさわぎ立つ。

【洶急】キフフ　水勢はげし。元史、汪德臣傳「嘉陵白水交會、勢ニ一ニ一」

【洶洶】キフキフ　○鼓動する聲、どよめきさわぐ。揚雄、羽獵賦「ニ一ニ一旭旭」蘇軾賦「忽ニ一ニ一於軍動ニ」○水の勢。左思、吳都賦「濤聲ニ一ニ一」

【洶動】キフドウ　さわぎて靑みからず。宋史、河渠志「每ㇾ將ㇾ興ㇾ工、市肆ニ一ニ一」〓騷擾。

【洶湧】キフヨウ　波の聲。劉說詩「軒窗怒濤聲ニ一ニ一」

【洶涌】キフヨウ　波のわきたつ勢。又、其の聲。涌・湧同じ。司馬相如、子虛賦「沸乎暴怒、ニ一ニ一澎湃」

【洶湧】キフヨウ　前條に同じ。吳志、孫權傳、注「見ニ波濤ニ一ニ一、歎曰、嗟乎固天所ㇾ以隔ニ南北一也」

【洶澎】キフホウ　わき上る。韓愈詩「君才誠倜儻、時論方ニ一ニ一」

【洫】キョク　㊁　或は滅に作る

○みぞ(渠)廣さ八尺、深さ八尺ある田間の用水を引く水道「溝ニ一」○城のほり(城池)○みだる(亂)○やぶる(壞敗)

【洞】㊀トウ　㊁ヰ　灰　滴は正字

㊀さかのほる(逆流而上)「溯ニ一」○水のめぐり流れる貌(旋流)○くらし(幽暗)「ニ一窗」㊁ニ一ニ一は心くらし(悟)

【洞泊】クヰハク　水のめぐり流れる貌。唐書、柳宗元傳「還ニ一乎淪漣」

【洞洞】クヰクヰ　○水の流れる貌。王安石詩「雪乾沙淨水ニ一ニ一」○心くらき貌。爾雅「ニ一、愼也」

【洞洞】クヰクヰ　めぐりながれる。盤旋して流れる。宋史、蘇軾傳「ニ一激射、識敗二公私船一不ㇾ可ニ勝計一」〓洞洞。

【洗】㊀セン　㊁クヮン　霰　銑

㊀水が涌きて光る。○ニ一は果敢の貌、たけくいさましい(武)○いかる貌。詩、邶風「有ニ一有濊」㊁水の深く廣き貌。〓滉。○ほのか、ぼんやり、怳・恍に通ず。

【洗洗】クヮンクヮン　武き貌。又、果毅なる貌。詩、大雅「武夫ニ一ニ一」

【洗愈】クヮンコウ　うっとりして明かならざる貌。司馬相如、大人賦「四望三崵崘之軋洸ニ一ニ一」〓怳惚・恍惚。

【洗洋】ヤウヤウ　○水の深く廣き貌。○轉じて學說などの廣大にしてとりとめなき義とす。史、老莊傳「其言ニ一、自恣以適ニ己」

【洗漾】クヮンヤウ　ただよふ。呂溫、應三禮部試「色必洞澈、光無ニ一ニ一」

【活】クヮツ　黠

○いく、生存する「生ニ一」「死ニ一」○いかす(生)死を救ふ。史、項羽紀「項伯殺ニ人臣ニ一之」之は項伯を斥す。○おふ(生育)くらし(生計)「ニ一計」○勢がつよい、生氣が盛んに動く。○よみがへる(蘇生)○ニ一は水の盛んに流れる聲。○圖柔術にて氣絕せし者をよみがへらす法「ニ一を入る」

【活眼】クヮツゲン　理を見るに明かなる眼力。

【活潑】クヮツパツ　いきいきしたる氣、活潑なる生氣。詩經、衛「皆含ニ此嘉生之

一一」

【活命】クヮツメイ　けものをいかす。呂覽「夫殺」人以一一、不二亦不仁一乎」。

【活句】クヮック　詩文の活氣ある句、生動せる字句。滄浪詩話「須レ參二一一一、勿レ參二死句一」

【活火】クヮクヮ　盛んにもゆる火。蘇軾詩「活水還須二一一一煎」

【活火山】クヮクヮザン　現に火をふき出してゐる火山。死火山・熄火山等の對。

【活活】クヮツクヮツ　水の盛んに流れる聲。詩、衞風「河水洋洋、北流一一」

【活計】クヮツケイ　くらしむき、すぎはひ、生活の計畫。白居易詩「莫レ厭家貧一一微」＝生計。

【活剝】クヮツハク　生きたる芝居、しばゐにて見る如き目ざましき實際の出來事。

【活語】クヮツゴ　文法にてはたらくことば。＝作用言・動詞。

【活殺】クヮツサツ　いかすと、ころすと。＝生殺。

【活殺自在】クヮツサツジザイ　いかすも、ころすも心のままである。勝手にふるまふこと。

【活字】クヮツジ　活版を見よ。

【活詞】クヮツシ　いきたることば。劉知幾文「王充以二聖人一一、爲二自己一死句一」

【活人】クヮツジン　人をいかす、醫術をいふ。廣事類賦「陸宣公晩年家居、尤留二心於醫一、聞レ有二驗方一、必自抄錄、此亦一一之一術也」

【活人畫】クヮツジンクヮ　背景は書にて、畫中の人物は實際の人を用ふる一種のみせもの。

【活水】クヮツスヰ　流れ動くみづ。死水の對。朱熹詩「問渠那得二清如一許、爲レ有二源頭一一來一」

【活塞】クヮツソク　圓筒内にはめこみ、自由に出入し得るやうにしたる栓。

【活脫】クヮツダツ　いきうつし、甚だ相似る、多く詩に用ふる。楊萬里詩「小春一一是春時」

【活東】クヮツトウ　おたまじゃくし、蛙の子。蘇雅、「科斗一一、蝦蟇也」

【活動】クヮツドウ　○盛んに動く。○圖或る目的の爲めに奔走する。

【活動寫眞】クヮツドウシャシン　映像の活動して見える幻燈。＝活動影戲。

【活剝生呑】クヮツハクセイトン　まるのみにして變化する能はざる義。大唐新語「有二秦璟開張懷慶、好愉二名士文章一（中略）人問二之誥一、曰、活二剝王昌齡一、生呑郭正一一」＝生呑活剝。

【活潑】クヮツパツ　勢ありて生動する貌。殷遙詩「應外書魚一一、牀頭經典交加」

【活潑潑地】クヮツパツパツチ　魚のはねをどる如き勢よき貌、地は助字、活と潑潑とは形容詞、もと釋氏の語。中庸、朱注「此一節子思喫緊爲レ人處、一一、讀者其致レ思焉」

【活法】クヮツパフ　應用の方法、活用法。圖機

一一」

【活板】クヮツバン　一字づつの印板を組み合せて文句を構成するやうに造りし印刷板木、其の一字づつの印板を活字といひ、昔は瓦又は木にて造る、今は鉛の合金にて鑄造する。夢溪筆談、隱曆中、有二布衣畢昇、爲二一一一、用二膠泥一刻レ字」これを一一の濫觴とす。＝活字板。

【活版】クヮツバン　前條に同じ。

【活物】クヮツブツ　生氣ありて活動するもの。

【活佛】クヮツブツ　いきぼとけ、高德の僧などを稱す。韓邦靖詩「更禱二番僧一取二一一一」

【活辯】クヮツベン　圖活動寫眞の辯士の略。

【活民書】クヮツミンショ　備荒貯蓄のことを記せる書。元史「趙簡請以二宋董煟所レ編救荒一一、頒二州縣一」＝活人書。

【活潑】クヮツポツ　勢よくをどる。又、あちこちと活動する。

【活用】クヮツヨウ　○いかし用ふる。實用に適するやうにつかふ。○文法にて助詞・形容詞・助動詞の語尾が意味によりて變化する用法。

【活鰱】クヮツレン　いきたる魚。白居易詩「萬里無二一一一」

【活路】クヮツロ　いのちのたすかるみち、免れ出るみち。＝血路。

【消】

消（水部七畫）の俗字。

【洪】コウ　東

○おほみづ「一水」＝洚。○大いなり。書、大誥「一一惟我幼沖人」

【洪飲】コウイン　大いに飲む。李中詩「一一花開數十朶」＝豪飲。

【洪圖】コウト　大いにしてまろし。法苑珠林「譬如二鍛鼻一一一鍛長」

【洪恩】コウオン　大いなるめぐみ。荀勗詩「一一蓄輔、慶及二羣臣一」＝鴻恩・大恩・洪惠。

【洪基】コウキ　大業のもとゐ。又、帝王の事業のもと。陸機、漢高祖功臣頌「一一惟求、編祚長隆」

【洪業】コウギョウ　大いなるのり。陶弘景、許長史舊館壇碑「永觀二前猷一、聿遵二一一一」＝洪鏡。

【洪規】コウキ　大いなるはかりごと。陸機、辨亡論「一一遠略」＝大計・大猷。

【洪輝】コウキ　大いなるひかり。典引「揚二玆一一一」

【洪鈞】コウキン　天。又造化。鈞は陶器を作る轆轤の如きもの。以て造物者に比す。杜甫詩「八方開二蕩域一、一氣轉二一一一」

【洪勳】コウクン　大いなるいさを。宋書、武帝紀「自レ玆迄レ今、一一彌劭」＝洪伐・偉勳。

【洪化】コウカ　大いなる敎化。後漢書、章

帝紀「明君之德、啓迪ー一、緝熙康久、光照二六幽一」晉書、樂志「元首敷ー一、百僚股肱莊忠良」

【洪荒】コウクワウ　ぱっとして廣く大いなり。千字文「天地玄黃、宇宙ー一」

【洪惠】コウケイ　大なる恩惠。晉書、段灼傳「使三萬邦欣欣、喜二戴ー一一」‖洪恩。

【洪業】コウゲフ　大いなる事業、天子の事業。左思、吳都賦「建二至德一以創ー一」‖洪基。

【洪原】コウグワン　廣きはら。漢書、司馬相如傳「乃堙ー一、決二江疏一河」‖廣原。

【洪源】コウゲン　おほいなるみなもと。隋書、音樂志「昭哉上德、浚二彼ー一一」

【洪才】コウサイ　大いなるはたらき。晉琛詩「雖二漢若一範、ー一類二河海一」‖大才。

【洪細】コウサイ　大と小と。梁武帝文「求理得情、ー一必盡」‖洪纖。

【洪志】コウシ　大いなるこころざし。唐太宗詩「書揚二盛跡一、補闕興ー一一」‖大志。

【洪澤】コウシン　水の廣きわたし。魏文帝文「臨ー一而懷レ德」

【洪洗】コウシン　大いにふる雨。郭璞賦「隆陽映而不レ焦、ー一沃而不レ長」

【洪儒】コウジュ　大學者。公羊傳、序疏「能通二一經一曰二儒生一、博二覽羣書一號曰ー一一」‖鴻儒・碩儒。

【洪緒】コウショ　大いなる事業、緒は事業。張敬叔賦「開二帝王之ー一一」‖洪基。

【洪圖】コウト　大いなるはかりごと。徳林傳「丁二母憂一、匍匐奔赴、因發二熱病一、彌旬ー一」顧は衰。

【洪鈞】コウキン　大いなるつりがね、大鼎に喩ふ。温庭筠詩「淡柄發ニー一こ」‖巨鎰。

【洪水】コウスヰ　おほみづ。書、堯典「湯湯ー一方割」‖澤水・大水。

【洪酔】コウスヰ　大いに酒に乏ふ。法苑珠林「飲レ酒ー一」‖大酔・酩酊。

【洪誥】コウコウ　おほごと。蔡邕文「ー一遠布、薄夏周稱」

【洪積土】コウセキド　洪水の作用にて土砂が積みかさなりて成りたる地層。

【洪川】コウセン　大いなる川。陸機、弔二蔡邕一文「彼ー一之方割、覩一墳之所レ埋」‖大川。

【洪纖】コウセン　大いなると、小さきと。後漢書、班固傳「紬二縕二儀一ー一之度一」‖細大・巨細・洪細。

【洪族】コウゾク　高貴のいへすぢ。顏延之文「紹二此ー一、蔑二彼名級一」

【洪大】コウダイ　大いなり。舊唐書、江王元祥傳「體質ー一、腰帶十圍」‖鴻大。

【洪濤】コウタウ　水面のひろき貌。

【洪涛】コウタウ　おほなみ。木華、海賦「ー一瀰汗、萬里無レ際」‖大濤。

【洪漲】コウチャウ　大いなるふち。水經、注「ー一巨浪、繁二連江湄一」

【洪智】コウチ　大いなるちゑ。論衡「恢人直以高才ー一、考二上世人一乎」

【洪祚】コウソ　高貴のちすぢ。潘岳賦「周文公之苗裔、予元舅之ー一」

【洪統】コウトウ　大いなるちすぢ、立派なる系統。陸機詩「綿綿ー一、非レ爾孰崇」

【洪寧】コウネイ　大いに安し。蔡邕、釋誨「有二堯皇之ー一唐虞之至時一」

【洪伐】コウバツ　大いなるいさを、伐は功。晉書、張協傳「沒則勒二ー一于金册一」‖偉勳・洪勳・玉勳・大功。

【洪範】コウハン　○禹の時、洛水より出でたる神龜の背にあらはれしといふ九章の文にて天下を治める大法。書、洪範「天錫二禹ー一九疇一」九疇は、五行・五事・八政・五紀・皇極・三德・稽疑・庶徵・五福。○大いなるのり。‖洪軌。

【洪武】コウブ　明の太祖の年號。

【洪覆】コウフク　大いにおほふ義、天をいふ。轉じて天子の大いなるめぐみ。張九齡詩「ー一在二元元一」

【洪福】コウフク　大いなるさいはひ。金史、顯宗后傳「社稷之ー一也」‖鴻福・大福・景福。

【洪颷】コウヘウ　おほかぜ。袁宏文「ー一扇レ海、二溟揚レ波」颷は旋風カゼ

【洪模】コウボ　大いなるのり。席景永、銘「敷二玆景躅一、流二美ー一一」‖洪範・洪軌。

【洪溶】コウヨウ　水が大いにして深し。元結賦「海活森谷泪ー一」‖鴻溶。

【洪涼】コウリヤウ　大雨にておほみつが出る。郭璞賦「去秋以來、諸部並有二暴雨一、水嘗ー一」

【洪流】コウリウ　大いなるながれ。詩譜詩「ー一高瀉自レ天來」

【洪霖】コウリン　大いなるながあめ。晉毗詩「ー一瀰二旬日一、腐腐四區昏」

【洪量】コウリヤウ　すぐれてひろき度量。北史、高允傳）

【洒】

㊀サイ・セ　㊁セン　㊂ソン　㊃セイ・サイ　㊄サイ・セ

㊀そそぐ（灑）水をかけて洗ふ、さっぱりする「瀟ー一落」「ー一落」瀟に通ず。㊁うやうやし（肅恭）つつしむ貌「ー一如」○水ふかし。㊂驚く貌「ー一然」○ーソンはさむくなのの（寒慄）㊃すすぐ（雪）名譽を恢復する。孟、梁惠王「願比二死者一ー一之」○あらふ（洗）「ー一濯」㊄鮮明なる貌。高峻なる貌。詩、邶風「新臺有ー一」

同訓異字　洒・注・沃・澆・灌・瀉・瀉・瀉の別は注（水部五畫）の條を見よ。

【洒掃應對】サイサウオウタイ　水をまきてはらひきよめ、尊長者の呼ぶに應じ、問に對ふ、皆年少者の職。論、子張「子夏

之門人小子、當二——進退一、則可矣」【洒心】シン心をあらふ。莊子「削レ形去レ皮、一レ去レ欲、而遊二于無人之野一」【洒灑】サイ　あらひすすぐ。左、襄二一「在二上位一者、一二一其心一」【洒落】シャク心がさっぱりとする。晉言故事「春陵周茂叔、人品甚高、胷中一一、如二光風霽月一」＝瀟洒。【洒如】ジョ　瀟灑ショウサイなる貌。禮、玉藻「君子之飲レ酒、愛二一酔一而色一一也」【洒然】ゼン　○おどろく貌。史、范雎傳「羣臣無下不二一變レ色易レ容者上」○一顧にセン敬眉の貌。＝洒如ジョ

【洄】ジ　ニ　支

○溢れき水、ゆ。○漣一は渦の流れる貌。○にる(煮)

【洲】シウ　ス　尤

○す、しま、砂がもりあがりて成りたる島にて、水中居るべき者。詩、關雎「在二河之一」なぎさ。○くに、地球上の大陸「五大一」○十一瀛一は仙人の居る所。【洲北】シウ　す。鮑照詩「孤鴈集二一一」【洲渚】シウシャ　なぎさ。杜甫詩「風生二一歸帆開」【洲嶼】シウ　しま。韋應詩「遲遲窓二一一、遷遷互二津陌一」＝洲島。【洲澨】シウセイ　水のほとり。すと、うらと。澨は水浦。高啓、松江亭詩「綿綿一一平、莽莽霞葵楡」＝島澨。【洲島】シウタウ　しま。元結、石魚湖上醉歌「山爲レ樽水爲レ沼、酒徒歴歴坐二一一」【洲汀】シウテイ　沙にて成るなぎさ、す。楊炯文「竹樹在二一一之外一」＝洲渚・汀洲。【洲渚】シウシャ　図○砂地、島四せるはま。○洲濱ヒンの略。結婚式に用ふる島臺シマダイ蓬萊。○餅菓子の名。

【津】シン　真

○つ、わたしば(渡頭)論、微子「問一」○みなと、ふなつき。○きし、がけ(崖)○うるほふ(潤)○しる(液汁)「一液」つば(口中液)○一一はあふれる(溢)○天一は地名、直隸省に屬す。○一貼は財を以て人の不足を補ふ、潤益する義。【津頭】シントウ　よだれ「病源論」【津液】シンエキ　つば。素問「爲レ胃行二其一一」＝唾液。【津腺】シンセン　わたしば。驛は陸上のうまつぎばに比していふ。錢起詩「夜火臨二一一、晨鐘隔二浦城一」【津航】シンカウ　わたしぶね。張綰、龍樓寺碑銘「彼岸何遠、一一絶レ濟」＝津船。【津涯】シンガイ　ふなつき、船をつける岸。書、微子「若レ渉二大水一其無二一一一よ」【津岸】シンガン　わたしばのきし。魏志、公孫衍傳、注「則賀浮レ舟百艘、沈二津一一、貸二遽有無一」＝渡頭・津驛・津渡。【津徑】シンケイ　わたしばのみち。齊書、李安民傳「絕二其一一」【津人】シンジン　わたしもり。莊子「一一操舟者レ神」【津津】シンシン　多くしてあふれる貌。莊、庚桑楚「其中一一乎猶有レ惡」一說に盛しき貌又、雪の味ある義。【津堠】シンコウ　わたしばのきし。于濆詩「巨浸無二一一一」＝津涘・津涯。【津唾】シンダ　つばき。＝津液・唾液。【津埭】シンタイ　ふなつきば。齊書、蕭子良傳「脅二遏一一、恐二喧傳郵一」【津逮】シンタイ　此方のわたしばより、對岸のわたしばに船にて行く。遠くは至り及ぶ。水經、注「世人學レ有二一一者一」【津店】シンテン　わたしばにあるみせ。高啓詩「商旅喚二一一一」＝梁肆。【津渡】シンド　わたしば。孟浩然詩「潮平一一闊、風止客帆收」【津度】シンド　舟渡しを業とするわらべ。張說詩「一一夜艤レ舟」【津頭】シントウ　わたしば。杜甫詩「休下向二一一一問中去程上」【津筏】シンバツ　○わたしのいかだ。韓愈詩「開二張儀中實一、自可レ得二一一一」○轉じてすべき、案内の義とす。＝津路。【津梁】シンリャウ　○わたしと、はしと。後漢書、雲延傳「北度二洞水一、破二舟機一、壞二一一、催而得レ免」○佛が人を濟度する義とす。世說、言語「庾公見二臥佛一曰、此子疲二於一一、於レ時以爲二名言一」○邪を爲すにたよりとなるもの、はしわたし、案内、階梯などの喩とす。○水を渡り陸を行く義より、奔走の意に用ふ。【津津浦浦】フホ　圖國のすみずみ、到る所。＝率土之濱。

【洙】シュ　ス　虞

川の名、泗水の支流、山東省に在り。【洙泗】シュシ　孫國の二川の名、孔子其のほとりにて弟子を敎ふ、よりて孔子の學の義とす。史、孔子世家「孔子設二敎一一之上、修二詩書禮樂一、弟子彌至」＝泗洙。【洙泗學】シュシガク　孔子の學、前條を見よ。唐彙詩「人歸一一、歌盛舞雩風」

【洵】シュン　ジュン　眞

○うづまくみづ。○まこと、まことに(信)詩、鄭風「一美且

都」○とほし（遠）○ひとし（均）○ー沸ふつ　はこゑを出さずして泣く。盤語「無ー沸」

同訓異語　海・信・眞・誠・固・實・允・良・諒・荷の別は信（人部七畫）の條を見よ。

【湘】

㊀ジ。
㊁ジ。　國　風

㊀川の名、直隸省に在り。㊁水にひたり濕ふ（漸濕）又、其の地。詩、魏風「彼汾沮ー」

【洗】

㊀㊁セン　㊂セイ・サイ　漢　呉

㊀あらふ、足をあらひすすぐ（洒足）○きよし、いさぎよし（潔）㊁すすぐ、きよむ。○たらひの類、みづこぼし（棄水器）儀禮、士冠「設ー于東壁」○ー禮は基督教にて信者になる者に施す儀式、今までの罪惡をあらひ去る意にて信者の頭に水を灌ぐもの。‖浸禮。

【洗胃】ヰセン　あぶくらをすすきよむ、改心する義。南史、荀伯玉傳「吞刀刮腸、飲ー灰ー」

【洗硯】ヰセン　あらひてひのしをかける。文同詩「淨若ニ新ー一ー」

【洗宕】ヰセン　罪なきを明らかにしてゆるす。唐書、蘇頲傳「駁ニ發其讞一、多ー從ニー一ー」

【洗瘕】ヰセン　きずを清め去る。唐書、吳武陵傳「濊ー垢ー一、以備ニ四海一」

【洗甲】ヰカフ　洗兵に同じ。宋史、樂士寧傳「孟達ニ編海一ー一ー挽ニ天河一」

【洗肝】ヰカン　きもをすすきよむ。心をさっぱりと清める。蘇軾詩「江水洗ニ我肝一」‖洗心。

【洗眼】ヰセン　日をあらふ。韋孝寬詩「馬頭漸向揚州郭、爲報時人ー一ー看」

【洗刮】ヰクワツ　あらひけづる。蘇軾詩「豈效ニ世俗人、一ー求ニ媚媛一」

【洗臉】ヰケン　俗　顏面をあらふ。

【洗悟】ヰセン　さとす。又、さとる。十六國春秋「ー二ー釋僧一」

【洗盞】ヰセンサンアラヒ　さかづきをすすぐ。蘇軾詩「ー一ー酌二黃」

【洗耳】ヰシ　けがれし事を聞きし耳をあらひきよむ。堯が許由に天下を讓らんとせしを許由聞きて耳を洗ひし故事。七啓「河濱無ニー一ー之士、翳嶽無ニ巢居之民一」

【洗心】ヰシン　心をあらひきよむ。易、繫辭「聖人以ー此一ー、退藏ニ於密一」

【洗浄】ヰシヤウ　あらひ清める。

【洗車雨】ヰシヤウ　陰曆七月七日の雨（田家五行雜占）

【洗手花】ヰシユクワ　雞冠花ケイクワの異名。東京夢華錄「十二月街市鬻ニ――一」

【洗如】ヰジヨ　さっぱりとしたる貌。梅堯臣詩「靜坐人已眠、我虛久ー一」

【洗拭】ヰシキ　あらひぬぐひて清くする。白居易詩「ー二ー金杯一揮ニ玉徹一」

【洗足】ヰソク　あしをあらふ。梁宣帝賦「馮ニ怪石一而爲レ枕、固ニ滄浪一而ー一レー」

【洗雪】ヰセツ　あらひすすぐ。はぢをすすぐ。後漢書、段熲傳「ー二ー百年之遺負一、以慰ニ忠將之亡魂一」

【洗汰】ヰタ　あらひ去る。唐書、馬總傳「磨治ー一、其俗一變」

【洗證】ヰセン　あらひ去る。王粲詩「一雨終夜鳴、殘暑歸ニー一ー」

【洗濯】ヰタク　あらふ。東城集「何時復見ニー一ー乎」‖洗滌。

【洗竹】ヰチク　竹をすかす、即ち竹の繁き枝を去りて疎にする。學山錄「唐詩、有ニー一ー之言一（中略）穿ニ沐叢竹一、逆ニ其繁亂一、不レ便レ分ニ其勢一、然後枝幹茂擢、俗謂ニ之ー一ー」

【洗滌】ヰデキ　あらふ。南史、何修之傳「性好レ潔、一日之中、ー一者十餘遍」‖洗濯。

【洗濁】ヰデキ　洗はあらひて潔を去し、濁は厚きを致す。變儀を鄭重にする。書、酒誥「厥父母慶、自ー一、致レ用レ酒」

【洗馬】ヰバ　太子の宮の屬官、行列の前驅を掌る。洗は先。漢書、百官表「太子屬官有ニー一ー」‖先馬。

【洗筆】ヰヒツ　ふでをすすぎ清む。白孔六帖「白樂天傳ニ一詩成ニ輒洗ニ其筆一」

【洗兵】ヰヘイ　兵器を洗ひてをさめる。戰をやめる義。說苑「敵宜生曰、此妖也、武王曰、非也、天ー一也」杜甫、洗兵馬行「安得ニ壯士挽ニ天河一、淨洗ニ甲兵一長不レ用」‖洗甲。

【洗沐】ヰモク　髪あらふ、官吏の休暇を賜りて家に歸る義。漢武、萬石君傳「每ニ五日ー一、歸謁レ親」

【洗浴】ヰヨク　身をあらふ。佛國記「入レ池ー一」‖沐浴。

【洋】

セン　㊀　蒼・麌に通ず

しきりに、たびたび、相仍る、ふたたび（再）易、坎卦「水ー至」

同訓異語　洊・頻・連・仍・累・切の別は仍（人部二畫）の條を見よ。

【洊歲】ヰサイ　しきりに歲を重ぬる年、幾年もつづく。王融、策ニ秀才一文「中產開ニー一之賢一」

【洮】

タウ　豪

○川の名、臨洮より出で、甘肅省を經て黃河に入る。○手・顏などをあらふ（盥）きよむ、あらひすすぐ。

【洮汰】タウタ　あらひきよめる。後漢書、陳元傳「ー二ー學者之累蔽一」‖洗濯。

【洞】㊀トウ　㊁トウ　竜　図　通音ドウ

㊀ほら、ほらあな（深穴）うつろ「一穴」「一窟」○ふかし（深）○とくながれる（疾流）○とおる（通）通達する、さとり知る。○ほがらか（朗徹）「一徹」○つらぬく、つきとおす（貫徹）「一胸」○一一はまじめでまこと（誠懇）○蟹穴の所在地。唐書、馮盎傳「諸一獠叛」‖峒。○一庭は湖名、湖南岳陽縣の西南に在り。㊁一一は無形の貌。又、すなほ（婉順）なる貌。又、驚きつつしむ貌。

【洞開】トウカイ　ひろくひらく。宋史、太祖紀「汴景新宮成、御二正殿一坐、令レ一一諸門」‖洞闢。

【洞察】ドウサツ　たに。曹植、七啓「背一一、對二芳林」‖窮察。

【洞甲】トウカフ　よろひをつらぬく。南史、蔡道恭傳「所レ中皆一レ一鉄甲羽、一發或貫二兩人」

【洞徹】トウテツ　つらぬきうごかす。郭璞、十日雹、詔一一天神懸符」

【洞究】トウキウ　明かにきはめる。元史、張文謙傳「一一術數」

【洞宮】トウキウ　道士の居るてら。楊巨源詩「一一曾向二龍邊一宿」‖道院。

【洞房】トウバウ　むねをつらぬきうがつ。司馬相如、子虚賦「一レ一連レ閨」

【洞窟】トウクツ　ほらあな、いはや。柳宗元、祉說「風出二一一一」‖洞穴。

【洞豁】トウクツ　ほがらかにひろし。呂令問賦「公府一一、棄木難生」‖洞敞。

【洞貫】トウクワン　つらぬく。吳志、晉瑤傳「矢皆一一」

【洞曉】トウケウ　明かにうがちさとる。宋史、丁謂傳「圖讖博突音非、無レ不二一一一」

【洞穴】トウケツ　ほらあな。揚雄、羽獵賦「入二一一出二蒼梧一」‖洞窟。

【洞見】トウケン　みとほす、みぬく。‖洞察・洞視。

【洞戸】トウコ　○婦人のへやの出入り口。後漢書、梁冀傳「連房一一、柱壁雕鏤、加以二銅漆一」○ほらあなの口。顧況詩「一一窮衡一寂寂」‖洞門。

【洞参】トウサン　洞見に同じ。

【洞照】トウセウ　明かにてらす。何承天文「貴平一一、宇宙開朗」

【洞達】トウタツ　通ずの底なきもの、洞は通、凡八の類。漢書、元帝紀贊「準二史書一敍二享基一、叙二一一一一」前赤壁賦「客有レ吹二一一一一者」

【洞達】トウタツ　うがち通ずる。酉陽雜俎「日可レ一一二陰陽一」‖明徹。

【洞膽】トウタン　心をうがち見る。周邦彥、汴都賦「賓鋭一レ一、神離照レ捕」

【洞庭】トウテイ　湖の名、今の湖南省に在りて、支那第一の大湖。史、吳起傳「晉三苗氏左二一一右二彭蠡一」李白詩「一一西望楚江分」‖九江。

【洞庭春色】トウテイシユンシヨク　酒の名。蘇軾詩序「安化郡王以二黄柑一釀レ酒、謂二之一一一」

【洞庭雖レ潘負レ之者北】トウテイスヰハンフノシヤホクニソムクハ　洞庭湖は深くとも、之を持むときは敗北する。左思、蜀都賦「劍閣雖レ巖、憑レ之者蹶、非レ所二以深一根固一蔕也、一一、非レ所二以愛一人治一國也」

【洞欲】トウヨク　うがちとほす、明かにさとる。白居易詩「淺深皆一一、可レ照二腸與一肝」

【洞天福地】トウテンフクチ　天下の名山勝境、神仙の居る所の稱。仙經に三十六洞天、七十二福地ありといふ。

【洞洞】トウトウ　まじめにまこと、質愨なる貌。禮、祭義「一一屬屬然、如レ不レ勝、屬屬は專一の貌。

【洞房】トウバウ　深く奥まりたるへや。沈約詩「凝華入二蘭帳一、清暉照二一一一一」轉じて婦人のへや。

【洞房花燭】トウバウクワシヨク　婦人のへやに燈火がうつくしくかがやく。庾信詩「一一明、燕餘度舞輕」轉じて婚姻の宴の義とす、花一に華に作る。

【洞分】トウブン　明かにわける。宋史、趙普傳「賢愚一一、玉石殊致」

【洞開】トウヘイ　廣くひらく。三朝聖政錄「太祖修二大內一既成、令レ一一諸門」‖洞闢。

【洞朗】トウラウ　明かにほがらか。雲笈七籤「一一幽虚、無二毫不二彰」

【派】ハイ　卦　通音ヘイ

○わかれる、わける。○わかれまた、えだがは（水分）（流）「分一」○學問・宗教・技藝などのわかれ「學一」「禪一」「流一」「宗一」

【派引】ハイイン　わかちひく。金史、補遺序「凡事物名數、支分一一、珠貫綵布、井然有レ序、炳然如レ丹」

【派遣】ハケン　諸方へ手わけしてつかはす。‖派差。

【派出】ハシユツ　手わけして出す「一一所」

【派別】ハベツ　わかれわかれになる。左思、吳都賦「百川一一、歸レ海而會」

【狀】フク　屋

○めぐりながれる（回流）「湍一」○かくれながれる（伏流・潛流）○みなと（水泊）「太子一」「魯峯一」

【狀流】フクリウ　めぐりながれる。又、かくれながれる。杜甫詩「一一何處入」

【洋】㊀ヤウ　㊁シヤウ　陽　漾

㊀大いなる海「海一」「大一」○おほし（多）○ひろく大いなり（廣大）○一一はひろがる、はびこる、充滿する。又、衆多な

る貌。盛大なる貌。又、善美なる貌。又、魚がゆったりと尾を揺かす貌。又、ただよふ、歸する所なき貌。○さまよふ、徉と通ず。○外國の稱「東ー」「西ー」○國西洋「ー學」「ー食」「ー語」㊀漢水に入る川の名。

【洋夷】ヤウイ　四洋人をいやしみていふ語。

【洋溢】ヤウイツ　滿ちてあふれる貌。中庸「是以聲名、ー二ー乎中國」

【洋行】ヤウカウ　○俗支那に在る外國人の大商店。○國西洋に行く。

【洋裝】ヤウサウ　○四洋風のよそほひ、西洋の服裝。○洋本じたて、洋書の裝釘。

【洋傘】ヤウサン　四洋のかさ。‖國蝙蝠傘（カハホリガサ）

【洋妾】ヤウセフ　國外國人のめかけとなる女、羅紗綿（ラシヤメン）

【洋洋】ヤウヤウ　○川の名、黄河の支流。○ーは水の流れ下る貌。○つづく。‖絡。○地の名、洛陽をいふ、今の河南省河南府。‖雒。○國京都の稱「上ー」「ー中」

【洛邑】ラクイフ　洛陽に同じ。周の武王、殷の民を洛水の濱に遷してーーを作り、之を東都といひしに始まる。

【洛花】ラククワ　牡丹の異名。歐陽修文「ー以三殺雨一爲二開候一」‖洛陽花。

【洛京】ラクケイ　古、支那の帝王の都せし處。五代史、職方考「洛陽、梁・唐・晉・漢・周當以爲レ都、後唐爲二ーー一、晉爲二西京一、後周因レ之」‖洛陽・洛邑。

【洛陰】ラクイン　洛水にて行ふみそぎ。劉孝威詩「皇儲重二ーー一」

【洛學】ラクガク　宋の程顥・程頤の性命理氣の學說。實踐淺抄「紹熙倘二程氏一曰二ーー一」

【洛師】ラクシ　洛陽をいふ、師は京師。書、洛誥「予惟乙卯朝、至二于ーー一」

【洛神】ラクシン　洛水の神、宓妃をいふ。謝靈運文「招二魂宓妃一、ーー清思、單二養日之歡陳一、遠二古來之妍媚一」洛神賦は曹植の作。

【洛書】ラクシヨ　禹の時、洛水より出現したる神龜の背に有りしといふ九つの模樣、洪範九疇の根元となりしもの。易、繫辭「河出レ圖、洛出レ書、聖人則レ之」

【洛誦】ラクシヨウ　文章をつづけて讀む、洛は絡。莊、大宗師「副墨之子、聞二諸ーー一之孫一」

【洛蜀三黨】ラクシヨクサンタウ　宋の哲宗の朝に激しく爭ひたる政治上の黨派三つ。洛黨は洛陽の人程伊川の一派、蜀黨は蜀の人蘇東坡の一派（四川の名に因みて出黨ともいふ）朔黨は劉摯の一派（宋史）‖元祐三黨。

【洛黨】ラクタウ　宋の程伊川の黨。洛は洛陽。小學紺珠、元祐三黨、ーー程頤・賈易等、蜀黨蘇軾・呂陶等、朔黨劉摯等」

【洛閩之學】ラクビンノガク　程朱の學派の稱。洛陽閩の條參看。

【洛陽】ラクヤウ　○古の都の名、洛水の北に在り、故にいふ、洛京參看。史、呂不韋傳「食二河南ーー十萬戸一」‖洛邑・洛師・洛京・西京。○國京都の異稱。

【洛陽花】ラクヤウクワ　牡丹の異名。羣芳譜「唐宋時、ーー冠二于天下一、故牡丹竟名二ーーー一」‖洛花。

【洛陽紙價貴】ラクヤウシカノタカシ　○晉の左思が三都賦を作りし時、豪貴の人爭うて傳寫し、爲めに洛陽の紙の價が高くなりし故事（晉書、文苑傳）○轉じて著書の盛んに行はるるにいふ。

【洛洛】ラクラク　水の流れ下る貌。山海經「爰有二淫水一、其清ーー一」

【流】ル　尤

○ながる、ながす、ながれ、流れ行く水「河ー」「本ー」「支ー」「奔ー」「濁ー」孟、梁惠王「從ー下一、而忘レ反」○うかぶ。○根源なし「ー言」○のぶ。○およぶ、およぼす（及・竟）しく（布）「ー布」○つたはる「ー傳」○ひく。○めぐる。禮、仲尼燕居「周ーー無レ不レ徧」○くだる、くだす（下）○うつる、うつり行く。孟、公孫丑「德之ー行」○かはる。○かたよる。○しまりがなくなる（無二節制一）禮、樂記「樂勝則ー」○はなる、はなつ（放）○ちる。○ーー離はさすらふ、さまよふ。又困苦する。又鳥の名、梟。○はしる。○とる、えらぶ、もとむ。詩、周南「左右ーー之」○しまながし、刑罰の一「ー罪」「配ー」○流刑に處す

る。周語「乃ー主於畿」〇しな（品法）「品ー」〇たぐひ、ともがら「名ー」「俗ー」「羽ー」「縞ー」〇すぢ。〇ー求は國名。＝琉球。國〇りう、りうぎ、特別の方式「山鹿ー」「遠州ー」〇ながれ、子孫。又、其のままやめになること、立ちぎえ。又、質物が約束の期限を經過して質屋の所有となる。

【流亞】リウア 次位に位する人。又、同類。晉書、桓溫傳「孫仲謀、晉宣王之ー也」＝亞流。

【流哇】リウアイ みだらなるはやりうた、淫靡なる流行ぶし〔張衡、七辯〕

【流芳】リウアウ 晩春にここかしこと飛びうつりて薫れ鳴くうぐひす。張說詩「繞レ廻ー一凡幾樹、猶レ聞亂蝶許多聲」

【流域】リウイキ 川のながれに沿へる一帶の土地の區域。

【流淫】リウイン 度にすぎて行がみだれる。荀子「士大夫無ニーー之行一」

【流詠】リウエイ 弘く傳へうたふ。晉書、康獻褚皇后傳「謳歌ーー、播溢無レ外」

【流曄】リウエフ 光をながす。西都賦「翡翠火齊、ーレー含レ英」

【流易】リウエキ うつりかはる。潘岳詩「荏苒冬春謝、寒暑忽ーー」＝變遷。

【流衍】リウエン 廣くのべ布く、つたはりはびこる。後漢書、桓帝紀論「五邪縱レ虐、ーニー四方」

【流餓】リウガ 他方にさすらひてう𠮟る。說苑「官無二腐鼠之蔵一、國無ニーー之民一」

【流餧】リウガ 〇たなびきうごくもや。唐書、劉洎傳「ーー成レ彩」〇仙人の飲む美酒の名。抱朴子「石髓煎官到二天上一仙人但以ニーー一杯一與レ我飲レ之、輒下二飢渇一」

【流行】リウカウ 〇あまねくゆきわたる。孟、公孫丑「德之ーー、速二於置郵而傳レ命」〇はやる、はやり「ーー病」

【流治】リウヂ あまねくうるほす。漢書、食貨志「王德ーー、禮樂成焉」＝潤治。

【流汗】リウカン あせを流す、流れる汗。漢書、王莽傳「未三背不ニーー面無二慚色一也」

【流寓】リウグウ すてられてさまよふ。新序「齊有二婦人一、極醜無レ雙、號曰二無鹽女一、行年三十、無レ所二容入一、衒嫁不レ售、ーー莫レ載」

【流暉】リウキ すぎ去り易き光陰。劉希夷詩「相歎惜ニーー」

【流藝】リウゲイ 學問藝術等の特別のかた、流派。

【流求】リウキウ 琉球〔柳宗元、嶺南節度使厩庫記〕北史にーー國傳あり。

【流金鑠石】リウキンシャクセキ 暑氣のはだしきにいふ。淮南子「大熱鑠レ石流レ金、火弗レ爲レ益二其烈一」

【流金鑠上】リウキンシャクジヤウ 炎暑のはげしきをいふ。莊、逍遙遊「大旱金石流、土山焦而不レ熱」

【流離】リウリ 流罪に處する。又、其の刑、流は罪の後漢書、梁統傳「五帝有ニーー權與之誅一」

【流麗】リウレイ あたたかき氣をただよはす。李嶠表「景日ーレー、嚴霜不レ凋」

【流寓】リウグウ 他鄉にさすらひすむ。周書、庾信傳「南北ーー之士、各許レ還二其舊國一」＝漂寓。

【流火】リウクワ 〇四に流れ下る火星（火星の正南に在る時は極暑）詩、豳風「七月ーー、九月授衣」〇轉じて陰曆七月の稱。

【流金】リウキン よりあひがおながれになる。

【流光】リウクワウ 〇過ぎ行く日かげ。李白詩「逝川與ニーー一競忽不二相待一」＝流年。〇波に隨ひて流れる月光。赤壁賦「擊二空明一兮泝ニーー」

【流黃】リウクワウ あや、綵。古樂府「大婦織ニ綺羅一、中婦織ニーーー」

【流潢】リウクワウ 水のながれる池。阮籍、東平賦「ーー餘濤、洋溢靡レ之」

【流丸】リウグワン それだま。懲毖錄「ーー中二髀臣左肩一、血流至レ踵」＝流彈。

【流刑】リウケイ 國事犯の刑、島地にうつして定役に服せしめざるもの。

【流形】リウケイ 世上に流行せる種種の形、卽ち森羅萬象。文天祥、正氣歌「天地有二正氣一、雜然賦ニーー」

【流態】リウタイ 此處彼處とあるきまはりていとふ。陳瓘、歸去來辭「策扶レ老攜ーー」

【流螢】リウケイ 風にまかせてとぶほたる。王筠詩「ーー漸散レ火、絡緯欲レ催レ機」

【流血】リウケツ ながれるち。ちをながす。次條參看。

【流血成川】リウケツセイセン 戰死者の甚だ多きをいふ。戰國策「居二四十餘萬之衆一ーー、湧泉如レ雷」

【流血漂杵】リウケツヒヨウシヨ 戰爭がはげしくして流れる血が杵の如き浮きものをもながす。一說に杵は齒卽ち齦〔孟、盡心〕

【流言】リウゲン 根源なきうはさ、ねなしごと。書、金縢「ーニー於國一」荀、致士「凡ーー、流說・流事・流謀・流譽・流慝、不レ官而衡レ至者、君子愼レ之」＝蜚語。

【流言止於智者】リウゲンシチニヤム 流言は智者の前に至りては行はれず。荀、大略「流丸止二於臾一、流言止二於智者一」

【流戶】リウコ 流亡せる民の戶口。唐書、殷侑傳「以二仁惠一爲レ治、歲中ーー復屬而還」

【流話】リウワ うはさ、いひふらす。韓愈、子「絕ニーー一元稹詩「ーー翻二波濤一」＝流言。

【流永】リウエイ すゐぎん。蘇軾詩「白鹿泉頭山月出、曙光浴レ眼如ニーー一」

【流沙】リウサ 支那の四方なる大いなる砂原、卽ち戈壁の沙漠。書經「四被二于ーー一」

【流澌】リウシ ながしころす。漢書、元帝

絕。潁川水出、一二一人民」
【流散】リウサン さすらふ。又、其の者。後漢書、廉范傳「徙三巴郡太守一、招二還一一」
【流産】リウザン 胎兒が月滿たずして死んで生れる。‖李産・小産。
【流竄】リウザン 罪によりて遠地にながす。
【流徙】リウシ 人民がいくさなどのために他方にあちこちとうつりさまよふ。劉禹錫詩「維時連年戰、道路多二一一」
【流言】リウゲン あとかたもなきことがら。荀、致主「流言流說一一」注「流者無二根源一之謂」
【流動】リウドウ 水がとけて流れる。楚辭「一一兮狹二路下一」‖流水。
【流失】リウシツ 水にながされてなくなる。
【流人】リウジン ○他國にさすらふる人。又、罪人。韓愈「越之一一、去レ國旬月」○流刑に處せられし人。孟浩然詩「江南作二一一」
【流唱】リウショウ ひろくつたへてとなへる。水經、注「役夫一一」
【流觴曲水】リウシヤウキヨクスイ 陰曆三月三日に曲水に杯を流し、其の杯の已が前に來らぬ中に、詩を作る故事。王羲之、蘭亭集序「此地有二崇山峻嶺茂林脩竹一、又有二清流激湍一、映二帶左右一、引以爲二一一一」
【流出】リウシユツ ○ながれいづ。
【流水】リウスイ ○ながれるみづ。詩、小弁「汎彼一一、朝二宗于海一」○物の通かなるに喩ふ。「光陰如二一一一」後漢書、馬皇后傳「來如二一一一、馬如二游龍一」
【流水調】リウスイテウ 音調の高妙なるをいふ。列、湯問「伯牙鼓レ琴、志在二流水一、鍾子期曰、善哉洋洋兮若二江河一」李白詩「愧非二一一一、叨入二伯牙絃一」
【流水不レ腐】リウスイフラズ 常に運動する者は腐朽せざるに喩ふ。月覽「一一、戸樞不レ蠹」
【流星】リウセイ ○よばひぼし。史、天官書「甘泉常有二一一一」○古の寶劍の名、光が流星に似たるが故。古今注「吳有二寶劍六、四曰二一一一」杜甫詩「流星二一劍」
【流星光底】リウセイクワウテイ ふり上げたる名刀の下。韓愈詩「一一逸二長蛇一」
【流逝】リウセイ ながれゆく。詩經、疏「如二川之一一一」
【流涎】リウセン もらっしてやせおとろへる。又其の者。唐書、白居易傳「乞盡免二江淮兩賦一、以救二一一一」
【流漬】リウシ ながれもる。陳師道文「一一不レ時、盈二盛千里一」
【流說】リウセツ うはさ、ねなしごと。呂覽「至治之世、其民不レ野二淫學一一一」‖浮說。
【流歎】リウタン 水の流れる如くむさぼりすする。曲禮「毋二放飯一、毋二一一一」
【流涕】リウテイ あまねくうるほふ。崔駰、北巡頌「聖澤一一、黎元被レ德」‖流洽。
【流宕】リウタウ しきのべる。晉唐書、謝安皇后傳「一一陰教」陰教は女の教。
【流涕】リウテイ 十分にあまりあり。宋史、樂志「適二厥宇一編録一一」
【流篇】リウヘン それや。後漢書、劉陶傳「孫堅偽二一一所レ中」‖流矢。
【流連】リウレン よだれをながす。深く淺む義。杜甫、飲中八仙歌「道逢二麴車一口一レ一」
【流粧】リウシヤウ さいはひを遠く及ぼす。陳、江總傳「延一一、永永無レ窮」
【流蘇】リウソ 五彩の絲を雜へて旌旗又、車につけるふさ。張衡、東京賦「飛二一一之驪殺一」晉書、儒林傳「或編二阿那、若二一一垂レ羽、廻レ廻綿綿」
【流涎】リウセン ながれおつまる。白虎通「愛祖一一也」
【流俗】リウゾク ○世俗のならはし。禮、射義「不レ從二一一一」○世俗の人。成公綏、嘯賦「整二一一一未レ悟、獨超然而先覺」‖俗人。
【流賦】リウフ 此處彼處とわたり歩くぬすびと。明史に一一師あり。‖流寇。
【流帶】リウタイ ながれめぐる。郭璞賦「川瀆交錯、漁潤一一」
【流滯】リウタイ ながれると、とどこほると。管子外傳「萬物皆來、無二有一一一、以相通移」
【流體】リウタイ 氣體と液體との總稱。
【流宕】リウタウ 遠く遊びまはる。對志、許靖傳「自二一一以來、與二英士一相隨一‖遠遊・流浪。
【流彈】リウダン それだま。閩書「張倫一一所レ斃」‖流丸。
【流暢】リウチヤウ すらすらとして滯りなし。南史、徐湛之傳「善二尺牘一、言辭一一」
【流通】リウツウ ○ながれかよふ。三國志「血脈一一」○貨物が諸方へ送り出される。鹽鐵論、大農丞レ利、百脈萬物一一」
【流涕】リウテイ なみだをながす。ながれるなみだ。戰國、燕策「一一有レ頃而後言」
【流眄】リウベン ながしめに見る。張衡賦「微眺一一」李益詩「斜光動二一一一、此意誰二自持一」‖流盼。
【流傳】リウデン 世にひろく布きわたる。郭璞詩「新詩海內一一遍」
【流電】リウデン 極めて迅速なる喩。李白詩「時光疾二一一」
【流動】リウドウ ながれうごく。梁昭明太子文「生滅一一、無二有二住相一」
【流動體】リウドウタイ 氣體及液體の總稱。
【流毒】リウドク 害をながす。又、其の害毒。

六紀「太公曰、夫紂、一一諸侯、歎三侮聖臣一」

【流年】リウネン　過ぎ行くとしつき。杜甫詩「傷懷一一度」‖流光。

【流波】リウハ　美くしき目にてながしめに見る。宋玉賦「望二余帷一而延視兮、若二一一之將一レ來」

【流派】リウハ　わかれながれる。又、えだ、わかれ。張文潜、水詩「一一表二宗旨一」‖支流・流儀。

【流馬】リウバ　諸葛孔明の發明せし馬の形せる機車。蜀志、諸葛亮傳「亮性長二于巧思一、損益連弩木牛一一、皆出二其意一」

【流播】リウハ　つたはりしく。中論「仁愛普洽、世守一一」

【流杯】リウハイ　さかづきをながす。曲水の宴にて流すさかづき。杜牧詩「且探二流水一醉一一一」‖流觴。

【流罪】リウザイ　同じなかま。北史、賀若敦傳「與二其一一一皆爲二大將一」‖黨伐傳詩「一一多相許」

【流亡】リウバウ　一定の住居なくさまよふ。又、其の者。幣、射義「夫君臣上下、樂而以一一者、未二之有一也」漢書、食貨志「農人所二以一一一」‖亡命。

【流芳】リウハウ　芳名を後世に殘す。晉書、桓溫傳「既不レ能レ一一後世、不レ足三復遺二臭萬載一耶」

【流放】リウハウ　流罪に處す。書經、傳「故一一二一之幽州一」‖流竄。

【流泊】リウハク　さまよふ。陸游詩「一一郡

連山」‖飄泊。

【流眄】リウベン　ながしめに見る。張昱詩「一一星光動」‖流盼。

【流普】リウフ　あまねし。潘岳詩「害谷獨消、吉德一一」

【流風】リウフウ　先人の殘し置きたる美風。孟、公孫丑「其故家遺俗、一一善政、猶有二存者一」

【流沸】リウフツ　わきてながれ出る。蔡邕文「果葉相繙、六十餘載、火熾一一、漫以不レ振」

【流聞】リウブン　ひろくつたはりきこゆ。又つたはるうはさ。高允文「先王之道、光二演于明時一、郁郁之音、一二一于四海一」

【流轉】リウテン　流れるうきくさ。楊炯賦「髑一一一而欲レ散」

【流繁】リウハン　前より傳はる話事。晉書、成帝紀論「帝亦克儉二于躬一、庶能澄二揚一一一者也」

【流漂】リウヘウ　ただよふ、さすらへる。晉書、載記「皇容盛、幼而嶷賦一一」

【流氓】リウバウ　さすらへる。氓は流民。鮑賦「一一萬重」‖流浪。

【流別】リウベツ　流派によりて別ける。晉書、摯虞傳「撰二古文章一、類聚區分爲三三十卷、名曰一一集」‖類別。

【流眄】リウベン　ながしめに見る。阮籍詩「一一顧二我旁一」‖流盼。

【流連】リウレン　流亡に同じ。韓愈文「一一四歸、樂レ生興レ事」

【流奔】リウホン　ながれはしる。晉賓、蜚京傳「末世一一、以レ文代レ質」

【流沫】リウマツ　ながれるあわ。淮南子「人莫レ鑑二於一一一」

【流民】リウミン　一定の居所なく流浪する民、流亡の民。漢書、食貨志「昭帝時、一一稍還田野益闢、頗有二蓄積一」

【流逋】リウブ　酒にふけりおぼれる。漢書、谷永傳「一一蠭興、漏殺無レ別」

【流目】リウモク　目をあちこちと移して見る。李白詩「一一湘烟夕」

【流餘】リウヨ　物を諸所にうつしはこぶ。郡陽文「蚌蜃一一、千里不レ絕」

【流用】リウヨウ　融通して用ふる。

【流庸】リウヨウ　故郷を去り、さすらひて人の爲めに雇はれてはたらく。又、其の人。漢書、昭帝紀、注「一一、謂下去二其本鄉一而行爲レ人庸作上也」

【流離】リウリ　前條に同じ。漢書、昭帝紀「民匱二于食一一一未レ盡」

【流落】リウラク　おちぶれる。李白文「白離四布衣、一二一楚漢一」‖流浪・落魄・飄零・零落。

【流覽】リウラン　處處を見まはす。魏文帝詩「一一觀二四海一、涕泣非レ所レ識」

【流利】リウリ　筆法又文調などの流れ動きて凝滯せざる義。宋史、律歷志「婉約一一」

【流離】リウリ　〇居所を失ひて諸處にさまよふ。漢書、劉向傳「物故一一以二十萬數」‖流浪。〇鳥の名、鸝。詩、邶風「瞿兮一一之子」〇實石の名、琉璃に同じ。漢書、四域傳「嗣實國出一一一」

【流淚】リウルイ　なみだをながす。魏書、楊椿傳「帝下二御牀一、執二椿手一一レ一曰、公先帝舊臣」‖垂淚・墮淚・流涕。

【流離】リウリ　のびのびとしてうるはし。蘇軾詩「嫣莊雖二一一、剛健含二婀娜一」

【流連】リウレン　〇遊行にふけりて家にかへるを忘れる。孟、梁惠王「先王無一一之樂、荒亡之行」〇圍ばうづけ、遊女屋にとまりて日を送る。

【流連】リウレン　なみだのながれる貌。陸瑜賦「引調奏而滯一一」

【流露】リウロ　すっかりとあらはれる、かくさず直用を示す。

【流罪】リウザイ　遠地に放ちやる刑。しまながし。五代史、梁大祖紀「一一以下囚」‖流刑・流竄。

【流轉】リウテン　佛人事の輪轉止まざるにいふ。護嚴經「一切衆生界、一二一生死海」‖流離轉變。

【流布】ルフ　世にひろまる。雲笈七籤「四部皆一一」宋史、沈括傳「時有二文章一、隨即寫發、不レ令二一一」‖流傳。

【流浪】ルラウ　ながれただよふ、あちこちとさすらふ。鮑照詩「一一酒舟經三齡」‖流離・流亂。

【汲流】キフリウ　〇流水をくむ。〇圍其の人の流儀をまなぶ。

【亂レ流】ランリウ　川をまっすぐによこぎりてわたる、流を絕ちてわたる。

【枕レ流漱レ石】ヂンリウシウセキ　○まけ惜みの強き義に用ふ。孫楚才藻卓絶なり。少き時、王濟に謂ひて、當に石に枕し流れに漱がんと欲すといふべきを誤りて、――といふ。濟其の誤りたるをいへば、枕レ流は耳を洗ふ所以、漱レ石は齒を磨く所以なりと答へし故事（晉書、孫楚傳）○圓サス孫楚の答さすがに巧なりといふ意によりて、サスガの宛字アテとす。

【流石】ガス　圓なるほどと感じうなづく意味を表はすことば。心に思ひし通り果して、本分に違はず。前條を見よ。

【流鏑馬】ヤブサメ　圓古の武藝の一、馬を馳せながら鏑矢カブラヤを的に中てる競馬の武技。

【洌】レツ　厨

○きよし、水又酒などが清くすむ「清ー」歐陽修、醉翁亭記「泉香而酒ー」○さむし、ひやゝか。

【洌風】レツフウ　きむきかぜ。宋玉、高唐賦「ーー過二而有一悲哀一」

七畫

【浥】イフ・オフ　職　エフ・オフ　葉

○うるほふ。うるほす（濕）「厭ー」○ひたる。ひたす（漬）

【浥浥】ユフユフ　芭・蕉・潤・澤・沾・濡の部は濕（水部十四畫）の條を見よ。

【液】㊀イウ　㊁テキ　寘　元　篇

㊀ーー（イウイウ）は水の流れる貌。㊁ーー（テキテキ）はすみやか（速）なる貌。又利を欲する貌。

【滅液】メツテキ　○迷かなる貌。曷、頤卦「其欲ーー」○利を欲する貌（漢書、敘傳）○イウ水の流れる貌（楚辭、大招）

【海】カイ　賄

○うみ、わたつみ（天池）○物事の衆く聚る所の喩とす「文ー」「學ー」「歌吹ー」○廣く大いなる形容「ー容」「ー涵」

【海員】カイイン　船舶の船長以外の乘組員の稱。

【海宇】カイウ　海内の國土、宇は屋。陳傳「其詩「ーー正無レ慮、草木亦蕃蔚」

【海運】カイウン　海上の運漕。元史、食貨志「ーー自二世祖用一伯顏之言一、議漕二東南粟一、由二海道一以給二京師一」

【海鰌魚】カイチウギョ　海魚の一、えのうを、あかえひ。＝鱷。

【海潮】カイシン　海潮をとめるせき。元史、良吏傳「委民漁ニーー一專二商船一以射レ利」

【海匪】カイヒ　○海のしほ。史、貨殖傳「吳東有ニーー之饒一、章山之銅、三江五湖之利一、亦江東一都會也」○地名。漢書、地理志「會稽郡、縣ーー、故武原鄉、有二鹽官一」

【海鳧】カイフ　うみのかもめ。謝靈運詩「ーー戲二春岸一、天鷄弄二和風一」

【海港】カイカウ　うみべにある小さきみなと。元史、世祖紀「走ニーー一」

【海角】カイカク　○みさき、細長く海中につき出たる地。○海のすみ。白居易詩「ーー天涯獨始休」＝海隅。

【海樓】カイロウ　蜃の楼閣。又、其の蜃を揚雄賦「淨丁焉頭焼ニーー一」

【海獄】カイガク　○うみと、やまと。柳宗元、乞巧文「乾坤之量、包二含ーー一」○大恩に喩ふ。薛能詩「恩如ニーー一何時報」＝海岳。

【海涵】カイカン　ひろく人を容れる、海は容。王僧孺文「陛下ーー普育」蘇軾、潮州謝上表「天覆三草生一ニ一萬族一」＝海函・海容。

【海氣】カイキ　うみのき。韓愈詩「ーー昏昏水拍レ天」張子容詩「ーー朝成レ雨、江天晩作レ霞」

【海鏡】カイキャウ　一種の貝の名。本草綱目記「ーー如レ蚌、中有二紅蟹子一、小如レ豆」

【海曲】カイキョク　○うみの隅。＝海阿・海隈。○しま。書經、傳「ーー國之島一」

【海隅】カイグウ　うみのくま。書、益稷「帝光二天之下一、至二于ーー一蒼生一」＝海阿・海陬・海曲。

【海軍】カイグン　海上の軍艦及沿海の兵備に關する一切の總稱。陸軍の對。

【海外】カイグワイ　四海のそと、即ち外國。詩、商頌「相土烈烈、ーー有レ截」

【海關稅】カイクワンゼイ　海路による輸出入品に課する稅、海關は開港場にある稅關。

【海頭】カイトウ　海峽に同じ。

【海月】カイゲツ　○海上の月。張說詩「ーー徘二徊舟一」○くらげの異名。海面に浮游する腔腸動物の一。＝水月・水母・海舌。

【海峽】カイケフ　二つの大陸地にはさまれたる海のせまき所、せと。＝海門、海頸。

【海鳧】カイフ　うみがめ。爾雅「ーー、大一蚊、重千鈞」

【海狗】カイコウ　膃肭臍セツトの異名。

【海國】カイコク　海に近き國。又、海中にある島國。段成式落詩「ーー徵花散三曉歌一、蔥佳氣滿二乾坤一」

【海船】カイセン　水戰に用ふる舟の名。類說「越人水戰有ニーー一」

【海樓】カイロウ　うみのいかだ。宋之問詩「秋來見ニーー一」

【海際】カイサイ　うみぎは。吳均詩「白鷺浮ニーー一明月落二河濱一」

【海參】カイジン　せいうち、北海に産する海獸の一、上脣より二本の大いなる牙が下垂する。

【海藻】カイソウ　うみのも。本草「綸布、一名昆布、東海有レ之、其葉細者、一一也」
【海參】カイシン　いりこ（蝘海鼠）海鼠ナマコを煮て乾したる食品。
【海參威】カンシンイ　露國領の港、ウラジオストック即ち浦汐ウラジホ海參威。
【海市】カイシ　水蒸氣の作用によりて海邊などの空中に城市人馬などの現るるをいふ。隋唐遺事「李淳風、此一一蜃樓比歟、豈長久耶」‖蜃氣樓。
【海事】カイジ　海上にてする仕事。韓愈、南海神廟碑「且不レ習二一一一」
【海鰌】カイシウ　○くぢら。海族錄「一一乃水族之極大、而疑異不レ測者」‖鯨魚。○兵船の名。宋史、虞允文傳「官軍亦以二一一一船一衝二敵舟一」
【海獸】カイジウ　うみに住むけもの、獸は哺乳動物をいふ。宋史、五行志「紹興八年、陝西海堀有二一一一如レ馬、蹄鬣皆丹」
【海日】カイジツ　海上の日。曹唐詩「天上鶴鳴一一紅、青鸞侍女掃二朱宮一」
【海人】カイジン　○すなどりを業とする者、あま。述異記「東海有二牛魚一、其形如レ牛、一一採捕」○海中の怪物、海坊主ボウズ。南史、侯人傳「倭國西南萬里有二一一一、身黑眼白、裸而醜、其肉美」
【海心】カイシン　うみのまんなか。蘇軾、日觀峯詩「洪波萬里、貪二天湧一點金鳥出二一一一」
【海神】カイシン　うみのかみ。三齊略記「始皇于二海中一作二石橋一、一一爲レ之豎レ柱」
【海蛇】カイダ　海魚の一、えらぶうなぎ。
【海上】カイシャウ　○うみのおもて。‖海面。○海の上のそら。‖海天。○ふなぢ。‖海路・航路。
【海上保險】カイジャウホケン　航海中に起る難船等の損害を償ふ約束を結ぶ保險。
【海相】カイシャウ　國海軍大臣の異稱、相は宰相。
【海商】カイシャウ　海を航して商ふ人。王建詩「草市迎二江貨一、津橋役二一一一」‖海賈。
【海若】カイジャク　うみの神。莊子、逍遙「今三一一舞二馮夷一」單に若ともいふ。莊、秋水「河伯向レ若歎」
【海松】カイシヨウ　みるめ、みる、うみまつ、海中の石に生ずる一種の海草。
【海水浴】カイスヰヨク　衞生又娛樂のため夏期海に入りて水をあびる。
【海濱】カイヒン　海岸に同じ。江淹詩「且汎二桂水湖一映レ月遊二一一一」
【海鱗】カイリン　海の底の鳴る聲、俗につなみ（海溢）の磯とす。楊慎、古今諺「山經二風雨一來、一一風雨多」
【海汐】カイセキ　夕しほ。吳子孝詩「一一魚龍夜、仙官日月遊」
【海舌】カイゼツ　海月クラゲに同じ。
【海鳳】カイホウ　ほたてがひ（帆立貝）本草「車渠一名一一、海中大貝、其形如レ扇」
【海戰】カイセン　海上のいくさ。陸戰の對。
【海鼠】カイソ　なまこ、鰾皮動物の一、骨なく鱗なく、背に疣イボあり。‖沙噀・海蛇。
【海賊】カイゾク　海上にて船舶を襲ひてぬすみをするぬすびと。
【海菩】カイボ　うみのも。又、のり。南越志「海漘、一名一一」
【海內】カイダイ　國のうち。戰國策「今欲下幷二天下一、凌二萬乘一、詘二强國一、制二一一、子二元元一、臣中諸侯上非レ兵不可」
【海島】カイタウ　海中のしま。史、田儋傳「請爲二臣人一守二一一中一」左思、魏都賦「洗二兵一一、刷二馬江洲一」‖海嶋。
【海棠】カイタウ　花樹の一。本草「一一花不レ香、惟蜀之嘉州者有レ香而木大、有二資一一花黃、貼梗一一花小而鮮、垂絲一一花粉紅向レ下」
【海潮】カイテウ　うみをそ、あじか。風俗志「一一生二海中一、似レ鰣而大、毛著レ水不レ濡」
【海岱】カイタイ　舜の時の十二州の一、海より岱泰、卽ち泰山までの間の地、古の青州、今の山東省地方（書、禹貢）
【海帶菜】カイタイサイ　こんぶ。流球國志略「一一、一名昆布」
【海道】カイダウ　○海にそひし地方の街道。○園東海道の略語。山道の對。
【海蘑】カイリ　うに（雲丹）海產の蝟皮動物の一、其の卵巢を雲丹といひて食用とす。‖海栗。
【海圖】カイト　海の深淺・暗礁・潮流の方向などをしるしたる圖。
【海底】カイテイ　うみのそこ。宋史、仁宗紀「登州地震、距蓬山撲、負レ是屢震、氣一一有レ聲如レ雷」遯齋記「珊瑚樹碧色、生二一一一、一株十枝」
【海底電信】カイテイデンシン　うみのそこに沈めて設けし電信線。‖海底電信線。
【海程】カイテイ　うみの上のみちのり。海上里程。
【海鳥】カイテウ　○海のとり。○海に棲む一種の大いなる鳥。爾雅「爰居雜縣」疏「爰居一一也、大如二馬駒一、一名雜縣、漢元帝時、瑕邪有レ之」晉語「一一曰爰居、止二於魯東門之外一二日」李白詩「一一知二天風一、羣鳥皆門東」
【海天】カイテン　○海上のそら。遯逝詩「雲徑二一一去、日就二江村一隈」○うみとそら。
【海苔】カイタイ　海邊のまちはづれ。孔稚圭、北山移文「張二英風于一一一」
【海堂】カイダウ　わたつみ。木華、海賦「一一遨路、馬銜當レ蹊」
【海豚】カイトン　いるか、海獸の一、形鯨に似て、肉は食用とす。
【海曙】カイショ　海上の日の出。周權詩「一一紅處湧二仙山一」

【海軟風】カイナンフウ　日中に海上より陸地の方に吹き來るかぜ。
【海馬】カイバ　○たつのおとしご、海産の小魚の一、其の頭馬に似、直立して游泳す。○にんぎょ、海獣の一、體長丈餘、灰蒼色にして脊鰭なく、肉は食用とす。‖儒民ジュ
【海方】カイハウ　海外のくに。‖隋書、裴矩傳「裴弘策土宇被ニ一ー一」
【海防】カイバウ　海岸の防備、敵艦の來寇を聞く設備。
【海防艦】カイバウカン　海防の任務にあたる軍艦、喫水淺く防禦力の強きもの。
【海旁】カイバウ　うみべ、旁は傍。史、天官書「一ー蜃氣象ニ樓臺ニ」‖海濱・海畔。
【海拔】カイバツ　海中に筆きこ砲臺。
【海拔】カイバツ　圓海面よりの高さ。
【海畔】カイハン　うみぎし。書、禹貢、傳、場石ー一山」‖海濱・海邊。
【海濱】カイヒン　うみのほとり、うみべ。‖海邊・海旁・海畔。
【海濱】カイヒン　うみべ、海水の岸。漢書、雙遂傳「一ー遐遠、不ニ霑ニ聖化ニ」‖海濱・海隅。
【海風】カイフウ　うみから吹き來るかぜ。李益詩「天山雪後ー一寒」
【海物】カイブツ　うみより産する物、海産物。書、禹貢「厥貢惟ー一錯」
【海表】カイヒョウ　海外の土地。書、立政「天下至ニ于ー一罔レ有レ不レ服」‖海外。
【海豹】カイヘウ　あざらし、北海に産する海獣の一、短小にして鰭のある胶を有し、毛は蒼黒にして光澤あり。
【海邊】カイヘン　海濱に同じ。
【海鰌】カイシウ　はも(鱧)海魚の一、うなぎに似て背部は黒褐色。‖海鰌鰽。
【海味】カイミ　海より得る食物、即ち魚貝など。齊書、虞悰傳「會稽ー一、無レ不ニ畢致ニ」
【海綿】カイメン　海中に生ずる一種の下等動物、其の綿狀の骨骼を精製して沐浴醫療等に用ふ。
【海門】カイモン　海峽に同じ。
【海容】カイヨウ　海の如く廣き心を以て罪をゆるす。‖海涵・海函。
【海羅】カイラ　のりの一。前越志「海藻、一名海苔、或曰ー一」
【海老】カイラウ　圓蝦ヱビ
【海老尾】カイラウビ　圓琵琶三味線の棹の端の後方に曲れる部分の稱、形の似たるが故、えびを。‖匙頭。
【海里】カイリ　海上の里程、一緯の六十分の一、即ち我十六町五十九間四尺許、英語ノットの譯。‖浬・節。
【海狸】カイリ　哺乳動物の一、歐羅巴アーバ及北米の河邊に生息す、足に蹼ありて游泳する。
【海流】カイリウ　海水が赤道より極へ(寒流)極より赤道へ(暖流)一定の方向を取りて流れるもの。‖潮流。
【海陸】カイリク　うみと、くがと。隋書、地理志「蘇州府、川澤沃衍、有ニ一ー之饒ニ」
【海立】カイリツ　なみだつ。韓愈詩「天外黒風吹ー一、翻東飛雨過レ江來」
【海樓】カイロウ　海に臨める樓屋。王昌齡詩「南越歸人夢ニ一ー一」李白、明堂賦「跨ニ蓬壺之ー一、吞ニ滄宗之日觀ニ」
【海王星】カイワウセイ　惡星中、太陽より最も遠きもの、百六十八年九箇月にて太陽を一周す。
【海鬥表二魚躍一】カイトヒョウニギョヤクス　度量の極めて大いにして行動の自由なる喩。古今詩話「一ー、天空任ニ鳥飛ニ」

【浩】カウ　皓

○大水の貌。○大いなり「一歌」「一歎」○ゆたか(饒)多し「一繁」「一博」○ひろし(廣)
【浩飲】カウイン　大いに酒をのむ。黄庭堅詩「劇談ー一不レ知レ醉」‖鯨飲・豪飲・暢飲。
【浩歌】カウカ　聲たかくうたふ。劉峻賦「暇ニ浮雲一以掻レ首、臨ニ清風一而ー一」‖浩唱。
【浩浩】カウカウ　○大水の貌。書、舜典「懐レ山襄レ陵、ー一滔レ天」○廣大の貌。中庸「ー一其天」
【浩汗】カウカン　ひろく大いなり、汗は廣。晉書、孫楚傳「三江五湖、ー一無レ涯」‖浩洋。
【浩穰】カウジョウ　○廣大なる貌。‖浩洋。○清物の多き貌。文心雕龍、事類「載籍ー一」
【浩然】カウゼン　浩然之氣の略。楊繼盛詩「ー一歸ニ太虚ニ丹心照ニ千古ニ」
【浩嘆】カウタン　大いにして廣し。沈佺期詩「蒼然懐ニ君子ニ、ー一將如何」
【浩劫】カウコフ　○長き世。‖唐詩「甲子初開ー一長」‖巨劫。○佛人間の大いなる災禍、佛家にて一劫中を成住壞空の四階級に分つを以て其の一部の破壞の義を取る。
【浩唱】カウシャウ　大聲にてうたふ。陸龜蒙詩「ー一發ニ扶桑一」‖浩歌。
【浩湯】カウシャウ　水の廣く流れる貌。荒仲淹、岳陽樓記「浩浩湯湯、横無ニ際涯ニ」
【浩瀚】カウカン　ひろき土地。白居易文「宜レ縦ニ材士ー一ー一」
【浩穰】カウジョウ　大いにしてしげし、穰は盛多、人民の多きをいふ。漢書、張敞傳「長安中ー一、於ニ三輔一尤劇レ劇」
【浩然】カウゼン　○水の盛んに流れる形容。○轉じて盛大流行の貌、次條參看。

○歸り去らんとする志の盛なるに喩ふ。孟、公孫丑「夫出レ畫而王不二予道一、予然後一一有二歸志一」

【浩然之氣】カウゼンノキ 浩然は盛大流行の貌。天地間に流行せる正しき元氣。孟、公孫丑「我善養二吾一一、敢問、何謂二一一一」「其爲レ氣也、至大至剛、以直養而無レ害、則塞二于天地之間一」

【浩瀚】カウカン ○廣く大いなり。沈約賦「何斯願之一一」○志のほしいままなる貌。楚辭、哀時命「志一一而傷悲」

【浩闊】カウクワツ 甚ださわがし。李華錄「高街千巷、盡皆繁盛一一」

【浩歎】カウタン 大いになげく。張九齡詩「一一楊朱子、徒然泣二路岐一」

【浩洞】カウトウ 廣くしてうつろなり。漢武內傳「九天一一、太上羅レ列」

【浩茫】カウバウ 水の廣き貌。水經、注「登レ高遠望、觀二巨海之一一一」

【浩博】カウハク ひろし。宋史、郭稚傳「汪洋一一」

【浩繁】カウハン 大いにしげし。蔡邕書、齊幹傳「舟車轅輓、人庶一一」

【浩森】カウシン 水の廣き貌、森は大水。陳山毓、七夕賦「浮二湘之一一一、溯二七澤之漪瀾一」

【浩渺】カウベウ 大いにしてはるかなる貌。渺は廣遠。宋之問詩「一一浸二雲根一、煙嵐出二遠村一」

【浩瀚】カウカン 廣く遙かなる貌。陳陽詩「十洲隔二八海一、一一不レ可レ期」

【浩漫】マウマン ○大いにして廣し。李白詩「客心不二自得一、一一將二何之一」○衆多。新論「三軍一一、則立二裘號一」

【浩洋】カウヤウ 水の廣大なる貌。淮南子「水一一而不レ息」

【浩漾】カウヤウ 水の廣大なる貌。漾は洋。傳亮文「湍流一一、莫レ測二其端一」

【浩蕩】カウタウ ひろくただよふ。阮籍賦「設一一而未レ靜」

【浩渡】カウタウ 水の廣大なる貌。渡は洋。

【浩露】カウロ しげきつゆ。孟郊詩「扣レ船不レ能レ疑、一一詩二衣襟一」

【浤】 クヮウ 庚

一一は水のわき上る貌。木華、海賦「崩雲屑雨、一一汩汩」

【浣】 クヮン 翰

○あらふ、垢衣を濯ふ。すすぐ（滌）＝澣。○十日の稱、古、十日毎に官吏に休暇を賜ひ、沐浴せしめたるに由る「上一」

【浣胃】クヮンヰ るぶくろをあらひ清む。劉基文「一一滌レ腸、絕二去病根一」

【浣花溪】クヮンクワケイ 唐の杜甫の草堂の在る所。老學菴筆記「杜少陵在二成都一、有二兩草堂一、一在二萬里橋西一、一在二浣花日】クヮンクワジツ 成都の俗、毎年四月十九日、杜甫の浣花溪の草堂にて宴集す、此の日を一一と名づく「老學菴筆記」

【浣花】クヮンクワ 天門冬トンモンの異名「抱朴子」

【浣雪】クヮンセツ すすぐ。唐書、王士眞傳「數表請レ赦、乃詔、一一盡以二故地一」

【浣染】クヮンセン あらひそめる。唐書、食貨志「代宗性儉約、身所レ御衣、必一一重二再三一」

【浣腸】クヮンチヤウ はらわたを洗ふ。史、扁鵲傳「以二砭石一一、腸、胃、滌二滌五藏一」○洗腸・滌腸。

【浣濯】クヮンタク あらひすすぐ。史、萬石君傳「家自一一」

【浣洗】クヮンセン あらひねる。木草「可三以一一二衣服一」

【涇】 ㊀ ケイ ㊁ ケイ 徑 青

㊀とほる（通）莊、秋水「一一流之大」○川の名、甘肅省に發源し、陝西省に入りて渭水と合す。㊁直なる流。

【涇渭分】ケイヰブン 涇渭は共に川の名、今の陝西省に在り、涇水は濁り渭水は清む、故に清濁の區別の明かに定まるに喩ふ。詩、邶風「涇以レ渭濁、湜湜其沚」蘇軾詩「俗裏光塵合、胸中一一」

【涇水】ケイスイ 川の名、關中八川の一。源、西夏「涇關二渭汭一」疏「一一出二安定涇陽縣西岸頭山一、東南至二馮翊陽陵縣一入レ渭」

【涓】 ケン 先 消は俗字

○小さき流れ。○しづく（滴）○細小の義に借り用ふ「一一滴」「一埃」○一一は小さき水の流れる貌。○えらぶ（擇）○のぞく（除）○いさぎよし（潔）はらひ清める。

【涓涓】ケンケン しづくと、ちりと。微少の義。杜甫詩「未レ有二一一答聖朝一」

【涓埃】ケンアイ 前條に同じ。臨は英の王機、北伐疏「思策二涓埃一、率陳二一一一」

【涓吉】ケンキツ いささか。陸機詩「從然離二親海一、何以效二一一一」

【涓吉日】ケンキツジツ 吉日をえらぶ。左思、魏都賦「涓二吉日一陟二中壇一」○涓吉。

【涓潔】ケンケツ ○清くいさぎよし。元史、祭祀志「殊非一一之道」○清くする。沈光、李白酒樓記「以二聰明一移二于月露風雲一使之一一」

【涓涓】ケンケン 小流の貌、ちょろちょろと流れる水。家語、觀周「一一不レ絕、終爲二江河一」

【涓人】ケンジン ○宮中の掃除を主り、又取次をする人、論者（取次の者）の類。史、陳勝世家「故一一」○宦官をいふ。國語「乃見二其一一一」○中涓。

閑人。

【涓滴】ケン　水のしたたり。微少の義。徐幹詩「也應ニ――滴ニ前綠一」

【涓流】ケン　小さきながれ。後漢書、周紆傳「――猶レ積、浸成ニ江河一、婢火雖レ微、卒能燔レ野」

【涅】 サク　ソク　見

○すこしくうるほふ（小濡）○寒ーは人名、夏の時、罪イを殺して其の位をうばひし者。

【涘】 シ　紙

水のほとり、きし、みぎは（水厓）「渭ー」詩、王風「在ニ河之ー一」

【浸】 ㊀シン　㊁シン　㊀寝　㊁沁

㊀ひたす（漬・漚）水にひたる、しみこむ（漸漬）しづむ（沈・没）史、趙世家「城不」ー者三版」○うるほす、うるほふ（潤）○すすむ（漸進）○やや（稍）やうやく。‖漸・寖。○みづたまり。○さは（澤）㊁漸くにひたす（浸）「浸ー」

同訓異語　ヒタス・漸・漬・漚・漏・潤・濕○浸は水が次第にひたす。史記「城不レ浸者三版」○漸はいつとなく水がひたす、浸なり。詩經「漸ニ車帷裳一」また漸次の義。○漬は浸なり、染なり、水につかる義。史記「漸ニ漬於失ニ敬」○漚はうるほし、ひたす、容れ含む、十分にいれひたすなり「漚ニ麻泥ニ大清一」の如し。○漏は水につけて柔かにする義。詩經「東門之池、可ニ以漚ニ麻」○濕は音サン、說文に物を以て水に投ずるなり、とあれども水中に入れひたすにあらず、布帛等を水にてしめす義なり。庾信、鏡賦「濕陸ニ油檀一」○ケン浸・浸・漸の別は浸（水部十畫）の條を見よ。

【浸淫】シン　漸くにしみこむ。司馬相如賦「――舒濕」‖漸漬。

【浸肌】シン　はだにしみこむ。仰宗元詩「過午難ニ為ニ宿、清寒伯ー一」

【浸漉】シン　水にひたしそそぐ。莊子「時雨降矣、而猶ー一、其於レ澤也、不ニ亦勞一乎」

【浸漬】シン　次第次第にひたす。孔融詩「三人成ニ市虎一、ー一解ニ讒深一」

【浸潤之譖】シンジュンノソシリ　水がしみこむ如く、次第次第に深く進むざんげん。論、顔淵「――、膚受之愬」

【浸水】シンスイ　水がひたす。又、ひたせる水「ー一地」「ー一家屋」

【浸漸】シン　漸くにひたす。潘尼、安石榴賦「滋味ー一、馨香流溢」‖浸漬。

【浸染】シン　漸くにひたしそめる。又漸次にうつり化する。杜牧文「君生ー一仁父之化、温良柔友」

【浸漸】シン　次第に進み行く貌。論衡「物之生長、無ニ卒成暴起一、皆有ニ一ー一」‖浸漬・浸潤。

【浸息】シンソクタイメイ　漸次におこたる。宋史、文天祥傳「時理宗在レ位久、政理ー一」

【浸沈】シンチン　しみこむ。楊維楨文「水光山色、ー一胸次一」‖滲入。

【浸透】シン　しみとほる。‖滲透。

【浸醲】シンレイ　基督教徒の行ふ儀式、水を身にそそぎて清淨を表す。‖洗禮。

【涔】 シン　侵

○たまりみづ、にはたづみ（潦水）淮南、俶眞「牛蹄之ー一、無尺之鯉」○ひたす（漬）○ふしづけ、水中に柴を積みて魚を養ひて捕ふるもの。‖梌。○雨又は涙の下る貌。

【涔雲】シン　雨を伴ふくも、あまぐも（雨雲）〔呂覽、注〕

【涔旱】シン　おほみづと、ひでりと。淮南子「仰而食ニ之、時有ニ一ー災害之患一」‖水旱。

【涔潛】サン　魚の浮沈する貌。曹植賦「見ニ海魚之ー一一」

【涔涔】シンシン　○雨の多き貌。杜甫詩「雲氣接ニ昆崙、ー一寒雨繁」○涙・汗などの盛んに下る貌。羅隱詩「江山魂難盡、泉客淚ー一」‖潸然・泫然・漣然。○困頓カンタンシタルの貌。杜甫詩「行藥病ー一」○天氣の陰りて暗き貌。黃庭堅詩「雪意ー一滿面風」

【涔歸】シン　すこしのみづたまり、僅に牛の歸を容れる義。許有孚詩「吾池不ニ曾ー一水、孰謂蓬瀛敢相擬」「字解參看。

【涔淚】シン　こぼれるなみだ。江淹詩「ー一留在レ目」

【浚】 シュン　願

○ふかし（深）‖濬。○さらふ。井・池・川等の底を深くする。孟、萬章「使レ――井」○轉じて財貨などを貪りとる。左、襄二四「――我以生」○くむ（汲）くみ取りて出す。○まつ（須）書、皐陶謨「夙夜ー一明」

同訓異語　浚・深・濬・邃の別は深（水部八畫）の條を見よ。

【浚急】シュンキュウ　ふかくはやし。洛陽伽藍記「穀水ー一、注ニ于城下一、多壞ニ民家一」‖急浚。

【浚湖】シュンコ　みづうみをふかくす。ふかきみづうみ。南史、謝靈運傳「奴僮既衆、義故門生數百、鑿レ山ー一レ、功役無レ已」

【浚井】シュンセイ　ゐどをさらへて深くする。孟、萬章「使レ――レ、出從而掩レ之」

【浚哲】シュンテツ　ふかくしてあきらか。書、舜典「濬哲文明、温恭允塞」

【洩瀉】セツシャ　さらへてふかくする。水經、注「不二啻一一一而水旱不レ減」【洩痢】セツリ　ほりをふかくす。又、ふかきほり。江淹文「崇レ墨一一」

【洗】セイ　霽

○ぬるきゆ（始溫水）○あく（灰汁）○したむ（漉酒）○します。

【消】セウ　蕭

○きゆ、けす（銷）○つく（盡）ほろぶ（滅）易、泰卦「小人道一一」○ちる（散）とける（釋）○へる（耗）「一一耗」「一一磨」○病に通ず。○食に通ず。○一石は藥の名。○俗一夜は晩食。

同訓異語　消・滅・熄○消は盡なり、また滅なり、きえて亡くなる義、消滅・消亡と連用す。○滅はきえほろぶる義、滅亡と連用す、もと火のきゆる義より、廣く物の盡くるに用ふ。○熄は火のきゆるなり。

【消愛】セウアイ　うちはらし。‖遣悶。

【消搖】セウエウ　○ゆったりときまよひあるく、閒暇自如の貌。禮、檀弓「孔子蚤作、負レ手曳レ杖、一一于門一」‖逍遙。○觀望する義。後漢書、馮衍傳「陟二雍畤一而一一兮」

【消夏】セウカ　夏のあつさをはらひさる。‖銷夏・消暑。

【消耗】セウカウ　へる。へらす。參同契「棄材文「焚レ香默坐、一一二世慮一」‖遣悶。

【消耗品】セウカウヒン　使用するに隨ひ減損する品物。紙筆墨紙の類。

【消渴】セウカツ　○のどがかわきて流動物をほしがり、小便の通ぜざる病氣。漢書、司馬相如傳「常有二一一病一」今の糖尿病の類。‖消中。○婦人の癆病。

【消閑】セウカン　ひまつぶし。

【消劇】セウゲキ　○けしほろぼす。論衡「災害緣二于上天一賢名不レ能二一一一」○借金をかへす。

【消極】セウキョク　陰性にして退き守る義に用ふ、否定的・實・退・滅などの性をあらはす語。積極の對。

【消火】セウクワ　火を消す、火事を防ぎ消すこと。一一器」

【消火栓】セウクワセン　火事を消し止める爲めに水道の鐵管にしつらへたる噴水口の栓。

【消化】セウクワ　○物が消滅して變化する。周書、蘇綽傳「暗然潛以一一」○たべし食物がこなれる。○圓物事の理をよくかみこなしてゐとくする。‖咀嚼・理解。

【消魂】セウコン　心を奪はれる、氣を失ふ、がっかりする。‖銷魂。

【消光】セウクワウ　くらす、月日を送る。‖消日。

【消歇】セウケツ　きえてやむ。陳信詩「壯情已一一、雄圖不二復申一」

【消遣】セウケン　うれへをけしやる。王粲傳文「焚レ香默坐、一一二世慮一」‖遣悶。

【消磨】セウマ　消癖に同じ。元稹詩「自從二一一滅二容光一」

【消榮】セウエイ　きえつきる、榮は盡。論衡「夫死精魂一一、不二復聞二人之言一」

【消散】セウサン　きえてちる。けして無くす。漢書、李尋傳「一一積惡一」

【消日】セウジツ　日をすごす。晉植、感節賦「一一以忘レ憂」歐陽修文「至二於學レ書不レ倦、往往可二以一一一」‖消光。

【消失】セウシツ　きえうせる、無くなる。‖滅珍・消滅・消盡・消案。

【消暑】セウショ　消夏に同じ。‖銷夏。

【消石】セウセキ　藥品の一種、能く物を消化す。‖芒消・硝石・芒硝。

【消波】セウハ　きえてとける。支遁詩「原夫千載事、一一歸二空無一」

【消暇】セウカ　おとろへやせる。後漢書、陳紀傳「積毀一一、殆將レ滅レ性」‖消瘦。

【消釋】セウシャク　きえとける。禮、月令「時雪不レ降、冰凍一一」

【消息】セウソク　○きえると生ずると、往來する。易、豐卦「天地盈虛、與レ時一一」○轉じておとづれ。晉書、陳機傳、陸機語「犬曰、我家絕無二書信一、汝能齎レ書取二一一一不」○もやう、ありさま。杜甫詩「因レ君問二一一」

【消湯】セウタウ　けしたひらげる。後漢書、桓帝紀「殘醜一一、民和年稔」

【消長】セウチャウ　きゆると長ずると。さかえると、おとろへると。蘇軾賦、盈虛者如レ彼、而卒莫二一一也」‖榮枯。

【消停】セウテイ　暫時休息の義、消磨停頓の意。趙長卿詞「謾二說風塵一一二酸苦一」

【消珍】セウチン　けしほろぼす、珍は絕なり、盡なり。後漢書、皇甫規傳「伐惡一一、則乾災可レ除」

【消毒】セウドク　病のどくや微菌などをけしたやす。

【消防】セウバウ　火災をけしふせぐ。一一夫は其の仕事をする人、とび。

【消弭】セウビ　けしとどむ。後漢書、趙壹傳「抗二論當世一二一時災一」

【消費】セウヒ　つひやす。‖費消。

【消費稅】セウヒゼイ　物品の消費者に負擔せしむる間接稅、酒・煙草・鹽などの課稅の類。

【消伏】セウフク　わざはひをけしはらふ。後漢書、明帝紀「二一災譴一」

【消磨】セウマ　すれへる。けして無くす。歐陽修、醉翁亭記「觥之酒二特險與一、劇削一一」

【消滅】セウメツ　きえほろぶ。陳琳文「有下何不二一一者上哉」‖消失・消珍。

【浙】セツ　屑

○川の名、浙江省に在り、杭州を經て錢塘江と稱す。○浙江省の簡稱。○米とぐ、よなぐ（汰）誤りて淅と混用す。

【涉】 セフ　葉

○わたる、水をかちわたりする（無舟渡水）「徒ー」書、召牙「心之憂危、若ー虎尾」ー于春冰と危險の甚だしきに喩ふ。○ひろく通ずる「博ー」○ふへる（經歷）枚乘、七發「背秋ー冬」○わたし。○かかはる、關係する「干ー」「交ー」「關ー」

同訓異字　涉・渡・濟・津・踐・亙・經の別に渡（水部九畫）の條を見よ。

【涉河】セフカ　黄河をかちわたりする。左傳「晉曰、所ー不二此報一、無能ー」

【涉禽】セフキン　水鳥をいふ、淺水をわたりて小魚を捕食する鶴・鷺などの類「ーー類」

【涉秋】セフシウ　あきの期を經る。朱熹詩「ーー未ー停ー車」

【涉水】セフスイ　川をかちわたりする。詩、邶風、傳「以ー衣ーー」

【涉世】セフセイ　世事を經歷する。韓非子「ーー如ー此其汙」

【涉筆】セフヒツ　筆を動かす。李昭玘文「據ー紙ーー、掩二文愚之紛紜一」

【涉歷】セフレキ　わたり經る。鍾會文、好二書籍一「ーー衆書」

【涉獵】セフリフ　水を渉り、獸を獵る。羣書をざっとひろく覽るにいふ、博覽して專精ならざる義。漢書、賈山傳「ーー書記一、不レ能レ爲二醇儒一」

【涎】 セン　㊀先　㊁エン　㊀霰

㊀よだれ（口液）「垂ー」○ねばきしる、物の黏液「蝸ー」㊁迤ーエンは相連る貌。又、水の流れる貌。＝漣迤。

【涎沫】センエキ　光澤ひかる貌。漢書、五行志「燕燕尾ーー」

【涎牛】センギウ　蜒蚰ケンユウの異稱「山堂肆考」

【涎冪】センベキ　かたつむりなどの黏液が篆文の如きをいふ。馬祖常詩「壁蝸ーー蹤」

【流レ涎】リウセンスルニ　非常に飲食せんことを思ふ。杜甫詩「遠遊二麴車一口ーー」＝垂涎。

【涑】 ㊀ソク　㊁ソカ　㊀沃　㊁禡

㊀あらふ（滌）手にて洗ふ。㊁川の名、山西省に發し、陝西省に至りて黄河に入る「ー水」

【涕】 ティ　霽

○なみだ「垂ー」「流ー」「揮ー」○なく（泣）涙を出してなく「泣ー」○竹の一種「ー竹」

【涕淚】ティルイ　なみだ、はなしる。孟郊詩「老泣無ーー、秋露爲二滿瀼一」＝淚涕。

【涕泣】ティキフ　なみだを流し、しゃくりあげてなく。劉基詩「古道今已矣、感寤空ーー」

【涕泣】ティキフ　なく。禮記「惟父母之喪、不レ辟ーー而見レ人」＝泣涕。

【涕洟】ティイ　なみだをながす。蘇軾詩「每レ聞二諸舊亡一、ーー發氣放」

【涕洟】ティイ　なみだ、涕は目から、洟は鼻から出る汁。詩、陳風「寤寐無言、ーー泣下」＝涕洟。

【涕淚】ティルイ　なみだ。南史、梁武帝紀「拜二陵山殿一、ーー所レ洒松草變レ色」

【涅】 デツ　ネツ　㊀屑　涅は俗字

○くろつち（黒土在レ水中）淮南、俶眞「以ー染緇則黑於ー」○くろくそめる。くろむ。論、陽貨「ー而不緇」

【涅汙】デツオ　くろくそめる。玉逸賦「椒蘭芳ーー、蓼茸兮充房」

【涅齒】デツシ　齒を黒くそめる。又、其の齒。＝染齒。

【涅槃】デツバン　いれずみ。書經、傳「臣不レ正レ君臣二罪刑一、墨二其額一涅以レ墨」

【涅槃】デツバン　梵語の音譯、安樂・寂滅又は不生不滅と譯す、煩惱・迷妄を脫して眞理を證得する義にて、卽ち佛の死をいふ。楞伽經「ーー者不死不生之地、一切修行所二歸依一也」

【涊】 デン　㊀銑

○ー然ゼンは汗の出づる貌。枚

乘、七發「一然汗發」○澣ーオンは わるふひ(悪酔)の貌。又、けがれにごる(垢濁)

【涂】㊀ト ㊁チョ 虞

㊀みち、田地の用水をひく溝に沿へる道。＝塗。○ーは露の厚き貌。○ーは月は陰暦十二月の異稱。㊁川の名。＝滁。

【涕】㊀トン ㊁ホン 元 寒

㊀はく(吐)あけう。○ー灑トンは十二支の申ルの異名。淵雅「大歳在申、曰ー灑」㊁ー瀉サンは水流の曲折する貌。

【浿】バイ 佳 卦

川水の名。水は漢魏時代、今の鴨綠江の稱(史、朝鮮傳)又、隋唐時代、朝鮮の大同江の稱(隋書、高麗傳)

【浼】㊀バイ 薙 ベン 寒 ㊁ベン・メン 銑

㊀けがす、けがる(汚・污)孟、公孫丑「爾焉能ー我哉」㊁ーーンは水の流れて平かなる貌。詩、邶風「河水ーーー」

同訓異字 涊・汙・汚・污・槾・潰・濺等の別は汙(水部三畫)の條を見よ。

【浜】ハウ 庚

○船を納れ置く溝。○圃濠(水部十四畫)の略字とす。

【浮】フウ ブ 尤 通音 フ

○うかぶ、うく、うかばしむ。○流に順ふ。○さまよふ「ー雲」○あふれる(溢)○さきんず。○すぐ(過)○虚、表記「恥名之ー於行」○かろし(輕)○うはべ、虚にして實ならざるもの「一言」○むす(蒸)○水上にただよふ。○勝負事にかけて飲ませられる罰杯。說苑、臣術「請ー妾子」○一種の竹。○一種の石。○ーには雨雪の盛んなる貌。又、衆くして強き貌。○ー屠は佛。圓○うく。確實ならざること「ーいた考」○うかぶ、ゆくりなく思ひ出す「心にーぶ」○うかれる。物事に熱中する。○うかさる、無中になる「熱にーされる」

【浮埃】フアイ かろきほこり。楊烱詩「參差凌二倒景一、滿濕軼二ーー一」

【浮塵】フアイ かろきちり。劉禹錫詩「凡禽不二敢息一、ーー莫二能停一」＝浮埃。

【浮懸】フケン うきたるかめ。沈與求詩「眼中水怪狀莫レ名、出二沒沈墜一如二ーー一」

【浮游】フユウ めぐりうかぶ、周流してあそぶ。史、屈原傳「寧二赴於湘流一、以ーニ一壓埃之外一」

【浮淫】フイン 流派して行のみたらなる者。史、平準書「擯二ーー幷兼之徒一」

【浮寓】フグウ ○うかべるくも、あてにならざる事に喩ふ。論、述而「不義而富且貴、於レ我如二ーー一」○小人に喩ふ。李白詩「總爲二ーー一能戴レ日、長安不レ見使二人愁一」

【浮雲之志】フウンノこころざし 浮べる雲の如き不義の富貴をにくむ志。揚雄、答賓戲「仲尼抗二ーー一、孟軻棄二浩然之氣一」前條參看。

【浮榮】フエイ うきたる世俗のさかえ。王融詩「ーー未レ能レ捨」＝虚榮。

【浮影】フエイ 水にうかべるかげ。揚雄賦「臨二清霄一而鉄二ーー一兮」

【浮鬱】フエイ 水にうかぶかもめ。埤雅「鷗好レ沈、鷺好レ浮、故曰二ーー一」

【浮鷗】フオウ けむりをうかべる。又、うかべるけむり。司空曙詩「孤燈寒照レ雨、濕竹暗二ーレ一」

【浮鷗】フオウ かろがろしくしてあてやか。韓愈詩「ーー使レ天難二就看一、清香撲レ地只遙聞」＝浮華。

【浮泥】フデイ ○うかべるあわ、うたかた。姚合詩「走塵驚二製花一、飢鳥啄二ーー一」○極めてはかなきものに喩ふ。陳陶詩「人間萬萬ーー客」

【浮芥】フカイ うかびたるあくた。

【浮海】フカイ 舟で海にうかぶ。蘇軾詩「潮平風靜日ーレ一、縹緲擬二蓬壺一」

【浮巧】フコウ 詐實ならざるたくみ。後漢書、安帝紀「令禁二奢侈一、無レ作二ーー一之物一」

【浮航】フコウ ふなばし。北史、成淹傳「造二ーー一、帝賞二納之一」

【浮客】フカク さすらへるたびびと。鮑照詩「旅雁方南飛、ーー未二西歸一」

【浮家泛宅】フンカハンタク 舟のなかのすまひ。新唐書、隱逸傳「張志和曰、願爲二ーー一、往二來苕霅間一」

【浮寄】フキ あだなるたのみ、人生のはかなきをいふ。張華詩「人生若二ーー一、年時忽蹉跎」

【浮氣】フキ ○かげらふ。夢溪筆談「野馬則田野間ーー耳」○圓うかがろしくして意志の弱きもの。

【浮鯉】フリ 酒の上にうくあぶら、鯉は酒毒。張衡、南都賦「ーー若レ霍」

【浮空】フクウ そらにうかぶ。蘇軾詩「江ー愁心千疊山、ーレ一積翠如二雲擁一」

【浮說】フセツ とりとめもなきうそ。史通「猶時載ニーー一、未レ免二機要一」

【浮誇】フコ ○はでやかにして大げさなり。韓愈、進學解「奉秋謂戲、左氏ー

一」○とりとめもなく大きくいふ。
【浮華】フカ かろがろしくはでやか。漢書、司馬相如傳「虚行無ㇾ節、但有二一一之辭一」
【浮光】フクワ 水にうつる月かげ。范仲淹、岳陽樓記「一一躍ㇾ金、靜影沈ㇾ璧」
【浮說】フセツ かろがろしくへつらひこびて利祿などを爭ひ求める。晉書、貨殖傳「貴遊豪戚及一一之徒」
【浮橋】フケウ ふなばし、舟をならべて造りしうきばし「事物紀原」＝浮梁。
【浮月】フゲツ 水にうかべるつきかげ。范成大詩、「楚江一一治二征衣一」
【浮幻】フゲン まぼろしの如くとりとめなし。梁昭明太子文、「何得下二眞實之中一、見中此一一上」
【浮言】フゲン ねなしごと、無根の說。晉紀「毋ニ浮動以二一一一」
【浮吸】フキフ かまびすし。任昉文「雖レ曰二人境一、實少二一一一」
【浮塵】フヂン あか「詩經、疏「香而凍梨、色如二一一一」
【浮操】フサウ かろがろしくしてさわぐ。潛確類書「浪二万嚴重厚一、鎭二服一一一」
【浮子】フシ うき、釣絲につけて、魚の觸れたる知らせとなる小さき木片。雞肋編「釣絲之牛、繫以二荻梗一、謂二之一一一」
【浮辭】フジ ねなしごと。著實ならざることば。鄒陽、獄中上書「兩主二臣、剖ㇾ心析ㇾ肝相信、豈移二於一一一哉」＝浮辭・浮言。
【浮人】フジン 浮浪人に同じ「唐書、楊炎傳」＝浮民。
【浮究】フキウ むだごと。漢書、藝文志、注「删二去一一一、取二其指要一也」
【浮燕】フエン うかびむす。荊州記「遙望二白氣一一如ㇾ煙」
【浮世】フセイ うきよ、定めなき世の中。阮籍、大人先生傳「遊二塵一一一、與レ道俱成」
【浮生】フセイ 定りなき人生。李白文「一一若ㇾ夢」莊、列禦寇「其生若ㇾ浮兮、其死若ㇾ流」史記には流を休に作る。
【浮生半日閒】フセイハンジツカン 俗世界を離れたる暫時の清閒。李涉詩「閒二竹院一逃二塵境一又得二一一一」
【浮生若ㇾ夢】フセイジヤクム うきよは夢の如くはかなし。李白、春夜宴二桃李園一序「一一、爲ㇾ歡幾何」
【浮石】フセキ かるいし、火山より噴出せしもの。吳都賦「一一若ㇾ浮」＝輕石。
【浮說】フセツ ねなしごと。東方朔、七諫「聽二奸臣之一一一兮」＝浮言。
【浮涉】フセフ 水をわたる。蜀志、許靖傳「一一二江海一南主二交州一」
【浮淺】フセン あさはか、輕薄なり。漢書、東方朔傳「一一行二于衆庶一」＝浮薄。
【浮船】フセン ふねをうかぶ。庾信文「武侯南征、一一於瀘水一」＝泛舟。
【浮疏】フソ かろがろしくおほざっぱ。南史、梁簡文帝、與二湘東王一書「近見二京師文體、競學二一一一」
【浮情】フジヤウ かるはづみにしてなまける。朱熹文「輕佻一一、反無レ異二于市人一」
【浮沈】フチン ○うきしづみ。○轉じて榮枯盛衰の喩。○俗に隨ひて上下する。史、游俠傳「與レ世一一、而取二榮名一哉」＝浮滅。
【浮湛】フチン うかび又しづむ。漢書、陳遵傳「我放意自恣、一二俗閒一」＝浮沈。
【浮塵子】フヂンシ うんか、稻の害蟲。
【浮潤】フジユン うかびおぼれる。吳均詩「一一逐二波影一、隨風遠二風力一」
【浮屠】フト 梵語の音譯、佛陀に同じ。又、佛教の義とす。韓愈、送二一一文暢一序あり。＝浮圖・佛圖・佛陁。
【浮圖】フト 浮屠條に同じ。後漢書、襄楷傳「宮中立二黃老一一之祠一」＝浮屠。
【浮動】フドウ ただよひうごく。林逋詩「暗香一一月黃昏」
【浮騰】フトウ 身をうかせてをどる。舞賦「一一渠レ說」
【浮漢】フカン うきぶくろ、游泳の用具。法苑珠林「雖利海上屢乞二一一一」
【浮巻】フカン かろがろしくしてあらし。國語「驕縱一一」
【浮漚】フオウ うはき、かるはづみ。陳奇猷「陸龜蒙、才名播二海外一、然性一一」＝輕浮・輕佻。
【浮費】フヒ むだづかひ。晉書、元帝紀「乃勤二農桑一、節二一一一」＝浪費・濫費。
【浮靡】フビ かるはづみではでやか。唐書、杜甫傳贊「廣與詩人攻二陳隋風流一、一一相矜」
【浮浮】フフ ○雨雪の盛んなる貌。詩、小雅「雨雪一一」○衆くして盛ㇾ貌。詩、大雅「江漢一一、武夫滔滔」
【浮文】フブン ○かろがろしき文章。○晉書、謝安傳「一一妨ㇾ要」○輕薄なる飾。
【浮漂】フヒヤウ うきただよふ。續、武帝文「流澌一一、舟船行難」
【浮標】フヒヤウ うき、暗礁などを知らしむる爲め水上に浮べたるしるし。
【浮泛】フハン ○舟遊をいふ。晉書、謝安傳論「嘯二詠山林一、一一二江海一」＝游泛。○空の切實ならざる者をいふ。
【浮辯】フベン まじめならぬ言說。漢書、河閒獻王德傳「所二招致一率多一一一」注「言無二實用一耳」＝浮靡。
【浮水】フスイ うかべる水。揚雄「古者觀二一一一、而知レ爲レ舟」
【浮沒】フボツ うかび又しづむ。歐陽修文「覽二星辰之一一一視二日月之際一」＝浮沈。
【浮沫】フマツ うかべるあわ。揚雄「雖之所レ在、其上必有二一一一」
【浮民】フミン 浮浪の民、どくつよし。近思錄、注「京師一一逾二百萬一」

【浮名】フメイ 其の實に過ぎたるほまれ。李白詩「東山春色綠、歸隱謝二一一」＝浮譽・虛名。

【浮譽】フヨ 實なきほまれ。韓愈文「未ヶ曾以二一詞一遏二于公侯一以借中一ヒ＝虛譽・浮名。

【浮浪】フラウ さまよふ、住所不定の者。通典「高齊時、無賴之人、不レ業二州縣一者、悉二之一一入一」

【浮嵐】フラン むしてただよへる山の氣。黃庭堅詩「有レ人半夜出レ山去、頃覺一一霧二衆空一」

【浮嵐暖翠】フランダンスイ うかべる山の氣と、暖き青き山の色。歐陽修、醒山高詩「欲レ令一一千萬狀、坐風常對中乎斯嶺上」

【浮利】フリ 浮虛なる利益、うきたる利禄。後漢書、逸民傳「飾二智巧一以逐二一一一」

【浮梁】フリャウ ○うきはし。宋史、太祖紀「齊州渡二江南軍于采石一爲二一一」以濟」○茶の産地。江西省饒州に在り。白居易、琵琶行「潯月一一買レ茶去」

【浮鼈】フイ かるはづみにしてはでやか。元倉子、貧富一一之材至」

【浮弄】フロウ うかびたはむる。黃庭堅詩「驚鷗一一蟬娟影、白鷺窺レ魚疑不レ知」

【浦】ホ 遇

○うら（水濱・海濱）「曲一」「極一」○一口は江蘇省江浦縣の東に在る要津、舊名は浦子口、今開きて商埠と爲す、津浦鐵道の終點なり。

【浦澨】ホジョ うらべ。杜甫詩「舟人漁子入二一一一」

【涔】ボツ 月

○さかんにおこる貌。勃に通ず。○にごる（渾）

【浡鬱】ボツウツ 水のわき出づる貌。晁補之詩「懸流下噴水一一、誰言相驚有二怪物一」

【浡然】ボツゼン 盛んに起る貌。孟、梁惠王「天油然作レ雲、沛然下レ雨、則苗一一興レ之矣」＝勃然。

【涌】ヨウ 腫 又、湧に作る

○わく、水がわき騰がる。司馬相如、上林賦「洶一一澎湃」○盛んにおこる、噴騰する「蚤一一」「撥一一」○図ユウ自然に生ずる「蟲が一一く」

【涌溢】ヨウイツ 水がわきてあふれる。後漢書、陳忠傳「霖雨積レ時、河水一一」

【涌煙】ヨウエン わき上るけむり。張協詩「騰雲似二一一一、密雨如二散絲一」

【涌起】ヨウキ 盛んにわきたつ。莊子「參二透化一而雷霆一一、役二鬼神一而風雨奔駛」

【涌出】ヨウシュツ わきいづ。老學庵筆記「烈焰應レ手一一、以レ火名レ軍、尤爲二異也一」

【涌泉】ヨウセン ○わき出づるいづみ。易林、一一滑清」＝沸泉・噴泉。○盛んに發生するに譬ふ。後漢書、馬援傳「謀如二一一一、紛如二轉規一」

【浴】ヨク 沃

○ゆあみ、湯又水にて身を洗ふ、あびる、ゆあみする「沐一」○受ける、被る「一恩」「善き方にいふ。禮、臨行「有レ梁身而一一」「德」○きよむ、清め治む。○図あぶ、あびる、湯水を頭からかぶる。

【浴衣】ヨクイ ゆかた。孟浩然詩「講席遊二綾柄一、泉堂施二一一一」

【浴客】ヨクカク 温泉場又は風呂場などにてゆあみをする人、湯治客。

【浴盞】ヨクサン ゆあみに使ふうつは、をけ、たらひなど。

【浴沂之樂】ヨクキノガク 門人共と郊外に遊ぶ樂。沂（水部四畫）の條を見よ。

【浴盆】ヨクボン 水をあぶる爲。劉孝威詩「一一點二落霜一」

【浴後】ヨクゴ ゆあみしてののち。＝浴餘。

【浴槽】ヨクサウ ふろをけ、ゆぶね。王安石詩「雲湧二一一一朝自曙」

【浴日】ヨクジツ ○旭日ヒが初めて昇り、光が波と上下する。淮南子「日浴二於咸池一」○轉じて勳功の大いなるに喩ふ「補天一一」

【浴室】ヨクシツ ゆどの「水經、註」

【浴鐵】ヨクテツ 戰馬をいふ、甲を被りて鐵中に浴する如き故。江淹文「滅陽黑騎、一一爲レ羣」

【浴殿】ヨクデン ゆどの、浴室の立派なるもの。白居易詩「清宮東面煙波冷、一一四頭繡漏深」

【浴童】ヨクドウ 水をあびるわらべ。劉孝威詩「一一爭二淺岸一」

【浴佛日】ヨクブツニチ 陰曆四月八日の釋迦の誕生日。佛運統志「四月初八是一一」＝灌佛日・佛生日。

【浴陽】ヨクヨウ 關をうかべたる湯に入る。大戴禮「五月五日、蓄レ蘭爲二沐浴一」楚辭「一一二一湯兮沐二芳華一」

【浪】㊀ラウ 㐌 ㊁ラウ 養

㊀なみ（波）「波一」○うごく。○なみだつ（跳波）○かろがろし（浮薄）「一信」○はしいまま（放）「放一」みだり（濫）「一費」○諜一はおどけてつつしまず（不敬）㊁一一は流れる貌。○滄一は漢水の下流、漢陽に至りて揚子江に合す。○博一は地名、張良が秦始皇を椎擊せし所、河南省に在り。㊂孟一ロウはおろそか、精霊ならざる貌。

又冒昧の義。

【浪遊】ラウユウ　ぶらぶらとあそぶ。杜牧詩「塔ノ恨王孫ー―去、落英猶藉始歸來」劉克莊詩「湖海ー―今已倦、山林獨往未全非」‖漫遊。

【浪海】ラウカイ　なみのはげしく立つうみ、ごたごた多き俗界に喩ふ。梁武帝文「救二燒灼于火宅一、振二沈溺于ー―一」

【浪花】ラウクワ　○なみのはな。梁元帝、鴛鴦賦「朝浮兮ー―、夜集兮江沙」杜甫詩「閃閃ー―飜」圖○ハ大阪の一名。‖浪華・浪速・難波。○ハ食器の異名。

【浪語】ラウゴ　みだりなることば。楊萬里詩「丁寧舟人莫ニ―ー一」‖妄語・漫語。

【浪子】ラウシ　○みだらなる男、一定の職なくあちこちと放浪せる男。宋史、李邦彦傳「每綴二街市俚語一爲二歌曲一、人爭傳レ之、自號二李ー―一」‖浪人。○道樂むすこ、游蕩の子弟。

【浪士】ラウシ　○みだらなる士。唐書、元結傳「自稱ニ―ー一」○圖らうにんざむらひ、浪人せる武士。

【浪死】ラウシ　いぬじに、他鄉にさすらひて死する。通鑑、漢紀「王溥作ニ無下面ニ逢ニ來一ー―上歌」‖徒死。

【浪志】ラウシ　みだらなるこころざし。釋氏通鑑「木食澗飲、ー―無レ生」‖妄念。

【浪游】ラウユウ　なみうちぎは。徐牧詩「願尾隨ニ波裏一、朱顏破ニ―ー一」

【浪職】ラウショク　其の實を盡さずして其の職に在る。孫樵文「大懸大善、難レ賤必紀、尸位ー―、雖レ貴必黜」‖曠職。

【浪迹】ラウセキ　あちらこちらと行きて定りなき義。岑參詩「明時不レ愛レ璧、ー―東南游」‖浪跡。

【浪戰】ラウセン　みだりにたたかふ。通鑑、唐紀「ー―爲二下策一」‖徒戰。

【浪傳】ラウデン　みだりに世につたへる、輕率に宣布する。杜甫詩「將レ詩莫ニ―ー一」

【浪人】ラウニン　○官職なくして流浪する人。柳宗元、李赤傳「李赤江湖間ー―也」圖○封建時代に武士又役人が官職から離れておちぶれる。又、其の人。‖浪士。○一定の住所無くぶらつきある者。‖浮浪者。

【浪擲】ラウテキ　みだりになげうつ。元稹詩「尺寸皆隨レ用、錙銖敢ー―」

【浪費】ラウヒ　むだづかひ。楊萬里詩「賜金浜ー―、喚取從二甘泉一」

【浪浪】ラウラウ　○湖などの流れる貌。屈原、離騷「哲二余標一之ー―」○圖浪人のおちぶれたるありさま「ー―の身」

【浪子】ラウシ　みだらなり、おろそか。潘岳、笙賦「罔ニ―ー一以慢懇一」‖孟浪。

【浬】リ　支

○泥ーは、波斯の酋長の名。○俗に英語ノットの譯語、海里の義、我が十六町五十九間四尺許。

【涖】レイ　リ　寘　國　又、莅・蒞に作る

○みる(視)○のぞむ(臨)其の場所に至りのぞむ。○ーーは瀕を下る水の聲。

【涖臨】リンリン　涖・望・臨の別は望(月部七畫)の條を見よ。

【涖止】リシ　來りのぞむ。詩、小雅「方叔ーー、其車三千」止は助字。

【涖政】リセイ　君として臨みて政を聽く。吳越春秋「太伯三以天下讓於レ是季歷ーーレ」

【涖祚】リソ　くらゐにのぞむ、天下に君臨して政を行ふ。‖涖阼・涖政。

【涮】レン　リ　銑　霰

水がとくながれる(疾流)「湲ー」

八畫

【涴】㊀ア　㊁エン　哿　國　阮　國

㊀けがす、けがる、けがれ(汙)韓愈詩「勿使塵埃ー―」㊁ーー演は水の廻り曲る貌。江賦「洪瀾ーー演」

【涴唾】アダ　みだりがはしき聲。又みだらなる音曲、唾は淫聲。騷、宋玉文「弘二鼓雅奏一、抑二鄭ーー一」歐陽修詩「ーー俚所レ樂」

【涴威】アイ　大いなる威勢。詩、周頌「既有ニ―ー一、降レ福孔夷」

【涴意】アイ　心をほしいままにす。又、みだらなる心。管子「先王之治レ國

涴・汙・涔・楓・潘・瀸・點・點・漁の別は汙(水部三畫)の條を見よ。

【游】ユウ　游(水部九畫)の俗字。

【淫】イン　侵　國　古字

○みだら、酒色におぼれる。○ほしいまま(放)○むさぼる(貪)○あふる(溢)○すぐ(過)ふける、度にすぎる。書、大禹謨「罔ーー於樂」○まどはす(惑)孟、滕文公「富貴不能ー―」○はなはだし(甚)列、黃帝「朕之過ーー矣」○大いなり。○ひさし(久)○うるほす、うるほふ。○ひたす、ひたる(浸)○よこしま(邪)穀、坊記「刑以防ーー」○ながる(流移)○ーーはおること遠き貌。又、進む貌。又、往來する貌。又、流れる貌。○魚の一種。

【淫哇】インアイ　みだりがはしき聲。又みだらなる音曲、哇は淫聲。騷、宋玉文「弘二鼓雅奏一、抑二鄭ーー一」歐陽修詩「ーー俚所レ樂」

【淫威】インイ　大いなる威勢。詩、周頌「既有ニ―ー一、降レ福孔夷」

【淫意】インイ　心をほしいままにす。又、みだらなる心。管子「先王之治レ國

也、不レ一ニ於法之外一」
【淫遊】インイウ　きまりなくみだらにあそぶ。＝浪遊。
【淫佚】インイツ○なまけて樂にふける。左、隱三「驕者一一、所二自邪一也」＝淫荒。○男女間のいたづら。淩濛、刑法志「男女一一」
【淫逸】インイツ　みだらにしておこたりあそぶ。史、平準書「所下以着二行義一而防中一一上也」＝淫佚・淫荒。
【淫泆】インイツ○流れる貌。楚辭、哀郢「絳一一其若レ雲○智し進む貌。管子、内業「一一乎與レ我俱生」○遠く去る貌。高唐賦「洪波一一」○往來する貌。揚雄、羽獵賦「一一與與」
【淫雨】インウ　ながあめ。晉、月令「天多二沈陰一一一早降」＝淫霖・霪雨・久雨。
【淫霖】インリン　いなづまのきらめく貌。張衡賦「凌二震雷之硫磕一兮、弄二狂電之一一一」
【淫波】インパ　聲音のつらなり絶えざる貌。禮、樂記「咏二歎之一一一之一」
【淫宴】インエン　禮儀のみだれた酒もり。後漢書、邊讓傳「設二長夜之一一一」
【淫巧】インカウ　あやしくかざれるたくみ。書、泰誓「作二奇技一一一以悅二婦人一」
【淫行】インカウ○みだらなる行。○猥褻なるふるまひ。
【淫夜】インヤ　みだらにしてわるがしこし。班彪、北征賦「憤二我王之一一一」
【淫樂】インガク　○正しからざる音樂。禮、樂記「一一慝禮、不レ接二心術一」○みだらなるたのしみ。又、それにふける。史、呂后紀「日飲酒一一一」
【淫樂】インガク　みだらなる夜間。呂覽「亟治之世、其民不レ好二一一一流說一」
【淫戲】インギ　みだらなるたはむれ。書經「惟王一一用自絕」
【淫虐】インギャク　いんらんにして人をしへたぐ。史、殷紀「維王一一用自絕」
【淫慝】インタク　酒色などの遊にふけりてだらしが無い。漢書、楊惲傳「＝淫佚・淫亂・淫蕩・淫逸・淫放。
【淫刑】インケイ　みだらにして不當なる刑罰。左傳「一一以逞」唐書、陳子昂傳「明レ證恤レ獄、以息二一一一」＝濫刑。
【淫德】インテキ　みだらなるよこみち。晉植文「履二先王之正路一、覺一一之可レ違」＝邪徑。
【淫惠】インケイ　みだりなる不當のめぐみ。申鑒「一一・曲意・私怨、此三者、貿枉二貞道一、亂二大德一」
【淫祀】インシ　みだらなる神をまつる。又、其の祭。曲禮「一一無レ福」
【淫祠】インシ　まつるまじき神のやしろ。唐書、狄仁傑傳「毀二吳差一一一」
【淫視】インシ　よこめで見る。曲禮「毋二一一一」
【淫辭】インジ　みだらにして正しからざることば。孟、公孫丑「一一知二其所一レ陷」
【淫心】インシン　みだらなるこころ。周語「神無二聞行一、民無二一一一」
【淫酒】インシュ　さけにふける。晉書、劉琨載記「曜少而一一、末年尤甚」
【淫水】インスイ　平地にあふれるみづ、氾濫せる水。淮南子「女媧氏積二蘆灰一、以止二一一一」
【淫聲】インセイ　みだらなる音樂。列女傳「目不レ視二邪色一、耳不レ聽二一一一」
【淫嫉】インシツ　みだらにしてけがらはし。嫉は賤。宋史、蔡攸傳「多道二市井一一諧浪語一、以媒二寵心一」
【淫奏】インソウ　正しからぬ音樂。雅樂の反對。晉書、樂志「一一餘興、雜章奔數」＝淫聲。
【淫慝】インタク　みだらにしておこたる。周禮「去二其一一與二其奇衺一之民一」
【淫盜】インタウ　みだらにして盜む。南史、齊高帝紀「誡奸一一者、一皆湔除洗除」
【淫蕩】インタウ　淫荒に同じ、蕩はほしいまま。
【淫溺】インデキ　甚だしくふけりおぼれる。中說「吾文章可レ謂二一一一矣」
【淫匿】インドク　むさぼりよこしま。左傳「以懲二一一一」
【淫佚】インイツ　みだらにして道にさかふ。管子「驗二比黨一一行貪之徒一」
【淫放】インハウ　みだらにしてほしいまま。阮籍文「好レ勇則犯レ上、一一則棄レ親」＝淫荒。
【淫非】インピ　みだら。曾子「使二民毋レ由レ接二於一一之地一」
【淫費】インヒ　むだづかひ、むだなものいり。後漢書、皇后紀「世增二一一一」
【淫靡】インビ　みだらにしてはでやか。漢書、王褒傳「說者以爲二一一不急一」
【淫巫】インフ　みだらなるみこ。唐書、蘇源明傳「一一愚祝、妄有二關說一」
【淫婦】インプ　淫亂にして身持の惡しき女、いたづらもの。
【淫風】インプウ　みだらなるならはし。
【淫萍】インペイ　うきくさ。傳休奕贈、「一一本無レ根、非レ水將何依」
【淫僻】インペキ　みだらでひがむ。大戴禮「風俗一一、百姓荒亡」
【淫朋】インホウ　みだらなるあそび友だち。書經「見賊臣民、無二有二一一一」
【淫奔】インポン　男女媒なくして私に通ずる。周禮、地官「調レ不二必六禮備一、非二一一也」
【淫湎】インメン　酒色にふけりすさむ。左傳「不レ式二王命一、一一毀レ常、王命伐レ之」
【淫羊藿】インヤウカク　一種の多年生草、根葉を藥用とす。いかりさう（礙草）
【淫潦】インラウ　ながあめにて漲るおほみづ。宋史、單鍔傳「夏秋患二于一一」元史、河渠志「泄二江湖之一一、立二捍海之橫塘一」＝霖潦。
【淫亂】インラン○酒色におぼれあそびおこたる。周語「立二於一一之國一」○關其だしき色好み。
【淫濫】インラン　當の度に過ぎてみだらなり。後漢書、梁商傳「刑不二一一一」
【淫霖】インリン　ながあめ、霖はながあめ。

一說、三日以上降り續く雨。陳雅「久雨謂二之淫一、淫謂二之霖一」‖霖雨・淫雨。

【淫溏】インタウ　出でてやまざるなみだ。韓愈詩「中宵倚二牆立一、——何滂滂」

【淫威】インヰ　たり。左傳「子產曰、匹夫匹婦強死、其魂魄猶能馮二依子人一、以爲二淫一ー一ト」

【淫慝】インタク　みだらにしていろどとにふける。‖淫縱惡癖イツセウ

【淫褻】インセツ　みだらにしてまどふ。漢書、五行志「將生二ー一寵氏之禍一」

【滅】

㊀　メキ
㊁　キョク・ケキ　職　錫

㊀はやくながれる(疾流)㊁みぞ。史、夏紀「卑二宮室一、致二費于溝一」‖溝。

【液】

㊀　エキ　陌
㊁　セキ　陌

㊀しる(汁)「一體」「津ー」○淫ーは音の連りて絶えざる貌。○推移クワイの按に通ず。㊁うるほふ。○ひたす(漬)○とく、ちる(解散)

【液化】エキクワ　氣體・固體が溫度又は壓力の作用により變じて液體になる。

【液汁】エキジフ　しる、つゆ。‖漿。

【液態】エキタイ　水・油の如き流動する物體。氣體・固體と合せて物の三態といふ。

【液庭】エキテイ　どてん、宮庭。漢書、王莽傳「ー一ー瞻來ル充」‖掖庭。

【淵】エン　先

○ふち。水、地より出でて深くたたへて流れざるもの。○轉じて物の多く聚る所「一藪」○いけ(池)ぬま。○しづか(靜)「一默」○ふかし(深)「寒ー」○ーは鼓を伐つこと。

【淵藪】エンソウ　ふかきこころ。鮑照詩「盛明難二重來一、ー一爲ル誰測」‖淵旨。

【淵淵】エンエン　○靜深なる貌。中庸「ー一其淵」○鼓をうつ音。詩、小雅「伐レ鼓ー一、振旅闐闐」

【淵遠】エンエン　ふかくとほし。頭陀寺碑文「業行淵修、理懷ー一」

【淵雅】エンガ　ふかくおちつきて雅味あり。魏志、管寧傳「ー一高尚、確然不拔」

【淵海】エンカイ　ふちと、うみと、物の深く大いなるに喩ふ。抱朴子「五經爲二道義之ー一、子書爲二增レ深之河流一」

【淵奇】エンキ　水に潛ふもの、ふなびと。張協、七命「ー一唱二淮南之曲一」

【淵岳】エンガク　ふちと、たけと。物の靜かにして動かざるに喩ふ。文心雕龍「ー一其心、翩風其采」

【淵洽】エンカフ　ふかくして、ひろくゆきわたる。魏書、常景傳「詔曰、景學業該通、文史ー一」

【淵鑑類函】エンカンルイカン　四百五十卷、清の張英等、勅を奉じて撰す、天部・歲部・地部・帝王部より、禽蟲・草木・魚介等に至る四十五門に分ちて故事成語を彙輯す。

【淵奧】エンオウ　ふかき根柢。晉松之文「道統ニー一神超二妙物一」

【淵曠】エンクワウ　ふかくひろし。沈約文「雖二法身常住之奥遠、二諦三假之ー一、情道求二宗於斯一可レ足」

【淵玄】エンゲン　おくぶかし。蔡邕文「ー一其深、諒寔其高」‖深奥。

【淵源】エンゲン　みなもと、事物の根元。漢書、成帝紀「臨林之宮、四海ー一」‖根原・本原。

【淵乎】エンコ　おく深き貌。老子「道沖而用レ之、或不レ盈、ー一似二萬物之宗一」

【淵旨】エンシ　おくふかきむね。任昉文「仰二模ー一、取二簡段一」

【淵深】エンシン　○ふちふかし。史、貨殖傳「ー一而魚生レ之、山澤而往レ之、人富而仁義附焉」○おくぶかし。呂覽「圓大ー一不レ可レ測也」魏志、衛臻傳「明慮ー一、規略弘遠」

【淵淑】エンシュク　ふかくしてよし、淑は善。陳志、郭嘉傳、注「忠貞ー一、篤純性達」

【淵水】エンスイ　ふかき水、ふち。書、大誥「予惟小子、若レ涉ー一ー」‖淵泉。

【淵泉】エンセン　おくぶかし。晉束晳文「其ー一、如レ虛如レ宋」

【淵泰】エンタイ　おくぶかし。晉束晳文「其ー一、如レ虛如レ宋」

【淵靜】エンセイ　○ふちが深くしてしづか。柳貫詩「ー一得レ藏レ珍」○ふかくしづか。註、天地「無爲而萬物化、ー一而百姓定」‖沈靜。

【淵沼】エンセウ　ふかきぬま。魏志、管寧傳、注「ー一之魚、樂二其源濁一」

【淵照】エンセウ　深く明かに知る。齊書、豫章王嶷傳「ー一殆二乎機象一」‖明察・淵見。

【淵泉】エンセン　ふかきいづみ。列子「心如二ー一、則智慧日新」宋書、符瑞志「王者德至ー一、則河出二龍圖一」

【淵然】エンゼン　水深くして靜かなる貌。柳宗元、鈷鉧潭西小邱記「ー一而靜者、與レ心謀」

【淵潛】エンセン　ふかくひそむ。揚雄、反離騷「德二神龍之ー一」

【淵藪】エンソウ　淵は魚の聚る所、藪は獸の聚る所、よりて物の多く聚るに喩ふ。書、武成「爲二天下逋逃主一ー一」‖戰一に叢に作る。

【淵叢】エンソウ　前條に同じ。

【淵塞】エンソク　心ふかく德が充實する。後漢書、章帝紀「聰明ー一、溫在二圖讖一」

【淵澤】エンタク　ふかきさは。禮、月令「祈二名山大川名澤ー一井泉一」

【淵湛】エンタン　ふかくたたへる。魏書、張燮傳「洞庭ー一、通二巴流一以增レ大」

【淵沖】エンチウ　ふかくしてむなし。陸機文「茂德ー一、天姿玉裕」

【知二淵中之魚一者不祥】チチュウノウオヲシルモノハフショウナリ 淵の中の魚を見透して知るは悪し、隣から隣まで窮むるは宜しからざる喩、古の諺か未だ詳かならず。（説林、上）

【淵澄】エンチョウ ふかくしてすむ。千字文「川流不息、——取レ映」

【淵閣】エンカク ふかきはかりごと。南齊書、高組十二王傳贊「——遠算、意在レ無レ遺」‖遠圖・淵謀。

【淵洞】エンドウ ふかし。又、ふかきうつろ。拾遺記「瀛州東有二一一一

○みぎは(水際)きし、ほとり(水邊)○轉じて窮盡の義とす、かぎり、はて。莊、養生主「吾生也有レ涯、而知也無レ涯」【涯岸】ガイ　○水のきし。陳信文「江淮無二一一之固一、亭壁無二湯鑊之固一」＝涯涘。○かぎり。通典「滄海無二一一」【涯限】ガイゲン　かぎり。王僧孺文「一旦攀附、遂無二一一」＝涯際。【涯際】ガイサイ　みぎは。又、かぎり。陳信文「趨渥之一一莫レ窮、江海之波瀾不レ測」【涯涘】ガイシ　みぎは。又、かぎり。韓愈、柳子厚墓誌銘「汎濫浮蕩、爲二深博無一一一」【涯涘】ガイシ　波うちぎは。柳宗元文「爲レ池環レ之九里、丘陵林麓距二其一一一」【涯分】ガイブン　かぎり、身分相應の程度、本分。晉李文「環二視其中所レ有、頗識二一一一」【以レ有レ涯隨レ無レ涯】カギリアルヲモツテカギリナキニシタガフ　限りある壽命を以て、限りなき望を抱く。莊、養生主「吾生也有レ涯、而知也無レ涯、——」

【清】カウ　梗

○まじはる、いりまじる(混)みだる、みだす「玉石混一」○にごる、にごす、かきまぜて濁す「濁一」

周顒四聲　清・交・接・雜・錯・混・參・閑・廁の別は交(一部四畫)の條を見よ。【清塞】シンソク　まじりみだれる。唐書、魏和初傳「十不レ收レ一、取舍一一」＝紛清・雜亂・錯亂。

【潤】カク　入　通音コ

○つく(竭)かる、水が盡きて無くなる。禮、月令「仲秋之月、水始一」○からす、水を乾かす。【潤陰】コクイン　きびしきさむさ。張衡賦「一一沍寒」＝窮陰。【潤沍】コゴ　寒さ強く水がこほる。裴度文「外去二一一之節、內見二發生之理一」【潤涸】コカク　水のかわきたるなきさ。候信詩「一一通二沙路一、冥渠塞二水門一」【潤水】コスイ　かれたる川。梁簡文帝文「旅泊冬川、阻二鼓一一」【潤轍】コテツ　次條の故事に本づきて困窮の境遇に喩ふ。李商隱文「活二枯鰌於一一一」【潤轍鮒魚】コテツノフナ　車轍中の水たまりに居る鮒。人の急に迫れるに喩ふ。莊、外物「莊周家貧、故往貸二粟於監河侯一、監河侯曰、諾、我將レ得二邑金一、將レ貸二子三百金一可乎、莊周忿然作レ色曰、周昨來顧二視車轍中一有二鮒魚一焉、周問レ之曰、鮒魚來、子何爲者邪、對曰、我東海之波臣也、君豈有二斗升之水一而活レ我哉、周曰、諾、我且南遊二吳越之王一、激二西江之水一而迎レ子可乎、鮒魚忿然作レ色曰、吾失二我常與一、我無二所レ處一、吾得二斗升之水一然活耳、君乃言レ此、曾不レ如二早索二我於枯魚之肆一」＝轍鮒之急。【潤鮒】コフ　前條の略。陳信詩「一一當レ思レ水」

【涵】カン　覃

○ひたす、ひたる(漸漬)「一養」○しづむ(沈)○いる(容)「包一」「海一」函に通ず。

周顒四聲　涵・浸・漬・漸・漚の別は浸(水部七畫)の條を見よ。【涵泳】カンエイ　ひそみかくれる。韓愈文「鯨魚之一一卵三育於此一」＝潛伏。【涵煦】カンク　ひたしあたためる、惠を施してやしなふ。宋史、徐禧傳論「深仁厚澤、一一生民一」＝覆育。【涵滿】カンマン　ひたしうるほす。元結頌「一一一天休一」＝浸潤。【涵咀】カンシ　よくかみこなしてあぢはふ。陸機叡文「每レ一一一義晞、獨坐日昃」【涵養】カンヨウ　いれたくはへる。王炎詩「胸次要一一一」【涵碧】カンヘキ　みどり色をひたす。朱熹詩「一水方一レ、千林已變レ紅」【涵養】カンヨウ　○ひたし養ふ。陳書、沈炯傳「文帝嗣レ位、表曰、王者之德、睿及無レ方、矧彼頑沈、孰非一一一」＝化育。○學識氣質を養成する、涵育。

【淇】キ　支

川の名。河南省に在り。【淇園】キエン　衛に在る園の名。述異記「衛有一一一出レ竹、在二淇水之上一、詩云、瞻二彼淇澳一、綠竹猗猗是也」史、河渠書、鄭臣從官、皆貢レ薪寘二決河一、是時東流郡燒レ草、以故薪柴少而下一一一之竹、以爲レ楗」【淇園長】キエンチョウ　竹の異名。

【淮】クヮイ　佳　通音ワイ

川の名。古の四瀆の一、河南省桐柏山より出で、東流して安徽省に入り、滁して洪澤湖と爲る。【淮南子】ワイナンジ　書名、二十一卷、前漢の淮南王劉安撰す、大旨道德に本づく、雜家に入る。【淮陰】ワイイン　地名、今の江蘇省清河縣の地、其の故城址は縣南に在り、韓信の封ぜられしは卽ち此。【淮豆】ワイトウ　豌豆エンドウの異名【正字通】【淮南】ワイナン　○淮水以南の地にて晉・北魏・隋・南宋・南齊の郡名。又、唐の十道の一、今の湖北の長江以北、漢水以東、及江蘇・安徽の長江以北、淮水以南の地の總稱。○豆腐の

異名、淮南厲王安の創製する所なるに由る。山堂肆考「一ハ王安始謂レ豆爲二乳脂一、名曰二豆腐一、白レ是爲二豆腐異稱一」

【淳】ケイ　ギョウ　圏

○ひろし、大水の貌。○ひく(引)○溟ーは自然の氣。又、物事の未だ分れざる混沌たる貌。莊、在宥「大同乎溟ー」

【淈】コツ　月

○にごる。にごす(濁)屈原、漁父辭「何不レ其波而揚二其泥一」○みだる(亂)○つく。つくす(盡)○ながれる。○汨に同じ。【淈淈】コツ　決し流れる貌。上林賦「滔滔ーー」

【滑】コツ　月

○あふ、かなふ(合)○あをぐろき貌。○大いに清し。

【潛】コン　元

ーーコンは未だ定らざる貌。荀、賦論「ーー淑淑」

【混】㊀コン　㊁コン　元　阮　渾に通用す

㊀まじる、まじはる、まじふ(雜)「ー雜」「ー淆」○あはす、あふ(合)「ー一」「ー合」○にごす、にごる。○ーは水の盛んに流れる貌。○ーは元氣の未だ分れざる貌。大きくばっとしたる貌。㊁比に通ず、ー夷は、西方の夷。ー崑夷。○ー淪は山の名。ー寓。

同訓異字　混・交・接・雜・錯・淆・參・和・廁・雜の別は交(一部四畫)の條を見よ。

【混一】コン　あはす、多くのものをひとまとめにする。晉書、楊帝紀「漢高ニ天下一、車書ーー」ー九合・統一。

【混殽】コン　前條に同じ。史、張儀傳「經ニ營天下一、ーニ諸侯一」ー混一。

【混汚】コン　けがれ。外傳「以己之ーー」

【混淆】コン　まじる、まじふ。抱朴子「貧賤恒、玉石ーー」

【混合】コン　まじりあふ。杜牧詩「光塵能ーー」

【混血兒】コン　あひのこ、人種の異なるものの間に生れし子。

【混元】コン　天地の總名、宇宙、元は元氣。晉書、孝友傳序「大矣哉、孝之爲レ德也、分ニーー一而立レ體」

【混元代】コンゲン　極めて古き時代、創世期。白居易詩「似レ遊ニ華胥國一、疑レ返ニーーー」

【混混】コン　○水の盛んに流れる貌。流、賦、楚「源泉ーー、不レ舍ニ晝夜一」○濁る貌。王逸、九思「ー兮濁濁」

【混雜】コン　いりまじる。北魏書、韓顯宗傳「錯居ーー」ー混雜。

【混入】コン　まぜいれる、まぜこむ。

【混然】コン　次條に同じ。莊子「古之人在ニーー之中一」

【混茫】コン　ぼっとしてとりとめなし。子華子「ーー之初、造名二太初一」ー混沌。

【混漫】コン　入りみだれる。抱朴子、其爲レ政也、或仁而不レ斷、柔緩ーー」

【混冥】コン　ぼっとしておくふかし。高妙深遠の義。郭象莊周「齊物論ーー道乃隳」

【混亂】コン　いりみだれる。雜糅紛紜「顚倒ーー」ー混淆錯亂。

【混流】コン　いりまじりながれる。上林賦「泊乎ーー、順レ阿而下」

【混淪】コン　○元氣の未だ分れざる貌。列子「氣形質具、而未二相離一、故曰二ーーー一」ー混沌。○混昆に同じ。

【混和】コン　まざる。まぜる。ー混合。

【淬】サイ　㊀　焠に通用す

○にらぐ、刀劍を鍛錬するに燒きて水に入れ、火を滅して鐵の質を堅くする。戰國燕策「以レ藥ーレ之」又、其の水を貯ふる器、轉じてつとめはげむ義とす「ー勵」○そむ(染)○おかす(犯)

淬 淬・焠通ず。焼きて火より出す、故に火に从ふ、水に入れて火を滅す、故に水に从ふ。

【淬礪】サイ　つとめはげむ。唐書、許王素節傳「一一自強」‖淬勵・砥礪。

【淬勵】サイ　前條に同じ。

【淬礪】サイ　○ときみがく。劍戟、新論「越劍性利、非一一而不レ銛」元稹詩「筒銭本求利、一一其鋒難」‖礪淬・礪礦・磨礪・磨淬。○轉じて人の進修に喩ふ。

【澌】 サン　セン　㊀　㊁

あらふ(洗)あらひきよめる。

【淄】 シ　㊁　通じて菑に作る

○くろきいろ(黒色)○川の名、山東省の萊蕪縣より出づ。○臨一は戦國の齊の都、今の山東省青州府臨一縣治。

【淄硯】シン　山東省淄川縣より産する硯、宋の時、最も之を重んず、蘇易簡の硯譜に「天下之硯、青州紅絲石第一」とあるは即ち一一なり、盛百二に一一錄あり。

【淄澠辨レ味】シジョウベンミ　淄・澠は齊國の二川、齊の桓公の臣、易牙能く味を知り、二川の水の味を辨ず。列、說符「易牙齊大夫、善聞レ味、辨二淄澠二水一、俱嘗而知レ之也」

【深】 ㊀　シン　㊁　シン　㊀　㊁

㊀ふかし、水が深し。淺の對。おくぶかし(遠)「一山」○ふかくす。○終に近づく、おそし(晩)「春一」○久し。白居易詩「夜一忽夢少年事」ふける「夜一」○こまやか(濃)「一紅」○さらへをさめる(浚治)漢書、溝洫志「治水有レ決レ河一レ川」○かくす(蔵)○甚だ、極めて。○一種の衣「一衣」㊁ふかさ、ふかみ。周禮、地官「測二土一」

同訓異字　シン・淺・淄・澠・邃○深は淺の反。莊子「視レ淺者不レ可二以汲一レ深」すべて水に限らず、廣く情思・義理などの深きにも用ふ。許渾詩「貧別登二情淺一」後漢書「才應優深」○淺・深の二字は共に淵・川をさらへて深くする義「淺レ川」また「淺二於淵一」の如し、また廣く深の字の義に用ふ、北史に「黄河急淺」と用ひ、また詩に智の深きを「淵哲」といへる如し。○邃は奥深きなり、幽邃・深邃と連用す。

【深愛】アイふかくいつくしむ。禮、經解「孝子之有二一一一者、必有二和氣一」

【深奥】オウ　おくぶかし。易、文言、疏「乾坤易之門戸、義理一一」‖深邃・深長・深遠。

【深況】シンキョウ　深き天子のめぐみ。後漢書、伏湛傳「蒙レ恩一一、所レ官謂有レ益二于國一雖レ死無レ恨」

【深慙】シンザン　深く恥ぢる。非有先生論「吳王稚然、俛面一一」‖深思・深念。

【深意】シンイ　ふかきこころ。謝靈運、山居賦「尋二古皓之一一一」‖深旨。

【深愛】シンアイ　甚だしきしんぱい。‖大患・大憂。

【深隱】シンイン　ふかくかくれる。杜甫、雨詩「萬木蒼一一、連山雨未レ開」

【深窈】シンヨウ　深く静かなる貌。洞天清錄「軒窗閒雅、悠然遠眺、道路一一、儼然深居」許渾詩「禪室各一一」

【深邃】シンスイ　深くしげりたる木かげ。韓駒詩「移レ牀就二一一一」

【深遠】シンエン　ふかきうらみ。韓愈詩「往者不レ可レ悔、孤情抱二一一一」

【深測】シンソク　○ふかきふち。詩、小雅、小旻「如レ臨二一一一」○ふかし。

【深遠】シンエン　深奥に同じ。

【深情】シンジョウ　ふかくさし出たるのき。僧惠洪詩「一一雨骨時」‖深簷。

【深閨】シンケイ　おくゆかしくおだやか。杜甫詩「顧視清高氣一一」

【深話】シンワ　ふかくあやしむ。陳基詩「梁書一一故人稀」

【深勤】シンキン　ふかく其の罪をきはめる。齊書、陸澄傳「詔曰、澄表據多レ謬、不レ足二一一一、可二白衣領一職」

【深海】シンカイ　○深きうみ。○深き二百メートル以上の海。

【深解】シンカイ　おくそこまで、さとる。諸葛亮、與二張溫・群賢一書「二一一兵意一」

【深交】シンコウ　ふかきまじはり。晉書、溫嶠傳「嶠與二庾亮一一一」

【深更】シンコウ　よふけ。曹伯啓詩「樓鼓辨二一一一」‖深夜。

【深耕】シンコウ　ふかくたがやす。禹、貢惟王「一一易耨」

【深室】シンシツ　ふかきたに。梁元帝文「一危峭、組二綾煙霞一」

【深莊】シンソウ　ふかくかんがみる。漢書後主紀「一一二物情一匡二我王度一」

【深忌】シンキ　ふかくいみはばかる。後漢書、吳漢傳「光武一一レ之」

【深寄】シンキ　ふかくまかす。江淹文「既乖二寵榮一、彌縣二一一一」

【深談】シンダン　十分にひらきさとる。吳越春秋、願王前三大夫種一與一一」‖熟議。

【深伉】シンコウ　ふかき恨のあるかたき。‖深讐。

【深宮】シンキュウ　おくにふかき御殿。‖深奥。

【深虛】シンキョ　おくぶかくしてむなし。後漢書、袁紹傳「惡氣一一」

【深拱】シンキョウ　奥ぶかき宮中に居て手をこまぬきて何事も爲さず。史、李斯傳「陛下一二一禁中」

【深篤】シントク　ふかき岩あな。梁宣帝賦「潛二一一、而學二六通一」‖幽窟。

【深緋】シンヒ　こき赤色。‖朱。

【深愧】シンキ　ふかくおもふ。ふかきおもひ。張衡賦「私湛憂而一一兮」‖深念。

【深隄】シンテイ　ふかき堤。

【深淪】シンリン　ふかくひろし。劉克莊詩「中洞既一一」

【深刻】シンコク　きびしき刑罰。漢書、元帝紀「上失二其道一而縄レ下以二一一一

【深翠】シンスイ　こきみどり、ふかみどり。盛弘之「荊州記」「樹林一一已生ノ烟」‖深綠・深碧。

【深遠】シンエン　○土地がおくぶかし。○轉じて學術・議論などの深遠なる義。梁簡文帝文「感門一一、入ノ之者寡」‖深奥・深長・深遠。

【深害】シンガイ　極めてこきあをいろ。蘇軾詩「梨花淡白柳一一」

【深穹】シンキュウ　ふかきおとしあな。徐寅詩「洞裏雙扉入到初、似ア從二一一一視ル高墟ヒ」

【深省】シンセイ　ふかくさとる、深く反省する。杜甫詩「令三人發二一一」

【深切】シンセツ　極めてねんごろ。史、孔子世家「不レ如下見ニ之于行事一之一一上明也」‖懇切。

【深泉】シンセン　ふかきいづみ。晉書、顧愷之傳「投二魚一一一放二飛鳥一」

【深遡】シンソ　○ふかいと、あさいと。詩、邶風「深則厲、淺則揭」漢書、宣帝紀「各以二罪一一一報之」○ふかき。

【深澹】シンタン　ふかくひそむ。元稹詩「風高雲遠、波暖鯉一一」

【深歳】シンネン　ふかきくさむら。韓愈詩「一一見二狐狸一」

【深到】シンタウ　深く造詣に達する。蘇軾詩「開軒延與語、指亦有二一一一」

【深邃】シンスイ　遠くのがれ避ける。晉書、郭璞傳「遂一一絕レ迹」

【深窓】シンソウ　おくざしき。陸機賦「一一百室、曾臺千房」‖深宮。

【深耽】シンタン　甚だしくふける。北史、李義深傳「梁武帝一一二釋學一、集二名僧于愛敬・同泰二寺一講二涅槃大品經一」

【深歎】シンタン　ふかくなげく。張融詩「不レ輕文藻少、一一正雲疲」

【深澤】シンタク　ふかきいけ。○城の池を深くする。韓詩外傳「高レ城一レ一、不レ足レ以レ爲レ固」

【深恥】シンチ　ふかくはづ。ふかきはぢ。南史、陶弘景傳「讀書萬餘卷、一事不レ知爲二一一一」‖大恥。

【深智】シンチ　ふかきちゑ。韋應物詩「張侯本忠烈、濟世有二一一一」

【深沈】シンチン　次條に同じ。

【深澹】シンタン　おちつきておもおもし、淺はは沈。‖深沈・深重。

【深長】シンチャウ　あさはかならず、ふかくながし。論語、序說「發二意味一一一」

【深沖】シンチウ　ふかくやはらぐ。晉書「望レ之凝秀、接レ之一一」‖湖沖。

【深遠】シンヱン　おちつきておもおもしく物事にさわがず。‖深澹・深沈・沈重。

【深痛】シンツウ　ふかくいたむ。晁冲之詩「風俗移レ人可二一一一」

【深泥】シンデイ　ふかきどろ、深きぬかるみ。‖深澤。

【深厄】シンヤク　きびしく、あばきそしる。漢書、王章傳「飾レ文一一、以顯二無罪一」

【深怒】シンド　ふかくいかる。史、樂毅傳「我有二積レ怨一一三一于齊一」

【深入】シンニフ　敵地へ深く攻め入る。史、戴冑傳「一一二敵國一」

【深念】シンネン　ふかくおもふ。史、陳賈傳「力不レ能レ爭、常蕪居一一」

【深房】シンバウ　おくふかきへや。‖深閨。

【深華】シンクワ　ふかきくさはら。儲光羲詩「網罟縻二一一一」

【深白】シンパク　まっしろ。玄楠詩「輕朱一一錯二淺色一、高亞綠樹爭二精神一」

【深博】シンパク　ふかくしてひろし。韓愈、柳子厚墓誌銘「汎濫浄蜜、爲二一一一無二涯涘一」

【深察】シンサツ　ふかく事き病氣。馬祖常詩「恤」隱疑二一一一」

【深淵】シンエン　深淵と薄氷との略。吾戒、石勒戒記「如レ臨二一一一」深淵參看。

【深總】シンソウ　おく深くひめる。宋史、蔡序辰傳「踪跡一一、包二藏禍心一」

【深徹】シンテツ　おくぶかし。南史、齊高祖紀「脫開至道一一、惟人是弘」

【深徹】シンテツ　ふかくして、さとし。經書、劉芳傳「才愚一一、特精二經義一」

【深文】シンブン　法律をきびしくする。きびしき法律。文は刑法。漢書、張湯傳「湯與二趙禹一共定二諸律令一、務在二一一一」‖峻文。

【深警】シンケイ　ふかき禁害。顏氏家訓「南染二吳越一、北雜二夷虜一、皆有二一一一、不レ可二具論一」

【深習】シンシフ　濃きみどり。名山記「早春有レ影、其色一一」‖深翠。

【深壁】シンヘキ　とりでを厚くして固く守る。漢書、韓信傳「兵易二敵敗一、不レ如レ一一」

【深謀】シンボウ　深き謀計。又、ふかくはかる。史、趙世家「范臺事二越王勾踐一、既苦レ身戮レ力、與二句踐一一一二十餘年、竟滅レ吳、報二會稽之恥一」

【深謀遠慮】シンボウエンリョ　ふかくはかりて永遠のことまで考へる。賈誼、過秦論「一一、行レ軍用レ兵之道」‖深慮淫謀。

【深墨】シンボク　甚だ黑し、或に居る處等をいふ。孟、滕文公「然レ弱、面一一」

【深味】シンミ　ふかくしてくらし。劉安陣文「是一一、而多二水陰一」

【深味】シンミ　○よく味ふ。謝靈運「余營一一二其旨一、服二其精當一、而未レ能レ行也」○甚だよきあぢ。

【深密】シンミツ　かんがへがふかくこまかし。綿密。魏志、荀攸傳「攸一一有二智防一」

【深慮】シンリョ　ふかくあはれむ。晉書、武帝紀「先帝一一二褒元一」

【深羅】シンラ　ふかききり。張融賦「夜霧一一、重密二長雲一」

【深妙】シンメウ　ふかく微妙なる理。史、龜策傳「精微一一」‖玄妙。

【深目】シンモク　くぼきめ。漢書、西域傳「大

苑囿。其人皆ー一、多二須顧一」‖顧は眷。

【深夜】シン よふけ。元稹詩「月明ーー古樓中」‖深更。

【深謀】シン ふかくしげりたるつた。方千詩「ーー難レ遁レ目」

【深林】シン 深く茂れるはやし。說苑「芝蘭生於ーー非下爲レ無レ人而不レ香」

【深慮】シン 深きかんがへ。後漢書、鄧禹傳「非レ有二忠言明謀一、ーー遠圖一」

【深閨】フカクアイケイ ふかくあはれむ。顧谷詩「獨念深閨興、ーー遲庭松」

【深更】シン ふかきいりえ。杜牧文「復引二時於ーー一」

【淌】 シャウ 養

○おほきなる水勢の貌。

【淑】 シュク 屋

○よし（善良）○又、婦人の美徳「貞ーー」「婉ーー」「ー德」○よみす、よしとする、よくす、私ーー」○ふかし、きよし（清清）○すなほ。○はじめ。後漢「ーー獻無常數」‖假。

【淑姿】シン 淑・善・好・佳・嘉・僖・美・眞・祐・吉の別は善（口部九畫）の條を見よ。

【淑郁】イクク 香氣盛んなり。上林賦「芬芳漚鬱、酷烈ーー」

【淑慝】シュクトク 善くつつしむ。詩經「溫恭且惠、ーー其身」‖敬愼。

【淑人】シュク ○善人に同じ。善眞の德ある人。詩、曹風「ーー君子、其儀一兮」○命婦の封號、宋の制、尙書以上の命婦はーーに封ず、明清は三品。

【淑胖】シュクハン よききざし。徐彥伯詩「藻綸淑胖潔二蔵経獻一ーー」

【淑性】シュクセイ やさしく善きうまれつき。晉衡、七辯「ーー窈窕、秀色美麗」

【淑清】シュクセイ ○よく治りてきよし。四子講德論「今海內樂レ業、朝廷ーー」○ほがらかにして清し。淮南子「日月ーー而揚レ光」‖明朗。

【淑女】シュクジョ 善良なるをんな。詩、周南「窈窕ーー、君子好逑」

【淑弟】シュクテイ 善德あるおとうと。孫文帝詔「於惟ーー、繇英純眞」

【淑哲】シュクテツ 善眞で賢し。又、其の人。後漢書、皇后傳「明愼二幽納一、洋溢二ーー一」元史、后妃傳「ーー端慤」

【淑德】シュクトク 正しく善きとく、主として婦人の善美なる德にいふ。易林「泓氏ーー、宋有二胥祿一」

【淑慝】トクジョク よきと、あしきと。書、畢命「旌二別ーー一、表二其宅里一」‖善惡。

【淑範】シュクハン 正しき女のてほん。唐書、后妃傳序「ーー懿行、更爲二內助一」

【淑妃】シュクヒ 女官の稱。事物紀原「魏明帝置ーー、齊永明中有司奏、ーー舊擬二九嬪一、以レ淑爲二溫恭之稱一、妃爲二亞レ后之名一、遂同二貴妃一、加比三三司一」

【淑美】シュクビ すなほにしてうるはし。應瑒文「余心嘉二夫ーー一」

【淑媚】シュクビ なまめきてうつくし。陸雲詩「目想二清顏雲一、耳存ーー音一」

【淑問】シュクブン ○よきほまれ、問は聞。江淹表「ーー夙孚、令儀早斷」‖淑聲、淑聞、善名。○モン善く訟を聽く。詩經「ーー如二流一」

【淑茂】シュクモ 德すぐれてうるはし。漢賈、劉向傳「賈賈ーー、道術通明」

【淑聲】シュセイ 女の善德あるほまれ、良淑のきこえ。晉書、皇妃傳序「陰教治二于宮闈一、ーー施二于區域一」

【淑寵】シュクチョウ 善眞なるつれあひ。潘岳詩「奈何悼ーー、儀容永潛翳」

【淑簫】シュクセイ よきたましひ。班婕妤賦「承二祖考之道德一兮、何性命之ーー」

【淳】 ㊀ジュン ㊁ジュン 眞 軫

㊀きよし（清）雜リンなし「ー粹」○すなほ、ありのまま、きぢ（樸）○まこと、あつし（厚）人情厚し。以上の義は醇に通ず。○そそぐ（沃）○大いなり。○しほはゆし（鹹）○兵車の一

對。○一は流れ動く貌。㊀ひろさ、はば。布帛の幅。‖純。

【淳】シュン　厚・篤・敦・醇・淳・醇の別は厚（广部七畫）の條を見よ。

【淳于髡】シュンウコン　周代の齊の人、孟子と時を同じくす、博聞強記、滑稽多辯、嘗て諷刺以て齊威王の長夜の飲を止め、しばしば諸侯に使して屈辱せられず。

【淳氣】シュンキ　まじりけなきよき氣。韓維詩「賦ノ詩多ク醇厚ノ語ヲ見ニ一一」

【淳化】シュンクワ　○すなほになる、淳朴になる。權德輿詩「一一洽ク唐明ニ殊方均ニ惠養ニ一」○宋の太宗の年號。

【淳化閣法帖】シュンクワカクホフテフ　淳は宋の淳化年間に成る、太宗、三館の書、及漢の張芝・崔瑗、魏の鍾繇、晉の王羲之・獻之・庾翼・羲子雲、唐の太宗・明皇・顏眞卿・歐陽詢・柳公權・懷素等の墨跡を選びて其の中に藏す、侍書王著に詔して以上の墨跡及南唐の澄心堂帖を以て禁中に摹刻し、版にて十卷と爲し——と名づく、諸の流傳の時、錯誤して重刻す。

【淳澆】シュンゲウ　てあつきと、うすきとの淳厚と輕薄と。劉子「天下二淳厚ノ俗一有ニ一一ニ」‖淳漓。

【淳漓】シュンリ　いさぎよし。後漢書、鄭均傳「有ニ一一之風ニ東州稱ス仁」

【淳素】シュンソ　淳朴の異名。‖醇素。

【淳厚】シュンコウ　まじりけなくすなほ。中論「人心和平、天下一一」‖淳朴。

【淳深】シュンシン　あつくしてふかし。潘岳、西征賦「忠孝一一」

【淳淳】シュンシン　流動する貌。莊、則陽「觸ノ觸ニ一一」

【淳粹】シュンスイ　まじりけなし。隋書、經籍志「道者精微一一、而無レ知ニ其體ニ」‖醇粹。

【淳素】シュンソ　かざりけなく、靜か。王績、游仙郷記「醉郷氏之俗、豈古華胥氏之國乎、何其一一也」

【淳澄】シュンチョウ　あらひきよむ。國語「齊三日、王乃一一ニ齋ニ」

【淳白】シュンパク　いさぎよし。後漢書、楊震傳「所在以ニ一一ニ稱」‖清白・淳潔。

【淳美】シュンビ　風俗がてあつくうつくし。‖醇美。

【淳朴】シュンボク　すなほにしてかざりなし。‖淳樸・淳實。

【淳樸】シュンボク　前條に同じ。朴・樸同字。後漢書、天文志「協神一一」

【淳洁】シュンケツ　いさぎよくして美し。後漢書、章帝紀「聖德一一、卿勞日民」

【淳漓】シュンリ　あつきと、うすきと、淳は醇に同じ、濃き酒、漓は薄き酒。‖醇醨・澆漓・淳澆。

【淳良】シュンリャウ　てあつくして善し。物理論「非ニ廉潔一一一不レ可レ信」

【淳園】シュンエン　しほはゆきあれ地、しほはま。漢書、食貨志の法に淳は盡なり、鹵鹹の田、五穀を生ぜざるなりと。左、襄二十五「度ニ山林一鳩ニ藪澤一、辨ニ京陵一表ニ一一一」註「一一墳衍之地」

【淳晉】シュンシン　すなほにしてかざらず。嵇康詩「老成慎ニ翔好一、後生守ニ一一一」

【淳和】シュンワ　厚くしてやはらぐ。後漢書、種暠傳「一一塗レ理、敦ニ說詩書一」

【淳和奨學兩院】シュンナシャウガクリャウヰン　國　共に王朝時代の學校、足利義滿以來、征夷大將軍を具て其の別當卽ち長官を兼ぬ。

【淞】ショウ　冬

江の名。今、松に作る、江蘇省の太湖より出で上海縣の北に至り、黄浦江と合し、又東して海に入る、吳一口といふ。今商埠たり。

【淒】セイ　サイ　齊

○さむし、すごし（寒涼）詩、邶風「一其以風」○雲雨の起る貌。

【淒其】セイキ　寒くすずしき貌、其は助字。詩、邶風「緡兮綿兮、一一以風」

【淒日】セイジツ　涼しき秋の日。簫愛「春日遲日、夏日長日、秋日一一、冬日短日」‖秋日。

【淒淒】セイセイ　○寒くすずしき貌。詩、鄭風「風雨一一、雞鳴喈喈」‖淒然。○雲雨のおこる貌。詩、小雅「有レ渰一一」

【淒然】セイゼン　寒くすずしき貌。莊、大宗師「一一似レ秋、煖然似レ春」

【淒楚】セイソ　すさまじく感ずる、いたみかなしむ。李子卿、聽ニ秋笳ニ賦「悲者易ニ一一一」

【淒風】セイフウ　すさまじくさむきかぜ。左、昭四「春無ニ一一、秋無ニ苦雨一」

【清】セイ　シャウ　庚　淸とは別。

○きよし、濁の對、いさぎよし（潔）○すむ（澄）水が清くすむ。○きよめる。○あきらか（明）くもりなし、しづか（靜）たひらか（平）「一世」○ととのへをさむ（整理）理に當る。○をはる（了結）「一算」○すみざけ。○飲料物の淡稀。○かはや。○日の下。○朝代の名、世祖福臨、瀋州より入りて國を建つ、凡そ十帝二百六十八年、宣統に至りて位を遜り、改めて中華民國を建つ。○一一はすがすがしき貌。風賦「一一洽洽」

【清愛】セイアイ　○いさぎよく和らぐ。成公綏賦「高談一一、講ニ道研幽一」○きよらかなるさかもり、愛は酒。淸晉、劉向傳「願賜ニ一一之閒一、指ニ圖陳レ狀」‖清宴。

【清爽】セイサウ　世がよく治まる。爽は平。文天祥、正氣歌「鳥路當ニ一一、含

レ和吐二明庶一ニ‖清平。

【清昌】セイ　よく治まりて人がおそれ服する、清平にして長服する。唐書、王縉傳「境内ーー」

【清猶】セイ　次條に同じ。猶は猷。

【清漪】セイ　きよきさざなみ。方竜詩「分流一湧數百里、直抵二絕壑一瀦二ーー一」‖清漣。

【清友】セイ　梅花の異名。三餘贅筆「梅花ーー」

【清圓】セイ　きよらかにしてしづか。唐玄宗詩「尊レ勝在二ーー一」

【清游】セイ　塵界をはなれてきよくあそぶ。又風流のあそび。范成大詩「煩第支二脚力一、正剩賒二ーー一」‖雅遊。

【清遊】セイ　前條に同じ。蘇軾詩「南郭ーー邀二頭謝一」

【清儀】セイ　よきはかりごと。沈約文「愛始擢レ纓、ーー清襟」

【清吟】セイ　きよきひびき。曹植、白鶴賦「聆二雅琴之ーー一、記二六翮之末流一」

【清南】セイ　きよらかなるあめ。孟郊詩「靜塵無二濁氣一、ーー答二薰愛一」

【清氷】セイ　きよらかにしてながし。高允、鹿苑賦「圓レ之以二蒼形一、紐レ之以二ーー一」

【清楚】セイ　きよくさかえる。水經、注「ーー綾渡、頁多二趣味一」

【清影】セイ　きよき月かげ。杜甫詩「陰室生二微籟一、月林散二ーー一」

【清曜】セイ　きよきかがやき。傅休奕詩「汲谷竦二ーー一、九日接二高枝一」‖清輝・清暉。

【清越】セイ　聲がすみて調子が高い。禮樂記「其聲ーー以長」

【清樾】セイ　きよきこかげ。蘇軾詩「三更欹吹龍、人影亂二ーー一」

【清婉】セイ　きよくしてやさし。北史、温子昇傳「博二覽百家一、文章ーー」

【清遠】セイ　きよくとほし。晉書、王祥傳「理致ーー、將非二以レ德掩一其言一乎」

【清音】セイン　○きよらかなる音聲。左思、招隱詩「非二必絲與一レ竹、山水有二ーー一」○すめる音聲。潘岳の對。

【清温】セイン　きよらかにしてやさし。宗炳詩「動植各生姿、德寧自ーー」

【清夏】セイカ　氣のきよくすめるなつ。謝朓詩「時惟ーー始、雲景爽二餘芳一」

【清歌】セイカ　聲きよくうたふ。曹植、洛神賦「馮夷鳴レ鼓、女媧ーー」

【清雅】セイガ　きよくみやびやか。魏志、徐宣傳「ーー獨立、不レ拘二世俗一」

【清介】セイカイ　きよくしてひとりだつ。南史、陸慧曉傳「ーー正立、不レ雜二交游一」

【清巧】セイカウ　俗氣を離れてたくみなり。顏氏家訓「何遜之詩、實爲二ーー一」

【清皎】セイカウ　鳥の清らかなる聲。梅堯臣詩「聞レ鵲喜二ーー一、蒲萄發二朱莖一」

【清香】セイカウ　きよきかをり。陳偲詩「卷荷忽裁二微風觸一、瀉下ーー露一杯」

【清詣】セイケイ　きよくたかし。杜甫詩「諸葛大名垂二宇宙一、宗臣遺像頌ーー一」

【清儼】セイゲン　きよくして直し。唐書、趙宗儒傳「少嗜レ學、履尚ーー」‖清直。

【清角】セイカク　○黄帝の琴の名「博物志」○五音の中、東に當てたる音。列子「雖二師曠之ーー一、鄒衍之吹律一、無二以加一レ之」

【清客】セイカク　梅の異名「三餘贅筆」‖清友。

【清恪】セイカク　きよくしてつつしむ。魏志、註「雅亮公正、在レ官ーー」‖清愼。

【清涵】セイカン　きよくうるほす。盧仝詩「清風十日期、冰臘復ーー」

【清閑】セイカン　きよくしづか、他人の開暇を稱していふ、おひま。漢書、鼂錯傳「願陛下ーー之處二日陳二安危之慮一」‖清閑。

【清閑】セイカン　前條に同じ。嵇康、琴賦「徽微其ーー」

【清澗】セイカン　きよきたにがはのながれ。劉峻文「酌二ーー之寒流一」‖清溪。

【清鑒】セイカン　○きよく明かに觀わける。陰書、高柔傳「稱二柔有二ーー一、所レ斷文事、必先以レ情呈レ柔而後出レ之」○已の詩文書畫を人に示すに某先生ーーと書く。

【清規】セイキ　僧佛家の規約。傳燈錄「百丈山懷海禪師創二立ーー一、禪門至レ今遵レ之」

【清暉】セイキ　きよき日のひかり。謝靈運詩「昏旦變二氣候一、山水含二ーー一」

【清輝】セイキ　前條に同じ。

【清輝】セイキ　きよきひかり。杜甫詩「故園松桂發、萬里共二ーー一」

【清徽】セイキ　きよらかにしてけだかし。晉書、殷浩傳論「ーー雅量、衆疑攸レ歸」‖清操。

【清琴】セイキン　きよらかなる音のこと。魏文帝詩「有レ客從二南來一、爲レ我彈二ーー一」

【清狂】セイキャウ　心清くして狂者に似たる者。漢書、武五子傳「ーー不悳」陳瀟詩「詩酒ーー二十年」

【清鏡】セイキャウ　きよきかがみ。陳遵詩「每レ臨二ーー一笑二頭顱一」

【清謇】セイケン　きよきひびき。嵇康、琴賦「澹ーー以赴會、何絃歌之綢繆」

【清爽】セイサウ　きよくすみし大そらもの。謝曉詩「迴薄滯ーー一」‖清空・清霄・清昊・清旻。

【清虚】セイキョ　きよらかにしてむなしき。魏志、管寧傳「ーー足二以偉一レ古、廉二貞一レ世」

【清興】セイキョウ　きよきおもむき。杜甫詩「挂席釣川源、焉知ーー終」

【清曲】セイキョク　きよき歌のふし。謝惠連、雪賦「酌二桂酒一兮揚二ーー一」

【清苦】セイク　清廉にして貧を甘んずる。吳志、陸抗傳「ーー自立」

【清癯】セイク　きよらかにやせて山林の氣ある體。劉子翬、梅花詩「玉

骨納雲間大仙、天敕三飛雲佳二一一』清瘦。
【清化】ｾｲｶ 清く明かなる教化。李密、陳情表「遂蒙聖朝、沐浴ー一」
【沐浴清化】ﾓｸﾖｸｾｲｶ 清明なる政化の恩澤を蒙むる。晉書、李密傳「自ー二聖朝ー一」
【清華】ｾｲｶ ○貴き家がら。北史、李諤傳「以二才幹ー一、望ー二清華ー一』淳風。清貴。○清くはなやか。晉書、左貴嬪傳「言及二文義ー一、詞旨ー一」○図書、國家の次に位し、大臣になり得る家柄。
【清快】ｾｲｶｲ さっぱりとこころよし。
【清紙】ｾｲｼ 美しくよきをしへの後漢書、趙壹傳「親旅ー一」
【清光】ｾｲｺｳ ○貴人の清らかなる風采。後漢書、馬援傳「英主能明ー二臣下ー一」○月の清き光。李白詩「明月有ー二清輝ー一」
【清暉】ｾｲｷ きよらかなりとして威し。後漢書、仲長統傳「秩ー二千石ー一、具ー二其志ー一」
【清晨】ｾｲｼﾝ 靜かにきよくとはりてかまびすし。西陽雜俎「負金者盛ー一、甚ー二喧ー一」
【清玩】ｾｲｶﾝ みやびやかなる玩品。翰墨志「資ー二其有ー一以爲ー一ー一」
【清貴】ｾｲｷ 侍從の官。齊書、張欣泰傳「當ー二處ー一ー一」
【清憲】ｾｲｹﾝ きよきたらひ。又、清く手
たあらふ。潘脽詩「拭ー二衣誡ー一ー一」』清瘦。
【清化】ｾｲｶ 清く明かなる教化。李密、陳情表「遂ー二聖朝ー一、沐ー二浴清化ー一」
【沐浴清化】ﾓｸﾖｸｾｲｶ 清明なる政化の恩澤を蒙むる。晉書、李密傳「自ー二聖朝ー一」
【清華】ｾｲｶ ○貴き家がら。北史、李諤傳「以二才幹ー一、望ー二清華ー一』淳風。清貴。○清くはなやか。晉書、左貴嬪傳「言及二文義ー一、詞旨ー一」○図書、國家の次に位し、大臣になり得る家柄。
【清快】ｾｲｶｲ さっぱりとこころよし。
【清紙】ｾｲｼ 美しくよきをしへの後漢書、趙壹傳「親旅ー一」
【清光】ｾｲｺｳ ○貴人の清らかなる風采。後漢書、馬援傳「英主能明ー二臣下ー一」○月の清き光。李白詩「明月有ー二清輝ー一」
【清暉】ｾｲｷ きよらかなりとして威し。後漢書、仲長統傳「秩ー二千石ー一、具ー二其志ー一」
【清晨】ｾｲｼﾝ 靜かにきよくとはりてかまびすし。西陽雜俎「負金者盛ー一、甚ー二喧ー一」
【清玩】ｾｲｶﾝ みやびやかなる玩品。翰墨志「資ー二其有ー一以爲ー一ー一」
【清貴】ｾｲｷ 侍從の官。齊書、張欣泰傳「當ー二處ー一ー一」
【清憲】ｾｲｹﾝ きよきたらひ。又、清く手
史、王暢傳「子良愛ー二其ー一ー一」
【清公】ｾｲｺｳ 清廉にして公平。魏志、毛玠傳「少爲ー二縣東ー一ー一稱」
【清潤】ｾｲｼﾞｭﾝ 清くしてはるかに遠し。舞賦「遠ー二浮曦之清氣ー一ー一之明心」張九齡詩「ー一江城月、流光澹ー二庭樹ー一』明遠。
【清曉】ｾｲｷｮｳ きよらかなるあかつき。宣和畫譜「僧巨然善畫ー二山水ー一、今御府藏ー一ー一」
【清教徒】ｾｲｷｮｳﾄ 四居十五百五十八年に起りし英吉利の新教徒。
【清月】ｾｲｹﾞﾂ すめろつき。王維詩「ー一個將ー一」
【清潔】ｾｲｹﾂ いきぎよし。淨書、許荊傳「ー一自守、清不ー一改ー一」
【清潔】ｾｲｹﾂ きよくしづかの侍從。現賦「加ー二清潔之際ー一、含ー二沖虛之ー一ー一」
【清閑】ｾｲｶﾝ けだかきことば。晉書、樂廣傳「廣善ー一ー一、而不ー一長ー二手筆ー一」』清談。
【清経】ｾｲｹｲ 清らかなる音の琴、絃は琴の絲。陳子昂、山亭宴集序「奏ー一ー一」
【清源】ｾｲｹﾞﾝ きよきみなもと。吳均詩「濟水有ー一ー一、桂樹多ー二芳枝ー一」
【清厳】ｾｲｹﾞﾝ 廉潔にしてきびし。魏志、王基傳「出爲ー二安豐太守ー一、爲ー一政ー一、有ー二威惠ー一」
【清顯】ｾｲｹﾝ きよく、あらはれる。馬志、衛瓘傳「歷ー二職ー一ー一」』清貴。
【清悟】ｾｲｺﾞ きよらかにしてさとし。北
史、王暢傳「子良愛ー二其ー一ー一」
【清公】ｾｲｺｳ 清廉にして公平。魏志、毛玠傳「少爲ー二縣東ー一ー一稱」
【清潤】ｾｲｼﾞｭﾝ 清くしてはるかに遠し。舞賦「遠ー二浮曦之清氣ー一ー一之明心」張九齡詩「ー一江城月、流光澹ー二庭樹ー一』明遠。
【清曉】ｾｲｷｮｳ きよらかなるあかつき。宣和畫譜「僧巨然善畫ー二山水ー一、今御府藏ー一ー一」
【清教徒】ｾｲｷｮｳﾄ 四居十五百五十八年に起りし英吉利の新教徒。
【清月】ｾｲｹﾞﾂ すめろつき。王維詩「ー一個將ー一」
【清潔】ｾｲｹﾂ いきぎよし。淨書、許荊傳「ー一自守、清不ー一改ー一」
【清潔】ｾｲｹﾂ きよくしづかの侍從。現賦「加ー二清潔之際ー一、含ー二沖虛之ー一ー一」
【清閑】ｾｲｶﾝ けだかきことば。晉書、樂廣傳「廣善ー一ー一、而不ー一長ー二手筆ー一」』清談。
【清経】ｾｲｹｲ 清らかなる音の琴、絃は琴の絲。陳子昂、山亭宴集序「奏ー一ー一」
【清源】ｾｲｹﾞﾝ きよきみなもと。吳均詩「濟水有ー一ー一、桂樹多ー二芳枝ー一」
【清厳】ｾｲｹﾞﾝ 廉潔にしてきびし。魏志、王基傳「出爲ー二安豐太守ー一、爲ー一政ー一、有ー二威惠ー一」
【清顯】ｾｲｹﾝ きよく、あらはれる。馬志、衛瓘傳「歷ー二職ー一ー一」』清貴。
【清悟】ｾｲｺﾞ きよらかにしてさとし。北
玠傳「子弟愛ー二其ー一ー一」
【清公】ｾｲｺｳ 清廉にして公平。魏志、毛玠傳「少爲ー二縣東ー一ー一稱」
【清潤】ｾｲｼﾞｭﾝ 清くしてはるかに遠し。舞賦「遠ー二浮曦之清氣ー一ー一之明心」張九齡詩「ー一江城月、流光澹ー二庭樹ー一』明遠。
【清曉】ｾｲｷｮｳ きよらかなるあかつき。宣和畫譜「僧巨然善畫ー二山水ー一、今御府藏ー一ー一」
【清教徒】ｾｲｷｮｳﾄ 四居十五百五十八年に起りし英吉利の新教徒。
【清月】ｾｲｹﾞﾂ すめろつき。王維詩「ー一個將ー一」
【清潔】ｾｲｹﾂ いきぎよし。淨書、許荊傳「ー一自守、清不ー一改ー一」
【清潔】ｾｲｹﾂ きよくしづかの侍從。現賦「加ー二清潔之際ー一、含ー二沖虛之ー一ー一」
【清閑】ｾｲｶﾝ けだかきことば。晉書、樂廣傳「廣善ー一ー一、而不ー一長ー二手筆ー一」』清談。
【清経】ｾｲｹｲ 清らかなる音の琴、絃は琴の絲。陳子昂、山亭宴集序「奏ー一ー一」
【清源】ｾｲｹﾞﾝ きよきみなもと。吳均詩「濟水有ー一ー一、桂樹多ー二芳枝ー一」
【清厳】ｾｲｹﾞﾝ 廉潔にしてきびし。魏志、王基傳「出爲ー二安豐太守ー一、爲ー一政ー一、有ー二威惠ー一」
【清顯】ｾｲｹﾝ きよく、あらはれる。馬志、衛瓘傳「歷ー二職ー一ー一」』清貴。
【清悟】ｾｲｺﾞ きよらかにしてさとし。北
史、王暢傳「子良

旦。

【清蕤】セイ　きよらかにしげる。陳希烈、苦竹徑詩「山前無數碧琅玕、一徑一五月寒」

【清新】セイシン　きよくあたらし。

【清愼】セイシン　潔白にしてつつしむ。北史、牛弘傳「鑒賞機悟、一一絶倫」

【清愼勤】セイシンキン　清廉・謹愼・勤勉の三者は官吏の守るべき道。呂本中、官箴「當官之法、惟有三事、曰清、曰愼、曰勤」

【清澈】セイテツ　きよく明か。晉書、孫綽傳「外祖庾亮曰、此兒神明一一、志氣真立、非常童也」

【清浄】セイジョウ　すみて深きみさは。梁簡文帝詩「欲レ知二情外物一、伊洛有二一一」

【清尚】セイショウ　きよらかにけだかし。晉書、李重傳「貝二一一見レ稱」‖清高。

【清商】セイショウ　○清くすめる湖の音。七啓「動二朱弦一發二一一」○清く涼しき風。潘岳、悼亡詩「一一應レ秋至」

【清唱】セイショウ　すみたる聲にてうたふ。陸機詩「名謳激二一一一、絲人繕二清歌一」

【清浄】セイジョウ　○きよくしてけがれなし。○よごれのないこと、邪念私心なし。

【清浄寂滅】セイジョウジャクメツ　清浄無爲の教と寂滅爲樂の教と。老莊の道家の教と、佛教と。（韓愈、原道）

【清賞】セイショウ　よみしほめる。蘇軾詩「自レ昔慳二一一、今玆得二縱探一」

【清酌】セイシャク　○きよらかなるさかもり。○神にささげる酒。宗廟の祭に酒を稱して一一といふ。曲禮「凡祭二宗廟一之禮、酒曰二一一一」

【清酒】セイシュ　すみたるさけ。周禮、天官「辨二三酒之物一、一曰事酒、二曰昔酒、三曰一一」詩經「一一百壺」‖澄酒。

【清揚】セイヨウ　きよらかにしづか。後漢書、陳紀傳「訟者日減、郡中一一」

【清純】セイジュン　心きよくまじりけなし。晉書、荀顗傳「顗一一體レ道」

【清澄】セイチョウ　きよくあつし。何遜詩「所在皎二一一」

【清醒】セイセイ　まじりけなくあつし。楚辭「屈原漁父、舉世皆濁、我獨一一」

【清書】セイショ　きよがき。‖淨書。

【清洌】セイレツ　水きよし。晉親遊詩「亭亭映二一一」

【清水】セイスイ　○清くすめる水。漢書、韓安國傳「一一明鏡、不レ可二以レ形逃一」○㊀しみづ、きよきわき水。‖清泉。

【清正】セイセイ　きよくしてただし。淮南子「水定則一一、動則失レ平」

【清世】セイセイ　よく治まれる世。唐書、李源傳「抱二此眞節一、棄二于一一一」‖清時・明時・治世。

【清清】セイセイ　きよらかなる貌。風賦「一一冷冷、愈レ病析レ酲」

【清靖】セイセイ　安らけく治まる。北史、賈愼傳「在レ州五載、一一寡レ事、爲二吏人所一レ安」‖清寧。

【清靜】セイセイ　きよくしづか。史、老子傳「無爲自化、一一自正」

【清靜庵】セイセイアン　庵の名。宋史、皇甫坦傳「召問二長生久視之術一、帝歎服、書二清靜二字一以名二其庵一」

【清靜】セイセイ　そらがすみわたって晴れる。英僊威詩「更約秋風一一日」‖快晴。

【清沼】セイショウ　水すめるぬま。晉書、南燕載記「前二後臨一臨二一一一」‖淨沼。

【清潤】セイジュン　きよくしてうるはし。晉書、慕容皝載記「天姿一一」‖清美。

【清晴】セイセイ　すみたるそら。揚雄、甘泉賦「陛二一一一一而載二雲旗一兮」‖清空。

【清切】セイセツ　○きはめてきよし。杜甫詩「線雲一一歌塵上」○清雲にして切近。謝朓文「一一藩屏、寂寞蒿萊」

【清涼】セイリョウ　清めすずし。後漢書、劉虞傳「吾被二重恩一、未レ能一二一一國恥一」

【清旱】セイカン　○すめるいづみ。韓愈、送二李愿二序「坐二茂樹一以終レ日、溫二一一以自潔」○すずりの異名。

【清淺】セイセン　すみてあさし。謝靈運詩「揚澤泛二沈深一、菰蒲冒二一一一」

【清穆】セイボク　きよくやはらか。蘇軾詩「禪老語一一」

【清聽】セイチョウ　清くして十分に足る。北史、李德林傳「博學多才、詞藻一一」

【清瑩】セイエイ　潔白にしてかざりけなし。荊涼錄「一一疎朴、不レ好二華競一」

【清楚】セイソ　きれいにさっぱりとする、整は齪。白居易詩「一一看二諸非一」

【清瘦】セイソウ　○からだがやせてすらりとしてゐる。杜甫、天狗賦「性剛腸面一一」‖清癯。○山がさっぱりとやせて見える。韓愈詩、南山道レ冬轉一一」

【清率】セイソツ　きよくしてすがる。南史、齊衡陽王道度傳「居レ身一一」‖清廉率直。

【清遶】セイジョウ　○きよらかなる酒だるこ。きよき酒。酒は觴。騷、賈生詩「漏盡三徑曉、獨對一一一」

【清泰】セイタイ　事無く安らか。晉書、孫楚傳「自レ玆以降、九野一一」‖清寧。

【清道】セイドウ　○天子の出行に先だちて道路を清掃する。司馬相如、上林賦「且夫一一而後行」○轉じて天子の行幸のさきばらひをいふ。漢書、西吉傳「出逢一一一」‖前驅。

【清蕩】セイトウ　清平に同じ、蕩は平。後漢書、和帝紀「萬里一一」

【清卓】セイタク　きよくしてすぐれる。法苑珠林「幼懷二雅亮一一不レ羣」

【清濁】セイダク　○すむと、にごると。轉じて世の治亂又は人の善惡などにいふ。○清音と濁音と。

【清旦】セイタン　きよきあさ。列子「齊人有二

欲ㇾ金者八ー一衣冠、而之ㇾ市」‖清晨、清曉。

【清旦】セイタン　きよくおちつく。王勃文「以ニー一而成ニ淑ㇾ風俗」

【清滿】セイマン　すめるはやせ。陸機詩「清風二飛颺一、皎月ニー一」

【清晨】セイシン　心きよくあはし。殉仙傳「清朝ニー一、不ㇾ爲ニ見焉一」

【清談】セイダン　○俗を脫したるはなし。後漢、鄭太傳「ー一玄論、時ㇾ稱吹ㇾ生」○晉人の老莊易などを談ずるをいふ。‖清言。

【清冷】セイレイ　水のきよきいけ。夏侯湛賦「陽ニー一以清暉、翻二高翔於ニ清冷一」

【清一】セイイツ　きよくはれたるひる。王維詩「且時陽和節、ー一了」は決定が濟む。服部‖清明。

【清淨】セイジョウ　きよくすむ。‖清潔、清淸。

【清直】セイチョク　いさぎよく正し。晉書、郭奕傳「ー一有ニ風檢一、立德不ㇾ倦」

【清定】セイテイ　世が靜く治まる。後漢書、明帝紀、詔「今海內ー一、萬里一統」

【清貞】セイテイ　心がきよくただし。晉書、王連傳「ー一簡貴、不ㇾ減ニ祖父一、但風操殊不ㇾ及耳」同書、阮修傳「ー一守ㇾ道、抗ニ志榮門一」

【清淨】セイジョウ　きよくたたへる。王褒之、井賦「洗ニ煩惱一以ー一、湛ニ冷朗一以寥廓」‖澄淨。

【清望】セイボウ　清廉にして人望ある者。晉書、楊濟傳「帝重ニ兵官一、多授ニ貴戚ー一」

【清白】セイハク　いさぎよし。後漢書、楊震傳「使ニ後世稱爲ニー一吏子孫一」高士傳「程行ー一」‖潔白、清廉。

【清遠】セイエン　きよくはるか。沈約文「清晨淸澤、道風ー一」‖清遠。

【清拔】セイバツ　きよくひいでる。梁書、文學傳「吳均文體ー一、有ニ古氣一、好事者或效ㇾ之」‖清挺。

【清班】セイハン　よき位階。黃庭堅詩「昨來立ニー一國士相期許」

【清眸】セイボウ　きよくながれる。陸機詩「巢湖信ー一、廻野映ニ甘蔗一」

【清美】セイビ　きよくうるはし。司馬光、永興縣上表「由ㇾ川ー一、土地肥饒、商賈輻湊」‖清麗。

【清明】セイメイ　きよくひいでてしづかなり。北史、序傳「淸眞ー一」‖清澈。

【清貧】セイヒン　心きよくにしてまづし。陸機、豪士賦「欲ㇾ希ー一、祥鳳以臨ニ庭、視ニ彼故人ー一、掌握之儔ニ」伴嫌錢「雖可ニー一自樂ニ、不ㇾ作ニ淸富多ㇾ營」

【清敏】セイビン　心きよくさとし。南史、梁宗室推傳「少ー一、好ㇾ學ㇾ文」王隱、晉書「程咸博學洽通、文藻ー一」

【清風】セイフウ　きよくさわやかなかぜ。詩、大雅「吉甫作ㇾ頌、穆如ー一」、蘇軾、赤壁賦「ー一徐來、水波不ㇾ興」‖清颸。

【清風】セイフウ　きよくさわやかなさいはひ。耶律楚材詩「休思ニ雅頌ニ三章ー一」

【清芬】セイフン　きよくかをり。轉じて清く香はしき德行。文賦「昧ニ世德之ー一」‖清香、清馥。

【清氣】セイキ　きよくさわやかなる氣。江淹詩「ー一四ー一」

【清平】セイヘイ　○きよくさわやかに治まる。‖清爽。○きよくさわやかに治める。庾信文「有ㇾ一ニー一天下ー一之心」

【清楚】セイソ　やうすが清くしてけだかし、非俗清楚、宋元文「ー一清深、容顏儒者」

【清幽】セイユウ　○四の文王のたまや、清は清淨。左、桓二「ー一茅屋」○文王の德を美めたる詩句、詩經に出づ。

【清颯】セイソウ　きよくさわやかなかぜ。成公綏、嘯賦「ー一振ニ乎海水一」

【清眸】セイボウ　すみたるひとみ。張衡、七辨「齒耀ニ巧笑一、ー一流盼」‖明眸、清目。

【清穆】セイボク　○きよくさわやかにして和らぐ。晉書、王濛傳「眾可令ニ淸潤混ニ流、觀ニー一之風一」○人の健康がすぐれる、書簡の用語。

【清猛】セイモウ　心よくしてたけし。後漢書、皇甫規傳「兗州刺史章領之ー一」

【清味】セイミ　よきあぢ。又、さっぱりしたるおもむき。李塤詩「可ㇾ憐ー一屬ニ儉家一」

【清名】セイメイ　心の清廉なるきこえ。晉書、何關王順傳「少有二一一一、輕レ財愛レ士」‖清譽。

【清明】セイメイ　○きよくあきらか。禮記「一一在レ躬、志氣如レ神」○清く明かに治まる。聖賢臺神錄「海內一一」○二十四氣の一、春分の次の氣節。四月五日頃。鮑劉樂事「一一前兩日、謂二之寒食一」

【清明風】セイメイフウ　春分の後に吹く東南の風。史、律書「——居二東南一」‖清風。

【清風】セイフウ　すみたる風。陰鏗賦「聊遣二蓬子一一」

【清門】セイモン　寒素なる家がら。杜甫詩「勝宗祖武之子孫、于レ今爲レ庶爲二一一一」‖寒門。

【清夜】セイヤ　よく晴れたる夜。韓文公詩「一一延二淸賓一、明燭愛二高光一」‖清宵。

【清野】セイヤ　野の作物又は家屋などを拂ひ除け、攻め來る敵をして糧食宿舍の便を得しめざる義。何承天、安邊論「陳平一一以後、其來」

【清揚】セイヨウ　眉上廣くして眼清し。また揚は眉の上下をもすべていふ。詩、鄭風「有二美一人一一一婉兮」

【清約】セイヤク　きよくつづまやか。宋書、東篠之傳「治レ身一一、見所二貪慕一、一無レ所レ愛」

【清涼】セイリョウ　きよきせ。孫楚、蓮花賦「有二自然之靈氣一、晉二蠻溟之一一一」

‖清淵。

【清輝】セイキ　きよらかなる音。朱慕詩「天風發二一一一、山月度二寒光一」

【清朗】セイロウ　きよくほがらか。晉書、潘岳傳「徽猷新晴、六合一一」

【清醥】セイセイ　きよくすみし酒。西京雜記「一一甘風、紺宝飯啓」

【清陰】セイイン　きよらかなるながめ。楊萬里詩「八月蘆二雁紫一一一裏濁醪」

【清響】セイキョウ　清き鈴の音のする天子のみくるま。張九齡詩「一月調二琴賦、華后陪二一一一」

【清流】セイリュウ　○清き風化。晉書、杜弢傳「西州人士、得レ沐二浴子一一一」○潔白なる人のなかま。唐書、裴枏傳「初全忠依二史李振一曰、此等自謂二一一、宜下投二諸河一永爲中濁以全忠笑而許レ之」‖清渠。

【清楽】セイラク　○きよくあきらか。後漢書、劉瑜傳「一一自然、被レ褐懷レ寶」○齊のあきらかなる義。晉書、王獻傳「晉室一一、許氣雖正」

【清暑】セイショ　○きよくすずし。洪苑珠林「一一寢息、安樂無病」○五雜俎の一名。

【清暑殿】セイショデン　日内をすずしくするくすり。

【清涼殿】セイリョウデン　○漢代の宮殿の名。○圖書、天子が朝政を聽かれし御殿の名。

【清冷】セイレイ　きよらかにすずし。梁武帝、淨業賦「心一一其若レ水」玉臺賦「朝霧一一、而隈二其側一兮」

【清白】セイハク　きよし、洽は清。張協、七命「天一一而無レ疫、野曠朗而無レ塵」

【清麗】セイレイ　きよくうつくし。南史、謝朏傳「容貌一一、儀容端雅」

【清氣】セイキ　きよくすぐれたる氣。陳徐陵賦「含二一儀之和氣一、稟二乾元之一一一」

【清歷】セイレキ　うつくしくならよ。左思、嬌女詩「小字資二紫一、口齒自一一」

【清洌】セイレツ　きよし。柳宗元、小石潭記「下見二小潭一、水尤一一」

【清癯】セイク　いさぎよし。けっぱく。史、樂書「正直一一而廉者宜レ施レ風」‖廉潔。

【清淨】セイジョウ　すめるさざなみ。謝靈運詩「白雲抱二幽石一、綠篠媚二一一一」

【清華】セイカ　きよくさえたる音樂のふし。吳兢「宮商和暢、一一清雅」

【清和】セイワ　○きよらかにして和ぐ。淺書、賈誼傳「海內之氣、一一咸理」‖清平。○陰暦の四月一日。歲時記「四月朔爲二一一一節一」轉じて四月を一一月といふ。○のどやか。謝朓詩「麥秋始一一」○春の時候がのどかでおだやか。謝靈運詩「首夏猶一一」

【清話】セイワ　俗をはなれたるきよきはなし。李夢詩「見レ君勝二服藥一、一一病能除」

【淨】セイ　ジャウ　㊥

○いさぎよし（潔）○きよし（無垢）けがれなし「潔一」「明一」○きよくす「一身」○邪惡の念なくして潔白なり。○演劇の脚色の一、粉墨を以て面を塗りて扮演する者、俗に大花面といふ。○清一は心清くさっぱりとして煩しからず「六根清一」

【淨友】ジャウユウ　衛公の異稱（山堂肆考）

【淨域】ジャウイキ　○清き場所、彌陀の淨土。南史、庾詵傳「上行先生」生二個院一一一矣」‖淨土・淨界。○寺院。

【淨院】ジャウイン　てら。姚合詩「松書餘律手餘紙、一一共レ老」‖禪院・寺院。

【淨戒】ジャウカイ　ほとけの戒法。五戒・十戒など。白居易詩「八關一一齋銷日、一曲狂歌醉送春」

【淨界】ジャウカイ　○淨土に同じ。宋鏡文命、大愛敬寺銘「一一無レ疆、金地永貞」○寺院。又墓地。

【淨掃】ジャウサウ　きよくぬぐふ。楊萬里詩「一一一白蘚二掃二黃塵一」‖淨拭。

【淨几】ジャウキ　きよき机。蘇軾詩「細雖一一讀二文史一、落筆端要似二新詩一」

【淨巾】ジャウキン　清淨なる頭巾、僧のつづきん。陳陶詩「山泉落二一一一」

【淨宮】ジヤウキユウ てら。梁簡文帝詩「慈波流ニ一ニ」‖梵宮。
【淨空】ジヤウクウ きよきそら。劉孝威詩「平雲斷ニ高峀ニ、長河隔ニ一ニ」
【淨教】ジヤウケウ 清淨なるをしへの義、佛教をいふ。皇甫曾詩「一一傳ニ荊吳ニ」
【淨財】ジヤウザイ 慈善のために出す義捐金。又寺への寄附金。
【淨掃】ジヤウサウ きよくはらふ。王昌齡詩「一一陰山一掃ニ胡拔ニ」
【淨神】ジヤウシン こころをいきよくす。春秋繁露「君子淨ニ志以一レ一」
【淨寫】ジヤウシヤ きれいに書きうつす。
【淨書】ジヤウシヨ きよがき。‖清書。
【淨色】ジヤウシキ 清き色。張籍詩「一一在ニ霜枝ニ」
【淨植】ジヤウシヨク きよらかにたつ。周敦頤愛蓮說「不レ蔓不レ支、亭亭一一」
【淨水】スヰキ 手あらひみづ。
【淨沼】ジヤウセウ 水のすめるいけ。劉禹錫詩「踈拔ニ一一草害散」
【淨洗】ジヤウセン きよくあらふ。杜甫、洗兵馬詩「安得壯士挽ニ天河ニ一ニ甲兵ニ常不レ用」‖洗淨。
【淨滌】ジヤウデキ きよめすゝぐ。孟郊詩「一一一掬碧、遠消千慮塵」
【淨掃】ジヤウサウ きよらかなるこしかけ。謝朓詩「一一捜ニ涼風、危欄入ニ醉筵」
【淨地】ジヤウチ 淨土に同じ。
【淨土】ジヤウド 圖三毒五濁の業なき清淨なる國土。人間界を穢土といふの對。大藏法數「佛土名ニ一一、常清淨、自然無ニ一切雜穢ニ」‖極樂淨土・淨界・淨域・佛土。
【淨土眞宗】ジヤウドシンシウ 眞宗の別稱、淨土宗より分派したるが故。
【淨土宗】ジヤウドシウ 圖佛教の一派、普賢を以て初祖とす、南無阿彌陀佛の名號を念じ、他力本願にて極樂へ往生するを主旨とす、我國にては、法然上人（源空）に始まる。
【淨土沙門】ジヤウドシヤモン 佛教の學問。劉程之文「集ニ於廬山之般若臺ニ、修ニ一一ニ」
【淨房】ジヤウバウ かはや、便所。
【淨頗黎鏡】ジヤウハリキヤウ 圖地獄の閻魔王の庭にありといふ鏡、亡者生前の所業が盡く映じ現るるといふ。
【淨編】ジヤウヘン 圖佛法によりて受ける清きさいはひ。徐陵文「大傾ニ財寶、同修ニ一一ニ」
【淨拭】ジヤウシキ きよくしてあをし。梅堯臣詩「一一如ニ拭銅ニ」
【淨淘】ジヤウタウ きよくせよ。張籍詩「一一煙霞古、寒原草木凋」
【淨琉璃】ジヤウルリ ○圖一種の美くしき世界。藥師琉璃光如來本願經、東方去レ此過ニ十恒河沙等ニ佛土一、有ニ世界一、名ニ一一ニ○圖歌曲のかたり物の稱。又特に義太夫節の稱、もと淨瑠璃姫の事蹟を作りしに始まる、故に名づく。‖淨瑠璃。
【淨語】ジヤウゴ 佛法のはなし。鄭谷詩「幾思ニ聞ニ一一、雨後對ニ禪牀ニ」‖法話。

【淵】

㊀エン ㊁エ
㊂ヱン
水 八

㊀ふち。水の深き處。㊁深し。㊂深き池。
【淵海】エンカイ 深き海。
【淵客】エンカク 深山に住む人。
【淵岸】エンガン ふちのきし。
【淵奇】エンキ 深くして奇なり。
【淵魚】エンギヨ ふちにすむうを。
【淵源】エンゲン ○水のみなもと。○物事のもとづく所。
【淵谷】エンコク ふちたに。
【淵黙】エンモク 深くしづまりて言はざること。
【淵明】エンメイ 陶潛の字。
【淵藪】エンソウ ふちとやぶ。魚鳥の住む處。
【淵泉】エンセン 深きいづみ。
【淵深】エンシン 深し。
【淵水】エンスヰ ふちみづ。
【淵雷】エンライ 深き處にとどろく雷。
【淵淵】エンエン 深きさま。
【淵博】エンハク 學問の深くして廣きこと。
【淵默】エンモク 深くしづまりて言はざること。
【淵明】エンメイ 陶潛の字。
【淵藪】エンソウ ふちとやぶ。魚鳥の住む處。
【淵泉】エンセン 深きいづみ。
【淵深】エンシン 深し。
【淵水】エンスヰ ふちみづ。
【淵雷】エンライ 深き處にとどろく雷。
【淵淵】エンエン 深きさま。
【淵博】エンハク 學問の深くして廣きこと。

【淵】

㊀エン ㊁エ
㊂ヱン
水 八

㊀ふち。水の深き處。㊁深し。㊂深き池。
【淵海】エンカイ 深き海。
【淵客】エンカク 深山に住む人。
【淵岸】エンガン ふちのきし。
【淵奇】エンキ 深くして奇なり。
【淵魚】エンギヨ ふちにすむうを。
【淵源】エンゲン ○水のみなもと。○物事のもとづく所。
【淵谷】エンコク ふちたに。
【淵黙】エンモク 深くしづまりて言はざること

「ー一全不レ動」

【淺才】セン あさはかなるちえ。高適詩「ー一豈二命二孤劍一遠萬里一」

【淺深】シン うすむらさき。歐陽修詩「深紅ー一看漸レ好、顏色不レ奈二東風吹一」

【淺灘】セン 知ること淺し、淺き見識。北史、陽固傳「棄二丘嫌智、玉納ー一」

【淺見】セン 小さかもり。宋長編「於二銷金帳中一、ー一低唱」

【淺酌】シャク こさかもり。白居易詩「玉杯ー一遇初匝、金管徐吹曲未レ終」

【淺淺】セン ○水の疾く流れる貌。楚辭、九歌「石瀨兮ー一」○少しづつ。

【淺酔】スイ 眠融詩「魚網徐徐曳、蝶屐ー一傾」

【淺鮮】セン すくなし。史、刺客傳「臣之所二以待一レ之、至ー一矣」

【淺帶】タイ おびをゆるくむすぶ。閨怨 迫らざる貌。李白文「縞衣ー一、十有五人」

【淺短】タン あさはかでおとる。蜀志、諸葛亮傳「智術ー一、遂用二猖獗一」‖淺劣。

【淺白】パク うすじろし。碧雞漫志「或紅、或淺紅、或白、或ー一」

【淺薄】セン あさくうすし。後漢書、皇后紀「時俗ー一、巧僞滋生」

【淺聞】セン 知ること少し、見聞せまし。史、儒林傳「小吏ー一、不レ能二究宜一」‖寡聞・鈔聞。

【淺緑】セン うすはなだいろ。あさぎ。李商隱詩「蜀國ー一松溪水」

【淺謀】ボウ あさはかなるはかりごと。左傳「深思而ー一」

【淺毛】モウ うすげ。管子、注「ー一之獸、虎豹之屬」

【淺海】カイ あさせの儒。玄長詩「ー一寒魚少」

【淺略】リャク あさくしてはぶく。書經正義序「文義皆ー一」

【淺慮】リョ あさはかなるかんがへ。

【淺緑】リョク あさみどり。顧況深詩「新枝含ニー一」

【淺知】チ 智あさくしておとる。韋應物詩「ー一見二推許一、恐爲二識者尤一」‖淺陋・淺短・淺海。

【淺陋】ロウ あさくいやし、陋は劣。漢書、蕭伸舒傳「此臣ー一之罪也」‖淺劣。

【淙】 ソウ サウ・ソウ 江 冬

○水の流れる貌。又、其の聲。○そそぐ。

【淙琤】ソウ 水の流れる聲の玉を鳴すが如きにいふ、琮は玉聲。韓愈孟郊聯句「竹影金猿碎、泉音玉ー一」

【淙淙】ソウ 水の流れる聲。陸游詩「洗二耳石瀨一聽ニー一」‖潺湲。

【淙灑】ソウ 水の流れる貌。又、其の聲。高適歌「石泉ー一若二風雨一」

【淹】 タ 寒 又淹に作る

○波のよせたたむ貌。○還ーは沙石が水に隨ふ貌。

【涯】 唾（口部八畫）に同じ。

【淘】 タウ 豪

○よなぐ、水にてゆりよどませて善きと惡きとをよりわける。○善を取りて惡を去る「ー汰」○こめとぐ（淅米）「淨ー」○ながれる。ながす。

【淘金】キン 金をよりわける。許渾詩「洞丁多斲レ石、蜜女半ーレ」‖淘沙。

【淘宮術】キュウジュツ 人の性質及運命は其の生れたる日の干支（宮）にて定まるものとし、之をよなげて吉をとり凶を去り、運命を開くを旨とする教義。

【淘汰】タイ よなぐ、えりすぐる、淘一に洮に作る。後漢書、陳元傳「洗二汰學者之累惡一」

【淘淘】トウ 流れる貌。‖滔滔。

【淘澄】チョウ よなぎこす、惡を去りて好を取る。緩耕錄「將二石子一ー一玩弄」

【涿】 ㊀ダウ ㊁シャク 藥 沃 覺

㊀どろ（泥）○ぬかる、ぬま、ぬかるみ「ー濘」○うるほふ（潤、濕）○やはらぐ（和）○溺る「沈ー」㊁しなやか、絆に通ず。

【涿濘】ネイ ぬかる。ぬかるみ。楊載詩「長路方ー一」

【涿爾】ジ どろどろしたるかゆ。陸游詩「食有ニー一猶足レ飽」‖糜糲にシク

【涿約】ヤク しなやか（柔弱）なる貌。莊、逍遙遊「肌膚若二冰雪一、ー一若二處子一」‖綽約。

【涿】 タク 屋

○川の名、直隸省涿州にあり。○一鹿は地名、古、黄帝の都、直隸省宣化府保安州の南に在り。○したたる（流下滴）○うつ（擊）

【淡】 ㊀タン ㊁エン 感 琰 豏

㊀あはし、うすし（薄）さっぱりする。濃の對。○水の滿つる貌。○薄き味、粗食。○心がさっぱりして名譽や利慾などの念が薄い「ー泊」「恬ー」○まみづ「ー水」鹹の反對。㊁澹ータンは風に隨ふ貌。又、水のひろがり

うごく貌。○——ン は安らかなる流の平かに滿つる貌。

同訓異語 淡・薄・薄・涼・漓・淺・倹の別は薄（艸部十四畫）の條を見よ。

【淡蕩】タンタウ うすきかすみ。陸游詩「——輕颸入二夏初一」

【淡長】タンチャウ うすぐも。蘇軾詩「——孤月照二梨花一」

【淡烟】タンエン うすけぶり。＝淡煙。

【薄レ淡】タンタン 觀來なる物を食ふ。茹は食ふ。皮、叔孫通傳「呂后與二陛下一、攻苦食レ淡」蹊、淡通ず。

【淡雅】タンガ あっさりと上品。晉書、牛弘傳「有二——之風一、候二淸之度一」

【淡交】タンカウ あっさりしたる交。莊、山木「君子之交淡若レ水、小人之交甘如レ醴」也、表記にも類語あり。

【淡啖】タンタン 少しづつ食ふ。經鉏堂雜志「每レ食先——三口」

【淡紅】タンコウ うすあかと。うすみどりと。李商隱詩「——萬山收」

【淡菜】タンサイ 海產の貝の一種、長さ三四寸味美なり、いがひ、にたりがひ。

【淡薄】タンハク うすげしやう、あっさりしたるよそほひ。蘇軾詩「若把二西湖一比二西子一、——濃抹總相宜」

【淡粧】タンサウ さっぱりとして慾なき貌。曾鞏詩「——非二外樂一、恬然忘二世喧一」＝淡如。

【淡然】タンゼン 少しのうれへ。杜牧詩「點滴從二空夢一、深疑是——」

【淡粥】タンシュク うすきかゆ。蘇軾詩「折脚鐺中煮二——一」

【淡如】タンジョ あっさりしたる貌。儲光羲詩「何以知二君子一、交情復——」

【淡水】タンスイ まみづ、鹽分を含まざる水「——湖」

【淡水魚】タンスイギョ まみづ（淡水）即ち河・池などにすむうを。曹植文「淡水之魚、不レ入二于海一」

【淡晴】タンセイ うすくはれる。楊萬里詩「午曦初作無二氣力一、——花影才二分明一」

【淡淡】タンタン ○あっさりしたる貌。又、うすき貌。楊萬里詩「——活溜溜海水」＝淡如。○安らかなる流の平かに滿つる貌。宋玉賦「潰——而並入」

【淡竹】タンチク はちく。（筍の條を見よ）「——對二苦竹一爲レ文」

【淡漠】タンバク あはきと、こきと。＝淡淡。

【淡泊】タンパク あっさり、色又は味。又心などのさっぱりしてゐる義。＝澹泊。

【淡淡】タンタン 慾少く靜かなる貌。恬靜。文子「非二——一、無二以明一レ德」＝淡泊。

【淡巴菰】タンパコ たばこ、蠻語の音譯。＝淡婆姑・烟草。

【淡婆姑】タンバコ 前條に同じ。

【淡碧】タンペキ うすあを。陸游詩「霧收山——一、雲淡日微紅」

【淡墨】タンボク うすずみ。孔武仲詩「敗壺——位二拜塵一」

【淡味】タンミ あっさりしたるあぢ、かるき味。厚味の對。

【淡如レ水】タンジョノミヅ 君子の心のさっぱりしたる喩。淡交參看。

【添】

（一）テン　（二）テン　鹽　豏

○そふ、ます（益）つけ加へる。○味を加へます爲めに添へて食ふもの、酒のさかなおかず。○國そふ、夫となり又は妻となる、つれそふ、配する。

同訓異語 添・副・貳・倍・沿○添は益なり、少しづつ增し加ふるなり。○副はかけがへに添ふるなり、ひかへ、副使・副將・副書などの類。○貳は副に同じ、太子を儲貳といふは、君のかけがへなり。○倍は陪（より）そふ義「沙上鳧雛倍レ母眠」また「倍レ花國レ柳過二前川一」の如し。○沿はつきしたがひてゆく義、書經の「沿二于江海一」の註に「順レ流而下、曰レ沿」とあり。

【添加】テンカ つけくはへる、つけたす。＝添附・加添。

【添換】テンクワン そへると、かへると。賈氏談錄「讀二破萬文一、一無二——一」

【添削】テンサク 文字をそへ又けづりて改む。法華文句「余二十七於二金陵一聽受、六十九於二圖丘一——」＝添刪

【添寫】テンシャ 前條に同じ、寫は改易。

【添素】テンソ そへじろ。又は物にそへて他人の處へやるてがみ。

【添增】テンゾウ ＝しそへる。儲嗣宗詩「日暮荒城倚二陂藻一、江南春思倍——」

【添竈】テンソウ そへつづく。（竈笵七條）條眞之人探二新安一、故——不レ絕」

【添丁】テンテイ ○我子を卑下していふ、賦役の人夫に加ふる義、唐の制、男子二十歲にして役に服す、故にいふ。唐書、盧全傳「全生レ子、名曰二——一、欲三爲レ國持二役也一」○轉じて男子を生む義。

【添附】テンフ 添加に同じ。

【渕】

テン　鹽

○けがれ、よごれ（垢濁）○しづむ（沒）

【渕沒】テンボツ あかつきにごる。莊嶽、逍遙「切——之流俗」註「垢濁也」

【淀】

テン　デン　霰　又澱に作る

○あさきみづ（淺水）よど、水淺くして流が淵の如くにゆるし。○國言語がすらすらと出ぬ、口ごもる。

【凍】

トウ　東　送　凍とは別

○にはかあめ（暴雨）ゆふだち。○瀧——は沾漬ウルホフの貌。

【凍雨】トウウ にはかあめ。國雅、注「今江

東呼二夏月暴雨一爲二㶁一一

【淝】ヒ　微

○川の名、安徽省の合肥縣に發す。本、肥に作る。○一泉は源同じくして注ぐ所のことなれる泉。詩、邶風「我思二一泉一」

【淞】ショウ　（水部十七畫）の俗字。

【淵】ヒョウ　蕭

一滂は水の聲。又風の物を擊つ聲。風賦「飄忽一滂」

【涪】フウ　尤　虞

○一江は川の名、四川省に發し、嘉陵江に合す。○一陵は地名、重慶府に屬す。

【淨】ヘイ　ヒ　霽　圭

○一はおほし(衆)又しける(淺)○水の聲。○舟の行く貌。

【洴】㊀ヘイ　青　㊁ハウ　庚　俗字

㊀わたなかに晒さらして白くする。又、其の聲。㊁水の聲。

【洴澼】ヘイ　綿をさらして白くする、澼は洗。莊、逍遙遊「世世以一一絖

爲レ事」

【淙】ベツ　㊀

ひろくおほいなる水。‖渺。

【淙茫】ベウバウ　水の廣濶としたる貌。郭璞、江賦「溶レ天以一一」

【淙淙】ベウベウ　水の廣くして限りなき貌。沈約、法王寺碑「一一洪波」‖渺渺・淙茫。

【淙漫】ベウマン　水の大いにはびこる貌。左思、吳都賦「滇渤一一」‖淙淙。

【淼】オ　㊀　魚

○どろ(泥)おり(澱淳)○す(洲)こじま。○あく、伏に通ず。

【淼圖】ダヲ　泥ふさがりたまる。唐書、孟簡傳「舟有二至冬一久一一」‖淤塞。

【淤腸】ヨウ　飽くほど飲食物を下される。馬援、廣成頌「一一犒レ功」‖飫賜。

【淤泥】ディ　どろ。周敦頤、愛蓮說「出二於一一一而不レ染」蘇軾詩「一一生二蓮花一」‖泥淤。

【淤澱】ヂ　どぶどろがとどこほる。李華頌「百年一一爲二遺漬一」

【淶】ライ　灰

川の名、一名拒馬河、直隸省に在り。

【淪】リン　ロン　眞　㊁　㊂

○さざなみ(小波)○しづむ(沒)○ひきゐる(率)○混一は氣形具はりて未だ分離せざる貌。

【淪猗】リンヰ　さざなみ、猗・漪同じ。詩、魏風「河水清且一一」‖漣漪。

【淪胥】リンセイ　しづみかくれる。劉長卿詩「心鏡常虛明、時人自一一」

【淪棄】リンキ　しづみかくれてすてられる。六一詩話「其詩一一、亦可レ惜」

【淪屈】リンクツ　しづみてのびず。晉唐書、明皇紀「一一者、所司具以レ狀聞」

【淪晦】リンクワイ　しづみかくれる。

【淪鬱】リンウツ　しづみそこなはる。隋書、音樂志「漢末大風、樂章一一」

【淪喪】リンサウ　ほろぶ。書、微子「今殷其一一」

【淪火】リンクワ　ほろびうしなふ。阮籍賦「逸指棄而一一」

【淪胥】リンセイ　相率ゐてともにほろぶ、看は相。詩、大雅、抑「無一一以一」

【淪落】リンラク　しづみふさがる、おちぶれてふしあはせ。任昉文「年世遄淪、孤蹤一一」

【淪替】リンタイ　しづみおとろふ。李白詩「延引故鄉人、風義未二一一一」

【淪溺】リンデキ　しづみおぼれる、沈沒する。宋書、武帝紀「王化阻閉、三巴一一」

【淪陷】リンカン　しづみおつ。藥師文「馮箕之道一一矣」

【淪匿】リンドク　ひそみかくれる。參同契「幽潛一一、包二要妙物一」

【淪敗】リンハイ　おちぶれる。後漢書、方術傳序「以二乖詐一一一」‖淪落。

【淪喫】リンキツ　おちぶれる。謝靈運詩「一一海二許京一」

【淪墓】リンボ　おちぶれてとしよる、零落老衰する。江淹文「歎二假衰疾一收二屍一一」‖耽淪。

【淪沒】リンボツ　しづむ、おとろへる。江淹文「惜二義宗之一一」‖淪落。

【淪滅】リンメツ　しづみほろぶ。馬融賦「二一一澤淵」

【淪落】リンラク　おちぶれる。李白詩、家本紫雲山、道風未二一一」柳宗元文「今乃淵裏一一、莫レ有二逢者一」‖零落・流落。

【淅】リン　震

○水をそそぐ(沃)○ながめ。‖淋。○だらだらと滴る貌「一漓」○病名、りんびょう、しばゆばり(小便數)‖痲。○㊁さびし(寂)

【淋汗】リンカン　○あせ。新論「馬未レ驟而一一」○あせながし、薄衣にて、夏、汗をながす風呂。

【淋漓】リンリ　そそぐ。又、絶えざる貌。王褒、洞簫賦「被二一一其間一兮」

【淋漫】リンマン　羽の生えかかれる貌。海賦

「鶴子ー一」
【淋池】リン　水の流れとどいけ。王子年拾遺記「穿ニ一一一四千歩一」
【淋巴液】リンパエキ　高等動物が組織間に有する無色透明の液、淋巴管により乳糜と合して心臓に入る、其管の合合する所を淋巴腺といふ。英語の音譯。＝明治。
【淋浪】リンラウ　みだれる貌。蘇軾詩「一一身上衣、雨脚猶下字」
【淋漓】リン　したたる貌。楊億詩「圓荷滴露珠ー一」＝淋灑。
【淋灑】リンサイ　○長き貌。楚辭、哀時命「倒ー一而縱橫」○大いなる貌。揚雄、羽獵賦「ー一廓落」
【淋渫】リンセツ　水のしたたる貌。曹植賦「喟ニ玄雲之油油ー兮、聽ニ長空之ー一」
【淋漓】リンリ　したたる。盛貌。道安「雨師止ニ其ー一」
【淋灑】リンサイ　したたる。北史、齊文宣后李氏傳「流血ー一、投ニ諸平水ニ良久乃蘇」＝淋漓。

【涼】

㊀リャウ　㊁リャウ　漾　陽　涼は俗字

㊀うすし(薄)「ー徳」○すずし(薄寒)「納ー」○かなしむ。○風にあたらしむる。○州の名、今の甘肅省。○國名、東晉の時、先後して甘肅の地に分據せし者、國號をーといふ、前後北・西・南之を五ーといふ。㊁たすく(佐)○まこと(信)＝諒。圖○すずし、清らかにしてすずし「眼元ーし」○すずみ。すずむ(納涼)「タ一」
【涼意】リャウイ　すずしきけはひ、涼しき趣。孔平仲詩「獨將ニ一一作ニ流螢ニ」
【涼雨】リャウウ　すずしきこかげ。晉風、潘岳傳「冬有ニ温煖ニ夏有ニー一」
【涼陰】リャウイン　すずしきあめ。岑參詩「蒼翠ニー一、石路無ニ飛塵ニ」
【涼夏】リャウカ　すずしきなつ。黃庭堅詩「詩同ニ三友、竹軒ー一晩」
【涼蚊】リャウカ　すずしきかぜ。潘岳詩「ー一白ニ涼葉ニ、輕櫺颺ニ風吹ニ」
【涼秋】リャウシウ　すずしきあき。岑參詩「ー一八月薄關道、北風吹斷天山草」
【涼涼】リャウリャウ　うちは。金史、高汝礪傳「上所ニ御ー一無ニ踰ニ突下ニ」
【涼徳】リャウトク　うすきとく。左、莊三二「縞多ニー一」＝薄徳。菲徳。
【涼颸】リャウシ　すだれ。宋祁、秋絃怨「海風吹ニー一、掩ニ字挂ニ匡鏡ニ」
【涼風】リャウフウ　○きたかぜ。阿房「北風謂ニ之ー一」○すずしき秋風。魏、月令「孟秋之月ー一至」高啓詩「ー一起ニ江海ニ、萬樹盡秋聲、搖落豈堪ニレ別、蕭蕭空復情」
【涼棚】リャウホウ　すずみだい。開元遺事「長安富人每ニ至ニ暑伏中ニ、各於ニ林亭內ニ植ニ孟柱ニ、以ニ錦結ニ爲ニー一ニ設ニ坐具ニ召ニ名姝ニ間坐遊爲ニ避暑會ニ」
【涼涼】リャウリャウ　輕薄なる貌。孟、盡心「行何爲踽踽ー一」

【淩】

リョウ　蒸　登　と別

○はす(馳)のる(乘)○ふ(歷)木華、海賦「汎ニ海ー一山ー」○をののく、おそる(懼)

【涙】

㊀ルヰ　㊁レイ　寘

㊀なみだ、眼から出る液「淚ー」(鼻は鼻から出るなみだ)「別ー」「血ー」「感ー」「暗ー」「悲ー」○なみだを出して泣く、なく。㊁疾く流れる貌「瀏ー」戻と通ず。
【涙河】ルイカ　なみだの盛んに流れる形容。言畫、顧愷之傳「淚如ニ傾河注ニレ海ニ」蘇軾詩「ー一東注問ニ蒼旻ニ」
【涙客】ルイカク　風仙花クワセンクワの異名「三柳軒雜識」
【涙汗】ルイカン　なみだと、あせと。魏書、頁祖傳「本非ニ骨鯁ニ乃大恐怖、ー一交橫ニ」
【涙眼】ルイガン　なみだぐめるまなこ。鍾起詩「相思番若ニレ夢、ー一幾時明」
【涙管】ルイクワン　目の上部より内管を通じて鼻内に涙を送る小管。
【涙痕】ルイコン　なみだを流したるあと。李白詩「但見ー一濕、不ニレ知心恨ニレ誰」
【涙珠】ルイシュ　なみだ。白居易詩「我有ニ雙ー一、知君穿不ニレ得」
【涙竹】ルイチク　まだらの竹。鄭士元詩「入ニレ楚愁忘ニ湘ー一、泊ニレ舟應ニ自愛ニ江楓ニ」＝斑竹。
【涙下レ沾ニ襟】ルイクダリテエリヲウルホス　法は私情を以て柱ぐべからず、故に慈愛の心を以て刑を行ふ能、前出孔明の將馬謖が街亭の戰に孔明の指揮にそむきて遂に大敗せしかば、孔明も已むを得ず、之を斬りて其の罪を正し、士氣を鼓舞せし故事。蜀志、諸葛亮傳「亮爲ニ政無ニ私、馬謖素爲ニ亮所ニレ知、及ニ敗軍流ニレ涕斬ニレ之、而卹ニ其後ニ」

【淥】

ロク　リョク・ロク　沃　屋

○こす。＝漉。○こしたる水、こしたる酒。○水きよし。張衡、東京賦「ー一水湲湲」

九畫

【渥】

アク　覺

○あつし(厚)てあつし。詩、小雅「既優既ー一」○うつくしく光澤ツヤあり。○うるほふ(潤)○うるほす、水にひたす。○ー注は川の名、甘肅省に在り、漢の武帝神馬を水中より得たりとい

ふ川〔史、樂書〕

同訓異義 渥・厚・篤・敦・淳・醇・醲の別は厚（厂部七畫）の條を見よ。

【渥恩】あつきめぐみ。揚雄文「敷―一、托三權倫比與二聖賢一」

【渥洽】あつきめぐみ、うるほひ。宋玉賦「常樹二恩之―一」

【渥惠】あつきめぐみ。荀勗文「泰承二―一、庶雖二意竭一」‖厚恩。

【渥赭】○まっかなるあか土。温庭筠賦「風如二吹煙一日如二―一」○あからがほ。詩經「赫如二―一」

【渥然】赤くつやある貌。歐陽修、秋聲賦「宜其――丹者、爲二槁木一、黟然黑者、爲二星星一」槁は枯。

【渥澤】あつくうるほふ。あつきめぐみ。王僧孺文「一遇二休明一、多逢二―一」

【渥丹】あかくつやある土。詩、秦風「顏如二―一」‖其君哉」白居易詩「比顏已―一」

【渥美】○。つやありて美くし。

【渥照】てあつく日をかける。厚く顧みる。陳琳書文「天人―一、增二徐論之榮一」

【渥味】濃厚にしてうまきあぢはひ。論衡「甘香―一之物、蟲生常多」

【渥露】しげきつゆ。傅休奕詩「纖霰時琴鬢、―一沾二我裳一」

【渭】 未

○川の名、甘肅省―源縣より出づ、陝西省の大川、洛水と合し黄河に入る。○―城は咸陽。

【渭城】渭城は唐の王維の陽關三疊の詩をいふ。送別の際、必ず之を唱ふるを例とす。劉禹錫詩「舊人惟有二何戡在一、更與殷勤―一」

【渭樹江雲】遠方の友を思ふ情の切なるにいふ。杜甫、春日懷二李白一詩「渭北春天樹、江東日暮雲」‖暮雲春樹。

【渭川千畝竹】渭水の沿岸の多くの竹。史、貨殖傳「―――、其人與二千戸侯一等」

【渭濁】○。にごる。渭水は濁るが故。曹伯啓詩「涇清―一源何異、物換星移志未レ改」（一説、渭水は清む）

【渭濱】○。將帥のはたらき。太公望呂尚が渭水の濱にて魚を釣り居たりし時、文王に聘せられて將相となりし故事。傅光義詩「超超―一、落落山門名」

【渭濱漁父】渭水に釣りしみたる太公望をいふ。史、范雎傳「臣聞、昔者呂尚之遇二文王一也、身爲二漁父一而釣二於渭濱一」

【渭陽】○渭水のきた。戰國策「呂尚之遇二文王一也、身爲二漁父一而釣二於―一之濱一耳」○舅をいふ。詩、秦風「我送二舅氏一、曰至二―一」に本づく。

【游】 ㊀イウ ㊁リウ 尤 遊に通ず

㊀およぐ（泳）水に浮びゆく、およぎ。○ゆく（行）あそぶ、あそび。‖遊。○何事もせずぶらぶらと遊ぶ「―民」「―食」「―手」○物を玩びて、情に適する。論、述而「―於藝」○ほしいまま。○離宮、別墅。○優―は自適せる貌。㊁はたあし。左、桓二「盤――縲」‖旋。○水の流。漢書、項籍傳「必居二上―一」

同訓異義 游・泳・泅○游は浮び行くなり、ながれ渡りにする義「潛レ水爲レ游」の如し。○泳は水中を潜み行くなり。詩經「漢之廣矣、不可レ泳思」○泅は水上を浮行するなり。列子「人有二溺レ河而居者一、習二於水一、勇二於泅一」

【游雲驚龍】たなびくくもと、おどろくたつと。巧妙なる書の形容。晉書、王羲之傳「飄若二游雲一、矯若二驚龍一」

【游泳】水をおよぐ。又、およぎ、水練「―一術」宋林時「纖鱗―一多」

【游衍】ほしいままにあそぶ。衍は溢。詩、大雅「昊天曰旦、及レ爾―一」‖游肆・游行・游溢・遊衍。

【游夏】孔子の弟子、子游と子夏と、共に文學に長ず。

【游幸】天子の出遊。成書、貴妃楊氏傳「妃每從二―一、乘レ馬則力士授二鞭策一」

【游學】○他國に出でて學問する。又、其の人。史、荀卿傳「荀卿―一於齊一」○他國より來りて仕官を求める者。史、始皇紀「厚招二―一」

【游辯】あそびてなれたはむれる。漢史、陳洗傳「平生少レ所二―一「河東柳慵欲二與交一、拒而弗レ納」

【游閒】他國に說きて離間の策を行ふ。史、李斯傳「諸侯人來事レ秦者、大抵爲二其主一、―一於秦一耳」

【游閒公子】家富みて衣食の憂なきひまびと、即ち、富貴の家の子弟。史、貨殖傳「――、師二延劍一、連二車騎一、以爲二富貴容一」

【游艦】あそびたはむれる。傳燈錄「頓然已歩空、得二―一三昧一」

【游騎】○游撃する騎兵隊。隋書、百官志「改二舊驍騎一、曰二―一」○舊史「改二舊驍騎一、曰二―一」○舊。ふるきなじみ、交游せる故。後漢書、樊曄傳「與二光武少一―一、最爲二御史一」

【游金】○とびめぐるとり。王融詩「一一暮知レ返、行人獨未レ歸」○水金に同じ。一一類」

【游魚出聽】荼の音の妙なるに魚が浮び出て聽く。荀、勸學「伯牙鼓レ琴、六馬仰秣、瓠巴鼓レ瑟、――」

【游居有レ常】游ぶにも家に居るにも常のきまりがある。曾、弟子職

「——、形就二有德一」

【遊度】ユウド　遊び樂しむ。度は娯。漢書、匡衡傳「朱輪有二十七射之宴一」‖遊娯。

【遊軍】ユウグン　游兵の軍隊。宋書、武帝紀「以二輕騎一爲二一一一」‖遊軍。

【遊官】ユウカン　遠方に出でて官吏となる。陸機詩「一一久不レ歸、山川修且闊」‖遊宦。

【遊玩】ユウグワン　なぐさみ遊ぶ。南史、徐湛之傳「招二集文士一、盡二一一之適一」

【遊宴】ユウエン　○諸事に優游する。論、述而「依二於仁一、游二於藝一」○園歌舞音曲などの技藝。‖遊藝。

【遊徼】ユウキョウ　漢の時、鄉里をみまはりして盜賊を禁ずる官、徼は巡邏の義。陳書、一一無乃闕二職司一誰咎一」

【遊撃】ユウゲキ　○一定の任務なく、機を見て出動して敵をうつ「一一隊」○官名、漢一一將軍を置く、歷代皆之れあり。

【遊閑】ユウカン　游軍。又游兵に同じ、一解に軍事の缺を補ふ爲めの豫備の軍。左傳「車二一一四十乘」

【遊俠】ユウキョウ　交遊を好みて人の急難をたすけるをとこだて。史、汲黯傳「好レ學一一、任二氣節一、內行修絜」‖任俠。

【遊言】ユウゲン　むだなはさ、根なしごと。禮、緇衣「放大人不レ倡二一一」‖游談。

【遊魂】ユウコン　たましひが本體から離れて散じ去る。又、其のたましひ。易、繫辭「一一爲レ變」

【遊散】ユウサン　ぶらぶらとあそびたのしむ。世說「孔車騎未二仕宦一時、自稱二孔郎一、一一名山」

【遊子】ユウシ　他國に流寓せる者、たびびと。淮南、高帝紀「一一懸二故鄉一」

【遊子猶行二於殘月一】ユウシナホコウスルニザンゲツヲ　旅人が道に迷ひ、夜より晩にかけて行く。賈島、晩賦「佳人盡飾二於晨粧一、魏宮鐘動、一一、西谷雞鳴」

【遊士】ユウシ　○遊說をする人。又、他國に遊學する士の類。始皇紀「呂不韋爲レ相、對二千萬戶一、號曰二文信侯一、招二致賓客一一、欲二以幷二天下一」○遊び食ふの士。管子、一一八千人」

【遊志】ユウシ　志をほしいままにしてたのしむ。宋玉賦「願賜二不肖之軀一而別離兮、故一一乎懷中」

【遊肆】ユウシ　なまけてほしいまま。晉書、孫統傳「統不レ留二心碎務一、經レ意一一」

【遊就】ユウシュウ　善き士に就きて交る。荀、勸學「君子居必擇レ鄉、游必就レ士」‖遊就。

【遊神】ユウシン　こころをたのします。馮衍文「一一一乎經濟之林」

【遊手】ユウシュ　○手をあそばせて用ひず。儀禮、聘禮、注「受授不レ一一、慎レ之也」‖空手。○仕事をなさず、ぶらぶらと遊ぶ者、あそびにん。晉書、食貨志「鄉無二一一一、邑不レ廢レ時」

【遊食】ユウショク　○あそびて徒らに食ふ。‖浮食。○又臣たる職をおこたりて祿をはむ。荀、成相「臣下職莫二一一」

【遊說】ユウゼイ　內治外交等の策を四方の諸侯に說きまはる。戰國時代に蘇秦・張儀等競ひて之を爲す。轉じて是非利害を人人に說き廻る義。史、蘇秦傳「兄弟三人、皆一一諸侯一以顯レ名」‖遊說。

【遊道】ユウドウ　まじはり、つきあひ。史、陳丞相世家「高用金饌、一一日盛」

【遊談】ユウダン　○遊說に同じ。戰國策「是以外賓客一一之士、無下敢盡二忠于前一者上」○うきたる根なしごと。後漢書、仇覽傳「天子修二設太學一、豈但使二人一一其中一」‖游言。

【遊座】ユウザ　○うかべるちり。洞冥記「風至自拂二塵上一一」○みだらなる音樂。鼓吹序「鼓二芳風一以扇二一一一」一解、惡の煩雜なる者。芳風は正樂。

【遊女】ユウジョ　○用遊の女子。詩、周南、漢廣「漢有二一一一」○あそびめ「張衡、南都賦」‖倡婦。

【遊倩】ユウセイ　艷情をうかがひさぐる者、まはしもの。‖諜者・間諜・細作。

【遊兆】ユウチョウ　十干の丙の異稱「史、歷書」‖柔兆「爾雅」

【遊田】ユウデン　かり。田とは田の害を爲す獸を獵る義。晉經「文王不二敢盤二于一一一」‖遊田・游畋。

【遊畋】ユウデン　前條に同じ。畋は狩獵。潛夫論「文王一一、遵二養耆老一」

【遊波】ユウハ　燕ツバメの異名「本草綱目」

【遊放】ユウホウ　あそびてしまりなし。南史、謝靈運傳「在レ鄉一一、不レ異二永嘉一」

【遊泛】ユウハン　舟に浮びてあそぶ。新安記「鼓レ檝一一、彈レ筍忘レ返」

【遊服】ユウフク　平常游歷する時などの衣服。左、昭八「一一而遊レ之」

【遊兵】ユウヘイ　陣列外に在りて形勢を見て、援護する軍勢。史、彭越傳「彭越常往來、爲二漢一一一、擊レ絕二其後糧一于梁地」‖遊兵・游擊兵。

【游步】ユウホ　あそびあるく。孫綽文「一一三界之表一、悉化無窮之境一」‖遊步。

【游浚】ユウシュン　およぐと、くぐると。淮南子「一一者不レ求二沐浴一」

【游民】ユウミン　一定の職業なきたみ。禮、王制「無二一一土一、無一一」

【游揚】ユウヨウ　游說してほめ立てる。漢書、季布傳「使二僕一一一足下名於天下一」

【游移】ユウイ　天子のあそびたのしみ。孟は樂。孟、梁惠王「一一一時二諸侯一度一度はのり、てほん。

【游弋】ユウヨク　○遊獵に同じ。史、李斯傳「乃入二上林一一一戒、日一一獵」○軍艦が防備などの目的にて海上を徘徊する義に用ふ。

【遊巡】ユウジュン　巡察の兵、憲兵の類。宋書、

柳元景傳「一一退走、賊遂薄ル壘」【游楽】ユウガク あそびたのしむ。‖游豫。【游覧】ユウラン あそびて見あるく。梁簡文帝「臨二清池一以一一、観二芙蓉之麗華一」【游宴】ユウエン あそびあるく。南史、宋少文傳「凡所二一一一、皆図二之於室一」‖遊歴。【游離】ユウリ 本体からはなれて中ぶらりになる、分離して浮游する。【游魂】ユウコン ○水に游泳するたつ。洛神賦「婉若二一一一」○たての一種なる紅草の異名。游は枝葉の扶疎せる貌。‖、鄭風「隰有二一一一」‖馬逸。○形容の美婦として美ましき喩の使用例、馬皇后傳「見二外家車如二流水一、馬如二一一一一」【游泳】ユウエイ およぐ。‖およぎめぐる。世説「見所二一一「皆闕二之於室一」晋書、王献之傳「一一既畢」【游猟】ユウリョウ 游田に同じ。

【湮】

㊀イン 㐭 ㊁エン 先 エッ 屑

㊀うつもれる（埋没）しづむ（沈）○おつ（落）㊁ふさがる。ふさぐ（塞）左、昭二九「鄭一不二育一」【湮没】インボツ 湮に没、鬱は滑、氣が塞ひ結ぼれる。史、賈誼傳「已矣閩其莫二我知一、鬱一一兮将誰語」‖湮逸。【湮塞】インソク ふさがる。‖湮閉。

【湮晦】インカイ ほろびかくれる。晋書、潘岳傳「憚二大道之一一一」【湮散】インサン ほろび失せる。唐書、魏徴傳「典章一一、微奏引二補綴一、校二集経書一」【湮滅】インメツ おとろえ滅びる。劉琨傳「一一同二子嗣戸一、遂一に堙に作る。【湮沈】インチン うもれしづむ。劉得仁詩「趨レ時不二同世一、自レ古易二一一一」【湮鬱】インウツ ほろびうせる。晴湯帝文「経典散逸、篇章一一」【湮珍】インチン ほろびたえる。唐書、礼儀志「儒雅既廃、経籍一一」‖湮滅。【湮九】インキュウ うつもれやぶる。唐書、李元紘傳「堙塞一一」【湮欝】インウツ うつもれてかすかなり。趙宋文「孟子閔二堙塞一湯文周孔之業一、将二遂一一一」【湮没】インボツ しづみほろぶ。‖湮滅。【湮滅】インメツ ほろびうせる。謝恵連、祭二古冢一文「銘誌一一、姓字不レ伝」‖堙滅。【湮鬱】インウツ ふしあはせの鬱結す。「余生命之一一、皆二鳥之不レ如」‖香塞。【湮淪】インリン うもれしづむ。郷谷詩「浮華重貿作、雅正喪一一」

【淬】

エキ 陌

液一は水の流れ行く貌。

【淹】

エン 塩

雲雨の貌。雲が雨を催してむしあつき貌。詩・小雅「有一一淒淒」

【淒】

エン クァン 刪 先

淵一センケンは水のながれる貌。又、其の聲。

【温】

温（次篇）の俗字。

【漫】

カイ 佳

○一一は衆くの水の流れる貌。詩、小雅「淮水一一」‖湯湯。○又、衆き貌。‖淒淒。

【港】

㊀カウ・コウ 送 ㊁コウ 江

㊀みなと、ふなつき、ふなみち（水中行舟道）○水の分流して舟を通ずべきもの。㊁一洞ウは相通ずる貌。長笛賦「一洞坑谷」○香一一の略稱。【港澳】コウオウ みなと。澳は水のくま。宋史、河渠志「臨二大江一、慮一一以容二舟艦一」‖港灣。【港口】コウコウ みなとの出入口。‖港門。【港湾】コウワン みなと、いりうみ。‖港澳。

【湯】

㊀カッ・カチ 曷 㐭 ㊁ケツ 屑

㊀かわく、のどが乾きて水を欲する。○いそぐ、非常に欲しく思ふ「一望」○楚越の方言、水の反流する者をいふ。㊁みづが竭ッく、かる「涸一」【湯愛】カツアイ 甚だしくこのむ。陳子昂詩「一一浪華美、偏便易二雕蟲一」【湯鳥】カツ 曲筒を作り空気の力を以て水を引きよぐる器の名。後漢書「作二翻車一一、用灑二南北郊一」注「一一為二曲筒一以レ氣引レ水上也」【解レ渇】カツかわきをとめる。世説「前在二大梅林一、過レ子甘酸、可二以一一一レ」‖解レ湯。【湯仰】カツギョウ 甚だしく信仰する。法華経、薬草喩品「心懐二憍慢一、一一於師一」【湯渇】カツのどの乾ける。駱賓王、唐書、徐敬業傳「如二魚鼈投レ石、一一待二泉一」【湯面穿レ井】カツメンセイ 平生より用意せずば、其の場にのぞみ、あわてて為すも、間に合はざるに喩ふ。説苑「一一之、猶一一、臨レ難而鋳レ兵、雖二兵堅一而不レ及也」楽府「病已成而後藥レ之、猶二湯面掘レ井、闘而鋳一レ兵、不二亦晩一乎」【湯心】カツシン 水を飲みたく思ふ心のやうにて切なる欲望。盛全詩「銭輸無二非百尺、一一飲去生二廉埃一」【湯質】カツシツ 功を賞せられんことをいそぎ望む。孫楚文「一一之士、鋒鏑争レ先」

【湯者易レ爲レ飲】タウシャイヰンスイン のどのかわける者は如何なる水にても悦びて飲む、ひもじい時のまづいものの無し（孟、公孫丑）‖湯者甘レ飲。

【湯水】タウスイ 旱のために水が涸れる。‖涸湯。

【湯睡】タウスイ ねむられぬ。六一詩話、卒章云、眠二盧寒燈一夢不レ成、胡旦笑曰、乃一一漢耳」

【湯不レ飲二盜泉之水一】タウフトヲインニタウセンノスイ どかわくも盜泉といふ惡名の泉の水をのまず。困窮するも不義をなさざる喩。陸機、猛虎行「——、熱不レ息二惡木之陰一」

【湯望】タウバウ かわきて水を欲する如く甚だしくのぞむ。范成大詩「國人一一公藤色、爲二君寒一幅入二帝讖一」‖熱望。

【湯筆】タウヒツ かすりふで。丹鉛錄「一一枯無レ學也、在二書家一爲レ雖、飛白如二今葉書一一、俗所レ謂沙筆也」

【湯病】タウビヤウ 消渇のやまひ。黃庭堅詩「相如一一應レ須レ此、莫下與二文君一墾中遠山上」

【湯問】タウモン のどかわきてもだゆ。北史、魏咸陽王禧傳「一一垂レ死」

【湯痢】タウリ のどかわきて腹下る病。梁書、何點傳「點少時嘗患二一一一」

【減】カン ゲン 俗字

○へる、數が少くなる。へらす（損）增の對。○かろし（輕）すくなし（少）うすし。○へり（損耗）○ひく、數を引き去る。加の對。又其の算法。ひきざん「加一乘除」

同訓異語 ヘル・減・耗 ○減は加または增の反、數の少くなる義。○耗は虧なり、息の反、欠の生ずる義、衰耗・消耗・耗損と連用す。

【減價】ゲンカ ねだんを低くす。又、評判をおとす。晉書、張載傳論「二陸入レ洛、三張一レ一」

【減降】ゲンカウ へらしくだす、へらして輕くする。

【減耗】ゲンマウ へる。へらす。唐書、百官志「農衆不レ勤、倉庫一一」

【減卻】ゲンキヤク へらす。杜甫詩「一片花飛一二一春」

【減刑】ゲンケイ 相當の罰より輕くする、罪を輕くする。‖減等・減輕。

【減輕】ゲンケイ 刑罰・租稅などを輕くする。‖輕減。

【減免】ゲンメン へらしけづる。‖減減・減削。

【減殺】ゲンサイ へらしそぐ。又、へる。

【減罪】ゲンザイ つみを輕くす。後漢書、光武紀「其殺二奴婢一者、不レ得一一」

【減黜】ゲンチユツ ことさらにかまどの數をへらして竈に虛弱を示すはかりごと、戰國の時、齊の孫臏の魏の將龐消をあざむきし策（史記）後漢書、慶鄰傳「孫臏一一而君增レ之」

【減削】ゲンサク へらしけづる。釋名「消、削也、日二一一一也」‖削減・減剋。

【減收】ゲンシウ みいりがへる。‖收入減少。

【減食】ゲンジキ たべる量を少くする。

【減省】ゲンセイ へらしはぶく。漢書、元帝紀「有下可二減除一一以便二萬姓一者上、條奏、毋レ有二所レ諱一」‖減損省略。

【減稅】ゲンゼイ みつぎをへらして輕くす。唐書、食貨志「貞元八年、以二水災一一一」‖減租。

【減少】ゲンセウ へりて少し。後漢書、明帝紀「蝗田一一」‖減損。

【減品】ゲンピン 食物の品數をへらす。晉書、成帝紀「詔二太官一一一」

【減租】ゲンソ 減稅に同じ。

【減息】ゲンソク へりやむ。宋書、庾悅傳「江右區區、戶不レ盈二數十萬一、地不レ踰二數千里一、而統司鱗次、未レ獲一一一」

【減損】ゲンソン へる。へらす。易、損卦、疏「損者、一一之名」‖毀損・減少。

【減退】ゲンタイ へりて少くなる。南史、王規傳「以二門宗貴盛一、恆愚一一一」

【減黜】ゲンチユツ 官位を下げおとす。南史、諸侯王表「衆食不レ飲レ酒、一一其官一」‖降黜。

【減等】ゲントウ 等級をへらして輕くす。唐書、武宗紀「罪遞二減一等一」或釋放」

【減法】ゲンポウ ひきざん。‖減算。

【減半】ゲンパン 半分へる。南史、何點傳「貶二子三年一、衣帶一一」

【減筆】ゲンヒツ 字畫をはぶく。‖省筆・略字。

【減俸】ゲンポウ 俸給のたかをへらす。增俸の反對。‖減給。

【渰】キフ 俗

○水の疾き聲。‖湧。○泪一は急に轉ずる貌。

【渫】キフ 俗 呪

○あつもののしる（肉汁・藥汁）

【渠】㊀キョ 慣 ㊁キョ 慣 國

㊀みぞ（溝）「溝一」○大いなり（巨）○かしら（魁）「一魁」「一帥」○一一は家屋が深くして廣き貌。○ひたす（漸）○かれ（彼）○藥草の名。○軒一は笑ふ貌。○芙一は荷の㊁なに、いづくんぞ、なんぞ（豈）何一寧一と連用するも同じ。史、陸賈傳「何一不レ若漢」同書、張儀傳「蘇君在、儀寧一能乎」‖距巨。

同訓異語 ニ渠・何・曷・胡・豈・那・庸・奚・距・巨の別は何（人部五畫）の條を見よ。

【渠帥】キョスイ みぞと。唐書、百官志「都水監使者二人、掌二川澤津梁一一陂池之政一」

【渠渠】キョ ○家屋の深く廣き貌。詩、秦風「夏屋ー ー」○寛泰ならざる貌。渠は遽に通ず。荀、修身「有レ法而無レ志二其義一則ー ー然」

【渠魁】キョカイ わるもののかしら、渠は大、魁は帥。書、康征「殲二厥ー ー一、脅從罔レ治」‖渠帥。

【渠衝】キョショウ しろぜめに用ふる大いなる車。荀子「苟得レ利而已矣、是ー ー入レ穴而求レ利也」ー ー入レ穴は大を屈して小に就く喩。

【渠水】キョスイ ほりぬきのみぞ。風、思遠詩「俱臨郊ー ー」

【渠帥】キョスイ わるもののかしら。史、司馬相如傳「誅二其ー ー一」‖渠率・魁首。

【渠率】キョソツ わるもののかしら、率・帥同じ。史、田叔傳「取二其ー ー二十人一、各笞五十」‖渠帥。

【渠答】キョトウ さかもぎ、敵を防ぐ爲めに鐵にてつくれる菱形のもの。漢書、龍綰傳「布ニー ー一」‖鐵蒺藜。

【渠長】キョチョウ 渠魁に同じ。唐書、建成傳「純二其ー ー一」‖魁長

【渠擊】キョゲキ さらへ、じょれん。方言「枇、宋魏之間、謂二之ー ー一」

【渠儂】キョノウ 個彼の義。自稱即ち我を吾儕といふの對。

【渠輩】キョハイ 彼等に同じ。金史、歡都傳「君相之位、皆ー ー爲レ之、奈何」

【渥】 クッ 屋

濕ークツは水波の漂ひて疾き貌。又、神の名。

【渦】 クワ 戈

○水浪のとどろく聲、水のさかまく聲。○水と石と相激する聲。

【渦洶】クワキョウ 波の激する聲。周光鎬文「ー ー滂湃」‖渦洸。

【渚】 クワ 阮

渦ーオウは波の相激する聲。

【渙】 クヮン 諫

○とく（釋）ちる（散）「ー散」○溜る所なくのびる（發暢）○ーは水のさかんなる貌。○ー爛はつやつやし。又、文章ヤある貌。○易の卦の名、坎下巽上。易、正義「ー者散釋之名、大德之人、建二功立一業、散二離釋一險、故謂二之ー ー一」

【渙汗】カンカン ○ひろく大なり。册府元龜「ー ー之恩、宜レ及二浹洽之俗一」○王者の詔を出す義。汗出でて反らざる如く、詔令發すれば取消すべからず。易經「ー ー二其大號一」

【渙渙】クヮンクヮン 水の盛んなる貌。詩、鄭風「溱與レ洧、方ー ー兮」

【渙兮】クヮンケイ とけちる貌。老子「ー ー若二冰之將一レ釋」

【渙沱】クヮンタ 水がとけると、こぼると。郭璞賦「ー ー期二乎來者一」

【渙散】クヮンサン とけちる。蔡邕文「不三敢ー ー二其意一」‖散渙。

【渙然】クヮンゼン とけちる貌。杜預、左傳序「ー ー冰釋、怡然理順」‖渙兮。

【渙發】クヮンパツ 盛んに發する、詔令を發布する。渙は易の卦の名、水の散る如く險難を散開して四方に發布する義。渙を煥に作るは非。柳宗元、賀二大赦一表「ー ー二大發一」

【渙揚】クヮンヤウ 盛んにあがる。枚乘文「分二賜宰弼一ー ー二古風一」

【渙爛】クヮンラン あやある貌。後漢書、延篤傳「ー ー兮其溢レ目也」

【溟】 ケキ 錫

川の名、河南省濟源縣の西南に在り、黄河に入る。‖溟。

【湖】 コ 虞

○みづうみ、陸地にて圍まれたる大いなる水、池沼の大いなるもの（大陂）「ー沼」「大ー」○ー廣はもと湖南・湖北・廣東・廣西の總稱。今は一南ー北の總稱。‖三楚。

【湖陸】コリク みづうみの南。晉書、明帝紀「微行至二於ー ー一」

【湖海之士】コカイノシ 豪氣ありて野に在る人。魏志、陳登傳「劉表與二劉備一共論二天下人一、許汜曰陳元龍、ー ー、豪氣不レ除」元龍は登の字。

【湖學】コガク 湖州の學校。宋史、胡瑗傳「慶曆中、數二學士一湖閒二十餘年、弟子以二數千一計、是時方尚二辭賦一、瑗ー ー以二經義・治事一分レ齋」

【湖絲】コシ 個湖州に產する絹絲。

【湖心】コシン 湖水の中心。劉禹錫詩「洞庭秋月生ニー ー一、皆波萬頃如レ鏡レ金」

【湖上】コジョウ ○みづうみのほとり。古詩「林中不レ覺レ薪、ー ー不レ覺レ魚」‖湖畔・湖邊。○湖水の面。

【湖水】コスイ ○みづうみの水。○みづうみ。孟浩然詩「八月ー ー平」

【湖沼】コセウ みづうみと、ぬまと。江淹賦「鏡帶ニー ー一、綿二亘池林一」

【湖池】コチ みづうみと、いけと。論衡「ー ー非レ一、其實狹同也」

【湖南】コナン 省の名。洞庭湖の南に在り、故に名づく。湘水其の南北を貫き流る、また湘省と稱す。古の三苗の國、禹貢の荊州の域、長沙を省治とす。

【湖畔】コハン みづうみのほとり。李嘉王詩「ー ー春山遠難盡、雲中遠樹愚難離」‖湖邊。

【湖筆】コヒツ 湖州にて製する筆。徽墨と竝稱す。

【湖邊】コヘン みづうみのほとり。宋書、

符瑞志「一一得二石函一、中有二小青石一、刻作二皇帝字一」‖湖神。

【湖北】コホク　省の名、揚子江に跨り、洞庭湖の北に在り、禹貢の荊州の域、武昌を省治とす。

【渾】㊀ コン ㊁ コン 阮 元 混に同じ

㊀にごる（濁）まじる。○くぼし（窪下）○大いなり、物の氣形質具りて未だ分れず、唯ば、として大いなるさま「一沌」「一淪」○ひとしくおなじ（齊同）○ひとまとめ。○すぶ、すべて。㊁ ―は水の盛んに流れる貌。○滾滾。○一は開通せざる貌。又、古の凶人の名「左、文十八」‖混沌・渾沌）

同訓異義 渾・凡・總・都　○渾は、ひとまとめに打ち混じて分かぬ義。杜詩「渾然不レ解レ事」○凡は皆也、およそとも訓じ、概括を計ていふ詞、總に近し。通鑑「統有二四五、新國三、凡八大國」○總は總攬をいふ、聚束也と註す、もと糸を組合す義より出づ、多くの物を一つにすべ合はせる義。別の字に對す、列子の「居二人民之上一、總二一國之事一」の總を轉用して勤辭とす。○都はよせ合せる義、總也、聚也と註す、殆らずあつむるをいふ。晉灼文「頃振二遺文一、都爲二一集一」

【渾圖】コンまんまろし。元史、曆志「天體一一」沈作喆、寓簡「氣質一一」

【渾河】コン　○滿川奉天府の南方を流れて遼河に入る、源を南滿洲の邊疆に發し、東北より西南に向ひて流る、奉天大會戰の前、兩軍此河を挾みて陣し、屢ゝ激戰す。○山西、直隸の桑乾河の一名。

【渾家】コン　妻。夜景、苦戰行「身爲二最小女一偏得二一憐」

【渾殺】コンいりまじる。司馬光文「前賂公行、賢愚一一」‖混淆・錯雜。

【渾淪】コンひろくつつみひたす。宋史、蘇軾傳「賦頌一師二父詞一、其レ文、汪洋一一光芒、壓二視百代一」

【渾金】コンまざりもののあるかれ、あらがね。晉書、王戎傳「常目二山濤一、如二璞玉一一、人皆欲二其寶一、莫レ知レ名二其器一」

【渾渾】コンクン　水勢の相激する貌。張華、七命「濆海一一涌二其後一」

【渾元】コン　自然の氣。班固賦「一一運レ物、流不レ盡兮」

【渾渾】コン　○盛んに流れる貌。荀、窟圖「財貨一一如二泉源一」‖滾滾。○濁る貌。舊唐書、張荐古傳「勿二一一而濁一」○朴略にして知り難き貌。揚子法言「虞夏之書一一爾」

【渾身】コン　全身。

【渾深】コン濁りてふかし。埤雅「洛以二一一一宜レ鮮、伊以二清淺一宜レ魴」

【渾然】コン　○圭角なき貌。○差別なき貌。

【渾大】コンダイ　ひとまとめにして大いなり。唐書「其論議一一、雖二古王佐一無二以加一」

【渾濁】コンダク　にごる。老子「曠兮其若レ谷、渾兮其若レ濁」‖濁渾。

【渾天儀】コンテンギ　天體を觀測する器。圓球の表面に日月星辰を描きたるもの。後漢書、張衡傳「造二渾儀之正一、作二一一一」‖天球儀・渾天象。

【渾不似】コンフジ　琵琶に似たる樂器。長安客話「王昭君琵琶、使二胡人改作一、形小、昭君笑曰、渾不レ似」とあるに本づく、渾はスベと讀む。

【渾碧】コンすべて見渡すかぎり青し。周瑞「見渡一一萬里」‖一望。

【渾融】コンユウ　物がよく融け合ふ。

【渾和】コンまどかにしてやはらぐ。元結詩「心混混兮意一一」

【渣】サ 麻 歌

○川の名。○なり、かす（滓）

【渣滓】シサ　かす、をり、沈澱物。班固賦「俗以レ此爲二一一一字一」‖楂柏。

【湫】㊀ シウ ㊁ セウ 尤 篠

㊀いけ（池）「深一」○龍一は瀑布。○一一はうれへかなしむ貌。○すずしき貌。○一濕は清く靜かなり。㊁ひくくうるほふ（下濕）せまし（隘）「一隘」○とどこほる（停滯）○あつまる（集）「一戻」○閑くて。低くして水草などの生ずる地。

【湫隘】シウアイ　地ひくくしてせまし。左、昭三「子之宅近レ市、一一喧塵、不可二以居一」

【湫兮】シウケイ　清涼なる貌。宋玉、高唐賦「一一如レ風、淒兮如レ雨」

【湫湫】シウシウ　うれへる貌。春秋考異郵、陽肇陰卑「一一者悲愁之狀也」‖忡忡。

【湫宅】シウタク　ひくくせまきいへ。揚子法言「一一閉門、不レ有二椒房之勞一」

【湫底】シウテイ　氣が凝り集りとどこほりて散ぜざる後。左、昭元「申開一一」‖抑鬱。

【湜】シャウ 陽

○川の名、湖南省の大川、瀟水と合し洞庭に注ぐ。○一源は湖南省の縣名。○一省は湖南省の異稱。○にる（煮）詩、召南

「于以ー之」

【湘娥】ショウガ ○湘水の神、堯の二妃、娥皇・女英。曹植、九詠「揚二桂旗一兮擊二ー鼓一」李賀詩「水弄ー佩」‖湘君・湘妃。○轉じて美人の義とす。

【湘君】ショウクン 湘妃に同じ。史、始皇紀「浮レ江至二湘山祠一、逢二大風一、幾不レ得レ渡、上問二博士一曰、ー何神、博士對曰、聞レ之堯女舜之妻、而葬レ此、於レ是始皇大怒（中略）伐二湘山樹一、赭二其山一」

【湘竹】ショウチク 竹の異名。博物志「堯之二女、舜之二妃、曰二湘夫人一（舜前、二妃嘗以レ淚灑レ竹、竹盡斑」

【湘簟】ショウテン 湘竹にて織りしたかむしろ。韋應物詩「ー玲瓏透二象牀一」

【湘南】ショウナン ○湘水の南。周濂、職方志、注「衡山在二ー一」○圖 相模川の南、相模の海岸一帯の地。

【湘妃】ショウヒ ○堯舜の二妃、娥皇・女英をいふ。湘中記「舜二妃死爲二湘中神一、故曰二ー一」琴操有二ー一怨一」○斑竹（まだらだけ）の異名。湘竹を見よ。

【湘竿】ショウカン 湘潭は商務殷盛。又清の咸豐以來、將卒湘人多し、故に湖南全省及長江沿岸の大商埠、皆ー一を用ふ。

【湘簾】ショウレン 湘竹のすだれ。趙孟頫詩「ー一疎織浪紋梅」

【渭】 ショ 圖

○露の多き貌。○盛んなる貌。詩、小雅「零露ー兮」○したむ、酒をしぼりて糟（かす）を去る。詩、小雅「有レ酒ー我」‖醑。○さらふ（浚）

【渭渭】ショショ 盛んなる貌。詩、小雅「其葉ー一」

【渚】 ショ 圖

○なぎさ、みぎは（水際）「淺ー」「煙ー」「堯ー」○こじま、す、小さき洲。詩、召南「江有ー」

【渚宮】ショキュウ なぎさに臨める宮殿。今の湖北江陵縣城内の西北隅に在り、春秋の楚の別宮。左傳「王在ー一」白居易詩「ー一東面煙波冷」

【渚畔】ショハン みぎは。崔顥詩「ー一鱖魚舟上釣」‖渚邊。

【渚屋】ショオク みぎは。莊、秋水「兩涘ー一之間、不レ辨二牛馬一」‖渚涯。

【渚岸】ショガン みぎは。荀志、許婧傳「尋陽ー一」五子除里」‖汀渚・渚屋。

【湜】 ショク 圖

○きよし、すむ、水清くして底が見える。○正を持する貌。

【湜湜】ショクショク 水澄みて底まで見える貌。一說に正を持する貌。詩、邶風「淫以ー渭濁、ー一其止」

【測】 シキ ソク 圖

○はかる、水の深淺をはかる。又、すべて物の廣狹・遠近高下・大小等を量る。○心にて推し考へる、思ひはかる。○はからる。易、繫辭「不ー一之謂レ神」

同訓異字 測・計・謀・圖・量・度・稱・料・忖・揣等の別は計（言部二畫）の條を見よ。

【測景】ソクケイ 日かげをはかる。南史、梁元帝紀「土圭ー一、仙人承レ露」北史、梁王俊傳「置二渾天儀一ー一表一」‖度景

【測量】ソクリョウ 海の深淺をはかる具。繩の端に鉛のおもりをつけたるもの。

【測探】ソクタン はかる。隋書、天文志「ー一日星、分二步星度一」‖測度

【測究】ソクキュウ 量り極める、測量し研究する。宋玉、神女賦「盛矣麗矣、難ー一矣」

【測驗】ソクケン はかりしらべる。齊東野語「留レ此以備ー一」

【測候】ソクコウ 天文氣象をはかる「ー一所」隋書、天文志「漢初ー一、乃知二五星皆有二遲行一」

【測鎖】ソクサ 距離をはかるくさり、鋼鐵にてつくる、間縄（カンジョウ）

【測算】ソクサン はかりかぞへる。

【測繪】ソクカイ はかりしる。孟郊詩「幾人能ー一」‖測知。

【測晷】ソクキ 時間をはかる。陸倕文「擬レ景ー一」

【測度】ソクタク ○はかる。禮記「人滋二其心一、不レ可ー一也」○ソクタク 度數をはかる。

【測地】ソクチ 土地の廣狹・高低等をはかる。

【測地學】ソクチガク 地球の形狀・質量及大さ等を研究する學術。

【測定】ソクテイ はかりさだめる。

【測天】ソクテン 天文をはかりしらべる。

【測量】ソクリョウ ○神又は人の心をはかる。韋莊詩「天心詎ー一」‖忖度。○物品又は土地河海などの長短高低深淺などをしらべはかる。

【漯】 ㊀ セツ ㊁ テフ 葉 厲

㊀さらふ（除去）水をかへてどぶなどを除き去る「淺ー」「開ー」きよくす。○ちる（散）○もる。もらす。莊、秋水「尾閭ー一之」‖洩。○やむ（歇）○けがす。けがれ（汗）王褒、得賢臣頌「去卑等與ー一而升本朝」○あなどる（慢）なる

（俾）㊁ー（ㄆㄧˇ）は波の連なる貌。○とほる（通・徹）

【湔】 セン 先 感

○そそぐ（灑）あらふ（滌）○うるほす。

【湔祲】センシン あらひそそぐ。說苑「憂患生乎所忽、禍起乎細微、汙辱難ー一、敗事不可復追」‖湔洗。

【湔祓】センフツ 汚名をあらひすすぐ。金史、循吏傳「謀反大逆、皆衆ニー一、彼獨何罪、幽囚若是」‖洗雪。

【湔洗】センセン すすぎあらふ。後漢書、華陀傳「若在二腸胃一、則斷截ー一、除去疢穢、既而縫合、傅以二神膏一、四五日創愈」‖洗濯・湔祓・湔濯。

【湔濯】センタク 前條に同じ。徐陵文「復於ニ道老一曲照ニ一一一」‖洗濯。

【湔濺】センセン すすぎあらふ。潘嶽詩「稍以自ー一」‖洗滌。

【湔拭】センフツ あらひぬぐふ。黃庭堅詩「待ニ余ー一一牀書」

【湔祓】センフツ 醜惡をあらひ去る。戰國楚策「君獨無レ意ー一ニ僕一也」

【渲】 セン 先

○こみづ（小水）○畫法にて、水墨を再三そそぐ、繪のくまどり「ー刷」「ー法」郭熙、林泉高致「擦以ニ水墨一再三而淋之、謂ニ之ー一」

【湊】 ソウ 有

○みなと（水上人所ニ會一）ふなつきば、港は水、ー は陸。○あつまる（聚）「輻ー」‖輳。○はだのきめ、膚に通ず。○きそひすすむ（競進）戰國策「士爭ー一燕」

【湊輳】ソウソウ 湊・輳・聚・集・萃等の別は聚（耳部八畫）の條を見よ。

【湊合】ソウガフ 一つによせ集める。‖綜合。

【湊集】ソウシフ あつまり、つどふ。‖輻湊。

【湊出】ソウシュツ あつまりてあらはれ出る。張融文「自縱橫ー一」

【湊遘】ソウコウ 前觸があつまる。論衡「草木之中、有二巴豆・野葛一、食レ之ー一、頗多殺レ人」

【湊理】ソウリ はだのきめ。文心雕龍、養氣「ー一無レ滯」‖腠理。

【湯】 ㊀タウ ㊁シャウ 陽 ㊂タウ 漾 ㊃ヤウ 陽

㊀ゆ（熱水）楚辭、九歌「浴二蘭ー一兮沐芳華」ふろ、溫泉。○煎藥の名に添へていふ語「葛根ー一」○殷朝初代の天子の名「成ー一」○はらふ（攘）㊁なみのうごく貌。ながれる貌。㊂そそぐ。○ほしいまま。蕩に通ず。○盪に通ず。㊃ー谷は日の出づる所。司馬相如賦「右以ー谷爲ニ界一」‖暘谷。

【湯湯】シャウシャウ 水の流れる貌。又、波のうごく貌。詩、大雅「江漢ー一」范仲淹、岳陽樓記「浩浩ー一」

【湯熨】タウウツ 患部を湯にてあたためる。溫罨法。史、扁鵲傳「疾之居ニ腠理一也、ー一之所レ及也」

【湯禹】タウウ 殷の湯王と夏の禹王と、皆古の聖王。‖禹湯。

【湯波】タウハ 煎じじる。史、扁鵲傳「上古之時醫有二俞跗一、病不レ以ニ一一一」

【不レ避ニ湯火一】タウクワヲサケズ 熱湯烈火をも避けずして進む。史、貨殖傳「前蒙ニ矢石一不レ避ニ湯火之難一者、爲ニ重賞一使也」尹文子「民無ニ長幼一、臨レ敵難ニ湯火一不レ避」

【蹈ニ子湯火一】タウクワヲフム 危險の地に立ち入る喩。楊炯文「雖ニ婦人之兵一、可ニ以蹈ニ子湯火一」

【湯鑊之罪】タウクワクノツミ 釜で煮られる罪。史、范雎傳「賈有ニ一一一」賈は須賈。同書、藺相如傳「臣請就ニ湯鑊一」

【湯劑】タウザイ せんじぐすり。唐書、吳湊傳「詔ニ侍醫教ニ一一一」‖湯藥。

【湯水】タウスヰ ゆ。法句喩經「取ニ其ー一一」

【湯井】タウセイ いでゆ。潘岳、四征賦「ー一溫谷」註「ー一溫湯也」唐書、地理志「更ニ溫泉一曰ニ驪清宮一、治ニ一一一爲レ池」‖湯泉・溫泉。

【湯泉】タウセン いでゆ。抱朴子「水主ニ魏冷一而有ニ溫谷之一一一」‖溫泉。

【湯煎】タウセン 藥にえ湯の中につけて物を煮る一種の煮方。

【湯池】タウチ ○熱きゆをたたへたるいけ、城の濠の要害なる義。漢書、食貨志「石城十仞、ー一百步」○溫泉をいふ。李白詩「ー一流ニ大川一」

【湯治】タウヂ 國溫泉に浴して病氣をなほす。

【湯殿】タウデン ゆどの。漢武故事「漢成帝、爲ニ趙飛燕一造ニ一一一」‖浴室・浴殿。

【湯之盤銘】タウノバンメイ 殷の湯王の盤の銘。銘は戒辭。大學「ー一一日、苟日新、日日新、又日新」

【湯婆子】タウバス ゆたんぽ。陳餘叢考「今人用ニ銅鐵器一、盛レ湯置ニ衾中一、以レ脚、爲ニ之ー一」‖湯媼・脚爐。

【湯武】タウブ 殷の湯王と周の武王と、共に其の君を放伐して天下を得「ー一放伐」史、陸賈傳「ー一逆取而以レ順守レ之」

【湯餅】タウヘイ うどん。事物紀原「魏晉之代、世俗レ食ニ一一一、今索餅是也」‖溫麵。

【湯桶】タウトウ 殷の湯王が野に出でて四面に網を張りし者を見て、其の三面を除かしめしかば、國民其の仁徳の食歎にまで及びしを謳歌せし故事（呂覽、異用）杜牧詩「ー一屢ニ司刑一」次條參看。

【開ニ湯網一】カイタウモウ 罪人を寬大にもつかふに喩ふ。史、殷紀「湯出、見ニ野張ニ網四面一、祝曰、自ニ上下四方一、皆

入二吾網一、湯曰、嘻盛レ之矣、乃去二其三面一、祝曰、欲レ左左、欲レ右右、不レ用レ命、乃入二吾網一」

【湯沐其而戴湯相半】タウモクダンヲシテタウヲアヒナカバス　物情の各異る所ある喩。淮南、説林「――、大度成而無徐相賀」

【湯沐邑】タウモクイフ　沐浴の料に備ふる采地。史、高祖紀「賜二自二沛公一以誅二暴逆一、遂有二天下一、其以レ沛爲二湯――一」

【湯挙】タウクヮ　せんじぐすり。漢語、貨益傳「――非二陛下日所レ嘗飲一進」‖湯剤。

【探レ湯】タンタウ　○沸騰する湯の中に手を入れる。詩、擧氏「孔子曰、見レ善如レ不レ及、見二不善一如レ探レ湯、吾見二其人一矣、吾聞二其語一矣」○圓タンタウ　上古、事の正邪を判ぜんため神に盟はしめ、手にて熱湯の中を探らしめ、傷せざるを正とし、傷するを邪とせし故事。

【以レ湯沃レ沸】ユタモッテヲヲソソグ　紛亂を益甚長せしむる喩。淮南、原道「――、亂乃逾甚」

【以レ湯消レ雪】ユタモッテヲケス　事の易きに喩ふ。淮南、兵略「若二以レ水滅レ火、若二以レ湯沃レ雪、何往而不レ遂、何之而不レ用」

【湛】

㊀タン　㊁チン　㊂セン　㊃タン　㊄チン　㊅ジン　㊆ヂン

㊀たたふ、水がたたへる「一澄」○しづむ(沒)○やすし(安)○――は露の盛んなる貌。又、水の深き貌。又、まごころある貌。又、あつし、重厚なる貌。○すむ(澄)又、あはし(澹)㊁しづむ。‖沈。○――は水流のはげしく怒る聲。㊂ひたす(浸)‖漸。㊃ふける。‖耽。○たのしむ(樂)㊄しづむ(沒)

【湛恩】タンオン　ふかきおん。史、司馬相如傳「威武紛紜、――江漢」

【湛靜】タンセイ　ふかくしづか。漢書、匡衡傳「――安舒者、戒二于後時一愈心浩大者戒二于遺忘一」‖沈靜。

【湛寂】タンセキ　深くして靜か。唐大宗文「法流――、揔レ之莫レ測二其源一」

【湛然】タンゼン　○水のたたへたる貌。蘇軾詩「――如二古井一、終歳不二復澜一」○おちつきて靜かなる貌。宋史、趙汝談傳「荷得レ之、凝然――」

【湛淡】タンタン　水がたたへみちる貌。吳均詩「――春塘滿」‖湛湛。

【湛湛】タン　○露の盛んなる貌。詩、小雅「――露斯」○厚重なる貌。楚辭、九章「忠――而眉レ進兮」○水のふかくたたへたる貌。楚辭、招魂「――江水兮上有レ楓」

【湛碧】タンヘキ　綠色の水をたたへる。王勃、乾元殿頌「縣壊凝レ紫、河宮――」

【湛冥】タンメイ　おくぶかくくらし。李白詩「誰人測二――一」‖幽玄・深遠。

【湛露】タンロ　しげくおくつゆ。潘岳、籍田賦「若二――之晞一朝陽一」湛湛參看。

【湛盧之劍】タンロノケン　夾王闔閭の寶劍、湛然として黒き義。越絶書「闔閭無道、――、去レ之入レ水」

【湍】タン　寒

○はやせ(疾瀬・急流)水のはやくながれる所「奔――」「急――」「激――」○はやし「――駛」「――急」○水が激しくめぐる。

【湍悍】タンカン　水のながれはやし。史、河渠志「高水――、難三以行一平地一」

【湍激】タンゲキ　水勢たけりてはやし。蘇軾詩「水流石壁聲、――不レ受レ駕」

【湍決】タンケツ　水疾くして堤を壊れるく企史、高震傳「故致二――一」

【湍深】タンシン　流急にしてふかし。儒林奚詩「――激二瀦隅一、門庭若二決河一」

【湍水】タンスイ　はやせ、うづまくはやせ。孟、告子「性猶二――一也、決二諸東方一則東流、決二諸西方一則西流」‖湍流・湍瀨。

【湍悲】タンヒ　水流急激にしてなみたつ。漢書、溝洫志「今水益――、爲レ害甚於故」

【湍駅】タンエキ　回り流れるはやせ。水經、注「盛川多二――一」

【湍瀨】タンライ　はやせ。淮南子「募年而漁者爭盛二――一」

【湍流】タンリウ　めぐりて急なるながれ。九章「長瀨――、浮二江淵一兮」‖急流。

【湍瀧】タンロウ　急激なるながれ、たきつせ。滝縄仁詩「賦湍豈敢追二――一」

【湫】メン　銑

おほみづ。

【湫漫】メンマン　水廣き貌。木華、海賦「勝觀――」

【渡】ダン　翰

ゆ(湯)

【渟】テイ　ヂャウ　青

○とどむ、とどまる(水止)水がたまりて流れず。停と通ず。○みぎは。‖汀。

【渟滀凝碧】テイチクギヤウヘキ　あぶらをたたへし如く深く、すみて碧色をこらす。文徴明、玉女潭山居記「渟滀凝碧」王勃、乾元殿頌「河宮凝レ碧」

【渟注】テイチュウ　とどまりひたす。楊貴詩「――就二澤底一」

【渟匯】テイワイ　水がたたへめぐる。匯は同。瀦は俗字。‖停匯。

【渟泓】テイオウ　ふかくたまりたるさまの水。煎茶水記「惡――而喜二泉源一」

【渟水】テイスイ　たたへとどこほれるみづ。

史、李斯傳「決ニ一ヲ一ニ、數ニ之海一」‖止水。

【渟滀】テイチク　とどこほれるどう。陸機文「留子飲ニ之ニ一ヲ之汙一」

【渟蓄】テイチク　とどまりたまる。韓愈、柳子厚墓誌銘「汎濫ニ一ヲ、爲ニ深淵一無ニ崖涘一」

【渟澱】テイデン　たたへてきよくすむ。孟郊詩「呀窓潘ニ一ヲ」

【渟淵】テイエン　水のたたへる貌。白居易文「夏之夜、吾愛ニ其泉一ヲ一風治治一」

【渟泊】テイハク　ふなどまり。白居易詩「提レ綱役ニ攜ヲ綾、選レ勝時ニ一ヲ」

【涎】テン　豔

渡一は安らかに流れる貌。

【涎涎】テンテン　やすらかに流れる貌。杜牧詩「微漣風定翠ニ一ヲ」

【渡】ト　遇

○わたり、わたし、わたしば。王維詩「荒城臨ニ古一ヲ」○わたす。わたる(濟)‖度。○かよふ(通)圖○なりはひ「世ニ一り」「一世」○スクフ授ける、及ぼす。○ワタ外國より到來「古ニ一リの珊瑚」又、かけあひ(交涉)

同訓異字　渡・濟・涉・瀰・亙・竟・徑

○渡は水をわたるなり、わたし場の義にも用ふ。○濟は渡と略ト同じ、人を渡すにも用ふ。孔子家語「子產以ニ所レ乘之輿一ヲ濟ニ冬涉者一ヲ」佛書に「濟ニ度衆生一ヲ」も同義なり。○涉は淺き水をかちわたりするなり。轉じて書物をざっと博く觀るを、涉獵、博涉などといふ。○瀰は偏くゆきわたるなり、終極の義。周禮、注「白虹瀰レ天」○亙は瀰に近し、物のこちらから向うまで、ときわたるなり。○竟は亙に同じ、虹亙は、虹竟とも書く。○徑はさしわたしなり、直徑と用ふ、一直線にわたるなり。史記「高明被レ酒、夜徑ニ澤中一ヲ」

【渡海】カイ　海をわたる。李白詩「長風吹レ月一レ來、遙勸仙人一杯酒」‖渡航。

【渡航】カウ　うみをわたる。梁書、王茂傳「衆號ニ二十萬八一ヲ請レ戰」

【渡レ江楫】トカウノシフ　晉の五胡の亂に、豫州の刺史祖逖江を渡り、中流にして楫を擊ち、誓ひて吾生きて中原を清むる能はずして復た濟らんもの、此の江の如きあらんといひし故事。文天祥、正氣歌「或吞ニ一ヲ慷慨呑ニ胡羯一ヲ」

【渡御】トギョ　○天子のおでまし。○圖祭禮のみこしが出て旅所に行く。

【渡口】トコウ　わたしば。‖津頭・渡頭。

【渡津】トシン　○わたしば。○わたしばを渡る。西陽雜俎「一レ一者皆壞レ衣枉レ法」

【渡世】トセイ　圖○世をすごす、くらす。○世わたり、くらし。‖生業・家業。

【渡濟】トサイ　わたしをわたる。易林「乘レ船一レ一、載レ水濟レ火」

【渡船】トセン　わたしぶね。居家必用「造レ橋修レ路、及造ニ一ヲ一」

【渡頭】トトウ　わたしば。張九齡詩「萬井緣ニ津沿、千艘咽ニ一ヲ口」‖津頭・渡口。

【渡米】トベイ　圖亞米利加に行く。

【渡來】トライ　外國から此方へわたり來る。

【渡得レ船】タスカリテフネヲエタリ　たすかりて甚だ喜ぶに喩ふ。法華經「如ニ子得レ母渡得レ船」

【湩】㊀トウ　㊁トウ　東　送

㊀ちちしる(乳汁)「乳一」稗天子傳「具ニ牛馬之一ヲ以洗ニ天子之足一」㊁一然はつづみの聲。

【湃】ハイ　卦

○なみうつ、なみもとる。○澎一は水勢の強き貌。又、波の相戻る貌。又、其の聲。‖澎湃。

【湃湃】ハイハイ　波のこゑ。蘇軾詩「空壑餘潮鳴ニ一ヲ」‖潮音。

【湄】ビ　支

○みづぎは「江一」詩、秦風「在レ水之一ヲ」棄と通ず。詩、小雅「居ニ河之湄一ヲ」○きし、はま。

【湎】㊀ビン　㊁ヨン　元　銑

㊀謎に用ふる字。‖閩。㊁滑一ヲは未だ定まらざる義。○一ヲは思慮の昏亂せる貌。

【湢】ヒョク　職

○ゆどの(浴室)○一然は整齊の貌。○水の激き涌く貌。○一湢ヒョクは相迫る。

【湢浴】ヒョクヨク　ゆどのにて湯あみす。禮、內則「男女不レ共ニ一ヲ一」注「湢、浴室也」

【渢】㊀フウ　㊁ハン　東　感　陷

㊀弘くして大いなる聲。○水の聲。㊁一は中庸の聲。又、浮ぶ聲。左、襄二九「美哉一ヲ乎」

【渢渢】フウフウ　中庸の聲。又、浮ぶ貌。正韻「一ヲ、中庸之聲也」

【渺】ベウ　篠　豪に通ず

ひろし、はるか、大水の貌。

【渺茫】ビョウバウ　ひろくはるか。韋莊詩「扶桑日在ニ一ヲ中」‖森茫・渺渺。

【渺渺】ビョウビョウ　廣くして涯なき貌。方

回時「情乎初――」、前曲漸深幽」

【渺微】ビウ　渺渺に同じ。遠くはるかなる貌。木華、海賦「――泥漫」

【渺渺】ベウベウ　水廣くして遥かなき貌。かすかに遠し。曾、内樂「――乎如レ夢無レ極」‖渺茫・渺漫・杳渺・浩渺・森茫・森漫・渺瀰・縹渺・森淼

【渺漫】ベウマン　廣くはるかなる貌。漫は廣遠。劉滄詩「白浪連レ空極――」

【渺河】ベウクワ　廣くはるかなる貌。郭璞賦「漠帰――」‖渺瀰・森漫。

【滭】ベン　メン　薬

滭ーは大水の貌。

【湎】ベン　メン　銑　沔に通ず

○おぼれる。酒におぼれる。物事にふける。しづむ。○――ベンはながれうつる(流移)貌。漢書、敘傳「風流民化、――紛紛」‖泯泯。

【渤】ボツ　月

○滃ーは霧の出づる貌。○朔ーは水の壁。○――海は直隷省、遼東の海灣。‖勃海・渤澥・北海。又、國名、本名は靺鞨、高麗の別種。又、濱の郡名、山東省に在り。

【渤潏】ボツユツ　海水の涌きたつ貌。李白詩「海水――、人摧二鯨觀一」‖洋潏。

【溢】㊀ボン　元　㊁フン　問　ホン　願

㊀川の名、江西省徳化縣即ち九江縣の西を流れ、揚子江に入る、其の川口を――浦口(――口)といふ。㊁水の聲。○みづわく(涌)

【溢溢】ワン　わきあがりあふれる。漢書、溝洫志「河水――」

【渝】ユ　虞

○かふ、かはる(變)更改する。○あふる(溢)「――溢」○州の名、今の四川省重慶府。よりて重慶を――といふ。

同訓異字　渝・變・化・易・替・代・更・遷・換の別は變(言部十六畫)の條を見よ。

【渝移】ユイ　かはりうつる。呂覽「變乎其心不――」

【渝月】ユゲツ　月をこえる。‖逾月・踰月。

【渝替】ユタイ　かはりおとろへる。高適詩「逢レ時愧二名節一、遇レ坎悲二――一」

【渝盟】ユメイ　ちかひを變へてそむく。左、桓元「――レ一無レ享レ國」

【渦】ワ　歌　通音　クワ

○うづまく(旋流)水がぐるぐるると回り流れる。○うづまくみづ、うづ。

【渦水】クワスイ　○うづまくみづ。魏文帝文「經二東關一、進――一、相二洋乎高樹之下一」○淵水に入る川の名。

【渦旋】クワセン　うづまく。海官紀聞「大海洋中有二――一處一」‖渦螺・盤渦・螺旋。

【渦中】クワチウ　○うづのなか。朱熹、答二呂子約一書「蘇黄門初不レ學レ佛、只因レ在二嵩州一陷二入此游――一」○俗　どたごたのなか「――に投ず」

【入二渦中一】ニフクワチウ　うづまきの中に身を投ずる。前條參看。

【渦盤】クワバン　水が盤旋する、渦旋に同じ。宋之問詩「軽雲出二遠岫一、渦盤遊二――一」

【混】㊀ワイ　㊁キ　尾　灰

㊀水のくま(水曲)山のくまを隈といふの對。○しづむ(沒)㊁――淵は水波の湧き起る貌。

【湧】涌(水部七畫)に同じ。

【湧泉】ヨウクワン　水がわく。朱熹詩「一水從レ中來、――知幾折」‖湧沸。

【湧出】ヨウシュツ　わきでる。後漢書、光武紀「中元二年夏、京師醴泉――」‖噴出。

【湧泉】ヨウセン　わきいづるいづみ。よき考などの出て盡ざる喩。後漢書、馬援傳「謀如二――一、勞如二轅駒一」

【湧沫】ヨウマツ　わき立つあわ。‖飛泉。鮑照詩「跳花濺半散、――飛旋圓」

【淦】イツ　質　十畫

○あふる、みつ(充盈)滿ちてこぼれる「充――」「洋――」「盈――」○つらなる(列)‖俳。○つつしむ(愼)○ひとすくひ、一手にてすくふ。兩手にてすくふを掬といふの對。○二十四兩の量。‖鎰。○しづか(靜)○おごる「驕――」「奢――」○すぐ(過)○おほみづ。

【淦溢】イツイツ　そしりすぎる。溢美溢惡參看。

【淦淦】イツイツ　水滿ちあふれる貌。李賀詩「飛下雌鷺背、塘水深――」

【淦起】イツキ　あふれこゆ。晉書、張禎傳「高昔論鷹、――流漫」

【淦喜】イツキ　この上なきよろこび。鮑照、世子誕育表「不レ勝二殊歡――一」

【淦決】イツケツ　あふれやぶる。漢書、溝洫志「河從二瓠子一決二東南一、多二――一」

【淦口】イツコウ　口にあふれる。强記、瓜賦「嘉味――、鮮レ類レ倫」

【淦肥】イツヒ　みちてこえる。王粲詩「軍中多沃餼、人馬皆――」

【溢美溢悪】イツビ ほめ過ぐると、そしり過ぐると。荘、人間世「夫両喜必多溢美之言、両怒必多溢悪之言」

【溢味】イツ この上なきあぢはひ。張載詩「芳茶冠二六清一、一播二九區一」

【溢目】イツモク めにあまる。後漢書、延篤傳「煥爛兮其一レ一也」

【溢出】イツ 実に過ぎたるほまれ。蜀志、諸葛瞻傳「是以美聲一レ一、有レ過二其實一」‖溢美。

【溢利】イツ 余分の利益。鹽鉄論「禁二一都一溷費一、一レ一藪則反レ本」

【溢流】イツ あふれながれる。唐書、五行志「醴泉坊太平公主第、井水一レ一」

【溶】 ヨウ 蓮

○大水の貌「一然」○一滃（オウ）は雲霧などの盛んにたちのぼる貌。

【溶溶】ヨウ 雲気。又、大水のさかんなる貌。賈誼、旱雲賦「遊望二白雲之蓬勃一兮、一一滔滔而安止」

【溶然】ヨウゼン 盛んなる貌。又、泉のわき出づる貌。歐陽修、醉翁亭記「中有二清泉一、一一而仰出」

【溶滃】ヨウオウ 雲霧の盛んに起る貌。郭璞、江賦「氣一一以繚杳」

【温】 ㊀ セン ㊁ ウン・オン 問元

温は俗字

㊀あたたか（煖）「一暖」○あたためる、ぬくめる「一酒」‖煖。○いでゆ「一泉」○おだやか（柔）やさし、色和ぐ。論、季氏「色思一」心がやさし。詩、秦風「一其如玉」○たづねる（尋）「一舊」「一故」○夏の末の風。㊁つつむ「一藉」‖溫。

【温藉】ウンシャ おだやかにてやさし。温克参看。

【温粥】ウンシュク 圖小麥粉にて製せし餅ぢるどん。

【温衣】ウンイ あたたかに著る、あたたかなる衣物。後漢書、鄧皇后紀「一一美飯、衆レ所二歎詠一」

【温像】ウンセン おとなしくして大いなる姿。後漢書、劉表傳「表身長八尺餘、一一泰貌一一」

【温煖】ウンダン あたたか、煖は煖。劉峻、廣絶交論「鼓一一、則冬谷成レ陽」

【温温】ウンウン 柔和なる貌。詩、小雅「一一恭人、維徳之基」

【温雅】ウンカ おだやかにしてみやびやか。南史、王泰傳「及レ長、通和一一、家人不レ見二喜慍之色一」

【温坑】ウンカウ きんどる、朝鮮・満洲にて室の牀下に穴道を造り火氣を通ずる煖房の装置。

【温慙】ウンザン やさしきかほ。漢書、韓王信傳「以一一遜辭一承二接上下一、無レ所レ失レ歡」‖和顔悦色。

【温恭】ウンキョウ やはらぎしたがふ、恵は順。詩、邶風「終温且恵、淑二愼其身一」

【温慎】ウンシン あたたかく慎む「一一動物」は鳥獣など。

【温言】ウンゲン やさしきことば。後漢書、馬皇后紀「假二借一一、賞以二財位一」

【温顔】ウンガン おだやかにしてつつしむ。李勉文「一一者、精神慈吐息」

【温厚】ウンコウ やさしくして篤實。後漢書、王暢傳「疾二亜厳刻一、務崇一一」‖温柔敦厚。

【温谷】ウンコク 温泉のわくたに。潘岳、西征賦「爾有二亟温濛湯、湯井一一」

【温克】ウンコク やさしく容るる所をもて善く自ら持する。詩、小雅「人之齊聖、飲レ酒一一」鄭箋「一一能温和自持」

【温故知新】ウンコチシン 前に習得したることをあたためさらへ、新しき道理を發明す、温は尋（ツヅ）ぬ一説に學なりと説くは非。論、爲政「子曰、温レ故而知レ新、可二以爲一師矣」

【温史】ウンシ 資治通鑑の異稱、司馬温公の著作なるが故。

【温慈】ウンジ やさしくいつ〳〵しむ。漢書、刑法志「一一惠和、以救二天之生殖長育一也」

【温酔】ウンスイ あたたかくやさしきことば。新論「一一一潤、師人挾レ纊」‖温言。

【温柔】ウンジュウ おとなしくすなほ。禮、經解「一一敦厚、詩教也」

【温柔郷】ウンジュウキョウ ○あそび場所。又、いろざと「飛燕外傳」‖遊里。○ねや、閨房。

【温室】ウンシツ あたためたるへや。西京雑記「一一在二未央宮殿北一、武帝所レ建、温暖之室、以製二狗寒一」

【温習】ウンシュウ さらへる、既に學びたることをくりかへしてならふ。蘇軾詩「朝向二春園一凍遊衍、暝歸二書室一同一一」既歸は日が暮れて家に歸る。

【温尋】ウンジン あたためさらへる。又、たづぬ。禮記「温故而知レ新」疏「言、賢人由レ學既讀一一故事一又能知二新事一」

【温慎】ウンシン おだやかにしてつつしむ。杜牧文「飾貝一一、故庶レ世睡明、無二罪悔一」

【温情】ウンジョウ なさけぶかく、やさしき心。

【温石】ウンジャク 蛇紋石（ジャモン）の一名。熱して腹中すれば永く身體をあたためる效あり。

【溫酒】ウンシュ　さけをあたためる。晉書、華琦傳「屢求和作二獻形一以レ一レ」

【溫純】ウンジュン　温和にして純粋。漢書、揚雄傳「典謨之篇、雅頌之聲、不二一一一深潤一則不レ足二以揚一鴻烈一」

【溫順】ウンジュン　おだやかにすなほ。後漢書、宋弘傳「弘少而一一」

【溫色】ウンショク　やさしくすなほなるいろ。白居易詩「自玉顏二一一、牛頭二一一」

【溫水】ウンスイ　あたたかき水。北史、齊宗室趙郡王叡傳「三軍皆飲二一一」

【溫粹】ウンスイ　おだやかにしてまじりけなし。歐陽修詩「堯夫大雅質、稟德質一一」

【溫藏】ウンゾウ　漢語ヨウの異名（本草）＝蔡蘆。

【溫存】ソン　あたためると涼しくすると、子が父母に事ふる禮。曲禮「凡爲二人子一之禮、冬溫而夏凊、昏定而晨省」定は疑どこをとる、省はきげんを伺ふ。北史、薛孤傳「至二一一之時「朝夕無レ違」

【溫詔】ウンセウ　なさけふかきみことのり。朱熹詩「御閲一一詩二首」

【溫泉】ウンセン　いでゆ。晉書、紀瞻傳「今有二一一一而無二柴火一」

【溫煖】ウンダン　あたたかにしてやはらか、轉、俗に軟に作る。元稹詩、木綿一一當二綿衣一」

【溫帶】ウンタイ　熱帶と寒帶との間にありて氣候の温和なる地帶、赤道の南北二十三度半より六十六度半に至る間の地。

【溫湯】ウンタウ　いでゆ。唐書、高祖紀、庚戌幸二一一一、壬子還二于驪山一」＝温泉。

【溫如レ玉】ウンジョギョク　君子の徳の美くしきに喩ふ。詩、秦風「言念二君子一、温其如レ玉」

【溫暖】ウンダン　あたたかし。又、あたたかさ。＝温煖。

【溫度】ド　あたたかみ、あたたかさの程どあひ。

【溫熱】ネツ　あたたかし。水經、注「温泉水、其水一一若レ湯、能愈二百疾一、故世謂二之温泉一焉」

【溫念】ネン　親切なるおもひ。蜀照詩「一一如下レ餘、深恩遠存追」

【溫房】バウ　あたたかき（やゝ七堵「一一則冬服二縞紵一、清室則中夏含レ衛」

【溫飽】バウ　あたたかに著、あくまで食ふ。後漢書、皇后紀「人所二以願一封候一者、欲レ上奉二絲綸一、下求中一一耳」＝飽食暖衣。

【溫肥】ヒ　あたたかにしてこゆ。絶康詩「一一者早終、涼瘦者遅死」

【溫被】ヒ　ふとんをあたたむ。晉書、王廷傳「延事レ親色養、夏則扇レ枕、冬則煖レ身一レ」

【溫敏】ビン　おだやかにしてさとし。皇甫謐、高士傳「既通二古今一、性復一一、不レ脱二下問一」

【溫風】フウ　夏の末に吹くあたたかきかぜ。禮、月令「季夏之月、一一始至」

【溫死】シ　たちまち死す、人の死をいふ。楚辭、九辨「恐一一而不レ得レ見二乎陽春一」＝溫逝・溫亡・長逝。

【溫謝】シャ　溫死に同じ、謝は去。李文「形神一一、雖音如レ在」

【溫逝】セイ　溫死に同じ、逝は死去。

【溫然】ゼン　にはかなる貌。＝忽然・突然・遽然。

【溫】

㊀キ・ケ　月　未　俗に汽と書用するは非

㊁ケツ　月　未

㊀川の名。㊁しほいけ（鹽池）

【滀】

クゥ　寶　讀・洗に通ず

滀一クゥは水の深くひろき貌。【滀湟】クゥクゥ　水の深くひろき貌。劉歆、新論「達者之慮、則一一而無レ遲」＝洗濯・濯湟。

【滑】

㊀クヮツ　㊁コツ　月　黠

㊀なめらか「柔一一」「軟一」○利トし、滞らず、すらすらとしてさはりなし。○すべる（蹉）足がとめどを失ひてそれる、すべらす。○珠の名。㊁みだる（亂）○をさむ（治）○にごる。○一一コツは水の流れる貌。

【滑車】カツシャ　周圍に溝のある車、此の溝に繩をかけて重き物體を上下する。

【滑澤】クワツタク　つや。雲笈七籤「呼吸中和、——微細」‖光澤。
【滑石】セキカツ　鑛物の一、粉末にして物に塗れば摩擦を減ず。
【滑脫】クワツダツ　すべりぬける、滞りなく、自由自在「圓轉——」
【滑達】クワツタツ　すべる。皮日休、苦雨詩「蘇地——足」
【滑稽】コツケイ　○智多く如何なる難問にあひても滯なく答ふる義、滑は亂、稽は同、辨捷の人、非を冒ひて是の若く、是を說きて非の如く、能く同異を亂るをいふ。一說に——は酒器、盲が口より出でて章を成す、詞窮り竭きざること、——の酒を吐くがごときをいふと。史、滑稽列傳、淳于髠の載とす。
【滑滑】コツコツ　水の流れる貌。易林「涌泉——、流行不ㇾ絕」
【滑瀆】クワツトク　なめらかにしてきよし。蘇軾詩「——空梨儿」
【滑石】クワツセキ　鑛物の一、粉末にして物に塗れば摩擦を減ず。
【滑澤】クワツタク　つや。雲笈七籤「呼吸中和、——微細」‖光澤。
【滑脫】クワツダツ　すべりぬける、滞りなく、自由自在「圓轉——」
【滑達】クワツタツ　すべる。皮日休、苦雨詩「蘇地——足」
【滑莧】クワツケン　なめらかなるたかむしろ。劉光祖詞「胡牀——應ㇾ無ㇾ價」
【滑砥】クワツテイ　なめらかなるいしだん。蘇軾詩「——擊二秋蓬一飛橋蹟古槎」
【滑紙】クワツシ　ぬめ(紙)帛の一種、薄くなめらかにして書畫をかくに適す。‖光紙。
【滑和】クワツワ　やはらぐ。莊子「不ㇾ足二以——一不ㇾ可ㇾ入二乎靈府一」
【滑稽】コツケイ　○智多く如何なる難問にあひても滯なく答ふる義、滑は亂、稽は同、辨捷の人、非を冒ひて是の若く、是を說きて非の如く、能く同異を亂るをいふ。一說に——は酒器、盲が口より出でて章を成す、詞窮り竭きざること、——の酒を吐くがごときをいふと。史、滑稽列傳、淳于髠の載とす。
【滑滑】コツコツ　水の流れる貌。易林「涌泉——、流行不ㇾ絕」

【溪】ケイ　齊　諧に同じ

【溪友】ケイユウ　谷間に棲む風流の友。圖繪寶鑑「吳恍不ㇾ知二何許人一、作二林泉平遠一——釣徒一、皆有二氣象一」
【溪雨】ケイウ　たに間のあめ。李白詩「滿院池月靜、卷ㇾ簾——涼」杜牧詩「——灘聲急、巖風樹勢斜」
【溪翁】ケイオウ　谷間にすむ老人。皮日休詩「——無ㇾ語遣相望」‖溪叟。
【溪客】ケイカク　蓮の異名「西溪叢語」
【溪蓀】ケイソン　たに。張協詩「——無二人跡一、荒蹊鬱蒨森」‖幽窗。
【溪澗】ケイカン　たにがは。元結詩「種ㇾ藥老二——一」
【溪徑】ケイケイ　たにあひのほそみち。
【溪莊】ケイサウ　たにまのゐなかや。賈島詩「桃花夾ㇾ岸護二——一」
【溪狖】ケイユウ　たに川のまるきばし。陸游詩「林雀無ㇾ聲——斷、炊煙不ㇾ動竹籬斜」
【溪水】ケイスイ　たにのみづ。郭璞詩「——碧悠悠、猿聲斷二客愁一」
【溪壑】ケイカク　たに川の音。蘇軾詩「——便是廣長舌、山色豈非二清淨身一」
【溪泉】ケイセン　たにのいづみ。溫庭筠詩「片時無ㇾ事——好、盡日凝ㇾ眸岳色秋」‖淵泉。
【溪蘇】ケイソ　菖蒲ハナの異名〔花木考〕
【溪亭】ケイテイ　溪に臨めるちん。許渾詩「——四面山」朱熹詩「認取——今日意、四更山月海二波心一」
【溪邊】ケイヘン　たにのほとり。鶴林玉露「出步二——一、邂逅園翁——」問二桑麻一、說二秔稻一」‖溪頭。
【溪毛】ケイモウ　たに間の水藻。謝逸詩「水落——洲」
【溪瀨】ケイライ　たに川のせ。陸游詩「風聲雜二——一雨氣挾二龍腥一」
【溪嵐】ケイラン　たにのぼるもや。白居易詩「——漠漠樹重重、水檻山牕次第逢」
【溪流】ケイリウ　たにがはのながれ。桐汭志「三峯拱二其前一、——抱二其後一」

【滎】㊀ケイ　㊁ケイ　㊀青　㊁庚

㊀古の澤の名、河南ー澤縣に在り。○極めてすこしの水。韓詩外傳「一澤之水、無二呑舟之魚一」㊁ー瀅は波浪の涌きあがる貌。

【源】ゲン　元　原と通ず

○みなもと、河川の流の發する所「發ー」「淵ー」「水ー」○轉じて物事の根本「根ー」「起ー」「基ー」○ーは水のたえまなく流れる貌。轉じて物事のつづく意とす。○圖ゲント四姓の一、嵯峨天皇に出づる者を嵯峨ー氏、清和天皇の孫經基に出づる者を清和ー氏といふ。
【源委】ゲンヰ　本と末と。禮、學記「或原也或委也」原は源。元稹、樂府「敎化從來有二——一必將ㇾ泳ㇾ海先泳ㇾ河」‖原委。
【源究】ゲンキウ　本をたづねきはめる。管子「守二物之終始一、終身不ㇾ竭、此謂二——一」
【源委】ゲンヰ　本と末と。禮、學記「或原也或委也」原は源。元稹、樂府「敎化從來有二——一必將ㇾ泳ㇾ海先泳ㇾ河」‖原委。
【源泉】ゲンセン　○川水の流れ出るみなもと。孟、離婁「——混混、不ㇾ舍二晝夜一」‖泉源。○轉じて物事の起原の義とす。○文義の溯源に喩ふ。蘇軾文「吾文如二萬斛——一、不ㇾ擇ㇾ地皆可ㇾ出」
【源清則流清】ゲンセイスナハチリウセイ　君が正しければ、民も亦正しきに喩ふ。韓詩外傳「君者民之源也、——、源濁則流濁」
【源源而來】ゲンゲンジライタル　水の流れて絕えざる如く斷えずして來る。孟、萬章「欲二常常而見一之、故——」
【源泉】ゲンセン　○川水の流れ出るみなもと。孟、離婁「——混混、不ㇾ舍二晝夜一」‖泉源。○轉じて物事の起原の義とす。○文義の溯源に喩ふ。蘇軾文「吾文如二萬斛——一、不ㇾ擇ㇾ地皆可ㇾ出」
【源流】ゲンリウ　いづみのみなもと。朱熹、觀書有ㇾ感詩「半畝方塘一鑑開、天光雲影共徘徊、問ㇾ渠那得二清如一ㇾ許、爲下有二——一活水一來上」
【源平】ゲンペイ　圖○源氏と平氏と。○源氏は白旗を用ひ、平氏は赤旗を用ひたるが故に紅白の異にいふ「——桃」
【源平盛衰記】ゲンペイセイスイキ　圖四十八卷、二

修天皇の應保年中より、安徳天皇の壽永に至るまで、凡そ二十餘年間源平盛衰の事を記す、信濃前司行長の作といひ、或は葉室大納言時長の作といふ。

【源流】ゲンリュウ みなもとのながれ。詩譜序「欲レ知二一一清濁之所レ由、則循二其上下一而省レ之」

【溝】㊀コウ ㊁コウ 宕 充

㊀みぞ、田の用水、田間の水道。又、道路の旁の下水道。○谷間のながれ「一壑」○しろのほり(城塹)「城一」○みぞをほる。○御一は宮城のおほり。○盧一は川の名。盧一暁月は北京八景の一。‖桑乾河・滹河。㊁おろか(愚)荀、儒效「其愚陋一督」

【溝洫】コウキョク みぞ。林寛詩「霑霈暫二日月一、窮巷変二一一」

【溝壑】コウガク みぞ。たにま。孟、滕文公「志士不レ忘二在二一一一」

【填二溝壑一】カコウガクニマル 命をうしなふといふ謙辞。史、扁鵲傳「無二先生一、則棄捐二一、長終而不レ得レ反」戦國、趙策「及レ未レ填二溝壑一而託レ之」

【溝渠】コウキョ みぞ、下水。曲禮「門園一一必歩」疏「溝、廣深四尺者、渠亦溝也」‖溝瀆。

【溝浅】コウセン 次條に同じ。史、夏紀「卑二宮室一致二費于一一一」‖溝澮。

【溝澮】コウカイ 田間のみぞ。周禮、考工記「匠人爲二一一一」‖溝洫。

【溝洫】コウキョク 田の間のみぞ、洫は小溝。孟、離婁「七八月之間、雨集一一皆盈」

【溝瞀】コウボウ ○溝洫に同じ。楊倞、皇徴賦「風曲一一、高低稲畦」○轉じてみなかの義。南史、孝義傳論「多發二一一之中一、非レ出二衣簪之下一」

【溝瞪】コウトウ みぞと田のうねと。舊唐書、李憲傳「雨水自二五月一至二七月一不レ止、一一漂溺、不レ可レ出レ師」

【溝水】コウスイ みぞのみづ。卓文君詩「一一東西流」

【溝洫】コウキョク みぞのどぶどろ。唐書、李敬玄傳「阻二一一一一莫二能前一」

【溝池】コウチ ○城のほり。禮、禮運「城郭一一以爲レ固」○みぞと、いけと。「仲長統、樂志論」

【溝中】コウチュウ みぞのなか。孟、萬章「若二已推而内二之一一一」

【溝中之瘠】コウチュウノセキ 窮困してみぞにうづもれ死する。說苑「死則不レ免レ爲二一一一」文天祥、正氣歌「分作二一一一瘠」

【溝渠】コウキョ みぞ。爲、說卦「坎爲レ水、爲二一一、爲二隠伏一」

【溝瀆自経】コウトクジケイ 自ら首をしめ、みぞに陥りて死す。論、憲問「豈若下匹夫匹婦之爲レ諒、自二一一、而莫中之知上也」

【溷】㊀コン ㊁コン 元 圏 クワン 諫

㊀にごる(水濁)○みだる(亂)○はづかしむ(辱)漢書、陸賈傳「毋二久一一女爲也」○かはや(廁)「廁一」「圏一」晉書、左思傳「門庭藩一一」○ぶたごや。㊁燉一一は煩はしく濁る貌。又、むすぼれて熱き貌。

【溷軒】コンケン 溷廁に同じ。

【溷辱】コンジョク 心がみだれる。釋例「楚之君臣、最多二一一一」

【溷厠】コンシ かはや。倉就篇「近二一一一者、則被二汙染一」

【溷汁】コンジュウ きたなきしる。北史、祖鑒傳「以二一一一沃二其頭一、令二曳出一」

【溷濁】コンダク にごる。屈原、離騒「世一一而不レ分」

【溷中】コンチュウ かはやのなか。雲仙雑記「投二匿一一一」

【溷屏】コンペイ かはやのかこひ。

【溷餘】コンヨ けがれたるもの。禮、少儀「君子不レ食二一一一」

【溷語】コンゴ 俗わるくち(惡口)

【溷穢】コンワイ にごりけがる。王褒文「洪波退流、必遷二其一一一」‖穢溷。

【滄】サウ 陽

○一浪は川の名、卽ち漢水。‖蒼浪。○うみ(海)あをうなばら「一溟」「一海」○あをあをとして廣し「一茫」○さむし(寒)「一熱」

【滄瀛】ソウエイ おほうみ。李郢詩「風雨来レ予歸二故里一、片帆只欲レ駕二一一一」‖滄溟。

【滄海】ソウカイ ○あをうなばら。李商隱詩「一一月明珠有レ淚、藍田日暖玉生レ煙」‖滄溟。○仙人の居る所の十洲記「一一島在二北海中一(中略)水皆蒼色、仙人謂二之一一一」○郡名、今の東天興東道の地。一說に今の朝鮮の南部。‖蒼海「史記」

【滄海遺珠】ソウカイノイシュ 大海中に取り殘されたる眞珠、世に珍らしき寶の喩。事文類聚「狄仁傑謂二汴州參軍一曰、立本與二其才一日、君可レ謂二一一一矣」

【滄海一粟】ソウカイノイチゾク 大海の一粒の粟にて、殆ど比較の出來ざる極めて微小なる喩。赤壁賦「寄二蜉蝣於天地一、渺二一一一」

【滄海之橫流】ソウカイノオウリュウ 世の變遷に喩ふ。鮫婆傳序「孔子觀二一一一一、乃喟然而歎」

【滄江】ソウコウ ひろきみづうみ。丘爲詩「晨趨玉陛下、心醉一一流」

【滄滄】ソウソウ 寒き貌。列子「日初出一一涼涼」

【滄桑變】ソウソウヘン 滄海變じて桑田となる

る、時勢の甚だしく移りかはる義。神仙傳「麻姑謂三王方平一曰、自二接待一以來、見二東海三變爲二桑田一、向到二蓬萊一、水乃淺於往者一、略少半也、豈復爲レ陵乎、方平乃曰、東海行復揚レ塵耳」

【滄洲】サウシウ ○神仙の居る所、滄浪洲の略。杜甫詩「支離ー一排空闊」○江湖と同義。朝市に對していふ。南史、張充傳「飛二竿釣一ー一」○おなかの水濱。陸雲、晉伯碑「ー一遵レ跡、巢山辭レ位」

【滄然】サウ さむさと、あつさと。說文、段注「周書、周祝解曰、天地之間、有ニーー一」

【滄茫】サウバウ あをあをとして廣き貌。柳宗元、招二海賈一文「ーー無形兮、往來連卒」＝若泥。

【滄溟】サウメイ あをうなばら。武帝內傳「諸仙玉女、聚二居ーー一」＝滄海。

【滄浪歌】サウラウカ 漁父の歌、何事も自然のなりゆきに任すべきをいふ。楚辭、漁父「漁父莞爾而笑、鼓レ枻而去、歌曰、滄浪之水清兮、可三以濯二吾纓一、滄浪之水濁兮、可三以濯二吾足一」孟子、離婁篇にも引きて吾を我に作る。

【滄】サウ シウ 尤 蒸

ーー（サウサウシウシウ）は米をとぐ聲。＝瀏瀏・淅。

【滓】㊀シ ㊁シ 紙 支

㊀かす、おり（澱）沈澱物「沈ー一」「塵ー一」「渣ー一」○けがれ。けがす「垢ー一」㊁くろむ（黑）史、屈原傳「皭然泥而不ー一者也」

【滋】シ 支 通用 ジ

○しける、しげし（蕃）○おほし（多）左、僖十五「象而後有レ」○ふゆ。ふやす。○うるほす。うるほす。まく（蒔）屈原、離騷「余既ー一蘭之九畹兮」○そだつ（生長）書、泰誓「樹レ德務ー一」○ますます（益）左、昭元「其慮ー一甚」ー益と二字連用するも同じ。○にごる（濁）にごす、黑くする。左、襄八「何故使吾水ー一」○しる（液）禮、檀弓「必有ニ草木之ー一焉」○よきあぢ、うまき食物「一味」「一饌」

同訓異語 シゲシ・繁・蕃・稠・茂の別は繁（糸部十一畫）の條を見よ。○又滋・益・增・倍・加の別は益（皿部五畫）の條を見よ。

【滋榮】シエイ しげりさかゆ。草木、喜而詩「蓁レ之必慆悴、惠レ之則ーー」孟郊・贈レ別聯句「嘉植鮮二危朽一、善理易ニーー一」＝繁榮。

【滋液】シエキ しる、やしなひになる汁。司馬相如、封禪書「ーー滲漉」

【滋繁】シハン うるほひやはらぐ。王褒、洞簫賦「吸二重醇之ーー一」

【滋侈】シシ さかんなるぜいたく。左傳「宮室ーー」

【滋甚】ジンシン ますます、はなはだし。宇解參看。

【滋彰】シシヤウ ますます、あきらか。老子「法令ーー、盜賊多有」＝益彰・滋章。

【滋潤】シジュン うるほす。王倍傳文「樊二道單一有ーー一萬類一」

【滋潤】シジュン うるほふ。うるほひ。賈島詩「雨餘ーー在、風不レ起二塵沙一」

【滋殖】シショク しげくふえる。漢書、刑法志「畜藪爲レ相、徠二民之欲一而不二授亂一、是以衣食ーー、到劃用稀」＝滋息。

【滋息】シソク しげりふえる。秦觀賦、山林深其條暢、水土嫗而ーー」＝滋殖。

【滋多】シタ ますますおほし。左傳「信因之資也、民之所レ庇也、得レ厚失レ信、所レ亡ーー」

【滋蔓】シマン ますますわづらはし。晉書、載記「今律令ーー」

【滋繁】シハン しげし。華陽國志「聖德廣被、民物ーー」杜牧詩「柯葉自ーー」

【滋補】シホ からだのやしなひになる。補は補益。＝滋養。

【滋漫】シマン ひろくはびこる。杜甫詩「山色遠寂寞、江光夕ーー」

【滋蔓】シマン しげりはびこる。左、隱元「無レ使ーー一、蔓難レ圖也」

【滋味】シミ あぢよき物。禮、月令「薄ニーー一」

【滋茂】シモ しげる。阮伯琦詩「培植將二百年一、柯葉日ーー」＝繁茂。

【滋養】シヨウ そだてやしなふ「ーー分」莫長庚文「以二佛照餘波一、而ーー其根脚」

【滋養濃腸】シヨウヂヤウ 滋養になるものと腸の中にそそぎ入れて、其の生命をつなぐ。

【滋膜】シマク 滋養分多きもの。南齊書、周顒傳「引二此ーー一、自汙二腸胃一」

【溲】㊀シウ ㊁シウ 有 尤

㊀そそぐ、ひたす、水にて粉類をこねる。＝溲。㊁ーーは米をとぐ聲。○そそぐ、ひたす（注沃）○ゆばり。小便（溺・尿）

【溲器】シウキ しびん、おまる。西京雜記「李陵猥見二匈虜一、卧レ之臨二其衝一、以爲レ枕、示レ服二猛也、皆レ銅、象二其形一爲ニーー一、示レ服二尊之一也」＝溲缶・尿器・虎子・溺器。

【溲疏】シウソ うつぎ、灌木の一、葉は對生、初夏に小白花を著け、黑實を結ぶ。

【溲溺】シウデキ ゆばり。又小便する（放尿）

【溲器】シウキ 溲器に同じ。

【漫便】ベンゆるやか。後漢書 張湯傳「遺失ー一」‖漫漶。

【滜】濕（水部十四畫）の本字。

【滇】シン 因 ○川の名、二あり、一は河南省に在り、一は湖南省に發して廣東省に入る。○ーーはさかんな(盛)る貌。又、おほ(衆)き貌。○いたる(至)漢書、王褒傳「萬舜舉ー」‖臻。○義に通ず。

【滐滐】シン ○多き貌。詩、小雅「室家ーー」○盛んなる貌。班固詩「百穀ーー」○舒ぶる貌。太玄經「陽引而進、物出ーー」

【準】㊀ジュン ㊁セッ 風 ㊀みづもり(水平)水平を測る器。○ひとし(均)○めあて(的)「標ー」「ー的」のり(法)○たひらか(平)○たひらにす。○のっとる(則)易、繫辭「易與二天地一ーならふ(倣)○ただす。○圖准に作り、ゆるす義とす「批准」㊁はなばしら(鼻梁)「隆ー」

【準由】ジュンのっとりよる、法則としてしたがふ。‖準據・依準。

【準據】ジュンキョ のっとり由る。又、よりどころ。‖準由・標準。

【準繩】ジュンジョウ ○平をはかる水もりと、直を爲す繩なはと。孟、萬章「繩レ之以二規矩一ーー」以爲二方員平直一規はぶんまはし、矩はさしがね。○轉じて標準の義とす。

【準則】ジュンソク のっとるべきのり。‖法則。

【準度】ジュンタク ○はかる、計量する。‖料度。○ジュンド準則に同じ。

【準程】ジュンテイ のり、てほん。元史「立レ官置レ吏、萬世ーー」‖法規・法式。

【準的】ジュンテキ めあて。後漢書、賈彪傳「一言一行、天下以爲二ーー一」‖標準・準則。

【準備】ジュン そなへ。宋史、張所傳「以二王彥一爲二都統制一、岳飛爲二ーー一」‖【準備金】ジュンビキン 預ケ入レメ臨時の支出に備へ置く金錢。

【準平】ジュン たひらか。漢書「水爲二ーー一、王道公正修明」

【準例】ジュンレイ 標準とするためし。

【準頭】ジュントウ 相術家の語、鼻の下部の稱。

【澐】シ・ク 風 ーー滅ケツは水波の相つづく貌〔江賦〕

【滷】ジョ・ジュ 因 ○むしあつし、空氣が濕氣を含みて暑し(溽暑)「蒸ー」○あつし(濃厚)禮、儒行「其飲食不ー一」○うるほす、うるほふ(潤)

【滷蒸】ジョジョウ むしあつし。禮、月令、土潤ーー、大雨時行」

【滷莽】ジョボウ しげきつゆ。隋煬帝詩「ーー方霑レ衣」

【潤】セン 因 ○水の動く貌。○ながれはやし。

【溯】ソ 遇 ○さかのぼる、流に逆ひてのぼる。‖遡・泝・洑。○轉じて往事を追思する。

【溯洄】ソカイ 流にさからひて上る。詩、秦風「ーー從レ之、道阻且長」‖遡洄。

【溯源】ソゲン ○みなもとにさかのぼる。○轉じて事の根本をたづねる「天道ーー」

【滔】タウ 豪 ○はびこる(漫)水が大いにみなぎる。書、堯典「浩浩ーー天」○ーーは、大水の貌。又、流れ行く貌。又、亂れる貌。○おこたる(慢)あなどる。左、昭二六「官不ーー」○ひがしのかぜ。○あつまる(聚)莊、田子方「ーー乎前」○ひろし、大いなり。○うごく、うごかす。

【滔滔】タウタウ ○廣大なる貌。詩、大雅「江漢浮浮、武夫ーー」○水の盛んに流れる貌。詩、齊風「汶水ーー」○流れ行く貌。轉じて世の風潮を追ひて行く貌。論、微子「ーー者天下皆是也」○行く貌。東方朔、七諫「年ーー而日遠兮」

【滔蕩】タウタウ 廣く盛んなり。文心雕龍「志不レ出二於ーー一、辭不レ離二於哀思一」

【滔天】タウテン 大水が天にまではびこる。書、堯典「懷レ山襄レ陵、浩浩ーー」

【滔天惡】タウテンアク 天にはびこる程の大惡。一解に天をあなどり畏れざる義。漢書、敘傳「咨爾賊臣、篡レ漢滔レ天」

【滔騰】タウトウ あふれのぼる。淮南子「遵二絕川谷之間一ーー二大荒之野一」

【溏】タウ 陽 いけ(池)ぬま(淖)

【澌】シ 紙 川の名、古の孤水、今沙河と稱

す、河南省海州に在り。

【滀】 チク　屋

○みづあつまる（水聚）○はやし（念）○いきどほりて顏色のむっとしたる貌。

【滀乎】コチク　顏色のむっとしたる貌。色の憤起する貌。莊、大宗師「一一進二我色一也」

【滀滀】チクチク　水のあつまる貌（木華、海賦）

【滁】 チヨ　魚

○川の名、安徽省合肥縣の北より出で和・一二州を經て、江蘇省に至り揚子江に入る。○州の名、唐代に置く、即ち今の安徽省一縣、地一水の陽に當り、山高く水清く、江淮間の勝地たり、宋の歐陽修嘗て此州に知たり。

【滌】 テキ　錫　通音デキ

○あらふ、すすぐ（洒）「洗一」「洗一」○はらふ、けがれをはらひ去る「掃一」○きよむ。○したみざけ。○一一はあつさ（旱氣）又、暖氣。○牲を養ふ室。

【滌罪】あしき點を去る。罪は穢ヲ汚ルレ石」ますます甚だしくする喩。

【滌音】人の心をおぼらす音曲。

【滌死】水に溺れて死する。

【滌佛】佛を迷信する。梁書、武帝紀「武帝、晩溺二信佛道一」

【滌沒】おぼれしづむ。搜神記「船遠行、一一不レ返」‖沈沒。

【滌利】心を利益にのみ專はれる。晉書、宣帝紀「貪二于近一者、則遠レ遠、溺二于利一者、則傷レ名」

【滌器】しびん。後山詩話「以二一一害二生氣一」‖溺皿・溲器・虎子・尿器。

【滌源】あらひきよめる。沈約、解講疏「一一煩惱一棲二情正業一」

【滌洗】あらふ。北史「織負二濁穢一、一一從二一一」‖洗濯・洗滌・滌蕩。

【滌蕩】けがれをすすぐ。晉書、成公綏傳「心一一而無レ累、志離レ俗而飄然」

【滌濯】すすぎあらふ。周禮「宰夫職從二大宰一、既二一一」‖滌洗。

【滌器子】茶の異名。施肩吾詩「茶具二一一」

【滅】 ㊀デキ　錫　㊁デウ・ネウ　嘯

㊀おぼる（水死）○しづむ（沈沒）○たへず。○おぼらす、物事にふけりて心を奪はれる「惑一」㊁ゆばり、いばり、小便。‖尿。○ゆばりする、放尿。史、范睢傳「醉更一睢」

【溺愛】水に死する者を一といふ一は弱、水に弱くして自ら勝つこと能はざる意。

【溺愛】あいにおぼれる。江淹賦「一一一離レ意、魂飛心離」

【溺溺】水におぼれたる者を救ひあげる。鄧析子「一一一錘レ之以レ石」ますます甚だしくする喩。

【溺音】人の心をおぼらす音曲。

【溺死】水に溺れて死する。

【溺佛】佛を迷信する。梁書、武帝紀「武帝、晩溺二信佛道一」

【溺沒】おぼれしづむ。搜神記「船遠行、一一不レ返」‖沈沒。

【溺利】心を利益にのみ專はれる。晉書、宣帝紀「貪二于近一者、則遠レ遠、溺二于利一者、則傷レ名」

【溺器】しびん。後山詩話「以二一一害二生氣一」‖溺皿・溲器・虎子・尿器。

【滇】 テン　先

○漢代の夷の國、今の雲南省地方、故に雲南省を一に一省といふ。○一一は盛んなる貌。漢書、禮樂志「泛泛一一」

【滕】 トウ　蒸

○春秋戰國時代の國名、今の山東省兗州府一縣の地。○みづがわきあがる、騰と通ず。○口を張りて說く。

【滕六】雪の神、異二（巻六二頁四段）を見よ。

【滕王閣】江西省南昌府新建縣の西章江門上に在る閣の名。王勃の序と、王緒の賦と、王仲舒韓愈の記とあり。

【滂】 ㊀ハウ　㊁ハウ・ヒヤウ　庚　陽　通音ハウ

㊀水又は淚の盛んに流れる貌。○水の流れる聲。○潮一は風の物を撃つ聲。○一洋はゆたか、ひろし（闊・廣）㊁水の聲。‖坪。

【滂沱】○雨の盛んに降る貌。詩、小雅「月離二于畢一、俾一一一矣」月が畢星に附くと大雨になる。○淚の盛んに流れる貌。詩、陳風「涕泗無レ容、滂沲一一」

【滂潤】ながあめ。恩澤に喩ふ。閻丘均表「一一時降」‖雨澤。

【滂沛】雨の盛んに降る貌。揚雄、甘泉賦「雲飛揚兮雨一一」

【滂湃】水勢の盛んなる貌。李頎、雜興詩「行人夜渉生暝燭、洞照洪瀾劇二一一一」‖澎湃。

【滂溢】水の流れる聲。司馬相如賦「一一（九派）」

【滂洋】不平にして氣がふさがる貌。馮衍、顯志賦「氣一一而雲披」

【滂沛】水がさかんに湧き流れる。又、其の聲。枚乘、七發「觀二其雨克一、則一一怫鬱」

【滂洋】ゆたかにひろし、盛大なる貌。漢書、禮樂志「一一一、溥洽號」李白、明堂賦「鴻恩一一」

【溟】 ベイ　ミャウ　通音　メイ

○小雨ノ霧がふりてくらし「一濛」○くらし、遠く又深くして薄暗し。○水の色黒き海。又、海の稱。‖冥。○水が激しうごく貌。

【溟涬】メイ　くらし。又、元氣の未だ分れざる貌。論衡、談天「一一涬鴻」

【溟渤】メイ　大海の中に在る島。蓬萊之詩「蓬萊在二一渤海一」

【溟池】メイ　北方の大海。庾信、謝二滕王一啓「一一九萬里、無レ論二此澤之深一」‖北溟。

【溟渤】メイ　南方の大海。李白、玉壺玉詩「一一連二蒼梧一、前臨二蒼梧一」

【溟涬】メイうすぐらき貌。那居實賦「秋風滅滅兮、雲一一」‖冥冥・溟濛。

【溟濛】メイ　こさめふりてをぐらし。又、其のこさめ。張景詩「只因一霎一一雨、不レ得二分明看一好山一」

【溟沐】メイ　こさめ、そぼふる雨。太玄經「密雨一一」

【滅】 ベツ　メチ　厲　通音　メツ

○ほろぶ、ほろぼす「一亡」「殄一」○きえる、けす(火熄)「一息」「消一」○つく(盡)なくなる。○たゆ、たつ(絶)○しづむ(沒)○死する「寂一爲樂」

【滅絕】メツ　ほろびしなくなる。‖滅法界・滅相。

【滅口】メツ　其の事に就きての證言を防がんために之を殺す(史、春申君傳)晉書、后妃傳「后恐二漏泄一、手殺レ之以一レ一」

【滅罪】メツ　佛つみほろぼし、罪惡を除く。

【滅相】メツ　○佛ごふ(業)が盡きて身體の相形が滅亡する。○甚だしく、やたらに。‖滅法。

【滅日】メツ　滅門に同じ。

【滅盡】メツ　ほろびしつくす。又ほろびつきる。‖滅絕・絕滅。

【滅性】メツ　父母の喪に遭ひ哀みて生命を滅ぼす、性は生命。孝經「毀不レ一レ」

【滅絕】メツ　ほろびしつくす。‖滅盡。

【滅多】メツ　國みだりに、やたらに。

【滅道】メツ　佛迷の因果を滅盡する修行。

【滅度】メツ　○佛さとりを開きて生死の苦を滅し、煩惱の海を度るを得、佛果を得る。法華經「得レ至二於一一一」‖得度。○轉じて死をいふ。西陽雜俎「一行和尚一一矣」

【滅亡】メツ　ほろぶ。禮、樂記「國之一一、無レ日矣」‖亡滅。

【滅沒】メツ　きえうせる、ほろぶ。蘇軾、潮州韓文公廟碑「一一倒景不レ可レ記」

【滅法】メツ　○佛人間界の一切の苦を滅す。○國法外に、甚だしく、やたらに。‖滅法界・滅相。

【滅名】メツ　ほまれをなくなす。史、刺客傳「奈何是沒レ身之讐、終滅二賢弟之名一」

【滅明】メツ　暗くなったり明くなったりする。‖明滅。

【滅門】メツ　陰陽道の一一日の略、月に五日ある大凶日、大禍日・狼藉日ニテと共に三惡日とす。‖滅日。

【滅裂】メツ　きれぎれ、はなればなれ、おろそか(末略)「支離一一」莊、則陽「治レ民焉勿二一一一」駱賓王詩「生涯一一一、岐路幾徘徊」

【溥】 ㊀ホ・フ　㊁フ　廣　廣溥と同じ

㊀大いなり。○ひろし(廣)あまねし「宏一」「周一」‖普。㊁しく(布散)遍、祭義「一之而橫二于四海一」

【溥冶】フ　あまねし。漢書、匈奴傳「大化神明、溥恩一一」‖周治・普徧。

【溥敝】フ　ひろくのせる。陸雲賦「淡二厚德之一一一兮、蓋二造化之大造一」

【溥將】フ　あまねく助ける、將は助。詩、商頌「我受レ命一一」一解に將は大。溥大に同じ。

【溥大】フ　大いなり。漢書、朱博傳「廣二家至德一一、宇內萬里」‖溥將。

【溥長】フ　大いにしてながし。詩經「駕公劉、既溥既長」

【溥暢】フ　大いにのびる。宋玉、風賦「夫風者、天地之氣、一一而至」

【溥天】フ　天の地をおほふかぎり。詩、小雅「一一之下、莫レ非二王土一、率土之濱、莫レ非二王臣一」孟子に溥を普に作る。

【溥原】フ　大いにしてひろし。‖廣大。

【溥被】フ　あまねくおほふ。元結、樂歌「類二我聖德一兮、一一無レ方」‖溥施。

【溥施】フ　ひろくおほふ。曹植賦「暢二沈陰一以一一、似二明后之一施一恩」‖溥被。

【溶】 ヨウ　多

○水がさかんなり。○安くゆるる貌。○一然は間暇ィある貌。○國とける、とかす、物質が水にまじりて融解する。固體が液狀に化する。鎔に通用す。

【溶液】ヨウ　固體が液中にとけて雜りたる汁「食鹽水の類。又固體が化して液體になりし者。

【溶解】ヨウ　とける、物が液中にとける。‖鎔解。

【溶媒】ヨウ　他物を溶解するなかだちとなるもの。水・酒精・水銀など。‖溶劑。

【溶溶】ヨウ　ただよふ。蘇軾詩「孤帆信二一一一一非二此中意一」

【滒溶】ヨウ ○水の盛んに流れる貌。杜牧、阿房宮賦「二川一一流入宮渭」二川は、渭水・焚水。○心の寛くゆったりとしたる貌。楚辞、九歌「心一一其不レ可レ量兮」

【溜】㊀リウ ㊁リウ 尤 沼 又溜に作る

㊀したたる。○ながれ。○あまだれおち、簷下の水の滴る處。左、宣三「三進及一一」㊁留。○したたり、しづく。○ながれる。○ひらく(發)㊂流に通ず。○とどまる。㊁留。國○ためる 積もりてふえる。○多人數の集りてかへる室。○ごみため。

【溜飲】リウイン 飲食物が胃中につかへて酸き汁の出る病。胃酸過多症。

【溜出】リウシュツ 蒸溜して液狀になりて器の口からしたたり出る。

【溜水】リウスイ たまりみづ。庾肩吾詩「題門閑一一、錦石鎖二浮橋一」

【溜滴】リウテキ しづく。李商隠詩「照レ庭餘雪盡、映レ溜一一垂」㊁消滴。

【溜池】イケ 園用水などをためて置くいけ。㊁貯水池。

【濂】㊀レン ㊁デン・ネン 豏 豔 豐

㊀中絶えたる小さき水。㊁濂溪。

㊂ねばりつく。㊁黏。㊂ひたす(漬)○一一はうすきこほり(薄氷)

【溜】ワ 麻

くぼむ。㊁窪。

十一畫

【漪】イ 支

なみたつ、さざなみ(小波)「漣一」「論一」「清一」

【漪瀾】イラン さざなみ。瀾は大波。左思、呉都賦「扇二微波一一」

【漪漣】レン さざなみ立つ。さざなみ。晉書、衛恒傳「遠而望レ之、若二翔風拂レ水、清波一一一」㊁漣漪。

【澱】イウ 尤

一一は水の流れる貌。詩、衛風「洪水一一」

【潁】エイ 梗

川の名、河南省登封縣の北なる嵩山より出で、安徽省に至り淮水に合す。

【潁水隠士】エイスイインシ 堯の時、潁水の邊に居りたる隠士許由をいふ。高士傳「許由耕二于潁水之陽一、堯召爲二九州長一、由不レ欲レ聞レ之、洗二耳於潁水一」

【演】エン 銑

○水、長く流る。○かよふ(通)○うるほふ(潤)ながれしみこむ。○ひく(引)○ひろめる(廣)「推一」○のぶ(延)ひきのばす。○しく(布)○意義を廣め說く「一說」㊁衍。○事に先ちて實習する「一習」○行ふ「一奏」「一劇」○滒一は水めぐる(廻曲)貌。

【演繹】エンエキ 推・遵・陳・宣・布・展・舒・申・伸・信・暢・延・紓の別は述(述部五畫)の條を見よ。

【演池】エンチ ひろくめぐり行はる。遠史、貨貨志「兼鋳二太平錢一、新舊互用、由レ是國家之錢、一一城中」㊁演迤。

【演繹】エンエキ ○意義をたづねのべる。中庸、章句序「更五一一作二爲此書一」○實和書譜「講二求其說一一一頗多」○論理學にて一般の原理より特種の事理を推定する法式。歸納の對。

【演技】エンギ 遊藝を行ふ。㊁演藝。

【演義】エンギ ○意義をしきのべて說く。潘岳賦「晉一レ以獻レ說」○史事に據りて稗官小說の書を雜取して敷衍して文を成すもの。三國一一・隋唐一一の類。

【演劇】エンゲキ 演劇に同じ。

【演藝】エンゲイ 公衆の前にて遊藝をする、また其の遊藝。㊁演技。

【演數】エンスウ をしへをのぶ。張正甫文「自二幾隣之一一于中土一、沿將二千餘一」

【演劇】エンゲキ しばゐをする。又しばゐ。㊁歌舞伎・演戲・演伎。

【演錬】エンレン 圖銃の演習をする。

【演算】エンサン 立てたる式に隨ひ、計算して所要の答を得る。㊁運算。

【演史】エンシ 古き事蹟を演べる。古文析義「院本雜劇一一亦此類」

【演習】エンシフ けいこする。けいこ「實地一一」

【演唱】エンショウ のべとなふ。洛陽伽藍記「安二置佛徒一一一大衆數部一」

【演承】エンショウ のべうける。舊唐書、韋思謙等傳贊「子子孫孫、一一餘慶」

【演舌】エンゼツ 口にて己の意見をのべる。㊁演說。

【演說】エンゼツ ○義理をのべひろめてとく。周書、鄭孝穆傳「一一一」○公衆の前にて意見を述べる。㊁演舌。

【演撰】エンセン のべつくる。宋史、律曆志「擇二曆算子弟相從習者一、授二一一之要一」

【演奏】エンソウ 音樂を行ふ。㊁奏樂。

【演題】エンダイ 演說のだいもく。

【演壇】エンダン　演説する者の立つだん。
【演武】エンブ　武藝をけいこする。明、顧其恩、擒茲直首「皇城内、有二小教場一以備二一一一一」
【演漾】エンヨウ　ただよふ。阮籍詩「汎汎乘二輕舟一、一一惟所レ望」

【漚】

㊀オウ　㊁オウ　尤　宥

㊀ひたす（久漬）長き間、水につける。○一藺グサは香氣の盛んなる貌。㊁あわ（泡）「浮一」○かもめ。鷗に通ず。列、黄帝「海上ク人、有レ好二鳥者一」

【漑】

カイ　カイ　隊

○そそぐ（灌・注）流し入れる「灌一」史、河渠書「引二漳水一一鄴」○すすぐ（濯）「濯一」

同訓異字　漑・注・灌・濯・酒・瀉の別は注（水部五畫）の條を見よ。

【漑灌】カイカン　水をそそぐ。詩經、疏「說泉所二以一一一」‖灌漑。
【漑浸】カイシン　そそぎひたす。孔叢、楊柳賦「一一以レ時、日引月長」
【漑田】カイデン　田に水をそそぐ。漢書、溝洫志「引二漳水一（中略）一一四千五百餘頃」
【漑瀉】カイシャ　どう水がそそぎて肥料をほどこすにあたる。漢書、溝洫志「瀉鹵兼二用粳稻一、水道交通、便二於漕輸一、一舉而三利興、歳增二收畝一鍾」

【漢】

カン　㊥

○あまのがは（天河・銀河）「銀一」「雲一」○川の名、陝西省に發源し湖北省漢口に至り揚子江に入る「一水」○をのこ（男子）「好一」「惡一」○朝代の名、劉邦（高祖）秦を滅し一王と爲り、長安に都す、世に西一と稱す、十二帝二百十三年。劉秀（光武）の中興に及び洛陽に都す、東一と爲す、十三帝百九十六年。劉備（昭烈）國を成都に建つるに及び、魏、呉と竝びて三國と稱し、蜀一と爲す、二帝四十二年。又西晉の時、劉淵は山西省に據りて一を立つ。又五代の時、劉知遠のたてたる二世四年間の一。○種族の名、支那の本部の民。滿・蒙・回・藏と合して五族と爲す。○一口は地名、湖北省夏口縣の地。○國支那の義「一文」「一土」

【漢高】カンコウ　漢の高祖をいふ、劉氏、名は邦、字は季、沛の人、寛仁にして大度あり。張蘊古、大寶箴「縱縱漢高、恢二一一一大度一」
【漢語】カンゴ　○支那本土の語音。元史、世祖紀「以二蒙古語一譯二河南一一一譯二編蘆一」○國單字にて成り、主として音讀する語、勉強・忍耐・健康・克己など。
【漢子】カンシ　人を賤めていふ語。北齊書、魏蘭根傳「顯德怒云、何物一一、我與レ官不レ肯レ就」綴耕錄「今人謂二賤丈夫一爲二一一一」
【漢詩】カンシ　○漢時代の詩。○國支那の詩、からうた。和歌の對。
【漢城】カンジョウ　朝鮮の京城の一名、漢江の北にある故。
【漢書】カンジョ　○一百二十卷、後漢の班固撰す、前漢十二代、二百三十餘年の歷史、十二帝紀・八表・十志・七十列傳より成る、史記・後漢書と合せて三史と稱す。‖前漢書・西漢書。○國支那の書物。
【漢籍】カンセキ　○漢時代の書籍。宋書、曆志「遠考二唐典一近徵二一一一」○國支那の書物。‖漢書。
【漢三傑】カンサンケツ　漢の高祖に仕へし、蕭何・張良・韓信の三人。
【漢文】カンブン　○漢の文帝。晉書、范弘之傳「一一襲二弋綈之服一、諸侯猶修」○漢時代の文。○國支那の文章。國文の對。
【漢水】カンスイ　○一百二十卷、後漢の班固撰す、前漢十二代、二百三十餘年の歷史、十二帝紀・八表・十志・七十列傳より成る、史記・後漢書と合せて三史と稱す。‖前漢書・西漢書。○國支那の書物。
【漢籍】カンセキ　○漢時代の書籍。宋書、曆志「遠考二唐典一近徵二一一一」○國支那の書物。‖漢書。
【漢三傑】カンサンケツ　漢の高祖に仕へし、蕭何・張良・韓信の三人。
【漢文】カンブン　○漢の文帝。晉書、范弘之傳「一一襲二弋綈之服一、諸侯猶修」○漢時代の文。○國支那の文章。國文の對。

【漁】

ギョ　㊥

○いさり、すなどり。又、其の業を爲す者、れふし。○いさる、侵し取りて擇ぶなし、むさぼり取る「一色」「侵一」
【漁翁】ギョオウ　すなどりする老いたる人。柳宗元詩「一一夜傍二西巖一宿」‖漁父。
【漁家】ギョカ　れふしの家。‖漁戸・漁荘。
【漁歌】ギョカ　すなどりする男のうた。漁父の歌。韓偓詩「牧笛自由隨レ草遠、一一得意扣レ舷時」
【漁磯】ギョキ　すなどりすべきいそ。李中詩「風靜滑一一一」
【漁具】ギョグ　魚を捕ふる器具。陸龜蒙に一一詩序あり。黄庭詩「釣翁吹二荻畑一葦子收一一一」
【漁火】ギョカ　いさりび、すなどりする爲めにもやす火。張繼詩「江楓一一對二愁眠一」
【漁獲】ギョカク　すなどりして得る。新序「今日一一、食レ之不レ盡、貢レ之不レ售」
【漁月】ギョゲツ　すなどりする人の家。吳業詩「桑麻夾レ岸收二幾匯一、蘆荻成レ林出二一一一」‖漁家。
【漁具】ギョグ　魚を捕るあみ。朱德潤詩「風帆疑捲灘湘雨、黄葦堆レ胸插一一一」
【漁罪】ギョザイ　漁家に同じ、莊はおなや。郭翼詩「花開移レ艇過一一一」
【漁莊】ギョソウ　漁人の家。李棄春詩「鄰白——外」
【漁舍】ギョシャ　すなどりする人、れふし。
【漁子】ギョシ

劉孝綽詩「釣舟蓄二朱鱗一、一一服二冰紈一」

【漁舟】ギョシュウ　すなどりのふね。杜荀鶴、秋宿二臨江驛一詩「一一火影寒侵レ浦、蘆路鈴聲夜過レ山」‖漁船。

【漁人】ギョジン　すなどりを業とする人。‖漁夫・漁者。

【漁者】ギョシャ　れふし。列仙傳「唐高宗時、一一得二青石一」

【漁唱】ギョショウ　漁夫のうたふ歌。陸游詩「空深過二釣船一斷續聞二一一一」‖漁歌。

【漁取】ギョシュ　あさりとる。宋史、朱紱孫傳「吏加二一一一、貓孩知二其弊一、悉悛二除之一」

【漁色】ギョショク　女色をむさぼる。醒、坊記「好德如レ好レ色、諸侯不二下一一レ」

【漁食】ギョショク　人の物をうばひとりて食ふ。漢書、何並傳「以二氣力一一一一閭里一」注「謂二侵奪取レ之若二漁獵一」

【漁征】ギョセイ　水産物の稅。周禮「掌二一一一入二于王府一」

【漁樵】ギョショウ　すなどりする人と、きこりと。王維詩「平明閭巷掩レ花開、薄暮一一乘レ水入」‖樵漁。

【漁船】ギョセン　漁舟に同じ。

【漁答】ギョトウ　魚を捕へるふせご。陸龜蒙詩「一一處處倚二蘆花一、家家下二一一一」

【漁笠】ギョリュウ　すなどりするおやぢ。陸龜蒙詩「一一日水濆吟、殷勤謝二一一一」‖漁父・漁翁。

【漁管】ギョカン　魚を捕ふるあみ。韋莊詩「背レ風開二柴徑一、向レ月展二一一一一」‖漁罟。

【漁村】ギョソン　れふしの住めるむら。

【漁艇】ギョテイ　すなどりする小舟。鄭浩詩「展江湖二清空一、春光集二一一一」

【漁撈】ギョロウ　すなどりする如くうばひとる。漢書、景帝紀「一一二一百姓一、侵二牟萬民一」

【漁艇】ギョテイ　漁舟に同じ。杜甫詩「空濛舴二一一一」

【漁釣】ギョチョウ　魚をつる。史、齊世家「呂尚以二一一一一、奸二周西伯一」好は干に通ず。

【漁笛】ギョテキ　すなどりする人の吹くふえ。杜牧詩「牛歌一一山月上」

【漁歌】ギョカ　漁はすなどり、歌は鳥獸をかる。晉植、廣絕交「晉網一一」‖敗漁。

【漁夫】ギョフ　れふし、すなどりを業とする者。‖漁父・漁者・漁郎・漁叟・漁師。

【漁父之利】ギョフノリ　兩者互に爭ふ間に、他の第三者が其の利をよこどりする義。蚌が蚌の肉を食はんとして貿を夾まれ、互に相爭ふ間に、兩者共に漁父に捕はれたる故事（戰國策）蚌鷸之爭を見よ。

【漁陽摻撾動地來】ギョヨウサンカドウチライ　唐の安祿山が叛旗を翻して攻め來るをいふ。漁陽は地名、幽の都名、今の京兆の東部。白居易、長恨歌「一一、驚破霓裳羽衣曲」

【漁郎】ギョロウ　すなどりする人。許渾詩「兩岸已變新知少、卻伴二一一把二釣竿一」‖漁子。

【漁撈】ギョロウ　魚をとる、すなどりする、撈は水中の物をすくひとる。

【漁利】ギョリ　詐りて利を取る「管子、注」

【滬】　クヮン　㊥

○漫一は測り知るべからず。又、はっきりせず。○曼一は分別なし。

【滬】　ゴ　㊦

○川の名、松江の下流、江蘇省上海縣に在り。‖滬瀆。○轉じて、上海の一名とす。○えり、竹を海べに列べ立てて魚を捕ふるもの（鱉）笘に通ず。

【滬上】コジョウ　㊟上海の異名。單に滬ともいふ。

【滸】　コ　㊦

ほとり、みづぎし（水崖）

【滹】　コ　㊦

一沱は川の名、山西省に發し、直隸省に入りて海に注ぐ。‖呼沱・嘑沱。

【滾】　コン　㊥

○一は水の盛んに流れる貌。‖混混・滾滾。○俗に水を煮て沸かす義とす。○物のころがりて行く貌。

【滾滾】コンコン　水の盛んに流れる貌。杜甫詩「不盡長江一一來」‖混混。

【灌】　サイ　㊥

○ふかし（深）○あざやか（鮮明）○壞れる貌。崔駰、慰志賦「王綱一以陵遲」○折れる貌。○沸の流れる貌。

【漕】　㊀サウ　㊁サウ　㊥　㊦

㊀こぐ、舟をこぎ進める。○はこぶ（水運）舟にて物を運ぶ「運一」○ふねのかよひぢ、水路。㊁衛の邑の名、其の故城の趾は今の河南省滑縣の東二十支那里に在り。

【漕運】ソウウン　船にて物をはこぶ。前書、郭昕傳「一一四百里、關中稱レ之、名曰二富人渠一」

【漕渠】ソウキョ　舟の通ふみぞ。史記「發二卒數萬人一、穿二一一一三歲而通一」‖運河。

【漕溝】ソウコウ　漕渠に同じ。王渾詩「揚旌越二一一一」

【漕穀】ソウコク　穀物をはこぶ。五代史、職官傳「歲一一二百萬石一」

【潜】（センク）　ものを還ぶふね。陳高詩「下邑供二軍食一、何時發二一一一」

【潜艇】（センテイ）　はこぶね。史、平準書「一二一山東粟、以給二中都官一」＝轉漕。

【漿】㊀シ　㊁ライ　支　灰

㊀あわ、口から出す沫（涎沫）　○ながる。○こす。㊁地の名、酇に通ず。

【漬】シ　支　寘

○ひたす、ひたる（浸）「漸ー」　○つく、つける。○そむ（染）○獣死す。○圖つける（醢）鹽・糠・糟などに菜蔬肉類を詰め浸して味をつける。又其のつけもの「奈良ー」「浸ー」

同訓異字　漬・浸・漸・潤・浜・濱の別は浸（水部七畫）の條を見よ。

【漬浸】（シシン）　ひたる。ひたす。南史、孫法宗傳、以レ血漬レ骨、當二悉ー一一」＝浸漬。

【漬墨】（シボク）　よごれてくろくなる。又よごして黒くする。李濱、顧橋賦「危梁蘚剝、ー一蟲穿」

【潪】シ　紙

○流れる貌。○うるほふ（潤）

【瀡】シウ　有

○ゆばり、いばり（溲・小便）○しろみづ、こめしる（淅米汁）

【漱】シウ　宥

○くちすすぐ　うがひす。＝嗽。○あらふ（濯）

【漱玉】（ソウギョク）　玉を漱ぐ、瀑布などの水の散る形容。陸士衡詩「山溜何冷冷、飛泉漱レ鳴レ玉」

【漱濯】（ソウタク）　すすぎあらふ。禮記「士以下皆ー一」

【漱石枕流】（ソウセキチンリュウ）　石にくちすすぎ、流に枕す、まけをしみの強きにいふ。晉書、孫楚傳「孫楚字子荊、才藻卓絶、少時欲二隱居一、謂二王濟一曰、當レ云レ欲レ枕レ石漱レ流、誤云二漱レ石枕レ流、濟曰、流非レ可レ枕、石非レ可レ漱、楚曰、所二以枕一レ流、欲レ洗二其耳一、所二以漱一レ石、欲レ礪二其齒一」

【漱瀝】（ソウレキ）　すすぎあらふ。李華、隱者贊「富春長往、ー一清江」

【漱瀝】（ソウレキ）　すすぎあらふ。史、扁鵲倉公傳、「漱二流腸胃一、ー一五藏一」＝洗濯。

【漆】㊀シツ・シチ　質　㊁セツ　屑

㊀うるしの木、落葉喬木の一、全體樗に似て大きく、秋紅葉して美し、樹幹を傷けて汁を採り、うるしを製す。○うるし。○うるしの如く黒し「ー黒」○俗に數字の七に代用す。○川の名、陝西省より出で渭水に入る。㊁ぬる、うるしをぬる「ー身」㊂ーセツは祭禮に專ら事を致す容。禮、祭義「濟濟ー一然」

【漆園史】（シツエンシ）　莊子をいふ。史、老莊傳、莊子者蒙人也、名周、周嘗爲二蒙ー一」

【漆器】（シツキ）　うるしぬりの器物。事物紀原「韓子曰、舜作二食器一、黒二漆其上一（中略）唐太宗曰、舜作二一一一、而諫者十七人、則器之布レ漆、自レ舜始也」

【漆瓦】（シツグワ）　うるしぬりの瓦。十六國春秋「鄴太武殿皆ー一金環、銀楹金柱、珠簾玉牖」

【漆書】（シツショ）　うるしにて描きし書、うるしぶみ。

【漆工】（シツコウ）　ぬしや。後漢書、申屠蟠傳「家貧傭爲二ー一、郭林宗見而奇レ之」

【漆黒】（シツコク）　うるしの如くくろし。拾萬里詩「去年中秋天ー一、今年中秋月雪白」

【漆瘡】（シツソウ）　うるしまけ　うるしかぶれ。

【漆汁】（シツジュウ）　うるしのしる。蘇軾詩「君家蜂作レ窠、徹底悪ニー一」

【漆身】（シツシン）　からだにうるしをぬる。厲國境、豫讓乃ー一レ身レ厲、吞レ炭爲レ啞」

【漆車】（シツシャ）　黒ぬりの車「周禮、春官、巾車」

【漆者不二畫】（シツシャカクヲ）　一人にて二技を併せ修めざる喩。淮南子「古之爲レ車也、ー一、漆者不レ畫」

【漆書】（シツショ）　古、竹簡にうるしを以て書せしをいふ。佩池筆記「孔壁及所レ得竹簡科斗皆ー一」

【漆宅】（シツタク）　ひつぎ（棺）漆を塗るが故。（清異錄）

【漆桶】（シツトウ）　うるしをけ。漢書、律歴志、註「祝狄如ニー一」

【漆瞳】（シツドウ）　黒きひとみ。蘇軾詩「ー一已照二天上」

【滲】㊀シン　㊁シン　侵　袷

㊀しむ、にじむ。○したむ、こす。○ながれる貌。㊁ひたる。ひたす。＝浸。

【滲淫】（シンイン）　次第にひたる。海賦「滴瀝ー一」＝漸漬。

【滲漉】（シンロク）　もりてかわく。柳宗元賦「九泉魚枯、而四海ー一ル」

【滲漬】（シンシ）　しみてもる。元史、方技張庶傳「無レ陰者誘而以化二甘淡ー一、皆陽藥」

【滲透】（シントウ）　しみとほる。

【滲漏】（シンロウ）　しみもる。耶律楚材詩「破船偏ニー一、流水不レ能レ洗」＝滲漉。

【參差】シン　したたる。司馬相如、封禪書「滋液ー一、何生不ノ育」

【滑】シン　眞

きし、みぎは（水涯）詩、王風「在河之ー一」岸上平かにして下の水の深き所。

【漿】シャウ　陽

○のみもの（飲料）「水ー」孟、梁惠王「簞食壺ー一」○こんず、す（酢）○しろみづ（米汁）又廣く物の汁「腦ー一」○含ー一は蚌ダの異名。

【漿果】シャウクワ　汁多くして顆ノ多きくだもの、葡萄の類。又廣く汁多き果物をいふ。

【漳】シャウ　陽

川の名、山西省より流れ出で、河南直隸兩省を經て運河に合す。

【漵】ジョ　語

うら（浦）杜甫詩「舟人漁子入ー一浦ー一」

【漈】セイ　霽

○みぎは（水涯）○海水の低く陷る處。

【漠】サク　藥　陌

湖の名、安徽省合肥縣に在り。後漢書、明帝紀「ー一湖出ー一黃金」＝巢湖。

【寂】ジャク　錫　寂に同じ

○いさぎよし、きよし（水潔）○しづか、人聲なし「ー一寞」

【漩】セン　先

水めぐる、水がうづまく「回ー一」

【漸】㊀セン・ゼン　㊁セン　㊂サン・ゼン　咸　豏　琰

㊀やっやく、やや（稍）「ー一次」○すすむ（進）次第に進む「ー一進」○きざし（兆）○易の卦の名、艮下巽上。○徐徐と進むこと。㊁ひたす（漬）ぬらす。詩、衛風「ー一車帷裳」○そそぐ、うるほす（濕）○そむ（染）感化する。漢書、董仲舒傳「ー一民以仁」○ーー一は麥の秀づる貌。㊂又、流れる貌。＝嶄・嶄。

漸　㊀漸・進・晉・前・歳・益・勵・奨の別は進（走部八畫）の條を見よ。

○漸・浸・漬・潤・溫・蘇の別は浸（水部七畫）の條を見よ。

○漸・淫・沒の別は淫（水部十畫）の條を見よ。

【漸加】次第に加はり增す。

【漸次】だんだん、次第次第。

【漸漬】次第にしみこむ。史、曹參傳「況中庸以下、ー一ニ于失敎ー一被ニ服于成俗ー一乎」

【漸進】だんだんにすすむ、漸次に進歩する。

【漸潤】次第にうるほふ。傅休奕詩「洪澤所ニー一ー一、隙石爲ニ圭竇ー一」

【漸染】次第にそまり習ふ。後漢書、宦者傳「ー一ニ朝事ー一、頗識ニ典物ー一」＝漸染。

【漸漸】○徐徐に進む貌。楊允孚詩「南國鄕音ー一移」○麥の秀でる貌。史、宋微子世家「○山の石の高く峻しき貌。詩、小雅「ー一之石、維其高矣」○淚の流れる貌。楚辭、九章「涕ー一兮」

【漸臺】漢の武帝の臺の名。漢書、郊祀志「北滔ニ大池ー一ー高二十餘丈、名曰ニ太液ー一、漸とは臺、池中に在りて水に浸さる、故にいふ。

【漸漬】次第に增し加はる。陸游詩「風力ー一帆力便、風摩雲雜風摩犯」

【漸染】次第にそまる。後漢書、顧愷之傳「每食ニ甘蔗ー一、常自ノ尾至ノ本、人或怪ノ之、愷之曰、——」轉じて、文章又は山水などの次第に面白くなるにいふ。＝漸入ニ佳境ー一。

【漸入佳境】次第によくなる。晉書、顧愷之傳「每食ニ甘蔗ー一、常自ノ尾至ノ本、人或怪ノ之、愷之曰、——」轉じて、文章又は山水などの次第に面白くなるにいふ。＝漸入ニ佳境ー一。

【漸民】たみを次第に善に感化する。漢書、董仲舒傳「ー一以ノ仁、摩ノ民以ノ義」

【漸入佳境】次第によくなる。晉書、顧愷之傳「每食ニ甘蔗ー一、常自ノ尾至ノ本、人或怪ノ之、愷之曰、——」轉じて、文章又は山水などの次第に面白くなるにいふ。＝漸入ニ佳境ー一。

【漸染】次第にそまる。後漢書、宦者傳「ー一ニ朝事ー一、頗識ニ典物ー一」＝漸染。

【漸漸】○徐徐に進む貌。楊允孚詩「南國鄕音ー一移」○麥の秀でる貌。史、宋微子世家「○山の石の高く峻しき貌。詩、小雅「ー一之石、維其高矣」○淚の流れる貌。楚辭、九章「涕ー一兮」

【漸臺】漢の武帝の臺の名。漢書、郊祀志「北滔ニ大池ー一ー高二十餘丈、名曰ニ太液ー一、漸とは臺、池中に在りて水に浸さる、故にいふ。

【漸添】次第に增し加はる。陸游詩「風力ー一帆力便、風摩雲雜風摩犯」

【漸民】たみを次第に善に感化する。漢書、董仲舒傳「ー一以ノ仁、摩ノ民以ノ義」

【漸入佳境】次第によくなる。晉書、顧愷之傳「每食ニ甘蔗ー一、常自ノ尾至ノ本、人或怪ノ之、愷之曰、——」轉じて、文章又は山水などの次第に面白くなるにいふ。＝漸入ニ佳境ー一。

【漸】㊀ゼン　㊁ソウ　東　㊂ソウ・ス　虞

㊀水が會する。○ーー一は水の聲。㊁ーー一は疾し。甘泉賦「風ーー一」

【漯】タフ　合

○川の名、山東省在平縣に在り。書、禹貢「浮ニ于濟ー一」○濟ーー一は水のあつまる貌。

【漭】タン　寒　濟と音は別

○露の多き貌。詩、鄭風「零露ーー一兮」○まろし（圓）杜甫詩「玉露ーー一清影」

【滯導】タイダウ　露多き貌。宋史、樂志「白露ー〻」

【漲】チャウ　漾

○みなぎる、水が滿ちあふれる「怒ー」「暴ー」易林「水ー無レ船」○轉じて物の擴張する義に用ふ。

【漲溢】チャウイツ　水がみなぎる。金史、馬諷傳「毎二秋潦一ー一害二民田一、諷視二地高下一、疏二決之一、其患遂息」

【漲海】チャウカイ　南海の別稱。舊唐書、地理志「海路縣南五十里、即ー一、渺漫無レ際」

【漲水】チャウスイ　水をみなぎらす、みなぎる水。李商隱詩「月澄新ー〻、星見欲レ消レ雲」

【漲雲】チャウウン　みなぎるおほなみ。陳子昂詩「黄沙林雨暗、絳ー〻飛」

【滯】テイ　タイ　霽

○とどこほる、物事がはかどらず「遲ー」「停ー」しぶる、とどまる、返留する「一在」「一留」○こりかたまりて通ぜぬ（凝）「凝ー」○つもる（積）「沈ー」○もれる（漏）○ひさし（久）○水がそそぎ散る貌「一沛」

【滯淫】タイイン　久しくとどまる。張華詩「於レ今久ー一」‖留滯。

【滯陸】タイリク　夏時になりても陰氣の滯り伏す義。國語「氣無二ー一、亦無二散陽一」

【滯沛】タイハイ　とどこほりて久しくとどまる。沛は留。韋莊詩「帝里無レ成久ー一、那レ家三度見二新蟬一」

【滯下】タイカ　痢病（ビヤウ）

【滯碍】タイガイ　とどこほりさしつかへる。杜甫詩「衆レ心誠二本原一、子レ事少二ー一」

【滯貨】タイクワ　たなざらし、うれのこりの品物の類。杜子「揚州萬ー一」

【滯固】タイコ　こり固まりて通ぜず。後漢書「守文之往、ー一所レ宜、異論紛紜、互相激發」‖凝滯。

【滯獄】タイゴク　裁判の判決がとどこほる。南史、梁始興王憺傳「曹無二留事一、下無二ー一」‖積案・滯訟。

【滯在】タイザイ　ながく他所にとどまる。‖淹留・滯留。

【滯想】タイサウ　とどこほりて通ぜざるおもひ。韓愈物書、疏食連二道傾一、消愁遣二ー一」‖滯念。

【滯積】タイセキ　一方にとどこほりたくはへる。左傳「國無二ー一、亦無二困人一」

【滯訟】タイショウ　滯獄に同じ。

【滯穂】タイスイ　とりもらしたる穂、落ほは漏。詩、小雅「此有二ー一」

【滯悪】タイヲ　とどこほりふさがる。詩經、疏「不レ使二其水一有二ー一」‖常時通流」

【滯溜泥泥】タイリウデイデイ　こりかたまりて通ぜず。陸象山語錄「凡事莫二如レ此ー一」

【滯納】タイノウ　をさめ入れるべき稅金などを期限までにをさめず。‖怠納。

【滯念】タイネン　とどこほりてはれぬおもひ。陸機詩「感感多二ー一」‖滯想。

【滯伏】タイフク　とどこほりしづむ、とどこほりてはかどらず。呂覽「書傳唐氏之始、陰多二ー一而湛積」‖沈滯・滯塞。

【滯務】タイム　とどこほれるつとめ。杜甫詩「相公須二憂國一、ー一莫レ一掃」

【滯悶】タイモン　とどこほりもだえる心。蘇軾詩「親二此瓦派注一、頓覺二ー一瘳」

【滴】テキ　錫

○したたり、しづく「涓ー」「點ー」「殘ー」「餘ー」○したたる、水たまが落ちる。

【滴瀝】テキレキ　のきにしたたるしづく。范成大詩「疎疎密密ー一聲」‖簷滴。

【滴水】テキスイ　みづをしたたらす。したたるみづ。周最詩「徒旨ー一能穿レ石、其奈二堅貞匪石心一」

【滴蟲】テキチウ　一滴の水に無數に棲息する微細の動物。原生動物中の纖毛・鞭毛二蟲の總稱。‖毛蟲。

【滴滴】テキテキ　しづくが續きてしたたる貌。李商隱、新鶯得レ雨詩「甘青ー一是精誠、晝夜如レ絲一尺強」

【滴瀝】テキレキ　水がしたたる。拾遺記「崑崙山、甘露滴瀝似レ雨、著二草木一、圓ー一如レ珠」‖漏滴。

【滴露】テキロ　したたるつゆ。羅隱詩「砌竹搖レ風直、庭花ー一レ雨疎」

【滸】バウ　マウ　養

○ひろし、水の廣き貌「渺ー」又、原野の遠く廣き貌。司馬相如、上林賦「過二乎泱ー一之壄一」○とほし。○ほのぐらし。謝朓詩「晨光復泱ー」

【滸流】バウリウ　廣大なる貌。張衡賦「滄池ー一」‖滸滸。

【滸滸】バウバウ　水の廣く遠き貌。宋玉、高唐賦「涉ー一、驅二莘莘一」

【滸浪】バウラウ　廣大なる貌。家語「使二齊遣二戰於ー一之野一」‖滸滸。

【漠】バク　藥

○すなはら「沙ー」「磧ー」古、幕と通ず。○ひろし（廣莫）廣くしてはてなし。ぱっとしてとりとめなし「空ー」○きよし（清）○しける（茂）○さびし「寂ー」‖寞。○淡ー・恬ーはしづかなる貌。○ーーは布き列る貌。○くらし、ぼんやり「濛ー」

【漠然】バクゼン　ぼんやりとして明かならざる貌。淮南子「聖人內修二其本一、而不レ外飾二其末一、一一無レ爲而無レ不レ爲也」

【漠南】バクナン　大漠の南、即ち內蒙古、次條參看。

【漠北】バクホク　支那と沙漠の北方の地。⇔漠南・外蒙古。

【漠漠】バクバク　○ひろびろとしてはてなき貌。王維詩「一一水田飛二白鷺一」○布き列る貌。陸機詩「街巷紛一一」○布き散る貌。謝朓詩「生レ烟紛一一」○晴き貌。杜甫詩「干戈塵一一」一解に合ふ貌。○靡なき貌。荀子「解蔽」「聽二一一一而具爲二冺冺一」

【漫】

㊀バン・マン　㊁ボン・マン　俗字

㊀ひろし、大水の際涯なき貌。嚴維詩「柳塘春水一一」○はびこる。○やぶる（敗）○あまねし（徧）○ほしいまま、きままし（放）しまりなし「散一」「汗一」○たひらか。○ちる（散）○ぬる。⇔墁。○とほし。○一一は雲の色の美くしき貌。又、長く遠き貌。○いつはり（欺）○みだりに、そぞろ、あてもなく。㊁水の廣大なる貌。○みつ（滿）蘇軾詩「桃李一一山總粗俗」○一一は夜の長き貌。又、たひらか、とほし。

【漫遊】マンユウ　所所をぶらぶらと遊びめぐる。元結詩「一一無二遠近一」

【漫汗】マンカン　○はてなく廣き貌。張衡賦「布濩一一、瀺灂洋溢」○しまりなき貌。⇔汗漫。

【漫畫】マンガ　○折にふれてそぞろにえがく畫。いたづらがきの畫。又、滑稽風刺の畫。○島の名、「らさぎ（兎）」

【漫語】マンゴ　すれやぶれて分明ならざる貌。蘇軾詩「開書已一一」漫一に憂に作る。○漢書、揚雄傳「爲二其泰侈靡一而不レ可レ知」

【漫言】マンゲン　深く考へずに言ふことは、そぞろごと。⇔漫語・泛言。

【漫語】マンゴ　漫言に同じ。梁武帝文「不レ得二空作一一一」

【漫漫】マンマン　はっきりとせず、ぼんやり。白居易詩「書壁錦一一」⇔爛。

【漫爛】マンラン　みだりなる貌。陸游詩「投レ老宦遊眞一一、平生懷抱固超然」

【漫誌】マンシ　ひろくひたすら。書經、疏「溥者、一一之名」

【漫漶】マンカン　腐くして滅し。宋史、河渠志「一一沮洳、費レ工尤多」

【漫然】マンゼン　何となくそぞろに。

【漫罵】マンバ　みだりに人をののしる。

【漫筆】マンピツ　そぞろがき。⇔漫錄・隨筆。

【漫評】マンピョウ　そぞろなる批評。

【漫浪】マンロウ　○際涯なき貌。李白詩「上瞰二蒼蒼一下覆二一一一」○夜の長き貌。寰宇記、飯牛歌「長夜一一何時日」○水流の長き貌。劉長卿詩「春山無レ限水一一」○路の長く遠き貌。潘尼詩「路一一其修遠兮」○雲の色の美くしき貌。倚青、大傳「卿雲爛兮、縵一一兮」

【漫滅】マンメツ　すれきえて明かならず。後漢書、蔣濟傳「刻字一一」⇔漫漶。

【漫浪】マンロウ　定まりし職業もなくぶらつきてゐる、浮浪。又其の者。蘇軾詩「蒙恩三百頃、一一散二窮愁一」⇔散漫放浪。

【漫漫】マンマン　はるかにして限りなき貌。韓愈、送二鄧尚書一序「一一不レ見二蹤跡一」

【漫録】マンロク　そぞろがき。⇔漫筆。

【滿】

㊀バン・マン　㊁ボン・モン　早　唐

㊀みつ、みたす（充・盈）いっぱいになる。○まんまるくなる「圓一」史、日者傳「月一必虧」○あふる（溢）たる（足）○ほこる、おごる。魯語「其一之甚也」○一洲は地名、秦天吉林黑龍江三省の總稱。㊁もだゆ、わづらふ。⇔懣。

同訓異義　滿・盈・充・實・塞・塡○滿はいっぱいにみつるなり。缺の反、滿月と用ふ○盈は器にみつる義、滿に同じ、但、だんだんにみちゆく意あり。○充は末末端端までゆきわたりみつるなり、皮膚充實の類。○實は虛の反、中にしかと實の入りたるなり。孟子、倉廩充、府庫實」○塞は塡なり、物につめをして、一つぱいにふさぐ意、實に近し。○塡は足らぬところをうめるなり、閑に作る。同じ。文選「閑二城溢一郭」

【滿溢】マンイツ　みちあふれる。漢書、溝洫志「一日之間、井竈夜增、江河一一」

【滿員】マンイン　定員にみつ。論衡「其器二文吏一也、備レ數一一」

【滿盈】マンエイ　十分にみち足る。陸佃文「在二臣庸劣一、久知二一一一」⇔盈滿。

【滿籠】マンロウ　かご一つぱい、籠は三四斗を容れる竹かごの漢書、平賢傳「遺二子黃金一一一、不レ如二一經一」

【滿悅】マンエツ　十分なるよろこび。

【滿筵】マンエン　席にみつ。晉書、劉惔傳「賓客一レ、文案盈レ几、遠近書記、日有二數千一」

【滿堂】マンドウ　のきいっぱい。張耒詩「朝日一一雞犬靜」

【滿園春】マンエンシュン　けしの花の大いなるもの。王世懋、花疏「罌粟花最華、又有二一種一小者、曰二漢美人一、大者曰二一一一」

【持レ滿】ジマン　○十分に滿てるを持ちこたへる。韓詩外傳「子路曰、敢問二一一有レ道乎」○弓を十分に引き

しぼる。史、李將軍傳「擬乃一レー卑發」

【引レ滿舉レ白】ハクヲアグ　なみなみと酒をつぎたる杯をひきて飲む。白は杯。〔漢書、紘傳〕

【引レ滿】ヒキマン　○なみなみとつぎし杯を引きて飲む。漢書、紘傳「一レー退レ白」○十分に弓を引きしぼる。漢書、李廣傳、注「注二矢於弓弩一而引二滿之一」‖持レ滿。

【滿架】マンカ　たな一つぱい。〔唐詩〕「一ー薔薇一院香」〔一本に滿と一と地を易ふ〕

【滿假】マンカ　意滿ちて自ら大いなりとしておごる。假は大。書、大禹謨「克勤二于邦一、克儉二于家一、不二自ー一」

【滿開】マンカイ　十分に花が開く。

【滿街】マンガイ　町ちゅう。〔韋莊詩〕「ー一楊柳絲絲綠」

【滿花】マンカ　ちまたにみつ。〔元稹詩〕「妓樂當ー一唱、兒童ー一傳」

【滿腔子是測隱之心】マンカウシコレソクインノココロ　側隱はあはれと思ふ心の深き義。身中に仁愛の心の滿つるをいふ。宋の程顥の語。

【滿腔子都是春意】マンコウシスベテシュンイ　身中に春の氣候の如き和氣の滿てるをいふ。程顥の語。

【滿干】マンカン　潮汐のみちひ。

【滿岸】マンガン　きし一ぱい。李嶠詩「泉如二珠淚一後レ增滿、花似二紅粧一ー一悲」

【滿俸】マンポウ　灰白色を帶びたる一種の金屬、質硬くしてもろし。英語の香港。

【滿飾】マンショク　祝意を表するため軍艦を旗幟電飾などにて美くしくかざりつける。

【滿期】マンキ　期限がみちる。

【滿望】マンボウ　かご一つぱい。王褒詩「秋胡始倚レ馬、羅敷未レー一」

【滿胸】マンキョウ　むね一つぱい。委宛子「智能レー之人、宜レ在二王閨一」‖充胸。

【滿願】マンガン　國日數を限りて神佛に願だてしたる其の日數がみちる。

【滿月】マンゲツ　○陰曆十五夜の月。張九齡詩「思レ君如ニー一、夜夜減二清輝一」○子をはらみて十ヶ月に滿つる〔通俗編〕○子生れて一ヶ月に滿つる。北史、節義傳「時式子素、生始ー一」張籍詩「幼子初生纔ー一」

【滿座】マンザ　次座に通ず。梅林玉窓「ー一失レ色」

【滿堂】マンドウ　○座いっぱいの衆人。全席。詩話「忽發二狂言一驚ニー一」○人又は物が座にあふれる。鮑照詩「綠竹徒ー一、受人不レ解レ顰」

【滿載】マンサイ　十分にのせる。李白詩「多酤新豐醞、ー一刻漢船」

【滿作】マンサク　國穀物が十分みのる。「豐年ー一」‖豐作。

【滿耳】マンジ　みみにいっぱいになる。漢書、郊祀志「聽二其言一洋洋レー」

【滿紙】マンシ　かみ全面。陸游詩「揮レ灑拾得殘詩稿、ー一風鴉字半斜」

【滿洲八旗】マンシュウハッキ　清の太祖の時設けたる兵制、一旗の兵數七千五百人、皆各異りたる色の旗を有す。

【滿身】マンシン　からだ一つぱい。陸龜蒙詩「憂後不レ知明月上、ー一花影倚レ人扶」

【滿身是膽】コレタン　全身に膽力の充ちたる義。蜀志、趙雲傳、注「子龍一身都是膽也」子龍は雲の字。‖單身是膽。

【滿酣】マンカン　十分に酒をくむ。劉克莊詩「野有二黃花一且ー一」‖滿酌。

【滿城風雨近二重陽一】マンジョウフウウキンチョウニ　城中に風雨が滿ちて、最早九月九日の節句に近づく。宋の潘大臨此の句を得たる時、忽ち赦書の至るありて折角の興を敗りし故事〔詩話總龜〕

【滿酌】マンシャク　杯に一つぱい酒を酌む。西陽雜俎「命レ吏ー一」‖滿斟。

【滿斟】マンシン　おとしあなにみつ。左傳「玉有二積惡一、流血丹レ野」

【滿足】マンソク　十分にみち足る。南齊書、皇敬兒傳「意知ー一」

【滿堂】マンドウ　ざしきぢゅう、ざしきいっぱい。老子「金玉ー一、莫二之能守一」

【滿堂春色】マンドウシュンショク　桃の一大枝をいふ。米芾畫史「徐熙桃一枝謂二之ー一」

【滿地】マンチ　地面いっぱい。

【滿秩】マンチツ　初任の官吏、初めの一年間は、試補として全俸を受けず、一年に滿つれば全俸を受くるをいふ。漢書、平帝紀「賜二天下民爵一級、吏在レ位二百石以上、一切ー一如レ眞」

【滿場】マンジョウ　ばしょいっぱい。

【滿貯】マンチョ　いっぱいにたくはへる。鄭俠詩「眼前突兀雙玉瓶、ー一玉液清冷冷」

【滿廷】マンテイ　朝廷に列るすべての人人。‖滿朝。

【滿朝】マンチョウ　滿廷に同じ。

【滿潮】マンチョウ　みちしほ。

【滿天】マンテン　そらいっぱい。許渾詩「ー一風雨下二西樓一」

【滿天下】マンテンカ　天下のこらず、世界ぢゅう。‖全世界。

【滿點】マンテン　規定の點數にみちる、全點。

【滿招レ損】マンハソン　物は十分にみつれば缺ける。書、大禹謨「ー一、謙受レ益、時乃天道」

【滿幅】マンプク　きれはばの全體。陸游詩「阿翁舉レ書朗ーレー、阿翁學レ詩驚轉レ木」

【滿腹】マンプク　腹いっぱい。莊、逍遙遊「偃鼠飲レ河不レ過ニー一」‖滿腔。

【滿眸】マンボウ　滿目に同じ、眸はひとみ。

【滿面】マンメン　かほ一つぱい。韓愈詩「風霜ー一無二人識一」

【滿面春風】マンメンシュンプウ　顏一つぱいに溢れんばかりの喜〔王實甫、麗春曲〕

【滿目】マン　○目いっぱいにみちる。沈約、與二約法師一書「晉容一レ、言笑在レ耳」○みわたすかぎり。王維詩「一一望二雲山一」‖極目。

【滿門】マン　門にみつ。漢書、朱博傳、九卿賀客一レ、欲二仕宦一者滿レ門」

【滿艦】マン　かどにみつ。宋徽宗詩、承業者肯貽一レ」

【滿路】マン　みち一つぱい。東京夢華錄「五陵年少、一一行歌」

【滿了】ノウ　所定の事柄が結了する。

【滿洲】シウ　欺き誣ひる。漢書、谷永傳「一一誣レ天」

【滿】ヒウ　尤

水の流れる貌。

【滿】ヒツ　質

○わく。泉のわき出る貌。‖瀎。○一弗は盛んなる貌。

【漂】㊀ヘウ　㊁ヘウ　嘯　㊂ヘウ　嘯

㊀ただよふ、さまよふ、ながれうかぶ（浮）「一流」「浮一」書、武成「血流一杵」○うごく。うごかす（動）○劉一ハはさむし（寒）又、すずし（涼）○ひるがへる。ひるがへす。‖飄。○一一は高く飛ぶ貌。○一然は高く漬き貌。○軽き貌。○一疽ハウはできもの。‖瘭疽。○しのぐ（凌駕）㊁さらす、水中にて絮タクを擣ちて白くす「一白」史、淮陰侯傳「竟一数十日」

【漂搖】ヘウ　ただよはしうごかす。ただよひうごく。詩經「風雨所一一」王安石詩「一一五城舟」

【漂寓】グウ　さすらひて他郷にすむ。杜甫詩「伏枕聞二別離一、臨能忍一一」

【漂練】レン　綿を水にてさらす。黃庭堅詩「練レ一一草江寒」

【漂散】サン　ばらばらと亂れ散るあられ。枚乘、七發「多則烈風一一」

【漂失】シツ　ながれうせる。‖流失。

【漂沒】ボツ　ただよはしひたす。晏子「有二大水一一二宮館一、萬物不レ成」

【漂滅】メツ　ただよひうるほふ。管子「鄉人雖レ遇二一一一、而莫二之怨一也」

【漂杵】シヨ　たてをただよはす、激戰して流血の多きにいふ。書、武成「血流一レ、一戈衣、天下大定」

【漂說】セツ　ねなしごと、うきたるはなし。漢書、敘傳「亡命一一、羈旅騁辭」

【漂旋】セン　所定めずただよひめぐる。李賀詩「一一弄二天影一」

【漂蕩】タウ　○水害にて財產をながされる。南史、齊廢帝紀「調二遇レ」水資財一一者、今年調稅」○所定めずさまよふ。陳游詩「此身一一等二流

槎一、又向二江村一泛二淺事一」‖漂泊。

【漂著】チヤク　ただよひて岸につく。

【漂鳥】テウ　食物をたづねて居所をかへる鳥、鴛・啄木鳥の類。

【漂白】ビヤク　水又は藥品などにてさらして白くす。

【漂白粉】ビヤクフン　さらしこ、石灰と鹽素とにて造る、植物性の物の色ぬきに用ふ。

【漂泊】ハク　水にただよふ、所定めずさすらふる義。庾信賦「下一一、高橋羈旅」杜甫詩「即今一一干戈際」‖飄泊・飄蕩。

【漂浮】フ　ただよひうかぶ。

【漂漂】ヘウ　高く飛ぶ貌。史、賈誼傳「鳳一一其高逝兮」‖飄飄。

【漂母】ボ　綿を水にうちさらす女。史、淮陰侯傳「信至レ國、召二所一漂母一一と

【漂沒】ボツ　ただよひ沈む。史、西門豹傳「水來一一」

【漂沫】マツ　あわをただよはす。ただよへるあわ。與謝、海賦「颺二波於萬里之間一一一於扶桑之外一」

【漂流】リウ　○所定めずしてさまよふ。蘇軾詩「一一二十年、始悟萬族虛」‖漂泊。○風波の爲めに吹き流される。

【漂淪】リン　おちぶれ衰へる。孟郊詩「大雅難二其陳一、正聲勿一一一」‖飄零。

【溯】㊀ソ　㊁サク　遇　㊂ソ　遇

㊀さかのぼる。㊁水の激して撃つ聲。

【溯洄】クワイ　水のはげしく撃つ聲。汪克寬賦「聲淪一洄滿耳一一」

【溯洄】クワイ　水の相撃つ聲。郭璞、江賦「鼓二唇舌一以一一」

【溯】ヤウ　篠

水の疾く流れる貌「一汨」

【溯】ミツ　質

○ただよふ（漂流）ただよはす、水の搖動スルする貌「搖一」「蕩一」‖瀎。○ながし（長）○川の名、陝西省に在り、漢水の源。

【溯水】スヰ　ただよへるみづ。王建詩「沙溯一一閑新粉、綠野青旗一色酣」一說、始めて山を出たる泉。

【溯碧】ヘキ　みどりの色をただよはす。王勃賦「花鳥添レ紅、煙魚一レ一」‖溯碧。

【溯溯】ソク　○ただよふ貌。張籍詩「一一南潤水」‖汎汎。○水の動く貌。温庭筠詩「花風一一吹二細光一」

【漓】リ　支

○しむ、しみこむ（滲）漫染す

る。○かろし、うすし（薄）「漓―」‖醨。○淋―リン は雨の聲。又、したたる貌。

同訓異字 シツ 滴・薄・漉・葬・倫の別は雨（艸部十三畫）の條を見よ。

【漾】 ㊀ レウ 遥 ㊁ リウ 尤 ㊂ レキ 錫

㊀清く深し。○流れる。○寂―は高く遠き貌。㊁水清き貌。‖劉。㊂―然ゼンは變化する貌。韮、知北遊「油然―然」

【漣】 レン 先

○さざなみ（小波・細波）風、水上を行きて文アヤを成す「―猗」「微―」○さめざめと涙を垂れる貌。

【漣洏】レンジ さざなみ、さざなみ立つ。猗も漣。詩、魏風、河水清且――」

【漣如】レンジョ 涙の垂れる貌。易、旅卦「泣血――」‖泫然。

【泫漣】ケンレン 涙がながれおつ。班彪、北征賦「汝――而霑レ衣」

【漣漣】レンレン 涙の垂れる貌。詩、衛風「泣涕――」‖潸然・泫然。

【漏】 ロウ ル 宥

○もる、もらす（泄）水がもれる。○秘密の事が世間に知れる。○わすれる（遺・忘）○手ぬかり「疎―」「遺―」○宝の西北隅、奥まりてくらき處。中庸「尚不愧于屋―」○みづどけい（水時計）底にあなのある壺に水を入れ、中に漏箭即ち目もりしたる矢をたて、底より水のもれ出る度を示さしめて時刻を計るもの「一刻」「夜―」○あな（穴）すき（障）○病名「痔―」

【漏屋】ロウオク 雨のもるやぶれや。荀、儒效「彼大儒者雖レ隱二於窮閭一―、無二置錐之地一而王公不レ能二與レ之爭一名」

【漏決】ロウケツ 水もれてくづれやぶる。班固、奏旨「隄防周起、障塞―レ、有レ似二夏后治水之勢一」

【漏戸】ロウコ 戸籍にもれたる家。通典「魏道武詔採二訪―一、令レ繪二輪納一」

【漏壺】ロウコ みづどけいの水を受けるつぼ。蘇軾詩「夜長耿耿漏二―一」

【漏鼓】ロウコ 時刻を報ずるつづみ。唐書、百官志「凡夜漏盡、擊二―一而閉」

【漏刻】ロウコク 水時計。續漢書「孔壷爲レ漏、浮箭爲レ刻、下レ漏數レ刻以考二中星晝明星一」劉長卿詩「青瑣幽深―一長」

【漏巵】ロウシ 酒のもる杯。大酒の人を稱す。洛陽伽藍記「京師士子見二王肅一飲一斗、謂爲二―一」

【漏失】ロウシツ もれうしなふ。後漢書、律暦志「未初效驗、無レ所二―一」

【漏水】ロウスイ 水時計のみづ。李白詩「銀箭金壺―一多」

【漏聲】ロウセイ 水時計の聲。杜甫詩「五夜―一催二曉箭一」

【漏泄】ロウセツ もれる。もらす。易、繫、疏「若其不レ密而―一」‖漏洩。

【漏洩】ロウセツ 前條に同じ。

【漏船】ロウセン 水のもるふね。呉子「其善將者、如下率二―一之中一而坐中燒屋之下、使二智者不レ及レ謀、勇者不レ及レ怒」

【漏箭】ロウセン 水時計の壺の中に立てる目盛りの矢。周禮、疏「漏之箭、晝夜共百刻」

【漏脱】ロウダツ もれおちる。南史、吳喜傳「一見即寫、無レ所二―一」

【漏天】ロウテン 雨の多きをいふ。華陽國志「涪縣縣上當二天井一、故多二雨潦一、今諺云、天無二三日晴一、又目レ之爲二―一」

【漏點】ロウテン 水時計の水が滴り落ちる。辛棄疾詩「莫下向二禪頭一聽中―一上」

【漏斗】ロウト 酒・醤油などを漏利などに入れるに用ふる牽牛花狀の具、じょうご。三才圖會、―一鈎升者出二入僅伯二之器一」僅伯は酒の異名。

【漏板】ロウバン 時刻の知らせに撃つばんぎ。李賀詩「七星挂レ城闕二―一」

【漏蹄】ロウテイ もれあらはれる、露顯する。後漢書、蔡邕傳「事遂―一」‖漏泄。

【漉】 ロク 屋

○したむ、こす（濾）○つくす（竭）○圖 紙をすく。‖抄。

【窪】 ワ 麻

○くぼむ。くぼみ（窊）○牛の蹄の跡のたまり水。

十二畫

【澔】 浩（水部七畫）に同じ。

【澉】 カン 感 ゴウはあらふ（洗濯）

【澗】 カン ケン 諫 刪 硎に通ず

○たにみづ、たにがは「幽―」「溪―」山と山とが水を夾むむ。○川の名、河南澠池縣に出で洛水に入る。

【澗阿】カンア たに川のくま。范攄詩「白日滿二―一」

【澗窠】カンカ たにがは。蘇軾、虎丘寺詩「陰風生二―一、古木鳴二寒井一」‖澗溝。

【澗鳧】カンフ たにがは。孤士を樓ましめたるをはづ。孔稚圭、北山移文「林壑

無ン盡、ー一不ン歇」

【澗雪】カンセツ　たに川のひびき。謝元帝詩「歌清陰ニー一、舞影向ン池生」

【澗路】カンロ　たにがは。左、隱三「ー一沼沚之毛」‖溪流・澗壑・澗谷。

【澗覓】カンベキ　たにまに現はれるにじ。楊萬詩「行行踏ニー一」

【澗戸】カンコ　谷間にある家。盧照隣詩「ー一無ニ人跡ニ山窗聽ニ鳥聲ニ」

【澗谷】カンコク　たに。南史、陶弘景傳「每レ經ニー一、必坐ニ臥其間ニ」‖澗壑。

【澗泚】カンシ　たに川のなぎさ。范悴詩「碧草緣ニー一、青蘿社ニ雲龕」

【澗水】カンスイ　たにの水たまり。穆惠洪詩「春風綿ニ夕陰ニ雌鳧飲ニー一ニ」

【澗壑】カンガク　たに川のおと。溫庭筠詩「湍玉無ニ林色ニ喧餘有ニー一ニ」

【澗泉】カンセン　たにのいづみ。溫庭筠詩「一笈負ニ山藥ニ兩瓶攜ニー一ニ」

【澗底】カンテイ　たにがはのそこ。韋應物詩「ー一來ニ荊薪ニ歸來煮ニ白石ニ」

【澗畔】カンパン　たに川のほとり。宋之問詩「羅羅ーー草、青青山下水」‖澗邊・澗側・澗陲。

【澗飯】カンパン　たに川の水の香。溫庭筠詩「ー一添ニ仙曲ニ巖花借ニ御香ニ」

【澗屏】カンヘイ　たにがはのくま。張羽詩「結レ屋臨ニー一ニ」‖澗阿・澗曲。

【滽】キ　支

川の名、山西蒲州府に至り黃河に入る「ー汭」‖嬀。

【滮】キョウ　篠

○水の疾き聲。水の流れる貌。○ーーは附和雷同する。詩、小雅「ーー訛訛」又、善からざる貌。又、喊をつつしみ勤めず。

【潰】クヮイ　隊

○つひゆ、くづれる（旁決）つぶれる。○もる（漏）漢書、文帝紀「大水ー出」○みだる（亂）○ちる（散）ちらす。○戰にまけてばらばらになる。○とぐ（遂）○いかる（怒）○ー瘍ククヮイ　は水勢の激する貌。

【潰圍】クヮイヰ　敵の圍を破る。史、項羽紀「願爲ニ諸君ニーレー、斬ン將刈レ旗」

【潰港】クヮイカウ　つひえあふれる。漢書、溝洫志「ーー橫流」

【潰潰】クヮイクヮイ　亂れる貌。詩、大雅「ーー回レ遹」‖憤憤。

【潰決】クヮイケツ　くづれる。蘇軾文「江河ーー、百川騰溢」‖決潰。

【潰敗】クヮイハイ　つひえて兵がちりぢりになる。世說「戰敗、軍人ーー、逃ニ走山澤ニ」

【潰出】クヮイシュツ　くづれいづ、岸がきれて水があふれてる。漢書、文帝紀「大水ーー」

【決ニ潰水於千仞之隄ニ】クヮイスイヲセンジンノテイニケッス　勢烈しく、當るべからざるに喩ふ。淮南子「善用レ兵者、如レ決ニ潰水於千仞之隄ニ」一說、決潰と連讀す。

【潰走】クヮイソウ　くづれはしる、敗れてにげる。‖敗北・敗走。

【潰瞎】クヮイカツ　やぶれくづれる。趙絕書「夜舉レ火擊レ鼓、壞陣ニ詐兵ニ、越師ーー」

【潰敗】ハイ　つひえやぶれる。王惲詩「前徒卽倒レ戈、ーー如ニ山崩ニ」

【潰冒衝突】クヮイバウシャウトツ　洪水の岸をつきやぶる形容。蘇軾、論錯論「蓋亦有ニーー可レ長之患ニ」

【潰腹】クヮイフク　はらをそこなひやぶる。嚴延、座右銘「嗜慾者ーレ之矛」

【潰盟】クヮイメイ　ちかひに背く。天祿閣外史「盟以彰レ信、故ーレ者、春秋惡レ之」

【潰瘍】クヮイヤウ　病名、臟腑内部の組織が缺損して空洞を爲すもの、多くは胃腸及大小腸などの處に在り、瘰癧ト昜カラズ。

【潰亂】クヮイラン　やぶれみだれる。

【潰潏】クヮイケツ　くづれただれる。南方草木狀「水潰ニ之不ニーー」

【潰裂】クヮイレツ　くづれさける。

【潰漏】クヮイロウ　河がきれて水がもれあふれる。後漢書、王景傳「無ニ復有ニーー之患ニ」

【潢】㊀クヮウ・ワウ　㊁タウ・ワウ　㊂クヮウ・ワウ　陽・養・梗

㊀いけ、たまりみづ（積水池）○天ーは星の名。轉じて皇族の義に用ふ「天ー貴胄」○水がひかりわく。‖洸。㊁水深く廣き貌。‖滉。㊂紙を染む。又、表具をする「裝ー」

【潢汙】クヮウヲ　すこしのたまり水。左、隱三「ーー行潦之水、可ン薦ニ於鬼神ニ」

【潢池】クヮウチ　○水のたまりたる池。洞冥記「女國有ニーー、海ン之而孕」○狹き土地に喩ふ。漢書、解憑傳「故盜ニ弄陛下之兵于ーー中ニ耳」

【潢洋】クヮウヤウ　深く廣き貌。道德指歸論「冥冥實實、ーー堂堂」‖滉洋。

【潢漾】クヮウヤウ　深く廣き貌。司馬相如、上林賦「然後顯溝ーー、安期徐佪」

【潢漾】クヮウヤウ　にはたづみ。韓愈詩「ーー無ニ根源、朝滿夕已除」‖行潦。

【滸】㊀ゲウ　㊁ガウ　麌・巧

㊀うすし（薄）かろがろし。○そそぐ（沃）水をながしかける。㊁人の名、寒浞の子。‖皋。

同訓異字　滸・薄・輕・涼・漓・愉・淡の別は薄（艸部十三畫）の條を見よ。

○ゲウ　澆・注・沃・灌・漑・灑・酒・瀉の別は注（水部五畫）の條を見よ。

【澆漑】ギョウガイ　水をそそぐ。魏志、郭淮傳「宜開ニ河渠ニ可ニ以引レ水ーー一」‖

混流。

【混季】ケンキ　風俗の輕薄となりしすゑの世。北史、周武帝紀「運當ニ一一、思ン復ニ古始一」

【混詭】ケンキ　かるがるしくしていつはる。唐書、魏徴傳「三代之後、一一日滋、棄ニ任法律一、漢雜ニ霸道一」

【混僞】ケンギ　輕薄にしてうそ多し。僞和、衰風、疏「一一漸起」

【混訛】ケンカ　輕薄にしてまことなし。晉書、禮志「叔代一一、王風陵遲」

【混灌】ケンクワン　水をそそぐ。郭璞、江賦「一一遵注」

【混俗】ケンゾク　風俗うすくなりておとろへる。王褒、策問「覩ニ俗一一、法令滋彰」

【混浮】ケンフ　うすきと厚きと。史、黄霸傳「一一散樸」＝厚薄。

【混書】ケンショ　あさざけ。潘堂詩話「東坡謂ニ晨飲ニ爲ニ一一一」

【混世】ケンセイ　すさのよ、濁季の世。史、樂書、注「一一爲ン之、非ニ通禮一也」

【混浚】ケンセン　薄く淺し。淮南子「煩撃一一」

【混濁】ケンダク　そそぎあらふ。後漢書、楊秉傳「二一一濯纓」

【混薄】ケンハク　人情うすし。後漢書、朱穆傳「感ニ時一一一」

【混末】ケンマツ　世の季。陳書、後主紀「陛君ニ臨區宇一屬ニ一一一」＝濁季。

【混漓】ケンリ　うすし。皮日休詩「玉液是一一、金河乃精粕」＝混薄。

【潔】ケツ　㊥　又絜に作る

○いさぎよし、きよし（清）「清一」「皎一」○心が清廉である「廉一」「一白」○心を修治ハラヌする。論、述而「人一已以進」

【好ン潔】カウケツ　きれいずき。左、定三「郤莊公、卞急而一ン一」＝潔癖。

【潔己】ケツキ　己の身をいさぎよくす。後漢書、張奐傳「正ン身一ン一、感化大行」字解參看。

【潔祭】ケツサイ　きよくかんばし。戴復古詩「飲食烹炮皆ニ一一」

【潔癖】ケツヘキ　ものいみす。晉徒子、好色賦「一一俟ン令惠音聲一」

【潔箱】ケツサウ　清らかなるはこ。雲笈七籤「盛ニ之一一、毎ン欲ニ施行一、納ン香出ン之」

【潔疾】ケツシツ　きれいずきのやまひ。文海披沙「古今一一莫ン如ニ庾炳之・王思微・宋南宮・倪元鎮一」

【潔慎】ケツシン　心きよくしてつつしむ。晉書、鄭默傳「以ニ一一一不ン染ニ其流一」

【潔淨】ケツジヤウ　いさぎよし。神仙傳「沐浴一一」＝潔清・清潔。

【潔水】ケツスイ　清きみづ。韓愈詩「一一空澄鑒」＝清水。

【潔清】ケツセイ　いさぎよし。紳女賦「儀ニ貞亮之一一一兮」＝清潔。

【潔誠】ケツセイ　きよく誠なり。詩、照詩「一一、金河乃精粕」＝洗ン志潤ニ尊年一」

【潔繁】ケツソウ　いさぎよくしてかざりなし。易經「藉用ニ白茅一」疏「言以ニ一一之道一奉ニ事於上一也」

【潔表】ケツヒヤウ　きよきこころ。顔峻詩、紳之來思、享ニ此一一一」

【潔白】ケツパク　○きよくまっしろ。○心がいさぎよし。漢書、匡衡傳「願ニ一一之士一、昭ニ無欲之路一」

【潔婦】ケツフ　婦人の能く其の身を守る者。列女傳「晉一一者、秋胡子之妻也」＝貞婦。

【潔病】ケツビヤウ　潔疾に同じ。

【潔癖】ケツヘキ　きれいずきのやまひ。潔懐錄「米元章有ニ一一一」＝潔疾。

【潔朗】ケツラウ　きよくほがらか。李荘石賦「當ニ六合之精央一、沿ニ素輦之一一」

【潔廉】ケツレン　いさぎよくして欲少なし、潔白清廉。舊唐書、殷侑傳「所ン至以ニ一一一著稱」＝清廉・廉潔。

【滴】

㊀ケツ　シュツ・ジュチ　質　㊁イツ　質　㊥

㊀水がわき出る「浮一」○す（延）○一露は甘露。㊁水の流れる貌「灌一」

【滴溢】ケツイツ　流の盛なる貌。司馬相如、大人賦「左支玉而右黔靈兮、前陸離而後一一」＝溢滴。

【滴滴】ケツケツ　水のわき出る貌。李郢詩「千条萬滴水一一」

【頑】

コウ　カウ　㊥　鴻に通ず

○濛一は元氣の未だ分れざる貌。又、くらくして分明ならざる貌。○みづかね（水銀）＝汞。○一溶は水の深く廣き貌。○一洞は相連なる貌。

【潸】

サン　セン　刪　㊥　潺　㊥

○淚の多き、雨水に從ふ、麻の片なり、俗に林に從ふは誤。

【潸然】サンゼン　淚の流れる貌。詩、小雅、一一出ン涕」＝潸然・潸潸・泫然。

【潸潸】サンサン　○雨の降る貌。○淚の流れる貌。元稹詩「分司別ニ兄弟一、各各淚一一」＝潸然・潸焉。

【潸然】サンゼン　潸焉に同じ。

【潸】

サン　セン　刪　㊥　先

○水の流れる貌。又、其の聲。○轉じて、淚の流れる貌。

【潸沄】サンウン　水の流れる貌。蔡夔詩「朝棲ニ喬木之蒼幹一、夕飲ニ臨潤之一一一」

【潸淺】サンセン　○水の流れる貌。又、其の聲。謝靈運詩「乘ン月弄ニ一一一」○借

りて涙のさめざめと流れる貌。遊仙、九歌「橫流淨兮ー〻」＝潸然。

【滔滔】タウ　○浸き溪流の流れる貌。又、其の聲。白居易詩「有レ石白磷磷、有レ水清ー〻」○雨のふる音。陳後主詩「簾外雨ー〻」

【滔滔】セン　水のさらさらと流れる貌。庾九騈詩「舍二我筆硯一樂二彼ー〻一」

【滓】㊀シ　㊁セイ　㊃支

㊀みづがつきる（水案）つく（盡）○ちる、ほろびる「ー滅」○ーは雪又は雨の聲。又風の聲。㊁馬いななく。＝嘶。

【滓滓】シシ　氷のとけつくる如く、ほろびる「ー〻灰滅」揚子方言、ー也」

【澁】シフ　㊃　又澀に作る

○しぶし。○しぶる、とどこほる「ー滯」なめらかならず。○文字の讀み難きもの「奇ー」「艱ー」○一種の竹。○園ヂ熟せざる青きしぶ柿の實よりしぼりたる液にて黒褐色の塗料とす。

【澁時】シフジ　しぶりむせぶ。禮記「飲而俠」疏「雖食未レ飽、必前咳飢以利二滑喉中一、不レ令ニー〻一」

【澁滯】タイ　とどこほる。王惲、純清齋「必賓二州縣力一、ー〻方可レ度」

【澁澀】シフタイ　新奇にしてむづかしく讀み難き文體。唐詩紀事「竹馬爲二篠驂一、月兎爲二魄兎一、進士效レ之、謂二之徐ー〻一」徐は徐彦伯。

【澀】シフ　㊃　澁（前條）に同じ。

【渠】シフ　㊃

泉がわき出づ。又、其の聲。

【渠渠】シフシフ　水の湧きあがる聲。文園詩「山雨灑二春城一、ー〻聲頗急」＝潺湲。

【潯】ジン　㊁

○きし、みぎは（水涯）「碧ー」「江ー」○ふち。＝潭。○ー陽江は江西省九江の一名、白樂天の琵琶行を作りし地。○ー江は廣西省潯州府に在る江。＝黔江。

【潯】ジュ　㊂

○うるほす、うるほふ（潤）よき雨、時雨が百穀を潤ほし生ずる「甘ー」「霖ー」○そそぐ（注入）注に通ず。

【潚】シュク　㊄

○深くして清し。○はやし

【潤】ジュン　㊄　（疾）

○うるほふ。うるほす。易、繫辭「ー之以二風雨一」うるほひ「河ー」「澤ー」○まうけ（利益）「利ー」○つや（光澤）つやあり。荀、勸學「玉在レ山而木ー」○かざる（飾）「ー色」立派にする。大學「富ー屋、德ー身」○うるはし。○人に酬ゆるに財を以てす「ー筆」○恩澤ッを施す。

同訓異字　潤・濕・澤・沾・滿・浥の別は濕（水部十四畫）の條を見よ。

【潤益】エキ　○かざりてます。隋書、經籍志「毛公及衞敬仲、又加ニー〻一」○まうけ。＝利益。

【潤屋】ヲク　潤身を見よ。

【潤下】カ　○水。說文「水曰ニー〻一」○物をうるほして低きにくだる。參同契「水流不二炎上一、火動不ニー〻一」童漢卿詩「朝宗終到レ海、ー〻每盈レ科」

【潤潤】ジュンジュン　かれたるをうるほす、貧者をめぐむ。吳均文「皇恩所レ被、枯レ木ー〻」

【潤洽】カフ　あまねくうるほふ。易林「五嶽四瀆、ー〻萬福」

【潤滑】クワツ　うるほひてなめらか。淮南子「夫水所二以能成一其至德一于天下一者、以二其涼潤ー〻一也」

【潤草】サウ　草をうるほす。春秋元命苞「潤以殺レ木、露以レ枯」

【潤類】ルイ　ひろくしてつやのあるひたひ。蔡邕詩「修睫ー〻兼應對」＝廣額。

【潤濕】シツ　うるほふ。うるほす。槃子「高足者以辟ニー〻一、邊足二以圖一風雨一」

【潤身】シン　身に光采を附けて立派にする。大學「富潤屋、德ー〻一、心廣體胖」

【潤色】シキ　かざりて文采を加へる。論、憲問「東里子產ニー〻之一」

【潤色先生】センセイ　硯の異名。

【潤飾】シヨク　つやをつけてかざる。曹植文「使三僕ー〻之一」宋史、蔡卞傳「援レ筆立就、不レ加ニー〻一」＝潤色・飾潤。

【潤澤】タク　しめりてむし暑し。禮記、疏「土ー則土之潤澤易レ行、故可二養美一之」

【潤澤】タク　○うるほふ。うるほす。○なさけをかける。孟、滕文公「若夫ニー〻之二、則在二君與子一矣」○つやをつける。＝潤色。

【潤膩】ヂ　うるほひてあぶらけありてなめらか。宋史、河渠志「設取二淤土一觀實、極爲ニー〻一」

【潤美】ビ　色澤ツありてうつくし。裏、蕭仲舒傳「夏玉不レ琢、安質ー〻、

不レ待二刻篠一」

【潤筆】ジュンピツ　ふでをうるほす。書畫の揮毫料。隋書、鄭譯傳「不レ得二一錢一、何以ー一レ一」

【潤朗】ジュンラウ　つやありてほがらか。北史、魏楊愔傳「風郎ー一、所二以比一レ玉」

【潟】セキ　㊥

○かた、しほけのある地（鹵地）ひかた、遠淺の海岸にて潮のさしひきによりて隱見するすな地。○圖。潮・湖・濱などの稱。

【潟口】セキコウ　川の口が島又は沙のなどにて圍まれて湖をなすもの。

【潟湖】セキコ　そそぐながれる。水經、注「泰川ー一、合成二一川一」

【潜】セン　㊥　㊦

潜は俗字、書は譌字

○ひそむ（藏）「龍ー」かくれる（隱）○しづむ（沈）○くぐる、水又は物の下をもぐる。○ふかし（深）○まじる（參）○ふしづけ、柴を水中に積み、魚の息ふ所とする。○ひそめる、心を靜におちつける「ー心」○ひそかに、そっと。

同訓異字　潜・隱・匿・蔵・祕の別は隱（阜部十四畫）の條を見よ。

【潜隊】センイ　ひそみかくれる。易、乾卦、程傳「聖人側微、若二龍之ー一一」‖潜藏。

【潜蟄】センチツ　ひそみかくれる、蟄は蟲。魏志管寧傳「抱レ道懷レ貞、ー二一鄕閭一」‖潜隱・潜藏・潜匿。

【潜行】センカウ　○しのびあるき。‖微行。○水中をくぐり行く。

【潜幸】センカウ　しのびのみゆき、內密の御成。

【潜蚊】センカウ　ひそめるみづち。赤壁賦「舞二幽壑之ー一、泣二孤舟之嫠婦一」

【潜航艇】センカウテイ　水中をもぐりて航海する一種の軍艦。‖潜水艇。

【潜淵】センエン　○ひそみしづむ。楊子方言「ー一沈也、楚鄙以南曰レ潜或曰レ潜」○うるほふ。晉淨之詩「春閨ー一夏木荊、空濛映帶春江綠」

【潜感】センカン　○人知れず心を動かす。陳章賦「雄芒既表二乎ー一、並抃且悲二乎遐棄一」○ひそかに氣の感通するにいふ。郭璞、磁石贊「磁石吸レ鐵、時指取レ芥、氣有二ー一、物亦冥會」

【潜居】センキョ　ひそみをる。黃石公文「ー一抱レ道、以待二其時一」‖隱居。

【潜魚】センギョ　水中にふかくひそみかくれる魚。傅休奕詩「羅二重淵之ー一、落二九天之高繳一」

【潜拱】センキョウ　心をおちつけ靜かにして兩手を斂める。裴度賦「必ー一而玄感、乃粲然而著レ之」

【潜伏】センプク　石などの下にかくれてゐることぼろぎ。張衡活時「ー一洩二幽話一」

【潜睡】センスイ　ひそみてくらます、才智などをかくして世に知らさず。蔡邕、楊賜碑「ー一幽閉、不レ答二州郡一」‖潜藏。

【潜晦】センクワイ　人知れずはかる。晉書、景帝紀「深謀祕策、獨與レ帝ー一」

【潜滅】センメツ　ひそみかくれる。易、乾卦「潜龍勿レ用、陽氣ー一」

【潜窟】センクツ　ひそかにかくれのがる。蹤跡をくらます。梁書、沈約傳「年十三而遭二家難一ー一」

【潜志】センシ　志をひそめて研究する。江淹文「ー二百氏、沈二紳六經一」

【潜思】センシ　潜心に同じ。

【潜熟】センジュク　ひそかにほどこす。宰參詩「君臣日同緘、禎瑞方ー一」

【潜心】センシン　心を深くひそめる。漢書、叔孫通傳「下レ帷發レ憤、ー二一六藝一」宋史、楊時傳「幼頴異能、屬レ文、稍長ー二一經史一」‖潜思・沈思。

【潜神】センシン　こころをひそむ。班固、答賓戲「ー一默記」‖潜心・潜思。

【潜深】センシン　ひそみてふかし。韓詩外傳「智慮ー一、則一レ之以二易簡一」

【潜潤】センジュン　ひそみうるほふ。溫庭筠詩「宿雨香ー一、春流水暗通」

【潜升】センショウ　ひそみかくれると、のぼると。揚子法言「ー一在レ己、用レ之以レ時」

【潜水】センスイ　みづの中にもぐる「ー一夫」

【潜水艇】センスイテイ　潜航艇に同じ。

【潜勢力】センセイリョク　表面にあらはれざる勢力。

【潜跡】センセキ　あとをひそめかくす。契丹詩「ー一依二道崎一」

【潜邸】センテイ　將來天子となるべき人、即ち皇太子のやしき。元史、姚樞傳「世祖在ー一一、潜龍參看。

【潜匿】セントク　○ひそみかくれる。楊炯賦「鐵鎗ー一、騰蛇伏藏」李白詩「ー一遊二下邳一」○ひそめかくす。晉書、李矩傳「ー二一精勇、見二其老弱一」

【潜輝之曜光】センキノヨウクワウ　世に知られざる有德者のかくれたる光采。韓愈、荅二崔立之一書「雖二好譽於既死一、發二ー一一」致とは發揮の義。

【潜熱】センネツ　物のとけて液體となり、又は液體が蒸發する時に要する熱。寒暖計に感ぜざるもの。

【潜蟠】センバン　ひそみわだかまる。宋史、樂章「ー一或躍レ淵」

【潜寐】センビ　ひそみねむる、死をいふ、永眠する。古詩「ー一黃泉下」

【潜伏】センプク　ひそみかくれる。李紳詩「碧流ー一讖龍關」‖潜藏。

【潜窒】センチツ　人知れずはりふる。窒は棺を墓穴に下す。晉書、石勒載記「勒母王氏死、ー二一山谷一、莫レ詳二其所一」

【潜鱗】センリン　深くひそめる魚。孫逖詩「還見羅ー一一」

【潜龍】センリョウ　○天子の未だ位に即かれ

ざる時の場。易、乾卦「初九ー一勿レ用」○世に出でざる大人君子に喩ふ。

【潛】 潛（前條）の俗字。

【潬】 セン　セン　銑

宛ー（センは水相薄ぜる。又、めぐる（展轉）

【潨】 ㊀ソウ　シュウ・シュ　東　多　㊁サウ・ソウ　江　絳

㊀そそぐ、小水が大水に入る。○水が會する所、おちあひ。○きし（岸）㊁水の聲「ー然」＝淙。【淙淙】ソウ　水の流れる聲。王琦詩「石溜正ー一」【淙然】ソウ　水の聲。柳宗元文「行ー其泉於高者ー、瀉ニ之溜ー、有レ聲ー一」

【潯】 ソン　寒

はく（噴）＝噴。

【潭】 ㊀タン　㊁シン・ジン　覃　侵　通音　タン

㊀ふかし（深）ふかくす。○ーーは奥深き貌。韓愈詩「ー一府中居」○水邊。㊁ふち（淵）「清ー」「深ー」【潭奥】タン　おくふかし。郭璞、爾雅序「學ー者之ー一、譬ニ輪者之準蹈一」【潭淵】タンエン　ふかきふち。馬融、廣成頌「滄ニ滅ー一、左挈ニ靈龍一、右抱ニ蛟螭一」【潭邃】タンスイ　ふかきたに。鮑照、登ニ大雷岸一與レ妹書「思ニ積ニ波瀾一、悲ニ滿ニ潭壑一」【潭水】タンスイ　ふかき池。蘇軾詩「去如ニ龍出レ山、雷雨卷中ー一と」【潭深】タンシン　○ふちがふかし。張正見詩「綸處髮ニーー一」＝深潭。○ふかし、學問などが深し「經術ー一」【潭府】タン　大臣などの官舍。杜甫詩「ー一邑中甚淳古」字解參看。【潭潭】タン　ふかくしてうづまく。馭津詩「險石俯ニーー一、跳流疑ニ沿源一」

【潴】 瀦（水部十六畫）に同じ。

【澄】 チョウ　蒸　もと澂に作る

○すむ、すきとほりてきよし、水靜かにして清し。○すます、きよむ。○すみざけ、酒の名。○圖ます、まじめな顏をする。【澄澄】チョウ　きよきさざなみ。徐寅詩「左右ー一小檻前」【澄潤】チョウ　すめるふち。謝靈運、山居賦「瀰瀰平湖、澄澄ー一」【澄皎】チョウ　すみてたかし。陶潛、祭從弟敬遠文「靜月ー一、溫風始逝、撫レ杯而言、物久人脆」【澄耀】チョウ　きよらかなるひかり。月賦「降ニーー一之靈關一」【澄空】チョウ　すみ渡れるそら。常建詩「女媧下ニーー一」【澄湖】チョウ　すみたるみづうみ。李白悲ニ清秋一賦「ー一練明」【澄爽】チョウ　心がすみてさわやか。晉書、陸機傳「風儀ー一、神清俊邁、文深宏麗」＝清爽。【澄心】チョウ　○心を清くすます。文賦「罄ニーー一以凝レ思」○しづかにすめる心。【澄深】チョウ　すみてふかし。庾信啓「ー一其智」則厚、昭ニ明其道一乃弊」【澄澈】チョウ　すみたるさけ。論、衡運「ー一在レ下」【澄水】チョウ　きよくすめる水。潘尼賦「凝冰不レ足レ方ニ其潔、ー一不レ能レ喩ニ其清一」【澄正】チョウ　きよくしてただし。晉書、荀顗傳「綜ニ核名實、風俗ー一」【澄清】チョウ　きよくすむ。きよめる。後漢書、范滂傳「慨然有ニ澄ーニ天下一之志ニ」＝澄澈。【澄晴】チョウ　はれてすみわたる。又、其のよき天氣。＝澄霽。【澄泉】チョウ　すめるいづみ。陳子昂詩「乘レ月弄ニーー一」＝清泉。【澄鮮】チョウ　すみてあざやか。謝靈運詩「雲日相輝映、空水共ー一」【澄汰】チョウ　よりわける、澄は濁を去る、汰は沙石を去る。王筠詩「石溜正澄淤、山泉始ー一」＝沙汰。【澄澹】チョウタン　すみたるふち。沈佺期詩「碧水ー一映ニ遠空一」【澄澄】チョウ　すみてあはし。蕭頴士賦「收レ神返レ慮、ー一靜默」＝清澄。【澄澄】チョウ　きよくすむ貌。阮籍詩「ー一綠水、遊澄其波」【澄浮】チョウ　すみてとどまりたたへる。水經、注「鹽澤池水ー一、淵而不レ流」＝浮澄。【澄激】チョウ　清くすむ、激も澄。關尹子、九藥「論レ道者、或曰ニーー一」【澄碧】チョウ　すみてみどり色の水。李白詩「君去滄江挐ニーー一」＝碧澄。【澄明】チョウ　すみわたりてあきらか。方干詩「一泓激灑復ー一」【澄瀾】チョウ　きよきなみ。唐明皇詩「雁沼ー一翠、猿崖落照紅」【澄灣】チョウ　水のすめる入江。王勃詩「新月照ニーー一」

【澂】 チョウ　蒸

きよし（清）すむ。＝澄

【潮】 チョウ　蕭

○うしほ、しほ、海水が一定の時間を以て滿干する現象、ししほをー、ひきしほを汐といふ、一解に朝のをー、夕のを

汐。○さす、色がつく「―紅」○隋の州の名、唐に―陽といふ、今の廣東省―州府。○國うしほ、醬油を用ひず鹽にて味をつけたるつゆ「鯛の―」

【潮紅】あか色を呈する。范成大詩「曉來醉面――」

【潮候】しほどき、しほのさしひきする時刻。實字記「瓊州―不ノ同」

【潮信】潮候に同じ、信は兆候。李嘉祐詩「東風―滿、時雨稻苗齊」

【潮水】うしほ。隋煬帝、樂府「流波將ノ月去、―帶ノ星來」

【潮汐】うしほ、一說に潮はあさしほ、汐はゆふしほ。宋史、河渠志「江口每日―一漲ノ沙、塡二塞上流一」

【潮臚】俗樟腦。

【潮流】（齊書、武帝紀）○時勢、世の趨勢

【澈】テツ　屑

○すむ（澄）「澄―」「瑩―」○水盡く。

【澐】トウ　東

○梓―は川の名、四川省に出づ。○―關は陝西省の縣名。

又、關名。歷代の要地と爲す。○―は高き貌。

【澎】ハウ　庚　旁に通ず

水の盛んなる貌。又、水波相擊つ聲。

【澎湃】水波の相擊つ聲。司馬相如、上林賦「沸乎慕窓、涌―」澎一に彭に作る。

【潑】ハツ　曷

○水發ゝこる、水わく。○もる。○水がちな、はねる。○そそぐ。盡斷「以ノ―ノ絹」○勢の盛んなる貌「活―」○―剌は魚の飛びはねる貌。杜甫詩「船尾跳魚―剌鳴」

【潑散】としわすれ。瑯琊代酔編「淮人歲暮家人宴集、日ニ―一」

【潑潑】魚の勢よくはねる貌。郭璞、筌蹄賦「魚―以隨ノ波樂只」

【潑墨】山水を畫く法、唐の王洽に始まる、水墨にて巨點を作る。

【潑剌】字解を見よ。

【潘】ハン　寒

しろみづ（泔漸米汁）

【潘楊之好】婚姻を重ねたるよしみ。晉書、楊經、字仲武、潘岳云、爲二三葉世親之恩一子之姑、子之伉儷、潘楊之睦、有二自來一矣」

【澈】テツ　㊀ヘイ　㊁ヘツ　霽　屑

㊀きよし（清）○水中にて絮をうつ。○―は魚の水に游ぶ貌。㊁―洌は水流の輕くはやき貌。上林賦「橫流逆折、轉騰―洌」

【澄】㊀ラウ・ロウ　蕭　㊁ラウ　嘯

㊀ながあめ、雨の大いなる貌。○おほみづ。○たまりみづ、にはたづみ（路上流水）「行―」‖澇。㊁ひたす。○たまりみづ（積水）㊁―倒は老衰の貌。一說におだやかなる貌。

【澄澄】事をなげやりにする、粗率。晉書「無根曰ノ浮、荷蘭曰ノ萍」

【澄徒】大雨にて水にひたる。宋書、羊弘傳「十三年東土―、民命輟矣」

【澄水】にはたづみ。舊唐書、薛鎭傳「鎭池爲ニ―所ニ入、其味多レ苦」

【澄清】澄倒】○老衰の貌。稽康、絕交書「足下篤知二吾―一疎懶不ニ切二事情一」○蘊藉の貌。北魏書、崔暹傳「魏天保以後、重二吏事一、謂二容止澄

【澇】ラウ　號

○おほなみ（大波）○にはたづみ。○涼に通ず。

【澠】ミン　軫

（水部十畫）に同じ。

十三畫

【澳】㊀イク　㊁アウ　屋　號

㊀水の曲り入りたるきしべ、くま、隈匿。‖隩。㊁ふかし（深）○國名、―太利（オウストリヤ）の略稱、澳一に墺に作る。○―門は港名、本、廣東省香山縣に屬す。今は葡萄牙の領地。‖媼港。○國―沖に同じ。

【澣】カイ　卦

渤―（ボツカイ）は海の別名。‖勃解。

【潟】カツ　曷

○瀉―は水深くして廣き貌。○波の貌。

【澤】タク　陌

○みぞ、溝に注ぐこみぞ「溝

一」○小さき流。○水の名。

【滅】㊀クヮイ　㊁ワイ　㊂クヮツ　㊀泰　㊁泰　㊂曷

㊀水の多き貌。㊁けがれる「汙ー」穢に通ず。○注ーワイは水の深く廣き貌。㊂ーークヮツは罟ーの水に入る聲。詩、衞風「施」罟ーー」

【滑】㊀クヮン　㊁カン　㊀㊁院　㊂通ず

㊀すすぐ、あらふ、衣の垢を洗ふ。○唐代の制、十日毎に官吏に休暇を賜ひ、私宅にて沐浴せしむ。よりて俗に十日間の稱とす「上ー」「中ー」「下ー」‖沢。㊁瀚（水部十六畫）に同じ。

【滑衣】クヮンイ　衣をあらふ。詩、周南「薄汚二我私一、薄澣二我衣一」

【滑酒】クヮンセイ　すすぎ洗ふ。漢書、萬石君傳「身自ーー」‖滑濯・滑澣。

【滑濯】クヮンタク　すすぎあらふ。北史、魏孝文帝紀「性儉素、常服二ーー之衣一」‖滑酒・滑酔。

【滑酔】クヮンスイ　衣服又は器物をあらひ清める。‖滑濯。

【滑帛】クヮンパク　洗濯したるきぬ。禮記「衣二其ーー一、醯醬以歡」

【滑沐】クヮンモク　かみあらふ。南史、卞彬傳「皮膚澡刷不レ廢、ーー失レ時」

【澴】クヮン　㊀刪　波がうづまく（波流轉貌）「漩ーー」

【激】ゲキ　㊀錫

○はけし、きびし、勢がきつい。○はけむ、はげます、感じ動かす。史、張儀傳「以ー二其意一」○さへぎる（遮）ささふ。○つく（衝）水が物に遮られて勢を增す。孟、告子「ー而行レ之」○すみやか（疾急）「迅ーー」「急ーー」○言論が直くきびしきに過ぐ「ー切」○感じ動く。後漢書、蔡邕傳「感ー忘レ身」○そそぐ。○あがる（揚）○おこる（發）○いかる（怒）○色明らか。○ーー楚は聲の清かなる義。○ことさらに世俗に違ふ「ー詭」

【激越】ゲキエツ　音聲がはげしくして清くあがる。柳宗元文「羽觴飛翔、絲竹ーーレ中也」

【激迅】ゲキジン　甚だはやし。應場賦「曉ニーー而難レ追、傷二往寒之無一レ個」

【激賞】ゲキショウ　甚だしくほめる。李白詩「ーー搖二天筆一、承恩賜二御衣一」

【激水】ゲキスイ　みづを遮りて其の勢をはげしくする。又其のはげしく急なる水。西唐書「ーー威二比目魚一」

【激擊】ゲキゲキ　はげしく擊をはりあげる。‖勵擊。

【激切】ゲキセツ　言論がはげしくせまる。後漢書、陳寵傳「言ー事者必多ーー」

【激戰】ゲキセン　はげしくたたかふ。又、其の戰。‖血戰・苦戰。

【激楚】ゲキソ　清かにしてかなしき聲。楚辭、九歌「宮庭震驚發ーー一ー」‖激揚清楚。

【激盪】ゲキトウ　大ぬすびと。晉唐、歸私論「ーー似レ忠、不レ可レ謂二無私一、此類自ーー、反涕泣、何郎也」‖奮激・激印・感慨奮發。

【激感】ゲキカン　はげしく心を動かす。漢武帝、悼二李夫人一賦「既ーー而心遙ー」

【激詭】ゲキキ　世俗に違ひて異を立つ。後漢書、范冉傳「好違」時絕レ俗、爲二ーー之行一」

【激勵】ゲキレイ　はげましすすむ。柳宗元、賀レ赦表「謂二除遣積一、政理之源也、要二在勸賢一ーー之方也」‖激勉。

【激矢】ゲキシ　勢つよきや。揚子「般之揮斤、羿之ーー、君子不レ言、盲必有レ中也」

【激湍】ゲキタン　はやせ。徐幹詩「湘土纔千里、平沙少二ーーー一」

【激怒】ゲキド　はげしく怒る。後漢書、吳漢傳「軍士ーー、人倍二其氣一」‖盛怒。

【激動】ゲキドウ　○きつくうごく。○はげしく心に感動する。

【激波】ゲキハ　○なみたたせる。○はげしきなみ。‖激浪。

【激發】ゲキハツ　○はげしくおこる。○奏稚要錄「授琴獻之、調聲ーー、衆二皆驚之聲一」○はげましおこす、奮發させる。

【激忿】ゲキフン　はげしくいかる。後漢書、鄧訓傳「諸羌ーー、相與解レ仇結レ婚」‖激怒・勁忿・勁怒。

【激憤】ゲキフン　はげしくいきどほる。家語「孔子曰、陳蔡之閒、吾與二三子一、厄知二其非一ーー厲志之始一乎是」

【激變】ゲキヘン　はげしくかはる、急激なる變化。

【激勉】ゲキベン　はげます。宋史、燕達傳「賜名位已頂、不二必親一矢石一、第ーー二將士一可也」‖激勵。

【激揚】ゲキヨウ　はげまされて奮ひあがる。

感動して發憤する。後漢書、滅洪傳「對氣運慨、閑二其昔一者、無レ不二一一」【激昂】ゲキコウ はげしくあがる。風賦「飄忽淜滂、一一煙怒」【激浪】ゲキラウ あらなみ。＝怒濤・激波。【激流】ゲキリウ 勢はげしきながれ。謝靈運詩「水性本無レ泡、一一逢二衆レ沫」【激冷】ゲキレイ はげしくさむし。潘岳賦「寒風凄以一一」【激厲】ゲキレイ はげし。南史「性頗一一、少二威重一、有レ所二是非一、形二於造次一」【激勵】ゲキレイ いたくはげます。唐書、吳競傳「宋璟等一一」＝激發。【激烈】ゲキレツ 甚だしくはげし。李白詩「吃辭何一一」【激論】ゲキロン きつく言ひ立てる。又、其の議論。＝劇論。

【澡】 ソウ 皓

○あらふ（洗）すすぎ清める。○借りて修め潔くする義とす。禮、儒行「備有レ一レ身而浴」德」浴德は道德に沐浴する。【澡雪】サウセツ 洗ひてひのしをかける、轉じて、冤罪を改め去る義。宋郭文「以二詩書一敎レ人、一一一故俗」【澡瀡】サウカイ あらひすすぐ。枚乘、七發「一一胸中、滌二練五藏一」＝洗濯。【澡盥】サウクワン 口すすぎ手あらふ。水經、注「唯得二漱飲一而已、無二敢一一一」【澡洒】サウサイ 澡濯に同じ。【澡室】サウシツ ゆどの（湯殿）＝浴室。【澡身】サウシン 身を洗ひ清める、字解參看。【澡雪】サウセツ あらひすすぐ。莊子「疏二淪而心一、一二一而精神一」而は汝。【澡洗】サウセン あらふ。山海經、注「郭璞曰、一一可二以洗レ體去レ垢」【澡濯】サウタク あらひ口すすぐ。魏書「日三一一、然後飲食」【澡灌】サウクワン あらひきよむ。白居易詩「今朝」一一、衰瘦頓有レ餘」＝洗濯・洗滌・澡洒・澡洗・澡濯。【澡沐】サウモク ゆあみし、かみあらふ。唐書、柳公綽傳「居レ喪纔畢、三年不二一一」＝沐浴。【澡浴】サウヨク ゆあみす。晉書、倭人傳「初喪哭泣不レ食、已葬、男女入レ水一レ」【澡練】サウレン あらひねる。東晉文「一二一精潤一呼二吸清虛一」

【澀】 ㊀ シフ ㊁ サフ 合 緝

㊀一はやはらぐ（和）詩、小雅「其角一一」○一然はすみやか（疾）なる貌。曹植、七啓「一然飛沒」○水出づ。出づる水。㊁はやせ（濕流）

【澔】 シフ シュク 緝 緝

滑ナメラかならず。＝澀。

【澐】 ゼイ 霽

○水邊の埋立地。○みぎは（水涯）「海一」

【澶】 ㊀ セン ㊁ タン 寒 旱

㊀一淵エンは川の名、直隸省濮陽縣の西南に在り。○地の名。㊁一漫マンはほしいまま（擅縱）莊、馬蹄「一漫以爲レ樂」又、遠き貌。司馬相如、上林賦「案二節一一漫」

【澤】 ㊀ タク ㊁ セキ・シャク 陌 陌

㊀さは、水と草との交る所「沛一」○うるほふ、しめる。うるほす。○うるほひ、めぐみ「恩一」「德一」書、畢命「一潤二生民一」○ふち、秩祿。孟、公孫丑「則是干レ一也」○あらふ（洗濯）○あぶら。○する、もむ、こする。曲禮「共飯不レ一手」○ふだんぎ（褻衣）詩、秦風「與子同一」○つや「光一」つやをつける。○一宮は周代に射術を習はせて士を擇びし所（禮、射義）㊁とく（解）釋に通ず。史、孝武紀「振二兵一」旅

同訓異字 澤・潤・清・滿・澗の別は潤（水部十四畫）の條を見よ。

【澤雨】タクウ 萬物をうるほすよきあめ。晉書、樂志「一一施、化雲布」＝慈雨。【澤蚜】タクサウ 苦菜の異稱（遯異記）＝重錄。【澤藪】タクソウ 古、水澤を掌りし官の名。周禮「有二山虞一一、以掌二山澤一」【澤國】タクコク 池沼などの多き地。曹松詩「一一江山入二戰圖一」【澤及二枯骨一】タクキフコツ 周の文王の仁澤、死人の枯骨にまで及びし故事。呂覽、異用「周文王使二人相一地、得二死人之骸一、東以聞二於文王一、文王曰、更葬レ之、東曰、此無レ主矣、文王曰、有二天下一者、天下之主也、有二一國一者、一國之主也、今我其主也、遂令レ

束以二衣棺一葬之、天下聞レ之曰、文王賢矣、澤及二髊骨一、又況於レ人乎」注「骨有レ肉曰レ髊、無曰レ枯」新序に髊を枯に作る。

【澤山】タクサン　園甚だ多きを云。

【澤芝】タクシ　荷ハスの美名〔古今注〕＝芙蓉。

【澤瀉】タクシャ　をもだか、多年生草の一、池澤に生ず、葉は慈姑キュウに似て小、地下の稉莖を藥用とす。＝野慈姑。

【澤潤】タクジュン　うるほす、めぐみが普く行きわたる。唐書、武平一傳「威厲外著、恩洽ー一」

【澤潤】タクジュン　うるほす、めぐみを施す。書、畢命「道洽政治、ー二生民一」

【澤畔】タクハン　さはのほとり。史、屈原傳「行二吟ー一澤一」

【澤芬】タクフン　藥草の名、よろひぐさ〔江淹蓮花賦〕＝白芷。

【澤梁】タクリョウ　さはに設けて魚を捕るやな。孟、梁惠王「ー一無レ禁」禮、王制「鮪魦ノ魚、然後虞人入二ー一一」

【澤鹵】タクロ　鹽氣あるさはべの地。史、河渠書「注二瀆間之水一、溉二ー一之地一四萬餘頃」

【濁】　タク　ドク　㊥　通音ダク・ゾク

○にごる。清の對。にごす。にごり。○けがれ、けがれる、みだれる「溷ー」品行惡し。

【濁汙】ダクオ　にごりけがれる、汙は汚。蘇軾文「余方區區、欲レ磨二洗ー一一」

【濁暗】ダクアン　にごりてくらし。皆筆、多雨時「陰氣ー一化爲レ霧」

【濁酒】ダクシュ　にごりざけ。魏都賦「清酤如レ濟、ー一如レ河」杜甫詩「ー一有二妙理一」＝濁酒。

【濁流】ダクリュウ　にごりたるながれ。轉じて潔白ならざるなかま。歐陽修、朋黨論「此蓋清流、可レ投二ー一一」

【濁醪】ダクロウ　にごりざけ。魏都賦「清酤如レ濟、ー一如レ河」杜甫詩「ー一有二妙理一」＝濁酒。

【濁浪】ダクラウ　にごりたるなみ。范仲淹、岳陽樓記「ー一排レ空」

【濁世】ダクセイ　にごりたるすさの世。東方朔、非有先生論「按レ興避レ世、其子作狂、皆避二ー一一、以全二其身一者也」＝濁代。

【濁清】ダクセイ　にごれると、すめると。元稹詩「一元氣二分二ー一、地居方直一天體明」＝清濁。

【濁代】ダクダイ　道徳のすたれたる世。晉書、夏統傳「出處遇二ー一一、含レ輿二屈生一同レ汚共レ泥」＝濁世。

【濁富】ダクフ　清廉潔白ならずしてとみ榮える。清貧の反對。姚崇、木蜜誡「與二其ー一一、寧比二清貧一」

【濁欲】ダクヨク　きたなくしてむさぼる。太清神仙菜經要略「年茂而ー一愈甚」

【濁浪】ダクラウ　にごれるなみ。范仲淹、岳陽樓記「ー一排レ空」

【濁醪】ダクロウ　にごりざけ。魏都賦「清酤如レ濟、ー一如レ河」杜甫詩「ー一有二妙理一」＝濁酒。

【濁流】ダクリュウ　にごりたるながれ。轉じて潔白ならざるなかま。歐陽修、朋黨論「此蓋清流、可レ投二ー一一」

【濁醪】ダクロウ　にごりざけ。魏都賦「清酤如レ濟、ー一如レ河」杜甫詩「ー一有二妙理一」＝濁酒。

【濁浪】ダクラウ　にごりたるなみ。范仲淹、岳陽樓記「ー一排レ空」

【濁醪】ダクロウ　にごりざけ。魏都賦「清酤如レ濟、ー一如レ河」杜甫詩「ー一有二妙理一」＝濁酒。

【濁流】ダクリュウ　にごりたるながれ。轉じて潔白ならざるなかま。歐陽修、朋黨論「此蓋清流、可レ投二ー一一」

貌、しけし。

【澱】テン　澱のおほき貌。詩、小雅「谷風」「―」

【澱】テン　こきくも。梁簡文帝詩「―重雲宇」

【澱】テン　しげりし木のはの事。謝霊運詩「―被二西阿一」

【澱】テン　こきけむり。吳均詩「漫漫被二―一」

【澱】テン　こってりとしてあでやか。李白詩「一枝―紅艶露、雲雨巫山枉断腸」

【澱】テン　あつきめぐみ。班固、北征頌「歌二―沢一」

【澱】テン　こってりとしてある油。倫、注、其飲食水漿皆油之言衆也、酌―也」

【澱】テン　こまやかなこころれひの貌。白「別酒無レ勢レ酔、―且自酌」

【澱】テン　こってりもたるよそほひ、又化粧の白居易詩「―粉」

【澱】テン　甚だしきあつさ。杜甫詩「炎赫―」

【澱】テン　よくねむるの貌。韓愈詩「何人得二―上釣魚船」

【澱】テン　ふかみどりの厳端石時「有レ時一段清如レ鏡」

【澱】テン　こきまぜゆずみの酒かの反

【澱】テン　㊀さし（水垂）ほとり。○大いなるつつみ（大防）㊁わく（涌）水がわき出る。㊂水をはく。噴に通ず。

【澱水】テンスイ　ふきだす水、ふきあげ。

【澱泉】テンセン　わきあがるいづみ。公羊、昭五「―者何、直泉也、直泉者何、涌泉也」

【澱海】テンカイ　はげしくなみだつ。左思、呉都賦「――沸騰」注「水相激湧、曰二―一」

【澱】ヘキ　㊀

○あらひさらす（漂）○浙―は絹を水にさらして白くする。

【澱】ヨ　㊀　又、渡に作る。

澱―ヨは川の名、四川省夔州府治の南、瞿塘峡の上流に在り、蜀の門戸、舟行危険の所。

【澱】リン　㊀　澱は俗字

すすし（凄清）さむし（寒）

【澱】レイ　㊀

○川の名、湖南省に在りて洞庭湖に入る。○隋の州の名、今の湖南省―縣の地。○甘き水の泉。列、湯問「―泉涌」醴に通ず。○―は波の聲。

【澪】レイ　㊀

○川の名。○㊀水の脈、水路、河海の中にて舟の通行する道筋、みを、みよ。

【澪標】ミヲツクシ　㊀　みををつくし、水路を示すために水中に打ちこみしくい。

【濂】レン　㊀　濂に同じ

○うすし（薄）○―溪は地名、湖南省道州の西に在り、宋儒、周惇頤の生地、故に世に―溪先生と稱す。

【濂洛關閩之學】レンラククワンビンノガク　濂洛の周程（周惇頤（字茂叔）洛陽の程顥（字伯淳、雅明道）其の弟程頤（字正叔、號伊川）關中の張載（字子厚、號横渠）閩中の朱熹（字元晦、號晦庵）等の唱へたる儒教をいふ。目宋學・道學。

十四畫

【濫】アイ　㊀

○靄―はくもる（曇陰）○雲氣の貌。

【濰】ホ　㊁

川の名、山東省に在り。

【濕】イン 㫃

泪ーは水の聲。

【澌】エイ ケイ 遇 支 青 又藻に作る

○澤ーは水のめぐりうづまく貌。○小さき水の貌。

【濠】カウ ゴウ 豪 通音ガウ

○ほり（城下池）‖壕。○川の名、安徽省に在り。○ー洲は南洋の大陸、ー太利亞ガウストラリア

【濠陸】ガウ しろのまはりのほり。金史、宗翰傳「由濠梁レ性、決二引海水一、納之ーー」‖壕陸。

【濠濮閒想】ガウボクカンソウ 濠・濮は二川の名、莊子濠梁の上に遊び魚の樂み遊ぶを見て樂み、又濮水に釣して楚王の聘に應ぜざりし故事に本づきて、俗を離れて閑棲する高尚の心の義とす。世說、晉語「會心處、不二必在一レ遠、翛然林木、便自有二ーー一也」

【濠梁】ガウリャウ 濠水に設けたるやな。莊、秋水「莊子與二惠子一遊二ーー之上一」

【濩】㊀ クヮク ㊁ コ 藥 遇

㊀雨だれのしたたる貌。○にる（煮）詩、周南「是刈是ーー」○濩ー は水勢の相激する貌。○宮室のおく遠づき貌。○采色きらめきて定まらざる貌。㊁しく（布）○大ーダイは殷の湯王の樂曲の名。

【濶】闊（門部九畫）の俗字。

【濕】シフ 緝 通音シツ 又、溼に作る

○うるほふ、しめる、ぬれる。○うるほす、しめす。○うるほひ、しめり「下ーー」「卑ーー」○ーは牛の物をかむに耳を動かす貌ぜい、小雅「其耳ーー」

【同訓異字】濕・潤・澤・沾・濡・浥○濕は乾の反、しめるなり。易經「火就レ燥、水流レ濕」○潤はうるほひなり、つやのある義、澤ツヤなり「河潤二九里一」は、河水のほとり九里の間しめるに非ずして、其の邊の草木皆水氣のうるほひを受くるなり「富潤レ屋、德潤レ身」も、皆つやある義。○澤はつやあるなり、潤に近し、潤澤と用ふ。○沾は水のかかりて、しっぽりとぬるること、霑と同字なり。史記「汗出沾レ背」同書「霍酒面大雨、陛楯者皆沾焉」○濡は沾と略ー同じ。唐書、張旭傳「旭大醉、以二頭濡一レ墨而書」○浥は露などのしめりを帶ぶる義。詩經「厭浥行露」

【濕レ温而居レ下】シツヲンニシテヒクキニヲル 濕氣をきらひながらひくき地に居る。惡名を嫌ひながら善行を行はず、惡む所を避くるに、其の道を誤るに喩よ。孟、公孫丑「仁則榮、不仁則辱、今惡レ辱而居二不仁一、是猶二惡レ濕而居レ下也」

【濕翠】シツスイ しめりけあるみどり。高士談詩「綠一抹洗二天日一、ーー千重隔二蔚山一」

【濕笑】シツセウ 強ひて笑ふ、にがわらひ。北史、賈景德傳「何須二乾啼一ーー」

【濕潤】シツジュン 地しめりて水がひたす。元稹詩「陰深山有レ泉、ーー草多レ蘇」

【濕氣】シツキ しめりけ。物類相感志「麥得二ーー一則爲レ蝮」

【濕疥】シツカイ ひぜん、皮膚病の一。‖疥癬。

【濕濕】シツシツ うるほふ。鬼谷子「平地注レ水、流者先濕」‖濕濕。

【濕潤】シツジュン うるほふ。うるほす。酉陽雜俎「館無レ故自ーー者、赤蠅蜜名二鈎注一居レ之、去則止」

【濕地】シツチ しめりけある土地。元稹詩「ーー蟲蛇避二暗廊一」

【濕度】シツド 天氣中に含む水蒸氣の多寡の割合「ーー計」

【濕毒】シツドク 濕氣を帶びたるかぜ、しめっぽき風。庾肩吾詩「ーー含二酒氣一」

【濡】ジュ 虞

○うるほふ、ぬれる、ひたる（漬）しめる（濕）○ぬらす、ひたす。詩、邶風「不ーー軌」○めぐみ、うるほひ。○ーー忍はたへしのぶ（堪忍各忍）○とどこほる（滯）「ーー滯」○つや（潤澤）みづみづしくして光澤あり。詩、小雅「六轡如ーー」○やはらか。○ゆばり（溺・小便）史、倉公傳「不二復留病必入一レ腎」○ならふ（習）なれる。

【同訓異字】濡・濕・潤・澤・沾・浥の別は濕（前條）を見よ。

【濡化】ジュカ 仁德にうるほふ。揚雄、劇秦美新文「被レ風ーー」‖首、京師江淮、匈內陋洽」

【濡滯】ジュタイ うるほふ。うるほす。神仙傳「葛玄飲レ酒一斛、便入二泉澗中一臥、酒解、乃出レ身不ーーー」‖濡滯。

【濡染】ジュセン ○うるほひそまる、常に見聞に習ふ義。韓愈文「日漬耳染、不レ學以能」○うるほしそめる。李商隱詩「ーー大筆何淋漓」

【濡首】ジュシュ 首まで沈溺する、易の未濟卦の故事に本づき、大醉して本性を失ふ義。晉書、周顗傳「然是亦ーー之誤也」

【濡潤】ジュジュン うるほふ。うるほす。鮑照詩「霧雨ーー、草木互榮滋」

【濡染】ジュセン 十分にうるほふ。程史「建二皇極一而融二會于偏黨一、尊二重閣一而

ニー子廢施」
【滿溢】ミツ　とどまる。孟、公孫丑「三宿而後出ノ晝、是何ー一也」‖遲留・遲緩。
【滿肉】ミツ　うるほへるにく。曲禮「ー一齒決」
【滿忍】ミツ　よく侮辱をしのぶ。史、蕭改傳「無ニー一之心」

【滯】シュン　震

○さかふ(逆)河を疏して深からしむ。書、堯典「ー川」○ふかし(國深)

同訓異字　滯・深・淺・邃の別は深(水部八畫)の條を見よ。

【滯穴】シュンケツ　ふかきたに。謝靈運、山居賦「仰眺三尋峯、俯鏡ニー一」‖深谿。
【滯源】シュン　ふかきみなもと。白居易、香樂志「潛瀹靈根、滯溜ー一」
【滯壑】シュン　ふかき城のほり。水經、注「有ニ匈奴城ニ方五里、ー一三重」
【滯縊】シュン　城のほりをふかくしつくらふ。後漢書、班固傳「ニー城湟ニ」
【滯濯】シュシュン　ふかくふち。謝靈運詩「循ノ山成ニー一」‖深淵。
【滯池】シュン　深きいけの義にて海をいふ。左思、吳都賦「帶ニ朝夕之ー一ニ」
【滯哲】シュウ　智がすぐれてさとし。又、其の人。書、舜典「ー一文明、溫恭允塞」‖深智。

【濟】㊀セイ・サイ　祭　㊁セイ・ザイ　霽

㊀わたる(渡)史、樂書「ー河而西」わたし、わたりば(津頭)○とどむ、やむ(止)○なる。なす(成)「ー美」○もちふる、利用する。○ます(益)加へる。左、桓十一「盡請ー師于王」○にぎはしすくふ(賙救)易、繫辭「知周ニ乎萬物ニ而道ー二天下ニ」○すくふ、たすく(助)易、繫辭「道ー二天下ニ」○おしのける。‖擠。○通ず。㊁ーは莊敬なる貌、おごそか。又、多くしてさかんなる貌。又、威儀の多き貌。○川の名、河南省ー源縣の西、王屋山より發し、黃河に入る。

同訓異字　濟・渡・涉・濡・厲・揭・徑の別は渡(水部九畫)の條を見よ。

【濟宥】サイユウ　すくひゆるす。魏志、郭王沖傳「賴以ー一者、前後數十」
【濟救】サイキュウ　すくふ。陳書、高允傳「吾在ニ中書一時、有ニ陰德ニ一ニ民命ニ」
【濟化】サイカ　教へ導きて善にうつらす。晉書、王坦之傳「聖人所ニ以ー一ニ」
【濟活】サイカツ　救ひいかす(後漢書)
【濟時才】サイジサイ　世の困亂を救ふたらき。杜甫詩「艱危深仗ニ一一ニ」
【濟世】サイセイ　世をすくふ。後漢書、盧植傳「性剛毅有ニ大節ー常懷ニ一一志ニ」
【濟世會】サイセイクワイ　㊀帝室の保護により設けし慈善事業の一、主として貧民の病を治療することを目的とす。
【濟渉】サイショウ　水をわたる。後漢書、張禹傳「難ニ子ー一ニ」
【濟濟】サイサイ　おほくの人のつつしみ敬ふ貌。詩、大雅「ー一多士」
【濟度】サイド　㊀衆生をすくひて極樂界に至らしめる。隋書、高帝紀「降ニ大慈ニ一ニ一ニ羣品ニ」
【濟物浦】サイブツホ　朝鮮の仁川港の異稱。
【濟楚】サイソ　衰へたるをすくふ。晉書、琅邪悼王傳「陛下龍飛踐祚、興レ微ノレー」‖整齊。
【濟民】サイミン　たみをたすけすくふ。書經「尙克相ノ予、以濟ニ兆民ニ」許衡詩「身在ニ朝廷ニ思ノレー」
【濟勝之具】サイショウノグ　景色の勝れたる山河をわたる道具にて、健脚の義。世說、裴逸「許非ニ徒有ニ勝情ニ有ニ一ー」許は許詢。
【濟濟】サイサイ　○美くしき貌。詩、齊風「四驪ー一」○衆くして盛んなる貌。又、威儀の多き貌。詩、大雅「ー一多士」
【濟濟多士】サイサイタシ　おほく盛んなる賢才。詩、大雅「ー一、文王以寧」
【濟美】サイビ　子孫がよく父祖の業を承けつぎて善き事を成す。左、文十八「世濟ニ其美ニ不レ隕ニ其名ニ」

【瀇】ヒツ　質

瀷(水部十六畫)の俗字。

【濤】タウ　豪

○おほなみ(大波)○なみたつ。
【濤聲】タウセイ　おほなみの音。白居易詩「ー一夜入伍員廟、柳色春藏蘇小家」
【濤雪】タウセツ　おほなみの白く海き起つ形容。孟浩然詩「驚濤來似レ雪、一葉寢生レ寒」
【濤波】タウハ　おほなみ(大波)水經、注「瀾濟ー一」‖波濤・瀾瀾。
【濤揩】タウカイ　かみなりの如き大波のおとの。蘇軾詩「ー一殷ニ白晝ニ」
【濤瀾】タウラン　なみだつはやせ。蘇軾詩「泉流知ニ人意ニ屈折作ニ一一ニ」
【濤瀾】タウラン　おほなみ。嵇游詩「此心如ニ古井ニ無ニ地起ニ一一ニ」
【濤瀾】タウラン　なみたついりえ。蘇軾詩「勿」謂無ニ人知ニ古佛臨ニ一一ニ」

【濯】タク　覺

○あらふ、すすぐ(滌)けがれをあらひ去る。○きよむ(淸)潔白にする。○ーはあきらか(光明)なる貌。詩、大雅「鉤膺ー一」又、こえてつやつやしき貌。詩、大雅「鷹鹿ー一」一說に嬉み遊ぶ貌。又、山に草木な

き貌。はけやま(禿山)の形容。孟、告子「是以如」此ー也」○掘ったに通ず。漢書、鄧通傳「ー鑄」

【濮院】ボクヰン　あらひすゝぐ。周禮「世婦掌二宮女一而ー之」

【濮鎮江】ボクチンカウ　蜀の成都に在る流在浅の一名。杜甫詩「ー逕来滿園」

【濮魚雪】ボクギョセツ　あまぐも。黄子發文「四方有二ー一、候者立雨」

【濮滌】タクデキ　あらふ。滌は洗う器。濮に青龍寺詩「猿叫麗鳴鳥啼、倒耳般勝雅二ー一」‖濮濯・濯洗。

【濮濯】タクタク　手あらふ。蘇軾詩「膏如二ー近一行潤、未二背已夢一ー一」

【濮瀝】タクレキ　みそぎ。劉孝綽詩「萬歳三陽發、ー一元巳初」

【濮濯】タクタク　あらひきよめる。崔祐甫文「可二以歩而適一可二以濯而絜一」‖洗濯。

【濮流】タクリウ　きぎをあらひすゝぐ南史、袁昂傳「ー一レ一為レ國、入レ遊遊レ陳」

【濮凉雨】タクリャウウ　陰暦の六月の大雨。周處風土記「六月有二大雨一名二ー一一」

【濮身】タクシン　からだをあらふ。白居易詩「勞者ー息レ肩、熱者思ー一レ」

【濮洗】タクセン　すすぎあらふ。史記淮陰侯傳「遺明三傑時、一一遺南侯」‖洗濯・洗濯・濯濯・濯濯・濯濯・濯濯。

【濮足】ソクソク　足をあらふ。孟、離婁「滄浪之水濁兮、可二以濯二我足一」左思、詠史「振二衣千仞岡、ー二一萬里流」

【濯濯如二春月柳一】タクタクジョシュンゲツノヤナギノゴトシ　人品の美くしく光潤なる形容。世說、晉止「有二人數二王恭一形度一者云云、ー一」

【濯瀝】タクレキ　濯洗に同じ。

【濘】

㊀ディ　㊁デイ　㊀㊁通音　ネイ

㊀ぬかるみ、どろ(濘)「泥ー」「深ー」○きよし(清)○みぞ。㊁汀ーは小さき水。張協、七命「何異二促鱗之游一汀ー」

【濘濘】ディディ　どろがつかへる。史記「濘濘何事」

【濘涂】ディト　ぬかるみ。どろ。詩經、谷風「就レ其ー一」‖泥濘。

【濘淖】ディナウ　どろ深くしておぼれる。秦醜、述行賦「路頭放面無二乾穴一、望ー一而艱レ進」

【濱】

ヒン　眞

○はま、水のほとり、みぎは(水際)「水ー」「海ー」かぎり、はて「率土之ー」○地、水に近し、水にそふ。史、貨殖傳「鄒魯ー一洙泗」

【濱涯】ヒンガイ　水のほとり。曹植詩「鮮蛤被二ー一、光彩如二錦虹一」

【濱死】ヒンシ　しにかかる。‖瀕死・垂死。

【濱香】ヒンカウ　園菅に似たる草、花は赤褐色、地下莖の塊は薬用となす。‖蘄草。

【濱路】ヒンロ　園はまべの時。

【濱千月】ヒンセンゲツ　園○はまべに草り居る千月。○あととといふ詞に從ふ。

【濱綿綿】ヒンメンメン　園長濱綿袖の略、近江國長濱より産するちりめん。

【濱菊】ヒンキク　園はまべに生ずる草の一、花は菊花に似て香高く薬用とす。‖玉版菊。

【濱邊】ヒンペン　園海にそひたる地。

【濛】

ボウ　東　通音　モウ

○くらし、うすぐらし「空ー」「ー一」「冥ー」○こさめ(微雨)のふる貌。詩、豳風「零雨其ー」○こさめ霧などの貌。說文「微雨也」○ー鴻は元氣の未だ分れざる貌。春秋命曆序「ー鴻萌兆」○ー頂は大水。

【濛雨】モウウ　こさめ。宋之問詩「暮日ー晴、飛猿入二岩谷一」

【濛濛】モウモウ　うすぐらし。劉孝綽、謝二浙江一詩「ー一江煙上、遥花沙嶼無」‖冥濛。

【濛昧】モウマイ　霧などがとちこめてくらし。鮑照詩「ー一江上猿」

【濛濛】モウモウ　雨霧などのをぐらき貌。王昌齡詩「玉清壇上雨ー一」

【濮】

ボク　屋

○川の名、二あり一は山東省に在り。一は河南省に在り、春秋時代の「桑間ー上」は即ちこれ、今は濮ウる。○一種の竹。○姓の名。

【濮上之音】ボクジャウノオン　淫亂なる音。禮、樂記「桑間ー一、亡國之音也」

【濫】

㊀ラン　㊁カン　㊀勘　㊁㊁

㊀ひろがる(氾)水がひろがる「氾ー」○あふる(溢)物事が度に過ぐ。○うかぶ(泛)「ー觴」○ぬすむ(竊)○つく(漬)○みだる、自ら檢束せず。○道にそむく「乖ー」論、衛靈公「小人窮斯ー矣」○うきたることは(浮辭)○實を失ふ。○まぎらはし

「一風」○みだりに、むやみに「一造」㊀氷を盛る陶器。＝鑑。○たらひ（浴器）也、別陽「同」「雨浴」㊁―泉ンは底より正しく出づる泉。＝檀泉。

【濫觴】ランショウ　物事のはじめの譬。孔子家語「三楚、江源発二於濫觴一」（女部三畫）の條を見よ。

【濫造】ランゾウ　道義の外にあふれでる。漢書、刑法志「鑄作姦巧、新奇―出」

【濫竽】ランウ　濫吹に同じ。梁簡文帝文「―自慙」

【濫巾】ランキン　隠者に非ずして隠者の頭巾を著く、似て非なる隠者。孔稚圭、北山移文「誤二欺松桂一、―二北山一」

【濫吹】ランスイ　人の技者を聞はずして妄りに用ふる。管仲、斉桓公に笙三百人を聞かせしに、南郭先生之能盛二竽処一、請願為王吹、処士横議、むやみに高説などを論ずる。

【濫刑】ランケイ　濫罰に同じ。

【濫祭】ランサイ　みだりにまつる。礼記、祭「著―亦是不敬」

【濫造】ランゾウ　むやみにつくり出す。＝濫製。

【濫殺】ランサツ　みだりにころす。元史、泰定帝紀「往歳征循廉訪司、勉二其―一」

【濫雑】ランザツ　みだりにまじる。杜氏通典「用レ人―至二于士流一、晩レ居レ之」

【濫賞】ランショウ　みだりに賞をあたへる。賞銭、疏「有徳不―一、賞必加二于賢人一」

【濫觴】ランショウ　物事のはじめの譬。孔子家語、三楚、孔子謂二子路一曰、夫江始出二崏山一、其源可二以一レ―一レ及レ至二江津一、不二勢梢一、不レ可二以渉一」

【濫出】ランシュツ　みだりにいだす。

【濫穴】ランケツ　むだのものをおく。宋史、職官志「員既―、名益二濫一」

【濫吹】ランスイ　実力なくして、位に居る、無能の者が才能ある如くよせかけるの辞の宣王が竽（笛の一種）を好み、楽人三百人をして合奏せしむ、南郭処士其の技なくして其の中に混入す、宣王死し湣王立ち、一人づつ竽を吹かしめしかば、処士遂に逃れ去りしといふ故事に本づく「韓非、内儲説」張正見詩「幸承二―一末一撃レ擣白鶴レ歌」＝濫竽。

【濫觴】ランショウ　濫造に同じ。

【濫費】ランヒ　あしさせに。通鑑「民間盛二―一」

【濫陽】ランヨウ　みだりに位をのぼせる。宋史、梁顕傳「寧無二―任賢之大一耶」

【濫伐】ランバツ　みだりに木をきる。

【濫発】ランパツ　むやみに発行する「紙幣―」

【濫用】ランヨウ　みだりに用ふる。

【濫費】ランピ　みだりにつひやす。＝冗費・浪費。

十五畫

【瀅】エイ　徑

○すむ（水澄）○小さき水「汀―」

【瀆】カク　屋

○水が裂け去る。○―は水の激する聲の韓愈、藍田壁記「水―鏘鳴」

【瀇】カク　陌

○―は水の廣く深き貌。木華、海賦「―瀇沿汗」

【瀏】リュウ　有

○水勢の相撃つ聲。○水の疾く流れる貌。

【瀋】シン　寝

○しる（汁）○川の名、奉天省―陽縣の南四里に在り、下流は渾河に入る。

【瀋陽】シンヨウ　縣の名、清の太祖、遼陽より都を此に遷し、盛京と稱す、後、奉天府を置き、定めて陪都と爲す、今は開きて商埠と爲す。

【瀉】㊀シャ　禡　㊁シャ　馬　別陽は別字

㊀そそぐ「傾―」「一千里」㊁はく（吐）○もらす（泄）くだす。○はらくだし（下劇）○しほつち、瘴氣ある土、「鹵」「下―」

【瀑】ボク　沃　別陽は注（水部五畫）の條を見よ。

【瀕】㊀ヒン　眞　㊁ビン　軫

㊀―は水疾く流れの貌「沈約詩「出浦水――」㊁そばぐ。史、藺相如傳「得以頗血―大王矣」大王即ち秦王を殺すといふ婉語。

【瀘】テン　先

川の名、河南省に在り、洛水に入る。

【濺】セン　霰

○とびちる水だまり「名山記「激湍二飛雨一―」

【濾】リョ　御

○こす「―酒」

【瀆】㊀トク ㊁トウ 有 屋

㊀みぞ(溝)こみぞ、どぶ(小渠)「汙ー」論、憲問「自經於溝ー」○四ー は江・河・淮・濟の四大川の稱。○にごす。にごる(濁)けがす(汚)けがる「褻ー」○あなどる(慢)狎れ近づく。證、少儀「毋ー」神」○かさなる(重複)○にごり。㊁句ー は春秋の宋の地名。○くぐりあな。左、襄三十「自ー基門之ー入」竇に通ず。

【瀆亂】ルゲ 瀆・汙・汚・穢等の別は汙(水部三畫)の條を見よ。

【瀆汙】トク けがす。けがれる。關氏易傳「無レ所ニー一、謂二之洗心一」

【瀆職】トク 官公吏が不都合の行をなして職務をけがしはづかしめる。

【瀆慢】トン なれあなどる。宋史、范師道傳「婦人女子與二小人之性一同、寵幸大過、則ー一之心生」‖褻慢。

【瀌】ヘウ 蕭 尤

ー ー(ウ)は雪の盛んにふる貌。詩、小雅「雨雪ー ー」

【瀎】ベツ 屑

○ぬる(塗)○ぬぐふ(拭滅)○ー滿は水の疾く流れる貌。

【瀑】㊀ホク・ボク 屋 通音 ㊁ハク・ボク 覺 バク

㊀たき(飛泉・懸泉)「飛ー」㊁水の沸く貌。又其の聲。○濆ー は波浪のわき起つ貌。

【瀑布】バク たき。孫綽、遊二天台山一賦「ー ー飛流以界レ道」‖飛泉。

【瀁】㊀ヤウ 養 ㊁ヤウ 蕩

㊀水がひろくして、はてしなし「沆ー」「浩ー」「滉ー」㊁深(水部十一畫)の古字。

【瀏】リウ 尤 有

○きよし(清)詩、鄭風「ー其清矣」ふかし(深)○風の疾き貌。楚辭、九歎「秋風ー以瀟瀟」○きよくあきらかなる貌。

【瀏風】リウ すずしく吹くかぜ。兼要「涼風曰ー ー」

【瀏亮】リウ 涼しき貌。馬融、長笛賦「正ー ー以風洌」注「ー ー清涼貌」

【瀏濫】リウ 水のみなぎる貌。揚雄、甘泉賦「正ー ー以弘溝兮、揭二東西之流一」

【瀏覽】リウ 書物などを通じ見る。淮南、原道「ー ー徧照」‖割覽。

【瀏瀏】リウ○風疾き貌。謝惠連詩「亭亭映二江月一、ー ー出レ谷飄」○樓疾ハヤの貌。宋玉、九辨「乘二旹驟之ー ー一兮」

【瀏亮】リウ きよくあきらか。陳柯、文賦「賦體レ物而ー ー」

【瀘】リ 御

○こす(濾)紗又は葛布などにて水をこして滓カスを去る。○あらふ(洗)すます(澄)

【瀘過】グワ 水をこす「ー ー器」

【瀰】ルヰ 紙

漫ー は水波の湧き起る貌。郭璞、江賦「漫ー濆瀑」

【瀇】ワヲ 養

ー瀇は水の深くして廣き貌。淮南、覽冥「ー瀇極望」

十六畫

【瀛】エイ 庚

○おほうみ(大海)○水の貌。○澤の中。○ー洲は海中に在りて仙人の棲めりと傳ふる三神山の一。史、始皇紀「海中有二三神山一、名曰二蓬萊・方丈・ー洲一」

【瀛海】エイカイ おほうみ。史、孟嘗傳「乃有二大ー ー一、環二其外一」

【瀠】エイ 庚

洑(水部十四畫)に同じ。

【瀠洄】エイクワイ 水めぐりながる。朱熹詩「振槽嚴下水ー ー」‖澴溪。

【瀣】カイ クワイ 卦 隊

沆ー は北方の夜半の氣。又、露の氣。又、海の氣。東方朔、七諫「呑沆ー以長生」

【瀚】カン 翰 或は瀇に作り通じて翰に作る

○混ー は水の貌。○浩ー は廣大なる貌。○ー海は蒙古の沙漠の名、一名は戈壁。‖翰海。

【瀚瀚】カンカン 廣大なる貌。淮南、要略「浩浩ー ー」

【瀖】クヮク 藥

○ー濊は衆波の聲。○ー濩は、采色まばゆくして定らざる貌。

【瀞】セイ シャウ 敬

○きよし。淨に通ず。○圖ト河の水のしづかにたまる所。

【瀟】セウ 蕭

○きよくふかし(清深)○ー ー

は風雨の暴疾なる貌。詩、鄭風「風雨ー々」○川の名、湖南省に在り、湘水に入る。

【瀟洒】さっぱりとしてきよらか。孔稚圭、北山移文「ー々出塵之表」

【瀟瀟】前條に同じ、瀟・洒同義。

【瀟湘】二川の名、湖南省洞庭湖の南に在り、其の附近は、風光絶佳にして八景の目あり。夢溪筆談「度支員外郎宋迪工ン畫、尤善爲二平遠山水一、其得意者、有二平沙落雁・遠浦歸帆・山市晴嵐・江天暮雪・洞庭秋月・ー々夜雨・煙寺晩鐘・漁村夕照一、謂二之八景一、好事者多傳レ之」

【瀟灑】しづかなり。劉因詩「端居得ニー々一」

【瀟竹】竹の異名。韓愈・孟郊、城南聯句「ー々遠輸委」

【潛】

潛（水部十二畫）の譌字。

【瀦】チョ　虞　又、瀦に作る

ぬま、水の停まる所。みづたまり。

【瀕】ヒン　眞

○みぎは（水厓）はま。〓濱。○そふ（沿）○せまる（迫）のぞむ「ー死」

【瀕海】○うみべ。漢書、賈山傳「江湖之上、ー々之觀畢至」○海に沿ふ。〓沿海。

【瀕死】しにかかる。〓殞死・垂死。

【瀨】ライ　泰

○せ、水が沙上を流れる、淺きながれ。楚辭、九歌「石ー兮淺淺」○はやきながれ（急湍）「迅ー」「怒ー」「湍ー」「急ー」

【瀝】レキ　錫

○したたる（水下滴）「滴ー」したたむ。○ながれる、そそぐ。○したたり、しづく「滴ー」「餘ー」○漸ーは雪霰の聲。又、風の聲。○ー液は微しなる水流。張衡、思玄賦「漱ニ飛泉之ー液一兮」○清酒。

【瀝血】○ちをそそぎて必ず報ぜんことを盟ふ義。吳越春秋「不レ滅ニー々之仇一、不レ絶二讎毒之怨一」○誠の心を開きて相示す義。韓愈詩「刳レ肝以爲レ紙、ーレ血以書レ辭」

【瀝汁】したたれるしる。

【瀝青】ちゃん、松脂に油を加へて煉り合せたる塗料。

【瀝膽】忠誠の心を盡す、肝膽を披瀝する。宋史、倪思傳「誰肯披レ肝ー

レー、瀝二膽威儀一」

【瀝腸】はらわたにそそぐ。齊書、何昌寓傳「痛入二骨髓一ーレー紓レ懷」

【瀝酒】したたる。したたり。海賦「ー々滲淫、香厨雲霧」〓滴瀝。

【瀝瀝】○水の聲。于武陵詩「入レ戸風泉聲ー々」○風の聲。逸士傳「許由隱二箕山一、入遊二一瓢一飲乾挂二於樹上一、風吹ーー有レ聲」〓淅瀝。

【瀘】ロ　虞

川の名、雲南省に出で四川に入りて揚子江に會す。蜀志、諸葛亮傳「五月渡ニー、深入不毛」

【瀧】㊀ロウ　東　㊁サウ・ソウ　多　㊂ラウ　江

㊀雨の降る貌。○ひたす（漬）うるほす。㊁川の名。○州の名。○ー岡は山名、江西省永豐縣沙溪に在り。歐陽修にー岡阡表あり。㊂はやせ（奔湍）「奔ー」「驚ー」○國名瀑布の義とす。

十七畫

【瀅】エイ　庚

○ーは水の聲。柳宗元、鈷鉧潭西小邱記「ーー之聲與ニ耳謀一」○澄ーは水のうづまく貌。

【瀁】㊀エイ　遇　㊁ベイ　遇

㊀ー洋は大水の貌。㊁ー漠は水の甚だ遠き貌。

【瀇】㊀サン　㊁セン　銑　豏

ー瀁は小さき水の聲。又、魚のうきしづみする貌。

【瀼】ジャウ　陽

ーーは露の濃かなる貌。詩、小雅「零露ーー」〓穰穰。又、水の光の開合の貌。

【瀡】セン　豏

○うるほす（沿）ひたす（漬）漸に通ず。○繒かに水ある貌。○ほろほす。〓殲。

【瀰】㊀ビ・ミ　㊁ビ・ミ　紙　㊂ベイ　霽

㊀渺ーは水の曠く遠き貌。木華、海賦「渺ー瀁漫」㊁ーーは水の流れる貌。詩、邶風「河水ーー」○水の滿つる貌。詩、邶風「有ーー濟盈」

【瀰漫】ひろがりはびこる。

【淪】ヰク　藥
○にる(煮)○ゆびく。○あらふ(滌)○はやし、流疾し。

【澐】ウン　眞
○なみ、大いなる波、洪―」「狂―」「鯨―」○なみたつ。又其の形容。

【澐澐】イン　さざなみ。陳琳「――、水波也」‖曹植、洛神賦「―」

【澐洋】ヨウ　波の長くうねる貌。木華、海賦「―、浮天無岸」‖潘岳、秋興賦「―」

【澐淪】タン　なみ。孫綽、遊天台山賦「修竹―」‖左思、呉都賦「―」

【澐波】ハ　おほいなるなみ。顔延年「―」

【澐文】ブン　さざなみのもやう。張協、海賦「―――」‖後漢、輿服志「―」

【澐邊】ヘン　○波打ちぎわ。曹植、洛神賦「―」○波打ちぎわなる貌。王褒、洞簫賦「―」‖潘岳、秋興賦「―」‖左思、呉都賦「―」

【澐澐】ヘン　なみなみと水のあふれる貌。木華、海賦「―、浮天無岸」‖潘岳、秋興賦「―」

【澐澐】ヘン　水のあふれる貌。又、さざなみの起る貌。揚雄、甘泉賦「―」

【澐澐】ヘン　水のあふれる貌。又、水の動く

く貌。○かぎ（鉤）○大いなる恐ろ○――は絶えざる貌。○瀉――は塵垢なき貌。

【瀉】シャ　なみだをながすの貌。何遜詩「已矣將何如、垂紙自――」‖叢談・振涙。

【瀉】シャ　絶えざる貌。又、分明なる貌。晉王羲之「先後次序敍目皆、――可レ觀」

【瀉瀉】シャ　水をそそぎ注ぐにて地をはらふ、酒は酒、墻は墻に同じ。諺、大雅「――庭內」

【瀉瀉】シャ　前條に同じ。諺、子虛賦「――乎洋洋」‖駢字類編「――與灑通」則可矣」

【瀉瀉】シャ　盛んに流れ、物を洗ふ貌。唐孟子之始來、詩「――異レ之」

【瀉瀉】シャ　ちりをあらひそそぐ、淘衣「濕堂不レ――、卑屋不レ燥風」

【瀉瀉】シャ　そそぐ。書補文「和氣致レ祥、時雨――、野草萌芽」

【瀉瀉雨】シャクシャク　陰暦七月六日に降るあめ、牽牛織女二星の會合を妨ぐる意「殺風景時節、七月六日有レ雨、謂二之――一七日雨則云二洗車雨一」

【瀉瀉】シャク　さっぱりとしたる貌。宋史、張洎傳「風儀――、文采清醒」‖清落。

【灘】㊀タン 奮 ㊁タン 寒

○せ（瀨）はやせ、水淺く石多くして急に流れ、舟行の困難なる所。㊁水の奔り流れる貌。㊂沼――は太歲の申に在る稱。○國あらうみの航路「遠州ナダ」「播磨ナダ」

【灘聲】タンセイ　前條に同じ。杜甫詩「黃牛峽――」‖白馬江寒捲雪痕」

【瀨】ビ 紙

○水の流れる貌。○滾――は雪霜の貌。淮南、原道「雪霜――」

廿一畫

【灝】カツ 筆

○ひろし（廣）○大いなり。

【灝灝】カツカツ　ひらふにはてしなくひろ（廣）き貌。法言、問神「廣夏之者、灝灝爾、尚書――一篇」疑文「――猶漫漫廣曠」也」

【灞】ハ 禡

川の名。陝西省に在り、長安の附近を流れて渭水に入る、一に霸に作る。

【灞橋】ハキョウ　長安の東に在る橋の名。三輔黃圖「――在二長安東一跨レ水作レ橋、漢人送レ客至二此橋一折レ柳贈レ別」

【灞橋驢上】ハキョウロジョウ　詩思を構へるに適する場所。全唐詩話「相國鄭綮善レ詩、或曰、相國近爲二新詩一否、對曰、詩思在二灞橋風雪中、驢子上、此何以得レ之」

【灢】シュク 沃

――はうやうやし（恭）‖屬灢

廿二畫

【灣】ワン 刪

○いりえ（水曲）海に限らず、すべて水の弓狀に入り込みし所。沈佺期詩「舟險萬重――」○海の入江「膠州――」「廣州――」○銀――は天河ノ○國ノ港の大なるもの「東京――」

【灣灣】ワンワン　いりえのいそ。王維詩「社酒吹レ香新燕飛、遊人裙幌占――」

【灣洄】ワンクワイ　水のめぐれる川のくま。黃庭堅詩「孤浦鳴鳥樂二――一」

【灣然】ワンゼン　水の弓狀に入り込む貌。柳宗元、遊二宴南池一序「峯陵城南環以二翠山一、延以二林麓一、其屋谷之委會、則泓然爲レ池、――爲レ淵」

【灣入】ワンニフ　水が入江になりて陸地に入りこみてゐる。

【灣流】ワンリウ　太西洋中の赤道流の一、墨西其灣より東北流して歐洲の西岸に注りてまた北流するもの。

【灣對】ワンタイ　灣と灘と相對する。李東陽詩「三十六灣――」

廿三畫

【灤】ラン（次條）の俗字。

廿八畫

【灩】エン 豔

又灩に作る　灩は俗字

○瀲――は水波のただよひうごく貌。又、水の滿つる貌。○――預堆は、四川省奉節縣の西南に在り、三峽の一なる瞿唐峽の口に横はる一大巖の名。入蜀記「晚至瞿塘關、關西門正對二――一、預堆、猶二瞿塘一也」‖淫預堆・猶豫堆。

【灩灩】エンエン　月の水に映じて光る貌。何遜、望二新月一詩「的的與レ沙靜、――逐レ波鮮」

【灩碧】エンヘキ　みどりいろをうごかす、故都宮殿記「――魚池」

火部（ヒ）

【火】クワ 哿

○ひ、物體がもえて生ずる光熱體「燈――」「漁――」「炭――」○きりび「燧――」論、陽貨「鑽燧改――」

○食物を煮又焼く「禁ー」「一食」○やぶる(壊)そこなふ(毀)○炎ーは陽氣の盛んなる義。○心が物に激して逆上する「心ー」「慾ー」○物事の急に迫る「ー急」「ー速」○やく、火をもやす。もゆ。○くわじ(火事)「ー災」「失ー」○唐代の兵制、十人一組の稱。轉じて同作者の義とす「ー作」○星の名「ー星」○國。漢字の火の字が偏になるものの稱。

【火雲】クワウン　夏のくもの峯參詩「五月山雨熱、三峯ー一蒸」

【火頌】クワシヨウ　○ほのぼ。易林「卒逢ニー一」○竜膽(リンダウ)の異名(本草)

【火耕】クワカウ　古の耕耘の一法、草木をやき灰となして種をまく。史、貨殖傳「ー一而水耨」

【火技】クワギ　鉄砲類を取りあつかふわざ。

【火器】クワキ　○ひいれ。○鐵砲の類。‖火兵。

【火牛計】クワギウケイ　春秋周の時、齊の田單が千餘の牛の角に兵刃を束ね、其の尾に油を灌ぎたる葦を束ね、其の端を焼き、夜に乗じて燕軍に放ち、大いに之を敗りたる奇計(史、田單傳)

【火急】クワキフ　甚だしく急なり。北史、齊武帝紀「帝特愛ニ非時之物一、取求ー一、皆須ニ朝徵夕辦一」

【火炬】クワキヨ　たいまつ。晉書、王濬傳「乃作ニー一、長十餘丈、大十數圍、灌以ニ麻油一在レ船」

【火魚】クワギヨ　かながしら。‖方頭魚。

【火化】クワクワ　○火にて物を焼る。禮、禮運「昔者先王未レ有ニー一、食ニ草木之實、鳥獸之肉一」○火葬。寧齋隨事「自ニ縛氏ー一之說起一、於レ是死而焚レ尸者所ニ在皆然一」

【火花】クワクワ　○はなび。‖燈火。○蛾(ガ)の異名。古今注「飛蛾赴ニ燈、一名ー一、一名慕光」○國。電氣の放射する時、又は物の相撃つ時、發散する光。

【火浣布】クワクワンフ　石綿にて織りたるぬの。魏志、齊王芳紀「西域、重譯獻ニ一一」‖火鼠・火澣布。

【火鼠布】クワソフ　前條に同じ。

【火雞】クワケイ　○ひくひどり、南洋に産する走禽類、體大いに、頭上に骨質の冠をいただき、脚は大きく能く走る。陸產禽獸志「國有ニー一、食レ火吐レ氣」‖食火雞。○雞の足に火を繋ぎて敵の陣中に飛ばして火攻にする、火牛の計に似たる奇策。晉書、江逌傳「取ニ數百雞、以ニ長繩一連レ之、繫ニ火於足一、縱令驚散、飛集ニ營ー一ー、以ニ焚ニ其舍一」

【火數】クワスウ　拜火教(七四〇頁三段)に同じ。

【火血刀】クワケツタウ　㊀地獄(火)畜生(血)餓鬼(刀)の三惡道「ーー」の苦」

【火惑】クワワク　火の用心に關するおきて。荀子「修ニー一、養ニ山林藪澤草木魚繁ニー一」

【火伍】クワゴ　伍は五人組、火は十人組。柳宗元、段太尉逸事狀「吐ニ左右ニ皆解レ甲散還ニー一中ー一」

【火後】クワゴ　寒食の節の後。陸游、牡丹記「開在ニ寒食前一者、謂ニ之火前一、在ニ寒食後一者、謂ニ之ー一ー一」

【火口】クワコウ　○火山の噴火口。㊀○ひうちの火を燃えつかせる料。○ダチ鐵砲の火氣を筒に通ずるあな。‖火門。

【火攻】クワコウ　ひぜめ。孫子、火攻「ー一有レ五、一曰火レ人、二曰火レ積、三曰火レ輜、四曰火レ庫、五曰火レ隊」

【火災】クワサイ　くわじ。禮、月令「孟秋行ニ夏令一、則多ニー一ー一」

【火榮】クワエイ　はやつけぎ、燒寸(ヤキスン)

【火罪】クワザイ　ひあぶり、古の刑罰の一。

【火葬】クワサウ　やきて葬る。土葬・水葬の對「南史、扶南國傳」‖火化。

【火槍】クワサウ　てっぱう(鐵砲)稍通俗「有ニ飛ー一、注レ藥以レ火發レ之」‖火刀。

【火山】クワザン　火をふく山。‖噴火山。

【火徹】クワテツ　夏の熱き空、火の傘を張るに喩ふ、徹は傘。韓愈詩「赫赫炎官

張ニー一」

【火事】クワジ　火の災にかかる。淮南俶眞傳「齊果上ニー一」‖火災・火難。

【火柴】クワサイ　封蠟(フウラフ)の異稱。

【火徹】クワテツ　もえのこり。魏志、管寧傳「望見有ニ火光一、纔連レ之得レ島、島無ニ居人一、又無ニー一」

【火車】クワシヤ　○火攻に用ふる車。齊民、高帝紀「推ニー一數追ニ攻戰相持一」○汽車。‖火輪車。○㊀地獄にて罪惡の人を載する火の車。變文論「遣ニ罪人身ニ著ニー一上」

【火車站】クワシヤタン　㊀停車場。

【火傷】クワシヤウ　やけど。

【火主】クワシユ　ひもと。宋書、五行志「隆安十一年、京都所在大行ニ火災一(中略)王弘知ニ天意ニ之災ニ不レ早ニー一」

【火酒】クワシユ　燒酎(シヨウチウ)の高精分の多き一種の酒。

【火銃】クワジウ　てっぱう(鐵砲)同掌字會「俗呼ニー一、又曰ニ銃筒一」

【火繩】クワジヤウ　ひなは、昔、鐵砲の導火線に用ひし竹製の繩。通雅「格本に無レ用、惟枝上垂根可レ以作ニー一、以發ニ火銃一」

【火食】クワシヨク　煮て食ふ。禮、王制「東方曰レ夷、被髮文身、有ニ不ニー一ニ者ニ矣一」

【火正】クワセイ　火を掌る官。鄭語「夫黎爲ニ高辛氏ニー一」‖祝融。

【火星】クワセイ　大陽系統中の遊星の一、六百八十七日にて太陽を一周す。‖

焚燒屋。

【火浣】クワカン　石綿にて織りたる布。後漢書、西南夷傳注「一ハ、卽火浣布也」

【火勢】クワセイ　火のいきほひ。王堂淮海錄「振二西北主威一、以絕二一一一」

【火成岩】クワセイガン　地下の岩漿が凝固して成りたる岩石。＝火山岩。

【火前】クワゼン　寒食の節の前、火とは寒食の日には火を禁ずる故にいふ。宋史、食貨志「建安園茶、北苑上品一、其最佳者曰二社前一、次曰二一一一」火後茶看。

【火箭】クワセン　火をつけて射る矢、ひや。

【火船】クワセン　敵の船を焼く爲に、油を注ぎ薪を積みて火を放ちて流す船。＝火攻船。

【火戰】クワセン　銃砲彈を用ひてするたたかひ。＝火兵戰。

【火鼠】クワソ　ひねずみ、支那の南方の火山中に棲む、其の毛を織きて火浣布を製すと傳ふ（神異經）

【火逃】クワタウ　甚だしく急なり（李俊民詩「紫門近日多二來客一、一一休嫌待二孝先一」＝火急。

【火刀】クワタウ　てっぱう。宋濂、秦士錄「出二一一一砑柱、殺二傷中國民一」＝火砲。

【火宅】クワタク　○佛家より煩惱の多き俗界をさしていふ語。法華經「三界無レ安、猶如二一一一」○僧の妻ある者を一一僧といふ（夢餘錄）

【火定】クワヂヤウ　佛道の信仰者が無餘涅槃卽ち小乘の涅槃に入らんとする時、薪木を積みて火を生じ、自ら火中に身を投じて滅を取る。

【火傘】クワサン　ひばし。（山野錄「以二一一一灰」

【火田】クワデン　○田畑の雜草を焚く。燔、王制「昆蟲未レ蟄、不二以一レ一」○はたけ。水田の對。

【火斗】クワト　ひのし。（通俗文「一一曰二熨斗一」

【火熨】クワヰツ　火を用ひてすがたを整ふ。

【火牛】クワギウ　くわじ。（韓非、喩老「故自圭無二水雖一、丈人無二一一」＝火災。

【火傷】クワシヤウ　○同じ仲間の兵。木蘭詩「出レ門看二一一一、一一各驚惶」○同伴者。＝伴侶。

【火飯】クワハン　やきたるにぎりめし。（通鑑、宋欽宗紀「靖康元年、帝以二御膳一賜二兵卒一、易二一一一以進」

【火兵】クワヘイ　小銃や火砲の稱「一一一處」

【火脈】クワミヤク　地下の火熱の傳はるみち。

【火綿】クワメン　精製せし木綿を強度の硝酸と硫酸との混和液にて製成せし爆發物。無煙火藥の原料として用ふ。

【火藥】クワヤク　硝石・硫黄・木炭を混合して製する發火藥。＝焰硝

【火輪】クワリン　太陽の（陳鑑誌「一一飛出客心鮮」

【火輪車】クワリンシヤ　汽車の異名。

【火輪船】クワリンセン　汽船の異名。

【火壘】クワルヰ　ひばち。行路難「一一大者曰二元燈一、燈レ手者曰二手燈一」

【火鉢】クワハチ　圖壘の上にやぐらを置きて暖をとるもの。＝炬燵。

【爇レ火】ネツクワ　火を焚きて飯を炊く。生活する義。（公羊、僖上「國之間士待レ臣而一レ一者數百家」

【改レ火】カイクワ　新しき火を取る、春は楡柳、夏は棗杏、夏季は桑柘、秋は柞檟、冬は槐檀の火を取るをいふ。論、隱貨「新穀既升、鑽燧一レ一」

【乞レ火不レ若レ取レ燧】コツクワフジヤクシユスイ　人に火を乞ふよりは、己が燧を取りて火を出だすにしかず。人に求むるよりは、己自ら飽むべきに喩ふ。淮南子「一一、寄レ食不レ若レ勞レ井」

【救レ火揚レ沸】キウクワヤウフツ　火を救はんとして沸湯を汲みあぐれば其の勞益迫急する義。史、酷吏傳「吏治者二救レ火揚レ沸」

【投レ火負レ薪】トウクワフシン　其の害をすくはんとして卻りて其の害を蔽だしくする喩。（析子「令煩則民詐、政擾則民不レ定、不治二其本一而務二其末一、譬如二拯レ溺錘レ之以レ石、救レ火投レ之以レ薪」

【火炎二崑岡一玉石俱焚】クワエンコンカウギヨクセキトモニヤク　火、崑山に燃ゆれば、玉石を分たず其に焚く。官吏濫逸の行あれば人の善惡を辨ぜず、之を罪するに喩ふ（書、胤征）

【火取蟲】ヒトリムシ　圖夏の夜、あかりなどをめがけてより來る蟲。＝蛾、燈蛾。

【若二火之燎二于原一】ジヤククワシリヤウウゲン　勢のさかんにして、近づくべからざるに喩ふ。書、盤庚「一一、不レ可二鄕邇一」

【火見櫓】ヒノミヤグラ　圖火事を發見し、其の遠近を見定めるために立てたるやぐら。＝望火樓。

【火道】クワダウ　圖火爐筒煙突の火口にかぶせるふた。「一一を切る」は其れを開きて火を付ける義。轉じて物事にとりかかる義にいふ。

【灰】ケ　クワイ

○はひ。○燒盡する、滅絕する。○活氣を失ひし者に喩ふ。史、韓長孺傳「死一猶不二復然一乎」然は燃。

辨正　灰は、火に從ひ、ナ卽ち又に從ふ、又は手なり、火既に滅して、以て執持す可きなり。俗に灰に作るは非。

【灯】（前條）の字が（通用の部になるときの形。れんぐわ（連火）

【灰】

【灰汁】ワク　あく。あくみず。灰を水にひたして得たるうはずみの水。

【灰心】カイ　我なく靜かにして外物に誘惑せられざる心。莊、齊物「而心固可ン使ン如ン死ー一乎」に本づく。轉じて失意の事に遇ひて擬はざる心。義慶詩「ー一緣ン君盡」

【灰塵】ジン　はひと。もえさしと。全くほろぶる意。魏、張始均傳「一時生靈、至於ー一月息」白居易詩「一劫經ニ一ー一」「柯葉無ニ子遺一」

【灰燼】ジン　あくにてにる。顧記詩「浮漚子珠璣聯、ー一蟾搖光耀絕」

【灰塵】ヂン　物の滅び盡くるに喩ふ。張說詩「再逢ー一散、枯草及老傳」

【灰土】ド　はひと、つちと。

【灰滅】メツ　炭火が灰となりし如くにほろぶ。後漢、高允傳「孤二負聖恩一、自臨ニー一」ー一ニ歸滅。

【灰滅之智】チ　ことごとく後世せられるわざはひ。後漢書、郎顗傳「ー一ー一」

【灰冷】レイ　心が寒き灰の如く、何の欲望もなきをいふ。王安石詩「百念漸ー一、有ン生不ン須ン牧」ー一冷灰。

【灸】

キュウ　キウ　灸と同字。

○やいと、艾に火をつけ、體を灼きて病を療する法。○やく(灼)

【灸刺】キセキ　きうと、はりと。急就篇「ー一和ン藥遂ニ去邪一」

【灸師】シ　灸にて病を治する醫師。韓愈詩「ー一施ニ艾炷一、醫若ニ盧扁一」

【災】

サイ　災、灾に作る。或は古字。

○わざはひ、さいなん(禍害)「天ー一」「ー一禍」○自然に生ずる凶事「天ー一」○大いなる火事。又火元のしれざる火事。左、昭十六「天火曰ー一」

同訓異義　災・禍・殃・厄の別は禍(示部九畫)の條を見よ。

【災害】ガイ　わざはひ。ー一ニ災厄。災難。

【災告】コク　わざはひと、あやまちと。後漢書、蔡邕傳「陛下聖德充明、憂悼ー一ー一」

【災告】ガイ　わざはひ。後漢書「消ニ數ー一、安ニ耕黎元一」ー一告災。

【災難】ナン　わざはひ、なんぎ、くるしみ。後漢書、劉喬傳「ー一延ニ于宗子一」

【災變】ヘン　災異に同じ。白虎通に「ー一ー一變」あり。

【災厄】ヤク　わざはひ。范質、戒ニ從子某一書「荀不ン愼ニ禍根一、ー一從ン此始」

【災沴】レイ　わざはひ。沴は妖氣。杜牧之「自ー一後及牛馬」

【災禍】カ　わざはひ。書經「祭享有ン愆、ー一不ン生」ー一災厄。

【灾】

災(前條)に同じ。

【灺】

ジャ　シャ　本、炸に作る。

もえのこり(燭燼)

【灼】

(一)シャク　(二)セキ　藥

(一)やく(燒)あぶる(炙)○炎やをする。○あつし(熱)○あきらか(明)「ー一然」○おとろく。○ーーは花の盛んなる貌。

(二)焫(火部五畫)に同じ。

同訓異義　灼・明・昭・皎・晰・炳の別は明(日部四畫)の條を見よ。

【灼艾】ガイ　もぐさをやく、きうをすゑる。宋史、太祖紀「太宗嘗病疽、帝往視ン之、親爲ーー、太宗覺ン痛、帝亦取ン艾自灸、帝は宋の太祖。この故事によりて兄弟友愛の厚きをーー分痛といふ。

【灼見】ケン　あきらかに見る、つまびらかに知りつくす。書、立政「ーー三有俊心」

【灼爍】シャク　かがやきて高く、かがやく王融、淨行頌「匪ン日曜ン月灼以ー一」

【灼然】ネン　骨をやきて占ふ法。後漢書、倭ーー以下、用占吉凶」

【灼爍】シャク　あきらかにうるはし。雅、釋訓「ー一、明也」注「皆謂ニ顯著一」ー一灼然。

【灼灼】シャク　○花の盛んなる貌。詩、桃夭「ー一其華」○光のかがやく貌。新書「若ニ日出之ー一、回ニ人意一」ー一灼然。

【灼灼園中花】エンチュウ　盛んに開ける園中の花。范質、戒ニ從子一詩「ー一、莫ニ令ー一ー一晩翠一」

【灼樂】シャク　○ひかりかがやく、美白詩、衛都賦「ー一、ー一瑪瑙ー一」○艷やかなる色の形容。祭邕賦「榮華ー一、榮不ニ雜華一」

【灼然】ゼン　光明なる貌。劉寶、墓護論

「惟巽之風行、則賢臭二不育一一殊炎」‖灼灼。

【灼熱】シャクネツ　やきてあつくする。

【灼背】シャクハイ　せをやく。宋史、朱壽昌傳「用二淳屑法一一レ一炷レ頂、刺而灸二佛經一」

【灼爛】シャクラン　かがやく。吳融詩「嵯峨二丘岳一一一羅二星宿一」

【灼鑠】シャクシャク　やけただれる。劉勰新論「鋪金在レ爐、鑄者勿レ詢、非レ不レ欲也、銷而一一」

【灶】竈（穴部十六畫）の俗字。

【炎】レイ　リャウ　㊥

○少しく熱する貌。○鹽（雨部十六畫）の俗字。

四畫

【炎】㊀エン　㊁エン　㊂タン

㊀もゆ（燃）もえあがる、火光上る。○やく（焚）もやす。書、胤征「火一崑岡、玉石俱焚」○あつし（熱）○さかんなり（盛）○ほのほ。○勢の盛んなる貌。○一風は東北の風。○一天は南方の天。○燃え光る貌。○進む貌。㊁一一ダンは美くしく盛んなる貌。㊂ほのほ、焰に通ず。

【炎威】エンヰ　はげしきあつさ。劉禹錫詩「吟レ風起二天籟一、蔽レ日無二一一一」

【炎埃】エンアイ　熱くかがやく。魏了翁詩「一一蹴二塵昊一」

【炎熾】エンシ　甚だあつし。謝朓詩「滇雨銷二一一一」‖炎熱。

【炎蒸】エンジョウ　むしあつし。歐陽修詩「選レ勝逢二一一、林泉清可レ賞」‖炎溽。

【炎炎】エンエン　○熱氣の強き貌。詩、大雅「赫赫一一」赫赫は早氣。○盛んに進む貌。吳語「日長一一」○盛んなる貌。莊、齊物「大言一一」

【炎標】エンヒョウ　ほのかに、けむりと。謝靈運詩「烈火耀二一一一」

【炎夏】エンカ　あつきなつ。朱慶餘詩「一一寒蟬二高樹淒落中」

【炎旱】エンカン　ひでり。李白詩「龍怪湿二涙波一、俄レ時致二一一一」

【炎赫】エンカク　日がさかんにあつし。李白詩「一一五月中、炎曦爍二河堤一」

【炎漢】エンカン　漢の世を指していふ、漢は火德を以て王たるが故。魏書、陳思王植傳「植封二雍丘王一、朝二京師一、獻レ詩曰、受二命一一一臨二君萬邦一」

【炎曦】エンギ　ひでり、あつさ。唐書「一一威珍、租稅減レ入」

【炎氣】エンキ　あつさ。陳後主詩「殿深一一少」

【炎曜】エンヨウ　晝き日のひかり。王粲詩「涼風撥二蒸暑一、清雲御二一一一」

【炎果】エンクワ　枇杷びの異名（謝朓賦）

【炎荒】エンクワウ　南方の極めて遠くしてあつき未開の地、荒は荒服。李商隱文「久處二一一一」

【炎蒙】エンモウ　炎帝と黃帝と。漢書「而一一居處之苗裔、尙順有二存者一」

【炎官】エンクワン　火の神。韓愈詩「赫赫一一張二火旗一」

【炎徼】エンケウ　南方の遠き邊境。江淹文「冰洲一一、來獻二其琛一」‖炎荒。

【炎瘴】エンシャウ　熱病を生ずる沼澤のあしき氣。白居易詩「一一蒸如レ火、光陰走似レ車」

【炎上】エンジャウ　○火をいふ。書、洪範「水曰二潤下一、火曰二一一一」○國家城・社等などの代表をいふ。

【炎灼】エンシャク　火がさかんにもえあがる。甚だ恐懼して迫り苦む心に喩ふ。魏武帝、讓二九錫一表「捶悼征營、心如二一一一」‖燒灼。

【炎暑】エンショ　きびしきあつさ。儒光義詩「道遙高殿陰、六月無二一一一」‖炎熱、酷暑。

【炎蒸】エンジョウ　むしあつし。庾信詩「五月一一氣、三時刻漏長」‖炎溽。

【炎腫】エンシュ　病名、發熱によりてはれ痛む、「肺一一」「胃一一」

【炎溽】エンジョク　むしあつし。‖溽暑。

【炎燄】エンエン　のろし。陳琳、武軍賦「一一四舉、元戎齊登」

【炎精】エンセイ　○ほのほ、かがろふ。‖陽炎。○火德の神。馮衍文「社稷復存、一一更輝」○日をいふ。

【炎燒】エンセウ　○やける。もえる。○やく。もやす。

【炎暑】エンショ　あつきひる。閻伯璵詩「但見柳青青、夾レ路起二一一一」

【炎塵】エンヂン　暑き日のほこり。

【炎帝】エンテイ　○なつの神。○古代の帝王、神農氏の稱。

【炎天】エンテン　○あつきなつのそら。孔融詩「絳蘇一一路」○南方の天。「淮調、時則」○夏のあつき日なた。

【炎暑】エンショ　あつきのくるしみ。杜甫詩「清涼破二一一、寶瑟欲二登簾一」

【炎德】エントク　火德。楚辭「嘉二陽朔之一一一」‖炎附レ熱　權勢ある者にへつらひて附き隨ふ喩。宋史、李電傳「見二大臣不公、常欲レ面二折之一、其能——看二人屑隨一、以資二推鞫一乎」

【附レ炎棄レ寒】　勢位の盛んなる人に附き從ひ、其の衰へたる時は棄て去る。人情の輕薄なるをいふ。柳宗元、宋清傳「吾觀下今之交二乎人一者上、炎而附、寒而棄、鮮レ有下能始二終清一之爲一者上」

【炎熱】エンネツ　甚だしきあつさ。唐太宗詩「人皆苦二一一、我愛夏日長」

【炎方】エンパウ　南方。杜甫詩「鴻洞此一一」

【炎風】エンフウ　東北のかぜ、八風の一。呂覽「東北曰二一一一」

【炎飆】エンヒョウ　夏のあつき風。王勃文「一一謝レ節、爽候開レ辰」

【炎陽】エンヤウ　なつの異名。梁簡文帝詩「六龍驚不レ息、三伏起二二一一」‖炎師・朱明。
【炎場】エンヂヤウ　やく。東方朔、七諫「觀二天火之一一一兮、聽二大鼇之波聲一」
【炎爛】エンラン　あきらかにかがやく。馬融、東巡頌「曄光四煬、一一寰レ天」
【炎涼】エンリヤウ　○あつきと、すずしきと。齊書、樂書「數化變二衆機一、布政司二一一一」‖涼熱。○人情の厚きと薄きとに喩ふ。李白詩「一別隔二千里一、榮枯異二一一一」

【炕】

㊀カウ　㊁カウ　陽　漾

㊀かわかす、ほす(乾)火にあぶり乾かす、あぶる(炙)○たかぶる。○燥ハツ むる牀、おんどる、牀下に火氣を通じて室内をあたたむるもの。朝鮮又は支那の北方に行はる。‖炕牀。○亢に通ず。○一陽は枯涸カレの義。㊁はる(張)「一布」
【炕暖】カウダン　火にてあぶりあたためる。

【炁】

氣(气部六畫)に同じ。
關尹子「以二一一一生二萬物一」

【炘】

キン　文

○あつし(熱)あぶる(炙)○一一は光の盛んなる貌。揚雄、甘泉賦「乘二景炎之一一」」

【炒】

サウ　セウ　巧

いる(煮)「一豆」「煎一」
【炒米】サウマイ　いりごめ。南史、陳武帝紀「一升米、買二綢一匹一、或一一レ食レ之」

【炊】

㊀スヰ　㊁スヰ　寘　支

㊀かしぐ、にる(煮)○ふく。‖吹。㊁一累は動きのぼる貌。
【炊煙】スヰエン　にたきするけむり。‖炊烟。
【炊臼】スヰキウ　妻を失ふをいふ。西陽雜俎「江淮王生善卜、有二賈客張瞻一將レ遠、夢レ炊二臼中一、問二王生一、生曰、君婦不レ見レ妻矣、臼中炊無レ釜也、瞻歸婦已卒」釜・婦音通ず、故にいふ。
【炊金饌玉】スヰキンセンギヨク　飲食の美なるをほめていふ。晉書、王濛傳「平蠻成里帶二梁塵一、炊レ金饌レ玉作二鳴鐘一」
【炊火】スヰクワ　めしをたく火。漢書、武五子傳「近卿作レ亂、內外俱發、趙氏無二一一一形一」無二一一一は人煙なき義。
【炊桂】スヰケイ　桂樹にて飯をかしぐ、物價の高き他國に辛く生活するにいふ。戰國策「今臣貧レ玉一レ一、因レ鬼見レ帝、不二亦難一乎」
【炊骨】スヰコツ　骨(部首十畫)の炊レ骨食レ子を見よ。
【炊甑】スヰソウ　めしをかしぐ、にたき。釜

記、注「薪籠二一一一、柴以給レ爨」
【炊事】スヰジ　めしをかしぐ、にたき「一一場」
【炊人】スヰジン　めしたき。西陽雜俎、本是王家一一」
【炊煮】スヰシヤ　かしぎにる。蘇軾詩、晉公赤乞レ米、一一個不レ歸」
【炊烝】スヰジヤウ　かしぎむす。蓋だしくむしあつき噫っ烝は烝。梅堯臣詩「屋室如二一一一」
【炊甑】スヰソウ　飯たくこしき。白居易詩「置レ之一一中、與レ飯同時熟」
【炊飯】スヰハン　めしをかしぐ。陸游詩「赤米舂二一一、青蔬淡二煮羹一」
【炊夫】スヰフ　めしたき男。
【炊婦】スヰフ　めしたき女、おさん。‖炊婦。
【炊米】スヰマイ　こめをかしぐ。かしぐ米。唐書、陽城傳「日一二一斛一」資庭堅詩「見報無二一一、浩歎聽二屋梁一」
【炊累】スヰルイ　塵などが動きのぼる貌。莊、在宥「從容無爲、而萬物一一焉」‖吹累。

【炙】

セキ　シヤ　禡　陌　遇　霽

○あぶる、やく、肉を火にかけて燒く。○あぶりもの、燒きたる肉。○ひあぶりにする、やき殺す。○親しみ近づく、ちかづく「親一」
【行レ炙】カウシヤ　燒きたる肉を賓席の人

人にくばる。南史、王現傳「顏師伯嘉賓、傳レ酒一レ一、皆悉內破」
【欲レ炙之色】ヨクシヤノシキ　物を見てほしがる心の顏にあらはれる貌。晉書「顧榮與二同僚一飲、見二行レ炙者一、有二一一一榮輟與嘼之(中略)後趙王倫篡レ位、榮在レ難、一人救レ之、乃受レ炙人也」
【炙輠】シヤクワ　輠は車の油をさしこむ所之を火にあぶれば油が流れて止まずよりて辯說のよどみなき譬とす「史、孟荀傳」輠或は過又橋に作る。
【炙膾】シヤクワイ　ほそく切りたる肉をあぶる。周禮、疏「燒レ藏一レ一」
【炙鯁】シヤカウ　あぶりやきたるきりにく。急就篇「膻膾一一各有レ形」
【炙手】シヤシユ　手(部首四畫)の炙レ手可レ熱を見よ。
【炙背】シヤハイ　○せ中を日にあぶる。心地よきにいふ。劉康、與二山濤一書「野人有レ快二一一一而美二芹子一者、欲レ獻二之至尊一」○又、苦しきにいふ。陸游詩「暑transfer日一レ一、憑欄泥涼レ脚」

【炉】

五畫　爐(火部十六畫)の俗字。

【炬】

キヨ　語

○かがりび、たいまつ(松明)

「松ー」「列ー」○らそく「蠟ー」○するどく光るものの譬「眼光如ー」○俗ー燧コタツは煖を取る具。＝火燧。

【炬火】キョクワ たいまつのひ。史、田單傳「牛尾ー」

【炬燭】キョショク らそく。南史、蕭慤鉤ニーー十燧ニ＝炬燭。

【炬燧】キョスイ らそく。倪啓詩「麗鏘ーー曜幾里、香烟出ル檻芳飄綺ニ＝蠟燭。

【炯】ケイ キャウ

俗字 炯は

あきらか、ひかり。李嶠、玉詩「金沙發光ー」＝耿。

【炯戒】ケイカイ 明かなるいましめ。班固、幽通賦「又申ル之以ニーー」＝明戒。

【炯眼】ケイガン あきらかに物を見ぬく眼。

【炯鑒】ケイカン 明かなるてほん、鑑はかがみ。說林「豈非ニ用ル法之ーー一哉」＝明鑒。

【炯晃】ケイクワウ かがやく。潘岳賦「金根照耀以ーー兮、龍驤臨願而沛艾」

【炯炯】ケイケイ ○光りかがやく貌の蘇舜欽詩「禁懷兩沈淡、ーー抱ニ明玉ニ」○小しく明か、心にかかりて忘るる能はざる貌。楚辭、遠遊「夜ーー而不ル寐」＝耿耿。○明かに寒する貌。

【炯心】ケイシン 光明なる心。李白詩「高節不ル可ル奪、ーー如ニ凝丹ー」

【炯朗】ケイロウ あきらか、ほがらか。張華賦「何燦文之ーー」

【炫】ケン・ゲン

㊀ケン・ゲン 鉄 蕨 ㊁ケン

㊀かがやく。かがやかす（耀）○あきらか（明）○ひかる。ひかり（火光）○ほこり示す、てらふ「矜ーー」「自ーー」㊁かがやく（耀）

【炫耀】ケンヨウ かがやく。史、田單傳「牛尾炬火、光明ーー」＝炫燿。

【炫怪】ケンクワイ 奇にほこりて異を立てる。柳宗元文「敢ーニ於衆目ニ以召ル閑取ル怒乎」

【炫晃】ケンクワウ ひかりかがやく。戰國、秦策「ーニ于道ニ」

【炫煌】ケンクワウ 光のかがやく貌。漢書、敘傳「ーー上天、顯ル象著明」顯は顯。

【炫目】ケンモク めをまばゆくす。水經、注「浮梁振動、無ニ不ニ搖ル心ーー一也」

【炸】㊀サク 陌 ㊁アツ 治

㊀火力にて爆發さす。㊁油にて食物をあげる。又其の食物、油煎食物。

【炸彈】サクダン ○炸藥をこめたる彈丸。○炸藥を罐の中にこめたるもの。＝爆裂彈。

【炸發】サクハツ 火藥が發火する。＝爆發・炸裂。

【炸藥】サクヤク 火藥の極めて猛烈なるもの、地雷・水雷等に用ふ。＝爆發藥。

【炮】ホウ

炮（火部三畫）に同じ。

【炷】シュ シュ

慶 遇

○とうしん（燈心）とうしみ、燈油にひたしてあかりをつけるもの。○たく（燒）○香の一くゆり。白居易詩「惟燒ーー降眞香」

【炻】㊀セウ 篠 ㊁セウ 篠

㊀灼（火部三畫）に同じ。㊁てる。てらす。＝照。

【炻炤】セウセウ 明かに見る貌。荀、儒效「ーー兮其用ル知之明也」＝昭昭。

【炭】タン

○すみ、木を蒸し燒にしたる燃料「木ー」○すみをもやしたる火「盛ー」○もえのこり。○元素の一「ー素」○石炭の略稱「ー坑」

【抱ル炭希ル涼】タンヲイダキテすすヲコヒネガフ 行ふ所と望む所と相反するに喩ふ。魏志、高柔傳、注「孫盛曰、信不ル足ル爲、而斷ニ柔必附ニ猜生於我ニ而望ニ彼之必懷ニ何異ヲ抱ル炭求ル凉、——者之說」

【炭坑】タンカウ 石炭をほりだすあな。＝石炭坑。

【炭化】タンクワ 炭素と化合する。又炭素に化する「ーー作用」

【炭化水素】タンクワスイソ 炭素と水素との化合物。

【炭火】タンクワ すみび。十八史略、殷紀「爲ニ銅柱ニ以ル膏燭ル之、加ニ於ーー之上ニ」

【炭礦】タンクワウ こへいだ。＝石炭。

【炭酸】タンサン 無水炭酸と水との化合物。

【炭酸瓦斯】タンサンガス 炭素と酸素との化合物。

【炭酸加里】タンサンカリ 溶解し易き白色の粉末、炭酸カリウム。

【炭水化物】タンスイクワブツ 炭素及水素の化合物。

【炭層】タンソウ 土中にある石炭の層。

【炩】

漢の肅宗孝章帝の諱。

【炟】

【炭】

○火起こる。○やく（爆）○後

【炭田】タン 炭層の多くある土地。‖煤田。

【炭團】タン 圓炭の粉末をこねてまるめたる燃料。炭の代用とす。

【炮】(一)ホウ (二)ハウ 送 看

(一)あぶる、まるやきにす、物を裹みて燒く。‖炰。○柴を燔きて祭る。○庖に通ず。(二)やく(灼)○鐫磔と同義に用ふ。

【炮烙】ホウラク 火にてあぶりかわかす格。盛臣詩「猶前未二經好一箱後可二一一」

【炮醢】ハウ あぶれるきりにく。沈約、高士贊「心安二炮醢一、日絕二一一」

【炮烹】ホウ あぶると、にると。李白詩「歸來飫二所獲一、一一宜二烟火一」‖炮調。

【炮煎】ホウ あぶると、にると。梁末詩「老妻坐二我傍一、笑餌屬二一一」

【炮風烹雨】ホウフウ 大典禮のごとそうの酌申意「有二所謂一一者、風乃雖雖、雨則宜二自焉一我之」

【炮烙之刑】ホウラクノ ひあぶりの刑。刻桂に油を注ぎ、之を燒火の上に架け、罪人をして行かしめ、足滑りて火中に墮ちて焚死せしむる酷刑。史、殷紀「紂乃重二辟刑一有二炮烙之法一」圖すやきのひらたきとなべ、いりなべ。‖焙烙・炒鍋。

【炮燔】ホウハン 火に埋めてやく。陸游詩「溫裘山猪供二一一」

【炰】ホウ 看

○やく。‖炮。○一烋は自ら矜りて氣の健き貌。詩、大雅「女一烋于中國」‖咆哮。

【炳】ヘイ ヒャウ 梗 又、昞・昺に作る

○あきらか(明)いちじるし(著)易、革卦「大人虎變、其文一也」○著明なる貌「一焉」「一一」

同音異義 炳・昞・昺・炯・烱・晾の別は昞(日部四畫)の條を見よ。

【炳蔚】ヘイ あやあり。文心雕龍「虎豹以二一一一凝レ姿」

【炳煜】ヘイ ひかりかがやく。白居易詩「親資盛輝耀、妓樂紛一一」

【炳煥】ヘイ かがやきてる。拾遺記「化爲二赤雲一、丹鄉一一」

【炳耀】ヘイ かがやく。拾遺記「文彩一一、中國發走之類、不二復嘆咽一」

【炳焉】ヘイ あきらかなる貌。‖炳然。

【炳娘】ヘイ あきらかにかがやく。張衡、東京賦「魂異謳謠、燿一一」

【炳絢】ヘイ あきらかにしてあやあり。江淹賦、雜二體詩一文章、發二謳鹿之一一一」

【炳煥】ヘイ かがやく。江淹、蘆華賦「蓋二蓬殿一兮覆廕、圖二綠綺一兮一一」

【炳然】ヘイ あきらかなる貌。漢書、劉向傳「是非一一可レ知」‖炳焉。

【炳若二日星一】ヘイジャクニチセイ 明らかなること日と星との如し。王海「唐虞二典、商盤周誥之文、準二將萬世一一一」

【炳蔚】ヘイ 虎豹の異名。蘇軾詩「圖論極二幽遠一、操レ戈長二一一一」

【炳炳】ヘイ あきらかなる貌。唐書、陸贄傳「一一如レ丹」

【炳燭】ヘイ あきらかなる燭。又、燭をあきらかにす。陸雲賦「五嶽降レ神、四瀆一レ一」

【炳靈公】ヘイレイコウ 泰山の神。文獻通考「後唐長興三年、詔以二泰山三郎一、爲二威雄將軍一、宋大中祥符元年、加二封一一一」

六畫

【炷】(一)エイ (二)ケイ 梗 看

○あきらか(明)○攜へ行く小さき流。おきかた(行道)

【烏】ヲ カ 虞

○からす。說文「孝烏也」詩、羅「純黑而反哺者、謂之一一」○くろし、黑色。○なんぞ(何)いづくんぞ、何とて(安・惡)○あ、歎息の聲。‖嗚。○太陽の中に三足の一が棲めりとの傳說によりて日の義とす「一兔」

【烏衣】イ 燕の異名「燕言」

【烏衣巷】イノコウ 兩晉時代王氏・謝氏の如き貴族の住みしちまたの名。江寧縣內に在り。‖烏巷。

【烏有】イウ いづくんぞ此の事有らん、即ち無の義。漢書、司馬相如傳「一一先生者、烏有二此事一也、爲レ齊難、亡是公、」二是人也、欲レ明二天子之義一」

【烏雲之陣】ウンノジン 烏の散ずる如く、雲の合ふ如く聚散常なく、變化窮りなき陣法。六韜「一一、陰陽皆備、或也二其陰一、或也二其陽一」

【烏焉】エンからすと、とびと。路温舒、上書「德義に刑書、一一之罪不レ誅、而後鳳凰集、誹謗之罪不レ誅、而後直言進」

【烏喙】カイ ○烏の如きくちばし、烏は物を食る鳥、以て慾ふかき相とす。吳越春秋「越王爲レ人長頸一一、鷹視狼步、可二以共一患難一、而不レ可二共樂一」○毒草の名、とりかぶと。戰國、燕策「燕人不レ食二一一一、爲二其殺レ人與二烏死一同一患也」‖烏頭。

【烏江】ウ ○安徽省にある川の名、楚の項羽の自殺せし所。○黑龍江の異名。

【烏號】ウ 黃帝の弓の名。史、封禪書「有レ龍垂二胡髯一、下迎二黃帝一、黃帝上

騎（中略）陳二黄帝之号一（中略）後世其号遂二一一一

【烏貝】カラス　圖どぶ貝の一名。
【烏有二反哺之季一】カラスニハンポノキヲアリ　反哺は子の烏が養はれたるむくいに、口中の食を親の烏にかへし與ふる義。十六國春秋、烏有二反哺之義一」
【烏之雌雄】ジョウ　烏は雌雄相似て別ちがたし、以て物の是非善惡の分ちがたきに喩ふ。詩、齊風「具曰予聖、誰知二烏之雌雄一」

【烟】煙（火部九畫）に同じ。

【烝】㊀カウ　㊁キウ　尤　君
㊀ほこる貌、氣つよくいばる「驕ー」㊁よし（善）休に通ず。○うつくし（美）○やはらぐ（和）○さいはひ（福祿）○よろこび。

【烋】ベツ　メツ　屑
○ほろぶ。ほろぼす（滅）○きゆ（消）＝滅。

【烜】㊀ケン・クヮン　㊁キ　銑　阮
㊀かわかす（乾）易、說卦「日以ー之」○あきらか（光明）爾雅、釋訓「赫兮ー兮」○火の盛んなる貌。㊁ひ（火）鬼神に供へる火（周禮、秋官、司ー氏、注）

【焄】クン　聚威の盛んなる貌。李白詩「ーー蝟二族旗一」

【烘】㊀コウ　東　キョウ　冬　㊁コウ　送
㊀火をたく、やく（燎）もゆ、もやす。○てらす、あきらか。㊁あぶる、かわかす（火乾物）

【烘箱】コウサウ　あぶりばこ、火をいれて物をかわかす具。

【烘柿】コウシ　さはしがき。陸田錄「今應天府多二大柿一、其初生澀、堅實如レ石、凡百十枚、以二穰藉一、置二其中一、則紅熟爛如レ泥、而可レ食、土人謂二之ーー一者、非レ用レ火乃用レ此耳」

【烘澁】コウジフ　日光がやくが如くてりかがやく。潘子眞賦「或譬二ーー之葛一、或擬二凝霜之菊英一」

【烖】災（火部三畫）の本字。
中庸「ー及其身一者也」

【烝】㊀シャウ・ジャウ　蒸　通　蒸に通ず
㊁シャウ
㊀むす、火氣がむしあがる（火氣上行）むしあつし、むれる。○すすむ（進）獻ずる。○きみ（君主）詩、大雅「文王ー哉」○おこる（興作）○のぼる（升）○もろもろ、おほし（衆多）「ー民」○あつし（厚）○ここに（眞）○ひさし（久）○みだる。○牲體を俎上にのぼす。○冬日の祭。○己より身分の尊き女に私通する（上淫）左、桓十六「衛宣公ー于夷姜」夷姜は宣公の庶母。㊁むしあつし（蠻熱）氣上りて遠き貌。

【烝嘗】ジャウシャウ　敬ひまつる。陸機、辨亡論「掃二清宗祊一、ニー昌祖一」＝祭祀。

【烝矯】ジャウケウ　曲りたる木をむしてため正す。荀、勸學「故木必將待二隱括一而ーー、然後直」

【烝溫】ジャウヲン　むしあつくしめりけあり。蔡襄詩「南方赤夏苦ニーー一」＝暑氣。蒸暑。

【烝烝】ジャウジャウ　○物の盛んに興る貌（爾雅、釋訓）○隘ひ行く貌。一說に厚き貌。詩、魯頌「ーー昌昌」○火氣の上ぶる貌。韓愈、食ー菊詩「ーー沸鼎中」○進む貌。書、堯典「ーー又不レ格ー姦」

【烝徒】ジャウト　おほくのともがらの詩經「ーー增增」注「烝、衆也」

【烝冬】ジャウトウ　陰曆十月の異名。周禮、春官、太宗伯「以ニーー一享二先王一」

【烝餅十字】ジャウヘイジフジ　習の何曾の故事、蒸餅の上に拆けて十字形をなす、烝は蒸に通ず。書言故事「曾何曾烝餅上不レ拆二十字一則不レ食、坡詩、吹裂十字瓊肌香」坡は蘇東坡。

【烝民】ジャウミン　おほくのたみ。詩、大雅「天生ニーー一、有レ物有レ則」＝衆民。

【烙】ラク　カク　藥　藥
○やく（灼、燒）鐵を熱して體にやきつける、やきがねなあてる。莊、馬蹄「燒之ー之」○やきがね、やきばり（火鍼）○炮ーハウ　は殷の紂王の用ひし刑の名、炮（火部五畫）を見よ。○圖焙ーバク　は物を炒るに用ふる素燒の平土鍋。＝炮碌。

【烙印】ラクイン　やきはん、やきいん。

【烈】レツ　屑
○はげし、火の勢つよし。書、胤征「ー于猛火」さかんにもやす（燃）孟、滕文公「益ー山澤而焚之」○たけし（猛）「猛ー」「ー風」「武ー」あらし（暴）きびし「嚴ー」○氣象がつよくただし（剛正）「忠ー」「義ー」○うつくし（美）○明かにいちじるし。孟、萬章「於ー今爲ー」あきらかにひかる「ー光」○わざ（事業）てがら「功ー」孟、滕文公「武王ー」○ーは威武の貌。又、憂ふる貌。又、寒さはげしき貌。○そこなふ（害毒）○わ

さはひ(殃)漢書、公孫弘傳「若湯之旱、則桀之餘ー也」○古の兵制、五人組の稱。

【烈婦】レツフ はげしくかがやく。傳休奕、石碏賦「玄黛之ー、綵ー婦奕而飛鑑」

【烈火】レツクワ 勢のはげしき火。潘岳、悼亡詩「何減衛二懿激ハーー擬炎燔ー」‖猛火。

【烈業】レツゲフ はげしきいさを。王逸、九思「超二輪軌一兮成ー化、遠ニーー兮垂レ勳」

【烈操】レツサウ はげしく堅きみさを。北史、列女傳「陳博女尉氏、幼有ニーー」

【烈士】レツシ 剛正にして義にいさむ。史、伯夷傳「貪夫徇レ財、ーー徇レ名」‖烈夫・烈丈夫。

【烈日】レツジツ あつさはげしきひの光。張協、雜詩「ーー不レ驕頭上雲、病身全仰一枝筇」

【烈暑】レツショ きびしきあつさ。庾信、姜寔碑傳「歷二郡寒ーー、無二懈容一」‖酷暑・盛暑。

【烈風】レツフウ いさを高く多くしきせんぞ。書、伊訓「伊尹乃明二言ーー之成德一、以訓二于王一」

【烈丈夫】レツヂヤウフ 義烈なるますらを。史、伍子胥傳「隱忍就二功名一、非二ーーー、孰能致レ此哉」‖烈士。

【烈女】レツヂヨ みさをの堅き女。史、田單傳「忠臣不レ事二君一、ーー不レ更二夫一」

【烈丈夫】レツヂヤウフ きぬを裂きたる如き聲。白居易、琵琶行「曲終抽レ撥當レ心畫、四絃一聲如二裂帛一」

【烈夫】レツフ 烈士に同じ。

【烈武】レツブ すぐれたる武威。詩、雲漢「我有ニーー、如レ雷如レ霆」‖勁武。

【烈婦】レツフ 烈女に同じ、多く既婚の者にいふ。

【烈風】レツフウ はげしきかぜ。後漢書、鄭太傳「猶下以ニーー一掃中彼枯葉上」

【烈烈】レツレツ ○威武の貌。詩、小雅「ーー征師、召伯成レ之」○高大なる貌。詩、小雅、南山「ーー」○寒さはげしき貌。詩、小雅「冬日ーー、飄風發發」‖栗烈。○憂ふる貌。詩、小雅「憂心ーー、載饑載渴」

【烈烈】レツレツ つよすぎるあぢはひ。淮南子、精神訓「ーー重酒」

【烈名】レツメイ ほまれ高き名。人物志、「氣清力勁、則ーー生焉」

焉 エン 先

○いづくんぞ(安)なんぞ、いかんぞ。論、公冶長「魯無君子者、斯ー取斯」○どこで、いづくにか。詩、衞風「ーー得諼草言樹之背」○これより「罪莫大ーー」○これ(是)左、隱六「晉鄭ーー依」○ここに。○事を形容するに用ふる、然又、如の字の義「忽ーー」「勃ーー」○語の已む詞。易、坤卦「故稱龍ーー」○語調をととのへる爲めに添へる無意味の助字。論、陽貨「四時行ーー、百物生ーー」○黄色の鳥の名、鳳凰の屬。

同訓異字 焉・爲・安・惡○爲は何也と註す、なんぞ又いづくんぞと訓む「爲用レ稼」は、何として稼を用ひんや、用ひはせぬと反す詞なり。○安は何也と註す、爲に比すれば輕し、どこにてかと訓す、この地位に安んぜらるるかと云ひかけたるに、安んぜられはせぬといふ意に還るなり。韓非子「今吾安居而可」論語「安見二方六七十如五六十里非レ邦者一」の如し。○惡は烏と、音義共に同じ、何としてと告むる意あり「惡在三其爲二民父母一也」「無レ父烏生」の如し。

【焉烏】エンウ 字相似て誤り易き義。宋郡文「日不レ辨二於ーー一」‖烏焉・魯魚。

【焉哉乎也】エンサイコヤ 四字ともに文章に用ふる助字。周興嗣、千字文「謂二語助一者、ーーー」

焦 ショウ 蕭

○こがす、こげる。○いらだつ。○かうばし、にほふ。

【焦爛樓閣】セウランロウカク 註、焦は氣の蒸し出づる貌、樓閣は精神の揺然たるなり、共に鬼神の氣の形容。禮、祭義「北氣發二揚於上一、爲二昭明ーー一、百物之精也、神之著也」

然 ゼン 先

○しかり、しかあり。○事を形容する語。○然而、然後、然則、然且、然猶、然況、然未、然不、然無、然非、然雖、然使、然縱、然假、然若、然如、然惟、然亦、然或、然或、然或

望二煮レ薬、殺レ豚一レ」

【烹飪】ハウジン にる、にたる食物。張協、雑詩「公徳政頌序「蔬食以周二其一一」、野次以同二其燔炙一」

【烹調】テウ 十分にたる料理。一一煎鶏魚而勝之非レ善レ調、煮也」

【烹飪所】ハウジンショ まかないどころ、炊事場、料理場。

【烹煎】セン にる、いる。陸游詩、自嘲「老還一就一一」

【烹茶】チャ 小鼎を煮る。園呉を汲り行ふに於ふ老子、治二大国一者、若レ烹二小鮮一」楊慎、続時「勿レ補一一手」

【烹茶】チャ ちゃをにる。

【烹調】テウ 飲食物の調理、食物の料理。通鑑、北魏侯剛「一一」

【烹煮】シャ にたる子牛の煮物。詩「山珍海錯羅二烹鮮一」一一鮑蓋加二酢醤一」

【烹庖】ハウ にたる料理。荘九皮「一一入二鑊俎一」

【烹鮑】ハウ にると、やくと。出師文「因家作苦、饑時伏臘、烹レ羊無レ酒、斗酒自労」

【烹滅】メツ 殺しほろぼよ。史、始皇紀「一一無辜一掘二鼓黔首一」

【烹羊】ヤウ ひつじをにる。又にたるひつじ。烹鮮参看。

【烽】ホウ 夂 夂鑵に作る

のろし、外敵の侵入を知らせるもの、桔槔を設け、其の端に薪を入れたる籠をつるし、敵の攻め来るあれば火をつけ高く挙げて遠方に警報するもの。一一火」

【烽煙】エン のろしのけむり。郭頂詩「朝夕候一一」

【烽火】クワ ○のろし。後漢書、杜茂傳「一一亭候数一一」日烽燧。○轉じて兵乱の義。杜甫詩「一一連三月一」

【烽台】ダイ のろしのいとなめ。任孝恭、弾劾「一一相望、毎有二警急一、各以二一一一」日烽燧。

【烽燧】スイ のろしと、つつみと、警戒時に用ふるもの。沈約文「一一相望、晨昏不レ息」

【烽燧】スイ 烽火をあげるものみ。唐書、百官志「邊城毎成一一防人」

【烽子】スイ のろしの番卒。又斥候兵。我是詩、自註「一一警夜、知二是將軍夜巡一」

【烽燧】スイ のろしの煙塵。詩「吏試二烽一一」

【烽戍】ジュ のろしのまもり。蔡琰、胡笳十八拍「原野蕭条兮、一一萬里」

【烽煙】エン のろし。猶は鋒を挙げ、夜は烽を挙ぐ。漢書、賈誼傳「斥候望二一一一不レ得レ臥」

【烽塞】サイ のろしをうちあげるだい。

【烽柝】タク のろしと、ひゃうしぎと、非常を警むる義。庾信文「一一是警」

【烽燧】スイ のろしをあぐるとりで。唐書、張嘉貞傳「選二邊要地一、築二一一一」

【烽遽】キョ 敵を警戒する烽火と偵察との唐書、吐蕃傳「乃徙二一一一」

八畫

【焔】エン 燄は俗字

ひかり（光）ほのほ（炎）「火一」

【焃】エン

ほのほ（火焔）ひばな。火、ほのほの上る貌。班固、東都賦「一一炎炎、揚レ光飛レ文」

【焃焃】エンエン ほのほを起すふいがら。周禮、金精百鍊賦「鼓二一一一而上下」

【炭】タン

○てらす（燿）○やく（炙）左、昭十七「行二火所一」○一腫。○はは皮膚の一局部がはれほてりてづきづきといたむ。一燃衝炎腫。

【焱】ヒョウ

○かがやく（煌）ひかる（光）あきらか（明）にてらす、かがやかす。○昆に通ず。

【焜煌】コンクワウ かがやく。かがやかす。光武贊「登二一方一一」

【焜煌】コンクワウ かがやく（金就磧）陳陽修詩「文字焜煌開二金一一」

【焜黄】コンワウ 木を焼るに用ふる燧又は土製の小さき壺、しちりん。

【焠】サイ

○にらぐ、焼きたる刀刃を水に入れて鋼の質を堅くする。王褒、聖主得二賢臣一頌「清水一其鋒一也」一淬。○やく（焼灼）○そむ（染）史、荊軻傳「使二工以藥一之」

【焠兒】ジ つけぎ、松の木を紙の如く削り、其の一端に硫黄を付けたるもの。蟻耕録「杭人削二松木一寸小片一、其薄如レ紙、繪二硫黄一、塗二木片頂一分許一、名曰二發燭一、又曰二一一一、蓋

【焃天】コンテン 火の盛んなる義。王維文「火旅賦」玉、一一連地」

【焄】ケイ 庚

○うれふ（憂）○さい（僻子）○焼（前書）に同じ。

【焜】コン 阮

以發レ火、及代二燧鑽用一也」＝引火奴。

【焯掌】シャウ　孔子の門人有若がれむけをさます爲めに掌ヲやきて苦學せし故事。荷、解嘲「有子蒸レ臥而焯二其掌一」

【焯】シャク　藥

○火氣。○かがやく(燿)「一學ニ灼。○あきらか(明)

【焯見】アキラカ　明かに見る。＝也見。

【焦】セウ　蕭　通じて燋に作る

○こげる、やく、火に燒けて黄黑くなる。○こがす、やく。○こげくさし。禮、月令「其味苦、其臭一」○かわく。杜甫詩「脣一口燋呼不レ得」○思ひなやむ、心わづらふ(煩)阮籍詩「誰知我心一」○やせつかる、憔に通ず。○三一は六腑の一、飲食物又は氣の通ふ處。○圖「心に深く慕ふ。

【焦然】こがしいる。鮑照「涉レ夏如レ燔、遵レ秋溺レ火、主山一レ」

【焦澗】セウカン　かわきかれる。陶弘景、詩雨則「苗座一レ、遠近强呼」

【焦湯】カラ　甚だしくかわく。玉堂閑話「城中無レ水、號曰一レ」

【焦卷】セウクワン　草木がかわきちぢまる。

【焦慮】セウリョ　氣をもみて心配する。溫庭筠文「沙漠銷鑠、草木一レ」杜甫詩「皇天德潤洋、一レ有二生意一」

【焦傑】セウケツ　身長三尺ばかりの小さき人「一一國」荀子、注「一レ一短人、長三尺者」＝侏儒。

【焦沒】セウボツ　すなをやく。燥熱にいふ。淮南子「或熱一レ、或寒凝レ水」

【焦躁】セウサウ　いらだち、さわぐ。水滸傳第一回「苦殺師一レ」

【焦思】セウシ　心をいたむ。史、夏紀「禹乃勞レ身一レ」＝焦心・焦慮・勞思。

【焦心】セウシン　きをもむ、いらだつ心。漢書、路溫舒傳「大臣憂戚、一レ一合レ謀」＝焦慮・苦心・苦慮。

【焦脣】セウシン　くちびるをかわかす。苦の比喩。「越王苦二會稽之恥一三年苦レ身勞レ力、一レ一乾レ舌」

【焦灼】セウシャク　○やく。神仙傳「衣物悉不レ一一」＝燒灼。○心が甚だしく憂苦する。吳志、周瑜傳「憂懣一レ」

【焦突】セウトツ　やきとらかす。蘇舜欽詩「不レ如具酒漿、無可免一一」

【焦悴】セウスイ　きびしくあつし。王勃之詩「三伏一一」＝憔悴。

【焦頭】セウトウ　やかれおぼる、困厄に陷るたとえ。前漢書「奇偶時如レ輪、終期人名曰二一一一」＝焦爛。

【焦點】セウテン　光線が凹面鏡、又はレンズ等に反射、又は屈折して後集る點。軸に物事の集注する中心點の義とす。

【焦土】セウド　やけあとのつち、牡牧、阿房宮賦「楚人一炬、可レ憐一一」

【焦桐】セウトウ　琴の異名。胡笳詩「已託二一一傳二蔡家一」＝焦尾琴參看。

【焦頭爛額】セウトウランガク　火災を未然に豫防する策を施せし者は賞せられず、失火するに及びて頭をこがし額をただらせて救ひたる者は賞せらるゝを譬へて末をのみ事とするに喩ふ（漢書、霍光傳）

【焦熱地獄】セウネツヂゴク　佛八大地獄の一、火熱にて亡者を苦しめる地獄。

【焦迫】セウハク　こころいらだちてせわしき意。文心「一一、速退同レ調」

【焦尾琴】セウビキン　琴の異名。後漢書、蔡邕傳「吳人有二燒桐以爨一者一、邕聞二火烈之聲一、知二其良材一、因請而取レ琴、果有二美音一、而其尾猶焦、故時人名曰二一一一」＝綠綺。

【焦眉之急】セウビノキフ　最も切迫したる急務の五燈會元に焦を焚に作る。

【焦味】にがきあぢ。書經、銑、其臭焦、其味苦、苦我二一一一」

【焦螟】セウメイ　蚊蚋は極めて小さき蟲の名、蚊蚋は蚊のまつげ、人の相爭ふを大局より見れば其の極めて小にして論ずるに足らざるに喩ふ。列、湯問「江浦之間、生二蔑蠛一、名曰二焦螟一、群飛而集二於蚊睫一、不二相觸一也、栖宿去來、蚊弗レ覺也」

【焦勞】セウラウ　心がつかれわづらふ。柳宗元文「加二一一憂約之歲一」

【焦慮】セウリョ　氣をもみて心配する。溫庭筠文「勞神一一、指レ日忘レ年」＝苦慮・焦思。

【焦茶花】イヅバナ　圖黒すみたる茶色。＝茶褐色。

【焜】セツ　屑

やく(燒)＝爇。

【然】ゼン　ネン　先

○もゆ。もやす、燃の本字。孟、公孫丑「若二火之始一一」○たく、やく(燒)○ゆるす、うべなふ(許)しかり、しかく、史、游俠傳「此皆學士所レ謂有道仁人也、猶一一遵北面一」○しかあるに。論、微子「是魯孔丘徒與、曰一」○しからば、しかれども、しかるに。○しかして、しかうして。○句の末尾に置く助字、爲に同じ。論、先進「不レ得二其死一」○形容する字の下に加へ用ふ、焉・如・爾に同じ「浩一」「悠一」「欣一」「豁一」「卓一」「泰一」「斐一」「凜一」「莞一」○挙一は蛇の名。

同部異音　然・而・爾の別は而（部首六畫）の條を見よ。

【然諾】ゼンダク　然りとして贊同する。

志、彭業傳「公亦宿慮明定、即相ー、遂擧ノ事焉」
【然脂】ネンシ あぶらをもやす。魏志、劉馥傳「夜ーー照ニ城外ニ、視ニ賊所ノ作、而爲ノ備」
【然髭】ネンシ 鬚（髟部十二畫）の條の然ノ顯を見よ。
【然石】ネンセキ もゆるいし、石炭。水經、注「延成縣出ニーー」
【然諾】ネンダク うけがふ、承諾する。史、張耳傳「此固趙國立名義ニ不ノ倍、爲ニーー一者也」‖許諾。
【然否】ネンピ 然ると然らざると。史、老子傳「或曰儋即老子、或曰、非也、世莫ノ知ニ其ーー、老子歷君子也」

【焞】 ㊀トン 元 ㊁タイ 灰

㊀ーートンは光なし、うすぐらし。左、僖五「天策ーー」天策は星の名。㊁ーーダイは勢の盛んなる貌。詩、小雅「曄曄ーー」

【焙】 ハイ 㒳 一音ハク

あぶる（炙）はうじる。
【焙茶】ハイチャ 茶をほうじる。白居易詩「夜火ーー一杯」

【焚】 ㊀フン ㊁フン・ボン 問 文 燔は古字

㊀やく。やける（燒）書、胤征「玉石俱ーー」○原野山林を燒き て獵する。㊁たふす、たふれる（僵斃）僵に通ず。左、襄二四「象有ノ齒以ーー其身」
【焚逸】フンイツ やけうせる。唐書、劉知幾等傳「巨盜再興、圖典ーー」‖燒失。
【焚香】フンカウ 香をたく。杜甫詩「ーー玉女跪、雰裏仙人來」
【焚膏】フンカウ 燈油をたく。韓愈、進學解「焚ニ膏油ニ以繼ノ晷、恆兀兀以窮ノ年」
【焚棄】フンキ やきすてる。魏書、孝莊帝紀「詔以ニ前勳勤書多ニ溢目ニ、宜ニ一切ーーニ之」‖燒棄。
【焚琴煮鶴】フンキンシャカク 殺風景の義。李義山雜纂「殺風景、花間喝道・背ニ山起レ樓・臭ノ鵝焚ノ琴・淸泉濯ノ足」
【焚劫】フンゴフ やきかすめる。宋史、孫何傳「遂使ニ蛇豕肆行、ーー我鄕縣」‖焚掠。
【焚草】フンサウ ○くさをやく。○文章などの草稿をやく。南史「必手書ーー」
【焚舟】フンシウ ふねをやく、兵すでに河を渡りて其の舟を焚くは必死を示す義。左傳「秦伯伐ノ晉、濟ノ河ーーノー」
【焚室】フンシツ やけたる家。左、昭十八「書ーー、同寘ニ其征、與ニ之材」
【焚灼】フンシャク ○火にてやく。苦だしく心を苦めるにいふ。錢翊文「ーー常苦ニ予寸心、芒刺日加ニ予四體ニ」‖燒灼。○火あぶり（漢書、刑法志）
【焚書坑儒】フンショコウジュ 秦の始皇が經書を焚き、儒者を穴に埋めし故事。孔安國、尙書序「秦始皇滅ニ先代典籍、焚ノ書坑ノ儒」
【焚焼】フンセウ やく。やける。荀子「餘者ニ丘山ニ不ニ時ーー、無ノ所ノ藏レ之」
【焚船】フンセン ふねをやきはらひて必死を示す。史記「渡ノ河ーーノー」‖焚舟。
【焚蕩】フンタウ やけてなくなる。李白詩「吳宮又ーー、雖盡巢赤空」
【焚燬】フンキ やけると、おぼれると、百姓の水火の苦に陷るに喩ふ。石介詩「三載出南狩、王師拯ニーーニ」
【焚燬】フンキ やきすつ。貢和書譜「搜ニ求篆字ニ、ーー略盡」
【焚符】フンフ わりふをやく。莊子「ーーノー破レ璽、而民朴鄙」
【焚滅】フンメツ やきほろぼす。漢書、司馬遷傳「周道旣廢、秦擧ニ去古文ニ、ーーニー詩書ー」
【焚掠】フンリヤク 家を焼きて財をかすめとる。唐書、康承訓傳「所在ーーノー」

【無】 ブム 虞

○なし。有の反對。孟、梁惠王「仁者ノ敵」○ず（不）打消に用ふる。○むなし、空虛の義。論、泰伯「有如ニーー」○なかれ（勿）禁止のことば。孟、公孫丑「ーー若宋人然」○或語に冠して其の語と反對の意味をあらはす「ー學」「ー益」「ー能」○ーーと連用して反語となり「むしろ何ぞ することなからんや」と訓む。左、昭元「其ーー乃不可ー也乎」‖無寧。○ーー慮と連用して、すべて、大凡の義とす「ー慮數百人」

同訓異字 ナシ 無・靡・旡・罔・亡・莫・勿・毋・沒・微○無は有の反なり、論語「天下有ノ道則見、無ノ道則隱」とあるが如し、又禁止の無にも用ふ、なかれと訓す「無ノ友ニ不ノ如ノ己者」この如し。○靡・旡の二字は共に、無に同じ、古字なり。○罔は無也と註す、ありとは見えぬといふ意なり。○亡は存の反にて、なくなつたと譯す、論語に「不幸短命死矣、今也則亡」とある如し、一に𠂢に作る。○莫は勿也、無也、不可也と註し、又定也とも註すれば、確と決定して無しといふ義にて、意強し、孟子に「不祥莫ノ大ノ焉」とある如し、後世にては、詩と俗語とに限りて、なかれと訓す。○勿は、さうはするなと禁ずる語にて、最も重し。論語「過則勿ノ憚ノ改」○毋は禁止の辭、無より重く、勿より輕し。論語「毋、以ニ與二關雎里鄰豈一乎」○沒は滅沒の義により、なしと訓す、俗語なり。○微は、なし又、なかつせばと訓す、實はあれども、もし無きにして見たらなり。論語「微ニ管仲ニ、吾其被ニ髮左衽ー矣」
○ブム 無乃・無寧・寧の別は寧（宀部十

一書）の條を見よ。

【無似】ブおろか。賢人に似るなし。一解父に似ず、自己の謙稱。禮、哀公問「寡人雖二一一一也、願聞下所三以行二三言一之道上。不肖。

【無事】ブ　何事もなし、何事をも爲さず。蘇軾詩「一一此靜坐、一日是兩日」

【無事日月長】ブジタクヂツチヤウ　ひまな者は月日の長き心地すの白居易詩「一一、不羨天地閑」

【無粋】ブスイ　〇人情にうとし。〇ぶいき、風流の道にくらし。

【無道】ブタウ　道理にはづれたること。又、其の者の論。貞觀「如殺二一一一一、以戒二有道一何如」

【無端】ブイ　〇はしいままにして輒るべきなし。やくざもの。史、高祖紀「一一不レ能レ治二商業一」〇物をにくみのゝしる語。徐陵、烏棲曲「嗔憎一一汝南雛、天河未レ落猶爭鳴」〇愛するの極、わざとののしることば。徐凝詩「天下三分明月夜、二分一一是揚州」〇安んずる所なし。魏志、華陀傳「呻吟一一」＝無聊。

【無禮】ブイ　れいぎを知らず。詩、鄭風「相レ鼠有レ體、人而一一」

【無爲】ム　何事もせず、少しも干渉せず。老子「爲二一一一、則無不レ治」

【無爲而治】ムヰジチ　聖人の德、至大にして何事をも爲さずして自然に治まる。論、衛靈公「子曰、——者、其舜也與」

【無意】ムイ　こゝろなし。列子「一一則心同、動指則皆至」

【無意識】ムイシキ　〇自分に氣が付かず。〇自我の觀念の活動せざる義。睡眠中の時など。

【無一物】ムイチブツ　心虛無にして一物をも存せず。傳燈錄「菩提本非レ樹、明鏡亦非レ臺、本來——、何處惹二塵埃一」

【無逸】ムイツ　やすらかにたのしむことなし、書經の篇名、周公が成王を戒めし辭。

【無射】ムエキ　十二律の一、陰曆九月に配す。禮、月令「季秋之月、律中二一一一」

【無益】ムエキ　やくにたたず、用をなさず、むだ、いたづら。舊、旅獒「不下作二一一一害中有レ益、功乃成、不下貴二異物一賤中用物上民乃足上」

【無駄】ムダ　あくことなし。陸游詩「黃油接暖閣一レ、白布彩長衾有レ餘」

【無縫】ムホウ　〇えんがない、ゆかりなし。〇無因緣。〇關死者を弔ふべき親類がない。〇不血食。

【無煙火藥】ムエンクワヤク　煙を發せざる一種の火藥。

【無煙炭】ムエンタン　石炭の一種、色眞黒にして強熱を發してもえ、殆ど惡臭及煙を發せざるもの。＝無煙煤。

【無籍女】ムセキヂヨ　醜婦をいふ。列女傳「鍾離春者、齊無鹽邑女、宣王之正后也。其爲レ人極醜無雙、行年四十、無レ所二容入一」

【無恩無德】ムオンムトク　恩をうけたることもなく、めぐみをうけたることもなし。左傳「無レ怨無レ德、不レ知レ所レ報」

【無我】ムガ　〇私心なし、我慾なし。孟浩然詩「會レ理知二一一一、親レ空默二有形一」〇我を忘れる「一一夢中」

【無價】ムカ　〇つまらぬもの、あたへなし。〇價がしれぬ程貴し。周曼詩「寶劍徒稱一一寶」

【無界】ムカイ　かぎりなし。陶潛詩「高莽眇一一、夏水周森疏」＝無涯。

【無涯】ムガイ　無限に同じ。＝無二津涯一。

【無何有之鄕】ムカユウノキヤウ　何物もなき鄕、造化の自然樂むべき地にいふ。莊、應帝王「出二六極之外一、遊二一一一」

【無效】ムカウ　きゝめなし、效力なし、效驗なし、役に立たず。

【無學】ムガク　學問なし。＝不學。

【無期】ムキ　〇期限なし「一一徒刑」〇極め期限を定めず「一一公債」

【無機體】ムキタイ　化學にて生活機能を有せざる物體。金・石・土・水など。＝無機物。

【無記名】ムキメイ　姓名をしるさず「一一投票」記名の對。

【無礙】ムガイ　きはまりなし。舊、呂刑「哲人惟刑、一一之辭」＝無窮。

【無窮】ムキウ　永久にしてきはまりなし。廣雅、蒼頡之傳「作レ書垂レ法、爲二一一之規一」＝不窮・無疆。

【無絃】ムゲン　〇つくることなし。杜牧詩「天業益張、聖統一レ一」＝無窮。〇天地間に未だ萬物の生ぜざる始、卽ち宇宙の根元。周惇頤、太極圖說「一一而太極」＝絕對。

【無垢】ムク　〇けがれなし、清淨潔白の義。楞嚴經「國名二一一、琉璃爲レ地」〇圓衣服の上著と下著と共に同色の無地の絹にてしたてたるもの「白一一」

【無垢衣】ムクエ　汚なきころも、製裝の異稱。枯竹鏡原「製裝、一名——、又名二忍辱鎧一」＝忍辱鎧・離塵服。

【無慮】ムリヨ　憂なし。書、大禹謨「敬二戒一一、罔レ失二法度一」＝無憂。

【無口】ムクチ　圓ことばかずが少し。＝寡言。

【無花果】ムクワクワ　いちじゅく、春季倒卵形の花をつけ、夏、實を結ぶ。＝天仙果。

【無患樹】ムクワンジユ　槵ムクロの一名。

【無官大夫】ムクワンタイフ　圓〇昔、四位又は五位の位ありて官職のなき人を呼ぶ稱。〇公卿の子の未だ元服せざる者。

【無下】ムゲ　圓〇いちづ、一向、一概。〇最下等。

【無卦】ムケ　陰陽道にて其の人の生年の干支の關係上、五年間凶なりといふまはりあはせ。有卦ウケの對。

【無形】ケイ 形なし。又、其の物。‖無象。
【無形に】ケイ 形なきに見る。子が親を慕ふ注意の重れるをいふ。曲礼「父母在せば——」
【無礙】ゲイ よりどころなし、古に考ふることなき妄説。或、大禹謨「——之言勿レ聴」
【無礙之言】ゲイ よりどころなきことば。苟、正名「——、不見之行、不聞之実、君子慎レ之」→前条参看。
【無窮】ゲイ 複雑なし。太平御覧「——子帝」
【無月】ゲツ 中秋節。八月十五夜にくもりて月が見えず。
【無碍】ゲ 障害なくして杳し。荘子「其天守全、其神——」‖無障。
【無言】ゲン ものいはず。蘇軾「去住只今議定是、相逢一笑各——」‖不言。
【無漏】ゲン ゆみづる無し。淮南子「鳥跡之行、踰子之好、不レ能——」而射レ之——レ、行レ之以レ忠」
【無絃琴】ゲンキン いとのなき琴。蕭統、陶靖節傳「淵明不レ解二音律一、而蓄二——一張一」李白詩「大音自成レ曲、倶奏——」
【無間地獄】ゲンゴク 梵語、阿鼻。無間無救などと訳す、責罰苦悶を受くること間断なき地獄。八熱地獄の一。
【入無間】ゲンニュウ ○道の微妙なるをいふ。老子「無有——」○蘇軾文の精微を極むるをいふ。揚雄、解嘲「深者入二黄泉一高者出二蒼天一、大者含二元気一、細者——」
【無後】ゴ 後嗣なし。孟、離婁「不孝有三、——為レ大」
【無告】コク つみなきもの、寡は罪の周嫂、又官「救二——一、我二有罪一」
【無告】コク 告げ訴ふべき處なき鰥民、鰥寡孤獨などの者、大禹謨「予克レ——一」疏、王制「天民之窮而——者也」
【無骨】コツ ○支離滅裂せし文章（文心雕龍）○コツ 図ぶいき、無風流。
【無根】コン ねなしごと、據る所なし。晉子「凡道——一無レ基、無レ葉無レ栄」
【無才】サイ はたらきなし。管轄別傳「世鮮二名人一、皆由レ——一、不レ由レ無レ資也」
【無罪】ザイ 罪なし。孟、梁惠王「——一而就二死地一」‖無事。
【無愛】サイ 世にならぶ者なし。史、淮陰侯傳「王如信者二國士一——」
【無差別】シャベツ 差別なし。‖平等。
【無算】サン ○少くして数へるまでもなし。淮南子「日計——一、歳計有レ餘」○数へきれぬ程多し。‖無数。
【無慙】ザン ○はぢなし。‖無恥・無惨。○図むごたらしい。‖無情。
【無視】シ ○見ることなし。荘子「——一無レ聴、抱レ神以レ静、形将二自正一」○かろんじて眼中におかず。‖蔑視。
【無始】シ きずなし。荀、賦論「明達神粋而——一也、夫是之謂二君子之知一」
【無実】ジツ もとでなし。唐書、馬周傳「遠人以レ図賜レ宅、衆以下其興二土木一、生業一也、皆黠矣」
【無識】シキ 見識なし。
【無実】ジツ ○真実の正味なし「有名——」○実際になし「——の罪には、ねれきぬ。‖冤枉。
【無字碑】ジヒ ○文字なき碑。遯志略「泰山高四十餘里、凡十八盤（中略）至二絶頂上一、有二唐時——一」○文字を識らざる人を喩りていふ。北夢瑣言、趙崇標賀堂而不レ学、人號二——一」‖没字碑。
【無心】シン ○こころなし。道徳指歸論「夫道之為レ物、無形無状、——無意」○図ねだる、乞ひ求める。
【無心以出レ岫】シンニシュツ 雲の無心にして山岫を出づる如く、心に事を営まず、自ら縦逸なるにいふ。陶潜、帰去来辞「雲——、鳥倦レ飛而知レ還」
【無数】スウ 図多数の人が毎月若くは数ヶ月毎に一定の金を出し合ひ、くじびきにて當籤せし者が其の集りたる金をとる融通法。‖頼母子講。
【無数】スウ 物を取れども盡くることなき象（大蔵法数）赤壁賦「惟江上之清風与二山間之明月一、取レ之無レ禁、用レ之不レ竭、是造物者之——也」
【無神論】シンロン 神の存在を否定する論。有神論の対。
【無私無偏】ムヘン 公平にして偏頗なし。文中子「房玄齢、問二事レ君之道一、子曰、無私、問二使レ人之道一曰無偏」
【無所畏】ムショイ おそれる所なし。
【無上】ジョウ この上もなし、極上、第一等。‖最上。
【無状】ジョウ ○善き行なし。史、賈生傳「自傷為レ傅——一、哭泣歳餘」○功状なし。史、夏紀「視二鯀之治レ水——一」○無礼の義に用ふ、無作法。‖亡状。
【無情】ジョウ ○こころなし。有情の対。方干詩「怪石——更不レ言」○まごころなし、真実の心なし。大学「——者、不レ得レ盡二其辞一」○なさけ

がない。‖薄情・無慈悲。
【無常】ムジョウ　㊀世の轉變のはげしい人の死生の定まりなきをいふ。縁氏雲寶「生滅輪廻、是謂二一一」　㊁しばしばしない。傳燈錄「無得一一、然後謂二之解脫一」
【無職】ムショク　一定の職業なし。
【無所屬】ムショゾク　政黨又團體に入らずして一本立のもの。「——議員」
【無數】ムスウ　〇多くして數へきれず。杜甫詩「一一蜻蜓齊上下」〇定數なし。周禮「男巫——、女巫——」
【無聲】ムセイ　こゑなし。詩經「上天之載、————無臭」
【無二】ムニ　二つのなきに勝れる。「——の親友」
【無二無三】ムニムサン　唯一つ。法華經「唯有二一乘法一、無二二又無一三」‖唯一つ〇轉じてただ一すぢに物事をなす。‖一心不二無二。
【無念】ムネン　〇何もかんがへなし、我を忘れてゐる。「——無想」〇殘念。くやしい、口惜しい。‖殘念。
【無能】ムノウ　はたらきなし、才能なし。漢書、司馬遷傳「——之輩」
【無望】ムボウ　豫期せず、思ひがけず。史、春申君傳には無を毋に作る。次條參看。
【無妄之福】ムマウノフク　無妄は易の卦の名、震下乾上、謀め期望せず自然の天命に順ふ義。轉じて突然に起る意味にもいふ。戰國、楚策「有二一一、又有二無妄之福一」史、春申君傳には毋望に作る。
【無明】ムミョウ　はてなし。潘岳賦「謂二原遍分一一一、前二川流兮無一岸」‖無邊。
【無比】ムヒ　たぐひなし。逸周書「勁率力貌而——」‖無二。
【無風帶】ムフウタイ　貿易風と反對貿易風との相會して無風となる地方、緯度三十度の所。‖回歸無風帶。
【無服之殤】ムフクノショウ　死者の爲め忌服をせざる義。儀禮、喪服傳「不レ滿二八歲一以下爲二——一」
【無聞】ブモン　世間に名が聞えず。論、顏淵「在レ邦一一、在レ家一一」
【無遠】ムエン　疎くしてかぎりなし。江賦「察」之無レ象、尋レ之一一」‖無涯・無限。
【無偏無黨】ムヘンムタウ　中正公平にしてかたよらず。書、洪範「無レ偏無レ黨、王道蕩蕩」
【無謀】ムボウ　かんがへなし、無分別。
【無縫天衣】ムホウテンイ　天女のおりしぬひ目なしの衣服。「雲笈錄」錄下て文章の構造の自然に微妙を極めたるに喩ふ。‖天衣無縫。
【無數】ムスウ　極めて數の多きにいふ。漢書、成帝紀「有二青蠅一一、集二未央宮殿中朝者坐一」
【無味】ムミ　味なし、つまらぬ、無趣味。老子「道之出レ口、淡乎其一一」
【無名】ムメイ　〇世間に名が知られず「一一草」〇姓名が分らぬ「一一氏」〇正當の理由なし「一一之師」
【無名指】ムメイシ　手の第四指、くすりゆび、べにさしゆび。
【無明】ムミョウ　㊀過去の煩惱の爲めに本心の明がなくなる。大藏法數「過去世煩惱之惑報二於本性一、無レ所二明了一、故曰二一一一」‖疑・无明。
【無銘】ムメイ　刀劍などに作者の記名な

【無線電信】ムセンデンシン　電線を用ひずして、電波の作用にて通信する電信。
【無線電話】ムセンデンワ　電線を用ひずして、電波の作用にて通話する電話。
【無双】ムソウ　雙びなし。
【無爲】ムヰ　〇自然のまゝにして人爲を加へず。老子「——而治」〇何もせずに。
【無爲徒食】ムヰトショク　何もせずに食ふこと。
【無爲無策】ムヰムサク　何もせず、策なし。
【無爲無策】ムヰムサク　何もせず、策なし。
【無爲無策】ムヰムサク　何もせず、策なし

きもの。

【無紋】ムモン　〇あやもやうなし。金史、輿服志「八品九品、服一一羅」〇圀紋所なし。

【無恙】ムヨウ　恙(心部六畫)を見よ。

【無聊】ムリョウ　〇いさをなし。李嶠詠「結レ懽頁有レ裕、聯レ宗魄二一一」〇もちひず。左傳「一レ一、將二自及一」‖不レ須。

【無用長物】ムヨウノチョウブツ　やくにたたぬ邪魔物。世說「平生無二一一一」

【無用之用】ムヨウノヨウ　世に用なきもの、かへりて大用を爲すをいふ。莊、人間世「人皆知二有用之用一、而莫レ知二一一一也」

【無欲】ムヨク　心に欲しがる所なし。無知を見よ。

【無律】ムリツ　しまりなし、不規律の意。李靖傳「蕭瑀劾二靖持レ軍一レ、縱レ士大掠、敗二突厥資一、帝召讓レ之」

【無量壽佛】ムリョウジュブツ　阿彌陀如來の異名(阿彌陀經)

【無量力】ムリョウリキ　はかり得がたき力。王僧孺詩「大身無邊身、大功一一」

【無量無邊】ムリョウムヘン　數量り限る所なく廣大なり。法華經「供二養衆僧一其德最勝、一一」

【無慮】ムリョ　おほよそ、あらましの總計。小計慮を爲さざる義。陳書、食貨志「天下大抵一一皆錢二帛銀一矣」‖仁慮。

【無頼】ムライ　〇たのみなし、くらべものなし、等倫なし。〇類別なし。頗開なし。論、衡霊公「有レ歎一レ一」

【無聊】ムリョウ　心うれひありて樂まず。李陵答二蘇武一書「與レ子別後、益復一一」

【無憀】ムリョウ　心にたよりなくさびし。憀は賴。陸倕蒙詩「閨夢二關鴻一說二一一」‖無聊。

【無涯】ムガイ　圓滿は煩惱、煩惱を離れる境、悟をひらきて生死の道に淵落することなし。有漏の對。法華經、序品「於二一一實相一、心已得二通達一」

【無緣】ムエン　〇ふしあはせ。詩、小雅「憂心惸惸、念二我一一一」左傳「一一早世隕命」‖不幸。〇ふちなし、知行なし、俸祿なし。

【無論】ムロン　もちろん、いふまでもなし。‖勿論。

【無乃】ムダイ　むしろ、いっそ。經傳釋詞「一一猶二得無一也」‖無寧。

【無寧】ムネイ　むしろ、いっそ。經傳釋詞「一一猶二無乃一也」論、子罕「一一死二於二三子之手一乎」

九畫

【烈】レツ　烈(火部六畫)の古字。

【煒】イ　㊀キ　㊁尾　㊂

㊀あきらか(明)〇まっか(盛赤)なる色。詩、邶風「彤管有一一」〇盛んなる貌。㊁かがやく。‖煒。

【煒煒】イイ　あきらかなる貌。又、盛んなる貌。蔡邕賦「丹華一一、綠葉參差」

【煒曄】イヨウ　かがやく貌、盛んなる貌。王禹偁詩「有唐張曲江、盛名何一一」

【煒燁】イヨウ　前條に同じ。郭璞、丹木贊「丹木一一、沸沸玉膏」

【煒煌】イコウ　光りかがやく。韓愈詩「章何何一一」

【煜】イク　㊀ヤ　㊁屋

〇かがやく。かがやかす(煜)揚雄文「日一乎晝、月一乎夜」〇ほのほ(火焰)〇曄一イクは盛んなる貌。班固賦「管弦曄一」

【煜煜】イクイク　光がかがやく貌。梁簡文帝、詠三朝日二詩「團團出二天外一、一一上二層峯一」

【煜曄】イクヨウ　あきらかにかがやく。潘岳賦「應曄一一」

【煜耀】イクヨウ　ひかりかがやく貌。漢書、敍傳「其餘發飛景附一一其間者、蓋不レ可二勝載一」

【煜煜】イクイク　かがやく。孫綽賦「要二玄電之一一一、瑣二玉衡之琳琅一」

【煤】バイ　㊀エッ　㊁ヤ　㊂

㊀やく(灼)㊁ゆでる、湯又油にて煮る(煽)俗に通じて作に作る。又、別に

【煙】エン　イン　㊀先　㊁

〇けむり(火氣)〇かすみ、もやの類「雲一一」「曉一一」「寒一一」「暮一一」「水一一」「一霧」〇けむる。〇すす(煤)「松一一」「煤一一」〇煙草の略「喫一一」「一酒」

【煙埃】エンアイ　次條に同じ。後漢書、蔡卓傳「蠹京一一」

【煙塵】エンジン　けむりと、ほこりと。元稹詩「谷深一一浄、山虚鐘磬長」‖煙埃。

【煙霞】エンカ　けむりと、もやと。唐德宗詩「四郊一一空」‖雲霞。

【煙雨】エンウ　けむりてふるあめ。杜牧、江南春詩「南朝四百八十寺、多少樓臺一一中」

【煙雲】エンウン　けむりと、くもと。四都賦「紅塵四合、一一相連」‖雲煙。

【煙雲供養】エンウンクヨウ　靈を以て情を怡ばしむる義。妮古錄「黃大癡九十而貌如二童顏一、米友仁八十有餘、神明不レ衰、蓋一一中——也」

【煙暖】エンダン　けむりて日光くらし。鮑照詩「一一越嶂深、箭道楚江急」

【煙筱】エンショウ　けむりと、ほのほと。北史、來護兒傳「縱レ火一一張レ天、映覆レ火而懼」

【煙隔】エンカク　けむりにてかすめる村。王禹偁詩「地接二清淮一屋佳致二水村

一一是魚鄉」

【煙霞痼疾】エンカコシツ　○隱居して山水を愛することの甚だしきにいふ。唐書、田游巖傳「入二嵩山一、居二許由洞旁一、（中略）高宗幸二嵩山一、親至二其門一、游巖野服出拜、帝曰、先生比佳乎否、答曰、臣所謂泉石膏肓、——者」

【煙霞癖】エンカヘキ　○前條に同じ。倪瓚詩「殘生意拘——」○圖揚片を嗜み吸ふ者をいふ。

【煙火】エンクワ　○飯をかしぐけむり。史、律書「鳴雞吠狗、——萬里可レ謂二和樂者乎一」‖人煙。○のろし。漢書「初北邊自二宣帝一以來、數世不レ見二——之警一、人民熾盛、牛馬布レ野」‖烽火。○火にて煮たる食物。馬令、南唐書「此非レ有二風雅製度一、何得二人間——氣一多邪」‖熟食。

【煙花】エンクワ　○繁華に喩ふ。杜甫詩「秦城樓閣——裏」○妓女をいふ。黃滔詩「慕上無——一事思妾顏色」俗に女子の娼妓となる者を堕落——といふ。

【嬋娟】センエン　○髪の美くしく黒き形容。曹植詩「洞房叩レ戸、攬レ玉紐二——一」○青山に喩ふ。蘇軾詩「淮山相細好、曉鏡開二——一」

【煙景】エンケイ　はるげしき。李白、春夜宴二桃李園一序「陽春召レ我以二——一、大塊假レ我以二文章一」

【煙溪】エンケイ　かすめる谷川。林泉高致

「野中濃布、——漫布」

【煙月】エンゲツ　煙のこめたる月。張九齡詩「林園事益簡、——賞恆餘」

【煙蓑】エンサ　けむれる雨の中にみのを着くる義。陸游、溪上小雨詩「增空紫陌紅塵夢、收得——雨笠身」

【煙草】エンサウ　○けむりを帶びたるくさ。李益詩「——遠レ天根樹齊、岳陽樓路子規啼」○たばこ。本草綱目「一名相思草、言人食レ之則時時思想不レ能レ離也」‖淡巴菰ダバコ。菸草。

【煙渚】エンシヨ　かすめるみぎは。謝莊詩「容裔迩二星漢一、遙遙濟二——一」

【煙聚】エンシユ　煙の如くむらがりあつまる。王勃文「魚鳥——、具有二鳧鷖之」

【煙樹】エンジユ　かすみのこめたる木。孟浩然詩「鳥過二——一宿、盤後三水軒一飛」

【煙渚】エンシヨ　けむりこめたるなぎさ。孟浩然詩「移レ舟泊二——一」‖煙汀。

【煙曙】エンショ　けむりのたなびくあけぼの。李商隱詩「醉起微陽若二——一」

【煙嶼】エンジョ　けむりのこめたる小島。張九齡詩「——宜二春色一、林猿莫夜啼」

【煙水】エンスイ　かすみけぶれるみづ。孟浩然詩「蒼梧白雲遠、——洞庭深」温庭筠詩「誰解乘舟尋二范蠡一、五湖——獨泛レ鷗」‖煙波。

【煙壺】エンコ　地名、山東省芝罘港に在り、明の時、烽燧を設け防海の備と爲す。轉じて芝罘の異名、芝もと之に作る。

【煙波】エンパ　もやのこめたる水波。崔顥詩「日暮鄉關何處是、——江上使二人愁一」‖煙浪。

【煙霧】エンム　○たなびくもや。陸游詩「數家煩屋鎖二——一」○けむりがとぶ。王十朋、蓬萊閣賦「草木蔥蘢、——霧吐」

【煙路】エンロ　けむりと、きりとの王物詩「北山——始迷茫」

【煙滅】エンメツ　けむりの如く消えうせる。陳琳、檄二吳將校部曲一文「隨波漂流、與レ煙俱滅者、亦詎衆多」

【煙浪】エンラウ　煙のこめたるなみ。劉禹錫詩「巴江——深」

【煙嵐】エンラン　けむりと、むしのぼる山の氣と。賈島詩「浩瀚浮二雲根一、——沒二遠村一」

【煽】カ　俗

煽（大部八畫）の俗字。

【煖】ダン　俗

○あつし（熱）○かわく（乾）○かがやく（赫）○やく（爇）

【煇】㊀キ　㊁コン　㊂ケン　㊃ケン　㊄ケン　㊅ケン　㊆ケン　㊇ケン　㊈ケン　㊉ケン　㊊ケン　㊋ケン　㊌ケン　㊍ケン　㊎ケン　㊏ケン　㊐ケン　㊑ケン　㊒ケン　㊓ケン　㊔ケン　㊕ケン　㊖ケン　㊗ケン　㊘ケン　㊙ケン　㊚ケン　㊛ケン　㊜ケン　㊝ケン　㊞ケン　㊟ケン　㊠ケン　㊡ケン　㊢ケン　㊣ケン　㊤ケン　㊥ケン　㊦ケン　㊧ケン　㊨ケン　㊩ケン　㊪ケン　㊫ケン　㊬ケン　㊭ケン　㊮ケン　㊯ケン　㊰ケン　㊱ケン　㊲ケン　㊳ケン　㊴ケン　㊵ケン　㊶ケン　㊷ケン　㊸ケン　㊹ケン　㊺ケン　㊻ケン　㊼ケン　㊽ケン　㊾ケン　㊿ケン　㊀ケン　㊁ケ

嬉文帝の諱を作る。

【熙笑】キ やはらぎわらふ。恰然として笑ふ。唐・韓愈「南山詩」「百禽相―」

【熙陸】キ ロク 広くさかんなり。晋書、束晳伝「―被二四表一、格二皇穹一」

【熙朝】チョウ よく治まる御代。皇室の「―」

【熙世】セイ 昭代。

【熙載】サイ 「―」

【熙民】ミン 「―」

【熙熙】キ すこしのめぐみ(小惠)を行ふ貌。晋書、阮籍伝「彼只二―一為レ仁、子子為レ慈」

【熙載】サイ あたためおほふ。礼記「天地訢合、陰陽相得、煦二嫗覆育一万物一」

【煌】

㊀ クワウ 唐 ㊁ クワウ 陽

㊀かがやく(輝)「煌―」「輝―」㊁火の光。

【煌煌】コウ ひかりかがやくの文、太陽。院稚賦「欣二―一之恒照一兮喜二大陽之未移一」

【煌灼】シャク 明かなる貌。「―」

【煌星】セイ きらきらとひかるほし。

【煌煌】コウ ひかりかがやくの貌。「明星―」

【煌煌】コウ 明かなる貌。「蜜燭―」

【煌煌】コウ 「―」

【煥】

クワン 陽

○ひかり(火光)○あきらか(明)○光りかがやく貌。○あや(文章)ある貌。

【煥発】ハツ かがやきて文采ありの郭璞、帝京詩「爰有二石棋一、五彩―一」

【煥曜】ヨウ かがやく。韓愈賦「明哀日以鑒レ形兮、信―一而重レ光」

【煥乎】コ 文章のかがやく貌。晋、束晳「補二亡詩一」「―其有二文章一」

【煥彩】サイ 明かにあらはれる。張協詩「休暑曲錦、備レ物―一」

【煥然】ゼン かがやきあらはるる貌。川者賦「管公於レ斉、其神明―一、正在二三子外一」大詔渙発の渙発とは別。

【煥発】ハツ あきらかにかがやく。呉均詩「―天光散」

【煥爛】ラン あきらかの白居易詩「辞文―一英華接」

【煖】

ナン 寒

○ひかり(火光)○あたたか(温)○ひとりもの。ひとり(単)兄弟なき独り者。又、妻なきをとこ(寡夫)○うれふ(憂)

【煖気】キ うれ(思ふ貌。又、単独の貌。左、哀十六「―余在レ疚」

【煖衿】キン 困窮してたよりなき孤身者。孟、梁恵王「鰥寡孤独、天民之―一」

【煖煖】ナン 「―」

【煜】

イク 屋 又、熠・燠に作る

○ひかり。○ひとりもの。ひとり(単)兄弟なき独り者。又、妻なきをとこ(寡夫)○うれふ(憂)

【煜煜】イク 「―」

【煜耀】ヨウ 「―」

【煙】

エン 先

○けぶり。○けぶりの如きもの。○けぶりの如く多きもの。○けぶりの如く細きもの。○けぶりの如く立つもの。○けぶりの如く消ゆるもの。○けぶりの如く物を蔽ふもの。○けぶりの如く物を染むるもの。○けぶりの如く物を包むもの。○けぶりの如く物を隔つるもの。○けぶりの如く物を没するもの。○けぶりの如く物を失ふもの。○けぶりの如く物を迷はすもの。○けぶりの如く物を惑はすもの。○けぶりの如く物を乱すもの。○けぶりの如く物を汚すもの。○けぶりの如く物を害するもの。○けぶりの如く物を滅ぼすもの。○けぶりの如く物を尽くすもの。○けぶりの如く物を絶つもの。○けぶりの如く物を断つもの。○けぶりの如く物を切るもの。○けぶりの如く物を裂くもの。○けぶりの如く物を破るもの。○けぶりの如く物を壊すもの。○けぶりの如く物を毀つもの。○けぶりの如く物を砕くもの。○けぶりの如く物を粉にするもの。○けぶりの如く物を細かにするもの。○けぶりの如く物を薄くするもの。○けぶりの如く物を軽くするもの。○けぶりの如く物を浮かべるもの。○けぶりの如く物を漂はすもの。○けぶりの如く物を流すもの。○けぶりの如く物を運ぶもの。○けぶりの如く物を送るもの。○けぶりの如く物を伝ふもの。○けぶりの如く物を通ずるもの。○けぶりの如く物を貫くもの。○けぶりの如く物を突くもの。○けぶりの如く物を刺すもの。○けぶりの如く物を射るもの。○けぶりの如く物を打つもの。○けぶりの如く物を叩くもの。○けぶりの如く物を撃つもの。○けぶりの如く物を殴るもの。○けぶりの如く物を蹴るもの。○けぶりの如く物を踏むもの。○けぶりの如く物を踏みつけるもの。○けぶりの如く物を踏みにじるもの。○けぶりの如く物を踏みしだくもの。○けぶりの如く物を踏みつぶすもの。○けぶりの如く物を踏みくだくもの。○けぶりの如く物を踏みこわすもの。○けぶりの如く物を踏みやぶるもの。○けぶりの如く物を踏みくずすもの。○けぶりの如く物を踏みつぶすもの。○けぶりの如く物を踏みくだくもの。○けぶりの如く物を踏みこわすもの。○けぶりの如く物を踏みやぶるもの。○けぶりの如く物を踏みくずすもの。

【煤】

バイ 灰

○すす。○すすけたる貌。

【煤煙】エン すすけたる貌。

【煙】

エン 先

○けぶり。○けぶりの如きもの。○けぶりの如く多きもの。○けぶりの如く細きもの。○けぶりの如く立つもの。○けぶりの如く消ゆるもの。○けぶりの如く物を蔽ふもの。○けぶりの如く物を染むるもの。○けぶりの如く物を包むもの。○けぶりの如く物を隔つるもの。○けぶりの如く物を没するもの。○けぶりの如く物を失ふもの。○けぶりの如く物を迷はすもの。○けぶりの如く物を惑はすもの。○けぶりの如く物を乱すもの。○けぶりの如く物を汚すもの。○けぶりの如く物を害するもの。○けぶりの如く物を滅ぼすもの。○けぶりの如く物を尽くすもの。○けぶりの如く物を絶つもの。○けぶりの如く物を断つもの。○けぶりの如く物を切るもの。○けぶりの如く物を裂くもの。○けぶりの如く物を破るもの。○けぶりの如く物を壊すもの。○けぶりの如く物を毀つもの。○けぶりの如く物を砕くもの。○けぶりの如く物を粉にするもの。○けぶりの如く物を細かにするもの。○けぶりの如く物を薄くするもの。○けぶりの如く物を軽くするもの。○けぶりの如く物を浮かべるもの。○けぶりの如く物を漂はすもの。○けぶりの如く物を流すもの。○けぶりの如く物を運ぶもの。○けぶりの如く物を送るもの。○けぶりの如く物を伝ふもの。○けぶりの如く物を通ずるもの。○けぶりの如く物を貫くもの。○けぶりの如く物を突くもの。○けぶりの如く物を刺すもの。○けぶりの如く物を射るもの。○けぶりの如く物を打つもの。○けぶりの如く物を叩くもの。○けぶりの如く物を撃つもの。○けぶりの如く物を殴るもの。○けぶりの如く物を蹴るもの。○けぶりの如く物を踏むもの。○けぶりの如く物を踏みつけるもの。○けぶりの如く物を踏みにじるもの。○けぶりの如く物を踏みしだくもの。○けぶりの如く物を踏みつぶすもの。○けぶりの如く物を踏みくだくもの。○けぶりの如く物を踏みこわすもの。○けぶりの如く物を踏みやぶるもの。○けぶりの如く物を踏みくずすもの。

【煙】

エン 先

○けぶり。○けぶりの如きもの。○けぶりの如く多きもの。○けぶりの如く細きもの。○けぶりの如く立つもの。○けぶりの如く消ゆるもの。○けぶりの如く物を蔽ふもの。○けぶりの如く物を染むるもの。○けぶりの如く物を包むもの。○けぶりの如く物を隔つるもの。○けぶりの如く物を没するもの。○けぶりの如く物を失ふもの。○けぶりの如く物を迷はすもの。○けぶりの如く物を惑はすもの。○けぶりの如く物を乱すもの。○けぶりの如く物を汚すもの。○けぶりの如く物を害するもの。○けぶりの如く物を滅ぼすもの。○けぶりの如く物を尽くすもの。○けぶりの如く物を絶つもの。○けぶりの如く物を断つもの。○けぶりの如く物を切るもの。○けぶりの如く物を裂くもの。○けぶりの如く物を破るもの。○けぶりの如く物を壊すもの。○けぶりの如く物を毀つもの。○けぶりの如く物を砕くもの。○けぶりの如く物を粉にするもの。○けぶりの如く物を細かにするもの。○けぶりの如く物を薄くするもの。○けぶりの如く物を軽くするもの。○けぶりの如く物を浮かべるもの。○けぶりの如く物を漂はすもの。○けぶりの如く物を流すもの。○けぶりの如く物を運ぶもの。○けぶりの如く物を送るもの。○けぶりの如く物を伝ふもの。○けぶりの如く物を通ずるもの。○けぶりの如く物を貫くもの。○けぶりの如く物を突くもの。○けぶりの如く物を刺すもの。○けぶりの如く物を射るもの。○けぶりの如く物を打つもの。○けぶりの如く物を叩くもの。○けぶりの如く物を撃つもの。○けぶりの如く物を殴るもの。○けぶりの如く物を蹴るもの。○けぶりの如く物を踏むもの。○けぶりの如く物を踏みつけるもの。○けぶりの如く物を踏みにじるもの。○けぶりの如く物を踏みしだくもの。○けぶりの如く物を踏みつぶすもの。○けぶりの如く物を踏みくだくもの。○けぶりの如く物を踏みこわすもの。○けぶりの如く物を踏みやぶるもの。○けぶりの如く物を踏みくずすもの。

食貨志「皮葉貨惡、乃ノ一 或捐
「錢爲」末食ノ之」
【煎炒】セン くすりをにる。唐書、劉瑑
傳「瑑ニ雖得ル死一所ノ愛、死病必親
ーノ一、背而進」‖煎熬。

【照】 セウ 畧 又炤に作る

○てらす。中庸「日月所ノ」光の及ぶ所、日がさす。轉じて日の義とす「夕ー」「遥ー」「晩ー」「殘ー」「斜ー」うつす、かがやかす。○あきらか(明)○ひかる、てる、てりかがやく。○ひかり、あきらか、かがやき(光)○つき合せる「對ー」○あてる、依る。○條例規則などにあてはめる「ー例」○證明書「護ー」は支那内地の旅行券。○通告する「ー會」「知ー」○鏡を以て自ら顧る。晉書、王衍傳「在ー中、攬鏡自ー」○實眞「小ー」「寫ー」

【照映】セウエイ てりうつる。てらす。晉書食貨志「車如ニ流水、馬若ニ飛龍、一ニ一軒廠、光ニ榮前載ー」
【照耀】セウヨウ てらしかがやく。華嚴經「以ー一切所ー圓」
【照曜】セウエウ てりかがやく。謝靈運詩「石淺水潺湲、日落山ー一」
【照臨】セウリン 文章などの前後相應にてつり合をとる。
【照海鏡】セウカイキヤウ 船に備へつけたる望遠鏡の明史「花後歷ニ——、大徑數尺、能照ニ數百里ー」
【照燭】セウショク 神佛が明かにかんがみ視るの‖照鑑。
【照會】セウクワイ かけ合ひの公文書に用ふ。宋史、河渠志「乞ニ取索ーー」
【照鏡】セウキヤウ ○鏡にてらしみる。李綱詩「人生ノー須ニ自知ー」○よくてらすかがみ。南史、陸慧曉傳「心如ニ一ー」「遇ノ形觸ノ物、無ニ不ニ顯然ー」
【照管】セウクワン てらし守りて管理する義。歐陽修文「某不ニ久出ニ郡、徒ニ以ー孱託ーニ一三歲小子ー」
【照査】セウサ つき合せてしらべる。‖查照。
【照錄簿】セウロクボ おぼえ(除金)の簿「荊楚歲時記」
【照察】セウサツ あきらかに見ぬく。潛夫論「未ニ相ーー、而求ニ深罰ー」
【照常】セウジヤウ 例平常の如く。
【照影】セウエイ ひかりあらはる。集古錄「晉ニ唐名將、莫ニ動業ーー」
【照尺】セウシヤク ○銃の著彈距離を定める爲めに銃身に取りつけたるもの。○測量器械、木板にて作る、尺度を細分して地面の高低を測るもの。
【照灼】セウシヤク かがやきあきらか。南史、梁武帝皇后傳「光彩ーー」
【照準】セウジユン 鐵砲のねらひ「ーー器」
【照相器】セウシヤウキ 畧 寫眞器。
【照照】セウセウ かがやく貌。鮑照詩「芬芳

【照海】セウカイ 海岸高、一一寒洲爽」‖昭昭。
【照射】セウシヤ ひかりかがやく。韓琦詩「圖騶天表相ーー」
【照妖鏡】セウエウキヤウ 人の心を照し見るといふかがみ。西京雜記「戚陽宮、有ニ方鏡ー、廣四尺、高五尺九寸、表裏有ノ明、人直來照ノ之(中略)人有ニ疾病ー在ノ內、摠ノ心而照ノ之、則知ニ病之所ノ在、又女子有ニ邪心ー、則膽張心動、始皇常以照ニ宮人ー、膽張心動者則殺ノ之」
【照燭】セウショク てりてすみわたる。梁簡文帝啓「秋色ーー、預表ニ光端ー」
【照徹】セウテツ ○洞ひくてらす。○てりわたる。
【照得】セウトク 畧 近世の公牘文に上より下に行ふもの、この二字を首に冠よ。
【照顧】セウコ てらしつくす。
【照病鏡】セウビヤウキヤウ 醫中の病を照し見る鏡。晉書紀事「葉法善有ニ破鏡一、經ノ胸脇ノ水、人有ノ疾以照之、盡見ニ藏腑中所ノ蓄之物ー、然後以ノ藥療之、莫ニ不ニ疾愈ー」
【照視】セウシ てらしあはせてかへす、書輪の回答。
【照燃】セウネン あきらかにしてさかんなり。燃は茂。宋史、樂志「天行徐諷、皇儀ーー」
【照魔鏡】セウマキヤウ 惡魔の本體をてらしあらはすといふかがみ。‖照妖鏡。
【照冥】セウメイ 佛 盂蘭盆の祭の夜にたく火。

【煎】 ○セン ㊁セン 先 薺

○いる(蒸)火にて汁を去る、煮つめる。○にる(熟煮)せんじる「ー藥」○つくす(盡)(ヲ)へる(減)

同訓異義 煎・煮・烹・飪○前は、火去レ汁也」と註し、汁の乾くまで煮つめるなり。○煮は煮ノ鍋・煮茶などに用ふ、調味せず、ただ煮わかすなり。○烹は調味してにるなり、烹人は料理人をいふ。左傳「以ニ烹ニ魚肉ー」○飪は熟なり、にえ加減なり。論語「失ノ飪不ノ食」

照朝盛事」七月十五日、僧俗官中元節、僧家建ニ盂蘭盆會ー、故ニ都西湖及塔上河中、調ニ之ーーに
【照面】セウメン かほをてらす。晉書、王羲之傳「可ニ以ーヒー」‖照顏。
【照耀】セウエウ あきらかにかがやく。宋玉、笋賦志「宇宙ーー、日月光華」‖燁燁。
【照覽】セウラン ○てらして、明かにみる。○神佛が明かに監視する。‖照鑑。
【照臨】セウリン 日月が上よりてらしのぞむ。轉じて君主が民にのぞむ義。又、貴人の來るを敬ふ語。左、文十二「君不ニ忘ニ先君之好ー、ニ一賢ー」
【照布】セウフ 國 茶市に用ふる上等の麻布「朝鮮ーー」

【煎熬】センガウ　食物の汁のなくなるまで煮る。枚乘、七發「予レ是使二伊尹一一二」‖熬煎。

【煎茶】センチャ　葉茶を煮る。又、其の葉茶。李洞詩「一レ一掃レ地習二忘機一」‖烹茶。

【煎調】センテウ　食物などにて調味する。南史、孫廉傳「皆手自一一、不レ辭二勤劇一」

【煎督】セントク　きびしく督促する。柬坡、尺牘「日夜一一」

【煎悩】センナウ　いりなやます。浮生子「風輭而地濕、水冷而火熱、互相一一、無二時得一レ安」

【煎烹】センハウ　にる。蘇軾詩「我有二玉味一非二一一一一」‖烹煎。

【煎餅】センピン　○もちを焼きたるもの。○國センベイうどん粉に砂糖をまぜ、種種の型に入れてうすくやきたる菓子。

【煎薬】センヤク　せんじて用ふる藥。

【煎和】センクワ　煮て味をととのへる。周禮「割享一一」

【煎海鼠】コイリ　國ほしこ、なまこの腸を去り、ゆでて日光にほしたる食品。‖海參。

【煖】

㊀ダン・ナン　早
㊁ケン・クヮン　元

㊀あたたか(溫)證、玉制「七十非二裘不一一」‖暖・煗。○あたたむ。又、あたたまる。㊁人の名、渴一は戰國の時の齊の人。○あたたか。‖暄。

【煖香】ダンカウ　あたたかなるにほひ。李商隱詩「蜜蜂飛上迮二一一一」

【煖閣】ダンカク　ろろりの火にてあたためたるたかどの。歐陽炯詩「紅爐一一佳人睡」

【煖室】ダンシツ　むろ、あたたかなるへや。

【煖煖】ダンダン　あたたかなる貌。孫綽賦「嘉卉蕤蔓、溫風一一」

【煖房】ダンバウ　移家のさかもり。王建、宮詞「太儀前日一一來」

【煖炉】ダンロ　鐵・煉瓦等にて作れる箱形の爐。薪炭又瓦斯などにて室内をあたためるもの、ストーブ。‖煖室・煖爐。

【煖爐會】ダンロクワイ　ろびらき、陰暦十月一日に催すさかもり。荊楚歲時記「十月旦日命レ酒、爲二一一一一」

【煙】

煙(前條)の㊀に同じ。

【粘】

㊀デン　㊁セン　陷　鹽

㊀ひかり(火光)○ひらめく(閃)㊁ゆでる(燸)

【煤】

バイ　灰

○すす(煙墨)「松一」「墨一」○すみ(墨)○せきたん(石炭)「一炭」

【煤烟】バイエン　○すすや、ほこり。‖烟煤。

【煤煙】バイエン　○すすけむり。‖煤烟。○石炭のけむり。

【煤氣】バイキ　○すすの立ちのぼる氣。南部煙花記「夜迮レ火則墨二一一一」○石炭瓦斯。

【煤氣井】バイキセイ　石油のわく井戸。‖油井。

【煤炭】バイタン　石炭、單に煤ともいふ。庚中外史「西山有二一一一」

【煤田】バイデン　石炭層の多き土地。‖炭田。

【煤油】バイユ　石油。‖石腦油。

【煤竹】バイチク　國○屋根などに用ひし竹のすすけてあか黒くなりしもの。○煤掃に天井等を掃ふに用ふるさゝ竹。

【煩】

ヘン　元
ハン　一音　ボン

○わづらはし、ごたごたしてうるさし。書、說命「一則亂」○わづらふ、わづらひもだゆ(悶)「一悶」○熱にて頭痛がする。○わづらはす、勞する。

【煩憂】ハンイウ　苦しみうれへる。

【煩紆】ハンウ　わづらはしくまつはる。李白詩「寸心增二一一一」‖煩縈。

【煩鬱】ハンウツ　氣がむすぼれふさがる。

【煩縈】ハンエイ　わづらはしくまつはる。孫綽賦「有レ若二葡萄之蔓延一、或如二兎絲之一一一」‖煩紆。

【煩寃】ハンエン　わづらひもだえる。楚辭、九章「憂心之一一兮、涕瀇瀇而不レ止」

【煩冤】ハンエン　わづらはしくかまびすし。杜牧詩「時陪庾公賞、還悟陝二一一一」

【煩雜】ハンザツ　わづらはしきと、てがるなると、煩雜と簡易と。歐陽修文「國體大小、適二一一之宜一」‖繁雜。

【煩急】ハンキフ　わづらはしくきびし。詩、唐風、揚之水、箋「平王政教一一、而愚澤之令、不レ行二於下民一」

【煩懆】ハンサウ　うるさき思。耶律楚材詩「晴月洗二一一一」

【煩悩】ハンナウ　わづらはしきおもひ。支遁詩「冷風解二一一一」‖煩抱。

【煩劇】ハンゲキ　うるさくいそがしい。‖繁劇。

【煩言碎辭】ハンゲンサイジ　言を煩はしく辭を細かにする。又、其のくだくだしき言辭。漢書、劉歆傳「分レ文析レ字、一一」

【煩碎】ハンサイ　くだくだし、わづらはし。‖煩瑣。

【煩瑣哲學】ハンサテツガク　四洋の中世に行はれたる哲學、基督教を保證せし說、其の所論の煩瑣なるが故に名づく。

【煩絮】ハンジョ　うるさくこまか。劉勰、文論「騷人之情、必刻畫而一一」

【不レ憚レ煩】ハバカラズハンザツヲ　煩雜を畏れず。孟嘗文公「何辭子之一一」

【煩荷】ハンカ　煩雜にしてこまかくやかましい。漢書、文帝紀「擴興除二苛一一約二法令一」

【煩累】ハンルイ　わづらはしくかまびすし。杜牧詩「時陪庾公賞、還悟陝二一一一」

【煩惱】ハンナウ　わづらはしきと、てがるなると、煩雜と簡易と。歐陽修文「國體大小、適二一一之宜一」‖繁煩。

【煩急】ハンキフ　わづらはしくきびし。詩、唐風、揚之水、箋「平王政教一一、而愚澤之令、不レ行二於下民一」

【煩懆】ハンサウ　うるさき思。耶律楚材詩「晴月洗二一一一」

【煩悩】ハンナウ　わづらはしきおもひ。支遁詩「冷風解二一一一」‖煩抱。

【煩劇】ハンゲキ　うるさくいそがしい。‖繁劇。

【煩言碎辭】ハンゲンサイジ　言を煩はしく辭を細かにする。又、其のくだくだしき言辭。漢書、劉歆傳「分レ文析レ字、一一」

【煩瑣】ハンサ　くだくだし、わづらはし。‖煩碎。

【煩瑣哲學】ハンサテツガク　四洋の中世に行はれたる哲學、基督教を保證せし說、其の所論の煩瑣なるが故に名づく。

【煩絮】ハンジョ　うるさくこまか。劉勰、文論「騷人之情、必刻畫而一一」

【煩辭】ハンジ くだくだしくわづらはし。後漢書、黃瓊傳「米鹽瑣密、初若二一一一、然猶精力、能推二行之一」

【煩想】ハンサウ うるさきおもひ。草廬雜詩「賴此林下期、清風滌二一一一」

【煩躁】ハンサウ わづらひさわぐ。易經、疏「以二其一一一故二其辭多也」

【煩數】ハンサク うるさく、しばしばある。後漢書、龐參傳「循役一一、休而息レ之」

【煩雜】ハンザフ わづらはしくごたごたする。漢書、孟喜傳「禮經多、春秋一一」晉書「愚二前代律令本注一一一」

【煩愁】ハンシウ わづらはしき物おもひ。張衆詩「欲下把二一一一付中杯酒上」

【煩褻】ハンセツ ちりづか、ごみため。莊子「戸内之一一、曾靈處レ之」

【煩冗】ハンジョウ 煩縁に同じ。

【煩蒸】ハンジョウ 心がもだえる程むしあつし。范成大詩「夜雨洗二一一一」

【煩暑】ハンショ むしあつし。盧思道、納涼賦「積二炎蒸于蘆幄一、流二一一于園篠一」

【煩擾】ハンジョウ わづらはしくくだくだし。擾は繁多。＝繁冗・煩冗。

【煩擾】ハンジョウ わづらはしくみだれる。史、李將軍傳「我軍誠二一一一、虜亦不レ得レ犯レ我」

【煩訞】ハンヨウ 煩雜なるるうったへ。蘇轍詩「清談靜二一一一」

【煩多】ハンタ わづらはし。六韜、其事一一」

【煩治】ハンヂ わづらはしきまつりごと。淮南子「治國之道、上無二苛令一、官無二一一一」

【煩撃】ハンゲキ 入りみだれる。宋玉、九辯「枝一一而交精」擧一に擧に作る。

【煩醒】ハンセイ 二日ふつのためのあしきこころ。劉敬叔詩「澡雪滌二一一一」

【煩毒】ハンドク わづらひくるしむ。楚辭「煩便悁而一一」

【不レ耐レ煩】ハンヲ 煩劇なる職務に堪へず。宋書、庾登之傳「弟炳之爲レ人强急而一一」

【煩熱】ハンネツ あつくくるし。姚合詩「客行長似レ病、一一攻二四肢一」

【煩法】ハンハフ わづらはしき法律規則。歐陽修文「其一一翻文、一皆罷去」

【煩文】ハンブン 煩雜なる文章。孔安國、尚書序「觀二史籍之一一一、慨二篇之者不二一一」＝繁文。

【煩密】ハンミツ わづらはしくこまか。類延之文「選曹務レ一、不レ尚二一一一」

【煩務】ハンム わづらはしきつとめ。北史、柳虬傳「伏願思二臣至言、少減二一一一」＝繁務。

【煩悶】ハンモン わづらひもだゆ。白居易詩「宅小人一一、泥深馬鈍煩」＝煩懣。

【煩懣】ハンモン ○心がわづらひもだえる。遊仙、哀時命「惟一一而益レ悒」悒は胸。＝煩悶・煩寃。○脚がつかへてくるし。魏志、華陀傳「陳登得レ病、胸中一一」

【煩勞】ハンラウ わづらひつかる。後漢書、明帝紀「一一軍司」

【煩亂】ハンラン ○心がわづらひみだれる。○ごたごたとみだれる。漢書、張敞傳「敞能吏、任レ治二一一一、材輕非二卽之器一」＝煩雜。

【煩慮】ハンリョ うるさき思ひ。子虚、曉諭二石橋一序「時レ溪二一一一」

【煩累】ハンルイ わづらひ、わづらはしき雜務。韓愈遣興詩「清談解二一一、愁眉始得レ伸」

【煩禮】ハンレイ くだくだしき禮儀作法。＝煩縟。

【煩論】ハンロン わづらはしくこまごまと論ずる。又、其の論。

【煩惱】ハンナウ もだえまどふ。遊仙文帝文「願斷二一一、入二清淨境一」

【煩悩】ハンナウ もだえなげく。張衡詩「何爲懷二憂心一一」

【煩惱】ハンナウ 人世の欲情のわづらひ。聽曉記「消二一一垢、顯二心本性一」

【煬】

㊀ヤウ　㊁ヤウ　陽　漾

㊀あぶる（炙）○あぶりかわかす（燥）○熱を加ふ。○火氣おこる。火を盛んにもやす。莊、盜跖「冬則一レ之」㊁とらかす、金を燥かす（鎔金）

【煬者】ヤウシャ 火をもやして炊ぐ人。庭、寓言「一一避レ竈」

【煬突】ヤウトツ 茶をむすけむりだし。杜陽雜編「煬レ茶者爲二羽形一、置二一一一間一、記爲二茶神一」羽は飾羽。

【煬和】ヤウワ 和氣に炙りてやはらぐ。莊子「無レ所二甚親一、無レ所二甚疎一、抱レ徳一一、以順二天下一、此謂二眞人一」

【煉】

レン　霰

○ねる、金を火にとかして精錬する。＝錬。○藥物をまぜてこねる。

【煉瓦】レンガ 煉瓦石の略。

【煉瓦石】レングワセキ 粘土を水にてこねて長方形にやきたる一種の瓦。

【煉石】レンセキ 石をねる。論衡「女媧氏鎖二煉五色石一、以補二蒼天一」＝錬石。

【煉丹】レンタン ○仙術にて長生不死の藥として丹沙をねる。○體氣を丹田卽ち臍下三寸の所に蓄へねる。○ねりぐすり。＝煉藥。

【煉炭】レンタン ○たどん。＝炭團。○石炭を粉にしてねりかためたるすみ。

【煉乳】レンニウ 牛乳を精煉せし一種の飲料、コンデンスミルク。

【煉塀】レンベイ 圖土と瓦とにて築き上げ、上を瓦にてふきたる土塀。

【煉物】レンモツ 圖ねりかためて造りし物。瑠璃寶石などの擬造物の稱。

【煨】

ワイ　灰

○うづみび。○うづみ火にてやく「一芋」

【煨芋】ワイウ いもをやく。李嶠詩「爐

頭一一ノ火、相對各欣然」

【燻火】クンクヮ　ふづみび。耶律楚材詩「幸有二和林酒一、銷二地爐一一ノ爲レ君溫」

【燻蒸】クンジヤウ　やけのこり。徐陵文「往朝一一、多歷二年所一」朱熹詩「殘類隨二一一一、遺孫脫二餘燼一」‖灰燼。

【燻酒】クンチウ　酒をあたためる。范成大詩「人日出門逢二熟友一、地爐一一ノ煖如レ湯」

【燻座】クンザ　あつばい。後漢書「士燮三兄弟二面號二一一一者、亦何可レ支哉」

【燻柴】クンサイ　薪を埋火にてやく。趙師秀詩「焚燻夜一一ノ」

【熊】ユウ　東　通音ユウ

○くま、猛獣の名、家に似て黒地に産す、毛は黒・赤・白等あり、其の膽は藥用とす。○一一はあざやかに光澤ある貌。山海經「其光一一」○有一一は黄帝が天下を有つの號。

【熊魚】ユウギョ　熊のたなごころと、魚の肉と、共に美味なるもの。范成大詩「熊蹯相安無可レ笑、一一自レ古不レ容レ兼」‖熊掌を見よ。

【熊渠子】ユウキョシ　周の時の楚の人、夜行き臥石を見て以て虎と爲し、之を射て石を沒し羽を飲む、之を視れば石なり、因りてまた之を射るに矢摧けて迹なし（韓詩外傳）

【熊經鳥申】ユウケイテウシン　仙人が長生する爲めに身體をねる法、熊が木に攀ぢて懸る如く、鳥が首を伸ばす如くする、今の體操に同じ。莊、刻意「吐レ故納レ新、一一、爲レ壽而已矣」申・伸同じ。

【熊虎之將】ユウコノシヤウ　猛き大將。三國志「周瑜曰、劉備梟雄之姿、而有二關張一一一」

【熊掌】ユウシヤウ　くまのたなごころ、極めて美味なるもの。孟、告子「魚我所レ欲也、一一亦我所レ欲也」‖熊蹯。

【熊館】ユウクワン　くまのあ、藥用とす。唐書、柳公綽傳「仲郢幼時、學、晉和二一、丸使二夜明嚼以助レ勤」

【熊蹯】ユウハン　くまのたなごころ、其の肉甚だ美味なり、膳は獣の掌。公羊、宣二「膳宰一一不レ熟」‖熊掌。

【熊羆之士】ユウヒノシ　猛き士。書、康王之誥「亦有下一一、不二心一之臣上‖熊貔之士。

【熊羆之力】ユウヒノチカラ　くま。又、しぐまの如き強き力。漢書、賈山傳「率二一一一、虎狼之心一、置二食諸侯一」‖熊羆入レ夢】ユウヒニイルユメ　男子をうむ前兆。詩、小雅「大人占レ之、維熊維羆、男子之祥、維虺維蛇、女子之祥」

【熅】㊀ウン・ヲン　㊁ヲツ　月　文

㊀うづみび。○あたたか（煖）○鬱せる煙、天地の蒸す氣。○一一は陰陽和して相扶ける貌。㊁煙の鬱する貌。○熱き貌。

【熅火】ヲンクヮ　炎なのなき炭火。漢書、蘇武傳「置二一一一一」

【熅】ウン　文　色の黄なる貌。

【燒】エフ　緝　集

○あきらか（明）○火光の盛んなる貌「燁一一」

【熙】

黒（火部九畫）の俗字。

【熏】クン　文　薫に通ず、煙は俗字

○ふすぶ、くすべる火煙が上り出る。○やく（灼）○ひぐれ。‖曛。○けぶる、ふすぼる。○感動する。○作す、作る。○一一は和ぎ悦ぶ貌。又、坐して安からざる貌。○ゑふ。‖醺。○香をたきてにほひをしみこませる、薫と通ず。韓愈文「三浴而三一一之」○煙をあてて黒くすべる。

【熏染】クンセン　火にてくすべたるみかん。橘錄「橘微損則去レ皮以二肉鮓一或二蜜餌一、用レ火熏レ之、曰二一一一、謂二之糖蜜中一、味亦佳」

【熏香】クンカウ　くすべる。香氣の甚だしきに喩ふ。蘇軾詩「今年苦寒、炙レ手熏一一」

【熏灼】クンシヤク　やく、勢の盛んなるに喩ふ。漢書、班氏敍傳「谷永賛言、建始河平之際、許班之貴、傾二動前朝一、一一四方一‖薫灼。

【熏風】クンフウ　東南の風、一名清明風（名義）

【熏蒸】クンジヤウ　悶燥煩。

【熒】㊀ケイ　㊁エイ　青　迥

㊀ともしび（燭）ちいさき光。○ひかる（光）ひかりかがやく（灼）あきらか（明）○目がくらむ（眩）目がちらつく。莊、人間世「目將一一之」○一一惑は星の名。○螢ホタルと通ず「一火」㊁うたがひまどふ（疑惑）

【熒惑】エイワク　ひかりかがやく。郭璞賦「紫柴一一以裹被」

【熒煌】ケイクワウ　かがやく。薛逢詩「燈火一一酔客衆」

【熒熒】ケイケイ　○光りてつやある貌。史記「美人一一今、類若二望之一榮」○ひかりかがやく貌。阿房宮賦「明星一一、開二粧鏡一也」鏡の光の形容。

【熒惑】ケイワク ちいさきともしび。漢書、敘傳「守二窈奥之一一」〔宋玉、神女賦〕而觀中白日上也」

【熒惑】ケイワク ○兵亂の光を示すといふ星の名、即ち火星。史、天官書「一一星名曰二司命一」○田則有レ兵、入則兵散」○火の神の名、赤帝の神にて南方に位す〔春秋緯〕○まよはす。人心を炫惑する。六韜、妄張二詐誘一以一一其將一」

【熇】

㊀コク 沃 ㊁カク 藥 ㊂ケウ 嘯 ㊃カウ・コウ 皓

㊀火、あつし（火熱）「一一」「一赫」㊁火盛んなり（熾）㊂ほのほ（炎氣）㊃かわく。乾かす（燥）

【熇暑】カクショ あつし（熱暑）左思賦「宅土一一、封疆瘡癘」

【熇焚】コウフン やく。柳宗元詩「寧知世情異、熇發坐一一」

【熄】

ショク 職

○きゆ（火滅）莊、逍遙遊「爝火不レ一」○けす。やむ（止）なくなる。ほろぶ（亡）「珍一」孟、離婁「王者之迹一、而詩亡」○うづみび。

同訓異字 止・滅・消・滅の別は消（水部七畫）の條を見よ。

【熇火山】カククワザン 一時噴火の止みてゐる火山。活火山と死火山との間。＝休火山。

【熄滅】ソクメツ きえてなくなる、やむ。韓愈文「紀レ之之義、風災一一」

【煽】

㊀セン ㊁セン 先 銑

㊀あふる、火をおこす。○おこる、さかんなり（熾）火が盛んにおこる。○轉じて勢力が盛んなり。○人をおだてる、まどはす（惑）○國ワッ酒を盛んに飲む。㊁アツ馬具の一、馬の兩脇に垂れる革製のおほひ。＝障泥。

【煽誘】センイウ おだていざなふ。

【煽熾】センシ 勢さかんなり。潘岳文「華勢沸騰、積落一一」

【煽動】センドウ 人をおだてて事を起さしむ。＝鼓煽。

【煽風器】センプウキ 電力にて風を起す器具。＝煽風機。

【煽惑】センワク おだてまどはす。

【熔】 鎔（金部十畫）の俗字。

【爂】

リン 震 眞

おにび（鬼火）きつねび（陰火）＝燐。

【熤】

國字

○砲一一（コウ）はおほづつ。＝大砲。○砲身。

十一畫

【熨】

㊀ヰ ㊁ウツ 未 物

㊀あたたむ。又、おさへる、醫療の法にて上より下を按へる。○膏藥をおさへ貼る。㊁のす、火にて布帛のしわをのばす。又、それに用ふるひのし（火斗）○國のし、のしあはび、進物の包紙の上にはるもの。又、それに象りし折紙。

【熨斗】ウツ ひのし。隋書「李穆在二幷州一、遣二子淳入レ京、李二一於高祖一曰、願戴二威柄一以慰二安天下一也」＝運斗・火斗・火熨。

【熠】

イフ シフ 緝 緝

○あざやか、あきらか、かがやく、盛んなる光。○かがやかす。○一燿（イフエフ）は鮮明なる貌。詩、豳風「一燿其羽」又、螢の異名。詩、豳風「一一宵行」

【熠燿】イフエフ ひかりかがやく。黃滔詩「一一燈前夜一一」＝燿熠・燿燿・耀熠。

【熠耀】イフエフ 光のあざやかなる貌。陸游詩「草根綴二微露一、螢火飛一一」

【熹】

エイ ケイ 霽 齊

日にさらす、かわかす、ほす（曝乾）漢書、賈誼傳「日中必一、操刀必割」

【熬】

ガウ ゴウ 豪

○いる、いりつける（炒、乾煎）「一豆」○淳一は八珍の一、天井（ダシ）の類〔禮、內則〕圖○強忍の義「一刑」「一審」○愁ふる聲。敖に通ず。

【熬海鼠】ガウカイソ いりこ。なまこのはらわたを去り、ゆでて日にほしたるもの。＝海參。

【熬穀】ガウコク 火にていりこがしたる穀實。周禮「共二飯米一一」

【熬煎】ガウセン いる。路史「管仲斷割、而離肭一一之」煎餌を以て喰と爲し、之をして成熟せしむる義。轉じて憂慮すべき事、忍耐し難き義などにも用ふ。＝煎熬。

【熬波】ガウハ 海水を煮て鹽を製する。鹽鹽、海賦「一一出レ素」

【熲】

ケイ 迥

○ひかり（微光）○かがやく（輝）

【熟】シュク　ジュク　屋　本、孰に作る

○にる（煮）よくにる。論、鄉黨「君賜腥、必ー而薦之」にゆ、よくにえる。○みのる、うむ、成る、十分に出來る「成ー」「豐ー」○つらつら、くはしく、つまびらか。○あきらか、くはし（精審）○ならふ、なれる、素習する「練ー」「習ー」○ただる。ただらす（惰）○たけなは（甜）「ー睡」

【熟語】ジュクゴ　よくそらんずる。杜荀鶴詩「酒逸琴書伴二閑身一、ニ十時事繁二於貧一」＝語熟。

【熟穀】ジュクカク　みのりたる穀物。淮南子「不レ待レ雨而求ニー一」

【熟考】ジュクコウ　つらつらかんがへる。＝熟思。

【熟客】ジュクキャク　なじみのお客。生客の對。

【熟識】ジュクシキ　十分に評識する。

【熟果】ジュクカ　よく熟したるくだもの。

【熟臥】ジュクガ　よく寢ぬ、十分にねむる。神仙傳「先ー二ー子雪中一顏色赫然、氣息休休」＝熟睡・酣睡。

【熟練】ジュクレン　よく練りたるかとり絹。陸游詩「秋清初換ー一衣」

【熟語】ジュクゴ　二字以上熟して一の意義をあらはすもの。＝成語。

【熟議】ジュクギ　みのりよき年「漢貴、五行志」＝豐年・稔歲・豐歲・穰歲。

【熟察】ジュクサツ　つらつらかんがへる。史、鄒陽傳「大王ー二ー之一」＝熟思。

【熟字】ジュクジ　熟語をあらはす文字。

【熟思】ジュクシ　つらつらおもふ。梁元帝簫、凡百衆庶、爾其ー之、事之大小、先當ニー一」＝熟慮・精思。

【熟柿】ジュクシ　熟したるかき。

【熟紙】ジュクシ　樋にてうちて礬沙をひきたる紙。生紙の對。唐書、百官志「ー一匠八人」＝礬紙。

【熟視】ジュクシ　十分に注目して見る。戰國齊策「徐公來ー一、自以爲レ不レ如」

【熟悉】ジュクシツ　十分に知りつくす。晉康文「未レ一ー於足下一」＝詳知・審知・深知。

【熟食】ジュクショク　よく煮たる食物。白虎通「盛人鬱レ木取レ火、教ニ民ー一ー」杜甫詩「幾年逢ニー一ー」＝火食。

【熟睡】ジュクスイ　十分によくねむる。蘇軾詩「東坡但ー一」＝熟眠・熟寢。

【熟酔】ジュクスイ　十分にゑふ。杜甫詩「ー一爲ニ身謀一」＝爛酔。

【熟軟】ジュクナン　つぶさに見つもる。漢書「令ニ臣得レ執ニ數之一」注「執・熟同」

【熟省】ジュクセイ　つらつらかへりみる。漢書、谷永傳「唯陛下留レ神反覆、一ニ一臣言一」

【熟結】ジュクケツ　くはしく十分に知る、熟習して精通する。杜甫詩「ー一文選理」＝精熟。

【熟息】ジュクソク　十分にやすむ。五代史、李存節傳「戒ニ士卒一ー一」

【熟揮】ジュクキ　くはしくえらぶ。鹽鐵論「不レ可レ不ニー一也」＝精揮。

【熟達】ジュクタツ　なれて上手である、熟練して通達する。

【熟談】ジュクダン　よく相談して事をきめる。＝熟議。

【熟知】ジュクチ　十分に知る。

【熟鐵】ジュクテツ　十分にきたへたるくろがね。生鐵の對。

【熟圖】ジュクト　十分にはかり考へる、圖は謀。＝熟慮・熟計。

【熟銅】ドウジュク　十分にきたへたるあかがね。

【熟讀】ジュクドク　十分によくよむ。朱熹文「書貴ニー一、讀多自然曉」

【熟煮】ジュクシャ　よくにる。禮記「ー一而祀、非ニ逸禮一也」

【熟蕃】ジュクバン　野蠻人中にてやや王化に服從するもの。生蕃の對。＝熟羌・熟番。

【熟否】ジュクヒ　○煮えると煮えざると。○穀物・果實などのみのると、みのらざると。○事になれると、なれざると。

【熟寐】ジュクビ　よくねいる。列子「夜則昏酣而ー一」＝熟眠・熟睡。

【熟眠】ジュクミン　よくねむる。柳宗元詩「曉レ凡ー一開ニ北牖一」＝熟睡・酣寢。

【熟覽】ジュクラン　十分によく見る。蔡邕文「新詩雖得ニー一ー」

【熟爛】ジュクラン　○肉がにえただれる。○風俗などが甚だしく亂れるにいふ。漢書、薛仲舒傳「ー一如レ此之甚也」＝爛熟。

【熟慮】ジュクリョ　つらつら考へる。史、穰侯傳「願君ー一」＝熟思。

【熟練】ジュクレン　○十分になれる。＝練熟・練達。○十分にねりたるきぬ。陸游詩「日斜渦泳罷、ー一試ニ單衣一」

【熟路】ジュクロ　よくなれたるみち。生路の對。韓愈、送ニ石處士序一「若下騏馬駕ニ輕車一就ニー一而王良造父爲中之先後上也」

【爇】㊀セン・ゼン　㊁カン　㊀琰　㊁翰

㊀やく、もやす「ー焚」かはかす（乾）○つつしむ（敬）詩、小雅「我孔ー矣」㊁かわかす。易、說卦「燥萬物者、莫ニー於火一」＝焫・暵。

【熱】ネツ　屑

○あつさ、あつし「炎ー」「苦ー」冷の對。○物を溫め又は燒く氣が強い。○悶え煩ふ。○むす、やく。○雜沓する「ー鬧」○體溫の度の高まる病「發ー」「解ー」「煩ー」○心が專一になる「ー中」「ー心」「ー誠」○のぼせる、精神が亢奮する。心がいら

だつ（躁急）

【熱飲】ネツイン　熱燗の酒を飲む。白居易詩「―一三杯即是家」

【熱酒】ネツシュ　熱き火のほのほ。蔡邕詩「閏夏天氣―一烘」

【執レ熱不レ濯】テツトツハズ　熱をとるものは、水を以て手を濯ふべし、之を濯はざれば熱を救ふ能はず。微勞を厭ひて大事を遂げざるに喩ふ。孟、離婁「今也欲レ無レ敵二於天下一而不レ以レ仁、是猶二執レ熱而不二以濯一也」

【熱河】ネツカ　直隸省承德府の別名、灤河の上流、塞外の地に在り。往年英佛同盟軍の北京に迫まりし時、清帝避難の地たり。

【熱客】ネツカク　○炎暑を冒して來り訪ふ賓客。杜甥、喜二人家一主人開二客來一詩「今世榛蕪子、閑レ熱到二人家一、主人開二客來一驚覺亦此何」○轉じて權勢ある人を逢迎する俗人にいふ。

【熱郷】ネツキヤウ　氣候のあつき土地。詩經、疏「―一率晩寒、南方是也」

【熱官】ネツクワン　權勢ある官。冷官の對。北齊書、王晞傳「非レ不レ愛―一、但思レ之爛熱酒」

【熱血】ネツケツ　○あつき生血。宋无詩「軍中七日不二火食一、手殺二降人一吞二―一」○誠心の譬とす。吳偉業詞「耿耿胸中―一」‖熱誠。

【熱心】ネツシン　ふかく心をかたむける。‖熱情・熱腸。

【熱情】ネツジヤウ　○甚だあつきなさけ。○物事に一心になる心がけ。‖熱心。

【熱熱】ネツネツ　よくにる。傳燈錄「生疎處常令二―一」

【熱暑】ネツシヨ　あつし。枚乘、七發「煇爍―一」‖暑熱・炎暑。

【熱性】ネツセイ　物に激しやすき性質。

【熱誠】ネツセイ　ふかきまごころ。‖丹誠・赤誠・熱血。

【熱帶】ネツタイ　地球の南北回歸線間の炎熱地帶。溫帶・寒帶の對。

【熱湯】ネツタウ　あつきゆ。禮、月令、疏「如二―一灌レ之也」

【熱閙】ネツダウ　あつぐるしくかまびすし。冷靜の反對。白居易、避暑詩「―一漸知隨レ念盡」

【熱地】ネツチ　要地に同じ、權勢ある地位。白居易詩「寂寞曹司非二―一」

【熱腸】ネツチヤウ　熱心に同じ、腸ははらわた。情の冷淡ならざるをいふ。杜甫詩「訪レ酒卜二鄰家一、敲レ門得二―一」

【熱中】ネツチウ　心が熱する。孟、萬章「仕則莫レ君、不レ得二於君一、則―一」‖熱心。

【熱度】ネツド　熱の度合。

【熱悩】ネツナウ　甚だしきなやみ。淮南子「令二諸衆生一―一消滅」

【熱罵】ネツバ　はげしくののしる。

【熱望】ネツバウ　熱心にのぞむ。‖切望。

【熱飯】ネツパン　たきたてのあつきめし。楊萬里、竹枝歌「要レ把二綠荷一包二―一、新頭不レ怕上高灘」

【熱病】ネツビヤウ　ねつの烈しきやまひ。腸窒扶斯・猩紅熱・瘧疾・傷寒・痘瘡・麻疹・流行性感冒・腦脊髓膜炎・丹毒・破傷風・狂犬病・黄疸・脚氣・肺結核・肺炎・腸チフス・赤痢・コレラ・ペスト・黄熱病・マラリヤ・睡眠病・癩病・梅毒・淋病・下疳・ヒステリー・ノイローゼ・神經衰弱・ヒポコンデリー・ヒステリー・ノイローゼ・神經衰弱・ヒポコンデリー

【熱鬧】ネツナウ　にぎやか。

【熱烈】ネツレツ　○精神がはげしく充實する。○權勢の盛んなるにいふ。抱朴子「生二乎世貴之門一、居乎―一之勢、車多不レ與レ騎期、而騎自來矣」

【熛】ヘウ　蕭

○ひのこ、火飛ぶ、ひかり（光）○とし（疾）○あかきいろ（赤色）

【熛起】ヘウキ　火の飛ぶ如く疾くおこる。漢書「勝廣―一、梁楚膠烈」

【熛怒】ヘウド　火の盛んなる貌。詩、小雅、正月、箋「炎燄―一」

【熛風】ヘウフウ　はげしきかぜ。史、曹參「輕利剽速、卒如二―一」‖飄風。

【熛疾】ヘウシツ　とび火の如く疾く至る。史、淮陰侯傳「―一風起」

【熛至】ヘウシ　とび火の如く疾く至る。史、宋武帝紀「衆有二―一、坐以常衰二冷物一」

【燋】セウ　蕭

○ひのこ、火飛ぶ、ひかり（光）○とし（疾）○あかきいろ（赤色）

【燋爛】セウラン　火の盛んなる貌。詩、小雅、正月、箋「炎燄―一」

【燋風】セウフウ　はげしきかぜ。史、曹參「輕利剽速、卒如二―一」‖飄風。

十二畫

【燊】シン　眞

燐（火部七畫）に同じ。

【燁】エフ　葉　緝

○かがやく。かがやかす「焜―」「煒―」○光盛んなり。

【燁燁】エフエフ　かがやく貌。耶律楚材詩「綿綿延二國脈一、―一受二天祚一」

【燁然】エフゼン　てりかがやく貌。劉基、賀二相者言一「―一玉質」

【燕】㊀エン　㊁エン　先　霰

㊀つばめ、つばくらめ、春來り秋去る小さきわたり鳥、尾長く分岐す（玄鳥）○さかもり。さかもりする。詩、小雅「式―一敖」‖宴・讌・醼。○やすんず（安）やすむ、くつろぐ（安息）「―一居」○なれる（褻）「―一朋」㊁國の名。周の召公奭の封土、戰國七雄の一、今の直隸泰天及び朝鮮の北部の地、秦に滅ぼさる。○東晉の時の國號、前後・西・南・北の五―あり。○直隸省地方の異稱「―一京」は北京。

【燕安】エンアン　心がくつろぎてたのしむ、心が安適する。文同詩「圖書好―一」

【燕飲】エンイン　さかもりする。詩、大雅、鳧鷖「酒既清、爾殽既嘗、公尸―一、福緣來成」

【燕婉】エンエン　やすらかにしてしとやか、燕は安、婉は順。又、其の人物。詩、邶風「―一之求、遽隔不レ歸」

【燕燕】エンエン　○安息の貌。詩、小雅「或―一居息、或盡瘁事レ國」‖宴宴。○つばめを重ねていふ。詩、邶風「―一于飛」

【燕賀】エン 燕は人家に巣くふ鳥、故に人が家屋を作れば、相賀して喜ぶ。因りて人の家の落成せしを賀するをいふ。自ら燕雀に比して謙する辭。淮南、說林「湯沐具而蠭蠆相弔、大廈成而燕雀相賀、憂樂別也」

【燕好】エンカウ ○さかもりして、ひきでものを贈る。左傳「介葛盧來、禮ノ之加ニー一」注「燕、燕禮、好、好貨」○親國房の讌樂クニフサノエンガクをいふ。

【燕樂】エンガク ○さかもりの音樂。周禮、鍾師「凡祭祀饗食奏ニー一」○エンラクさかもりしてたのしむ。詩經「我有ニ旨酒ー以ー一遨ニ遊之心ー」

【燕頷虎頭】エンガンコトウ 燕の如きあごと、虎の如き頭にて貴き人相、後漢の班超は此の人相にあたる。後漢書、班超傳「ー一、飛而食ノ肉、萬里侯之相也」

【燕喜】エンキ きかもりしてたのしみよろこぶ。詩、魯頌「魯侯ー一、令妻壽母」

【燕居】エンキョ 閑暇無事にして休息する時。論、述而「子之ー一、申申如也」 ⇔宴居。

【燕許大手筆】エンキョダイシュヒツ 大文章をいふ、唐の燕國公張說・許國公張說の二人共に文章を以て著れたるが故。唐書、蘇廋傳「廋自ニ景龍一後、與ニ張說ニ以ニ文章ニ顯、稱ニ望略等、故時號ニ——ー」

【燕窠】エンクワ つばめのす。徐積詩「風暖ー一牢、雪晴鳥雀健」⇔燕巢。

【燕窩】エンクワ 海岸に產する金絲燕の巢、支那人の珍重する食品。

【燕遊】エンユウ 燕居の時の調謔。詩說「時以ニ閒暇ニ周旋ー一」

【燕京】エンケイ 北京の別稱、春秋時代の燕國の領土に屬するが故。

【燕綏】エンスイ くつろぎたのしむ。

【燕語】エンゴ ○さかもりしてうちとけてかたる。漢書、孔光傳「光爲ニ光祿勳ー、沐日歸休、兄弟妻子ー一、終不ノ及ニ朝省政事ー一」論語。○つばめの聲。王涯詩「綠暗綠樹深、ー一雛梁晩」

【燕子】エンシ つばめ。⇔乞鳥・燕兒。

【燕子花】エンシクワ ○蜀生の草花、花は紫にして燕に似たり。○圖かきつばた。

【燕子樓】エンシロウ 江蘇銅山縣城の西北隅に在り、唐の張建封の築きし所。白氏長慶集、燕子樓詩ニ敘「建封納ニ歌妓關盼盼于ー一、公薨、盼盼念ニ舊愛ー不ノ嫁、居ニ是樓ー十餘年、嘗題ノ詩見ノ志、白樂天感ニ和之ー」

【燕支】エンシ ベにを取る草の名。又、ベにを取る山の名、紅草を產するが故。古今注「西方土人以染ノ紅名ニー一、中國人謂ニ之紅藍ー、以染ノ粉、爲ニ婦人面色ー」⇔燕脂・臙脂・胭支。

【燕私】エンシ 一家がむつまじくかたらふ。詩經「諧父兄弟、備言ー一」

【燕脂】エンシ 燕支に同じ。古今注「ー一草出ニ西方ー、葉似ノ薊、花似ノ蒲、土人以染ノ粉、爲ニ婦人面色ー、故名ニー一ー」 ⇔薊はあざみ。

【燕室】エンシツ 休息する部屋、燕居の室。劉禹錫、平蔡刻下銘「ー一緣ノ雲、精廬切ノ漢」

【燕雀安知ニ鴻鵠之志ー】エンジャクイヅクンゾコウコクノコゝロザシヲシラン 小人は大人物の意を推知する能はざるに喩ふ。史、陳涉世家「涉少時與ニ人傭耕、輟ノ耕之ニ壟上ー、悵恨久之曰、苟富貴無ニ相忘ー、傭者笑而應曰、若爲ニ傭耕ー何富貴也、陳涉太息曰、——哉」

【燕雀不ノ生ノ鳳】エンジャクフセイノホウ 瓜の蔓に茄子はならずといふ俚諺に同じ。參同契「——、狐兎不ノ乳ノ馬」

【燕出】エンシュツ 天子のしのびあるき（徵行）漢書、王嘉傳「諫臣多言ニー一之害ー」

【燕處】エンショ 燕居に同じ。禮、經解「ー一則聽ニ雅頌之音ー」

【燕石】エンセキ 燕山より出づる玉に似て玉に非ざる石、似て非なるものに喩ふ。荀子「宋愚人得ニー一ー、藏之以爲ノ寶」

【燕息】エンソク くつろぎやすむ。⇔息燕・燕休・休息。

【燕情】エンジョウ なまけなれる。酸遊詩「ー一恐ノ瀆ノ君」⇔燕婿。

【燕臺召】エンダイセウ 燕の昭王の臺を築きて賢者を招きたる故事に本づき、君主に優待せらるるをいふ。李白詩「謬泰ニ——、而陪ニ郭隗羣ニ賢字の自ノ隗始の條を見よ。

【燕丹】エンタン 燕の太子、名は丹、初め秦に質たり、其の無禮を憤りて逃げ歸り、衞人荊軻をして始皇を刺さしめんとして成らず、始皇怒りて燕を伐つ、燕王、丹を斬りて以て謝す。騶衍王、易水送別詩「此地別ニー一、壯士髮衝ノ冠、昔時人已沒、今日水猶寒」

【燕朝】エンテウ 天子の休息せられる御殿。

【燕趙悲歌士】エンチョウヒカノシ 戰國の時、燕趙の國に世を憂ひて悽愴悲歌せし士多し。史記、刺客傳「——、相逢劇孟家」

【燕麥】エンバク からすむぎ、葉平滑、葉細長、穎果は細長く飼料とす。爾雅「薃、雀麥」注「卽ー一也」⇔雀麥。

【燕巢于幕】エンソウヲマクニ 非常に危險なる喩（左、襄二九）下の如し。燕巢ニ于幕上ー一を見よ。

【燕尾服】エンビフク 洋服の一種、フロックコートの前を切りたる如き仕立にて、後方は長く垂れて二つにさけ、燕の尾に似たり、禮服として用ふ。

【燕朋】エンホウ なれなれしく遠慮なき朋友。禮、樂記「ー一逆ニ其師ー」

【燕毛】エンモウ 宗廟の祭の後の宴會に毛髮の色、卽ち長幼によりて席次を定めるの中庸「ー一所ニ以序ニ齒也」 ⇔齒は齡。

【燕翼】エンヨク 祖先が子孫を助け安んずるはかりごと。詩、大雅「詒ニ厥孫

謀、以ー二ー子ー」
【燕爇】ネツ　燕石に同じ。文心雕龍「宋客以ニー一ー爲ニ寶珠ー」
【如ニ燕巢ニ于幕上ー】ジョウエンノバクジョウニ　居所の甚だ安からざるに喩ふ。左、襄二九「夫子之在ニ此也、猶ニ燕之巢ニ于幕上ニ」

【燄】㊀エン　㊁エン　琰

㊀ほのほの少しくあがる貌。㊁ほのほ「光ー」○火が始めてもえて未だ盛んならざる義。左、莊十四「人之所ニ忘、其氣ー以取ニ之ー」
【燄燄】エンエン　火の始めてもえ上がる貌。
【燄燄不ニ滅炎炎者ニ何ー】エンエンフメツエンエンタルモノハナニゾヤ　燄燄と火の僅に燃え始めたるときに消さざれば、炎炎と火勢が盛になりては如何ともすべからざるに至る。以て禍惡の事は速に處置すべきに喩ふ。家語、觀周「ー、涓涓不ニ壅、終爲ニ江河ー」

【熹】キ　支

○あぶる(炙)○さかんなり(盛)○ひろし(博)○あきらか(明)○微かなる日光。○おこる(熾)○人名、宋の朱ー、字は元晦。

【熹微】ビ　太陽の光がかすか、光が未だ盛んならざる貌。陶潛、歸去來辭「恨ニ晨光之ー一ー」＝微陽。

【橫】クワウ　陽

○あきらか(明)○かがやく「炫ー」＝煌。

【熾】シ　寘

○さかんなり(盛)火勢つよし、氣勢強し。○もやす、火勢を盛んにする、火をおこす。○かしぐ(炊)○きびし、はげし、猛烈。詩、小雅「獄犴孔ー」

同訓異字　熾・盛・隆・壯・昌の別は盛(皿部七畫)の條を見よ。

【熾烈】シレツ　勢つよくはしいままなり。唐書、裴度傳「密輔非ニ其人ー、使ニ兒賊ー一」
【熾灼】シシャク　○火がさかんにもゆ。○轉じて權勢さかんなり。唐書、許敬宗傳「威福ー一、當時莫ニ與比ー」
【熾盛】シセイ　さかんなり。漢書、匈奴傳「人民ー一、牛馬布ニ野ー」
【熾然】シネン　はげしくあつし。＝酷熱。
【熾熾】シシ　さかんなるいきどほり。雲、南征賦「曜靈羣駭、以增ニー一ー」
【熾茂】シモ　さかんにしげる。唐書、劉仁軌傳「今茲滋潤澤霑足、百穀ー一ー」＝盛茂。
【熾烈】シレツ　さかんにはげし。列子「陽光ー一、聖冰立消」

【燠】ジン　セン　軫　銑

○あたたむ(溫)＝暖・煖。○ゆびく、冷えたる食物を湯につけてあたためる。

【燋】㊀セウ　㊁サク　篠　覺　藥　陌

㊀こげる。こがす。＝焦。○たいまつ、かがりび(炬)㊁未だ火をつけざる燭。

【燋熬】ショウゴウ　日にやけてかれる、槁は枯。唐書、孫思邈傳「乏渴則ー一、發二平面一而動二平形一」宋史、五行志「天聖中、天下苦ニ旱、百姓疫死、田穀ー一」
【燋心】ショウシン　心をこがす、憂の甚だしき義。列子「乃苦ニ其身一、燋ニ其心ー」往漢書、上下ー一ー」＝焦心。
【燋壤】ショウジョウ　ひでりにて水氣なくやけたる地。魏志「季師淫刑、衆海ー一ー」
【燋鎖】ショウサ　○やきとらかす。通燋文錄序「金石ー一、斯文燦然」○甚だ熱き義。韓琦詩「陽烏自ー一ー」
【燋爛】ショウラン　やけただる。論衡「日者火也、烏入ニ火中ー一ー」
【燋滅】ショウメツ　火にやけ、水におぼれる。抱朴子「生民ー二于湯火ー」

【燒】㊀セウ　㊁セウ　蕭　嘯

㊀やく(燔・蒸)もゆ。もやす、たく。㊁のび(野火)白居易詩「夕照紅ニ于ー一」○やく(放火)圖○たちはたらく「世話をー一く」○りんきする、妬む。

【燒爇】ショウネツ　やきはらふ、爇は平らげる。＝焦爇。
【燒香】セウカウ　香をたく。賢書、佛圖澄傳「謂ニ帝ー一禮拜、以通ニ典禮ー一」＝焚香。
【燒蛤】セウカウ　はまぐりをやく。左傳、莊「ー一爲ニ炭、以煇ニ竈ー」
【燒棄】セウキ　やきすてる。宋郡筆記「每ニ見ニ書所ニ作文一、憎ニ之欲ニー一ー」＝焚燒卻。
【燒燬】セウキ　やく。やける。＝燒灼。
【燒卻】セウキャク　やきすてる。＝燒棄。
【燒痕】セウコン　草野などをやきたるあと。周弼詩「春風入ニー一ー」
【燒草】セウサウ　くさを焚く。史、河渠書「是時東郡ー一ー、以ニ故薪柴少ー」
【燒葬】セウサウ　火葬に同じ。北史、高允傳「及ニ葬送之日、歌舞鼓舞、殺牲ー一、劉切禁絶ー」
【燒指】セウシ　自ら指を燒きて信仰の誠を示す、佛敎苦行の一。韓愈文「焚ニ頂ー一、百十餘ニ年ー」
【燒失】セウシツ　やけうせる。＝燒滅・燒燬。
【燒遺】セウヰ　のこりなくやける。燒きつ

くす。

【燒失】セウシツ やきあぶる。詩經、疏「一一數レ之」

【燒灼】セウシヤク やく。梁武帝、涅槃經疏序「救ニ一一于火宅一、振ニ洗溺于滄海一」＝焚灼、焦灼。

【燒鍊】セウレン やくときたえる。白居易詩「一一初開琥珀光」

【燒石膏】セウセキカウ 石膏を熱して水分を去りしもの、其の粉末を水にてねりかためて塑像・模型などの製作に用ふ。＝無水石膏。

【燒磚窯】セウセンえう 瓦をやくかま。

【燒炭】セウタン すみをやく。魏書、刑罰志「緣ニ內民、富者一ニ於山一、貧者役ニ於園湖一」

【燒酎】セウチウ アルコール分の強き一種の酒。

【燒滅】セウメツ やけると、おぼれると。吳志、周瑜傳「燔ニ炎張レ天、人馬一一」

【燒點】セウテン 光熱などの一點にあつまる所。轉じてすべて事物の主要なる中心點。＝焦點。

【燒熱】セウネツ やく。あつし。春秋繁露「陰日損而隨レ陽、陽日益而鴻、故爲ニ一一」＝焦熱。

【燒爛】セウラン やく。陶潛詩「正夏長風急、林室頓ニ一一」

【燒眉之急】セウビのキフ すて置き難き火急の事。五燈會元「僧問ニ浮山佛慧如何是急切一句一、慧曰、火燒ニ眉毛一」＝燃眉之急。

【燒焚】セウフン やく。李白詩「玉石俱ニ一一」

【燒餅】セウベイ やきもち。湘素雜記「凡以レ餌爲ニ食具一者、皆謂ニ之餅一、故火燒而食者、呼爲ニ一一」

【燒煉】セウレン 道家にて丹藥をねる術。茅亭客話「綿州震山院僧曉檀者、椰人也、頗觀ニ之暇一、頗好ニ一一」

【燒繪】セウクワイ 圖ペンに似たる小さきやきごてにて木の面を焦がし畫く繪。

【燒刃】セウジン 圖にらぎきたへたる刃物

【燒筆】セウヒツ 圖下絵をかくに用ふる木炭筆。

【煙】

㊀ セン
㊁ ジン
㊁ 眞

㊀もゆ。あたたか。あたたむ（温・煖）禮、內則「一ニ湯請レ浴」○ただれる。ただらす（爛）㊁にる（火熟物）

【煙罹】センリ さかんにかがやく。漢書、敘傳「一一威靈」

【煙熱】センネツ あつし。呂覽、重己「衣不ニ一一一」

【燋】

セン
㊇

○きゆ、火がきえる（火滅）○やむ、氣勢がなくなる。左、昭二三「楚師一」

【燃】

ゼン
ネン
先

然（火部八畫）の俗字

もゆ。もやす。

【燃犀】ネンサイ さいの角をもやす、物を明かに見ぬく喩、東晉の溫嶠が犀角をもやして牛渚磯といふ深き淵の底までを實見せし故事（晉書、溫嶠傳）に本づく。蘇軾詩「我欲ニ一レ看ニ龍鱗ニ抱レ寶眠一」

【燃薪】ネンシン たきぎをもやす。唐書、爭論傳「夜一レ讀レ書」

【燃燈】ネントウ ともしびをもやす。元稹詩「特敕街中許ニ一一」

【燃燒】ネンセウ もえる、やける。

【燃眉之急】ネンビのキフ 事の急にしてうちすて置くべからざる喩。故事成語考「求物濟レ用謂ニ一一一ニ」＝燒眉之急。

【燃料】ネンレウ 火をもやす材料、薪炭・石炭など。

【燈】

トウ
蒸

又、燈に作る。灯は俗字

○ともしび、あかり「殘一」「明一」「紅一」「寒一」「點一」「孤一」「青一」○佛家にて佛法の義に喩ふ、無明の闇を照す義「法一」「傳一」

【燈影】トウエイ ともしびの光。又、其のかげ。杜甫詩「一一照無レ寐、心淸聞ニ妙香一」

【燈下】トウカ ともしびのもと。

【燈架】トウカ ともしびの臺。＝燈檠、燈臺。

【燈蛾】トウガ ひとりむし、燈火にたかる小蟲。西陽雜俎「悉成ニ一一一飛」

【燈火】トウクワ ともしび。劉長卿詩「柴村一一晩」

【燈火稍可レ親】トウクワシヤウカシン 秋夜精神爽かにして、讀書に適するをいふ。韓愈詩「時秋積雨霽、新涼入ニ郊墟一、燈火稍可レ親、簡編可ニ卷舒一」

【燈花】トウクワ 燈火の燈心のさきに生ずるかたまりのもえかす。四京雜記「隃麋云、燈火花得ニ錢財一」＝丁子頭

【燈花之喜】トウクワのよろこび 燈火に花を生ずれば吉事ある兆とす。本草「燈花發レ明、時珍曰、昔隃麋貢、燈花爆而百事喜」演雅、酈文恭「有下占ニ燈花一獨占則燈花圖重物也」

【燈紫】トウシ ともしびをかかぐる臺。紫は足ありて几に似たるもの。酉陽雜俎「寶中尤異者、有二青玉一一一」＝燈架・燈臺。

【燈盞】トウサン ともしびの油ざら。＝油皿・燈皿。

【燈心】トウシン 燈明皿の油に浸して火を點ずるもの、燈心草のずゐにて造る。＝燈炷。

【燈心草】トウシンサウ とうしんぐさ、莖圓くて細の一名、高さ三四尺、其のしんにて燈心を造る。

【燈炷】トウシュ とうしん（燈心）吳錄「虎頭草不レ中レ爲レ席、但以二其穰一爲二一一」

【燈燭】トウシヨク ともしび。漢書、外戚傳「夜設二一一一、設二帳帷一、陳二酒肉一」

【燈燄】トウエン ともしびの光、穗は其の形の形容。＝燈火。

【燈館】トウクワン ともしびき。李頎詩「醉眠春草長、吟坐夜一一」＝燈滅・燈消。

【燈夕】トウセキ 上元の夕に燈を張り夜を照すをいふ。又其の夕。宋史、呂蒙正傳「昔一一設レ宴」＝元宵節。

【燈船】トウセン 航路のめじるしにあかりをつけておくふね。＝燈明船。

【燈臺】トウダイ ○ともしびの臺。瑯琊代酔編「猥に鏡及一一」＝燈檠。○海岸又は島嶼などに臺を築き、燈火を點じて航海のめあてとするもの。＝燈明臺・燈塔。

【燈明】トウミヤウ ○火を點ずる。又其のあかり。後漢書、黨錮傳「旗二約一一一」＝○圓神佛に供へるあかり。

【燈籠】トウロウ 竹・石・金などにて作る、其の中に火を點ずる具。通鑑、宋孝武紀「挂二葛一一・麻綱幡一」

【燈籠草】トウロウサウ ほほづきの一名、實の燈籠に似たるによりて名づく。酔傳花鏡「王母珠、一名酸漿、俗名二一一」

【燉】トン 元

○大いなり。○火の色。○火の盛んなる貌。○一煌トンクワンは地名、甘肅省安西府に在り、一一に敦に作る。

【燔】ハン ハン 元

○やく（燒）「燒一」＝焚。あぶる（炙）○ひもろぎ（祭肉）膾に通す。孟、告子「一肉不レ至」

【燔艾】ハンガイ もぐさを焚く。灸をする。陸游詩「一一取二一快一」

【燔劫】ハンカフ 人の家をやきおびやかす。

【燔柴】ハンサイ しばをもやして天を祭る。禮記「一一於泰壇一祭二天也」

【燔舟】ハンシウ ふねをやきはらふ。晉書、劉毅傳「一一一而進」＝焚舟。

【燔炙】ハンシヤ やきあぶる。詩、小雅「醯醢以薦、或燔或炙」

【燔灼】ハンシヤク やく。論衡「人爲レ官所レ殺、胸二其身體一若二一一之狀一」＝焚灼。

【燔鑄】ハンチウ のろしをあげる。漢書、貢禹傳「辰候煙燧不レ得レ風」注「晝擧レ烽、夜一一」

【燔蕩】ハンタウ やけてつきる。牛弘文「四京大亂、一時一一」

【燔肉】ハンニク 祭にそなへたる肉、ひもろぎ。字解參看。

【燔燎】ハンレウ 庭火を焚く、たきびする。後漢書、光武紀「一一告レ天、圓二于六宗一、望二于羣神一」

【燗】ラン 寒

○礪（火部十七畫）に同じ。○圓酒をあたためる「一酒」

【燐】リン 寒（火部十畫）に同じ。

○おにび（鬼火）「黃一」「赤一」「野一」○元素の一、黃白又は赤色の固形體にして自然に燃える、動物の骨の主成分。

【燐火】リンクワ おにび。廣信賦「一一寄飛」＝鬼火。

【燐寸】リンスン 圓すりつけぎ、まっち。＝火柴。

【燐亂】リンラン 多くの采色にみだれかがやきて定まらざる貌。王延壽賦「燈一一、煒煒煌煌」

【燎】レウ 篠 錫

○にはび、かがりび。地上に火をもやして夜を照す。詩、小雅「庭一之光」○あきらか（明）なる貌。詩、陳風「佼人一兮」○てらす（照）○やく、もやす、火を放つ、田畑の雜草をやく。

【燎衣】レウイ ころもを火にてあぶる。後漢書、光武紀、光武對レ鏡一一」

【燎炬】レウキヨ かがりび。隋書、柳彧傳「正月望夜、充レ街塞レ陌、衆戲朋遊、鳴鼓聒レ天、一一照レ地」

【燎原之火】レウゲンノヒ はらをやく火。惡の長じ易きに喩ふ。左、隱六「商書曰、惡之易也、如二火之燎二于原一、不レ可二鄕邇一」

【燎祭】レウサイ 庭火をたきてまつる。魏志、文帝紀、注「一一天地五嶽四瀆一」

【燎燭】レウシヨク ○かがりび、地にてもやすは燎、手に執るは燭。○かがりび。漢書、揚雄傳「揭二光曜之一一」今、乘二臭炎之炘炘一」

【燎髮】レウハツ 髮をやく。事の甚だ易き喩。後漢書「此猶鼓二洪鑪一燎二毛髮一耳」牛弘文「攻如二一一一戰似二獲枯一」

【燎毛】レウモウ 毛をやく。極めて容易なるに喩ふ。柳玭文「羅睺之易、如レ一一」＝燎髮。

【燎レ野】レウヤ 野をやく。北史、齊文宣帝紀「一一以二仲冬一不レ得二他時行一、火損二昆蟲草木一」

【燎朗】レウラウ　ひかり明か。潘岳、螢火賦「奇姿―、在ㇾ陰益燿」
【燎燿】レウエウ　光のかがやく貌。韓詩外傳「―乎如二星辰之錯行一」‖昭昭。
【燎獵】レウラフ　林を焚きて獣を獲る。易林「文當―、昌前獲ㇾ福」

【燠】

㊀イク　アウ・オウ　號　屋
㊁ウ　通　イウ・ウ　尤

㊀あたたか(暖)あつし。あたたむ(温)㊁痛み念ふ辭、苦痛をなぐさめる辭をかける。
【燠煦】イクイク　あたたかなる貌。孔武仲詩「陰風號二霜雪一、吾輩願――」
【燠館】イククワン　あたためるへや、浴室の異稱。
【燠暑】イクシヨ　むしあつし。洛陽名園記「盛夏―不ㇾ見二長日一」‖蒸暑。
【燠燠】イクイク　あたたか(殺氣無き、疏)‖溫暖。
【燠休】イクキウ　痛み念ふこと。左、昭三「民人疾痛而或――之」‖噢咻。

【營】

㊀エイ　㊁ケイ　清　庚

㊀いとなむ、いとなみつくる(造)「こしらへる「造ー」「築ー」孟、梁惠王「經ㇾ之ー之」○をさむ(治)○はかる(度)計畫する「經ー」南北を經となし、東西をーと爲す。○家業をする「ー業」○ととのふ、やはらぐ。○めぐる。めぐらす(繞)○みだる、まどふ(惑)○ちんや、とりで(軍壘)「垣ー」「陣ー」「兵ー」「屯ー」○まもり(衛)○たましひ(魂)○いはや(窟)土を累ねて作りたる岩穴。○いへ、すまひ、やどり(居宅)○支那古代の地名、十二州の一、今の奉天府より朝鮮の國境に至る。○ーは往來する貌。○さかひ、めぐり。○正ーは恐れて安んぜざる貌。○ー室は星の名。證、月令「孟春之月、日在ー室」㊁いひとく(辯解)○星の名、熒に通ず「ー惑」
【營營】エイエイ　○しげく往來する貌。詩、小雅「ーー青蠅」○利を求むるにあくせくする貌。陳信、連珠「青蠅營營、市井ーー」
【營衛】エイエイ　兵營・壘を守る番人。史、樂書傳「ーー止ㇾ嘈」
【營妓】エイギ　兵營に善ふる官妓。漢武外史「漢武始僅ニーー一以待二軍士之無ㇾ妻者一」
【營救】エイキウ　人の爲めにすゝひ開きなどして辯護する。吳志、張昭傳「傾ㇾ身ーー、方以得ㇾ免」‖救解。
【營窟】エイクワツ　土をかさねて作りたる岩穴。孟、滕文公「下者爲ㇾ巢、上者爲二ーー一」
【營口】エイコウ　奉天省に屬す、遼河の東岸に在り、南滿鐵道と京奉鐵道の支線と交會する所、開きて商埠とす、大豆を以て輸出品の大宗とす。
【營倉】エイサウ　法規命令に服從せざる軍人を處罰するために收容する兵營內のへや。
【營造】エイザウ　家屋をいとなみつくる。
【營作】エイサク　いとなみつくる。史、始皇紀「ーニー朝宮渭南上林苑中一」‖營造。
【營私】エイシ　己の私利のみをはかる。後漢書、霍方進傳「邪枉貪汙、ーー多欲」
【營所】エイシヨ　ちんや、兵營。後漢書、種暠傳「到ニーー一、先宣二恩信一」‖營壘・軍營。
【營生】エイセイ　生活ㇱをいとなみ謀る。杜荀鶴詩「不二是ーー拙一、多緣二覓ㇾ句忙一」
【營繕】エイゼン　いとなみつくらふ。繕は補。晉書、桓伊傳「比年ーー、並已修整」‖修繕。
【營度】エイタク　いとなみはかる。
【營築】エイチク　いとなみつくる。史、周紀「古公乃ーニー城郭屋室一」‖營建。
【營陣】エイヂン　ちんや。漢書、李廣傳「正ニ部曲行伍ーー一」‖營壘。
【營田】エイデン　田地の制度の一法。文獻通考「ーー者募ㇾ民耕ㇾ之、而分ㇾ里築ㇾ室以居二其人一、略如二晁錯田塞之制一、故以ㇾ營名ㇾ之」
【營房】エイバウ　俗兵營。
【營福】エイフク　幸福を求める。唐書、張士衡傳「太子嘗問ニーー一ㇾ佛、其應若何、士衡對曰、事ㇾ佛在二清靜仁恕一、爾如貪慢驕虐、雖二傾ㇾ貲事一ㇾ之、無ㇾ損二于福一」
【營養】エイヤウ　身體のやしなひ。
【營利】エイリ　かねまうけ、利をはかる。
【營壘】エイルイ　ちんや、とりで。後漢書、公孫瓚傳「盛修ニーー一」‖軍營。
【營療】エイレウ　病を治療する。魏書、術藝傳「王顯以ニーー之功一、封二樂南伯一」
【營惑】エイワク　人をまどはす。劉向、封事「ーニー耳目一、變二移心意一」

【燬】

キ　紙

○やく。もえる。詩、周南「王室如ーー」○火。○はげしきひ(烈火)

【燥】

サウ　號　皓

○かわく(乾)「高ー」易、乾卦「火就ーー」かわかす。○やく(燥)○乾ーはかわく。韓愈「うるほひなく何のおもしろみなき養「無味乾ーー」
【燥濕】サウシツ　かれば。陳後主詔「波中ー

一輕」

【燥剛】サウガウ 土地の氣が乾きてつよし。＝燥勁。

【燥渴】サウクワツ かわきかれる。晉書、庾翼傳「山南諸城、每ㇾ至二秋冬一、水多ㇾ涸、運漕用ㇾ功、實爲二艱阻一」＝焦渴。

【燥勁】サウケイ かわきてつよし。晉顧、傳「江南其氣ㇾ一、厥性輕揚、故曰ㇾ揚」＝燥剛。

【燥吻】サウフン 心がいらだちうれへる。祭文「上無三以供二養尊長一、下無三以撫二字孤稚一、彷徨ㇾ一、內熱如ㇾ疾」

【燥荻枯柴】サウテキコサイ かわきたるをぎと、かれたるしばと。

【燥吻】サウフン かわけるくちばた。容易に詩文の佳句の浮び出でざる譬。陸機、文賦「始謳二謌于一ㇾ一、終流二離于濡輪一」蘇軾詩「一ㇾ時時著ㇾ酒潤」

【燦】 サン 輸 通じて粲に作る

あきらか、あざやか(明)光色が明かにして目を動かす。

【燦爛】サンラン あざやかに美くし。＝爛・炳爛。

【燦爛】サンラン 〇あざやかにかがやく貌。說文「一ㇾ、明粲貌」＝粲爛。〇盛んに明か。後漢書、班固傳「備哉一ㇾ」

【燭】 ショク ソク 沃

〇ともしび(燈火)「明一」「華一」「燈一」「銀一」古は炬(リビ)をいふ。〇てらす。てる(照)漢書、武帝紀「日月所ㇾ一」かがやく。〇星の名。

【燭影】ショクエイ ともしびのかげ。祖詠詩「風驚搖二一一、秋雨帶二遠聲一」

【燭輝】ショクキ ひかりかがやく。成公綏、天地賦「三辰ㇾ一、五緯重光」

【燭ㇾ燭爲ㇾ詩】シヨクヲシヨクシテシヲナス 蠟燭一寸づつ燃る間に、四韻の詩を作る。南史、王僧孺傳「竟陵王子良、晉夜集二學士一ㇾ一、四韻者、則刻二一寸一以ㇾ此爲ㇾ率」

【燭ㇾ燭】ショクヲトル ともしびをとる。李白、春夜宴二桃李園一序「一ㇾ一夜遊」

【執ㇾ燭】シツショクトル ともしびをとる。禮記「主者ㇾ一ㇾ抱ㇾ燭」＝秉燭。

【燭架】ショクカ 燭臺に同じ。

【燭花】ショククワ ともしび。梁元帝賦「燭燼落、ㇾ一明」杜甫詩「空燒夜ㇾ一」＝燭穗・燭蕊。

【燭光】ショククワウ 〇ともしびの光。＝燈光。〇光度の單位、鯨油燭燭が一時間に百二十グレインづつもえて發する光度。

【燭穗】ショクスイ ともしび、穗は其の形に喩ふ。范成大詩「歸來更了鹿車債、目書昏花ㇾ一雅」＝燭花。

【燭寸詩】ショクスンシ 詩才を試る爲めに蠟燭一寸もえる間に作らせる詩。刻ㇾ燭作ㇾ詩を見よ。

【燭照】ショクセウ ともしびにて明かにてらす。韓愈、送二石處士一序「若ㇾ一數計而能下一也」

【燭臺】ショクダイ ろうそくたて。白居易詩「且盡青娥紅ㇾ一」＝燭架・燈檠。

【燭奴】ショクド しゃくだい。開元天寶遺事「申王以二龍檀木一彫二成燭跋童子一、衣以二綠衣袍一、繫二之束帶一、使下執二蠟燭一列中立於宴席之側上目爲二一一」＝燈檠。

【燭不ㇾ見ㇾ跋】シヨクフケンバツヲ 燭は炬、跋は本卽ち把處なり、炬既に燃え盡して、其の本の見はるるは、夜の深けたるなり。曲禮「侍坐於所二尊敬一、毋ㇾ餘ㇾ席、見二同等一不ㇾ起、燭至起、食至起、上客起、——」火炬夜を照らして盡き易し、盡れば卽ち殘る所の本を藏くす、若し殘本を聚積せんか、客之を見ば、夜の深きを知り、主人の厭倦せんことを慮り、客は辭して退かんと欲す、故に殘本を見はさざるなり。

【燭盤】ショクバン ともし火を載するさら。宋參詩「紅淚金ㇾ一、嬌歌豔新妝」

【燭夜】ショクヤ 〇夜をてらす。魏志、管輅別傳、注「三五盈月、淸輝ㇾ一」〇鍾の異名。中華古今注「鍾一名ㇾ一」

【燭龍】ショクリウ 神の名。淮南子「ㇾ一在二雁門北一、蔽二於委羽之山一、不ㇾ見ㇾ日」楚辭、天問「日安不ㇾ到、ㇾ一何照」注「天之西北、幽冥無ㇾ日之國、有ㇾ龍銜ㇾ燭而照」

【燭淚】ショクルイ 蠟燭の流れる涙に喩へていふ。歸田錄「落葉公、避二暑室一、赤燃ㇾ燭趨ㇾ旦、每二龍ㇾ官去一、後人至二其舍一、見二燭淚堆一ㇾ一在ㇾ地、往往成ㇾ堆」

【燭蛾】ショクガ ともしびと、かがりびと。呂覽「若二晴夜而ㇾ一也」

【燧】 スヰ 寘

〇ひうち、石と鐵とを打ち合せ、又は錐もみなどして火を發する。又其の道具、ひうち石。〇のろし(烽)〇うちびきりびと。

【燧明】スヰメイ 燧烽に同じ。

【鑽ㇾ燧改ㇾ火】サンスヰカイクワ 春夏秋冬の季節のかはる毎に各〻木にきりもみをして新火をとる。論、陽貨「——、期可ㇾ已矣」

【燧改】スヰカイ 季節にしたがひて改めて火をきる。元稹詩「一ㇾ一鮮妍火、陰繁疎濟桐」前條參看。

【燧人氏】スヰジンシ 古の帝王の名、燧を鑽り火を取りて、民に烹飪を敎ふ。

【燧烽】スヰホウ のろし、燧は晝にもやし、烽は夜擧げる。＝烽燧・狼煙・烽火・燧烟。

【燹】セン　㊥　㊀㊁は俗字

○やはらぐ（和）○火にて熟する。

【燮理】セフリ　やはらげ治める。書、周官「燮ニ理陰陽ヲ」

【燮和】セフワ　○やはらげて和よくする。韓愈、爲二張相國一謝レ官表「燮レ理以ニ一一之任一」‖調燮。○轉じて宰相の職。姚合詩「一一皆逢識、出入鎖登庸」

【燧】タツ〔國字〕

炬一ツは暖を取る具。‖火燧。

十四畫

【爝】ユク　㊥　曜・耀に通ず

かがやく。かがやかす、てらす（照）ひかる（光）「光一」「炳一」「昭一」「燈一」

【燼】ジン　㊥　燸（火部十畫）に同じ。

【燼】ジン　㊥

○もえのこり、もえさし「餘一」「灰一」「餘一」○さいなんのあと（災餘）○のこりのたみ（遺民）亡國の餘民。左、襄四「收二國之一」

【燼灰】クワイ　もえのこりと、はひと。‖灰燼。

【燼滅】メツ　もえてなくなる、亡び絶える。鮑照賦「蕪歿一一、光沈響絶」

【燼餘】ヨ　○もえのこり、もえさし。‖餘燼。○いきのこり、亡國の遺民。‖餘燼。

【燧】スイ　㊥

○ひのび（野火）○戰爭の爲め起る火（兵火）「兵一」○のろし（烽）

【燧人】センジン　㊥

○てらす、あまねくてらす（普遍照）○おほふ（覆）‖轉。

【燾育】タウイク　おほひそだてる。傳咸賦「伊我皇之仁德兮、配二一於二儀一」‖覆育。

【燻】クン　㊥　㊀㊁㊂

㊀火がおこる。○火さかんなり。淮南、覽冥「火一炎而不レ滅」○勢が張る「一一炎」㊁もゆ、火延ぶる貌。

【燦】サン　㊥

○ひかる（光）てらす、かがやく「灼一」「閃一」○うつくし（美）○とらかす。粲に通ず。

【燦金】サンキン　○かねをとかす。周禮、考工記「一一レ一以爲レ刃、凝レ土以爲レ器」○人の目の見るべき喩。閻語「衆心成レ城、衆口一一レ」

【燦燦】サンサン　かがやく貌。李陵詩「一一三星列」

【燭】ショク　㊥　㊀㊁

㊀セツ　㊁ショク

蠟燭などのもえのこり、もえかす、ほくそ（燭餘）

【燭奸】ショクカン　かがやく。かがやかす。江淹賦「映二燭光一而一一、慷二慨氣一而愛羨」

【燭燭】シヨクシヨク　かがやく貌。李陵詩「一一三星列」

【燭龍】ショクリウ　神名。人面蛇身赤色。

【燭武】ショクブ　人名。春秋時代鄭の人。

【燭奸】ショクカン　奸を照らす。

【燭跡】ショクセキ　人の行跡を照らす。

【燭照】ショクセウ　照らす。

【燭淚】ショクルイ　ろうそくの流れる淚。

【燭臺】ショクダイ　ろうそくを立てる臺。

【燭光】ショククワウ　ろうそくの光。

【燭夜】ショクヤ　夜、ろうそくをともす。

【燭影】ショクエイ　ろうそくの影。

【燭花】ショククワ　ろうそくの芯の燃えかす。

【燭盤】ショクバン　ろうそくを立てる盤。

【燭籠】ショクロウ　ろうそくを入れる籠。

【燭滅】ショクメツ　ろうそくが消える

レ事矣」

【燼灰】ジンクワイ　ねろりの灰。張說、聞レ雨詩「心對二一一一一死、孤隨二庭樹一殘」

【燼頭】ジントウ　ねろりのほとり。范致能詩「何如田舍火一一」＝爐邊。

【燼閑】ジンカン　園茶人の家にて陰曆の十月一日に地爐を開きて茶をたてる儀式。

【燼冶】ジンヤ　金を鑄るふいど。宋史、丁度傳「兒魁嘯聚、一一日滋、居則鑄レ錢、急則爲レ盜」

十七畫

【爚】ヤク　藥

○いなびかり（電光）火のひかり（燦）○やく（熱）○ひかる、かがやく「爚一」「灼一」

【爛】ラン　翰

○ただる、ただれる、やけどをする（火傷）ただれ。○熟して度に過ぎる、煮え過ぎる。○あきらか（明）きらきらとひかる「粲一」詩、鄭風「明星有一」○くるしむ。○やぶる、くさる、腐敗する。公羊、僖九「魚一而亡」○ちる、きゆ。

【爛遊】ランイウ　ぶらぶらと遊ぶ。范成大詩「山郭官閑得二一一一」＝漫遊。

【爛飲】ランイン　さかんにのむ。吳師道詩「乞君安得二千壺酒一、一一狂歌慰二別離一」

【爛爲】ランヰ　あきらかなる貌。史、蕭相國世家贊「淮陰皆布皆以誅滅、而何之勳一一」＝爛然。

【爛柯】ランカ　斧の柄がくさる、碁を圍みて、時の移るを知らざるにいふ。柯は斧の柄。述異記「信安郡石室中、晉時樵者王質、逢二二童子碁一、與二質一物、如二棗核一、食レ之不レ飢。質手坐而觀、童子曰、汝斧柯爛矣、質歸二鄉閭一、無二復時人一」

【爛開】ランカイ　さきみだれる、爛漫としてひらく。楊萬里詩「一一櫻桃滿如レ雪」＝爛漫。

【爛盱】ランカン　あざやか。晉書、張協傳「雲一一、瓊壁青熙」

【爛今】ランキン　あざやかに光る貌。詩、唐風「角枕粲兮、錦衾一一」

【爛漫】ランマン　華美にして鮮明なる貌。詩、唐風「角枕粲兮、錦衾爛兮」＝燦爛。

【爛死】ランシ　やけただれて死する。韓愈文「一一於沙泥、吾憐樂レ之」

【爛熟】ランジュク　○みのり過ぎる。蘇軾詩「櫻桃一一滴レ增レ靡」○食物がにえすぎる。○すべて事物が十分に熟途してややくだり阪となるにいふ。○十分に精錬なるにいふ。陳遊詩「世態十年看一一」

【爛醉】ランスイ　甚だしくえふ。黃庭堅文「一一不二辭レ酌而就レ臥、鼻鼾如レ雷」＝酣酔。

【爛然】ランゼン　あきらかなる貌。漢書、王莽傳「功德一一」＝爛爛。

【爛腸】ランチャウ　酒を飲みてはらわたをただらす。梁書、文學傳「娛レ耳一レ一、因レ事而息」

【爛敗】ランハイ　ただれくさる。晉書、王悅傳「幄下甘果、一一令レ棄レ之」

【爛發】ランパツ　○盛んにおこる。江淹、神女賦「美目豔起、秀色一一」○花が盛んに開く。＝爛開。

【爛壞】ランクワイ　ただれくさる。蔡琰詩「還顧邊冥冥、肝脾爲二一一一」＝爛敗。

【爛漫】ランマン　○物のみちて溢れんとする貌。能、在宥「大德不レ同、性命一一矣」○光彩のちらばる（分布）貌。王延壽、魯靈光殿賦「流離一一」○花の咲き亂れたる貌。吳融詩「落樹和嬌一一紅」＝瀾漫。六朝以後謂りて、漫を慢に作る。

【爛爛】ランラン　あきらかなる貌。世說、容止「王戎眼一一、如二曉下電一」

十八畫

【爨】クワン　翰

○火を熾ぐ。○祭にそなへる火。＝炬。○のろし。

【爝】シャク　セキ　藥　嘯

○かがりび、たいまつ（炬火）○てる、てらす（燭）

【爝火】シャククワ　小さきたいまつの火。能、逍遙遊「日月出矣、而一一不レ息」

廿一畫

【爛】　爛（火部十三畫）に同じ。

廿五畫

【爨】サン　翰

○かまど（竈）○かしぐ、めしをたく（炊）爨、穀文公「以二釜甑一」○圖おさん、めしたき女。

【爨炊】サンスイ　めしをたく、炊事。＝炊爨。

【爨婢】サンヒ　竈たきをする下女。學蔀通辯「粹氏以三其有二生死論一之說一、則天下之備奴一一黥刑盜賊亦無二自而降一之矣」

【爨婦】サンフ　めしたき女。蘇軾詩「閑レ食能廣二一一知一」

爪部（爪）

【爪】㊀サウ　㊁サウ　巧　效

㊀つめ、手足の甲「指一」「利一」「鴻一」○勇力ありてたのみに

なる者に喩ふ「一牙之士」○鷹ーは茶の異名。㊁にぎる(握)とる(取)

【爪印】サウ　つめあと、痕跡の義とす。蘇軾詩「應ㇾ似飛鴻踏二雪泥一泥上偶然留二一ー一」

【爪牙】サウガ　○つめと、きばと。○敵をふせぎて己をたすけ衛る武臣に喩ふ。詩、小雅「所父、予王之ー一」○己を助くるなかま、黨與。後漢書、竇憲傳「悉以二軟弱任當等一爲二ー一」

【爪角】サウカク　つめと、つのと。轉じて自ら衛りて人を傷くものに喩ふ。韓非子「民知二虎兕之有二ー一也、而莫ㇾ知二萬物之靈有二ー一也」

【爪距】サウキョ　つめと、けづめと。南史、蕭恪傳「開看是雞雛、羽翅一ー具足」

【爪楊枝】サウヤウジ　園藤の開にはさまりし物を去るもの。‖小楊枝ヨウジ

【匿ㇾ爪】トクサウ　猛獸鷙鳥が深りに其の爪牙をあらはさず。轉じて名人が其の技能をつつみかくすにいふ。新論「猛獸不ㇾ露、必匿二其爪一」

【爪彈】サウダン　園○三味線などを爪にてさゝやかにひく。○屈したる指を急に爪にてはじく。轉にて人を讒斥なすする義とす。

【爭】㊀サウ　㊁サウ　庚　俗字

㊀あらそふ、きそふ(競)「力ー」「延ー」「兵ー」あらそひ「競ー」論、八佾「君子無所ー」○をさむ(治)○うったふ(訟)○辯ず、辯論する、口舌にてあらそふ。○いさむ(諫)○いかでか、どうして。ー如ー若と連用するも同じ。‖怎。㊁あらそふ、諫め止むる「ー臣」「諫ー」‖諍。

【爭友】サウイウ　不善を諫める友。孝經、爭臣「士有二ー一ー一、則身不ㇾ離二於令名一」

【爭衡】サウカウ　輕重をあらそふ、天下の權を爭ひ合ふ。庾信賦「楚漢ー一ー、寧寶競逐」

【爭窺】サウキ　きそひてのぞき見る。姚鼐詩「淺薄ー一孔窒窠」

【爭論】サウロン　互に己の意見を主張して論ずる。‖爭論。

【爭攫】サウクワク　權勢をあらそふ。史、淮陰侯傳「今東鄉ー二天下一、豈非二項王一耶」

【爭鬪】サウトウ　あらそふことば。急就篇「讒諛ー一相觸觸」‖爭論。

【爭ㇾ功】サウコウ　互に功をあらそふ。漢書、叔孫通傳「羣臣飲ー一ー」

【爭采】サウサイ　○いろどりをあらそふ。王倫、徵丘竹賦「翠葉與二飛雪一ー一ー、良柯與二層冰一競ㇾ鮮」○あらそひ取る。宋宏、三國名臣贊「競收杷絳、ー一松竹」

【爭坐位帖】サウザヰテフ　顏眞卿の郭僕射英乂に與へし書の稿本、七紙あり、宋の時、刻して世に傳ふ。

【爭子】サウシ　父母の不善を諫める子。孝經、爭臣「父有二ー一ー一、則身不ㇾ陷二於不義一」

【爭臣】サウシン　君の不善を諫むる臣。孝經、爭臣「天子有二ー一七人一、雖二亡道一、不ㇾ失二天下一」

【爭訟】サウショウ　あらそひ訴へる。謝靈運詩「盧館絕二ー一、空庭來二鳥雀一」

【爭席】サウセキ　席次をあらそふ。莊子「其反也、舍者與ㇾ之ー一ー矣」

【爭奪】サウダツ　あらそひうばふ。晉書、范寧傳「ー一兆二于仁義一、是非成二于儒墨一」

【爭媚】サウビ　あらそひのいと口。左傳「民知二ー一ー一矣、將三棄ㇾ禮而徵二于書一」

【爭長】サウチャウ　○互に長幼の序をあらそふ。左傳「隱侯・薛侯來朝ー一ー」○互に長短をくらべ爭ふ。黃庭堅文「人家兄弟無二不識者一、蓋因二娶ㇾ婦入門、異姓相聚一ー一ー競ㇾ短、漸演日開、以至二背違、分ㇾ門割戶」

【爭鬪】サウトウ　あらそひたたかふ。王襃文「勿ㇾ與二國里一ー一ふ」

【爭鋒】サウホウ　はこさきをあらそふ。漢書、張耳傳「慣毋二與ㇾ楚ー一ー」

【爭論】サウロン　あらそひ辯ずる。史、儒林傳「ー一ー於上前一」

【爬】ハ　麻

○かく(搔)爪にて引きかく。○とる、把に通ず。

【爬行】ハカウ　爪をかけてはらばひゆく。

【爬沙】ハサ　蟹の行く貌。韓愈詩「ー一歸手鈍」

【爬櫛】ハシツ　かきけづる、整理する義。周必大詩「公來開二朏塾一、草莽手ー一」‖爬梳。

【爬梳】ハソ　前條に同じ。韓愈文「蜂屯蟻聚、不ㇾ可二ー一一」

【爬蟲類】ハチウルイ　皮膚に甲鱗ありて爬行する動物。へび・とかげの類。

【爬背】ハハイ　せなかをかく。神仙傳「麻姑鳥爪(中略)背大癢時、得二此爪一以ー一ー當佳」白居易詩「ー一向ㇾ腸眠」

【爬痒】ハヤウ　かゆきをかく。麻姑山記「寫二其可ー一ー」‖搔痒。

【爬羅剔抉】ハラテキケツ　爬は掻く、羅は網羅、剔は骨を解く、抉はくじり出す、廣く隱れたる人才を探し用ふる義。韓愈、進學解「ー一ー、刮ㇾ垢磨ㇾ光」

【爰】エン　五　畫　元

○いかる(怒・恚)○ここに(于・

日、於是）○かふ、かへる（易）○一はゆるやか（緩）なる貌。詩、王風「有兎一一、雉離于羅」○一居は大いさ馬駒の如き海鳥の名。‖雜縣。

【同訓異義】ヨク　爰・玆　○爰は於是也と註す、句頭に置く字なり「爰方啓行」の如し。○玆は此と同義、これとも、このとも、ここにとも訓む、惟玆臣庶、念レ玆在レ玆の如し。

【爰書】エン　裁判の書類、爰は換、古、裁判官に愛憎偏頗あらんことを嫌ひ、互に獄書を交換して取調をなさしむ、故にいふ（史、張湯傳）

【爰田】エン　古代の税法、政府に収入すべき公田の稅を改め易へて賞すべき所の衆に與ふるもの（左、僖十五）

爪　部

【爲】（一）ヰ　（二）ヰ　支　別

㊀なす、つくる、こしらへる（作造）○なる、たり、たる。○をさむ（治）○論、衛靈公「顏淵問レ邦」○まなぶ（學）論、陽貨「女一二周南召南一矣哉」○まねす、いつはりてよそほふ。史、范雎傳「佯一不知一永巷而入二其中一」○はたらき、しわざ「行一」○らる（被）せらる。㊁たす（助）論、述而「夫子一衛君乎」○よる（因）あづかる（與）まもる（護）○ため。論、學而「一人謀而不忠乎」わけ、ゆゑ。○おもふ。孟、公孫丑「而子一我願之乎」‖謂。

【同訓異義】ヰ　爲・成・就・濟・作　○爲は事をするなり。左傳「老夫耄矣、無二能爲一也」○成・就の二字は共に爲したる事をしとぐるなり。小學「德器成就、大異二衆人一」○濟は成なり、なしおほせるなり。書經「必有忍也、乃有レ濟」○作は爲なり、にじめつくる義。

【爲レ我】ヰ　己を利する爲めにする。戰國の時の楊朱の學說。孟子「拔二一毛一而利二天下一不レ爲也」

【爲レ人】ヰ　ひとのために　らまれつき、性質。史、夏紀「禹一レ一敏給克勤」

【爲政】ヰ　○政をおこなふ。○論語の篇名。

【爲善】ヰ　善き事を爲す。書經「我聞吉人一レ一、惟日不レ足」後漢書、東平憲王傳「一レ一最樂」

【爲朋】ヰ　しばらくして。孟、滕文公「爽子愾然、一レ一曰、命レ之矣」

【爲替】ヰ　遠き地に金錢を送るに正金を送らず手形にてすます方法。

十四畫

爵　シャク　サク　㊥

○すずめ。孟、離婁「爲二叢敺一レ者鵲也」‖雀。○雀の形したるさかづき。○くらゐ、公・侯・伯・子・男の五等に分つ。○官位階級「好一」「名一」「榮一」○つかさ（主宰）

【爵位】シャ　○くらゐ。○爵と、くらゐと。

【爵一級】シャク　朝廷にて官爵を賜ふ。後漢書、竇憲傳「鴻都門一賣二官爵一、公卿州郡、下至黃綬、各有レ差、崔烈入二錢五百萬一爲二司徒一、議者嫌二其銅臭一」

【爵秩】シャク　くらゐと、ふちと。史、商君傳「明二尊卑一一等級一、各以二差次一」‖爵祿。

【爵培】シャク　さかづきのだい。金史、禮志「一一一在二神座前一」

【爵服】シャク　位と、それに相當する服裝と。

【爵封】シャク　諸侯のくらゐと知行の地と。後漢書、周一一于有八百」

【爵祿】シャク　雀を捕ふるあみ。史、鄭當時傳、贊「下邽翟公爲二廷尉一賓客填一レ門、及レ廢、門外可レ設二雀羅一」雀・爵同じ。方干詩「未レ妨溪上泛二漁艇一、又奠三門前張二一一一」

【爵祿】シャク　爵秩に同じ。范梓詩「世間一一不レ易レ致、何處去就如二鵬風一」

父　部

【父】フ　㊥

○ちち。○祖一は父の父、伯一は父の兄。外祖一は母の父。○おきな「一老」○老年の男子の美稱、呂望を「師尚一」范增を「亞一」といふ類。○おやぢ、身分賤しき老人、野老「樵一」「田一」「漁一」○あざな。もと甫に作る。

【父君】フクン　自分の父の敬稱。‖大人・嚴君・家大人。

【父兄】フケイ　父と兄と。論、子罕「四則事二公卿一、入則事二一一一」

【父子】フシ　父と子と。易經「有二男女一、然後有二夫婦一、有二夫婦一、然後有二一一一」

【父子聚麀】フシシュユウ　禽獸は禮なし、故に父子牝を共にす、麀は牝鹿の總稱「夫惟禽獸無レ禮、故父子聚レ麀」

【父子之間不責善】フシノカンニハゼンヲセメズ　父と子との間には善を責め求むるを慮ざず。孟、離婁「夫章子、子父責レ善而不二相遇一也、責善朋友之道也、父子責レ善、賊レ恩之大者」

【父事】フ　父として尊びつかふ。漢書、

鮑宣傳「陛下－－二天、母二事地、子二養契民－」

【父執】ッ　父の友、執は父と同志の人。曲禮「見二父之執一、不レ謂二之進一、不二敢進一杜甫詩「怡然敬二－－一」「問レ我來二何方一」

【父翁】ッ　ちちと、ちぢと。又、せんぞ。晉書「我－－名播二四海一、寧不レ知耶」

【父族】ック　ちち方のやから。周禮「界命諸二于－－一」

【父道】ッ　○ちちの行ひし道。論、學而「三年無レ改二父之道一」○父たる者の守るべき道。

【父母】ッ　○ちちと、ははと。○轉じて、人を尊び稱する詩、大雅「豈弟君子、民之－－」

【父母之遺體】ッイ　子の身をいふ。禮、祭義「曾子曰、身也者－－也、行二－－一、敢不レ敬乎」

【父母之邦】ッボ　ふるさと、故國。論、微子「柱レ道而事レ人、何必去二－－一」

【父母命名】ッメイ　父母の著き譽。禮、內則「將レ爲レ善、思レ聞二－－一必果」

【父母唯其疾之憂】ッボタダソレノ　父母は子の病氣のみを最も心配する。論、爲政

【父爺】ッヤ　ちちおや（親父）

【父老】ッラウ　村里の重立ちしとしより。漢書、高帝紀「置二酒沛宮一、悉召二故人一－子弟一佐レ酒」

【父雖レ不レ父子不レ可二以不一子】ッイ　必曰二宗－－一」

爻部

【爻】カウ　名　效

○まじはる（交）○易の卦を成すもの、一卦は六－より成る、乾卦☰坤卦☷の一一の類「上－」「六－」「初－」

五畫

【爼】爼（人部七畫）の譌字。

七畫

【爽】㊀サウ　㊁サウ　陽　養

㊀さわやか、爽く快ひし。○はがらか（朗）王筠文「高秋氣－」○あきらか（明）夜が明けてあかるし「昧－」「－塏」○勢よし、はけし（烈）たけし（猛）○たかし。又、たゞとし（貧）あらたか。○俊邁にして羣を拔く「英－」「豪－」○たがふ（差）あやまつ（過）みだれる。老子「五味令二人口一－」○やぶる（敗）ほろぶ（亡）○－鳩は鷹の異名。㊁－鳩は鷹屬の名。左、定二「有

たと（父が父道を失ふとも子は子たる道を盡さざるべからず「古文孝經序」

【父之讎不二共戴一レ天】ッカタキトハトモニテンヲイタダカズ　子たる者、父の讎は必ず報殺すべきをいふ。曲禮「父之讎、弗二與共戴一レ天」

【父爲二子隱一】ッカクスニ　父が子の惡をかばふは人情の美なる點「論、子路」

四畫

【爸】バ　馬　哿

ちち（父）－－は俗語、父の義。

六畫

【爹】タ　麻　哿

○ちち（父）○俗に祖父を呼ぶ稱。○尊者の稱。南史、始興王傳「人歌曰、始興王、民之－」

九畫

【爺】ヤ　麻　もと耶に作る

○ちち、父の俗語「阿－」○尊稱として用ふ「老－」「太－」○國老夏の義。又、己の父の謙稱。

【爺爺】ヤ　○俗ちち。○尊稱、うし、大人。宋史、宗澤傳「北方常尊稱レ之、

兩廡－」

同訓異義　爽・差・違・舛の別は差（工部七畫）の條を見よ。

【爽塏】ソウガイ　高燥にして明かなる地。左、昭三「子之宅近レ市、湫隘囂塵、不レ可二以居一、請更二諸－－者一」

【爽快】ソウクワイ　さわやかにこころよし。

【爽氣】ソウキ　さわやかなるこゝち、爽快の氣。韓偓詩「西山－－生二襟袖一」

【爽爽】ソウソウ　尋常の人に超越する貌。南史、何子朗傳「人中－－、有二子朗一」

【爽傷】ソウシヤウ　やぶりそこなふ。淮南子「五味亂レ口、使二口－－一」

【爽然】ソウゼン　○ぼんやりとして失意の貌。史、屈賈列傳「－－自失矣」○さわやかなる貌。

【爽德】ソウトク　○明かなる德、書、盤庚「故有二－－一自レ上」＝明德。○德にたがふ、爽は貳。國語「昔昭王娶二於房一、曰二房后一、實有二－－一」＝失德。

【爽邁】ソウマイ　心あきらかにすぐれる。晉書、孫楚傳「才藻卓絕、－－不羣」

【爽約】ソウヤク　約にそむく。李商隱文「文侯校獵、寧－－二於虞人一」＝失約。

十畫

【爾】ジ　ニ　紙　又、尒・尓に作る

○なんぢ（汝）○しかく。孟、告子「非二天之降一才－殊一也」しか

り、しか(然)ーは如此の義。云ーイフはこのとほりの義。論、述而「不知老之將至云ー」○ちかし。孟、離婁「道在レ邇而求諸遠」＝邇。○のみ(而已・耳)論、郷黨「便便言、唯謹ー」○うつる(移)○華の盛んなる貌。○おほし。○形容に用ふる助字「徒ー」「聚ー」然・如と同じ。

【爾雅】ジガ 爾・而・然の別は而（部首六畫）の條を見よ。○ナンヂ 爾・汝・若・女・乃・迺・而の別は汝（水部三畫）の條を見よ。

【爾雅】カ ○十三經の一、魯の周公の作といふも辭かならず、字書の最も古きもの。ーー注疏十一卷は、郭璞の注、邢昺の疏。○文章言語がたゞしく美はし。

【爾後】ジゴ そののち。＝自後・以後。

【爾今】コン 今より。＝自今。

【爾曹】ソウ なんぢら。陶綱詩「真極不レ知レ下、遊隨共ニーー」＝爾輩。

【爾時】ジ そのとき、其の當時。＝彼時。

【爾爾】ジ ○然り然りと他の言をうけがふ辭。古詩「諸諸復ーー」○如レ此の意。晉書、張方傳「王者問レ罪、爾但言ニーー」

【爾汝】ジジョ ○人を輕蔑する語。孟、盡心「人能充ニ無レ受ーーニ之實一、無レ所レ往而不ニ爲レ義也」○ーーの文は親友の義。文士傳「禰衡有ニ逸才一、與ニ孔融一作ニーー交一」

【爾祖】ソ 汝のせんぞ。詩、大雅「王之藎臣、無ニ念ニーー一」＝乃祖。

【爾來】ライ ○それ以來。出師表「ーー二十有一年矣」○近來。＝邇來。

【爾雲山】ウンザン 旅順に在る山の名、高さが二〇三呎トーある故、乃木大將が字音を假りて名づけたるもの。＝二百三高地。

【出乎爾者反乎爾】ナンザニイデルモノハナンザニカヘル 善惡禍福、みな人の自ら招く所なるをいふ。孟、梁惠王「曾子曰、戒レ之戒レ之、ーーー者也」

【棄ニ爾幼志一】ナンヂノヨウシヲステヨ 汝が童幼の心を棄てよと戒むる義。儀禮、士冠禮「ーー、順ニ爾成德一、勗考惟祺、介ニ爾景福一」

【金玉爾音】ナンヂノオンインヲタフトブ 音聲を貴重して妄りに發せざる義。詩、小雅「毋ーー、而有中遐心上」

【莫ニ匪ニ爾極一】アラザルナシナンザノキワミヲ 帝堯の德をほめたる歌の一句、人民が此世に安く生活し得るは皆汝帝堯の至極せる恩德のお蔭に由らざるはなし。史、五帝紀「立ニ我烝民一、ーーー」

【爾惟風】ナンヂハカゼ 上の歌が下を化するを、風が草を靡かすに比していふ、爾は君主を斥す。書、君陳「爾其戒哉、ーーー、下民惟草」

爿部

【爿】ショウ 陽

木を兩分せし形、片の對。

四畫

【牀】ショウ 陽 床は俗字 通音ジョウ

○ゆか、とこ。○ねどこ、ねだい、人の坐臥する所「臥ー」「禪ー」「ガー」○こしかけ。○ろけた(非幹)樂府、淮南王篇「後園鑿ニ井銀作一ー」○すべて物を安置する具「筆ー」「墨ー」「印ー」「琴ー」「銃ー」

【牀几】ショウキ ○牀はねだい、几は脇息ソクキ 吳志、趙達傳「築ニ小屋一、施ニーー一」○ショウたたむことのできる一種のこしかけ、俗に床几に作る。＝胡牀。

【牀子】ショウシ いす、こしかけ。＝椅子。牀几。

【牀第】ショウダイ ○ねだいと簀コウと。周禮、玉府「掌ニ王之燕衣服寢席ーー凡良器一」＝牀簀。○ーーは國郡の中に在り、敵に轉じて婦女の義とす。宋書、義法異等傳論「欲レ不レ紛ニ遂ーーニ豈可レ得哉」

【牀褥】ショウジョク 南京產。＝臥蓐。

【牀上安レ牀】ショウジョウアンショウ 頂禮ナサに喩ふ。楞嚴品錄「毛梭、惠遠之子、便捷有レ餘、眞巧不レ足、善ニ於布置一、略不ニ須草、若比ニ方諸父一、則ーーニ」＝屋下架屋。

【牀蓐】ショウジョク ねどこ、しとね。後漢書、張陽傳「給ニ雜帳ーーニ」潘岳文「寢伏ニーー一、念在ニ朝廷一」＝牀褥。

【牀褥】ショウジョク しとね、ねどこ。李密、陳情表「劉變レ疾、常在ニーーニ」＝牀蓐。

【牀前】ショウゼン ねどこのまへ。李白詩「ーー看ニ月光一、疑是地上霜」

【牀榻】ショウトウ こしかけ。晉書、王祥傳「榻前但可レ施ニーー一而已」

【牀頭】ショウトウ ゆかのほとり。張籍、行路難「君不レ見ーー黃金盡、壯士無ニ顏色一」

五畫

【牁】カ 敵

牂ーカは漢代の郡名、今の貴州の北部の地。又、川の名、一名盤江。漢書、南粵傳「下ニ牂ー江一」

六畫

【牂】ショウ 陽 一音サウ

○さかんなり。○めひつじ(牝羊)＝牂。○ーー雲は狗の狀をな

す雲。○―サクは盛んなる貌。詩、陳風「東門之楊、其葉――」○―絢は地名、絢（前條）を見よ。

【牆】シャウ　圖　墻は俗字

○かき、かきね（垣）「女―」「垣―」「短―」○へい（屏）論、季氏「而在蕭―之內也」○柩を飾る衣。○國―は獄。【牆衣】シャウイ　かきねの上の青き苔。白居易詩「暖變――色」【牆垣】シャウエン　かき（史、趙世家）＝垣墻・牆壁。【牆下】シャウカ　かきね。孟、盡心「五畝之宅、樹ニ―一以桑」＝牆根。【牆角】シャウカク　かきねのすみ。白居易詩「黃葉聚ニ―一、青苔圍ニ柱根一」＝牆隅。【牆有ノ耳】シャウニアリ　秘密の漏れ易き譬。管子、君臣「――者、微謀外泄之謂也」【牆壁】シャウヘキ　かき。揚雄、甘泉賦「竜候ニ忽於―一ニ」＝牆籬。【牆面】シャウメン　牆に面すれば開明を得ざるなし、以て不學の者に喩ふ。書、周官「不ノ學ニ―一、莅ノ事惟煩」論、陽貨「人而不ノ爲ニ周南召南一、其猶ニ正ニ―一立一也與」＝面牆。【牆壁】シャウヘキ　かき。魏徴論「書ニ空拳一、稱破ニ百萬之師一、無ニ―一之蓬ニ」＝牆落。

片部

【片】ヘン　圖　片は俗字

○かたかた、判わちし木の右半。＝は左半、かたひら。○きれ「紙一」「木一」物の薄くして平かなる者。○かたかた（偏）一つの物事の半分、かたわれ、ひとつ（單・隻）○はなびら（瓣）「花一」○名一は名刺の俗語。○ペンは英國の銅貨の稱、我が二錢一毛五絲に當る。＝邊尼ペン

【片雨】ヘンウ　一方にのみ降るあめ。岑參詩「江村一―外、野寺夕陽邊」【片雲】ヘンウン　ひときれのくも、わづかの雲。【片影】ヘンエイ　わづかのかげ。楊萬里詩「方溪笑鴻一―寒」【片函】ヘンカン　圖短き書簡。＝寸簡。【片簡】ヘンカン　きれはしのかき物。＝斷簡・片書。【片月】ヘンゲツ　かたわれづき。于武陵詩「涼天生ニ一一」【片言】ヘンゲン　かたこと。論、顏淵「一―可ニ以折ニ獄者一、其由也與」簡單なる言葉にて訟獄を判決する。由は子路。＝偏言・一言隻辭。【片言隻辭】ヘンゲンセキジ　わづかのことば。陸機、謝爽「――、不ノ關ニ其閒一」＝一言半句。【片語】ヘンゴ　片言に同じ。＝隻語。【片刻】ヘンコク　すこしのま。＝片時・寸時。【片恩】ヘンオン　かたおもひ。【片紙】ヘンシ　かみぎれ。宋史、汪若海傳「高宗書以ニ一一、賜ニ若海一」【片時】ヘンジ　かたとき、わづかのあひだ。僧貫休詩「如何三萬六千日、不ノ放ニ心身一靜ニ一ト」【片鱗】ヘンリン　かたこと。柳宗元文「趙郡拓ノ之、立ニ一一而不ノ遺」＝片言。【片晌】ヘンショウ　片時の義。晌は、まひる、轉じて時刻の義とす。【片書】ヘンショ　片紙に同じ。＝片函。【片善】ヘンゼン　すこしの善行。劉孝綽詩「一言白璧輕、一一黃金賤」＝小善。【片楮】ヘンチョ　片紙。邶經詩「隻字一一猶靡ノ奇」【片片】ヘンペン　かるくひるがへる貌。又、きれぎれなる貌。庾信詩「一一紅顏落、雙雙淚眼生」【片麻岩】ヘンマガン　花崗石に似て岩石中にて成生最も古きもの「――系」【片務契約】ヘンムケイヤク　常事者の一方のみが義務を負擔する約束、贈與の約の類。賣買などの約を雙務契約といふの對。【片假名】カタカナ　國國字の一、漢字の偏傍を省略して造りしもの。平假名の對。【片栗】カタクリ　山野に自生する宿根草、花と根とは百合に似たり、片栗粉の原料とす。＝山慈姑。【片破月】カタワレツキ　圖片月に同じ。

四　【版】ハン　圖　板に通ず

○ふだ（簡牘）いた、木の方形に切りて片を爲すもの。○城を築く時に土を兩方よりはさむ板。○ひがむ（僻）そむく（反）「一―」○戸籍。論、鄒嶽「武負一者」○一丈。又、八尺の長さ。又、二尺の廣さ。史、趙世家「城不ノ浸者三一」○文書を板木にほる「出一」「一本」○しゃく、笏。後漢書、范滂傳「投」一棄官而去」＝手版。【版位】ハンイ　神位。宋朝會要「王欽若奉ノ詔製ニ一一成、貯以ニ赤匣髹牀一」【版行】ハンコウ　書物を印刷發行する、版本にほりて世に行ふ。＝板行。【版金】ハンキン　圖背時、大判・小判の總稱、後世は、大判の稱。＝判金。【版權】ハンケン　著作物を印刷發行する權利。＝著作權。

【版築】ハンチク　○土地と人民と。轉じて領土の義。唐書、楊炎傳「賦不レ加レ斂而增レ入、一一不レ造而得二其盧實一」‖戸口册。○書籍(管子、修業不レ息レ版、注)

【版籍奉還】ハンセキホウカン　國明治維新の際、諸大名が其の領土人民を朝廷に還したるをいふ。

【版築】ハンチク　○牆板と杵と、土功に用ふる具。漢書、英布傳「項王伐レ齊、身負二一一一

【牘】（十五畫）同（大部七畫）に同じ。

【牘】トク　屋

○文字をしるす木のふだ（書版・木簡）○かきもの（文書）「文―」「奏―」「案―」「簡―」「篇―」てがみ「尺―」○古代の樂器、笏の類。

牙部

【牙】ガ　麻

○きば（牡牙）前齒と奥齒との間にある大形の鋭き齒。○轉じて身を護るたのみとなるもの「爪―」○象のきば「象―」○かむ（噬）○はぎしり。○きざし、めばえ、芽に通ず。○きばの狀をなす器物にいふ。○帳の前に立てる旗「一門」○やくしょ（官署）○天子又は將軍の建てる旗、象―にて飾る「大―」「一旗」○さいとり、賣買兩者の間に立ちて手數料を取るもの、仲買人「一儈」一說に―は互の轉訛。

【牙音】ガオン　齒にふれて出づる音、カキクケコの類。

【牙營】ガエイ　本陣・本營。牙旗をたてたる大將軍の陣屋。

【牙牙】ガガ　小兒の語を學ぶ愛らしきこと。司空圖文「女則――學レ語」元好問詩「――嬌女纔堪レ誇」

【牙行】ガカウ　さいとり。○牙儈。

【牙旗】ガキ　大將軍のはた。張衡、東京賦「戈矛如レ林、――繽紛」

【牙科】ガクワ　齒齒科。

【牙儈】ガクワイ　さいとり。唐書、張文新傳「許買レ婢還レ約、爲二一一一搜索陵突」品字箋「儈、會也、――以二兩牙一而會二合市中之交易一者」＝牙保・牙商。

【牙爪】ガサウ　きばと、つめと。轉じて、防禦の具にいふ。荀、勸學「蚓無二――之利一、筋骨之強、上食二黃泉一用レ心一也」

【牙刷】ガサツ　齒みがきやうじ。郭鉅詩「南州―寄來日、去レ賦濛レ頭一金直」

【牙人】ガジン　なかがひにん（仲買人）＝牙郎・牙儈。

【牙城】ガジヤウ　城のほんまる、牙旗を立てるに由る。唐書、李愬傳「率二左右一登二一一一」王惲詩「角聲慢レ日上二一一一」

【牙頭】ガトウ　牙儈に同じ。

【牙檣錦纜】ガシヤウキンラン　象牙にて飾りし帆柱と、錦のともづな。杜甫、泛レ舟詩「春風自信牙檣動、遲日徐看錦纜拳」

【牙旋】ガセン　大將軍の軍營のとばり。超曇詩「―連烽擁二萬蹄一」

【牙帖】ガテフ　仲買人の免許狀。

【牙婆】ガバ　きいりばば、物事の世話をして口錢を取る老女。

【牙牌】ガハイ　かるた。正字通「―、今戲具、俗傳、宣和二年、高宗時韶頒二行天下一、謂二之骨牌一、如二博塞格五之類一」

【牙粉】ガフン　はみがきこ。

【牙保】ガホ　牙儈に同じ、保は商家の人。

【牙保罷】ガホヒ　不正品と知りつつ、賣買のとりもちして手數料を取りしつみ。

【牙門】ガモン　大將の軍門、幔の前に牙旗を立つるに由る。後漢書、公孫瓚傳「拔二其―一一一、今、官署を衙門といふは―一の訛。

【牙郎】ガラウ　仲買人。輟耕錄「今人謂二駔儈者一爲二一一一、本謂二之互郎一、主二互易市物一者也」

【牚】（八畫）同（大部七畫）に同じ。

【牚】タウ　庚

○ささへばしら（支柱・郭柱）＝樘。○ささふ。

牛部（牛）

【牛】ギウ　尤

○うし、家畜の一、反芻類に屬す。曲禮「凡祭宗廟之禮、―曰二一元大武一」○星の名、二十八宿の一、ひこぼし（牽牛星）蘇軾、赤壁賦「徘徊於斗―之間」○―山は山東省臨淄縣に在り。孟、告子「―山之木嘗美矣」○―莊は奉天省の地名、遼河に沿へる商埠。○蝸―ぐうはかたつむり。

【牛衣】ギウイ　亂麻を編みてつくりたるもの。漢書、王章傳「疾病無レ被、臥二―中一與レ妻訣涕泣」

【牛醫】ギウイ　牛の病をいやす醫者。後漢

書、黃憲傳「世貧賤、父爲ニ一ー」
【牛飲】ギウ　牛の飲む如く大いに酒を飲む。史、殷紀、注「紂爲ニ酒池ニ糟丘ニ而ー一者三千餘人、爲レ畜」
【牛疫】ギウ　牛の流行病。
【牛耕】ギウ　うしを使ひてたがやす。山海經「穀之孫叔均、是始作ニ一ー」
【牛角】ギウ　うしのつの。南史、齊豫章王嶷傳「取ニ細一兩、橫繫ニ一ー、放臥ニ其家ー」
【牛角歌】ギウカク　寧戚が齊の桓公に用ひられて相となる以前、其の斉よ所の牛の角をたたきてうたひし歌(三齊略記)ニ飯牛歌。
【牛角掛レ書】ギウカククワイシヨ　牛に乘りつつ書を讀む。世說、雅量「李密乘ニ黃牛一被ニ以ニ蒲韉一、時ニ漢書一帙、掛ニ於角上ー一手提ニ牛制ー一手翻ニ讀書ー」
【牛鬼】ギウ　○牛の形したる怪物。○正しからざる神鬼。杜牧文「ー一蛇神、不レ足レ爲ニ其靈ー誕幻ー也」
【牛驥同皁】ギウキドウサウ　牛は歩の遲きもの、驥は一日に千里を行く馬、皁はかひばおけ、賢人が不肖者と同一の待遇を受くるに喩ふ。鄴陽、獄中上ー梁王ー書「使下不レ羈之士與ニ牛驥一同ニ皁ー」
【牛後】ギウ　大いなる者の尻につく義。史、蘇秦傳「鄙諺曰、鄙爲ニ雞口ー無レ爲ニ一ー後」大いなる者の部下になるよりは小なる者の頭タとなれ。
【牛吼】ギウコウ　牛がほえる。また牛のほえる如き大聲にいふ。郭璞、大蛇讚「幽都之山、大蛇牛吼」吼は吼に同じ。
【牛耳】ギウ　古、諸侯の會盟には牛の耳を割きて其の血をすする、卑者牛耳を執り、尊者これに薦むるを禮とす。轉じて牛耳を執るを以て盟主の義とす。左、哀十七「孟武伯問ニ於高柴ー曰、諸侯盟、誰執ニ一ー」
【牛溲】ギウ　うしのいばり。韓愈、進學解「ー一馬勃、敗鼓之皮、俱收並蓄」馬勃は馬糞、一說に馬尿菌。
【牛車】ギウ　うしに牽かすくるま。史、平準書「將相或乘ニ一ー」
【牛豎】ギウ　うしかひわらは。○牛童。牧童。
【牛首一臠馬肉】ギウシユイチレンバニク　禁を外に責めて、内に自ら犯すに喩ふ、衛靈公婦人にして丈夫の飾をなす者を好む、人盡く之に倣ふ、公、吏をして之を禁ぜしむれども止まず、晏子に問ふ、晏子對へて、君之を内に服せしめて、之を外に禁ずるは、猶ほ牛首を門に懸けて、馬肉を内に賣るが如し、公何ぞ以て内をして服すること勿からしめざる、則ち外、敢て爲す莫しと(晏子春秋)
【牛洛】ギウ　秣陵(南京)の南に在る淵の名。晉書、溫嶠傳「至ニ一ー磯、水深不レ可レ測、世云、其下多ニ怪物ー、嶠遂燃ニ犀角ー而照レ之」
【牛嶠】ギウ　牛が暑に苦みてあへぐ。漢書、西吉傳「吉前行逢ニ人運ニ牛、ー一吐レ舌、吉止駐使ニ騎吏問ニ逐レ牛行幾里ー一矣」
【牛酥】ギウソ　牛乳にて製せし食料、濃き酒の如きもの、バタの類。
【牛桃】ギウ　ゆすらうめの異名。博物志「櫻桃、一名ー一、一名英桃」
【牛刀割レ雞】ギウタウカツケイ　牛を切る刀にて雞を切る。大事を處理する才能を小事に用ふるに喩ふ。論、陽貨「割レ雞焉用ニ牛刀ー」
【牛女】ギウ　牽牛と織女との二星。
【牛車】ギウ　うしかひのわらべ。劉兼詩「橫笛ー一臥ニ憑澄ー」
【牛涎】ギウ　猶ウの疱瘡ニの種痘の料とす。
【牛背】ギウ　牛のせなか。陸游詩「兒童踏ニー一、安穩如レ乘レ舟」
【斷ニ牛馬一截ニ盤匜ー】ダンギウバイチセツバンイ　極めて鋭利なる劍の義、盤匜は銅器。戰國策「吳子之劍、肉試則斷ニ牛馬ー、金試則截ニ盤匜ー」
【牛馬走】ギウバソウ　自己の謙稱、牛馬の如く奔走する僕といふ義。司馬遷、報ニ任安ー書「太史公ー一」
【牛皮】ギウ　○うしのかは。○國牛皮飴の略語、澱粉・砂糖・飴にて製せし菓子。ニ來歷。
【牛尾魚】ギウビ　海魚の一、こちの異名、形、はっぱうに似てひらたく、口大きく尾尖る。
【牛腹】ギウ　わきばらの張る義。晉語「虎目而豕喙、蔦肩而ー一」
【牛蒡】ギウ　あかねぐさ。蔬疏廣要「齊人謂ニ之鼠ー、徐州人謂ニ之ー一ー」
【牛酪】ギウラク　ばた。
【牛李】ギウリ　唐の牛僧孺と、李宗閔との二人互に黨派を結びて爭ひし故事に本づきて、後世朋黨の爭にいふ。唐書、二李元牛楊傳「是時權震ニ天下ー、人指曰ー一ー」
【牛王】ギウワウ　牛の神。月令廣義「牛有ニ一ー之祀ー、而越俗有ニ謂ニ二丹伯牛之像ー以祭者ー」
【牛膝】ギウシツ　蔓草の名、原野に自生す、其の葉は覓に似、其の節高くして牛の膝に似たり。
【牛頭馬頭】ゴヅメヅ　倶に地獄の獄卒。
【牛頭天王】ゴヅテンワウ　圖祇園精舍の守護神。
【牛旁】ギウ　野菜の一、根を食用とす。ニ牛蒡。
【食レ牛之氣】ショクギウノキ　幼き頃より已に大志あるをいふ。戸子「虎豹之子雖レ未レ成レ文、已有ニ一ー一」文は毛の斑。ニ吞牛之氣。
【放ニ牛于桃林之野ー】ホウギウヲタウリンノヤ　戰爭に用ひし牛を桃林といふ原に放ちやる、兵亂の息みたるをいふ。書、武成「歸ニ馬于華山之陽ー一ー」
【雉レ牛】チギウ　牛を椎ツにてうち殺す。史、馮唐傳「魏尚爲ニ雲中守ー、五日一ー一レー、雲客軍吏舍人、是以匈奴

遠避、不レ近二雲中一」

【曳レ牛卻行】ヨウヤクカウス　牛を後へ引きて行く、極めて力の強きをいふ。魏書、伊祁傳、伊祁代人也、少而勇健、走及二奔馬一、善射多力、――」

【牛追物】ウシオフモノ　圖昔の遊戯、牛を追ひ射る。

【呼レ牛呼レ馬】コヲトコヲトバ　是非は人の評するに任せて、已はこれに與らざるをいふ。莊、天道「呼二我牛一也、而謂二之牛一、呼二我馬一也、而謂二之馬一」

【汗レ牛充レ棟】ウシニアセンムネニミツ　汗（水部三畫）の汗牛充棟（一〇四九頁二段）を見よ。

【對レ牛彈レ琴】ウシニコトヲタンズ　愚人に向ひて道を說くも益なきに喩ふ。顏延年苑「嘗貽二士公明儀一、――、弄二清角之操一、牛食如レ故、非二牛不一レ聞、不レ合レ耳也」

【搏二牛之蝨一不レ可三以破二蠛蠓一】ウシノシラミヲウツニハブヨヲヤブルベカラズ　蝨は大なれども外に在り、蠛蠓は小なれども内に在り、故に手にて搏てば牛につきたる蝨をば殺すべきも、蠛蠓をば殺す能はずとの義。外なる敵には勝つも、内なる敵には勝ちがたきに喩ふ。〔史、項羽紀〕日知錄に「搏レ牛之蝨」と讀むべしとあれども從はず。

【牝】ヒン　㊥

○め、めす、鳥獣の女性。牡の對、一說に飛ぶ者に雌雄といひ、走る者に一牡といふ。○かぎの入るあな（鎖孔）○盧一は谿谷ニ韓愈詩「有似黃金擲盧一」

【牝遊】ヒンイウ　畜類のさかりがつく。

【牝瓦】ヒングワ　めがはら、屋根の上にあふむけて葺く瓦。牡瓦の對。

【牝雞之晨】ヒンケイノアシタ　めんどりがあしたを告げる、后妃又は婆婆の權を專らにするにいふ。書、牧誓「武王曰、古人有レ言曰、牝雞無レ晨、――、惟家之索」索は盡。

【牝朝】ヒンテウ　則天武氏の朝をいふ、牝雞之晨の義に取る。藝林伐山「唐人目二武后之世一爲二――一」

【牝馬之貞】ヒンバノテイ　柔順の德あり、能く事に堪へて成功する義。易、坤卦「坤元亨、利二――一」

【牝牡】ヒンボ　○けもののめすと、をすと。詩經「吉日維戊」疏「日有二剛柔一、猶二馬有一二牝牡一」○星の位置。晉書、天文志「太白在レ南、歲星在レ北、曰二一年殺大熟一」

【牟】ボウ　ム　尤

○牛のなく聲の形容。○とる（取）うばふ（奪）むさぼる（貪）史、平準書「富商大賈無一―一大利一」○いつくしむ（愛）○すぐ（過）おかす（侵）○ます（倍）○おほむぎ（大麥）詩、周頌「貽二我來一」■麰。○おほいなり（大）○ひとみ。荀、非相「堯舜參一レ子」■眸。○黍稷を盛る器。禮、內則「敦一レ巵匜」○かぶと（冑）鎧に通ず。

【牟食】ボウショク　食物を貪り取る。韓非、七反「――之民」

【牟然】ボウゼン　牛の鳴く聲。柳宗元、牛賦「――而鳴」

【牟利】ボウリ　利をむさぼる。鹽鐵論「物騰踊、則商賈一レ自市」

【牣】ジン　軫　畫

○みつ（充滿）「充一」孟、梁惠王「於一魚躍」あふる。○やはらかにして固し、韌と通ず。

【牡】ボウ　㊦　通音ボ

○をす、鳥獣のを。牝の對。詩、邶風「雄鳴求二其一」○かぎ、ぢうまへ（戸鑰）漢書、五行志「長安章城門、門一自亡」

【牡蛤】ボカウ　かきの異名。本草「牡蠣名――・蠣蛤一」

【牡瓦】ボグワ　をがはら、屋根の上に下向に伏せてふく瓦。牝瓦の對。

【牡桂】ボケイ　にっけい（肉桂）爾雅、翼「――生二南海一、葉似二枇杷一、皮薄色黃」

【牡丹】ボタン　和名、はつかぐさ。五雜俎「――自レ唐以前、無二稱賞一、僅謝康樂集中、有二竹間水際多二――一之語一、此是花王第一知己也」■花王・洛陽花・木芍藥。

【牡牝】ボヒン　けものをすと、めすと。史、大宛傳「取二其善馬數十匹、中馬以下――三千餘匹」■牝牡。

【牡蠣】ボレイ　をあさ。儀禮「――者宜レ鹿也」

【牡錦】ボキン　かぎ。蘇軾詩「西園――夜沈沈、尙有三游人駐二柳陰一」

【牡蠣】ボレイ　かき、貝類の一種、介殼は不正にして葉狀、肉は味美にして滋養に富む。■蠔。

【牢】ラウ　豪

○いけにへ（犧牲）牛羊豕を太一、牛羊を少一といふ。一說、牛を太一といひ、羊を少一といふ。○くら、こめぐら（廩）○ひとや（獄）史、白敍傳「盡」地爲レ、議不レ入」○をり、牛馬を入れ養ふ所。○あたひ（價）○かたし（堅固）「堅一」「一固」○さびし、心細し、無聊「一愁」○はるか（遼）○おだやか（穩）○か

こむ。○ふちまい(縁金)
【牢檻】ラウカン　をり。ひとや。＝牢獄。
【牢記】ラウキ　しっかりとおぼえる。＝強記。
【牢固】ラウコ　かたし。南史、顔峻傳「所レ論鐘、形式雖少、輪郭不レ成(中略)雖以二鈞物一、竟不二一一」＝堅固。
【牢獄】ラウゴク　ひとや。晉書、天文志「昴七星、天之耳也、主二訓事一、昴明則天下一平、搖動有二大臣下レ獄」＝牢檻。
【牢籠】ラウロウ　意の如くならずして不平なり(閲歴、揚雄傳、注)＝牢愁。
【牢死】ラウシ　獄中にて病死する。＝獄死。
【牢愁】ラウシウ　心さびしくして悲ふ。昭明文選、雜詩、銘世鈞詩、乍晴乍雨天氣換、一杯聊復消二一一」
【牢性】ラウセイ　いけにへ。韓愈詩「考鐘伐レ鼓待二一一」＝牲牢。
【牢祖】ラウソ　大字をのせるつくゑ。梁書、王子雲傳「皇二殿郊廟一、設二一一」
【牢不可レ破】ラウフカハ　かたくしてやぶれず(韓愈、平淮西碑)
【牢肉】ラウニク　牛・羊・豕の三つのいけにへ。禮記「夕深衣、祭二一一」
【牢落】ラウラク　○心ひろくして凡俗を抜く、落落として不羣なり。晉、文賦「心一一而無レ偶」○さびしくまばら。史、司馬相如傳「一一牢落」＝

寥落。○ふしあはせ(不遇)
【牢籠】ラウロウ　ふちまい。後漢書、四元傳「雖將多益二一一」＝牢檻。
【牢籠】ラウロウ　○ひとまとめにとり込む。○他人を我が術中に入れて自由に使ふ。＝籠絡。

四畳

【物】ブツ　モチ　物一番　モツ

○もの、天地間に存在する有形・無形のすべてのもの、しなら。周禮、大司徒「以鄉三一一教萬民」○たぐひ(類)左、桓六「與レ吾同二一一」○みる(相)○たぐふ(比)○一故は死をいふ。
【物我】ブツガ　人と、われと。徐鉉詩「本圖忘二一一」「何必計二論叢一」
【物価】ブッカ　物のねだん、さらば「一一騰貴」
【物界】ブツカイ　物質界をいふ。心界・精神界の對。
【物議】ブツギ　世間のうはさ。南史、謝朏傳「歴二淹郊野一、不レ屑二一一」＝世論・物論。
【物化】ブツカ　○物の變化する義。莊、齊物「莊周夢爲二胡蝶一、栩栩然蝴蝶也、自喩適レ志與、不レ知二周也、俄然覚、則蘧蘧然周也、此之謂二一一」○人の死をいふ。梁簡文、誡二諸王一書「勗二一一、珍重愼民世」＝物故。
【物華】ブツクワ　○物のひかり、寶物などの精彩。王勃、滕王閣序「一一天寶」○景色。杜甫詩「且盡二芳樽一戀二一一」
【物外】ブツガイ　世俗の外、人事に與からず。唐書、元德秀傳「彈琴讀レ書、陶陶然遺二身一一一」＝世外・物表。
【物外情】ブツガイジヤウ　世俗をはなれたる情。李中詩「乘レ興因尋——」
【物怪】ブッケ　あやしきもの、へんげ、妖怪の類。史、封禪書「依二一一一以致二諸侯一」
【物形】ブツケイ　もののかたち。法書要錄「蔡二其一一一、得二其文理一、故謂レ之曰二文母一」
【物件】ブッケン　○しなもの、事物。○法律にて權利の目的となるもの。
【物權】ブッケン　財産權の一、占有權・所有權などすべて有體物に於ける權利。
【物候】ブッコウ　萬物が氣候に應じて來る變の現象が來り、玄鳥が去る類。楊炯文、平二寇日月一、唐都之一一可レ知」
【物騒】ブッサウ　國世上が靜かならず、世間がさわがし。
【物産】ブッサン　其の地より産出する品物。吳都賦「江湖陰陽、一一殷充」＝方物。
【物事】ブツジ　○ものごと。隋書、張衡傳「死大盲曰、我爲レ人作二何一一一、而望二久活一」○食ふべき物。古今注「農家呼二粟米可レ食之物一、以爲二一一」
【物資】ブッシ　しなもの。＝材料。
【物質】ブッシツ　人人の感官にて、認識せられる物、物品。
【物情】ブツジヤウ　○事物のありさま。孟、滕文公「夫物之不レ齊、物之情也」○世間のありさま。○四季をりをりの景色のやうす。楊萬里詩「只消一卷梅山集、幻出多般景一一」
【物象】ブッシヤウ　○物のかたち(水經、注)＝物形。○四季の景物のやうす。文同詩「此閒一一皆新得」
【物色】ブッシキ　○物の色。禮、月令「察二一一」○人相書をまはして人を捜す。後漢書、嚴光傳「帝命レ以二一一」訪レ之」
【物則】ブツソク　ものののり。國語「昭二明一一一以訓レ之」
【物魅】ブツミ　ばけもの。周禮、注「致二一一于國境一」
【物務】ブツム　つとめ、事務。後漢書、黃香傳「躯動一一、愛レ公如レ家」
【物慾】ブツヨク　金錢酒色等の物質上の慾、外物の慾。
【物理】ブツリ　○物の道理。晉書、元帝聰明機斷、光精二一一」○物理學の略。
【物理學】ブツリガク　物の性質・エネルギー等につきて研究する科學。＝格物學・究理學・理學。
【物累】ブツルイ　外物のかかりあひ。莊子「知レ樂レ天者、無二天怨一、無二人非一、無二一一」＝無二鬼責一」＝俗累。

【物力】ブツリョク　〇ものを生ずるちから。漢書「生レ之有レ時、而用レ之亡レ度、則ち一必屈」〇租稅以外に人民の田園屋舍車馬牛羊樹藝の數及び其の藏鏹ノカネの多寡を算して錢を徴するを一一といふ「金史、食貨志」

【物論】ブツロン　〇世の中のうはさ。一一騒然」＝物議。〇衆人の評論。晉書、謝安傳「桓沖既卒、荊江二州、並缺ニ一一一」

【物故】ブツコ　人の死をいふ。物は沒の古字の誤訛、故はふるくなる。一說に物は勿なり、故は事なり、復た事を能くする所ろなきをいふと。又、死を戒して言ふことを欲せず、ただ其の服用せし所ろの衣物皆すでに故ナしといふ義なりと。史、司馬相如傳「治レ道二歲不レ成、士卒多ニ一一」

【物故】ブツコ　人の死をいふ、

ーは馬・牛・羊・豕犬・雞。三ーは牛・羊・豕。

【牲殺】セイサツ いけにへ。牲は必ず特に殺すが故。孟、滕文公「ー器皿衣服不レ備、不二敢以祭一」

【牲酒】セイシュ いけにへと、さけと。宋史、樂志「ー嘉旨、鬱鬯純熙」

【牲幣】セイヘイ 祭に用ふるいけにへ、牲は牛・羊・豕、幣は其の色純にして體の全きもの。左、桓六「吾ー!肥腯」

【牲犢】セイトク いけにへの小牛。周禮「王巡二狩殷國一、則國君膳以二ー一」

【牲牢】セイロウ いけにへ。庾信、樂府「ー修牧、繭栗毛純」韓愈文「梁武帝、前後三度捨レ身施レ佛、宗廟之祭、不レ用二ー一」＝牢牲。

【牲醴】セイレイ いけにへと甘酒と。袁凱詩「設時具二ー一、歌舞勞二迎迓一」

【牴】 テイ 薺

或は觝・抵に作る

○ふる(觸)さはる「ー牾」「ー觸」○あたる(當)○おほよそ(大略)○をひつじ。＝羝。

【牴牾】テイゴ くひちがふ、さはる(違戻)牾は迕。漢書、司馬遷傳「甚多二疏略一、或有二ー一」

【牴觸】テイショク つきあたる。さしさはる。周禮、注「楊衒所二以令レ不レ得レ二ー人一」

六 畫

【牸】 ジ 寘

○めうし(牝牛)孔叢子、陳子義「子欲二速富一、當レ畜二五ー一」○めうま(牝馬)

【牸牛】ジギュウ めうし。說苑「晉公畜二ー一生レ子」

【牸犀】ジセイ めすのさい。爾雅、翼「ー之角、文理分明」

【牸馬】ジバ めうま、牝馬。史、封禪書「有レ斎二ー一」

【牷】 セン ゼン 先

いけにへ、牲牛の毛色の純粹にして體の全きもの「牲ー」

【牷犧】センギ いけにへ。牧乘、七發「純粹ー一、獻二之公門一」＝犧牷。

【特】 トク ドク 職

○ひとり、ひとつ(獨)○ひとりびとり。○すぐれる、傑出する、衆にぬきんでる(擢)又、其の者。○ことに(殊)とりわけ。○專らに爲す「ー使」「ー派」○ただ(但)＝獨。○つれあひ(匹)つま、配偶者。詩、小雅「求二爾新一」○をうし(牡牛)又、一匹のいけにへの牛。書、舜典「諦格于藝祖、用ー一」○を、をす。○ことなり(異・別)

同訓異字 ニ特・異・殊の別は異(田部七畫)の條を見よ。

【特異】トクイ とりわけてかはる。漢書、劉向傳「大星如レ月西行、衆星隨」之此爲二ー一」

【特有】トクユウ 他と異りてひとりでたもつ。＝特得。

【特宥】トクユウ 特別の扱を以てゆるす。晉書、齊王冏傳「宜下準二ー一以全中種親之典上」＝特赦。

【特得】トクトク 一一あいさつする。泛拜の對。周禮「孤卿ー二大夫一、以二其等一」

【特恩】トクオン 特別なるめぐみ。蘇軾文「朝廷非常ー」

【特効】トクコウ 特別の効果、特殊の効能「ー一藥」

【特技】トクギ 外に類のなきわざ。

【特牛】トクギュウ 一匹のいけにへのうし。通典「陳武帝以二ー一祀二后土于北郊一」

【特許】トクキョ 特別なるゆるし。古辭「曲池隨時望、ー一顧郎目」

【特許權】トッキョケン 工業上の物品、又は其の方法の發明者、又は繼承者が、官府より一定の期限内、其の製作販賣使用などを專有することを許される權利。

【特權】トッケン 其の人に限りて享有し行使し得る權利。

【特創】トクソウ ○獨力にてつくりはじめる。○獨力にて發明する。

【特操】トクソウ いつも堅く守りてかはらざるみさを。莊、齊物「曩子行、今子止、曩子坐、今子起、何無二ー一與」

【特産】トクサン 特に其の地に產出する。又其の物。

【特旨】トクシ 特別の思召。ー一錢位」

【特賜】トクシ 特別にたまふ。詩經、疏「ー一汝以二大圭一」

【特舟】トクシュウ ひとつのふね。爾雅「大夫方舟、士ー一」＝單船。

【特秀】トクシュウ とりわけすぐれる。劉峻、辨命論「天下英傑、珪璋ー一」

【特質】トクシツ 特に其の物にのみある性質。＝特性。

【特進】トクシン 漢代に諸侯の功德優盛にして、朝廷の敬異する所の者には、位特進を賜ふ、三公の下に在り、隋の文帝はこれを散官となす。後漢書、和帝紀「賜二諸侯王公將軍ー一」

【特赦】トクシャ 特別の恩典にて罪人をゆるす。＝特宥。

【特賞】トクショウ 特別の賞與。

【特殊】トクシュ とりわけて他と異り。＝特異・特別。

【特殊教育】トクシュキョウイク 特別の方法にて教育する、盲啞・白癡などの教育。

【特種】トクシュ 特別なる種類。

【特選】トクセン とりわけてすぐれる。朱熹文「此山水之ー一處也」

【特稱】トクショウ とくべつのとなへ。

【特異】トクイ　たぐひなくたかくそびえる。水經、注「孤峯一一」＝特峙。
【特色】トクシキ　格別にすぐれたるありさま。
【特性】トクセイ　特質に同じ。
【特牲】トクセイ　〇一匹のいけにへの牛。禮、郊特牲、注「郊者、祭レ天之名、用二一牛一、故曰二一一一」〇一匹の豚。國語「大夫舉以二一一一」＝特豚。
【特設】トクセツ　ことさらに設ける。
【特製】トクセイ　特別に念入れて製造する。又其の製品。
【特選】トクセン　特別のえらび。特別にえらぶ。
【特待】トクタイ　特別なるもてなし。
【特待生】トクタイセイ　學問品行が優等にて授業料を免除せられる學生。
【特達】トクタツ　特別に衆にぬけ出る。晉書、江統傳「陛下天授逸才、聰鑒一一」
【特地】トクチ　ことさら、地は助辭。宋黨詩「貧里煩二君一一過一」
【特峙】トクヂ　ひとりそばだつ。文賦「孤立而一一」
【特長】トクチョウ　とりわけすぐれる、特別の長所。
【特徵】トクチョウ　〇特に他に異りたるしるし。〇特別にめし出して優待する。後漢書、朗顗傳「天之生レ固、必爲二聖漢一、宜下擧二一一一以示中四方上」固は幸固。
【特定】トクテイ　特別に定める。
【特撰】トクセン　特に衆人にぬきんづ。徐陵文「一一二鷰揭之佐一」
【特典】トクテン　特別なるおきて。
【特等】トクトウ　特別なる等級「一一席」
【特得】トクトク　特有に同じ。
【特派】トクハ　特別にさしつかはす「一一員」
【特放】トクハウ　とりわけ氣まま。晉書、嵇含傳「遇奕莊周、天縱一一」
【特發】トクハツ　〇特別にさし出す。〇特別にさしつかはす。＝特派。〇病人自身に其の病を生ずる。傳染の對。
【特筆】トクヒツ　特に目立つやうにかきしるす「一一大書」
【特廟】トクビョウ　妾のたまや、夫婦は合祭すれども、妾は配祀することを得ず。公羊傳、注「妾母卑、雖レ爲二夫人一猶一一而祭レ之」
【特別】トクベツ　特殊に同じ。
【特命】トクメイ　特別なる命令。唐書、盧邁傳「攝祭一一也」
【特免】トクメン　特別にゆるされる。
【特牲】トクセイ　一匹のいけにへのひつじ。左傳「祭以二一一一、殷以二少牢一、足二以供一レ祀」
【特約】トクヤク　特別の約束。
【特立獨行】トクリツドクカウ　自ら信ずる所を守りて世俗の外にぬきんで立ち、一世に獨行するをいふ。禮、儒行「其一一一、有二如レ此者一」
【特例】トクレイ　特別なるしきたり。

七畫

【牼】カウ　ケイ　庚　徑

〇牛の膝の下の骨。〇宋一は戰國時代の人名。

【牽】ケン　先

〇ひく、ひっぱる、前の方へ引きすすむ「一レ牛」〇かかはる（拘）ひきつけられる「拘一」史、六國表「學者一於所レ聞」〇つづく、つらぬ（連）つなぐ（繫）〇物を引くに執るもの、紐・綱・索など。〇牛・羊・家などのひかれ行く動物の稱。又、いけにへ。左、僖三三「惟脯資循一一鳩矣」〇一牛は星の名。又、蔓草の一、あさがほ。

同訓異字　牽・引・挽・援・曳・延・惹・彈・撫・繫　〇牽は引き前スむるなり、牽レ牛・牽レ羊の類、轉じて私欲にひかれる事に用ふ。衍義、男牽レ欲而失二其剛一、〇引は弓をひく義、引きのべ、引きよせ、引きさげ、引きすむる類、廣く用ふ。史、蘇秦傳「引レ錐自刺二其股一」〇挽は力を入れて引くなり、引レ弓は、弦を引きよせるなり、挽レ弓は、力を出して引きはるなり、また前より力を入れて引くなり。左傳「夫二子者、或挽レ之、或撫レ之」〇援はひきかけて己の力とするなり、牽援・援助などと用ふ。〇曳は引きずるなり、曳レ尾・曳レ裾・曳レ杖の類。〇延は引きよせるなり、延レ客・延二賢人一の類。〇惹は引きてつきまとふ意、詩に多く用ふ、「暮惹二御香一歸」「春日偏能惹レ恨長」の類。〇彈は手にてはじき引くなり、彈レ琴の如し。〇撫はひっぱり來る義。孟子「五伯者撫二諸侯一以伐二諸侯一者也」〇繫は自由をさまぬやうにひっぱる義。唐書「牽二繫首尾一」

【牽引】ケンイン　〇ひく。易經、注「茅之爲レ物、拔二其根一而相一一者也」〇轉じて連及の義。
【牽曳】ケンエイ　ひきずる。北史、齊高陽太妃傳「父京之爲二相州長史一、神武赴レ鄴、欲レ納レ之、京之不レ許、遂一一取レ之」
【牽纏】ケンテン　ひきつれまとふ。胡直詩「秉憲涉二湘沅一、吏事滋一一」＝牽拘。
【牽牛】ケンギュウ　〇ひこぼし。二十八宿の一。四都賦「左二一一一而右二綫女一、似二蜚流之無一レ進」〇牛を引く。
【牽牛花】ケンギュウクワ　あさがほ（朝顏）蔓草の一、葉は三裂し夏淵斗狀の美花を著ける。＝蕣花。
【牽強】ケンキョウ　むりにこじつける。蘇軾詩「李二龐歷密一眞一一、惠愧山蜂久蓄蜜」

【牽絲之幸】ケンシノカウ　婚姻を定むる故事。唐書「郭元振美丰姿、宰相張嘉貞欲二納爲一壻、目二吾五女各持一一絲帳後一、子孝レ之、得者爲レ婿、元振牽二一紅絲一、得二第三女一、有二姿色一」【牽制】ケンセイ　ひきつけて自由にさせぬ。後漢書、元帝紀贊「一二文法一、遊移不レ斷」【牽製】ケンセイ　ひきつけて自由にさせぬ。引曳する。唐書、張巡許遠傳「一二首尾一」＝牽制。【牽斷】ケンダン　ひききる。薛能詩「一二一絲不レ及、牛空懸著玉搥頭」【牽纏】ケンテン　ともづなを引きゆく。庾集詩「桃花吹レ雨春一レ」【牽聯】ケンレン　つらなりつづく。【牽挽】ケンバン　ひく。韓愈詩「軒豁斷二一一」【牽連之親】ケンレンノシン　引きづづきの遠き親類。揚雄、答二劉歆一書「異二雖外家一、一一」

【牾】ゴ　遇

さかふ（逆）そむく、悖る。＝忤。捂。

【牿】コク　沃

○をり、牛馬の牢。○牛のつのぎ、牛の角端につけたる横木、人を害するを防ぐもの。易、大畜「童牛之一」＝楅。

【犀】セイ　サイ　斉

○猛獣の一、狀、水牛に似たり、鼻梁の上に角を生ず、角は薬品となし、皮は甲冑に作るに適す。○かたくするどし（堅利）○犀の角。○瓠一はゆふがほのさね、美人の白き歯に喩ふ。詩、衛風「齒如二瓠一」○木一は桂花の別名。【犀鎧】サイガイ　犀の皮にてつくれるよろひ。宋書、孔顗傳「服二皆著一犀皮鎧一、執二短兵一」【犀角】サイカク　○さいのつの、薬品とす。後漢書「獻二象牙・一・・・瑇瑁一」烏一一は其の黒きもの。○觝角ノ骨。戦國策「一一僅月、彼乃帝王之后、非二諸侯之妾一也」【犀甲】サイカフ　○犀の皮にて製れるよろひ。周禮、函人「一一壽百年」北史、周高祖紀「保定元年三月、白鵠遣レ使、獻二一一鎧鎧一」＝犀函。○轉じて、堅き鎧。【犀函】サイカン　犀甲に同じ。南史「突騎短兵、一一鐵楯」【犀舟】サイシウ　堅き舟。後漢書、張衡傳「鎧レ有二一一勁弩、猛人沙邛夜、有二須者一也」【犀櫝】サイトク　犀を以て飾とせしもの。唐書「張易之爲レ母作二七寶帳一、爲二犀

【犁】リ　レイ　斉　支

㊀からすき、農具の一、牛馬に牽かせて耕す。○たがやす（耕）○ころ（比）○むすぶ（結）○くろし（黒）○夜明けごろ。＝黎。㊁まだらうし。○老人の皮膚の垢じみたること。㊂おそれてをののく貌。【犁牛】リギウ　まだらうし。論、雍也「一一之子、騂且角」【犁然】リゼン　ふるひをののく貌。莊、山木「一一有レ當二於人之心一」＝粟然。【犁老】リラウ　老人。犁は老人の膚の垢じみたる貌。賈、恭賛「播二穀一一一」【犁且】リシャ　よあけがた。史、南越傳「一一城中、皆降二伏波一」＝黎且・黎明。【犁明】リメイ　夜明けがた。犁は黒、うすぐらし（史、呂后紀）＝黎明・犁且・昧爽。

【犍】ケン　元　先

○きんきり牛、勢を割きたる牛。＝犗。○一爲は漢の郡名、今の四川遵縣の境の地。

【犒】 捜（手部十一畫）の俗字。

【犎】 ホウ 冬
領の上の肉が高く起きて狀駱駝に似たる一種の牛。‖封牛・犛牛

十畫

【犗】 カイ 卦
○きんきり牛、去勢せし牛。○畜類の強健なる養。

【犒】 カウ 皓
ねぎらふ、飲食物を贈りて軍士を慰めるる「―勞」「宴―」「―師」

【犒師】 酒食を贈りて兵士をねぎらふ。左、僖二六「齊孝公伐二我北鄙一、使二展喜一―レ―」

【犒賞】 兵をねぎらひ物を賞與する。唐書、李綽傳「不二大―一、人心不レ激」

【犒設】 兵士の勞をねぎらひ物をたまふ。南唐近事「―不レ至」

【犒賚】 ねぎらひて物をたまふ。宋史、范鎮傳「所レ募多市井年少、利二―一、往往捕二農民一以應レ數」‖犒賞・勞賚。

【犒勞】 兵士をいたはりねぎらふ。魏志、明帝紀「遣二使者一、持レ節―二一合肥壽春諸軍一」

【犖】 ラク 藥
○まだらうし（駁牛）○すぐれる、超絶する「卓―」○―は明かなる貌。

【犖确】 山に大石の歩き貌。韓愈詩「山石――行徑微」

【犖犖】 事の分明なる貌。史、天官書「此其――大者」

十一畫

【犛】 ㊀ バウ 豪 ㊁ リ 支
㊀からうし、長き髦の牛。又、其の髦。‖旄。㊁くろ色のうし（黒牛）

十二畫

【犝】 トウ 東
角なき牛。

十五畫

【犢】 トク 屋
こうし（牛子）

【舐レ犢】 己の兒を愛するといふ譬。後漢書、楊震傳「海無二日諱先見之明一、猶懷二老牛一レ―之愛一」

【犢車】 こうしにひかすくるま。唐書、禮樂志「供奉内人乘二―一」

【犢鼻褌】 さるまた、ふんどし。揮は褌、兩脚を覆きて腰に繋ぐ。世說「阮仲容步兵居二道南一、諸阮居二道北一、北阮富而南阮貧、七月七日、北阮盛曬レ衣、皆於二庭中一竪二長竿一掛二大布一――於中庭一、人或怪レ之、答曰、未レ能レ免レ俗、聊復爾耳」北史、劉晝傳「少孤貧、愛レ學、閉レ戸讀レ書、晝月惟著二――一」

【犧】 ハク 覺
野牛の一種。蘇軾、韓文公廟碑「―牲雜卜羞二我觴一」‖犧。

十六畫

【犧】 ㊀ キ・ギ ㊁ サ 歌 支
㊀いけにへ、宗廟の祭に供ふる牲。轉じて他人の爲めに一身をすてるにもいふ「一牲」○いけにへの牛を刻みし祭祀用のさかだる。禮、禮器「―尊疏布」○包―は古の帝王の號。易、繫辭「古者包―氏之有レ天下一也」―一に羲又戲に作る。㊁いけにへの牛を刻み、翡翠にて飾りし祭祀用のさかだる。詩、魯頌「―尊將將」

【犧牲ノ聘】 國家の爲めに命を棄てることを長れて、仕官を辭すの莊、列禦寇「威聘二於莊子一、莊子應二其使一曰、子見二夫犧牛一乎、衣以二文繡一、食以二芻菽一、及二其牽而入二於太廟一、雖レ欲レ爲二孤犢一、其可二得乎一」

【犧象】 周代に用ひし酒器。禮記「著殷尊也、―周尊也」

【犧牲】 ○天地宗廟をまつるに用ふるいけにへ。禮記「孟春――毋レ用レ牝」○他人の爲めに己の身をすつる義とするは、殷の湯王が身を以て―と爲して天に禱り雨をせし故事に本づく。呂覽「殷湯克二夏而王二天下一、五年不レ雨、湯乃以レ身禱二于桑林一、剪二其爪一、自以爲二―一、用祈二福于上帝一、雨大至」

【犧盛】 いけにへのもりもの。文心雕龍「―惟潔、本二於明德一」

【犧牲】 いけにへ、牲は色純にして體全き牲。大戴禮「宗廟曰二斬轅一、山川曰二―一」‖犧性。

【犧尊】 酒尊の一、オにて犧牛の形につくる。詩、魯頌「―將將」犧一に戲に作る。莊子「百年之木、破爲二―一尊一」一說、犧音サ字解參看。

【犧羊】 いけにへに用ふるひつじ。

詩、小雅「以ㇾ我齊明與ニ我ㇾ牲ㇾ」以祉以方」＝餼羊。

【犧】シヤウ　虎　又變に作る

○牛の息する聲。○轟ㇾは音の文公の臣の名。

廿三畫

【鑵】集（前條）に同じ。

犬部（犭）

【犬】ケン　統

いぬ、狗は小、ㇾは大「吠ㇾ」「狂ㇾ」「田ㇾ」「獵ㇾ」曲禮「ㇾ曰ニ羹獻」

【犬猿】クワンエン　○いぬとさると。○圖非常なる仲わるい「ㇾㇾも啻ならず」

【犬牙相制】ケンガアヒセイス　兩國の境の入り交りて互に相制する義。史、孝文紀「高帝封ニ王子弟ニ地――、此所ㇾ謂磐石之宗也」漢書には制を錯に作る。

【犬彘】クワンチ　已の力を盡すことの謙辭。孫沔、服闋辭ニ復官ㇾ表「誓圖ニ――ㇾ、庶答ニ鴻休ㇾ」＝駑駘・尺寸效。

【犬戎】クワンジウ　四方の夷狄の名。＝犬封・畎夷・昆夷。

【犬兔之爭】クワントノノアラソヒ　韓盧といふ駿犬が、東郭逡といふ狡兎を逐うて山に騰ること五たび、山を繞ること三たびにして、兩者共に疲れて死し、遂に田夫に獲られきといふ故事（春秋後語）＝鷸蚌之爭。

【犬吠】ケンバイ　犬がほえる。史、酷吏傳「野無ニ――之盜ㇾ」

【犬馬心】ケンバノコヽロ　臣子が報效を思ふ心の謙辭。史、三王世家「臣竊不ㇾ勝ニ――ㇾ」

【犬馬之養】ケンバノヤシナヒ　親を養ふのみにて敬せざるをいふ。論、爲政「今之孝者、是謂ニ能養ㇾ至ニ犬馬ㇾ皆能有ㇾ養、不ㇾ敬何以別乎」

【犬馬之齒】ケンバノヨハヒ　自己の年を卑下していふ、齒は齡。漢書、趙充國傳「――、七十六」＝犬馬之年。

【犬馬勞】ケンバノラウ　自分のほねをりをいふ　前條に同じ。

【犬羊】ケンヤウ　いぬと、ひつじと、つまらぬものの喩。論、顏淵「虎豹之鞟、猶ニ――之鞟ㇾ」鞟はつくりかは。

【犬羊狐鼠賊】ケンヤウコソヾクワ　つまらぬけものに等しき逆賊。

【犬追物】イヌオフモノ　圖古代行はれたる射術の遊技、騎馬にて犬をおひ射て勝負を定めるもの。

【犬吠ニ天上ㇾ】イヌテンジヤウニホユ　淮南王安、仙去するや、餘藥鼎中に在り、雞犬之を舐めて飛昇するを得、雞は雲中に鳴き、犬は天上に吠ゆ「神仙傳」

【如ニ犬僧ニ枯骨ㇾ】イヌノゴトシコツニ　味なきに喩ふ。涅槃經「菩薩如ㇾ五欲法無ㇾ有ニ歡樂ㇾ如ニ犬噉ニ枯骨ㇾ」

【犭】　犬（前條）の字が漢字の偏になる時の形、けものへん。

一畫

【犮】ハツ　亂

犬の走る貌。

二畫

【犯】ハン　醒

○をかす（干・侵）法を干す「ㇾ罪」「共ㇾ」「干ㇾ」又、罪ある人「ㇾ人」○ふれる（抵觸）あたる。○こゆ（超）○かつ（勝）うち勝つ。○うつ（伐）侵し伐つ「ㇾ闕」○しのぐ（陵）「陵ㇾ」○いつはる（僭）○さかふ（逆）たがふ（違）「違ㇾ」「ㇾ顏」

【犯】　犬に从ひ已の聲、俗に巳に从ふは非。

【犯人】ハンニン　犯・侵・干・冒の別は侵（人部七畫）の條を見よ。

【犯蹇】ハンケン　犯罪の意志。

【犯顏】ハンガン　いやな顏色をするをも、かまはずして諫める。史、婁敬傳「犯ニ君之顏ㇾ」

【犯諱】ハンキ　忌み避くべき長上の名諱ををかす。南史、王亮傳「下官以ニ――ㇾ被ㇾ代」

【犯禁】ハンキン　禁制のいましめををかす。周禮「察ニ其ㇾ――者、與ニ其不者ㇾ而捕ㇾ之」

【犯科】ハンクワ　君父にそむきをかす。

【犯逆】ハンギヤク　法律ををかす。諸葛亮文「作ㇾ姦ㇾ、及爲ニ忠善ㇾ」＝犯罪。

【犯ㇾ闕】ハンケツクワス　宮闕にあだする。五代史、周太祖皇后柴氏傳「契丹ㇾ」

【犯忤】ハンゴ　をかしさかふ。陸雲文「不ㇾ慮ニ――ㇾ、戰陣ニ所懷ㇾ」

【犯罪】ハンザイ　○をかしたるつみ。○罪ををかす。

【犯ㇾ臧】ハンゾウクワス　官物を私する罪を犯す。宋書「奸吏ㇾ、百錢以上皆殺ㇾ之」

【犯ㇾ上】ハンジヤウ　上に在る人をしのぎをかす。論、學而「有子曰、其爲ㇾ人也、孝弟而好ㇾ者鮮矣」

【犯觸】ハンシヨク　をかしふれる。論衡「大則謂ニ之一ニ――歲月ㇾ」

【犯則】ハンソク　おきてををかす。＝犯法。

【犯法】ハンハフ　おきてををかす。史、平準書「人人自愛、而重ㇾ、先ニ行義ㇾ而後絀ニ恥尋ㇾ焉」＝犯科。

【犯陣】ハンヂン　天子の行幸の路を侵犯する。漢書、張釋之傳「此人ㇾ、當ニ罰金ㇾ」

三畫

【犴】 ㊀ガン 寒 ㊁ガン 翰　㊀のいぬ、狐に似て小し。‖犴狴。㊁郷亭にあるひとや。朝廷に在るを獄といふ。

四畫

【狁】 イン 軫　獫—は匈奴の別號。‖獫狁。

【狁】 ギン 文　犬の吠える聲。‖狺。

【狂】 キャウ 陽　○きちがひ、精神がくるふ「—氣」「—疾」○みだりがはし。○たけし。○さわぐ(躁率)○心が一事に專一にして進む。○志のみ大いにして行の掩はざる義「—狷」○きちがひじみたる行、常規をはづれたる奇拔のふるまひ。又、其の人「—生」○勢力の盛大なる義「—風」「—瀾」

【狂飲】キャウ　酒だしく酒をのむ。蘇軾詩「放歌—飲不レ知レ曉」

【狂易】キャウ　心がくるひて性情がかはる。漢書、五行志「病——」

【狂歌】キャウ　○きちがひじみたる聲にてうたふ。きちがひじみたるうた。杜甫詩「耽酒須二徹識一—聖賢」○國たはれうた、滑稽じみたる歌。

【狂狡】キャウ　くるひみだれる。後漢書、竇憲傳「故—:乘レ閒相詿誤耳」

【狂躁】キャウ　ものぐるはしくなきさけぶ。戴良詩「—大自號」

【狂簡】キャウ　志大にして事に略なり。論、公冶長「—斐然成レ章」

【狂愚】キャウ　氣がくるひておろか、愚は癡。文心雕龍「文學傲誕、以速レ誅、近平—以致レ戮」

【狂氣】キャウ　きちがひじみたる氣。韓愈詩「雲夫昔兄有二—一、嗜好與レ俗殊二酸鹹一」

【狂妄】キャウ　非常によろこぶ。

【狂虐】キャウ　ものぐるはしく亂暴にして人をいぢめる。前史、王敬則傳「著梧王—、左右不二自安一」

【狂句】キャウ　國おどけたる意を含める俳句。

【狂花】キャウ　時ならぬ時節にさく花、かへりざき。庾信、小園賦「落葉半牀、—滿屋」

【狂怪】キャウクワイ　きがくるはし。蘇軾詩「詩酒淋漓出二—一」

【狂劇】キャウ　くるひたはむれる。韓愈詩「—時穿レ壁」

【狂犬】キャウ　きちがひいぬ。阮籍賦「値二—之暴怒一、加二楚害於徽驅一」‖獅犬・獰犬・瘋犬。

【狂言綺語】キャウゲンキギョ　文飾したる詞、小說の類。白居易、香山寺白氏洛中集記「今生世俗文字之業、——之過」

【狂狷】キャウケン　狂は志高くして行の掩はざるもの、狷は知未だ及ばずして守ること餘りあるもの、皆中庸の道に合はざる行。論、子路「子曰、不レ得二中行一而與之、必也—乎」

【狂瞽】キャウコ　よこしまにしてくらし。南史、虞寄傳「盍二—之說一、披二肝膽之誠一」‖狂言瞽說。

【狂顧】キャウ　あわててふりかへる。邢劭賦「獸—而猶動、鳥將レ憂而以疲」

【狂草】キャウサウ　草書の最も柔かにくづして奔放なるもの。五雜俎「今之學二—一者、須レ識二粗中有レ細、疎中有レ密」

【狂躁】キャウサウ　心がくるひておちつかず。潘夫人「—而多レ縢」‖狂噪。

【狂躁】キャウサウ　氣がくるひさわぐ。王令詩「愛之不レ可レ入、抵觸發二—一」‖狂噪。

【狂死】キャウシ　氣がくるひて死する。漢書、五行志「犬多—」

【狂恣】キャウシ　くるはしくほしいまま。晉書、五行志「專斷不二一朝觀一、此—不臣之咎也」‖凶恣。

【狂詩】キャウシ　おどけの意を含める詩。

【狂疾】キャウシツ　きちがひのやまひ。韓愈文「抑而行レ之、必發二—一」

【狂人】キャウジン　氣のふれたる人、きちがひ。‖狂犬。

【狂奏】キャウソウ　心くるひておろかの君は愚。後漢書「吁子危レ我哉、是我幼時—之行也」

【狂攫】キャウクワク　くるひみだれる。東晳賦「還醒レ牀而無レ被、於—而安寢」

【狂酣】キャウカン　甚だしくゑふ。李中詩「醉吟窮二野景一、—養二天眞一」

【狂生】キャウセイ　きちがひじみてほしいままなる書生。史、酈生傳「酈中皆謂二之—一」

【狂雪】キャウセツ　風にくるひてみだれ舞ふゆき。李嶠詩「—隨レ風擲、馬飛、惹煙無二力投一風散」

【狂態】キャウタイ　きちがひじみたるやうす。陶潛文「尙未レ除二於—一」

【狂濤】キャウタウ　さかまく大なみ。僧齊己詩「—顚浪高漫漫」‖狂浪・狂瀾。

【狂癡】キャウチ　氣がくるひておろか。黃庭堅詩「人生會面難、取レ醉聽二—一」

【狂佞】キャウネイ　きちがひじみてかるがるし。

【狂朝】クワウテウ 無法にあざける。白居易詩「一一更讒ㇾ誰」

【狂蜂】クワウホウ くるひとぶてよ。陸游詩「一一入ㇾ書幃」

【狂顧】クワウコ きちがひ、顧・顧通ず。張籍詩「聞ニ客語ㇾ秘知ニ貳賊ニ對ㇾ花欷歔似ニ一一」

【狂奴】クワウド 氣のくるひたる男で世說、規箴「殷子慢與ニ侯司徒一書曰、君房足下、位至ニ鼎足ニ甚善、懷ㇾ仁輔ㇾ義、天下悅、何謀順ㇾ旨、腰領絕、侯得ㇾ書、封奏ㇾ之、帝笑曰、此ニ一故態」

【狂童】クワウドウ きちがひじみたるわらべ。詩經「一一之狂也且」＝惡少。

【狂馬】クワウバ 氣のくるひたる馬。淮南子「一一不ㇾ顧ㇾ木、猶狗不ニ自投ニ於河ニ」

【狂妄】クワウマウ くるひて道理にはづれる。

【狂暴】クワウバク あらあらしく亂暴なり。

【狂夫】クワウフ 氣のくるへるをとこ。史、淮陰侯傳「一一之言、聖人擇焉」＝狂人。

【狂風】クワウフウ 勢はげしきかぜ。杜甫詩「霹靂因雨發ニ一一ニ」

【狂物】クワウブツ 物くるはしくはしいまま。晉書、前梁戰記「此兒ニ一一、宜ニ早除ニ之」＝狂悖・猖物。

【狂悖】クワウボツ くるひもとる。國語「有ニ一一之言ニ、有ニ眩惑之明ニ」

【狂奔】クワウホン ○くるひはしる。○或る目的の爲めに、熱心に奔走する。

【狂樂】クワウラク 酒をいふ。晉書、裴楷傳「足下飮ニ人一一、貴ニ人正醒ニ、不ニ亦乖ニ乎」

【狂亂】クワウラン 氣がくるひみだれる。漢書、五行志「一一無道」

【狂瀾】クワウラン 勢のたけりくるふなみ。次條參看。

【顚ニ狂瀾於既倒ニ】テンクワウランヲキタウニス 時勢の衰へたるを挽回するに喩ふ。韓愈、進學解「尋ニ墜緖之茫茫ニ、獨旁搜而遠紹、障ニ百川ニ而東ㇾ之、——」＝起ㇾ衰。

【狂惑】クワウワク くるひまどふ。荀子「夫狂與ㇾ惑者、聖人之戒也」

【狀】ジャウ 俗字

○かたち（形）すがた、さま、なりふり（形態）「一態」「形一」「奇一」「一貌」「千態萬一」○おもむき、ありさま（情勢）「情一」○てがみ、かきつけ（牒）「書一」又、特に訴狀「告訴一」○ありさまを陳述する。莊、德充符「自ニ其過ニ」○形容する「名一」

語法 犬に从ひ爿の聲、形の相似たるは犬に若くはなし、故に犬に从ふ。

【狀況】ジャウキャウ やうす、ありさま。

【狀元】ジャウグワン 進士の試驗部ち高等官試驗に及第して第一番となりし者。晉書「放榜後、一一以下、到ニ主司宅門ニ下ㇾ馬」＝狀頭。

【狀元紅】ジャウグワンコウ ○酒の名、紹興酒の陳くして三年に至りし者の稱。○果の名、荔枝ㇾの異名。○紫茉莉の異名「陶朱公書」

【狀元三場喫著不ㇾ盡】ジャウグワンサンヂャウキッチャクフヅンメ 鄭試・省試・廷試の三場の試驗に、曾第一番になりし者は一生衣食に困らず「宋史」

【狀字】ジャウヂ 諂副阿。

【狀師】ジャウシ 代言人、辯護士。

【狀詞】ジャウシ 圖訴訟書類。＝狀子。

【狀態】ジャウタイ ありさま、やうす。

【狀頭】ジャウトウ 狀元に同じ「南部新書」

【狀貌】ジャウバウ かほかたち。史、高祖紀「呂公者好ㇾ相ㇾ人、見ニ高祖ニ一一、因重敬之ニ」＝容貌・容狀。

【狃】ヂウ 有 宥

なる、なれる、なれなれしくする（狎）ならふ（習）

【狃ㇾ恩】ヂウオン おんになれて何とも思はず。後漢書、陳忠傳「陛下每引ㇾ災自厚、不ㇾ責ニ臣司ニ一一、莫ニ以爲ニ負」注「狃、習也」

【狃習】ヂウシフ なれならふ。王安石文「上一一而知ニ其事ニ、下服則而安ニ其教ニ」

【狆】チュウ 東

○種族の名、貴州・廣西・雲南地方に住む獰族。＝仲。○圖ㇾ犬

（狗ㇾ犬と猫との中間に在る意。＝佛林狗。

【狄】テキ 錫

○えびす、北方の獰族「北一」○廣く野蠻人をいふ「夷一」「戎一」○とほし（遠）＝逖。○のぞく、はらふ。又、をさむ。○位卑しき伶人。○體大いにして力すぐれたる鹿。○諸侯の夫人の衣、翟に通ず。○音聲の疾き貌。禮、樂記「一成樂濫之音作」

【狄牙】テキガ 春秋の時、滋味を知るを以て齊の桓公に仕へし易牙の別稱。論衡「一一調ㇾ讒、肴無ニ滿味ニ」

【狄仁傑】テキジンケツ 字は懷英、大原の人、則天武后に仕へ同平章事たり、張東之・姚宗等の賢を薦む、嗣聖十七年卒す、年七十一、中宗の時、梁國公に追封せらる。

【狄鞮】テキテイ 西方の野蠻國の通譯官。禮、王制「東方曰ㇾ寄、南方曰ㇾ象、西方曰ニ一、北方曰ㇾ譯」

【狁】ヘン 元

めぐる、又其のさま、連一は宛轉の貌。

五畫

【狖】 イウ 宥

ましら、をながざる、黒ざる「猿ー」「猱ー」＝狨。

【狎】 カフ 洽

○なら(習)ならふ、事に習熟する。周語「未ー君政」○ちかづく(近)○ならす、己に近づけ親しましむ。○なれあなどる、かろんず(輕)論、季氏「ー大人」○もてあそぶ(玩弄)たはむれる(戯)○かはるがはる(更代)交互に。左、襄二七「晉楚ー主諸侯之盟也久矣」

同訓異字 狎・褻・嫉・馴・擾○狎はなれなれしく、なじむ義。禮記「賢者狎而敬之」○褻は私服なり。轉じてなじみて心安くする義とす、褻御は近習の臣をいふ。○嫉は褻と同じ。漢書、枚乘傳「以故得ニ嫉媚貴幸一」○馴・擾の二字は共に、鳥獣の人になれるをいふ。淮南子「馬先馴而後求レ良」漢書「劉累學レ擾レ龍」

【狎愛】アフアイ なれあいする。又、其のなれ愛せられる者。北史、崔暹傳「隨權王孝友、被ニ文襄一ー、數獣ニ舞戯三讓於前一」＝愛狎・暱愛。

【狎客】アフカク 人のもてあそびになる者、たいこもち(幇閒)陳書、江總傳「被ニ狎ー一」

【狎近】アフキン なれちかづく。韓偓詩「燕侠冰霜難ニー一」＝狎昵。

【狎翫】アフグワン 侮り玩ぶ。左、昭二十「水濡弱民狎而翫レ之、則多死焉」

【狎獣】アフジウ なれたるけもの。沈炯詩「馴烏逐ニ飯響一、ー一親ニ讌林一」

【狎邪】アフジヤ 心がよこしまにして悪になれる。又其の人(胡銓、上ニ高宗一封事)

【狎褻】セフセツ みだりがはしくけがれる。＝猥褻。

【狎昵】ガフヂツ なれしたしむ。晉書、桓伊傳「惟ー一諂邪一」＝狎暱・狎近。

【狎侮】アフブ なれあなどる。晉經「ー一君子一」

【狎弄】アフロウ なれたはむれる。白居易詩「官舍可ニー一、曾煩聊激瀧」

【狊】 ケキ 錫

○犬の物を視る貌。○猨の屋。○烏の兩翼を張る貌。

【狒】 ケツ 月

獣が驚きはしる貌。禮、禮運「故獣不ー」

【狐】 コ 虞

きつね、野獣の一、犬に似て小、毛は黄褐色にして尾太く、口尖る、性疑多くして狡猾なり。＝野干。

同訓異字 狐の性疑多し、疑へば以て類を含すべからず、故に才に从ひ狐の省に从ふ。

【狐貉】コカク きつねと、むじなと、其の皮は、上等の裘と爲す。論、子罕「衣ニ敝縕袍一、與ニ衣ー一者ー立而不レ恥者、其由也與」

【狐疑】コギ 狐の如くうたがひ深くして決せず、狐の性疑深く、冰河を渡るに且つ聽き且つ渡る故にいふ。史、淮陰侯傳「孟貢之ー一、不レ如ニ庸夫之必至一也」

【狐裘】コキウ きつねのかはごろも。禮弓「有若曰、晏子一ー三十年、晏子希知レ禮」

【狐裘而羔袖】コキウニンテカウシウス きつねのかはごろもは美なれども、小羊を以て袖となすは惡し、一身盛く善にして、少しく惡しき所あるに喩ふ。左、襄十四「余ー」

【狐裘蒙戎】コキウモウジウ 狐裘は狐のかはごろもにして貧人の服、蒙戎は亂れる貌。以て貧人の慌亂するに喩ふ。詩、邶風「ー、匪ニ車不ニ東、叔兮伯兮、靡ニ所ニ與同一」左、僖五には戴戎を差牟に作る。

【狐臭】コシウ わきが。＝腋臭・胡臭。

【狐鼠】コソ 二者皆陰獣、よりて小さき惡賊に喩ふ。柳宗元、行路難「須臾力盡道傍死、ー一蜂蟻爭噬吞」

【狐兎】コト きつねと、うさぎと。參同契「燕雀不レ生ニ鳳、ー一不レ乳レ馬」

【狐白裘】コハクキウ きつねの腋下の白き毛を集めて製せしかはごろも。史、孟嘗君傳「有ニ一ー一直千金、天下無レ雙」

【狐媚】コビ 巧にこびて人を惑はす。晉書、石勒載記「數ニ他孤兒寡婦ニー一以取ニ天下一」

【狐憑】コヒウ きつねつき。＝狐祟・狐魅。

【狐王廟】コワウベウ 俗にいふ稲荷のやしろの類「行書雜綠」

【狐惑】コワク うたがひまどふ。元稹詩「ー一意顛倒」

【狐涉レ尾】コセフビ 小狐が水を渡らんと、勇み進みて尾をぬらししも、遂に濟ること能はず、以て事に當りて妄りに進むも、遂に成らざるに喩ふ。易、未濟「小狐汔濟、濡ニ其尾一、无レ攸レ利」

【狐埋レ之而狐搰レ之】コマイコレヲシテコクツコレヲ 忽ち事を成して、又、忽ち破るに喩ふ。吳語「諺曰、ー一、是以無ニ成功一」

【狐死兎泣】コシトキフ 物の其の類を傷むに喩ふ。宋史「ー一、李氏滅、夏氏寧獨存」＝兎死狐悲。

【狐死首レ丘】コシカウキフ ○狐は死してなほ己の棲みし丘に首を向ける。本を忘れざるに喩ふ。檀弓「狐死、正丘首仁也」○故郷を思ふにいふ。楚辭「鳥飛反ニ故郷一兮、狐死必首

レ丘」

【狐假二虎威一】コケツトラカル　狐が虎の威を假りて他獸ををどす。轉じて君主の威をかりて、弱者ををどすに喩ふ。戰國楚策「獸見レ之皆走、虎不レ知二獸畏レ己而走一也、以爲畏レ狐也」

【狗】コウ　ク　有

いぬ、犬は大、ーは小。曲禮「尊客之前、不レ叱レ狗」

【狗魚】コウギョ　山椒魚サンセウウオの異名。＝鯢。

【狗鼠】コウソ　○いぬと、ねずみと。齊民要術「不レ得レ使二ーー近一レ之」○いやしき小人に喩ふ。

【狗盜】コウタウ　小ぬすびと。史、孟嘗君傳「客有下能爲二ーー一者上」

【狗猪不レ食二其餘一】ソノコウクワヲクハズモ　不義の人は、犬豕も其の人のくひさしの肉を食はず、甚だしく鄙む辭。漢書、元后傳「人如レ此者、ーー」

【狗吠】コウハイ　いぬと、ぶたと。孟、梁惠王「雞豚ーー之畜、無レ失二其時一」＝狗豕・犬豕。

【狗居】コウキョ　いぬをはふる。又、いぬこるし。史、刺客傳「家貧客游、以爲二ーー一」

【狗偸】コウトウ　狗盜に同じ。李尤、函谷關賦「文驩レ齊而懼レ追、聽二雞鳴於ーー一」文は孟嘗君の名。

【狗盜】コウタウ　○いぬと盜と。玩好の物をいふ。戰國策「馮煖曰、臣竊計、君宮中積二珍寶一、ーー實二外廐一、美人充二下陳一」○臣が君に對して自ら謙するの辭。漢書「臣常有二ーー之心一」

【狗吠】コウハイ　いぬの吠える聲。孟、公孫丑「雞鳴ーー之聲相聞、而遠二乎四境一」

【狗尾草】コウビサウ　莠ユウの一名。

【狗尾續貂】コウビゾクテウ　善美なるものに續ぐに、粗惡なるものを以てするに喩ふ。趙王倫の黨みな卿相にのぼり、奴卒に至るまで爵位を得たるを、時人譏りて「貂不レ足狗尾續」といひし故事「晉書、趙王倫傳」に本づく、貂蟬は侍中の冠、貂ヲの尾にて作り、蟬の羽を附けて飾とするもの。

【狗武】コウブ　胡蘇ゴソの異名。本草「胡蘇、一名ーー」

【狗蚤開】クサウヒラク　蚤の咬けたるを載れていふ、狗蚤は犬くぐり。世說、排調「張吳興年八歲船レ齒、先遽知二其不レ常、故戲レ之曰、君口中何爲開二狗竇一、張應レ聲答曰、正使下君鑽レ從二此中一出上」

【狗毒】クドク　まちんの一名。爾雅、注「駮赤名ーー一」＝馬錢。

【狗肉】コウニク　いぬのにく。無門關「懸二羊頭一賣二ーー一」

【狙】シヨ　鉏

○てながざる。○ふしてねらふ、うかがふ（伏伺）「一擊」

【狙擊】ソゲキ　ねらひそこなふ。唐書、虞紀傳「ーー陰謀、天下無レ不二痛憤一」

【狙獲】ソクワク　ねばざる。北戸錄「大猿則ーー猱狖之類」

【狙撃】ソゲキ　ねらひうつ。史、留侯世家「真與レ客ーー滄海君博浪沙中一」

【狙公】ソコウ　猿を愛ふ者、猿まはし。莊、齊物「ーー賦レ芧、朝三而暮四、衆狙皆怒、然則朝四而暮三、衆狙皆說」說は悦コフ

【狙詐】ソサ　ねらひうかがふ。唐書、鄭覃傳「ーー中國一」＝狙伺。

【狙猱】ソコウ　さる。張九成詩「登山不レ須レ扶、跳梁逐ーーー」

【狙伺】ソシ　さるの物を伺ふ如く、ひそかにうかがふ。唐書、陸贄傳「畧二數百卷一、瞻者頗盲下其挾二兩端一有二所ーーー一」＝狙候。

【狙縛】ソバク　ねらひてしばる。唐書、王潮傳「伏二叢棘一ーーー王緒一以徇」

【狌】セイ・シャウ　㊀　セイ・シャウ　㊁　庚　敬

㊀しょうじょう。＝猩（犬部九畫）㊁いたち、鼠の屬。莊、秋水「騏驥驊騮、一日而馳千里、捕鼠不レ如ーー」＝鼬。

【狷】ケン　銑

偏ーは猿に似て頭は狗に類する獸の名。

【狛】ハク　陌

○狼に似たる獸の名。○國こま、こまいぬ（高麗犬）

【狉】ヒ　支

○たぬきの子。＝狸。○ーーは獸の走る貌。柳宗元、封建論「麋豕ーー」

【狒】ヒ　未

○ーーは人に似たる獸の名、猿の一種、ひひ。＝山都・梟羊。國○猿の甚だしく年を經たるもの、やまわらは。○淫慾の盛んなる人をいふ。

【狒】ヒ　支

ーー猖はわがままにふるまふ、一說、とびあがる（飛躍）

六畫

【狡】カウ　巧

○わるがしこし（狡）ずるし「ー兎」「ー猾」○くるふ（狂）もとる（戻）○とし、すばやし。○まじる、まじはる。○みだる

（狡）そこなふ（害）○貌のみ美くしくして心がよこしま。○すこやか（健）○獣の名、こいぬ。

【狡悪】カウアク わるがしこし。又、其の者。

【狡吏】カウリ 滑夫論「雖レ積ニ一ー一爭ニ毫之一」

【狡黠】カウカツ わるがしこし。魏志、鄧艾傳「詔曰、姜維ー一、四土不レ寧」

【狡猾】カウクワツ わるがしこし。前史、齊廢帝紀「放レ鷹走レ狗雖ニ一ー一ー」＝狡猾。

【狡猾】カウクワツ わるがしこく詐多し。左、昭二六「無レ助ニ一ー一ー」

【狡獪】カウクワイ わるがしこくいつはり多し。唐書、伏威傳「一ー多レ算」＝狡詐。

【狡詐】カウサ わるがしこくくしてうそをつく。＝狡獪。

【狡算】カウサン わるがしこきはかりごと。唐思道文「女奴陸氏、出レ自ニ掖庭一、因智一ー、舉世無レ匹」＝狡計。

【狡獣】カウジウ わるがしこくつよきけもの。西京雜記「好騎ニ駿狗一逐ニ一ー一」

【狡逸】カウイツ わるがしこくすばやし。曹植詩「一ー過ニ駿騏一」

【狡智】カウチ わるがしこき智慧エ

【狡童】カウドウ わるづよきむし。淮南子「一ー死、顧民生」

【狡慝】カウトク ずるくしてよこしまにして害を爲す。禮記、食貨志「清吏ー一、敢瀾百端」

【狡童】カウドウ わるがしこきわらべ。詩、鄭風「不レ見ニ子充一乃見ニ一ー一ー」解に、弱のみ好くして誠實なき童。

【狡悪】カウアク わるがしこし。謝莊文「呪ニ近ー一、取ニ誅射虎一」

【狡兔三窟】カウトサンクツ 身を託する地三ありて僅に生を保つを得るに喩ふ。戰國齊策「狡兔有ニ三窟一僅得レ免ニ其死一耳、今有ニ一窟一未レ得ニ高レ枕而臥一也、請爲レ君復鑿ニ二窟一」

【狡兎死走狗烹】カウトシソウクコウル わるがしこきうさぎ死すれば、不用となりし獵犬は煮て食はれる。戰國亡ぶる後は、功臣は誅せらるるに喩ふ。史、越世家「飛鳥盡良弓藏、――」

【狡猾】カウクワツ わるくもてあそぶ。齊書、王融傳「一ー一ー慶勢一專二行權利一」

【狢】カク 篠

むじな。狸に似たる獣、鼻尖り毛深くして穴居す。＝貉。

【狙】クヮン 寒 元

まみ、あなぐま、貉ムジの屬。＝貆。

【狠】㊀ゲン・ゲン ㊁ギン・ゴン ㊂コン 阮 眞 剛

㊀犬の鬪フ擊。㊁もとる、ねぢける（戻）＝很。○甚、又、極至の義、一好ハウは甚だ好し。

【狠悪】コンアク 心ねぢけてはしいまま。唐書、武后傳「一ー快快」

【狠愎】コンヒツ もとりねぢける。文心雕龍、孫楚ー一而駁レ府」

【狠戻】コンレイ ねぢけもとる。北史、蘇威傳「其性ー一」

【狩】シウ 有

○かり（獵）○特に冬のかり、地を守り草を燒きて狩る（火田）○かる、かりを行ふ。○命を受けて守る所、任地。巡ーは天子が守る所の領地を巡る。＝守。孟、梁惠王「巡ー者巡レ所レ守也」

周漢隸釋 狩・獵・苗・田・蒐・獮の別は蒐（一六六頁二段）の字解參看。

【狩人】シウジン かりうど。魏文帝詩「一ー獣ニ佳食一」＝獵人。

【狩田】シウデン かり、冬のかり。周禮「中冬教大閲（中略）遂以ー一」

【狩獵】シウレフ かり。詩經「不レ狩不レ獵」

【狩衣】シウイ 園古の官服の名、まるえりにて袖にくくりあり、袴は指貫を用ふ、もと鷹狩・鍬鞠などに著用せしもの。

【狗】

狗（イ部六畫）の俗字。

七畫

【狹】カフ ゲフ 通音 ケフ

○せまし（隘）廣の對。○せばむ、せばまる、せましとす。書、咸有一德「無自廣而ー一人」

周漢隸釋 狹・陿・褊・陋○狹は廣または闊の反なり。史記「地狹人寡」心のせまきにも用ふ。○陿は寬の反なり、狹なり、隘なり、天地陿の類。○褊は衣服の身はばのせまきなり。轉じて土地または心のせまきにも用ふ。左傳、衞國褊小、老夫寵交。○陋は物の間のせまきなり、谷間などの迫りてけはしく、せまきにいふ、險陋・峽陋と熟す。轉じて心のせまきにも用ふ、猶陋は猶介にして寬容の量なきなり。

【狹呢】カフヂ 土地せまし。唐書、郭子儀傳「地ー一」＝狹隘。

【狹隘】カフアイ せまし。＝陋隘・狹呢。

【狹韻】カフイン 字數の少き韻。術瑣新論「退之詩、好押ニ一ー一、累句以示レ工」＝險韻。

【狹軌】カフキ 鐵道のレールの幅が三フト六インチ以内のもの。廣軌の對。

【狹義】カフギ 範圍をせまく限定して見たる意味、例へば仁を廣義に解すれば道德の全體をいひ、一ーに解すれば義・禮・智と對して道德の一

部分とする類。

【狭隘】キョウアイ　せまきこみち。盧照鄰詩「平川看二釣倡一ー開二機唱一」

【狭窄】キョウサク　せまし、狭・窄同義。

【狭斜】キョウシャ　もと長安の曲巷の名にして娼婦の居る所。轉じて遊里卽ち花柳街の義とす。古樂府「長安有二ー一道狭不レ容レ車」

【狭小】キョウショウ　せまくしてちひさし。左、昭三二、注「咸陽ー一故謂レ城之」孔叢子「魏國ー一、乏二於賢一」‖褊小・窄小。

【狭溢】キョウイツ　土地がせまくしてやせる。史、貨殖傳「此地ー一、乃至二澤遷一」

【狭量】キョウリョウ　度量がせまい、狭小なる度量。

【狭陋】キョウロウ　せまくしてきたなし。後書、鄭紹叔傳「宅巷ー一不レ容二輿駕一」

【猘】セイ　㊀キ　㊁シ　霽　紙　支

㊀ぶた（豕・猪）列、黄帝「食ー一如レ食レ人」‖猘。㊁太古の帝王の名。非、外物「ー一韋氏」

【猉】ギン　文

犬、狺に作る

犬があらそふ。‖狺。

【猉猉】ギンギン　犬の爭ひ吠える貌。楚辭、九辨「猛犬ー一以迎吠兮」

【猟】ケン　先　厳

又、獫に作る

○せまし、きみじかし（下急・褊急）「ー一急」○かたし（介）かた意地といはれる程に堅く義を守り恥を知りて僞さざる所あり「狂ー一」論、子路「ー一者有」所レ不レ爲也」

【猟隘】アイ　心せまくきみじか。南史、劉湛傳「江夏王義恭、性甚ー一、欲レ專二政事一、每毎レ決所レ裁」‖褊隘。

【猟介】ケンカイ　操守堅くして苟も人と合はず。晉語「小心ー一、不二敢行一也」

【猟急】ケンキュウ　心せまくきみじか。後漢書、范升傳「以二ー一不レ能レ從レ俗」‖卞急。

【猟狭】ケンキョウ　きみじかにて心せまし。晉書、王豪傳「性ー一、不レ能レ和レ俗」

【猟忿】ケンフン　心狹く急にしていかり易し。舊唐書、王遂傳「遂性ー一、不レ容二大過一」

【猟慎】ケンシン　心狹くしていきどほり易し。歐陽修、亳州乞致仕表「臣既非ー一以肆二一朝之忿一、又非二矯激而希二高世之名一」

【猟尻】ケンコウ　心せまくしてもとる。南史、宋前廢帝紀「梁業都懈、ー一日甚、何以頓圖乃爾」

【猴】サン　㒳

しし（獅子）

【猴下】サンカ　㊥高僧を呼ぶ敬稱、閣下の類。猴は獅子座ダンの義、佛の坐する牀座。

【猴猊】サンゲイ　からしし。爾雅、穆天子傳「ー一野馬、走五百里」‖獅子。

【猴座】サンザ　前條に同じ「爾雅」

【狽】バイ　泰

○狼の屬。○狼ーバイはあわてる、狼（本義）を見よ。

【狴】ヘイ　斉

○のいぬ（野犬）○ひとや、をり（牢・監獄）

【狴犴】ヘイガン　○獣の名、のいぬ、狂犬。潘緬頬書「ー一好レ訟、形二獄門上一」○轉じてひとや。易林「失意懐レ憂、如レ幽ー一」こ犴は鄉の牢。‖陛阡。

【狴牢】ヘイロウ　ひとや。杜甫、有レ事於南郊一賦「叢棘垓而ー一傾」

【狼】ラウ　陽

○おほかみ、犬に似て頭鋭く、頬白く、口大きく、性猛き野獣。○轉じて狼の如く物を害する「豺ー一之心」○ー藉・ー戻はみだる（亂）○星の名。

【狼煙】ロウエン　のろし、狼の糞を用ひて作るといふ。西陽雜俎「邊亭烽火、用二狼糞一、以二其煙直上、風吹不レ斜也」狼火參看。玉海「庸至必擧ー一ー一こ」‖狼烟。

【狼抗】ロウコウ　狼の如く心あらく人にさからひあたる。晉書、周顗傳「顗曰、處仲剛愎强忍、ー一無レ上、其意寧有」限耶」‖狼戾。

【狼藉】ロウセキ　つよくたてこもる。沈約文「沈攸之ー一陝西」

【狼火】ロウカ　のろし、狼の糞を加ふる時は風吹くと雖も、煙直上するといふ。‖烽火・狼煙。

【狼戾】ロウレイ　おほかみと、とらと。無道にして慈深く、他を害する者に喩ふ。漢書、趙皇后傳「失二婦道一、無二進養之禮一而有ー一之過一」‖戾狼。

【狼顧】ロウコ　○狼はよく後を顧る性あるにより、人の恐れてみかへるにいふ。史、蘇秦傳「秦嬴之ー一恐二韓魏之圖二其後一也」○人相の名、狼の如くに後方をふりかへることの出來る首。晉書、宣帝紀「聞レ有ー一之相、欲レ驅レ之、乃召使二前行一、令二反顧一、而正向レ後而身不レ動」

【狼吼】ロウコウ　狼の如く大いにほえる、酷吏などの大いに怒り呼ぶ形容の雅伯易文「所レ過之邑、鷙視ー一」

【狼疾】ロウシツ　狼はよく顧る、病めば能はず、以て人のよく身を顧ること能はざる者に喩ふ。孟、告子「養二其一指一而失二其肩背一而不レ知、則爲二ー一人一也」

【狼心】ロウシン　狼の如く欲ふかき心。宋百敎文「念二寡關之百二離一湿ー一、

笑二齊客之三千不如二雖口一」

【狼子野心】ラウシ　狼は之を飼らさんとするも、心山野に在りて馴れがたし、以て馴れがたき心、謀叛の心、凶暴の人に喩ふの左、宣四「叔向母謂二伯石一曰、是狼之餘也、――」

【狼唳】ラウ　狼の如くかむ、烈しくをかす。北史、隋煬帝紀「高麗僻二居荒裔一、鴟張――、侮慢不恭」

【狼藉】ラウ　○とりちらしてある義、藉は物事のどたばた亂れる義、一說に狼の草を藉きて寢たるあとの甚だ亂れるによりていふ。史、滑稽傳「履舄交錯、杯盤――」○國　亂暴の義「――者」

【狼跋】其胡二跋レ其尾一　ラウバツキコフビヲフム　進退ともに躓跌するをいふ、跋は躓、胡は頷の下に垂れる肉、或は頸なり、意は狼の老狼には胡あり、進みては其の胡をふみ、退きては其の尾につまづく（詩、豳風、狼跋）

【狼貪】ラウ　狼の如くむさぼる。韓愈文「羊羹――、以口覆レ城」

【狼吞】ラウ　狼の如く貪り呑む。魏鐵論「辭レ小取レ大、無厭――」

【狽狙】バイ　○うろたへあわてる。西陽雜俎「或言――是兩物、狽前足絕短、每レ行、常駕二於狼腿上一、狼失レ狼則不レ能レ動、故世言二事狼狽一者一一」世說「仲智――來」○つまづく、顚躓困頓。李密、陳情表「臣之進退、實爲二狼狽一」

【狼尾】ちからぐさ。爾雅、疏「草似レ茅者、一名雚、一名――」

【狼藉】ラウ　狼の如くもとりてあらし。王融疏「人面獸心、――蜂蠆」

【狼戾】ラウ　○狼の如く心ねぢけて道理にもとる。戰國策「趙王之一無レ親、大王之所二明見一知一也」○亂れて多くある。孟、滕文公「粢盛秩秩乎――」

【狸】リ　支

たぬき、野獸の一、體薄黑く、口尖り、尾太し「狐――」＝貍。

【今狸執二鼠】ラウリシツソ　狸は狸奴、貓の異名、貓に鼠を捕へしむ、才能に應じて人を使ふに喩ふ。韓非子「使二雞司一レ夜、――、皆用二其能一、上乃無レ事」

【狸奴】リド　貓の異名。羅大經詩「隨室偏遊二黠鼠一、――雖レ小策レ勳奇」

【狸毛筆】リマウ　たぬきの毛の筆。唐書、歐陽詢傳「以二狸毛一爲レ筆、覆以二兎毫一、管皆堅勁、非レ是不二得書一」

八畫

【猗】（一）イ　支　（二）ア　（三）イ　紙　（四）イ　寘

（一）ああ、歎美の辭。○ながし。○――はうるはしくさかん（美盛）なる貌。○よる（依）○さざなみ。詩、魏風「河水清且漣――」＝漪。○調子をととのへるため、語尾におく辭。書、秦誓「斷斷――」＝兮。（二）やはらか、すなほなるさま「――儺」（三）くはははる（加）○樹木などのしなやかなる貌「――靡」（四）つく（相附著）

【猗猗】イイ　○美くしく盛んなる貌。詩、衞風「綠竹――」○ながき貌。宋賦「微風條暢、漸漸――」

【猗蘭】イラン　草木のしげる貌。世說「綠柯――、枝幹扶疎」

【猗歟】イヨ　歎息のこゑ。詩經「――盛哉、頌而長兮」＝猗與。

【猗氏】イシ　縣名。漢代に置く、今の山西省河東道に屬す。

【猗儺】イダ　すなほになよらか、柔順の貌。詩、檜風「隰有二萇楚一、――其枝」

【猗狔】イク　○たをやか。廣韻「――猶二委曲一」＝婀娜。○柔弱にして下垂する貌。漢書「又――以招搖」

【猗頓之富】イトンノ　巨萬の富をいふ、猗頓は春秋時代の魯國の大富豪。賈誼、過秦論「非レ有二仲尼・墨翟之賢、陶朱・――一」

【猗靡】イビ　○しなやかによりなびく貌。史、司馬相如傳「扶輿――」○女子のしなやかなる形容。阮籍詩「――情歌愛、千載不二相忘一」

【猗與】イヨ　ああ、感歎の聲。詩、周頌「――漆沮」＝猗歟・猗嗟。

【猗蘭操】イランサウ　琴曲の名、孔子の作なりといふ。琴操「孔子歷二聘諸侯一、諸侯莫二能任一、自レ衛反レ魯、幽谷之中、見二香蘭獨秀一、歎曰、夫蘭當レ爲二王者香一、今乃與二衆草一俱生、乃止レ車援レ琴鼓レ之、作二――一」＝幽蘭操。

【猓】ゲイ　霽

○猴の一種、をなかざる。＝果然。○――羅は崇南・貴州・雲川等に居る蠻人の一種。＝羅羅。玃羅。

【貌】ゲイ　霽

獅――は獅子の屬。

【貌下】ゲイカ　高僧を呼ぶ敬稱、獅子座の義にて、佛の坐する牀時、佛は人中の獅子なりとの意に本づく。轉じて高僧の座席。

【貌座】ゲイザ　佛の座。魏收倫詩「――蘭麝氣、皐比寫二餘連一」＝獅子座。

【猜】サイ　灰

○うらむ、うらみそこなふ（恨賊）ねたむ、そねむ。○うたが

ひうらむ(疑恨)左、僖九「綢俱無い」〇おそる(懼)〇もとる(狼)〇おしはかる(揣測)「一測」「一度」

【猜畏】サイ　それみおそれる。後漢書、呂布傳「每懷ニ一一一、行止常以ノ布自衛」

【猜意】イ　それむこころ。李商隱詩「不ノ知府氣民義味、一一意難竟未ノ休」

【猜忌】キ　それみうらむ。北史、周宣帝紀「擁ニ戸近臣ニ、多ノ所ニ一一ニ」〇猜恨。

【猜害】ガイ　それみてそこなふ。陶弘景文「恩報讎ノ愛貧仙異ニ而内疑ニ一一」

【猜忌】キ　人の才能などをそねみいむ。後漢書、申屠剛傳「王莽專ノ政、朝多ニ一一ニ」〇疑忌。

【猜疑】ギ　それたみうだがふ。

【猜毀】キ　それみそしる。皮日休、口箴「一息之波、波ニ千無垠、一一之言、如ノ臨ニ帝閽ニ」

【猜懼】グ　うたがひおそれる。周書、王褒傳「被ノ閣之日、上下一一」

【猜防】ボウ　互にそねみて仲あし。宋書、劉湛傳「崇敬甚、相感説、及ニ俱被ニ時遇ニ一一漸生」

【猜拳】ケン　拳をうつ、酒間の遊戯。東皐雜錄「唐人詩有ノ城頭擊鼓傳ニ花枝、席上搏ノ拳握ニ松子ニ句ニ乃知酒席ニ一爲ノ戯、其來已久」

【猜嫌】ケン　それみきらふ。魏志、賈詡傳「慴」見ニ一一ニ、閉ノ門自守」李洞、贈江流父詩「數尺寒絲一竿竹、登知浮世有ニ一一ニ」〇猜疑。

【猜險】ケン　他人をそねみ害する、猜疑にして陰險。唐書、劉文靜傳「文靜多ニ權譎ニ而性一一」

【猜作】サク　それみさかふ。徐陵文「共ニ一一ニ設ニ、誰云ニ一一ニ」

【猜狠】コン　それみうらむ。元稹詩「君心半夜一一生」

【猜戒】カイ　それみうたがふ。李商隱詩「一一誰先設、三朝事始平」

【猜鬆】ソウ　それみて氣づよし。唐書、高祖諸子傳「元吉一一好ノ兵」

【猜謂】イ　それみそしる。唐書、魏徵傳「設使未ノ爲、一一過行」

【猜阻】ソ　うたがひはばむ。博雅「一一疑也」陸游詩「大度寧一一」〇疑阻。

【猜憚】タン　それみはばかる。後漢書、宦者傳論「無ニ一一之心」

【猜恕】ジョ　それみて無慈悲なり。史、吳起傳「起之爲ノ人也、一一人也」

【猜謗】ボウ　それみそしる。黄庭堅詩「漫欺貧ニ一一ニ漫官來ニ諂諛ニ」

【猙】サウ　庚

〇あらあらし。〇豹に似て一角五尾ある獣の名。

【猙獰】ダウ　〇あらあらしくにくらし。魔異記、容貌一一」〇凶惡。〇犬の毛。

【猖】シャウ　陽

たけりくるふ、あばれる(狂駭)「披一」

【猖狂】シャウキャウ　はげしくくるふ。晉、山木「一一妄行」〇猖狂・猖獗・狂猖。

【猖獗】シャウケツ　〇ほしいままにして勢さかんなり。字彙「賊勢一一」〇かたむきくつがへる、獗は蹶に通ず。蜀志、諸葛亮傳「智術淺短、遂用一一」通鑑に、獗を蹶に作る。一解に狂肆

【猖蹶】シャウケツ　たけりくるふ、蹶は蹶。說苑、設疑「良臣而亡、先人餘殃也、一一而活、先人餘烈也」

【猖蹶】シャウケツ　前條に同じ。

【猖披】シャウヒ　氣たけりてはげし。蜀志「一一好爲ニ清議ニ」

【猟】セイ　霽

きちがひいぬ(狂犬)〇獅。

【獅犬】シイ　きちがひいぬ。李商隱詩「城中一一憎ニ顒佩ニ」〇劉狗。

【猝】ソツ　月　卒に通ず

にはか(暴疾)だしぬけ(唐突)あわただし(急遽)「倉一」

同訓異字　猝・卒・遽・倥・驟・暴・忽

の別は遽(走部十三畫)の條を見よ。

【猝嗟】サ　にはかに發する嘆辭。漢書、韓信傳「項王亶鳥一一千人皆廢」注「一一暴猝嗟也」史記には叱咤に作る。亶鳥は悲怒の聲。

【猝然】ゼン　にはかなる貌。〇卒然・倥然。

【猛】バウ　梗　ミャウ　耕

〇たけし、あらあらし、つよし「勇一」「一士」「獰一」「一犬」〇きびし(嚴急)寛の對。左、昭二十「有ノ德者能以ノ寛服ノ民、其次莫ノ如ノ一」〇ひどい(殘酷)檀弓「苛政一於虎」〇あし(惡)「一惡」

【猛惡】アク　〇たけくしてあし。〇勢甚だはげし。文選「風勢一一由ノ此激」

【猛威】イ　勢がたけだけし。

【猛雨】ウ　はげしきあめ。温庭筠詩「夜闌ニ一一驚ニ花落ニ」〇甚雨。

【猛鷙】シ　たけくするどし。吳志、孫策傳評「一一冠ニ世」

【猛悍】カン　たけくつよし。段克己詩「東山氣象太一一」

【猛氣】キ　たけきこころ。儲光羲詩「銳士千萬人、一一如ニ熊羆ニ」

【猛念】ネン　たけくきびし。北史、劉貴傳

「挙性――、賞尤厳峻、多懐二粛心一」【猛禽類】ハヤブサ 性あらくして他の動物を捕食する鳥の総称。鷲・鷹の類。‖猛禽類。

【猛炬】タケビ 火の盛んなるたいまつ。南史、王懿伝「夜行忽見二前有一―一導レ之、乗レ火行百里許、乃免」‖烈炬。

【猛火】はげしくもゆる火。参同契「金入二于一―一、色不レ奪二精光一」

【猛勁】タケシ たけく強し。晋書、魏武帝紀「臨上多レ楽、楽風―一」‖猛勁。

【猛決】はげしく決断する。漢書、于烈伝「為レ臣盡レ忠、――不如レ烈也」‖果決。

【猛犬】たけきいぬ。漢書、西域傳「銀象師子――大雀之類、食二子外国一」師子は獅子。

【猛虎】たけきとら。唐書、兵志「――所二以百獣畏一者、爪牙也」史、淮陰侯傳「――之猶豫、不レ若二蜂蠆之致一レ螫」事は決断して実行するを貴ぶ喩。

【猛虎一嘯山月高】サンゲツタカシ 深山夜中の物凄き光景をいふ。徐幹之詩「夜深重子喚不レ起、――」

【猛虎在二深山一】サンニアリ 豪傑の士の其の處を得るに喩ふ。司馬遷文「――、百獣震恐、及二在二陷穽之中一、搖レ尾求レ食」

【猛爪】するどきつめ。梅堯臣詩「――入レ頃貪逆レ血」

【猛士】つよくいさましき士。史、高祖紀「安得二――一今守二四方一」

【猛志】たけきこころざし。後漢書、公孫瓚傳「――益盛」

【猛獣】たけきけもの。虎・獅子の類。呉越春秋「――将レ撃、必弭レ耳帖伏」――が将に撃たんとする時は耳を垂れ平伏してことさらに弱きを示す喩。

【猛過】勢するどくすすむ。

【猛将】たけき大将。李陵、答二蘇武一書「――如レ雲、謀臣如レ雨」

【猛水】はげしきながれ。論衡、――之投二砂石一、猶二飄風之飛二毛芥一」‖激流。

【猛性】たけきうまれつき。盧照隣文「屈二――一以自励」

【猛政】きびしきまつりごと。古雅四太守行「外行――、内懐二慈仁一」‖苛政。

【猛省】ふかく自らかへりみる、深く反省する。‖深省。

【猛捷】たけくすばやし。傅休奕賦「――者、莫レ如レ虎」

【猛然】勢のはげしき貌。

【猛卒】つよき兵卒。‖勇卒。

【猛島】たけきとり。周礼、注「取二――一者、或以レ媒誘而致レ之」‖鷙鳥。

【猛敵】たけきあた。漢書、賈誼傳「今不レ獲二――一而獲二田鼠一、不レ搏二反盜一而搏二畜兎一、既二細娯一而不レ顧二大患一、非レ所二以為一レ安也」‖強敵。勁敵。

【猛暴】たけくあらし。北史、魏孝文帝紀、幸二歌園一詔曰、虎狼――、食レ肉残レ生、従レ今勿二復捕一レ」

【猛風】おほかぜ。廣雅「――、大風也」‖暴風。

【猛勇】たけくいさまし。論衡、主人――、衰容不二敢闘一也」‖剛勇。

【猛浪】はげしきなみ。呉均文「急湍迸レ箭、――若レ奔」

【猛戻】たけくしてもとる。荀子「勇膽――、則輔レ之以二道順一」‖悍戻。

【猛烈】はげし。書経、疏「陰陽和二風雨一時、無二此――之風一」蘇軾詩「斬レ蛟閧二――一、掃レ剣思二崎嶇一」

【猋】（犬部十七畫）の俗字。

【猋】ヘウ 〔蕭〕

○つむじかぜ（回風・旋風）はやて。○犬の走る貌。○去ることの疾き貌。

【猋風】下より上に回旋する烈風、つむじかぜ。疇、月令「――発レ生」‖扶揺。

九畫

【猟】ソウ 〔未〕

【獄】ゲキ 〔尤〕

【獅】シ 〔支〕

【猷】イウ 〔尤〕

○はかる。はかりごと（謀）「大―」「宏―」「皇―」「帝―」「鴻―」「遠―」書、君陳「爾有レ嘉―嘉謀」‖猶。○みち（道）○ごとし（若）おなじ（同）○ああ、歎辞。書、大誥「―大誥二爾多邦一」

【猷念】はかりおもふ。書経「汝分二――一以相従」

【猶】㊀イウ ㊁エウ 〔尤〕〔雑〕

㊀はかる。はかりごと（図・謀）‖猷。○みち（道）○にたり、にる。○なほ、なほ何の如しと返り讀む。孟、告子「性―杞柳也」ちうど能く似てゐる。○なほ、やはり、まだ。○すら、これでさへ。韓愈、與二張籍一書「夫子―有二所疑一」○より、から、由に通ず。孟、公孫丑「然而文王―方百里起」○獲ルの屬、性甚だ疑ひ深く、人の聲を聞けば豫め木に登り、人なければ乃ち下る。轉じて決断せずしてためらふを―豫といふ。○いぬ。㊁樂器なくして歌ふ（徒歌）‖謡。○うごく、うごかす。

す、猶に通ず。

同訓異義 猶・尚・由・仍○猶は依レ旧之辞と註す、もと獣の名にて、一足づつ後を見かへりつつ、行くものなり、やはりと訓す、尚は、きゝへ加へなすをいひ、猶はあとへもどりていふ、尚は質用、猶は虚用なり、左伝に「一薫一蕕、十年尚猶有レ臭」の尚は、下の語に係り、猶は上の語に係る。○尚は加也と註す、止むべくして止まず、又其の上に加へなすなり、詳経に「雖レ無二老成人一、尚有二典刑一」の如し、老成人は、没けれども、其の典刑は、亡びずして、尚猶ともに通ず、孟子に多く用ゐる、猶は如也、猶也と註す、唐書に「今年審食仍流留」とあり、去年の上に、今年も又重ねて等迷滞留すとの意なり。○由は

【猶】ユウ　猶はさるの属、性疑多し、特じて人の疑惑して容易に決行せざるをいふの義、兵略「撃二其一一、凌二其與一」次條参看。

【猶猶豫】イウユウ　進退の疾徐の中を得る貌。楚辞「屈原既放則野、徘徊猶則小人、君子造——」注「疾舒之中」

【猶令】イウレイ　ためらふ貌。老子「——若レ畏二四隣一」

【猶子】イウシ　兄弟の子、もと（姪）甥、楚辞「兄弟之子レ——也」

【猶父】イウフ　ちちと同じやうに事へる。論、先進「子曰、回也視レ予レ——也」

【猶與】イウヨ　うたがひてためらふの貌記「卜筮者所下以決二嫌疑一定中——上也」＝猶豫。

【猶豫】ユウヨ　疑深くして決せず。奚子「用レ兵之害、——最大」＝猶與。

【猶龍】イウリウ　道徳の深博にして窺ひ知ること能はざるに譬ふ。史、老子傳「孔子去謂二弟子一曰、鳥吾知二其能飛一、魚吾知二其能游一、獣吾知二其能走一、走者可二以為一レ網、游者可二以為一レ綸、飛者可二以為一レ矰、至二於龍一吾不レ能レ知、其乗二風雲一而上レ天、吾今日見二老子一、其猶レ——邪」もと、荘、天運に出づ。

【猶太教】ユダヤケウ　猶太人の奉ずるモーゼの律法を奉ずる一神教。

【猶レ魏二石田一】ユウカイシヤクデン　石田は耕すべからざる田、之を得るも用ふる所なきをいふ。左、哀十一「得二志于齊一、——也、無レ所レ用レ之」

【猴】エン　俗字

てながざる。猴の属、長臂にして善く嘯く。

【猴狢】イエンカク　てながざると、をながざると。淮南「——失レ木而擒二於狙一、非二其處一也」

【猴】コウ　尤

さる、ましら、人に似て能く坐立す、顔と尻とには毛なく赤し、尾短く、性躁にして動くことを好む「猿——」「獼——」＝沐猴。

【猴猿】コウエン　さる。水経「猴猿譲」注「山多二——一、好乗レ危、縦飲二故瀧一、愛二斯名焉」＝猿猴。

【猴王】コウワウ　さるのかしら。宋史、閻婆国伝「山多レ猴、不レ畏レ人（中略）投以二果實一、則其大猴二先至一、土人謂二之——一、猴夫人一、食畢、羣猴食二其餘一」

【猴】（一）セイ・シャウ　青　（二）シャウ　庚　或は狌に作る

猴（前條）の本字。

【猩】ショウ　庚

（一）——猩は犬の吠える聲。（二）——猩は猿の大なるもの。又、想像上の動物、髪長く、顔赤く、聲は小兒の如く、能く酒を飲み、舞をなすといふ。

【猩紅】シヤウコウ　猩猩の血の如きあざやかなる紅色。陸游詩「——染二露湔一温」

【猩紅熱】シヤウコウネツ　傳染病の一、はげしく發熱して全身が紅斑獣を呈する病。

【猩脣】シヤウシン　しゃうじゃうのくちびる、最も美味といふ、八珍の一。呂覧「肉之美者、猩猩之脣」李賀、大堤曲「那食鯉魚尾、爭食——」

【猩猩】シヤウジヤウ　さるの属。曲禮「——能言、不レ離二禽獣一、人能く巧みに言ふも但饑なければ、禽獣にひとしき喩。

【猩血】シヤウケツ　眞紅なるもの。醫家詩「花心洗出——」＝猩血。

【猩猩緋】シヤウジヤウヒ　あざやかなる紅色。＝猩紅。

【猱】ダウ　ジウ　尤　虞

猿の属、てながざる、性、善く木に登る「捷——」「猿——」詩、小雅「毋教二——一升木」

【猱玩】ガン　さる。韓愈、南山詩「微調動二水面一、縦躍換二一一」【猱擢】ガクおほざる。杜甫、題壁詩「一長臂者、較能窮二宅幽一」

【猪】チョ　豬（豕部九畫）の俗字。

【猫】ベウ　メウ　豬（豕部九畫）の俗字

【猟】㊀（ヘン）㊁ヘン　㊀先　㊁霰　㊀かはをそ、猿の屬。＝猿。㊁―狚ヘンは猿に似て狗の如き頭の獣。

【猗】ヰ　かはをそ。淮南、主術「喬二猗鳧一者、必歩二一一」

【猥】ワイ　みだり。多し。後漢書、馬援傳「賓客―一」

【猾】クワツ　ずるし。狡（犬部九畫）の俗字

【猿】エン　元　さる、ましら。

【猿猴】エンコウ　さると、つるとの抱木子「胡越生二南徼一、一狐謀化、君子爲二一一、小人爲二沙蟲一」

【猿劇】エンキョ　さるしばゐ。姚合詩「映竹窺二一一一禅雲探二鳥情一」＝猴戯。

【猿猴取レ月】エンコウトル　愚人が身の程を知らずして終に命を喪ふに喩ふ。僧祇律「佛告二諸比丘一、過去世時、波羅奈城有二五百獼猴一、樹下有レ井、井中見レ月、共執二樹枝一、手尾相接、入レ井取レ月、枝折一齊死」

【猿愁】エンシウ　猿のうれへ鳴くこゑ。李白葛亮、出師表「一自枉屈」○つむ（積）○さかんなり（盛）「一大」

【猥褻】ワイセツ　猥・褻・濊・漫の別は妄（女部三畫）の條を見よ。

【猥雑】ワイザツ　どたまぜになりてみだれる。＝紛雑・亂雑。

【猥褻】ワイセツ　みだらにけがらはし。＝淫猥。

【猥多】ワイタ　みだりに多し。後漢書、馬援傳「賓客―一」

十畫

【猱】ヨウ　尤　○獣の名。○湖南・兩廣・雲南地方に居る蠻族の名「峒―」

【猿臂】エンピ　さるの如き長きひぢ。史、李將軍傳「廣爲レ人長―一、其善レ射亦天性也」＝猿臕。

【猿臂之勢】エンピノイキホヒ　軍の進退攻守を自由にする表。舊唐書、李光弼傳「膊則攫レ之、敗則自守、裂裳相續、使二賊不レ得二西侵一、此則――也」

【猿鳴】エンメイ　さるのなく聲。水經、注「巴東三峽巫峽長、―一三聲淚沾レ裳」＝猿聲。

【猿楽】サルガク　散樂（八一四頁三段）を見よ。

【獄】ガイ　灰　おろか（愚擬）事理に明かならざるもの「一疑」

【獄】ギョクゴク　通音ゴク　○らうや、ひとや、罪人を囚へ置く所、殷に羑里といひ、周に囹圄といひ、又、牢といふ「牢」「監―」○つみ。○うったへ（訴訟）「訟―」「折―」「決―」「疑―」＝訟語「君臣無―」

【獄案】ゴクアン　訴訟事件の調書。民話錄「岳武穆―一、今在二南陽一」

【獄掾】ゴクエン　らうやの役人。掾は屬官。漢書、賈參傳「秦時爲二一一」

【獄訟】ゴクショウ　罪の訴と財の訴と。周禮「凡諸侯之―一、以二邦典一定レ之」

【獄死】ゴクシ　らうやにて死する。＝牢死。

【獄囚】ゴクシウ　らうやにつながれ居る罪人。＝囚人。

【獄舎】ゴクシャ　らうや、ひとや。＝牢獄・監獄・囹圄。

【獄守】ゴクシュ　獄吏に同じ、官は小吏。

【獄訴】ゴクソ　罪のうったへ。唐書、張鎰傳「由レ是―一衰息」

【獄則】ゴクソク　らうやのおきて。

【獄卒】ゴクソツ　○らうばん、看守・押丁など後漢書、廉范傳「求レ代二延尉一一」＝獄丁。○佛　地獄にて亡者を呵責するといふ鬼。

【獄丁】ゴクテイ　らうばん、看守・押丁の類。＝獄卒。

【獄法】ゴクホウ　罪人をただす法律。史、叔恬傳「秦王聞二趙高彊力通二于一一」

【獄門】ゴクモン　○らうやの門（宋書、范曄傳）○圀さらしくび、首を獄門にさらしたるに由る。＝梟首。

【獄牢】ゴクラウ　ひとや。淮南子「執二一一」

者無レ罪」＝牢獄・獄舎。【獄吏】ゴクリ　ろうやの役人。漢書、刑法志「獄吏深文以レ刻レ賞」＝獄官。

【猾】 クヮツ　黠

○わるがしこし(黠)許多し。○みだる(亂)さわがす。書、舜典「蠻夷レ猾レ夏」

【猾賊】クヮツゾク　わるがしこし。後漢書、酷吏傳「趙安米賊二人縱レ酒自恣、人不二敢犯一」

【猾夏】クヮツカ　中國を亂す義。書、舜典「蠻夷レ猾レ夏」傳「猾、亂也」

【猾吏】クヮツリ　わるがしこくしていつはる官吏。洪文「道隆之代、其人混沌、異法之盛、其人レ一」

【猾奴】クヮツド　わるがしこし。宋史、姦臣傳「趙倫燕人也、性レ一」＝狡猾・點猾。

【猾賊】クヮツゾク　わるがしこくして人をそこなふ。史、高祖紀「項羽爲レ人慓悍レ一」

【獅】 シ　支　古、師に作る

し、熱地に産する猛獸の一、狀虎に似、頭大に尾長し、毛は黃褐色、吼る聲雷の如し「一子」

【獅子座】サシ　○佛の說法する座席、佛が人中の王獅なることを百獸の王たる獅子に比していふ。大智度論「佛所座處、若林若地、皆曰二一一、四足獸中獨步無レ長、能伏二一切一、佛亦如レ是、於二九十六種外道中一、一切降伏無レ長、故名二人師子一」○轉じて高僧の座をいふ。＝獅座・獅座。

【獅子吼】シシク　○しゝが吼ゆれば百獸恐れ服す、以て佛が法を說けば、多くの惡魔外道皆降伏するに喩ふ「華嚴經」○雄辯の喩に專用ふ。○悍妻の惡聲に喩ふ。蘇軾詩「忽聞河東一一、拄杖落レ手心茫然」

【獅子身中蟲】シシンシンチュウ　內より生ずる禍に喩ふ。○味方の中に在りてうらぎりする者など。楞嚴經「如一一、自食二獅子肉一非二他外蟲一」

【獅子奮迅之勢】シシフンジンノイキホヒ　獅子の如く身を振ひてはしりまはる勢。人の勢の甚だ盛んなるに喩ふ。法華經「請佛師子奮迅之力」

【獅子舞】シシマヒ　獅子の狀を裝ひて舞ふをいふ「唐書、音樂志」＝師子舞。

【獅狗】シク　獅子ノ狗と。四都賦「挾二一一一一一」

十一畫

【獍】 ケイ　梗

○母を食ふといふ獸の名、故に不孝の喩とす。○鏡に通ず、破鏡は父を食ふ獸の名。

【獎】 シャウ　養

たすく(助)すすむ、すすめほめる。＝奬。

【獐】 シャウ　陽

しか、のろ、麞の扁。＝麞。

【獏】 貘(豸部十一畫)に同じ。

十二畫

【獗】 ケツ　月

たけりくるふ(狂暴)わるづよし。字彙「賊勢猖一」

【獗】 ケツ　月

猛ノ如クはてながざる。＝果然。

【獠】 トウ　東

西南の蠻族の名、もと湖南路嶋に出で、廣西・廣東に蔓延す、生熟二種あり。

【獘】 ヘイ　霽　弊に同じ

○たふる、たふす(仆斃)○くるしむ(困)○やぶる(壞敗)○つひやす。

【獫】 ケン　琰　あらあらし。史、匈奴傳「誅二一一一」

【獫狁】ケンイン　あらくして勇む。漢書、霍去病傳「誅二一一一」

【獗】 ケツ　月

たけりくるふ(狂肆)わるづよし。字彙「賊勢猖一」

【獗】 ゼン　先

猛ノ如クはてながざる。＝果然。

【獞】 トウ　東

西南の蠻族の名、もと湖南路嶋に出で、廣西・廣東に蔓延す、生熟二種あり。

【獠】 ㊀レウ　㊁ラウ　篠　晧

㊀かり、夜の獵。＝宵田・夜獵。㊁西南の夷。唐書、褚遂良傳「何不レ撲殺此一」

十三畫

【獗】 ゴウ　篠

○つよきいぬ(猛犬)○指使に堪ふる犬。左、宣二「公孫敖夫一」

【獪】 キツ　質

○くるふ(狂)おどろきあわてる(驚遽)禮、禮運「鳳以爲レ畜、故鳥不一」○獸が走る。○驚きて飛ぶ。

【獷】 クヮ　麻

○いさむ(勇)つよし。○あらきいぬ(狂狗)

【獺】ダツ 泰
―猫は古、東三省・朝鮮北部地方に住みし人種の名。‖滅。

【獬】カイ 卦
〇一豸は牛に似たる獣の名、人の闘ふを見れば其の邪悪の方に觸れ、人の論を聞けば不正の方を咋むといふ。〇転じて法の名。淮南、主術「楚文王好服一冠」‖解・懈。

【獫】㊀クヮイ 泰 ㊁クヮツ 黠 封
〇わるがしこし「狡一」「姦一」「譎一」〇みだら（接）㊁猾に同じ。

【獷】ケン 先
〇はやくはれる（疾走）はねをどる。〇きびし（急）し（疾）〇自ら守ること堅くして荷も世と合はず。孟、盡心「必也狂一乎」‖狷。

【獫】ケン レン 琰 銑 霰

〇喙の長き犬。〇一狁は周代の北方のえびす、夏には獯鬻、漢以後は匈奴といふ。‖獯狁。

【獨】トク ドク 屋 独は俗字
〇獾の属、獾は惹を好み、一は特を好むといふ。〇ひとりもの「孤一」孟、梁恵王「老而無子、曰一」〇ひとり（單）相手なし、一人にて居る「惸一」〇ただ、ただ其の物事にのみ限る意。‖唯・特。〇獨逸の簡称。‖徳。

【獨酌】ドクシャク ひとり酒をくむ。南史、顔延之傳「布衣蔬食、二一郊野、嘗三其爲レ適、傍若レ無レ人」

【獨樹】ドクジュ 一本の木。古樂府「獨柯不レ成レ樹、二一不レ成レ林」

【獨處】ドクショ ひとり居る。宋玉文「聖人瑰意琦行、超然二一一」

【獨稱】ドクショウ 唯其のもののみたたへられる。淮南子「帝王者多矣、三王二一」

【獨吹】ドクスイ ひとりで笛を吹く。唐信詩「惟有二悠悠洛一和伊能一一」

【獨醒】ドクセイ おのれひとりさむ。史、屈原傳「舉レ世混濁、而我獨清、衆人皆醉、而我二一一」

【獨笑】ドクショウ ひとりゑむ。獨志、鵜周伴「論語與猫、欣然二一一、以忘二餐食一」

【獨嘯】ドクショウ ひとりうそぶく。

【獨古】ドクコ 〇ひとりじめ。蘇軾詩「一人間分外榮」〇一個人又は國が已ひとりにて利益又は權利などを占有する「一一事業」

【獨裏】ドクリ 已ひとりで裏らにする文同傳「與猫匪智解、勝境方二一一」

【獨善】ドクゼン 已のみをよくす。尹文子「爲レ善使二人不レ能レ得レ從、此二一一也」

【獨擅】ドクセン 已の思のままにする「一一場」戰國策、趙二一一レ之、功成名立、利附焉」

【獨奏】ドクソウ ひとり音樂をかなでる。合詩「詩成長作二一一人」

【獨活】ドクカツ うど。野菜の一。‖土當歸。

【獨擧鼎】ドクキョテイ 他人の力を借らず自力にてはげしくうつ。宋名臣言行錄「王素升二邃意、風力愈厲、讀者目爲二一一」鵐はくまたか。

【獨語】ドクゴ ○ひとりごと。白居易詩「獨行二一山江頭」〇獨逸語の略。

【獨坐】ドクザ ひとりすわる。王維詩「一一幽篁裏、彈レ琴復長嘯」

【獨坐滿二一樹】ドクザマンイツジュ 一人坐して一つの樹に滿つ、蜚像なる寧親の隋書、韋藝傳「藝容貌環偉、年二十餘、必整二儀衛一、盛服以見レ之、一一、番人畏懼莫二敢仰視一」

【獨裁】ドクサイ 君主が自己の意旨により て隨意に萬機の政を執り行ふ「一一政治」‖專制。

【獨創】ドクソウ 自力にて物を發明創造する。

【獨子】ドクシ ひとりご、兄弟なき者。史、信陵君傳「一一無二兄弟一者歟」

【獨秀】ドクシュウ 特にひいでる。宋史、胡安國傳「松柏挺然二一一者也」‖特秀。

【獨修】ドクシュウ ひとりで修業する。‖獨學・獨習。

【獨習】ドクシュウ 師に就かず自分ひとりにてまなびならふ。‖獨學。

【獨身】ドクシン 〇ひとり身。史、伍子胥傳「一一出走」‖單身。〇ひとりもの、つれあひなき者「一一生活」

【獨眼龍】ドクガンリュウ 〇片めの英雄。唐書「僖宗時、黄巢遊反、李克用破レ之、時人以二其一目眇而有レ勇、號爲二一一」〇國伊達政宗の異稱。

【獨吟】ドクギン 一人で詩を吟ずる。白居易

奏の對。映閣、孫登隱室詩「玄谷巖窗、鳴琴一一」

【獨歌】ドクカ　自分のみ獨り歌しとする。傳燈錄「天上天下、唯我一一」

【獨斷】ドクダン　○自分ひとりでとりきめる。晉書、石崇傳「決二一一之聽一、奮二神武之略一」＝專斷。○書名。二卷、漢の蔡邕撰す。

【獨知】ドクチ　○ひとりにてさとる。淮南子「大將者必獨見　○己ひとりのみ知る。戰國策「君之使二最爲二太子一、一一之契也」

【獨夫】ドクフ　○ひとり身の男、獨身の男。○惡政を行ひて國民より見はなされたる天子。書、泰誓「一一受」

【獨歩】ドクホ　○すぐれて他になき者なし。晉書、與二楊德祖一書「昔仲宣一王粲」一一於漢南一、○ひとりあゆむ。漢書、李陵傳「使衣一一出レ營」＝單歩。

【獨木】ドクボク　一本立の木。後漢書、高獲傳「除、一一不レ林」

【獨木橋】ドクボクケウ　まるきばし。魔志「獨木之橋、曰レ權亦曰レ句」＝獨梁・略句。

【獨木舟】ドクボクシウ　まるきぶね、木をえぐりて造りたる船。

【獨樂】ドクラク　○ひとりでたのしむ。孟、梁惠王「獨樂樂、與レ人樂樂、孰樂」　○兒童の玩具、こま。

【獨樂園】ドクラクエン　宋の司馬光（溫公）の園の名。

【獨立】ドクリツ　○己ひとりにて立つ。論、陽貨「雖一一」○人の力をからず自力にて身をたてる。ひとりだちする事。大過「一一不レ懼」

【獨立不レ懼】ドクリツフク　品行方正にして心にすこしの慚づる所なし。劉子新論「雖二疾不レ以二幷行一變二節、顛沛不レ以二夜浴一改レ容、——、獨竣不レ愧レ衾」

【獨立國】ドクリツコク　完全なる主權を有し他國の干涉を受けずして統治權を行使し得る國。

【獨立自營】ドクリツジエイ　人の力にたよらず自力にて事業をいとなむ。

【獨樑】ドクリヤウ　丸木橋。淮南、覽冥「若レ行二一一、不二過一、無レ人不レ蹴二其脅一」

【獨力】ドクリキ　自分ひとりのちから。自力ケンカ

【獨案內】ドクアンナイ　圖師友なくともひとりにて見れば十分に解し得らるるやうに說明せる書物。繪卷物など「地圖——」

十四畫

【獲】

㊀ クヮク　㊁ クヮク　㊀㊁ 入聲　陌韻

㊀う（得）論、雍也「仁者先二難而後一一」○獵して得たる鳥獸。○うばひとる、爭ひとる。○とりこ、えもの　ぶんどり、戰ひて得たる物。○はしためしもへをんな（下婢）「臧一一」㊁隕ホクヮクは困迫して志を失ふ貌。禮、儒行「不隕二于貧賤一」

【獲者之儀】クヮクシヤノギ　鳥獲・夏育の如き勇ある人のなさま。四京賦

【獲隽】クヮクシウ　はとの一種。荊楚歲時記「四月有レ鳥、名二一一、其鳴也自呼、農人候二此鳥一則把レ犁上レ岸」注「今布穀也」

【獲罪】クヮクザイ　つみを得る。論、八佾「一一于天、無レ所レ禱也」

【獲得】クヮクトク　○得る。○とらへる。

【獲麟】クヮクリン　麒麟を得たる事。孔子春秋を著し「哀公十四年、西狩一一」の句にて、筆を絕てり　よりて絕筆の義にも用ふ。

【獫】

セン　㊀

あきのかり（秋獵）＝秋田。

【獵】

ダカ　㊁

あし（惡）容貌凶惡なり。廣異記「容貌獰一」

【獐】

ヒン　㊁

かはをそ（獺）＝獺。

【獐獺】ヒンタツ　かはをそ。韓愈、應二科目一時與二人書「爲二一一之笑一者、蓋十八九矣」

【獗】

獗（次畫）の俗字。

十五畫

【獧】

クヮン　㊁

○猛くあらきいぬ。○あらし「強一」「頑一」「蠻一」○一一クヮクヮクは禮儀風俗などのみだれて醜惡なる貌。漢書、敍傳「一一亡秦、滅二我聖文一」

【獧狷】クヮンケン　わるくあらあらしき意。四域拂林傳「大如レ狗、一一而力」

【獧悍】クヮンカン　あらくたけし。桂海獸志「其人物一一、風俗荒怪」

【獧獸】クヮンジウ　わるづよきけもの。郭璞爽詩「一一血盤レ地、互人擧沸レ天」

【獧俗】クヮンゾク　あらあらしき風俗。醜惡なる民俗「後漢書、蔡彪傳」

【獧獗】クヮンケツ　わるだけきあた。後漢書、

設頗傳「欲三修レ文戢レ戈招二降一一」

【獞民】ヨウ　あらあらしくしてもとる。唐書、馬総傳「一一有二夷猺風一、親而教二敬令一則二資剛一勝治洗汰、其俗一変」＝慓戻。

【獸】ジウ　㊥

○けだもの、六一は糜・麗・熊・羆・野豕・兎。○ほじし（腊）

【獸醢】ジウ　宗者の醢者。周禮、天官「一一掌レ祭二獣物一、凡祭祀共二其牲羞一」＝牢醢。

【獣心】ジウ　獣類の如きみさげたる心。

【獣畜】ジウ　けものを入れるをり。北史、元帝紀「置二一一一射二猛獣一」＝獣檻。

【獣聚而鳥散】ジウシュウジテテウサン　鳥獣の如く聚散す。聚散常なき戦。漢書、主父偃傳「匈奴――、従レ之如レ搏レ景」

【獣炭】ジウ　○炭を粉にして獣の形を作りしもの。晉書「王琇性豪侈（中略）以三屑炭一作二獣形一、落下窯貴籠数之」＝錦帯書「温二一一一而被二透心之冷一」○獣骨を焼きて炭となせるもの。＝骨炭。

【獣蹄鳥跡之道交二於中國一】ジウテイテウセキノミチコウヲチウゴクニ　世乱れて禽獣の足跡天下に満つる。孟、滕文公「當二堯之時一、天下猶未レ平、洪水横流、氾二濫於天下一、草木暢茂、禽獣繁殖、五穀不レ登、禽獣偪二人一」

【獣慾】ジウ　いまはしき下劣なる情慾。

【獣行】ジウ　けだものに同じき行。獣慾より起るみだらなる行為。

【獣革】ジウ　けものの皮つくりかは。

【獣檻】ジウ　けものを入れるをり。南史、建安王傳「出檻二一一」

【獣窮則噬】ジウキウスレバカム　獣が困み窮まれば人を噛む。韓詩外傳「顔淵曰、――、鳥窮則啄、人窮則詐」

【獣姦】ジウ　○けものの如く姦ふ。孟、盡心「愛而不レ敬、一二一之二也」○けものの。

【獵】レウ　ロフ　㊥

○かり、冤は春のかり、苗は夏のかり、獮は秋のかり、狩は冬のかり、通じて一一といふ。○かる、かりをする。○とらふ（捕）禽獣を逐ひて捕へる。○しへたぐ（虐）○うごかす（擾）○とる（攫）史、日者傳「一一纓正」＝禄危坐」○ふ（醒）ふむ、こゆ（躡）○一一は風の吹く貌。○國すなどり（漁）の義に轉用す「一船」「一師」

【獵較】レウカク　田獵グルして獣物の多少を較べる。孟、萬章「舜入一一、孔子亦一一」

【獵犬】レウ　かりに用ふるいぬ。王維詩「牧童望レ村去、一一隨レ人還」＝獵狗。

【獵戸】レフ　○かりうどの家。范成大詩「一一遠張レ罠」○かりうど。＝獵人。

【獵師】レフ　○かりうど。列仙傳「一一世世見レ之」＝獵夫。○國漁夫にもいふ。

【獵人】レフ　かりうど（宋書、武帝紀）＝獵戸・獵師。

【獵手】レフ　かりうど。又、其の手下。名山藏「括二民百餘一為一一一」＝獵人。

【獵奢】レフ　風の吹く貌。又、其の聲。鮑照詩「鱗鬐夕蛮起、一一晩風遒」

【獵獵】レフ　風の吹く貌。又、其の聲。世説「恕子一一見二齊莊一」

【獵夫】レフ　かりうど。蘇軾詩「麻鞋短後隨二一一一射二弋鳧兎一供二朝晡一」＝獵人・獵師。

十六畫

【獻】㊀ケン・コン　㊁サ　㊥　俗字 献

㊀目上の人に物をたてまつる、ささぐ、すすめる（進）又、其の物。○酒を客に進める。○かしこき人、賢者。論、八佾「文一不レ足徵」○太歲、亥に在るを大淵一といふ。○姿一は宗廟にて犬の異名。國○こん、人に酒をすすめてさす杯の度数「一一」「三一」○一立ちは料理の組合せ。㊁藝事にて飾りし酒宴ぶりの名「一流」＝犧。

【獻詠】ケン　國己の作りし詩歌を君主の御覧に供し、又は神社佛閣に奉納する。

【獻可】ケン　君主に善言を上りて、其の過を補ふ。左、昭二十「君所レ謂レ可而有レ否焉、臣獻二其否一以成二其可一、君所レ謂レ否而有レ可焉、臣獻二其可一以去二其否一」

【獻饋】ケン　おくりもの。圖畫見聞志「受二其一一錫資一有レ差」

【獻斥】ケン　人に物を贈る謙辭。呂覽「野人獻レ芹、願レ獻二之至尊一」

【獻金】ケン　かねをさし上げる。

【獻供】ケン　物をたてまつる。徐陵碑文「提河一一之侶、玉城遇來之端」

【獻功】ケン　出來上がりたるものを上にすすめる。周禮「令二諸侯春入貢一一」

【獻身】ケン　○身命をささげて、力をつくす。身を犧牲にする。○自ら其の場所に進み出る。禮、坊記「故男女無レ媒不レ交、無幣不二相見一、恐二男女之無別也、以レ此坊レ民、民猶有二自獻其身一」坊は防。

【獻上】ケン　物をたてまつる。魏志、曹植上レ牛表、敢不二一一一」

【獻觴】ケン　さかづきをささぐ。閒居賦「稱二萬壽一以一レ」

【獻春】ケン　はるのはじめ。王褒詩「翠像荷二恩澤一、朱顏感二一一一」

【獻捷】ケン　戰に勝ちて其の俘虜をたてまつる。左傳「王命伐レ之、則有二一一一」

【獻俘】ケン　よきことを君にすすめたてまつる。揚雄、御書箴「一レ一宜レ美、而諫說是折」

【獻足】ケン　さしあげる。

【獻替】ケン　善をすすめ、惡をすてる、替は廢、君を輔佐するにいふ。晉宏、三國名臣序贊「以レ道佐レ世、出レ能動レ功、入能一一、謀レ寧二社稷一」

【獻納】ケン　○忠言を上にたてまつる。晉、陶侃都賦序「朝夕論思、日月一一」○物をたてまつる。

【獻酬】ケン　杯をとりやりする。酬は返杯。陶潛詩「提壺接二賓侶一、引滿勸二一一一」

【獻策】ケン　はかりごとをすすめる。宋史、張齊賢傳「以二布衣一一レ」

【獻俘】ケン　かちいくさしてかへり、俘囚を獻じて成功を廟社に奉告する。左傳「晉侯獻二楚俘於王一」

【獻芹】ケン　はかりごとを奉る。忠謀。

【獻本】ケン　圖書物を贈呈する。

【獻芹】ケン　圖料理の次第、また其の通合せ。

獺　タツ　曷　通音ダツ

かはをそ。形、小狗の如く水邊に棲む、ゆびの間に蹼かきを具へ、能く水に入りて魚を捕へ食ふ。「瀨一」

【獺多則魚擾】かはをそ多ければ、魚は恐れてみだれる。抱朴子「一一、獺多則鳥亂、有司設則百姓困」

【獺祭】サイ　○かはをそが多く獲た魚を陳列するを俗に魚を祭るといふ。禮、月令「孟春之月、獺祭レ魚」○轉じて、詩文を作る時などに多くの參考書を散亂したるさまにいふ。談苑「李商隱爲レ文、多檢二閱書冊一、左右鱗次、號二一一魚一」

獹　ロ　遇

韓一は戰國時代の韓國の駿犬の名。韓盧。

十七畫

獼　ビ　支

おほざる（＝猴・沐猴）

【獼猿】ビエン　さる。青楡、蜩賦「體二雜朱之驄一、蓄二才捷一一一」

【獼猴】ビコウ　おほざる。漢書、西域傳、注「沐猴即一一」＝胡孫。

【獼猴戲】ビコウギ　さるまはしの技の總稱。錄話「學士總上倒弄二一一一」

【獼猴】ビコウ　おほざる。漢書、西域傳、注「沐猴即一一」＝胡孫。

十九畫

獾　ケン　銑　同じ

一猶ケンは北方の蠻族。＝獫狁匈奴。

玃　ヲ　遇

一一は雲貴四川地方に居る蠻族（「天下郡國利病書」）＝猓玃。

羅羅。

二十畫

玃　クヮク　ケキ　陌　藥

おほざる（大猿）「狖一」「猱一」上林賦「雉一飛鵠」

【玃猿】エン　さる。晁補之詩「今此在二林藪一、跳レ身同二一一一」

【玃猴】コウ　さる。蘇軾詩「村巷驚呼聚二一一一」＝玃猿。

【玃猿】ケンケン　たけきとり。獲一に擭に作る。老子「猛獸不レ據一一不レ搏」＝玃鳥。

【玃父】フ　おほざる。國雅「一一善跳、擾二持人一也」

玄部

玄　ゲン　先

○くろ、あかぐろ（赤黒色）天の色。易、坤卦「天一而地黃」○轉じてあめ（天）そら（天空）○かみ（上帝）○もと（根極）○くらし（冥）○老子の說きたるみち「一學」○おくぶかき理、微妙の道理。○きよくしづか（清

靜)〇一孫はやしゃご(合孫の子)〇一酒は水(家語、問禮)〇一默は十干の壬の異名。〇一月は陰暦の九月(爾雅)〇かがやく。‖炫。

【玄奥】ゲンオウ おくぶかくしてはかられざる意。陸賦「研二道德之一一」

【玄衣】ゲンイ 黒に赤みを帶びたる色の衣。禮記「周人冕而祭、一一而養レ老」

【玄圃】ゲンポ くろくもる。抱朴子「披二一一一而揚二大明一」

【玄妙】ゲンミョウ ふゆ。爾雅「冬爲二一一一」

【玄遠】ゲンエン おくぶかく遠し。言論などの玄妙なる義。晉書、阮籍傳「籍雖レ本二禮教一、然發言一一、口不レ臧二人物一」

【玄翰】ゲンカン くろきはね。塘城集仙錄敍「物細則慧羽一一」

【玄學】ゲンガク 玄妙なる老莊の學。北史、羊烈傳「能言二名理一、以二一一一知レ名」

【玄鑑】ゲンカン 老易をいふ。古今注「鄧平識則變レ古、又二千歲則變レ黒、謂二之一一一」

【玄甲】ゲンコウ くろ色のよろひ。(史、霍去病傳)

【玄圃】ゲンポ 空中、天空。(韓愈、雜說)

【玄鑑】ゲンカン 玄妙なる鏡。人の心の形容。淮南子「誠得二清明之士一、執二一一一於心一、照レ物明白、不下爲二古今一易上レ慮」

【玄旅】ゲンリョ 黒くして赤みをおびたる色のはた。淮南子「天子服二蒼玉一、建二一一一」

【玄機】ゲンキ おくぶかき道理、深奥の妙諦。張說詩「金壇承二道訣一、玉牒啓二一一一」

【玄穹】ゲンキュウ 上天をいふ、玄は其の色。張華詩「高冠拂二一一一」‖玄天。

【玄虛】ゲンキョ 奥ぶかくしてむなし、虛無にして無爲、老莊の學をいふ。

【玄玉】ゲンギョク 黒色の玉。禮、月令「孟冬之月、天子衣二黒衣一服二一一一」

【玄駒】ゲンク ○蟻の異名(大戴禮)○小さき馬(爾雅、釋畜)○黒き鯉の異名(古今注)

【玄酒】ゲンシュ おくぶかきをしへ。張衡賦「仰二先哲之一一一兮」

【玄革】ゲンカク 髮をつかさどる神。海錄碎事「髮神曰二一一一」

【玄黄】ゲンコウ ○くろき天の色と黄なる地の色と。易、文言「夫一一者、天地之雜也、天玄而地黄」○黒と黄との幣帛。書、武成「篚二厥一一一」○馬の病める義、黒馬が病めば黄色を帶ぶ。詩、周南「陟二彼高岡一、我馬一一」

【玄嘿】ゲンモク ふかくむなし。陸機詩「遇心一一、矯志崇邈」

【玄關】ゲンカン ○玄妙なる道にすすむ門戸。頭陀寺碑「一一幽鍵、感而遂通」○居宅の門。岑參詩「林下閉二一一一」○禪寺にて客殿に入る門。○國家の正面の入口。

【玄敎】ゲンキョウ おくぶかき老莊のをしへ。李威用詩「曾聞一下在知レ常」

【玄玄】ゲンゲン 甚だ深遠なる貌。蔡邕文「仰レ之若二重獄一一一焉」玄之又玄を見よ。

【玄元皇帝】ゲンゲンコウテイ 唐代、老子に奉りし尊號。

【玄悟】ゲンゴ 深くさとる。楞嚴經「於二精明中一一一精理一」‖深悟。

【玄根】ゲンコン 道家の說にて道の本をいふ。李白文「參二一一一以比レ禪」

【玄裘】ゲンキュウ 天子の服する黒色の衣。詩經「一一赤舄」

【玄旨】ゲンシ ○おくぶかきむね。張賁詩「靜室談二一一、靜寄窺經聽」○老莊の深奥なる道理。

【玄識】ゲンシキ おくぶかきかんがへ。魏都賦「先生一一、深頤靡レ測」‖妙識。

【玄漆】ゲンシツ くろきうるし。元史、祭祀志「匱鉄並用二一一」

【玄津】ゲンシン 佛のをしへ。頭陀寺碑「釋網更維、一一重檣」註「釋網、一一喩佛法也」

【玄針】ゲンシン おたまじゃくしの異名。古今注「蝦蟇子、曰二科斗一、一曰二一一一」

【玄非】ゲンピ 唐の名僧、姓は陳氏、河南洛陽の人。貞觀三年、天竺に遊び、廣く異本を求めて之を參驗し、居ること十七年、百餘國を經、西域記十二卷を撰す。

【玄鼈】ゲンベツ くろきけどろも。宋濂詩「山分二秋色一俊二一一一」

【玄裳縞衣】ゲンショウコウイ くろき色の下衣と白き色の上衣、鶴の形容、禪じて鶴の異名とす。後赤壁賦「翅如二車輪一一一、戛然長鳴」

【玄酒】ゲンシュ 水の異名、太古酒なく祭の時、水を以て酒に代へたる故。

【玄珠】ゲンシュ 道家にて、道の本體に名づけていふ。莊、天地「黄帝遊二于赤水北一、登二崑崙之丘一而南望還歸、遺二其一一一」

【玄術】ゲンジュツ おくぶかきみち。晉書、佛圖澄傳「少學二一一一」道、妙二通一一一」

【玄稷】ゲンショク くろあは。漢書、宣帝紀「嘉穀一一、降二于郡國一」註「一一黒粟也」

【玄圃】ゲンポ ○極めてすぐれたるひじり。後漢書、王充等傳論「一一御レ世、則レ天同レ極」○孔子をいふ。班固、典引「故先命一一、使二綴レ學立レ制」註「一一孔子也」

【玄制】ゲンセイ 玉りてしづか。晉書、夏侯湛傳「海內無レ虞、萬國一一」

【玄寂】ゲンセキ おくぶかくしづか。方干詩「若把二重門一誰一一、何妨晉閥都無關」

【玄孫】ゲンソン ひひまご、孫の孫。韻會「曾孫之子爲二一一一」

【玄澤】ゲンタク くろきおほなみ。郭璞詩「丹泉漂二朱沫一、黒水散二一一一」

【玄端】ゲンタン 周代の朝服、禪は正、正服なり。禮、玉藻「朝二一一、夕深衣」

【玄談】ゲンダン おくぶかき黄老の道の話。李白詩「清論既抵レ掌、一一又絕倒」
【玄道】ゲンダウ おくぶかき理に通ずる。老子「微妙一一、深不レ可レ識」
【玄鳥】ゲンテウ 燕ツバメの異名。禮、月令「仲春之月一一至」
【玄天】ゲンテン ○北方の天(淮南子)○ひろく天をいふ。魏書「一一高明、倚假二列星一以助レ明」‖支考。
【玄冤】ゲンエン 郡の名、漢の武帝、朝鮮を滅して置く所、即ち今の朝鮮咸鏡道及吉林の南境、もとの沃沮の地。
【玄冬】ゲントウ ふゆの異名、五行説に冬は北方にして水にあたり、水の色は黒きが故。(淮南時訓)「白レ夏涉二一一、凝レ冰行レ舟」
【玄圃】ゲンポ 彼我の區別なく一つに混同する。文中子「無レ所レ察、無レ所レ不レ容、萬物一一」
【玄恩】ゲンオン ○おくぶかきとく、幽微の德。辭典「一一升聞、乃命以レ位」○天地の玄妙の理。老子「常知二稽式一是謂二一一一、一一深矣遠矣」
【玄尙白】シンハクヲタフトブ 玄は黒、なほ白きは未だ其の妙に達らざるに喩ふ。漢書、揚雄傳「或嘲レ雄以二玄之尙白一、雄解レ之、誤曰二解嘲一」
【玄之又玄】ゲンシユウゲン おくぶかき上にもなほおく深し、道の廣大無邊なるを形容す。老子「一一、衆妙之門」
【玄渠】ゲンキヨ おくぶかくしづか。沈約詩「神行烟二一一一」
【玄蕃寮】ゲンバリヨウ 圖古、治部省に隸して佛寺僧尼又は外國人の送迎を掌りし役所。
【玄牝】ゲンピン 老子の道の奥妙なる義、牝は陰の義。老子「一一之門」
【玄武】ゲンブ 四神の一にて北方の神、龜蛇の形を爲す。曲禮「前二朱鳥一而後二一一一、左二青龍一而右二白虎一」
【玄武岩】ゲンブガン 火成岩の一、其の質は細密、火山地方に多し。
【玄武之旌】ゲンブノハタ 龜蛇を畫がけるはた。隋書、禮儀志「六曰、一一」‖龜蛇旌。
【玄武門】ゲンブモン 紫宸殿の北面の門、其の内に玄武觀あり(唐六典)
【玄服】ゲンプク 黒き衣。宋玉賦「原與一一」
【玄黄】ゲンワウ くろ色のたまと。穆天子傳「乃執二白圭一一、以見二西王母一」
【玄圃】ゲンポ 崑崙山に在る仙人の居處(淮南、覽冥)
【玄圃積玉】ゲンポセキギヨク 玄圃は崑崙山、他人の詩文を崑崙山に積累せる玉に喩へて稱す。晉書、陸機傳「葛洪著レ論、稱二陳機文一猶二一一非二夜光一焉」
【玄謀】ゲンボウ 深きはかりごと。晉書、齊王冏傳「偉哉武閔、首創二一一一」‖遠謀・深謀。
【玄謀】ゲンボウ 深きはかりごと、玄妙なる計謀。張衡賦「同志謁來從二一一一」
【玄米】ゲンマイ くろまい、未だしらげざる米。白米の對。
【玄冥】ゲンメイ ○水。又、雨の神(禮、月令)張衡、思玄賦「委二水衡乎一一一」○大陸神にして刑殺を主る。楚辭「考二一一於空桑一」○くらし。淮南子「處二一一一而不レ闇」‖黒闇。
【玄妙】ゲンミヨウ おくふかく微妙なり。孟浩然詩「漸通二一一理一、深得二坐忘心一」
【玄默】ゲンモク おくゆかしく何も言はず。漢書、揚雄傳「人君以二一一一爲レ神、澹泊爲レ德」‖淵默。
【玄覽】ゲンラン 心を玄冥の處に置きて萬事を覽知する義。老子「滌除一一能無レ疵」北史、魏孝文帝紀「優游恭レ己、一一獨得」
【玄理】ゲンリ 奥深き眞理。又、學說。南史、朱百年傳「顏言二一一一、時爲二詩詠一」

【妙】 四畫

妙(女部四畫)に同じ。

【玆】 五畫

玆(艸部六畫)と別字、今は混用す

【玆】シ 支

くろし(黒)にごる(濁)左、哀八「何故使二吾水一一」今本濕に作る。

【率】 六畫

㊀シュツ ㊁リツ ㊂ス ‖ 質 質 質

㊀の通ソツ

㊀したがふ(遵)よりそふ(循)孟、梁惠王「一一西水濱」○うく(奉)つく(服從)○ひきゐる(將)「一兵」○すぶ(統)○おほかた、おほむね(大略)史、非周傳「大抵一皆寓言也」大一と連用するも同じ。○しな(差等)○てがる、簡略。○かろがろし「輕一」○かろがろしくあわてる(輕遽)「一爾」「草一」○さきだつ「一先」○めあて(表的)○さっぱりしたること。○禮式作法などにかかはらぬ「眞一」「坦一」○行ふ。左、哀十六「一義之謂勇」用ふる。㊁すべかぞへる(總計)○ほど(限度・程限)物事の標準。孟、盡心「非不爲拙射變其殼一」○つづめたる數、約數。○乘除の關係をなす數。○わりあひ、比例。㊂とりあみ。○をさ、かしら「將一」「方伯連一」‖帥。

同訓異語 率・恒・徑・隨・遵・循・殉の別は順(頁部三畫)の條を見よ。

【率爾】ソツジ 率直にしてやさし。南史、蕭場傳「處レ己一一、不レ以二名位一

驚物」＝率直和易。
【率由】ソツユ　したがひよる。孟、離婁「一一二先王舊章一」
【率爾】ソツジ　あわただしき貌。論、先進「子路一一而對」＝率然。
【率爾人】ソツジヒト　輕るはづみの人物。世說、賞譽「王僧紹少便聰悟、叔父敬玄撫三其首一曰、見神明當用、當不レ作二一一一」
【率循】ソツジュン　したがひ行ふ。書、顧命「臨二諸侯一一二天下一」＝率由。
【率先】ソツセン　衆に先だち行ふ。史、絳侯世家「丞相吾所レ重、其一一レ之」晉書、顧榮傳「榮躬當二矢石一、爲レ衆一一」＝帥先・首先。
【率然】ソツゼン　○にはかなる貌。漢書、東方朔傳「一一高縱」＝卒爾。○常山に棲む蛇の名。孫子、九地「善用兵者、辟如二一一一一者常山之蛇也、擊二其首一則尾至、擊二其尾一則首至、擊二其中一則首尾俱至」
【率直】ソツチョク　ありのままにて正直。
【率土之濱】ソツトノヒン　陸地の續ける限り、即ち、天下中の義。詩、小雅「普天之下、莫レ非二王土一」——、莫レ非二王臣一」＝率濱。
【率濱】ソツヒン　率土の濱、溥天の下の略語、即ち天地の間、到る處にの意、溥は普、廣大なり。宋史、樂志「一一歡洽宸動」＝率普・溥率。率土之濱參看。
【率服】ソツフク　したがひつく。
【率厲】ソツレイ　ひきゐはげます（厲は勵。

【旅】

ロ　虞

くろし（黑）左、傳二八「一弓」
くろぬりの弓。

玉部

【玉】

㊀ギョク　㊁キョク　雨　攵　㊁の正字は王

㊀たま、石の美なるもの「寶一」「珠一」「金一」○ぎょく、鑛石の一、瑪瑙に似て半透明のもの、緑石・角閃石の類。○物事の美をほめ、又は寶愛するにいふ「一食」「一顏」「一樓」「一趾」「一手」○天皇に關する物事の上に添へる美稱「一座」「一體」「一璽」○美くしく瑩がする。張載、西銘「貧賤憂戚、庸玉女于成一也」○寒一綠一は竹の異名。㊁玉のさいくにん琢玉の工人。本、玉に作る「玉人」今は一と混用す。圖○たま。丸き形。又其の物。＝球。○しろもの。又其の性質「善一」「惡一」○ぎょく。遊娼妓のあげだい。又、雞卵。
【玉葱】ギョクソウ　たまにて遣りたるかめ。
【玉案】ギョクアン　たまの飾ある立派なつくゑ。漢、楊雄、解嘲「一一一形製甚古而極精巧」
【玉衣】ギョクイ　たまにて飾れる服。漢書、霍光傳「璧珠璣一一衣」
【玉音】ギョクオン　○天子のおことば。元史、成宗紀「一一褒諭」○德のすぐれることば。中說「敎佩二一一一服之無一斁」○琴の音の清かなるにいふ。嵇康、趙秀才彈レ琴詩「一一開澹入レ神清」○人の音信をいふ「司馬相如、長門賦」
【玉韻】ギョクイン　立派なる詩。又人の作りし詩をいふ敬稱。張道符詩「金樽傳時一一成」
【玉宇】ギョクウ　玉にてかざりたるのき。月宮などを稱していふ。拾遺記、瓊樓「一一瞰二雲門一」
【玉英】ギョクエイ　たま。淮南子「鍊二英青、金英黃、一一白」
【玉詠】ギョクエイ　人の作りし詩歌の敬稱。
【玉瑛】ギョクエイ　水晶。狩埔岡「漢文帝時、渭陽一一一」
【玉嬰】ギョクエイ　衛矛の異名。蘇軾詩「一一見」
【玉液】ギョクエキ　○うつくしきしる、道家にて飲めば長生すといふもの。隋書「金丹一一、長生之事、歷代寶レ貴、不レ可二勝紀一」○美酒に喩ふ。白居易詩「開レ樽、酒三杯中、一一黃金屑」
【玉葉】ギョクヨウ　天皇の御一族。古今注「常有二五色雲一氣二、金枝一一、止二於帝上一、有二花蕊之象一」
【玉珂】ギョクカ　貝にて作りし馬具、其の色玉に似たり。張籍詩「文軒樹二羽蓋一、乘馬鳴二一一一」
【玉海金山】ギョクカイキンザン　人品のけだかきをいふ。晉史、朱紱傳「器宇宏深、神表峙峻、金山萬丈、幾莫レ登、玉海千尋、窺映不レ測」
【玉匣】ギョクカフ　たまばこ。劉勰、新論「必藏レ之二一一一」
【玉函】ギョクカン　玉にて作れる藏書のはこ。拾遺記「寫以二玉牒一、編以二金繩一、貯以二一一一」
【玉顏】ギョクガン　うつくしきかほ。○尊稱又「一一駐下、曜二於慌惚一」＝玉面。
【玉鑑】ギョクカン　玉にてつくれるてかがみ。山海經「崑崙墟、高萬仞、中有二九井一、以二玉爲一レ檻、蘇軾詩「珍珠映二一一、澄澈瀉二銀牀一」
【玉几】ギョクキ　玉にてかざれるつくゑ。書經「皇后憑二一一一」
【玉肌】ギョクキ　うるはしきはだ。○楚莊詩「一一香膩透二紅紗一」
【玉輝】ギョクキ　たまの如くかがやく。晉書、陸機傳序「一一涼潔、川澤納レ輝」＝珠輝。
【玉鏡】ギョクキョウ　月の異名。許渾詩「蟾蜍稅レ駕紅塵息、一一飛レ空天地白」
【玉膺】ギョクヨウ　白くみごとなるなます。雲仙雜記「吳郡獻二松江鱸魚一爲帝

曰、所ㇾ謂金臺ㇾ一、東南佳味也」

【玉皇】ギョクコウ　道教にて天帝をいふ。韋應物詩「逍遙仙家子、日夕朝ニ一ニ元稹詩「我是ニ一香案吏」‖玉帝。

【玉觥】ギョクコウ　玉杯に同じ、觥は角にて造りし大杯。

【玉冠】ギョクカン　○たまにて飾れるかんむり。○圖即位・大嘗會の時、天皇の用ひたまふかんむり。

【玉環】ギョクカン　○たまのわ。史、張釋之傳「有ㇾ人盜ニ高廟座前ニ一ニ」○月に喩ふ。白居易詩「落月沈ニ一ニ」○楊貴妃の小字「太眞外傳」

【玉關】ギョクカン　玉門關に同じ。劉元濟、怨詩「ニ一芳信斷、關河錦字新」

【玉笑】ギョクショウ　たまのてがた。唐書、車服志「古者召ニ太子ニ用ニ一ニ」

【玉玦】ギョクケツ　環の形にて少しく缺けたる所あるおびだま。史、項羽紀「裏ニ所ㇾ佩ニ一ニ」

【玉虎】ギョクコ　たまの如くきよし。孫綽、贈司空使貽「素質ニ一、華藻金章」‖玉繩。

【玉月】ギョクゲツ　玉もて飾れる戸。宋史、樂志「金鋪ニ一」王縉詩「ニ一照ニ繡幃、珠軒明ニ綺牖ニ一」

【玉盌】ギョクワン　○たまにて製したる美くしきつぼ。李商隱詩「一片冰心在ニ一ニ」○玉碗に同じ。同人詩「ニ一傳點銅龍啜」

【玉虹】ギョクコウ　橋の異名、橋は虹ニの如く彎曲せる故。

【玉鉤】ギョクコウ　弓はり月。鮑照詩「始出ニ四南樓ニ纖纖如ニ一ニ」‖弦月。

【玉笏】ギョクコツ　たまにて作りたるしゃく。洞冥記「周公以ニ一ニ與ㇾ之」

【玉骨】ギョクコツ　梅の異名。竹坡詩話「冰肌ニ一清無ㇾ汗、水殿風來暗香滿」

【玉壺冰】ギョクコヒョウ　たまのつぼのこはり。心の清きに喩ふ。鮑照詩「流如ニ朱絲繩ニ清如ニ一ニ」

【玉昆金友】ギョクコンキンユウ　人の兄弟を稱めていふ。昆は兄、友は弟なり。南史、王鎧傳「謚字公衡、美ニ風儀ニ善占吐、雖ニ學業不ㇾ及ニ弟錫ニ而孝行齊焉、時人以爲ニ兼錫ニ王、可ㇾ謂ニ一ニ」今、人の兄弟を稱して玉昆といふは此に本づく。

【玉座】ギョクザ　天子の御座。謝朓、銅雀臺詩「ニ一猶寂寞、況遊妾身輕」

【玉梭】ギョクサ　うつくしきひ。李賀玉詩「軋軋挿ニ素手ニ、幾時停ニ一ニ」

【玉釵】ギョクサイ　たまのかんざし。司馬相如、美人賦「ニ一挂ニ臣頭ニ、纏綿挿ニ臣衣ニ」

【玉碎】ギョクサイ　玉となりて碎ける、名譽の死をいふ。元氏全の對。北齊書、元景安傳「大丈夫寧可ニ一ニ、不ㇾ能ニ瓦全ニ」

【玉塞】ギョクサイ　玉門關の異名。晉書、禿髮烏孤載記「控ニ弦ニ一ニ、謂ニ屬金山ニ」

【玉搥】ギョクスイ　賢人の死をいふ。賈宏、三國名臣序贊「先賢ニ一ニ於前ニ、來哲攘ニ袂於後ニ一ニ」

【玉札】ギョクサツ　○他人の書翰の敬稱。皮日休詩「數行ニ一存ㇾ心久」○藥品の貴きもの。韓愈、進學解「ニ一丹砂」‖玉屑。○地圖の異名「神仙服食經」

【玉山】ギョクザン　容姿の美くしき喩。晉書、裴楷傳「見ニ裴叔則ニ、如ㇾ近ニ一ニ、昭ニ映人ニ也」

【玉山崩】ギョクザンホウ　容貌の美なる者の大醉したる狀。世說、容止「嵇叔夜宇叔夜、山濤曰、叔夜之爲ㇾ人也、巖巖若ニ孤松之獨立ニ、其醉也、傀俄如ニ玉山之將ニ崩ニ」頽に作る。

【玉筯】ギョクチョ　○玉のさかづき、琰は盞また觴に同じ。禮記「酳用ニ一ニ仍雕ニ」

【玉芝】ギョクシ　うつくしきれいし。十洲記「鍾山在ニ北海ニ生ニ一ニ及神草四十餘種」

【玉扈】ギョクシ　たまのさかづき。漢書、高帝紀「奉ニ一ニ爲ニ太上皇壽ニ一」‖玉杯。

【玉扈無當】ギョクシムトウ　貴重なる玉の扈にても當ㇾ無くては用を爲さず。韓非、外儲說「堂溪公見ニ韓昭侯ニ一日、爲ニ人主ニ而漏ニ泄其羣臣之語ニ、譬猶ニ玉扈之無ニ當」

【玉姿】ギョクシ　たまの如く美くしきすがた。王無競詩「一吹一落淚、重ㇾ今想ニ一ニ」

【玉璽】ギョクジ　たまの耳飾。韓非子「薛公相ㇾ齊、爲ニ十一ニ而美、其一處ニ之王ニ」

【玉趾】ギョクシ　人の足の敬稱、おみあし。左傳二六「閣下君親辱ニ一ニ、將ㇾ下ニ於軫ニ」

【玉笥】ギョクシ　うつくしき籠。梁昭明太子文「啓ニ一ニ而安獻」

【玉璽】ギョクジ　天子の御印。漢志、匈奴后傳「賜ㇾ地得ニ一ニ、方一寸九分」‖御璽。

【玉質】ギョクシツ　うるはしきうまれつき。晉書、元帝紀「ニ一幼彰、金聲夙振」

【玉人】ギョクジン　○玉にて作りし人形。拾遺記「○玉の如き美くしき人」晉書、衞玠傳「○玉をみがく人の手を玉字とす。孟、梁惠王「使ニ一ニ雕ニ琢之」」

【玉振】ギョクシン　玉は磬、振は收、八音を合奏する時、まづ鎛鐘を撞ちて音をのべ、終りに特磬を擊ち、其の韻を收めて樂を一終す。轉じて金聲玉振は智德の全備せるに喩ふ。孟、萬章「集大成也者、金聲而ニ一之ニ也」

【玉蕊】ギョクズイ　次條に同じ。蕊は鬚。

【玉蕊】ギョクズイ　たまのかんざし。西京雜記「就取ニ一ニ插頭ニ」

【玉蕊花】ギョクズイカ　草花の一種、ぎばうしゅ（擬寶珠）墓芳譜「漢武帝取ニ玉蕊ニ插ㇾ頭」——、花名始ㇾ此」

【玉章】ギョクショウ　人の詩文又書翰をいふ敬稱。靈寶七籤「靈文眞訣、大布ニ人間ニ金簡ニ一、廣弘ニ天上ニ」‖玉簡。

【玉潔】ギョクケツ うつくしきたなごころ。晉書、孫惠傳「含二奇謀于朱脣、握二神策于一一」」

【玉杓】ギョクシャク 玉のひしゃく。拾遺記「有二青雀一銜二一一一以授二子晉一」

【玉趾】ギョクシ たまのさかづき。曲禮「飲一一一者非レ禮」‖玉杯。

【玉手】ギョクシュ うるはしき手。曹植、妾薄命「攜二一一一喜二同車一」

【玉塵】ギョクジン うつくしきほうき。蘇軾詩「掃除假レ雪徐紈落、談麈如レ雲一一歸」

【玉樹】ギョクジュ ○すぐれて高貴なる風采の人に喩ふ。晉書、謝玄傳「埋二一一一于土中一、使二人情何能已一」○槐樹の異名。「隋唐遺語」

【玉潤】ギョクジュン 文辭をほめていふ。晉書、衛玠傳「玠風神秀異、委父樂廣、重二名海內一、談者以爲二婦翁冰清、女壻一一一」

【玉書】ギョクショ 神仙の傳へたる書物。「拾遺記」

【玉食】ギョクショク みごとなる食物。書、洪範「惟辟一一」辟は君。‖玉饌。

【玉燭】ギョクショク 四時の氣候の調和する義。爾雅、釋天「四時和謂二之一一一」」注「道光照也」

【玉蜀黍】ギョクショクショ たうきび(唐黍)‖包穀・玉米・珍珠米。

【玉髓】ギョクズイ 石英の一種。

【玉成】ギョクセイ 玉の如く立派にみがき上げる。張載、西銘「貧賤憂戚、庸玉二汝於成一也」庸は以・用に同じ。

【玉砌】ギョクセイ たまのいしだたみ。陰書、秦王俊傳「香粉塗レ壁、一一金階」

【玉詔】ギョクショウ 天子のみことのりの尊稱。曹唐詩「一一新除沈侍郎、便分二茅土一領二東方一」

【玉石混淆】ギョクセキコンコウ 善惡の別なきにいふ。抱朴子「貶錫顚倒、一一」

【玉石同架】ギョクセキドウカ 次條と同義。

【玉石同匱】ギョクセキドウキ 玉も石も同じひつに在り。賢愚一所に入りまじれるに喩ふ。楚辭「玉與レ石而同レ匱兮」

【玉石同碎】ギョクセキドウサイ 玉も石も共にくだく。善惡共に亡ぶるに喩ふ。袁宏、三國名臣序贊「滄海橫流、一一」

【玉石俱焚】ギョクセキトモニヤク よき玉も、つまらぬ石も、共にやけほろぶ。善惡の別なく害にかかるに喩ふ。書、胤征「火炎二崑岡一、一一」

【玉折】ギョクセツ ○立派なる死にかた。世說「毛元宇伯成、負二才氣一常稱二孫興公一曰、一不レ作二漏船載二伯成一、不レ作二破甑甚二孫興公一」○物事がすぐれたる人のわかじにする譬。

【玉屑】ギョクセツ ○長生不死の仙藥と稱する玉の粉(三輔故事)○詩文のすぐれたる佳句の形容。許有孚詩「字字珠璣飛二一一一」○ちらちらとふる雪の形容。

【玉雪】ギョクセツ ○雪をたたへていふ。梁昭明太子文「一一開二六出之花一」○物の清らかなるに喩ふ。韓愈文「髮漆黑、肌肉一一」

【玉尖】ギョクセン 美くしき指頭。楊維楨詩「一一捐レ管醞二香雲一」

【玉簪】ギョクセン たま。竇鞏詩「西帝潛二金宇一東湖錄二一一一」

【玉饌】ギョクセン みごとなる飲食物。左思、吳都賦「其宴居、則珠服一一」

【玉蟾】ギョクセン 月の異名。月の中にがまが居るといふ傳說に本づく。方干、中秋月詩「涼將銅鼎外、三五一一秋」‖玉兔。

【玉帶】ギョクタイ 玉にてかざりし立派なる帶。演繁露「宋朝親王皆服二一一一」

【玉敦】ギョクタイ 玉にて飾れる食器。又、古、盟誓の時、血を獻ずる器。周禮、玉府「若合二諸侯一則共二珠槃一一」

【玉壺】ギョクタイ 天帝の居所の異稱。雜樂志「遊二閬苑一觀二一一一」

【玉臺體】ギョクタイタイ 陳の徐陵の玉臺新詠に摸して作れる詩體。滄浪詩話「玉臺集、乃徐陵所レ序梁陳六朝之詩、皆有レ之、或者但謂二濃艷者一爲二一一體一、其實不レ然」

【玉體】ギョクタイ ○王侯のからだの敬稱。漢書、王吉傳「是以敢陳之一一、犯二勤勞之罪一」○美人のからだ。傳休奕詩「一一映二羅裳一」

【玉砣】ギョクタイ たるきの頭のたまのかざり。蜀都賦「金鋪交映、一一相輝」

【玉堂】ギョクドウ ○美くしき殿堂。揚雄、解嘲「歷二金門一、上二一一一」○女官のへや(三輔黃圖)○漢代の役所の名。學者の居る所。漢書、楊雄傳「久污二一一之署一」○宋代より翰林院の異稱とす。宋、太宗詩「翰林承旨貴、清禁一一中」

【玉池】ギョクチ ○うるはしきいけ。江淹詩「夕飲一一津」○卷物の首に貼りたる紺。書畫家卷首貼レ綾、謂二之贅一、又謂二之一一一」

【玉墀】ギョクチ 玉石を敷けるには。墀は增上ノ地ヘの砌。賈至詩「劍佩陪二一一一步」

【玉鷹】ギョクチョウ うつくしきちりの雪の異名。何遜詩「若遂二微風一起、誰言レ非二一一一」」白居易詩「漠漠復紛紛、東風散二一一一」

【玉帳】ギョクチョウ ○玉にてかざりしとばり。拾遺記「西王母見二天子一一一高會一」○將軍の居るちんや。杜甫詩「一一分レ弓射二虜營一」○圓柱の裝飾などの玉代を記す帳簿。

【玉女】ギョクジョ ○美女をいふ。人のおすめをほめていふ。續、祭統「國君取二夫人一之辭曰、請君之一一與二寡人一共有二粢盛一」○仙女をいふ。神異經「與二一一一投壺」○女陰の異名。

【玉筋】ギョクジョ ○たまのはし。杜甫詩「金盤一一無二消息一」○美人の涙に喩ふ。白居易、六帖「綠筠眉面白、淚墜垂如二一一一」

【玉帝】ギョクテイ 玉皇に同じ。道書「一一居二玉清三元宮第一中位一」

【玉條】ギョクデウ ○うつくしきえだ。崔伸

芳詞「香林窟一一」○繁褥なる規則。劇秦美新「盤律嘉量、金科一一」

【玉燕】ギョクエン　○風室の系譜、玉にて飾る。隋書、百官志「給一一官一人」○天を祭る時の祭文を記せし札。史、封禅書「其下則有一一書」

【玉環】ギョクカン　玉にて造りしみみだま。詩經「玉之瑳也」後漢書、輿服志「天子一一、諸侯美石也、路侯以レ石」

【玉巵】ギョクシ　たまをちりばめたるの。曾植詩「歌坐ニ一一、會ニ諸賓客一」

【玉汁】ギョクジュウ　たまにて作りし酒をくむひしゃく。史、項羽紀「一一一雙、欲レ與ニ亞父一」

【玉兎】ギョクト　月の異名。月の中に兎が居るといふ傳説にもとづく。韓愈詩「金烏長飛一一走」

【玉幢】ギョクドウ　たまのはた。左傳「路以ニ璵璠一一葬レ之」

【玉杯】ギョクハイ　玉のさかづき。史、宋世家「彼爲ニ衆害ニ、必爲ニ一一」漢書、文帝紀「十六年秋九月、得ニ一一ニ、刻曰ニ人主延壽ニ」‖瓊杯。

【玉液】ギョクエキ　たまのおびもの。佩・環同じ。詩、秦風「何以贈レ之、瑶瑰一一」

【玉扇】ギョクセン　○玉にてかざれるへや。祥異記「吳孟與ニ弟子一度ニ石梁ニ、見ニ金闕一一、地皆五色文石」○うつくしきはなぶさ。沈佺期詩「一一九霄露、碧葉四時春」

【玉鏡】ギョクケイ　○貴きすがた。史、晉仲連傳「吾觀ニ先生之一一ニ」‖靜容。○美くしきかほかたち。鮑照、無城賦「東都妙姫、南國佳人、蕙心紈質、一一絳脣」

【玉帛】ギョクハク　たまと、きぬとの幣物。書、舜典「五玉三帛」左傳「禹合ニ諸侯于塗山ニ、執ニ一一者萬國」

【玉箔】ギョクハク　たまのすだれ。北史、隋煬帝后蕭氏傳「珠簾一一之奇、金屋瑤臺之美、雖ニ時俗之崇麗、蓋皆人之所レ歸」‖玉簾。

【玉魄】ギョクハク　月の異名。何景明詩「一一中天湧、清輝近水多」‖玉輪。

【玉版】ギョクハン　○たまにて作りたる板。史記自序「金匱一一、圖籍散亂」○筍の異名（「筍食譜」）○紙の異名。晉書、阮孚傳「天下皆以ニ玉版一爲レ紙、而劉中用ニ蔡倫法一造レ紙、有ニ一一ニ、名ニ貢餘一、有ニ表光一一一貢餘雖ニ以ニ蒼茅一爲レ之」

【玉盤】ギョクバン　○玉にてかざりたるたらひ。漢武内傳「以ニ一一ニ盛ニ仙桃七顆一」○月の異名。李華玉詩「朦朧吐ニ一一ニ」李白詩「少時不レ識レ月、呼爲ニ白一一ニ」‖玉輪。

【玉匕】ギョクヒ　たまのさじ。鮑照詩、金鼎一一合ニ神丹一」

【玉陛】ギョクヘイ　たまのきだはし。魏志、陳思王植傳「一一奉ニ朝覲ニ、拼ニ金門ニ、躡ニ一一ニ」‖玉階。

【玉聽】ギョクチョウ　たまのくつわ。宋樂章「一一息レ節、金絡懐レ音」

【玉璽】ギョクジ　たまにてかざれるかべ。晉書、石季龍載記「珠簾一一、窮ニ極伎巧ニ」

【玉片】ギョクヘン　たまのかけら。開元遺事「懸ニ碎一一、每夜聞ニ相觸聲ニ、即知レ有レ風、號ニ占風鐸ニ」

【玉篇】ギョクヘン　三十卷、倚雅・説文と並びて字書の最も古きものとす、梁の顧野王撰し、唐の孫強之に增加す、宋の大中祥符六年、陳彭年等數を率ひて重修す。

【玉歩】ギョクホ　婦人の、又、貴人のあゆみ。錢起、納涼賦「花映ニ香塵一、光生ニ一一ニ」

【玉璞】ギョクボク　未だみがかざる玉、あらたま。

【玉乳】ギョクニュウ　梨の異名。木草「梨一名一一」

【玉面】ギョクメン　○うつくしきかほ。李白詩「一一耶溪女、青蛾紅粉粧」‖玉顔。○人のかほをいふ敬稱。韓詩外傳「使ニ寡君得ニ見ニ君之一一ニ」

【玉門關】ギョクモンカン　漢代四城地方と内地との境に設けたる關門、今の甘肅省燉煌縣の西に在り。明一統志「一一在ニ故瓜州西北一十八里ニ」‖玉關・玉塞。

【玉容】ギョクヨウ　美好なる容貌。陸機詩「一一誰能順、傾城在ニ一彈ニ」

【玉簪】ギョクシン　たまの如き花のつぼみ。簪時、「一一珠芽未レ足レ多」‖珠簪。

【玉圓】ギョクエン　もくれんげの異名。草芳譜「一一花、九瓣色白、微帶レ香、香味似レ蘭、故名」

【玉輪】ギョクリン　月の異名。駱賓王詩「一一湘レ池開、劍履連レ星起」‖玉盤・玉魄。

【玉層】ギョクソウ　正朔をいふ。搜神記「奔耕ニ於歷山ニ、得ニ一一於河際之厥ニ」

【玉輦】ギョクレン　たまにて飾れる天子の車輿。潘岳賦「天子乃御ニ一一ニ、蔭ニ華蓋ニ」

【玉路】ギョクロ　帝王の車、路・輅同じ。周禮、巾車「王之五路、一曰ニ一一ニ」

【玉露】ギョクロ　○うつくしきつゆ。齊書、高帝紀「龍炳ニ一一、旦夕揚レ露」○圖最上の瓶茶の名。

【玉漏】ギョクロウ　玉にて飾れる宮中のみづどけい。漏は漏刻。宋史、樂志「良夜永ニ一一正遲遲」

【玉勒】ギョクロク　玉にて飾れる御ぐの唐信賦「控ニ一一而揚星」

【玉樓】ギョクロウ　○見嵩山の一角にありといふ美くしきたかどの。十洲記「城上安ニ金臺五所一一十二所ニ」○道家にて兩肩のほね。蘇軾詩「凍合ニ一一寒起レ粟、光搖銀海眩生レ花」注「道經以ニ兩項骨ニ爲ニ一一ニ銀海は眼。

【玉盌】ギョクワン　玉にて作りしわん、盌は椀。

【玉椀】ギョクワン　たまのわん、椀・盌同じ。李白詩「一一盛來琥珀光」

【玉衣行】ギョクイコウ　玉は偶王、

行は行歩、佩玉は行歩を節するもの、車馬によりて遅速の度を異にす、故に佩玉を易ふれば、歩調をも改めざるべからず。以て法を變ふれば事も亦變はるに喩ふ。國語「先民有レ言、——」

【抱レ玉哭】コクヲイダキテナク 冤罪にかかりて泣く。楚の卞和の故事。劉向文「和王立、和抱二其玉一哭夜哭」

【懐レ玉其罪】タマヲフトコロニシテソノツミヲ 貴き物を持つ爲め、卻って罪を招く。左、桓十「初鄧曼有レ寵、鄧侯入レ朝、鄧曼送レ之曰、周諺有レ之、匹夫無レ罪、懐レ玉其罪、——、吾焉用レ此、其以賈レ害也、乃獻レ之」

【攻レ玉】タマヲオサム 玉をみがき治める。詩、小雅「他山之石、可二以攻一レ玉」

【切レ玉如レ切レ泥】タマヲキルニドロヲキルガゴトシ 堅き玉を切ること泥土を切る如し。刀劍の鋭利なるをいふ。列、湯問「周穆王大征二四戎一、四戎獻二崑鍔之劍一、其劍長尺有咫、——」

【虚レ玉抵レ鵲】タマヲムナシクシテカチヲカフ 物價の高き形容。戰國策「楚國之貧貧二於玉一、薪貴二於桂一（中略）今令二臣——、因レ鬼見レ帝」‖欺レ玉抵レ桂・欺金鬻玉。

【玉塊】ギョクカイ 圍遊戯の一。‖擲球戯。

【如レ玉】ギョクノゴトシ 美くしき者の形容。詩、小雅「生彼二朱一束、其人——」

【玉不レ琢不レ成レ器】タマミガカザレバウツワヲナサズ 玉の質はもと美なれども、琢磨を加へざれば器となりて用に應ずること能はず。禮、學記「——、人不レ學不レ知レ道」

【王】㊀ワウ ㊁ワウ 陽

㊀きみ(君)一國の君主「帝—」「君—」「三—」「先—」「聖—」○徳を以て天下を一統する者。覇の對。孟、公孫丑「以レ力假二仁者一覇、覇必有二大國一、以レ徳行二仁者一、—不レ待レ大」○皇族の敬稱。○をさ、かしら。○人臣の最も高き爵位。○大いなるものの稱。○尊長者の敬稱、祖父を—父といふ類。○諸侯封を設きたる時に天子に參朝する義。㊁王たり、きみとなる。詩、大雅「—此大邦」又、君たらしめる。○ゆく(往)○さかんなり(盛)俗に旺に作る。莊、養生主「神雖レ—不善也」○國皇子から五世以下の皇族の稱。

【王安石】ワウアンセキ 字は介甫、半山と號す、宋の撫州臨川の人、神宗に仕へて參政となり、新法を行ふ、夙て相となり、荊國公に封ぜらる、政を執ること六年、怨讐紛起して青苗法を罷む、安石自ら安んぜずして引き去る、哲宗の元佑元年卒す、年六十八、詩文に長じ、唐宋八家の一人なり。

【王維】ワウヰ 字は摩詰、唐の太原の人、詩畫を善くし、草隷に工、開元九年進士第一に擢かれ、尚書右丞に遷る、その別業輞川に在り、詩を賦し、自ら樂む、乾元二年卒す、年六十一。

【王武】ワウブ 帝王のみち。女史箴「一家道以正、—有レ倫」

【王右軍】ワウイウグン 晉の能書家王羲之をいふ。晉書、王羲之傳「爲二右軍將軍會稽内史一」王羲之を見よ。

【王家】ワウカ 帝王のいへ。書經「王季其勤二—一」

【王綱】ワウカウ 帝王の世を治めるおほつな。裴柄詩「盛化乾坤開、—日月恒」‖國法。

【王學】ワウガク 王陽明の唱へたる學説、王陽明を見よ。‖姚江學派。

【王氣】ワウキ 王者を出すきざしある地氣。五代史、吳越世家「記二斗牛之間一有二—一」

【王畿】ワウキ 王城附近、即ち畿内の地。周禮「職方氏辨二九服之邦國一方千里曰二—一」

【王粲】ワウサン 字は仲宣、獻帝に仕へて侍中となり、建安七子の一人、博學多識、文章贍麗、魏の太祖に重んぜられ、軍謀掾となり、關内侯に封ぜらる、年四十一にして卒す、著書數十篇あり。

【王維】ワウヰ 字は摩詰、唐の太原の人、詩畫を善くし、草隷に工、開元九年進士第一に擢かれ、尚書右丞に遷る、その別業輞川に在り、詩を賦し、自ら樂む、乾元二年卒す、年六十一。

【王武】ワウブ 帝王のみち。女史箴「一家道以正、—有レ倫」

【王右軍】ワウイウグン 晉の能書家王羲之をいふ。晉書、王羲之傳「爲二右軍將軍會稽内史一」王羲之を見よ。

【王家】ワウカ 帝王のいへ。書經「王季其勤二—一」

【王綱】ワウカウ 帝王の世を治めるおほつな。裴柄詩「盛化乾坤開、—日月恒」‖國法。

【王學】ワウガク 王陽明の唱へたる學説、王陽明を見よ。‖姚江學派。

【王氣】ワウキ 王者を出すきざしある地氣。五代史、吳越世家「記二斗牛之間一有二—一」

【王畿】ワウキ 王城附近、即ち畿内の地。周禮「職方氏辨二九服之邦國一方千里曰二—一」

【王粲】ワウサン 字は仲宣、獻帝に仕へて侍中となり、建安七子の一人、博學多識、文章贍麗、魏の太祖に重んぜられ、軍謀掾となり、關内侯に封ぜらる、年四十一にして卒す、著書數十篇あり。

【王化】ワウクワ 天子の善き政治によりて、人民が善に化する。詩、關雎、序「風、風レ也、教也、風以動レ之、教以化レ之、—之基」

【王瓜】ワウクワ からすうり。禮、月令「孟夏之月、—生、苦菜秀」‖栝樓。

【王荊公】ワウケイコウ 王安石を見よ。

【王喬】ワウケウ 漢の世の仙人。列仙傳「王子喬者、周靈王太子也、好吹レ笙、作二鳳凰鳴一（中略）後乘二白鶴一、至二嵩氏山頭一、舉レ手謝二時人一、數日而去」

【王月】ワウゲツ 正月の異稱、陰曆「元年春王正月」‖王春。

【王業】ワウギョウ 帝王のしごと。諸葛亮、後出師表「漢賊不二兩立一、—不二偏安一」

【王官】ワウクワン 天子のみことのり。禮、緇衣「—如レ絲、其出如レ綸」綸は緒、天子の言もと糸口のごとく細きも、出でて下に達すれば其の太きこと綸の如し。‖綸言。

【王后】ワウコウ きさき。詩、大雅「——烝哉」‖皇后。

【王侯將相寧有レ種乎】ワウコウショウシャウイヅクンゾシュアランヤ 種はたねすぢ、別に王侯將相たる先天的血統あるにあらず、誰にても心がけ次第にて王侯將相ともなり得る義。史、陳渉世家「壯士不レ死即

已、死卽葬二大名一耳、一一」

【王公大人】ワウコウタイジン 身分貴き人。史、老子傳「自一一一不レ能レ器レ之」

【王國】ワウコク 帝王の治むるくに。詩經「斯皇多士、生二此一一一」

【王佐】ワウサ 天子のたすけ。後漢、董仲舒傳、贊「劉向稱二董仲舒一一一之材一、謹二伊呂一已加」

【王佐之材】ワウサノザイ 帝王を輔佐するに足るはたらき。前條參看。

【王者】ワウシャ はばき。國語、注「一一也、似レ靴、北胡可レ爲二脚纏一」

【王子】ワウシ ○帝王の子。○國親王の宮下なき皇族の男子。

【王子猷】ワウシユウ 王羲を見よ。

【王事】ワウジ 王室に關する事がら。【王事靡盬】ワウジビコ 王事は緊要なるもざるべからず、故に一日も怠りて力を盡す義の詩、唐風「一一、不レ能レ藝二黍稷一」

【王師】ワウシ 天子のいくさ。詩、周頌「於鑠一一」於は嗚呼、鑠は美。

【王室】ワウシツ 帝王のいへ。後漢、劉有常、同二力一一一」日帝室、皇室。

【王臣】ワウシン 天子の臣。易、坤「一一無レ成、臣一朝之故」一說は甚だしく艱難する義、臣下は一身の利害をすてて君の爲めに心をくるしめ盡す。

【王庖】ワウホウ 天子のくるま。周禮「王巡守則夾二一一」

【王趾】ワウシ 天子の建てたる地神のやしろ。禮記「王自爲立レ社、曰二一一」

【王者】ワウシャ ○君たるもの、帝王。史記「一一以二民人一爲レ天、民人以レ食爲レ天」○王道を以て天下を治める君。霸者の對。

【王者香】ワウシャカウ 蘭の異名。韓、孔子自衛反レ魯、過二醫谷之中一、見二蘭獨芬芳一、喟然歎曰、夫蘭當レ爲二一一、今乃與二衆草一爲レ伍、賢者不レ遇レ時、與二鄙夫一同レ列、猶レ蘭レ生二深林一、不レ爲レ人而芳、君子脩レ道、不レ爲レ窮而改レ節、蘭之香、非レ爲レ己而芳、君子之行、非

三畫

【玕】 カン 寒

琅―は玉に次ぐ美石。

【玫】 キウ ク 有

○玉に次ぐ黒色の美石「瑰―」○證書等に數字の九に代用す。

【玫瑰】キウクワイ 玉の名。「爾雅釋地」「―隆中、有玉焉」

【玓】 テキ 錫

―瓅は珠のかがやく貌。

【玲】 カイ 灰

古、諸侯を封ずるしるしに用ひし尺二寸の大圭。

【玨】 カク コク 覺 俗 又數に作る

二つの玉、相合して一と爲るもの、雙玉。

【玩】 グヮン 翰 翫に通ず

○もてあそぶ(弄)おもちゃにする「―弄」「把―」たはむる(戯)「戯―」○なる(習)なれしたしむ。易、繫辭「所樂而―者爻之辭也」○おもちゃ、てあそび。○めでる(賞)「賞―」「―味」珍とする「珍―」○古―は古道具、骨董。

同訓異義 玩・翫・弄○玩はもてあそびなぐさむ、珍玩・奇玩の類。晉語「玩物喪志」○翫は玩に同じ、なれもてあそぶなり。○弄はなぶりものにするなり、弄臣はなぶりものになる臣なり、品字箋に「以日日―玩、以手曰―弄」とあり。

【玩愛】グヮンアイ もてあそびこのむ。沈遼詩「―何可論」＝玩賞。

【玩易】グヮンエキ 味ひてうたがふ。魏志、鍾繇傳、諸葛誕反、「誕―世寵、謂其智略不足」

【玩弄】グヮンロウ よく意味をたづねもてあそぶ。王粲「仲宣―、手鋒以歸」＝玩味。

【玩具】グヮングヰ おもちゃ

【玩索】グヮンサク 意義をよく考へもとめる。中庸、章句「―而有得焉」

【玩辭】グヮンジ ことばをもてあそぶ。易經「君子居則觀其象而―其辭」

【玩世】グヮンセイ 一切の世事をかろんじ視る。後漢、依―傳、論―時不遂」

【玩戯】グヮンギ もてあそびふける。陳琳文「謀―機權、――以爲二吟誦一」

【玩讀】グヮンドク 意義を味ひてよむ。吳志、孫策傳「聞二其善二左傳一、乃自――欽二與論講一」＝玩誦。

【玩誦】グヮンショウ 玩味してうたふ。唐書「其文章孜孜―、人以爲レ癖」

【玩物】グヮンブツ ○無用の物をもてあそぶ。書、旅獒「―人喪レ徳、―レ―喪レ志」○小兒のおもちゃ。＝玩具。

【玩味】グヮンミ ○食物の味をよく味ふ。○轉じて詩文などの意味をあぢはひもてあそぶ。蘇軾文「石刻諸詩、反覆――」＝諦繹・諷味。

【玩弄】グヮンロウ ○もてあそぶ。○なぶりものにする。おもちゃにする。＝翫弄。

【玦】 ケツ ケチ 屑

○おびだま、形は環の如くにして半分缺くる所ある男子の佩玉。○ゆがけ、弓を射る時に、右手の大指にはめて弦を引くもの。禮、內則「右佩―」＝決。○烏玉―は、墨の異名。○紫玉―は茶の異名。

同訓異字 玦は佩玉、環の缺けて周れからざるもの、男子は決斷を貴ぶ、故に玉に從ひ、決の省聲に從ふ。

【玦環】ケツクワン 半圓形のたまき。蘇軾詩「浩蕩城西南、亂山如二―一」

【玫】 バイ 灰 通音マイ

―瑰バイクワイは赤き色の美石。又、はまなす、薔薇の類、水邊に生じ、茄子に似て枝に刺多し、花は球形にして香氣あり。

【玭】 ヒン ヘン 先 眞

たま(珠)「―珠」淮水より出づる珠。

【玫】 ビン ミン 眞

玉に次ぐ美石。孔融詩「―瑰曜、美玉耀レ光」

【玖】 ク 尤 又、玉・玖に作る

赤地に白文あある美石「武―」

五畫

【珂】 カ 歌

○たまに次ける石、白瑪瑙。「珮―」○珂にて飾りしくつわ(馬勒)。梁簡文帝詩「連―往淇上」○騙馬の意あるによりて人の鄉を―鄉・里・鳴―里といふは富貴にして故鄉に歸る義。

【珈】カ 麻

○婦人の頭飾、髪にさす珠玉の飾。詩、衛風「副笄六ノ一」○國ノ珠ヒロは熱帯地方に産する木、其の實の核をやきて飲料に製す。

【珊】サン 寒 又、𤦲・𤦲に作る。

○髪ノはよろめく貌。‖珊跚。○闌ノはさかりが過きてさびしくなりし貌。李賀「玉詩」絳管閑ノ歸客盡」○ノは佩玉などのこゑ。○國せんち、又、さんちの音譯。

【珊瑚】サンゴ 熱帯の海中に棲む一種の圓筒形小蟲の骨骼、相集りて樹枝狀をなすもの、故に古、ノ樹と稱す。世說、法修「晉以ニ一ノ樹高二尺許一賜レ僧」

【珊瑚樹】サンゴジュ 珊瑚蟲の骨骼の堆積して成りし岩、熱帯地方の海に多く、其の海面に現はれ出づるものを珊瑚島といふ。

【珊珊】サンサン 裾に帶びたる玉の聲。杜甫詩「時聞雜環聲ノノ」

【珒】ケツ 屑（玉部十四畫）の俗字。

【玭】㊀セイ・サイ 齊 ㊁シン 支 疵と通ず

㊀玉の色、あざやか。又、顔色衣服の鮮明なる貌。㊁きず（玷）玉の疵「瑕ノ」

【玭玭】セイセイ 色のあざやかなる貌。陳孚詩「金碧照ノノ」

【玳】タイ 卦（玉部八畫）の俗字。

【珎】チン 眞 珍は俗字

【珍】チン 眞

○めづらし、くし（奇異）「ノ寶」「ノ品」又、其のもの、たから（寶）金玉。○うまし（美味）八ノは「牛・羊・麋・鹿・腊・家狗・狼」抱朴子「論」「則不レ以ニ細疵一妻ニ其美一」○たふとし、おもし（貴重）○うつくし、よし（美善）禮、儒行「儒有ニ席上之ノ一以待レ聘」珍ノとする、貴しとする、たふとぶ。○しるしだま（瑞玉）

【珍異】チンイ めづらしくことなりたるもの。楚語「不レ蓋ニ一ノ一、不レ陳ニ庶修一」‖珍奇。

【珍玩】チンガン めづらしくくつくし。後漢書、陳禪傳「單于懷服、遺以ニ胡中ノノ一而去」

【珍器】チンキ めづらしきうつは。戰國策「珠玉財寶、車甲ノノ、盡收入レ燕」

【珍羞】チンシュウ めづらしきかはごろも。南史、崔祖思傳「瓊管玉簫、碎以爲レ爽、ノノ繡襦、焚レ之如レ草」

【珍禽】チンキン めづらしきとり。書、旅獒「ノノ奇獸、不レ育ニ于國一」

【珍具】チングヮン めづらしき馳走。禮記「養老之ノノ」

【珍禾】チンクワ めづらしきいね。陸雲賦「發ニノノ之神穎一」

【珍果】チンクワ めづらしきくだもの。後漢書、東平王蒼傳「賜ニ韶裘及大官食物ノノ一」

【珍貨】チンクワ めづらしきたから。後漢書、陳禪傳「單于懷服、遺以ニ胡中ノノ一而去」

【珍寶】チンホウ めづらしくうつくし。後漢書、梁后紀「宮殿雕麗、馳騁ノノ一」

【珍怪】チンクワイ ○めづらしくあやしきもの。史、滑稽傳「寶器ノノ多ニ子玉室一」○あやしきに見る怪むべき事。史記「語父老皆曰、平生所レ聞劉季諸ノノ、當レ貴」

【珍玩】チンガン めづらしとしてもてあそぶ。又、其の物。後漢書、五行志「圖書衛階、ノノ寶貨、皆所レ獻者也」

【珍圭】チンケイ 王の使者のもつしるしだま。鄭康成云「ノノ王使之瑞節、執以往、致ニ王命一焉、歸又執以反命」

【珍産】チンサン すぐれたる賢人の産出國。「實西土之ノノ、聖賢之多ニ出也」

【珍貢】チンコウ めづらしきみつぎもの。王褒「殊方ノノ、府無ニ虛日一」

【珍草】チンサウ めづらしきくさ。陸游詩「有レ客餉ニノノ、發レ窗驚ニ絕奇一」

【珍藏】チンザウ 大切にたくはへる。後漢書、董卓傳「塢中ノノ有ニ金二三萬斤、銀八九萬斤一」‖寶藏。

【珍事】チンジ 圖○めづらしき事、まれにある出來事。○意外の事。‖椿事。

【珍秀】チンシウ めづらしくひいでる。陸

雲、九懐「懐二瑤林之一一一捏二瓊野之芳香一」

【珍羞】チンシウ　めづらしくうまき物。後漢書、霊帝紀「詔減二天官一一一」‖珍膳。

【珍獣】チンジウ　めづらしきけもの。史、三王世家「重譯來朝、澤及二方外一、故一一至、奇禽異、天庭供物」‖珍禽。

【珍什】チンジフ　めづらしき道具。‖珍器。

【珍物】チンブツ　めづらしきたまもの。劉孝威文「曲降二恩慈一、賜二一一一」

【珍酒】チンシユ　めづらしきさけ。張載文「来レ園二一一出二于海隅一」

【珍書】チンショ　世にめづらしき書物。‖奇書。

【珍場】チンヂャウ　めづらしきしるし。前、周頌、箋「謂二一一一、天下所二休慶一也」

【珍惜】チンセキ　大切にしてをしむ。寒和書譜「唐人類多工レ書、然亦願自一一」

【珍説】チンセツ　めづらしきはなし「荀子「小家一一之所レ願」‖珍談。

【珍重】チンヂウ　めづらしき物。後漢書、馬帝紀「服御一一」‖珍寶。

【珍鮮】チンセン　めづらしくあざやか。擯徳輿詩「村盤貯猫列、雛黍皆一一」

【珍饌】チンセン　めづらしき酒食。楊萬里詩「只嫌嶺外無二一一一、一味春蔬不レ直レ錢」

【珍談】チンダン　めづらしきはなし。‖珍説。

【珍】チン　○大切にする。張羽詩「一一函封寄二千里一」○たっとびて賞美する辭。朱熹詩「一一無極翁」○人に身體を大切にすべきことを勸める尺牘の用語。梁書、王僧孺傳「捉レ手無恩、雖レ別一一」○圖めてたし。

【珍愛】チンアイ　めづらしきものくりもの。蘇軾詩「反勝二未瓜一報一一一」

【珍羞】チンシウ　めづらしき料理。皮集詩「鵝レ美充レ腹出二一一一」‖珍羞。

【珍羞】チンシウ　めづらしき料理。蘇軾詩「我昔在二田間一、食脆有二一一一」‖珍羞。

【珍奇】チンキ　めづらきたから、珠玉などの總名。列、楊朱「敝二其珍奇一一一」

【珍物】チンブツ　めづらしきもの。西京賦「一一臻レ、殊方異類」‖珍品。

【珍聞】チンブン　同めづらしきはさ。

【珍幣】チンペイ　めづらしきたから。唐書、習氣傳「鵝二女樂一部、一一不レ貿」

【珍膳】チンゼン　めづらしく、ゆたかなり。唐書、劉晏傳「東都食飲、皆素腥一一」

【珍木】チンボク　めづらしき樹。洛陽伽藍記「芳草如レ積、一一連レ陰」‖珍樹。

【珍味】チンミ　めづらしきあぢ。禮、王制「八十常食」註「常食皆一一也」

【珍薬】チンヤク　めづらしきくすり。論衡「物之變隨レ氣、非レ得二神草一一、食レ之而變化也」‖奇薬。

【珍麗】チンレイ　めづらしくうるはし。後漢書、西域傳贊「土物一一」

【珎】テン　俗

珍（前條）の俗字。

【玷】テン　㊥㊥㊥

○かく（缺）玉が缺ける、玉の病。詩、大雅「白圭之一、尚可レ磨也」○あやまつ（過）○かけ、おちど、あやまち（過失）「瑕一」「一缺」○はづかしむ、けがす（辱）「一汙」「一辱」

同訓異字　玷・缺・欠・闕・缺の別は缺（缶部四畫）の條を見よ。

【玷缺】テンケツ　かく（缺點）おちど。皮日休詩「王臣方未寧、佐レ我無二一一一」

【玷汚】テンヲ　前條に同じ。後漢書、劉陶傳「智短思濁、行辱二一一一」

【玻】ハ　俗

がらす、びいどろ。硝石にて製せし透明體「一瓈」梅堯臣詩「銀瓶索酒傾二一瓈一」‖硝子水玉。

【玻瓈】ハリ　○七寶の一、水晶の類。阿彌陀經「金・銀・瑠璃・一一・碑磲」‖玻瓈。○がらす。

【玻璃】ハリ　前條に同じ。

【珐】

琺（玉部八畫）の俗字。

【珀】ハク　ヒヤク　㊥

琥一一は寶石の一。‖虎魄。

【珉】ビン　ミン　㊥

○たまに次ぐ美石。禮、玉藻「君子貴二玉而賤一一」似て非なる者を惡む意。‖玟。○貢一一は石碑に用ふる美石。

【珉玉】ビンギョク　珉石。明一統志「一一坑、在二汝寧府息縣西北一、産出二一一一、其色潔白、堪レ爲二器物一」

【珉砌】ビンセイ　美くしき石だたみ。王勃詩「羅帳五華壁、一一百枝燃」

【玲】㊀レイ　㊁ラウ　㊥㊥

㊀金玉の鳴るこゑ。㊁すきとほりて明かに見える貌。

【玲玎】レイテイ　玉石の聲。皮日休詩「石聲高一一」‖玎玲・玲瑯。

【玲瑯】レイラウ　金玉の聲。劉子翬、琴二操「一一一絃萬象春、風雨雷霆不二枯槁一」

【玲玲】レイレイ　○金玉の聲。文心雕龍「聲轉二于吻一、一一如レ振レ玉」‖玲玎。○光明の貌。張協賦、雪水共澄鮮賦「一一瑠璃」

【玲瓏】レイロウ　○金玉の聲。班固、東都賦「和鑾一一」○明かなる貌。李白詩

「卻二下水精簾一、一一望二秋月一」‖瑞玲。

六　畫

【珩】カウ　ギャウ　庚

○おびだま、おびものの上につける玉の飾。○かんむりのひも。

【補注】一は佩上ハキモノの玉、行歩を飾する所以のもの、故に玉行に从ふ。

【珩統】クワウ　かんむりのひも。張衡、東京賦「一一絲纊」

【珙】キョウ　腫　多

おほいなるたま(大璧)左、襄三二「窺其一璧」‖拱。

【珪】

圭(土部三畫)の古字。

【硅石】石英の異名。‖砂石。

【珪素】非金屬元素の一、無水珪酸及珪酸鹽となりて多く岩石中に存す。

【珪組】ソイ　圭玉のひも。晉書、張軌傳論「綰二黑綬之一一一」

【珪幣】ソイ　玉帛に同じ。大祭祀に用ふるところ。史、封禪書「具二一一一各異」

【珥】ジ　寘　紙

○婦人のみみだま、みみかざり(墳)‖耳璫「玉一」「簪一」○劍一はつば(鐔)楚辭「撫二長劍兮玉一」○ひがさ、日旁の氣。○さしはさむ(插)

【珥弁】ダイ　みみかざりの玉と、かんざし。楊載詩「典二一一一」‖簪珥。

【珥璫】タウ　みみだま、今の耳環の類。唐書、南蠻傳「左右一一、綴二貫花蕊一」‖耳璫。

【珥筆】ジヒツ　筆を冠の側に插みて以て記事に備へる。晉稽康「絶交書」「手一一一」一解、耳は卑に通ず、眩ふなり、一一は晩年の説(説文通訓定聲)

【珠】シュ　虞

○たま、水中に産する圓き玉「遺一」「明一」「蚌一」說文「一、蚌之陰精」○一の如く圓形の粒になれるもの「算一」「念一」「涙一」○物事の美稱「一玉」

【珠璣】シキ　たまにて作りたる頸飾ネックレス。劉禹錫詩「何人不レ願レ解二一一一」

【珠纓】シエイ　たまにて飾れるかんむりのひも。三禮圖「一一翠纓」續晉書、冠のところ。史、封禪書「具二一一各異」

【珠閣】シカク　うるはしきたかどの。孫綽、天台山賦「一一玲二瓏於林閒一」‖珠樓。

【珠汗】シカン　たまの如きあせ。傳休奕、苦熱詩「一一洽二玉體一」

【珠旒】シリウ　たまにてかざれるはた。司馬相如、子虛賦「曳二明月之一一一」

【珠璣】シキ　たま。莊子「日月爲二連璧一、星辰爲二一一一」璣は圓くなき玉。

【珠玉】シュギョク　○たま。尉雅「西方之美者、雒山之一一焉」○美くしき容姿に喩ふ。晉書、王衍傳「衍甫總二衆中一、如二一一在二瓦石間一」○貴重すべきものに喩ふ。李白詩「詩成一一在二揮落一」

【珠玉無足而玉者君好之也】シュギョクアシナクシテタマフルモノハキミコレヲコノムナリ　珠玉は足なくして能く至る、是れ君主の好むに由るの韓詩外傳「一一、士有レ足而不レ至者、君不レ好也」

【珠算】シュサン　たまざん、算盤にて計算する、北海の時より始まる「甄鸞、周髀、注」

【珠院】シュイン　たまにて飾れるたれぎぬ拾遺記「越有二美女二人一名二夷光一、一名修明、以貢二於吳一、吳處以二椒華之房一、貫二翻珠一爲レ簾幌、朝下以蔽レ景、夕捲以待レ月、二人當レ軒、並坐、理レ鏡靚二粧於一一之內一、窗窺者莫レ不二動レ心駭レ魂、謂二之神人一」

【珠珥】シュジ　しんじゅにて作りし耳だま。漢書、王莽傳「一一在レ耳、首飾貔存」說苑「鄒手產死、鄒人、丈夫舍二珠珥一婦人舍二一一一、夫婦卷異三月、不レ聞二挙哀之聲一」‖玉珥。

【珠簪】シュシン　たまのかんざし。張衡賦「一一挿分綢繆亂」

【珠数】シュズ　ずず、佛具の一、百八箇の小さきたまを絲に貫きて環にせしもの。‖念珠。

【珠唾】シュダ　名言・佳句などを形容していふ。李白詩「妖姫落二九天一、臨レ風生二珠玉一」楊萬里詩「銀鈎一一千萬章」

【珠瑤】シュヨウ　たまの耳かざり。劉植、魯都賦「珥二明月之一一一」

【珠戦】シュセン　たまにて飾れるうつくしきとの。王融詩「璧門涼月宵、一一秋風週」

【珠貝】シュバイ　しんじゅ。江淹詩「一一性明潤、隋王好芳脣」

【珠箔】シュハク　たまのすだれ。嵇含「一一銀扃啓不レ開」‖玉箔、珠簾。

【珠槃玉敦】シュハンギョクトン　珠玉にて飾りし槃と敦と、古、諸侯會盟の時に設くるもの、諸侯の會盟にはかず牛耳を割き其の血を取りて歃る、珠槃は牛耳を盛り、玉敦は血を盛る「周禮、天官、玉府、注」

【珠母】シュボ　あこやがひ(眞珠貝)海產の貝の一、殻は暗褐色、内に眞珠を藏す。楊衒之「洛陽伽藍記」「一一圖圖白、樓桑箇箇青」

【珠米】シュベイ　うつくしきこめ。馬祖常詩「一一圖圖白、樓桑箇箇青」

【琺瑯】ファ　たまの如く美くしき花のつぼみ。王維、梅花詩「朔風吹寒ー一夜、千花萬花開三白華一」ー王當。

【琺屋】ファ　たまにて飾りたるくつ。史、春申君傳「客三千餘人、其上客皆躡ニーー一」

【琺靡】ファ　玉のゆたれ。飽照詩「ー無レ間レ簪、搖帳不レ勝レ風」

【琺琳】ファ　美のことごとく集る處。庾信文「開レ國承レ家、ーー」

【琺瑯】ファ　うるはしきたかどの。李白詩「春風開二綵殿一天樂下ニーー一」

【珮】ハイ　泰

玉のおびもの「雜ー」「ー玉」ー佩。

【珮刀】ハイ　おびるたち。蘇軾詩「少年意氣天街闊、何處相逢佩ニーー一」

【班】ハン　刪

○わかつ、分配する。書、堯典「ー三瑞於羣后一」瑞はしるしの玉。○わかる(別)ー馬」○ついづ、席次をあらわす。ついで(次序)○つらなる(列)○しく(布)「ー荊」○くらゐ(階位)席次「朝ー」「末ー」「同ー」「文ー」「武ー」○ならび(行列)同じ級。○まじる、まだら。(雜色)「ー白」○ひとし(齊)同じ。孟、公孫丑「若是ー乎」○かへす(還)ひきもどす「ー師」○あまねし(徧)○進まざる貌。○ーーは車の行く聲。又、明かなる貌。

【班爵】ハンシャク　班・分・別・例・頒・析・訣の別は分(刀部二畫)の條を見よ。

【班位】ハンイ　○くらゐ。晉書、李重被記「諸侯恃レ恩、各爭ニーー一」ー列位。○同列に位する。韓非子「韓居二中國一、地不レ能レ滿二千里一、而所レ以得ー與ニ諸侯一ーニー於天下一、君臣相保上者」

【班荊】ハンケイ　荊を地に布きて坐する。左、襄二六「ー相與食」ー席。

【班固】ハンコ　後漢の人、字は孟堅、彪の子。父死して家を喪し、歸るに及び、獄繫を博貫す、後漢の明帝の時、校書郎に拜し、續書を典校し、父彪の漢書を續成す、永元四年卒す、年六十一。

【班史】ハンシ　後漢の班固の著したる漢書の異稱。歐陽修文「ー自成二一家之言一」前條參看。

【班示】ハンジ　わかちしめす。後漢書「梁冀引咎、乃以レ所レ上ニーー百官一」

【班次】ハンジ　位のじゅんじょの春秋「會之ーー、以二國大小一爲レ序」ー班列・位次・席次。

【班師】ハンシ　いくさをかへす。書、大禹謨「ーー振レ旅」ー旋師。

【班爵】ハンシャク　位と俸給と。韓愈、進學解「跖二財賄之有亡一、計ニーー之崇庫一」ー祿庫は高下。

【班爵】ハンシャク　五等の爵位の先後をついでる。

【班如】ハンジョ　進まざる貌。易、屯卦「乘レ馬ーー」

【班昭】ハンショウ　後漢の才女、字は惠姬、彪の女、曹壽の妻なり、兄の班固、漢書を著し、未だ竟へずして卒す、帝詔に詔して東觀に就きて、之を踵ぎ成さしむ、數ー召して宮に入れ、后妃諸貴人をして師事せしむ、號して曹大家ダイカといふ、家は姑と同じ、大家は女の尊稱。

【班超】ハンチョウ　字は仲升、彪の次子、固の弟、少くして大志あり、家貧にして抄書して母を養ふ、嘗て筆を投じて歎じて曰く、大丈夫當に功を異域に立て、以て封侯を取るべし、安ぞ能く久しく筆硯を事とせんやと、明帝時朝に仕へ、出でて西域を征し、五十餘國を安集し、定遠侯に封ぜらる。

【班田】ハンデン　國家が一般の公民に一定の法によりて田地を附與し、又之を收め還さしめる古代の制、ーー收授ともいふ。我國にては孝德帝の時に行はる。

【班馬】ハンバ　○隊列に別れるうま。左、襄十八「有ニーー之牽一、齊師其遁」○班固と司馬遷と、固は漢書、遷は史記を著す。晉書、陳壽傳「丘明既沒、ーー遷興」

【班白】ハンパク　黑髮と白髮と交はれるもの、五十歲位の老人。禮、王制「ーー者不二提擧一」注「髮毛目レ班」ー頒白。

【班班】ハンパン　○明かに著しき貌。後漢書、趙壹傳「不二敢ーー顯言一竊二窮鳥賦一篇一」○車の聲。後漢書、五行志「車ーー入二河閒一」

【班輸之雲梯】ハンユノウンテイ　班輸は魯人、公輸般、巧に機械を作る、雲梯は攻城に用ふる具。列子「ーー、墨翟之城禽、自謂能之秘也」

【班曆】ハンレキ　こよみをわかつ。晉書、高祖紀「党項羌內附、庚午ーニ於奚阪一」ー頒曆。

【班列】ハンレツ　班次に同じ。潘岳文「天子以爲二散騎常侍一、從ニーー一也」

【珞】ラク　藥

環ーラクは玉をつなぎて作りし首かざり。

七

【球】キウ　ク　尤

○うつくしき玉。○玉を以て作りたる磬(樂器)。書、益稷「戛擊鳴ーー」○すべて圓形のもの

にちりばめる、琱の義「地ー」「星ー」「ー根」

【球茎】キウケイ 植物の地下茎の一種。

【球技】キウギ たまつき、西洋遊戯の一。

【球形】キウケイ 球状に同じ。

【球状】キウジヤウ 球がたまの如くに丸く固まってゐるもの。慈姑・水仙などの球の類。

【球根】キウコン 根がたまの如くに丸く肥えてゐるもの。蕪菁・大根の根の類。

【球戯】キウギ 球くして球のあそびかた。

【球形】キウケイ ほぼ球に近い形。

【球琳】キウリン ○美玉なり。詩、商頌「殷武」○すぐれた才に喩ふ。李白詩「夫子有二盛才一、正利得二ー琳一」「琳」に誤に作る。

【現】ケン ゲン 〔霰〕

○あらはす、あらはる（顯・表）浄住子「有形則影ー、有聲則響應」‖見。○玉のひかり。○うつつ、物事が實際に存在すること、實在「ー世」○いま、まのあたり「ー在」即時・目下・今生。○現に起きてゐる時。眠又夢の對。

同訓異字 現・見・顯・著・形・暴・露・表・彰・旌の別は見（部首七畫）字を見よ。

【現役】ゲンエキ 現在兵役に服する兵。豫備・後備の對。

【現行】ゲンカウ 現に效力ある法律規則など。

【現行犯】ゲンカウハン 現に行ひ又は行ひ終りし際に發覺せし犯罪。

【現況】ゲンキヤウ 現在のありさま。

【現境】ゲンキヤウ 現在の境遇。梁武帝文「善惡交謝、生二乎ー一」

【現形】ゲンケイ ○形體をあらはす。黃庭堅、大悲閣記「惟觀世音、應レ物ー レ、或至於八萬四千手眼一」○現在の形狀、ありかたのさま。‖現狀。

【現今】ゲンコン ただいま、現時。

【現在】ゲンザイ ○まのあたり、そこに在る。○げんに、まのあたり。○過去及未來に對してまのあたりの時。法華經「ー一未來佛、其數无有レ量」‖現世。

【現像】ゲンザウ 寫眞のたねいたにうつりしすがたを眼に見えるやうに現はしだす。

【現時】ゲンジ ただいま。‖即今・現今。

【現實】ゲンジツ 實際の事實。又、有樣。理想の對「ー主義」

【現身】ゲンシン ○佛 現世のからだ。○佛如來三身の一「ー一說法」‖應身ヲウシン○圖うつしみ、今生きて居るこの身。

【現狀】ゲンジヤウ 現在のありさま。‖現況・現形。

【現象】ゲンシヤウ ○ありさま。○事物の普通人の感覺にふれてさとられたるもの。‖感覺の對。

【現職】ゲンシヨク 今現につとめてゐる職務。

【現世】ゲンセ 佛 三世の一、今の世、うつしよ。法華經「亦於二ー一得二其福一」‖現代。

【現存】ゲンソン 今のこってゐる、現に存在する。

【現代】ゲンダイ いまの時代、當今の世の中。‖現世。

【現代思想】ゲンダイシサウ 現代に行はれて最も勢力ある人世觀又社會觀の傾向。

【現當】ゲンタウ 圖現在と未來と、この世とあの世と。當は當來。

【現場】ゲンバ 其の事の起りし場所。げんば。

【現住】ゲンジウ ○今の住所。○寺の現今の住職。

【現任】ゲンニン 現在其の職にある。又、其の人。

【現神】アラヒトガミ 圖現在の神の義、天皇をいふ。‖現人神アラヒトガミ 圖かりに人となりて現はれし神の義、天皇をいふ。

【琇】シウ イウ 〔宥〕〔密〕

○玉に似たる美くしき石。○かがやく。詩、衞風「充耳ー瑩」充耳は耳のかざり。

【琇瑩】シウエイ 光りかがやく玉。又、光りかがやく。

【琁】セン 〔先〕

美くしき玉「ー璣」‖璇。

【琁】ヅイ 〔灰〕

○美くしき玉。○玉の笏、周尺にて三尺ほどありて天子の持つ笏。禮、玉藻「天子搢ー」

【琁】ブム 〔慶〕 琁に同じ

ー砆ブは玉に似たる石。‖碱砆。武夫。

【瑯】ヤ 〔麻〕

琅ーラウは地名。琅（次條）を見よ。

【琅】ラウ 〔陽〕

○ー玕カンは玉に似たる美くしき石。書、禹貢「雍州、厥貢惟球琳ー玕」又、竹の異名。○玉の聲。○琅ーラウは器物の面に焼き附ける釉藥グスリ○ー瑯ラウヤは山東省沂州の地名。‖瑯琊。

【琅玕】ラウカン ○玉に似たる美石。山海經

「僧舍中有二一一樹一」○美くしき竹の異名。杜甫詩「園客夏簟清二一一」

【琅璫】ラウタウ　○罪人を繋ぐ鉄のくさり（淮書、西域傳）‖銀鐺・鎖當。○すず、鈴鐸。杜甫詩「風動金一一」○おび玉の飾の形容。蘇軾詩「更聞玉佩聲一一」

【琅琅】ラウラウ　○金玉の相撃つ聲。朱徳潤詩「細腰清動金一一」○鳥の聲の清き響。孫綽飲詩「珍禽無數語一一」

【理】リ　紙

○をさむ（治）○ただす（正）ととのふ、ととのへる（整）「一髪」○とほす（通）○みがく（切磨）玉をみがき治める。韓非、和氏「王乃使二玉人一一其璞一」○つくろふ（繕）「修一」○わかつ（別）○かざる。○わかる、をさまる。漢書、循吏傳「政平訟一」○人の守るべきみち（道義）「義一」「倫一」○さが（天性）○宇宙の本體。氣の對。○すぢ「條一」○ことわり「道一」○木のもくめ「木一」○皮膚のきめ「膚一」○たのむ（賴）○みめかたち（容貌）○なかだち（媒介）○裁判官「大一」「一官」史、循吏傳「李離者晉文公之一也」○つかひ（使人）「行一」

同訓異義　理・治・修・收・斂・藏・納・御の別は修（人部八畫）の條を見よ。

【理由】イウ　事のわけ。

【窮レ理盡レ性】キウリジンセイ　天地の理を推し窮めて人の性を盡す。易、說卦「一一、以至二於命一」

【理解】カイ　さとりしる。宋史、林光朝傳「光朝通二六經一、貫二百氏一、未二嘗著書一、惟口授學者一、使二之心通一一」‖理會。

【理學】ガク　○物理・化學・天文學等の自然に關する科學の總稱。○宋代理氣の說を唱へたる學。清の皇帝勅撰一一正宗十五卷の撰あり。‖宋學・程朱學。

【理氣】キ　○呼吸をととのふ。謝靈運、望賦「先嘯晩而一レ一」○本體の理と、現象の氣と。朱子語類「天地之間、有レ理有レ氣、理也者形以上之道也、生レ物之本也、氣也者形以下之器也、生二物之具一也」

【理義】ギ　道理、すぢみち。

【理窟】クツ　○わけ、理の集る處、窟は穴。晉書、張憑傳「勃窣爲二一一一」○圖ごとしつけの理由。

【理化】クワ　○物理學と化學と。○をさめみちびく、理は治。晉書、刑法志「夫德以訓レ世、而法以整レ俗、一一之本、事資由レ之」‖治化。

【理外】ガイ　道理の外。南齊書、顧憲之傳「五生二一一」

【理會】クワイ　さとる。呂氏童蒙訓「後生初學、且須レ二一氣象一、氣象好時、百事皆當」‖理解・了解。

【理官】クワン　裁判官。漢書、藝文志「法家者流、蓋出二於一一」

【理國】コク　國を治める。管子「一一之道、地德爲レ首」‖治國。

【理財】ザイ　貨金をあつめ整理する。世說補「有二沙門道研一來レ謁、意在レ一レ」

【理想】サウ　理性にて想像する絶對完全の域。

【理産】サン　出産を管理する。陳藏器、註荊傳「一レ一、所レ增三信手前一」‖治産。

【理事】ジ　○事をとりさばき治める。書經、傳「居レ位一レ一」‖治事。○又其の官。

【理絲】シ　絲ををさめる。晉書、左芬傳「能二成經紀一分二繭一レ一、女工是察、祭服是治」

【理障】シャウ　圖人の正智をくらまして宇宙の眞理に背く。事障の對。‖圓覺經」

【理趣】シュ　ことのわけ。書經、疏「一一終同」

【理性】セイ　○人人の本來有する智能。○性を治める。後漢書、黨錮傳「是以忠人導レ人一レ一」‖治性。○推理をするはたらき。○圖萬有の本性。事相の對「信心銘化燈水」

【理勢】セイ　自然のなりゆき、自然の趨勢。

【理治】チ　をさまる。をさめる。文子「居レ家一一、然後可レ移二官長一」

【理智】チ　分別理解のちゑ。

【理屈】クツ　かみをととのへる。傳成文「大才治レ世、居二簡之一一也」‖飾。

【理法】ホフ　物事のすぢみち。韓詩外傳「莫レ不一一、則公道達而私門塞、公義立而私事息」‖條理。

【理墓】ボ　野墓未開の土地を治めること。‖理葬・理藩。

【理非】ヒ　道理と非道と。

【理分】ブン　すぢみちを正してわかつ。唐書、張玄素傳「修析一一」

【理亂】ラン　○をさまると、みだれると。抱朴子「莫二一一一以卷舒、齊二去就一以保レ身者、知人也」唐人、高宗の諱を避けて、治をかへて理と爲して用ふ。韓愈文「一一不レ知、難辨不レ聞」‖治亂。○みだれたるを治める。高允文「移レ風易レ俗、一レ一解レ紛」

【理論】ロン　實驗によらず、推理によりて立てる論說。實驗の對。

【琉】ル　リウ　尤　又、瑠に作る

○一琉は細色の寶玉、佛説の七寶の一。○一球は國名、今の沖縄縣。‖流求・瑠求。

八畫

【琰】エン　塩

○美玉。○玉の美色ある貌。○鋒芒ある玉、古、諸侯の不義なる者を征伐する時に執る瑞節。

【琬】エン　ワン　阮

○一琬は丸くしき玉。○鋒芒なき玉。

【琦】キ　支

○めづらし。○珍とすべき一種のたま。○くし、ことなり、奇偉、平凡ならず。瑰に○すぐれて大いなり。【琦行】キコウ 衆と異りたる行。宋玉、對楚王問「夫聖人瑰意――」

【琪】キ　支

玉の属。雪雅、釋地「東方之美者、有醫無閭之珣玕―焉」【琪花瑤草】キカヨウソウ 仙境に在りといふ美くしき花と草。○王叡、夢仙詩「前程漸覺風光好、琪花片片點二瑤草一」【琪樹】キジュ 玉の如き美くしき樹。六朝事迹「寶林寺有二―一、在二法堂前一、即本草之南天燭」‖玉樹。

【琴】キン　ゴン　侵

○こと（樂器）瑟の類、伏羲の創作する所、桐にて作る、長三尺六寸、廣六寸、古は五絃、周に至り二絃を加へて七絃となす。説文「―、禁也」白虎通「―以禁二制淫邪一正二人心一也」○謝！月！風！雪は名を異にしのみにて製作は全く異り。【琴瑟】キンシツ ことのね。後漢書、禮儀志、注「―一調二四海一」【琴韻】キンイン ことのね。劉禹錫之詩「管絃依二折柳一―一動二流波一」‖琴音。【琴高】キンコウ ○鯉に乗りて天に昇りしといふ仙人。列仙傳「―趙人、以レ琴爲レ姓」明一統志「―山在二寧國府涇縣東二十里一、勢有レ変、相傳―一控レ鯉上昇之所」○轉じて鯉の異名。黃庭堅詩「春網撥二―一」【琴魚】キンギョ ことと、つるぎ。宋史、趙抃傳「帝曰、聞卿西馬入レ蜀、以二琴一鶴一自隨、爲レ政頗易二亦爾一乎」鄭谷詩「夫君清且貧、―一最相親」【琴棋】キンキ ことと、ごと。法書要錄「博學工文、―一書畫、皆得二其妙一」【琴瑟】キンシツ ことと、すずりと。孟浩然詩「平石籍二―一、落泉遶二衣巾一」【琴箏】キンソウ ことと。抱朴子「三墳爲二金玉一、五典爲二―一」【琴詩】キンシ 琴と詩と。白居易詩「―一酒伴皆抛レ我、雪月花時最憶レ君」相共に琴を彈じ詩を賦し酒を酌みかはしたる吾友は、皆己をすて去りたれば、雪月花の好景に對する毎に最も君をなつかしく思ふ。【琴操】キンソウ ことうた。劉向別錄「君子因二雅琴一以致レ思、其道閉塞、悲愁而作者、名二其曲一曰レ操、言遇二災害一不レ失二其操一也」‖琴曲・琴歌。【琴瑟】キンシツ ことと、おほごと、瑟は十五絃・二十五絃・五十絃等あり、夫婦相和するを―一和するといふ。詩、周南「窈窕淑女、―一友レ之」【如レ鼓二琴瑟一】ジョコキンシツ 夫妻のよく和合するをいふ。詩、小雅「妻子好合、――」【琴心】キンシン 心を琴の音に寓する。史、司馬相如傳「文君新寡好レ音、故相如絃奏レ令相重、而以二―一挑レ之」【琴堂】キンドウ 縣の長官、孔子の門人、宓子賤が單父を治めし時、琴を彈じ堂より下らずして治まりしといふ故事（呂覽、察賢）による。晉書故事「稱二蘇治一曰二―一」【琴書】キンショ ことと、書物と。魏志、崔琰傳「以二―一自娯」‖琴峡。【琴瑟】キンシツ ことと、ふえと。後漢書、桓帝紀「桓帝好二音樂一、善二―一」【琴酒】キンシュ ことと、さけと。李嶠詩「雲霞仙路近、―一俗塵疎」‖琴樽。【琴臺】キンダイ ことと書物と。魏志、崔琰傳「以二―一自娯」‖琴峡。【琴摩】キンマ ことのこと。劉長卿、聽琴詩「月色滿レ軒白、―一宜二夜閑一」‖琴音。【琴線】キンセン ことと、さかだると。宋史、蘇舜欽傳「羅二列圖史一、―一以自倫悦」‖琴酒。【琴堂】キンドウ 縣の長官、孔子の門人、宓子賤が單父を治めし時、琴を彈じ堂より下らずして治まりしといふ故事（呂覽、察賢）による。晉書故事「稱二蘇治一曰二―一」【琴筑】キンチク ことと、ちくと、筑は箏に似たる樂器、竹にて之を敲す。説文「―一、禁也」白虎通「―以禁二制淫邪一正二人心一也」‖琴曲・琴歌。【琴瑟】キンシツ ことと、ふえと。後漢書、桓帝紀「桓帝好二音樂一、善二―一」【琴酒】キンシュ ことと、さけと。李嶠詩「雲霞仙路近、―一俗塵疎」‖琴樽。【琴書】キンショ ことと書物と。魏志、崔琰傳「以二―一自娯」‖琴峡。【琴摩】キンマ ことのこと。劉長卿、聽琴詩「月色滿レ軒白、―一宜二夜閑一」‖琴音。【琴線】キンセン ことと、さかだると。宋史、蘇舜欽傳「羅二列圖史一、―一以自倫悦」‖琴酒

○一珀ハクは松脂などが土中に入りて化したるもの。廣雅「一珀生地中、其上及旁不レ生レ草」〓虎魄。○虎の皮の文をきざめる瑞玉、兵を發するに用ふ。左、昭三二賜子家子雙一」【琥珀不取二腐骨一】コハクはくさった骨ホネを吸取せず。廉潔の士は、不正の品を取らざるに喩ふ。琥一に虎に作る。吳志、虞翻傳「翻曰、虎珀不取二腐骨一、磁石不レ受二曲鍼一」

【琨】コン　元

○玉に次ぐ美くしき玉。書、禹貢「瑤一篠簜」○一瑤ヨウは山の名、善金を出す。〓昆吾。【琨玉秋霜】コンギョクシュウソウ人品のけだかきに喩ふ。史、孔融傳論「德優長、嶷嶷秋霜、其與一一比レ貞可也」【琨絃】コン　美くしき玉の絃。陸詩「鏤琴叶二舜跡一、照瑟調二琨絃一」

【琤】サウ　シャウ　庚

○玉又はすべて物の相觸れて發する聲。韓愈詩「泉聲雜二玉琤一」○水又は琴などの清き聲の形容。【琤琤】サウ　○水の清き聲。韓詩「一一皆淸流」○琴の聲。孟郊詩「前溪忽調レ琴、隔レ林寒一一」【琤瑽】サウサン　佩玉ガギの聲。殷文圭詩、泉聲東激玉一一」〓琮琤。

【琰】セン　琰

小さき玉のさかづき（玉爵）。說文「叉曰」一、殷曰二琖一、周曰二爵一」〓盞・醆。

【琮】ソウ　冬

○外は八角にして中は圓きわりふだま（瑞玉）○一琤ソウは玉石の相撃つ聲。

【琢】タク　覺

○みがく、椎ツヰや鑿ノミにて彫りて玉を治める。詩、衞風「如レ切如レ磋、如レ琢如レ磨」ふるに（脚）「一レ」うつ。○修め飾トトノふ。【琢玉】タクギョク　たまをみがく。詩經「他山之石、可二以攻一レ錯」傳「錯、石也、可二以一一レ玉」温子昇寺碑「溢レ金成レ器、一レ一爲レ寶」〓攻玉。【琢句】タク　字句をみがき修める。王安石「刻意一一似二天子一」〓造句。【琢切】タクサイ　みがく。韓愈詩「一一李商隱」〓磋切・鎪切。【琢磨】タクマ　みがく、玉石をみがきする、磨は砂石にてこすりみがく。轉じて學問をみがき修める義。詩、衞風「如レ切如レ磋、如レ琢如レ磨」〓磨琢。

【琱】テウ　蕭

○ゑがく（畫）○きざむ。〓彫・雕。

【琛】チン　シン　侵寢

○自然に生ずる美くしく珍らしき寶。寶玉の類「天一」詩、魯頌「來獻其一」○國一ヅクは一國の寶とすべき賢人。

【琶】ハ　麻

○樂器の絃を下より順に鼓する。○琵一は一種の樂器。

【琲】ハイ　賄　隊

○貫く。○たまのを、珠をつらぬきたるひも。○國珈一ーは樹の名。又飲料の一、珈（玉部五畫）を見よ。

【琵】ヒ　支

○一琶は樂器、俗琵狀をなして四柱四絃を具へ、長さ三尺五寸あるもの。〓批把・枇杷。○樂器の絃を上より順に鼓する。廣韻「推手爲一、引手爲一」【琵琶魚】ビハ　あんかう。俗に鮟鱇と書く、東海に多く產す、形扁圓にして、盤の如く、肉厚く腹大に、尾細長くして全體琵琶に似たり。

【琺】ホウ　麻

刀の鞘の鯉口コヒに在るかざり。

【琳】リン　侵

○一種の美玉。書、禹貢「厥貢惟球一琅玕」○玉の相撃つ聲。【琳宇】リンウ　○美くしき玉にて飾れる家。梁簡文、遊二桃源圖一詩「一一氣融融」○寺院。袁易詩「淸心見二一一」〓琳宮。【琳宮】リンキュウ　寺。殷堯藩詩「落日牛羊門、一一事事淸」【琳球】リンキュウ　美くしき玉。陸機文賦「或一一一於懷抱」【琳琅】リンロウ　たまの鳴る音。轉じて淸き水の聲にいふ。趙至文詩「流泉爽レ心鳴一一」【琳瑯】リンロウ　うつくしき玉。陳傑詩「神藻花一一」【琳閨】リンケイ　美玉にて飾れる宮城の門。漢武內傳「蓬萊闕一一」【琳琪】リンキ　○美くしき玉。柳宗元、答二貢士沈起一書「爲レ我以二一一珪璧之資一」○玉の鳴る聲。楚辭「撫二長劍一

兮玉琪、瓊綵鳴兮ー一」○詩文などの美くしきに喩ふ。文心雕龍「下ノ筆ー一竝、雖ニ英逸一、故使才雲茂」

【琭】 ロク　屋

○一種の玉。○ーは玉の狀の形容。老子「ーー如ニ玉」

九畫

【璋】 キ　尾

美くし、めづらし（珍奇）「瑰ー」「奇ー」

【璃】 ウ　虞

○石の玉に似たるもの。○おびだま、佩玉の中間につける玉。

【瑛】 エイ　庚

○玉のひかり。○玉ーはすいしやう（水精）符瑞圖「玉ー仁覆、不ニ斷自成、光若ニ白華一」○玉英。

【瑷瑢】 詩　身におぶるたま。古樂歌「姮娥垂ニ明璫一織女奉ニ玉ーー一」

【瑗】 エン　寒　願

○中に大孔ありて、孔の徑サシワタシが肉即ち外邊に倍する玉。○人の名、蘧ーー、字は伯玉。

【瑕】 カ　麻

○きず、玉の點ズ玉の病。ひび、われめ。○あやまち、とが（過失、缺點）○つみ（罪）○なんぞ（胡）＝遐。○とほざく（遠）【匿ニ瑕含ニ垢】カクコウクン　國君の度量の大いにして、能く物を容れ恥を忍ぶことを美玉の瑕疵を藏するに喩へていふ。左、宣十五「瑜掩ニ瑕、國君含ニ垢、天之道也」【瑕瑾】カンキン　圖きず、瑾は美玉なれども誤用して瑕疵の義とす。【瑕釁】カン　○あやまち（過失）史、李斯傳「成ニ大功一者、在ニ因ニー一而遂忍之」○すきま（隙）の義。【瑕適】カンテキ　きずあと。蘇軾屢詩「未ニ能窮ニ玄義一豈敢求ニーー一」【瑕疵】カシ　きず、缺點、人の過失。韓愈、進學解「忘ニ己量之所ニ稱、指ニ前人之ーー一」【瑕玷】カン　きず、かけ。後漢書「典雅無ニーー一矣」【瑕疹】カシン　きずありとして之を棄て絕つ。書經「不ニ汝ーー一」【瑕瑜下二相掩一】カユハヅ　瑕は玉のきず、瑜は玉のひかり、美德と過失と兩ながらかくさざるは心の忠實に喩ふ。禮、聘義「瑕不ニ掩ニ瑜、瑜不ニ掩ニ瑕、忠也」【瑕類】カイ　瑕疵に同じ。劉禹錫詩「鐫鉄揚ニ芬聲、尋尺掊ニーー一」

【瑚】 コ　遇

○珊ソンは海蟲の一、珊（玉部五畫）を見よ。○ー璉レンは宗廟に黍稷を盛る器、夏には璉といひ、殷にはーといひ、周には簠簋といふ。【瑚璉器】コレンキ　宗廟に用ふる瑚璉といふ器の如き貴き器量、又其の人がら。論、公冶長「子貢問曰、賜也如何、子曰、女器也、曰何器也、曰瑚璉也」北南詩「鄭公ーー、華岳金天晶」

【琿】 コン　元

○美くしき玉。○ー春は川の名、寧古塔の東南六百支那里に在り、西南流して圖們江に入る。又圖們江の北岸に在る地名、開きて商埠と爲す。

【瑟】 シツ　シチ　質

○おほごと（大琴）伏羲の創作する所、十五絃十九絃二十五絃等種種あり。○おほし、衆多なる貌。○あざやか、潔鮮なる貌。詩、大雅「ー彼玉瓚」○おごそか、つつしむ、矜莊なる貌。○こまかし、緻密なる貌。○ーはさびしく吹く風の聲。○蕭ーサウは寒風の疾き貌。【瑟縮】シツシュク　おほごとのねの。劉禹錫詩「休ノ彈ー一偏ニ醒ニ離思一」＝琴瑟。【瑟琴】シツキン　おほごとと、ことと。夫婦和合するを琴瑟和すといふ。詩、小雅「妻子好合、如ノ鼓ニーー一」＝琴瑟。【瑟瑟】シツシツ　ことのいと。武元衡詩「ー一無ニ管絃一」【瑟瑟】シツシツ　風のさびしく吹くこゑ。白居易詩「風蕭蕭兮花秋ーー一」【瑟縮】シツシュク　寒くちぢかまる。呂覽「骨ーー不ニ達、故作ニ淫舞一以宣ニ導之一」

【琪】 シン　カン　眞　寒

玉に次ぐ勁き石。

【瑞】 ズイ　寘

○しるしだま、玉を以て信とする、天子が諸侯を封ずる時に、しるしとして授ける玉、桓圭（公）信圭（侯）躬圭（伯）穀璧

（子）瑞璧（男）の五ーあり。○めでたきしるし、天が善政に感じて降す吉兆「吉ー」「嘉ー」「祥ー」「ー兆」○よろこび、めでたし「ー朔」「ー雨」○圖みづ、善美の義「ー種」

【瑞】ズイ めでたきもや。玉陳述「東城ー初日鮮」

【瑞異】ズイイ めでたく不思議なり。南方草木疏「時産瑞十七種圖二卷、以爲ニーー」‖奇瑞。

【瑞雨】ズイウ めでたきあめ。南史、處士傳「上ニー頃」

【瑞雲】ズイウン めでたきくも。西京雜記「祥瑞之雲、日ニ慶雲ニ赤日ニ赤雲ニ白虹ニ景雲」

【瑞烟】ズイエン めでたきけむり。杜甫古詩「上林春色滿ニーー」‖祥烟。

【瑞應】ズイオウ めでたきしるしの感應。杜預、左傳序、疏「與龍白虎、並爲ニーー」‖瑞感・祥應。

【瑞穀】ズイコク めでたきもや。李商隱詩「ー一明星照ニ晴天ニ」‖瑞露。

【瑞香】ズイカウ ぢんちゃうげ（沈丁花）三月開ク、甘綠伯具ニーー爲ニ殊友ニ、張敞叔夏ニーー爲ニ佳客ニ

【瑞感】ズイカン めでたき感應。南史、柳慶傳「慶前ニーニ神異ニ感應限ニ無數」

【瑞氣】ズイキ めでたき雲氣。晉書、天文志「ーー一日ニ慶雲ニ若ン煙非ン煙、若ン雲非ン雲」

【瑞禽】ズイキン めでたき鳥。宋史、燕懿王德昭傳「錫ニ黃金ニ爲ニ奇獸ーー一賜レ之」‖瑞鳥。

【瑞禾】ズイクワ めでたきよきいね、種子を異にして穂を同くする禾。宋史、高宗紀「揚州獻ニーー」‖嘉禾。

【瑞花】ズイクワ ○めでたき花。許渾詩「ー一朝滿ニ人、仙草玉前澤」○ゆきの形容。陰鏗、詠ニ雪詩ニ「飄ニーー新」

【瑞旒】ズイリウ めでたきしるし。皇甫湜文「錫ニ金幣ニ之邑ニ、旌ニーニ云」‖瑞兆・瑞徵。

【瑞相】ズイサウ ○めでたき人相（王氏、京師寒族、多ニ此ー）○めでたきしるし。‖瑞兆・吉兆・休徵・瑞祥・瑞徵。

【瑞草】ズイサウ めでたきくさ。成綺詩「玉階ニーー、金陵立ニ神宇ニ」

【瑞草魁】ズイサウクワイ 茶の異稱。杜牧、茶山詩「山實東吳秀、茶稱ニーー」

【瑞芝】ズイシ めでたき靈芝。ライ禪、賀ニ封禪一表「泥ニーー、檢ニ珍玉ニ」

【瑞獸】ズイジウ めでたきけもの。酉陽雜俎「ー一親紀」ーー異禽、遊ン園鳴ン閣」

【瑞日】ズイジツ めでたき日。朱熹、明道先生畫像贊「ーー祥雲、和風甘雨、龍德正中、陸氏斯昏」

【瑞祥】ズイシャウ 瑞徵に同じ。

【瑞星】ズイセイ めでたきほし。晉書、天文志「ーー一日ニ景星ニ」

【瑞雪】ズイセツ めでたきゆき。雪は豐年の兆なるが故。張正見詩「同雲遞映レ嶺、ーー近浮レ空」

【瑞節】ズイセツ たまにて作れる符節。圖語「古者先王既有ニ天下ニ、爲ニ車服旗章ニ以旌レ之、爲ニ符節ーー一以鎭レ之」

【瑞徵】ズイチウ めでたきしるし。司馬相如、封禪文「厥塗靡レ踰ニ天瑞之徵ニ」‖瑞兆・瑞相・瑞祥。

【瑞鳥】ズイテウ めでたきとり。禽經「鸞ーー」

【瑞圖】ズイト めでたき圖畫。王逸、九思「感ニ風后ニ兮受ニーー」

【瑞寶章】ズイホウシャウ 圖勳章の一、八等に分つ。

【瑞鳳】ズイホウ めでたきかぜ。寇準詩「玉闕明ニ淸旦ニ、金鑾轉ニーー」

【瑞氣】ズイキ めでたきさいはひ。王褒文「天人感應、屢降ニーー」

【瑞物】ズイブツ 麒麟鳳凰等のめでたき物。李白、明堂賦「神仙傳珠、ーー咸湊」

【瑞鳳】ズイホウ めでたきしるしの鳳凰。蘇瑣詩「ーー飛來陸二衡霍一、祥魚出鼓ニ瑞ニ王舟ニ」

【瑞夢】ズイム めでたきゆめ。陰嬌帝文「仍感ニーー一、是知善庶、已降ニ舟航ニ」

【瑞祿】ズイロク めでたきしるし。集異記「圖凝ニーー一、伝瑞祿ニ」

【瑞蓮】レンズイ めでたきはちす。范雨湜文「トー猶奇、合ニ瑞公池ニ」

【瑞露】ズイロ めでたきつゆ。許敬宗賦「法ニーー于雲掌ニ」

【瑞世國】ズイセイコク 圖米が異く出來てめでたき國の義、我國の美稱。

【瑄】セン 先 大いさ六寸ある璧。漢書、郊祀志「有司奉ニーー玉ニ」‖宣。

【瑔】ゼン ネン 先 ○玉に次ぐ石「ー石」○玉の佩びもの。

【瑇】タイ 瑁 瑇は俗字 ーー瑁ダイは南海に産する龜の一種、其の甲は黃褐色半透明にして黑き斑あり、我國にて鼈甲カフといひ、粧飾用器具に用ふ。

【瑙】ダウ ノウ 篠 通音ナウ 瑪ーノウは寶石の一。瑪（次葉）を見よ。‖馬腦・碼碯。

【瑒】㊀チャウ ㊁タウ 養 ㊂タウ 陽 ㊀宗廟の祭に用ふる圭。㊁たまの名。○人の名。曹丕、典論「汝南應ー德璉」

【瑑】テン 銑 璧を琢刻して文ヤを爲る。漢

書、帝仲舒傳「良玉不ㇾ」【琢刻】コク　ありきざむ。完懐英詩「一ー一方寸餘、遺像規ニ浴場ニ」

【琄】　㊀バウ・モウ　㊁バイ・マイ　㊂バイ　㊀㊁㊂通音

㊀諸侯が天子に朝する時、天子が、諸侯の執る圭の上にかむらせる玉。㊁琿ー（玉部八畫）を見よ。

【琄】　ヒン　ハン　㊀通音　㊁ヘン

琳ーは文采ある貌。

【璊】　ビン　ミン　㊀

玉に次ぐうつくしき石。‖珉。

【瑜】　ユ　㊀

○一種の美くしき玉「琿ー」○玉の光采。禮、聘義「瑕不ㇾ掩ー」きずも光もかくさずしてあらはす。

【瑜瑕】ユカ　美くしきと、きずと。美惡の譬。魏照詩「豈能與ニ衛賈ー一稱辨論」

【瑜伽三密】ユガサンミツ　㊀瑜伽宗にて、主觀・客觀の合一不二を實行するために身・語・意の三つにつき修する秘密の法。

【瑜伽宗】ユガシュウ　㊀印度の世親の開きし宗派、瑜伽は梵語の音譯、相應の義。主觀・客觀の合一不二なる義。

十畫

【琴】　㊀エイ　㊁エイ　㊀㊁漢　㊀呉

㊀玉に似たる美くしき石。詩、衛風「充耳琇ー」○あざやか、あきらか（明）揚雄、大玄經「一死一生性命ー矣」○つや、ひかり（光采）㊁てらす、かがやく（玉色光澤）「照ー」

【瑤】　エウ　㊀

○美くしき玉。○美稱に用ふ「ー札」「ー章」「ー質」

【瑤英】エイ　藍田山に出づる玉の至りて美なるもの。張協文「錯以ニ金ー一、錢以ニ金華ニ」‖玉英・瑤華。

【瑤函】カン　○うつくしき手紙。司空圖詩「ー一眞跡在、妖魔敢掩ㇾ威」○人の手紙を稱していふ。

【瑤纓】エイ　前條に同じ。羅隱詩「不ㇾ把ニ一一一附中鯉魚ニ」

【瑤顏】ガン　うつくしきかほ。劉駿恭詩「ー一映ニ長川ニ、華服照ニ通津ニ」

【瑤琴】キン　たまにて飾れること。宋之問詩「微臣一何幸、再得ㇾ聽ニ一一ニ」

【瑤瑟】シツ　美くしきたまのさかづき。張衡詩「玉盃酔ニ一一ニ」‖瑤杯・瑤觴。

【瑤席】セキ　うるはしきむしろ。魏徴、五郊樂章「一一降ㇾ神、朱弦饗ㇾ帝」

【瑤衆】ダク　玉の如き枝、菊の異名。陸龜蒙、白菊詩「還是延年一種材、卽將ニ一一ニ」

【瑤池】チ　穆天子の西王母に會せし所、崑崙山に在り。穆天子傳「天子觴ニ西王母於ニ一之上ニ」集仙傳「西王母所ㇾ居宮闕、在ニ崑崙山ニ、崑崙之圃、閬風之苑、左帶ニ一一、右環ニ翠水ニ」

【瑤枕】チン　美くしきまくら。王翰、古蛾眉怨、「幽興承ニ恩露ニ一一」

【瑤琴】キン　玉の如く美くしきなしろ。張翔詩「玉斎清ニ一一、銀河經ニ君撫ニ」

【瑤林】リン　たまの如く美くしきはやし。陸雲、九愍、懐ニ一一之珍秀ニ」握ニ蘭野之芳香ニ」

【瑤林瓊樹】ケイジュ　人品のけだかきをいふ。晉書、王戎傳「王衍神姿高徹、如ニ一一自然是風塵裏物ニ」

【瑤璧】ヘキ　たまにて飾れるてぐるま。江淹賦「企ニ興之所ニ出入ニ一一之所ニ周遊ニ」

【瑤玉】　カク・コク　㊀呉　㊁呉

一對の玉。左傳三十「王賜ニ之請納ニ玉於王與ニ晉侯ニ晉十一」註「雙玉曰ニ一ニ」‖珏。

【瑤玉】ユク　美くしきたま。江淹、傷ㇾ友賦「帶ニ一一而爭ㇾ光、握ニ隨珠ニ而比ㇾ麗」

【瑤光】クワウ　北斗の第七星の名。

【瑤瑩】エイ　うるはしきたま。白居易、白牡丹詩「折來比ニ玉色ニ一種如ニ一一ニ」‖瓊瑤。

【瑤草】ソウ　美くしき草、仙境に生ずる草。路振、乘軺録「馬ニ文「飲以ニ玉池、秣ニ之ー一ー」」

【瑤札】サツ　他人のてがみの敬稱。宇文殷詩「贈文ー一降、賜酒玉杯傳」

【瑤室】シツ　うるはしきうまれつき。梁簡文帝詩「玉蟾光ー一、金細蛾黛紅」

【瑤簪】シン　たまのかんざし。溫庭筠詩「ー一遺ニ親戚ニ、霜侵駐ニ羸驂ニ」

【瑤樹】ジュ　うつくしきうてな。劉義恭詩「丹墀設ニ金屏ニ、ー一陳ニ玉牀ニ」‖瑤臺。

【瑤笙】シャウ　たまにて飾れるしゃうのふえ。戴叔倫詩「更弄ニ一一ニ調、秋空鴈又鳴」

【瑤珠】シュ　たま。韓詩外傳、璇玉ー一」

【瑤樹】ジュ　美くしき樹。陳子昂詩「崑崙有ニ一一ニ、安得采ニ其英ニ」

【瑤鍾】ショウ　たまのさかづき。張耒詩「玉盃酔ニ一一ニ」‖瑤杯・瑤觴。

【瑤席】セキ　うるはしきむしろ。魏徴、五郊樂章「一一降ㇾ神、朱弦饗ㇾ帝」

【瑤衆】ダク　玉の如き枝、菊の異名。陸龜蒙、白菊詩「還是延年一種材、卽將ニ一一ニ」

【瑤玉】　カク・コク　㊀呉　㊁呉

一對の玉。左傳三十「王賜ニ之請納ニ玉於王與ニ晉侯ニ晉十一」註「雙玉曰ニ一ニ」‖珏。

【瑰】 クヮイ 灰 又竦に作る

○たま、一說に、美くしき石。○めづらし（珍奇）すぐれて居る一ー瑋」○玫ー（クヮイクヮ）は赤色の玉。又、草の名、はまなす（濱茄）

【瑰異】クヮイ めづらしくあやし。雅南千「聚人無二瑰奇之服一、無二ー異之奇一」‖奇異。

【瑰瑋】クヮイ めづらしくすぐれたるこころ。瑰琦を見よ。

【瑰偉】クヮイ すぐれて大いなり、偉一に瑰に作る。史、司馬相如傳「假儻ー一」

【瑰傑】クヮイ すぐれてめづらし。司馬相如賦「假儻ー一、異方殊類」‖珍奇。

【瑰材】クヮイ すぐれてたくまし。賈府元機「落花乎里、兵相ー一」‖魁碩。

【瑰琦】クヮイ すぐれてゐる、琦は奇。宋玉、對二楚王問一「夫聖人瑰意琦行、超然獨處」‖奇偉。

【瑰姿】クヮイ ふしぎにあやしく美くし。張衡文「峯崖刻削、窮二造化之ー一、經祠查冥、若二鬼神之彷彿一」

【瑰瑋】クヮイ すぐれたるたま。詩句などのすぐれたるに喩ふ。王禹偁詩「登閣有二摩英一贈別瑰與レ瓊」高啓詩「上有二秀句一如二ー一」

【瑰壯】クヮイ すぐれて立派。四京雜記「抽二盧公家一甚ー一」‖瑰偉。

【瑰姿】クヮイ すぐれたる容貌、瑰瑋なるすがた。傳毅賦「ー一譎起」

【瑰鮮】クヮイ すぐれてめづらしきことば。張九齡文「儷偶大節、遥落ー一」

【瑰儒】クヮイ すぐれて博雅なる儒者。山海經序「蓋周之徒、足レ爲二通識ー一」

【瑰邁】クヮイ うつくしくすぐれる。唐書、李商隱傳「商隱爲レ文、ー一奇古」

【瑳】 サ 歌 哿

○みがけるたま。○玉の色の鮮かに白き貌。○みがく。‖磋。○物の鮮かに白んなる貌。○白齒をちらと見せて巧に笑ふ貌。詩、衛風「巧笑之ー一」

【瑳兮】サケイ 色のあざやかなる貌。詩、邶風「ー一・ー一、其之展也」

【瑳瑳】サ ○たまの白く鮮かなる貌。宋史、樂志「珊珊ー一、箓金煌煌」○齒の白き貌。梅堯臣詩「苑花光粲粲、女齒笑ー一」

【瑣】 サ 哿

○くづ、こな、玉の屑ノ○連結する「連ー」又、くさり。‖鎖。○ちひさし（小）こまかし（細）○ひくし、いやし（卑）○青ーはくさり形に鏤めたる天子の門。

【瑣圖】サ 瑣闥に同じ。王維詩「夕奉二天書一拜二ー一」

【瑣近】サン こまかくして近し。杜預文「若使二奏語卑瑣一、則情趣ー一、立言高雋、則旨意遠大」

【瑣瑣】サ ○細小にして卑賤なる貌。一解につかれたる貌。易、旅卦「旅ー一、斯其所レ取レ災」○くだくだしくわづらはし、煩碎猥屑の意。○玉の屑（說文）

【瑣細】サイ わづか、細か。蘇軾詩「初移一寸根、ー一如二插秧一」

【瑣碎】サイ 瑣屑に同じ。韓愈詩「竹影金ー一」

【瑣窗】サウ まどに花紋を鏤りたるもの。陶潛詩「玉鏤隔二ー一」

【瑣散】サン こまかなる粉の如くにちる。周密、劉潘雪賦「築翅兮ー一」

【瑣事】サジ こまかなることがら。

【瑣屑】サセツ くだくだしく細か。梅堯臣詩「敲物怪二ー一」‖瑣細・瑣碎。

【瑣闥】タツ 宮門をいふ、門の上に連環の文を刻むが故。杜甫詩「曉漏追隨青ー一」‖瑣闈。

【瑣尾】ビ 小さくしておとろふ、尾は末、おちぶれる貌。詩、邶風「瑣兮尾兮、流離之子」一解にわかくうつくし（少好）き貌。

【瑣末】サマツ わづか。‖瑣細。

【瑣劣】サレツ くだくだしくおとる。元稹文「調旨ー一、目濆琴瑟一」

【瑤】 シャウ 蕭

玉又は樂器の鳴る聲。

【瑤琴】サウ 玉又は樂器の聲。詩、小雅「八鸞ー一」

【瑱】 テン シン 霰 チン 震

○みみだま、みみふさぎ、玉を以て耳に充つ。詩、鄘風「玉之ー一也」‖充耳。○一種の玉。‖鎭圭。

【瑱紘】シン みみふさぎの玉につけるひも。李商隱、祭レ姑文「冕紘ー一、山嶽黼黻」

【瑪】 バ 馬

ー瑙は寶石の一種、文理交錯して馬腦に似たり、印度に產す、紅色多き者を上品とす、笄・印材等に用ふ。‖馬腦・碼碯。

【瑯】 琅（玉部七畫）の俗字。

【瑠】 瑠（玉部十二畫）の俗字。

十一畫

【瑽】キウ　尤　○玉の觸れて鳴る聲。○磬に作るうつくしきたま。又、玉磬。‖球。

【瑽然】玉の觸れて鳴る聲。史、孔子世家「環―玉聲」

【瑽琳】美くしき玉。謝朓「西北之美者、有二崑崙盧之一―琅玕一焉」‖球琳。

【瑽】キン　侵　○一種の美くしき玉「―琪」○國取―と連用して取捉の義とするは誤。

【瑽瑤】瑽瑤は共に美玉、之を懷き握るは美德を抱くに喩ふ。楚辭、九章「――兮、窮不レ得レ所レ示」

【瑽琪】美くしきたま。左、宣十五「―――瓌、國若合レ璧」

【瑾】サイ　賄　○たまのひかり、つや(光采)○珠の垂れさがれる貌。○光采の散亂する貌。

【瑾彩】あざやかなるいろどり。曹植詩、丹華灼烈烈、―有二光輝一」

【瑾瑾】○光の散亂する貌。吳師道詩「瓦光浮―」○鮮明なる貌。

【璀】サイ　賄　○一種の美くしき玉「―璨」○國取―と連用して取捉の義とするは誤。

【璀璨】璀璨は共に美玉、之を懷き握るは美德を抱くに喩ふ。楚辭、九章「――兮、窮不レ得レ所レ示」

【璀璨】美くしきたま。左、宣十五「―――瓌、國若合レ璧」

【琿】キン　侵　○一種の美くしき玉。謝朓「西北之美者、有二崑崙盧之一―琅玕一焉」‖球琳。

【琲】ハイ　賄　○珠の垂れる貌。又、玉の光る貌。孫綽、遊二天台山一賦「琪樹――而垂レ珠」

【璇】㊀サウ　㊁サ　陽　筒　○玉に似たる一種の石。㊁門などにくさり形にほりつけたるかざり。‖璇。○――はちひさし(小)又、玉の聲。‖琼瑣。

【璇霄】高天。李白詩「――花落レ深」

【璇題】榮く盛んなる貌。晉灼注漢賦「下蒲蔚以―――」

【璇璣】珠の垂れる貌。又、玉の光る貌。孫綽、遊二天台山一賦「琪樹―――而垂レ珠」

【璜】シャウ　陽　○たま(半圭)圭を半分に割きしもの「圭―」

【璫】シャウ　多　佩玉の聲「―琤」

【璫琤】玉石の相擊ちて發する聲。杭賓小姬「劍珮―――、交二疎左右一」

【璉】レン　銑　先　夏の代、宗廟に供する黍稷を盛る器。瑚(玉部九畫)を見よ。

【璣】キ　微　○圓からざる珠「珠―」○小さき珠。○璇―は天文を正す器。詩、疑典「在璇―玉衡以齊七政」在は察。○北斗の第三星の名。

【璜】クワウ　陽　○おびだま(佩玉)の一、璧を半分にせし玉。佩玉には下に

【璫】㊀ケイ　㊁ケツ　屑　㊀赤きたま。‖瓊。㊁おびだま(佩玉)‖琪。

【璫珩】おびだま。鄭元箴詩「豪傑可レ貴如二―――一」‖衝璜。

【璞】ホク　屋　○あらたま(素玉)未だ琢がざる玉「―玉」老子「―散則爲レ器」○かざらざる眞實に喩ふ。戰國策「歸眞反―」

【璞玉渾金】琢かざる玉と、あらがねと。人の性の質朴純美なるに喩ふ。晉書、山濤傳「王戎目レ濤、如二――一人皆欲二其資一、莫レ知二名其器一」

【璠】ハン　元　璵―は美くしき玉にて魯國の寶(左、定五)

【璠】リウ　尤　琉(玉部七畫)に同じ、璠は俗字

―琉―は一種の寶玉、古、大喪

圓より出づ、赤・白・黒・黄・青・綠・紺・紅・紫の十種あり。‖琉璃・流離。

【璘】リン　眞　夕

○玉のひかり、玉の光彩。○一瑀ウンは文ある貌。‖隣陽・班璘。

【璘彬】リンビン　玉の光の盛る貌。張衡、西京賦「騈闐ー一」

【璘璘】リンリン　玉などの光る貌。歐陽修詩「落金盤潤ー一」

【璐】ロ　遇　ル

美くしき一種の玉。楚辭、九章「被ニ明月ヲ一兮佩ニ寶ー一」

十三畫

【環】クヮン　刪　ヴァン

○たまき、肉ありて中の好アナの徑と同じき壁。○たまのわ、わ、くわん「耳ー」「指ー」「鐶ー」○めぐる、まはる（旋回）○まはす、めぐらす、かこむ（圍）「ー視」「一繞」孟、公孫丑「一而攻之」○内外を巡察する官。

周圍環繞ヴァン　環繞・遶・行・巡・周・旋・運・回・廻・循・繚の別は繞（糸部十二畫）の條を見よ。

【環紆】クヮンウ　めぐりまとふ。王勃文「連峯雜起、複嶂ー一」

【環轉】クヮンテン　めぐれる日がさ。五代史、司天考「五代之際、日有ニ珥ー一、暈紐貫抱數層ー一」

【環海】クヮンカイ　○國の四方をめぐる海。江淹文「以ニ紫天ー一爲レ字、ー一爲レ池、保身大笑、被髮行歌」○轉じて四海・海内の義とす。韓愈、賀册尊號表「ー一之内、含生之類」

【環境】クヮンキャウ　○めぐりかこむ區域。元史「ー一作ニ須磨ニ選ニ精甲ー一外扞而耕ニ稼其中ー一」○個人身周圍の事物。

【環攻】クヮンコウ　かこみせむ。孟、公孫丑「三里之城、七里之郭、環而攻レ之而不レ勝」

【環堵】クヮンタ　たての張衡賦「獻ニ一環綺ー一兮」注「環、珠也、琨、璧也」

【環堂】クヮンダウ　衆くの人がくるまざにするわる。明史「於レ是ー一於地ー一」

【環周】クヮンシウ　○まはりをとりかこむ。柳宗元、石渠記「蒼蒲被レ之、青蘚ー一」○くるくるとめぐる。張華詩「四氣鱗次、寒暑ー一」

【環堵】クヮンド　めぐりみる。潘岳閑居賦「彌ニ性場ー一而種ニ菜、滋ニ情園ー一而ー一」‖環視。

【環竹】クヮンチク　みどりの竹樹をめぐらす。洛陽名園記「第レ之超然、登レ之愉然者ー一亭也」

【環繞】クヮンジョウ　めぐらす、めぐる。南史、阮孝緒傳「所レ居以ニ一頃牀ー一爲ニ精舍ー一、以レ樹ー一」‖圍繞。

【環飾動物】クヮンショクドウブツ　動物のからだが多くの同じ環狀のふしに分れてゐるもの。‖環蟲類。

【環旋】クヮンセン　めぐる。柳宗元傳「紅燄蔽ニ其左ー一、蜚氣舒ニ其右ー一、香凝ー一、入ニ子宮中ー一」‖旋環。

【環堵】クヮンド　わの耳かざり。戰國策「激ニ其ー一ー一、玉レ老不レ嫁、以愛ニ父母ー一」

【環堵蕭然】クヮントセウゼン　狹き家の貧しくさびしき貌。晉書、陶潛傳「ー一ー一、不レ蔽ニ風日ー一」次條參看。

【環堵之室】クヮントノシツ　方一丈を板とし、五板を堵とす。四方各一堵の小室。禮、儒行「儒有ニ一畝之宮、ー一ー一」

【環拜】クヮンハイ　めぐりをがむ。周禮、春官「ー一以ニ雷鼓ー一鼖鼓ー一爲ニ雷ー一」注「賓客環列而拜」

【環堰】クヮンエン　たまのおびひも。紀、綱解「行歩則有ニ一ー一之聲ー一」‖環佩。

【環肥燕瘦】クヮンピエンソウ　唐の明皇の妃、楊玉環は肥え、漢の成帝の后、趙飛燕は痩せて、竝に美人たり、よりて美人の體態同じからずして各其の妙を極むる謂とす。

【環翊】クヮンヨク　めぐりてたすける。翊は輔翼。漢書、天文志「三公侍レ後、藩位ー一」

【環雷魚】クヮンライギョ　さめの異名、魚に似たる海獸。‖鮫・鯊。

【環繚】クヮンレウ　めぐりまとふ。唐書、路巖敬傳「環レ水ー一、如レ璧然」

【環列】クヮンレツ　わの如くにならぶ。隋書、音樂志「丘陵爰峙、克光ニ天保ー一、闕洞開、百雉ー一」

【璨】サン　翰　ツァン

○美くしき一種の玉。○たまの光る貌。○璀ーサイはたまの垂れる貌。孫綽賦「琪樹璀ー一而垂ニ珠ー一」

【璨璨】サンサン　鮮かに白き貌。蘇軾、病中大雪詩「催思近ニ醇醪ー一、未ニ敢覺ニ一ー一」

【璨璨】サンサン　玉の光る貌。吳筠詩「燁燁青琳宮、ー一列ニ玉華ー一」

【璿】スヰ　霰　ツァン

佩ぶる端玉「佩ー」

【璀】ツイ　寘　ツェ

○みみかざり、みみだま（充耳）「琇ー」「耳ー」古詩「耳著ニ明月ー一」後世は宦官の裝飾品となる、故に宦官を稱してーといふ。○椽頭ノキバの飾。漢書、司馬相如傳「華椽璧ー一」○冠に著ける金玉。○丁ーは佩玉の鳴る聲。‖丁東。○琅ーは鈴。

【璧】ヘキ　陌　ピー

○たま、しるしだま、瑞状をなせるたま、肉ハが好ナの徑に倍するたま、穀ー・瑔ー・琮ー等の種類あり。○珙ーは大いなるたま。重寶の義とす。

【璧帛】ハキ　たまのさかづき。楚語「遇二之於鄭郊一、饗ノ之以ニーー一」

【反ノ璧】カヘス　人の贈物をかへす。左、僖二「晉公子重耳及ノ曹、僖負羈餓二甚レ璧、公子受ケ飧ーレー」

【銜ノ璧與ノ櫬】ンクワクヒ　たまを口中にふくみ、棺を背に負ふ、古の降服の禮。左、昭四「鞮子面縛銜ノ璧、士相與ノ櫬從ノ之」

【璧玉】ハキ　たま。新語「ー一珠璣不レ御二手上一、則玩好之物重二于下一」

【璧月】ハツ　たまの如く圓く美くしき月。江淹、太極殿銘「ー一宵懸、卿雲翼翠」

【璧筒】ハキ　たまのはこ。鄭俠詩「文章有二神力一、ー一光彩錯」

【璧人】ハキ　たまの如く美くしき人。衛玠別傳「玠幼齡時、乘二白羊車一、市上咸曰、謹家ー一」‖玉人。

【璧帛】ハキ　たまと、きぬと。進物とす。史、留侯世家「無レ愛二金玉一ー一、令二太子爲レ書、卑ノ辭安車因使二辯士固請一、宜レ來」

【璧門】ハキ　玉にて飾りし門。班固賦「設ニーー之屬闕一」

【璧砌】ハキ　玉にて飾れる柱礎。王僧孺、謝解表「ー一珠燦、綸映階平」

十四畫

【璽】シ　㊎

通書ジ筆は俗字

○しるし、おして、印、天子諸侯の印「玉ー」「傳國ー」○秦以後特に帝王の印の專稱とす「御ー」後漢書、輿服志「ー皆玉螭虎紐、文曰皇帝行ー・皇帝之ー・皇帝信ー・天子行ー・天子之ー・天子信ー」凡六」

【璽書】シヨ　○諸侯・大夫の印をおしたるかきつけ。左、襄二九「ー一追而與レ之」○秦漢以後、天子の印をおしたる文書。又、其の文體の名。文體明辯「天子之書、用レ璽以封、故曰ニーー一」

【璿】セン　㊎

○美くしきたま。‖琁・璇。○ー璣は古、天文を觀測せし器。

【璿璣玉衡】センキヨクカウ　古、天文を觀測する具。書、舜典「在ニーー一、以齊二七政一」‖渾天儀。

【璿宮】センキウ　玉にて飾りたる宮殿。王勃賦「金室廣如、ーー佚女」‖璇宮。

【瑞】ゼン　㊎

玉に似たる一種の石「ー玟」

○珉は玉の一種、璶（玉部十二畫）を見よ。

十五畫

【瓊】ケイ　㊍

ギヤウ　又、瑤に作る

○赤きたま。○うつくしきたま。○采色美くし。○廣く美くしき物の形容に用ふ「ー筵」「ー妄」

【瓊瑤】ケイおびだま。詩經、傳「佩玉ー一、所二以納ヒ閒」

【瓊英】ケイ　○玉に似たる美くしき石。詩經、傳「ー一、美石似レ玉者、人君之服也」○梅花の異名。宋璟、梅花賦「ー一綴レ雪、綵萼著レ霜、傳如傳粉、是謂二何郎一」

【瓊壁】ケイ　玉に似たる美石。詩經、傳「ー一石似レ玉、婦大夫之服也」

【瓊琚】ケイ　美玉、人の贈物を敬ひていふ。詩、衛風「投レ我以二木桃一、報レ之以ニーー一」

【瓊筵】ケイ　玉の如き美くしきむしろ。李白、春夜宴二桃李園一序「開ニーー一以坐レ花、飛二羽觴一而醉レ月」

【瓊蜂】ケイ　たまのさかづき。江淹、雙神歌「ーー既飾、纏綿以陳」‖玉蜂。

【瓊顆】ケイ　玉のひかり。陸雲、榮啓期贊「景邁ーー、春和桂春」‖瓊蜂。

【瓊機】ケイ　たま。王勃文「ーー有レ潮、藻繪多レ文」

【瓊玖】ケイ　美玉。善き贈物の譬。詩、衛風「投レ我以二木李一、報レ之以ニーー一」

【瓊琚】ケイ　美玉、よき贈物の義。詩、衛風「投レ我以二木瓜一、報レ之以ニーー一」

【瓊玉】ケイ　美くしきたま。竹書紀年「周成王二年、蜀人呂人來獻二ーー一」

【瓊懷】ケイ　たまの如くうつくしきこころ。陸雲、九愍「闕情穢以芬蕤、ーー皎其如レ玉」

【瓊嶼】ケイ　玉の山。張協、七命「ーー縣陵」

【瓊戸】ケイ　玉にて飾りたる戸。宋之問詩「畫堂ーー特相宜」‖瓊扉。

【瓊座】ケイ　うつくしき席。賀瑒、臘梅詩「增二綺窗之盛一、助ニーー之芬敷一」

【瓊采】ケイ　たまのつや。梁慶餘、殘雪詩「滅日彤ニーー、幽庭減二夜寒一」

【瓊姿】ケイ　たまの如く美くしきすがた。高啓、梅詩「ーー只合レ在二瑤瀨一」

【瓊枝玉葉】ケイシギヨクエフ　皇室の子孫に喩ふ。顏延之文「瓊枝挺秀、玉葉貴神」

【瓊枝梅樹】ケイシバイ　才德の備はれる人に比す。藝林伐山故事「佛經云、瓊枝寸寸是玉、梅樹片片皆香」轉じて巧麗なる字句に喩ふ。

【瓊室】ケイ　玉をちりばめたる美くしき家。揚雄賦「瑤臺ーー、華屋蘭高」

【瑕】カ　たまのかんざし。南齊書、崔祖思傳「一―玉筋、碎以爲ㇾ屑、珍若ㇾ琅玕之如ㇾ草」

【瑕樹】カジュ　玉の如く美くしき樹。人品の高潔に喩ふ。晉書、王戎傳「王衍神姿高徹、如二珊林一一一」

【瑕瑳】カサ　うつくしきらてな。杜甫、金華山觀詩「上有二蔚藍天一、垂ㇾ光抱二一一」

【瑕醜】カシュウ　美くしきくりや。拾遺記「邵望、光武皇后之弟、富無ㇾ匹、其西館皆以二玉器一盛ㇾ食、故謂二之東京郭氏之家一焉二一一金穴一」

【瑕瑳】カサ　たまをちりばめたるうつくしきとの。賈至詩「影浸二山河一一一冷」ㇾ珠宮一一殿。

【瑕邁】カバク　玉の如くうるはしき花。劉禹錫過二桃源一詩「香光既深味、一一亦加ㇾ餐」ㇾ瑕邁。

【瑕疵】カシ　玉のきかづき。唐書「張說與二徐堅一論二近世文章一、曰、王翰如二一一王璨、雖二偏然可一レ珍、而多二玷缺一」

【瑕鮫】カコウ　たまのこな。韋應物詩「莫ㇾ遣二兒童一觸」一一、留待二幽人掃一日」看」

【瑕林宴】カリンエン　宋代、進士の及第者に賜ふ宴。宋史、選擧志「進士始分三日、自ㇾ是錫ㇾ宴賦二瓊林苑一一」

【瑕樓玉宇】カロウギョクウ　月中の宮殿の形容。拾遺記「張見二月規中天、一一懸然二一一、賦詞「又恐――、高處不ㇾ勝ㇾ寒」

【瓚】サン　瓚（玉部十九畫）の俗字。

【璷】テキ　玉のきず（瑕）呂覽「寸之玉必有二瑕一一」

【璐】レイ　通音り又、黎・瓈に作る　琉一一は寶石の一つ。又、硝子ス。

【瓅】レキ　○ひかり、てらす「玓一一」○明かなる珠。

十六畫

【瓌】クワイ　○美玉。○めづらし、瑰（玉部十畫）に同じ。

【瓌偉】クワイイ　すぐれて大いなり。晉書、郤詵傳「博學多才、一一倜儻」ㇾ瑰偉。

【瓌瑋】クワイイ　奇特なり。莊子「其書雖二一一而違非無ㇾ傷也」

【瓌奇】クワイキ　めづらし。左思賦、「搜二一一」ㇾ珍奇。

【瓌寶】クワイホウ　めづらしき寶。梁元帝文「倍愛法師、靈天地之淳精、宇宙之一一」

【瓌寶】クワイホウ　すぐれて珍らしき物、珍奇なる品。張衡賦「一一方玉、鳥集鱗萃」

【瓌傑】クワイケツ　美くしくすぐれる。晉書「阮脩字蕭宗、容貌一一、志氣宏放」

【瓌才】クワイサイ　すぐれたる才。駱賓王詩「玉帳引二一一一」ㇾ命才。

【瓌姿】クワイシ　すぐれたるすがた。曹植文「一一艷逸、儀靜閑都」

【瓌秀】クワイシウ　すぐれてひいでる。唐書、呂元膺傳「泰儀一一、有二器識一」

【瓏】ロウ　○玉の相觸れて發する聲。○あきらかなる貌「玲一」

【瓏玲】ロウレイ　金玉のこゑ。楊載詩「散珠分的皪、擊玉碎一一」ㇾ玲瓏。

【瓏璁】ロウソウ　○玉などの觸れ合ふ聲。馬融傳「一一伯琦詩「星鈴綵校聲一一」○明かなる貌。韓愈詩「聲出孰知大、一一曉花乾」ㇾ玲瓏。

十七畫

【瓔】エイ・ヤウ　アウ・ヤウ　○一珞ラクは玉をつなぎたるくびかざり。○一琅ラウは玉に似たる石の名。

【瓖】ケツ　○うり、ひさご「黃一」「南一」「西一」○匏一は星の名。史、天官書、註「匏一一名天雞、在ㇾ河鼓東、匏一明、則歲大熟也」

【投ㇾ瓜得ㇾ瓊】トウカトクケイ　微物を贈りて多くの恩惠を得たる喩、瓜で瓜を釣る。詩、衛風「投ㇾ我以二木瓜一、報之以二瓊一一」

【瓚】サン　○一種のたま（珪玉）左、昭十七「用二一一玉瓚一」○人の名「陳一」

十八畫

【瓏】ロウ　○一種のたま（珪玉）左、昭十七「用二一一玉瓚一」○人の名「陳一」

【瓔珞】エイラク　たまをつなげる頸飾。後漢書、三仲傳「一一以纓ㇾ衣爲ㇾ飾」

十九畫

【瓚】サン　○たま（圭）○宗廟の祭に酒を進める具、柄に圭を用ふる故に玉一又圭ともいふ。

瓜部

【瓜】クワ　○うり、ひさご「黃一」「南一」「西一」○匏一は星の名。史、天官書、註「匏一一名天雞、在ㇾ河鼓東、匏一明、則歲大熟也」

【投ㇾ瓜得ㇾ瓊】トウカトクケイ　微物を贈りて多くの恩惠を得たる喩、瓜で瓜を釣る。詩、衛風「投ㇾ我以二木瓜一、報

レ之以二瓞縣一」

【瓜葛之親】クワカツノ　瓜葛は蔓草にて枝葉相まとふ。よりて繰つづきの義に喩ふ。晉書、王悅傳「王導皆與レ悅奕棋爭レ道、導笑曰、相與有二瓜葛一、那得レ爲レ爾邪」

【瓜期】クワキ　任期のみつる義。左、莊八「瓜時而往、曰及レ瓜而代」王世貞詩「歸不レ待二瓜期一」

【瓜果】クワクワ　うりと、くだものと。晉書、慕容儁傳「有レ園、在二宅北數里一、一一初熟、有レ人踰レ垣竊レ之」

【瓜瓠】クワコ　○うりと、ひさごとの總。月令「一一不レ成」○星の名。星經「一一五星、在二離珠北一」

【瓜犀】クワサイ　うりのたね。荊楚歲時記「七月采二一一一以爲二面脂一」本草「瓜中納レ月レ犀」＝瓜瓣。

【瓜時】クワジ　任期の滿つる時。瓜期を見よ。

【瓜菹】クワソ　うりづけ。黃庭堅詩、渕河飯食業、一一已佳茹」

【瓜代】クワダイ　任期が滿ちて他人と易る義。瓜期を見よ。

【瓜瓞緜緜】クワテツメンメン　瓜のつるに多くの小さき實を結ぶ。子孫の連綿たるに喩ふ。詩、大雅「緜緜瓜瓞、民之初生」

【瓜田不レ納レ履】クワデンフレリ　うりばたけにて履に足をいれず、瓜を盜む如く見えるが故。人に疑はるべきことを爲さざる戒。古樂府「一一、李下不レ正レ冠」

【及レ瓜】キフクワニ　任期が滿つる。瓜期を見よ。

【瓜分】クワブン　瓜を分つが如く、土地をわかつ。戰國趙策「天下將二因レ秦之怒一乘二趙之弊一而一一レ之」漢書、賈誼傳「高皇帝一二天下一、以王二功臣一」＝瓜剖。

【瓜辨】クワベン　うりの種子。謝惠連文「梅李核、一一皆浮出、不二甚爛壞一」

【瓜剖】クワボウ　瓜を分つ如く地を分ける。南史、陳武帝紀「八紘九野、一一豆分」＝瓜分。

【瓜剝抄】クワマツセウ　財産をしらべかすめて、無辜の民に及ぶ義。明史、景清傳「籍二其鄉一、種族磔死、謂二之一一村里爲レ墟」

五畫

【瓩】テツ　㕣　ちひさきうり（小瓜）「瓜一」

【瓢】ヘウ　㕣　ひさご。＝匏。

【瓢瓠】ヘウコ　ひさご。廣韻「一一可レ爲二飲器一」

六畫

【瓠】㊀ヨ　㊁クヮク　單　廣　廣

㊀ひさご、ゆふがほ、瓜の一種、形の長きもの、食用に供し、又乾かして容器とす。○やぶれたるかめ（破器）史、賈生傳「幹棄周鼎、分而寶二康一」貴きものをすてて無用のものを大切にするの喩。㊁ぼろぼろとかける。莊、逍遙遊「一一落無所容」

【瓠犀】コサイ　瓠中のさねの美人の齒の白く美くしくそろへるに喩ふ。詩、衞風「齒如二一一一」

【瓠瓜】コソウ　ひさご。詩は樗。蘇軾詩「一一酌二行潦一」

【瓠巴】コハ　上古の琴の人、善く琴を鼓す。列、湯問「一一鼓レ琴、而鳥舞魚躍」

【瓠瓢】コヒョウ　ひさご。謝承、後漢書「鄉欲隨二虞翻一學、同郡部敬公爲二督郵一、過レ敬、敬以二荷藥一內二一一一盛レ酒」

十一畫

【瓢】ヘウ　㕣

○ふくべ、ひさご、へうたん。○ひさごの實の中身を去りて空虛にし、酒等を容れる器。「一一簞」「酒一」○ひしゃく。莊、逍遙遊「剖二之以爲一一」

【瓢飲】ヘウイン　ひさごに容れたるのみもの。論、雍也「一簞食、一一一」

【瓢遊】ヘウイウ　ひさご。李白詩「驚二此動一一觴一願君從二一一一」

【瓢勺】ヘウシャク　ひさごを半分にしたるひしゃく。齊書、下彬傳「飲レ酒以二瓠壺一一一」

【瓢瓶】ヘウビン　ひさご。蘇軾詩「一一空佳レ賢」＝瓢簞。

【瓢簞】ヘウタン　○ひさごと、かたみと、飯は飯を入れる竹器、漿飲を見よ。陶潛文「冬無二縕褐一、屢空二一一一一」○圖酒を容れるふくべ。

【瓢蟲】ヘウチウ　天道蟲をいふ、こがねむしの一種、大さ三分許、形圓く、赤色にして黑き小點あり。

【瓠】ロウ　㕣　尤　からすうり（王瓜）「瓜一」

十四畫

【瓣】㊀ベン　㊁ベン　瓜　辛　㕣　綜　㕣

㊀うりのさね、瓜のなかご、瓜中の實。○數多の片より成れる果實の肉の一片、蜜柑などのふさ。仙傳拾遺「千餘枚皆缺二一一」○はなびら（花片）「花一」○機械の兩室の間に在る片、兩室の交通を開閉する仕掛けのもの「安全一」

【瓣香】ベンカウ ひとつまみの香、もと禪僧が人を敬禮する時に之をたきしもの。轉じて人を欽仰する義とす。陳師道詩「向來一一一、敬爲二曾南豐一」

【瓣鰓類】ベンサイルイ 軟體動物の一、左右二枚の殼と左右二枚づつの瓣狀の鰓とを有するもの、からすがひ・蛤等の類。

十七畫

【瓤】ジャウ 陽

○うりわた、瓜の内部、瓜中の實を包みて絮の如くにして汁あるもの。○蜜柑類の實の如く多くの房に分れる其の房「橘一」「柑一」

瓦部

【瓦】グワ 馬

○かはら、土を燒きて造りし板、屋根を葺き又土間に敷くもの「甍一」「一屋」○する「一器」○いとまき（紡塼）詩、小雅「載弄之一」○たてのうら（埴脊）左、昭二六「射之中楯一」○國 グラム 重量の單位、佛語の音譯、我が二分六厘七毛弱（支那にては克と譯す）

【瓦版】ガハン かはらのかめ。杜荀鶴詩「一一逢底猶斟時」

【瓦窰】グワエウ かはらのかめ。國史補「渾池道中有下車載二一甕中一手陰路上」

【瓦屋】グワヲク かはらぶきの家。考工記、匠人「葺屋三分、一一四分」

【瓦解】グワカイ 瓦の如くくだけちる。漢書、徐樂傳「天下之患、在二於土崩一、不レ在二一一一」

【瓦合】グワガフ ○敗瓦のあつまりは、うまくまとまらず。よりてよりあつまりの兵にいふ。漢書、鄭食其傳「說二沛公一曰、足下起二一一之卒一、收二散亂之兵一」‖烏合。○かどだたずまじはなり。禮、儒行「嘉レ賢而容レ衆、毀レ方而一一」

【瓦棺】グワクワン かはらのくわん。禮、檀弓「有虞氏一一」‖陶棺。

【瓦雞】グワケイ かはらのにはとり、形のみにて其の用を爲さざるに喩ふ。金樓子「陶犬無二守レ夜之警一、一一無二司レ晨之益一」

【瓦硯】グワケン かはらのすゞり。唐書、地理志「虢州弘農郡土貢二紬一一雜地骨皮染一」

【瓦盡】グワジン すやきのさかづき。梅堯臣詩「呼レ兒欲二自酌一一無完盞一」

【瓦屑】グワセツ 瓦にて造りしさかづき。徐調詩「樓上張レ燈倒二一一一」

【瓦師】グワシ かはらの製造人。大論「釋迦文佛、先世作二一一一」

【瓦斯】ガス ○英語の音譯、氣體のもの。又、石炭瓦斯の略。○瓦斯絲織の略。

【瓦石】グワセキ かはらと、いしと。八王故事「似二珠玉在二一一一間一」

【瓦磚】グワセン かはら、磚も瓦。‖瓦甎。

【瓦全】グワゼン 徒に身を全くする義。玉碎の反對。北齊書、元孫安傳「大丈夫寧可二玉碎一、不レ能二一一一」

【瓦樽】グワソン かはらのたる。李公佐詩「一一滿レ酒頻頻注」‖瓦尊。

【瓦豆】グワトウ かはら製のたかつき。儀禮「木豆謂二之豆一、竹豆謂二之邊一、一一謂二之登一」

【瓦缶】グワフ 土製のほとぎ。李商隱詩「洞房盈二一一一」

【瓦釜雷鳴】グワフライメイ 無學の人の誇說して、人を驚かすに喩ふ。又、庸愚の人の位に在るに喩ふ。風乎、卜居「黃鐘毀棄、一一、讒人高張、賢士無レ名」

【瓦甓】グワヘキ かはら、壁はしきがはら。蘇舜欽詩「一一滿二我前一」

【瓦龍】グワリウ かはらのつぎめ。杜牧、阿房宮賦「一一參差、多二于周レ身之帨一」

【瓦卜】グワボク 瓦を擊ち其の文理の分析するを見て吉凶をうらなふ「風俗通」杜甫詩「一一傳二神語一」

【瓦影】グワエイ かはらのさかだる。三禮圖「一一謂二祭紀之大器一也」

【瓦屬】グワクワツ かはらにて造りたる釜。家語「晉有二倫商者一、一一煮レ食」

【瓦礫】グワレキ かはらと、こいしと。價値なき物に喩ふ。歷代名畫記「好レ之則貴二於金玉一、不レ好賤二於一一一」

二畫

【瓧】國字

瓦グワの十倍、十瓦（支那にては瓩）

三畫

【瓰】カウ コウ 陽 東 江

もたひ、頸の長き甕ノ支那語にて十升を受く。漢書、貨殖傳「醯醬千一」‖缸。

【瓸】國字

瓦グワの千倍、千瓦。基ラム（支那にては瓲）

四畫

【瓮】ワウ 董

もたひ、かめ（瓶罌）‖甕。

【瓱】國字

瓦グワの十分の一。デシグラム。

【瓶】國字　瓦グラムの千分の一。ミリグラム。

五　畫

【瓷】アウ　㊥　○ぼん、ほとぎ。＝盎。○甕ーは大いなる甕ブロの貌。

【瓴】レイ　リャウ　青　○かめ、瓶の耳ある者。○かはら(瓦)屋瓦の仰むけにふくもの、其の凹みし所を雨水が流れる。＝瓦溝牝瓦ガハラ

【瓴水】ライ　かめのみづ。史、高祖紀「秦形勝之國、帶二河山之險一、蘇隔千里、持戟百萬、秦得二百二焉、地勢便利、其以レ兵下二於諸侯一、譬猶二居高屋之上一建二ー一一上也」注「瓴盛レ水瓶也、言二其向レ下之勢易一也」建は覆す。

【建二瓴水一】クワンスイ　かめの水をくつがへす。勢の強きに喩ふ。前條參看。

六　畫

【瓷】シ　支　又、甆に作る、俗に磁に作る　○かめ、瓶の耳ある者。○かはら(瓦)屋瓦の仰むけにふくもの、其の凹みし所を雨水が流れる。＝瓦溝牝瓦ガハラ

【瓴水】ライ　かめのみづ。史、高祖紀「秦形勝之國、帶二河山之險一、蘇隔千里、持戟百萬、秦得二百二焉、地勢便利、其以レ兵下二於諸侯一、譬猶二居高屋之上一建二ー一一上也」注「瓴盛レ水瓶也、言二其向レ下之勢易一也」建は覆す。

【建二瓴水一】クワンスイ　かめの水をくつがへす。勢の強きに喩ふ。前條參看。

晏景初殿賦「—ニ—國風」‖陶甄・冶陶。

【甄拔】ケンバツ　人才を明かに別ちてぬき用ふる。晉書、山濤傳「山濤舉ニ冀州刺史一ニ—隱逸一擢ニ訪賢才一」‖選抜。

【甄表】ケンヘウ　明らかにわかちあらはす。後漢書、安帝紀「詔貞婦有ニ節義一、賜ニ穀十斛一—ニ—門閭一、旌ニ顯厥行一」

【甄別】ケンベツ　優劣を明かにわかちて去取を定める。元史「—ニ—能否一、公ニ其黜陟一」

【甄明】ケンメイ　あきらか。北史、王延傳「性識—ニ—、精力不レ衰」

【甃】シウ　宥

○しきがはら、地に敷きならべる平瓦。○いしだたみ、平たき石をしきならべしもの「石—」○井の内側をたたむかはら「井—」○をさむ(治)○かざる(飾)

【甃石】シウセキ　いしだたみ〔東京夢華錄〕

【甌】ヘン　先

かめ、ほとぎ、小盆。

【甎】國字

瓦グラの百分の一。センチグラム。

【甍】ボウ　庚

○はち、ほとぎ。○やぶれたるもたひ。○われる、裂く、陶器がこはれる。揚子法言「甄ニ陶天下一者在レ和、剛則—、柔則延」

十一畫

【甌】オウ　尤

○かめ、小さき甁、小さきぼん(小盆)「瓦—」「金—」「茶—」○古の地名、今の浙江溫州府地方。

【甌脫】オウダツ　胡人、境上に土室を作りて漢人を伺ふもの。史、匈奴傳「各居ニ其邊一爲ニ—ニ—ニ‖區脫。

【甌窶滿篝】オウロウマンカウ　狹小にして小高きはたけ、篝は竹にてあみし籠、米が籠に滿つるは非常なる豐作をいふ。史、滑稽傳「——、汙邪滿車」

【甎】セン　先　又塼に作る

○かはら(瓦)しきがはら(壁)○瓦のいとまき。詩、小雅「載弄之瓦」注「瓦、紡—也」

【甕】ベウ　庚

いらか、やねのむね、むながはら(屋棟)「連—」「雲—」

【甕甍】ヨウバウ　いらかと、むねと。劉孝綽詩、朝起望ニ—ニ—一

十二畫

【甑】シウ・ソウ　送　經通音ソウ

こしき、せいろう(炊器)土やきの槽、上は大きく下はほそく、釜の上にのせて米などをむすもの「釜—」

【甑不レ顧】ソウフカヘリミズ　あきらめのよきにいふ。後漢の孟敏の故事。後漢書、郭泰傳「孟敏荷レ甑墮レ地、不レ顧而去、郭林宗見而問ニ其意一、對曰、甑已破矣、視レ之何益、林宗以レ此異レ之」

【甑塵釜魚】ソウヂンフギョ　極貧にして久しく炊がざる義。次條を見よ。

【甑中生レ塵釜中生レ魚】ソウチウセイヂンフチウセイウヲ　極めて貧しき形容。後漢書、范冉傳「冉、字史雲、陳留外黃人也(中略)乃結ニ茅室一而居焉、所止單陋、有レ時絕レ粒、窮居自若、言貌無レ改、閭里歌レ之曰、甑中生レ塵范史雲、釜中生レ魚范萊蕪」萊蕪は地名、冉て其の地の長たりし故。

【坐レ甑】ザソウニオス　こしきの中に坐する。暑熱の甚だしき形容。韓愈詩「五月因ニ暑濕一如ニ坐ニ深甑一遭ニ—蒸炊一」

【甑盆】ソウボン　こしきと、はちと。韓詩外傳、昔者舜—ニ—無レ膽」

【甕】プ　虞　ム

もたひ(小甕)酒を容れる小甁。

十三畫

【甕】ヨウ　送　多

○かめ、もたひ。‖盆。○つるべ、井戸の水を汲みあげる甁。○酒を容れるかめ。李斯、諫逐客書「擊ニ—一扣レ缶」○—盆は大いなる酒の器。

【甕牖繩樞】オウユウジョウスウ　敗壁の口をまどとし、繩を以てとぼそに繋ぐ、貧家の形容。賈誼、過秦論「陳涉——之子、傭耕之人、而遷徙之徒也」‖蓬戸甕牖。

【甕盎】オウアウ　甁中に生ずる小さき羽蟲。

【甕裡醯雞】オウリケイケイ　甕裡醯雞を見よ。

【甕天】オウテン　見る所の狹き喩。黃庭堅詩「醯雞守ニ—一」‖甕裡醯雞を見よ。

【甕頭】オウトウ　初めて熟せし酒、甕頭春の略稱。法書要錄「江東云ニ缸面一、猶ニ河北稱ニ—一、謂ニ初熟酒一也」

【甕頭春】オウトウシュン　前條に同じ。孟浩然詩「已言鹽梅熟、復道——」

【甕裡醯雞】オウリケイケイ　世間知らずの小人に喩ふ、醯雞はかめの中の蟣蝨ぎ

莊、田子方「孔子見二老聃一（中略）出以告二顏回一曰、丘之於レ道也、其猶二醯雞一與、微二夫子之發二吾覆一也、吾不レ知二天地之大全一也」

【甕】オウ　東　翰

大いなるもたひ（大甕）一石を受く。史、貨殖傳「漿千―」＝僧。

【甓】ヘキ　ハク・ヒャク　陌　麥

○かはら（瓦）しきがはら（甃）晉書、陶潛傳「朝運二百―于齋外一、○かめ（甑）○井戸側のいしだたみ。

十四畫

【甑瓦】アツ　エイ　敬　庚

かめ、もたひ（甕）酒を盛る甁。【晁錯】守レ邊かめを編みて竹筏（ばつ）の如くにして水を渡る。曾鞏文、淳化之歳、當自二七月一至二九月一雨不レ止、漂明門外皆浮二―一以濟」

十六畫

【甗】ゲン　阮　銑　篠　元

○こしき（甑）底のなきこしき。○こしきの如き形せる山。

甘　部

【甘】カン　覃

○あまし（甜）苦の對。○うまし（美）うまき食物「旨―」孟、梁惠王「爲レ肥―不レ足於口一歟」○あまんず、うましとす、滿足する、意を快くする「一レ心」○耳を悦ばすことば。左、昭十一「幣重而言―」○ゆるし（緩）○たのしむ（樂）○たちばな「―橘」柑は俗字。○―露は省名、元代より置く、西貢の雍州の城。

【甘雨】カン　よきあめ。論衡「道玉レ天者、膚風起、――降」＝時雨。

【甘羣】カン　うまきさかな。後漢書、黄香傳「惟見玉堂嚴麗、旨酒―、盈二衍其中一」

【甘橘】カン　みかん。唐詩「竹林千戸封、――蜜頭奴」＝甘橘。

【甘苦】カン　○あまきと、にがきと。荀子「――鹹淡、辛酸奇味、以レ口異」○たのしみと、くるしみと。○苦にあまんず。

【不レ知二甘苦一】シラズ　甘きと、にがきとを辨へず。道理の善惡を知らざる喩【戴、非攻】

【甘瓜】カン　まくはうり。本草「甜瓜、一名―、一名果瓜」

【甘果】カン　味のあまきくだもの。李尤賦「橘柚含桃、―――成レ叢」

【甘堝】カン　金銀を鎔かすつぼ、るつぼ。甘」に堝に作る。玉篇「―、所二以鎔二鍊金銀一」

【甘言】カン　よろこばしくきこえることば、こびへつらふ言。戰國策「周君曰、苦言藥也、―――疾也」

【甘草】カン　藥草の一、高さ二三尺許、多年生草、葉は藤に似、淡紫色の花を著く、根は黄色甘味、藥用とす。

【甘酸】カンサン　あまきと、すきと。借りて苦樂の義とす。黄庭堅詩「先見二氣渡一語二世味一、如下食二橘柚一知中―上」

【甘旨】シ　味うまし。又其の物。陸詩外傳「鼻欲レ嗅二芬香一、口欲レ嚐二―一」＝旨甘。

【甘心】シン　わが心の思ふままにす。左、莊九「鮑叔帥レ師、來言曰、子糾親也、請君討レ之、管召讎也、請受而―レ醢」

【甘心如レ薺】カンシンセイ　心おちつきて苦を感ぜざるにいふ。南史、梁范雲傳「今日就レ戮、――」

【甘蔗】カンシャ　さたうきび、黍に似たる多年生草、莖より砂糖を製す。異物志「交趾所レ產、――特醲好」

【甘受】カンジュ　あまんじてうける、快く受ける。

【甘薯】カンショ　さつまいも。＝甘藷。

【甘藷】カンショ　さつまいも。

【甘食】カンショク　味うまく食ふ。孟、盡心「飽者―レ、煖者甘レ衣」

【甘蕉】カンショウ　次條に同じ。

【甘旨】カンシ　うまく柔かなる食物、譬は膳。史、刺客傳「且夕得二―一以養レ親」

【甘井先竭】カンセイマヅカツ　才能ある者は早く衰廢するに喩ふ。莊子「直木先伐、――」

【甘蔗】カンシャ　甘味ある一種の草、なつな、あまな。詩、衛風「誰謂荼苦、其甘如レ薺」後鈔、新茶詩「―一非二子四一」

【甘蔗】カンショ　芭蕉ショウの異名「普拉雅、異物志」

【甘液】カンエキ　味あまくやはらか。拾遺記「日南之南、有二淫泉之浦一、或言、此水一―、男女飲レ之、則淫、其水激レ石之聲、似二人之歌笑一、聞者令二人淫動一、故俗謂二之淫泉一」

【甘鼠】カンソ　鼯鼠ゴソの異名。埤雅「鼠之最小者、或曰二―一」

【甘棠之愛】カントウノアイ　周の召公の善政に感じて其のやどりし甘棠カントウの樹を大切にせし故事。借りて善治者を思慕する情の切なるにいふ。詩、召南「蔽芾甘棠、勿レ翦勿レ伐、召伯所レ憩」

【甘話】カンワ　こころよくうけあふ。＝快諾。

【甘煖】カンダン　うまき物と暖かなる衣と。李子傳「江東齊人、竭レ力備レ質、以

致ニ——ニ‖甘暖。

【甘盤】カンバン 殷の賢臣にして道徳ある者。書經「台小子舊學ニ于——」

【甘肥】カンピ うまくこえたる肉。陶潛詩「我豈貪所ノ美、孰敢甚ニ——ニ」

【甘美】カンビ あまくうまし。易林「桃李花實、晝晝日息、長大成熟、——可ノ食」

【甘木】カンボク 不死の樹、之を食へば死せずといふ（山海經、注）

【甘味】カンミ うまきあぢはひ。又、うまくあぢはふ。史記「楚王曰、寡人集不ノ安ノ席、食不ノ——」

【甘蠅】カンヨウ 古の射を善くせし人（列子）

【甘露】カンロ あまきつゆ。天下太平のしるしに降るといふ。論衡「——味如ニ飴蜜ニ、王者太平則降」‖音義、神穀。

【甘蔗子】カンシャシ 薏苡ノタの異名（姑蘇志）

四畫

【甚】ジン 寢 裕

○はなはだし、太ー已ーともに用ふ、非常に、常度を超える。○はなはだしき事物。老子「聖人去ー」○ふかし（深）○おもし（重）○なんぞ（何）「ー麼」

同音異義 勝甚・太・泰・酷・絕・孔・已

○甚はひどく、又は、きつく、いみじくと訓す。論語「其斯之謂ー也」○太は太極・太上などの太にて、このよもなくなり。宋玉賦「求ノ解則太白」太甚とも連用す。○泰は太に同じ。○酷は酷酷・酷吏などと熟す、主極てひどき義なり。史記「何無忌酷似ニ其舅ニ」○絕は絕代・絕好などと熟す、外に比類なく、とび離れてなり。史記「無忌騙場、報ニ平王ー日、楽女絕美、平王遂自取ニ楽女ー而棄ニ之ー」○孔は甚に同じ、古文に用ふ、後世は韻文ならでは、多く用ひず。詩經「兄弟孔懷」○已は太に同じ、已甚とも連用す。

【甚雨】ジンウ 大雨。禮、王藻「若有ニ疾風迅雷ー一ー則必變」‖猛雨。

【甚口】ジンコウ 大いなる口。左、昭二六「有ニ君子ー、白皙鬑鬑眉、ー一」一解甚だ辯口ある義。

【甚篤】ジントク はなはだあつし（唐書、陸贄傳）‖酷篤。

【甚大】ジンダイ 非常に大いなり。易、繫辭「其道ー一」‖多大。

六畫

【甜】テン 鹽 又、舐に作る

○あまし（甘）○うまし（美味）○黑ー——コクチンは臥睡ヒルネ酥軾詩「一枕黑ー餘」

【甜甘】テンカン あまくうまし。晉書、張天錫傳「天錫歸ノ朝、朝士多歿ノ之、會稽王道子嘗問ニ其西土所ニ出、天錫應ノ聲曰、桑葚ー一、助ニ甜ー一ノ聲、乳酪發ノ性、人無ニ貳心ー一」桑葚は桑の實。

【甜瓜】テンカ まくはうり。本草「ー一、一名甘瓜、一名果瓜」

【甜菜】テンサイ さたうだいこ、製糖料とす。

【甜梅】テンバイ 杏ノの異名（江南錄）

【甛】テン 甜（前條）に同じ。

八畫

【甞】ショウ 嘗（口部十一畫）に同じ。

生 部

【生】セイ シャウ 庚

○うまる、うむ（産）子をうむ。○いきながらふ、いく。死の對。轉じて世に在る義とす「一ー」「平ー」○いかす（活）殺の對。○いのち「一命」孟、告子「舍ー而取ニ義」○おこる。おこす（起）○やしなふ、そだつ（長養）史、孟嘗君傳「其母窮卑ー之ー」○いづ。いだす。○なる。なす（造）○はゆ、草木がはえる、おふ、成長する。○みち（義理）○すぎはひ、くらし（産業）○瑕なきこと。○いきもの（動植物）論、鄉黨「君賜ー必畜ニ之ー」○なま（不熟）又、物事が十分に練熟せず。○いけどり（禽獸）いきながら、いきてるまま「ー擒」○讀書人の稱「先ー」「後ー」「書ー」○自己の謙稱「小ー」「晚ー」○俗語に用ふる無意味の助字「太俗ー」「作孽ー」

【有ノ生者必有ノ死】セイアルモノハカナラズシヌ 生きたるものは必ず死す。揚子法言「——、有ノ始者必有ノ終、自然之道也」

【生意】セイイ ○いきいきしたる心。陶潛賦「ー一活動」‖生機。○商賈の變易。

【生育】セイイク おひそだつ。詩經「載震載夙、載生載育」‖生長。

【生生】セイセイ いのちを貪る、恥をしの

びて一日一日とくらす。偸又媮に作る。李陵、答二蘇武一書「豈ー〻ー之士、而惜ー死之人哉」

【視ー生如ー死】シセイハシニノゴトシ　心を労らし、意を苦むる所なきをいふ。列子「——、視ー富如ー貧、視ー人如ー家、視ー我如ー人」

【貪ー生】タンセイ　生きながらへることをむさぼる。淮南子「或ー〻ー而死、或輟ー〻ー死而得ー生」

【樂ー生畏ー死】ラクセイヲオソルヽヲ　生きてゐる者を十分に楽ひ、死者を丁寧にとむらふ。孟、梁恵王「——、王道之始也」疏、遵運には喪を送に作る。

【不ー聊ー生】フリョウセイ　安心して生活せず。史、主父偃傳「苦——」

【生家】セイカ　己の生れたる家、さと、實家。

【生孩】セイガイ　みどりご、孩は幼児のはじめて笑ふをいふ。李密、陳情表「ー六月、慈父見ー背」

【生硬】セイコウ　○固陋にして無作法なり。掛冠錄「北都有二姑女一、美色而舉止ー、人謂二生張八一硬一」に據に作る。○詩文の熟練を缺くにいふ。

【生客】セイカク　はじめての客。熟客の對。東坡志林「子由作二龍賢堂記一、儕爲書之、且欲ァ果二廬山一結綠、它日入ー山不ー爲ニーー一也」

【生氣】セイキ　○萬物を生ずるいきいきしたるいきほひ。禮、月令「季春之月、ーー方盛、陽氣發泄」○鬱悶の氣を生ずる。國語「我曲楚直、其衆莫ー不ーレーー」

【生禽】セイキン　いけどる。魏志、李通傳「ーニー黄巾大帥吳霸一」禽は擒に同じ。

【生擒】セイキン　前條に同じ。

【生薑】セイキョウ　しゃうが、はじかみ、宿根草の一、根莖は黄色にして辛味あり、薬用又食用とす。‖生姜。

【生魚】セイギョ　○未だ死せざるうを。○なまうを、なまざかな。‖鮮魚。

【生壙】セイコウ　生存中に設くる墓。陸餘叢考「司空圖作ニーー一、每二春秋佳日一、邀二賓友一遊二咏其上一」‖壽藏。

【生活】セイカツ　いきながらふ。又、よわたり。文子、道德「自二天子一以下至二于庶人一、各自ーー」

【生還】セイカン　いきてかへる。劉長卿詩「天南一萬里、誰料得ニーー一」

【生計】セイケイ　くらし、なりはひ。劉倉詩「自憐ーー事悠悠、浩渺滄浪一釣舟」‖活計。

【生訣】セイケツ　いきわかれ。後漢書、馬援傳「出征二交趾一、土多二瘴氣一、援與二妻子一ーー、無二海音之心一」‖生別。

【生業】セイギョウ　なりはひ。史、封禪書「不ー治ニーー一而饒給」

【生絹】セイケン　きぎぬ、ねらざるきぬ。晉史、古今注至二唐初一皆ーー」‖生縑。

【生縑】セイケン　ねらざるきぬ。圖繪寶鑑「畫二梅於ーー扇上一」

【生口】セイコウ　○軍中のとりこ、捕虜。漢書、李陵傳「捕得ーー首」○牛馬の類（魏志、王昶傳、注）

【生財】セイザイ　財利を生ずる。大學「ーレーー有二大道一」‖生利。

【生殺】セイサツ　いかすと、ころすと。蘇軾詩「書生只宜坐二帷幄一、談笑弄二ーー一」‖活殺。

【生産】セイサン　○なりはひ。史、陳丞相世家「其嫂誚二平之不ー視二家ーー一」‖生業。○自然物に人工を加へて財物を増しふやす作用。

【生産額】セイサンガク　生産せし財物の高。

【生産力】セイサンリョク　財物を生産するちから。

【生祠】セイシ　生存中に神として祭る爲め立てし祠。漢書、于定國傳「父于公爲二郡決曹一、決獄平、郡中爲レ之生立レ祠、曰二于公祠一」

【生師】セイシ　生徒と教師と。李觀、袁州學記「ーー有レ舍、廚廩有レ次」

【生紙】セイシ　すきたるままの紙。唐代、喪あるときに用ひしもの。熟紙の對。錄異、與二陳給事一書「用二ーー一寫」

【生魚】セイシ　○はがはえる、男は生れて八月、女は七月にして齒を生ず。周禮、司民「自二ーー一以上、皆登二于版一」○轉じて人民の義とす。

【生日】セイジツ　たんじゃうび。顔氏家訓「江南風俗、二親若在、每レ至二ーー一、常有二酒食之事一」‖生辰・誕辰。

【生死肉骨】セイシニクコツ　死をいかし骨に肉つける。人の大恩を受くるにいふ。左、襄二十二「所謂生レ死而肉レ骨也」

【生人】セイジン　人民。唐人、太宗の諱を避けて民を人といふ。白居易詩、杜國勳成私自問、有二何功德一及二ーー一」‖生民。

【生心】セイコウシンヲシヅ　異志あるをいふ。左傳「戒之ーレ、國之患也」

【生辰】セイシン　たんじゃうび。‖生日・誕辰。

【生業】セイギョウ　民をそだて財をあつむ、國力を養ふ義。左傳「伍子胥曰、越十年ーー、而十年敎訓」

【生色】セイショク　○いきいきしたる色つや。○色に生ずる。顔色にあらはれる。孟、盡心「其ーレ也睟然見二於面一」

【生殖】セイショク　生物が子を生みて次第にふえる。生産繁殖の義。左傳「效二天之ーー長育一」

【生遂】セイスイ　そだつ。朱熹詩「動植各ーー、總容自清溫」

【生芻】セイスウ　刈りて未だ枯れざるまでも。詩、小雅「皎皎白駒、在二彼空谷一、ーー一束、其人如レ玉」其の德玉の如き賢人が、世に用ひられず、白駒に乘りて遠く去らんとするを惜みて、せめて一束のーーを秣ヤシナはんとして贈りたしとの意。

【生生】セイセイ　物の絶えずして生ずる貌。易、繫辭「ーー之謂レ易」

【生生世世】セイセイヨヨ　現世も未來も、何

時の世までも、未来永劫。
【生前】セイゼン 書を書くときぎぬ。韓愈詩「――数幅壁中堂」
【生前】セイゼン 生きてをるうち。死後の対。杜甫詩「――相遇且衝杯」
【生鮮】セイセン なま。又、あたらしくいきいきする。捜神記「鰹魚皆三尺餘、――可愛」
【生憎】アイニク をりあしく、意外に。風雅遺響「――幌頭細二孤鴈一」‖生怕。
【生息】セイソク いきながらふ。李覯詩「行行求二飲食一、欲三以助二――一」‖生存。
【生存】セイゾン いきながらふ。陸游詩「――惟愛二酒泉封一」
【生存競争】セイゾンキョウソウ 生物が各自の生存上より起る競争。
【生日淨末】セイタンジョウマツ 俳優の名称。生は男優、旦は立おやま、淨は悪人、末は立役又あらごとし。〔北夢瑣言〕
【生数】セイスウ いけどりてつれくる。
【生知安行】セイチアンコウ 生れながらにして知り安んじて行ふ。聖人をいふ。中庸「或生而知之、或学而知之、或困而知之、及二其知之一也、或安而行之、或利而行之、或勉強而行之、及二其成功一也」
【生長】セイチョウ おひそだつ。司馬相如、上林賦「隆冬――」
【生蟲】セイチュウ いきもの。竹書紀年「鳳凰不レ食二――一」
【生徒】セイト 学校にて教を受くる者。後漢書、寇恂傳「修二郷校一、教二――一」
【生動】セイドウ いきいきしてうごく、甚などの真に迫るをいふ。東観餘論「以二氣韻一――一爲レ先、經営位置爲レ下」
【生得】ショウトク ○いけどる。史、淮陰侯傳「毋レ殺二漢武君一、有二能――者一、購二千金一」‖生捕・生獲。○うまれつき。
【生活剣】セイカツケン 他人の詩文を丸ぬすみする義。唐詩紀事「時語曰、活二剽張員餘一、生呑郭正一」
【生肉】セイニク なまのにく。熟肉の対。漢書、東方朔傳「――爲レ膾、乾肉爲レ脯」
【生年】セイネン ○生れ歳。後漢書、呂布傳「――以来、不レ聞二天下有二劉備一」○いきてゐる間、寿命。次條參看。
【生年不満百、常懐千歳憂】セイネンフマンヒャク、ツネニセンサイノウレイヲイダク 文選の古詩の句。
【知二生之楽一未レ知二生之苦一】チセイノラクヲシッテセイノクルシキヲシラズ 人は生きてあることの楽みを知りて其の苦みあるをしらず。列、天瑞「人皆――」
【生寄死帰】セイキシキ 人の世に在るは、一時の寄留の如く、死亡は本宅に帰るが如し。淮南、精神「生、寄也、死、帰也、何足二以滑一和」
【生魂】セイコン 陰暦十六日。書經、傳「周公攝政七年三月、始――、月十六日」
【生硬】セイコウ 未だ熟せざる様。詩話「無二光之處、名レ魄也」
【生徒】セイト 学校にて教を受くる者。後漢書、寇恂傳「修二郷校一、教二――一」
【生動】セイドウ いきいきしてうごく、甚などの真に迫るをいふ。東観餘論「以二氣韻一――一爲レ先、經営位置爲レ下」
【生得】ショウトク ○いけどる。史、淮陰侯傳「毋レ殺二漢武君一、有二能――者一、購二千金一」‖生捕・生獲。○うまれつき。
【生活剣】セイカツケン 他人の詩文を丸ぬすみする義。唐詩紀事「時語曰、活二剽張員餘一、生呑郭正一」
【生肉】セイニク なまのにく。熟肉の対。漢書、東方朔傳「――爲レ膾、乾肉爲レ脯」
【生年】セイネン ○生れ歳。後漢書、呂布傳「――以来、不レ聞二天下有二劉備一」○いきてゐる間、寿命。次條參看。
【生年不満百、常懐千歳憂】セイネンフマンヒャク、ツネニセンサイノウレイヲイダク 文選の古詩の句。
【知二生之楽一未レ知二生之苦一】チセイノラクヲシッテセイノクルシキヲシラズ 人は生きてあることの楽みを知りて其の苦みあるをしらず。列、天瑞「人皆――」
【生寄死帰】セイキシキ 人の世に在るは、一時の寄留の如く、死亡は本宅に帰るが如し。淮南、精神「生、寄也、死、帰也、何足二以滑一和」
【生魂】セイコン 陰暦十六日。書經、傳「周公攝政七年三月、始――、月十六日」
【生物】セイブツ 生物の構造・状態・分布等を研究する科學。
【生兵】ナマヘイ ○あらての兵。○新兵。
【生平】セイヘイ へいぜい、平常に同じ。史、張耳陳餘傳「――閒二耳餘賢一」‖平生。
【生別】セイベツ いきわかれ。死別の対。‖生訣。
【生擒】セイキン いけどる。後漢書、呂布傳「――二虎一而縛レ之」‖生擒・生獲。
【生母】セイボ 己を生みたるはは。庶母・継母の対。南史、謝朏傳「所レ――郭氏疾」
【生民】セイミン たみ、人類の通、公孫丑「――以来、未二嘗有一也」
【生命】セイメイ いのち、誥命。北史、源賀傳「人之所レ貴、莫レ貴二於――一」
【生面】セイメン ○新らしき方面、所帰軸。杜甫詩「凌煙功臣少二顔色一、將軍下レ筆開二――一」○はじめての面會。
【生茂】セイモ おひしげる。易林「甘露降、萬物――」
【生来】ショウライ ○うまれてこのかた。○うまれつき。
【生理學】セイリガク ○生物の生活する原理を研究する科學。○人身生理學。
【生類】セイルイ いきもの。宋史、食貨志「鳥獣未レ蟄、草木萌蘖、概縦燎レ原、則傷二――一、須二十月後方得レ縦レ火」‖生物。
【生塩】ナマジオ ○たみ。晉書、蔡謨傳「――仰二其徳一、四海歸二其仁一」‖生民。○いのち、生命。沈約文「――有レ限、勞役過疲」
【生路】セイロ ○たすかるべきみち。陶潜文「江革窮人也、遭二章帝時一、雖レ賦レ貧、毎而遷、賦貧レ之不レ害、而告二其――一」○はじめて通る路。熟路の対。
【開二生路一】セイロヲヒラク 活路をひらく。魏志、曹仁傳「開レ城必示二之活門一、所三以開二其生路一也」
【生害】ガイ 圓じがい（自害）‖自殺・自刃。
【生涯】ショウガイ 一生のあひだ。荘、養生主「吾生也有レ涯、而知也無レ涯」
【生者必滅】ショウジャヒツメツ 諺 いのちある者は必ずほろぶ。
【生滅滅已】ショウメツメツイ 圓 生滅の諸現象を滅断して佛果を得る。涅槃經二諸行無常、是生滅法、――、寂滅爲樂」
【生老病死】ショウロウビョウシ 圓 生ると老ゆると病むと死ぬとの四苦は人の免るべからざるもの。法華經科註「――四苦也」
【生菩薩】ボサツ やさしく美くしき婦

人。書言故事「人妻有二三可ニ長、年少之時視レ之如ニ一一ニ安有ニ人不ニ一長ニ一一耶」

五畫

【甦】 シン 眞

むらがりて盛んに生ずる、おほし（衆多）詩、大雅「一一其鹿」

六畫

【産】 サン 濟

○うむ、子を生む。うまる、子が出生する「安ー」○うまれ。孟、滕文公「陳良楚ー也」○うまれたる物「海ー」「物ー」○なりはひ、くらし「生ー」「一業」「恒ー」○もとで（資財）

【産衣】サン 圓うぶぎ（産著）

【産嗣】サンシ できそだつ、嗣は育。禮、保傅文「詳視ニ其區土之所ニ一一」ニ生育。

【産額】サンガク 産物の出來高。

【産科】サンカ 婦人の出産を取り扱ふ醫術。

【産業】サンギョウ なりはひ。又、生産の業。韓非、解老「外不レ事ニ利ニ其ー一」

【産出】サンシュツ つくりだす。

【産褥】サンジョク 出産の時のしとね。遯齋閑覽「婦人疾莫レ大ニ於ー一」ニ産婦。

【産業】サンギョウ 前條に同じ。

【産地】サンチ ○人の生れ出たる地。○物の生ぜし地。

【産婆】サンバ とりあげばば（助産婦）經國大典「ー一則給レ料」ニ穩婆。

【産物】サンブツ 其の地に生ずるもの。ニ土宜・物産。

【産卵】サンラン たまごをうむ。

【産靈神】ムスビ 圓天地萬物をうみなす靈妙なる神靈、造化の神。ニ造物主。

七畫

【甥】 セイ 庚 通音 サウ ショウ

○をひ、兄弟姉妹の生みし男子。○むこ（むすめの夫）孟、萬章「帝館ニ於貳室ニ」舜が堯の女を娶りし故にいふ。後世、壻の居室を一館といふは此に本づく。ニ壻。

【甦】 ソ 虞 俗字 蘇は

○さかんなり。○草木の實の垂れる貌。

九畫

【甦】 甦（次條）の俗字。

【甦】 ソ ス 虞

よみがへる、死して更に生きる。ニ蘇。

用部

【用】 ヨウ 宋

○もちふる、つかふ「使ー」「試ー」○行ふ。○きき入れる、とりあげる「採ー」○あけもちふる（登庸）「登ー」「任ー」「擢ー」○はたらき「作ー」「運ー」「效ー」「妙ー」○いさを、しるし「功ー」○つかひみち。○たから（財貨）○つひえ「費ー」「節ー」○もとで（資力）○そなへ（防備）○役に立つだらく「器ー」○もって。史、李陵傳「居門下者皆ー爲恥」ニ以。○圓ゐ爲すべきわざ「一事」「一向」

【用以】ヨウイ 用以○用は以より意つよし。論語、泰伯「苟是用希」○以は、てと訓す「事之以レ禮、葬之以レ禮」は、事ふるにも禮でつかへ、葬るにも禮で葬るなり、以の字、おもへらくと讀むところあり。齊悼王世家に「齊王自以、見子年少、不レ習ニ兵革之事ー、願舉レ國委ニ大王ー」の如し。然れどもやはり下の之事より觀したる以の字なり。

【用意】ヨウイ こころがけ、心をつかふ。韓愈文「愛レ國忘レ家、ー一至到」ニ用心。

【用行舍藏】ヨウカウシャザウ 用舍行藏を見よ。

【用閒】ヨウカン まはしものを使ふ、反閒を放つ。孫子、用閒「ー一レ有レ五、有ニ鄉閒ー有ニ內閒ー有ニ反閒ー、有ニ死閒ー有ニ生閒ー、五閒俱起、莫レ知ニ其道ー、是謂ニ神紀ー、人君之寶也」

【用器】ヨウキ づひき道具を用ひて正がく圓形。

【用刑】ヨウケイ 刑罰を適用する。易經「君子以明愼ニ一一而不レ留レ獄」

【用言】ヨウゲン 文法にて語尾の變化する語、動詞・形容詞・助動詞等をいふ。體言の對。

【用賢】ヨウケン かしこきものを官に用ふる。後漢書、左雄傳「委レ遵和レ厲、莫レ大レ寧レ人、寧レ人之務、莫レ重レ一レ」ニ任レ賢。

【用語】ヨウゴ もちふることば、使用することば。

【用才】ヨウサイ 才ある人を用ふる。陶潛詩「帝者慎ニ一一」

【用事】ヨウジ ○必要なる事がら。周禮、司服「辨ニ其名物與ニ其ー一」○要路に居りて政權を專らにする。戰國策、趙太后新ー一レ、秦急攻レ之」

【用人】ヨウジン ○人を用ふる。○圓大名又貴人の邸につかへて種種の雜用

をする人。
【用心】ヨウシン　心をつかふ。列、湯問「一レ一原、勤レ手均也」
【用水】ヨウスイ　○水をつかふ。○圃灌漑又は消火などのために貯へ置く水。
【用舎行蔵】ヨウシャコウゾウ　世に用ひらるれば、出でて巳の道を行ひ、すてらるれば退きかくれる。論、述而「子謂二顔淵一曰、用レ之則行、舎之則蔵、惟我与レ爾有レ是夫」＝用行舎蔵。
【用世】ヨウセイ　出でて世の用となる。戴叔倫詩「一一経悲開レ道遅」
【用度】ヨウド　いりめ、費用。後漢光武紀「頃者師旅未レ解、一一不レ足」
【用途】ヨウト　もちひどころ、つかひみち。＝費途。
【用意】ヨウイ　用は以、意は何、何を以てといふに同じ。應璩詩「一レ一稱二才学一」
【不中レ用】フチュウヨウ　用に立たぬ。史、秦紀「秦皇謂二呉広一曰、天下一家、一者、益去レ之」
【用武之国】ヨウブノクニ　兵を用ひて敵を制するに宜しき國。史、留侯世家「張陽雖レ有二此国一、其中小不レ過二数百里一、田地薄、四面受レ敵、非二用レ武之国一也」
【用兵】ヨウヘイ　いくさをする。蜀志、馬謖傳「一レ一之道、攻レ心為レ上、攻レ城為レ下」＝用武。
【用命】ヨウメイ　上の命を奉ずる。書経「一レ一賞二于祖一、不レ用レ命戮二于社一」
【用例】ヨウレイ　これまでに使用せしためし。

一　畫

【角】ロク　屋　一説、角の誤字

＝里先生は商山四皓の一人。

二　畫

【甫】フ　虞

○はじめ(始)はじめて「年一十三」○おほし(衆)大いなり。○われ(我)○男子の美稱。孔子を尼一といふ類。＝父。○あざな、人の字を問ふに台一といふ。○章一は殷の冠の名。

【甬】ヨウ　腫

○宮禁のかよひみち、道の兩側を塀にておほひたるもの。○県の名、今の鄞。○地名、浙江省鄞縣の異稱。
【甬道】ヨウドウ　兩側に牆垣を築き外人をして見ることを得ざらしむるやうに作りたる道の史、始皇紀「築二一一一」＝馳道・複道。

七　畫

【甯】㊀ディ　㊁ディ　霽　青　通音ネイ、又寧に作る、部十一(一)に同じ

㊀やすし。漢書、王莽傳、永以康一」㊁一武子は戦國時代の衛の大夫。

田部

【田】㊀テン・デン　㊁テン・デン　先　震

㊀た「稲一」「水一」はた「菜一」「麻一」○土地の広狭「一園」「一里」○一井の地。○田畑の形したる所「鹽一」○かり(獵)「一獵」詩、鄭風「叔于一」＝佃・畋。○おほつつみ(大坡)○一一は胸などを撃つ聲、又、薬の貌。㊁たつくる。田を耕し治める、はたけをつくる。詩、齊風「無一一甫田」
【田園】デンエン　たはた。陶潜、歸去來辭「一一將レ蕪、胡不レ歸」
【踐レ田奪レ牛】センデンダツギュウ　牛を引きて他人の田地に入りたる罰に其の牛を奪はれる。微罪を重く罰する譬。左、宣十二「奪レ牛以懲二人之田一而奪二之牛一、罰已重」
【求レ田問レ舎】キュウデンモンシャ　田宅を求むることに心を用ひて國家の事を顧みざる義。現志、呂布張遼統傳「劉備謂二許汜一曰、君有二國士之名一、今天下大亂（中略）而君一一、言無レ可レ采」
【田家】デンカ　ゐなかやつ。孟浩然詩「故人具二雞黍一邀レ我至二一一一」＝田舎。
【田歌】デンカ　田うた。歳時、四月田歌詩「茶歌続了又一一」
【田客】デンカク　小作人。晉書、太原諸部赤以二匈奴胡人一為二一一一一、多者数千」＝佃客（通考）
【田楽】デンガク　國　○昔時、農民がなぐさみに行ひし舞樂、後には法師の舞となり、鎌倉室町頃に盛に行はる。○豆腐・こんにゃくなどを串にさし味噌をつけて焼きたる料理。
【田鶏】デンケイ　たづ、田の中に居る鶏。謝朓詩「一一遠相叫」
【田間】デンカン　田畑のなか、ゐなか。史、李廣傳「従二一騎一出、従二人一一一飲」後漢書、王丹傳「每歳農時、駆牛二酒肴於一一、候二勤者一而労之」
【田器】デンキ　耕作に使用する器具。＝農具。
【田漁】デンギョ　かりと、すなどりと。後漢書、南蛮傳「有二曠地一一之饒、金銀畜産之富一」
【田獵】デンリョウ　田獵の間に設けたる法。

左傳「子駟爲二ー一」
【田業】デン たわざ、農作の業。又、田地。後漢書、和帝紀「貧民有二ー一、而以二匱乏一不レ能二自農一者、貸二種糧一」
【田犬】デン かりに用ふるいぬ。周禮、疏「犬有二三種一、一者ー一、二者吠犬、三者食犬」
【田券】デン 地券。宋史、侯可傳「質二人ー一至二萬畝一」
【田五加木】デンゴカノキ 野草の一、たらこぎ。湿地に生じ紅色の花を著く。和漢三才圖會
【田圃】デンポ 田作と、こがひと。異志、孫休傳「ー一已至、不レ可レ後レ時」
【田時】デンジ 耕作にいそがしき時節。司馬相如、喩二巴蜀一檄「方今ー一東垣二百姓一」
【田畝】デンポ 田の作物のとりいれ。北史、室韋國傳「ー一甚薄」
【田宇面】デンメン 圃かほの四角なるをいふ。南史、宋明帝日二李安人一曰、卿畫方如レ田、封侯相也」に本づく。
【田舍】デンシャ ゐなかの家。又、ゐなか。漢書、季布傳「朱家心知二其季布一賢置二ー一」
【田舍翁】デンシャオウ ゐなかおやぢ。宋書、武帝紀「ー一得レ此以爲レ過矣」
【田舍漢】デンシャカン ゐなかもの、漢はおとこ。隋唐嘉話」
【田舍兒】デンシャジ
【田車】デンシャ かりに用ふるくるま。詩、小雅「ー一既好、四牡孔阜」
【田主】デンシュ ○田の神。周禮、大司徒、注」田神・田祖。○其の田地の所有者。史、陳世家「事牛經二人田一ー一察二之牛一」
【田鼠】デンソ もぐらもち、土中を潜りて昆蟲を捕食す。禮、月令「季春之月、桐始華、ー一化爲レ駕」
【田宅】デンタク たと、いへと。史、王翦傳「請二美ー一園池一甚衆」
【田單】デンタン 戰國時代の齊の將、燕の樂毅來り攻め、七十餘城を下し、唯莒と即墨とのみ下らず、單火牛の計を用ひて、大に燕軍を破り、七十餘城を復し、安平君に封ぜらる。
【田地】デンチ ○耕す土地。史、蕭相國世家「君胡不三多買ー一ー一」○場所といふ意の俗語。朱子文集「爲レ學須レ以二主敬立志一爲レ先、方可下就二此ー一上一推二尋義理一見中諸行事上」
【田畯】デンシュン ○田は穀をつくるはた、畯は農をつくるはた。禮、月令「殺レ草可三以糞二ー一一可三以美二土疆一」○田地。淮南子、「正二封疆一修ー一」
【田田】デンデン ○荷葉水の水に浮べる貌。古詩、江南曲「蓮葉何ー一」○圓なるを擊つ聲。禮、間傳「殷殷ー一、如レ懣精然」
【田夫】デンプ 農夫。禮、郊特牲「黃衣黃冠而祭、息二ー一一也」
【田賦】デンプ 田の稅。春秋「哀公十有二年春、用二ー一一」
【田父】デンプ ひゃくしょう。史、項羽紀「迷失レ道、問二ー一一」
【田父功】デンプコウ 勞せずして功を收むるに喩ふ。田父は農夫。戰國策「韓子盧者、天下之疾犬也、東郭逡者海內之狡兔也、韓子盧逐二東郭逡一環レ山者三、騰レ山者五、兔極二於前一、犬斃二於後一、犬兔俱罷、各死二其處一、田父見レ之、無二勞倦之苦一而擅二其功一」
【田畝】デンポ ○たはた「書、盤庚」○田の畝歩。事物紀原「司馬法以二六尺一爲レ步、步百爲レ畝」
【田園】デンエン たと、はたけと。たんぼ。陶光義詩「既念生二子孫一、方思慶二ー一」
【田野】デンヤ ○ゐなか。齊語「處レ商就二市井一、處レ農就二ー一一」○田はた。孟、離婁「ー一不レ辟、貨財不レ殖、非二國之害一也」
【田螺】デンラ たにし。本草「ー一生水田中、及湖濱岸側一形圓、大如二梨橘一、小者如二桃李一、人煮食レ之」
【田里】デンリ むらざと。孟、盡心「解二其ー一一、教二之樹畜一」
【田獵】デンリョウ かり。又、かりをする、田は畋。禮、王制「百姓ー一」
【田廬】デンロ ゐなかや。左思、詠史詩「功成不レ受レ爵、長揖歸二ー一一」
【田鳥】デンチョウ 圖經水鳥の一、形水雞に似て小さく、長き嘴を有し、田澤に居て魚を捕食す。鳴(國字)
家。

【由】 イウ 尤

○よる(自)○ふ、經歷する。論、爲政「觀二其所一ー一」○かたどる、のっとる(式)○したがふ(從)たより從ふ。論、泰伯「民可レ使ー一之」○ちなむ(因緣)○事の原因。○ただす(正)○もちふる(用)左、襄三十「不レ能ー一吾子」○おこなふ(行)○なほ。孟子「王ー一足二用爲一善」
‖猶。○ーーは自得の貌。又、喜悅の貌。又、猶豫の貌。○わけ、よし、ちなみ、いはれ「理ー一」○より(從・自)論、雍也、誰能出不ー一戸」○たすく(輔)○ひこばえ、木の枝を生ずるもの「ー一蘖」○よる、縁に通ず。○擬やうす、傳聞せし事などを推しはかり問ふに用ふる尺牘

の語「御上京の―」

同訓異義 由・猶・尚・仍の別は猶（犬部九畫）の條を見よ。○由・自・從・緣・因・仍・道の別は自（部首六畫）の條を見よ。

【由由】ユイユイ　○自得の貌。孟、公孫丑「故――然、與ㇾ之僞而不ニ自失一焉」○容悅の貌。○猶猶、ためらふ。楚辭、九辯「倘――而進ㇾ之」

【由衍】ユエン　舒緩ユカンの貌。馬融賦「―――遊ㇾ道」ㇾ遊衍「詩經」

【由慢】ユウマン　ひこばえ。蘖は俗生。書、盤庚「若ニ顚木之有ニ―――一」

【由詞】ユウシ　梁ルヤウシュウの一名「爾雅」

【由余】ユウヨ　春秋の周の人。兵法六篇を著す。秦の穆公、其の謀を用ひ、地を拓くこと千里、遂に西戎に覇たり。

【由緒】ユイショ　いはれ。傳へ來れる理由、緣起。洛陽伽藍記「遂問ニ寺―一」

【由緣】ユエン　○ちなみ、事の由來。北魏書、鹿念傳「乃敍ニ―――一」○てだて、ゆかり。陶潛詩「慷慨思ニ南歸一路遐無ニ―――一」

【由基】ユキ　養叔（六六・五二）に同じ。

【由旬】ユジュン　梵語ㇾ踰繕那ユジュンナの略。六町一里にて四十里・三十里・十六里などの諸說あり「祖庭事苑」

【由來】ユライ　○由りて來る所のゆゑよし。左、僖七「吾知ニ其所ニ―一」ㇾ由緒。○もとから。楊炯詩「趙氏連城璧、―一天下傳」ㇾ元來。

【甲】カフ　陽

○きのえ、木の兄の義、十干の第一位。爾雅「歲在ニ―曰ニ閼逢一」○第一、最もすぐれたる物事をいふ「―科」○かしら（長）「村―」○なる（習）＝狎。○はじむ、はじまる（始）○宋代十戸一組の自治團體の稱。其の取締規約を保―といふ（五―を團といふ）○よろひ（鎧）「―冑」「兵―」○よろひを著けたる兵士。○つめ（爪）又、琴などのつめ。杜甫詩「銀―彈箏用」銀にて爪―とする。○から、龜蟹などの殼（介）○草木などの新芽を包む薄き皮「孚―」○なにがし（某）史、萬石君傳「萬長子建、次子―、次子乙」○一つ以上ある者の最初の者の代名詞「兄弟二人、―某、乙某」○なれる。＝狎。○臺灣にて地積の單位。百二十二坪位に當る「田―」圖○トプ（宵）○聲のすみて高き調子。

【甲兒】カフジ　よろひを脫ぎ棄て、兵器をひき捨てて遁る。孟、梁惠王「兵刃既接、――」

【假ㇾ甲】カフヲカス　よろひを藏めて用ひず、戰をやむる義。晉書、荀堅載記「―ㇾ息ㇾ兵」＝罷ㇾ兵。

【釁ㇾ甲鼓ㇾ旗】カフヲフンシテキヲナラス　戰を止むる義。晉書、王鑒傳「――、廣ニ晨衆之務一」

【全ㇾ甲】センカフヲタモツ　甲兵を一人も失はず「漢書、霍去病傳「謂ニ驃將軍一ㇾ―獲ㇾ醜」

【甲鏡】カフガン　よろひ。唐書、百官志「受ニ黃賈一―弓矢於衛尉一」＝鎧鏡。

【甲革】カフカク　かはのよろひ。周禮「王弓弧弓、以授ニ射ニ―楛矢一者」

【甲殼】カフカク　かに、龜などのかたら。

【甲科】カフクワ　科擧（高等官試驗）の最高の科目。漢書、蕭望之傳「以ニ射策一―爲ㇾ郎」

【甲觀】カフクワン　かみやしき、城下に設けたる邸宅。御覽「漢元帝爲ニ太子一時、生ニ成帝於―一」＝甲第。

【甲士】カフシ　兵士の稱。甲を帶びる故。司馬法「六十四井爲ㇾ甸、計有ニ三百七十六夫、共出ニ長轂一乘、―ニ三人、步卒七十二人一」

【甲子】カフシ　○十干と十二支と。漢書、律曆志「歷數三統、天以ニ―一、地以ニ甲辰一、人以ニ甲申一」○きのえね。

【甲州流】カフシウリウ　圖兵法の名。甲斐の武田氏の將小幡景憲の唱へたるもの。

【甲首】カフシュ　○よろひをきたるもの、俘虜を數ふるに、雜兵と分ちていふ。左、桓六「獲ニ其二帥大夏少庶、―一三百一以獻ニ於齊一」○よろひ武者の首。

【甲族】カフゾク　貴き家がら「南史」＝世家貴族。

【甲第】カフダイ　○立派なるやしき、かみやしき、大邸宅には甲乙の次第あり、故に第といふ。漢書、霍光傳「宣帝賜ニ光ニ―一區一」＝甲舍・巨室。○甲科に同じ。

【甲拆】カフタク　草木の芽を發する。晉、解卦象傳「雷雨作而百果草木皆―一」

【甲蟲】カフチウ　昆蟲類中の甲殼ある者、頭・胸・腹の三部に分る、螽・斯蝗ヒバリなど。

【甲鐵鏡】カフテツケン　鉄にてつつみし鏡。

【甲部】カフブ　經部に同じ、四庫（三六一頁二段）を見よ。

【甲兵】カフヘイ　○よろひ武者。○よろひと兵器と。轉じて戰爭の義とす。孟、梁惠王「抑王興ニ―一一」

【甲夜】カフヤ　午後八時（漢官儀）杜陽雜編「文宗謂ニ左右一曰、若不ニ一視ㇾ事、乙夜讀ニ書、何以爲ニ人君一耶」五更（六〇頁三段）參看。＝初更。

【甲螺】カフラ　頭目又は首領の義。支那人が國語の頭ニに當てたる字。清、林謙光、臺灣紀略序「天啓改元者ニ顏思齊者ニ爲ニ日本國一一」

【甲令】カフレイ　法律の第一條又は第一篇。轉じて法令。又、官の命令（漢書、吳芮傳）＝令甲。

【甲冑】カフチウ　よろひと、かぶとと。易、說卦「離爲ニ―一一」

【甲寅生ニ蛾蝨一】カフインニガシツヲショウス　甲寅の中に

艦パンコウや戦いなどがわく。戦争が久しくつづく形容。韓非、喩老「――、鷹雀處二叢蔚一」

【甲必丹】カピタン 首領の義。所属の衆を管理する権ある者。軍艦・商船の船長、陸海軍の将校等皆此稱あり、和蘭語の音譯。

【甲板】カンパン 西洋形の大船の最上部にある牀、木、又は鐵の板にて張る。

【申】シン 寘

○さる、十二支の第九位。爾雅「太歲在二―一曰二涒灘一」○昔の時刻の暮の七つ、今の午後四時「一刻」○方角にて西南西。○せのび(欠伸)荘、刻意「熊經鳥―」引伸。○のぶ(展・舒)屈の對。○――はゆるやかなる貌、くつろぐ貌。○書を以て上に告ける。○かさぬ(重)くりかへす。孟、梁恵王「――之以二孝悌之道一」○あきらか(明白)「――證」○いたす(致)禮、郊特牲「大夫執二圭而使一、所二以――一信也」○地名、上海パイの呉淞江を春――江(楚の春申君の封邑なりし故)といふ。故に上海を略稱して――、又、――江といふ。○國スワ陳述する。

同訓異字 ノ申・述・陳・宣・布・展・舒・伸・信・暢・延・舒の別は述(走部五畫)の條を見よ。

【申冤】シンエン 冤罪を申理する義。易林「比月爲レ患、無レ所二――一」

【申戒】シンカイ かさねてをしへいましむ。馬融、東巡頌「――二百工一」

【申誥】シンカウ 訓戒をのべる。書經「伊尹――于王一、曰、嗚呼、天惟無レ親、克敬惟親」

【申韓之學】シンカンノガク 申不害・韓非子が主張せし刑名の學。後漢書、酷吏傳「陽球性嚴厲、好二――一」

【申救】シンキウ 其の冤罪をのべ、力をつくしてたすける。晉書、周顗傳「力言二王導忠誠一、――甚至」

【申駡】シンバ かさねてかける、第二陣。

【申儆】シンケイ かさねがさねいましむ。儆は警。左傳「――二之以待二不虞一」

【申厳】シンゲン かさねていましむ、嚴は戒。禮記、季秋之月、――二農命一、王海「習二其行陣之勢一、教以――之令一」

【申告】シンコク 役所へまうし出る。

【申申如】シンシンジョ ゆっくりと、くつろぐ貌。論、述而「子之燕居、――也、夭夭如也」

【申雪】シンセツ 明白なるしょうこ。後漢書、郎顗傳「罪無二――一、獄不二訊鞫一」

【申請】シンセイ 人民が官府に上申して事を請求する。

【申奏】シンソウ まうしあげる。宋書、孝武帝紀「躬自――二小大一以聞」

【申旦】シンタン 夜より旦タンに達する。楚辭「獨――而不レ寐兮」

【申飭】シンチョク 告げ戒める。宋史「――二將帥一、慎固二封守一」後世は斥責セキサイの意を含む。

【申報】シンパウ 事件を上に知らせる。舊唐書「――有司一」

【申不害】シンフガイ 戰國時代の人、法家の祖、其の學黄老に本づきて刑名を主とす、韓の昭侯、用ひて相となす、申子の身を終ふるまで、國治まり兵強く、韓を侵す者なし。著はす所の書二篇、申子といふ。

【申命】シンメイ かさねて命令する。書、堯典「――二羲叔一」

【申盟】シンメイ 重ねてちかふ、くりかへして約束する。＝韓盟。

【申理】シンリ 冤罪を受けし者の爲めに申し聞きしてすくふ。北史「竇熾除二原州刺史一、抑二挫豪右一、――冤滯一」

【申呂自レ嶽降】シンリョノゴクヨリクダル 申侯・呂侯は周の宣王の名臣にて四嶽の神靈によりて降誕せし義。蘇軾、潮州韓文公廟碑の句。詩、大雅「維嶽降レ神、生二甫及申一」とあるに本づく。甫は呂。

【申令】シンレイ 命令をのべる。又其の命令。

【男】ダン ナン 寒

○を、をのこ、をとこ(丈夫)女の對「一子」「一女」易、繫辭下傳「一女構レ精、萬物化生」○むすこ。女ムスの對。男子が父母に對して自ら稱して――といふ。○血氣さかんのをのこ(壯丁)「丁――」○五爵の第五位。禮、王制「公侯伯子一、凡五等」

解字 丈夫たり、田力に從ふ、――は力を田に用ふる義。

【生レ男猶生レ女好】セイダンユウセイジョニシカズ 男子を生めば兵役に取られて戰死する故に惡し、女子は近隣に嫁する故に好し、唐の世兵亂多し、故にいふ。杜甫、兵車行「信知生レ男惡、反是生レ女好、生レ女猶得レ嫁二比隣一、生レ男埋没隨二百草一」

【生レ男如レ狐猶恐二其尪一】セイダンスルコトキツネノゴトクナホオソルソノオウナルヲ 男兒を生み狐の如く剛強なるも、猶ほ其の柔弱なるかをおそれる。班昭、女誡「――、生レ女如レ鼠、猶恐二其虎一」

【男系】ダンケイ 男の方のちすぢ。女系の對。

【男工】ダンコウ 男の職工。女工の對。墨子「女工作二文采一――作二刻鏤一」

【男裝】ダンサウ 女が男のよそほひをする。

【男子】ダンシ　○をとこのこ。詩、豳風、斯干「維熊維羆、―之祥」○をとこ。‖男兒。

【多二男子一則多レ懼】ダンシオホケレバオソレオホシ　男の子を多く持てば、種種のしんぱい多し。莊、天地「――、富則多レ事、壽則多レ辱」

【男子不レ死二於婦人之手一】ダンシハフジンノテニシセズ　男女の別を明かにする爲めなり。禮、喪大記「――、婦人不レ死二於男子之手一」

【男子居レ外女子居レ內】ダンシハソトニヲリ、ヲンナハウチニヲル　男子は常に外に居り、女子は內に居りて、其の別を明かにするをいふ。禮、內則「禮始レ於謹二夫婦一、爲二宮室一、辨二內外一――、深レ宮固レ門、閽寺守レ之、男不レ入、女不レ出」

【男兒】ダンジ　○男の子。陶潛、責レ子詩「雖レ有二五―一、總不レ好二紙筆一」‖男子。○丈夫の義。韓愈、張中丞傳後敍「南八、――死爾、不レ可下爲二不義一屈上」

【男色】ダンショク　かげま、男が男の容色を愛する。○漢書、董賢傳「柔受之傾レ意、非二獨女嬃一實亦有二――一焉」‖龍陽。

【男尊女卑】ダンソンジョヒ　社會上に於て男子は尊く女子は卑しとする義。列、天瑞「男女之別――、故以レ男爲レ貴、吾既得レ爲レ男、是二業也」

【男女】ダンジョ　男と女と。禮、禮運「飲食――、人之大慾存焉」

【男女不レ同二椸架一】ダンジョハイカヲオナジクセズ　男女は別あるを要す、故にその衣架を異にす、椸架は衣桁イカ【禮、曲禮上】

【男女貿レ功】ダンジョコウヲカフ　男と女と互に其の仕事を易へて相助ける。尤倉子「男子不レ織而衣、婦人不レ耕而食、――、相資爲レ業」

【男女同權】ダンジョドウケン　社會上に於て男女の權利を同等とする義。

【町】テイ　チャウ　青　選

○田のあぜ（畔埒）「一畦」田のくぎり（區域）○一―畽は舍旁の隙地。詩、豳風「一―鹿場」國○市街。○地方自治團體の一「市―村」○距離の單位、六十間を一―とす。○地積の單位、三千坪を一町とす。‖十段。

【町畦】テイケイ　田のあぜ。轉じて心にへだてあるにいふ。莊、人間世「彼且爲二嬰兒一亦與三之爲二嬰兒一、彼且爲二無―一、亦與三之爲二無―一」‖畔埒。

【無二町畦一】ムテイケイナシ　人に接するに隔てなき義。一解に威儀なき義。前條參看。韓愈詩「文才不レ如レ人、行又――」

【甸】㊀テン・デン　㊁テン・デン　先　叡

○周代の制、王城の周圍五百里以內の地の稱。‖畿內。○町はづれの土地、郊外「郊―」○周代の稅法にて、六十四井の稱、兵車一乘・兵士七十五人を出す土地。○をさむ（治）書、多士「―四方」○郊野を掌ること。○田畑の產物。禮、少儀「納―於有司」㊁かり。かる（狩）禽獸を取る。‖田畋。

【甸人】テンジン　古の官名、藉田及び野物を供することを主どる【禮記】‖甸師【周禮】

【甸服】デンフク　五服の一、王城を距る四方五百里以內の地の稱。書、禹貢「五百里―」」

畫

【画】

畫（田部七畫）に同じ。

【甽】

畎（田部四畫）の古字。

【畆】

畝（田部四畫）に同じ。‖畔埒。

【畄】シ　支

留（卿部九畫）に同じ。

【甿】ボウ　蒸　庚

○たみ（田民・農民）管子、揆度「北郭者盡雁纓之―也」氓に通す。○無智なる民。【甿庶】ボウショ　田野の民【呂覽、南昌潮陀寺碑】

【畀】ヒ　寘

○たまふ（賜）○あたふ（與）書、洪範「不―洪範九疇」

【畢】畢（十部六畫）の俗字。

四畫

【畏】ヰ　未

○おそれる（懼）おそればかる（戰慄）論、季氏「―天命」おづ（怯）孟子「是―三軍者也」○おそれ憚るべきこと。○いむ（忌）にくむ。國○カシおそれ多し、勿體モッタイなし。○コムおそれつつしむ。

【畏縮】イシュク　長・恐・懼・怖・怕・愧・怯・惧・聾・慄・悸・慊の別は恐（心部六畫）の條を見よ。

【畏愛】イアイ　うやまひいつくしむ。禮記「長而愛レ之」

【畏友】イユウ　敬ふべきとも。紓顧詩「王

君我――、時寄五色鮮」孟子に「曾西謂、子路篤二先子之所一レ長」とあるに本づく。

【長逝】チヤウセイ　おそれにくむ。漢書、韓信傳「信知二漢王一―二其能一レ稱レ疾不二朝從一」

【長忌】チヤウキ　おそれいむ。左傳「爲二刑罰一威嚇一使レ民――」

【長恐】チヤウキヨウ　おぢおそれる。五代史、吳越世家「國中皆――」

【長懼】チヤウク　おそれる。戰國秦策、富貴則親戚――」

【長悔】チヤウクワイ　おそれくやむ。易經「憂悔吝――、自令二――一」

【長敬】チヤウケイ　おそれてうやまひつつしむ。大學「之二其所一レ――一而辟焉」

【長日】チヤウジツ　夏の日。蘇軾詩、明窗――晒先墳、高柳鳴蜩午更昏」左、文七「趙衰冬日之日也、趙盾夏日之日也」注「冬日可レ愛、夏日可レ畏」とあるに本づく。

【長舌】チヤウゼツ　甚だしく擅るることの多き意。左、文十七「――、身其餘殘」

【長縮】チヤウシユク　おそれちぢむ。金史、章宗紀「皆――、而不二敢行一事」

【長惕】チヤウテキ　おそれる、惧は怯なり、弱なり、一に慓に作る。漢書、武帝紀「匈奴入二雁門一、太守堅二――一棄市」

【長壎】チヤウケン　おそればかる。史、貨殖傳「凡編戸之民、富相什則卑二下之一、伯則――二之一」

【長途】チヤウト　道路險阻にして長るべきところ。莊子「夫――者、十殺二一人一、則父子兄弟相戒也」

【長薄】チヤウハク　おそれてうとんずる。唐書、鄭仁表傳「以二門閥文章一自高、天瑞有二五色雲一入瑞有二鄭仁表一徵從陵籍、人――二之一」

【長遁】チヤウトン　おそれさく。易林「低レ頭寢視、有レ所――」

【長附】チヤウフ　長服に同じ。唐書「沙陀――」

【長服】チヤウフク　おそれしたがふ。漢書、魏相傳「禁二止姦邪一、憂盛――」

【長慷】チヤウリヨウ　おそれる。宋名臣言行錄「王嚴叟知二開封府一、不レ尙二智力一、所在無事、自然――」

【昀】キン　眞

――はたがやしひらく（墾辟）

【界】カイ　ケ　卦

○さかひ（境）田と田との間、土地の境「國―」「封―」「經―」「疆―」孟、公孫丑「域レ民以二封疆之一―」○さかひす、かぎる。○かぎり（限）くぎり。後漢書、馬融傳「奢儉之中、以レ禮爲レ―」○さかひうち（境内）又其の場所「生物―」「舉―」○仲をへだつ（離間）揚雄、解嘲「范睢―二涇陽一」○ならぶ（接比）戰國秦策「三國之與レ秦、壤―而患急」

【界域】カイヰキ　さかひ。爾雅「兗域也」注「謂二竟埒一―也」‖境域。

【界限】カイゲン　疆界をいふ。韓愈、雪詩「地空迷二――一、砌猶接二高卑一」

【界紙】カイシ　罫をひきたる紙。宋熹、與二方伯謨一書「其――又作二一封一」‖罫紙・界格紙。

【界尺】カイセキ　文具の一、直線を畫くに用ふるもの、ぢやうぎ。銚氏殘語「太祖以レ柏爲二――一、謂二之隔凉一」‖界方。

【界說】カイセツ　疆定義に同じ。

【界約】カイヤク　國境を定めて之を遵守する條約「黑龍江――」「濱海――」

【畊】耕（耒部四畫）の古字。

【畫】畫（田部三畫）の本字。

【畎】ケン　銑　又、畎に作る、畎は古字

○田の中のみぞ、田間のこがは、田の用水、廣深各一尺。轉じて、たんぼ、ゐなかの義とす。○そそぐ、水を疏通する。○山谷の水を通ずる處。書、禹貢「羽―夏翟」羽―は羽山の谷。

【畎澮】ケンクワイ　田のあぜ。吳師道詩「禦聞播種初、行者避二――一」

【畎澮之中】ケンクワイ　畎は田間のみぞ、畝は田のうね。ゐなかの義とす。孟、告子「舜發於――一」舜がゐなかから立身せし義。

【畋】テン　デン　先　霰　通じて田・佃に作る

○たつくる（治田）○かりす（獵）又かり（狩獵）禽獸を取る「一漁」書、五子之歌「―于有洛之表」‖田・佃。

【畝】畝（田部五畫）の本字。‖畮。

【畑】〔國字〕

はた。火田の合字。

五畫

【畛】シン　軫　眞

○あぜ、くろ。○さかひ（界限）「域」はて。○いたす（致）つける（告）曲禮「―於鬼神」○ね（根）もと。○たつ（殄）

【畛域】シンヰキ　田のあぜ、さかひ（界限）莊子、汎汎乎、若二四方之無レ窮、無レ所二――一」淮南、俶眞訓「混二――一」

【畛畦】シンケイ　さかひ、物の隔てをなすにいふ。世說、任誕「蘇子瞻所ニ與遊一、亦不ニ畫一レ疆、各隨ニ其人高下一、談謔放蕩、不ニ復爲一レ畛」

【畛畷】シンテツ　田間のあぜみち。吳都賦「其四野則一レ一無數、百脉俞倍」

【畟】ショク　職

一は刃の利スルき貌。詩、周頌「一一良耜」

【畜】

㊀チク　㊁キク　㊂キウ　俗に誤りて、チク・キクを混用す

㊀たくはふ。‖蓄。つむ(積)積み貯へる「貯一」「一積」○ととむ(止)孟、梁惠王「一君何尤」○たくはへ。○あつまる。㊁やしなふ(養)大學「不一一牧敛之臣」○かふ(飼)馬牛雞犬などをかひやしなふ。論、鄉黨「君賜ニ生必一レ之」○おこす(起)○いる(容)○一一は慮愛勤勞の貌。○したがふ(順)○家に飼ふ鳥獸。㊂家に飼ふ動物、家畜、六一は牛馬羊犬雞家。

【畜怨】チクオン　うらみをたくはへる。又、たくはへたるうらみ。國語「一一ニ道厚」

【畜穀】チクコク　穀物をたくはへる。吳志「富レ國強レ兵、力レ農一レ一」‖儲蓄・貯蓄。

【畜藏】チクザウ　たくはへる。史記「民繪ニ甘食好衣一不レ事ニ一一之業」‖畜積。

【畜産】チクサン　○家にかふ牛馬雞犬など。漢書、薛宣傳「君一一、且猶敬レ之」○人を賜りていふ、畜生に同じ。後漢書「被レ罵ニ一一一、辱莫レ甚焉」

【畜止】チクシ　とどまる。易經、蹇「往レ下之乾、唯能一一」

【畜積】チクセキ　たくはへる。管子「一一自多、用レ兵自强」‖畜藏・貯畜。

【畜犬】チクケン　家にかふけもの。禮記「馬牛一一、有ニ放佚者一、取レ之不レ詰」

【畜生】チクシヤウ　○とりけだもの。大藏法數「一一者、無明之類也」○人を罵りていふ。隋書、神武人傳「夫人傳「夫人法然曰、太子無レ道、上悉曰、一一何足レ付ニ大事一耶」太子は煬帝。

【畜生道】チクシヤウダウ　㊀冥途六界の一、畜生の身となりて苦患を受けるといふ所。

【畜聚】チクシュ　たくはへあつめる。禮記「君子總ニ天下之辜一、以爲ニ一一之臣一」

【畜水】チクスイ　水をたくはへる。晉書、裴秀傳載記「一レ一覆レ舟、蓋レ獸反レ害」

【畜德錄】チクトクロク　二十卷、清の唐文奭撰す。二十一門に分ちて、周秦より元明に至るまでの嘉言善行を類輯す。

【畜類】チクルイ　○人の家にやしなふ動物。‖家畜。○けだもの、獸類。

【畜牧】チクボク　牛馬を野にてやしなふ。史、李牧傳「大縱ニ一一一、人民滿レ野」‖牧畜。

【畜養】チクヤウ　牛馬などをやしなふ。漢書、枚乘傳「種樹一一、不レ見ニ其益一、有レ時而大」

【畔】ハン　㊥

○あぜ、くろ(田界)左、襄二五「行無ニ越思一如ニ農之有一一」○水のほとり(水邊)きし(水崖)「河一」「池一」「湖一」「海一」「澤一」○すべて物の邊側「杜一」「橋一」○そむく(背)漢書、高祖紀「齊梁一之」‖叛、はなれる(離)書、胤征「一一官離レ次」○さかひ、かぎり(限)

同訓異義　畔・叛・倍・背・反・負・乖の別は叛(又部七畫)の條を見よ。

【畔援】ハンエン　彼にそむきて此をたすける、わがままにふるまふ義、強意。詩、大雅「無ニ然一一一、無ニ然歎矣一」‖跋扈。

【畔換】ハンカン　強くほしいまま。漢書、敍傳「項氏一一、蹈ニ我巴蜀一」‖強恣。又、畔一に叛に作る。宋書、武帝紀「劉毅叛換」

【畔散】ハンサン　そむきちらす。仲長統、述志詩「一一ニ五經、滅ニ棄風雅一」

【畔嘖】ハンサク　田のあぜ、地ざかひ。

【畔約】ハンヤク　約束にそむく。史、始皇紀「荊王獻ニ青陽已西一「已西一レ一擊ニ我南郡一」‖背約・違約。

【畝】ボウ　㊥　通　晉ホ　又、畝・畮、畝に作る

○田地の面積の單位、古は六尺四方を步とし、百步を一とす。秦以後二百四十步を一とす。○うね、あぜ(疆界)又、田畑「田一」「畦一」○圃ヒ田地の面積の單位、三十步をいふ(段の十分の一)

【畮】

畝(前條)の古字。

【畚】 ホン　阮

○ふご、もっこ、土を運ぶ具。わらにて作る。○すき（鍬）

【畚鍤】サンソウ　土を運ぶもっこと、土を掘るすきと。晉書、石勒載記論「――相尋、干戈不ㇾ息」

【畚】 畫（田部七畫）の俗字。

【畠】 「國字」

はた、はたけ（畑）

六畫

【畹】 畝（土部六畫）に同じ。

【畦】 ケイ　霽

○うね、あぜ（堰）○はたけ（田圃）「荒―」「野―」史、貨殖傳「千―薑韭」○はたけを治める農夫。孟、公孫丑「病于夏―」○田のくぎり（區）田一區を一―といふ。○田五十畝の稱。

【畦堰】ケイエン　田の水をせくゐせき。

【畦畎】ケイケン　田間にあるみぞ。吳菜詩「屋脚蚌蛤上、――魚龍爭」

【畦畛】ケイシン　○田地のさかひ、へだて。黃庭堅賦「視二其胸中一無ㇾ有二――一」○轉じて一定の範圍又は法則の義とす。宣和畫譜「釋貫休作二十六大阿羅漢一、筆法略無ㇾ蹈二襲世俗筆墨一―一」＝畦町。

【畦蔬】ケイソ　はたけの野菜。杜甫詩「――繞二茅屋一、自足朔二盤餐一」＝畦菜・畦蔌。

【畦道】ケイドウ　あぜみち、田圃の路。

【畦町】ケイチョウ　○はたけのうね。謝靈運、山居賦「――所ㇾ藝、含ㇾ蔬藉ㇾ芳」○轉じて區域、かぎり。又、法則などの義とす。晉盤「王洽潑墨成二山水烟雲一、悟澄殿二去筆墨一――」

【畦丁】ケイテイ　はたけつくり。農夫。杜甫詩「――負ㇾ薪至、感動百慮端」＝園丁。

【畤】 シ　紙

まつりのには（露庭）天地の神、又五帝即ち東西南北中央の神を祭る地。―は止なり、神靈の依り止まる所「靈―」。史、秦紀「祠二上帝西一―」

【畢】 ヒツ　質

○をはり。をはる、をふ（竟）○ことごとく（盡）みな（皆）つくす。○星の名、あめふり、二十八宿の一「―宿」○あみ、網小にして柄の長きもの。詩、小雅「將ㇾ雨之雲、日――」

【畢命】ヒツメイ　○其の生命を終はる。書補文「公叔―ニ於四乘一」○書經の篇名。

【畢竟】ヒッキョウ　終りまでみる。北史、馬光傳「圖書讎校、莫ㇾ不二――一」

【畢力】ヒツリョク　力のあるだけをつくす。後漢書「―ㇾ―補綴」

【略】 リャク　藥　或は畧に作る

○はぶく（省）「省―」「簡―」そぐ（減少）○みち（道）左傳「吾子欲復文武之―」のり、すぢ。○かすめとる「侵―」「攻―」准南、兵略「攻城―地」＝掠。○はかる。はかりごと（計謀）「謀―」「計―」「策―」「方―」「戰―」○をさむ（治）いとなむ、經營する「經―」○さかひ（境界）○かなめ（要約）「大―」○ほぼ、あらまし、大抵。○かんがへ（智慮）○もとむ（求）○めぐる（巡行）左、隱五「吾將―地焉」○をかす（犯）

同訓異義 略・計・謀・圖・量・度・稱・權・測・料・忖・策・籌等の訓は計（言部二畫）の條を見よ。

【略解】リャクカイ　あらましの意味をときあかす。又其の文書。＝略說。

【略畢】リャクヒツ　あらましをあげしめす。

易、乾卦疏「今則一二大綱二不レ可二事事繁說一」
【略字】リャクジ　畫を省略したる文字。‖省字。
【略約】リャクヤク　まるきばし。蘇軾詩「一一横二秋水一」‖獨木橋。
【略取】リャクシュ　かすめとる。‖掠取。
【略逃】リャクトウ　あらましをのべる。
【略省】リャクセイ　はぶく。韓愈、奏田縣丞廳壁記「得則退不二敢一一、漫不レ知二何事一」‖省略。
【略奪】リャクダツ　かすめうばふ。史記、漢紀「財物悉被二一一」‖掠奪。
【略レ地】リャクチヲクス　○土地を攻め取る。淮南、兵略「攻レ城一レ、莫レ不二降下一」○境界の地を巡りて期視シテ認する。字解參看。
【略賣】リャクバイ　人をかどはかしうる。漢書、外戚傳「少君年四五才、爲レ人所二一一」
【略服】リャクフク　國正式にあらざる服裝。
【略野】リャクヤ　のをせめとる。任昉文「攻レ城一レ、殉レ義忘レ生」

七畫

【異】イ　㊀

○ことなり、ちがふ(違)同の對。論、先進「一乎三子者之撰」○よそ、ほか(他)「一境」○すぐれる「一能」○あやし(疑怪)くし(奇)めづらし(珍)「珍一」「奇一」○他とことなりとしてあやしむ。孟、梁惠王「王何無一」於百姓之以」王爲二愛也」○ことにす。○わかつ(分)○わざはひ(災)「災一」「天變地一」○ことなる物事。歐陽修、縱囚論「不立一以爲二高」○ことに、とりわけ。○無名一は藥の名、金創を治す。

同訓異義　異・殊・特○異は同の反、物の彼と此と違ふなり、異域・異姓と用ふ。○殊は別也、異也、斷絶也、死也、決也と註す、物のきれ離れて違ふなり、殊美は、きれはなれ、すぐれて美なる意。又異と同じ、異域を殊域といひ、山河異を、山河殊ともいふにて知るべし。○特は獨と通じ、ひとり取わけすぐれる義。史記「特長二高帝大后之感一耳」

【異域】イイキ　よそのくに。後漢書、班超傳「立二功一一、以取二封侯一」‖異鄉・異國。
【異域之鬼】イイキノキ　他國にて死せしもの。李陵、答二蘇武一書「生爲二別世之人一、死爲二一一」
【異香】イカウ　ことなれるにほひ。李山甫詩「一片一一天上來」
【異客】イカク　他鄉にある人、たびびと。王維詩「獨在二異鄉一爲二一一一、每レ逢二佳節一倍思レ親」
【異學】イガク　○當時の政府に認められたる學問と說を異にせる學問、德川時代に於て朱子學以外の學問。○異端の學問。
【異卉】イキ　珍らしき草。卉は草の總名。西京雜記「名花一一」
【異軌】イキ　道をことにす。軌は車轍、法度の義とす。隋書、經籍志「殷周所二以一一レ、奉漢手レ爲改レ轍」
【異義】イギ　ことなりたる意味。公羊傳、序「其中多二非常一一可レ怪之論一、說者疑惑」
【異議】イギ　他とかはりたる議論。後漢書、耿弇傳「以二列侯一、奉二朝請一、每レ有二四方一一、輒召入問二籌策一」
【異菌】イキン　めづらしききのこ。菌譜「蕊山岐拔、仙靈所レ宮、爰産二一一」
【異形】イケイ　普通と異なれるあやしきすがた。晉書「僕便鬼也、于レ是變爲二一一而滅」
【異境】イキャウ　よそぐに。又、異りたる土地。金史、胥鼎傳「路州北卻爲二一一」
【異鄉】イキャウ　よその土地。異客を見よ。‖他鄉・殊域。
【異花】イクワ　めづらしきはな。蘇軾詩「一一繁二四方一、野鳥喧二百族一」
【異敎】イケウ　自ら信ずる敎と異れる敎。韓愈詩「欲レ驅二一一歸中仙靈上」
【異見】イケン　異りたるかんがへ。梁書、劉敞傳「互生二一一」
【異口同音】イクドウオン　衆人の說の一致する義。普賢經「一一、敎二於行者薄淨六根一」
【異國】イコク　よそのくに(外國)左、莊二二「不レ在レ此、在二一一」
【異才】イサイ　常人にすぐれたるはたらき。又其の傑出せる人。漢書、終軍傳「聞三其有二一一」司馬光詩「三皆由來產二一一」
【異采】イサイ　日を奪ふ光采。白居易歌「一一奇文相隱映」
【異彩】イサイ　かはりたる光。‖異采。
【異相】イサウ　常人とことなれる人相。老學庵筆記「有レ僧熟視曰、汝有二一一」
【異草】イサウ　めづらしきくさ。梁簡文帝文「一一雙鮮、靈禽比翼」
【異操】イサウ　ことなれるみさを。又、みさをを異にす。論衡「伍員・伯嚭俱事二夫差一、此一レ一面同レ主也」
【異士】イシ　常人に異りたる人物、非凡の士。南史、宋臨川王道規傳「千載上有二英才一一、沈沒而不レ聞者、安可レ數哉」
【異志】イシ　○むほんの心。後漢書「強レ兵將レ有二一一、今不二早圖一、必爲レ所レ制」‖異心。○衆人にことなりてすぐれたる志。書斷「王次仲少

有ニ一ー一」

【異時】イジ 今と異りたる時。漢書、司馬相如傳「一ー嘗通爲ニ郡縣一矣」‖他時・往時。

【異日】イジツ 今日のほかの日、前日又後日の義。韓非、說難「一ー與レ君遊ニ於果園一」‖他日。

【異質】イシツ 奇特の士。魏志、武帝紀、注「高才ー一、其各竪レ所レ知」

【異人】イジン ○すぐれたる人、奇特の士。辨亡論「一ー輻輳、猛士如レ林」○常に異りたる人、神人・仙人の類。郭璞、江賦「挺ニ一ー乎精魄一」○國外國人。

【異心】イシン むほんの心。後漢書、馬援傳「懷ニ一ー一」‖貳心。

【異狀】イジヤウ ことなれるやうす。山海經、注「後世所ニ隆育一、多有ニ殊類一ー之人一」

【異常】イジヤウ 通常とことなる。劉禹錫詩「明鏡一看愁ニ一ー一」

【異趣】イシュ ○各ことなれる志趣。趙秉文詩「苦樂各レ一ー、嗜好從レ所レ依」○常と異るおもむき。法書要錄「鍾繇書、點畫之間、多ニ一ー一」‖奇趣。

【異樹】イジュ めづらしき木。四京雜記「左臣遠方、各獻ニ名果一ー一」‖異木。

【異術】イジツ ○てだてをことにす。後漢書、杜篤傳「守國之勢、同レ歸一レ」○又異なれるわざ。北史、江式傳「殊藝ー一、王教一端」

【異色】イシキ をりばしょを異にす。雲笈七籤「別ニ尊卑一、令ニ男女一ー一」

【異瑞】イズイ めでたきしるし。杜甫詩「寸地尺天皆入貢、奇祥ー一爭來送」

【異數】イスウ 特別の禮遇。左、莊十八「名位不レ同、禮亦一レ一」

【異性】イセイ ○たちをことにする。○又、男性と女性とのちがひ。

【異姓】イセイ 己と祖先を異にするもの（書、旅獒）

【異世同調】イセイドウテウ 時世は異なれども、調は異ならずの謝靈運詩「唯謂古今疎、異世可レ同レ調」

【異說】イセツ 常とかはりて珍らしき說。晉書、荀勗傳「出ニ奇技一、抑ニ一ー一、好疑レ賈以徵ニ非常之利一者、必加ニ其誅一、則官業有レ常、人心不レ遷矣」

【異俗】イゾク ことなりたるならはし。漢書「革ニ正ー一」‖殊俗。

【異族】イゾク ことなれるやから。左思賦「水物殊レ品、鱗介一レ一」

【異存】イゾン 國他と異るかんがへ。‖異見・異議。

【異態】イタイ ことなるやうす。陳與義詩「川陵各ー一、艱險常一律」

【異體】イタイ かたちをことにす。晉書、衛恆傳「倉頡相副、一レ同レ勢、奮レ筆輕發、離而不レ絕」

【異端】イタン 聖人の道にあらずして、別に一編をなすもの。論、爲政「攻ニ乎ー一、斯害也已」

【異中有レ同】イチウアリドウ ことなる中にも、同じき點あり。黃庭堅、書法論「同中有レ異、——」

【異鳥】イテウ めづらしきとり。後漢書「一ー翔ニ于殿屋一、怪草生ニ于庭際一」‖異禽。

【異朝】イテウ ○異國の朝廷。又、外國。○己の國事せる朝代と異なれる朝代。

【異轍】イテツ みちをことにす。梁武帝、淨業賦「治淨一道、無レ有ニ一ー一」‖異軌。

【異圖】イト むほんの心。晉書、干寶總論「咸熙ニ一ー一、用ニ融ニ前烈一」‖異心・異志。

【異同】イドウ ちがひ。同は常字にて意味なし。諸葛亮、出師表「陟ニ罰臧否一、不レ宜ニ一ー一」

【異等】イトウ 通常とちがひてすぐれる。漢書、武帝紀「吏民有ニ茂才一ー一」

【異能】イノウ 衆にすぐれたる才能。史、仲尼弟子傳「皆ー一之士也」

【異聞】イブン ○めづらしきはなし。舊唐書「求ニ一ー一于振古一、勞ニ睿思於當年一」○他人と異りたるきゝごと。論、季氏「子亦有ニ一ー乎」

【異變】イヘン 常と異りたるできごと。

【異母】イボ 父を同じくして母を異にする。史、呂后紀「高祖八子、長男肥、孝惠兄也、一レ」

【異木】イボク ことなりて珍らしき樹木。江淹賦「我ニ一ー一而同レ秀、種ニ雜草一而一レ香」

【異本】イホン 世にありふれたる本と異る書物。南史、王僧孺傳「聚レ書至ニ萬餘卷一、半多ニ一ー一」

【異味】イミ 常に異りたる美味。左、宣四「子公之食指動、以示ニ子家一曰、他日我如ニ此必嘗ニ一ー一」

【異名】イメイ 本名の外の別稱。老子「同出而ー一」

【異樣】イヤウ 異りたるやうす。續文獻通考「ー一百色」

【異評】イヒヤウ めづらしき批評。劉克莊詩「謎料叢中有ニ一ー一」

【異父】イフ 母は實母にして父はちがふ。

【異服】イフク 異樣のあやしききもの。周禮、無ニ一ー一異言者」

【異腹】イフク はらちがひ。

【異物】イブツ ○常に異りたる珍らしきもの。○書、旅獒「不ニ作ニ無益一害レ有益一、功乃成、不ニ貴ニ一ー一」‖他の用物。○民乃足」○死者をいふ。魏文帝文「元瑜長逝、化爲ニ一ー一」

【異邦】イバウ とつくに、外國。‖異國。

【異法】イハフ ことなるのり。五燈會元「三祖曰、法無ニ一ー一、妄自愛著」

【異品】イヒン 珍らしきしな。江淹、山中雜詩「廣ニ四海之一ー一」‖異物。

【異裏】イリ 衆と異りたる生れつき。陳琳文「此乃天然ー一、非ニ仰讀者所ニ庶幾一也」‖異質。

【異類】イルイ たぐひを異にす。又、たぐひの異なるもの。列子「虎之與ㇾ人ㇾ異ㇾ」

【異路】イロ みちをことにす。詩經、傳「入二其邑一男女ㇾ異ㇾ路、班白不二提挈一」

【異路同歸】イロドウキ 路は異なれども、歸着する所は同じ。淮南、本經「五帝三王、殊ㇾ事而同ㇾ指、異ㇾ路而同ㇾ歸」

【異論】イロン 常とことなれる論說。又、論說を異にす。漢書、董仲舒傳「今師異ㇾ道、人ㇾ殊、百家殊方、指意不ㇾ同」＝異說。

【畫】

㊀ クヮク
㊁ クヮイ・エ 卦陌 通用グヮ 又畫に作るは俗字

㊀かぎる（界限）わかつ（分）區劃する。左、襄四「芒芒禹迹、一爲九州」○くぎり、區劃。○とどむ（止）論、雍也「今女ㇾ」○はかりごと「計ㇾ」はかる（計謀）○あきらか（分明）○易の卦爻をあらはす橫段、一卦は六ㇾより成る。○直線を描く。○漢字の橫の直筆。又、ひろく一筆の義、人は二ㇾ、天は四ㇾの類「字ㇾ」○端直。○一直線に引く。㊁ゑ（繪）圖する所の形像「名ㇾ」「古ㇾ」「壁ㇾ」「琴棋書ㇾ」○ゑがく、ゑをかく。

【畫一】クヮイツ 畫・計・謀・圖・量・度・稱・衡・測・料・付・揣・商・揆・略・策・籌・算・校・讎・程・詮・衡・識・詢の則は計（言部二畫）を見よ。

【畫一】イツ 一の字を引きたる如く整齊ナルなる義。一解、明かなる貌。史、曹相國世家「蕭何爲ㇾ法、顯者ニㇾ一」

【畫界】クヮイカイ さかひをかぎる。魏志、夏侯玄傳「分ㇾ疆ㇾ、各守二土境一」＝分界。

【畫計】クヮイケイ はかりごとを定める（漢書、酈侯世家）＝計畫・畫策。

【畫策】クヮクサク はかりごとを立つ。揚雄、解嘲「語侯ㇾ、陳平出ㇾ奇」

【讀畫】トクグヮ 畫中に詩趣の含まれたるを喜び讀みて鑑賞する。階閣詩話續編「畫無二可レ讀者一、讀二其詩一也、翁廣平詩、品ㇾ泉ㇾ遲返ㇾ櫂、潘師陶詩、ㇾ論ㇾ詩日往還、又吳錫麒集中、多用二ㇾ字一之字」

【畫家】グヮカ ゑかき。研北雜志「果老ㇾ以二王子元・郭忠恕一爲二第一一」＝畫工。

【畫家三組】グヮカサンソ 圓機活法「昔以來、顧長康・張僧繇・陸探微所ㇾ畫通ㇾ神、爲二一一」

【畫制】グヮセイ 美くしくゑがきたる舟。五代史、前蜀世家「龍舟一一、照二耀江水一」＝畫船。

【畫角】グヮカク 美くしきつのぶえ。高適詩「城頭一一三四聲、匣裏寶刀畫夜鳴」

【畫閣】グヮカク 美くしきたかどの。庾肩吾詩「歌聲臨二一一一、舞袖出二芳林一」＝畫樓。

【畫學】グヮガク ゑの學問。宋史、選擧志「一一之業、曰佛道、曰人物、曰山水、曰鳥獸、曰花竹、曰屋木」

【畫棟】グヮトウ ゑがける如きはし。司空圖、詩品「月明華屋、一一雲陰」

【畫鼓】グヮコ 美くしく色どれるほこ。王維詩「一一影戈白日寒、連旗大旆黃塵沒」

【畫工】グヮコウ ゑかき。西京雜記「諸宮人皆賄二一一一、獨王嬙不ㇾ肯、遂不ㇾ得ㇾ見」

【畫虎類狗】グヮコルイク 虎（虍部二畫）を見よ。

【畫象】グヮゾウ 次條に同じ。

【畫像】グヮゾウ 肖像畫。李白詩「丹青一一麒麟豪」＝畫象・圖形。

【畫師】グヮシ ゑかき（唐書、閻立本傳）＝畫工・畫手・畫家・畫匠。

【畫人】グヮジン ゑかき。畫譜「高克明、山水雖ㇾ工、不ㇾ免二一一之習、無二深厚高古之風一」＝畫工・畫匠。

【畫匠】グヮショウ 畫工に同じ。韓偓詩「入ㇾ窟雲山繪二一一一」○後世、凡俗なる畫工の稱。名畫家に別ちていふ。

【畫省】グヮショウ 尙書省の異稱、胡粉にて古賢烈士を壁に畫けるに由る。沈佺期詩「累年同二一一、四海接二文場一」

【畫蛇添足】グヮジャテンソク 蛇（虫部五畫）を見よ。

【畫手】グヮシュ ゑかき。杜甫詩「一一看二前蜀一、吳生遠擅場」

【畫簷鐵冰】グヮンテツヒョウ 簷（竹部六畫）を見よ。

【畫聖】グヮセイ 特にすぐれたるゑかき。畫譜「吳道子筆法超妙、爲二百代一一一」

【畫中有ㇾ詩】グヮチュウユウシ 繪畫の中に詩の如き趣あり。東坡志林「味二摩詰之詩一、詩中有ㇾ畫、觀二摩詰之畫一、一一」

【畫圖】グヮト ゑ。李白詩「九天開出一成都、萬戸千門入二一一一」

【畫棟】グヮトウ 彩色したるなぐ。王勃、滕王閣詩「一一朝飛南浦雲、珠簾捲西山南」殊一本朱に作る。

【畫有二六法一】グヮユウロクホウ 畫を畫く六つの法。劉綸寶鑑「一一、一曰氣韻生動、二曰骨法用筆、三曰應ㇾ物寫ㇾ形、四曰隨ㇾ類傳ㇾ彩、五曰經營位置、六曰傳摸移寫」

【如ㇾ畫】ジョガ 美くしき形容。後漢書、馬援傳「緑髮眉目一一」

【畫舫】グヮホウ ゑがきてかざりたる舟。白居易詩「春池八九曲、一一兩三艘」

【畫伯】グヮハク 畫家の敬稱、伯はかしら。

【畫眉】グヮビ ○黛ずみにてまゆをゑがく。漢書、張敞傳「能畫ㇾ蛾一一」○鳥の名。ほほじろ。花鏡「一一狀似二山雀一大、毛色蒼黃、兩頰有二白色一如

レ暦」

【畫繪】グワ 畫をかくふで。元好問詩「一一倘像詩典型」

【畫譜】フワ ○畫家の傳統「宣和畫譜敘目」○花鳥山水などを時節又は品類に從ひて並きし書冊。

【畫屏】グワ 畫がける屏風。景色好き山に喩ふ。李嶠詩「花發千巖似二一一」

【畫餅】グワ 畫がきたる餅は食ふべからず。以て用ふべからざる義に喩ふ。（魏志、盧毓傳「詔選舉莫レ取二有名者一、如二畫レ地作レ餅、不レ可レ啖也」

【畫龍】グワ 龍を畫むくせ。劉基詩「昔時米南宮、父子同二一一」

【畫廊】グワ 美くしく畫がける廊下。羊士諤詩「十畝蒼苔繞二一一」

【畫龍點睛】グワ 名人が龍を畫きて、最後に眼睛を點ぜしに、其の龍が天に上りしといふ故事。よりて事物の眼目となる處をいふ。又事を完全になし遂ぐるにいふ。水衡志「張僧繇於二金陵安樂寺一畫二兩龍一、不レ點レ睛、每云、點之卽飛去、人以爲レ誕、因點二其一一、須臾雷電破レ壁、一龍上レ天、一龍不レ點レ睛者見在」

【畫楼】グワ 畫がける丸き美くしきたかどの。李嶠詩「聚螢鑑二仙閣一、運露連二一一一」‖漢閣。

【畯】シュン 圖

○田を作る人（農夫）○農業の神。○たをさ、田地を見まはりて農を勸める官。詩、豳風「田一至喜」‖田大夫。○寒一は鄙野なる人。

【番】

㊀ ヘン・バン
㊁ ハン
㊂ ハ

元 寒 歌 麻

㊀たび（回數）○かず（枚數）物事の順序を數ふることば。○互に代りて其の事に當る「更一」「交一」○西戎の一種、卽ち唐の吐一。又、廣く外國人を稱す「一舶」「一人」「一菜」‖蕃。○臺灣の土人「生一」「熟一」㊁一禺クは古の地名、今の廣東省瓊州府治に屬す。㊂一陽クは縣の名、九江郡に屬す。‖鄱陽。○一一ハは武勇ある貌。○又、毛髮の白き貌。‖皤皤。圖○バみはり、監守する「一人」○ツガ雌雄一雙。○つるむ、交尾する。

【番戍】バン 番に當りてまもる。宋史、兵志「平居知レ有二訓厲而一一之勞一、有レ事而後遣」‖戍戍。

【番頭】バン ○兵卒の組頭、材勇ある者をえらびて之に任ずる「唐書、兵志」○圖商家の使用人のかしら。

【番番】バン 武勇ある貌。書、秦誓「一一良士」

【畽】

畝（田部五畫）の本字。

【畬】

㊀ ヨ
㊁ シャ

魚 麻

○あらた、開墾して二年目の田。一說に三年目の田「菑一」㊁やきた。雜草をやきはらひて作る田。又、其の田を作る。

【畱】

㊀ リウ・ル
㊁ リウ

尤 宥

留は俗字

㊀とどまる。史、越世家「可急去矣、愼勿一」「とどむ（止）殘し置く、とどこほる（滯）「延一」「滯一」○まつ（待）○ひさし（久）○おくれる（遲）「遲一」○ゆるやか（徐）○うかがふ（伺）非、刻意「執弾而一之」○をさむ（治）○ルーブル、露西亞國貨幣稱呼の單位、我一圓に當る。㊁すばる、晶星の別名。

同訓異字 留・止・駐・停・過・逗・稽の別は止（部首四畫）の條を見よ。

【畱意】リウ 心をとどめる。史、樂毅傳「敢獻書以聞、惟君王一一焉」‖留神・注意。

【畱學】リウ 他國に在留して學問する「一一生」‖游學。

【畱窩】リウ 他鄉に滯り住む、淹留して外に在る義。杜甫詩「我方一一歸未レ得」

【畱軍】リウ 軍隊をとどむ。史、信陵君傳「一レ壁レ鄴」

【畱繫】リウ とどめてつなぐ。宋史、梁師傳「一レ一壁金、有下久被二一一者上」

【畱後】リウ 官名、るすゐばんの役。事物紀原「唐開元之後、凡節度入朝、或遙領不レ臨レ鎭、則置二一一以董二軍事一」‖留守。

【畱蔵】ザウ とどめたくはへる。唐書、劉禪威傳「德威於二閤門一友時、爲レ人寬厚、生平所レ得奉祿、以分二宗親一、無二一一一」

【畱心】シン 心をとどめそそぐ。庾信文「一一機事、愛二玩圖書一」‖留神・留意。

【畱神】シン 物事に心をとどめそそぐ。後漢書、鄧禹傳「丁寧再三、一一于此一」‖留意。

【畱守】シュ ○るすばん。史、越世家「與二太子一一」○官名、天子の巡幸の時、重臣を以て代りて土を守らしめるもの。事物紀原「唐志云、車駕不レ在レ京、則置二一一一」○圖不在の義。

【畱滯】タイ とどまりとどこほる。魏志、管輅傳「專レ靡投レ骨、音無二一一」

一こ」＝閑適。

【閑題】ダイ　名所古跡を遊覽して詩歌を詠ずる。又其の詩歌。庾肩吾詩話「是陵薈福寺紅梅閣、士大夫多二―一」

【閑暇】ヒマ　とめおく、保存しおく。

【閑田】デン　兵士が其の地に永く駐屯して、敵を防ぐ暇に農事につとめる。＝屯田。

【閑任】ニン　官吏が任期みちてなほひきつづき其の職にとどまる。

【閑別】ベツ　旅立つ人が殘り居る人人に別を告げる。

【閑落】ラク　さすらふ。史、霍去病傳「―不遇」＝流落。

【閑連】レン　ひきつづけ。淮南子「愚夫蹇婦、皆有二―一之心一」

【畹】エン　阮　八畫

○はたけ（田畝）「蘭―」○田二十畝の稱。一說に、十二畝。又、三十畝。○畝―は國畝、即ち天子の外戚。

【畸】キ　支

○井田に盡すこと能はざるはしたの田地、殘田。○わりのこり（零餘）「一零」○ことなり（異）めづらし（奇）「一人」○かたは（不具）「一形」

【畸形】ケイ　かたは、不具「一一見」

【畸人】ジン　○へんじん（變人）俗と遇はざるかはり者。莊、大宗師「一―者畸二於人一、而侔二於天一」○かたは、不具者。

【畺】キャウ　陽　今、疆に作る

さかひ、はて（境）

【畫】

畫（田部七畫）の俗字。

【當】㊀タウ　㊁タウ　漾陽

㊀あたる、あたらしむ、ひきうける「擔―」論、衞靈公「―仁不讓二於師一」たふ（任）○むかふ（對）つりあふ、匹敵する。史、廉頗傳「學二兵法一言二兵事一以天下莫レ能―」○かなふ（適）○其の時にであふ（會・遇）曲禮「一貧不レ嫁」○とのゐす（直）○あたひす（値）○ならぶ（偶）○つかさどる（主）任ずる。左、襄二六「慶封―レ國」○てきす（敵）おほふ（蔽）ふせぐ。李白詩「一夫―レ關萬夫莫レ開」○つく（即）うく（承）○然るべき筈。○罪が法律の條文にあてはまる。○何―は事を處理する。○まさに、何何すべしと反り讀む、かくなるべき筈であるの義。―應・應―と連用するも同じ。㊁そこ（底）韓非、外儲「譬猶二玉屑之無一レ」○正しくあたる、事理の宜しきに合ふ義。呂覽、義賞「豈非二賞罰一邪」○ひきあて、しち「抵―」

同訓異義　當・中・丁・直・方・抵・孚の別は中（一部三畫）の條を見よ。○當・可・合・應・容・須・宜の別は可（口部二畫）の條を見よ。

【當意即妙】ソクメウ　其の場合に應じたるうまき機轉。

【當下】カ　その時、現に。＝現下。

【當家】カ　家務を管理する。史記「百姓レ―、則力二農工一」

【當該】ガイ　○そのかかり「――官吏」○そのもの、その事がら。

【當歸】キ　やまぜり、野草の一、莖二三尺、夏時小白花を著く。本草「―一名乾歸」

【當局者】キョクシャ　碁をうちて居る者、局はどばん。轉じて其の事に當る人。唐書、元澹傳「當レ局者迷、傍觀者審」

【當月】ゲツ　其の事のありし月。北史、齊永安簡平王浚傳「初神武納二浚母一、―而有レ孕」

【當午】ゴ　正午に同じ。李紳詩「鋤レ禾日―一」＝事午。

【當國】コク　國事に任ずる。史記「周公旦代行レ政―レ一」

【當今】コン　いまの時。孟、公孫丑「當二今之世一、舍レ我其誰也」＝現時。

【當座】ザ　○其の座、其の席。○其の時かぎり、しばしの間、當分「―一預」

【當罪】ザイ　○つみにあてる。＝抵罪。○刑罰が正しく其のつみにあたる。管子「施レ刑―レ一、則人不レ易レ訟」

【當事】ジ　其の事にあたる。

【當時】ジ　○其の頃。蘇洵、上田樞密一書「―之文、淺狹可レ笑」○いま。＝現時。

【當職】ショク　職官にあたる。册府元龜「帝疑二洪字一レ一、嘗面告レ之」

【當初】ショ　そのかみ、其のはじめ。＝最初・以前。

【當世】セイ　現在の世。若し、賢循傳「令レ敎二育生徒一、號爲二一一儒宗一」＝今世。

【當然】ゼン　あたりまへ、もとより其のはず。

【當選】センキョ　えらびにあたる。

【當籤】セン　くじにあたる。あたりくじ。

【當代】ダイ　今の世。＝當世。

【當地】チ　この地。神仙傳「李根能變化、坐致二四方奇異之物一、皆非二一一所レ在」＝本地。

【當直】チョク　とまりばん、とのゐ、宿直の番にあたる。

【當朝】タウテウ　當代の朝廷。清唐彪「盛引ニ――同學之臣ニ數賜ニ遊宴ニ」

【當途】タウト　政權の要路に居る人。後漢書、張綱傳「豺狼ノ――ノ、何問ニ狐狸ニ」

【當塗】タウト　當途に同じ。韓非、孤憤

【當年】タウネン　ことし。又、其の事のありし昔年。漢書「不ノ能ノ通ニ其學ニ――不ノ能ノ究ニ其禮ニ」

【當方】タウハウ　○其の方面。周禮、大行人、疏」○圖こちら、てまへ、私の方。

【當番】タウバン　官吏交代の番にあたる。又、其の人。（舊唐書、職官志）

【當舖】タウホ　質屋。當は抵當。

【當面】タウメン　○面向する。蔡邕文「雜疏司ニ以當ニ面」○對面。○其の時。目下。

【當用】タウヨウ　圖さしあたりたる用事。

【當路】タウロ　○道路中の要地にあたる。漢書、溝洫志「大禹治ノ水、山陵――者毀ノ之」○樞要の地位に居りて事を用ふる大臣。次條參看。＝當途。

【當路之人】タウロノヒト　政權をとる要地にある人。孟、公孫丑「夫子當ニ路於齊ニ、管仲晏子之功、可ニ復許ニ乎」

【當壚】タウロ　次條に同じ。

【當壚】タウロ　酒屋の店番、壚は酒を賣る竈。史、司馬相如傳「相如遂令ニ文君――ニ――」＝當壚。

【當壚】タウロ　火に向かひて暖を取る。駱賓王詩「――猶炭然」然は燃ス

【暾】テツ　セイ　風　テイ　霽

なはて、たんぼみち、田間の道「畛――」

九畫

【暾】シュウ　震

たのあぜ（稻田畦）うね「田――」

【暹】セン　先　輿・痛に同じ

○あきち（隙地）○城下の田。○江河の邊地。

十畫

【曦】キ　微

○かぎり、さかひ（疆界）土地のさかひ。○しきみ、しきゐ（門限）「門――」詩、衞風「薄送ニ我ニ――」○門の内。○みやこ（帝都）○帝都を中心として四方五百里以内の稱「――内」「王――」「京――」「帝――」○帝都を中心として四方五百里以外の地を更に五百里づつ順次に區畫せし地域の稱「九――」＝圻。

【疆内】キヤウナイ　○天子に直隸せる帝都を去る四方五百里以内の土地。揚雄「京師、天子之ニ――千里」＝畿甸。○圖山城・大和・河内・和泉・攝津五國の稱「五――」

【疆】キヤウ　陽　もと畺に作る

○さかひ（境界）「封――」「邊――」○かぎり（限）詩、小雅「萬壽無――」○かぎる、さかひす。○界を正す。○さかひをまもる。○羅が白くなりて死ぬる。

【疆域】キヤウヰキ　國ざかひ。晉書、地理志「裒ニ提類ニ而分ニ區宇ニ、剖ニ山河ニ而疆ニ――ニ」＝國境・封域。

【疆宇】キヤウウ　さかひ。又、領土。後漢書、袁安傳「率ニ承鴻業ニ、大開ニ――ニ」

【疆場】キヤウヰキ　○田地のさかひ、大界を疆、小界を場。詩、小雅「――翼翼」○くにざかひ（國境）左、桓十七「――之事、愼守ニ其一ニ、而備ニ其不虞ニ」＝疆域。

【疆界】キヤウカイ　境界に同じ。

【疇】チウ　尤

○うね、さかひ（界埒）○はたけ。又、特に麻ばたけ。○たぐひ、ともがら、なかま。＝儔。○區ニに

【疇内】チウナイ　○天子に直隸せる帝都を去る四方五百里以内の土地。揚雄「京師、天子之ニ――千里」＝畿甸。○圖山城・大和・河内・和泉・攝津五國の稱「五――」

十四畫

【疆】キヤウ　陽　もと畺に作る

○さかひ（境界）「封――」「邊――」○かぎり（限）詩、小雅「萬壽無――」○かぎる、さかひす。○界を正す。○さかひをまもる。○羅が白くなりて死ぬる。

【疆域】キヤウヰキ　國ざかひ。晉書、地理志「裒ニ提類ニ而分ニ區宇ニ、剖ニ山河ニ而疆ニ――ニ」＝國境・封域。

【疆宇】キヤウウ　さかひ。又、領土。後漢書、袁安傳「率ニ承鴻業ニ、大開ニ――ニ」

【疆場】キヤウヰキ　○田地のさかひ、大界を疆、小界を場。詩、小雅「――翼翼」○くにざかひ（國境）左、桓十七「――之事、愼守ニ其一ニ、而備ニ其不虞ニ」＝疆域。

【疆界】キヤウカイ　境界に同じ。

【疇】チウ　尤

○うね、さかひ（界埒）○はたけ。又、特に麻ばたけ。○たぐひ、ともがら、なかま。＝儔。○分類せし項目「洪範九――」○もろもろ。○たれ（誰）○つれあひ（匹偶）○ひとし（等）漢書、宣帝紀「――其爵邑」○さきに（前日）むかし、以前、きのふ（襲）「――昔」○つちかふ、おほふ。○家業を世世相傳ふる義。今は專ら天文算數學者を一人といふ。籌と音通。

【疇日】チウジツ　すぎしひ。前史、陳伯之傳「見ニ故國之旗鼓ニ、感ニ生平於――ニ」＝疇日・前日。

【疇昔】チウセキ　まへのひ。疇は曩。一說に發語の辭。昔は夕、前日・昨夜の義。左、宣二「――之羊、子爲ノ政」

【疇曩】チウノウ　なかま。後漢書、劉陶傳「參儕下ノ獄、其――十餘人皆死」＝儔輩・等輩・流輩。

十七畫

【曙】デフ　遇

○かさぬ、かさなる（累）「重――」「層――」○おそる（懼）詩、周頌「莫不ニ――」○一種の布。圖○ざしきの牀の上に敷きつめる物。○たたむ。折り重ねる。又、仕舞ふ「所ニ――ヲ――ム」

【疊韻】デフヰン　○詩の次韻をかさねてす

る義。○二字共に同韻の字より成る熟語。嬋娟・逶迤・曇游など。
【曇雲】ダンウン かさなれるくも。＝層雲。
【曇山】ダンザン 宋の謝枋得の號、其の著＝集二卷あり。
【曇嶂】ダンシャウ 重なりて連なる山。地理通釋「重巖＝＝、隊レ天蔽レ日」＝疊嶂・疊峯。
【曇濤】ダンタウ 疊浪に同じ。
【曇重】ダンチウ かさねる。かさなる。楊萬里詩「牛渓牛濃山＝＝」＝重疊。
【曇疊】ダンデフ かさなれるみね。李巨仁詩「＝＝如二積浪一」＝疊巒。
【曇浪】ダンラウ かさなれるなみ。柳宗詩「風生＝＝起、露卷孤帆出」＝疊濤。
【曇嶺】ダンレイ かさなれるみね。李頎詩「＝＝雪初霽」

【疊】ヂョウ 曇（前條）に同じ。

疋部

【疋】㊀ショ・ソ ㊁ガ ㊂ヒツ・ヒチ 魚 馬 質

㊀あし（足）㊁ただし（正）雅の古字。㊂兩の倍、四丈。○動物を數ふるにいふ「牛一＝」＝匹。圓○ナヒ徳川時代に烏目ヲク十文の稱、百＝は一貫文。○布帛二端の稱。

【疋練】ヒツレン 一匹のねりぎぬ。後漢書、崔琦傳「延初生、其上有レ物若二＝＝一、遂上昇レ天、占レ之吉」＝匹練。

七畫

【疏】㊀ショ・ソ ㊁ソ 魚 御 ＝疎（次條）と通ず

㊀うとし、うとむ、うとくなる、とほざかる（遠）近・親の對。○まれ（稀少）「稀＝」密の對。○とほす。とほる（通）塞がりしものを開き通ずる。孟、滕文公「禹＝＝九河」○わかつ（分）淮南、原道「裂レ地＝＝隴而壑レ之」○すかす。すく、まばら、ぬけ目がある。○あらし（麤）そまつ、おろそか「一食」○いやしむ（賤）○はだし（徒跣）○大いなり。○かざりおろがく（飾書）○をさむ（治）○きざむ（刻）○すかしほる。○しく（布）つらぬ（陳）○＝＝は衣服の盛んなる貌。○扶＝は枝葉の盛んなる貌。○くしけづる（理）梳に通ず。○やさい、蔬に通ず。㊁物事を一っ一っにかきわけてのべる（條陳）「奏＝」かでっがき（條錄）又、其の書狀「上＝」「抗＝」○ときあかし、書物の註釋「註＝」
【疏最】ソサイ うとんじはばかる。唐書、宦者傳、士大夫、皆＝＝レ之」
【疏迂】ソウ うとくまはりどほし。王冕詩「客計轉＝＝」
【疏雨】ソウ まばらなるあめ。岑參詩「北山＝＝點二朝衣一」＝疎雨。
【疏遠】ソヱン ○ぶさたする。＝疎闊。○うとんじとほざく。＝疏斥・疏隔。○平生親み近かず。樂毅、答二燕惠王一書「不レ察＝＝之行」
【上レ疏】タテマツル 上疏（三八頁四段）を見よ。
【疏棄】ソキ うとんじすてる。神仙傳「嬰＝此惡疾一已見＝＝一」
【疏狂】ソキャウ そそっかしく氣ちがひじみたる義。白居易詩「＝＝屬二年少一」＝疎狂。
【疏畧】ソリャク 一一箇條を立てて書きあげる。漢書、賈誼傳「雖二編以＝＝一」
【疏忽】ソコツ あらまかにしておろか。韓愈文「忘其＝＝之深、而有二此說一焉」
【疏外】ソグワイ うとんずる。諸葛亮文「皆二先帝一所＝＝一」＝疏斥。
【疏懶】ソラン 世事にうとき心。嵇康詩「高論動二侯伯一、＝＝脫二塵喧一」
【疏虞】ソグワ 漢の東海龔遂の人、少くして學を好み、春秋に明かなり、宣帝の時、仕へて太子太傅に至る、兄の子受、同時に太子少傅に至る、在位五年、廣、受に謂つて曰く、足るを知れば辱しめられず、止るを知れば殆からず、宜成り名立つ、此の如くにして去らずんば懼らくは後悔あらんと、乃ち上疏して骸骨を乞ふ、上之を許す、公卿大夫祖道を設けて東都門外に供張す、送る者車數百輛、道路觀る者皆曰く賢なるかな二大夫と。
【疏密】ソミツ うちひらけてひろし。杜甫詩「高樓憶＝＝一」
【疏闊】ソクワツ あらし、精密ならず。漢書、溝洫志「方略＝＝、上切責レ之」
【疏禄】ソロク おろそかにしてかたくな。柳宗元詩「步登最高寺、蕭散任二＝＝一」
【疏籃】ソラン まばらにとぶほたる。宋之問詩「螢驚樹上＝＝度、烏護檣邊一雁飛」
【疏忽】ソコツ そそっかし、手ぬかり。
【疏數】ソサク うときと、ちかきと。禮記「昏姻、＝＝之交也」＝疏密。
【疏鑿】ソサク 水の塞がりたるを開き通ずる。郭璞賦「巴東之峽夏侯＝＝」
【疏枝】ソシ まばらなるえだ。朱熹詩「倒影的樂＝＝橫」＝疎枝。
【疏食】ソシ 粗末なる食。論、述而「飯二＝＝一、飲レ水」＝蔬飯。
【疏水】ソスヰ 地をきり開きて水をかよはす。白居易詩「如二祁寒之節一、則＝＝レ而辨レ火」
【疏斥】ソセキ うとんじしりぞく。五代史、蕭延孝傳「忠臣勇士、皆見二＝＝一」＝疏外。

【疏節】ソセツ　疏略なる小さき行。禮記「色容不レ盛、此孝子之ー―也」

【疏朗】ソロウ　まばらなるほがひげ。元史、李洞傳「骨格清峻、神情開朗、秀眉ー―、目瞥如レ電」‖疎朗。

【疏麻】ソマ　あらくそまつ。後漢書、馬后傳「望二見后袍衣ー―一、反以爲二綺穀一」

【疏奏】ソソウ　箇條書にして申し上げる。後漢書、張酺傳「風夜憂懼、章奏不レ能レ數、心願對二中常侍ー―一」

【疏族】ソゾク　とほきしんるゐ。蔡邕文「推二思中外一、施二淡ー―一」‖疏屬。

【疏率】ソソツ　あらまかにして小事にかかはらず。南史、張稷傳「性ー―、朗悟有二才略一」

【疏宕】ソタウ　心粗豪にして小節に拘らず。北史、薛澄傳「ー―不レ拘」

【疏導】ソダウ　水を通じみちびく。後漢書、和帝紀「詔三刺史二千石一、其簡レ宜ー―」

【疏述】ソジュツ　あらくとほりてこせつかず。蘇軾文「性ー―不レ疑」

【疏通】ソツウ　○ささはりなく通ずる。蘇軾詩「秀句益ー―」○明かに筋道を分つ。漢書、儒林傳「ー―證三明之一」

【疏放】ソハウ　きままにしてしまりなし。杜甫詩「晴レ酒益ー―」‖疎放。

【疏瀉】ソシャ　うとんずる。顏氏家訓「子姪不レ愛、則疎遂ー―」

【疏朴】ソボク　あらくしてかざりなし。董逌文「但級緋ー― 未レ爲二密緻一耳」

【疏網】ソマウ　あらき目のあみ。法律のゆるやかなるに喩ふ。駱賓王詩「ー―倘恢恢」

【疏末】ソマツ　うとし。疏一に疎に作る。後漢書、葉鋼傳「恩義已輕、服屬ー―」

【疏密】ソミツ　あらきと、こまかなると。梁簡文帝文「ー―俱巧、眞草皆得」

【疏野】ソヤ　あらあらしく無作法にしていやし。閻檢復鑑「事止ー―、揩謂曠逸」‖疎野。

【疏論】ソロン　ひらきそそぐ。荘子「ー―而心」漢二晉而精神王‖開滌。

【疏朗】ソラウ　すきとほりてほがらか。晉書、王敦傳「眉目ー―、性簡脆有二鑒裁一」

【疏理】ソリ　○はだがあらし、肌理が緻密ならず。漢書「其人ー―」○さっぱりと整へをさめる。疏通整理。舊唐書「命二京城諸司一ー―繫囚」

【疏籬】ソリ　まばらなるかき。戴復古詩「春風不レ到處、桔槹挂二ー―一」‖疎籬。

【疏略】ソリャク　まばらにして省略する。精密の反對。漢書、夏侯勝傳「爲レ學ー―」

【疏漏】ソロウ　手おち、ぬかり。

【踈】

疏（前條）に同じ。熟語は左に參看せよ。

【踈影】ソエイ　まばらなるかげ。林逋詩「ー―橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏」‖疏影。

【踈散】ソサン　おろそかにしておごる。北史、崔延傳「好飲レ酒、頗涉二ー―一、久不レ徙レ官、甞爲二豁情賦一」‖疏散。

【踈豪】ソガウ　前條に同じ。

【踈隔】ソカク　伸がうとく隔る、交際がうとくなる。‖疏遠。

【踈狂】ソキャウ　狂放不羈の貌。‖疏狂。

【踈闊】ソクワツ　○おろそか、まはりどほし。黃庭堅詩「早年舉二居能一、適用固ー―一」○ぶさたする。‖疏遠。

【踈緩】ソクワン　うとくしてゆるやか。北齊書、王晞傳「我性實ー―、不レ堪二時務一」

【踈嬾】ソラン　うとんじ、きらふ。後漢書、賈皇后紀「數閒二手帝一、漸至ー―」

【踈散】ソサン　うとんじはなれる。李白詩「省友日ー―、玉章亦已稀」

【踈慵】ソヨウ　ものうし。白居易詩「世名檢束爲二朝士一、心性ー―是野夫」‖疏慵。

【踈少】ソセウ　まばらにしてすくなし。孔平仲詩「人烟ー―白日靜、風物澄明新雨後」‖稀疏・稀少。

【踈屬】ソゾク　遠きしんるゐ。史、田單傳「齊諸田ー―」‖疏屬・疏族。

【踈惰】ソダ　おろそかにしておこたる。宋書、孔顗傳「顗學不二綜實一、性又ー―」

【踈宕】ソタウ　疏宕に同じ。

【踈誕】ソタン　世事にうとくしてほしいまま。南史、顏延之傳「延之ー―不レ能レ取二容當世一」

【踈闊】ソクワツ　あらきあみ。法律の寛大なるに喩ふ。許敬宗詩「ー―妖紀漏」‖疏網。

【踈慢】ソマン　おろそかにしてあなどる。王昌齡詩「放レ之清冷泉、因得レ省二ー―一」‖疏懶。

【踈野】ソヤ　疏野に同じ。

【踈傲】ソガウ　おろそかにしてものうし。北史、盧思道傳「性ー―」‖疏慵・疏慢。

【踈籬】ソイ　あらきすだれ。武士衡詩「蕭影ー―外、鳴蛩暗雨中」‖疏籬。

九　畫

【疑】

㊀ギ　支　㊁ギョウ　蒸　㊂キ　紙

㊀うたがふ、あやしと思ふ、あやしむ（怪）○まどふ（惑）定まらず「ー惑」○きらふ（嫌）○はかる（度）○おそらくは（恐）うたがふらくは。推量の詞。李白詩「ー是銀河落二九天一」○にる（似）「ー似」○もとる（戻）○官の名「前ー」○九ーは山の名、蒼梧に在り、九峯あり、其の形相似たるが故。㊁さだまる（安定）凝に通ず。㊂なぞらふ。‖擬。

【疑忌】ギキ うたがいきらふ。魏志、劉毅傳「雖二外儀雅一、而心多二ー一一一」＝猜忌。

【疑義】ギギ うたがはしき意義。後漢書、鄭玄傳「孔融聞二玄善算一、乃召見二於樓上一、因從質二諸ー一一」

【疑懼】ギク うたがひおそる。易經、注「異順之志、進退ー一」温庭筠詩「激揚衝二箭虎一、ー一聽二冰狐一」

【疑懷】ギクワイ うたがひの心。孟郊詩「ー一無レ所レ想」＝疑心・疑念。

【疑狐】ギコ うたがひふかききつね。黄庭堅詩「蘇長公渡レ冰翻、ー一滅二林逋一」

【疑獄】ギゴク 犯罪のうたがはしき裁判事件。賈誼、新書「梁餽有二ー一、半以爲レ當レ罪、半以爲レ不レ當」

【疑似】ギジ によりてまぎらはしき。魏志、杜畿傳、疏「紛總難レ察、ー一難レ分」

【疑貳】ギジ 互にうたがひて心を離す。晉書、殷浩傳「於レ是與二桓溫一有二ー一」

【疑事無レ功】ギジブコウ 疑ひながら事を行へば成功することなし。史、趙世家「ー一、疑功無レ名」

【疑心生二暗鬼一】ギシンアンキヲ 心に疑ふ所あれば種種の恐ろしき想を生ず。列、說符、口義「諺曰、ー一」

【疑城】ギジヤウ 假に設けて敵をまどはすしろ。三國志「吳徐盛植レ木衣レ幕、爲二ー一假樓一」

【疑阻】ギソ うたがひへだつ。潘岳文「腹心庭爭、爪牙ー一」白居易詩「鬧生二鬼魅一、ー一生レ蟲、何異讒生ー一中」

【疑團】ギダン うたがひのかたまり。疑念の結聚。傳燈錄「ー一猶レ在也」

【疑塚】ギチヨウ 類似のつか。發掘せられんことを恐れて多くのまぎらはしき塚をきつく。蠶耕錄「曹操ー一七十二、在二漳河上一」＝疑冢。

【疑念】ギネン うたがふこころ。甘粲文「遣二鼓尺書室一、ー一始氷析」＝疑心。

【疑滯】ギタイ 人に信ぜられずしてそしりを受ける。隋史「爲二國大臣一、又得二政重萬里遠出、必至二ー一一」

【疑兵】ギヘイ 敵を惑はしむべきいつはりの兵。史、淮陰侯傳「信乃益爲二ー一一」

【疑問】ギモン うたがひとふ。又、うたがはしき事がら。魏書、房景先傳「景先作二五經ー一百餘篇一」

【疑問代名詞】ギモンダイメイシ 誰・何などの如く疑問の意味をあらはす代名詞。

【疑惑】ギワク うたがひまどふ。元稹文「內掛二ー一之詞、外斡二異同之旅一」

【壹】チ シ 壺

つまづく、けつまづく（路・頓）「前跋後ー一」たふれる（仆）

十一畫

【壹】 壺（前條）に同じ。

疒部

【疒】ダク 痛

○やむ、やまひ（疾）○圖やまひだれ。字畫のとなへ。

二畫

【疔】テイ チヤウ 青

かさ「ー一瘡」形固くして小、豌豆の如く、多く面部に生ずる危險なるできもの。めんちやう。

【疕】ヒ 紙

○かしらのできもの「頭瘍」○はげ（禿）○かさぶた（痂）○頭痛む。

三畫

【疚】キウ 有

○やむ。○久しき病。○やまし、氣がとがめる、心がなやみ苦しむ。詩、小雅「憂心孔ー一」論、顏淵「內省不ー一、何憂何懼」○轉じて人の喪に居るを在ー一といふ。

【疝】サン セン 諫

久しき病、故に字久に从ふ。同訓異字 疚・病・疾・痾・瘤の別は病（疒部五畫）の條を見よ。

はらいたむ、腰腹疼痛の病。せんき「ー一氣」せんしやく「ー一痛」

【疝氣】センキ 大小腸・腰腹などの筋肉のひきつりていたむ病の泛稱。＝疝・圖小腸氣。

四畫

【疣】イウ 尤

○いぼ、皮膚に生ずる小さきこぶ（小瘤・贅肉）○むだなものに喩ふ「贅ー一」

【疣贅】イゼイ ○こぶ（結肉）杜甫詩「於レ時見二ー一一、骨髓幸未レ枯」○餘計なものに喩ふ。＝贅疣。

【疫】エキ ヤク 陌

○えやみ、やくびやう、はやり病（流行病）瘧亂・黑死病・赤痢・猩紅熱などの類。漢書、刑法志「諺曰、『棺者欲レ歲之一、非レ憎レ人欲レ殺レ之、利在二於人死一也』」「瘟ー一」「ー一癘」○やくびやう神

（癘鬼）

【疫癘】やくびゃう（疫病）あしきはやり病。後漢書、賀帝紀「詔以二―一水潦、令二人中輸一今年田租一」

【疫病】やくびゃう　前條に同じ。

【疥】カイ　卦

○ひぜん、しっ（濕瘡）「一瘙」「瘁―」○おこり、ぎゃく（瘧）又、おこりを病む。

【疥癬】かいせん　次條に同じ。

【疥瘡】かいさう　ひぜん、――蟲の寄生により起る小泡、粟粒の如く、多く手指の間に生ず、乾濕の二種あり、傳染性を有す。轉じて外患の微なる者に喩ふ。吳語「今王非二越是圖一、而齊晉以爲二憂一、夫齊晉譬二諸疾一、――也」‖疥癬。

【疥癩】かいらい　かゆきふきでものの病（痒疾）禮、月令「仲冬行二春令一、民多二――一」

【疵】シ　支

やむ、やまひ（病）詩、小雅「俾我―兮」

【疾】チン　震

○やむ、ねつびゃう（熱病）をやむ。詩、小雅「―如疾首」○ねつびゃう。○うまきもの（美味）うまきものは病を生じ易きが故。左、襄二三「美―不」如二惡石一石猶生」我、一之美、其毒滋多」

【疾疫】しつえき　熱病。轉じて災患に喩ふ。孟、盡心「人之有二德慧術知一者、恆存乎―一」

【疤】ハ　麻

○すちぶしのやまひ、筋節の病。○かさのあと（瘡痕）‖瘢。

五畫

【疔】ア　歌　又、痾に作る

○やむ、やまひ（病）○沈―チン　宿―は長くして重き病。

【痂】カ　麻

かさぶた（瘡弁）腫物シュが癒えて生ずる硬き皮。南史、劉穆之傳「子弇爲二太守一嗜二創一」（この故事によりて嗜好の偏するものを嗜―といふ）

【疳】カン　覃

○ひかんのやまひ、小兒のやまひ。食慾が増して身體のやせる病「脾―」○下―カイは花柳病の一、陰部に腫物シュの生ずる病「―瘡」

【疳積】カンセキ　幼兒の貧血症、食物消化せず、面色灰白となる、營養不良、或は寄生蟲の爲めに發す。

【疔】ク　虞

せむし、くぐせ（曲脊）脊骨の曲がる病。

【疔僂者】クロウシャ　せむしの人、莊、達生「見二――一」‖疔僂（集韻）

【疚】ケン　ゲン　先

○筋肉のひきつるやまひ。○横―オウは花柳病の一、股間に惡性の腫物シュの發するもの、よこね。

【疵】シ　支

○きず「小―」○つみ、あやまち（過失）漢書、景十三王傳「吹毛求―」○やまひ（病）○そこなふ（毀）きずつく。○卑―ヒは侯人の貌「史、日者傳」

【疵瑕】シカ　きず、瑕は玉のきず。過失に喩ふ。左、僖七「不二汝一一」‖瑕疵、瑕瑾。

【疵瑾】シキン　きず。又、つみとが。魏志、何夔傳、注「荀有二一―一、刑戮可也、加二其掩扑之罰一」

【疵癘】シレイ　わざはひする、たたる。又わざはひ。穀梁傳序「鬼神爲レ之一―」疏「鬼神卽宗廟也、――謂二災變一也」

【痕】キ　支

○うちて、きずつく（毀傷）

【疾】シツ　質

○やまひ（病）論、爲政「父母唯其―之憂」○えやみ（疫病）○きず（瑕疵）くるしみ（患苦）○うれふ（患）くるしむ（困苦）なんぎ。管、小問「牧民者必知其―」○あし（惡）わづらふ、病に罹る、しんぱい（心配）○はやし、とし、すみやか（速）「一言」○しひたげ（虐）うらむ（怨）きらふ（嫌）にくむ（惡）論、泰伯「―之已甚」○害毒、人に害を加ふる者。左、宣十五「山藪藏―」毒蛇・猛獸など。○つとむ（力）○おもむく（趨）○疾に通ず「―醫」○ねたむ。大學「媢―而惡之」‖嫉。

疾・痛・疲・病・症・痒・疹・疼・痘・痢・瘡の別は巠（心部八畫）の條を見よ。

○疒疾・病・疫・痢・瘕・癇の類は病（本書）の條を見よ。

【疾惡】シツアク ○惡人を憎む。禮記、孔穎傳「緯方雅、一レ一若レ讎」若レ讎とは少しも假借せざる喩。‖疾邪。○シツにくむ。‖憎惡・嫌惡。

【疾苦】シツク はげしきあめ。韓詩外傳「越裳氏重二九譯一而獻二白雉于周公一曰、吾受二命國之黃耇一曰、久矣天之不二迅雷一一也、海不二波溢一也、意者中國有二聖人一、盍往朝レ之、於レ是來也」‖猛雨。

【疾疫】シツエキ はやりやまひ（流行病）禮、月令「季春行二夏令一、則民多二一一一」

【疾怨】シツエン にくみうらむ。禮記「不二敢一一一、起レ敬起レ孝」

【疾行無二善迹一】シツコウゼンセキ 急ぎて施したる事には善き出來ばえなきに喩ふ。四庫雜記「牧羊文章敏疾、長卿制作淹遲、蓋二一時之製一而長卿遲疑、枚皐有二累句一、故知一一矣」

【疾苦】シツク 人民のくるしみ。苛政に喩ふ。五代史、韓建傳「出二入閭里一、問二其一一一」‖苦痛。

【疾語】シツゴ とくかける、早く準馬をかる。‖疾驅。

【疾言】シツゲン 口ばやにものいふ。論、鄉黨「不二一一一、不二親指一」

【疾言遽色】シツゲンキョシキ はや口にものをいひ、あわてたる顏色をなす。後漢書、劉寬傳「雖レ在二倉卒一、未二曾一一一」

【疾呼】シツコ とくよぶ。韓愈文「府中不レ聞二急步一一一」

【疾視】シツシ 目を怒らしてにらみみる。孟、梁惠王「撫レ劍一一」

【疾日】シツジツ 疾は惡、子と卯との兩日にて、惡日とす。殷の紂王は甲子の日に亡び、夏の桀王は乙卯の日に死す、故に王者之を忌む。左、昭九「辰在子卯、謂二之一一一」‖惡日。

【疾速】シツソク とくすすむ。魏志、賈逵傳「今一一出二其不意一、所レ謂先レ人以レ奪二其心一也」‖急達。

【疾首】シツシュ かうべをいたむ、頭痛がする。心配する喩。孟、梁惠王「一一蹙レ頞」蹙頞とは顏をしかめて、鼻もとにしわをよせる。

【疾趨】シツスウ とくはしる。漢夫論「逐父一一、百步而廢」

【疾徐】シツジョ はやきと、おそきと。周禮「以救二凶荒一、一一疏數之節一」

【疾戰】シツセン すみやかにたたかふ。五代史、王景仁傳「閉レ壘示レ怯、伺二梁兵玄二疏懈一一」‖急戰。

【疾走】シッソウ はやくはしる。史、孫臏傳「引レ兵一一」

【疾足】シッソク あしばや。史、淮陰侯傳「乘失二其應一、天下共逐レ之、於レ是高材一一者、先得レ焉」

【疾速】シッソク すみやか。白居易詩「人生百年內、一一如レ過レ關」

【疾痛】シツツウ やみいたむ。體、內則「問二衣燠寒一一苟變二而敎抑二搔之一」史記「一一憯怛、未二嘗不一呼二父母一也」‖疼痛。

【疾雷】シツライ ときいかづち。後漢書、仲長統傳「暴風一一、不レ足レ以方二其怒一」

【疾風迅雨】シップウジンウ とき風と、はげしき雨と。荊楚歲時記「去冬節二一百五日、卽有二一一一」謂二之寒食一」

【疾風知二勁草一】シップウケイソウヲシル 困難に會ひて堅き節操をあらはすに喩ふ。後漢書、王霸傳「光武謂レ霸曰、潁川從レ我者皆逝、而子獨留勞力、一一」

【疾病】シツビョウ ○やまひ。星經「五穀豐、人安吉、無二一一一、天子有二令德一」○ケイビョウ病が重きる。論、述而「子一一」

【疾步】シツポ はやくあゆむ。元稹詩「一一無レ由レ致」‖疾行。

【疾苦】シックやまひ。姚合詩「伊人同一一、所レ對惟苦辛」

【疾癘】シツレイ やましきと、かゆきと。荀子「寒暑一一」

【疾雷不レ及レ掩レ耳】シツライミヽニオヨバズエンジ 急に雷鳴して耳をおほふ暇なし。事急にして防ぐ暇なきに喩ふ。六韜、軍勢「一一、迅電不レ及レ瞑レ目」淮南子には掩を塞に作る。

【疾病】シツビョウ はやりやまひ。魏志、賈逵傳「又有二一一一、子レ爲軍中醫動」‖疾疫。

【護レ疾而忌レ醫】ケイヲマモリテイヲキラフ 己の過失あるも人の諫をきかざるに喩ふ。周子通書「今人有レ過、不レ喜二人規一、如二護レ疾而忌レ醫」

【疹】シン チン

㊀くちびるのかさ（脣瘡）○はしか「麻一」はっさう（疱瘡）小粒狀のふきでものの稱「遇一」「水泡一」㊁熱病。‖疢。○やむ、やまし（病）張衡、思玄賦「思百殃以自一」

【疹患】シンカン 皮膚に生ずるやまひ【陣書、後主紀】

【疱】ショウ ソウ 廣

あしきかさ（惡瘡・久瘡）膿の一種、瘡は淺くして大いに、一は深くして惡し。史、吳起傳「卒有二病一一者、起爲吮レ之」

【疱瘡】ソウ あしきはれもの。左、襄十九、疏「荀偃病二此一一一潰、遂生二創於頭一」

【痂】セン テン 廣 韻

おこり（久瘧）おこりの間日なしに發するもの。又、其の病に罹る。

【疻】ダン 廣

きずいたむ（瘡痛）

【疸】 タン 醫 早

胃より起る病、わったん「黄―」酒食過度に由りて肝臓を病みて膽汁が血液中に混入する爲め、皮膚・面・目・爪甲・小便皆黄色を帶ぶる病。‖黄病。

【疼】 トウ 多 蒸

いたむ。いたみ(痛)

同訓異字 疼・痒・傷・痛・醒・悛・悼・憐・戚・慨・恒・惻の別は悼(心部八畫)の條を見よ。

【疼愛】トウアイ 憐ひどくかあいがる。‖痛愛・酷愛。

【疼腦】トウノウ いたみてはれる。王獻之文「患二面―一」

【疼痛】トウツウ いたむ。いたみ。

【疱】 ハウ 爻

○はれやまひ(腫病)○もがさ、ほうさう(瘡)皮膚殊に顔面に水泡狀のかさを生じ、痘痕を殘す熱性の傳染病。‖天然痘。○液汁を含みて水泡狀に腫れあがるできもの、とびひ「水―」

【疱瘡】ハウサウ もがさ、天然痘。‖痘瘡。

【疲】 ヒ 支 麗に通ず

○つかる。後漢書、光武紀「我自樂二此、不一レ爲一レ也」○つかれ、つからす、力を勞する。○とぼし(乏)財盡きて苦む「一弊」○うむ(倦)○やせる(瘦)「一馬」

【疲勤】ヒキン つかれくるしむ、勤も疲。蘇軾文「方營二新居一、費用百端、竭力幹辦、尤爲二―一」

【疲癃】ヒリウ つかれうう。後漢書、來歙傳「兵人―一、若招以二財穀一、則其衆可レ集」

【疲倦】ヒケン つかれうむ。東觀漢紀「今日―甚」

【疲困】ヒコン つかれくるしむ。晉書、蘇峻傳「道途行連、軍人―一」‖疲憊。

【疲殆】ヒタイ つかれおこたる。論語「思而不レ學」注「徒使二人精神一―一」

【疲惓】ヒケン つかれおこたる。晉書、五行志「犯レ暑妨レ農、官私―一」

【疲茶】ヒダ つかれ衰へる。杜甫詩「―痩何人、羸レ淚巴東峽」

【疲純】ヒトン つかれよわる。晉書「荷堅曰、吾精兵若レ擬、利器如レ霜、而鄧二於烏合一―一之賊一、天也」‖疲困・困乏。

【疲癃】ヒハイ つかれる、無も疲。‖疲勞。

【疲馬不レ畏二鞭箠一】ヒバフヲソレズベンスイヲ 困窮すれば刑を畏れざるに至るに喩ふ。鹽鐵論「―、黎民不レ畏二刑法一」

【疲弊】ヒヘイ つかれよわる。諸葛亮、出師表「今天下三分、益州―一」‖罷弊。

【病】 ヘイ ビャウ 敬

○やまひ(疾)わづらひ「疾―」「一氣」「多―」「臥―」○うれへ、くるしみ(困苦)○うれへ(憂)しんぱいする。左、襄二四「鄭人―之」○うらむ(恨)○くるしむ、なやます、やます、人をくるしめる。人に迷惑をかける。禮、表記「君子不レ以二其所能一病二人一」○やまひが重くなる。論、述而「子疾―」○はづかしむ(辱)○短所・惡癖・缺點。晉語「舅所―也」

同訓異字 病・悲・憂・患・恤・閔・憫・愁・悕の別は悲(心部九畫)の條を見よ。

○ふ病・疾・疚・痾・疔・瘤○病は疾加也と註す、やまひの重りたるなり。論語「子疾病、子路請レ禱」○疾は急にやみつきたるなり。書經「若藥弗二瞑眩一、厥疾弗レ瘳」○疚は久病なり、俗にいふ持病なり。また心に憂ふる義。論語「內省不レ疚」○疔は病の深く根に入りたるなり、宿痾の類。○疔は病に同じ。○瘤は久病なり、久しく固くなりしやまひなり、痼疾・沈痼と用ふ。

【病痾】ビヤウアイ ながわづらひ。‖久病・宿痾。

【病院】ビヤウヰン 病人を治療する所。‖醫院。

【病ノ癆】ビヤウインヤウ おふしをやむ。蘇軾詩「虎嘯風吹レ箱、箱多蟬―レ―」

【病家】ビヤウカ 醫者が診察する病人の家。

【病假】ビヤウカ 病によりて暇乞をこふ。假は暇。白居易詩「―連綿日漸深」

【病氣】ビヤウキ ○やまひのもやう。冥報記「君有二―一」○圖やまひ「―全快」

【病菌】ビヤウキン 微生物の病源となるもの。

【病轉】ビヤウテン 病骨に同じ。

【病原】ビヤウゲン やまひのもと。‖病因・病根。

【病骨】ビヤウコツ 病氣のからだ。李賀詩「―猶能在、人間底事無」

【病根】ビヤウコン ○やまひのもと。後漢書、華陀傳「君―深、應レ當レ剖レ腹」‖

病原。○心にしみ込みたる惡しきならはし、惡習。横渠語錄「一一不レ去隨二所レ居所一レ接而長」

【病死】ビヤウシ やみて死す。史、龜策傳「文王一一」

【病身】ビヤウシン やめるからだ、健康ならざる身體。‖病軀・病體。

【病者】ビヤウシヤ 病人に同じ。北魏書、長孫稚傳「危難之日、一一先行」

【病牀】ビヤウシヤウ 病人のねどこ、やまひのとこ。‖病褥。

【病證】ビヤウシヤウ 病の徴候。水滸傳「也來看二個內一一」俗に病症と書く。

【病疽】ビヤウソ やまひのとこ。‖病褥。

【病褥】ビヤウジョク 同條に同じ。

【病尿】ビヤウセウ やみてよわし。沈遼詩「千里馳レ書慰二一一」

【病僧】ビヤウソウ やめる出家。白居易詩「暮鐘鳴鳥驚、秋雨一一閑」

【病體】ビヤウタイ 病骨に同じ。

【病中】ビヤウチウ わづらひてゐる間。‖病間。

【病的】ビヤウテキ 物事の不健全にして常態を失するにいふ。

【病毒】ビヤウドク 病氣の原因となる害物。

【病人】ビヤウニン 病者に同じ。荀、法行「良醫之門多二一一」‖疾病之側、多二枉木一」‖病者。

【病坊】ビヤウバウ 病氣の養生所。類要「唐以二祕書監一爲二宰相一一一、悉及書作郎僞二尙書一一」其の職務の開放にして休養に資するに足るが故。‖養病坊。

【病夫】ビヤウフ やめるひと。柳宗元文「愈屬之門、不レ拒二一一一」繩墨之側、不レ拒二枉材一」

【病鰥】ビヤウクワン よからぬくせ。平陽人物志「好詞工書、皆一一也」

【病魔】ビヤウマ やまひがみ。‖二豎。

【病兎】ビヤウト やまひによりて官をやむ。漢書「相如既一一、家居茂陵」

【病理】ビヤウリ 病氣の原因及狀態などの原理「一一學」

【病羸】ビヤウルイ やみつかれる。‖羸病。

【有病不治常得中醫】イウビヤウフヂジヤウトクチユウイ 病を其のままに爲し置くは、中等の醫を得るにひとしと。扁鵲（ヘンジヤク）の病に害あるにいふ（漢書、藝文志）

【移病】イビヤウ 病と稱して命に應ぜず。漢書、揚敞傳「一一臥」

【養病】ヤウビヤウ 病を治める、養生をする。禮、射義「酒者所二以一一一也」

【病入二骨肓一】ビヤウニフコツカウイチ 病の治すべからざるにいふ。左、成十「醫至曰、疾不レ可レ爲也、在二肓之上、膏之下一、攻之不レ及、藥不レ至焉」

【病閒】ビヤウカン ○やまひの少しく快きまま。論、子罕「一一曰、久矣哉、由之行レ詐也」‖少差。○病氣中。

【病革】ビヤウカク 病氣が危篤に迫る、革は亟（キヨク）に通ず、俗にカクの音によみてあらたまると訓するは非。禮、檀弓「曾元曰、夫子之一一矣、不レ可二以變一」

【伴レ病】ハンビヤウ けびようをつかふ。說苑「子胥諫不レ用、因輒一一レ不レ行」‖稱レ病・詐病。

【謝レ病】シヤビヤウ 病氣と稱して君命をことわる。史、魏其傳「一一」‖辭居」‖移レ病。

【無レ病而自灸】ムビヤウジシキウ 徒に無益の苦勞する。莊、盜跖「丘所謂——也」

【病從レ口入】ビヤウジウコウニフ 病は飲食をつつしまざるより生ず。傳休奕、口銘「——、禍從レ口出」

【病加二小愈一】ビヤウカセウユ 病は少しく癒ゆる時、油斷して養生を怠り、反りて以前より重くなる。愈は癒に同じ。韓詩外傳「官怠二於官一成二——一」

【症】

證（言部十二畫）の俗字。病の徴候（ヘウ）「病一」

六畫

【痍】

イ 支 通じて夷に作る

○きず（創）「搶一」「金一」○きずつく（傷）史、蒙恬傳「傷一者未レ瘳」○轉じて戰後の損害・疲弊などに喩ふ。

【痂】

カ 麻

○きずつく（傷）○うちきず（殿傷）○きずあと（瘢痕）張衡、西京賦「所好生毛羽、所惡成一一」

【痎】

カイ 佳

おこり（瘧）二日目に一度おこるぎゃく。

【痼】

クワイ 灰 もと疒に作る、俗に廻に作る

腹の中の長き蟲「一一蟲」

【痕】

コン 元

○きずあと「瘢一」○あと（迹）すべて物の迹あるもの「墨一」「淚一」「酒一」「苔一」「刀一」

【痕垢】コンコウ けがれたる罪の跡。獨孤及、貢舉敎表「洗二蕩一一一、成使二維新一」

【痕跡】コンセキ 次條に同じ。

【痕迹】コンセキ あとかた。楚辭「靈」金縢「雖二有一一一一、而無二一一一」‖痕跡。

【瘁】

？ 紙

○窶き貌。○ほしいまま、自ら放縱にする貌。

【痊】

セン 先

いゆ、病除く、いやす、なほす（癒）抱朴、用刑「是以灸刺雖二痛、而不一可一止者、以一一病也」

同訓異語 ユ 瘥・已・愈・癒・差・蔡・療・醫○瘥・已・愈・癒の四字は共に病のさっぱりとなほる義、愈一に癒の字に作る。○瘥は少し快き義、差に作る、同じ。魏志「疾小差」以上の五字はいやす、いゆる、共に用ふ。○療は、いやすとのみ訓む。周禮「凡療レ病以二五毒一攻レ之」○醫は、くすし、慣用して、いやす義とす。東坡詩「人療尚可レ慶、士俗不レ可レ醫」

【疥】 ガイ 泰

ぢ、しもがさ（隱瘡）しりのやまひ、肛門のはれいたむ病「一漏」「一核」「一瘡」韭、列禦寇「舐レ痔者得車五乘」一疾を祝りて車を褒美に貰ふ、賤業を爲して多くの利を得る者を嘲る。【痔瘡】ヂサウ ぢの病。肛門内に在るを内痔といひ、外に在るを外痔といふ。【痔漏】ヂロウ ぢの久しく癒えず、外に腫れるもの。王義之、鵝嘴帖「鵝嘴瓜炙入二窮者一、煎二酥酒一盞一服レ之、治二一一一有レ驗」

【痌】 トウ 東

いたむ（痛）＝恫。

【痒】 ㊀ヤウ ㊁ヤウ 養 陽

㊀やむ、やまひ（病）○かさ、できもの（瘍）㊁かゆし「痛ー」「隔レ靴爬ー」＝癢。

【痒痾】ヤウア かゆき病。張載、四銘「一一疾痛、擧切二吾身一」【痒疥】ヤウカイ かゆきかさ。周禮、天官「夏時有二一一一疾一」

【痙】 ケイ 徑

筋肉がひきつる。又、其の病。【痙攣】ケイレン 身體の一部の筋肉が引きつりかがまる。又其の病（重きものは癎類に至る）

【瘀】 ザ 卦

○にきび（小腫）○はれもの、できもの、よう（癰）○ねぶと（瘤）

【痣】 シ 寘

ほくろ、あざ（黒子）＝誌・黶子。

【痟】 セウ 蕭

○づつう（頭痛）＝首疾。○消と通ず、消渇一に痟渇に作る、今の糖尿病。

【痛】 トウ ツウ 送 通音

同訓異語 メイ 痛・悼・傷・隕・愴・愴・戚・恨・恫・惻・疼の別は悼（心部八畫）の條を見よ。

【痛飲】ツウイン 甚だしく酒を飲む。世說、任誕「一一ニ斛、然二後離レ一便可レ稱二名士一」＝劇飲。【痛隕】ツウイン いたむ。唐書、劉洪傳「體常流レ血、恬然不レ爲二一一一」【痛感】ツウカン 甚だしく心を動かす。晉書、溫嶠傳「骨肉生離、一一二天地一、人皆切齒」【痛苦】ツウク いたみくるしむ。いたみくるしみ。【痛快】ツウクワイ 甚だこころよし。法書苑「吳皇象善二行草書一、世稱二沈著一一一」【痛撃】ツウゲキ 他をひどく詰り責める、甚だしく他の言行などを攻撃する。【痛哭】ツウコク はげしくなく。漢書、賈誼傳「方今事勢、可二痛一一者一、可二爲流涕一者二、可二痛長太息一者六」宋史、韓琦讀二孫洙策文一、嘆曰、一一流涕、極二論天下事一、今之賈誼也」【痛哭流涕長大息】ツウコクリウテイチヤウタイソク 時勢の非なるを甚だしくなげき語、長大息は深く歎息する。前漢、賈誼「上疏陳二政事一」【痛恨】ツウコン 甚だうらむ、非常に殘念に思ふ。南史「一一鳴哭久之」＝切恨、刻骨恨。【痛疾】ツウシツ いたみやむ。左傳「民人一一、而或壅二防之一」【痛心】ツウシン こころをいためる。唐書、劉蕡傳「一一泣血」【痛切】ツウセツ 身體のいたむ處。大唐新語「裴敬彜曰、大人毎レ有二一一一、我但不レ安」【痛惜】ツウセキ 甚だしくをしむ。隋文帝文「美志不レ遂、良可二一一一」【痛切】ツウセツ 甚だ深切なり、ひしひしと身にしむ、沈痛にして迫切。漢書、楚元王傳「其言多二一一、發二于至誠一」【痛楚】ツウソ いたみくるしむ、子貢詩「一一無二共語一」＝苦痛。【痛悼】ツウタウ いたみかなしむ。遺爾文帝文「想二卿一一之誠一」＝悼痛。【痛歎】ツウタン いたくなげく。【痛訣】ツウケツ きびしくそしる。史、張湯傳「以二深文一一二一譴侯一」＝峻訣。【痛慣】ツウクワン いたみなやむ。陳書、姚察傳「會無二一一、但四向坐正念、云一一切空寂」【痛罵】ツウバ 甚だしくののしる。世說補「武帝謂二和嶠一曰、我欲レ先二一一王武子一、然後爵レ之、嶠曰、武子痛疾、恐不レ可レ屈」＝極罵。【痛憤】ツウフン いたくいきどほる。傷唐

書、太宗諸子傳論「父子一一、義不ㇾ顧ㇾ全」
【痛疾】ツウシツ いたくいしばりする、きびしく戒める義に用ふ。陸游詩「惡石何妨更一一」
【痛痒】ツウヨウ いたくかゆし、痒は癢。韓愈文「夫口之于二甘苦一、身之于二一一、感二物而動一」＝痛癢。
【不ㇾ知二痛痒一】シラズツウヨウヲ 何の感じもなし。利害の關係なきにいふ。傳燈錄「猶未ㇾ知二痛痒一」
【痛癢】ツウヨウ ○いたくかゆし。蜀志、孟光傳、光之指摘一一」○心に苦痛を感ずる。晉書、范宏之傳、於二下官之身一有二何一一一」
【痛論】ツウロン 非常につよく論ずる。

【痘】トウ 宥

はっさう、もがさ（疱瘡）豌豆ほどの狀の水疱を生ずる熱性の傳染病、胎毒より起るといふ、俗に天花といふ「天然一」「種一」
【痘疫】トウエキ もがさのあと、あばた、いも。
【痘苗】トウビョウ 種痘の原料となる病毒、多く小牛の痘瘡中の濃汁にて製する。

【痾】バイ クワイ 隊 隊

やむ、やまひ（病）詩、衛風「使我心一」「沈一」「疚一」

【痞】ヒ 紙

○つかへ、癪などにて胸がふさがる、腹の内に塊の如きものありていたむ「一塊」久しき瘧の後に起るによりて瘧母ともいふ。○俗惡人「地一」「流一」

【痛】ホ 遇

○やむ（病）やましむ。書、泰誓「毒二四海一」○つかる、人疲れて行く能はざる病「瘏一」詩、周南「我僕一矣」

【痢】リ 寘

くだりやまひ（病）大便がはげしくくだる「下一」「赤一」「泄一」

八畫

【痴】ア 支

やまひ（病）ながびくやまひ。潘岳賦「舊一有痊」＝痾。
【痴癰】アヨウ 病にかかる。宋祁詩「一一坐寬レ日」＝抱痾。

【痘】ア 馬

おふし、おし（瘖）＝啞。

【痿】キ ズキ 支 支

なゆ、しびれる、なえて動作の力なし「陰一」しびれるやまひ「痺一」
【痿挺】キテイ なえそこなふ。南史、張融傳「樹邊便起二一瘤一、如二拳大一、稍稍長二十餘日一、瘤大腫懶、出二黃赤汁斗餘一、樹爲レ之一一」
【痿廢】イハイ 肢體がしびれるやまひ。轉じて政が弛びて振はざるに喩ふ。

【疥】オ 卦

○ふるち（積血）○血液の壅滯によりて生ずる病、腦充血、血淋などの類。

【痒】キ 寘

氣定まらず、むなさわぎ（心動）＝悸。

【痙】クヮン 刪

○やむ（病）○一一は病みつかれ（罷）る貌。詩、小雅「四牡一一」又、賢人が志を失ひて憂ふる貌。

【癌】ケン 先

手の脈がまる病。

【痼】コ 遇 俗に通ず

○ながびくやまひ（久病）「沈一」○轉じて或る物事に一心にこりかたまる「一癖」
同訓異字 癌・病・疾・痾・疫の別は病（疒部五畫）の條を見よ。
【痼疾】コシツ 久しくいえざる病。後漢書、光武紀「京師醴泉湧出、飲レ之者一一皆愈」＝痼病。
【痼癖】コヘキ 極めて物事にこりかたまるくせ。潘岳、反北山嘲詩「煙霞成二一一一、壑僨痊二巢由一」

【痦】コン ビン 元 眞 又、瘨に作る

やまし、やまひ（病）詩、大雅「多我觀一」

【痒】スキ 寘 古、悁・慎に通ず、痒は俗字

○やむ（病）うれふ（憂）○つかる（勞）「珍一」「憔一」詩、小雅「僕夫況一」○やぶる（毀）、頽一」

【痰】タン 感

咳と共に氣管より出づる粘液、又、其の病。

【痴】 チ　支　癡（疒部十四畫）の俗字

○おろか（癡・不慧）「白―」○きず（疵病）

【痴呆】チタイ　おろかもの、呆は獃の俗字。

【痴漢】チカン　おろかもの。‖癡漢。

【痩】 チャウ　漾　本、腹に作る

○はる（張）○ちゃうまん（腹滿）

【瘐】 チョク　沃

しもやけ、ゆきやけ（寒瘡・凍瘡）寒氣に中りて皮膚の腫れ又ただれる病。漢書、趙充國傳「手足皸―」

【痲】 バ　麻　通音マ、本麻に作る

○しびれる、しびれ。○―痺ヒは、はしか、一種の傳染性熱病。‖麻疹・圖疱瘡。○圖あばた。

【痲痺】ヒ　しびれ、痺もしびれる。

【痺】 ヒ　ハイ　紙　霽

○ちひさきはれもの（小腫）○ちゅうぶ（中風）又、ふしのいたむやまひ。漢書、賈誼傳「又類辟且病―也」辟は足の病。

【痹】 ヒ　眞　痺は別字

○しびれる、しびれ「麻―」「風―」○やまひ（病）○しつのやまひ（濕病）

【痲】 リン　侵　俗に淋に作る

○せんき（疝痛）○りんびやう「―病」「―疾」尿道がただれていたみ、小便の通じ難き病氣。

九畫

【痘】 イン　オン　侵

おふし、おし（啞）言ふこと能はざる病。‖喑。

【痘啞】ンア　おし。

【痘默】モク　ものいはず。柳宗元文「用レ是更樂二一一一與二木石一爲レ徒」‖緘默。

【痘藥】ヤク　おしになるくすり。史、呂后紀「太后斷二戚夫人手足一去二眼燻レ耳、飲二一一一使レ居二廁中一命曰二人彘一」

【痘聾】ロウ　おしと、つんぼと。史、淮陰侯傳「吟而不レ言、不レ如二一一之指聾一」‖聾啞。

【痕】 カ　麻　馬　禡

○きず。‖瑕。○女のやまひ。○腹にこりを生ずる病。

【痩】 クヮン　刪

○やむ（病）「惆―」○むなしくす（曠）おろそかにする。書、冏命「―厥官」

【痩】 ケイ　靈　靈

くるふ（狂）左、哀十二「國狗之―、無不レ噬也」

【痩狗】ケイク　狂犬なり。左、襄十七「國人逐二一一一」

【痙】 痓（疒部八畫）に同じ。

【痳】 シュウ　腫

あしがはれる（足腫）又其の病。號令の下に行はれざるに喩ふ。漢書、賈誼傳「天下之勢、方病レ大―」足がはれて行きなやむ譬。‖癰。

【痛】 ト　遇

○やむ、やまひ（病）やみつかれる。○馬が疲れて進む能はざる病。

【痛悴】ストイ　病みつかれる。楚辭、九歌「躬劬勞而―一」

【痛痛】トヽヤ　やみなやむ。詩、周南「勞二我馬瘏矣、我僕痛矣」

【痲】 フウ　東

○づつう（頭風病）○俗に精神病の義とす、きちがひ「―癲」

【痲】 ヘン　先

ちゅうぶ（中風・半枯）半身不隨の病。

【痲枯】ヘンコ　半身不隨の病（半枯）集韻「公孫綽有二一一之藥一以起二死者一」

【瘍】 ヤウ　陽

○かしらのかさ（頭瘡）ふきでもの、はれもの。癰・疽などの皮膚病の總稱「潰―」「腫―」曲禮「身有―則浴」○きず（傷）

【瘍醫】イヤウ　○周代の官名、民の瘍モノアある者、皆其の藥を受く（周禮、天官）○外科醫の通稱。

【瘀】 （一）ユ　虞　（二）ヨ　遇　虞　又愈・瘉に作る

㊀やむ（病）詩、小雅「胡俾二我―一」○いゆ、病がなほる（病癒）漢書、高帝紀「漢王疾―」いやす、なほす。㊁まさる（賢）‖

愈。

同訓異字 癒・瘉・痊・已・愈・瘳・差・瘥・瘳の別は痊（疒部五畫）の條を見よ。

【瘦】 ユ 遇

○やむ、賢人の志を失ひて憂病を懷くにいふ。○囚徒の飢寒によりて死するにいふ。

【病死】ビヤウシ 獄中にて病死する、囚徒の死をいふ。漢書、宣帝紀「一一一獄中一」

【瘌】 ラツ ライ 泰 易

○いたむ（痛）○きず（傷）○ひぜん（疥）○固頑癩ラヒヤウにて髮が禿るもの。

【瘼】 癩（疒部十二畫）に同じて

十畫

【瘞】 エイ 霽

○うづむ、をさむ（埋藏）地中にうめかくす「埋一」「收一」○はか、墓所。

【瘞鶴銘】エイクワク 梁の天監十三年、陶隱居眞逸撰す、其の碑は江蘇省丹徒縣焦山の崖石上に在り、後ち江中に陷落す、清の康熙中、陳鵬年工を募りて之を出す、華陽眞逸は梁古鉢に顯況と爲す、或は陶弘景ならんといふ。

【瘞玉】エイギヨク 玉をうづめる。桓譚新論「修二封泰山一一一登宗一」注「凡封レ山則埋レ玉、祭レ川則沈レ璧」

【瘞禮】エイライ 地の神を祭りし供物を地にうめる儀式。

【瘟】 ヲン 元

えやみ、やくびやう、はやりやまひ（疫病）

【瘟疫】ヲンエキ 急性のわるきはやりやまひ。日溫疫。

【瘧】 ギヤク 藥

おこり、わらはやみ。或は寒く或は熱く、毎日一回、又は隔日に一回、時を定めて發する病。日間歇熱。

【瘧鬼】ギヤクキ おこりの神「搜神記」「雷頭項氏有二三子一死而爲二疫鬼一一居二江水一爲二一一一

【瘦松】ソウ やせたる松。陸游詩「一一無二横枝一、蒼竹少二全葉一」

【瘦小】ソウ やせてちひさし。北史、叱羅協傳「形貌一一、舉措弱急」

【瘦瘠】セキ やせる。古今注「雁自二河北一渡二江南一、一一能高飛、不レ畏二矰繳一」

【瘦損】ソン やせる。蘇軾、紅梅詩「細雨湯殘千顆淚、輕寒一一一分肌」‖瘦削。

【瘦長】チャウ やせてながし。彭乘墨談「凡小家、喜二瘦而長一」

【瘦面】ソク やせたるかほ。陸游詩「可レ憐落筆漸健快、其奈一一無二光輝一」

【瘦容】ヨウ やせたる容貌。樂府詩「自把二銀花一比二一一一」

【瘦羸】ソク やせつかれる。薛能詩「自惜多情欲一一一」

【瘠】 セキ 陌

○やす、やせる(痩)體がやせて細くなる。肥の對。○地味わるし「一薄」○へる(減少)物が乏しくなる。漢書、食貨志「堯有二九年之水、湯有二七年之旱一而國無捐一者、以蓄積多而備先具也」○へす、はぶく(省約)

(本畫)の條を見よ。

【瘠瘦】ソウ やせる。晉補文「雀自言、雀微軀身體些少、肌肉一一、所レ得蓋少」

【瘠土】セキ やせたる土地。沃土の反對。國語「昔聖王之處レ民也、擇二一一而處レ之、勞二其民一而用レ之、故長王二天下一」

【瘠馬】セキ 病みてやせたるうま。晉、設卦「乾爲二一一一」

【瘠薄】ハク やせたる土地。食志、武帝紀「古之牢者、必居二一一之地一」‖塉埆。

【痩】 ソク 屋

○あまりたるにく、あまじし(寄肉)いぼ、こぶ、はなたけ(梟菌)の類。○あしきにく(惡肉)

【瘨】 テン 先 震 銑

○やむ(病)○くるふ(狂)○たふる(倒)たふす(顚)

【癈】 ハン 寒

きす(痍)きずあと(瘡痕)「刀一」後漢書、馬援傳「吳王好レ劍客百姓多二瘡一」

【癈疾】ハイ きずと、いぼと。元好問詩「胡爲文字閒、刮レ垢搜二一一一」

【癈痍】ハイ きずあと。後漢書、趙憙傳「所レ好則瘡レ皮、出二其毛羽一、所レ惡則洗レ垢、求二其一一一」

【癘】 ヨウ レウ 霽 嘯の正字

たか(爽鳩)

【癆】 ラウ 癆の正字

(疒部十二畫)の俗字。

十一畫

【瘡】 エイ 霽

○しづか(靜)「婉一」○つまびらか(審)○おくふかし(深遠)

【瘍】 キン 支 震

やむ、やます(病)つからせる。漢書、文帝紀「一身從事」

【瘵】 サイ 泰

○やむ、つかれやむ(勞病)「衰一」「凋一」詩、小雅「上帝甚蹈、無二自一一一」○瘵一サイは肺病。

【癘】 シャウ 藥

山川に生ずるあしき濕熱の氣「一毒」「一霧」「一煙」又、其の氣に中りて起る熱病「一瘟」「一疫」

【癘雨蠻烟】バンエン 支那南方の瘴地の毒氣を含める雨と烟と。蘇軾詩「湘江南去少二人行一、——白草生」

【癘雲】ウン 山川の瘴氣を含めるもの張遠詩「一一猶山獨登樓」

【癘疫】エキ 風土の惡しき爲めに起る一種の熱病。晉書、其康傳「齎州包二帝山海一、珍異所レ出、一閉之實、可レ資二數世一、然多二一一一人情彈焉」

【癘氣】エン 瘴氣を含むけむり。元稹詩「君避二海鯨一、蒸演爲二色蜃一一一中」

【癘毒】ドク 山川のあしき氣の後漢書、楊終傳「南方暑濕、一一互生」

【癘母】ボ 瘴癘の氣が凝結して成るもの、始は彈丸の如く、漸くにして車輪の如し、人之に中れば即ち病む、支那の嶺南に多く之れあり「晉書雜記」

【癘鬼】キ 瘴氣を含めるきり。蘇軾詩「玉骨那愁一一、冰肌自有二仙風一」

【癘瘴】レイ 山川の瘴氣にあたりておこる熱病。瘧は內病、瘴は外病、支那の南方の濕ひて暑き地に多し。南史、任昉傳「寄二命一一之地一」

【癡】 シ 支

きゃうふう（驚風）小兒の病「癎ー」

【瘰】セキ 陌

○やせる病、瘠の譌字。○㾦（シャク）（癩）

【瘢】セン 銑

ひぜん「疥ー」＝蘚。

【瘕】ゾク 屋

ー蠱（レイ）は皮膚病、ひぜんの類〔左、桓六〕

【瘠】タイ 泰

ながち、しらち、婦人病の一、白又赤のおりもののする病。正字通「赤ー（ナガ）白ー（シラ）婦人下部病」

【瘴】バク 藥

○やむ（病）○なやむ、くるしむ。○民ーは民の苦患するところ。詩、小雅「亂離ー矣」

【瘵】ヘウ 篠 嘯

ー疽（ソ）は指さきの腫み腫れる病。＝㾦蝦眼。

【瘰】ライ 賄 紙 眞 通雷ルキ

ー癧（レキ）は頸部及び顎下の扁桃腺淋巴腺などがはれてしこりとなり、膿みくづれる病、ぐりぐり。＝㾦連串。

【瘳】チウ レク 尤 沃

○いゆ、病がなほる。いやす（癒）書、說命「若藥弗瞑眩厥疾弗ー」○へる（損）晉語「於己何ー」

【瘻】㊀ロウ・ル ㊁ル 宥 麌

㊀かさ、頸に生ずる腫物（シュモツ）漿瘦（ルイセウ）の類。㊁せむし、くぐせ（曲脊）「痀ー」

【瘻癘】ロウライ 久しく癒えざる頸の腫物（シュモツ）と癩病（ライビャウ）と。柳宗元、捕蛇者說「可ニ以已ニ大風拘攣ー一ニ」

十二畫

【癇】カン 刪

○癎ー（テンカン）は病名、不意にひきつけて氣絕し、口より泡をだし、暫くにして蘇生する病。＝風眩・羊癇風。○かんのやまひ、小兒の病、筋肉ひきつりて氣がいらだつ病、きゃうふう（驚風）○㊀かん、感情が強きに過ぎる、神經過敏「ー積（セキ）」

【癇癪】カンシャク ㊀物事に激して氣がいらだつ、かんしゃくもち、神經過敏。

【癇病】カンビャウ 小兒の筋肉のひきつる病。後漢書、王符傳「哺乳多則生ニー一ニ」

【癇聲】カンセイ ㊀痛を起すくせ。

【癌】ガン 咸

がんのできもの、臟腑に生ずる硬くくして痛む惡性の毒瘤「舌ー」「胃ー」「乳ー」「子宮ー」

【癌腫】ガンシュ がんの出來もの。

【癆】㊀セウ ㊁セウ 嘯 效

㊀憔に同じ。㊁やむ（病）○ー瘁（セウスイ）はほろびちぢむ（減縮）漢書、禮樂志「是以纖微ー瘁之音作而民思憂」

【癘】セン シン 霰 先

○いたむ（痛）漢書、谷永傳「榜箠ー於炮烙ニ」＝憐。○やまひ（疾）

【癜】㊀タン 寒 ㊁タン 翰 ㊂タン 早 ㊃タン 旱 ㊄タン 銑

㊀つかれやむ（勞病）○やむ。やます（病）書、畢命「彰ー善ー惡」○わうだん（黃病）「ー熱」○ー疸は惡性の腫物（シュモツ）のために熱がでる。左、襄十九「荀偃ー疸」㊁やむ。○つかる（勞）○くるしむ（苦）㊂いかる（怒）○つかる（勞）㊃手足の關節の病、風疾。○小兒の熱病、猩紅熱の類。㊄かたし（難）○熱病、癆症（リョウセウ）の一種。

【癖】ハイ 陌 過ぎに

なほらぬやまひ（固病）「一人」「一痼」

【癖疾】ヘキシツ 治し難きやまひ。かたは（不具）となる病。禮、禮運「矜寡孤獨ー一者、有ー所ー養」＝廢疾。

【癖人】ヘキジン かたは、不具者。

【癖兵】ヘキヘイ 負傷してかたはになりし兵士、之を收容する所を一一院といふ。

【癆】ラウ 豪 號

○いたむ（痛）○藥が反りて毒を致す、藥物中毒。○甚だしく

勞して瘦せる病。○肺―（ハイロウ）は、らうがい、肺結核（ハイケツ）

【癆】 リウ ル 虎 癌は俗字

こぶ（癌肉・贅肉）肉の起る疾「疣―」

【癆醜】（リウシウ）衆所ノ悪ム―也」

【癆贅】（リウゼイ）こぶ。唐書、孫思邈傳「結ビ―ヲ陷ル二瘤痕一」‖贅癌。

【癆】 リウ 東 又、瘌に作る。

○つかれやむ（罷病）「疲―」○せむし（背疾）老いて病む（老病）「罷―」「老―」「衰―」○小便の通ぜざる病。

【癆疾】（リウシツ）腰の曲がりて、背隆くなるやまひ、せむし。漢書、賈山傳「民皆二老羸ノ―ヲ、扶ヶ杖而往」

【療】 レウ 嘯

いやす、なほす（癒）病を治む「治―」「醫―」「施―」

同訓異字 療・痊・已・愈・癒の別は痊（疒部六畫）の條を見よ。

【療渇】（レウカツ）のどのかわくをいやす。國史補「蔗ハ―ス二煩渇一ヲ」‖所謂茶也」

【療飢】（レウキ）次條に同じ。王融文「―ノ不レ期ニ於膏食一」

【療餓】（レウガ）飢をいやす。四皓、采芝採「曄曄紫芝可二以―一ノ」‖療飢。

【療救】（レウキウ）病をいやしすくふ。後漢書、廉范傳「抱二持棺柩一、遂俱沈溺、兼傷二其妻一、鉤求得レ之、―一漢免」

【療護】（レウゴ）くわんびやう（看病）北史、崔季舒傳「縱貧賤厮養、亦爲レ之―」

【療治】（レウヂ）病をいやす。北魏書、裴延傳「還レ京―」‖治療・攻療。

【療方】（レウハウ）病をいやす方法。

【療法】（レウハフ）前條に同じ。

【療病】（レウビヤウ）病をいやす。後漢書、王符傳「凡―レ者、必知二脈之虚實、氣之所レ結、然後爲二之方一、故病可レ愈、而壽可レ舒」

十三畫

【癟】 ソ 語 御

○うれへふさぐやまひ（發病）○あなを生ずるできもの、瘡瘢（ソウハン）の屬。○國 黒死病、鼠より傳染するによりてあて用ふ。

【癟憂】（ソユウ）うれへふさぐ。詩、小雅「―以痒」

【癜】 チン デン 感

癟（疒部十二畫）に同じ。

【癖】 ヘキ 陌 錫

○くせ、嗜好の一方に偏する病「書―」「詩―」「錢―」「潔―」「惡―」「聚兒―」晉書、杜預傳「臣有二左傳一―」○やまひ「病―」腹に塊（カタマリ）を生ずる病。○飲食の消化せざる病。

【癖痼】（ヘキコ）久しく治せざる病。李華文「無二―一疥搔之疾一」‖痼癖。

【癖性】（ヘキセイ）くせ。晉書「故事「性有二偏好一曰二―一」‖性癖。

【癖病】（ヘキビヤウ）わるきくせ。柳宗元文「好レ財工レ貨、皆―也、吾不幸早得二此二病一」

【癒】 ユ 眞

いゆ。‖癒。

【癒】 ヨウ 麌

癒（疒部十八畫）に同じ。

【癘】 レイ ライ 霽 泰

○惡しき瘡を生ずる疾、かったる、なり。‖癘瘧。○えやみ（疫）はやりやまひ（流行病）「疫―」史、曹相國世家「時病レ―」歸レ國」○ころす（殺）○はげむ‖勵。

【癘疫】（レイエキ）はやりやまひ。韓愈文「水旱―之不レ期、民之豐約懸二於州一」‖疫癘。

【癘疾】（レイシツ）えやみ。左、昭四「―不レ降」注「癘、惡氣也」‖疾疫・疾癘。

【癘病】（レイビヤウ）○えやみ、惡しき流行病。‖癘疫。○（レイビヤウかったる）。‖癘病。

十四畫

【癆】 セイ 蕾 霽

やむ（病）總、玉藻「親―色容不レ盛、此孝子之疲節也」

【癡】 チ 支 痴は俗字

○おろか（不慧）あはう、智慧にぶし「白―」「狂―」「愚―」晉書、王濛傳「濛有二隱德一、人皆以爲レ―」○愛變して捨てず「書―」佛典に貪・瞋・―を以て三惡業と爲す。

【癡獃】ガイ　おろかもの、獃は黠。范石湖集に「貧ニー一詞」を載す。
【癡漢】カン　おろかもの、漢は男。北史、齊文宣紀「李集頭諫不レ屈、帝笑曰、天下有二如レ此ー一」‖癡頑。
【癡頑】ワン　おろかにしてかたくな。五代史、馮道傳「鑑光當レ之曰、爾是何等老子、對曰、無才無德、ー一老子」
【對二癡人一說レ夢】コノンストック　愚人に對して夢を話す、馬鹿げたることの喩。（唐段成式、酉陽雜俎、唐李德裕作「禪、不レ曉二其言一、乃書レ傳曰、大師姓何、何國人、此正所謂――耳、僧實冢以レ傳、編二入僧史一、又從而解レ之、此又夢中說レ夢耳」朱子文集「子貢之明達、性與二天道一、猶子二與聞一、此正癡人前說レ夢過也」
【癡情】ジョウ　色情にうごかされ迷ふ心。
【癡笑】ショウ　笑ひて已まざること愚人の狀の如き義。盧全示二添丁一詩「父憐母惜猶不レ得、卻生ニー一令二人嗤一」
【癡態】タイ　ばかげたるやうす。
【不レ癡不レ壟不レ成二姑公一】ツンボ　嫁に對して愚人と聾啞との如くならざれば、好き姑と言はれず（宋實、與猶之傳）
【癡呆】ホウ　ばか、おろか。‖癡愚・癡獃。
【癡物】ブツ　おろかもの。五代史、盧程傳「猴侯相二此ー一、敢辱二予九卿一」

【癡聾瘖痙】ばかと、つんぼと、おしと。列子「――家資富、智慧聰明卻受レ貧」

十五畫

【癰】ヨウ　（疒部十八畫）に同じ「類ー」

【癤】セツ　セチ　風
○小さき瘍。「痤ー」○ねぶと、瘍より輕し。

【癥】チョウ　蟲
腹中のしこり（腹結病）史、扁鵲傳「以レ此視レ病、猶見二五藏一結一」

【癢】ヤウ　養
○かゆし。禮、內則「疾病苛ー、而敬抑搔之」‖痒。○俗ー（ヤウ）は佞倆ありて之を試みること能はず、心にむづがゆく思ふ義。

十六畫

【癨】クヮク　藥
ー亂（クヮク）は暑氣に中りて甚だしくはきくだしする病。‖霍亂。

【癧】レキ　蟹
瘰ー（ルイ）は惡しき腫物（疒部十一畫）を見よ。

十七畫

【癮】イン　吟　又瘾に作る
○時むこと甚だしくして病を成す「酒ー」「烟ー」○ー疹（イン）は小さきできもの。

【癭】エイ　梗
○くびのこぶ（類瘤）「ー腫」○轉じて木のふしこぶ。杜甫詩「長歌敲二柳ー一」

【癬】セン　銑
○たむし「頭ー」○ひぜん「疥ー」

十八畫

【癯】ク　虞
やせ（瘠）漢書、司馬相如傳「形容甚ー」‖臞。

【癰疽】ソ　やせつかれる。齊東野語「ー如レ不レ勝レ衣」
【癰瘠】セキ　やせ。唐書、李百藥傳「侍二父母喪一還レ鄉徒跣數千里、服闋レ除、容貌ー瘠累年」‖瘦瘠。
【癰劣】レツ　やせつかれる。唐書、張薦傳「皆ー不レ能レ殺」‖衰憊。

【癱】コウ　冬
○はれもの（腫）よう、あしきかさ（惡瘡）多くぼんのくぼ又は背に發する。‖癰。○地名、雍州の雍と通ず。
【吮レ癰】スヒ　惡しきできものの血を吸ふ。唐書、孝友傳「張士廉母病レ癰、士廉嘗吮レ血」
【癱疽】サ　○危險なるできもの。六いにして淺き者を癰と爲し、深きを疽と爲す。後漢書、律歷志「多病ニー一癰疽一」○また其の腫物を治する醫師。孟萬章「孔子於レ衛主ニー一」

十九畫

【癲】テン　先

〇くるふ、きちがひ「瘋ー」「ー狂」〇ー癇（カン）は一種の神經病、癇（疳部十二畫）を見よ。

廿三畫

【癰】レン　先

かがまる、ひきつる。〃攣。

癶部

【癶】ハツ　ハチ　曷

兩足を左右に張りたる象形文字、兩足張りて相撥除するなり。そむく（背）又、ゆく（行）

四畫

【癸】キ　紙

〇みづのと、十干の末位。爾雅「太歲在ー、曰ー昭陽」四時に配しては冬、方位にては北、五行にては水に配す。〇はかる（度）＝揆。〇人の姓。〇天ーは女の月經。素問「女子二七而天ー至」＝月事・月水。庚ーは軍中にて糧食を乞ふ隱語、庚は西方、穀を主る、ーは北方、水を主るが故。左、哀十三「若登首山以呼曰庚ー乎」

【癸水】キスヰ　婦人の月經。紺樓記「紅潮、謂二桃花ーー一也、又名二入月一」

七畫

【登】トウ　蒸

〇のぼる、あがる（上）「ー樓」「ー車」「ー高自卑」〇すすめる（進）たてまつる（上）禮、月令「農乃ー穀」〇のぼす、帳簿に書きのせる「ー記」「ー錄」「ー載」〇あぐ、あげ用ふ「ー用」〇くははる（加）左、昭三「皆ー」一馬」〇たっとぶ（尊）〇なる。なす（成）〇さだむ。さだまる（定）〇みのる（成熟）孟、滕文公「五穀不ー」〇あたる（當）郎時「一時」〇おほし（衆）〇たかし（高）〇ーは力を用ふる時のかけごゑ。

【登仙】トウセン　登・升、昇・陞・上・騰・踊・陟の別は升（十部二畫）の條を見よ。

【登瀛州】トウエイシウ　瀛洲は仙人の居る海中三神山の一、之に登るは榮譽とする義。唐實、褚亮傳「號二十八學士、歲二之番府、以資二講ー一賢之直一、天下美向、謂二之ーー一」

【登衍】トウエン　五穀などがさかんにみのる。後漢書、明帝紀「詔曰、昔歲五穀ーー、今玆宿麥善收、其大二赦天下一」

【登遐】トウカ　帝王の崩御。列、黃帝「帝登假」假・遐・皆通ず。

【登高】トウカウ　〇たかきにのぼる。中庸「ーレー必自レ卑」〇陰歷九月九日に高山に登りて災厄をはらふ故事（襍齋譜記）

【登記】トウキ　〇帳簿に記載する。刑錄勘覆「ーーー在レ册」〇權利及び身分に關する事項を登記所の帳簿に記載する法律上の手續。

【登極】トウキク　天子の位にのぼる、極は北極、衆星の向ふ所、故に喩ふ。良覿政要「自ーー以來、大事三數件」

【登花殿】トウクワデン　園後宮の一、古、弘徽殿の右方にある御殿。

【登賢】トウケン　賢才をあげ用ふる。後漢書、黃瓊傳「急ーレー之舉、虛二降レ己之記一」＝舉賢・擢賢。

【登艦】トウカン　敵艦を衷する爲め軍艦内の下士卒が甲板の上にあつまり或は網梯にのぼりて行ふ敬禮。

【登載】トウサイ　新聞雜誌などにかきのせる。＝登錄。

【登山】トウサン　山にのぼる。

【登時】トウジ　即時。文選、陸士衡、爲二杜預一登二當陽一侯表「臣以二庸才一、受二國重任一、不レ能二宣ー威、以寧二東夏一、使二賊虜一、得二以逃ー死、臣之罪也、宜二即ー時一、收二臣印綬一、免二臣官一、以謝二天下一」

【登庸】トウヨウ　よくみのる。梅堯臣詩「丹井養ーー」

【登稔】トウジン　よくみのる。梅堯臣詩「九穀初ーー、羣黎共樂康」

【登城】トウジヤウ　〇城の上にのぼる。曲禮「ーレー不レ指」〇國トウジヤウ貴、諸侯が江戸城へ出頭する義。

【登熟】トウジュク　登稔に同じ。蘇軾詩「其民殷衆、禾稼ーー、兵革既利」

【登踐】トウセン　のぼる。

【登涉】トウセフ　山にのぼり水をわたる。晉書、荀朗載記「談レ虛論レ玄、不レ知二日之將レ夕、ーニ一山水、不レ知二老之將レ至」

【登仙】トウセン　天に上りて仙人となる。蘇軾、赤壁賦「羽化而ーー」＝上僊・登僊。

【登踐】トウセン　のぼりふむ。王向詩「ーー窮二幽深一、下レ山日已晚」

【登廳】トウチヤウ　役所へ出る、出廳。

【登程】トウテイ　國かどで、旅行の發程。

【登朝】トウテウ　朝廷に出仕する。又、仕宦する。漢書、敍傳「弱冠ーー」

【登麾】トウキ　そなへすすめる。拾遺記「以二犧牲一、ーニ一千百騎一」

【登壇】トウダン　ゆづりを受けて帝位にのぼる。張衡賦「嘉二大舜之ーー一」。

【登祚】トウソ　天子の位に即く。南史、謝

墨遷傳「文祖―一」‖踐祚・登極。
【登第】トウダイ　試驗に及第する。唐書、選擧志「―一者加二一階一其不レ第、則習レ業如レ初」‖及第。
【登攬】トウラン　あげぬきんづ。宋史、文苑傳「不レ及二―一一」‖登拔。
【登壇】トウダン　○大將を拜するには壇を設けて任命す、よりて大將となる義とす。曲禮詩「不レ問―一萬戶侯」○剛直說者が演壇にのぼる。
【登跳】トウテウ　のぼりながめる。張九齡詩「暇日時―一、郊臨二故都一」
【登登】トウトウ　力を用ふる貌。又其の時のかけ聲。詩、大雅「築レ之―一」
【登徒子】トウトシ　宋玉に登徒子好色賦あり、よりて後世色を貪る者を――と謂ふ。
【登頓】トウトン　高きにのぼりて少しくやすむ、登臨して少しく頓息する。謝靈運詩「山行窮二―一一」
【登年】トウネン　年を歷ること多し。周語「若―一以戮二其毒一必亡」戮は行ふ。
【登拔】トウバツ　人をあげぬく。唐書、陳子昂傳「―一二才良一求二人撰一宣布上意一」‖登擢。
【登聞鼓】トウブンコ　朝廷に鼓を懸け設き、臣民の諫を進め、又は事を訴へんとする時、之を撃ちて通ぜしむるもの。無冤錄引謀錄「眞宗景德四年、詔改二鼓司一爲二―一院一」
【登簿】トウボ　帳簿へかきのせる。圖登簿

嘯敖トウガは逍遙省の帳簿に登錄したる船舶の噸數。
【登用】トウヨウ　人をあげもちふる。史、夏紀「舜―一、攝二行天子之政一」‖登庸・擧用。
【登庸】トウヨウ　あげもちふる、庸は用。書、堯典「疇咨若二時―一」疇は誰。
【登覽】トウラン　高き所にのぼりてながめる。晉書、江逌傳「養以二玄虛一守以二無爲一、―一不レ以二榮觀一遊豫不レ以二苑沼一」
【登臨】トウリン　高きにのぼりて下にのぞむ。孟浩然詩「江山留二勝賞一、我輩復―一」
【登龍門】トリュウモン　黃河の上流に龍門といふ所ありて、鯉これに登れば龍に化すといふ、よりて人の榮達するに喩ふ。後漢書、李膺傳「膺以二聲名一自高、士有下被二其容接一者上名爲二――一」
【登錄】トウロク　表幅にかきのせる。「―一殺」

【發】ハツ　ホチ　月　一畫　ホツ

○はなつ、矢を放つ。○おこる(起)立身する「―跡」孟、盡心「舜―一於畎畝之中」○ひらく(開)「花―」「―倉」○のぶ(舒)あがる(揚)禮、樂記「其聲―以散」○いづ。いだす(出)禮、月令「雷乃―聲」○すすむ(進)○ゆく(往)さる(去)○おこなふ(行)○あばく(擿)「―墓」○あきらかにす(明)「啓―」○義理をあらはし明かにする「―明」論、爲政「亦足レ以―」○あぐ(擧)おこす(興)○みだる(亂)ちらす(散)○つかはす(遣)戰國齊策「王何不レ―而擊レ之」○あらはる。あらはす(見)○うごく。うごかす(動)○もる(洩)○―は疾き貌。詩、小雅「飄風――」○魚の盛んにはねる貌。詩、衞風「鰷鱒――」

同訓異義　發・興・開・辟・啓・闡・拓・披・拆・折の別は開(門部四畫)の條を見よ。

【發案】ハツアン　考へ出す。又、其の考案。
【發憤】ハツフン　心をおこす。浮住子「卓然―一、忍レ苦受レ辱」‖奮心。
【發育】ハツイク　そだてる。中庸「洋洋乎―一萬物」
【發引】ハツイン　葬式のとき棺を墓地へ送り出す、引は柩車の前に取りつけて引くひも。
【發蘊】ハツウン　心に抱ける才學をのべあらはす。文中子「智哉太初、善發二其蘊一」
【發運使】ハツウンシ　宋代の官名、米穀を江淮地方より、京師へ運搬することを掌る。
【發輝】ハツキ　ひかりをあらはす。歐陽修、徐孺子墓銘「文章―一乎、星日光輝」‖發揮。
【發芽】ハツガ　めぐむ、めをふき出す。宋元詩「雷雨連旬發、潛藏重―一」
【發解】ハツカイ　州縣より京師に出でて試驗を受ける、州縣の試驗にて優等者ありし時、其の地方官廳より解(公文書を中央政府に發送して更に其の人を京師にて試驗する。壺齋錄「解、本文狀之名、唐時舉子赴レ京、本州給レ解、故謂二之拔解一―一」
【發行】ハツカウ　世に弘めだす。又書物を出版する。
【發向】ハツカウ　出向かふ、出發に同じ。舊唐書「麟德二年正月甲子、以レ―一太山一停レ還」
【發號】ハツガウ　號令を出だす。易經「―レ施レ令」
【發酵】ハツカウ　酒を釀すに酒母の泡が立つ義「齊民、穀志、注」
【發客】ハツカク　開寶り出す。
【發覺】ハツカク　あらはれてさとられる。史、高祖紀「事―一、夷三族一」
【發刊】ハツカン　印刷して世にひろめる。
【發汗】ハツカン　あせがでる。又あせをだす「―一劑」
【發軔】ハツジン　ふさがれるをひらき通ず

る。易、文言「六爻ー一、旁二通情一也」

【發輝】ハツ　ひかりをはなつ。潘岳文「散レ瑛ーレー」

【發狂】ハツキャウ　きがちがふ、氣がふれる。

【發掘】ハツクツ　あばきほる。漢書、師丹傳「ーニー傳太后・丁太后冢一更以レ民葬レ之」

【發火】ハツクワ　ひをはなつ。吳志、周瑜傳「諸船同時ーレー」

【發光體】ハツクワタイ　物理にて自ら光を發する物體。

【發見】ハツケン　新らしく見いだす。

【發言】ハツゲン　口を開きてことばをいだす。詩經、序「詩者志之所レ之、在レ心爲レ志、ーレー爲レ詩」

【發現】ハツゲン　〇あらはれてる。‖出現。〇あらはしだす。

【發源】ハツゲン　水の湧き出るもと。爾雅「四瀆者ー一レー注レ海者也」

【發語】ハツゴ　言ひだす、言ひはじめる。

【發作】ハツサ　おこる。韓愈、南海神廟碑「盱風怪雨、ー一無レ節」

【發端】ハツタン　としのはじめ。楚辭「開春ー一兮」

【發散】ハツサン　ふさがりし氣をもらしちらす。成公綏、嘯賦「乃吟詠而ー一」

【發身】ハツシン　身をおこす。大學「仁者以レ財ーレー」

【發信】ハツシン　手紙を出す。又電報をうつ、音信を發送する。

【發疹】ハツシン　皮膚に小さきふきでものが出る。

【發軫】ハツシン　車を出す、軫は車の横木。たびだちするにいふ。魏書、高祖紀「丙子詔、六軍ー一、丁丑皮服、執レ轡御レ馬而出」

【發軔】ハツジン　車を發する、軔は車の歯どめの木。屈原、離騷「朝ーニー於蒼梧一兮」‖發車。

【發車】ハツシャ　車を出す。玉篇「發二乘車一」‖開車。

【發射】ハツシャ　銃砲のたまなどをうちだす、射の正音はセキ。

【發祥】ハツシャウ　〇天命を受けて天子となる吉兆の見はれる義。詩、閟宮「纘二戎祖考一、王ー其ー之」〇天子の祖先の出でし地。東都賦「我朝先世ーニー於長白山一」

【發蹤指示】ハツシヨウシジ　發蹤は縦を解き放つ、指示は指し示す、犬の縄を解き放ちて獲物にけしかける。史、蕭相國世家「追殺レ獣者狗也、而ーー者人也」注書に蹤を縦に作る。

【發揚】ハツヤウ　火を點ずるに用ふるつけぎ。輟耕錄「杭人削二松木一爲二小片一、其薄如レ紙、鎔二硫黄一塗二木片頂一分許、名曰ーニー又曰二焠兒一」

【發生】ハツセイ　はえでる。杜甫詩「好雨知二時節一、當レ春乃ーー」

【發聲】ハツ　〇こゑをいだす。又、いだすこゑ。孟、告子「徴二於色一、發二於聲一而後喩」〇國歌會にて集まりし歌を讀み上げる役。

【發聲器】ハツセイキ　音聲を出すだく、聲帶口腔内の諸器官の總。

【發笑】ハツセウ　わらふ。文天祥詩「使二我ーー悲嬉開一」

【發夕】ハツセキ　宿舍を離れ出る、夕は宿。詩、齊風「叢道有レ滿、齊子ーー」

【發跡】ハツセキ　立身出世する、猶ほ興起といふが如し。司馬相如、封禪文「公劉ーニー于四皮一」

【發送】ハツソウ　〇使を出して見おくりす。史、蘇秦傳「諸侯各發レ使發レ之送レ之、擬二於王者一」〇品物をおくり出す。

【發兌】ハツダ　書物などを印刷して賣り出す。

【發遣】ハツケン　〇次第にのびて成長す。顏延之「曜逸應也、蓋取二語勾萌ーー、陽景敷レ暉、柔レ和萌レ渠、用遡二介祉一」〇學問事業などが次第に進む。

【發談】ハツダン　はなしだす。開天遺事「方二啓レ口ーー、香氣噴二于席上一」

【發條】ハツデウ　ぜんまい、ばね。

【發達】ハツタツ　諄をあばき出す。漢書、趙廣漢傳「其發レ姦摘レ伏如レ神」通「撥」に通に作る。

【發展】ハツテン　のびひろがる、さかえゆく。

【發電】ハツデン　〇電氣を發生する。〇電報をうつ。

【發途】ハツト　かどで、出立。‖發程。

【發動】ハツドウ　おこりうごく。莊、天運「人固有二尸居而龍見、雷聲而淵默、ー一如二天地一者乎」

【發難】ハツナン　兵亂をおこしはじめる。漢書、項籍傳「天下初ーレー」

【發熱】ハツネツ　ねつが出る、體溫がのぼる。東坡集「一夜ーー」

【發賣】ハツバイ　賣り出す、發賣禁止ハツバイは書籍新聞雜誌等の賣り出しを差止める。

【發凡】ハツボン　其の書の大意若くは要領。左傳、杜預序「ーー以言レ例」

【發病】ハツビヤウ　病氣をおこす。

【發布】ハツプ　天下にあまねくしく、世上にあまねく通知する「憲法ーー」

【發憤】ハツプン　いかる。劉向、九歎「悲二故鄉一而ーレー兮、去二余邦一之彌久」

【發憤】ハツプン　心をふるひおこす。論、述而「ーレー忘レ食」

【發兵】ハツペイ　軍士を發集する。周禮「以二銅虎符一ーレー」

【發表】ハツピヤウ　意見などを世間に公然と言ひあらはす。

【發明】ハツメイ　〇ひらきあきらかにす。宋玉、風賦「ーニー耳目一、寧レ體便レ人」〇新に物事を考へ出す。

【發蒙】ハツモウ　蒙（草部十畫）の條の發蒙振レ落ハツモウシンラクを見よ。

【發曚】ハツモウ　うすくらき目がひらけて見ゆる義。長楊賦「今日ーー、曚然已昭矣」

【發揚】ハツヤウ　勢よくおこりあがる。羅隱詩「乘レ時怨ーー」

【發令】ハツレイ　法令を出だす。‖發號。

【發蹤】ハツ　天子の御出立、蹤はみてぐるま。

【發起】キツ　〇くはだてる。〇思ひ立つ。‖發心。

【發句】ク　圖〇連歌の上句即ち五七五の三句。〇五七五の三句のみにてまとまりし意味をあらはす短き歌。‖俳諧・俳句。

【發願】グワン　佛發心のねがひ（法華經）

【發心】シン　〇思ひ立つ。漢書、宣元六王傳「一一懈墮」〇佛菩提心シンをおこして佛法に歸依する（楞嚴經）‖發起。

【發足】ソク　出發に同じ。

【發端】タン　〇はじむ。はじまり。宋史、文彦博傳「一一爲ル難」〇律詩の第一・第二の兩句。

【發菩提心】ボダイシン　圖大慈悲心をおこす。眞道欣求の心、即ち自利・利他の大行を修せんとの志を發起する義（觀經疏）

白部

【白】ハク　ビャク　陌

〇しろ、五色の一、西方の色。〇しろし。〇しろくなる、しらむ、夜があける。蘇軾、赤壁賦「不ル知東方之既ル白」〇いさぎよし（潔）「潔ル白」「清ル白」〇あきらか（明）「明ル白」荀、王霸「仁人之所務ル白也」あかるい。莊、人間生「虚室生ル白」〇まうす（申）「敬ル白」「述ル白」〇さかづき（杯爵）「太ル白」漢書、儒林傳「引滿舉ル白」すみざけ（清酒）〇しろがね（銀）「黄ル白」〇何物もなき義、文飾なきもの、訓練を經ざるものなど「一兵」〇一屋は茅にて屋を覆ふ義。轉じて貧家をいふ。

【白堊】アク　〇しらつち。宋史、高昌國傳「屋室覆以ニ一一」〇炭酸石灰の種。

【白衣】イ　〇無位無官の人、未だ仕官せざる人は一一を著るが故。史、儒林傳「公孫弘以ニ春秋一一爲ニ天子三公」〇役所の小使。漢書、龔勝傳「聞ニ之一一、減ル君奠ル官」〇しろきころも、びゃくえ。禮、月令「孟秋之月、天子衣ニ一一、服ニ白玉ニ」‖素衣。

【白衣送ル酒】ハクイソウシュ　陶淵明九月九日に酒なかりし時、江州の刺史王弘の使者が白衣を著て酒を送り來りし故事。續晉陽秋「陶潛九日無ル酒、出ニ籬邊ニ坐ル久之、見ニ白衣人至ニ乃王弘遣ル送ル酒使也」

【白衣使者】シシャ　酒を贈り來る使。前條を見よ。

【白雨】ウ　〇にはかあめ、ゆふだち。蘇軾詩「一一跳ル珠亂入ル船」‖驟雨。〇雹をいふ（清異錄）

【白羽】ウ　白き鳥の羽うちは。語林「諸葛武侯以ニ一一一揮ニ三軍ニ」

【白玉】ギョク　しらくも。莊、天地「乘ニ彼一一ニ」至ニ於帝鄉ニ」

【白雲鄉】ハクウンキョウ　天帝の居所。蘇軾、潮州韓文公廟碑「公昔騎ル龍ニ一、手挾ニ雲漢ニ分ニ天章ニ」

【白氣】キ　しろきかさ、暈は日月の周圍をとりまける雲氣（晉書、天文志）

【白鉛】エン　圖亞鉛

【擧ル白】キョハク　酒杯を擧げて飲む。珊瑚詩話「飲酒痛噴、謂ニ之一一ニ」

【白屋】オク　白茅にてふきたる家。貧家の人とす。韓詩外傳「窮巷一一之士、周公所ニ先見一者四十九人」

【白鮫】コウ　しろく小さきてを。漢書、元帝紀「百ニ一一、蔡飛蔽ル日」

【白汗】カン　しろき玉の如きあせ。淮南子「挈ニ一石之重ニ則一一交流」

【白雁】ガン　しろきがん。晉書、儒志「用ニ一一自準各一頭ニ」

【白眼】ガン　にらむ。晉書、阮籍傳「不ル拘ニ禮教ニ能爲ニ青一一、見ニ禮俗之士ニ以ニ一一ル對ル之」

【白鷴】カン　鳥の名、山雞に似て色白し。行止閑暇、李昉稱して閑客と爲す。李白詩「謂ニ以ニ雙白鷴ニ贈ニ君雙一一ニ」鷴一に鷳に作る。

【白氣】キ　しろき氣體。漢書、谷永傳「一一起ニ東方ニ賢人將ル興之表也」

【白旄】ボウ　〇しらはた。淮南、時則「孟秋之月、天子服ニ白玉ニ乘ニ一一ニ」‖白幟。〇降參する時にたてるはた。〇圖書、源氏の用ひたる白はた。

【白金】キン　〇しろがね、銀。說文「銀一一也」爾雅「一一曰ニ之銀ニ其美者曰ニ之錄ニ」〇ぶらちな、灰白色の貴金屬、熱に遇ふも容易にとけず。

【白銀】ギン　しろがね、ぎん。史、秦始皇紀、注「黄金一一、爲ニ宮闕ニ」

【白銀盤裡一青螺】ハクギンバンリイッセイラ　白銀のたらひの如き湖水の上に青き島の浮べる形容。劉禹錫詩「遙望洞庭山色翠、一一」

【白宮】ハク　アメリカ大統領の官舍、ワシントン府にあり。

【白薬】ヤク　しろき蓮の花。白居易詩「水花披ニ一一ニ」

【白魚】ギョ　〇蠶ビの一名、衣服・書物等に生ずる蟲。〇圖ニ一二寸許の小魚。‖鱗魚。

【白魚入ル舟】ハクギョニュウシュウ　周の武王が殷の討王を伐たんとせし時、白色の魚が其の舟に躍りこむ、殷の色は白なるが故に、やがて殷が降服する前兆となりし故事。轉じて敵の我に歸服する意に用ふ。史、周紀、武王渡ル河、中流白魚躍入ニ王舟中、武王俯取以祭」

【白居易】キョイ　白樂天を見よ。

【白玉盤】ハクギョクバン　月の異名。李白詩「小

時不レ識レ月、呼作二一一一」

【白玉之微瑕】ハクギョクノビカ　白璧微瑕に同じ。貞観政要「君子小過、瑜二一一、小人小善、乃鉛刀之一割」史、鄒陽傳「黄金有レ痕、白玉有レ瑕」

【白玉樓中之人】ハクギョクロウチュウノヒト　文人の死するにいふ。唐言故事「唐李賀將レ死、有二緋衣一嬰二赤虬一召レ賀、緋衣曰、帝成二白玉樓一、立召爲レ記、天上差樂、不レ苦也」

【白駒過レ隙】ハククノカゲキ　歳月の過ぎ易きに喩ふ。次條參看。

【若二白駒之過一隙】ハククノゴトクニカゲキ　白き駒が隙のすきまを馳せ過ぐる如しの意。歳月の速やかに過ぐるに喩ふ。荘、知北遊「人生天地之間、——、忽然而已」隙一に郤に作る。

【白扈楽】ハクイ　野草の一種、くさのわう。

【白果】ハクカ　銀杏の實。

【白圭】ハクケイ　白く清らかなる玉。詩、大雅「一一之玷、尚可レ磨也、斯言之玷、不レ可レ爲也」白きたまの玷けたるはなほ磨きて治むるを得れども、言語のしくじりは改められず。轉じて言語を愼むべき義とす。論、先進「南容三復二一一」

【白圭之喩】ハクケイノタトエ　圭は水を受くる器、白圭は洪水を治むるに、堤を築き隄岡に注ぎたる故事。孟、告子「禹以二四海一爲レ壑、今吾子以二隣國一爲レ壑」柳宗元、興州江運記「——、孟子不レ與」

【白血球】ハクケッキュウ　無色の血球、血液また淋巴液の中に存ず。赤血球の對。

【白虹貫レ日】ハクコウカンジツ　白色のにじが日を貫くは兵亂の兆とす。戰國策「義政之剿二韓傀一也、——」

【白黒】ハクコク　○白と、くろと。○善きものと惡しきものとに喩ふ。漢書、劉向傳「賢不肖渾殽、——不レ分、邪正雜糅」‖黒白。

【白骨】ハッコツ　しろきほね。呉詰「堅起二死人一而肉二一一一也」‖枯骨。

【白皚】ハクガイ　しろざけ。本草「酒經名、紅曰レ醥、綠曰レ醽、白曰レ醝」宋書、孝武帝紀「醽醥凋二秋菜一、——解二冬寒一」

【白蔵】ハクゾウ　秋の異名、氣白くして收め藏する義。爾雅「秋爲二青陽一、夏爲二朱明一、秋爲二一一一、冬爲二元英一」

【白山黒水】ハクサンコクスイ　長白山と黒龍江と、金史、世宗紀「生女直境、有二混同江・長白山一、混同江、亦號二黒龍江一所謂——是也」

【白士】ハクシ　寒士に同じ。晉書、羊祜傳「以二一一一一而居二重位一」

【白芷】ビャクシ　よろひぐさ。楚辭「糅二申椒與一菌桂一兮、——一生」‖澤芳。

【白桵】ハクシ　しらはた。通鑑、後唐紀「王仁達爲二一一一」

【白髭】ハクシ　しろきうはひげ。元好問詩「清鏡平明見二一一一」

【白洲】ハクシュウ　○しろき沙にてなれるす。蘇軾詩「執云風土惡、一一生二綠珠一」○圓ス法歷。

【白日】ハクジツ　○てりかがやく太陽で孔融詩「讒邪害二公正一、浮雲翳二一一一」○まひるの林篤詩「一一莫二空過一、青春不再來一」○くもり無き日。嫌疑のはれたるに喩ふ「青天一一」

【白人】ハクジン　白色人種に同じ。‖白種。

【白刃】ハクジン　しらは、ぬきみ。中庸「一一可レ蹈也」‖利刃。

【冒二白刃一】オカスハクジンヲ　敵中にをどり入るをいふ。漢書、李陵傳「士張二空弩一、——、北首爭死レ敵」

【白狀】ハクジョウ　自ら罪狀を告げて出る。漢書、丙吉傳「見レ吉一一」

【白首】ハクシュ　○しらがあたま。史、范雎・蔡澤傳贊「游二說諸侯王一、一一無レ所レ遇者」‖白頭。○圓ス淫賣婦の異稱。

【白酒】ハクシュ　しろざけ。禮記「酒清白」酒に清酒と白酒とあるをいふ。梁武帝詩「玉盤奢二朱李一、金杯盤二一一一」

【白書院】シラショイン　圓德川時代の江戸城中の間の名、大廣間の北、帝鑑の間の西に在り。

【白色人種】ハクショクジンシュ　皮膚の色の白き人種、歐羅巴人をいふ。‖白人・白皙人種。

【白水眞人】ハクスイシンジン　錢の異名。漢書、王莽以三錢文有二金刀一、故改爲二貨泉一、或以二貨泉字一爲二一一一一」白水は泉、眞人は貨。

【白石】ハクセキ　しろきいし。詩、唐風「揭之一一、——鑿鑿」鑿鑿は鮮明の貌。

【白皙】ハクセキ　皮膚の色のしろき義。左、昭二六「有二君子一一一」‖黒髭眉」

【白雪】ハクセツ　しらゆき。孟、告子「一一之白、猶二白玉之白一與」

【白戰】ハクセン　○徒手にて戰ふ。○詩人が才を鬪はす爲めに、其の題に縁ある語（雪の詩ならば、玉・銀・月・鹽・梁・鷺・鵝などの語）を用ひざるをいふ。歐陽修・蘇軾等好みて之を爲す。

【白扇倒懸東海天】ハクセンサカサニカカルトウカイノテン　富士山の形を扇子が倒さまにかけてあるに譬へたる句（扇はうちはなれば、支那人には通せず）石川丈山詩「仙客來遊雲外巓、神龍惜老洞中淵、雪如二紈素一飄如レ練、——」

【白打】ハクダ　○蹴鞠數の名。王建詩「寒食內人長一一、廊中先散與二金錢一」○徒手にて相搏つ。圓小記「武藝十八、終以二一一一一、以二一一一終、明二乎其不レ持二寸鐵一也」

【白帶魚】ハクタイギョ　臺灣にて太刀魚の稱。

【白地】ハクチ　○あからさま、地は助字。‖白白地。○なんとなしに、わけもなく、故なく。李白詩「相看月未レ堪、一一斷二肝腸一」○しろぢ。世說「如二一一明光錦一」‖白質。

【白痴】ハクチ　次條に同じ、痴は癡の俗字。

【白堊】ハク　甚だしさばかの左、成十八、注「不慧、蓋世所ㇾ謂ㇾ一」
【白甜】ハクテン　ひなか。漢書、賈誼傳「一一大都之中」‖白日・蓋日。
【白紵】ハクチョ　夏著る布の細くして潔白なるもの　古樂府に一一歌あり。
【白著】ハクチョ　○いちにるし。漢書、馮奉世傳「成功一一、爲二世使表一」‖著明。○ハクチョ定りたる稅の外に續取する。唐書「稅外續取、謂之一一」
【白丁】ハクテイ　○無位無官の平民。北史、李庶傳「敏何官、對曰一一耳」○圓白布の狩衣を著けたる人夫。
【白帝】ハクテイ　五帝の一。周禮、疏「西方一一」
【白帝城】ハクテイジョウ　城の名、今の四川省夔州府に在り。元和郡國志「公孫述至二魚復一有二白龍一出二井中一因號二魚復一爲二一一一」
【白鳥】ハクテウ　○しろきとり。鶴・鷺の類。詩、大雅「一一鶴鶴」○蚊蚋の異名（夏小正、傳）○蚊の異名。杜甫「江湖多二一一一」○圓說ハクテウ
【白鏹】ハクサウ　しろきてん。五代史附錄「臨訣脫二一一一表一以表二高雅一」
【白鐵】ハクテツ　俗錫ス
【白顚】ハクテン　馬の額に白毛あるもの。詩、秦風「有ㇾ車鄰鄰、有ㇾ馬一一」
【白田】ハクデン　はたけ、畠（國字）はこの二字を合せたるなり。晉書、傳玄傳「一一數至二十餘頃一」
【白徒】ハクト　訓練なき兵卒。管子、七法注「以二敎卒練士一擊二敵衆一一」
【白銅】ハクドウ　○銀色の金屬、ニッケル。○圓五錢の白銅貨の略。
【白頭翁】ハクトウオウ　○頭髮の白きおきな。劉廷芝詩「寄ㇾ言全盛紅顏子、應ㇾ憐半死一一」○ひよどりの異名。‖白頭鳥。○おきなぐさ、野草の一、春初花開く。李白詩「如何青草裏、亦有二一一一」
【白頭如ㇾ新】ハクトウジョシン　白頭に至るまで、交れども互に心を知り合はざれば、新知と同じ。史、鄒陽傳「一一、傾蓋如ㇾ故」
【白頭鳥】ハクトウテウ　鵯ヒヨの異名。
【白熱】ハクネツ　白色の光を放つほどに、非常に熱せられる一一燈
【白波】ハクハ　ぬすびと。後漢書、宗帝紀「中平元年張角反、皇甫嵩討ㇾ之、角餘賊在二西河一一谷一時俗號二一一賊一」
【白梅】ハクバイ　○しろき花のうめ。○青梅の實を鹽につけ日にさらしたるもの。本草「青者鹽淹、曝乾爲二一一一」
【白煤】ハクバイ　無煙炭の‖圓無煙煤。
【白白】ハクハク　あきらかなる貌「明明一一」
【白白地】ハクハクチ　あきらか、あからさま。明白、又顯明の義、地は助辭、語錄又小說等に用ふる俗語。
【白馬寺】ハクバジ　支那最初の寺、後漢の明帝の時、蔡愔、大月氏の攝摩騰・竺法蘭の二僧を伴ひて歸り、洛陽に此寺を建つ。
【白髮三千丈】ハクハツサンゼンジョウ　白髮の長きをいふ。李白、秋浦歌「一一、緣ㇾ愁似ㇾ箇長、不ㇾ知明鏡裏、何處得二秋霜一」
【白眉】ビャクビ　衆中にてひとりすぐれたる義。蜀志、馬良傳「馬良字季常、宜城人、兄弟五人、竝有二才名一鄉里爲ㇾ之諺曰、馬氏五常、一一最良、良眉中有二白毛一、故以稱ㇾ之」五常とは兄弟五人皆字に常の字あるに由る。
【白眞】ビャクシン　しろきかざりの馬、貴卦「一一无ㇾ咎、上得ㇾ志也」
【白躑紅】ハクテキコウ　白き花の咲く浮き草と赤き花のさく躑躅と。
【白傳】ハクデン　白樂天の稱、太子少傅たりしに由る「唐書、白居易傳」蘇軾詩「一一閑游笑酒ㇾ句、拾遺授老敎論ㇾ親」拾遺は杜甫。
【白脫角】ハクトツカク　蹇脚にて蹌ハの稱。
【白文】ハクブン　圓漢文に句讀訓點を施さざるもの、無點。
【白粉】ハクフン　おしろい。‖鉛華・鉛白。
【白兵戰】ハクヘイセン　敵味方が互に白刃を揮ひて接戰する。
【白豹】ハクヒョウ　しろきへう。詩經、疏「毛白而文黑、謂之一一」
【白描】ハクビョウ　すみ丸、采色せず、故に白といふ。圖繪寶鑑「趙孟堅字子固、善二水墨一一一」
【白璧】ハクヘキ　しろき色のたま。史、虞卿傳「賜二黃金百鎰、一一一雙一」
【白皚皚】ハクガイガイ　白きたまに少しのきず。大體美にして僅かの缺點あるに喩ふ。昭明太子、陶淵明集序「一一、惟在二閑情一賦一」
【白麻】ハクマ　詔書、唐の中書、黃白二麻を用ひて、綸命を爲る、其の後、翰林學士白麻を掌り中書獨り黃麻を用ふることを得（翰林志）
【白米】ハクマイ　しらげたるこめ。宋書、孝義傳「月俸得二一一一」
【白面書生】ハクメンショセイ　年わかくして事になれざるもの。南史、沈慶之傳「今陛下欲ㇾ伐ㇾ國、而與二一一一謀ㇾ之、事何由濟」
【白楊】ハクヤウ　はこやなぎ、葉は圓形鋸齒あり春初かはやなぎに似たる花を開く。古今注「一一葉圓青楊葉長」
【白羊宮】ハクヤウキュウ　天文にて、十二宮の一。
【白楡】ハクユ　○にれ。晉詩「三月無青草、千家盡一一」○ほしの名。古樂府「天上何所ㇾ有、歷歷種二一一一」
【白樂天】ハクラクテン　晩唐の詩人、名は居易、字は樂天、吾山と號す、太原の人、貞元中進士に擧げられ、會昌の初、刑部尚書を以て致仕し、同六年、七十五歳にて卒す、其の著白氏長慶集七十五卷あり。
【白龍魚服】ハクリョウギョフク　貴人の微行にいふ。說苑、正諫「吳王欲二從ㇾ民飲一伍子胥諫曰、不可、昔白龍下二清冷之

澗ニ化為レ魚、漁者豫且射中ニ其目、白龍上訴ニ天帝ニ、天帝曰、當ニ是時ニ、若安置ニ何形ニ、白龍對曰、我下ニ清冷之淵ニ、化為レ魚、天帝曰、魚固人所レ射也、若レ是豫且何罪、夫白龍天帝貴者也、豫且宋國賤臣也、白龍不レ化、豫且不レ射、今棄ニ萬乘之位ニ、而從ニ布衣之士ニ飲酒、臣恐其有ニ豫且之患ニ矣、王乃止」

【白鷺】ハクロ　○しらつゆ。詩、豳風「蒹葭蒼蒼、――為レ霜」○二十四氣の一、處暑の次に來る氣節、九月八日頃。

【白鹿洞】ハクロクドウ　南唐の時の學館、朱熹再興す、江西省南康府廬山の五老峰下に在り【玉海】

【白毫】ビャクガウ　佛のひたひにありて光を發し無量の國土を照すといふ毛。法華經「世尊於ニ靈山會上ニ、為ニ諸大衆ニ說ニ二十八品ニ、放ニ眉間ニ――一相ニ、光照ニ三千大千世界ニ」

【白虎】ビャクコ　○四神の一、西方を守る神。○ビャクコ　豆腐の異名。趙宧光「養生雜言」「豆腐青黎白有ニ菊香ニ處ニ、――青龍一口吞レ青龍は青菜。

【白虎隊】ビャクコタイ　國明治元年、會津城にたてこもりて官軍を拒ぎ、敗れて飯盛山にて自殺せし少年決死隊。

【白散】ビャクサン　蜀椒を藥に包まず、其のまま酒にひたして用ふるもの。

【白檀】ビャクダン　熱地に生ずる香木の一、香料・藥材とす。

【白朮】ビャクジュツ　藥草の名、をけら。

【白蓮教】ビャクレンキョウ　元の韓山童が設けたる祕密結社の宗教團體、清代にも數回蜂起して反を謀れり。

【白蓮社】ビャクレンシャ　謝靈運・慧遠法師等の結社の名。蓮社高賢傳「謝靈運一見ニ遠公ニ、肅然心伏、乃卽レ寺築ニ臺、繕ニ涅槃經ニ、鑿ニ地植ニ白蓮ニ、時遠公聽賢同修ニ淨土之業ニ、因號ニ――ニ」

【白拍子】ビャウシ　國昔遊女の舞ひたる舞の名。又其の舞妓、又遊女。

【白無垢】シロムク　國全部白色の衣服。

【白馬節會】アヲウマノセチヱ　國昔正月七日に、左右馬寮より白馬二十一頭を出して天皇の御覽に供へたる儀式、なぬかのせちゑ。

一　畫

【百】㊀ハク・ヒャク　㊁バク

㊀もも、を、ひゃく、十の十倍。○もたび。○おほし（衆多）「一姓」「一官」「一穀」㊁はけむ（鬱）左、傳二八「距躍三ー、曲踊三ー」

【百憂】ヒャクイウ　いろいろのしんぱい。歐陽修賦「ー――感ニ其心ニ、萬事勞ニ其形ニ」‖百愁。

【百不レ失ー】ヒャクフシツ　決して目的とする所を失はず。論衡「從ニ門庭ー聽ニ堂室之言ニ、什而失レ九、如ニ登レ堂閱レ室、――」

【百金之士】ヒャクキンノシ　能く軍功をたてて、百金の賞を受くる士。史記「――五萬人、殺者十萬人」

【百鬼夜行】ヒャクキヤカウ　惡人の時を得て跋扈するに喩ふ。

【百科】ヒャククワ　各種の學科「ー――全書」

【百貨】ヒャククワ　あらゆる貨物、各種の商品。

【百梅】ヒャクバイ　百たびも後悔する。淸異錄「國士劉乙、曾乘レ醉與ニ人爭ニ妓女ニ、既醒、慙悔、集ニ淸紙ー、凡ニ四十酒ー失レ實レ約者ー、輒以自責、題ニ曰ニ――經ニ」

【百花生日】ヒャククワノタンジツ　陰曆二月十二日【陶朱公書】

【百花潭】ヒャククワタン　地名。輿宇記「杜甫宅在ニ成都西郭外ー地屬ニ浣浦ー、接ニ浣花溪ー、地名ニ――」杜甫詩「萬里橋西一草堂、――水卽滄浪」

【百花魁】ヒャククワクワイ　梅花をいふ。王賢、梅花詩「識來ニ嶺和羹事ー、且向ニ百花頭上ー開」

【百花王】ヒャククワワウ　牡丹の異名。北山集「卻嘉賤人稱ニ第一ー、至レ今喚作ニ――ー」皮日休詩「落盡殘紅始吐レ芳、佳名喚作ニ――ー」‖花王。

【百官】ヒャククワン　おほくのやく。書、周官「總ニ――ー」‖四海ニ‖百僚。

【百計】ヒャクケイ　おほくのはかりごと。張騫時「白髮如今欲レ搔レ頭、從來――盡廢レ休」

【百五】ヒャクゴ　冬至の後一百五日、卽ち

寒食の節をいふ。荊楚歲時記「冬至後、一百五日、名二寒食一」

【百工】ヒャクコウ ○もろもろのつかさ。書經「允釐二百工一」○もろもろの工人。論、子張「百工居レ肆、以成二其事一」

【百工五種】ヒャクコウゴシュ いろいろの職工と、五穀の種子と。歐陽修、日本刀歌「——與レ之居、至レ今善玩當精巧」

【百口】ヒャッコウ 百人の義にてすべて一家の眷族をいふ。晉書、周顗傳「詣二宰輔一請レ罪、僅顗將レ入、導呼曰、伯仁以二一一一累レ卿、誠直入不レ顧」□企家。

【百孔千瘡】ヒャクコウセンソウ 聖人の道の其だしくかけたるにいふ。陸龜蒙、與二孟倚書一書、漢氏以來、章句區區、終二補——一隨亂隨失」

【百穀】ヒャクコク おほくの穀物。一解に、粱・稻・蔬・菜・果各二十種を合せ稱すと。易經、「日月麗二乎天一一草木麗二乎土一」

【百谷王】ヒャクコクオウ 海をいふ、海は百川の集る所、猶ほ萬民の天子に從ふが如し。老子「江海所二以能爲一一者、以二其善下一之、故能爲二——一」

【百愧】ヒャクコン くさぐさのうらみ。梁元帝詩「殺妾慈心——生」

【百濟】ヒャクサイ 國名、くだら、三韓の一、扶餘溫祚の建つる所、東晉の初に當りて馬韓の地を有す、唐の高宗、新羅を援けて之を討ち亡ぼす。

【百識之後】ヒャクシキノゴ ○人の死後をいふ。詩、唐風「冬之夜、夏之日、——、歸子其室」室は墳ナリ○百識は尊易に逆し難き餘、故に人の死を諱みていふ。史、高祖紀「陛下——、蕭相國即死、令二誰代一之」

【百草】ヒャクソウ もろもろのくさ。典、歷書「冰泮發レ蟄、——奮興」□藥草。

【嘗二百草一】アヘンヒャクソウ 古、神農氏が百草を嘗ちて醫藥を創めたる故事。搜神記「神農以二赭鞭一——、遍知二其平毒寒溫之性、臭味所レ主、以療二百設一、故天下號二神農一也」

【百氏】ヒャクシ 多くの學者。漢書、敘傳「綴二六經一通二道術一、總二——一、皆二高章一」□諸子百家。

【百司】ヒャクシ 百官に同じ。書、立政「——庶府」

【百獸率舞】ヒャクジュウソツブ 音曲の妙なるに、多くの獸をでが感動して舞ふ。書、益稷「於予擊レ石拊レ石、——」

【百日紅】ヒャクジツコウ さるすべり、花樹の一、樹皮滑くなめらかにしてよくすべる、夏月紫紅色の小花さく。□紫薇。

【百閒君子】ヒャクカンクンシ 多くの在位者、閒は無意味の助字、百閒は凡百の義。詩、邶風「——、不レ知二德行一」

【百神】ヒャクシン おほくのかみ。詩、周頌「懷二柔一一一、及二河喬嶽一」

【百舍重繭】ヒャクシャチョウケン 三十里（一里は我が六町位）を一舍とす、三千里を急行して足掛つきただれてまゆの如し、萬難を忍びて遠路を往く形容、一說に繭は趼と普通、足にたこの出來る義（戰國宋策）

【百辟】ヒャクヘキ おほくのさいはひ。書、伊訓「作レ善降二之一一」

【百辭】ヒャクシ もろもろのもとめ。宋史、高定子傳「公家一一」

【百出】ヒャクシュツ 種種樣樣にあらはれ出る。唐書、藝文志「其變蓋一一不レ可二究極一」

【百乘之家】ヒャクジョウノイヘ 周代戰に用ふる百輛の車を出だす家、卽ち卿大夫。大學「——、不レ畜二聚斂之臣一」

【百姓】ヒャクセイ ○多くのたみくさ、人民。詩、小雅「羣黎一一、徧爲二爾德一」○百官。書、堯典「九族既睦、平二章一一」○圖ヒャクセイ農民。

【平二章百姓一】ヘイヒャクセイ 百姓を平かに明かに治める、平章は平和章明。書、堯典「——、百姓昭明」

【百世之師】ヒャクセイノシ 百代の後までも人の師と仰がれる人。孟、盡心「聖人、——也」

【百世之利】ヒャクセイノリ 永久の利益。史、張儀傳「皆爲二一時之說一、不レ顧二——一也」

【百尺竿頭進二一步一】ヒャクシャクカントウイッポヲススム すでに工夫をこらしたる上に、更に工夫を加へて向上する喩。傳燈錄「招賢大師示二偈一曰、百丈竿頭不レ動人、雖二然得入一未レ爲レ眞、百丈竿頭須レ進レ步、十方世界是全身」景德錄に、百丈を百尺に作る。

【百尺樓】ヒャクシャクロウ 高き樓閣（魏志、陳登傳）杜牧詩「春寒——」

【百舌】ヒャクゼツ もず。杜甫詩「泉聲滿林一一鳴、黃泥野岸天雞舞」□伯勞。

【百舌之聲】ヒャクゼツノコエ もずの鳴くこと。淮南、說山「人有二多百者一、猶二——、人有二少百者一、猶二不開之戶一一、不開之戶は容易に開かざる喩。

【百揆】ヒャクキ 百事皆擧げ勞する職、冢宰之文「欽レ哉二一官一、彌咨二一一一」

【百折不撓】ヒャクセツフトウ いくたび挫けても志を屈せず。蔡邕、橋太尉碑「百丁——臨二大節一而不レ可レ奪之風」□百折不屈。

【百川學レ海而至二于海一】ヒャクセンウミヲマナンデウミニイタル 天下の川は皆海を學びて日夜流れて遂に海に注ぐ。人も修養を積みて止まざれば、遂に君子聖人の地位にも進み得られる喩。法言、學行「——、丘陵學レ山而不レ至二于山一、是故遲二夫進一也」

【百全計】ヒャクゼンケイ 極めて完全なるはかりごと。南史、齊東昏侯紀「范雲謂二光儀一曰、君是天子愛人、當レ思二——一」□萬全計。

【百戰百勝】ヒャクセンヒャクショウ 百たび戰ひてたび勝つ。孫子、謀攻「——、非二善之善者一也、不レ戰而屈二人之兵一、善之善者也」

【百足】ヒヤクソク むかで、人を螫す、蜈蚣の一、頭胴部黄褐色、背部暗緑色、二十對の脚あり。埤雅「蜈蚣、一名蚿、一名商羊、今俗謂二之一一一」＝蜈蚣。

【百足之蟲至レ死不レ僵】ヒヤクソクノムシハシニイタルトモタフレズ　助け多き者は容易に滅びざるに喩ふ。晉語、六代論「語曰、――、扶レ之者衆也」

【百代】ヒヤクダイ　極めて多くの世代。晉書、阮籍傳「辭旨二無窮一、而典亜二一一一」＝百世。

【百代橋】ヒヤクダイバシ　百世を經るも毀れざる堅き橋。孟子「使二軍人護二郷商之地一、立二――一橋」

【百端】ヒヤクタン　いろいろのいとぐち。史、魯仲連傳「博開二燕能之路一、悉延二一一之學一」

【百雉】ヒヤクチ　城の大いさにいふ、一雉は長さ三丈、高さ一丈の城の牆。左、隱元、「都城過二一一一、國之害也」

【百丈】ヒヤクジョウ　ひき船の綱（南史、朱超石傳）

【百囀】ヒヤクテン　さかんにさへづる。賈至詩「千條弱柳垂清瑣、一一流鶯啼二建章一」

【百度】ヒヤクド　〇もろもろの法度ゝ晉書、百官志「高祖践レ極、一一伊始」〇もろもろたび。＝百回。

【百度更張】ヒヤクドカウチヤウ　もろもろの制度文物をあらためはる。＝維新。

【百二險】ヒヤクエキケン　天然の地勢の險阻にして要害なる義、即ち他國に百倍するだけの要害、二は倍。史、高祖紀「婁形勝之國帶二河山之險一、懸隔千里、持戟百萬、婁得二百二焉」

【百人一首】ヒヤクニンイツシユ　國小倉百人一首の略、藤原定家撰、天智天皇以下百人の歌各一首を採る、古來骨牌として盛んに行はる。

【百年三萬六千日】ヒヤクネンサンマンロクセンニチ　百年の總日數。杜牧詩「一一、與レ子期二於局上消一」

【百拜】ヒヤクハイ　幾回となく拜する。禮、樂記「先王因二酒禮一、一獻之禮賓主一一、終日飲レ酒、而不レ得レ醉焉」

【百敗】ヒヤクハイ　幾度もまける。又、幾度となくしくじる。＝千敗。

【百方】ヒヤクホウ　〇いろいろのてだて。書苑「一一譬說、不レ能レ得」〇諸方面の國國。道德指歸論「一一仰レ朝」

【百芳】ヒヤクホウ　おほくのにほひよき花。埤雅「蜂採二取一一、釀レ蜜」＝衆芳。百花。

【百八鐘聲】ヒヤクハツシヨウ　〇除夜に鳴らす鐘の聲。孤篠漫錄「聚二百八槌一、以應二十二月二十四氣七十二候一」〇＝もと梵鐘を朝晡に百八づつ打ちしもの、人間の百八煩惱をさますために、人間の百八煩惱をさますために、人間の過去現在未來にわたる種種のまよひ。

【百發百中】ヒヤクハツヒヤクチユウ　百たび射て百たびあたる。史、周紀「楚有二養由基者一、善射者也、去二柳葉一百步而射レ之、百發而百中レ之」

【百般】ヒヤクハン　いろいろさまざま。韓愈詩「一一紅紫闘二芳菲一」

【百寶】ヒヤクホウ　もろもろのえびす。杜甫詩「源獠淨二三蜀一、風雲晴二一一一」

【百拜】ヒヤクハイ　おほくのあしきこと。孔子家語「夫子見二人一善一忘レ其一一」

【百福莊嚴】ヒヤクフクシヤウゴン　三十二相を具する。法華經「彩畫作二佛像一――相」

【百聞不レ如二一見一】ヒヤクブンイツケンニシカズ　百度聞くは、一度實見するの確實なるに及ばざる義。漢書、趙充國傳「――、兵難二豫度一、臣願驅至二金城一、圖上方略」

【百分率】ヒヤクブンリツ　數（元高・歩合高・歩合）のわりあひを知る算法。＝歩合算。

【百辟】ヒヤクヘキ　多くの諸侯、辟は君。詩、周頌「不レ顯惟德、一一其刑レ之」刑はのっとる。

【百變】ヒヤクヘン　いろいろにかはる。左氏兵略「用兵之法、一步一一、見レ可則進、知レ難則退」

【百木】ヒヤクボク　おほくの樹木。後漢書、荀爽傳「温規之氣養二生一一」

【百萬塔】ヒヤクマントウ　國奈良朝の頃、朝廷より諸國の佛寺に納めたる經卷入りの小塔。

【百萬遍】ヒヤクマンベン　國多人數集りて念佛を唱へる佛事、もと山城國智恩寺にて修したる佛事の名、衆僧が車座をなし千八十箇の大珠數をくりて百萬たび念佛する。

【百味】ヒヤクミ　多くの食物。齊楞、求二自試一喪「日限二一一一」

【百味飲食】ヒヤクミオンジキ　國いろいろのうまき供物。百緣經「――、皆悉備有」

【百嚙】ヒヤクメツ　もろもろのくすり。淮南子「四水者、帝之神臭、貝智二一一、以潤二萬物一」

【百酒之長】ヒヤクシユノチヤウ　酒の異名。漢書、食貨志「夫酒食者之將、酒――、嘉會之好、鉏田農之本」

【百利】ヒヤクリ　多くの利益。

【行二百里一者半二九十一】ヒヤクリヲユクモノハハンクジフニナカバナリ　人は倦怠し易く、路を行くに殘の九十里と、後の十里と相匹敵すといふ義。事をなすに始の易くして、終の難きに喩ふ。戰國策、――、於レ此言二末路之難一」

【百里負レ米】ヒヤクリニコメヲオフ　貧にして孝養するにいふ。子路の故事。家語、致思「子路曰、昔者由也、事二親一之時、常負二百里之糧一、爲レ親負二米百里之外一」

【百里才】ヒヤクリノサイ　方百里の地、即ち縣を治める才能。蜀志、龐統傳「龐士元非二――一」

【百里之命】ヒヤクリノメイ　方百里は周代、諸侯の國の面積、命は命令、一國の政治の義。禮、泰伯「可二以寄一――一」

【百兩】ヒヤクリヤウ　車百輛、兩は輛に同じ、一車兩輪、故に兩といふ。詩經「之子于歸、一一御レ之」親迎の禮の盛ん

なるをいふ。

【百慮】ヒャクリョ　種種なる思慮。易、繫辭「天下同レ歸而殊レ塗、一致而―ー」

【百疹】ヒャクシン　おほくのあしき氣、疹は妖氣。文天祥、正氣歌「ー―自辟易」

【百箇】ヒャクコ　多くのたみ。庾信詩「ー―戒仰レ德、千年一聖人」

【百禮之會非レ酒不レ行】ヒャクレイノクワイヒシュフカラズンバヒャクレイノクワイアラズ　種種の禮儀の會も、酒なくては行はれず。漢書、食貨志「酒者天之美祿、帝王所下以頤二養天下一享二祀祈一レ福扶レ衰除レ疾、――」

【百姓】ヒャクセイ　おほくのつかさ。書、皐陶謨「ー―師師」

【百鍊】ヒャクレン　古の名劍の名。古今注「吳大帝有二寶刀三一曰ー―一、二曰三青羽一、三曰三漏景一」

【百鍊剛】ヒャクレンカウ　百度も鍛錬せし鐵の如く、志氣の堅確なるにいふ、剛は鋼。事類全書、晉劉琨爲二段匹磾一所レ拘、自知必死、爲二五言詩一贈二其故吏盧諶一末云、何意――、化爲二繞指柔一」

【百縷】ヒャクル　おほくの縷。詩、商頌「殷受レ命咸宜、ー―是何」何は荷。

【百六會】ヒャクロククワイ　厄運の歲に出會ふ義。漢書、谷永傳「遭二元妄之卦一、運直二百六之災阨一」陽厄五、陰厄四あり、一百六歲にして陽厄あり故に――といふ。「漢書、谷永」

【百王】ヒャクワウ　百代の帝王。漢書、董仲舒傳「天下治和、ー―同レ之」

【皁】

サウ　圖　皂は俗字

○けらい（隷臣）しもべ、こもの（賤人）士の臣は一、一の臣は輿、輿の臣は隷。○うまやのね（櫟）○馬のかひをけ（槽）○うまや（廐）○くろし（緇・黑）○くろぎぬ（黑繒）○とちのみ（橡實）○馬の三乘（十二匹）の稱。○殺實の未だ堅からざる稱。

【皁衣】サウイ　黑繒の服、漢代、官吏の服色、よりて仕官を備二ー一といふ。漢書、蕭望之傳「備二ー一二十餘年」

【皁巾】サウキン　黑色の頭巾、晉、西陽雜俎「御者大傳云、庾舜衆刑、犯レ衆者ー一」

【皁莢】サウケフ　さいかち。落葉喬木の一、高さ三四丈、刺多し、葉は羽狀複葉、夏小黃花をつく、實を結び莢を成す、長尺にして刀の如し。‖皁角。

【皁白】サウハク　くろと、しろと。晉書、天文志「是天公憎愎、無二ー一之徵也」‖黑白。

【皁隷】サウレイ　めしつかひ。左、昭七「士臣皁、皁臣輿、輿臣隷」宋史、李大臨傳「貧無二ー一」

【皁櫪】サウレキ　うまや、馬を養ふ所。柳宗元詩「生平動二ー一、到隸不レ告レ疲」

【皂】

皁（前條）の俗字。

【皃】

貌（豸部七畫）に同じ。白は訛字　圖かほ（顏）

【的】

テキ　圖

○まと、弓のまと、射侯の中「質ー」○あきらか（明白）あざやか（鮮明）「ー然」○しろし（白）「ー顙」○ただし（端）まことと（眞實）○とほし（遠）○はすのみ（蓮子）‖菂。○かなめ（要處）○まさに、まことに。○さだめて、たしかに「ー確」白居易詩「ー無二官職趁一人來一」○めあて（標準）「目ー」「表ー」「準ー」「標ー」○俗語に用ふる形容助詞「好ー」「美ー」「醜ー」‖底。

【的確】テキカク　明かにたしか。品字箋「的、白也、ー―明且確也」

【的證】テキショウ　たしかなる證據。

【的然】テキゼン　明かなる貌。中庸「小人之道、ー―而日亡」

【的當】テキタウ　たしか。秦觀詩「不レ因二猶葉一辨二林歩一ー一山翁來一覺レ秋」‖確實。

【的中】テキチウ　うまくあたる。うまくあてる。

【的的】テキテキ　明かなる貌。淮南子「ー―者獲」注「ー―、明也、爲二衆所一レ見故獲」

【的例】テキレイ　よくあてはまる先例。

【的歷】テキレキ　あざやかなる貌。歐陽修、眞州東園記「芙蕖芰荷之ー―」‖的皪。

【的皪】テキレキ　あざやか（鮮明）なる貌。魏都賦「丹蘭凌レ浪而ー―」‖的歷。

【皆】

カイ　俚

○みな、すべて、ことごとく（悉）のこらず「悉ー」おなじく（同）ともに（偕俱）ならびに（竝）○あまねし（徧）詩、周頌「降二福孔ー一」

同訓異語　皆・咸・僉・悉○皆は、みな一同の義、廣く用ふ。荀斯傳「諸男皆尚二秦公主一、女悉嫁二秦諸公子一」○咸は、ことごとくとも訓む、彼我相孚合する義、匈奴傳に「天下莫レ不二咸便一」とある如し、皆は、外より指して言ひ、咸は其のものになりていふ。○僉は其の所に集りたる人を、すべていふ、皆也、咸也、衆共言之也と註す、書經に「僉曰鯀哉」とあるが如し。○悉は一所にこぞりての意。孟子「雕瘵」首盡レ領而

相告ごそりてとも訓む。楚辭「舉レ世皆濁、我獨醒」

【皆】比に从ひ白に从ふ、下部を日或は日に作るは非。

【皆既】日蝕又は月蝕の時に、日月の面の全く掩はれる現象、既は盡。⇔皆既蝕。

【皆勤】一日も休まずしてつとめる。

【皆濟】皆かりを全部仕拂ひすます。

【皆朱】朱又は辰砂をまぜて赤くぬりたる塗物。

【皆傳】おくゆるし、弟子が藝術の奥義を悉く師匠から授かる。

【皆無】少しもない。⇔絕無。

【皈】

歸（止部十四畫）に同じ。

【皇】

クヮウ　ワウ　陽

○きみ、すめらぎ、みかど（君主・天子）「一帝」「先一」○大いなり「一天」書、湯誥「惟一上帝」○ひかる（光）○ひろし（弘）○うるはし（美）さかんなり（盛）詩、大雅「穆穆一一」○おごそか（莊）○ただし、ただす（正・正）詩、豳風「四國是一」○あめ、かみ、萬物の主宰。○己の父母祖先を祭る時の敬稱「一考」「一妣」○道家又は佛教にて其の信ずる神佛の敬稱。道家の「玉一」「盛一」佛教の「空一」「覺一」○はな、草木の華。○たまやのもん（宮門の闕）○つかのもん（家の前の闕）○室に四壁なきもの。漢書、胡建傳「列二坐堂一上」○舜の時、羽もて飾りたる冠。○鳳の本字。書、益稷「鳳一來儀」○いとま、ひま。左、昭三二「不一」＝啓處」啓はひざまづく。＝遑。○一一は心の定まらざる貌の又、きらきらと光る貌。又、明かなる貌。又、美くしく盛んなる貌。又、あくせくといそがしき貌。○於一は歎美の辭。詩、周頌「於一來牟」

【皇矣】大いなり。矣は助字。詩經「一一上帝、臨レ下有レ赫」

【皇維】帝王ののり。陸贄、大赦詔「張二一一一一一」＝皇綱。

【皇闕】王宮の門。又、王宮のうち。宋書、四廂樂歌「鼓鐘震二天區一、禮容鬱二一一一」＝禁闕・紫闕。

【皇猷】帝王のみち、天子のはかりごと。北史、李弘傳「一一遐闡」＝皇謨。

【皇胤】天子の子孫。莊文、詐僞「集レ祉、應二瑞迎一レ祥、一一璽式、帝女金相」＝帝胤・天胤。

【皇運】帝王たるまはり合せ。隋書、煬帝紀「一一之初、百度伊始」

【皇英】堯の二女、舜の妃たる娥皇・女英の略稱。班婕妤賦「美二一一之女一兮、配二帝皇一」＝英皇。

【皇恩】天子の御めぐみ。張說詩「春園既醉心和樂、共識二一一遵化同」＝皇澤。

【皇家】皇室、又、天子を稱す。晉書、輔二亮我一一一」

【皇考】○死せし父をまつる時の敬稱、皇は大、考は亡父。曲禮「祭二王父一曰二皇祖考一、王母曰二皇祖妣一、父曰二一一、母曰二皇妣一」○皇祖をいふ。禮記「皆祖之廟、曰二一一廟一」○國天皇の御亡父、崩御せられし先代の天子。

【皇綱】天子の世を治め給ふ大いなる法則。班固、答賓戲「廓二帝基一恢二一一一」＝皇紀・皇維。

【皇學】國我が國の制度文物などを研究する學問。＝和學・國學。

【皇基】皇室の基礎、國家のもとゐ。

【皇尊】おほぞら。潘岳賦「仰二一一一一号歎息」＝蒼穹。

【皇宮】天子の住みたまへるところ、宮城。

【皇居】天子の居所。孔融文「帝室一一、必須二非常之寶一」＝皇城。

【皇極】帝王の定めたる大道にて四方萬民の法を取る所のもの。又、大中至正の道、極は至極の義。書、洪範「五、一一、皇建二其有極一」

【皇猷】四通八達の大いなる道。東都賦「動二大輅一、連二一一一一」

【皇化】天子の德に順ひ服する感化。李白詩「七葉遥二一一一千韓光二本支一」＝王化。

【皇華】詩、小雅に皇皇者華の篇あり、其の序に「君遣二使臣一也、送レ之以二禮樂一、言遠而有二光華一也」とあるに本づき使臣を送していふ。

【皇皇】○美盛なる貌。詩、大雅「穆穆一一」○かがやきてあざやかなる貌。詩、小雅「一一者華」＝煌煌。○定まらざる貌、さまよふ（彷徨）貌。檀弓「既葬一一如二有レ所レ而弗レ至」＝栖栖。

【皇維】皇太子に同じ。＝皇儲。

【皇祐】おほいなるさいはひ、皇は大、祐は福。漢書、禮樂志「一一元始」

【皇后】○古は天子の稱。秦、始皇「一一一号二玉几一」○秦漢以後は天子の正妻（古は單に后と稱す）漢書、高帝紀「尊二王后一曰二一一一」

【皇國】國すめらみくに、我が大日本帝國。

【皇嗣】天子のよつぎ、皇太子。後漢書、明德馬后紀「后常以二一一一未レ歷、鄧懷二憂歎一」＝皇儲。

【皇州】帝都をいふ。鮑照詩「樂前

飛玉闕ニ愛景臨ニ——ニ」

【皇史宬】クワウシセイ 明の皇室の祕書室の名。成祖、ものおきぐら。李東陽「明大內有ニ——ニ」

【皇室典範】クワウシツテンパン 國皇位の繼承・天皇皇族の御身分及其の財産などを規定せし法典、明治二十二年二月十一日發布。

【皇上】クワウジヤウ 當代のみかど、今上天皇。

【皇城】クワウジヤウ 天子の御所。事物紀原「唐貞觀、崇政殿侍臣、進以ニ事患正ニ俗ニ——一建ニ議名ニ官之事ニ、始見於此ニ」

【皇恩】クワウオン 天皇のをぢぎみ。潘水燕詩「——燕王元侯爵」

【皇祚】クワウソ 天子の位。北史、外戚傳序「況ニ我ニ——ニ」‖天祚・帝祚・皇位。

【皇祖】クワウソ 天子の祖先。書經「——有レ訓、民可レ近不ニ可レ下」

【皇祖考】クワウソカウ 死せし祖父を祭る時の敬稱。曲禮「祭ニ王父ニ曰ニ——ニ、王母曰ニ皇祖妣ニ」

【皇祖妣】クワウソヒ 死せし祖母を祭る時の敬稱。前條を見よ。

【皇宗】クワウソウ 天子の代代の御祖先。

【皇族】クワウゾク 天子の同族。沈約文「奕奕——、于レ斯爲レ盛」

【皇太后】クワウタイコウ 天子の嫡母。

【皇太子】クワウタイシ 天子の世嗣。‖東宮・太子・皇儲・國儲・皇嗣・皇緒。

【皇太孫】クワウタイソン 後年皇位をつぎたまふ御身分の皇孫。

【皇道】クワウダウ ○大いなる道。‖皇路。○國我が國體を基礎として立てたる道。

【皇澤】クワウタク 天子のめぐみ。張衡賦「——寘洽、海外混同」‖皇恩・君恩。

【皇闈】クワウヰ 王宮の門。又、宮中。曹嘉詩「入侍ニ于——ニ、出則登ニ九列ニ」

【皇儲】クワウチョ 天子のよつぎ。陸機詩「——遥ニ竜俊、多士出ニ幽遐ニ」‖皇太子。

【皇邸】クワウテイ 天子の座後に立てる屏風(周禮)

【皇帝】クワウテイ 秦以後てんしの稱、帝は地、天に合する義。史、秦始皇紀「采ニ上古帝位號、號曰ニ——ニ」

【皇朝】クワウテウ 當代の朝廷。潘尼詩「竝レ跡侍ニ信宮ニ、攜レ手登ニ——ニ」‖本朝。

【皇天】クワウテン 天の敬稱。又、天の神。倘書大傳「德及ニ——ニ、則祥風起」‖上帝。

【皇天后土】クワウテンコウド 天の神と地の神と。左、僖十五「君與ニ后土ニ而滅ニ皇天ニ——、官聞ニ君之言ニ」‖天神地祇。

【皇天無レ親惟德是輔】クワウテンムシンイトクコレタスク 天は特に誰を愛すといふことなく、唯德ある者を助ける(書、蔡仲之命)‖天道無レ親。

【皇典】クワウテン 國皇國の典籍モツ又、主に古の貴重なる國史、即ち古事記・日本書紀などをいふ。

【皇都】クワウト みやこ。韓愈已詩「新詩驚ニ——ニ」

【皇圖】クワウト 天子の版圖。班固賦「於レ是聖皇乃握ニ乾符ニ、闡ニ坤珍ニ、撥ニ——ニ、稽ニ帝文ニ」李賀詩「——跨ニ四海ニ」

【皇統】クワウトウ 天子の血統。後漢書、郭訓傳「超ニ立ニ——ニ、奉ニ承大宗ニ」

【皇妣】クワウヒ 死せし母の敬稱、祖は亡母。皇考參看。

【皇羽】クワウウ 五采の羽を持ちて舞ふまひ。周禮、地官、注「——者以レ羽冒ニ覆頭上ニ、衣飾ニ翡翠之羽ニ」

【皇辟】クワウヘキ 妻が死せる夫を祭る時の敬稱。曲禮「夫曰ニ——ニ」注「皇君也、辟、法也、妻所レ取レ法也」

【皇別】クワウベツ 國皇族より分れ出でたる氏族。神別・蕃別の對。

【皇誤】クワウゴ 天子のはかりごとの正邪。傳詩「綏ニ奠子孫ニ、今古、紛ニ神帝道ニ張ニ——ニ」‖皇謀。

【皇極】クワウキヨク 上帝のみたま。又、帝王の神靈。南史、宋武帝紀「仰賴ニ——ニ、術順ニ聖謨ニ」

【皇禮砲】クワウレイハウ 海軍に於て天皇旗・皇后旗・皇太子旗、及び皇族旗に對して行ふ禮砲、其の數二十一發。

【皇路】クワウロ 大いなる道、一說に君道。文天祥、正氣歌「——當ニ清夏ニ」

【皐】カウ コウ

國 又、邑に作る俗字は俗字

○ゆるし(緩)○あお、人を呼ぶ聲の長く引く貌。禮、檀弓運「升ニ屋而號、曰ニ某復ニ」屋根の上にのぼりて死人の靈魂をよびもどす時の聲。○さは(澤)詩、小雅「鶴鳴于九ニ——ニ、九ニ——はつづらなりに曲れる深きさは。○さし(岸)○かぎり(限界)○たかし(高)「——門」○——はかたくな(頑)にして道を知らざる貌。詩、大雅「——識識」又、事を治むる能はざる貌。○さつき、陰暦五月の異稱。○——陶は舜の時の獄官の長。書經「帝曰、——陶汝作ニ士ニ」○難、——陶の後。——伯通は後漢の人。

【皐皐】コウコウ 頑固にして道を知らざる貌。又、事を治むる能はざる貌。詩、大雅「——訳訳、曾不レ知ニ其玷ニ」

【皐蘆獲架】コウロクカク 皐陶・蘆・穫(周の文王の祖先)契(殷の湯王の祖先)の四人、共に舜時代の名臣。

【皐比】コウヒ ○虎の皮。左、莊十「——ニ——ニ而先犯之」○轉じて將軍又は儒者などの坐席の敬とす。虎皮をしきものとせしよりいふ。劉基、賈

柑者宜「坐ニ―一者、洗洗乎千城之具也」宋名臣言行錄外集「勇撤ニ―一ニ【皐門】カウモン　宮城の最外に在る高きもん。視、明堂位「天子―ニ―」

六畫

【皐】　皐(前條)に同じ。

【皎】　キョウ　㊥　纖に通ず

○しろし(白)月白し。詩、陳風「月出ニ―一分」○きよし(潔)○ひかる、白くひかる(日月の光)詩、陳風「月出ニ―一分」○あきらか(明)光明なり。

同訓異語　アキラカ　皎・明・昭・的・晰・炳の別は明(日部四畫)の條を見よ。

【皎鏡】キョウケイ　明かなるかがみ。月に喩ふ。韓愈詩「方池含ニ積水一、明月流ニ―一ニ」ニ明鏡。

【皎皎】キョウキョウ　○白き貌。楚辭、漁父「安能以ニ―一之白、蒙ニ世俗之塵埃一乎」ニ皓皓。○光明なる貌。傅毅賦「夫何ニ―一之間夜分、明月燭以施ニ光一」

【皎皎】キョウキョウ　あきらかにひかる。皛皛、天河賦「―一無ニ際、隔干自浮」ニ皎皎。

【皎月】キョウゲツ　明かにさえたるつき。禧充詩「層軒登ニ―一、流照滿ニ中天一」ニ皓月。

【皎潔】キョウケツ　しろくいさぎよし。王維詩「―一明星高」

【皎如】キョウジョ　明かなる貌。韓莊詩「積雪鏘ニ前除一、漠光夜―一」ニ皦如。

【皎朗】キョウロウ　あきらか。王逸、離騷經章句集「其義皎而朗」ニ皛朗・炯朗・炳明。

【皎厲】キョウレイ　自ら高くする、自ら矜り高ぶる。晉書、應詹傳「紓不ニ修ニ常人之節一、不ニ爲ニ―一之事一」

七畫

【皓】　カウ　㊥　もと皓に作る

○しろし(白)○ひかる(光)○あきらか(明)白く光りて明かなり。詩、陳風「月出ニ―一分」○いさぎよし(潔白)○―一はむなしくひろき(虛曠)貌。又、いさぎよき貌。○昊に通ず「―一天」

【皓曜】カウエウ　しろく明かにひかる。陸機、羽扇賦「雀ニ―一之奕奕一、含ニ靜風之微微一」

【皓皓】カウカウ　○あきらかなる貌。注言、淵靜、明星―一」○潔白なる貌。詩、唐風「揚之水、白石―一」○むなしくひろき(虛曠)貌。大戴禮「曾參之行、常以ニ―一、是以眉壽」

【皓旰】カウカン　光の盛んなる貌。楚辭、九歎「曳ニ彗星之ニ―一ニ今」

【皓月】カウゲツ　明かに照る月。梁元帝詩「湛江澗ニ―一、水影若ニ浮天一」李白詩「良宵宜ニ清談一、―一未ニ能ニ寐」

【皓皓】カウカウ　しろきは、美人の齒の形容。韓非、揚搉「色理ニ―一、悅ニ情面ニ損ニ精」司馬相如、美人賦「雲髮豐髆、蛾眉ニ―一」

【皓首】カウシュ　白髮の首。老年の義。李陵、答ニ蘇武ニ書「丁年奉ニ使、―一而歸」ニ白頭。

【皓雪】カウセツ　しらゆき。元稹詩「風斎北風起、―一紛ニ滿庭一」ニ白雪。

【皓然】カウゼン　しろき貌。後漢書、郡國志、注「五月霜雪―一」

【皓白】カウハク　まっしろ。後漢書、張良傳「年皆八十有餘、鬚眉―一、衣冠甚偉」

【皓魄】カウハク　月の異名。權德輿詩「清光杳無際、―一流ニ碧空一」ニ玉魄・冰魄・桂魄。

【皓髮】カウハツ　しらが。後漢書、劉寵傳「有ニ五六老叟一、顧眉―一」ニ白髮。

【皖】　クヮン　㊥

春秋時代の國名、今の安徽省廬州府懷寧縣治。故に安徽省の異名を―省といふ。

【皤】　ヒョク　㊥　通音　フク

二百。―宋樓は清の光緒年間、浙江省歸安縣の陸心源の藏書の樓名、藏書甚だ富む、―宋樓藏書志一百二十卷の著あり。

八畫

【哲】　セキ　㊥　㊥　晳・晢とは別

○しろし、人の皮膚の色白し。左、昭二六「有ニ君子白―一」周禮、大司徒「填ニ撫其民一―而辨」○質のなき樣ヤウ【爾雅】

附錄　析に从ひ白に从ふ、俗に折に从ひ哲に作るは非、日に从ふ晳とは別。

十畫

【皚】　ガイ　㊥　灰

しろし、潔白なり、霜雪などの白き色。卓文君、白頭吟「―一如ニ山上雪一」

【皚皚】ガイガイ　霜雪などの白き貌。劉歆、遂初賦「遭ニ積雪之ニ―一」杜甫詩「崖沈谷沒白ニ―一」

【皞】　カウ　㊥

まっしろ(甚白)

【皞皞】カウカウ　甚だしろき貌。孟、滕文公「―一乎不ニ可ニ尚一」

【皚】　カウ　㊥

○あきらか(明)○しろし(白)○―一は廣大自得ユウヅウフウフクの

貌。孟、盡心「王者之民、一一如也」○古、吳（日部四畫）に通ず「一天」太吳伏羲氏・少吳金天氏の吳を一に一に作る。

【皛】 ケウ　篠

○しろし（白）○一一（ケウケウ）は鮮明なる貌。陶潛詩「昭昭天宇闊、一一川上平」○あらはる。あらはす（顯明）○一潔は深く白き貌（郭璞、江賦）

【皚】 コク　沃

鳥の白きにいふ、しろし。＝皓。

【皚皚】（コクコク）鳥の白き貌。何晏、景福殿賦「一一白鳥」＝皓皓。

十一畫

【皦】 サイ　賄

しろし（白）霜雪などの白き貌。韓愈、醜雞聯句「腦膊戰聲喧、繽翻落羽一」

十二畫

【皤】 皤（白部十畫）の俗字。

【皤】 ハ　歌

○しろし（素白）○特に、髮の毛の白きにいふ。○腹の大いなる貌。左、宣二「一其腹」○一は豐かに多き貌。

【皤如】（ハカ）白き貌。易、賁卦「賁如一一」

【皤然】（ハシ）しろき貌。南史、范縝傳「年二十九、髮白一一」＝皤如。

【皤皤】（ハハ）○髮の白き貌の斑斕、辭雅詩「一一國老」＝番番。○豐かに多き貌。左思、魏都賦「行廚一一」

十三畫

【皦】 ケウ　篠

○しろし、玉石の白き色。○あきらか（皎・明）「一日」○音樂の節次の明かなる義。論、八佾「一如也」

【皦皦】（ケウケウ）明かに白き貌。古逸詩「皎皎者易レ缺、一一者易レ汚」

【皦日】（ケウジツ）あかるき日、眞晝のあかるき日。詩、王風「有レ如二一一一」（白日を指して譬を爲す義）＝白日。

十五畫

【皪】 レキ　ラク　藥　錫

的一は白き貌。又、明かなる貌。又、明珠の光。司馬相如、上林賦「明月珠子的一一江靡」（江靡は揚子江の岸、靡は湄）＝的皪。

十六畫

【皭】 キ　紙

はな（華）＝皦。

【皭】 カク　藥　皦に通ず

しろし（白）

【皭然】（カクジン）しろき貌。史、司馬相如傳「一一白首」

十八畫

【皭】 シャク　セッ　藥　錫

白き色。又、淨き貌。史、屈原傳「一然泥而不滓者也」

【皭皭】（シャクシャク）潔白なる貌。韓詩外傳「新沐者必彈レ冠、新浴者必振レ衣、莫レ能以二己之一一、容中人之混汚上」

皮部

【皮】 ヒ　支

○かは、獸のけがは。周禮、天官「秋斂一」革は毛を去りしかはを柔かにしたるなめしがは。○おほひ（被）○物の外を護るものの稱「包一」「封一」○うはべ（表）すべて物事の表面「地一」「木一」「一膚」○物の薄きものの形容「鋼一」「豆腐一」○かはごろも（裘）「一幣」○まと（的）皮をはりし的。論、八佾「射不レ主一」○こけ（苔）○はなす、かはをはぐ。戰國韓策「一面扶眼」

【皮角】（ヒカク）獸のかはと、つのと。周禮「凡屠者斂二其一一筋骨一入二于玉府一」

【皮革】（ヒカク）毛がはと、つくりがはと。周禮「以レ時獻二其珍異一一一」

【皮下注射】（ヒカチュウシャ）注射器を用ひて皮膚の下に藥をさしこむ醫療法。

【皮裁】（カサイ）かはごろも。詩經、疏「緑衣不レ足二以襲レ寒、故爲二一一一以助レ之」

【皮袴】（ヒコ）皮製の袴。捜神記「著二一一一」

【皮相】（ヒサウ）うはべだけを見て直ちに判斷する。史、鄧生傳「足下以レ目一一、恐失二天下士一」

【皮相之士】（ヒサウノシ）うはべのみを見て内情を察知せざる人。韓詩外傳「延陵子知其爲二賢者一、請二問姓字一、牧者

曰、子乃――也、何足レ語二姓字一哉」

【皮肉】ヒニク　○かはと、肉と。起世經「綾二其一一一」○國いぢわるく、あてこすりをいふ義。

【皮肉之見】ヒニクノケン　あさはかなるさとり。傳燈錄「遂磨欲三西返二天竺一、乃命二門人一曰時將レ至矣、汝等盍三各言一所得一乎、時門人道副對曰、如二我所見一、不レ執二文字一、不レ離二文字一、而爲二道用一、師曰、汝得二吾皮一、尼總持曰、我今所レ解、如二慶喜見一阿閦佛國一、一見更不二再見一、師曰、汝得二吾肉一、道育曰、四大本空、五陰非レ有、而我見處無二一法可一レ得、師曰、汝得二吾骨一、最後坐可卿拜後依レ位而立、師曰、汝得二吾髓一」各奉集にも出づ、文稍異る。‖皮膚之見。

【皮傅】フフ　うはべの言を以てこじつける。後漢書、張衡傳「方言非二其事一曰ニ一一、言二皮膚淺近强相傅會一也」

【皮膚】フフ　はだへ。柳宗元文「一撮ニ一一、塵垢滿レ爪」

【皮膚如レ漆】ハフフジョシツ　色の甚だ黒きをいふ。南史、焦度傳「度、容貌壯醜、――」

【皮膚病】ヒフビヤウ　しもやけ・にきび・たむし・ひぜんなどのはだへに生ずる病の總稱。

【皮幣】ヒヘイ　○かはぎれもと、きぬとのおくりもの。孟、梁惠王「事レ之以二一一一一一不レ得レ免焉」○白鹿の皮の貨幣。史、平準書「以二白鹿皮方尺一、緣以二彩繢一爲二一一一一直四十萬」

【皮弁】ヒベン　鹿のかはのかんむり。朝廷に出仕する時の常服。又、加冠の禮の時、先づ縞布冠を著、次に――を加ふ(儀禮、士冠禮)

【皮面】ヒメン　顔の皮をはぐ。戰國策「再致大呼、所二擊殺一者數十人、因自レ――一抉レ眼、屠レ腸遂以死」

【皮毛】ヒモウ　けがは。莊、讓王「冬日衣二――一、夏日衣二葛絺一」

【皮裏陽秋】ヒリノヤウシウ　皮裏は皮のうち、即ち心中、心中にて褒貶する義、陽秋は春秋、即ち孔子が春秋を作りて褒貶の意を寓せしに本づく。晉書、褚裒傳「季野有二――一」季野は裒の字。

五畫

【皰】ハウ　○にきび(面瘡)「面ー」青年の時、顔面に生ずる小さきできもの。‖圖粉刺。○もがさ、手足臂肘などに暴起する水泡の如きもの。

七畫

【皴】シュン　○ひび、あかぎれ、寒氣に冒されて皮膚の裂けるもの(皸裂)「凍ー」「ー裂」○しわ(皺)○畫法の一、山石などのひだを描くにいふ。披麻ー・荷葉ー・大斧劈ー・小斧劈ー・雨點ー・雲頭ーなど「ー法」

【皴皺】シンカ　しわ。韓愈詩「老皮ー――交總横」

【皴裂】シンレツ　ひびがきれる。梁書、武帝紀「戰ー手觸レ寒、手足ー――」

九畫

【皲】クン　キン　あかぎれ(手足坼裂)ひび、皮膚が寒氣に冒されて龜裂する。‖凍裂。

【皲瘃】キンチク　あかぎれと、しもやけと。漢書、趙充國傳「手足ー――」‖凍瘡。

【皲裂】キンレツ　寒氣の爲めに、ひびがきれる。

【皱】　皺(部首十三畫)の俗字。

十畫

【皲】㊀シウ　㊁シウ　㊁スウ　通書

㊀しわ、顔面のしわ「面ー」又、すべて物のひだ。○しわむ(蹙)しわをよせる、眉をしわむ。㊁くりのいが(栗蓬)貢物詩「新蝟避ー栗ー」

【皲蹙】シウシュク　しわ。ひだ。韓愈、石亦ーー不レ凡」

【皲眉】シウビ　まゆをひそめる。‖蹙頞。

【皲面】シウメン　しわづら。陸游詩「ーー朱鉛太不レ宜」

十一畫

【皺】サ　○はなのにきび(鼻皰)○もがさ。○ざくろばな、鼻端の赤くなる病「酒ー鼻」

十三畫

【皾】テン　セン　肉の上のうすかは、皮膚の薄膜。禮、內則「濯手以摩之去其ー」

皿部

【皿】ベイ　さら、食物を盛るひらたき鉢、盤盂の屬「器ー」

三畫

【盂】ウ 虞

○はち。わん、飲食物を盛る容器「飯ー」「盤ー」史、滑稽傳「酒一ー」＝杯。○わん。又、はちの形せしもの「腎ー」○田獵ッの陣形の名。左、文十「宋公爲二右ー一、鄭伯爲二左ー一」

【盂方水方】はちが方形ならば水も亦方形となる、民の善惡は君の善惡によるとの喩。韓非、外儲說「孔子曰、爲二人君一者猶ノ盂也、民猶ノ水也、——、盂圓水圓」

【盂蘭盆】梵語の音譯、倒懸を救ふの義、盆は食器、陰歷七月十五日百味の飲食を父母及び祖先に具へ前に布施し、冥土に於ける亡靈の倒まに懸けられたる如き苦を救ふの意。釋氏要覽「行孝順者、亦應レ修二——一」＝盂蘭會・盂蘭盆會。

四畫

【盈】エイ 庚

○みつ（充滿）だんだんに滿つる。○あふれる（溢）易、坎卦「坎不レ一」○あまる（餘）古、贏に通ず。縮の對。○一ーは水の一ぱいにみちて流れる貌。又、女の美くしくたをやかなる貌。

同音通用 盈・滿・充・實・塞・塡の別は滿（水部十一畫）の條を見よ。

【盈溢】エイイツ みちあふれる。後漢書、樊宏傳「常戒二其子一曰、富貴ー一未レ有二能レ終者一」

【盈盈】エイエイ ○水の滿つる貌。古詩「ー一水間、脈脈不レ得レ語」○女の容貌のしなやかに美くしき貌。枚乘、雜詩「ー一樓上女、皎皎當二窗牖一」

【盈耳】エイジ みつると、へると。唐書、樂志傳「歲朔閱二羊馬薬駝一七日、觀二勝負一以卜二歲ー一」＝息耗。

【盈虧】エイキ みつると、かくると。易、謙卦、疏「盈者滿、則謙者受レ益也」晉說詩「一歲幾ー一」＝盈缺。

【盈筐】エイキョウ かごにみつ。鮑照、園葵賦「乃薬乃蒲、堆レ盤ー一レ」＝滿筐。

【盈虛】エイキョ みつると、むなしきと。易、豐卦「天地ー一、與レ時消息」

【盈科】エイクワ 水の流れるに少しのくぼめる坎にも一ぱいに滿ちて先ず〳〵と進むをいふ、科は穴、人の學を成すに漸を以て進むべきに喩ふ。孟、離婁「原泉混混不レ舍二晝夜一、ー一レ而後進、放二乎四海一」

【盈貫】エイクワン ○貫は錢、錢に通ずる弓を十分にひきはるをいふ。莊、田子方「列禦寇爲二伯昏無人一射、引レ之ー一」○罪惡の滿ち多き義、貫は縄ざし、餘り多くしてさしきれざる（左、宣五）＝貫盈。

【盈月】エイゲツ 十五夜の滿月。魏志「三五ー一、清輝燭レ夜」

【盈缺】エイケツ みつると、かくると。盧仝詩「天涯娟娟燐蟆月、三五二八盈又缺」＝盈虛。

【盈進】エイシン 順序をふみてすすむ。孟、離婁「盈レ科而後進」盈科參看。

【盈尊】エイソン 杯にみつ。曹植、正會詩「清酤ー一レ、中坐騰光」

【盈縮】エイシュク みつると、ちぢむと。史、貨殖傳「進退ー一、與レ時變化」

【盈滿】エイマン みちつむ。潘岳詩「憂息何時定、沈憂日ー一」

【盈溪】エイケイ みちあまる。唐書、羅藝傳「涿郡襲二富饒一、倚レ邊兵仗多在、而倉庫ー一」

【盈沖】エイチュウ みつると、むなしきと。阮籍詩「天時有二否泰一、人事多ニー一」

【盈滿】エイマン 十分にみちたる、富貴權勢などの極盛なるにいふ。後漢書、竇門戸頗レ財日久、ー一之誉、道家所レ忌」魏文帝、戒盈賦「猥然懷ニー一之戒一」

【盅】チュウ 東

器の內部窳し、むなし（響窳）老子「道ー而用レ之」＝沖。

【盃】

杯（木部四畫）の俗字。熟語は杯の條を見よ。

【盃中蛇影】自ら猜疑心を起して苦む故事、疑心暗鬼を生ずといふに同じ。

【盆】ホン ボン 元

○はち、ほとぎ（盤）酒などをいれる瓦器「瓦ー」「浴ー」○茶器・食器などをのせる緣のあさき器。○盂蘭盆の法會の略語。又、陰歷七月の中元の節「一暮クレ」

【載レ盆望レ天】頭に盆を戴けば天を望む能はず、天を望まんには盆を戴くを得ず、事は同時に兼ね行ふ能はざるに喩ふ。司馬遷、報二任安一書「僕以爲載レ盆何以望レ天」後漢書、第五倫傳「臣聞、居レ官待レ士、不レ如レ爲レ國、——、事不二兩廢一」

【傾レ盆】雨の盛に降る形容。雜詩「黑雲壓二空萬馬屯、轉レ盼白雨如二ーー一」＝瀉盆。

【鼓レ盆而歌】莊子が妻を失ひし時の故事。莊、至樂「莊子妻死、惠子弔レ之、莊子則方箕踞——、惠子曰、不レ哭亦足矣、又——、不二亦甚一乎、莊子曰、人且偃然寢二於巨室一而我噭噭然隨而哭レ之、自以爲不レ通二乎命一故止也」

【盆景】盆の中に植物の色にそめたる砂を以て物の形を畫く技。又、

其の玉がきし畫。

【盆景】ボンケイ　鉢に花卉を植ゑて自然の景色に擬したる置き物。元人は之を盆子景といふ。王毓、姑蘇志「虎邱人善於二盆中一植二奇花異卉一盤松古梅一置二之几案一清雅可レ愛、謂二之一―一也」

【盆栽】ボンサイ　図　はちうゑのうゑき。

【盆石】ボンセキ　盆の中に石砂等をとりあはせて山水の景を造りしもの。又、それに用ふる石。

【盆地】ボンチ　山脈又は高地にて四方を圍まれたる平坦の地「甲府ー―」

【盆池】ボンチ　ほんの如き小さき池。明一統志「有二一―一徑二尺水注二其中一」‖小池。

【盆篋】ボンキョウ　酒壺等を容れる土器、缸は缶に同じ。史、廉頗藺相如傳「關相如前曰、趙王竊聞二秦王善爲二秦聲一、請奉二一―一秦王一以相娯樂」

五畫

【盎】アウ　平　養

○はち、ほとぎ（盆）「盆ー」ーは大腹にして小口。盆は底小にして口寬し。○盛んに見はれる。孟、盡心「一於背」あふれる。○さかんな（盛）る貌。ーーは和ラギ〳〵ぐ貌。杜牧文「春之ー―、不レ足爲二其和一也」又、盛んに盈つる貌。

【盎盎】アウアウ　瓦のこばち。淮南子「狗彘不レ擇二ーー一而食」

【盎然】オウゼン　盛んにあふれる貌。蘇軾詩「詩詞如二醉酒一、ーー薰二四肢一」‖益益・益益然。

【益】エキ　ヤク　陌

○ます（增）○くはへる（加）長ずる「增ー」「ー智」○ますます、いよいよ（愈）○すすむ（增進）○ゆたか（饒）「饒ー」○おほし（多）○みちあふる（盈滿）○たすく（助）○ためになる、やくにたつ、きき め。得る所。論、衛靈公「終夜不レ寢以思、無レ―」○まうけ、利得あり。損の反對「損ー」「利ー」○易の卦の名、震下巽上。○漢代の州名、今の四川・雲南と貴州の北部と。

同訓異語　益・增・倍・益・加○益は今までよりは、增し進むなり、韓文に「聖益聖而愚益愚」とあるが如し。○增は益と略同じ、增し加はるなり、唐詩に「城中增二新愁一」とある如し。○倍は一倍以上ますなり、增・益は、增すことの多少にかゝはらずして用ふ。○益は浸也、蓄也と註す、水のしみひろがり、草のはびこる義にて、漸次に增し加はるをいふ。史記、酷吏傳「法令滋章、盜賊多有」○加は今まである上に、添へ加はる義、重ヌルなり也と註す。

【益友】エキウ　交りて益ある友。論、季氏「益者三友損者三友」

【諍益】ソウエキ　○分量をまし加へることを願ふ。論、衛也「ーレー、日與二之庾一」○又一層詳しき教訓を求める。論、子路「ーレー、曰無レ倦」

【益州】エキシウ　漢代に置きし州名。今の四川省の地。

【益者三樂】エキシャサンガク　人の好む所に三の益あるをいふ。論、季氏「――、損者三樂、樂レ節二禮樂一、樂レ道二人之善一、樂レ多二賢友一益矣、樂二驕樂一、樂二佚遊一、樂二宴樂一損矣」

【益壽】エキジュ　ながいきする。漢書、李尋傳「宜三急改レ元易レ號、還得二延年一ーー」

【益習】エキシフ　○ちゑを增す。葉夢得詩「雪多前ーレー、文吉後進レ名」○龍眼肉（リュウガン）の異名。本草「龍眼生二南海山谷一、一名ーー」

【益蟲】エキチュウ　人生に利益を與へる蟲類の總稱。蠶・珊瑚・蜜蜂などの類。

【益鳥】エキテウ　食用・裝飾・害蟲驅除など、すべて人生に利益を與へる鳥類の總稱。

【益母】ヤクモ　めはじき、越年生草にて藥草の一、蕘蔚之を服すれば益あり、故に名づく。一名茺蔚。

【盍】カフ　合　易　泰

○おほふ（覆）あふ（合）會合する。○なんぞ何何せざると返り讀む、何不の合音字、疑問の反語。論、先進「一各言二爾志一」古、蓋・盖に通用す。○鶡に同じ、烏の名。○ーー旦は夜鳴きて旦を求める鳥。

【盍簪】カフシン　朋類のより集まる義。豫卦「朋ーー」注「盍合也、簪疾也」疏「衆朋合聚而疾來也」

【盌】ワン　早　俗字

椀・碗は俗字

六畫

【盖】

盖（艸部十畫）の俗字。

【盒】カフ　合

○さら（皿）はち（盤）○はちのふた（盤覆）又、蓋のあるはち、組合せて重ねるやうに作りし容器「香ー」

【盔】クヮイ　灰

○はち（鉢）○俗にかぶと（首鎧）の義とす。鐵片を以て製す、形帽の如きもの「一甲」

【盡】 盡（皿部九畫）の俗字。

七畫

【盛】 ㊀ セイ・シャウ 庚 敬 ㊁ セイ・ジャウ

㊀もりもの、そなへもの、神に供へる爲めに器に在る黍稷、黍稷を粢といひ、器に在るを一といふ「粢―」「犧―」○物をもるうつは、什器など。左傳「旨酒一―」○もる、物を器に受け容れる。○なる。なす（成）○よそほひおごそか（嚴飾）㊁さかんなり「全―」「殷―」○みつ（滿）○廣く大いなり。○つよし（强）○しげる（茂）「茂―」○おほし（多）「一多」「衆―」○長ずる。○とみさかゆ（富榮）「隆―」「昌―」「富―」「豐―」「榮―」○―京は清朝の陪京の名、今の奉天瀋陽縣治。○國もる、高く積み上げる。又、薬を調合する。

【盛年】 ナカン 壯・壯・壯・壯・昌○盛は衰の反、さかり最中なり、上へ上へともり上ぐる意あり。○隆は中央高也と訓す。汚の反、汚はくぼやかなり。鼻筋の高きを隆準といひ、天の弓なりに、中央高きを、穹隆といふ（隆一に窿に作る）大學序「宋德隆盛、治教休明」○壯は雄壯・壯健などと用ふ、氣力たくましく壯なるなり、三十を壯といふも其の故なり。○熾は火の燃えあがる如くに、勢の目立ちて盛んなるなり、熾盛と用ふ。○昌は次第に明らかになるなり。

【盛位】 セイ 貴きくらゐ。韓愈、與二于襄陽一書「一一無二林木之光一」＝顯位・高官。

【盛意】 セイ 盛旨に同じ。

【盛運】 セイ ○盛世のまはり合せ。白居易、上三韋狀二表「啓二一千年之一一」＝昌運。○よき仕合。

【盛宴】 セイ 盛んなる宴會。王勃、滕王閣序「勝地不レ常、一一難レ再」＝盛宴。

【盛夏】 セイ なつのもなか。漢書、五行志「一一日長、倩以養レ物」

【盛顏】 セイ 壯年の時のさかんなる顏色。鮑照詩「一一當二少歡一翳髮先生レ白」

【盛業】 セイ さかんなる營業。禮、月令「帝用二一一一」

【盛氣】 セイ さかんなるいきほひ。又、氣をさかんにす、えらさけんまく。

【盛事】 セイ 甚だりっぱなることがら。典論「文章經國之大業、不朽之一一」

【盛指】 セイ さかんなる旨。晉書、陶侃傳「抗レ表致仕、詔曰、高讓彌篤、至意難レ違、覽二其一一一、憮然二嘿然一」＝盛旨・盛意。

【盛時】 セイ 勢のさかんなるとき。又、年わかくさかんなる時。曹植、箜篌引「一一不レ可レ再」

【盛饌】 セイ さかんなり。論衡「德惠一一、故端緊難也」

【盛秋】 セイ あきのもなか。漢書、李廣傳、注「一一馬肥、故令二折衝禦レ難也」

【盛式】 セイ 盛典に同じ。

【盛情】 セイ 御親切 ゴシンセツ

【盛者必衰】 セイシャヒッスイ さかんなるものは急る心を生ず、故に必衰の理あり。仁王經「一一、賢者必虛」

【盛色】 セイショク 美くしきかほいろ。漢書買捐之傳「夫後宮一一、則賢者隱レ虛」李白詩「一一無二十年一」

【盛飾】 セイショク さかんなるよそほひ。史、鄭陽傳「一一入レ朝者不二以レ利污一レ義」

【盛衰】 セイスイ さかんなると、おとろふると。五代史、伶官傳敍「一一之理、雖レ曰二天命一、豈非二人事一哉」＝隆替。

【盛世】 セイ 盛んにして太平の世。沈約文「值二衝圖之一一一」

【盛勢】 セイ さかんなるいきほひ。魏史、超世家「左師觸詟願レ見二太后一、太后一一而胥レ之入」

【盛儀】 セイ 盛んなる儀式。高啓詩「扈蹕諸蕃觀二一一一」

【盛況】 セイキャウ さかんなるありさま。

【盛暑】 セイ りっぱなるおくりもの。

【盛張】 セイチャウ 勢さかんにしてつよし、張は強。唐書、回鶻一一、北邊空虛」

【盛舉】 セイ さかんなるくはだて、立派なる事業。

【盛勳】 セイクン さかんなるいさを。阮籍文「元功一一、光光如レ彼、國土嘉辭、縣縣如レ此」

【盛會】 セイクワイ さかんなるよりあひ。周伯琦詩「良辰一一如レ雲從」

【盛觀】 セイクワン りっぱなるみもの。＝壯觀。

【盛京】 セイケイ 今の奉天省の治、清の太祖瀋陽より都を此に遷す、北京に遷都せし後は一一を以て陪都と爲す、東三省の一。

【盛業】 セイゲフ さかんなるわざ。杜甫詩「一一今如レ此、傳經固絕倫」

【盛坐】 セイザ 盛んなる會筵。晉書、車武子傳「武子善二於賓會一、當時稱レ有一一、而武子不レ重、皆云無二車公一不レ樂」

【盛裝】 セイサウ 美くしく立派に著かざる。＝盛飾。

【盛旨】 セイシ さかんなるむね、かたじけなきおぼしめし（孔叢子）＝盛指・盛意。

志、張遠傳「及二其未一レ合、逆二擊之一折二其一一一以安二衆心一」
【盛饌】セイセン　盛んなる酒食。論、鄉黨「布ニ一一、必變レ色而作」
【盛唐】セイトウ　唐詩を初唐・一一・中唐・晩唐の四期に分つ。一一は其の極盛時代、即ち開元より大曆に至る間。滄浪詩話「論詩如レ論レ禪、漢魏晉與ニ一一第一義也」
【盛讚】セイサン　さかんなる稱愛。漢書、谷永傳「長堪二重任一、久享ニ一一」
【盛典】セイテン　さかんに立派なる儀式。⇒盛式。
【盛怒】セイド　はげしくいかる。國語「寡君不レ能レ事二戰場之司一、使二君一一一、以暴二露于敝邑之野一」
【盛冬】セイトウ　冬のもなか。雲林異景志「一一寒至不レ燃レ火」⇒隆冬。
【盛德】セイトク　さかんなるとく。易、繫辭「富有之謂二大業一、日新之謂ニ一一」
【盛德遺範】セイトクイハン　先人の盛德と、のこれる儀範と。唐書、韋陟傳「宋璟見レ陟歎曰、——盡在レ是矣」
【盛德之士亂世所レ疏】セイトクノシハンセイノソスル　德の盛んなる士は、亂世には疏遠にせらる〔說苑〕
【盛年】セイネン　さかんなるとし。曹植、敍愁賦「迄ニ一一而始立」⇒壯年。
【盛年不二重來一】セイネンハカサネテハキタラズ　わかき時は、再び來らず。陶潛、雜詩「一一、一日難二再晨一、及レ時當二勉勵一、歲月不レ待レ人」林寬詩「白日莫二空過一、青春不二再來一」
【盛紡】セイボウ　盛澤（江蘇省吳江縣の地名、多く綢綾を出す）にて織る所の紡綢をいふ。
【盛服】セイフク　おごそかなる正裝。中庸「齊明一一、以承二祭祀一」左、宣二「一一將レ朝」
【盛服先生】セイフクセンセイ　儒紳をいふ。漢書「——不レ用二於世一、此乃桑之所二以亡一天下一也」桑の時、文學を盛んにし勇武を好む、故にいふ。
【盛名】セイメイ　さかんなるほまれ。後漢書、黃瓊傳「陽春之曲、和者必寡、一一之下、其實難レ副」
【盛名難レ副】セイメイフクシガタシ　虛名の甚だ實に過ぎる義。前條參看。
【盛禮】セイレイ　盛んなる典禮。北史、高閭傳「豈可二聖明之辰而闕ニ一一」
【盛鬢】セイビン　さかんにうるはし。史、禮書「猶レ云二盛見一紛華一一一而說上」
【盛王】セイオウ　德のさかんなる王。禮記「虞夏殷周、天下之一一也」

【盜】タウ　號

○ぬすむ（竊）○すべて私もに物を利する義。○ぬすみ。又ぬすびと「一賊」「大一」「竊一」「強一」「寇一」「劇一」

說文 次に从ひ皿に从ふ、次は涎ぶの古字、皿中の美味を見てよだれを垂れてぬすみ取らんと欲する意、俗に盜に作るは非。

同訓異義 竊・賊・竊・偸・竊○盜は人の物をとるなり、說文に「私利レ物也」とあり。莊子「盜亦有レ道」○賊は人を劫すなり、寇賊・殘賊などと用ふ、物をぬすむに限らず、大小事とも廣くいふ、盜よりはあらくはげし、舜典の「寇賊姦宄」の傳に「殺人曰レ賊」とあり。○竊は人の目をしのび、こっそりとぬすむ、竊窃・竊盜などと用ふ。○偸は人の目をはづすなり、偸レ閒とは、忙しき中より、人目をはづして、閒暇を得るなり、苟且也、偸也と註するにて解すべし。○攘は此方へ來りたるものを、とめて返さぬなり、孟子に「攘二其隣之雞一」とあるは、隣家の雞が、逃げ來りしをぬすみて、返さぬなり。

【盜竽】トウウ　ぬすびとのかしら。表異錄「一一言二盜之倡一也、竽者五音之長一⇒盜魁。
【盜汗】トウカン　ねあせ。外科祕法「一一不レ止」
【盜臣】トウシン　ぬすみするけらい。大學「與二其有一聚斂之臣一、寧有ニ一一」
【盜儒】トウジュ　言行一致せざる學者。唐書、李逢吉傳贊「夫口道二先王語一、行如二市人一、其名曰ニ一一」
【盜鈔】トウショウ　ぬすみかすめる。唐書、回紇傳「回鶻人號曰、善二騎射一、寧一一ニ一一⇒盜掠。
【盜跖】トウセキ　古の大盜の名。莊、盜跖「柳下季之弟、名曰ニ一一、一一從二卒九千人一、橫二行天下一、侵二暴諸侯一」柳下季は柳下惠。⇒盜蹠。
【盜竊】トウセツ　ぬすみ。漢書、匡衡傳「上有二好レ利之臣一、則下有ニ一一之民一」⇒竊盜・攘竊。
【盜泉】トウセン　山東省泗水縣に在る泉の名。晉苑「水名ニ一一、孔子不レ飲、醜二其名一也」
【盜賊】トウゾク　ぬすびと。周禮、小宰「以糾二萬民一、以除ニ一一」
【盜難】トウナン　圖畫物を盜まれたる災難。
【盜伐】トウバツ　他の所有の竹木をぬすみてきりとる。
【盜逕】トウケイ　ぬすむ。北史、王紫傳「ニ一一軍資」
【盜ニ名字一】トウメイジヲヌスム　名（日部三畫）の條を見よ。
【盜不レ過二五女之門一】トウハゴジョノモンヲスギズ　女子を嫁するまでには費用多くして家も貧しくなる、故に盜も五人の女子ある家には入らず。後漢書、陳蕃傳「鄙諺曰、——、以二女貧一家也」
【盜亦有レ道】トウモマタミチアリ　ぬす人にも亦その道がある。莊子「跖之徒、問二於跖一曰、——乎、跖曰、何適而無レ道耶、夫妄意二室中之藏一、聖也、入先、勇也、出後、義也、知可否一、知也、分均仁也、五者不レ備、而能成二大盜一者、天下未二之有一也」
【盜驪】トウリ　千里の馬の名、驪馬の淺黑

色にして小顆なるもの、周穆王八駿の一。種天子傳「右服二一一」【盜掠】タウリャクぬすみかすめる。唐書、史憲誠傳「攻人邑、因與一一」

【盡】ホ　皿

黍稷を盛るまるき器。‖簠。

八畫

【盞】盞（艸部十畫）に同じ。

【盞】サン　酒に同じ

さかづき。又、小さき杯、ちょく「瓦一」「杯一」「酒一」

【盟】㊀メイ・ミャウ　㊁バウ・ミャウ　敬　庚

㊀通音メイ　㊁通音マウ

㊀ちかふ。ちかひ（誓）「一約」「同一」古、神に告げて犠牲を殺し、其の血をすすりて約束を固める。○あきらか（明）○まこと（信）○蒙古にて數部落を合せて一一とす、内蒙古は六一、外蒙古は四一。㊁古、孟に通ず。一津ジンは河南省の地名。史、周紀「武王東觀二兵於一津」‖孟津。

解字 心を明かにする爲めに牲を殺し、其の血を獻りて誓ふ、故に血に从ふ、後世誤りて皿に从ふ。

同音異義 盟・萌・矢の別は誓（言部七畫）の條を見よ。

【盟友】メイイウ　したしき交を結びし友。

【誓盟】セイメイ　誓き約束を盟める、誓は矯。寒盟の對。左、哀十二「吳子使二太宰嚭一一レ、公使二子貢一對曰、盟所二以周一信也、苟有レ盟焉弗レ可レ改也已、若可レ尋也、亦可レ寒也」

【盟誓】メイセイ　かもめと交を結ぶ。世外に超然たるにいふ。陸游詩「平湖煙水一一」

【渝盟】ユメイ　約束に背く、渝は變。左、桓元「一レ一無レ享國」

【寒盟】コンメイ　誓約を守る心をゆるべるの意。盟の反對。

【盟兄】メイケイ　したしき友の敬稱。

【盟契】メイケイ　かたきちぎり。京房文「一一無レ差、邦必昌矣」

【盟主】メイシュ　同盟のかしら（左、襄二六）‖盟首。

【盟首】メイシュ　誓約書の首位に署名するもの。‖盟主。

【盟書】メイショ　ちかひのかきつけ。左傳、注「載在二一一一藏二於司盟之府一」

【盟誓】メイセイ　ちかふ、ちかひ。左傳「戮レ力同レ心、申レ之以二一一一、重レ之以二婚姻一」

【盟壇】メイダン　ちかひのには。梁州記「今門外一一猶存」

【盟府】メイフ　誓約の書を入れおく處。

【盞】ロク　皿

○こす（濾）水を濾す。周禮、考工記「淸其灰一一之」‖漉。○小さきはこ（小匣）化粧道具などを入れる小さきはこ。唐書、李德裕傳「貢脂一一數具」‖簏。○つくす（竭）水を去る。○したたる（瀝）

【盤】㊀カン・ケン　㊁カン・ケン　寒　銑

㊀上から見おろす、下に臨む「一臨」詩、大雅「天一在下」○しらべる（察）みはりをする「一察」「一督」「一視」○しめす（視）○かぬ（攝）かね守る「一國」○らゃ、罪人を一禁する所「一獄」㊁かんがみる。鏡にてしらべる。‖鑑。○めつけ、しらべる者、めつけ役「軍一」○をさ（宰領）○官署「國子一」「欽天一」○宦官、奄人。史、秦紀「因最一求二見孝公一」○かがみ（鑑）てほん（模範）いましめ「一戒」○明かなる貌。

【監禁】カンキン　人をおしこめて自由の行動をさせぬ。

【監軍】カングン　軍隊の目附役ヤク

【監視】カンシ　しらべみる。詩經「一一四方、求二民之莫一」

【監護】カンゴ　みまもる。詩經、疏「敕二令工匠一一一其事一」

【監國】カンコク　國事を監督する、古、天子諸侯の太子の任とする轉じて太子の義に用ふ。左、閔二「君行則守、有レ守則從、從曰二一軍一守曰一一、古之遺也」

【監獄】カンゴク　ひとや、らうや、獄屋ヤクオク‖牢獄。

【監査】カンサ　しらべる、監察審査。

【監査役】カンサヤク　㊀監督して檢査する役。銀行・會社の職役。

【監察】カンサツ　目をつけてしらべる。又、其の官。王逸文「一一一章下、應二對諸侯一」

【監察御史】カンサツギョシ　百官の善惡を考へ、賦役・農桑・刑獄・盜賊などを取締る官名（唐六典）

【監司】カンシ　州、又郡を監察する官。‖憲司。

【監史】カンシ　天子のさかもりを監督する職。詩、小雅、賓之初筵「既立二之

監、或佐二之史一」

【監事】カン　法律上の語、法人の財産業務の實況を監査報告する人。

【監視】カン　○めをつけてみる。漢書、張良傳「四方軽后、我監我視、威儀事服、唯事是從」‖監察。○法律にて、附加刑の一、警察官が主刑を終へたる犯人の轉居を禁じ、日常の行爲を監査する。

【監修】カン　史傳の編修を監督する。又、其の官。合監事類「ニー國史一」

【監守自盗】カンシュジトウ　法律の用語、己の主管する物を盗むをいふ。

【監生】カンセイ　國子監の學生。國士監は漢の太學、故に亦太學生と稱す。

【監奴】カン　しもべがしら。漢書、霍光傳「利光愛二幸一ー馮子都一」

【監督】カントク　目をつけてとりしまる。又其の役。後漢書、荀彧傳「上設ニー一之重、下建二副貳之任一」

【監房】カンボウ　罪人を拘へ置くへや。仕擧大辭海「獄點入ニー一」

【監本】カンポン　國子監にて刻せし書物。陸深、金臺紀聞「胡致堂論二明宗一曰、余國子監、見二木本一印レ書、又以二一一一爲レ正」

【監門】カンモン　もんばん。周禮、注「ー一門徒、轉非、五藏「繕ニー一之服、爰二不レ關於此一矣」‖守門者。

【監物】カンモツ　國官、中務省の屬官、大藏省・内務省などの出納をしらべ、兼ねて倉庫の管鑰を掌りし官。

【盡】ジン　⑪　尽は略字

○つく、なくなる。つくす(竭)器の中が空し。○みな(皆)ことごとく(悉)○とどまる(止)きはまる(極)をはる(終)○月が終る、陰暦にて三十日を大ー一と爲し、二十九日を小ー一と爲す。○いづれも。○つまびらか(詳)○まかす(任)白易居詩「ー一君花下醉青春」○まよ、俗に儘に作る。○ー一道ヒは縦令の俗語。

同訓異字　盡・殫・竭・渠・罄・既・癈・悉○盡は心部七畫の條を見よ。

○殫は殳部、殫盡也、終也と註す、皆さっぱりと、なくなる義。○竭は殘盡也と註す、臥を皆ころしつくすなり、古は單に作る。轉じて何物にても、全くつくすをいふ。韓文「財渠殫亡」

○渠は盡也、敗也と註す、よわりつくるなり。史記太史公自序「紳大用則竭」○罄は盡也、散也と註す、物のつきてさびしくなりたるなり。書經「牝雞之晨、惟家之索」○罄は器中の空しくなりたるなり、盡に同じくして、用法せまし。○既は或る限りある物が、そこまで全くつきたるなり、日食皆既の如し。○癈は、つくすと訓む、人を盡く殺すなり。○悉はことごとくとも、つくすとも訓む、無くし盡すにはあらず、一一殘らずの義、悉皆と連用す。

【盡言】ジンゲン　○十分にいさめる。周語「好ニー一以招二人過一、忠之本也、唯善人能受ニー一」‖極言。○十分に說きつくす。易、繫辭「書不レ盡レ言、言不レ盡レ意」

【盡日】ジンジツ　○ひねもす、日出より日沒まで。漢書、高祖紀「今足下ー一攻、士卒傷者必多」無名氏詩「ー一閒レ花花不レ語」‖終日。○みそか、月の最終日。

【盡心】ジンシン　こころをつくす。孟、盡心「盡二其心一者、知二其性一也」

【盡瘁】ジンスイ　心をつくし力をつからす、瘁は病。詩、小雅、北山「或燕燕居息、或ー一事レ國」諸葛亮、出師表「鞠躬ー一、死而後已」

【盡レ善盡レ美】ゼンヲツクシビヲツクス　禁美を極めつくす。禮(曰部九畫)を見よ。

【盡忠報國】チュウコク　忠をつくし、國にむくゆ。宋史、何鑄傳「何鑄引二岳飛一至レ庭、諸二其反狀一、飛顧而示之背、背有二刺涅一——四大字、深入二肉理一」

【盡頭】ジントウ　つきてなくなる處。杜甫詩「腸斷春江欲レー一、杖藜徐歩立芳洲」‖盡處。

【盡レ年】ジンネン　壽命を全うし終はる。莊子「可二以全生一、可二以ー一レ」

【盡謀】ジンボウ　はかりごとを十分につくす。後漢書、劉輔傳「百僚在レ位、皆レ忠ー一レ」

【盡レ命】ジンメイ　死を致す義。北史、魏彭城王傳「士於二布衣一、猶爲二知己一ー一レ、況臣託二靈先王一、誠應レ竭二腹脇之力一」

【盡覽】ジンラン　ことごとくみる。宋史、陳彝傳「陛下詔發天下忠武之士、必有下補二其所一レ闕以獻中賜朝廷一日萬機、勢未レ能ニー一一覽明退錫鋒「棟宇軒牖、ー一江山之勝一」‖畢覽。編覽。

【盡力】ジンリョク　あるたけの力をつくす、ほねをおり。杜甫詩「廐中老ー一レ、歲晩病傷レ心」

【盡信レ書則不レ如レ無レ書】ジンショヲシンズレバスナワチショヲナカラシムルニシカズ　書經は誤謬もあればことごとく信ずべからざるをいふ。孟、盡心「ー一、吾於二武成一取二二三策一而已矣」孟子は書經に就きて言ひたるも、廣く書傳の説として見るも可なり。

【盤】バン　⑮　槃に作る

○さら、はち、食物をもる容器「杯ー一」「玉ー一」「香ー一」左、僖二三「乃饋ー一飧」○たのしむ(樂)‖般。○大いなる岩。‖磐。○わだかまる。‖蟠。○たらひ(盥)

顔を洗ふ盥。大學「湯之ー銘」○まがる（屈曲）めぐる。めぐらす（旋）「ー回」「ー旋」「ー紆」蘇軾詩「蜀道走千ー」○ー桓（バンクヮン）は進まざる貌。又、たちもとほる（便旋）貌。○圖賣の價格「開ー」○圖ゞ物を載せる臺「碁ー」

【盤遊】（バンユウ）たのしみあそぶ。書、五子之歌「ー—無ゞ度」＝盤樂逸遊。

【盤盂】（バンウ）○飲食物を入れるさらはち。抱朴子「視二泰山一如二弾丸一、見二滄海一如ニ一ー一」○書物の名、黄帝の史、孔甲の作。漢書、藝文志「孔甲ー—二十六篇」

【盤紆】（バンウ）わだかまりまがる。史、司馬相如傳「其山則ー—澤藪」＝盤旋・屈曲。

【盤牙】（バンガ）盤互に同じ。漢書、谷永傳「百官ー—、親疎相錯」

【盤踞】（バンキョ）わだかまる。據り守る。杜甫詩「蕭落ー—雖ゞ得ゞ地、冥冥狐高多二烈風一」

【盤據】（バンコ）根據地の廣く且つ固きにいふ。全唐詩話「或說王維終南山詩、讖ゞ時也、其曰ー太一近二天都一、連山接二海隅一、言二勢焰一ニ一朝野一也」

【盤曲】（バンキョク）山路の屈曲せる處。宋書、謝靈運傳「石參差、山ー—」

【盤屈】（バンクツ）まがる。駱賓王文「根柢ー—、枝幹扶疎」＝盤曲。

【盤回】（バンカイ）まはりめぐる。韓愈詩「流水ー—山百轉」＝盤旋。

【盤桓】（バンカン）○濡みがたき貌、たちもとほる。易、屯卦「初九ー—、利ゞ居ゞ貞」○ぐづぐづして志を決せざる貌（李密、陳情表）

【盤古】（バンコ）○むかし。宋元通鑑「學紹曰、且聞、ー—至ゞ今、讖帝讖王」○古の天子の號。述異記「ー—氏、夫婦陰陽之始也」

【盤互】（バンゴ）互に入り組む、盤曲交互。漢書、劉向傳「宗族ー—」＝盤牙。

【盤谷】（バンコク）地名。明一統志「ー—在二懷慶府濟源縣北二十里一、唐李愿歸二隱於此一」

【盤根錯節】（バンコンサクセツ）わだかまりたる根と入り組みたる木節と。事の艱難に喩ふ。後漢書、虞詡傳「詡爲二朝歌長一、笑曰、不ゞ遇ー—、何以別二利器一乎」＝盤錯。

【盤錯】（バンサク）○入り組みまじはる。說苑「酒食珍味ー—ニ於前一」○盤根錯節の略。劉禹錫文「紛拏ー—、一辭而剖」

【盤散】（バンサン）びっこをひきて行く貌。史、平原君傳「民家有二躄者一ー—行汲」＝盤珊。

【盤斜】（バンシャ）めぐりてななめなり。歐陽修詩「山勢ー—隨二澗谷一」

【盤挽】（バンバン）まとひ、めぐらす。隋書、流求國傳「男女皆以二白紵繩一、繞ゞ髮從二頂後一ー—至ゞ額」

【盤石】（バンセキ）○極めて堅固なる磯。荀、富國「國安二乎盤石一、憂二於旗翼一」＝盤・磐通ず。陸龜蒙、謙守實記「親二其家一、若二泰山之固一、ー—」

【盤折】（バンセツ）まがりくねる。白居易詩「誰知中有ゞ路、ー—通二巖穴一」＝盤回・盤曲・盤盤・曲折。

【盤涉調】（バンセフテウ）音樂十二律の一、盤一に般に作る。朱子語類「般涉調、胡樂之名也、殺如二般若之般一」

【盤旋】（バンセン）○めぐりあるく。韓愈、送二李愿歸二盤谷一序「隱者之所ニー—」

【盤陀】（バンダ）○石のわだかまりて平からざる貌。蘇軾詩「中洛南畔石ー—」○馬のくら。杜甫詩「白馬金ー—」○圖ゞ鉛と純錫との合金、ー—鑞の略稱、金屬をつなぎあはすに用ふ。

【盤跚】（バンサン）うねうねとまがりたるさま。つづらをりの孟浩然詩「平田出ゞ郭少、ー—入ゞ雲長」

【盤盤】（バンバン）曲折する貌。李白、蜀道難「青泥何ー—」

【盤渦】（バンカ）ぐるぐるとめぐりてうづまく。郭璞、江賦「ー—谷轉、浚澤山頽」

十一畫

【盥】（クヮン）○たらひ、手を洗ふ盤。○手をあらふ（澡手）「沃ー—」「櫛ー—」左、僖二三「奉匜沃ー—」○そそぐ（沃）

【盥耳】（クヮンジ）汚れたる耳を洗ひきよむ。許由の故事。後漢書、崔駰傳「或掩ゞ目而潤潛、或ーゞ耳而山棲」＝洗耳。

【盥洗】（クヮンセン）てあらふ。半偕獵文「ー—朝服、立二于祚階之東一」

【盥漱】（クヮンソウ）てあらひ口そそぐ。禮記「子事二父母一、雞初鳴、咸ー—」

【盥流】（クヮンリウ）そそぎあらふ。韓愈、元和聖德詩「皇帝儉勤、ニ一陶瓦一」＝灌盥。

【盥浴】（クヮンヨク）てあらひ、ゆあみす。後漢書、劉寬傳「而時嗜ゞ酒、不ゞ好二ー—一」

【盧】

㊀ロ　㊁リ

盧（古）・鑪・爐・壚・顱・蘆等に通用す

㊀くろいろ（黒色）書、文侯之命「ー弓一、ー矢百」○火をもる器。＝鑪・爐。○ひとみ（瞳子）○

酒を賣る區、土を累ねて作り中に酒瓮を置くもの。‖壚。○飯をもるうつは。○搏捕の采の目の名、五子皆黒きもの、最勝の采。○轉じて賭博を呼ーといふ。○獰に通ず、黒き良犬の名、韓ーは戰國時代の韓國の良犬の名。○かりいぬ（田犬）○ますがた。‖櫨。○頭の骨。‖顱。○ほこのえ、矛戟の柄。○古の國名（書、牧誓）○姓、ー綰は漢人。○浦ーはあし、蘆に通ず、一說にじがばち（土蜂）○壺ーは匏の一名。○ーは大いに笑ふ貌。○ーは俄國の貨幣の名。（三）臚（内部十六畫）に同じ。○廬に同じ。

【盧橘】ロキツ　○枇杷の異名。蒙荊、今閩呼二枇杷一爲二ー一、其葉名二無愛屈一。○金柑の異名。廬は黒、金柑の生ずる時は青黒色なるが故（本草綱目）

【盧弓盧矢】ロキユウロシ　黒ぬりのゆみと矢と。書、文侯之命「盧弓一、盧矢百」注「盧、黒也」

【盧胡】ロコ　笑聲の喉の間にある聲、大笑なり。後漢書、應劭傳「親レ之者、捶レ口ー而笑」‖胡盧。

【盧仝】ロドウ　唐の濟源の人、玉川子と號す、學を好みて博覽、詩に工なり、昔て月蝕の詩をつくり元和の逸黨を誅る、韓愈其の工を稱せり、性茶を好む、謝二孟諫議（名は簡）惠二茶歌一あり。盧陸參看。

【盧附】。扁鵲（盧に家す）と兪跗と、共に古の良醫。左思、蜀都賦「神農是嘗、ー是料」注「扁鵲、盧人、姓、兪跗」一說に盧氏（古の名醫、列、力命に見ゆ）と兪跗と。

【盧陸】ロリク　盧仝と陸羽と、共に唐の人、盧仝は玉川子と號す、茶を嗜み、茶歌を作る（古文眞寶に載す）陸羽、字は鴻漸、茶事に精しく、茶經三卷を著す。

十二畫

【盪】（一）タウ。江（二）タン。陽（三）タン。寒

（一）おしうつる（推移）易、繫辭「八卦相ー」○あらふ（滌）○うごかす。○舟をうごかし行る。論、憲問「奡ー舟」○うごく（動）「震ー」○ほしいまま（放）「蕩ー」○ーは大いなる貌。（二）あらふ、器をあらふ。又心を洗ひ消める。漢書、藝文志「ー意平レ心」‖滌。（三）つく（突）搪突する、抵觸する。隋書、五行志「提刀向レ前ー」

【盭】レイ　霽　○もとる（戻、狠）背く、たがふ（違）漢書「爲人賊ー」‖戾。○あつかは、たこ（胝）○艾に似たる草、緑色の染料とす。漢書、百官公卿表「諸侯王金璽ー綬」‖綟。

【盬】コ　遇　○しほ（鹽）精製せざる鹽。史、貨殖傳「倚頓用ー鹽起」○もろし、堅牢ならず、おろそか。詩、唐風「王事靡ー」（王事はおろそかにしてはならぬ）一說に

【盭躓】レイシ　器物の堅牢ならざる貌。漢書、息夫躬傳「器用ーー」

十五畫

【盬】レイ　霽　○もとる（戻、狠）背く、たがふ（違）漢書「爲人賊ー」‖戾。○あつかは、たこ（胝）○艾に似たる草、緑色の染料とす。漢書、百官公卿表「諸侯王金璽ー綬」‖綟。

目部

【目】ボク　モク　屋

○め、まなこ、動物の視官「注ー」「瞬ー」「美ー」○みる（見、視）○あきらかにす（明）○あな（空孔）○すぢめ、きめ（脈理）「節ー」○めつき、みあはす、めざし。○めをつく、みつめる（注視）○めくばせす、目にて意を通ずる。周語「道路以ー」

○かなめ「眼ー」○となふ(稱)名つける。○こわけ「細ー」「項ー」論、顔淵「請問其ー」○かで「條ー」○な(名)なまへ(稱號)「題ー」「名ー」○試験の種別「科ー」○しなだめ(品藥品題)物事の優劣を品評する。後漢書、許劭傳「曹操微時常求劭爲己ー」○頭ーは軍の長官、かしら。○さくわん(屬官)「吏ー」○首に通ず。ー宿は首席。圓○め、拜又は耕耘などの分量を示す度。又其のきざみ。○すきま「網のー」

【目意】工人が目分量にて計り定める。韓非子「巧匠ー中ー繩」目巧。

【目下】ただいま、現在。近思錄、古人擧道、ー雖ー似ー相連、其實如ー此、乃能久相親」目今。

【目耕】讀書力學するを農夫の田を耕すに喩へていふ。世說「王祖之、家貧而好學、嘗三日絕ー糧、執ー卷不ー候、家人餉ー之、困窮如ー此、何不ー耕、王徐答曰、我常ー耳」

【目禁】めくばせして人の發言をさしとめる。後漢書、龐參傳「嵐紀論ー事于帝前、ー播宣不ー可、欲ー有ー所言、杞ー目ー亂止」

【目光如ー炬】炬はたいまつ、眼光のきらきらとして人を射るに喩ふ。南史、檀道濟傳「ー、髮」賊投ー地曰、乃壞ー汝萬里長城」

【目逆】來る人を見つめて迎へる。目送を見よ。

【目擊】親しく見る。擊は觸。莊田子方「仲尼曰、若二夫人一者、ー而道存矣」

【目見】目にて見る。說苑「耳聞之ー不ー如ニー見ー之」

【目謁】目にて意を通ずる。唐書、則天皇后傳「道路ー目」目語。

【目今】ただいま。目下。

【目算】○みつもり、目分量。○みこみ、豫定のもくろみ。

【目次】書物のみだしの順序。

【目使】めつかひする、人を見さげて使役する。唐書、王翰傳「家素二豪侈、ー一頭令、自視二王侯一、人莫ー不ー悉ー之」

【目指】めくばせにてさしづす。漢書、賈禹傳「家富勢足、ー一氣使」

【目汁】なみだ。徐積詩「所ニ以不一ー欲ー讀ニ史書一、鼻涕ー一沾ニ鬍鬚一」

【目瞬】まばたきす。西京雜記「陸賈曰、ー一得ニ酒食一」

【目食耳視】飲食物をかざり、色をつけなどして目の爲めにし、味の如何を問はず。又、時の流行を聞きて衣裳を飾り、耳の爲めにして體に適すると否とを問はず、徒に衣食の外觀を飾ひて目に奇侈に流るるを歎ぜし語。司馬溫公、迂書「嗚呼衣食之害、日甚ニ於一日一、不ニ以耳視而以ー目食一者鮮矣」

【目成】めくばせして意を通ずる。屈原、少司命「滿堂兮美人、忽獨與ー余兮ー一」

【目睛】眼のたま。高唐賦「煌煌熒熒、奪ニ人ー一」

【目眦盡裂】コトゴトクサイめを張りてにらみ視る形容。眦は皆。史、項羽紀「瞋ー目視ニ項王一、頭髮上指、ー一」

【目笑】目と目と見合せて笑ふ。史、平原君傳「十九人相與ー一ニ之、而未ー發ー之」

【目睫】睫はまつげ、極めて近き所に喩ふ。(後漢書、班固傳)

【目前】めのまへ、まのあたり。列、楊朱「ー一之事、或存或廢、千不ー識ー一」目前。

【目送】目を離さずして行く人を見おくる。左、桓元「目送而送ー之」史、周強父傳「上ー一ー之」

【目賊】盜賊語にて、烏賊。

【目代】圓昔、國守の赴任せざる時、其の代理として任國に赴き事務を執りし役。

【目算】眼力のとどかざる義。宋之問詩「ー一南浦雲、心醉東郊柳」

【目挑】めにていどむ。史、貨殖傳「今夫趙女鄭姬、設ニ形容一(中略)ー一心招、出不ー遠ニ千里一」

【目的】めあて、もて、己のめざす所。

【目的論】哲學にて萬有は悉く或究竟の目的の爲めに存在するものなりといふ說。

【目途】めあて、みこみ。

【目渡】目の光が消くして水の如きにいふ。韓事維辛「ー一澄鮮」

【目標】めじるし、しるし。

【目盲】めくらになる。老子、五色令ニ人ー一、五音令ニ人耳聾一」

【目容】めつき。禮記「ー一端」

【目覩】目で視る。南史、劉伶之傳「ー一詞訟、手答ニ牋書一」劉禹錫詩「ー一千載事、心交上古人」

【目力】めのみえるちから。孟、離婁「聖人既竭ニ目力一」

【目睫】目にて禮意を通ずる。漢書、敍傳「上以ニ伯新室一、數ー一ニ之一」

【目錄】○書中の見だし。晉書、晉志傳「有ニ手所ー作ー一」目次。○圓進物の品名。

【目論】目は能く他物を見るも、自ら其のまつげを見ること能はず、よりて他を知りて自らを知らざるにいふ。史、越世家「今王知ニ晉之失計一、而不ニ自知ニ越之過一、是ー一也」

【瞋ー目張ー膽】大いに勇氣を奮ふ形容。史、張耳陳餘傳「ー一、出ニ萬死一不ー顧ニ一生之計一、爲ニ天下一除ー殘也」

【瞑ー目】シメテカナシムカなしみてめをい

ためるの王僧孺文「痛レ心ー」、豈伊一事」

【睾レ目】ガウ 光にて目がくらむ。北史、齊孫傳「電光ー」、駿雨留濕」

【瀉レ目捕雀】スガメテトラフ 雀が見んことを恐れて己の目を塞ぎて捕へんとするも捕ふる能はず。すべて事を爲すには誠實を以てすべき誨。後漢書、何進傳「陳琳曰、諺有二瀉レ目捕レ雀、微物尚不レ可二欺以得一、況國家大事乎」

【寓レ目】グウモク めを寄せて見るの意。韓愈詩「ー一一紫翠開、安眠水非レ鏡」

【側レ目】ソバメ よこめで見る。恐れはばかりて正視せず。戰國秦策「妻ー一而視」

【屬レ目】ショク 注視する。左、定十四「師屬二之目一」

【以レ目】モク 目にて知らせる。周語「道路ー一」

【拾レ目】コロクモク 目をよろこばす。謝靈運賦「看二東山一面ー一」目悅目。

【目付】ツケ 德川時代の官職の名。旗本の士より選任す、諸事に立ち會ひて、非法を正す職。

【目見】拜謁 【不レ見二其睫一】マツゲヲミズ 目はむく毛の端を見得れども、己のまつげを見るを得ず。人は他人の事は之を見得るも、己の事は知り得ざるに喩ふ。史、越世家「吾不レ責二其所レ行之如レ目見二毫末一而不レ見二其睫一也」

【盱】 三畫

㊀カン ㊁カン 國 早

㊀しろめがち、白き部分多き目。㊁目を見張る。

【盱目】カンモク 目を張る。白虎通、聖人「ー一陳レ長、天下富昌」

【旰】 ク 國 遇

○みはる、みあける（張）目上視）○くろきひとみ。○よろこばし、たのし。○大いなり。○うれふ（憂）詩、小雅「云何其ー一」○ー一はあわてて視る貌。又、日をみはる貌。○睢ー一は小人喜悅の貌。又、質朴の貌。○ー一盱は安徽省泗州の地名。

【旰衡】ケイ 目をはりあげて見る。漢書、王莽傳「ー一厥色」注「眉上ヒレ衡、ー一舉レ眉揭レ目也」

【旰旰】ケイケイ ○あわてて見る貌。莊、寓言「而睢睢ー一、而誰與居」○目を張る貌。荀、非十二子「ー一然」

【盱】 セン 先

ー暎は遙に視て閉ヅくして未だ明かならず。＝羊眠。

【直】 ㊀チョク・チキ 國 ㊁チ 國 直・直は俗字

㊀なほし、まっすぐ。曲の對「曲ー」詩、小雅「其ー一如レ矢」ただし（正）「剛ー」「忠ー」○まがらず、すなほ（順）たひらか。○かたむかず、私なし。書、洪範「王道正ー」○ただしき心。ただしき行。○なほす、ただす。○あたる、相當する。史、平準書「爲皮幣ー一四十萬」○はべる（侍）○ただちに、すぐに、即時に。○とのる「當ー」「宿ー」とのゐする。晉書、羊祜傳「入ー一殿內」○たつ（殖）○のぶ（伸）のばす、まっすぐにする。孟、滕文公「枉尋而ー一尺」又、無實の罪をいひひらきする。韓愈、王仲舒墓誌「公獨爲ー一其冤」○わくいづみ（湧泉）○すすむ（進）○ことさらに（故）史、雷侯世家「ー一墮二其頭地下」○ただ（但）語勢をつよむるに用ふる助字。孟、梁惠王「ー一不二百步耳一」㊁あたる（値）あたひ、ねだん（物價）「價ー一」＝値。○ちんせん（貨錢）柳宗元、送二薛存義序「受若ー一憲二若事一」○國 なほす。修繕する、病を療す。

同訓異義 直・中・當・丁・方・與・存の別は中（一部三畫）の條を見よ。

【友レ直】チョクトモトス 正直の者を友とす。論、季氏「ー一、友レ諒、友二多聞一」

【直音】チオン 文法にて拗音・促音以外の音。

【直下】カチョク ました。

【直行】カチョク ○ただしくおこなふ。韓詩外傳「君子正直ー一、指二人之過一、非二毀疵一也」○國 汽車などが途中にて立ち寄らず、直に目的地に行く。

【直航】カチョク 國 船にて途中寄港せずして、直に目的地に行く。

【直角】カチョクカク 互に垂直なる二直線のなす角、九十度の角。

【直覺】カチョクカク 推理經驗などによらずして直接に知り得る。＝直觀。

【直轄】カチョクカツ 直接に支配する「ー一學校」

【直諫】カチョクカン 憚らずしてあからさまにいさめる。

【直議】チョクギ 正直に議論する。韓非子「明主在レ上、羣臣ー一二ー于下一」＝直言。

【直躬證レ父】チョクキュウハフヲショウス なほきにすぎるは卻りて道にあらざるをいふ、直躬は人名。論、子路「葉公語二孔子一曰、吾黨有二直躬者一、其父攘レ羊、而子證レ之、孔子曰、吾黨之直者異二

於是「父喪に子隆、子房父隱、直在二其中一矣」

【直系】チョクケイ　法律にて親先より子孫相續きて直線なる血族關係。傍系の對。

【直徑】チョクケイ　圓・球・楕圓等の中心を通過し、其の周に終る有限直線。

【直走】チョクソウ　はばからずして正しく宵ふ。又其の宵。左傳「伯宗每レ朝、其妻戒レ之曰、子好ニ一一一必及ニ于難一」韓愈、爭臣論「朝廷有ニ一一骨鯁之臣一」

【直如レ絃死ニ道邊一】チョクジョゲンシドウヘンニシス　正直の士の世に容れられざるをいふ。後漢書、五行志「順帝時、童謠曰、——、曲如レ鉤、反封レ侯」

【直日】チョクジツ　當直の日（國語、注）

【直情徑行】チョクジョウケイカウ　己の情をほしいままにして直に事を行ふ。禮、檀弓「有ニ直情而徑行者一、我欲レ之道也」

【直諒虛心】チョクリョウキョシン　まっすぐのふしと、うつろなるしんと、竹の形容。

【直接國稅】チョクセツコクゼイ　直接に國家に納める稅。地租、所得稅などの類。間接國稅の對。

【直接取引】チョクセツトリヒキ　國仲買人の手を經ずしてぢかに先方と取引する。

【直前】チョクゼン　ただちにすすむ。漢書、外戚傳「馮倢伃一一、當レ熊而立」

【直線】チョクセン　○まっすぐなるすぢ。○二點間の最も短き距離に相當する線。

【直道】チョクダウ　○まっすぐなる路。○ただしきみち。論、衛靈公「斯民也、三代之所ニ以一一而行一也」

【直突】チョクトツ　まっすぐなるけむりだし、突は煙突。漢書、霍光傳「見ニ其灶下一一傍有ニ積薪一」

【直方大】チョクハウダイ　正直・方正・巨大の三つ、地道の純德。よりて君子柔順の德とす。易、坤卦「——、不レ習无レ不レ利」

【直披】チョクヒ　圓名宛の人がてづから開封せんことを求める爲めに封筒の表面に記す傍付。ロ親展。

【直筆】チョクヒツ　○事實をありの儘にかく。曲筆の對。晉書、荀勗傳「時無ニ一一之史、後得ニ束ニ其譯談一」○圓その人がみづから筆を執りて書く。又其の書。ロ自筆・直書。

【直北】チョクホク　正北に同じ。史、封禪書「因ニ其一一ニ立ニ五帝壇一」

【直譯】チョクヤク　ほんやくするに原文の文句どほりに譯するをいふ。意譯の對。

【直立】チョクリツ　まっすぐにたつ。

【直遂】チョクスイ　ただしくまことである、女の直を見よ。

【直隸】チョクレイ　京師の直轄を受ける、直接關係の義。宋史、趙普傳「令ニ節鎭所ニ領州郡皆一一京師一、得ニ自奏ニ事、不レ屬ニ諸路一」

【直往】チョクワウ　○ひたすすみに進む。ロ勇往。○まっすぐにゆく。ロ直行。

【直參】チョクサン　圓直接に主人に仕へるけらい。陪臣の對。

【直訴】チョクソ　圓規定の手續を經ずして直接に君主又は長官に訴へ出る。ロ越訴。

【直錢】チョクセン　ねだん、物の價値。漢書、食貨志「黃金重一斤、一一萬」

【拳レ直】キョクヲアグ　正しきものをあげ用ふる。論、爲政「一一レ錯ニ諸枉一、則民服」

【直衣】チョクイ　圓背の服、其の制ほぼ袍と同じく、烏帽子・指貫と共に著用す。

【直會】チョクヱ　圓音、祭事を終りし後に催したる宴會。

【盲】バウ　ミヤウ　通音　マウ

○めしひ、めくら、矢明、目にひとみ（眸子）なきもの。又其の人「一人」「聾一」○くらし（暗）「暗一」○とし（疾）はけし、一風は疾き風。○雀一・雞一はとり目。

【盲啞】マウア　めくらと、をふしと「一一學校」ロ盲瘖。

【盲瘖】マウイン　めくらと、をふしと。梁書、處士傳「或躁靜陽狂、一一絕レ世、寡ニ能繼一」

【盲棋】マウキ　定石の法に合はざるどのうちかた。洪容齋詩「掠レ邊終レ手是一一」

【盲龜浮木】マウキフボク　あふことのきはめて難き喩。法華經「佛難レ得レ值、如ニ優曇波羅華一、又如ニ一眼之龜值ニ浮木孔一」

【盲聾】マウロウ　めくら。論衡「知レ今不レ如レ古、猶ニ之一一」ロ盲人・盲者。

【盲人】マウジン　めくら。世說「一一騎ニ驄馬ニ夜半橫ニ深池一」甚だ危險なる喩、眸は瞳眼。

【盲心】マウシン　心に事理を辨せざるにいふ。韓愈文「盲ニ於心一者皆是」

【盲者】マウシャ　めくら。淮南、氾論訓「毋レ貽ニ一一一鏡一毋レ子ニ瞽者履一」暗與するも益なき喩。

【盲者失レ杖】マウシャシツヂャウ　たよるところを失ふに喩ふ。陳同甫文「惘然若ニ盲者失レ杖」

【盲從】マウジュウ　是非善惡の分ちなく、むやみに人に附和して從ふ、盲人の安行に喩ふ。

【盲腸】マウチャウ　大腸の一部の小腸につづく所の稱、さきが行き止るが故に盲といふ。

【盲忘】マウバウ　心くらくして忘れる。淮南子「天下時有ニ一一自失之患一」

【盲風】マウフウ　秋吹く疾風。禮、月令「仲秋之月（中略）一一至」

【盲目】マウモク　めくら。李商隱詩「一一把ニ大節一、處ニ此京西落一」

【盲瞽】マウコ　めくらと、つんぼと。楊雄

經「一一摭遺」蘇軾詩「醉夢顚倒如二一一」

四畫

【看】カン　カン　寒　翰　俗字

○のぞむ、みる(視)「問ー」「臥ー」「愛ー」「熟ー」○見まもる「ー護」「ー守」○あしらふ、待遇。高適詩「不知天下士病作二布衣一」○訪ひうかがふ(訪候)韓非子「其姉往ー之」○人の姓。書法手を目上にかざして望み見る、故に手の下、目に从ふ。

新撰字鏡 看・見・視・觀・覽・瞻・瞰・瞥の別は見(部首七畫)の條を見よ。

【看客】カンカク　みて、見物人、閲覧者。‖看官・觀客。

【看看】カンカン　○よくみる貌。孟浩然詩「ー一似二相識一脈脈不レ得レ語」○みるみるうちに、漸くに。杜荀鶴詩「ー一水浸來時路」

【看花】カンクワ　花を見る。劉禹錫詩「紫陌紅塵拂レ面來、無二人不一レ道二看一レ花」‖觀花。

【看花馬】カンクワバ　花見に乗る小さき馬。緇流集「長安俠客、春日結レ友賞レ花、以二乘一レ肥馬一行二花下一、謂二之看花馬一」

【看過】カンクワ　○みのがす、默許する。○見すごす、目をとほす。

【看官】カンクワン　見物する人。水滸傳「ー一不レ要二心慌一」

【看經】カンキン　佛經をよむ。讀經ドキヤウ

【看月會】カンクワイ　陰曆八月十五夜の月見の會。月令廣義「燕都士庶、中秋饋二遺月餅西瓜之屬一、名二ー一一」」

【看經】カンゴ　かいはう、みとり「ー一婦」‖看病。

【看殺】カンサツ　○見る、殺は助字の張船山詩「擧杯ー一客吟身」○見ごろす。世說、容止「衛玠從二豫章一至二下都一、人久聞二其名一、觀者如二堵牆一、玠先有二羸疾一、不レ堪レ勞、遂成レ病而死、時人謂、ー一衛玠」

【看山椽】カンザンテン　山を看て樂む因緣。元好問、下二黃檢討一詩「辛苦黃檢三十里、豈知却有二ー一一」

【看守】カンシュ　○ばんをする見はり番。水滸傳「ー一寨柵」○圖監獄署にて囚徒を監守する役人。

【看レ朱成レ碧】カンシュセイヘキ　心亂れ目くらみて五色を辨ぜざる義。王衍羅詩「誰知心眼亂、看レ朱忽成レ碧」

【看錢】カンセン　見せ物の觀覽料「滿堂ー一無」

【看竹】カンチク　竹を觀る。王維詩「ー一何須問二主人一」

【看燈】カントウ　上元の夜の燈を見る。舊唐書、中宗紀「景龍四年上元夜、帝與二皇后一微行觀レ燈、因幸二中書令蘇瓌之第一、至二十四夜一、又微行ー一レ」

【看破】カンパ　みぬく、見やぶる。

【看板】カンバン　圖○商店の屋號商品などをしるして掲げるふだ。‖招牌。○興行物の外題・役者の名などをしるして掲げるふだ。○武家にて奴僕などに着せるきもの、主家の紋所をつけたる法被ハッピ‖號衣。

【看病】カンビヤウ　病人を介抱する(看護)雜阿含經「佛自往ー一」

【盼】タイ　ゲイ　霽　霽

○にらむ、恨み視る。魏志、許褚傳「瞋目ー之」○勤め苦クルシむ貌。

【盼盼】タイタイ　勤め苦みて休息せざる貌。孟、滕文公「使二民ー一飢一」朱註には恨み視る貌とす。

【相】㊀シャウ・サウ　㊁シャウ・サウ　陽　養

㊀あひ、あひたがひに(交互)「ー思」○あふ、まじはる(交)○したがふ、本質。詩、大雅「金玉其ー」○一羊は遊ぶ。‖逍遙。㊁みる(視)左傳、十一「ー時而動」○あきらむ(觀察)○うらなふ、うらなひ。○人の容貌によりて其の心術運命を判斷す、にんさうをみる。又、其の術「人ー」「家ー」○にんさう、みめかたち(容貌)「骨ー」○かたち、さま(形態)○をさむ(治)○えらぶ(擇)○たすく(賢佐・助)論、八佾「ー維辟公」○つとむ。○みちびく(導)てびき。又、めくらを案内する者。論、季氏「焉用二彼ー一與」○客をあしらふもの、接待役、かいぞへ(擯)論、先進「願爲二小ー一焉」小は謙辭。○主をたすけて事を行ふ者。○つかさ(主任者)○君主をたすけて政にあづかる大臣、百官の長「宰ー」「丞ー」「國」「輔ー」「卿ー」○きねうた、春くに杵を送る時うたふ歌。又、其の歌をうたふ。史、衛鞅傳「春者不ー一杵」○樂器、樂を節するもの。‖拊。○陰曆七月の異稱。

【相印】シャウイン　宰相のいんの白居易詩「人閒所レ重者、ー一將軍鉞」

【相器】シャウキ　宰相となるべき才器。晉書、韋賢傳「朝廷稱二有宰相之器一」

【相公】シャウコウ　宰相の敬稱。王粲、羽獵賦「ー一乃乘二輕軒一翼二四騶一」‖相君。

【相國】シャウコク　○百官の長。秦の時始めて置く。漢書、百官表「蕭何爲二丞相一、七年遷爲二ー一一」これによれば、ー一は丞相よりも尊き位。後世

は丞相をも一一と稱し、遂に宰相の通稱となる。○國太政大臣の異名。
【相才】ソウサイ 大臣たるべきはたらき。
【相式】ソウシキ ○會同などの禮式の時、主人をたすけ行るかいぞへ役。禮記「諸侯一一」
【相如駟柱】ソウジョシチュウ 前漢の司馬相如が、蜀の昇仙橋の柱に「大丈夫、不レ乘二駟馬車一、不レ復過二此橋一」と題せし故事〔蒙求〕
【相伴】ソウバン 賓客の相手。後氏私記「令二掾宇道一一、陪二酒果一」
【相府】ショウフ 宰相の官舍。通典「以二列侯主計一、居二一一一」
【相門】ショウモン 宰相大臣となる家柄の史、孟嘗君傳「將門必有レ將、一一必有レ相」
【相羊】ソウヨウ ぶらぶらとあるく。楚辭「聊逍遙以一一」 徜徉・徘徊。
【相愛】ソウアイ 相互にいつくしむ。禮記「敎二民一一、上下用レ情、禮之至也」
【相違】ソウイ 互にちがふ。漢書、王嘉傳「前後一一」
【相應】ソウオウ ○兩者互に相こたへる。齊語「式擧以一一」○つりあふ、ふさはし「身分一一」
【相憶】ソウオク 互にあひおもふ。駱賓王詩「別後能一一、東陵有二故侯一」
【相好】ソウコウ ○國かほかたち。無量壽經「身色紫金、一一特殊」○なかがよい。詩經「兄及弟矣、式一一矣」
【相互】ソウゴ あひたがひ、おたがひ。
【相工】ソウコウ 人相見、人相をみる人。史記「長安中有二一一田文者一」 相人。
【相剋】ソウコク 五行の運行にて、木は土に勝ち、土は水に勝ち、水は火に勝ち、火は金に勝ち、金は木に勝つをいふ。相生の對。
【相左】ソウサ 國 行き違ひ。
【相殺】ソウサイ ○契方さしひき勘定する。○法律にて、雙方互に同種の債務ある時、互にさし引きて義務をすます。
【相坐之法】ソウザのほう まきぞへの法律、一人罪あれば一家又は一族其の罪を受くるをいふ。淮南子「商鞅爲二秦一一一而百姓怨レ」 連坐法。
【相思】ソウシ 互に相思ふ。漢書、外戚傳「上意益一一悲感」
【寫二相思一】ソウシをうつす 人を思ふ情を書きうつす。李商隱詩「欲二將風紙一一一」
【相思子】ソウシし 互に相思ふ心を表せる文字。韓愈詩「桑榆倘可レ收、風雪二一一」
【相識】ソウシキ しりあひ、互に面識ある者。五燈會元「一一滿二天下一」
【相生】ソウショウ 五行の運行にて、木より火を、火より土を、土より金を、金より水を、水より木を生ずるをいふ。相剋の對。
【相術】ソウジュツ 人相をみるじゅつ。魏志、朱建平傳「善二一於閭巷之間一」 相法。
【相風】ソウフウ 詩、鄘風の篇名。鼠を相るにことよせて無禮を刺りたる詩。曰く「一レ有レ儀、人而無レ禮、人而無レ禮、胡不二遄死一」
【相續】ソウゾク ○前者につぐ。漢書、五行志「一一事レ政」○祖先の後を子孫がつぐ。
【相對】ソウタイ ○相互に關係をもつてみる、一方のみにては立たれず。絶對の對。○國むかひたがひ、相互。
【相當】ソウトウ ○力が互につりあふ。漢書、注「角抵者、兩兩一一」○あてはまる。的當。
【相談】ソウダン 國 互に話し合ふ。又、はなしあひ。
【相知】ソウチ しりあひ、知己。列仙傳「將レ入レ京、投二一一一」
【相地】ソウチ 土地のよしあしを考へ見る。史、周紀「后稷一一之宜、宜レ穀者種レ稑、民皆法二則之一」
【相持】ソウジ 互にもち合ふ。史、項羽紀「楚漢久一一未レ決」
【相傳】ソウデン 代代相つたへる。
【相場】ソウバ 國 其の時の物の價。○時價、市價。
【相方】ソウホウ 方角をみる。柳宗元文「經工庇材、考レ繩一レ」
【相貌】ソウボウ かほかたち、すがた。○容貌。
【相法】ソウホウ 人相をみる法。五代史、趙鳳傳「術士周玄豹、以二一一一百二人事一多中一」 相術。
【相比】ソウヒ 相周じ。世說「陸機・陸雲、中興、年皆一一」
【相風】ソウフウ かざみ。述征記「長安南有二靈臺一高十仞、有二一一銅鳥一、遇レ風則動」
【相撲】ソウボク すまう〔本朝紀原〕 角力・角觝。
【相輪塔】ソウリンとう 國 相輪陀羅尼ソウリンダラニの說に本づきて立てたる塔。○相輪樘。
【相得】ソウトク 互に心が合ふ。史、淮南武安侯傳「一一歡甚無レ厭」

【眄】

親（示部七畫）に同じ。

【盾】

㊀ ジュン
㊁ トン・ドン
旧 楯

㊀たて（楯）矢石を扞ぐ具。矛「一」「甲」「一鼻」㊁人の名。趙一は戰國時代の晉の卿。

【省】

セイ シャウ 圖

○かへりみる「反一」我に立ちかへりて考へ見る。論、學而「吾日三一吾身」○よくみる、

明かに察する。○安否を問ふ「歸」曲禮「晨ー而昏定」○はぶく、へらす「ー略」節約する「ー用」○つまびらか（審）列子「實僞之辨、如此其ー也」○あきらか（明）○あやまち（過）史、始皇紀「飾ー」○やくしょ（官廳）「中書ー」「尚書ー」○きんり（宮禁）○地方の行政上の區劃。元代、中書省を各路に置く、明清時代、支那本部を十八ーに分ち、之に盛京・吉林・黑龍江・新疆を加へて二十二ーとす。○國ヶ內閣を組織する中央政府の官衙「內務ー」「大藏ー」

同訓異字 省・顧・省○省は氣をつけてみる義、反省・省察と用ふ。○顧はふりむきてみる義。回顧と熟す。○省はふりかへりみる義、ねんごろに、したしむ意あり、省顧と用ふ。

【省改】自らかへりみて行をあらためる。漢書、成帝紀「方今世俗奢溢、國ー者、其申ニ敕有司ー以漸禁之、列侯近臣、各自ー」

【省耕】天子が巡遊の際、農耕を觀察する。孟、告子「春ー而補ー不足」

【省減】はぶきへらす。漢書、宣帝紀「方今天下少ー事、縣役ー、兵革不ー動」＝節減・削減・削減。

【省悟】かへりみさとる、反省覺悟。

【省察】かへりみてよく考へる。唐書、蕭遘妻傳「惟陛下ー」

【省寺】やくしょ、官衙。杜甫詩「文翰飛ニーー」

【省試】唐代州縣にて行ひし人才登用試驗＝貢試。

【省覲】つまびらかにしらぶ。唐書、盧鈞傳「省ニ大詔令ー必反覆ー」

【省親】他鄉に在る者が歸りて父母の安否を問ふ。宋濂文「其有ニ不ーー者、卽斥去之」＝歸省。

【省試】詔勅をすくなくする。魏志、高柔傳「見ー奸ーレ、縱ニ無治道ー」

【省方】天子が四方を巡省して民俗を觀察する。易經「先王以ーーレ觀ニ民設ーレ敎」

【省文】○文字の點畫を略して書く。異聞錄「今人作ー字ーレ、以ーレ礙ーレ凡、以ーレ處ニ爲ー處、其實皆說文木字也」＝略字・省筆。○文章の字句をはぶく。

【省墓】鄉里にかへりて父母祖先の墓にまゐる。

【省略】はぶく。魏志、楊戲傳「雖ニ性簡情ーー、未ーレ背ニ以ニ甘言ー加ニ人ー」

【省令】國各省大臣より發する政令。

眡 タン 寒 感

○ーーは虎のみおろす貌。易、顚卦「虎視ーー」○俗に耽樂の耽に誤用す。

眈 テン 先

みまはす、轉視する貌。

昉 ハウ 養

○ならふ。＝倣。○微かに見る。○仿・彷・髣に同じ、ーー髴は見てあきらかならざる貌。

眊 バウ モウ 號

○くらし、目明かならず「昏ー」孟、離婁「胸中不正、則眸子ー焉」○おいほれ「老ー」＝耄。○くらくなる、くらむ。

【眊眩】めくらむ。韓非錄「眼目ーー」

【眊悼】老幼の齡、八十を眊といふ。耄に同じ、七歳を悼といふ。未だ人と成らずして死するは悼むべし。漢書「ーー之人、刑罰所レ不レ加」

【眊眊】くらき貌。封龍子「古之謂ニ知ー道者ー、曰ニ先生ー何也、猶レ言ニ先醒ー也、不レ聞ニ道術ー之人、則冥ニ於得失ー、不レ知ニ亂之所ニ由、ーー乎其猶レ醉也」

盼 ハン ヘン 諫

○かへりみる（顧視）「恩ー」「ー顧」○めもと美くし、日の黑白の分明なる貌。詩、衞風「美目ー兮」○めづかひす、美人の目を動かす貌「流ー」

眉 ビ ミ 支

○まゆ、まゆげ、目の上の毛「蛾ー」「愁ー」○ふち、へり（邊側）漢書、遊俠傳「居ニ井之ー」○峭に通ず。峨ーは山の名。

【眉宇】まゆのあたり、眉端、額ともいふ。眉の間に於けるは家にすめるが如し、故にいふ。枚乘、七發「聞氣見ニ於ーー之間」

【眉月】三日月。白居易詩「ーー晚生砌女浦」＝新月・初月。

【眉語】眉の伸縮によりて意を通ずる事。白詩「ーー兩目笑」＝目語。

【眉宇石】硯の名。宋の徽宗、研石に眉の如き紋ある者を名づけて——といふ。蘇東坡贈ーー研歌を作る（余懷研林）

【眉壽】まゆ秀でて長命なる義。詩、小雅「樂只君子、遐不ーーー」

【眉雪】しろきまゆ、老人にいふ。韓維詩「詩翁愧ニ盛事ーー慙ニ猶殺ー」

【眉睫】ビセフ ○まゆと、まつげと。金史、趙元傳「曰、此賊也、吐二左右一縛レ之、遂伏、僚吏問二其故一、元曰、偶得二於一一間一耳」○事の極めて近く迫るに譬ふ「近在二一一一」‖眉目。

【眉尖】ビセン まゆのとがりたるさき。蔡松年詩「曲終新恨到二一一一」

【眉尖刀】ビセンタウ なぎなた（武備志）‖薙刀。

【眉黛】ビタイ まゆずみ。王勃詩「鸞鏡鳳拂亂、一一雪清幾」

【眉波】ビハ 美人のまゆ、斧は人の性を伐る許の義。蘇軾詩「慇懃未レ易レ拂、一一眞自伐」

【眉目】ビモク ○かほつき。三國志、魏琰傳「一一疎朗、甚有二威重一」○至りて近きことに喩ふ。顏氏家訓「書疏尺牘、千里一一」

【眉目如レ畫】ビモクジョガ 容貌の美なるにいふ。後漢書、馬援傳「爲レ人明二鑑遠一、——」

【眉間】ビカン まゆのあひだ。

【眉軒】ビケン 意氣のさかんなる形容。孔稚圭、北山移文「一一席次」

【揚レ眉】アゲのる意氣の盛んなるにいふ。李白、與二韓荊州一書「不レ使二白一レ一レ吐レ氣、激二昂青雲一耶」

【叢眉】ソウビ 婦女のまゆを賞く。事物紀原、梁結爲二宮中墨紅粧一眉、此婦人一レ一之初也」漢書、張敞傳「敞京兆、舉二威儀一、爲レ婦一レ一」

【作レ眉】ツクルビ 畫レ眉に同じ。唐書、安樂公主傳「方鏡一レ一」

【伸レ眉】ノバスビ 憂の去りたる形容。漢書、薛宣傳「可二復一一一於後一」‖信眉・舒眉。

【舒レ眉】ジョビ まゆをのべる、憂の去るにいふ。黃滑詩「軒然談笑一一一」

【翠於眉】ミドリヨリモ 青く畫ける眉よりも一層青し。白居易詩「巫女剛花紅二似粉一、昭君村柳——」

【明】ベイ ミャウ 庚 明とは別

みること、あきらか。

【眇】ベウ メウ 篠

○すがめ、かため、めっかち（偏盲）一方の目が小いさし。又其の人。○ほそし（細）ちいさし（微小）すがめ（末）○とほし（遠）○つくす（盡）○目をほそく開きて視る。○杳一は遠く視る貌。○たへ（精微）漢書、元帝紀贊「劉二極幼一」‖妙。○なる。なす（成）○一然はこまか（微細）なる貌。○要一は好き貌。

【眇忽】ベウコツ ○極めて少き數、忽は小數の名。○かすかにして辨識し難き、形容。司馬相如賦「眇忽荒忽、若二神仙之髣髴一」

【眇視跛履】ベウシハリ すがめにして明かに視んとし、あしなへにして遠く履まんとするは、危地に陷るを免れず、力足らざる者の、強ひて事を行ふは禍を招くに至る喩。易、履卦「眇能視、跛能履、履二虎尾一咥レ人凶」

【眇身】ベウシン 細小なる身といふ謙辭。漢書、武帝紀「朕以二一一一、託二于王侯之上一」

【眇小】ベウセウ たけ短し、せい低し。史、孟嘗君傳「始以二薛公一爲二魁然一也、今視レ之乃一一丈夫耳」

【眇然】ベウゼン ○細かき貌。○遠き貌。○寡、聖主得二賢臣一、宜一一經二營離レ世哉」

【眇跛】ベウハ めっかちと、あしなへと。北史、魏孝文帝紀「車駕至二雍州一、路見二一一一、停レ駕親問、賜二衣食一、復二終身一」

【眇風】ベウフウ 衰敗せる風俗。後漢書、馮衍傳「照二道德之光輝一兮、回二衰世之一一一」注「眇、微也」

【眇眇】ベウベウ 微小なる貌。史、始皇紀贊「人以二一一之身一興レ兵誅二暴亂一」

【眇末】ベウマツ ちひさくかすかの又其のからだ、眇身に同じ。後漢書、和帝紀「詔曰、朕以二一一一寧二承祖烈一」

【眇日】ベウジツ すがめ。南史、梁元帝紀「武帝夢二一一僧執二香爐一」

【眄】メン 霰 篇

○ながしめに視る「流一」「顧一」「遊一」陶、歸去來辭「一一庭柯以怡顏」○よこめにらむ（邪視）史、鄧陽傳「按劍相一」○意をかたよせ傾くるにいふ。

【眄視】ベンシ ○ながしめにみる、よこめにみる。戰國策「馬レ兒授レ女、一一指使、回面役之人至」

【眄睞】ベンライ ○橫目にみる貌。○鮑溶賦「日一一兮遠曙、○智巧のなき貌。謹愼、筮筮臥倨貌。興一一一

【眄睨】ベンゲイ 睥睨のかすむる貌。晉史、梁武帝紀「一一則目光燭レ人」

五畫

【眇】ビウ 篠

○視る貌。○一一はふかくとほし（深遠）

【眗】ク 遇

○左右のまなこ。○左右のまなこにて視る。

【眩】ケツ 屑

○みる、熟き視る。○目の深き貌。

【眩】㊀ケン・ゲン 銑 ㊁ケン・ゲン 霰 紙

㊀目がくらむ、めまひ(眼花)○くるめく、くらむ(亂視)○くらし、まどふ(惑)中庸「敬大臣則不ㇾ眩」みだる(亂)○くらます。○まじる。まじふ。㊁てづま(魔術)「一人」幻。

【眩暈】ゲンウン めまひ。めくらむ。又、其の病名。貧血、又は神經衰弱等によりて起る。

【眩惑】ゲンワク 目がまばゆきほどにかがやく。目耀眩。

【眩耀】ゲンエウ めまひするやうひ。後漢書、姜肱傳「言惑ニ一不ㇾ欲ニ聽ㇾ風」目眩疾・眩惑。

【眩人】ゲンジン 魔法つかひ。史、大宛傳「以ニ大鳥卵及黎軒善ニ一幻ニ一人ニ一漢」

【眩瞑】ゲンメイ まことの如くにくらます。景福殿賦「多聞多蘊、多能ㇾ一」

【眩瞀】ゲンボウ めくらし。主情迷文「ㇾ比日一一史裝」

【眩瞑】ゲンメン めまひ、めがくらむ。目眩。

【眩目】ゲンモク めをくらます。

【眩惑】ゲンワク くらましまどはす。くらみまどふ。淮南子「世俗之所ニ一一也」

【眞】シン 眞

○まこと、ほんたう。僞・假・虛假などの對。後漢書、馬援傳「帝王自有ㇾ一也」○まことに、實に「一個」「一成」○ただし(正)「一正」○あつし(淳)○くはし(精)○まことの道「一理」又、自然の道。○道教の奥義。又、其の奥義を究めたる人を一人といふ。○もと(原質)○たましひ(神氣)○書法の名。草・行の對。目楷。○寫一は肖像。○玄一は玉の別名○州の名、江蘇省低微縣の治。

同訓異字 眞・誠・固・實・允・良・諒・荷・洵の別は[人部七畫]の條を見よ。

【眞一】シン まことのこころ。陶潛詩「此中有ニ一一欲ㇾ辨已忘ㇾ言」

【眞印】シンイン 圖眞誠の印證。書言故事「諸ㇾ佛ニ一ㇾ證不ㇾ像之一一、神通變化佛衣一來、得ㇾ道者、隨付ニ一與ニ一眞印ニ一至二大經ニ無ㇾ修ㇾ斷」

【眞一】シン ○まことのすがた。法華文句「勝義既結、一一來現」○圖寫眞「御ㇾ一一」

【失ㇾ眞】シッシン まことを失ふ。李白詩「模放不ㇾ倒ㇾ古、時識者一一」

【保ㇾ眞】ホシン うまれつきの眞性を保ちて失はず。屈原、卜居「寧超然高舉、以一一乎」

【全ㇾ眞】ゼンシン 天より付與せられしわが自然の眞性を完全にたもつ。莊子、齊物論「固能一一ㇾ一ㇾ和」目保ㇾ眞。

【守ㇾ眞】シュシン 生れしままのまことの性を守る。後漢書、申屠蟠傳「安ㇾ貧樂ㇾ道、味ㇾ道一一」目保眞。

【眞香茗】シンカウメイ 茶の一種。述異記「巴東有ニ一一、其花白色、如ニ薔薇一、煎服令ニ人不ㇾ眠能通ニ無ㇾ眠」

【眞假】シンカ ほんものと、かりのもの。

【眞贋】シンガン ほんたうのものと、にせものと。

【眞義】シンギ まことの意義。

【眞低】シンテイ まことと、いつはりと。漢書、賈帝紀「使一一相亂ニ已」

【眞金不ㇾ鍍】シンキンフト 眞正の黃金は鍍ㇾするを要せず。眞才ある者は飾るに及ばざるに喩ふ。李紳詩「假金方用ニ眞金一鍍、若遇ニ眞金一不ㇾ鍍ㇾ金」

【眞境】シンキャウ すこしの汚もなきすぐれてよき場所。仙人などの住む地。宋史、樂志、導引曲「遂乘ニ遊仙一、金碧照ニ空山一、一一勝ニ人間一」

【眞紅】シンコウ こきくれなゐ、まっか。

【眞空】シンクウ ○圖一切の色相意識を超出せし所。李商隱詩「土中悟ニ一一」○物理學にて空氣もなき全くのから。

【眞劍】シンケン ほんたうの刀。木劍・竹刀などの對。通典「陪ㇾ位則帶ㇾ劍」注「木劍也、言ニ其象ニ一一」

【眞個】シンコ まこと、個は助字。趙嘏詩「謫仙一一是仙才」

【眞言宗】シンゴンシュウ 佛教の一派。佛の滅後七百年龍猛菩薩之を傳ふ。唐の初、善無畏三藏東に來る、是を支那に於ける初祖とす。僧空海唐に至り悉果に就きて學び、我國に傳ふ。目密宗。

【眞宰】シンサイ 道家にて天をいふ。莊齊物「若有ニ一一而特不ㇾ得ニ其眹一」

【眞相】シンサウ まことのありさま。李紳詩「一一有無因ニ色界一、化城興滅在ニ浮基一」

【眞宰】シンサイ まじめ、攀はまじめ。

【眞實】シンジツ まこと、虛僞ならず。眹為經「所ㇾ言一一者、應ㇾ驗ㇾ無ニ僞言一」

【眞人】シンジン ○道教の奥義を悟り得たる人。莊子「古之一一、其寢不ㇾ夢、其覺無ㇾ憂」目至人・眞仙。○仙人の別稱。

【眞情】シンジョウ ○まことの心、まごころ。○實際のありさま。

【眞主】シンシュ 眞に天子たる資格ある天子。後漢書「今劉氏復興、卽一一也」

【眞珠】シンジュ 眞珠貝の殼内に生ずる一種の珠、圓くして銀色を帶ぶ。目珍珠。

【眞珠船】シンジュセン 眞珠をもて飾れる舟。特に優れたるものに喩ふ。日孚紀聞「王羲之云、觀ㇾ書畫ㇾ得ニ一一趣、如ㇾ得ニ一一一一」

【眞僧】シンソウ 眞の立派なる僧者。僭僞。

陪僞などの詩に揚子法言「如用ニ一ニ天下無レ敵」‖君子儒。

【眞摯】シン　まことのおもしろみ。王禹偁詩「恨レ被得ニ一ニ懐レ古生ニ遠思ニ」

【眞正】シン　ほんたう。

【眞成】シン　ニ、實に。王昌齡詩「一ニ清命」

【眞性】シン　天然のうまれつき。司空曙詩「少閑何處無ニ一ニ」

【眞迹】シン　眞實の筆跡。錢林玉鑑「見ニ其一ニ」‖眞蹟・眞跡・眞筆。

【眞路】シン　前條に同じ、蹟は筆のあと。

【眞俗】シン　眞人に同じ。

【眞諦】シン　眞理、まことのみち。俗諦と合せて眞俗二諦といふ。大藏法數「一ニ者、對ニ二性本實之理ニ也」

【眞如】シン　圖眞は其の體虛妄ならざる義、如は如常の義、變化せざる一切萬有の眞性をいふ。起信論「一ニ之體、離ニ名字相ニ、離ニ心緣相ニ、離ニ言說相ニ、故名ニ離言ニ一ニ」

【眞如ノ立】シンニョノリフ　楷書は人の立てる如し。東坡志林「一ニ、行如レ行、草如レ走、未レ有ニ未ニ能立能行ニ而能走者ニ也」

【眞皮】シン　皮膚の表皮の下にあるかは、神經及血管を含むもの。

【眞筆】シン　其の人が手づから書きたる筆跡。晉史「周昉丹青見ニ一ニ」‖眞迹・眞蹟。

【眞本】シン　眞正の書物。南史、王琳傳「三輔舊書、相傳只爲ニ一班固ニ一ニ」

【眞味】シン　まことのあぢはひ。歐陽修詩「子言古淡有ニ一ニ」

【眞理】シン　まことの道理。方干詩「閑ニ僧說ニ一ニ」

【眞砂】シンサ　圖こまかきすな。‖細砂。

【眞】

眞（前條）の俗字。

【眕】シン　軫

○おもんず（重）○こらへしのぶ（忍）安んじ重んずる貌。左、隱三「憾而能ニ一者鮮矣」

【眩】シュン　願

○まじろく（目動）‖瞬。○めくばせす、目が動きて意を通ずる。

【眚】

㊀セイ　㊁レン　㊂サイ　梗　靑　靜

又、眦に作る

㊀まなじり（目尾）決ニ一ッはまなじりをさく、目をむく。○衣服の襟の交る處のあはせめ。㊁にらむ、恨み視る「睚ニ一」

【眦】

眚（前條）に同じ。

【眚】セイ　梗

○めのやまひ、目がかすむ、くもる。○わざはひ（災）「災ニ一」「妖ニ一」○あやまち（過失）○はぶく（省）へらす、そぐ（殺）

【眚災】セイサイ　過失又は災難によりて犯したる罪。書、舜典「ニ一肆赦」‖災眚。

【眙】

㊀チ　㊁イ　支　寘

㊀みる、みつめる。○おどろきて目を見はる「愕ニ一」㊁目を擧ぐる貌、みあぐ。○盱ニ一は安徽省の縣名。

【眙縣】イケン　おどろきみる。唐書、杜伏威傳「突騎破レ陣、衆ニ一不レ及レ救、皆哭服」

【昧】バイ　泰　隊　通音マイ

日くらし、目明かならず。左、僖二四「目不ニ別五色之章ニ一」

【眛】バツ　屑

○目明かならず、くらし。○人名、鍾離ニ一は項羽の將。

【眠】ベン　先　通音ミン

○ねむる、いね（寢）「安ニ一、快ニ一」「熟ニ一」「醉ニ一」後漢書、第五倫傳「竟夕不ニ一」○ねむり。○いつはりしぬ（佯死）○草木の僵すにいふ。三輔故事「漢苑有ニ一柳、如ニ人形ニ一、一日三ニ一起」○睡眠

【眠牀】ベンショウ　ねだい。李建勳詩「馬語頻到路、僧傳偶ニ一ニ」

【眠食】ベンショク　○ねむりと、食事と。○圖史、陸澄傳「行坐ニ一、手不レ釋レ卷」‖寢食。○轉じて人の起居にいふ。韓愈、與ニ孟簡尙書ニ一書「未レ審入レ秋來、ニ一何似」（何似は何如）

【眠睡】ベンスイ　ねむる。ねむり。晁補之詩

「一生所ニ未ル免、飲食與ニ一ニ」

【睿】 エン　ヱン　㊀元　㊁霰

○めしひ、めくら、目がつぶれる。○轉じて井の潤れて水なきにいふ。

【睿井】井水のかれたるもと。左、宣十二「日ニ於ニ一ニ而圧レ之」ニ廢井。

【眠】 シ　㊁霽

みる。ニ視。

【眙】 直（見部五畫）の吉字。

【眷】 眞（心部十畫）の吉字。

六畫

【眼】 ガン　㊁諫

○め（目）まなこ、めだま「一球」「一光」「碧一」「青一」「綠一」「金一」○あな（孔穴）「窗一」「銀一」「泉一」○目だまの狀をなすもの。屋一はあふぎのかなめ。○物事のかなめ（要點）「字一」「主一」○みる。○龍一（リュウガン）は支那の南方に產する果。

【眼穿】（ガンセン）人を想望する情の切なる喩。韓愈詩「一一長訝鯉魚斷、耳熱何辭數緯頻」ニ望眼欲レ穿。

【放レ眼】（ガンセン）目を十分に開きて廣く見わたす。白居易詩「一レ一見ニ青山ニ任ニ頭生ニ白髮ニ」

【眼下】（ガンカ）眼前に同じ。白居易詩「一一來ニ海寒ニ」

【眼界】（ガンカイ）めに見ゆるかぎり。王維詩「一一今無レ染、心空安可レ迷」白居易詩「一一春ニ衾席ニ」

【眼角】（ガンカク）まなこのすみ。宋史、五行志「理宗朝、宮妃粉ニ黥一一、名ニ淚妝ニ」

【眼睫】（ガンセフ）まぶち、睫は通じて民に作る。歐陽修、憎ニ蒼蠅ニ賦「驅ニ集ニ眉睫ニ」

【眼花】（ガンクワ）めのかすむ事。杜甫、飲中八仙歌「知章騎レ馬似レ乘レ船、一一落井水底眠」

【眼科】（ガンクワ）眼に關する醫術。

【眼瞼】（ガンケン）まぶた。ニ眼睫・目瞼。

【眼前】（ガンゼン）目くばせして意を通ずる。五代史「天子與ニ宮人一一、而慕下者ニ兵仗室ニ恐公不レ免也」ニ目語（唐書、則天皇后傳）

【眼孔小】（ガンコウセウ）見識せまし。海錄碎事「指大一一腸ニ與ニ十萬貫ニ則塞ニ破屋子ニ矣」

【眼孔大】（ガンコウダイ）見識の大いなる義。唐書、安祿山傳「祿山一一、毎レ令レ笑レ我」

【眼末】（ガンマツ）めだまのひかり。ニ眼光。

【眼識】（ガンシキ）善惡を見分けるはたらき。梁簡文帝文「一一無レ明、易レ辨ニ朱紫ニ」

【眼珠】（ガンジュ）目だま。博雅「目謂ニ之一一ニ子謂ニ之眸ニ」

【眼睛】（ガンセイ）めのたま。傳燈錄「山河大地、不レ礙ニ一一ニ」

【眼前上】（ガンゼンジヤウ）ひとみのまへ。指月錄「國師若在ニ三藏ニ上、有ニ尚難一レ見、豈不レ知ニ國師在ニ三藏一一ニ」

【眼前】（ガンゼン）めのまへ。晉書、郗鑒人事少、出ニ山遊一一ニ」ニ目前・眼下。

【眼線】（ガンセン）犯罪偵人、刑事探偵。

【眼中丁】（ガンチウテイ）次條に同じ。南宋の時、丁謂を惡みて時人が眼中丁と言ひしは釘をさすと洒落たるなり。燼餘錄通鑑長編「丁謂讒ニ陷寇公、天下論曰、欲レ得ニ天下寧、須レ拔ニ一一、欲レ得ニ天下好、莫レ如レ召ニ寇老ニ」次條參看。

【眼中釘】（ガンチウテイ）目の中に釘あれば苦痛に堪へず、よりて强人に喩ふ。五代史、趙在禮傳「在禮在ニ宋州ニ人尤苦レ之、已而逐去、宋人宴而相謂曰、眼中拔レ釘、豈不レ樂哉」

【眼中人】（ガンチウジン）なじみの人、想望する所の人。何遜詩「不レ見一一、空想山南客」杜甫詩「眼中之人吾老矣」

【眼中無レ人】（ガンチウナシ）自らたかぶりて人を人とも思はぬ。ニ傍若無人。

【眼波】（ガンパ）女子の媚を呈するめつき。黃庭堅詩「女兒浦口一一秋」ニ秋波。○めづかひ。杜牧詩「傳報一一須ニ種當」

【眼目】（ガンモク）○めつき。北史、周太祖紀「此小兒一一異」○めざすところ、要點。傳燈錄「參學一一、臨レ機直須ニ大用」

【眼力】（ガンリキ）目のちから。劉禹錫詩「滅レ盡存ニ一一、省レ事養ニ神王」ニ目力。

【眼窩】（ガンクワ）眼球の入りてゐる穴。

【眭】 ㊀キ　㊁ケイ　㊀支　㊁霽

㊀くぼみたる目（深目）くぼみたる目にて惡だれ視る。○目があなのく、みあぐ。㊁にらむ。

【眶】 キャウ　㊁漾

まぶた、眼だまの上下をおほひ護る皮（目尻）「一瞼」「眼一」ニ目尻。

【眺】 チョウ　㊁嘯

目明かならず、くらし「一一」

【眷】 ケン　㊁霰　㊂瞼に作る　又

○かへりみる（顧）心がむかふ、思ひ戀ふ「一戀」○ねんごろ、あつし。○みうち、親族「一

屬」「親ー」○めぐみ、いつくしむ(愛)めをかける(恩顧)「恩ー」「殊ー」「深ー」「優ー」「垂ー」詩、大雅「乃ー乃顧」

【眷】ケン 同部四畫の條を見よ。

【眷】ケン 同視する貌、かへりみる。朱灌詩「ー一揆二兩光一、中夜歎以驚」＝眷然。

【眷遇】ケングウ めをかけてもてなす。晉安帝詩「帝鄉ー一殊、曲宴鈞二恩修一」

【眷眷】ケンケン かへりみる貌、ねんごろに厚く思ふ。詩、小雅「ー一懷顧」一本瞻瞻に作る。同じ。北史、成淹傳「夫酉主者一不レ拘二小節一、豈得ニー一守二尾生之信一」

【眷顧】ケンコ なさけをかけてかへりみる。詩、大雅「乃眷乃顧」

【眷顧】ケンコ めぐみをかける。晉書紀聞「鑽二草木之微一、偏加ニー一」

【眷然】ケンゼン 思をかけてかへりみる貌。陶潛、歸去來辭序「ー一有二餘與之情一」＝眷焉。

【眷屬】ケンゾク 家族。雲笈七籤「億誠ー一、千載子孫」＝家眷・眷屬。

【眷注】ケンチュウ 思をかけてかへりみる。正字通「ー一猶レ所レ鍾也」

【眷命】ケンメイ いつくしみ思ふ、ひいき。戴、大禹謨「皇天ー一、命二有四海一、爲二天下君一」注「眷、顧也」

【眷戀】ケンレン 思ひしたふ。晉書、庾亮傳「哀悲ー一、不二敢違距一」

【眴】

㊀ケン・ゲン ㊁シュン ㊂ジュン

㊀目動く、めくばせす、目にて意を通ず。史、項羽紀「項梁ー一籍曰、可」行矣」○あざやか(鮮明)「ー一煥」○ーーはすなほ(柔順)なる貌。又、目動きて視ること明かならず。○めくらむ。＝眩。㊁またたく。＝瞬・瞤。

【眴眴】ケンケン ○目動搖して明かならず。素問「腎病者目ーー然」○柔順なる貌。管子、小問「苗始其少也ーー乎、何其孺子也」

【眴轉】ケンテン 視ること明かならず。雅、四都賦「目ーー而愛遷」

【眇】

シ 支

○めやかに(目汁凝)○皆ヲを傷める。

【眇昔】シセキ 目がかすみてくらし、眇はめやかに。韓愈、短燈檠歌「夜書細字蚤二語言一兩目ーー頭雪白」＝眯昔。

【眯】

ベイ・マイ ㊁ヒ・ミ 薺 霽

㊀塵などが目の中に入る。莊、天運「夫播糠ー一目」まどひ視る。㊁夢におそはる。莊、天運「彼不得夢、必且數ー一焉」＝魘夢。

【面】

メン 霰

○ひとみ(眸・目精・目童子)○きざし(兆)莊、齊物「而特不レ得其ー一」

【眩】

ケン 霰

○ながむ、のぞむ、遠きを視る、ながめ見わたす「登ー一」「遙ー一」「臨ー一」「週ー一」又ながめ、見わたす景色。○蠱惑して目正しからず。

【眩瞀】ケンボウ 眩・瞀・瞑・瞢の別は望(月部七畫)の條を見よ。

【眩瞑】ケンメイ 遠くながめる。眩は見つめる。晉書、桓溫傳「ー一中原」

【眺望】チョウボウ 遠くながめる。禮、月令「仲夏之月、可レ以居二高明一、可レ以遠ー一」

【眺覽】チョウラン 遠くながめる。晉書、天文志「八維絕二ー一、千里東旌旗」

【眠】

ベン ミン 先 霰

○ぬすみみる。○ーーは姦人の視る貌。又、互に相視る貌。古詩「ー一不レ得レ語」

【眸】

ボウ ム 尤

○ひとみ(目童子)＝牟。○め(眼)「放ー一」「倒ー一」「雙ー一」

【眸子】ボウシ ひとみ。孟、離婁「存二乎人一者、莫レ良二於ー一一」

【眸晴】ボウセイ ひとみ。＝眸子・瞳子。

【眙】

七 畫

ガ 歌

のぞむ(望)みる(視)

【睇】

キ 霽

○のぞむ(望)みる(視)○したふ(慕)こひねがふ、希に通ず。

法言、學行「一」顔之人、亦顔之徒也」顔は孔子の高弟顔回。

【睆】 クヮン　㊥

○大いなる目。日出づる貌。‖晼。○果實のみのる貌。詩、小雅「有ニ其實一」○星の明かなる貌。詩、小雅「一彼牽牛」○睆一は好き貌。又、音のまろぶ(圓轉)如く好き貌。○うつくし(美好)き貌。禮、檀弓「華而一、大夫之資與」○見わたす、きはめみる(窮視)貌。

【睆睆】クヮン　きはめ視る貌。詩、大雅「一一鸛在ニ梁一、君子之車一」

【睍】 カン　㊥㊦

○大いなる目。○目出づる貌。左、宣二「一其目」‖睆。

【睍】 ㊀ケン　㊁ケン・ゲン　㊥㊦

㊀一一は小視(ヌスミ)の貌。○目めらはれいづ。又、出でたる目。○一睆は好き貌。㊁目小さし。又、小さき目。

【睍睆】ケン　羽毛の好き貌。一說に聲のこゝろがる如く清く好き形容。詩、邶風「一一黃鳥、載好ニ其音一」

【睍睍】ケン　小しく視る貌。唐書、韓愈傳「俛ニ首下ニ心、色他一一」‖俔俔。

【睘】 ケン　㊥

一一は目を側てて相視る貌。恣恨(イカリ)して邪視(ヌスミ)する貌。孟、梁惠王「一一睊睊、胥讒、民乃作ニ慝一」

【睊】 ㊀セン　㊁カン・ケン　㊥㊦

○ほつけ。‖睆。㊁すがめ。すがむ(眇)韓非、說林「一其一目一」

【睇】 テイ　ダイ　㊥㊦

○ぬすみみる(小視)ながしめにみる。「流一」○よこめ(傾視)「邪一」

【睇視】ナガシメ　ながしめにみる。李唐詩話「一一不ニ已一」

【睇視】テイ　傾き視る。禮、內則「在ニ父母舅姑之所一、不ニ敢一一一」

【睇眄】ベン　よこめにみる。眄は斜視。物記「毋ニ淫視一」注「淫視、一一也」疏「目當ニ直瞻視一、不ニ得ニ流動邪眄一也」阮籍、詠懷詩「素髮發ニ朱顔一、一有ニ光華一」

【睢】 ㊀キ　㊁スキ　支　支　㊥

㊀みあぐ、目を仰ぐ、驚きて目をみはる。○ほしいまま(恣)「恣一」いかる(怒)そしる(毀)㊁川の名、汴水の支流。○陽なは縣の名、其の故城　今の河南省商邱縣の南に在り、唐の張巡、許遠此を守りて安祿山に抗し、江淮を屏蔽す。

【睢睢】キ　仰ぎ視る貌。漢書、五行志「萬衆一一、驚怪迷目」

【睢盱】クヰ　○小人の喜悅する貌。又、貪朴なる貌。王延壽賦「洪荒朴時、厥狀一一」○ほしいまま(跋扈)なる貌。又、仰ぎ視る貌。莊、寓言「面睢睢盱盱而誰與居」

【睨】 ゲイ　㊥

○にらむ、ななめにみる(睥)「睥一」「傲一」「辟一」○うかがふ、みる。○目斜なり。

【睡】 コン　元　㊥

日くらし(昏)

【睟】 スキ　㊥

○つやつやし、潤澤(ウルホヒ)のある貌。○視ること正しき貌。○目清く明か。○もっぱら、まじりなし(純)‖粹。○天の名。九天の一。太玄經「五爲ニ一天一」

【睟然】スキ　和らぎてつやのある貌。孟、盡心「一一見ニ於面一」

【睡】 スキ　㊥

○ねむり(坐寐)倦みて目を閉づ「坐一」○ねむる。ねむり(眠)「午一」「熟一」「酣一」「昏一」

「伴ー」「陽ー」○冬の山の慘淡たる形容。郭熙、山水畫記「冬山慘淡而如ー」

【睡隆】陳希夷（摶）をいふ。宋耳集「華山陳眞人隱二於睡一、小則夏ノ月、大則幾年方一覺」

【睡癖】ねむりがたけなは。李頻詩「睡癖悠悠覺、春山睡正酣」

【睡郷】ねむりし間の心のおちつきどころ。陳與義詩「ー深處作二奔雷一」

【睡臥】横になりてねむる。韓非子「說法十餘萬而ー矣」

【睡語】ねごと。原漢註「或寢而多言者、俗云ニーー」

【睡相】ねむりて居て政を聽かざる宰相。事文後集「徐光溥爲ノ相、論二時事一、大爲二李昊所一レ挾、光溥後不レ言、每二家讌一、假寐而已、時號ニーー」

【睡熟】十分にねむる。李賀詩「夜遙燈焰短、ー小屏深」

【睡仙】ねむりつつ行く仙人。神仙拾遺傳「夏侯隱登ノ山渡レ水、每開レ目輒睡、同行者聞二其鼻鼾之聲一、而步不二差跌一、時號ニーー」次條參看。

【睡鄕】ねむるくせ。齊東野語「杜牧有ニーー、夏侯隱號ー仙」

【睡魔】ねむりを催させる神。蘇軾詩「建茶三十斤、不レ靡二味如何一掌二贈包居士一、借レ君戰ニーー」

【睡味】ねむるここち。陸游詩「春濃日永有二佳處一、ー著レ人如二蜜甜一」

【睡眠】ねむる。ねむり。李咸用詩「擁レ芳爲ノ藥隱ニーー」

【睡餘】ねむりのさめたるのち。黃庭堅詩「ー清味在二胸中一」

【睡蓮】蓮の一種、夏の末、白色重瓣の花を著け、日中に開き未の刻以後に閉づ、ひつじぐさ「ー科」

【睛】セイ　シャウ　支　睛とは別

ひとみ、目の中の珠子「眼ー」「瞳ー」「黑龍點ー」通じて精に作る。

【睜】セイ　梗

目をみつめる、目を張りて見る。

【睒】セキ　陌

睒ー はいさがはしくみる（急視）貌、又、いなびかり。

【瞜】セフ　葉

まつげ、まぶたの縁に生えてゐる毛「ー毛」「交ー」

【瞜】セン　銑

○暫く視る、ぬすみみる。○うかがふ（窺）○いなびかり（電光）○光輝の晶熒（カガヤクニ）なる貌。

【瞜瞜】いなびかりの韓愈詩「雷電生ニーー」

【瞜瞜】光のかかやく貌。韓愈詩「大白ー」

【督】トク　沃

○ひき（察視）みはりをする（監察）「監ー」「ー戰」○ひきゐる（率）身を以て下を率ゐる。すべる（都）○うながす（催）「ー促」「催ー」○すすむ（勸）○いましむ（敕戒）「教ー」○ただす（責）○ただし（正）○あつし（篤）○かんがふ（考）○とがめる、せむ（責）「ー責」○をさ（主長）○多くの人をすべひきゐる人、大將「都ー」「總ー」○なか、まなか（中央）○衣服の背にあたるぬひめ、せぬひ。莊、養生主「緣ー以爲經」○家ーは長男。○ー亢ノトクは戰國の燕の地名。史、刺客傳「獻二亢之地圖一」○基ーは耶蘇。

【督郵】ノ官の名、郵は尤ノ郵ち過失の信字。謝承、後漢書「陳慶家貧、爲二郡ー一、乘二牛車一、郷里號曰二都車ー一」

【督學】學事を監督する。又、其の人。

【督ノ軍】軍隊を率ゐ統べる。

【督逋】あやまちをただしせむ、督は責。戰國策「唯大王有レ意ニーー之一」

【督課】其のわりあてたる仕事を監督する。宋書、文帝紀「漸食者寡、荒棄不レ闢、ー無レ聞」

【督勸】ただしすすめる。晉書、食貨志「ー開レ荒五千餘頃」

【督察】ただしみる。唐書、李嗣傳「ニー姦詐一案二訪風俗一」

【督視】しらべみる。方岳詩「一登ニーー府一、兩觀三大宇宙一」○監視。

【督責】ただしせむ、うながしせむ。史、李斯傳「賢主者必且能全レ道而行ニーー之術一者也」

【督ノ殺】たたかひを監督する。唐書、裴度傳「詔身ーレー」

【督租】みつぎものを監督する。北史、魏太祖紀「先ニーー于冀州一」

【督促】うながしせまる、催促する。漢書、成帝紀「持レ節ーー運補」○督道」

【督率】監督しつつひきゐる。晉書、王濬傳「使二主部ニーー所一レ統」

【督迫】うながしせまる。宋史、食貨志「科斂侵漁日甚、其咎繇レ在二縣令一、而ーー寬由二郡守一」○督促。

【督撫】ブ　總督と巡撫と、並に清朝の地方官。

【瞥辦】ベツ 清朝の末の官名、とりしまりて處理する義「——軍務」「——鐵路事務」

【瞥勵】ベツ ただしはげます。北史、齊王蒨傳「親自——」

【睇】ヘイ 㫗 又、埤・睥に作る

○ななめにみる、ながし目にみる。見まはして勢を示す。○にらむ、うかがふ(窺)

【睇睨】ゲイ ○ながし目にみる(邪視)睨は伺ひ視る。史、信陵君傳「——故久立」後漢書「——天地之間」＝俾倪・俾睨・睥睨。○城上のひめがき。釋名「城上垣曰——、言其於孔中——非常一也、一作二睥睨一」＝堄堞。

【睥】ヘイ 㫗 ㊀ 睇(前條)に同じ。

【睦】ボク 屋

○むつまし、むつむ。書、堯典「九族既——」やはらぐ、敬ひつみて和ぐ「燕——」したしむ(親)「親——」「和——」禮、禮運「講信修——」○あつくす(厚)「敦——」

【睦友】ボクイウ 兄弟の仲むつまし。禮記「敎之以二孝悌一則——子愛一」

【睦親】ボクシン むつみしたしむ。又、したしきみうち。晉書、庾亮傳「元勳——、顯以二殊禮一」

【睚】ガイ 卦

【睚眦】ガイシ 回族にしたしむ。又、むつまじきみうち。宋史、樂志「齊ノ家——、似ノ武族ノ文」

【睞】ライ 隊

○わきみをする(旁視)洛神賦「明眸善——」みまはす。○目の瞳子正しからず。○眄——は睞の類。

【睠】ケン 霰

——は深き目の貌。晉書、石季龍載記「孫珍患」目、撤約歸曰、淵中則愈、珍曰、何可ン淵、約曰、卿目——正耐ン淵中」

【睠】ケン 眷(目部六畫)に同じ。

【睠睠】ケンケン 心のむかひ思ふ貌、懇ひ慕ふ。又、勤めて厚くする貌。詩、小雅「——懷顧」＝眷眷。

【睠顧】コ かへりみる。史、屈原傳「——楚國、繫二心懷王一」＝眷顧。

九

【睿】エイ 叡 叡に叡に作る

○ひじり(聖)○さとし(智)十分に事理に通達する。書、洪範「作ン聖」○ふかくあきらか(深明)○聖の字と同じく天子の事に用ふる敬語とす「——慮」「——覽」

【睿占】エイセン 占に从ひ目に从ひ谷の省に从ふ、占は其の象に取り、目は其の明に取り、谷は其の響應窮まらざるに取る。

【睿感】エイカン 天子の御感。

【睿藻】エイサウ 天子の作られし詩文。柳宗元、請ン復二尭號一表「——窮二于六藝一」＝御製・聖製。

【睿旨】エイシ 天子のおこころ。＝聖慮。

【睿聖】エイセイ すぐれてかしこし。後漢書、鄧興傳「昔文王承二積德之緒一、加之以二——一三分天下、尚服二事殷一、天子之德をたたへいふ。

【睿聖文武皇帝】エイセイブンブクワウテイ 唐の憲宗の尊號。

【睿達】エイタツ 心のさとくあきらかにして事理に通ずる。陸機文「聰明——、鑑度弘遠」

【睿智】エイチ すぐれてさとし。易、繫辭「古之聰明——、神武而不ン殺者夫」＝睿哲。

【睿哲】エイテツ すぐれてさとし。蔡邕、胡太傅碑銘「聰明——」

【睿圖】エイト 天子のはかりごと。隋書、音樂志「皇矣上帝、愛二命自一天、——作ン極、文教遐宣」＝睿謀・帝謨。

【睿聞】エイブン 天子のおぼえ。＝聖聽・天聽。

【睿護】エイゴ 帝王のすぐれたるはかりごと。王延幹詩「日月光二玄覽一、乾坤啓二——一」

【睿謀】エイボウ 睿圖に同じ。

【睿明】エイメイ さとくあきらか。

【睿覽】エイラン 天子の御覽。＝聖覽。

【睿慮】エイリョ 天子の御心。＝聖慮。

【睫】セフ 葉

——眇は遠く視る貌。

【睾】カウ 豪

○さは(澤)＝皐。○ひろく大いなる貌。○きん、きんたま、ふぐり、陰囊中に在るたま(腎丸)「一丸」

【睾業】カウゲフ 廣大なる貌。荀、解蔽「——廣廣、孰知二其德一」

【睾丸】カウグワン 陰囊、きんたまっ高等動物は一對あり、下等動物は其の數多し。

【睽】㊀ケイ ㊁キ 霽 支

㊀そむく(乖)乖離して相親まず。○はなれる(離)○にらみあふ、反目する。○ことなり(異)○——は目を張る貌。○易の卦の名、兌下離上。㊁——唯、は目を張る貌。

【睽違】クイはなれへだたる。睽一に睽に作る。‖離隔。
【睽疑】クイ　互にうたがひあふ。宋史「内自ー一」‖疑惑。
【睽乖】クワイそむく、にらみあふ、乖は背。六書故「反ノ目也、因ノ之爲ニ一ー」‖乖睽・睽離。
【睽睽】クイ　目を張る貌。韓愈、鄆州谿堂詩序「我目ー一」
【睽睽】クイ　睽離に同じ。謝靈運詩「即レ事怨ニー一ー「感レ物方懐哉」
【睽孤】コイそむく。人がそむき去りて孤立する（易、睽卦）
【睽離】クイそむきはなれる。陸游詩「寄ノ書雖ニ異紋ー一」
【睽雅】ヤ目を張る貌（王延壽、魯靈光殿賦）

【瞑】ケキ　陌
驚き視る貌。
【瞑然】ケキおどろき見る貌。盛唐、北固山賦「ー一失レ色」

【瞍】ソウ　有　尤
めくら（無レ目）眸子なし。‖瞍。

【瞕】ティ　霽　薺
○むかへみる（迎視）○遠く視る。

【瞎】カツ　黠
めやに（目眵）

【瞎】ト　虞　親は古字
みる（見）「目ー」「逆ー」
同訓異字　瞎・見・視・親・覧・看・瞰等の別は見（字部七畫）の條を見よ。

【瞋】
㊀シン　眞
㊁チ　支
㊂ボク　屋
㊃ボウ　東
㊄ブ・ム　遇
㊅ボウ　號
㊆ボク　屋
㊀くらし、目が明かならず、智識がくらし「昏ー」○みだれる（亂）「ー亂」「狂ー」○ー一は正しく見ず。○髪を被る。㊁目明かならず。○目を低くしてつつしみてみる。○物を視るに眩みやすし。㊂雀ー一はとりめ。‖夜盲。
【瞀瞀】ボウ敢て正視せざる貌。又、閉ぢき貌。荀、非十二子「子弟之賓、ー一然」
【瞀亂】ボウみだれる。楚辭「中ー一兮迷惑」北史、黄羽傳「是非ー一」

【瞰】ハツ　月
たて（盾）‖戟。

【瞞】ユ　虞
ー一は媚びる貌。漢書、韋賢傳「ー一詔夫」

十畫

【瞜】カツ　黠
○かため、めっかち（隻眼・獨眼）○めくら、めしひ（盲）
【瞜虎】コツめっかちの虎。北史、吐谷渾傳「曾採掇、有ニ幹局一眇ニ一目一而性甚忍、前後牽レ使、皆以ニ酷暴一爲レ名、時人號曰ニー一」
【瞜見】ソウめっかち。十六國春秋「有生無ニ一目一七歳其祖洪戯レ之目、吾聞、ー一一涙、信乎」

【瞌】カツ　合
目がねむらんと欲する、うみつかれてるねむりす（塵睡）貧休詩「ー一睡山童欲レ成レ夢」
【瞌睡】カツるねむりの字解を見よ。

【瞏】ケイ　庚
○おどろきみる（驚視）びっくりしてみつめる。○うれふ（憂）○ー一は依る所なき貌。‖驚愕。
【瞏然】ケイ　○依る所なき貌。詩、唐風「獨行ー一、豈無ニ他人一、不レ如ニ我同姓一」○憂ふる貌。詩、周頌「ー一在レ疚」

【瞋】シン　眞
目をいからす、怒りて目を張る。
同訓異字　瞋・怒・忿・憤・慍・恚等の別は怒（心部五畫）の條を見よ。
【瞋怒】シン目を張りていかる（柳宗元、乞巧文）
【瞋レ目】シンクワイモクス　めをいからす。史、項羽紀「項王ー一叱レ之」
【瞋目張膽】シンモクチョウタン　目（部首五畫）の條を見よ。

【瞀】ソウ　有
めしひ、めくら（無レ目）臓ゾウがなくして見えず「昏ー」
【瞀亂】ボウめくらの國語「瞀賦障語」注「無ニ眸子一曰レ瞀、有ニ眸子一而無レ見曰レ瞽」‖瞽瞀。

【瞟】
㊀ペイ・ミャク　青
㊁ヘン・メン　先
㊂ベン・メン　銑
㊀通音メイ　㊁通音ミン
㊀目を合はす、目を閉づ「ー一目」○目くら。○よく見えず、くらし、瞑に通ず。㊁ねる、いぬ（寐）ねむる、眠に通ず。莊、徳充符「擯高悟而ー一」㊂日くるめく、めまひ「ー一眩」
同訓異字　瞟・瞼・瞑・瞰・瞑の別は瞼

（目部十一畫）の條を見よ。

【瞋目】シンモク　めまひ。書、說命「若藥弗ニ―一、厥疾不ン瘳」＝眩暈。

【瞋視】シンシ　視て審かならざる貌。淮南、覽冥「其視―一」

【瞋目】シンモク　○目をふさぐ。晉書、楊嶷傳「―一不ン答」＝瞑目。○安心して死する。後漢書、馬援傳「甘心―一」

十一畫

【瞖】エイ　㊥　目がかすむ（目障）宋史、謝皇后傳「后生而―ニ一目ニ」かすみ、眼病。

【瞑】シュン　㊥　○またたく、またたき。＝瞬。胸。○目が動く。莊、庚桑楚「終日視而目不ン―一」

【瞟】セイ　サイ　㊥　○さっする（察）みる（視）○よこめでみる（邪視）

【瞠】ダウ　㊥　㊦　㊧　㊨　㊩　㊪　㊫　㊬　㊭　㊮　㊯　㊰　㊱　㊲　㊳　㊴　㊵　㊶　㊷　㊸　㊹　㊺　㊻　㊼　㊽　㊾　㊿　(51)　(52)　(53)　(54)　(55)　(56)　(57)　(58)　(59)　(60)　(61)　(62)　(63)　(64)　(65)　(66)　(67)　(68)　(69)　(70)　(71)　(72)　(73)　(74)　(75)　(76)　(77)　(78)　(79)　(80)　(81)　(82)　(83)　(84)　(85)　(86)　(87)　(88)　(89)　(90)

【瞚】 シン 眞

○深く見る。○見おろす、下し視る。○ぬすみみる、ひそかにうかがひ見る（窺視）

【瞬】 シュン 震 又、駿・竣の旁に作る

○またたく、まじろく。またたき。列、湯問「先學不ㇾ一、而後可ㇾ言射矣」○またたきする程の極めて短き時間「一ㇾ一ㇾ間」

【瞬刻】 シュンコク またたきする間、極めて短き時間。‖瞬時。

【瞬時】 シュンジ またたきする間、極めて短き時間。‖瞬間・瞬刻。

【瞬視】 シュンシ またたきしてみる。射經「目勿ㇾ一ㇾ一、身勿ㇾ偏坐」

【瞬息】 シュンソク またたきし、又、いきする間、極めてわづかの時間。優婆塞戒經「一ㇾ一到ニ無色界一」杜甫詩「得失一ㇾ一間」

【瞤】 ジュン 軫

○まじろく、目動く。西京雜記「目ㇾ一得ニ酒食一」‖瞬。○ひく（攣）肉が動きて製ひきつける。素問「肌肉ㇾ一酸」

【瞑】 靑（目部二十一畫）の俗字。

【瞧】 セウ 蕭

ひそかに見る、偸み視る。

【瞪】 タウ 庚 徑

正面よりみつめる、目をみはる、直視する「一視」

【瞪視】 タウシ みつめる。唐書、杜甫傳「一曰、嶷挺之乃有ニ此兒一」

【瞪眙】 タウイ みつめる。晉書、郭文傳「一ㇾ一不ㇾ轉、跨ニ牛單堂一、如ニ行ニ林野一」‖監視。

【瞳】 トウ 東

○ひとみ（目珠子）「一子」「一孔」「重ㇾ一」「方ㇾ一」「雙ㇾ一」章に通ず。○一爲は無心にして見る貌。一說に、未だ知ることあらざる貌。莊、知北遊「女ㇾ一焉如」新生之犢」

【瞳孔】 トウコウ ひとみ。

【瞳子】 トウシ ひとみ。史、項羽紀贊「舜目蓋重ㇾ一」‖童子。

【瞳人】 トウジン ひとみ、他人の目を視れば、其の瞳孔中に己の影を見るが故。李賀詩「一雙ㇾ一點ニ秋水一」

【瞳朧】 トウロウ ひとみ。新論「夫玉有ニ定形一、而察ㇾ之不ㇾ同、非ニ好相反一ㇾ一ㇾ殊也」

【瞭】 レウ 篠

○あきらか（明）「明ㇾ一」「一望」○目睛が明か。孟、離婁「胸中正則眸子ㇾ一焉」

【瞭然】 レウゼン あきらかなる貌。‖瞭焉。

【瞭眄】 レウベン あきらかなると、くらきと、韓愈詩「孟軻分ニ邪正一、眸子看ニ一ㇾ一」

【瞰】 カン 勘

○みる、ちらりと見る「一見」「一ㇾ一」目を過ぐ、わづかにみる（纔見）しばらく見る（暫見）○一は定まらざる貌。又、ちらちらと見ゆる貌。王逸、九思「日ㇾ一ㇾ分西沒」

【同訓異字】 瞰・瞥・見・視・覩・望・看・瞻・瞰・視の別は見（部首七畫）の條を見よ。

【瞰覩】 カントウ ちらりとみる。晉書、王坦傳「余少好ㇾ書、雖ニ僅見一ㇾ一、皆能疏記」

【瞰見】 カンケン わづかにちょっと見る。‖窺見。

【瞠】 トウ 庚

○ひとみ（目精）○視る貌。左思、吳都賦「驚ㇾ一鷄視」○くらし。○一ㇾ一は下し視る貌。○一鴞ヘウは文ある貌。‖瑣瑣。

【瞥】 ベツ 屑 通音ベツ

○みる、ちらりと見る「一見」「一ㇾ一」目を過ぐ、わづかにみる（纔見）しばらく見る（暫見）○一ㇾ一は定まらざる貌。又、ちらちらと見ゆる貌。王逸、九思「日ㇾ一ㇾ分西沒」

【瞥見】 ベツケン わづかにちょっと見る。‖窺見。

【瞬】 シュン 震

○ひとみ（目精）○視る貌。左思、吳都賦「驚ㇾ一鷄視」○くらし。○一ㇾ一は下し視る貌。○一鴞ヘウは文ある貌。‖瑣瑣。

【瞻】 セン 鹽

○みる、ちらりと見る「一見」「一ㇾ一」目を過ぐ、わづかにみる（纔見）しばらく見る（暫見）○一ㇾ一は定まらざる貌。又、ちらちらと見ゆる貌。王逸、九思「日ㇾ一ㇾ分西沒」

【瞻望】 センボウ ものみだい、木を築して高所を作り遠望する者、軍營及び都市繁盛の區に多くこれを建つ、敵軍を望み、又、火事の用に供す。

十三畫

【瞿】 (一) ク 虞 (二) ク 遇

(一)雋隼などが物を視るにいふ。○一然は心驚く貌。又驚き見る貌。○一ㇾ一はいそがはしく視まはす貌。又つつましやか（儉）又、目をはりてみつめる貌。又、驚きあわてて善かならざる貌。又、志の守る所なき貌。○おそる、懼に通ず。(二)(一)の解に同じ。○ほこ（戟）書、顧命「一人冕執ㇾ一」‖戟。○まち、衢に通ず。○一塘は峽の名、四川省、奉節縣の東十三支那里に在り、三峽の首たり、兩岸對峙、中に一江を通ず。瀧澦堆、正に其の口に當る、水勢怒激、全蜀江路の門戸に當り、古今兵事上攻守必爭の地とす。‖瞿唐。○一曇ダンは佛の姓。

【瞿然】 クゼン ○守る所なき貌。莊、齊物論「狂夫ㇾ一ㇾ一」○おどろきあわてて善かならざる貌。禮、玉藻「視容ㇾ一ㇾ一」

梅福」○顧慮してつつましやかなる貌。唐風「良士――」【瞥視】ベツシ おどろきみる貌。禽經「雀以レ猜―レ」【瞑然】メイゼン そどろきあやしむ貌。韓愈「―而呼」【瞑目】メイモク 佛をいふ。釋迦牟尼「潛飯遂祖、於二雙樹間一、現二―相一、故曰二―氏一」【瞑想】メイソウ 佛氏の學。宣和畫譜「孫知微好二黃老一、―二故道一、益工也」【瞑眩】メイケン なでしこ（撫子）山野に自生する草、夏秋の交に淡花をつける。其の苗は蔬菜に似たり。

【瞑】ベン　大いなる目の貌。

【瞼】ケン　まぶた「眼―」眼球を上下より合せおほふ皮。○古經一部にて卅ないふ。唐書、唐臨傳「前輩有二十一」

【瞽】コ　○めしひ、めくら（盲）「一者」○善惡を見わくる能はざること。又、其の者。○古代の樂官、盲人を用ひたる故（樂工・伶人）○―瞍は人名、舜の父。○―宗は殷代の學校の名、音樂を重んじて主要の教科としたる故の稱。禮、明堂位「―宗殷學也」

【瞽義】コギ つまらぬ議論。唐南文「獻替是司、輕陳二―一」‖妄議。

【瞽言】コゲン つまらぬことば。めくらの見えずして妄言する如きに喩ふ。漢書、谷永傳「―一觸二忌諱一」

【瞽史】コシ 周代の二官の名、瞽は太師、主君の側に侍して、詩を誦し諷諫することを司り、史は太史、天文を掌る官。李嶠文「―郊三家之言、鴛人失二官之業一」

【瞽師】コシ 理にくらきことば。後漢書、荀爽傳「時政得失、小子何知、非二―一、伏紙戰慄」‖瞽言。

【瞽者】コシャ めくら。韓、送窮文「―無二以與一爭文章之觀一、聾者無二以與一爭鐘鼓之聲一」無知の者は至言の妙味を悟ること能はざる喩。

【瞽說】コセツ 理にあたらざる愚說。漢書、谷永傳「皆―一歟天者也」‖瞽言。

【瞽宗】コソウ 殷代の學校の名、字解を見よ。

【瞽瞍】コソウ 舜の父の名、一說に舜の父が愚昧にして目あれども善惡を分つこと能はざるが故に時人の呼びたる名なりと。書、堯典、傳「無レ目曰レ瞽、舜父有レ目、不レ能レ分二別好惡一、故時人謂二之瞽一配レ字曰二―一、瞍無レ目之稱」

【瞻】セン　○みる、仰ぎ視る「仰―」「具―」詩、衞風「―彼日月」○其の場に臨みみる。曲禮「視―無レ回」

同訓異字　瞻・見・視・觀・覽・看・瞰・覩・親・瞥の別は見（部首七畫）の條を見よ。

【瞻依】センイ 仰ぎ尊みて親みたよる。詩、小雅「靡―靡恃、父兮、靡二依怙一母」に本づく。

【瞻望就日】センボウシュウジツ ○仰ぎて雲を見、太陽に近づく、其の至德を慕ひて從ふ喩。帝堯紀「就レ之如レ日、望レ之如レ雲」李嶠、日賦「就日瞻雲兮、心皆繫レ帝」○轉じて天子に親近する喩。

【瞻仰】センギョウ あふぎみてたふとぶ。韓詩外傳「大山者、萬民之所二―一也」

【瞻顧】センコ かへりみる。宋史、彭乘傳「皆與二同年生一、登二相國寺閣一、皆一二一顧閣一、有二徙官之樂一」

【瞻視】センシ みる又、めつき。論、幾曰「正二其衣冠一、尊二其一一」

【瞻暍】センエツ 仰ぎ見る。世說「王子猷謂二謝、萬林公先在レ陝、一一共高」

【瞻レ前顧レ後】センゼンコゴ ○事を處するに善く前後を顧みてする。謀慮をいふ。離騷「瞻レ前而顧レ後兮、相二觀民之計極一」○前後をすべて計る。漢書、敍傳「―一、正二其終始一、述二郊祀志第五一」

【瞻載】センサイ あふぎみていただく。典唐書「億兆八紘之所二―一」

【瞻跳】センチョウ 仰ぎ見る。宋書、謝一一庭宇賦、仰レ首徂秋晏」

【瞻望】センボウ ○遠く仰ぎ見る。詩、郭風「―一弗レ及、泣涕如レ雨」○思ひしたふ。南史、王筠傳「爲二衆所二―一」

十四畫

【矇】クック　○みる（大視）○―瞍はいなびかり（雷光）（木華、海賦）

【矇】ヒン　しかむ、心に恨みて顏をしかめる。韓、天運「西施病レ心、而―二其里一」‖顰。

【矇】ボウ モウ　○めしひ、めくら（盲）目明かならず。○あきめくら、眸子あれども見えず（書言）○人の未だ學ばざるにいふ。蒙に通ず。

○事理を分別する能力なし。又其の者「愚ー」「瞽ー」

【瞶瞭】ハウモウ　愚かなる心をひらき導く。瞶は蒙と通ず、愚蒙の心を啓發する。楚辭、沈江「蔽二幸君之ー一」＝啓蒙。

【瞶昏】モウコン　めくらの盲康文「ー一面ノ嬪而不レ悟、雖二重照一秋亮一于百尋一」

【瞶晦】モウカイ　目が明かならず、瞶は眸子ありて見えざるあきめくら、瞶は眸子なきめくら。國語「ー一修レ城、庶瞶司レ火」＝瞶瞶。

【瞶瞽】モウコ　目がくらし。韓愈詩「淚目苦ニー一」

【瞶昧】モウマイ　めくら。又、おろか。蜀志、費詩賦「夫何ー一之尊号、心窮忍以懼伊」＝蒙昧。

【瞶瞶】モウコウ　明かならざる貌。班固賦「心ー一猶未レ察」

十五畫

【瞿之】クヲ　カク　㊥

○驚きて左右を顧みる、あわて視る貌。○ー鑠クヲクシャクは老人の身が輕くすこやかなる貌。○人の姓。

【瞿瞿】クヲク　あわて驚きてみる貌。易、震卦「視ー一」

【瞿鑠】クヲクシャク　老人の勇健なる貌。後漢書、馬援傳「據レ鞍顧眄、以示レ可レ用、帝曰、ー一哉是翁也」

【瞹】㊀ケイ　㊁ケン　霽　銑

㊀視る、みつめる（直視）㊁ーケンは目の正しからざる貌。魯靈光殿賦「目ー一而褰精」

【瞶】ベツ　屑

○めのやまひ、ただれめ。○目あきらかならず。○皆子の赤き貌。

十六畫

【矐】カク　藥

めをつぶす、失明せしむ。史、荊軻傳「秦始皇惜二高漸離善擊筑一、重赦之、乃ー一其目」

【矗】ロ　遇

○みる（視）○ひとみ（目瞳子）

十八畫

【矡】クヮン　刪

○めをいからす（瞋目）めを張る。○かへりみる（顧視）目を轉ずる。

十九畫

【矚】シ　燭

みる、もとめ視る貌。

【矚目】シンモク　索めめ見る貌。魏書、張淵觀象賦「ー一ニー八荒」

【矗】チク　シュク　屋　屋

○ひとし（齊）○草木が盛んに生ずる。○なほし（直）杜牧、阿房宮賦「ー不レ知二其幾千萬落」○そびゆ（聳）○おこる（起）○長く直立する貌。

【矗矗】チクチク　たかくそびゆる貌。司馬相如、上林賦「崇山ー一、峭崖嵯峩」

【矉】バン　刪

○みる（視）韓愈詩「親戚相視ー一」○目の美くしき貌。○きる、かうむる（被）班固、答賓戲「ー一龍虎之文一齒矣」

二十畫

【矘】カン　翰

みる（視）、うかがふ、のぞき見る（窺）孟、滕文公「陽貨ー一孔子之亡一也」＝瞰・瞯。

【矡】タン　寒

○みつむ（直視）目精の直き貌。○目明かならず。

廿一畫

【矚】ショク　ソク　沃　㊥　矚は俗字

みる（視）ながめる、氣をつけて見る「眺ー一」「遊ー一」魏書、張淵傳「凝神遠ー一」

【矚目】ショクモク　ながめる、注意して見る（矚目）＝注目・注視。

矛　部

【矛】ボウ　ム　尤

○ほこ、柄の長さ周尺にて二丈のものを酋ー一、二丈四尺のを夷ー一といふ。古、黒光の創作せしもの。○衛ー一は木の名、にしきぎ、まゆみ。

【矛戈】ボウカ　ほこ、戈は一枝あるほこ。宋書、顧覬之傳「面矢殊用、ー一異レ適」

【矛戟】ボウゲキ　ほこ、戟は雙枝あるほこ。詩、秦風「王于興レ師、修二我ー一一、與レ子偕作」

【矛又】ボウユウ　さすまた。蘇軾詩「鴻逸將

軍在二近邑一、呼来飜従二一一一」【矛槊】ボコ。獣陽後、雪詩「槊雖三随郭一文士業、豆唯人人把二一一一」＝矛矟。

【矛盾】ジュン　ほこと、たてと、盾は楯、自らほこの前後相抵触するにいふ、韓非、難「楚人有レ鬻二盾与一レ矛者一レ誉レ之曰、吾盾之堅、莫二能陥一也、又誉二其矛一曰、吾矛之利、於レ物無レ不レ陥也、或曰、以二子之矛一陥二子之盾一何如、其人弗レ能レ応也」＝矛楯。

【矛楯】ムジュン　前條に同じ。

【矛出】クシ　図矛をつき出す為めに城壁などにつくり設けたるあな。

矜　四　畫

㊀キン・ゴン　㊁キョウ　㊂クァン　通音キン

㊀ほこのえ(矛柄)史、主父偃傳「起二窮巷一奮二棘一」○つえ(杖)㊁あはれむ(関憐)書、泰誓「天一レ于民」○くるしむ(苦)○なやむ(惜)○あやふし(危)○かなしむ(哀)○あわつ、にはか(遽)○ほこる(誇)自ら尊大にする。書、大禹謨「汝惟不一」○おごそか(荘重)論、衛霊公「君子一而不争」○うやまふ、つつしむ(敬)「一式」書、旅獒「不」＝細行」○ためとぶ(尚)賈誼、治安策「故人一節行」○そばだつ(竦)㊂やもを、老いて妻のなき者「一寡」＝鰥。

同訓異字　矜・憐・哀・憫・恤の別は憐(心部十二畫)の條を見よ。

○ちなみ　矜・誇・伐の別は誇(言部六畫)の條を見よ。

【矜式】キンシキ　あはれむ。左傳「一ニ一寡人一而閔二之一則寡人之願也」

【矜貴】キンキ　あれみそだてる。

【矜己】キンキ　○自ら其のたふときをほこる。列子「不レ逆レ命、何淡而不二一一一何淡レ名」○ほこりたかぶる。

【矜慎】キンシン　矜荘貴重の意。陸賈傳「時楊素、恃レ才一一」

【矜救】キンキュウ　あはれみすくふ。後漢書「士大夫多二一之一乃得二俱全一」

【矜厳】キンゲン　才能をほこりて人と優劣をきそふ。南史、陳琰傳「寮悉郎二一一」

【矜窮】キンキュウ　まづしき人をあはれむ。国語「禍レ貧レ一レ、賜之宗也」

【矜荘】キンソウ　堅く強き貌。又、自ら持重する貌。詩、小雅「一一兢兢」

【矜誇】キンコ　ほこる。唐中宗詩「緑蝶黄鶯未二敢舞一、梅香柳色已一一」＝矜奢。

【矜懸】キンケン　ほこりおごる。劉基詩「周器忌二盈満一、老子戒二一一一」

【矜厳】キンゲン　つつしみ深くしておごそか。後漢書、銚期傳「一一有レ威」＝荘厳。

【矜レ功】キンコウ　いさをありしをほこる。漢書、敍傳「持レ寵一レ一」

【矜莊】キンソウ　つつしみおごそか。周礼、注「賓客之容、厳恪一一」

【矜躁】キンソウ　ほこりさわぐ。南史、郎紹叔傳「性頗一一、以二権勢一自居」

【矜肆】キンシ　おごりてほしいまま。唐書、元載傳「得意漸益一一」＝驕肆。

【矜人】キンジン　まづしくあはれむべき人。詩、小雅「愛及二一一一」注「貧窮可レ憐之人」

【矜恤】キンジュツ　あはれみめぐむ。後漢書、周澤傳「一二一孤嫠一」

【矜武】キンブ　矜は敬、武は法、うやまひてのっとる。孟、公孫丑「使二諸大夫国人皆有レ所二一一一」

【矜大】キョウダイ　ほこる。後漢書「内外無二偉曲之私一、在レ上無二一一之色一」＝矜大。

【矜誕】キンタン　ほこりてほしいままの言。鮑照、戦城南「自一一以重二弾言一乎」

【矜レ能】キョウノウ　己の才能にほこる。書経「有二其善一喪二其善一、矜二其能一喪二其功一」

【矜伐】キョウバツ　ほこる、じまんする、伐もほこる。魏志、邴芝傳「深自一一」

【矜慄】キョウリツ　次條に同じ。

裔　七　畫

㊀イツ　㊁キツ　質

㊀うがつ(穿)錐を以て穿つ。○一一は物の香風に成長する貌。○三色のめでたき雲。㊁おどろき飛ぶ貌。＝猲。

【裔裔】ケツケツ　めでたきくも。蔡仲舒、雨雹對「雲五色爲レ慶、三色成レ裔」

矟　サク　覺

ほこ(矛)周尺にて一丈八尺あり て馬上にて持つ所のもの。‖槊。

八畫

【矰】サク　陌

○矛の長さ。○さす、矛を以て物を刺し取る。魯語「一魚鼈」

十一畫

【矱】キン　㊥

ほこのえ(矛柄)＝矜。

矢部

【矢】シ　紙

○や(箭)易、繫辭「刻木爲ー」○つらぬ、陳列する。○ちかふ(誓)論、雍也「夫子ー之曰」○ただし(正)なほし(直)○ほどこす(施)詩、大雅「ー其文德」○くそ。屎に通ず。史、廉頗傳「一飯三遺ー」馬ーは馬糞。○かすとり(投壺の籌)禮、投壺「主人奉ー」○嗤ーシは矰繳の付いた、射る者、必ず先づ嗤ーを放ちて遠近を定む、よりて事の始の義とす。

周制矢・箭・鏃の別は弊(前部七畫)の條を見よ。

【矢守】シやがら(書、禹貢、徐「綠之材中ニ矢之守ニ箘之材中ニ箭竹之管」

【矢魚】シギョ　矢は陳ベ魚は漁、漁者が漁具を陳ねて魚を捕ふる義。左、隱五「公ーニ于棠」棠は地名。

【矢丸】ガン　やだま、矢と鐵砲のたまと。

【矢言】ゲン　ちかひのことば。書、盤庚「出ニーー」＝誓言。

【矢室】シツ　やなぐひ、えびら。＝矢服・箭室。

【矢詩】シシ　しをのべいふ。詩經「ーー不レ多、維其遂歌」注「矢、陳也」

【矢人】シジン　やをつくる工人。孟、公孫丑「ーー惟恐レ不レ傷レ人、函人惟恐レ傷レ人」

【矢刃】ジン　やと、やいばと。漢書、蘇武傳「路窮絕兮ーー摧」

【矢石】シセキ　やと弩弓の石と。轉じて戰爭の義とす。史、管仲晏子「ーー之難、汗馬之勞」

【矢石不加】シセキフカ　矢や石を加へず、敵の矢だまを冒して戰ふ。史、貨殖傳「ーー、不レ避二湯火之難一者、爲二重貲一使也」漢書、叔孫通傳「漢王方ーー卒二天下一」

【矢鏃】シゾク　やじり、やのね。蜀志、關羽傳「ーー有レ毒、瘉入二于骨一」

【矢石】シセキ　やづつ。韓愈、表記「弓服ー」甲胄之屬」

【矢服】シフク　次條に同じ。＝箭筒。古法以二牛革一爲二ーー一、臥則以爲レ枕、取下其中虛、附レ地枕レ之、戰里內有二人馬聲一則皆開レ之、否則能納レ聲也」

【矢箙】シフク　えびら、矢を盛る具。＝矢服。

【往レ矢】オウシ　矢を弦につがふ。唐書、張巡傳「將ーー外向、救兵不レ能レ前」

【矢頃】シケイ　㊥○弓をひきしぼりて矢を放つべき程合。＝發。○矢の達すべき距離。

【矢大神】シダイ　㊥神社の隨身門の左右にある像、矯身ゾウの裝ひせし者。

【矢立】ヤタテ　㊥○古、陣中にてえびらの中に入れて攜へたる硯。○腰に佩びる墨斗入

【矢束】シソク　㊥矢の長さ、一束は四本の指を竝べたる長さ、卽ち一握りの長さ。

【矢盡】シジン　はげしく戰ひて矢がなくなる。後漢書、段熲傳「下レ馬大戰、至二日中一刀折ーー」＝矢竭。

二畫

【矣】イ　紙

○語の終る意の又、斷定の意を表はす助字。現在の場合にては。論、衞靈公「祿在其中ー」過去にては。論、微子「至則行ー」勝來にては。論、里仁「苟志於仁ー、無惡也」○語の中に置く助辭、哉と通ず。書、牧誓「逖ー西土之人」論、述而「甚ーー吾衰也」○反問の辭、乎ーと通ず。論、季氏「則將爲用彼相ー」○耳の字と通ず。戰國策「則連有ー赴東海而死ー」史記には矣を耳に作る。

三畫

【知】㊀チ　㊁チ　支　㊂去

○しる(識)。生ーー、學ーー心に感じ知る。ーー覺○わきまふ(辨別)○おぼえ(記憶)論、里仁「父母之年、不可不ーー也」○さとる(覺)孟、盡心「聞而ーー之」○さとり(認識)○たくひ(匹)○つかさどる(主)をさめる。ーー事、九、襄二六「子產其將ーー政矣」○さとり。○よく(欲)の條、樂記「誘於外ーー」○しりあひ、相ーー。ちかづきになる。屈原、九歌、樂矣「樂ー今新相ーー」○人となりを知りて優待する。ーー遇㊁もる。中庸「好學近乎ーー」＝智。

同訓異義　知・識○知は識より廣し、

知ル人・知ル道といへば、心の底より覚と知ることなり、知己・知音と熟す、識ル名・識ル面は、一寸見覚あるまでの意なり、相識と熟す。

【知友】チイウ　しりあひ。潜夫論「深ニー一而厚二交友一」

【知音】チイン　琴の音を知る。轉じて己の心を知る親友の義とす。列・湯問「伯牙鼓レ琴、志在二高山一、鍾子期曰、峩峩兮若二泰山一、志在二流水一、子期曰、洋洋兮如二江河一、伯牙所レ念、子期必得レ之、子期死、伯牙絶レ絃以無二ニーレー者一」

【廣知】クワウチ　智識をひろむ。黄石六書論・論志切用、所二以ーヒーレー

【聞レ知】ブンチ　才智をよりまはす。史、張湯傳「ーレー以御レ人」⇔弊知。

【知行合一】チカウガフイツ　知と行とは、本來同一物にて、知りて行はざるは知らざるに同じとの明儒王陽明の學說。

【知客】チカク　僧徒の賓客を接待することを主る役。禪林寶訓音義「知二典二客一總白相一、應二對迎送一者一」

【知覺】チカク　こしりさとる。後漢書、杜詩傳「如有二姦人詐僞一無由ニーー」○心理學にて感官によりて外界の事物を認識するはたらき。⇔智覺。

【知己】チキ　自分の心をよく知れる眞の友。史、刺客傳「士爲二知ル己者一死、女爲二悅ル己者一容」韓愈、上二張僕射一書「時以稱二於天下一、曰ニーー則未也」

【知レ幾】チキ　事の幾微（キビ）を知る。易、繫辭「子曰、ーレー其神乎」

【知舊】チキウ　ふるなじみ。魏志、荀彧傳「遭沖節儉、縁賜散二之宗族ーー、家無二餘財一」⇔舊知・故舊。

【知行】チカウ　圖領分の地。扶持。

【知遇】チグウ　人と爲りを知りてよくあしらふ。南史、南康王綜朝傳「深被二ーー一」

【知會】チクワイ　圖文書又は口頭にて一般に通知する。

【知曉】チゲウ　しりてさとる。韓愈、與二崔立之書一「僕愚陋無レ所ーー、然聖人之書、無レ所レ不レ讀」⇔通曉。

【知官】チクワン　道理に明かなることば。左、襄十四「蔡伯以爲ニーーー」

【知縣】チケン　縣の長官、縣知事。⇔知縣事。

【知縣事】チケンジ　縣知事に同じ。雲麓漫鈔「唐制縣令闕、位官攝レ令、曰ニーーー」

【知事】チジ　州縣の長官。唐會要「刺史有レ故乃闕、但令二上佐一依レ次知二州事一」

【知識】チシキ　○ちゑと見識と。○しり居る。維摩經「衆所ニーーー」

【知死期】チシキ　陰陽道にて人の生年月日により其の死期を豫知する。

【知悉】チシツ　くはしくしる、十分に知り盡す。

【知レ十】チジフ　きはめてさときにたとふ。論、公冶長「回也聞レ一以ーレー」

【知人】チジン　知友に同じ。

【知レ進】チシン　すすむことのみを知る。隨園論「知レ利不レ知レ害、ーレー」

【知仁勇】チジンユウ　知は道を知る、仁は道を體する、勇は道を強むる。中庸「ーーー三者、天下之達德也」

【知者不レ貳】チシヤフジ　知識あるものは深く蔵してみだりに言はず。老子「ーーー、言者不レ知」

【知者不レ惑】チシヤフワク　知者は理に明かなり、故にまどはず。論、子罕「子曰、ーーー、仁者不レ憂、勇者不レ懼」

【知者樂レ水】チシヤガクスイ　知者は事理に通して周流し、凝滯せざること水に似たり、故に水を樂む。論、雍也「ーーー、仁者樂レ山、知者動、仁者靜、知者樂、仁者壽」

【知識】チシキ　圖先方へかけあふ。⇔照會。

【知善】チゼン　善き事を知る。禮記「愛而知二其惡一、憎而知二其善一」

【知足】チソク　たることをしる。老子「ーレー者富」

【知道】チダウ　○道理をあきらかにさとり知る。禮記「人不レ學不レ知レ道」○圖知る、承知する。

【知得】チトク　得ることを知る。易、繫辭「ーレー而不レ知レ喪」

【知周二乎萬物一】チシウコバンブツ　聖人の智は萬物に周到する。易、繫辭「ーーー、而道濟二天下一、故不レ過」

【知非】チヒ　己のあしきをさとり知る。淮南子「運伯玉行年五十、而知二四十九年之非一」

【知府】チフ　府の行政を掌る長官。

【知レ兵】チヘイ　善く兵機を曉り知る。史記「兵未レ戰而先見二敗徵一、此可レ謂レ知レ兵矣」

【知母】チボ　○はをしる。陸璣、草木疏「ーレー而不レ知レ父」○藥草の名。初秋生じ、多年生草、葉は細長くして叢生す、根を藥用とす。本草「ーー治二諸熱一」

【知名】チメイ　○なを知る。禮記「男女異レ有二行媒一、不二相ーレー」⇔通名。○世に名を知らるる。晉書、武陵傳「總角ーレー」⇔騈レ名。

【知命】チメイ　天命を知る。五十歳をいふ。論、爲政「五十而知二天命一」潘岳、閑居賦「自二弱冠一、涉乎ーー之年一、八徙官而一遷レ階」

【知了】チリヤウ　十分に知る、知りつくす。

【矧】シン　四畫　矢部

○いはんや、まして（況）○はぐき。曲禮「笑不至ーー」（はぐ

きを現はす程に大笑せず)‖斷。○國はぐ、矢竹に羽をはめて矢を造る。

同訓異字 矧・況の別は況(水部五畫)の條を見よ。

【矣】

候(人部七畫)に同じ。

五畫

【矩】ク 國

○かねざし、さしがね、方形を畫くに用ふるもの「規ー準繩」(規は圓を畫くもの、ぶんまはし)禮、經解「規ー誠設、不可欺以方圓」○つね(常)○かど(廉)○けた(方)○のり(儀)おきて(法則)「規ー」「遵ー」論、爲政「七十而從心所欲、不踰ー」○地をいふ。

【矩形】ケイ ○ますがた。○幾何學にて各の角が直角を成す四邊形の稱。

【矩繩】ジョウ さしがねと、すみなはと。法則の義とす。大戴禮「所謂賢人者、行中ー—」‖矩彠。

【矩尺】シャク かねざし、木工の用ふるもの。‖木尺・曲尺・鉤尺。

【矩則】ソク のり、おきて。齊書、武帝紀「三季澆浮、舊章陵替、吉凶衆靡、動違ー—」‖矩度・矩法・準則。

【矩度】ド ○のり、法則。○動作の紀律。宋史、理宗紀「—有ノ常」

【矩矱】ガク さしがねと、すみなはと。晉夫論「造ニ規矩ー—一、以教ニ後人ー」

七畫

【規】

規(見部四畫)の本字。

【矬】ザ 平

みじかし(短)身の丈が低い。北史。宋世景傳「形貌ー陋、面好藏名人物」

【矬陋】ロウ たけ低くいやし、宇解學者。

【短】タン 上

○みじかし。長の對。ひくし。○久しからよ。荀、非相「帝堯ー」○足らず、乏し、少し、あやまちあり、拙し、鈍し、缺點。○そしる、人の過失を指して譏る。史、屈原傳「上官大夫ー屈原於頃襄王」○わかじに(夭折)書、洪範「凶ー折」

同訓異字 短・誹・非・謗・論・誉・訕・刺・毀・譏・誚の別は誹(言部八畫)の條を見よ。

【短衣】タン たけみじかきころも。史、叔孫通傳「服ニー—楚製」

【短衣窄袖】サクシュウ みじかきころも、せまきそで、胡人の服。夢溪筆談「中國衣短、自ニ北齊ー以來、乃全用ニ胡服ー、窄袖、緋綠短衣、長褶靴」隋都頌詩「——呼ニ郎君ー」

【短咏】タンエイ みじかきうた。杜甫詩「長歌ー—還相酬」

【護ノ短】コウタン 短所をかばひ護る。晉、與ニ山巨源ー絶交書「仲尼不ノ假ニ盜子子夏ー以護ニ其短ー也」

【舍ノ短取ノ長】シャタンシュチョウ あしき所をすて、善き所をとりて宜しきを制する。漢書、藝文志「觀ニ此九家之言ー、則可ニ以通ニ萬方之略ー矣」

【縱ノ短斷ノ長】ショウタンダンチョウ 長短よろしきにかなはしむる義。荀子「禮者——、揖ノ有ノ檢、揖ノ不ノ足ノ戰國策「斷ノ長續ノ短、方數千里」

【短歌】タンカ ○みじかきうた。樂府「短歌三李長吉、爲ニー—」○國三十一文字の歌。長歌の對。

【短綆】タンコウ たけの短きつるべなは。荀、榮辱「—不ノ可ニ以汲ニ深井之泉ー」

【短褐】タンカツ みじかきあらぬのの衣。韓非、五蠹「—不ノ完者、不ノ待ニ文繡ー」‖短褐。

【短氣】タンキ ○きおちする、落膽して自ら振ふ能はず。王羲之帖「艱疾如ノ此、令ニ人ー—」○國きみじか、性急。

【短規】タンキ つたなきはかりごと。謝靈運文「辭ニ其淺思、蓄ニ其ー—一」

【短期】タンキ みじかき期限。

【短暮】タンボ みじかきひかげ。孫楚、秋興賦「何微陽之ー—、整ニ流夜之方永ー」

【短計】タンケイ つたなきはかりごと。柳宗元詩「千金孝ニー—、七首荊軻拙」

【短簫】タンショウ たけのみじかき短簫。長簫の對。韓愈詩「ー—二尺便且光」

【短頸】タンケイ みじかきくび。酈道、瀙、烏龍、注「水鳥似ノ鴨而ー—」

【短見】タンケン あさはかなかんがへ。呂覽「智所ニ以相過ー、以ニ其長見與ニー—一也」‖淺見・淺慮。

【短古】タンコ 古詩の句數の少きもの。長古の對。

【短弧】タンコ いさごむし、一に射工、又、水弩と呼ぶ、水邊に居り、人身を射る、これに射られたるものは死すといふ。漢書、五行志「蜮生ニ南越ー、蜮猶ノ短也、在ニ水旁ー能射ノ人、南方謂ニ之ー—一」周禮、疏「ー—蟲害所ノ生、其狀如ノ鼈」

【短後】タンゴ 事を爲すに便するため後をみじかく仕立てたるころも。莊、說劍「ー—之衣」

【短袴】タンコ みじかきはかま。

【短距】タンキョ みじかき距離の宿場みち、坂は一里づか。

【短簑】タンサ たけみじかきみのの田錫詩「ー—長笛一川秋」

【短才】タンサイ 鈍くして足らざる才能。謙、陶詩「每愧雲山贊ニー—一」‖鈍才。

【短册】タンサツ 國和歌俳句等を書く細長き

紙、縦一尺一寸五分、幅一寸八分。
【短喙】タンカイ みじかくしてせまし。王建詩「葉似蕉二兩尾、一一古時衣」
【短札】タンサツ 短き書札の義、自ら其の書翰を稱す。書言故事「諸葛亮碑、願奮一一、以報二國恩一」‖寸楮・寸簡。
【短醜】タンシウ たけひくくしてみにくし。南史、張緬傳「緬形貌一一、精神清徹」
【短人】タンジン せいひくき人。漢書、注「朱儒、一一也」‖僬僥。
【短銃】タンジウ たけひくきかき。左傳「吳子門焉、牛臣踵子一一以射之」
【短銃】タンジウ ピストル（英語）‖拳銃。
【短縮】タンシユク みじかくちぢめる。
【短慨】タンガイ みじかきたて。楯は盾に同じ。晉書、長沙王道憐傳「子義最有二智幹一、善於用二短一」
【短世】タンセイ わかじにの意。晉書、元帝紀「懐帝一一、越去二王都一」‖短命・夭折・早世。
【短折】タンセツ 前條に同じ。字解參看。
【短促】タンソク あさはか。韓愈詩「自知一一無所補、從事久此寧朝夕」‖淺短。
【短促】タンソク みじかくちぢめる。
【短刀】タンタウ みじかきかたな、あひくち。南史、侯景傳「戰士皆被二短甲一、一一但低視斫二人脛馬足一」
【短短】タンタン みじかき貌。李白詩「白日何一一、百年苦レ易レ滿」
【短長】タンチヤウ ○人の短所と長所と。後漢書、張衡傳「自有二芳人說一一一」○壽命の短きと長きと。晉、盤庚「朕乃予制二乃一一之命一」○戰國時代の合縱連衡の說、彼に赴くを短とし、此に附するを長とする。史、六國表「縱橫長短之說起」
【無二短長一】ナンチヤウ 何の長所もなし。短は帶字にて意味なし。史、越世家「其爲レ人――」
【短程】タンテイ みじかきみちのり、近距離の道。羅鄴詩「終日長程又一一」
【短艇】タンテイ ○こぶね。羅鄴詩「深深艤短艇、漁火滅分、中潭一一與二同載一」○英語のボートの譯。‖端艇。
【短亭長亭】タンテイチヤウテイ 亭は驛はたごや、五里に短亭をおき、十里に長亭をおく。白帖「十里一長亭、五里一短亭」
【短笛】タンテキ みじかきふえ。晉書、律曆志「歌聲清者、用二一一一短律一」
【短筆】タンヒツ 拙きふで。南史、王弘之傳「但銀二一一不レ足レ書二美談一」‖拙筆。
【短評】タンピヤウ みじかく、ちよっとした批評。
【短兵】タンヘイ 短き兵器、刀劍の類。史、衛將軍傳「長兵則弓矢、一一則刀鋸」
【短兵急】タンヘイキフ ○刀劍を以て急に攻める。後漢書、光武紀「乘レ勝輕進、反爲レ所レ敗、賊追急、短兵接、光武自投二高岸一」○圖 いきもつかず急にせきたてる。
【短兵接戰】タンヘイセツセン 互に刀劍を用ひ相近づき戰ふ。史、項羽紀「令二騎皆下レ馬步行、持二短兵一接戰」
【短袂】タンベイ みじかきたもと。又、たもとを短くする。論、鄭當「與レ賓長、短二右袂一」
【短篇】タンペン みじかき詩文。高啓詩「題レ杯邀レ我賦二一一」
【短命】タンメイ わかじにの意、壽也「有二顏回者一好レ學、不幸一一死矣」‖短世・夭折。
【短絡】タンラク ひくきエがき。蘇軾詩「無レ限黃花繞二一一」
【短慮】タンリヨ ○あさはかなるかんがへ。後漢書、黃紹傳「愚俚一一、輕進易レ退」○氣みじか（短気）

八畫

【矮】ワイ 蟹

○みじかし。ひくし「一小」「一屋」「一人」○みじかくす、ちぢめる。

同部異音 矮・低・卑・庳の別は低（人部五畫）の條を見よ。
【矮屋】ワイヲク ひくきいへ。天賓道事「丈夫有二凌雲之志一而抑二於下位一、若レ立二身一一之下一、使二人匿レ頭不一レ得」
【矮人觀場】ワイジンノクワンヂヤウ 前條に同じ。
【矮椿】ワイシユン ひくきかき。張羽詩「一一低貼レ水、老樹倒垂レ蘇」‖短檐・卑牆。
【矮屏】ワイヘイ ○からだが、ひくくして、みにくし。西陽雜俎「一一機星」‖短陋。○家などがひくくむさぐるし。
【矮人觀場】ワイジンクワンヂヤウ 前條に同じ。
【矮椿】ワイシユン ひくきかき。張羽詩「一一低貼レ水、老樹倒垂レ蘇」‖短檐・卑牆。
【矮屏】ワイヘイ ○からだが、ひくくして、みにくし。西陽雜俎「一一機星」‖短陋。○家などがひくくむさぐるし。

十二畫

【矯】㊀ケウ ㊁ケウ 蕭

㊀たむ、ただす（匡正）なほくす（直）曲りしものをまっすぐにためなほす。曲を揉めて直からしむ。○いつはる（詐）詐り稱する「一詔」「一命」かこつける（託）○ほしいまま、みだりに（擅）○つよし（強）中庸「強哉一」いさむ（勇）たけし（武）○あぐ（擧）○とぶ（飛）㊁矢が躍り出る。○一一は高く擧る貌。
同部異音 矯・僞・詐・譎・詭・佯・陽の別は僞（人部十二畫）の條を見

よ。

【矯乃】ケウダイ　ことさらに人と違ひて自ら高しとする。秦観文「晉王旨日不レ甘レ餌、而指以爲二阿堵物一、此乃奸人故爲ニ―一、益二盧名一以暁レ世也」

【矯革】キョウカク　ためなほしてあらためる。後漢書、徐防傳「雖二所レ失或久一、蓋可ニ―一ニ」

【矯健】キョウケン　あがりをどる。杜牧詩「―蛟龍爪尾長」

【矯矯】キョウキョウ　○たけき貌。詩、魯頌「―虎臣」○高く秀る貌。志の高く超然たる貌。漢書、鼂錯傳「夏生ニ―一、弱冠登レ朝」

【矯激】キョウゲキ　つねなみの行にはづれて、はげしい。國史補「詩章則李ニ―千孟郊ニ」

【矯正】キョウセイ　ためいつはる。魏書、劉仁之傳「仁之外示二長者一、内懐ニ―一、其實二貪吝一、破耕散牛、盛飯冷菜、衣服故敝」‖譎詐。

【矯誣】キョウブ　旨をいつはりて設すの漢書「羽ニ―一刺子冠軍、自尊、罪二也」

【矯矢】キョウシ　やをためなほす。淮南子「調レ弓ニレ矢、而擁レ柱巍矣」

【矯揉】キョウジュウ　ためあらためる。揉は直き者をためて曲げる。文心雕龍「檃括情理、ニ―文采一」‖矯揉。

【矯揉】キョウジュウ　前條に同じ。易、說卦「坎(中略)爲ニ―一」

【矯情】キョウジョウ　ことさらに人情に背きて高異を示す。董仲舒賦「雖ニ―レ而獲二百利一兮、復不レ如二正レ心而歸一善一」

【矯首】キョウシュ　かしらをあげる。陶潛文「時ニレ而遐觀」‖擧頭。

【矯飾】キョウショク　うはべをいつはりかざる。後漢書、章帝紀「俗吏ニ―外貌一、似レ是而非」

【矯正】キョウセイ　ためなほす。南史、劉穆之傳「斟二酌時宜一、隨レ方ニ―」

【矯制】キョウセイ　朝命に假託して事を行ふ。史、汲黯傳「臣謹以二便宜一持レ節、發二河南倉粟一以振二貧民一、臣請歸レ節、伏ニ―一之罪一」

【矯詔】キョウショウ　みことのりなりといつはる。漢書、石顯傳「ニレ開二宮門一」

【矯俗】キョウゾク　悪しき風俗をためなほす。後漢書、祭遵傳「ニレ變レ化、卓如二日月一」

【矯託】キョウタク　いつはりてかこつける。唐書、博陵傳「生死濟天、本語自然、刑由威福、繫之人主、今其ニ―一、皆云二由レ佛」

【矯誣】キョウブ　いつはりてうばひとる。

【矯誣】キョウブ　ためいつはる。事實をまげいつはる。晉、仲長之語「ニ―上天一、以布二命于下一」‖詐欺。

【矯風】キョウフウ　あしき風俗をためなほす。‖矯俗。

【矯命】キョウメイ　矯は託、君の命なりといつはりかこつける。戰國策「ニレ以レ貴賜二諸民一」貴は債。

【矯勵】キョウレイ　わるきことをあらためて一所懸命にはげむ。晉書、劉琨傳「雖二暫自ニ―一、而輒復縱逸」

【矯枉】キョウオウ　まがれる者をためて正しくする。南史、王琨傳「ニレ過レ正」中庸を得る能はざるをいふ。

【矰】ソウ　蒸

いぐるみ、矢に生絲をつけて鳥雀を射る獵具。史、老子傳「飛者可二以爲一ニ」

【矰繳】ソウシャク　いぐるみ。弋鳥の具。史、陳侯世家「橫二絕四海一、當可二奈何一、雖レ有ニ―一、猶安所レ施」

【矰繳之說】ソウシャクノセツ　いぐるみにて鳥を捕る如く己の利益を目的として人に說く。韓非、五蠹「則遊說之士、孰不レ爲ニ用一――而徼中倖其後一」

【矰弋】ソウヨク　いぐるみ。莊子「鳥高飛、以避ニ―之害一」

十四畫

【矱】ヤク　藥

○ものさし(尺)○はかる、のり(標準)‖護。

石　部

【石】セキ　シャク　陌

○いし、山の骨「岩ニ―」「怪ニ―」「奇ニ―」「金ニ―」○おもり、はかり。○いしぶみ(碑碣)呂覽、求人「故功績勒二乎金一ニ」○いしばり、石の鍼(砭)○古、石にて作れる樂器、八音の一。書、益稷「擊ニ―拊ニ―」‖聲。○古、戰に用ひし投げいし「矢ニ―」○ますめ、一斗の十倍。○めかた、百二十斤の稱、三十斤を鈞と爲し、四鈞を一ニと爲す。書、五子之歌「關ニ―和鈞」○堅きものの形容に用ふる「心如二鐵ニ一」○やくに立たず、無用の義とす「一田」「一女」○くすり「藥ニ―」○人の姓、一顯は漢の濮南の人。○圖十斗、斛の音を借りて讀む。‖斛。

【石章】セキショウ　ひとつば、山地に自生する隱花植物の一。

【石尤風】セキユウのフウ　石氏の女、嫁して尤郎の婦となる、尤遠く出でて歸らず、妻之を憶ひ、病みて死するに臨み、默じて曰く、吾其の行を阻むる能はざりしを恨む、今より凡そ商賈の遠行する者あれば、吾當に大風を起し、天下の婦人の爲めに、之を阻むべしと、自後商旅船を發して、打頭の風に値へば、曰く、これ――なりと(江湖紀聞)

【石印】セキ　石版にて印刷する「一一本」

【石音】セキ　〇磬の音。寰、益稷、疏「石、磬也（中略）一一縣レ角、最難二諧和一」〇廣く石のひびき。王延士詩「青島忽來過、聽レ我金一一」

【石英】セキ　水晶。鑽石イ・瑪瑙ナなどの總稱。

【石垣】セキ　石造の垣。西城記二周二峰一一」

【石堅】セキ　石にて築きしみせ。

【石隙】セキ　甘きしほ「周禮、鹽人」ロ飴蜜。

【石燕飛】セキ　雨ふる兆とす。湘州記「零陵山有二石燕一、遇レ雨則飛如レ生、雨止則還爲レ石」

【石翁仲】セキ　石人に同じ。

【石屋】セキ　〇石づくりの家屋。〇竹園石を疊みせる又石を用ひて細工ある假山。ロ石工、石匠。

【石鏤】セキ　いしのわれめ。草廬雜詩「山中清景多、一一寒泉漱」ロ石隙。

【石階】セキ　いしだん。白居易詩「一一桂枝竹編簡」ロ石磴。

【石炎】セキ　かたまじはり。史、蘇秦傳「此所謂乘二危國一而得二一一者也」

【石紅】セキ　いしばし、飛びわたる橋。

【石硝】セキ　磧石の一、含水硫酸カルシウム。

【石壕吏】セキ　收斂の吏。明一統志「石壕在二河南府陝州城東七十里一、唐杜甫有二一一詩一」

【石角】セキ　いしのかど。張籍詩「檜聲呼出レ月、一一碧回レ雲」

【石瀨】セキ　石の多くあるたに川。

【石龍】セキ　石の五輪塔、或は塔。

【石敢當】セキ　五代の晉の勇士の名、後世其の名を石にほりて守護神とす。桑莊漫錄「一一、鎭二百鬼一、壓二災殃一」

【石磯】セキ　石のいそ。磯、巖二厜儀一、序「坐二一一一投レ竿而漁」

【石臼】セキ　石うす。後漢書、梁鴻傳「孟氏有レ女肥黑而醜、力舂二一一」

【石級】セキ　いしだん。ロ石階・石磴。

【石虛中】セキ　硯の異名。文房四譜、卽墨侯傳「一一、字居默」

【石渠天祿】セキ　漢代の書室の二つの圖書室の名。汪克寬、文會閣賦「思昔一一徒以貯二簡編之積和一」

【石鱗】セキ　小兒の時に優れたるを譬めていふ。陳書、徐陵傳「陵字孝穆、幼聰氏、骨參五色雲化而爲レ鳳、象二左肩上一、己而誕レ陵焉、時寶誌上人者、世稱二其有道一、陵年數歲、家人攜以候レ之、寶誌手摩二其頂一曰、天上一一也」ロ天上麒麟兒「杜甫詩」

【石窟】セキ　いはや。佛國記「新城山有二一一一南向、佛本手レ此蟄蹲」

【石火】セキ　いしを撃ちて出す火。事の極めて速かなるに喩ふ。新論「人之短生、猶如二一一一焉然以過一」

【石灰】セキ　いしばい。酸化カルシウム。後漢書、楊璇傳「以二排灰一盛二一一於車上一」

【石塊】セキ　いしくれ、石のかたまり。

【石梓】セキ　石にて造れる棺の外のはこ。檀弓「自斃二一一三年而不レ成」ロ石槨。

【石槨】セキ　前條に同じ。

【石花菜】セキ　ところてん、海藻の一、長さ三四寸紅色を帶ぶ。又其れにて製したる食品。圖洋菜。

【石亞之】セキ　石の如く堅くして蕭策に富む臣。漢書、匈奴傳「奇謀之士、一一甚衆」

【石徑】セキ　石のこみち。杜牧詩「遠上二寒山一一斜、白雲生處有二人家一」

【石遞】セキ　前條に同じ。

【石經】セキ　石に刻みたる經書、後漢の靈帝の時、蔡邕が朝命を奉じ始めて五經を石に刻して大學に立てしもの。後漢書、蔡邕傳、注「講堂前一一四部」

【石磬】セキ　石にてつくりし磬といふ樂器。

【石雞】セキ　かじか（河鹿）蛙の一種、清き谷川にすみ、美聲を發して鳴く。

【石橋】セキ　〇いしばし。三齊略記「始皇作二一一一」ロ石梁。〇シクウ圖龍葉の曲名。

【石決明】セキケツメイ　鮑ビバの漢名。

【石蜐】セキコウ　しゃぼん（佛語）

【石工】セキコウ　いしや。曲禮「天子之六工、曰土工、金工、一一、木工、獸工、皮工」ロ石匠。

【石刻】セキコク　いしぼり。新論「太山之有二一一一凡千八百餘處」

【石鼓文】セキコブン　周の宣王岐陽に蒐狩して、其の功を鼓の形の石に刻せし文字、初め陳倉野中に散在せしが、唐の鄭餘慶之を鳳翔府、孔子廟に遷し、元の季、燕京國子監に移せりといふ。古文眞實前集に韓愈・蘇軾の石鼓歌あり。

【石材】セキザイ　家屋橋梁碑碣等の材料として使用する石。

【石像】セキゾウ　石造の肖像。晉史、阮孝緒傳「供二養一一先有二損壞一、心欲レ補レ之、磐レ心發願、經二一夜一忽然完復、衆皆異レ之」

【石蓴】セキシュン　曼殊沙華（八八九頁二段）の一名。

【石州流】セキシュウリュウ　圖茶の湯及び生花の一派、片桐石見守貞昌のはじめしもの。

【石人】セキジン　〇墓道などに立つる石の人形。ロ石翁仲。〇無智にして頑石の如き人。史、滑稽傳、帝譽能爲二一一一」帝は武帝。

【石晉】セキシン　五代の後晉の劉稱、石敬瑭を祖とするが故。

【石匠】セキショウ　石工に同じ。

【石林】セキリン　〇石のねだい。晉史、宋武帝紀「帝素有二熱病一、坐臥常須二冷物一、後有レ人獻二一一一、寢レ之、極以爲

レ佳、乃咲曰、木林貝貴、而況石耶、即命レ毀レ之」○石のゆい。西京雑記「中有二一一石床一」(鍾乳石の下より出づるもの。本草「一一、一名乳牀、一名石笋、生二鍾乳窠中一、鍾乳水滴下、凝積生、如二筍狀一、久漸與二上乳一相接為レ柱也」

【石昌】セキショウ 水石の上に叢生する一種の深綠色の草。本草「一一生二水石間一」‖石菖蒲。

【石首】セキシュ いしもち。明一統志「一一魚在二南海一、頭中有二小石一故名」

【石絨】セキジュウ いしわた。元史、阿合馬傳「出二一一一織為レ布、火不レ能レ然」(然は燃の正字)‖石綿。

【石筍】セキジュン 岩石の尖りて立てるをたけのこに比していふ。高適詩「一一倒垂懸澗地」‖石笋。

【石綏】セキスイ 石のひだ。又、其れを畫く筆法。

【石鐘山】セキショウザン 山の名。明一統志「一一在二九江府湖口縣一、蘇軾曾游レ此」

【石鐘乳】セキショウニュウ 礦石の一、炭酸石灰を含める水が巖隙より滴下し日久しくして凝積し纍纍として下垂すること鐘の乳の如きもの。薬用とす、鐘一に鍾に作る。唐書、高季輔傳「帝賜二鍾乳一劑一、曰、而遇二藥石之言一、朕以藥石相報」

【石青】セキセイ 顔料グの一種、支那の南海に産す、色青翠、久しくして變ぜず、畫家多く之を用ふ。江淹文「山比二一一一」

【石磯】セキキ 石のいしずえ。

【石蠶】セキサン 石墨の類、眉を畫くに用ふ。劉長卿詩「殘妝添二一一一蛾翠一」

【石塔】セキトウ ○墓石。‖墓碑。○石造の五輪塔。

【石楊】セキヨウ いしのこしかけ。戴叔倫詩「挂レ納雲林淨、翻レ經一一涼」

【石炭】セキタン 古代繁茂したる植物が地下に堙沒して炭化したる黒色の石、燃料に用ふ。唐書、王勃傳「今温レ酒及炙レ肉、用二一一一」‖煉炭。

【石炭酸】セキタンサン 無色長針狀の結晶體、十五六倍の水に溶解す、防腐劑、又は、消毒藥として使用す、殺菌力最も強し。

【石地】セキチ 石田に同じ。晉書、索靖傳「行見二姑蘇城南一一」

【石竹】セキチク 山野に自生する草、夏月花開く、花色種種あり、瓣の先が齒牙狀に分裂す、からなでしこ。

【石丈】セキジョウ 石をたふとびて稱す。石林燕語「米芾知二無為軍一、初入二州廨一見二立石一頗奇、即命二袍笏一拜レ之、毎呼曰二一一一」

【石陽】セキヨウ 石の如き堅きはらわた。意志の強きに喩ふ。范成大文「壓二君子之一一一兮、固將レ狗二乎市虎一」‖鐵心。

【石長生】セキチョウセイ はこねぐさ、栽培用植物の一、高さ六七寸、葉は銀杏に似て小さし。

【石女】セキジョ うまずめ、子をうまざる女。蘇軾詩「一一無レ見傳薪槁」

【石田】セキデン 耕しがたき田地。左、哀十一「得二志于齊一、猶レ獲二一一一一也」

【石碓】セキタイ いしだん。後漢書、梁冀傳「飛梁一一、陵二跨水道一」

【石乳】セキニュウ 石鐘乳に同じ。庾信詩「一一滴二簷前一」

【石馬】セキバ 墓前などに立てる石のうまの漢書、霍去病傳、注「霍去病冢前有二石人馬一」

【石脂】セキシ 石にて作りたるふだ。神異經「東北有二鬼是石室三百戸、其一門一一題曰二鬼門一」‖石榜。

【石蜐】セキコウ みづごけの異名。爾雅、注「水苔也、一名一一」

【石破天驚】セキハテンキョウ 意外に奇抜なる事にいふ。李賀詩「女媧煉レ石補レ天處、一一逗二秋雨一」

【石版】セキバン 石材の面に文字繪畫等を寫し、其れを原版として印刷する印板。

【石盤】セキバン ○石筆にて文字をかくやうに作りし石の板。○屋根を葺くに用ふる石の板、スレート。

【石斑魚】セキハンギョ かははぜ。

【石碑】セキヒ いしぶみ。後漢書、儒林傳「一一帝乃詔二諸儒一、正二定五經一、刊二於一一一」

【石筆】セキヒツ 蠟石を筆の形に作りて石盤に文字などを書くに用ふるもの。

【石斧】セキフ 石にて造りしもの、太古石器時代に用ひしもの。

【石鉄】セキテツ 雕刻物・石碑などの石の塵。淵鑑類函、續仙傳「去レ壇二歩、其下一一、入レ地數尺」

【石蛙】セキア ○石女に同じ。太玄經、注「求レ室而得二一一一」○望夫石。白居易に「獨路一一詩」あり。

【石佛】セキブツ いしぼとけ。宋史、王寶傳「掘レ地得二數一一及石碣一」

【石蠅】セキヨウ いしを愛するくせの黒林石體「臨江士人、登レ子明有二一一一」

【石片】セキヘン いしのきれ。白居易詩「一一鋪二四首一」

【石砮】セキド いしばり、昔醫療に用ひし石造のはり。

【石本】セキホン 石ずりの本。米芾、寶章待訪錄「以二一一一見レ寄」

【石墨】セキボク 鉱石の一、黒色にして鉛光を有す、主に鉛筆のしんに造る。‖黒鉛。

【石蠣】セキレイ 石のひきうす。魏志、明帝紀、注「以レ繩連二一一一一磨二其衝一」

【石門】セキモン 岩石の門の聳立せるもの。袁宏道、姑蘇遊記「一一尤奇、兩石突起如レ門、下臨二絶壑一」

【石油】セキユ せきたんあぶら、炭素と水素との化合物にして點火又燃料に供す、くさらづ。本草「石腦油、釋名一一」

【石蜃】シャク　かまきりの異名。爾雅、注「螳螂有レ斧鼻、江東呼爲二一一一」

【石龍】セキリュウ　石づくりのらっか。

【石榴】セキリュウ　ざくろ。曹植詩「一一植二前庭一、緑葉擢二緋青一」‖安石榴。

【石梁】セキリョウ　いしのはし。水經、注「有二一一一亦謂爲二一一水一」

【石蠶】セキサン　○石の龍の形をなせるもの。張協賦「一一噴沫而蜿蜒」○蜥蜴ケラの異名。

【石龍芮】セキリュウゼイ　たがらし、たぜり、水田に生ずる雑草の一、葉は掌状黄緑色、五瓣の黄花をつける。

【石燕】セキエン　こいし、いしころ。

【石漑】セキガイ　石のくぼみて水のたまるもの。柳宗元、石渠記「有二一一一、菖蒲被レ之」

【石南】セキナン　石楠花に同じ。

【石楠花】シャクナンゲ　高山に生ずる灌木の名、しゃくなげ、葉は長楕圓形、花は紅白色、枝頭に簇り咲く。‖石南草。

【石言】セキゲン　石が能く人の言を爲す。左傳「一一三子言、晉侯問二于師曠一曰、石何故言、對曰、石不レ能レ言、何憑焉」

【射レ石爲レ虎】イシヲイテトラトナス　石を虎と見誤り、之を射て矢が深く根もとまでとほりたりといふ故事。韓詩外傳「楚熊渠子、夜行、見二寢石一以爲二伏虎一、射之沒レ金飲レ羽、視レ之石也、因後射レ石、矢揣無レ跡」史、李廣傳「李廣爲二北平太守一、嘗出獵、見二草中石一、以爲レ虎也、射之中レ石沒レ矢、視レ之石也、他日再射、終不レ入矣」

【此レ石成レ羊】イシヲシテヒツジトナス　黄初平、仙術を得て、白石を羊に化せしめたる故事。神仙傳「黄初平、丹溪人、年十五、家使レ牧レ羊、有二道士一、見二其貴一、謂二其父一曰、當レ與二其兒一、俱詣二金華山石室中一、四十餘年、其兄初起行レ山尋索、歴年不レ得、後見二市中一道士一曰、金華山中、有二牧羊兒一、是爾弟無レ疑、初起即隨去、相見語畢、問羊安在、曰、近在二山東一耳、往視レ之、但見二白石一、初平叱曰、羊起、於レ是白石皆變爲二羊數萬頭一」

【點レ石成レ金】イシヲテンジテキントナス　○古の仙人の術。列仙傳「許遜、南昌人、晉初爲二旌陽令一、――、以是二通賦一」○文字を改竄して名作とするに喩ふ。‖點レ鉄成レ金。

【拜レ石】ハイセキ　石を尊敬して之を拜せし故事。石丈を見よ。

【石韞レ玉而山暉】イシタマヲツツミテヤマカガヤク　内に學徳あるものは、自ら外に發して文をなすに喩ふ。陸機、文賦「一一、水懐レ珠而川媚」一本に暉を潤に作る。

【石突】イシヅキ　○槍・長刀などの柄の本をつつむ金具。○刀劍のこじり。‖鐏。

【漱レ石枕レ流】イシニクチスヽギナガレニマクラス　まけをしみの強きにいふ。晉書「孫楚字子荊、才藻卓絶、少時欲二隱居一、謂二王濟一曰、當レ云レ欲レ枕レ石漱レ流、誤云二漱レ石枕レ流一、濟曰、流非レ可レ枕、石非レ可レ漱、楚曰、所二以枕レ流、欲レ洗二其耳一、所二以漱レ石、欲レ礪二其齒一」

【縄レ石】イシニナワヲ　いしにふれあたる。公羊、僖三一「泰山之雲、一レ一而出、膚寸而合」

【介二于石一】イシヨリモカタシ　石よりも堅く確かなり、人の志操の固き形容。晏、豫卦「六二――、不レ終レ日、貞吉」

二畫

【矴】テイ　径

いかりいし（鐵に舟石）‖碇。

【矴石】テイセキ　いかりの石。唐書、楊瑒傳「事往二于人一、書二名史氏一足矣、若二碑頌一者、徒遺二後人一作二一一一耳」

三畫

【矸】カン　醒　寒　早

○山の石の貌。○石の淨き貌。

【矼】㊀カウ・コウ　㊁カウ　江　送

㊀水中のとびいし、いしばし（石橋）‖杠。㊁かたし、堅實なる貌。莊、人間世「德厚信レ一」

【矻】コツ　月

つかれる、ほねをりはたらく。

【矻矻】コツコツ　勉めてやまざる貌。又、勞れ極る貌。漢書、王褒傳「勞レ筋苦レ骨、終日一一」‖兀兀・汲汲・汲汲・屹屹。

【矹】ゴツ　月

砕一ガツは石屋の穏かならざる貌。又、沙石の水に隨ふ貌。‖硉兀。

【矽】セキ　陌

纖石の一、一に硅素といひ、化學の原素の一、褐色粉狀又は針狀・板狀等に結晶し、廣く土中に含有せらる、石英などと化合せしめて玻璃を製造する原料とす。

四畫

【硫】カウ　陽

一磺カウは雷などの聲。張衡、思玄賦「凌二蒼雷之一磺一兮」

【欦】カン　コン　感

きる（斫）

【砉】ケキ　クヮク　関　編

骨と皮との離れる辭の形。【砉然】ケキ　骨と皮と相離れる聲。莊、養生主「――嚮然奚ン刀騞然」

【研】研（石部六畫）の俗字。

【砂】サ　麻　通音シャ　通じて沙に作る

すな、いさご（沙）岩石が細かく碎けて小粒になりしもの「丹―」「辰―」「礫―」【砂糖】サタウ　圓甘味料の一、甘蔗の汁より取る。‖沙糖。【砂金】シャキン　河中の砂礫中に在りて黃金を含める沙粒。又砂粒狀の黃金。‖沙金。【砂石】サセキ　すな、いしつぶ、こいしの漢書、高祖紀「大風從ン西北一起、折ン木發ン屋、揚ン―ー」「豆唷」【砂漠】サバク　砂中に浴する、沙漠中の鳥類・獸類など皆これを爲す。【砂利】サリ　圓小石・砂の雜りたるもの‖砂石」【砂礫】サレキ　といし。杜甫詩、朔風飄ン胡雁、擧ン適帶ン―ー」【飛ン砂走ン石】ヒサスナ　大風の形容。搜神記「武王時、雍州城南有ン大樹、爲ン妖、以ン兵圍伐ン之、乃有ン神、―ー、雷電霹靂、無ン令ン得ン近」

【砌】セイ　サイ　霽

○きざはしの下のいしだたみ（階甃）「玉―」「甃―」「幽―」みぎり。○圓ころ（頃）「其の時「嚴寒の―」

【砆】フ　虞　珷・夫に同じ

礝ーノは玉に次ぐ一種の美石。‖武夫・瑠玞。

【砒】ヘイ　霽　通音ヒ

原素の一「―素」又其れを含む一種の鑛物、はげしき毒あり。「―石」「―霜」

五畫

【砥】㊀アイ　㊁アク　隊　職

砥ーノイは寶玉の名（史、范雎傳）

【砦】サイ　卦

とりで（壘）敵をふせぐ爲めに築きたる小城「―柵」宋史、楊存忠傳「拔ー遁去」‖塞。

【砥】シ　テイ　薺　紙

○といし（磨石）あをと、刃物をとぐに用ふる石にてきめの細かきもの「―礪」（礪はあらと）○たひらか（平）なる者に喩ふ。詩、小雅「周道如ー」（孟子萬章には底に作る、古、相通ず）○ひとし（均）○とぐ、みがく（磨）○ー礪ーノイは周の寶玉の名（史、范雎傳）

【砥矢】たひらかにして直きに喩ふ。詩、小雅「周道如ー矢、其直如ー矢」【砥尙】シクヮ　行をはげまし心を高くする。魏書、儒林傳「子弟人多ー―、儒林標興」【砥石】シセキ　といし。淮南子「ー―不ー利、而可ン以利ン金」【砥柱】シチウ　山の名、黃河の中に在り、砥ーノに底に作る。激流の中に屹立して少しも動かず、よりて亂世に在りて毅然として節を守る者に喩ふ「中流ー―」【如ン砥】ゴトシ　平かなる貌。字解參看。【砥平】シヘイ　といしの如くたひらか。親都賦「長庭ー―、緯ー夾陳」【砥礪】シレイ　といしを以てみがく。離亞文「ー―周鍼、水ー淬鄭刀」【砥礪】シレイ　○とぎみがく。礪、儒行「ー―廉隅」○といし（礪はあらと）山海經「維嶽之山、其中多ー―」

【砠】ソ　虞

いしやま、土山の石を載くもの。詩、周南「陟ン彼ー―ー矣」‖岨。

【砧】チン　侵　或は碪に作る

○きぬた、衣を搗つに用ふる石の臺。庾信詩「秋ー調急節」○草を搗つに用ふる石。古樂府「桑ー今何在」【砧鎖】チンサ　きりだい、古、人を殺すに用ふ、伏して斧を受ける臺。魏陽雄、名ニ致仕一第二表「將三將干ニ於是旗一、宜ニ先伏ニ於ー―一」‖椹質。【砧杵】チンショ　きぬたのきね。儲光羲詩「秋山響ニー―一」【砧聲】チンセイ　きぬたのこゑ。曾覿詩「ー―近報ニ漢宮秋」【砧斧】チンフ　きりだいと、をの（斧鉞）と、人を殺する具。韓愈詩「解ニ戰栗一、束ニ以ニー―一」

【砮】ド　遇　虞

いしのやのね（石鏃）國語「肅愼氏貢ニ楛矢・石ー―長尺有ニ咫一」

【破】ハ　箇

○やぶる、物事がこはれる（敗壞）○戰にまける。又、敵をくじきやぶる「擊ー」「撃ー」「殺ー」陽明全書「ー山中賊易、ー心中賊難」○ひらく（坼）さく（裂）「ー裂」わる（剖）「剖ー」つんさく（劈）○文義を解析（ときわけ）する「ー題」○つくす（盡）「看ー」「證ー」「踏ー」

同訓異語　破・敗・壞・傷・毀・壞・敵・弊・仆○破は、わる、われるなり。又、裂なり。破ㇾ竹・破ㇾ襲・破ㇾ卵の類。○敗は成または勝の反、物のつぶれる義、急に物をわりやぶるは、破なり。いつとはなしに、つぶれやぶれるは、敗なり。肉敗は、肉の腐敗したるなり。破軍は急に討ち破るなり。敗ㇾ軍は漸くに敗りたるなり。○壞はくづれ毀（こぼ）はれるなり。やぶるとも訓む。破壞・敗壞・崩壞などと用ふ。崩は、山など高き物のくづれるなり。壞は、高平の別なく、広く物のくづれ、そこなはれるをいふ。壞亂と熟す。舊喪「父母不ㇾ喪、則家敗壞」○傷はきずつきやぶれるなり。孟子「矢人惟恐不ㇾ傷ㇾ人、函人惟恐傷ㇾ人」また疵傷は、心をきずつける程に愛ふるなり。○毀は缺也、小兒齒毀・卵毀の類、優劣と連用す。○弊は壞と音訳同じ、壞に作るも同じ。○敝はやぶれつぶれるなり、敗に近し。韓文「三綱淪而九法斁」○敵・弊は二字同じ、完の反、衣服のふるびやぶれる義。敵帷・敝衣の類なり、轉じて疲弊・凋弊・困弊などと用ふ。○弃は昔ヒ、やぶり捨る義、岸のかけくづれる意なり。書經「方ㇾ命圮ㇾ族」「圮は音イ土橋にて訓字なり」

【破屋】（ハヲク）　やぶれや、あばらや。杜詩「王川先生洛陽裏、ー一數間面已朽」

【破戒】（ハカイ）　佛のいましめを破る。本法燈明記「若有二戒法一可ㇾ有ニー一、既无二戒法一由ㇾ破二何戒一而有ニー一」

【破格】（ハカク）　なみはづれ、先例をやぶる。目何外。

【破顏】（ハガン）　顏色を和げて笑ふ。五燈会元「世尊在二靈山會上一拈ㇾ華示ㇾ衆、是時衆皆寂然、惟迦葉尊者、ー一微笑」

【破堅】（ハケン）　○やぶりこはす。やぶれこはれる。管子「張ㇾ軍而不ㇾ能ㇾ戰、圍ㇾ邑而不ㇾ能ㇾ攻、得ㇾ地而不ㇾ能ㇾ實、三者見ㇾ一焉、則可ニー一也」○上級裁判所にて原裁判の判決を不當として取消す義。

【破棄】（ハキ）　やぶりすてる。

【破ㇾ義】（ハギヲ）　義理をやぶりそこなふ。左、隱三「淫ーレー」

【破舍】（ハシヤ）　やぶれたるふすま。陸游詩「元元過二逸夜一悠悠擁ニー一」

【破鏡】（ハキヤウ）　○夫婦の離別にいふ。神異經「昔有二夫婦一相別ーレー、各執二其半一、後其妻與ㇾ人通、鏡化ㇾ鵠飛、至二夫前一、後人鑄ㇾ鏡、背爲二鵠形一、自ㇾ此始也」○かたわれづき、まろくなき月。古詩「ー一飛上ㇾ天」

【破卻】（ハキヤク）　やぶりすてる、卻は助字。唐書、褚遂良傳「敎ニー之」

【破軍星】（ハグンセイ）　北斗の第七星にて剣に象るもの、此劍先の方に向ひて事をなす者は必ず失敗するといふ。開元占經、五行大義黃帝斗圖「一名二貪狼一二名二巨門一三名二祿存一四名二文曲一五名二廉貞一六名二武曲一七名二破軍一又金神在ㇾ斗居ニー一」

【破瓜】（ハクワ）　○瓜の字を二分すれば二個の八の字となる、因りて女の十六歳を破瓜の年といふ。孫綽詩「碧玉ニー時、郎爲ㇾ情顚倒」○八八六十四にて、男子の六十四歳の義とす。呂洞賓詩「功成當ㇾ在ニー年」

【破塊】（ハクワイ）　つちくれを破る、暴雨の農作を害するをいふ。無鹽論「太平之時、雨不ㇾ破ㇾ塊」

【破潰】（ハクワイ）　○やぶれつひゆ。魏志、武帝紀、注「乘二聖朝之威一（中略）遂大ニー一」○洪水などにて堤がきれる。Ⅱ決潰。

【破壞】（ハクワイ）　くだきやぶる。又、くだけやぶれる。淨住子「無ㇾ所ニー一」

【破壞主義】（ハクワイシュギ）　○確實なる眞理又は善惡の標準等の存在を否定する見解。Ⅱ破壞說。○他の計畫をうちこはす意見。

【破曉】（ハギヤウ）　天の初めて明ける義、しののめ。楊萬里詩「昨來風日較暄些、ー一來遊特地佳」

【破椅】（ハイ）　やぶれたるはかま。蘇軾、倉言詩「溪邊布穀見、勸ㇾ我脫ニー一」Ⅱ繁褲。

【破獄】（ハゴク）　ろうやぶり。罪人がろうやをやぶりてにげる。Ⅱ脫獄・破牢。

【破碎】（ハサイ）　やぶりくだく。也、義樂論「盡ニー其家一」Ⅱ破摧・碎破。

【破摧】（ハサイ）　やぶりくだく。又やぶれくだける。Ⅱ破碎・破壞。

【破敗】（ハハイ）　やぶりちらす。軍書、魏徵傳「遣ㇾ將其勳「ニー陵諫、以明ニー世之義一、全ニー功臣之世一」

【破產】（ハサン）　財產をつひやす。今俗謂ㇾ白詩「子孫未ニ必學一ㇾ不ニー破ㇾ家」

【破傷風】（ハシヤウフウ）　病の名、きず口より一種の微菌が入りて起す惡性の病。

【破邪顯正】（ハジヤケンシヤウ）　邪道を打ちやぶりて正法をあらはす。

【破船】（ハセン）　○船が暴風などのためにこはれる。Ⅱ難船・難破船。○やぶれたる船。晉書、武帝紀「前殿小船數丈、中有ニー一」

【破壞】（ハクワイ）　圖散財する。

【破損】（ハソン）　やぶる。又やぶれる。

【破顏】（ハガン）　○文の起首に於て題意を剖析するをいふ。六一詩話「梅聖俞

賦二河豚詩一云、春洲生二荻芽一春岸飛二楊花一（中略）知レ詩者謂、一一所レ句、已道二盡河豚佳處一」○八股文の首二句をいふ。

【破題書】ハクダイ　○書の一種。晉斷「王獻之變二右軍行書一、號曰二一一一」○圖　俗書の楷法に合せざるもの。

【破綻】ハタン　やぶれほころびる、事業がやぶれて立ち行かず。

【破談】ハダン　圖相談がまとまり合はず、談判未成に終る。

【破顏】ハガン　おどろきおそれる。韓非、存韓「趙氏一レ、荊人懾疑」

【破竹】ハチク　竹を破るに、其の節に刃を加ふれば、數節の後は、容易に裂くるが如く、勢猛烈にして敵するものなきに喩ふ。晉書、杜預傳「今兵威已振、譬如レ破レ竹、數節之後、皆迎レ刃而解」

【破垣錐】ハエンスイ　羅鍋の異名（農書）

【破陣】ハジン　敵陣をうちやぶる。陳書、文帝「河橋之役、先登一レ」

【破陣樂】ハジンラク　唐の太宗秦王たりし時、劉武周を征して功あり、軍中にて秦王破陣樂を作る、即位に及びて、宴會必ずこれを奏す（唐書、禮樂志）Ⅱ七德舞。

【破綻】ハタン　やぶれ落ちる。漫叟詩話「成瓦一一無二復全一」

【破滅】ハメツ　泣くことをやめる。列子、答二張湛書「一レ一爲レ笑」悲を轉じて喜とする義。

【破的】ハテキ　○まとをやぶる、射て的に中ッてる。晉書、謝衛傳「賊若一レ、當下以二鼓吹一相賞上倘應レ聲中レ之」Ⅱ貫的。○轉じて言の理に中たる者に喩ふ。

【破天荒】ハテンコウ　天荒は天地未開の時の混沌たるさま、之をやぶり開く義にて、率先して人の未だ爲さざる所を爲すにいふ。北夢瑣言「荊州解送擧人、多不レ成レ名、號曰二天荒一、至二劉蛻舍人以二前解一及第一、爲レ破二天荒一」

【破風】ハフウ　國家の兩側面の屋根の切棟（きりむね）が下り山形をなす所。Ⅱ搏風。

【破釜沈船】ハフセンセン　釜（金部二畫）の條を見よ。

【破片】ハヘン　かけ、こはれたるかたはし。

【破綻】ハタン　やぶれほころぶ、やぶりほろぼす。漢書、王莽傳「皆一二一之」

【破門】ハモン　師が其の弟子を棄てて師弟の關係を絶つ。又宗派から信徒を除名する。

【破約】ハヤク　約束をやぶりて履行せず。Ⅱ背約。

【破浪】ハラウ　なみをやぶる。南史、宗慤傳「慤年少、叔父問二其所一レ志、慤曰、願乘二長風一破二萬里浪一」

【破落戶】ハラクコ　どろつき。咸淳臨安志「近令臨安府、收二捕一一、編置二外州一」

【破倫】ハリン　人倫の道をやぶる。Ⅱ不倫。

【破裂】ハレツ　○やぶれさける。○圖談判がやぶれる。

【破廉恥】ハレンチ　はぢしらず。

【破廉恥罪】ハレンチザイ　盜賊詐僞姦通等すべて私慾よりして生ぜし犯罪。國事犯等の對。

【砲】ハウ　俗字

○いしはじき、いしゆみ、古代の武器の一、彈機にて石塊をはじき飛ばして敵を攻めるもの。○おおづつ「火一」

【砲烙】ハウラク　てつぼうのけむり。Ⅱ砲煙。

【砲火】ハウクワ　大砲をうちだすときに發する火ばな。又うちだす砲丸。

【砲丸】ハウガン　大砲のたま。Ⅱ砲彈。

【砲工】ハウコウ　○銃砲を製する工人。○砲兵と工兵と。

【砲手】ハウシュ　大砲の發射を司る兵。

【砲術】ハウジュツ　大砲を發射する方法。

【砲數】ハウスウ　砲塞に同じ。城は小高き土地。

【砰】ハウ　ヒャウ　㊥

○大いなる聲。○石の落ちる聲。

【砰隱】ハウイン　盛んなる貌。漢書、禮樂志「休嘉一一溢二四方一」

【砰磕】ハウカツ　雷の如く盛んなる聲。羽獵賦「一一聲若二雷霆一」

【砰訇】ハウコウ　大いなる聲。沈約賦「其水則一一漰迫、或寬或疾」

【砰然】ハウゼン　石の落ちる聲。列、湯問「一一聞レ之如二雷霆之聲一」

【砰湃】ハウハイ　波のうちあふ貌。胡天游詩「須臾萬里霧、一一動二蓬瓦一」

【砰砰】ハウハウ　鼓の聲。陸機、鼓吹賦「鼓一一以輕投」

【砰磕】ハウカツ　石の落つる聲。又水流の激しく怒る聲。司馬相如、上林賦「一一一匐磕」

【碾】

碾（玉部五畫）に同じ。

【砭】ヘン　㊥　㊦

○いしばり（石鍼）「針一」「鍼一」○石ばりす、石針にて病を治す。○轉じて人の性行をためなほす、いましめる、過失な規諫する。又其の戒規のことば。范成大詩「時時苦語兒一一」

【砭灸】ヘンキウ　いしばりと、やいとと。病を治する法。史、倉公傳「法不レ當二一一一」Ⅱ鍼灸。

【砭愚】ヘング　愚にいしばりす、おろかなるものをいましめる義。伊洛淵源錄「横渠初書其窗之左、曰二一一一」右曰二訂頑一」

【砌】㊀ラ　㊁カ　歌

㊀磊ー（ライ）は衆くの小石の積み重なれる貌。上林賦「水玉磊ー」又、人の性體の卓特（タクトク）なる貌。世說「其人磊ー而英多」○ーろ（ラウ）はとどろきひびく聲。顧雲詩「轟轟ーー雷車轉」㊁玉に次ぐ石。＝珂。

六畫

【硎】ケイ　ギャウ　青

といし（砥石）莊、養生主「刀刃若新發於ー」（とぎたての如くするどし）

【研】㊀ゲン　㊁ゲン　先　通音ケン　俗字

㊀とぐ、みがく。○きはむ（究）物事の理を攻究する。㊁すずりいし、墨を磨する具。「筆ー」＝硯。

【研磨】ケン　硯のふた。舟庫集、東坡ー銘曰、研貌有ㇾ智」＝硯盤。

【研考】ケン　きはめしらべる。後漢書、蘇竟傳「ーー異同」＝考究。

【研校】ケウ　しらべくらべる、校は較。牛弘文「ーー是非、定二其去就一」

【研學】ケン　學問をみがく。

【研覈】ケン　しらべかんがへて明かにする。張衡、東京賦「温ㇾ故知ㇾ新、ーー是非」

【研求】ケウ　みがきもとめる。晉書、阮瞻傳「瞻讀ㇾ書、不二甚ーー一」＝研尋。

【研究】ケウ　みがききはめる。元史、鐵木兒塔識傳「伊洛諸儒之書、深所二ーー一」

【研窮】キウ　みがきはめる。陳亮、答二朱子一書「ーー義理之精微」

【研攻】コウ　みがきをきめる。張羽詩「經史左右相ーー」＝研究。

【研索】サン　みがきはめる、索は錐にて穴をあける如く深くきはめたづねる。樓鑰詩「衙友更從遊、問學加二ーー一」＝精研。

【研塗】ジョ　すずりばこ。清異錄「歐陽通善ㇾ書、造二論文具一、號二ーー一曰二端溪方舘一」＝硯匣。

【研覈】ケン　十分にしらべる。北齊書、魏收傳「帝以二魏史未ㇾ行、詔ㇾ收更加二ーー一、收奉ㇾ詔、頗有二改正一」＝究審。

【研精】ケイ　きはめてつまびらかにする。後漢書、盧植傳「學好二ーー一、不ㇾ守二章句一」

【研澄】チョウ　みがきすます。眞誥「淨レ理注レ倫、ーー康競」

【研田】デン　文士は、文筆を以て生活を營む、故に田地に喩へていふ。蘇軾詩「我生無ㇾ田食二硯研一」＝硯田。

【研聒】ビン　みがきてうるはし。南史、王錫傳「作ㇾ辭必ーー一」＝脂磨

【研輝】ケン　研は硯、硯を愛するくせ。五雜俎「蔡氏可ㇾ謂二世有一ーー一癖」

【研北】ホク　几案を南方に向けて置く時は、人は硯の北に坐す、故におそばといふ。或にて書狀の宛名（アテナ）の脇付とす。天祿識餘「段成式書云、杯宴之餘、常居二ーー一、几案面ㇾ南、人坐二研之北一也」＝硯北。

【研磨】マ　きはめみがく。歐陽修詩「官學三十年、六經老ーー」

【研摩】マ　○學をする。梁武帝文「ーー墨二以勝ㇾ文」○みがきはめる。＝研讀。

【研覽】ラン　きはめてしらべみる。晉書、徐廣傳「百家搜數、無ㇾ不二ーー一」

【硃】シュ　虞

○しゅ（朱）礦石の一、赤きすな、赤色の顏料とし、又圖めて朱墨を造る。辰砂・丹砂・銀砂・酸化水銀「ー砂」○あか色。

【硃砂】シュサ　水銀の原料とするもの。參同契、注「燒二鴻ーー一、覓無ㇾ所ㇾ得」

【硃批】ヒ　清朝の制、內外の奏章、悉く皇帝の親しく硃筆（シュヒツ）を以て批示するをいふ「ーー諭旨」＝硃諭・上諭。

【硫】リュウ　尤

○山上の大いなる石。○礦ー（コウリュウ）は壯大なる貌。○磊ー（ライリュウ）は石の貌。○ーー（リュウロウ）は石の堅くして相入れざる貌。

【硅】ロッ　月

ーー（ロツコツ）は石崖の穩かならざる貌。又、沙石の水に隨ふ貌。＝碑兀。

七畫

【硜】カウ　キャウ　庚

ーーはかたくるしき小人の貌。又、磽石のこと。

【硜硜】カウ　○磽石のこと。史、樂書「石聲ーー、以立ㇾ節」○かたくるしき小人の貌。論、子路「ーー然小人哉」○孟軻氏の貌。論、盡心「言語ーー」

【硬】ガウ　敬　通香　カウ

○かたし、こはし（堅牢）つよし（剛強）「強ー」「堅ー」杜甫詩

「吉貴ニ種ノ方連神」○生ー（カイ）は未だ十分に熟せざる義。

【碩南】（コウ）へっ（蟹）をいふ。軒渠錄「紹興十七年五月初、臨安大雨、…太學屋瓦皆碎、學官申二朝廷一、…不レ可レ言、…蟹、稱爲二ー一也」‖碩頭雨。

【碩漢】（カン）知づよくして人に屈せざる男。碩骨の男子。

【碩貨】（カ）金銀貨の貨幣。紙幣などの對。

【碩學】（ガク）學問の深い人。

【碩鼠】（ソ）詩經三貴族一」

【碩骨】（コツ）かたくほね。轉じて、剛強にして人に屈せざる義。全唐詩話「ー一殘形知二後秋一、屍骸終是不二風流一」

【碩濁】（ダク）文章などがかたくしてしぶる、生硬晦澁の流暢の對。

【碩水】（スイ）多量の炭酸石灰・硫酸石灰等を含有する水。軟水の對。

【碩性】（セイ）かたきたち。宋元詩「ー一醉二斤酒」

【碩度】（ド）鑛物のかたさの度あひ。‖堅度。

【碩煤】（バイ）俗無烟炭。‖硬炭。

【碩文學】（ブンガク）國まじめに正しき文學。小說などを軟文學といふの對。

【碩鱗類】（ギョルイ）魚類の一部門、軟骨及硬骨の二部、若くは全部硬骨を具へ、鱗は表面に琺瑯質を被り光澤あり、てよざめの類）

【碻】カク 覺

○堅ー（カク）は石の多きやせ地。‖境埆。○堅く正し、たしか（確）後漢書、崔寔傳「指切二時要一、言辯而ー」○きそふ（競）くらぶ。漢書、李廣傳「數與二虜ー」‖角。

【碻】カク 陌

堅ー（カク）は水石に激して峻險にして平かならざる貌。

【硿】クゥ 庚

石の落つる聲。

【硿硿】（クウ）石の落つること。潘岳、藉田賦「設鞭ー一、以研鋌」

【硯】ケン 霰

○すずり、すずりいし、文房具の一、磨墨の具、通常、石を以てつくる「石ー」「陶ー」「鐵ー」周武王、硯銘「石墨相著而黑」‖研。○筆ー（ふでとすずり）と。轉じて讀書作文の義。

【硯蓋】（ガイ）すずりのふた。南史、梁武帝紀「盤龍火爐、鳳翔ー一」‖研蓋。

【硯材】（ザイ）すずりに適すべき材料。怡情小品「其下多二ー一」

【同二硯席一】（ドウセキ）人と同學するをいふ。漢書「宣帝少時、與二彭祖一ー一」‖共二研席一（晉書、劉弘傳）

【硯箋】（ケンセン）書名、四卷、宋の高似孫撰す、一卷は端硯を說き、二卷は歙硯を說き、各附するに詩文を以てす、原には硯の圖あり、今は佚す、三卷は諸硯品を說き、四卷は諸硯に關する詩文を載す。

【硯池】（チ）すずりの水のたまるところ。葉平巖詩「點點梅花入二ー一」

【硯滴】（テキ）すずりの水さし、水注。經鮫然詩「ー一穿レ池小」

【硯田】（デン）すずりを田に喩へて稱す。唐庚詩「ー一無二遠識一、酒國者二長春一」‖研田。

【硯屏】（ペイ）すずりの向ふに立てる衝立の如きもの。淵天清錄「自二東坡山谷一、始作二ー一、…銘二硯一、又刻二於屏一」‖研屏。

【硯北】（ホク）學者文人の名宛の脇付にする語。研北（一三四七頁）を見よ。

【硯林】（リン）書名、一卷、清の余懷撰す、硯に關する事を隨筆し、年代の次なし。

【硨】シャ 麻

印度に產する玉に次ぐ寶石、しゃこ。

【硨磲】（キョ）○七寶の一、玉につぐ寶石。‖車渠。○蛤類の最大なる者、其の長徑三尺許、殼甚だ厚く、白色にして光澤あり、磨きて裝飾用とす。

【硝】セウ 蕭

○無色の結晶體をなす鑛物の一種、熱帶地方に產し、火を點ずれば紫焰を發して燃ゆ、火藥・硝子などの原料とす「ー一石」「芒ー」○火藥「ー一烟」「煙ー」

【硝煙】（エン）○火藥のけむり。○鐵砲のけむり「ー一彈雨」‖硫煙。

【硝酸】（サン）窒素と酸素との化合物、腐蝕性を有する無色の液體。

【硝酸銀】（サンギン）硝酸にて銀をとかして得る無色板狀の結晶體、寫眞術・醫療等に用ふ。

【硝子】（シ）ガラス。‖玻璃。

【硝石】（セキ）字解を見よ。

【硝藥】（ヤク）くわやく（火藥）えんせう（煙硝）「彈丸ー一」

【碌】ラク 陽

○ー一は石の相擊つこと。○雷ー一磅ーは大いなる聲の形容。

【碌碌】（ロク）石の相うつこと。又、雷の聲。王逸賦「雷聲兮ー一」

【碌碌】（ロク）○石の相擊つこと。司馬相如、子虛賦「礧石相擊、ー一磕磕」○堅き貌（博雅）

【硫】リウ 尤

ゆわう、火山の地に產する黃色

の鑛物、火を點ずれば青焰を發して燃え、劇臭を放つ、藥又は工藝品の原料とす。‖硫黃。

【硫化銀】リウクワギン 硫黃と銀との化合物、黑色の粉末狀をなす、銀器が硫黃の氣にふれて黑くなるは――を生ずるに由る。

【硫化水素】リウクワスイソ 硫黃と水素とが化合せし無色惡臭の氣體。

【硫酸】リウサン 無色油狀の液、酸性強くして金と白金との外、殆どすべての金屬を溶解し、水に混ずれば多量の熱を發す、又吸濕性強く諸種の物を乾燥するに用ふ、醫療及工業上の用途多し。

【硫酸銅】リウサンドウ 銅を硫酸と共に熱して得たる鮮青色の結晶物、銅由には自然に產し、染色術・鍍銅等に用ふ。‖膽礬・石膽。

【硫黃】リウワウ 字解を見よ。

【硇】

國字

はさま(峽)たにあひ。

【碕】

八畫

(一)キ (二)キ 支 紙 寘

(一)まがれるきし(曲岸)○ながきほとり(長邊)○いしばし(石矼)(二)石の貌。楚辭「嶽鎡―磯」

【碁】

基(木部八畫)に同じ。

【碌】

ギン 眞

儼―は深く險しくして連り延ぶる貌。

【碎】

サイ 隊

○くだく、細かに破る「粉―」「破―」「細―」○くじく「―敵」「摧―」「殲―」○くだける、こまか。○こな、くづ(瑣屑)○くだけたるきれ(細片)○くだくだし「煩―」「瑣―」「零―」晉書「孔愉言敎何―」

同訓異義 碎・摧・折○碎は細に破るなり。史記「臣頭與ン璧俱碎ニ於柱ニ」○摧は摧破・摧折と連用す、折りひしぐ義。世說「王爲ン敵摧、不レ爲ン顧敷笑榮ニ」○折はこなごなに碎く義、藥粉を熱す、碎に同じ。

【碎金】サイキン くだきたる金。詩文の字句の美なるに喩ふ。晉書、謝安傳「桓溫嘗以ニ謝安石所ン作誥文示ニ坐賓ニ曰、此安石―也」

【碎銀】サイギン 小さき銀貨。搜神記「取ニ出ニ―ニ付ニ與王生ニ」

【碎劇】サイゲキ くだくだしくいそがし。魏書、衞覬傳「蔣少遊、有ニ文藻ニ而不レ得レ伸ニ其用ニ恒以ニ剛綱總ニ尺―ニ、徙ニ尙閑湖城殿之側ニ」‖繁劇。

【碎瑣】サイサ ○くだけて、こまかなる貌。○煩はしく細かなる貌。黃庭堅詩「春蛙夏蠅更喧聒 土蜈蚣蠆何―ニ」

【碎碎】サイ こまかなる貌。五燈會元「再三瑣瑣―ニ」

【碎辭】サイ くだくだしきことば。漢書、劉歆傳「分ン文析ン字、煩言―ニ」

【碎身】サイシン 身をこなにしてはたらく。禪林類聚「粉骨―、蘇ン報ニ此德ニ」

【碎石】サイ くだけたるいし。拾遺記「方丈山有ニ細石ニ去ン石十里、觀ニ人物之影ニ如ン鏡ニ、―片片、皆能照レ人」

【碎破】サイ ○こはれる。○くだきやぶる。

【碎片】サイヘン かけ。‖破片。

【碎務】サイム くだくだしきつとめ、瑣碎の事務。晉書、劉毅傳「不ン宜ニ勞以ニ―ニ」‖雜務。

【碎裂】サイ くだけさける。韓愈詩「雨雹擊ン瓦―」

【碇泊】テイハク 碇を下して船をとめる。‖碇宿。

【碓】

タイ 隊

からうす、ふみうす、米穀などを入れてうすつく具。桓譚新論「宓犧制ン杵臼之利、後世加ン巧、借ン身、踐ニ―而利十倍ニ」「山―」「水―」「舂―」

【碓擣】タイタウ からうすのおと。盧仝詩「荒提綠雨多ニ牛跡ニ、村舍無ニ人有ニ―ニ」

【碓】

ツキ 寘

○つく(搗)○しづむ(沈)‖呂覽「―之以ニ石」

【碇】

テイ 靑

○いかり(錨)舟を停めるに用ふる石のおもり。唐書「蕃船泊ン步、有ニ下ニ―稅ニ」‖矴。○いかりをおろす「―泊」

【碇泊】テイハク 碇を下して船をとめる。‖碇宿。

【碣】

ケツ 屑

やじり(矢鏃)と爲すべき石。

【磧】

セキ 陌

○壁の形容、○―沙は礫物の一、多くは火山附近の地中

に産す、黄白二種あり、玻璃狀を爲し、冶金に用ふ。○一酸鹽は藥品の一、無色にして鱗片狀を爲す、防腐性洗滌藥に用ふ。

【礪陸】つづみのこゑ。魏文帝賦「伐二鼛鼓之一一兮、建二長旗之飄一一」

【礪礎】石の擊ちあふ聲。張華詩「八音一一奏、羽爼從橫陳」

【碑】ヒ　支

○たていし（竪石）古、宗廟に立てて牲を繫ぎし柱狀の石。○祝、祭義「君牽二牲入一廟門一、麗於一」後人、其の上に功德を記せしによりていしぶみの起原となる。○古、棺を穴に下す時、其の綍をしばりつけたる石。○いしぶみ「石一」「苔一」「斷一」「殘一」「墓一」「神道一」初學記「一以悲二往事一也、今宮室廟屋墓隧之碣、鐫二文於石一皆曰一」

【碑陰】イン　○いしぶみのうら。文體明辨「凡碑、面曰レ陽、背曰レ陰、一一文者、爲レ文而刻二之碑背一也」○碑背に書く文、又其の文體。‖碑陰文。

【碑碣】ケツ　いしぶみ。四角なるを碑、圓きを碣といふ（揚雄、羽獵賦）文心雕龍「自レ漢以來、一一雲起」

【碑誌】シ　いしぶみにかく文章の一總。‖碑文。

【碑帖】ヒテフ　いしぶみなどの搨本。

【勒レ碑】ロクヒ　石に文をほりつける。

【碑牓】ボウ　いしぶみと、かけふだと。周書、蔡儁傳「趙文深、少學二楷隸一、雅有二鍾王之則一、筆勢可レ觀、當時一一、惟文深及黄門而已」宣和書譜「來清臣、寸紙數字、人爭售レ之、以爲二珍玩一、至於論二求一一戸外之屨常滿と」

【碑版】ハン　碑誌の類。‖歐陽修、集古録「柳公權、筆二書學一、不レ能レ治レ生、爲二勸酸家書一一‖歐陽修、時筆萬」

【碑文】ブン　いしぶみにかく文章の一體。‖碑誌。

【碑裏】リ　いしぶみのおもて。任昉文「一一無滅、丘墳靡殞」

【碑銘】メイ　姓名鄉貫性行などを記して墓所に建つるもの。後漢書、郭泰傳「當爲二一一一。泰、嘗有二顛倒一、唯郭有道無二顛色一耳」

【碱】ブ　麌

碔（玉部八畫）に同じ。

【碱共】ブ　石の玉に似たる者。司馬光賦「一一亂レ玉」‖碱砆・武夫。

【磷】リン　眞

一一は深き貌。張衡賦「漂通川之一一」

【磟】ロク　沃

○石の青き色。○一一は人に隨從する貌。又、小さき石の貌。少き貌。○圖人事の繁雜なるを忙一といひ、辛勤するを勞一といふ。

【磟磟】ロクロク　○人に隨從する貌。又、凡俱なる貌の喩、蜀志傳「九卿一一、率二其官一」‖錄錄の○少き貌。老子「不レ欲二一一如レ玉」○小の聚、賈島詩「一一復一一、百年雙鬢蒼」‖轆轤。

【碗】ワン　旱（皿部五畫）の俗字。

わん。‖椀。

九畫

【磍】㊀ガン　㊁チン　長

㊀一一は山の形。左思賦「恒碣一一於青雲」㊁砧（石部五畫）に同じ。

【磽】ガン　感

○けはし（險）○いは。‖巖。

【碣】ケツ　屑

○石の特立せる貌、たちいし。張衡賦「若雙一之相望」○いしぶみ、方なるを碑といひ、圓なるを一といふ「碑一」「墓一」「神道一」○一石は山の名。漢書、武帝紀「東巡至二一石一」

【碩】セキ　陌

○大いなり。大碑「莫レ知二其苗之一一」○みつ（充實）○壯なる貌。

【碩學】ガク　大學者。後漢書、儒林傳「夫書理無二一義一、論有レ宗、而一一之徒、莫二之或徙一、通人部二其固一焉」‖碩儒。

【碩果不レ食】ショクセズ　おほいなる果物の一つ殘りてある貌。君子の道の決して亡びざるに喩ふ（易、剝卦）

【碩畫】カク　大いなるはかりごと。‖大計。

【碩士】シ　德たかき人、賢士。五代史「前後左右者、日益親、則忠臣一一日益疎」‖賢士。

【碩人】ジン　○大いなる德ある人、大人君子。又其の德ある隱士。詩、衛風「考槃在レ澗、一一之寬」○美人。詩、衛風「一一其頎」

【碩儒】ジュ　大學者。後漢書、荀淑傳「南臺二漢治二十餘年、以二著述一爲レ事、

逢稱爲ニ――一」‖大儒・鴻儒。
【碩夙】セキシュク おほねずみ。詩經の篇名。
【碩大】セキダイ 徳の大いなる貌。詩、陳風「有ニ美一人ニ――一且碩」
【碩大無ノ朋】セキダイムホウ 相貌が立派で美徳ありて朋比の行なき貌。詩、唐風「彼其之子、――」
【碩德】セキトク 大いなる徳。又其の人。
【碩輔】セキホ 賢良なる輔佐の臣。韓愈詩「天錫ニ堯帝一龍臣ニ――一」
【碩謀】セキボウ おほいなるはかりごと。子部文「宏略泉深、――雲蓋」‖碩畫。
【碩茂】セキモ おほいにしてしげる。轉じて子孫が繁榮する。漢書、敘傳「公旦爲ニ滋、支葉ニ――一」
【碩老】セキロウ 徳たかき老人、大人君子。揚雄、詩箴「者倫ニ――一、抱ニ其書一而遠遊」
【碩量】セキリョウ 大いなる器量。孫綽、郗鑒碑「聖德ニ――一、天實挺生ノ之」‖大器・大度。

【碩】ゼン 銑

玉に次ぐ美石。司馬相如、子虛賦「ニ石碱砆」

【碭】タン 養 陽

○あやある石(文石)○竺――バウは江蘇省徐州府に在る山の名。漢書、高帝紀「隱ニ芒ニ――一山澤間ニ○ほしいまま(蕩)○はねあがる。莊、庚桑楚「呑舟之魚、――而失ノ水」

【磁】ジ 寘

瓷(玉部九畫)に同じ。

【磐】ヘキ 陌

○あをく美くしき石「一玉」山海經「高山多ニ青ー」○あをみどり(深青色)「一草」「一潭」「紺――」「深ー」「一空」「一落」
【碧漢】ヘキカン あをき色のさざなみ。李賀詩「金塘開水搖ニ――一」‖碧浪・綠漪。
【碧字】ヘキジ あをぞらの隙欄詩「――星回夜漫漫」‖碧落・碧宵。
【碧雲】ヘキウン みどりの雲。江淹詩「日暮――合、佳人殊未ノ來」
【碧葉】ヘキヨウ みどりのは。李白詩「春光揮ノ地盡、――成ニ黃泥ー」‖綠葉。
【碧圓】ヘキエン 蓮の葉などのあをくまろきをいふ。韓愈詩「荷折ー――傾」
【碧海】ヘキカイ あをうなばら。薛道衡詩「駕ノ龍臨ニ――一、控ノ鸞踐ニ瑤池ー」‖滄海。
【碧青】ヘキセイ 濁などの水があををたたへて油の如くに見える形容。
【碧霞元君】ヘキカゲンクン 泰山の神の女、即ち東嶽大帝の女(山東考古錄)
【碧眼】ヘキガン あをきめ。高僧傳「達摩跋
【碧山】ヘキザン 青き山。李白詩「問ノ余何意栖ニ――一、笑而不ノ答心自閑」
【碧沚】ヘキシ あをきなぎさ。隋書、樂緯傳「踐ニ柔砂一步ニ――一」
【碧鮮】ヘキセン あをみどり色のしきがはら。李賀、冰井賦「――燒發、滿光烟烟」
【碧樹】ヘキジュ みどりいろの木。韓愈、石鼓歌「瑠璃ー――交ニ枝柯ー」
【碧水】ヘキスイ みどり色の水。梁昭明太子詩「桂樹臨浮ニ――一江花玉面兩相似」
【碧青】ヘキセイ 釣に生ずる青色の玉のくろくしゃう。斉書、李珠之傳「ー一千二百斤、供ニ御用ー」‖綠青。
【碧空】ヘキクウ あをぞら。五燈會元「――雲外、石筍橫ノ空」‖碧落。
【碧蕪】ヘキブ あをあをとしたるしのだけ。武元衡詩「曙塗深ニ――一、香露濕ニ紅蓮ー」
【碧蘚】ヘキセン あをきこけ。李商隱詩「白石巖扉ー――滋」‖綠蘚・蒼蘚・蒼苔。
【碧苔】ヘキタイ 碧蘚に同じ。和凝詩「淡蘿香老ー――肥」
【碧桃】ヘキトウ ○あをき色の桃の實の名、仙人の食ふ果、仙果。尹喜內傳「老子西遊省ニ太眞王母ー、共食ニ――一盤桑ニ○桃花の重瓣ナルにして實を結ばざるもの。蘇芳譜「千葉桃一名ー――」
【碧潭】ヘキタン あをきふち。潭正晉は〻新論「懸瀨ー――、瀾波淘湧、魚龍之所

ン安也、人入而長」

【碧幼】ヘキヨウ　野菜などの青くしげれるはたけ。‖青蔬・緑蔬。

【碧潮】ヘキチヨウ　青く見えるうしほ。

【碧天】ヘキテン　あをぞら。王羲之、蘭亭集詩「仰観ニ―一際一俯察ニ緑水濱一」‖青天・碧漢。

【碧淀】ヘキデン　水の青みてよどみたるところ。徐彦伯詩「―一紅深綺蹊開」‖碧澱。

【碧波】ヘキハ　あをきなみ。李白、送ニ林公遊ニ衡岳一序「振ニ五楼之金策一、浮ニ三湘之―一」‖碧浪。

【碧空】ヘキクウ　碧虚に同じ、是は主に秋の天をいへども、廣く天の義にも用ふ。‖蒼空・碧天。

【碧蘆】ヘキロ　みどりのつるぐさ。范成大詩「―一浸ニ清風一軟沙」‖翠蘆。

【碧蘚】ヘキセン　あをきこけ。杜甫詩「―一長似ニ錦、錦石小如ニ鍼一」

【碧落】ヘキラク　あをぞら。白居易、長恨歌「上窮ニ―一下黄泉、兩處茫茫皆不レ見」‖碧宇・碧漢。

【碧潤】ヘキジユン　みどり色のなみ。李賀玉詩「日泛ニ仙舟一酔ニ―一」‖碧浪。

【碧流】ヘキリユウ　みどりのながれ。喬知之詩「下有ニ―一水、上有ニ丹桂香一」

【碧綠】ヘキリヨク　ふかみどり色。張碧詩「千條―一輕拖レ水」‖碧翠。

【碧鷹】ヘキヨウ　あをあをしたるあし。趙孟頫詩「―一幹始長、柔桑葉已空」

【碧蘆】ヘキロ　すずき。張翰詩「蓴菜―一志「卯卯」（卯卯は完實）○堅き貌。張衡、思玄賦「行ニ積冰之―一」○刀刃の鋭利なる貌。枚乘、七發「白刃―一」

【磯】 キ 微

通音 ギ

○石の相撃つ聲「砰―」「碾―」‖礚。○鼓の聲。揚雄賦「登長平兮雷鼓―」○一頭は即頭に同じ、跪拜なり。夷堅志「深悼前非、一頭謝罪」

【磧】 ㊀ セキ 陌 ヤ 麻

㊁ ゲツ 屑

㊀ひきうす（磨）上下二つの石が擦り合ひて物を粉砕する具「碾―」正字通「古、公輸般作レ―、晉王戎有ニ水一六俗謂ニ之磨一」陸游詩「小―落雪花」㊁―は高くつむ（崇積）又、かたし（堅）

【磧固】カツコ　かたし。柳宗元文「當ニ其時一面ニ―一自守」

【磧志】シツ　しっかりして變らぬ志。隋書、楊素傳「建ニ累世之勳一、一心之―一」

【磧然】カツゼン　たしかなる貌。漢書、董仲舒「―一無レ志」‖確乎。○剛ひき貌。易、繋辞「夫乾―一、示ニ人易一矣」

【磧答】カツタフ　たしかな返事。

【磧定】カツテイ　しっかりときまる。又、しっかりときめる「―一審判」

【磧認】カツニン　たしかにみとめる、たしかに承認する。

【磧報】カツハウ　たしかなるしらせ。

【磧保】カツホ　たしかにうけあふ、確實なる保證。

【磧立】カツリフ　しっかりたてる。又、しっかりとたつ。

【磧論】カツロン　たしかなる議論。‖確說。

【磧乎】カツコ　確乎に同じ。

【磧】 カク 覺 同じ

○かたし（堅固）しっかりして動かず、たしか、すべて事の眞實なるもの「―乎」「―然」「正―」「―實」「的―」「詳―」○つよし（剛）

【磧言】カクゲン　たしかにいふ。又たしかなることば。

【磧乎】カクコ　○しっかりとして移らざる貌。易、乾卦、文言「―一其不レ可レ拔」○堅き貌。莊、應帝王「―一能ニ其事一」

【磧】 カツ 黠

碣（山形）に同じ。

【磧】 カツ 黠

碣―は目を搖かし舌を吐くの又、盛んに怒る。

【磧】 ファイ 灰

石の平かならざる貌。

【磧】 カイ 泰 通音 ガイ

石の平かならざる貌。

【磧樓】カイロウ　みどりいろのたかどの。鮑照詩「―一含ニ夜月一、紫殿帶ニ朝光一」

【磧嵬】カイギ　趙嘏詩「弄玉已歸ニ蕭史去、―一紅樹倚ニ斜陽一」‖翠樓。

【磧】 ガイ 隊 ヤ 麻

通音 カイ

【磧】 ケイ 霽

○かたし（堅）しっかりしてゐる貌。漢書、賈誼傳「―一之士」‖確乎。○剛ひき貌。易、繋辞「夫乾―一、示ニ人易一矣」

【磧然】ケイゼン　○たしかなる貌。漢書「―一異ニ志」‖確乎。○剛ひき貌。易、繋辞「夫乾―一、示ニ人易一矣」

【磧】 ケツ 屑

○石の相擊つ聲「―然」‖磕。○石の相擊つ聲「―然」‖磕。

【磧】 ケツ 屑

○石の相擊つ聲「―然」‖磕。

をみがくにいふ。轉じて物事をはげみきはめるにもいふ「切ー琢磨」（切は玉をみがく）‖琢。

【磋跌】サツ みがく。馬融、傷逝賦「馬則支離烏牙、是磋是跌」‖斯躓。

【磁】ジ 支

○ー石ジシャクは鐵を吸引し、又南北を指す性質を有する石。又方角を示す器、指針を一鐵鑛にて造る。‖羅針盤。○俗に借りて瓷器イシヤキノの意に通用す「ー器」

【磁氣】ジキ 磁石の南北を指し、又鐵を引く作用。

【磁器】ジキ いしやきの陶器、磁州より多く出づ、故にいふ。五雜俎「今俗語瓷器、謂之ー一者、蓋河南磁州窯最多、故相沿名之」一說に磁は瓷の借字。

【磁極】ジキョク 磁石の陰陽の兩端。

【磁針】ジシン 磁石のはり、羅針盤の指針。

【磁石】ジシャク にしやく。論衡「ー引ー鉄」‖磁鐵。

【磁杯】ジハイ 磁器のさかづき。

【磁鉢】ジハツ せとものの鉢ちゐ。耶律楚材詩「桑柔山果盈ー一」

【磁力】ジリョク 磁氣の作用の強さ。

【碓】㊀タイ 灰 ㊁ツキ 支 ㊂ツキ 質

㊀聚まれる石。○石を投げ下す。㊁うつ（搗）‖確。

【磔】タク 陌

○さく、張る、ひらく（開）○古、罪人を殺して其の體をひきさく刑、くるまざき。‖車裂・轘裂。○尸を張り市にさらす刑、はりつけ。○神に供へる牲ニヘを殺し裂く。○書法にて、字畫の右にさがれるものの稱、今は之を捺といふ。○ー一は物のこゑ。又、鳥の聲。○國ガク地上に立てたる十字架にしばりつけて槍にて突き殺す刑。

【磔刑】タッケイ 刑の名、はりつけ。漢書、刑法志「景帝中二年、改ー磔、曰棄市」注「謂ー張其尸也」

【磔磔】タクタク ○物のこゑ。旅巢記「庖人方治ー鮮、忽聞釜ー一有ー聲、頃之所ー烹肉、悉化爲二蝴蝶一」蘇軾、除日詩「爆竹聲ー一」○鳥の聲。蘇軾詩「春山ー一鳴二春禽一」

【磧】チン シン 眞 先

○石の落ちるこゑ。○いしずゑ、柱下の石。班固賦「離玉ー」

【磧然】チンゼン 石の落ちる聲。公羊、僖十六「聞二其ー一一視レ之則石、察レ之則五」

【磯】キ 微

○きしる。‖礒。○土地などをならすに用ふる具、圓輪又は圓柱狀をなす。○うす、ひきうす、いしうす、上下の二石を磨り合せて物を粉碎する具「一礎」

【碼】バ メ 馬

○瑪（玉部十畫）に同じ。○はかりのおもり。‖法馬。○ー頭は渡し場。又、ふなつき。○國ヤード英國の尺度の音譯、凡そ我が三尺位。

【磅】ハウ 陽 庚

○砰ーは石の落ちる聲。○ー礴ハクはひろがりはびこる貌。○ー礴は山の名。拾遺記「扶桑東五萬里、有ー礴山」國○ポンド英語の音譯、めかたの稱、我が百二十一匁と、九十九匁とに當る二種あり。‖封度。○貨幣の名、我が九圓七十六錢餘に當る。

【磅礴】ハウハク 雷聲の聲の形容。張衡、西京賦「ー一乎天威」

【磅礴】ハウハク ○まぜ合せて一つにする。混同する。莊、逍遙遊「將ヲー二萬物一以爲レ一」○みちふさがる、はびこりふさがる。陸機詩「ー一立二四極一、寫二陸放二蒼天一」韓愈文「ー一而鬱積」‖旁薄・旁礴。

【磐】バン 寒 刪 盤に通ず

○おほいし（大石）○ー礴バクは廣大なる貌。郭璞、江賦「荊門闕竦而ー礴」又、兩足を前に出して箕の如くに坐する、箕踞。莊、田子方「解レ衣ー一」‖槃礴。○ー牙ガバは相連り結ぶ。後漢書、騶虞傳「盜賊羣起、ー牙連歳」

【磐桓】バンカン 進み難き貌、盤・盤桓ず。易經「ー一利レ居レ貞」

【磐石】バンセキ 大いなる石。韓非、顯學「ー一千里、不レ可レ謂レ富」

【磐石安】バンセキアン 大石のうどかざるが如く安し。荀、富國「仁人用レ國、則國安二於磐石一、詩二於旗翼一」

【安二於磐石一】アンセキニオル 容易に移すべからざる磐石よりも安し。前條參看。

【磐跚】バンサン そばだつ。魏志、管寧傳「寧

石負ノ圖、狀象二龜一、鎭二宅於川四一、巍然ー一」

【礛】 硪（石部四畫）に同じ。

【磊】 ライ 㒳 又、礌・礧に作る ○衆くの石の貌。○石のかさなりて大いなる貌。○志の大いなる貌。

【磊塊】ライクワイ ○いしのかたまり。陳琳詩「荊聞前修業、銘型ー一無」○轉じて胸中の平かならざるに喩ふ。世說、任誕「阮籍胸中ー一、故須ノ酒澆ノ之」ー一壘塊。

【磊落】ライラク 高大なる貌。韓愈詩「降樓誰與ー一高」

【磊砢】ライカ ○石のかさなる貌。司馬相如、上林賦「水玉ー一」○才情の奇特なる貌。世說「孫楚云、其人ー一而爽多」

【磊磊】ライライ ○衆くの石の貌。楚辭「石ー一兮爲ノ蔓ノ蔓」○志大いにして細事にかかはらざる貌。晉書、石勒載記「大丈夫行ノ事、當ニー一落落如ニ日月皎然一」一本、曄曄に作る、同じ。

【磊落瑰瑋】ライラククワイヰ 磊落を重ねていふ、志の大いなる貌。前條參看。

【磊落】ライラク ○志大いにして細事にかかはらざる貌。韓愈文「ー一奇偉之人」ー一曄落。○果實の多くかさなりてみのる貌。潘岳、閑居賦「石榴蒲萄。

【礛】レン 㒳 ○といし、あらと（麤石）○赤き色。○心を苦しめて求める。磨と通ず。

【礛仁】レンジン 刻苦して仁を求める。韓詩外傳「仁道有ノ四、礛爲ノ下、傳貝、仁碑則其德不ノ厚」

十一畫

【礹】 イン オン 㒳 雷の鳴くこゑ。何晏賦「聲甸ー其如ノ震」ー殷。

【磬】 ケイ 㒳 ○玉又は石にて折れ曲りたる矩形に造り懸けて鳴らす樂器、八音の一「玉ー」「清ー」「梵ー」書、禹貢「泗濱浮ー」○今は僧寺にて用ふる銅を以て鉢盂の形に造り撃ちて聲を發せしむるものを亦ーといふ。○くびる（縊）くびり殺す。○馬をはす（駈）馬をはせて曲折せしむることーの如くする。○つく。磬に通ず。魯語「室如ノ縣ー」左傳にはーを磬に作る。

【磬控】コウ 馬を馭する法、馬を馳するを磬といひ、馬を止むるを控といふ。詩、鄭風「抑ー一忌」忌は助辭。

【磬鐘】ケイシヨウ 磬と、つりがねと。崇喬詩「雅調ー一遠、眞風樓殿清」

【磬折】ケイセツ 身を磬の如くに曲げて禮をする。曲禮「立則ー一垂ノ佩」

【礦】 サイ 灰 山の高く峻しき貌。＝崔。

【礦嵬】クワイ 山の高くけはしき貌。楚辭、宋玉賦「ー一峩嵩」

【磼】 ㊀ サン・セン 寒 ㊁ サン セン 寒 銑 又、礹に作る ㊀高峻なる貌。㊁ー嵓は山の險しき貌。

【磧】 セキ 陌 ○かはら、水邊の石原。○すなはら（沙漠）杜甫、送ニ人從ニ軍詩「今君渡ニ沙ー一漠川斷ニ人煙ー」

【磧沙】セキサ かはらのすな。謝靈運賦「面ニ先野ー一兮悲ニ橋梓ー一、過ニ急流ー一兮苦ニ菅ー一」＝沙磧。

【磧歷】セキレキ 淺き水の中の沙石。司馬相如、上林賦「下ニー一之坻ー」

【磧礫】セキレキ かはらの小石。張衡賦「僅禽獸跡、爛著ニー一ー」

【磧路】セキロ いしはらのみち。許棠詩「ー一雖多ノ阻、行人不ノ廢ノ吟」

【磚】 セン 先 かはら。＝甎。

【磚房】センバウ 煉瓦造りの家屋。

【磚壁】センヘキ れんがのかべ。吳都賦「因ノ山爲ノ基、ー一十餘里」

【磨】 ㊀ バ・マ ㊁ バ・マ 歌 紙 ㊀みがく、石を治める。轉じて物事をきはめみがく「錬ー」「琢ー」「研ー」○する、こする（摩擦）摩に通ず。○すれきえる（滅）「ー一滅」○かたし（艱阻）「ー一折」「ー一難」㊁いしうす、ひきうす（石磑）「水ー」「茶ー」

【磨唱】マイ ひきうす。

【磨崖碑】マガイヒ 唐の元結の大唐中興頌を顏眞卿が書して、浯溪の崖石を磨きて刻みしもの（靈池編）

【磨勘】マカン ○宋代の中世、ー一院を置きて內外の官吏の能否清濁を考ふ、後ち審官院と改む、勘は校勘。＝考績。○科擧時代に、人を派して鄕會の試卷を覆核せしをいふ。

【磨究】マキウ みがききはめる。纂錄錄「今之觀ノ獄者、不ノ欲ニ研窮ー一」

【磨篦】マヒ かがみをみがく。贈游詩「粉綿ー一不ノ忍ノ照」

【磨光】マクワウ ひかりをみがく。韓愈、遊

學解「爬羅剔抉、刮垢ー（レ）ー」
【磨刮】マツ　みがきする。梅堯臣詩「座客盡ーー」
【磨研】マシ　みがきとぐ。韓愈詩「才調眞可（レ）憐、朱丹在ニーーー」
【磨淬】マイ　刀劍などをみがきにらぐ。韓愈詩「法吏多ニ少年ー、ーー出ニ圭角一」＝礪淬。
【磨碎】マイ　すりくだく。又、すれ碎ける。
【磨擦】サツ　すれあふ。又こする。
【磨子】シ　ひきうす。品字箋「碾、今ーー也」子は助辭。
【磨礱遷革】センカク　琢磨して矯揉して善に遷り面目を革める義。歐陽修、吉州學記「教學之法、本ニ於人性ニーー、使レ趨ニ於善一」
【磨而不（レ）磷涅而不（レ）緇】マスレドモウスクナラズクロメラレドモクロクナラズ　至りて堅き者はみがけども薄うがず、至りて白き者は染むるも黒まず。君子の外物の爲めに心を變ぜざるに喩ふ。論、陽貨「不ニ曰レ堅乎、磨而不レ磷、不ニ曰レ白乎、涅而不レ緇」
【磨石】マセキ　ひきうす、石臼。晉書、天文志「譬ニ三之于蟻行ニーー之上一」
【磨琢】マタク　みがく。張耒詩「球然圭璋琢ニーー一爭ニ璀璨一」
【磨瑳】マサ　あらたまをみがく。梅堯臣詩「ーー（レ）鶚ニ美辭一」
【磨滅】マメツ　すりきえる。司馬遷、報ニ任安ニ書「古者富貴而名ーー、不（レ）可ニ勝記一」
【磨礪】マイ　みがく、礪はあらとにてとぐ。書經、傳「假ニ鉄戈矛ニーニー鋒刃一」
【磨鍊】マレン　とぎみがく。枚乘、諫ニ吳王ニ書「ーー感礪、不（レ）見ニ其損ニ有（レ）時而盡一」

【礫】

磊（石部十畫）に同じ。

十二畫

【磽】カウ　看　餚

かたくしてこえた地味あしき地、石多き瘠地なり。孟、告子「地有肥ーー」＝墝。
【磽确】カクカク　石多きやせ地。正韻「ーー石地」＝瘠塉。
【磽瘠】カクセキ　やせてせまし。漢書、景帝紀「詔國或ーー、無（レ）所ニ農桑一」
【磽薄】カクハク　石多くしてやせたる土地。陳琳、武ニ軍賦一「ーー財三歛、勧倫輸ニ兩奴一」＝磽确瘠薄。
【磽薄】カクハク　やせたる土地。梁簡文「化ニーー一爲ニ膏腴一者、不（レ）知ニ幾千萬畝一」

【磈】

磊（石部八畫）に通ず。

【磺】

㊀カウ　㊁クワウ　陽　梗

㊀あらがね、銅鐵の樸石。俗に礦・鑛に作る。㊁黄石の名、硫黄の類「硫ーー」

【磯】キ　微

○いそ、かはら、水の中の礁。水の石に激する所。又、其の近傍の地「石ーー」「苔ーー」「釣ーー」「漁ーー」○ふれる（觸）水が岩にあたりて激する。孟、告子「是不ニ可ニーー也」
【磯巾者】キキン　圓海岸の岩石に固着し巾着狀の口邊に多數の觸手ある小蟲。

【磯】キ　紙

そこなひやぶる「破ーー」＝毀。

【磲】キョ　魚　尤

又、碟に作る。
硨ーー（シャ）は寶石の一。又、蛤の屬の大いなるもの。

【磔】サク

ーー磔は山の高き貌。史、司馬相如傳「嵯峨ーー磔」＝嵯峨。

【礁】セウ　蕭

かくれいは。俗に海洋中、石の水面に隱現する者をいふ「暗ーー」＝嶕。

【礑】テイ　斉

○繒を染むるに用ふる黒き石。○人の名、金日ーーは漢武帝の時の人、もと匈奴休屠王の子。

【磌】テン　銑

磯ーー（レン）はいなびかり（電光）

【磴】トウ　徑

○さかみち（阪路）石のある阪路、いしだん「石ーー」「苔ーー」「薜ーー」○いしばし（石橋）「縣ーー」
【磴棧】トウサン　石のかけはし。韓愈詩「歳窮寒氣酷、冰雪滑ーーー」
【磴道】トウダウ　石だんのみち。陸龜蒙詩「清晨踐ニーーー一便是陟顛始」

【磻】㊀ハン　寒　㊁ハ　歌

㊀ーー溪は太公の釣せし河、今の陝西省寶雞縣の東南に在り。北流して渭水に入る。㊁やのねいし。＝礬（石部八畫）

【磷】㊀リン　眞　㊁ラン　㊂レン　震　㊃ン　㊄ーン　㊅ーン　㊆ーン　㊇ーン　㊈ーン　㊉ーン　㊊ーン　㊋ーン　㊌ーン　㊍ーン　㊎ーン　㊏ーン　㊐ーン　㊑ーン　㊒ーン　㊓ーン　㊔ーン　㊕ーン　㊖ーン　㊗ーン　㊘ーン　㊙ーン　㊚ーン　㊛ーン　㊜ーン　㊝ーン　㊞ーン　㊟ーン　㊠ーン　㊡ーン　㊢ーン　㊣ーン　㊤ーン　㊥ーン　㊦ーン　㊧ーン　㊨ーン　㊩ーン　㊪ーン　㊫ーン　㊬ーン　㊭ーン　㊮ーン　㊯ーン　㊰ーン　㊱ーン　㊲ーン　㊳ーン　㊴ーン　㊵ーン　㊶ーン　㊷ーン　㊸ーン　㊹ーン　㊺ーン　㊻ーン　㊼ーン　㊽ーン　㊾ーン　㊿ーン　(1)ーン　(2)ーン　(3)ーン　(4)ーン　(5)ーン　(6)ーン　(7)ーン　(8)ーン　(9)ーン　(10)ーン　(11)ーン　(12)ーン　(13)ーン　(14)ーン　(15)ーン　(16)ーン　(17)ーン　(18)ーン　(19)ーン　(20)ーン　(21)ーン　(22)ーン　(23)ーン　(24)ーン　(25)ーン　(26)ーン　(27)ーン　(28)ーン　(29)ーン　(30)ーン　(31)ーン　(32)ーン　(33)ーン　(34)ーン　(35)ーン　(36)ーン　(37)ーン　(38)ーン　(39)ーン　(40)ーン　(41)ーン　(42)ーン　(43)ーン　(44)ーン　(45)ーン　(46)ーン　(47)ーン　(48)ーン　(49)ーン　(50)ーン　(51)ーン　(52)ーン　(53)ーン　(54)ーン　(55)ーン　(56)ーン　(57)ーン　(58)ーン　(59)ーン　(60)ーン　(61)ーン　(62)ーン　(63)ーン　(64)ーン　(65)ーン　(66)ーン　(67)ーン　(68)ーン　(69)ーン　(70)ーン　(71)ーン　(72)ーン　(73)ーン　(74)ーン　(75)ーン　(76)ーン　(77)ーン　(78)ーン　(79)ーン　(80)ーン　(81)ーン　(82)ーン　(83)ーン　(84)ーン　(85)ーン　(86)ーン　(87)ーン　(88)ーン　(89)ーン　(90)ーン　(91)ーン　(92)ーン　(93)ーン　(94)ーン　(95)ーン　(96)ーン　(97)ーン　(98)ーン　(99)ーン　(100)ーン　(101)ーン　(102)ーン　(103)ーン　(104)ーン　(105)ーン　(106)ーン　(107)ーン　(108)ーン　(109)ーン　(110)ーン　(111)ーン　(112)ーン　(113)ーン　(114)ーン　(115)ーン　(116)ーン　(117)ーン　(118)ーン　(119)ーン　(120)ーン　(121)ーン　(122)ーン　(123)ーン　(124)ーン　(125)ーン　(126)ーン　(127)ーン　(128)ーン　(129)ーン　(130)ーン　(131)ーン　(132)ーン　(133)ーン　(134)ーン　(135)ーン　(136)ーン　(137)ーン　(138)ーン　(139)ーン　(140)ーン　(141)ーン　(142)ーン　(143)ーン　(144)ーン　(145)ーン　(146)ーン　(147)ーン　(148)ーン　(149)ーン　(150)ーン　(151)ーン　(152)ーン　(153)ーン　(154)ーン　(155)ーン　(156)ーン　(157)ーン　(158)ーン　(159)ーン　(160)ーン　(161)ーン　(162)ーン　(163)ーン　(164)ーン　(165)ーン　(166)ーン　(167)ーン　(168)ーン　(169)ーン　(170)ーン　(171)ーン　(172)ーン　(173)ーン　(174)ーン　(175)ーン　(176)ーン　(177)ーン　(178)ーン　(179)ーン　(180)ーン　(181)ーン　(182)ーン　(183)ーン　(184)ーン　(185)ーン　(186)ーン　(187)ーン　(188)ーン　(189)ーン　(190)ーン　(191)ーン　(192)ーン　(193)ーン　(194)ーン　(195)ーン　(196)ーン　(197)ーン　(198)ーン　(199)ーン　(200)ーン　(201)ーン　(202)ーン　(203)ーン　(204)ーン　(205)ーン　(206)ーン　(207)ーン　(208)ーン　(209)ーン　(210)ーン　(211)ーン　(212)ーン　(213)ーン　(214)ーン　(215)ーン　(216)ーン　(217)ーン　(218)ーン　(219)ーン　(220)ーン　(221)ーン　(222)ーン　(223)ーン　(224)ーン　(225)ーン　(226)ーン　(227)ーン　(228)ーン　(229)ーン　(230)ーン　(231)ーン　(232)ーン　(233)ーン　(234)ーン　(235)ーン　(236)ーン　(237)ーン　(238)ーン　(239)ーン　(240)ーン　(241)ーン　(242)ーン　(243)ーン　(244)ーン　(245)ーン　(246)ーン　(247)ーン　(248)ーン　(249)ーン　(250)ーン　(251)ーン　(252)ーン　(253)ーン　(254)ーン　(255)ーン　(256)ーン　(257)ーン　(258)ーン　(259)ーン　(260)ーン　(261)ーン　(262)ーン　(263)ーン　(264)ーン　(265)ーン　(266)ーン　(267)ーン　(268)ーン　(269)ーン　(270)ーン　(271)ーン　(272)ーン　(273)ーン　(274)ーン　(275)ーン　(276)ーン　(277)ーン　(278)ーン　(279)ーン　(280)ーン　(281)ーン　(282)ーン　(283)ーン　(284)ーン　(285)ーン　(286)ーン　(287)ーン　(288)ーン　(289)ーン　(290)ーン　(291)ーン　(292)ーン　(293)ーン　(294)ーン　(295)ーン　(296)ーン　(297)ーン　(298)ーン　(299)ーン　(300)ーン　(301)ーン　(302)ーン　(303)ーン　(304)ーン　(305)ーン　(306)ーン　(307)ーン　(308)ーン　(309)ーン　(310)ーン　(311)ーン　(312)ーン　(313)ーン　(314)ーン　(315)ーン　(316)ーン　(317)ーン　(318)ーン　(319)ーン　(320)ーン　(321)ーン　(322)ーン　(323)ーン　(324)ーン　(325)ーン　(326)ーン　(327)ーン　(328)ーン　(329)ーン　(330)ーン　(331)ーン　(332)ーン　(333)ーン　(334)ーン　(335)ーン　(336)ーン　(337)ーン　(338)ーン　(339)ーン　(340)ーン　(341)ーン　(342)ーン　(343)ーン　(344)ーン　(345)ーン　(346)ーン　(347)ーン　(348)ーン　(349)ーン　(350)ーン　(351)ーン　(352)ーン　(353)ーン　(354)ーン　(355)ーン　(356)ーン　(357)ーン　(358)ーン　(359)ーン　(360)ーン　(361)ーン　(362)ーン　(363)ーン　(364)ーン　(365)ーン　(366)ーン　(367)ーン　(368)ーン　(369)ーン　(370)ーン　(371)ーン　(372)ーン　(373)ーン　(374)ーン　(375)ーン　(376)ーン　(377)ーン　(378)ーン　(379)ーン　(380)ーン　(381)ーン　(382)ーン　(383)ーン　(384)ーン　(385)ーン　(386)ーン　(387)ーン　(388)ーン　(389)ーン　(390)ーン　(391)ーン　(392)ーン　(393)ーン　(394)ーン　(395)ーン　(396)ーン　(397)ーン　(398)ーン　(399)ーン　(400)ーン　(401)ーン　(402)ーン　(403)ーン　(404)ーン　(405)ーン　(406)ーン　(407)ーン　(408)ーン　(409)ーン　(410)ーン　(411)ーン　(412)ーン　(413)ーン　(414)ーン　(415)ーン　(416)ーン　(417)ーン　(418)ーン　(419)ーン　(420)ーン　(421)ーン　(422)ーン　(423)ーン　(424)ーン　(425)ーン　(426)ーン　(427)ーン　(428)ーン　(429)ーン　(430)ーン　(431)ーン　(432)ーン　(433)ーン　(434)ーン　(435)ーン　(436)ーン　(437)ーン　(438)ーン　(439)ーン　(440)ーン　(441)ーン　(442)ーン　(443)ーン　(444)ーン　(445)ーン　(446)ーン　(447)ーン　(448)ーン　(449)ーン　(450)ーン　(451)ーン　(452)ーン　(453)ーン　(454)ーン　(455)ーン　(456)ーン　(457)ーン　(458)ーン　(459)ーン　(460)ーン　(461)ーン　(462)ーン　(463)ーン　(464)ーン　(465)ーン　(466)ーン　(467)ーン　(468)ーン　(469)ーン　(470)ーン　(471)ーン　(472)ーン　(473)ーン　(474)ーン　(475)ーン　(476)ーン　(477)ーン　(478)ーン　(479)ーン　(480)ーン　(481)ーン　(482)ーン　(483)ーン　(484)ーン　(485)ーン　(486)ーン　(487)ーン　(488)ーン　(489)ーン　(490)ーン　(491)ーン　(492)ーン　(493)ーン　(494)ーン　(495)ーン　(496)ーン　(497)ーン　(498)ーン　(499)ーン　(500)ーン　(501)ーン　(502)ーン　(503)ーン　(504)ーン　(505)ーン　(506)ーン　(507)ーン　(508)ーン　(509)ーン　(510)ーン　(511)ーン　(512)ーン　(513)ーン　(514)ーン　(515)ーン　(516)ーン　(517)ーン　(518)ーン　(519)ーン　(520)ーン　(521)ーン　(522)ーン　(523)ーン　(524)ーン　(525)ーン　(526)ーン　(527)ーン　(528)ーン　(529)ーン　(530)ーン　(531)ーン　(532)ーン　(533)ーン　(534)ーン　(535)ーン　(536)ーン　(537)ーン　(538)ーン　(539)ーン　(540)ーン　(541)ーン　(542)ーン　(543)ーン　(544)ーン　(545)ーン　(546)ーン　(547)ーン　(548)ーン　(549)ーン　(550)ーン　(551)ーン　(552)ーン　(553)ーン　(554)ーン　(555)ーン　(556)ーン　(557)ーン　(558)ーン　(559)ーン　(560)ーン　(561)ーン　(562)ーン　(563)ーン　(564)ーン　(565)ーン　(566)ーン　(567)ーン　(568)ーン　(569)ーン　(570)ーン　(571)ーン　(572)ーン　(573)ーン　(574)ーン　(575)ーン　(576)ーン　(577)ーン　(578)ーン　(579)ーン　(580)ーン　(581)ーン　(582)ーン　(583)ーン　(584)ーン　(585)ーン　(586)ーン　(587)ーン　(588)ーン　(589)ーン　(590)ーン　(591)ーン　(592)ーン　(593)ーン　(594)ーン　(595)ーン　(596)ーン　(597)ーン　(598)ーン　(599)ーン　(600)ーン　(601)ーン　(602)ーン　(603)ーン　(604)ーン　(605)ーン　(606)ーン　(607)ーン　(608)ーン　(609)ーン　(610)ーン　(611)ーン　(612)ーン　(613)ーン　(614)ーン　(615)ーン　(616)ーン　(617)ーン　(618)ーン　(619)ーン　(620)ーン　(621)ーン　(622)ーン　(623)ーン　(624)ーン　(625)ーン　(626)ーン　(627)ーン　(628)ーン　(629)ーン　(630)ーン　(631)ーン　(632)ーン　(633)ーン　(634)ーン　(635)ーン　(636)ーン　(637)ーン　(638)ーン　(639)ーン　(640)ーン　(641)ーン　(642)ーン　(643)ーン　(644)ーン　(645)ーン　(646)ーン　(647)ーン　(648)ーン　(649)ーン　(650)ーン　(651)ーン　(652)ーン　(653)ーン　(654)ーン　(655)ーン　(656)ーン　(657)ーン　(658)ーン　(659)ーン　(660)ーン　(661)ーン　(662)ーン　(663)ーン　(664)ーン　(665)ーン　(666)ーン　(667)ーン　(668)ーン　(669)ーン　(670)ーン　(671)ーン　(672)ーン　(673)ーン　(674)ーン　(675)ーン　(676)ーン　(677)ーン　(678)ーン　(679)ーン　(680)ーン　(681)ーン　(682)ーン　(683)ーン　(684)ーン　(685)ーン　(686)ーン　(687)ーン　(688)ーン　(689)ーン　(690)ーン　(691)ーン　(692)ーン　(693)ーン　(694)ーン　(695)ーン　(696)ーン　(697)ーン　(698)ーン　(699)ーン　(700)ーン　(701)ーン　(702)ーン　(703)ーン　(704)ーン　(705)ーン　(706)ーン　(707)ーン　(708)ーン　(709)ーン　(710)ーン　(711)ーン　(712)ーン　(713)ーン　(714)ーン　(715)ーン　(716)ーン　(717)ーン　(718)ーン　(719)ーン　(720)ーン　(721)ーン　(722)ーン　(723)ーン　(724)ーン　(725)ーン　(726)ーン　(727)ーン　(728)ーン　(729)ーン　(730)ーン　(731)ーン　(732)ーン　(733)ーン　(734)ーン　(735)ーン　(736)ーン　(737)ーン　(738)ーン　(739)ーン　(740)ーン　(741)ーン　(742)ーン　(743)ーン　(744)ーン　(745)ーン　(746)ーン　(747)ーン　(748)ーン　(749)ーン　(750)ーン　(751)ーン　(752)ーン　(753)ーン　(754)ーン　(755)ーン　(756)ーン　(757)ーン　(758)ーン　(759)ーン　(760)ーン　(761)ーン　(762)ーン　(763)ーン　(764)ーン　(765)ーン　(766)ーン　(767)ーン　(768)ーン　(769)ーン　(770)ーン　(771)ーン　(772)ーン　(773)ーン　(774)ーン　(775)ーン　(776)ーン　(777)ーン　(778)ーン　(779)ーン　(780)ーン　(781)ーン　(782)ーン　(783)ーン　(784)ーン　(785)ーン　(786)ーン　(787)ーン　(788)ーン　(789)ーン　(790)ーン　(791)ーン　(792)ーン　(793)ーン　(794)ーン　(795)ーン　(796)ーン　(797)ーン　(798)ーン　(799)ーン　(800)ーン　(801)ーン　(802)ーン　(803)ーン　(804)ーン　(805)ーン　(806)ーン　(807)ーン　(808)ーン　(809)ーン　(810)ーン　(811)ーン　(812)ーン　(813)ーン　(814)ーン　(815)ーン　(816)ーン　(817)ーン　(818)ーン　(819)ーン　(820)ーン　(821)ーン　(822)ーン　(823)ーン　(824)ーン　(825)ーン　(826)ーン　(827)ーン　(828)ーン　(829)ーン　(830)ーン　(831)ーン　(832)ーン　(833)ーン　(834)ーン　(835)ーン　(836)ーン　(837)ーン　(838)ーン　(839)ーン　(840)ーン　(841)ーン　(842)ーン　(843)ーン　(844)ーン　(845)ーン　(846)ーン　(847)ーン　(848)ーン　(849)ーン　(850)ーン　(851)ーン　(852)ーン　(853)ーン　(854)ーン　(855)ーン　(856)ーン　(857)ーン　(858)ーン　(859)ーン　(860)ーン　(861)ーン　(862)ーン　(863)ーン　(864)ーン　(865)ーン　(866)ーン　(867)ーン　(868)ーン　(869)ーン　(870)ーン　(871)ーン　(872)ーン　(873)ーン　(874)ーン　(875)ーン　(876)ーン　(877)ーン　(878)ーン　(879)ーン　(880)ーン　(881)ーン　(882)ーン　(883)ーン　(884)ーン　(885)ーン　(886)ーン　(887)ーン　(888)ーン　(889)ーン　(890)ーン　(891)ーン　(892)ーン　(893)ーン　(894)ーン　(895)ーン　(896)ーン　(897)ーン　(898)ーン　(899)ーン　(900)ーン　(901)ーン　(902)ーン　(903)ーン　(904)ーン　(905)ーン　(906)ーン　(907)ーン　(908)ーン　(909)ーン　(910)ーン　(911)ーン　(912)ーン　(913)ーン　(914)ーン　(915)ーン　(916)ーン　(917)ーン　(918)ーン　(919)ーン　(920)ーン　(921)ーン　(922)ーン　(923)ーン　(924)ーン　(925)ーン　(926)ーン　(927)ーン　(928)ーン　(929)ーン　(930)ーン　(931)ーン　(932)ーン　(933)ーン　(934)ーン　(935)ーン　(936)ーン　(937)ーン　(938)ーン　(939)ーン　(940)ーン　(941)ーン　(942)ーン　(943)ーン　(944)ーン　(945)ーン　(946)ーン　(947)ーン　(948)ーン　(949)ーン　(950)ーン　(951)ーン　(952)ーン　(953)ーン　(954)ーン　(955)ーン　(956)ーン　(957)ーン　(958)ーン　(959)ーン　(960)ーン　(961)ーン　(962)ーン　(963)ーン　(964)ーン　(965)ーン　(966)ーン　(967)ーン　(968)ーン　(969)ーン　(970)ーン　(971)ーン　(972)ーン　(973)ーン　(974)ーン　(975)ーン　(976)ーン　(977)ーン　(978)ーン　(979)ーン　(980)ーン　(981)ーン　(982)ーン　(983)ーン　(984)ーン　(985)ーン　(986)ーン　(987)ーン　(988)ーン　(989)ーン　(990)ーン　(991)ーン　(992)ーン　(993)ーン　(994)ーン　(995)ーン　(996)ーン　(997)ーン　(998)ーン　(999)ーン　(1000)ーン

‖鄰鄰。又、玉石の光澤のかがやく貌。㊁碎ー（ヲロ）は高峻（タカ）の貌。史、司馬相如傳「徑入雷室之碎ー（ヲロ）」㊂すらぐ。石がすりへらされて薄くなる。論衡、貨「磨而不ー（ヲロ）」○雲母（ウンモ）の別名。○こいし（石礫）

【磧礫】（セキレキ）かたきをする。蔡子良文「居王師馬、未ㇾ足ㇾ磧ニ其堅ニ」

【碧碧】（ヘキヘキ）○玉石の色澤のかがやく貌。司馬相如、上林賦「ー（ヘキ）ー爛爛、采色渥汗」○清き水が石間を流れる貌。宋之問詩「碎石水ー（ヘキ）ー」‖紙薄。

【磔石】（レキセキ）㊀

○石の小さき貌。○つなとり。古、葬式の時、棺の綍（ヒモ）を執る者。又、其の人名を記する帳簿。○ー宝は春秋時代の燕の宮殿の名。史、樂毅傳「故鼎反ㇾ于ー宝」戰國策には歷宝に作る。俗に歷宝に作るは誤。

十三畫

【磩】（カク）㊁

きびし（深刻）むごし（慘酷）嚴に通ず。史、韓非傳「引繩ー切ニ事情ㇾ明ニ是非ㇾ其極慘ー少恩」

【礒】（キ）㊁

○いはほ（巖）○碕ーは石の貌。楚辭「嶽峩碕ー（キ）」○‖いそ（磯）

【礎】（ショ・ソ）㊁㊂

○いしずゑ、どだい石、柱下の石。「柱ー」‖礎ー（ソ）‖淮南、說林「山雲蒸而柱ー（ソ）潤」○轉じて物事のもとゐの義。「基ー」

【礎潤而雨】（ソジュンジウ）いしずゑがうるほへば雨が降るの事の生ずる必ず前兆あるに喩ふ。蘇洵、辨姦論「‖雖而風、――、人人知ㇾ之」礎柱參看。

【礎材】（ザイ）いしずゑの材料に用ふる木石など。

【礎礙】（ガイ）いしずゑ。史、安息國傳、注「大率、一名黎軒、南州志云、大家屋舍、以二珊瑚一爲ニ柱、琉璃爲ニ牆壁一、水精爲ニ礎ー一ー一」

【礎柱】（チウ）いしずゑと、はしらと。易、乾卦、疏「同氣相求者、若二天欲ㇾ雨而ー（ソ）潤一是也」

【礫】（タク）㊂

○そこ（底）○‖はたと、平手にてうつ音。又、事の行きつまるさま。

【礫】（ヘキ）㊁

いかづち。張衡賦「ー礫激而增響」‖靂。

【礧】（㊀ライ ㊁ライ）㊁

㊀ころばす、石を推して高きより下す。‖礌。㊁衆くの石の貌。‖磊。

【礧礧】（ライライ）大いなる石の轉じて心胸のひろく大いなるにいふ。陸海詩「買ㇾ酒不ㇾ澆胸ー（ライ）ー、逢ㇾ時空覺胆輪囷」

【礧礧落落】（ライライラクラク）心の高明正大なる貌の普書、石勒載記「大丈夫行ㇾ事、當ー（ライ）ー如ニ日月一」‖磊磊落落。

【礧礧】（ライライ）大いなるこゑの容。韓詩「角牙聲轢轢ー（ライ）ー」

十四畫

【礙】（ガイ）㊂

○とどむ（止）ささはる。ささふ。「障ー」法言、問道「聖人之治天下ー（ガイ）諸以ニ禮樂一」○ふせぐ（距）さまたぐ（妨）じゃまをする「妨ー（ガイ）」○へだつ（阻）「阻ー（ガイ）」○かぎる（限）○さまたげ、ささへ。

【礙眼】（ガイガン）目ざはりになる。又其のもの。杜牧之詩「豈如ニ匿見一未ー（ガイ）ー皆不ㇾ礙」俗に見ることを欲せざるものをいふ。

【礙窒】（ガイチツ）外物をささへて入らしめず「ーー性」

【礙滯】（ガイタイ）ささへられてとどこほる。梁簡文帝文「若見ニ明一於ーー（ガイ）一非ニ求ニ救於肯肯一」‖滯礙。

【礬】（ハン）㊂

礜（石部十畫）に同じ。

【礬】（ヨ）㊂

砒素を含める一種の毒石。水毒沙ともいふ「ー石」

十五畫

【礦】（カ）㊀

もと鑛に作る

あらがね、未だ人工を加へざる金銀銅鐵などの璞石。‖鑛。

【礩】（シツ）㊁

いしずゑ、柱下の石。戰國策「以ニ錬銅爲ニ柱ー一」

【礬】ハン　ベン　元

○硫酸を含める一種の礦物、明―バンの膠―バンの緣―バンの○特に明礬の稱、染色藥用等に用ふる白色又は透明にして酸味を有する固體「一水」○山―バンは花の名、ちんちゃうげ、瑞香の屬。

【礬紙】バンシ　どうさがみ。‖熟紙。

【礬石】バンセキ　みゃうばん、藥料又は染料に用ふる石、六角形の結晶體〔本草〕‖明礬石。

【礬頭】バンタウ　山水を畫く法、山の上に小石塊の堆を成せるものの稱〔繪事雜談〕

【礧】㊀ライ　㊁ライ　㊂ルイ　㊃ルイ　㊄ライ　㊅ライ　賄　灰　紙　寘

㊀おほいし(大石)○石の貌。㊁うつ(擊)㊂かさなる(重)○礧(石部十三畫)に同じ、石を推して、高所よりおとす、まろばす、石が轉びて突く。司馬相如、子虛賦「一石相擊」○傀礧―ライの儡に同じ「魁―子」㊃山の貌。

【礧磊】ライライ　石の大いなる貌。杜甫詩「水消石――」

【礨】ライ　寘　㊀おこなひをみがく。蔡邕文「砥節―レ―、直レ道正レ辭」㊁ほこをときみがく、戰の準備をする。西唐書、劉仁軌傳「―レ―秣レ馬、整二北不一レ、彼既無レ備、何攻不レ剋」

【礨淬】ライサイ　みがきにらぐ。吳淑詩「猶魚際二秋明一、光垢勞二―一一」‖淬礪・磨淬。

【礨砥】ライシ　といし。書、禹貢「――碧丹」傳「砥細二于礪一、皆磨石也」

【礨石】ライセキ　といし、あらとにする石。山海經「陰山多二―一一」

【礫】レキ　錫

こいし(小石)沙よりは大いなるもの「砂―」「瓦―」「礦―」

【礫洲】レキシウ　小石のあるす。唐太宗詩「馭二―一一」

【礪】㊀ライ　霽　㊁ライ　㊂ルイ　㊃ルイ　㊄ライ　㊅ライ　霽　灰　紙　寘

㊀と、あらと、きめのあらきといし(礪石)(砥はきめの細密なるといし)○とぐ、みがく(研磨)―トラにて物をみがく「磨―」「淬―」書、費誓「―乃鋒刃」‖厲。○はゆむ「砥―」「勉―」

【礪行】ライカウ　おこなひをみがく。蔡邕文「砥節―レ、直レ道正レ辭」

【礪戈】ライクワ　ほこをときみがく、戰の準備をする。西唐書、劉仁軌傳「―レ―秣レ馬、整二北不一レ、彼既無レ備、何攻不レ剋」

【礪淬】ライサイ　みがきにらぐ。吳淑詩「猶魚際二秋明一、光垢勞二―一一」‖淬礪・磨淬。

【礪砥】ライシ　といし。書、禹貢「――碧丹」傳「砥細二于礪一、皆磨石也」

【礪石】ライセキ　といし、あらとにする石。山海經「陰山多二―一一」

【礫】レキ　錫

こいし(小石)沙よりは大いなるもの「砂―」「瓦―」「礦―」

【礫洲】レキシウ　小石のあるす。唐太宗詩「馭二―一一」

【礧】ロウ　東　㊀すりうす(磨殺)米穀の殼をとりさる臼。○みがく、とぐ(磨)「磨―」「斲―」「磋―」音語「斲其椽而―之」

【礧斲】ロウタク　みがくと、きると。孟郊詩「殷勤相勤勉、左右加二―一一」

【礪磨】レイマ　みがく。韓愈文「―――乎事業一而奮二發乎文章一」‖磨礪。

【礪厲】レイレイ　みがきとぐ。荀、性惡「鈍金必待二―一一而後利」‖磨礪。

十六畫

【礮】ハウ　效　○砲の正字、いしはじき、機を以て石を發するもの(機石)古の攻戰の具。○元の世始めて火藥を用ひて―を造る、てつぱう「火―」

【礮眼】ハウガン　大砲のつつぐち。

【礮撃】ハウゲキ　大砲にてうつ。‖砲撃。

【礮臺】ハウダイ　火礮を置くもの、土石を用ひて築造し、以て守禦と爲すもの。‖砲臺。

【礮彈】ハウダン　○いしはじきに用ふる石。○てつぱうのたま。

【礫】レキ　錫　礫―ハクは薄礫に同じ。

【礴】ハク　藥　○旁―磅―はまじる(混同)貌。又、廣くおほふ(廣被)又みちふさがる(充塞)莊、逍遙遊「旁―萬物」○槃―バンは兩足を出して坐する。莊、田子方「解レ衣槃―」‖箕坐。

十七畫

【礱】セン　鹽　―礪ロウはいなびかり(電光)

【礱】ハク　藥　○旁―磅―はまじる(混同)貌。又、廣くおほふ(廣被)又みちふさがる(充塞)莊、逍遙遊「旁―萬物」○槃―バンは兩足を出して坐する。莊、田子方「解レ衣槃―」‖箕坐。

十九畫

【礴】ハク　磨(石部十一畫)の本字。

示部

【示】㊀シ・ジ　寘　㊁キ・ギ　支　字の偏となる時略して礻に作る

㊀しめす、人に見せる、垂れしめす、人にさしづする「―威」「―教」「指―」しめし「訓―」「論

―」○つぐ（語）事を以て人に告げる。○しらしむ（知）禮、檀弓「國奢則―之以儉、國儉則―之以禮」○あらはす（見）○みる、視・眎に通ずる論、八佾「其如―諸斯乎」㊀くにつかみ、地の神。‖祇。

【示威】ジイ　いきほひをしめす、威武を表示する。左傳「叛而不―討、何以―」

【示威運動】ジイウンドウ　或る目的を達せんために多人數合同して相手ををどす運動。

【示訓】ジン　をしへしめす。晉書、禮志「昔天子親猶以供二粢盛一后夫人躬蠶以備二祭服一所レ以事二敬一明レ教―也」‖訓示・垂訓。

【示教】ジンケウ　しめしをしふ。

【示現】ジン　佛が、法の力を示しあらはす。湯淺雄志「―如レ此」

【示談】ジン　圓當事者雙方が爭のをさまるやうに相談する。

【礼】レイ　一畫

禮（示部十三畫）の古字。

【祁】キ　三畫　支

○大いなり、はなはだ。○さかんなり（盛）○しづか。○―は舒ノンビリかに遲き貌。又、おほし（衆多）○伊―は姓。‖伊者。

【祁寒】カン　大いに寒し。書、君牙「冬―、小民亦惟曰怨咨」‖甚寒・大寒。

【祁祁】キ　○舒ノンビリかに遲き貌。詩、小雅「興雨―」○物事の衆多なる貌。詩、大雅「諸婦―之、―如レ雲」

【祁奚薦レ讎】キケイシュウ　晉の悼公の臣祁奚が公平無私の心を以て己の後任者として、其の讎の解狐を薦めた故事。左、襄三「祁奚請レ老、晉侯問レ嗣焉、稱二解狐一其讎也、將レ立レ之而卒、又問、對曰、午也可」午は奚の子。

【祁山】サン　甘肅省西和縣の西北に在り、諸葛亮の魏を伐つや、六たび―に出づ。

【祁連】レン　天山の一名、匈奴天を呼びて―といふ。甘肅省張掖縣の西南に在り。‖南山・雪山。

【祀】シ　示　四　俗、祠に作る

○まつる「合―」「享―」まつり（祭）「祭―」書、洪範「八政三曰―」○殷の代、年をいふ、四時の祭の一終する義に取る。

【祀典】シテン　まつりの儀式、祭祀の典禮。禮記「非二此族一也、不レ在二―一」‖祭典。

【祀事】シジ　○くにつかみ、土地の神主、后土。禮、祭義「建二國之神位一右―」○ほこら、やしろ。地の神を祭る御殿。禮、祭法「諸侯爲二百姓一立―」○まつり。まつる。后土を祭る。○古、二十五家のくみあひ。○同志會集の所、なかま（團體）「結―」「文―」「詩―」正字通「鄰結共事者曰―」○社日の略語、立春後の第五の戊の日を春の―日といふ「春―」「秋―」○江淮地方にて母の稱。圓○臺灣にて最下の行政區劃、莊の次位「番―」○多くの中より一つの事を取り出していふ詞。

【祀友】シユウ　○其の社に特に關係ある人人。○其の社のなかま。‖社員。

【社未屋】シヤビヤ　亡國の社には屋を設けて天光を受けしめず、故に國の未だ亡びざるにいふ。禮、郊特牲「天子大社、必受二甸師氏以逮二天地之氣一也、是故喪國之社屋一之、不レ受二天陽一也」（屋レ社は國の滅亡せし義）

【社員】シヤイン　社のなかま。又組合の人。

【社燕】シヤエン　つばめは作の社日に來りて秋の社日に去る、故にいふ（格物總論）蘇軾詩「有レ如二社燕一與二秋鴻一、相逢來往還相送」

【社翁雨】シヤオウウ　社日にふる雨。陸龜蒙詩「幾點――、一番花信風」

【社家】シヤカ　數戸聚りたる家屋。冥報記「寄二逗村一―一」

【社交】シヤカウ　社會に出でて他人と交際する。

【社格】シヤカク　圓神社の等級格式。官幣・國幣などの別。

【社會】シヤクワイ　古、二十五家を一社となし、因りて相聚りて團體をなすをいふ。近思錄「鄉民爲二一一一、爲立二科條一、族二別善惡一、使二有レ勸有レ恥」

【社會教育】シヤクワイケウイク　○社會が自然に人を教育する。家庭教育・學校教育の對。○社會主義に本づきて行ふ教育。‖社會主義的教育。

【社會主義】シヤクワイシユギ　○貨富の懸隔を少くして社會の平和を保たんとする主義。○私有財產制度を打破して土地資本等を社會の共有とする主義。‖社會共產主義。

【社會政策】シヤクワイセイサク　社會の諸問題を解釋するために國家の施行する政

治、相續法・租稅法・工場法・小作法などの改良又は組合設置の類。

【社會精神】シャクワイセイシン　社會的意志に同じ。

【社會的意志】シャクワイテキイシ　其の社會成立以來、傳承し來りし思想又は信仰の類、個人はこれに支配せられ感化せらる、我が武士道の類。‖社會精神。

【社公】シャコウ　地の神。禮記、祭「今人祭二社神一爲二一一」

【社倉】シャサウ　○飢饉などの時に貧民を救ふ爲めに設けたる米ぐら。唐書、食貨志「武德元年九月詔二一一」○國古、諸國に在りし朝廷の御料の田を田部の民に作らしめ、其の稻をおさめ置く倉。

【社酒】シャシュ　くにつかみ。漢書、郊祀志「句龍、能平二水土一、死爲二一一」‖后土。

【社寺】シャジ　神社と寺院と。

【社日】シャジツ　立春後及び立秋後の第五の戊の日、春のを春社といひ、秋のを秋社といふ。禮、月令、注「社、后土也、祀レ社日用レ甲」

【社人】シャジン　村里の人。春活紀聞「國語」

【社掌】シャショウ　國かんぬし、神官。‖社司。

【社稷】シャショク　社は土の神、稷は穀の神、國は土穀に資りて以て人を養ふ、故に立てて之を祀る。轉じて國家の義とす。孝經「保二其一一、而和二其民人一」

【社稷爲レ墟】シャショクタルヲ　國の亡ぶるをいふ。淮南子「身死二人手一一」

【社稷之臣】シャショクノシン　國家の安危に任ずる大臣。論、季氏「是一一也、何以レ伐爲」

【社說】シャセツ　新聞雜誌などにて其の社の意見を代表する論說。‖社論。

【社鼠】シャソ　君側に居る奸人に喩ふ。晏子春秋、問上「景公問曰、治レ國何患、晏子對曰、患二夫一一(中略)鼠之所二以不一可レ得レ殺者、以レ社故也、夫國亦有二人焉一、人主左右是也、此亦國之一一也」

【社團】シャダン　法律にて、二人以上の人が共同の目的を以て設立したる團體。財團の對。

【社頭】シャトウ　くにつ神を祭る壇場。唐書、禮樂志「一一四隅」

【社長】シャチョウ　○組合の長、村長の類。李流山、雜錄「一一乘二涼轎一」○結社の主宰者。又其の代表者。○臺灣にて蕃社の取締をする者。

【社中】シャチュウ　○組合なかま。吳師道詩「分手遠上笑、攢レ眉一一緣」○やしろのうち。

【社頭】シャトウ　神社のほとり。‖社前・祠頭・祠畔。

【祢】ヤク　異　又綸に作る

夏殷の世、天子の行ふ春まつり(周代は春祭を祠といひ、夏祭を一といふ)夏を禴、秋を嘗、冬を烝といふの對。

【祢祫】ヤキョウ　王者の行ふ春まつりと夏まつりと。禮記「一一陽義也、嘗烝義也」

四畫

【祆】エウ　通

わざはひ、まがごと。地のしめす凶變「一孽」妖と通ず。

【祆孽】ヨウゲツ　わざはひ。淸書、禮樂志「蠢茲不レ軌、一一伏誅」

【祆災】ヨウサイ　わざはひ。後漢書、蔡邕傳「屢出二一一一以當二讜言一」

【祈】キ　國　或は蘄に作る

○いのる、神にをひて福を求める「仰一」「敬一」「一禱」いのり、ぐわんがけ。○つぐ(告)○むくゆ(報)詩、大雅「以一黃耇」

【祈雨】キウ　あまごひ、雨のふることを祈る。詩、小雅「以祈二甘雨一」

【祈求】キキウ　いのりもとめる、切に願ふ。

【祈願】キグワン　いのりねがふ。梁武帝、斷二酒肉一文「若以二不殺一一、輒得二上敎一」‖祈請。

【祈穀】キコク　穀物の熟するをいのる。禮、月令「孟春之月、天子乃以二元日一一一于上帝一」一一は天壇の新年殿。

【祈年】キネン　神に祈りて福を請ふと雖を得たるに報ゆるまつりと。後唐書、張嘉貞傳「先是獄刑、爲二連延一一、有二殺數百萬一」

【祈請】キセイ　神佛にいのり請ふ(列、周穆王)杜甫詩「一一走二兒童一」

【祈禱】キトウ　神佛にいのりちかふ。

【祈戰】キセン　たたかひに勝たんことを祈る。左傳「秦伯伐レ晉、以レ璧一一于河」

【祈禱】キタウ　○神佛にいのる。後漢書、樂巴傳「小人常被二貴寵一以一一」○いのり。北史、道昇傳「爲二一一一」

【祈祉】キシ　幸福を祈り求める。宋史、先農樂章「爲レ農一一」‖祈福。

【祈念】キネン　一心にいのる、念じ祈る。

【祈年祭】キネンサイ　國としごひのまつり、毎年二月四日に豐年を天神地祇に祈る祭。

【祈福】キフク　さいはひをいのる。禮記「祠二染岡社稷之壇一、以爲レ民一一」‖祈祉。

【祇】㊀キ・ヤ　㊁シ　支　佳

㊀くにつかみ、地の神、后土「天神地一」○すべての神の

稱。○やすし、やすんず（安）詩、小雅「俾我—也」○大いなり。易、復卦「無—悔」㊁ただ（唯）まさに（適）詩、小雅「—擾我心」

同訓異字　祇・祇・正・政・方・適・的・多・肆・將の別は正（止部一三）の條を見よ。

【祇園精舎】シヲンシャ　㊀古、天竺マカダ國の須達長者が釋迦牟尼の爲めに建てたる寺の名。轉じて廣く寺の名とす。祇園は祇樹給孤獨園の省稱。阿彌陀經「舍衛國、祇樹給孤獨園」維摩經「息心所棲、曰二精舍一」

【祇候】シコウ　大いなるくい。易、復卦「不レ遠復、無二—一」㊁大悔。

【祇陀】シダ　波斯匿王の太子、祇園精舍の地主、金剛經新注「祇是—太子所レ施、故曰二祇樹一也」

【祇林】シリン　祇園精舍の林。寺の美とす。梁簡文帝文「鹿苑是殊、—何遠」＝祇樹林。

【祆】ケン　先　祇とは別

○胡ヒの神、波斯スイ國の拜火教の神を火—と曰ふ。故に其の教を—教といふ。○關中にて天の稱。

【祉】チ　紙　通音シ

さいはひ（福）「福—」「休—」「嘉—」「祿—」詩、小雅「既多受—」

同訓異字　止に從ふ、福が止りて他に移らざる義。

同訓異字　祉・福・祐・幸・禧・倖の別は福（示部九畫）の條を見よ。

【祉福】シフク　さいはひ。詩經「烈文辟公、錫二茲一—一」＝福祉。

【祉祿】シロク　さいはひ。崔瑗銘「皇靈既祐、——來臻」

【祐】ハウ　皮

木祭の翌日行ふ祭の名。又其の祭を行ふ。

五畫

【祐】イウ　有　通じて、右・佑に作る

○さいはひ（福）○たすく、たすけ（助）上より下を助ける。易、大有「自天—之」天地神明の助「天—」「帝—」

【祐助】イウジョ　天のたすけ。易、大有「自レ天祐レ之」象傳「祐者、助也」

【祐筆】イウヒツ　國貴人の傍に侍して書記の役をする人。右筆とも書く。＝侍史。

【祜】コ　虞

さいはひ（福）厚き福「皇—」「垂—」「多—」「休—」詩、小雅「受二天之一—」

同訓異字　祜・福・幸・禧・祉・倖の別は福（示部九畫）の條を見よ。

【祚】ソ　遇

○はらふ（攘）○やる（遣）おふ（逐）禍をはらひ遣る。○ひらく（開）○ちらす（散）「病—」○—はつよし（彊健）詩、魯頌「以車—」

【祚】コ　虞

さいはひ（福）厚き福「皇—」「垂—」「多—」「休—」詩、小雅「受二天之一—」

同訓異字　祚・福・幸・禧・祉・倖の別は福（示部九畫）の條を見よ。

【祥】シヤウ　佳

柴をやきて天をまつる。又其の祭。揚雄、甘泉賦「欽—宗祈」＝柴。

【祠】シ　支

○まつる。まつり、春の祭。詩、小雅「論—烝嘗」○いのりまつる（禱祀）○むくいまつる、願のかなひし禮として祭る（報賽）「—賽」○ほこら、やしろ（社）「—堂」「古—」「荒—」「淫—」「叢—」たまや（廟）「先—」○—官はかんぬし。○生—は其の人の功德を仰ぎて生存中にたてるやしろ。

同訓異字　祠・祭・祀の別は祭（示部六畫）の條を見よ。

【祠宇】シウ　やしろ、神社。

【經レ祠】シンシ　祖先の祭を續つ、祠は祀。書經「嗣レ宗—レ」

【祠官】シクワン　かんぬし、神官、神職。史記「其令二—致レ敬、毋レ令レ所レ祈」

【祠祭】シサイ　神恩に報ゆる祭。周禮、疏「謂二新嘗求レ福、得レ福乃—二之一」＝賽祀。

【祠祀】シシ　まつる。史、始皇紀「遂上二泰山一、立レ石封—一」

【祠掌】シシヤウ　國祠官に同じ。＝社掌。

【祠堂】シダウ　おたまや。漢書、襲勝傳「勿下隨レ俗動二吾家一種レ柏作二—上一」＝廟。

【祠堂金】シダウキン　國堂塔建立の料として寺へ寄進する金。＝永代供養料。

【祠禱】シタウ　かみを祭りて福を祈る。王所、巫廟詩「—希二安寧一」

【祠壇】シダン　まつりのには。史、樂書「常有二流星一經二於—一之上一」

【祠頭】シトウ　やしろのほとり。＝社頭。

【祇】シ　支　神祇の祇とは別

つつしむ、つつしみ（敬）「肅—」「虔—」書、大禹謨「—承于帝」

【祇役】シエキ　つつしみて君主の命を奉じて役に從ふ。三百詩に唐の晨鐘登の「—遵レ風、潮二湘中春色一」の

詩を載す。

【祇仰】キヤウ うやまひあふぐ。元史「害雲左右、皆一ニ其德」＝敬仰。

【祇敬】ケイ つつしみうやまふ。書、皐陶謨「日嚴一ニ六德」

【祇候】コウ ○つつしみて伺ふ。魏書、劉休賓傳「詐言陛三主臨ヒ墓、故來一ル」○國語族又は官吏の功勞ある者を特遇する爲めに與へる資格、錦雜圍一ル・磨香閒一ルの類。

【祇承】ショウ つつしみてをごそか。羽獵賦「一ニ雍穆之徒、立ニ君臣之節一、崇ニ聖賢之業一」

【祇若】ジャク つつしみしたがふ。書經「敬不一ニ一至之休命一」

【祇遹】ジュツ つつしむ。書經「社稷宗廟、罔不一ニ一」漢書、韋賢傳「皇帝一ニ若禮、尊ニ重神明一」＝祇承・慶遹・若遹。

【祇水】ジュ つつしみうく。書、大禹謨「文命敷ニ于四海、一ニ于帝一」

【祇服】フク つつしみてしたがふ。書經「予弗一ニ厥父一」

【祇慄】リツ つつしみおそれる。元史、祭祀志「夙夜一ル、無ニ以報稱一」

【神】シン ジン 圓

○かみ、天の神。又、廣くすべての神の總稱「鬼一」「明一」「水一」「海一」「嶽一」「蕃一」○たましひ（精靈）○心「精一」○靈妙にして人力にては測られず、變化極りなき義「一聖」「一速」「一妙」「一工」「入一」

【神佑】シンイウ かみのたすけ。班固賦「靈威一一、鴻濤是乘」＝神祐・神助・天祐。

【神祐】シンイウ 前條に同じ。齊書、樂志「具ニ悉ニ主衷一、以答ニ一一」

【神遊】シンイウ 心が飛び行きて遊ぶ。列子「黃帝（中略）晝寢而夢遊ニ于華胥氏之國一、蓋非ニ舟車足力之所ヒ及、一ニ而已、淮南子「身處ニ江海之上一、而一ニ魏闕之下一」

【神眼】シンガン 眼をいふ。宋茂七箴「眼者神之舍、易者氣之戶」

【神異經】シンイキヤウ 書名。隋書、經籍志「——一卷、東方朔撰、張華注」

【神韻】シンイン ○心のすぐれて奇妙なる義。宋書、王敬弘傳「敬弘一一沖簡、識度標峻」○詩文などのすぐれたるおもむき。＝神韻。

【神禹】シンウ 夏の禹王の敬稱。

【神苑】シンエン 神社の境内にちるには。

【放神】ハウシンイツス ○わが心のままにする、きままにする。韋應物詩「一レ一道所レ拘」○ハウシン國安心「御一一可レ被レ下候」

【置神】シンヲオク 心をとめる。後漢書、鄧禹傳「丁寧再三、一ニ一于此一」

【怡神】イシン 精神をなぐさめよろこばす。隋書、徐則傳「悅ニ性沖元、一ニ一虛白一」

【神交】シンカウ 形にかかはらず精神上の交。晉書、嵇康傳「康所ニ與一一者」

【神效】シンカウ すぐれたるしるし、たゝなるきめ。宣室志「其他一一、不レ可ニ具述一」＝靈驗。

【神樂】シンガク ○神妙なる音樂。遯異記「遊レ有ニ一一、不レ如ニ少年一」○國かぐら、神を祭るために奏する舞樂。

【神學】シンガク 神に關する研究をする學問、宗教學。

【神陵】シンリヤウ すぐれたるめきき。郭璞文「願陛下少留ニ一一」

【神祇】シンギ 天つかみと國つかみと「天神地祇」の、總て「國ニ爾于上下一一」

【神氣】シンキ ○ふしぎなる雲氣。史、封禪書「趙人新垣平言、長安東北、有ニ一一、成ニ五采一」○精神氣力の盛んなる狀。

【神器】シンキ 帝位を代表する器、支那にては玉璽若くは寶器の類、我國にては三種の神器。轉じて、帝位の義とす。班彪、王命論「不レ知ニ一一有レ命、不レ可レ以ニ智力一求ヒ也」

【神機】シンキ 甚だすぐれたるはかりごと。阮籍文「若良運未レ協、一一無レ準、則勝レ精抗レ志、遵ニ世高超一」＝神算・神謀。

【神駿】シンシュン すぐれたる駿馬。范仲淹賦「天產ニ一一、瑞符ニ大君一」＝天駿。

【神築】シンチク ○神社の境内。○神佛などのすむところ。又俗を離れて清き所。＝仙境・靈境。

【神鏡】シンキヤウ 國三種神器の一、八咫鏡

【神宮】シンキウ ○神をいつき祭る御殿。雅樂歌「一一雨願、天慨穆穆」○ジングウ國伊勢の太廟の稱、伊勢大神宮。

【神龍】シンリヨウ ふしぎなるからだ。銑康詩「潛龍資ニ一一、湛盧歡ニ蘭池一」

【神君】シンクン ○道家の神「史、封禪書」○賢明なる地方長官をほめていふ稱「晉書、喬智明傳」○國德川時代に家康を尊びて稱す「東照一一」

【神化】シンクワ かみわざ、神の如く不思議なる變化、自然の化。

【神怪】シンクワイ ふしぎ。又、其のもの。

【神誨】シンクワイ かみのをしへ。遯史、耶律昌傳「夢受ニ一一、龍錫ニ金佩一、天遣無レ私、必應ニ有德一」

【神京】シンケイ みやこ。王庭珪詩「幾年羈旅望ニ一一」＝京城・首府。

【神經】シンケイ 動物の體内に在りて知覺と運動とを傳達することをつかさどる器官。

【神經家】シンケイカ 神經質の人、心配性の人。

【神經過敏】シンケイクワビン 物ごとを氣にかけすぎる、苦勞性。

【神橋】シンケウ 神社に行く道にあるはし。

【神訣】シンケツ すぐれて神妙なる法。李白

詩「自言——不可求」

【神劍】シンケン ○神に奉りし劍。○神より授りたる劍。○圖三種神器の一、草薙劍クサナギノツルギ

【神謀】シンボウ かみのおとがめ。‖神罰。

【神權說】シンケンセツ 君主の統治權は神より直接に授けられたるものなりといふ說。

【神祐】シンユウ 神より授かるさいはひ。宋史、樂志「禮備樂成、薦二神之祐一」頌延之詩「惠二茲玉裘一、以答二——一」

【神悟】シンゴ たへなるさとり。すぐれてさとし。南史、任昉傳「身長七尺五寸、幼而聰敏、早稱二——一」

【神工】シンコウ ○神が作る。又其の製作品。○神の如く靈妙に物をつくる。又其の人。梁作「——鬼斧」宋藏浸抄「藝苑二——、時推二妙翰一」‖天工。

【神功】シンコウ 神妙にして測られざるからん。任昉箋「——無紀」

【神魂】シンコン たましひ。漢魏對問「氣行則——交、形留則精魄存」‖靈魂。

【神采】シンサイ 次條に同じ。元史、趙孟頫傳「才氣英邁、——燁發、如二神仙中人一」

【神彩】シンサイ すぐれたる風采。又精神と風采と。晉書、王衍傳「幼而穎悟、——形歟、視レ日不レ瞬」‖神采。

【神草】シンソウ 人參シンの異名「本草綱目」

【神葬】シンソウ 神道の儀式を以て葬むる。

【神簫】シンショウ 次條に同じ。

【神算】シンサン 甚だすぐれたるはかりごと。後漢書、王渙傳「京師稱歎以爲二渙有一——一」‖鬼謀・神策。

【神事】シンジ 神をまつること。‖祭典。

【神妓】シンギ ○けだかきやうす。世說「大尉——高潔、如二瑤林瓊樹一」大尉は王衍。○心と、すがたと、精神と容姿と。

【神寶】シンポウ ○天子の藏せられる玉。唐書、輿服志「——以鎭二中國一、藏而不レ用」○圖三種神器の一、八尺瓊曲玉ヤサカノマガタマ

【神州】シンシウ ○支那人が自國を稱していふ。盧世南、奉和詩「三分開二翰藻一、萬里宅二——一」元杰、岳武穆墓「題二復——一指掌開、永昌陵闕認レ陌遲、丹心一片經百月、猶照中原萬里山」○神仙の居る所。河圖括地象、崑崙東南地方五千里、名曰二——一、其中有二五山一、帝王居レ之」○圖我國の異稱。神の聞きたまひし國の義。藤田彪、正氣歌「天地正大氣、粹然鍾二——一」‖神國。

【神秀】シンシウ ふしぎに、け高くひいでる。孫綽、天台山賦序「天台山者、蓋山嶽之——也」

【神呪】シンジュ まじなひ。又、其のことば、のりと。晉書、佛圖澄傳「少學レ道、善誦二——一、能役二使鬼神一」

【神識】シンシキ 精神と見識と。

【神人】シンジン ○神と人と。○神の如く氣高き人。

【神社】シンシャ 神のやしろ、ほこら。

【神性】シンセイ 心。北史、顏之儀——一」

【神聖】シンセイ 靈妙にして測り知るべからざるもの。漢書、龍鑑論「五帝——、其揆莫二能及一」

【神仙】シンセン 神僊に同じ。

【神仙中人】シンセンチュウジン 人品の高尚なるをいふ。晉書、王右軍見二杜預碑一歎曰、此——」

【神前】シンゼン 神の祭壇の前。晉書、劉伶傳「供二酒肉於——一」

【神僊】シンセン 長生不死の仙人。僊は仙。天隱子「能通レ變曰二——一」‖神仙。

【神饌】シンセン くもつ。神に供へる酒食。

【神速】シンソク 非常にすみやか。魏志、郭嘉傳「兵貴二——一」

【神代】シンダイ 圖かみよ、太古、神武帝以前。

【神刀】シントウ すぐれたる利刀を崇めていふ。世說、御覽「又管以二竹筒一納二鐵珠二滿レ中、棄レ刀斷レ之、應レ手墮落、因曰二——一」

【神道】シンダウ ○墓場に行く道路「——碑」○はかるべからざる不思議の道。易、觀卦、象傳「聖人以二——一設レ敎、而天下服矣」○圖かんながらのみち。本邦固有の宗敎、神代の傳說に本づき、神を敬ひ祭祀を重んずることを主とするもの。

【神道碑】シンダウヒ 墓道に立つるいしぶみ。白居易詩「不レ願レ作二人家墓前——一」

【神託】シンタク 神のおつげ。‖託宣・神敕。

【神智】シン ふしぎなるちゑ。新論「聚二其一一一識二其才能一」
【神教】シンキョウ 神託に同じ。
【神通力】シンツウリキ 霊妙にして何事にても自由に行ひ得る力。神は神異不測、通は無碍自在。法華經「神通之力」
【神鳥】シンテウ 鳳凰。隋史「太極東堂、畫二鳳鳥一、題爲二一一一」
【神典】シンテン 神の事跡をしるしたる書物。
【神傳】シンデン うまれつき。天よりさづかる。楊復光文「宰臣用一一一時、天付忠貞」
【神童】シンドウ ちゑの非常にすぐれたる子ども。唐書、劉晏傳「八歳號二一一一、名震二一時一」
【神授】シンジュ かみに捧ぐるともしび。孔帖「唐文宗朝、謁二亳州太清宮一上二尊號一、是夜一一見」
【神荼鬱壘】シントシウツリツ 百鬼を捕へるといふ二神の名、故に其の圖を鬼門に掲げる【風俗通】
【神農虞夏】シンノウグカ 炎帝神農氏・帝舜有虞氏・夏の禹王、皆支那太古の聖王。伯夷、采薇詩「——忽焉沒兮、我安適歸矣」神農虞夏の政樣禪讓の遺、超忽として、すでに沒すること久しとの義。
【神農氏】シンノウシ 太古の聖王の名。史、三皇紀「炎帝——、姜姓（中略）火徳王、故曰二炎帝一、以レ火名レ官、斲レ木爲レ耜、揉レ木爲レ耒、耒耨之用、以教二萬人一、始教レ耕、故號二——一、以二播種一穀二草木一、始嘗二百草一、始有二醫藥一」
【神農嘗二百草一】シンノウカヒヤクサヲナム 太古神農氏多くの草を嘗味して醫藥の方を創めたるをいふ。前條參看。
【如レ神】ゴトシシン きはめて霊妙なり。中庸「至誠一レ一」
【神馬】シンバ ○ふしぎなる馬。孝經援神契「澤出二一一一」○圖シン神社に奉納するうま。
【神方】シンパウ ふしぎなる方術。方干詩「世人莫レ識二一一字、仙鳥偏栖桑樹枝」
【神宮】シングウ 神の後として尊重する。又、すぐれたるたから。史、龜策傳「以爲二一一一」
【神魂】シンパク たましひ。張衡詩「悉森異人境、坐視動二一一一」‖神魂。
【神剖】シンパウ 神のくだす訓。‖天訓・神誥。
【神不レ享非禮】シンフケフヒレイ 神は祭る可からざる人の祭を受けず（論、八佾、季氏旅二於泰山一章、集解）
【神秘】シンピ ○人智にてははかりしられざる奥深きこと。倪瓚詩「昔聞陽洞啓二一一、中有三仙人置二玉文一」○ひみつにして人に示さず。古文孝經序「王公貴人、咸二一一爲、比二於禁方一」
【神物主義】シンブツシュギ 哲學にて理論又は事物などによらず以心傳心にて眞理を直覺することを主とする說。
【神品】シンピン 最もすぐれたる品位。穀梁「人莫レ窺二其巧一者、謂二之一一一」
【神父】シンプ 崇び親みて神と父とに比する稱。後漢書、宋登傳「號稱二一一一」
【神武】シンブ 甚だしくすぐれたる武力、人間以上の武力。晏、繁辭「古之聰明睿知、一一而不レ殺者夫」
【神符】シンフ ○かみの守札。北夢瑣言「人背二一一一道一」○神のめでたきしるし。揚雄文「天部二一一、地合二靈契一」
【神風】シンプウ ○神の吹かすかぜ。陸雲詩「一一滿旅」○圖かみかぜ、特に元寇の際に吹き起りしかぜ。
【神佛】シンブツ かみと、ほとけと。
【神別】シンベツ 圖我國族制の一、神代の神より分れ出たるもの。皇別・蕃別の對。
【神變】シンペン 人智にてはかり知ることの出來ざる變化。孫綽、天台山賦「騁二一一之揮一」
【神鳳】シンポウ 太平のしるしとして出づる神鳥。拾遺記「孔子相レ魯之時、有二一一一游集、至二哀公之末一、不二復來翔一、故曰二鳳鳥不一至」
【神謀】シンボウ 甚だすぐれるはかりごと。歐陽修文「心匠既規、一一創運」
【神木】シンボク ○めづらしくすぐれたる木。班固、西都賦「一一靈生」‖珍木。○圖神社の境内にある木。
【神明】シンメイ ○かみ。左傳「敬レ之如二一一一、畏レ之如二雷霆一」○人の心、神。韓愈「以卜二一一一」○圖天照大神。
【神妙】シンミョウ ○甚だ巧妙にして人力以上である。曹植、求二自試一表「伏見所二以行一軍用一兵之勢一、謂二一一一矣」○圖殊勝。又、奇特の義。
【神文】シンモン 圖互にかたく約束を守る爲め神に告げる文書「一一誓詞」
【神勇】シンユウ すぐれたる神仙のくすり。史、始皇紀「方士徐市等、求二一一一、數歲不レ得」‖仙藥・靈藥。
【神勇】シンユウ 甚だすぐれたる勇氣。蘇軾文「孟德者、一一之退卒也」
【神典】シンテン みこし。宋史、禮志「遵レ唐禮儀史奉二一一一行」
【神來】シンライ ○神の靈をふきこまれたる如くに感ぜられる。○詩文などの當人の思ひ及ばざる感興をあらはす語。
【神靈】シンレイ 圖ひもろぎ、神サマをたてめぐらして神の座として祭るところ。
【神略】シンリャク 甚だすぐれたるはかりごと。晉書、懿帝紀「一一獨斷、征伐四克」‖神謀。
【神慮】シンリョ ○神のみこころ。魏志、常道鄉公紀「誕敷二一一一」○こころ。張衡詩「坐久一一平」
【神力】シンリョク ○ふしぎなるちから。鄭俠詩「文章有二一一一」○鬼神の力。

阿毘曇論「一一自在」
【神版】シンパン　○霊妙なる造化の神。列、湯問「一一所レ生、其物異レ形」○神のみたま。
【神路】シンロ　神社に通ずる路。宋書、后妃傳「一一誤候」
【神話】シンワ　太古、神の実現を信じたる時代の神秘なるものがたり。
【神王】シンワウ　精神が旺盛ナルなり、王は旺。荘、養生主「神雖レ王不レ善也」
【神皇正統記】ジンワウシャウトウキ　六巻、北畠親房著す、神代より、後村上天皇の御受禅に至るまでの事を記し、神皇の正統は、南朝にあることを述ぶ。

【祝】㊀シュク ㊁シウ 宥屋

俗に音シュクと混読す

㊀はふり、かんぬし、神官「巫一」言を以て神に告げ、主人の爲めに福を祈る者。○はじめ(始)○たつ(断)「一髪」○一融は火。又は夏の神。又、南海の神の名。㊁いはふ、いのる(祈)後来の福を請ひ求める。又、其の詞、のりと「一詞」

同訓異義　祝・賀　○祝は行末をことほぐなり。韓文「不二敢以レ祝而敢以レ規」○賀は、よろこびを申し入れるなり。禮記「婚禮不レ賀、人之序也」

【祝允明】シュクインメイ　字は希哲、生れて枝指となり、枝山と號す、明の長洲の人、博覧を博覧し、詩文奇氣多し、千言立ろに就る、而かも事類を驟括して遺すことなし。又書を善くす、筆法道勁にして風韻蒼散なり。
【祝宴】シュクエン　いはひのさかもり。
【祝筵】シュクエン　いはひの席、祝儀のむしろ。
【祝賀】シュクガ　いはひ、よろこび。‖祝慶。
【祝規】シュクキ　いはひよろこぶと、戒めると。韓愈、送二石處士一序「敢不二重夜以求一レ從一一」
【祝慶】シュクケイ　いはひよろこぶ。
【祝祭】シュクサイ　いはひまつる。詩経「一一于祊」
【祝史】シュクシ　かんぬし、祈禱を掌る神官の唐書、禮樂志「一一陪二其後一、皆北向」
【祝詞】シュクシ　○祭時に所禱の意を述べたることば。又文章、のりと、神に申上げることば、祝辭。○圖慶くいはひの意を述べる言語文章。
【祝辭】シュクジ　前條に同じ。
【祝枝山】シュクシザン　祝允明を見よ。
【祝酒】シュクシュ　いはひて、のむさけ。
【祝勝】シュクショウ　勝利を祝ふ、かちいくさのいはひ。‖祝捷。
【祝捷】シュクセフ　祝勝に同じ。
【祝禱】シュクタウ　神に告げていのる。宋史、天文志「主二北方邑居刑愛祭祀一一事一」
【祝典】シュクテン　いはひの儀式。‖祝儀。
【祝電】シュクデン　いはひの電報。
【祝杯】シュクハイ　いはひのさかづき。
【祝砲】シュクハウ　いはひて、うちはなつ大砲。‖禮砲。
【祝髪】シュクハツ　かみを断ちきる。發梁、哀十三「一一文身」列子「南國之人、一一面裸」‖断髪。
【祝版】シュクハン　神を祭る時に、祝文ノを書く者、清代の制、天壇の一一は綠青紙朱書を用ひ、地壇は黄紙墨書を用ふ。
【祝文】シュクブン　○文體の名。文體明辯「一一者、繼レ神之辭也、劉勰所レ謂祝史陳レ信、資二乎文辭一者是也（中略）用以繼二天地山川社稷宗廟五祀羣神一、而通二其誠一之一一、其詞有二散文、有二韻語一」○圖慶賀の意を述べる文。
【祝融】シュクユウ　○夏の神の禮、月令「孟夏之月、其神一一」○火をつかさどる神。傳に、火災をいふ。左、昭二九「火正曰二一一一」○南海の神「太公金匱」
【祝融峯】シュクユウホウ　湖南省衡山縣の西北三十支那里に在り、七十二峯中の最高の者、峯上に祝融の墓あり。朱熹に「陛下二一一一」の七絶あり。
【祝儀】シュギ　○祝典に同じ。○圖いはひごとの贈物。○はなむけ、かづけもの（祝頭）
【祝言】シュウゲン　○祝賀のことば。○圖婚禮。
【祝著】シュクチャク　いはひよろこぶ。‖慶賀。

【祟】スイ シュツ 遇 物

たたる。たたり（神禍）神佛のとがめ（禍は人の自ら招く所、神は其れに因りて之を降す、一は神自ら之を出し示して以て人を警める者）

【祐】セキ ジャク 陌

宗廟の木主ハイを藏する石の室、いしびつ。左、莊十四「命二我先人典二守宗一」

【祖】ソ 麌

○おぢ、おほぢ、父の父。○はじめ（始）者、舜典「黎民一飢」もと（本）「開一」「鼻一」○せんぞ「始一」「皇一」「太一」○せんぞのたまや（始廟）周禮、考工記「左一右社」○もととしてならひのっとる（效法）「一述」史、韓世家「秦王一張儀之故智」○承傳する物事のもととなれるもの「元一」○道路の平安をまもる神「道一神」○出で行く時に道神を祭るをいふ。又、其の際、送別の宴を開く義「一

宴」「一道」

【祖宴】ソエン　旅立する人を送るさかもり。祖道の宴。

【祖送】ソソウ　旅立する人を送るとかもり。孟浩然詩「一一江上列、離別恨二前書」＝祖宴。

【祖考】ソカウ　死したる祖父。詩經「祭以二清酒一從以二騂牡一享于一一」

【祖業】ソゲフ　せんぞのなしたる功業。漢書、終軍傳「必待二明聖一、濁色一一、傳二于無窮一」左傳序「隱公能弘二宣一一一、光二啓王室一」

【祖國】ソコク　○自己の祖先以來關する國。父母の邦。續通考「回回一一也」○外國に寄寓する者、其の鄉國を斥していふ。

【祖師】ソシ　○其の學問を始めたる師。漢書、外戚傳「定陶丁姬、易一一丁將軍之孫」○佛釋迦をいふ。轉じて一派の宗門を開きし僧をいふ。禪宗の達磨、日蓮宗の日蓮の類。

【祖禰】ソデイ　祖先のたまや。唐律疏議「春秋修二其一一」

【祖述】ソジュツ　ならひしる。魯語「一二一地德、日中考レ政」

【祖述】ソジュツ　遠く其の道にもとづきてのべる。中庸「仲尼一二堯舜、憲二章文武一」

【祖生之鞭】ソセイノベン　人に先だちて著手する、先鞭を著ける。晉書、劉琨傳「與二范陽祖逖一爲レ友（中略）常恐二祖生先吾著一レ鞭」

【祖先】ソセン　せんぞ。樂同契「子繼二父業、孫紹二一一」

【祖先敎】ソセンケウ　祖先の神靈をまつりたふとぶ敎。＝祖先崇拜敎。

【祖餞】ソセン　はなむけす。南史、虞玩之傳「朝廷無二一一者一」

【祖宗】ソソウ　祖は始、先祖、宗は本、中興の祖。漢書、景帝紀「古者祖二有功一、而宗二有德一」

【祖道】ソダウ　旅立の時に道祖神をまつる祭、昔、黃帝の子累祖、遠遊を好み道に死す、後人以て行神と爲す。漢書、疏廣傳「設二一一一、供二陳東都門外一」

【祖帳】ソチヤウ　道祖神をまつりて送別の宴をはる、帳は供張の李白詩「開レ筵引二一一一」

【祖法】ソハフ　祖先の定めおきたる法。

【祖妣】ソヒ　死したる祖母。詩經「爲レ酒爲レ醴、烝二畀一一一」

【祖父】ソフ　ちち、父の父。南史、謝靈運傳「因二一一之資一、生業甚厚」

【祖武】ソブ　祖先の遺したる功績。武は步武、遺跡の義。詩經「繩二其一一一」周伯琦詩「乘輿繩二一一一、誠哉幸二釐京一」繩は繩。

【祖廟】ソベウ　せんぞの魂を祭るたまや。禮記「春秋修二其一一」

【祖母】ソボ　ばば。後漢書、廣陵傳「孝養一一一」

【祖龍】ソリウ　祖は始、龍は人君の象、秦の始皇の異稱。史、始皇紀「今年一一死」

【祖運】ソレイ　せんぞのみたま。樊噲、京兆奏惠還頌「爲レ酒爲レ醴、烝二彼一一一」

【祚】ソ　遇

○さいはひ（福・祿）「天一」「休一」「嘉一」「榮一」さいはひす、神が福祿を授け報ゆる。左、宣三「天一明德」○くらゐ（位）天子の位「踐一」「登一」「皇一」「寶一」史記「卒踐帝一」＝阼。○とし（歲）曹植、元會詩「初歲元一」

【祚胤】ソイン　子孫。詩、大雅「永錫二一一一」

【祓】

祓（示部十四畫）に同じ。

【祝】シユク　祝は俗字

○ひそかにす、ひむ、人に隱して知らしめず（密）かくる。かくす（藏）○人力にて測り知られず「神一」閉ぢて宜ぶべからず。○かみ（神）○いたはる（勞）

同訓異語　祕・隱・潛・匿・藏の別は隱（阜部十四畫）の條を見よ。

【祕藏】ヒザウ　祕祕に同じ、藏は溫奧。

【祕要】ヒエウ　○ひめたる要旨、奥旨精義。晉書、韋誕傳「於二墓前一一之義」「無二不二祕要一」○祕密緊要の義。

【祕閣】ヒカク　天子の書物庫。宋朝會要「編排元年五月、詔就二崇文院中堂、建二一一一」＝祕府、祕館。

【祕樂】ヒガク　たやすく知りがたきすぐれたる音樂。王濟、華林園詩「清池流レ觴、一一通レ交」

【祕學】ヒガク　神祕なる學問、天文・律數・醫・陰陽・古候などの學問。晉書、程咸傳「咸、少好二一一一」

【祕曲】ヒキヨク　ひめかくして容易に人に傳へざる音曲、琵琶に於ける流泉啄木の類。

【祕怪】ヒクワイ　ふしぎにあやし。又、其のもの。王遙詩「靈奇一一不レ可レ說」

【祕遣】ヒケン　○ひみつのくはだて。唐書、溫大雅傳「數陳二一一一、多レ所二嘉納一」＝祕計。○ひめかくせる。唐書、段叡傳「多納二古帖一一千文昌一」

【祕玩】ヒグワン　ひみつのもてあそび物。唐書、楊貴妃傳「奇服一一、變化若レ神」

【祕館】ヒクワン　天子の書物庫。後漢書、竇融傳「寫藏二一一一」

【祕計】ヒケイ　ひみつのはかりごと。漢書、高帝紀「爲二匈奴所一レ圍七日、用二陳平一一一得レ出」＝祕遣、祕策、祕謀、密謀。

【祕訣】ヒケツ　ひみつの法。邵謁詩「上仙傳二一一、淡薄與二無營一」＝祕法。

【秘結】ヒケツ　大便の通じがわるい。‖便秘。

【秘庫】ヒコ　禁府に同じ。

【秘蔵】ヒゾウ　ひめたくはへる。漢書、劉敞傳「陳二發一一一校二理舊文一」

【秘策】ヒサク　ひみつのはかりごと。晉書「探賾一一、鉤二取微一帝謀書」‖祕計・祕策。

【秘事】ヒジ　人に知れざるやうにひめかくす事柄。

【秘術】ヒジュツ　ひみつのわざ。晉書、王敦傳「得二王之神寶一、安危之一一、不レ可二復與一而忽二者也一」

【秘書】ヒショ　○天子所藏の書。漢代四庫の一。「經・史・子・集」○大切の文書。文書類「祕本」○長官に附屬して機密の事を執り扱ふ者「一一官」

【秘書監】ヒショカン　宮中の祕籍の記錄を掌る職。事物紀原「漢桓帝、延熹二年、始置二一一一一人一」

【秘蹟】ヒセキ　容易にあらはれざるめでたきしるし。沈約、齊武論「嘉祥露合、一一泉湧」

【秘蔵】ヒゾウ　かくれておくふかし。手部文「妹嬉一一、潛密清涼」‖幽遠。

【秘笈】ヒキュウ　容易に得られざる書物。古今詩話「陸放翁藏二書數千卷一、多二奇篇一一一」

【秘傳】ヒデン　たやすく人に授け傳へざる術。

【秘府】ヒフ　○大切の品を入れるくら。おもに宮中の書庫をいふ。後漢書、藝文志「皆充二一一一」‖祕閣。○祕書省の別稱。

【秘封】ヒフウ　他人に見られざるやうにかたく封ずる。‖嚴封・嚴緘。

【秘文】ヒブン　ひみつの文。又、容易に見ることを得ざる書物。班固、西都賦「啓二靈篇一、校二理一一一」‖祕籍。

【秘謀】ヒボウ　ひみつのはかりごと。唐書、褚遂良傳「皆預二一一一、有二裨輔之益一」

【秘密】ヒミツ　○人にひめかくす。晉書、藝術傳「聞二諸一一一」○關係者にして深奥なる妙法「眞言一一」

【祊】フ　遇

○後死のものを先祖に合せまつる。三年の喪、終りて其の木主を先祖の廟に合祀する。禮、檀弓「以吉祭易二喪祭一明日一一於祖父一」○先祖の墓に合せはふむる。

【祊享】フキョウ　あはせはふむる。薩德輿、墓銘「一一雙魂、泯聲無窮」‖合葬。

【祓】フツ　ハイ　物

㊀はらひ。はらふ、神に祈りて災を除く。○いさぎよくす（潔）神に祈りてからだのけがれをはらひきよめる。○のぞく（除）㊁さいはひ（福）

【祓禊】フツケイ　はらひきよめる。唐書、儒學傳「每レ開レ經、輒一一東帶危坐」

【祓除】フツジョ　けがれをはらひのぞく。陸游詩「一接二俗人一三一一」

【祓戸神】ハラエドノカミ　國祓戸（祓を行ふ場所）を守る四神。瀬織津神（氣吹戸主（イブキドヌシ）速秋津姫（ハヤアキツヒメ）佐須良姫（サスラヒメ）

【祓箱】ハラエバコ　國祓の玉串（タマグシ）をいれるはこ。

【祐】ユウ　六　畫　佑

大いに先祖の廟に合せまつる「一祭」公羊、文二「大事者何、大一也、大一者何、合祭也」

【祐誥】ユウコウ　昭穆を序づる王者の大祭。禮、王制「天子將二一一一、祐嘗祐烝」

【祓・掃・拂・擯・攘・禳・除・除】の條の附は掃（手部八畫）の條を見よ。

【祓禊】フツケイ　わざはひをはらふ、みそぎ。三月上巳の節に行ふ祀。事物紀原「韓詩曰、三月桃花水下之時、郊國之俗、以二上巳一於二溱洧之上一、執レ蘭招レ魂續レ魄二一不祥一」魏信文「雖レ行二一一之飲一、即同二春禊之儀一」

【祓飾】フツショク　陳腐を去りて更に新しくかざる。司馬相如、封禪書「一二一跋文一」注「一一者、言除二去舊事一、更飾二新文一也」

【祓濕】フツシツ　はらひきよめる。唐書、儒學傳「每レ開レ經、輒一一東帶危坐」

【祓除】フツジョ　けがれをはらひのぞく。陸游詩「一接二俗人一三一一」

【祓戸神】ハラエドノカミ　國祓戸（祓を行ふ場所）を守る四神。瀬織津神（氣吹戸主（イブキドヌシ）速秋津姫（ハヤアキツヒメ）佐須良姫（サスラヒメ）

【祓箱】ハラエバコ　國祓の玉串（タマグシ）をいれるはこ。

【祭】サイ　畫

まつる、まつり（祀）「大一」「弔一」「報一」孝經、士章「一一者際也、人神相接、故曰際也」

【祭祀】サイシ　祭祀・祠○祭は說文に、右手持レ肉也と註す。祠時に限らず、物をそなへて祭るなり。論語「祭思レ敬」○祀は定りたるまつりなり。左傳「國之大事、在二祀與一戎」○祠は祀に通用す。又、祠は、遍ほどきにまつるなり。

【祭器】サイキ　まつりのうつは。禮記「祭服敝則焚レ之、一一敝則埋レ之」

【祭饗】サイキョウ　まつり。晉書、載記「一一朝廢、宜二正服奏衣九文冠九旒一」

【祭告】サイコク　君主が帝室若くは國家の大事を神明につげまつる（珍漢筆談）

【祭具】サイグ　まつりのうつは。又、其のそなへもの。漢書、郊祀志「震二天地泰一諸鬼神一而遍二一一、以致二天神一」‖祭器。

【祭司】サイシ　非官敎の僧職の名。

【祭祀】サイシ　まつり。事物紀原「周牧使二鬼物一以致二享祠一、以二犧牲一登薦二百神一、則一一之始也」

【祭文】サイブン　まつりの費用。

【祭詩】サイシ　唐の賈島が自作の詩を祭りし故事。唐書、賈島傳「島苦吟、常以二歲除之夜一、取二一年所レ作詩一、以二酒醴一祭之、且言勞二精神一、以レ此補レ之」藏敍詩「賈島一レ一忙」

【祭菜】サイ　神に供へる蔬菜。左、楳六「潔菜豐盛」「一一料」

【祭主】サイ　○祭を行ふあるじ。易經「震驚百里、不喪匕鬯、繼也、出可下以守二宗廟社稷一以爲中一一上也」○其宗教の儀式に於ける最高者、先づ酒を以て地を祭るをいふ。轉じて學政を司る長官の稱。事物紀原「晉咸寧中、初立二國子學一、始置二國子一一一」「國子一一は我が學習院長の如きもの。○國德川時代、大學頭の唐名。

【祭政】セイ　まつりと、まつりごと。祭事と政治と。「一一一致」

【祭天】サイ　天をまつる。古、天子のみ之を行ふを得。

【祭典】サイ　まつりの儀式。‖祭禮。

【祭服】サイ　祭る時に著る服。曲禮「有二田謀一者、先爲二一一一」

【祭文】サイ　○文體の名。親友を祭奠する辭、古の祭祀は止だに告謝するのみ、中世以還、兼ねて言行を讚して以て哀傷の意を寓す、蓋し祝文の變なり、其の辭、散文あり、韻語あり、「文鑑明辯」○國ゾク俗曲の一種「祝一一」「說經一一」

【祭禮】サイ　まつりの儀式。禮記「一一與二其敬不一是而禮有二餘也一、不レ若二禮不一足而敬有二餘也一」‖祭典。

【祥】シャウ　陽

○さいはひ、めでたし、よろこび（善福）「吉一」「休一」○きざし、しるし、吉凶の前兆。又、特に吉事のきざしにいふ。中庸「國家將興、必有二禎一」（吉兆）左、昭十八「將有二大一」（凶兆）○服喪中の祭。小一は一周忌。大一は三周忌。禮、閒傳「父母之喪、期而小一、又期而大一」疏「大一、二十五月」○つまびらか。詳に通ず。史記、自序「陰陽之術大一」漢書には詳に作る。

【祥雨】シャウウ　詳瑞に同じ。後漢書、馬融傳「雨鮮時潤、一一時至」

【祥雲】ウンシャウ　めでたきくもゆき。庾信、宇文公碑「一一入レ境、行雨隨レ軒」‖瑞雲・景雲・卿雲。

【祥煙】エンシャウ　めでたきけむり。魏唐書、禮儀志「曙後一一遍レ空」‖瑞煙。

【祥桑穀】サウコクシャウ　祥は妖怪、あしきしるし、桑と穀とが二木が共に朝庭に生ぜしは王者不恭の罰とす。史、殷紀「帝太戊立、伊陟爲レ相、亳有レ祥、桑穀共生二於朝一、二暮大拱、帝太戊懼、問二伊陟一、伊陟曰、臣聞妖不レ勝レ德、帝之政其有レ闕與、帝其修レ德、太戊從レ之、而祥桑枯死而去」

【祥瑞】ズイシャウ　めでたきしるし。詩經、疏「王誠感レ物、一一必臻」韓愈文「風雨以レ時、一一輻輳」‖吉兆。

【祥祲】シンシャウ　めでたききり。范雲詩「移朝叱二一一一、薄晩挙二奇烟一」‖瑞氣。

【祧】テウ　通

先祖を合祀せるたまや、遠祖の廟、己より上五世を經たる祖先（特別の功德ある者を除く）は悉く一つに合せ祭る。「合一」「宗一」‖遷廟。

【祧廟】テウビョウ　遷主を藏むるたまや。漢書「超二郊宮、定二一一一」

【票】ヘウ　表　圖

○火の飛ぶ貌。飛び散る火。○はやし（疾）○かるくあがる（輕擧）「一禽」○てがた、きって、郵便又は銀行の切手・證券・乘車券などの稱「信一」「鈔一」「軍一」「彩一」「傳一」「運一」○ふだ「投一」

【票騎】ヘウキ　漢の武官の名。漢書、霍去病傳「爲二一一校尉一」‖剽姚・驃姚。

【票子】ヘウシ　さつ（札）子は助辭。紙幣・手形・切手。

【票然】ヘウゼン　輕く飛ぶ貌。漢齊、禮樂志「一一遊旗遙紆」

【祓】リョ　編

山川をまつる。旅に通ず。

七畫

【祓】シン　震　先

○日のかさ、日旁の氣。○わざはひをひき起すあしき（妖氣）「妖一」陰陽の二氣が相侵して生ずる雲氣。左、昭五「吾見二赤黑之一一」○さかんなり。さかんにす。班固、東都賦「天官景從、一一威盛」容」

【祲祥】シンショウ　あしき氣。厲世、鮑防傳「時比歲旱、策問二陰陽一一一」‖災祥。

【祳】脤（肉部七畫）に同じ。

八畫

【祺】キ　支

○さいはひ（吉・祥）「頒―」詩、大雅「壽考維―」○春―は春のさいはひ、新年のよろこび。■新禧。○―然は安泰にして憂へ懼れざる貌。荷、非十二子「儼然莊然―然」

【祺祥】さいはひ。夢溪筆談「雲物―」

【禁】㊀キン　㊁キム　侵

㊀とどむ、さしとめる（制止）之を制して爲すこと勿からしむ「防―」「―止」○つつしむ（謹）○いましむ（戒）「戒―」○ごしょ、天子の居所、門毎に―あり、近侍の臣にあらざれば妄に入るを得ず、故に―中といふ「宮―」「―門」○いみ（忌）忌みさける「―忌」よじなひ（厭勝）「―厭」○のろひ（呪詛）○まはふ（妖幻）○いましめ、きそく、おきて（法律）「法―」孟、梁惠王「問國之大―」○俗に監獄をいふ「監―」―子は獄卒。㊁たへる、力が勝ゝへる。漢書、成宣傳「猶弗能―」

同訓異義　禁・耐・堪・勝・任・能の別は耐（而部三畫）の條を見よ。

【禁遏】おさへつけてとどめる。後漢書、馬防傳「防兄弟貴盛、帝不レ喜レ之、數加二譴敕一、所以―二其權一」■禁制・抑制。

【禁闥】きんり、ごしょ、闥は宮中の小門。鄭審詩「入レ遲二隨道一分レ行接二―一」■禁中・禁掖。

【禁衛】ごしょのまもりの兵。又、其の者。魏志、高堂隆傳「王公設レ險、以固二其國一、都城―一、用戒二不虞一」

【禁衛軍】天子の衛兵。■禁軍。

【禁掖】きんり、ごしょ、掖は宮閤の左右の掖門。李嘉祐詩「趨陪二―一應行遲」■宮闈。

【禁旅】まもりのへ。

【禁苑】宮中のその、天子の園囿。漢書、食貨志「省二―一以予二貧民一」西都賦「四郊則有二上囿禁苑林藪澤一」■御苑。

【禁垣】御所のかきね。■宮垣。

【禁煙】○寒食の節に火を禁ずる、轉じて寒食の節の異稱。韓琮詩「正值驚花過二―一」○宮中より出づるけぶり。李遠詩「漠漠―籠二遠樹一、冷冷宮漏響二前除一」○國煙草を喫するをさしとめる。

【禁園】宮中のその。上官儀詩「―凝二朔氣一、瑞雪掩二晨曦一」■禁苑。

【去レ禁】禁令をやむ。左傳「毀レ關―レ薄レ政」

【禁制】とどめしかる。前史、王僧辯傳「從弟僧度、知二其謀一―乃止」

【禁戒】さしとめいましめる。

【禁忌】日月方位などに就きていみはばかる。漢書、藝文志「泰二子―一、泥二于小數一」■忌諱。

【禁句】圖○作歌の上にていみさくべき句。○人の感情を害することば。

【禁軍】禁旅に同じ。■禁衛軍。

【禁火】火をもやすことを止む。荊楚歲時記「去二冬節一一百五日、即有二疾風甚雨一、謂二之寒食一」

【禁貨】俗禁制品。

【禁閑】禁門に同じ。

【禁錮】○とぢこめ置く刑罰。後漢書、馬融傳「淫令―一二之一」○仕進の途をふさぎて仕宦するを得ざらしむる法。左、成二年「―勿レ令レ仕」■廢錮。○國刑罰の一、獄中に監禁すること、有期―一・無期―一の二あり。

【禁溝】ごしょのおほり。韓愈詩「繞下幷渠入二―一」

【禁獄】ろうにおしこめる。

【禁圃】御所のうち、宮中の菜御殿、圃はしきみ。■禁園。

【禁坐】天子の御座、坐は座に通ず。後漢書、光武數引二公卿郎將、列二―一」

【禁札】圖禁止の箇條をかきしるして道路に立て公衆に示すたてふだ。■制札。

【禁止】さしとめる。史、始皇紀「不レ能二―一」

【禁呪】まじなひ。酉陽雜俎「善二推步一―」

【禁邪】よこしまをふせぎとどむ。史記「誅レ暴―レ」

【禁黜】ごしょのかき。鄧谷詩「得下逐二晴風一出中―上」

【禁城】ごしょ。李愛詩「―春色曉昔昔」■宮城・禁掖・禁庭。

【禁酒】飲酒をやめる（後漢書、呂布傳）

【禁書】法律にて刊行・所藏又は閲覽を禁止せし書物（明律、注）

【禁署】ごしょの中にあるやくしょ。唐書、畢諴傳「帝悅曰、吾將レ擇二能帥者一、孰謂顏收在二―一」■禁省。

【禁色】圖昔、許可を得ざれば裝束に用ひられざりし色、深紫と深紅との二色。

【禁制】止めてなさしめず。後漢書、朱祐傳「―二士卒一、不レ得二剽掠一」

【禁省】ごしょの中にあるやくし

よ。又、禁中の略。後漢書、閻皇后紀「更相阿黨、互作二威福一、採二刺一一、更爲二倡和一」‖宮省・禁署。

【禁錮】キンコ　大切に秘藏する書物の習。書、荀綽傳「總書一一」

【禁足】キンソク　○人の外出をとどめる。釋宗規「當二法王一一之辰一」○圍外出をさしとめられる罰。

【禁内】キンナイ　禁中に同じ。後漢書、趙典傳「貴邪二讒鄙一、侍二講一一」

【禁園】キンエン　きんり、奥御殿。轉は宮中の小門。史、汲黯傳「出二入一一一補レ過拾レ遺」‖禁闥。

【禁斷】キンダン　さしとめる。魏志、文帝紀「一一淫祀」

【禁治産】キンチサン　瘋癲白痴などの如く心神喪失して法律上自己の財産を管理し得る能力なき者に對し、裁判所が財産の處理を禁止する。

【禁中】キンチュウ　きんり、御所の史、始皇紀「常居二一一一」‖禁裏・禁内。

【禁廷】キンテイ　宮中、きんり。‖禁庭。

【禁庭】キンテイ　禁城に同じ。孔帖「肇温父綬在二一一一」

【禁屠】キンド　殺生セイをさしとめる。唐書、則天后紀「五月庚午一一」

【禁方】キンポウ　ひでんの調劑法。史、扁鵲傳「我有二一一、年老欲レ傳二與公一」

【禁兵】キンペイ　宮城を守護する兵士。唐書、兵志「殿秀實見二一一一、謀弱一」

【禁闥】キンタツ　天子の宮中のはたけ。漢書、百官公卿表「上林苑有二一一一」

【禁網】キンモウ　おきて。漢書、刑法志「風流簡厚、一一疏闊」‖禁罔・法律・禁令。

【禁物】キンモツ　禁制せる品物。南史、劉孝標傳「坐二私載一一一免レ官」

【禁門】キンモン　御所の御門。‖宮門・禁闕。

【禁錮】キンコ　宮門のかぎ。范成大詩「一一通二三鼓一臨轅任二五更一」‖宮錮。

【禁裏】キンリ　天子の御所。獨斷「天子所レ居曰二一一一」

【禁裡】キンリ　前條に同じ。

【禁林】キンリン　○禁苑の林木。程園賦「集二一一而屯聚一」○翰林院の別稱。蘇易簡に一一宴會集あり。

【禁旅】キンリョ　近衞の軍隊、旅は五百人をいふ、ここは廣く衆卒の義とす。宋史、職方志「昭宗之末、一一盡矣」‖禁軍。

【禁令】キンレイ　おきて、法律。周禮「掌二市之治教政刑禁度一一」‖禁制。

【禁樓】キンロウ　どしょのたかどの。姚合詩「夕郎夜直吟二仙掖一、天樂和レ聲下二一一一」

【祼】カン　館

いのる、馬の爲めに疾なきをいのり、田獵に獲モノの多きを賻るなど、祷に通ず。

【禀】ヒン　稟（禾部八畫）の俗字。

【祿】ロク　屋

○さいはひ（福）「福一」「天一」「干一」「食一」「世一」詩、商頌「百一是何」○よし（善）○ふち（扶持）官吏の俸給「秩一」「俸一」○秩祿を授ける。禮、王制「位定而然後一之」○不一無一は士の死をいふ、死して祿を終へざる義。○圀一は火の神。○天一閣は漢時代の天子の書庫の名。

【祿位】ロクイ　ふち と、くらゐと。周禮、冢宰「以二八則一治二都鄙一、四曰、一一以馭二其士一」‖祿爵。

【祿重】ロクジュウ　俸祿が多し。史、禮書「德厚者位尊、一一者寵榮」賈誼子「禮崇則智士至、一一則義士輕レ死」

【于レ祿】カンロクモト　仕官する。論、爲政「子張學一一レ」

【祿券】ロクケン　圀祿秩にかへたる公債證書。

【祿賢】ロクケン　まさりてかしこき者に俸祿を與へる。忠經「一一レ能」

【祿仕】ロクシ　ふちを受けん爲めに仕官す。韓愈、爭臣論「陽子將レ不二一一乎」

【祿賜】ロクシ　俸給と賞賜と。漢書食貨志「租稅一一、皆以二布帛及穀、使二百姓盡二意農桑一」

【祿爵】ロクシャク　ふちと、くらゐと。禮、王制「王者之制二一一、公侯伯子男凡五等」‖祿位。

【祿食】ロクショク　ふちを受けて生活する。漢書「賦給二郊祀宗廟百神之祀、天子奉養、百官一一庶事之費一」陳遊詩「一一妻子樂、功名後人看」

【祿秩】ロクチツ　さいはひ。易林「遊在二石門一、一一安全、受二福西隣一、飽飲二玉泉一」

【祿秩】ロクチツ　官吏のふち。身分によりて差違あり、故に秩といふ。禮、月令「季秋之月、收二一一之不レ當、供養之不レ宜者」‖秩祿。

【祿米】ロクマイ　ふち米、秩祿の米。韓非子「七十受二一一一、一一德施二惠于民一也」杜甫詩「故人供二一一一、鄰舍與二賙蔬一」

【祿俸】ロクホウ　官より賜はるふち。後漢書、宣秉傳「所レ得一一、輒以收二養親族一」

【祿命】ロクメイ　人の運命、人生の祿食運命。史、日者傳「卜者多虛高二一一以悅二人志一」

【祿物】ロクモツ　圀かづけもの、はな。‖祿

頭。
【祿料】ロク ふち。白居易詩「官優有二―一」＝給料。

九畫

【禕】キ 支 韋に通ず

○めづらし(珍)○よし(美)

【禋】イン エン 先 眞

きよめまつる(潔祀)天帝をまつる。精意を以て享祭する「一祠」「秉一」書、舜典「一于六宗」
【禋祀】シン 潔くしてまつる。周禮、春官「以二―一祀二昊天上帝一」
【禋祠】シン 前條に同じ。李嘉祐詩「―一影二舊典一」

【禍】クワ 哿

○わざはひ(殃)ふしあはせ、災難。福の對「奇―」「消―」「女―」禮、表記「君子愼以避二―一」○わざはひす、災を與ふ。神の咎を受ける。書、湯誥「天道福二善一―一淫」
【禍福無門】ヒトノマネクシテクワフクスル 禍・災・殃・厄○禍は福の反なり、不仕合にあふなり。淮南子「禍者福之所レ倚、福者禍之所レ伏」○災は時のまはり合せなり、天地よりなすわざはひなり。左傳「天災流行」また人火曰レ火、天火曰レ災と註す。○殃は神の咎をうける義。易經「積不善之家、必有二餘殃一」○厄はなんぎにあふ義、尼に同じ、困厄・災厄と用ふ。
【禍殃】ワウ わざはひ。ふしあはせ。
【禍階】カイ わざはひの起る階梯。ジシ左、隱三「階レ之爲レ禍」＝禍梯。
【禍害】ガイ わざはひ、さいなん。＝禍殃。
【禍機】キ わざはひの生ずるきざし。北史、崔彧傳「審二禍福之興、徹二侈禍之機一」李賀、樂府「艾葉綠花誰剪裁、中藏二―一不レ可レ測」
【禍兆】テウ わざはひと、とがめと。＝殃咎。
【禍患】クワン わざはひ。うれへ。易經、疏「自レ下設レ上、悖逆之道、故―一來至」
【禍源】ゲン 禍根に同じ。＝禍始。
【禍根】コン つみ。過子昇文「呂雀之門、―一所レ伏、梁冀之家、咎徵斯在」
【禍根】コン わざはひの本。吳越春秋「大夫種曰、吉者凶之門、福者禍之根」
【禍心】シン 惡計をたくらむ心。左、昭元「包二藏一―一」
【禍胎】タイ わざはひの起るきざし。漢書、枚乘傳「福生有レ基、禍生有レ胎、絕二其胎一、禍從レ何來」
【禍梯】テイ わざはひの起る階梯。史、趙世家、母レ爲二邯鄲一、毋レ爲二―一」＝禍階。
【禍福】フク わざはひ。爾雅「謀二―一」
【禍難】ナン わざはひ。韓非子「夫智者知二―一之地一而避レ之者也」
【禍福相貫】クワフクアヒツラヌク 禍福の二者相貫通して、一方に偏せざるをいふ。戰國策「禍與レ福相貫、生與レ亡爲レ鄰」
【禍福自レ己】クワフクおのれニヨル 禍も福も皆自分より招く、自業自得。孟、公孫丑「禍福無二不自一レ己求一レ之者一」
【禍福如二糾纏一】クワフクアザナヘルガゴトシ 禍福の互に表裏を爲すことは、より合せたる繩の如し。纏は三合の繩。漢書、賈誼傳「禍之與レ福兮、何異二糾纏一」
【禍福無門唯人所レ召】クワフクハモンナシタダヒトノマネクトコロナリ 災禍と幸福とは、皆人の自ら招く所にして、其の來るに一定の門戸とてはなし（左、襄三三）
【禍變】ヘン わざはひ。唐書、張說傳「―一之生、在二人所一レ忽」＝災變。
【禍井】セイ わざはひのもと。易林「井レ口結レ舌、言爲二―一」
【禍亂】ラン わざはひ、みだれ。漢書、平當傳「災害不レ生、―一不レ作」
【禍累】ルイ わざはひ、累はわづらひ。淨住子「此是患苦之門、―一之始」
【嫁レ禍】カニ 己の禍を人に移しきせる。史、張儀傳「―レ―安レ國、此善事也」
【轉レ禍爲レ福】テンジテフクトナス 禍に逢ふも、うまく之を處置して反りて幸福に變ずる。史、蘇秦傳「古之善制レ事者、―一、因レ敗爲レ功」
【禍生于懈惰】クワセイハケダイニショス 禍は おこたりて戒愼せざるより生ずる。說苑「―一、孝衰二于妻子一」
【禍從レ口生】クワハクチヨリショウ 禍は言を愼まざるより起る。鍾氏要覽「一切衆生、―一、口舌者壓レ身之斧也」
【禍兮福之所レ倚】クワフクノヨルトコロ 禍福の循環極りなきをいふ。老子「―一、福兮禍之所レ伏、孰知二其極一」

【禊】ケイ カツ 霽 黠

○はらふ、はらひ(祓)みそぎ、年中行事の一、陰暦三月上巳（後には三日と定む）に行ふを春―といひ、七月十四日に行ふを秋―といふ。王羲之、蘭亭集序「修二―事一」○はらふ、みそぎする。
同訓異字 祓・掃・掃・攘・被 祓の別は掃（手部八畫）の條を見よ。
【祓飲】イン ○上巳のみそぎのさかもり。晉書、祓龍四年三月甲寅、帝臨二―一。○又其の酒をのむ。續漢書、禮儀志「三月上巳、官民並二―一于東流水上一」
【禊宴】エン みそぎのさかもり。南史、王融傳、武帝芳林園―一、使二融爲一

曲水詩序「當時稱ノ之」‖禊飲。

【禊祠】ケイ みそぎしてまつる。又、其のまつり。後漢書、禮儀志「三月三日、於二東流水上一自潔濯、謂二之ー一ニ」

【禊帖】ケイ 蘭亭帖をいふ。輿地志「至レ若二ー一則激レ之益深、擊レ之益激」

【禔】

㊀シ 支 ㊁シ 支 チイ 因

㊀さいはひ(幸・福)○やすし(安)㊁まさに、ただ(但)ただに。史、韓長孺傳「一取辱耳」(漢書には一を紙に作る)「紙。

【禔福】シフ さいはひ。漢書、司馬相如傳「遐邇一體、中外一一」‖祉福。

【禘】

テイ ダイ 霽

王者の大祭、王者が始祖の大祭を行ふとき、其の神靈の保護神たる天帝をたてて之に配祀する義。

【禘郊】ダイカウ 帝王の行ふまつり、禘は始祖をまつる、郊は郊外にて天を祭る。

【禘祫】ダイカフ 祖先の廟を合せ祭る。左傳、疏「祫卽禘也、取二其序一昭穆一謂二之祫一」‖祫禘。

【禘祭】ダイサイ ○王者が祖廟に新穀を薦めるまつり。禮記「郊社之禮、一一之義」○夏の祭と秋の祭と。禮、王制「春礿・夏禘・秋嘗・冬烝」

【禎】

テイ チャウ 庚

○さいはひ(祥)「嘉一」○よし(休)めでたきしるし(符瑞)○ただし(眞正)

【禎祥】テイシャウ めでたきしるし。中庸「國家將レ興、必有二一一一」‖祥禎。

【禎瑞】テイズイ めでたきしるし。齊書、樂志「極二一一一

酒」

【福堂】フクダウ　牢獄の異名。眞珠船「余向繫三錦衣獄一、觀二壁上有レ大二書一一字一甚偉、近聞二吳越春秋一、大夫種親詞有レ云、禍發二福根一、終爲二福堂一、因知二出處一」

【福地】フクチ　仙人の住む處。北史、韓麒麟傳「王業所レ資、聖躬所レ戰、其爲二神鄉一一、實不レ虛矣」

【福祉】フクシ　さいはひ。易林「賜二我一一、壽算無レ極」

【福茶】フクチャ　圖黒豆・昆布・梅干などを加へたる煎茶、節分又は大晦日に飲用す。

【福田】フクデン　佛に供養すれば、福德を生ずること田の物を生ずる如しとの說。經藏、與二孟仙書一書「非二徒信其法一、求二一一利益上也」

【福利】フクリ　しあはせ。後漢書、仲長統傳「衰入擅二無窮之一一、而普士挂二不赦之誅辜一」

【福慶】フクケイ　さいはひ、慶は祿。詩、周南「樂只君子、一一綏レ之」＝福祿。

【福祿】フクロク　さいはひ。詩、小雅「一一如レ茨」＝福慶。

【福祿壽】フクロクジュ　○福と祿と壽との○圖七福神の一。

十畫

【禁】キン　エイ　敬　寒

○まつり。まつる。凶災を除去する祭、山川の神を祭りて水旱・疾疫の災をはらひ、日月星辰の神を祭りて雪霜風雨の時ならざるをはらふ祭（左、昭元）○祭のには。

【禡】バ　禡

いくさのまつり、師旅の止まる所にて行ふ祭、即ち戰時に軍隊の止りし所にて行ふ祭。禮、王制「一於所レ征之地一」【禡祭】バサイ　いくさのまつり。＝師祭。

十一畫

【禦】ギョ　語　古、御・馭に通ず

○ふせぐ（扞）「防一」「一敵」こばむ（拒）拒みて入れず。○あたる（當・抗）齊語「莫二之能一禦也」○とどむ、ひきとめる。孟、萬章「今有二人於國門之外一」とどまる（止）○まもる（守）「守一」「備一」因に通ず。○さく（避）山海經「可二以一一火」○ふせぐもの、とどめるもの。詩經「不レ畏二彊一禦」

同訓異字　禦・防・扞・捍・拒・閑の別は防（阜部四畫）の條を見よ。

【禦扞】ギョカン　ふせぐ。通典「一二一矢石こ＝扞禦・防禦。

【禦水】ギョスイ　水をふせぐ。山海經「可二以一一レ一、食之使二人不レ溺」

【禦戰】ギョセン　ふせぎたたかふ。尉繚子「退不二享陣一、以一一非二善者一也」

【禦侮】ギョブ　あなどりをふせぐ、敵の來るをふせぎとめる。轉じて武臣をいふ。詩、大雅「予曰有二一一一」

十二畫

【禨】キ　㊀キ　㊁キ　微　未

㊀さいはひ（祥）○たたり（祟）㊁沐して後、酒を飲む。又、其の酒。禮、玉藻「進」一進盞」

【禨祥】キショウ　禨はたたり、詳はさいはひ。鬼神の禍福の事をいふ。漢書、趙王彭祖傳「不レ好二治一一宮室一一」

【禧】キ　支

○さいはひ（福）めでたし「福一」「鴻一」○よし（吉）よろこび。○つぐ（告）○新一は新年のよろこび。○ひもろき、祭肉。證に通ず。

同訓異字　禧・福・祐・幸・祉・倖の別は福（示部九畫）の條を見よ。

【禩】シ　祀（示部三畫）に同じ。

【禪】㊀ゼン　㊁ゼン　先　嚴

㊀ゆづる（讓）天子が位を讓る「一讓」孟、萬章「唐虞一」○古、天子が地を除ひ清めて山川の神を祭るにいふ「封一」＝壇。㊁しづか（靜）佛說にて靜慮、即ち專心守一にして、すべての繫累を斷ち、菩提、即ち明心達理の境に到るをいふ「一學」傳燈錄「一有二五、外道一、凡夫一、小乘一、大乘一、最上乘一」○佛教の一派「一宗」心を靜かにして眞理を直觀する宗派。○ざぜん（坐禪）打坐して靜慮菩提の業を修めること。蘇軾詩「睡穩如一息息勻」

【禪庵】ゼンアン　禪僧のいほり。溫庭筠詩「一一過二微雪一、鄰寺隨二衆煙一」

【禪位】ゼンイ　天子が位を讓る。文獻通考、經籍考「玄宗一二一太子一亨一」＝讓位。

【禪院】ゼンイン　てら。續釋常談「皆與二寶宮一、遊二天台一一」

【禪閣】ゼンカク　てら、洛陽伽藍記「一一虛靜、隱室凝遠」

【禪學】ゼンガク　禪宗の學問。福湖野錄「江西兜率悅禪師、一一高妙聰敏、出二子流類一」

【禪閣】ゼンカク　圖太陽の身分にて佛門に

入りし人の稱。

【禪家】ゼンケ　禪宗。又、其の寺院。

【禪扃】ゼンケイ　佛寺の門。王勃、遊二武擔山寺一序「梵筵霞屬、一一烟飡」

【禪師】ゼンジ　○僧侶・禪僧。○禪家高德の僧に朝廷よりたまはる稱號「道元一一」

【禪室】ゼンシツ　坐禪をくむへや。又、てら。＝禪房。

【禪祖】ゼンソ　禪宗の始祖たる達摩をいふ。蘇軾詩「古剎訪二一一一」

【禪牀】ゼンシヤウ　禪學を修めるゆか、寺のゆか。司空圖詩「永夜一一雨滴聲」

【禪讓】ゼンジヤウ　天子が存生中に位をゆづる。又其の事。後漢書、逸民傳論「頴陽洗レ耳、恥レ聞二一一一一、孤竹長鬚、羞レ食二周粟一」

【禪僧】ゼンソウ　禪宗の僧。白居易詩「門閉無二訪客一、室靜有二一一一」

【禪褥】ゼンジヨク　坐禪を組むときしかけ。杜牧詩「今日賞緣一一時、茶甌輕颺落花風」＝禪牀。

【禪杖】ゼンヂヤウ　圖○坐禪の時に睡る者をいましめうつに用ふるつゑ。警策（釋氏要覽）○禪僧のつくつゑ。劉基詩「追レ稽一一落、鬼石製裝祖」

【禪定】ゼンヂヤウ　圖禪那の音略、靜慮と譯す。智度論「一切一一亦名レ定、亦名二三昧一」＝禪那。

【禪那】ゼンナ　圖心を靜かにして眞理を直觀する、禪宗の教義。單に禪ともいふ。＝禪定。

【禪尼】ゼンニ　佛門に入りたる女子。

【禪房】ゼンバウ　てら。李白詩「心塵都已滅、永宵趨二一一一」＝禪室。

【禪味】ゼンミ　禪學の面白きあぢはひ。蘇軾詩「不レ知二一一梁六、但取二饑腸騷一」

【禪門】ゼンモン　禪家の宗門（梁高僧傳）

【禪門五宗】ゼンモンゴソウ　昔六祖の後、臨濟・潙仰・雲門・法眼・曹洞の五宗、法眼は流れて高麗に入る、潙仰は石晉の時に至りて已に亡ぶ、今は唯雲門・曹洞・臨濟のみ存す、而して臨濟尤も盛んなり。

【禪林】ゼンリン　禪宗の多くの寺。又、禪僧の多くの仲間。禪林寶訓音義「禪者靜慮也、林者叢林也、蓋謂山林之士、湖海之流、雲集招提二（中略）修二習淨業一、以レ此言レ之、故曰二一一一一」

十三畫

【禫】タン　㊥

除服の祭の名、父母の三年の喪を終へ更に一箇月を隔てたる二十七ヶ月目に行ふ祭。禮、開傳「期而大祥、中レ月而一一」

【禮】レイ　㊥

はらひ、殃ハザハヒを除ハふ祭「禳一一」

【禮】ライ　㊥

○ゐや、五常の一「仁義一智信」すべて人の履み行ふべき外形上の秩序の儀式。のり（品箭）○ぎしき、作法「祭一一」「一法」「古一一」「吉一一」「凶一一」「冠一一」「典一一」○れいもつ。○おじぎ、あいさつ、すべて敬意を表する行爲「敬一一」「一拜」又、其の敬意をあらはす爲めの贈物。論、陽貨「一云一云、玉帛云乎哉」○經書の名。禮記ライキ・周禮シウライ・儀禮ギライを三一といふ。

【禮衣】レイイ　儀式に用ふる衣服。王禹偁詩「朝服紛紛換二一一一」

【禮意】レイイ　○敬意の意思（漢書、鏑不疑傳）＝敬意。○禮の精神。書、周官、疏「或據二禮文一、或據二一一一」

【禮闈】レイヰ　漢代、尚書省の異稱、建禮門内に在りて禁闥シに切近するが故（通典）

【禮樂】ガク　行を愼ましむる禮儀と、心を和げしむる音樂と。禮は社會の秩序を定め、樂は人心を和げる用あるものとして尊重する。孝經「移レ風易レ俗、莫レ善二於樂一、安レ上治レ民、莫レ善二於禮一、禮者敬而已矣」禮、樂記「一一不可斯須去身」

【禮勝則離】レイショウカバ　禮も其の中を過ぐれば、民離れて親和せざるに至る。禮、樂記「樂者爲レ同、禮者爲レ異、同則相親、異則相敬、樂勝則流、一一」

【禮義】レイギ　人の行ふべき禮の道。詩經、序「變風發二乎情一、止二乎一一一」

【禮儀】レイギ　禮儀作法、禮は大、儀は小。詩、小雅「一一既備、鐘鼓既戒」

【禮節】レイセツ　人の踐み行ふべき正しき道。漢書、刑法志「治二其賦兵一、教レ之以二一一一之謂也」＝禮義。

【禮器】レイキ　祭祀又は賓客を待つに用ふる種種の器。禮記に一一篇あり。

【禮饗】レイキヤウ　禮をそなへて賓客をもてなす。後漢書、馬援傳「一一官屬」甚盛」

【禮遇】レイグウ　禮を以てもてなす。北史、劉芳傳「一一日隆」＝禮待・禮接。

【禮願】レイグワン　神佛に願をかける。雲笈七籤、講座二一一、仰希二元慰一」

【禮經】レイケイ　聖人の定めたる禮法を記したる書物。禮記・儀禮の類。

【禮敬厚】レイケイアツシ　禮を以て敬ふことが、てあつし。北史、韋夐傳「明帝即レ位、禮敬愈厚」

【禮敎】レイケウ　禮儀に關するをしへ。禮記「恭儉莊敬、一一也」陸機文「辭雍所二以班一一一」

【禮弁】レイベン　うやまひてつつしもてなす。唐書、紫延玉傳「見二一一錄遲一」

【禮獻】レイケン　禮を以てたてまつる。隋書、樂曲「神宮肅雍、天儀穆穆、一一既同、膺二此盛福一」

【禮裝】レイサウ　禮服に同じ。

【禮式】レイシキ 禮儀の法式。‖儀式・作法・禮法。
【禮論】レイロン 禮義を以て人にへりくだる。論、里仁「能以ニ一一爲レ國乎、何有」
【禮數】レイスウ 身分相等の禮儀。待遇。左、莊十八「名位不レ同、禮亦異レ數」
【禮制】レイセイ 禮儀のきまり。後漢書、周磐段「一一不レ序」
【禮接】レイセツ 禮を以てもてなす。晉書、杜夷傳「傾レ心一一、引爲ニ參軍一」‖禮遇。
【禮範】レイハン 禮儀のきまり。禮記「一一者、仁之貌也」
【禮履】レイリ 一種のわらぐつ。埤雅「今一種履、見レ人則交ニ其前足一而拱、謂ニ之一一」韓愈詩「一一拱而立」
【禮代】レイダイ 國ゆやしろ、禮として贈る物品。
【禮待】レイタイ 禮を以てもてなす。高士傳「段干木、晉人也、魏文侯以ニ客禮一待レ之、出過ニ其閭一而軾」
【禮徵】レイチョウ 禮を具へて召す。吳志、程秉傳、秉字德樞、孫權聞ニ其名儒一、以レ禮徵レ秉、既到、拜ニ太子太傅一」
【禮典】レイテン 一國の禮制。周禮、三目、一一以和ニ邦國一、以統ニ百官一、以諧ニ萬民一」
【禮三於禮二】レイヲフ 禮儀に習ひ熟する。禮記「孔子曰、延陵季子、吳之一一者也」
【深二於禮一】フカシ 禮に深くゆきわたる。禮記「晉侯使ニ郤缺一聘レ魯、敬而不レ煩、則一一者也」
【禮拜】ライハイ 神佛を拜する。漢武故事「燒レ香一一」
【禮魂】ライコン 敬意を表するために放つ大砲。‖禮砲。
【禮帽】レイボウ 禮服着用のときにかぶる帽子。
【禮貌】レイバウ 禮容を正しくして人を敬ふ。孟、離婁「夫子與レ之遊、又從而一一ニ一之」
【禮法】レイハフ 禮儀作法。書經、疏「次ニ序爵命一、使レ有ニ一一一」‖禮儀法度。
【禮禁未然】レイキンミゼン 禮は經驗の未だ外に見はれざる前に禁ずるものなる義の史記、自序「一一之前、法施ニ已然之後一」
【禮尙往來】ライシヤウワウライ 禮は互に往來して、相訪ふをたふとぶ。曲禮「一一、往而不レ來、非レ禮也、來而不レ往、亦非レ禮也」
【禮賓院】レイヒンヰン 外國人を待遇する爲めに設けたる官署。唐會要、天寶十三年三月二十七日勅、鴻臚卿司有ニ一一一一ニ通鑑、胡三省注「唐有ニ一一一、凡胡客入朝設ニ宴於此一」
【禮部】レイブ 官名、我が式部官の如し。唐書、百官志「一一侍郎一人、掌ニ禮義・祭享・貢舉之政一」
【禮服】レイフク 儀式に用ふる衣服。漢書「立ニ明堂一、制ニ一一一、以興ニ太平一」
【禮物】レイモツ ○禮式を行ふ爲めに用ふる物。遼史、禮志「引ニ一一于四阿門一」○敬意を表する爲めの贈品。○曲禮と文物と。王褒、荊州文學記「訓ニ六經一講ニ一一一」
【禮文】レイブン ○一國の文明をあらはす制度文物。漢書、禮樂志「周監ニ於二代一ニ一一尤具」○禮に定めたる箇條書、禮經の明文。禮意參看。
【禮聘】レイヘイ ○禮をあつくして人才をめしよぶ。南史、陶弘景傳「帝手勅招レ之、錫以ニ鹿皮巾一、後屢加ニ一一、竟不レ出」○又禮を備へて妻をめとる。北史、孀婦國「初婚之吉、敵ニ禀一ニ一君子所ニ以重ニ人倫之本一」
【禮辟】レイヘキ 禮を以てめし招く。後漢書、張純傳「司空張禹、數以ニ一一、不レ能レ致」
【禮容】レイヨウ うやうやしき容儀。史、孔子世家「常陳ニ俎豆一、習ニ一一一」
【禮律】レイリツ 禮法と刑律と。南史、疑武帝紀「一一兼修、刑德備擧」
【禮記】ライキ 四十九篇、古禮を說くこと詳かなり、漢の戴聖の傳へたるもの、一名小戴記。
【禮佛】ライブツ ほとけををがむ。唐書、傳奕傳「身陷ニ惡逆一、獄中一レ一、口誦ニ胡書一、以圖ニ像免一」

十四畫

【禱】タウ 訓 いのる

○父のおたまや、親の廟「一一廟」○廟にまつりたる父の稱。生に父、死に考、廟に入りて一と稱す。○軍行に携持して行く廟主、かたしろ（行主）禮、文王世子「其在ニ軍、則守ニ於公一」○人の姓。一衡は魏の人。
【禰祖】デイソ 父と祖先との廟。韋孟詩「既去ニ一一一、惟懷惟顧」

【禰】デイ ナイ 訓 又、祢に作る

十七畫

【禳】 ジャウ　陽

はらふ。はらひ。神を祭りて災變疫癘などをはらふ。周禮、天官、女祝、註「卻變異曰―」「祓―」

同訓異語　攘・掃・拂・攘・祓・除・撥の別は掃（手部八畫）の條を見よ。

【禳禱】ジャウタウ　神明を祭りて災をはらひ福をいのる。禱は、注「有二疾屋一（中略）此則之分野也、於レ是大修二―之術一」（其祇）

【禴】 ヤク　藥

祠（示部三畫）に同じ。

内部

【内】 ジウ　有

獸のあしあと（獸跡）

四畫

【禹】 ウ　虞

夏の世を建てたる聖王の號。初め堯舜二帝に事へ、洪水を治めて功あり。孟、滕文公「―三過其門而不レ入」管子、入國「―立二諫鼓于朝一而備二訊唉一」訊は問の唉は慈問なり。

【禹域】ウヰキ　支那の異稱、禹が洪水を治めて九州の界を正したるに本づく。‖禹跡。

【禹行舜趨】ウカウシュンスウ　夏の禹王や虞舜の如き聖人の動作のみに倣ひて其の實なきにいふ。荀、非十二子「禹行舜趨、是子張氏之賤儒也」

【探禹穴】タンウケツ　夏の禹王の入りしといふ穴を探檢する、名山大川を探るをいふ。史、太史公自序「南浮二江淮一、上二會稽一――、闚二九疑一」

【禹貢】ウコウ　書經の篇名、禹、洪水を治め、九州の貢法を定め、山川道里の遠近、物産の宜しき所を詳かにす、故に名づく。

【禹拜二昌言一】ウハイシヤウゲン　昌言は道理に當れる言、拜して之を受ける。書、大禹謨「至誠感二神、矧玆有レ苗、禹――曰、籲」

【禹跡】ウセキ　禹のあしあと。支那全土の稱、禹は洪水を治め、山河を開疏し國土を平定して九州としたる聖王。左、襄四「茫茫―一、畫爲二九州一」‖禹域。

【禹門】ウモン　龍門に同じ。淮南子「禹鑿二龍門一」（進士に登第せしを登龍門といふ）

【禺】 ㊀グ　㊁ダ　ギョウ　㊂ゴ・グ　有　多　虞　遇　通音

㊀をながざるの一種、猴の屬、赤目にして長尾。‖果然。㊁山の名。〇番―は、古の越（今の廣東省地方）の地名。〇―は魚の名。〇わかち（區）〇事の端の初めてあらはれるにいふ。〇處に通ず、―淵は窪淵、日の入る所。〇―彊は神の名。㊂でく、偶に通ず。「―人」

六畫

【禼】 ㊀チ　㊁リ　支　支

㊀すだま。‖魑。㊁あきらか、うるはし。〇ちら（散）たがふ（違）‖離。

七畫

【禽】 セツ　屑

契に同じ。漢書、百官表「―作二司徒一」

八畫

【禽】 キン　侵

〇とり（鳥）「水―」「山―」「文―」「仙―」「家―」「珍―」「獸―」「珍―奇獸」〇鳥獸の總稱。後漢書、華陀傳「吾有二一術一、名二五―之戲一、二曰虎、二曰鹿、三曰熊、四曰猨、五曰鳥」〇とりこ。とりこにす（捕虜）‖擒。

同訓異語　禽・鳥・隹・雀の別は鳥（日部二畫）の條を見よ。

【禽狄】キンテキ　とりこにする。‖擒狄。

【禽語】キンゴ　とりのなきごゑ。趙師秀詩「春深―一啾、溪落岸沙高」‖鳥語。

【禽獸】キンジウ　とりけだもの。曲禮「――、能言、不レ離二―一」

【禽獸行】キンジウカウ　人の道にそむける不倫の行をいふ（司馬法）

【禽言】キンゲン　とらへて、ころす。北史、崔休傳「養蠶莫レ不二―一」

【禽獮】キンセン　とらへて、ころす。禮、祭二郷尚書一序「草雍而―二之一」

【禽鳥】キンテウ　とり。國語「夏展父曰、離狄不レ過二蘧蒢一、以告レ度也、男則王帛、―、以導レ物也」宣和畫譜「芰荷禽―一、以導レ物也」宣和畫譜「芰荷禽陵人、善畫二花竹一――」

【禽獮】キンセン　とらへほろぼす。陷書、省

梁志「一戦一一、俘馘萬計也」【窮困覆車】（クルマヲクツガエス）鳥獣もくるしめば、車をも覆す。弱者も死にものぐるひとなれば大力を出すに喩ふ（史、甘茂傳）

禾部

【禾】クワ　歌

○いね（稲）「嘉一」「晩一」春秋、莊二八「大無二麥一」○穀物の總稱、たなつもの。○なへ（苗）○わら、穀類の莖。○稼穡に力めること。○國字の偏となる時の稱。

【禾稼】カ　こくもつ。續、月令「季夏行二秋令一、則丘陵水潦一一不レ熟」

【禾穀】クカク　いね。易林「陽旱炎炎、傷二禾一一」

【禾菽】クシュク　いねと、まめと。地理遊擇「輪廓伊洛毫田、一一彌望」

【禾黍油油】クワショユユ　いねやきびの、うるはしく盛んに成長せる貌。史、宋世家「麥秀漸漸兮、——」

【禾穂】クスイ　いねのほ。韓非子「惜二尺壁一者、耗二一一一、愛二盜賊一者、傷二良民一」

【禾苗】クワビョウ　いねのなへ。晉、嵇興、疏「一一秀實、農事未レ閑」

【禾本科】クワホンカ　植物分類上の一科目、藁は皇素蘆行厥、花は穂を有し、穂狀又は複穂狀、果實は穎果、稻麥・玉蜀黍の類。

【禾】ケイ　カイ　齊　霽

木の頭の曲り、止まりて上がること能はざるにいふ、稭・穡の字之に从ふ。

【私】シ　二　畫　支

○わたくし。公の反對。自分に關することがら「一財」「一立」「一設」孟、滕文公「逢及二我一一」○よこしま（邪曲）ねじけたる心「一曲」○偏頗、不公平。○ひそか（密）人知れず、祕密「陰一」○一家、一己、うちわ、みうち。○自分の所有にする。孟、滕文公「八家皆一一百畝」○自分の自由勝手にする。孟、公孫丑「有一一壟斷一焉」○寵愛を受ける人、嬖臣又愛妾の類。晉語「君多一一」○自分一人にて居る（燕居獨處）論、爲政「退而省二其一一」○よく「一慾」○姦通する「一通」○男女のかくし所、陰。飛燕外傳「早有二一病一不レ近二婦人一」○ふだんぎ（常服）詩、周南「濯汚二我一一」○あひむこ（姉妹の夫）○ゆばり（小便）又ゆばりする（放尿）左、襄十五「師慧過二宋朝一一焉」○家臣の自稱。○國クレタ自己の謙稱。

【私愛】シアイ　○かたよりて公平ならざる愛。後漢書、循吏傳序「宮房無二一一一、私情參雜。○ひそかに愛する女。

【私意】イわたくしのこころ（漢書、劉歆傳）

【私印】シイン　私に用ふる印章。官印・公印の對。印史「古人一一、有レ曰二某氏圖書一、或曰二某氏圖書之記一、蓋惟以識二圖書一、而其他則否」

【私議】シギ　私事を以てまみえる。史、申屠嘉傳「爲レ人廉直、門不レ受二一一一」

【私怨】エンわたくしのうらみ（韓愈、送二溫處士一序）＝私憾。

【私恩】シオン　私交上のめぐみ。詩經、箋「無二一一一非二孝子一也」

【私家】カ私門に同じ。

【私假】カ　人に誂らずして己の痾斷にて物を貸與する。又ひそかに物を借用する。禮記「子婦無二私貨一、無二私蓄一、無二私器一、不二敢一一、不二敢私與一」

【私交】カ　○一個人としての交際。公務上などの交際に對していふ。○權力ある臣下、又外國などとしたしみ交りて私利を計る。宋史、蕭機傳「人臣無二一一一」

【私行】カ　○一個人としての行。○私用にて出で行く。禮、曲禮「大夫一一出レ疆」

【私學】シガク　○私人の立てたる學校。○自己の好む學術。史、李斯傳「國二令下一、即各以二一一一議レ之」

【私憾】シカン　わたくしの利害に就きてのうらみ。左傳「以二其一一一、敗レ國珍レ民」＝私怨。

【私艱】シカン　我身に屬するなやみ、父母の喪など。懷舊賦序「予既有二一一一、且尊役二于外一」

【私議】シギ　○ひそかに自分一己の考にて批評議論する。○私宅にて相談する。禮、曲禮「公事不二一一一」

【私覿】テキわたくしのたまもの。唐書、路隨傳「公事而當二一一一耶」

【私曲】キョクかたよりてよこしまの事、何遠傳「性耿介無二一一一、非二邪曲一。

【私回】シカイ　かたよりてよこしまの行。國語「縱二一一一而塞二民事一」＝私曲。

【私窠子】シカソ　ぢごく、私娼。密雲錄「婦。五雜俎「今時娼妓布二滿天下一、又有不レ隸二於官一家居而實レ蠶者、謂二之土妓一、俗謂二之——一」

【私願】シガン　わたくしのねがひ。陳書、貫高傳「不レ勝二一一一、願乞二骸骨一」

【私敬】シケイ　私交上に於ける敬禮。隣

書、揚元鑒傳「獲ㇾ展ニ一一」
【私衷】シチュウ　かたよりて正しからざるおもわく。禮記「一一不ㇾ辭ㇾ鑑、君子不ニ自留ニ焉」
【私見】シケン　自分一個のみこみ。
【私權】シケン　個人の私法上の權利。公權の對。
【私記】シキ　ささやく、ひそひそばなし。〔後漢書、光武紀〕白居易、長恨歌「夜半無ㇾ人一一時」
【私財】シザイ　自分のもつてゐる財產、私有財產。
【私債】シサイ　私の負債。鹽鐵論「不ㇾ知ㇾ愛ニ一一」
【私產】シサン　一私人の所有せる財產。晉書、李重傳「王法所ㇾ禁者、唯服物車器有ニ貴賤之差ニ至ニ于奴婢一一、則貴賤未ニ皆曲爲ㇾ之立ニ限也ニ」私財。
【私事】シジ　○一身一家に關する事がら。公事の對。○ないしょごと。日誌事。
【私錢】シセン　わたくしのあた。史、張湯・酷相如傳「以ニ先ニ國家之急ニ而後ニ一一ニ也」
【私人】シジン　○國家又は社會に對して一個人をいふ、一私人。○めしつかひ。日家臣・私臣。
【私心】シシン　○自分一己のかんがへ。司馬遷、答ニ任少卿ニ書「誠一一痛ニ之ニ」○わたくしの心。又私利をはかる心〔管子、任法〕日私意。
【私親】シシン　己の親屬。又は特に親しき者。晉書、禮志「何得ニ復顧ニ一一ニ說」
〔私姐〕シソ　ぢごく、密淫賢婦。日私窠子。
【私情】シジョウ　わたくしの情愛。李密、陳情表「荀順ニ一一則告訴不ㇾ許」
【私從】シジュウ　私人の召使、僕從など。
【私淑】シシュク　私は獨、淑は善、其の人に直接に教を受けずとも、私に之を模範として己の身を善くする。孟、離婁「予未ㇾ得ㇾ爲ニ孔子徒一也、予一一ニ一一諸人一也」
【私書】シショ　○一私人の書狀又書類。公文書の對。○ないしょの手紙。
【私署】シショ　私に官職を授く。後漢書、劉陶傳「四光遠類、一一將帥ニ」
【私乘】シジョウ　私人の著したる歷史。日野乘・私史・野史。
【私政】シセイ　わが身に關するつとめ。左傳「而後聽ニ其一一ニ證也」
【私生兒】シセイジ　ててなしご。日私生子。
【私消】シショウ　官有又公有物をひそかに費消する。
【私設】シセツ　一私人の力にてつくりまうける。官設・公設の對。
【私裝】シソウ　ふだんぎ。禮記「不ㇾ敢以ニ其一一ニ事ニ上帝ニ」
【私撰】シセン　一私人の著作。宋史「張昭有ニ史材ニ晉一一ニ同光實錄十二卷ニ」
【私訴】シソ　公訴に附帶して被害者たる私人がおこす民事上の訴訟。
【私憤】シフン　私情にまかせて公平ならざるにくみ。中論「人無ニ賢愚一見ㇾ善則譽ㇾ之、見ㇾ惡則誘ㇾ之、此人情也、未ニ必有ニ私愛一也、未ニ必有ニ一一ニ也」
【私宅】シタク　私有のいへ。官宅の對。漢書、良吏傳「每ㇾ去ㇾ官、輒無ニ一一ニ、常假ニ官空車廬一居焉」
【私智】シチ　自分一己の小さき智慧、公正ならざるちゑ。史、項羽紀「奪ニ其一一ニ」
【私通】シツウ　男女がひそかになれあふ、密通する。
【私第】シダイ　わがいへ、自己のやしき。官舍の對。賈島詩「公堂朝共到、一一夜相留」
【私覿】シテキ　官吏が一個人の資格にてまみえる、覿は面會。論、鄉黨「一一愉愉如也」
【私田】シデン　己の所有地。後漢書、濟南安王康傳「一一八百頃」
【私鬪】シトウ　わたくしにたたかふ。史、商君傳「民勇ニ於公戰ニ怯ニ於一一ニ」
【私徳】シトク　自分一身に對する德、節儉・勉強などの類。公德の對。
【私慝】シトク　人に知れざる惡事、隱れたる惡行。日隱慝。
【私報】シホウ　○ないないのしらせ。○一私人の報知。公報・官報の對。
【私怨】シオン　私情によりて讐する。管子「愛ニ人而私ニ賞之ニ、惡ㇾ人而一一ニ之ニ」
【私法】シホウ　私人相互間の權利義務の關係を規定したる法律。公法の對。
【私服】シフク　○政府の專管に係る物品をひそかに賣る（密賣）○一私人の營業にて賣る。
【私夫】シフ　まをとこ（間夫）漢書、王商傳「女弟淫亂、奴殺ニ其一一ニ」
【私憤】シフン　私情にまかせて公けならざるいきどほり。何中詩「天步政多ㇾ艱、此豈一一時」
【私面】シメン　私に面會する。左傳「楚公子棄疾如ㇾ晉過ㇾ鄭、以ニ其乘馬八匹ニ一一見ニ子皮ニ」
【私門】シモン　わたくしのいへ。朝廷に對して臣家をいふ。韓詩外傳「公道達而一一塞」日私家。
【私與】シヨ　己ひとりのはからひにて人に物を施す。禮記「子婿不ニ敢私假ニ、不ニ敢一一ニ」
【私用】シヨウ　○官府又は公共の物品を私かに使用する。○自分の用事。公用の對。
【私欲】シヨク　自分勝手の欲望。周語「從ニ其一一ニ」日私慾。
【私利】シリ　己一人の利益。管子「民多ニ一一ニ者、其國貧」
【私立】シリツ　○自分にて勝手に定める。宋史、曹琮傳「一一ニ文法ニ」○自力にて設立維持する。公立・官立の對「一一學校」
【私慮】シリョ　私人のこめぐら。宋史、眞宗紀「出ニ一一ニ賑ニ貧乏者ニ」

【私力】シリョク　一己のちから。
【私業】シギョウ　一家の係累、妻子眷屬など。齊書、豫章王嶷傳「臣一一不レ少」‖家業。
【私論】シロン　おほやけならざる論。公論の對。晉書、石季龍載記「季龍立二一一之祭、偶語之律」

【秀】シウ　宥

○ひいづ。さかゆ（榮）ぬきんづ。しげる（茂）○花さく（吐華）禾穗又は草の花が開く。論、子罕「苗而不レ一者有矣夫」○うつくし（美）よし。○特にすぐれる（特異）又、其の人「俊一」「英一」「挺一」「穎一」
【秀逸】シウイツ　ひいでてすぐれる。詩書、陸機傳「天才一一、海藻宏麗」
【秀穎】シエイ　禾穗の秀でたるをいふ。轉じて才が衆人にひいでぬきんでる。吳志、陸遜傳「皆當世一一」
【秀越】シウエツ　特にひいでる。煮泉小品「蚊山他處一一、故其泉清寒甘香、雅宜レ煮レ茶」‖秀絶。
【秀雅】シウガ　秀でてみやびやか。高僧傳「風神一一、思入二玄微一」
【秀氣】シウキ　○すぐれたる氣。禮運「故人者其天地之德、陰陽之交、鬼神之會、五行之一一也」○轉じて山川のすぐれたる景色。張九齡詩「奇峯生二奇樹一、秀水含二一一一」
【秀吟】シウギン　すぐれて善き詩歌。
【秀句】シウク　○特にすぐれたる句。杜甫詩「最傳二一一一養區南」○圓たくみなる洒落ッかるくち。
【秀外而惠中】シウグワイジチュウ　外貌が秀でて心がさとし、惠は慧。韓愈文「曲眉豐頰、清揚而便辟一一」
【秀慧】シウケイ　すぐれてさとし。北史、魏莊帝紀「風神一一、姿貌甚美」
【秀發】シウハツ　ひいでていさぎよし。顏延詩「一一庶民絕二文飾一」
【秀才】シウサイ　○才のひいでたるもの。史、貢禹傳「聞二其一一一、召置二門下一」○試驗科目の名。唐書、選擧志「其科之目、有二一一一、自後士人通稱謂二之一一一」
【秀爽】シウサウ　すぐれて氣象がさわやか。唐書、趙彦昭傳「少豪邁、風骨一一」‖英爽・俊爽。
【秀士】シウシ　德行道藝のすぐれたるむらひ。禮、王制「命レ鄉論二一一一、升二之司徒一、曰二選士一」
【秀耳】シウジ　すぐれて大いなるみみ。舊唐書、僧神秀傳「禪師身長八尺、龐眉一一、威德嶷嶷、王霸之器也」
【秀出】シウシュツ　衆にぬきんでる。後漢書、謝夷吾傳「英姿挺特、奇偉一一」
【秀潤】シウジュン　ひいでうるほふ、書畫などがすぐれていきいきする。圖繪寶鑑「一一可レ喜」
【秀色可レ餐】シウショクソウサン　色の美くしきを極言す。侍兒小名錄「古人言、一一、如二絳仙一者眞可レ療レ飢矣」絳仙は隋の煬帝の妃、姓は吳氏。
【秀水】シウスイ　縣名、明代に置く、嘉興と並に浙江省嘉興府の治下。
【秀粹】シウスイ　すぐれて正しくうつくし。歐陽修詩「文章一一得二家法一」
【秀擧】シウキョ　すぐれてととのふ。晉書、溫嶠傳「風儀一一」
【秀絶】シウゼツ　もっともすぐれてゐる。‖特絶・秀越・挺秀。
【秀擢】シウタク　すぐれてぬきでる。晁沖之詩「天末有二佳人一一如二芝蘭一」
【秀逸】シウイツ　ひいですぐれる。劉勰文「英髦一一、皆擢二庠于當年一、譽二奇才一而莫レ用」
【秀挺】シウテイ　すぐれてぬきんでる。孔稚圭、祭二張長史一文「惟君之德、高明一一」‖英挺。
【秀特】シウトク　高くすぐれてひいでる。任昉文「天表一一、軒狀堯姿」
【秀拔】シウバツ　人にすぐれてぬけ出る。蜀志、彭羕傳「卿才具一一、主公相待至重」
【秀發】シウハツ　風采などがすぐれてひいでる。晉書、裴楷超戴記「神彩一一、睿止可レ觀」
【秀眉】シウビ　ひいでたるまゆ。南史「何點明目一一、容貌方雅、入二葉中一、百寮莫レ不二祇敬一」
【秀敏】シウビン　衆にすぐれてさとし。宋書、孔顗傳「文行一一」
【秀茂】シウモ　おほいにすぐれる。晉書、王濟傳「文詞一一、伎藝過レ人」‖俊茂。
【秀朗】シウラウ　ひいでてあきらか。梁書、范雲傳「精神一一而勤二於學一、卿相才也」
【秀麗】シウレイ　すぐれてうるはし。南史、陳武帝紀「此地山川一一、當有二王者興一焉、二百年後、我子孫必鍾二此運一」
【秀發】シウハツ　ひいでて靈妙なり。‖靈秀。

【禿】トク　屋

○はげ、髮がぬけてなくなる「一頭」○山の樹木なきにいふ「一山」又葉の落ち盡きたる樹木「一樹」○すべて物の落ち盡き、又はすり切れるにいふ「一筆」○圓かぶろ、かむろ、童子の髮の形の名、髮をやや長く斷ち切りて四方に垂れ下げしもの。又、遊女に仕へる小女。
【禿翁】トクオウ　頭のはげたる老人。史、魏其武安侯傳「武安怒曰、與二長孺共一老一一、何爲二首鼠兩端一」長孺は、韓安國。
【禿筆】トクヒツ　禿筆に同じ。范成大詩「一一冰硯竟無レ奇」
【禿山】トクザン　樹木を生ぜざる山、はげやま。淮南、道應「石上不レ生二五穀一、一一不レ遊二麋鹿一」

【秃者】トクシャ はげあたまのひと。後漢書「使二一一御レ之」
【秃樹】トクジュ 葉の落ちたる木。楊萬里詩「驕昔擁秃今一一」
【秃鶖】トクシュウ わしの大なる者、深青に産す、脚大にして黒灰色、頭小にして眼大、性猛烈なり。
【秃丁】トクテイ 僧を罵りていふ。北夢瑣言「此寺當レ有二一一作亡亂」
【秃頭】トクトウ ○はげあたま。晉書、羅含傳「含幼秃、頭然、一一小兒來喊レ燕。○醫一一病は頭のはげる病。秃瘡坊主。
【秃筆】トクヒツ さきの切れたるふで。杜甫詩「戲拈二一一掃二驢鞦一」‖禿筆。

【秆】カン 旱

わら（藁）‖稈。

【秘】

秘（神部十五畫）の古字。

【秞】セン 先

うるち、うるしね（種）米のねばりけの少きもの。

【季】キン 先

とし。又みのり（穀熟）‖年。

【秉】ヘイ ヒン 敬梗

㊀いなたば（禾束）ひとにぎりの稲の束。○とる（執・操）手ににぎる。○心にしっかりととり守る「一一心」「一一彝」○ますめの名、粟十六斛の稱。論、公冶長「冉子與之粟五一一」㊁權柄の柄に同じ。左、哀十七「國子實執二齊一一」國一一は國柄。

同訓異字 秉・取・執・把・操・採・撮・捕・捉・資の別は取（又部六畫）の條を見よ。

【秉彝】ヘイイ 天より定められたる常道を執り守る、彝は常。詩、大雅、烝民「民之一一レ一、好二是懿德一」‖秉夷。
【秉鈞】ヘイキン 政權を執る。白居易詩「舊閣三丞相、如何秉二國鈞一」
【秉燭】ヘイショク 手に燭火を執る。文選、古詩十九首「生年不レ滿レ百、常懷二千歲憂一、晝短苦夜長、何不二一一レ遊一」

【杭】カウ 庚 稉は俗字

うるしね（秈稲）稲の黏ならざるもの、普通常食にするもの。‖粳。
【杭稌】カウト 杭は粳、うるしね、稌はもちごめ。蘇軾詩「但願飽二一一、年年拳二秋成一」

【秖】カウ・エ 篠 號

○稲の一種。說文「飯之美者、南海之一一」○へる、へらす、むなし「衰一一」「減一一」「損一一」‖耗（禾部四畫）

【科】クワ 歌

○しな（品位・等級・等差）論、八佾「爲レ力不レ同一一」○ほど（程）はかる（量）○すぢめ、物事の分類せられたる條目「學一一」○官吏の登庸試驗「一一舉」「一一第」「登一一」○とが（罪責・罪咎）「罪一一」○さだむ（斷）○あな（坎）くぼき所。孟、離婁「盈一一而後進」○うつろ（木中空）○おきて（法律）「金一一玉條」○一斗はおたまじゃくし、蝦蟇の子。○一一頭は頭髮を露はす（露頂）○俳優のしぐさ「一一白」（白はせりふ）○國一一學は一定の組織系統ある學問。

語源 科は程なり最小なり、禾斗に从ふ、斗は量なり。

【犯レ科】クワハン 罪を犯すをいふ、科は罪條。諸葛亮、前出師表「若有下作レ奸一レ及爲二忠善一者上宜下付二有司一論中其刑賞上」
【科戒】クワカイ 定められたるいましめ。雲笈七籤「脩要之階、不レ過二戒・律・科・範等之法、不レ逾二一一一」
【科學】クワガク 系統的組織を有する學問。理化學・動植物學・醫學などの類。
【科甲】クワカフ ○科擧に同じ。○國學等の及第者。‖甲科。
【科擧】クワキョ おきて、はっと。後漢書「隸有司其申二明一一一」
【科擧】クワキョ 官吏の登用試驗。又其の試驗に應ずる。宋史、選擧志「貞元中詔曰、一一猶條、皆先朝所レ定、宜二一切如レ故、前所二更定一者一悉廢」
【科第】クワダイ 試驗して優劣の次第をさだめる。漢書、元帝紀「以レ此一一一郎從官一」
【科場】クワジョウ 官吏の登用試驗場。宋史「太宗曰、設レ科三博求二俊彦於一一中一」‖揭屋。
【科懲】クワチョウ 罪にあててこらす。韓愈文「如有二隱漏一必懲一一」
【科條】クワデウ 箇條。職員令「一一既備」
【科斗】クワト おたまじゃくし。劉克莊詩「塘水拍レ隄一一生」‖活東・蝌蚪。
【科斗文字】クワトモジ 最古の文字、其の形おたまじゃくしに似たり、故にいふ。衛恒、論二蝦蟇子、此蟲一名二科斗一、一名二活東一、頭圓大而尾細、古文似レ之、故孔安國皆云二一一一蟲也一」‖科斗書。

【科頭】クワトウ　冠又は頭巾をつけずして頭をあらはす。史、張儀傳「徒跣ー」王維詩「ー箕踞長松下、白眼看他世上人」

【科目】クワモク　○官吏の登庸試験。韓愈の「藝ニー一時與ノ人書」は文章軌範に出づ。○分類せし箇條。

【科料】クワレウ　刑罰の一、十錢以上二十圓までを犯人より徴收する罰。

【秖】シ　支

まさに、ただ(適)＝祇。

同訓異字　祇・秖・正・攺・方・適・的・多は正(止部一畫)の條を見よ。

【秋】シウ　尤　もと妹に作る

○あき、四時の一、夏の次、冬の前にて禾穀の熟する時、陰暦の七八九の三ヶ月「初ー」「孟ー」「仲ー」「晩ー」○みのり、穀物がよくできる。書、金縢「有ー」○とき、なり、大切又は危急の時期。諸葛亮、出師表「危急存亡之ー」○ーは馬のとびあがる(騰驤)貌、又、舞ふ貌。○春ーは魯の歴史の名。○竹ーは陰暦の三月。蘭ーは九月の異名。○立ーー分は竝に氣節の名。

【秋意】シウイ　あきのこころ。韋應物詩「河漢有ニー一、南宮生ニ早涼一」

【秋陰】シウイン　あきのくもれるそら。韓愈詩「ー一散ニ白日一、泥濘不ニ少乾一」

【秋雨】シウウ　あきのあめ。禮、月令「仲秋行ニ春令一、則ー一不レ降」沈佺期詩「海氣如ニー一、海烟似ニ夏雲一」

【秋海棠】シウカイダウ　秋日濕地に生ずる草花の名。葉芳莖ー一、一名八月春、草本花色粉紅、葉狀如ニ梨葵一」

【秋郊】シウカウ　秋の野べ。＝秋野。

【秋毫】シウガウ　獸の毛の秋に至りて末銳くなりて見え難きにより、物の微小なるに喩ふ。孟、梁惠王「明足ニ以察ニー一之末一」

【析ニ秋毫一】シウガウヲサク　事理をつくして詳細なる義。史、平準書「三人言レ利、事ー一矣」

【秋季】シウキ　○あきのすゑ。＝秋杪。○秋の時節。＝秋期。

【秋季皇靈祭】シウキクワウレイサイ　図秋分の日に行ふ大祭、宮中にて歴代の天子のみたまを祭られるもの。

【秋氣】シウキ　あきの景色、秋のけはひ。柳宗元詩「ー一集ニ南澗一、獨遊亭午時」

【秋蚓】シウキン　こほろぎ。＝蟋蟀。

【秋興】シウキョウ　秋のこころもち、秋日の感興。潘岳、秋興賦、序「於レ時秋也、故以ニー一命レ篇」＝秋懐。

【秋瓜】シウクワ　秋熟する瓜。杜甫詩「一廚ニ放國二十經レ秋、每レ見ニー一憶ニ故丘一」

【秋懐】シウクワイ　秋思に同じ。

【秋樓】シウラウ　あきのとりいれ。李商隱詩「自悲ー一少、誰慰夏畦難」＝秋收。

【秋官】シウクワン　刑罰を司る官、司法官、秋は顯殺を主る、故にいふ。周禮、天官「ー一司寇刑官之屬」

【秋曉】シウゲウ　秋のあけぼの。宣和畫譜「范寬有ニ煙嵐ー一圖一」

【秋月寒江】シウゲツカンカウ　有徳の人の心の清きに喩ふ。黃庭堅、贈ニ李次翁一詩「德人天游、ーー」

【秋胡】シウコ　古の貞操ある美婦人。列女傳、魯潔婦者、ー一子之妻」

【秋草】シウサウ　あき生ずる草。李白詩「棣華儻不レ接、甘與ニー一同」

【秋霜】シウサウ　あきのしも、草木を凋殺せしむるが故に、權勢の盛大、又は志の嚴厲なるに喩ふ。申鑒「喜如ニ春陽一、怒如ニー一」晉書、范弘之傳「志厲ニー一」

【秋霜烈日】シウサウレツジツ　秋の寒き霜と、はげしく暑き日と、刑罰の嚴正、又は威權の極盛、志操の剛厲なるに喩ふ。

【秋霆】シウテイ　秋そだてるかひこ、あきこ。

【秋士】シウシ　士の不遇にして仕へざる者。淮南子「春女怨、ー一悲」

【秋事】シウジ　秋のとりいれの事。大戴禮「食ニ農夫九人一、以成ニー一」

【秋風】シウフウ　あきのさびしきかなしみ。蘇復古詩「客行今老矣、ー一日凄然」

【秋收】シウシウ　あき穀物ををさめる。荀子「春耕夏耘、ー一冬藏、四者不レ失レ時」

【秋深】シウシン　あきふかし。陸游詩「井梧飄レ葉覺ニー一」

【秋社】シウシャ　秋の社日。社日(一三五九一)參看。

【秋嘗】シウシャウ　秋、新穀を神にそなへて祭る、嘗はなめる義。禮、王制「天子諸侯宗廟之祭、春曰レ祠、夏曰レ禴、秋曰レ嘗、冬曰レ烝」＝新嘗。

【秋色】シウシキ　秋の景色、秋の氣分。岑參、與ニ高適薛據一同登ニ慈恩寺浮圖一「青松夾ニ驛道、宮觀何玲瓏、ー一從レ西來、蒼然滿ニ關中一」

【秋水】シウスイ　○あきのみづ。莊、秋水「ー一時至、百川灌レ河」○刀の異名。越絕書「太阿之劍、其色如ニー一」

【秋成】シウセイ　秋、穀物がみのる。中說「春生レ之、夏長レ之、ー一レ之、冬藏レ之」＝秋熟。秋收。

【秋晴】シウセイ　秋のはれて霞みわたれる天氣。

【秋晴】シウセイ　秋、諸侯が參內する。漢書、吳王濞傳「使ニ人爲ニー一」

【秋聲】シウセイ　ものさびしき秋風の聲。歐陽修に秋聲賦あり、古文眞寶に載す。

【秋霽】シウセイ　あきの雨がやみて天氣のよくはれる義。儲光羲詩「城池ー一空」

【秋霄】シウセウ　秋のよひ。＝秋夜。

【秋千】シウセン　ぶらんこ。＝鞦韆。

【秋扇】シウ　あきのあふぎ。棄てて顧みられざるに喩ふ。班婕妤の怨歌行に本づく。劉孝綽、班婕妤怨「妾身似二―一、君恩絶二團素一」

【秋雁】シウ　あき行ふかり。左、襄三「春鄭子皮、―一冬狩、皆於二農隙一以講レ事也」

【秋蟬】シウ　あきぜみ。范成大詩「落日―一滿二四山一」‖鳴蜩。

【秋蝸】シウ　あきのせみ。吳越春秋「適游二後園一、聞二―一之聲一」‖秋蟬。

【秋刀魚】シウタウ　園さんま、海魚の一、形細長にして刀に似、背部黄黑、腹部銀白色。‖青串魚。

【秋蟲】シウ　秋夜に鳴くむし。杜甫詩「―一壁不レ去」

【秋潮】シウ　秋のうしほ。元史、河渠志「八月以來―一洶湧」

【秋登】シウ　あきみのる。

【秋波】シウ　女のこびるめつき。成語考「纖指如二春筍一、嫵眼若二―一」蘇軾詩「佳人未肯回二―一」

【秋芳】シウ　秋に開くかんばしき花。蘇軾詩「―一壓レ帽黄花滋」

【秋足】シウ　あきのそら。爾雅、釋天「秋爲二―一」

【秋風】シウ　あきかぜ。漢武帝、秋風辭「―一起兮白雲飛、草木黄落雁南歸」

【秋分】シウ　二十四氣の一、白露の次に來る氣節、九月二十三日頃、秋の彼岸の中日にて、晝夜平分の時。

【秋杪】シウ　あきのすゑ。杪は木末。宋玉、九辯「靚二―一之遥夜一兮」

【秋陽】シウ　酷烈なる秋の日の光。孟、滕文公「江漢以濯レ之、―一以暴レ之」酷烈なる秋日に布を曝して潔白ならしめる。

【秋夜如レ歲】シウトシ　あきの夜の長きをいふ。江淹賦「――、秋情如レ緑」

【秋容】シウ　あきのさびしきやうす。李白詩「浮雲滅二霽景一、萬物生二―一」

【秋容淡】シウタン　秋のやうすがさっぱりとしてあはし。韓琦、九日水閣詩「雖レ愁二老圃一――、且看寒花晚節香」

【秋霖】シウ　秋のながあめ。賈島詩「寂寒思二隱者一、孤獨坐二―一」

【秋涼】シウ　あきのすずしさ。白居易詩「能來夜話否、池畔欲二―一」

【傷レ秋】シャウシウ　あきの來るをかなしむ。盧綸詩「鈴様已―レ」

【秋高馬肥】シウカウバヒ　秋の天氣澄み渡りて高く見え、馬もたくましく肥ゆ。匈奴得意の時。漢書、匈奴傳「何奴至レ秋、馬肥弓勁、卽入レ塞」杜審言詩「雲靜妖星落、秋高塞馬肥」

【秋津國】アキツ　園我國の別稱、あきつはとんぼの秋津洲アキツシマ蜻蛉洲。

【炶】

秋（前條）の本字。

【种】

チュウ　東

○をさなし（稚）沖に通ず。○人の姓。

【秕】

ヒ　紙　支

○しひな、穀の成熟せざる者。‖粃。○轉じて名ありて實なきもの、惡し、けがす。後漢書、安帝紀「一―我王度」けがる（穢）

【秕糠】ヒカウ　しひなと、ぬかと。黄滔詩「豪門廚二粱肉一、窮巷思二―一」‖粃糠・糠粃。

【秕政】ヒセイ　惡しきまつりごと。晉語「軍無二―一」‖惡政。

【秒】

ベウ　篠

○のぎ、稻の穗の毛（禾芒）○極めて細微の稱「一忽」○時間、又、角度の單位。一分の六十分の一。

【秒忽】ベウコツ　秒はのぎ、忽は蜘蛛の絲。極めて微少の義とす。漢書、叙傳「造二計一―一」

五　畫

【秧】

アウ　陽

○なへ（禾苗）插―は田うゑ。農政全書「乃種―一」○草木の苗

【秧針】アウシン　稻の苗、針は形の形容。

【秧稻】アウタウ　いねのなへ。宋史、西南夷傳「土宜二五穀一、多種二―一」

【秧田】アウデン　稻苗を植ゑ附ける田、苗代。天工開物「凡――一畝所レ生秧、供二移栽二十五畝一」

【秧苗】アウビョウ　田にうゑつけるなへ。范成大詩「竹葉青―頭碧、――滿意青」

【秞】

イウ　尤

――は禾黍の盛んなる貌、又、物の初めて生ずる貌。元結、樂歌「其生如何分――」

【秬】

キョ　語　魚

くろきび（黒黍）實の黒き黍「黒―」「玄―」詩、大雅「維―維秬」

【秬酒】キョシュ　くろきびにて造りたるさけ。禮記、注「鬯、――也」

【秬鬯】キョチャウ　鬯はにほひぐさ、くろきびと鬯とを合せて造りたる酒の禮記「天子親耕、粢盛――、以事二上帝一」

【秤】

レ　徑

億の萬倍、萬億。詩、周頌「萬億

及ー」【秭歸】シキ縣名、漢代に置く、今の湖北省ー歸縣。

【秦】シン　ジン　眞

○國の名、伯益の後の封地、周代は甘肅省ー州の地、春秋の時、今の陝西省を領有す、故に亦陝西省の異稱とす。○朝代の名、始皇(嬴政)六國を兼并し周に代りて天下を有ちし號。凡そ三主十五年にして漢に滅ぼさる。又、東晉の時苻健長安に據りて亦ー と號す、是を前ー と稱す。姚萇之を滅ぼして代り興る、是を後ー と稱す。東晉の時乞伏乾歸亦自らー王と稱す、是を西ー と稱す。【秦越】シン 春秋の時の二國の名、秦は西北に在り、越は東南に在りて相距ること、極めて遠し、故に疎遠の者に喩ふ。韓愈文「若ㇾ越人視ㇾ秦人之肥瘠ㇾ」宋史、食貨志「無ニ一ー肥瘠之視ニ」【秦鏡】シン 秦始皇が宮中に懸へつけし鏡、よく人の心中を照すといふ。西京雜記卷三「高祖初入ニ咸陽宮ー、周二行府庫ー有ニ方鏡ー(中略)人有ニ疾病在ニ内、掩ニ心而照ㇾ之、則知ニ病之所ニ在、又女子有ニ邪心ー、則膽張心動、始皇常以照ニ宮人ー、膽張心動者則殺ㇾ之」【秦檜】シン 南宋の高宗の時の宰相、金の猛威を恐れて、只管和議を主とし、岳飛以下主戰說を唱ふるものを陷殺す。【秦始皇】シン 姓は嬴、名は政、莊襄王の子、六國を滅して天下を一統し、自ら始皇帝と稱し、咸陽に都す、李斯の議を用ひ、封建の制を改めて天下を郡縣にし、書を焚き儒を坑にす、又、萬里の長城を築かしむ、在位三十七年崩ず。【秦聲】シン 如淳「個圖秦王善爲ニ一ー」詩奉三盆缶秦王、以相娛樂」ㇾ秦筆。【秦嶺】シン 陝西省西部の南に在り。韓愈詩「雲橫ニ一ー家何在」【秦淮】シン 川の名、江蘇省溧水縣に出で、西北流して江寧城(南京)を貫き、又西北流して大江に入る、秦の時鑿つ、故に名つく。

【秫】ジュチ　眞　通　術　ヂュツ

もちあは、ねばりけのあるあは(黏粟)併又は酒に作る。【秫稭】ジュツ もちいね。晉書、陶潛傳「爲ニ彭澤令ー、公田悉令ㇾ種ニ一ー」

【秤】ショウ　徑

○はかり(權衡)○轉じて公平なる義の喩。○てんびん、物の輕重を計る器。太平御覽「諸葛亮曰、我心如ニ一ー、不能爲ニ人低昂ニ」

【称】

稱(禾部九畫)の俗字。

【租】ソ　眞

○みつぎ、ねんぐ、かかりもの、田地よりとれたる米の幾分を官に納めるもの、後世は金にかへて納める(田賦)「田ニ一ー」「地ニ一ー」史、孝文紀「賜ニ天下民田ー半ニ」又、すべての稅「市ニ一ー」○つぐ(積)○稅を出して他人の所有地を借る「ー借」【租借】ソねんぐとつえだち(力役)即ち人夫を徵發すること。舊唐書、李抱眞傳「籍ニ戶丁、男三選ニ其一ー、有ニ村力ー者、免ニ其ー一ー、給ニ役矢ニ」ㇾ賦稅。【食ㇾ租衣ㇾ稅】ソゼイ 君主は民の納むる租稅を以て衣食とする(漢書、食貨志)【租界】ソカイ 支那にて外國人の居留地の義、租は稅を取りて借す。ㇾ租借地。【租課】ソカ わりあてたる年貢の意(南史、王玄謨傳「新舊錯亂、ー不ㇾ時」【租借地】ソシャク 租界に同じ。【租稅】ソゼイ ねんぐ。史、孝文紀「令ニ勸ㇾ農務ニ本、而有ニ一ー之賦ー、田賦三升」【租賃】ソチン 借租借賃、借地料。【租賦】ソフ ねんぐ、みつぎの典、五常世家「令ニ吏毋ニ得ㇾ收ニ一ー」【租庸調】ソヨウテウ 唐代の三種の徵稅法、地より收むるを租、民を人夫に徵發するを庸、家業に課するを調といふ。租は粟を、調は布帛の類を上納せしむ。通鑑、唐紀「武德二年、初定ニ一ー法ニ」

【秩】チツ　質

○ついで(次序)「一序」「品ー」ついでる、順序をつける。○つね(常)○つかさ、くらゐ(官職)「官ー」「位ー」○ふち(俸祿)「一祿」「俸ー」○さとし(智)○きよし(清)○ーは水の流れ行く貌。又、つつしむ、又、うやうやし(恭敬)又、清く通る貌。○十年間の稱。七ーは六十一歲より七十歲まで。白居易詩「已閒第七ー、飽食仍安眠」【秩次】チツ しだい。周禮、注「先ㇾ尊後ㇾ卑、各依ニ一ー、則羣吏得ㇾ正」ㇾ順次、秩序。

【秩序】ヂヨ　しだい。順序。陸機、文賦「譬二支
　黃之一一、故濫泥不レ鮮」‖秩次。
【秩祿】ヂヨク　祿位をついでさだめる。周
　禮「宮伯掌二其正令一、行二其一一一」
【秩宗】ヂヨウ　○百神の資格等級をつい
　て、又、祭ることを司る官の首。羅典
　「吾伯汝作二一一一一」‖宗伯。說宗・禮
　官。○後世、禮部の異稱。
【秩秩】ヂヨ　○流れ行く貌。詩、小雅「一
　一斯干」傳「一一、流行貌」○うやう
　やしくつつしむ貌。詩、小雅「左右
　一一」傳「一一恭敬也」○清き貌。
　詩、大雅「維嶽降神、生甫及申」箋「一
　一、清貌」‖智德の深き貌。詩、周頌「閔予小子」箋「一一、智德深遠之貌」‖秩序
　の整へる貌。荀、禮「貴賤長幼一一焉」
【秩米】ヂヨ　ふち米の異稱。史、宋元嘉僧
　「以二一一三千餘斛一助二人租稅一」
【秩祿】ヂヨク　ふち米、俸給。史、崔去病
　傳「定令下與二驃騎將軍一同上秩祿一等」

【秣】バツ　マチ　㊥ 遇音　マツ

○まぐさ、かひば、牛馬を養ふ
わら、又は禾穀「芻一一」○
まぐさかふ、牛馬にかひばを
與へて養ふ。○一陵は今の江
蘇省江寧縣の東南の地、より
て南京の異稱とす。‖金陵。
【秣粟】マツゾク　馬の食とするもみ。又もみ
　をかひばに用ふる。後漢書、郭丹傳
「馬不レ一一、妻不レ衣レ帛」

【秘】ヒ　㊥ 寘韻の俗字

○ひそか、みそか(密)祕(示部
五畫)を見よ。○國名。亞米利
加洲の一一露西の略稱。

【秬】ヒ　フ　㊥ 支有

くろきびの一つ稃の中に二
つの米あるもの。詩、大雅「維
秬維一」

六畫

【移】イ　㊥ 支

もと迻に作る

○うつる、うつす(徙遷)かは
る(變易)轉ずる、場所をかへ
る「一一居」「一一民」物事をかへる
「一一風」○うごく。うごかす
(動)およぶ(及)及ぼす。○古
の公文書の一體、まはしぶみ
「一一文」○ひく(延)さる(去)○
苗を分けうゑる。六書故「凡種
稻先苗之、後一之」○延ばす
「一一日」「一一時」○ほどこす。施
に通ず。史、田叔傳「如有一一德
於我」

同訓異字　移・遷・徙・映○移・遷・徙
の三字は共にうつす、うつると訓
む、移は苗をうゑかふる義、彼より
此にうつるなり。書經「世變風移」
孟子「河內凶則移二其民於河東一」○
遷は登也と註す、下より上にうつ
る義。特經「出レ自二幽谷一、遷二于喬
木一」官位の昇るを榮遷といふ、孟
母の三遷も、よき方へとうつるな
り、又屢くうつりかはる義に用ひ
て官の降るを左遷といふ、又移に
通じ用ふ、論語の「不レ遷レ怒」の註
に「遷移也」とあり。○徙は遷也、
遷也と註す、遷の字には、高下の窟
あり、移にはうつり易る窟あり、徙
には立ちのく窟あり。論語「閒レ徙
不レ能レ徙」○映は、うつるとよむ、
月光の水にうつる類。

【移晷】イキ　○ひかげをうつす、時刻の
　長きにいふ。北史、王慶傳「語及二晉
　レ國之道一、擲所二陳說一、深合二旨一、帝促
　レ席一レ一、不レ覺二坐之疲一也」‖移
　景。○日月の影の次第に轉じ移る
　義。楊維楨、宮詞「十二瑤樓漫日一、
　華二桐花一レ上御紗一」
【移易】イエキ　うつしかへる。又うつりか
　はる。韓愈、爭臣論「豈以二富貴一二
　一其心一哉」
【移居】イキヨ　住居をうつす。劉禹錫詩「生
　計逐二萬馬一、每レ出似二一一一」
【移掘】イクツ　うつしほる。南史、齊東昏
　侯紀「大樹合抱、亦皆一一」
【移貫】イクワン　移籍に同じ、貫は名簿。
【移檄】イゲキ　檄文をまはす。又、其の檄
　文。史、南越傳「尉陀一レ一」
【移栽】イサイ　うつしうう。徐陵詩「一一
　未レ有レ因」‖移植。
【移植】イシヨク　うつしうう。陶弘景「求二
　其地一始一一」
【移蓐】イジヨク　美麗なる花木を鉢に
　植ゑ、車輪をつけて處處に移し置
　くもの。開天遺事「楊國忠子弟每
　レ至二花時一、移二名花一、植二木檻中一、下
　設二輪脚一、挽以二綵繩一、所レ至牽二引
　之一、以便二觀賞一、號二一一一一一」
【移書】イシヨ　まはしぶみ。漢書、劉歆傳
　「一一大常博士」‖移文。
【移處】イシヨ　場所をうつしかへる。詩、
　周南、漢廣「漢之廣矣、不レ可二一一一
　今一一一高木と」
【移植】イシヨク　うつしうう。呂安文「桂林
　一一」白居易詩「誰謂洞庭橘、美人自一一」‖移栽。
【移籍】イセキ　戸籍を他へうつす。南史、
　謝靈運傳「一一會稽」‖轉籍・移
　貫。
【移住】イジユウ　土地をかへてうつりす
　む。杜甫詩「故將一一南山邊」
【移牒】イテフ　文書を他の役所へまはす。
　又其の文書、牒はかきつけ。
【移轉】イテン　うつす。うつる。白居易詩
　「一家三十口、一一就松來」
【移動】イドウ　書を移して綱と稱する。
　漢書、楊敞傳「乃一レ一趨」一說、綱

を以て居處を移す。‖移殊。
【移風】イフウ 風俗をうつしかふ。孝經、廣要道章「一レ易レ俗、莫レ善二于樂一」
【移文】イブン まはしぶみ。文書を各處に移す義。南齊の孔稚圭、北山ニ一を作る、檄文至軌範に出づ。‖移書。
【移變】イヘン うつりかはる。後漢書、楊終傳「慈困之民、足二以感一動天地一、一レ降一陰陽之炎」
【移封】イホウ 諸侯が領土をうつしかへる。‖徙封。
【移木之信】イボクノシン 徙木之信（六二五頁三段）に同じ。
【移民】イミン 面積廣く人少き地に民をうつし住ましむ。周禮「若邦凶荒、令二ニレ一一遷レ財」

【稆】 カツ 黠

○わら（禾莖）○皮を去りたるわら、わらしべ、わらのしん。書、禹貢「三百里納一レ」‖稭。

七畫

【稉】 稌（禾部四畫）に同じ。

【稈】 カン 旱

わら、穀物のくき（禾莖）「麥一」「禾一」「芟一」‖秆。

【稀】 キ ケ 微 希に通ず

○まれ、たまさか、まばら（疎）曹操詩「月明星一」減多になし。杜甫詩「人生七十古來一」○うすし（薄）「一薄」陳思濟詩「羨殺田家豆粥一」○依一ははんやりしたる貌。‖彷彿。

同訓異字 稀・希・罕・少の別は罕（网部三畫）の條を見よ。

【稀鹽酸】キエンサン 鹽酸の蒸餾水にとかして極めてうすきもの、胃病藥とす。
【稀疏】キソ すくなくしてむなしの佛國記「城中人民亦一一、止有二寥寥數萬戶一」
【稀覯】キコウ まれに見る、めづらし。鄒嬪記「當世一一之物也」‖希覯。
【稀星】キセイ まれなるほしの杜甫詩「霞霄成二消滅一一一年有無」
【稀少】キショウ すくなし。‖希少。
【稀疎】キソ まばら。後漢書「三輔山原曠遠、民庶一一」‖稀踈。
【稀代】キダイ 國めつたになくて珍し。
【稀稠】キチウ まばらなると、しげきと。淮南、劉向傳「異有二大小一一一、占有二舒疾緩急一」法「一一猶レ言二疎密一也」
【稀薄】キハク うすし。
【稀有】ケウ まれにある義。ふしぎ、めづらし。‖希有。

【稍】 サウ セウ 效 巧

○やや、やゝやく、しだいに、一一と連用するも同じ。○ふち（糜米）毎月給する扶持米。すこしづつ漸次に分ちて給する故「糜一」○ひとし（均）ちひさし（小）「一事」○周代の制、王城を距ること三百里の稱。

同訓異字 稍・差・較・良・旋○稍は、ややとも、やゝやくとも訓む、すこしづつなり、ちくちくと進む、兵稍卻の類。○差は次第に少しづつ、ちがひの見ゆるをいふ。隋文紀「江北地狹、田收差晚」○較はたくらべて見るにの義、杜詩に「春寒花較遲」とあり、例年に較ぶればの義なり。○良は、まことにとも訓む、稍寢と異り、其久は、頗久なりと註す。○旋はかへつてとも訓む、反旋の義、めぐりて本にかへる意あり、玉篇に「蛭子入地、至二來年禾秀時一乃出、旋生二廻羽一」とあり。

【稍食】セウショク 官吏の扶持米。周禮「內宰均二其一一一」
【稍稍】セウセウ やや、漸やく進む貌。戰國策「一一蠶食之」

【稅】 ㊀セイ 霽 ㊁タイ 泰 ㊂メツ 屑 ㊃エツ 薛 ㊄スキ 置

㊀みつぎ、ねんぐ「租一」「賦一」「一金」「收一」「征一」「脫一」「免一」○かかりもの。○ねんぐをとりたてる。○とく、おく（贈）はなつ。○おくる（物を贈る）㊁日を經て喪を聞きて忌服する。說、檀弓「小功不一一」㊂とく（解）解き放つ。左、成九「有司對曰、鄭人所一獻楚囚也、使一レ之」㊃ようこぶ、悅に通ず。㊄死者の尸に衣する爲めに贈る服。又、其の服をきせる。襚に通ず。史、陸賈傳「乃奉二百金一往一」

【稅駕】セイガ 車につけたる馬を解きて休息する。史、李斯傳「物極則衰、我未レ知所レ一レ也」‖解駕。
【稅粮】ゼイリョウ 稅を徵收して其の利を占する。宋史、滿商傳「義一一一路有レ可二稱道一」
【稅額】ゼイガク 租稅の高。宋史、食貨志「減二江東諸路逃田一一一」
【稅關】ゼイカン 輸出入稅をとり扱ふ役所。
【稅權】ゼイケン ねんぐをとりたてる權利。
【稅租】ゼイソ みつぎもの。十六國春秋「復二百姓一一之半一」‖租稅。
【稅則】ゼイソク 租稅に關する規則。
【稅法】ゼイハフ 租稅に關する法律。
【稅賦】ゼイフ ねんぐ、みつぎもの。周禮、注「任レ地謂下任二土地一以起中一一上也」‖賦稅。
【稅目】ゼイモク ねんぐの種類の名稱。地租・戶稅・所得稅・營業稅などの名

目。
【稅吏】ゼイ　租稅の事務をとり扱ふ役人。
【稅率】ゼイ　租稅をわりつけるわりあひ。
【稅斂】ゼイ　ねんぐをとり立てる、收稅。
【稅冕】ベン　かんむりをぬぐ。孟、告子「猪肉不レ至、不レ一レ一而行」

【程】テイ　庚

○のり、きそく（法式）「規ー」「法ー」「章ー」○ほど、物事の度あひ「一度」○ますめ（容量）かけめ（輕重）ながさ（長短）かず（多少）○しな（品等）かぎり（制限）一定のきまり（課定）「課ー」「日ー」○みちのり（道理・旅行）「道ー」○はかる（量）漢書、東方朔傳「一其器能」○しめす（示）○一分の十分の一。○人の姓「ー顯」「ー頤」國○ほどぶん「身のー」○時間「一無く」○工合ぐあひ又調子「一善く」

同訓異字　程・計・課・圖・量・度・稱・權・測・料・付・搬・商・撰・略・策等の別は計（言部二畫）の條を見よ。

【程頤】イ　宋の大儒、字は正叔、兄程顥と共に道學を修む、謹嚴にして德行あり。世に伊川先生と稱す、徹宗の大觀元年卒す、年七十五。
【程顥】カウ　宋の大儒、字は伯淳、弟頤と共に周茂叔に學ぶ、性溫厚にして、和氣を以て人に接し、未だ嘗て怒色を見はさず、道學を以て一代の師宗たり、世に明道先生と稱す、神宗の元豐八年卒す、年五十四。
【程限】ゲン　きまり、かぎり。謝承、後漢書「一試不レ第ニー一」
【程式】シキ　かた、のり。管子「儀者、萬物之ー也、法度者、萬物之極表也」＝法式。
【程朱學】ガクシュ　宋の程頤・程顥・朱熹の唱へし性理學。元史「趙復字仁甫（中略）北方知レ有二程朱之學一、自レ復始」
【程度】ド　どあひ、ほどあひ。＝程限。
【倦程】ケイ　道にうみつかれる、あるきくたびれる。李商隱詩「ー一山向背、望レ國嶢峨」
【程文】ブン　試驗場にて書く一定の法式ある文章。文章軌範、將字集、小序「揚庭ー一論、當レ用二此樣文法一」
【程門四先生】センセイ　宋の程頤の門人、呂大臨・謝良佐・游酢・楊時の四人をいふ（宋史、呂大防傳）
【程門立レ雪】リツセツ　程頤の門人、游酢・楊時の二人が、道を求めるに熱心なりし故事。宋名臣言行錄「一日先生坐瞑目、二子立侍不二敢去一、久之先生乃顧曰、二子猶在レ此乎、日暮矣、姑就レ舍、二子者退、則門外雪深尺餘矣、其敬厲如レ此」
【程量】リヤウ　○どあひ。＝程度。○めかた。

【稀】キ　微

○まれ、すくない、めずらしい「ー有」「ー代」「ー覯」○うすい「ー薄」○ゆるい「ー疎」○ほしいまま「ー望」

【稀世】セイ　世にまれなこと。
【稀代】ダイ　代にまれなこと。
【稀有】ウ　まれなこと。
【稀覯】コウ　まれにみること。
【稀薄】ハク　うすいこと。
【稀疎】ソ　まばらなこと。
【稀望】ボウ　ほしいまま。

【稔】ネン　寢

○みのる、穀物が善く熟する「登ー」○みのり。○轉じて物事の成熟して積る。柳宗元、箕子碑「紂惡未ー」○とし（年）左、襄二七「不及二五ー一」○積むこと久し。任昉文「惡積釁ー」

【稔熟】ジュク　穀物が十分にみのる。張耒詩「田家ー一人情好」

【秤】テイ　ダイ　蕭

○くろいぬびえ、のびえ、稗ヒエの一種、其の實は甚だ細かなり「稗ー」○かはやなぎのほ、蒹に通ず。一說に、木の更に生ずるもの、ひこばえ。易、大過「枯楊生ー」

【稊稗】ヒエ　稊はのびえ、稗に似たる雜草。稗はしひな、共につまらぬもの。劉禹錫、說騶、伯氏佐二戎於朔一、獲二良馬一以遺レ予、予不レ知二其良一也、猶レ之以ニー一飲二之于汚池一」
【稊米】ベイ　いぬびえ。莊、秋水「ー一之在二大倉一」

【稃】フ　虞　九　遇

もちいね（穎稻）酒を醸すべし。詩、周頌「豐年多二黍多一」

【稂】ラウ　陽

すくも、あらぬか（穀皮）もみがら。

○いぬあは、莠ユウの一種、稻を害する雜草。○轉じて物事を害するものに喩ふ「一莠」

【稂莠】ユウ　禾穀を害する惡草。潛夫論「莠ニー一者傷二禾稼一、惡二好宏者、賊二良民一」

【稊】テイ　齊　八　霽

○ひこばえ、木の更に生ずるもの。＝荑。

【稃】フ　虞

穉ーとは稻の名。杜牧詩「穉ー百頃田」＝罷亞。

【稍】（一）ショウ　（二）キン・クン　軫　阮

（一）つかぬ（束）（二）みつ（滿）

【稍息】ソク　十分につみのせる。齊語「ー一而歸」

【稚】チ　寘　同じ

○いとけなし、をさなし「幼―」「―子」「―齢」○をさなき者。【稚幼】ヨウ　をさなし。蘇軾詩「大公所二遺業一、百謀仍―一」‖幼稚。【稚氣】キ　こどもらしき氣分、をさなき。‖稚心。【稚魚】ギョ　うをの子。‖魚仔・魚苗。【稚子】シ　○をさなきこども。陶潛、歸去來辭「僮僕歡迎、―候レ門」○筍の異名。杜甫詩「竹根―無二人見一」【稚見】ケン　○あかご。又こども。‖幼兒。國○ヲサナゴ等院にて給仕に使役する少年。○祭禮又法會等の行列にだす男女の幼童。【稚心】シン　こどもらしき心、をさなごころ。【稚筍】ジュン　わかきたけのこ。僧警住詩「春光欲レ老綠陰寒、――挽レ空已作レ竿」【稚老】ロウ　こどもと、としよりと。張弘道詩「衰殘餘二―一」

【稠】チウ　テウ　㊀チウ　㊁テウ　尤

㊀おほし(多)○しげる。しげし(密)㊁うごく、動搖する貌。【稠疊】ジョウ　しげくかさなる。李白詩「――千萬峰、相連入レ雲去」【稠密】ミツ　しげくこみあふ。

【稙】チョク　シキ　職

はやまきのいね(早種禾)

【稗】ハイ　卦

○ひえ、いぬびえ、禾の一種、葉は稻に似、實は小にして粟の如く、殼は黑し。孟、告子「荀爲不熟、不如二―一」○こまかし、ちひさし(細小)「―史」【稗官】小說、傳說。民間の瑣細の事を記錄せしもの。【稗史】シ　小說、傳說。民間の瑣細の事を記錄せしもの。【稗官小說】ショウセツ　稗官は小官の意、小說は細碎の言、古、王者が閭巷の風俗を知らんと欲し、小官を立てて稗說せしむ、轉じて小說をいふ。漢書、藝文志「小說家者流、蓋出二於稗官一、街談巷語、道聽塗說者之所レ造也」

【稷】リク　ロク　職

わせ(早稻)最も早く熟する稻。

【稟】リン　ヒン　ホン　寢　俗字

㊀ふちまい(賜穀)俸給として政府より賜はる米。中庸「既――稱レ事」○こめぐら‖廩。㊁うく(受)下官が上官の命令を受ける「承」意、說命「臣下罔レ攸レ―レ命」○俗に事を上に申し上ける意とす「―事」○うまれつき、たち、天賦の性質「天―」「異―」「特―」朱熹、大學序「氣質之―」【稟受】ジュ　稟は穀を賜ふなり、面々に從ひ禾に從ふ、俗に廩に作るは非。【稟承】ショウ　上官のさしづをうける。南史、袁昭傳「在二京口一―二―許筆一」‖承稟。【稟性】セイ　天よりうけたる性質。後漢書、方術傳「光武謂二高獲一曰、朕欲レ用レ子爲レ吏、宜レ改二君性一、違對曰、臣―二於父母一、不レ可レ改之於陛下一」‖稟和氣讀。【稟賦】フ　天よりうけたるうまれつき、うまれつきの性質にもいふ。陳遠詩「蒼生―紙被薄、平日扶レ衰【稟命】メイ　上の命をうけると、上へ申しあげること。宋史、職官志「樞密院掌二軍國機務一、大事則――‖奏稟。【稟報】ホウ　關上官に報告する。【稟議】ギ　上官に提出して意見を求めること。

【稜】ロウ　蒸　㊀リョウ　㊁リン　㊂ロウ　㊃レン　㊄ロン　㊅ロン　㊆ロン　㊇ロン　㊈ロン　㊉ロン　㊊ロン　㊋ロン　㊌ロン　㊍ロン　㊎ロン　㊏ロン　㊐ロン　㊑ロン　㊒ロン　㊓ロン　㊔ロン　㊕ロン　㊖ロン　㊗ロン　㊘ロン　㊙ロン　㊚ロン　㊛ロン　㊜ロン　㊝ロン　㊞ロン　㊟ロン　㊠ロン　㊡ロン　㊢ロン　㊣ロン　㊤ロン　㊥ロン　㊦ロン　㊧ロン　㊨ロン　㊩ロン　㊪ロン　㊫ロン　㊬ロン　㊭ロン　㊮ロン　㊯ロン　㊰ロン　㊱ロン　㊲ロン　㊳ロン　㊴ロン　㊵ロン　㊶ロン　㊷ロン　㊸ロン　㊹ロン　㊺ロン　㊻ロン　㊼ロン　㊽ロン　㊾ロン　㊿ロン

○かど、すみ(廉)‖棱・楞。○いきほひ、いつ、みいづ、かうがうしき威光、神靈の威「―威」漢書、李廣傳「威―憺於鄰國」憺は勗。【稜威】ヰツ　○みいつ。神靈の威光。南史、梁武帝紀「―――直指、勢論二風雷一」‖威稜。○國天皇の尊嚴なる御威光。【稜角】カク　とがりたるかど。韓愈詩「晴明出―――、稜稜秋二分綠一」【稜側】ソク　石のかどだちてけはしき貌。元好問詩「―石砌依二高枏一」【稜層】ソウ　屋などの角立ちて連なれる貌。劉禹、遊二武夷山一記「草木蒙茸、夾道一色、屋壁紅黃、―可レ愛」【稜稜】リョウ　○寒さの嚴しき貌。鮑照、蕪城賦「―――悲風、蕭蕭愁雲」○かどかどしく正しき貌。唐書、崔從傳「從入朝侍、立レ朝―――有二風望一」

【稽】ケイ　カイ　齊　㊀ケイ　㊁カイ　㊂ケイ　㊃カイ　㊄ケイ　㊅カイ　㊆ケイ　㊇カイ　㊈ケイ　㊉カイ　㊊ケイ　㊋カイ　㊌ケイ　㊍カイ　㊎ケイ　㊏カイ　㊐ケイ　㊑カイ　㊒ケイ　㊓カイ　㊔ケイ　㊕カイ　㊖ケイ　㊗カイ　㊘ケイ　㊙カイ　㊚ケイ　㊛カイ　㊜ケイ　㊝カイ　㊞ケイ　㊟カイ　㊠ケイ　㊡カイ　㊢ケイ　㊣カイ　㊤ケイ　㊥カイ　㊦ケイ　㊧カイ　㊨ケイ　㊩カイ　㊪ケイ　㊫カイ　㊬ケイ　㊭カイ　㊮ケイ　㊯カイ　㊰ケイ　㊱カイ　㊲ケイ　㊳カイ　㊴ケイ　㊵カイ　㊶ケイ　㊷カイ　㊸ケイ　㊹カイ　㊺ケイ　㊻カイ　㊼ケイ　㊽カイ　㊾ケイ　㊿カイ

九畫

○皮を去りしわら。又、それにて作りしむしろ、天を祭る時にしくもの。○國わらしべ、わ

らのしん。

【稱】㊀ショウ ㊁シ・ 魚

㊀禾の實の落ちる貌。○熟せし穀をかる(穫)㊁神に供へる米、せんまい。

【種】㊀シュ・シュウ ㊁シ・ショウ・シュ 送

㊀たね、穀物の種。又、草木のたね。○もと(起因)○たぐひ(品類)「各ー」「十ー」なかま、ともがら、やから(部族)「一族」「人ー」史、陳渉世家「且壯士不死即已、死即擧大名耳、王侯將相寧有ー乎」○ーは謹愨なる貌、うやうやし。又、髪の短き貌。㊁うう(植)苗をうゑる、草木をうゑる。○しく(布)「一徳」○たねをまく「耕ー」

同訓異義 ウ種・植・栽・樹・蒔○種は草木の種をまき植うる我、種ゝ瓜の如し、また竹木をうゑるにも用ふ。○植はかやらぬやうに、うゑ立つるなり。蘇軾、三槐堂記「予植三槐于庭」○栽はわかき木をうゑつくるなり。中庸「栽者培ゝ之」○樹は長けたる木をたてうゑること。孟子「五畝之宅、樹ゝ之以桑」○蒔はこまかなる苗をうゑつくるなり。詩經「蓼ゝ彼萑葭」

【種牛】シュウ たねうし。犢ゝシを得る爲めに養ふ牛。

【種玉】シュギョク よき婿を得たる故事。搜神記「楊公雍伯、篤孝、葬ニ父母於無終山ー、山高無ゝ水、作ニ義漿ー給ニ行人ー三年、有ニ一人ー飲訖、探ニ中出ニ石子ー一升ー與之曰、種ゝ此生ニ美玉ー、幷得ニ好婿ー、公種ゝ之數畝、北平徐氏有ゝ女絶美、公求ゝ之、徐氏曰、得ニ白璧一雙ー、當ゝ爲ゝ婿、公至ニ所ゝ種、得ニ白璧五雙ー、以聘、後遂以ゝ女、名其地ー、謂ニ玉田ー」

【種瓜】シュカ ○うりをうゑる。温庭筠「レー得ゝ瓜、種ゝ李得ゝ李」○事物この因あればこの果あるに喩ふ。ㇵ種ゝ豆得ゝ豆〔呂覽、離俗〕

【種藝】シュゲイ 草木をうゑ、藝も種植。實業詩「閑居日偏永、手把ー一遊」

【種子】シュ ○草木のたね。○轉じて事物のもと。

【種族】シュゾク いれば。陸游詩、「染ー一筑ニ人痴」ㇵ義商。

【種人】シュジン 古、異族の奥狄をいふ。後漢書、光武紀「爾郎褒叛、遣ニ武威將軍劉尚ー討破ゝ之、徙ニ其ー一於江夏ー」

【種種】シュ ○謹愨なる貌。莊、胠篋「舍ニ夫ー一之機ー」○髪の短き貌。左、昭三「我髮如ゝ此ー一」○いろいろ、さまざま、物物の義。

【種樹之書】シュジュノ 草木をうゑる事を記せし書。史、李斯傳「所ゝ不ニ去者、醫藥卜筮ー一」

【種植】シュショク うう。曹植文「脾農之始嘗ニ百草ー、教ニ民ー一」

【種族】シュゾク ○人の種類、白人種・黄人種などの如やから。○一族諸共に殺される。史、秦紀「秦ー一其家ー」ㇵ族誅・族滅。

【種竹】シュチク 竹をうゑつける。仇池筆記「ー一須ニ辰日ー、栽用ニ臘月ー」

【種痘】シュトウ うゑぼうさう。兩般秋雨盦隨筆「ー一始ニ於宋眞宗朝王旦ー、其後各相授受、以ニ潮廣人ー爲ゝ最」

【種德】シュトク 德を布き行ふ。書、大禹謨「ー一洽ニ于百姓ー」ㇵ積德。

【種播】シュハ うゑしく。黄庭堅詩「終緑何曾省ニ機織ー、布穀來ゝ應ゝ勤ー一」

【種馬】シュバ たねうま。周禮、注「種謂ニ上善似ゝ母者ー、玉路駕ニー一」

【種別】シュベツ 種類によりて分つ。漢書、藝文志「ー一爲ニ七略ー」ㇵ類別。

【種落】シュラク 民族のあつまり居る處。晉書、四夷傳論「廣開ニ荒垣ー、更招ニー一」ㇵ部落。

【種類】シュルイ たぐひ。論衡「瑞應之出、始無ニー一ー、因ゝ善而起、氣和而生」

【稱】㊀ショウ ㊁ショウ 蒸 徑

㊀はかる(量・銓)物の輕重を知る。○かかぐ、ささぐ。○あぐ(揚・舉)○となふ、よぶ、名いふ。○ほめる、ほめあげる「褒ー」論、泰伯「民無ニ得而ー」稱」ほまれ「英ー」「聲ー」○おこなふ(行)○のぶ(述)○いふ(言・謂)○となへ(名號)「名ー」「通ー」「自ー」「一謂」㊁どあひ(度合)○はかり(標衡)てんびん。俗に秤に作る。○かけめ(斤兩)○かなふ、宜しきに適ふ「ー一職」そろふ、つりあふ。○はかる(量)○ひとし(等)○そふ(副)○あぐ、あがる(擧)漢書、食貨志「亡者取倍ー一之息」○衣の單複の具なにいふ、衣服の一そろひ。左、閔五「祭服五ー一」

同訓異義 稱・舉・揚・托・副・倡・抗・擡・翹の別は舉(白部十一畫)の條を見よ。

○稱・計・謀・圖・量・度・權・測・料・忖・揣・商・揆等の別は計(言部二畫)の條を見よ。

【稱謂】ショウイ ○となへ、名稱(尊號、兩京記)○窓見をのべる。宋書、武帝紀、功高二開闢一理微ニー一」

【稱引】ショウイン ひきあひに出してあげる。晉岡、六代論「其言深切、多ゝ所ニー一」ㇵ援擧・引證。

【稱號】ショウゴウ ○となへ。後漢書、劉盆子傳「無ニー一ー、不ゝ如ゝ立ニ宗室ー、挾ニ我

誅伐上」‖名目。◎名號を稱する。史、嚴安傳「―一曰二湯帝一」

【稱惡】ショウあげ用ふる。史、萬石張叔傳「直不疑南陽人、爲レ郎、文帝―レ、稱遷至二大中大夫一」

【稱呼】ショウとなへ、なまへ。

【稱讚】ショウ○ほめたたへる。南史、王筠傳「皆擊節―レ」○ほまれ。‖擧譽。

【稱旨】シショウシ上の意にかなふ。漢書、孔光傳「寢レ使―レ、由レ是知レ名」

【稱兵】ショウ病氣といひたてる。史、項羽紀「―レ不レ往」

【稱心】ショウシン己の心に望む所に適合する。晉書、蔡謨傳「才不レ副レ意、略不レ稱レ心」

【稱首】ショウシュ首として稱する、其の中にて第一に傑出せるもの。漢書、游俠傳「擊而游談者、以二四海一爲二―一」

【稱述】ショウジュツ○意見をのべる。唐書、杜甫傳「稟レ細錄レ大、所二以圖一レ死―一」○たたへのべる。

【稱職】ショクショク才能が其の職務にかなふ。漢書、成帝紀贊「公卿―レ、奏議可レ述」

【稱制】セイ太后などが天子に代りて政令を行ふ。制は制度の命。史、呂后紀「今太后―レ、王三昌弟諸呂一、無レ所二不可一」

【稱說】セツたたへのべる。漢書、顏錫傳「太常遺レ錯、受二尚書伏生所一遺、因上書―一」‖稱述。

【稱揚】ヨウたたへいふ、道は首。‖稱說。

【稱述】ジュツ人をほめて上にすすめる。漢書、霍方遇傳「獨與レ長安一二―之一」長は淳于長。

【稱貸】タイ金をかして利息を取る。孟、滕文公「―一而益レ之」

【稱道】ダウたたへいふ、道は首。‖稱說。

【稱歎】タン ためいきをつきてほめる。呉志、虞翻傳、注「甚愛レ之、屢―一歎」‖歎稱。

【稱慶】ケイたたへほめる。論衡「皆能教授、故世―二其名一」‖稱美。

【稱美】ビほめる。北齊書、陽雄傳「移書―二一之一」‖美。◎よきことをほめる。禮記「銘之義、―レ不レ稱レ經」‖稱述。

【稱兵】ヘイ兵に同じ。禮記「孟春之月、不レ可二以―一」

【稱揚】ヨウほめあげる。漢書、黃霸傳「下レ詔―一」‖賞揚。

【稱譽】ヨほまれ。ほめる。楊惲文「猶二從レ風而靡一、何―一之有」

【稱是】ゼはかりはかる。莊子「人有二適レ越、挽レ車―一」

【稷】ダン

穀の俗字

もちごめ、もちいね。

十畫

【稼】カ

○うう、穀類を植うる。とりいれを稽といふの對。○うゑつけたる穀物「晩―」「稻―」「百―」詩、豳風「十月納二禾一」又特に、禾の秀でて實るもの。○うゑつけ、耕作、農業。論、子路「請學―一」○國はたらく「出―」

【傷レ稼】シャウカ穀草をいためそこなふ。荀子「蓋耕―レ」‖傷禾・傷穀。

【稼穡】ショクショク○穀物をうゑうると、かり取ると。書、無逸「先知二―一之艱難一」○轉じて農事の義。‖耕穡。

【稼政】カセイ田地、又は田地に注ぐみぞなどのまつりごと。周禮「正疆畎二稼器一修二―一」註「―一、謂二溝洫之類一」

【稾】カウ

又、稿に作る

○わら、禾本のくき（禾莖）「粟―」○くき（莖、幹）○したがき、詩文の草案「草―」「―本」「原―」「奏―」「屬―」

【稾街】ガイ漢代長安城中の町の名。諸夷來朝の時の居館地に供せし所。漢書、陳湯傳「斬二郅支首及名王以下一宜レ縣二頭―一蠻夷邸閣一以示二萬里一」‖蕃街。

【稾人】カウわらにんぎゃう、草を縛りて人の形を成す者。唐書、張巡傳「縛レ稾爲レ人千餘、被二黑衣一夜縋二城下一、潮兵爭射レ之、久乃―一、還得二箭數十萬一」‖藁人。

【稾本】カウ書物のしたがき。‖草稿。

【稾砧】チン妻が夫をいふ隱語。◎（神部十四畫）の條を見よ。

【稿】キク

藁（前條）に同じ。

つむ（積）あつめる（聚）たくはふ。積み貯へる「―積」‖蓄。

【稽】㊀ケイ ㊁ケイ

㊀かんがふ（考）考察する「―古」「無―」○はかる（議）○あふ（合）○くらぶ、たくらべる（計較）○とどむ。後漢書、馬援傳「何足久―天下士」とどまる（留止）○ほこ（榮戟）○いたる（至）莊、逍遙遊「大浸―天」（大浸は大水）○おなじ（同）滑―コツは辯舌を以て異同を亂る義。○會―は山名、古、揚州の鎭、今の浙江紹興縣の東南十三支那里に在り。㊁下拜して首、地に至る。首を地につける敬禮法。

稽・至・到・球・脂・致・稚・臻・踬・躓等の別は至（部首六畫）の條を見よ。

○ケイ 稽・止・留・駐・停・過・逗の別は止（部首四畫）の條を見よ。

【稽察】ケイ 稽は考、疑ふ所あれば卜筮して之を考へる。晉、洪範「七、ーレ、擇建ニ立卜筮人ニ、乃命ニ卜筮ニ」

【稽古】ケイ ○古の道をかんがへる。書、堯典「曰若、ーニ帝堯ニ」○轉じて學問の義。後漢書、桓榮傳「ーー之力、可レ不レ勉哉」○國學習する、練習する。

【稽顙】ケイ ○喪に居る時にひたひを地につけて敬禮する、ぬかづく。檀弓「拜ーー、哀戚之至隱也」○頭を地につけて敬禮する。稽首參看。

【稽失】シツ とどこほりしくじる。

【稽首】シュ 禮拜して首が地に至る。公羊、宣六、注「頭至レ地曰ーーニ」ー解に、頭を腰より下にさげる。荀、大略「平衡曰レ拜、下衡曰ーーニ、至レ地曰ニ稽首ニ」

【稽滯】ケイ とどまりとどこほる。北史、郭祚傳「由レ是事頗ーーレ」ー事滯・滯滯。

【稽程】ケイ ○かんがへはかる。宋史、刑法志「ーニ律論ニ」○路をへだてとどめられる。漢開文帝、樂府「週山時阻」路、絶水源ーー」

【稽覽】ケイ かんがへ見る。權德輿文「ーニ故志ニ通ニ殊種品ニ」

【稽留】ケイ とどむ。とどこほる。春秋「陽之氣平行而來レ止、未レ當有レ所ニーー滯雷ニ也」ー滯留。

【穀】コク 國 穀は俗字

○たなつもの、百穀の總稱、五ーは麻・黍・稷・麥・豆。一說に黍・稷・菽・麥・豆「新ー」「嘉ー」○さいはひ（福祿）福祿を得る。詩、小雅「俾ー旣ーー」○ふち米、俸米。論、憲問「邦有レ道ー」○よし（善）書、洪範「旣富且ーー」○やしなふ（養）詩、小雅「以ー我士女」○いく（生）詩、王風「ー則異室、死則同穴」○こども（孺子）○谷に同じ、ー風は谷風。○つぐ＝告。○水の名。○不ーは古、人君の謙稱。＝不祿。

【穀雨】コク 二十四氣の一、淸明の次に來る氣節、陽曆の四月二十日頃、百穀を生ずるあめの意。逸周書「ーー之日、萍始生」

【穀價】コク 穀物のねだん。後漢書、光武紀「ーー騰踊、人用困乏」

【穀氣】コク 五穀の人體を養ふもの。後漢書「人體欲レ得ニ勞動、動搖則ーー得レ銷、血脈流通、病不レ得レ生」

【穀穀】コクコク 鳥のなく聲の形容。歐陽修詩「鶯聲ーー催ニ春耕ニ」

【穀日】コク よきひ。＝吉日・穀旦。

【穀城】コクジョウ 山の名、今の山東省東阿縣の東北、圮上老人が張良に「ーー山下黃石卽我」といひしは卽ちこの山。

【穀旦】コクタン よき日。詩、陳風「ーー于差、南方之原」（差は擇）＝吉日・佳辰。

【穀風】コクフウ 物を生長するはるかぜ。漢書、王莽傳「ーー迅疾、從ニ東北一來」＝谷風・春風・東風。

【穀璧】コクヘキ 五玉の一、古、子爵の諸侯の執る所のもの、粟粒の如きあやある白玉の周禮「子執ーーー」

【穀梁傳】コクリョウデン 二十卷。春秋穀梁傳の略稱、周の穀梁赤の撰、左氏傳・公羊傳と合せて春秋三傳といふ。赤は公羊高と同じく、子夏に從ひて孔秋を受く。

【穀穫】コクカク こくもつのかて。後漢書、馬援傳「以ニ兵少一不レ得ニ窮追一、收ニ其ーー畜產一而還」＝糧穀。

【穡】 ㊀シン ㊁テン 侵 先

㊀あつむ。あつまる（聚）しけし（稠）○こまか（緻密）縝に通ず。○元ーは唐の詩人、白居易と友たり。㊁こまか（緻密）

【稷】 シク 職

○きび、たかきび、五穀の一、穀類中、種うること最も古し、故に百穀の長とす。曲禮「ーー曰明粢」○轉じて五穀の神。又、其の祠（國土の神卽ち社に配して社ーといふ）又、農官の稱「后ー」○とし、はやし（疾）○かたむく、昃に通ず。

【稷下】シクカ 古、齊の城下、稷門は齊の城門（今の山東省臨淄縣の北に在り）の名、談說の士の多く集る處。史、田完世家「齊宣王喜ニ文學遊說之士一（中略）是以齊ーー學士復盛」

【稷狐】シクコ 五穀の神をまつれる社に棲むきつね。君側の奸臣に喩ふ。說苑「來見ーー見レ攻、社鼠見レ熏也」＝城狐。

【稷正】シクセイ 穀物の神。風俗通「烈山氏之子曰レ柱、能殖ニ百穀蔬果一、故立以爲ニーーー」＝穀神・穀神。

【稷契】シクセツ 唐虞の世の二臣。書、舜典「帝曰、俞、咨、禹汝平ニ水土一、惟時懋哉、禹拜稽首、讓ニ于ーー與ニ皐陶一、帝曰、俞、汝往哉」

【稷黍】シクショ 穀ものの異名。轉名「穀國如ニ稷粒一、故曰ーーー、日ニ穀黍ニ」

【稷蜂】シクホウ 穀物の神の祠にすくふはち。君側の姦臣に喩ふ。韓詩外傳「ーー不レ攻而社鼠不レ熏」

【稻】 タウ 晧

いね（稉）五穀の一、早熟のも

のを早—ヤ晩熟のものを晩—ヤといふ。又、黏る者を稬といひ、黏らざる者を杭といふ。禮、曲禮「凡祭宗廟之禮、—曰嘉蔬」註、周頌「十月稻—」。

【稻雲】ウン　旱き田のいねを雲に喩へていふ。宋、范成大、田舍詩「梯田—雲外」

【稻粱】リヤウ　いねと、きびとの粱。康文「假無——之城、必以二蔽麥一爲二珍餐一」

【稻蘇】ソ　いねの穂さき。徐鉉詩「秋暮天高——成」

【稻芒】バウ　いねののぎ。後漢書、酷吏傳「陰察視口眼有二—一」

【稻苗】ベウ　いねのな（。杜荀鶴詩「牛畔—新雨後、鷁邊松頭晩風時」‖稻候。

【稻粱謀】ベウバウ　生活のはかりごと。書言故事「策二曰於外一爲二——一、韓愈雁詩、天受地久棲鳥橋、風猶酸苦稻粱微」

【稃】㊀チ　㊁チ　支　眞

又、稚・穉に作る

㊀おくて（晩稻）○いとけなし、わかし、幼少。㊁をさなし（幼）「幼—」「童—」

【稃子】ヂ　○こども。陶潛文「僮僕歡迎、—候—門」‖童子。○をさなご。‖稚子。

【稃弱】ヂジヤク　幼くてよわし。

【稃童】ヂドウ　わかきこども。

【稃稚】ヂチ　幼くてわかし。

十一畫

【穎】エイ　梗　穎は俗字

○ほさき（禾末）禾の穂のさき。○ほ（穂）○轉じて物の尖りし端。○きりの頭（錐錐）穎に通ず。○筆のさき「毛—」○かねのわ（鍔）○めざましきくら（警枕）禮、少儀「—杖琴瑟」○才の人に秀でる義。又、其の者。陸機、文賦「抱—而獨—」「俊—」「明—」「聰—」

【穎悟】ゴ　ひいでてさとし。晉書、王戎傳「幼而—、神彩秀徹、視レ日不レ眩」

【穎才】サイ　さときはたらき。又、其の人。

【穎脫】ダツ　嚢の中の錐のさきが拔け出る。才氣の人に拔け出るに喩ふ。史、平原君傳「使三遂蚤得二處二囊中一、乃—而出、非二特其末見而已一」一說に穎は穎（錐柄）の誤なりと。

【穎哲】テツ　すぐれてさとし。又、其の人。傳亮文「神姿—、大成俱茂」

【穎敏】ビン　ひいでてさとし。元史、達識脫里傳「幼—、從レ師授二經史一、過レ目輒領解」

【穅】カウ　陽

○もみがら、すくも（穀皮）○ぬか、あらぬか。‖糠。

【穅粃】ヒ　ぬかと、しひな。後漢書、安帝紀、詔「雖レ有二糜粥一、—相半」‖糠粃。

【穄】キ　寘

しけし（稠）史、齊悼惠世家「深耕—種、立苗欲疏」

【穄】セイ　霽

くろきび、稷の一種、黍に似て黏らざるもの。後漢書、烏桓傳「其土地宜—」

【積】㊀セキ・シヤク　陌　錫　㊁シ　寘

○つむ「—善」「山—」「充—」「盈—」つもる。あつむ（聚）○かさなる（累）累めかさねる「堆—」「累—」○ひだ（辟）○數學にて二個以上の數を乘じて得たる數。○かさ、ひろさ「面—」「容—」㊁たくはへ（儲蓄）「畜—」「貯—」「餘—」孟、梁惠王「乃—乃倉」周禮「委—」註「少曰委、多曰—」○もくろみ「見—書」

【積愛】アイ　つもれるいつくしみ。積德を見よ。

【積惡】アク　惡事をつむ。酒夫箴「——不レ休、必致二築舖之名一」‖積不善。

【積威】イ　久しき以前よりつみたくはへし威光。

【積愛】アイ　つもるうれへ。東方朔傳「夫——者、得レ酒而解」

【積雨】ウ　ながあめ。宋史、禮志「宰臣奏、——傷レ農、上乃命在三天竺前一レ晴」‖淫雨。

【積懷】クワイ　つもれる心のうさ。

【積羽沈レ舟】ウシウチン　羽の如き輕きものも多く積めば舟を沈む。衆力の恐るべきに喩ふ。史、張儀傳「——、衆輕折レ軸」

【積雲】ウン　つみかさなれるくも。王褒文「御而望之、鬱乎似二——一」‖層雲。

【積葉】エフ　つみかさなりたる葉。司馬光詩「——迷二幽徑一、荒藤落二舊井一」

【積怨】エン　つもりかさなるうらみ、深き恨。戰國策「我有二——一深二怒於齊一」

【積氣】キ　天をいふ。列、天瑞「天——耳」

【積毀銷レ骨】キコセウコツ　讒言も多くつもる時は堅骨も遂に銷え盡く、衆口の恐るべきに喩ふ。鄧陽、獄中上二梁王一書「衆口鑠レ金、——」

【積極】キヨク　○事を成して極度に達する義。蘇軾、始皇論「積二誠信一之極、

以至三始皇一。○陽性にして、進取を主とする義。積極の對。

【積玉之圃】ハクギョクノホ　名文の多きに喩ふ。晉書、陸機傳「玄圃之積玉、無レ非二夜光一」

【積勳】セキクン　功をつみかさねる。晉書、習鑿齒傳「一レ一累レ功」

【積貲】セキシ　たからをつむ。史、平準書「商賈以二幣之變多一レ一逐レ利一」

【積愫】セキソ　よろこびをかさねる。鮑照、皇孫誕育上表「東儲一一、皇孫誕育、國啓二昌期一、民迎二鴻運一」

【積欠】セキケン　未納の租稅のつもりしもの。〔續紙、論二積欠一狀〕

【積穀】セキコク　米穀を積みて凶荒に備へる。三國志「蓄財一一而有二變患之慮一者、未二之有一也」

【積貯】セキチョ　たからをつむ。漢書「項王爲レ人、刻印刓而不レ能レ授、攻城得レ賂、一レ一而不レ能レ賞」

【積載】セキサイ　船車等に荷物をつみのせる。

【積日】セキジツ　多くの日數をつむ。南史、齊高帝紀「將士一一、不レ得二寧處一」＝累日。

【積習】セキシュウ　ひさしきならはし、久しきを積みて習慣を成せる者。春秋繁露「一一漸靡、物之微者也」

【積翠】セキスイ　つみかさなる。說苑「珠玉重寶、一一成レ山」＝積累・積疊。

【積檢】セキケン　年久しき義。晉書、羊祜傳「履謙一一、晚節不レ逢、此遠近所二以爲レ之感痛一者也」＝積年。

○陽性にして、進取を主とする義。積極の對。

【積玉之圃】ハクギョクノホ　名文の多きに喩ふ。晉書、陸機傳「玄圃之積玉、無レ非二夜光一」

【積勳】セキクン　功をつみかさねる。晉書、習鑿齒傳「一レ一累レ功」

【積貲】セキシ　たからをつむ。史、平準書「商賈以二幣之變多一レ一逐レ利一」

【積愫】セキソ　よろこびをかさねる。鮑照、皇孫誕育上表「東儲一一、皇孫誕育、國啓二昌期一、民迎二鴻運一」

【積欠】セキケン　未納の租稅のつもりしもの。〔續紙、論二積欠一狀〕

【積穀】セキコク　米穀を積みて凶荒に備へる。三國志「蓄財一一而有二變患之慮一者、未二之有一也」

【積貯】セキチョ　たからをつむ。漢書「項王爲レ人、刻印刓而不レ能レ授、攻城得レ賂、一レ一而不レ能レ賞」

【積載】セキサイ　船車等に荷物をつみのせる。

【積日】セキジツ　多くの日數をつむ。南史、齊高帝紀「將士一一、不レ得二寧處一」＝累日。

【積習】セキシュウ　ひさしきならはし、久しきを積みて習慣を成せる者。春秋繁露「一一漸靡、物之微者也」

【積翠】セキスイ　つみかさなる。說苑「珠玉重寶、一一成レ山」＝積累・積疊。

【積檢】セキケン　年久しき義。晉書、羊祜傳「履謙一一、晚節不レ逢、此遠近所二以爲レ之感痛一者也」＝積年。

【積敵】セキテキ　次條に同じ。後漢書、李固傳「一一之後、易レ致二中興一」

【積弊】セキヘイ　○悪弊をつみかさねる。荀子「彼日一レ一、我日積レ完、彼日積レ勞、我日積レ佚」○久しくつみたる惡弊。

【積漬】セキシ　なが雨にて出たるおほみづ。宋史、五行志「京畿大雨、平地水尺、近縁一一」

【積累】セキルイ　つみたくはへたる物品。兵機・盜賊の類にいふ。漢書、高祖紀「燒二楚一一一」

【積敵】セキテキ　次條に同じ。後漢書、李固傳「一一之後、易レ致二中興一」

【積弊】セキヘイ　○悪弊をつみかさねる。荀子「彼日一レ一、我日積レ完、彼日積レ勞、我日積レ佚」○久しくつみたる惡弊。

【積漬】セキシ　なが雨にて出たるおほみづ。宋史、五行志「京畿大雨、平地水尺、近縁一一」

【積累】セキルイ　つみたくはへたる物品。兵機・盜賊の類にいふ。漢書、高祖紀「燒二楚一一一」

【積貯】セキチョ　○たからをつむ。史、平準書「商賈以二幣之變多一レ一逐レ利一」

【積著】セキチョ　つみたくはへる。著は貯（史、貨殖傳）

【積貯】セキチョ　つみたくはへる。貯は貯（史、貨殖傳）

【積著】セキチョ　つみたくはへる。著は貯（史、貨殖傳）

【積貯】セキチョ　つみたくはへる。貯

やか(和)「雍ー」「緝ー」おだやかなる貌。詩、大雅「ー如清風」○あつし(厚)「敦ー」○よろこぶ(悦)皆、君臣「ー君之色」○むつぶ、むつまじ。＝睦。○ーは美くしき貌、語言容止の美盛なる義。又、つつしむ、うやうやし。又、威儀多き貌。○ー然は静かに思ふ貌。○昭ーは宗廟の次序にて昭は一世、ーは二世、即ち、子たる者の位。

【穆清】ボクセイ　天子に仁徳ありて政清し。史記、自序「改正朔、易ニ服色一、受ニ命於ーー一」曹植、七啓「天下ーー、明君在レ國」

【穆然】ボクゼン　静かに思ふ貌。又、深遠の貌。史、孔子世家「有レ所ニーー深思一」

【穆穆】ボクボク　○語言容止の美盛なる貌。詩、大雅「ーー文王」○和敬なる貌。書、呂刑「ーー在レ上、明明在レ下」○威儀多き貌。又、深遠の貌。曲禮「天子ーー、諸侯皇皇」

【穆滿】ボクマン　周の穆王、名は滿、後人常にーーと稱す。温庭筠詩「ーー昔賓二物外遊一」

穠 十二畫

サク　ソク　屋

○早く取る穀。○未だ熟せざる穀を刈り取る。

穂 十二畫

スキ　眞

○ほ、穀物の禾頭に實の結べるもの「麥ー」詩、王風「彼稷之ー」○ほの如き形をなすもの「一ー寒燈」(燈火の形にいふ)

種 十二畫

㊀トウ・ソ　㊁チョウ　東　冬

㊀おくて、先に植ゑて遅く熟する穀(晩稻)㊁うう(植)

穉 十三畫

アイ・エ　ワイ・エ　隊　泰　又、誤に作る

○あれる(蕪)雜草が生えしけりて荒れる「蕪ー」「荒ー」○田中の雜草。○けがれ、よごれ(汙)きたなきもの「汙ー」「垢ー」○けがれる、よごれる。○あし(惡)「奸ー」「凶ー」○けがらはしい。又其の事、又は場所。○騒亂。又、凶賊。

【同訓異字】穢・汙・污・洿・濊・蟠・點・涴・腌の別は汙(水部三畫)の條を見よ。

【穢行】アイコウ　けがれたるおこなひ。

【穢濁】アイコン　けがれにごる。又、くそつぼ。醜態漫錄「如レ落ニーー汙渠中一」

【穢草】アイソウ　あしき雜草。淵衡「盜賊宿ニ于ーー、邪心生ニ于無道一」

【穢濁】アイダク　けがれにごる。蜀志、許靖傳「共謀譲レ進ニ退天下之士一、沙汰ーー、顯ニ抜幽滯一」＝穢濁・濁穢・垢濁。

【穢德】アイトク　惡しき德。書經「ーー彰聞」

【穢多】エタ　國中古以來平民の下級にありし賤民の稱。＝新平民。

【穢土】エド　けがれたる此の世。淨土の對。淨土門にて「厭離ーー、欣求淨土」といふ。＝娑婆・塵世・濁世。

穣 十三畫

ジョウ　養

○とりいれ、禾を收むる、收穫する。穀を種うるを稼、收むるをーといふ。書、盤庚「若農服田力ー乃亦有レ秋」○とりいれる禾穀。○農事、耕作「稼ー」「農ー」「舊ー」○をしむ(愛吝)＝嗇。

稼 十三畫

カ　禡

○とりいれ、禾を收む、收穫する。穀を種うるを稼、收むるをーといふ。書、盤庚「若農服田力ー乃亦有レ秋」○とりいれる禾穀。○農事、耕作「稼ー」「農ー」「舊ー」○をしむ(愛吝)＝嗇。

稷 十三畫

スキ　職

○ほ(禾秀)禾穀が穂を出し花さくさま「嘉ー」「稻ー」○ーーはは苗の好美なる貌。詩、大雅「禾役ーー」

穢 十三畫

ヲイ　隊

しげし、さかんなり、華木の稠く多き貌「繁ー」「妖ー」「鮮ー」詩、召南「何彼ーー矣」

【穢李】ワイリ　しげくさかんなるすもも。詩、召南「何彼穢矣、華如二桃李一」

【穢綠】ワイリョク　しげくみどり。李賀詩「千山ーー生二雲外一」

穣 十四畫

ジョウ　養

○とりいれ、禾を收む、收穫する。穀を種うるを稼、收むるをーといふ。書、盤庚「若農服田力ー乃亦有レ秋」○とりいれる禾穀。○農事、耕作「稼ー」「農ー」「舊ー」○をしむ(愛吝)＝嗇。

穩 十四畫

オン　阮

おだやか、定まる、やすらか(安)「安ー」「平ー」「ー當」

【穩穩】オンオン　やすらかなる貌。歐復古文「平平ーー、爲ニ公爲一レ卿」

【穩健】オンケン　おだやかで、しっかりとしてゐる。唐國史補「劉晏馬取ニーー、不レ擇二毛色一」

【穩當】オントウ　おだやかにしてよくあてはまる。唐庚文錄「此波瀾二起澤一、波字未ニーー一」

【穩婆】オンバ　とりあげばば(産婆)正昔「鄰曰二生婆一、正曰ニーー一」＝收生婆・穩婆。

【穩便】オンビン　おだやか、かどだたず。長孫無忌、「免服期「臨」事施行、實不ニーー一」

【穫】クヮク　藥　陌
○かる（刈穀）禾莖を刈る「刈ー」「芸ー」「秋ー」○かりいれ「收ー」○隕ーは困迫して志を失ふ貌。禮、儒行「不隕ニー于貧賤」
【種稚】タクチ いねを刈りいる。詩經「八月剝レ棗、十月ーレ稻、爲レ酒、以助ニ其養老之具一」＝刈稻。

【穡】セイ　寘
○かりたるいね。○禾の鋪きて未だ束ねざる者。詩、小雅「此有ニ不斂ー一」

【穎】穎（禾部九畫）の俗字。

【穉】タイ　灰　頴に通ず
○つむじかぜ（暴風）詩、小雅「維風及ー」○かぶろ、禿する貌。○すたら、おとろふ（頽廢）「ー陵」

十五畫

【穠】ハ　歌
ーは稆。又、稻の搖動する貌。方岳詩「轉レ頭ー稜秋風黃」＝飛蓬。

【穢】ヘヮ　隊
くさぎる（耘）田の草を除く。

十七畫

【穣】穣に同じ。

【穣】ジャウ　陽　養
○わら（禾莖）○ゆたか（豐）穀物がよくみのりて收穫多し「豐ー」○ーは衆き貌。○さかんなり（盛）○さねわた。正字通「凡果實中之子、曰ー」＝種。○田の爲めに稻を求める。史、滑稽傳「道傍有ニ田者」註「爲ニ田求ニ稻ー一」
【穣歲】ジャウサイ みのりのよき年。＝豐年。食貨志「國實於ーー」＝豐年。
【穣穣】ジャウジャウ ○禾實のゆたかにみのる貌。史、淳于髡傳「五穀蕃熟、ーー滿レ家」○すべて物の衆き貌。詩、周頌「降レ福ーー」

穴部

【穴】ケツ　屑
○あな（孔）「孔ー」「巖ー」むろ（土中の室）易、繫辭「上古ー居而野處」○すきま、うつろ（空孔）貫通せるあな。○いはや（窟）「窟ー」○かたはら（側）○うがつ（穿）○貧家にて人身要害の處の稱。○つかあな、墓のあな「墓ー」詩、王風「死則同ー」○闕缺けて具はらざる所。
【穴窓】ケツカウ あなぐら。
【穴居】ケツキョ あなずまひ。字解參看。
【穴蟻】ケツギ あな、ほら。宋史、楊佐傳「以ニ木盤ー貯レ水、ーー置レ之如ニ雨滴一然、謂ニ之雨盤一」
【穴隙】ケツゲキ 戶牖に穴をあけて男女が垣間見る、淫奔の惡。孟、滕文公「不レ待ニ父母之命、媒妁之言一、ーー相窺」
【穴處】ケツショ 穴居に同じ。漢書、賈捐之傳「巢居知レ風、ーー知レ雨」謝靈運、山居賦「古巢居ーー曰ニ巖栖一、棟宇居レ山曰ニ山居一」

一畫

【穴】ツ　物
○手にて穴を探る。＝抶。○俗に盜の牆に穴をあけるにいふ。

二畫

【空】ケウ　送
○きはむ、物事を最後のところまできはめつくす「考ー」「研ー」「博ー」「詳ー」「精ー」「講ー」「畢ー」○きはめつくす（窮盡）おしたづねる（推尋）「推ー」「探ー」○はかる（謀）○をはる（竟）きはまる（極）○ーはにくみて相したしまざる貌。詩、唐風「自ニ我人ーー」（自は用）
【究竟】キウキャウ つまるところ。又、つまり。後漢書、馬融傳「流寓偏照、殫レ變極レ趣、上下ーー」＝究極。畢竟。窮竟。
【究察】キウサツ 十分にしらべあきらかにす。吳志「臣下所レ當ニ詳審一明朝所レ當ーー」＝究審。
【究悉】キウシツ きはめつくす。又、きはまりつく。北史、薛聰傳「前言往行、多レ所ニーー一」
【究審】キウシン 十分にしらべる。審は詳なり、熟究なり。隋書、楊汪傳「煬帝時ニ親省ニ囚徒一、時擊囚二百餘人、汪通宵ーー、詰朝而奏、曲ニ盡事情一、無ニ遺誤一、帝甚異レ之」＝研審・勘審。
【究明】キウメイ きはめ明かにす。

同訓異義 穴・窮・極の別は窮（穴部十畫）の條を見よ。

【究覧】キュウ　十分にきはめ見る。後漢書、馮緄伝「是皆将軍所ニ一一也」晉書、孝友伝「王延、博則備覧、夜則讀書、遂ニ一ニ経史ニ特通ニ大義ニ」【究理】キュウ　事物の理をきはめる。舊唐書、職官志「一一精密」‖窮理。

【穹】キュウ　東　三　畫

〇たかし(高)〇大いなり。〇そら、あめ、おほぞら(天空)「蒼ー」「皇ー」「玄ー」「高ー」「秋ー」〇きはむ。きはまる(窮)詩、國風「一窒熏鼠」〇ゆみがた(弓狀)「ー窿」〇ー窮は香草の名。‖芎藭。

【穹昊】キュウコウ　おほぞら、天をいふ。晉書、孝武帝紀「静ニ河海於既清ニ、補ニ一ー於已棄ニ」

【穹蒼】キュウソウ　おほぞら、天をいふ。范成大詩「聖人坐ニ明堂ニ、洪禧等ニ一ー」

【穹谷】キュウコク　深き谷。班固賦「其陽則崇山隆ー、幽林ー一」

【穹蒼】キュウソウ　おほぞら、形は弓狀にして色は青きが故。詩、大雅「靡ニ有ニ旻力以念ニ一ー」‖蒼穹・蒼天。

【穹天】キュウテン　おほぞら。陸雲賦「儀ニ一ー而承ニ規」

【穹窿】キュウリュウ　次條に同じ。太玄經「天一面周ニ平下」

【穹窿】キュウリュウ　〇高くゆみなりに曲る、隆一に隆に作る。張衡、西京賦「閣道一一、屬ニ長樂與ニ明光ニ」〇天をいふ。

【穹靈】キュウレイ　上天の靈。北史、孫明帝紀「一一降ニ祐、臨ニ此衆業」

【穹廬】キュウロ　匈奴傳「匈奴父子同ニ一ー而臥」‖窮廬。

【空】㊀コウ　㊁コウ・クウ　㊂コウ・クウ　通音クウ　支　虞　東

㊀そら、おほぞら「太ー」「天ー」「虚ー」「碧ー」「晴ー」〇むなし(虚)「一砲」からである。詩、大雅「杼柚其ー」(杼柚は織具)〇ひろし、大いなり。〇つく(盡)からになる。管子「倉廩實而囹圄ー」〇無智、愚かなる貌。論、子罕「一一如也」(また悾に作る)〇物がなくなりてさびしくなる。李白詩「蕭條徐泗ー」〇とりとめなし。〇むなしく、いたづらに。〇そらごと、實在せず「一論」㊂うろ、あな(穴)史、大宛國傳「張騫鑿ー」‖孔。㊂むなし(虚)まづし(貧乏)論、先進「回也其庶乎、屢ー〇きはむ(窮)〇かく(缺)〇とほる(通)〇うがつ(穿)

【空空】クウクウ　空・虚・晴〇空は有の反なり、からと譯す、空手・空林・空山・酒樽空と用ふ。〇虚は實また盈の反なり、中に物なきなり、虚心・虚舟と用ふ。莊子「虚而往、實而歸」〇晴はひろくして空しきなり、晴野・遠晴と用ふ、また晴日は多くの日を空しくするなり、職官は其の官職を空しくするなり。

【空位】クウイ　〇用ひずしてあけてある場所。〇あきたる地位、位のみありて人の缺けたるにいふ。〇帝位があいてゐる。

【空營】クウエイ　人なき軍營。左傳、注「烏烏得ニ一ー、故樂也」

【空耗】クウコウ　空しく乏し。宋史、孫甫傳「宿兵以來、國用ー一」‖虚耗・虚耗。

【空洩】クウセツ　からぼり。‖空壕。

【空函】クウカン　からばこ。なかに手紙のなきふみばこ。晉書、殷浩傳「寄逸ニ一ー」

【空閑】クウカン　〇すきま。〇天地の間。〇暫學にて四方・上下・長短・遠近等の生ずる根本概念。時間の對。單に空ともいふ。

【空閑美】カンビ　檜畫彫刻等に於ける美。

【空氣】クウキ　地球を包圍する氣。

【空虚】クウキョ　〇むなし。史、汲鄭傳「安ー國富」民、使ニ囹圄ー一」〇そら。歐陽修詩「彩雲滿ニ一ー」‖虚空。

【空空】クウクウ　〇おろかなる貌、無識の貌。論、子罕「有ニ鄙夫ー問ニ於我ー一如也」〇佛字宙の事物皆因緣の所生にて實體なき理を悟りて、心に執著なき義。孔稚圭、北山移文「誤ニ一ー於釋部ー、累ニ支許於道流ー」

【空懷】クウカイ　むなしきおもひ。文賦「揔ニ一ー而自悼」

【空谿】クウケイ　ひろびろとしてむなしき谿は陰。孔武仲詩「眼中ー一到ニ溟冥ー」

【空華】クウゲ　佛　かすみたる日にて望めば空中にちらちらと花あるが如く見ゆ、煩惱の爲めに種種の妄想を生ずるに喩ふ。圓覺伽藍藏章「用ニ此思惟ー、辨ニ於佛境ー、猶如ニ一ー復結ニ空果ー」

【空閑】クウカン　ひとりねのねや。白居易詩「一ー人獨愁」‖空房。

【空察】クウサツ　〇すきま、あな(穀はあな)〇耳目鼻口(韓非、喩老)

【空隙】クウゲキ　すきま。‖縫隙。

【空穴】クウケツ　からあなの白居易詩「一一易ニ來ー風」‖空洞。

【空端】クウタン　むなしくつく。荀悦、漢紀論「百姓ー一、萬民疲弊」

【空言】クウゲン　〇うそ、そらごと。史、商相如傳「乘ニ以ニ一ー一求ニ璧」‖虚言・虚語。〇實行又實力の伴はざる議論文章「史、太史公自序」

【空弦】クウゲン　箭がつきて射る能はざる弦。弓のみありて矢なし。咎は尋弓(=尋常馬遷、報二任安一書「更張二一弦一、再二白刃一、北嚮爭死敵」=空拳。

【空拳】クウケン　○すて。からて。北齊書、神武帝紀「魏帝敕曰、縦無二四馬攅一轡、猶欲下曾二一一而爭之上=徒手・空手。○前條に同じ。拳・拳二字、古、通用す(漢書、李陵傳)

【空谷足音】クウコクノソクオン　さびしき山中に人の來りし音、非常に珍らしき事に喩ふ。莊、徐無鬼「夫逃二空谷一者、聞二人之足音跫然而喜矣、況乎見二其弟親戚之謦欬一乎」

【空劫】クウコウ　㊀世界の起滅に四劫(成・住・壞・空)ある、其の一、萬物皆空に歸し、大暗黒となる時。大藏法數「四、一者、謂二世界空盡也、有二二十小劫一壞劫之後(中略)無二一切一夜日月、唯大黒暗、名爲二一一空一也」

【空想】クウソウ　○實行の出來ざるかんがへ。○わだかまりなきかんがへ。唐紀二南師一乘章「跪二拜慶覲一結二一一」

【空山】クウザン　○人の居らざる靜かなる山。華陽國志「獨二坐一一空山一、故レ虎自衛」○しづかなる山。王維詩「一一不レ見レ人、但聞二人語響一」

【空室】クウシツ　誰も居らぬへや。=空房。

【空車】クウシャ　からぐるま。家語、始誅「大三尺之限、一一不レ能レ登者何哉、蛟故也」

【空寂】クウジャク　さびしき。李俊民詩「一庵一一地、香火讀二楞嚴一」=寂寞。

【空手】クウシュ　すて。漢書、武五子傳「一一搏二熊羆猛獸一」=徒手。

【空翠】クウスイ　そらに見えたる山のみどり。杜甫詩「石苔滑空几杖、一一撲二肌膚一」

【空青】クウセイ　○おほぞら。杜甫詩「江雲飄二素練一、石壁斷二一一一一」○藥の名、銅鑛中に産す、銅青石の類。

【空前絶後】クウゼンゼツゴ　是れまでにも又これから後にも無し、非常にめづらしきにいふ。宣和畫譜「顧空於前、張絶於後、而道子乃兼二有之一」(顧は愷之、張は僧繇、道子は吳道子)

【空地】クウチ　あき地、現在使用せざる地面(後漢書、張禹傳)

【空中樓閣】クウチュウロウカク　○空中に築きたる樓閣、疑氣樓の夢溪筆談「登州四面臨レ海、春夏時、遙見二空際有二城市樓臺之狀一、土人謂二之海市一」○轉じて、虚構なる文章。

【空洞】クウドウ　○うつろ、ほらあな。○うつろにして何物もなし、度量の廣きに喩ふ。世說「王導指二周顗胸一曰、卿此中何所レ有、答曰、此中一一無レ物、但足二容一卿輩一數百人一」

【空屋】クウオク　○空閨に同じ。○人の居らざるへや。=空室。

【空砲】クウホウ　からでっぱう。

【空噸】クウトン　彈丸を込めざるでっぱう。明紀編年「一一向レ外、不レ實二鉛子一」=空砲。

【空白】クウハク　紙面の何も書きてなき所。=餘白。

【空漠】クウバク　○ひろきすなはら。蔡邕詩「胡雁長一一、猿飛響二州落一」○むなしく、ぼんやりとする。

【空乏】クウボウ　むなしくとぼし。=缺乏。

【空腹】クウフク　すきはら。本草綱目「一人飲レ酒、一人飽レ食、一人一一」

【空文】クウブン　○實益なき文章。○實行せざる法律。又は規則。

【空簿】クウボ　事實にあはざる計算簿。漢書、食貨志「與二郡縣一通レ姦、多張二一一、官益不レ實、百姓貧病」

【空明】クウメイ　月光が水に映ずるをいふ。蘇軾、前赤壁賦「擊二一一一一汾流二光一」

【空冥】クウメイ　おほぞら、天をいふ、冥は遠くしてをぐらし。張衡、題二九龍戲珠圖一詩「卷レ圃還レ君慎二封鎖一、但恐破レ壁飛二一一一」

【空濛】クウモウ　こまめ降りてうすぐらき貌。張衡賦「朝雨一一如二霧縠一」

【空門】クウモン　佛門をいふ。白居易詩「自二從苦厚一一一法、消盡平生種種心」

【空王】クウオウ　空王參看。

【空論】クウロン　㊀佛の教理、佛が世界の萬物を一切皆空なりと說きたる故(圓覺經)

【空論】クウロン　實行の出來ざる言論、よりどころなき議論。=空談。

【空殘】クウザン　よりどころのなきりくつ。

【空巢落二燕泥一】クウソウラクエンデイ　隋の薛道衡の詩の句。隋唐嘉話「煬帝善レ屬レ文、而不レ欲二人出一二其右一、司隸薛道衡山レ是得レ罪、後因レ事誅レ之、曰、更能作二空梁落二燕泥一否」

【空谷】クウコク　○さびしき山中。○空虚なる心。

【空虚】クウキョ　○むなしくうつろ。○實なし。

【空閨】クウケイ　ねやの内。

【空曠】クウコウ　ひろくてさびしき。

【空濶】クウカツ　ひろくてさびしき。

【空漠】クウバク　ひろくてさびしき。

【空寥】クウリョウ　ひろくてさびしき。

【空靈】クウレイ　○ひろくてさびしき。○心のさとりて俗念なきをいふ。

【空名】クウメイ　○實なき名。○實なき文章。

【空文】クウブン　○實なき名。○實なき文章。

【空理】クウリ　○實なき理。○實なき文章。

【空論】クウロン　○實なき理。○實なき文章。

【空疎】クウソ　○實なき理。○實なき文章。

【空虚】クウキョ　○實なき理。○實なき文章。

【空洞】クウドウ　○實なき理。○實なき文章。

【空濛】クウモウ　○實なき理。○實なき文章。

【空明】クウメイ　○實なき理。○實なき文章。

【空冥】クウメイ　○實なき理。○實なき文章。

【空門】クウモン　○實なき理。○實なき文章。

【空王】クウオウ　○實なき理。○實なき文章。

【空論】クウロン　○實なき理。○實なき文章。

【空論】クウロン　○實なき理。○實なき文章。

【空殘】クウザン　○實なき理。○實なき文章。

【空巢落二燕泥一】クウソウラクエンデイ　○實なき理。○實なき文章。

【空谷】クウコク　○實なき理。○實なき文章。

【空虚】クウキョ　○實なき理。○實なき文章。

【空閨】クウケイ　○實なき理。○實なき文章。

【空曠】クウコウ　○實なき理。○實なき文章。

【空濶】クウカツ　○實なき理。○實なき文章。

【空寥】クウリョウ　○實なき理。○實なき文章。

【空靈】クウレイ　○實なき理。○實なき文章。

四畫

【穴】

(一)エツ　(二)エチ　入聲　屑

㊀ふかし(深)○くらし、かすか(幽)○しづか。○隱れてくらき處。○室にてかこみたる室、複室。㊁深き竅穴の聲。莊、齊物「一者咬者」

【穿】

セイ　敬　同じ

おとしあな、地を穿ちて陷を陷るもの「陷一」「檻一」「深一」「坎一」

【穿陷】セイカン　おとしあな。=陷穿・陷阱。

【穿】㊀セン 先 ㊁セン 銑　㊀うがつ（擊）ほり開く。漢書、溝洫志「ー�田」○きる（鑽）○とほす（通）ひらく。○あな（孔穴）○あなをあく、破りて穴をあける。穴があく。後漢書、耿弇傳「衣屨ー決」㊁うがつ、つらぬく、つきとほす「貫ー」○十分にきはめる、徹底する。

【穿鑿】セン穴の無き處に穴をうがつ、強ひて解釋を下してこじつけるにいふ。宋史、王安石傳「又作字說、多ニーー」

【穿山甲】センザンカフ いしゐし、熱地に産する獸の名、全身角質の甲鱗を以ておほはれ、常に穴居して蟻を食ふ、其の甲鱗を藥用とす。＝鱗鯉。

【穿試】シセン 針の目に絲をとほす。輿地志「齊武帝起二屑地觀一、七月七日、宮人多穿ニ之ーー一、世謂ニ之ーー一樓一」＝穿針。

【穿ノ陸】センノロク かべに穴をあける。西京雜記「匡衡好レ學、貧而無レ燭、鄰舍有レ燭、而不ニ逮及一ーレー引ニ其光一以レ書映レ光而讀」

【穿楊】センヤウ 善く射るにいふ。戰國策「養由基善レ射、去ニ楊葉二百步一而射レ之、百發百中」

【穿窬】センユ 壁をうがち牆をこえる小盜、こそどろぼう。論、陽貨「色厲而內荏、譬ニ諸小人一其猶ニーー一之與」

【窀】チュン 眞　○ながし（長）あつし（厚）長夜の義。○長く埋める、墓穴に棺を下す。○つかあな（壙穴・墓穴）

【窀夢】チュンボウ 墓穴に棺を下す。又墓穴。左、襄十三「ーーー之事」

【突】トツ 月　○つく「馳ー」「排ー」「撞ー」○つきいづ、前につき出す「ー出」○ふれる（觸）「唐ー」「衝ー」「觸ー」○しのぐ（凌）○をかす（犯）○ほろ、うがつ（穿）左、襄二五「背ー陳城」○かぶろ（禿）○あらうま（惡馬）「騏ー」○けむりだし「煙ー」「曲ー」「竈ー」○にはか（猝）だしぬけ「ー如」○ー厥は支那北方の人種、匈奴の別種、今の土耳其トルコ種。

【突】トツ 同訓異字 突・衝・撞・搥・撞・春・搗・舂の別は衝（行部九畫）の條を見よ。

【突起】トツキ 高くつきでる。

【突騎】トツキ 精銳にして敵軍につき入る騎兵。漢書、晁錯傳「平原易地、輕車ーー、則匈奴之來、易ニ擣亂一也」

【突進】トツシン 勢するどくとほりすぎる。

【突貫】トツクワン ○つきつらぬく。○一氣につき込み進む。

【突隊】トツタイ けむりだしのすきま。淮南、人間「百尋之堤、以ニーー之煙一潰」

【突陣】トツヂン 敵陣につきいりて撃つ。唐書、劉武周傳「以ニ精騎ーーー破レ之」

【突兀】トツコツ 高くぬきんでて立つ。峰巒時「ーー便高三百尺」兀一に扤に作る。木華、海賦「震海之鯨、突扤遨遊」

【突怒】トツド 突然に同じ。

【突進】トツシン 直ちにするどくつき進む。＝突前。

【突出】トツシュツ つきいづ。唐書、則天后傳「新興有ー山、因ー震ーー」

【突如】トツジョ にはかに、不意に。＝突如。「ーー其來如」

【突前】トツゼン たちにつき進む。蜀志「超、負ニ其多力一、陰欲ニーー提ニ曹公一」

【突然】トツゼン にはかに、不意に。＝突如。

【突梯】トツテイ 滑達にしてかどばらぬ貌、俗に隨ひて逆らはず、推し移る義。莊辭、漁父「將ーー滑稽、如レ流如レ韋、以潔楹乎」

【突隄】トツテイ 海につきだして築きたるどて。＝突堤。

【突擊優悉】トツゲキアッシ 石の怒れるが如く、傲れるが如き狀の形容。柳宗元、鈷鉧潭西小邱記「其石之ーーー、負レ土而爭爲ニ奇狀一者、殆不レ可レ數」

【突禿】トツトク 頭髮の短きと、はげたると。荀、非相「ーー長左」

【突入】トツニフ つきいる。後漢書、度遼傳「率ニ走卒一ーニ其家一、捕レ之」

【突破】トツパ つきやぶる。

【突飛】トツピ 圖とび放れてかはつてゐる。

五畫

【窓】㊀ア 麻 ㊁ワ 禡 又、廠に作る　㊀くぼむ（凹）○ひくし（低下）くぼみて低し「坳ー」汙に通す。○滿たざる貌「窊ー」㊁くぼめる地、くぼみ（下地）

【窊隆】アリュウ たかひく（高下）ある貌。嶋賦、長笛賦「波瀾鱗淪、ーー流戾」＝隆窳。

【窗】㊀エウ ㊁アウ・エウ 巧 篠 ㊂ソウ・メン 先 看　㊀ふかきめ（深目）○深く遠き貌、ふかし、とほし「窗ー」「杳ー」㊁ー窕アウは曲れる貌。㊂ー然ソウはなけきてぼんやりとする貌。＝悵然。

【窅窅】エウ　○深く遠き貌。道徳指帰論「猶生二於冥冥一、窈生於―々一」○深き貌。韓愈詩「―々深堅、其堵甚完」

【窅然】エウ　おくぶかき貌。秦観詩「―一房櫳深」

【窅冥】エウ　深遠なる貌。水経注「石壁―々、仰視二巌石一、松樹鬱鬱蒼蒼、如レ在二雲中一」王安石詩「一路紫苔通二―々一」

【窅然】ヨウ　なげきてぼんやりする貌。荘、逍遙遊「―喪二其天下一焉」

【窈】エウ　㊥

○ふかし(深)おくぶかし。○しづか(静)深く遠し。○うるはし(美)○うるはしきこころ(美心)○よし(好)○のびやか(舒)

【窈窕】エウテウ　おくぶかく、かすかなる貌。江淹詩「――潤湘空、翠洲遊無レ極」

【窈冥】エウ　深く静かなる貌。荘、在宥「至道之精、―々冥冥」‖窅窅・深窈。

【窈糾】エウキウ　女の姿の、のびのびとしてしなやかなる貌。詩、陳風「佼人僚兮、舒二―一兮」

【窈然】ヨウ　深くして暗き貌。列、力命「―無レ際、天道自合」‖窈冥・窅然・窅窅。

【窈窕】エウ　○婦人の容儀のしとやかなる貌。詩、周南「―淑女、君子好逑」‖幽閑。○男子のしとやかなるにも用ふ。古詩「云有二第三郎一、―一世無レ雙」○なまめきたる貌。後漢書、列女傳「入則亂髪壊レ形、出則―作レ態」‖妖冶。○山水宮殿などの奥深き貌。鄭去寒辞「既―以寄レ室」‖添知之詩「―一九重門」

【窈冥章】ヨウメイシヤウ　詩経の陳風、月出篇の第一章をいふ。曰く「月出皎兮佼人僚兮、舒二窈糾一兮、勞心悄兮」薛軾、前赤壁賦「誦二明月之詩一、歌二――一」

【窈窈】エウ　深遠なる貌。盧照隣賦「重門之―一」‖窅窈。

【窈渺】ベウ　ひろびろとしたる貌。元好問詩「―一朱絃寂寞心、得レ詩何書得二黄金一」‖窅眇。

【窈冥】エイ　○幽暗なる貌。史記「大風從二西北一面起、折レ木發レ屋、揚二沙石一、―一晝晦」○事理の深遠なる貌。淮南子「深微―一、難二以レ知論一」

【窈】カウ　㊦

あなぐら。‖窖。

【窅】㊀ケウ　㊁エウ　㊥㊦

㊀―窕　はしづか(静)又、深く遠し。張衡、西京賦「望―窕以徑廷」㊁窈(穴部五畫)に同じ。

【窄】サク　㊥

○せまし(狭)寛又廣の對「短―」「險―」杜甫詩「如レ覺二天地―一」○せまる(迫)(陥)

【窄狭】サクケフ　窄・狭・褊・隘の別は狭(犬部七畫)の條を見よ。

【窄韻】サクイン　文字の少き韻礎、文字の多き韻を寛韻といふの對。六一詩話「―一難二獨用一」‖險韻。

【窄袖】サクシウ　つつそで、つつっぽ。又、其の衣服。

【窄小】サクセウ　せまくちひさし。‖狭小。

【窗】㊀トウ　㊁チウ　㊥㊦

㊀物の穴の中にある貌。㊁人名、不―は周の先祖。○いはや(窟)呉越春秋「公子光伏甲于―室中」又あな(穴)

【窘】ヘン　㊥㊦

○はぶむる(葬)棺を墓穴に下して埋める「埋―」「改―」「耐―」「客―」○つかあな(墓穴・壙穴)「故―」說苑「修棺掘作二窘一」

六畫

【窖】㊀チウ　㊁チウ　㊥㊦

㊀ふさぐ、ふさがる(塞)○とどまる(止)○通らぬ「埋―」つまる(滞)「―息」○元素の名、空氣を構成する氣體「―素」㊁

【窒】サク　㊥

○せまし(狭)寛又廣の對「短―」「險―」杜甫詩「如レ覺二天地―一」○せまる(迫)(陥)

【窒狭】サクケフ　窄・狭・褊・隘の別は狭(犬部七畫)の條を見よ。

【窓】窗(穴部七畫)の俗字。

【窄】ひくし(卑下)

【窕】㊀テウ　㊁テウ　㊥㊦

㊀うつくしく、よし(美好)又、おくゆかし、しとやか「窈―」○ふかし(深)○しづか(閑静)○ほそし(細)○ものさびし、蕭條の條に同じ。○杳―は遙かに遠き貌。㊁うつくし、しとやか。㊂かろがろし。左、成十六「楚師輕―」‖佻。㊃ふかし、とほし。‖窈。

【窖】㊀チウ　㊁チウ　㊥㊦

㊀ふさぐ、ふさがる(塞)○とどまる(止)○通らぬ「埋―」つまる(滞)「―息」○元素の名、空氣を構成する氣體「―素」㊁

ふさぐ、つむ。○―皇（クワウ）は宗廟の前門。左、宣十四「雁及于―皇」

【窒礙】（グワイ）窒・塞・杜・壅・梗・礙の別は塞（十部十畫）の條を見よ。

【窒礙】（ガイ）ふさがりさまたぐ。金史、移剌諧傳「遇其―、略其筆辭」‖障礙。

【窒息】（ソク）いきがつまる。

【窒欲】（チツヨク）私欲をふさぐ。易、損、卦「山下有ㇾ澤、損、君子以懲ㇾ忿―ㇾ慾」

【窒扶斯】（チフス）病名、發炎の義「腦――」「發疹――」

七畫

【窓】（サウ）（文）

あなぐら。漢書、蘇武傳「幽武置ニ大―中ニ」

【窄】（サク）（看）

―窓（サウ）は開き達する貌。潘岳賦「幽谷窓以―窄」

【窘】（㊀キン）（㊁タン）（軫）（阮）

㊀くるしむ（困）「困―」○きはまる。○たしなむ。○きはむ。○せまる（窮迫）つまる、ゆきつまりこまる「窮―」「艱―」㊁きびし（急）

【窘窮】（キンキウ）くるしみきはまる。‖窮窘。

【窘壁】（キンヘキ）くるしみちぢまる。五代史、閻寶傳「今梁兵―ㇾ、其勢可ㇾ破、勝而驕怠、其情可ㇾ知、此不ㇾ可ㇾ失之時也」‖困窘・迫窘。

【窘束】（キンソク）ちぢかまりて自由にならぬ。文章軌範、侯字集小序「筆端不ニ―ㇾ」

【窘迫】（キンパク）壓にせまりくるしめられる。晉書、劉琨傳「在ニ晉陽ニ、爲ニ胡騎所ニ圍、城中―ㇾ」

【窘歩】（キンポ）○いそがしくあゆむ。離騷「夫惟捷徑以―ㇾ」‖急歩。○あゆむになやみくるしむ。顏延之詩「―憚ニ先迷ニ」

【窘厄】（キンヤク）さいなん。‖窘困・艱窘。

【窗】（㊀サウ・ソウ）（江）（㊁ソウ）（東）

㊀まど、牆に在るを牖といひ、屋に在るを―といふ「紗―」「深―」「綺―」「簾―」○あきらか。㊁あな（孔）○けむりだし（通突煙突）

【窗牖】（サウイウ）まど。字解參看。江淹詩「朱霞入ニ―ㇾ、曙靈照ニ空隙ニ」

【窗櫺】（サウレイ）まどのすきま。陸游詩「野藤補風入ニ―ㇾ」

【窗前】（サウゼン）まどのまへ。杜荀鶴詩「尋常一樣―月、幾有ニ離花一便不ㇾ同」程氏遺書「周茂叔―草不ニ除去ニ、問ㇾ之、云、與ニ自家意思ㇾ一般」

【窗含西嶺千秋雪】（サウガンセイレイセンシウノユキ）唐の杜甫の七言絶句の句。曰く「兩個黃鸝鳴ニ翠柳ニ、一行白鷺上ニ青天ニ、――、門泊東吳萬里船」

八畫

【窠】（クワ）（歌）

○す（栖）鳥のす、穴中に在るを巢、樹上に在るを巢といふ。○あな、くぼき所。蘇軾詩「忽見ニ蜂窠苔ニ」

【窠臼】（クワキウ）鳥のす、臼は形の似たるによりていふ。‖臼窠。

【窟】（クヮツ・キョク）（物）（陌）

―然（ゼン）は遠らふ風のこゑ（壯、天下）

【窟】（コツ）（月）（通音クツ）

○いはや、あな（孔穴）「石―」「深―」「巖―」「土―」むろ、あなぐら（窖）禮、禮運「冬則居ニ營―ㇾ」地を掘りて室をつくる、ほら「洞―」○す、獸・蟲などのすむ穴。戰國策「狡兔有ニ三―ㇾ」○物のあつまる處「巢―」郭璞詩「京華遊俠―」○月―は月の生ずる所。

【窟窖】（クツカウ）地中のあな。

【窟居】（クツキョ）いはやずまひ。晉玄、張忠傳「數ㇾ過ニ窟室ニ弟子亦以ニ―ㇾ」

【窟穴】（クツケツ）あな。元稹詩「巴蛇蟠ニ―ㇾ、穴下有ニ巢蜂ニ」

【窟室】（クツシツ）地中のむろ、地を掘りてつくりし（やの左、裏三十「伯有晞ㇾ酒、爲ニ―ㇾ夜飲」

【窣】（ソツ）（月）

○穴の中より卒（ソツ）に出づ。○効―は行くこと緩（ユル）かなる貌。司馬相如、子虛賦「蜚遝効―上ニ金隄ニ」○―窸―は安からざるこゑの形容。

【窣堵波】（ソトハ）卒都婆（二七三頁梵語）に同じ。

【窖】（タン）（感）

○坎（カン）の底にある小坎「坎―」、○旁より入る坎。

九畫

【窻】　窗（穴部七畫）に同じ。

【窶】㊀ユ ㊁トウ 虞 尤

㊀くぐりど、門傍のくぐりど、いぬくぐり。論、儒行「華門圭ー」㊁うがつ（穿）猫に穴をあける。論、陽貨「其猶穿ー之盜也與」一解に牆を踰ゆえる。

【窩】ヲ 歌

○むろ、あなぐら（窟穴）○穴ずまひ（穴居）○かくす（藏）盗賊又は賊物をかくしておく所「ー家」○別荘などの義。宇彙「凡別墅獨處皆名ー、宋邵雍有ニ安樂ー一」

【窪】ワ 麻 通音ア

○くぼし、くぼむ（汙）低下の地「低ー」「坳ー」「卑ー」「踣ー」‖深。○ふかし（深）

十 畫

【窯】エウ 蕭 俗字窰は

○かま。瓦、又は陶器を焼くかま。‖窰。○囲碁家を一子といひ、妓を一姐という。

【窖】窰（前條）に同じ。

【窮】キュウ 東 もと窮に作る

○きはむ。きはまる（極）つまる。○くるしむ（窘）韓詩外傳「人ー則詐」こまる（困）論、堯曰「四海困ー」まづし（貧）又、其の人。周禮、大司徒「振ー」（振は救）くるしめる、こまらせる。戦國秦策「公孫衍欲ー」張儀」○つく、つくす（盡）とどまる（止）○せまる（急）○をふ。をはる（竟）書、微子之命「永世無ー」○ふさぐ。ふさがる（塞）孟、公孫丑「遁辭知ニ其所ー」○立身出世せざる義。達の反對。

同訓異字 窮・極・究○窮は行きつまる意、をはる、盡ッく。稗編「史記上起ニ黄帝ー下窮ニ漢武ー」轉じて困窮と運用す。○極は至極の義、行き尽きて、最早その先なきをいふ。○究は推尋也、覓也、深也、窮盡也と註す、考究・研究と運用す、困窮の義は無し。

【窮陰】キュウイン 冬の末。白居易詩「芳節變ニー一、朝光成ニ夕照一」

【窮裔】キュウエイ はるかの地、裔は衣服のすそ、故に喩ふ。韓愈、柳子厚墓誌銘「故卒死ニ於ー一」

【窮猿】キュウエン 危難にくるしめるさま。

【窮境】キュウキャウ 窮地に同じ。

【窮極】キュウキョク きはまり、はて。曹植詩「天地無ニー一」

【窮苦】キュウク なんぎ、くるしみ。王維詩「一生自ー一」‖窮困。

【窮屈】キュウクツ 圓自由がきかぬ、きかね。

【窮寒】キュウカン 困窮してなやむ。蘇軾詩「詩人例ー一、秀句出ニ寒餓一」

【窮涸】キュウコ 魚が水に離れて苦しむ。韓愈、應ニ科目ー時與ニ人書「ー一不レ能ニ自救ニ乎水一」

【窮寇勿レ追】キュウコウハツイ 窮したる寇を追ふ時は、却りて反噬に遇ふ、故にいふ。孫子、軍爭「歸師勿レ遏、――」

【窮谷】キュウコク おくぶかき谷。

【窮困】キュウコン くるしむ。左傳「民知ニー一、而愛ニ恕于楚一」‖困窮。

【窮相】キュウサウ 貧乏なる骨相。笑話錄「貧ー一女子也」‖貧相。

【窮策】キュウサク くるしまぎれにあみたる方法。

【窮愁】キュウシュウ くるしくして、しんぱいする。史、李陵君傳「處卿非ニー一、亦不レ能ニ著レ書以自見ニ於後世ニ云」

【窮而後工】キュウジコウ 詩人は窮して後、詩に巧になる義。歐陽修、梅聖俞詩集序「愈窮則愈工、然則非ニ詩之能窮ニ人、殆窮者而後工也」

【窮當益堅】キュウタウエキケン 男子は困窮しても、益志を堅固にすべし。後漢書、馬援傳「常謂ニ賓客ー曰、丈夫爲レ志、――、老當ニ益壯ー一」

【窮通】キュウツウ 窮地に同じ。

【窮途】キュウト 窮したる猿は林を揺ばすして逃ぐ。人の窮したる時は、官を揺ばすして仕ふるに喩ふ。晉書「段揚州誄ニ李充ー一曰、君能屈ニ志百里ー一否、答曰、――、豈暇レ揺レ木」

【窮巖】キュウガン おくぶかき處のいはほ。晉書、杜京產傳「幕ニ宇ー一、擇ニ芝幽澗ー一」

【窮奇】キュウキ ○堯の時の四凶の一、其の行ふところ窮して、其の好むところ奇なる義、共工をいふ。左、文十八「少皞氏有ニ不才子ー一、毀ニ信廢レ忠、崇ニ飾惡言ー一、天下之民謂ニ之ー一ー一」○天神の名。淮南、地形「ー一廣莫風之所レ生也」○四北の地に在る怪獣、善人を害し悪人を喜ぶといふ（神異經）

【窮鬼】キュウキ びんぼうがみ。韓愈、送窮文「三揖ニー一、而告レ之」

【窮匱】キュウキ 窮乏に同じ。左傳「稽聖氏有ニ不才子ー一、不レ分ニ孤寡ー一、恤ニー一ー一」‖乏匱・困匱。

【窮究】キュウキュウ きはめつくす。後漢書、楊震傳「少好レ學（中略）明經博覽、無レ不ニー一」‖討究。

【窮寮】キュウリョウ 貧だしくくるしむ。史、游俠傳序「故士ー一而得ニ委レ命」‖窮窮・困窮。

【窮竟】キュウキョウ ○きはめつくす。史、張湯傳「ー一ニ其事」○つまり。

【窮理】キュウリ 事理をきはめたづねる。法苑珠林「釋道、一ニ一理性、心眼洞明」

【窮寒】キュウカン 十分にしらべる。北齊書、蘇瓊傳「更令ニ一一ニ」＝究審。

【窮極】キュウキョク きはめつくす。西京雜記「一ニ一雕麗」

【窮狀】キュウジョウ くるしみてゐるありさま。

【窮書生】キュウショセイ 貧乏書生。雜纂三續「必不レ得、——乞二富家婚一」＝窮措大。

【窮泉】キュウセン 泉下の我。潘安仁文「撃ニ一一号朽壌一」

【窮措大】キュウソダイ まづしき書生。冷齋夜話、東坡作ニ一一詩一」＝貧士。措大（七六四頁三段）を見よ。

【窮鼠嚙レ猫】キュウソコウビョウ 死にものぐるひになれば、弱者が強者をやぶるに喩ふ。鹽鐵論、刑法「死不二再生一、——」＝困獣猶闘。

【窮餓】キュウガ まづしくしてうゑる。晉書、郝隆傳「初隠ニ在二鄉里一甚ニ一一」＝貧餒・困餒・窮餓。

【窮途】キュウト 困窮すると袋路に入ること。班彪、王命論「一一有レ命、吉凶由レ人」

【窮地】キュウチ くるしき場合。＝窮境。

【窮追】キュウツイ どこまでもおひきはめる。朱熹詩「逸賊方ニ一一」

【窮通】キュウツウ 困窮すると榮達すること。莊子「子貢曰、古之得レ道者、窮亦樂、通亦樂」＝窮達。

【窮通各有レ命】キュウツウカクアリメイ 困窮するも通達するも各天命あり。白居易、論レ友詩「——、不レ繫二才不才一」

【窮鳥入レ懐】キュウチョウフトコロニイル おひつめられたる鳥が、人の懐に入る。人の困窮して來り依る者をあはれむべき喩。顔氏家訓「——、仁人所レ憫」

【窮冬】キュウトウ ふゆのすゑ。陰暦の十二月。杜甫詩「一一急二風水一江山雲霧昏」

【窮途之哭】キュウトノコク 晉の阮籍が出遊して車の通ぜざる所に至り、痛哭して返りし故事。轉じて貧困のかなしみにいふ。王勃、滕王閣序「阮籍猖狂、嵇致二一一一」

【窮年累世】キュウネンルイセイ 己の一生より、子孫代代に至る。荀悦、崇德「人欲二夫餘財蓄積之富一也、然而——、不レ知レ足」

【窮髪】キュウハツ 北極の草を生ぜざる地。髪は草木。莊、逍遙遊「一一之北、有二溟海者一天池也」

【窮乏】キュウボウ まづし。又、其の人。漢、食貨志「轉レ穀振二貧一一一」＝困乏・貧乏・匱乏。

【窮北】キュウホク 北方の最極の地。趙壹詩「雖レ冒二一一一海雲中、屬國當時事不レ同」

【窮到レ骨】キュウトウコツ 困窮が其の極度に達するをいふ。杜甫詩「已訴徴求——、更思疲馬涙沾レ巾」

【窮民】キュウミン なんぎなる人。孟、梁惠王「老而無レ妻曰レ鰥、老而無レ夫曰レ寡、幼而無レ父、曰レ孤、老無レ子曰レ獨、此四者天下之一一而無レ告者」

【窮目】キュウモク 目の力の及ぶかぎりを盡くす。鮑照詩「一一一盡二帝州一」＝極目。

【窮厄】キュウヤク くるしむ。元倉子「一一則以レ命自寛」＝窮阨・窮阸。

【窮阨】キュウヤク 前條に同じ。

【窮老】キュウロウ 貧しきと年よりたると。杜甫詩「一一多二愁感一」

【窮朧】キュウロウ おしつまりたる臘節ち陰曆十二月の祭の日、年末のおしつまりたるにいふ。楊凌鍊詩「一一催レ年急」

【窮覽】キュウラン 十分にきはめ見る。班固、封二燕然山一銘「考レ傳驗レ圖、一ニ一其山川一」

【窮里】キュウリ 里中の極隘の處をいふ。漢書、道虞淑傳「長安少年數人、會ニ一一空舍一、謀二共劫一レ人」

【窮理】キュウリ 物事の理を探しきはめる。易、說卦「一レ一盡レ性、以至二于命一」＝盡性は天賦の性をつくしきはめる。＝究理。

【窅】ヨウ 匣 書

窅は屋の幽深なる貌。王延壽、魯靈光殿賦「窈窅一以峰嶸」

【寢】シン 侵 終

寢に過ぎはるか、とほし、ふかし、深く遠き貌。

【寢寢】シンシン 深くとほき貌。博雅「弘弘・夤夤・一一・窈窈、深也」＝窈窕・窅冥・杳冥。

【竇】トウ 送

墳（土部十書）の古字。

【竅】キョウ 嘯

〇ゆがむ、いびつになる、ひずむ、器の形正しからず。器にきずあり。史、五帝紀「器不二苦一一」〇よわし（弱）〇おこたる（惰）「昔一一」枚乘、七發「手足惰一一」

【竅桔】キョウケツ 竅は器のきず、桔は粗惡にして堅からず。荀子「械用兵革、一一不二便利一者闕」＝苦竅。

【竅惰】キョウダ なまけおこたる。商子「一一之民」＝惰竅。

【竅民】キョウミン 怠惰なるたみ。新書「夫淮南一一貧鄉也」

十一畫

【竊】セツ 屑

〇うかがふ、ひそかに見る（窺

視）「伺ー」「皆ー」のぞく。杜牧詩「ー綺裙女」＝闚。○かたあしをあぐ（半步）＝跂。

【窺伺】ガカ　窺・伺・偵・候・狙・覘の別は伺（人部五畫）の條を見よ。

【窺觀】ヤ　うかがひねがふ。歐陽修、憎詩蠅「賦ー極三百蠅一而ー」

【窺見】ケン　うかがひみる。論、子張「ーニー室家之好」

【窺伺】ヤ　人のやうすを伺ひて心に謀る所ある義。司馬文「吐蕃約盟米レ定、ー在レ心」

【窺窬】ユ　すきをうかがふ、ひそかに身分不相應の事を願ひ望む。晉書、元帝紀「狡虜ーー」＝窺視・覘視。

【窶】

㊀ク　㊁ロウ・ル　尤　虞

㊀やつれる、まづし（貧）貧くしてやつれ、貧くして體を備ふる能はず「貧ー」「困ー」「寒ー」詩、衛風「終貧且ー」○ちぢまりて小さし。㊁甌ーは狹小にして傾きたる地。史、淳于髡傳「甌ー滿篝」

【窶數】レツ　窶・貧の別は貧（貝部四畫）の條を見よ。

【窻】

窗（穴部七畫）の俗字。

【窓】

シッ　質

○穴より出る。○ー窣ソツは安からざるこゐの形容。李賀詩「海神山鬼來ー座中、紙錢ー窣鳴」

【窣】

シン　㊀浸に同じ

○あふる（溢）ひたす（漬）○やうやく、やや（漸）漢書、五行志「其後ー盛」

十二畫

【窾】

㊀クヮン　㊁クヮ　㊀早　㊁戈

㊀むなし（空）でたらめ。史、太史公自序「實不中其聲者謂之ー」○から（空虛）＝ー空」莊、養生主「導ー大ー」○から（枯）㊁ほら、うつろ、あな（空）＝科。

【窾木】うつろにしたる木。淮南、說山「見ニーー浮一而知レ爲レ舟、見ニ飛蓬轉一而知レ爲レ車」

【窺】

セイ　㊀支　㊁紙

○あな、いはや（窟）顏延之詩「月ー來賓」○あなほる、地を穿つ。

【窿】

リュウ　東

天空の弓狀に彎曲して四垂せる貌「穹ー」

十三畫

【竅】

ケウ　嘯

○あな（孔穴）「孔ー」「穴ー」「竹ー」○身體に在るあな、七ーは耳目鼻口。

【竅穴】あな。＝穴竅。

【竅孔】あな。＝孔竅。

【竄】

㊀サン　㊁ザン　㊀㊁霰　㊁㊁遵晉

㊀かくれる。かくす（隱匿）○のがる（逃）逃げかくれる「亡ー」「伏ー」「逃ー」「走ー」「奔ー」「投ー」「鼠ー」「鳥ー」○はなつ（放）しまながしにする（流刑）流罪）書、堯典「ー三苗于三危」○殺す（誅）○ふすぶ（熏）藥物・香などがしみとほる「香ー」○あらたむ（改）かふ（易）詩文などを改めなほす「改ー」「點ー」韓愈詩「讀墨ー古史」○いへ（屋）㊁いる、穴に入る「ー入」○人を誘ひて惡を爲さしむ。

【竄匿】なり、鼠の穴中に在るに從ふ會意文字。

【竄逃】ヤウ　逃・遁・遯・遯・遁・北の別は逃（辵部六畫）の條を見よ。

【竄逃】にげのがる。＝逃竄。

【竄黜】官位をしりぞけ島流しにせらる「宋史、褒幼學傳」＝竄貶。

【竄匿】にげかくれる。易林「狐鼠ー穴所レ處」＝竄伏。

【竄入】○にげこむ。○書籍などに他人の文句がまぎれ込む。＝攙入。

【竄伏】にげかくれる。劉基詩「ー草莽間、厥慄面玄黃」＝竄匿・潛伏。

【竄貶】官位をおとして島流しにする。宋史、徽宗紀「梁燾三王關一所レ効、竝ー一」＝貶竄。

【竄奔】にげはしる。＝奔竄・逃奔。

【竄流】しまながしにする。＝流竄。

十四畫

【竊】

穴（穴部十畫）の正字。

十五畫

【竅】

タウ　篠

畫指ゼスを張る。

【竇】

㊀トウ　㊁トク　㊀㊁有　屋

㊀あな（孔穴）「石ー」「巖ー」「雲

―」「幽―」○くぐり、門傍の小戸「狗―」左、襄十「墓門圭―之人」○あなぐら（窖）○みぞの（水道）水の通ふみぞ「水―」左、襄二六「有大閧自其―入」○水が堤をきる（決）周語「不―」澤（水部十五畫）に同じ。

【竇竅】トウ　あな。竅、月令「仲秋穿―」

【竇窖】トウカウ　―穿二固倉一

十六畫

【竈】サウ　ソウ　竈は俗字

○かまど、くど、へっつひ「炊―」「廚―」「沈―」○かまどの神。「祀―」「―王」「―君」論、八佾「與其媚於奥、寧媚於―」

【竈陘】サウケイ　かまどの灰の柴などを焼く處、土にて造る。禮、月令「孟夏祀―先」注「東面設主於―」

【竈戸】サウコ　竈をひさぐ（い）へ。又、しほを煎る人。宋史、食貨志「凡鬻―之地曰亭場、民曰亭戸、或謂之―」―亦稱―丁」

【竈稅】サウゼイ　製鹽業に課する稅（北史、職官傳）

【竈地】サウチ　竈戸のある土地。清會典「竈丁之地、曰―」―竈戸參看。

【竈突】サウトツ　かまどのけむりだし。呂覽「―決、則火上焚レ棟」

十七畫

【竊】セツ　窃は俗字

○ぬすむ（盗）ひそかに取りてわが物にする「偷―」「叨―」「―位」○ぬすびと「草―」「鼠―」「盗―」○ひそかに、わたくしに（私）そっと、人知れず。公然とさしでざる義にて謙辭とす。論、述而「―比於我老彭」○あさし（淺）「―毛」○―脂は鳥の名、いかるが。爾雅「桑扈、一名―脂」

同訓異字　竊・盗・竭・偸・攘の別は盗（皿部七畫）の條を見よ。○竊・密・私・閒・窃○竊は、人のしらぬまにと譯す。私也と註す。孟子「竊負而逃」○密は、水ももらさずと譯す。奥深くして窺ひ易からざる義。○私は公に對していふ、内内になり。孟子「私淑於諸人一也」○閒は、すきを見てひそかになり、閒行と熟す。○窃は竊の俗字。

【竊位】セツヰ　くらゐをぬすむ。其の徳なくして位に在るにいふ。論、衛靈公「城文仲其――者與」

【竊視】セツシ　ひそかにぬすみ見る。漢書、金日磾傳「莫レ不――」

【竊取】セツシュ　ぬすみ取る。

【竊笑】セツセウ　ひそかにくすくすわらふ。晁錯策「將二四面以與一衆爲一敵、臣――之」

【竊竊】セツセツ　○こせこせと知った風をする。莊、齊物「―然知レ之」―然　察。○こそこそとはなす貌。金史、逆臣傳「御―偶語、不レ知レ議二何事一」

【竊賊】セツゾク　ぬすびと。元稹詩「我非二―一誰夜行」

【竊盜】セツタウ　○ぬすびと。唐書、陽孤及傳「南至二番禺一、西盡二巴蜀一、無二最レ竊之盜一」―盜竊・最盜・狗盜。○ぬすみ。―盜竊・攘竊。

【竊鉄】セツテツ　ひそかにときとる（史記）

【竊鉄疑】セツテツノギ　疑の心を以て見れば何事も疑はしく思はるるにいふ。疑心暗鬼を生ずるの類。鉄は斧。列、説符「人有二亡レ鉄者一、疑二其隣之子一、視二其行歩一、竊レ鉄也、顔色竊レ鉄也、言語竊レ鉄也、動作態度無二爲而不一竊レ鉄也、俄而掘二其谷一、而得二其鉄一、他日復見二其隣人之子一、動作態度無二似レ竊レ鉄者一」

【竊毛】セツモウ　淺くうすきけ。爾雅「虎―謂二之貔貓一」

【竊レ名】セツメイ　其の實なくしてむなしくほまれあり。顔氏家訓「下士―」

【竊レ命】セツメイスル　國の威納命令をぬすむ。三國志「高后稱レ制、而諸呂―レ」

立部

【立】リフ　リツ　通音

○たつ「直―」「屹―」「特―」「卓―」身を直くして動かさず「樹―」○とどまる、たちどまる（住）行の對。禮、曲禮「―必正方」○なる（成）しっかりとなりたつ。禮、冠義「而後禮義―」○すたらぬ、廢絶せず。左、襄二四「既没、其言―」○おく、おこる（起）おきあがる。○おく（置）○竪にす。○かたし（堅）しっかりときまる。論、八佾「三十而―」○あらはす、あらはる（見）○當る、莅む。○天子、又、諸侯がくらゐにつく（即位）左、隱六「桓公―乃老」○かたくまもる（堅守）○たちどころに、すぐ、速に、即ち。戰國趙策「其末―見」

同訓異字　立・建・竪・植・樹・起の別　もと大に作る、大は人なり、一は地なり、人の地上に在る會意。

【立案】リフアン　○しくみをたてる、速向をかんがへ定める。○文章のしたがきを作る。

【立夏】リッカ 二十四氣の一、穀雨の次の氣節、陽暦五月六七日頃。漢書、天文志「立冬冬至、北從二黒道一ー一夏至、南從二赤道一」

【立脚地】リッキャクチ たちば、立脚點。

【立券】リッケン てがらを立てる。晉書、齊獻王攸傳「攸レ命ーレレ、卿二勿レ王童一」‖立功。

【立花】リッカ 圖花枝をいけなどして山水の景色を模しあらはす技藝。

【立願】リツグワン 神佛に願をかける。‖發願。

【立計】リッケイ はかりごとをくみたてる。新語「懷二異慮一者、不レ可二以ーレー」

【立教】リッケウ をしへをたつ。尚書序「舉二其宏綱一、撮二其機要一、足二以垂一ー一レー」漢書、武帝紀「古之ーレー、鄉里以レ閭、朝廷以レ爵」

【立言】リツゲン 言論の後世に傳はりて滅びざる義。左、襄二四「大上有レ立レ德、其次有レ立レ功、其次有レ言レー、雖レ久不レ廢、此之謂二不朽一」

【立憲】リッケン 憲法を定めて政を行ふ。

【立憲政體】リッケンセイタイ 專制政體の對。即ち憲法を立て立法・行政・司法の三權が各獨立機關を設け、議會をして立法に參與せしめ、元首は、其の協贊によりて政務を行ふ政體。

【立語】リッゴ たちながらかたる。杜牧詩「ーー平生豁」

【立功】リッコウ てがらをたてる。立言を見よ。

【立后】リッコウ 皇后をたてさだめる。

【立刻】リッコク 圖立所に、直ちに、即刻。‖立地。

【立像】リツザウ 立てる偶像。漢書、明帝紀「遣二使天竺一ー二得二釋迦ーー一」

【立志】リッシ こころざしを高ひ立つ。孟、萬章「懦夫有レ二ーレー」

【立祠】リッシ ほこらを建て設ける。漢書、循吏傳「起レ家ーレー」

【立秋】リッシウ 二十四氣の一、大暑の次の氣節、陽暦八月七日頃。唐書、禮樂志「ーー祀二白帝一、以二少昊氏一配」

【立身】リッシン みをたつ、出世する。孝經「ーレー行レ道、揚二名後世一、以顯二父母一、孝之終也」

【立春】リッシュン 二十四氣の一、大寒の次の氣節、陽暦二月三日頃。史、天官書、ーー四時之卒始也」

【立證】リッショウ 證據をあげる。

【立食】リッショク 卓上の飲食物を立ちながら隨意に食ふ、西洋風の饗應ぶり。

【立錐之地】リッスイノチ きりの先を立つる程の少しの地。史、魏侯世家「秦滅二六國後一、使レ無二ーーー一」‖立錐之地。

【無二立錐之地一】リッスイノチ きりを立つる程の所有地もなし。前條參看。荀子には立を置に作る。

【立體】リッタイ 數學にて、長・幅・厚のあるもの。

【立體美】リッタイビ 彫刻建築などに於ける美。

【立太子】リッタイシ 公式を以て皇太子をさだめたつ。‖立坊・立儲。

【立道】リツダウ みちをさだめ立てる。漢書、董仲舒傳「聖人法レ天而ーレー」

【立談】リツダン ○立ちながらはなしする。○轉じて時間の短き義にもいふ。史記、虞卿ーー之閒、而取二卿相一」

【立地】リッチ たちどころに。王建詩「一時跪拜覲宸徽、ーー階前賜二綠衣一」‖即時。

【立治】リッチ まつりごとをおこしたつ。禮記、疏「明二人君ーー之本一」

【立使之馬】リッシノウマ 儀仗のうちにたつ馬。唐書「林甫居レ相、嶽二致天子耳目一、以レ語動二在廷諸官一曰、君不レ見二ーーー乎、終日無レ聲、食二三品芻豆一、一鳴則驚レ之」

【立儲】リッチョ 太子を立てる、儲は儲君。‖立太子。

【立冬】リットウ 二十四氣の一、霜降の次の氣節、陽暦十一月七日頃。夏侯湛賦「惟ーー之初夜、天降慘以降レ寒」

【立德】リットク 德を立てる、制を創め法を垂れて、ひろく衆を濟ふをいふ。立言を見よ。

【立派】リッパ 圖みごと。壯美。

【立坊】リッパウ 立太子に同じ。

【立法】リッパフ 法律を制定す。漢書、刑法志「聖人制レ禮作レ敎、ーレー設レ刑」

【立法機關】リッパフキクワン 立法にあづかる國家の機關、即ち帝國議會。‖立法府。

【立腹】リップク 圖はらをたてる、いかり（怒）

【立名】リツメイ 名（日部三畫）の條を見よ。

【立命】リツメイ 天の賦する所をまったくして之を害することを爲さず。孟、盡心「殀壽不レ貳 修レ身以俟レ之、所二以ーレー也」

【立禮】リツレイ ○禮式をきだめる。禮記「先王ーレー以二有レ本有レ文」○立ちながら禮をする。坐禮の對。

【立論】リツロン 議論のすぢをたてる。

【立纓】リツエイ 冠のひもが上を右ぎて立つもの、天子のめしたまふもの。

四畫

【竑】（一）クワ 麻（二）コウ 蒸 ㊀ひろし（廣）㊁はかる（度）もの。さしにてはかる。周禮、考工記「故ーー其幅廣」

五畫

【站】タン 翰 ○ひさしくたちとどまる（久立）○うまつぎ（驛）中途にて斬くたち駐まる所「車ーー」「驛ーー」「兵ーー部」

【站夫】タンフ 驛夫に同じ。郡國利病書「ーーー之名、雖見於元」‖驛卒。

【竧】チ 圖

○たたずむ(久立)楚辭「結桂枝兮延ー」‖佇。○つまだつ。○くはだつ(企)

【竚立】ちょりつ　たたずむ。

【竝】

㊀ヘイ　㊁ハウ　通　並に同じ。並に作る

㊀みな(皆)ともに(共・偕)中庸「萬物ー育」ならびに。後漢書、董卓傳「ー封列侯」○あふ、ならぶ(併比)「比ー」ならび立つ。禮、禮運「ー於鬼神」㊁ならぶ。○ちかづく(近)○つらなる(連)史、大宛傳「ー南山」

同訓異字　ならび立つ、二立に从ふ。

竝・並・幷・倂・比・竝・排

○竝は立ちならぶ義、幷也、比也、皆也、偕也と註す、用法廣し、竝行・竝驅・竝立の類。○倂・幷は二字同じ、二つ以上の物を、一つに合するなり、兼倂・合倂・幷呑の類。○瞓はつらなりならぶこと、瞓睨には六指なり。○比は親なり、近なり、和なり、又竝なり、合なり、密なりと註す、閒のすかずして、つづきならぶなり、比隣・親比・比年の類。○竝は隣也、偶也、同じやうな物が、二つならぶなり、雙眼・一雙の類。○排は行列を正してならべる義、排比・排列と用ふ。

【竝育】ひょういく　ひとしく生長する。中庸「萬物ー‖、而不二相害一」

【竝行】へいかう　○ならびてゆく。論、憲問「見ー其與二先生一ー‖上也」○ふたつながら行はる。禮、禮運「ー‖而不レ悖」

【竝肩】へいけん　かたをならべる。南史、陸驎傳「鳴珮再紹、ー‖二英彦一」‖比肩。

【竝興】へいこう　一時に皆おこる。禮、月令「疾風暴雨總至、藜莠蓬蒿ー‖」

【竝至】へいし　ならびいたる。晉子「夫使二國常無一レ患、而名利ー‖者神聖也」

【竝出】へいしゅつ　ならび出る、ならびに起る。漢書「敎化廢而奸邪ー‖」

【竝立】へいりつ　ならびたつ。晉、盧志傳「兩雄不二俱處一、功名不二ー‖一」

【竜】

龍(部首十六畫)の古字。

六畫

【竟】

㊀ケイ・キャウ　㊁ケイ・キャウ　俗

㊀つひに(遂)つまり「畢ー」「究ー」「窮ー」○きはむ。きはまる(窮・極)其の事をおしきはめる。漢書、霍光傳「縣官重大后、故不ー」○をふ、をはる。をはり(終)史、高祖紀「歲ー、此兩家常折二券弁一賣」㊁さかひ(疆)曲禮「入ー而問レ禁」‖境。

同訓異字　竟・遂・卒・訖・畢・終の則は遂(走部九畫)の條を見よ。

【章】

㊀シャウ　㊁シャウ　通

㊀あや、いろどり(文采)論、公冶長「斐然成ー」○文明のかざり、文化「禮樂典ー」○あきらか。あきらかにす(明)あらはす(表)「表ー」「憲ー」○あらはる(露)○しるし(表識)○くだり(科條)○かたち(形狀)○わかち(區別)家語、子貢問「上下有ー」○のり、規則「ー程」「法ー」○ふみ(文詞・文書)「玉ー」「文ー」「辭ー」○臣民が天子に上る書「ー奏」「奏ー」○文の一段落「篇ー」○くすのき「樟ー」‖橋。○できあがりたる物事。○いんぎょう、おしで「印ー」○大林木を數ふるにいふ。史、貨殖傳「千ー之材」○ー甫は般代の冠の名。○建ーは漢の宮殿の名、長安に在り。○のろ。‖麞。㊂隋(阜部十一畫)に同じ。

同訓異字　說文に樂の竟を一章と爲す、音に从ひ十に从ふ、十は數の終なりとありて、音の部に列せり。

【斷レ章取レ義】だんしょうしゅぎ　詩を解する法にて、作者の本意に拘はらず、取りて自己の用と爲すをいふ。孟、滕文公「魯頌曰、戎狄是膺、荊舒是懲、周公方且膺レ之」朱注「按、今此詩爲二僖公之頌一、而孟子以二周公一言レ之、亦ー‖也」

【章魚】しょうぎょ　たこ(蛸)吸盤ある八脚を有し、頭腹圓く、全身に骨無し。‖章魚。

【章句】しょうく　文の章と句と。又、文章の句。漢書、夏侯勝傳「建所レ謂ー‖小儒、破二碎大道一」

【章句學】しょうくがく　一章一句の末のみを究めて、大體に通ぜざる學問。隨游詩「少部二――一所レ蓋在二經世一」

【章左】しょうさ　上書などの文句の餘白。後漢書、蔡邕傳「分二前首目一、連二從ー‖一、帝嘉二其才高一」

【章草】しょうそう　草書の一體。書斷「漢杜操字伯度善二草書一、章帝愛レ之、上表亦使レ作二草字一、曰二之ー‖一」一說に、漢の元帝の時、史游が急就章を作りて楷體を解放せしによりて稱す。

【章身】しょうしん　衣服をいふ。左傳「衣、身之章也」

【章逐】しょうちく　明かに美くしき貌。呂覽、本生「萬物ー‖彰彰。

【章臺】しょうだい　戰國の時、秦の咸陽に建てたる宮殿の名。轉じて宮殿の通稱とし、又、繁華なる街巷・遊郭などの稱とす。侯國輔詩「ー‖折二楊柳一春日路傍情」

【章程】しょうてい　のり、規則、程は方式。史、

太史公自序「張蒼爲ニ―一、叔孫通定ニ朝儀一」

【章法】ショウホウ 文章の章段のくみたて。字法・句法とならぶもの。

【章服】ショウフク 他の物と識別する爲めに紋又は記號などのあやあるきもの。朱慶餘詩「水邊花氣薰ニ―一」

【章表】ショウヘウ しるし。又、あらはす。後漢書、輿服志「作ニ輿輪旗旒一―一以尊ニ殷之一」

【衮ニ章而適レ越】コンニシヤウシテエツニユクノ章甫の冠を與がんとして冠を用ひざる越國に行く。其の爲す所、目的とする所に反する喩。莊、逍遙遊「宋人資ニ章甫一而適ニ諸越一、越人斷髮文身、無レ所レ用レ之」

【章甫之冠】シヤウホノクワン 殷代の冠、孔子之を服せしによりて儒者のかんむりの義とす。禮、儒行「孔子曰、丘長居レ宋、冠ニ―一」

【章理】シヤウリ あきらかなる道理。戰國策「明言ニ―一、兵甲愈起」

七畫

【竣】シュン セン 先 眞

○をはる。をふ(畢)仕事を成しをへる「一工」「一功」○とどむ。とどまる(止)○しりぞき伏す(退伏)事がをへて後へさがる。周語「有司已」事而一」○あらたむ(改)

【竣工】シュンコウ しごとができあがる。

【竣功】シュンコウ 前條に同じ。

【竣成】シュンセイ 仕事が出來あがる。‖竣功。

【竢】ショウ 腫

○つつしむ(敬)○おそる(懼)すくむ(畏縮)以上は悚に通ず。○あぐ(上)楚語「一善抑惡」○くはだてのぞむ(企望)○うごく(動)劉峻文「神飛魂一」○そびゆ。そびやかす。揚雄、長楊賦「整ニ輿一而竢」‖聳。

【竢企】ショウキ 足をそばだてて待つ貌。張九齡賦「聞善歡而一レ、見善好而窮忆」

【竢敬】ショウケイ おそれうやまふ。詩經「敬之憧憧」傳「憧憧、一一也」

【竢秀】ショウシウ そばだちひいづ。謝靈運、山居賦「孤岸一一、長洲芊綿、既跨既臨、曠矣悠悠」‖竢峙。

【竢時】ショウジ 恐れつつしみて心をうごかす。漢書、禮樂志「虛レ己一レ一」

【竢度】ショウド おそれふるふ。後漢書、賈逵傳「百城聞」風、自然一一、其諸威過者、望レ風解ニ印綬一去」‖懼竦。

【竢峻】ショウシュン たかくそびえる貌。鮑照詩「翹翹凌ニ海風一、一一峯ニ山木一」

【竢然】ショウゼン ぞっとする貌。後漢書、黃瓊傳「一一異レ之」

【竢動】ショウドウ ○うごかす。振鷺綠話「喜ニ一于堪輿、澤周ニ流于道路一」○心がつつしみうごく。

【竢墓】ショウボ つつしみしたふ。唐書「憲宗頌ニ列聖實錄、見ニ正觀故事ニ、一一不レ能レ窮レ卷」‖景慕・仰慕・欽慕。

【竟】ドウ 東

○わらべ、こども、十五歲前後の男女子「成一」「幼一」「兒一」「奇一」「神一」「學一」「牧一」「樵一」「豎一」「頑一」○罪ありてめしつかひ(奴婢)となりしもの。○僮に通ず。○牛羊の角なきもの。○頭髮がはげる(禿)韓愈、進學解「頭一齒豁」○はげやま、山に草木なし、不毛。荀、王制「故山林不一」、而百姓有餘材也」○一一は盛んなる貌。○一牛は角のなきうし。

【童幼】ドウヨウ をさなきもの。皮日休詩「駭衆著ニ一一」‖童穉・童孩。

【童謠】ドウエウ こどもの歌ふはやりうた。列、仲尼「兒一一曰、云云」

【童牙】ドウガ こども、幼小をいふ。淮南、修務「甘羅一一而報レ趙」

【童歌】ドウカ こどもの謠ふうた。法苑珠林「有ニ兩童子、携レ手來歌」

【童孩】ドウガイ こども。蘇軾詩「師儒昔謂奘、仲季時一一」‖童幼・童穉。

【童騃】ドウガイ こどものおろかなる義、騃は愛。韓愈詩「一一無レ所レ識」

【童顏】ドウカン ○をさなげな。鮑照詩「顏女希ニ一一」‖稚顏。○老人のわかしきかほ「鶴髮一一」

【童牛】ドウギウ 角のなきこうし。易、大畜「一一之牿、元吉」

【童僕】ドウボク をさなきこども、僕は使ふ。韓愈詩「一一無レ所レ識」

【童冠】ドウクワン こどものかんがへ。卑近にして取るに足らざる見識。易、繫辭「初六一一、小人无レ咎、君子吝」

【童形】ドウケイ 小どものすがた。‖童幅。

【童山】ドウザン はげ山、草木を生ぜざる山。字解卷看。

【童子】ドウジ こども、十九歲以下、卽ち未成人の稱。左、成十六「國之存亡天也、一一何知焉」‖童兒・童孺・童豎。

【童子之師】ドウジのシ こどもに學問を敎へる敎師。韓愈、師說「彼一一、授ニ之書ニ而習ニ其句讀ニ者也」

【童心】ドウシン　こどもごころ。左、襄三一「昭公十九年矣、猶有ニ―一」

【童丱】ドウカン　いとけなき小兒。丱は髮の卷、男女七八歲の頃、齒のぬけかはるをいふ、轉は俗字。後漢書、閻皇后傳「年皆―、並召ニ黃門侍郎一」

【童昏】ドウコン　おしつかひのこども。

【童孺】ドウジュ　こども。前史、范元琰傳「元琰時―、哀章遺ニ孤ニ」‖童豎。

【童然】ドウゼン　○頭のはげたる貌。○轉じて山などに樹木のなき貌。

【童體】ドウタイ　童形に同じ。

【童男】ドウダン　をとこのこ、未だ婚せざる男兒。史、封禪書「使ニ人乃齎ニ―一量女一入ニ海求ニ之ニ」

【童女】ドウジョ　女のこども。史、周紀「宣王時、―謠曰、檿弧箕服、實亡ニ周國一」

【童土】ドウド　草木の生ぜざる地。莊、徐無鬼「堯聞ニ舜之賢一、見ニ之ニ―一之地一」

【童童】ドウドウ　○樹の葉の盛んなる貌。蜀志、先主傳「有ニ桑樹一高五丈餘、遙望ニ―一如ニ小車蓋一」‖傘蓋。○木に枝なき貌。梅堯臣詩「秃株立ニ―一」

【童髮】ドウハツ　こどものたれがみ。又、こども。鮑溶詩「ニ―離ニ道心一、壯年落ニ隱機一」

【童穉】ドウチ　こどものめしつかひ。蜀應物詩「家貧無ニ―一、吏卑升ニ無齋一」

【童昧】ドウマイ　をさなくして智くらし。傳毅、趙徳詩「雖能昭ニ開啓一我ニ―一」‖童昏・蒙昧・幼昧。

【童蒙】ドウモウ　こども、蒙は蒙昧、こどもは物事にくらし。易、蒙卦「ニ―求ニ我一」

【童蒙訓】ドウモウクン　三卷、宋の呂本中撰す、家塾の讀本にして、修身處世上の格言多し。

【童話】ドウワ　こどもの喜ぶはなし、お伽話。

八畫

【竪】ジュ　虞

○豎（㚔部九畫）の俗字。○闓（門部九畫）の俗字。○（縱）

【竫】セイ　ジャウ　徑

やすし（安）しつか。後漢書、崔駰傳「―潛思於至賾一」‖靜。

九畫

【竭】ケツ　屑

○つく。つくす（盡）「空ニ―一」「困ニ―一」「貧ニ―一」「殫ニ―一」曲禮「君子不ニ竭ニ人之歡一不ニ―一人之忠一」○かれる（涸）○やぶる（敗）左、莊十「曹劌曰、一鼓作ニ氣、再而衰、三而ニ―一」○あぐ（擧）○おひいただく（負戴）

同訓異字　竭・盡・殫・窮・罄・既・磬・悉の別は盡（皿部九畫）の條を見よ。

【竭歡】ケツカン　よろこびの心をつくす。宋書、孝武紀「詔曰、八風循ニ通、卿雲叢ニ集、盡ニ天髓一瑞、率字ニ―一」

【竭蹶】ケツケツ　道を行きくたびれてたふれる。蹶は躓に同じ。荀、儒效「遠者ニ―一而趨ニ之一」

【竭産】ケツサン　財產をなくす。蜀志、黃和傳「傾ニ家ニ―一」

【竭盡】ケツジン　つくす。蘇軾文「犬馬之誠、本期ニ於ニ―一」

【竭誠】ケツセイ　まごころを十分につくす。鄒陽文「今臣盡ニ忠ニ―一」

【竭澤】ケツタク　さはの水をほす。（淮南）ニ―一而漁、豈不ニ獲得一而明年無ニ魚一」ニ―一而漁は餘地を留めざるに喩ふ。

【竭智】ケツチ　ちゑのあらんかぎりをつくす。戰國策「盡ニ力ニ―一」

【竭能】ケツノウ　才智の及ぶかぎりをつくす。管子「行ニ正而有ニ罰一、則賢聖無ニ從ニ―一」

【端】㊀タン　㊁ヅン　寒　㊂セン　銑

㊀ただし（正）○なほし、まっすぐ（直）かたよらず。禮、玉藻「目容ニ―一」○ただす。○きざし（萌兆）○はじめ（始・首）もと（本源）○は、はし、こぐち、いとぐち「ニ緒」孟、公孫丑「惻隱之心、仁之ニ―一也」○かぎり（涯）きは、さき（際末）「末ニ―一」「筆ニ―一」○しな（等）○つまびらか（審）○もっぱら（專）○漢時代の朝服。論、先進「ニ章甫一」○周代の制、布帛一丈八尺の長さの稱（一說に二丈）○一的は確定の義。○無ニ―一ムタンは、はじめをはりが分らず。史、田單傳「奇正相生、如ニ環之無ニ―一」又思ひ慮けなく、ゆくりなく。賈島詩「無ニ―一更渡ニ桑乾水一」○一溪は硯材にする石を產する地名、今の廣東省肇慶府に在り。㊁あへぐ。‖端。㊂周代、大夫以上のかんむり。禮、月令「諸侯玄ニ―一而祭」‖冕。

【端衣】タンイ　正しき禮服。大戴禮「今夫ニ―一玄裳、冕而乘ニ路車一、志不ニ在ニ于食ニ掌一」

【端委】タンイ　周代の禮服、玄端の衣と委貌の冠と。左、昭元「弁冕ニ―一、以治ニ民臨ニ諸侯一」

【端閫】タンコン　王宮の正門。張衡賦、立ニ金人于ニ―一」

【端行】タンカウ　○正しきおこなひ。○正しくあゆむ。

【端慤】タンカク　ただしくしてまことあり　荀子「恭敬忠信、ニ―以愼行ニ之一」

【端揆】タン 大臣宰相といふ、庶政を正しくはかる義の南史、沈約傳「久處二一一一一有レ志二台司一」

【端拱】タン えりをただしくす。かたちをととのへる。王禹偁、淨行詩「一レ一清二頽海一、堤歩寫二境氛一」‖整襟。

【端居】タン ふだん。孟浩然詩「欲レ濟無二舟楫一、一一恥二聖明一」‖居常・平居。

【端拱】タン ○ただしく手をこまぬく、人君が無爲にして天下を治める義。隋煬帝詩「一一朝二萬國一、守文繼二百王一」‖垂拱。○轉じて臣下の事にも用ふ。晉書、阮孚傳「正應三一一以擧二當年耳一」

【端凝】タン 正しくして確實なる義。舊唐書、馮定傳「其文一一若レ植」宋史、李沆傳「太宗目二沆之一曰、李沆風度一一眞貴人也」

【端雅】タン ただしく高し。王衍孫文「天神一一、威光四照」

【端華】タン ただしくうつくし。南史、宋順帝紀「帝姿貌一一、眉目如レ畫、見者以爲二神人一」

【端倪】タン 山のいただきと水のほとりと。轉じて事の本末始終の義。莊、大宗師「反覆終始、不レ知二一一一一

片。○はしがき（序文）

十一畫

【竫】 セン 銑 テン 霰 タン 翰

ひとし、ひとしくす（等）齊語「一本竪末」（竪はただす）

十五畫

【競】 ケイ キャウ 敬

又、競に作る、競とは別

○きそふ、あらそふ（爭）せりあふ「爭ー」「奔ー」「進ー」「紛ー」「校ー」○つよし（彊）○すすむ（進）○にはか（遽）○盛んなり。

【競馬】ケイバ 馬のかけくらべ。

【競採】キョウサイ きそひて取る。賀徹、採桑詩「ー一須ㇾ盈ㇾ手、爭歸欲ㇾ滿ㇾ籠」＝爭採。

【競爭】キョウサウ きそひあらそふ。莊子「有ㇾ左有ㇾ右、有ㇾ倫有ㇾ義、有ㇾ分有ㇾ爭、有ㇾ競有ㇾ爭、此之謂二八德一」

【競漕】キョウサウ 圖端艇ボートのこぎくらべ、ボートレース「短艇ー一」＝競渡。

【競進】キョウシン きそひすすむ。離騷「衆皆ー一、以貪婪兮」

【競盜】キョウタウ きそひうったへる、雜記「紛爭ー一、非ㇾ禮不ㇾ決」

【競走】キョウソウ きそひはしる。淮南子「與ㇾ馬ー一、筋絕而弗ㇾ能ㇾ及」

【競逐】キョウチク あらそひきそふ。後漢書、馮異傳「當二兵革始起、投擲之時一、豪傑ー一」

【競注】キョウチウ きそひそそぐ。水經、注「細泉輕流、擊ㇾ川ー一」

【競渡】キョウト 舟にて先を爭ひてわたる遊戲、今の端艇競漕の類。荊楚歲時記「五月五日、ー一」

【競賣】キョウバイ せりうり。

【競奔】キョウホン さきをあらそひてはしる。潘岳續詩「晉生性坦率、與ㇾ世無二ー一一」＝奔競。

十七畫

【競】 競（前出）に同じ。

竹部

【竹】 チク 屋

○たけ、多年生植物の一、幹は圓くして直く、中空にして節あり、各種の器具を造るに用ふ、葉は細長く竝行葉脈ありて四時常に青し、春月筍を生ず「茂ー」「修ー」「綠ー」「翠ー」「篁ー」「叢ー」「苦ー」「淡ー」「孟宗ー」史、貨殖傳「渭川千畝ー、其人與二萬戶侯一等」○ふえ、八音の一、笙管の類。○かきもの（備册）古、簡策に亦竹を用ふ「一帛」○孤ー、は古の國名、今の直隸省遷安縣の西。

【竹院】チクヰン 庭に竹のある書院。白居易詩「ー一君開館二永日一、花亭我醉登二幾春一」

【竹陰】チクイン 竹のかげ。白居易、池上詩「山僧對ㇾ棊坐、筒上ー一清」

【竹葉】チクエフ ○たけのは。○酒の異名。古詩「ー一清香好、何妨飲二數杯一」○冠の名（隋書）

【竹園】チクエン ○たけのその。地誌志「梁孝王東苑方三百里、卽兎園也、多植ㇾ竹、中有二修ー一一」○轉じて天子の子孫をいふ。竹のそのふ。

【竹牙】チクガ 筍（竹の異名（筍譜））＝竹胎。

【竹簣】チクキ たけのふなぎを。白居易詩「ー一擁二釣艇一」

【竹竿】チクカン 竹のさを、たかざを。漢書、貨殖傳「ー一萬个」

【竹簡】チクカン たけのふだ。孔安國、尚書序「以二ー一一寫ㇾ之、增二多伏生二十五篇一」

【竹几】チクキ 竹夫人に同じ、たけのよりかかり。釋名「ー一竹夫人也」

【竹筍】チクジュン たけのこ。王安石詩「淵淵嶺栖生ー一」

【竹魚】チクギョ あぢ（鰺）海魚の一。

【竹外一枝】チクグワイイツシ 竹やぶの外に出でたる梅の一枝。蘇軾詩「江頭千樹春欲ㇾ白、ー一一斜更好」

【竹刑】チクケイ 刑書をいふ、古、竹簡に書せしが故。左傳「殺二鄧析一而用二其ー一一」

【竹竿】チクカン たけのかんざし。宛委餘編「女媧氏以ㇾ竹爲ㇾ竿」

【竹雞】チクケイ うばしぎ。禽異記「ー一似二鷓鴣一」

【竹葉松韻】チクエフショウイン 竹と松とが縱橫にまじり生ずる。韻はたて絲、緯はよこ絲。

【竹溪六逸】チクケイロクイツ 竹溪の酒友六人の稱。唐書、李白傳「客二任城一、與二孔巢父・韓準・裴政・張叔明・陶沔一居二徂徠山一、日沈飲、號二ー一一一一」

【竹筧】チクケン たけのかけひ。陸游詩「ー一一寒泉晨灌ㇾ疏」

【竹月】チクゲツ たけのと。趙嘏詩「ー一半開殘未ㇾ經、松枝靜宿鶴初還」＝竹扉。

【竹工】チクコウ 竹細工師。王禹偁、黃州竹樓記「吾聞二ー一一」

【竹杠】チクカウ 駕籠をかく竹の棒。楊基詩「ー一兜子一見斜」

【竹槍】チクサウ 竹やり。漢匡勝胡「瓜畔國備二武勇一、設二ー一一會一」

【竹槍席旗】チクサウセキキ 圖たけのやりと、むしろのはたと。百姓一揆のありさま。

【竹箭】チクセン たけに記せるふみ。五代史、楚世家「持ㇾ節以二ー一一封ㇾ之」＝竹簡・竹簡。

【竹槍】ソウ　たけのやらひ。宋史、蛮夷傳「有二撲屋戰棚一衛以ニ一一、即其舊所レ居」

【竹枝】ソク　歌の一體、男女の情事、又は土地の風俗などを詠ずるもの、唐の劉夢得（禹錫）に始まる（唐書、劉禹錫傳）劉禹錫、竹枝序「一一、巴歈也、巴兒聯歌、吹二短笛一擊レ鼓、以赴レ節、歌者揚レ袂雜舞、其音協二黃鍾一、羽末加二哀聲一、含レ思宛轉、有二淇濮之豔一焉」

【竹紙】ソク　圖○薄き鳥の子紙。○雁皮紙、又は唐紙の一名。○竹幹内のあまき皮。

【竹蛩】ソクキョウ　蟲の一　あぶら蟲。

【竹樹】ソクジュ　竹と木と。梁書、盧士傳「院孝緒所レ居室、惟有二鹿牀一一一環繞」

【竹書】ソクショ　たけにしるせるふみ。晉書、束晳傳「晉太康二年、汲縣人發レ塚、得ニ一一數十車一、皆簡編科斗文字」

【竹酔日】チクスイジツ　陰暦五月十三日、此の日竹をううるによろしといふ。岳陽風土記「五月十三、謂二之龍生日一、種レ竹多茂、即——也」山家清事「八月八日爲ニ——一種レ竹易レ活」

【竹笑】チクショウ　竹の風を受けて屈するをいふ。說文「竹得レ風、其體大屈、謂二之ニ一一」

【竹雀】チクジャク　おやだけ。杜牧詩「林架輕ニ一一柳暗憎二桐孫一」

【竹素】チクソ　書籍、竹は簡、素は絹（晉書、王戎傳）張協詩「游二思ニ一一園一」＝竹帛。

【竹裏】チクリ　たかやぶ。雜錄登詩「搖颺楚王宮、徘徊繞ニ一一」

【竹胎】チクタイ　筍チクジュンの異名、皮日休詩「山蕨收時帶ニ一一」

【竹刀】チクトウ　○竹にて造れる刀、齊民要術「以ニ一一骨刀一四破レ之」○圖ヒシ劍術を習ふに用ふる竹の刀。

【竹箭】チクセン　たけのかは。茶經「茶有下如ニ一一者上、枝幹堅實」

【竹中有レ兒】チクチュウユウジ　竹の中より小兒の生れ出でたりといふ故事。華陽國志「有二女子一、浣二于水濱一、有二三大竹一、流入二女足間一、開二竹中有二兒聲一、持歸破レ竹、得レ男、以レ竹爲レ姓、植二所レ破竹于野一、遂成レ林」

【竹筋】チクキン　たけにて作りたる箸。白居易詩「白陽青ニ一」

【竹蠣】チクレイ　まて、海に生ずる貝の一種。

【竹田】チクデン　たけやぶ。史記、註「一一爲レ蔓」

【竹奴】チクド　たけのよりかかり。王炎詩「一一夏日涼、脚爨冬夜燒」＝竹夫人。

【竹豆】チクトウ　たけにて造りたるたかつき。爾雅「木豆謂二之豆一一一謂二之籩一」

【竹筒】チクトウ　竹のつつ。晉書、陸機傳「以ニ一一盛レ之」

【竹頭木屑】チクトウボクセツ　竹のきりかぶと、木のくづと。晉書、陶侃傳「造レ船、木屑及竹頭、悉令二收掌一、之、成不レ解二所以一、後正會、積雪始晴、廳事前餘雪猶濕、於レ是以レ屑布レ地、及二桓溫伐レ蜀、又以二所レ貯竹頭一、作レ釘裝レ船」

【竹馬】チクバ　たけうま、小兒の乘りて遊ぶもの。後漢書、郭伋傳「兒童騎ニ一一迎拜」

【竹馬之友】チクバノトモ　をさなき時のとも。晉書、殷浩傳「桓溫謂二人曰一、少時吾與二浩共騎二行馬一」博物志「小兒五歲、曰二竹馬之戲一、七歲曰二竹馬之戲一」

【竹牌】チクハイ　矢を防ぐために作れる竹の楯。晉書「一一雲梯」

【竹萌】チクボウ　たけのこの異名。韓駒詩「豈知苦ニ一一、風味當獨擅」

【竹包松茂】チクホウショウモ　新築家屋の下部の堅固なることは、後生せる竹の如く、上部の緻密なることは、繁茂せる松の如し。新築落成の頌詞とす。詩、小雅、斯干「秩秩斯干、幽幽南山、如二竹苞一矣、如二松茂一矣」

【竹帛】チクハク　書物、竹簡と、をきぬと、古は紙なくーーに書きしに起る。雅南、本經「著二於ーー一、鏤二於金石一、可レ以傳二於人一者、其祖也一章疏、焚書坑詩「ーー蟬消帶業虛、隋河空鎖祖龍居」

【著二於竹帛一】チョヲチクハクニ　歷史に姓名を載する。雅南、本經「——、鏤二於金石一」

【竹柏】チクハク　なぎ　松柏科の樹にして、高さ二三丈。本草、注「峨眉山中、一種竹葉柏身者、謂二之ーー一」

【竹皮】チクヒ　たけのかは。漢書、高祖紀「高祖爲二亭長一、乃以ニ一一爲レ冠」

【竹屋】チクオク　竹のとびら。儲光羲詩「落葉滿二山砌一、誰掃ニ一一」

【竹夫人】チクフジン　だきかご、夏時涼しく寢られる爲めに抱きてねる竹製の籠。東坡志林「俗以二竹几一爲二——一」＝青奴、竹夾膝。

【竹米】チクベイ　たけのみ。皮日休詩「野客病時分ニ一一」＝竹實。

【竹箆】チクヘイ　○しっぺい、佛家にて人を打つに用ふる具。揮麈餘話「打！二十」○宮中の調（西湖詩餘）

【竹杪】チクビョウ　たけのさき。張籍詩「獨愛南園裏、山晴ニ一一風」＝竹梢。

【竹篇】チクヘン　たけのかは。元史、天文志「用ニ一一均二分天度一」

【竹筐】チクキョウ　竹製のもりもの具。儀禮、聘禮、疏「有ニ一一、以盛二出牢一」

【竹木】チクボク　竹と木と。左、襄十八、「焚二申池之ーー一」＝竹樹。

【竹鼠】チクソ　たけのこし。漢書、嚴助傳、注「江淹作ニ一一以行」＝竹獲。

【竹箭】チクセン　ふえ。眞師泰詩「一一笙風鳴、蕉雨滴珠滴」

【竹籬】チクリ　たけかご。白居易詩「曉日攜ニ一一家僮買二春蔬一」

【竹輿】チク　たけやぶのなか。李白詩「一一無二人蹤一、池中靄月白」

【竹籟】チク　たけにて作りたるまがき。杜甫詩「茅舍一一短」

【竹林七賢】チクリンシチケン　晉の阮籍・嵇康・山濤・向秀・劉伶・王戎・阮咸の七人、常に竹林に遊びしが故にいふ。晉書、嵇康傳「康所二與神交一者、惟陳留阮籍・河内山濤、豫二其流一者河内向秀・沛國劉伶・籍兄子咸・瑯琊王戎、遂爲二竹林之遊一、世所謂——也」

【竹葉】チク　竹のあぶら、藥用とす。本草「淡一一氣味甘」

【竹聯】チクレン　竹製の柱かくし。

【竹簟】チクテン　竹のすだれ。西京雜記、漢諸陵墓、皆以二竹葉一藏、皆爲二水紋及龍鳳之狀一」

【竹槧】チクザン　竹を瓦に代へたるたかどの。宋の王禹偁、黄州に官して建つ、其の黄州一一記は古文眞寶後集に載す。

【削レ竹】サクチク　竹をわる。

二畫

【竺】(一)チク　(二)トク　屋　沃

(一)たけ(竹)○天一一は國名、今の印度。(二)あつし(厚)楚辭「稷惟元子、帝何一一之」‖篤。

【竺乾】チクケン　佛教の學問。朱熹詩「遂心昧性晒二一一一」

三畫

【竹】ロク　屋

○竹の根。○ばらあるたけ(刺竹)

【竹二乾公】コツケンコウ　ほとけ。馬融文「猶瞻二一一一、謂レ佛也」

【竽】ウ　虞

ふえの一種、笙の類、古は三十六簧あり、後世、十九簧となる、管の排列は參差として鳥の翼にかたどる。周禮、春官、笙師「掌二教レ吹一一」

【竽レ竿濫レ吹】シウカンランスイ　人の好む所にそはざる喩、竽は笙等の類。韓愈、答二陳商一書「齊王好レ竽、有下求二仕於齊一者上、操レ竽而往、立二王之門一三年、不レ得レ入(中略)客曰、王好レ竽、而子吹レ瑟、雖レ工、如二王之不一レ好何」この故事は韓非、内儲説に出づ。

【竽瑟】ウシツ　ふえと、ことと。禮、樂記「濫唱一一以和レ之」

【竽笙】ウショウ　ふえ。禮、樂記「君子聽二一一一簫管之聲一」

【竽籟】ウライ　ふえ。吳均、竹賦「調二八風一而順當、然後成二一一一以備レ樂」

【竽篥】ウリツ　ふえ、觱篥は蕃。高唐賦「城作悲鳴篥似二一一一」‖笳笛。

【竿】(一)カン　寒　(二)カン　早　(三)カン　翰

(一)さを、たかざを(竹竿)「竹一一」「釣一一」「旗一一」「帆一一」史、貨殖傳「竹一一萬个」○一牘は書札。莊、列禦寇「小夫之智、不レ離二於竿牘一」注「以竹簡相問訊也」‖竹簡。(二)やがら(箭幹)‖笴。(三)きものかけ(衣架)

【竿頭】カントウ　さをのさき。傳燈錄「百丈一一須レ進レ步」

【竿牘】カントク　書札をいふ。字解參看。

【竿杪】カンビョウ　さをのさき。漢書、王莽傳「懸頭一一一」

四畫

【笄】ケイ　齊　笄に同じ

○かんざし、男女共に束ねたる髪をとめる爲めに插す具、又、男子は冠をとめる爲めにも插す。○かんざしを插す。禮、内則「子事二父母一、雞初鳴、咸盥漱、櫛縱一一」

【笄年】ケイネン　初めて成年となりし年頃。中論「君子修レ德、始二乎一一一、終二乎始背一」

【笄冠】ケイカン　かんざしと、かんむりと、男女の成年に達したるにいふ。通典「一一有二成人之容一」

【笄字】ケイジ　かんざしをさすと、あざなをつけると、女子の婚期に至りしを、爲レ之、稱レ字」

【笄總】ケイソウ　からがいをさし髪をつかぬ。禮、内則「子事二父母一、雞初鳴、咸盥漱、櫛縱一一」

【笄年】ケイネン　初めて笄を加へし年、女子の十五歳をいふ。宋史、理宗紀「福州陳氏、一一守志、詩逾二九秩一、詔旌二其門一」

【笈】キフ　緝　業

おひ、おひばこ、ほんばこ(書笈)「負一一」「書一一」「衆一一」史、蘇秦傳「負一一從レ師、不レ遠二千里一」

【負レ笈】フキフ　他所に遊學する。字解參看。

【笏】コツ　月

しゃく(手板)天子以下公卿士大夫の束帶の時に帶にさしはさみ持つもの、周尺にて長二尺六寸、幅二寸。釋名「一忽也、

若有敎命、及所啓白、則書其上、謂忽忘也」身分に應じて其の材料を異にす。禮、玉藻「天子以球玉、諸侯以象、大夫以魚須文竹、士以竹本、象可也」

【投ノ竿】コウトウカン しゃくをなげすてる、官を辭する。韓愈詩「ノー遠辭丹鳳闕」＝挂冠。

【笊】サウ 效

○ざる、たけかご。○す、鳥の居る穴（樹に居るを巢といふ）

【笑】セウ 嘯 唉に同じ

○わらふ、ゑむ。わらひ、よろこびて口を開いてわらふ「大ー」「冷ー」「言ー」「嬉ー」論、憲問「樂然後ー」○よろこぶ（欣、喜）たのしむ。○あなどる（侮）○あざけりわらふ（嘲）「嘲ー」「侮ー」「誹ー」「冷ー」孟、梁惠王「以五十歩ー百歩」○花の咲くにいふ。

同訓異義 笑、嗤、哂、嘯○笑は喜びて顔を解き齒を露くなり。轉じて花の開くを花笑といふ、また冷笑はにかわらひなり。○嗤はあざけりわらふなり。文選「服者愛二惜費一、但爲二後世嗤一」○哂は音シン微笑なり。論語「夫子哂レ之」朔に同じ。○嘯は大笑なり、ふき出すなり。漢書「談笑大嘯」

【笑噱】セウキョ わらふ聲。范成大詩「頑質三憎蛙一、傀狀發ニー一」

【笑靨】セウエフ ゑくぼ。梁昭明太子詩「眼語ー一近來情」古歌「ー一自然開」

【笑靨金】セウエフキン ○菊の花の異名。藥譜「菊花名ニ——」○笑靨花はこごめざくら、灌木の一、狹披針狀の葉を有し、春時白色五瓣の花開く。

【笑呀】セウア わらひて口をあく。梅堯臣詩「只取二勝負一和ー一」

【笑顏】セウガン ゑがほ。鮑照詩「道逢長恨忪、豈復歌ー一」＝笑面。

【笑噱】セウキョ 大いに笑ふ。趙翼詩「識ノ白供ニー一」

【笑謔】セウギャク わらひたはむる。後漢書、陰后紀「后恭儉少二嗜玩一、不ノ喜ニー一性仁孝多二矜愍一」

【笑話】セウワ わらひかたる。詩經「燕ー一兮、是何有二暮處一兮」＝笑談。

【笑殺】セウサツ 甚だしくわらふ、殺は助字。南史、程靈祚傳「自可二拍レ手ー一」

【笑渦】セウクワ 白き齒を出してわらふ。孫覿詩「欣然一ー一、破此百夢結」

【笑止】セウシ 圖をかし、ばかばかし「ー一千萬」

【笑嗤】セウシ あざけりわらふ。劉基詩「未ノ能已二忽怒一、煩暇ノ防ニー一」

【笑疾】セウシツ 妄りにわらふやまひ。宋史、扈掌傳「有ニー一、雖二上前一不二自禁一」

【笑哂】セウシン わらふ。わらひ。李翺文「假令逃ニー一之狀、曰二羞聞一、則論語曾ノ之矣」

【笑聲】セウセイ わらひごゑ。陳瓘詩「語犀ノ異ー一同」

【笑談】セウダン わらひてものがたる。孔武仲詩「方外ー一無二聆域一」

【笑中刀】セウチウタウ 表面に溫和を裝ひ、內心陰險なるにいふ。唐書、姜撫傳「李義府、貌柔悅ノ人目、嬉恰微笑、而陰賊褊忌、著二于心一、凡忤ノ意者、皆中傷之、時號二義府——一」

【笑嘲】セウテウ わらひあざける。黃庭堅詩「ー一憐二鮫鰐一」

【笑納】セウナフ 圖自分の贈物を他人の受けんことを望む謙辭「御ー一被下度候」＝笑圖。

【笑罵】セウバ わらひののしる。宋史、鄧綰傳「ー一從ノ汝、好官須二我爲一之」

【笑柄】セウヘイ わらひぐさ。玉堂叢話「陳太常曾誤入二首部一、見下入二稅銀一者上、驚曰、賄賂公行、至ノ此極矣、人以爲ニー一」

【笑拄】セウチウ 喜びわらひて手をうつ。魏志、鍾繇傳、注「聞ノ之驚喜、笑與ノ拄俱」

【笑面】セウメン わらひがほ。李百藥、少年行「千金笑面、一揮掌中歡」

【笑樂】セウラク わらひたのしむ。元好問詩「日與二諸君一期、相從一ー一」

【笑覽】セウラン 圖わらひながらみる、己の物を他人のみることをいふ敬語。

【笑圖】セウト ○わらひながら圖め置く。水滸傳、第一回「不ノ要二推卻一、望乞ー一」○圖己の贈品を受納せんことを乞ふ謙辭「御ー一可ノ被ノ下候」＝笑納。

【笑裏藏刀】セウリザウタウ 外は和易にして內の陰險なるに喩ふ。笑中刀を見よ。

【笑話】セウワ わらひばなし、面白きはなし。

【帶ノ笑】タイセウ ゑがほする。李白詩「名花傾國兩相歡、長得二君王一ノ帶ノ笑ニー一」

【笑脫ノ頤】セウダツノイ 大いにわらふ。蘇軾詩「携ノ掌——」

【笔】トン 阮

ざる（竹器）米穀を受くる器。＝圓。

【笆】㊀ハ ㊁ハ 麻 麻

㊀刺がある竹（棘竹）㊁たけがき、竹を編みし籬。

【笆籬】ハリ まがき。劉禹錫詩「茫中士女齒ニー一」＝籬笆。

【笋】筍（竹部六畫）に同じ。「竹―」

【笋簏】タケノコ　たけのかは。元槇詩「風吹ニ―一」織二紅磁一雨打二桐花一簏二絲莎一」

【笋皮】タケノカハ　たけのかは。高適詩「―一笻子荷葉衣」

【笔】筆（竹部六畫）に同じ。

五畫

【笳】カ　虞

あしのはぶえ。胡人、蘆の葉を巻きて吹く笛、其聲觱篥に似たるもの「胡―」「蘆―」

【笳管】カクワン　胡人の吹く笛。南史、阮孝緒傳「外兄王安貞、擢重其門、孝緒聞レ其―一、穿レ窬逃匿、不レ與相見一」〓笳笛・胡笳。

【笳吹】カスヰ　あしぶえ。古、軍中にて用ふ。劉孝威詩「霍馬悲ニ―一」〓胡笳・悲笳。

【笳鼓】カコ　胡人の吹く笛と李益詩「―一悲愁繁、旌旗遠色故」〓笳管。

【笳笛】カテキ　こまぶえの異名「見戰之法、書以二旌旗鼓鐸一爲レ節、夜以二金鼓一―一爲レ節」

【笴】カン　旱韻

やがら（箭幹）「矢―」

【笞】コ　灰

たが、桶のかはをしめ堅めるわ。〓箍。

【笱】コウ　有

うへ、やな、魚を捕ふる具。竹を曲げて作る。詩、衛風「毋發二我一」」

【笙】サ。シャウ　庚

○しゃうのふえ、竹製の樂器、十三管、又、十九管ありて、形笋に似たり。○たかむしろ（筵）「桃―」○ほそし（細）

【笙歌】シャウカ　笙のふえと、うたと。楚辭「孔子閒居、五日彈レ琴而不レ成レ聲、十日倘成二―一」

【笙簧】シャウクワウ　しゃうのふえの舌。庾信、春賦「更爽二―一、還移二箏柱一」

【笙竽】シャウウ　しゃうのふえ。齊書、高帝紀「―一變レ聲、鐘石改レ調」

【笙鼓】シャウコ　笙の笛と、つづみと。時經「簫舞―一」

【笙簫】シャウセウ　ふえ。宋書、樂志「―一既列、懸象既盈」

【笙鏞】シャウヨウ　しゃうの笛と、大鐘と。書、益稷「―一以間」〓笙磬。

【笕】ケン　銑

○竹のなは（竹索）○いれずみ（黥刑）「鏹―」

【筒】トウ　東

はこ。飯又は衣服を入れる箱、圓を筥といひ、方を―といふ「衣―」「饌―」「筥―」「棗―」

【第】シ　霽

○ゆか（牀）○ゆかいた（牀板）○ゆかだな、いたじき（牀棧）○すのこ（牀簀）左、襄二十七「牀―之言、不レ踰レ閾」

【笘】セン　寒

支那揚子川地方にて小兒が字を寫すに用ふるふだ「一―」（一に佔畢に作る）

【笞】チ　支

○むちうつ（捶撃）「捶―」「鞭―」「旅―」むち、しもと、むちうつ杖。○刑罰の名、五刑の一、罪の輕重に隨ひてむちうつ數の制定あり（唐書、刑法志）

【笞斬】チザン　むちうちはづかしむ。唐書、安祿山傳「時時遣二―一レ之」

【笞刑】チケイ　五刑の一、むちうち懲らす刑。唐書、刑法志「斷獄之刑有レ五、一曰笞、笞之爲レ言恥也、凡過之小者、捶撻以恥レ之、漢用レ竹、後世更以レ楚」

【笞撃】チゲキ　むちうつ。史、張皆傳「發二東平、捕二奴婢一―一問レ之」〓笞捶。

【笞詬】チコウ　むちうちはづかしむ。唐書、崔縱傳「雖二縱願官一而數一―一」

【笞罰】チバツ　笞刑にあたるつみ。

【笞殺】チサツ　むちうちてころす。漢書、高后紀「斬二呂祿一―一呂須一」

【笞辱】チジョク　むちうちはづかしむ。漢書、朱邑傳「未二嘗一―一人一」

【笞捶】チスヰ　つゑにてうつ。轉じて、征伐の義とす、種一に捶に作る。荀子「一―一暴國一」

【笞罵】チバ　むちうちせむ。五代史、梁家人傳「緒惰不レ作レ業、數加二一―一」

【笞檛】チタク　むちうつ。齊經、傳「―一不レ是者、使レ記二識其過一」〓楚撻。

【笞杖】チヂヤウ　○むち。○笞罪と杖罪と。

【笞罵】チバ　むちうちのしかる。江少虞「朝夕―一、使レ不レ能二自存一」

【笞背】チハイ　せをむちうつ。漢書、賈誼傳「伏二中行說一而笞二其背一」

【笞撻】チタツ　むちうつ。哭寃、病レ項詩

「千鈞重負未ㇾ容ㇾ稱、更慶眉宵遷ㇾ一ㇾ」

【管掾】ケンエン　むちうちてひどくとりしらべる。史、酷吏傳「告姦不ㇾ服、以ニ一ㇾ一定ㇾ之」

【筑】　筑（竹部六畫）の譌字。

【笁】チョ　圖　ひ、機の緯ヰを持する者。

【第】テイ　ダイ　圖　○ついで（次序）「次ㇾ一」左、哀十六「楚國ㇾ一、我死、令尹司馬非ㇾ勝而誰」（勝は人名）○いへ、やしき（邸宅）宅には甲乙次第あるが故「邸ㇾ一」「別ㇾ一」「甲ㇾ一」○官吏登庸試驗「科ㇾ一」轉じて廣く試驗の義とす「及ㇾ一」「登ㇾ一」「落ㇾ一」「下ㇾ一」○しなさだめをする。○ただ（但）史、淮陰侯傳「陛下ㇾ出游ニ雲夢ニ」○物事のついでを記すに用ふる「ㇾ一」「ㇾ一ㇾ」

【第】ダイ　音・廸・直・稚の別は唯（口部八畫）の條を見よ。

【第宅】ダイタク　邸宅を造營する。唐書、崔座傳「東都ㇾ一ニ於集賢里ニ」

【第館】ダイカン　やしき、やかた。後漢書、宦者傳序「府署ㇾ一基ニ列於都鄙ニ」

【第觀】ダイクワン　邸宅と樓觀ろうかんと。後漢書、張讓傳「貫ニ田宅ニ、起ニ一ㇾ一ニ」

【第舍】ダイシャ　やしき。後漢書、梁冀傳「大起ニ一ㇾ一ニ」＝邸宅・第宅。

【第宅】ダイタク　やしき。後漢書、朱穆傳「減ニ省一ㇾ一園池之費ニ」杜甫詩「王侯ㇾ一皆新主」＝邸宅・第舍。

【第內】ダイナイ　やしきの內。＝邸內。

【就ㇾ第】ジュダイ　私宅に歸る。官職を辭する義。後漢書、賈復傳「復以ニ列侯ニ一ㇾ一」

【第一香】ダイイチカウ　○佛の異名【清異錄】○牡丹の異名。皮日休の詩に見ゆ。

【第一義】ダイイチギ　○最も大切なる意味。○佛教の最も深奧なる妙理。傳燈錄「問、何名ニ一ㇾ一ニ、——者、從ㇾ何次第得ㇾ入、師曰、——者、無ㇾ有ニ次第ニ亦無ニ前入ニ」

【第一人稱】ダイイチニンショウ　文法にて人代名詞の一、自己の名の代りに用ふるもの。予・余・僕の類。自己の相手の名の代りに用ふるを第二人稱といふ、君・汝の類、其の以外の者の名の代りに用ふるを第三人稱といふ。彼の類。

【第一流】ダイイチリウ　第一等のなかま。世說「劉曰、極還、然故是第二流中人耳、桓曰、——復是誰、劉曰、正是我輩爾」劉は劉眞長、桓は桓溫。

【第二國】ダイニコク　當事國以外のくに。

【第三者】ダイサンシャ　法律の用語、當事者以外の人。

【第三人稱】ダイサンニンショウ　第一人稱を見よ。

【第二人稱】ダイニニンショウ　第一人稱を見よ。

【笛】テキ　圖　試は遙に作る

ふえ。一尺四寸の竹管に七つの孔をあけて吹き鳴らす樂器。又、すべて吹き鳴らす樂器の稱「玉ㇾ一」「牧ㇾ一」「短ㇾ一」「鐵ㇾ一」風俗通「武帝時丘仲作ㇾ一、一滌也、蕩滌邪志納ニ之雅正ニ、長尺四寸、七孔」

【笛聲】テキセイ　ふえを吹くこゑ。李益詩「入ㇾ夜思ㇾ鄉切、一ㇾ一清更哀」

【笛伶】テキレイ　ふえふき、笛を吹く樂人。

【笈】ドウ　圖　通

とりかご（鳥籠）屈原、懷沙賦「鳳凰在ㇾ一兮、雞鶩翔舞」

【笵】範（竹部九畫）に同じ。

規模なり、土を以てするを型といひ、金を鎔といひ、竹をーといふ。

【符】フ　圖　○わりふ「一節」竹又木の上にしるしとすべき文字をかき、之を割りて彼我各半分を所持し、他日事あるとき、合せて證據とするもの「割ㇾ一」「剖ㇾ一」「將ㇾ一」又銅にて虎の形をつくりㇾ之を兩分するものもあり「銅虎ㇾ一」○しるし（證據）靈ㇾ一は天神の御印。○あふ（合）○めでたきしるし（瑞祥）甘露・醴泉の類「祥ㇾ一」「天ㇾ一」「地ㇾ一」「元ㇾ一」○未來記「ㇾ讖」○神明の加護をしるしたるまもり札「神ㇾ一」○きのはだ（木膚）○一種の竹。○字に通ず。

【符應】フオウ　しるし。符命が來り降りて人事と相應ずる義。史、封禪書、立ニ嗣上帝ニ以合ニ一ㇾ一ニ」

【剖ㇾ符】ボフフ　割符ㇾをさき、一半を諸侯に與へ、一半を留めて後日の信と爲す、大名に封ずる義。史、高祖紀「ㇾ一封ニ功臣ニ」

【劃ㇾ符】カクフ　○わりふをわかつ。漢書、高惠高后文功臣表「赤帶ㇾ一世ㇾ爵、受ニ山河之誓ニ」○國フ古、木片に文を記し、二つに分ち、一片を止め、一片を授け、他日合せ見て證とす。＝符節。

【符契】フケイ　しるし。漢書、元后傳「以ニ璽應ニ一ㇾ一ニ」

【符合】フガフ　わりふを合せたる如く正しくあふ。宋書、樂志「ㇾ一如ニ影

聲、先ノ天天弗レ違」

【符契】フケイ　わりふ。五代史、梁継輪傳「能使二契丹空レ國與レ師、應レ如二一一一」

【符驗】フケン　しるし、朱慶餘詩「藥成休二伏火一一一不レ傳レ人」

【符璽】フジ　○天子の御印。史、秦始皇紀「本二其一一一以爲二帝者一」‖璽符。○廣く印形の稱とす。禪愈、原道「相欺也、爲二之一一斗斛權衡一以信レ之」

【符讖】フシン　未來の興敗などを記したるもの、未來記。宋書、符瑞志「太史令駱達、奏二陳天文一一一」

【符瑞】フズイ　めでたきしるし【宋書、禮志】‖符瑞。

【符水】フスイ　神の守り札と、神に供へたる水と。能改齋漫錄「制二作一一一以療レ病」

【符瑞】フズイ　めでたきしるし。史、封禪書「未レ有下睹二一一一而不レ臻二乎泰山一者上也」‖符祥。

【符節】フセツ　わりふ、竹にて作り、文字を其の上に書し、兩分して各其の一を取り之を合して信となすもの。次條參看。

【著レ合二符節一】ガフフセツニツク　兩者の全く相同にきに喩ふ。孟、離婁「地之相去也、千有餘里、世之相後也、千有餘載、得レ志行二於中國一、——」

【符檄】フゲキ　しるしのかきつけ。唐書、李錡傳「不レ持二一一一、口含二詔書一」

【符命】フメイ　○天が祥瑞を降して人君に與へ、天命を受けし符レとする義。輔林志「帝王之興、必有二一一一一」○天子の勅命。文心雕龍「一一炳燭」

【符籙】フロク　未來記。傳信記「道士葉法善精二于一一之術一」‖符讖、讖書。

【笄】ヘン　元　阮

かご、竹などにて筥の形に造り之に青き繪を著せ蹇栗の屬を盛る器。

【笨】ホン　阮

あらし(麤率)そまつ「粗一」音書、羊祜傳「豫章太守史畸、以二肥大、時人目爲一一伯一」

【笨車】ホンシャ　粗造の車。宋書、顏延之傳「常乘二羸牛一一、逐二駿馬一而不レ能二乎泰山一者上也」‖符節。

【符節】フセツ　わりふ、竹にて作り、文字を其の上に書し、兩分して各其の一を取り之を合して信となすもの。次條參看。

【著レ合二符節一】ガフフセツニツク　兩者の全く相同にきに喩ふ。孟、離婁「地之相去也、千有餘里、世之相後也、千有餘載、得レ志行二於中國一、——」

【符檄】フゲキ　しるしのかきつけ。唐書、李錡傳「不レ持二一一一、口含二詔書一」

【笠】リフ　緝

かさ、かぶりがさ、柄なきを一、柄あるを笠といふ「雨一」「圓一」「蓑一」

【笠檐】リフエン　かさのひさし。陸龜蒙詩「一一蓑秋有二殘螢一」

【笠子】リフス　かさ、子は助字。李白詩「飯罷山頭逢二杜甫一、頭戴二一一一日卓午」

【笠澤】リフタク　湖名。揚州記「太湖一名一一、一名洞庭」

【答】レイ　リャウ　青

○かご(籠)びく。○舟中に數く牀ユ「一牀」

【答答】レイレイ　魚を流する具。陸龜蒙、漁具詩序「所レ載之舟曰二舴艋一、所レ貯之器曰二一一一一」びく(魚籠)

【笹】【國字】

ささ(篠)細小の竹の稱。

六畫

【筴】カウ　看　巧

○たけのなは(竹索)史、河渠書「寧長一兮沈二美玉一」‖籠纜。○ちひさき簫。

【筋】キン　文

○すぢ。○ちから、肉の力(體力)「一力」

【筋肉】肉の力なり、肉に從ひ力に從ひ、竹に從ふ、竹は物の筋多きものなるが故。

【筋骸】キンガイ　すぢと、ほねと。通記「通也者所二以固二人肌膚之會一、一一之束也」

【筋骸】キンガイ　すぢと、ほねぐみと。唐實回鶻傳「瀚海北產二良馬一、首似二鵝鶴一一、壯大、日中能數百里」

【筋竹】キンチク　○すぢと、ほねと。轉じて筆法にいふ。法書要錄「初學之際、宜レ先一一一一不レ立、肉何須レ附」○からだ。孟、告子「勞二其一一、餓二其體膚一」

【筋斗】キンとんぼがへり、もんどりうつ。敎坊記「奧武帝時、于天津橋、設二輪殿一酺三日、敎坊一小兒、一一絶倫、乃衣以二綵繒一、雜于內伎中、少頃綵二長竿一倒立、舉復去レ手久之、乃手翻身而下」‖金斗、翻金斗。

【筋肉】キンニク　すぢと、にくとの身體をいふ。

【筋脈】キンミャク　すぢと血脈と。素問「聖人陳二陰陽一一一和同、骨髓堅固、氣血皆從」

【筋骨】キンコツ　すぢと、せぼねと。文同詩「精金凝骨髓一一一老玉碾胸臆一一」

【筋力】キンリキ　すぢのちから。‖骨力、體力。

【筐】キャウ　陽　もと匡に作る

○かご、かたみ、方なるをいふ。○いひ、圓なるを筥といふ「瑤一」「敝一」詩、周南「不盈頃一」○脇の方なるもの。

【笸籮】ハクラ　べんたう。さかなどと。物を盛るの竹器。左、思三「一一錦綺之器、漬汙行潦之水」

【笸籃】ハクラン　方形のかご。圓きかご。

【笸林】ハクリン　方ノ如クなるゆか。莊、齊物「與レ王同一一一食二芻豢一」‖方林。

【笸底】ハクテイ　はこのそこ、はこのなか。

【笸籃】ハクラン　かご。劉勰新論「蹄不レ編則素絲棄二於一一一人不レ學則才智腐二於心胸一」

【笘】キョウ　㊀通じて巧に作る

○四川省に産するつゑとすべき一種の竹、節高くして中實つ。竹譜「竹之堪レ杖、莫レ尚於レ笘」○轉じてつゑ(竹杖)

【笘竹】キョウチク　○一種の竹、字解參看。○竹のつゑ。倚善住詩「孝袍一一自閑行」

【筆】ヒツ　㊀括に通ず

○やはす(筈末)箭のさきの弦を受ける所。陸機詩「離合非レ有レ常、譬二彼弦與一一」○圖はず。當然かくあるべき意をあらはす。

【笄】ケイ

○古、紙なかりし時、文字を記せし竹札、ふだ(竹簡)「簡一」孟、盡心「吾於二武成一、取二二三一」而已」○かきつけ(文書)○特に官を授くる時の辭令書「一書」○くじ、かずとり(籤署)○はかりごと(籌謀)「計一」「上一」「拙一」「奇一」「籌一」「畫一」○官吏登用試驗の問題「對一」「射一」○文體の一「制一」「治安一」○うらなひのめどぎ(數筮)史、封禪書「黃帝得二寶鼎神一、於二是迎一日推一」一○のり(敕令)○むち、馬を鞭うつむち(馬箠)「箠一」禮、曲禮「君車將レ駕則僕執レ策立二于馬前一」○むちうつ。論、雍也「一其馬一」○つゑ(杖)○一一は落葉のこと。

同訓異字　策・計・謀・圖・慮・度・稽・揆・測・料・忖・擬・商等の訓は計(言部二畫)の條を見よ。

【策杖】サクジョウ　鞭を振り上げる、馬を驅りて走らせる。儲光羲詩「一レ一還二南山一」

【策應】サクオウ　互にはかりごとを通じ合ふ「東西一一」

【策勳】サククン　勳功を冊に書す。左、桓二「凡公行、告二于宗廟一、反行二飲至一、舍レ爵一レ焉、禮也」

【策勳地】サククンチ　圖戰爭の時、作戰計畫を立て命令を發する所、本營。

【策策】サクサク　葉の落つること。韓愈詩「秋風一披拂、一一鳴不レ已」

【策士】サクシ　種種のたくらみを出す人。柳宗元文「曲逆起爲二一一一、輔二成帝圖一」曲逆は漢の陳平、曲逆侯に封ぜらる。

【策試】サクシ　官吏登用試驗に題を設けて試問する。後漢書、徐防傳「博士及甲乙一一、宜下從二其家章句一開二五十條一以試之、解釋多者爲二上第一」‖策問。

【策書】サクショ　官に任ずる辭令書。漢の制、皇帝が百官を任ずるに竹簡に書して之を與ふ(漢書、注)

【策杖】サクジョウ　つゑをつく。閑見前條、路險一レ一以行」

【策勵】サクレイ　むちと、たづなと。譚子「底一一、然後知二馭之道一」

【策府】サクフ　天子の書策を藏める所、唐には祕書省といふ。種天子傳「天子四登二見翁一、見二四王母一、發已至二軍玉之山一、先王之所レ藏一一」

【策勉】サクベン　はげましつとむ。魏開文帝文「宜レ與共相一一、弘二濟時業一」

【策謀】サクボウ　はかりごと。荀悅、漢紀序「有二常道一、有二權變一有一一一」

【策名】サクメイ　名を臣籍に書きしるす、臣となる義。左、僖二三「一レ一委レ質、貳乃辭也」李陵答二蘇武一書「一一清時一」

【策命】サクメイ　天子の臣下に下さるる文書、辭令書。周禮、內史「凡命二諸侯及孤卿大夫一則一一之」‖策書。

【策命使】サクメイシ　圖君から臣下に附與する御沙汰書・命令書等を奉じて行く使者。

【策問】サクモン　官吏登用試驗に題を設けて試問する。又、其の文體。後漢書、和帝紀「帝親臨一一」‖策試。

【策略】サクリャク　はかりごと。後漢書、賈逵傳「參二吉一一」

【策慮】サクリョ　はかりごと。劉歆文「權二通者之一一、威謀完二乎金城一」

【策勵】サクレイ　むちうちはげます。宋史、葉適傳「擢二此志窓一而叮以一一期望二者雅乎」

【筍】㊀シュン　㊁シュン　㊂通音ジュン

㊀たけのこ。‖筭。㊁こし(竹輿)〔公羊傳、注〕

【筍廚】シュンチュウ　たけのこと、わらびと。林玉露「山妻雅子作二一一、供二夢飯一」

【筍譜】シュンフ　一卷、宋の祕書丞撰す、五

類に分ちて筍を說くこと詳かなり。

【筍輿】ジュン　竹のこし。范成大詩「一一幾舫相隨年」倒稱して筍ともいふ。字解參看。‖竹輿・編輿。

【筅】セン　銑

○ささら(小帚)○茶一は、薄茶をかきまはして泡を立てる具。宋の韓駒父に謝二人寄一茶一子詩あり。

【筌】セン　先

うへ、ふせご、漁具の一、細き竹を編みたるもの。

【筌蹄】テイ　○魚をとるやなと兎をとるわなと。皆物を得るまでの具にて目的を達すれば不用となるもの、轉じててびき、案内などの義に用ふ。莊、外物「筌者所二以在一レ魚、得レ魚而忘レ筌、蹄者所二以在一レ兎、得レ兎而忘レ蹄、言者所二以在一レ意、得レ意而忘レ言」‖蹄筌。○轉じて南朝士大夫の說法の時に執るもの麈尾ヅの類。南史、侯景傳「上表二一一、曰、我賚二公講一」

【答】タフ　合

○こたふ(應)返辭ヘンジをする「即一」「奉一」「拜一」「手一」「報一」○むくゆ(報)「一禮」「一拜」孟、離婁「禮」「人不一」、反「其敬」○あたる(當)○あはす(合)○こたへ、いらへ、へんじ。○厚重なる貌「一布」

同訓異義　答・對・應・酬○答は當也、報也、先方の問に答ふるなり。○對は人の問に、それは何何と、一一ことわけて答ふるなり、答よりは重し。○應はあどうつなり。孟子「沈同問、燕可レ伐與、吾應レ之曰、可」○酬は盃にて應ずるなり、呼欵レ酬の類。

【答案】アン　こたへの案文、こたへがき。

【答揖】タフイフ　先方の敬禮に對して答禮する。金史、張行簡傳「一レ手一レ、近二于坐一受也」‖答拜。

【答應】タフオウ　こたへ。後漢書、五行志、注「熹平五年、天下大旱、禱二請名山一、求レ雨二一一一」

【答拉】タフラ　はりあふ。南史、戚衮傳「辯辭縱橫、雖二以一一、諸儒憚レ氣」

【答賽】タフサイ　神佛に報賽する、お禮まゐり。南史、王晏傳「晏未レ敗前、於二北山刱一一」

【答辭】タフジ　○こたふることば。○式禮などにて目上の人の式辭に對して答へ述べる辭。

【答謝】タフシヤ　答禮のことばを述べる。

【答書】タフショ　へんじのてがみ。‖答簡。

【答荅】タフ　竹の聲。蕭枝贈「破竹五七尺、指レ之一一然、以喩二編編之屬一」

【答拜】タフハイ　先方の敬禮にむくいて拜禮する。禮記「君於二士不一一一也、非二其臣一則一二一之一」

【答詩】タフシ　他の問に應じて いひひらきする。

【答揚】タフヤウ　こたへる。書、顧命「一二文武之光訓一」‖對揚。

【答禮】タフライ　他人の敬禮にむくいて禮する、返禮する。

【筑】チク　屋

箏に似たる樂器、竹を以て擊ちならす「琴一」「悲一」史、荊軻傳「高漸離擊一」

【筒】トウ　東

○つつ、竹のくだ。○轉じてすべて圓柱狀にして中の空虛なる者の稱。○國てつぱう、銃をいふ。

【筒袖】ちまき。風土記「端午進二一一、名角黍、以二菰葉一裹」

【等】トウ　迥

○しな、たぐひ(比・類)○ともがら(輩)「吾一」「彼一」「儕一」○ととのふ(齊)○ひとし(均)おなじ(同)「同一」「平一」「均一」○はかる(量)はかりくらべる、比較する、稱量する。孟、公孫丑「一一百世之王」○はしごだん(階級)論、鄉黨「出降二一一」○わかち、しな(差別)○まつ(俟)范成大詩「父老年年一二觀」○なに、何の俗語。應璩詩「用一稱二才學一」又、何一と連用す。後漢書、東平王傳「處二家何一一最樂」

同訓異義　等・齊・侔・均の別は齊(部首十四畫)の條を見よ。

【等位】くらゐ。荀子「尙レ賢使レ能、而一一不レ貳」

【等夷】おなじなかま、爽は儕。史、留侯世家「諸將皆陛下故一一」‖同儕・同輩・等倫。

【不レ踰レ等】次第順序をこえて進むことを爲さず。禮、學記「幼者聽而弗レ問、學一一也」

【等閑】なほざり。意を用ひざる義。錢起詩「瀟湘何事一一回」‖等閒。

【等閒】なほざり、かりそめに。孟郊詩「宦情惟一一」‖等閑・等頭。

【等級】しな、わかち。禮、月令「別二貴賤一一之度一」

【等差】しな、差別。顏氏家訓「風與二日月一同耳、但以二大小一爲二一一」‖差等・級差。

【等身】からだと同じ長さ。宋史、

晉書中傳「幼聽悟方五歲、父坦毎旦令正立展二書卷一、謂レ之ニ――一書ニ課ニ其誦讀一」

【等身金】トウシンキン　金の多きにいふ。舊唐書「有下生ニ得都批一者上賞レ之以ニ――一」

【等閑】トウカン　圖いかんぞ、なにら。

【等級】トウキフ　ついで。孟子、疏「序、――也」

【等數】トウスウ　しな。周禮、掌四方賓客之牢禮飢、飲食之ニ――與ニ其政治一ニ

【等閒】トウカン　なかま、同じともがら。後漢書、仲長統傳「或曾爲ニ我之雄長一矣、或皆與レ我爲ニ――一ニ」＝等輩・等倫・同儕。

【等輩】トウハイ　なかま、同じともがら。後漢書、茅容傳「與ニ――一避ニ雨樹下一ニ」＝等倫。

【等比】トウヒ　○ひとしく。漢書、張敞傳「諷公卿奏、憚案友不レ宜レ處レ位、――皆免」○數學にて二つの比のひとしきをいふ。

【等分】トウブン　○ひとしくわける。又、其の分量。○諸藥の斤兩、多少皆同じきをいふ〔名醫別錄〕

【等倫】トウリン　ともがら、同輩の義。杜甫詩「當貴當レ如レ此、終榮邁ニ――一ニ」漢書、甘延壽傳「投石超距、絕ニ――一ニ」＝同輩・等輩・等儕。

【等列】トウレツ　○おなじくらゐに居る。漢書、蕭信傳「居常缺於、蓋與ニ群瀆一ニ――上」○くらゐ。左傳「三年而治レ兵、入而振旅、歸而飲至、以數ニ軍實一、昭ニ文章一、明ニ貴賤一、辨ニ――一ニ」

【筆】ヒツ　㊥

○ふで、文字圖畫などを書く具、不律・毛穎は一の異名。「蓋――」「禿――」「退――」「下――」「執――」「援――」○すべて筆の用を爲すもの。「石――」「鉛――」「鐵――」○かく、しるす。「自――」「絕――」「一例」○筆にてかきし文字圖畫。「妙――」「拙――」

【筆意】ヒツイ　○ふでづかひ。書畫の運筆の意思。畫譜「――位置、清氣盤レ人」○行文の旨趣。

【筆架】ヒツカ　ふでかけ。開元天寶遺事「有ニ一錦紋花石一、縫賞ニ――一ニ」

【筆耕】ヒツカウ　賃錢を取りて文字を寫す、農夫の田を耕すに喩ふ。任昉文「既――資レ養、亦備書成レ學」

【筆墨】ヒツボク　ふでのけ。南史、鄭灼傳、「――悉、毎削用レ之」

【筆格】ヒツカク　ふでかけ。楊文公談苑「宋綬思公、有ニ一珊瑚――一、子弟竊レ之、公以ニ十千一購レ之」＝筆架。

【筆諫】ヒツカン　筆法に託していさめる。唐書、柳公權傳「帝(穆宗)問ニ公權用レ筆法一、對曰、心正則筆正、筆正乃可レ法矣、時帝荒縱、故公權及レ之、帝改容悟「其以レ――一也」

【筆削】ヒツサク　書くべきはかき、削るべきはけづる。史、孔子世家「至レ爲ニ春秋一、筆則筆、削則削、子夏之徒、不レ能レ贊ニ一辭一ニ」

【筆札】ヒツサツ　○筆と紙と。史、司馬相如傳「上許令ニ尚書給ニ――一ニ」○てがみ。＝筆翰。

【筆算】ヒツサン　○書くと數へると。習字と算術と。○算用數字を用ひて計算すること。珠算の對。＝洋算。

【筆師】ヒツシ　筆匠なり。山谷題跋「今都下有ニ――如ニ胡毛一ニ」＝筆工。

【筆者】ヒツシヤ　かきて、筆を下して書きし者。

【筆寫】ヒツシヤ　ふでにてかきうつす。

【筆匠】ヒツシヤウ　ふでをつくる工人。嫌眞子「唐祕書省(中略)裝潢匠六人、――六人」＝筆工。

【筆林】ヒツリン　ふでかけ。李夢詩「數枝門柳低ニ衣桁一、一片山花落ニ――一ニ」

【筆趣】ヒツシユ　ふでづかひ。南史、蕭引傳「此字――關關、似ニ鳥之欲レ飛」

【筆蹤】ヒツセキ　ふでのあと。晉書、王獻之傳「觀ニ其――一、猶東晉ニ能家之餓隸一ニ」＝筆迹。

【筆生】ヒツセイ　寫字を業とするもの、寫字生。

【筆勢】ヒツセイ　筆の力。晉書、王羲之傳「論者稱ニ其――一、以爲飄若ニ浮雲一、矯若ニ驚龍一ニ」＝筆力。

【筆精】ヒツセイ　筆を用ふることの精妙なる義。益州名畫錄曰「蜜之於レ人、各

有二本性一、一一盛妙、不レ知レ所レ然」【筆迹】ふでのあと。書跡。隋史、王僧虔傳「辭制既雅、一一又麗」＝筆蹟・筆跡。

【筆蹟】ひつせき　前條に同じ。

【筆舌】ひつぜつ　筆と口舌と。法言、問道「吾見二天常一、爲二帝王之一一也」天常は五常。

【筆尖】ひつせん　ふでのはさき。王惲詩「細窗春惊二入一一」

【筆洗】ひつせん　ふであらひ（考槃餘事）

【筆戰】ひつせん　〇筆がふるふ。張舜民詩「隈牀一一誰能置」〇文筆上のあらそひ。

【筆到】ひつたう　十分に書きしるきる。米黻詩「誰云存レ心乃一一」

【筆答】ひつたふ　書きてこたへる。文士傳「有二劇問一、以レ一一レ之」＝筆對。

【筆端】ひつたん　ふでさき。文賦「籠二天地一於形内一、挫二萬物一於一一」

【筆談】ひつだん　言語に代へて筆にて意思を通ずる。

【筆致】ひつち　ふでつき、文字のかきぶり。

【筆誅】ひつちう　其の罪惡をかきたてせめる。

【筆陣】ひつぢん　文詩の雄健なるを行陣に喩へていふ。杜甫、醉歌行「詞源倒流三峽水、一一掃千人軍」

【筆冢】ひつちう　ふでづか。國史補「長沙僧懷素好二草書一、自言、得二張旭三昧一、寫壞禿筆千枚、埋二于山下一、號曰二一一一」＝筆塚。

【筆筒】ひつつう　ふでを入れるつつ。ふでたて。我虚雜俎「獻之有二逸竹一一一」

【筆頭】ひつとう　〇ふでの穂。雲仙雜記「李太白少夢二一一生花、後天才贍逸、名聞二天下一」〇筆の如く尖りたるあたま。魏書、古弼傳「弼頭尖、世祖常名レ之、曰二一一一」〇國連名中の首席の者、ふでがしら。

【筆頭菜】ひつとうさい　草の名、つくし、つくつくし。＝土筆。

【筆禍】ひつくわ　ふでばこ。吳菜詩「門垣成二畫趣一、一一到二酔樵一」

【筆法】ひつぽう　〇ふでの運びかた。唐書、韓愈傳「滉書得二張旭一一一」〇文の作りかた。

【筆鋒】ひつぽう　ふでさき。鮑照詩「兩設窮二舌鋒一、五車摧二一一一」

【筆墨】ひつぼく　〇ふでと、すみと。〇轉じて文章をいふ。晉書、溫嶠傳「陶侃上書曰、故大將軍嶠、忠誠著於聖世、勳績感於人神、非三臣一一所二能稱陳一」

【筆力】ひつりよく　ふでのいきほひ。圖畫見聞志「畧顧（中略）工二畫馬一、有二神幹之風一、而一一勁逮」

【筆力扛レ鼎】ひつりよくかうてい　文章の勢のつよきをいふ。韓愈、病中贈二張十八一詩「龍文百斛鼎、筆力可二獨扛一」

【筆路】ひつろ　〇ふでづかひ。模畫。晉、衛恒「索靖賛」「索靖賛」「索靖賛」

曾曾、劉長傳「賓客―ノ、文案盈ノ几、遠近書記、日有二數千一、終日不ノ倦」

【筥】キョ　圓　○物を盛るはこ、圓形の筐。「飯―」「飯―」詩、召南「維筐及―」○いなたば、刈りたる稻の束。

【筐】クヮン　早　曾（竹部八畫）に同じ

○ふえ、くだ（管）「磬―」○かご（籠）「―鍵」○つかさどる（主）史、平準書「桑弘羊爲大司農、―諸曾計事」【筐篋】ふえと、ことの類と。漢書、韋玄成傳「鐘鼓―ノ」＝曾篋。

【筧】ケン　徵　かけひ、とひ、竹をかけわたして水を通ずるもの「竹―」「山―」「曲―」【筧水】かけひのみづ。陸游詩「―長澗ノ樂、燈窗夜覆ノ棋」

【箐】セウ　圖　○ふご、はこ。○めしびつ、一斗二升の飯米を容れる竹器。○轉じて僅少の分量の義。又、凡庸の人にいふ。論、子路「斗―之人、何足ノ算也」○はしづつ（筋筒）○ささら（飯帚）【箐斗】わづかの升目。分量の小さきにいふ。沈佺期詩「晉徒緣ノ家厚、―慙二相貽一」＝斗筲。

【筴】㊀サク　㊁ケフ　藥　陌　㊀めどぎ（筮）曲禮「龜爲ト、―爲筮」○ふだ（簡）かきもの。莊、駢拇「挾―讀書」＝冊策。○はかりごと（謀）史、張耳陳餘傳「恐陳王不用其―」＝策。○やらい。＝柵。㊁はし（箸）○はさむ、はさみあぐ（夾擧）韓愈、曹成王碑「―漢陽」

【筰】サク　藥　○たけなは（竹索）○國の名、卬は支那の西南夷の地。

【算】サン　輸　○そろばん、計數の具。○俗に算（竹部八畫）と通用して數ふる義とす。【算數】計數の義、竹に從ひ弄に從ふ、常に弄べば誤らざるなり。

【筅】セイ　庚　をさ、機の經糸を整へ理むる具。

【筮】セイ　霽　○うらなふ。うらなひ、めどぎを以てする占術「ト―」「占―」「易―」うらかた。○めどぎ（蓍）占ひに用ふる五十本の細き竹、古蓍草の莖を用ひたりといふ「―竹」【筮龜】うらなひに用ふる龜。【筮短龍長】「六日―一」＝龜筮。【筮龜】うらなひにあらはれたるしるし。晉書、郭璞傳「璞撰二前後一六十餘事一」【筮仕】吉凶をうらなひて仕へる、初めて仕官するにいふ。左、閔元「郭偃―ノ二子晉一遇二屯之比一、辛談占ノ之曰、吉」【筮竹】うらなひに用ふるめどぎ。字解參看。【筮卜】めどぎを以てうらなふと、龜の甲をやきてうらなふと。漢書、倪林傳「及二秦禁一ノ學、易爲二―筮一之書一獨不ノ禁、故傳受者不ノ絕也一」＝卜筮、占卜。

【筱】セウ　篠　通音ゼウ　しのだけ（小竹）＝篠。

【筋】キン　斤　はし「竹―」「匕―」＝箸。

【筵】テイ　青　○ひくだ、機絲をまく管。○小さきたけざを。

【筩】㊀トウ　㊁ヨウ　東　腫　㊀たけづつ（竹筒）○筩―は小孔ありて、入るべくして出すべからざる器、今の郵便箱の類。漢書、趙廣漢傳「受民間書」爲二筩一以投之」㊁やづつ（箭室）

【箏】ソウ　庚　○竹の中のうすきかは、竹中の衣。○よこいと（緯）をまきつけるくだ。

【篁】コウ　陽　○わかだけ（幼竹）「叢―」

八畫　竹

【箇】カ　㊀コ　㊁　又、个・介に作る　個は俗字　○物を數へるに用ふる字、枚の義。荀、議兵「負矢五十―」○この、これ。此の俗語。○俗に

物事を指し示すに用ふ。這ーはこの、那ーは、あの。
【箇箇】ひとつひとつ。杜甫、贈詩「卻絵二非稱一添ニ一ー一」
【箇所】箇ここととめざすところ。
【箇條】箇かど、くだり。＝個條。
【箇人】一人といふが如し。＝個體の對「ー一種」＝個人。
【箇數】箇物のかず。
【箇中人】此の中の人の義。蘇軾詩「平生自是ー一」
【箇儂】われ、自稱の詞。隋煬帝詩「ー一無賴是楡波」

【箕】キ　支

○み、穀物にまじれる塵・糠などをさばいて分け去る具（簸）○轉じて其の形の如く兩足をのべて坐する貌。曲禮「坐毋ー」○ちりとり、塵芥を受ける器具。論、曲禮「必加ニ帚於ー上一」○み、二十八宿の一にて、風を好むと星。春秋緯「月麗ニ于ー」、風揚レ沙」○かぜのかみ（風師）張衡、思玄賦「屬ニ飛廉一使ニ奔ー」○國の名、子爵、今の山西省楡社縣の東南。ー子は殷の紂王の臣、所謂三仁の一人。
【箕踞】キキョ　高節を全くして隱遁するにいふ。晩の時、許由が堯の天下を讓らんとするを聞きて、箕山に隱れ潁水に耳を洗ひたる故事に本づく。謝靈運詩序「徐幹少無ニ宦情一、有ニ一之心事一」
【箕斂】キレン　箕にて物をすくひとる如くむやみに租稅を貪りとる。史、張耳・陳餘傳「頭會ー一、以供ニ軍費一」（頭會は民の頭數に應じて穀を出さしむ）
【箕帚妾】キソウショウ　ちりとりと、はははきとを執る下女。轉じて人の妻となるといふ謙辭。史、高祖紀「呂公曰、臣少好ニ相人一、相ニ人多矣一、無レ如ニ季相一、願季自愛、臣有ニ息女一願爲ニ箕ー帚ー一」（帝一に箒に作る、箒は俗字）
【箕山之志】キザンノこころざし　許由・巢父の二人が箕山（河南省登封縣嵩山の南にあり）に隱れたる故事により、退隱して節を守るにいふ。晉書、向秀傳「文帝問曰、聞有ニ一一、何以在レ此、秀曰、以爲巢許狷介之士、未レ遽ニ曉心一、堂足ニ多慕一、帝甚悅」漢書、鮑宣傳「小臣欲レ守ニ箕山之節一」
【箕踞】キキョ　兩足をのべてすわる。史、刺客傳「倚レ柱而笑、ー一以罵」＝箕坐。
【箕坐】キザ　兩足をなげ出して坐す、箕の形に似る故。論衡「趙陀椎髻ー一」＝箕踞。
【箕帚】キソウ　ちりとりと、ははきと。說苑、修文「草茅之產、得レ奉ニ執ー一之事一」（執ニ一一は人の妻となるといふ謙辭）
【箕帚妾】キソウショウ　ちりとりと、ははきとを執る下女。轉じて人の妻となるといふ謙辭。史、高祖紀「呂公曰、臣少好ニ相人一、相ニ人多矣一、無レ如ニ季相一、願季自愛、臣有ニ息女一願爲ニ箕ー帚ー一」（帝一に箒に作る、箒は俗字）
【箕山之志】キザンノこころざし　許由・巢父の二人が箕山（河南省登封縣嵩山の南にあり）に隱れたる故事により、退隱して節を守るにいふ。晉書、向秀傳「文帝問曰、聞有ニ一一、何以在レ此、秀曰、以爲巢許狷介之士、未レ遽ニ曉心一、堂足ニ多慕一、帝甚悅」漢書、鮑宣傳「小臣欲レ守ニ箕山之節一」
【箕踞】キキョ　兩足をのべてすわる。史、刺客傳「倚レ柱而笑、ー一以罵」＝箕坐。
【箕坐】キザ　兩足をなげ出して坐す、箕の形に似る故。論衡「趙陀椎髻ー一」＝箕踞。
【箕帚】キソウ　ちりとりと、ははきと。說苑、修文「草茅之產、得レ奉ニ執ー一之事一」（執ニ一一は人の妻となるといふ謙辭）
【箕帚妾】キソウショウ　ちりとりと、ははきとを執る下女。轉じて人の妻となるといふ謙辭。史、高祖紀「呂公曰、臣少好ニ相人一、相ニ人多矣一、無レ如ニ季相一、願季自愛、臣有ニ息女一願爲ニ箕ー帚ー一」（帝一に箒に作る、箒は俗字）

【箘】キン　圓

○やだけ、しのだけ、矢がらを作るに適する一種の竹。○たけのこ（筍）

【管】クヮン　旱　又、筦に作る

○くだ、だけくだ。○ふでのちく「筆ー」「彤ー」○ふえ、笛の類「簫ー」「金ー」「急ー」「ー絃」○かぬ（包）○かなめ（樞要）荀、術效「聖人也者道之ー也」○つかさどる、事を總理する、支配する「ー轄」「主ー」「總ー」史、李斯傳「ー事二十餘年」○かぎ（鍵）「ー鍵」
【管仲】クヮンチュウ　管仲と晏嬰と、共に齊の賢相、史記に其の列傳あり。
【管晏】クヮンアン　管仲を見よ。
【管見】クヮンケン　ふえのね。後漢書、法「ー一調、則律曆正」
【管窺】クヮンキ　見る所の甚だ小なるに喩ふ。莊、秋水「是直ー一、用ニ錐指一地也、不ニ亦小一乎」＝管窺・管見・以ニ蠡測一海。
【管家】クヮンカ　一家の取締人、又商店の番頭など。
【管樂】クヮンガク　管仲・樂毅のなかま、二人は春秋戰國時代の名臣。孟浩然詩「自顧躬耕者、才非ニ一一」蜀志、諸葛亮傳「亮寓ニ居襄陽隆中一、毎自比ニ管仲樂毅一」
【管蒯】クヮンカイ　齊の管仲と、三國の蜀の諸葛亮と、二人は共に名相。南史、劉瀚傳「常自比ニ一一一」
【管鍵】クヮンケン　管は門戸を開閉することを掌るかぎ、鍵は車輪をすべるくさび。轉じてしばいする義。孫臏文「編紀居ニ一一之任一」＝管理。
【管輪】クヮンリン　筆。晉書、書賦對「固非ニ一一之所ニ逮、聊敬對以終レ篇」＝筆輪。

【管窺】クワンキ　管見に同じ。管中窺レ豹を見よ。‖管見。

【管蠡】クワンレイ　ふえのね。陳琳主簿「野鶴唳ニ一一一」

【管見】クワンケン　くだのあなから豹の一斑をみる。見識の狭きにいふ。何承天、答二顔永嘉一書「吾少信ニ一一一、老而彌篤」‖管窺。

【管絃】クワンゲン　ふえと、琴と。廃興、礼楽志「鐘石ニ一一」王羲之、蘭亭記「無二絲竹ニ一一之盛ニ」‖絃絲、絲竹。

【管鍵】クワンケン　かぎ。周礼、司門「掌ニ授ニ一一一以啓中閉関門ニ」‖管鑰。

【管庫】クワンコ　身分卑きくらばん。役号「一一之士、七十有餘家」

【管蔡】クワンサイ　管叔と蔡叔と、共に周公旦の兄弟、後ち亂を起して誅さる。

【管城】クワンジヤウ　地名、周の管叔の封地、河南の縣名、今の河南省鄭縣の治。

【管城子】クワンジヤウシ　筆の異名。韓愈、毛穎傳「聚ニ其族一而加ニ束縛一焉、秦皇帝使ニ恬賜ニ之湯沐一而封ニ諸管城一、號曰ニ一一一」

【管商】クワンシヤウ　管仲と商鞅と、共に春秋戦国時代に於ける法家（韓非、五蠹）

【管掌】クワンシヤウ　とりしまりつかさどる。

【管守】クワンシユ　掌りまもる。又其の人、番人。

【管籥】クワンヤク　ふえ。鄭玄詩、神前舞女舞ニ妖繞一社下游人弄ニ一一一」

【管弦】クワンゲン　見識のせまき言説。魏書、劉芳傳「臣學謝ニ全經一、業非ニ通古一、豈可ニ輕薄ニ管弦一、妄陳ニ一一一」

【管船局】クワンセンキヨク　國通信大臣の管轄に属する一局、航路及其の標識・船舶・海員・水運、又其の保護会社の監督等を司る。

【管長】クワンチヤウ　○とりしまりのかしら。管守の長。○一宗一派を管理するかしら。

【管仲】クワンチユウ　春秋の斉の賢相、字は夷吾、桓公をたすけて天下に覇たらしむ。論、憲問「子曰、ニ一相二桓公一、覇二諸侯一、一匡二天下一、民到二于今一受二其賜一、微ニ一一一吾其被二髪左衽一矣」

【管中窺豹】クワンチユウキハウ　見る所の小なるに喩ふ。晉書、王獻之傳「一一一時見ニ一斑一」

【管統】クワントウ　つかさどりすべる。雲笈七籤「各有ニ官位一、以相ニ一一一」

【管内】クワンナイ　うけもちのうち、管轄する範囲内。

【管鮑交】クワンパウノマジハリ　管仲・鮑叔の二人の互に心を知り合ひて変りし故事（史、管仲傳）杜甫詩「君不レ見ニ一一貧時交、此道今人棄如レ土」

【管絡】クワンラク　○ふえ、簫は三孔又は六孔ある笛。孟、梁恵王「百姓聞ニ王鼓二之聲一、ニ一之音ニ」○かぎ、管は鑰に同じ。禮、月令「慎ニ一一一ニ」‖鍵鑰。

【管鑰】クワンヤク　かぎ。鑰は鍵。前條の後の解参照。‖管鍵。

【管理】クワンリ　つかさどりをさめる。‖管絡。

【管領】クワンリヤウ　○すべてをとりしまりをさめる。道徳指歸論「ニ一天地、無レ不ニ包裹一」○國足利時代、将軍を補佐せし重職。

【管轄】クワンカツ　くだと、ほらがひとくだにて天をうかがひ、ほら貝にて大海の水を測る如く極めて見識のせまき喩。東方朔、客難「以レ管窺レ天、以レ蠡測レ海」‖管見蠡測。

【管玉】クワンギヨク　勾玉の一種にして、管状をなす、瑪瑙などにて造る、緑に貫きて、頸・手・足などの装飾に用ひしもの。

【笇】ケン　鉗に通ず

○くびかせ（銷項）○くびかせをかける。○とざす（銷）おびやかして口をきかさず、木を口に含ませて聲を出さしめず。

【箝語】カンゴ　くちをふさぎて言はしめず。偶語することを禁ずる。漢書、異姓諸侯王表「植レ城銷レ刃、一一燒レ書」

【箝口】カンコウ　くちをつぐむ。又、口を閉ぢて言はしめず、言論の自由を束縛する。漢書、袁盎傳「君自閉ニ箝天下之口一、而日益レ甚」‖鉗口、箝口、箝語、緘口。

【箝制】カンセイ　束縛して自由をさせぬ。

【箍】コ　固

○たが、割竹をたがねて桶・樽などを束ねしめるもの。‖笍。○たがをかける。語錄「宋大悲寺一桶者、箍易、程顥兄弟就寄レ所疑、酬應如レ響、問「其姓不」箍」

【箜】コウ　東

【箜篌】クゴ　○こと、琴の類、もと十二絃、今は十三絃、秦の蒙恬の創製なりといふ「秦一」「彈一」さゝのこと。○風一は簷端などにかけるふうりん（風鈴）李商隱詩「西樓一夜風一急」

【箟】サフ　セン　沿　篇

うちは（扇）世本「武王始作一」

【筭】筆（前條）に同じ。

【算】㊀サン　㊁サン　輯 早　俗に算に通用す

㊀かず（數）○かぞふ物の數を計る。論、子路「噫斗筲之人何足ㇾ也」（數の中に入れてかぞへるに足らぬ）㊁そろばん、數をはかるに用ふる器。又、其の術。○ちゑ（智略）○はかりごと（籌畫）○かずとり、投壺の勝敗の數をあらはす具（籌策）儀禮、鄉射禮「一人執ㇾ以從之」

同訓異語　算・計・謀・圖・慮・度・稱・揚・測・料・忖・諮・筭等の別は計（言部二畫）の條を見よ。

【亂ㇾ算】サンラン　圖ちりぢりにみだれる、混亂する。

【算學】サンガク　そろばん、數學に同じ。

【算木】サンボク　圖○普通のそろばんにて算出し難き場合卽ち開平以上の計數に使用する方柱形の木のこま。○易占に用ひて卦を示す具、長さ三寸許の方柱形の木にて六箇あり。

【算卦的】サンクワテキ　圖賣卜者。

【算計】サンケイ　かぞへはかる。魏志「必欲下ニー長短ニ辨ニ論是非ㇾ」と臨海詩「蜀估峽商工ニーニ」

【算子】サンシ　そろばん、さんぎ、子は助辭。五代史、王章傳「此豎與ニ一把ㇾ一、未ㇾ知ニ顚倒ニ何益ニ於國ニ邪」

【算術】サンジュツ　算數の術。漢書、藝文志「杜忠ㇾ一十六卷」‖算法・數學。

【算數】サンスウ　數學。北史、刁沖傳「圖緯ㇾ一、天文風氣之書、莫ㇾ不ニ關綜ニ」

【無ㇾ算】ムサン　數へることの出來ざるほど多くある「殺傷ㇾ一」

【算無ニ遺策ㇾ】サンナシ　はかりごとに手落ちなし。晉書、桓玄傳「經略指授、——」

【算入】サンニフ　かぞへいれる、かずに加へる。

【算博士】サンハカセ　○算術の博士。轉じて詩中に多く數字を用ふる者を嘲りていふ。全唐詩話「路賓王好以ㇾ數對、如ニ梁地重關一百二、漢家離宮三十六、號爲ニ——ニ」○圖古、大學寮の數學教師の稱。

【算法】サンポフ　計算の法。北史、高允傳、允明ニーニ」

【算盤】サンバン　そろばん（十露盤）十萬寶叢新錄「古人布ㇾ算、以ㇾ籌、今用ニーニ」‖算子。

【算命的】サンメイテキ　圖命運を推算する。算卦的に同じ。

【算用】サンヨウ　圖かんぢやう、數を計算する、計算。

【算歷】サンレキ　算法と歷象と。南史、祖暅傳「皓少傳ニ家業、善ニーニ」

【筹】シウ　有　通音サウ　籌に同じ

○はばき、はゞき、膚をはき去る具「竹ー」「箕ー」○拂雲ー山に生ずる竹の名、莖は指の大いさの如く梢に細き葉密に生じて箒の如し。僧贊寧、竹譜「拂雲ー生ニ廬山ニ」

【箒掃】シウサウ　はゞきにてはく。皮日休詩「琥珀珠粘行處雪、櫻桃ー——臥來雲」

【箒】シャウ　陽　しのだけ（細竹）「篲ー」

【箠】スヰ　紙

○むち、馬をうつむち（馬策）「馬ー」‖捶。○罪人をむちうつ又其のむち「杖ー」「楚ー」「鞭ー」○むちうつ刑罰（笞刑）漢書、刑法志「景帝中六年定ニーニ令ニ」

【箠策】スイサク　うまのむち。李尤、馬箠銘「御者ー一、示ニ有ニ威怒ニ」

【箠楚】スイソ　むちうつ、又其の刑。雲龍浸鈔「杜詩云、脫身潭尉中、始與ニーニ酬、韓昌黎詩云、列司卑官不ㇾ堪ㇾ說、未ㇾ免ニーニ塵埃中ニ」‖杖刑。

【箠笞】スイチ　馬のむちと、犬いなるつゑと。漢書、晉丘壽王傳「乘ニ乘天下ニ、驅ニ名城ニ、殺ニ豪傑ニ、鎖ニ甲兵ニ、折ニ鋒刃ニ、其後民以ニ種組ーニ、相ニ箠擊ニ」注「箠、馬鞭、笞、大杖」

【箠罵】スイバ　むちうちののしる。朱鳥可談「沈括存中、晚娶ニ張氏ニ悍虐、存中不ㇾ能ㇾ制、時被ニーニ」

【箠楚】スイソ　むちと、たづなと。漢書、王吉傳「手苦ニ於ーニ、身勞ニ乎車輿ニ」

【箋】セン　先　通じて牋に作る

○書物の意義を解き明かす文句を記して本書にはりつける小さき札紙「附ー」轉じて註釋の義とす「毛詩鄭ー」○かきもの（文書）○たてまつるふみ（上書）又、其の文體、奏記の類、太子・諸王に上つるにもいふ。○詩文、又は手簡を書く小幅にして美くしき紙「詩ー」「用ー」「短ー」

【箋紙】センシ　文書をしるすかみ。語林「謝安就ニ乞ニーニ」

【箋釋】センシャク　書物の註釋「荀子ーー」‖注疏・註解・箋注・註釋。

【箋注】センチュウ　次條に同じ。

【箋註】センチュウ　本文の意を解釋する。韓愈文「古聖人言、其旨深微、——初難、觀ニ前人ニ倒是非ニ」‖箋注・箋釋・註解。

【劄】サツ　職　錫
○さす、鍼にて刺す。○臣下が君主に事を奏する文の一體、表にあらず狀にあらざるもの「一子」札に通ず、公文書、上より下に行ふもの。○しるす（錄）―記サツは書を讀みて得る所あれば隨時に輯錄する者をいふ「二十二史―」

【箔】ハク　藥
○すだれ（簾）「珠―」「簾―」○養蠶に用ふる具（蠶箔）「蠶―」韓愈詩「春蠶看三滿―一」高啓詩「幸早夏分蠶―薄。○金屬を薄くたたきのばしたるもの「金―」「銀―」

【箙】フク　屋
えびら、矢を盛る器、獸皮又は竹木を用ひて作る。周禮、夏官「仲秋獻矢―」通じて服に作る。

【箊】筒（竹部十畫）に同じ。

【箊】ヨ　魚

箖―は葉の薄くして廣き竹の名。

【箖】リン　眞

―箖は竹の名。前條參看。

九畫

【箠】イ　支
さを（竿）竿を以てころもかけ（衣架）とするもの。＝椸。

【箯】カ　麻
○よしぶえ。＝笳。○よし（葦）のわかきもの。

【箐】クヮ　陽
○竹の一種、質堅く節の促まり、大なる者は船に作るに宜しく、小なる者は笛と爲す。○竹の通稱「修―」「翠―」「筠―」「疎―」柳宗元詩「簷下修―十二竿」○やぶ、たかむら（竹田・竹叢）「幽―」「叢―」

【箐篠】クヮウ　たけと、しのと。竹譜「―之屬、必生二高燥一」

【箐竹】ナンチク　むらがり生じたるたけ。柳宗元文「隔二―一聞二水聲一」

【箑】ケフ　葉

長方形の箱、主に書物などを入れるはこ「書―」「箱―」「啟―」「開―」禮、學記「入學鼓―、孫其業也」

【箱物】ソウブツ　はこ。韓愈詩「探藏二―一時一發」＝篋笥。

【箱篋】ソウケフ　はこ。搜神記「火從二―中一起、衣物盡燒」

【箙】ッ　屋
―箙はやなぐひ、えびら（箭室）の屬、矢を容れて負ふ具。＝胡簶。

【箙箭】ブクセン　やなぐひ。＝箙簶・胡簶。

【箜】コウ　九
―篌は樂器の名、箜（竹部八畫）を見よ。

【箘】コウ　送
○たけのうつは。○やな、竹木を束ねて魚を取る具。＝魚梁。

【箴】シン　侵
○はり（針）衣を縫ふに用ふるはり。禮、內則「紉―請補綴」＝鍼。○いしばり、古、石にて作り病を刺して治するもの。轉じていましめ（規戒）の義とす「規―」「良―」「世―」「明―」○いましめをしるす文體の名。文體明辯「按、說文云、―者、誡也、蓋醫者以―石刺病、故有所諷刺而救其失者、謂之―、喩―石也」「酒―」「大寶―」

【箴戒】シンカイ　箴・戒・誡・警・儆・敕の訓は戒（戈部三畫）の條を見よ。

【箴誡】シンカイ　いましめ。いましむ。柳宗元文「用二國史一―二以施一其政一」＝箴儆。

【箴儆】シンケイ　いましめいましむ。漢書、路溫舒傳「開二天下之口一、廣二―之路一」

【箴規】シンキ　○いましめ。○いましめたゞす。孟浩然詩「人生靜躁殊、莫レ照二相―一」

【箴訓】シンクン　いましめ、をしへ。質信文「夫人高氏、―有レ儀、言容以レ德」

【箴砭】シンヘン　いましむ。又、いましめ、箴は警。國語「晉獻武公年九十有五、猶――于國」

【箴言】シンゲン　いましめのことば（警句）

【箴石】シンセキ　いしばり。漢書、藝文志「醫經――湯火所レ施」

【箴誡】シンカイ　それとなくいましめる。唐書、儒學傳「孔穎達爲二皇太子一、撰二帝經章句一、因レ文以箴――」

【箴砭】シンヘン　病を療するいしばり、砭はいしばり。轉じて人の惡をいまし

める義とす。‖針砭。

【箴銘】シンメイ　いましめの文と銘と。謝靈運文「詩以言レ志、賦以敷陳、一一誄頌各有レ倫」

【箱】シャウ　サウ　陽

○はこ、かたみ(筐・篋)「巾ー」「琴ー」○にぐら、車内の物を容れる處。○こめぐら(米廩)詩、小雅「乘二其ー一斯ー」○ひさし。‖廂。

【箱篋】ソウケフ　はこ。蘇軾詩「家風二吉今帖一墨色照二ー一」

【箱篋】サウケフ　はこ。名義鈔「所レ得レ之皆ニー一珍一」

【箸】ジャク　藥　或は筯に作る

○くまざさの類、葉を取りて笠に作る「一竹」○たけのかは(竹皮)

【箬笠】ジャクリフ　たけのこがさ(瑯琊代酔篇)‖箬笠。

【箕】　箕(竹部十二畫)に同じ。

【箸】セイ　シャウ　梗　青

笮ーセイは魚を漁する具、漁せし魚を入れるかご、びく。

【箭】㊀セウ　㊁サク　篠　藥

㊀樂器の名、舞ふ者の執る所、簫(竹部十二畫)に同じ。○ー韶セウは舜の樂の名。說文「虞舜樂曰ー一韶、尚書作二簫韶一」㊁うつ(撃)等にて人を警つ。○舞曲の名。

【節】セツ　セチ　屑

○ふし、竹のふし。廣く草木のふしこぶ。○物の結合してゐる部分「關ー」○音樂のふし、てうし。○みさを(志操)「一義」「一行」「名ー」「氣ー」左、成十五「聖達」「一次守」「下失ー」○こと、おこなひ(行事)○しるし「符ー」わりふ、てがた(符信)使者の執りて信を示す所のもの。○ためし(經驗)○ときをり。○氣候のかはりめ「時ー」古、立春・立夏・立秋・立冬・春分・秋分・冬至・夏至を以て八ー一と爲す、後世は一年を二十四ー一に分つ。○物事のさだめ、きまり(制限)ほどあひ(適度)左、莊二三「制財用之ー」○きまりをつける、かぎる、さだむ。○はぶく(減省)「裁ー」「撙ー」左、成十八「ー器用」○のり(法度)○禮儀のきまり「禮ー」○しな(等差)○かぎり、しきり(區畫)○文の一段を一ーといふ。○山の高き貌。詩、小雅「ー彼南山」○いはひ(詩日)「天長ー」「千秋ー」○樂器の名、うちて他の音樂のふしをととのへるもの、卽ち拍。○易の卦の名。兌下坎上。○國のっと、英國の尺度の名、主に船舶の速度を計ふるにいふ、我が十六町五十八間許。‖海里・浬。

【節會】セチヱ　節句の日の朝廷の宴會。英雄記「公孫瓚、每レ至ニー一、屠レ牛爲レ脯」

【節鉞】セツエツ　符節ふと、まさかり(鉞)と。孔叢子「天子當レ階南面、授二之ーー一」

【節レ酒】セツセツ　○己の守るところの意見を屈して人に從ふ。戰國策「以二秦之強一ーレ一而下二與國一、臣恐二其害一於東周一」○國ツツ丁度其の時、をりから。

【持レ節】セツセツス　○みさををかたく守る。○天子より賜はりし符節を持ちて使する。

【守レ節】シュセツヲマモル　みさををまもる。漢書、王章傳、贊「剛直ーレ一、不レ量二輕重一」‖完節・全レ節。

【擁レ節枕レ旄】ヨウセツチンバウ　天子より符信として賜はる節旄を枕つく、命を受けて外に在る義(陰書、高祖紀)

【節下】セッカ　○符節のもと。將軍のもとの義。前史「ー一有二沈勇一、不レ能レ用、空議何施」‖麾下。○轉じて將帥の稱とす。

【節壁】セツヘキ　みさを、操は壁に同じ。左思、吳都賦「俗有二ー一之風一」‖氣節・志節氣槩。

【節孝嗣】セツカウシ　婦女の少くして寡となり、嫁せざるものを節婦といひ、其の能く翁姑に事ふるに耽ぶものを節孝といひ、祠を立てて之を祀るを——といふ。

【節季】セツキ　○節のをはり。又、時節の末。

【節運】セツウン　賦「月孟ー一、歲赤告レ成」○國年の末、歲暮。

【節義】セツギ　みさをありて義にかなふ。黃石子「ー一之士、不レ可二以刑威脅一」

【節度】セツド　大將軍のはたの王安石文「賜二兩鎭之ー一」‖節旄・旌節。

【節句】セツク　人日(正月七日)上巳(三月三日)端午(五月五日)七夕(七月七日)重陽(九月九日)をいふ「五ー一」‖節日・佳節。

【節花】セツクワ　菊の異名(本草綱目)。

【節俠】セツケフ　氣節ありて弱者を助け強者を挫く、をとこだて。史、刺客傳「爲レ行而使二人疑一レ之、非ニー一也」

【節儉】セツケン　けんやく。史、晏嬰傳「以ニ一力行ニ節ニ子齊一」

【節限】セツゲン　ほどよく、かぎりをつける。晉書、流寓傳「賦調役使、無ニ復一ー一」ー節制・節約。

【節減】セツゲン　はぶきへらす。舊唐書、廟宗紀「自今以後、除常膳及忌御等物、並從ニ一ー一」ー節略・節省・削減・損減。

【節操】セツサウ　みさを。後漢書、趙熹傳「少有ニ一ー一」

【節士】セツシ　みさををたかき人。韓詩外傳「一ー不ニ以ー存ニ生」

【節制】セツセイ　たかきみさを。晉書、祖逖傳「逖輕ニ財好ニ俠、慷慨有ニ一ー一」

【節上生ニ枝】セツジヤウセイシ　岐ニ一に又岐を生じて歸宿する所なき喩。朱子語錄「隨ニ節生一ー、——、更覺ニ蔓延一、亦無ニ用處一也」ー節外生枝。

【節取】セツシユ　○人の惡節ヲ棄てて善節のみを取る。左、僖三三「君取ニ一ー節ー可也」○文章の一節を切り取る。

【節酒】セツシユ　さけをひかへてのむ。晉書、胡毋輔之傳「一ー自ー、甚有ニ能名一」

【節序】セツジヨ　時節のうつる次第。杜甫詩「看ニ一ー花驚ニ一ー」

【節食】セツシヨク　食物をひかへてくふ。魏志、高柔傳「其俗一ー、好治ニ宮室一」

【節帥】セツスイ　○節度使の略稱。唐書「河南一ー」○清時代、總督・巡撫の異稱。

【節制】セツセイ　ほどよくとりしまる。荀、議兵「相ニ文之一ー」

【節節】セツセツ　鳳凰の鳴く聲。宋書、符瑞志「鳳凰其鳴雄曰ニ一ー、雌曰ニ足足一」

【節葬】セツサウ　音樂のほどよきてうし。禮記「文采ー、聲之節也」ー止奢、政論「忌ニ一ー鳴ニ和鑾ニ清ー一ー之戒」

【節族】セツソク　前條に同じ。漢書「賜ニ五ー一使ー有ニ一ー一」

【節撙】セツソンおさへて、ひかへめにする。管子「節ニ飲食ニ撙ニ衣服ニ、則財用足」

【節刀】セツタウ　國王朝時代、賊徒征討の時、天子より大將軍へ賜はりし、しるしの刀。

【節斷】セツダン　ふしぶしをたつ。公羊傳、注「支ニ解ニ一ー之一」

【節鎭】セツチン　節度使のやくしょ。宋史、王彥超傳「自ニ一ー一來朝」

【節度】セツド　○きまり。左傳、疏「卽是ニ制ニ財用之ー一也」○セツタクさしづ、指揮。事物紀原「後漢公孫瓚討ニ烏桓ニ詔令ニ受ニ劉虞ー一、虞寄ニ名ー使、璽書ニ此號一」

【節度使】セツドシ　一地方の軍政及び行政を總轄する官名。唐に始まる。唐書、百官志「——掌ニ總ニ軍旅ニ、順ニ・誅殺ニ」ー節帥。

【山ノ節溪ノ稅】セツケイゼイ　節は柱の上のますがた、稅は梁上の短き柱、うだつ。山に柱を刻み、うだちに藻を畫がく、天子の宗廟の飾。論、公冶長「子曰、臧文仲居ニ一ー、——、何如其知」

【死ノ節】シセツ　みさをを守りていのちを持てる。漢書、鄧都傳「奉ニ職一ー」

【節制】セツセイ　天子より使者に賜ふしるしのはた、旄牛の尾の毛を其の竿につける。漢書、蘇武傳「杖ニ漢ー節ー、臥起操持、ー一盡落」

【節夫】セツフ　節士に同じ。任昉文「義士ー一、聞ノ之有ノ立」ー烈夫。

【節婦】セツフ　みさを正しきつま。李觀、哀ニ老婦一詩「敎誉敎ニ一ー、許與旌ニ門閭一」

【節物】セツブツ　時節に應じて生ずる品物。晉書、陸機傳「踰ニ歲感ニ一ー、我行已永久」

【節文】セツブン　ほどよくきりもりして飾る、文は飾。史、叔孫通傳「隨者因ニ時世人情一爲ニ之ー一儀一也」ー品節文章。

【節分】セツブン　立春に氣節のうつりかはる時の稱。二月四日頃、俗に立春の前夜をいふ。

【節目】セツモク　○こわけ、細目。禮、學記「先ニ其易者一、後ニ其ー一」○規則のかてう。韓愈文「持ニ院中之紋事ー一十餘事一」

【節約】セツヤク　つづまやかにする。後漢書、宋梁傳「性ー一、常服ニ布被一漱ニ食瓦器一」ー節限・儉約。

【節用】セツヨウ　費用を制限する。論、學而「ー一而愛ニ人一」

【節欲】セツヨク　慾望を制限する。春秋繁露「ー一順ノ行、則倫得」ー制欲。

【節樂】セツラク　たのしみを制限する。皮、樂書「凡作ニ樂者、所ニ以ー一ー」

【節錄】セツロク　ほどよく省きて記錄する。又、其の記錄。ー抄錄。

【箭】セン　ゼン　圖

○や（矢）關よりして東は矢、關より西はーといふ「弓ー」「勁ー」「流ー」「飛ー」「毒ー」○みつどけいのめもりを刻みたる矢「漏ー」○すごろくのさい（博筌）○しのだけ、やだけ、幹直く堅くして矢を作るに適す。

【箭羽】センウ　やのはね。白居易、放ニ旅雁一詩「我ニ汝題ニ汝爲ニ一ー一」

【箭ノ箭】センクワンノセン　やとおよ。陸游詩「我似ニ獨食ノー一飛一」

【箭幹】センカン　矢がら。次ぎに同じ。

【箭幹】センカン　やがら。幹は箭に同じ。晉書、王恭傳「以ニ斜絹一爲ノ箭、納ニ一ー中、名ノ箭漆之」ー矢筒。

【箭笴】センカン　箭を矢につなぎ、射て消息を通ずるもの。宋史、官軍圍ノ城（中略）得ニ一ー一、縛ニ錦悉笑ノ之」

【箭鏃】センゾク　矢に作る鋭き竹。周禮、職

方氏「揚州其利竹箭」注「―一也」疏「箭一名篠、故禹貢云、篠簜是一物二名也」‖箭竹。

【箭箙】センフク　やじり。後漢書、西域傳「生白草、有ㇾ蕤、圍人煎以爲ㇾ藥、傳ニ―一所ㇾ中卽死」

【箭鏃】センゾク　飛箭の如く疾くはせる。張九齡詩「―一入三窮寇ニ」

【箭矢】センシ　やのかずとり。儀禮「―一八十」

【箭竹】センチク　やにつくるたけ。晉書、伏滔傳「彼蜀陽者、金石皮革之具率焉、竹木―之族生焉」

【箭頭草】センタウサウ　薑葉ばくの異名（救荒本草）

【箭瘡】センソウ　矢のきずあと。蔡琰、胡笳十八拍「沙場白骨兮刀瘡―一」

【過ㇾ箭】クワセン　過き去ることの早き貌。江淹傳「風猛往船―ㇾ一」‖如ㇾ矢。

【箸】

㊀チョ　㊁チャク　御　藥

㊀いちじるし。‖著（艸部九畫）○はし「匕―」「火―」「象―」‖筯。㊁きる（被服）‖著。○ねばりつく（黏附）

【篆】テン　銑

○古代の文字の一體、大小二種あり、大―は周の宣王の太史史籀の作る所。小―は秦の李斯の作「―字」「―書」「籀―」「秦―」○印章には多く―字を用ふるにより轉じて印章の義とす。○銘文に―字を用ふるによりて銘の字の義とす。○感―は感激して心に深くきざみつける。‖感銘。○篆字の如くうねりて立つ香煙のけむり。宋蘇軾「香霧盤屋―清」

【篆額】テンガク　篆字にてかきたる石碑の題字。舊唐書、李華傳「李華曾爲二魯山令元德秀墓碑一顏眞卿書、李陽冰―一、後人爭模二寫之一」

【篆款】テンクワン　篆書にて凹くきざみつける銘。仇池筆記「元豐中、余自二齊安一過二古黃州一、獲二一鏡一、其銘字如二蝌大一―一甚精」

【篆刻】テンコク　○篆字を印にほりつける。○轉じて形容の句のみ多く實益なき文章をいふ。法言「童子雕蟲―一、壯而曰、壯夫不ㇾ爲也」

【篆字】テンジ　篆體の文字。‖篆文・篆書。

【篆書】テンショ　古代の文字の一體。漢書、藝文志「六體者、古文・奇字・―一・隸書・蟲篆・鳥書」

【篆銘】テンメイ　篆書にてしるしたる銘文。庾肩吾「立ㇾ石旌ㇾ事、―一不ㇾ朽」

【篆隸】テンレイ　篆書と隸書と。

【範】ハン　豏

○金を鎔るいかた（模型）○轉じて、かた、のり、てほん、常の模法（法式・模）「模―」「軌―」「師―」「典―」「儀―」「洪―」○一定のくぎり「一圍」

【範圍】ハンイ　一定のくぎり。又くぎりをつける。易、繫辭「―二天地之化一而不ㇾ過」

【範軌】ハンキ　のり、きそく。張華文「行爲二一―一、言成二廉括一」‖軌範。

【範式】ハンシキ　のり、てほん。文心雕龍「皆後人―一也」

【範疇】ハンチウ　○分類の義。書經の洪範九疇の類。○哲學の用語、外物を認識して之を概念とする時、必ず執るべき形式。

【範民】ハンミン　たみを法則にあてはまらしむる。漢書、鄭安傳「養失而奏、樂失而淫、禮失而采、數失而僞、爲采淫奏、非所二以―一之道一也」

【篇】ヘン　先

○かきもの、首尾全き詩歌又は文章「一什」「短―」「名―」「佳―」○しょもつ（書冊）○書物のぶわけ「初―」「前―」「後―」「詩三百―」「論語二十―」「孟子七―」

【篇什】ヘンジフ　詩歌をいふ、什は十、詩經の雅頌が十篇を以て一什としたる故。詩經、集傳「詩雅頌無二諸國之別一、故十篇爲二一卷一、猶二軍法十人爲一什也」

【篇章】ヘンシャウ　○詩文の總名。○文章。又、書籍。北史「京平公神慶、性愛二―一」

【篇籍】ヘンセキ　しょもつ。左思詩「四賢豈不ㇾ偉、遺烈光二―一」

【篇帙】ヘンチツ　ふみづつみ。又、書物。‖卷帙。

【篇題】ヘンダイ　しょもつ。後漢書、荀悅傳「所ㇾ見―一、一覽多能誦記」‖篇名。

【篾】ベツ　屑

たけのこし（竹輿）あんだ、竹木を編みてつくりしもの。

【篾輿】ベツヨ　たけのこし。史、張耳陳餘傳「上使三泄公持ㇾ節問二之一―一前一」‖竹輿。

【籠】ロウ　東

○まがき「籬―」○杯又椀などをいれる籠。

十　畫

【簀】㊀ウン　㊁エン・ヲン　吻　文　先

…篇は竹の名。竹の中にて最も大いなるもの、肌薄くして節長く、射筒ヲ爲すによろし。柳宗元、柳州山水記「…篇湘湖間皆有之」

【箐窩谷】ケイクワコク　陝西省洋縣の西北にあり、谷中竹多し。宋の文同、亭を其の中に築く、蘇軾に…詩あり。

【箇】カ　コ　果

○さを、ふなさを、船を進むる竿「竹…」「輕…」唐寅詩「插…菜渚…漁艇」○老…はとしよりのせんどう。

【箇工】コウ　せんどう。杜甫詩「…幸不ノ溺」

【箇師】シ　せんどう。陸深、豫山餘話「……柁工」＝篙人・篙手。

【篙人】ジン　せんどうの唐稱。杜甫傳「方ノ春南民爲ニ艱渡ニ…使ニ…衣ニ油綵衣ニ沒ノ水不ノ濡」＝篙師・篙工・篙手。

【篙手】シュ　せんどう。鳳璞「海嶠呼…爲ニ…長年」古今詩話「川陝以ニ…爲ニ三長老」皆抽棹ヲ之意。

【篙櫓】ロ　ふなさをと櫓と。李存詩「波濤險ノ地有、切莫ノ倦…」

【篝】コウ　尤　宥

○かがり。○かご、火を覆ひ盛る籠。又、物をいれて負ふ籠。史、滑稽傳「願…滿…」○ふせご（笭）籠を伏せて上に衣を被ひ、中に香爐を置き、香を薰ク きしむるもの「香…」「衣…」＝薰籠。

【篝火】カ　かがりび。歐陽修文「…餘燼」高啓詩「…樹側照」

【篝燈】トウ　かごにて燈火を覆ふをいふ。宋史、陳彭年傳「幼好ノ學、毋催…子、愛之禁ニ其夜讀ヲ、彭年…寢室、不ノ令ニ母知ニ」

【篋】キョウ　叶

ふみばこ。＝匧（匚部十畫）一說に篋の俗字。

【箙】フク　職

○めしいれ（飯器）五升を容れるもの。○ささら（飯帚）○うづく（動）＝梢。

【箑】サン　諫　篆は俗字

うばふ（奪取）無理に取る、強奪する。取るべからざるものを取る…「一位」孟、萬章「是…也、非天與ニ也」

同訓異字　篡・奪・簒の別は奪（大部十一畫）の條を見よ。

【箪】タン　寒

○めしいれ（飯器）五升を容れるもの。○ささら（飯帚）○うづく（動）＝梢。

【箪位】タンヰ　臣が君主の位を横どりする。

【箪逆】ギャクク　むほん。

【箪弑】シイ　君をころして其の位を奪ふ。

【箪奪】ダツ　君の位をうばふ。

【箪立】リツ　臣が君の位を奪ひ、之に代りて立つ。

【篩】シ　サイ　佳　支

○ふるふ、ふるひにてよりわける。漢書、賈山傳「…土築ニ阿房之宮」○ふるひ、底に目のある竹むしろ、又は網などを張り、粗き物は留り、細き者は目より落つるやうに作りし器。○極めて大いなる竹の名、船につくる、一名大極。

同訓異字　篩・簁・篗・振・揀・戰・顫の別は簁（大部十三畫）の條を見よ。

【篌】シウ　尤

さけこし。酒を漉ス具「酒…」蘇軾詩「公餘試ニ新…」

【篛】ジャク　藥

○たけのこ（筍）管籥事、筍譜「筍一名…竹、土內皮中謂之…」

【篠】セウ　篠　選音ゼウ

ささ、しのだけ、しの（細竹）やだけ、幹細く葉大きく、山野に叢生す、幹を矢に用ふ「細…」「密…」「翠…」「叢…」

【篛笠】リフ　たけのこがさ。王昌齡詩「何人方舟順ノ流下、草衣…ニ倶滿洲」

【篁】コウ　陽

○青き竹。○竹の茂る貌。

【篪】チ　支　篪とは別

横笛の一種、長さ支那尺にて一尺四寸、周圍三寸八孔あり「壎…」詩、小雅「伯氏吹ノ壎、仲氏吹ノ…」

【築】チク　屋

○つく（擣）きづく、杵にて地をつき堅める「修…」「增…」「造…」「改…」詩、豳風「九月…場圃」又きづきたるもの、土木工事「建…」「新…」「小…」○きづくに用ふる杵。史、始皇紀「身自持ニ…一」○ひろふ（拾）

同訓異字　築・衝・突・搗・擣・撞・舂・舂の別は衝（行部九畫）の條を見よ。

よ。

【築營】チクエイ 軍營をきづく。梁簡文帝詩「武師將軍新ー一」

【築港】チクカウ みなとをきづく。

【築堤】チクテイ ものみをきづく。宋書、少帝紀「穿ー池ー一、起成華殿」

【築堰】チクエン きづきかためる。詩、豳風、鴟鴞「予手拮据、予所ー一、予口卒瘏」

【築構】チクコウ きづきかまへる。唐書、徐賢妃傳「因ー山積ー水、無ー一之苦」

【築造】チクザウ きづきつくる。＝造築。

【築作】チクサク きづきつくる。新語「黃帝乃伐ー木構ー材、ー一宮室」

【築山】チクザン 土を積みて山を作る。つきやま。＝築山。

【築室】チクシツ 家をきづく。詩、小雅、斯干「ー一ー百堵、西南其戸」

【築室道謀】チクシツダウボウ 家をきづくに道の謀をなす。＝築室。

【築室反耕】チクシツハンカウ 家をきづくに反つて耕す。＝築室。

【築城】チクジヤウ しろをきづきつくる。＝一時は樂府雜曲の歌詞。

【築邸】チクテイ やしきをいとなみきづく。史記「淮陽三單于、ー一ー於長安」

【築第】チクダイ 前條に同じ。宋史、劉正夫傳「ー一ー於杭州萬松嶺」

【篠】ヂョウ 塩

○簹ー（ヂヤウ）はたかむしろ、あんぺら（竹席）○はとむね、簹（竹部十七畫）を見よ。

【篤】トク 沃

○あつし（厚）てあつし、人情があつい「敦ー」「護ー」○ふかし（深）○かたし（固）○もっぱら（純）心が專一にして雜ならず「純ー」「醇ー」「一行」「一學」○やまひはなはだし（病甚）史、范雎傳「應侯遂稱ー病ー」

同訓異語 篤・厚・敦・淳・醇・遲・鈍の別は厚（厂部七畫）の條を見よ。

【篤愛】トクアイ あつくあいする。晉書、潘岳傳「僕才輕任重、實懷ー明公ー一」

【篤行】トクカウ ○篤實なるおこなひ。○あつく躬に行ふ。

【篤孝】トクカウ てあつくつくす孝行。

【篤學】トクガク 熱心に學問をはげむ。史、伯夷傳「顏淵雖ー一、附ー驥尾ー而行益顯」

【篤誠】トクセイ つつしみぶかし。史、五帝紀「日以ー一、臨ー有ー解」＝篤敬・敦誠。

【篤厚】トクコウ 人情あつくうやうやし。中庸「君子ー一、而天下平」

【篤志】トクシ てあつきをしへ。傅亮詩「敷ー莊銘ー一、引ー帶佩ー嘉誤」

【篤敬】トクケイ 篤實にしてつつしむ。論、衛靈公「言忠信、行ー一」

【篤疾】トクシツ あつく藝術に志す。晉書、梁鴻傳「多才之英、ー一之彦、役ー心精微、耽ー此文意」

【篤劇】トクゲキ 病があつくはげしくなる。＝篤困。論衡、微桐恒篇「我病ー一、扁鵲乃其」

【篤癖】トクヘキ あつきめぐみ。陸雲文「ー一ー鍾」

【篤厚】トクコウ 親切にしてあつし。漢書、嚴安傳「貴ー仁義ー、賤ー權利ー上ー一、下ー一ー俗、化ー一ー海內ー一、則世世必安矣」＝醇厚・敦厚。

【篤志】トクシ ○しんせつなるこころざし。○熱心にこころざす「論、子張」

【篤實】トクジツ てあつくしてまじめ。

【篤疾】トクシツ ○おもきやまひ、危篤の病。＝篤病。○廢疾・殘疾・兩目盲・二枝折など「明律、注」

【篤實】トクジツ てあつくしてまじめ。＝篤厚。

【篤信】トクシン かたく信ずる。論、泰伯「ー一好ー一、守ー死善ー道」

【篤慎】トクシン あつくつつしむ。孔融文「陛下ー一取士、必須ー效試」

【篤恕】トクジョ 人情あつく思ひやりがある。范式文「敬柔慈善、明允ー一」

【篤性】トクセイ 篤厚なるうまれつき。吳苑「與ー母居、重孝ー一」

【篤誠】トクセイ 心あつくまことあり。左傳「齊聖廣淵、明允ー一」

【篤敏】トクビン 德あつくして事にさとし。易林「君有ー八人ー信允ー一、爲ー幾所ー擧」

【篤病】トクビョウ てあつくゆきとどく。漢書、谷永傳「齊桓晉文、用ー士ー一」＝篤劇。

【篤老】トクラウ はなはだ年をとる。漢書、疏廣傳「上疏乞ー骸骨ー、上以ー其ー一ー一ー一ー之」

【篤論】トクロン 甚だゆきとどける議論。

【篣】バウ 陽

○ばうう（笞擊）＝榜。○かご（籠）

【篦】ヒ 支

はこ、かご、かたみ。四形の竹器。「筐ー」廣韻「方曰筐、圓曰ー一」

【篦】（ヘイ） 霽 俗字 皃は俗字

○かんざし（叡）○けすぢたて（導）髮の毛をわけるに用ふるもの、又梳の齒の細密なもの「竹ー」○へら。竹製の小刀、柔かき物を切り、すぢをつけ、又物をねるに用ふ。

【篥】リツ 質 リチ 一番 リキ

篳ー（ヒチリツ）は樂器、笛に似て九孔ある笛。＝觱篥。

【篶】ワク 藥 又籗に作る

いとわく。絲を巻きつけるわく。‖簨。

十一畫

【簋】 キ　紙

神に供へる黍稷を盛る器、木又は瓦などにて作り、外が圓くして内の方なるもの「土ー」「簠ー」

【簋簠】は黍稷をもる祭器、唐書、禮樂志「進ル饌者、實ニ籩豆ー簠ー」簋は外が方にして内の圓きもの。

【御】 ギョ　語

とめばう。‖禦。

【箘】 クヮイ　クヮク　陌　麥

○婦人のかみかざり（首飾）‖綰。○婦人の裏中の冠。

【篦】 コ　虞

水中に竹を立て連ねて魚を取るもの。

【箝】 ㊀ サン・セン　寒　㊁ サク　覺

㊀かぢ（舵尾）○うごく（動）馬融賦「其旋清風也纖末箝ー」‖楫。㊁ささら（飯帚）

【箕】 サク　陌

○す、すのこ（簀）ゆか（牀第）ねだいの上に敷く敷物。禮、檀弓「華而睆、大夫之ー歟」○ゆかいた（牀板）○つみあつめる（積聚）

【易ー箕】は士君子の死をいふ易（日部四畫）の條の易箕（八五二頁一段）を見よ。

【箟】 サン・セン　寒　霰

○のぶ（述）えらぶ。漢書、藝文志「書之所ー起遠矣、至ー孔子ー」‖撰。○十分に具はる食物（具食）‖饌。

【箠】 飾（竹部十一畫）に同じ。

【箠】 シウ　宥

○ひとし（齊）○めかけ（副室）○そへぐるま（副車）

【箾】 ㊀ シン　侵　㊁ サン　覃

㊀ー箾シンは竹の長き貌。又、長短相等しからざる貌。‖參差。㊁かんざし。‖簪。

【箑】 セイ　スキ　霽　寘　又、扇に作る

○はばき（箒）たかばうき（竹掃）史、高祖紀「太公擁ー」○しのだけ（篠）帶に作るに宜しき細竹。竹譜「ー、篠竹中ー掃箒」○ははきぼし（彗星）

【箙】 セキ　サク　陌　職

○やす（捕魚具）水中の魚を刺して取る具。○やすにて魚を刺し取る。

【簇】 ㊀ ソウ　㊁ ゾク　屋　沃

㊀むらがる（叢）杜甫詩「桃花ー一開無ー主」あつまる（湊）蔟に通ず。○大ー（ソウ）は正月の律の名。轉じて正月の異稱とす。‖蔟簇。㊁やのね、やじり（矢金）‖鏃。

【簇生】むらがり生ずる。史、律書「正月律中ニ蔟簇ー、蔟簇者、言ニ萬物ー一也」

【簇簇】むらがる貌。韋莊詩「天外晩峰青ー一、檻前春樹翠ー一」

【簌】 ソク　屋

○ふるひ（篩）○ーーは木の茂密なる貌、しげし。元稹詩「風動落花紅ーー」

【筒】 トウ　送

○竹のこし、かご（竹輿・筍）○圓山轎ヲヲをーー子といふ。○馬に水を飲ます器、うまぶね。

【簰】 ハイ　佳

いかだ（筏・桴）

【篳】 ヒツ　ヒチ　質

○しば、いばら（竹荊）○まがき（籬落）荊竹を編みて結びしまがき。○しばのと（荊門）○ーー篥リツは樂器の名、竹を管とし蘆を首とし、上から吹く、九孔ありて強き音を發する。通典「ー篥出於胡中」‖觱篥。

【篳篥】樂器の名、字解を見よ。李頎詩「南山截ー竹爲ニーー一」

【篳門圭竇】篳門はしばのをりど、圭竇は牆を穿ちて作りたる門旁の小戸、上は銳く下は方にして圭の狀の如し、貧家の門牆をいふ。禮、儒行「ーー、蓽戸甕牖」左傳には竇を窬に作る。

【篳路藍縷】しばにて作りし粗末なる車と、ぼろぎもの（襤衣）と。路

は幹、人の勤倹なるをいふ。左、宜十二「――、以啓二山林一」轉じて事を開創（ハジメヲヒラク）する義に用ふるは寒微より起り、艱辛に耐へて事を創造する意。

【篳】ベウ　蕭

一種の細き竹の名、中實ちて孔無し、莖五六寸、箭矢に爲るべし。左思、呉都賦「一箭有レ餘」

【筏】ベツ　屑

○籐（カヅラ）の一種（桃枝竹）「一席」○竹の皮、わりだけの外皮をとりしもの、みがき。○小さき貌。

【篷】ホウ　東

○とま（苫）竹茅などを編みて舟を覆ふもの「船一」「蓑一」○轉じて小舟の義「釣一」皮日休詩「一一衝雪返華陽」【篷窗】（船窗）蘇軾詩「一一高枕雨如レ瀉」陳游詩「熱酔臥ニ一一一」

【篦】ロク　屋

はこ（篋）竹にて編みし丈（タケ）の高き箱（高篋）書物衣類などを容れる。晉書、劉柳傳「讀レ書而無二所解一、可レ謂二書一奚」書一は本箱。

十二畫

【簡】カン　濶

○古、未だ紙のなかりし時、文字を書きし竹のふだ（竹牒）○ふみ、しょもつ（文書）「一策」「汗一」「書一」＝柬。○けみす（閲）○かぞふ（數）○くらぶ（比）○汰（タグ）、明かにする。○はぶく（略）てがるにする「一易」「一略」「一率」○つづまやか、やすし（易）○あなどる（慢）おろそかにする。孟、離婁「是一輕也」○つづめる（要）○ふらぶ（選）えりわける。孟、梁恵王「一在二帝心一」○轉じて君主の特命によりて官に任ぜられるを特一、又一授といふ。○わかつ（分）○志大いなり。論、公冶長「狂一斐然成レ章」○おほまか、事の大體をとりて細事に拘はらず。書、大禹謨「臨下以一」○おごる（傲）○いさむ（諫）左、成八「是用大一」○まこと（誠）○しく（手版）○一一は鼓のこゑ。又、大いなる貌。

簡擇簡練　簡・擇・練・選・擇・揀の訓は撰（手部十二畫）の條を見よ。

【簡易】カン　てがる、やさしい。史、萬石君傳「慶於二諸子中一、最爲二一一一一矣、然猶如レ此」

【簡易科】カンイ　てみじかに其の學科を修め得る課程。本科又は高等科などの對。

【簡要】カンエウ　てがるにしてかなめ、綱略にして要を得る。

【簡閲】カンエツ　えらぶ。歐陽修文「豈夫訓練之未レ至、將レ由二一一之不一精」

【簡閲點呼】カンエツテンコ　臨海軍撰備役又後備役の下士卒を召集して人員しらべをする。

【簡傲】カンガウ　志が大きくしておごる。北史、崔瞻傳「性一一、以二才地一自矜、所二與周旋一、皆一時名望」

【簡箇】カンカ　○鼓の牌の和ぎて大いなる貌。詩、商頌「奏レ鼓一一」○大いなる貌。詩、周頌「降レ福一一」

【簡求】カンキウ　えらびもとめる。後漢書、皇后紀論「一一忠賢」

【簡倨】カンキョ　おごりたかぶる。宋史、荷昭叢傳「以二貴家子一日事二遊宴一一一自恣」＝簡傲。

【簡察】カンサツ　てがるにて事をすくなくする。後漢書、光武帝紀「兵革既息、天下少レ事、文書簡省、務從二一一一」

【簡弓】カンキウ　大いなる貌、弓は助字。詩、邶風「一一一一、方將二萬舞一」＝簡閲。

【簡稽】ケイカン　兵器をしらべ、士卒を計ること。周禮「以二八式一趨二邦治一、二曰、趨二師田一以二一一一」

【簡潔】カンケツ　つづまやかにしていさぎよし。南史、王懿遺傳「立身一一」

【簡古】コカン　詩文などの、簡潔にして古雅なる義。東坡題跋「章應物・柳宗元受二韓退之一一一、皆二至味乎淡泊一、非二餘子所一及也」

【簡冊】カンサツ　簡札に同じ。

【簡策】カンサク　ふみ、書物。＝簡冊・書冊・簡編。

【簡札】カンサツ　ふみ、てがみ。＝簡牘。

【簡抜】カンバツ　えらびとる。後漢書、伸屠蹲傳「今一一其書、有二益於政一者、略載レ之云」

【簡駆】カンク　ものを書きとめるふだ、削版なり。繁辱雑識「一一古無レ有也、陸務觀謂、始二於王荊公一、其後盛行、淳熙末、始用二竹紙高數寸闊尺餘者一、謂二版簡一」

【簡師】カンシ　選びたる兵卒。左、襄二五年「一一陳以待レ我」

【簡習】カンシフ　ならふ。孫楚文「簡二練甲楯一、一一水戰」

【簡取】カンシュ　えらびて取る。劉志、王證傳「一一良才、以爲二官屬一」

【簡授】カンジュ　君主が特にえらびて官をさづける。傅休奕、樂府「來レ遊能レ遲、一一爽賢」＝選授・銓授。

【簡出】カンシュツ　えらび出す。＝選出。

【簡書】カンショ　○戒命のかきつけ。兵事の命令。詩、小雅「豈不ン懷ン歸、畏二此ー一ー」○かきもの。てがみ。

【簡省】カンセイ　はぶく。後漢書、王景傳「雖レニー役費一、猶以二百億一計」＝簡約。

【簡捷】カンセフ　てがるにしてすばやし。

【簡選】カンセン　えらぶ。後漢書、竇融傳「ーニー良吏一、試二守諸縣一」

【簡素】カンソ　○てがるでおどろぬ、簡略質素。○晉書、高密王泰傳「ーー寡慾」○竹簡と縑素。古、字を書くに用ひしもの。水經、注「爲ン紙、用代二ーーー」

【簡率】カンソツ　證法などをてがるにする。晉書、高密王泰傳「任ン意ーー」

【簡述】カンジュツ　えらびすぐる。宋書、謝方明傳「方明ーー精當、名慣ン所ン宜」

【簡習】カンシフ　えらぶ。韓愈詩「相賀ーー朝二精專一」

【簡擢】カンタク　えらびぬきんづ。藥逸文「ーニー疎賤一、即爲二守望之親一」＝簡拔。

【簡單】カンタン　てがる、てみじか。＝簡短・單簡。

【簡帙】カンチツ　書物のそこなはれる義。耶律楚材詩「義易湮縻ーー」

【簡定】カンテイ　えらびさだめる。曹植、漢武帝贊「ーニー律曆一、辨二脩舊一」

【簡牒】カンテフ　文字をしるしたるふだ。漢書、薛宣傳、注「牒書謂ン書二於ーー一也」＝簡札。

【簡發】カンハツ　○文書を記する竹札と木札と。杜預、左傳序「大事書二之於策一、小事ーー而已」○轉にて、かきもの。又、てがみ。

【簡能】カンノウ　才能ある者をえらび用ふ。後漢書、謝夷吾傳「尊ン功ーー、爲二外臺之表一」＝選能。

【簡派】カンパ　えらびて派遣する。

【簡馬】カンバ　軍馬を檢閱する、師は閱。

【簡拔】カンバツ　えらびぬく。諸葛亮、前出師表「是以先帝ーー、以遺二陛下一」＝簡擢・選拔。

【簡版】カンパン　字を書くふだ。（老學庵筆記）＝簡牒・簡牘。

【簡單】カンヒツ　たけのふだ。（晉語）簡謂二之畢一」＝竹簡。

【簡學】カンフツ　書經「五辭ーー、正二於五刑一」

【簡兵】カンヘイ　軍隊の操練をする。左傳「子產乃ーー大蒐」

【簡便】カンベン　てがるでつがゐ好し。

【簡編】カンペン　しょもつ。韓愈詩「雖火猶可レ救、ーー可二卷舒一」

【簡朴】カンボク　てがるにしてかざりなし。後漢書、魏霸傳「以ニーー寬恕一爲レ政」＝簡樸。

【簡樸】カンボク　前條に同じ。

【簡慢】カンマン　おろそかにしてあなどる。北史、李業傳「性ーー矜レ寵、不レ卑二禮度一」＝怠慢。

【簡明】カンメイ　てがるにして明か。

【簡約】カンヤク　つづまやか。後漢書、馬援傳、射雁二節儉一、事從ニーー一」＝簡省。

【簡略】カンリャク　あらまし、てがるにする。後漢書、宣秉傳「務擧二大綱一、ーニー苛細一」＝簡率。

【簡練】カンレン　えらびねる。（禮記）ーニー衆俊一」

【簣】キ　クヰ　［去］［未］

もっこ、あじか。土を運ぶに用ふる竹かご。書、旅獒「爲」山九仞、功虧二一ーニ」

【簀】クヮウ　［陽］

○した、ふえの舌、吹きて之を鼓動して聲を生ずるもの「笙ー」「銀ー」○笙のふえ。詩、王風「君子陽陽、左執ー」○かみかざり（步搖）「簪ー」

【簧鼓】クヮウコ　笛の舌を鼓動して聲を發せしむる如く、妄言して衆を惑はすをいふ。毗、聘撰「ーニー天下之耳目一」詩經「巧言如ン簧」に本づく。

【簪】シン　サン　［侵］［覃］［感］

○かんざし、かっがい（笄）冠をとめる爲めに髮に插すもの「瑤ー」「脫ー」○かんざしを插す。○とし、はやし（疾）○あつめる。あつまる（聚攢）易、豫卦「朋盍ー」○首髮をかざること。玉ーは玉のかんざし。又花の名、きばすし。一根に數葉叢生し、夏秋の交、淡紫色の花開く。○圖かんざし、かざし（紋）女の髮に插す首飾。

【簪纓】シンエイ　かんざしと冠のひも。轉じて高官の義とす。陳遵、答山軒賦「家傳二詩禮一、世襲ニーー一」

【脫ン簪】ダツシンクワン　かんざしをぬき去る、第を請ふ時の作法。列女傳「周宣姜后者、齊侯之女也、賢而有ン識、宣王嘗夜臥晏起、后夫人不ン出ン房、姜后脫出、乃脫ン簪珥一待二罪於永巷一」

【簪纓】シンエイ　冠をとめるかうがひと衣のすそと。衣冠といふに同じ。柳氏家訓「ーー徒在、斷養何殊」

【簪筋】シンキン　冠をとめるかうがいとなく（手版）と。轉じて禮服。又、禮服をつけたる官吏の義とす。梁簡文帝文「ーー成行、貂蟬在ン席」江淹詩「ーー奉二周行一」

【簪珥】シンジ　かんざしと、耳玉と。史、外戚世家「夫人脫ニーー一叩頭」

【簪笏】シンコツ　ふでをかしらにさす。小吏となるにいふ。漢書、趙充國傳「持ン節ーレ、事二孝文帝一」

【簪紱】シンフツ　冠をとめるかうがひと、官

印のひもと。轉じて官位の義とす。李白玉詩「白衣謝ニ―一」

【簨】シュン　㊥　鐘又は磬を懸ける鳥居形の具、上の横木を一、兩傍の柱を簴といふ。

【簨虡】シュンキョ　字解を見よ。‖鎛虡・筍虡・栒虡。

【簫】セウ　㊥　○ふえ、竹管を列べ、編みて作る、大いなる者は二十四管、小なる者は十六管、底あり「玉―」「管―」「樓―」（底なきものを洞―といふ）○しのだけ。‖簫。○ゆはず（弓末）

【簫韶】セウセウ　ふえ。禮、樂記「君子聽ニ―之聲一、則思ニ善樂之臣一」

【簫鼓】セウコ　ふえと、つづみと。陸機文「―振響、和鬱流ノ韓」

【簫史】セウシ　秦の穆公の時の人、道術を得、善く簫を吹き鳳凰の鳴聲をなす、穆公、女（弄玉と號す）を以て之に妻がせる「列仙傳」

【簫部】セウブ　舜の樂の名。書、益稷「―九成、鳳皇來儀」九成とは九たび奏する、成は樂曲の一終。

【簫笛】セウテキ　ふえ。韓維詩「朱絃孤影四壁寂、鐙以ニ―一相謂和」

【簫韻】セウイン　ふえ。吳都賦「種瓠吟、―鳴、洪流響、清金聲」

【簫部】セウブ　女夫婦の通稱。禪常聽「―即簫史也、後世女夫通稱也、唐詩云、嫁得ニ―一愛ニ遠遊一」

【簜】タウ　㊥　おほいなるたけ（大竹）書、禹貢「篠ノ―既敷」

【簞】タン　㊥　○はこ（筒）かたみ（小筐）竹にて編みし飯びつ。○竹の名、節の間甚だ長し、其の嫩かきものの纖維を紡ぎて布と爲す（竹疎布）圖○一筒スは衣服などを入れるひきだしつきの大いなる箱。○瓶ノ―はひさご。又、それにて作りし酒器。

【簞笥】タンシ　○飯などを入れるはこ、圖きを簞、方なるを笥といふ。曲禮「凡ソ―ノ―ニ○圖スル用ノ―」

【簞食壺漿】タンシコクシャウ　飯を竹器にもり、漿ヲを壺に入れる、歡迎して義兵を騎ムカフる形容。孟、梁惠王「―、以迎ニ王師一」

【簞食豆羹】タンシトクカウ　すこしの飯と、あつものと、豆はたかつき、椀の類。孟、盡心「―形ニ於色一」

【簞食瓢飲】タンシヘウイン　貧に居り約に處るにいふ。次條を見よ。

【簞瓢】タンヘウ　飯をもる器と酒などをいれる器。論、述而「一―ノ食ヒ一瓢飲、在ニ陋巷一、人不レ堪ニ其憂一、回也不改ニ其樂一」（孔子が顏回の清貧に甘んずるを賞したることば）

【簦】テキ　㊥　ふえ「一笛」笛（竹部五畫）に通ず。

【簟】テン　㊥　○たかむしろ、竹又は葦を編みたる敷物（竹席）「枕ノ―」「涼ノ―」「夏ノ―」「清ノ―」○大いなる一種の竹の名「一竹」

【簟紋】テンモン　たけのすのこ。項斯詩「苔色經ニ―一松陰到ニ一ノ―ご

【簟笏】テンシャク　たかむしろのしきもの。王隱晉書「賜ニ―一牀帳ノ―幷錢五十萬一」

【簞】トウ　㊥　からかさ、さしがさ、柄のある大形の笠、後世の傘ヒガサに似たるもの。史、平原君傳「廣卿謂ニ―ノ―一」

【簿】ハク　㊥　ばくち、すごろく（局戲）「六ノ―」通じて博に作る。

【簠】ホ　㊥　神に供へる黍稷を盛る器。木又瓦にて造り、外が方にして內圓く一斗二升を入る。

【簠簋】ホキ　神に供へる黍稷をもる器。漢書、賈誼傳「古者大臣有ノ坐ニ不廉一而廢者ニ、不レ謂ニ不廉一、曰ニ―不ニ飾」飾は飾と通ず。

【簠簋不レ飭】ホキフレズ　祭器がととのはず、大臣の收賄罪を犯したる者を貶黜する時に用ふる婉曲のことば、前條參看。

【簪】シン　㊥　レン　㊥　宗廟の祭に肉をもる竹器。

十三畫

【簷】エン　檐（木部十三畫）に同じ　ひさし、のき（檐）

【簷雨】エンウ　のきばにしたたるあめ。杜甫詩「野雲低渡レ水、―細風レ風」

【簷牙高啄】エンガカウタク　屋根ののきのかどが牙の如く突き出る「杜牧、阿房宮賦」

【簷牖】エンイウ　のきのあまだれのひびき。簷溜の音。朱熹詩「―一通夕鳴」

【簷瓦】エンクワ　のきのかはら。陳伯詩「武安ノ―振、見陽猛獸奔」

【簽】セン　㊥

○かご(籠)○ふだ、文字を書く札。○名をしるす(署名)「一名」「一押」「題一」○一書セン(ショ)は文字。又官名。

【簽記】セン　かきしるす。耶律楚材詩「一一長安五陵子、馬似二游龍一車如レ水」

【簽字】セン　㊥文書に親しく記名して証とする者。‖簽名・署名。

【籤】タ　㊥

しもと、むち(策・鞭)

【籤】籤(竹部十五畫)の俗字。

【簸】ハ　㊐㊥

○あふる、ひる、箕にて米を揚げて糠や塵を去る。○あふり揚ぐる「掀一」「翻一」「顛一」杜甫詩「浪一船應レ旋」○よなぐ(汰)

【簸揚】ハ　穀をさびてぬかを去る。風俗通「顚レ倒一一、田農之事也」

【簸機】ハ　其にてあふりあぐ。晉書、習鑿齒傳「簸二之颺一之、糠粃在レ前」

【簸弄】ハ　○あよりもてあそぶ。陳高詩「晶光浴二秋日一、一一琉璃珠」○進言して是非を顚倒する輩。

【簿】㊀ボ・ブ　㊁ハク　㊐㊥

㊀ちゃうめん、會計簿。すべて物事を書き込む冊子「帳一」「名一」「金蘭一」○しゃく(笏)蜀志、秦宓傳「以一擊一頼」○卓レは車蓋の次第。㊁簀簀の具の一。‖箔。○すだれ(簾)

【簿記】ボ　○帳面に書きつける。唐書、百官志「一一課業、俾二奉レ案紙筆一、皆預俻焉」‖簿記。○帳面のつけかた。一一法」

【簿冊】ボサツ　帳面、帳簿。

【簿書】ボショ　○官府の錢穀の出納を記するちゃうめん。○ひろく官文書をいふ。次條參看。

【簿書期會】ボショキクワイ　帳面に記入すると日限を定めて租稅を取り立てると、煩瑣なる公務をいふ。漢書、賈誼傳「大臣特以二簿書不レ報二期會之間一以賈二大故一」

【簿責】ボセキ　帳面を見せつけて問ひ責める。史、絳侯世家「史一一絳侯一」

【簿領】ボリヤウ　帳にしるす。南史、孔休傳「廣美二容止一、善二談論一、王儉常云、盧秉使二人摩二一一一」

【簿錄】ボロク　ちゃうめんにしるす。北史、盧容繼傳「死時唯書二數百卷一而已」

【簾】レン　㊥

す、すだれ。竹、又は葦を編みて作りしとばり「珠一」「帷一」「湘一」「葦一」「垂一」

【簾幃】レンヰ　すだれと、とばりと。又、すだれのとばり、幃は幕に同じ。韋詩「秋天聞二好鳥一驚起出二一一一一」‖簾櫳。

【簾蜂】レンホウ　前條に同じ。林逋詩「潘潘一一欺レ遠」

【簾影】レンエイ　すだれのかげ。雍陶詩「明月何高高、樓中一一寒」

【簾旌】レンセイ　すだれをかかし入る。陰鏗詩「何氣レ一一旗、桐陰覺二井涼一」

【簾旌】レンセイ　次條に同じ。白居易詩「林燈偎二秋坐一、樓晴妓一レ一」

【簾旌】レンセイ　すだれをまきあげる。杜甫詩「一レ一惟白水、隱レ几亦青山」

【簾外】レンガイ　すだれのそと。李商隱詩「斜照猶二一一一」

【簾幌】レンクワン　すだれと、たれぎぬと。又、すだれのとばり。南史、范縝傳「有二一一一、睡二於茵席之上一」

【簾鉤】レンコウ　すだれかけ。杜甫詩「落日在二一一一」「風連春事動」

【簾中】レンチウ　○すだれのなか。‖簾内。○閨房時、公卿、諸侯の正妻の尊稱レ綺羅二萬戸一一一拉雜二天府一」

稱。
【簇箭】ソウセン　すだれ、箔は線ぢ三幅黄圓「金玉珠璣爲ニ一ニ」
【簇花】ソウカ　すたれまく。杜牧詩「深秋ー一千家雨」
【簇擁】レウヨウ　すだれのかかれるれんじまど。元稹詩「微月透ニ一ニ窗光度ニ碧空ニ」

【簏】ロク　屋
やだけの一種、皮の色の黒きもの、矢に作る。‖箙。

【篠】ロク　屋
胡ー　はやなぐひ、やづつ（箭筒）

十四畫

【籍】㊀セキ・ジャク　㊁シャ　㊀陌
㊀ふみ、かきもの（文書）しょもつ「書ー」「典ー」「經ー」「史ー」「羣ー」「載ー」「篇ー」○しく（布）○ふだ（簡牒）○にんべつちょう「戸ー」「ー貫」「名ー」「圖ー」「屬ー」○戸籍に登記する。○ふむ（蹈）「ー田」禮、祭義「天子爲ー千畝」○ーは口語のかまびすしき貌。○ー沒ボツは罪をかうむりて財産を没収せられる。㊁籍（艸部十四畫）に通ず「溫ー」
【籍記】セキキ　漢書に書きしるす。又、其の傳書。漢書、尹翁歸傳「東海郡中賢否、皆ー一ニ之」‖識記。
【籍甚】セキジン　名聲ますますたしくひろがる。漢書、陸賈傳「公卿間、名聲ー一」‖籍藉・嘖嘖。
【籍藉】セキセキ　○口諍のかまびすしき貌。漢書、江都易王傳「國中口語ー一」‖籍籍・諠譁。○縱横にちらばる貌。漢書、燕剌王傳「骨ー一今亡レ居」○みだれる貌。漢書、劉屈氂傳「事ー一如レ此、何可レ絕也」‖紛紛。
【籍田】セキデン　天子の上帝祖廟に供へる穀物を作られる田地、籍は蹈藉の義、天子が自ら蹈みて之を耕すをいふ。漢書、文帝紀「其開ニ一ー」、厥親率耕、以給ニ宗廟粢盛ニ」（一解に籍は借の音通、最初天子が農具をもつて二三度親ら耕し、其の餘は人民の力をかりて耕す義）
【籍沒】セキボツ　財産を官に没収する、帳に記錄して之を取りあげる義。蘇軾詩「誰家美園圃、一一不レ容レ覆」

【簞】ダイ　泰
かぶりがさ（笠）雨をふせぐ具「一笠」

【籌】チウ　尤
○かずとり、數をかぞへるに用ふるかずさし「牙ー」「酒ー」「觴ー」○投壺の戲に用ふる矢。○はかりごと（策）「良ー」「遠ー」「運ー」○はかる（謀）○くじ（籤）みくじ。
同訓異字　籌・計・謀・圖・量・度・揆・機・測・料・忖・擬・商・略・策等の訓は計（言部二畫）の條を見よ。
【籌議】チウギ　籌商に同じ。周書、蘇綽傳「有ニ機婦ニ善談笑、太祖宴レ之、有レ所ニ一ー、卒多會レ旨」‖籌畫會議。
【籌決】チウケツ　相談して是非曲直をさだめる。魏書、崔光傳「共信賓、每レ事ー一」
【籌策】チウサク　はかりごと。史、高祖紀「運ニ一ー帷幄之中、決ニ勝於千里之外ニ吾不レ如ニ子房ニ」‖籌略・計畫。
【籌量】チウリャウ　はかる、見積りする。又はかりごと「唐書、李勣傳」‖籌策。
【籌商】チウシャウ　はかる、相談する。‖籌議。
【籌度】チウタク　○はかる。盧肱詩、北門古槐、酷思寄ニ一ー一」‖商度・謀度。○はかりごと。
【籌辦】チウベン　金錢の出納をはかりて事を處理する。
【籌邊】チウヘン　邊境の兵備を計畫する。ー一楼社圖川省成都縣柚の西に在り、唐の李德裕築つ。
【籌略】チウリャク　はかりごと「吳志、呂蒙傳」‖謀策・策略・謀略。
【運ニ籌于帷幄ニ】ウンチウヲイアクニ　幕中にて戰略をさだめる。漢書、高帝紀「上曰、夫ー一、決ニ勝千里之外ニ吾不レ如ニ子房ニ」籌策參看。

【籍】テキ　錫
ーーは竹の細長くして、上のそげたる貌。詩、衛風「ー一竹竿、以釣ニ于淇ニ」

【籥】ダク　藥
○くびわ（鉗・箝）○ふむ。漢書、禮樂志「ー一浮雲」‖躡。

【籃】ラン　ロン　覃
○かご、手に提げ持つに便なるかご「竹ー」「魚ー」「藥ー」「筐ー」○大いなるかご、あじろかご「籠ー」
【籃輿】ランヨ　あじろのこし。蘇軾詩「ー一從ニ紙筐ニ得レ句輕ニ千葉ニ」‖竹轎。

十五畫

【籔】ス　虞　藪と同じ

十六斗の稱。

【簑】 篦（竹部十一畫）に同じ。

【籀】 チウ 第 籀は俗字

古代文字の一體、周の宣王の太史史ーの作る所、卽ち大篆「ー文」「ー書」

【籀篇】チウ 大篆をいふ。江淹、謝ノ賜ニ石硯一啓「敬圖ニー一、側觀ニ硯功一」【籀文】チウ 大篆をいふ。學古編「李斯、既作ニ小篆一、遂以ニー一爲ニ大篆一」

【籐】 トウ 圖 或は藤に作る

どう、と、竹に似たる蔓生の植物、熱地に生ず、彎曲自在なるが故に、種種の用に供せられる。

十六畫

【籤】 ニィ 庚

○はしばこ（箸箱）○かご（籠）

【籞】 ギョ 圖

○とめば（禁苑）「禁ー」竹を編みて人の往來を禁ずる處。○いけす、池水中に竹籠を編みて魚を養ふもの「池ー」○をり、雞にてかこみて鳥を畜ふもの「籠ー」○かこひを設ける、とどむ。

【籤】 セン 先

姓。神仙傳「彭祖姓ー名鏗、帝顓頊之玄孫（中略）歷ニ夏殷周一、年七百六十七歲而不ニ衰」＝老彭。

【籜】 タク 藥

たけのかは（竹皮）筍の皮、成長するに隨ひて脫落する「筍ー」「新ー」

【籜粉】タク たけのこの皮に生ずるこ。貫師泰詩「ー一已翻綠甲紫、錦花還染羽毛蒼」

【籜龍兒】タクロウジ たけのこ。朱喬年詩「一雷驚起ーー」＝籜龍笆。

【籟】 ライ 泰

○ふえ、三つの孔ある管ノ○簫の一名。○すべて孔アより發するひびき。莊、齊物「地ー則衆竅是已、人ー則比竹是已」「天ー」「松ー」「清ー」「爽ー」「萬ー」「洞ー」○かなしき聲。

【籟簫】ライシャウ しゃうのふえ。楚辭文「口之噓氣爲ニ聲、何異ニー一納ニ氣而鳴一耶」

【籠】 ㊀ロウ 東 多 ㊁リュウ

㊀こ、かご、土を盛る器、ふせご。竹などを編みて作れるいれものの總稱「樊ー」「雀ー」「筍ー」○とりのをり（鳥檻）○つつむ、こむ、かねあく（包含）○えびら（箙）㊁たけの名。○くさびおほひ、車軸の頭。○圖こもる。又こもり、室内に閉居して外出せず「ー城」「病氣引ー」又神佛の殿内に宿泊して祈願をかける「參ー」

【籠鷹】かごのうぐひす。白居易詩「鮮魚思ニ反ノ泉、ー一悔ニ出ノ谷」

【籠鳥】かごの中のつる。白居易、寄ニ元九一詩「誰識相念心、翻驚與ニー一」

【籠檻】たけにて造りたるをり。南史、范雲傳「今羽翮未ニ豐、不ニ得ノ不ニ就ニー一」

【籠絡】かごのとり。自由にならぬ身に喩ふ。何遜詩「ー一恨ニ同促一」＝籠鳥。

【籠居】圖家にこもりてをる。

【籠括】入れくくる、ひきくるめる。公羊傳、疏「項羽因ニ胡亥之虐一、而ニー一天下一」＝籠括。

【籠愛】かごと、はこと。青箱雜記「官職是國家的、非ニ臥房ー一中物一」

【籠城】圖しろにたてこもる。

【籠兒】○魚を捕へるたけかご。李賀詩「韓鳥慶ニ絲繼一、湘儀在ニー一」

○籠の中に入れたる如く一ところにとめおくする。文心雕龍「觀ニ其體說一、則ニー一籠統一」

【籠鷄】かごの中につなぐ。元稹詩「野鳥多ニー一、鷄鶩本易ノ馴」

【籠鳥】かごのとり。中論「斯與ニー一鹿馴一未ニ有ニ異也一」

【籠鳥戀ノ雲】東縛を受くる身の自由を得んと望む心に喩ふ。魏子「籠中之鳥、空嘯不ニ出」。蘇軾詩「鳥因不ニ忘ニ飛、馬駑常念ニ驪一」

【籠燈】とうろう。李中詩「ー一吐ニ冷艷一、蘆樹起ニ寒暉一」

【籠絆】しばりて自由をさせぬ。北史、盧思道傳「離ニー一朝市一、且ニ三十載一而面往之心、未ニ嘗去一懷抱一也」＝羈絆。

【籠罩】まんちう。俺游雜錄「唐人呼ニ幞頭一爲ニー一」

【籠統】○かごと、あみと。○轉じて、人を我手中にまるめこむ意。晉書、劉元海載記「恣度卓举、有下

一一宇宙之志」‖包羅・籠絡。
【籠絡】ロウラク　他人を我が手の中にくるめこみて自由にする。宋史、胡安國傳「蔡京得政、士大夫無不受其ー一」
【籠利】ロウリ　利をひきくるめて取る。宋史「爲ー時ー一、無三足ー取者一」‖網利。
【籠手】ロウテ　圖○鎧の一部、兩腕を被ふもの。○弓籠手ユガケの略。弓を射る時左のひぢを被ふもの。○撃剣の具、手にはめるもの。

【籙】ロク　㊥

○未來記、豫言を記せしもの、天神の策命「圖ー」張衡、東京賦「高祖膺ー受圖」○しぇもつ(籍)○ほんばこ(籠)

十七畫

【籀】チュウ　㊦

きはむ、罪人をしらべる。

【籧】キョ　㊤

ー篨ハはあんべら、たかむしろ(竹席)又、はとむね、胸突き出でて俯すこと能はざる病。轉じて人の顔色をうかがひて媚びへつらふ者に喩ふ。

【籧篨戚施】ハはとむねと、せむしと。轉じて、醜惡の人に喩ふ。國語「ー不ー可ー使ー俯、戚施不ー可ー使ー仰」

【籤】セン　㊦　籖は俗字

○くじ。○みくじ、吉凶をうらなふに用ふる竹札。○くじ札に當りし者が或權利を得るやうに仕組みしもの「抽ー」○しるし(驗・標識)ふだ「牙ー」○かずとり、ふだ。‖簽。

【篇】ヘン　㊥

○ふえ、三孔又は六・七孔ある笛「笙ー」「竽ー」詩、衛風「左手執ー」○かき。禮、月令「孟冬愼ー管ー」‖論。

【簀】ヨ　㊤　輿の俗字

竹のこし(徹輿)

【簡】ラン　㊤　或は籃に作る

えびら。箭矢イシヤを盛りて背に負ふもの、其の形木桶の如し。漢書、韓延壽傳「抱ー負ー」

【簟】レン　㊦

かがみばこ。列女傳「置ー鏡ー中」‖匳。

十八畫

【籩】ヘン　㊤

たかつき(竹豆)

【籩豆】ヘントウ　まつりの器の名。王績詩「豐骨輸二朗宝一、鮮觴薦二ー一」
【籩豆】ヘントウ　籩は竹にて造り、果物や乾肉の類を盛り、豆は木にて造り菹醢の類を盛る祭器。論、泰伯「ー一之事、則有司存」

十九畫

【籠】ロウ　㊦　㊥

とうし、ふるひ。米と糠とをふるひ分つ器。‖篩。

【籮】ラ　㊦

○ふ(箕)○かたみ(筐)いかき、米をよなぐに用ふる底方にして上闊きざる。

【籬】リ　㊥

まがき、ませがき、柴や竹を編みて作る垣「藩ー」「竹ー」「樊ー」「疎ー」「短ー」

【籬落】リラク　かきねに飛ぶ蜂ハチ。竹見蔵の狭きたとへ。宋玉、對二楚王問一「夫藩籬之鷃、翠足與二天地之高一哉」歐陽修詩「何異ー一鵬二雲鵬一」‖井蛙。
【籬垣】リエン　まがき。晉書、吳隱之傳「數畝小宅、ー一仄陋、內外茅屋六間、不ー容二妻子一」
【籬菊】リキク　まがきのもとのきく。白居易詩「ー一黃金合、蜜蠟緣玉觴」
【籬根】リコン　まがきのもと。高適詩「ー一長三花草一、井上生二薜苔一」‖籬下。
【籬棚】リホウ　まがきの風輪詩「園林滿二芝木一、雞犬傍二ー一」
【籬落】リラク　籬落に同じ。‖籬垣。
【籬畔】リハン　まがきのほとり。朱慶餘詩「故山ー一菊、今日爲ー誰黃」‖籬邊。
【籬落】リラク　まがき。陸道潛詩「遍覺ー一眼界寬」‖籬離。
【籬楓】リフウ　まがきのほとりにあるかへで。歐陽修詩「ー一葉如ー火」
【籬邊】リヘン　まがきのほとり。杜甫詩「ー一野外多二衆芳一」
【籬落】リラク　まがき。戴叔倫詩「ー一殘二山果一、池塘餐二海鮮一」‖籬畔・籬笆。

二十畫

【籯】エイ　㊦

かたみ、三四斗入のかご。漢書、韋賢傳「遺二子黃金滿ー一不ー如二一經一」

【簍】ワク　薬　いとわく、絲を絡ぶ具。‖簍。

糸　六畫

【籲】ユ　ヤノ　薬　遇　よぶ（呼）神を呼びていのりもとめる。‖籲。

【籲嗟】ギョウ　よびさけぶ。柳宗元「駁二復讐一議」「上下蒙昧、一一不レ聞」

【籲天】コテン　天によばはる。書、泰誓「無レ辜ノ一レ、籲二于蒼一」

米部

【米】ベイ　マイ　霽

○こめ、よね、稲の實「玄一」「白一」「新一」○物の實多くして稱す、古代は黍稷・稻粱・菽・大豆の實を六一といふ「菰一」「菱一」「竹一」國○ハ佛國の尺度、米突の略、我が三尺三寸に當る。○亞米利加州の略「歐一」「一國」（支那にては美の字をあて用ふ）

【米友仁】ベイユウジン　宋の米芾の子、字は元暉、刀學古を嗜む、亦書畫を善くす、世に小米と號す。米芾參看。

【米運】ベイウン　米の運漕（元史、世祖紀）

【米國】ベイコク　米と、しほと。轉じて姻戚の義とす。蘇子、非命「吾嘗一一數二天下書一」

【米蝦】ベイカ　えびの細小なるもの、もみ。本草「一一様殻、以二緋粗一名」

【米價】ベイカ　米のねだん。劉子翬詩「市頭一一新來減、一醉葉直五六錢」

【米價調節】ベイカチョウセツ　こめねだんの高下を程よくととのへて暴騰暴落のなきやうにする。

【米家山】ベイカサン　宋の米芾、山水を善くし、自ら一家を成す、子の友仁能く家學を傳ふ、俗に父子並く所の山を稱して――といふ。

【米汁】ベイジュウ　しろみづ、米のとぎしる。急就篇、注「以二洗一一、和二小豆一而煮レ之也」‖米潘・米瀾。

【米艇】ベイテイ　こめびつ。

【米課】ベイカ　こめのみつぎもの。宋書、良吏傳「今若減二其一一、將來理有二深益一」‖米納。

【米元暉】ベイゲンキ　米友仁を見よ。

【米元章】ベイゲンショウ　米芾を見よ。

【米穀】ベイコク　こくるゐ、白米と雜穀と。列仙傳「以二一一一食レ之」

【米汁】ベイジュウ　こめのしる。左傳、注「潘、一一可二以浴一頭」‖米泔。

【米商】ベイショウ　米を賣買するあきうど、米屋。

【米食】ベイショク　米の飯を常食とする。

【米蠹】ベイト　國八十八歳の賀のいはひ、米字を析けば八十八となる故（夜航詩話）‖米年。

【米船】ベイセン　○米を積みしふね。陳遘詩「日有二一一街レ尾來一」○國アメリカの船。

【米菜】ベイサイ　こめと、もみと。又、もみ。周禮、舍人「掌二王一之出入一」

【米田】ベイデン　米を作る田。‖稻田。

【米點】ベイテン　畫法の語。岩石蘚苔などを描くに用ふる細き點、米元暉父子より始まる。

【米顯】ベイケン　宋の米芾の異稱、其の不羈なるによりていふ。

【米囊花】ベイナウカ　罌粟のはなの異名（花小名）雍陶詩「無レ限客愁今日散、馬頭初見――」

【米納】ベイノウ　米を租稅に納める。

【米年】ベイネン　國米壽に同じ。夜航詩話「邦俗稱二八十八一爲二一一一、亦未レ爲二不典一也」

【米包】ベイホウ　こめだはら。宋史、食貨志「一一瓦器牛畜之類」

【米苞】ベイホウ　前條に同じ。

【米蔘】ベイジン　こめと、むぎと。書、費誓、疏「糗、熬一一也」

【米飯】ベイハン　こめのめし。海槎餘錄「舟人以二一一、頻頻投レ之」

【米潘】ベイハン　しろみづ。唐書、南詔傳「產二善馬一（中略）飲以二一一、七年可レ御、日雖數百里」‖米泔・淅米汁。

【米綳】ベイホウ　ほしいひ。後漢書、和熹鄧皇后紀「儲二峙一一薪炭一」

【米蔕】ベイテイ　字は元章、宋の襄陽の人、南宮、又、海嶽外史と號す、文章を善くし、特に書に長ず、畫は所謂南畫にして、最も山水人物に妙なり。‖米南宮。

【米潤】ベイジュン　しろみづ。禮記、注「潘、一一也」‖淅米汁。

【米粒】ベイリュウ　こめつぶ。晏林「堅冰黃鳥常哀、悲愁不レ見二一一、但覩二蓬蒿一」

【米廩】ベイリン　○こめぐら。○古の學校。畿、明堂位「一一、有虞氏之序也」

【米麴】ベイキク　米のかて。急就篇、閔染果蔬助二一一」

【米利堅粉】ベイリケンフン　小麥粉、舶來の諢純粉。

【數米而炊】カズイテスイス　瑣末の事にこせこせするにいふ。莊、庚桑楚「簡レ爰而櫛、――」

臼　四畫

【粄】ジョ　ダコ　禡　粗　粗惡―はおこしごめ、おこし。

【粁】〔國字〕　佛國の尺度キロメートルのあて字、一米突の千倍。‖幾米。

基米。

【粂】〔國字〕くめ、久米の合字。

【籾】〔國字〕○もみ、もみがら、すくも。○もみ殻をかぶれる米(粟)

四畫

【粘】糠(米部十一畫)に同じ。

【粋】サイ 圜 ○もっぱら(純)○くはし(精徴)

【粗】ヒ 紙 支 ○しひな、皮のみにて實のなきもの。書、仲虺之誥「若ㇾ粟之有ㇾ粗」○轉じて成績の惡しき喩「一政」○知らざること。‖秕。

【粗糠】コウ しひなと、ぬかと。糠は糠。疏、道遊遊「是其塵垢ー―、猶將ㇾ陶二鑄堯舜一者也」

【粗淺】シセン しひなと、かすと。庸愚の者に喩ふ。唐書、楊瞻復傳「汝二去ー一者、實華乃出」‖精粗。

【粗放】ホウ 惡しきまつりごと。晉書、文帝紀「朝無二ー―一人無二勝言一」‖秕政・惡政。

【粉】㊀フン ㊁フン 問 吻 ㊀こ、こな、穀物又は其の他の物を微細に碎きしもの「一末」「鉛ー」「朱ー」○こなとなる、搗き碎きてこなとなす「一碎」○こごめ。○白し「一米」「竹ー」「花ー」○おしろい(古、米のこなを用ふ)「白ー」「脂ー」「施ー」「鉛ー」「紅ー」○いしばい。○いろどり、かざり(采色。潤色)㊁けしゃうする、ぬる、かざる(飾)

【傳ㇾ粉】フンフフ おしろいを附ける、化粧する。語林「魏文帝疑二其ー一ㇾ」‖施ㇾ粉・加ㇾ粉。

【粉牋】フンセン 色ふで。杜牧詩「ー―堆盡ㇾ月」

【粉筐】フンキョウ おしろいばこ。鮑照詩「徒飛二輕埃一舞二空牀一ー―塵器靡二復遊一」

【粉華】フンクワ けしゃうかざり。

【粉澌】フンシ こなごなに散り敗れる。雨史、陳武帝紀「白羽纔擒、囚徒ー―」

【粉黛】フンタイ 美がきいろどる。劉允濟詩「粉功多ニー―」

【粉繪】フンカイ 前條に同じ。杜甫詩「鄰公ー―隨二長夜一」

【粉骨碎身】フンコツサイシン ほねをこにし、みをくだく。甚だしく辛苦艱難するにいふ。譚林類纂「――、雖ㇾ親二此職一」‖碎骨粉身。

【粉指】フンシ おしろいのつきたるゆび。

【粉楼】フンロウ 妓女多沙汰、人有ㇾ僧二其妻一者お往往ー―疵印二于青銅一」

【粉砕】フンサイ こなごなにくだく。楊萬里詩「ー―銀山一成二雪片一」

【粉黛】フンタイ 前條に同じ、黛は碎。‖書粉。

【粉黛香盤】フンタイコウバン 美人のうらみかなしむにいふ。丁鶴年詩「――不ㇾ勝ㇾ情」

【粉鰒】フンシ 白くぬりたるへい。白居易詩「玲瓏映ニー―一」

【粉署】フンショ 白色にぬりたる官衙。漢官儀「省中皆胡粉塗ㇾ壁、故曰ニー―一」

【粉飾】フンショク ○かざり、おしろいをぬりてけしゃうする。史、滑稽傳「共ー―ニー之一」○けしゃうする如く、人をほめて善きものにする。韓詩「等ー二人一者、故人樂ㇾ之」○實際を求めずして徒らに外觀を飾る。孫載詩「妄自ー―欺二盲瞽一」

【粉黛】フンタイ ○おしろいと、まゆずみと、けしゃうする。陳書、高祖紀「盛ニー―一而戴二干戈一、曳二羅綺一而呼二晉譯一」○美人の義とす。白居易、長恨歌「六宮ー―無二顏色一」

【粉團】フンダン だんご。開元天寶遺事「宮中毎ㇾ到二端陽節一、進ニー―角黍一」

【粉團花】フンダンクワ てまりばな。紫陽花アヂサヰに似たる花を著く。‖繡毬。

【粉廉】フンレン こなぢり。温庭筠詩「蛺蝶雙雙隨ニー―一」

【粉蝶】フンテフ 白き羽のてふ。温庭筠詩「ー―團飛花影轉、采鴛雙泳水紋生」杜甫詩「風輕ー―喜」

【粉白】フンパク おしろい。戰國策「鄭之美者、ー―黛黑、立於衢閒」‖鉛白。

【粉白黛綠】フンパクタイリョク おしろいを以て白くし、眉ずみを以て青くする。轉じて美人の義とす。韓愈、送二季愚詩一「盤谷序」「――、列ㇾ屋而閑居」列子には綠を黑に作る。

【粉白不ㇾ去ㇾ手】フンパクステズ おしろいを手より離さず、男子の化粧に喩を用ふることの甚だしきをいふ。魏志、何晏傳、註「――、行歩顧ㇾ影」

【粉箋】フンセン 色ふで。顧況詩「朱衣小僮高呵ㇾ道、ー―新圖猫寫ㇾ眞」

【粉米】フンマイ 白米、衰衣十二章の一。書、益稷「藻火ー―」酒誥「社稷七穀之神也、ー―由ㇾ之成也」

【粉壁】フンペキ しらかべ。顧野王獄「訊二掠紬于ー―一、寫二纖腰于華堂一」

【粉黛】フンタイ ○おしろいと、すみと。物の相異の甚だしきにいふ。種漢書、黃瓊傳「朱紫共色、ー―雜錯、所謂抵二金玉于沙礫一、碎二珪璋于泥塗一」四方聞ㇾ之、莫ㇾ不二憤歎一」○おしろい

と屑ずみと。後漢書、梁鴻傳「今乃衣綺縠ニ傅ニ粉一、登鴻所ノ願哉」＝粉黛。

【粉本】フンポン ○畫のしたがき。先づ胡粉ヲニにてしたゑを書く、故にいふ。圖繪寶鑑「古人畫稿謂ニ之ー一ー一前賢多資ニ畫之宜和紹興所ノ藏ー一、多有ニ神妙者ー一」○轉じて、てほんとなる詩文をもいふ。

【粉米】フンベイ こな、こ。

【粉面】フンメン おしろいにてしろくぬりたるかほ。陸暢詩「ー一仙郎選ニ聖朝一、偶逢ニ裝女ニ學ニ吹簫ー一」

【粈】〔國字〕

粉ーシンはぬかみそ、五斗味噌、糠と麹と鹽とを加へて醸せるもの。

【粍】〔國字〕

佛國の尺度ミリメートルのあて字。一米突ノルの千分の一、我が三厘三毛許。

五畫

【粕】カン 呉

しろみづ。＝泔・米汁。

【粔】キョ 圏

ー籹おこしごめ、おこし。米を煮りて蜜(今は砂糖又は飴を用ふ)を混ぜてまろめたる菓子。

【粗】ソ 虞 魚

○あらし。精の反對。○ほぼ(略)あらまし。史、司馬相如傳「ー陳ニ其略ー一」○圖人に贈る物品に冠する謙辭「ー末なる品」「ー酒」「ー飯」＝麤。

【粗惡】ソアク そまつにしてわるし。憎好の對。

【粗衣粗食】ソイソショク そまつなる衣服とそまつなる食物と。＝惡衣惡食。

【粗餐】ソサン あらっぽく氣強くして細事に拘はらず。＝疏餐。

【粗忽】ソコツ あらあらし。粦辛雜識「猶ー一不レ細者氣也」

【粗鹵】ソロ 圖粗末なるそへ物、つまらぬ景品。

【粗言】ソゲン あらきことば。參同契「至誠安徐、口無ニ一ー一」

【粗忽】ソコツ そそっかしい。＝輕忽・輕率。

【粗造】ソゾウ そまつなる作りかた。＝粗製。

【粗糙】ソサウ きめあらし。

【粗率】ソソツ あらくしてていがるなり。南史、孔顗傳「衣冠器用、莫レ不ニー一ー」一本に麤率に作る。

【粗茶淡飯】ソチャタンパン 貧しき生計。楊萬里詩「——終ニ殘年ー」

【粗雜】ソザツ そまつにしてつまらぬ。唐書、李鄘傳贊「惟ー一苦窓而已」

【粗製】ソセイ 粗造に同じ。

【粗淡】ソタン そまつにして味あはし。唐書、張孝宗傳「孝宗與ニ其下ー同ニー一、日膳數豆腐而已、人服ニ其儉ー」＝粗濟。

【粗暴】ソボウ あらあらし。

【粗服】ソフク そまつなる衣服。

【粗米】ソベイ あらきこめ。綿米の對。漢書「一簞用ニー一ニ觚、麴一觚ー」

【粗樸】ソボク いやしくしてかざりけなし。唐書、劉晏傳「ー一庫院、飲食儉狹、室無ニ媵婢ー」＝粗朴。

【粗筆】ソヒツ あらまかにしてつたなし。

【粗券】ソケン そまつ。＝園莽。

【粗猛】ソモウ 周密ならずしてたけきこと。魏志、毋丘儉傳「驍果ー一、數有ニ戰功ー」

【粗末】ソマツ 圖ぞんざい、つまらぬ。

【粗密】ソミツ あらきと、こまかきと。＝疏密・精粗。

【粗野】ソヤ あらくしていやし。＝疎野・樸野・鄙野。

【粗暗】ソアン そそっかしい、おろそか。

【粗糲】ソレイ あらきくろごめ、惡米。

【粗陋】ソロウ 粗末にしてあらし。

【粗漏】ソロウ てぬかり、そそっかしくしておちがある。

【粘】デン ネン 圏

黏(黒部五畫)に同じ

【粘液】ネンエキ ねばるしる。楊萬里詩「綠纏ニ黃蜜ニ、冰彈漉ニー一ー」

【粘著】ネンチャク ねばりつく「ー一力」

【粘殺】ネンサツ 糊づけにしてつづる。臨安府誌「用ニ天台印本ニ、剪製ー一」

【粘土】ネンド ねばつち。

【粘膜】ネンマク 皮膚に連接して內腔の裏面を蔽ふ薄き皮。

【粕】ハク 奧 陌

かす(滓)さけのかり、さけのしぼりかす「糟ー」魄に通ず。

【粏】ハン 早

こごめもち、だんご(屑米餅)

【粒】リュウ 緝

○つぶ、こめつぶ「米ー」「飯ー」「粟ー」○すべて物の米つぶの如き狀をなすもの「砂ー」○米食する。書、益稷「烝民乃ー、萬邦作乂」

【卻粒食氣】キャクリュウショクキ 穀食を避け、霞を食ふ、仙人をいふ。齊書、補伯玉傳「卻ノ粒之人、浪ノ蹤之人、乃可ニ置致ー一、不レ宜ニ久羈ー一」浪は惰。

【絕ノ粒】ゼツリュウ 穀物を食はざる法。孫綽、遊ニ天台山ー一賦「ー一ノ華芝」＝辟穀・卻ノ粒。

【粒子】リュウシ つぶ。

【粒食】リフショク こくものを食ふ。醫、王御「羽毛穴居、有ㇾ不ニ一一ニ者ㇾ矣」
【粒雪】リフセツ あられ。‖霰。
【粒米】リフベイ こめつぶ。孟、滕文公「樂歲ー一狼戾、多取ㇾ之而不ㇾ爲ㇾ虐」
【粒粒皆辛苦】リフリフカイシンク 一つぶ一つぶ皆辛夫のほねをりより成る。李紳、憫ㇾ農詩「鋤ㇾ禾日當ㇾ午、汗滴禾下土、誰知盤中飧、ー一」

六畫

【粤】エツ チチ 月

○ここに、發語の辭。‖曰、越。○あゝ、歎息の聲。○あつし(厚)○國の名。今の廣東・廣西は古の百ーの地、故に此の二省を兩ーといひ、又、廣東省の異稱をー省といふ。魏徵詩「請纓繫ニ南ー一」‖越。
【粤漢鐵路】エツカンテツロ 廣東省城より湖南を通過し、湖北の漢口に至る鐵道。
【粤東】エツトウ 廣東省の異稱。字解を見よ。

【粢】㊀シ ㊁セイ 米 支

㊀きび(稷)曲禮「稷曰ニ明ー一」○六ーは黍稷・稻・粱・麥・菰。‖六穀。○神に供へる黍稷。○ことめのもち。‖黍。㊁さけ(酒)「一醍」
【粢盛】シセイ きびを器に盛りて神に供へるもの。左、莊十一「天作ニ淫雨一、ー一不ㇾ實ニ於ー一、若ㇾ之何不ㇾ弔」漢書、文帝紀「給ニ宗廟ー一」

【粧】シャウ サ 陽

○よそほひ(粉飾)けしやう(化粧)「紅ー」「淡ー」「濃ー」「新ー」○よそほふ。けしやうする。
【粧奩】シャウレン おしろいをぬりてよそほふ。林下詩談「ー一點ㇾ蒸拂ニ輕紅一」
【粧鏡】シャウキャウ けしやう用のかがみ。杜牧、阿房宮賦「明星熒熒、開ニ一ー一也」
【粧疲】シャウコン けしやうしたるあと。蘇軾詩「娟娟侵ㇾ鬢ー一澹」
【粧點】シャウテン ○よそほひかざる。隋史、馮淑妃傳「淑妃ー一不ㇾ獲ニ時重一」○あひしらひてかざる。
【粧面】シャウメン よそほひたる顏。李嶠詩「ー一對ニ青鏡一、欲ㇾ廢起ニ畫梁一」

【粥】㊀シュク ㊁イク 屋 屋

㊀かゆ(糜)米を煮てゆるくしたる者「糜ー」㊁ひさぐ、賣る。○もみ、もみごめ、米の未だ皮を去らざるもの。○あは、玉蜀黍に似たる禾本植物、支那北方地方の常食料。‖梁・小米。○あは粒に似たる小さきものの稱。○俸祿の義。史、伯夷傳「義不ㇾ食ニ周ー一」韓愈、進學解「歲豐熙ー一」
【粟而弈】ゾクジカの つまらぬ事に心を用ふる喩。淮南、詮言「ー一、數ㇾ米而炊、可ニ以治ニ家一、而不ㇾ可ニ以治ニ國一」
【粟散國】ゾクサンコク 佛 あはつぶを散らしたる如き多くの小さき國。楞嚴經會解「粟散卽小國小主散ニ天下一、如ㇾ粟多也」
【粟豆】ゾクトウ あはと、まめと。杜甫詩「國馬竭ニー一、官雖ニ繼ニ粟菽一」
【若粟之有ㇾ秕】ジャクゾクノアルヒ 小人の君子の中に雜はれるに喩ふ。書、仲虺之誥「若ニ苗之有ㇾ莠、ー一、小大戰戰、罔ㇾ不ㇾ懼ニ于非ニ辜一」
【粟肌】ゾクキ 寒さの爲めに、肌に粟粒の如きものを生ずる。楊萬里詩「淒淒輕寒粟ニ肌ㇾ膚」
【粟米】ゾクベイ こめ、もみ。孟、盡心「布縷之征、ー一之征、力役之征」
【粟粒】ゾクリフ もみつぶ。杜牧、阿房宮賦「釘頭磷磷、多ニ於在ㇾ庾之ー一一」

【粪】リン 震 問 問

○おにび。說文「鬼火也、从ニ米舛一、舛、死人之骨一」‖燐。○ほたるび(螢火)

七畫

【粳】カウ 梗(禾部四畫)の俗字

うるち、うるしね。米の黏らざるもの、早熟を稻といひ、晩熟をー一といふ。
【粳稻】コウタウ うるちのいね。史、循吏傳「祭以ニー一一」
【粳米】カウマイ うるち、稻の粘らざるもの。本草集解「ー一御ニ今人常食之米一」南史、徐孝克傳「缺ニー一一爲ㇾ粥、不

ノ能二常辦一」

【粱梁】リヤウ　うるちごめ。梁書、沈約傳「約子旋以二母憂一去レ官、蔬食飯レ麥、服除猶絶二粱肉一」

【粱糧】リヤウ　うるちのかて。陶潛詩「豈期過二滿腹一、但願飽二粱糧一」

【粲】サン　㊀

○しらげたるこめ（白米）○めし、いひ（餐）○あきらか、あざやか（鮮明）「一然」燦に通ず。○いさぎよし（精潔）○しとやか（優）○うつくし（好）○三人の女の稱。○おほし（衆）○文采多き貌。○一然は白齒を出して盛んに笑ふ貌。轉じて自作の詩文などを人に示すことを謙して「一を博す」といふはおわらひぐさに示すといふ義。○白一は漢代の刑の名、米を呑きて正白ならしむる罰。

【粲粲】サン　○文采多く鮮かなる貌。詩、小雅「四人之子、一一衣服」○みめよき貌。陸雲詩「宮室多二妖冶一、一一都人子」

【粲然】サン　○笑ふ貌。○潔き貌。荀、榮辱「一一皆有二衆人之所一以同一者」○潔き貌。荀、榮辱「一一皆笑」○潔き貌。荀、榮辱「一一皆有二衆人之所一以同一者」

【粲爛】サン　○うつくしく鮮かなる貌。粲は又、燦に作る。詩、唐風「角枕粲爛」

【粹】スヰ　㊀

○まじりけなし（純）「純一」「眞一」「醇一」○きよし。○もっぱら（專一）「眞一」○くはし（精）○まったし（全）○圓すべる、いきな人。世態人情に通ずる人「一人」

【粹學】スヰガク　純粹なる學問。劉宰、寄二游默齋一詩「四海游夫子、一一洞二古今一」

【粹器】スヰ　純粹の材。沈珣文「紳曷令才、入倫一一」

【粹然】スヰネン　まじりけなくきよし。

【粹白】スヰハク　まっしろ。＝純白。次條參看。

【粹白之裘】スヰハクノキウ　まっしろのかはごろも。呂覽「天下無二粹白之狐一而有二一一一取二之衆白一也」

【粹美】スヰビ　まじりけなくうるはし。老學庵筆記「陳福公長卿、重厚一一、有二天人之相一」＝醇美。

【粹穆】スヰボク　まじりけなくやはらぐ。宋史、樂志「德厚二重閼一、神遊一一、何以多之、惟粹惟穆」

【粹質】スヰシツ　まじりけなく、すぐれてくしび。白居易文「天地間有二一一之氣一焉、萬類皆得レ之」

【糂】シン　㊀

もみ、もみがら（穀皮）

【梁】リヤウ　㊁

おほあは、粒の大いなるあは、穀の最も良きもの「稻一」「膏一」

【梁飯】リヤウハン　米のかゆ、餘は米の多きかゆ、あつがゆ。王安石詩「巾簁稻飯類二一一一」

【梁肉】リヤウニク　よき米と、にくと。美食をいふ。列、力命「衣則衣レ錦、食則一一、居則連レ騶、出則結レ駟」史、孟嘗君傳「僕妾餘二一一一」

【梁飯】リヤウハン　うまきこめのめし。撰夫論「夫一一食肉、有レ好二于面目一、不レ若二糲粱麤糲之可二食于口一也」

【梁米】リヤウマイ　よきこめ。唐書、許欽寂傳「我乏レ食、有二美酒一乎、有二一一一乎」

【粮】リヤウ　㊁

かて。＝糧。

【精】セイ　シャウ　㊀

○くはし。粗の反對。くはしくこまか（細密）なり、大禹謨「惟一惟一」つまびらか（審）○まじりけなし。○なれる（熟）○くはしくたくみ「一巧」劉克莊詩「銀鉤楷法一」○いさぎよし（潔）○まじりけなくうつくし（粹美）○たへなり（妙）○するどし（銳）○もっぱら（專）○あきらか（明）○しらぐ（舂）しらげたるこめ。○こころ（心）「一神」莊、德充符「勞乎子之一一」○ただし（正）よし（善）○たましひ（靈）○すぐれたるまことの氣（眞氣）○まこと、まごころ（誠心）管、心術「中不一一者、心不一平」○もと、もとのちから。○えらぶ（擇）○ひかる（光）○ひかり、三一は日月星。○かみ（神鬼）杜甫詩「雲霧蟄二幽一方降一一」○あやしく不思議なるもの。もののけ（物怪）「山一」「木一」○ひとみ。＝睛。○生殖の原質「一液」「一血」○水一は水晶。

【精一】セイイツ　くはしく專ら。書、大禹謨「惟精惟一、允執二厥中一」

【精純】セイ　すぐれてするどし。後漢書、姚期傳「據二山河之固一、擁二一一之衆一」

【精衛填ノ海】セイエイテンノウミ　望むまじき事を企てて、徒労するに喩ふ。山海經「發鳩之山有レ鳥、名曰二精衛一（中略）往遊二于東海一、溺而不レ反、是故精衛常取二西山之木石一以堙二東海一」

【精耀】セイヨウ　あざやかにかがやく。論衡「以レ燕作レ珠、一一如レ眞」

【全レ精】センセイ　精神を完全にたもつ。關尹子「一一者、忘二是非一、忘二得失一」

【精僻】セイ　○くはしくきとる。南史、王懿傳「學通二陰陽一、一二一聲律一、○くはしくときあかす。

【精巧】コウ　くはしくすぐれてたくみ。梁元帝文「雕鐫一一、似二蓬陽之仙物一」

【精好】コウ　くはしくしてよし。宋史、趙安易傳「極二其一一一」

【精核】カク　くはしくしらべる、核は殿。漢書、馬融傳「一二一數術一」＝精覈。

【精確】カク　くはしくたしか。江總文「志業該練、心力一一」

【精學】ガク　くはしく學ぶ。又、學にくはし。後漢書、申屠蟠傳「隱居一一、博貫二五經一、發明二圖緯一」

【精覈】カク　たしかにしらべる。後漢書、順帝紀「簡二序先後一、一二一高下一」

【精甲】コウ　すぐれてよきよろひ。晉書、成都王穎傳「一一耀レ日、雄騎前驅」＝堅甲。

【精治】チ　くはしくゆきわたる。北史、劉芳傳「部以二芳經學一一、超二遷國子祭酒一」

【精悍】カン　すぐれて氣づよし、悍は勁。史、游俠傳「爲レ人短小一一」

【精簡】カン　くはしく選び拔く。南史、陳暄傳「徐陵爲二吏部尚書一、一二一人物、皆精神之士、皆尚慕焉」＝精選・精擇。

【精鍛】タン　くはしくめききする。韓愈文「欲レ求二士之賢愚一、在二子一一博采之而已」

【精氣】キ　○たましひ。易、繫辭「一一爲レ物」○天地萬物の根本、元氣。

【精義】ギ　くはしく細かなる義理。易、繫辭「一一入レ神、以致レ用也」

【精騎】キ　えりぬきの騎兵。唐書、高祖紀「選二一一二千一爲二遊軍一」

【精勤】キン　つとめはげむ。東哲詩「類回一一以輕レ貧」

【精金良玉】キンリョウギョク　人品の純粹温良なるに喩ふ。名臣言行錄、外集「純粹如二精金一、温潤如二良玉一」

【精強】キョウ　くはしくしてつよし。後漢書、竇融傳「兵馬一一」

【精進】シン　すぐれてうるはしくひかりあり、華は花の如く美くしく光ある義。又、其の物。孔穎達、尚書序「謂二其一一一」楚辭「揚二一一一以炫曜兮」

【精光】コウ　○あきらかなるひかり。北史、齊高帝紀「高祖目有二一一一」○すぐれてよきはまれ。晉書、陳敏傳、金陵擧二於江外一、一一據二於揚楚一」

【精蘊】ウン　おくふかく蘊み至る。劉克莊文「衡レ道甚嚴、壺一一不レ減二於橫渠一、而樂易治過二於了翁一矣」

【精曉】ギョウ　くはしくさとる。貴治通鑑「明皇一二一旨律一」＝精通。

【精潔】ケツ　くはしくいさぎよし。國語「其爲レ人也、小心一一」

【精妍】ケン　くはしくうるはし。蕪城賦「才力雄富、士馬一一」

【精研】ケン　くはしくきはめみがく。後漢書、何休傳「貫朴納口、而脂有二心思一、一二一六經一、世儒無二及者一」

【精根】コン　こんき、心のげんき。

【精魂】コン　たましひ。李華、弔二古戰場一文「弔祭不レ至、一一何依」

【精懇】コン　くはしく、ねんごろ。南史、謝靈運傳「事レ佛一一」

【精査】サ　十分にくはしくしらべる。＝審査。

【精采】サイ　精彩に同じ。

【精彩】サイ　○ひかり、物事の精華。＝精采。○いきいきしたる氣象。晉書、嘉容超載記「一一秀發」

【精細】サイ　くはしくこまか。金樓子「書極一一」

【精爽】ソウ　たましひ、爽は明。左、昭二五「心之一一、是謂二魂魄一、魂魄出レ之、何以能久」＝精靈。

【精察】サツ　くはしくしらべる。孟郊、征蜀聯句「石猶設二奇伏一、穴覬窮二一一一」＝熟察・明察。

【精算】サン　くはしくかんぢやうする。

【精旨】シ　くはしきこころ。蔡邕詩「兵誡術數、萬微一一」

【精眞】シン　まじりけなくまこと。

【精神】シン　こころ、たましひ。梁書、范雲傳「一一秀朗」

【精神一到何事不レ成】セイシンイットウナニゴトカナラザラン　人は熱心になれば何事も成らざることなき義。朱熹文「陽氣發處、金石亦透、——」

【精神科學】セイシンカガク　心のありさま及其のはたらきに關する事を研究する學問、心理學・倫理學・論理學などの總稱。

【精神錯亂】セイシンコンラン　精神が亂一ぱいに滿ちる。金史「李獻甫心思到處超レ人甚、人稱爲二一一一」

【精深】シン　くはしくふかし。唐書、杜甫傳贊「又善陳二時事一、律切一一、至二于音一、不二少衰一、世號二詩史一」

【精通】ツウ　くはしく義理をたづねる。雲笈七籤「學者自應二一一得レ一知レ萬」＝精討。

【精舍】シャ　○讀書の所。又、學校・塾。後漢書、包咸傳「立二一一一講授」○精神のやどる所、卽ち身體。管子、

内業「定心在レ中、耳目聰明、四枝堅固、可二以爲一一一」○傍てら。曾氏要旨「精遡窮目、息心所レ棲、日二一一」

【結】ケツ　くはしくつまびらか。後漢書、竇融傳「小心一一」‖精細。

【結手】ケツシュ　すぐれたる兵卒。南史、齊高帝紀「王蘊將二數百一一、帶甲數二千餘一」‖結兵。

【精熟】セイジュク　十分に手なれる。‖純熟。

【精純】セイジュン　まじりけなし。宋史、李綱傳「一一之氣、達二於面目一」

【精通】セイツウ　くはしく書をよむ。後漢書、樂恢傳「恢好二經學一（中略）閉レ閤一一、不レ交二人物一」‖精達・熟通。

【精粋】セイスイ　○くはしくまじりけなし。漢書、禮樂志「夫人育二天地之氣一、有二五常之性一、聰明一一、有生之最靈者也」‖純粋・醇粋。○清潔なる空氣。劉向、九歎「吸二一一一而吐二氣濁一兮」

【精微】セイビ　物事の眞の正味。‖神髄。

【精製】セイセイ　念を入れてつくる。

【精誠】セイセイ　まじりけなきこと。班彪、王命論「一一通二於神明一」

【精整】セイセイ　物事がよくととのふ。唐書、楊弘禮傳「望二其衆一、抱伏一一人人整レ力、壯レ之」

【精切】セイセツ　くはしくしてよくあてはまる。元史、黃溍傳「文辭布置謹嚴、援據一一」‖剴切。

【精選】セイセン　くはしくえらぶ。後漢書、賈琮傳「特勅二三府一一二一能吏一」‖詳選・妙選。

【精鮮】セイセン　極めてあざやか。蘇軾詩「曉堤飛脫落、文彩自一一」

【精選】セイセン　こまかなると、あらきと。禮記「布帛一一不レ中」‖精粗。

【精測】セイソク　くはしくはかる。

【精法】セイホウ　くはしくえらびわける。劉克莊詩「完卒要一一」

【精到】セイトウ　十分にくはしくゆきとどく。圖繪寶鑑「古人筆法圓熟、用意一一」

【精討】セイトウ　くはしくたづね求める。梁簡文帝、答二湘東王一書「一一錙銖」

【精撰】セイセン　くはしくえらぶ。‖精選。

【精斷】セイダン　精密にはんだんする。魏志、賈逵傳、注「年七十餘矣、其于二一一無レ衰、而術略不レ損二于故一」

【精致】セイチ　くはしくこまやかなるむね。晉書、左思傳、班固兩都、現勝二其辭一、張衡二京、文過二其意一、至レ若二此賦一、擬二諸數家一、傳辭會義、抑多一一」‖深致。

【精緻】セイチ　くはしくこまか。唐書、崔元翰傳「其好レ學老不レ倦、用レ思一一」

【精忠】セイチュウ　一すぢに忠義である。‖純忠。

【精蟲】セイチュウ　精液中に在る生殖原子。

【精通】セイツウ　くはしくさとり知る。

【精鍼】セイシン　○よく鍊りたる鍼。○よき賈のくろがね。蘇軾、徐州上二皇帝一書「地既產二一一、而民皆善レ鍛」

【精膿】セイノウ　くはしくしてあつし。膿は厚なり、善なり。唐書、丘和傳「煬帝北巡、和鑄鎧一一」

【精誦】セイショウ　精通に同じ。

【精魄】セイハク　たましひ、からだ。中論「夫形體者、人之一一也」

【精美】セイビ　くはしくしてうるはし。

【精微】セイビ　くはしくこまか。中庸「致二高大一而盡二一一」

【精魅】セイビ　ものの化。拾遺記「勿下輕二萬乘之餘、當レ此一一之物上」

【精緻】セイチ　くはしくしてきよし。韓愈、柳子厚墓誌銘「厚少一一、無レ不二通達一」

【精兵】セイヘイ　えりぬきの兵士。史、項羽紀「一一三萬人」

【精靈】セイレイ　くはしく明かなる結論の決書、樓護傳「爲レ人短小一一、論議常依二名節一」

【精米】セイマイ　しらげたるこめ。禮記、疏「君子膳二一一一素器一也」

【精密】セイミツ　くはしくぬけめなし。‖精細・緻密・粹密。

【精妙】セイミョウ　くはしくしてたへなり。宋史、王著傳「儒家字體、洞悉二一一一」

【精陽】セイヨウ　陰層六月の異名（梁元帝纂要）

【精利】セイリ　すぐれてするどし。呂溫詩「劍陣益一一、玉纏零價騰」

【精耳】セイジ　くはしくこまかにして善し。唐書、人物志「一一長慮、善在二悉謀」‖失在二多疑一」‖淳真。

【精慮】セイリョ　くはしきかんがへ。常袞文「苦心一一、夙夜思職」

【精力】セイリョク　事をしとげるちから。根氣。漢書、匡衡傳「尤一一過二絕於人一」

【精勵】セイレイ　十分につとめはげむ。後漢書、朱浮傳「學者一一、遠近同慕」

【精蜜】セイミツ　○すぐれてくしびなる氣。易、繫辭、疏「陰陽一一之氣、凝聚而爲二萬物一也」○なきたま（仁魂）「一一欄」‖聖靈。

【精練】セイレン　よくきたへねる。

【精煉】セイレン　書經をいふ。後漢書、姜肱傳「就二一一一、求レ見」‖精舍。

【精進】シンジン　○傍一心に道を修める。法苑珠林「一一、聖賢學二般若一」○轉じて、菜食の義。「一一潔齋」

【粽】ソウ　医

ちまき。‖糉（米部九畫）

【糀】チャウ　タウ　医陽

○あめ（飴）○かて（糧）食米。禮、王制「五十異一」

【糝】リン　呂

○ｌ（リン）は川の水が清く石に激する貌。詩、唐風「揚之水、白石ｌｌ」‖磷磷。○㊀せせらぎ。

【糀】【國字】かうぢ（麴）

九畫

【糊】コ コツ 月 虞

○のり。○のりをつける、のりにて貼る。○ねばる（黏）○かゆ、かゆをすする。轉じて口すぎをする。宋正考父、鼎銘「饘（セン）於是粥（シュク）於是以ｌ余口」（一に餬に作る）‖餬。○模ｌはばっとしたる貌。ぼんやり。白居易詩「平明山雪白模ｌ」

【糊口】コウ くちすぎ、生計、生活する、糊一に關に作る。字解參看。‖餬口。

【糊紙】コウ かみをのりばりにする。謝承文「ｌｌ補之」

【糊塗匠】コトウ 僞表具師。

【糊塗】コトウ ごまかす、事をあいまいにする、分曉ならず。宋史、呂端傳「太宗欲ｌ相ニ呂端ニ或曰、端爲ル人ｌ太宗曰、端小事ｌｌ、大事不ニ糊塗ニ」‖糊突。

【糇】コウ 尤 通じて餱に作る

○かて（糧）○ほしいひ（糒・乾食）

【糇糧】コウリヤウ かて、食料。詩 大雅「乃裹ニｌｌニ」

【糙】サン 感

○糲（米部十一畫）に同じ。○國ｌ糠（ヌカ）はぬかみそ。

【精】シヤウ 庚 靑

○かて（糧）○せんまい、神に供へる精米（シヤウマイ）

【糉】ソウ 送 又、粽に作る

ちまき（角黍）だんご。又、もちごめを茅・蘆・孱篠等の葉に包みて蒸したる食品、五月五日の端午の節に造る。續齊諧記「今世五月五日作ｌ」

【糅】ヂウ ジウ 有 宥

まじる、まじはる、まじふ（雜）「雜ｌ」「混ｌ」「紛ｌ」史、屈原傳「同ニ玉石ニ兮、一槩而相量」（槩はとかき）

【同訓異義】ジウ 糅・交・接・雜・錯・混・淆の別は交（一部四畫）の條を見よ。

【糈】セウ 語

○かく、かきまぜる、こねる（攪）○しる（汁）

【糂】シン 侵

○かく、かきまぜる、こねる（攪）○しる（汁）

【穀】穀（禾部十畫）の俗字。

【糗】キウ 有

○いりごめ（熬米麥）○ほしいひ（糒・乾糧）

【糗糧】キウリヤウ ほしいひ（乾飯）儲光羲詩「ｌｌ常共飯、見採每更抱」

【糗糧】キウリヤウ ほしいひのかて。書、費誓「峙ニ乃ｌｌニ」‖糗糧。

【糕】【國字】

佛國の尺度、センチメートルのあて字、一米突（メートル）の百分の一、我が三分三厘許。‖厘米突。

十畫

【糕】コウ 豪

○かて（糧）○ほしいひ（糒・乾食）

【糕糧】コウリヤウ かて、食料。詩 大雅「乃裹ニｌｌニ」

【糖】タウ 陽 又、餹に作る

○さとう、甘蔗（カンシヨ）などより製せし甘味のもの「製ｌ」「白ｌ」「沙ｌ」○あめ（飴）

【糖霜】タウサウ 白ざとう。蘇軾詩、冰盤薦ニ琥珀ニ何似ｌｌ美」‖白糖。

【糖漿】タウシヤウ 上等の白糖を以て蒸溜水に和して製せしもの。‖單舍利別

【糖尿病】タウネウビヤウ 糖分が排出して衰弱する病。

【糖分】タウブン 砂糖質の成分。

【糖酪】タウラク あまき乳漿。搨言「櫻桃利熱、和以ニｌｌニ」

【糒】ビ ハイ 幷 寘

○ほしいひ（乾飯）、乾ｌ」「餱ｌ」○かて（兵糧）「糧ｌ」史、大宛傳「載ｌ給武師」

【糒醪】ビカウ かてと、さけと。漢書、李廣傳「兵史持ニｌｌ一壺ニ遺レ廣」

十一畫

【糠】カウ 陽 又、穅に作る

○ぬか、もみぬか（穀皮）○粃ｌは、しひなと、ぬかと。轉じて煩碎（ハンサイ）の義とす。○精ｌはかすと、ぬかと、甚だしき粗食の義。○ｌ星（カウセイ）は星の名。石氏星經「箕前亦名ｌ星」明大歲豐、小徵天下饑荒無ｌ米」

【糠蝦】カウ あみ、蝦の類の極めて微小なるもの、しほからとす。＝簸蝦。
【糠粃】カウ 舂糠中の破れざる者、極めて粗食の義とす。史、陳丞相世家「亦食ニ―ノ耳」
【糠秕】カウ ぬかと、しひなと。つまらぬ事に喩ふ。類氏家訓「成ニ―之徴事」＝糠粃。
【糠糜】カウ ぬかのかゆ。韓愈文「飫ニ于肥甘一、甘ニ―ノ」
【舐レ糠及レ米】スヰカウキフベイ 糠を舐り盡せば米に至る、土を削り盡せば國を滅すに至る喩。史、吳王濞傳「發ニ諸侯之地一、微求盜多、誅ニ謫良善一、日以益甚、里語有レ之、――」

【糟】サウ 豪

○かす(粕)さけのかす(酒滓)楚辭「何不餔ニ其ノ一而啜ニ其醨一」○にごりざけ、もろみざけ(濁酒)○醴ニ―は盡く人を殺す義、又、行事・心術の潔からざる義。
【糟糠不レ厭】サウカウフヘカス 貧賤の甚だしきをいふ。史、伯夷傳「回也屢空――」韓非子には厭を飽に作る。
【糟糠之妻不レ下レ堂】サウカウノツマハクダウ 貧しき時、糟や糠を食ひて艱難を共にせし妻は後日富貴に至るも之を棄てず。後漢書、宋弘傳「貧賤之交不レ可レ忘――」
【糟丘】サウ 酒がすをもかの如く積みかさねしもの。韓詩外傳「桀爲ニ酒池一、可ニ以運ニ舟一、――足ニ以望ニ十里一」南史、陳暄傳「暄嗜レ酒、過差非レ度(中略)曰、速營ニ―一、吾將レ老焉」(人の諷諫せしに答へたる言)李白詩「盤餐卽金液、――是蓬萊」
【糟粕】サウ さけのかすと、かうじと。陸游詩「餘年更何爲、枕ニ藉糟與ニ麴一」
【糟醨】サウレイ さけがすのつつみ。新序「桀爲ニ瑤臺一、紂爲ニ肉圃一、厚ニ民力一、殫ニ民財一、爲ニ酒池ニ―一」＝糟丘。
【糟粨】サウハク かす、廢棄せしつまらぬものに喩ふ。晉書、潘尼傳「名位爲ニ―一、勢利爲ニ塵垢一」＝糟魄。
【糟魄】サウハク 前條に同じ。滋味を去りたる殘物。莊、天道「古人之ニ―一」「古人の著はしたる書物をいふ)
【糟蹋】サウタフ 酒がすのかめ。白居易詩「舖獄服ニ―一、流落見ニ麴車一」
【糟毛】ソウモウ 圖馬の毛の灰色にして白色の交れるもの。＝油馬。

【糙】サウ ソウ 號 通音ザウ

○くろごめ(玄米)あらごめ、未だ舂ツカずかざる粗米。○醫あらし(粗)きめがこまかでない「粗ニ―」

【糝】サン シン 感 寢

又、糂に作る

○こながき、牛羊豕の肉と米とをまぜて煎りつけたるもの。○ねばる(黏)莊、山木「蘧蒢不レ―」○まじふ。まじる(雜)○こめつぶ(米粒)○―粉シンはうるち米のこな。
【糂食】シンショク こながき。周禮、天官「盛豆之實、飽食ニ―一」
【糂粒】サンリフ こめつぶ。陸龜蒙詩「耽愛烝黎無ニ―一」

【糦】シャウ 陽

よそほふ。よそほひ。＝粧(米部六畫)

【糜】ビ 支

○かゆ(粥)「薄ニ―」「豆ニ―」○ただら、敗れ潰える。ただらす(爛)「ニ―爛」○つひゆ、つひやす「ニ―散」靡に通ず。○まゆ。眉と通ず。○隃ニは墨の名。漢官儀「日給ニ―墨二枚」
【糜散】ビサン ただれちる、消えほろぶ。劉向賦「芳蘂蘂而終敗兮、名ニ―而不レ彰」
【糜粥】ビシュク かゆ。禮、月令「行ニ―飯食ニ」
【糜沸】ビフツ かゆが煮えただれる如く亂れる。漢書、揚雄傳「秦俊ニ―雲擾、羣黎爲レ之不レ康」＝鼎沸。
【糜滅】ビメツ やぶりほろぼす。やぶれほろぶ。賈山、至言「萬鈞所レ壓、無レ不ニ―一」
【糜爛】ビラン かゆのただれる如く收拾すべからず。疲勞の甚だしき譬。五、盡心「以ニ土地故一ニ―其民一、而戰レ之大敗」

【糞】㊀フン ㊁フン 文 問

㊀くそ(屎大便)○こやし、こえ。○つちかふ、おほふ、培ひ治む、こやしをかける。禮、月令「可ニ以ニ田畤一ニ」○けがれ(穢)きたなきもの。左傳「其言ニ―土也」○はらふ(掃除)不潔の物を掃ひ除く「掃ニ―」「ニ除」曲禮「凡爲ニ長者一ニ之禮、必加ニ帚于箕上一」㊁はらひすてる(掃棄)
【糞壤】フンジャウ 人に諂ふの甚しきをいふ。晉書故事「晉人譏諂無恥、曰ニ―之徒一。唐郭弘霸爲ニ侍御史一、時大夫魏元忠病、僧懲省候、弘霸獨後、請賢ニ便液一、卽染ニ指嘗、以驗ニ病輕重一、賀曰、甘者、病不レ瘳、今味苦、當レ愈無レ患、元忠惡ニ其姻一、暴ニ語于朝一」
【糞溷】フンコン くそつぼ。南史、范縝傳「臣ニ菌席一者、殿下是也、落ニ――

者下官是也」‖織細。
【薏汁】ヨクジフ　くそのしる。魏志、華陀傳、注「殺ニ一蚘ヲ一、乃解」
【黄壌】クワウジャウ　けがれたる土。北史、崔頤傳「崔浩不ニ信ニ佛道一、祖模深所ニ歸向一、誕ニ一ヲ中ニ禮ニ拜佛像一」
【黄土】クワウド　くさりてぼろぼろせるつち。論、公冶長「一ノ牆、不レ可レ杇也」（きたなき壁は塗り直しが出來ず、孔子が門人、宰我の晝寢を戒めたる語）
【黄土言】クワウジン　道にそむきていやしむべきことば。左、襄十四「其言黄土也」

十二畫

【糈】ショ　ソン　陽　支　又、粗に作る
○さけさかな、酒食。‖儒。○熟する、火にてむして熟する。○きび（黍穆）

【糧】リャウ　ラウ　陽　かて（穀食）旅行又は行軍に用ふる食料（古は多く糒ホシイヒを用ひき）周禮、地官、廩人、註「行レ道曰レ糧、謂レ糒也、止居曰レ食、謂レ米也」
【絶レ糧】クワクワ　食料が乏しくして困ること。論、衛靈公「在レ陳一レ」
【糞レ糧】クワウラウ　ひものをつつむ。詩、大雅「乃裹ニ餱糧一、于レ橐于レ囊」
【糧食】リャウシャウ　かて。又、兵糧。左傳「楚師遂遠、一將レ盡、必將ニ速歸一」
【糧荚】リャウケフ　かてと用度と。後漢書、獻帝紀「詔曰、吾儒年踰ニ六十一、去離ニ本土一、營ニ求一ヲ一、不レ得レ寧レ業」
【糧事】リャウジ　ひゃうらうぐるま。唐書、裴行儉傳「詐爲ニ一ノ三百乘一」
【糧納】リャウナフ　かて、軍隊の食料。史、平準書、漢興接ニ秦之弊一、丈夫從ニ軍旅一、老弱轉ニ一ヲ一」‖糧餉・餱糧。
【糧餉】リャウシャウ　かて、ひゃうろう。漢書、貨食志「男子力耕、不レ足ニ一ヲ一、女子紡績、不レ足ニ衣服一」‖糧食。
【糧道】リャウダウ　かてをおくるみち。史、高祖紀「不レ絕ニ其一ヲ一、當不レ如ニ蕭何一」‖糧道。
【糧仗】リャウヂャウ　兵糧と軍器と。魏書、于烈傳「詣ニ一城一四面抗拒久之、糧軍不レ至、一ヲ一俱盡」‖糧食兵仗。
【糧貯】リャウチョ　糧食のたくはへ。後漢書「京城一ヲ甚多」
【糧粟】リャウゾク　糧食と輜重と。史記「從馬凡十四萬匹、一ヲ一不レ與焉」
【因レ糧於敵】インリャウヲテキ　敵の兵糧を我が食料とする。孫子、作戰「一ヲ一、故軍食可レ足也」
【糧秣】リャウマツ　ひゃうらうと馬のかいばと。

十四畫

【糯】ダ　禡
もちごめ　黏分多くして餅につくるに適する米。‖稬。
【糯米】ダイ　もちごめ。本草、性寒、作レ酒則熟」

【糰】ダン　寒
だんご（粉餌）

十五畫

【糵】ゲツ　ゲチ　屑
かうぢ、もやし。麯（米部十七畫）に同じ。

【糲】レイ　ラツ　霽　泰
○くろまい（玄米）精うけざる米。○あらし（麤）史、刺客傳「用爲ニ夫人靈一之資一」
【糲粢】レイシ　しらげざる米と穊と。粗飯をいふ。史記、自序「一ヲ一之食」
【糲飯】レイハン　しらげざる米のめし。粗飯の義。南史、梁武帝紀「膳無ニ鮮腴一、惟豆羹一ヲ一而已」
【糲米】レイマイ　くろごめ。韓詩外傳「一之食、未ニ嘗飽一也」‖粗米。

十六畫

【糴】テキ　錫
○かひよね（入米）米を買ひ入る、糶チョウの反對「市一」「貴一」○かひよねの米穀。
【糴価】テキカ　買ひ入れる米の價。顏師古、策ニ賢良一文、一ヲ翔踴、則工商容レ之而雜レ振」
【糴貿】テキバイ　穀物をかふ。魏詩外傳「不レ可ニ一ヲ一而得一也」
【糴米】テキマイ　かひよね、穀實を買入れる。北史、房景伯傳「經ニ糴雨一絕レ糧、遣ニ婢一ヲ一」

十七畫

【蘗】ゲツ　ゲチ　屑
○かうぢ、もやし（麯）「麯一」米麥を蒸しねかして黴花ビカを生ぜしめしもの、酒醬油を造る原料とす。○孽ゲツは色色とたくみて、其の罪を釀ジヤウし成す義。漢書、李廣傳「隤而一ヲ一其短」○孽に同じ。

十九畫

【糶】チョウ　嘯

○うりよね（出穀）米を賣り出す。糴（テキ）の反對「貴ー」「販ー」○うりよねの穀。○國せり賣の略、競賣。

【糴糶】テキテウ 米穀の賣買。

糸部

【糸】㊀ベキ 錫 ㊁シ 支

㊀はそいと（細絲）○極めて少しの分量、髮の吐く一筋を忽とし、十忽を絲とし、五忽を糸とす。○かすか（微乏）㊁圖絲（糸部六畫）の略字。

一畫

【糺】キウ 有

糾（糸部二畫）に同じ。

【糺纏兮】キウテンケイ 雲がいりみだれて長く廣がる貌。兮は無意味の助字。十八史略、五帝紀に糺を禮に作る。禮し禮の古字礼に誤りしならんか。

【系】ケイ 霽

○いとくち（緒）いとすぢ（細縷）○つなぐ。つながる、かかる（繫）漢書、敍傳「ー高頊之玄宵兮」つらなる（連）○つぐ（繼承）○ちすぢ（胤・血統）いへすぢ「世ー」「帝ー」「先ー」○つづきあひ（相聯屬）すぢみち「ー統」○山ーは山脈の連り續くもの。

同訓異語 系・係・繫・掛・挂・懸等の別は係（人部七畫）の條を見よ。

【系族】ケイゾク ちすぢをひける親族の郁離子「不ン問二其ー一」

【系孫】ケイソン ちすぢをひきたる遠き孫。舊唐書「柳宗元後魏侍中濟陰公之ー一」

【系圖】ケイヅ 代代のいへすぢを示したるかきもの。‖系譜。

【系統】ケイトウ ○いへすぢ、血族。○物事の順序次第を逐ひて連絡せるすぢみち。

【系譜】ケイフ 系圖に同じ。宋史、藝文志「錢惟演錢氏慶ー一一卷」‖譜系。

【系絡】ケイラク つながりまとふ。つながり。

二畫

【糾】キウ 有 又、糺に作る。糾は俗字

○ただす（正・督）周禮、大司馬「以ー邦國」しらべる（察）督察する。左、昭六「ー之以故」○をさむ（收）收め合す。○もとらす（戻）○あつめる、あはす（結合）「ー合」後漢書、荀彧傳「收離ー散」○よる、なふ、あざなふ、繩を三すぢ合せてなふ。又其の繩。○まとふ、まつはる（線）亂れてからみつく「紛ー」○むすぶ。むすぼる（結）

同訓異語 糾・正・規・繩・格・匡・革・訂・質の別は正（正部一畫）の條を見よ。

【糾按】キウアン ただしらべる。後漢書、蔡茂傳「時陰氏賓客、在二郡界一多犯二吏禁一、茂輒ー一無レ所二回避一」‖勃按。

【糾戒】キウカイ ただしいましむ。周禮「各掌二其鄉之民數一而ー一之一」

【糾合】キウガフ 收めあはす。左、僖二四「ー二ー宗族于成周一」

【糾糾】キウキウ まつはる貌。詩、魏風「ー一葛屨」‖察察（一解に稀疏なる貌）

【糾彈】キウダン 罪をただしあげる。梁書、徐勉傳、自掌二糾憲一多レ所二ー一一」

【糾紛】キウフン まつはりむすぼれる。李白詩「枝枝相ー一」

【糾訴】キウソ つみをただしらべる。

【糾繚】キウレウ もつれみだれる。實誼、鵩鳥賦「雲氣雨降兮、ー一相紛」‖紛糾。

【糾察】キウサツ ただしらべる。後漢書、盧植傳「有司依違、莫二肯ー一一」‖糾正。

【糾雜】キウザツ もつれみだれる。宋書、恩倖傳「刑政ー一、理雜二過遺一耳目所レ寄、事歸二近習一」‖紛雜。錯雜。

【糾繩】キウジヤウ 法を以てただす。繩は正。隋書、劉昉傳「身毘酒徒、家爲二逋藪一、若不ー一、何以繩愆」

【糾正】キウセイ ただす。晉書、石鑒傳「多レ所ニー一、朝廷憚レ之」

【糾擿】キウテキ つみをただしをさむ。晉書、察官疇載記「今百姓貧察、官牧無レ已、兵士遭逃、相招爲レ寇、風移化變、莫二相ー一」

【糾奏】キウソウ 官吏などの罪をただして申し上げる。宋書、蔡廓傳「高祖以下臨刑直不レ容二邪枉一、補二御史中丞一、多レ所ニー一、百寮震懼」

【糾率】キウソツ あはせひきゐる。糾一に糺に作る。前漢、龍額傳「糾二率義勇一、立可レ得二三百人一」

【糾彈】キウダン つみをただす。唐書、元稹傳「許二方幅一ー一」

【糾劾】キウガイ つみをただしてしりぞく。晉書、律歷志「仲尼之撥二亂於泰秋一、說二亂賊一ー一」

【糾逖】キウテキ 惡人をただして之を遠ざける、逖は遠。左、僖二八「以綏二四國一ー一王慝一」

【糾慝】キウトク こもごも相まつはる。史、實誼傳「威之與レ德、交若二ー一、且長且擾、君道正矣」

【紆餘】ウヨ　あやまりをただす。書、閻命「縄ノ愆ヲ―シ、橋ニ其非心ヲ」

【紆紛】フンウ　○もつれみだれる。子虚賦「其山則　交錯――、上干ニ青雲ニ」○山川の乱りめぐれる貌。李華、弔ニ古戦場ニ文「河水繁帶、萇山――」‖糾紛。

【紆縄】ジョウ　縄の如くあざなひまつはる。糾は三合のなは、縄は二合のなは。史、賈誼傳「夫縄之與ノ縄兮、何異ニ―ー」

【紆明】メイ　明かにしらべただす。‖糾察。

【紆問】モン　ただしたづねる。後漢書、蘇章傳「貪暴爲ニ民患ニ前後監司、皆ニ其勢援ニ莫ニ敢ー―」

【紆戻】レイ　つみをただしてころす。後漢書、郭伋傳「亦以ニ信賞ー―ニ巣帥ニ袁賊銷散」

【紆勉】ベン　ただしはげます。魏志、傅嘏傳「夫建ノ官均ノ職、清ノ理名ノ物、所ニ以立ニ本也、循ノ名考ノ實、―ニ成規ニ所ニ以治ニ末也」

【紆】ウ　ク　畫　糸

○まがる（曲）かがまる（屈）屈曲する「回ー」○めぐる、まとふ、まつはる（繞）「繞ー」「繚ー」○なは（縄）○心がむすぼれる（鬱結）李白詩「寸心增ー煩ー」

【紆鬱】ウツ　氣がむすぼれる。楚辭、九歌「志ー―其難ノ解」‖鬱紆。

【紆繞】ジョウ　まとひめぐる。黄公度詩「蓮山帶水自ー―」

【紆行】コウ　うねりまがりてゆく。周禮「郷行仄行、連行ー―」

【紆曲】キョク　まがる。七發「湟池ー―」‖紆縄。曲折。

【紆結】ケツ　心がむすぼれてのびず。馮衍、顯志賦「心怫鬱而ー―兮」

【紆縄】ジョウ　曲折する後。漢書、揚雄傳「超ー―之清澄」

【紆軫】シン　心がむすぼれてかなしむ、軫は隠痛。楚辭、九章「心鬱結而ー―」

【紆徐】ジョ　行くことの緩やかなる貌。顔延詩「経橋堤上行ー―」

【紆繞】ジョウ　まとひめぐる。後漢書、邊讓傳「振ニ弱支ニ而ー―兮、若ニ綠繁之垂翰ニ」‖繚繞。

【紆折】セツ　うねりまがる、紆餘曲折。

【紆縄】ジョウ　まとひつく。慶世南文「其爲ノ狀也、則筋力ー―、殊ノ文無ノ御」

【紆盤】バン　まがりめぐる。蔡邕詩「山路何ー―」‖盤紆。

【紆餘】ヨ　○うねりまがる。上林賦「ー―委蛇、經ニ營乎其内ニ」○才氣が十分にありてゆったりとせる貌。韓愈、進學解「ー―爲ノ姸、卓犖爲ノ傑」○文章ののびのびして迫らざる貌。蘇洵、上ニ歐陽内翰ニ書「執事之文、ー―委備」

【紀】キ　糸

○しるす（記・識）すぢみちを立てて記す。韓愈、進學解「ー事者必提ニ其要ニ」又、其の記錄。○歴史上特に天皇の事の本末を記せし篇。世家・列傳などの對「本ー」○のり（法）みち（道）きまり（極）きまりをつける。證語「禮以ー政」をさむ（治理）○とし（歳）「元」○一ーは十二年。書、畢命「既歴三ー―」○いとぐち（緒）○もとる（基）○こと（事）○すぢ（經）○あふ（會）○かず、ほど（數）○かなめ（要）○人の姓。一信は漢の高祖の將。○春秋時代の國名、今の山東省に在り。○世ーは百年間の稱。○國日本書紀の略「記萬葉」（記は古事記）

【紀行】コウ　旅行の行程の記事。蘇軾文「作ノ詩ーレー者、多ニ一時之傑ー」

【紀號】ゴウ　名稱、年號。宋史、王服傳「建中之名、雖ノ取ニ魯桓ー然重ニ襲前代ー―、非ノ是」

【紀綱】コウ　○國家ののり、おきて。小なるを紀、大なるを綱といふ。書、五子之歌「今失ニ其道ー其ー―」‖典章法度。○とりしまる、をさめる。齊語「ー―齊國ー神ニ補先君ー」

【紀綱之僕】ボク　事ををさめる小役人。左、僖、二四「秦伯送ニ衛於晉ー三千人、實ー―也」後世、人の僕を稱して紀綱、又、傭紀といふは此に本づく。

【紀效新書】キコウシンショ　十八巻、明の戚繼光撰す。練兵備和の爲めに作る。分ちて十八條と爲し、儒帥に關あり、其の詞、日語の如く文飾を加へず、其の曉解し易きに取る。

【紀記】キ　國日本書紀と古事記との略稱。

【紀極】キキョク　終極の義。莊子、其文「如ニ此論ー、終何ー―」

【紀元】ゲン　○建國の初年。○年代計算の原始とする年、我國にては神武天皇即位の年。西洋にては耶蘇降誕の年。

【紀元節】セツ　國神武天皇即位の當日即ち二月十一日を祝ふ大祭日、三大節の一。

【紀功碑】コウヒ　いさをを記する石碑。唐書、距ニ柳谷ニ百里、其處有ニ殊超ー―ー」

【紀識】キ　しるす。釋名「紀、記也、ー―ニ之ニ也」

【紀事】ジ　事實の經過を記するの文、其の文體、ー―は記志の別名にして、野史の流なり、古、史官時事を記することを掌りて、耳目の達ばざる所の者は、往往遺す、是に於て

文人學士見聞する所あるに遇へは、手に隨ひて紀錄し、或は以て史官の採擇に備へ、或は以て史籍の遺亡を補ふ、名同じからずと雖も、其の一一たるは一なり〔文體明辨〕

【紀信】キシン　漢の忠臣、項羽、高祖を滎陽に圍む、事急なり、信偶りて高祖となり代りて出で降る、高祖因りて脫するを得たり、羽、信を燒き殺す。

【紀序】キジョ　のりついで。史記「天下有レ道、則不レ失二其一一」＝統序。

【紀綱】キカウ　いさををしるす。隋書、音樂志「雲門表レ効、司勳一レ、業紀二山河一、道固二金石一」

【紀傳體】キデンタイ　歷史の一體、本紀・列傳の體裁によりて、人物の行事を中心として記述せしもの。編年體・紀事本末體などに對する稱。

【紀傳道】キデンダウ　國古、大學寮四科の一、主に史記・漢書・文選・爾雅等を授ける、其の教官を紀傳博士といふ。＝文學道。

【紀念】キネン　記念の誤用。

【紀年】キネン　○世紀と年月と。左傳「臣小人也、不レ知二一一一」○歷史。李綱「林文「史者編レ年也、故曰二紀傳一」

【紀律】キリツ　○のり、おきて、規則。左、桓二「百官於レ是乎畏レ憚、而不三敢犯二一一一」＝法令・法度。○軍法。

【紈】クヮン　グヮン　寒

白きねりぎぬ。熱絹、粗厚の者を練といひ、輕細の者を一といふ「羅一」「素一」「冰一」「輕一」

【紈綺】クヮンキ　しろきねりぎぬと綾ぎぬと。宋書、武帝紀「上清儉寡欲、後庭無二一一綵竹之音一」＝綺紈。

【紈牛】グヮンギウ　小牛。王融文「一一露犬之玩」

【紈綿】グヮンメン　しろきかとりぎぬ。歐陽修文「但欲下借二粉繪一圖レ之掛中一一上」

【紈袴】グヮンコ　しろねりのはかま、貴族子弟の服。故に貴族の子を一一子といひ輕薄の意を帶ぶ。漢書、敍傳「出與二王許弟子一爲レ羣、在二手綺繡一一一之閒一」

【紈扇】グヮンセン　白きねりぎぬのうちは。江淹詩「一一如二團月一、出レ自二機中素一」

【紈素】グヮンソ　練りたるしろぎぬ。班婕妤詩「新裂齊一一、鮮潔如二霜雪一」＝素紈。

【紈綈】グヮンテイ　しろねりのきぬと綈き葛布と。唐書、和政公主傳「諸子不レ服二一一一」

【紅】コウ　グ　東

○くれなゐ、あざやかなる赤色「眞一」「深一」○べにぐさ。○べに。又、べにいろ。○くれなゐのはな。○古、工に通ず「一女」「女一」○功（力部三畫）に通ず。○剌一レは薔薇ワイバの一名。

同訓異字　紅・赤・丹・絳・緋・殷の別は赤（部首七畫）の條を見よ。

【紅友】コウイウ　酒の異名。周必大題跋「宜興黃土村、去レ縣五十五里、東坡與二單秀才一步レ田至レ焉、地主以レ酒見レ餉、謂レ坡曰、此一一也」

【紅雨】コウウ　○くれなゐのあめ。轉じて花にそそぐ雨。孟郊詩「一一花上滴、綠烟柳際垂」○あかき花の散るに喩ふ。黃庭堅詩「自行一一亂花間」蘇軾詩「淨眼見二桃花一、紛紛墮二一一一」

【紅雲】コウウン　くれなゐのくも。異聖記「玉帝所レ居、常有二一一一擁レ之」

【紅葉】コウエフ　あかき葉、もみぢ。西陽雜俎「史生遊二華山一、有二一一一、大如レ掌」

【紅葉良媒】コウエフリヤウバイ　紅葉に詩を題して結婚の媒妁とせし故事、唐の僖宗の時、于祐、御溝に一紅葉を拾ふ、葉上に二句あり、曰く「慇懃謝二紅葉一、好去到二人閒一」と、祐乃ち又一葉に「曾聞葉上題二紅怨一、葉上題レ詩寄二阿誰一」と題して上流に放つ、宮女韓夫人これを拾ふ、後に祐と韓夫人と婚を結べり、時に夫人又詩を作りて曰ふ「一聯佳句題二流水一、十載幽思滿二素懷一、今日御溝二葉寄、方知紅葉是良媒」と〔太平廣記〕

【紅於】コウヲ　楓カヘデの異名。杜牧詩「停レ車坐愛楓林晚、霜葉一一二月花一」に本づく。

【紅花】コウクワ　くれなゐのゆふやけ。韋充、餘霞散成レ綺賦「白日欲レ落兮、一一始生」

【紅蜆】コウケン　赤きかに。蘇軾詩「一一殼脫紅色、巨者可三以斟二酒杯一」也」

【紅肛】コウカウ　あかささげ〔吳普本草〕

【紅蓼】コウリウ　くれなゐの色の十分なる蓼。王安石詩「柳葉鳴蜩綠暗、荷花落日一一」

【紅顏】コウガン　○あかくうつくしきかほ。少年をいふ。劉廷芝詩「此翁白頭眞可レ憐、伊昔一一美少年」○美人の顏をいふ。漢武帝賦「色一一一面弗レ明」

【紅錦】コウキン　あかきにしき。南史、東昏侯紀「雜帳及步障、皆裕以三綠一一」李白詩「背繡夏眉一一靴」

【紅魚】コウギョ　鯛。＝鮭魚。

【紅玉】コウギョク　○美人のはだの色の形容「四京雜記」○寶玉の名、ルビー、鋼玉石の一種。

【紅旭】コウキョク　あさひ。吳融詩「有レ時一一見二蓬萊一」＝紅暾。

【紅蓮】コウレン　あかきはちす。張籍詩「佳花半落一一垂」＝紅蓮・紅衍。

【紅裙】コウクン　あかきもすそ。轉じて妓

女の褥。杜甫詩「越女――濕、蕪姜翠欲滴」

【紅花】コウクワ　○べにばな。越年生草、園圃に栽培し、臙脂及び紅色顏料とす。‖紅藍花。○赤き色の花。

【紅閨】コウケイ　赤く塗り飾りたる室、美人のねや。王涯詩「君不見――少女端正時」

【紅霓】コウゲイ　あかにじ。七啓「懍慄則紅霓成――」

【紅紋】コウモン　唐麻紋の舊名。

【紅嫩】コウジュン　あかきほほ。韓愈詩「白咽――長眉青」

【紅絹】コウケン　もみ、紅色の無地の絹。

【紅妝】コウシャウ　くれなゐのけしやう。妝奩記「植二神仙堂一、皆――粧眉」

【紅桟】コウサン　くれなゐのかけはし。陸游詩「梁州――雪未差」‖朱棧。

【紅脂】コウシ　べに。袁郊「紅粉――映二資質一」‖臙脂。

【紅紫】コウシ　くれなゐと、むらさきと、並に開色。論語、鄭藥「――不三以爲二褻服一」

【紅日】コウジツ　あかきひ、あさ日。王建詩「蓬萊正殿壓二金鰲一、――初生碧海濤」‖紅旭。

【紅十字會】コウジフジクワイ　支那の赤十字社。

【紅脣】コウシン　くれなゐの口びる。美人の口をいふ。‖朱脣。

【紅樹】コウジュ　○秋のもみぢせる木。司空圖詩「――謝村秋」○春のあかき花ある樹。歐陽修、遊春詩「――青山目欲レ斜」

【紅綫褒章】コウセンハウシャウ　國危險を冒して人命を救助せし者に賜はる褒章。

【紅潤】コウジュン　くれなゐ色にうるほふ。西陽雜俎「忽有二一葉大如レ掌、――可レ愛、隨レ流而下」

【紅燭】コウシヨク　あかきともしび。開元天寶遺事「楊國忠子弟、每レ至二上元夜一各有二千炬――一、圍二于左右一」

【紅藥】コウヤク　あかき花のしべ、藥は若。宋之問詩「青林暗換レ葉、――漸開レ花」

【紅蕉】コウセウ　美人蕉の一名、花は罌粟に似て色あかし、支那の南方（閩廣）に多し（嶺南雜記）

【紅赤】コウセキ　あかし。異苑「水色――、有二自然石橋一」

【紅箋】コウセン　あか色の詩などを書く紙。妝奩記「吳綰仙以二――一進レ詩」

【紅蕊】コウズイ　べにと、まゆずみと。劉鑑文「――師レ容、欲二以爲一レ飾」

【紅桃】コウタウ　あかきもものはな。譚能詩「最憶――竹外斜」

【紅綃巾】コウセウキン　ひをどしのよろひ。

【紅脣】コウシン　○靡氣日に映じてあか色を爲す。班固、西都賦「――四合、煙雲相連」○うき世の煩はしき份事。又、熱鬧繁華の事に喩ふ。徐陵詩「――百戲多」

【紅茶】コウチヤ　汁の色が赤味を帶びる紅茶。綠茶の對。

【紅女】コウヂヨ　はた織るをんな、紅は工。漢書、鄭食其傳「――下レ機」

【紅潮】コウテウ　○酒にゑひて顏が赤くなる。蘇軾詩「――發レ頰醉二檳榔一」○女子のつきのもの（妝樓記）‖月經・月事・天癸。

【紅豆】コウトウ　一名は相思子、支那の嶺南に產す。蔓生の木にて幹高き丈餘、葉は羽狀複葉、秋、小花を開く、花冠は蝶の形を爲す、子は大き豌豆の如くにして微扁（廣東新語）

【紅燈】コウトウ　あかきともしび。王建詩「――一夜剪刀寒」‖紅燭。

【紅杜鵑】コウトケン　赤色の躑躅ツツジ‖紅躑躅。

【紅皦】コウキヨウ　くれなゐのあさひ。‖紅旭。

【紅蓓】コウバイ　あか色の花。蓓は蕾。何承天詩「――迎レ春開」‖紅花。

【紅梅】コウバイ　あか色の花のさく梅。

【紅白】コウハク　くれなゐと、しろと。李白詩「――花開煙雨中」

【紅珀】コウハク　あか色の琥珀。柳毅傳「錢塘君出二――一盤一」

【紅粉】コウフン　べにと、おしろいと。杜審言詩「――青蛾映二楚雲一、桃花馬上石榴裙」（青蛾は青き黛眉にて畫きし眉）

【紅粉樣】コウフンヤウ　べにと、おしろいとにてけしやうする。靴は紙に同じ、妝の俗字。古詩「纖纖――、纖纖出素手」‖木蘭歌、易却紈綺裝、洗却鉛粉粧」

【紅毛人】コウマウジン　四洋人をいふ。毛髮赤きが故。次條參看。

【紅毛番】コウマウバン　和蘭人の異稱、番は蕃スエビ（明史）

【紅沫】コウマツ　あかきあわ。晴蜩鳴詩話「丹砂燒爲二黃金一、以染レ筆、入レ石不レ去、名曰二――一」

【紅藥】コウヤク　芍藥ケンクワの異名。譚能詩「――當レ階翻」

【紅羅】コウラ　○くれなゐのうすぎぬ。李白詩「紅羅複斗明見」○荔枝レイシの異名（妝樓枝譜）

【紅蝦】コウカ　あか色のらふそく。皮日休詩「夜半醒來――短」

【紅藍】コウラン　あかね草の異名。史記、注「茜草當、一名――」

【紅鯉】コウリ　ひごひ。白居易詩「船頭有二行寵一、炊レ稻烹二――一」‖赤鯉。

【紅淚】コウルイ　女子のなみだ。麗情集「灼灼（錦城の官妓）以二縑綃一寄二――一爲レ寄」

【紅蓮】コウレン　○あか色のはちす。○アビ地獄八寒地獄の一、紅蓮地獄。

【紅樓】コウロウ　朱ぬりのたかどの、富家の女の住居。白居易詩「――富家女、金鑰璫羅襦」

【紅爐上一點雪】コウロジヤウイテンセツ　活火の上に一點の雪をおけば忽ち解く。道を悟りて胸中に溶凝なきに喩ふ。櫻近思錄「顏子克レ己、如二――一」

【紇】コツ　ケツ　隔月

○つかぬ(束)○絲が下る。○人の名、叔梁―は孔子の父。○囮―は人種の名、今の外蒙古地方の土人。‖囮囑。

【糾】 ジン 眞

○なは(索)絲を合せて繩と爲す。○いと(纏)○印のひも。○針に絲をとほす。禮、內則「衣裳綻製、―箴請補綴」「補―」「縫―」○つづる(綴)

【糾】 シュン ジュン 眞

○のり(法)淮南、精神「以道爲―」○まるうちのひも(圓條)禮、內則「織紝組―」○したがふ。‖循。

【紂】 チウ 有

○しりがい(馬繒)○殷の天子の名、暴虐無道にして周の武王に亡ぼさる、夏の桀王と竝稱して桀―といふ。證法「殘忍捐義曰―」

【約】 ヤク 藥

○つかねる、むすぶ、くくる、たばねる(纏束)「―束」ひきしめる。論、雍也「―之以禮」○つづまやかにす「儉―奢らず。論、里仁「以―失之者鮮矣」○はぶく、へらす「簡―」「守―」○しめくくり(要會)○くるしむ(窮)くるしみ。論、里仁「不仁者、不可以久處―」○とどまる(止)○あらかじめ期日を定める。又、其の期日。○ちかふ、ちかひ(誓盟)○あかし(證)○おほむね、ほぼ(大略)「大―」「一略」○なは(繩)○淖―は柔弱しなやかなる貌。○證―はは(縛)っきりせざる貌。

【約束】ヤクソク ○つかぬ。○とりきめ、ちかひ。史、司馬穰苴傳「臨レ軍―」

【約束】ヤクソク つづまやかにしていましむ。蘇軾詩「家人自―」

【約束】ヤクソク 約言に同じ。

【約束】ヤクソク 居書、郁慮俊傳「―、土木形骸」

【約束】ヤクソク ○つかぬ。○とりきめ、ちかひ。史、司馬穰苴傳「臨レ軍―」

【約束】ヤクソク 證約定書。

【約定】ヤクテイ やくそくしてきめる。

【約飭】ヤクチョク つづまやかにしていましむ。蘇軾詩「家人自―」

【約束】ヤクソク 困窮の境遇に居る。人物志「雄悍之人、可二與涉一レ難、難二與―一レ處」‖處レ約。

【處レ約】ヤクニヲル くるしみ(困窮)の境遇にをる。論、里仁「不仁者不レ可二以久―一レ」

【約而速】ヤクジシテスヤカニ ことばつづまやかにして急遽ず。禮記「其言也、――、敏而臧」

【爽レ約】ヤクニタガフ 約束にそむく、爽は違。李商隱文「文侯校獵事―ニ於虞人」‖違約。

【約束】ヤクソク 甲數が乙數にて割りきれるとき乙を甲の―といふ。

【約束】ヤクソク つづまやかに、はぶく。漢書、刑罰志「可二減除一レ―一者」‖儉省。省約。

【約言】ヤクゲン ちかひ。ちかふ。詩經、柏舟「執二其手一與レ之―一、示レ信也」

【約束】ヤクソク 約言に同じ。

【約束】ヤクソク つづまやかにして飾らず。唐書、郁慮俊傳「―一、土木形骸」

【約束】ヤクソク ○つかぬ。○とりきめ、ちかひ。史、司馬穰苴傳「臨レ軍―」

【約束】ヤクソク 證約定書。

【約定】ヤクテイ やくそくしてきめる。

【約飭】ヤクチョク つづまやかにしていましむ。蘇軾詩「家人自―」

【約束】ヤクソク 困窮の境遇に居る。人物志「雄悍之人、可二與涉一レ難、難二與―一レ處」‖處レ約。

【處レ約】ヤクニヲル くるしみ(困窮)の境遇にをる。論、里仁「不仁者不レ可二以久―一レ」

【約而速】ヤクジシテスヤカニ ことばつづまやかにして急遽ず。禮記「其言也、――、敏而臧」

【爽レ約】ヤクニタガフ 約束にそむく、爽は違。李商隱文「文侯校獵事―ニ於虞人」‖違約。

【約束】ヤクソク 甲數が乙數にて割りきれるとき乙を甲の―といふ。

【約省】ヤクセイ つづまやかに、はぶく。漢書、刑罰志「可二減除一レ―一者」‖儉省。省約。

【約章】ヤクシャウ 國際間に結ばれたる約束の法文。

【約數】ヤクスウ 甲數が乙數にて割りきれるとき乙を甲の―といふ。

【約略】ヤクリャク あらまし、大概ガイ白居易詩「與レ君―一說二杭州一」

【約畧】ヤクリャク つづめて論ずる。又、其の論。

【紜】 ウン 文

○みだる、ごたつく(亂紛)物が衆くして亂れる「紛―」○さかんなり(衆盛)

【紜紜】ウンウン ○衆くして亂れる貌。柳宗元、晉問「師師蒐狩、溶溶――」○往來の盛んなる貌。白居易詩「牛馬走――」

【紛】 カイ ケツ 屑 霽

髮をむすぶ、ゆふ。

【紘】 繩(糸部七畫)に同じ。

【級】 キフ 緝

○しな、くらゐ、次第、位次「等―」「動―」「官―」○だん、きだ(階段)「階―」曲禮「拾―聚足」○しるし、戰場にて獲たる敵

の首。秦の時、敵の首一つを得たる者には爵一級をたまふ制なりしに由る「首一」「俘一」後漢書、光武紀「斬首數千一」

【級差】サウ　しな、わかち。‖等級。

【級遞】スウ　數學にて一定の法則により增減する數を順次に排列せしもの。

【級等】トウ　しな　階段。‖等級。

【紉】　クヮウ　庚

○おほづな（綱維）○ひろし、大いなり（宏）淮南、精神「夫天地之道、至一以大」○はて（極）列、湯問「八一九野之水」○かんむりのひも、冠冕の系そ。朱一」○弊をかける繩。

【紗】　サ　麻　通音シヤ

○しゃ、輕くうすき織物（穀）「素一」「輕一」「窗一」絹の輕細なるもの。古、沙に作る。○轉じて、麻、又木綿のうすき織物をもいふ。圖○羅一ラは毛織物の一。○更一ラは金巾キンに形模様を印せしもの。○紗一ラはふろしきの上等のもの。又茶の湯のふきん。

【紗巾】キン　しゃのづきん。劉長卿詩「向レ風長嘯處二一一野鶴由來不レ可レ親」

【紗綺】コウ　うすぎぬのはかま。白居易詩「淺色羅衫輕似レ霧、紡花一一薄二于雲一」

【紗殺】コク　しゃのちぢみ。漢書、江充傳「衣二一一禪衣一」

【紗窗】ソウ　しゃを張りたるまど。喬知之、従軍行「一一白雲宿、羅幌月光披」

【紗燈】トウ　しゃのかや。うすものとばりに。陸游詩「酣酣美睡付二一一に‖紗帳。

【紗帽】バウ　しゃにて製りたるばらし。杜甫詩「掉レ頭一一仄」

【紗羅】ラ　うすぎぬ。晉史「庾人始以二一一爲二長頂頭巾一」

【紗籠】ロウ　うすぎぬを張りたるかご。白居易詩「耿耿一一燭」

【紗籠中人】ロウチウ　宰相となるべき運命の人、唐の李藩、判官たりし時、能く人を相する新羅の僧あり、曰はく、判官は是れ——なり、凡そ宰相たるべき者は冥司必ず潛かに紗籠を以て之を護る、異物の擾す所たるを恐るればなりと、後果して相となりぬ（原化記）

【索】　㊀サク　㊁サク　陌　入

㊀なは、つな、大なるを一、小なるを繩といふ「大一」「朽一」「繩一」○なふ、なはなふ（絞）なはをあざなひ作る。孟、滕文公「宵爾一綯」○ちる。ちらす（散）「一居」○一一は心の安からざる貌。又懼れる貌。○一然は盡くる貌。つくす。又、さびし（寂寞）き貌。又、淵の下る貌。㊁もとむ（求）さがす、たづねる（搜）「搜一」「探一」○好き者を擇ぶ。

同訓異字　索・盡・殫・竭・罄・既・窮・悉の別は盡（皿部九畫）の條を見よ。

○索・求・干・需・須・覃・徵・逋・覓等の別は求（水部二畫）の條を見よ。

【索引】イン　○書物の見だし。○さがし出す。易林「愛二我嬰女一一一不レ得」

【索隱】サクイン　○隱れたる事理をさがし求める。晉、繫辭「探賾一一」○史記の注の名。唐の司馬貞著す。

【索米】サクベイ　さがしもとめる（楚辭）

【索居】サクキョ　散りはなれて居る。禮、檀弓「吾離レ羣而一一、亦已久矣」‖散處。

【索索】サクサク　○おそれる貌。易、震卦「震一一」疏「心不レ安之貌」○聲の形容。白居易詩「第一第二絃一」

【索然】サクゼン　○盡くる貌。莊、徐無鬼「一一出レ涕」○散らばる貌。晉書、羊祜傳「一一俱散」

【索綯】サクタウ　繩をなふ。詩、豳風「宵爾于茅、宵爾一一」

【索紐】サクヂウ　人名。晉書、索紞傳「一一字叔徹、明二陰陽天文一、善二揲蓍占筮一」太守陰澹命爲二西閤祭酒一、就辭曰、漢以二東帛一禮レ之、月數二羊酒一」

【索緜】サクメン　てつなはによる。淮南子「槩之力、制レ絡伸レ鈞」一一一散金」

【索莫】サクバク　○ものさびしき貌。郭璞詩「塞上詩懷尤一一」‖寂寞。蕭索。索寞。○神氣の沉沒する貌。王褒詩「一一無レ言而如レ土」

【索漠】サクバク　索莫に同じ。

【索寞】サクバク　前條に同じ。方岳詩「太陽無二光芒一一」‖索莫。

【索廟】サクビョウ　きずあとをさがす。故らに惡事を摘發する。陸賈、魏徵像「今之刑賞、或由二喜怒一、或由二好惡一、好則假レ之出レ羽、惡則洗レ瘢一一」‖求瘢（趙壹賦）

【索餅】サクベイ　くみたるかみ。唐書、突厥傳「一一一餐二獲肉一、拿羅獻二酒杯一」‖餅髮。

【索餅】サクベイ　圖小麥粉をこねて縒り如くせし食物。

【索髮】サクハツ　餅髮の人を輕んじていふ。南北朝時代に南朝の人が北朝の魏

の人を指していひし語。

【紙】

紙 或は牋に作る

かみ。車觀漢紀「黃門蔡倫、造意用樹皮及敝布魚網作ㇾ」

【紙鳶】シエン たこ。いかのぼり。獨異志「梁武太清三年、侯景圍ニ臺城一、簡文縛ニ一紙鳶一、出ニ空中一、望ニ含於外一」

【紙燈】シトウ かみにて造りたるよろひ。唐書、徐圀傳「製ニ紙鎧一、勁矢不ㇾ能ㇾ洞」

【紙牌琴】シハイキン 樂譜を刻みたる紙を機械にて轉ずれば自ら聲音を發する樂器。

【紙格】シカク あかりしやうじ、障紙などの格は格子。鑑容閒抄「室中有ニ窗一ㇾ一ㇾ出入處ㇾ」

【紙價高】シカコウ 著作のひろく世に行はるるをいふ。紙貴を見よ。

【紙魚】シギョ しみむし、きらむし、全身銀色を帶びて、三つの尾毛を有せる小蟲。＝蠹魚・衣魚。

【紙型】シケイ ○かみにて造りたるかた。○活字板にて用ふる紙の模型。＝圖紙版。

【紙札】シサツ かみふだ。南史、齊江夏王鋒傳「好學ㇾ書、張家無ニ一ㇾ」

【紙上】シジヤウ かみのおもて。韓愈詩「字向ニ一ㇾ皆軒昂」＝紙面。

【紙燭】シショク てしょく、しそく、こよりに油をぬりてともすもの。

【紙錢】シセン 葬る時、紙にてぜにの形を作り、棺の中に入れるもの、六道錢。唐書、王璵傳「漢以來葬者、皆有ニ瘞錢一、後世里俗稍以ㇾ紙寓ㇾ錢、爲ニ鬼事一」

【紙窗】シサウ 紙にてはりしまど。白居易詩「一一明覺ㇾ曉」

【紙帳】シチヤウ ○かみのとばり。蘇軾詩「困眠得ㇾ就一一暖」○圖かみにて製せしかや。

【紙用】シヨウ かみ。紙に字を書くを用を辨ずに喩ふ。楊萬里詩「只有ニ書生拙用處一」

【紙背】シハイ ○かみのうら。柳宗元詩「一一應ㇾ勞手自題」○文書の背面。轉じて文章の裏をこの義理「眼光一一透ㇾ」

【紙牌】シハイ かみのはりふだ。

【紙砲】シハウ かみでつくり、紙をまるめて彈丸としたる鐵砲、小兒の玩具。雜纂續「又愛又怕、小兒放一一」

【紙版】シハン 圖活字の印刷に用ふる紙型。

【紙筆】シヒツ かみと、ふでと。晉書、荀洪傳「代ニ斯以賀一一夜輒寫ㇾ書」

【紙幅】シフク かみのひろさ。かみはば。

【紙幣】シヘイ ○さつ、通貨の代用をなす紙の手形。＝楮幣。○紳にさぐるぬさ。梅堯臣詩「竟持一一挂ニ廟陌一、微風颺揭如ニ寢收一」

【紙本】シホン 紙に書きたる書畫。絹本の對。范成大詩「生綃多ニ俗格一、一有ニ眞蹟一」

【紙面】シメン ○かみのおもて。劉禹錫「滁生一一」＝紙上。○圖手紙「御一一拜見」

【紙貴】シキ かみの價高し、著書のよく行はるるにいふ。晉の左思、三都賦を作る、世人相傳寫して爲めに洛陽の紙價の騰貴したりといふ故事（晉書、左思傳）

【紜】

ジン ヂン

○おる（織）はたを織る。○はたのいと（機縷）

【紜織】ジンシキ はたおる。北史、蕭大圜傳「侍見五三、可ㇾ充一一、家僮數四、足ㇾ代ニ耕耘一」＝織社。

【純】

㊀ジュン 眞 ㊁トン 元

㊀さいと（絲）論、子罕「今也一儉」○もっぱら（專）「精一」「眞一」○みな（皆）○まじりけなし「一粹」「一一」○いつはりなし、自然のままにてかざらず、天眞「一樸」「眞一」詩、大雅「文王之德之一」○よし（善）○うつくし（美）精しく好し。漢書、地理志「冰紈綺繡一麗之物」○入いなり一一哦○やまざること。○あつし（篤）「一孝」「忠一」○一如はやはらぐ貌。○一丈五尺の稱。㊁へり、ふち、衣服の緣邊。儀禮、士冠禮「服ニ纁裳一衣一」㊂つかぬ、たばぬ（總束）「一束」布帛の一端。戰國策「錦繡千一」

【純一】ジュンイツ まじりけなくもっぱら。晉書、帝紀總論「中林之士、有ニ一一之德一」

【純益】ジュンエキ 正味のまうけ。＝純利。

【純嘏】ジュンカ 大いに全き幸福、純全の福。詩、大雅「一一膺常矣」＝嘏福。

【純孝】ジュンカウ まごころを以て篤く親に孝行をする、大孝。左、隱元「潁考叔一一也、愛ニ其母一施及ニ莊公一」

【純懿】ジュンイ 極めてまことなり。晉書、許孜傳「性行一一」＝純誠。

【純紙】ジュンシ まじりけのなき紙。正易心法「陰陽之一一也」

【純糙】ジュンサウ まじりけなき毛色のいけに。高唐賦「蓮ニ一一藕ニ璇室一」

【純金】ジュンキン まじりけなきこがね。南史、扶南國傳「常遣ニ扶南王一一五十人食器形如ニ圖盤一」＝精金。

【純銀】ジュンギン まじりけのなきしろがね。

【純潔】ジュンケツ まじりけなくいさぎよし。魏志、管寧傳「胡微君、外同ニ手俗一、內秉ニ一一、心非ニ其好一、王公不ㇾ能ㇾ屈」＝純絜。

【純乎】ジュンコ 純然に同じ。

【純黑】ジュンコク まじりなきくろ色。詩經、疏「桑葉茂盛而柔軟、則其色一一」
【純紫】ジュンシ まじりなきむらさき色。杜陽雜編「其色一一、厚可二寸餘一、舉レ之則著二鬚毛一」
【純臣】ジュンシン 極めてまことなる忠臣、忠純の臣。左、隱四「石碏一一也」
【純眞】ジュンシン もっぱらなるまこと。李白詩「白鷺鮮レ白非二一一一」
【純儒】ジュンジュ 眞の學者。後漢書、鄭康成傳「稱爲二一一一」‖醇儒・眞儒。
【純淑】ジュンシュク もっぱらにしてまざりけなくよし。漢書、孔光傳「太師光、聖人之後、先師之子、德行一一、道術通明」‖淳淑。
【純熟】ジュンジュク 十分に熟する。蘇軾詩「眞漆未二一一一」
【純純】ジュンジュン もっぱらなるまこと。莊、山木「一一常常」
【純如】ジュンジョ やはらげる貌。論、八佾「始作翕如也、從レ之一一也」注「一一、和諧也」
【純粹】ジュンスイ まじりけなし。史、張湯傳「名實一一、深流二千里一」‖精粹・醇粹。
【純正】ジュンセイ ○まじりけなく正しい。○純正蒙求ジュンセイモウキュウ三卷、元の胡炳文撰す。○理論のみを主として應用に及ばず「一一哲學」
【純誠】ジュンセイ 極めて誠實なり。曾鞏詩「論高知二峻節一、交淡見二一一一」
【純然】ジュンゼン まじりけなき貌。‖純乎。
【純忠】ジュンチュウ まごころを以てする忠義。‖敬忠。
【純篤】ジュントク まごころがありてしんせつ。後漢書、朱穆傳「穆淳獨而一一稱」
【純白】ジュンパク まっしろ。莊子「機心存二于胸中一、則一一不レ備」‖粹白。
【純美】ジュンビ 純粹にしてうつくし。‖淳美・醇美。
【純文學】ジュンブンガク 詩歌小說等の美文の文學。
【純樸】ジュンボク 手あつくきちのままにしてかざらず。莊、馬蹄「一一不レ離、孰爲二犧尊一」‖純朴。
【純毛】ジュンモウ まじりけなきけいろ。
【純朊】ジュンモウ もっぱらにしてうるはしの漢書、楚王戴傳「夫行一一而不二顯異一、則有レ國者、將何貴焉」‖淳茂。
【純吏】ジュンリ 純眞忠實なる官吏。三國志、注「王思部論一一也」
【純利】ジュンリ 純益に同じ。
【純理】ジュンリ 純粹なる理論。
【純眞】ジュンシン まじめにしてすなほ、純正温眞。元史、成遵傳「得二一一一者」九人」
【純靡】ジュンビ 精好にしてはでやか。漢書、地理志「一一之物」‖精好華麗。

【紓】ショ 魚 通 遇 ジョ

○ゆるむ、ゆるし（緩）舒に通ず。○とく（解）やはらげる「一憂」左、僖二二「一一緩也」○とける、やはらぐ、和解する。左、文六「難必一一」

【素】ソ 遇

○白色のきぎぬ（生帛・生絹）禮、雜記「純以一一」○しろし（白）「一絲」「一衣」むち（無色）○きぢ、したぢ、すなほ、かざりなし「質一」「儉一」呂覽、勿躬「不レ離二其一一」○こころざし（志）○むなし、ただに、ただ（空）いたづらに。孟、盡心「不二一餐一分」○したぢ（豫備）あらかじめす、前に計畫する。楚語「夫謀必一、見成事焉」○もと、もとる、はじめ（本始）○つね（常）「平一」○むかし（故舊）「一交」○現に其の所に在る義。中庸「君子一其位一而行」○もとより（元來）史、項羽紀「陳嬰一信謹」○なりたち（性質）○しろ（原料）○まこと（誠）心のそこ、眞情。鄒陽獄中上書「具情一二○もとむ。中庸「一一怪行隱」（一說に索の誤）○國物質のもと。其の以上に分析すべからざる原質「元一」「水一」「酸一」

同音同訓異字 素・本・原・蓄・故・元・種・職・主の別は本（木部一畫）の條を見よ。

【素壁】ソヘキ しらかべ。後漢書、呂強傳「樓閣相接、丹青一一」‖白堊。
【素衣】ソイ しろきころも。禮記「大夫士去レ國、一一素裘素冠」陸機詩「京洛多二風塵一、一一化爲レ緇」‖白衣。
【素意】ソイ もとよりのおもはく。張衡、思玄賦「恕二一一之不レ逞」‖素志。
【素蘊】ソウン 白き花。陸龜蒙、白蓮詩「一一多蒙二別豔欺一、此花眞合レ在二瑤池一」
【素因】ソイン もとのおこり。‖原因。
【素羽】ソウ しろき色のはね。張華、白鳩篇「白雀呈二一一一」璣、一一明鮮」‖白羽。
【素鳥】ソウ しろきからす。班固賦「敬二靈篇一兮披二瑞圖一、獲二白雉一兮效二一一一」
【素影】ソエイ しろきかげ。范榮、殘雪賦「亂二一一於夜月一」
【素波】ソハ しろきしる。左思、魏都賦「黑井鹽池、玄瀆一一」
【素娥】ソガ 月の異名、白き色の縞姫の義。羅公遠傳「明皇遊二月宮一、見下一一十餘人、皓衣乘二白鸞一、舞二於桂下一」‖縞嬪。
【素甕】ソオウ しろききぬがさ。劉禹錫詩「擁車飛二一一一、從者盈二路傍一」
【素交】ソコウ 年來のまじはり。杜甫詩「一一零落盡、白首淚雙垂」‖素故・

語交。

【素行】ソカウ　○其の現在の分に應じて正しく行ふ。中庸「君子素二其位一而行」○國平生のおこなひ「一一調べ」

【素顔】ソガン　しろきかほ。すがほ。李白詩「綠酒酒二升波一、青娥遡二一一一」‖素面。

【素肌】ソキ　しろきはだ（。又したぢのはだへ。白居易詩「脂凝二故錦一一一堪二新玉一」

【素気】ソキ　秋の氣。宋史、夏侯嘉正傳「秋之爲レ神、一一清潔、嫌二繁傷一」‖商氣。

【素輝】ソキ　しろきひかり。陸機詩「清露晞二一一一」

【素肉】ソニク　しろきはだのな。齊民平申酒「白酒一一酒酒」

【素琴】ソキン　かざりなきこと。禮記「祥之日鼓二一一一」

【素王】ソワウ　しろきたま。左思、吳都賦「紫貝流黃、縹碧一一」

【素懐】ソクワイ　もとよりのおもひ。韋應物詩「一一出塵垢、適有二携手客一」

【素光】ソクワウ　しろき光。月光にいふ。朱熹詩「川谷流二一一一」

【素官】ソクワン　清貧なる官職。晉史、江虨傳「我本一一、不レ求二富貴一」

【素絹】ソケン　しろききぬ。成公綏、隸書體「爾乃動二纖指一、擧二素腕一、握二一一、染二玄翰一」

【素願】ソグワン　もとよりのねがひ。晉書、宋纖傳「今當二命終一、乞如二一一一」‖素望・宿願。

【素懐】ソクワイ　しろきにじ。魏文帝詩「白旄若二一一一」‖白虹。

【素懐】ソクワイ　常綠灌木の一、花は茉莉に似て四瓣にして光る。

【素月】ソゲツ　しろき月のひかり。古樂府「昭昭一一明、輝光燭二我牀一」‖皓月・陰月。

【素女】ソジョ　しろと、くろと。東都賦「器用二陶匏一、服飾二一一一」

【素絹】ソケン　○しろききぬ。李白詩「牋跡一一非二數簡一」○國白き僧衣。

【素縄】ソジョウ　しろきかとりきぬ。元稹詩「十四一一幼未レ到」

【素沙】ソサ　しろきいさご。李紳詩「一一見底無二纖芥一」

【素爪】ソサウ　しろきつめ。李賀古詩「怨揮二一一一、豈七絃二音座呼殺遲一時」

【素雅】ソガ　すがほのままにしてさっぱりとよそほふ。世說新語「安帝一一無二珠玉一、綽約若二仙子一」

【素俤】ソテイ　彩色などを施さざるにすがた。張籍詩「古巖壁一一、喬木挂二疾蹤一」

【素志】ソシ　もとよりのこころざし。年來の希望の任昉文「宿心一一」‖素意・宿志・素望。

【素齒】ソシ　白く美くしきは。傅休奕詩「低頭和二顏色一、一一結二朱脣一」‖皓齒。

【素秋】ソシウ　秋の異名。秋の色は白し、故にいふ。抱朴子「一一屬二庶殺之氣一」‖素商。

【素室】ソシツ　○平民の人家。‖素族。○白ぬりの家。‖白堊之室。

【素質】ソシツ　きぢ、もとよりの性質。揚雄「一一五彩、皆備成レ質、曰レ繪」‖本質。

【素習】ソシフ　○平生よりならふ。五代史、唐明宗家人傳「明宗曰、汝將家子、文章非二一一一、必不レ能レ工」○平生のならひ。

【素心】ソシン　○心の潔白なる義。顏延之文「弱不レ好レ弄、長實一一」○本心。李白詩「一一愛二淸酒一」

【素車】ソシヤ　白木のくるま。史、殷紀「前レ瓜斷レ髮、一一白馬」

【素車白馬】ソシヤハクバ　白きくるまと白き馬と。喪に用ふるもの。轉じて降を乞ふ時に用ふ。史、高祖紀「秦王子嬰——、係レ頸以レ組、封二皇帝璽符節一降二軹道旁一」

【素商】ソシヤウ　秋の異名。梁元帝纂要「秋曰二一一一、亦曰二高商一」‖素秋・素節。

【素掌】ソシヤウ　しろきたなごころ。楊慎詩「金仙一一晞二金鐸一」

【素手】ソシュ　○白く美くしき手。古詩「一一挽二紅粉妝一、纖纖出二一一一」○國からて。‖徒手・赤手。

【素食】ソショク　○何事も爲さずして食ふ。詩、魏風「彼君子兮、不二一一一兮」‖素餐。○菜食にして肉なし。漢書、昌邑王典喪不二一一一」‖蔬食。○平生の常食物。禮、表服傳「既練飯二一一一」

【素麪】ソメン　しろきはなのしべ。劉孝綽詩「一一映二華扉一」

【素雪】ソセツ　しらゆき。司馬相如賦「一一飄零」‖白雪。

【素節】ソセツ　○秋の異名。歐陽修詩「一一今已屬」‖素商・商節。○明かにいさぎよきみさを。喬知之詩「持心一一本無レ求」‖亮節。

【素髪】ソハツ　白きはぼひげ。韋莊詩「一一青骨酒風姿」‖白髮・霜髮・霜鬢。

【素瞳】ソドウ　月の異名。韓愈詩「霧重關二秦芝一、雲疎點二一一一」

【素組】ソソ　しろきくみひも。禮弓、疏「用二一一一一爲レ纓」

【素絵】ソカイ　白きかとりきぬ。鮑照、詠二白雪一詩「無レ妨玉顏嫺、不レ奪一一鮮」

【素足】ソソク　しろきあし。李白詩「吳陽一一女、會結素絢郎」

【素族】ソゾク　平民。齊書、高帝紀「吾本布衣一一、會不レ到レ此」

【素飧】ソソン　次條に同じ。

【素餐】ソサン　其の職を勤めずして徒に官祿を食む。詩、魏風「彼君子兮、不二一一一兮」‖素飧・素食。

【素讀】ソドク　國意義を解くことなくして文字を讀むのみをいふ。

【素波】ソハ　しろきなみ。水經注「水淸

不レ潮、ーー自激」

【素望】ソバウ もとよりののぞみ。柳宗元文「自視欿然、知二其不一レ盈ニーー一久矣一」＝素志。

【素白】ソハク しろし。淮南子「直立而不レ撓、ーー而不レ汚」

【素鵠】ソコク 月の異名。宋孝武帝詩「月羽皎ニーー一」

【素髪】ソハツ しらが。潘岳賦「ーー颯以垂レ領」宋鹿物詩「兩鬢生ニーー一」＝白髪。

【素貧】ソヒン したぢからの貧乏。漢書、揚雄傳「ーー嗜レ酒」

【素撫】ソブ 平素よりなでいつくしむ。魏志、張範傳「士不ニーー一、兵不レ練習一、雖二以成一レ功」

【素服】ソフク しろきもの。禮記、日食則天子ーー、而修二六官之職一」

【素封】ソホウ すぐれたるかねもち。計士なけれども其の富、封侯に等しき義。史、貨殖傳、注「今有下無二秩祿之奉一、曾色之入、而樂與レ之比者上命曰ニーー一」

【素朴】ソボク きぢのままにてかざりけなし。漢書、賈誼傳「百姓ーー、獄訟衰息」＝素樸。

【素樸】ソボク 前條に同じ。

【素本】スホン 圖○無點の漢書。白文の書。○訓點注釋などのなき書物。

【素面】ソメン ○しろきかほ。又すがほ。太眞外傳「自衒二美豔一、常ーー朝レ天」○圖ノ拳劍などの時、めんを被らずしてたたかふ。

【素門】ソモン いやしきいへすぢ、素素の族。又、其の者。任昉文「臣ーー凡流、輪轉無レ取」

【素問】ソモン 醫學の書の最も古きもの、黃帝と岐伯との問答の語を記す、未だ必ずしも上古に成りしにあらざるも、周秦間の人の舊聞を傳述せしもの、漢以後の書にあらず、唐の王冰注二十四卷あり。

【素養】ソヤウ 平常に德を修める。漢書、李尋傳「馬不レ伏レ經、不レ可二以遠一レ道、士不ニーー一、不レ可二以重一レ國」

【素履】ソリ 己の本分に安んずる義。易、履卦ーー往、无レ咎」＝素行。

【素絲】ソシ しろきねりきぬ。唐書、駱賓王傳「張九齡、如二輕縑一ーー質清二時用一而窘二邊幅一」

【素王】ソワウ 其の位なくして王たるの德ある人。杜預、左傳序「說者以爲、仲尼自レ衛反レ魯、修二春秋一立二ーー一、丘明爲二素臣一」（素臣は素王の臣）

【素襖】スワウ 素袍に同じ。

【素性】スジヤウ 圖其の人のおひたち。

【素袍】スハウ 圖すあを、古の平民の服、後世は武家の侍の禮服とす、形直垂の如く上下同色の布にて仕立てる。＝素襖。

【素燒】スヤキ 圖うはぐすりをかけざる陶器。

【納】ダフ ナフ 合

○いる（入）内に入れる、をさむ（収）取り入れる。出の反對「出ー」○うける（受）○いたす（致）曲禮「二女於天子一」○をさめる、官にさし出す「ー稅」「上ー」○引き進める。○たてまつる、捧げる（奉・獻）○をさまる。をさめる（藏）書、金膳「乃ー冊於金縢之匱中」○ーーダフは滿ひしめる貌。劉向、九歎「衣ーー而掩レ露」圖○ムフ仕舞ふ、終へる。○ノフはて（最終）「見ーサイ」「ーー會クワイ」

同訓異義 納・入・內・容の別は入部首二畫）を見よ。

○ムフ納・修・治・理・收・斂・藏・御の別は修（人部八畫）の條を見よ。

【納吉】ナフキツ 周代結婚の六禮の一、吉卜を得て納れる（禮、昏義）

【納會】ナフクワイ 圖一年の最終の會合。

【納言】ナフゲン ○舜の時の官名、上の言を出し、下の言を納れることを掌る（書、舜典）○圖ナフゴン大納言・中納言・少納言の總稱。

【納獻】ナフケン 物をさめたてまつる。魏志、陳留王紀「承レ風慕レ義、遣レ使ーー、以明二委順一」＝獻納。

【納金】ナフキン 金錢を上納する。又其の金錢。

【納完】ナフクワン をさめずみ。＝完納。

【納款】ナフクワン 降服の義。

【納后】ナフコウ 臣の女をきさきにいる。後漢書「光武擊二王郎一、至二眞定一ーレー」

【納貢】ナフコウ みつぎをいれる。晉書、潘岳傳「方今四海會同、九服ーレー」

【納骨】ナフコツ 死者の遺骨を寺などにをさめる「ーー堂」

【納采】ナフサイ 結婚を申し込む時の贈物、采は其の女を采擇する義。禮、昏義、疏「ーー者、謂二采擇之禮用一レ雁」

【納諫】ナフカン ざんげんを信じてきき入れる。漢書、杜欽傳「晉獻被二ーー之誘一、申生蒙二無罪之辜一」

【納日】ナフジツ 入り日。書、堯典「寅餞ーー一」

【納受】ナフジユ うけをさめる。漢書、王尊傳「上初ーー二尊言一」＝受納。

【納職】ナフシヨク 夷人が方物（地方の物産）を貢獻する、職は貢。淮南子「海內賓伏、四夷ーレー」

【納稅】ナフゼイ ぜいををさめる。蘇軾詩「貧レ牛ーレー耕レ屋炊、虛淺不レ及二明年饑一」

【納誉】ナフゼン 善き言を納れ用ふる。南史、齊豫章王嶷傳「坦懷ーレー」

【納女】ナフジヨ 天子に臣の女を奉る、納は致。曲禮「ーー於天子一」

【納徵】ナフチヨウ ○ゆひなふ。周代結婚の六禮の一。儀禮、昏禮「ーー玄纁束

帛儀皮如二納吉禮一」注「徵、成也、使下使者納レ幣以成中昏禮上」○取り立てる。漢書、王莽傳「以下所二益一ー一錢千萬上遺與」

【納納】ナフ　物を包容するをいふ。杜甫、野望詩「ーー乾坤大」

【納入】ナフ　をさめる。‖納附。

【納杯】ナフ　圖さかもりの終るしるしとして最後に主人にさすさかづき、をさめの杯。

【納附】ナフ　納入に同じ。

【納幣】ナフ　ゆひなふ。禮、雜記「ーー一束」‖納徴。

【納本】ナフ　圖出版の際、著者・出版者より政府にをさめる見本。

【納涼】ナフ　すずむ。すずみ。徐陵詩「ーー高樹下」

【納所】ナフ　圖○年貢類をとり收める所。○寺院にて寺務をとり扱ふ所。又、其の役僧。

【納得】ナフ　圖承知する。得心する。

【納戸】ナフ　圖衣服・家具などを入れ置くへや。

【紈】タン　寒

○冠のみみふさ（瑞）を懸けるひも「衡ー」○衣ふちの線飾「儀禮、繒布紈裏無ー」○ーーは鼓をうつこと。

【紈紈】タン　鼓を擊つ聲。孔平仲詩「ー有レ如二打雨鼓一星河漫漫急在レ戸」謝朓詩「武昌城頭鼓ーー」

【紐】ヂウ　有　通音チウ

○ひも、結ぶに用ふる絲（系）○かかる（係）○むすぶ、ゆふ、つかぬ（結・束）○もとづく（本）莊、人間世「禹舜之所ー也」○むすびめ。○印のつまみ（印鼻）淮南、說林「龜ー之堤」‖鈕。

【紉】チン　イン　軫

牛のはなづな、牛の鼻につけてひく繩。禮、少儀「牛則執ー」

【紡】バウ　養

○つむぐ、うむ麻や綿などを引きのばしより合せて絲にする「ー績」「夜ー」○つむぎたる絲、うみたる麻。○かく（紕）しばる（縛）普語「獻子執而ー于庭之槐」

【紡車】バウ　いとをつむぐ具、輪ありて搖かし轉ずべきもの、故に車といふ。劉說詩「月色夜夜照ーー、木綿紡盡白雪紗」

【紡績】バウシク　つむぐと、おると。紡績機織。開天遺事「或將レ照ーー機杼」

【紡織娘】バウシキジヤウ　くつわむしの異名。‖晒晒兒。

【紡錘】バウスイ　いとをつむぐに用ふるつむ。

【紡結】バウケツ　いとをつむぐ。漢書、張安世傳「安世尊寵二公侯一食邑萬戶、然身衣二弋綈一夫人自ーー」‖結紡。

【紡甄】バウシン　いとまき。詩經、箋「ーー其所レ有レ事二於紡結一也」

【紡文績學】バウブンセキガク　文章を作り學問に通ずることを紡績に比していふ。

【紡毛】バウマウ　つむげるけ。莫均詩「ーー織二野服一、縫芰作二山衣一」

【紡纏】バウテン　績つぎたるあさいと。超孟頫詩「敢下安坐二ーー一、學レ足挨且蹉」

【紕】㊀ヒ　㊁ヒ　支　圓支

○あやまる（錯）あやまり、まちがひ、錯亂する。○いとのふし（節）おりものの絲のふし。㊁かざる（飾）白絲にて旗、又は冠のへりをかざる（緣邊）詩、鄘風「素絲ーー之」

【紕繆】ヒビウ　あやまる。あやまり。禮、大傳「五者一物ーー、民莫レ得二其死一」‖失誤・謬繆。

【紕漏】ヒロウ　あやまりてもれる、疏密謬誤。世說新語「ーー竊あり。

【紑】フ　フウ　尤　有

白くあさやかなる衣の貌。詩、周頌「絲衣其ー」

【紛】フン　文

○みだる（亂）ごたごたともめる、ごたつく「ー亂」老子、挫其銳解其ー」○まぎれる、まがふ「ー失」○ーーはおほし（衆）又、さかんなり（盛）又、動き擾ぐ貌。○むすぼる（結）○ゆるむ（緩）○はたのあし（旒）

同訓異義　紛・亂・紊・棼・擾の別は亂（乙部十二畫）の條を見よ。

【紛芸】フンウン　盛んなる貌。史、司馬相如傳「賦武ーー」

【紛紜】フンウン　○盛んなる貌。前條に同じ。○亂れる貌。楚辭、九歌「賜ーー以繽繙兮」○衆く亂れる貌。班固賦「萬騎ーー」

【紛繞】フンネウ　○盛んなる貌。楚辭、九章「ーー宜修姱而不ー鬱兮」○亂れる貌。廣韻「ーー、亂也」

【紛紆】フンウ　みだれしげる。韋應物詩「滁陽山水多、草木供ーー」

【解紛】ケフンフン　絲のもつれを解く。轉じて人の爭を解く義とす。老子「挫二其銳一解二其紛一」

【紛更】フンカン　かき亂して改めかへる。紛亂更易。史、汲黯傳「奈何乃欲二高皇帝約束一ーー之爲」

【紛煙】フンエン みだれふさがる。魏書、廣陽王傳「邊緊構ノ道、以成ニ一一一、其所ニ由來一非ニ一朝一也」

【紛消】フンセウ まじりみだれる。歐陽修詩「薄領朱墨何ニ一一」

【紛雜】フンザツ みだれてやかまし。朱熹詩「宋莫殘時見、白ノ此道ニ一一一」‖豐紛。

【紛起】フンキ みだれおこる。歐陽修文「異說ニ一一」

【紛議】フンギ もつれたる議論。

【紛糾】フンキウ みだれもつれる。史、孫子傳「解ニ雜亂一一一者不ニ控拳一」‖糾紛、糾紛。

【紛競】フンキヤウ 紛爭に同じ。宋史、莊文太子傳「吏民一一不レ一、從見ニ其擾一」

【紛華】フンクワ ○はでではなやか。漢書、食貨志「奇麗ニ一一、非ニ其所ニ習一」○はなやかにしてにぎやか。‖繁華熱鬧。

【紛諍】フンサウ みだれてかまびすし。吳景奮詩「野人居處絕ニ一一一」

【紛劇】フンゲキ わづらはしくいそがしい。張九齡詩「玉レ色無ニ一一、來人但歎遲」

【紛喧】フンケン かまびすし、喧、一に譁に作る。鮑照詩「遊ノ跡避ニ一一一」‖諠紛。

【紛訌】フンコウ うちはもめ、もつれせめぐ。

【紛紅駭綠】フンコウガイリヨク 赤き花、青き葉の風にみだれ飜る貌。柳宗元、貧家湯記「——、蓁莽香氣」

【紛汨】フンコツ みだれる。王褒、遊ニ寺浮ニ賦「候陰陽之盛衰、渺昏曉之一一」

【紛評】フンピヤウ みだれあらそふ。徐陵文「流ニ化親朋ニ善和ニ一一一‖紛爭。

【紛雜】フンサツ 紛擾に同じ。

【紛揉】フンジウ みだれ、もつれる。鍾惺演、春雪詩「纖袅裊而一一、更霏霏而交錯」

【紛糅】フンジウ ごたごたと入りまじる。謝惠連、雪賦「既新歷而先集、糅一一而逢多」‖錯糅。

【紛失】フンシツ まぎれてなくなる。

【紛奢】フンシヤ はでなるおごり。杜牧、阿房宮賦「秦愛ニ一一一ニ人亦念ニ其家一」

【紛如】フンジヨ みだれる貌。太玄經「鸞鳳一一一」‖紛然、紛若。

【紛紛】フンフン 入りまじりてわづらはしい。後漢書、延篤傳「枝葉扶疎、榮華一一一」

【紛擾】フンジヨウ みだれる。みだれの漢書、武帝紀「何紛然其擾也」後漢書、朱浮傳「交易一一、百姓不ノ寧」‖紛亂、紛騷、騷擾。

【紛繞】フンゼウ もつれまつはる。孫楚詩「吉凶如ニ糾纏一憂喜相一一」

【紛吽】フンセン みだれたがふ。唐書、蘇安恒傳「鬼神馮怒、陰陽一一」

【紛拏】フンダ いりみだれて相うつ、爭一に筆に作る。爭亂の義。史、霍去病傳「漢匈奴一一」

【紛敝】フンダウ かまびすし。蘇轍文「叫號一一、奔走告訴」

【紛蕩】フンタウ みだれうごく。蘇轍詩「羣盲久一一、開卷每驚嘆」

【紛沓】フンタフ ごたごたと混雜する。紛至沓來。齊書、蕭穎胄傳「熊羆之士、十有五萬、征鼓一一、雷ニ動荊南一」‖雜沓。

【紛麾】フンサン わづらはしき俗事。

【紛葩】フンハ さきみだれたるはな。長笛賦「一一綢繆、誠可ノ喜也」

【紛披】フンヒ ○花の亂れ咲く貌。杜甫詩「此節東籬菊、一一偏ノ誰秀」○物のばらばらに亂れる貌。蘇軾詩「誰道洪鈞劵ニ容ニ一一、海天風雨看ニ一一ニ」

【紛謀】フンバウ みだれあやまる。道德指歸論「乾ニ一一結構、一一ニ是非一」

【紛紛】フンフン ○ごたごたと煩はしき貌。孟、滕文公「何爲ニ一一然、與ニ百工ニ交易」○亂れる貌「落花一一」‖繽紛。○衆く盛なる貌。漢書、禮樂志「羽旄一一」

【紛亂】フンラン みだれる。みだれ。漢書、遊俠傳「是當一一、諸子相騰」‖擾亂、酸亂。

【紊】ブン 問 文

みだる、みだす(亂)

同訓異字 紊・亂・棼・紛・擾の別は紊(乙部十二畫)の條を見よ。

【紊紊】ブンブン みだれすたる。隋書、牛弘傳「昔周德既衰、禮經一一、孔子以ニ大聖之才、開ニ素王之業一」

【紊碎】ブンサイ みだれくだける。水經、注「碉前有ニ石碑、文字一一」

【紊亂】ブンラン みだる、みだす。

【紋】ブン モン 文

○もやう、かた、あや、織物のあやもやう(織文)轉じて物のしわ(皺)にいふ「波一」「水一」「手一」○圖もん、もんどころ。家家に定まれる徽章「定一」「一章」「家一」

【紋紋】モンモン あやあるかとりぎぬ。王逸詩「風過細波生ニ一一」

【紋章】モンシヤウ 圖もんどころ。

五畫

【紺】カン コン 勘

こんいろ。深青色に赤色を帶びたる色。唐、韓愈「君子不ニ以ニ一緅飾一」‖倍天青。

【紺珠】カンジユ 手にてなでれば記憶を呼び起すといふ不思議の寶珠。唐の張說が人より贈られしもの「開元天寶遺事」に記事珠。

【紺螺】カンラ こん色と、くりうめ色と。

字解參看。

【紺青石】ショウセキ 藍銅鑛の一名。‖鋼青石。

【紺瞳】トウ あをぐろきひとみ。蘇軾詩「一一綠髮初謝レ事」

【紺碧】ヘキ くろあをき色。范成大詩「曉霧朝暾一一烘」‖紺綠。

【紺宇】ウ 寺。劉長卿詩「一一焚香淨」

【紺園】エン 寺の沈佺期詩「一一澄二夕漪一、碧殿下二秋陰一」‖紺宇。

【紺燕】エン 燕の異名。爾雅、翼「鷾鴯鳥也、一名二烏鰂一、又名二一一一」

【紺青】ジョウ 顔料グンの名、翠青よりやや色濃し。又、其の色「魏志、倭人傳」

【紺地】ジ こん色のきれ地。魏志、倭人傳「特賜二汝一一句文錦三匹一」

【紺屋】ヤ 圖そめものや。

【絇】ク 遇

くつかざり、履頭の飾「履一」「青一」

【絇纓】クエイ くつの緣のかざり「儀禮、士冠禮」

【絅】ケイ 迥 徑

ひとへもの、うすぎぬ（禪衣）「中庸「衣錦尚一、惡其文之著也」詩經にー」を裳に作る、同じ（尚は加ふ）

【絃】ゲン 先

○いとを張りたる樂器の總稱。琴瑟の類。○樂器に張るつるいと「大一」「小一」「二十五一」「絕一」又、弓の弦と通ず。○琴などをひく「一歌」「夜一」○古、琴瑟の調和するを夫婦の和諧するに喩ふ、故に婦の死するを斷一といひ、續娶するを續一といふ。

【絃歌】ゲン 琴をひき詩をうたふ。論、陽貨「子之二武城一、聞二一一一之聲一」‖弦歌・絃誦。

【絃妓】ゲン 圖三味線をひく歌ひ女。‖藝妓。

【絃琴】ゲン ことの後漢書、鄧皇后紀論、非レ禮不レ庶、悅二此詩書一、一一樂レ古」

【絃索】ゲン 樂器のいとすぢ。又總べて樂器の絲屬に屬するものをいふ。元稹詩「夜半月高一一鳴」

【絃誦】ゲン 琴をひき詩をうたふ。蘇軾詩「一一管明孟世隣」‖弦誦。

【細】サイ セイ 霽

○ほそし、ちひさし（小）「短一」○すくなし、わづか（微・少）「些一」「微一」○こまやか、こまかし。○くはし「詳一」「精一」「委一」粗の反對。○かろし（輕）いやし（賤）○せまし（狹）○わづらはし、くだくだし（煩碎）「苛一」「煩一」「繁一」「瑣一」○官位卑き人。○性質鄙しき人「一人」

【細雨】サイ こまめ。梁簡文帝詩「一一雜二冷風一」‖微雨。

【細腰】ヨウ ほそやかなるこし、美人のこし。後漢書、馬廖傳「楚王好二一一、宮中多二餓死一」‖纖腰。

【細葉】ヨウ こまかき草木のは。‖纖葉。

【細詩】シ こまかくわづらはし。唐書、崔縱傳「治簡易、謂二略一一一」‖小詩。

【細瑕】カ さゝやかなるきず、小さき缺點。漢書、陳湯傳「論二大功一者、不レ錄二小過一、舉二大美一者、不レ紲二一一」‖細疵・微瑕・小瑕。

【細行】コウ ちひさきおこなひ。瑣細なる禮法。書、旅獒「不レ矜二一一、終累二大德一」

【細腰】ヨウ こまかにしらべかんがへる。盧照隣詩「高談十二部、一一五千文」

【細汗】カン こまかきあせ。耿湋詩「一一凝レ衣集、微涼待レ扇過」

【細聞】ブン 細作に同じ。

【細菊】キク こぎく、こまかききくの花。杜甫詩「小驛香醪嫩、重巖一一斑」

【細酒】シュ 生物中の最も微小なる動

【細蓮】レン 細蓮の誤。

【細緻】チ こまかにかたし。桐譜「一種文理一一而性喜レ濕、身體有二五刺一、謂二之刺桐一」

【細謹】キン 微細なるつつしみ。史、項羽紀「大行不レ顧二一一一」

【細鉅】キョ こまかきと大いなると。韓愈文「仟包畜糞、無レ異二一一一」

【細工】サイク 圖こまかき道具を作る。

【細君】クン ○諸侯の夫人の稱。‖小君。○轉じて廣く人の妻の稱。東方朔は戲れて自ら其の妻を稱す。漢書、東方朔傳「割レ之不レ多、又何廉也、餘遺二一一一、又何仁也」

【細花】カ こまかなるはな。‖小花。

【細滑】カツ こまかになめらか、女の肌膚など。轉じて女色の義とす。安般守意義「身離二一一一意不二妄念一」

【細管】カン ○ほそきふえ。庾信詩「一一調二歌曲一、長彩教二舞兒一」○簫のささやかなるふえ。岑參詩「一一雜二清絃一」○ほそきくだ。

【細計】ケイ こまやかにはかる。新論「人有二一一一者、知二其必有一一志一」

【細草】サイソウ ほそきくき。爾雅、注「一一大葉」‖纖莖。

【細見】ケン ○こまかに見る。○圖事をくはしく書き記せる書物。

【細檢】ケン くはしくしらべる。‖細査・精査。

【細故】コマカイ　些細なことがら。賈誼、鵩鳥賦「一一蕝芥兮何足レ論」‖小事。
【細皴】コマカイ　こまかきちりめん。梁師道詩「縐紋蒙二一一一」
【細査】コマカイ　くはしくしらべる。‖細檢。
【細沙】コマカイ　こまかく生ずるはますげ。
【細瑣】コマカイ　こまかくわづか。史、匈奴傳「貪二一一一」
【細細】コマカイ　かすかなる貌。杜甫詩「煙一一駐二游絲一」‖輕微。
【細碎】コマカイ　こまかくくだく。又、こまかくわづらはし。金史、世宗紀「卿等所レ廣、皆一一事、又止錄二其惡一、而不レ舉二其善一」‖細瑣・瑣碎・煩碎。
【細作】サイサク　まはしもの。爾雅、釋言、注「左傳謂二之諜一、今之一一也」‖細開・開者。
【細棧】サイサン　ほそきかけはし。
【細字】サイジ　こまかなる文字。
【細事】サイジ　こまかき事がら。南史、何遠傳「以二一一一一受二雜罰一」‖瑣事。
【細思】サイシ　くはしくかんがへる。‖精思。
【細疵】サイシ　すこしのきず。抱朴子「論レ珍、則不下以二一一一一棄中瓦美上」
【細腰】サイヨウ　そよかぜ。賈島詩「高杉韻二一一一」
【細人】サイジン　○いやしきひと。禮、檀弓「君子之愛レ人也以レ徳、一一之愛レ人也以二姑息一」‖小人・賤人。○官位の卑き人。韓非、說難「與レ之論二一一一則以爲レ寡レ智」
【細心】サイシン　○注意深し、めんみつ。○氣がちひさし。‖小心。
【細辛】サイシン　多年生の草の一種、根を藥用とす。
【細斟】サイシン　しめやかに酒を酌む。李商隱詩「菜羹詩二一一」朱子詩「一一潋灩新春酒、戲舞斑爛萬綵衣」‖小酌・細酌。
【細詢】サイジュン　くはしくくたづねる。宋无詩「遠物那堪レ贈、佳晉欲二一一」
【細書】サイショ　○こまかき文字。後漢書、光武紀「一札十行、一一成レ文、勤約之風、行二于上下一」‖細字。○こまかく書く。
【細數】サイスウ　こまかくかぞへる。珊瑚鉤詩話「王臨川詩云、一一落花二四更久、綠尊三旁草一得レ歸遲」
【細柔】サイジュウ　こまかくやはらかき獣毛。禮記、疏「虎蝟浸毛一一」
【細小】サイショウ　ほそくちひさし。‖些小・微小。
【細篠】サイセウ　ほそきしのだけ。倪瓚詩「水影山容黯淡、雲林一一蕭疎」‖細竹。
【細說】サイセツ　○小人の言。史、項羽紀「聽二一一一、欲レ誅二有功之人一、此亡秦之續耳」○くはしく說く。杜甫詩「爲レ君一一我未レ暇」‖詳說。
【細緣】サイエン　こまかにしてやはらか。俗に軟に作る。拾遺記「有レ草名二流虹一、可レ染、海人織以爲二冠帔一」
【細則】サイソク　こまかなる規則。
【細大】サイダイ　こまかきと大いなると。史、始皇紀「一一盡レ力、莫二敢怠荒一」‖小大・洪細。
【細緻】サイチ　こまかし。諸寺寄物記「一一可レ愛」‖緻密。
【細長】サイチョウ　ほそながし。南方草木狀「水松葉如レ檜而一一」
【細遺】サイトク　くはしくよむ。陸游詩「蓋書一一猶多レ味」‖精讀。
【細波】サイハ　さざなみ。徐陵詩「時從二高浪一歌、乍遙二一一一移」‖小波。
【細馬】サイバ　善き馬。唐六典「使司每歲簡二一一五十匹一」李白詩「胡姬十五一一歌」‖善馬・良馬。
【細胞】サイホウ　生物の體を組織する微小なる球體。
【細報】サイホウ　くはしくしらせ。‖詳報。
【細斑】サイハン　こまかきまだら。西陽雜俎「一一短脛、憲內之最」
【細眉】サイビ　ほそきまゆ。孫楚、反金人鉛「時悅三膚額下作二一一一」‖繊眉。
【細微】サイビ　○ほそくかすか。○身分の賤しきにいふ。崔顥詩「人生今日得二嬌貴一、誰道虛娼身一一」
【細評】サイヒョウ　こまかに批評する。又、其の批評。林逋詩「倒在簡二閒拂一詩雖愜二一一一」
【細風】サイフウ　かすかなるかぜ。杜甫詩「春雷引二一一一」‖微風・細颸。
【細萍】サイヘイ　こまかきうきくさ。孟郊詩「昔聞說大宛、下國皆一一」
【細末】サイマツ　こまやか。又こまかなる粉。賈雲詩「手燃二蛩霜一皆一一」
【細密】サイミツ　こまかくくはし。‖綿密・緻密。
【細民】サイミン　いやしきたみ。史、田蚡傳「進二衰增一侯二一一」
【細務】サイム　こまかきつとめ。元史、察罕傳「但總二持綱維一、不レ屑二一一」
【細目】サイモク　こわけ、こまかき箇條。晉書、陳亮傳「時王導輔レ政、務存二大綱一、不レ拘二一一」
【細紋】サイモン　こまかきあやもやう。何遜詩「寒流聚二一一」
【細覽】サイラン　くはしく見る。李中詩「閑經宜二一一」
【細流】サイリュウ　ほそきながれ。李斯、諫二逐客一上書「河海不レ擇二一一、故能就二其深一」
【細柳】サイリュウ　地名。今の陝西省咸陽縣の西南の一一倉は卽ち漢の周亞夫の兵を屯せし處。柳營（九三五頁二段）參看。三輔黃圖「一一觀在二長安西北一」
【細柳新蒲】サイリュウシンホ　ほそき柳と、新らしきがまと。杜甫、哀江頭「江頭宮殿重二千門一、——爲レ誰綠」
【細鱗】サイリン　○ちひさきうろこ。蘇軾、赤壁賦「巨口一一、狀如二松江之鱸一」○ちひさきうを。

【細緻】ほそき糸すぢ。謝朓詩「一一兒無ン識」
【細路】ほそきみち。宣和畫譜、幽溪一一、屈曲縈帶」‖細徑。
【細論】こまかに論ずる。范成大詩「奇事不ン勝ン紀、重遊當ニ一一」
【細話】こまかくはなしする。元好問詩「一一洛陽事、高詠嵩山詩」

【糺】サツ 㮚

○まとふ（纏）つかぬ（束）たばねる。○俗に束隊を屯駐する義、とどまる「一營」「駐一」

【紫】シ 㮚

○むらさき、青と赤との間色「紅一」「深一」「淺一」に論、陽貨「惡ニ一之奪ニ朱也」○むらさき色の衣服「賜一」又は綬章「佩一」○圖草の名、葉は細長くして互生し、青赤色の花を著け白き質を結ぶ、根よりむらさき色の染料を採る。又、醤油の異名。

【紫衣】ン ○むらさき色の服。人君の服。左傳「一一狐裘」○苔の一種、色赤くして紫を帶ぶ。‖赤苔。○むらさき色の製裝（釋氏要覽）
【紫蕨】ケツのうぜんかづら。夏秋の間、赤黄色の花開く、藤あり。陸璣、詩疏、凌霄花、本草謂ニ之一一一」
【紫宇】ン紫眉に同じ、宇は眉宇。
【紫雲英】ウンエイれんげさう、田野に叢生し、春日紫紅色の花を開く。
【紫綬】ジュ紫色の印綬を垂れ史く、高位高官に昇る喩。晉書、儒林傳論「紛ン一一」‖佩ン紫。
【紫苑】エン山地に自生する草、初秋に傘狀紫色の花を著く。しをに。‖女菀。
【紫茄】カ なすびの南史、蔡撙傳「脊前自種ニ白蒿一一一以爲ニ常餌一、謂ニ之其清一」
【紫蟹】カイ むらさき色のかに。蘇軾詩「一一鱸魚賤如ン土、得ン錢相付何曾數」
【紫霞想】カソウ 仙境に遊びたるおもひ。李白詩「淡蕩滄洲志、飄颻——」元好問、少林詩「我無ニ玄豹姿、謾有ニ一一一」
【紫氣】キ むらさき色の雲氣。瑣言記「斗牛之間、常有ニ一一、張華聞雷煥妙ニ象緯一、問ン之、煥曰、寶劍精氣也、在ニ豫章豐城一」
【紫金】キン 赤銅ドウの異名。梁武帝詩「龍馬一一牧」
【紫金牛】キンギュウやぶかうじ、葉は茶に似、實は赤く球狀を成す、ししくはず。
【紫錦】キン むらさき地のにしき。漢武帝内傳「盛以ニ一一之囊一」
【紫禁城】キンジョウ ○支那北京皇城の異稱。○星の紫微垣を以て帝居に比するが故にひろく宮禁を紫禁といふ。李嶠詩「白玉仙輿紫禁來」
【紫極】キョク 王宮をいふ。魏志、文德郭后傳、注「龍飛ニ一一、作合ニ聖皇一」
【紫玉玦】ギョクケツ 茶の異名。蘇軾、謝ン惠ン茶詩「空煩ニ赤泥印一、遠致ニ一一一」
【紫蕨】ケツ あをき併むらで蕨繊「甘露實零ニ於一一一」‖翠草。
【紫扃】ケイ 王宮のとぼそ。王勃、乾元殿頌「一一垂ン櫺、黄根餌ン野」
【紫荊】ケイ 花木の名、すはう。本草「一一一名紫珠、鳥鼠有ン之、人多種ニ于庭院間一、木似ニ黄荊一、葉小無ン椏、花深紫可ン愛」
【紫蕨】ケツ わらび。白居易詩「一一行看採」方岳詩「一一成ン拳著ン雨肥」
【紫姑】コ 神の名、兒女子戲れに其の神を迎へて休咎（吉凶）を問ふ（劉敬叔、異苑）
【紫塞】サイ 萬里の長城の異名。風俗通「秦築ニ長城一、土皆紫色、謂ニ之一一一」、南徹土色丹、謂ニ之丹徹一」
【紫草】ソウ 多年生草、山野に自生す根を乾かして紫色の染料とす。‖紫丹（爾雅）
【紫芝】シ むらさき色のれいし。四皓採芝歌「曄曄一一可ニ以療ン饑」
【紫絲毬】シキュウ あぢさゐの異名。
【紫宸】シン ○天子のどてん。唐會要「龍朔三年四月、始御ニ一一殿一聽ン政」○圖古の禁中の正殿、ししいでん。又、南殿。
【紫綬】ジュ 紫色の印のひも。漢書、百官表「相國丞相一一金印」
【紫筍】シュン ○あをくして赤味を帶びし、たけのこ。蘇軾詩「想見青衣江岭路、白魚一一不ン論ン錢」○良き茶の異名。
【紫莞】カン 和ほぞら。又、王宮をいふ。南史、朱异傳「升ニ一一之丹地一、排ニ玉殿之金扉一」
【紫石】セキ ○鑛石の一種、一一英又一一一殺の略。本草「一一英生ニ太山山谷一」晉書、桓溫傳「眼如ニ紫一」○すずりの異名。
【紫石英】セキエイ むらさき色の水晶。魏氏春秋「取ニ白石及一一五色之石於太行殺城之山一」前條參看。
【紫髯綠眼】リョクガン 紫のほほひげ、緑のまなこ、夷狄の人を形容せる語。岑參、胡笳歌「君不ン聞胡笳聲最悲——胡人吹」
【紫蘇】ソ しそ、草の一種、莖は方形紫綠色、紫の花さく、花葉ともに食用とす。本草「一一一名赤蘇」
【紫蛇】ジャ 赤栗毛のらくだ、極めて美味とす。蘇軾詩「一一之峯人莫ン識、雜以ニ雜豚一眞可ン惜」
【紫圍】シイ 王宮の門。又王宮の義。陳書、高祖紀「氣湧ニ青雲一、神飛ニ一一一」
【紫檀】タン 熱帶地に產する喬木。材質堅く紫色にして上等の器物の製作に用ふ。古今注「紫檀木出ニ扶南一、色

號、亦謂之ー一」
【紫竹】ジチク 幹に紫黒色の斑ある竹。苦竹の類。‖寒竹。
【紫庭】ジテイ 幕府の異名。宋書、符瑞志「鳳凰翔ー於ー一、余何徳ー以感ー斯」
【紫泥書】ジデイショ 詔書をいふ。紫泥（紫色の印泥）にて璽書を封ずるに由る。李白詩「聖朝恩ー賀酒ー一」
【紫電】ジデン ○名刀の光をいなづまに比して形容す。○古の名刀の名。晉書、今注「吳有二名劍一曰ー一」
【紫銅】ジドウ 青銅の異名。
【紫陌】ジハク ○みやこの市街。李白詩「高樓對ー一、甲第連二青山一」○京師の郊外の路。劉禹錫詩「ー一紅塵拂ー面來」
【紫瑤】ジヨウ むらさき色のまだら。
【紫微】シビ ○北斗の北にある星の名。支那の天文学にて天帝の居所となす。轉じて王宮の義に用ふ。晉書、天文志「ー一垣十五星、在二北斗北一、一曰ー一天帝之座也、天子之常居也」○中書省の異名。‖紫薇。
【紫薇】シビ さるすべり。方術疏「鶴老化二紅藥一、紫薇ー一」‖百日紅。
【紫薇省】シビショウ 唐の開元間、中書省を改めて——と曰ふ。錦字箋「房中者省多種二紫薇一、故號ー一」‖紫薇中書
【紫薇中書】シビチュウショ 圖皇后宮職の異名。
【紫薇郎】シビロウ 中書郎の異稱。白居易詩「獨坐黃昏誰是伴、紫薇花對ー一」
【紫氣】シキ むらさき色の雲氣。劉禎詩「奮ー超凌ー一」
【紫磨】シマ 金の最上品。孔融文「金之優者、名曰ー一」‖眞。
【紫陽花】シヨウカ あぢさゐ。韻語陽秋「有二山花一色紫氣香、穠麗可ー愛、人莫ー知二其名一、白樂天標二其名一曰ー一紀之以ー詩」
【紫陽書院】シヨウショイン 宋の朱子の建てし學堂。方回、紫陽書院記「紫陽山去ー徽郡之南門一五里而近、故侍御侍講晦太師徽國文公先生都人也、今山與ー人稱曰ー紫陽夫子一、若二洙泗先聖一然、此書院之所二由作一、而名之曰ー紫陽一」
【紫蕨】シケツ むらさき色の山のもや。杜牧之、綺席草芽ー一鬱伍伍」
【紫綬】シジュ ○赤紫色のうすい絹。楊炯詩「使客重二周遮一、金鞭控ー一」○ー一は漢の横吹曲の名。古今樂録ー一馬融、東久茂、慷ー歸曲作也」
【紫蓉朱】シヨウシュ 義人が正士の態をなして、人をあざむくに喩ふ。論、陽貨「惡ー紫之ー朱也」

【紬】チュウ 支

あしぎぬ、太く粗き絲にて織りしきぬ。つむぎの類。唐書、食貨志「丁歲輸綾ー一二丈」‖粗紬。

【紳】シン 眞

○おほおび、高貴の人の衣冠束帶の時につける大帶。論、衛靈公「子張書ー諸ー一」○つかぬ（束）○縉ーは高貴の人の稱。‖高紳。
【搢ー紳】シンヒツ おほおびをひく。論、絅衣加二朝服一ー一」
【紳笏】シンコツ 大帶と、しゃくと。文官の裝束。宋史、劉伯正傳「ー一儼然、容色不ー動」
【紳士】シンシ 圖○學德の修養ある上品の人の稱。‖君子。○富貴なる人。
【紳商】シンショウ 圖紳士たる資格ある商人。
【律管】リツカン おほおび、文官の著くるもの。後漢書、第五倫傳「刻二著五臟一、書ー諸ー一」

【紟】シン 軫

○めぐる。めぐらす（轉）○むすぶ（結）「縉ー一」○もとる。もとらす（戻）孟、告子「ー其兄之臂一」

【終】シュウ シュ 東

○をはる。をはり。始の對「始ー一」「歲ー一」易、繫辭「原ー始要ー一」つく（盡）やむ（已）左、僖二四「婦怨無ー一」きはまる（窮極）○しめ（死・歿）「臨ー一」檀弓「君子曰ー一、小人曰ー死」○なる（成）○みつ（充）○つくす、をふ、きはむ、なす。○つひに（竟）書、旅獒「不ー矜ー細行一、累大德ー一」○はて（極）する。○方百里の地の稱。○一ーは十二年の稱。左、襄九「十二年矣、是謂二一ー一星一也」

同訓異語 終・畢・卒・訖・了・闋 ○終は始と對す、始よりをはりまで續く意あり、終日は朝から晩まで、終身は生れてから死するまでなり。○畢は終と同じ、畢生は一生なり、一から十までことごとく告すみ盡し終るなり。○卒は其のはてなり、終盡也と註す、卒業と用ふ。○訖は卒に同じ。○了はさっぱりと、婦ぢのあきてすみたるなり。○闋は音ケツ止なり、訖なり、事のをはりたる義。また特に音樂の終りたる義にも用ふ。○終・畢・卒・訖・畢の別は（延部九畫）の條を見よ。

【終老】シュウロウ ○身のおちつき處。世說、僅遂「浩然有二ー一之志一」○轉じて死をいふ、いまは（臨終）の義とす。

【終訖】シュウキツ をはる。つきる。司馬光詩「還如二恩在ル人、泗澤無ニ一ニ」

【終期】シュウキ をはりのとき。

【終竟】シュウキョウ をはる。をはりの後漢書、陳忠傳「百ニ已不レ得レニ一於子道一」‖終盡。

【終局】シュウキョク 事件のをはり。局は碁の勝負の意。韓愈詩「送ニ一看ニ一」‖終結・了局。

【終極】シュウキョク をはる。をはり。同義「莫レ知ニ其所ニ一ニ」

【終結】シュウケツ 終局に同じ。

【終業】シュウギョウ ○其の日のしごとを爲しをはる。○しかけたる仕事をしあげる。‖卒業・畢業。

【終古】シュウコ ○古より永久に。淮書、淮南王志「一一歸固兮生稍變」○古昔の意。院籍傳「酣暢一一」○平常の意。陸雲傳「雲論陳慨、冠ニ乎一一」

【終歲】シュウサイ いちねんじゅう。白居易詩「一一守ニ窮廬一而無ニ誰嗟歎一」

【終始】シュウシ ○をはりと、はじめと。荀子「慎レ終如レ始、一一如一」○始から終まで關係を共にする。

【終止形】シュウシケイ 文法の活用言、語尾變化の一、文の終に用ふる形「聞く」「見る」の類。

【終日】シュウジツ 日出より日沒まで、ひねもす。易、乾卦「君子一一乾乾」

【終日不レ食】シュウジツフショク 終日食事をせず。論、衛靈公「子曰、吾嘗ニ一、終夜不レ寢、以思、無レ益、不レ如レ學也」

【終審】シュウシン ○最後のしらべ。○法律にて此上に上訴の道なき裁判所の審問判決。

【終身之計】シュウシンノケイ 一生涯の爲めに立てるはかりごと。管、權修「一年之計、莫レ如レ樹レ穀、十年之計、莫レ如レ樹レ木、一一、莫レ如レ樹レ人」

【終身誦不レ枉二百步一】シュウシンショウヒヤクホヲマゲズ 一生路を人に讓るも、其の徑げ失ふ所、百步に過ぎず、讓德を勸むる語。唐書、朱敬則傳「敬則兄仁軌子仲容、隣居爭レ親、曾毒二子第一日、一一、終身讓畔、不レ失二一段一」

【終生】シュウセイ 一生涯、一生ををはる。王褒文「誓可レ與二一一」

【終制】シュウセイ ○三年の喪をつとめあげる。唐書、崔寧文傳「凱旋一一」○喪式の制度。晉書、宣帝紀「預作二一一於首陽山一」

【終宵】シュウショウ よもすがらの韓愈詩「一一思二幽室一、華燭光爛爛」‖終夜。

【終夕】シュウセキ よもすがら。任昉文「一一不寐」‖終夜・終宵。

【終朝】シュウチョウ よあけより朝食までの間の時、小雅「一一采レ綠、不レ盈二一一」

【終天】シュウテン 世のをはりまで。とこしへ、永久。「一一の恨」は父母の喪にいふ、斬齊の期あれども、悲痛の情は、此世を終るまでやまざるが故。‖窮天。

【終點】シュウテン 圖しまひの所「電車の一一」

【終南】シュウナン 山名の柳宗元文「一一四垂於隘首、以臨二於汝一、東至於太華、以距二於關一」‖南山・中南・秦山・秦嶺。

【終尾】シュウビ 事のをはり。

【終畢】シュウヒツ をはるをはり。白居易詩「天長地久無ニ一一」‖終竟。

【終風】シュウフウ 終日吹くかぜ。詩、邶風「一一且暴」

【終末】シュウマツ 事のをはり。‖結末・終尾。

【終夜】シュウヤ よもすがら。禮記「晏如二一一一有レ來二于内寢之中一、非レ爲何見」‖通宵・終宵・竟夕。

【終養】シュウヨウ 父母の喪を終へる。李密、陳情表「願乞ニ一一」（此は祖母に對して孝養を終る義）

【終了】シュウリョウ をはる。又をはり。‖結了。

【恨レ終】ハンシュウ ○物事の最後をつつしみ善くする。次條參看。○父母の葬祭を鄭重にする。論、學而「一一遠レ遠」

【慎レ終如レ始】シンシュウジョシ 事の終をつつしむこと、最初の時の如くす。老子「一一、則無二敗事一」

【令終】レイシュウ 事の終をつつしみ善くする、有終の美をなす。文選、琴賦「又善レ始而一一」

【非二池中物一】ヒチチュウノモノニアラズ いつまでも世に埋もれては居らず、時を得れば大いに爲すこと有る喩。吳志、周瑜傳「恐蛟龍得二雲雨一、一一」

【紹】 セウ 繼

○つぐ（繼續）うけつぐ「繼一」「克一」「遥一」○たすく（助）會見の時に賓主の間に在りて禮をたすける。○ひき合はせする、とりもつ、又其の事「一介」「介一」

同訓異義 紹・續・嗣・繼・接・襲・尋・次・亞・貳の別は續（糸部十五畫）の條を見よ。

【紹位】セウヰ くらゐをうけつぐ。論語論「其子孫一レ、百代不レ絕」

【紹介】セウカイ とりもち、ひきあはせ。史、魯仲連傳、平原君曰、請爲二一一、而見二之於先生一」‖介紹・媒介。

【紹述】セウジュツ 前の事業を繼ぎて更に之を大いにする、述は大。

【紹繼】セウケイ うけつぐ。淨住子、序「子者一一爲レ後」‖繼紹・承繼。

【紹興】セウコウ 地名、浙江省會稽道に屬す、其の地酒を製し、世に名あり「一一酒」

【紹述】セウジュツ 前代の事をうけつぎてのべ明かにする。宋史、蔡卞傳「於レ是專以二一一爲二國是一」凡元祐所レ革、一切復レ之」

【紹承】セウショウ つぎうける。宋史、樂志

「一ニ一石緒、永勵二精明一」
【紹レ絕】ショウゼツ　たえたるをつぎおこす。史記、自序「一レ一立廢、晉人宗レ之」
【紹繼】ショウケイ　紹繼に同じ。蔡邕、太尉李公碑銘「既文且武、桓桓一一」
【紹登】ショウトウ　つづきのぼる。宋史、樂志「謀祥一一、海縣斯寧」
【紹復】ショウフク　つぎおこす。書、盤庚「一ニ一先王之大業一」

【紲】セツ　屑　或は絏に作る

○きづな、たづな、牛馬をつなぎ牽くなは。○つなぐ、きづなにてつなぐ(繫)。係一」○しばる、束縛する。「縲一」獄に繫ぐ。又其のなは「縲一」○ゆだめ(弓弭)

【組】ソ　慶

○くみひも、紐、又は印につけるひも、紋の類。うちひも「朱一」「綠一」「華一」「繫一」○ひもをあみつくる。○かけつなぐ。○くむ、くみたてる、構成する「一成」○圖體「一合」
【組織】ソシキ　冠のくみひも。禮記、玄冠朱一一、天子之冠也」
【解レ組】カイソ　印綬をとく、官を罷める義(梁書、謝朏傳)車座物詩「一一

徹三園林一」
【組繫】ソケイ　くみひも。儀禮「握三手玄纁二裹者一一一」
【組維】ソイ　くみひもをあむと布を織ると。＝組織。
【組綬】ソジュ　印形のくみひも。
【組訓】ソクン　まるうちのくみひも。又、其のひもをあむ。禮、內則「治二絲繭一織レ紝一レ一」
【組織】ソシキ　○絲をくみ、はたをおる。遼史、食貨志「樹二桑麻一習二一一」＝組紝の○くみたてる。劉峻文「一ニ一仁義二琢三磨道德一」
【組成】ソセイ　くみたてて、なりたたす、組織して成立する。＝構成。
【組紡】ソボウ　印のくみひも。紡は綬。江淹表「謂三建金虎符一一一」
【組練】ソレン　甲冑をいふ、組甲練甲。唐太宗詩「一一輝二淺色一」

【紀】ダ　紙

絲の數詩、召南「素絲五一」

【紿】タイ　賄

○あざむく(欺・誑)○いつはる(詐)史、高祖紀「乃一爲調曰」○うたがふ(疑)

【紬】チウ　尤

○つむぎ、眞綿をつむぎたる大絲にて織りしきぬ「繭一」○つむぐ(紡)「一績」○あつむ、つづる(綴)綴り集む。史、太史公自序「一史記金匱石室之書」○をさむ(經)○ひく(抽)抽き出す。
【紬繹】チウエキ　端緒をひき出してたづねる。漢書、谷永傳「燕見一一、以求二善怨一」
【紬次】チウジ　ぬき出して序でる。唐書、韋澳傳「取二十道四方志一精加二一一、類爲二處分語一」
【紬績】チウセキ　つむぐ。史、歷書「一ニ一日分二率歷二氷德之勝一」
【紬緞】チウタン　つむぎと、どんすと。

【紩】チツ　質

○なは(索)○ぬふ(縫)○いる(納)

【紬】チュツ　質

○ぬふ(紩)ぬひめ(縫會)○しりぞく(退)＝黜。○かがむ(屈)荀、非相「緩急嚴一」○足らず。

【紵】チョ　御

○いちび、麻の一種、苧の粗なるもの。詩、陳風「可二以漚一一」＝苧。○いちびにて織りたるあさぬの。書、禹貢「厥貢漆枲絺一」
【紵衣】チョイ　麻のころも。左、襄二九「子產獻二一一一」
【紵絺】チョチ　麻布と、ねり絹と(史、司馬相如傳)
【紵絮】チョジョ　わた(綿絮)(史、張釋之傳)
【紵縞】チョコウ　麻布と、細き苧布と。說苑「具二一一三百、裝將以送レ之」

【紲】バツ　月

たび(足衣)後漢書、禮儀志「絳袴一」＝襪。

【紲】ハン　銑

○きづな、ほだし。牛馬等をつなぐ繩(馬繫)○つなぐ、足をつなぐ、つなぎとどむ、ほだす「羈一」「拘一」「囚一」「系一」
【紲靮】ハンキ　ほだし。世の中のきづな。蕭表元詩「馬良道二一一」＝羈紲。紲縲。
【紲拘】ハンコウ　つなぎとどむ。蕭穎士文「越二一一之常禮一」＝拘紲。
【紲制者】ハンセイシャ　きず口にはる膏藥。

【紼】フツ　物

○つな(索)大いなるなは。詩、小雅「一縭之」○葬式に棺を引く索。曲禮「助一葬必執一」一」○

ひざかけ、束帶の時に膝を蔽ふもの。前に通ず。○印のひも。‖紱。

【紱】 フツ 物

○印のひも(紐)「環ー」「佩ー」‖綍。○まとふ(纏)

【紱冕】ジ印綬を帶び冠を著く。轉じて高官の地位。後漢書、鄭康成傳「吾雖ㇾ無ㇾ一ー之緒ニ、頗有ニ讓爵之高一」

【累】 ㊀ルヰ ㊁ルヰ ㊂ルヰ ㊃ラ 紙 寘 紙 支

累に通ず

㊀しばる(縲)つなぐ(縛結)捕縛する。孟、梁惠王「係ニ其子弟ニ」○つらぬ(連)㊁かさねる。かさなる(重)「重ー」「ー年」「ー卵」ます(增)「增ー」本、絫に作る。○しきりに、つづきて「ー遣」㊂わづらはす。書、旅獒「不ㇾ矜ニ細行ニ、終ー大德ニ」手數をかける。○かかりあひ(關係)わづらひ「世ー」「俗ー」「塵ー」「家ー」「繫ー」まきぞへ「連ー」「係ー」○うれへ(愛)戰國秦策「此國ー也」㊃はだか。‖倮。

同訓異義 累・仍・頻・連・荐・切の別

は仍(人部二畫)の條を見よ。

【絫累】あし手まとひの兒女を擔へる。游宦紀聞「ーㇾ一扶ㇾ攜」

【累黍】しとねを幾枚もかさねる。又、其のしとね。家語「甫遊ニ於楚一、ーㇾ一而坐、列ㇾ鼎而食」

【累葉】だいだい。後漢書、耿弇傳「耿氏ーー以ニ功名一自終」‖累世・交葉。

【累加】かさなりくははる。

【累沿】太平の相つづく義。沿は天子の德のあまねきをいふ。班固、東都賦「重ニ於永平之際一、重熙而ーー」

【累遷】わづらひさはり。淨住子「今欲ニ水行一、非ニ舟航一不ㇾ移、二ーー也」‖陸遷。

【累起】しきりにおこる。漢書、楚元王傳「背唐虞既寢而三代迭興、聖帝明王、ーー相襲、其道甚著」

【累葉】ご石をかさねる。極めてあやふきに喩ふ。說苑「荀息曰、臣能累ニ十二博棊一、加ニ九卵其上一、公曰、危哉」

【累騎】馬鳥にのる。世說、任誕「ーー而返」

【累計】すべてを合せたる計算。‖總計・累算。

【累坐】他人の罪にまきぞへとなりて罪せられる。‖連坐。

【累歲】としをかさねる、くる年もくる年も。後漢書、許楊傳「起ㇾ塘四百餘里、數年乃立、百姓得ニ其便一ー大稔」‖累年。

【累載】歲をかさねる。南史、到溉傳「溉遭ニ母憂一、居ㇾ喪盡ㇾ禮、服闋、猶蔬食布衣者ーー」‖累歲。

【累算】累計に同じ。

【累時】ときをかさねる。王充文「寒不ㇾ一ー、則霜不ㇾ降」

【累囚】とらはれ、めしうど。

【累日】ひをかさねる。後漢書、郭泰傳「ーー不ㇾ去」‖連日。

【累身】みにわづらひをきたす。列子「原憲之蜜損ㇾ生、子貢之殖ーㇾ一」

【累進】しきりに上にすすむ。‖累遷。

【累進稅】財産の多くなるに從ひて其の稅率の累進する租稅。

【累檢】累年に同じ。南史、謝莊傳「黃初在ニ於穎川一ーー」‖歷載。

【累觴】さかづきをかさねて飲む。陳傅良詩「ーㇾ一以爲ㇾ歡、庶ㇾ前以爲ㇾ儀」

【累宿】日をかさねてとまる。盧照隣詩「ーー思方重」

【累乘】同數を幾つもかさねてかけ合す。

【累世】だいだい。後漢書、淸王傳「富及ニーー一」‖累代・累葉。

【累宵】夜をかさねる、每夜。家塾物詩「ーー同ニ燕酌一、十舍揖ニ征驂一」

【累石】いしをつみかさねる、かさねたる石。漢書、韓安國傳「以ㇾ河爲ㇾ寇、ーㇾ一爲ㇾ城」

【累積】かさねつむ。高唐賦「交加ニーー一重疊增益」

【累音】よきことを、つみかさねる。漢書、劉敬傳「周之先自ニ后稷一、堯封ニ之邰一、積德ーー十餘世」‖積善。

【累遷】しきりに高官にうつり進む。漢書、蕭望之傳「ーー諫大夫丞相司直、歲中三遷官」‖累進。

【累戰】つづけざまにたたかふ。晉書、楊佺期傳「ーー皆捷」

【累祖】○先祖代代。○遺體の名。旅人の道路の安全を守る神。纂碎錄「黃帝子ーー好ニ遠遊一、而死ニ於道一、故後人祭ニ之以爲ニ行神一」

【累息】息をころす。後漢書、任延傳「吏民ーー」‖屛息。

【累代】代代。晉書、憲帝紀「侯ニーー一之寶」‖累世。

【累日】傳朝「後漢書、郭泰傳」‖每日。

【累著】かさねたくはへる。梁昭明太子詩「微官絕已久、煩勞多ニーー一」

【累著】しきりにあらはす。南史、伏曼傳「時始興內史何遠、ーニ清績ニ」

【累重】身のわづらひとなるもの、ほだし。妻子家屬。漢書、西域傳「募民壯健有ニーー一敢徙者ニ」

【累徵】しきりにめしたづぬ。漢史、嚴滿離不傳「ーー皆以ㇾ疾辭」

【累帝】ルイテイ　代代の天子。晉書、赫連載記「長安―ー舊都」
【累土】ルド　○土を積み重ねる。○少しの土。老子「九層之臺、起二於―ー一」
【累棟】ルイトウ　幾戸もかさなりたるやね。のむね。張載詩「―ー出二雲表一」
【累德】ルイトク　○德のわづらひとなる。又、惡行。莊、庚桑楚「惡欲言怒哀樂六者―ー也」○德をかさねつむ。史、周紀「西伯積レ善―ノレ」ー盛德。
【累牘】ルイトク　書札を重ねつむ。北史、李諤傳「連篇―ー、不レ出二月露之形一」
【累年】ルイネン　よしをかさねる。後漢書、陳蕃傳「輔二弼先帝一、出內―ー」ー積年・累歲・連年。
【累世】ルイセイ　數ヶ國の國語の通譯をかさねて意を通ずる。漢書、平帝紀「重譯」注「道路絕遠、風俗雜異、故―ー而後通」ー重譯。
【累卵之危】ルイランノキ　卵をかさぬる如き危險の甚だしきをいふ。史、范雎傳「秦王之國、危二於累卵一、得レ臣則安」
【累累】ルイルイ　重なる貌。易林「疊疊―ー」又うち續く貌。ー纍纍。

六畫

【絪】イン　因

○しとね、ざぶとん（座蒲團）漢書、霍光傳「加二蓋絪一」ー茵。○一縕は萬物生成の元氣。又、其の元氣の盛んにあつまる貌。
【絪縕】イン　元氣の盛んなる貌。元氣縕靄。易、繫辭「天地―ー、萬物化醇」ー氤氳。

【絞】㊀カウ　㊁カウ　巧　㊂カウ　看

㊀くびる（縊）繩にて首くくる「手―ー」「―ー殺」○くくる（縛）○なふ、よる（糾）兩繩相交り、之を捩りて緊急ならしめる。爾雅、疏「糾―ー繩索」○きびし（急切）少しも假借せず。論、泰伯「直而無レ禮則―ー」○そしる（刺）○めぐる（繞）㊂しぼる、しめる、堅める。○もえぎいろ（蒼黃色）「―ー衣」國○ゾメ布帛の面を所所くくり染めて現はしたるかすり「―ー染」○しぼる、壓搾して液汁を採る「油を―ーる」「手拭を―ーる」
【絞縛】カウバク　くびくくる。左、哀三「若其有レ罪、―ー以戮」
【絞盆】カウボン　罪式に尸を飾るふすま（禮、檀弓）
【絞殺】カウサツ　しめころす。
【絞死】カウシ　くびれしぬ。漢書「自―ー者、歲數百千人」
【絞汁】カウジフ　しぼりたるしる。居家必用「―ー同二桂花一」
【絞首】カウシュ　○くびをしめる。ー縊首。○國現行の刑罰の一、重罪犯に科す。
【絞帶】カウタイ　斬衰ニにしめる帶。儀禮「―ー者繩帶也」
【絞盤】カウバン　籠艦ロウの異稱、堅き木又は金屬にて直立の圓筒狀或は鼓形に作り、外に肋木若干條あり、汽力或は横杆を以て之を轉動し、下に機關ありて之を阻み、自ら退くことなからしめ、以て碇を起し或は舟を曳き上げる等の用に供す。
【絞殺】カウサツ　しめころす。晉書、郤詵傳「有レ亡命而被二斷縣一者上矣、有二縛東而―ー者一矣」

【絳】カウ　江

○ここあかいろ（大赤・大紅）「淺―ー」○地名、晉の國都、山西省新―ーの北に在り。
同訓異字　絳・赤・紅・丹・緋・殷の別は赤（部首七畫）の條を見よ。
【絳衣】カウイ　あかきころも。莊子「楚莊王、鮮冠組纓―ー、以治二其國一」
【絳帷】カウキ　あかきとばり。後漢「張ニー一以遮隱兮」ー絳帳。
【絳雲】カウン　あかくもの美稱。歩虛詞「北闕臨二玄水一、南宮生ニー一」
【絳雲樓】カウウンロウ　清初、常熟の錢謙益の藏書の樓名、火災に罹り、存せず、——書目四卷あり。
【絳英】カウエイ　あかきはなぶさ。韓愈、榴花詩「可レ憐此地無二車馬一、顚倒青苔落ニー一」
【絳蠟】カウラフ　あかき花のうてな。趙師俠詩「ー一襯二輕紅一」
【絳汗】カウカン　血の色したるあせ。梁昭明太子、七契「踏躡二紅塵一、霑漬ニー一」
【絳気】カウキ　あかきもや。王勃賦「憑二臨帝野之ー一、愛二晴天之碧雲一」
【絳闕】カウケツ　あかいろのもすそ。王維、宮詞「繞レ樹宮娥著ニー一」
【絳灌】カウクワン　漢の高祖の臣、絳侯周勃と、灌嬰と。前趙錄「劉淵幼而好レ學（中略）曰吾每レ觀二書傳一、管絳二陳平之無武、ー一之無文」
【絳闕】カウケツ　あかくぬりたる王宮の門闕。文心雕龍「敷二奏ー一、既三弊輔辰一」
【絳虹】コウコウ　あかきにじ、雨の霽れる時に出づ。初、記「敎ニー一於洼陰一」
【絳脣】カウシン　あかきくちびる。美人の口の形容。鮑照、蕪城賦「蕙心紈質、玉貌ー一」ー朱脣。
【絳霄】カウセウ　赤き下裳。劉禹錫詩「武夫

何洗洗、衣紫袈ニ一ノ一ニ」

【絳樹】カウジュ　○古の美女の名。庾肩吾、詠二美人一詩「一ノ一及西施、倶是好容儀」次條參看。○珊瑚の異名。章應物、詠二珊瑚一詩「一ノ一無二花葉一、非レ石亦非レ瓊」

【絳樹青琴】カウジュセイキン　並に古の美女の名。遊仙窟、註「絳樹者、古美姿也、引二司馬相如上林賦一曰、若夫青琴宓妃之徒、伏儀曰、青琴神女也」

【絳紗】カウサ　あかいろのかとりぎぬ。史、田單傳「得二千絳牛一、衣以ニ一ノ一衣一ニ」

【絳帳】カウチャウ　○あかきとばり。後漢書、馬融傳「當坐二高堂一施ニ一ノ一、前授二生徒一、後列二女樂一、○轉じて師の席。又、學者の書齋の義とす。

【絳帖】カウテフ　法帖の名。絳は州の名。法帖譜系「單炳文論ニ一ノ一至爲二精審一、最耕錄「一ノ一者、宋尚書郎潘師旦、以二官帖一摹刻於家一爲二石本一、世稱二潘絳一帖、凡二十卷、單炳文謂、淳化帖不二多見一、其次一ノ一最佳」

【絳被】カウヒ　あかきよぎ。在昉記「陽陽令遣二祖逖一四幅一ノ一領一ニ」

【絳気】カウキ　赤き氣、卽ち虹の類。江淹、赤虹賦「紫縹上レ河、一ノ一下レ漢」

【絳羅】カウラ　あかきうすぎぬ。隋書、禮儀志「一ノ一襦、白紵裙」

【紅】カ。　敬

○ぬふ(縫)○國くける、縫目を表にあらはさざるやうにぬふ。

【給】㊀キフ　㊁ケフ　集　組

㊀そなへる(備)そなふ(供)左、僖十三「敢不共一ニ○たす。たる(足)品物が十分にある。孟、梁惠王「秋省二斂而助一レ不一ニ」○たまふ(賜)○あたふ(與)物を人に與へる。晉書「特一ノ一賜二資蓋一ニ」○たまもの、めぐみ。○てあて、あてがひぶち「月一ノ一」「俸一ノ一」㊁くちまへよし、敏捷く言ふ、よくしゃべる。言語便捷。論、公冶長「禦人以二口一ノ一ニ」○國動作をあらはす語に添へる敬語。

同訓異字　給・賜・錫・貺・貢の別は賜(貝部八畫)の條を見よ。

【仰レ給】オフセタマフ　上より給與を受ける。史、平準書「衣食一ノ一縣官ニ」

【給假】キフカ　官より休暇を賜はる、假は暇。元史「每月朔望上弦下弦一ノ一四日」ニ賜暇。

【給牒】キフテフ　物を與へて兵をねぎらふ。宋史、度宗紀「咸淳五年十二月、以二錢二百萬一、命二京湖帥臣一ノ一襄鄂等處水陸戍士一ニ」

【給濟】キフサイ　あてがひすくふ。吳志「傾レ家一ノ一」ニ給助。

【給仕】キフジ　國○役所等にて雜用を勤める小使。○飲食の世話をする。又、其の召使。

【給使】キフシ　使役にそなへる。法苑珠林「諸天爲一ノ一」

【給資】キフシ　資本を給與する。

【給賜】キフシ　物をあたへたまふ。宋史、職官志「鴻臚寺卿、掌二四夷朝貢、宴勞一ノ一、送迎之事一ニ」

【給事中】キフジチウ　官名、秦漢にては一の加官にて殿中の奏事を司る、晉以後正員となり、隋唐以來門下省に屬し、制敕駁正の事を管し、明に至りて侍從規諫の職を掌り兼ねて六部を監察す、清代は都察院に屬し、御史と同じく諫官たる故、又給諫と稱す。

【給助】キフジョ　金品をあたへてたすける。

【給水】キフスイ　水を供給する。

【給足】キフソク　十分に足る。後漢書、曹褒傳「制禮作樂、其秩大熟、百姓一ノ一」

【給費】キフヒ　費用にあてる。唐書、姜恪傳「少孤貧好レ學、晝採レ薪一ノ一、夜燃レ藁照レ書」

【給付】キフフ　物を供給交付する、あたへる、わたす。

【給扶】キフフ　あたへたすける。南齊書、武陵昭王傳「又一ニ二人一」ニ給助。

【給復】キフフク　租稅賦役を免除する、復は除。北史「貧人降者、一ノ一十五年」

【給米】キフマイ　こめをあたふ。宋史、眞宗紀「流民還レ鄉、家一ノ一一斛一ニ」ニ賜米。

【給役】キフエキ　○あてがひ養ふこと。○軍隊などにて衣服糧秣其の他の必要品を供給する。

【給與】キフヨ　物をあたへる。唐書、杜元穎傳「一ノ一不レ時、戍人寒餒」

【給俸】キフホウ　扶持米をあてがふ。後漢書、光武紀「命二郡國有レ發者一ノ一」

【給料】キフレウ　あてがひ。唐書、食貨志「至德初以二用物不レ足、內外官不レ一ノ一給二乾元元年給二外官半料一ニ」

【紐】㊀クゥ　㊁クィ　集　組

㊀しけいと、繭の外面より抽き出したるままの粗き絲。○しけ絲にて織りし絹、しけいとおり、しけぎぬ。㊁かかる(懸)ひっかかる。左、成二「驕一ノ一于木一而止一ニ」掛。○つながり結ぼる「結一ノ一」○とどまる(止)とどこほる(凝)

【絖】クゥ　濃

○わた(綿絮)＝纊。○國光澤ありて書畫を書くに用ふるきぬ「一本」

【結】㊀ケツ・ケチ 屑 ㊁ケイ 霽

㊀むすぶ(締)「締ー」「連ー」ゆふ、絲繩等をむすぶ、むすぼる。○くくりめ、むすびめ。○ちぎる、約束をむすぶ「要ー」「約ー」「面ー」「交ー」○組をつくる「ー社」○みのる、果物が實になる。杜甫詩「卑枝低ー子」○氣分がふさがる「鬱ー」「憂ー」○くくる(括)まとふ(纏)○とざす(閉)○まとめる(收)○しばる(縛)つかぬ(束)○つらぬ(連)○かまへる、くみたてる「ー構」陶潛詩「ー廬在ニ人境一」○なす(成)○こりかたまる(凝)「冰ー」「ー晶」詩、曹風「心如ー兮」○したしむ(親)㊁もとどり。漢書、陸賈傳「魋ー箕踞」‖髻。

同訓異語 ムス 結・締・揃 ○結はゆふと譯す、締なり。曷、繫辭「上古結レ繩而治」また心のむすぼれて解けぬ義にも用ふ、鬱結・憂結と連用す。○締はしっかりとむすぶ、結に同じ、結ン交と締ン交とも用ふ、但心の結ぼれるには用ひず。○揃は兩方の掌にすくひ取る義。小爾雅「今俗謂ニ兩手所ニ奉、爲ニ一掬一」むすぶと訓みても、結・締とは意義全く異り。

【結ン禁】ケツスイムスブ 兵舍をつくる。後漢書、何進傳「請ニ武子平樂觀一列ニ步兵騎士數萬人一ー一レー爲レ陣」

【結纓】ケツエイ 冠のひもをむすぶ。左傳「子路曰、君子死、冠不レ免、ー一レー面死」

【結夏】ケツゲ 圖安居(四八一頁四段)に同じ、夏籠ケコモリ。

【結界】ケツカイ 圖惡魔を防ぐ爲めに法力にて界を作り、其の中に入らしめず。又、其の所、眞宗の寺院にて本堂内外陣の外の欄は之に象る。

【結核】ケツカク 細菌の寄生によりて患部の硬く凝りかたまるもの「ー一腫」

【結跏趺坐】ケツカフザ 圖兩足を組み連ねて坐す。法華經「ー一池生ニ蓮華一、中有ニ一童子一、ー一」

【結句】ケツク ○詩の末の句。むすびの句。藝苑雌黃「七言律、不レ雜ニ中二聯一、雜在ニ發端又ー一耳」○圖ケツつまり、畢竟、結局。

【結花】ケツカ はなをつける。李端詩「由來得レ地早、何事ー一レー遲」

【結果】ケツクワ できばえ。‖成果。

【結構】ケツコウ わざはひを引き起す。史、蘇秦傳「以ニ有レ盡之地一、而逆ニ無レ已之求一、此所謂市レ怨ー一レー者也」‖構レ禍。

【結旅】ケツリョ よしみをむすぶ。公羊傳、注「外米レ能ー一ニ諸侯一」

【結願】ケツグワン 神佛に祈願したる日の滿つる晩。梁京寺記「ー一乞ニ本情一」

【結歡】ケツクワン たがひによろこびあふ。任昉詩「ー一三十載、生死一交情」

【結口】ケツコウ 口を緘して言はず。蔡邕文「軍下ー一、莫レ圖ニ正辭一」‖緘口・結舌。

【結構】ケツコウ ○家又は詩文等をくみたてる、しくみ。王延壽、魯靈光殿賦「觀ニ其ー一、規矩應レ天」○圖みごと、立派。

【結婚】ケツコン えんぐみ。後漢書、梁皇后紀「ー一之際、有レ命既集」‖結昏・定婚。

【結草】ケツサウ ○恩を報ずるにいふ。魏武子妾あり、武子病む時、其の子顆に謂ひて曰はく、我死せば此の妾を嫁せしめよと、病革なる時、又曰はく殺して殉となせと、武子死するに及びて、之を嫁せしむ、秦晉の戰の時に顆一老人の草を結びて杜回に抗するを見る、回躓き倒る、遂に之を獲たり、後顆夢に其の老人を見る、曰はく、我は汝の嫁せしめし婦人の父なり、汝先人の治命に從へり、我、故に之に報ぜりと(左、宣十五)○草庵をつくる。後漢書「ー一レー爲レ廬」

【結草蟲】ケツサウチウ 蓑蟲ミノムシの漢名。

【結愁】ケツシウ かなしみの心がむすぼれる、心がむすぼれふ。杜荀鶴詩「鏡色江聲暗ー一レー」

【結証】ケツシヤウ 二人以上の同志と組合をつくる。又、其の作りし組合。温庭筠詩「幷對ニ山松一如レ一レー」

【結晶】ケツシヤウ 鑛物などの一定固有の形を成すをいふ。又、其の物。

【結繩之政】ケツジヤウノマツリゴト なはを結びて文字にかへし大古の政事。孔安國、尚書序「古者伏羲之王ニ天下一也、造ニ書契一以代ニ一ー一」

【結轖】ケツシツ 氣が結ぼれる。枚乘文「中若ニー一ニ」‖鬱結。

【結誓】ケツセイ ちかひをむすぶ。陶潛文「欲ニ自往以ー一レー」

【結舌】ケツゼツ だまる。漢書、杜欽傳「皆ー一レー杜レ口」‖結口・噤口。

【結撰】ケツセン 文章をくみ立てて作る。宋玉、招魂「ー一至思、蘭芳假些」

【結束】ケツソク ○むすびつかぬ、たばねる。○旅行又は出陣の身じたくする。韓愈詩「行行事ニー一ニ」

【結隊】ケツタイ 隊伍をくむ。宋史、兵志「ー一レー竝依ニ李靖法一、三人爲ニ一小隊一、九人爲ニ一中隊一」

【結體】ケツタイ ○字畫のくみたて。○結合せし形體。

【結髮】ケツパツ なかまをむすぶ。張衡、西京賦「輕レ死重レ氣、ー一レー連レ翩」

【結託】ケツタク 互に心をむすびてたよる。北史、高隆之傳「深沈有ニ志氣一、與ニ神武一深相ー一」

【結著】ケツヂヤク ○むすびつく。晉書、費服志「中央兩頭高如ニ山形一、貫レ中以ニ

裡尾、而一二之一也」○國ケツつまり、究竟・落著・決著。
【結締】ケツテイ むすびつくる、むすびしめる。‖締結。
【結凍】ケツトウ こほる。金史、移剌溝阿傳「檜梁一一、如レ柞」‖凝凍。
【結闕】ケツケツ まじはりたたかふ。戰國策「一一於高唐之上」
【結納】ケツノウ ○心にちかひてたよる。唐書、田弘正傳「弘正不レ覺自失、乃深相一一」○國婚約のしるしに男女兩家にてとりかはす禮物。
【結茅】ケツバウ 家を建てる。宋史、李衡傳「定二居嶌山一、一二別墅一栽二橘柚一徘」
【結髮】ケツパツ ○女那にては男は二十歳、女は十五歳にして髮をゆひて成人となる、故に其の年ごろをいふ、元服する。史、李將軍傳「廣自請曰、臣一一而與二匈奴一戰」○かみをいふ。
【結冰】ケツピン こほりがはる、こほる。
【結文】ケツブン 文章の終の文句。
【結髮】ケツパツ なかまをつくる。大寶遺事「每二春時一一レ聯レ黨」‖結黨。
【結末】ケツマツ をはり。‖結尾。
【結約】ケツヤク やくそくをむすぶ。
【結縭】ケツリ 女の嫁する時、母が帨巾を帶に結びつけてやる。詩、豳風「親結二其縭一」
【結綠】ケツリョク 美玉の名。史、范雎傳「周有二垂棘一一宋有二一一一」
【結褵】ケツリ からいしばの。周禮、注「一名一一、俗謂二之詩草一」
【結了】ケツレウ をはる、すむ、かたづく。
【結連】ケツレン むすびつらぬ。元史、列女傳「母子以レ帶相一一、遂夜號哭」‖連結・聯結。
【結廬】ケツロ いほりをかまへつくる。陶潛詩「一一在二人境一、而無二車馬喧一」
【結論】ケツロン ○論につめたる點。○論理にて三段論法の大小二前提より生する斷定。
【結緣】ケチエン ○佛道に歸依する。○ことの縁のゆかりをむすびつける。白居易詩「三郎何因此一一」
【結集】ケツシフ 釋迦の死後、諸弟子が佛說をあつめて編纂する（法華經科註）
【結縛】ケツバク 囚物欲にしばられる。煩惱の異名。无量壽經「煩惱一一」

【糸刃】㊀ケツ 屑 ㊁ケイ 屑
㊀清し、いさぎよし、古、潔に通ず。○くくる（束・結）○はかる（度）㊁ひっさぐ（提）手にて提げる。‖挈。
【挈矩】ケイク ○右にて柱をみがきよめて滑かならしめる（禮、明堂位）○轉じて圓轉滑脫の意に用ふ。屈原、卜居「如レ脂如レ韋、以一一乎」‖潔矩。
【絜矩】ケツク 人を推し度りて方正ならしめる恕の道、矩は曲尺、のり。大學「是以君子有二一一之道一也」
【絜粢】ケツシ 神に供へるきよききび。左、桓六「一一豐盛」

【絭】ケン 銑
たすき。袖をかかげる紐（襷は國字）

【絢】㊀ケン 霰 ㊁シュン 眞 㔾
㊀あや、いろ（文采）「彩一」「華一」○文ある貌、あやありて美くし。論、八佾「素以爲一一今」○一練は疎き貌。顏延之、赭白馬賦「一練窒絕」㊁まるひも。‖紃（糸部三畫）
【絢飾】ケンショク うつくしくかざる。唐書、馬植傳「植綺二更事一、以二文雅一一一其政、清淨不レ煩」
【絢爛】ケンラン ○あやありてきらびやか。朱德潤詩「一一晴光入二座紅一」○轉じて詩歌文章の字句が豐富にして適當なるにいふ。蘇軾、與二姪書一、凡文字、少小時、須レ令二氣象崢嶸、采色一一、漸老漸熟、乃造二平淡一」（詩文を作るに初は字句を飾るが漸次老熟するに從ひて平正淡泊の境に至る）

【絎】コウ 巧
なは（大索）‖紘（糸部九畫）

【絲】シ 支
○いと、蠶のくちより吐き出すいと、すぢ、きぬいと「素一」「羅一」「製一」○轉じてひろく綿・麻・繭等を細く引きのばしてよりをかけしもの。○きぬいとをおりたるもの（帛）漢書、公孫弘傳「食不二重肉一、妾不レ衣一」又、あみたるもの。○いとを張りたる樂器、八音の一、琴瑟の類。‖絃。○いとをとる、いとを紡ぐ。○小數の單位の一、十一を一毫とす。轉じて微細の義とす。○すべて一に似たるもの「蛛一」「遊一」「柳一」○食物の切りて縷を成すもの亦一といふ。韓琦詩「秋老鱸一肥」
【絲鞋】シアイ きぬいとのくつ。老學庵筆記「惟陽レ朝服二一一」‖絲履。
【絲雨】シウ いとの如き細雨、こさめ。劉彥暉詩「一一帶レ風斜」‖微雨。
【絲毫】シガウ 極めてすこし。唐書、辛雲京傳「治レ軍予法、下有レ犯、雖二一一比、不二肯貸一」國通語錄「把二斷世界一不レ漏二一一」

【絲瓜】シクワ へちま、瓜の一種、皮の中の海綿狀のすじは種種の用に供す。
【絲管】シクワン 琴と笛と。張說詩「一一清且哀、一曲傾二一杯一」＝絲竹。
【絲藏】シクワン きぬいとと、まゆと。禮記「執二麻枲一治二一一」
【絲枲】シ きいとと、あさと。賈、禹貢「青州、厥貢、鹽絺海物、惟錯、岱畎、一一一」（畎は谷、岱山の谷をいふ）
【絲蓴】シシュン 絲の如きほそきじゅんさい。齊民要術「蓴葉舒長、是名二一一一」
【絲氅】シきぬいとと、わたと。孟、滕文公「疏屨一一輕重同、則價相若」
【絲緒】シいとのこぐち。江淹賦「堆二濾炭於片景一捉二一一於一息一」
【絲繩】シきぬいとにて造りたるなは。宋史、輿服志「貫レ之以二五采一一一」
【絲竹】シいとたけ。ことと、ふえと。絲は琴瑟など、竹は笙笛など。禮、樂記「金石一一、樂之器也」漢書、張禹傳「理二一一絃一」＝管絃、絲管ともいふ。
【絲桐】シトウ 琴の異名。桓譚新論「神農氏始削二桐爲レ琴、繩絲爲レ絃」李白詩「寒菁不レ忍レ曾、爲レ君奏二一一一」
【絲綿】シメン きいとにて作りたるほっす。老學庵筆記「第一架六物、曰如意、曰玉斧、曰鶴扇二、曰麈、曰一一」
【絲麻】シマ きぬいとと、あさいとと。周禮、考工記「治二一一一以成レ之、謂二之蟄功一」
【雖レ有二絲麻一無レ棄二菅蒯一】シアリトイヘドモスツルナカレシカンクワイヲ 絲麻と菅蒯とは共に屨を爲るに用ふるもの、屨を爲るには上品の絲麻あるも、下品の菅蒯を棄つべからず。徒に美物のみを貴びて賤物を捨つべからざる喩。左、成九「——、雖レ有二姬姜一、無レ棄二蕉萃一」
【絲蘿】シラ 菟絲と女蘿と。詩經「焉與二女蘿一」傳「女蘿、菟絲、松蘿也」古詩「與レ君爲二新婚一、菟絲附二松蘿一」轉じて婚姻に喩ふ。
【絲綸】シリン 天子のみことのり。綸は綬、天子の言は絲の如く細きも、臣下は之を堅ぐること綸の大いなるが如くすとの義。禮、表記「王言如レ絲、其出如レ綸」に本づく。翰林志「翰林之司、掌二一一之命一」
【絲縷】シルル いとすぢ。南史、張緒傳「枝條花長、狀若二一一一」＝絲線。
【絲路】シロ ほそきみち。歐陽修詩「一一蠶蛆細入レ袋」

【紕】

紕（糸部四畫）に同じ。

【絨】ジュウ 東

○地の厚く暖かなる毛織物「氈一」○ほそぬの（細布）○石一ジュウは鑛物の一、いしわた、綿ぎて火浣布と爲す。
【絨毯】ジュウタン 厚き毛織物の一種、多く敷物とす。

【如】

㊀ジョ ㊁ヂョ 御 御

㊀わた（綿）ふるわた（散綿）「敗一」「弊一」新らしきを綿といひ、故きを一といふ。○わたいれ。○柳の花「柳一」○なづみて決せざる義。○一一はことば多くして斷えざる貌。㊁味を調理する、味をつける、あんばいする。禮、曲禮「毋一一羹」
【絮羹】ジョカウ あつものの味を調へる。曲禮「毋一一羹」
【絮煩】ジョハン わた。張衆詩「髮思獨自易二一一、羞澀二羔服一求二新袂一」
【絮語】ジョゴ 多言にして絶えざること、わたの絲の延びて永く綴く如きをいふ。
【絮酒】ジョシュ わたに酒をしたす。後漢書、徐穉傳、注「以二綿絮一漬二酒中一、暴乾以裹レ雉、裹到二所レ赴家塚外一、以水漬レ綿、使レ有二酒氣一、酹酒畢則去、不レ見二喪主一」後人弔祭文に多く此に本づく。
【絮絡】ジョラク わたと、きぬと。史、匈奴傳「高帝設奉二匈奴一一酒米食物一各有レ數、約爲二昆弟一以和親」
【絮煩】ジョハン くだくだし。水滸傳、第三回「語休二一一一」＝絮絮・絮聒。
【絮縷】ジョル わた。新らしきを綿といひ、故きを絮といふ。姚合詩「藏曆藏二深櫃一、新衣薄二一一一」＝絮綿。
【絮纊】ジョコウ わたと、いとと。宋史、食貨志「河南父老、喜二劉豫一復二舊賦一及二於一一一、割剌至二於絮纊一」

【絏】

セツ セチ 屑

○繩（糸部五畫）に同じ。○縲一ルイは古、罪人をつなぐ黒索なり。＝縲絏。

【絕】

セツ ゼチ 屑 通音 ゼツ

○たつ（截）だちきる（斷）絲を斷ちきる。又永くつづける物事を中斷する「斷一」○ほろぶ（滅）たゆ「一世」○さへぎる（遮）○へだつ（隔）「隔一」遠く離れる「一域」「一塞」○やむ、とどむ（止）「一食」○よこぎる（横過）「一流」○わたる（度）まっすぐに渡る。○おちいる（陷）○しぬ（死）ころす「一命」○ふさがる（塞）○つく（竭）なくなる、まづし。呂覽、季春「振二乏一」○つくす、きはめる（極）○すぐれる、まさる「佳一」○たえて、決して。○はなはだ。史、伍子胥傳「一愛二幸

之」○詩の一體、律詩の半分即ち四句より成る詩「一句」「七一」「五一」

同訓異義 絶・斷・截・裁・製○絶は絲のきれたる義、物のきれてあとの無きをいふ、絶命・絶筆・絶交の如し。論語「在レ陳絶レ糧」○斷は物を二つにたちきること、又物の中たえたることにも用ふ、斷碑・斷橋・斷雲の如しの轉じて決斷の義に用ふ、斷レ獄の如し。○截はきりたつ義、絶と略ゝ同じ、絶句を截句とも書く。○裁・製の二字は共に衣服などをたつことなり。轉じて事をきりもりして決斷するを裁斷・裁決と連用し、天子の詩文などを御製・聖製といふ（製一に制に作る、同じ）○「絶・甚・太・泰・酷・孔・已の前は其（甘部四畫）の條を見よ。

【絶愛】ゼツアイ　甚だ愛するの義。陸游詩「一一山橋淡靄中」

【絶異】ゼツイ　甚だしく特にすぐれるの義。後漢書、和熹鄧后紀「姿顏殊麗、一一于衆」

【絶域】ゼツイキ　遠くへだたれる外國。漢書、武帝紀「詔二州郡一察二吏民有可下爲二將相使中一一上者上」‖殊域。

【絶纓】ゼツエイ　冠のひもをきる。楚の莊王の故事。說苑、復恩「燈燭滅、有下引二美人之衣一者上美人援絶二其冠纓一」

【絶遠】ゼツエン　甚だとほし。張九齡詩「江上行一一、林間儔運レ疲」

【絶縁】ゼツエン　○えんをきる。○電氣が他物につたはらざるやうに遮る。

【絶艷】ゼツエン　すぐれてあでやかに美し。又、其の人。李白詩「句踐徵二一一、楊娥入二吳關一」

【絶佳】ゼツカ　すぐれてよし。蘇軾文「惠酒一一」‖絶美。

【絶海】ゼツカイ　○うみをわたるの海路。原詩「蒼鷹一レ主、不レ異二鳳鳥一」○遠く陸を離れたる海中。

【絶崖】ゼツガイ　甚だけはしきがけ。張載、登行賦「緣二阻岩之一一」

【絶巧】ゼツカウ　極めてたくみなり。

【絶交】ゼツカウ　まじはりをたつ。戰國策「西生秦惡二北絶一齊交一、則兩國兵必至矣」晉康に與二山巨源一一書あり。

【絶好】ゼツカウ　○はなはだよし。○絶交に同じ。

【絶學】ゼツガク　中頃たえし學問。

【絶壑】ゼツガク　絶谷。李白詩「攀レ崖渡二一一」

【絶澗】ゼツカン　遠くはなれたる谷。後漢書、梁冀傳「深林一一有レ若二自然一、奇禽馴獸、飛二走其間一」‖絶谷。

【絶巖】ゼツガン　きりたちし如きいはほ。吳地記「虎丘山一一聳レ空」

【絶技】ゼツギ　すぐれたるわざ。班固、答賓戲「逢蒙一二於弧矢一」

【絶奇】ゼツキ　はなはだめづらし。‖奇絶。

【絶棄】ゼツキ　たちすてる。晉書、江逌傳「一二人事一、剪レ茅結レ宇、耽二翫載籍一、有二終焉之志一」‖捨棄。

【絶境】ゼツキヤウ　遠く塵世と隔たれる地。陶潛、桃花源記「來二此一一、不二復出一」

【絶響】ゼツキヤウ　音の絶ゆるが如く死刑に處せられる時、琴を彈じて廣陵散（琴曲の名）も今に於て絶えぬべしと言ひし故事、風流韻事の復見るべからざるを感慨していふ（晉書、嵇康傳贊）

【絶句】ゼツク　四句より成れる詩、五言、七言の二種あり。金史、劉昂傳「作レ詩得二晩唐體一、尤工二一一」

【絶粒】ゼツリフ　くさき葉を食はずの杜甫詩「一レ作不レ改」

【絶望】ゼツバウ　衆にすぐれる。後漢書、隗囂傳「皆蝟之輩、不レ過二數步一、卽託二騶尾一得レ一一」‖拔擢・絶倫・超羣・凌羣・出羣。

【絶滅】ゼツメツ　水路の通ぜざるたまりみづの轉。金文「是猶下航二斷港一一、以望中至於海上」

【絶景】ゼツケイ　すぐれたるけしき。晉清紀聞「於二郡城一一處、增二園樓居一」

【絶藝】ゼツゲイ　すぐれたるわざ。唐書、選擧志「一一奇技、莫レ不二兼取一」‖絶技。

【絶叫】ゼツケウ　大聲にてさけぶ。晉書、宣帝傳「投レ馬一一」

【絶險】ゼツケン　甚だけはし。詩經「修路一一、曾是不レ易」‖絶嶮。

【絶絃】ゼツゲン　○琴の絲をたちきる。伯牙善く琴を鼓し、鍾子期善く聽く、鍾子期死す、伯牙琴を破り、絲を絶つ、おもへらく爲めに鼓するに足るものなしと（呂覽）○轉じて親友の死をいふ。

【絶嶮】ゼツケン　はなはだたかき山の路。賓王詩「薄烟橫二一一」

【絶後】ゼツゴ　後日に又と出ること無し、空前と連用す。宣和畫譜、顧愷之子前、張紹之後」

【絶谷】ゼツコク　深くけはしきたに。‖絶澗・絶壑。

【絶哭】ゼツコク　甚だしくかなしみ泣くの意、相石處傳「古人一一、金革無レ避」

【絶國】ゼツコク　絶域に同じの漢書、武帝紀「其令二州郡一、察二吏民有二茂材異等一可下爲二將相一、及使中一一者上」

【絶穀】ゼツコク　こくもつを食はず。淮南子「一レ一不レ食」‖絶粒。

【絶才】ゼツサイ　すぐれたるはたらき。又、其の人。後漢書、班固傳「此六子者、皆有二殊行一一」

【絶塞】ゼツサイ　遠くかけはなれたる國境のとりで。駱賓王詩「交河浮二一一、弱水沒二流沙一」

【絶四】ゼツシ　執著の心なき義。論、子罕「子一レ、毋レ意、毋レ必、毋レ固、毋レ我」

【絶嗣】ゼツシ　嗣は祀に通ず、先祖の祭を絶つ、國の亡ぶる義。書經「荒二棄其緒一、廢レ宗一レ」‖絶祀。

【絕ㇾ嗣】ゼツシ　子孫がたえる。‖絕緒。
【絕壺】ゼツコ　たえつきる。
【絕唱】ゼツシヤウ　すぐれたる詩歌。晉書、謝靈運傳「一ー高躅、久無二嗣響一」
【絕峻】ゼツシユン　甚だしくけはし。盧世南文「巖壁深限、盤紆ー一」
【絕緒】ゼツショ　あとつぎが絕える。後漢書、陸「ー一宮ㇾ無ㇾ後」
【絕勝】ゼツセウ　○形勢のすぐれたる要地。晉摯詩「險負ニー一元倡伴」○景色のすぐれたる地。○はなはだまさる。韓愈詩「最是一年春好處、ー一絕柳滿二皇都一」
【絕色】ゼツシヨク　○すぐれてよき容色、絕世の佳人。伊尹小名錄「採二古ー一」○物のすぐれて美くしき色。江淹、遊華賦「藥金光面ー一」
【絕食】ゼツシヨク　食事をやめる。周書、樊深傳「ー一再宿」陳餞文「昔人有二因ㇾ憤而ー一、懼ㇾ溺而自沈者一」‖斷食。
【絕瑞】ゼツスイ　すぐれてめでたきしるし。唐書、陳希烈傳「陛下德充二子內一、符應二于外一、必有ニー一表ㇾ之」
【絕世】ゼツセイ　○絕代に同じ。晉書、安帝紀「鎭軍將軍裕、英略紹邈、忠勇ー一」‖延世。○滅びたる世、後嗣なき家をいふ。論、魏曰「臨ニー一」
【絕息】ゼツソク　○たえてやむ。史、始皇紀「災害ー一、永偃二戎兵一」○いきがたえる、死ぬ。
【絕俗】ゼツゾク　○世俗とはなれる。世事を遠棄する。王褒、得二賢臣一頌「聆然ー一ㇾ離ㇾ世哉」○凡俗の上に超出する。後漢書、劉陶傳「眞高ー一」
【絕續】ゼツゾク　きれると、つづくと。成公綏賦「若ㇾ蟬若ㇾ合、將ㇾ絕復續」‖斷續。
【絕大】ゼツダイ　はなはだ大いなり。
【絕代】ゼツダイ　○世に並びなくすぐれる。杜甫詩「ー一有二佳人一、幽居在二空谷一」○古くかけはなれたる時代「郭璞、爾雅序」
【絕對】ゼツタイ　他に對立するもののなき義。相對の對。
【絕體絕命】ゼツタイゼツメイ　四體も命もきはまる、とても逃れられぬ場合。
【絕倒】ゼツタウ　○ころがる程大いに笑ふ。五代史、晉家人傳「左右皆失笑、帝亦自ー一」○感心の極たふれる。晉書、衛玠傳「每ㇾ聞二玠言一、輒歎息ー一」○甚だしくかなしみて其の容を失ふ「隋書、陳孝意傳」
【絕島】ゼツタウ　はなれじま。‖孤島。
【絕端】ゼツタン　物の最もはしのところ。‖最端。
【絕嘆】ゼツタン　甚だしくほめる。晉書、劉毅傳「輒ー一以爲ㇾ不ㇾ可ㇾ能」
【絕倫】ゼツリン　たぐひにぬき出てすぐれる。隋煬帝詩「青散園ㇾ一、羣羽誠ㇾ難ㇾ擬」‖絕倫・絕類・絕羣。
【絕塵】ゼツヂン　○はしることを極めて速かにして、塵埃の上に超然たる義。莊田子方「顏淵問二於仲尼一曰、夫子步亦步、趨亦趨、夫子奔軼ー一、而回瞠二若乎後一矣」轉じて道徳の遠なるに喩ふ。○うきよを離れる。‖絕俗。
【絕頂】ゼツチヤウ　○てっぺん、最上のいただき。王褒詩「檐溜俯二危松一、山窗臨ニー一」○轉じて極點の義。
【絕嶺】ゼツレイ　最上のいただき。‖絕頂。
【絕東】ゼツトウ　ひがしのはて。‖極東。
【絕等】ゼツトウ　たぐひにぬき出てすぐれる。吳均文「眞華照ㇾ物、而以ニー一見ㇾ猜」
【絕特】ゼツトク　はなはだすぐれてゐる。韓愈文「滕王閣痴爲二第一、有二瑰偉ー一之稱一」‖特絕。
【絕念】ゼツネン　おもひきる、諦めける。斷念。
【絕望】ゼツバウ　のぞみをたつ。漢書、文帝紀「天下ー一矣」
【絕遠】ゼツエン　甚だしくはるか。王褒賦「楚楚ー一、山河迥遠」
【絕乏】ゼツバフ　物がなくなりと困し。史、平津侯主父傳「嚮日持久、糧食ー一」
【絕版】ゼツパン　○印刷をやめる。○版木が無くなる。又版木を無くしてしまふ。‖絕板。
【絕ㇾ比】ゼツヒ　ならぶものなくすぐれる。杜陽雜編「精巧華麗ー一ㇾ、絕美ㇾ絕佳に同じ。‖玉美。
【絕筆】ゼツピツ　○書くことをやめる。杜預、左傳序「ニー一於獲麟之一句一」‖絕麟。○圖生涯の最後に書きし書。
【絕艷】ゼツエン　極めてけはしきがけ。世說「桓溫入ㇾ峽、ー一天懸」
【絕脈】ゼツミヤク　脈がとまる、死ぬ。
【絕無】ゼツム　たえてなし。蘇軾文「秦漢以來之所ニー一而僅有一」
【絕命】ゼツメイ　いのちがたえる、死ぬ。
【絕命詞】ゼツメイシ　死に臨みて作る詩歌文章、辭世。漢書、息夫躬傳「書二——一」‖絕命辭。
【絕妙】ゼツミヤウ　すぐれてたへなり。北齊書、鄭道祖傳「能彈ㇾ琴自造二龍吟十弄、云嘗夢二人彈ニ琴、寤而寫得、當時以爲ニー一」
【絕流】ゼツリウ　たえほろぶ。水經、注「今池林ー一、略無二遺跡一矣」
【絕目】ゼツモク　見わたすかぎり。鮑明遠詩「ー一盡平原一」
【絕洋】ゼツヤウ　大海をまっすぐにわたる。宋史、高麗傳「自二定海一ー一而東、抵王、國人歡呼出迎」
【絕流】ゼツリウ　流を橫ぎりて渡る。爾雅「正ー一曰亂」
【絕粒】ゼツリフ　○米穀がなくなる。後漢書、范冉傳「所ㇾ止單陋、有ㇾ時ー一、窮居自若、晉狼無ㇾ改」‖絕糧。○米穀を食はず。北史、魏太尉公欽傳「凡人ー一七日乃死」
【絕倫】ゼツリン　人なみよりはるかにすぐれる。漢書、匡衡傳「經學ー一」
【絕ㇾ糧】ゼツリヤウ　糧米を絕ちて食はず。論、衞靈公「子在ㇾ陳ー一、從者病、莫二能興一」
【絕類】ゼツルイ　絕倫に同じ。

【絶隘】すぐれてうるはし。揚雄文「心好二沈博一一之文一」

【不レ絶如レ縷】縷は線に同じ、いとすぢ。細微にして始ど絶えんとする義。漢書、荊燕呉傳「積益衰微、――」‖不レ絶如レ線・不レ絶如レ髪・不レ絶如レ帯。

【絶無而僅有】全く無くしてたまにある、非常に少し。蘇軾、上二神宗一書」

【條】タウ 蕭

○さなだ、ひらうちのひも（扁緒）○うちひも、くみいと。○馬ー は馬の腹帯。○國ー 蟲 さなだむし、扁形動物の腸内に寄生する多節白色のさなだひもに似たる蟲。

【絰】テツ 屑

喪服を著くる時、首と腰とにまきつける麻の帯「衰ー」

【統】トウ 宋

○すぶ。○すべをさめる（總理）書、周官「冢宰掌二邦治一」百官ニ○あはす（合）「一一」○はじめ（始）○もと（本）○事のいとぐち、事業のはじめ（業緒）○のり（綱紀）○すぢ、つづきあひ「世ー」「系ー」「皇ー」「大ー」「正ー」「道ー」

【統一】すべあつめてひとつにする。漢書、董仲舒傳「下レ帷發レ憤、潜二心大業一、令二後學者有一レ所二ー一一、爲二羣儒首一」‖一統。

【統壹】前條に同じ。

【垂レ統】子孫のうけつぐべき緒ダテをたれる。孟、梁惠王「君子創レ業ー一、爲レ可レ繼也」

【嗣レ統】ちすぢをうけつぐ。漢書、公孫弘傳「ー一垂レ業、物鬼變化、天命之符、應興何如」‖承統・繼統。

【統父】すべをさむ。晉書、陳騫傳「元勳宿德、ー一東夏一」‖統治。

【統轄】すべをさむ。‖統制。

【統合】すべあはす。

【統監】○政事をすべて監督する。北史、劉仁之傳「管二領二城一、仁之作二ー一一」‖總監。國○軍隊の演習を統御する人。○韓國保護時代に日本より簡派せし最高官。

【統御】すべをさむ。魏志、王淩傳、注「一二我馬一、置二齊東夏一」‖總御。

【統馭】前條に同じ、馭は馬を御する。唐長慶德音「臣ー一萬邦」

【統括】すべくくる、すべまとめる。‖綜括・總括。

【統計】○すべはかる。○同種類のものを集め、計數によりて、其の狀態を示す法「ー一學」

【統紀】天下をすべをさめるわざ。史、自序「維我漢、爾二五帝末流一、接二三代ー一一」

【統護】すべまもる。宋史、職官志「宜撫使不二常置一、宜二布威靈一、撫二緩邊境一、及ー二一時帥一、置二觀軍旅之事一」

【統ベ埴】天下をすべ治める。劉基文「惟漢五世、提レ乾ー一」

【統嗣】天子のちすぢ。後漢書、丁鴻傳「諮呂提レ攜、ー一幾移」

【統轄】すべあつむ。漢書、兒寬傳「ー一一羣元」

【統承】すべらく。書經「ー一一先王二修二其禮物一」

【統制】○すべてとりしまる。唐書、高俊賓傳「雖レ悍而寡レ謀、ー一尤非レ所レ善」○官名、宋代より始まる、出征軍の司令官、其の總司令長官を都ー一といふ。

【統帥】すべひきゐる。唐書、穆宗紀「以二ー一功一、遷二司徒一」‖統率。

【統率】前條に同じ。

【統帶】國軍の總司令官。

【統治】すべをさむ。唐書、兵志「以相ー一」

【統治權】一國の元首が國家の平安をはかるに行使する權力。

【統領】○すべをさめる。蜀志、杜微傳「擬以二空虚一一二、貴州二國淵任重、惟慺慺愛慮」‖總領。○すべをさめる、かしら、首長、軍の一部曲の長。

【絣】ヘン 庚

○むぢのきぬ。○つづ（繽）後漢書、班固傳「將ー一萬騎」○わた（綿）○國 飛白。又、其の織物。

【絡】ラク 藥

○まとふ。○くくる（括）しばる（縛）○めぐる。めぐらす（繞）まつはる、からむ「纏ー」○つづく、つながる（連屬）「連ー」○きづな（絆）「玉ー」「金ー」○わた（絮）○つむぎ（紬）○すぢみち、いとすぢ「ー脈」

【絡繹】くつわむし、絡絲娘を見よ。沈周詩「豆葉風涼ー一籬」

【絡緯】馬のむながひ。唐太宗、飲レ馬詩「驟骨飲二長溜一、奔流濺二ー一」

【絡繹】往來のつづきて絶えざる貌。衞恒、四體書勢「鴻鵠翔渚、ー一遵延」‖絡驛・落驛。

【絡絲娘】絡緯ムシの異名。爾雅、翼「蜤蠑以二六月一振レ羽作レ聲、連夜

札札不止、其聲如二紡レ絲之聲一、故一名二機雉一、一名二絡緯一、今俗人謂二之ーー一」ヨ蜡蜡兒。

【絡新婦】ジョロウグモ　蜘蛛の一種、ちよらっくも、全身に黄白黒色の環紋あり、毒蛇だし。

【絡束】カクソク　しばる。漢書、楊王孫傳「支體ーー、口含二生玉一、欲レ化不レ得」

【絡頭】ラクトウ　おもがひ、馬の鞍轡の上につける装飾。杜甫、驄馬行「青絲ーー黄金勒」ヨ絡・羈絡。

【絰】ルキ　紙

○糸（糸部五畫）の古字、かさぬ。○一絲の十分の一（十黍のおもさ）轉じて極めて微小の喩とす。漢書、律歴志「權二輕重一者、不レ失二黍ーー一」

七畫

【絣】エン　先　銑

おはひ、冕（縫腋）の上を覆ふ板にて黒色の布を張りて作る。左、桓二「衡紘紘ー」

【綆】カウ　梗

つるべなは、るどなは「汲ーー」莊、至樂「精小者、不可以懲大、ー短不可汲深」（才の小なる者は重任にたへざる喩）ヨ統。

【綆縄】コウセウ　つるべ縄を下す。劉禹錫文「懸書ーー、日中不レ見」

【經】クイ　キャウ　青

○たて、たていと。緯の對。○たて（縦）○すぢ（系脈）○ちまた（道路）南北をーー、東西を緯といふ。○さかひ（境界）「ー界」界を分ち定める。周禮、天官「體二國一ー野」○つね、のり（常理・常法）いつも變らぬ道理。孝經、三才「夫孝者天之ーー也」○ふ、とほる「ー過」「ー歴」「ー驗」「ー年」道程にも歳月にも事業にも用ふる。○はかる（度）工事の測量をする。孟、梁惠王「ーー之營之」○をさむ（治）統治する。左、隱十一「ー二國家」○くびる（縊）論、意問「自ーー於溝瀆」かける（繋）ひき繋ける。史、田單傳「遂ーー其頸於樹枝」○おる（織）○みちをつく。○よる（山）○したがふ（順）○いとなむ（營）○儒教にて聖人の著したる書籍「ー學」「五ーー」「明ーー」「孤ーー」○佛說を記せし書籍「梵ーー」「佛ーー」○かつて、いままで、曾ーと連用するも同じ。○女子の月のもの「月ーー」「ーー水」

【經營】ケイエイ　○たていとと、よこいとと。順序正しくをさめる。左、昭二八「ーー天地一曰レ文」○地の東四を經、南北を緯といふ「大戴禮、易本命」○經度と緯度と。○圖なりゆきの事情。

【經由】ケイユ　とほりよる。王昌齡詩「末代多二艱危一、卿相盡ーー」

【經院】ケイイン　聖人の書を講ずる堂。高啓詩「ーー蕭深秋講散」

【經營】ケイエイ　○家屋をはかりいとなむ、經始を見よ。○事業をはかりいとなむ。

【經延】ケイエン　のびわたる。何晏傳「ーーニ歳月一而無二瑕疵之期一」

【經筵】ケイエン　天子が經書の講義を聞く席。宋史、哲宗紀「不レ俟レ進レ食、即御ーー」

【受レ經】ケイヲウ　經書の教をうける。漢書、艾侯博傳「勝顧既久繫、詔欲レ從レ勝ーー、勝辭以二罪死一、顧曰、朝聞レ道夕死可矣、勝竟二其言一、遂授レ之」

【帶レ經而鋤】ケイヲテシカス　經書を擔へながら田をすく。漢書、兒寬傳「寬治二尚書一、貧無二資用一」ーー、息則誦讀」

【寫レ經換レ鵝】ケイクワンシュ　王羲之が道徳經を寫して、鵝に換へたる故事。晉書、王羲之傳「山陰有二道士一、養二好鵝一、羲之往觀焉、意甚悅、固求レ市之、道士云、爲寫二道德經一、當二擧レ群相贈一耳、羲之欣然寫畢、籠レ鵝而歸」

【引レ經】インケイ　經書を引きて證據とす。高適詩「匡衡多ーー」

【卷レ經】カンケイ　聖人の書をまきをさめる。北史、鄭道昭傳「頑傲者徳、ーー而不レ誅」

【枕レ經籍レ書】シンケイセキショ　深く讀書にふける義。班固、答賓戲「徒樂二枕レ經籍一、紆二青紫一、擁二衡門一」

【守レ經】シュケイ　常の正しき道をまもる。漢書、貢禹傳「有二伯夷之廉、史魚之直一、ーー據レ古、不レ阿二當世一」

【經界】ケイカイ　さかひ。孟、滕文公「夫仁政必自二ーー一始」

【經學】ケイガク　孔子の教を究むる學問。漢書、兒寬傳「見レ上語二ーー一、上說レ之」ヨ經術・儒學。

【經紀】ケイキ　○すぢみち。後漢書、皇甫規傳「故有二ーー禮義一」ヨ紀律・綱紀。○すぢ道を立ててをさめる。淮南子「二ーー山川一」○善く生を營む、生活上の世話をする。韓愈、柳子厚墓誌銘「既往罪子厚、又將レ二ーー其家一」○仲買人。ヨ牙人・牙儈。

【經義】ケイギ　書經の意味。漢書、張禹傳「講二論ーー一」

【經過】ケイクワ　とほりすぎる。庾信詩「漢使絶二ーー一」ヨ經歴。

【經卷】ケイクワン　○聖人の著したる書物、四書・五經の類。後漢書、劉梁傳「手

執ニ——ニ」＝經書。○ケイサン佛教の書。＝佛經。

【經義】ケイギ 經術に同じ。史、儒林傳「漢興然後、諸儒始得レ修ニ其ニ——ニ」

【經業】ケイギョウ ○つねの定りしごと。史、貨殖傳「富無ニ——一則貨無ニ常主ニ」○經學の修業。後漢書、鄭康成傳「隱修ニ——、杜レ門不レ出」

【經驗】ケイケン 實際にためす。又、それによりて得たる知識。

【經國】ケイコク 國家を治める（晉書、宣帝紀）次條參看。

【經國大業】ケイコクタイギョウ 國を治めるに要用なるわざ。文章をいふ。魏文帝、典論「文章經國之大業、不朽之盛事」

【經濟】ケイサイ ○國を治め民をすくふ。文中子「皆有ニ——之道ニ」＝經世濟民。○國現財の義とす「——學」○つましくする、節儉、儉約。

【經濟學】ケイザイガク 人類又、國家の財貨に對する關係を研究する科學。＝理財學。

【經史】ケイシ 經書と歷史と。方回詩「——入二胸中一、元陵堆二黃壤一」

【經史子集】ケイシシシュウ 經書と歷史との本籍、人の博學なるを稱する辭。梁書、許懋傳「永元中轉二散騎侍郎兼國子博士一與二司馬樂一同レ志友善、俱射江祐雅重レ之、號爲ニ——一」

【經史子集】ケイシシシュウ 經書と、歷史と、諸子と、詩文集と。支那の書物の分類法の階梯、經籍志に始まる。

【經旨】ケイシ 聖人の經書のむね。柳宗元文「儒言ニ——、夙有二開知一」

【經始】ケイシ 家屋を建てはじむ、經は地を測量する。詩、大雅「ニ——靈臺ニ、經レ之營レ之」

【經師】ケイシ ○經書を教ふる教師。漢書、平帝紀「校學僮ニ——一人」○經行なくしてただ經書を授けるのみの教師（道德を以て人格を養成する者を人師といふの對）通鑑、後漢和帝紀「魏昭謂二郭泰一曰、——易レ遇、人師難レ遇」○ケイサク昔經文を寫物又折本などにしたてたる人、今は裝具屋をいふ「——屋」

【經商】ケイショウ 各地を經めぐる行商、經は經歷の義（水滸傳、第二回）

【經常】ケイジョウ 一定してかはらず「——費」唐書、食貨志「古之善治二其國一、而愛二養斯民一者、必立ニ——簡易之法一」

【經術】ケイジュツ ○儒教の經義に本づきて得來りたる政治上のはたらき。史、東平思王傳「草二修ニ——一」

【經書】ケイショ 聖人の書きし書物。史、游俠傳「論ニ——一」

【經水】ケイスイ つきやく。＝月經。

【經世】ケイセイ 世を治めること（莊、齊物論）

【經制】ケイセイ 國家を治める制度。又、經理節制の義。宋史、陳傅良傳「於二古人一——治法一尤精」

【經星】ケイセイ ほしの名。穀梁傳「恆星者、——也」

【經緯】ケイイ 聖人の教の綱。晉書、杜預傳「立功之後、從容無事、乃取二思一——一」＝經書・增緯。

【經說】ケイセツ 聖人の書の言說。梁武帝文「如レ是皆是——、不レ可レ不レ信」

【經涉】ケイショウ へわたる。晉書、涼武昭王傳「晉自レ立レ身、不レ堂二世利一、——累朝一、通否任レ時」＝歷涉。

【經線】ケイセン 地球の表面に緯線と直交して兩極を連結する想像上の大圈線。

【經傳】ケイデン 經は聖人の書、傳は賢人の著述。漢書、藝文志「詔二光祿大夫劉向一、校ニ——一」

【經天緯地】ケイテンイチ 天下を治める。成信、疑達珠「——之才、拔山超海之力」

【經度】ケイド 地球を東西に三百六十分せし度。緯度の對。

【經德】ケイトク ○人の守るべき平素の道德。孟、盡心「——不レ回」回は邪。○德を常にする、德を守りて變らず（書、酒誥）

【經年】ケイネン 幾年もすごす、年來。

【經邦】ケイホウ くにをさめる。書、周官「兹惟三公、論レ道ー、變二理陰陽一」＝經國。

【經法】ケイホウ 經書の意義と禮法と。韓愈、送二殷員外一序「學有ニ——一」

【經費】ケイヒ つねの費用。史、平準書「不レ領二於天子之ニ——一」

【經武】ケイブ 兵備ををさめる。左傳「貪レ冦攻レ昧、武之善經也、子姑整レ軍而レ——乎」阮籍、咏懷詩「才非二允文一器非ニ——一」

【經文】ケイブン ○佛教の經書の文。○佛教を記したる根本の文。おきゃう。＝佛經。

【經文緯武】ケイブンイブ 文を經とし武を緯とする、文武兩道を兼ね備へる。＝鏤武經文。

【經ノ野】ケイヤ 田野を經理する。周禮「體レ國ーレ——」

【經絡】ケイラク 身體のすぢと脈と。

【經理】ケイリ ○常の法によりてをさめる。○其のすぢみち。荀、解蔽「道也者治之ニ——也」○經書の義理。後漢書、光武紀「講二論ニ——一、夜分乃寢」

【經履】ケイリ へめぐる、經來る 遊歷する。後漢書、應奉傳「奉少聰明、自レ爲二兒童一及レ長、凡所ニ——一、莫レ不二暗記一、說レ書五行並下」＝歷履。

【經綸】ケイリン 天下を經營しをさめる、綸を理ゐめるに比す。易、屯卦「君子以ニ——一」

【經歷】ケイレキ ○久しきを經、遠きを歷る（書、君奭）○ふるすぎる 過去の事歷。＝履歷。

【經戒】キョウカイ 佛經に說くいましめ。梁書、孔休源傳「篤信二佛理一、遍持二一

一こ
【經函】ケイカン　佛書を入れるはこ。洛陽伽藍記「一一重レ今猶存」
【經木】キヤウ　図檜・杉等の木材を薄にて削りし薄片。昔時之に佛經を寫したりといふ。今はさなだ紐に編みて夏帽子を造る。
【經藏】ケウザウ　寺の一切經を藏する書庫。
【經呪】ケイジユ　佛に向ひて唱ふるいのりごと。隋書、眞臘傳「毎日淸旦、以二楊枝一淨レ齒、誦二一一一」
【經律】ケイリツ　〇佛道ののりの源典、釋後主紀「僧尼道士、挾レ邪左道、不レ依二一一一、竝皆禁絕」〇ケイつねののり。葉適詩「毎餐莊周齊物論、洗到暗濁遂二一一」

【綌】ゲキ　図
あらきくずぬの。又、其の衣服。詩、周南「爲レ絺爲レ綌」（絺は精細なる葛布）

【絹】㊀ケン　㊁ケン　鉄　㊀
㊀きぬ、けんぷ、羅絲にて織りし織物。㊁わた。〓胃。
【絹絲】ケンシ　きぬ張りのうちは。晉書、安帝紀「集二一一及楊滿一」
【絹索】ケンサク　書漬をかく白き絹。歷代名畫記「今之畫人、筆墨過二於埃塵一、升堂三晴嫁一」

青和二其泥津一、徒汙二一一一豈曰二繪畫一」
【絹絹】ケンケン　きぬ織物の一、梓澤の絲にて織りたるもの。〓繭紬。
【絹中】ケンチウ　わなのなか「周禮、秋官注」
【絹帛】ケンハク　きぬ。魏志、武宣卞皇后傳、注「脫二與一一」
【絹布】ケンフ　〇きぬと、もめんと。晉書、安平王孚傳「一一各五百匹」〇圖きぬ織物。〓絹帛。
【絹糸】ケンシ　きぬ地に書きし書畫。紙本の對。
【絹絲】ケンシ　きぬと、わたと。唐書、地理志「天寶四二山川形便、分二天下一爲二十道一、一曰二關內道一、賦賦一一市易、賦貢毛羽革角布席」

【綏】シン　図
いと、あかきいと（絳綫）「朱一」

【練】シ・ソ　鉄
〇紡ぎたる粗き絲。〇くずぬの、緒の屬。
【練雲竹筍】シウンチクジユン　女を嫁するに、したくの粗末なるをいふ。後漢書、賊良傳「賊良五女並賢、每有レ求レ婦、輒便許嫁、練裳布被、竹筍木屐、以道レ之」蘇軾詩「竹筍與二練裙一、豚時事三晴嫁一」

【綏】㊀スイ　㊁タ　支　寄
㊀とりてのひも、車中の把、車にのぼりて立つ時、身を安んずる爲めにとりてのぼるひも。論、鄉黨「必正立執レ一」〇轉じてやすし。やすんず（安）論、子張「一レ之斯來」〇しりぞく（卻）軍隊が退く「交一」〇一一は蛇びて行く貌。又、毛の長き貌。又、おだやか（安泰）なる貌。〇黍稷を供へて尸を祭る。〇かんむりのひも。〇はたざさり。㊁やすし（安）〓安。〇くだす（下）
【綏安】スイアン　綏・安・寧・康・泰・易の關は安（山部三畫）の條を見よ。
【綏退】スイタイ　やすんじとどむ。魏書、宇文福傳「一一變施」
【綏懷】スイクワイ　やすんじなぐさむ。唐書、楊綰仁傳「悉レ心一一由二恩義一、以東、皆率二貢賦一」〓撫懷・循懷。
【綏遠】スイエン　遠き地方をやすんずる。宋史、蔣維岳傳「朝廷寄以二一一一」〓定遠。
【綏卹】スイジユツ　やすんじをさむ。後漢書、班固傳「一一之方、其益不レ一」〓綏恤・御撫。
【綏恤】スイジユツ　やすんじなつける。唐書、許紹傳「一一士庶」
【綏祭】スイサイ　黍稷を供へて尸をまつる。禮、曾子問、疏「謂下欲レ食之時、先減二黍稷牢肉一而祭中之於豆間上故曰二一一一」
【綏集】スイシフ　やすんじ和ぐ。後漢書、西域傳「班超留二于寘一、一一諸國」〓安集・和集・綏緝。
【綏緝】スイシフ　やすんじやはらげる。後漢書、伏隆傳「招懷一一、多來降附」〓綏集・緝綏・懷緝・安緝。
【綏綏】スイスイ　〇安泰なる貌。禮、儒效「一一兮其有二文章一」〇ならび行く貌。詩、周頌「有レ狐一一」
【綏靖】スイセイ　民をやすんずる。吳志、陸遜傳「敬二服王命、一一四方一」〓綏寧・靖綏。
【綏靜】スイセイ　やすんず。左傳「文公恐懼、一一諸侯」
【綏族】スイソク　やからをやすんず。張衡賦「糾レ宗一レ綱制二蒼昏一」
【綏定】スイテイ　國家をやすんじ定める。後漢書、宣帝紀「胶東二至境、未レ能一一」〓安定・鎭綏。
【綏寧】スイネイ　やすらか。やすんずる。司馬光詩「疲俗待二一一一」〓安綏。
【綏撫】スイブ　たみをやすんず。張昭良詩「有レ謀當レ緊レ酬、無レ職且レ一レ」
【綏撫】スイブ　やすんじてなで愛する。吳志、孫瑜傳「虛心一一、得二其歡心一」〓撫綏。
【綏遠】スイエン　遠地の民をやすんず。吳

志、薛綜傳「―ノ―撫ノ衆、實有ニ其人一」‖綏遠、鎮遠。

【絹】（ケン）㊀㊁ 五 適

㊀うすぎぬ（雑穀）「雑―」○きぎぬ「生―」○おやぎぬ。○しろきぬ。㊁ほばしら、帆をかける長木。

【絹紬】うすきしろきぬ。國語、晉語「衛ノ醉揮ニ射子ー一紛絡之上一」

【絹綃】うすぎぬ。揚雄「相去數丈之間、如ノ隔ニ一ー一」‖殺絹。

【絹素】白きぎぬ。歴代名畫記、古人多ク以ノ素ヲ爲ノ妙、若能絹ニ一ー一、則ニ一段精粉、綾ニ日改ノ之、謂ニ之吹雪一。

【絹紋】うすぎぬのあや。

【絺】（チ）亥

ほそ絲の葛布ノ又其の衣服「葛ー」「綌ー」

【絺綌】葛布のこと。詩、孔子世家

【絺繡】葛布と、わたと。轉じて夏と冬との衣。張敞詩「―時ノ變ノ裕、ー一忽驚ノ年」

【絺紵】絺は葛布の細かなるもの、紵は麤きもの。詩、周南「爲ノ絺爲ノ紵」論、鄭箋「儉」暑參ー一」

【絺紵】絺は細細なるくずぬの、紵はいちび麻にて織りたる布。書、禹貢「厥貢、漆枲ー一」淮南子「冬日被ノ絺、夏日服ニ一ー一」

【綃】（チン）參

うしのはなづな。‖剛。

【綈】（ティ）寒

つむぎ、あしぎぬ、粗くしてあつきぎぬ（厚綿）

【綈几】あつぎぬを加へたるひぢつき。西京雜記「天子ー一、冬則加ニ綈錦其上一」

【綈袍】厚きぬ、つむぎの類。漢書、王嘉傳「賜ニ一ー一領一被一」

【綈袍】わたいれのあしぎぬの上衣。史、范雎傳「取ニ一ー一與ニ綈袍ノ之」

【綉】（トウ）冬

○綿の一片。○俗に繡（糸部十二畫）と同じく用ふ。

【統】

統（糸部六畫）の俗字。

【綘】

繁（糸部十一畫）に同じ。

【綍】（フツ）物

○おほづな（大索）禮、緇衣「王言如ノ綸、其出如ノ一」○ひつぎなは、棺を引くなは（棺索）‖紼。

【絽】（ブン）㊁（ベン）㊀ 問 勉

㊀襲を發する時に著る服。○ひつぎなは、棺をひくつな。㊁かんむり。‖冕。

【絽】（リョ）遇

○無地のきぬおりもの。○圖。極めてうすき絹織物。

【綛】［國字］

○かすり（絣）○かせいと。

八畫

【綱】（カウ）陽

○つな、おほづな（大繩）○あみ（網）の目をすべるおほづな。書、盤庚「若ノ網在ー有ノ條而不ノ紊」○轉じて物事をとりしまるのり「一紀」「朝ー」又、人の常に守るべき大いなる道「ー常」「三ー」○すべる、すべ治める。詩、大雅「ー紀四方」○くくる、つなぐ（係・繋）周禮、馬質「ー惡馬」○同類のものの大いなる類別。目の對「一目」○つら、なみ（列行）○貨物若干を一つに結合して運輸するにいふ「茶ー」「鹽ー」「一運」

【綱擧目張】大綱を擧ぐれば細目も自ら明かになる、綱目參看。

【綱維】○おほづな、國家の法度。史、稚陰侯傳「秦之綱維廢弛」‖綱紀。○寺にて事務を管掌する者の稱。西陽雜俎「其寺ー、錄日錄ニ竹平安一」

【綱要】綱領となる最要の點。筆柔、近思錄、序「請ー、熹求ニ朱子焉注一」

【綱鑑易知錄】（カンイシロク）九十二卷、清の吳乘權撰す、別に朱國標の編せし明鑑易知錄十五卷あり、今之を合刻して一部と爲す、編年體の歴史にして、前鑑の頗る簡明なるを以て、歴代の事實を知り易からしむ、和版あり。

【綱紀】○大づなと小づなと。國家を治めるのり。陰符經、往厝之術「綱乎若道、天地之ー一、布王之肚非ー一‖紀綱・綱維。○國家をすべ治める。綠を治むるもの、之を張るを綱と爲し、之を理むるを紀と爲す。詩、大雅「ー一四方」

【綱常】人の守るべき大道、三綱（君爲ニ臣綱一、父爲ニ子綱一、夫爲ニ婦綱一）と五常（仁・義・禮・智・信）の略。

宋史、黄味道傳「正ニ一ニ」
【綢條】ちゅうのり、おきて。晉房喬、王劭傳、贊「不ノ能ノ裂ニ冕一ニ、然以謹重ニ知ノ名」
【綢目】ちゅうもく 物の大わけと小わけと「通鑑一一」詩經、序「裁ニ綱ニ而萬目張、ぎょくニ參画梁綱明」
【綢理】ちゅうり すべをさめる。晉孟文「一ニ一天下一軼ニ於萬祖ニ」‖綱紀・統治。
【綢繆】ちゅうびょう おぼもと、おぼぐくり。晉書、刑法志「不ノ足ノ載ニ車上下一一ニ」

【綺】キ 綾

○あや、あやぎぬ(文綾)もやうのある絹「錦一」其のあやもやうの組めにして經緯に順はざるもの。りんず(綸子)○もやう、いろつや(文藻彩色)○うつくし、かざりてたくみなること「一語」○緣一は司馬相如の琴の名。
【綺衣】きい あやぎぬのころも。史、倚如傳「補裨一一」
【綺雲奥論】きうんおうろん うつくしき雲と、赤きかすみと。江淹賦「乃有ニ綺雲之館、紅霞之臺ニ」
【綺延】きえん 美くしきむーろ。陳子昂詩「金尊對ニ一一ニ」‖綺席。
【綺麗】きれい うつくしくあでやか。北史、辛德源傳「晩飾遠風、枕ニ綺六經ニ漁ニ獵百氏ニ文章一一、體調清華」‖綺麗。
【綺羅】きら うつくしき夕やけ。蕭統、七召「一一映ノ水、鮮月昇ノ天」
【綺閣】きかく うるはしきたかどの。謝朓詩「青樓一一已含ノ春」‖綺樓。
【綺檻】きかん 美くしきてすり。王勃、七夕賦「珠龍一一北風發、機戸雌霓南向開」‖綺檻。
【綺花】きか うつくしきはな。梁簡文帝詩「一一非ニ一種ニ」
【綺紈】きがん あやぎぬと、ねりぎぬと。美くしき織物。又、其の衣服。後漢書、王符傳「錦繡一一」
【綺觀】きかん うつくしきたかどの。宋史、后妃傳「椒殿一一、千門萬戸」
【綺戸】きこ あやぎぬもて飾れるとびら。張衡詞「瑣窗一一組ニ風色ニ」
【綺語】きご ○巧にかざりたることば。梁武帝文「但所ノ言悉美、皆非ニ事實ニ不ノ無ニ一一之過一」○佛語飾の語、十惡の一。
【綺疏】きそ あやあるうすぎぬ。史、孟嘗君傳「今君後宮蹈ニ一一、而士不ノ得ニ短綃一」
【綺藻】きそう ○美くしきかざりくさもやう。于昭、明堂賦「綵以ニ一一、施以ニ丹雘一」○うつくしき詩文。十六國春秋「荷堅覽而奇之、此文一一清麗、最卿傳也」
【綺羅】きら あやぎぬ。劉基詩「獻ニ霞蹈ノ綺席一一」
【綺羅】きら あやありてうるはし。禮書、景福殿賦「○美くしくいりまじる【何晏、景福殿賦】○ごたごたにまじる。新論「眞僞一一、賢愚雜錯」
【綺思】きし 美くしき思想。梁簡文帝詩「一一曖霞飛」‖綺情。
【綺猶】きゆう あやぎぬのそで。蔡邕文「一一丹裳、蹈ニ霄絲履一」
【綺室】きしつ うつくしき(や。後漢書、仲長統傳「妖童美妾、填ニ子一一、倡謳妓樂、列ニ乎深堂一」
【綺繡】きしゅう うつくしきぬひもやう。漢書、地理志「其俗彌侈、織ニ作冰紈一一綈綺之物一」
【綺麗】きれい うるはしく色づきたる木。江淹、四時賦「憶ニ王國之一一一」
【綺窗】きそう 美くしきまど。夏侯惠、景福殿賦、仰觀ニ一一、周覽ニ蓼宮一」
【綺羅】きら 衡宮くあやあるはなし。陸機詩「高談一何綺、前若ニ朝霞開一」
【綺陌】きはく うつくしきみち。王涯、遊春詞「綠見春光生ニ一一」
【綺閣】きかく 美くしくはでやか。陸機、文賦「詩緣ニ情而一一」
【綺筵】きえん あやぎぬのとばり。陶弘景、尊像畫讃「瑤席玉檝、一一繡巾」
【綺夢】きむ うつくしきゆめ。梁昭明太子、錦帶生ニ一一」
【綺羅】きら あやぎぬと、うすぎぬと。婦人衆詞「車乘塡ニ街衢一一、盈ニ耳寺ニ」
【綺綾】きりょう あやぎぬ。劉基詩「獻ニ霞蹈ノ綺席一一」
【綺羅】きら ○あやありてうるはし。禮書、景福殿賦「○美くしくいりまじる【何晏、景福殿賦】○ごたごたにまじる。新論「眞僞一一、賢愚雜錯」
【綺思】きし 美くしき思想。梁簡文帝詩「一一曖霞飛」‖綺情。
【綺猶】きゆう あやぎぬのそで。蔡邕文「一一丹裳、蹈ニ霄絲履一」
【綺室】きしつ うつくしき(や。後漢書、仲長統傳「妖童美妾、填ニ子一一、倡謳妓樂、列ニ乎深堂一」
【綺繡】きしゅう うつくしきぬひもやう。漢書、地理志「其俗彌侈、織ニ作冰紈一一綈綺之物一」
【綺麗】きれい うるはしく色づきたる木。江淹、四時賦「憶ニ王國之一一一」
【綺窗】きそう 美くしきまど。夏侯惠、景福殿賦、仰觀ニ一一、周覽ニ蓼宮一」
【綺羅】きら 衡宮くあやあるはなし。陸機詩「高談一何綺、前若ニ朝霞開一」
【綺陌】きはく うつくしきみち。王涯、遊春詞「綠見春光生ニ一一」
【綺閣】きかく 美くしくはでやか。陸機、文賦「詩緣ニ情而一一」
【綺筵】きえん あやぎぬのとばり。陶弘景、尊像畫讃「瑤席玉檝、一一繡巾」
【綺夢】きむ うつくしきゆめ。梁昭明太子、錦帶生ニ一一」
【綺羅】きら あやぎぬと、うすぎぬと。婦人衆詞「車乘塡ニ街衢一一、盈ニ耳寺ニ」
【綺綾】きりょう あやぎぬ。劉基詩「獻ニ霞蹈ノ綺席一一」
【綺羅】きら ○あやありてうるはし。禮書、景福殿賦「○美くしくいりまじる【何晏、景福殿賦】○ごたごたにまじる。
【綺繡】きしゅう 美くしきたかどの。唐明皇詩「一一遲步入ニ一一」

【綦】キ 支

○履のひも(履繫)「履一一」○もえぎ、青黑き色、緑色、蒼艾色。女の服の色。詩、鄭風「縞衣一一巾」○きはむ。きはまる(極)苟、王制「日欲一一色」

【緊】キン 軫 俗字

○かたし(堅)○ちぢむ(縮)「一縮」○せまる、急ぐ事がら「一急動議」○きびし(急)○まつはる(糾)きびしく絲をまとひあはす。
【緊要】きんよう 最も大切なり。政刑大觀「係ニ一一事件「卽登簿」
【緊急】きんきゅう ○絃をきびしく張る。傅毅、舞賦「弛ニ一一之絃張ニ今」○必要に迫る事がら。
【緊急】きんきゅう きびしく、もつれる。楚辭「心一一兮傷懷」‖糾纏。
【緊密】きんみつ きりつめてせまし。圖畫見聞志「其體格緊一而衣服一一」
【緊縮】きんしゅく ひきしまる。ひきしめる。
【緊切】きんせつ ○極めてきびし。‖急切。○甚だ大切なり。○甚だ適切なり。
【緊捉】きんそく きびしくつかむ。
【緊張】きんちょう きびしく張る。十分に張

りつめる。

【緊那羅】キンナラ 梵 天龍八部の一。人に似て頭上に角あり、香樂の神。＝人非人、疑人、疑神。

【緊密】キンミツ かたくしてすきまなし。夢溪筆談「磚遶城、一一如レ石、劖レ之皆火出」

【緊要】キンエウ ともづなをかたく結ぶ。陳遵詩「一一下賢豪」

【綮】ケイ 圓 霽

㊀はたじるし、しるしばた（徽幟信）○ほこのさや（戟衣）＝綮。㊁肯一は筋肉の結ぶ處。莊、養生主「技經肯一之未嘗」轉じて事理の緊要の處をいふ。

【綣】ケン 圓 阮

綣一はねんごろにする、情厚く、つきまとひて離散せざる貌（詩、大雅）

【綟】㊀コン ㊁コン 元 阮

㊀なは（繩）○織りたるおび（帶）後漢書、南匈奴傳「童子佩刀一帶各一」㊁綟皮は西域のえびすの名。史、匈奴傳「自關以西、有綿諸一戎」＝混夷。

【綟帶】キンタイ 織りたるおび。字解參看。

【綵】サイ 蟹

○あや、いろどり、あやもやう（彩文）「文一」「五一」いろいと（色絲）○あやぎぬ、もやうのある五色のいろどりある織物（五色綿）又、其の衣服。

【綵輿】サイヨ 美くしくいろどれるまく。宋史、禮志「百貨縣レ市、錦以二一一」＝綵帷。

【綵衣】サイイ 五色にていろどれる衣服。杜甫詩「遠傳冬筍味、更覺一一春」＝綵服。

【綵衣娛レ親】サイイゴシン 老萊子が年七十にして嬰兒の戲を爲し、五色の衣を著て母を喜ばしたる故事（高士傳）曹植詩「伯瑜年七十、綵衣以娛レ親」（綵伯瑜をいふ）

【綵鷁】サイゲキ 色絲にてかざりたるまり。李白、宮中行樂詞「紫女鳴二琴佩一、天人奏二一一」

【綵花】サイクワ つくりばな、造花。梁龍文館記「出二一一賜二近臣武平一一」＝綵華。

【綵華】サイクワ 前條に同じ。

【綵絢】サイケン 美くしきあやもやうある絹織物。

【綵縑】サイケン 五色のあやあるかとりぎぬ。劉克莊詩「一一百段支女樂」

【綵宋】サイソウ 色絲のなは。吳融詩「一一機二驚吹一黃鸝啼二落花一」

【綵絲】サイシ いろいと。白居易詩「一一牽二雪引一」＝綵綫。

【綵漆】サイシツ いろうるし。晉書、輿服志「以二一一畫二輪轂一、名曰二畫輪車一」

【綵勝】サイショウ つくりばな。初學記「人日剪レ綵爲二一一一、（人日は、正月七日）＝剪綵。

【綵繩】サイセウ 色絲のなは。盧照鄰詩「一一挽レ花去、輕裘度レ閣來」＝綵索。

【綵船】サイセン 五色にて美がきかざれふね。宋史、禮志「眞宗東封二泰山一、所レ過州府、上御二子城門樓一、設二山車一一、載レ樂」

【綵綫】サイセン いろどれる詩篇。賈島詩「抄書上二一一」

【綵線】サイセン 美くしくいろどりしたるいと。＝綵絲。

【綵組】サイソ 美くしき色のくみひも。晉書、輿服志「皆帶レ綬、以二一一一爲二綬帶一」

【綵仗】サイヂヤウ うつくしき儀仗。沈佺期詩「北闕晴空一一來」

【綵帳】サイチヤウ いろぎぬのとばり。沈佺期詩「燕姬一一美容色」

【綵扇】サイセン 美くしくいろどれるへや。顏延之賦「周以二畫廊一匝以二一一一」

【綵棚】サイホウ 木を架し、綵帛を張りて覆蔽となすもの。通典「隋大業年、外國來朝、煬帝於二端門外一列爲二戲場一、百官一一夾レ道、從レ昏達レ旦、縱二觀之一」

【綵鳳】サイホウ 美くしき色のほうわう。謝朓詩「一一鳴二朝陽一、玄鶴舞二清閨一」

【綵籃】サイラン 美くしくいろどれるかご。蘇軾文「大集二金榮一一以獻」

【綵機】サイキ いろどれるともづな。隋遺錄「錦帆一一、窮二極侈靡一」

【綵綾】サイリヨウ いろどれるあやぎぬ。張渭表「新衣二稱、虹霓開出、一一五色、鸂鶒互飛」＝文綾・綺綾。

【綵龍】サイリヨウ いろどりたるいとすぢ。蘇軾詩「捧レ箱一一看二新綵一」

【綵翎】サイレイ 美くしき色のはね。朱松詩「關關射レ鴨弓、一笑翻二一一」

【綵樓】サイロウ うつくしきうてな。夢華錄「京師七夕、貴家多結二一一於庭一、謂二之乞巧樓一、里巷與二妓館一、列二之門首一、修飾相尚」

【綵繡】サイシウ 美くしくいろどれるかご。韓愈詩「青幬紫蓋立童僕、細雨浮塵作二一一一」＝綵籃。

【綷】㊀サイ ㊁スキ 隊 支

㊀ふぎぬ、五色のきぬ。史、司馬相如傳「一雲蓋而樹二華旗一」㊁一縩はきぎぬ（紈素）のすれあふ聲。繡田賦「綃紈一縩」

【緇】㊀レ ㊁シ 支 紙

綃は正字

㊀くろいろ（黒色）周禮、考工

記「七入爲緅」染めて七次に至るをいふ。○くろいろのきもの(黒衣)黒染の衣「一衣」○轉じて僧侶、黒色のころもを著るに由る「一徒」㊀くろむ、黒色にそめる。論、陽貨「不曰白乎、涅而不一」

【緇衣】イ○黒色の衣服、古、卿士が平居の時の服。詩、鄭風「一一之宜兮、敝予又改爲兮」○すみぞめのころも、僧衣、轉じて僧侶の服とす。

【緇帷】ヰすみぞめのころもを著て、僧となる。高啓詩「一一別二家人一」

【緇黄】ヰクワウ　僧と道士との道士は黄冠を著るが故。‖僧道。

【緇素】ヰソ○くろきと、しろきと。孔叢子「以二緑縢一加二之女工一爲二一一青黄一色名雖レ殊、其實則一」○僧と俗と、素は白色の服、俗人をいふ。梁元帝文「一一結レ懽、義或延レ道」

【緇塵】ヰヂンくろくよごれたちり。「由門二一一一、振二錫問一病室一」

【緇降】ヰカウくろきちりによごれる、黒に染めて衣服がけがれる。李益詩「少游二京洛一共二一一一」

【緇涅】ヂネ　黒色に染むる。劉綱詩「伊余久一一、復得レ味二茗溪一」

【緇徒】ヰト　僧侶。孟浩然詩「卓錫依レ松艘、一一換レ錫迎」‖緇侶・緇流・僧徒。

【緇服】ヰフク　黒色の衣服。水經「一一思レ主之士、施二裳含一之夫」

【緇布冠】ヰフクワン古、冠禮を行ふ時、初に——を加へ、次に皮弁を加へ、次に爵弁を加ふ、漢代、名を進賢冠と改め、文儒の服と爲す。

【緇磨】ヰマ　くろし。顧愷論「繪素不レ絶二自分子一一」

【緇流】ヰリウ　僧侶。盧綸詩「泯レ跡在二一一一」‖緇徒。

【緇林】ヰリン　林荒りて黒き雛鳥の如きをいふ、孔子が其の下に遊びしによりて、道を講ずる處の稱とす。莊、漁父「孔子遊二乎緇帷之林一、休二坐乎杏壇之上一、弟子讀レ書、孔子絃歌鼓レ琴」

【緇衣】ヰイ　くろもと、うすろぐとの服、陽貨「不レ曰レ堅乎、磨而不レ磷、不レ曰レ白乎、涅而不レ緇」李白詩「道經無二一一一一一黄塵一」

【緇侶】ヰリョ　僧侶。任昉文「一一之澄練、同場之洗浄」‖緇徒・緇流。

【緦】シウ　尤　ソウ・ス　尤

○青と赤との間色、紫に類する色。論、鄭風「君子不レ以二紺一飾」‖淺絳色。○又、其の絹。

【綽】シャク　薬

○しとやか、しなやか(婉美)○ゆるし、ゆるやか(緩・寛)「寛一」○おほし(多)

【綽號】シャクガウ　あだな。‖綽名。

【綽今】シャクイ　寛大なる貌、今は助辭。詩、衛風「寛兮一一、倚二重較一兮」

【綽綽有レ裕】シャクシャクイウユウ　ゆったりとして迫らず、寛裕。詩、小雅「此令兄弟、——」孟、公孫丑「晉進退、豈不二綽綽然有二餘裕一哉」

【綽然】シャクゼン　ゆったりと　したる貌。‖綽綽・綽々。

【綽態】シャクタイ　ゆったりと　しとやかなるやうす。心腐くして姿多し。曹植、洛神賦「柔情一一、媚二於語言一」

【綽名】シャクメイ　あだな。水滸傳「一一久喚二花和尚一」‖綽號・渾名。

【綽約】シャクヤク　柔かに細びる貌、柔弱なる貌。舞賦「一一閑靡、便娟體輕」綽一に淖に作る。莊、逍遙遊「肌膚若二冰雪一、淖約若二處子一」

【綬】ジュ　有　宥

○くみひも(組絲條)「組一」○官職のしるしとして佩びる印の環を受くるひも「印一」「璽一」史、蕭相傳「懐黄金之印、結二紫一於要」○國勳章・褒章等を佩用するに用ふるひも。

【解レ綬】カイジュ　官職を辭する。魏文帝詔「漢高脱レ衣以衣二韓信一、光武一レ一以帶二李忠一」‖挂レ冠・棄レ綬。

【結レ綬】ケツジュ　官に就く義。解レ綬の反對。顔延之詩「脱二巾千里外一、一レ一登二王綬一」‖佩綬。

【綬鳥】ジュテウ　七面鳥。‖吐綬鳥。

【綏】スキ　支

○かんむりのひも(冠纓)「紫一」「素一」「朱一」○はた、舞の時の旌。○一メイは長く垂れる貌。杜牧詩「垂髪綵一一」○鋼ヒのくちばし、長くして腹の下に在り。禮、檀弓「范則冕而蟬有一」○國メイ古、武官の冠の左右につけたる菊花を半切せし如き形の飾。ほほすけ。

【緆】セキ　錫

○ほそぬの、細き麻布、通じて裼錫に作る。○もすその下の線。

【綫】セン　霰　線

○ぬふ(縫)○衣の線をぬふ。漢書、賈誼傳「一以偏諸」

【綪】セン　感

○あかね色、蔬草にて染めたる色、青赤色。○青赤色の

絹。左、定四「一筏旃旌」

【綫】 線（系部九畫）に同じ。

【綜】 ソウ　㊥

○すぶ、すべをさめる（經理）○すべあつめる（總聚）易、繫辭「錯ー其數」○へ、をさ（長）たていとを通して整へ治める具。

【綜核】ソウカク　事の本末をすべて明にす、核一に實に作る。次條參看。

【綜覈】ソウカク　事の本末をすべあきらかにす。漢書、宣帝紀「信賞必罰、ー名實」＝綜核。

【綜合】ソウゴウ　すべあはせる。＝總合。

【綜括】ソウクワツ　ひとまとめにすべくくる。唐書、姚思廉傳「推究ー發、陳二家史」＝包括。次條參看。

【綜理】ソウリ　すべをさめる。漢書、王莽傳「公開ー門延士、下及白屋、虛省朝政」＝一總理。

【綜緝】ソウシフ　すべつくすこと。晉書、郭璞傳「五經羣史、多所ー一」＝該綜。

【綜括】ソウクワツ　すべあつめる。晉書、虞潭司馬勗傳「威能ー二一道文、肇二諸不朽」＝總括。

【綜析】ソウセキ　すべると、わけると。蔡邕文「包括無ノ外、ー一無ノ形」＝分合。

【綜達】ソウタツ　すべてにひろくわたる。後漢書、孔融傳「名實相副、ー二一經學」＝會通。

【綜務】ソウム　つとめをすべをさめる。隋書、百官志「置二六官、以ー一ー」＝總務。

【綜理】ソウリ　すべをさめる。晉書、陶侃傳「其ー一微密、皆此類也」＝總理。

【綜緝】ソウシフ　すべおさむ。晉書、葛洪傳「衆ー二一群籍」

【總】 綜（系部十一畫）に同じ。

【綯】 タウ　㊥

○よる、なはなふ。詩、豳風、七月「宵爾索ー二」○なは（繩索）

【綫】 ㊀タン　㊁ダン　㊥　㊀サン　㊥

㊀白く鮮かなる衣の貌。○つむぐ（紡）㊁もえぎ（青黄色）○圖だんだらぞめ。

【綻】 タン　㊥

○ほころぶ、解ける、衣の縫ひ目がとける。○花開く。杜甫詩「紅ー雨肥梅」

【綻破】タンハ　ほころびやぶる。梅堯臣詩「憲在二御補綴、惡二衣破ー一」

【綻裂】タンレツ　ほころぶ。韻、内則「衣裳ー一、紕織謂二補綴一」

【綢】 ㊀チウ　㊁ダウ　㊥尤

㊀まとふ、まつはる（纏）○しばる（縛）たばねる（束）○こまか（緻密）「ー密」○織物の稱、紬ヂウと通ず。○おくぶかし（奥深）㊁つつむ（韜）

【綢緞舖】チウタンポ　圖呉服店。

【綢繆】チウビウ　性情が緻密にして操行が正直。詩、小雅「ー一如ノ髮」陸「謂直如ノ髮也」

【綢繆】チウビウ　○もつれあふ。詩、唐風「ー一束薪、三星在ノ天」＝纏綿。○まとひつつむ。詩、豳風「ー二一牖戸」

【綵】 ㊀サン　㊁シン　㊥寒

㊀よし（善）○人名、孫ー㊁綵シンは衣裳の毛羽の垂れる貌。

【綬】 ㊀テイ　㊁テツ　㊥齊

㊀つづる、つらぬ（連）ぬひつらねる（縫聯）「補ー」「連ー」つぐ、とづ、つぎあはす、あつむ、あつまる（緝）「緝ー」「集ー」○つづり、とぢ。○つく、むすぶ（結）○へりかざり（緣飾）○はたあし（旗）○しるし（表）㊁とどむ（止）證、樂記「證者所以ノ淫也」○まぐ（拘）

【綬學】ジユガク　學問をうけ授かる。漢書、劉歆傳「往者ー一之士」＝承學。

【綬音】ジユイン　子音と母音とを合して成る音。

【綬甲】ジユカフ　よろひをとどす。戰國策「秦ー一厲兵、敎二勝于戰場一」

【綬字】ジユジ　文字をつづる。

【綬緝】ジユシフ　次條に同じ。任昉文「ー一遺文、赤貽二世範一」

【綬輯】ジユシフ　つづりあつむ。漢書、敍傳「故採二撰前記一、ー一所ノ聞」＝綴輯。編緝。

【綬綬】ジユジユ　飛ぶ物を繋ぎとめる繩。荀、非十二子「ー一然」

【綬文】ジユブン　文をつづる。又、つづりたる文。漢書、劉向傳「自二孔子一後、ー一之士衆矣」＝著述。

【綬旒】ジユリウ　○はたあし、旗のかざり、綬は其のかざりを旗に結びつける繩。詩、商頌「鞗二下國ー一」○ふきながしの結びつけたるもの。手に持ちて自由になる故、臣が君を自由にする譬に用ふ。「公羊傳、襄十四」＝旌旗。

【綴連】テツレン　つづりつらぬ。魏書、崔浩傳「多載劃ー一、以爲二箱幗一」＝連綴。

【絣】 ヘイ　㊥　㊀綱は同字同は古字

絣（系部六畫）に同じ。

○あみ、魚鳥を捕る具「魚ー」「羅ー」「罩ー」書、盤庚「若ー在綱、有條而不紊」○あみす、あみを張りて魚鳥を捕る。○つつみくるむ。○ことごとく取る「ー羅」○おきて、刑法「法ー」「禁ー」「刑ー」「天ー」漢書、酷吏傳「昔天下之ー嘗密矣」○たてよこのななめに行きかふあや。

【網月】ワウ。あやもやうのほりものしたる月。宋玉、招魂「ー朱綠」

【網君】ワウクン あみ。顧野王「聖人師ー蜂立ニ君臣ー、師ニ蜘蛛ー立ニー」ー岡害。

【網周】ワウシウ 網即ち法律が周密にして罪人を逃さず。道德指歸論「隆刑峻罰、網直刻深、法禁ー、慘毒少レ恩、諸侯畏忌」ー網密。

【網疏】ワウソ あみの目があらまか。轉じて法律のぬけめあるに喩ふ。鹽鐵論「ー則漏失、法疏則罪漏」

【網中】ワウチウ 網の中。宋史、前有ニ堅壘ー、後有ニ大河ー、勁兵四面至、彼或南下、隨ニ吾ー一矣」ー術中。

【網蟲】ワウチウ 蜘蛛の異名。沈約詩「ー垂レ戸綴」

【網捕】ワウホ あみにてとらへる。張緯文「皆禁ニー、所ニ以宜ニ昌明ー而廣ニ慈愛ー也」

【網羅】ワウラ おきて、刑罰。宋書、王濟傳「居常綱任、倘慢ニー」

【網膜】ワウマク 眼球の最も内部に在りて、外界の影象をうつすうすかは。

【網密】ワウミツ 網の目が細密なる義。師道衡、老氏碑「魚驚ニー」、鳥亂ニ弓多ニ」轉じて法律の嚴密なる喩。

【網目】ワウモク あみのめ。法律にたとへていふ。世說、言語「冰由ニ陛下ー不レ疎」

【網羅】ワウラ ○おほあみと、こあみと。莊、山木「然且不レ免ニ于ー機辟之患ニ」ー羅網。○轉じてすべてをくるめ取る。史記、自序「ニー天下放失舊聞」

【網絡】ワウラク のこらずくるめこむ。史記、自序「ニー古今、紀ニ述惠勳ー」

【網利】ワウリ まうけを獨りにてしめる。劉珣文「ーレー者、絕レ登ニ龍斷ー」

【網漏】於吞舟之魚】アミンヲクワス 大奸人が法律の制裁を逃れるに比す。史、酷吏傳「ーー、而吏治烝烝、不レ至ニ于姦ー」

【網代】アジロ 圖○冬期水中に竹又は木を組みならべて魚を捕へるもの。○檜の木又は竹をあみて筵の如くあみしもの。

【緋】ヒ 微

○あか、ひのいろ（赤絳）○赤のねりぎぬ。

同訓異字 緋・赤・紅・丹・絳・殷の別は赤（部首七畫）の條を見よ。

【緋甲】ヒカフ ひをどしのよろひ。

【緋紗】ヒシヤ あかきうすぎぬ。白居易詩「ーー燭下水平流」

【緋袍】ヒハウ ひのころも、あかき官衣。魏書、蠕蠕國傳「詔賜ニーー小口將帥一具、紫袍大口袴雜一具ー」

【緋綠】ヒリヨク あか色と、みどり色と。又、其の衣服。隋書、禮儀志「五品已上通著ニ紫袍ー、六品已下象用ニーー」

【綿】ベン メン 先 緤に同じ

○わた、木綿のわた、新らしきをーといひ、古く麤きを絮といふ。○まわた、繭から製せしわた。○つらなる、長くつづきて絕えず「連ー」○こまか、ほそし「ー密」○まとふ、まつはる「纏ー」○やはらか（軟弱）○ー蠻は鳥の聲。

【綿延】エン つらなりのぶ。草應物詩「紆直水分レ野、ーー稼窮レ峰」ー連延。

【綿花】クワ 採收せし果實のままのわた。

【綿火藥】クワヤク 綿花を硫酸と硝酸との混合液にひたして製したる爆發藥。

【綿亙】カウ つづきわたる。謝靈運、山居賦「跨ニ越山嶺ー、ニー田野ー、或隆或降」

【綿紙】シ わたをすきこみたるかみ。李商隱詩「牛曲新辭寫ニーー」

【綿絲】シ もめんいと（韓愈、謝重物狀）

【綿弱】ジヤク かよわし。唐雲、李聽傳「惟南兵ーー、夥人素易レ之」

【綿手】シユ ほそくやはらかな手。崔珏詩「莫レ道妝成斷ニ客腸ー、粉圍ーー白蓮香」

【綿密】ミツ わた。漢書、匈奴傳「金帛ーー」

【綿綿】メン つらなりまとふ。楊萬里詩「海棠ーー雪茶蘼」

【綿亙】ゼンカウ 綿は連綿たる義。絕に同じ。茅を剪りて地に立て、それを連ねて草卑の位次を表す。史、叔孫通傳「與ニ其弟子百餘人ー、爲ニーー習レ之」

【綿絕】ゼツ 前條に同じ。

【綿歌】ダン ながく絕えざるなげき。孟郊詩「ーー空隨踵」

【綿地】チ 長くつらなる土地。蔡邕、文十一「ーー千里」

【綿竹】チク 四川省の地名。晉書、文帝紀「鄧艾帥ニ萬餘人ー（中略）破ニ蜀將諸葛瞻於ーーー」

【綿惙】テツ 氣息の絕えんとする貌。世說、雅行「臨レ終ーー」

【綿篤】トク 病が危篤なり。周書、庾信傳「居レ喪、更加ニーー」ー廣は宇文廣。

【綿帛】メンパク わたと、きぬと。後漢書、董卓傳「奉ニ獻ーーー」

【綿漫】メン　才力の弱き様。方回詩「一ー希二儒時一貪婪恣二取求一」

【綿遠】メン　年代がはるかにとほし。晉書、天文志「年代ー一、文籍闕レ傳」‖悠遠。

【綿蠻】メン　鳥の鳴く聲。詩、小雅「ー一黃鳥、止二于丘隅一」

【綿布】メン　〇わた、ぬのと。後漢書、臧洪「知三種レ麻養レ蠶作二ー一一」〇もめんの織物。

【綿服】メン　もめんぎもの。‖綿衣。

【綿密】メン　ゆきとどきてこまかし。宋和書譜「宋蘧思話學二書于羊欣一、宜レ筆ー一」‖周密。

【綿綿】メン　うち續きて絶えざる貌。詩、王風「ー一葛藟、在二河之滸一」‖縣縣。

【綿羊】メン　ひつじの一種。毛長く角無く、其の毛を毛織物の原料とす。宋史、層檀國傳「蓄有二ー一・山羊・沙牛・水牛・騾駝・馬・犀・象一」

【綿裏針】メンリシン　わたの中のはり。諷刺の話に喩ふ。通俗編「元曲云、――」

【綿力薄材】メンリョクハクザイ　力弱く材うすし。漢書、嚴助傳「越人――、不レ能二踰嶺一」

【綿綿】メン　こまかにしてうるはし。唐書、李華傳「文詞ー一少二宏傑氣一」‖縣縣。

【綿絮】メンジョ　ひきつづく。北史、崔仲方傳「出レ綿ー一七百里」

【綿連】メンレン　うちつづく、つらなる。李紳詩「江雲縷斷草ー一」‖連綿。

【維】ユヰ　キ　支

〇つな、おほづな（綱）〇道德の基礎たるのり。四ー一は禮義・廉恥。〇世界の四隅をつなぐ大綱「天柱地ー一」又、すみ（隅）〇すぢ「纖ー一」〇つなぐ（繫）くくる（連結）詩、小雅「繁二之ー一之」〇つらねむすぶ（連結）〇おもふ（念）發聲の辭。〇これ。‖惟。〇ただ。‖唯。〇居ー一は十二支の巳の異名。

同訓異字　維・惟・之・此・是・斯・斯・伊・時の訓は之（ノ部三畫）の條を見よ。

【維摩】ユイマ　釋世尊と同時代の天竺の人の名。翻譯名義集「ー一翻詰、秦言二淨名一」‖淨名居士・維摩詰。

【維綱】イコウ　のり、法度。漢書、司馬遷傳「不下以二此時一引二ー一一、盡中忠慮上」‖綱維。

【維舟】イシュウ　ふねをつなぐ。陳子良詩「我行逢二日暮一、須レ繫二ー一一」‖繫レ舟。

【維樹】イジュ　舟のつなと、かいと。漢書「是猶下渡二江河一上ー一一、中流而遇レ風」

【維新】イシン　〇これあらたなり、王政の改まる義。詩、大雅「周雖二舊邦一、其命ー一」〇圖明治初年の改革をいふ。

【維城】イジョウ　これ城、即ち城の如く衛りとなる者、嫡子をいふ。詩、大雅「宗子ー一」

【維持】イジ　つなぎもつ、もちこたへる。千寶、晉紀總論「賴二道德典刑一以ー一二之一也」

【維斗】イト　北斗星の異名（莊、大宗師）

【維日不レ足】イジツタラズ　終日勉むるも十分にたらず。維は一に惟に作る。書、泰誓「我聞吉人爲レ善、惟日不レ足、凶人爲二不善一、亦惟日不レ足」詩經「降福遐ー一」

【絨】ヨク・キキ　イク　ヨク　屋　職

〇ぬふ（縫）〇ぬひめ（縫合）詩、召南「素絲五ー一」

【綠】リョク　ル　有

絲ノ十纏、一說に絲十を綸、綸十を一といふ（一說、綸の倍）

【綸】㊀リン　眞　㊁クヮン　刪　ロン　元

㊀つりいと（釣繳）「垂ー一」「投ー一」〇ふときいと、絲よりも太し。〇おほづな（綱）〇つかさどる、をさめる「經ー一」易、屯卦「君子以經ー一」〇まとひつつむ（纏裹）〇青絲をあみたる印のひも（青絲綬）〇ことのいと（琴絃）〇わた（絮）㊁ー巾　ロンキン　は青絲にて作る巾の名、諸葛孔明の用ひしによりて一名諸葛巾。〇圖ー子　リシ　絹織物の一種、綾子のあて字。

【綸言】リンゲン　天子のみことのり。貢禹詩「增秩視二重典一、ー一猶二明庭一」‖綸綸。

【綸言】リンゲン　天子のみことのり。晉書、儒林傳「章儒動レ星、應レ於ー一」‖汗言を見よ。

【綸言如レ汗】リンゲンジョカン　天子の詔は一たび出でて反らざるに喩ふ。禮、緇衣「子曰、王言如レ絲、其出如レ綸、王言如レ綸、其出如レ緡」天子の言はもと絲の如く細きも、之を出して下に達するときは、其の太きこと綸の如しとの義。漢書、劉向傳「出レ令如レ出レ汗、汗出而不レ反者也」

【綸旨】リンシ　みことのり。薛延珪詩「爾能奉ー一」‖綸言如レ汗を見よ。

【綸綬】リンジュ　青絲のくみひも。江淹表「綠衣ー一、漢國二前制一、奇服怪物、周改二舊刑一」

【綸布】リンフ　こんぶの異名。本草集解「昆布、又名ー一」

【綸絆】リンハン　天子の詔、絆は棺を引く大索。宋柳宗元文「捧二對ー一一、不レ知

レ所レ圖」綸言如レ汗を見よ。
【綸命】リンメイ みことのり。＝綸旨。
【綸誥】リンカウ いと と、わたと。魏書、道武帝紀「授二諮商戸一令」綸二一一」

【綢】リャウ 養

○よりあはす（綾）○履二つ。

【綾】リョウ 蒸

○あや、あやぎぬ（文綵）薄く細き織物。○綢ーリョウは羊かならざる貌。○國おもてに現はれざる種種の關係、いきさつ。
【綾綺】リョウキ あやぎぬ。又、其の衣。北史、隋文帝紀「大失二人レ衣一ー」南史、陳文帝紀「大失不レ衣一ー」面無二金玉之飾一」元典、后妃傳「共剖二緒比一ー一」
【綾綺殿】リョウキデン 國古の皇居の殿名、宜陽殿の左、陰貴殿の右、温明殿の前にあり。
【綾紈】リョウクワン あやぎぬと、白のねりぎぬと。又、其の衣服の美しき、和帝紀「綺人衣二ー一者三百餘人」
【綾羅】リョウラ あやのかとり絹。北史、馮元興傳「徒歩上省、以示二清貧一、認遺レ益大失二ー一」時人服二其雅節一」
【綾羅】セン あやぎぬのうちは。李商隱詩「ー一映レ風開二天」
【綾帽】リョウバウ あやぎぬのづきんの北史、魏孝靜帝紀「八十以上、賜二ー一及杖一」

【綾文】リョウモン 白色の絹布、織目はなめにして地質厚く光澤なきもの（綾文と書くは誤）
【綾羅】リョウラ あやぎぬと、うすぎぬと。張華、輕薄篇「童僕餘二粱肉一、婢妾餘二ー一」

【綠】リョク 屋

○みどり、青と黄との間色、もえぎ。○みどりいろの布帛。又、其の衣服。○かりやす、草の名、黄ー色を染むべきもの、一名淡竹葉。‖菜。○結ーは實玉の名。史、漢雎傳「宋有結ー」○ーは古の駿馬の名。
【綠葵】リョクキ みどりのさざなみ。黄金詩「春滿揚二ー一」
【綠衣黄裏】リョクイクワウリ 賤貴其の所をかふるに喩ふ。綠は間色、黄は正色、綠を衣とし、黄を裏とするは、賤貴顛倒なり。○、郡風「綠兮衣兮、ー一」
【綠衣使者】リョクイシヤ 鸜鵒の異名「開元天寶遺事」
【綠陰】リョクイン 青葉のかげ。白居易詩「眠レ松愛二ー一」
【綠陰幽草勝二花時一】リョクインイウサウマサルカジ 初夏の綠陰の景は、春花の時にまさる、王安石、初夏即事の結句。
【綠筠】リョクイン みどりのたけ。劉禹錫詩「遠レ望二紅蕖一當レ軒暗二ー一」‖綠竹。
【綠芋】リョクウ さといも。沈約詩「紫茹綠ー一」‖青芋。
【綠雨】リョクウ 新綠にふりかかる雨。張問陶詩「四月好天氣、人來ー一中」
【綠雲】リョクウン ○みどりのくも。鮑照詩「揚芳紫煙上、垂綠ー一中」○美女の髪の多くして黒き形容。杜牧、阿房宮賦「ー一擾擾、梳二曉鬟一也」
【綠葉】リョクエフ みどりいろの木のは。屈原、九歌「秋蘭兮青青、ー一兮紫莖」‖紫莖。
【綠烟】リョクエン ほそき色のけむり。李白詩「ー一滅盡清江空」
【綠荷】リョクカ みどりのはちす葉。李嶠、詠二水上蓮一詩「珠淚ー一中」
【綠莖】リョクケイ 青きくき。王仲宣、雨霽賦「白蘋ー一、芙蓉含レ英」‖莖。
【綠眼】リョクガン みどり色のまなこ、外夷の眼の形容。李白詩「君不レ聞胡笳聲最悲、紫髯ー一胡人吹」‖碧眼。
【綠芰】リョクキ みどりのひし。左思、魏都賦「ー一泛二清而浚一」
【綠綺】リョクキ 琴の名。傅玄文「楚王有二ー一琴、曰二綠綺一、司馬相如有二ー一一、蔡邕有二飛尾一、皆名器也」
【綠蟻】リョクギ 美酒の異名。謝朓詩「嘉肴聊可レ薦、ー一方獨持」
【綠橘】リョクキツ みどりのたちばな。本草集解「朱橘小而色赤如レ火、ー一綠碧可レ愛、不レ待二霜後一色味已佳」
【綠玉】リョクギョク 綠色柱狀の美石。エメラルドの類。‖綠柱石。
【綠槐】リョククワイ みどりのえんじゅ。沈佺期詩「ー一開復合、紅塵緊還散」
【綠菊】リョクキク あをきあをとせるたかやぶ。錢起詩「重門深二ー一」
【綠萼】リョクガク みどりのわげ。萼は綠對。白居易詩「紅綺帶纔ー一低」
【綠畦】リョクケイ みどりなるうね。唐球詩「貴侯二ー一蔣二蔵玉一」
【綠蓼】リョクリョウ みどり色の谷。李白詩「瓜田傍二ー一」
【綠髮】リョクハツ 黒髪のもとどり。長孫佐輔詩「ー一青蛾尚未レ襄」
【綠嬌郎】リョクケウラウ あをくして大いなる瓜がめ。しろうがくばう。
【綠紅】リョクコウ あをばと花と。杜牧詩「千里鶯啼綠映レ紅」‖紅綠。
【綠莎】リョクサ あをきはますげ。砂原に、馬嵬傳「樹以二蒲柳一被以二ー一」
【綠裳】リョクシヤウ あをきみのの章莊詩「ー一人釣季鷹魚」（季鷹魚は鱸ス）
【綠裳衣】リョクシヤウイ 青きみの、漁者の服。張志和、漁父詞「青箬笠ー一、斜風細雨不レ須レ歸」
【綠草】リョクサウ みどりのくさ。劉孝綽詩「況在二青春日一、蓬萊ー一邊」
【綠窗】リョクサウ ○貧女の住家。富女の室を紅樓といふの對。白居易詩「ー一貧家女」○ひろく婦女の室のまどをいふ。李商隱詩「秦人昔富家、ー一閨二妙旨一」

【綠滿二窓前一草不除】リョクマンソウフジョ　朱熹の四時讀書樂の詩の句。宋史、道學傳「周惇頤字茂叔、雅有高趣、隱前草不レ除曰與二自家意思一一般」とあるに本づく。

【綠漲】リョクチョウ　みどりのも。岳珉詩「婉彼滹沱、載渭而逝、脩堤二一一、托二身洪流一」

【綠耳】リョクジ　名馬の名。史、周紀「造父以二善御一幸二於周穆王一得二一一之駟一」＝騄駬。

【綠洲】リョクシュウ　萩などの青く茂りたる洲。唐玄宗詩「羽騎一一鳴二紅樹一、龍旌雙雙走二一一」

【綠事】リョクジ　島嶼のくるまの後漢書、輿服志「皇孫一一以綠」

【綠珠】リョクシュ　晉の石崇の愛の名、石崇之を寵はんとして得ず、閻を矯めて綠を收めし時、自ら樓下に投じて死す【晉書、石崇傳】

【綠酒】リョクシュ　みどり色の良き酒。陶潛歸去來辭「一一盈二尊一」

【綠髮】リョクハツ　みどり色の黑き髮。「一一多二嬋娟一」

【綠髮嬰童】リョクハツエイドウ　圖老子頭巾姿の幼兒、又は貧窮に勞苦ある者に賜はるはうびのしるし。

【綠樹】リョクジュ　みどりの木。王勃、益州淨惠寺碑「一一玄蘿、網二羣岳一」

【綠嶼】リョクショ　草木の茂れる小島。韓翃詩「一一晚迴舟」

【綠袴】リョクコ　みどりがこまやか、草の茂る形容。歐陽修、秋聲賦「豐草一一而爭レ茂」

【綠水】リョクスイ　みどりのみづ。劉長卿詩「一一滿湘岡、青山鄭杜深」

【綠翠】リョクスイ　みどりいろ。李白詩「一一如二美人一」

【綠蕪】リョクブ　あをきばせを。皮日休詩「空階一一、葉、衆芸寄二閒詩一」

【綠鬢】リョクビン　こけの異名。古今注「宗定伯入行、則生二苔蘚一、或曰茂紫、一名二一一」＝苔錢。

【綠葉】リョクヨウ　あをあをとしたるくさむら。周元範詩「階雨衆賓一一中」

【綠袍】リョクホウ　みどり色のさかだる、祭は勘解由にて美濃の國掾「一一聚、綠袍槐簡催」

【綠蘿】リョクラ　あをきこけ。古今注「菖蒲、或青、一名一一」＝莓蘚。綠苔。

【綠苔】リョクタイ　あをきこけ。貫玉詩「秋館生二一一一」＝綠蘚。

【綠蘚】リョクセン　みどりの蘚。草木の美くしき形容。方回、海棠詩「一一多嬋、紅情不レ語、動二旅人意一」

【綠蕤】リョクスイ　みどりいろのまゆ。

【綠濃】リョクノウ　みどり色のふかき。梁簡文帝詩「一一翻二新葉一」＝碧濃。

【綠竹】リョクチク　みどり色のたけ。詩、衛風「瞻二彼淇澳一、一一猗猗」（一說、綠は萹、草の名、王芻の一名）

【綠茶】リョクチャ　煎茶にして飲む尊通の茶。紅茶の對。

【綠汀】リョクテイ　みどりのみぎは。趙師秀詩「蘆風滿二一一」

【綠潮】リョクチョウ　あをきへた。太眞外傳「李臣實表曰、一一含レ霜、芳流二綺殿一」

【綠天】リョクテン　唐の白樂天の庵室の名。清異錄「懷素居二零陵庵一、東郊植二芭蕉一萬餘、取レ葉代レ紙、號二其所一曰二一一一」

【綠燈】リョクトウ　みどり色のひとみ、外夷の眼。唐書、點戛斯傳「長大赤髮碧面一一」

【綠酷】リョクコク　よきさけ。韓翃詩「鱠下玉盤紅縷細、酒開金甕一一濃」

【綠髮】リョクハツ　みどりのかみ。李白詩「中有二一翁一一、翩翩披二雲鶴一」

【綠鬱】リョクウツ　ろくは、草物又は吳氣比に用ふ。＝硫酸銅。草綠。

【綠礬】リョクバン　みどり色の美くしき石。温郊詩「白玉抽二亮節一一一已雜レ緋」

【綠鬢】リョクビン　あをきらきくさ。杜審言詩「淑氣催二黃鳥一、晴光轉二一一一」＝青蘋。

【綠萍】リョクヘイ　みどりのうきくさ。梁武帝詩「一一隨二浪動一」

【綠苗】リョクビョウ　みどりのなへ。陶潛詩「一無二際涯一旁村」

【綠碧】リョクヘキ　るり色の玉。又、みどり。

【綠衡】リョクコウ　南都賦「一一紫英」

【綠毛龜】リョクモウキ　龜の一種、みのがめ。酈州志「本州四河井盛レ龜、甲上有二綠毛一、狀如二海苔一」

【綠葉】リョクヨウ　みどりのつるくさ。司空曙詩「一一蟬二紅英一」

【綠芽】リョクガ　○みどり色の茶の樹。李嘉祐詩「渡流通二野寺一、一一望二青山一」○よき色の煎茶。朱慶餘詩「一一香醪レ酒」

【綠野】リョクヤ　○青く茂れる野原。謝靈運詩「暮晩一一秀」○唐の裴度の別莊の名。藥房雜錄、裴度傳「於二午橋一創二別墅一、花木萬株、中起二涼臺暑館一、名曰二一一堂一」

【綠楊】リョクヨウ　みどりのやなぎ。王維詩「洪上一一秋」＝垂楊。

【綠羅】リョクラ　みどりいろのうすぎぬ。歐陽修詩「池面一一風卷レ皺」

【綠蘿】リョクラ　あをきつた。郭璞詩「一一結二高林一、蒙籠蓋二一山一」＝碧蘿。

【綠林】リョクリン　山の名、荊州、當陽縣に在り、前漢の末の亡命者、此の山にこもる、よりて盜賊の異名とす【漢書、王莽傳】李陵、遇レ盜詩「一一豈容夜知聞」＝白波。

【綠醽】リョクレイ　美酒。左思、吳都賦「飛二羽觴一而酌二一一一」＝綠酷。

【綠烟】リョクエン　みどりのいろえ。儲光羲詩「垂釣一一春」

【綠珍】リョクチン　圖古、六位の人の著たる綠の袍。

【綠青】リョクショウ　みどり色の顏料の、無水炭酸と銅との化合物。

【綟】㊀レイ　㊁レツ　麻

㊀もえぎ（萌黄）〇かりやすぞめ、灰草ニテソメタル色「―緑」㊁厩のみどりいろなるもの。〇國厩いとにて目をあらく織りし布。

【綠綬】もえぎの印のひも。東觀漢紀「復設二諸侯王金璽一一」

【綰】ワン 圏

〇すべる（統）すべくくる。史、貨殖傳「東―二穀絡朝鮮真番之利」〇人名。盧―は漢高祖の臣。〇つなぐ、かく（繋）連絡する。〇つらぬく（貫）〇むすぶ、わぐねる。

【綰髻】ワン ひぢにまとふ。繁欽詩「何以致二拳拳一一雙金環」

九 畫

【緯】㊀ヰ ㊁イ 尾 未

㊀よこいと、織物の横絲。經ノ對。左、昭二四「醫不二慮一レ其―一」ぬき。〇よこ（横）東西の道をいふ。南北の道を經といふの對。〇地文にて赤道に平行して地球の表面に引きし假設の線「一度」「北―」「南―」〇すぢみち、もと。〇おる（織）〇未來記「讖―」「圖―」〇六經に皆―あり、熟語の緯書參看。〇星の名、五―は五星。〇絡―ヲ―は蟲の名。＝莎雞。㊂つかぬ（束）

【緯經】ケイ 横すぢと縦すぢと。吳師道詩「悠梁雄跨相―一」

【緯書】ショ 〇未來の事、又吉凶禍福の豫言を記せし書物。〇經書の對。禮、王制、疏「去二孔子一既遠、―一見レ行二於世一」易・書・詩・禮・樂・春秋・孝經に各一緯あり、合して七緯といふ。

【緯線】セン 赤道に平行して横に引きたる假定線、赤道以北を北緯、以南を南緯といひ、赤道の零度より兩極の九十度に至りて終る。

【緯度】ド 地球の赤道を基本として横線にて劃したる南北の距離。經度の對。

【緯武經文】ケイブケイブン 武を緯絲とし、文を經絲として國家を治める。＝書、齊王攸傳「自レ漢刑レ國、緯二武經一レ文」＝經文緯武。

【緣】㊀エン ㊁エン 先 圏

㊀へり、ふち。〇衣服のへり、衣服の端にまとひつけたる飾。〇すべて物のへり。㊁よる、ちなむ（因）「由―」〇よる、たよる、したがふ（循・順）孟、梁惠王「―木而求レ魚」〇まとふ（絡）てづるを求める「貪―」〇ちなみ、たより、ゆかり、えにし、かかりあひ、人倫の關係、夫婦のえにしなど「世―」「俗―」「塵―」「前―」「良―」「宿―」〇國まはりあはせ、因によりて果を生ずる作用「因―」〇緣と通ず「―衣」

【緣飾】エンショク 緣・自・從・由・因・仍・道の別は自（部首六畫）の條を見よ。

【緣由】エンイウ ちなむ。ゆかり。杜甫詩「中原正格調、後會何―一」

【緣因】エンイン 佛現在の結果を得たる原因、二因の一。大藏法數「謂二一切功德善根一、資二助了因一、開二發正因之性一、故名二―一一」

【緣業】エンゴフ まつはりめぐる。益部方物志「木或下垂、葛弱―一」

【緣家】エンカ ゆかりあるいへ、しんるゐ。緣類。唐書、高儉傳「―在二蒲陽一」

【緣界】エンカイ へり、さかひ。後漢書、魯恭傳「部國螟傷レ穀、犬牙―一不レ入二中牟一、河南尹袁安上書言レ狀、帝異レ之」

【緣覺】エンガク 佛十二因緣の理を觀じてさとる。大藏法數「因觀二十二因緣一、覺二眞諦理一、故名二―一一」

【緣起】エンギ 〇佛社寺等の由來。楞伽經「佛說―一」〇著者が著書を編成せし由を說くにもいふ。序文の類。〇圏きざし、吉凶の兆。又めてたきよろこび、いはひ。

【緣故】エンコ ゆかり、えんつづき。

【緣語】エンゴ 圏和歌の修飾法の一、音讀上又は意味にゆかりある他の語を假りて修飾するもの。

【緣坐】エンザ 他人の罪によりてまきぞへになる。北史、齊後主紀「諸家―、配流者所在令レ還」＝連坐。

【緣子魚】エンスギョ 盛京にて松魚をいふ。

【緣飾】エンショク 外部のかざりをつける。漢書、公孫弘傳「―以二儒術一」＝文飾。

【緣日】エンニチ 〇僧となりたる因緣ある日。＝化緣日。〇圏神佛の祭日、有緣日の略。

【緣分】エンブン 因緣にて定まる所の分をいふ。沈周詩「知無二―一離二輕入一」

【緣木求魚】エンボクキウギョ 勞して功なき喩。宇解、並に木（部首四畫）の條を見よ。

【緣類】エンルイ 結婚によりて生じたる親類。＝緣家。

【緇】 緇（糸部十畫）を見よ。

【緘】カン ケン 咸 圏

〇とづ、ふうをする「封―」〇手紙のふうじめ。轉じて手紙

の義「華ー」○つぐむ、口を閉ぢて言はず、默する「ー默」家語「有金人三ー其口」

【緘ン縅】カン 箱、又は書信の封をひらく。李白詩「況有二錦字書一ー一使二人嗤一」＝封緘・啓緘。

【緘口】カン くちをとづ。ものいはず。家語、觀周「有二金人一焉、三ー其口一而銘二其背一曰、古之愼レ言人也」

【緘縢】カン 封じてかたくとざす。宋史、高昌傳「有二勅書樓一、藏二唐太宗・明皇御札詔勅一、ー一緘鑰一」＝封鎖。

【緘札】カン 封じたる文書、手紙をいふ。李商隱詩「玉壘ー一何由達」＝封書。

【緘縢】シン くちびるをとぢてものいはず。韓愈、王承福傳「風霜使二膏脂一安可二ー口舌一ー一養レ神」＝緘口。

【緘默】カン ふうじたる手紙。范成大詩「ー默三年一一封」＝封書。

【緘封】カン 封じつつむ。歐陽修、古硯詩「緘縢三四勅ー一」

【緘縢】カン とぢてひめかくす。孫過庭書法「設有レ所レ會、ー一已深、遂令レ學者茫然莫二知一領要一」

【緘封】カン とぢる、ふうをする。漢書、宣許后傳「錮二一ー一」＝封緘。

【緘默】カン 口をつぐむ。ものいはず。默一に嘿に作る。宋史、張洎傳「願君父無レ務於上、臣子ー一於下一」＝緘口。

【絹】ケン 圭 ケツ 圭 ㊥

紫青の間色の印の紐「青ー」

【緩】クヮン 旱

○ゆるし、ゆるやか。急の對「舒ー」「徐ー」「寛ー」「厳ー」○しまりなし、ゆるやか、ゆったり（寛）古詩「出ー門日以遠、衣帶日以ー」ゆるむ。○せまらず。ゆっくりする。孟、殷文公「民事不可ー也」

【緩急】クヮン ○ゆるやかなると、いそがはしきと。○危急の義、緩は帶說文「緩、繫レ帶也」と意轉し。史、賈誼傳「一旦有ー一、豈足レ恃乎」

【緩頰】クヮン わざはひをゆるくす。柳宗元文「願以二薄上田一贖レ財以ー一」

【緩緩】クヮン ゆるやかなる貌。陳基詩「聽レ鳴花開ー一歌」＝徐徐。

【緩刑】クヮン 其の刑罰を緩くする。周禮「荒政（中略）三曰ー一」

【緩頰】クヮン 婉言を以て警喩などを引きてしづかにものを言ふ。史、魏豹傳「ー一往說二魏豹一、能下」之、吾以二萬戸一封レ若」

【緩死】クヮン 死刑をゆるべる。易、中孚「君子以議レ獄ー一」

【緩程】クヮン かいをゆるめて舟の進みをおそくする。儲光羲詩「ー一擇レ勝欲レ賦レ詩」

【緩急】クヮン 心ゆるみておこたる。管子「人心之變、有レ餘則驕、驕則ー一」

【緩帶】クヮン をびをゆるくして安心する。漢書、匈奴傳「遵二城守一、境之民、父兄ー一、稚子咽啼」

【緩歩】クヮン ゆるやかにあゆむ。北齊書、文苑傳「ー一當レ車、無二畏色一」＝徐歩。

【緩慢】クヮン ゆるやかにしておこたる。書經、疏「寛弘者、失二於ー一」

【縦】コウ 九

○繩にて刀劍の把をまく。○まきづか、瓣ーは麻なはにてつかをまく。○ー氏は地名、春秋の周の邑、漢代の縣、今の河南省偃師縣の南にー氏山あり、相傳ふ王子晉、白鶴に乘じて山嶺に駐り、手を擧げて時人に謝して去ると。

【縕】ウン 圖

又、韞に作る

○おほなは（大索）○きびし（急）とし、はやし（疾）

【總】シ 支

○麻布の目のあらきもの。○ー麻マは三ヶ月間の喪服。

【縋】シュ シュウ 陽 虞

ほだす。ほだし（絆）

【縅】シフ 侵

○つむぐ（績）麻をつむぐ（接麻）○あつむ（會聚）「采ー」緩ー」あつまる＝輯。○ぬふ（縫）衣服の下を縫ふ「ー邊」○つづく、つぐ（繼續）○ひかる（光明）大學「於ー熙敬止」○やはらぐ（和）○とらふ（捜捕）「ー盜」○ーーは口舌の聲。又、條理ある貌。

【縅縅】シフ 口舌の聲。詩、小雅「ーー關關、謀欲レ譖レ人」

【縅縅】シフ あつめて安んずる。獨孤及、謝表「謹奉ー一守レ官、正レ身率レ下、勉二勵苦節一、ーーー疲人上」＝敬止」

綺綾。
【綺靡】キビ 美麗。
【綺羅】キラ 美しい衣服。
【綺麗】キレイ 美しい。
【綺談】キダン 美しい談話。
【綺筵】キエン 美しい宴席。
【綺窗】キソウ 美しい窓。
【綺語】キゴ 美しい言葉。
【綺紈】キガン 美しい絹。
【綺羅星】キラボシ 美しい星。
【綺麗事】キレイごと 美しい事柄。

【綯】 トウ 尤

なう。糸を撚り合わせる。

【綢】 チュウ 尤

ふとい糸。

【綢繆】 チュウビュウ ①糸などを巻きつけること。②男女の情愛の深いこと。

【綢緞】 チュウドン 絹織物の総称。

【綢直】 チュウチョク 人情に通じて正直なこと。

【綢密】 チュウミツ 細かいところまで行き届いていること。

【綢繆】 チュウビュウ ①糸などを巻きつけること。②男女の情愛の深いこと。

【綣】 ケン 銑

まとう。まつわる。

【綣綣】 ケンケン 誠意のこもったさま。

【綣懐】 ケンカイ 心をこめて思うこと。

【綣結】 ケンケツ 固く結ぶこと。

【綣然】 ケンゼン 誠意のこもったさま

役者の稱。

【綴】テイ 眞

○こまかし(細密)きめがこまか。○くはし(精)物事に念が入りてぬけめなし「工ー」「精ー」「細ー」「詳ー」○ぬひおぎなふ(縫補)

【綴密】テツ ○きめがこまやか。蘇軾文「棟樑綾峙、瓦壁ー一」○こまかにこみ合ふ。水經、注「林木ー一」‖緻密。

【締】テイ 齊 霽

○むすぶ、結びて解けず。とりきめる。史、始皇紀「合從ー交」○むすばる(結)屈原、九章「氣繚轉而自ー」○國ムスブ 固く結ぶ。○ジョウ とりしまる、警戒する。○リャク「取ー」「戸ー」

同音異義 締・結・掬の別は結(糸部六畫)の條を見よ。

【締姻】テイ 夫婦の緣をむすぶ。宋元詩「黃香早ー一」

【締架】テイ 家屋を結びくむ。經南十志「皆二人力之ー一、後加二茅茨一」‖結架。

【締交】カウ まじはりを結ぶ。賈誼、過秦論「合從ー一、相與爲ー一」‖結交。

【締結】ケツ しめくくる。約束をむすぶ。江淹、讓官表「ー二民社一」

【締構】コウ 結びかまふ。王褒、子讓郡牌「于時王業ー一、國步艱棘」

【締造】ザウ むすびつくる。楊修賦「結二合歡邪一ー二疑假一」‖構造。

【締盟】メイ ちかひを結ぶ「ー一國」

【締約】ヤク やくそくを結ぶ。又、結びしやくそく。唐書、張孝忠傳「ー一益堅」

【綴】テイ 霽 薺

○あか色。又、丹黃色。○あかぎぬ、赤冒。○土の色の黃赤のものにもいふ。

【綴衣】イ 漢の文帝の時の孝女、父淳于意罪ありて刑に當す、ー一身を入れて官婢と爲り父の刑を贖はんと請ふ、帝其の意を悲み爲めに肉刑の法を除く。

【綴旒】リウ あかき裝したる戰兵、赤衣の馬隊。主に罪人を捕へるもの。後漢書、百官志「執金吾一人中二千石、丞一人比千石、ー一二百人」

【緀】ハウ 皓 又、褓に作る

○むつき、うぶき(産衣)小兒の衣被ヒ 漢書、宣帝紀「在ー襁」‖襁褓。○國ムツ おしめ。

【緒】㊀ビン 眞 コン 元 ㊁メン 先

㊀いと、つりいと(絲)詩、召南「維絲伊ー」○なは(繩)○かうむる、かうむらす(被)○ぜにさし(錢貫)○ぜにさしに貫きたる錢。㊁綿に通ず。ー蠻ビンは鳥の名。大學「ー蠻黃鳥」‖綿蠻。

【緡錢】ビン ○ぜにさしに貫きたるぜに。漢書、武帝紀「初算二ー一」○漢時代の稅法の名(千錢を一緡にさして一貫とし、一貫毎に二十錢を所得稅として收める稅法)

【緡綸】ビン 釣絲。謝靈運、山居賦「ー一不レ投、罝羅不レ掇」

【緲】ベウ 篠 通じて眇に作る

○かすか(微)はるか「浩ー」○標ー ハウは遠く見える貌。‖縹眇。

【編】㊀ヘン 先 ㊁ヘン 銑

㊀あむ、とづ、絲にてとぢる。○ついづ(序次)編にて次第に竹簡を排列する。○文書をあつめつづる、書物をえらぶ。轉じてとぢぶみ(書籍)漢書、張良傳「出ー一書」○つらぬ(連)すべて次第に順ふもの皆ー一といふ「ー列」「ー排」○くむ、織る「ー蒲」「ー竹」○むすぶ(結)○とぢいと。とぢかは。又書物のとぢめ。○かもじ(假髮)㊁いとをくむ、くくる、あむ。‖編。

【編管】クワン 宋代の刑法の一、いれずみせずして地方に流す。吏學指南「宋法不二文面一而流者、謂二之ー一一」

【編戸】コ 民間の戸籍に編入せる家、庶人をいふ。漢書、高帝紀「諸侍故與レ帝爲ニー一民一」

【編纂】サン 文書をあみあつめる。陸游文「脩ー一、刻二本於金陵舍舍一、今亡矣」

【編次】ジ あみついづ。史、孔子世家「上紀二唐虞之際一下至二秦穆一、ー一其事一」

【編修】シウ ○ととのひて正し。後漢書、祭祀志、注「百禮ー一而不レ潰」‖脩。○文書をあみととのへる。又、國史を編修する官。宋に史館ー一あり、明代は翰林院に屬し、位、修撰に次ぐ。

【編綴】テツ 文書をあみあつめる。綴は又、輟に作る。南史、劉穆傳「手自ー一、恆夜盡綸」‖編集。

【編輯】シフ 前條に同じ。

【編竹】チク たけをあむ。後漢書、「編レ竹

ーレー稱二貧居一」

【編綴】ヘンテツ あみつづる。山谷題跋「ー―國二藏書一」

【編入】ヘンニフ くみいれる、くみこむ。

【編年體】ヘンネンタイ 歷史の一體、年代順に事實を記述するもの、資治通鑑の類。

【編員】ヘンイン 前のうつくしくならびたるさいふ、編は排比の義。漢書、東方朔傳「日旁二照琅璫一」顏若ニーー一」

【編髮】ヘンパツ 髮をあみつかぬ。又、其の髮（史、西南夷傳）＝辮髮。

【編桴】ヘンフ いかだをあむ。呂覽任、淫辭記「維レ舟ーレー以戴レ之」

【編蒲】ヘンホ がまをあむ。任昉文「集レ螢映レ雪、ーレー緝レ柳」

【編笠】ヘンリフ たけのこし。公羊傳、注「竹笠、一名ーー」＝竹輿。

【編列】ヘンレツ ○あみつらねる。詩經、傳「ーニー他髮二爲レ之」○庶人の戸籍に編みつらねる義。史、司馬相如傳「ーー之民」＝編戸。○くみならべる。

【緬】ベン　メン　㊥

○ほそいと（微絲）○かろし（輕）○とほし（遠）はるか（貌）「遐ー」「悠ー」○思ふ貌「懷ー」○一句ヴルは國名。

【緬想】ベンサウ はるかにおもひやる。世說、棲逸「ーニー人外、三十年矣」

【緬然】ベンゼン ○遙かなる貌の水經、注「高墜ーー、與二青漢一接」○遠く思ふ貌。楚辭「ーー引レ領南望」

【絲】

綿（糸部八畫）に同じ。

【練】レン　㊥

○ねる、きぬを灰汁にて煮て熟せしめる。○白のねりぎぬ「素ー」○えらぶ（選）「簡ー」「選ー」○しらべる、けみす（閲）○ねられて成る。○くはしくならす、精熟せしめる「熟ー」「訓ー」「操ー」「諳ー」「洗ー」○一周忌に著る喪服。又、其の祭。小祥忌。

【練鋭】レンエイ 訓練してつよし。又、其の兵。吳子、圖國「此五者、軍之ーー也」

【練達】レンタツ 精しくしらべる。晉陽秋「陶侃ーニー庶事」

【練究】レンキウ ねりきはめる。宋書、自敍傳「好書不レ倦、尤ーニー篤事」

【練句練字】レンクレンジ 詩文を作るに字句をよくねる。珊瑚鉤詩話「詩以レ意爲レ主、又須二篇中練レ句、句中練レ字、乃爲レ工」

【練冠】レンクワン ねりぎぬのかんむり。禮記「主人深衣ーー、待二于廟一」

【練砂】レンサ 丹砂をねる。隋都剌詩「分レ鑪煉レ砂ーレー」＝煉砂。

【練祭】レンサイ 死後十三ヶ月目のまつり、一周忌の祭。禮、曾子問「主人ーー而不レ旅」

【練士】レンシ 兵をねる、練は訓練。道德指歸論「選レ將ーレー、砥二礪甲兵一」

【練字】レンジ 練句練字を見よ。

【練絲】レンシ 蠶種が白きねり絲を見て黑くも赤くも染まること、猶ほ人の性の善にも惡にもなると似たるを悲みし故事。說林「墨翟見二練絲一而悲、爲下其可二以黃一可中以黑上也」阮籍詩「楊朱泣二岐路一、墨子ーー」

【練日】レンジツ 日をえらぶ。莊子「ーレー簡レ辰」＝擇日。

【練習】レンシフ ねりならふ。晉書、胡母輔之傳「ーニー兵馬一」

【練習艦】レンシフカン 海軍士官候補生又は水兵機關兵の實地練習に用ふる艦。

【練熟】レンジユク ねりて精くする。＝練達。

【練染】レンセン ねりそめる。後漢書、百官表「掌下知二物貨一主ニーー、作中染色上」

【練撰】レンセン ねりえらぶ。文心雕龍「綴レ字屬レ篇、心須ニーー一」

【練達】レンタツ なれて通達する。後漢書、胡廣傳「年八十、而心力克壯、ーニー事體一」＝諳練通達。

【練若】レンニヤ 梵寺の異名。梵語、阿蘭若の略。祖庭事苑「ーー亦云二蘭若一」

【練布】レンフ ねりたるぬの。晉書、王導傳「乃與二朝賢一俱制ニーー單衣一レ

【練武】レンブ 武藝をねりて精くする。＝講武。

【練兵】レンペイ 軍隊を訓練する。崔禹錫詩「ーー宜二雨洗一風鼓一候二涼一」

【練磨】レンマ ねりみがく、練習研磨の略。

【縅】【國字】

○をどし。鎧のさね（甲葉）を緒又は革にてつづる「緋ーー」○をどす、をどしをする。

十畫

【縊】イ　エイ　㊥

○くびる、くくる（絞）○自ら頸をくくりて死ぬ。左、桓十三「莫敖ー於荒谷一」○人の頸をくくりて殺す。

【縊殺】イサツ くびをしめてころす。公羊傳「桓公召而ーニー之一」＝絞殺。

【縊女】イジヨ 蟲の名、一名は蜈、長さ寸許、頭赤く身白く、恒に絲を吐き自ら懸る、能く蠶に化す。圖雅「蜈、ーー」注「小黑蟲、絲懸自縊、故名ニーー一」

【縈】エイ　㊥

○めぐる（旋繞）とりまく「ー

繞」「遶ー」又、めぐらす。〇まとふ、からみつく、からまる。詩、周南「葛藟ー之」〇まがる（曲）まつはる（纏）「紆ー」

【縈紆】ウイ めぐりまつはる。史通「列行ー以相間」‖紆縈。

【縈迴】ユイクワイ まとひめぐる。宋蘇詩「一川繞碧自ー」‖縈繞・縈帶。

【縈結】ケツ まつはりむすぼる。吳都賦「苞筍抽ン節、往往ー」

【縈繞】ニヨウ まとひめぐる、とりまく。詩、齊風「水所ニー」‖縈迴・縈盤。

【縈旋】セン まとひめぐる。孫綽詩「下枕湖水相ー」

【縈帶】タイ 〇まとへるおび。禮記「大江如ニー」〇まとひめぐる。‖縈繞。

【縈繞】ネウ まとひめぐる。笙賦「新聲遞曲、奇韻橫遶、ニー耳鼓、繞ニ纏鋒徑」

【縈抱】ホウ まとひいだく。關雎侯詩「千嚴萬壑相ー」

【縈絲】シ まとひめぐる。柳宗元文「縈ン青絲ン白」

【縈雪】セツ めぐりまがる。王安石詩「大江秋正清、島嶼相ー」

【纁】

㊀チン ㊁ウン ㊂ウン・ヲン 眞 文 元 纁の正字

㊀赤と黄との間色。㊁さかんなる貌「紛ー」〇綑ー（ウン）は天地の元氣。又、元氣の上りむす貌。㊂おくぶかし（淵奥）易、繫辭「乾坤其易之ー邪」‖纁。〇ふるわた、やれわた（舊絮）〇もつれあさ（亂麻）〇ー袍はどてら。

【纁袍】ウン どてら。韓詩外傳「晉子褐衣ーー朱三晉完ニ」

【纁黃】ワウ どてらぬのこのわた入。論、子罕「子曰、衣ニ敝ーー與ン衣ニ狐貉ニ者ン立而不ン恥者、其由也與」‖纁褐。

【纁袗】シン どてらのちまき、雨衣。北齊書、文苑傳「身衣ニーー、出經ニ梁綿ニ時寒ニ猶戰ニ」

【縞】

カウ 篠

〇ねりぎぬ（練絲）〇こまかきぎぬ（精絲）しろぎぬ（白繒）〇きぎぬ（生絲）〇國ノ色絲を織り込みて筋目を現はしたる模樣。又、其の布帛「縞ー」「綾ー」

【縞衣素巾】キン 白色の衣服と、もえぎ色の巾と共に周代の賤しき女の服裝。轉じて己の妻の謙稱。詩、鄭風「ー、聊樂ン我員」（員は助字）

【縞羽】ウ しろきはね。張載、擬賦「魂ニーー于清霄ニ、擬ニ妙姿於白雪ニ」‖白羽・素羽。

【縞巾】キン 白ねりぎぬのづきん。晉書、李密戰記「特聽ニーー素帶、居ニ師友之位ニ」

【縞紵】チヨ ねりぎぬのもすそ。韓愈詩「ーー綠幀無ニ等差ニ」

【縞帶】タイ しろきくつ。記、玉藻「縞冠玄武、既祥之冠也」

【縞紵】チヨ 吳の季札が鄭の子產に縞帶を與へ、子產は之に報ずるに紵衣を以てせし故事により、友人間の贈物、又は交際の義に用ふ「左、襄二九」字文通文「情均ニーー、契比ニ金蘭ニ」

【縞服】フク 白きねりぎぬの衣。張九齡詩「ーー紛相送」

【縞練】レン しろきねりぎぬ。蘇軾詩「留中ーー舒ニ眼界ニ」

【縣】

㊀ケン ㊁ケン 霰 先

㊀かく。かかる、たれさがる。‖懸（心部十六畫）〇つなぐ。つながる（繫）〇へだたる（隔絕）遠く離れる。〇あらはる。〇かけて鳴らす樂器、鐘磬の類。㊁あがた。秦の始皇の時に始まりし行政上の區劃、郡又は府に屬す（我國にては郡が縣に屬す）「郡ー」「治ー」國〇あがた、上古は朝廷の御料地、後には縣主（ケンジュ）の支配する土地、中古以後は國主の任國。〇現今地方行政區劃の一、地方自治體の最上級にあるもの。

【縣衙】ガ はかりをかける、勞力の互に相帶しきをいふ。戰國策「不ン能ニ與ン齊ーー矣」

【縣官】クワン 〇天子をいふ。漢書、京房傳「事ニーー十餘年」〇州縣の吏。漢書、食貨志「其在所之ーー」

【縣磬】ケイ 物の盡きて一物もなき義。左、僖二六「室如ニーー、野無ニ青草ニ」‖懸磬・懸罄。

【縣鼓】コ つづみかけに懸けたるつづみ。禮記、明堂之下、ーー在ン西、應鼓在ン東」

【縣耜】シ すきをかけて農事を休む。又、かけたるすき。國語「民無ニーーニ」

【縣車】シヤ 車をかけ、再び出でざる義。轉じて致仕の義に用ふ。後書、蘇竟傳「縣ニ其安車ニ、傳ニ子孫ニ」‖懸車。

點耶。
【縣社】シン　國縣が幣帛を奉る資格の神社。
【縣官】クワン　役人をかける。後漢書、和帝紀「張ル官置レ吏、以理二萬人一、一レ一設レ罰、以別二善惡一」‖懸賞。
【縣丞】ジョウ　縣令の屬官「史、商君傳」
【縣名二將母一曾子不レ入】ケンメイヲシヤウボトシテソウシニイラズ　將母の名を忌みて孝行の曾子は其の縣に入らず「史、管仲逐鄙傳」
【縣政】セイ　○遠く事を出す。劉向疏「一ニ一萬里之外、揚二威昆山之西一」○かけたるはたの風に揺く如く、心の安からざるに喩ふ。戰國策「心搖搖如二懸旌一」懸は縣に同じ。
【縣治】チ　○縣の行政。○縣廳の所在地。
【縣廳】チヤウ　縣の事務を取扱ふ役所。
【縣延】ケイ　縣の政をする役所。後漢書、郭泰傳「給二事一一一」
【縣傳】デン　縣の宿つぎの馬。漢書、貢山傳「皆二縣馬一以賦二一一一」
【縣肉】ニク　獸肉をかけて乾れる。史、殷紀「以レ酒爲レ池、一一レ一爲レ林」
【縣令】レイ　○縣の長官「史、商君傳」○國明治十九年以前の縣の長官。今の縣知事。○縣知事の發する行政上の命令。
【縣圃】ホ　神仙の居る山。楚辭「夕余至二乎一一一」‖玄圃。

【縑】ケン　コン　圓

かとりぎぬ、ふたこぎぬ、あはせたる絲にてかたく織りしきぬ。絹の細密なるもの。漢以後多く贈遺賞賚等に用ふ。亦書畫の用に供す「綵一」「素一」「生一」「熱一」「尺一」「斷一」
【縑衣】イ　かとりぎぬの著物。漢書「嘯傲レ翁須作二單一一一」
【縑緗】ケンサウ　かとりぎぬと、わたと。齊書、陳皇后傳「冬月猶無二一一一」
【縑綵】サイ　あやぎぬのちやあるもの。白居易詩「捧授金銀與二一一一」‖綵縑。
【縑緇】シ　淺黃のうすぎぬ、書物の表裝に用ふ。轉じて書物の喩。晉賈正文「頗遊二縑素一、少閑二一一一」柳宗元文「具二謹札一、捧二一一一」
【縑素】ソ　かとりぎぬの白きもの、書畫を書くに用ふ。圖繪寶鑑「略施二微染一、自然超二出一一一」‖素縑。
【縑緡】ビン　かとりぎぬ。宋史、毅穆傳「仁宗崩、毅用二黃縑一服御用二一一一」
【縑精】セイ　きぬと、かみと。陳與義詩「卻寄二書林一汪二一一一」

【縠】コク　屋

○ちりめん（縮緬）‖綸紗「羅一」「細一」「文一」「綺一」○もぢ。○雲一ムラ　はきりの如く細かなるちりめん。

【絹】ケン　先

結一ケツは心むすぼれて解けず。楚辭「心結一兮折摧」

【綷】サイ　隊　圓

○こと（事）漢書、揚雄傳「上天之一一」○國いき、生命「一が切れる」

【縗】サイ　灰

喪服、長さ六寸、廣さ四寸、胸の前に著けるきれ（通じて衰に作る）

【縒】㊀シ　㊁サ　㊀支　㊁哿

㊀參一シンはふそろひの貌。‖參差。㊁いさぎよし、鮮潔なる貌。○國絲をよる。○よりたる絲。

【綣】シウ　ス　名　通音　遇　スウ

○ちぢみ（縮）「羅一」しじら、葛布の細かにしわあるもの。○ちぢむ（縮）ちぢめるあや。
【綣綣】ケン　ちぢみのこまかきかたびら。詩、鄘風「豈弟君子、遐不二謂矣一一、是縕袢也」

【縉】シン　眞　又、晉に作る

○うすあかいろ（淺赤色）又、其の帛。○さしはさむ（插）束帶の時、笏を大帶（紳）にさしはさむ。轉じて高位高官の者「一紳」‖搢。○一雲は黃帝の時の官名。
【縉紳】シン　○束帶の時に笏シャを大帶に插む。轉じて公卿の貴。縉又搢・薦に作る。漢書、郊祀志「其語不二經見一一一者弗レ道」‖搢紳・薦紳。○轉じて廣く高位高官の人の稱。
【縉紳全書】ゼンシン　國職員錄。

【縝】シン　軫

○こまか（緻密）物事に綿密なり。○くろし（黑）○くろかみ。‖黮。○うみたるあさいと。
【縝密】ミツ　こまか。陸龜蒙、紀二錦韜一文「非レ細非レ綸、一一柔美」
【縝紛】フン　衆くして盛んなる貌。上林賦「周覽泛觀、一一紀芬」
【縝密】ミツ　心を用ふることが、こまかにしてつつしみぶかし。禮、聘義「溫潤而澤仁也、一一以栗知也」南史、孔休源傳「休源累居二顯職一、一一未二嘗言一於中事一」

【縛】ジャク　藥

○かざり、繁く多きいろどり「鮮ー」「紛ー」「繊ー」○しけし、わづらはし、こまか（細）「繁ー」

【繽彩】ヒンサイ　かざれるいろどり。晉書、夏侯湛傳「潤ー之飾」ー紛。ー影燦」

【繽組】ヒンソ　しげくいろどれるくみひも。江賦「青綸競糾、ー一爭映」

【繽紜】ヒンウン　わづらはしき盛儀「繁文ー」宋史、李若水傳「有司循二常習一、敢欲レ加ニー一非レ所レ以靖二公爾一也」

【繽麗】ヒンレイ　はそやかにしてうるはし。太眞外傳「綵繒ー一、一時輝レ此」

【繰】セン　先

うすあか、ももいろ（淺絳色）爾雅「一洗謂之ー」又、其のきぬ。

【絹】ケン　霰

○くみひも。＝條。○つるぎのふくろ（劍衣）＝韜。○かくす（蔵）

【縋】ツヰ　寘

○おろす、縄にすがりてさがる「下ー」左、僖三十「夜ー而出」○さけおろしたる縄「懸ー」

【縋登】ツヰトウ　索をさげて之にすがりてのぼる。左傳「使二師夜縋而登一」

【縢】トウ　蒸

○とぢる、ふうじる（緘）「金ー」「封ー」からげる、しばる、束ぬ。○なは（縄）○行ー一はむかばき、きゃはん（脛衣）○ふくろ（縢）

【縛】ハク　藥

○しばる、くくる。○つかぬ（束）つなぐ（繋）○いましむ。○とらへつなぐ、しばりて自由を得しめず「束ー」「捕ー」「生ー」「縄ー」史、淮陰侯傳「有ー廣武君而致麾下者、信乃解其ー」○いましめ、なはめ「就ー」

【縛杷】バクハ　しばりて手うちにする。後漢書、宋均傳「大怒、收レ郎ーニー之一」

【縛擒】バクキン　いましめとらふ。呂覽「生縛而擒之」＝捕縛・擒縛。

【縛束】バクソク　しばりつかぬ。後漢書、郭訓傳「爾有二固レ疾者一、輒拘持ー一、不レ與二兵刃一、使二醫藥療レ之、愈者非ー一、小大莫レ不二感悦一」＝束縛・縛束。

【縛賊】バクゾク　ぬすびとをしばる。李商隱詩「入レ幕ー一獻二太尉一」

【縛肘】バクチウ　かひなをしばる。晉書、佛圖澄傳「長大白皙、以二朱絲一縛二其肘一」

【縛著】バクチヤク　しばりつける。魏志、呂布傳、注「以レ綵繩二女身一、ーニー馬上、夜自送レ女出」

【縛】ハン　寒

こぶくろ（小嚢）

十一畫

【縣】（一）エイ・アイ　霽　ィ　支　（二）エイ　霰

（一）これ（伊・是）○ほこぶくろ（戟衣）○あかぐろき色のきぬ。（二）あゝ、歎く聲。左、隱元「爾有ー母遺、ー我獨無」

【繇】（一）エウ　蕭　（二）イウ　尤　（三）チウ　宥

（一）しけし、しげる（茂）書、禹貢「厥草惟ー」○ぬく（抽）○したがふ（從）○うごく＝搖。○ぶやく、えだち。ぶやくに出る「ー役」＝徭。○うた、謠（言部十畫）に通ず。○人名、陶に通ず、答ー一は人名。＝皐陶。（二）よる（自因）易、坤卦「其所ー一來者漸矣」＝由。○すぐ（過）○みち、はかりごと「皇ー」＝猷。○ーーは行く貌。＝悠悠。（三）易のうらかたのことば、卦兆の占辭。左、閔二「成風聞成季之ー」

【繇役】エウエキ　ぶやくに出る。漢書、食貨志「周室既衰、ー一積作」＝徭役。

【繇戍】エウジュ　邊境をまもる。又、其の兵。漢書、高帝紀「復勿ニーー一」＝徭戍。

【繇俗】エウゾク　歌謡と風俗と。漢書、李尋傳「撥二山川變動一、參二人民ーー一」

【繇賦】エウフ　ぶやくと租稅と。後漢書、敬帝紀「減二太官一、省ニーー一」

【縯】（一）エン　（二）イン　銑

（一）ながし（長）（二）ひく（引）○人名、劉ーは後漢の光武帝の長兄。

【縩】キャウ　養

○むつき、せおひおび、小兒を背せなかに負ふ帶。＝襁。○ぜにさし（錢貫繩）俗に錢に作る。○ふしいと（類）○圖おしめ、おむつ。

【縩屬】キャウゾク　相屬ツヅくこと襁の如きをいふ。漢書、兒寬傳「輸租ー一不レ絕」

【縩褓】キャウホ　むつき。史、衞將軍傳「青子在ニー一中一」注「縩長尺二寸、闊八寸、以約二小兒子背一也」＝襁褓。

禮緩。

【綏】サイ　國　又、緌に作る　粹一は鮮ヤかなる衣。又、衣のすれるこゑ。

【纙】サイ　國　いとぐるま、絲をくだに巻きつける車。

【繅】㊀サウ・ソウ　呉　㊁サウ　漢　㊀いとをくる、繭を煑きて絲を出す。孟、滕文公「夫人織一」○繅りの繩。㊁玉に繞くしきもの、五采の文ヤあり。○五采の絲繩。‖藻。

【繅絲】ソウ　繭をひきて絲をとる。李白詩「一一機君頭緒多」

【繅車】ソウ　いとくりぐるま。蘇軾詩「此身如レ繅自繁縄、左旋右轉留二一一」

【繅藉】ソウ　玉にしくもの。周禮、春官「一一五采五貮」

【縫】サン　國　はたあし。庭旗の遊蘇一」

【縫】シ　國　繅に同じ

○かみづつみ（紙髪）髪をつつむ黒き帛。○一一は衆多なる貌。宋玉賦「一一幸幸」

【縮】シュク　屋

○ちぢまる、ちぢむ、短くなる「伸一」「畏一」「愧一」○したむ、こず。左、僖二八「無以レ酒」○たて（縦）檀弓「古者冠一縫」○つかぬ（束）縄にて約束する。○しりぞく（退）「退一」○ただし、なほし（直）事理の直きにもいふ。孟、公孫丑「自反而一」○をさむ（斂）「一手」「一小」○みじかし（短）○ちぢれる。○しかめる（蹙）「一鼻」○みだら（乱）○かく（缺・欠）足らず。國○ちぢみおりの略。○上縄ノ

【縮頭】シュク　はなすにをしかめる。呂覧「一レ而食レ之」‖慳嗇。

【縮衣節食】シュクイセツシキ　節倹する。陸游詩「一一勤二躬業一」

【縮遠鏡】シュクエンキョウ　國とほめがね、望遠鏡。

【縮項】シュクコウ　うなじをちぢむ。恐れる貌。庾信、徐有功傳「當二此時一、左右及衙仗、在二庭陛一者數百人、皆一一不二敢息一、而有功氣定言詳、義然不レ撓」

【縮甲】シュクカフ　よろひを束ぬ。戦國策「其レ一則可」

【縮減】シュクゲン　へる。へらす。晉書、律歴志「從レ度以盈二加一一三一之」‖損減。

【縮收】シュクシュウ　ちぢまる。ちぢめる。‖收縮。

【縮寫】シュクシャ　原形より小さくちぢめてうつす。

【縮尺】シュクシャク　製圖上原形よりも縮小したる圖を畫く時、其の縮小すべき一定の比例の寸法。

【縮手】シュクシュ　てをさむ、仕事をやめる。韓愈文「巧匠旁觀、一二袖閒」‖斂手・袖手。

【縮縮】シュクシュク　おそれてちぢかまる貌。唐書、吐蕃傳「見二中國服飾之美一、一一愧退」

【縮小】シュクセウ　ちぢめちひさくする。又ちぢまりてちひさくなる。

【縮退】シュクタイ　ちぢみしりぞく。呉志、呂蒙傳「倘レ臨レ機擬レ敵、奇變一一」‖慴退。

【縮地】シュクチ　土地をちぢめて、近くする。神仙傳「費長房遇二壺公一、有二神術一、能一一一一千里一、來在二目前一、放レ之復如レ舊」

【縮地補天】シュクチホテン　地を縮め天を補ふ、天子が天下を改造する義。舊唐書、音樂志「高皇一一、重張二區宇一」

【縮朒】シュクヂク　ちぢみ退きて事にたへざる貌。晉書、五行志「當二春秋時一、侯王申多一一不レ任レ事」

【縮圖】シュクト　原形をちぢめてえがきたる圖。

【縮鼻笑】シュクビセウ　鼻をしかめて笑ふ、事を厭ふ貌。北史、崔儉傳「梁與二魏收一不レ協、收後稟典二國史一、儉恐レ被二惡書一、乃悅レ之旦、晉有二玷闕一、今則魏子、收縮二鼻笑レ之、儉不レ釋」

【縮縫】シュクホウ　縦にぬふ、たてぬひ。衛縫ニヒの對。禮、檀弓「古者冠一一今也衡縫」

【縮葉】シュクエフ　○次條に同じ。○草木が霜枯れる。禮記「草木黄落」注「謂二枝葉一一一」

【縮慄】シュクリツ　ちぢみおそれる。唐書、李想傳「爲皆一一」‖縮栗。

【縮緬】シュクメン　國絹織物の一種、よりのつよき生絲を緯ヨコとして縮み織にせしきぬ。

【縦】㊀シュウ　㊁シュウ　㊂シュウ　㊃ソウ　呉　漢　多　通　音古、從に作る

㊀ゆるぶ、ゆるし（緩）○はなつ（放）ゆるす、ゆるしにがす「一囚」おく（舍・置）○つける「一火」○矢を發する。○ほしいまま（恣・放）「放一」「任一」○ほしいままにす、わがままにふれまふ。○自由にする。○たとひ、よし、よしや、推想す

ろ辭。論、子罕「予一不得ニ大葬ニ」（一令一使とも連用す）㊁一決ははげます、すすめる。‖慫慂。㊂たて。又、南北をいふ。横の對。古、從に通ず。○あと、あしあと、古、蹤に通ず。㊃一一は急ぐ貌。

同訓異語 ○ヒキ縦・縦令・假使・借令・借使・譬○縦は、さうはなけれども、さうして見たときはなり、ゆるすといふ義より、轉じて助辭となす、史記に「縦彼不レ言、籍豈不レ愧ニ於心一乎」とある如し、通じて從に作る、縦然と書きても同じ、唐に多く用ふ。○縦令はさうはなけれども、ゆるしてさうさせて見るなり。○假令・假使・假如・假饒の四者、皆假設之辭と註す、かりにしかせしめばの意なり。○借令・借使・試使・設使・就令・饒使・縦使の七者も亦略ニ上に同じ。○譬ヒトは此物を以て、彼物に比類していふ、下には必ず、ごとしの字を置くなり、喩・況二字に同じ。史、南越傳「成敗之轍、譬若ニ刻鵠一」

○オヨイ縦・横・放・肆・恣・擅○縦は繩をゆるめとりはなして、自由にするなり、法度などを守らざるにいふ。○横は無理にわがままをするなり、横行と熟す。孟子「諸侯放恣、處士横議」○放はしまりなく、推し放つ意、放縦・放逸・放恣などと用ふ、法度などを守らざるにいふ。○肆は慾ふままにするなり、放肆と熟す、恣に同じ。○恣はわるきことを氣ままにするなり、横恣と熟す。行義「將レ恣ニ凶欲一」○擅は專なり、一人にてほしいままにするなり、擅レ朝は、わが身ばかり、君寵をうくること、擅場は役者などの、其の座中にて、只一人すぐれたる上手をいふ。

○スル縦・赦・宥・釋・恕・免・許・放・原・免・與等の別は赦（赤部四畫）の條を見よ。

【縦逸】ショウイツ ほしいまま。晉書、劉堪傳「輒復一一」

【縦飲】インショウ ほしいままにのむ。杜甫詩「一一久拚人共棄」

【縦臥】ショウガ ほしいままにうたふ。晉書、袁山松傳「善ニ音樂一（中略）每四ニ酣醉一一ニ一之一」‖放歌。

【縦歩】ショウホ ほしいままにしておごる。陸機擬古詩「舉寢且一一」‖放歩・傲縦。

【縦衡】ジュウカン くつわをゆるめると傳休奕、良馬賦「一一斯逝、覩レ轡則止」‖馳衡。

【縦火】ショウクワ ひを放ちてやく。史、五帝紀「一一焚レ廩」漢書、李陵傳「從ニ上風一一レ一」‖放火。

【縦横】ジュウオウ ほしいままに見る。史、高祖紀「高祖常縦ニ戚姫一一ニ一乘レ龍」

【縦覧】ジュウラン ほしいままに見る。蘇軾文「欲三遊目一一究ニ其有無一」

【縦貫】ジュウクワン たてにつらぬく。又、南北にとほる。東西を横といふの對。

【縦管】ジュウクワン たてに立てる。たて。沈約文「既一一而横構」

【縦覆】ショウフク ○兵をはなちてうつ。唐書、高開道傳「稜一一破レ之」○さまたたく。楊戩疏「取ニ鵲鼓一一臨レ軒一一」

【縦道】ケンショウ ○はなちやる。後漢書、班超傳「願レ得ニ生還一一ニ一之一」○ヒキ縦令。

【縦レ矢】シャヲハナツ やを放つ。唐書、兵志「一一三百歩、四發而二中一」

【縦恣】ショウシ ほしいまま。韓非子「士民一一ニ一于內一」

【縦肆】ショウシ ほしいまま。晉康文「從容一一、遺ニ忘好惡一」‖放肆・縦恣・肆縦。

【縦囚】ショウシウ らっに入りてゐる罪人をゆるしはなつ。唐書、太宗紀「一一來歲、皆赦レ之」歐陽修に一一論あり。

【縦容】ショウヨウ ほしいままにしておごる。北史、魏景穆十二王傳「以ニ一一ニ忘レ倹」

【縦焼】ショウセウ 火を放ちてやく。後漢書、皇甫嵩傳「若因レ夜一一、必大驚亂、出レ兵擊レ之、田單之功、可レ成也」

【縦迹】ショウセキ あしあと。李白詩「譬如ニ雲中鳥一一去無ニ一一ニ」‖蹤迹。

【縦発】ショウハツ ○矢を發ちつを縦といひ、食を進ふを發といふ。詩、鄭風「抑縦捨忌、抑一一忌」○轡じて善く馬を御するを縦控一一といふ。

【縦横】ジュウオウ かいを放ちて舟の行くにまかせる。櫂は棹に同じ。張協、七命「一レ一隨レ風、弭レ櫂濟レ波」‖放櫂。

【縦脱】ショウダツ 禮儀にかかはらずして我儘なり。莊、天下「一一無レ行」‖放蕩。

【縦探】ショウタン ほしいままにさぐる。蘇軾詩「自レ昔懷三幽賞一、今茲得ニ一一一」

【縦誕】ショウタン ほしいままに大言する。晉書、王澄傳「酣燕一一、時レ憚極レ嫡」

【縦談】ショウダン 思ふままにかたる。楊修答臨淄侯牋「一一窮ニ化元一」

【縦肆】ショウシ ほしいままに馬をはしらす。聖主得ニ賢臣一頌「一一馳騁、必如ニ彫琢一」

【縦放】ショウハウ ほしいまま、ほしいままにやる。金史、趙秉文傳「雖レ然一一、不レ拘ニ一律一」

【縦歩】ショウホ 氣ままにあゆむ。道抔詩「一一車馬休、樂レ自若翠陌」

【縦臾】ショウユ すすめそそのかす。漢書、衡山王傳「候ニ星氣一者、日夜一一王謀反事一」‖慫慂・慫恿。

【縦欲】ショウヨク 私欲を制せずしてほしいままにする。左傳「我實レ一レ、而不レ能ニ自克一也」

【縦覧】ジュウラン ほしいままに見る。蘇軾文「欲三遊目一一究ニ其有無一」

【縱斷】ジュウダン たてにたちきる。
【縱橫】ジュウオウ ○たてと、よこと。盧綸詩「川原唯寂寞、歧路各ー一」○思ふまま。杜甫詩「凌ー雲健筆意ー一」○合縱連橫の略。戰國策士の術。魏徵詩「ー一計不ー就」‖從橫。從衡。
【縱橫家】ジュウオウカ 古の九家の一。時勢を審察し人主に遊說するもの。蘇秦は合縱を主張し、張儀は連橫を主張す、故にいふ。
【縱橫無礙】ジュウオウムガイ どちらにも何等のさはりなし。
【縱縱】ソウソウ 急きて事に趨く貌。禮、曲禮「喪事欲ー其事ー一」
【縱令】タトヒ たとひ、よしや、假定の助辭。歐陽修文「ー一河道可ー復、乞俟ー豐年一餘力漸次興修」‖假令。

【績】 セキ 錫

○うむ、つむぐ、麻絲麻等より絲をひき出す一紡ー」詩、陳風「不ー其麻」○わざ、しごと（事業）○いさを、てがら（功）「成ー」「功ー」「勳ー」「治ー」「凝ー」書、堯典「庶ー咸熙」【考ー績】官吏の眞否と功過とをしらべる。書、堯典「三歲ー一、三考黜ー陟幽明」【績效】てがら、いさを。唐書、李晟傳「勳ー昭ー一、與ー二武儀一」【績女】絲をつむぐをんな。陸游詩「ー一窺ー纖牧豎迎」【績紡】セキハウ 絲をつむぐ。晉書、吳隱之傳「家人ー一以供ー二朝夕一」‖紡績。【績文】セキブン 文章を作る。韓愈文「稱ー學ー一、以蓄ー二其有一」【績用】てがら、いさを。晉、幾典「九載ー一弗ー一成」

【總】 ソウ 董

○すぶ。○すべて、みな（皆）姚合詩「問ー我來期ー一不ー一知」○あつむ（聚）あつめつかぬ（聚束）あつめ合せる、しめる。○ひきる、とりしまる（將領）すべをさめる、支配する。論、憲問「百官ー一己」○むすぶ（結）○かかる（係）○ー一角はあげまき。○つかぬ（聚束）かみづつみ（束髮）又、其の具。○ふさ（流蘇）○物事がまとまる、おほくくり（會要）淮南、原道「萬物之ー一○ー一は柔き貌。又、亂るる貌。

【總】 ソウ 董

總・評・凡・部の別は海（水部九畫）の條を見よ。
【總綱】ソウカウ 政の大綱をすべくくる。晉書、武帝紀「此殿所ー二以垂拱ー一、實ー二成于良二千石一也」
【總角】ソウカク ○あげまき、小兒の髮をすべあつめて頭の兩側に角の形に結ぶもの。詩、齊風「齊子發兮、ー一卿兮」○轉じて小兒の義とす、卽ち男女の未だ冠笄せざる者の稱。
【總角之好】ソウカクシカウ 幼時のまじはり。吳志、周瑜傳、注「周公瑾、英俊異才、與ー二孫有ー一ー、骨肉之分一」
【總額】ソウガク すべての高、そうじめ。仕學大乘「止有ー二通額ー一、並無ー二各里細額一」
【總合】ソウガフ すべあはす、個個別別の事物を一つにあつめる。‖綜合。
【總監】ソウカン 事務をすべつかさどる。又、其の官。南史、雷次宗傳「並以ー二儒學ー一ー一諸生一」
【總曉】ソウケウ 全體をかんがみ察する。髮は皓皓に通ず。齊書、樂志「明君御ー二四海一、ー一盡ー二人筭一」
【總御】ソウギョ すべをきめる。魏志、武帝紀「終能ー一ー二皇機一、克成ー二洪業一者、惟其明略最優也」‖統御。
【總軍】ソウグン 軍隊のこらず。‖全軍。
【總支】ソウシ ふさのつきたるほこ。宋書、桂陽王休範傳「綀甲照ー一水、ー一成ー一林」
【總會】ソウクワイ ○すべてあつまりあふ。梁簡文帝文「日中ー一」○團銀行會社などにて其の全體の社員株主等の會議。
【總括】ソウクワツ すべくくる。北史、魏太武五王傳「爲機主學ー一古今名紀賢后一、凡著ー二四卷一、號ー二之一」‖綜括。
【總管】ソウクワン すべてとりしまる。又、其の官。事物紀原「晉有ー二都督諸軍事一、後周改爲ー一ー一」
【總計】ソウケイ しめだか、總勘定。
【總檢校】ソウケンカウ 團檢校・勾當・座頭などをすべてとりしまる官人の官。
【總攝】ソウセフ すべまもる。宋貴之文「ー一ー諸將一」
【總攻擊】ソウコウゲキ 總がかりにてせめうつ。
【總裁】ソウサイ すべつかさどる。又、其の職。宋史、呂蒙正傳「政術ー二冤靜一、委ー二任僚屬一、事多ー一而已」‖總理。
【總菜】ソウサイ 團日日三度の家庭料理。
【總認類】ソウサイルヰ 動物分類の一部門、鼠が總駐をなすもの、たつのおとしごの類。
【總至】ソウシ 悉くあつまり來る。任昉、宣德皇后令「祥光ー一、休氣四塞」
【總集】ソウシフ 多くの人の詩文を一つに集めしもの（專ら一人の詩文を集めたるを別集といふの對）文選の類。
【總攬】ソウラン すべあつめる。崔仲舒文「統ー二理海內一ー一百僚一」
【總身】ソウシン からだぢゅう、そうみ。‖全身。
【總攝】ソウセフ すべあつまる。すべあつめる。馬融、笛賦「參伍以變、節ー二疾其數一」魏「儲ー二妃嬪六宮一ー一、次ー二舘ー一ー二其陰陽之數一也」
【總署】ソウシヨ すべつかさどる。後漢書、百官志、注「掌ー二凡行禮及祭祀一ー一

一曹事」

【總稱】ソウショウ 全體をひきくるめたるとなへ。‖總名。

【總數】ソウスウ すべてのかず。‖全數。

【總寮】ソウリョウ すべてとのへる。晉紀「宣帝過レ温、見二父老故吏一、讌飲累日、歡曰、願二清萬里一ニ一八荒一」

【總攬】ソウラン すべてをひきくるめて說く。

【總則】ソウソク 全體にわたる規則。

【總代】ソウダイ 團全體の人の代理人、總名代。

【總督】ソウトク のこらず、全部。‖全體。

【總長】ソウチョウ 全體をとりしまる長官。‖總理。

【總追捕使】ソウツイブシ 團全國の追捕使のとりしまり役。源頼朝に始まる。

【總統】トウ 全體の事ならをすべる「大一一」漢書、百官表「太師・太傅・太保、是爲三公、鎭二燮陰陽一而論レ政、無二不一一一」

【總督】ソウトク ○すべくくりてとりしまる。又、其の官。漢書、西域傳贊「一ニ一城部三十有六」○一省の長官の名。○團朝鮮及臺灣總督府の長官。

【總包】ソウホウ すべつつむ。易經、疏「乾元、一ニ六爻」

【總苞】ソウホウ 菊花のうてなの如く一朶の花を載する夢の如きもの。

【總髮】ソウハツ 團昔、男子がさかやきをそらずに全體の髮をはやしたるをいふ、そうがみ。

【總則】ソウソク 事をすべ執る。漢書、張禹傳「君其開レ心致レ思、一ニ一諸事一、推以二孝孳一、無レ遺二厥宜一」

【總辦】ソウベン 事をすべつかさどる。又、其の職。

【總務】ソウム 全體の事務。又、其の務をすべつかさどる人。

【總名】ソウメイ 數個のものを總べて名づける。五經要義「終南、山之一一」‖總稱。

【總目】ソウモク すべての目次。梅堯臣詩「出文康書作ニ一一一未レ暇綴レ組酬二草萊一」

【總攬】ソウラン ○政權をすべとる。後漢書、光武紀「明二恒政體一、一ニ一權綱一」○人心をすべて己に服せしむる。獨志、諸葛亮傳「一ニ一英雄」

【總理】ソウリ すべをさめる。又、其の職。‖綜理・統理。

【總領】ソウリョウ ○すべをさめてとりしまる。又、其の人。漢書、總相傳「厲精爲レ治、練二羣臣一、核二名實一、而相一ニ一衆職一、故稱二上聖一」‖統領。○團氏の嫡流。又、長男。

【總括】ソウカツ 一列の人に總て報する。五分律「一ニ一而去」

【總錄】ソウロク ○すべをさめる。後漢書、馬援傳「帝益以爲レ能、尙書衆事、皆令一ニ一之」○團官人のとりしまり役。

【總論】ソウロン 全體をすべくくれる論。

【縶】 チフ 國 一音 チツ

○とらふ(囚拘・拘執)つなぐ(繫)とらはれる、つながる「拘一」「繫一」左、成九「南冠而一者誰也」○ほだす。ほだし(羈絆)「羈一」

【縶維】ソクイ つなぐ。詩、小雅「縶レ之維レ之」

【縛】 ㊀ テン 鹽 ㊁ ケン 銑 ㊂ セン 鹽 ㊃ テン 銑

㊀しろ(白色)白くして鮮か。㊁きぬ。‖絹。㊂こまかきぬ。㊃つかぬ(束)羽を束ねる、まく(卷)

【綳】 ハウ 庚

○つかぬ(束)兒を束ぬる衣(袍)○つつむ、まく(卷)

【綳帶】ホウタイ 婦女の用ふる幅廣き帶。

【縵】

㊀ バン・マン ㊁ バン・メン ㊂ バン・メン 諫 刪

㊀むぢのきぬ(無文繒)○車にもやうなし。又、すべて文飾なきもの。○一田はうねをつくらざる田。㊁むぢのきぬ。㊂他の樂に和する雜聲、つれびき。○一一は雲などのうねうねとして縵ヤルかなる貌。又、敎化の廣く遠きに喩ふ。尙書、大傳「糺一一分」又、死生を齊うする貌。

【縵樂】バンガク 雜へ奏する音樂。周禮、春官「敎ニ一燕樂之鐘磬一」

【縵緻】マンモウ 無文のかとりぎぬ。北史、文明皇后馮氏傳「后性儉素、不レ好二華飾一、躬御ニ一一而已」

【縻】 ビ 支

○つなぐ。つながる(繫)「拘一」「繫一」○きづな(牛轡)なは「羈一」○ちる。ちらす(散)‖靡。

【繆】 ㊀ ビウ 尤 ㊁ ビウ 宥 ㊂ レウ 篠 ㊃ ボク 屋

㊀からむ、まとふ(纏綿)「綢一」㊁あやまる。あやまり(誤)「錯一」「紕一」‖謬。○いつはる。いつはり(詐)○たがふ、まちがふ(違)「乖一」名と實とたがふ。㊂めぐる、まとふ。‖繞。㊃穆(禾部十一畫)に同じ「昭一」○姓、秦の一公の後。

糸部 繆・繞・繚・繞・繕・繒・繙・繚・繞・繕・繒・繙・繚・繞・繕・繒・繙

【綛巧】カウ　巧妙なるはかりごと。漢書、陳安國傳「窓者有ㇾ仙ㇾ一可ㇾ以食ㇾ之、則臣不ㇾ知也」文天祥正氣歌「皇有ㇾ仙ㇾ一」

【綛語】ゴ　いつはりのことば。五代史、漢湘陰公實傳「吾平生不ㇾ爲ㇾ一」綛一本語に作る。

【綛說】セツ　あやまれる言說。莊子「多辭ㇾ一、不ㇾ耕而食、不ㇾ織而衣」＝綛言。

【綛篆】テン　六書の一、綛は綢繆の義、うねり曲りたる篆書、主に印刻に用ふ（漢書、藝文志）

【綛戾】レイ　あやまりもとる。漢書、劉向傳「朝臣舛午、ㇾ一乖刺」

【綛繞】ジョウ　まつはりめぐる。漢書、司馬相如傳「ㇾ一玉綏」

【綛綟】レツ　絲のもつれたる貌。王安石詩「漢合罷ㇾ一」

【綵】ヒツ　質

○ひざかけ（裙・襜膝）＝韠。○冠のぬひめ。

【縹】㊀ヘウ　㊁ヘウ　篠　豪

㊀そらいろ、はなだいろ（淺青色）渾きある色（淡青色）「縹ㇾ一」「青ㇾ一」○もえぎ（青黄色）○ㇾ紗は遠く視る貌。㊁ㇾ一は輕く舉る貌。賈誼、鵩鳥賦「鳳ㇾ一其高遨兮」

【縹瓦】グワ　はなだ色のかはら。皮日休詩「金吳ㇾ一十萬戸」

【縹蒨】コウ　はなだ色のつぼ。范成詩「ㇾ一買ㇾ酒洗ㇾ春愁」

【縹青】セイ　はなだいろ。曹植詩「石榴植ㇾ前庭、綠葉映ㇾ一」＝青縹。

【縹帙】チツ　はなだ色のほんづつみ、帙は書衣。轉じて書卷をいふ。唐太宗、帝京篇「章編斷復綴、ㇾ一舒還卷」

【縹瓢】ヘウ　はなだいろの書物ぶくろ。隋書、經籍志「總ㇾ括羣書ㇾ盛以ㇾ一、謂ㇾ之ㇾ書囊ㇾ」

【縹妙】ベウ　はるかにひろき貌。木華、海賦「翠仙ㇾ一」

【縹緲】ベウ　○前條に同じ。李白詩「參差遠天際、ㇾ一晴霞外」○高く遠き貌。白居易詩「山在ㇾ虛無ㇾ一間」

【縹碧】ヘキ　はなだ色の玉の類。左思、吳都賦「瑤貝流黃、ㇾ一珠玉」

【縹綫】セン　はなだ色のあやぎぬ。後漢志、楊阜傳「被ㇾ一ㇾ牢窒繭」

【縹緲】ベウ　はなだと、みどりと。隋書、禮儀志「天子以ㇾ夏綏六采、玄黃白赤ㇾ一」

【緐】㊀ヘン・ハン　㊁ハン　元　叅　又繙に作る

㊀しげし、善に通ず。○おほし（多）詩、小雅「正月ㇾ一霜」○さかんなり（盛）「ㇾ昌」○しばし（頻）「ㇾ文縟禮」いそがし（忙）「ㇾ忙」いりまじる（雜）「ㇾ蕪」○しげる、ふえる。しげくする。左、昭三「景公ㇾ于刑」㊁うまのはらおび「ㇾ纓」

【緐繁】ハン　繁・蕃・稠・滋・蔓○繁は筒の反なり、多くして文采の入り雜れる義、禮數繁・春色繁の如し、又文采の意なく、只ごたごたと多く雜るにも用ふ、繁雜と熟す。○蕃は艸の茂り盛んなるなり、蕃殖と連用す。繁と通用すれども。文采の意はなし。○稠はしげり密やかなる義、稀の反、人ごみを稠人といひ、草木の茂り合ひてすきま無きを、草木稠といふ。○滋は蕃と似たり、水の物を浸して、潤のひろがる意より、物の增しひろがる義に轉用す、又孳と通用す。孳は畜類の子を生みてふえることなり。○蔓は艸のしげるなり、盛んなる意にて、多き意はなし、蕃は衆艸の上にていひ、蔓は一艸一木の上にていふ、蕃は艸に限り、蔓は木にも通用す、盛んなる意ある故、才德の上にも用ひ、秀才を蔓才ともいふ。

【繁蔚】ハン　しげし、しげる。又、文彩のあやある貌。沈約文「辭藻ㇾ一」

【繁陰】ハン　樹竹のしげれるかげ。歐陽修、醉翁亭記「佳木秀而ㇾ一」

【繁英】ハン　しげき花。李嶠詩「落楹繁ㇾ一照ㇾ淫黛」

【繁榮】エイ　しげりさかえる。陶潛詩「卉木ㇾ一、和風清雅」

【繁纓】エイ　諸侯の馬の飾、繁は馬の腹帶、纓は馬の鞅ヨウ左、成二「膊ㇾ曲斷ㇾ一ㇾ以朝」

【繁葉】ヨウ　しげりたるは。

【繁衍】エン　しげくのびる、さかんにはびこる。＝蕃衍。

【繁苛】カ　法律などがわづらはしくやかまし。＝煩苛。

【繁柯】カ　しげれるえだ。應場賦「揚ㇾ白日之炎陰、承ㇾ翠柯之ㇾ一」

【繁閑】カン　せはしきと、ひまなると。

【繁簡】カン　繁多なると簡略なると。＝煩簡。

【繁縟】ヂョク　おほきさいはひ。張昱詩「一人膺ㇾ大慶、萬字受ㇾ一ㇾ」＝繁祉。

【繁莖】ケイ　○草木しげりて花さく。人の少壯の時に比す。史、呂不韋傳「不ㇾ貞ㇾ一時、樹ㇾ本、即色衰愛弛後、雖ㇾ欲ㇾ開ㇾ口、倘可ㇾ得乎」○にぎはひさかえる。沈約詩「落陽ㇾ一子、提安輕薄兒」

【繁刑】ケイ　刑罰をしげくす。韓詩外傳「堅甲利兵不ㇾ足ㇾ以爲ㇾ武、高城深池不ㇾ足ㇾ以爲ㇾ固、嚴令ㇾ一、不ㇾ足ㇾ以爲ㇾ威」＝緐刑。

【繁劇】ゲキ　いそがはし。郭璞、新ㇾ出ㇾ書ㇾ表「以ㇾ無ㇾ用之才、當ㇾ一之

伍ニ‖繁忙・劇繁。
【繁絃】ハン　しきりなる琴の音。蔡鶴、琴賦「一一既抗、雅韻乃揚」
【繁絃急管】ハンゲンキフクワン　管絃のしげくきびしき絲竹。錢起詩「一一催ニ歌酣ニ」
【繁細】ハンサイ　わづらはしくこまか。賈誼、新書「一一是處、不レ圖ニ後患ニ非レ所ニ以爲ニ安也」‖繁碎・煩細。
【繁碎】ハンサイ　わづらはしくこまやか。南史、鍾嶸傳「一一職事、各有ニ司存ニ」‖繁瑣・繁細。
【繁霜】ハンサウ　しげくふるしも。詩、小雅「十月一一」
【繁雜】ハンザフ　しげくいりまじりてわづらはし。前書、牛弘傳「雖ニ職務一一、手不レ釋レ卷」
【繁遊】ハンイウ　しげくす。しげし。張華文「一一族類、乘居四遊、翩翩然有ニ以自得ニ」
【繁熾】ハンシ　しげくさかんなり。曹植詩「皇綱紊且熾」
【繁昌】ハンシャウ　〇草木がさかんにしげる。揚雄賦「生植日一一」〇國又家がさかえる。宋書、謝靈運傳「陣ニ中無ニ以一一」
【繁鼓】ハンコ　耳弓の名。荀、性惡「一一鍾鼓、古之耳弓也」
【繁昏】ハンコン　盛昏に同じ。五代史、郭崇韜傳「可レ使ニ一一坐變ニ清涼ニ」‖酒宴。
【繁縟】ハンジョク　しげくして多し。宋史、劉綜傳「或地居ニ要津ニ或戸口一一之處、望ニ親加ニ選任ニ」
【繁殖】ハンショク　しげくふえる。孟、滕文公「禽獸一一」
【繁縟】ハンジョク　〇しげくしてつやあり。縟は文采。晉書、文苑傳序「綜採一一、存ニ軸清英ニ」〇くだくだし。繁文縟禮。
【繁盛】ハンセイ　さかんなり。李中詩「園圃一一日、一一復風流」
【繁說】ハンセツ　わづらはしく述べる。墨子「慈者必緩、而不ニ一一一ニ」
【繁湊】ハンソウ　しげくあつまる。宋書、徐廣傳「戰功殷積、報紋雜レ遝、萬機一一、固應レ難レ遂」
【繁多】ハンタ　しげく多し。後漢書、蔡邕傳「辟歷數賢、殆刑誅一一之所レ生也」
【繁榮】ハンエイ　花のしげきえだ。方干詩「一一壓レ枝卑」
【繁昵】ハンヂツ　多きさいはひ。詩經「綏ニ我眉壽、介以ニ一一ニ」
【繁榻】ハンタフ　さかんにしげる。隆昭明太子詩、「藥樹永一一」
【繁條】ハンデウ　しげきえだ。趙彦昭詩「一一偏是著レ花遲」
【繁忙】ハンバウ　いそがし、多忙。‖繁劇。
【繁法】ハンパフ　〇おきてをわづらはしくする。史、秦紀贊「秦之盛也、一一嚴刑、而天下振、及ニ其衰一也、百姓怨望而海內畔矣」〇わづらはしきおきて。‖苛法。
【繁葉】ハンエフ　〇烦はしくみだれる。唐玄宗、孝經序「安得レ不レ闕ニ其一一ニ」〇草木がしげり合ふ。
【繁殖】ハンシヨク　しげくかきなる。蔡邕文「增ニ減大冀、去ニ其一一ニ」
【繁縟】ハンジョク　わづらはしくみだれる。指遺記「更除ニ其一一ニ」
【繁文縟禮】ハンブンジョクレイ　わづらはしきかざり、こみ入れる禮式。轉じて、わづらはしき虛禮儀式の義とす。
【繁務】ハンム　つとめがいそがし。‖劇務。
【繁茂】ハンモ　しげる。宋書、徐湛之傳「果竹一一、花藥成レ行」
【繁縟】ハンジョク　〇禮式をわづらはしくす。史、禮書「一一節文、無レ益ニ于治ニ」〇わづらはしき禮式。‖縟禮。

【縫】ホウ　ホウ　東　多

㊀ぬふ、針にて衣をぬふ「裁一一つぎあはす(補合)〇とりつくろふ「彌一一」〇ぬひかた、ぬひもの。㊁ぬひめ、あはせめ、縫合せし處。〇すきま(罅隙)墨客揮犀「有ニ茶生ニ石一一間」
【縫衣女】ホウイヂヨ　針仕事をする女。
【縫腋】ホウエキ　圖書、天皇・文官及四位以上の武官の著用せし袍、腋の下をぬひつけ下に襴ヲをつけたるもの、まつはしのうへのきぬ。闕腋の對。
【縫掖】ホウエキ　ぬひめ。詩、召南、注「縫、表之一一也」‖縫合。
【縫刺】ホウシ　裁縫と刺繍とと。
【縫紉】ホウジン　絲にてぬふ。陸游詩「蒼頭供ニ井臼、赤脚解ニ一一ニ」
【縫綴】ホウテイ　ぬひつづる。韓非子、說林「鍼工持針、一一既成、看ニ油所ニ汚」
【縫著】ホウヂヤク　ぬひつける。儀禮、注「縫關レ一一於武一也」

【糾】リウ　支

〇にほひぶくろ(香纓)一說に悅巾ナビキ〇つなぐ(繫)〇くつかがり、絲を以て履を飾る。

【縟】ジュツ　質　物

〇おほづな。〇ひつぎなは(綍)棺を穴に下すなは。〇ひきづな、竹にて作りし索にて舟をひき、又つなぐもの「挽一一」〇玉のしきもの、章ガハルにて作る「漢一一」

【縷】ル　ロウ・ル　尤　虞

㊀いと、いとすぢ(綫)「絲ー」孟子「布ー之征」○いとすぢの如くに細く長き事物の稱。蘇軾、赤壁賦「不絕如ー」○纚ー，はくはし、こまかし(委曲)柳宗元文「欲乘筆觀ー」○ーーは連り續く貌。又、細かき貌。㊁禮に通ず。藍ーっはつづれ、やぶれごろも(敝衣)左、宣十二「藍路藍ー以啓山林」‖襤褸。

【纚解】カイ 細かにわかちとく。唐古今注記序「冰澌ーー」

【纚脅】クワイ 細く切りたるなます。韓、遊詩「喜見ーー映二盤筯一」

【纚言】ガン こまごまとくはしく言ふ。又、其のことば。‖纚說。

【纚遝】カツタフ こまかに陳べる。宋史、天文志「ーー而申二言之一」‖纚陳。

【纚析】セキ こまかにわかつ。王諲文「初髮論而ーー」

【纚切】セツ こまかにきる。潘岳、四征賦「雖人ーー、魏刀若レ飛」

【纚說】セツ 纚言に同じ。

【纚纚】ソク いとすぢの如くにつづく。韋承慶賦「單思針懇而ーー」

【纚陳】チン 纚遝に同じ。

【纚遝】トウ ○絲すぢの長く續く貌。宋史、食貨志「募ー治レ繭、繭レ麁紡レ纚、ーー而織レ之、寸寸而成レ之、其勤極矣」○細き貌。蘇軾詩「船頭斫レ鮮細ーー」○細くして絕えざる貌。○こまごま、書簡の用語「不レ盡ニーー一」

【縲】ルキ 支

○しばる、つなぐ(繫)捕縛する、拘囚する。○とりなは、罪人をしばる黒色のなは。

【縲紲】セツ 黒き索ナハを以て罪人をつなぐ、とらはれ。縲は纚に同じ。紲、公冶長「雖レ在ニーー之中一、非二其罪一也」

【縺】レン 先

○もつる、絲がむすぼる、絲が結びて解けず。○圖もつれ、こたた、もめ(葛藤)

十二畫

【繘】イツ キツ 質

つるべなは、汲索(綆)「綆ー」

【繒】カン ケン 諫 通じて綰に作る

○にしきのあや(錦文)○圖繒ーはゝは古の染色の名、後に錦の織物の名とす、宮中の疊の綠ベなどに用ふ。‖疊繒。

【繢】クワイ エ 隊

○もやう、ぬひ、ぬひとり。○ゑ。周禮、考工記「畫ーー之事、雜五色」‖繪。○ゑがく(畫)ぬふ「雕ー」○うちひも(紐)○ぬひある布帛。

【繢畫】クワイ ゑ。韓愈詩「或繢者ニーー、或繡若二寫描一」‖繪畫。

【繢繡】シウ ぬひあるきぬ。禹貢賦「絲以ニーー一、鉄以二錡文一」

【繢綾】クワイ メキ いろどりある冠のひも。禮記「緇布冠ーー、諸侯之冠也」

【繢繪】ソウ ゑがきたるかとり。白虎通「白約二整ーー一、爲レ結二于前一」

【繅】クワイ 蟹 クヮク 陌

○そむきたがふ(乖違)○むすびさまたぐ(結礙)○破れる聲にいふ。

【繐】ケイ 霽

絲細くして疏ラきぬの。

【繖】サン 早 潸

○きぬがさ、かさ(蓋)「錦ー」「羅ー」○からかさ。晉書、王導傳「遇雨請以レ入」‖繖傘。

【繡】シウ セウ 宥 嘯

○ぬひ、ぬひもやう。○ぬひとり、五色の備はるぬひもの「刺ー」「文ー」○ぬひある布帛。○にしき「錦ー」

【衣レ繡夜行】シウヤカウ 富貴にして故郷に歸らざれば、則ち人に知られざるの喩(史、項羽紀)錦(金部八畫)の條の衣レ錦夜行を見よ。

【繡眼兒】シウガンめじろ(常熟縣志)

【繡毬】キウ ○騎馬にて打る遊戲に用ふる錦のまり。又、五色にてくけたるまり(宋史、樂志)○てまり花。蘇芳譜「ーー(中略)春月開レ花、五辨百花成レ朶、團圞如レ毬」○菊の一種。菊譜「ーー朶花、玉毬白花」

【繡帨】シウクワ ぬひとりを施したる美くしきたれぎぬ。徐鉉詩「ーー銀屏香閨閉」

【繡局】キク ぬひとりを施せるとびら。徐賓、劉婆詩「銅沒紅蕉レ紫、鐵香入ニーー一」‖繡戸。

【繡虎】コ ぬひもやうの虎の如く、綺麗なる文をいふ。世說、賞譽「曹子建七步成レ章、世目爲ニーー一」

【繡綵】サイ ぬひとりせしあやぎぬ。北史、崔光傳「賜二光ーー一百匹一」

【繡褥】ジク 繡文に同じ。‖褥繡。

【繡匠】ショウ ぬひとりを職業とする人。

【綿裳】メンシャウ ぬひあるもすそ、裳は腰下を蔽ふ服。詩經「我覯之子、兎衣ー裳」

【綿冕】メンベン 美くしきけごろも。元史、儀衛志「冠二五梁冠、戴二龍玉面一、具二ー冕一副」

【綿被】メンピ ぬひとりしたるとばり。徐陵詩「ー綉幌二雲燭一」

【綿腸】メンチャウ にしきのはらわた。美くしき文才にいふ。蘇軾詩「平生錦ー、早歲爭莫腹」

【綿蛮】メンバン うつくしくかざれるはしら。南史、后妃傳「香柏文櫨、花梁ー」

【綿延】メンエン ぬひあるごとし。晉書、五行志「鱗甲帝署ニーー」

【綿絡】メンラク うるはしき街の陳暄詩「長安開ニーー二條向二綺門一」

【綿邈】メンバク ぬいとりにて作りし佛像。齊唐書、義琰傳「賜ニ繡ー像一軀一」杜甫、飲中八仙歌「蘇晉長齋ー一脚」

【綿文】メンブン ぬひとり。史、貨殖傳「刺ニーー一不レ如レ倚二市門一」自注。

【綿綿】メンメン ぬひとりのついたて。薛逢詩「人倚ニーー一閑貧女」

【綿履】メンリ ぬひを施したるくつ。白居易詩「ーー鏤行縢」

【綿簇】メンソク ぬひとりしたる美くしきすだれ。韓偓詩「碧闌千外ーー蜜、猩色屏風畫二折枝一」

【織】 ㊀シッ・シキ ㊁シ 職

㊀おる、はたおる「ー錦」「紡ー」「紃ー」○くみたてる「組ー」「纉ー」○はた（機）○はたいと。○促ーは蠶蜂の異名。㊁おりだる絹文。○あやあるきぬ、絲を染めており成したるもの。錦綺の類。○しるし（徽章）○はたじるし、はた（幡）幟に通ず。詩、小雅「ー文鳥章」

【織錦坊】シキキンバウ にしきを織る坊舍。唐書、玄宗紀「於二錦繡谷一置二織錦坊一」

【織室】シキシツ 漢代、宮中にて織物をおるへや。唐代は織染署といふ。

【織経】シキケイ はたをおる、経ぬきの糸、内則「ー組紃」

【織成】シキセイ おり成す。機にて事をつくり出す。中論「至人踏レ機握レ杼、ーニー天地之化一」

【織製】シキセイ おりてつくる。劉勰文心雕龍新論、ーー篇題」

【織女】シキヂョ ○はたおりをんな。日織婦の○織女星の略語。荊楚歲時記「天河之東有ニーー一、天帝之子也」次條參看。

【織女星】シキヂョセイ 星の名、たなばたづめ。晉書、天文志「織女三星、在二天紀東端一、天女也」杜牧詩「臥看牽牛ーー」

【織坊】シキバウ はたをおる室。晉書、李太后傳「時后爲二宮人一、在ニーー中一、教寫二兩龍花一牀、日月入レ懷、遂生二孝武帝一」日織室。

【織汙】シキヲ ちがやをあみおる。徐陵詩「ーー一領レ竹稱二貧居一」

【織紡】シキバウ はたをおり、いとをうむ。元經薛氏傳「太妃李氏者、簡文爲二會稽王一時、使二十人一室レ之、ーー中得二李氏一」

【織経】シキケイ ○はたおり女の經。漢書、龍參傳「道路行人、農夫ーー」○たなばたづめ。博物志「遙望宮中多ニーー一、見ニ一丈夫牽レ牛、渡二天河一飲レ之」日織女・天孫女。

【織文】シキブン おり出したる模様。

【織絳】シキカウ はたおりと針仕事と。

【織部司】シキブシ 圖書、大藏省に屬して織物染物のことをつかさどりし役所。

【繞】 ゼウ ネウ 俗 又、繞に作る

○めぐる。めぐらす（遶）「圍ー」「環ー」「紆ー」○まとふ。まつはる（纏）「纏ー」

【繞郭】ゼウクワク 城郭をめぐる。元稹詩「ーー烟嵐新雨後」

【繞樹】ゼウジュ 水をめぐるの意。戚嘉、短歌行「ーー三匝無二枝可一依」

【繞繞】ゼウゼウ まとひめぐる貌。羅鄴詩「人經紛ーー」

【繞帶】ゼウタイ めぐる。めぐらす。潘夫論「斷二蔵衆練一、ーー手腕一」

【繞柱】ゼウチウ はしらをめぐる。五代史、楚世家「馬希範作二九龍殿一、以二八

記「環レ淵皆山也」○行は巡行と連用す、一通りめぐり行くこと、行レ部・行二州部一の類。○巡は行視也と註し、巡守・巡檢と連用す。○周は市なり、ぐるりと、一まはりするなり、周囲と連用す、遍は俗字。○旋は行・巡・周などとは異り、物のくるくると、幾遍もめぐるなり。旋轉と連用す、旋風は、つむじ風なり。○運はめぐりて行くこと、日月之運行・四時之運の如し、世運は、時代のうつりかはりて行くことなり。○圍は遶に同じ、もと水のうづまき流れる貌なり、旋に近し、賜九遍、溪水週流の類。○循は巡なり、ついてゆく義。漢書「循二衣者一循二行都國一問二民所二疾苦一」○繞は纏なり、繞なり、めぐらしまとふ義、纏綿と連用す。文選「繚以二周垣一」

【繞腰】ゼウエウ こしをとりまく。南史、林邑國傳「男女皆以二橫吉貝一ーー以下一」

龍ニ―レ、自官身一龍也」

【繞梁】ゼウ 歌の聲のすぐれて妙なるにいふ。列、湯問「韓娥東之レ齊、匱レ糧過二雍門一鬻レ歌假食、既去而餘音一ニ―梁、三日不レ絕」

【繞線】ゼウ めぐりまとふ。烏雨松、大隆賦「堰蹇連延、繞麻一ニ―」‖線、圍線。

【纁】セン 寒

蜀錦の名。

【繕】セン 銑

○をさむ(治・修)○おぎなふ(補)禮、月令「一囿圃」つくろふ(修復)なほして善くする。詩、鄭風「一甲治兵」箋「一之言善也」○あつむ。○そなへる(備)「一兵」○うつす(鈔錄)「一寫」○つよし(勁)

【繕治】ヂ つくろひいとなむ。魏鼎詩「力役止ニ―一」‖營繕。

【繕修】シウ いくさぶねをつくろふ。南史、王琳傳

【繕完】クヮン つくろひてまったくす。左、襄三一「以二敝邑之餘一盟主一ニ―弊邑」

【繕造】ザウ つくろひつくる。狄仁傑文「修二築城池一、一ニ―兵器一」

【繕修】シウ つくろひなほす。漢書「一ニ―干戈」、傅亮文「圖二前荊軌一、一ニ―毀垣一」

【繕葺】シフ 家屋などをつくろふ。宋史、李專明傳「一ニ―未二數月一、復二其舊一」‖補葺。

【繕補】ホ つくろひおぎなふ。唐書、蕭倣傳「南海多二敝紙一、倣數二誥子一、一ニ―殘書一」‖修補。

【繒】ソウ 蒸

○きぬ、帛の總名「一帛」古は帛といひ、漢代は一といふ「好一」「厚一」「綵一」漢書、灌嬰傳「睢陽販二繒者一也」○いぐるみ、矢に絲をつけて鳥を射る。‖矰繳。

【繒矰】ソウ あやあるきぬ。沈約、高松賦「拂二一一而繳二升梁一」

【繒綵】ソウ きぬと、わたと、錦は綵。列子「不レ待二五穀一而食、不レ待二一一而衣」‖繒帛。

【繒紈】ソウ かとりぎぬ。宋書、吐谷渾傳「錦組一一、見レ珍二殊俗一」

【繒綵】ソウ いろどれるきぬ。後漢書、彭寵傳「遣レ使以二美女一一一聘二遺匈奴一」

【繒繳】シヤク いぐるみ。三輔黃圖「以二一一一一以射レ雁」‖繒繳。

【繒繫】ケイ きぬと、わたと。白居易詩「一一足レ禦レ寒、何必錦繡文」

【繒繡】シウ あつきぬ。張伯淳詩「積潤浸二一一一」

【繒綬】ジユ 平かならざる貌。魯靈光殿賦「雲龍一一以繙紆、前一一而龍鮮」

【繯】㊀ソン 元 ㊁ソン 阮 元

㊀一一は棄まる貌。㊁おさへる(裁抑)‖捲。

【繙】ヘン 元 寒

○ひもとく。結びしひもを解く。○轉じて書物を開きて讀む。○繙一ハンは風の族を吹く貌、ひらひらとひるがへる(翻・飜)

【繙閱】エツ 書物をひもときて讀む。

【繙繹】エキ 書を開きて義理をきはめる。宋安卿詩「空餘書一笈、焚レ香日一一」

【繙經】ケイ 聖人の書をひもときよむ。莊、天道「於レ是縮二十二經一以說二老聃一」

【繙譯】ヤク 甲國の文書を取りて、乙國の文官に轉譯する。‖翻譯。

【繰】レウ 蕭

○まとふ。まつはる(纏)○めぐる。めぐらす(繞)「絮一一」「繞一一」「環一一」○もとる。もとらす

【繰絮】レウ 絲・繞・環・行・巡・周・旋・運・回・廻・循の別は繞(木部)を見よ。

【繰絮】レウ まつはりめぐる。梁簡文詩「華華運絹相一一」‖葉繞。

【繰垣】エン めぐれるかき。四京賦「一一蘇聯、四百餘里」

【繰刺】レウ まつはりもつれる。王褒、洞簫賦「譯圍一一、離解捷猛」

【繰繞】レウ ○まつはりめぐる。潘岳、射雉賦「周環迴復、一一盤跱」‖繞繰。○袖の長き貌。南都賦「修袖一一而滿庭」

【繰】（國字）

一揚(ウアレ)色と色との間を、ほかしたる染色。又其の織物の名。‖莊綢。

十三畫

【繹】エキ 陌

○ひく、絲の口を抽き出す。又それに似たる事がらにいふ「演一」「演一」○たづぬ(尋)其の端緒を引きて之を尋ね窮める、意味を推究する「尋一」「討一」論、子罕「一之爲貴」○生ずる貌。○相續きて絕えざる貌

「一如」○をさむ（理）○つらぬ、のべしく（陳布）○ながし（長）○たかし（高）○大いなり。○絡ーは往來の絶えざる貌。‖絡繹。○ーは盛んなる貌。又、相連る貌。一說に善く走る貌。詩、魯頌「以車ーー」○宗廟卽ち祖先を祭りし正祭の翌日に行ふまつり（殷に彤といひ、周にーといふ）

同訓異語 繹・尋・討・原の別は寸部九畫）の條を見よ。

【繹騷】エキサウ 善く走る貌。宇解參看。

【繹騷】エキサウ つづき馳せてきわがし。

【繹如】エキジョ 詩、大雅「徐方ーー」つづく貌。論、里仁「ーー也、以成」疏「其脊緒繹然、相續不絕」

【繹味】エキミ 意味をたづね求める。唐書、李大亮傳「太宗賜二荀悅漢紀一曰、悅論議通博、極二爲政之體一、公宜レ一ニ之」‖辭味。

【繶】オク 圖 うちひも（帷）幔の緣をからげる飾のひも。

【繲】カイ ケ 卦 ○ふるぎ（故衣）○あらひし衣。莊、人間世「揖鐵治ーー」

【繢】キャウ 陽 うまのはづな「馬ーー」陸游詩「烏出樊籠馬脫ーー」‖轡。

【繪】クヮイ エ 圖 泰 又、繢に作る ○ゑ、ぬひ、いろどり、もやう。○ぬふ、五采を會ゝめて刺繡する。いろどりゑがく（繰畫）「彩ーー」「粉ーー」又其のゑがきしもの「一幅」「圖ーー」○もやう又はぬひある布帛。

【繪像】クヮイザウ 畫像。唐書、郭英乂傳「幅巾ーーー」

【繪事】クヮイジ ゑの道。論、八佾「ーー後レ素」（繪をかく時、白粉を最後につけて各色を一層鮮明ならしめる）

【繪素】クヮイソ ゑ（畫）李嶠文「影遍ニーー一彩塵非二繪之筆一」前條參看。

【繪塑】クヮイソ いろどりたる土人形。蘇軾詩「ーー神靈集、飛沸爪牙雄」

【繪圖】クヮイヅ ゑづ。宋史、鄭俠傳「ーー以獻」‖圖繪。

【繫】ケイ 圖 係に通ず ○つなぐ（維）つながる。○むすぶ、むすびつける。むすばる。○とらへる。とらはれ（囚拘）「囚ーー」「收ーー」「拘ーー」「捕ーー」「械ーー」「遂ーー」○とどむ（留）○もたる（維持）○しばる（縛）ほだす。ほだし（羈絆）○つらなる（連接）○かく、かかる。‖係。○つづく（系・續）○つづきあひ。○ひも、つな。○ーー辭は易の卦爻につきての說明、十翼の一。

同訓異語 繫・係・系・掛・挂・罣・懸の別は係（人部七畫）の條を見よ。

【繫紙】ケイシ つなぎしばる。史、賈誼傳「麒麟可二繫而縶一、豈日異二夫犬羊一」‖繫縛・絆繫。

【繫纘】ケイサン あしをしばる。南史、孝義傳「有二燕巢常墜飛來去、後忽孤飛、女感二其偏棲、乃以レ線ーレ爲レ鞋、後歲此燕果復更來、猶帶二前線一」

【繫紲】ケイセツ 物をつなぐくさり。轉じて自由を束縛する。‖羈絆・束縛。

【繫索】ケイサク 物をつなぎとめるなは。

【繫囚】ケイシウ つなぎて獄にとらふ。とらはれ人。杜牧詩「我作二八品吏一、落中如二ーーー」

【繫世】ケイセイ 其の世系を記するもの、譜牒をいふ。荀子「其銘誄ーー、載二傳其名一也」

【繫束】ケイソク つなぎしばる。世說「參佐無二不レ被ーーー」

【繫縛】ケイバク つなぎしばる。

【繫肘】ケイチウ かひなにかける。後漢書、梁鴻傳「有二道士一言二此婦當レ爲二天子一、以二五綵與一レ石、繫二其肘一云、石中有二玉璵一、豐倩之遂反」

【繫繫】ケイケイ つなぎしばる。周禮、鞮鞻氏「掌二蠻夷之舞一、皆有二其聲一、以二鼓節一之、其人持二旌以舞一、而繫二其指一」

【繫纓】ケイエイ こぶねをつなぐ。高啓詩「洗レ衣江動レ月、ーレ岸垂レ花」

【繫馬】ケイバ ○うまやにつなぎて飼ふ馬。孟、萬章「ーー千駟」○馬をつなぐ。

【繫匏】ケイハウ 棚にかかれるふくべ。轉じて、ふくべの棚にかかりて爲すことなきが如く、何事をもなさず、徒に日を過ごすに譬ふ。論、陽貨「吾豈匏瓜也哉、焉能繫而不レ食」に本づく。‖繫瓠。

【繫泊】ケイハク 舟をつなぎとまる。元稹詩「共將レ船ーー、況是月臨レ江」

【繫維】ケイイ つなぎしばる。雲笈七籤「有二頑獷一、故名爲二ーー一、無二頑獷一、故名爲二解脫一」‖束縛。

【繫縻】ケイビ つなぎしばる。蘇軾、賀啓「君臣之恩、一ニ之於前」‖繫縛。

【繫臂之寵】ケイヒノチョウ 宮女にして君主の特別なる寵愛を受くるをいふ。晉書「武帝胡貴嬪名芳、饒軍胡奮女也、帝多簡二良家子女一、以充二內職一、自擇二美者一、以二綠紗一繫レ臂」に本づく。‖專房之寵。

【繫絡】ケイラク つなぎまとふ。又、つなが

りまつはる。韓愈文「凡五歲——甚微」

【繫累】ケイ　ともづなをつなぐ、舟をとめる。謝靈運詩「放棹——永嘉郷」

【繫縛】ケイバク　つなぎとめる、捕縛する。漢書、趙廣漢傳「不宜以往往姦——一人」‖罪案。

【繫累】ケイルイ　かかりあひ、身にかかるわづらひ。許月卿詩「高者無——」‖係累。

【繫縁】ケイエン　つながりかかる。班固文「既——于世教一矣」

【繫絏】ケイセツ　捕たしてこひしたふ。易集解「小人——、必不能矣」

【若二不レ繫舟一】ナンジフレイセンカ　心にしてとゞき向ふ所なきに喩ふ。莊、列御寇「汝善——、而巧者忘、無能者無所レ累、彼以全動物遊、況以不繫之舟、遊萬物者也」

【繭】ケン　㊥

○まゆ(蚕衣)蠶が口より吐き出して造る纖維性の巣。○わたいれ。○きぬもの(絹)○あかぎれ(足底)戰國宋策「百舍重——」‖肬。○——ケンは聲氣の微サかなる貌。禮、玉藻「言容——」‖綿綿。

【治レ繭】チケン　まゆから絲をとる。宋史、食貨志「蠶婦——一綫レ麻」

【繭館】ケンクワン　かひこを飼ふへや、養蠶室。梅堯臣詩「漢儀后親蠶　採レ桑來——」

【繭紙】ケンシ　まゆをなしたるかひこ。蘇軾詩「簡編圖繪等レ書嘉、窗戸低回作レ——」

【繭絲】ケンシ　○きぬいと。‖繭絲。○人民より租稅を取るに、繭の絲をひき出す如く取り盡さざれば止まざる義。史、趙世家「以爲——乎、以爲二保障一乎」

【繭紬】ケンチウ　柞蠶の絲にて織りし絹。寄園寄所寄「——明初尚未レ行」‖絹紬・絹綢。

【繭綢】ケンチウ　前條に同じ、多く山東省に出づ。

【繭栗】ケンリツ　牛角の繭の如く栗の如く小さき猶の禮、王制「祭天地一之牛、角——」

【繯】ケン　㊥

○つなぐ(繋)○まとふ(絡)○めぐる(環)○しめる(絞)

【繯首】ケンシュ　くびをしめる刑。繩を以て縊と爲して絞ひ殺す。‖絞刑。

【繰】サウ　㊥

○くる、絲をくる。‖繅。○㊥絲をくる如くに順におくる「——延べる」

【繙】サン　㊦

○うちひも(組)の類。‖纂。○つなぐ。

【繳】㊀シャク　㊁ケウ　㊥

㊀きいと。○いとすぢ(纏)○いぐるみ、矢に絲をつけて鳥を射るしかけのもの(弋射)「矰——」○いぐるみにて射る、弋射する。孟、告子「思援弓——而射之」㊁まとふ(纏)かかはる(拘泥)○をさむ、租を納める「——稅」「一款」○わたす(交)物を原主に還す。

【繳繞】ケウジョウ　かかはりまつはる。史、太史公自序「名家苛察——」注「——猶二糾纏一不レ通二大體一也」白居易詩「牢事漸疎——世務方——」

【繳弋】シャクヨク　繳はいぐるみ、矰は繳を結びつけたる矢。淮南子「好レ弋者、先具二繳與一矰、好レ魚者、先具二罟與一罾」

【繳網】シャクマウ　いぐるみの矢と、あみと。狩獵の義。鹽鐵論「古者烏獸魚鱉、不レ中レ殺不レ食、故——不レ入二於澤一、雉兎不レ取」

【繩】ジョウ　㊥　俗に略して縄に作る

○なは(索)あさなは麻或は絲の兩股以上を縒べ合せたるもの。易、繫辭「上古結——而治」○すみなは「準——」大工が物の曲直を計るめやすに使用する具。○轉じて、ただす(正)○なほし(直)○つぐ(繼)詩、大雅「——其祖武」○はかる(度)○のり、きそく(法律)○ほめる(褒)左、莊十四「蔡侯——息嬌」○——は續きて絕えざる貌。又、戒め愼む貌。

同訓異義　スダ　繩・正・規・科・格・匡・董・訂・貫の別は正(正部一冀)の條を見よ。

【繩墨】ジョウボク　道にたがへるを正す。晉書、鍾雅傳「雖直レ法——、盲俾者憚レ之」‖正レ違。

【繩役】ジョウエキ　つなわたり(走繩之伎)列盲史に擬ニ——一詩あり。‖繩技。

【繩戲】ジョウギ　前條に同じ。‖繩伎。史記、後漢天子受二朝賀一會利侯四來、戲二於殿前一以二兩大縲繩一繫二兩柱頭一、相去數丈、兩倡女對舞、行二於繩上一、相逢、切肩而不レ傾」

【繩糾】ジョウキウ　過失をただす。書、冏命「匡二其不一及、繩レ愆糾レ謬」

【繩短】ジョウタン　すみなはと、さしがねと、轉じてのり(法則)の義とす。唐書、德宗賢妃章氏傳「自動有二——一」東觀餘論「張旭所レ書、千字文、左脚右筆、而不レ離二——之內一」

【繩外】ジョウグワイ　すみなはのそと、法規の

ほかの管子「不レ牧之民、繩之外也」
【繃】ホウ　なはにてつなぐ。儀禮、疏「以二麻繩一繫二前兩足一」
【繃帯】ホウタイ　しめくくる。しめくくり。唐書、唐儉傳「衆遽少ニー一、然事レ親以レ孝聞」
【繃創】ホウソウ　創なはに從ひてけづりただす。儀禮、疏「不レ如二子ニー一、而自合也」
【繃索】ホウサク　なは。漢書、西域傳「行者騎歩相持、ニー相引、二千餘里」
【繃察】ホウサツ　ただしらべる。唐書、韓思復傳「遣二御史大夫一、性悟淡、不レ喜レ爲ニー一」‖糾察。
【繃帯】ホウタイ　なはを張りたるこしかけ。晉書、佛圖澄傳「襄國城堂下濕暴、澄至二故巢處上一、衆ニー一、爲二安息香一、兒願數百丈、如レ此三日、水大至、隨壑皆滿」
【繃準】ホウジュン　のり、きそく、法度。史記、項羽本紀「宜二正二衣冠一、立爲甲ニー一と」‖準繩。
【繃繩】ホウジョウ　○おほき貌。老子「ニー一兮不レ可レ名」○絶えざる貌。詩、周南「百斯子孫ニー一」
【繃帽】スホウ　なはのとぼそ、なはにて戸樞をしばりしもの、貧家の形容。賈誼、過秦論「陳涉、甕牖ニー一之子」
【繃正】セイ　法によりてただす。後漢書、王渙傳「ニー一部都、風威大行」
【繃尺】セイシャク　のり、きそく。金史、文藝傳「元好問文有ニー一、備二衆體一」‖法度。
【繃盛】ジョウ　ぬすびとをただす。宋史、王曙傳「曙知二益州一、ニー一以二峻法一、多致二之死一、蜀人比二之張詠一、號二前張後王一」
【繃治】チ　ただしをさむ。唐書、太宗皇后長孫氏傳「後廷有二被レ譴者一、必助二帝怒一、請ニー一、俟二意解一徐爲二開治一」
【繃直】チョク　すみなはの如くなほし。經田賦、「還汗ニー一、近陌如レ矢」
【繃縮】シュク　なはにすがる。括異志「鄭道士以ニー一下百餘丈」
【繃度】タク　のり。鮑照、拔河賦「突ニー一而就レ強」
【繃督】トク　罪し治める。唐書、王君廓傳「數以レ法ニー一、猜惑不二自安一」
【繃縄】ジョウ　なはにてしばる。北史、流求國傳「獄無二枷鎖一、惟用ニー一」
【繃墨】ボク　すみなはの、のり。繃、解「ニー一試陳、不レ可二欺以一曲直一」
【繃絡】ラク　つなぎまとふ。又、つながりまとふ。晉書、輿服志「朱絲ニー一網箱一」
【繃柱】チュウ　曲れるを正す。魏志、徐邈傳「爲二涼州刺史一、彈レ邪ニー一、州界肅清」

【繵】テン　先

○ひとへ（禪・涼衣）○まとふ。‖纏。

【繖】ドウ　ダク　有　覃

紛ニー一は善からざる貌。又、其の物の盛んに多き貌。

十四畫

【繸】クン　文

うすあか（淺絳色）又、うすあか色の布帛「玄ニー一」「深ニー一」
【繸黄】クワウ　たそがれ、日のくれがた。楚辭「與ニー一而爲レ期」‖黄昏。
【繸裳】クン　うすあかき色のも。周禮、註「凡祭服、皆玄衣ニー一」
【繸朱】クン　黒みたる赤。晉書、輿服志「皇太子妃爵韍繸ニー一綬」

【繼】ケイ　霽

○つぐ（紹）中庸「善ニー一人之志」つづく、つづける（續）○つづき。○うく（受）うけつぐ（承傳）あとを引き受ける。又其の者「後ニー一」○ついで、やがて。孟、公孫丑「ニー一而有二師命一」

繼・次・亞・廣の別は續（次第）の條を見よ。

【繼嗣】シ　次第にうけつぐ貌。‖繼、平淮西碑「聖子神孫、ニー一承承」
【繼紹】ショウ　前人のみちをうけつぐ。晉書、元帝紀「三葉重レ光、四聖ニー一、憲澤伴二於有虞一、下世過二于周氏一」
【繼姑】コ　夫の繼母。漢季翊夫人碑「ニー一入レ室、勤營祭祀」
【繼奥】オク　相つづきておこる。後漢書、左雄傳論「幸和之時、頌德ニー一」
【繼妻】サイ　のちぞひ、後妻。‖繼室。
【繼述】ジュツ　うけつぐ。劉寶誄、「茂名敏樹立、令緒慎ニー一」‖繼紹・繼續。
【繼子】シ　まなこ。
【繼志】シ　善く前人の志をつぐ。中庸「夫孝者善ニー一人之志一」
【繼承】ショウ　あとつぎ。晉書、張駿傳「ニー一嗣然」‖繼述・義嗣。
【繼嗣】シ　あとつぎ、相續人。‖繼述。
【繼室】シツ　○のちぞひ、後妻。左、昭三「齊侯使二高張一ニー一於晉一」‖繼妻。○後妻をめとる。左、隱元「ニー一以二聲子一」
【繼聲】セイ　うけつぐ。庾信文「絶ニ嗣者、以二友子一ニー一」
【繼親】シン　ままおや。蔡邕文「ニー一在レ堂、猶謂二繼母一也」
【繼受】ジュ　つぎうける、うけつぐ。‖繼承。
【繼述】ジュツ　前人のあとをつぎてあきらかにのべる。‖紹述。
【繼序】ジョ　つづきあひのついで。唐書、經籍志「史凡十有三、其十二日二譜系一、以紀二世族一ニー一」
【繼承】ショウ　うけつぐ。韓愈、平淮西碑「聖子神孫、繼繼承承」‖承繼。

【繼踵】ケイ あとをつぐ。‖接踵。
【繼絕】ケイ あとをつぐ。唐書、桓元範傳「安足レ二一前烈一」
【繼紹】ケイ うけつぐ。周禮、大司業、疏「取二其一一而遵レ者遵レ美也」‖紹繼。
【繼絕】ケイ たえたるをつぐ。禮記「興二滅國一繼二絕世一」公羊傳「桓公有二存亡一一之功一」
【繼述】ケイ うけつぐ。禮記「爲レ二一長子一養之一」
【繼志】ケイ 祖先の遺志をうけつぐ。轉じて位を嗣ぐ義とす。漢書、師丹傳「陛下低一二一先帝一」
【繼體之君】ケイタイ 天子のよつぎのみ、皇太子。漢書、平成傳「自レ古受命之王、及繼體守文之君、非二獨內德薄也、蓋亦有二外戚之助一焉」
【繼日】ケイジツ 夜を日につぎて寢をつづけ行ふ意。晉唐書、晉宗紀「以レ燭一レ一」宋史、丁謂傳「以レ夜一レ一」‖繼レ晷・繼晷。
【繼續】ケイ ちすぢをうけつぐ。漢仲舒文「國之繼二位一、繼二其統一也」
【繼配】ケイ 二度めのつれあひ、のちぞひ。‖繼室・後妻。
【繼美】ケイ うつくしきことを前人につぎて爲す。晉唐書、于志寧傳「陛下紹二膺位一、臨二萬方一、理宜下二一一軒轅一、脩二堯舜一、繼二美前烈一上」
【繼父】ケイ のちぞひのをっと。
【繼父】ケイ ○ちちにつぐ。詩經、疏「能レ一、是其美德」○まま父。類書纂要「一一不二同居一」
【繼武】ケイ ○前後の歩武アシを相接する。禮記「大夫一一」○轉じて其の事をうけつぐ義とす。路賓王詩「一一二前雄一」
【繼母】ケイ ままはは。儀禮、喪服傳「一一與二同母一同」‖後母。

【繢】ケン 銑 夢

一繢ケンは人情が厚くしてつきまとふ。むすぶ、つきまとひて離れず。左、昭二五「一一繢從」公」又、ねんごろ。反復する。詩、大雅「以謹一一繢」

【纂】サン 早

○あつむ、文書を集め編む「編一」「論一」‖撰。○あつまる、むらがる。○赤色のくみひも(組)の類。○つぐ、うけつぐ(繼)漢書、敍傳「一一堯之緒」‖纘。

同訓異字 纂・聚・集・輯・萃・翰・醵・師・撰・屯の別は聚(耳部八畫)の條を見よ。

【纂堯】サン 帝堯の遺業をうけつぐ。漢書、敍傳「皇矣漢祖、一一二之緒一」
【纂次】サン あつめて次第をつける。朱文「一一讐正」
【纂修】サン 文書を集め整へる、編纂撰修。郭璞詩「謂起二丘園一重一一」
【纂集】サン 次條に同じ。
【纂輯】サン 文書をあつめる。‖編纂。
【纂述】サン あつめのべる。宋史、張昭傳「一一書數萬卷、尤好一一」
【纂承】サン うけつぐ。後漢書、樂恢傳「陛下富二于春秋一、一一二大業一」‖紹承。
【纂成】サン 集めて仕上げる。曹植文「人物未レ就、軒轅一一」
【纂撰】サン あつめえらぶ。元稹文「一一者由レ詩而下十七」
【纂組】サン くみひも、また綬ジュの類。漢書、敍傳「賦文列錄倡二農事一者也、綺縠一一害二女紅一者也」
【纂脩】サン 天子が世を繼ぎて朝に臨む。謝山野峰「仁爲初一一」
【纂錄】サン あつめしるす。宋史、趙安易傳「時搜二籍來レ獻、奏請一一一」‖集錄・輯錄。

【纖】シュ ス 國

○うすぎぬ、こまかき絽。おり、細密の羅。○きぬのいろどり(綵采)○一葛は春秋の鄭の地名、今の河南省長葛縣、周の桓王、鄭を伐ちて此に敗る。
【纖子】シュ 國 絽織物の一種、帶地などに用ふ。漢名、八絲緞。
【纖絺】シュチ 國 緞子メンの一種、漢名、七絲緞。

【纘】ヒン 眞

○一紛は盛んなら貌。又、亂れる貌。○一一は衆き貌。又、亂れる貌。陶弘景賦「鳥迷一一紛兮一一」
【纘翻】ヒン みだれ飛ぶ貌。左思、吳都賦「首羅二崇山、大鵬一一」
【纘紛】フン ○多く盛んなる貌。家語「旌旗一一、下蟠二于地一」○亂れる貌。文選、思玄賦「思一一而不レ理」○花などの亂れ散る貌。陶潛、桃花源記「落英一一」

【繃】ヘン ベン 銑

○あむ(編)くむ。○まじふ(交)くみあはせる「交一」「紫一」○くみたるかみ。
【繃髮】ベン くみたるかみ。晉書、西域傳「吐谷渾婦人、貝二金花一爲二首飾一、一一者後、綴以二珠貝一」‖編髮。

【纔】 匡(衣部十四畫)に同じ。

【繒】 【國字】

かすり(絣)

十五畫

【纔】クヮン　[寒]
○わた(綿)新らしきわた(新絮)○わたいれ、綿を縫ひ込みし衣服。
【纔纊】サンクヮン　綿を懐ひく、君主の恩恵に感じて寒を忘れる。左、宣十二「師人多寒、王巡三軍一拊而勉レ之、三軍之士、皆如レ一レ」
【纔絮】クヮンジョ　わた、かとりきぬと。韓愈詩「探湯無所、益、何況纔絮レ縕」

【纏】ケツ　[所]
○しぼり、處處に染文ある布帛、布帛の所所を絲にてくくりて其の部分を白く染め殘したるもの。○しぼりに染めるしぼる、むすぶ(結)○眼に花を生ずるにいふ。孫覿詩「眼ー眩紅綠」

【纕】㊀サッ　㊁サイ　[泰]
㊀ちりめん。○うすぎぬ(絹)
㊁纔に同じ、絆ーは新らしきうすぎぬの衣のすれ合ふ聲。潘岳賦「綃紈絆ー」

【纘】サン　[諫]
纂(糸部十九畫)の俗字。

【纖】セン
纖(糸部十七畫)の俗字。

【續】ショク　ゾク　[沃]
○つぐ、つづく(繼)＝賡。○つらなる(連屬)斷えて復ー連なる。○陸ーは相繼ぎて絕えず。○繼ぎて來る者。史、項羽紀「足亡秦之ー耳」
同訓異語　繼・續・紹・緒・接・襲・尋・次・亞・屢○續は斷の反、斷えたる所をつぎ、又つらなりつづく意なり、續編・續紀などと用ふ。晉書「紹不レ足、狗尾續」○繼は斷えたるあとをつぐなり、繼母はまま母なり、繼室は、後妻なり。中庸「夫孝者善ー人之志一」○嗣はあとつぎなり。書經「問弗レ及レ嗣」○紹は家をつぎ、絲をつぎ、業をつぐに限りて用ふ。韓文「尋二綠緒一而遠紹」○緒は紹に同じ。中庸「繼二大王・王季・文王之緒一」に通用す。○接は續と似たり、紙をつぐを、接レ紙といひ、樹をつぐを、接樹といひ、觸と觸のつづくを觸接といふ。○襲は因也、承也、受也と註す、下地からあるに、因襲して重ねつぐなり、襲レ位・襲レ絆と用ふ。○尋はおひかけつづく義。左傳「日尋二干戈一」○次は次第に、つぎつぎなり、順次と用ふ。○亞は次に同じ、又つぎにつく義、亞聖の如し。○屢は人の詩歌などを、つぐことの外は用ひず、屢和・屢謝の如し。
【續絃】ゾクゲン　再び妻をめとる義、琴瑟のつるの斷れたるをつぐに喩ふ。海內十洲記「煮二鳳喙及麟角一、合煎作レ膏、名レ之爲二ー膠一、此膠能續二弓弩已斷之弦一」書言故事「再娶曰二ー絃一」(古、琴瑟を夫婦に喩へしが故)
【續紹】ゾクセウ　つづけてかきのせる。日連載。
【續出】ゾクシュツ　つづきてでる。又、つぎつぎに現はれる。＝頻出。
【續生】ゾクセイ　ひきつづきておこる。＝繼發。
【續續】ゾクゾク　ひきつづく貌。白居易詩「低レ眉信レ手ー二彈一」(信はまかせる)
【續短】ゾクタン　短きものにつぎ足す。戰國策「斷レ長ー レー」
【續晝】ゾクチウ　夜をひるにつづけて行ふ。魏志、鍾會傳「精二練名理一、以レ夜ー レー、由レ是獲二聲譽一」＝攝盡。
【續貂】ゾクテウ　○尊きものを以て高きものにつぐに喩ふ。趙王倫の簒位卿相に登り、奴卒に至るまで爵位を加へ、朝會毎に貂蟬多に盈つ、より て時人、諺を爲りて「貂不レ足、狗尾續」といひし故事(晉書、趙王倫傳)による。○貂は貂の尾にて飾りたる侍中の冠。劉基詩「雄豪猶擬持二侯印一、富貴寧須續二狗貂一」○後世、輒ち他人の未だ終らざりし業をつぎて爲すを譏していふ。
【續編】ゾクヘン　正編につづける書物。

【纏】テン　[先]　[級]
○まとふ、めぐらす(繞)まつはる、からむ、からまる「糾ー」「繚ー」「牽ー」「拘ー」「ー繞」○めぐる(繞)○つかね(束)「ー束」○圖ト消防夫の組のめじるし、竿のさきに種種の形の物を取りつけ、其の下に馬簾などをさげたるもの。
【纏綿】テンメン　まとひめぐる。白居易詩「情緒正牽ー、詩魔自ー ー」
【纏繞】テンジョウ　まとふ。雲霧七篇「寒雀爐ー、心曜ー ー」
【纏裹】テンクヮ　まとひつつむ。後漢書、范滂傳「以レ布ー ー、倒立于地一」陳遊詩「人生如二春蠶一、作レ繭自ー ー」
【纏撓】テンナウ　まつはる。莊子「脗脗然在二ー ー之中一」
【纏ひ】テンひ　まとひあつめる。梁簡文帝文「永言ー ー、飼鴨二丹心一」
【纏足】テンソク　まとひめぐる。又、足手まとひ。淨住子「生累ー ー、解脫何由」＝纏綿。
【纏足】テンソク　婦人の足を布帛にてまとひて小ならしめる。纏裹弊「婦人之ー ー、起二于近世一」
【纏著】テンヂャク　からみつく。

【纏頭】テンタウ はな、かづけもの。舊唐書、郭子儀傳「出二繒錦二百匹一、爲二子儀一ー之費一」

【纏綿】テンメン ○まとひしばる。○轉じて足手まとひとなるもの。淨住子「已離二妻子一無二ー一ー」‖綿纏。

【纏綿】テンメン 心がまつはりて離れざる貌。潘岳賦「思ー二於靖堂一」‖綿纏。

【纏絡】テンラク まつはりからむ。太上飛行九神玉經「玉光ー一、丹輝紫闕」

【纆絏】ボク 圧 なは(繩索)三つよりのなは。一說に二つよりの索。史、賈誼傳「夫禍之與福兮、何異糾ー一」

【纇】ライ 圀 ○いとのふし(絲節)「結ー一」○ふしいと、節ッのある絲。○もとる(戻)「忿ー一」○きず(疵)「瑕ー一」「微ー一」「疵ー一」淮南、氾論「明月之珠、不能無ー一」

【纍】㊀ルヰ ㊁ルヰ 圓 支 ㊀つづく、つなぐ、つながる(係・繫)各箇のものが相連綴する「ー一」○つづる(綴)とらはる(囚繫)‖纍。○かかる(係)○まとふ(纏)めぐる(繞)

詩、周南「葛藟ー一之」○きづな(絆)足手まとひ「係ー一」○大いなるなは(大索)つるべなは(繩)○ー一は志を得ざる貌。又、傷れたる貌。又、絕えざる貌。又、重なり積もる貌。㊁まきぞへ、延き及ぶ、事か相縁り及ぶ。

【纍囚】ルヰシウ 獄にとらふ。とらはれ人。左傳「兩釋二ー一一以成二其好一」‖累囚。

【纍纍】ルヰルヰ とらはれる。又、牢獄ヤ漢書、司馬遷傳「幽二于ー一一」

【纍纍】ルヰ ○志を得ざる貌。史、孔子世家「ー一如二喪家之狗一」○つづれたる貌。王粲「登樓賦」「ー一ー」○相つらなる貌。禮、樂記「ー一乎端如二貫珠一」○重なり積もる貌。漢書、石顯傳「印何ー一」

十六畫

【纘】サン 纂(糸部廿一畫)の俗字。

【纏】ロ 圓 ○ぬのいと。あさいと(布縷)「紡ー一」○あさぬの。○麻をねる(練)糸、滕文公「妻辟ー一」○紵の屬、以て布に織る。

十七畫

【纓】エイ ヤウ 庚 ○むながひ、馬の胸を蔽ふ革(馬鞅)「絡ー一」「鳥ー一」「轡」○ひも、かんむりのひも(冠系)「玉ー一」「珠ー一」「冠ー一」「長ー一」孟、離婁「滄浪之水清兮、可以濯我ー一」

【纓冠】エイクワン かんむりの紐を以て頭を貫く、あわてて整ふるに及ばざる形容。孟、離婁「被髮ー一而往救之、則惑也」

【纓紳】エイシン 冠のひもと大帶と、轉じていふ。顏師古時「濟濟盛ー一ー」

【纓緌】エイジ 冠のひもと印のひも。張說時「城池自榮謚、ー一爲二微纓一」

【纓絡】エイラク 瓔珞に同じ。北史、林邑國傳「珠璣ー一」

【纔】サン サイ 咸 灰 ○少しく黑き色。○轉じてわづか(僅)わづかに。漢書、鼂錯傳「遷縣ー一至」‖財裁・才材。

同音異字 纔・僅・劣・才・財・裁の別は僅(人部十一畫)の條を見よ。

【纖】ジャム 塩 ○たなすき(棄)○おび(佩帶)○馬のはらおび。○門をかかぐ。

【纖】セン 圀 纖は俗字 ○ほそし、ちひさし(小)こまかし(微細)○うすぎぬ(羅縠)○こまかきすぢ(細線)○とがる。○しわし(吝嗇)史、貨殖傳「周人既ー一」○しなやか、たをやか。○さす(刺)讒、文王世子「其刑罪則ー一割」‖殲。○ー一は女の手のほそく美くしき貌。

【纖埃】センアイ こまかきほこりの細田賦「微風生二於輕轄一、ー一起二於朱輪一」‖纖塵。

【纖維】センヰ 生物體を組織する細きすぢ。

【纖鋭】センエイ ほそくするどし。唐太宗、十騎戒「耳視ー一」

【纖騈】センイ すこしのくもり。世說「晴天月明淨、都無二ー一一」

【纖腰】センエウ ほそやかなるこし。元稹詩「嫻語嬌不レ聞、ー一軟無レ力」‖細腰・楚腰。

【纖葉】センエフ ほそきは。詩經「ー一垂二楊柳一」

【纖纖】センセン ほそくあてやか。舞鶴賦「引二圓吭之ー一一、頓二修趾之洪崎一」

【纖藍】センラン ほそくしてあてやか。隋游詩「何當掃二ー一一一」

【纖塵】センヂン すこしのきず。韓愈詩「盲眼鏡淨無二ー一一」‖纖翳。

【纖介】センカイ 極めてすこし、介は芥。戰

閑齋策「無二一一之畧一者、湯煖之計也」

【纖芥】カイ　こまか、すこし、芥は一筋のとげ。後漢書、蕭扶傳「受二秋毫之善一、貶二一一之惡一」＝纖介。

【纖巧】カウ　こまかくたくみ。古樂府類編序「其末一一而不レ振」

【纖毫】ガウ　すこし、極めてこまか。杜甫詩「上方重關晩、百里見二一一一」

【纖角】カク　ほそく尖れるつの。陸龜蒙詩「何代奇工厭二玉英一、細將二一一盡雕成」

【纖介】カイ　細きと大いなると。周邦彥文「紛二飾朴質一、務二一一一一」＝纖芥・洪纖。

【纖月】ゲツ　三日月。杜甫詩「風林一一落」＝纖鉤。

【纖妍】ケン　ほそくしてうつくし。嫵媚。

【纖悉】シツ　すこしのあか。宋濂詩「僧廬皆削平、清淨無二一一一」

【纖細】サイ　こまか。趙嘏類詩「三月蠶始生、一一如二牛毛一」

【纖兒】ジ　小兒に同じ。晉書、陸納傳「時會稽王道子、以二少年一專レ政、委二任尚小一、納望レ門而歎曰、好家居、一一欲レ擾二屋之一耶」

【纖指】シ　ほそきゆび。相鼠經「高類纖節、洪髀一一、相之備者」

【纖纖】セン　すこしのきず。李華文「一日再至、洗二其一一一」

【纖芒】ボウ　○かすかなし。菊譜俗謂二能腮菊一爲二小銀臺一、枝幹一一、葉青黃而粗疎」＝纖柔。○ほそくやはらか。陸游詩「一一玉指破二雙柑一」

【纖人】ジン　性質の纖弱なる人。中說「謝莊王融、古之一一也、其文悲」

【纖弱】ジャク　ちひさくよわし。歷代名畫記「謝赫筆路一一、不レ副二雅壯之旨一」＝纖纖。

【纖手】シュ　女子のほそく美くしき手。陸機詩「佳人撫二琴瑟一、一一清且閑」

【纖芽】ガ　こまかくしげる。孟郊詩「竹韻邊霜層、草色何一一」

【纖艷】エン　やぶさか。史、貨殖傳「其風得過賞、愈二於一一一」＝纖悋・吝嗇・慳。

【纖纖】セン　こまかくして色どりしげくあつし。嵇康、西京賦「故其宮室次舍、雖二一一一一」

【纖纖】セン　○細つき貌。こせつく。道德指歸論「近習一一、務順二其君一」＝纖細。○ほそく尖りて銳き貌。古詩「兩頭一一月初生」

【纖刀】トウ　ほそきかたな。孟郊詩「枝枝如二一一一」

【纖摩】マ　こまかきちり。＝微塵・纖埃。

【纖條】デウ　ほそきえだ。張華文「一一一被レ綠、翠華含レ英」

【纖魄】ハク　三日月。纖は細、魄は月。許飛雲、新月詩「初生二一一一一挂二南樓一」＝纖月。

【纖眉】ビ　ほそきまゆ。宋徽宗詩「一一丹臉小腰肢」

【纖後】ゴ　こまか。後漢書、陳元傳「遺肥一一、指爲二大丸一、挾レ瑟過レ客、挾二其弘美一」

【纖靡】ビ　ちひさく美くし。東都賦「恥二一一一而不レ服、疑二奇寵一而不レ珍」＝纖好。

【纖妙】メウ　ほそくたへなり。馬融、長笛賦「微風一一、若レ存若レ亡」

【纖縟】ジョク　うすぎぬ。元稹詩「被服一一衣、左右風二壁璫一」

【纖離】リ　古の良馬の名。荀子「一一綠耳、古之良馬也」

【纖悋】リン　やぶさか。文中子「一一者義之蠹」

【纖麗】レイ　しなやかにしてうるはし。張華詩「被服極二一一一一、香膳盡二柔嘉一」

纏　十八畫

【纏】テン　糸部十五畫の俗字。

纔　十八畫

【纔】サイ　支　古咸

○つなぐ。張衡賦「一一幽繭之秋蕚兮」○ひも（系）

纒　十九畫

【纒】サン　旱　纏は俗字

○つぐ。つづく（繼）中庸「武王―太王王季文王之緒」○あつむ。＝纂。

【纏綿】デン　纏・纏・綿・纏・纏・接・纏・導・次・亞・度の解は纏（糸部十五畫）の條を見よ。

【纏綿】ケン　つづく。つぐ。禮記、疏「武王能二一一父祖之業一」＝紹繼・繼續・纏綿。

【纏逃】トウ　あつめのべる。容齋隨筆「皆以二手帖一論二一一之要一」＝纏逃。

【纏緒】ショ　事業をうけつぐ。纏は纏。詩經「至二子文武一、纏二大王之緒一」＝孤及、遂二孫侍御一序「用二文學一」一一、而兄弟皆材」

【纏綿】メン　うけつぐ。任昉、蜀志序「一一其事一、竟未レ成レ功」＝纏綿。

【纏】テン　㊀シ　纏　㊁リ　支　㊂シ　支　纏

㊀かみづつみ、頭髮をつつむきれ。＝纏。○一乎はむらがりゆく（羣行）貌。○つづく（連屬）「一一遝」○貌「一一」は長き貌。㊁つらなる（連）㊂かんむりのひも（緌）㊃車のかざりの貌。

【纏綿】メン　細長く連る貌。屈原、離騷「宋玉景差之一一一」

【纏繞】デン　纏　纏

○はた、はたほこ、旄牛（ヤク）の尾

にて作りし大旗、秦漢の時、天子の車の飾。漢書、高帝紀「黄屋左ー」〇轉じて俗に天子の親征軍を大ーといふ。〇軍中に用ふる大旗。歐陽修、書錦堂記「高牙大ー」〇葬式の時、棺側に立てるさしもの。‖羽葆幡。

廿一畫

【纜】 ラン　㊥ 攬は俗字

ともづな、舟を維ナグく索ハ、錦ー」

【收レ纜】シュラン　ともづなを引き上げて出帆する。鮑照詩「ー解二帝郷一、揚レ棹發二皇京一」‖解纜。

【擊レ纜】ゲキラン　ともづなをつなぐ、舟をとめる。陸游詩「放翁ー水雲郷」

【解レ纜】カイラン　ふなでする。江淹詩「ーー候二前侶一」‖收纜・開船。

【纙】 ルキ　㊦

しばりなは、くろなは（黒索）‖纙。

缶部

【缶】 フウ　㊥ 瓶に同じ

〇ほとぎ、もたひ、腹の大きくして口のつぼめる瓦器にて酒漿を盛る。古、秦人宴會に之を鼓して歌を節す「瓦ー」「土ー」史、李斯傳「擊二甕叩一ー」〇量の名、四斛コク

【缶】 缶（南絲）の俗字。

二畫

【缸】 カウ　㊦

かめ、もたひ、十升を受ける大形の壺「玉ー」「酒ー」「滿ー」

【缸硯】カウケン　蜀に姓朦といふ者あり、破れたる酒缸を以て硯をつくり、ーーといふ、蘇軾にーー銘序あり。

【缸面酒】カウメンシュ　酒の初めて熟せしもの。法書要錄「辨才留二蘇過一宿、設二ーーー一、過江東缸面、猶二河北麦頭一皆初熟酒也」

四畫

【缺】 ケツ　ケチ　㊦ 又、缺に作る、欠は別字

〇かく（虧）やぶる（破）こはれる、器物がきずつきてこはれる「ー損」「残ー」「玷ー」「虧ー」「金甌無ー」こはす（毀）〇ふそくす、そろひし物の一部分が失せて少くなる、足らず「ー乏」「ニー」〇其の官職があく、空位を生ずる「補ー」〇かけ、きず（玷）「瑕ー」あやまる、しくじる。書、君牙「戒以二正罔一」「〇列ーはいなびかり（天閃）〇発ーはいぐち。‖発脣。

【同訓異義】ケツ　缺・欠・闕・虧・玷〇缺は完の反對、物のかけ損じたる義。戰國策「願得下補二黒衣之缺一以衛中王宮上」〇欠は晉ケン數の不足せる義、通欠とは、年貢の滯りたる義。〇闕はかけおちたるなり、全の反なり、缺と似てやや異り、缺は一物のすみの缺けたるなり、闕は多くの物の中にてかけおちたるなり。〇虧は盈の反、月の盈虧に用ふ、損し毀るる義なり。書經「爲レ山九仞、功虧二一簣一」〇玷は音テン玉のきずなり。詩經「白圭之玷、尚可レ磨也、斯言之玷、不レ可レ爲也」

【缺員】ケツイン　一定の人員がかけてゐる、所定の人員に滿たぬ。

【缺呀】ケツカ　かけてうつろとなる。歐陽修文「山形中斷、巉崖ーー、若二斷若一レ續」

【缺陷】ケツカン　かけて足らず。不滿足。宋史、李沆傳「但念二内典以二此世界一爲二ーーー一」（内典は佛書）

【缺朽】ケツキウ　かけてくさる。轉名、義齒レ之、齒ーー也」

【缺勤】ケツキン　つとめをかく、病氣などの爲めに休みて出勤せず。‖闕勤。

【缺盡】ケツジン　文字の誤をはぶく。文心雕龍「最以二馬字一レ、而石建慳レ死」

【缺月】ケツゲツ　かけたる月かげ、片われ月。韓愈詩「ーー初升大缺レ雲」

【缺如】ケツジョ　足らざる貌　一說に小智の貌。老子「其政察察、其民ーー」

【缺缺者】ケツケツシャ　ちゑの少き人。缺一に缺に作る。柳宗元、桐葉封レ弟辯「是直小丈夫、――之事」

【缺口】ケツコウ　いぐち、三つ口。醫書、毛頴像「衣レ褐之徒、ーー而長髯」‖発缺。

【缺刻】ケツコク　植物の葉の緣のぎざぎざ。鋸齒ノコギリの如きもの。

【缺脣】ケツシン　いぐち、三つ口、上脣の缺けたるもの。淮南子「身蹄見レ鏡、而子ーー」‖缺口。

【缺如】ケツジョ　〇かけたる貌。‖闕如。〇意の滿たざる貌、不滿足のさま。淮南子「自視猶ーー也」‖缺然。

【缺席】ケツセキ　㊥出席すべき所に出ぬ。‖闕席。

【缺席裁判】ケツセキサイハン　原告又は被告人が公判の當日缺席せし時に裁判官の下す判決。

【缺然】ケツゼン　意の滿たざる貌。莊、秋水

「吾自視ー—」＝缺如。
【缺損】ケツソン ○器物などがこはれる。○利益を失ふ、そんをする。
【缺典】ケツテン 缺けて修まらざる事。＝闕典。
【缺點】ケツテン 圖かけめ、おちど、短所。
【缺望】ケツバウ 不滿足に思ひて怨む望は怨「史、直筆傳」＝觖望。
【缺乏】ケツバフ 物が不足する、とぼしくなる。
【缺本】ケツホン 卷數のかけて足らざる書物。楓窗小牘「及二離亂南來一、ー—且不レ可レ得」
【缺盆】ケツボン 肩上の橫骨の中のくぼめるところ。史、倉公傳「左缺盆之脈」
【缺落】ケツラク かけおつ。黃庭堅詩「菩薩ー—庭松老」
【缺簿】ケツリ すきたるまがき。杜甫詩「ー—籬レ棘担、倒石頭レ藤縫」
【缺略】ケツリヤク かけてそなはらず。又、きてはぶく。
【缺禮】ケツレイ 禮儀をかくこと。＝失禮。
【缺漏】ケツロウ かけてもれる。＝闕漏。

五畫

【缾】缶（部首）に同じ。

六畫

【缶】カウ コウ 石韻

○錢を受ける瓦器、小孔ありて入るべく、出すべからざるやうに作りしもの。○竹にて作りて文書を入れる函、投書ばこ。今の郵便箱の如きもの。
【缶筒】ホウトウ 祕密の文書を投ずるつつ、めやすばこ。漢書、趙廣漢傳「又教二吏爲一ー—以受二民之詞訟一」

【缾】ヘイ ビャウ 庚 又、餅に作る瓶に同じ

かめ、つるべ（汲水器）「長ー」「短ー」「罌ー」
【缾罄】ヘイケイ かめ、もたひ。韓愈詩「陳大ー—小、所レ任自有レ宜」蘇軾、送岑ー—陸子泉序記「茗飲盛二天下一而ー—負擔之所レ出、通二四海一矣」＝罄缾。
【缾杓】ヘイシャク 水がめと、ひしゃく。給遺記「琥珀爲ニー—一」

八畫

【缾】餅（缶部六畫）に同じ。

十畫

【罃】エイ アク 庚

○かめ、長き頸の瓶、火に備へる用水を盛る器。○人名、戰國の魏惠王卽ち梁惠王の名。

十一畫

【罅】カ ケ 禡

○ひま、物のすきま、あな（孔隙）「寸ー」「林ー」「窗ー」「雲ー」「石ー」「巖ー」○事の間隙スキ「ー—漏」○さく（裂）ひびが入る。
【罅隙】カゲキ いがみわれたるくり。包佶詩「鳥窺二新ー—一、龜上二半皴苔一」
【罅漏】カロウ 事のすきまの韓愈、進學解「補レ宜ー—一」（聖人の道の缺けたるを補ふ）

【罄】ケイ 徑 回 古、磬に通ず

○むなし、つく。つくす（盡）器中空し「空ー」「窘ー」左、僖二六「室如レ懸ー—」（一本磬に作る）○すべて、ことごとく、みな（皆）詩、小雅「一無レ不レ宜」○不ーは書簡の結尾語、十分に書き盡さざる義。＝不宜不備。

【罄竹難書】ケイチクナンショ 惡の罪は盡（皿部九畫）の條を見よ。
【罄匱】ケイキ つきてとぼし、王粲文「國有二殷殷之實一、家無二ー—之憂一」
【罄竭】ケイケツ つく。晉書、呂蒙載記「比年多事、公私ー—、不二深レ根固レ本、恐二爲患時一來」＝乏竭・匱竭。
【罄盡】ケイジン むなしくつく。晉書、王衍傳「數年之內、家資ー—、出就二洛城四面園一而居焉」＝竭盡。
【罄地】ケイチ すべての國。齊南郊歌「率天奉レ贄、ー—來賓」
【罄餅】ケイヘイ 水を汲むかめ。韓愈詩「罄罄滿懸ニー—一」

十二畫

【罇】ソン 元

さかだる「酒ー」「清ー」「節ー」「尊・樽。

十三畫

【罌】瓦部十三畫に同じ。

十四畫

【罌】アン エイ 庚 敬

かめ（瓶）もたひ（缶）瓶の腹大いにして口の小なるもの「玉ー」「餅ー」「銅ー」「磐ー」「提ー」
【罌粟】アンソク 米囊花ソクの一名、春夏の交に單瓣又重瓣の芙花をつけ、米儀の形したる實を結ぶ。黃庭堅詩「女奴漬ニー—一」＝御米花。
【罌缶】アンフ かめ、もたひ。史、淮陰侯傳「以二木ー—一度レ軍、軍二安邑一」
【罌瓶】アンヘイ もたひ。元稹詩「戶編皆ー—

一」

十五畫

【罍】 ライ ルオ 支 灰

さかだる、雲雷の形を畫きし酒樽。詩、周南「我姑酌ニ彼金一」「玉ー」「樽ー」

【罍罌】 ライオウ さかだる。柳宗元文「馬寒ければ、ー相逼に

【罍觴】 ライシャウ さかだると、さかづきと。王昌齡詩「ー且終レ宴、功業曾未レ了」＝罍觶。

【罍尊】 ライソン 雲雷のもやうある酒樽。禮、祭器「廟堂之上、ー在レ阼、犧尊在レ西」

十六畫

【罐】 タン ドン 翌

びん、とくり（徳利）＝壜。

【罏】 ロ 虞

○さかだる、もたひ（甕）○ろろり（火爐）瓦にて作りし爐。（鑪は金にて作る）

十八畫

【罐】 クヮン 隊

○つるべ（汲器）○ほとぎ（缶）國○クヮン又、罐に作る。ぶりき製のいれもの「一詰」○かま「茶ー」○薄き金屬製の湯わかし「藥ー」

网部

【网】 バウ マウ 養 又、罒・罓に作る

○あみ。網の古字。○國ヤマ字盡の冠となる時の稱。

【罔日】 日に從ひ、中は網の目の交る文字は比上より發現して取るなり。

【罔】 网（兩條）に同じ。

三畫

【罕】 カン 早 又、罕・罕に作る

○まれ、まばら（希少）たまゝ。論、子罕「子ー言レ利」○あみ（網罟）○はた（旌旗）「旌ー」

【同訓異義】 罕・稀・希・少○罕は疎りて少きなり、疎なり、たまたまなり。○稀はまばらなり、疎なり、稠の反なり。曹操詩「月明星稀、烏鵲南飛」○希は稀に通ず、希有はたまに有るをいふ。○少は多の反、數の少き義、行人少の如し。

【罕旗】 カン はた。史、周紀「百夫御ニ一ー」

【罔】 バウ マウ 養

○あみ、獸を捕へるあみ（羅網）＝網。○罪人を捕へるあみ、即ち法律「天ー」「文ー」○あみをかける、あみす、網にて取る、羅致する。○轉じて法律にて處刑する。孟、梁惠王「ー民而可ニ爲也一」○むすぶ、つなぐ。○しふ（誣）道理になきことを無理におしつける「誣ー」「欺ー」言ひまげる。論、雍也「不可ニ罔也一」○正しき道を行はず。論、雍也「ー之生也、幸而免」○なし（無）書、湯誓「ー有ニ攸赦一」なかれ。○なみす。○無知なる貌。○愛心の貌。○うっとりする。○愛ふる貌。○一兩ヤウは水の神。左、宣三「魑魅ー兩」＝魍魎。

【罔極】 きはまりなき父母の恩。詩、小雅「欲ニ報ニ之德一、昊天ー極」に本づく。

【罔罟】 あみ。晉、張翰「結レ綱而爲ニ一ー一、以個以漁」釋文「取レ獸曰レ罔、取レ魚曰レ罟」

【罔然】 おろかなる貌。心のうっとりせる貌。張衡、東京賦「罔ー若レ醒」＝罔罔・惘然。

【罔罔】 心のうっとりせる貌。前條參看。

【罔兩】 字解を見よ。

四畫

【罘】 フ 虞 尤

○うさぎあみ（兎罟）○かさぬ（復）○一罳は宮門外に在る屏。木を縵めて之をつくる、其の中疏通にして透明なり、青瑣の類。漢書、文帝紀「未央宮東闕ー罳災」罘は復、罳は思、人臣事を請はんとする者、此に至りて重ねて思ふ義。○又、極めてうすきかけ、景の外の微陰。莊、齊物「ー兩問レ景」

【同訓異義】 罔・無・靡・亡・莫・勿・毋・沒・微の別は無（火部八畫）の條を見よ。

之一訳は山名、山東省文登縣の東北に在り、一名煙臺、清の同治元年開きて商埠と爲す、‖芝罘。

【罘罳】フ 事上に張りたる冤あみ。司馬相如、子虚賦「一一彌ㇾ山」

五畫

【罡】 カン 陽

天一は北斗星の異名。

【罟】 コ 慶

○あみ(罔)の總名「數一」「漁一」「爲一」「罔一」○うさぎあみ「冤一」○うをあみ(魚罔)○おきて、刑律。詩、小雅「罪ㇾ此罪一」「天一」○あみす、あみにてとる。

【罟擭陷阱】おとし穴と、我に人獸を捕へるしかけ。中庸「驅而納二諸一之中一」

【罟師】ニ 漁夫。王維詩「一一盪槳向二臨圻一」

【罟罟】フ あみ。淮南子「好ㇾ漁者、先具二罟與一不」

【罟網】フウ あみ。陳書、王固傳「徙入以二南人嗜ㇾ魚、大設二一一一圍以二佛法一兇之、遂一鮮不ㇾ獲」‖罔罟。

【罝】 シュ 遇

○うをあみ(魚罟)○こあみ(小網)

【罝罳】ソシ 魚を捕へる小あみ。張衡、四京賦「設二一一一一」‖魚罟。

【罥】 ビン 眞

○つる(釣)○あみ、うさぎあみ。○圖ワナ縄を輪にして鳥獣の足をかけて捕へるしかけ。‖係縻。轉じて人を欺く惡計。

【罥索】ビンイ うさぎあみ。左思、吳都賦「一一連網」

【罣】 ケイ 霽

○かく、かかる(挂)○ささへる。ささはる(礙)「一礙」

【罣誤】ケイ 官吏が過失によりて譴責を受ける。‖註誤。

六畫

【罣】 (一)ケン 霰 (二)ケン 先

○かく(挂)「掛一」つなぐ(係取)(二)わがぬ(維)

【罦】 フ 虞 尤

あみ、車上に設けて鳥を捕へるあみ(翻車網)詩、王風「雉離于一」

【罛】 ラン 寒

罪一は廣大なる貌。左思賦「相與臚二於罪一之野一」

八畫

【罨】 エン アフ エフ 琰 合 葉

通音 アン

○あみ、上より覆ひかぶせて魚を捕へる網。‖撒網。○おほひかぶせる(掩覆)○あみす(四)網にて魚を捕る。王篇「以二罔一魚也」

【罨畫】クワ さいしきしたる繪。丹鉛總錄「一一家有二一一一彩色畫也」

【罨法】ワン 炎症を消し、充血を去る爲めに冷水又は溫水の濕布を貝て、患部を覆ひてひやし又は溫める治療法「冷一一」「溫一一」

【罫】 カイ 卦 通音 ケイ

○め、博局ケイの方目の線。○わく、すべて格子ケッ形に畫せし線「方一」○圖ケイ文字の行間の界線の又、其の線のある紙「一紙」

【罫紙】ケイ 圖けいのひきてある紙。

【罫中】ケイ 基局ケイの目のうち。柯譚、新論「使二一一一死基皆生一」

【罪】 サイ 賄 通音ザイ 皋は古字

○つみ、とが、とがめ、法を犯す「犯一」「治一」「死一」「重一」「輕一」「無一」「大禹謨「一疑惟輕」○不都合「謝一」○わざはひ(殃害)左、桓十「懷璧有一」○つみす、つみにあてる、刑にあてる「一人」○しおき、刑罰。○圖つみ。人から怨まれる如

きしうち「ーを作る」

【罪惡】ザイアク つみ。蘇軾詩「我生涉二憂患一常惡長ニーー一」

【罪案】ザイアン 犯罪に對する裁判の目や十書。

【罪因】ザイイン 罪を構成する原因。梁武帝文「今佛弟子、酣レ酒嗜レ肉、不レ長ニーー一、不レ長二苦果一」

【罪己】ツミヲオカス 自らを咎め責める。左、莊十一「禹湯ーレー、其興也浡焉、桀紂罪レ人、其亡也忽焉」白居易詩「遂下ニーー詔二殷勤制一萬邦一」

【罪告】ザイコク つみとが。書經、傳「非二我ーー一」‖罪過。

【罪戾】ザイレイ つみあやまち。北史、李順傳「聚遊數與レ賴游宴、頗有二浮言一、恐二順泄一レ之、以二金寶一納二賴懷中一、故累遜ーー得レ不レ聞」‖過戾。

【罪科】ザイカ しおき、刑の科條。後漢書、郭躬傳「平二其ーー一」‖罪條。

【罪過】ザイクワ つみあやまち。史、信陵君傳「自言ニーー一」‖罪咎。

【罪悔】ザイカイ つみあやまち。詩經「庶無ニーー一以追二于今一」

【罪魁】ザイクワイ 犯罪の張本人、首謀。

【罪刑】ザイケイ つみとが。後漢書、張酺傳「竇氏雖レ伏二厥辜一、而ーー未レ著」

【罪證】ザイショウ つみ、とがめ。歐陽修詩「何時乞二殘骸一、萬一免ニーー一」

【罪辜】ザイコ つみ。後漢書、丁鴻傳「部署之吏、無レ所二長懟一、縱行二非法一、不レ服ニーー一」

【罪業】ザイゴフ 佛罪になる所業、煩惱により生ずる罪惡の總因。

【罪因】ザイイン とらはれ人、めしうど。

【罪疾】ザイシツ つみと、やまひと。わざはひ（災難）「書、盤庚」

【罪貫】ザイクワン つみのたち、犯罪の性質。

【罪人】ザイジン ○つみを犯したるひと、犯罪人。書經「ーー斯得」○ひとを刑に行ふ。孟子「レー不レ孥」罪己參看。

【罪狀】ザイジヤウ 罪を犯したる次第、ありさま。犯罪の情狀。

【罪障】ザイシヤウ 佛極樂往生のさはりになる罪業。梁武帝文「凡啜レ肉者、是大ーー」

【罪證】ザイショウ 犯罪を明かにするしょうこ。

【罪跡】ザイセキ つみを犯したるあとかた。

【罪籍】ザイセキ 罪人の姓名を記したる簿籍。

【罪梯】ザイテイ つみを犯すきだはし。鹽鐵論「爲二民ーー一也」

【罪罰】ザイバツ つみ、とが。北史、高謙之傳「成共謗毀、橫受ニーー一」

【罪犯】ザイハン つみ、とが。

【罪名】ザイメイ 犯罪の名目。後漢書、明帝紀「明奏ニーー一」

【罪戾】ザイレイ つみ。左、莊二二「免二于ーー一、弛二于負擔一、君之惠也」

【罪隷】ザイレイ つみありて官の奴となりし者。周禮「ーー百有二十人」

【抱レ罪】ハウザイ 罪を身にもつ。後漢書、蔡邕傳「ーレー懷レ罪」

【議レ罪】ギザイ つみを論じしらべる。晉書、顧和傳「臧汗百萬、付レ法ーレー、百僚慶レ之」

【聞レ罪】ブンザイ 我より罪を得る義。戰國策「ニー於先生一」

【待レ罪】タイザイ 官職に在ることを謙していふ、何時過失によりて罰せられるか測られずとの義。史、季布傳「臣無二功狗レ罷。ーニー河東一」

【寄レ罪】キザイ つみをゆるす。易、解卦「君子以赦レ過ーレー」

【罪不容二於死一】ツミシヌルニモアマル 罪大いにして死すとも猶ゆるし容るるに足らず。孟、離婁「此所謂率二土地一而食二人肉一ーー」漢書、王莽傳「罪不容レ誅」

【抵レ罪】テイザイ 相當の刑に處する。史、趙世家「而今乃ーレー」

【坐レ罪】ザイニアフ つみにかかる。說苑、奉使「王曰、何坐、曰坐レ盜」

【罪疑惟輕】ツミノウタガハシキハカロクス たしかならざる罪は輕く處分する（書、大禹謨）

【罙】 シン リン 俗

ふしづけ（浸）柴を水中に積みて魚を聚めて捕へるしかけ。‖鬱。

【罩】 タウ タク 覺 效

○竹を編み上を窄くし底を闊くし、中に香餌を置き、旁に口あり、水中に立て魚を入れて捕へるかご「籠ーー」○こむ（籠）入れ包む。司空圖詩「荷塘烟ーー小齋廬」

【置】 チ 寘

○おく。○たつ、たてる（立）呂覽、特君「莫レ如ーー天子一」○そなへまうける（設）「ーー酒」○さしおく、ゆるす（赦釋）史、吳王濞傳「無レ有二所ーー一」○すつ（廢棄）周語「是以小怨ーー大德一也」○とどまる（停留）「姑ーー」○やすんず、すゑつける「安ーー」○しゅくば（驛站）「ーー郵」○しゅくばのうま（驛馬）

【置郵】チイウ しゅくば、況も驛。孟、公孫丑「德之流行、速二於ーー一而傳レ命」

【速二於置郵傳レ命】ソクヨリハヤキハチユウデンノデンメイヲツタフルヨリハヤシ 置は驛、郵は早馬。傳達の極めて迅速なるに喩ふ。前條參看。

【置科】チクワ 法律の科條を設く。魏志、曹仁傳「嚴整奉二法令一、常ーーニ一于左右一、案以從レ事」

【置換】チクワン おきかへる。

【置質】シツ 人の臣となる時に、物を君に獻ずる義、質はにへ。呂覽、執一「今日ーレー爲レ臣」

【罟師】シ　ことばのつかひやう。漢書、周勃傳「勃恐不レ知レ――」
【置酒】チシュ　さかもりする。さかもり(酒宴)史、高祖紀「高祖――ニ――前殿一」
【置酒高會】カウクワイ　さかんなるさかもりする。漢書、高帝紀「漢王入ニ彭城一、收ニ羽美人貨賂一、――」
【置錐之地】スイチ　錐を立てる程の少しの地。莊、盜跖「堯舜有ニ天下一、子孫無ニ――一」⇨立錐之地。
【置傳】チデン　置郵に同じ。宣帝紀「下足レ表ニ――一」⇨驛傳。

【罛】コ　キ　劇　こあみ、魚を捕へる小網。詩、豳風「九―之魚」

九畫

【罳】シ　支　栄一ツはめかくしの屏、あみまど。栄(网部四畫)を見よ。

【署】ショ　御　○やくわり、てわけ、てわけする。史、項羽紀「部ニ呉中豪傑一」○しるし。しるす(表記)字を題する「大―」「一簽」○名をかく「一名」「連―」かきはんする。○やくしょ(公廨)「官―」「府―」「治―」「公―」「禁―」○つかさどる、暫く事務をあつかふ「一理」
【署記】ショキ　名をかきしるす。⇨署名。
【署書】ショショ　楽の八體書の一、多く題額に用ふ。今は傳を失ふ。
【署置】ショチ　それぞれ官職に任ずる。晉書、王仁恭傳「劉武周ニ――百官一」
【署長】ショチャウ　官署の長官「警察――」史、馮唐傳「唐以ニ孝著一、爲ニ中郎一ニ」
【署背】ショハイ　せなかにしるす。北史、裴連猛傳「自署ニ名于背一」
【署分】ショブン　てわけ、やくわり。⇨部署。
【署名】ショメイ　名をしるす。北史、陳收傳「總ニ監之一、――而已」
【署理】ショリ　官職の缺員ありし時に暫く他の官吏を以て其の事務を代理せしめる。

【罰】バツ　ハチ　月　通音バツ　罸は俗字　○つみ、とが「刑―」「科―」「懲―」○つみす、法律規則に背きし者を罪にあてる、處分する「誅―」「必―」「賞―」○ばち、罪惡の報「天―」
【後レ罰】コウバツニオクル　罪することをのちにする。禮記「先レ事而後レ――」
【罰金】バツキン　罪の贖として出さすぜに。漢書、張釋之傳「此人犯レ蹕、當ニ――一」⇨罰錢。
【罰慝】バツトク　つみする、極も罰。書、多方「我乃其大ニ――之一」⇨極罰。
【罰酒】バツシュ　○古、君臣燕飲の時、禮を失せし者を罰し、飲ますに酒を以てする義。詩經、簫「兕觥ニ――一」○後世勝負に負けたる者に飲ます酒。陳造詩「低喚ニ楽飯一充ニ――一」
【罰責】バツセキ　處分してせめる。後漢書、東夷傳「山川各有ニ部界一、不レ得ニ妄相干涉一、邑落有ニ相侵犯者一、輒相ニ――一」⇨責罰。
【罰則】バツソク　罪過を處分する規則。
【罰杯】バツパイ　勝負にまけたるものに飲ます酒。⇨罰盃。
【罰俸】バツポウ　官吏の懲罰處分として俸給の全部若くは一部を納めしめをいふ。陸圓園筆「唐元和五年、房式有ニ不法事一、――召還」

十畫

【罵】バ　禡　○ののしる(罵)惡口をいふ「怒―」「唾―」「捶―」「答―」「笑―」「惡―」「嘲―」史、留侯世家「高祖輕ニ士善一」○ののしりごと、惡口。
同訓異義　罵・署○罵は惡言を以て人に加ふる義。史記「輕ニ士善一」○署は音リ罵よりは輕し、觀會に「正斥レ罵、旁及レ署」とあり。書經「小人怨レ汝詈レ汝」
【罵譏】バキ　ののしりそしる。楚辭詩「羣小所ニ――一」
【罵坐】バザ　座中の客をののしる。史、田鮒傳「勃謂ニ夫一―不敬一」蘇軾詩「羅ニ遊一―灌將軍一」⇨罵座。
【罵辱】バジョク　ののしりはづかしめる「漢書、程方進傳」⇨詬罵。
【罵倒】バタウ　甚だしくののしる。
【罵咄】バトツ　ののしり惡口を極める。全唐詩話「士子來氣―一、遊ニ諸侯門一」
【罵詈】バリ　ののしる。史、張釋之傳「漢王一ニ――踏侯羣臣一、如レ罵ニ奴耳一」⇨詈罵。

【罷】(一)ハイ　蟹　ハ　(二)ヒ　支　(一)やむ(已)事を中止する、廢する「廢―」○やすむ、休止する。論、子罕「欲―不レ能」○官を免する「―免」職を去る。○まかる(退歸)退き去る。(二)つかれる。⇨疲。○にぶし(鈍)
同訓異義　罷・已・息・輟・止・歇・弾・休の別は已(五六一頁三段)を見よ。
【罷休】ヒキウ　仕事をやめてやすむ。史、孫子傳「將軍一―就レ舍」

【罷官】クワイ　官をやめる。職を去る。李白詩「黃霸初臨レ郡、陶潛未レ一レ」

【罷業】ハイゲフ　罷工に同じ。

【罷遣】ヒケン　職をやめてやりかへす。後漢書、趙康傳「發レ民繕二修城郭一、康至皆一レ、百姓大悅」

【罷工】ヒコウ　仕事をやめる。‖罷業。

【罷免】ヒメン　やめはぶく。罷は廢。漢書、翼奉傳「一二不急之用一、振二救困貧一」

【罷退】ヒタイ　やめしりぞく。廢志、明帝紀「皆一二之」

【罷黜】ヒチュツ　やめしりぞける。漢書、武帝紀「一二百家一、表二章六經一」

【罷免】ヒメン　職務をやめらる。舊唐書、文宗紀「玉レ是放免一一」

【罷兒】ヒ　風の風に揺れ動く貌。蘇軾詩「翠浪舞翻紅一一」‖羆羆。

【罷倦】ヒケン　うみつかれる。東觀漢紀「今日一一甚」

【罷勞】ヒラウ　前條に同じ。勞は倦。漢書、嚴助傳「士卒一一」

【罷士】ヒシ　〇つかれたる士卒。齊語「一一無レ伍、罷女無レ家」〇才能の劣りし人。

【罷癃】ヒリウ　〇つかれて弱し。金史「老幼一一」〇怠りて振作せず。漢書「坐二一一不レ勝レ任者」

【罷蔫】ヒエン　疲れて鈍き馬。轉じて役にたたぬ鈍才の義とす。漢書、司馬遷傳「僕雖二一一、亦曾側聞二長者之遺風一矣」

【罷病】ヒイ　つかれなやむ。後漢周章「問二一一之故、政事之失一」‖疲病。

【罷敝】ヒヘイ　つかれやぶれる。賈誼、過秦論「人民一一」‖罷弊。

【罷弊】ヒヘイ　つかれる。漢書、公孫弘傳「以爲下一二中國一、以奉中無用之地上」‖罷敝・疲弊・羸弊。

【罷民】ヒミン　つかれたるたみ（周禮、大司寇）

【罷老】ヒラウ　疲つかれ年老ゆ。漢書、劉敞傳「孝者一一」注「罷讀曰レ疲」

【罷勞】ヒラウ　つかれる。左傳「民不二一一一君無二怨讟一、政有レ經矣」‖疲勞。

【罷癃】ヒリウ　次條に同じ。

【罷癃】ヒリウ　せむし、腰曲りて背高き病。史、平原君傳「臣不幸有二一一之病一」‖罷癃・背疾。

十一畫

【罽】キ　ウツ　物　未

〇こあみ。〇鳥を捕へるあみ。【罽羅】ラキ　小さきとりあみ。禮、王制「鳥化レ爲レ鷹、然後設二一一一」

【罻】ヰ　羅（網部八畫）に同じ。

【罼】ヒツ　質

〇うさぎあみ「畢一」〇さであみ、長き柄をつけたる小あみ。

十二畫

【罭】ケイ　霽

〇けおりもの、まっせん、毳縫ユの屬。〇うをあみ（魚網）

【罭罦】ケイフ　國名。漢書、西域傳「一一、地平温和、有二目宿雜草奇木檉柳杯竹漆一」

【罩】シュウ　トウ　多　東

車上に張りて鳥を捕へる網（幡車罔）

【罾】ソウ　蒸

〇よつであみ、方形の網の四隅を竹にて張り柄をつけたるもの、少時、水に沈め、急に引上げて魚をとる具「漁一」「振一」〇あみす　よつで網にて魚を捕る。漢書、陳勝傳「置二人所レ一魚腹中一」

【罾笱】ソウコウ　よつであみと、うへと。韓子「絢網罟一一之智」

十三畫

【羂】ケン　銑

〇わな（係蹄）繩又は網などを張り獣類の脚に係けて捕らへるもの。〇わなに係け捕らへる、わなす。〇くくる（縊）

十四畫

【羆】ヒ　支

しぐま、大熊、毛は黄白色、多力なり、人に遇へば人の如くに立ちて之を攫むむ、俗に人熊といふ。詩、小雅「維熊維一」

【羃】ベキ　錫　羃（一一師十四畫）に同じ

〇おほふ。春渚紀聞「皆以青帛一之」おほひ（覆）〇ふきん、食物を蓋ふきれ「巾一」〇づきん（頭巾）「一羅」

【羅敷】ラフ　等しき數の相乘積。

【羅】㊀ラ 双リ 支 ㊁ラ 国

㊀あみ、とりあみ「雀ー」爾雅「鳥罟謂之ー」○あみす、あみにてとる。又、網にて取る如くすべて殘さず取る「網ー」○つらぬ。つらなる「ー列」「星ー」○かかる(罹)漢書、于定國傳「文法」者、于公所決、皆不「恨」○うすぎぬ、うすもの「輕ー」○絡び組む、絡び包む。○巨ー酒器「金巨ー」○新ーは國名、後ち朝鮮に并せらる。○運ーは亞細亞の國名。○ー馬ーは古の西洋の國名、今の伊太利の地。○隣國ーエンは鬼の王、えんま。㊁めぐる。＝邏。

【羅刹】ラセツ 梵語 Rākṣasa 羅叉娑・羅剎娑・羅刹娑・羅刹・列・陣・綿の訓は連（全部七畫）の條を見よ。

【羅衣】ライ うすぎぬの衣服。後漢書、邊韶傳「ー一領、組綾被粉」

【羅縠】ラコク うすぎぬのたれぎぬ。說苑「居則廣廈邃房、下ニー一來ニ清風ニ」

【羅幃】ライ うすぎぬのたれぎぬ。風俗通「ー一翠被還金香」＝羅帷。

【羅纓】ラエイ うすぎぬの冠のひも。樂府詩「何以結ニ恩情ニ美玉綴ニー一」

【羅漢】ラカン 梵語 Arhat 阿羅漢の略、十分に佛道を悟り得たる者。大慈法數、生諸阿ー一、準旨ニ無學ニ謂ニ其生死已盡無ニ法可ニ學ニ」

【羅漢松】ラカンまき（槙）常綠喬木、いぬまき。

【羅漢柏】ラカンあすはひのき、あすなろう、俗に檜葉といふ、常綠喬木、扁柏の類、建築又は器具の用材とす。

【羅紈】ラガンうすぎぬと、あやぎぬと。魏志、夏侯尚傳「皆得ニ服ニ綺錦ー一紈素之物ニ」＝羅綺。

【羅襟】ラキンうすぎぬのえり。白居易詩「ー一裏帶竹皮巾」

【羅裙】ラクンうすぎぬのもすそ。王昌齡詩「ー一王風細細生」

【羅漢劇】ラカンゲキ 支那劇の一種。

【羅綺】ラキ 美服を著る者は、必ず粗服を著る時あり、榮華の永くつづかざるにいふ、劇は實に淮南子「有ニ榮華一者必有ニ憔悴ニ」

【羅苦】ラコ あみ。杜甫詩「豈無ニ濟時策ニ、終竟畏ニー一」注律に喩ふ。

【羅紗】ラシャ うすぎぬ、ろ（絽）紗晉書、石崇傳「遂ニ踰ニ絳羅一被ニー一」

【羅傘】ラサン うすぎぬのかさ。貴耳集「中原貴ニ頂黃ー一」

【羅袖】ラシュウ うすぎぬのそで。喬知之、倡女行「昨宵綺帳迎ニ韓壽ニ今朝ー一引ニ潘郎ニ」

【羅針盤】ラシンバン じしゃく、磁石。＝羅經・羅經盤・羅盤盤。

【羅紗】ラシャ 毛織物の名、葡萄牙語の音譯。明史食貨「賜ニ大紅紵絲ー一ニ」

【羅裳】ラショウ うすぎぬのもすそ。晉子夜歌「ー一易ニ風塵ニ」

【羅雀】ラクジャク すずめをあみにてとる。唐書、張巡傳「睢陽食盡、至ニー一掘ニ鼠、煮ニ鎧弩ニ以食ニ之ニ」蘇軾詩「門前可ニー一、盛子須ニ屋卿ニ」

【羅取】ラシュ よみにて取る、轉じて人才をあつめ取るにもいふ。唐書、杜祐傳「ー一俊乂」

【羅織】ラシキ うすぎぬの短衣。史、滑稽傳「ー一褐、微聞ニ鄰澤ニ」

【羅綱】ラコウ 罪なき者を法網の中に入れて罪を織り成す。唐書、來俊臣傳「命ニ其黨ニ事、共爲ニー一ニ」

【羅居】ラキョ ならびつらなれるほし。李白詩「十月到ニ幽州ニ戈陵若ニー一ニ」

【羅列】ラレツ ○隱人を食ふといふ、黑牙綠眼赤髮の惡鬼の名。觀佛經「獄卒ー一手提ニ鐵叉ニ遶ニ刺其眼ニ」○清の聖祖の初、黑龍江を攻撃する民族を稱す、即ち今の露西亞人なり。

【羅扇】ラセン うすぎぬのうちわ。異苑「江南李後主、得於ニ黃ー一上書賜ニ宮人處奴ニ」

【羅池】ラチ 今の廣西省馬平縣の東に在り、池上に廟あり、唐の刺史柳宗元を祀る、韓愈にー一廟碑の文あり。

【羅致】ラチ 鳥をあみにて取る如く、招きて來たらしむ。韓愈、送ニ溫處士ニ序「以ニ禮爲ニ羅、誠意爲ニ羅下ニ」

【羅峙】ラジ つらなりそばだつ。陳琳文「百將ー一、千部列陣」＝列峙。

【羅陳】ラチン つらなりならぶ。韓愈詩「光芒相照耀、南北爭ー一」＝羅列。

【羅幀】ラテイ うすぎぬのとばり。庾信、蕩子賦「秋窗獨掩、ー一長垂」

【羅緞】ラダイ ならびつらなる。荊州圖記「ー一相望」

【羅漿】ラショウ 佛十たび息する時間。法苑珠林「六十剎那爲ニ一息、十息爲ニ一ー一ニ」

【羅拜】ラハイ つらなりかこみてをがむ。漢書、酈生傳「沛公ー一、道去」

【羅幕】ラバク うすぎぬのまく。陸機詩「蓬宇列ニ綺窓ニ、蘭室接ニー一ニ」

【羅布】ラフ つらなりしく。晉書、周處傳「道ニ路通ニー一ニ江河ニ」＝羅敷。

【羅浮】ラフ 廣東省增城縣にある山の名、晉の葛洪が仙術を修めたる所にて梅の名所。元和志「山之四、有ニ浮山ニ、蓋羅浮之一阜、浮ニ海而至ニ與ニ羅山ニ並ル臨ニ敖口ニー一ニ」

【羅浮少女】ラフショウジョ 趙師雄が羅浮山の梅林に遊びし時梅の精なる少女にあひし故事（柳宗元、龍城錄）＝羅浮仙。

【羅敷】ラフ ○古の美人の名、趙の邯鄲の女、王仁の妻となる、趙王、其の操を奪はんとせし時、箏を彈じて其の夫あることを明かにして之を拒む、其の詞に曰ふ「使君自有

レ婦、―自有レ夫、東方千餘騎、夫壻居二上頭一、（古今注）○羅布に同じ。

【羅舞】ラブ つらなりまふ。古郊祀歌「千童―成二八溢一」

【羅文】ラブン ○うすぎぬのあや。李嶠玉階「流水―海燕同」‖羅紋。○現の異名。蘇軾に萬石君―傳あり。

【羅紋】ラモン うすぎぬのたもと。李嶠春賦「玉趾景照、―風飄」

【羅襦】ラジュ うすぎぬのたび。曹植、洛神賦「凌レ波微歩、―生レ塵」

【羅網】ラマウ ○とりあみ。禮、月令「置二罘―一」‖羅罔。○佛前莊嚴の具。法華經「眞珠―、張二設於其上一」

【羅紋】ラモン うすぎぬのあや。北史、流求傳「男子用二鳥羽一爲レ冠、裝以二珠貝一、飾以二赤毛一、婦人以二―一白布一爲レ帽、其形方正」‖羅文。

【羅絡】ララク くるめこむ。李白詩「―四季開、綿微無二一隙一」

【羅立】ラリツ つらなりたつ。杜甫詩「諸峯―似二兒孫一」

【羅綾】ラリョウ うすぎぬと、あや絹と。玉海「河北則―紬紗風靡華靡」

【羅列】ラレツ ならびつらなる。韓愈文「―而進」‖陳列。

十七畫

【羈】キ　支　羈は俗字

○たび、たびずまひ（旅寓）○たびびと（旅客）「孤―」左、昭十三「爲―終身」

【羈寓】キグウ たびのやどり。‖旅寓。

【羈愁】キシウ たびのうさ。陳子良詩「故鄉千里外、何以慰二―一」‖客愁・旅愁。

【羈滯】キタイ 旅にいてとどこほる。權德輿文「族閥―二于江南一者衆」

【羈魂】キコン 旅中のからだ。盧仝詩「海月護二―一、到レ曉點二孤光一」

【羈旅】キリョ たびする、たびずまひ。たびずまひする。又、其の人。周禮「野鄙之委積、以待二―一」‖旅客。

【羈旅之臣】キリョノシン 寄寓して客分たるけらい。左、莊二二「齊侯使二敬仲爲レ卿、辭曰、――（中略）免二於罪戾一、弛二於負擔一、君之惠也」

十九畫

【羈】キ　支　羈は俗字

○きづな、馬のおもがい（馬絡頭）○つなぐ、束縛する「繫―」ひく（牽）牽制して自由にさせぬ、ほだす（絆）とりしまる、檢束する「不―」「牽―」○あしてまとひ（繫累）○もとどり（髻）○たび、たびびと。‖羈（前條）

【羈紲】キセツ むながい。ほだし。白居易詩「山林少二―一、世路多二艱阻一」

【羈役】キエキ 束縛せられてえだちに就く。陶潛詩「遙遙從二―一」

【羈客】キカク たびびと。溫庭筠詩「自憐―一尙飄蓬」‖旅客。

【羈繫】キケイ つなぐ、きづな。貫奎詩「遭來閹身落二―一」‖繫縛。

【羈檢】キケン しめくくる、しめくくり。北史、劉弘傳「少好レ學有二―一」

【羈束】キソク つなぎひく。後漢書、申屠蟠傳「彼豈樂二―一哉」‖束縛・拘牽。

【羈孤】キコ ひとりたび、又ひとりつながれる。杜甫詩「骨肉滿レ眼身―」

【羈梏】キコク 縛りてがせをはめる、身を束縛する譬とす。蘇軾詩「愉然脫二―一」

【羈恨】キコン たびのものおもひ。孫萬壽詩「―雖レ多レ緒、俱是一相情」‖旅恨・客恨。

【羈魂】キコン たびのこころ。戴叔倫詩「―愁似レ絕、不二復待二猿吟一」‖客心。

【羈鎖】キサ ほだしつながれる。白居易詩「上無二脅戈窓一下無二―一牽一」

【羈思】キシ たびのかなしみ。謝靈運詩「念君客遊―一益」‖羈愁・旅思・客心。

【羈絏】キセツ つなぐ、きづな。左、僖二四「臣負二―一、從レ君遷二於天下一」繩は維、たづな、君の馬の口を執る義にて臣事するといふ譬辭。

【負二羈絏一】キセツヲ 君の爲めに賤役を執る義、羈は馬のきづな繩（一に繩に作る）はたづな。前條參看。

【羈束】キソク しばる、つなぐ。後漢書、張升傳「任レ情不レ羈」注「不レ羈、謂レ超二絕等倫一、不レ可二―一也」‖羈絆・束縛・拘束。

【羈枕】キシン たびまくら、たびね。陸游詩「―不レ成レ寐、蕭騷聽出レ城」‖客枕・旅枕。

【羈鳥戀二舊林一】キチョウキュウリンヲ 旅人が故郷を思ふ心に喩ふ。陶潛詩「――、池魚思二故淵一」

【執二羈靮一】キシツキヲ 賤役に從ふ義、靮は馬轡ナリ 檀弓「如皆守二社稷一、則執二――一而從」

【羈泊】キハク 舟にてたびやどりする。‖旅泊。

【羈旅】キリョ つなぎしばる。公羊誼「雖レ犬遺二――一妻孥厭二苦辛一」

【羈絆】キハン つなにてつなぐ、きづな。魏志、夏侯玄傳「分レ卿蓋レ界、各守二土境一、則非二束縛一―之謂一也」

【羈縻】キビ つなぐ、束縛する、縻は牛の綱ナリ 漢書、司馬相如傳「天子之於二夜郎一也、其義一―勿レ絕而已」

【羈旅之臣】キリョノシン 他國より寄寓して臣たるもの。‖羈・羈遁ず。戰國策「臣――也」

【羈縻】キビ ほだし。柳宗元、憲宗賦「際二窮冬一而止居守、一―券以結繩」

【羈勒】キロク ほだし、束縛する。謝靈運詩「單民易二周章一、豈レ身就二――一」‖羈絆。

羊部

【羊】ヤウ　隷　羋は本字

○ひつじ、家畜の一、綿羊と山羊の二種あり、性温順にして白又は黒の長毛あり、毛は織物の原料とす。曲禮「―曰柔毛」「山―」「白―」「羖―」○祥に通ず「相―」○吉祥の祥の古字「吉―」

【羊羹】カウ　○羊のあつもの。戰國、中山策「中山君烹都士大夫以司馬子期在坐、―不レ及、司馬子期、怒而走レ於楚」○圓シンの菓子の名。

【羊毫】カウ　ひつじの毛の筆。

【羊角】カク　○ひつじのつの。轉じて、其のぐるぐる曲れる如くに吹く風、つむじかぜ。莊、逍遙遊「摶二扶搖一――而上者九萬里」‖旋風。○張ケの異名。梁簡文帝詩「風搖―樹」

【羊裘】キウ　羊のかはごろも。後漢書、嚴光傳「嚴光字子陵、少與二光武一同遊、及レ帝即レ位、光隱レ身不レ見、帝令二以物色訪一レ之、後齊國有二一男子一、披二―一釣二澤中一、帝疑レ光、使レ禮聘レ之」

【羊舌】シツ　字は叔子、羊の孫、晉に仕へ、累遷して尚書左僕射都督荊州諸軍事となる、遠邇悦服す、吳の陸抗と對壘し、務めて徳を修め以て吳人を懐ケく、抗嘗てその徳量を稱して樂毅・諸葛亮と雖も過ぐる能はずと爲す、卒して太傅を贈らる。

【羊很】コン　ひつじの如くもとる。吳惟善詩「狠貪――經二前聞一」史、項羽紀「很如レ羊貪如レ狼」に本づく。

【羊棲】サウ　ひつじを整ぐねだ。劉禹錫詩「――雜塒接」

【羊豕】シ　ひつじと、ぶたと。儀禮、少牢饋食禮、注「――日二少牢一」

【羊齒】シ　しだ（羊歯）有毛の地下莖より羽狀複葉を出し、葉面に胞子を生ず。爾雅、注「草細葉、葉縁生而毛、似二――一、今江東呼爲二雨露一」

【羊質虎皮】ヒ　外面は美なれども、内、其の實なきに喩ふ、見かけだおし。後漢書、劉表傳論「――、見レ射則恐」

【羊車】シヤ　○宮中に用ふる、美くしく飾れる小車。釋名「――、羊祥也、祥、善也、善飾之車、今謂車是也」晉書、輿服志「――一名羊車」○羊にひかす車。晉書、武帝紀「乘二――一遊二於宮内一、宮人乃取二竹葉一插レ戸、鹽汁灑レ地、以引二帝車一、蓋竹葉鹽汁、皆爲二羊所一レ喜食一也」

【羊棗】ソウ　なつめ。孟、盡心「曾皙嗜二――一、而曾子不レ忍レ食二――一」‖棗

【羊酒】シユ　ひつじの肉と、さけと。史、鄒陽傳「高組廣綰同日生、里中持二一―一、貿二兩家一」

【羊桃】タウ　鹿角菜の異名。

【羊腸】チヤウ　羊のはらわたの如く山路の曲りてけはしきをいふ、つづらをり。又其のけはしき山路の名。史、蔡澤傳「決二――之險一、塞二太行之道一」

【羊頭】トウ　賣二馬肉一　よき品を看板に出してあしき品を賣る。馬一に狗に作る【無門關】

【羊頭狗肉】クニク　羊の頭を看板にかけて狗の肉を賣る、もと狗を馬に作る。前條參看。

【羊脚】キヤク　ひつじと、ぶたと。後漢書、仲長統傳「對二猪牧一――、盜跖主二征稅一」

【羊肉】ニク　ひつじの肉。莊、徐無鬼「――不レ慕レ蟻、蟻慕二羊肉一」

【羊膜】マク　有胎盤類に屬する哺乳類の胎兒を包む膜。‖胎膜。

【羊酪】ラク　ひつじのちち。世説「王武子前置二數斛一――」

【使羊將狼】シヤウラウ　弱者をして強者を率ゐしむるに喩ふ。史、圓嶠世家「令二太子將一レ此屬一、無レ異レ使レ羊將レ狼」

【以羊易牛】エキギウ　小を以て大に代用するをいふ。梁惠王、或時鐘に釁らんが爲め、時に牛の殺されんとするを見て、これを憫み、羊を以て牛に代へよと命じたる故事（孟、梁惠王）

【羋】ビ　一畫　姓

○羊が鳴く。○姓、楚の祖先の姓。

【羌】キヤウ　二畫　隷　羗は俗字

①えびす、支那の西方の野蠻人種の稱。後漢書、西羌傳「西―之本、出二自三苗一、姜姓之別也」○あゝ、歎息の辭（楚國の方言）

【羹】カウ　三畫　有　又、羔・羔に作る

○みち（道）○すすむ、善に進む。○みちびく（誘）○―里は殷の紂王が周の文王を拘せし地名、今の河南省湯陰縣の北、九里（支那里）に故址あり。

【羌】　羌（前條）に同じ。

【美】　ビ　ミ　㊎　羌は俗字

○うつくし、うるはし、よし（善）みめよし、外觀の善きなり。醜、又、惡の反對。○うまし（甘）「甘ー」○みごと、立派。○よみす（嘉）ほめる（褒）「贊ー」「褒ー」「淫ー」詩、召南、甘棠序「甘棠ー召伯也」○よきこと。よきもの「濟ー」「醇ー」○美くしくする、善くする。普語「彼將惡始而ー終」○國名、美利堅合衆國の略。‖米國。

同訓異義　美・善・好・佳・嘉・都・良・臧・吉・淑の別は善（口部九畫）の條を見よ。

【美惡】ビアク　○よきと、あしきと。禮記「ー皆在二其心一」‖善惡。○うるはしきと、みにくきと。‖美醜。

【美夫】ビフ　うるはしき貌。夫は助字。孟、盡心「道則高矣ー」

【美育】ビイク　美の趣味を養成する教育（知育・德育・體育等の對）

【美藥】ビヤク　うるはしくきかゆ。易林「啓蟄始生、萬物ー」

【美音】ビオン　うるはしくよき聲。‖美聲。

【美好】ビカウ　うるはしくみめよし。論衡「妖氣生ニー一一、故ー一之人多二邪惡一」

【美號】ビガウ　よき名稱。禮記、疏「謂者列二生平善行一而爲二作ー一」

【美學】ビガク　美醜の原理法則を研究する科學。‖審美學。

【美姬】ビキ　うつくしき女。史、項羽紀「貪二於財貨一、好二ー一」

【美裝】ビサウ　うつくしき皮ごろも。公羊傳「梁昭公朝二乎楚一、有二ー一一裘、襄瓦求レ之、昭公不レ與」

【美玉】ビギョク　うまきせり。杜甫詩「ー一由來知二野人一」‖臨岸參看。

【美金】ビキン　よきかね。國語「ー一以鑄二鉏夷一、以鑄二鋤狂一」

【美錦】ビキン　美くしきにしき。左傳「子有二ー一一、不レ使二人學一レ製焉」

【美瘡】ビサウ　○うつくしきひびき。列子「言美則聽美、言惡則聽惡」○よきこえ。胡宗仁詩「黃鳥弄二ー一一、日暗二樓閒樹一」

【美聽】ビチヤウ　惑心すべき行爲。

【美玉】ビギョク　うるはしきたま。論、子罕「有レー一一於斯」

【美化】ビクワ　○うつくしきならはし。周史、宋武帝紀「淳風ー一、盈二塞區宇一」○國美に理想化する。

【美瓜】ビクワ　うるはしきうり。後漢書、郡國志「瓜州生ニー一一」

【美花】ビクワ　うつくしきはな。杜甫詩「ー一多映レ竹、好鳥不レ離レ山」

【美官】ビクワン　高き官職。詩話總龜「誘以ニー一一、蘇洋笑曰、官自美也、庠亦自美也」

【美觀】ビクワン　うつくしきみもの。謝靈運文「臨二窻目之ー一一」

【美如二冠玉一】ビジョカンギョク　外部は美なれども其の實は取るに足らざる喩。又本のみにて總なき喩。史、陳平世家「平狀二美丈夫一、如二冠玉一耳、其中未二必有一也」

【美形】ビケイ　○うつくしきすがた（世說、容止）‖美容・美貌。○國美女の稱。

【美景】ビケイ　よきけしき。陳書、孫瑒傳「每二良辰一ー一、賞二愛竝集一」

【美言】ビゲン　○ためになるよきことば。揚子「良玉不レ彫、ー一不レ文」‖嘉言。○かざりたることば。老子「信言不レ美、ー一不レ信」

【美彥】ビゲン　すぐれたる士。北史、崔宏傳「良族ー一、不レ得レ尚二寒」‖英彥。

【美國】ビコク　阿亞米利加をいふ。‖國米國。

【美才】ビサイ　すぐれてうるはしきはたらき。又、其の人。唐書、文藝傳序「大曆正元間、ー一盟出」

【美哉】ビヤルカナ　晏子春秋「ー一水乎清清」

【美草】ビサウ　うつくしきくさ。易林「鹿得ニー一一、鳴呼二其友一」

【美莊】ビサウ　美くしきしもやしき。士を得るに喩ふ。獨異志「崔慕知二貢舉一、夫人李氏常勸レ樹二莊田一、慕曰、子有三十所ー一、前歲放二春榜三十人一、設非二良田一耶」

【美裝】ビサウ　うつくしきよそほひ。

【美刺】ビシ　ほめると、そしると。謝靈運文「鑑章以陳ニー一一」‖毀譽・褒貶。

【美事】ビジ　美くしき事がら。隋書、劉炫傳「嘉言ー一、成誦於心」

【美辭學】ビジガク　國法則に從ひて言語を正しく且つ美くしく使ふことを研究する學問。‖修辭學。

【美質】ビシツ　よきうまれつき。漢書、張山拊傳「中有二預子之ー一一」韓詩外傳「雖レ有ニー一一、不レ學則不レ成二君子一」

【美人】ビジン　○美くしき女。宋玉、九歌「滿堂兮ー一、忽獨與レ余兮目成」○君主、又賢人をいふ。詩、鄭風「云誰之思、西方ー一」○女官の稱。史、平原君傳「ー一居二樓上一」

【美人局】ビジンつつもたせ（通俗語）

【美人草】ビジンさう　ひなげし、罌粟の別に似て小さく莖葉に毛茸を被生す。‖虞美人草。

【美人蕉】ビジンせう　かめにやを。謝少南詩「樹梁線垂君子珮、崔林紅破——」

【美狀】ビジャウ　うるはしきすがた。方言「秦晉之間、美貌謂二之媄一ー一、或レ自二關而東一謂レ之窈一」

【美色】ビショク　よきしらせ、吉兆に同じ。

【美詩】ビシ　春秋繁露「帝王之將レ興也、其ー一亦先見」

【美遊】ビユウ　高きくらゐ。唐書、蕭至忠傳「宰相要官、子弟多居ニ―一、故ニ子孫ニ」

【美珠】ビシュ　うるはしきたま。淮南子「白玉不レ琢、――不レ文」

【美酒】ビシュ　うまきさけ。北史、盧元明傳「元顯二雖レ驕二飲ニ―一、自爲ニ佳器ニ」（頌一に誦に作る）

【美趣】ビシュ　よきおもむき。諸葛亮文「雖レ有ニ淹留一、何損ニ予ニ―ニ」

【美酒】ビシュ　うつくしきくちひげ。北斉書、許惇傳「惇ニ―長ニ下垂至レ帯」

【美術】ビジュツ　美をあらはすを目的とする技術。建築・彫刻・繪畫・音樂・文學等の純粋、又は之に應用・附加をいふ。

【美稱】ビショウ　○よきとなへ。後漢傳「父猶レ傳也、男子之ニ―一也」○よきほまれ。晉書、王浚傳「俱有ニ―ニ―」

【美色】ビショク　○美くしきいろ。晉書、阮籍傳「鄰家少婦有ニ―一、當レ壚沽レ酒」○美くしきいろ。錢起詩「幽石生ニ芙蓉一百花艶ニ―一」

【美食】ビショク　うまきもの。傳成文「無ニ敢好衣ニ―一者ニ」↔美味。

【美飾】ビショク　うつくしきかざり。後漢、衣服志「志好ニ―一、帛必海細、衣必輕婗」

【美睡】ビスイ　こころよく眠る。續仙傳「夏侯隱登レ山渡レ水、亦閉レ目ニ―一、同行聞ニ其鼾聲一而不ニ驚覺一人稱ニ睡仙ニ」

【美政】ビセイ　うるはしきまつりごと。書、堯典、疏「堯之聖德ニ―一、不ニ必處理一必須ニ賢輔ニ」

【美盛】ビセイ　うるはしくさかんなり。蜀仲舒、賢良策對「上下和睦、習俗一、不レ令而行、不レ禁而止」

【美妾】ビセフ　美くしきめかけ。後漢傳、伸長統傳「妖童ニ―一、妙ニ于絃管ニ」

【美稽】ビセイ　うるはしく色が白くしてきめよし。

【美女】ビジョ　美くしきをんな。史、外戚世家「詩曰、――入レ室、悪女之仇」

【美田】ビデン　美くしく肥えたる田地。漢田の訓。蘇氏用術ニ―一、欲レ稱ニ馬田ニ」

【美味】ビミ　圓よきところ。長所。

【美酒】ビシュ　よき酒。漢書、敍傳「嘉ニ其ニ―一」

【美面目】ビメンモク　うるはしくしてあでやか。左、桓元年「目逆而送レ之曰、――」

【美芳】ビホウ　うつくしくかぐはし。淡書、嵇康志「――曜曜仲卿」

【美貌】ビボウ　うつくしきかたち。宋玉、神女賦「須臾之間、――橫生」↔美容・美形。

【美容】ビヨウ　美くしき容玉。顔氏家訓「和氏之璞、天下之ニ―一也」

【美髯】ビゼン　うつくしきかみ。後漢書、明徳馬皇后紀「方口ニ―一、能誦レ易、好讀ニ春秋ニ」

【美眄】ビベン　美くしく目を動かす。嬾記「見ニ其ニ―一、巧笑ニ―ニ」

【美目盼兮】ビモクベンケイ　美目盼兮を見よ。

【美風】ビフウ　よきならはし。宋玉賦「――洋洋而輻湊」

【美質】ビシツ　うるはしくゆたか。陸賈、財元傳「至行通ニ于神明一、仁風ニ―一」

【美服】ビフク　うつくしきもの。列、楊朱「豐屋ニ―一厚味蚊色」

【美物】ビブツ　うるはしきもの。禮記「三牲之俎、八簋之實、一ニ―一備矣」

【美文】ビブン　語句をかざりし文章。

【美聞】ビブン　感ずべきうはさ。↔美誉。

【美毛】ビモウ　うるはしきけ。禮記「山龍有ニ―一、白受ニ其色ニ」

【美滿】ビマン　こころよく足る。杜牧詩「千帆ニ―一風」↔快足。

【美味】ビミ　よきあぢはひ。後漢文帝、七勅「神明嗜ニ之ニ―一」

【美名】ビメイ　よきほまれ。杜甫詩「――人不レ及」↔美譽。

【美妙】ビミョウ　うつくしくたへなり。人物志「――不ニ眛神ニ」

【美茂】ビモ　うるはしくすぐれる。晉瑾文「經學治博、才章ニ―一」

【美目盼兮】ビモクベンケイ　眼の黒白わかれて美くしく明かなる形容。詩、衛風「巧笑倩兮、――」

【美譽】ビヨ　よきほまれ。晉書、帝紀「沈毅多ニ大略一、少流ニ―一」↔美稱。

【美容】ビヨウ　美くしきすがた。楚辭、九章「蹤レ跡有二西施之一一兮、讒妬入以自代」＝美貌。

【美樂】ビラク　このみたのしむ。詩、序、疏「樂、樂也、爲二天下所一一一」

【美利】ビリ　大いなる利益。易經、乾始能以二一一一利二天下一」杜甫詩「一一戒二止足一」

【美麗】ビレイ　うつくしくうるはし。戰國、齊策「城北徐公、齊國之一一者也」

【美酒】ビシュ　○酒の異名。漢書、食貨志「酒者天之一一、所三以厭二養天下一」○厚き俸祿。南史、孔奐傳「太守身居二一一一、何爲不レ能レ辦」＝美秩。

四畫

【羔】カウ　羔

こひつじ(小羊)「一羊」論、鄉黨「緇衣二一裘」

【羔羊】カウヤウ　詩經、召南の篇名、卿大夫退食自公の行あり、進退の度數あるに喩ふ。後世以て賢士大夫を稱美するの辭と爲す。後漢書、王渙傳「乘二清修之節一、蹈二一一之義一」

【羌】キヤウ　羌(羊部二畫)の俗字。

【羝】テイ　羝

○めひつじ(牡羊)黒色の牝羊。○五―大夫は秦の繆公の相、百里奚の異稱。

五畫

【羭】ユ　羭(月部六畫)に同じ。

【羞】シウ　尤

○すすむ(進獻)食物をすすめ供へる。○ごちそう、供へ進める滋味ある食物。さかな「膳―」「庶―」「珍―」○はづ、はぢらふ。はぢ(恥)論、子路「或承之以―」

同訓異義　羞・進・晉・薦・爲・奉・勸・獻の別は進(走部八畫)の條を見よ。

○羞・恥・辱・忝・愧・媿・慙・怍・怩・恧・慙等の別は恥(心部六畫)の條を見よ。

【羞惡之心】シウヲノ　己の不善をはぢ、人の不善をにくむ心、正義の觀念。孟、公孫丑「惻隱之心、仁之端也、―、義之端也」

【羞愧】シウキ　羞恥に同じ。愧もはぢ。後漢書、淮陽王傳「悟罪一一流レ汗」

【羞悔】シウクヮイ　はぢくやむ。王安石詩「童子常誇作レ馭工、暮年一一有二揚雄一」

【羞花閉月】シウクワヘイゲツ　花もはぢらひ月もかくれる、美人の形容。

【羞赧】シウタン　羞赧に同じ。淮成大詩「斷腸寒食二一一」

【羞恨】シウコン　はぢうらむ。王筠詩「詎忍開二朝鏡一一一掩二空扉一」

【羞作】シウサク　はづ、はぢらふ。蘇軾詩「貴人一見定一一」

【羞澀】シウジフ　己の不善をはぢる。○羞愧・慙羞。

【羞澀】シウジフ　はづかしくして活氣無し。杜甫詩「美空恐一一、畱二得一錢一看」

【羞膳】シウゼン　すすめ供するうまき物。北史、魏文明后傳「一一滋味」＝膳羞。

【羞赧】シウタン　はぢて顏をあかくする。孫綽「感君不二一一」

【羞恥】シウチ　はぢ、はぢる。歐陽修、與二高司諫一書「是足下不二復知一入門有二一一事郤」＝羞愧。

【羞明】シウメイ　病名。視神經が衰弱して、強き光の刺激を畏れ、喜ふみて暗處に居るもの。

【羞怨レ恥】シウヲンヲチ　はづかしめをこらへる。杜牧詩「勝敗兵家不レ可レ期、――是男兒」

【羝】チヨ　魚　羝

こひつじ。生れて五ヶ月を經たる小羊。詩、小雅「既有二肥一」」

【羝】テイ　羝

をひつじ(牡羊)

【羝乳】テイニウ　をひつじが子を生む。決してあるまじきことに喩ふ。漢書、蘇武傳「匈奴徙二武北海上無レ人處一、使レ牧、―乃得レ歸」(乳は兒を生む)

【羝羊】テイヤウ　をひつじ。詩、大雅、縣「一一、觸レ藩」

【羝羊觸レ藩】テイヤウショクハン　牡羊は兩肚にして物に觸るゝを喜ぶ、然れども藩に觸れて進む能はず、以て勞無はやりて猛進する者は卻りて失敗して進退これ谷まるに至るに喩ふ。易、大壯――不レ能レ退、不レ能レ遂」(遂は進)

【羚】レイ　リヤウ　青

かもしか、深山に棲む大いなる角ある羊、角を藥用とす。

【羚羊】レイヤウ　かもしか。埤雅「一一似レ羊而大角、有二回繞歷文一、夜則懸二角木上一、以防レ患」

六畫

【羭】イ　シ　支　紙

○去勢せる牡ひつじ。○大角あるめひつじ。

【羹】イ　支　羨とは別

沙―は漢の江夏郡の縣名、今の湖北省に屬す。

【羞】 羞（艸部九畫）の俗字。

七畫

【義】ギ 𦍌 或は誼に作る

○正しきすぢみち、のり（法）五常の一「仁―禮智信」○君臣の間の道徳、五倫の一。中庸「君臣有―」○むね、わけ（意旨）「意―」「解―」「理―」「―疏」「經―」○よし（善）ただし（正）よろし（宜）事物を裁制して各宜しからしめる。○行事の正しき理に適すること「―戰」「―師」○善行の人に過ぐれること「―士」「―俠」○君國、又は公共の爲めにする心がけ。又、其の人「―人」「―民」「―倉」「―學」○みさを（節）「節―」○衆のたふとび戴くこと。○血緣なくして恩情を以て結ぶ假の親類「―父」「―兄」○轉じて本來の實物と緣の無きものにして實物の用をなすもの「―足」「―齒」○儀に通ず。○國名、義大利の略。‖意大利伊太利。

【義拳】ギケン 德行の如く自身より出づるさかえ。勢榮の對。

【義捐】ギエン 義の爲めにする寄附。

【義氣】ギキ 正しき義理を失ふ。老子「失レ仁而後義、―レ而後禮」

【好レ義】コウヲギス 正しき義理をこのむ。大學「未レ有二上好レ仁、而下不レ―レ者一也」‖嗜レ義。

【嗜レ義】シギス 正しき義理を好む。中說「我未レ見二―レ如レ嗜レ利者一也」

【勇レ義】ユウヲギス 人に先だちて義をとなへる。後漢書、李通傳「布衣―レ、助二成大業一」

【後レ義】ゴヲギス 仁義の道をあとまはしにする。孟、梁惠王「苟爲二―レ而先レ利、不レ奪不レ饜」

【履レ義】リヲギス 正しき道をふみ行ふ。後漢書、任延傳「龍丘先生、躬履―レ、有二原憲伯夷之節一」

【守レ義】シュヲマモル 正しき道をまもる。後漢書、鄭興傳「數言二政事一、依レ經―レ、文章溫雅」

【見レ義不レ爲無レ勇也】ケンギヲミテセザルハユウナキナリ 正義を見て之を行はざるは勇氣なきに由る、孔子の語（論、爲政）

【以レ義制レ事】ギヲモッテコトヲセイス 義によりて事の宜しきをきりもりする。晉、仲應之語「―、以レ禮制レ心」

【義解】ギカイ 義疏に同じ。宋史、王秀傳「作二老子訓傳及佛書―一」‖解義。

【義學】ギガク ○義塾に同じ。○國法を修める爲めを主とせずして、只學問として佛教を研究する。

【義甲】ギカフ 琴のつめ（丹鉛錄）

【義眼】ギガン いれめ。

【義氣】ギキ 忠義の意氣。江淹文「刺史張敏――雲騰」

【義旗】ギキ 正義の爲めのはたあげ。晉書、溫嶠傳「公著逸レ衆獨反、人心必混、――將三翹指二於公一矣」‖義兵・義師。

【義擧】ギキョ 正義の爲めに事をあげる。又、其の事。溫子昇文「遭逢際會、頗參二―一」

【義軍】ギグン 正義の爲めにあぐるいくさ。‖義兵。

【義兄弟】ギケイテイ 義理のきうだい。

【義俠】ギケウ 正義の爲めに強者を抑へ、弱者を助けるをとこぎ。容齋隨筆「行遍レ人曰レ義、義士―義姑義夫義婦之類是也」‖游俠。

【義故】ギコ かつて恩義をかけたる緣故ある者。宋書、謝靈運傳「―門生數百」

【義倉】ギサウ 凶年の爲めに備へる米倉。唐會要「開成四年、詔曰、―防二水旱一」

【義莊】ギサウ 親戚を救ふ爲めに設ける莊。宋史、范仲淹傳「置二―一里中一、贍二族人一」‖義田。

【義士】ギシ 正義を守ることの極めて篤き人。左、桓二「武王克レ商、擧二九鼎一于洛邑一、―猶或非レ之」

【義子】ギシ やしなひご、養子。‖假子。

【義師】ギシ 正義の爲めに起す兵。義擧

詩「海內無二―一、共欲レ討二不祥一」‖義兵。

【義商】ギシャウ いれば。

【義姉妹】ギシマイ 義理の女きうだい。

【義人】ギジン 極めて義に篤き人。史、伯夷傳「太公曰、此―也」‖義士。

【義人錄】ギジンロク 二卷、赤穗――の咯、室鳩巢著。赤穗四十七義士の復讐の顚末を漢文にて記す。

【義衆】ギシュウ 人に施すのみもの。搜神記「楊公雍伯、雒陽縣人也、父母亡、罪二無終山一、遂家焉、山高八十里、上無レ水、公汲レ水作二―一於坂頭一、行者皆飮レ之」

【義手】ギシュ 木又はごむにて作りたる假の手。

【義趣】ギシュ ことのわけ。春秋序疏「文辭約少、則二―一微略」‖意義。

【義務】ギム 公衆の爲めに立てたる塾舍の輪耕錄「掘二―一、以淑二後進一」‖義學。

【義政】ギセイ 正しき義にかなふまつりごと。墨子「順二天意一者―也」

【義絕】ギゼツ なかたがひ、義理の爲めに緣故を絕つ。

【義戰】ギセン 正義の爲めに起すいくさ。孟、盡心「春秋無二―一、彼善二於此一則有レ之矣」

【義疏】ギソ 文意のときあかし。經義の疏解。隋書、經籍志「周易―十九卷、宋明帝集二羣臣一講」

【義足】ギソク 木又はごむにて作りたる

假の足。

【義嗜】ギシ　正義のこころ。楊奐文「一一披露、上心亦同」

【義女】ギジョ　養女。閑情寓奇「收爲二一一」

【義家】ギカ　むえんづか（宋史、理宗紀）＝義塚。

【義田】ギデン　親戚の貧者を救濟する爲めの田地。錢公輔文「范文正公方二貴顯時、置二負郭常稔之田千畝一、號曰二一一一、以養二濟軍族之人一」＝義莊。

【義徒】ギト　正義の爲めに起る兵。南史、宋紀「集二一一凡三十七人一、願レ從者百餘人」＝義兵。

【倍レ義】バイニギヲ　正しき道にそむく。倍は背。史、淮陰侯傳「食二人之食一者、死二人之事一、吾豈可二以鄕レ利一ヒ一乎」

【杖レ義】ヂヤウギ　正しき道によりて行ふ。陸賈、新語「伏レ仁者顯、一レ一者彊」＝依義。

【依レ義】エギ　前條に同じ。後漢書、賈逵傳「人臣ノ一一願レ君、歸レ忠彰レ主、行之美也」

【義方】ギハウ　義を以て方正ならしむる義にて、父の子に敎訓するをいふ。左、隱二「愛レ子敎レ之以二一一一、弗レ納二於邪一」

【義父】ギフ　かりのちち、義理ある父。洛陽伽藍記「汝南王聞而異レ之、拜爲二一一一」＝養父・契父・假父。

【義賃】ギチン　正義の爲めのいきどほり。後漢書、逸民傳、漢室中微、士之蘊二一一一而奚」

【義兵】ギヘイ　○正義の爲めに起す兵。南史、始皇紀「興二一一一」○義勇兵の略語。

【義母】ギボ　養母。北夢瑣言「周氏既至、以二一一一奉レ之」

【義僕】ギボク　主人に忠義なるしもべ。

【義民】ギミン　理を重んずるたみ。書、多方「爾多方之一一」

【義務】ギム　○分に應じてなすべきつとめ。＝本務。○法律にて必ず果さざるべからざる責任。權利の對。

【義務敎育】ギムケウイク　國民として必ず受くべき敎育、小學校敎育をいふ。

【義勇】ユウ　○正義の心より出づる勇。李陵、答蘇武書「陵先將軍功略蓋二天地一、一一冠三軍一」○正義と勇氣と。○義勇兵。文獻通考「河北陝西有二一一一、諸州有二義軍一」＝義兵。

【義勇艦隊】ギユウカンタイ　平時は海運業に從ひ、戰時には武裝して軍務に服する商船の一團。

【義勇兵】ギユウヘイ　軍籍にあらざる者が志願してなりし兵士。

【義理】ギリ　○正しきすぢみち。北史、崔浩傳「研二精一一一、時人莫レ及」○團體の人に對するおつとめ「一一一人情」

【義例】ギレイ　書物の凡例、即ち書中の大體の說明。魏書、張吾貴傳「一一無レ窮、皆多二新異一」

【義烈】ギレツ　すぐれたる忠義。又、其の人。後漢書、獨行傳「以二一一一稱」魏志、臧洪傳「今王室將レ危、此誠天下一一、報レ恩效レ命之秋也」

【義和團】ギワダン　拳匪（七四七頁四段）の註名。

【羣】クン　グン　文　群は俗字

○むれ。むらがる、あつまる。○くみ（隊）ともがら（輩）とも（朋友）なかま。○あつまりやはらぐ、衆と和ぐ。論、衛靈公「一而不レ黨」○もろもろ、おほし（衆）○あつめる（會合）荀子「壹統類而一二天下之英傑一」○獸三をーと爲す。詩、小雅「戚一戚友」

【羣蛙】グンアヘイ　おほくのかはづ。陸游詩「多情幽草沿二牆綠、無賴一一襍レ舍鳴」

【羣有】グンイウ　多くの物、萬物。宋史、樂志「履二育一一」

【羣遊】グンイウ　むらがりあそぶ。古雉朝飛操「雉羣飛兮鳴相和、雌雄一二於山阿一」

【羣烏】グンウ　むらがれるからす。蘇軾詩「烏鵲自能知二夜旦一、一一未レ可レ辨二雌雄一」＝羣鵲。

【羣英】グンエイ　おほくのすぐれたるもの。後漢書、宦者傳論「乘二九服之會一、一一協二一一之勢力一」＝衆雄。

【拔レ羣】バツグンスル　衆にぬき出る。抜萃（七四二頁四段）を見よ。

【羣下】グンカ　多くの下のものども、多くの臣妾など。詩、小雅、吉日序疏「以二恩惠一接二及一一一」

【羣噪】グンサウ　羣口に同じ、噪は口ばし。

【羣行】グンカウ　衆とむらがりゆく。劉琨詩「大晉既寧開、一一何閒關」諸葛亮傳「木牛流馬法、騎行者數十里、一一者二十里」

【羣雄】グンユウ　羣英に同じ。

【羣學】グンガク　團社會學。

【羣季】グンキ　諸弟ども。李白、桃李園序「一一俊秀、皆爲二惠連一」（惠連は謝惠連）

【羣起】グンキ　むらがりおこる。

【羣議】グンギ　衆人のそしり。其奉詩「皆阿二一一一」

【羣說】グンセツ　多くの人の議論。唐書、裴度傳、贊「天子赫然排二一一、任二度畝事一」

【羣蟻附レ羶】グンギフセン　多くの蟻がなまぐさきものにつく。衆人の利に趨るに喩ふ。盧坦、與二李渤一書「今之人、奔二分寸之祿一、走二銖兩之利一、如二羣蟻之附二腥羶一、聚蠅之投中爐火上」

【羣疑衆謗】グンギシウバウ　衆人皆疑の心をいだく。諸葛亮、後出師表「一一、衆論紛レ胸」

【羣居】グンキョ　むらがり居る。禮記「一一五人、則長者必異レ席」

【羣兒】ケンジ　おほくの惡人。唐書、劉仁軌傳「一一所ノ聚、宜ニ先攻ニ之」

【羣花】グンクワ　おほくのはな。李白詩「一一散ニ芳園ニ、斗酒聞ニ離顏ニ」＝衆花・衆芳。

【羣經】グンケイ　多くの聖人の書。南史、沈峻傳「凡聖賢所ノ講之書、必以ニ周官ニ立ノ義、則周官一書、實爲ニ一一源本ニ」

【羣螢】グンケイ　多くのほたる。張秀明、迎秋獻「夜宿ニ螢窗ニ聚ニ一一而燭ノ卷」

【羣輕折ノ軸】グンケイサクジク　おほくの輕き物も集まれば車軸を折る、小力も合すれば大力となるに喩ふ。史、張儀傳「積羽沈ノ舟、——」

【羣撃】グンゲキ　多くのわるもの。撃は鬪。

【羣言】グンゲン　おほくの者のことば。十六國春秋「好ニ儒學ニ尤善ニ著述ニ、一一總要、無ノ不ニ綜覽ニ」

【羣彦】グンゲン　おほくのすぐれたるさむらひ。衆邑詩「清浩一一、如ノ雲如ノ龍」＝衆賢。

【羣賢】グンケン　多くの賢き人。王羲之、蘭亭集序「一一畢至」

【羣犬吠所ノ怪】グンケンバイショノカイ　人衆リ衆リて賢者の盲行の常人に異なるを怪み誇るに喩ふ。屈原、懷沙賦「邑犬羣吠兮、吠所ノ怪也」

【羣狐】コングン　おほくのきつね。南史、王儉惡傳「諂曰猛獸不ノ如ニ一一、躡等十餘人、何憚ニ儉惡ニ」

【羣口】グンコウ　多くの人のことば。＝衆口・衆喙。

【羣議】グンギ　むらがりさわぐ。宋史、鄭戩傳「兵民相扇動、數千人一ニ州門ニ守門者拒不ノ得ノ入」

【羣策羣力】グンサクグンリョク　衆人の智力を合する。揚子法言「淡扈ニ羣策ニ羣策扈ニ羣力ニ」

【羣山】グンザン　〇むらがれる山。〇ケン朝鮮の府の名、全羅南道に屬す。

【羣醜】グンシウ　〇羣類をいふ。易、漸卦「夫征不レ復、離ニ一一也」疏「醜、類也」〇多くの凶惡なる者。晉書、陶侃傳「無ニ征不ニ剋、一一破滅」

【羣盜處ニ禍中ニ】グンタウショカチュウニ　多くのしらみが、ふんどしの中に居る。俗人の苟安をぬすみて世に在るに喩ふ。晉書、阮籍傳「羣盜之處ニ禍中ニ、逃ニ乎深縫ニ、匿ニ乎窺室ニ、自以爲ニ吉兆ニ也」

【羣集】グンシフ　むらがりあつまる。增續韻府「有レ燕ニ一一」

【羣心】グンシン　おほくの人の心。後漢書、二十八將傳論「受任則ニ一一歸レ峯、論列則其餘未レ遠」＝衆心・羣情。

【羣神】グンシン　おほくのかみ。書經、望ニ于山川ニ徧ニ于一一」

【羣臣】グンシン　人君の死をいふ。史、樂毅傳「及レ至ニ一一之日、餘教朱レ衰」

【羣青】グンセイ　青色のあのく、天然に産し又人工にても造る。紺青よりやうすし。

【羣情】グンセイ　おほくの人の心。趙孟頫詩「厚澤敷ニ一一」

【羣翔】グンシャウ　むらがりとぶ。拾遺記、其國太平、則娘鵲一一」＝羣飛。

【羣聚】グンシュ　おほくのこども。又、多くの人をいやしめののしろ語。後漢書、袁術傳、術怒曰、一一不レ從レ吾、而從ニ吾家奴ニ乎」

【羣衆心理】グンシュウシンリ　羣衆中の一人の行爲が忽ち多數の人に傳播してそれと同一の行爲をなさしめる心理現象。

【羣書】グンショ　多くのしょもつ。＝羣籍。

【羣書類從】グンショルイジュウ　圖五百三十卷、塙保己一編、我が國古今の書冊を分類して合刻せしもの。

【羣萃】グンスイ　むらがりあつまる。又、其のなかま。陳檢文「擢自ニ一一、累歷ニ榮進ニ」

【羣生】グンセイ　おほくの民衆。漢書、宣帝紀「養ニ育一一ニ」

【羣小】グンセウ　〇おほくの小人。晉書、張重華傳「好與ニ一一遊戲、屢出ニ錢帛ニ以賜ニ左右ニ」〇おほくのめかけ。詩、邶風「憂心悄悄、慍ニ于一一ニ」

【羣雜】グンザツ　多くの雜物。晉書、阮籍傳「博覽ニ一一、尤好ニ莊老ニ」

【羣族】グンゾク　おほくのなかま。劉長卿詩「朝出ニ秋田ニ喙ニ殘粟ニ暮入ニ寒林ニ嘯ニ一一ニ」

【羣孫】グンソン　おほくのまご。類書纂要「唐郭子儀、一一問レ安、不ニ識辨ニ、惟頷レ之而已」

【羣島】グンタウ　小さき島の多く集まれるもの。

【羣芳】グンパウ　おほくのはな。潘岳賦「賢ニ斯物之用舍ニ相ニ一一之勳植ニ」

【羣芳譜】グンパウフ　書名、三十卷、明の王象晉撰す、天譜・歲譜・穀譜・蔬譜・果譜・茶竹譜等に分つ、康熙四十七年敕して廣ニ一一百卷を撰す、較竹詳備と爲す。

【羣邸】グンテイ　多くの人民、邸は民。＝羣黎。

【羣謗】グンバウ　多くの人のそしり。魏收文「道聽則ニ一一集、任重而衆怨會」

【羣彙】グンイ　多くのえびす。左傳「庸人帥ニ一一ニ以叛」

【羣飛】グンヒ　むらがりとぶ。射雉賦「樂ニ羽族之ニ一一ニ」

【羣品】グンピン　多くの品物、萬物をいふ。易經「聖人有レ以仰觀俯察ニ天地ニ而言ニ一一ニ」温庭筠詩「一一待ニ陶甄ニ」＝庶品。

【羣賓】ゲンおほくの賓客。
【羣分組聚】グンブンソウジュ異なるを分ち、似たるをあつめる。易、繫辭「方以ㇾ類聚、物以ㇾ羣分」
【羣辟】グンキ諸侯をいふ。辟は君。書、周官「六服ー—、罔ㇾ不ㇾ承ㇾ德」‖羣牧。
【羣籍】グンおほくの書物。隋書、經籍志「劉向卒後、哀帝使ㇾ其子歆編ㇾ父之業、乃徧ㇾ領ㇾ羣書ㇾ于天祿閣上、歆遂總ㇾ括ー—、撮ㇾ其指要ㇾ著ㇾ爲ㇾ七略、凡三萬三千九十卷」
【羣編】グン前條に同じ。乾象新書、御製序「詮ㇾ次ー—古、總ㇾ覽ー—」
【羣峯】グンおほくのみね。朱熹詩「積水ー—碧、清猶楓樹丹」‖羣嶺。
【羣牧】ボクグン多くの諸侯。又多くの地方官。書經「四岳ー—」
【羣黄】コウグン多くのめくら。聾にて多くの愚人ども。鄭元結詩「掃ㇾ世縣ㇾ羣閽ー—」‖衆愚。
【羣羊】グンおほくのひつじ。多くの弱卒に比す。次條參看。
【羣羊攻猛虎】グンヤウコウモウコ多くの弱國を合して一大強國を攻むるに喩ふ。戰國策「爲ㇾ從者、無ㇾ以異ㇾ於驅ㇾ羣羊ㇾ而攻ㇾ猛虎ㇾ也、夫虎之與ㇾ羊不ㇾ格明矣」
【羣雄】グンおほくの英雄。經襲詩「攻ㇾ夷顧ㇾ親ー—」‖羣英・羣豪。
【羣雄割據】グンユウカッキョ多くの英雄が各一地方にたてこもりて勢力を振ふ。
【羣立】グンむらがりたつ。禮記「三年之喪、練不ー—、不ㇾ旅行」
【羣旅】グンリョおほくの人。玉海「ー—爭ㇾ先、莫ㇾ不ㇾ投ㇾ袂而起」
【羣黎】レイ多くの人民。詩、小雅「ー—百姓、徧爲ㇾ爾德」
【羣黎】レイ羣衆に同じ。‖衆黎。
【羣黐】チ多くの人のたましひ。潘尼詩「ー—感ㇾ韶運、理關應ㇾ翔風」
【羣僚】リョウおほくの役人。晉唐書、宣宗紀「接ㇾ待ー—、決ㇾ斷庶政」
【羣戮】リク むらがれるさき。
【羣枉】オウ多くのよこしまなるもの。枉は邪曲。劉向、條ㇾ災異ㇾ封事「讒邪退則衆賢進、ー—盛則正士消」‖衆枉。

【群】

羣（前條）の俗字。

【羨】

㊀セン 霰 エン 㔾 ㊁エン 先

㊀うらやむ、貪り欲する。○心にしたふ（慕）「欽ー—」「欽ー—」「企ー—」「仰ー—」○あまり（餘）孟、滕文公「以ー—補ㇾ不ㇾ足」○ながし（長）○あふれる（溢）史、司馬相如傳「功ー—于五帝」○曼ー—は盛大の貌。‖漫衍。㊁はかみち（墓道）

同訓異字 羨・餘・衍・贏・剩・賸の別

【羨殺】サツうらやむ、殺は助字。張船山詩「ー—南山狗、烟霞老ㇾ梁鼈」
【羨望】ボウうらやみのぞむ。
【羨慕】ボウうらやみしたふ。‖欽羨。
【羨門】モン古の仙人。漢書、郊祀志「始皇東遊ㇾ海上、求ㇾ羨門ー—之屬」
【羨溢】エンイツあまりあふる。漢書、高者者修ー—、貧者窮急愁苦」
【羨財】エンザイあまりの財貨。白居易詩「弊宅須ㇾ棄捨、貧家乏ー—」
【羨餘】エンヨあまり。唐書、食貨志「名曰ー—」

【羹】

羹（羊部十三畫）の俗字。

九畫

【羯】

ケツ 月 通音 カツ

○去勢したるひつじ。○えびす、匈奴の別部、山西省遼州地方に住む。
【羯鼓】コえびすのつづみの名、鞨鼓にて兩面をうつ。唐書、南蠻傳「龜茲部有ー—・揩鼓・腰鼓・齊鼓」‖兩杖鼓。
【羯摩】マツ 梵○二本の獨鈷を打ちちがひにしたる佛器。○受戒の儀式作法。
【羯羖】ケツ ○野羊。○轉じてわるづき義とす。史、貨殖傳「其民ー—」

【羶】

ユ 虞

○よし、うつくし（美）○黒色のをひつじ（黒羊）○山の神。

十一畫

【義】

キ 支 通音 ギ

人の姓名「ー—和」「伏ー—」
【義和】ワギ○堯舜の世に曆法を司りし大臣の羲氏と和氏と。書、堯典「乃命ー—ー—」○日の馭者。屈原「日御ー—之ー—」‖日御。
【義和鞭】ベンギワ日の御者の執るむち。李白詩「大力運ー—天地、義和無ㇾ停ㇾ鞭」杜甫詩「義和鞭ー—白日、少昊行ー—清秋」前條參看。
【義黄】ギコウ伏羲と黄帝と。吳均詩「垂德掩ー—」
【義皇上人】ギコウジョウジン 伏羲氏時代より以上の太古の世の人。うるさき世事を脫して志を高尚にする義。晉書、陶潛傳「陶潛嘗言、夏月虚閑、高ー—北窗之下、清風颯至、自謂ー—」
【義獻】ギケン 晉の王羲之と其の子の王獻之と。共に能書家。晉諸「可ㇾ謂ー—繩張雲漢、ー—繼之」
【義軒】ギケン 伏羲の發明せしこと。帝王世紀「伏羲、作ㇾ瑟、三十六絃、長八尺一寸」劉孝威詩「鴻鵠高飛、ー—

農祭」
【義草】ソウ　羲羹に同じ。
【義農】ノウ　伏義氏と神農氏と、共に支那太古時代に於ける聖天子。班固文「基二隆于ニ義ー一」
【義文】ブン　伏義と文王と。後漢書、延篤傳「朝則ー二之易、慮又之書一」

十二畫

【羵】トク　東
つのなきひつじ。
【羵】フン　文　吻
土中の怪羊。
【羵羊】ヨウ　土中の怪物の名。論語「土之怪曰ニ羵羊一」＝墳羊。

十三畫

【羹】カウ　庚　羹は俗字
○あつもの、すひもの。肉に野菜を雜へたるあつもの「肉ー」「菜ー」「藜ー」禮記「大ー不和」○ー獻は犬肉を宗廟に供へる時の稱。〔曲禮〕
【羹臛】カク　菜のあつものと肉のあつものと。陶雅「羹臛」疏「其肉甚美可レ啗ニー一」陸游詩「ー一芳鮮新弋鴈、衣霑輕嘆自緣緑」
【羹任】ニン　あつもの。儀禮、特牲饋食禮「ー一實レ鼎、陳二于門外一」
【羹牆】カクシャウ　人を仰ぎ慕ふ義。後漢書、李固傳「昔堯殂之後、舜仰慕三年、坐則見二堯於牆一、食則覩二堯於羹一」より出づ。
【羹粥】カクシュク　あつものと、かゆと。蘇軾詩「抽鑵第二間日、但未レ擡ニー一」ニ羹餬。
【羹餬】カンコ　あつものと、かゆと。耶律楚材詩「伏臘祖酒脯、旦夕充ニー一」
【羹レ吹レ韲】カンコスイセイ　熱きあつものにて口中を焼きたるにこりて、冷きあへものまで吹きてさます。戒に過ぎて卻りてしくじる喩。楚辭、九章「懲二羹者而吹レ韲兮」
【羹牆含糗】カンシャウガンキウ　羹をあつものに、糗イを含み食ふ、粗食をいふ。王褒、聖主得二賢臣一頌「ー一者、不レ足二與論一太牢之滋味一」

【羶】セン　先
○なまぐさし、なまぐさき肉「葷ー」○けがれ（汚穢）けがらはし。○羊の臭氣、羊の脂ノ禮、月令「其臭ー」
【羶行】センカウ　人に羞はれる善行。莊子「舜有ニー一百姓悅レ之」其の行爲が人に悅ばれること、蟻の羶を慕ふ如きに嘘ふ。
【羶香】センカウ　なまぐさきにほひ。周禮、天官「腥臊ー一之不レ可レ食者一」
【羶葷】センクン　なまぐさき肉と、くさき菜と。韓愈詩「盤饌雜ニー一」＝葷羶。

【羸】ルイ　支
○つかれる（罷）「餓ー」「疲ー」「罷ー」○やせ、やせる（瘦）○よわる、よわし（弱）老子「或強或ー」○やむ（病）○くつがへす（覆）鉤して之を覆す。易、井卦「ー其瓶凶」○ひっかかりてくるしむ。易、大壯「羝羊觸ニ藩一ー其角一」
同訓異字　羸・瘦・羅・癆・毀の別は瘦（广部十畫）の條を見よ。
【羸師】シイ　（つかれたる弱き兵。左傳「請ニー一以張レ之」偽りて疲弱なるまねして敵を誘ふ）＝羸兵。
【羸弱】ジャク　つかれよわる。
【羸劣】レツ　やみつかれて、よわし。頓悟に歌に作る。漢書論「必使ニ老小ー一居二其中央一」
【羸瘦】シュ　つかれやせる。後漢書、趙善傳「善弟禮爲二餓賊所一レ得、善自縛詣レ賊曰、哽久餓ー一、不レ如二孝肥飽一」
【羸餒】ダイ　つかれてうゑる、餒は餓に同じ。國語「民之ー一、日日已甚」
【羸敗】ハイ　つかれやぶれる。後漢書、羊續傳「時權豪之家、多餘二珍膳一、擅二深疾一之、常敗衣薄食、車馬ー一」
【羸兵】ヘイ　つかれたる兵士。徐陵文「分二給ー一」＝羸師。
【羸憊】ハイ　つかれくるしむ。哭志、陸抗傳「見兵財有二數萬一、ー一日久、難二以待一レ變」＝羸瘠・疲憊・疲癆。
【羸老】ラウ　つかれおゆ。盧思道文「余年五十、ー一將レ至」＝老羸・老羸。

十五畫

【羼】サン　寒　諫
まじふ。まじはる、錯亂する。顔氏家訓「典籍錯亂、皆由二後人所一レ羼」

羽　部

【羽】ウ　虞　羽は俗字
○は、はね。○鳥のつばさ（翅）又、鳥の長き毛。○飛蟲の翅「蟬ー」○鳥のながき毛のつきたるままの皮。○鳥類の汎稱「一族」王褒詩「空林鳴二暮ー一」○雉の尾にて作りし翳ノ舞樂の具「干ー」又、其のかざしを執りて舞ふこと。○たすけとなるもの、左右輔佐の義「一翼」○五音の一「宮商角徵ー一」○山名、舜が驩を殛せし處、山東

省逢萊縣の東南三十支那里に在り。○星の名。○人の姓。

【羽衣】ウイ 鳥のはごろも。漢書、郊祀志「衣ニ――一、立ニ白茅上ニ」

【羽客】ウカク 羽の生ぜし仙人。陳信、邛竹杖賦「待ニ――一以相貽」＝羽人・羽流。

【羽觴】ウシヤウ 酒盃の一種。

【羽翮飛肉】ウカクヒニク 重輕のものも多く集まれば重重のものを動かすに喩ふ。漢書、中山王傳「羣輕折レ軸、――」

【羽翰】ウカン はね。何遜詩「無ニ因生ニ――一、千里暫排レ空」

【羽箭】ウセン 矢ばねと矢ぶくろと。黃庭堅詩「包ニ貫道ニ――一」

【羽旗】ウキ はねをつけたるはた。宋玉賦「駕ニ飄馬一毬ニ――一」

【羽儀】ウギ ○鴻の鳥は其の進退が優美にして儀表となる義。易、漸卦「鴻漸于陸、其羽可ニ用爲ニ儀一」○轉じて立派なる儀容を正して朝廷に出仕する義とす。韓愈、燕喜亭記「吾知ニ其去レ是而ニ――一於天朝一也不ニ上レ歳矣」

【羽騎】ウキ 羽林即ち近衛の騎兵。崔駰、東巡頌「三軍霆激、――火烈」

【羽化】ウクワ ○はねが生ずる。搜神記「木蠹生レ蠹、――爲レ蝶」○羽がはえて仙人となる。晉書、許邁傳「偏遊ニ名山一、後莫レ測ニ所レ終、好レ道者、皆謂ニ之――一」

【羽化侶】ウクワリヨ 仙人のなかま。凌敬詩「方追ニ――一、從レ此得ニ玄珠一」

【羽形】ウケイ 鳥のはねのかたち。＝羽狀。

【羽檄】ウゲキ 至急を示す爲めに、鳥羽をつけたる邊文。史、陳豨傳「吾以ニ――一、徵ニ天下之兵一、未レ有ニ至者一」＝羽書。

【羽士】ウシ 道士の別稱。＝羽人・羽客。

【羽翅】ウシ はねと、つばさと。杜甫詩「安得如レ鳥有ニ――一、託ニ身白雲一、歸ニ故鄉一」

【羽人】ウジン はねの生ぜし仙人。山海經「有ニ――之國、不死之民一」＝羽客。飛仙。

【羽膊】ウシヤク さかづき、雀の形にて、頭尾翼あるもの。班婕妤賦「酌ニ――一兮銷レ憂」

【羽書】ウショ 至急を示す爲めに、鳥羽をつけたる檄文。杜甫詩「重北開ニ山金鼓振、征西車馬ニ――一遲」＝羽檄・飛檄。

【羽書之警】ウショノケイ いくさの警報。揚雄文「――塡ニ無ニ――一」

【羽旌】ウセイ 羽をつけたるはた。潘子顯詩「巍巍ニ玄樹、參ニ差羽ニ――一」

【羽扇】ウセン はうちは。晉林「提ニ白ニ――一、指ニ揮三軍ニ」

【羽族】ウゾク 鳥類。曹植文「不レ容ニ毛羣一、斥ニ逐ニ――一」＝羽屬。

【羽屬】ウゾク 前條に同じ。

【羽隊】ウタイ 矢を負へる兵士の一隊。

【羽蟲】ウチウ 鳥類、蟲は動物の總稱。閻尹「――盛者、毛蟲不レ育」

【羽族】ウゾク 頭にはねをつけたるはた。沈約詩「――拂ニ南鷹一」

【羽旄】ウバウ 鳥羽にて飾れるはたぼこ。孟、梁惠王「――之美」

【羽舞】ウブ 舞樂の名。周禮、地官「舞師教ニ――一」

【羽毛】ウマウ ○鳥のはねと、獸毛と。書、禹貢「其貢ニ――齒革」○はねのつきたる鳥のかは。禮記「衣ニ――一」

【羽葆】ウホウ 舞の名。禮記「秋冬學ニ――一」＝羽舞。

【羽翼】ウヨク はねと、つばさと。轉じて、たすけとなる義。六韜、王者師レ師、必有ニ股肱一一、以成ニ神威一」呂覽「三王一ニ之也」

【羽流】ウリウ 仙人のなかま。又、道士をいふ。來鵬、四園雅集圖記「高僧一ニ之儔」

【羽林】ウリン ○星の名。漢書、天文志「虛危南有ニ衆星一、曰ニ――天軍一」○轉じて天子の宿衛をいふ。羽翼の疾く擊ち、林木の多きに喩ふ。漢書、武帝紀「初置ニ――騎一、取ニ從レ軍死レ事之子孫一、養ニ――官一、教以ニ五兵一、號ニ――孤兒一」

【羽林兒】ウリンジ 近衛兵。宋參詩「鳴レ弓損レ甲――」

【羽鱗】ウリン 鳥と魚と。＝鳥魚。

【羽翎】ウレイ はね。俗惠洪詩「場來湘四塢、倦翮整ニ――一」

【羽獵】ウレフ 狩獵をいふ。人君の狩には羽(矢)を負ふ者從ふ、故にいふ。漢書、揚雄傳「其十二月――」

羿 二畫 圍

【羿】ゲイ ○いて(射師)○夏の時、有窮國の君の名、射を善くし、夏后相の位を簒ふ、其の善射を恃みて民事を修せず、寒浞の爲めに殺さる。

翁 四畫 圍

【翁】オウ 通音オカ ○おきな、男の老人「老ニ――」「田ニ――」「漁ニ――」○ちち(父)おやぢ。史、項羽紀「吾ニ――卽若ニ――」○老人の尊稱。○飛ぶ貌。○鳥ののどけ(頸毛)○人の姓。○碧ニ――は天をいふ。○信天ニ――はあほうどり。○圖ナ譜曲の假面。又、其れをかぶりて舞ふ曲。

【翁媼】オウオン おきなと、おうなと。陳造詩「――鳴鳴社酒香」

【翁主】オウシユ 諸王又は諸侯の女の國人に嫁せし者(史、大宛傳)

【翁仲】オウチウ 秦の南海の巨人阮ニ――をいふ。轉じて後世石又は銅にて造れる偶像の稱。魏志「明帝景初二

年、編三綱人二二列二於司馬門外六號
曰二一一一二

【紫方綱】カウハウ 清の乾隆の進士、袁枚と號す、金石諸錄書畫詞章に精通し、書法尤も一時に冠絶す。

【翅】㊀シ ㊁キ 眞 支 翡に同じ

㊀つばさ(翼)鳥類又は昆蟲類のつばさ。○魚の鰭に俗に沙魚の鰭を魚ーといふ。○ただ、ただに。孟、告子「奚ー食重」(なんぞただに食の重きのみならん)＝啻。㊁つばさ。

同訓異字 翅・翔・惟・只・止・但・徒・第・啻・直・祇の別は唯(口部八畫)の條を見よ。

【翅翼】シヨク つばさ。漢書、孫方進傳「見二不善者一、誅レ之若二驚鳧之逐一鳥爵一也、一一難レ脩不レ避也」＝翼翅・翅翮・羽翅。

【翅翮】シカク ＝翅翼

【翠】翠(羽部八畫)に同じ。

【翁】フン 翁・翁に同じ

ーーは飛ぶこと高からざる貌。又、飛ぶことおそき貌。又、羽翼のこゑ。

五畫

【習】シフ 緝

○ならふ、學ぶ、雛鳥が數ー飛びて飛ぶことをならふ「學ー」「晩ー」「誦ー」「週ー」禮、月令「鷹乃學ー」「論、學而「學而時ーレ之」○なる。ならす「ー熟」「調ー」○なれしたしむ「近ー」○つむ(積)かさぬ(重)○ならはし、ならひ「ー俗」「ー慣」「積ー」「染ー」○よる(因)○ーー はやはらぎのぶる(和舒)貌。

同訓異字 習・傚・倣・肄・慣・閑の別は傚(人部十畫)の條を見よ。

【習肄】シフイ ならふ、ならす、肄も習。史、叔孫通傳「命二弟子一ーー二朝儀一」＝肄習。

【習學】シフガク くりかへしまなぶ。＝復習・學習。

【習合神道】シフガフシンダウ 圖神・儒・佛の三教の數理を折衷したる神道の一派。

【習坎】シフカン 重なれる險阻、坎は穴、險の義(易、坎卦)

【習氣】シフキ くせ、ならはし。華嚴經「斷二除一切煩惱ーー一」

【習其】シフキ ならはし。質は慣に同じ。漢書、賈誼傳「少成若二天性一ーー如二自然一」

【習慣】シフクワン 前條に同じ。

【習慣性】シフクワンセイ 靜止又は運動の狀態を永久に繼續する性質。＝恒性。

【習業】シフゲフ わざをならふ。漢書、禮樂志「皆選二有二道德一之人一朝夕ーレー、以教二國子一」

【習字】シフジ 文字をかきならふ、てならひ。

【習習】シフシフ 春風の和ぎ舒ろる貌。詩、邶風「ーー谷風、以陰以雨」

【習親】シフシン なれちかづく。韓非子「伊尹身執二鼎俎一、爲二庖宰一、昵近ーー」

【習授】シフジュ ならひさづかる。元史、夔夔傳「侍二經筵一、勤二帝務一學、帝嘗就レ之ーー」

【習熟】シフジュク ならひなれる。ならす。稽苑別錄「大摂乎茶、亦須ニーーー」＝習練・熟習。

【習誦】シフショウ ならひよむ。漢書、張良傳「有二一父老一出二一編書一、乃太公兵法、良異レ之常ーー」＝誦習。

【習性】シフセイ ならはし、習慣となりし性。北史、儒林傳「帝王子孫、ーー驕逸」

【習染】シフセン くせ、くせになる。賈誼書「ーし迷惑」＝染習・習熟。

【習俗】シフゾク ならはせ。戰國趙策「當民溺於ーー、學者沈二於所レ聞」＝風俗。

【習得】シフトク ならひ覺える。

【習復】シフフク ならひかへす、さらへる。國語「士朝而受レ業、晝而講貫、夕而ーー、夜而計レ過、無レ憾而後即レ安」＝復習。

【習兵】シフヘイ 兵をならす、軍隊のてれん。周禮、注「古者因レ田ーレー、閑二其軍徒之數一」

【習練】シフレン くせ、ならはし。＝習氣。

【習流】シフリウ ふないくさの兵士、水戰に習ふ者。史、越世家「句踐選ニーー二千人一伐レ吳」＝水師。

【習禮】シフレイ ○禮儀作法になれてゐる。○禮儀作法をけいこする。史、孔子世家「吳二弟子一ーニー大樹下一」

【習練】シフレン 習熟に同じ。＝練習。

【習吳性成】シフゴセイセイ ならはしは第二の性質となる。書、太甲「伊尹曰、茲乃不義、ーーー」

【翍】チツ 眞

ーーは飛ぶこと速き貌。莊、山木「翍翍ーー」

【翍】ヒ 支 齊・灰 微 翡に通ず

○はねを張る貌。○ひらく。＝披。

【翊】ヨク イフ

○つつしむ(敬)又其の貌「ーー」○たすく(輔・佐・扶)「匡ー」「輔ー」○飛ぶ貌。○左馮ーは邸名、漢代に置く。

【翊賛】ヨクサン たすける。唐書、薛稷傳「帝以ニーー功一、徵召入宮中一、與決レ事」＝贊・輔助。

【翊戴】ヨクタイ 君主として崇び、たすけい

ただく。晉書、周顗傳「懐ヲ一ニ一秦王之計ト」‖翼戴。

【翅翅】シキ　うやうやしく敬む貌。漢書、禮樂志「共ニ一合レ所レ思」‖翼翼。

【翌】ヨク　職

あくるひ（明日）「一朝」‖翊・翼。

【翌日】ヨクジツ　明日なり。漢書、武帝紀「一ニ一親登二蒿高一」‖翌月。

【翎】レイ　リャウ　青

○はね（鳥羽）「箭ニ一」○やのはね（箭羽）○清朝にて有功者に賞賜する冠の飾とする羽「花ニ一」「藍ニ一」

【翎毛】レイマウ　鳥のつばさと、獣の毛。鳥獣の義。退諺「綺二於花竹一ニ一」‖毛翎。

【翬】レウ　リク　屋　嘯

○高く飛ぶ。○ニ一は遠くより吹き來る風の聲。莊、齊物「ニ一乎」

六畫

【翕】キフ　緝

○あふ。あはす（合）詩、小雅「兄弟既ニ一」○あつむ。あつまる（聚）又聚る貌「ニ一然」○ひく（引）○をさむ（收）をさまる（斂）とづ（閉）○さかんなり（盛）○おこる（起）○ニ一忽ニ一は疾き貌。左思、吳都賦「神化ニ一忽」

【翕赫】キフカク　さかんなる貌。後漢書、陳忠傳「使者所レ過、威權ニ一、簒二動郡縣一」

【翕張】キフチャウ　或は合ひ或は開く形容。揭傒、甘泉賦「翕赫習霍」

【翕習】キフシフ　よくかなふ。晉唐書、音樂志「六律ニ一、六呂成二八佾一、倘徉八風生」

【翕忽】キフコツ　疾き貌。字解を見よ。

【翕習】キフシフ　○威の盛んなる貌。劉希夷詩「軍容何ニ一」○風ふく貌。郭璞季詩「清風ニ一、扇二被蘭臺一」‖習習。○舒遲なる貌。左思賦「ニ一容裔」（音樂の形容）

【翕受】キフジュ　あはせうける。泰誓契、注「坤爲レ地、能ニ一天氣一」

【翕如】キフジョ　よくととのひ合ふ貌。論、八佾「始作ニ一也、從レ之純如也」

【翕然】キフゼン　あつまり合ふ貌。晉書、王衍傳「朝野ニ一」

【翕定】キフテイ　あつまりさだまる。周書、明帝紀「九州ニ一、最編在レ民」‖戴定。

【翕闢】キフヘキ　とづると、ひらくと。易、繫辭「夫坤、其靜也翕、其動也闢」

【翕翼】キフヨク　つばさををさむ。王褒賦「飛鳥ニ一レ、泉魚潛躍」

【翔】シャウ　陽

○かける、飛びめぐる（回飛）「回ニ一」「翔ニ一」論、鄉黨「ニ一而後集」○ニ一はつつしむ（莊敬）貌。○やすらか、安舒の貌。○かへりみる（廻顧）○拱きたる手を張りて行く。曲禮「室中不ニ一」

【翔洽】シャウカフ　飛鳥と游魚と。晉唐書、深仁洽ニ一ニ一」（仁德があまねく鳥魚にまでも及ぶ）

【翔回】シャウクワイ　とびかける。杜甫詩「鶺鴒見ニ一ニ一」‖翔翔。

【翔貴】シャウキ　物價が高くなりて下がらず。漢書、食貨志「穀價ニ一」‖騰貴。

【翔鵠】シャウカク　とびかけるみづち。庾闡詩「ニ一凌二九霄一」

【翔禽】シャウキン　そらをかけるとり。謝萬詩「ニ一撫レ翰遊」

【翔空】シャウクウ　そらをかける。陸氏王詩「翮高稱レ納使ニ一レ」‖翔天。

【翔翔】シャウシャウ　莊敬なる貌。禮、玉藻「朝廷濟濟ニ一」

【翔集】シャウシフ　空をかけまはるはやぶさ。潘岳、秋興賦「野有二鮪魚一鷹有二ニ一ニ一」

【翔天】シャウテン　そらをかけりとぶ。阮籍、東平賦「深林茂樹蓊翳參差、羣鳥ニ一レ一百獸交馳」‖翔空。

【翔鷁】シャウゲキ　はせめぐりて狩る。陳大子傳「六師之人、ニ一于曠原一得獲無レ疆、鳥獸絕レ羣」

【翔舞】シャウブ　かけりまふ。奥、宣紀「鳥獸ニ一、簫韶九成」

【翔佯】シャウヤウ　さまよふ、たちもとほる。魏明帝詩「ニ一於階際一曾是一何明」

【翔陽】シャウヤウ　太陽の興稱、日中に烏あるが故。木華、海賦「ニ一逸二翼於扶桑之津一」

七畫

【翛】（一）セウ　蕭　（二）イウ　有　屋　シュク

（一）ニ一は鳥の羽がやぶれる。詩、關風「予尾ニ一」（二）ニ一然は疾き貌。莊、大宗師「ニ一然而往」（三）飛ぶことはやき貌。‖倏。

八畫

【翣】サフ　セフ　洽

○おにがしら（蓑）○うちは（大扇）‖箑。○はねにて扇の形に作りし棺の兩旁に置くか

ざり。

【翠】スキ　圓

○翡ー(ヒスキ)はかはせみ(青羽雀鵲)翡は雄、ーは雌。又、玉の名「ー玉」○みどり、もえぎ(青黃色)「蒼ー」「青ー」「松ー」劉長卿詩「郭外遠山ー」○ひたれ(鳥の尾の肉)

【翠鬟】スイクワン　みどりのもや。王筠詩「遙峯聳ニーー」

【翠陰】スイイン　青葉のかげ。馬戴詩「初日照ニ楊柳ニ玉樓含ニーーニ」‖翠蔭・綠陰。

【翠筠】スイイン　青く夜りたる竹。楊巨源詩「ーー入ニ疎柳ニ」‖翠竹。

【翠羽】スイウ　かはせみのはね。漢書、江都易王非子建傳「犀甲ーー」

【翠南】スイナン　青葉にふりかかるあめ。文徵明詩「ーー滴ニ深簷ニ」

【翠塵】スイチン　みどりのくも。後漢書、馮衍傳「乘ニーーニ而相佯」

【翠蟠】スイハン　○みどりの木かげ。孔武仲詩「ーー連ニ雲日易ニ西ニ」○みどりのなみき。韓維詩「荊陌帶ニーーニ」

【翠葉】スイエフ　みどりのは。王倫、竹賦「ーー與ニ飛雪ニ爭ニ采ニ、良柯與ニ晉冰ニ爭ニレ鮮」

【翠煙】スイエン　みどりのけむり。木草「龍腦入ニ諸香ニ、焚レ之則ーー浮ニレ空ニ」

【翠柯】スイカ　みどりの枝。

【翠蛾】スイガ　美人の美くしき眉に喩ふ。蛾は蛾眉「乾淳歷時記」

【翠蓋】スイカイ　青きもや。雲笈七籤「秀葉翠ニーーニ」

【翠荷】スイカ　あをあををしたるあさざ。郭元祖、水藻賦「雜ニ青蓮與ニーーニ、偶ニ杜若與ニ江蘺ニ」‖綠荷。

【翠芰】スイキ　みどりの花のうてな。王筠、翠芰花賦「疏ニ翠密葉ニ、ーー丹華」

【翠空】スイクウ　あをぞら。唐太宗、出獵詩「騰ニ驤散ニーーニ」‖碧空・翠穹。

【翠輦】スイレン　翡翠せいの羽にて飾りたる天子の輦。司馬相如、上林賦「建ニーーニ之旗、樹ニ靈之鼓ニ」

【翠光】スイクワン　かはせみの羽のひかり。楊巨源詩「一點ーー去」

【翠黛】スイタイ　あをくしげれる竹やぶ。

【翠鬟】スイクワン　○みどりのまげ。美人の髮の形容。高駢詩「ーー丹臉皆勝レ愁」○轉じて青き山に喩ふ「ーー如レ拭」

【翠華】スイクワ　あをきくき。左思、吳都賦「綠葉ーー、冒レ霜停レ霄」‖綠莖。

【翠漢】スイカン　翠鬚に同じ。

【翠髻】スイケイ　みどりのもとどり。美人の髮の形容。顧瑛、宮詞「賣復王婦得ニーーニ」‖翠鬟。

【翠鬚】スイシュ　あをみだちたる谷川。郭元超賦「ーー島以綸連」

【翠翹】スイケウ　かはせみの羽にて作りし婦人の首飾、かんざしの類。一說、かはせみの尾の上の長毛を翹といふ、其の形に作りしもの。李商隱詩「旁有ニ雙叙雙ーー」

【翠覓】スイベキ　青竹のかけひ。盧瓊詩「ーー分レ泉自編レ竹」

【翠巒】スイラン　みどり色の險しき山。聞見後錄「層峯ーー、爭效ニ奇於前ニ」

【翠徑】スイケイ　あをぎり。杜甫詩「得レ金翻ニ百竹ニ棲レ枝把ニーーニ」‖碧梧。

【翠釵】スイサイ　みどり色のかんざし。幽怪錄「明旦拾ニ得ーー數坡ニ」

【翠蟠】スイハン　みどり色の連山。蘇舜欽詩「ーー環合封ニ白雲ニ」

【翠松】スイシヨウ　みどりいろのまつ。‖蒼松。

【翠色】スイショク　みどりいろ。

【翠蒼】スイサウ　あをぞら。丁復詩「ーー深處想ニ瓊樓ニ」‖碧空・碧穹。

【翠蕉】スイセウ　あをきばせを。楊萬里詩「ーー自搖レ扇」‖綠蕉。

【翠篠】スイセウ　みどりのしのだけ。梁簡文帝詩「隔レ籬臨ニ一ニ、映レ水含ニ珠櫳ニ」

【翠扇】スイセン　みどり色のうちは。李商隱詩「荷翻ニーーニ水堂虛」

【翠菩】スイケイ　あをきこけ。徐寅詩「節杖巖邊剔ニーーニ」‖蒼苔・碧苔・蒼蘚。

【翠嶽】スイガク　○みどりなるまゆずみ。杜甫詩、燕姬ーー愁」○青き山の形容。彦周詩話「極波山色ーー橫」

【翠蔥】スイソウ　青き苗のはたけ。歐陽修詩「李標疎雨換ニーーニ」

【翠竹】スイチク　みどりのたけ。洛陽伽藍記「青松ーー、羅ニ生其旁ニ」‖綠竹。

【翠帳】スイチヤウ　みどりのとばり。蘇人のねやにいふ「ーー紅閨ニ謝脫賦「關ニーートニ之影漏」

【翠天】スイテン　あをぞら。‖青空・蒼天・蒼空。

【翠波】スイハ　あをきなみ。皮日休詩「其中生ニーーニ」‖碧波。

【翠髮】スイハツ　みどりのかみ。王勃、采蓮賦「ーー蛾眉、頻解皓齒」

【翠微】スイビ　○山の八合目。爾雅「山未レ及レ上、曰ニーーニ」疏「一說山氣青縹色、故曰ニーーニ也」○山のみどりのもや。杜甫詩「移家ニーーニ洞、馬街ニ青草一斷」

【翠屏】スイヘイ　みどりの屏風。山の連れる形容。廬山後錄「清輝閣對ニ盧阜ニ、如ニ青天ーーニ」

【翠壁】スイヘキ　青く苔むしたる山のがけ。九華山錄「獨秀巖ーー橫峙可レ愛」

【翠鳳】スイホウ　かはせみと鳳凰と、天子の旌の飾とす。李嶠、陳ニ遙客ニ上書「建ニーーニ之旗、樹ニ翠鳳之旌ニ」

【翠幌】スイクワウ　みどり色のまどかけ。顧野王詩「窗開ーー卷」

【翠蔓】スイマン　みどりのつるくさ。蘇軾詩「長松度ニーーニ」‖青蔓。

【翠楊】スイヤウ　あをあをとしたるかはやなぎ。‖綠楊。

【翠浪】スイラン　みどり色のなみ。孟郊詩「曉潮湾ニ寒綠、ーー多ニ蒼蘚ニ」‖碧浪・蒼波。

【翠鳳】スイ みどり色の山の氣。郭璞詩「一一迎レ步興何長」
【翠黛】スイ みどり色のまゆ。江淹賦「黛三金翠與二一一一」
【翠眉】スイ あをあをとしげれるやなぎ。杜甫詩「兩個黃鸝鳴二一一一行白鷺上二青天一」‖綠柳。
【翠袖】スイ みどりいろ。‖綠衣。
【翠簾】スイ あをすだれ。元稹詩「桐花垂在二一一前一」
【翠滅】スイ みどり色のみぎは。四征賦「華蓮瀾二於綠沼一、青蕃蔚二乎一一一」注「滅、波際也」
【翠輅】スイ 皇后の乘るくるま。隋書、禮儀志「皇后之車十二等、四曰二一一一以從二皇帝一見二賓客一」
【翠輦】スイ ○あをくぬりたるたかどの。江淹、楚詞「日華皎二宇芳閣一、月波披二于一一一」○遊女屋の義。‖青樓・娼館。

【翟】（一）テキ（二）タク 覺

（一）尾の長き雉。又、其のはね、舞ふ者の執る具。詩、邶風「右手秉二一一一」○えびす、野蠻人。‖狄。○きじの羽にて飾れる衣。○きじの羽にて飾れる車。○羽舞を教ふる者。○人名、墨一は周代の宋の人、墨子を著す。（二）やまどり。‖翬。

【翟公書レ門】テキコウショスル 下郡の翟公の廷尉たりし時、賓客、先を爭うて御機嫌伺に來りしが、退官せし後は來り訪ふ者なし。後ちまた廷尉に拜命せし時、客訪はんと欲す、翟公乃ち其の門に「一死一生乃ち知二交情一、一貧一富乃ち知二交態一」と大書せしといふ故事（史、汲鄭傳）
【翟輅】テキ 皇后の乘るくるま。隋書、禮儀志「皇后之車十二等、三曰二一一一」

【翡】ヒ 未

かはせみ（赤羽雀）又、かはせみの雄（翠は雌にて青羽雀）
【翡翠】ヒスイ ○かはせみ、水邊に棲む小鳥の一、綠身青黃色、嘴は脚前及翼後に赤色の毛ありて美くし。漢書、貢山陵「飾以二一一一」‖魚狗・翠雀・翠鳥。○寶石の一、雲南省に出づ。‖翠玉。

九畫

【翫】ガン 翰

○大いに飛ぶ。○疾く飛ぶ羽おと。爾雅、釋鳥「鷹隼醜其飛也一」○雉の屬、五色の備はれる美くしき鳥。
【翫翫】ケンケン はやく飛ぶ羽おと。爾雅、注「戢翼一一然疾」
【翫飛】ケンピ 宮室の美麗宏壯なる形容。詩、小雅「如二一一斯飛一」‖裏詩「一一勢欲レ翾」

【翫】グヮン 翰

○もてあそぶ。‖玩。○弄びなぐさむ（慰）○むさぼる（貪）左傳「一歲而惕日」‖忨。○すきめでる（愛）○よろこぶ（悅）○おもちゃ（玩具）

同訓異字 翫・玩・弄の別は玩（玉部四畫）の條を見よ。

【翫偈】グヮンカイ むさぼる、翫・惕同義。字解參看。
【翫弄】グヮンロウ もてあそびけがす。‖玩弄。
【翫讀】グヮンドク 十分に味ひてよむ。‖玩讀。
【翫物】グヮンブツ おもちゃ。‖玩具・玩物・翫弄品。
【翫味】グヮンミ 十分に味ひさとる「熟讀一一」‖玩味。
【翫弄品】グヮンロウヒン 翫物に同じ。

【翬】ショ 御

とびあがる（飛擧）楚辭「鸞鳥軒一而翔飛」

【翦】セン 銑

俗字 剪は

○きる、たつ（斷）詩、召南「勿「一勿」伐」○はさみきる、そろへて斷つ（齊斷）○そぐ（殺）○けづる（削）○はさみ「一刀」○きりさる、のぞく（去）○ほろぼす（滅）○つくす（盡）○あさし（淺）○一一は短く淺き貌。又、佞人の貌。又、善く辯ずる貌。莊、在宥「佞人之心、一一者」

同訓異字 翦・斬・斫・截・攕・切・伐の別は斬（斤部七畫）の條を見よ。

【翦裁】センサイ ○布帛などをきりたつ。‖裁截・裁斷・剪斷。○轉じて花の美くしきにいふ。徐凝詩「珠樓瓊花開二一一」
【翦綵】センサイ あやぎぬをたちきりて衣をつくる。李白詩「吳刀一一綾二縫衣一」
【翦取】センシュ きりとる。
【翦截】センセツ きりたつ。白居易詩「二一五言一雜用レ旃」‖翦裁。
【翦佞】センネイ ○佞ひねもねる貌。莊、在宥「佞人之心一一者、又奚足三以辭二至道一」○短く淺き貌。曹植詩「惆悵櫂寒一一風、小梅飄レ雪杳花紅」
【翦刀】センタウ はさみ（鉄刀）‖剪刀。
【翦滅】センメツ きりたつ。‖翦裁。
【翦除】センヂョ きりのぞく。潘岳悼詩「痛緣胸中有二一一一」‖剪除。
【翦定】センテイ きりさだめる。唐書、關播傳「奉レ詔平レ賊、有レ如レ不レ受レ命、臣請發二州兵一二一一之」‖帝曰善」

【翔洽】ショウ　きりほふる。李華、弔二古戰場一文「河陵殺氣、以相ー一」【翔破】ショウ　きりやぶる。梁武詩「回レ刀ー一碧江色」【翔伐】ショウ　○木をきる。字解參看。○うちほろぼす。蘇軾詩「醜類易二ー一一」【翔滅】ショウ　きりほろぼす。左、宣十二「余姑ー二此一而後朝食」【翔絞】ショウ　きりはし。

【翩】（ヘン）先　一に翩に作る

○ひるがへる（反）○はやくとぶ（疾飛）○ーーは輕くあがる貌。又、自得の貌。又、往來する貌。又、才の美なる貌。又、宮闕の繩盛なる貌。又、行きて息やまざる貌。又、動搖する貌、そはそはしておちつかざる貌。【翩翩】ヘン　ひるがへり飛ぶ貌。張衡、西京賦「裴鳥ーー」王昌齡詩「庭前有二孤鶴一、武陵常ーー」【翩翩】ヘン　○鳥の疾く飛ぶ貌。詩、小雅「ーーー者鵻」○輕く舉る貌。易、泰卦「ーーー不レ富、以二其鄰一不レ戒以孚」○輕く往來する貌。詩、小雅「維其ーーー」○宮闕の繩盛なる貌。後漢書、班固傳「ーーー連連」○自得の貌。張華文「ーーー然有二以自樂一也」○才智の美なる貌。又風流文采の貌。史、平原君傳「ーーー濁世之佳公子也」

【翻】（ホン）元　一に翻に作る

○ひるがへる（反）○はやくとぶ（疾飛）○ーーは輕くあがる貌。又、自得の貌。又、往來する貌。又、才の美なる貌。又、宮闕の繩盛なる貌。又、行きて息やまざる貌。又、動搖する貌、そはそはしておちつかざる貌。【翩翩】ヘン　ひるがへり飛ぶ貌。張衡、西京賦「裴鳥ーー」王昌齡詩「庭前有二孤鶴一、武陵常ーー」【翩翩】ヘン　○鳥の疾く飛ぶ貌。詩、小雅「ーーー者鵻」○輕く舉る貌。易、泰卦「ーーー不レ富、以二其鄰一不レ戒以孚」○輕く往來する貌。詩、小雅「維其ーーー」○宮闕の繩盛なる貌。後漢書、班固傳「ーーー連連」○自得の貌。張華文「ーーー然有二以自樂一也」○才智の美なる貌。又風流文采の貌。史、平原君傳「ーーー濁世之佳公子也」

十畫

【翮】（一）カク　（二）レキ　錫　陌

㊀はねのくき（羽莖）はねのもと（羽本）「羽ー」「飛ー」「逸ー」㊁鼎の一種、空足の鼎。‖高瓶。

【翰】カン　寒

○やまどり（天雞）雉の一種。○とぶ、高く飛ぶ。太玄經「龍ー于天」○ながし（長）○はね（羽）○もと、みき（幹）○しろうま（白色馬）○まっしろ（純白）○ふで（筆）古、鳥の羽にて筆を造りし故「筆ー」「柔ー」劉公幹詩「投ー長歎息」○ふみ、てがみ（文書）「書ー」「尺ー」「手ー」○文書を司る官「ー林」「內ー」○みき、古、幹に通ず、もと。詩、大雅「維周之ー」【翰苑】カン　○翰林に同じ。宋史、蘇眼傳「文館清嚴、宜レ居二ーー一」○ーー集（二十二卷）は唐の陸贄（宣公）の文集。【翰墨】カンボク　字を書く、翰は筆。潘岳、秋興賦序「ーー操レ紙、慨然而賦」【投ー】トウカン　ふでをなげだす。劉楨詩「ーー長歎息」‖投筆。抛筆。【翰音】カンオン　○高く飛びて鳴く。虛名の負に過ぐるに喩ふ。易、中孚「ーー登二于天一、貞凶」○雞の異名、翰は長、羽肥ゆれば其の鳴く聲長し、故にいふ（曲禮）【弄ー】ロウカン　筆をもてあそびて書畫などをかく。宣和畫譜「則ーー游戲」‖筆ー。【翰藻】カンソウ　詩文をいふ。唐書、李百藥傳「ーー沈雄、詩尤其所レ長」【翰札】カンサツ　てがみ。晉書、何準傳「性既輕レ物、ーー簡傲」‖札翰・簡札・筆札。【翰池】カンチ　すゞつぼ。駱賓王文「戲ー滿手ーー」‖墨池。【翰長】カンチョウ　○翰林院の長官の意。李詩「御筆親題ーー衙、夜開二金殿一迎二珠氣一」○圖書記官長の稱。【翰飛】カンヒ　たかく飛ぶ。‖高飛。【翰墨】カンボク　○筆墨の義。轉じて文學の義に用ふ。唐書、李賀傳「詩有二奇ー一、洞レ得情貌一、絕二去一一畦逕一」○ーー全書（十二卷）は明の王宇、尺牘を作る者の爲めに撰す。【翰林】カンリン　○ふみのはやし。揚雄、長楊賦序「聊因二筆墨之戲一、ー文章一、故號ニーー一以爲二主人一子雖爲二客卿一以諷」‖翰苑・詞垣・文苑。○唐玄宗以後官名となる。夢溪筆談「ーー院在二禁中一」【翰林學士】カンリンガクシ　唐代の官名、詔勅を草することを掌る。事物紀原「唐太宗時、名儒時時召以草レ制、待詔、常於二北門一候二進止一、號二北門學士一、明皇改曰二翰林待詔一、開元二十六年、乃爲二ーーー一」

【翯】コク　カク　沃　覺

○鳥の肥えて澤ある貌。○鳥の羽のきよくしろき（潔白）貌。○水の白くひかる貌。【翯翯】コクコク　鳥の肥えてつやある貌。又、鳥の羽の潔白なる貌。詩、大雅「鳧鷖在ー、ーー」【翯翯】コクコク　水の白く光る貌。史、司馬相如傳「ーーー滿滿」

十一畫

【翼】エイ　㗊

○かざしの羽、舞ふ時に執る具。○かざす。○しりぞく（屏）周語「而ー其人一也」○ほろぼす（滅）○めのほし。目がかすむ。梅堯臣詩「忽然生ー無二藥攘一」○ささふ（障）○おほふ。おほひ（掩）「蔽ー」「掩ー」○くもり（曇）かくす（隱）「隱ー」「論ー」○かげ（蔭）「陰ー」「雲ー」○きぬがさ（華蓋）○はたほこ

（羽葆幢）○こくたん（烏文木）○たちがれ、木が自然に枯死する。又其の木。詩、大雅「其檿其柘」○五色の美くしき鳥、鳳凰の類。

【翁翁】オウ かげりて明かならざる貌。陶潛、歸去來辭「景ー―以將ル入」‖陰暗。

【翁柳】オウ 木がたちがれてくさる。柳宗元、石渠記「機ニ去ー―一決ニ疏土石ニ」

【翁桑】オウ 桑の木のこんもりと茂れるところ。左、宣二「舍ニ于ー―ー」

【翁日】オウ 日光をおほふ。晉書「蔽ル水作ル繖ーレー」‖蔽日。

【翁昧】オウ おほはれてくらし。馬融賦「列宿爲ル之ーー」

【翁蓊】オウ 草木の茂する貌。謝靈運賦「修竹蔽ニ蔚以ーー、灌木森沈以蒙茂」‖蓊翁。

十二畫

【翱】ガウ 豪 通音カウ

○こぶ、かける（翔）とびまはる。あそぶ（放遊）○ー翔はさまよふ（彷徉）又、得意にふるまふ。

【翱翔】カウ 飛ぶ貌。何晏明詩「鸞鸞雙鳳阿、ーー飛雲間」

【翱翔】カウ ○かけりまはる、鳥の飛びて翼を上下するを翱、翼を張りて動かざるを翔といふ。淮南、覽冥「ーニー四海之外ニ」○さまよふ。詩、邶風「河上乎ーー」○得意にふるまふ「ーニー於園堂ニ」

【翹】ケウ ゲウ 蕭

○あぐ、あける（舉）「ー尾」「ー首」○くはだつ（企）○つまだてる「ー足」○茂り盛んなり。○ーはおほし（衆）又高くぬき出る貌。又、遠き貌。又、危き貌。○鳥の尾の長毛。○婦人の首飾「翠ー」梁簡文帝詩「寶髻珊瑚ー」○おこす。おこる（起）○かく（懸）心にかける。

同音異義 翹・驍・撟・橋・矯・趫・趭・趫・趭・趫・趭

【翻天】ホンテン　そらにひるがへる。蘇軾詩「花浪ー雪相撥」

【翻譯】ホンヤク　甲國の語を乙國の語に轉じ改む。隋書、經籍志「漢桓帝時、有二安息國沙門安靜一、齎レ經至レ洛、ー譯爲二漢言一」

【翻譯名義集】ホンヤクミョウギシュウ　二十卷、宋の姑蘇景德寺の僧、法雲撰す、六十四目に分ち、梵語を解釋す、佛經を讀む者の好參考書たり。

【翻弄】ホンロウ　思ふままにもてあそぶ、てだまにとる。

【翼】ヨク　職

○鳥のつばさ(翅)又、蟲類のはね「蟬ー」○魚の腮ェの左右にある鰭。○たすく(助)たすけ(輔佐)親鳥がつばさを以て雛をかばふ義に取る。翊に通ず「輔ー」「扶ー」「贊ー」「匡ー」「羽ー」○おほひそだてる(覆)○のき(屋の四阿)○とぶ(飛)○あがる(翹)○うつくし(美)○やはらぐ(和)○あす(明日)翌に通ず。○星の名。たすき、二十八宿の一。○左右の部隊。史、李牧傳「張ニ左右ー」○ーーは壯健なる貌。又、整飭せる貌。又、しけん(華)貌。又、衆き貌。又、つつしむ、うやうやしく、昭九「ーニー天子」而加レ之レ共」共は恭。

【翼戴功臣】コウシンヨクタイ　宋代功勞ある臣下に授けし名譽の稱號(歐陽修、職官表)

【無レ翼而飛】ムシヨクジヒ　人の名聲の廣く揚るをいふ。管子「ーーー者、聲也」

【翼護暖腋】ヨクゴダンエキ　つばさにておほひ息を吹きかけてあたためる。轉じて人を愛護するにいふ。

【翼輔】ヨクホ　たすけ。又たすける。ll輔佐・輔翼。

【翼翼】ヨクヨク　○壯健なる貌。詩、小雅「四騏ーー」○ととのふ(整飭)貌。詩、小雅「維馬ーー」○飛び上る貌。王褒賦「ーー飛翔」○うやうやしき貌。詩、大雅「維此文王、小心ーー」○なれて暇ある貌。詩、小雅「四牡ーー」○和ぐ貌。扈原、離騷「高翔ー之ーー」○盛んに茂る貌。詩、小雅「我黍ーー」

【翼卵】ヨクラン　おほひそだてる。何夢桂詩「草餘重二下風一翠受二ーー恩一」

十三畫

【翽】クワイ　泰

ーーは羽ばたきする聲。一說におほし(衆多)詩、大雅「鳳凰于飛、ーー其羽」

【翾】ケン　先

○はやし(急疾)ll偏。○小しく飛ぶ。

【翾翾】クワンクワン　初めて起ちてすこしく飛ぶ貌。韓詩外傳「ーー十步之雀、猶知二俯而笑レ之」

【翾飛】ケンピ　すこしくとぶ。楚辭、九歌「ーー兮翠曾」

十四畫

【翹】エウ　嘯　曉に同じ

かがやく、ひかる。ひかり。かがやかす「光ー」「炳ー」「炫ー」「衒ー」「照ー」「榮ー」

【翹翹】エウエウ　かがやく貌。儲光羲詩「ーー金虎符」

【翹首】エウシュ　あたひを高くする。言其、希冀利祿貌。戴記、檀弓「ーー二諸侯一」

【翹車】ギョウシャ　ひらめくいなづま。鬼谷春秋「顧百若二車輪一、目若二ーーー一」

【翹德】ギョウトク　とくをかがやかす。周語「先王ーレ、不レ觀レ兵」

【翻】タウ　號

○かざしのはね(翳)○はたほこ(羽葆幢)

老部

【老】ラウ ロウ 蕭

○としより、傾きし齢の人。○七十歳の稱。曲禮「七十曰ニ老而傳ヘ」○徳と年との高き人の敬稱。○おゆ、おいほれる(衰)○おとろふ(衰)くちる(朽)「ー朽」○おい、おゆる。○つかる、(疲)兵の久しく外に在る義。晉語「楚師ー矣」つからす。左、僖二八「ー師費ー財」○年をとりて官を辭して隱居する、致仕する。左、隱三「桓公立乃ー」○としよりを敬ひいたはる。孟、梁惠王「ー我老、及ニ人老ー」○たける、上手になる「ー手」「ー練」「ー熟」○天子の公卿。又、諸侯の大夫の稱。○羣臣又は家臣の長、家老。論、憲問「爲ニ趙魏ー則優」○楚人李耳(老子)の唱へし學說「黃ー」「ー莊」○人の姓。

【老衰】ラウスイ 春すぎてなほ鳴く蛙ヒスダ＝晩年・殘衰。

【老友】ラウイウ 老年のとも。宋史、蔡元定傳「大儒曰、此吾ーー也、不レ當レ在ニ弟子列ニ」

【老媼】ラウ としよりたる女。徐照詩「出レ門ーー喚ニ雞犬ニ」＝老婆・老婆。

【老幼】ラウエウ としよりと、こどもと。陳陶詩「提ニ挈ーー」＝老弱。

【老易】ラウエキ 老子の書と周易と。

【老葉兒樹】ラウエフジュ うしころし、薔薇科に屬する木の名。夏、時樹に五瓣の白花開き赤き實を結ぶ。

【老翁】ラウヲウ としより。張說詩「謹念三千里、江湖一ー」＝老叟。

【老媼】ラウオウ 年よりたる女。＝老婆。

【謝レ老】シャラウ 年老いたるを告げて官を辭する。北史、爾朱元傳「謁レ闕ーレ」＝告レ老。

【告レ老】コクラウ 年老いたるを告げて致仕する。左、襄七「臧孫ーレ」

【老レ老】ラウラウ としよりをうやまふ。禮記「上ーレ而民興ニ孝」荀子「ーレ而壯者歸ニ悌」

【老艾】ラウガイ としより、艾は五十歳の鬚。論「所ニ以輔ニ者壯ニ而息ーー」＝耆艾。

【老革】ラウカク 老兵に同じ。隋書、斎周二蘇威一曰、「ー多レ姦」

【老學庵】ラウガクアン 宋の陸游の宅の名。宋史「陸游ーー筆記十卷」

【老學究】ラウガクキウ 世の用に立たぬ俗學者。正字通「俗儒誦ニ訓故一不レ能レ經レ世、曰ーーー」

【老點】ラウテン 老猾に同じ。

【老眼】ラウガン としよりになりて弱りし眼力。＝老花。

【老齡】ラウレイ 年ふりたる木のみき。張子渊詩「此時唯ーー、幹直不ニ攀折ニ」

【老漢】ラウカン としとりをとこ、漢は男子「十國春秋、李知實傳」

【老枝】ラウシ 年よりの樹。

【老氣】ラウキ ○老練の氣。杜甫詩「ーー橫ニ九州ニ」○俗に人の氣概の凡ならざるをいふ。楓秋といふは、この杜句と、北山移文の「霜氣橫レ秋」の語とを合せて成りしなり。

【老杉】ラウサン おいほれる。嘲歌、大國璋師魏館「以ニ耽沈之利ニ、欲レ役ニーー之齡ニ」

【老牛舐レ犢】ラウギウシトク 老いたる牛が子牛をなめる。子煩惱の喩(後漢書、楊彪傳)權徳輿詩「老牛還舐レ犢、凡鳥亦將レ雛」

【老脚】ラウキャク としよりのあし。楊萬里詩「ーー微能半要レ扶」

【老耽】ラウタン 年老いて困窮する(嘲、祭義)

【老驥伏レ櫪】ラウキフクレキ 有爲の才をいだき晩年に至るまで 不遇なるに喩ふ(魏武帝、樂歌「ーーー、志在ニ千里ニ、烈士暮年、壯心不レ已」

【老軀】ラウク 老いたるからだ、老身。王安石文「以ニ投ニ老軀ニ遭ニ難レ值之運ニ」

【老君】ラウクン ○老子の尊稱。後漢書、孔融傳「先君孔子、與ニ君之先人李ーニ相師友」○國臣下が大名の隱居せし者を呼ぶ尊稱。

【老朽】ラウキウ としよりと、わかものと。

【老儈】ラウクワイ 年老いたるおなか者。南史、王玄謨傳「玄謨謂ニ愛ニーー之曰ニ」

【老蒼】ラウサウ とし老いたる貌、蒼は毛髪の青白くなる義。杜甫詩「結レ交蒼ーー」

【老莊學】ラウサウガク 老子と莊子との學派。金史、顯宗孝懿皇后傳「后好ニ詩書ー、尤喜ニーー」

【老饞】ラウサン 老いて食をむさぼる。陸游詩「ーー自覺筆力短、得レ一忘レ十眞堪レ咍」

【老朋】ラウホウ 物事にたけてわるがしこし。＝老猾・老黠。

【老態】ラウタイ としよりてやむ。北史、賈彝傳「以ニ母ーー、輒在レ家定省」＝老病。

【老兄】ラウケイ ○年よりたる兄。白居易詩「形影默相顧、如ニ弟對ニーーニ」○轉じて年長の友の敬稱。

【老健】ラウケン ○文章などの老練にして勢つよき義。朱熹文「其晩歲筆力ーー」○年老いてすこやか。

【老後】ラウゴ 年をとりしのち。

【老語】ラウゴ としよりのはなし。蘇軾詩「詩祠若ニ璀璨、ーー徒閟諄」

【老公】ラウコウ ○年老いたる貴人の敬稱。

【老功】ラウコウ ○多年の經驗をつむ。○久しく其の事に從ひて功がある。

【老登】ラウトウ おいて心くらし。蘇名「ーー不ニ復知ニ服味善惡ニ」

【老壯】ラウサウ としよりと、わかものと。

【老僧】ラウソウ 年老いたるおなか者。南史、王玄謨傳「玄謨謂ニ愛ニーー之曰ニ」

【老蒼】ラウサウ とし老いたる貌、蒼は毛髪の青白くなる義。杜甫詩「結レ交蒼ーー」

【老莊學】ラウサウガク 老子と莊子との學派。金史、顯宗孝懿皇后傳「后好ニ詩書ー、尤喜ニーー」

【老饞】ラウサン 老いて食をむさぼる。陸游詩「ーー自覺筆力短、得レ一忘レ十眞堪レ咍」

【老子】ラウシ　老耼を見よ。
【老師】ラウシ　○外に在ること久しきにわたりて軍隊をつかさどる。左傳二八「一レー費ノ財」○としよりたる先生。老先生。史記「荀卿最ノ壽ニ一レー」
【老實】ラウジツ　物事になれてまめやか。
【老臣】ラウシン　○としよりたるけらい。漢書、趙充國傳「亡下除ニ一レー者ト」○身分おもき臣。家老。杜甫詩「丹青惜ニ一レー」
【老人】ラウジン　としより。‖老者・故老。
【老人星】ラウジンセイ　南極星の異名の普書、天文志「老人一星在ニ弧南ニ一日ニ南極ニ」
【老身】ラウシン　○としよりたるからだ。白居易詩「唯留一部清商樂、月下風前伴ニ一レー」○後輩に對する自稱。北史、穆崇傳「一ニ二十年」‖老生。
【老親】ラウシン　年よりしおや。‖老父母。
【老若】ラウニヤク　國としよりと、わかものと。‖老弱。
【老弱】ラウジヤク　老人と、わかものと、弱は二十歳（史、滑稽傳）國は弱を若に作る。
【老手】ラウシュ　ものなれたるうでまへ。又、其の人。蘇軾詩「一ニ王摩詰、窮交孟浩然」
【老蘇】ラウソ　ながいき、長壽。後漢書、荀爽傳「陽性純而能施、陰性順而能化、以レ證ニ濟レ樂、節ニ宜其氣、故能體ニ子孫之祥ニ致ニ一レー之福ニ」
【老儒】ラウジユ　年老いて學德並に高き學者。杜甫詩「文物多師古、朝廷半一レー」
【老樹】ラウジユ　老木に同じ。
【老宿】ラウシユク　○修行をつみたる僧。翻譯名義集「體毘履、此ニ云ニ一レー」○年たけて經驗に富める者。蘇軾詩「山中一レー依然在」‖宿老。
【老熟】ラウジユク　物事にたけてなれること。‖老練
【老職】ラウショク　國德川時代、大老・老中などの稱。諸藩にて家老をいふ。
【老衰】ラウスイ　としとりておとろへる。‖老憊。
【老成】ラウセイ　○物事に老練なる義。杜甫詩「髮髮無二遺恨一、波瀾獨一レー」○少くして成熟する。左思、吳都賦「岐嶷レ體、一レー奕レ世」
【老成人】ラウセイジン　經驗をつみて事になれたる人。又、舊臣をいふ。詩、大雅「雖レ無ニ一レー、尚有ニ典刑ニ」
【老生之常談】ラウセイノジヨウダン　少しも發明する所無き平凡なる老人の話。漢志、管輅傳「此ニ一レー」
【老先生】ラウセンセイ　○としよりし先生（漢書、賈誼傳）‖老師。○轉じて年位の高き者を呼ぶ尊稱。明代には内閣諸大臣にもいひ、又己を推擧せし長官をも稱す。
【老少】ラウセウ　○おいたると、ちひさきと。後漢書、周舉傳「冬中一月、莫ニ敢煙爨一一レー不レ堪」○晉の制度にて六十六以上と十二以下と（晉書、食貨志）
【老蛾】ラウガ　月の異名（蛾はひきがへる、月中に居るといふが故）劉基詩「纖闕又缺中天月、猶自寒光媚ニ一レー」
【老蘇】ラウソ　としふりたる首。孔武仲詩「十一瀟疎夕照閒、何人折我翠眼耳」
【老鼠】ラウソ　○年を經たるねずみ。○蝙蝠の異名。
【老蘇】ラウソ　宋の蘇洵（老泉）の異稱。
【老叟】ラウソウ　としより、おきな。白居易詩「白頭一レー泣且言」‖老翁。
【老僧】ラウソウ　老いたるぼうず、老衲。王維詩「一レー四五人、逍遙蹋ニ松柏ニ」
【老痩】ラウソウ　としよりてやせる。陳師道詩「思ノ君得ニ一レー」「鮮ノ熱生ニ後悔ニ」
【老惜大】ラウダイ　老いたる書生。仕學大乘「四十餘年ニ一レー」猶大を見よ。
【老大】ラウダイ　年をとる。杜甫詩「杜陵有ニ布衣ニ一レー窓轉拙」
【老大國】コウタイコク　昔盛んにして今は衰へたる大國。
【老大人】ラウダイジン　○老人長者の敬稱。○他人の父の敬稱。‖尊大人。○國母をいふ。
【老態】ラウタイ　としよりたるすがた。王禹偁詩「一レー厭ニ寒暑、病身憂ニ宿酲ニ」
【老達】ラウダツ　年長者を呼ぶ尊稱、書簡文の用語。‖尊達。
【老體】ラウタイ　年よりたるからだ。‖老身・老軀。
【老聃】ラウタン　老子をいふ。史、老莊申韓傳「老子者姓李、名耳、字伯陽、諡曰レ聃、周守藏室之史也、老子修ニ道德ニ、其學以ニ自隱無ニ名爲レ務、居レ周、久之、見ニ周之衰ニ、迺遂去、至レ關、關令尹喜曰、子將レ隱矣、彊爲レ我著レ書、於レ是老子乃著ニ書上下篇ニ、言ニ道德之意五千餘言ニ而去、莫レ知レ所レ終」聃、俗に聃に作る。
【老耄】ラウモウ　おいたると、をさなきと。耄は稚。蘇軾詩「遙知白谿路、一一相扶攜」‖老幼。
【老娘】ラウジヤウ　國母をいふ。
【老中】ラウチユウ　國德川幕府の時、將軍をたすけて天下の政治を執りし役人。
【老女】ラウジヨ　○ばば。○國武家の侍女の長。
【老奴】ラウド　○年老いたる下男。○五代史、張承業傳「吾王自取レ之、誤ニ一レー矣」‖老僕。○人を輕んじあなどる詞。世說「桓溫取ニ李勢女ニ爲レ妾、妻拔レ刀欲レ斫レ之、及見曰、我見猶憐、何況ニ一レー」此は夫を斥す。
【老杜】ラウト　唐の詩人杜甫の異稱。杜牧を小杜といふの對。
【老婆】ラウバ　老いて食を貪る。蘇軾、老婆賦「蓋寒ニ物之天美ニ、以養ニ吾之ニ一レー」‖老饕。
【老禿】ラウトク　おいて頭がはげる。嫌惡、毛穎傳「中書君老而禿」
【老衲】ラウノウ　としよりたる僧。衲は僧衣。戴叔倫詩「一レー供ニ茶竈ニ、斜陽

送二舟一」

【老年】ラウネン　年の老いたる義。晉書、何曾傳「皆以二一一一

後、朱紫別矣」‖檢覈。
【考究】かんがへきはむ。魏書、高允傳「及二更ニ一ニ、果如二前語一」
【考調】調人をしらべただす。晉書、曹據傳「親察二時俗一、以知二其寃一、更加二詳究一、具得二情實一、時稱二其明一」
【考核】かんがへさる所。‖證憑・考據。
【考料】しけん。‖考試。
【考課】官吏役員などの功績操行などをしらべる。事物紀原「漢京房作二ニ一之法」‖考績。
【考官】試驗を司る官。事文類聚「孝廉篇ニ一ニ、坐レ不二見官一、除二集議舉一」
【考檢】かんがへしらべる。漢書、食貨志「一ニ厥實一」‖檢考。
【考驗】かんがへしらべる。晉書、天文志「周髀術數具存、一ニ天狀ニ多レ所二違失一」‖勘驗。
【考古學】遺跡古物などをかんがへしらべて古代住民に關する事をしらべる學問。
【考査】かんがへしらべる。
【考察】かんがへしらべる。杜預文「弘宣二六典一、以詳二一一」
【考死】拷問ガウせられて殺される。資治通鑑、漢紀「乃詔二詔獄一一」
【考試】しけん。禮、學記、疏「視レ學、謂レ一ニ學者經業一」
【考訓】かんがへのべる。五代史、四夷錄「國地大小、興滅不レ常、烏足二以一一一說」
【考證】○しょうこを引きて考へる。○一學は清朝に盛行せし學風、經子等を彼此考證して研究する學。
【考正】誤を考へ正す。南史、蕭子顯傳「一ニ同異一、爲二一家之書一」
【考索】こゝをしらべる。後漢書「議レ管爲レ律、吹灰一レ一」
【考績】官吏のいさををしらべる。書、堯典「三載一レ一、三考黜二陟幽明一」（幽明は官吏の幽暗なる者と賢明なる者とをしらべて進退する義）‖考課。
【考撰】是非異同をかんがへ作る。東晉文「舍レ疑散レ滯、一ニ同異一」
【考治】拷問ガウしてしらべる。通鑑、漢紀「請下二州郡一一上」‖拷治・掠考。
【考定】かんがへさだむ。後漢書、張衡傳「諸儒二禮樂異議三事一、願下有司一以レ時一一」
【考訂】書物をしらべただす。‖校訂。
【考亭】○地名、福建省建陽縣の西南に在り。○宋の朱熹（文公）の異稱。宋史、朱熹傳「徙二建陽之一一、故事、置レ酒賦レ詩相樂、序齒不レ序レ官、獨熹繪二像其中一、謂二之洛陽一一一」
【考英會】年老いて學德ある人のまどひ。宋史、文彦博傳「與二富鄭公・司馬光等十三人一、用二白居易九老會故事一、置レ酒賦レ詩相樂、序齒不レ序レ官、獨熹繪二像其中一、謂二之洛陽一一一」
【考槃】世を避けて己の思ふまゝに樂む。考は成す、槃は盤桓して樂む意。一說に考は扣ク槃は樂器、それを擊ちて樂む。詩、衞風「一一在レ澗、碩人之寬」
【考妣】考は死にたる父、妣は死にたる母。曲禮「生曰レ父曰レ母、死曰レ考曰レ妣」
【考問】罪跡をとりしらべる。漢書、外戚班婕妤傳「許皇后廢ニ一一」
【考覽】かんがへみる。晉書、郭璞傳「一ニ奇書一、率多二隱語一、難レ可二卒解一」
【考慮】かんがへおもんばかる。
【考度】かんがへはかる。

【者】

㊀キ・ギ　㊁シ・ジ　㊂シャ　㊃ショ

㊀おゆ（老）○としより（老人）先賢行狀「養二育孤一」○六十歳（一說八十歳）○つよし（強）左、昭二三「不撓不一一」㊁たしむ「一欲」‖嗜。㊂いたす、いたる（致底）

【者英會】年老いて學德ある人のまどひ。宋史、文彦博傳「與二富鄭公・司馬光等十三人一、用二白居易九老會故事一、置レ酒賦レ詩相樂、序齒不レ序レ官、獨熹繪二像其中一、謂二之洛陽一一一」
【者儒】年たけたる儒者。十六國春秋、前秦錄「高平薛通、具樂制詳、如頑學一一、尤精二禮一一」‖老儒・宿儒。
【耆宿】シュク　老いて學德ある人。年老いたる宿儒。後漢書、樊儵傳「一一大賢、多見二賓禮一」
【耆德】ケイトク　老成にして德高き人。晉、伊訓「遵二一一、比二前輩一」
【耆婆】ギバ　○天竺の影堅王の子、善見太子の庶兄、生れながらにして針藥の術を持つ、長じて名醫となる（書婆經）○梅樂に在りといふ共命鳥ギミャウの異名（雜寶藏經）
【耆老】キラウ　としより、老は七十歳。唐鑑論「優二一一、而明二養老一」
【耆艾】キガイ　耆は六十歳、老は七十歳、老人をいふ。禮記「王者養二一一、尊二道德一、不レ失レ耆則至」

【者】

者（次畫）の俗字。

【耄】バウ モウ 號

一音マウ 通じて旄に作る

○おゆ、おいぼれる、年をとりてぼける、もうろくする「老ー」「衰ー」又、其の人、おいぼれ。○七十歳（一說に八十歳又九十歳）

【耄矣】バウイ おいぼれる。左、隱四「老夫ー、無二能爲一也」

【耄期】バウ 耄は八十又、九十歳、期は一百歳。又、おいぼれる。書、大禹謨「ー—倦二于勤一」

【耄荒】バウ ○おいぼれる。又、其のとしより、耄は八十歳。魏武帝歌「ー—皆得二以レ壽終一」○白髮の貌。釋名「七十曰レ耄、頭白耄耄然也」

【耄齡】バウ 七八十歳。宋濂詩「年已近二ー—一」

【耄昧】バウ 國おいぼれる。

【耋】テツ 屋 耋に同じ

○おゆ（老）○としより、老人。○七十歳（一說、八十歳）

【耋又】テツイ 老年と少年と（又は少艾）一說に艾も老。韓愈、南海神廟碑「ー—歌詠」

而部

【而】ジ 支

【而老】ジラウ としより、老人。國語「廉二恭明神一而敬二事ー—一」

【耆】

耆（前條）に同じ。

【者】シャ 馬

○もの、人を指していふ「使ー」「好事ー」「肉食ー」史、呂不韋傳「行二金六百斤一予二守ー」又、事物・場所を指していふ。左、昭三「請更諸爽塏ー」○この、これ（此）「一箇」○は。事を別つ詞。中庸「仁ー人也」「義ー宜也」（也ー とも連用す）又、則の字に類するもの。何ー ナンゾ 然ー シカル の如し。○語勢を強める爲めに添へる「王ー」「君子ー」「昔ー」

【耋】テツ 屋 耋に同じ

○おゆ（老）○としより、老人。○七十歳（一說、八十歳）

【耋又】テツイ 老年と少年と（又は少艾）一說に艾も老。韓愈、南海神廟碑「ー—歌詠」

【而】ジ 支

○しかして、しかして、して、で、接續詞。論、學而「學ー時習レ之」○しかれども、しかも、しかるに、其れでも。孟、梁惠王「吾有二司レ死者三十三人一、ー民莫二之死一也」○て、にて、にして。○なんぢ（汝）○すなはち。＝乃。○ごとし（如）○字句に添へる助字。論、微子「已ー已ー、今之從二政者一殆ー」○よく、よくす（能）○ほほ（頗）の毛。○ー已には唯それぱかりの義。論、子罕「九人ー已」＝而已矣。

【而已】ジニ 而・然・爾○而はて、にて、して、しかるに、しかも、などと訓み「承レ上起レ下之辭」と註す、されば而の字を句中に置くときは、必ず上下二義あり、上下の二義、折ることあり「哀而不レ傷」の如し、折れざることあり、左傳に「有レ威而可レ畏、之謂レ威」の如し、折るる場合には、しかもと訓むべし。○然は而と同用にして、意通し、しかれどもと訓むときは、雖レ然の義にして語勢し。○爾は如レ是の義にて、然と同じ、卓然を卓爾、率然を率爾などといふにて知るべし、但し然の字よりは意輕し、爾の字、のみと訓むときは、又これを輕用するなり、爾時は然りし時の義にて、其の當時を指していふ、故に爾の字を下に指辯とも解す。○而已・已・耳・爾○而已は而して已むを輕く用ひて助辭としたるなり、もはやそれにてすむ、已一字よりは重し、而已矣と用ふれば、意遒に強し、論語に「子曰、辭達而已矣」また史記に「快二意當前一、適レ觀而已矣」また同書に「苟有二用レ我者一、朞月而已矣」の如し。○已は昔イ語終詞と註す、止やの字の義なり、これぱかりぢやと譯す、而已をつめていふなり、老子に「天下皆知二美之爲レ美、斯惡已」とあり、已矣と用ふれば意強し。○耳は無レ斷と註す、爾がこれぢやといふ義、史記に「晉甘茂之孫甘羅年少耳、然名家之子孫」の如き、其の人を一なぐりに、こなしていふ意あり。孟子「幾與レ人同耳」已・爾二字よりは輕し。○爾は耳と同じくして稍重し、其の物を指し定めて、これぱかりぢやといふ意あり。

【而還】ジクワン その後、それから。＝以來・爾來・而後。

【而後】ジゴ 今よりのち。＝以後・而往・今後。

【而今而後】ジコンジゴ 今より以後。論、泰伯「ー—、吾知レ免夫、小子」＝今後。

【而立】ジリフ 三十歳をいふ。論、爲政「三十ー—」とあるに本づく。

【而已】ジイ 盡くして他に餘すことなき意を表す助字。論、里仁「夫子之道、

忠恕ニ―耍」

【耍】ゼン　ネン　三畫　而部

○やはらか(柔)漢書、司馬遷傳「以ニ―脆之體」‖輭。○よわし(弱)○退きて進まず。○うごめく。‖蝡。

【耍國】ゼンコク　よわきくに。戰國策「郢魏者楚之ー―、而秦楚之強敵也」‖弱國。

【耐】㊀ダイ　㊁ドウ・ノウ　隊　通音　タイ

㊀たふ、たへる、其の事に任へる(堪)○たへしのぶ、こらへる、がまんする(忍)○ほほひげをそり落す刑。‖彫。㊁よく、よくす。古、能に通ず。禮、禮運「故聖人ー以ニ天下ー爲ニ一家ー」

同訓異義　耐・堪・勝・任・禁・能○耐は、もちこたへる、忍耐と熟す、また耐ノ久・耐ノ寒などと用ふ。○堪は、しんぼうして成しとげる義。左傳「君欲ニ已甚、其何以堪ノ之」○勝は、あげてとも訓む、先方のものにおしかつ意。難ノ勝ノ數に、數多くして數へきれぬ義。孟子「材木不ノ可ニ勝用ニ」○任は力のつづきてたへる義。白起傳「病不ノ任ノ行」○禁は、とどめて外へもらさぬ義。文選「含ノ哀摸ノ悴、不ノ能ニ自禁ニ」○能は晉タイ耐に同じ。趙充國傳「漢馬不ノ能ノ冬」

【耐看】タイカン　看るに足る。倪瓚詩「遠岫疎林亦ー―レー」

【耐久朋】ナイキウホウ　始終心を變へざる親友。三國志「魏文同與ニ袁紹一締ノ交、能保ニ始終一、時人呼爲ニ―――ー」

【耐火】タイクワ　火にあひても燒け損ぜず、火にやけぬ。

【耐震】タイシン　地震にあひても毀損せず。

【耐水】スイタイ　圖水にあひても毀損せず「ーー紙」

【耐忍】タイニン　たへしのぶ。荀、仲尼「能ーニー之ー」‖忍耐。

【耐煩】タイハンクワイ　わづらはしきをこらへる。劉希夷詩「幽人不ノレーレー、振ノ衣步ニ閑寂ニ」

【彤】㊀ダイ　㊁ジ　支　隊

㊀ほほひげをそり落す刑、死よりは輕く、ただ頬毛を剃るのみ。漢書、功臣侯表「ー爲ニ鬼薪ニ」ー(頬毛)に耐に作る。㊁ほほひげ(頬毛)

【耑】タン　寒

はし、こぐち。‖端。

耒部

【耒】ライ　ルイ　灰　隊

○すき、手に持ちて土をおこす農具。古史考「神農作ノレー」○すきのえ。木を曲げて作る。

【釋レ耒】スイライ　すきをすてて耕作をやめる。史、淮陰侯傳「今將軍名聞ニ海内一、威震ニ天下一、農夫莫レ不ニ輟ノレー耕ノレー褕衣甘食傾ノ耳以待ニ命」‖投ノレ耒・輟ノレ耒・捨ノレ耒。

【執レ耒】シツライ　晉書、禮志「躬ノレー以奉ニ社稷宗廟ー」‖秉耒・操ノレ耒。

【輟レ耒】テツライ　すきを以て耕すことをやめる。前史、賀革傳「ーレー就ノレ文受ノレ業、精力不ノレ怠」

【耒鋪】ライホ　すき。鋪非、五篇「身執ニーー」‖耒耜。

【耒耜】ライシ　すき、農具の名、耒は其の柄。耜は其のさきの土に入る所(古は木にて作る。後世は鐵を用ふ)禮、月令「修ニーー一具ニ田器ー」‖耒鍤。

【耒師】ライシ　すきにて耕し又草ぎる。易、繫辭「斲ノ木爲ノレ耜、揉ノ木爲ノレ耒、ーー之利、以教ニ天下ー」

【耔】シ　紙　支

つちかふ。苗の根に土をかけて培養する「耘ー」詩、小雅「或耘或ー」

【耘】ウン　四畫　耒部　文　問　或は芸に作る

○くさぎる、田の草を除く。○のぞく(除)惡しき者を除き去る。史、東越王傳「不ノ戰而ー」

【耘耘】ウンウン　盛んなる貌。胡銓文「慶ニ千楹之ーー」

【耘鋤】ウンジョ　くさぎりうるる、農業。晉書、石季龍載記「今或盛ニ功于ーー之辰一、或煩ニ役于收穫之月一、誠非ニ聖君仁后之所ニ忍爲一也」‖耕耘。

【耘籽】ウンシ　くさぎると、苗の根につちかふと。詩、小雅「今適ニ南畝一、或耘或耔」陶潛、歸去來辭「或植ノ杖而ーー」

【耘鋤】ウンジョ　○くさぎりすく。曹植文「ーニー擬草ニ○轉じて國土をたひらぐ。

【耘薙】ウンテイ　くさぎりのぞく。陳遵詩「種時易ニーーー」

【耕】カウ　庚　又、畊に作る

○たがへす、たがやす、すく、すきや鍬にて田畑の土をす

き反す「躬ー」「力ー」「耦ー」「深ー」「歸ー」「墾ー」○たがやす如くに力を致して怠らず。揚子「ー道得レ道」○たがやす如くにかせぎて食を求める「筆ー」「舌ー」○以上の名詞。

【耕耘】コウウン　たがやしくさぎる。杜甫詩「曉野自ー」

【耕耨】コウドウ　たがやして穀物をふるつける。孟、公孫丑「ー陶漁」‖耕種・耕鋤。

【耕牛】コウギュウ　耕作に用ふるうし。陸龜蒙詩「欲下資ニー乾ー水田上」

【耕畜】コウチク　田をたがやし、けものを飼ふ。史、越世家「父子ー、履屐候レ時、持レ物送ニ什一之利ニ」‖耕牧。

【耕織】コウショク　たがやすと、すなどりと。後漢書「非ニ身所ニーー一不レ食」

【耕獲】コウカク　田をたがやし穀類をかりとる。易經「不ニーー一、不ニ菑畬一」李綱詩「君不レ見伯威子高處ニ侯爵一、在レ野終ニ年自ーー」

【耕藝】コウゲイ　たがやしうえつける、農業。晉書、朱沖傳「好レ學而貧、晝以ニーー一爲レ事」

【耕墾】コウコン　田畑をたがやしひらく。宋史、常同傳「纔レ民ーー、勿レ收ニ租稅一」‖耕作。

【耕桑】コウソウ　耕作と養蚕と。漢書、昭帝紀「ーー者益衆、而百姓未レ能ニ家給一、脫甚緊焉」‖農耕・耕織。

【耕作】コウサク　たがやしつくる。史、越世家「越王勾踐身自ーー、夫人身自織」

【耕墾】コウコン　たがやすと井を鑿ると。唐太宗賦「肆ニ黎元于ーーニ耕田參看。

【耕耘】コウウン　田をたがやし、かひこを飼ふ。耕作運轉。宋書、武帝紀「ーー樹藝、各盡ニ其力一」‖農耘。

【耕種】コウシュ　たがやしうえる。漢書、食貨志「厚ニーー養苗法一」‖耕作・耕藝。

【耕鋤】コウジョ　たがやしすく。杜甫詩「不レ知ニ指ニ青畴ーーニ」

【耕鑿】コウサク　たがやしうえる。国語文「余家貧、ーー不レ足ニ以自給一」

【耕織】コウショク　田をたがやし蚕をおる。後漢書、梁鴻傳「以ニーーニ爲レ業」

【耕地】コウチ　○土地をたがやす。王建詩「借レ牛ーレ晩、買レ樹納レ錢遲」○田畑「ーー整理」

【耕地整理】コウチセイリ　耕地の利用を増進する爲めに田畑・道路・溝渠の變更廢置を爲す制度。

【耕釣】コウチョウ　田をたがやし魚をつる。孟浩然詩「ー一方自逸、赤觸連不レ空」

【耕田】コウデン　たをたがやす。擊壤歌「鑿レ井而飲、ーレ一而食」

【耕耨】コウドウ　たがやしくさぎる。孟、梁惠王「深耕易耨」‖耕耘。

【耕農】コウノウ　田を作る百姓の仕事。又、其の百姓。

【耕墾】コウコン　寄留して耕す農民。柳宗元文「買ニ土一廛ニ爲ニーー一」

【耕紡】コウボウ　田をたがやし、苧をうむ。梅堯臣詩「凡百ニ二千石「唯在レ勤ニーー一」

【耕當レ問レ奴】コウトウモンド　事は専門の者に問ふべしといふ喩。宋書、沈慶之傳「ーー、縫當レ問レ婢」

【耕牧】コウボク　田をたがやし、けものを飼ふ。孔武仲詩「道逢ニ田閒叟一、時訪以ニーー一」

【耕傭】コウヨウ　耕作にやとはれる。又、其の人。後漢書、孟嘗傳「隱ニ處窮澤一、身自ーー」‖傭耕。

【耗】

㊀カウ　㊁バウ・モウ　㊂バウ

有　號　號

㊀へる。へらす（減）むなし（虛）‖耗。○きゆ（消）「消ーー」○つひやす（費）○うすし（薄）○やぶる（敗）○あし（凶・惡）○おとづれ（音信）「音ーー」㊁みだる。みだす（亂）多くして亂れる。○明かならず。‖眊。㊂つく（盡）○なし（無）

（補訂）耗・減の別は減（水部九畫）の條を見よ。

【耗減】コウゲン　へる。魏志、杜畿傳「是時天下郡縣皆殘破、河東最先定、少ーー一、畿治レ之、勸ニ課農桑一、與レ民無レ爲」‖損減・縮減。

【耗散】コウサン　つひやしちらして失ふ。素問「以ーーニ其眞一」‖消散。

【耗羨】コウセン　官吏が繳納を徴收するに正額以外に若干を多く取る義。

【耗土】バウド　やせたる地。蔬海の土。大戴禮、易本命「ーー之人醜」

【耗斁】コウト　へらしやぶる。へりやぶれる。詩、大雅「ーニ下土一」‖敗亡。

【耗惫】コウトウ　物の減ずると、增すと。張方平論「凡物力之充屈、繫ニ生齒之ーー一」

【耗問】コウブン　おとづれ。耗はへる、消息の消の義。漢書、鼂錯傳「不ニ相往來一、不レ通ニーー一」‖音耗・信耗・息耗。

【耗磨日】コウマノヒ　正月十六日の稱。此の日、酒を飲みて樂むこと社日の如くす。丹鉛總錄「正月十六日謂ニ之ーー一、此日必飲レ酒」

【耗竭】コウカツ　全く盡きて無くなる。漢書、高惠高后文功臣表、注「師古曰、孟解非也、言レ無レ有ニ獨存者一、至レ於ーー上也」

【耗亂】コウラン　みだれて明かならず、耗は眊。漢書、景帝紀「不レ事ニ官職一、ーー者悉相以聞」

【耖】

サウ　セウ

○まぐは（耙）○重ねてたがやす。

【耙】ハ　禡
まぐは(馬鍬)田をからすきにて耕したる後、更に土のかたまりをこなしならす農具、高さ三尺横四尺ばかり、上の両端に柄あり下に歯ありて牛馬に牽かせて用ふ。農政全書「制有ニ方ー有ニ八字ー」
【耙地】ハヂ　牛馬に引かせて田のつちくれをくだきならす器。

五畫

【耡】カ　麻
連ーレンはからさを。穀を打つ具。＝連枷。

【耜】シ　紙　もと枷に作る
すき。来ライの先につける木、又は金(鉄・来端)「来ー」「良ー」

七畫

【耡】ショ　魚　御　通音ジョ
○すき。＝鋤。○すく。○たすく、人民相助ける。○周代の税法の名。＝助。

八畫

【耦】㊀ヤキ・ジャク　㊁シャ　遇　阮
㊀ー田は天子の宗廟に供へる為めに男ら耕す田。漢書、文帝紀「開ー田」＝藉田。○かる。かす(借)漢書「以」躯ー」友報仇」㊁しきもの。＝藉。

九畫

【耦】ゴウ　グ　有　偶に通ず　通音グウ
○たぐひ(匹)＝偶。○あひて、つる(対)物事の二つならぶ義。○ともがら。○つれあひ(配)「嘉ー」左、桓六「人各有ー」○ならぶ、つれあふ。○あふ(遇)○かなふ(諧)○ちやうのかず(偶数)奇の対。○周代の制、両人相ならびて耕す「ー耕」又其の儀さのうね。説文「来廣五寸為伐、二伐為ー」
【耦耕】ガウ　両人ならびてたがやす。潘詩「函歌非ニ吾事一、依依在ニ耒ー一」
【耦語】ゴウ　相向かひて私ヒソヒソにかたる。漢書、高祖紀「ー者乗市」
【耦刺】グウシ　二人さしちがへて死す。
【耦数】グウスウ　ちやうのかず。奇数の対。朱熹文「洛書以ニ五奇数一、統ニ四ー一ー」＝偶数。

十畫

【耨】㊀ドウ　㊁ヂュク・ノク　沃　宥
㊀くは、田をすき草を除くに用ふる農具。＝鋤。○すく(働)くさぎる(耘)㊁すく、くさぎる。○阿ー多羅ノクラは梵語、無上の義。
【耨耕】ドウカウ　くさぎりたがやす。荀子「慎ニ一ー一而捨ニ農夫一、猶ニ鄧析一而為ニ工匠一」孟、梁恵王「深耕易ー」＝耕耨・耕耘。

十一畫

【耬】ロウ　尤
ー車はたねまき車、牛に引かせつつ種を下すしかけせしもの。

十四畫

【耬】クック　薬
いねかる(刈穀)

十五畫

【耰】イウ　尤
○土ならし、田畑の塊クワイをたたき砕く椎ツイ○すき(働)○種をまきて土を覆ひかぶせる。論、微子「ー而不ー輟」
【耰鋤】イウヂョ　すき。淮南、氾論「長勢而利施、後世為ニ之来耜一ー一」

耳部

【耳】㊀ジ・ニ　㊁ショウ　蒸　紙　通音ジ
㊀みみ、五官の一、音聲を聴くことを掌る器官。○物の両旁に附きて人の耳の如き形せるもの。史、封禅書「有ー雄登鼎ー」○のみ、そればかり(而已)論、陽貨「前言戯ニ之ー」○字句に添へる助字、矣の字の義に似たり。○ーは盛んなる貌。一説に柔従の貌。㊁やしごのひまご(玄孫の曾孫)一説にやしごの子(玄孫の子)＝仍。○圀みみ、物の端。
【耳朶】ジダ　耳・已・已矣・而已・爾の別は而(部首六畫)の條を見よ。
【耳学】ジガク　みみがくもん。聞きおぼえの學問。南史、沈慶之傳「慶之属ー卒曰、汝人雖ー見ニ古今一、不ー如ニ下官ー一也」
【耳下腺】ジカセン　耳の下にある唾液腺。
【耳科】ジクワ　耳を治療する醫術。
【耳環】ジクワン　みみわ、女子が耳たぶに

穿ちはめる装飾のわ。南史、林邑國傳「穿レ耳貫二小環一」杜甫詩「玉環穿レ耳誰家女」

【耳言】ジゲン 耳に口をつけてはなす、ささやく。舊唐書「與二李承嘉一ー一」＝耳語。

【耳語】ジゴ 耳に口をつけてささやく。史、魏其武安傳「與二程不識一ー一」

【耳孔】ジコウ みみのあな。

【耳垢】ジコウ みみのあか。＝耵聹。

【耳耳】ジジ 至りて盛んなる貌。一說に柔かに從ふ貌。詩、魯頌「六轡ー一」

【耳視】ジシ 耳にきくしのみにて其の是非をきはめずして事を行ふにいふ。司馬溫公、迂書「衣冠所二以爲一レ貌也、稱レ體斯美矣、世人舍二其所一レ稱、聞二人所一レ尚而慕レ之、豈非二以レ一ー一者一乎」

【耳珠】ジシュ みみかざりのまた。風俗通「ー一曰レ璫」＝耳璫。

【耳順】ジジュン 六十歳をいふ。論、爲政「六十而ー一」漢書、高惠之傳「至二於ー一之年一」

【耳食】ジショク 徒に他人の說を聞きて之を信ずるにいふ。史、六國表「此與二以レ一ー一無レ異」注「ー一不レ能レ知レ味也」

【耳朶】ジダ みみたぶ。五雜俎「元風吹二ー一ー一」

【耳墜】ジダ 前條に同じ。

【耳璫】ジタン 婦人の耳飾（みみかざり）。後漢書、輿服志「簪珥ー一垂珠」

【耳提面命】ジテイメンメイ 深切に教ふるにいふ。詩、大雅、抑「匪二面命一レ之、言提二其耳一」

【耳聞不レ如二目見一】ジブンシカモクケン 耳に聞くは目に見るには及ばず。魏書、崔浩傳「ー一、吾曹目見何可二共辨一」

【耳剽】ジヒョウ 聞きおぼえの學問。劉禹錫、遠望賦「非ー一以聽說一兮、固國求而縱觀」＝耳學。

【耳鳴】ジメイ みみがなる。己のみ知りて他人の知らざるにいふ。北史、李士謙傳「夫盲二陰德一、其猶ー一、己獨知之、人無二知者一」

【耳目】ジモク ○みみと、めと。列子「愼二ー一之觀聽一」○轉じて人の手先となる者。史、張耳傳「趙人多爲二耳餘（張耳・陳餘）一ー一者一」○人を指導する者に喩ふ。韓愈、爭臣論「聖賢時人之ー一、時人聖賢之身一」

【屬二耳目一】シヨクモクス 耳と目とをつけて、よくみききする。左、成二「師有レ功、先入レ問、入必ー一」＝屬レ耳。

【耳目之官】ジモクノカン 視察をつかさどる官。孟、告子「ー一、不レ思而蔽二於物一」

【耳餘】ジヨ 張耳・陳餘の二人、始は刎頸の交を爲し、後ち勢利を以て互に相傾け奪ひ、世の笑となる。范成大詩「勢利紛然背ー一」

【耳孫】ジソン 玄孫の子をいふ。高祖を去ること遠く、但耳に之を聞くのみといふ義。一說に耳は仍。淡書、景帝紀、注「ー一者玄孫之子也」

【耳輪】ジリン 耳の外部。王維詩「萬事風吹過ニー一」＝耳殼・外耳。

【耳力】ジリョク みみにきくちから。孟、離婁「侯嬴ニー一ー一焉」

【耳聾】ジロウ みみがつんぼになる。戰國策「蘇秦曰、舌敝ー一、不レ見二成功一」

【動レ耳】ドウジ 耳を感じ動かす。漢書、禮樂志「繇是而教誨者、威儀足二以充一レ目、音聲足二以ー一レ」高唐賦「感レ心ー一、動二腸傷一氣」

【掩レ耳盜レ鐘】エンジトウショウ 己の惡事を人の聞かんことを畏れて自ら耳を掩ふとも益なき義。呂覽、范氏亡、有レ得二其鐘一者、欲二負而走一、則大鐘不レ可レ負、以椎毀レ之、鐘聲然有レ音、恐二人聞一之而奪レ己、遽掩二其耳一、惡レ聞二其過一、亦猶レ此也」＝掩レ耳盜レ鈴。

【掩レ耳盜レ鈴】エンジトウレイ 前條に同じ。朱熹文「成レ書不レ出二姓名一、以避二近レ名之譏一、此與二掩レ耳偷レ鈴之見一何異」＝塞レ耳偷鈴。

【傾レ耳】ケイジ 注意してきく。禮記「ー一而聽レ之」＝側レ耳。

【清レ耳】セイジ みみをさっぱりとする。澄懷錄「李建勳嘗言二玉磬尺餘一、聲極清越、嘗有下讀二漫俗語一者上則起擊數聲、曰聊以レ一ー一」

【屬レ耳】ショクジ 耳をつけて善くきく。戰國策「趙使者來レ一ー一」＝傾レ耳。

【側レ耳】ソクジ 耳をかたむけ氣をつけて善くきく〔史、劉昌傳〕＝耽レ耳・傾レ耳。

【擡レ耳】タイジ 耳をそばだてて聞く。淮南子「諸侯必ー一」

【貴レ耳而賤レ目】キジセンモク 聞く所を貴びて、見る所を賤む。人の外の淺きをいふ。張衡、東京賦「所レ謂末學膚受、ー一者也」

【帖レ耳】チョウジ 犬などが耳を垂れる。喜び又は諂ふさま。韓愈、與二孟簡一書「人一書、俛レ首ー一レ、搖レ尾而乞レ憐者」

【耳熟】ジジュク 耳に聞きなれる。歐陽修、論二河北一事一劄「吾ー一矣、故能詳也」

【耳加レ聰】ジカソウ 耳が善くきこえる、かしこさをます義。說苑「齊桓公得二管仲隰朋一、曰、吾得レ聽二二子之言一、吾目加レ明、ー一」

【入レ耳著レ心】ニュウジチャクシン 聞きたることを心に留めて忘れず。荀、勸學「君子之學也、入二乎耳一、著二乎心一」

【入レ耳不レ煩】ニュウジフハン 耳に入りて聞き苦しからず、諂ふことばをいふ。韓愈、送二李愿歸二盤谷一序「才德滿レ前、道二古今一而樂二盛德一、ー一」

【忤二於耳一】ゴジニ 善言は耳にさからひて心に入り難し。韓非、難言「且至言ー一而倒二於心一、非二賢聖一莫二能聽一ニ」＝逆耳。

【諂耳】テンジ 耳にこびへつらふ。管子「淫聲ー一、繚亂諂目」

【耳熱】ジネツ 甚だしく酒にるふにいふ。

ふ。淳誓、楊惲傳「酒後――、仰レ天拊レ缶、而呼二烏烏一」

二畫

【耵】 テイ　チャウ　梗　青

―聤ナイはみみのあか、みみくそ(耳垢)

三畫

【耶】 ㊀ヤ　㊁ジャ　麻　麻

㊀俗語、父の稱、おやぢ。杜甫詩「見―背面啼」＝爺。○や、か(疑問の辭)＝邪。○莫―ヤク(ク)は古の名劍の名。＝鎖鍔。○汙―は低き田地。○―蘇ノ教は基督教。㊁よこしま。＝邪。

同訓異字　耶・邪・乎・歟・與の別は乎(ノ部四畫)の條を見よ。

【耶孃】ヤジャウ　父と母と。杜甫、兵車行「―― 妻子走相送、塵埃不レ見咸陽橋」＝爺孃・爺娘。

【耶馬臺】ヤバタイ　古、支那人が日本を稱する語、やまとのあて字(後漢書、倭國傳)＝耶馬臺。

【耶律楚材】ヤリツソザイ　元の名臣、字は晉卿、太祖に從ひて四方を平定し、太宗の時中書令に至る、博學能文、心を治理に留し、凡そ家古の陋風悉く之を改革す、常に曰はく「興二一利一、不レ如レ除二一害一、生二一事一、不レ如レ省二一事一」と、太宗の十六年卒す、年五十五、文正と謚す、其の著に湛然居士集あり。

【耶耗】ジャカウ　よこしま。荀、成相「―― 倚同失二道途一」＝邪耗。

四畫

【耿】 ㊀カウ　梗　㊁ケイ　梗　青

㊀あきらか、明白(炤)晉語「其光―於民一矣」○ひかり。○つつしみ儆しむる貌。○―は心に存して忘るる能はざる貌。又、心の安んぜざる貌。又、小ニスしく明かなる貌。○堅く志を守る貌。㊁ひかり。㊂あきらか、明白。

【耿介】カウカイ　○堅く心を守る、介は心專一にして世俗に合はざる義。馮衍、顯志賦「獨―而蔡レ古兮」○光りて大いなり。楚辭「彼堯舜之―兮」

【耿耿】カウカウ　心安んぜざる貌。詩、衛風「―― 不レ寐、如レ有二隱憂一」一說に小明なり、心に存する所ありて忘るる能はざる貌。

【耿烱】カウケイ　あきらかなるひかり。陸雲賦「仰二動華之―一」

【耿光】カウクワウ　あきらかなるひかり、盛德の形容。書、立政「以覲二文王之―一、以揚二武王之大烈一」

【耽】 タン　覃　虞

○ささやく(耳語)○みみなり、耳中の聲。○つんぼ(聾)○―クワウは大聲の形容。又、雷の聲。法言「非二雷非一霆、隱隱―一」○鏗―は大聲。左思、吳都賦「鏗鼓之鏗―有レ殷」

虞・祝・吮の耽と混用するは誤

○ふける、度を過して樂しむ「荒―」「深―」○耳大いにして垂れる。淮南、地形「夸父―耳、在二其北方一」○―は宮室のおくぶかき(深窪)貌。又、樹の蔭の重なる貌。

【耽悅】タンエツ　ふけりてよろこび樂しむ。吳志、謝「折レ節好レ學、―― 書傳」

【耽好】タンカウ　心をもつぱらにしてふけりこのむ。北史、常景傳「自レ少及レ老、―― 經史一」

【耽玩】タングワン　たしみもてあそぶ。吳志、士燮傳「―― 春秋、爲二之注解一」

【耽嗜】タンシ　ふけりたしなむ。閻復文賦「仰二動華之―一」

【耽習】タンシフ　ふけりならふ。北史、于仲文傳「少聰敏、智畧就レ學、―― 不レ倦」

【耽耽】タンタン　○おく深き貌。張衡、西京賦「大廈―― 」○樹の陰の茂り重る貌。左思、吳都賦「玄陰―― 」

【耽酣】タンカン　ふけりおぼれる。唐書、元德秀傳「人情所二―― 一」＝耽湎。

【耽讀】タンドク　書物をふけりよむ。

【耽湎】タンベン　酒色にふけりおぼれる。晉書、孔嶷傳「性嗜レ酒、嘗與二親友書一云、今年田得二七百石秫米一、不レ足レ了二翻藥事一、其―― 如レ此」＝荒湎・淫湎。

【耽味】タンミ　ふかくあぢはふ。陸雲文「兄前表、其有二深情遠旨一、可レ―― 高文一也」

【耽樂】タンラク　ふけりたのしむ。書、無逸「惟―― 之從」註「過レ樂謂二之耽一」＝樂耽。

【耽無】タンム　ふけりしたふ。

【耽戀】タンレン　ふけりまとふ。岑參詩「獻公恣二――一、親レ子如二仇讐一」

五畫

【聃】 タン　覃　聸は俗字

○耳たぶが廣くして輪廓無し。○周代の哲學者老子の名。禮、曾子問「吾聞諸老―― 」

【聖】 聖(心部六畫)の俗字。

【聿】イウ　有
しつか(幽靜)
【聿聿】イウ しづかなる貌。唐山夫人安世房中歌「清思――、經緯冥冥」

【聆】シン　侵
○きく(聽)○つぐ(告)

【聆】レイ　青
○きく(聽)「靜―」「側―」「傾―」○―はさとる(曉解)貌。
同訓異義 聆・聽・聞・昕の別は聽(耳部十六畫)の條を見よ。

【聊】㊀レウ　㊁リウ　蕭　尤
㊀いささか、かりそめ、しばらく(姑且)ちょつと。○ねがふ(願)○たのしむ(樂)「無―」○よる、たのむ(賴)安んずる。史、張耳陳餘傳「使三天下父子不相―一」○みみなる(耳鳴)○おそれる貌。○字句に添へる無意味の助字。詩、唐風「椒―之實」○―浪はほしいまま(放縱)なる貌。左思、吳都賦「相與―浪乎昧莫之垠」㊁―賦はしんばいして耳なる。楚辭、九歎「耳―啾而愾慌」○屬に同じ、華―は古の名馬。漢書、地理志「華―綠耳之乘」
同訓異義 聊・薄○聊は、わざとばかりと譯す、うちばにする義「不三敢博大一之辭」と註す「取二一屬一授レ之、聊以屬レ行」の如し。○薄は少也、略也と註す、輕少の義。詩、召南「薄言采レ之」
【聊爾】レウジ かりそめ。晉書、阮咸傳「未レ能レ免レ俗、聊復爾耳」
【聊賴】レウライ 安んじたのむ。漢書、張耳傳、注「言レ無二一以相保賴一」(無二一は心に安んぜざる義)
【聊復爾爾】レウフクジジ しばらく是の如くする。聊爾參看。

六畫

【聒】クワツ　黠
○かまびすし(譁)やかまし、語雜りて聲囂しし「喧―」○―はおろか(無知)なる貌。又、多言にして人の意を亂る。
【聒聒】クワツクワツ ○無知なる貌。一解に多言にして人の意を亂る。書、盤庚「今汝―、起二信浮言一」○かまびすしき貌。梅堯臣詩「―― 號鳴蛙」‖聒然。
【聒聒見】クワツクワツケン くつわむしの異名、形、蜻蜓に似、鳴聲高く、やかまし。‖楊雄、紡樹賦。
【聒子】クワツシ 春の水のぬるみておたまじやくし(蝌の子)の初めて水の如き液より出でたるもの。本草集解「二三月雷蟄蟲振二腸於水際草上一、變猶如レ粟、日見二黑點漸深一、至二春水時一、鳴以聒レ之、則科斗皆出、謂二之――一」
【聒耳】クワツジ 耳にやかまし。李白、美人舞歌「始知譜曲不レ可レ比、朱絃清梅徒―レ」
【聒然】クワツゼン 聲のやかましき貌。‖雜然。

七畫

【聡】㊀ソウ　㊁シウ　東
㊀聽(耳部四畫)に同じ。

【聖】セイ　敬
○ひじり、事に於て通ぜざる所なき義。又、其の人。智德の最も傑出する義。人格を修養して至極の地位に到りし義。又、其の人。○天子の敬稱「―上」「―天子」○天子に關する物事の上に加へていふ敬語「―恩」「―旨」「―感」○特に其の道に秀でたる人「詩―」「草―」○清酒の異名。濁酒を賢といふの對。李適之詩「樂―且銜レ杯」(魏謂の聖人參看)○通稱 高僧をいふ。
通なり、耳に從ふ、至の聲、俗に壬又、王に從ふは非。
【聖意】セイイ 聖人のこころ。後漢書、徐防傳「五經久遠、―義レ明、宜下爲二章句一、以結中後學上」
【聖域】セイイキ 聖人の地位。韓愈、進學解「紹レ述離レ倫、優入二―一」‖聖境。
【聖運】セイウン 天子の御まはりあはせ。
【聖】セイ【聖】セイ【人】ジン たらんと願ふ。周敦頤文「聖希レ天、賢―レ、士希レ賢」
【聖恩】セイオン 天子のおめぐみ。韓愈、潮州謝上表「―弘大、天地莫レ量」‖皇恩・聖澤。
【聖駕】セイガ 天子のおのりもの。續書、崔光傳「―清レ道、當レ勝二萬安一」‖車駕・乘輿・龍駕。
【聖學】セイガク 聖人の說きたる學問、備敎をいふ。薬栄、近思錄序「―湮而復明」‖經學。
【聖顏】セイガン 天子の御かほ。杜甫詩「日繞二龍鱗一識二―一」‖天顏。
【聖慮】セイリヨ 天子のおめがね。晉書、桓溫傳「關在二―一」(關はえらぶ)

【聖儀】セイ　天子ののり。書唐書、樂章「登文祖武還參差、一始一終光ニ一一」

【聖境】セイキヤウ　聖人の地位。淨住子「今出家者、未ル登ニ一一」ニ聖域。

【聖射】セイシヤ　天子の御からだ。班固、東都賦「俯ニ仰乎乾坤ニ參ニ象乎一一」ニ聖體。

【聖君】セイクン　すぐれたる天子。晉書、鈞竿曲「玉衡正ニ三辰ニ、道化賦ニ羣形ニ、退願補ニ一一ニ、與ル神合ニ其德ニ」ニ聖王・聖主。

【聖訓】セイクン　○聖人のをしへ。○天子の御さとし。天子の詔令。耶律楚材詩「洪恩浹ニ四海ニ一一宜ル書ル紳」ニ聖諭。

【聖恩】セイオン　天子のいさを。于鄧、降誕頌「續ル武繩ル文、時惟一一」ニ寵恩。

【聖果】セイクワ　佛正果に同じ。淨住子「三乘一一、十地功德」

【聖德】セイトク　○聖人のをしへ。○天子のみことのり。呂公著文「被ニ一一之丁寧ニ」ニ聖訓。

【聖皇】セイクワウ　天子の尊稱。班固、東都賦「一一乃握ニ乾符ニ、闡ニ坤珍ニ」ニ聖王。

【聖經】セイケイ　聖人の作りし書物。唐書、冀文志「孔子在時、方修ニ明ル一一ニ、以繼ニ經異ニ」

【聖歡日踐】セイケイジツセン　聖德ありて敬慎の行が日ましに進みのぼる。詩人が殷の湯王の德を頌せし語（詩、商頌、長發）

【聖敎】セイケウ　○ひじりのをしへ。盧士衡詩「且住ニ人間ニ行ニ一一」ニ聖訓。○佛敎をいふ（天台四敎儀）

【聖業】セイゲフ　天子の事業。漢書、宣帝紀「蒙ニ遺德ニ奉ニ承一一ニ」

【聖旨】セイシ　ひじりのことば。揚子「一一聖行、不ル違ニ其時ニ」

【聖賢】セイケン　聖人と賢人と。易經、大亨以聚ニ一一ニ」ニ賢聖・聖哲。

【聖語】セイゴ　○天子のおことば。○聖人のことば。ニ聖言。

【聖功】セイコウ　天子のいさを。李東陽詩「日月無ニ私照ニ、乾坤仰ニ一一ニ」

【聖裁】セイサイ　天子のおさばき。ニ聖斷。

【聖像】セイザウ　○孔子の像。三條偶筆「孔聖之有ニ一一、其來已久」○基督教の佛羅の繪像。又木像。

【聖作】セイサク　天子の作られし詩文。唐書、崔世南傳「一一誠工、然體非ニ雅正ニ」

【聖札】セイサツ　天子のかかれたるもの。張說詩「來承ニ一一ニ歸」

【聖算】セイサン　○天子の御とし。ニ壽算・聖壽。○天子のはかりごと。ニ聖謀。

【聖餐】セイサン　基督教が禁ぜられる前夜、弟子に麵麭と葡萄酒とを分與せし記念として、基督教會堂にて麵麭を聖肉、葡萄酒を聖血と稱して飲食する儀式。

【聖旨】セイシ　天子のおぼしめし。蔡邕文「臣伏讀ニ一一ニ」ニ睿旨。

【聖使】セイシ　天子のおつかひ。ニ敕使・天使。

【聖姿】セイシ　天子のおすがた。ニ聖容。

【聖嗣】セイシ　天子のよつぎ。後漢書、李固傳「卽位以來、十有餘年、一一未ル立」晉傳、皇太子頌「嘉月令辰、篤生ニ一一」ニ皇嗣・王嗣。

【聖祇】セイシ　麒麟の異名（論衡）

【聖子神孫】セイシシンソン　天子の子孫の總稱（韓愈、平淮西碑）

【聖日】セイジツ　○神聖なる太陽。轉じて、聖天子に喩へていふ。薛道衡詩「普天達ニ一一」○基督教にて日曜日の稱。ニ安息日。

【聖人】セイジン　○德孝に通じて智德の圓滿なる人。論、述而「一一吾不ニ得而見ヒ之矣」○清酒の異名。鄉陽、酒賦「清者爲ル酒、濁者爲ル醴、清者聖明、濁者頑愚」魏志、徐邈傳「醉客謂ニ酒清者ニ爲ニ一一、濁者爲ニ賢人ニ」○ニ智德すぐれて慈悲深き人。凡夫ニ對。ニ聖者

【聖人作而萬物睹】セイジンサクジバンブツミユ　聖人が世に出でて萬物の是非曲直が明かになる（易、文言）

【聖人無夢】セイジンムム　聖人の心には憂なし、故に夜は安眠して夢みることなし。淮南子「聖人用ル心仗ル性、依ル神相扶、而得ニ終始ニ、是故其寢不ル夢、其覺不ル憂」

【聖人者不ル凝ニ滯物ニ】セイジンハフギヤウタイモツ　聖人は時勢を知りて能く推し移る、故に外物に拘束せらるることなし。楚辭、漁父「——、而能與ル世推移」

【聖心】セイシン　聖人、又、天子の御こころ。

【聖臣】セイシン　才智の最もすぐれし臣。荀、臣道「殷之伊尹、周之太公、可ル謂ニ一一ニ矣」

【聖者】セイシヤ　○ひじり。ニ聖人。○ニ智德高く慈悲ふかき人。ニ聖人ニシヤウ

【聖上】セイジヤウ　天子の尊稱。ニ主上。

【聖主】セイシユ　すぐれたる天子。楊惲文「伏惟一一之恩不ル可ニ勝量ニ」ニ聖王。

【聖主不ル乘ル危】セイシユフジヨウキ　天子はあやふき所に近よらず。漢書、薛廣德傳「上欲ル御ニ樓船ニ、廣德頓首曰、宜ル從ル橋、上怒、張猛曰、就ル橋安、乘ル船危、——」

【聖壽】セイジユ　天子の御とし。李嶠、賀玄「欣ニ一一之延長ニ」ニ皇壽・帝壽。

【聖書】セイシヨ　○聖人の手に成りし書物。漢書、揚雄傳「雄自有ニ大度ニ、非ニ聖哲之書ニ不ル好也、○ニ耶蘇教の新舊約全書。ニ聖典。

【聖緒】セイショ　すぐれたる天子の事業。漢書、元帝紀「脫奉ニ承先帝之一一ニ、獲ル奉ニ宗廟ニ」

【聖瑞】セイズイ　○聖天子たるべきめでたきしるし。史、周紀「生ル昌有ニ一一ニ」○聖天子の御代にあらはれしめでたきしるし。

【聖敎】セイケウ　すぐれたる天子のみよ。周

必大詩「——恩榮歷二孝章一」‖聖代・昭代。

【聖制】セイ 〇聖人、又は天子の定めたるのり。漢書、郊祀志「違レ俗復レ古、循二——一、定二天位一、如レ建レ極」‖聖法。〇天子の作られし詩文。‖聖作・聖製。

【聖政】セイ 天子のまつりごと。陳亮文「陛下踐レ祚、——維新」

【聖製】セイ 天子の作られたる詩文。南史、宗室傳「——特異、復在二今日一」‖聖作・聖制。

【聖詔】セイ 天子のみことのり。漢書、王莽傳「事二承太后一——一」‖聖教。

【聖小兒】セイ 聖童に同じ。北史「風姿、字元達、八歳能誦二詩書一（中略）內外親屬、呼爲二——一」‖神童。

【聖裔】セイ 聖人の作りし書物。世說補「少引二——一、多資二天然一」‖聖書・聖經。

【聖節】セイ 天子のおたんじゃう日。‖聖旦・聖誕・萬壽節・天長節。

【聖善】セイ 母の德を稱していふ。詩、邶風「母氏——、我無二令人一」‖至善。

【聖寵】セイ すぐれたる天子のせんぞ。晉書、樂志「赫赫太上、繩繩——」

【聖祚】セイ 天子のくらゐ。劉禹錫詩「——自レ天錫」‖皇祚・寶祚・帝祚。

【聖則】セイ 聖人の定めたるのり。揚雄、少府箴「共二條事一兮——事道」

【聖代】セイ 聖世に同じ。高適詩「——係二吳甲一」‖昭代・聖世。

【聖體】セイ 天子のおからだ。後漢書、劉陶傳「損二於——一」

【聖堂】セイ 孔子を祀れる堂。‖聖廟・文廟。

【聖道】セイ 〇聖人のみち。漢書「孝武皇帝躬二——一、垂二宗廟一」〇佛ブツ 天台宗及眞言宗の稱。

【聖澤】セイ 天子のめぐみ。曹植文「沐二浴——一、潛二潤德教一」‖皇澤・聖恩・天恩。

【聖旦】セイ 天子の御誕生日。又、聖世の元旦。楊萬里詩「資日扶桑遭二——一」

【聖誕】セイ 天子の誕生日タンジヤウビ大學衍義補「今日承二前代故事一、爲二三大節一、元旦・冬至・——是也」‖聖節。

【聖斷】ダン 天子の御さばき。吾妻鏡「大臣歩聞、出レ自二——一」‖聖裁。

【聖德】トク 天子の御いきほひ。諸葛亮、出師表「陛下誠宜下開二張——一、以光中先帝遺德上」

【聖哀】アイ 天子のみこころ。張九齡詩「孤蹤論二千載一、流名感二——一」‖宸衷。

【聖敎】キヤウ 天子のみことのり。耶律楚材詩「感二恩承二——一」‖聖諭・帝敎。

【聖帝】テイ 聖皇に同じ。

【聖鳥】テウ 鳳凰ハウワウの異名〔論衡〕

【聖期】キ 當代の朝廷の尊稱。舊唐書、禮儀志「——垂レ則、永播二於芳規一、餘烈末光、增二輝於日月一」

【聖哲】テツ 萬理に通達して極めてさとき人。左傳「難求二——一之上一」

【聖典】テン 〇聖人の定めしのり。〇聖書。

【聖殿】デン 神聖なる殿堂即ち神殿。

【聖統】トウ 天子の事業。又、天子のおちすぢ。史、匈奴傳「欲レ興二——一、惟在レ擇二任將相一耳」

【聖童】ドウ すぐれてかしこきこども。後漢書、任延傳「年十二、明二詩易春秋一號二——一」‖神童・聖小兒。

【聖德】トク 〇すぐれたるとく。史、五帝紀「高陽有二——一」〇當代の天子の德。王維詩「——超二千古一」

【聖德形】ケイ 聖天子の御德がさかんに下に被るをいふ。後漢書、崔駰傳「——以橫被兮、渠庶愷以鼓舞」‖聖澤・德。

【聖讀而庸行】ヨウカウ 聖人の書を讀みても、その行ふ所の凡人と異ならざるをいふ。揚子法言「或曰、甚矣聖道無レ益二於庸一也、——」

【聖得知】トクチ さとく知る。韓愈、盆池詩「泥盆淺、水淺成レ池、夜半青蛙——」

【聖法】ホフ 〇聖人の定めたるのり。莊、胠篋「殫二殘天下之——一」〇其の時の天子の定めたる法令〔史、秦紀〕

【聖賢聖】ケンセイ 聖人は師に從ひて學ぶことを好む、故に其の智ますます進む。韓愈、師說「——、無レ常師」

【聖範】ハン ひじりののり。沈約詩「洋洋二、楚楚備衣」

【聖父】フ すぐれたるちち。宋史、樂章「既尊二——一、亦嚴二事母一」

【聖武】ブ 智德すぐれて勇武なり。又天子の武德をいふ。左思、蜀都賦「望二——之龍飛一」

【聖廟】ビヤウ 孔子のおたまや。‖聖堂・文廟。

【聖母】ボ 〇聖人の御生母。〇基督キリストの生母マリアの尊稱。

【聖謨】ボ 天子のすぐれたるはかりごと。書、伊訓「——洋洋、嘉言孔彰」

【聖明】メイ 天子を稱する敬語。陸機詩「小臣渭濱客、非賜二丹心答一——一」

【聖目】モク 圍基盤の上にしるしたる九つの點、ひじりめ、正目又は井目とも書く。

【聖門】モン 〇孔子の門人子弟。〇——人物志（十二卷）は明の郭子章撰す。

【聖陽花】クワ 茶の異名。群芳類書「雙林大士、自往二蒙頂一、結レ庵種レ茶、凡三年、得二絕佳者一號二——一、持歸供獻」

【聖諭】ユ 天子の御さとし。‖聖訓。

【聖用】ヨウ たくみに利用する。

【聖容】ヨウ 天子のおすがた。唐眞詩「恢恢皇度、穆穆——」‖聖姿。

【聖覽】セイラン　天子の御覽。幽閒鼓吹「此不レ足レ煩二―一」‖天覽・叡覽。
【聖林】セイリン　支那の曲阜の孔子の墓所をめぐれる林。‖孔林。
【聖慮】セイリョ　天子のみこころ。後漢書、胡廣傳「斷二之一一」
【聖靈】セイレイ　○天帝の靈能。○基督スピリット教の神の一分體。○圓シャウ死者の靈魂。
【聖雖】セイスイ　天子のみくるま。‖鳳輦。
【聖王】セイワウ　すぐれたる天子。荀子「禮莫レ大二于一一一」‖聖皇・聖主・聖帝・聖天子。
【聖衆】シャウシュ　㊀極樂淨土にある諸菩薩。
【聖諦】タイ　㊀佛教の眞義。
【聖天】デンシャウ　㊀大聖歡喜天の略。印度にて商估又文學の神とす。

【聳】聞の古字。
　盧世南、孔子廟堂碑「怡然動レ色、似二一簫韶之響一」

【聘】ヘイ　敬
　○安否をとふ、おとづれる（訪問）○古、諸侯が大夫をして他の諸侯を訪問せしむるにいふ「一問」「使一」○まねく、めす、禮を以て人を招く「招一」「一師」「禮一」○めとる（妻）昏禮に媒妁ナカダチに由りて幣帛を致し通問する。禮、內則「一則爲レ妻」
【聘君】ヘイ　隱れたる賢者にして召に應じて官吏となりし者の稱（正字通）
【聘賢】ヘイ　禮を以て賢人をまねき用ふる。皇甫謐文「朝有二一一之禮一、野有二遯窟之人一」
【聘妻】ヘイ　ずでに聘して未だ婚せざる妻。
【聘招】ヘイ　禮物を贈りて人を召す。‖聘徵・招聘。
【聘徵】ヘイ　尚條に同じ。徵は召。
【聘召】ヘイ　禮を以てめす。范仲淹文「宜二崇二一一之禮一、以厚二澆競之風一」
【聘物】ブツ　人に贈る禮物。‖進物。
【聘問】ヘイモン　みまふ。みまひ。曲禮「諸侯使二大夫一問二于諸侯一曰レ聘、儀禮、聘禮「大問曰レ聘、小聘曰レ問」
【聘幣】ヘイ　○敬意を表するために贈る幣帛（孟、萬章）○轉じてひろく禮物をいふ。
【聘命】ヘイ　禮を以てよび出す。後漢書、卓茂傳論「時已七十餘、而首加二一一優一辭重一禮、與二其周燕之君一、表二閭立一館、何異哉」
【聘用】ヘイ　禮を以て召し用ふる。盧綸詩「男兒須二一一、莫二信一筆爲一耕」
【聘禮】レイ　物品をおくるれい。禮記「一一上公七介、侯伯五介、子男三介、所二以明一貴賤一也」

八畫

【聚】シュ　ズ　虞　通音シュウ
　○あつめる。あつまる（會）つどふ「集一」「合一」「會一」「雲一」「蜂一」「叢一」「類一」「雜一」大學「財一則民散、財散則民一」○あつまりたる人民。あつまりたる貨物。○つむ。つもる（積）「積一」「畜一」○むら（村落）史、五帝紀「一年而所居成レ一」
　同訓異義　聚・集・纂・緝・萃・輯・醵・鐘・攢・叢○聚は一所により合ふなり、或または分の反對なり、左傳の「十年生聚」は、亂後民を撫育したれば、子孫も繁生して流落せし民も、四方より聚りしをいふ。○集はもと羣に作る、衆鳥の木にあつまる義、散りてあるを一所にあつめよするに用ふ、詩集・文集等の如し、集友は、諸方の友を一所によせるなり、聚友はかたまりより合ふなり。○纂は絲を組むをいふ、故に詩文などをつづり聚むるに用ふ、論纂の如し。○緝は集と音義通ず、民を安んじあつむるを安集とも、安緝とも書く、とりあつめて一つにする義、また書物を編するを緝といふ。○萃は聚と同義。漢元帝紀「魏之精銳、盡萃二于此一」○輯は輯睦と連用して、車の矢の數により聚むる如く、物の諸方より一所によりてくるをいふ、湊に作る、同じ。戰國策「士爭湊レ燕」○醵は錢を出し合ひ、飲食するなり、醵金の如し。○鐘は一所にのこりなく聚める義。左傳「天鐘二美於是一」○攢は簇ムラがりあつまるなり、攢峰攢・攢錐などの如く、多くは長く尖りたるものの聚るに用ふ。○屯は一所にかたまりて聚まる義、たむろとも訓む、兵屯・分屯と用ふ。
【聚麀】シュウ　麀は、牝鹿、聚は、ともにすと訓む。父子麀をともにすとは、亂倫の甚だしき義。麀（麀部二畫）の條を見よ。
【聚醵冠】シュウキョカン　鷸セキレイの羽を聚めて作れるかんむり。左傳「子臧好二一一」
【聚雲】シュウン　あつまれるくも。鮑照詩「一一屯二高岸一」
【聚觀】シュウクワン　むれあつまりて觀る。王炎詩「兒童喜一一、父老歡來謁」
【聚散】シュウサン　あつまると、ちると。あつめると、ちらすと。莊子「緩急相救、一一以成」杜甫、別二蔡著作一詩「境念鳳翔部、一一餓十春」
【聚收】シュウシュウ　あつめをさむ「管子「秋一一、冬閉藏」
【聚集】シュウシフ　あつめる。元稹詩「經二過二鄭二遂二賢牧一、一一一諸郎二宴三老

身ニ＝集聚。

【聚訟】シュウ　互に是非を爭ひて定まらず。後漢書、曹褒傳「誠宜作二合道徳一、三年不レ成、令疏之家、名曰二聚訟一」

【聚珍版】パンシュチン　活字版、清の乾隆三十八年詔して四庫全書の善本を甄擇して刊刻流布せしむ、侍郎金簡活字を以て印行せんと請ふ、名を――と賜ふ、武英殿――程式一卷あり。

【聚頭扇】シュトセン　あふぎ。春風堂隨筆「摺疊扇亦名二――一」

【聚蚊成レ雷】シュブンセイライス　○蚊が聚り鳴きて雷の如し。南史、梁武陵王紀傳「夏季煩暑、――」○羣小人の讒言に喩ふ。漢書、景十三王傳「衆口鑠レ金、聚蚊成レ雷」聚・蚊同じ。

【聚落】シュラク　むらざと、落は村里。㊟聚は集住「人所二聚居一、故謂二之村落一也落・――二後漢書、王扶傳「扶少修二節行一、客居琅邪、所レ止――化二其徳一」＝邑里。

【聚斂】シュレン　多く稅を取りたてる。論、先進「――而附二益之一」大學「與二其有二――之臣一、寧有二盜臣一」

【聲】

壻（士部九畫）の俗字。

【聰】

聽（耳部十一畫）に同じ。

【聞】

○ブン・モン　㊥ブン・モン　㊀文

㊀きく、耳が聲音を受ける。○きゝしる（知識）「多レ――」「見レ――」呂覽、異寶「名不レ可レ得而レ――」教を受ける。論、顏淵「子夏曰、商――之矣」○をしへ。をしふ、きかす。○うはさ、きゝづたへ「風レ――」○上に達する、上に聞こえる。おきゝに達する「上レ――」「以レ――」○にほひを嗅ぐ「一香」家語、六本「久而不レ――其香」㊁きこゆ、聲の至る所。詩、小雅「聲――于天」○きこえ、ほまれ「名レ――」「令レ――」○問に通ず「相レ――」

【聞一知十】ブンイツチジフ　聞レ一以知レ十（七貝三畫）を見よ。

【聞香】ブンカウ　○にほひをかぐ。元稹詩「依稀似レ笑還非レ笑、彷彿レ――不二是香一」○香を聞きわける遊事。

【聞記】ブンキ　きゝしる。說苑「孔子――不レ耳、無レ務二空談一」

【聞見】ブンケン　きくと、みると、見聞して知る。論衡「馮王治レ水、益記二異物一、以所レ――、作二山海經一」＝見聞。

【聞人】ブンジン　名高きひと。家語、始誅「少正卯、登之――也」

【聞譽】ブンヨ　きゝつたへてよむ。金史、張汝霖傳「本朝法制、坦然明白、天下之人、無レ不二――一」

【聞泉】ブンセン　いづみのおとをきく。盧都督詩「青松遠日只――レ――」＝聽泉。

【聞善】ブンゼン　よきことをきく。柳宗元文「――不レ衆、與二聚歛一同」

【聞道】ブンダウ　○道理をきゝしる。論、里仁「朝――、夕死可矣」○サイワヒナラク　聞けば、聞く所に由れば、多く詩に用ふる。孟浩然詩「――梅花早」＝聞說。

【聞達】ブンタツ　名譽高くして高官に登る。論、顏淵「在レ邦必聞、在レ家必聞（中略）在レ邦必達、在レ家必達」諸葛亮、出師表「苟全二性命於亂世一、不レ求二――於諸侯一」

【聞知】ブンチ　きゝてしる。孟、盡心「若二禹皐陶一、則見而知レ之、若レ湯則聞而知レ之」

【聞望】ブンバウ　ほまれと、人望と（名の人に聞こゆるを聞といひ、人の望めに仰がるるを望といふ）陸機、平西將軍周處碑「幼有二異行一、世存二風烈一、早騁二――一、晩懷二耿節一」＝名望・聲望。令聞令望。

【聞レ名】ブンメイ　名まへを聞く。北史、列女傳「魏侯景伯爲二清河太守一、有二不孝者一、欲レ案レ之、入白二其母崔氏一、母曰、吾聞――不レ如レ見レ面、小人未レ見二聽教一、但呼二其母子一來、令二其見一汝事一吾、或應二自改一」

【聟】

【國字】

しかと、確實の義。

九畫

【聤】

チヤウ　青

みみだれ。耳から膿がでる。又、其の膿。

【聰】

聽（耳部十一畫）の俗字。

【聯】

聯（耳部十一畫）の俗字。

十一畫

【聱】

ガウ　号

言辭の艱澁にして平易流暢ならざる義。

【聱牙】ガウ　言辭のごつごつして平易ならざるにいふ。韓愈、進學解「周誥殷盤、佶屈――」

【聾】

㊀ショウ　㊁サウ・ソウ　講・腫

○そびゆ、高く立つ「孤――」「特――」「高――」「森――」○そびやかす「――耳」○おそる（悚）ぞっとする「懼――」○つつしむ（敬）楚語「能――二其德一」○すすむ（奬）周書「――善而抑二惡焉一」○つんぼ（聾）

【聳拱】シヨウキヨウ 手をこまぬく。通典「但擧レ鞭一レ而已」‖拱手。
【聳起】シヨウキ そびえおこる。高く起る。
【聳懼】シヨウク ぞっとしておそれる。左傳「大夫聞レ之、無レ不二一レ」‖驚懼。
【聳空】シヨウクウ そらにそびえ立つ。李頎詩「丹崕一レ一無二過鳥一」
【聳秀】シヨウシウ そびえひいでる。宋書、劉穆之傳「既而至二山峯一一、林樹峯密、意甚悅レ之」‖秀擧。
【聳身】シヨウシン みをそばだつ。淮南子「萬民莫レ不二一レ而視聽一」
【聳樹】シヨウジユ たかく秀でたる樹木。鮑照詩「層巓望二地脈一一陸二天經一」
【聳然】シヨウゼン ○高くそびゆる貌。○つつしみをそれる貌。‖悚然。
【聳峙】シヨウヂ そびえたつ。任昉賦「匹二一一於東嶽一、比二凝嶺於秋霜一」
【聳動】シヨウドウ おそれうごく。‖竦動。
【聳立】シヨウリツ 山などが高くそびえ立つ。‖聳峙・峙立・屹立。
【聳樓】シヨウロウ たかきたかどの。韓愈文「一一排レ雲出、御槐帶レ江清」

【聲】セイ シヤウ 囟 声は略字

○こゑ、ひびき(響)「鳥一」「笑一」「吟一」「溪一」「鐘一」おと(音)○ことば(言語)○ふし、てうし(音曲)其の清濁高下によりて五一に分つ、卽ち宮・商・角・徵・羽。おんがく(音樂)○をしへ(敎)「一敎」○な(名)ほまれ(譽)「名一」「家一」孟、公孫丑「金一而玉振之也」○なる。ならす(鳴)○おとづれ(音信)「寄一」○字音の韻などによりて平上去入の四に分つもの「平一」「去一」「四一」
【聲威】セイヰ いひふらしておどす。戰國策「一二天下一」
【聲援】セイエン いひふらすのみにて勢をつけてたすける。任昉文「若使二鄙一部敎兵徵援一一、則屬于首允種二北門一」
【聲音】セイオン ○おんがく。禮、樂記「一一之道、與レ政通矣」○こわ色、音聲。孟、離婁「雖レ欲レ勿レ言、其何以爲二一一一」
【聲價】セイカ ほまれ。ひやうばん。風俗通「張伯坐二一一一」李白、上二韓荊州一書「一登二龍門一、一一十倍」
【聲樂】セイガク ○おんがく。列子「堂廡之上、不レ絕二一一一」‖音樂。○國人の音聲より成る音樂。器樂の對。
【聲妓】セイギ うたひめ、歌者。唐書、太平公主傳「供帳一一與二天子一等」‖歌妓・女樂。
【聲氣】セイキ ○いきほひ(勢)左、僖二二、注「數以佐二士衆之一一一」○こゑと勢と。
【聲曲】セイキヨク うたのふし。北史、何妥傳「一一流宕」‖音曲。
【聲偶搏裂】セイグウハクレツ 文を作るに、四聲をととのへ對句をならべ、又古人の句をとり來りて之を用ふる「歐陽修、蘇氏文集序」
【聲華】セイクワ ○美くしきほまれ。楊炯詩「一一周二百世一風烈被二三千一」○聲譽のかがやき。白居易詩「昔爲二京洛一一客、今作江南淳倒翁」
【聲敎】セイケウ 天子の威光と、をしへと。書、禹貢「一一訖二於四海一」‖聲威文敎。
【聲音】セイオン いひふらす。‖聲明。
【聲實】セイジツ 名實に同じ。晉書、劉毅傳「一一稱揖」
【聲酒】セイシユ 音樂と酒と。北史、李元忠傳「唯以二一一一自娛、待客無レ食、不レ可レ使二我無レ酒」
【聲稱】セイシヨウ よきほまれ。司馬相如、難二蜀父老一「休烈顯二乎無窮一一一次二乎來茲一」後漢書、陳忠傳「以才能二有二一一一」‖聲聞・聲譽・名聲。
【聲色】セイシキ ○音樂と女色と。書、仲虺之誥「惟王不レ邇二一一一、不レ殖二貨利一」○こわねと顏色と、轉じてやうす、態度。中庸「一一之於二以化一レ民、末也」
【聲勢】セイセイ いきほひと、ちからと。聲氣と勢力と。後漢書、竇憲傳「懇恃二宮掖一一一」
【聲名】セイメイ 名譽あるいさを。隋書、趙芬傳「所レ居之職、皆有二一一一」
【聲帶】セイタイ 發聲の器官、喉頭部に位して彈力ある二條の靭帶によりて成るもの。
【聲調】セイテウ こゑのしらべ、こゑのてうし。晉書、潘岳傳「一一絕倫」
【聲望】セイバウ ほまれと人望と。後漢書、東平王傳「一一日重」‖名聲人望。
【聲貌】セイバウ こゑと、かたちと。白居易詩「一一俱如レ玉」
【聲病】セイビヤウ 詩賦の平仄聲律に合せざる病「唐書、選擧志」
【聲聞】セイブン ○ほまれ、ひやうばん。名譽令聞。孟、離婁「一一過レ情、君子恥レ之」(過レ情とはほまれが實際より過ぎる)‖名譽。○佛說教を聽きて道をさとる。法華經「爲レ求二一一者、說二應四諦法一」
【聲聞問】セイブンモン おとづれをする。夢溪筆談「莫二敢與レ之通二聲問一」‖音問。
【聲名】セイメイ よきうわさ、よき評判。前漢元帝紀「蘇璟牧人時、稱二良吏一、及レ居二相位一、一一稍減」‖名聲・聲聞。
【聲明】セイミヤウ ○言ひふらす。‖聲言 ○五明の一、音韻の眞理を研究する學。智度論「五明者、一曰一一釋結諷字、經目流別」○佛德をほめ供養する讚。‖梵唄。

【聲門】セイ　生理學にて二條の聲帶の間。

【聲譽】セイ　ほまれ、ひやうばん。後漢書、馮衍傳「天下無ㇾ變、則足ㇾ以顯二ー一、一朝有ㇾ事、則可ㇾ以建二大功一」‖名譽・聲稱・聲聞。

【聲容】セイ　聲音と容儀と。宋樂舞歌「臧孫金石、寫德ー一」

【聲利】セイ　ほまれと利益と。唐書、嘉傳「使性簡潔、以ニー一爲ㇾ汗」‖名利。

【聲律】セイ　平上去入の四聲のきそく。又、其の法に合する詩賦。蘇洵、上二田樞密一書「當時之文、淺狹可ㇾ笑、飢寒困窮亂二其心一而ー一記問、從而破壞」

【聲（二）計聲律】セイリツ　平仄を配比して文を作る。隔は經傳の文字を接續するなり、對は對句を作る、聲律は律賦なり。蘇洵、送二石昌言爲二北使一序「學二句讀一ー、未ㇾ成而廢」

【聲淚】セイ　はなしごゑと、なみだと。晉書、王彬傳「ー一俱下」

【先ㇾ聲後ㇾ實】コウジツ　さきに虛聲にておどし、後に實力を用ふる。史、淮陰侯傳「兵故有二先ㇾ聲而後ㇾ實者一」

【呑ㇾ聲】ドム　すすりなきしてなげく。鮑照詩「心非二木石一豈無ㇾ感、ーレー雖ㇾ閉不二敢言一」

【害ㇾ聲】コエヲ　人におとづれを通ずる。晉書故事「朋友以二音問一見ㇾ及、曰ㇾ聲ニー一」

【聲如ㇾ鐘】コエノトシヨウ　聲音の極めて大なる形容。後漢書、郭林宗別傳「身長八尺、音ー一」

【聽二於無ㇾ聲一】コエナキニ　子の親に事ふるに注意の至れるにいふ。曲禮「爲二人子一者、ー一、視二於無ㇾ形」

【聲爲ㇾ律】トナル　口より出る聲は皆音律となる。史、夏紀「禹爲ㇾ人敏給克勤（中略）ー一、身爲ㇾ度」（身爲ㇾ度は身に行ふ所は法度となる義）

【聲如ㇾ雷】コエノ　聲音の極めて大なる形容。晉書、陸機傳「身長七尺、其ー一」

【聲（二）喉唇】コウシンカス　訳ふこゑが、うつばりのわるうごかす。歐聲のすぐれたるをいふ。文選、李善注「七略曰、美聲、謂人聲公善雅詠、發ㇾ聲盡動二梁上塵一」

【聰】ソウ　東

○耳がよくきこえる、耳の力が鋭敏なり。書、洪範「ー一作レ謀」さとし、かしこし。○あきらか（明）

【聰允】インソウ　智明かにして誠實なり。薛綜、漢紀「明帝自ㇾ在二儲宮一而ー一之德著矣」

【聰叡】ソウエイ　さとく明か。魏志、袁術傳、注「聖主ー一、有二周成之質一」‖聰敏・明叡。

【聰頴】ソウエイ　わかくしてさとし。宋史、朱台符傳「少ー一、十歲能屬ㇾ辭」‖聰慧。

【聰解】ソウカイ　さとし。南史、梁宗室曉傳「帝知二曉ー一」‖慧解。

【聰記】ソウキ　さとくしてよくおぼえる。北齊書、楊愔傳「ー一强識、牛面不ㇾ忘」

【聰慧】ソウケイ　さとし。五代史、盧質傳「質幼ー一善屬ㇾ文」‖聰敏・聰悟。

【聰辯】ソウベン　さとくすばやし。南史、江蒨傳「幼ー一、讀書過ㇾ口便誦」

【聰悟】ソウゴ　かしこくさとし。舊唐書、代宗獨孤皇后傳「ー一過ㇾ人、能候二上顏色一、發ㇾ言必稱二意慮一」‖聰敏・聰悟。

【聰察】ソウサツ　さとくして物事に明か。漢書、宣元六王傳贊「于ㇾ時諸侯爲ニー一矣」

【聰情】ソウジヤウ　さときこころ。江淹賦「峻調淵謀、慧志ー一」

【聰智】ソウチ　さとし。中論「明君之親任也、皆貞良ー一」

【聰敏】ビンソウ　かしこくさとし。隋書、李德林傳「幼ー一、年數歲誦二左思蜀都賦一」‖聰悟・聰慧。

【聰辯】ソウベン　さとくして辯才あり。北史、奚斤傳「斤、ー一強識、善二談論一」

【聰明睿智】エイチ　聖人の四德、聰は聞かざるなく、明は見ざるなく、睿は通ぜざるなく、智は知らざるなし。

【聯】レン　先　連に通ず

○つらぬ、あはす。あふ（合）くみあはせる。周禮、天官、太宰「ー一兄弟」○つらなる、つづく、つづき（連絡）相續きて絶えず。○同僚が官職をつらねて相助ける。○結婚する「姻ー一」○周代の戸口の編制の名稱、十家。又、十人の稱。○周代の邑里の一區（八閭）○對をする、二つ並べるもの。詩文の偶句「柱ー一」「楹ー一」「一句」

【聯（二）連聲】ツラ　聯・連・續・列・陳・綿の訓は連（走部七畫）の條を見よ。

【聯娟】エン　女子のまゆの長くして愛らしき貌。宋玉、神女賦「眉ー一以蟬揭兮、朱脣的其若ㇾ丹」洛神賦、修眉ー一」

【聯合】ガツ　二つ以上の物がくみあふ。‖連合。

【聯合艦隊】カンタイ　二つ以上の艦隊より成りたつ大艦隊。

【聯句】ク　○數人一句づつ作りて成れる一篇の詩。漢の武帝の柏梁臺の宴集の時に始まるといふ。皮日休文「近代ー一、莫ㇾ著二孟東野與二

韓文公之多於他集字見」○律詩の對句「前聯」「後聯」

【聯貫】レンクワン つながる、つづきあひ。‖聯絡・關聯。

【聯結】レンケツ 一緒にむすびつける。‖連結。

【聯互】レンゴ つらなりわたる。唐書、貴妃楊氏傳「第舍一一、擬二意宮禁一」‖綿亙。

【聯鎖】レンサ ○つなげるくさり。○つながる。‖聯絡・關聯。

【聯想】レンサウ 心理學にて一の觀念より、他の觀念を憶き起す心のはたらき。

【聯ㇾ事】レンジ ことをつらねる 同僚として、同一の事務を共にする。周禮、註「聯讀爲ㇾ連、謂二連ㇾ事通ㇾ職、相佐助一也」

【聯紙】レンシ かみをつたぎあはす。唐書、李藩傳「制有二不便一、就二數紙一批二御之一、吏謂ㇾ聯二它紙一、藩曰、一一是歟、豈曰ㇾ敕耶」

【聯珠】レンシュ ○たまを連ねたる如く美くしき詩文を作る。唐宜宗詩「綴玉一一三十年」○一一詩格は二十卷、元の子齊撰す。○五目ならべ。‖格五。

【聯隊】レンタイ 陸軍軍隊の編制上の名稱、三個大隊（十二個中隊）より成るを普通とす。

【聯綴】レンテイ つらなる。つらねつづる。周禮、疏「相合綴而一一」

【聯邦】レンパウ 數國合して一大國をなすもの。

【聯筏】レンバツ いかだをつらねる。金史、馮璧傳「未ㇾ幾果一ㇾ一大噪、傷二殘下邑一而去」‖連筏。

【聯ㇾ袂】レンベイ たもとをつらねる。柳宗元詩「一ㇾ一渡二危橋一、藻廻出二林杪一」

【聯璧】レンペキ ○一對の玉。又其の形して光るもの。莊、列禦寇「我以二天地一爲二棺槨一、日月爲二一一一」○二つそろひて美くしきものに喩ふ。‖連擘・雙美。

【聯翩】レンペン ○つづきて絶えざる貌。陸機、文賦「浮藻一一」○疾くつづく貌。杜甫詩「一一收二京一」‖連翩。

【聯歩】レンポ ならびあゆむ、連れ立ちて歩く。

【聯盟】レンメイ 共に約束をつらねる。‖連盟。

【聯綿】レンメン 長く連りつづく。李白詩「九疑一一皆相似」‖連綿。

【聯絡】レンラク つらなりつづく。唐書、朱朴傳「四塞二上洛・冀山之險一、北有二白崖一一、乃形勝之地、沃衍之墟」‖連絡。

【聯立】レンリツ 連合して立つ。

【聯聯】レンレン つらなりて絶えざる貌。顧況詩「浮溫丁子殊一一」韋莊詩「雁行斜去字一一」‖連連。

十二畫

【聵】グヮイ 卦

○つんぼ、生れながらのつんぼ「聾一」○轉じて事理に明かならざる義とす、おろか「昏一」「一一」晉語「聾一不可使聽」

【聵聵】グヮイ 無知なる貌。太玄經「媮二天下之一一一、豈二天下之瞭瞭一者、其唯玄乎」

【聵馳】バツイ つんぼで目がくらい。おいぼれたる形容。漢書、息夫躬傳「小夫憒臣之徒、一一不ㇾ知ㇾ所ㇾ爲」

【職】ショク シキ 職

○やくめ、つかさ「官一」○くらゐ（官秩）「一官」「一員」「武一」○つとめ、せめ、しごと（事業）分ちて爲すべき事「子一」「婦一」「一務」孟、萬章「共爲子一」而已矣」○つかさどる（執掌）○みつぎ、みつぎもの（貢獻）淮南、原道「四夷納一」○もと、もっぱら（專）おもに（主）詩經「一爲亂階」○一一は繁く多き貌。○姓。

同音異義 職・本・原・書・故・元・素・雅・固・主の別は本（木部一畫）の條を見よ。

【職由】ショクユウ 事の主としてもとづく所。左襄四「蓋言語漏洩、則職女之由」

【職員】ショクヰン 役所・學校・會社などの事務を取扱ふ人。

【職局】ショクキヨク 事務室。南史、植裕之傳「以二識一人之職一、收二縣一一」

【職官】ショククワン すべてのやくにん、百官。‖有司。

【職掌】ショクシヤウ つかさどる。又、つかさ。南史、注「一一猶レ云二職事一」

【職業】ショクゲフ しごと、つとめとするわざ。史、孔子世家「武王克レ商、通二道九夷百蠻一、各以二其方賄一、來貢二其職一、無レ忘二一一一」宋書、恩倖傳「尚子居レ朝威有二一一一」

【職權】ショクケン 職務上の權力。

【職原抄】ショクゲンセウ 圖二卷、北畠親房著す、我が國歷代の官位の沿革、補任の次第を記す。

【職工】ショクコウ 資本主にやとはれて品物を製することを業とするもの。

【職貢】ショクコウ みつぎもの。左、襄二八「共二其一一一」‖貢賦・貢職。

【職司】ショクシ やくめ、又やくしょ（官署）李商隱詩「古者世稱二大手筆一、此事不レ繫二於一一一」

【職次】ショクジ 官職の次第分限。通典「刊定一一、著爲二令格一」‖職守。

【職事】ショクジ ○官職上のつとめ。○諸官の常務に當る官。唐書、陸贄傳「按甲令有二一一官一、有二散官一」○圖レ職人の異稱。

【職掌】シキショウ つかさどる。又、やくめ。晉書、樂志「伯益佐二舜禹一ー二ー山興二川一」‖管掌。
【職制】シキセイ 官職上のきまり。‖官制。
【職責】シキセキ 職務につきての責任。
【職田】ショクデン 職分に應じて賜はる田地。文獻通考「隋開皇中、始給二ー一一」‖職分田・朱色。
【殉レ職】ジュンショクスルコト 職務の爲めに死する。
【職人】ショクニン 諸職の工人、大工・左官の類。北史、孫紹傳「ー一子弟、隨逐浮遊」
【職方氏】ショクホウシ 周代の姓、後に官名となる。周禮「ー一掌二天下之圖一、以掌二天下之地一」
【職服】ショクフク 官職によりて定めたる衣。‖朝服。
【職分】ショクブン つとめ、つとむべき本分。諸葛亮、出師表「此臣所下以報二先帝一而忠中陛下上之ー一也」
【職分田】ショクブンデン 圓古、官職に應じて賜ひし田地。‖采地・采色・職田。
【職務】ショクム 官職上のつとめ。隋書、牛弘傳「篤志二于學一、雖二ー一業雜一、卷不レ釋レ手」
【職位】ショクイ やくにん、官吏。任昉文「掌佐ー一、偏裨將師」
【職封】ショクホウ 圓古、職事に應じて大納言以上に賜ひし封戸。

【聑】

㊀ デフ 集
㊁ テフ 集 ㊃ エツ 葉

十三畫

【聾】

ダフ ノウ 江

㊀ささやく、耳に附きて私に小語す。史、魏其武安傳「乃效二兒女呫ー耳語一乎」古、囁に通ず。○ととのふ(攝)○とる(取)○もつ(持)○人の姓、ー政は戰國時代の刺客。㊁ささやく。○あふ(合)○木の葉の動く貌。㊂薄く切る肉。曲禮「ー而切レ之」‖牒。㊃うごく貌。‖操。

十四畫

【聹】

デイ 齊 通音 ネイ

耵ーはみみのあか、みみくそ(耳垢)

十六畫

【聽】

㊀ テイ・チャウ 徑
㊁ テイ・チャウ 靑

㊀きく、念を入れてくはしくきく「靜ー」「敬ー」「細ー」論、季氏「ー思聰」(聞よりは意強し)○まつ(待)周禮、大司徒「以ー王命一」○受ける。左、成十二「郯伯如レ秦ー一成」○したがふ(從)曲禮「三諫而不ー一、則逃之」まかせる(委任)○さだむ(斷)さばく(裁決)「ー一訟」「ー一獄」○をさむ(治)○あきらかにす(察)○うかがふ(候)○ゆるす、きき入れる。戰國齊策「王勿ー一其事」ゆるされる(可)㊁きく、きき受ける。○やくしょ、六朝以後ー一を加へて廳に作る。○まはしもの。荀、議兵「百里之ー一」‖聞者聞諜。

諸學 王に從ふ、俗に王ー一に從ふは非。

同訓異義 聽・聞・聆・听○聽は此方より注意してきくなり、聽レ講・聽レ政の類、禮記に「聽二於無レ聲一、視二於無レ形一」とあり。○聞は先方の聲の耳に入るなり「聞耳受レ聲也、聽耳待レ聲也」と註せるにて、別を知るべし。○聆は聽と同じ。○听は聽の俗字なり。

【聽受】チャウジュ きいてまどふ。疑ひて意味が十分に分らぬ。莊、齊物「是黃帝之所ニー一也」
【聽講】チャウカウ 講義をきく。世說「劉尹與二桓宣武一共ー一禮記一」
【聽覺】チャウカク 五官の一、耳の音響を聽くの力。‖聽感。
【聽諫】チャウカン いさめをきく。史、始皇紀「上不レ聽レ、今事急」
【聽許】チャウキョ ゆるす。魏武帝文「歸情上聞、不レ蒙ニー一」‖允許。
【聽決】チャウケツ うったへをききさばく。元史、王磐傳「自二死罪一以下、僉議レ家、朝二秋八月一悉來二京師一ー一如レ囚至、帝側然憐レ之、悉原二其罪一」‖聽斷。
【聽獄】チャウゴク うったへをとりさばく。周禮「以二五聲一ー一訟、求二民情一」‖聽訟。
【聽遠】チャウエンざんげんを信ずる。詩經、序「衛公好レ讒」
【聽事】チャウジ ○事をさばくやくしょ。晉志、諸葛恪傳「所レ坐ー一屋牀甲折」‖廳事。○玄關の前の中庭をいふ。
【聽視】チャウシ きくと、みると。淮南子「任二耳目一以ー一者、勞レ形而不レ明」‖視聽。
【聽診器】チャウシンキ 體内の音響をきいて疾病を診察する醫療用の器具。
【聽神經】チャウシンケイ 耳から大腦へ通ずる神經、聽覺をつかさどる。
【聽受】チャウジュ きき入れる。書經「無レ偪之貿、勿レ聽」疏「無レ可二考驗一之貿、勿レ聽二之一」後漢書、延篤傳「耳有二ー一之用一、目有二察見之明一」
【聽從】チャウジュウ 命令にしたがふ。
【聽教】チャウケウ 說教演說等をきく人、多くのきいて。長阿含經「不レ解二ー

一」

【聽訟】チヤウシヨウ　うったへをさばく。論、語「一ノ猶レ人也」

【聽政】チヤウセイ　まつりごとをきく。孟、離婁「子產聽二鄭國之政一」

【聽許】チヤウキヨ　ちかひをきく。ちかひの言をきけ。書經「庶士明一ノレ」

【聽聖】チヤウセイ　こえをきく。史、扁鵲傳「不レ待二切脈一望レ色一ノレ寫レ形」

【聽斷】チヤウダン　うったへをききさばく。漢書、嚴助傳「南面而一一、四海之內、莫不二聽應一」

【聽納】チヤウナフ　きき入れる。唐書、劉洎傳「虛心一一」

【聽聞】チヤウブン　○きく。書經「剛子之德言足二一一一」○聞チヤウの說政をきく。平等覺經「樂聽二聞世尊教一」

【聽用】チヤウヨウ　其の言ふことをききいれ用ふる。後漢書、馮衍傳「時莫レ一二其謀一」

【聾】ロウ　東

○つんぼ、耳に聲を聞くことなし。左、僖二六「耳不聽五聲之和 曰一」○つんぼになる。○くらし(闇)

【聾啞】ロウア　○つんぼと、おしと。○即ちて情意の上下相通ぜざるに喩ふ。子華子「一一之朝、上有二放志一下多二忌諱一」‖聾唖・瘖聾。

【聾瞶】ロウカイ　○つんぼ、瞶は生れながらにして聾ッなる者。晉語「一一不レ可レ使聽」○無知に喩ふ。易林「牛馬一一、不レ知二深味一」

【聾昏】ロウコン　つんぼ。馬融、廣成頌「一一不レ聞二雷霆之震一」

【聾者】ロウジヤ　つんぼ。莊、逍遙游「一一無二以與一乎鐘鼓之聲一」

【聾俗】ロウゾク　つんぼにて物事を聞き分くることの出來ざる如き無知の俗人。孟浩然詩「知音徒自惜、一一本相輕」

【聾盲】ロウマウ　つんぼと、めくらと。莊、逍遙游「豈惟形骸有二一一一哉、夫知亦有レ之」

【聾瞽】ロウコ　つんぼと、めくらと。曾棠詩「我非二土木爲一、耳目異二一一一」‖聾盲。

聿部

【聿】イツ　質

○つひに(遂)詩、唐風「蟋蟀在堂、歲一其莫」○ここに、これ(茲・惟)發語のことば。‖曰・越。○のぶ(述)○みづから(自)○したがふ(循)○曰に通ず。○ふで(筆)(秦以後筆に作る)○一皇クワウは輕く疾き貌。○圖ヅクヮ(筆旁)字畫構成上のとなへ。

【聿皇】イツクワウ　輕く疾き貌。揚雄賦、「武騎一一」

【聿修】イツシウ　聿は遹、祖先を思ひて其の德を述べ修める。詩、大雅「無レ念二爾祖一、一二厥德一」

七畫

【肄】イ　寘

○ならふ(習)「一習」「敎一」○つかれ(勞)うれひ、しんぱい。詩、衞風「既貽二我一一」○ひこばえ、きりかぶより生ずるわかえだ(嫩條)詩、周南「伐二其條一」○あまり(餘)

【肄業】イゲフ　○わざを習ふ。左、文四「臣以爲二一一一及二之也」○講習をいふ。

【肆】シ　寘

○つらぬ、つらなる(陳)詩、大雅「一筵設席」○みせ(店)品物をつらね賣る所「市一」「屠一」「酒一」「書一」「茶一」「藥一」「廊一」論、子張「百工居一」一」○つとむ(力)力を極める。○きはむ。きはまる(極)○ほしいまま(放)「放一」「恣一」「縱一」「一敎」○ゆるし。ゆるす(敎)(緩)○つひに(遂)孟、告子「一不レ珍厥愾」○ゆるに(故)語の端を更ムめる辭。書、無逸「一中宗之享國七十有五年」○のぶ(申・展)○おほいなり(大)○ながし(長)○すつ(棄)○つく(犯突)詩、大雅「是伐是一」○はやし、とし(疾)○さらす(暴)死刑にして尸を市にさらす。論、憲問「一諸市朝」○とる(操)法言「一筆而成書」○ただし(正)○なほし(直)易、繫辭「其事一而隱」○つら、ならび(列)左、襄十一「敎鐘二一」○俗に數字の四に通用す。

同訓異義　肆・縱・橫・放・恣・擅の別は縱(糸部十一畫)の條を見よ。○肆・敎・宥・赦・聽・允・許・放・縱・原・免・眷・與の別は敎(赤部四畫)の條を見よ。

【肆飲】シイン　ほしいままに酒をのむ。魏書、北海王詳傳「一一終レ日」

【肆筵】シエン　むしろをつらぬ、肆は陳設。詩、大雅「一一設席」

【肆虐】シギヤク　ほしいままにしへたぐ。唐書、王義方傳「陛下撫二萬方一而有レ之、蠻夷猾夏、罪無レ逃」罰、況暴戾下、蓋臣一一乎」‖橫暴・暴虐。

【肆志】シシ　こころざしをほしいままにす。文子「窮不レ易レ操、通不レ一一」

【肆赦】シシャ　罪人を赦ゆるす。書、舜典「眚災ニー、怙終賊刑」傳「肆、緩也、過而有レ害、當レ緩ニ赦之ニ」
【肆者】シシャ　ほしいままにしておごる。東京賦「以ニー一爲レ賢」‖奢肆。
【肆升】シショウ　ほしいままにのぼる。馬融、東巡頌「蕙香ニー、清煙昇蠶」
【肆縱】シショウ　ほしいままにふるまふ。後漢書、陳蕃傳「人君有レ事ニ於苑囿ニ、唯仲秋四郊順レ時講レ武、殺レ禽助レ祭、以敎ニ孝敎ニ、如或違レ此、則爲ニー一」‖恣縱・縱肆・放肆。
【肆情】ダ　ほしいままにしておこたる。元史、廉希憲傳「醫持ニ善藥ニ以療ニ臣疾ニ、苟能戒慎、則誠如ニ聖諭ニ、設或ニー、良醫何益、蓋以レ醫視レ漸也」‖放情。
【肆體】シタイ　からだがゆったりとくつろぐ。漢書、霍光傳「天子從容ニー一」
【肆陳】シン　つらぬ。柳宗元詩「蔬果自レ遠至、杯酒盈ニー一」
【肆應】シン　みせ、應は一に廊に作る。潘岳、四征賦「督宇寺署、ニー管廂」‖應肆・店肆。
【肆廊】ロウ　前條に同じ。
【肆目】モク　○其の目の力を竭くす。陸機文「輪匠ニー一レ、不レ乏ニ倕仲之妙ニ」○目の力のとどくかぎり。呂安文「ニー一平陽、則遠廊而無レ覩」‖極目。
【肆書】ショ　ほしいままにののしる。南史、顏延之傳「ニー一上席ニ」

【肆力】リキ　ちからをつくす。魏志、鍾繇傳「使ニ民得ニー一于農事ニ」‖盡力。

【肅】シュク　屋

○つつしむ、うやうやし（敬）「敬ニー」「祇ニー」「虔ニー」端嚴にして懈弛せず。○うやうやしく事ふ、うやまふ。○おごそか（嚴）きびし（急）「嚴ニー」禮、禮運「刑ニー而俗敵」○とし、すみやか（疾速）○ととのふ（整）○いましむ（戒）○ちぢむ、ちぢかまる（縮）禮、月令「草木皆ニー」○すすむ（進）みちびく（導）曲禮「主人ニー」客而入」○きよし（清）○さむし（寒）○そこなふ、ころす（殺）「ニー殺」呂覽、孟秋「天地始ニー」○ただし（正）○しづか（靜）○敬禮を行ふ、頭を低れておじぎする「ニー拜」「ニー啓」左、成十六「敢ニー從者」○ニーは嚴しく正しき貌。又、敬ふ貌。又、疾き貌。又、鳥の羽の聲。○ニー愼は國名、今の東三省（滿洲）の地に當る。魯語「ニー愼氏來賀」

同訓異義　肅・謹・愼・敬・恭・恪の別は謹（言部十一畫）の條を見よ。

【肅敬】シュク　つつしみうやまふ。顏氏家訓「吾每レ讀ニ聖人之書ニ未ニ嘗不ニー一對ニ之」
【肅殺】サツ　秋の氣が草木をそこなひからす。禮、郷飲酒義「天地ニー一、此天地嚴氣也」
【肅慎】シン　つつしむ。史記「陛下ニー、郊祀上帝、親享錫ニ一角駃一、蓋麒麟云」‖祇肅・虔肅。
【肅肅】シュク　○嚴正なる貌。詩、小雅「ニー一鼓功」○敬ひつつしむ貌。詩、周頌、ニー一免罝」○疾やかき貌。詩、召南「ニー宵征」○靜かなる貌。潘岳、寡婦賦「嘉門今ニー一」○鳥の羽のこゑ。詩、唐風「ニー一鴇羽」○松風の聲。世說「谿康ニー一如ニ松下風ニ」‖肅清。
【肅清】シュク　亂賊を平け清める。陸機文「二州ニー一、四邦威服」
【肅整】シュク　つつしみて行儀よくととのふ。‖整肅・端肅・嚴整。
【肅靜】セイ　つつしみてしづか。北史、張彝傳「羌夏畏服、憚ニ其威整ニ、一方ニー一、號爲ニ良牧ニ」
【肅然】ゼン　○つつしみてしづかにかしこまる貌。○山の名、泰山の東の黃、奚の武帝、泰山に封じ、ニー一に禪す。
【肅聽】シュクチョウ　つつしみてきく。‖謹聽・敬聽。
【肅望】シュクイ　つつしんでさしあげる、書簡文の用語。‖拜望。
【肅拜】ハイ　身を直くし拳をととのへ、少しく手を下げておじぎする。周禮「九曰ニー一」
【肅白】ハク　つつしんてまをす、書簡文の用語。‖肅啓・敬白・謹言。
【肅雝】シュクヨウ　つつしみて和ぐ。詩、周頌「烈不ニー一、王姬之事」‖敬和。

【肇】テウ　篠　八畫

○はじむ。はしめ（始）「ニー基」「ニー國」「ニー禋」書、舜典「ニー十有二州」○うつ（擊）○ただす、そろへ正す。ただし（正）○とし（敬）○はかる（謀）

同訓異義　肇・初・始・創・肈・肪・首・甫の別は初（刀部五畫）の條を見よ。

【肇域】テウヰキ　さかひを開き張る。詩、商頌「ニー一彼四海」
【肇基】テウキ　もとゐをはじむ。基をはじめかためる。書、武成「垂ニ于太王、ニー一王迹ニ」‖始基。
【肇禋】テウインはじめて國を建てる。書經「乃穆考文王、ニー一在ニ四土ニ」
【肇歲】テウサイ　年のはじめ（堯元帝集要）‖首歲・孟春・歲首。
【肇造】テウザウ　はじめつくる。書、康誥「用ニー一我區夏ニ」‖始建。
【肇始】テウシ　はじめ。はじむ。

【肇秋】ジウ　陰暦の七月、肇は始。上秋（三八頁一段）參看。＝孟秋。

【肇】肇（前條）に同じ。

肉部（月）

【肉】㊀ジク・ニク　㊁ジウ　通音　ニク宍は古字

㊀み、にく、しし「筋ー」「肌ー」「膚ー」「骨ー」○きりみ、ししむら。○からだ（身體）「ー刑」○鳥獣魚の體の食用に供せられる部分。又、特に獣のにく「梁ー」○果實野菜などの皮に包まれたるやはらかき部分。㊁こゆ（肥滴）○ー好は音の洪いにして美くしきにいふ。○孔のある錢。又、壁の外環ソト○闕にく、印にくの略。＝印泥。又牛にくの略。又からだの太さ「中ー」又物の厚み。

【肉緣】ニクちつづき。＝血統、肉親。

【以ー去ー嫉】ニクヲモツテアラタムル　驅逐するに、其の方法を誤れるに喩ふ。韓非、外儲說「——、蟻衆多、以レ魚驅レ蠅、蠅愈至」

【以ー肉委ー餓虎】ニクヲモツテガコニキス　いぬ死にして何の益なきに喩ふ。史、張耳陳餘傳「今必俱死、如二以レ肉委一餓虎一、何益」

【肉好】ニクカウ　○肥滿をいふ。一解に音の洪美をいふ。禮、樂記「寬裕ー一順成和動之音作、而民慈愛」○物の圓形にして中に孔アナある者、其の外を肉といひ、中を好といふ。爾雅「肉倍レ好、謂二之璧一」註「肉、邊也、好、孔也」

【肉皴】カニ　骨のつきたるにく。詩經、疏、對ニー一、故云二菜殽一」

【肉醬】ニクカウ　肉のあつもの。

【肉角】ニクカク　○肉につつまれたるつの。孔叢子「獨身而ー一」○麒麟の異名。後漢書、班固傳「ー一騏毛」

【肉眼】ガンニク　○眼鏡の力を借らざる人のまなこ。○俗人のまなこ。張羽詩「ー一紛紛爭二醜好一」○凡夫の眼。天眼通の對。淨土經「天眼通非レ肉、ー一慧非レ通」

【肉几】ニクキ　まないた。

【肉杏】ニクキャウ　あんずの異名。農書、北方ー一甚佳」

【肉腐出レ蟲】ニククサリテムシヲイダス　事は根本が壞れて然る後に禍害の生ずるに喩ふ。荀、勸學「ー一、魚枯生レ蠹」

【肉果】ニククワ　肉豆蔻ニクヅクの異名。

【肉塊】ニククワイ　肉のかたまり。

【肉冠】ニククワン　雞のとさか。＝雞冠。

【肉刑】ニクケイ　肢體を傷くる刑。いれずみ・はなきりの類。漢書、刑法志「遣二參夷之誅一、增二加ー一一」史、孝文紀「法有ニー一三一」註「鼻・劓二、左右趾合一、凡三」

【肉桂】ニクケイ　暖地に生ずる常綠喬木、根の皮は味辛甘、藥用とす、廣西・安南等に多し、廣西桂平縣に産するものを桂平といひ、安南に産するものを安桂又、邊桂といふ。

【肉蓯蓉】ニクジュウヨウ　草藥の異名。本草「山菜黄、一名蜀酢菜、一名ー一」

【肉山】ニクザン　○肥えたるからだ。黄庭堅詩「六月火雲蒸ニー一」○肉の多き形容。次條を見よ。

【肉山脯林】ニクザンホリン　肉の多きを形容す、脯は乾肉ホシニク帝王世紀「夏桀爲ニー一般紂爲二酒池肉林一」

【肉肆】ニクシ　肉を賣るみせ（肉屋）＝肉店。

【肉汁】ニクジフ　○鳥獣のにくを煮たるしる。班固文「衆人之逐二世利一、如二青蠅之赴ニー一也」○肉を煮出したるしる、そっぷ。

【肉親】ニクシン　血肉を分ちたる親子兄弟など。＝血族。

【肉陣】ニクジン　女子をならべて屏風に代へたる故事。開元遺事「楊國忠、冬月深二絳妾肥大者一、行二列于前一、令レ遮レ風、謂二之ー一一亦謂二肉陣一」＝肉屏風。

【肉醬】ニクシャウ　ししびしほ。周禮、注「醯醬、ー一也」

【肉蓯蓉】ニクシュジョウ　寄生植物の一、富士山などの高山に生ず、藥は肉質を爲す、長さ尺餘、短柱狀、藥用として補益の效あり。

【肉色】ニクシキ　○肉の色。○肌膚の色。○ニクイロ皮膚の色に似たる色。

【肉食者】ニクシヨクシャ　厚き祿を食む者、即ち大夫以上の者。左、莊十「曹劌曰、ー一鄙、未レ能二遠謀一」

【肉筍】ニクシュン　人の口より出づる牙。絲竹の聲などの對。

【肉絲】ニクシ　なまみのからだ、肉身。崇魂精神に對してからだをいふ。

【肉盞盤】ニクサンバン　宴會に來賓をして器を數りて待らしむるにいふ。肉屏風を見よ。

【肉袒】ニクタン　上衣をぬぎて肉體を袒はす。謝罪の禮。左、宣三「鄭伯ー一、牽ー羊以逆」

【肉彈】ニクダン　圓肉の彈丸、敵壘にをどりこむ身を彈丸に喩へていふ。

【肉池】ニクチ　圓印肉いれ。

【肉陣】ニクヂン　肉障を見よ。

【肉豆蔻】ニクヅク　ししづく、南洋諸島に産す、其の果實は香味甚だ烈し、香料又藥用とす。

【肉薄】ニクハク　飛道具を用ひずして敵に近くせまる、薄は迫（元史、郝經傳）

【肉筆】ニクヒツ　圓印刷にせざる書きしままの書畫。＝眞筆。

【肉屏風】ニクビャウブ　妓女に圍まれて風をふせぐにいふ。晉書故事「唐楊國忠家富、凡有ー一客設レ酒、令三妓女各執二其事一、號二肉屏風一、冬月令二妓女圍一

レ之就ニ――一」＝肉醬。
【肉片】ニクヘン 肉のひときれ。
【不レ知ニ肉味一】シニクノアジヲ 心一事に專らにして、他に移らさるをいふ。論・述而「子在レ齊聞レ韶三月、――」
【肉慾】ニクヨク 男女の肉體上の私慾。＝性慾。
【肉薄】ニクハク 人をかきとして敵をふせぐ。唐書「傳奕曰、周齊每レ戰、驅ニ夏人一肉ニ――一」

【月】

肉（前條）に同じ。
○漢字の偏旁となる時の字體、中の二畫左右に連る、日月の月とは別。○國ク字畫上のとなへ。

二畫

【肌】キ 支

はだ、はだへのにく（膚肉）「冰ー」「玉ー」「雪ー」「細ー」
【肌液】キエキ あせ。＝汗。唐・康文「ー――肉汗、原筆便出」＝汗巾。
【肌膚】キフ はだのあぶら。＝坐銷鑠、酒痴漫笑嬉」
【肌骨】キコツ はだと、ほねと。歐陽修、秋聲賦「其氣慄烈、砭ニ人ー――一」
【銘レ肌鏤レ骨】キニメイシ コツニチョウス はだや骨にきざみつける。深く心に記して忘れざる義（顧氏家訓）
【肌膚】キフ はだへ。莊・逍遙遊「ー――若ニ氷雪一」＝膚肌。
【肌理】キリ はだのきめ。杜甫詩「ー――細膩骨肉勻」

【肋】ロク 職

あばらぼね（脅骨）胸を圍みて肺や心臓をまもる様ナル形の骨。
【肋骨】ロッコツ ○あばらぼね、胸旁の骨。○西洋風の軍服の胸部につける肋骨狀のかざり。
【肋膜】ロクマク あばら骨の内にありて肺をおほへるまく「ー――炎」

【肓】

肯（肉部四畫）の古字。

三畫

【肜】イウ 東

祭の翌日に行ふ祭「一祭」書、高宗肜日、傳「祭之明日又祭也」

【肛】カウ・コウ 東 江

○しりのあな（肛門）大腸の下端「脫ー」○脖ー＝はふくれて大いなる（腹大）貌。韓愈詩「形軀領脖ー」
【肛門】コウモン しりのあな。史、倉公傳、注「ー――重十二兩」

【肝】カン 寒

○きも、かんのざう「ー臟」○轉じてまごころ（心裏）しんからのこころ「ー膽」「心ー」「肺ー」「忠ー」「鐵ー」○かなめ「ー要」「ー腎」
【肝胃】カンイ きもと、わと。又こころ。蘇軾詩「山城亦何有、一俟瀉ニ――一」
【肝要】カンエウ かなめ。＝樞要・肝心・肝腎。
【裂レ肝碎レ首】カンヲサキクビヲクダク 禍害の甚だしき義（蘇軾、始皇論）
【析レ肝】カンヲサク 腹を割つて見せる、まごころを示す義。史、郦陽傳「剖レ心ー相信」＝披レ肝。
【披レ肝】カンヲヒラク まごころをうちあける。後漢書、朗顗傳「披ニ露肝膽一、書不レ掃レ言」
【肝膈】カンカク 肝臓と、むなおちと。轉じて心の中。蘇軾詩「祭洞成ニ曲沼一、清澈見ニ――一」
【肝腸】カンチャウ こころ。陸雲文「存ニ想其人一、痛ニ切ー――一」
【肝臟】カンザウ 五臟の一、胆汁を醸して胆嚢に送る器官。南史、張興世傳「貴賤曰、賊據ニ入ー――裏一、云何得レ活」
【肝心】カンシン 肝要に同じ。＝肝腎。
【肝腎】カンジン ○肝臟と腎臟と、轉じて心をいふ。陳與義詩「揚雄平生學、ー――固ニ醲鮮一」○物事の主要なるに喩ふ。＝肝要。
【肝膽相照】カンタンアヒテラス 互に心を示して隔す所なし。韓愈、柳子厚墓誌銘「握レ手出ニ肝膽一相示」
【披ニ肝膽一】まごころをうちあける。漢書、路溫舒傳「――、決ニ大計一」＝披レ肝。
【肝膽傾】カンタンカタムク まごころをかたむけつくす。曾鞏詩「江湖一見十年舊、談笑相逢――」
【肝膽楚越】カンタンソエツ 物は見方によりて肝膽の如く密接せるものも、楚越の如くに遠く隔たる。莊、德充符「自ニ其異者一視レ之、――也、自ニ其同者一視レ之、萬物皆一也」
【肝腦塗レ地】カンノウチニマミル 慘殺コロスせられて肝臟や腦が地にまみれる。史、劉敬傳「使ニ天下之民一――、父子暴ニ骨中野一」
【銘肝】メイカン 心に刻みて忘れず。
【肝肺】カンパイ ○かんの臟と、はいの臟と。○轉してまごころ。杜甫詩「想レ見勞ニ――一」＝肺肝。
【肝油】カンユ 動物の肝臟から採りし油、藥用とす。
【肝腎】カンジン ○かんのあぶら、腎は腸の開の脂ッ唐書、禮樂志「諸大祀、取ニ――一、燔ニ于爐一」○古の八珍の一。周禮、天官、膳夫「珍用ニ八物一」註「珍、謂ニ淳熬・淳母・炮豚・炮牂・捶擣・煎・――一也」

【肯】 クヮウ　陽

むなさき。心臓の上、横膈膜の下の局部、古代の醫者が藥力の及ばざる所とせし所。說文「心上鬲下也」左、成十「居二心之上肓之下一」「病入二肓一」

【肖】 ㊀セウ　㊁セウ　嘯　蕭

㊀にる(似)骨肉が似る「不一」「克一」書、說命「說築二傅巖之野一、惟一」○かたどる(象)のっとる(法)○ちひさし(小)㊁おとろふ(衰微)○うしなふ(失散)○國あやかる。

【肖像】セウザウ　にすがた、其の人に似せて作れる畫像又は偶像。‖肖象。

【肖似】セウジ　にる。范成大詩「我家勝畫于、竹帛照二吳越一、雲仍無二一一、頗二肖祖一」

【肘】 チウ　有

○ひぢ、うでの關節ヲ(臂は中部の彎曲せる所、一は其の外側)○ひぢを取りてとどめる「掣一」後漢書、孔融傳「欲」命觴、數數被二一一」○尺度の稱、一は二尺(一說に、一尺五寸)

【肘腋】チウエキ　○ひぢと、わきのしたと。○轉じて己に切近せる地に喩ふ。晉書、江統傳「寇發二心腹一、害起二一一」

【肘膝】チウシツ　ひぢと、またと。蘇軾詩「或飛入二吾車一、偪入二一一」

【肘腎】チウジン　ひぢ。字解參看。

【肘腋】チウヤク　ひぢと、かひなと。

【引レ肘】ヒクヒヂヲ　かひなをひく。晉書、宣帝紀「引レ弩將レ射レ帝、孫謙止レ之曰、事未レ可レ知、三注三止、皆引二其肘一、不レ得レ發」‖掣肘。

【掣レ肘】セイヒヂヲ　前條に同じ。聞見後錄「自二屢括日之所一レ行與レ所レ言、相一二矛盾者多矣」

【肚】 ト　姥　遇

○はら(腹)○胃の(胃)

【肚皮裏】トヒリ　腹の中、心の中。

四畫

【肱】 イウ　尤　又、疣に作る

○いぼ、皮肉の餘分に隆起せしもの(肉瘤)‖贅。○轉じて宂物ムダナノの義に喩ふ。

【肱贅】イウゼイ　いぼと、こぶと。むだなものに喩ふ。荀、宥坐「今學曾未レ如二一一、則具然欲レ爲二入師一」‖贅肱。

【育】 イク　屋　或は毓に作る

○やしなふ(養)そだつ、子を養ひて善をなさしむ「牧一」「薰一」「化一」詩、小雅「長レ我一レ我」○おひたつ、生長する、生を遂ける。中庸「萬物一焉」○うむ、うまる。易、漸卦「孕婦不レ一」○をさなし(幼稚)詩、衛風「昔一恐一」鞠

【育育】イクイク　活潑スイヤカなる貌。曾子「浩浩者水、一一者魚」

【育英】イクエイ　英才を敎育する。孟、盡心「得二天下之英才一而敎二育之一、三樂也」‖識英。

【育嬰堂】イクエイダウ　棄兒ステヲ養育する所。‖育兒院。

【育嬰】イクエイ　やしなひそだつ。鞠はそだてる。晉書、四夷傳論「開二一一之新隆一」‖育養・鞠育。

【育蒸】イクジヤウ　そだてたる、めばえ。蓼莪賦「因二本心一以誕レ節兮、凝二一一之緑英一」

【育兒】イクジ　こをそだつ。

【育兒院】イクジヰン　孤兒・貧兒等を敎養する所。

【育成】イクセイ　やしなひそだつ。禹貢、兗州「厥草惟一一、厥木惟二一一一」

【育德】イクトク　德を養ひ長ぜしむ。易、蒙卦「君子以果レ行一レ一」

【育養】イクヤウ　そだてやしなふ。諸葛亮答二杜微一書「二一民物一、如二治一甲兵一」‖育鞠。

【育孕】イクヨウ　子をはらむ。魏書、崔光傳「乞停二孝歎一、以候二一一一」

【肴】 カウ　肴　殽に同じ、或は餚に作る

○さかな、喫ふ肉、穀物以外の副食物。魚と肉との熱して食ふもの「酒一」「嘉一」「珍一」○國魚類のおかず。

【肴蔌】カウソク　さかなと、野菜と。蘇軾詩「洗レ餅對二妻孥一、一無二厚薄一」‖肴核。

【肴核】カウカク　前條に同じ。荊楚歲時記「歲暮家家具二一一一以迎二新年一」

【肮】 カウ　陽

のど、のどぶえ(喉嚨)史、劉敬傳「搤二其一一一、拊二其背一」古、亢に通ず。

【肺】 キツ　質　屑

○一蟲は蚊の如き小蟲が衆く集り起つ貌。轉じてさかんに興る貌。左思、蜀都賦「景福一蟲而興作」○人名、佛一は戰國時代の晉の人。

【肺肺】キツキツ　笑ふ貌。臧懷亮詩「洗レ杯問勞苦、天女笑一一」

【肭】 ノツ　月

をさむ。をさまる（斂）

【肩】㊀ケン ㊁コン 元先

㊀かた（髆）軀幹の上部の左右、頸項の下の兩臂と相連なる處、臂本。○轉じてたふ、こらへる（任・勝・克）書、盤庚「朕不レ―二好貨一」○―は荷を擔ふところ、故に負擔の義とす。左、襄二「鄭子駟請息レ―於晉一」○まかす。○三歲の獸。詩、齊風「並驅從二兩レ―一兮」㊁―はやせて小なる貌。一說に、直なる貌。莊、德充符「其脰――」

【肩胛骨】ケンコウコツ かひがらぼね、背部の上面、肩の兩側にある三角形の骨。＝圖骸骨。

【肩章】ケンショウ 軍人官吏等の制服につける肩じるし。

【肩隨】ケンズイ 年長者にしたがひて歩むに肩を並べて稍退きて行く。曲禮「五年以長、則―二之一」

【肩摩轂擊】ケンマカクゲキ 肩と肩とすれあひ、車の轂コシと轂とがうち合ふ。往來のこみ合ふ形容。戰國齊策「臨淄之途車轂擊、人肩摩、連レ衽成レ帷、舉レ袂成レ幕レ揮レ汗成レ雨」

【肩輿】ケンヨ 二人にて肩にかつぐかご。荻園雜記「古稱二―一・腰輿・板輿・筍輿・兜子一、即今轎也」蘇軾詩「―一任レ所レ適、遇レ勝輒留連」

【息レ肩】イケン 荷をおろして肩をやすめる。轉じて己の仕事を休む。左、襄二「鄭子駟請レ―二於晉一」

【聳レ肩】ショウケン ○肩をそばだて體をすくませる、こびる形容。孟、滕文公「―レ―諂笑」○催れつつしむさま。史、吳王濞傳「―レ―累レ足、猶惧レ不レ見レ赦」

【比レ肩】ヒケン ○かたをならべる。比肩二〇三頁一段を見よ。○つづきておこる。韓非、難勢「是―レ―隨レ踵而生也」

【股】コ 虞

○もも、あし、また（大腿）膝以上をー、以下を脛スネといふ。又、上下を通じてー一といふ。○また の一方。轉じて物事の一部分、一一は。兵の一支隊。合ーは合資して商業を營む。ー本は資本。ー分はかぶ、又株券。○體をたすける大切なる部分なるにより、轉じて重要の臣に喩ふ「ー肱」○車上の轂に近き部分。○磬の上の大いなる部分。○直角三角形の直角をなす長き方の邊「句ー弦」

【股肱之臣】ココウ 最も賴みとする輔佐の臣。書、皐陶謨「帝曰、臣作二朕股肱耳目一」左、昭九「君之輔佐、是謂二股肱一」

【股掌】コショウ もも と、てのひら と。觀ること小兒の如く、操縱することの極めて易きに喩ふ。吳語「玩二吳國於ー一之上一、以得二其志一」

【股掌之臣】コショウノシン 股肱之臣に同じ。戰國策「王曰、需寡人之ー一也」

【股主】コシュ ＝株主。

【股戰】コセン おそれて足がわななく。史、齊悼惠王世家「ー一而粟、恐不レ能レ言」＝股栗。

【股肱】ココウ もも。蔡邕文「良兒感二其ー一」

【股分】コブン ＝株式組織に於ける資本を幾株かに分ちしもの。

【股本】コホン ＝株式組織に係る營業の資本。

【股栗】コリツ おそれて足がふるへる。史、酷吏傳「餘皆ー一」＝股戰・股弁。

【股慄】コリツ おそれて足がふるへる。漢書、郅都傳「號二關氏首惡一、餘皆ー一」＝股栗。

【劃レ股啖レ腹】カクコタンフク 己の股の肉を割きて腹に食はしむ、畢竟己の損となるに喩ふ。貞觀政要「若損二百姓一以奉二其身一、猶二割レ股以啖レ腹、腹飽而身斃」

【刺レ股讀レ書】シコトクショ 蘇秦、書を讀みて睡らんと欲すれば錐を引きて自らその股を刺し、血流れて足に至りしといふ故事。戰國秦策「讀レ書欲レ睡、引レ錐自刺二其股一、血流至レ足」

【肯】㊀コウ ㊁カイ 迥 哈 迥 作る通 音コウ

㊀あへて。○がへんず、うけがふ、ききいれる、ゆるす。認可する。詩、衞風「悪然ー一來」㊁骨に著ける肉。

同訓異字 肯・敢の別は敢（支部八畫）の條を見よ。

【肯可】コカ ゆるす。ゆるし。歐陽修文「未二嘗有一所ー一一」

【肯構肯堂】コウコウコウドウ 父が業をはじめて子が能くこれを繼ぐにいふ。書、大誥、若考作レ室、既底レ法、厥子乃弗レ肯レ堂、矧肯レ構」

【肯綮】コウケイ ○肯は骨につく肉、綮は筋骨の結合せる所。莊、養生主「技經ー一之未レ嘗、而況大軱乎」○轉じて事の急所、又、要所に喩ふ。

【肯首】コウシュ うなづく。＝首肯。

【肯諾】コウダク うけがふ。＝承諾。

【肯定】コウテイ 然りと定める。否定の對。

【肱】コウ 蒸

○ひぢ（臂幹）臂の第二節、肘より腕に至るまで。○轉じてたのみとするものに喩ふ「股

ー」

【肱骨】コウ　ひぢと、せぼねと。最もたのみとすべきものに喩ふ。唐書、宦者傳「高宗稱稱、任以二ー一事一」‖心膂・腹心。

【折レ肱】フクヒ　三折レ肱（三六頁一段）を見よ。

【曲レ肱】キョクコウ　次條を見よ。

【枕レ肱】チンコウ　ひぢまくらで假寢（カシン）する。論、述而「曲レ肱而枕レ之」‖枕レ肱。

【橫レ肱】オウコウ　肱をよこたへる。禮記「寢中不レ翔、立坐不レ一レ」

【肢】シ　支　通じて支に作る

○人のてあし（手足）四ー は兩手兩足。○獸の足。鳥の翼及び足にもいふ。

【肢解】カイシ　支解（七九頁二段）に同じ。

【肢骨】コツシ　手足の骨。

【肢體】タイシ　からだ。‖身體・體軀。

【肴】シャ　肴

きりにく「鮮ー」

【胱】ジュン　眞

○ーはねんごろ（懇誠）なる貌。中庸「ー ー其仁」‖忳忳。○膀胱（ボウコウ）卽ち乾肉の全きもの。儀禮、士昏禮「ー脾不升」○同家　食の胃。

【胴】ドウ　㊀ザク　㊁トツ　月　屋

㊀縮ー は陰曆の朔日（サクジツ）に月の東方に見ゆるにいふ。㊁膃ー（トツ）は肥えたる貌。又、海獸の名、をっとせい（海狗）膃ー 腸は其の獸の腎と腸とを連ねて取れるもの、滋補の藥とす。

【肺】ハイ　隊

○はいのざう、五臟の一、呼吸する所以の者。○こころの中（心裏）「ー腑」「ー肝」○ー は草木の盛んに茂る貌。詩、陳風「其葉ー ー」○ー 附は至りて親しき義。

俗用　市（シ）に从ふ、俗に市（シ）に从ひて脯に作るは誤。

【肺炎】エンハイ　肺に炎症を起す病、初は悪寒發熱を覺え、甚だしきは胸部痛み、呼吸頻發、咯痰血色或は鐵錆色を帶び、音聲低くして續かず、傳染性を有す。

【肺肝】カンハイ　○はい臟と、かん臟と。○轉じて眞心（シンコン）の義とす。大學「如レ見二其ー ー一然」

【肺腑】フハイ　まごころ。嘉洪詩「臨レ事見二ー ー一」‖肺肝。

【肺活量】リョウカツハイ　肺臟に空氣を入るるすべての分量。

【肺結核】ケッカクハイ　結核性の肺病。‖肺勞・勞咳。

【肺肺】ハイハイ　盛んに茂る貌。詩、陳風「東門之楊、其葉ー ー」

【肺附】フハイ　至りて親しき親類。漢書、劉向傳「臣幸得レ託二ー ー一」

【肺腑】フハイ　○肺臟の相附く如く至りて親しきもの、骨肉といふが如し。史、魏其田蚡傳「蚡以二ー ー一爲二京師相一」‖肺附。○心の中。‖心腹。

【肺勞】ロウハイ　肺結核の俗稱、勞一に痨に作る。‖勞症・勞咳。

【胚】ハイ　灰　胚の本字

物の未だ形をなさざる者。婦の孕みて一月なるを一、二月なるを胎といふ。

【肪】ハウ　陽

○あぶら「脂ー」動物の體内の油質の凝結せるもの。○こえる（肥）

【肪膩】ボウジ　肌があぶらじみてなめらか。貢師泰、靴レ彈二提琶一賦「皓齒素腕、玉壁ー ー」

【肥】ヒ　微

○こゆ（多肉）肌肉の豐滿なる　養。痞の反對。○ゆたか（饒裕）さかんなり（盛）厚し。○こえしむ。こやす。○こえたる良馬。漢書、食貨志「乘レ堅策ー」○こえたる肉「ー甘」○地味の良きにいふ（沃土）○こえ、こやし「ー料」○源おなじくして落口の異なる流。水の出づる所の同じくして歸する所の異なるもの。

俗用　肥・腴・沃　○肥は肉多きなり、こえふとる義。轉じて田肥・家肥・圈肥などと用ふ。○腴は腹の下のあぶらぎりて肥えたるなり。轉じて肥田を膏腴といふ。○沃は土地の水がかりよくして、肥えたるをいふ、沃壤と熟す。

【肥沃】ヒヨク　こえてひろく、たひらかなる地。唐書、歐陽詹傳「閩越地ー ー、有二山泉一」蘇舜欽、早陽殿故址詩「瓦礫雖レ費レ力、土壤頗ー ー」

【肥仗】ヒジョウ　こえてみめよし、後は姦。論衡、面狀ー ー、亦一相也」

【肥甘】ヒカン　こえてうまきにく。孟、梁惠王「爲二ー ー一不レ足二于口一與」‖美味。

【肥牛】ヒギュウ　こえたろうし。史記「乃多釀レ酒、買二ー ー一」

【肥強】ヒキョウ　こえてつよし、強く盛んなり。晉書、江統傳「族類蕃息、既特二其ー ー一」‖肥勁。

【肥勁】ヒケイ こえてつよし。論衡「使二貴帝嗟レ事修レ道、則心意調和、形體ー
ー」
【肥潔】ヒケツ こえてきよらか。春秋繁露「性貪ニー、而不レ貪二其大一也」
【肥レ國】ヒコクス 國をこやす。史、趙世家「裂二楚之地一足二以ー一ヒー、適二楚之名一足二以尊レ主」
【肥壯】ヒサウ こえてさかんなり。南史、宋臨安王休仁傳「形體竝ーー」
【肥沃】ヒヨク こえたるのこ。漢家周書「ーー必厚、甘泉必竭、直木必伐」
【肥遯】ヒトン ゆたかにかざれることば。文心雕龍「時義ーー、繁雜失レ統」
【肥醲】ヒジク こえてみにくし。後漢書、逸民傳「孟氏有レ女、默ーー而黑、力舉二石臼一」
【肥壤】ヒジヤウ こえたる土。易林「膏澤ーー、農人豐收」＝膏壤・沃壤。
【肥筍】ヒシユン 肥えたるたけのこ。梅堯臣詩「水邊苦竹抽ニー一、石上老蘇挙二紫茸一」
【肥脆】ヒゼイ 肉がこえてやはらか。北戸錄「ーー偏堪レ炙」
【肥遁】ヒトン こえたるよき地。史、項羽紀「地ーー、可二都以王一」＝肥沃・肥饒。
【肥瘠】ヒセキ ○からだのこえたると、やせたると。韓愈、爭臣論「親二政之得失一、若二越人視二秦人之ーー一」○地のこえたると、やせたると。書、禹貢「田之高下ーー」
【肥碩】ヒセキ こえて大いなり。頑は大。唐書、職官志「牧養ーー、蕃息孳多、置二牧官之最一」＝豐碩。
【肥泉】ヒセン ○水源同じくして、落口の異る流（爾雅、釋水）○周代、衛國の水の名。詩、衛風「我思ニーー一」
【肥饌】ヒセン こえふとりたるいけにへ。賈袁職句「酒盧橫二短棹一、居几研ニーー一」
【肥鮮】ヒセン こえたる生魚、又は肉類。北史、裴俠傳「ーー不レ食」
【肥瘦】ヒサウ こえたると、やせたると。隋史「短長ーー、皆有二比擬一」＝肥瘠。
【肥息】ヒソク こえてそだつ。史、平準書「牧レ羊歲餘、羊ーー」
【肥大】ヒダイ こえて大いなり。管子「形體ーー、羽毛豐茂」
【肥體】ヒタイ こえたるからだ（管子）
【肥張】ヒチヤウ こえてふとる。＝肥滿。
【肥甜】ヒテン こえてうまし。梁簡文帝文「陳二養兒之美味一、薦二甜鬻之ーー一」＝肥甘。
【肥土】ヒド こえたる土地。瘠土の反對。＝肥饒・沃土。
【肥膸】ヒトン こえたる豚の肉。左、桓六「博碩ーー」＝膸肥。
【肥遯】ヒトン 肥は饒裕ユタカ遯は遁、心がゆつたりとして世を遁れかくる。易、遯卦「ーー无レ不レ利」＝高隱。
【肥肉】ヒニク こえてふとりたる鳥獸のにく。孟、梁惠王「庖有ニーー一、廐有二肥馬一」
【肥肉厚酒】ヒニクコウシユ こえてうまき肉と、よき酒と。呂覽、本性「ーー、務以自強二牧官之最一」＝豐頤。
【肥馬】ヒバ こえてたくましきうま。論、雍也「乘ニーー一衣二輕裘一」
【望二肥馬塵一】バヂンヲノゾム 富貴の人に追從するをいふ。杜甫詩「朝扣二富兒門一、暮隨二肥馬塵一」
【肥白】ヒハク 體がこえてしろし。史、張丞相傳「解レ衣伏レ質、身長大ーー如レ瓠」
【肥胖】ヒハン こえふとろ、胖は大「ーー病」
【肥美】ヒビ こえてうつくし。賈誼、過秦論「不レ愛二珍器重寶一ーー之地一、以致二天下之士一」
【肥牡】ヒボ こえたるをすの畜類。詩、小雅「既有ニーー一、以速二諸舅一」
【肥膴】ヒボ こえたる乾肉。東晉賦「受レ餽在二于ーー一、得レ力在二于美酒一」
【肥笨】ヒホン こえふとりて粗俗なり、笨は麤（晉書、羊曼傳）
【肥滿】ヒマン こえふとる。＝肥張。
【肥饒】ヒヂヤウ ＝肥饒に同じ。
【肥沃】ヒヨク こゆ。論衡「ーー境埆、土地之本性也」＝肥饒・沃饒。
【肥料】ヒレウ こやしの料となるもの。

五畫

【胃】キ 未

○る、るぶくろ（穀府）食物を受けて消化する器官。○ここ（心裏）「心ー」「肝ー」○星の名、こきへ、二十八宿の一、西方に在り、倉廩を主る。
【胃液】イエキ ○より分泌する消化液、透明にして水の如し、酸性を帶ぶ、一名胃酸。
【胃炎】イエン 胃加答兒の異稱、急性・慢性の二あり。
【洗レ胃】センイ 心を改める義。南史、齊衛伯玉傳「若許二某自新一、必吞レ刀刺レ腸、飲レ灰ーレー」
【胃加答兒】イカタル 前條に同じ。
【胃癌】イガン ○に惡症のできもの即ち癌腫を發する病。
【胃潰瘍】イカイヤウ 圖胃の內の粘膜が腐クサレして起る病。＝胃蝕。
【胃擴張】イクワクチヤウ 胃ぶくろの筋肉の收縮力が弱りてひろがる病。
【胃腔壁】イコウヘキ 胃がひきつけていたむ。
【胃酸】イサン 胃液に同じ「ーー過多症」
【胃弱】イジヤク ○の消化力のよわる病。
【胃腺】イセン 胃壁內に在りて胃液を分泌する腺。
【胃腸】イチヤウ ○と、ちやうと。＝腸胃。
【胃病】イビヤウ ○のやまひ。
【胃潰瘍】イカイヤウ 胃潰瘍に同じ。

【胤】イン 眞

○たね、ちすぢ（血統）子孫「後

ー」「天ー」「帝ー」「皇ー」○つぐ（繼嗣）子孫が父祖の後を承け續ぐ。書、洛誥「予乃ー保、大相東土」○ならふ（習）○國名。書、胤征「ー侯命掌六師」【胤裔】イン子孫。＝後裔。

【胛】カフ 陷

かひがらぼね、肩部に在りて鎖骨と上膊部とに接して關節をなす骨「肩ー」「ー骨」後漢書、張宗傳「中矛貫ー」

【胠】キョ 魚 語 御

○ひらく、あける（開・發）莊、胠篋「ー篋探ー」○さる（去）○軍隊の右のそなへ、軍の右翼「右ー」（左翼を啓といふ）

【胸】ク キョク 虞 尤

○まがれるほじし（屈脯）乾肉の屈がれるもの。○とほし（遠）○ーークは屈曲の貌。

【胡】コ 虞 廣東音ウ

○獸類の頤コ又、のどの皮肉のたれ下がれるもの。詩、豳風「狼跋其ー」○くび（頸）○としより（老）「ー考」○いのちながし（壽）○ほこのくび（戈頭）鋒の曲りて旁出する者。○なに、なんぞ、いづくんぞ（何）ー爲はなんすれぞ、ー如はいかん。○はるか（遐）とほし（遠）「ー福」○おほいなり（大）○のり。＝糊。○東北のえびすの名（北狄）轉じてひろく野蠻人、又、外國人を輕蔑していふ。○影ーはまこものみ（菰米）○盧ーは笑聲ののどの間にあるにいふ。○祭器、瑚に同じ。○ー粉ゴはおしろい。○俗にでたらめ（證定）をいふにいふ。意に任せて妄りに爲す「一說」「一闔」

同訓異義 ニ胡・何・曷・盍・那・庸・奚・詎・巨の別は何（人部五畫）の條を見よ。

【胡安國】コアンコク 字は康侯、宋の紹興中の進士、風度嶷遠、物表に蕭然たり、嘗て曰ふ、浮世の利名は眞に蝸蠅の前を過ぐるが如きなりと、著すところ春秋傳あり、文定と謚し、孔子の廟に從祀す。

【胡爲】コなんすれぞ、疑問の詞。杜甫詩「幣甲滿二天地一ー君遠行」

【胡越一家】コエツイッカ 胡は北狄、越は南夷、四海皆一となるをいふ。通鑑綱目、唐紀「ー、古未レ有也」

【胡越意】コエツイ 胡は北狄、越は南夷、相距ること絶めて遠し、故に疏遠の意に喩ふ。晉書故事「永懷共濟レ心、莫レ起二ー一ー一」

【胡瑗】コエン 字は翼之、宋の海陵の人、仕へて蘇湖二州の教授となる、經義・治事二齋を立て、明體適用の學を倡ふ、其の門より出づる者、皆循循として雅飭す、後に太學に居る、四方之に歸し、庠舍容るる能はず、世に安定先生と稱す。

【胡笳】カ 蘆葉を捲きて吹く笛、北方の胡人の吹くもの。舉參詩「君不レ聞ー一聲最悲、紫髯綠顏胡人吹」＝悲笳。

【胡笳十八拍】コカジュウハクハク 後漢の蔡邕の女蔡琰（文姬）亂離に際して虜となり、胡王の婦となり、兒を生む、後、曹操に購はれて歸る、乃ち其の間の事實を賦し——を作る（樂府詩集）

【胡考】コカウ ながいき。詩、周頌「ー之寧」

【胡樂】コガク ○えびすの音樂。○外國の音樂を輕蔑していふ。

【吞二胡羯一】コカツイツ 北方のえびすを一口に呑む、之を全滅せんとする志をいふ、羯は匈奴の一種族。文天祥、正氣歌「或爲二張レ江掎一、慷慨——」

【胡騎】コキ 北のえびすの騎兵。晉書、劉琨傳「現在二晉陽一、皆爲二ー一所レ圍」

【胡麻】コマ 宗廟の祭に用ふる器。左、莊十一「仲尼曰、ー一之事、則嘗學レ之矣」＝瑚璉・簠簋。

【胡琴】コキン 胡人の琴。徇異記「東市有レ賣二ー一者」

【胡弓】コキュウ もと胡人の遊りし樂器の名、形三味線に似、馬の尾を張りたる小弓にて絃をすり鳴らす。＝弦弓。

【胡瓜】コクワ きうり。齊民要術「收二ー一、候レ色黃則摘」＝黃瓜。

【胡元】コゲン 元朝、北の夷（胡）より起りしが故。

【胡言亂說】コゲンランセツ わけの分らぬ言說。

【胡耆】コク としより（老人）耆は壽。左、僖二二「難レ及二ー一、獲則取レ之、何有於二毛一」＝胡考。

【胡沙】コ ○漠古地方の沙漠。○鮫ヲの異稱、あぶざめ（本草綱目）

【胡坐】コザ あぐら。＝箕踞。

【胡臭】コシュウ わきが（腋臭）

【胡枝花】コシカ 萩の漢名。＝胡枝子。

【胡人】コジン 北方のえびす。＝北狄。

【胡牀】コショウ 椅子の類、不用の時はたたみ置くやうに造る（牀几）晉書、庾亮傳「亮便服二ー一、與二諸賢士一談詠竟夕」

【胡蔘】コジュ いのちながし。

【胡思亂想】コシランソウ 無益の思量をいふ。朱熹文「食於二日用之間一、稍立二課程一、不レ要レ如レ此ー一、過二卻日子一也」＝胡思想。

【胡荽】コスイ　こにし、こえんどろ、香草の一、實を藥用とす。

【胡椒】コセウ　熱地に產する香木、其の實を香味料とす、さんせうの類。酉陽雜俎「一出二摩伽陀國一」

【胡椒八百斛】コセウハツピヤクコク　甚だしく賄賂をむさぼるにいふ。晉書故事「元載受レ賄、沒事敗、有司籍二其家一、鍾乳五百兩、——」鍾は鍾。

【胡說】コセツ　でたらめの議論。

【胡銓】コセン　字は邦衡、澹菴と號す、宋の廬陵の人、高宗に仕へて樞密院編修となる、紹興八年宰臣秦檜、策を決して和を主とす、銓乃ち封事（文章軌範に載す）を上り、秦檜・孫近・王倫を斬らんと請ふ、檜、銓を以て狂妄凶悖と爲し、名を除きて昭州に編管す、卒して忠簡と謚す。

【胡蜂】コホウ　のどにはえたるひげ。酉陽雜俎「五百歲鼯、生二一一一」

【胡鳶鳥】コエンテウ　羊の異名「述異記」

【胡孫】コソン　さるの異名、其の形胡人に似たる故。廣雅「猴、一名狙、一名王孫、一名一一」‖猢猻。

【胡頽子】コタイシ　ぐみ。

【胡桃】コタウ　くるみ、落葉喬木、枝を取りて其の種子を食ふ。博物志「漢張騫使二西域一、還而得、故名二赤桃一核桃一」

【胡竹】コチク　笛の名、もと胡國の竹にて造る。

【故鹿】コロク　えびすが攻めて來るさわぎ。

【胡蝶】コテフ　てふてふ、昆蟲類の一。‖蝴蝶。

【胡蝶之夢】コテフノユメ　莊子、夢に胡蝶に化し、樂みて彼我の別を忘れたる故事。莊、齊物論「莊周夢爲二胡蝶一、栩栩然胡蝶也、自喩適レ志與、不レ知レ周也、俄然覺、則蘧蘧然周也、不レ知下周之夢爲二胡蝶一與、——爲レ周與上」

【胡天】コテン　北のえびすの國のそら。

【胡同】コトウ　北方の支那人、巷ヲ衢ヲ衝ヲ謂ふ、元人、詩に入るる者あり、一一は其の省字。

【胡馬依二北風一】コバキタカゼニヨル　胡馬は北狄の馬、故郷の忘れがたきに喩ふ。古詩「一一、越鳥巢二南枝一」

【胡服】コフク　北方のえびすのきもの。

【胡編】コヘン　遠く大いなるさいはひ。儀禮「眉壽萬年、永受二一一一一」‖景福・洪福。

【胡粉】コフン　おしろい。抱朴子、論僊「愚人乃不レ信二黃丹及一一、乃化レ鉛所レ作」

【胡蜂】コホウ　くまばち。

【胡麻】コマ　穀類の一、華方にして葉は圓くして銳し、秋白花を著く、節毎に角を結び長さ寸許、四稜・六稜・七八稜ありて同じからず、子は黑白二種あり、壓して油を製すべし、相傳ふ、漢の張騫、其の種を西域に得たり、故に一一と名づく。‖脂麻・芝麻・油麻。

【胡麻飯】コマノメシ　ごまを炊ぎたる飯。抱朴子「胡麻一名方莖、服食不レ老、仙家所レ食」（齊諧記「有二一杯流出一、中有二一一一」）

【胡蘿蔔】コラフク　にんじん、食用とす（人參は藥草にて全く別なり）

【胡虜】コリヨ　北方のえびす。‖羌虜・北狄。

【胡盧】コロ　○口をおほひて笑ふ。一說に笑聲の喉の間に在るをいふ。孔叢子「一一大笑」‖盧胡。○ゆふがほ。‖瓠盧。

【胡簶】コヤナグヒ　やなぐひ、矢を入れて負ふ器。詩「一一、箭室也」‖胡綠。

【胡黃連】コワウレン　せんぶり、藥草の一種、味甚だ苦し、千度ふり出してもなほ苦き義。

【胡散】コサン　あやしい、疑はし。‖胡亂。

【胡亂】コラン　○みだり。劉氏鴻書「五胡亂レ華、漢人避レ兵者、凡事皆倉卒、不レ能二完備一、相率一一」○あやしくうたがはし。‖胡散。

【肫】

㊀シ
㊁シ
支 眞

㊀鳥獸の殘骨。又腐りたる肉。肉のつきたる骨「一骼」禮、月令「掩二骼埋一レ一」‖骴。㊁みづわた（水腸）○一蟨はうみがめ。左思賦「擒二蟨蝸一打一蟨」

【肫芥】シカイ　みづわた。淮南、說山「海水雖レ大、不レ受二一一一」

【肢】

シ
支
肢に同じ

てあし（手足）

【肺】

シ
紙

ほじし（脯）肺の骨ある者。

【胗】

シン
軫

かさ（創）‖瘨。

【胥】

シヨ
魚

○あひ（相）公羊傳「一命者何、相命也」○みな（皆）ともに（與）○たすく（助）○まつ（待）史、廉頗傳「一後命郾鄗」○し（須）史、倉公傳「一與公往見之」○みる（視）○てふ（胡蝶）○こもの、小役人。○詩句に用ふる意味なき助字。詩、小雅「君子樂一一○象一はつうべん（通譯官）○蟹一は蟹醢（周禮、天官、庖人）

【胥字】ショジ　胥は相、相共に居る、鳳樓の義。詩經「爰及二姜女一、聿來一一」潘尼、東武館賦「慕二吉公之一一」、漢二孟母之善隣一」（一說に胥は視）

【胥匡】ショキヨウ　相互にただす。書、太甲「民非レ后、罔二克一一以生一」

【胥徒】ショ こやくにん。周禮「治官之屬、府史ー」＝胥吏。
【胥靡】ショビ 刑徒。胥は相、靡は繋、鎖にて相繋ぐ刑の又、其の人。史、殷紀「傅說爲ニー一、築ニ傅險ニ」＝刑徒。
【胥吏】ショリ 市の小役人。周禮、注「ー一肆長、市中給ニ繇役ニ者」＝胥徒。

【胆】シュ 虞 卿

うじ、肉の中に在る蝿の生みたる蟲。＝蠕。

【胙】ソ サク 藥 遇

○ひもろぎ（祭肉）神に供へし肉にて祭の後にて分配するもの「祭ー」「福ー」「致ー」「歸ー」○むくい（報）功績に報ずる。左、隱八「ー之土ニ而命ニ之氏」○くらゐ（位）○さいはひ（福）さいはひす。周語「天地所ー」
【胙俎】ソジョ ひもろぎを載せたるまないた。周禮、天官「賓客食則徹ニ王之ー一ニ」

【胎】タイ 灰

○はらごもる。はらごもり（懷妊）動物が未だ生れずして母の腹中に居る「ー兒」傳雅「人三月而ー」○子ぶくろ（子宮）○はらのこ「ー兒」はらみ女。○はじめ、もと、きざし「胚ー」「禍ー」○すべて物に包まれ生じてはらごもりの狀をなせるもの「珠ー」○竹ー（タケノ）は筍の異名。
【胎衣】タイ えな（胞衣）＝胎包・胞胎。
【胎甲】タイカフ 胎中をいふ。夢溪筆談「物之處ニー一、莫レ不ニ倒生ニ」
【胎禽】タイキン 鶴の異名。陳家詩「誰共悠游物外心、相親惟有ニ一ー一ニ」＝胎仙。
【胎訝】タイガイ 胎教に同じ。魏文帝文「周成王禮ニ上聖之休氣ー一、稟ニ資姙之ー一ニ」
【胎教】タイケウ 子の胎中にあるうち姙婦が志行を正しくして、自然に胎中の兒に良感化を及ぼすこと。列女傳「文王生而明聖、君子曰、太任能ニー一ニ」
【胎兒】タイジ はらごもりのこ。
【胎生】タイセイ 母の胎内にて適當に發育を遂げて生れるもの。哺乳動物は皆是れなり。卵生の對。史、樂書「ー者不レ殰」殰は流産。
【胎仙】タイセン 鶴の異名。黃庭經「琴心三疊舞ニー一ニ」＝胎禽。
【胎息】タイソク 臍の中にて深呼吸する、道家修練の一法。後漢書、方術傳「王眞年且二百歲、視レ之似レ未ニ五十一者、自云、能行ニー一胎食之方ニ」注「漢武内傳曰、習ニ閉レ氣而吞ニ之、名曰ニー一、習ニ嗽レ舌下レ泉而咽ニ之、名曰ニ胎食ニ」抱朴子「ー一而已、得ニー一者、能不下以ニ鼻口一噓吸上如レ在ニ胞胎之中一、則道成矣」
【胎毒】タイドク 小兒が父母より受けて生れし遺傳の毒。
【胎内】タイナイ はらのうち。＝胎中・胎甲。
【胎内寶】タイナイ 圓宮土山などの築山に於て人のくぐれるやうになりし自然の洞門。たいないくぐり。
【胎髮】タイハツ うぶがみ。うぶげ。
【胎盤】タイバン えな（胞衣）胎兒と母體とを結び著けるもの。
【胎孕】タイヨウ はらむ。胄經、疏「產生爲レ乳、ー一爲レ化」＝姙娠。

【胆】

膽（肉部十三畫）の俗字。

【胝】チ 紙

○あかがり、あかぎれ（皹手）○たこ、摩擦によりて手足の皮の厚くなりしもの「脾ー」

【胄】チウ 宥

甲冑の胄（冂部七畫）とは別

○よつぎ、あとつぎ（嗣子）そうりょう（嫡長）○ちすぢ（後裔）する「裔ー」「名ー」「貴ー」「支ー」「末ー」
【胄裔】チウエイ ちすぢ、子孫。裔は衣服のすそ、轉じて末の義とす。左傳「吳、周之ー一也」＝後胤・裔胄。
【胄子】チウシ 天子より卿大夫に至るまでのあとつぎの子。書、舜典「敎ニー一ニ」（貴族の子弟を敎育といふは此に本づく）

【胖】ハン 翰 絳

○はる（腫）○婦が孕みてニケ月目。○ゆさらひのにく（連脢肉）

【販】ハイ ハツ 卦 藥

○股の上の小さき毛、にこげ。莊、天下「脾無ー」勞動してもものの毛がすりきれる。○白き肉。

【背】ハイ 隊

○せ、せなか、胸部の反面。○うしろ、うら、すべて物の後面の稱。○うしろむく、そむく、せなかをむける（違反・孤負）＝倍。○轉じてみすてる（棄）世を去る、死する。李密、陳情表「慈父見ー」○堂の北。古、堂を南に面して建つる定めなりしが故。詩、衞風「焉得ニ諼草一、言

樹之一」

【背叛】ハイ　そむく。漢書、賈誼傳「下無二一一之心一、上無二誅伐之志一」‖背反・離叛・乖叛。

【背風】ハイ　おひかぜ。又風にそむく。唐白詩「鳥巢寄レ一レ」

【背面】ハイ　○頭をそむける。李商隱詩「十五泣二春風一一一嫌梳下」○うしろの方。‖反面。

【背反】ハイ　そむきもとる。晁氏客語「韓文公詩（中略）雖レ近不二叛經一、遠二乎理一多矣」‖叛戻。

【胚】ハイ　反　胚は正字

○はらごもり、みごもり。○婦が孕みて一箇月目の稱。○動物にては卵黄の上面にある眼點、即ち胚化して雛となる部分、植物にては種子の内部に在りて二枚の厚き子葉を具へるもの、即ち植物の起原となる部分。○轉じて物事のはじめ（原始）

【胚渾】ハイ　もののめばえ。晁補之詩「明朝好天色、萬象開二一一」

【胚珠】ハイ　種子が子房内に在りて未だ果實を成さざる小球形の白色軟質のもの。他日成熟して種子となるもの。

【胚胎】ハイ　はらび。轉じて物事のはじめに喩ふ。本草綱目「一一將レ兆」

【背水之陣】ハイスイ　水を背にして陣すれば、退くときは水に溺る、故に決死して進み敵を破らんと期す、韓信が背水の陣を用ひて趙を破りし故事（史、淮陰侯傳）‖綠孑、天官「背レ水陣爲二絕地一、向レ阪陣爲二發軍一」

【背膂】ハイ　ちかひにそむく。曹植文「强陣一レ」

【背馳】ハイ　彼と此と反對にそむく。曹植詩「今我唯困蒙、羣士所二一一」

【胞】ハウ　肴

○えな（胞衣）胎兒ハラノコを藏へる肉膜。‖胎衣。○はら、母の體内、同一は同父母の生む所の兄弟姉妹。○生物體を組織する原形質の細粒。

【胞衣】ハウイ　えな。南史「王敬則母爲二女巫一、宮謂レ人云、欲則生時、一一紫色、應レ得レ鳴二鼓角一」‖胎衣・胎盤。

【胞子】ハウ　○隱花植物の子嚢中に在る粉狀の生殖器官。○原生動物の個體の分れて成れる小體。

【胞胎】ハウタイ　えな。生神章經「人之受二生於一一之中一、三元育養、九氣結形」

【胖】（一）ハン　（二）ハン　寒

（一）牲の半體ハンタイ。○脇側のうすき肉。（二）大いなり、ゆたか（安舒）

大學「心廣體一」

【胙】

脈（肉部八畫）に同じ。

六畫

【胭】エン　先

【胤】イン　震

○のど、のんど（喉嚨）‖咽。○一脂はべに。

【胭脂】エンシ　べに、顏料の一、江蘇・廣東より出づる者を佳と爲す。紅藍花又は蘇木を以て製す。唐韻「一一與二燕脂一同」‖燕支。

【胲】カイ　灰

○足の大指。○そなはる（備）

【胳】カク　陌　陽

はぎ（脛端）

【胸】キョウ　多　もと匈に作る

○むね（膺）頸の下、腹の上の部分。○こころ、おもひ「一襟」「心一」「一次」○廣く人身のむねに似たる部分。

【胸宇】キョウウ　むね。王十朋詩「一朝出千レ祿、得失戰二一一」‖胸中・胸次。

【胸臆】キョウオク　むねと、わきのしたと。四征賦「分二身首于鉢刃一、洞二一一一以三流矢一」

【胸膛】キョウタウ　むねのうち。唐書、禮儀志「百家綴二一一之說一、五禮無二著定之文一」

【胸膈】キョウカク　むねと腹との間。轉じて心の中の義とす。蘇舜欽詩「余生性闊疎、遂レ人出二一一」

【胸襟】キョウキン　むねのうち、心中、襟は

胸に富る、故にいふ。劉伶詩「聞レ此消二一一一」‖胸懐。

【胸懐】キョウカイ おもひ。胸に懐ふところ。曹冏、六代論「衰情散二於一一一、逆謀消二於脅吻一」‖胸襟。

【胸廓】キョウカク 胸の大さ、胸のひろさ。‖胸郭。

【胸腔】キョウコウ むねの内部。

【胸骨】キョウコツ むねの骨。

【胸算】キョウサン むなざんよう、心の中のはかりごと。

【胸次】キョウジ むねのうち。荘、田子方「喜怒哀樂、不レ入二於一一一」‖胸中。

【胸情】キョウジョウ こころ。宋書、謝靈運傳論「直舉二一一一、非二諷詩史一」

【胸中】キョウチュウ ○むねのうち。荘、天地「機心存乎一一一、則純白不レ備」○おもはく。

【胸中自有二數萬甲兵一】キョウチュウオノヅカラスウマンノカフヘイアリ 大いなる智略に富むに喩ふ。宋史「范仲淹領二延安一、閲レ兵選レ將、日夕訓練、又戒二諸將一「選レ兵若レ銳毋レ貴レ多、毋以二延州一重、夏人聞レ之相戒曰、毋レ以二延州一爲也意、今小范老子、——、不レ比二大范老子可レ敢也」小范は、范仲淹、大范は、范雍。老子は知州の稱。

【胸中無二宿物一】キョウチュウニシュクブツナシ 心の中に少しもわだかまりなし。世說「庾赤玉——」

【胸中有二成竹一】キョウチュウニセイチクアリ 竹を畫くに先ちて胸中にすでに出來上りたる竹あり、而る後に筆を下す義（蘇軾、文與可畫二篔簹谷偃竹記一）晁補之詩「與可畫レ竹時、——」與可は、文與可。

【胸中正則眸子瞭】キョウチュウセイスレバボウシアキラカナリ 心正しければ目のひとみも明かになる（孟、離婁）

【胸中生レ塵】キョウチュウチヲショウズ 人を羞ひ想ふこと久しくして、逢ふ能はざるをいふ。盧仝詩「蟾蜍無レ繩井百尺、渴心時去生二塵埃一」朱熹詩「十年不レ共レ獻二陽春一、正有二胸中萬斛塵一」

【胸中鱗甲】キョウチュウリンカフ 心甚だ險にして人と爭ふをいふ。鱗甲は甲冑。蜀志、陳震傳「李平胸中有二鱗甲一」

【胸痛】キョウツウ むねのいたみ。

【胸臆】キョウオク むねの中のかんがへ。‖胸宅。

【胸府】キョウフ こころ。晉書、王凝之妻謝氏傳「始遇二此士一、聽二其所レ間、殊開二人一一一」

【胸腹】キョウフク ○むねと、はらと。○轉じて地勢の形容にいふ。戰國策「韓天下之咽喉、魏天下之——」

【胸壁】キョウヘキ ○内臟をまもる胸部の外壁。○又、胸ほどの高さの城壁。‖胸牆。

【胸膜】キョウマク 肋骨のうらをおほふまく。

【胸裡】キョウリ 胸中に同じ。‖胸裏。

【胃】

胸（前條）に同じ。

【胱】

クヮウ 膀ーバウはせうべんぶくろ。

【脊】

㊀ケヲ ㊁キヲ 通 又脇に作る

㊀わき。‖脇。○あばら、わきばら、胸の兩旁、肋骨のある處。○かたはら（旁側）○をさむ（收斂）○おびやかす、威力を以て人をおどす。○せむ（責）誅求する。㊁そびやかす。孟、滕文公「一レ一諂笑、病二於夏畦一」一一諂笑は諂ひ媚びる狀をいふ。

【脊骨】セキコツ よわきものをおびやかす。禮記「強者一レ一、衆者暴レ寡」

【脊從】セキジュウ 威力を以て迫られて惡人に從ひくみす。晉、胤征「殘二賊忠良一——罔レ治」

【脊制】セキセイ おびやかしおさへつける。抱朴子「一二州縣、無レ所レ不レ至」

【脊息】セキソク ○恐ること甚だしくして、氣ををさめていきす。宋玉、高唐賦「股戰一一」注「一一縮レ氣也」○國ひぢかけ。

【脊軍】セキグン おびやかしうばふ。後漢書、伏皇后紀「以レ刃一二一之」

【脊痛】セキツウ 病名、卽ち肋膜炎。

【脊迫】セキハク 勢力を以ておどしせまる。後漢書、申屠蟠傳「爲二董卓所二一一一逼以レ身免」

【脊逼】セキヒツ おびやかしせまる。李嶠詩「女レ劍明二秋水一、兒威屈一一」‖脊迫。

【脇】

脊（前條）に同じ。

【膀】

コ クヮ 通 通 通じて跨に作る

また、兩股の間。

【膀下】コカ またのした。史、淮陰侯傳「不レ能レ死、出二我一一一」

【脂】

シ 支

○あぶら、肉のあぶら「一肪」「凝一」膏の凝るもの。○あぶらづく、あぶらを塗りて滑かにする。あぶらさす「一車」詩、衞風「載一載一」○こゆ（肥）○やに、樹木・煙草などより分泌する粘液。○燕一ヱンはべに（紅）婦人の化粧品「口一」「膺一」○鴈一セッは鳥の名、いかるが。‖桑扈。

【脂膏】シコウ あぶらと、なめしがはと。共に柔滑なるもの、以て人の卑劣にして世俗にこびへつらふに喩ふ。

楚辭「膚淳淫以滑澤、如レ脂如レ凝、以柔擢乎」韓愈詩「行行正直慎ニ一ニ」

【脂膏】シカウ 生物のあぶら。酈道元、禦覽、注「俗謂ニ之青雀ニ、膏曲食レ肉、好盜ニ一ニ」

【脂膠】シカウ あぶらと、にかはと。周邦彥、汴都賦「金角丹漆、一ニ竹木」

【脂粧】シカウ 車のくさびにあぶらさす、將に出て行かんとする用意。左、襄三一「巾レ車一レ一」

【脂レ車】シルヲニアラス 車（部首七畫）の條を見よ。

【脂腺】シセン 皮膚にありて脂肪を分泌する腺。＝脂肪腺・皮脂腺。

【脂澤】シタク ○あぶらとさりてつやあり。列子「膚色一ニ」○化粧用のあぶら。李嶠、謝レ賜ニ口脂一表「遣ニ六宮之一ニ」

【脂膩】シヂ あぶらあか。朱德潤詩「日光射レ波一ニ浮」

【脂那】シナ 支那に同じ（舶譯名義集）

【脂肪】シバウ 動物の皮下及び筋肉の組織中に在るあぶら。それを分泌する腺を一ニ腺といふ。

【脂粉】シフン べにと、おしろいと。史、佞幸傳「傅ニ一ニ」

【脂粉塘】シフンタウ 地名。識遺雜記「吳故宮有ニ香水池、乃西施浴處、人呼爲ニ一ニ」

【脂粉氣】シフンキ べにおしろいの氣、柔弱にして爽爽の氣の乏しきにいふ。揚雄新語「林邦輸論レ詩云、梨花一枝春帶レ雨、句纔レ佳、不レ免レ有ニ一ニ」

【脂麻】シマ ごまの異名、以て油を製するが故。本草「胡麻、一名一ニ」＝芝麻。

【脂レ脂鎖レ冰】シヲシニサスルニヒヲ 勞して功なきに喩ふ。顏氏家訓「內無ニ其實一而外學ニ其文一、著ニ漬」脂鎖レ冰、費レ日損レ功」

【胾】シ 寘

きりにく、きりみ（切肉）ニ大ニ「一ニ」

【胾炙】シカ きり肉のあつもの。詩、魯頌「毛炰一ニ」

【腌】ジ 支

○ただらかす（鋼）○十分に煮る（煮熟）左、宣二二年「夫一ニ臐踏不レ熟」

【脆】ゼイ 透 脆の俗字

○もろし、堅からず、こはれ易し。○よわし（弱）○かろし（輕）○柔かにしてうまき肉。○音響が清越なり。白居易詩「且聽清一好詩篇」

【脆弱】ゼイジヤク ○もろくしてうすし。元稹詩「一一河冰安可レ越」○心がかるがるし、脆は輕。後漢書、許荊傳「風俗一ニ」＝輕薄。

【脆美】ゼイビ 肉がやはらかくうまし。

【脆膜】ゼイマク もろきまく。陳泰詩「初疑一ニ輕無レ力」

【脆味】ゼイミ やはらかくうまきあぢはひ。韓非子「香美一ニ、厚酒肥肉」

【胞】

臍（前條）の本字。

【脊】セキ 陌

○せ、せなか、せぼね「一骨」諸の骨の幹となりて、全體を支ふる者、共に二十四節あり。○すぢ、すぢみち（理）詩、小雅「有倫有一ニ」○すべて、せぼねの如く中央高く兩旁低きもの「屋一ニ」「嶺一ニ」「刀一ニ」史、張儀傳「必折ニ天下之一ニ」○山一ニは岡。

【脊骨】セキコツ せぼね。北史、滑國傳「惠連山有ニ瀕天神者ニ、祠前有ニ一魚ニ一有レ孔、中通ニ鳥騰出入ニ」

【脊鏈】セキレン 脊椎骨の後方の突起せる部分中にある灰白色の質、腦に聯結して神經中樞を爲す。

【脊柱】セキチウ せぼね、脊椎骨二十四枚連接して柱狀を成すもの。＝脊梁。

【脊椎】セキツイ 二十四枚の骨、相連りて脊骨をくみ立てる椎形の骨。＝脊梁。

【脊梁】セキリヤウ せぼね、脊骨は諸骨の幹にして屋の梁あるが如し、故に名づく。＝脊柱。

【脊令】セキレイ 鶺鴒に同じ。詩、小雅「一ニ在レ原、兄弟急難」

【胱】テウ 嘯

○祭の名。○まつりの肉。

【胴】トウ 送 通俗ドカ

○だいちやう（大腸）○身體の幹部即ち軀幹をいふ。○國ガク樂器其の他の物の中腹の部分「太鼓の一ニ」「船の一ニの間」

【能】㊀ドウ・ノウ ㊁ネイ 蒸 國

㊀けものの名、熊の屬、足は鹿に似て、骨節強く力ありといふ。○轉じてよく(善)よくす、爲し得る、たふ、任に勝へる、あたふ。孟、梁惠王「不ㇾ爲也、非ㇾ不ㇾ能ㇾ也」○はたらき、事を爲し得る力「才ー」○わざ「藝ー」○才藝にたける。又、其の人。孟子「使ㇾ能者」「賢ー」○國のう、舞樂の一「一樂」㊁たふ。漢書、陸賈傳「胡殆之人、性ー寒」

同訓異字　能・克・善・喜・好の別は克（儿部五畫）の條を見よ。

【有ㇾ能有二不能一】ユウノウアリフノウアリ　天才の能くする者と能くせざる者とあり。左、定五「人各ー―」

【能樂】ノウガク　國謠曲に合せて行ふ歌舞の一種。

【能幹】ノウカン　はたらき。後漢書、循吏傳「孟嘗清行出ㇾ俗、ー―絕ㇾ羣」＝才幹。

【能狂言】ノウキョウゲン　國能樂の間に行ふ狂言。

【能官】ノウクワン　才能のある官吏。宋史、劉敏傳「帝曰、吳充ー―、馮京亦無ㇾ他、中書惡二其太直一、不二相容一耳」

【能化】ノウケ　佛　能く人を教化する義。佛。又、僧の師をいふ。弟子を所化といふの對。

【能劇】ノウゲキ　國能狂言に同じ。

【能言鳥】ノウゲンテウ　鸚鵡ノウムの異名。漢書、武帝紀「南越獻二馴象一、――」

【能士】ノウシ　才能ある士。荀、王覇「足ㇾ以容二天下之ー―一」戰國策「不ㇾ遺二賢者之後一不ㇾ擯二ー―之士一」

【能事】ノウジ　○よく爲すべきわざ。易、繫辭「引而伸ㇾ之、觸ㇾ類而長ㇾ之、天下之ー―畢矣」○事の特に長ずる者。杜甫詩「ー―不ㇾ受相逼迫」

【能臣】ノウシン　はたらきあるけらい。三國志、注「許劭謂二曹操一曰、子治世之ー―、亂世之姦雄」＝良臣。

【能者】ノウシャ　才能ある者。左傳「以勸二ー―一」

【能書】ノウショ　○てかき。王肯堂筆麈「ー―不ㇾ擇ㇾ筆、猶ㇾ話也」＝能筆。○國がんの藥などの功能のかきつけ。

【能仁】ノウニン　佛　釋迦の異名。祖庭事苑「梵云二釋迦一、此言二ー―一」

【能筆】ノウヒツ　てかき。＝能書。

【能品】ノウヒン　藝事の規矩を失はずして、形似を得たる作品（能品の上は妙品、妙品の上は神品）（續畫錄）

【能文】ノウブン　文を巧に作る。

【能辯】ノウベン　たくみなる辯舌。

【能名】ノウメイ　才能を以て名ある義。晉書、陶侃傳「廬江太守張夔、召爲二督郵一、領二樅陽令一有二ー―一」

【能吏】ノウリ　はたらきある官吏、才能ある吏（漢書、蕭望之傳）＝良吏・能官。

【能率】ノウリツ　或仕事を爲して得る所の效果の割合。

【能力】ノウリョク　○事を爲し得る力。柳宗元文「命有二好醜一、匪二汝ー―一」○法律にて完全に私權を行使し得る資格。○智學にて精神のはたらき。○國がんてら男、寺の下僕。

【脈】ベク　ミャク　陌　脉ハ俗字

○みゃく、ちのすぢ、血液のめぐるみちすぢ（血管）全身に分布し、血の流行をして循環窮らざらしむ、血を發送する者を動ーといひ、血を廻らす者を靜ーといふ「一管」「血ー」「動ー」「靜ー」○みち、すぢみち、つづき「山ー」「水ー」「地ー」○すぢだってつづく（連絡）「一理」○みゃく、血管の鼓動にて病狀を察する。又其の鼓動「一搏」○蔬のすぢ「平行ー」「網ー」

【察ㇾ脈】サツミャク　みゃくを視て病を察する。漢書、何武傳「候使二侍醫伍宏等內侍ー―一」＝診脈。

【脈管】ミャククワン　血液のめぐる管ノ＝血管。

【脈息】ミャクソク　人體の兩腕の處の動脈の跳るをいふ、其の遲速を驗して呼息の數準と爲すが故。

【脈搏】ミャクハク　みゃくがうつ。うつみゃく。＝脈息。

【脈脈】ミャクミャク　○絕えざる貌。溫庭筠詩「花情羞ー―、柳意恨二微微一」○互に情を含みて相視る貌。古詩「盈盈一水間、ー―不ㇾ得ㇾ語」辛棄疾調「ー―此情誰訴」

【脈絡】ミャクラク　すぢみち、つづき。中庸、序「支分節解、ー―貫通」

【脈理】ミャクリ　つづけるすぢみち。吳越春秋「山川ー―、金玉所ㇾ在」

【脉】ミャク

脈（前條）の俗字。

【胖】ハン

腑（肉部八畫）に同じ。

【腴】ユ

腑（肉部九畫）の俗字。

七畫

【脚】キャク　カク　藥　腳は正字

○すね（脛）○あし、躰の下「老ー」「醉ー」＝腳。○物の下部「山ー」○足の形に似たる者「註ー」○足ありて行く如く見えるもの「雲ー」「雨ー」○たちば、身の置きどころ「失ー」○行ーは僧の諸國を巡りあるくもの。

【脚下】キャッカ　あしもと。轉じて目下の義。＝現今・眼前。

【脚氣】キャッケ　足のしびれ、又、はれるやまひ。柳宗元文「僦居二南中一九年、增二ー―病一」＝厥疾（素問）

【脚跟】コンくびす。閒雅、疏「踵、一一也」

【脚踏二實地一】キャクフムジツチ事を爲すの切實なる義。鄧伯温、聞見錄「司馬溫公問二康節一曰、某何如人、曰、君實——人也」

【脚踪】シャクあしあと。‖足跡。

【脚色】ショク○出仕する時の閥歷書。朝野類要「初入仕、必具二總實戶頭三代名衔、家口年歲一（中略）謂二之一一」○芝居のすぢがき。桃花扇傳奇、凡例「一一所三以分二別君子小人一」

【脚踏車】ダフシャ俗自轉車。

【脚遠】バクあしぬくめ、ゆたんぽの類。黃庭堅詩「千金買二一一一」‖足底也

【脚本】ホン芝居のすぢがき。

【脚力】リキ○あしのちから。蘇軾詩「一一盡時山更好、莫レ將二有限一趁二無窮一」○ひきゃく（脚夫）文書を傳遞する人。西陽雜俎「元和末、驃城——張儼、遞レ牒入レ京」

【脚榻】タッこたつ。

脚絆　俗はばき。‖脛衣。

【脛】ケイ　徑　週

○はぎ、すね、膝より踵に至る骨「痩一」「赤一」「一骨」‖小腿。○一一は直き貌。漢書、楊惲傳「事何容易、一一者未レ必全也」

【脛衣】イケイ　袴なり、はかまの類。說文「袴、一一也」‖脛褌。

【脛巾】キンケイはばき、きゃはん。‖行纏。

【脛胝】コイはぎと、もと。宋史、古城國傳「載二金花冠一七貫裝二瓔絡一爲レ飾、一一皆露、踊二半履一無レ襪」

【脞】サ　哿

○こまかし。○細くきりたるにく（切肉）○叢一は細かくくだくだしくして大略なし。書、益稷「元首叢一哉」

【脧】㊀サイ　㊁セン　先　灰

㊀赤子の陰（生殖器）㊁ちぢむ（縮）○へる（減）やせる。漢書、董仲舒傳「民日削月一」

【脩】㊀シウ　㊁イウ　有　尤

㊀ほじし（脯）割きて乾したる肉「束一」古、束一を執りて贄と爲す、故に教ふる者、弟子の報酬を謂ひて束一といふ。○をさむ（治）修に通ず、熟語は修の字の條參看。○つつしむ（敬）○ならふ（習）○はらふ（掃除）○そなふ（備）○をさまる。○ながし（長）「一竹」「一遠」ながさ。○ひさし（久）○かわく。かわかす（乾）詩、王風「暵其一矣」○一一はととのへる（整齊）貌。㊂漆ぬりの器物に通ず。

同訓異字　脩・長・永の別は長（部首八畫）の條を見よ。

【脩遠】エンシウ路のりとほし。風俗、繼騷「路漫漫、其一一兮」‖遠遠。

【脩遠】センシウながくしてほそし。王安石詩「盤根蟄二巨魁一、其末乃一一」

【脩熙】タイシウつつしみたるやうす。盤銘「妙容一一」

【脩短】タンシウ長短に同じ。潘岳、西征賦「生有二一一之命一、位有二通塞之遇一」

【脩竹】チクシウなが きたけ。東京賦「永安離宮、一一冬青」

【脩脯】ホシウほじし。韓琦詩「直疑二萬類繁一、盡欲レ變二一一一」

【脩睦】ボクシウむつまじくする。禮、禮運「講二信一レ、脩二之人利一」

【脩嫉】シュウ長きをろち。蘇軾詩「澤輔如二一一一、坡垂似二伏龍一」

【脩路】ロシウ長く遠きみち（史、風原傳）

【脈】シン　㒳

ひもろぎ（祭肉）社を祭るに用ふるなまの肉（熟したるは膰）

【脣】シン　眞　唇は俗字

くちびる、口のふち、口縁、齒の垣となるもの「朱一」「丹一」「絳一」「厚一」「缺一」

【搖レ脣鼓レ舌】シンヲヨウシコゼツ妄に人を是非する貌。莊、盜跖「作レ言造レ語、妄稱二文武一」——、擅生二是非一」

【反レ脣】ハンシンス不平の貌。史、平準書「微一一」

【脣形科】シンケイクシンケイ植物分類部門の一、其の花冠がくちびるの狀をなす草木。

【脣如二激丹一】シンジョゲキタンくちびる、丹朱をそそげるが如し。莊、盜跖「——、齒如二齊貝一」

【脣脂】シン口べに。釋名「一一以レ丹作レ之、象二脣赤一也」

【脣齒之國】シンシノクニ利害の關係最も密なる國。左、僖五「晉侯復假レ道於虞」以伐レ虢、宮之奇諫曰、虢虞之表也、虢亡虞必從レ之、諺所謂輔車相依、脣亡齒寒者、其虞虢之謂也」

【脣頭】トウくちびるのさき。‖脣邊。

【脣亡則齒寒】ボウシシカンス脣は齒をおほふもの、脣なくば齒寒し、相隣れる一國が亡べば他の一國も亦危しとの喩。戰國策、趙之於二齊楚一也、隱蔽也、猶二齒之有一脣也、——、今日亡レ趙、則明日及二齊楚一」

【脫】㊀ダツ　㊁タイ　㊂エツ　屑　泰　薛

㊀ぬぐ、衣服をぬぐ「一一衣」○

ぬける、とく、はづす、はづれる（解）○はなる。はなす（離）○まぬかる（免）○はぶく、おろそか、おほよそ（疏略）○わする（遺）おつ。おとす、ぬかす「一字」「一落」○おち、あやまり。○もし、假に設けて說く辭、或は然る辭。吳子、勵士「一其不勝、取笑諸侯」（一若と連用するも同じ）○一然は病の除く貌。㊀もぬけ、ぬけがら、蟲が新に皮をぬけて出る。㊁一タイはのびやか（舒遲）なる貌。又、よろこぶ貌。

【脫】（字部十四畫）の條を見よ。

【脫衣】ダツイ ころもをぬぐ。齊諧「一レ」就レ功、首喪二宰相一、身衣二婦人一」

【脫易】ダツイ 事をおろそかにしていがる。宋史、周惟傳「善レ人一レ、少二威儀一」

【脫穎】ダツエイ 軍人が其の兵器よりにげて出る。

【脫稿】ダツカウ ぬけすたる。唐書、令狐德棻傳「近代無二正史一、梁陳齊、文籍可レ據、至二周隋一事多二一レ」

【脫解】ダツカイ ぬぎとく。漢書、張耳陳餘傳「一ニ一印綬二與レ耳」

【脫稿】ダツカウ 詩文などのしたがきが出來上る。

【脫殼】ダツカク 雛が孵へりて卵からぬけ出る。

【脫監】ダツカン らっやぶり。明律「凡犯罪、一レ一越レ獄、加二等一」一は門より出づる者。越獄は牆を踰えて出づる者。

【脫漏】ダツロウ にげてかへる、ぬけてもれる。左傳「晉侯見レ之長二其衆一也、乃一レ」注「能不レ張二旗幟一」こそこそとにげかへる。

【脫裘】ダツキウ かはごろもをぬぐ。陸游詩「亦不レ須二一レ去換レ酒」

【脫御】ダツギョ ぬぎすてる。

【脫去】ダツキョ ○のがれさる、にげる。○ぬぎすてる。

【脫句】ダツク ぬけおちたる文句。

【脫化】ダツクワ もぬけて形をかへる、佛家の形式をかへる。

【脫俗】ダツゾク わざはひをのがれる。淨業、外戚傳「太后心安、君等幸一レ」免。

【脫口】ダツコウ はだぬぐ。薛能詩「捶彩半一レ」

【脫劍】ダツケン 帶びたる劍を解き去る。賈至詩「一レ升二明堂一、郁郁被二陵雲一」

【脫袴】ダツコ はかまをぬぐ。陸游詩「小市提レ壺酌二渴酒一、東陵一レ插二青棘一」

【脫誤】ダツゴ 文字のおちたると、あやまれると。司馬光文「所レ寫多二一レ一、因刊正、使レ復二其舊一」

【脫肛】ダツコウ 肛門内の筋肉が外部へ脫け出る病の外科祕法「治二一レ一、乘座良久、燒二熨於痛内一、令レ坐二其上一、蒸レ之軟痛」

【脫獄】ダツゴク らっやぶり、破獄。

【脫監】ダツカン 俗氣をはなれてさっぱりする。王冕詩「上人一レ無二滯留一」

【脫灑】ダツサイ 俗氣をはなれてさっぱりする。王冕詩「上人一レ無二滯留一」

【脫字】ダツジ 字をぬかす。かきおとした字。

【脫靴】ダツカ さうりをぬぎすつ。をしげもなく物を棄つるに喩ふ。漢書、郊祀志「視二妻子一如二一レ一耳」

【脫漏】ダツロウ わらぐつをぬぎすつ、前條に同じ。史、孝武紀「嗟乎吾誠得レ如二黃帝一、視二去妻子一如二一レ一耳」

【脫身】ダツシン 己の身をぬきて出る。史、張耳傳「乃一レ一游」

【脫脂綿】ダツシメン あぶら氣をぬきて消毒せしわた。外科治療に用ふ。

【脫出】ダツシュツ ぬけでる、又ぬけだす。

【脫稅】ダツゼイ いつはりて納稅をのがれる。

【脫然】ダツゼン ○病のさっぱりと除く貌。公羊、昭十九「樂正子春之視レ疾也、復加二一飯一、則一一愈」○ダツゼンゆるやかなる貌。又、速ぶ貌。淮南、精神「一一喜矣」

【脫線】ダツセン 圖○汽車・電車などが線路をはづれる。○轉じて言行が常軌をはなれる。

【脫疽】ダツソ 手足の端のくさる病。

【脫走】ダツソウ にげはしる。易林「得二一一」」逃走。

【脫骨】ダツコツ あみをぬけいづ。陸游詩「斷厨突依レ濱、强魚健一レ」

【脫俗】ダツゾク 俗氣をはなれる。幕府燕談錄「范文正公鎭レ人作二慈銘一、以示二尹師魯一、師魯曰二其一一」」脫塵。

【脫粟飯】ダツゾクハン もみを去りしのみにて精げざる玄米のめし。史、平津侯傳「弘爲レ人意忌、外寬内深、食不二肉脫粟之飯一」

【脫胎】ダタイ 他の作意をとりて其の形式をかふる義。參同契「作丹之時、一一入口、功成之後、一一出レ殼」換骨脫胎（七七の項）參看。

【脫退】ダタイ ひきしりぞく。又、逃れ退く。

【脫刀】ダトウ 刀を腰からとりはづす。

【脫劍】ダケン なかまをぬけ出る。

【脫落】ダラク ○元の人、字は大用、順宗の至正元年中書右丞相となる。博く經史に通じ、宋史・遼史・金史等を撰す。○托克托。○ダラク字解を見よ。

【脫座】ダツザ うきよをはなれる。

【脫俗】ダツゾク 俗・出塵。

【脫兎之勢】ダットノイキホヒ 兎のにげ出でたる如く迅速なる勢。孫子、九地「始如二處女一、敵人開レ戶、後如二脫兎一、敵不レ及拒」

處女、敵人開レ戸、後如二脫兔一、敵不レ及レ拒」

【脫離】ダツリ　なんぎをのがれる、兵亂をのがれる。孝子傳「―レ―還レ家、見レ母拜拜號泣」

【脫帽】ダツボウ　帽子をぬぐ。陸游詩「新年――始徵詢」

【脫劍】ダツケン　ぬけはがれる。王令詩「―虎豹皮、假借猶等閑」

【脫藩】ダツパン　國德川幕府時代に武士が其藩をのがれ出て他の領地へ行くこと。

【脫漏】ダツロウ　ぬけたると、あやまりたると。晉書、秦王柬傳「一省、便擅二―一」‖脫誤。

【脫毛】ダツモウ　けがぬけると又、ぬけたる毛。

【脫網】ダツモウ　あみをぬけ出る。晉書、裴頠傳「―レ―之餘、豈習所レ制」

【脫落】ダツラク　○ぬけおつ。杜陽雜俎「羽毛―一」○すてさる。晉書、韓伯傳「崇二尚莊老一、一一名敎一」

【脫離】ダツリ　ぬけはなれる。

【脫略】ダツリャク　○かるんじおろそかにする。王昌齡詩「傭者輕二王侯一、一一當世務一」○事をはぶく。

【脫路】ダツロ　にげみち。‖逃路。

【脫漏】ダツロウ　ぬけもれる。杜甫詩「小魚一―不レ可レ起」

【脡】テイ　チャウ　迥

○細長く伸びたるほじし（脯）○なほし（直）

【脡脡】テイテイ　直すぐき貌。儀禮、少牢饋食禮、疏「脡者、取二―一然直一」

【脡脯】テイホ　細長きほじし。公羊、昭二五「與二四―一」

【脰】トウ　宥

くび、うなじ（頸項）史、田單傳「自割絕二―一而死」

【脢】バイ　灰　隊

せのにく（背肉）脊の側の肉。

【脡】ハウ　ヘウ　看

ゆばりぶくろ（膀胱）‖圖尿脬。

【脯】フ　麌

あふ（合）‖吻（口部四畫）

【脯合】フガフ　ひったりとあふ（莊、齊物）‖吻合。

【脫】ヘン　銑　霰

うるはし、つやよし（肥澤）集韻「愉色必有二―一容一」

【脫顏】ヘンガン　つやありてうるはしきか（楚辭、遠遊）

【脯】ホ　麌

○ほじし（乾肉）「脡―」「束―」論、鄉黨「沽酒市―不レ食」○圖果實の乾したるものをもいふ。○ほじしにする、酷刑に處する。呂覽、行論「殺二鬼侯一而―レ之」

【脯醢】ホカイ　○ほじしと、しほからと。禮記「大夫膊禮以二―一」○古の極めて慘酷なる刑。史、晉仲連傳「曷爲與レ人俱稱レ王、辛就二―一之地一」

【脯脩】ホシュウ　きりさいなむ。任昉文「觸二士便一―之痛一」

【脯資】ホシ　ほじしと糒資との左、倍三三「一―餼牽羊、二餼は生肉、牽は牛羊豕）後世借りて旅費の義とす。

【脯脩】ホシュウ　ほじしの總稱、執二束修一一束脩一」‖脩脯。

【脯醢】ホヒ　ほじしと、ほしいひとの總稱、賦「進二―一而誰客」

【脛】レン　霰

○きりにく。‖臀。○さく（割）「一割」

八畫

【腋】エキ　セキ　陌　隔

○わき、わきのした。○わきの下の皮。史、商君傳「千羊之皮、不レ如二一狐之一―」

【腋芽】エキガ　植物の葉腋に生ずる芽、葉と枝莖との間に發するところの芽。

【腋汗】エキカン　おそれ又恥ぢてわきの下にあせかく。東觀餘論「使二製者一―毛蟹、不レ粟而栗」

【腋間】エキカン　わきのした。惠洪詩「拂拂清風産二一一」

【腋氣】エキキ　わきが。與猶便覺「―一名狐臭又名二猪狗臭一」‖腋臭・惶羶。

【腋臭】エキシウ　わきが。‖狐臭

【腔】カウ　コウ　江

○から、内部の空なること、腹の中、滿一ぱい。○かこひ。○わきばら。○ほじし。○歌のふし、歌の調子「一調」黃庭堅詩「秀句入レ新一」○語音をいふ「京一」「土一」「秦一」○からだ（骨骸）

【腔子裏】カウシリ　からだの中、心の所在をいふ。程子遺書「心要レ在二―一」

【腔腸】カウチャウ　くらげ等の動物の體腔にて營養をつかさどるところ「一一動物」

【臆】キョ 魚
雄のほじし「雉ー」

【腎】ジン 軫
○じんのざう、五臓の一、下腹部の両傍に在りて泌尿を掌る器官。○轉じてかなめ「肝ー」
【腎虚】ジンキョ 精気の盡きる病。
【腎経】ジンケイ 耳の異名。白虎通「耳者、腎之候」
【腎臓】ジンザウ じんのざう。＝内腎。字解を見よ。
【腎腸】ジンチャウ じんざうと、ちやうと。転じてまごころ。書、盤庚「今子其敷ニ心腹ー一ニ」

【膕】シュク 職
○一尺二寸の長さのほじし。○ねばる（粘）

【膓】スキ 支 尤 シウ
○しり（尻輪）○しりぼね、尻の骨（髄）

【膉】セキ 陌
○ほじし（乾肉）＝脯ガ ○桂皮などをまぜてほし固めたる肉。○ひもの。○ひさし（久）○きはまる。（極）
【膉魚】セキギョ しほびきの魚、ひもの。
【膉毒】セキドク 甚だしき毒。潘尼、乗輿箴「厚味ー一、醫生ー災」
【膉肉】セキニク ほじし。易、噬嗑「噬ニー一」通レ腊。小畜、无咎」

【膵】セツ セイ 霽 屑
やはらかにして破れ易し、もろし。＝脆。

【膸】タン 勘
○にく（肉）○はだへ（肌膚）○さかな（肴）

【膨】チャウ 巷
○はれる、ふくれる「膨ー」腹が満つる「痞ー」○腫皮膚が浮腫んする。
【膨満】チャウマン ○はらがはる。梅堯臣詩「飲レ水徒ー一、渇喉殊未レ蘇」○腹のふくれるやまひ（腹水）

【膕】ツキ 支
○足のたこ（跟抵）○さすのあとの厚き皮。

【膓】テン 銑
○あつし（厚）酒食を厚くそなへる。書、酒誥「自洗ー、致用酒」註「洗以致其潔ー以致其厚」おほし（多）○よし（善）「加ー」饒、郊特牲「辭無不ー」○いたる（至）○ひさし（久）
同訓異字 膓・厚・篤・敦・淳・醇・渥の別は厚（厂部八畫）の條を見よ。
【膓財】テンザイ てあつをおくりもの（己の贈物を謙して不膓といふの對）陶潜詩「ー一莫レ酬」

【脹】チョウ 漾
○こむら、ふくらはぎ、脛の後面のふくれたる肉。＝腓腸肚。○さく（避）よける。詩、小雅「君子所依、小人所ー」○やむ（病）かはる（變）詩、小雅「百卉具ー」
【脹脛】チョウハギ 脛骨の後に在る骨。

【脈】ミャク 陌
ひのざう、五臓の一、胃の左下部に在りて食物の消化を助ける器官「ー臓」
【脈胃虚】ミャクヰキョ 病名、胃弱ヰジャクの別名。
【脈疳】ミャクカン 小兒の腹のみふくれて脚の痩せる病。

【臙】エン 先
○くれなゐ（紅）○べにばな（紅花）○のどぼね（咽喉）○やつし（痩）
【臙脂】エンジ 婦人の化粧料。紅花の汁を取りて製す。
【臙脂虫】エンジチュウ 介虫の一。紅色の汁を出す。
【臙脂蝶】エンジチョウ 蝶の一。雄は黄色、雌は紅色。

【脾】ヒ 支
脾（胴條）の俗字。

【腐】フ 虞
○くさる、肉がくさる。○物がくちる（朽爛）「ー草」○やぶれてくさくなる（臭敗）ただれる（爛）○くさらす、ただらす。○くさりて役に立たず「ー儒」ふるくさし（陳舊）○男子の勢を去る刑。＝宮刑。○豆ーは食品の名。漢の淮南王劉安に始まる。＝黎祁（天禄識餘）
【腐草】フサウ くさりたるあくた。＝糞志、魏劉傳「虎珀不レ取ニー一、薇石不レ愛ニ曲玦一」（虎珀は琥珀コハク）
【腐朽】フキウ くさりくちる。蘇軾詩「猴人長ニ老死一ー一同ニ草木一」＝朽腐。
【腐刑】フケイ 男子の勢を割く刑。其の創の腐臭なるが故にいふ。一説に腐木の實を生ぜざるに比すと。司馬遷、報ニ任安一書「最下ー一極矣」＝宮刑。
【腐虀】フセイ ○くされるかす。○豆腐のから。きらず、卵の花、雪花菜。
【腐草】フサウ くさりたるくさ。禮、月令「季夏之月、ー一爲レ螢」
【腐索】フサク くさりたる繩。淮南子「以ニー一御ニ奔馬一」＝朽索。
【腐史】フシ 史記の異稱。其の著者司馬遷が腐刑に處せられたるが故。
【腐心】フシン 恨みて心を煩はしくるしめる。史、刺客傳「日夜、切齒ー一」

【膈間】ケン　陣膈にして用に立たぬ學者の史、季布傳「爲二天下一所二笑者一」‖迂儒。
【膈噎】ケツ　くさりて食はむ。‖腐敗・腐蝕。
【膈井】セイ　水のくさりたるあと。楚辭、九歌「恐二芳華之一ー一兮」
【膈風】フウ　くさりしねずみ。輕く賤しき物に喩ふ。莊子「鵷雛ニーー一」注「腐鼠、喩二汚濁一」‖鼠、加二腐臗一ー一耳」
【膈膊之酒】ハクシュ　うまき食物や酒。枚乘、七發「皓齒蛾眉、命曰二伐性之斧一、甘脆肥濃、命曰二――一」
【膈敗】ハイ　くさるの意。食貨志「太倉之粟、陳陳相因、充二溢露積於外一、ーー不レ可レ食」‖腐敗。
【膈水】スイ　くさりたる水の意。劉輔傳「ーー不レ可二以爲一杜」
【膈胸】キョウ　くされただれる。漢書、陳萬年傳「自殺死者、或數百千人、久者農出ーー」

【膀】フ　㊀本、府に作る

○はらわた「臟ーー胱胃・大腸小腸・膀胱・三焦を六ーといふ（金匱論）○こころ（心裏）心のそこ。○至りて親しきものに喩ふ。史、惠景間侯者年表「諸侯子弟若肺ー」
【膀臚】ロ　はらわた。抱朴、至理「破二

【胖】ヘン　㊀又、胼に作る

○ーー胝はたこ、摩擦によりて手足などの皮が固まり厚くなる。あかぎれ、手足に出來るひびわれ。○かたし（固）
【胖眠】ベンミン　あかぎれ、手に胖といひ、足に胝といふ。一說に骨に近きの皮が壓迫せられて硬くなるをいふ、たこ。莊子「手足ーー」

【膟】ルイ　㊀

皮起る。

【腕】ワン　㊁

○うで。○てくび。胃の下端、掌のつけ根の所。○かひな。肘。と、てくびとの間。○㊁手ーン（はたらき、うでさへ（技倆）は宛なり、其の宛屈するに因る。
【捉レ腕】サクワン　うでをおさへる、責る時の狀「切齒ーー」‖擒腕・捻腕。
【腕骨】コツ　手くびを組み立てる八枚の小骨。
【腕釧】セン　うでわ（李商隱詩話）
【腕白】ハク　小兒の亂暴なるもの「ーー小僧」
【腕力】リキ　うでのちから。范成大詩「強弱二尺素一答二相思一兩日膠昏ーー疲」

九　畫

【膇】アク　㊁

脂アブラ厚し「ー脂」

【腰】エウ　㊀又、要に作る。古、要に通ず

○こし、身體の脊柱の下部と骨盤の上部とを結びつける大關節の名、又腹部と臀部との間、屈伸を主るもの。○こしにす、こしに著ける、帶びる「ー劍」「ー刀」○要害の地勢に喩ふ。戰國、魏策「梁者山東之ーー也」○山の麓に近き所「山ー」○㊁刀を數ふるにいふ。
【腰圍】イ　こしのまはり。腰の周圍。陸游詩「瘦損ーー圍未レ工」
【腰下】カ　こしの邊。李白詩「客舍草初人、ーー有二龍泉一」
【腰間】カン　こしのまはり。李白詩「流星白羽ーー插、劍花秋瀉光出レ匣」
【腰絞】コウ　婦人の裙帶（モスソ）をいふ。杜甫詩「珠壓ーー穩稱レ身」
【腰劍】ケン　けんをこしに帶びる。又、其の劍。陸游詩「負レ琴ーー成二友一」‖腰刀。
【腰疲】ヒ　つづみ。文獻通考「ーー之制、大者瓦、小者木、皆腐首織腹」‖細腰疲。
【腰斬】ザン　腰と脚とを斬りはなす刑。‖要斬。
【腰肢】シ　腰幹に同じ。庾肩吾詩「本自細ーー」
【腰肢軟】ナン　こしがやはらか、柳永、贈レ妓詞「英英妙舞ーー」
【腰纏】テン　こしなは、罪人の腰をしばるなは。唐高僧傳「以ニーー一繫レ之」
【腰帶】タイ　○革の大帶（身章撮要）‖盤帶の○骨盤の一名。○㊁園女のおびひも。
【腰刀】トウ　こしに差すかたな（北齊書、傅伏眼傳）
【腰椎】ツイ　腰部の脊椎骨。
【腰纏】テン　○腰にまきつける。時芸小說「纏ーー二十萬貫、騎レ鶴上二揚州一」○轉じてどうまき、財布。
【腰帬】クン　こしと、ももと。說苑「寡人有ニーー之病」
【腰腳】キャク　長靴のかこ。前後數人各手を以て腰の邊の高さにかき行くもの。通鑑、梁紀「ーー馬驢等之物」
【腰二絞痛一】コウツウ　腰骨と頭骨との間を兇かれる。管子「幸以獲レ生、以ーー、臣之疎也」腰一に要に作る。
【腰脊】セキ　こしと、せぼねと。蘇軾文「老病入ニーー一」
【折レ腰】セツヨウ　こしをかがむ、人に下るにいふ。晉書、熊遠傳「吾不レ能レ

（舊二五斗米一ー）事鄉里小兒」

【胥】 ショ 魚 ⑧ 醬（俗字）

魚の臭。禮、月令「仲秋之月、其臭ー」○なまぐさきもの。○あぶら（膏）○けがれ（汙穢）

【胯】 コ 麌 ⑥ 股（股部九畫）に同じ。

【腳】 キャク 藥 ⑨ 脚（肉部七畫）に同じ。

【腱】 ケン 元 先 ⑫ 願 ⑭

すぢのさき（筋頭）すぢのつけね。又、筋の大いなるもの。

【腮】 サイ 灰 ⑫ 顋（頁部九畫）の俗字。

【腫】 シュ 腫 ⑬

○ふくれる、はれる（脹）むくむ「振ー」漢書、五行志「公閉門而泣之、日盡ー」○はれもの、できもの（癰）○擁ーは木のふしこぶ。莊、逍遙遊「其大木擁ー而不中規矩」

【腫物】 シュモツ 腫はれもの、できもの。

【腫瘍】 シュヨウ はれもの、できもの（腫物）周禮、天官「瘍醫掌ー瘍潰金瘍折瘍之祝藥劀殺之齊」

【腥】 セイ シャウ 青

○なま（生肉）論、鄉黨「君賜ー必熟而薦之」○なまぐさし、魚の臭。禮、月令「仲秋之月、其臭ー」○なまぐさきもの。○あぶら（膏）○けがれ（汙穢）

【分ー醒】 フンセイ なまの肉を分配する。說苑、貴文侯、問二政于屈侯一「屈侯對曰、分ー熟不ー如ーー、ーー不ー如ー分ー地」

【腥魚】 セイギョ なまのうお。禮、大學之禮、倘二玄酒一而俎二ーー一」

【腥血】 セイケツ なまぐさきち。黃庭堅詩「合浦珠門ーー滿、荒城下自骨成丘」

【腥臊】 セイサウ ○なまぐさくけがらはし。史、晉世家「犯肉ーー何足ー食」犯は笞犯）○惡しくけがらはし。周語「其敗ーー」

【腥臭】 セイシウ なまぐさきにほひ。

【腥々】 セイセイ なまぐさきしる。范成大詩「火攻憚二燒臭一手拍嫌二ーー一」

【腥水】 セイスイ なまぐさきみづ。范成大詩「ーー留灘二末利一粘香旋車二柔落一」

【腥膻】 セイセン なまぐさきけもの。又其れを食ふ外國人をののしりていふ。（膻は羊に同じ、羊臭）‖唐腥。

【腥臙】 セイヤン なまぐさくしてあぶらじむの張籍詩「瘴衣常ーー」

【腥德】 セイケイ けがれたる德。中論「辱罪昭著、ーー發聞」‖穢德。

【腥風】 フウ なまぐさかぜ。又、殺伐の氣。韓愈詩「ーー遠更飄」

【腥聞】 セイブン けがれたるきこえ。喪、酒誥「ーー在ー上」紂の腥穢の德が上、天に聞ゆるをいふ。

【腥穢】 セイワイ なまぐさくけがれる。王僧孺詩「酒天ーー思二一掃一」

【腠】 ソウ 宥 ⑫

○はだへ（皮膚）○はだへのきめ（肉理・皮理）

【腠理】 ソウリ はだのきめ、皮膚の間。史、扁鵲傳「君有ー疾、在二ーー一」素問「寒則ーー閉」‖膚理。

【腦】 ダウ ノウ 皓 通音 ナウ

○なづき、あたまのしん（頭髓）「ー髓」「ー病」頭蓋中にある灰白色の物質。人の精神思慮の出づる所。○しん（草木の髓）○あたま、頭蓋骨。○精力、精神のはたらき。○馬ーノウは鏃石の一。‖瑪瑙。○樟ーショウは藥の名、樟木より製す。

【腦溢血】 ノウイツケツ 腦の血管の破れる病。‖卒中・中風・腦出血。

【腦出】 ノウシュツ 腦溢血に同じ。

【腦髓】 ノウズイ 頭蓋骨中に在る灰白色の物質。精神のはたらきをするもの。大腦・小腦・中腦・延髓の總稱。

【腦天】 ノウテン 圖 いただき、てっぺん。‖腦頂。

【腦貧血】 ノウヒンケツ 腦の血液の少くなる病。

【腦膜炎】 ノウマクエン 腦の膜に炎衝をおこす病。小兒に多し‖髓風。

【腦漿】 ノウショウ こころのうち。‖腦中。

【腦震】 ノウシン 病名。外傷より腦の脈をもらす、或加答兒を患ふるによりて起る。

【腦充血】 ノウジュウケツ 逆上して血液の腦に滿つる病。

【腦膜】 ノウマク 腦髓を包める膜。

【腦髓】 ノウズイ 腦の總稱。

【腦脊髓】 ノウセキズイ 脊柱の中にある髓。

【腦神經】 ノウシンケイ 大腦の底面及び延髓より發する十二對の運動及び知覺神經の稱。

【腦震盪】 ノウシンタウ 打撃等によりて腦がふるひうごかされて知覺を失ふ病（盪は盪）

【腦漿】 ノウショウ なづみそ、腦の粘液。

【腹】 フク 屋 ⑬

○はら、六腑の一、胃より肛門に至る細長き管にて食物が其の中を通過しつつ消化する。大ー小ーに分る。○こころ（心裏）「心ー」「中ー」「剛ー」「鐵心石ー」○羊ーは山阪の名、山西省大行山に在り、阪路屈

【腹痛】 フクツウ 腹の痛む病。

【腹瀉】 フクシャ 下痢。

【腹心】 フクシン ○はらとむね。○こころ。○心腹の臣。

【腹背】 フクハイ 前後。

【腹部】 フクブ 身體の腹の部分。

【腹膜】 フクマク 腹部の内面を包める膜。

【腹膜炎】 フクマクエン 腹膜の炎衝をおこす病。

【腹案】 フクアン 心中の考案。

【腹稿】 フクカウ 心中の文稿。

【腹藏】 フクザウ 胸腹の内臟。

【腹痛】 フクツウ 腹の痛む病。

【腹鳴】 フクメイ 腹の鳴る病。

【腹帶】 フクタイ 妊婦が胎兒の安全を祈りて腹に卷く帶。

【腹中】 フクチュウ 腹の内。

【腹背受敵】 フクハイジュテキ 前後より敵を受く。

【腹心之疾】 フクシンノシツ 治し難き病。

【腹背之毛】 フクハイノモウ 無用の物。

【腹誹】 フクヒ 心中にそしる。

【腹笥】 フクシ 學問の蓄積。

【腹藁】 フクカウ 腹稿に同じ。

【腹鼓】 フクコ 腹を打ちて鼓の如く鳴らす。

【腹痛】 フクツウ 腹の痛む病。

【腹瀉】 フクシャ 下痢。

【腹心】 フクシン ○はらとむね。○こころ。○心腹の臣。

【腹背】 フクハイ 前後。

【腹部】 フクブ 身體の腹の部分。

【腹膜】 フクマク 腹部の内面を包める膜。

【腹膜炎】 フクマクエン 腹膜の炎衝をおこす病。

【腹案】 フクアン 心中の考案。

【腹稿】 フクカウ 心中の文稿。

【腹藏】 フクザウ 胸腹の内臟。

【腹痛】 フクツウ 腹の痛む病。

【腹鳴】 フクメイ 腹の鳴る病。

【腹帶】 フクタイ 妊婦が胎兒の安全を祈りて腹に卷く帶。

【腹中】 フクチュウ 腹の内。

【腹背受敵】 フクハイジュテキ 前後より敵を受く。

【腹心之疾】 フクシンノシツ 治し難き病。

【腹背之毛】 フクハイノモウ 無用の物。

【腹誹】 フクヒ 心中にそしる。

【腹笥】 フクシ 學問の蓄積。

【腹藁】 フクカウ 腹稿に同じ。

【腹鼓】 フクコ 腹を打ちて鼓の如く鳴らす。

【腸】 チャウ 陽 ⑬ 腸は俗字

○はらわた、六腑の一、胃より肛門に至る細長き管にて食物が其の中を通過しつつ消化する、大ー小ーに分る。○こころ（心裏）「心ー」「中ー」「剛ー」「鐵心石ー」○羊ーは山阪の名、山西省大行山に在り、阪路屈

折多し。史、趙世家「羊ー之西」轉じて廣くつづらをりの險阪の義とす。○無ー公子は蟹の異名。

【腸胃】チャウヰ　はらわた、わた。史、扁鵲傳「湔二洗ー一、澡二雪五臓一、練レ精易レ形」＝胃腸。

【腸加菅皃】チャウカクワンバウ　病名、腸の中の粘膜の炎腫する病、急性・慢性の二種あり。

【腸胃】チャウヰ　はらわた、じんさっと。轉じて心の義とす。李嶠文「洗二貪鄙之ー一、開二盲聾之耳目一」

【腸断】チャウダン　はらわたがちぎれる、甚だしくかなしむ形容。江淹、別賦「行子ー一、百感傷レ腸」＝斷腸。

【腸窒扶斯】チャウチツフス　腸のいたむ傳染病。＝傷寒。

【腸肚】チャウト　はら、心の中。葉顒詩「風前而目松梢操、鐵石ー一冰玉肌」

【腸胞脳漿】チャウホウナウシャウ　血氣が盛んにして知識の少きに喩ふ。北齊書、環邪王佺「環邪王年少、ー一、輕爲二異措一」

【腸腹】チャウフク　はら。淮南子「肥二肌膚一、充二ー一一、供二嗜欲一、養レ性之末也」

【膜】　薬

薄く切りたる肉。＝薄。

【膂】　トツ　トン　月　願

こゆ、ふとる（肥）牛羊に肥といひ、豕にー一といふ「豐ー」左、桓六「牲牷肥ー」

【膰肥】ヒツ　豚の異名〔曲禮〕

【膜】　ドン　劇　やはらか（纖弱）

【朕】　バイ　医

○はらむ、婦人が始めて孕む（胎）○ー一バイは肥えたる貌。又、美くしき貌。左思、魏都賦「ー一坰野」

【膈】　ヒョク　劇

○むねふさがる、氣がむすぼれる、憂が泄れず。○ー一は雞のはばたきする聲。古詩「ー一膊膊雞初鳴」又、冰のわれさける聲。古詩「ー一膊膊春冰裂」＝幅膊。

【膈塞】ヒョクソク　胸ふさがりて氣の泄れざる狼。漢武帝、哀策「舒二盛德一而昧レ慝、遂ー一以沒レ事」＝幅憧。

【腹】　フク　屋

○はら、胸部の下にありて內臓をつつむ部分「滿ー」「鼓ー」○こころ（心衷）○氣が合ひてたのみとする「一心」○生みたる母體「同ー」「異ー」「遺ー」○いだく（懷抱）詩、小雅「出入ー一我」○まへ、前面「ー一背受レ敵」○すべて人のはらに似たるもの「山ー」

【腹案】フクアン　心の中のかんがへ。

【腹胃】フクヰ　はらのなか。韓非子「惡瘡面傷二害ー一」

【腹腔】フクカウ　腹の內の臓器をかこめるうつろ。

【腹稿】フクカウ　胸の中にて文章を組み立てる。唐書、王勃傳「勃閉レ戸、初不二構思一、先磨二墨數升一、引レ被濡レ面臥、及レ寤、援レ筆成レ文、不レ易二一字一、時人謂レ勃爲二ー一一」＝腹藁。

【腹蔵】フクザウ　図　腹の中に隱して語らず、遠慮ー一て思ふことを言はず。

【腹誹密疏】フクヒミッソ　腹中の本箱がからである、無學の喩。揚億詩「講學情田塲、談經腹笥虛」

【腹疾】フクシツ　はらのいたむ病。くだりは（泄瀉）左傳「河魚ー一奈何」南史、吳明徹傳「遇二肥水一灌二城之中一、苦困多二ー一一、手足皆腫、死者十六七」

【腹心】フクシン　己と心を同じくして頼みとする人。詩、周南「趙趙武夫、公侯ー一」

【布二腹心一】フクシン　心をうちあけて告げる。左、宣十二「非レ所二敢望一也、戰ー一」

【披二腹心一】フクシン　まごころをひらく。史、淮陰侯傳「臣願ー一、輸二肝膽一、效二愚計一、恐二足下不レ能レ用也」

【腹心疾】フクシンシツ　はらの中の重き病。史、商鞅傳「秦之與レ魏、譬若二人之有一ー一、非二魏并レ秦、秦卽并レ魏一、秦卽并レ魏、魏并レ秦、秦卽并レ魏」

【腹足類】フクソクルイ　軟體動物の一分類の名、多くは上に介殻を有し、腹面は筋肉質の足をなすもの、にし、あはびなどの類。

【腹腹】フクフク　はらのふくれる病。南史、張融傳「腹腹而黃、衆醫不レ能レ療」＝水腹。

【腹中之書】フクチウノショ　腹の中にたくはへたる書。世說、排調「郝隆七月七日、見二曝書者一、皆曬二衣帛一、乃出二日中仰臥一、人問二其故一、曰我曝二腹中書一也」

【腹痛】フクツウ　はらいたむ。漢武帝、祭二禰太尉一文「車過二三歩一、ー一勿レ怪」

【腹背】フクハイ　○はらと、せと。○まへとうしろと。晉書、羅憲趙攸記「ー一擊レ之、上策也」

【腹非之法】フクヒノホフ　次條に同じ〔漢書、食貨志〕

【腹誹之法】フクヒノホフ　口は言はされども、心に非としてそしる者を罰する法。史、平準書「損二益官九卿一見二令不便一、不二入言一而腹誹、死以自一是之後、有ー一一」

【腹壁】フクヘキ　腹腔の側壁。

【腹膜】フクマク　腹腔内の臓器を支（持つ）膜「―炎」

【鼓レ腹】コフフクス　はらつづみをうつ。莊、馬蹄「含哺而熙、―レ―而遊」

【剖レ腹藏レ珠】ホウフクザウシユ　財を愛して己の身を害する譬。唐書、太宗紀「太宗曰、西域賈胡得二美珠一、剖レ腹而藏レ之、愛レ珠而不レ愛二其身一也」

【腹便便】ヘンペン　はらのふくれたる貌。後漢書、邊韶傳「韶曰、腹之便便、五經之笥」韶は書物箱。

【腴】ユ　國　匯　俗字

○こゆ、下腹部が肥える。○又其のこえてやはらかにあぶらののりたる肉「鮮―」○うつくし、地味の肥えて美くしきにいふ「肥―」「沃―」漢書、地理志「九州膏―」○道の美くしきにいふ。班固、答賓戲「味二道之一腴一」○こやす、こえしむ。

【腰】ワイ　唐

―膝ヨウはのびやか（舒遲）なる貌。（王褒、洞簫賦）

【腺】〔國字〕

せん。分泌作用を營む體内の器官「汗―」「乳―」

十畫

【膃】エキ　陌

くびのにく（脰肉）

【膃】チツ　月　職

―肭ノウは北海に產する海獸の名、鰒ノウに似ありて、毛は黑褐色にして柔軟なり、一名海狗。

【膃肭臍】ヲツトツセイ　陰莖及び睾丸の脂ノウと連接せるものを、截じて取りて滋養藥としたもの。正字通「海狗腎曰二――一」

【膏】㊀カウ・コウ　㊁カウ・コウ　豪　號

㊀あぶら、肉のあぶら、脂肪。○火を點ずるあぶら（燈油）○こえる（肥）ふとる。○うるほひ（潤澤）めぐみ（恩澤）○くちべに（脣脂）○あぶらぐすり「―藥」「軟―」○あまし（甘）「―露」美くし。○なめらかにしてつやよし（滑澤）○むねのした（心下）左、成十「居育之上―之下」○味よく滑か。㊁あぶらす、油を塗りてなめらかにす。韓愈、送二李愿一序「―吾車一兮」○うるほす（潤）詩、曹風「芃芃黍苗、陰雨―之」

【膏雨】カウウ　時に應じて百穀をうるほす好きあめ。左、襄十九「小國之仰二大國一也、如二百穀之仰一―一也」

【膏汗】カウカン　あぶらと、あせと。與地紀勝「蒲宗孟肥、每レ至二暑夏一、膩―流溢」

【膏火】カウクワ　あぶらのひ。韓愈詩「十年讀レ書燈二―一、盡日吟レ詩愁二眼肝一」＝燈火。

【膏肓】カウクワウ　肓は心の下の微膜、肓はその上の薄膜、針藥の力の及ばざる所。後漢書、郭康威傳「鍼二―一、起二廢疾一」二豎（七五頁三段）を見よ。

【膏血】カウケツ　○あぶらと、ちと。唐書、陸贄傳「歷系歲二予逋一呼、―一鍋予笞捶一」○租稅を嚴しくとり立てる義。宋史、王禹偁傳「錫二生民一―一」

【膏燭】カウシヨク　あぶら、脂はぶた・犬などのあぶら（周禮、天官、庖人）

【膏腴】カウユ　こえたるよき土地。史、貨殖傳「―沃野千里」＝膏腴之地。

【膏澤】カウタク　よきうるほひ。王褒論、禮レ佛文「修二風鮮一、―一相續」

【膏澤】カウタク　めぐみにうるほふ。又めぐみ。孟、離婁「諸行善聽、―一下二于民一」唐園、四都賦「―一洽二於黎庶一」＝恩澤。

【膏潤】カウジユン　潤などが、あぶらの潤ウルヲしく如く靜か。柳宗元文「猿苦―、來若二白虹一沈沈無一聲」

【膏腴】カウユ　膏腴なる田地。蘇子良文「―一沃野」

【膏肪】カウバウ　あぶのかたまり。陸游詩「土如二―一一水如レ乳」

【膏物】カウブツ　樹理ゐの白き植物、楊柳の類。周禮、地官「其植物宜二―一一」

【膏脉】カウミヤク　うまきあぢ。＝美味・旨味。

【膏沐】カウモク　口べにと、髮のあらひ粉と。詩、豳風「豈無二―一、誰適爲レ容」說苑「言二人之善一澤二於一―一、言二人之惡一痛二於矛戟一」

【膏澤】カウタク　よきうるほひの意ヲ轉じて恩澤に喩ふ。顧雅臣獻「―一潤二于原隰一」

【膏藥】カウヤク　あぶらぐすり。後漢書、段熲傳「爲二合一―一」

【膏油】カウユ　燈火をもやす。韓愈、進學解「――以續レ晷、常兢兢以勤レ年」

【膏腴之地】カウユノチ　こえたる土地。戰國策、韓魏支二分方輿一――、以薄レ鄭」＝膏腴。

【膏粱】カウリヤウ　肥えたる肉と、美くしき粟とのうまき食物の義。孟、告子「詩云、既醉以レ酒、既飽以レ德、言三乎飽二仁義一也、所二以不一願二人之一―之味一也」

【膏粱子弟】カウリヤウシテイ　富貴の家の子弟。天香樓偶得「今人謂二富貴家一曰二――一、言但知二膏食一、不レ諳二他務一也」

【膏粱紈綺】カウリヤウクワンキ　貧澤を藏して美味にあく。東坡志林、雪堂記「――者、與二之精麤一、則必有二忍同一」

【膏粱之性】カウリャウノセイ 肥肉美穀を食ふ驕奢なる者の性。晉語「——、驕ノ正也」

【膏露】カウロ 萬物をうるほすよきつゆ、膏は甘の義、禮運「天降ニ——一、地出ニ醴泉一」＝甘露。

【膈】カク 陷 通じて鬲に作る

○心ムネと脾との間「胸ニ」○むねのうち(胸中)蘇軾詩「清徹見胸ニ」○鐘を懸ける木。＝鐘格。

【膈膜】カクマク 胸腔と腹腔との間に在りて二腔を區別する者、人の呼吸はこの膜の一張一縮に由る。

【膂】カク クヮク 藥 肉のあつもの(肉羹)

【膂】シウ 宥 やす、やせる(臞)＝瘦。

【膝】ソ 遇 飲獸の喉ノドの食を受ける處。潘岳、射雉賦「裂ニ破嚢一」＝嗉。

【膞】タイ 賄 ○はぎ(脛)と股モモとの總稱。股は大ニ、脛は小ニ「下ニ」○脛と股との後の肉。

【膜】マク 陌 ニ眺バクは小便ぶくろ、腎臟より出る尿をたくはへる囊。周禮、天官、疏「ニ眺爲精液之府」

【膜炎】エンマクエン 膀胱の内の粘膜が炎症を發する病、急性・慢性の別あり。

【膀】ハウ バウ 陽 足がはれる(足腫)脚氣の類。左、成六「有ニ沈瘍重ニ之疾一」

【膊】ハク 藥 ○ほじし(脯)うすく切りたる乾肉。○はりつけ(磔)罪人をはりつけにする。左、成二「殺而ニ之乎城上ニ」○かた(肩)「門ニ」○厚ニは厚く切りたる肉。○ニは雞のはばたきする聲。陸游詩「ニ庭樹雞初鳴」膈(肉部九畫)參看。＝膈膈膊

【膍】ヒ ヘイ 支 はらわた、五臟の總稱、牛羊麋鹿などの反芻類の胃。＝百葉。

【膂】リョ 語 又、筋に作る ○せぼね(脊骨)「筋ニ」「背ニ」○筋肉のちから。○轉じてたのみとするものに喩ふ。書、君牙「作ニ股肱心ニ」

【膂力】リョリョク せぼね(脊梁骨)のちからの意。書、吾丘壽傳「手ニ格猛獸一ニ——絕ニ」＝旅力。

【膄】ヨ 齊(御韻)に同じ。

【膂】レ 薺 膊(脇條)の間のあぶら(膊脂)「肝ニ」詩、小雅「取ニ其血ニ」

十一畫

【膠】(一)カウ・ケウ (二)カウ 巧 名 效 ㊀にかは、牛の皮、魚の膘ウキブクロなどを煮つめて作る、物を接合するに用ふ。周禮、考工記「ニ必厚施」○轉じてすべて物の黏ネバするもの「樹ニ」○にかはす、にかはをつけて接ぐ「ニ柱」○かたし(固)詩、小雅「德音孔ニ」○ねばりつく(黏合)杜甫詩「舌在口已ニ」○つく、附著する。○舟を淺瀨にのりあける。莊、逍遙遊「置ニ杯焉則ニ」○ただす(糾)○東ニは周代の學舍の名。禮、王制「養ニ國老於東ニ」＝東序。○州の名、山東省に在り、灤外に青島あり。○ニは雞の聲。又、和ぐ貌。又、動きみだれる貌。○姓。ニ爾は殷の賢人。㊁もとる(戻)「ニ戻」「ニ加」

【膠飴】カウイ 水あめ(糖名)(乾枯せしものは僞)

【膠加】カウカ もとる(戻)楚辭、九辯「何況ニ國之事兮、亦多端而ニ——」＝膠葛。

【膠膠】カウカウ ○やはらぐ貌。又、雞の聲。詩、鄭風「風雨瀟瀟、雞鳴ニ——」＝喈喈・雝雝。○うごきみだれる(騒擾)貌。莊、天道「魂且、然則ニ——擾擾乎」

【膠葛】カウカツ ○もとる、いりみだれる。史、司馬相如傳「雜遝ニ——以方馳」＝膠轕・交加。○上の清き氣(漢書、揚雄傳)

【膠化】カウクワ 物の化して膠の如くなるをいふ。

【膠固】カウコ ○にかはにてつけたる如くかたし。晉閻丈「諂侯彊大、磐石ニ——」＝牢固。○こりかたまりて融通がきかぬ、固陋にして變通のオに乏し。江淹文「非ニ臣ニ——、所ニ宜ニ膺荷一」

【膠西】カウサイ　地名、漢の一一王の國、今の山東膠縣・高密等の地。
【膠州灣】カウシウワン　黄海の海灣、山東省膠縣の南、勞山の角に在り、灣の東に勞山港あり、港口に青島あり。膠濟鐵路の起點地。
【膠庠】カウシャウ　膠ハ杜斆ノ略。杜（九三頁一段）參看。沈約文「守株一一、雖二異適一變」
【膠漆】カウシツ　○にかはと、うるしと。古詩「以レ膠投二漆中一、誰能別二離此一」○轉じて交情の堅きに喩ふ。後漢書、管寧傳「一一自謂堅、不レ如二雷與一陳一杜甫、贈二蕭昔詩「天下朋友皆一一」
【膠漆重黏】カウシツチョウデン　にかはと、うるしとの極めてねばる義、黏は粘に同じ。戰國策「夫一一也、而不レ能レ合レ遠、鴻毛至輕也、而不レ能二自舉一」
【膠序】カウジョ　○周の學舍の名。禮、王制「養二國老於東膠一、養二庶老於虞序一」○轉じてひろく學舍の稱とす。
【膠柱】カウチュウ　○にかはにてつぐ。博物志「武帝射二于甘泉宮一、帝弓弦絕、四使膠續二以レ一一之」○後世は機變に乏しき形容の義に用ふ。‖鼓瑟。
【膠着】カウチャク　しっかりとかたまりつく、易林「一一米レ遇、不レ出二牛觸一」
【膠柱】カウチュウ　柱（木部五畫）の條を見よ。
【膠粘】カウデン　にかはがねばら。粘は黏に同じ。歐陽修詩「窟摩久不レ作、意思如二一一一」
【膠戻】カウレイ　もとる、戻、文選に盭に作る。上林賦「塩平一一、瑜波趨浥」‖邪曲。
【膠擾】カウレイ　前條に同じ。

【膝】シツ　シチ　肉

ひざ。股と脛との相接する關節部にして以て屈伸すべき所。
【膝下】シッカ　○父母のひざもと。唐書、高宗紀「願得下奉二至尊一居中一一上」○子が父母に對する稱。
【膝蓋骨】シツガイコツ　ひざのさら。‖膝頭骨。
【膝行】シッカウ　ひざを地にすりつけながら行く、甚だしく畏れる形容。史、項羽紀「無レ不二一一一而前一莫二敢仰視一」
【膝席】シッセキ　ひざを以て席上に進む義。史、滑稽傳「餘半一一」身は起つと雖も膝はなほ席に據るをいふ。
【膝蓋】シツガイ　ひざのさら。‖就前「股脚一一脛骨レ柱」
【膝蹇拘背】シツケンクハイ　ひざのかゆきに背をかく。議論などの理に當らざる喩。‖蹇澁論「議論無レ所レ係、如二一一一」
【容レ膝】ヨウシツ　僅にひざを入れる程の小さき室、高士傳「結レ廬連レ騎、所レ安不レ過レ一一」
【促レ膝】ソクシツ　前へだんだんに進み出る。魏書、李孝傳「或一一レ一以持レ肩」‖前レ膝。
【偎レ膝】アイシツ　ひざをくづす。晉書、劉輿傳「應レ機辦實、一一レ一酬接」
【屈レ膝】クッシツ　ひざをかがめる。人の下となる。胡銓、上二高宗一封事「陛下一一レ一」

【膊】ハク　バク　肉

○きりにく（鰒）㊁股のほね。㊂陶器を作る用具。考工記「器中一一」

【膣】チツ　肉

○肉が生ずる。○女子生殖器の一、陰門より子宮に達する道。‖腟・生殖口。

【腸】チョウ　腸（肉部九畫）の俗字。

【膜】㊀バク・マク　藥　㊁ボ　虞

㊀まく、うすかは、あまかは、動物の體内の器官を包むうす皮「眼一」「耳一」○轉じて薄衣ふ。李商隱詩「榴一輕明榴子鮮」○なでる（撫）㊁一拜は兩手をあげ地に伏して拜する。長跪して拜する。穆天子傳「乃一拜而受」
【膜外】バクガイ　度外に同じ。魏了翁詩「榮進付二一一、寡欲自日休」
【膜拜】バハイ　長跪して拜する。字解參看。
【膜唄】バイ　手を合せ佛を拜して歌をうたふ。唐書「三公士人、奔走一一」
【膜翅類】マクシルイ　昆蟲類の一分類名、翅が膜質にして脈のあるもの、蜂・蟻など。

【膚】フ　虞

○はだ、はだへ「皮一」「肌一」「髮一」身體の表皮、詩、衛風「一如二凝脂一」轉じて物の表面。○うすし、うはつらばかりにして淺し。淺薄「一淺」「一泛」○うつくし（美）「一敏」○おほいなり（大）「一公」○つく（傅）○ぶたのにく（豕肉）○きりみ（切肉）○四本の指をならべたる長さ（扶の借字）
【膚引】フイン　あちこちとうはべをはぎとりて己の肌のたすけとする。
【膚學】フガク　淺薄なる學問。謝靈運文「淺思一一」‖淺學。
【膚合】フガフ　せまく小さききれぎれの雲の集り合ふ義。公羊、僖三一「觚レ石而出、膚寸而合、不二崇朝一而徧

而二乎天下一者、惟太山爾ン潘尼賦「雲ー一而仰浮」

【肩汗】カン はたへにあせをかく。王褒文「胸端ー一、人極馬倦」

【肩肌】ケン はだへ。○蘇軾詩「世間苦樂知有ン幾、今我幸免二ー一一」＝肌膚。

【肩隨】ケン 言語文章の大いにして理に當らざるもの。肩は膚淺。

【肩見】ケン あさはかなかんがへ、皮膚之見の略（南齊書、陸澄傳）

【肩公】ケン 大いなるいきを、公は功。詩、小雅「以奏二ー一一」＝大功。

【肩受】ケン うはべだけ受け傳へる、なまものじり。張衡、東京賦「末學ー一」

【肩受之想】ケン はだへに受くる如き利害の身に切なるうったへ。論、預潤「子且、浸潤之譖、一一、不ン行焉、可ン謂ン明也已矣」

【膚寸】ケン わづかの長さ、肩は手指四本をならべたる長さ、寸は一本の指を按ずる。戰國策「齊人伐レ楚、楚勝、一一之地無得者、形弗ン能ン有也」商合を見よ。＝扶寸。

【膚淺】セン あさはか。晉書、荀勗傳「元帝詔曰、袁粲ー一、不ン足ン置二博士一」＝淺薄。

【膚屈】セン 淺はかにして堅固ならず。宋郭文「識局膚淺、衛學ー一」

【膚撓目逃】ケウ はだへが刺されてたわみ、おそれてまともに見得ず。勇氣の無き形容。孟、公孫丑「不二膚撓一、不二目逃一」に出づ。

【膚受】ケン 入れ墨する。左思、魏都賦「或ー一而讃レ髮」＝文身。

【膚敏】ケン 容貌大いにして才すぐれてさとし。詩、大雅「殷士ー一」

【膚理】ケン はだのきめ。荀、榮辱「骨體ー一、辨二寒暑疾養一」＝肌理。

【膚如二凝脂一】ケン はだへの白く美くしきにいふ。詩、衛風「手如二柔荑一」

【膚不ン生レ毛】ケン はだへの毛がすり切れるほど勞役を續ける。司馬相如、難二蜀父老一「丹渓二其勞一、而膚無ン毛、——」

【膝】シツ

一ざは、祖祭に供ふる肉。一說に、はらわたの間のあぶら。

【膞】リツ・ロ

リツ・ル　尤　魚

○飲食の神の祭。○臘日の祭事。○立秋の日に天子出獵し還りて宗廟を祭ること。

【膞祠】リツ 狩の祭の名。穀梁、莊廿五「山居而谷汲者、一一而買ン水」

十二畫

【膮】ケウ

キウ　尤　篠

○ぶたのあつもの（豕肉羹）○かぐはし（香）

【膳】シヤン

ほしうを（乾魚）＝鯗。

【膳】

膳（肉部六畫）に同じ。

【膲】セウ

三ーサンは六腑の一、みのわた、水穀の通ずる所にして氣の終始する所といふ、上中下に分つ。＝三焦。

【膳】セン ゼン

○そなへ供する食物。調理の善く具はれる食物。○くらふ（食）總、文王世子「食下間所ー一」註「問所食」○くらふ肉。くらふ物。いけにへの肉。圖○飲食物をのせる臺。○めし、ごはん。○茶碗に盛りし飯を數へる稱。○著ニ一對の稱。

【減ン膳】ゲンゼン 大旱に同じ。晉書、成帝紀「咸康二年三月旱、詔二太官一ーレー」

【損ン膳】ソンゼン 天子が常の膳數を減損して儉約する義。賈山、至言「損二食膳一、不ン聽ン樂」史、平準書「天子乃ーレー、解二乘輿馬一、出御府禁藏一、以賜レ之」＝減膳。

【膳宰】ゼン 食膳を主宰する役、即ち膳夫の長（左、昭九）

【膳羞】シウ 牲肉と、うまき食物と。大祭祀を見よ。

【膳夫】フ 周代、宮中の食膳を司るもの。周禮、天官「ー一掌二王之食飲膳羞一」註「膳、牲肉也」

【膳府】フ 庖厨の用に供する物を掌る處。韋莊詩「八珍稱二ー一一」

【膳部】ブ ○料理人。○唐代の官名、宮廷の料理を掌る。○圖料理したる食物。＝饗膳。

【膳服】フク 飲食物と衣服と。周禮、圖市之賦、以待二王之ー一」

【膩】ヂ

○こゑ（肥ー）○あぶらじむ、あぶらあか（垢ー）○脂ー「肪ー」杜牧、阿房宮賦「渭流漲ー、棄脂水也」○なめらか（滑）きめがよい「細ー」「柔ー」「潤ー」

【膩滑】クワツ あぶらけありてなめらか。北史、解律光傳「妹下有二一物一、如二黑猪一、從レ地出走、其穴ー一」元稹詩「蛾江ー一淺眉秀、幻出文君與二薛濤一」

【膩染】ゼン あぶらじむ。丁復、夜鴉曲「指痕ー一膚紋細」

【膜拜】ファイ　なめらかなるおしろい。○白居易、木蘭花詩「紫房日照臙脂坼、素蘂風吹ー一開」【膜理】リヤ　なめらかにしてきめよし。宋玉、招魂「靡ー一理」

【膨】ハウ　庚　敲　通音パウ

はる、ふくれる（脹）

【膨脝】パウはらふくれる（大腹）韓愈、石鼎聯句「素腹ー一」‖彭亨・澎大。

【膨大】パイ　ふくれて大いなり。

【膨脹】チヤウ　ふくれる、物の容積が擴大する、無形の物にも亦借用す。

【膰】ハン　元

ひもろぎ、煮たる宗廟の祭肉、祭儀の熟肉。史、孔子世家「致ー一乎大夫」

【膰肉】ニク　宗廟の祭に供ふる熟したる肉、ひもろぎ。孟、告子「從而祭、ー一不レ至、不レ稅レ冕而行」

【膿】㊀ブ　㊁フ　虞　虞　通音ブ

㊀ほねなきほじし（無骨膿）○のり（法）㊁あつし（厚）○ーは肥えてうつくし。○骨なきほじし。

【膿仕】フ　厚き祿にて仕官する。又、其の官。詩、小雅「琐琐姻亞、則無二ー一」

【膿腫】フ　土地こえて美くしき貌。詩、大雅「周原ー一、堇荼如レ飴」

十三畫

【臆】オク　職

○むね（胸）「胸ー」胸の肉。○こころ、おもひ（意）史、賈誼傳「請以ー一對」（漢書には意に作る）○ー一悩は怒りて氣が滿つる。○國おくする、おぢる「ー一病」

【臆決】オツ　おしはかりて定める。唐書、陸贄傳贄「馮レ私ー一」‖臆斷。

【臆見】オケン　自分一人のかんがへ。

【臆出】シユツ　己の心にてあて推量して說き出す。歐陽修、春秋論「非二其ー一」

【臆斷】ヂン　しかとしたる證なき、あてすゐりやうの議論。宮弼、辨二邪正一論「但且欲レ證二臣狂賢、非二ー一一焉」

【臆測】ソク　己の心にておしはかる。後漢書、李通傳論「ー一隆徵」‖臆度。

【臆度】タク　おしはかる。蘇軾詩「世事仍ー一」‖億度。

【臆斷】ダン　己の胸にて推しはかりてとりきめる。蘇軾、石鐘山記「事不二目見耳聞一而ー一其有無一可乎」‖臆決。

【臆列】レツ　あて推量にてはんだんする。唐書、裴寂傳「本末駁舛、ー一自私」

【臆病】ビヤウ　圓勇氣がない、小膽。‖怯。

【臆面】メン　圓氣後れしたるやうす。

【膳】キヤク　藥　カク

○うはあご（口上）○切りたる肉「脾ー」

【膾】クワイ　泰

なます、細く切りたるなまの肉「鮮ー」「縷ー」「鱠ー」金羅玉ー」論、鄉黨「ー一不レ厭レ細」

【膾殘魚】クワイザンギヨ　白魚の異名、河海の間に生ずる小魚。皮日休詩「分明數得ー一」

【膾炙】クワイシヤ　○肉のなますと、あぶりものと、二者は人の同じく嗜むもの。孟、盡心「ー一與二羊羹一孰美、孟子曰、ー一炙」○轉じて詩文などの人人の口にいひ傳へて賞めらるゝ。宜和書譜「ー一人口」

【膾藏】クワイゾウ　なますとしてくる。晉書、孔坦傳「由二俎上肉、任二入ー一」

【臉】ケン　豏

○目の下、頬の上に當る部分。○轉じて顔面の義とす「笑ー」「玉ー」「粧ー」

【臊】サウ　豪

なまぐさし（腥）豕又犬のあぶら。又、其のにほひ「羶ー」

【臊惡】アク　なまぐさくしてあし。禮記、疏「其肉ー一」

【臊腥】セイ　なまぐさし。元稹詩「孤悲意顚倒、ー一不二復聞一」‖腥臊。

【臊騷】サウ　けがれて惡しきひやっぱん。北史、抱老傳「ー一布二於朝野一」‖腥聞。

【臊陀】ダ　圓鵜鷀ウの異名「本草」‖鵜客。

【臅】シツ　術

ー寒ハウはむねの中のあぶら（膻中膏）「膻、內則」

【膸】スキ　紙　通音ズキ

骨中のしん、骨中の脂ヤニ「骨ー」

【膽】セン　豏

あつもの（膾）汁の少きあつもの。

【膽】㊀タン　㊁セン　㊀寒　㊁先

㊀はだをぬぐ、省きて、胆に作る。‖檀。○一中ナカは心臓の下にある薄膜。㊁なまぐさし、羊の臭気。‖羶。○轉じて悪の喩。列、周穆王「王之嬪御、一惡而不可親」

【膽】タン 國

○きも、六腑の一、肝臓の右に在りて、消化液の一汁を分泌する器官。○きもだま、決断力、勇気の出づる所「一力」「一勇」「大一」○こころ（心裏）「心一」「忠一」○拭ひ治む、ふきとる。轍、内則「桃曰ニ之」（桃の毛をぬぐひとる）○胆一タンは草の名、秋日、紫又は白色の花開く。

【膽氣】タンキ 氣力をうばはる。梁武帝文「武夫褰レ帷、喪夫一レ」

【膽腑】タンフ 腹蔵を忍び仇を報いんとするにいふ（史、越世家）嘗膽（三五〇頁四段）を見よ。

【破レ膽】ハタン きもをつぶす、大いに驚き怖れる。漢書、賈誼傳「大諸侯之有二異心一者、一レ而不二敢謀一膽栗慄者。

【膽氣】タンキ 物に臆せざる氣力。五代史、郭光遠傳「個個有二一一一」

【膽寒】タンカン 甚だしく驚き懼れる。宋史、韓琦與二范仲淹一在二邊閫一最久、名重二一時一、朝廷倚以爲レ重、天下稱爲二韓范一、遼人謂曰、軍中有二一韓一西賊聞レ之心一一、軍中有二一范一西賊聞レ之、驚破レ膽」

【膽汁】タンジフ 食物を消化するため、きもより出づるしる。孔平仲詩「倉皇面深壘、嘔吸苦一一」

【膽汁質】タンジフシツ 人の氣質の一、忍耐力強く、思慮に富み、意志の堅固なる性質。

【膽如レ升】タンノゴトシ きもの大いなる形容。南史、侯景傳「割二析心腹一破二出肝腸一、見二其膽一、乃如レ升焉」

【膽大心小】タンダイシンセウ きもは大いにして、心を用ふることは細密にする。唐書、陸贄傳「孫思邈曰、膽欲レ大而心欲レ小、智欲レ圓而行欲レ方」

【膽智】タンチ 膽力と才智と。後漢書、度尚傳「郷郡稱二其一一一」

【膽掉股慄】タンテウコリツ きもがふるへ、ももがふるへる、非常におそれる狀。

【膽如レ斗】タンノトシ きもの大いなる形容。三國志、姜維傳、注「維死時見レ剖、膽如二斗大一」

【膽薬】タンヤク 肝臓にて分泌せし膽汁をためるふくろ。

【膽礬】タンバン 薬品の名。‖硫酸銅。

【膽瓶】タンペイ 長頸大腹にして懸けたる膽の形に似たるかめ。陳傳良、水仙花詩「擬レ花實二一一一、吾今得二吾師一」

【膽大於レ身】タンダイナリミ きもの大いなる形容。唐書、臣觀二其膽一、乃大二於身一、鼻息所レ衝、上拂二雲漢一」

【膽破】タンパ 大いに驚き懼れるにいふ。陳琳文「一一衆散、不レ戰而敗」

【膽勇】タンユウ 物に臆せざる勇氣。南史、青氣宗傳「以二一一一聞、頗愛二史書一」

【膽略】タンリヤク 大膽にして謀略あり。梁書、鄱陽王世子嗣傳「性豁果、有二一一一」

【膽力】タンリキ きもだま。物に臆せざる勇氣。晉志、朱綽傳「以二一一一稱」

【膿】ドウ ノウ 冬

○うみ、腫物などのうみて出るきたなき汁。○ただれる（爛）

【膿血】ノウケツ うみち。

【膿死】ノウシ ただれしぬ。齊民要術「水稻苗長七八寸、陳草復起、以レ鐵淫レ水殺レ之、草悉一一」

【膿汁】ノウジフ うみしる。

【膿瘍】ノウヤウ うみのかたまり、無用の贅。庾申外史「秃堅謂二老的沙一曰、今上一一不レ可レ輔、小婿孩兒、亦非二國器一」

【膿包】ノウハウ 前條に同じ。

【臀】トン ドン 元

○しり、ゐしき、ゐさらひ、臍‖は尻のあな。○物のそこ（底）

【臀肉】臀（前條）に同じ。

【臂】ヒ 寘

○ひぢ、肘より腕に至る間、手の上部。○琴の柄。○半一ハンは袖を半分短くしたる衣服。

【臂押】ヒヲシ ひぢと、両かたの間とう南史、戴顒傳「宋世子鑄二丈六銅像于瓦官寺一、既成、面恨レ瘦、工人不レ能レ改、乃迴レ顒看レ之、顒曰、非二面瘦一、乃一一促耳」

【臂環】ヒクワン うでわ。通俗文「一一謂二之釧一」‖手釧。

【臂使】ヒシ ひぢの指を使ふ如く、意の如く人を使ふ。漢書、賈誼傳「令二海内之勢、如二身之使レ臂、臂之使レ指、莫レ不二制從一」

【臂頭】ヒトウ ひぢ。ひぢのさき。

【把レ臂】トルヒヲ 互にひぢをとりあふ、親み愛するさま。後漢書「臨レ別一一レ一言誓」‖握臂。

【攘レ臂】ハラヒヲ 勇氣を鼓する狀。孟、盡心「遇鄉一一レ下レ車」‖奮レ臂。

【扼レ腕】ヤクワン ひぢにきざむ。固く約束する。列、湯問「一一レ一以誓」

【如二臂使一指】ヒノツカヒノゴトシ 何事もすべて意の如くなるに喩ふ。臂使を見よ。

【臃】ヨウ　図圖

はれもの、しゅもつ(腫)

【臃腫】ヨウ　○はれもの、できもの。集韻「一ー肉起也」○轉じて、木などのふしこぶや蕉、途遊遊「吾有大樹一人謂之樗、其大本ー腫而不中繩墨」○又轉じて人の拙策にして無用なる者に喩ふ。

【臍】セイ　サイ　支

○へそ、ほぞ、ほぞの緒のとれたるあとにて腹の中央に在り、古、斉に作る。○果物や瓜のへた(蔕)「瓜ー」○すべて、へその形に似たるもの。破ー↓歴ー　右うのへそ。○臘肭ーサイは海狗の腎。

【臍帯】サイ　へそのを、胎兒の臍と母體とを結びつける胚質の白き肉管。‖臍帯。

【臍下】サイ　圖決心をする、覚悟をする。

【噬臍】セイ　へそをかむ。及ぶべからざる喩。左、莊六「若不ニ早圖一後君噬ニ臍ー」齊は臍。

【臑】㊀ダ　㊁ジ　支　遇

㊀かひな、ひぢ(上臂)肩より肘に至る間。○ひぢの節。㊁にる(煮)枚乗、七發「熊蹯之ー」ただる(熟爛)‖臑。○圖ヌ(脛)

【臑骨】コツ　かひなのほね。

【臑燕】カン　烹たる小羊のにく。徐幹文「蒸豚ーー」

【臏】ヒン　軫

○ひざがしらのほね、ひざのさら(膝蓋骨)「膝ー」○はぎのほね(脛骨)○あしきる刑、古、脛の骨を割断する刑罰。‖刖。

【臏刖】ヒンゲツ　あしをきる刑。又、其の刑に處せられる。司馬遷、報ニ任安一書「孫子ーレー、兵法修列」

【絶レ臏】ゼツヒン　重き物をもちあげて脛の骨をたちきる。史、秦紀「王與ニ孟説一舉レ鼎ーレー」

十五畫

【臗】殖(歹部十五畫)の古字。

【臞】ハク　ボク　覚

はら(腫)肉が腫れ起る。

【臘】ラフ・ロフ　レフ　合　葉　臘は俗字

○冬至の後、第三の戌の日に百神を合せまつる。又、其の祭「ー祭」‖蜡祭。○ー祭は年末に行ふ、故に陰暦十二月の異名とす「ー月」「窮ー」○とし(年)○僧の得度以後の年數を數ふるにいふ。太平廣記「我生五十有七矣、僧ー方十二」元稹詩「七十八年三十ー」三十ーは僧となりし年數。○もろは(兩刃)○眞ーは南蛮の國名。○ーテンは古代、意大利・羅馬附近の民族の稱。‖拉丁。

【臘月】ゲツ　陰暦十二月の異名。この月に百神を臘祭するが故。唐書、歴志「以ニ十二月一爲ニーー一、建ニ寅月一爲ニ一月一」字解參看。

【臘祭】サイ　臘祭にうつつづみ。荊楚歲時記「十二月八日爲ニ臘日一、諺語、ーー鳴、春草生、村人並擊ニ細腰鼓一、作ニ金剛力士一逐レ疫」

【臘祭】サイ　陰暦十二月のまつり。禮、月令、疏「ーー之時、謂ニ田臘以取レ禽」

【臘月】ゲツ　冬至より後の三度目の戌の日。又、十二月八日の稱。杜甫詩「ーー前年暖倚ニ爐、今年ーー凍全消」

【臘梅】バイ　からうめ、なんきん梅、落木の一、冬の末に淡黄色の花開く、臘月に開きて梅花の香あり、故に名づく。‖蠟梅。

【臘八粥】ロハッシュク　臘祭の日にたべるかゆ。天中記「宋時東京十二月初八日、都城諸大寺、設ニ七寶五味粥一

謂ニ之――一」【臘牛】ラフ　陰暦十二月の牛は。耶律楚材詩「雪得晩瓜過ニ――一」【臘尾】ラフビ　年末。張船山、梅花詩「――春頭放ニ幾枝一」字解參看。

十六畫

【臙】エン　先　もと燕に作る　○のど、のんど(咽・喉)○ー脂ニはべに、化粧用の紅色の顔料ダ古は丹に脂をまぜて作る。‖胭脂・燕支。【臙脂虎】シコベにをつけたるとら、悍婦をいふ【清異錄】【臙脂井】セイ　晉陽井の異名、晉城の内に在り、陳後主、張麗華・孔貴嬪と共に其の中に投じて隋兵を避けしところ、閣ヌに石脈あり、帛を以て之を拭へば臙脂の痕を見るといふ。一名は辱井【酉陽志】

【臛】カク　沃　○肉のあつもの「羹ー」○いぶす、ふすぶ(燻)【臛目】クワク　馬糞にてふすべて目くらにする。史、刺客傳「臛ニ其目一使ル擊ル筑」

【臚】リョ　魚　○ならぶ、つらぬ(陳)つらなる「ー列」史、六國表「ー於郊祀」○ついづ(敍)○つたふ、上の語を下に傳へる「ー傳」○かは(皮)はだへ(膚)【臚言】ゲン　世ニ上にいひつたへる言。晉語「猥ニ――於市」【臚句】ロク　通譯官、上の語を下に傳ふるを臚、下の語を上に告ぐるを句といふ。史、叔孫通傳「大行設ニ九賓一ー傳」【臚唱】シャク　殿上にて名を唱へて呼び入れる。方回詩「ー――甘叨殿上傳」【臚情】ジョウ　陳情に同じ。張衡賦「即歧レ雒而ー」【臚陳】チン　つらね、陳列する。【臚傳】デン　○上の語を傳へ告げる。莊子「大臨ー一日、東方作矣」○殿上にて名を唱へよぶ「夢溪筆談」‖臚唱。【臚列】レツ　つらねならべる。張衡賦「九賓重、譯人列」‖陳列・羅列。

十七畫

【臞】ラ　虞　又、裸に作る　○はだか(裸體)○はだをぬぐ(袒)はだかになる。左、昭三一「童子ー而轉以歌」○ー物は淺毛の獸、虎・豹の屬。周禮、地官「其動物宜ニ――一物」○臧ゾウに通ず。○瓜ーは栝樓クワロウ

十八畫

【臟】ク　虞　○やす(瘦)史、司馬相如傳「形容枯ー」○へる(耗)【臟腑】ゾウフ　脾・痺・肺・腎・肝・膽の別は瘦(子部十畫)の條を見よ。【臟腑】ゾウ　虞　○五臟と六腑と。はらわた。佛國記傳「晉寧時平日王流水側、徑ニ取孔中、引ニ出五臟六腑一洗レ之」○轉じて胸懐に喩ふ。明周憲王有燉詩「年來偏愛心腸熱、老去臧俗ー一明」

十九畫

【臢】レン　銑　○きりみ、細かに切りたる肉(犬を哉といひ、小をーといふ)○魚腹をさきたるもの。○やす(瘦)○ー卷は伸びざる貌。○國ハリヤナ見るの敬語(一說に譬の誤用)

【臠殺】ナン　きりさいなみてころす。宋史、忠義傳「趙汝驌、宣城人、著ル戰城被レ執、先斷ニ其兩臂一而後ー一之一」【臠肉】ニク　きりみ。魏書、鄭義傳「性嗜ニ食民有ニ經倫一者、曾不レ與ニ杯酒一ー一、西門豹ニ羊酒一、亟門餘ニ一臠之一」

臣部

【臣】シン　眞　○けらい、おみ「君ー」「忠ー」「名ー」「良ー」「賢ー」「世ー」「近ー」「老ー」「爭ー」「佞ー」「幸ー」「叛ー」「亡等ー」「社稷ー」もと、仕官せし者に限りていふ。戰國「仕於公曰ー、仕於家曰僕」○けらいたる道を盡す。論、顏淵「君不レ君、臣不レ一」○ひろく統治權の下に在る一般の人民「一民」詩、小雅「率土之濱、莫ニ非王ー」○けらいが君に對していふ自稱。○古、自己の謙稱とす。今の僕といふが如し。後漢書、高祖紀「ー少好相人」呂公が劉季に對していふ。○丰はおそれる(惶惡)【臣下】シンカ　しもじものけらい。晉、泰誓「ー一化レ之」

【臣心如ㇾ水】シンシンノゴトシ　心の清白なるに喩ふ。漢書、鄭崇傳「臣門如ㇾ市、——、願得二考覆一」

【臣御】シンギョ　けらいと、そばめと。國語「男女服爲二一一一

【臥物】ガブツ　ふしたるやなぎ。杜甫詩「一一自生レ枝」

【臥龍】ガリウ　○ふしたる龍。陳倉詩「暗戸疑二藏虎一、盤根似二一一一

ふ」〔詩、大雅〕
【臨水】リンスイ みづにのぞむ。登高「登」山臨水」
【臨戰】リンセン 上にありて下をてらす。李陵林文「如」天如」日、一一于前」
【臨川】リンセン ○郡名、三國の呉の時置く、元代に隸す、今の江西一一縣の地。○王安石は一一の人、よりて別號とす。一一集（一百卷）は其の詩文をあつめたるもの。
【臨席】リンセキ 貴人より使をつかはして訪問さす、存は存問。史、嚴助傳「使二重臣一一二」＝省問。
【臨池】リンチ 後漢の張芝（字は伯英）池にのぞみて書を學ぶ、池水盡く黑し、よりて習字の義とす。王羲之、晉人、張芝一一學」書、池水盡黑」
【臨洮】リンタウ 縣名、秦代に置く、蒙恬が長城を築くに一一より起りて遼東に至る、今の甘肅省岷縣臨潭の地、地は洮水に臨む、故に名づく。
【臨眺】リンテウ 高所よりしてのぞみながめる。南史、徐勉傳「華樓迥樹、頗有二一一之美一」
【臨筵】リンエン かりもがりにのぞむ。吳志、董襲傳「襲死、孫權改」服一一、供給甚厚」
【臨文】リンブン 文を作る時にあたる。禮記「詩書不」讀、一一不」誦」
【臨平】リンピン 山の名、浙江省杭縣の東北に在り、平曠遠遊として崇岡修阜なし、唐の時、一一監を山下に置く。
【臨摸】リンモ 次條に同じ（摸はうつす）
【臨摹】リンボ ○臨は手本の文字を視て書く、摹はしきうつしにする。游宦紀聞「臨謂二置レ紙在レ旁、親二其大小濃淡形勢一而學之、若二臨淵之臨一、摹、謂二以二薄紙一覆レ上、臨二其曲折肥瘦一而レ畫」○手本を見て寫す。‖臨寫・摹臨。
【臨本】リンポン 習字圖畫などの手本。‖臨帖。
【臨命】リンメイ 臨終に同じ。論語文「一一終身、誦二斯語一」
【臨在】リンザイ そのばにかんがみのぞむ。莊子「君子不」得」已而一一天下一、莫」若二無爲一」

自部

【自】シ 圓

○より（從）から、よりす、何處から來る。論、憲問「晨門曰、奚一、子路曰、一孔氏」○よる（由）もとづく（因緣）○おのれ（己）みづから「一欺」○もちふる（用）書、皐陶謨「一我五禮」有」庸哉」○したがふ（率）孟、萬章「天視一我民視」○おのづと、おのづから、ひとりでに。○一然レバ（然）は勉強シイルする所なき義。

同音假借 ジ 目・躬・親○自は自分でにの義、人の指揮をまたず、自身にてするなり、おのづからと訓むときは、その物が天然にひとりでにさうなる義。韓愈、圬者傳「其自爲也過多、其爲レ人過少」○躬は我が身につけてする義。陳情表「躬親撫養」○親は自身にてしたしくする義、疏の反なり。史記「此陛下所二親見一」

○自・從・由・繇・因・仍・道○自は、かならと譯し、所二從來一也と註す。左傳「自二南門一入、出レ自二東門一」○從は就也、順也と註す、譬へば北處に在くに、甲乙二道あるを、甲に從ひて來るとか、乙に從ひて來るとかいふ處、自と略ゝ同じけれども、自よりは重し、史、晏子傳に「其御之妻、從二門閒一窺レ之」とあるは、晏子を御りて門外には出でず、門の隙よりのぞき見たるなり。○由は經過の處にて、從と略ゝ同じ、由レ蹤而行の如し。○繇は、より沿ふ義、晉仲舒傳に「此災異所二緣而起一也」とあり。○因は、それにつきてと譯す、この原因によりて、此の結果を生ずる意、孔子家語弟子解の、曾子の條に「志存二孝道一、故孔子因レ之以作二孝經一」とあり、因緣と熟す、繇と略ゝ同じ。○仍は、かさなると訓み、又しきりにとも訓む、下地ある上へ、續りにかさなる義、因仍と熟す、同用なれども、因は下地を主とし、仍は承なるを主とす、論語に「仍舊貫」如レ之何、何必改爲」とあり。○道は由と同じ、道は通行人の必ず由るものなれば、轉用して、よると訓む、山海經に「風道レ北來」とあり。

【自愛】ジアイ ○みづから其の身を愛する。老子「聖人自知不二自見一、一一不二自貴一」○自分の利ばかりはかる、自利（他愛の反對）
【自由】ジユウ ○おもふまま。柳宗元詩「欲レ採二蘋花一不二一一一」‖自在。○他の束縛を受けず。
【自由港】ジユウカウ ○各國の船舶が關稅を拂はずして自由に出入し、又は關稅なしに貨物を輸出入することを得る港。
【自衛】ジエイ みづから己の身をふせぎまもる。後漢書、董卓傳「每懷二猜畏一、行止常以レ甲一」
【自營】ジエイ みづから事業をいとなむ。
【自可】ジカ みづからよしとす。韓愈文「書言一一、不二與レ人交一」
【自家】ジカ ○わがや（自宅）○おのれ。
【自家種】ジカシユ みづから言ふ所の前後つきあはざる義、者は助字。禪

林煎茶、看經門、南堂靜云、須彌山高不レ見レ嵐、大海水深不レ見レ底、猿レ土揚レ塵無レ處レ逃、同レ頭種苦自家底」

【自我】ジガ 哲學にて自ら意識する我といふ觀念。

【自艾】ジガイ みづから惡を去りて善を修める。艾は刈り除く。孟、萬章「太甲悔レ過、自怨自艾」

【自解】ジカイ みづから強ひていひわけする。關尹子「世之愚拙者、妄授二聖人之思一、拙不レ知聖人時思時明、時拙時巧」韓愈、與二陣給事書一「恐懼自解」

【自害】ジガイ みづから死する。大戴禮、曾子立事篇「見レ刀一而死」‖自殺・自裁。

【自好】ジカウ 自ら身を潔くする。孟、萬章「鄙夫一者不レ爲」‖自愛。

【自效】ジカウ みづからいたす、己の誠をつくす。漢書、蘇武傳「兄弟親近常欲二肝腦塗一地、今得二殺レ身一、無レ所二自效一」‖自効。

【自縱】ジジウ みづからなつく。北史、李渾傳「渾弟緯常逸遊放逸、一一隱居、渙然有二絕塵之意一」

【自覺】ジカク ○心理學にて自分を知覺する作用。‖自意識。○自分の位地又價値を意識する。

【自レ我作レ古】ジガサクコ 古の禮に拘泥せざる義。宋史、禮志「孝宗欲レ不レ用二烏レ月之制一、曰——、何害」

【自堪】ジカン みづからたへしのぶ。黃庭堅詩「蕭颯同二風葉一、薦レ時不二自堪一」

【自記】ジキ ○手づからかきしるす。‖自書。○自動作用にて字又符號をしるす。「——寒暑計」

【自給】ジキフ 自分の力にて生活する。後漢書、李恂傳「避二居山澤一、結レ草爲レ庵、與二諸生一織レ席一」

【自强不息】ジキヤウフソク 自ら力めて善を爲してやまず。易、乾卦「天行健、君子以——」

【自紀】ジキ みづから風する。宋書、劉穆之傳「帝笑曰、卿能——、吾事濟矣」

【自火】ジクワ 國自分の家から出た火事。

【自家】ジカ しぜんにめぐりあふ。列子「窈然無レ際、大道一一」

【自盡自計】ジジンジケイ ○自分の誓に自分の贊をする。○自分をほめる、手前味噌。

【自活】ジクワツ 自分の力にてくらす。

【自覺】ジカクスル 自ら心を悟め安んずる。列子「孔子曰、善乎能一一者也」王維詩「酌レ酒與レ君君一一」

【自刎】ジフン みづから首はねて死する。

【史、孟嘗君傳】‖自刎。

【自經】ジケイ 自ら首をくくりて死す。‖縊死。

【自斃】ジヘイ みづからいましめつつしむ。元史「脫富二一一、卿等亦各宜レ鉄二厥職一」‖自警。

【自竪】ジジュ 己みづからかしこしと信ずる。列子「沿岡之蘇、在二于知レ罠、而不レ在二一一」

【自己】ジコ われ、おのれ。

【自窓】ジサウ 自らきられる、窓は伐。莊子「山木一一也」山中に在る有用の材は自ら伐採せられる。

【自圖】ジト おのれのくに。他國の對。

【自業自得】ジゴフジトク 自ら惡をなして自らその報を得る、身から出たさび。

【自今】ジコン 今よりのち。後漢書、劉盆子傳「請一一已後、不二敢復放縱一」

【自在】ジザイ おもふままになる。漢書、王嘉傳「大臣與二鄧恵一心一一」‖自由・任意。

【自財】ジザイ みづから己の生命をたつ。財は裁に通ず。史、呂后紀「寧成一一」‖自裁。

【自裁】ジサイ みづから己のいのちをたつ。史、自起傳「秦王賜二之劍一一一」‖自財・自刃・自害。

【自作】ジサク 自分の力にてつくる。元經「作二互市一、傳曰作者盲二惡帝一一一之罪」

【自殺】ジサツ みづから身をころす。史、魯仲連傳「與二人刃一、我寧自刃、乃一一」‖自害。

【自殘】ジザン 自害に同じ(殘は害)

【自賛】ジサン みづから我身をほめすすめる。史、平原君傳「門下有二毛遂一、前一一一于平原君一」

【自恣】ジシ わがまま。史、呂后紀「趙王不レ得二一一」後漢書、梁冀傳「少爲二貴戚一、逸遊一一」

【自修】ジシウ ○みづから己の身をただしをさめる。大學「如レ琢如レ磨者、一一也」○自ら學修する「一一室」‖自習。

【自失】ジシツ ぼんやりとする、きぬけする。史、賈誼傳「爽然一一矣」

【自刃】ジジン みづから首はねて死する。史、魯仲連傳「與二人刃一、我寧一一、乃自殺」

【自身】ジシン わが身、おのれ。唐書、韋嗣傳「奈何不二一一、反欲二從レ行誅一」

【自信】ジシン みづから信ずる。韓愈詩「自新」ジシン 自らあやまちをあらためる、自ら更新する。史、孝文紀「賜二父刑罪一使レ得二一一」

【自粘】ジネン ○自分で酒をくむこと。劉克莊詩「盡有二村醪一且一一」○轉じて自ら玩味する。蘇軾詩「家世事二酌古書史手一一」

【自悲】ジヒ みづからいのちをたつ。明史「賜二一一」‖自刃・自害。

【自若】ジジャク 泰然として心の動ぜざる貌。史、甘茂傳「曾參殺レ人、其母織一一也」‖自如。

【自主】ジシュ 自ら獨立して他の干渉を受けず。自己を以て權力の本體と爲すをいふ。

【自首】ジシュ みづから罪狀を告げる。屬

記」一二一前辈」
【自如】ジジョ 平氣なる貌。物事に動ぜざる貌。漢書、李廣傳「吏士無二人色一、而廣益治軍一一」‖自若。
【自序】ジジョ 己の著書に自ら作りたるはしがき。史記に「太史公一一」あり。
【自助】ジジョ ○他人の力を頼まず、みづから己をたすけて事を成す。○自分の助とする。新語「人君莫レ不レ知二求レ賢一一、近レ賢以自輔一」
【自書】ジショ 自筆に同じ。
【自成】ジセイ 自分で自分の事を處置する。又、自分の身のおきどころ。史、李斯傳「人之賢不肖、譬如レ鼠矣、在レ所二一一耳」
【自署】ジショ みづから其の姓名をしるす。
【自乘】ジジョウ 同じ數をかけあはせる「一一數」‖二乘。
【自媒】ジバイ 自ら私慾にうちかつ。呂覽「欲レ誘レ人者、必先一一」
【自媒】ジバイ みづからいふ。みづからのとなへ。後記「一一於諸侯」
【自縄自縛】ジジョウジバク 自分のなはで自分をしばる。自分の行ひしきで自分が苦む喩。
【自紋傳】ジブンデン 自己の履歴をのべたる文。
【自水】ジスイ みづから身を水中に投ずる(入水)
【自炊】ジスイ みづから飯をかしぐ。高啓詩「山妻一一稚子活」
【自生】ジセイ ひとりでに生ずる。自然に生ずる。
【自省】ジセイ 自分の行爲の善惡を考へてみる、自ら反省する。
【自裁】ジサイ 自分の子にてつくる。又、其の物品。
【自説】ジセツ 自分の主張する説。
【自然】ジゼン ○人爲の加はらざる義。老子「人法レ地、地法レ天、天法レ道、道法二一一一」○おのづから。○一一生(ジショウ)はやまのいも、山野に自生し、根を食用とす。‖自然薯・山藥。
【自然科學】シゼンカガク 自然界に關する事を研究する學問、理化學の類。精神科學の對。
【自然主義】シゼンシュギ ○宇宙の說明は物質の說明と同じく形而上の原理によらずしてなし得るといふ主義。‖唯物論。○文藝上感情を主とし人生の動作をありのままに書き現はす主義。
【自然淘汰】シゼントウタ 生物が外界の狀況に適する者は生存し然らざる者は滅亡すること。
【自全計】ジゼンケイ 己の身を安全に保つはかりごと。南史、齊高帝紀「群爲二一一一、布二誠于帝一」
【自疏】ジソ みづから盲ひわけする。蘇洵、貴論「急二於一一一」‖自解。
【自壊】ジエ 自ら其の身をたふとくする、自ら尊號を加へる。史、楚世家「王不レ加二我位一、我一一耳、乃自立爲二武王一」○國己の身を重んずる「獨立一一」‖自重。
【自他】ジタ 自分と他人と。
【自大】ジダイ みづから高ぶる、自ら尊大にする。孔叢子、居衛「一一而不レ修、其所二以大一不レ大矣」
【自堕落】ジダラク 國ふしだら、無作法。
【自知】ジチ 自分の力量を自分にてさとり知る。中說「一一者英、自勝者雄」
【自治】ジチ ○自ら己の身をきめる。禮記「百姓則レ君以一一也」○自然にをさまる。尹文子「法用則反レ道、道用則無爲而一一」○自治制の略。杜牧、策論「上策莫レ如二一一一」
【自治制】ジチセイ 國家が委任せし權能にて自治する公共團體、府縣郡市町村。
【自慨】ジガイ みづから酒をかもす。世說「晉陶レ潛一一」
【自殺】ジサツ 自殺に同じ。
【自棄】ジキ みづから己の身をおもんずる。詩經「無二思百憂一祇一一今」
【自縛】ジバク しぜんにむすばる。楚辭「氣繚轉而一一」
【自適】ジテキ 自分の心にかなふ。漢書、高鳳傳「清心篤行、屛レ辭不レ應、以二漁釣一一」
【自傳】ジデン 自分が書きたる自分の傳記。‖自敍傳。
【自轉】ジテン ○自分でまはる。○地球又は他の遊星が自ら回轉する。
【自動詞】ジドウシ 文法にて動作を他の事物に及ぼさざる動詞「眠る」「驚く」の類。
【自得】ジトク ○みづから心にさとる。中庸「君子無二入而不一一一焉」○自分で得意になる「史、屈原傳」
【自任】ジニン みづから其の事にあたる。孟、萬章「一一以二天下之重一」
【自縊】ジイ 女が雄人を待たずして自ら夫を求める。管子「一一之女、醜而不レ信」
【自保】ジホ みづから身をたもつ。後漢志、武帝紀、注「孤貧不レ能二一一一而況衆人乎」
【自暴自棄】ジボウジキ 自ら其の身をそこなひ、自ら其の身をすてる。孟、離婁「自暴者、不レ可二與有一レ言也、自棄者、不レ可二與有一レ爲也」
【自白】ジハク 自ら己の罪を白狀する。
【自縛】ジバク 自分で自分をしばる。傳燈錄「如二蠶吐レ絲一一」
【自伐】ジバツ 自分で自分をうつ。孟、離婁「國必一一、而後人伐レ之」
【自發的】ジハツテキ 自分の力にてはたらきだす。他動的の反對。
【自反】ジハン 自分の身をかへりみる。‖自ら反省する。禮、學記「知レ不レ足然後能一一也」
【自比】ジヒ みづからくらべる。蜀志、諸葛亮傳「每一一二於管仲・樂毅一」
【自費】ジヒ 自分の金で費用を辨ずる。官費・公費の對。

【自筆】ジヒツ　手づから書く。又、其の書。
同自書。

【自貧】ジヒン　みづから己の才智をたのみて怠る、貧は惰。史、高祖紀「高祖乃心恥ヂ―ー」

【自剄】ジケイ　みづから首はねて死する。
後漢、周紜傳「使者召ニ紜年二歳ニ謂ニ紜母ニ曰、紜不ニ―ー死」

【自給】ジキフ　自分の金にて費用を支拂ふ（爵に贖ふ時に作る）

【自命】ジメイ　自分の力を自分にて認識して自ら許す。唐書、杜如晦傳「少英邁ヂ―ー、貞ニ觀初ー」

【自明】ジメイ　證明せずしておのづからあきらか。

【自鳴鐘】ジメイシヨウ　とけい（時計）清朝通考「外國進A到時鐘亭子使用四個、又有ニ―ー、依ニ小香盒、精金爲之、一日十二時、凡十二次鳴」

【自滅】ジメツ　みづから身をほろぼす。
後漢、高武王傳「遂能以ー」

【自問自答】ジモンジトウ　自ら問ひ自ら答へる、己の疑問を己の心にて判斷する。

【自由】ジユウ　そのほか、又このほか。
俗語。

【自用】ジヨウ　己の才智を恃みて百事を武斷する。書經「好ヂ用則貧、ー則小」中庸「愚而好ー」

【自來水】ジライスイ　（圖）水道の水。自然に流れ來る水の義。

【自樂】ジラク　みづからたのしむ。春秋繁露「有」喪者雖ヂ貧ー、無ヂ喪者雖ヂ富莫ニ能自存」

【自立】ジリツ　ひとりだつ、獨立。

【自律】ジリツ　自分のわたくしを抑へる。金史、揭曼碩傳「ー―其餘、其待ヂ人則寬」

【自力】ジリキ　○おのれ一己のちから。
○みづからつとむ。唐書、白志貞傳「確確ー、有ニ知識」

【自了】ジレウ　獨力にて事を成し終る。
晉書、山濤傳「帝謂ニ濤曰、西園晉ーレと、後事深以委ヂ卿」

【自覺】ジカク　自分をあざける。自居易文「一以相貿、一以ー―」

【自欺】ジギ　自ら良心にはづる百行をする。大學「所謂ニ其意一者、毋ニ―ー也」

【自己】ジコ　みづから我身をあはれむ。陳拾遺詩「皆並望ニ故鄉一經ヂ影悽ー―」

【自致】ジチ　みづから十分につくす。論語「ー―ニ其誠信」

【自慊】ジケン　みづから己を恩ひはかる。戰國策「潔ニ淨自正、以ー」

【自禁】ジキン　みづからこらへる、自分で自分の心をおさへる。蘇洵、送ニ石昌言ニ序「心掉不ニ―ー」

【自暇】ジカ　みづから己の才をくらます。宋之問詩「妙年擅ニ―ー」

【自刻】ジコク　自らくるしみはげむ。歐陽修文「ー―益苦」

【自是】ジゼ　みづからよしとす。
老子「自見者不ヂ明、ー―者不ヂ彰」

【自訟】ジショウ　心に自ら過をせめる。論、公冶長「吾未ヂ見ニ能見ニ其過一而內ー―者ニ也」
同自責。

【自多】ジタ　みづからかしこしとす、多は賢。後漢書、朱浮傳「浮性矜急ー―」

【自持】ジジ　みづから己の節操を守る。史、儒林傳「兒寬爲ヂ人溫良有ニ智一ー―而善著ニ書」

【自作孽不可逭】ジサクゲツフカカン　自分にてつくりたる禍はのがれんとするも、のがれ得ず。書、太甲「天作孽猶可ヂ違、ー―」（孟子には道を活に作る）

【自恥】ジチ　自分の心にはらて惡をなさず。中庸「ー―者本也、恥ニ諸鄰明ニ其次也、恥ニ諸人ニ外矣」

【自帰】ジキ　みづから己をはづかしむ。論、顏淵「子貢問ヂ友、子曰、忠告而善道ヂ之、不可則止、無ニ―ー辱」

【自卑】ジヒ　○みづから己の身をひくくす。曲禮「夫禮者、ー―而尊ヂ人」○ひくき所よりする。中庸「譬如ニ登ヂ高必ー―」

【自炊】ジスイ　自分の身をうりて人につかはれる。王褒文「百里奚ー―」

【自取ニ富貴一】ジシユフウキ　己の力にて富貴の身分となる。事文類聚前集、北齊高昂曰、男兒當ヂ橫ニ行天下一、自取ニ富貴一耳」

【自奉】ジホウ　自分の身を養ふ、我が身に供給する衣食など。說苑「武王問ニ於太公一曰、賢君治ヂ國何如、對曰、其政平、其吏不ヂ苛、其賦斂節、其ー―薄」
同自養。

【自給】ジキフ　みづから己の長を恃こる。北史、宋弁傳「復欲ヂ以ニ門戶ー―ニ殊貨ヂ可ヂ怪」

【自答】ジトウ　みづから我身をむちうちてせめる。五代史、王殷傳「取ヂ杖授ニ侍僕ー―ニ手毋前」

【自責】ジセキ　みづから己の心をなぐさめる。李郎詩「高歌聊ー―、世事欲ニ茫然ー」

【自給】ジキフ　みづから心によろこぶ。陶潛詩「祇可ニ―ー悅ニ不ヂ堪ニ持贈ニ君」

【自嗤】ジシ　みづから我身をわらふ。拾遺記「坐見芳時歌、嘯悼空ー―」
同自笑。

四畫

【臬】ゲツ　屋

○のり（法）めあて、標準「準ー」○矢のまと（射的）○きはむ（極）かぎる。かぎり（限）王褒文「其廣無ー」○門のくひ（門臬）‖闑。○ひかけばしら、

其の景を取りて方を正す柱。○おきて、法律。書、康誥「汝陳時ー」○ー司シは司法官、明清時代の按察使の異稱。

【臭】 ㊀シウ ㊁キウ 名 省

㊀かをり、にほひ、氣の鼻に通ずるものの總名(後世は主として惡しきにほひに用ふ)「惡ー」「香ー」○くさし(嗅氣)○かぎ(香)易、繫辭「其ー如蘭」○くさる、やぶる。くさらす、腐敗。又、其のくさりし物。○あしき名(汚名)○けがす。けがる(汚穢)○乳ーはちちくさし、經驗乏しき少年をそしりていふ。㊁かぐ、嗅覺に通ず。

【臭橙】シウトウ ○柚ユの異名(本草綱目)○一說にだいだい。‖圃有橙。

【臭敗】シウハイ くさりやぶれる。‖腐敗。

【臭腐】シウフ くさる。列子「死則有ニー消滅一是所レ同也」

【臭聞】シウブン いやしむべきうはさ。‖醜聞。

【臭劑】シウザイ 圓臭薬カ、藥品の名。‖臭化鉀。

【臭味】シウミ 草木、類を同うすれば、臭味も同じ、よりて同氣同類の義とす。左、襄八「今晉於草木ニ爲君ー君之ー也」

六畫

【臯】 皋(自部五畫)の俗字。

十畫

【臲】 ゲツ 風

動きて安からざる貌。

【臲卼】ゲツヲツ 動きて安からざる貌。易、困卦「上六困于葛藟于ー卼」‖臬不。

【臆】 臲(前條)に同じ。

至部

【至】 シ 圓

○いたる(到)きたる(來)時、小雅「如川之方ー」到著する。○とどく(達)およぶ(及)ゆきつく、此より彼に達する。○きはまる(極)十分の點まで達する。○あつまる(會)○よし(善)○時期の名、とうじ(冬至)は一年中の最も短き日、げし(夏至)は一年中の最も長き日。左傳「凡分ー啓閉、必書ニ雲物一」○おほいに(大)きはめて、いたりて、甚だ。○いたり、きはみ「ー極」孟、離婁「規矩方員之ー也」(員は圓)

同訓異字 至・到・臻・詣・造・格・戾・屆・抵・値・格・臻・逮・詣・屆○至は至極の義にて、其の處まで來りつく義。詩經「如ニ川之方至一」○到は至也、彼より此に到著する意、至と通用す、至ル家を到ル家とも書く、されども知至、德至などには到は用ひず。論語「民到ニ于今一稱レ之」○臻は至り至る義。詩經「飢饉荐臻」○詣は進也、往也、到也などと註す、造と略ー同じ。史、秦紀「乘レ傳詣ニ長安一」○造は詣也、進也、だんだんと深く進むこと、學問の深く入るを造詣といふ。○格は至也、來也、感通也と註す、至るべき正しき處にいたりとどまる義。書經「舞ニ于羽于兩階一七旬有苗格」○戾は思はず、知らずして至り止まる義。詩經「鳶飛戾レ天」○屆は向うに、ここまと限りありて至るなり。書經「予決ニ九川一距ニ四海一」○抵は當也、至也と註す、至り當るの義「抵レ冬降レ霜」の如し。○傳はべったりと至り付くなり。左傳「傳ニ于城下一」○格は至也、謂也、格言は昔が地に至るなり。莊子「大塊載レ天而不レ溺」○踵は至なり、つづきいたる義。孟子「踵レ門而見ニ文公一」○逮は至なり。詩經「以逮ニ于今一」○訖は至なり、迄に過ず。書經「訖ニ于四海一」○屆は音カイ至り極まるなり。書經「惟德動レ天、無遠弗レ屆」

【至閒】シカン いたりてくらし。荀子「罔ニ其心一貳ニ其事一、夫是之謂ニ一ー一」

【至易】シイ いたりてやすし。那五策對「垂ニ漢之教一、求而安ニ上存一乎至簡一、舞詠之功、淺而移レ風俗一乎ー一」

【至貧】シヒン いたりて大いなるしわざ。莊子「至言去レ言、ー去レ貧」

【至竟】シキョウ いたり盡くせるかんがへ。漢書、鮑宣傳「惟陛下少留ニ神明一、覽ニ五經之文一、原ニ聖人之ー一、深思ニ天地之戒一」

【至要】シエウ いたりて大切なり。

【至恩】シオン この上なきめぐみ。後漢書、桓譚傳「君臣大義、母子ー一」

【至交】シカウ はなはだ親しきまじはり、また其のともゝ。前史、孔融傳「好ニ奬故舉一、與ニ王儁一ー一」‖石交。

【至孝】シカウ　十ぐれたる孝行。禮記「一ー近ニ乎天子一」‖大孝。
【至文】シブン　きはめてうつくし。又、其の者。荀子「毛嬙西施、天下ー一者也」
【至剛】シゴウ　いたりてつよくかたし。孟、公孫丑「其爲レ氣也、至大ー一」
【至感】シカン　至誠の心の他に感通する美。南史、梁武帝紀「ー一通レ神」
【至誠】シセイ　この上なく和ぐ。誠は和。書、大禹謨「ー一感」神、矧茲有苗」‖至和。
【至誠】シセイ　十分にいさめる。後漢書、申屠剛傳「愚意ー一、希得レ爲レ用」‖極諫・苦諫・熟諫。
【至貴】シキ　いたりてたふとし。淮南子「ー一不レ待レ性、至富不レ待レ財」
【至急】シキフ　〇來りてよろこぶ。詩、豳風「鴟梟鴟梟既ー一」〇至りてよろこぶ。
【至急至要】シキフシセウ　極めて大切である。
【至竟】シキヤウ　つまり、結局。杜牧、題二桃花夫人廟一詩「ー一息亡線二底事一、可レ憐金谷墜樓人」‖究竟。
【至願】シグワン　いたりてねがひ。
【至願】シグワン　この上もなきねがひ。
【至敬】シケイ　この上なきよろこび。晉殿賦「結二神襟之脫絡一、集二華夏之ー一」
【至敬】シケイ　いたりてよきをしへ。禮記「天道ー一、聖人至德」
【至虚】シキョ　いたりていきぎよし。李嶠詩「此物抱ー一、有レ似二楚屈原一」
【至清】シセイ　いたりてきよし。東方朔、客難「水ー一則無レ魚、人至察則無レ徒」
【至聖】シセイ　いたりて知德がすぐれる。又、其の人。中庸「唯天下ー一、爲二能聰明睿知、足二以有レ臨也」
【至聖先師】シセイセンシ　明代に贈りし孔子の尊號。
【至誠】シセイ　いたりて誠實、この上もなきまごころ。中庸「唯天下ー一、爲二能盡二其性一」
【至誠如レ神】シセイノトシン　まことの心の至りは神明の如く何物にも感通する。中庸「前知如レ神、國家將レ興、必有二禎祥一、不善必先知レ之、故ー一」
【至誠】シセイ　至りて後悔なる義。注、貨志「古之治二天下一ー一至悉也、故其善情足レ恃」‖至細。
【至小】シセウ　きはめてちひさし。
【至善】シゼン　この上なくよし。大學「在レ止二於ー一」
【至尊】シソン　いたりてたふとし、天子又天子の位をいふ。賈誼、過秦論「周二ー一面制二六合一」
【至大】シダイ　きはめておほいなり。
【至當】シタウ　いたりて善く道理にかなふ。【孝經、序】
【至道】シダウ　いたりてよきみち。禮、學記「雖レ有二ー一、弗レ學不レ知二其善一也」
【至道不損】シダウソンズ　至極せる大道は損

陽危文「則二天性之ー一、去二人性之好仇一」
【至識】シシキ　いたりて道理に明か。揚雄文「多聞見而識二乎道一者、ー一也」
【至日】シジツ　冬至ヒの日。易、復卦「先王以二ー一閉レ關」
【至人】シジン　老莊學にて道德の至極せる人。聖人といふが如し。莊、逍遙遊「ー一無レ己、神人無レ功、聖人無レ名」
【至心】シシン　至りて懇切なる心。晉書、王導傳「餘之者ー一、則見レ之、不二ー一則隱レ形不レ見」
【至仁】シジン　きはめてめぐみぶかし。莊子「夫ー一尚矣」
【至仁至慈】シジンシジ　極めてなさけぶかし。
【至神】シシン　いたりて神妙。易經「非二天下之ー一、其誰能與二于此一」
【至情】シジン　この上なきつつしみ。世說「晉文王稱二阮嗣宗ー一」
【至親】シシン　この上なきしたしみ。父子兄弟など。盧綸詩「畢日是陳事、滿堂無二ー一」‖近親。
【至情】シジョウ　まごころ。揚雄、答劉歆書「ー一之所レ想レ遷也」
【至正】シセイ　いたりてただし。
【至是】シゼ　いたりてよろし。淮南子「ー一之是無レ非、至非之非無レ是、此眞是非也」‖至善。
【至性】シセイ　いたりて善良なる孝悌のうまれつき。北史、魏孝文帝紀「帝
【至想】シサウ　いたりてすぐれたるかんがへ。張說詩「神功發二ー一」
【至止】シシ　きたりのぞむ。詩、小雅「君子ー一、福祿如レ茨」
【至慈】シジ　いたりてふかきめぐみ。歐

滅することなし。晉書、皇甫謐傳「――、至德不ㇾ衰」

【至知】チ　至極せるちえ。莊子「雖ㇾ有二――一、萬人服ㇾ之」

【至治】チ　きはめてよくをさまる。書經「――馨香、感二于神明一」呂覽「――之世、其民不ㇾ好二淫學流說一」

【至智】チ　この上なきちえ。越絕書「有二――之明一者、必破二庶衆之說一」

【至正】シセイ　いたりてあしく害あり。

【至惡】シアク　いたりてあしく害あり。夢周契「野葛巴豆、草藥中之――者」

【至德】シトク　いたれる德行。孝經「先王有二――要道一」

【至眞】シシン　前條に同じ。韓君書「論二――一者、不ㇾ和二於俗一、成二大功一者、不ㇾ謀二於衆一」

【至寶】シハウ　この上もなきたから。白居易詩「――有二本性一」

【至美】シビ　いたりてうつくし。梁簡文帝表「佛法之勝事、國家之――」

【至微】シビ　いたりてかすか。淮南子「――神明、弗ㇾ能ㇾ領也」

【至福】シフク　この上もなきしあはせ。＝至幸。

【至誠】シセイ　至りて深遠なる義。淮南子「模至大者無二形狀一、道――者無二度量一」

【至味】シミ　いたりてよきあぢ。春秋繁露「雖ㇾ有二天下之――一、弗ㇾ知二其旨一」也」

【至妙】シメウ　いたりてふしぎ。七啓「論二變化之――一」

【至樂】シガク　○いたりてたのし。臧良詩「――固如ㇾ此、是外徒營營」○シカク　善美をつくせる音樂。韓詩外傳「詔用二干戚一、非二――一也」大戴禮「至賞不ㇾ費而天下之士說、――無ㇾ爭而天下之民和」

【至理】シリ　いたれる道理。張鷟詩「異身無ㇾ有ㇾ像、――本無ㇾ名」

【至隆】シリウ　きはめてさかんなり。七啓「此謂道之――、而雍熙之盛際」

【至論】シロン　至りてすぐれたる議論。

三　致　チ　至

○いたす、至らしむ、來らしむ、招く。○おくる（送）「――書」「送――」○ゆだねる、まかす（委）論、學而「事君――其身一」○をさむ（納）官を辭する「――仕」○いどむ（挑戰）「――師」○きはめる（極）深く審かにする「――知」○つくす（盡）論、子張「人未ㇾ有二自一者一也、必也親喪乎」○つたへる（傳）「――言」○おもむき、ありさま（趣態）「風――」「景――」「奇――」「深――」○さだめ（制）○むね（歸所）○こまか（緻密）○はこぶ（運）○つく（就）○至と通ず。世說「西山朝來、有二爽氣一」○圖いたす、爲すの敬語。つかまつる。

【致久】チキウ　久と至とに從ふ、爰に久に從ひて致に作るは非。

【致秩】チツ　わざはひをまねく。道德指歸論「無ㇾ德無ㇾ祿、謂二之――一」

【致意】チイ　己の意志を傳へる。演書、朱博傳「遣ㇾ吏存問ㇾ之」

【致遠】チエン　○とほきをきはめる。易、繫辭「探ㇾ賾索ㇾ隱、鉤ㇾ深ㇾ――」○遠方の民を從へ來らしむ。

【致賢】チケン　賢者を招き來す。莫侯淪文「崇二神廟一以――一」＝招賢。

【致災】チサイ　わざはひをまねく。北史、王慶傳「殘水湯旱、自定之數、須ㇾ聖人一以濟、未ㇾ聞二由ㇾ邪以――一」

【致齊】チサイ　三日間のものいみ。禮、祭義「――于內、散二齊于外一、齊之日、思二其居處一、思二其笑語一、思二其志意一、思二其所ㇾ樂、思二其所ㇾ嗜一」（齊は古、齋に通ず）

【致仕】チシ　官を君に納め還して隱居する、辭職する。公羊、宣元「退而――」＝致政。

【致死】チシ　死に至らしめる、死なせる。

【致事】チジ　官を辭してしりぞく。曲禮「大夫七十而――一」＝致仕。

【致命】チメイ　たたかひをいどむ。左、宣十二「遂許伯御二樂伯一攝叔爲ㇾ右、以致二晉師一」＝挑戰。

【致貢】チコウ　貢物をさし出して臣下となる、古の仕官の語。貢は貢物。

【致身】チシン　みをいたす。生命を君主にたてまつる。論、學而「事ㇾ君能――」晉語「余將ㇾ――焉」＝致仕。

【致敬】チケイ　禮をしりぞく。禮記「七十――」晉語「余將ㇾ――焉」＝致仕。

【致齋】チサイ　いのりをする。宋史、眞宗紀「都城大雨、崇二恩寺一、幸二啓聖院、太平興國寺上清宮一――」

【致知】チチ　知をきはめつくす。大學「――在ㇾ格ㇾ物」王陽明は其の本然の良知を安全ならしむる義とす。

【致治】チチ　よくをさまるやうにする。史、滑稽傳「公孫鞅之事二孝公一也、設二刀鋸一以禁二奸邪一、信二賞罰一以――一」

【致罰】チバツ　つみにおこなふ。左傳「――於楚一而君又寘ㇾ之」

【致法】チホウ　刑法にあてる。史、呂不韋傳「賓客辯士、爲二遊說一者衆、王不ㇾ悅ㇾ――」

【致福】チフク　○さいはひを招き來す。易林、魏鍾仁鼎、養ㇾ賢――」○古、臣が祭る所あれば其の餘肉を王に進めるをいふ。周禮、春官「凡祭祀――」

【致民】チミン　たみを招きよせる。周禮「凡國之大事――」

【致命】チメイ　○天命のあらん限り力を

つくす。易、困卦「澤無レ水困、君子以レ―レ―遂レ志」○いのちを君主にさし出す。獨志、陽士元傳贊、「二二明主、忠情發レ臆」‖授レ命。○國其の爲めにいのちを失ふ「――傷」‖致死。

【玟瑰】ティ　れいをきはめ行ふ。禮記「―レ―以治レ躬則莊敬、莊敬則嚴威」

六畫

【琳】セン　㊥

○再び至る、かさなる(重)○しばしば、しきりに。易、坎卦「水―至」‖洊臻。

【臷】テツ　㊥

○おゆ。‖鬣。○たがひに。韓詩外傳「日居月諸、胡―而微」‖迭。

七畫

【臺】臺(次條)の俗字。

八畫

【臺】タイ　ダイ　㊦　台は別字

○うてな、土を方形に高く築きて四方を觀望するやうに造りし所、ものみ。後世はものみの建物にもいふ。○みささぎ、つか(陵墓)○こもの、賤役の輩。左、昭七「僕臣―」○草の名、すげ(夫須)用ひて蓑笠と爲す(莎草)詩、小雅「南山有―」○城の門。○中央政府の官省。又、其の高官。中―は尚書省。憲―は御史臺。柏―は都察院。制―は總督。糞―は按察使。○人を尊敬していふ「兄―」「老―」「尊―」○憲―は屬吏が上官を尊稱していふ。○至りて賤しき者、めしつかひ、僕の臣。孟、萬章「―無禮也」○上に物をのせ支ふる具「鏡―」「硯―」○盤―は天子の天文臺。又、心の義。○煙―ダイは山東省の島の名。又、之罘山と名づく。○國ダイ物事の基礎となるもの「―帳」「―紙」

【臺下】カイ　○尊敬すべき人に對する敬語。○國眞宗にて東本願寺の法主に對する敬稱。

【臺閣】ダイカク　○うてなと、たかどのと。說苑「秦始皇宮室―、連屬屢累」○尚書の官をいふ。後漢書、仲長統傳「光武皇帝政不レ任レ下、雖レ置二三公一、事歸二―一」○內閣をいふ。蔡邕、陳レ政疏「綱紐弛縱、莫二相糾一、臺省一―、亦復默然」‖臺省。

【臺閣生風】ダイカクセイフウ　廟堂の上にて大臣皆肅然として畏れる形容。晉書「傅玄爲二御史中丞一、貴游慴服、――」

【臺諫】ダイカン　御史臺の異稱、宋の代、諫官を臺諫、故にいふ。宋史、蔡京傳「―交論二其惡一、遂致仕」

【臺軍】ダイグン　六朝時代、官軍をいふ。晉陸機「晉宋閒謂二朝廷禁省一爲レ臺、故稱二禁城一爲二臺城一、官軍爲二―一、使者爲二臺使一、鄉士爲二臺官一、法令爲二臺格一」

【臺官】ダイクワン　○尚書をいふ。漢代、尚書を稱して中臺と爲すが故「宋書」○御史をいふ「國史補」

【臺觀】ダイクワン　ものみだい。魏志、高堂隆傳「―是崇、淫樂是好」

【臺獄】ダイゴク　御史臺の獄。宋史、張燾傳「蘇軾下二―一」

【臺座】ダイザ　佛像を置く座。朱子語類「夫子像設置二於椅上一、已不レ是、又復置在二―一上」

【臺詞】ダイシ　せりふ、芝居にて、俳優の演技に用ふることば。‖賓白・科白。

【臺臣】ダイシン　諫官。元史「今―坐レ議、公論杜塞、何謂二法二祖宗一耶」

【臺榭】ダイシャ　うてな、榭は屋根のあるものみだい。○臺、泰誓「惟宮室―、陂池侈服、以殘二害子爾萬姓一」史、劉敬叔孫通傳贊「―之儀、非二一木之枝一、三代之際、非二一士之智一」

【臺城】ダイジョウ　六朝時代の皇居の稱。今の江蘇江寧縣の北、玄武湖の側に在り。梁京寺記「梁武帝改二年號大同一、起二同泰寺一、在二―一內、窮二端嚴一、造二大佛閣七層一」

【臺子】ダイス　國正式の茶湯に用ふる茶棚。轉じてひろく茶棚をいふ。

【臺省】ダイセイ　○尚書省の稱。漢代、尚書を中臺と稱す、禁省の中に在り、故にいふ。‖中臺。○ひろく內閣の義。魏志、夏侯尚傳、注「在二―一常多託レ疾」‖臺閣。

【臺端】ダイタン　監察又は御史の稱、端は端正の義。唐書、百官志「侍御史號二―一、人稱レ之曰二端公一」

【臺帳】ダイチョウ　國○商家の元帳、大福帳。○すべて或る事柄の基本となる帳簿。

【臺盤】ダイバン　國古の食卓。

【臺門】ダイモン　○城の門、土を累ねてつくるが故「古今注」‖城門。○御史臺の門。

【臺笠】ダイリフ　すげがさ、臺は莎草。詩、小雅「――綢繆」

【臺隸】ダイレイ　しもべ。宋書、恩倖傳序「周漢之道、以レ智役レ愚、――參差、用成二等級一」‖臺僕。

十畫

【臻】シン　㊦

○いたる(至)およぶ(及)詩、邯鄲「遥ー于衡」○あつまる(聚)輻輳する。樂章、天命「百祿咸來ー」○おほし(衆)

同訓異義 臻・至・到・詣・造・格等の別は至(一五九一頁三段)の條を見よ。

臼部

【臼】キウ 有 臼とは別

うす、つきうす(舂)米を舂く器「石ー」「茶ー」「藥ー」

【臼窠】キウくわきまりしかた、窠曰(一三九八頁三段)に同じ。黄庭堅詩「取レ意開談沒ニ臼ー一」＝臼科。

【臼齒】キウおくば、先端は平かにして臼の如く食物を碎きて細かくする作用あり。

【臼杵】キウ うすと、きねと。易、繫辭「ーー之利、萬民以濟」＝杵臼。

【臼頭深目】シキウシンモク みにくき女の形容。新序、雜事「齊有二婦人一極醜無雙、號曰二無鹽女一、其爲レ人也、ーー」

【臼砲】キウ 火砲の一、筒短くして臼の如く、彈曲せる彈道を以て射撃するもの。＝虎蹲砲・國曲射砲。

【臼磨】キウ うす。蘇軾詩「卻欲レ供ニ一ーー一」

【臽】カン 陷 俗

○あな(坑)ちさきおとしあな(小阱)○あなにおとしいれる「ー虎」

【臾】ユ ヨ ヨウ 臾は俗字

㊀須ーはしばらく(俄頃)すこしの間。中庸「道也者不可須ー離ー也」＝頃刻。○厂ーはくぼみ、窟下の地。荷、大略「流丸止于厂ー」○瀕ーヒンは古の國名、今の山東省蒙陰縣の地。㊁通に同じ、縱ーはすすめる。＝慫慂。

【舀】サツ 治 三畫

○さす、さしはさむ。史、司馬相如傳「雜ー其間」＝插。○うすつく(舂)舂きて麥の皮を去る。○すき。＝鍤。鑱を築く杵。

【臿】ヨキ 魚 緝 四畫

かく(共舉)兩人共に一物を舉げる。又、兩手をかけてあげる「ー夫」

【舂】シヨウ 多 五畫

○うすつく、臼にて粟をつく。莊、逍遙遊「適ー百里者宿ー糧」○轉じて太陽が沒する、日が沒する「下ー」「高ー」薛能詩「隔レ溪遙見夕陽ー」○つく(撞)史、魯世家「ー其喉以戈殺之」衡に通ず。○從に通ず、ー容は、ゆったり、迫らずしてしづか。＝從容。

同訓異義 舂・衝・突・搗・擣・撞・舂・築の別は衝(行部九畫)の條を見よ。

【舂炊】スヰ うすつくと、かしぐと。高啓詩「新婦ーー兒夜泣」

【舂碓】タイ つきうす。前史、侯景傳「虐二于用レ刑、酷忍無道、於二石頭一立二大ーー一有二犯レ法者一、擣二殺之一」

【舂簸】シヨウ 米を臼にてつき糠を注にてさぐる。北史、祖瑩傳「亮難レ歷二顯任一、其妻不レ免二親事一ニーー一、孝文聞レ之、遣二其清貧一」

【舂米】ベイ こめをうすつく。十六國春秋「李漢家ーレー」

【舂容】ショウ おちつきて迫らず。禮、學記「善待レ問者、如レ撞レ鐘、待二其一ーー一、然後盡二其聲一」一解に重ねて搥く義。

【舄】セキ 陌 俗に舃に作る 六畫

○くつ(履)二重底のくつ(複履)「革ー」「履ー」詩、豳風「赤ー几ー」○大いなる貌。詩、魯頌「松桷有ー」ー○ー奕は光曜のなが れ行く貌、ひかりかがやく。班固、典引「ー奕於千載」○いしずゑ。＝碣。○ひかた「ー鹵」＝潟。○馬ーヤクは、車前バセンの異稱。

【舄鹵】セキ ひかた、しほはま、鹹地。漢書、溝洫志「終古ーー令生二稻黍一」＝斥鹵。

【舃】 舄(前條)の俗字。

【舅】キウ 有 七畫

○しうと、婦フが夫の父を稱していふ。○をぢ、母の兄弟「ー父」○諸侯が異姓の大夫を稱していふ。○伯ーは天子が異姓の諸侯を親みていふ辭。○外ーは夫が妻の父を稱してい

ふ。

【舅姑】キュウ しうとと、しうとめと。禮、内則「婦事二一一一、如レ事二父母一」

【舅姨】キュウイ 母方のをぢと、をひと。又、しうとと、むこと。左傳「凡君卽位、好二一一一、修二昏姻一」

【舅氏】キュウ 母の兄弟。詩、秦風「我送二一一一、自至二消陽一」＝母父。

【舅婦】キュウフ 妻の兄弟の妻（南史、張敬兒傳）

【舅父】キュウフ 母の兄弟。史、孝文紀「封二淮南王一一趙兼一爲二周陽公一」＝母氏。

【舅母】キュウボ 母の兄弟の妻。晉書「武帝楊后母早卒、依二舅家一一仁愛親乳之」

八畫

【與】

㊀ヨ　㊁ヨ　㊂コ

魚　御　魚

与に通ず　昇は古字

㊀なかま、くみ、ともがら「黨一一韓無、原毀「其應者必其人之一一也」○くみす（黨）なかまになる。論、徽子「吾非二斯人之徒一一而誰一一」○ともにす（偕）いっしょに爲す、つれだちて行く。論、陽貨「歲不我一一」○あたふ（予）授ける「授一一」「給一一」○したがふ（從）齊語「桓公知天下諸侯多一一己也」○たすく（助）○したしむ（親）○ゆるす（許）同意する。論、公治長「吾一一汝弗如也」○まつ（待）○やはらぐ（和）○もって（以）論、陽貨「鄙夫可一一事與君也與哉」もちひる（用）○かぞふ（數）○および、と「仁一一義」○より、何何といづれぞ、比較の接續詞。漢書、韓信傳「勇悍仁彊孰一一項王」○よりは。韓愈、送二李愿序一「其有二異於前一一若無一一於其後」○ために、古、爲に通ず。○くみして、ともに（偕）○ぞ、か。○容一一は閑適の貌。㊁あづかる「參一一」○豫に通ず、猶一一は疑ひて決せざる貌。＝猶豫。㊂か（疑問の辭）論、泰伯「君子人一一、君子人也」＝歟。○一一はすがたのびのびしたる貌。論、鄉黨「一一如也」一解に威儀中適の貌。又、盛んなれる貌。詩、小雅「我黍一一」

同訓異義　與・予・余・敷の別は予（次三月條後）の條を見よ。

【與國】コク 同盟國。孟、告子「我能爲二君約一一一、戰必克」

【與黨】トウ ○なかま。○時の政府に味方する政黨。

【與奪】ダツ あたふると、うばふと。左傳「七年之中、一與一奪、二三執甚レ焉」＝予奪・奪與。

【與知】チ あづかり知る。中庸「夫婦之愚、可二以一一一焉」

【與謀】ボウ はかりごとにあづかる。戰國策「燕有二田光先生一、其爲レ人智深而勇沈、可二一一一」

【與與】ヨ ○しげる（蕃廡）貌。字解參看。○威儀の中適せる貌。字解參看。

【與力】リキ 德川時代に奉行の配下に屬して 內外の諸事に當りし卑役。又、其の役人「一一同心」

【易レ與】ヨシ 相手に爲しやすし。史、淮陰侯傳「吾平生知二韓信爲二人一一一耳」

【弗二與共戴一レ天】テンヲトモニセズ 必ずあたに報い、誓つて俱に生きざる義。曲禮「父之讐、一一」

【可二與樂一レ成】トモニラクシムベシ 共に事の成效を樂むべし。史、商君傳「愚者闇於成事、知者見二於未萌一、民不レ可二與慮一始、而一一」

九畫

【興】

㊀キョウ・コウ　㊁キョウ・コウ

蒸　徑

通音㊀はコウ　㊁はキョウ

㊀おく、おきる（起）詩、小雅「夙一一夜寐」○おこす、始め起す「一師」○たつ、たちあがる。○あぐ。あがる（擧）○おこなはる（行）論、子路「禮樂不一一」○うごく。うごかす（動）○盛んになる。盛んにする。○たふとぶ（尚）○なる。なす（成）○かかりもの、官の徵賦物。○一一安嶺は滿州の西、蒙古の東に横はる一大山脈、滿洲語の金阿林（阿林は山）の轉訛。㊁おこる、心が感ずる。よろこぶ（悅）論、泰伯「一一於詩」禮、學記「不一一其藝一不一能樂學」○おもむき、おもしろみ「一味」「一趣」「一致」○詩の一體、六義の一、物に感じてわが意をのべ作るもの。

【興趣】キョウシュ おもしろみ。杜甫詩「一一江湖遠」＝興味。

【興致】キョウチ おもしろき おもむき、閒興逸致。滄浪詩話「近代諸公、其作務多使レ事、不レ問二一一一」

【興味】キョウミ おもしろく感ずる。北史、劉璠傳「對レ雪一一乃作二雪賦一一」＝感興。

【興會】キョウカイ おもしろみ（世說）＝興味。

【興醒】キョウセイ 興趣なくなる。

【興盡悲來】キョウジンカナシミキタル 興趣なくなる。

【興廢】キョウハイ 興亡。

【興亡】キョウボウ 興亡。

【興味】キョウミ おもしろみがたけなはなり。李白詩「一一落レ筆搖二五嶽一」

【興感】キョウカン おもしろく感ずる。北史、劉璠傳「對レ雪一一乃作二雪賦一一」＝感興。

【興會】キョウカイ おもしろみ（世說）＝興味。

【興趣】キョウシュ おもしろみ。杜甫詩「一一江湖遠」＝興味。

【興致】キョウチ おもしろき おもむき、閒興逸致。滄浪詩話「近代諸公、其作務多使レ事、不レ問二一一一」

【乘レ興】ジョウキョウ おもしろく心が浮き立

つにまかせる。晉書、王徽之傳「一レ興而來、興盡而反」

【興味】キョウミ　○おもしろみ。蔡寛夫詩話「轉覺林泉一レ長」‖興趣。○教育學にて感情上心意の活動をいふ。

【興行】コウギョウ　○品行を修めおこす。孝經「陳レ之以二德義一而民一レ興」○國サウ芝居などを開演する。

【興起】コウキ　○奮ひおこる。孟、盡心「百世之下、聞者莫レ不二興一也」○盛んにおこる。盬鐵論「若二時雨之潤一、萬物莫レ不二興一也」

【興業】ギョウ　○事業を勵みおこす。史記「孔子述レ文、弟子一レ興」○經濟上の事業をおこす「一一銀行」

【興隆】リュウ　盛んにおこる。張仲甫、重賦「竝二陽和一啓二葦戸一、農事一レ興、秋成斯慶」

【興廢】ハイ　起居に同じ。隋書、高熲紀「縣君二臨履宇一、於レ茲九載、開二直言之路一、披二不諱之心一、形二於顏色一、勞二於一一一」

【興館所】クワンショ　國取引上の參考の爲めに他人の財産上の狀態を確實に調査報知する所。轉じてひろく他人に關する事項を探偵報知する所にもいふ「人事一一」

【興昌】コウショウ　おこりてさかんになる。論衡「唐虞夏殷周者土地之名（中略）皆本下所二興一一之地上」

【興讓】キョウジョウ　讓譲をたふとびおこす。大學「一家仁、一國興レ仁、一家讓、一國一レ一」

【興勃】コウボツ　おこると、すたると。唐書、楊綰傳「以レ銅鑄レ錢、可レ正二衣冠一、以レ相爲レ鑒、可レ知二一一一、以レ人爲レ鑒、可レ明二得失一」‖隆替・興廢。

【興廢】ハイ　おこると、やぶると。後漢書、王充傳論「用舍之間、一一實繫」‖興廢。

【興發】ハツ　おこると、すたると。詩經、疏「王者政有二一一一」‖興替。

【興亡】ボウ　おこると、ほろぶると。盬陽鉷、用棠論「治亂一一之迹」

【興發】ハツ　惠をおこし意をひらき施す。孟、梁惠王「於レ是始一一、補レ不レ足」

【興舞】ブ　まひをまふ。周禮「凡小祭祀不二一一一」

【興復】フク　おとろへたるを更におこす。後漢書、光武帝紀「德横二天地一、一一宗統一、寔レ德賀レ勤、親二睦九族一」

【興奮】フン　おこりふるふ、元氣づく「一一劑」

【興利】リ　利益になる事をおこし企てる。史、陸賈傳「爲二天下一一一除レ害」

【興隆】リュウ　おこりさかんになる。諸葛亮、出師表「親二賢臣一遠二小人一、此先漢之所二以一一一也」

【興實在レ德】コウジツハトクニアリ　國のさかんになるは德を積むによる。張載、劍閣銘「一一、險亦難レ恃」

【擧】キョ　十畫　畫

國學は本字

○あぐ、かく(扛)ささぐ(擎)「一案」ひっさく(挈)○くはだつ(企)くはだてのぞむ「一首」○すすむ(進)○たつ(立)○ぬく(拔)城を攻めて抜き取る。孟、梁惠王「五旬而一之」○ひきあけてもちふる、登用する「薦一」論、子路「一賢才」○とる(取)○ものいふ(言)曲禮「主人不問、客先不一」○のむ(飲)○とぶ(飛)鳥がとび立つ。論、鄉黨「色斯一矣」○たふとぶ(宗)○こぞりて、みな(皆)左、哀六「君一不信二羣臣一乎」○あはせて、すべあはす(合)○ふるまひ、おこなひ「一止」「一動」漢書「人主無二過一」○おこなふ(行)「一行」○けやき(欅)○こころみ、えらび(選擧・試驗)○とりあげる、財貨を官に沒入する。周禮、地官、司門「凡財物犯二禁者一一之」○子をうむ「一子」生みたる子をそだてる。○價のやすき物を買入れおく。

向調果表　ケ　擧・揭・稱・扛・舁・絕・抗・旅・翻○擧は措と對す、下にある者を擧ぐるなり、衆レ賢の如し、擧レ人・擧レ才なども、下位に在る人才を擧げ用ふるなり、すたれたる事をおこすにも用ふ。中庸「其人存、則其政擧」○揭は雜擧也と註す、とびあがる義なり、抑の反なり、發揭・激揭などと連用し、勢ある字なり。詩經「我武維揚」○稱は揭なり、謂なり、官業にてほめあぐる意、稱揚と熟す。禮記「君子稱二人之善一、則欝レ之」また擧也と註するときは、共にもちあぐる義とす。詩經「稱二彼兕觥一」書經「稱二干戈一」○扛は、ささぐとも謂む、重物をさしあぐるなり。戰國策、秦武王與二孟說一扛二龍文之鼎一」○舁はあふぬく意、のしあがる、頽巢は獅子鼻の義、頽然は意氣の揚揚たるさまなり。○絕は風に乘じてあがるなり、揚に通ず、騰官は揚官に同じ。歸去來辭

「舟搖搖以輕颺」○抗はつよくあぐる義、抗レ疏は、忌憚なく上疏するをいふ、志の高くあがれるを高抗といふ。○掀は舉ケン手を以て高く舉ぐる義、說文に、舉出也と註す。左傳「乃掀レ公以出二于淖一」○掀はぬき出て高き義。詩經「翹翹錯薪、言刈二其楚一」翹は、翹字の意に近し。

○㚔・皆・咸・僉の別は皆(一三〇二頁)の條を見よ。

【舉行】あげおこなふ。‖執行。

【舉郡】郡中のこらず。後漢書、孔融傳「一一莫レ不レ敬レ憚、爲レ政明斷、疏レ善惡レ非、郡中稱爲二清平一」

【舉人】ひともやす、生計を立てさせる人、雅「待レ臣面一レ者數百家」

【舉業】官吏登用試驗の時に作る文章。金史「郝晉卿舉不レ事二一一」

【舉國】國中のもののこらず。史、刺客傳「晉一レ與二仲子一爲レ讐」‖全國。

【舉國一致】國民全體が一つになる。

【舉座】一座の者のこらず。‖滿座。

【舉削】人をあげ用ふると人をしりぞけると、倒は其の官爵より名をけづり去る。

【舉子】○官吏の登用試驗に應ずる人。通俗編引「槐花黃、一一忙」○生みたる子を育てる。後漢書「求二乳郷一勿レ得レ一一育てぬを不舉といふ。

【舉止】ふるまひ。魏書、賈秋千傳「一一風流、有レ餘二論者一」‖擧措。

【舉人】鄉試に及第して更に會試(京師の試驗)に應ずる者。事文類聚「唐制縣部試二一一、後以二進士一爲レ號」‖擧子。

【舉將】舊時擧げ用ひし將。三國志「吳郡太守朱治、孫權一一也」

【舉手】手をあぐ。後漢書、王霸傳「光武令二霸至一市中一、募レ人將二以擊二王郎一、市人皆大笑、一一レ郎三臉之一」

【舉手注目】軍隊の號令法。手をあげ對手に目をつけて敬禮を表する禮式。

【舉隅】隅(足部九畫)を見よ。

【舉證】證據をあげ示す。

【舉遠】とほしびをかかぐるの意。非子「訓二詩書者一曰、一一」

【舉世】世の中の人をこぞりての意。辭「一一皆濁、我獨清」杜甫詩「一一盡從二悲泰過、誰人皆免二死前一閑」

【舉措】あげ行ふと、やめて置くとふるまひ。‖擧動。

【舉錯】○事をあげ行ふと、置きて止むると。ふるまひ。南史、柳世隆傳「觀二君一一、當下以二清名一遺中子孫上耶」‖擧措。○人をあげ用ふると、さしおきて用ひざると。宋史、陳宓傳「一一當面人心服」

【舉奏】一一かぞへ上げて上奏する。宋史、選擧志「凡廷試前一年、一一官、具二所レ舉者策論五十首一」

【舉足】あしをあぐ。禮記「一一レ而不二敢忘二父母一」

【舉族】一族をこぞりて、すべてのやから。元結詩「昔年害二逆亂一一レ來南奔」

【舉場】官吏登用の試驗場。玉海「嘉祐二年詔、開歲一開二一一一」‖科場。

【舉直】正しき君子をあげ用ふ。論、爲政「一レ舉二諸枉一」

【舉贖】かなへをあぐ。淮南子「舉二鼎贖一者、力少而不レ可レ勝也」

【舉レ鼎絕レ脰】力少く任重きに愉ふ。秦武王が孟說と鼎を舉げ脰を絕ちて卒せし故事に本づく。絕脰(一五八頁三段)參看。

【舉朝】朝廷の者のこらず。後漢書、王隆傳「則天時、三月雪、屈朝諸部落跋涉等、以爲レ瑞、將レ賀、求遮止之、三月雪、豈二瑞雪一耶、臘月雷、亦瑞雷也、一一嗤笑、以爲二口實一」‖滿朝。

【舉動】ふるまひ。王粲賦「蜿約綿、一一多宜」‖擧止。

【舉杯】舉杯(九二四頁二段)を見よ。

【舉白】さかづきをあげる。又酒を進める。漢書、敍傳「皆引レ滿一レ、鉄笑大噱」

【舉レ目】めをあげて眺める。晉書、王導傳「風景不レ殊、一レ有二江山之異一」

【舉如二鴻毛一取如レ拾レ遺】國を取る事の甚だやすきに喩ふ。漢書、梅福傳「擧レ秦如二鴻毛一、取レ楚如レ拾レ遺」

十二畫

【舊】キウ　ク　㕣

○ふるし(故)新の對。左、僖二八「舍其一面新是謀」○ひさし(久)年を經ることが久しき事、無過「一勞乎外」○ふるなじみ、ちなみある人(故人)「故一一友」○としより(老宿)○ふるき物事。左、宣二八「舍其一面新是謀」

同訓異義　舊・陳・古・故の別は陳(阜部八畫)の條を見よ。○舊・本・原・故・元・素・雅・固等の別は本(九〇七頁四段)の條を見よ。

【舊痾】ふるくよりの病氣、持病。‖宿痾、痼疾。

【舊愛】昔のいつくしみ。曹植詩

「人皆棄ニ一ニ」
【不レ念ニ舊惡】ネンキウアク　他人のふるき惡事を心に止めず。論、公冶長「伯夷叔齊、一ニ、怨是用希」
【舊友】キウイウ　ふるきとも。許渾詩「全家南渡遠、一ニ北來頻」‖舊朋・故舊。
【舊遊】キウイウ　○むかしのあそび。李白詩「今古一相接、長歌愴ニ一ニ」‖曾遊・昔遊。○昔の交友。綿陰詩「倘因二匯足一思二朋害一、探レ棹二孤舟一訪ニ一ニ」
【舊因】キウイン　ふるきちなみ、昔のゆかり。吳融詩「消閒覓ニ一ニ」
【舊雨今雨】キウウキンウ　ふるき友と、新らしき友との雨は友と皆通ず、故にいふ。杜甫、贈小安「訪二舊長安旅次一多雨、非常重馬之客、舊雨來、今雨不レ來」に本づく。
【舊苑】キウエン　昔のその。李白詩「一ニ荒遂梅卿新」
【舊恩】キウオン　ふるきめぐみ。梁武帝詩「感恩誰誡、心念ニ一ニ」
【舊家】キウカ　ふるくより續ける家。‖故家。
【舊交】キウカウ　ふるきなじみ。史、吳世家「季札使二於鄭一、見二子產一如ニ一ニ」
【舊好】キウカウ　ふるきなじみ。王維詩「今時新識入、知君舊時好」‖舊交・舊誼。
【舊誼】キウギ　むかしのとなへ〔後漢書〕
【舊格】キウカク　昔のふるきかた。江淹文「威依ニ一ニ、以赴二我應一、范威大、紅梅詩「雖二然嫩蕊新粧別一、只與二橫斜一ニ一同」
【舊感】キウカン　ふるき感情。梁元帝錄「去レ鄉數千里、親レ日如レ歲、觸レ目興レ懷、一ニ來集」
【舊記】キウキ　ふるきかきもの、古昔の記錄。魏書、崔鴻傳「因二其一ニ一ニ、鄒衍之文、更無レ遺」
【舊館】キウクワン　ふるきやかた。任昉、王文憲集序「出二入禮閤一、朝二夕一ニ一ニ」
【舊舘】キウクワン　ふるきと。沈佺期文「同レ首恩ニ一ニ、雲山亂二心曲一ニ」‖故鄉・故里。
【舊規】キウキ　もとのおきて。‖舊章。
【舊君】キウクン　もとの主君。‖舊主。
【舊訓】キウクン　昔のをしへ。崔駰文「奮二發舊訓一、一ニ不レ違」
【舊勳】キウクン　王室に對するふるきいさを。左傳「我實公朱レ忘ニ君之一ニ」‖舊功。
【舊恥】キウチ　ふるきはぢ。朱淑真詩「假使二於鄭得一、終當レ有ニ一ニ」
【舊業】キウゲフ　ふるきすぢ。業は業。元好問詩「飛黃老去空奇骨、社燕歸來只一ニ」
【舊貫】キウクワン　○ふるきしきたり。論、先進「仍ニ一ニ如レ之何」‖舊式・舊制。○ふるきならはし。貫は慣。
【舊慣】キウクワン　ふるきならはし。‖舊染・舊俗。
【舊歡】キウクワン　昔のよろこび。潘岳賦「憶一ニ一ニ兮旣二新歡一ニ」‖故枝。
【舊館】キウクワン　ふるきやかた。任昉、王文憲集序「出二入禮闈一、朝二夕一ニ一ニ」
【舊銀】キウギン　○もとのながめ。○ふるきたかとの。袁枚詩「一ニ丹青復」
【舊敎】キウケウ　ふるき耶蘇敎、ルーテルの宗敎改革以前の宗派。‖羅馬敎・希臘敎など。
【舊言】キウゲン　平生のことば。荀、宥坐「皆無ニ一ニ」
【舊故】キウコ　ふるきなじみ。史、張耳傳「漢王與レ我、有ニ一ニ」‖故舊・舊知。
【舊政】キウセイ　昔からの惡しき政、汚ほ穢。左、文六「趙盾爲レ政治ニ一ニ」
【舊穢】キウクワイ　ふるきこくもつ。論、陽貨「一ニ既沒、新穀既升」
【舊宅】キウタク　ふるあと。杜甫詩「三月桃花浪、江流復ニ一ニ」
【舊邸】キウテイ　ふるきつみ。家語「不レ錄ニ一ニ、是丹雘之行也」
【舊藏】キウザウ　以前よりの所藏。又、其の物。
【舊相識】キウサウシキ　ふるきなじみ。左、襄二九「見二子產一如ニ一ニ」‖舊識。
【舊作】キウサク　ふるく作りし詩歌文章など。
【舊社】キウシヤ　ふるき昔のいしずゑ。眞境楚雲湘水圖歌「憶昔詩家愛二許渾一、凌波荒寺尋ニ一ニ」‖故址。
【舊枝】キウシ　ふるきえだ。梁簡文帝詩「季月雙桐井、新枝雜ニ一ニ」‖故枝。
【舊趾】キウシ　むかしのあと。‖古跡・舊迹。
【舊師】キウシ　以前の先生、又師匠。
【舊時】キウジ　むかし。劉禹錫詩「一ニ王謝堂前燕、飛入尋常百姓家」‖古時・昔時。
【舊詩】キウシ　ふるく作りたる詩。白居易詩「日西盧水曲、猶行吟ニ一ニ」
【舊式】キウシキ　ふるきしきたり。文心雕龍「率好二流巧一、祖二構一ニ一、容競乖レ新」
【舊識】キウシキ　昔よりのしりあひ。錢起詩「一ニ相逢情更親」‖舊知・舊相識。
【舊人】キウジン　ふるきなじみ。晉語「任ニ一ニ共レ政」劉禹錫詩「一ニ唯有二何戡在一、更與殷勤唱二渭城一ニ」‖舊友・故人。
【舊臣】キウシン　ふるくよりの臣、もとのけらい。
【舊章】キウシヤウ　古よりのふるきしきたり、古の聖王の禮典。詩、大雅「不レ愆不レ忘、率二由一ニ」
【舊情】キウジヤウ　○昔のこころもち。徐鉉詩、春物依稀有ニ一ニ」○ふるきよしみ。‖舊好・舊誼。
【舊主】キウシユ　もとの主人。‖舊君・故主。
【舊綠】キウリヨク　ふるきかぶ。林景熙詩「秋去空二秋影一、梅開上ニ一ニ」
【舊趣】キウシユ　ふるきおもむき。孟郊詩

「紹聖改ニ一一一、物象合ニ新姿ニ」

【舊儒】キウジュ 年老いて名望ある學者。南史、崔靈恩傳「都下一一咸推ニ重之ニ」‖宿儒。

【舊隊】キウタイ ふるき足あと、舊遊の地。李白詩「踏レ海客ニ還想ニ還山迷ニ一一ニ」

【舊政】キウセイ 古より行はれ來りしまつりごと。書經「君罔下以ニ辭費ニ亂ニ一一上臣罔下以ニ利口ニ一一ニ成功ニ」

【舊製】キウセイ ○ふるく作りし詩文又はすべての物の荒成。大詩「冠座昏ニ一一ニ」○昔のつくりかた。

【舊迹】キウセキ ふるきあと、迹は跡の俗。後漢書、陳寔傳「北收ニ西河上郡ニ東收ニ三輔之地ニ按ニ察一一ニ、表ニ裏山河ニ」‖古跡・故迹・舊跡・舊蹟。

【舊蹟】キウセキ 前條に同じ。

【舊世界】キウセカイ 亞細亞・歐羅巴・亞弗利加の三大洲の稱。南北亞米利加を新世界といふの對。

【舊說】キウセツ ふるき論說。薛季宣詩「格物可レ爲ニ邦、一一今難レ試」

【舊染】キウセン ふるきならはせ。書、胤征「一一汚俗」‖舊習・舊慣。

【舊套】キウタウ ふるきならはし。杜甫詩「一一疲ニ甫生ニ衰雄問ニ獨夫ニ」‖舊風・舊慣。

【舊族】キウゾク ふるきやから。陳琳文「一一長者」梁簡文帝文「門世奕葉、中州一一」

【舊態】キウタイ 昔のすがた。陸龜蒙、病孔雀詩「翎下移ニ金翠ニ傍ニ籠檻ニ斜倚ニ芳叢ニ一一生」‖古態・故態。

【舊套】キウタウ 古きかた。‖舊面目。

【舊道】キウダウ もとのふるき通路。新道の對。‖故道。

【舊宅】キウタク ふるく住みし家。後漢書、光武紀「置ニ酒一一ニ、大會ニ故人父老ニ」

【舊地】キウチ 以前の領地。‖舊領・舊封。

【舊知】キウチ もとからのしりあひ。新知の對。王嵩詩「處處風烟少ニ一一ニ」

【舊邸】キウテイ もとのやしき。鄭元祐詩「一一梅花落、新亭柳線垂」‖舊宅。

【舊典】キウテン ○ふるき舊物。古文書。‖古典。○ふるきしきたり、ふるき規則。

【舊土】キウド ふるき領地。‖舊地。

【舊都】キウト ふるきみやこ。魏志、董昭傳「拔ニ萬乘之艱難ニ反ニ之ニ一一ニ」

【食ニ舊德ニ】キトクニハム 先祖の功勞により て、子孫が爵位を享ける。易經「一一、貞厲終吉」後漢書、班固傳「士食ニ舊德之名氏ニ農服ニ先疇之畝ニ」

【復レ舊】フクキウ もとどほりにする、もとどほりになる。宋書、武帝紀「悉復レ舊」

【舊年】キウネン ふるきとし、こぞ。‖客年・昨年・去年・去歲・舊歲。

【舊邦】キウハウ ふるきくに。詩、大雅「周雖ニ一一ニ、其命維新」

【舊法】キウハフ ふるきおきて。國語「管子曰、參ニ一一ニ、擇ニ共善者ニ」

【舊派】キウハ 圖書幕時代の大小名の總稱。

【舊碑】キウヒ ふるきいしぶみ。高啓詩「無ニ限花苔沒ニ一一ニ」‖古碑。

【舊風】キウフウ ふるきならはし。皇甫謐序「土有ニ常風、俗有ニ一一ニ」‖舊俗。

【舊服】キウフク ○ふるき衣服。梅堯臣詩「一一變ニ爽博ニ」○舊き領土。服は五服・九服の服。書、仲虺之誥」

【舊物】キウブツ ふるきもの。左傳「祀夏配レ天、不レ失ニ一一ニ」

【舊文】キウブン むかしの文章。晉書、禮志「王肅・高堂隆之徒、博ニ通前載三千條之禮、十七篇之學ニ、各以ニ一一ニ、增ニ損當世ニ」

【舊聞】キウブン ○古よりの聞きつたへ。史、自序「悉論ニ先人所レ次ニ一一ニ弗ニ敢闕ニ」○ふるく聞きたる話。

【舊聞】キウブン ふるきいきどほり。陸游詩「一一開ニ孤劍ニ新愁感ニ斷砧ニ」

【舊弊】キウヘイ 昔よりのあしきならはし。

【舊癖】キウヘキ ふるきくせ。

【舊園】キウヘン ○ふるきはたけ。潘岳、懷舊賦「陳ニ芟被ニ于堂除ニ一一化而爲レ薪」○ふるさとのはたけ。黃庚詩「何時勦ニ一一ニ學レ種鄧平瓜」

【舊朋】キウホウ ふるきとも。陸游詩「倦客飄零少ニ一一ニ」‖舊友・舊交。

【舊封】キウホウ 舊き領地（封は封土）

【舊夢】キウム 以前見しゆめのあと、すぎ去りしはかなき事がら。李頻詩「一一驚知レ覺」‖昨夢。

【舊說】キウヤク ふるきちかひ。ふるき友。

【舊友】キウイウ 陸游詩「我與ニ梅花ニ有ニ一一ニ」

【舊樣】キウヤウ ふるきかた、書式。李商隱詩「漳宮——博山鑪」

【舊約】キウヤク ふるきやくそく、前のちかひ。

【舊約全書】キウヤクゼンショ 三十九卷、耶蘇基督以前の經典、猶太教徒の蒐集せし所のもの。

【舊老】キウラウ 昔の事を知れるとしより。沈約、奏ニ彈王源ニ文「志士 閑而傷レ心、一一爲レ之自嘆」‖宿老・故老。

【舊臘】キウラフ 去年のくれ、臘は陰曆十二月。梅堯臣詩「正月京都里、多ニ于一一時ニ」

【舊里】キウリ ふるさと。晉書、陸機傳「年二十而吳滅、退居ニ一一ニ、閉レ門勤學」‖故里・故鄕・故郷。

【舊領】キウリヤウ ふるき領土。‖舊地・舊封。

【舊帶】キウタイ 昔の古きとりで。‖故壘。

【舊例】キウレイ むかしからのしきたり。

【舊錄】キウロク ふるき祿俸の禮、經解「以ニ舊坊一爲レ無レ所レ用、而壞レ之者、必有ニ水敗一以ニ一一爲レ無レ所レ用、而去レ之者、必有ニ亂患ニ」

【舊曆】キウレキ 圖太陰曆。‖陰曆。

【舊話】キウワ ふるきはなし。劉克莊詩「渺レ世皆皆忘ニ一一ニ」

十三畫

【舋】 音（西部十八畫）に同じ。

舌部

【舌】ゼツ 厨 舌は正字

○した、五官の一、口中に在りて味を感じ、又、發音を助くる器官「口ー」「三寸ー」詩、大雅「莫レ捫二朕ー一」○まと（射侯）の左右に出たる所。○ことば（言）辯論「饒ー」「利ー」「巧ー」「讒ー」「廣長ー」「騙不レ及ー」○樂器内に在りて聲を發する具、金口木ーは木鐸。○物に附きて舌の形せるもの。箕ーは箕くの物を盛る所。○ー人はつうべん（通譯官）○反ー 缺ーゼツ

解字 口に在り言ふ所以なり、味を別つなり、干に从ひ口に从ふ、物、口に入れば、必ず舌に干はる、故に干に从ふ、俗に乎に从ひて舌に作るは非。

【舌耕】カウゼツ 辯舌を以て生計をなす。漢書、賈逵傳「逵通レ經、門徒來學者、數レ輒盈レ舍、故曰、逵非二力耕一乃ー一也」

【舌癌】ガンゼツ 舌に癌腫シュの生ずる病。

【舌乾唇焦】シャウセン 非常に能くしゃべる。史記「張儀解レ乾レ舌」に本づく。

【舌劍】ケンゼツ するどき辯舌。

【舌根】コンゼツ したのもと、舌の喉ガに近き處。禪林詩「ー一道味經二齒レ齒」‖舌本。

【舌根未レ乾】カンゼツコンマダ 今言ひし計りにて未だ時を經ず。

【舌爭】ソウゼツ くちさきのあらそひ。

【舌人】ゼツジン 通辯人。周語、注「ー一能達二異方之志一、象胥之官也」‖譯人・譯官。

【舌尖】センゼツ したのさき。‖舌端・舌頭。

【舌戰】センゼツ 互に議論をたたかはす。‖論戰。

【舌苔】ゼツタイ 病人の舌の上に生ずる垢膩アカ。醫者之によりて病を診察す。苔一に胎に作る。

【舌端】タンゼツ くちさき。鮑照詩「兩說窮二ー一、五事摧二筆鋒一」

【舌頭】トウゼツ したのさき。‖舌尖。

【舌鋒】ホウゼツ ことばのほこさき。‖論鋒。

【舌本強】キヤウゼツ 舌の根が固くなりて動く歸ずること出來ず。禮說、文學「三日不レ誦二道德經一便舌本開強一」

【舌論】ロンゼツ くちさきのあらそひ。

【搖レ舌】ヨウゼツ したをふるひ動かす。傳休奕詩「吐レ言若二履冰一、ー一レ一不レ可レ道」

【戢レ舌】シフゼツ 舌を動かして盛んに辯ずる。莊子「不レ耕而食、不レ織而衣、搖レ脣ー一レ、鼓二其舌一非二以逃一天下之主一」

【吐レ舌】トゼツ 苦みてしたをはき出す。漢書、西吉傳「漆二人置レ牛、牛喘ー一レ」

【掉レ舌】テウゼツ 雄辯をふるふ。史、淮陰侯傳「掉二三寸之舌一、下二齊七十餘城一」‖搖レ舌。

【卷レ舌】ケンゼツ 驚きて言ふ能はず。漢書、揚雄傳「禮官博士、卷二其舌一而不レ談」

【結レ舌】ケツゼツ 舌を結びて言はず。世說、德行「不レ能レ結二兒輩舌一也」

【捫レ舌】モンゼツ 舌をとる、言語を謹むをいふ。詩、大雅「無レ易二由言一、無レ曰二苟矣、莫レ捫二朕舌一、言不レ可レ逝矣」

【舌芒二于劍一】ゼツバウケンヨリ 舌は劍よりも鋭し、論鋒のはげしきをいふ。黃憲、天祿閣外史「一激之怒、炎二于火一、三寸之ー一」

【舌敝】ヘイゼツ したはやはらかなり。梁の強きに喰ふ。說苑「常樅謂レ老子一曰、舌存乎、曰存、豈非レ以二其柔弱一耶、樅曰、天下事盡矣」

【舌敝】ヘイゼツ 言多きに過ぎて舌の疲れる義。戰國策「ー一耳聾、不レ見二成功一」耳聾は人言を聽くに倦む。

【舍】 ㊀シャ ㊁シャ ㊂セキ・シャク 厨 舍は俗字 陋 舖

㊀やど、やどり。○とのゐどころ（宿直所）○假にとまる所（客館）「客ー」「旅ー」「館ー」○やしき、いへ（居宅）「茅ー」「屋ー」「第」「田ー」「廬ー」「官ー」○やすむ（休）いこふ（息）詩、小雅「亦不レ遑ー一」○おく（置）○すつ（廢棄）漢書、藝文志「ー一短取レ長」○やむ（罷）○のぞく（除）ゆるす（赦）漢書、朱博傳「常刑不ー一」○はなつ（放）孟、滕文公「ー一矢如レ破」○ほどこす（施）施しめぐむ。左、宣十二「旅有二施ー一」○とどむ。とどまる（止）○をる（處）○やどる、軍隊一日の行程、三十里にしてやどる。又、其の所。○星のゐどころ、晃宿。㊁すつ（廢）論、子罕「不ー一盡夜」‖捨。○やむ（止息）○おく（置）㊂釋（采部十二畫）に同じ「ー菜」

【作二舍一道傍三年不レ成】シヤダウバウサンネンフセイ 古の俚諺、道ばたに家を建てるに一一行人に相談する時は、異論百出して容易に落成するに至らず【後漢書、曹褒傳】

【舍下】シャカ　己の家の謙稱。
【舍監】シャカン　學校の寄宿舍などの監督。又、其の人。
【舍館】シャクワン　やどや。孟、離婁「一一來レ定」‖客館・旅館。
【舍兄】シャケイ　己のあに。‖家兄。
【舍次】シャジ　軍隊のやどり。左、莊三「凡師一宿爲レ舍、再宿爲レ信、過レ信爲レ次」
【舍人】シャジン　○家の雜務を執る者、食客の類「史、藺相如傳」○宮中に宿直して取締を爲す官、秦代より始まる「事物紀原」○國ノ官、天皇又は皇族に近侍して雜務を執るもの。又、現今、宮內省式部職の判任官。
【舍長】シャチョウ　○學舍又は學生の寄宿舍のかしら。○やどやのとりしまり「史、扁鵲傳」
【舍弟】シャテイ　人に對して己のおとうとの稱。杜甫詩「喜悼一一存」
【舍匿】シャトク　罪人をやどしかくす。漢書、淮南王傳「一一者、論若有レ法」
【舍利】シャリ　○梵語、舍利と譯す、釋尊の骨の法華經序品「佛滅度後、供二養一一一」翻譯名義集「佛舍利、椎撃不レ破、弟子一一、椎試卽碎也」‖佛骨。圖○死體を火葬にしたる骨。○自ら固くなりて死する蠶の病名。‖白殭病。
【舍利刹】シャリセツ　上等の砂糖を煮つめたるもの、藥用とす。‖精糖。
【舍菜】シャサイ　學校にて行ふ孔子の祭、舍は釋、菜は菜、蘋藻の屬。周禮、大胥「春入レ學、一一合レ舞」‖舍菜・釋菜。
【舍然】シャゼン　さっぱりと悟ける貌。列子「其人一一大喜、曉レ之者亦一一大喜」‖釋然。
【舍密】セイミ　化學の古名、和蘭語の音譯。

四畫

【舐】シ　舔は正字　ねぶる（賄）なめる。「一痔」舌にて物をかすめ取る。
【舐糖】シトウ　めかをなめる。史、吳王濞傳「里語有レ之、一一及レ米、糠在レ外、米在レ內」一一及米は外よりして後して內に及ぶに喩ふ。
【舐窓】シソウ　たなごころをねぶる。埤雅「蠹食レ書不レ食、獨自舐二其掌一、故其字在レ掌」徐陵啓「登二長城一喊「雖甚一一、實銘二骨髓一」
【舐犢之愛】シトクノアイ　老牛が子牛をなめ愛する。深く我が子を愛するといふ譬。後漢書、楊彪傳「無二日磾先見之明一、猶懷二老牛一一一」

六畫

【舒】ショ　通音ジョ　○のぶ。のばす「一眉」のびる（伸）「一翼」○ひろげる、ひらく（開）○ゆるし、ゆるやか（緩）「閑一」「寛一」○おそし（遲）○おもむろ、おだやか。○一遲はみやびやか（閑雅）又、遲緩なる貌。○つまびらかにす（詳）○ついづ（紋）○古の國名、楚の與國。今の廬江の一縣の地。詩、魯頌「荊一是懲」
【舒暢】ショチョウ　ノビル　舒・通・陳・宣・布・展・申・伸・信・暢・演・遽・延・紓の別は通部五畫の條を見よ。
【舒演】ショエン　のべひろめる。蔡邕、蔡朗碑文「一一奧祕、貫二理閫文一」
【舒雁】ショガン　鵝の異名「附雅」
【舒懐】ショカイ　思をのべる。文心雕龍「意得則一一以命レ筆」
【舒緩】ショカン　ゆるやか。北史、崔遜傳「擧措一一」
【舒卷】ショケン　○のべると、まくと。晉書「和光同塵、與レ時一一」‖卷舒。○書物を開く。元稹詩「頗レ憐減二舒酌一一一線二微吟一」‖開卷。
【舒元輿】ショゲンヨ　唐の元和中の進士、監察御史に擢でられ接勁縱ほしゐまゝ所なし、牡丹賦を著し、時に其の工を稱す。
【舒悒】ショユウ　心がのびてゆるやかなると、かなしみいたむと。楊遜、舜歌南風二賦「憫二沃瘠之勞逸一、均二陰陽之一一」符載、襄陽北樓記「天時有二晦明一、人情有二一一一」
【舒情】ショジョウ　おもひをのべる。楚辭「發レ憤以一一一」‖紓情・紓懷。
【舒舒】ショジョ　○勞のゆるやかなる貌。韓愈詩「淮之水一一」‖徐徐。○心の寛緩なる貌。孟郊詩「後生皆促促、心塗誰一一」
【舒暢】ショチョウ　心しづかにうそぶく、靜かに風月を吟味して樂む義。
【舒遲】ショチ　ゆったりとしてみやびやかなる貌。從容として迫らず。禮、王藻「君子之容一一」
【舒暢】ショチョウ　心をのべる。柳宗元文「尋復能久留二一一一哉」
【舒展】ショテン　のべひらく。禮記「坐毋レ倨」疏「其、謂一一一兩足、駢如二竝舌一也」武延秀詩「棠軒一一新二風月一」
【舒發】ショハツ　發ノ異名「附雅」
【舒揚】ショヨウ　のびのびとしてあがる、舒張して發揚する。淮南子「天王羣譯而有レ光、其聲一一」

七畫

【辭】ジ　辭（辛部十二畫）の俗字。

八畫

【舖】ホ　トフ　舍　すする（歠）大いに食ふ。
【舖】ホ　舐（舌部四畫）の正字。

九畫

【舗】 舖（金部七畫）の俗字。

十畫

【舘】 館（食部八畫）の俗字。

舛部

【舛】 セン 鉄

○そむく（背）たがふ（違）たがひ（互）○あやまる（錯）「錯ー」「謬ー」「失ー」○みだる、みだす（乱）○はぐ（剝）

【舛・差・違・爽の別】 は差（五六〇頁三段）の條を見よ。

【舛違】 そむきかふ。漢書、賈誼傳「本末ー一、首尾衝決」

【舛訛】 あやまり、文字などの誤謬。＝舛譌・訛舛・訛誤。

【舛午】 そむきたがふ。漢書、元王傳「動輒ー一、謬戻乖剌」＝違背。

【舛互】 たがひに入りまじる。左思賦「飛禽ー一」＝交互。

【舛誤】 あやまる。あやまり。隋書、王劭傳「取レ書驗レ之、一無二ー一一」＝錯誤・謬舛・乖誤。

【舛錯】 そむきみだれる。左思、呉都賦「詭類ー一」＝錯亂。

【舛駁】 入りまじりて正しからず。沈約、佛記序「繁簡ー一」

【舛馳】 いりまじりて正しからず。文心雕龍「純粹者入レ矩、ー一者出レ規」

六畫

【舜】 シュン 国

○むくげ（木槿）はちす。＝蕣。○支那古代の聖王、有虞氏の名。堯の譲を受けて天子と爲る。轉じて聖天子・明君の義に用ふ。蘇軾詩「致二君堯一終無レ術」

【舜華】 むくげの花。詩、鄭風「顚如二ー一」＝木槿・槿花。

七畫

【舝】 カツ 黠

○くさび、車軸の端にはめたる鍵＝轄。○くさびす。詩、衛風「載脂載ー一」○星の名（史、天官書）

八畫

【舞】 ブ ム

国 或は儛に作る

○まふ、樂に合せてをどる。○めぐる、まはる。列、湯問「鳥ー一魚躍」○まひ、をどり「ー一樂」○よろこびてことをどりする「抃ー一」○まはす。蘇軾、前赤壁賦「一幽壑之潛蛟」もてあそぶ（弄）自由にもてあそび變ずる。漢書、汲黯傳「ー一文法」○あざける（嘲）「ー一弄」○はけます、振ひ起す「鼓ー一」○鐘の體の上部。

【舞衣】 まひのいしやう。盧照隣詩「風花落ー一一」

【舞雪】 天を祭り酒を酌る所。論、先進「浴二乎沂一風二乎ー一一、詠而歸」

【舞雩陰詠】 自然を樂しむ快樂をいふ。論語の曾點の語に出づ。前條參看。朱熹、四時讀書樂詩「——春花香」

【舞詠】 まひと、うたと。徐陵文「謹勒二碑一陳二其ー一一」

【舞筵】 まひをまふ席。杜甫詩「燕趙二飛花一落ー一一」

【舞牀】 まひと、うたと。韓愈文「吹レ笙彈レ箏、飲レ酒ー一」

【舞樂】 舞に合せて行ふ雅樂。

【舞技】 まひのわざ、をどり。

【舞妓】 まひこ。＝舞姫。

【舞姫】 まひひめ。

【舞曲】 ○まひのふし。李嶠林詩「歌聲越二齊市一、ー一遶二平陽一」○まひと音曲と。

【舞子】 ○まひて。＝舞人。○国まひひめ。＝舞妓。

【舞人】 舞をまふ人（論、八佾、疏）

【舞榭】 まひをまふうてな。錢謙益詩「ー一歌臺綺繡叢、都無二人跡一有二春風一」＝舞臺。

【舞筵】 ○まふ時に用ふるうちは。張正見詩「月來疑二ー一一」○国まひあふぎ。

【舞臺】 ○まひを舞ふ臺。沈佺期詩「林香散二ー一一」○国劇場をいふ。

【舞態】 まふすがた、まひすがた。羅鄴詩「玉笛豈能留二ー一一」＝舞容。

【舞蹈】 ○足ぶみしてよろこびをどる。梁簡文帝文「徒懷二ー一之心一」○国西洋風のをどり、ダンス。

【舞知】 ちゑを巧にはたらかす。史、張湯傳「爲レ人多レ詐、ー一レ以御レ人」＝舞智。

【舞鳥之災】 火災をいふ。焉が舞ふ夢を見る時は火災ありといふ夢占より出づ（晉書、藝術傳）＝焉舞之災。

【舞法】 法律をもてあそぶ。漢陽侯文「法令以止レ亂、而ー一レ反以滋レ亂」＝舞文。

【舞筆】 事實をまげてかく。後漢書、崔寔傳「ー一レ旨レ辭、以破二其義一」＝曲筆。

【舞文】 ほしいままに法律の文を

玩び愛ずる。史、貨殖傳「吏士ー〻ー弄法、剝ー奪僞ー書」‖舞二文法一。

【舞抃】ブベン　よろこびまひて手をうつ。宋史、樂志「粲然ー一、曙不二覺倦一」　洛陽伽藍記「奇禽怪獸ー二ー殿庭一」‖抃舞。

【舞蹈】ブタウ　喜びてまひをどる。柳宗元文「下民ー一、荷二帝之力一」

【舞容】ブヨウ　まひすがた。‖舞態。

【舞踊】ブヨウ　をどり。をどる。

【舞弄】ブロウ　○ほしいままに法律などをもてあそぶ。隋書、王充傳「明二習法律一而ー二ー文墨一」‖舞文弄法。○人をふなどり弄ぶ。‖嘲弄・愚弄。

舟部

【舟】シウ　尤

○ふね（船）「孤ー」「扁ー」「輕ー」「盛ー」「釣ー」「漁ー」「歸ー」易、繫辭「刳二木爲一舟、剡二木爲一楫、舟楫之利、以濟二不通一」○おぶ（帶）詩、大雅「何以ー之、惟玉及瑤」○國の水、湯・酒などを入れる桶。‖槽。

【舟遊】シウユウ　ふなあそび。

【舟行】シウカウ　ふねにて行く。柳宗元、袁家渴記「ー一者窮、忽又無レ際」舟にて山渓の重複屈互せる處を行けば、水路窮りて始んど路なきかを疑ふ處に至り、忽ち一轉して、又廣闊なる處に出ることあるをいふ。

【舟艇】シウテイ　いくさぶね。宋書、武帝紀「甚二賊ー一、悉ー力而上」‖船艦。

【舟軍】シウグン　ふないくさ。吳志、全琮傳「魏以二ー一ー二大出二洞口一」‖水師・舟師。

【舟戰】シウセン　ふないくさ。吳志、全琮傳「魏以二ー一ー二大出二洞口一」‖水師・舟師。

【舟子】シウシ　せんどう、かこ。詩、邶風「招招ー一、人涉卬否」‖舟人。

【舟師】シウシ　ふないくさ。左、襄二四「楚子爲二ー一以伐レ濮」‖舟軍・水軍。

【舟楫】シウシフ　○ふねと、かぢと。易、繫辭「ー一之利、以濟二不レ通」○轉じて天子の輔佐の臣に比す。書經「若濟二巨川一、用レ汝作二ー一一」とあるに本づく。汝は傅說。

【舟人】シウジン　せんどう。詩、小雅「ー一之子、熊羆是裘」

【舟車】シウシヤ　ふねと車と。中庸「ー一所レ至、人力所レ通」‖舟輿。

【舟戰】シウセン　ふないくさ。黑子「楚人與二越人一ー二ー于江一」‖水戰。

【舟中敵國】シウチウテキコク　味方の中にも敵ある義。史、吳起傳「君不レ能レ德、則舟中之人盡敵國」

【舟中之指可レ掬】シウチウノシクワクスベシ　敗兵舟を爭ひ攀づ、先づ乘れる者其の指をなで切りにす、故に指の舟中にあつる者爾手にてすくふべし、其だしき敗軍の形容。左、宣十二「晉中軍下軍爭レ舟、——」

【舟底】シウテイ　ふなぞこ。韓陵完記「佯落二ー一ー一」‖船底。

【舟筏】シウバツ　ふねと、いかだと。又、船。廣書、食貨志「私鑄犯レ法日蕃、有下以二ー一鑄二江中一者上」‖舟桅。

【舟楫】シウシフ　ふねと、くるまと。史、司馬相如傳「ー一不レ通、人迹罕レ至」‖舟車。

【舟梁】シウリヤウ　○ふなばし。詩經「造レ舟爲レ梁」○ふねと、はしと。莊、馬蹄「至德之世（中略）山無二蹊隧一、澤無二ー一一」（非望の利を求めず、故に一家に止りて足る說）

【舟艘】シウソウ　ふねのともの。又、ふね。魏書、崔楷傳「遞進遲速、惟用二ー一一」

【爭レ舟】サウフネヲ　互に舟に乘ることを爭ふ。舟中之指可レ掬を見よ。

【同レ舟濟レ江】ドウシウサイカウ　苦樂を共にする喩。孫子、九地「吳人與二越人一相惡、當二其同レ舟而濟一、遇レ風、其相救也、如二左右手一」

【藏二舟於壑一】フネヲガクニカクス　物を藏することの堅固なる喩。壑は大いなる溪谷。莊、大宗師「夫ー一、藏二山於澤一、謂二之固一矣、然而夜半有レ力者負レ之而走、昧者不レ知也」‖舟壑。

【撐レ舟】シヤウフネ　ふねをこぐ。莊、逍遙「浮二人一レ一若レ舟」

【舟師】シウシ　舟が漫瀾にすわる。元史、張洪範傳「水漫ー一、非二潮來一不レ可レ進」

【舟楫】シウシフ　舟がかやる。淮南子「ー一乃見二善游一、馬奔乃見二良御一」

【刻レ舟求レ劍】コクシウキウケン　舟中より劍を墜し、刀もて其の舷に刻みて、ここに劍が沈めりとて之を求め、舟の移れるを知らず。愚人が頑固にして舊を守りて時勢の移れるを知らざるに喩ふ。呂覽、察今「楚人有二涉レ江者一、其劍自二舟中一墜二於水一、遽刻二其舟一曰、是吾劍所二從墜一也、舟止從二其所一レ刻處一入レ水求レ之、舟已行矣、而劍不レ行、求レ劍若レ此、不二亦惑一乎」

【乘レ舟】フネニノル　ふねに乘る。史、越世家「ー一浮レ海以行、終不レ反」‖駕舟。

【舟非レ水不レ行】フネハミヅニアラザレバユカズ　舟は水なければ行かず。君は民なければ治らざるに喩ふ。孔子家語「ー一、水入レ舟則浚、君非レ民不レ治、民覆レ上則傾」

【舢】タ　二　聖

○こぶね、刀の形したる小舟「輕ー」「漁ー」文心雕龍「論」快則河不レ容」○三百斛積の舟。

【舠】小船の形が刀に似たるもの、古、刀に作る。【舠子】小舟なり。原仙記「特ニ小ー一渡レ之」

二畫

【舡】カウ　江

○ふね(船)○船の形容。○ー魚は章魚ヲの屬。‖虹魚。

四畫

【航】カウ　唐

○ふね(船)船の別名「輕ー」「津ー」「野ー」左思賦「汎舟ー於彭蠡」○もやひぶね(方舟)兩舟並び行くもの。張衡、思玄賦「ー海臨河而無ー」○ふなばし(浮橋)「浮ー」北史「宇朱雀ー」○わたる(渡)舟にて水を渡る「ー海」北史「一葦面可ー」杭に通ず。詩、衛風「一葦杭之」【航運】カウ　舟にて物を運ぶ。‖舟運・漕運。【航海】カウ　舟にてうみをわたる。顔延之文「枝レ山ー レ、蹈レ沙軼レ漠之耳、府無二虛月一」【航海梯山】カウカイテイサン　海をわたり、山に梯をかけてのぼる、遠き海山の險を越えて外國に使するにいふ。梁簡文帝、大法頌序「航レ海梯レ山、奉二白環之使一」‖梯航・棧山航海。【航海暦】カウカイレキ　天文の事を記したる航海用のこよみ。【航行】カウ　舟にて行く。【航程】カウテイ　舟にて行く道のり。【航路】カウロ　ふなぢ。‖水路・航線。【航路信號】カウロシンガウ　航行中の汽船が衝突をさける爲め互にしらせる合圖。【航路標識】カウロヒヤウシキ　航路の安全を圖るためのめじるし。燈臺・燈船・浮標など、讀正音はシ。

【舩】船(舟部五畫)に同じ。

【舫】ハウ　養　陽

㊀もやひぶね(方舟)兩舟を並べる「連ー」史、張儀傳「一ー載二五十人一」㊁ふね(舟)「輕ー」「泛ー」【舫舟】ハウシウ　ふねのやかた。晉書、戴若思傳「在二ー上一」【舫人】ハウジン　せんどう。正字通「ー猶レ言二舟子一」‖舟人。【舫船】センハウ　もやひぶね。史、張儀傳「ー數レ卒」【舫舸】ハウカ　ふね。白居易詩「一葉短ー、一張斑鹿皮」【舫樓】ハウロウ　ふねのやぐら。晉書、王濬傳「旦自二淨陽一迅風飛レ帆、暮至レ都、倚二ー一長嘯、神氣甚遠」

【般】㊀ハン　寒　㊁ハン　刪　㊂ハツ・ハチ　曷

㊀めぐる。めぐらす(旋)○物事を數ふるにいふ「千ー」「萬ー」「百ー」○うつす(移)はこぶ(運)俗に搬に作る。○たのしむ(樂)「ー樂」「ー遊」○ゆく(行)○まかす(任)○おほぶね(大船)○一桓は進まざる貌。‖盤桓。○一磚は兩足をなげ出して坐する。‖箕坐。㊁わかつ(分)○種類「多ー」「萬ー」杜牧詩「年來喪百ー」○たまふ(賜)○めぐる。めぐらす。かへる、かへす(還・反)「ー師」‖班。○かへりて、かへって(反)賈誼、弔屈原文「ー紛紛其離二此郷一兮」○しく(布)○まだら(斑)㊂㊃若ンは智慧の義。【般遊】ハンユウ　たのしみあそぶ。‖盤遊。【般桓】ハンクワン　進まざる貌。‖盤桓。【般般】ハンハン　はこびのせる。後漢書、裴延齡傳「自レ冬經レ夏、ー ー不レ了、百役供應須二悉停罷一」【般師】ハンシ　いくさをかへす。漢書「明主ー ー能レ兵」‖班師・還軍。【般倕】ハンスイ　古の巧匠の公輸般と工倕との二人。揚雄賦「ー ー棄二其剞劂一兮」【般遝】ハンタフ　めぐる。禮、投壺「主人ー ー曰レ辭」‖盤旋・般旋。【般若】ハンニヤ　○㊃梵語、ちゑの義。一解に妄想を脫離して淸淨に歸する。心經註「ー ー者梵語、此曰二智慧一」○㊃おそろしき面相の鬼女。【般若湯】ハンニヤタウ　僧家にて、酒の異名。東坡志林「僧謂レ酒爲二ー ー一」【般礴】ハンパク　兩足を箕の如くに張り出してすわる。莊、田子方「解レ衣ー ー」秦觀詩「孤老脈二斯文一解レ衣ー ー」‖箕坐。【般般】ハンハン　文采ある貌。史、司馬相如傳「ー ー之獸、樂二我君囿一」註「班二駁鹿一也」【般樂】ハンラク　あそびたのしむ。般は遊樂。孟、公孫丑「ー ー怠敖」

五畫

【舸】カ　紙

○ふね(舟)○おほぶね(大船)「走ー」「輕ー」「別ー」左思賦「弘ー連艫」【舸艦】カカン　大いなるいくさぶね。南史、王僧辯傳「賊退、乃更起二長堤一繞レ城、大列二ー ー一、攻二水城西南角一」‖巨艦。【舸船】カセン　ふね。杜甫詩「依レ沙宿二ー ー一、石瀨月娟娟」

【舷】 ゲン 先

ふなばた、ふなべり、船の兩邊「船ー」

【叩レ舷】ケンタク ふなばたをたたく。郭璞、江賦「詠二採菱一以ーレー」【扣レ舷】ケンタク 前條に同じ。宋史、陸逸傳「ーレー飲レ酒、酣歌自得」【舷舷相摩】ゲンゲンソウマ 國ふなべりと、ふなべりとすれあふ、船にて接戰するにいふ。【舷窗】ゲンサウ ふなばたのまど。‖船窗。【舷側】ゲンソク ふなべり、船の側面。【舷梯】ゲンテイ ふなばた。‖舷頭。【舷邊】ゲンヘン ふなばたにとほりあかり。【舷頭】ゲントウ ふなばた。

【舸】 コウ 尤

おほぶね。【舸艦】コウカン ひらたくして大いなるふね。北堂書鈔「淳熙城西有二一ー一湖、御呂蒙作二一ー一大艦一艘」

【舴】 サク タク 陌

こぶね（小舟）【舴艋】サクマウ こぶね。小舸を舴艋といふに本づく。張志和詩「兩兩三三ー舟」‖小舟。

【船】 セン 先 又、舩に作る

ふね、支那の關東にては舟、關西にては一といふ「樓ー」「賈ー」「戰ー」「酒ー」「客ー」「釣ー」【船員】センイン 船長をはじめ、すべての船乘組員。【船運】センウン ふねが移る。論衡「座二于船中一而不レ知二船之自運一」【船艙】センサウ ふなぐら。‖船艙に同じ。【船隻】センセキ 船數に同じ。【船艘】センソウ 船のなまへ。‖船名。【船舷】センゲン いくさぶね。吳志、周瑜傳「方張二一一、皆尾相接」晉史、王濬傳「ーー數百、兵士皆乘レ船上レ岸」【船旅】センリョ ふねに乘てるはた。【船隊】センタイ 船と千里の馬と。王佐のオに喩ふ。呂覽「絕レ江者託二於船一、致レ遠者託二於驥一、箭至者託二於矢一、伊尹・呂尚・管夷吾・百里奚、此箭至之ーー也」說苑には驥を楫に作る。【船艙】センサウ ○船の下部。○國ふなあし、船の速力。【船梁】センリョウ 國どっく。船を造り又は修繕する處。‖國船臺。【船軍】セングン ふないくさ。越絕書「國閒見二子胥一、問二一ー之備一」‖舟軍・水師。【船艙】センサウ ○ふなばし。遼史、聖宗紀「命造二一ー一」○上甲板の前面に一段高くしたる處。【船舷】センゲン ふなばた。皮日休詩「擇地二一ー一無二一事一」杜甫詩「ーー不二重扣一」【船戶】センコ ○ふな問屋。賈島詩「賣中無二資貨一、ーー夜扃稀」○せんどう（元史、食貨志）‖船手・舟人。【船工】センコウ ふなだいく（魏志、許褚傳）‖船匠。【船載】センサイ ふねにのせる。晉書、陶璜傳「夜以二數百兵一、攻二蠭元一、獲二其寶物一二一兩艘」‖船載。【船倉】センサウ ふなぐら。楊萬里詩「ーー周圍各五尺、且道此中底寬窄」【船艙】センサウ ふねのかさ。晉書、載記「陸機避レ路、ーー其露」【船艙】センサウ 船の下部の荷物を入れる所。【船人】センジン ふなびと。呂覽「ーー怒」‖舟人。【船車】センシャ ふねと、くるまと。後漢書、仲長統傳「ーー實欵、周二於四方一」【船匠】センショウ 船工に同じ。【船將】センショウ ○いくさぶねの大將。○普通の商船などのかしら。‖船長。【船檣】センショウ 船のほばしら。唐書、食貨志「滑路多梗、ーー阻隘」【船子】センシ せんどう、かこ。‖舟子・船夫。【船主】センシュ 船舶の持主。【船首】センシュ 船のかしら、船のへさき。‖船頭。【船乘】センジョウ 船舶に同じ。說苑、伊尹・呂尚・管夷吾・百里奚、是嘗王之ーー也」【船稅】センゼイ 船舶に課する稅金。【船鈔】センセウ 稅關に課する船の稅。【船籍】センセキ 船舶を登錄したる原簿。【船戰】センセン 船いくさ。淮南「越欲二與レ漢用レ一、遂仍修二昆明池一、以ーー」【船體】センタイ ふねのからだ。【船道】センダウ ふなみち。後漢書、西域傳「開二滑一ーー」‖船路。【船長】センチョウ 船のかしら。謝宣城詩「楫人理二行艘一」李善注「楫人、ーー也」‖船將・楫人。【船場】センヂャウ 船を繫ぐ所。白樂天詩「昆山門外ーー」【船中】センチウ ふねのなか。世說「於二一一親レ之」‖舟中。【船僮】センドウ 船中に使はれる少年、ボーイ。【船塢】センオ ふねのあかり。句容陳詩「ーー與レ島開」【船頭】センタウ ○ふねのへさき。杜甫詩「風急打二一ー一」○同澤船の監督者。唐書、劉晏傳「州縣取二富人一督二漕輓一、謂二之一ーー一」○ふなのり。‖舟子。【船舫】センハウ ふね。宋書、五行志「漂二一ー一」【艘舶】ソウハク ふね、船は大船。【艘舫】ソウハウ ふねと、いかだと。宋史、河

梁志「上下設レ牐啓閉、以通二黃汴二河一一」

【船尾】セン　船のとも。杜甫詩「一一跳二魚撥刺鳴一」

【船脚】セン　船の前のとびら。李洞詩「每レ話二南遊一偏起レ念、玉峯波上入二一一」

【船埠】フ　わたしば（渡船場）はとば。明律「凡城市鄉村鎭色牙行、及一一頭、並選下有二抵業一人口上充」‖船歩・埠頭。

【船腹】フク　船の腹部〔宋書、沈攸之傳〕

【船歩】セン　○水軍と歩兵と。吳志、周瑜傳「劉表降得二其一一兵數十萬一」○わたしば。青箱雜錄「嶺南謂二水津一爲レ步、故一一即渡船處」‖船埠。

【船篷】セン　ふねのとま。黃庭堅詩「風雨打二一一一」○舟。陳造詩「一葉風月放二一一一」

【船路】セン　ふなぢ。北史、蔡容儁傳「于二上流鶏鳴洲一造二疑渠一、覓二數里一以塞二一一一」‖船道・航路。

【船樓】セン　ふねのやぐら。吳主、劉繇傳「宴二飲於一一上一」

【攲レ船】ヲス　船の用意をして岸に向け出帆を待つ、儀一に艤に作る。史、項羽紀「烏江亭長一レ一待」

【好レ船者溺好レ騎者墮】フネヲコノムモノハオボレウマヲコノムモノハオツ　船を好む者は水に溺れ、騎を好む者は馬より墮つ。人は其の好む所に就きて警戒すべきをいふ。戰國策「夫一一、君子各以レ所レ好爲レ禍」

【刺レ船】センヲサス　船にさをさす。漢書、陳平傳「平心恐乃解レ衣贓、而佐一一レ」

【沈レ船破レ釜】フネヲシヅメカマヲワル　死を決して戰ふにいふ。史、項羽紀「沈レ船破レ釜、燒二廬舍一、持二三日糧一、以示二士卒必死無二一還心一」

【停レ船】フネヲトム　舟をとめる。晉書、蔡謨傳「夫以二白起・韓信・項籍之勇一、猶發レ梁焚レ舟背レ水而陣、今欲レ一一水濟、此兵法之所レ誡也」

【發レ船】フネヲダス　船出する。漢書、郊祀志「迺益一一レ」‖開帆。

【以レ船爲レ家】フネヲモッテイエトナス　船を家とする。漢書、五行志「吳地一一、以レ魚爲レ食」

【舵】

舵（木部五畫）に同じ。

【舶】

柁（木部五畫）に同じ。

【舳】

㊀チク　㊁イウ・チウ　宥　屋　通音ヂク

㊀とも（舟尾）舟の後部。○かぢ（柁）㊁へさき、みよし（舟首）舟の前部。

【舳艫】ヂクロ　ともと、みよしと。漢書、武帝紀「一一千里」注「舳、船後持レ柁處、艫、船前頭刻レ楫處」（千里は船の多く連るをいふ）

【船】

ハク　陌

おほぶね、海中の大船「海一」「蒼一」「蠻一」「大一」「商一」「賈一」

【船買】ハクバイ　外國より航し來れるあきうど。唐書、淮陽王傳「敬宗修二宮室一、一一厭二沈香亭材一」

【船載】ハクサイ　大船にのせる。杜荀鶴、贈二友人赴二交阯辟命一詩「一一海奴環レ鉸レ耳、象馳蠻女綵纏レ身」

【船舶】センおほぶね。宋史、食貨志「一一輻輳、請レ復置二監官一」

【船來】ハクライ　圓外國より船に積みて來る。又、其の品。‖舶載。

【舲】

レイ　青

○やかたぶね。‖艫。○こぶね（小船）の窗牖のあるもの。「漁一」「孤一」淮南、俶眞訓「越一蜀艇不レ能二無水而浮一」

【舲船】レイセン　やかたぶね。楚辭、九章「乘二一一一余上レ沅兮」

六畫

【舷】

キヤウ　コウ　先　多　東

○こぶね（小船）○ふね（舟）

【舫】

ハウ　陽　通音ヘウ

舟一レ艦はこぶね（小舟）舟（舟部五畫）を見よ。

【艇】

テイ　迥

こぶね、狹く長き小舟「小一」「釣一」「水雷一」「酒航一」

【艇子】テイシ　せんどう。古樂府「一一打二兩槳一催二逐莫愁一來」

【艀】

フウ　尤　通音フ

○はしけぶね。○ふね（舟）たけ短く底の深き小舟。

【艘】

ソウ　豪

艘一レ艦はふね。抱朴子、博喩「一一鎖首、渉二川之良器一也」‖艦皇（左傳）

八畫

【艙】

サウ　陽　通音ソウ

艙一レ艦はこぶね（小舟）艙（舟部五畫）を見よ。

【艦】

カン　豏

○わたしぶね（渡船）○おほぶね（大船）艦（舟部七畫）を見よ。

九畫

【艘】ソウ　こぶね（小舟）「輕ー」

【艦】ヘン　琰　○ひらたきふね、あさきふね「ー艦」唐書、劉崇龜傳「乘ー亡去」○おほぶね（大船）

十畫

【艇】テイ　迥　こぶね（小舟）

【艙】サウ　號　船の胴の間。貨物を積む所「船ー」

【艘】ソウ　サウ・ソウ　シウ　豪　篠　皓　遇　有　○ふね、船舶の總稱「巨ー」「客ー」「戰ー」○船を數へるにいふ。漢書、溝洫志「漕船五百ー」

十一畫

【艟】トウ　シュウ　冬　東　衝ー（ショウトウ）はいくさぶね（戰船）狹くして長く、敵の船を衝突すべきもの。＝軍艦・蒙衝。

【艤】ギ　紙　舟を整へて岸に向ふ、ふなよそほひ。＝檥。

【艤裝】ギサウ　ふなよそほひする。

【艤舟】ギシウ　ふなよそほひ。

【艤舟亭】ギシウテイ　今の江蘇武進縣の東南。

十二畫

【艦】カン　豏　いくさぶね。四方に板を施して敵の矢石を禦ぐやうに作りし船「兵ー」「軍ー」「戰ー」「巨ー」「一隊」「巡洋ー」

【艦橋】カンケウ　軍艦内にて將校が指揮號令する時に上る一段高き所。

【艦上】カンジヤウ　軍艦の上。

【艫】ロ　虞　舟を行るの具「柔ー」「急ー」

十三畫

【艤】ギ　紙　舟を整へて岸に向ふ、ふなよそほひ。＝檥。

【艤裝】ギサウ　ふなよそほひする。

【艤舟】ギシウ　ふなよそほひ。

【艤舟亭】ギシウテイ　今の江蘇武進縣の東南。

【艦】カン　豏　いくさぶね。四方に板を施して敵の矢石を禦ぐやうに作りし船「兵ー」「軍ー」「戰ー」「巨ー」「一隊」「巡洋ー」

【艦橋】カンケウ　軍艦内にて將校が指揮號令する時に上る一段高き所。

【艦上】カンジヤウ　軍艦の上。

【艫】ロ　虞　舟を行るの具「柔ー」「急ー」

十四畫

【艦】カン　豏　いくさぶね。四方に板を施して敵の矢石を禦ぐやうに作りし船「兵ー」「軍ー」「戰ー」「巨ー」「一隊」「巡洋ー」

【艦橋】カンケウ　軍艦内にて將校が指揮號令する時に上る一段高き所。

【艦上】カンジヤウ　軍艦の上。

【艫】ロ　虞　檣（木部十五畫）に同じ。

十五畫

【艦】カン　豏　いくさぶね。四方に板を施して敵の矢石を禦ぐやうに作りし船「兵ー」「軍ー」「戰ー」「巨ー」「一隊」「巡洋ー」

【艦橋】カンケウ　軍艦内にて將校が指揮號令する時に上る一段高き所。

【艦上】カンジヤウ　軍艦の上。

【艦】カン　豏　檣（木部十五畫）に同じ。

【艨】モウ　董　東　一雙ー（シヤウモウ）はいくさぶね。狹長にして敵の船を衝突するもの。南史、蔡道恭傳「作ー數艦」＝蒙衝・戰艦。

十六畫

【艦】カン　豏　檣（木部十五畫）に同じ。

【艫】ロ　虞　檣（木部十五畫）に同じ。

艮部

【艮】コン　阮　○とどまる（止）○かぎる（限）○もとる（很）○かたし（難）かたし（堅）○うしとら、東北の方角。○午前二時より四時までの時刻。○易の卦の名。ー下ー上。

【艮嶽】コンガク　河南省開封縣城の東北隅に在る山の名。艮嶽記「徽宗登極之初、皇嗣未ㇾ廣、有二方士一言京城東北隅、地協二堪輿一、逢命土培二其隅一、以應二方位一、號曰二艮嶽一」艮は東北。

一畫

【良】リヤウ　ラウ　陽　一音ヲ　○よし（善）惡の對「ー媒」「ー士」「ー馬」「ー妻」○うつくし（美）○かしこし（賢）書、益稷「股肱ー哉」○すなほ、おとなし、おだやか（易直）「温ー」○ともに（船尾）船の後部。○へさき、みよし（船頭）船の前部。舳（舟部五畫）を見よ。

よきものの泛稱。○たくみに出來たる器(精作)器物が美くしく立派なり。禮、月令「陶器必ー」○ふかし(深)後漢書、祭遵傳「ー夜乃罷」○甚だし。○めでたし(吉)○やや、頗る、しばらくして。列、仲尼「ー久告退」○まことに(信・誠)李白、宴桃李園序「ー有以也」(以は故)○よく(能)左、昭十八「弗ー及也」○ただし(正)○賢者、君子、善人「賢ー」「三ー」○駿馬。○かしら(首長)○一人はをっと(夫)又妻をいふ。

同訓異字　良・信・誠・實・充・諒・荀・洵の別は信(一三七頁三段)の條を見よ。

○良・善・好・佳・嘉・都・美・臧・吉の別は善(三四二頁四段)の條を見よ。

【良醫】リャウイ　よきいしゃ。荀子「ー之門、多二病人一」論衡「醫能治二百病一、謂二之良一」

【良友】リャウイウ　よきともだち。晉書、周顗傳「幽冥之中、負二此ー一」‖善友・益友。

【良媛】リャウエン　よきたすけ。孫郁、牡丹詩「綢繆得二一ー一、亭亭是四隣」

【良緣】リャウエン　○よきゆかり。李商隱詩「新知遣二溝俗一、舊好隔二一ー一」○よきえんぐみ。

【良家】リャウカ　よき家がら。史、外戚世家「昌太后時、實姬以二一ー子一入レ宮侍二太后一」

【良好】リャウカウ　よし。‖善良。

【良效】リャウカウ　よきしるし。神仙感遇傳「湲井及レ泉、必有二一ー一矣」

【良貴】リャウキ　爵位の如き人爲の者にあらずして、自然に貴きもの。孟、告子「人之所レ貴者、非二一ー一也、趙孟之所レ貴、趙孟能賤レ之」

【良騎】リャウキ　すぐれてよき騎馬。又、其の兵。漢書、晁錯傳「益以二邊郡之一ー一」

【良驥】リャウキ　すぐれたる千里の馬。吳質、答二東阿王一書「紲二一ー之足一、而責以二千里之任一」‖良駿。

【良久】リャウキウ　ややしばらくの間。晉書、陸曄傳「吾嗟ー一」‖頗久。

【良裘】リャウキウ　よきかはごろも。周禮、天官、司裘「中秋獻二一ー一」

【良能】リャウノウ　善良にしてつつしむ。左傳、疏「爲善志性ー一、交遊欵密也」

【良禽擇レ木】リャウキンエラブコト　よき鳥はよき木をえらぶに喩ふ。人の其の仕ふべき主をえらぶに喩ふ。左、哀十一「孔文子之將レ攻二大叔一也、訪二於仲尼一、仲尼曰、胡簋之事則嘗學レ之矣、甲兵之事未二之聞一也、退命レ駕而行、曰、鳥則擇レ木、木豈能擇レ鳥」蜀志「良禽相レ木而棲」

【良金美玉】リャウキンビギョク　よき金と、うるはしき玉と。文章のすぐれたるに喩ふ。弘弼文「李嶠文如二一ー一、無二施不レ可」‖良玉精金・良玉美金。

【良弓】リャウキウ　○よきゆみ。墨子「ー一難レ張、然可二以及レ高入レ深」○よき弓師。禮、學記「ー一之子、必學レ爲レ裘」

【良玉】リャウギョク　よきたま。法言、寡見「ー不レ彫、美質不レ文、何謂也」

【良玉美金】リャウギョクビキン　すぐれて美なる文章に比していふ。唐書、文藝傳‖良金美玉。

【良佝】リャウク　よきいぬ。諫臣に比す。史、淮陰侯傳「狡兎死、ー一烹」

【良苦】リャウコ　甚だしくくるしむ。後漢書、王常傳「光武見レ常歡勞レ之曰、王延期ー一、每念往時共更二艱厄一、何日忘レ之」

【良君】リャウクン　よききみ。左傳「ー一將二賞レ淫而刑レ泆」‖明君。

【良賈】リャウコ　よきたから。管子「雖レ有二ー一、不レ能レ守也」

【良計】リャウケイ　よきはかりごと。魏志、曹仁傳「頓二兵堅城之下一、以攻二必死之賊一、非二ー一也」‖良策・善計。

【良月】リャウゲツ　陰暦十月の異名。十は盈數、故にいふ。左、莊十六「使下以二十月一入上、曰、ー一也、就二盈數一焉」

【良晤】リャウゴ　良き會面。于立詩「時清則擇レ木、木豈能擇レ鳥」蜀志「良禽相レ木而棲」

【良工】リャウコウ　よきたくみ。孟、滕文公「天下之ー一也」‖良匠。

【良工苦心】リャウコウクシン　技工に長ずる者の苦心多きをいふ。開元新話「老杜曰、更覺良工心獨苦、不二獨謂レ畫也」

【良國】リャウコク　善きくに。國語「夫吳、ー一也」‖善國。

【良賈深藏若レ虛】リャウコシンザウジャクキョ　よき商人は店頭に物をつらねず。賢者は其の能を隱して街ヲはざるに喩ふ。史、老子傳「老子曰、吾聞レ之、ー一、君子盛德、容貌若レ愚」

【良才】リャウサイ　よきはたらき。又、其のはたらきある人。晉植詩「大國多二ー一、嗟三海出二明珠一」‖良材。

【良妻】リャウサイ　よきつま。史、魏世家「家貧則思二ー一、國亂則思二良相一」

【良劑】リャウザイ　よくすり。‖良藥。

【良佐】リャウサ　○王良・造父の略稱、二人は共に古の名高き御者。元稹詩「四十八驅還二舊媒、時貢二天庭一付二ー一」○秦の官名、太少の二に分つ。

【良策】リャウサク　よきはかりごと。‖良計・良謀・良算・良圖。

【良算】リャウサン　よきはかりごと。晉書、邊憲傳「更思二ー一」‖良策・良圖・善策。

【良士】リャウシ　よきさむらひ。詩、唐風「好樂無レ荒、ー一瞿瞿」(瞿瞿は儉ヤカなる貌)‖美士。

【良子】リャウシ　善き子。國語「若三紂有二ー一」‖善子。

【良死】リャウシ　善命を全うして死する。通鑑、梁武紀「杜崇理殺レ人、天道有

レ懲、不レ得二一一一

傳」韓白は韓信と白起と。
【良兵】リャウヘイ よき兵卒。よき武器。周禮「二—良器、以待二邦之大用一」
【良苗】リャウミャウ よきなへ。陶潛詩「二—亦懷レ新」＝嘉苗。
【良謀】リャウボウ よきはかりごと。盧諶文「二—莫レ陳」＝良謀。
【良民】リャウミン よき人民、よく國法にしたがひて家業をはげむ人民「漢書、循吏傳」
【良冶】リャウヤ よきかぢ。禮學記「二—之子、必學レ爲レ裘、良弓之子必學レ爲レ箕」
【良夜】リャウヤ ○よふけ、良は深。後漢書、蔡邕傳「帝幸二進賢門一、召二邕及尚書一、—乃罷」○よき夜。蘇軾、後赤壁賦「月白風清、如二此—一何」＝佳宵。
【良吏】リャウリ よき官吏。漢書、嚴延年傳「雖レ有二材力一、不レ得二—一稱レ之レ功也」＝善吏・循吏・能吏。

十一畫

【艱】カン 副 艱は古文

○かたし、むづかし（難）易の反對。○なやみ、くるしみ（辛苦）くるしむ、なやむ「辛—」○けはし（險）易、泰卦「—貞吉」○かたんず、かたしとす。○も（忌中）「丁—」「遭—」王倫文「又以二居母一去レ官」

同訓異語 艱・憫・憐・難・阻・危・苦・憂の別は憫（六八四頁二段）の條を見よ。

【艱易】イン かたきと、やすきと。法言「破二問二經之一—一、自レ存亡、或人不レ論、曰、其人存則易、亡則艱」＝難易。
【艱急】キフ なんぎ。國語「以二盟誓一固二國之一—一」
【艱窘】カンキン なやみくるしむ。張耒、無悶詩「孔明用レ蜀最—一、百計攝拾無二遺策一」
【艱苦】クン なんぎ、くるしみ。＝艱辛。
【艱虞】グ なやみと、しんぱいと。陣與義詩「欲レ見二舊交一驚二歲月一、剩排二論語一說二—一」＝艱難憂虞。
【艱禍】クワン 困難と災害と。劉琨文「元凱以來、—累興」
【艱險】カンケン ○けはしき所。險阻・險艱。○なやみ、くるしみ。魏徵詩「豈不レ悼二—一、深愚二國士恩一」
【艱困】カンコン なやみ苦しむ。後漢書、杜林傳「雖レ遭二—一、握持不レ離レ身」
【艱疾】カンシツ 治し難きやまひ。書言故事「王羲之帖曰、蔡公遊委頓深可レ憂、當今人物眇然而—一若レ此、令二人短氣一」
【艱澁】カンジフ ○文詩の解し難きにいふ。○なんぎくるしみ。＝難澁・困難。
【艱辛】カンシン なやみ、くるしみ。李白詩「英豪未二豹變一、自レ古多二—一」＝艱苦・艱難辛苦。
【艱深】カンシン 文詩の解し難くして意味深きにいふ。蘇軾詩「—文二淺陋一」
【艱阻】カンソ なやむ。梁武帝文「人事—、亦何可レ言」
【艱食】カンショク 五穀を食ふ、人力を勞して作りし物なるが故に艱といふ。王安石詩「未二敢曉一—一、凶年爭二九州一」
【艱貞】カンテイ 艱難に耐へ堅く節を守りて固せず。易、明夷「利二—一」
【艱澀】カンジフ くるしみ。潘岳文「備嘗二—一、同嘗二蔓菜一」＝艱苦。
【艱難】カンナン なやみくるしむ。詩、小雅「天步—」
【艱厄】カンヤク なやみくるしむ。なやみ、くるしみ。後漢書、王常傳「往時共更二—一」
【艱哉】カンサイ 事を爲すに易からざるを歎く辭。書、泰誓「惟—」

色部

【色】シキ 副

○いろ、五—は青・黄・赤・白・黒「采—」○いろどり。いろどる「彩—」○かほいろ「顏—」論、季氏「—思溫」○きざし、やうす、ようだい、おもむき。景象。莊子「車馬有レ行—」○おだやか（溫潤）なるやうすをする。詩、魯頌「載—載笑」○男女間の慾情「女—」「—情」論、季氏「少之時、血氣未レ定、戒之在レ—」○けしき「景—」○つや（光澤）○けしきだつ、顏色をかへて怒る。左、昭十九「室於怒、市於レ—」○くさ（種）物の種類、俗に一種といふ。梅堯臣詩「其贈幾何多、六—十五餅」○—然は驚く貌。○物—は形貌をいふ。きて求める。
【色衆】シキシュ 女色と音樂と。李斯、諫二逐客一上書「是所レ重者在二乎—一—珠玉一而所レ輕者在二乎民人一也」
【色愛】シキアイ 女色に耽ふ。女色に荒淫する。書、五子之歌「內作二—一、外作二禽荒一」
【色藝】シキゲイ 妓色と技藝と。妓料錄、妓妾之以二—一取レ憐、姤二龍子主家一者、亦曰、我之富與レ貴、有レ以感二動其中一耳」
【色狀】シキジャウ さいしきの法。酉陽雜俎「周長史善レ畫、得二—一」＝設色

法。

【色莊】ショクソウ 外貌のみおごそかにまじめなるをいふ。論、先進「論篤是與、君子者乎、―者乎」‖色厲。

【色色】シキシキ いろいろ。唐書、選擧志「敦厚浮薄、―有之」‖種種。

【色然】ショクゼン 驚きて顏色を變ずる貌。公羊、宣六「―而駭」

【色澤】ショクタク いろつや。淮南子「鍾山之玉、炊以二燧火一、三日三夜、而―不レ變」‖光澤。

【色長】ショクチョウ 樂工の長（宋史）‖色頭。

【色聽】ショクチョウ 罪人の顏色をみて曲直を判斷する。周禮、小司寇「以二五聲一、聽二獄訟一、求二民情一、一曰辭聽、二曰―、三曰氣聽、四曰耳聽、五曰目聽」

【色貌】シキボウ かほいろと、かたちと。三水小牘「一九霞之衣、―甚嫵」

【色目】シキモク 元代、欽察・唐古・回回等の諸人種を呼びていふ。

【色養】シキヨウ 親の顏色を見て其の欲する所を察して孝養する。一說に愉悅の顏色を以て父母を孝養する。言語、潘岳傳「倘何能遠膝下―、而屑屑從二斗筲之役一乎」

【色厲】シキレイ 顏色はげしく威嚴あり。論、陽貨「―而內荏、譬二諸小人一、其猶二穿窬之盜一也與」（內荏は內心は柔弱）

【色界】シキカイ 佛欲天の上にある世界、貪慾は薄きも尙ほ色（物質）に染著する境界。

【色彩】ショクサイ ○いろ、つや。○いろどり、彩色。

【色相】シキソウ 肉眼にて見得る形相。楞嚴經「離二諸―一、無二分別性一」

【色紙】シキシ 圖歌・俳諧等をかく四角の料紙。

【色身】シキシン 佛色相ある身體、卽ち肉體。

【色情】シキジョウ 男女間の慾情。‖性慾・色慾。

【色素】シキソ 生物の皮下に在りて生物に特有の色を與へる小球體。

【色卽是空】シキソクゼクウ 佛物質其のまま空無なりとの意。般若心經「色不レ異レ空、空不レ異レ色、――、空卽是色」

【色盲】シキモウ 色を見わけることのできざる疾。視覺中の色彩感覺を失ひて、白・黑を除く外の色を辨ずる能はざる病。

【色慾】シキヨク 男女間の慾情。‖色情。

【色料】シキリョウ ○えのぐ。‖顏料。○染料。

【色動】シキドウ 驚き又怒りて顏色が變ずる。

【動色】ドウショク 顏色をかへる。後漢書、班固傳「君臣―レ、左右相趨、濟濟翼翼載載如也」

【漁色】ギョショク 女色をむさぼる。漁色（一一三八頁一段）を見よ。

【察色】サッショク 顏色をよくみる。韓非子「先レ意承レ旨、觀レ貌―レ」

【色授愛施】シキジュアイシ 容色が衰へて寵愛が薄くなる。韓非、說難「彌子――、得二罪於君一」

【作レ色】サクショク 怒りて顏色をかへる。史、蘇秦傳「韓王勃然―レ」

【望レ色】ボウショク かほいろを見る。史、扁鵲傳「不レ待二切脈一、―レ聽レ聲」

【以レ色交】イロヲモッテマジワル 美貌を以て交る。戰國策「――者、華落而愛滅、以レ財交者、財盡而交絕」

【怡レ色】イロヲヨロコバス 顏色をやはらげる。禮、內則「下レ氣―レ、柔レ聲以諫」

【色難】シキナン 子が顏色を和げて親に事ふるの難き義（論、爲政）（一說に親の顏色を察して之に順ふことはむづかし）

【色若二死灰一】シキシカイノゴトシ 生きたる色なきに喩ふ。莊子「日茫然無レ見、――」

五畫

【艴】ボツ フツ 物月

○氣色を盛んにす。呂覽「―然充盈、手足矜者兵革之色也」‖勃如。○顏色いかる。

【艴然】ボツゼン ○怒れる顏色の貌、むっとする。孟、公孫丑「曾西―不レ悅」○ボツゼン氣色を盛んにする貌。字解を見よ。‖勃如。

十三畫

【艷】エン 艷（次條）の俗字。

十八畫

【艷】エン 艷 又、豔に作る

○なまめかし、あでやか、はなやかに美くし、肥えてうつくし。○いろめく、媚をふくむ。○つや、いろつや（光彩）○うらやむ（歆羨）「歆―」○圖男女間の情事「―聞」「―書」

【艷艷】エンエン つややかなる貌。韓愈詩「蔽虧聽二新詩一、扈角月――」‖艷艷。

【艷歌】エンカ あでめきたるうた。梁武帝詩「朱口發二―一」

【艷妓】エンギ なまめきて美くしきうたひめ。白居易詩「花低蔓二―一」

【艷香】エンコウ うつくしき花のあんず。陳造、出郭詩「夭桃―雖二已過一、郁李金猶未レ謝」

【艷花】エンカ あでやかなるはな。杜荀鶴詩「―雖レ少不レ勞レ裁」

【艷語】エンゴ なまめかしきことば。盧思道詩「深情出二―一、密意滿二橫眸一」

【艷粧】エンソウ なまめかしく美くしきよそほひ。陳陶詩「春臺―蓬一枝」

【艷姿】エンシ つやつやしく美くしきすがた。吳志、華覈傳「―者、不レ待二文綉一以致レ愛」

【艷質】エンシツ　うらやみほめる。
【艷羨】エンセン　圖いろぶみ。懸想文ケサウ
【艷色】エンシキ　つややかに美くしきかほいろ。陶潛文「表二頑城之一一、朝二有艷士傳聞一」
【艷冶】エンヤ　うらやむ。
【艷艷】エンエン　うつくしき花。趙嘏詩「錯落傾二香艷一、玻瓈插二一一一」
【艷美】エンビ　つやつやしくうつくし。金史、張仲軻傳「宋有二劉貴妃者一、姿質一一」
【艷艷】エンエン　圖女に愛せられるしあはせ。
【艷羽】エンウ　つやのあるおしろいの顔料。詩「小彩鏡二雰艷一、一一挿二翡紅一」張正見詩「一一驚二飛蝶一、紅粧映二落花一」
【艷閻】エンエン　圖なまめきたるうはさ。
【艷泊】エンセン　なまめかし。與謝吾詩「少婦多二一一一、花鈿壓二石榴一」
【艷陽】エンヤウ　はなやかなる春の末。張九齢詩「還遇二一一時一」
【艷當】エンウ　うつくしきつぼみ。翁卷詩「擅看一一破二春晴一、又見飛花點點輕」
【艷波】エンハ　はなやかにして美くし。南史、弦貴嬪傳「共賦二新詩一、互相贈答、采二其尤一一者一、以爲二曲調一、被以二新聲一」

艸部（十）

【艸】サウ　隨　字畫の冠になる時は艹に作る
○くさ、草の古字。○圖くさかんむり、艹に作る。＝草冠サウカン

【艹】艸（前條）に同じ。

二畫

【艾】㊀ガイ　㊁ゲイ　泰　通音ガイ
㊀よもぎ（醫草）山野に自生する一種の草、葉は菊に似て五つに裂け、裏は白くして毛を生ず。○もぐさ、よもぎの葉を乾かして纖維を採りて製す、灸治に用ひ、又印肉を製するに用ふ「灼一」「陳一」○としより（老人）「耆一」「老一」（其の頭髪がよもぎの如く蒼白なる故）證、曲禮「五十曰一、服官政」○うつくし（美好）「幼一」孟、萬章「知好色、則慕少一」○うつくしき女。○やむ（止）○つく。つくす（盡）左、哀二「憂未一一也」○やしなふ（養）詩、小雅「保一爾後」○むくゆ（報）周語「樹子有禮一、人必豐」○あをじろ、よもぎいろ。
㊁かる、刈り入れる。穀梁、莊、二八「一年不一一而百姓飢」くさぎる（芟・種）刈り除く。○をさまる（治）「一安」又に通ず。
【艾安】ガイアン　をさまりてやすし。漢書、郊祀志「天下一一」＝又安・治安。
【灼レ艾分レ痛】シャクガイブンツウ　人の灸をするを見て、己も亦もぐさをやきて苦を分つ。宋史、太祖紀「帝性孝友、太宗嘗病重、帝往視レ之、親爲灼レ艾、太宗覺レ痛、帝亦取レ艾自灸」
【艾艾】ガイガイ　口の吃もなるをいふ。魏の將鄧艾の故事。朝期艾艾（九九八頁四段）參看。
【艾虎】ガイコ　をさめやすんず。歐陽修文「經二紀賊績一、一一萬里」＝艾安。
【艾蒿】ガウ　よもぎ。爾雅、疏「艾、一名冰臺、卽今一一也」＝蓬蒿。
【艾餻】ガウ　よもぎもち。遼史、禮志「五月重五日（中略）進二一一」
【艾虎】ガコ　五月五日の節句に、よもぎを以て虎の形を作り、頭に戴く、荊楚の風俗。淸嘯類書「五月五日、採レ艾爲レ人、懸二門戸上一、又以レ艾爲二虎形一、或翦綵爲二小虎一、帖以二艾葉一、內人爭相二戴之一」
【艾綬】ガジュ　みどりの印のひも。漢官儀「二千石以上、銀印綠綬、亦曰二一一」
【艾蕭】ガセウ　よもぎの一種。つまらぬもの に喩ふ。劉基詩「江蘺澤蘭成二一一」＝艾蒿。
【艾節】ガセツ　陰曆五月五日の節句。＝蒲午節。
【艾帳】ガチャウ　雉などを射る時、獵者が身を隱すかこひ。杜甫詩「春場歸二一一」＝雉驕。
【艾年】ガネン　五十歲、髮が蒼白色にして艾の如し、故にいふ。曲禮「五十曰レ艾、服二官政一」
【艾服】ガフク　五十歲。曲禮「五十曰レ艾、服二官政一」に出づ、王褒文「年踰二一一」
【艾餅】ガヘイ　よもぎもち。宋史、高宗傳「上巳月以二香艾一染レ餅、賜二從臣一」＝艾餻。
【艾老】ガラウ　五十歲以上の老人。穀梁論「五十以上曰二一一」

【芫】キウ　尤
○しとね（獸皐）○へんぴ、くにのはて（遠荒）遠く離れたるみなか。
【芫野】キウヤ　あれはてたるみなか。詩、小雅「我征徂レ西、至于二一一」＝遠荒。

【芳】ジュウ　蕭
ふるね（陳根）より再び生じたる草。唐書、裴延齡傳「得二陂一數百頃」

芋 ㊀ウ ㊁ク 虞 遇

㊀いも、さといも（蹲鴟）「綠ー」「紫ー」「野ー」「水ー」㊁大いなり。詩、小雅「君子攸飲ー」【芋栗】かしらいも（後漢書、馬融傳）＝芋魁・芋頭。【芋魁】いものおや、かしらいも。漢書、晁方進傳「衆ニー一」＝芋渠。【芋菽】いもと、まめと。史、項羽紀「歲飢民貧、士卒食ニー一、軍無二見糧一」【芋頭】かしらいも（本草集解）＝芋魁。【芋栗】さといもと、くりと。杜甫詩「園收ニー一ニ未二全貧一」

拗 キ 未

○おこる（勃）さかんなり。○ー欹は林の木のふるひうごく（鼓動）ころ。【勃然】おこる貌。司馬相如、上林賦「ー一興レ道而遷レ義、刑措而不レ用」＝勃然。

芑 キ 紙

○もちあは、粟よりも粘り氣多し。詩、大雅「維糜維ー一」＝白粱粟。○ちさ、野菜の名。詩、小雅「薄言采ー一」＝苦菜。【苦菜】にがちさ、ちさな。＝萵苣。

苟 キュウ 東

ー蒻はをんなかづら、香草の一、莖の高さ一二尺、葉は芹に似て分裂す、秋ぐ五瓣黃白色の小花を著く、根は藥用とす。＝川芎（四川省の産を佳とする故）

芙 クヮン グヮン 寒

ー蘭はがいも、山野に自生する蔓草、葉は尖りたる橢圓形をなし、夏、紫色五瓣の小花を著く。＝萱草。

芍 シャク 藥 一に勻に作る

ー藥は牡丹に似たる草花の名、根を藥用とす、えびすぐさ。詩、衛風「贈レ之以二藥一」三柳軒雜識「一藥爲二婦容一」＝勻藥。

芥 セ 卦

ひめはぎ（遠志）

芊 セン 先

○ー一はしけるさま（茂）貌。又、草の盛んなる貌。又、碧き貌「葱ー一」「青ー一」○樹木の相雜はれる貌。【芊蔚】草木のしげれる貌。陳子昂詩「ー一何青青」【芊芊】○草の茂りて盛んなる貌。謝朓詩「遠樹曖ー一」○碧き貌。潘岳賦「碧色潤其ー一」【芊眠】草の深く茂れる貌、茂密の貌。陸機賦「滿園ー一」陸游詩「柳邊烟掩映、堤上草ー一」【芊絲】草木の蕃衍する貌。謝靈運詩「孤岸擢秀、長洲ー一」

芒 ㊀ベウ ㊁クヮウ 陽 陽

芠は本字

㊀のぎ、稻麥などの實のさきの針の如き剛き毛「稻ー一」「麥ー一」○ひかり（光線）「光ー一」○草の名、多年生草の一、茅の類。○草木のとげ「ー一刺」○さき、ほ、はし（草端）○ほさき、ほこさき「鋒ー一」銳に通ず。○ー一はつかれ倦みたる貌。又、廣大の貌。又、ほんやりとしたる貌。○邙に通ず「北ー一」○芘に通ず。○國すすき（薄）㊁ととめなし「一芴」＝荒・忽。【芒鍼】わらぐつ。陳卽道詩「竹杖ー一取次行」＝草鞋・芒鼈。【芒銳】のぎの尖りてするどきさき。李遐詩「渾渾氣甚和、瓌玉無ー一」【芒角】○星の光ののぎの如きもの。○陽秋「有レ星赤而ー一、白二東北一西南流、投二于亮營一」○かど。晉武帝、與二陶弘景一論レ書書「運筆邪則無ー一ー一」＝稜角。【芒屬】わらぐつ。筆叢「六朝前、率草爲レ履、古稱ニー一、隋書之履」晉書、劉毅傳「家貧織ニー一、以爲レ業」＝芒履。【芒彗】星のひかりのさき。楊慎盛詩「徐星——動二天衢一」【芒刺在レ背】恐れ忌みて心の安からざるに喩ふ。漢書、霍光傳「宣帝謁二見高廟一、大將軍光從驂乘上內懼二不レ平之一、若有二芒刺在レ背一」【芒刃】刀劍などのきっさき。漢書、賈誼傳「ー一不レ頓」＝鋒刃。【芒種】○二十四氣の一、陽曆六月五日頃、麥を刈り稻を植ゑるに宜し。李超棹「小滿後十五日、斗指丙爲ニー一」○轉じて稻と麥と（周禮、地官、注）【芒消】消石の異名、硫酸ナトリウム。本草「消石、一名ー一」＝芒硝。【芒硝】前條に同じ。【芒芒】○疲れ倦みたる貌。孟、公孫丑「ー一然歸」○廣き貌。又、遠き貌。左、襄四「ー一禹跡、畫爲二九

州」‖茫茫。○目くらみてぼんやりとする貌。司馬相如、上林賦「―恍惚」○多き貌。東哲、補亡詩「―其稼」

【芒芒】バウバウ かや、ちがや（原千里、投荒記）

【芒洋】バウヤウ ひろくむなしき貌。柳宗元文「其旨本二儒術一、則辺遠――、而不レ知二其遠一」‖茫洋・渺茫。

【芒履】バウリ わらぐつ。孟浩然詩「手持白羽扇、脚歩芒―」‖草履。

【芃】 ホウ フウ 東

芒（前條）の本字。

○草木の盛んに生長する貌にいふ。○小狐の貌。又、尾の長き貌。詩、小雅「有二一狐一綏二綏彼―尾一」○盛んなる貌。又、物の多き貌。老子「物――各復二歸其根一」○一説に花の黄色なる形容。詩、小雅「―――其黄矣」

【芃芃】ホウホウ ○盛んなる貌。又、物の多き貌。老子「物――各復二歸其根一」○一説に花の黄色なる形容。詩、小雅「―――其黄矣」

【芃尨】ホウバウ 草の盛んに長ずる貌。詩、衛風「―――其麥」

【芸】 カン 寒 図

○一種の香草、初夏の頃、黄花を著く、書物の中に入れて蠹を防ぐ、故に藏書の所を一窗、藏書の所を一閣などといふ。○くさぎる、草を去る。論、陽貨「植二其杖一而―」古、耘に通ず。○――は盛んなる貌。又、多き貌。

【芸芸】ウンウン ○盛んなる貌。又、物の多き貌。老子「物―――各復二歸其根一」○一説に花の黄色なる形容。詩、小雅「―――其黄矣」

【芸香】ウンカウ かをりぐさ、へんるうだ、多年生草の一、藥用とす、又書中に插みて蠹害を除く。禮記、注「書房每月二―一草一辟二蠹魚一」‖七里香。

【芸香科】ウンカウクワ 植物の分類名の一、へんるうだ科。蜜柑・柚・橙などの類。

【芸閣】ウンカク 藏書のたかどの。香譜「魚豢典略云、芸香辟二紙魚蠹一、故藏書家閣二芸香一、亦曰二――芸署一」‖芸局。

【芸黄】ウンワウ 芸は極めて黄なる貌。轉じて草木の凋零の狀をいふ。梁武帝詩、陰機自操烈、庭草亦――」

【芸窗】ウンサウ 藏書の室。馮延登詩「――盡日無二人到一、坐見玄雲吐二翠微一」‖書齋。

【芸署】ウンショ 藏書のへや。芸閣を見よ。

【芸窓】ウンサウ 漢代秘書を藏するうてなを閣臺といひ、又――といふ。芸閣を見よ。‖芸署。

【芸帙】ウンチツ 芸草を入れたる書帙。轉じて廣く書物の義とす。梁寅、蒙山賦「坐二紫苔一兮綺窓、藤二蒼松一兮――舒」‖芸編・書巻。

【芸夫】ウンフ くさぎる男。後漢書、陳寔傳「――牧豎」‖耘夫・農夫。

【芸編】ウンヘン 書物をいふ。竇鞏詩「――不レ檢蠹絲繁、班馬專門萬古香」

【芽】 ガ 麻

○め、草木のめ「萌―」「芳―」「嫩―」「筍―」「吐―」○おこり、きざし、もと、事の端緒。江統賦「消姦宄於未―」○めざす、めぐむ、めを出す。○鐵物の苗の如くあらはるるものにもいふ。雲蔵論「銀―生二銀坑内一、狀如二亂絲一、紅色者上、即赤銀也」

【芽甲】ガカフ 草木の初めて發生せし子葉をいふ。韓維詩「即看春風起二――一」

【芥】 カイ ケ 卦

○からしな（辛菜）「辛―」蔬菜類の一種、春十字形の花を著け、粟粒の如き實を結ぶ、味甚だからし。○からし、からしたの實を粉末にしたる香味料。又、藥用品。○からしなは賤しくして實極めて小なり、故に物の小にして賤しき者をいふ「土―」○纖―は微細なる貌。○あくた、ごみ「塵―」‖塵―」「草―」

【芥子】カイシ からしな。又、其の實。粉末にして香味料とす。其の實極めて小なるが故に轉じて極小の喩とす。維摩經「以二須彌之高廣一內二――中一、無レ所二迫減一」

【芥子園畫傳】カイシエンクワデン 書名、四巻、清の王安節編す、李漁の序あり、歴代の山水の名家の畫法を彙輯し、初學の模式とす。

【芥子泥】カイシデイ からしねり。皮膚に刺戟を與ふる爲めに貼る。

【芥舟】カイシウ ○小さきあくたが舟の如く浮きてゐる。莊、逍遙遊「覆二杯水於坳堂之上一、則芥爲二之舟一、置レ杯焉、則膠、水淺而舟大也」○轉じて小舟の義とす。唐太宗、小池賦「泛二――一而已沈」

【芥屑】カイセツ からし。耶律楚材詩「――姜辛類二桂薑一」‖芥粉。

【芥孫】カイソン からしなの初めて生ずるもの。蘇軾詩「秋來猶露滴二東園一、蔵二瓶生一見芥有レ孫」

【芥蔕】カイタイ 些細なるもの。又、些細なる心のささわり（礙滯）蘇軾詩「一

洗ー一胸」‖帶芹。

【芹摩】キンアク あくたと、ちりと。‖塵芥。

【菱】キ 實

ひし(菱)の一種、實に尖角ある水草「菱ー」四角なるをーといひ、兩角を菱といふ。楚語「屈到嗜ー」

【芰荷】キカ ひしと、はちすと。大業雜記「池沼之內、冬月亦煎綵爲ニーー一」

【茣】キフ 國

○かぶとぎく、とりかぶと(薑草・烏頭)○白ーヒャクは藥草の一、高さ一二尺、花は通常紅紫色、稀に白色のものあり、觀賞用とし、又根を藥用とす。しらん(紫蘭)‖白及・白給。○くさの名、皮にて紙を製す。‖紙茣。

【芥】キン 支

せり(水英・楚葵)水澤中に生ずる一種の香草、夏日小白花を著く、葉は羽狀複葉を爲し互生す、嫩葉は食用とす「水ー」「香ー」呂覽「野人美ー」、願ー獻之玉尊」

【芹獻】キンケン 物を人に贈る謙辭。字解參看。‖獻芹。

【芹菜】キンサイ せり。詩、小雅、疏「我王使下人于二此水中一采中其ーー上、以爲レ羹以待二諸侯一」‖楚葵。

【芹藻】キンサウ せりと、もと。蘇徹詩「泮水生ニーー一」詩經、魯頌、泮水篇の「采芹采藻」の義より進士の志願者に比していふ。

【芹菹】キンソ せりのひたしもの(周禮、醢人)

【芩】キン ゴン 侵

○蔓草の名、葉は竹の如く濕氣ある濕地に生ず、其の實は牛馬が喜び食ふ。詩、小雅「呦呦鹿鳴、食野之ー」○黃ーは藥草。

【花】クワ ケ 麻

芰は俗字もと華に作る

○はな、草木のはな。○洛陽の人は單に牡丹をーといふ。○もやう、あや(文象)○はなさく。○すべて花の形せるもの「火ー」「一押」「浪ー」「燭ー」瑞ーは雪の異名。○天ーは天然痘(種ーは種痘)○藝妓の異名。ー娘の略。○錢を數ふるに五文を一ーと爲す(俗呼小錄)○眼がかすむ。杜甫詩「眼ー落井水底眠」○つかひへらす、費す、消耗する「ー消」「ー費」國○はな。櫻の花「ー見」又、梅の花。又、佛にたむけるしきみなど。○藝人などにあたへる祝儀。‖纏頭。○はなあはせ又はなくじの略。美くしきこと、はなやかなること、華美「ー形役者」「ー嫁」

【花押】クワカふ かきはん、押は字を變體に書くをいふ、花は其の形によりていふ。古今原始「ーー之巧、始二于章草一」‖草押・花字・花書。

【花衣】クワイ ○美くしくはでなるきもの。○楮花の子を去りしもの。

【花鳥】クワテウ はな。西京雜記「柱壁皆畫二雲氣ーー山獸水怪一」‖花鳥。

【花菌】クワキン 次條に同じ。

【花糊】クワコ はなのしとね。開元天寶遺事「吾自有ニーー一」‖花茵。

【花英】クワエイ はなぶさ、はな。‖華英。

【花影】クワエイ はなのかげ。六一詩話「風靜鳥聲碎、日高ーー重」

【花葉】クワエフ はなと、はと。晉書、石勒載記「家園中生二人參一ーー甚茂、悉成二人狀一」

【花兎】クワト はなぞの。李嶠、露詩「滴應明ニーー一、藏蓬注二竹叢一」‖花園。

【花宴】クワエン ○盛んにして華美なる酒宴。○國ハナミのさかもり。

【花園】クワエン はなぞの。李適詩「ーー四望錦屏開」‖花苑。

【花簪】クワシン 結晶せし金鹽、其の花のごとくなるを印鹽といふ(齊民要術)

【花下】クワカ 花のした。白居易詩「ーー步ー晴因二美景一、尋ー勸レ酒是春風」‖花底。

【花下曬レ衣】クワカサイイ 風雅の心なきをいふ。李義山、雜纂「殺風景、一日、ーー」

【花界】クワカイ はなの多き所。元稹詩「琥珀ーー淨」‖花海。

【花海】クワカイ はなのうみ、一面の花ざかり。隋遊詩「燕宮最盛號ニーー一」

【花街】クワガイ いろざと。‖妓舍。

【花蓋】クワガイ 花の萼及萼の總稱。

【花香】クワカウ はなのかをり。王勃詩「蘭氣深二新酌一ーー染二別衣一」‖花氣。

【花梗】クワカウ はなをつくる柄。‖花柄。

【花梗石】クワカウセキ みかげいし。‖花崗岩。

【花客】クワカク とくい。‖顧客・花主・華客。

【花甲】クワカフ 六十歲の稱。唐詩紀事「今謂三年屆二六十一日一ーー一」‖華甲。

【花蛤】クワカウ 文蛤グワカウの異名。本草「文蛤、名ニーー一」

【花含】クワガン つぼみ(酉陽雜俎)‖花蕾・花胎。

【花顏】クワガン はなの如き美くしきかほ。白居易詩「雲鬢——金步搖」

【花卉】クワキ くさばな。南史、徐勉傳「聚

レ石移レ果、難以ニ一一ニ‖花草。

【花氣】クワキ　はなのにほひ。宋之問詩「踏青千ニ一、泉和萬籟聲」‖花香。

【花期】クワキ　はなのさく時期。蘇軾詩「且衝二杯酒一問ニ一一ニ‖花時。

【花錯】クワサン　花のもやうあるにしき。宋史、外國傳「雍熙元年、大食國人、來獻ニ一一ニ」

【花御史】クワギョシ　紅梅の異名。

【花火】クワクワ　はなび。經國雄略「梨花之製、捲レ紙爲レ筒、如二元宵之放玩一一之類ニ」‖煙火。

【花魁】クワクワイ　○梅の異名。百花のさきがけの義。古詩「不二是一一、誰是！一」摭言「王文正公嘗賦二梅花詩一云、雪中未レ論和羹事、且占百花頭上魁」○水一一は蓮の異名（田家雜占）○蕚の異名（王元之、詠蓮）○圖ヲイ遊女、娼妓。

【花述】クワジュツ　○美くしく飾りしかんむり（眞官經）○花被の內側の部分。

【花兄】クワケイ　梅の異名。

【花轎】クワケウ　圖新婚が婚禮の日に乘るかご。

【花月】クワゲツ　○はなと月と。李白詩「更待一一夜、寫女笑藏納」○花に照る月。王勃詩「我堵一一下、別是一家春」

【花言】クワゲン　言の實なきもの、浮華なることば。朱子語類「巧言即今所謂一一巧語」

【花縣】クワケン　晉の潘岳河陽の令となり、桃李を種ゑしより人號して河陽一縣花といひし故事。李白詩「河陽花滿レ縣」轉じて後世縣治の美稱とす。王維詩「別路經ニ一一、還レ鄉入二錦城ニ」

【花險】クワケン　美くしきかほ。元稹詩「疑翠黛二蛾眉一、輕紅拂ニ一一ニ」

【花見羞】クワケンシウ　○古の美人のあだな。五代史、淑妃王氏傳「王氏鄧州錦家子也、有二美色一、號ニ一一ニ」○轉じて美人の義とす。徐積詩「君不レ見東家女子一一、十六未レ綰更悲愛」

【花月】クワゲツ　うるきや、花を賞るを樂とする者。牡丹譜「洛花敗二於人間一一始盛」

【花姑】クワコ　古、善く花をうゑし人の稱。花木錄「趙夫人弟子善種レ花、號ニ一一、故春園則記ニ一一ニ」

【花鈸】クワハツ　○はなかんざし。廣雅、車服志「一一九樹」‖花鈿。○花樹を接ぐ時に用ふる鐵枝（牡丹八書）

【花子】クワシ　こじき、乞食。五雜俎「京師謂二乞食一爲ニ一一ニ、不レ知二何取一義」

【花市】クワシ　はなのいち。成都古今記「正月燈市、二月一一」

【花蕊】クワズイ　花の雄蕊の約ヤクを支へる柄。

【花事】クワジ　春の花の開くこと。劉克莊詩「一一匆匆了」

【花時】クワジ　はなのさく時節。許渾詩「雪夜書千卷、一一酒一尊」

【花時酒】クワジシュ　花見酒。前條參看。

【花心】クワシン　○花のしん、しべ。○美人の心。

【花信】クワシン　開花のしらせ、花の消息。歲時記「冬至至二夏至一、有二二十四番一一風一、始二梅花一、終二楝花一」二十四書花信風（七十二候條參看。

【花信風】クワシンフウ　花の開かんとするを報ずる風。前條參看。

【花神】クワシン　○はなを司るかみ。月令廣義「女夷爲ニ一一、乃嫘夫人之弟子、花姑亦爲ニ一一」○花の精神。雲品「徐熙畫レ花傳ニ一一ニ」○花の精。‖花魂。

【花枝】クワシ　はなのさけるあした。蘇軾詩「一一月夕、如レ乘二移渡一而登二碧落一」

【花枝】クワシ　○はなびら、はなの開くを人のくちびるに喩へていふ。○美人のくちびる。

【花酒】クワシュ　○妓を挾みて酒を飲むをいふ。呉歌「色是藥、酒是鴆、酒色之中無二拘束一、只因ニ一一ニ誤長生、欲レ酒撃レ花神鬼哭」○酒の花を以て釀成せしもの。宋史、三佛齊國傳「有ニ一一椰子酒・檳榔酒・蜜酒二、皆非二物釀所一レ酸、欲レ之亦酸」

【花樹】クワジュ　花を賞する木。‖花木・芳樹。

【花備者】クワビシャ　梅の異名。

【花所】クワショ　はなのあるところ。劇談錄「直過ニ一一、異香芬馥」

【花燭】クワショク　○うつくしきらそく、ゑらそく。陌田錄「鄧州花蠟燭名、著二天下一、雖二京師一不レ能レ造」○轉じて結婚の宴にいふ。庾信詩「洞房ニ一一明」‖華燭。

【花惡】クワアク　はなのしべ。孟浩然詩「物華可レ玩、ニ一一四時芳」‖花蕊。

【花藥】クワヤク　前條に同じ。李商隱詩「蝶衝ニ一一蜂衝レ粉」

【花笑】クワセウ　はなが開く。沈攸之詩「一一鳥歌詠」‖花開。

【花精】クワセイ　花あるこずゑ。開元天寶遺事「賜二紅綠一爲レ纏、密綴二金鈴一、繫二於ニ一一之上ニ」

【花石綱】クワセキカウ　花木奇石を運搬する多くの舟の一つながり。宋史、朱勔傳「徽宗頗垂二意花石一、勔取二浙中珍異一以進、舳艫相二銜于淮泗一、號ニ一一ニ」

【花仙】クワセン　海棠の異名。○花中神仙を看。

【花箋】クワセン　はなもやうある詩箋。玉海「以二草書一書二龍鳳ニ一一及紙間一賜二王公近臣ニ」‖花牋。

【花牋】クワセン　はなの如くうつくしきません。梁簡文帝、對燭賦「雲母窗中含ニ一一ニ」

【花村】クワソン　はなの開けるむら（李時勉、北京賦）

【花朵】クワダ　はなのえだ。石林燕語「一一不レ減二萬數ニ」‖花枝。

【花托】クワタク　花柄の先端のふくれたる所。

【花竹】クワチク はなと、竹と。蘇軾、獨樂園詩「一一秀而野」

【花軸】クワヂク 花を著くる莖、花梗の莖。‖花莖。

【花娘】クワヂャウ 妓娼妓なと。顧炎武錄「娼婦」四「一一、豈且又謂二草如一梅菊臣詩「一一十四能歌舞」

【花柱】クワチウ 蕊蘂シベの柄。

【花中君子】クワチュウクンシ 蓮をいふ。周敦頤、愛蓮說「菊、花之隱逸者也、牡丹、花之富貴者也、蓮、花之君子者也」

【花中十友】クワチュウジフイウ 草木の花を品して十友に比せしもの。三餘贅筆「宋曾端伯以三十花一爲二十友、各爲二之詞、茶蘼韻友、茉莉雅友、瑞香殊友、荷花淨友、巖桂仙友、海棠名友、菊花佳友、杏華艷友、梅花清友、梔子禪友」

【花中神仙】クワチュウシンセン 海棠カイダウの異名。草芳譜「海棠有レ色無レ香、故唐相賞耽著二花譜一、以爲二一一一」‖花仙。

【花鳥】クワテウ 花卉と鳥類と。洞天清錄「崔白作二一一一、必先作二圖線一、動利如二蛟蛛一、頃以二粲彩一、逼レ眞如レ生」

【花鳥使】クワテウシ 男女の間をなかだちするつかひ。唐書、呂向傳「帝設置レ使、采二擇天子姝好一、內二之後宮一號二一一一」

【花彫】クワテウ 紹興酒の最上のもの。酒醴の外に彩畫を用ふるが故。

【花朝】クワテウ ○陰曆二月十五日の稱。提要錄「二月十五爲二一一一、高麗以二是日一爲二上元節一、今吳俗以二二月十二爲二一一一」○はなの咲けるあした。白居易詩「春江一一秋月夜」‖花晨。

【花朝月夕】クワテウゲツセキ ○はなのあしたと、つきのゆふべと。春朝秋夜の樂しき時をいふ。舊唐書、維威傳「伸二一一一、與二資佐一賦詠甚有二情致一」‖花晨月夕。○轉じて二月十五日を花朝、八月十五日を月夕といふ。（擇要錄）

【花天】クワテン 花か空一ぱいに滿ち開く。趙翼詩「酒海一一共擊鉢」

【花天月地】クワテンゲツチ そらには花、地には月かげ、春の花月の夜のけしきをいふ。

【花鈿】クワデン はなのかんざし。舊唐書、輿服志「花鈿蚕衣青質、第一品一一九樹」‖花鈿。

【花奴】クワド ○木槿ムクゲの異名（本草綱目）○古の羯鼓に巧みなりし人の名。楊妃外傳「汝陽王璡、小名一一、尤善二羯鼓一」

【花孔】クワコウ ○花の初めて生ぜしもの。孟郊詩「零落小一一」○茶の異名。劉禹錫詩「欲知一一清洽味」

【花航】クワカウ 美くしくかざれるふね。宋史、太祖紀「吳越國、進二銀裝一一一」

【花貌】クワバウ 美くしきかほかたち。白居易詩「計將一一參差是」‖花容。

【花被】クワヒ 花の蘂ずゐを保護する部分即ち萼及花冠の總稱。

【花品】クワヒン 花の品類。宋史、藝文志に「一一一卷あり。春渚記聞「歷二數一一一、自而香者、十花八九也、至二於菊一則自香軋無レ香」

【花譜】クワフ 四季の花を時節の順序によりて記し。又、其がきたる書。海棠記「唐相賈耽著二百一一一」

【花布梅】クワフバイ さらさうめ。

【花粉】クワフン 雌蘂の上につきたる粉。司空曙詩「柳絲遮二綠浪一、一一落二青蓉一」

【花撚】クワネン くわびん、はないけ。世說「取一一水一飲之」

【花紗】クワサ はなの咲けるこずゑ。沿道素、上元賦「柳精露泡、一一星稀」‖紗花。

【花片】クワヘン はなびら。元稹詩「等閑看レ水浮一一一」

【花箋】クワセン はなびら。紫芳譜「荊秋葵、一名漢宮秋色、深紅、一一分二數枚一、八月開開」

【花園】クワヱン はなばたけ。洛陽伽藍記「林泉題レ詩、一一折レ藕」‖花圃。

【花木】クワボク 花樹に同じ。

【花幔】クワマン ○花もやうあるとばり。可止詩「零消春力展、一一洞門垂」○花の盛んに開きて幕を引きし如く見ゆる形容。

【花髻】クワケイ 髪のかざり。ペ、瓔珞ヨウラクの類（大寶積經）

【花明】クワメイ 花が白く明か。晉郡紀「日和而柳暗一一」

【花面】クワメン 花顏に同じ。劉禹錫詩「一一丫頭十三四」

【花門】クワモン 回鶻の異稱。一一山堡あるによる。杜甫詩「一一既二絕漠一」

【花紋】クワモン はなもやう。清異錄「有二古柘一園三枝一、殿二其一根一、解爲二蓋具一、一一甚奇」‖花文。花樣。

【花樣】クワヤウ はなもやう。東京夢華錄「七夕以レ瓜雕刻成二一一一、謂二之花瓜一」‖花紋。

【花樣不レ同】クワヤウフドウ もやうが同一ならず、文章の他と同じからざるにいふ。書言故事「時文別格、謂二花樣不レ同」

【花洋布】クワヤウフ 捺さらさ（更紗）

【花容】クワヨウ ○花の如き美くしきすがた。○轉じて美人のすがた。鹿谷門抄「昔一一綽約、似二細照一」‖花貌。花狼。

【花莖】クワケイ はなのつぼみ。陸游詩「欲二驚俗眼一、一一坂、夕陽猶見樹陰移」

【花洛】クワラク はなのみやこ。洛は支那周代の都、洛陽の事。

【花柳】クワリウ ○花と柳と。王勃詩「一一一國春」○遊女。又、いろざと。裏街の巷。李白詩「昔在二長安一醉一一、五侯七貴同二杯酒一」‖娼院。

【花柳病】クワリウビャウ 梅毒ばいどく淋病りんびやう等の總稱。

【花林】クワリン はなのはやし。劉孝綽詩「山林惜二春暮一、旭旦坐一一一」

【花櫚木】クワロモク 熱地に產する木。嶺南

書「一一性堅、紫赤色似二紫檀一」

【花蕊】クヮズイ 花上のつゆ。天寶遺事「貴妃酒初消、苦二脯熱一、晨遊二後花苑一、吸二一一一以潤レ肺」

【花王】クワワウ 牡丹の異名。歐陽修、牡丹記「人謂二牡丹一一、今蜀黄魏可レ謂レ王、而魏紫乃后也」

【花不レ能レ言】クワフノゲンアタハズ はなは物いふことは出來ず。歐陽修詩「——誰解レ笑」

【插レ花照レ鏡】サウクワセウキヤウ 落花をしとねとする。天寶遺事「學士許渾與二親友一宴二花圃中一、聚二落花一鋪レ坐曰、吾自有二花insレ何須二坐具一」

【簪花】シンクワ 花の枝を插みて、かんざしとする。宋史、禮志「淳熙二年太上皇帝聖誕、文武百僚上レ壽二文徳殿一、從レ駕至二德壽宮一、行二慶誕禮一」

【較レ花】カククワ 花を比較して優劣を定める。天寶遺事「長安士女春時レ、賊插以下各二奇花一者上賞レ賜、皆用二千金一、市二名花一植二中庭一、以飾二春時一」

【花落家僮未レ掃】クワラクカドウイマダハラハズ 唐人の句。王維、田園樂詩「桃紅復含二宿雨一、柳綠更帶二朝煙一、——、鳥啼山客猶眠」

【初レ花】ハジメテクワス 瘴氣が花を引きしめて開かしめず。歐陽修詩「瘴色初含レ柳、餘寒尚一レ」

【傍レ花隨レ柳過二前川一】ハナニソヒヤナギニシタガヒテセンセンヲスグ 宋人の句。程顥詩「雲淡風輕近午天、——、時人不レ識二予心樂一、將レ謂偷レ閑學二少年一」

【簪レ花臥レ酒】シンクワガシユ 甚だしく花を賞し酒を愛する。雲仙雜記「虞松方レ春以調、擬レ月掛レ風、且留二後日一、——、不レ可レ過レ時」

【花發多二風雨一】クワハツスレバフウウオホシ 人事の意の如くならざるに喩ふ。于武陵詩「——、人生足二別離一」

【花開花落二十日】クワカイクワラクニジフニチ 花の開きしより花の落つるまでは、纔に二十日の間なるをいふ。白居易、牡丹詩「——、一城之人皆若レ狂」牡丹の和名をはつかぐさといふは此に本づく。

【芬】 フン

花（前條）の俗字。

【芡】 ケン 豏

みづぶき、おにばす、水草、葉は大いにして荷の如く、紋多く水面に浮ぶ、實は芒刺あり、其の中に米あり、食ふべし。

【芡實】ケンジツ おにばすのみ。藥本草先、發本事「京師一一最盛二于會業觀之凝碧池一」＝雞頭。

【芫】 ゲン グヮン 元 又、杭に作る

さつまふち、ふぢもどき（魚毒）葉はほけに似、春日、紫色四瓣の花さく、其の葉を搗きて汁を出し水に投ずれば魚死す。

【芫華】グヮンクヮ ふぢもどきの花。急就篇、注「一一、一名魚毒、漁者煮レ之、以投二水中一、魚則死而流出、故以爲レ名」＝芫花。

【芟】 サン セン 咸

○かる、草を刈る。○くさかりがま、草を刈る大鎌。齊語「秉二銍艾一」

【芟除】サンヂヨ 惡草をかりのぞく。轉じて世の害惡を除く。蜀志、蔣琬傳「——二姦穢一」

【芟夷】サンイ 草を刈り盡くす。掃除する義。五經六「如二農夫之務去二草蕪一、——二薙芟之一」

【芟蕪】サンブ しげれる草をかり除く。班固、答賓戲「遭二撥棄一、夷レ險レ徑一」

【芟砑】シンケン 草をかり木をきる。元稹、古社詩「王人議二一一、怪見不二敢前一」

【芟鋤】サンヂヨ かりすく。曾鞏詩「昔來誅官對二天子一、何嘗不レ欲二親一一一」＝刪正。

【芟正】サンセイ あしきをけづりて正す。芟は刪。宋史「載加二一一」＝刪正。

【芟討】サンタウ 草を刈る如く敵をうちひらく。王粲、爲二劉荊州一與二袁尚一書「勒二整六師一、二一振旅」

【芟除】サンヂヨ かりのぞく。＝芟鋤。

【芟薙】サンテイ かりのぞく。舊氏刊誤「春則芟除枯朽、秋則一二蕪穢一」

【芝】 シ 支

○れいし「靈一」ひじりだけ、さいはひだけ、古來瑞草、神草として稱せらる。○くさびら（菌）○きぬがさ（小蓋）圖○路傍等に叢生する小雞草の稱。○小さき蓬草にて、葉は披針形、長き地下莖を有す、庭園等に一面にうゑる。＝結縷草。

【芝字】シジ 芝眉に同じ、字は眉字。

【芝菌】シキン れいし、菌はきのこ。唐書、柳宗元傳「雖二朽株敗腐一、不レ能二生植一、猶足下藥二出一一一以爲二瑞物一、化書「陰陽和博、不レ根而生一一一、操温相宜、不レ井而生二蜀蜀一」

【芝草】シサウ さいはひだけ、ひじりだけ。王充論衡「土氣和故一一生」＝靈芝・芝菌。

【芝房】シバウ 獣の名。漢の孝武帝の時、甘泉宮内に九莖連葉の靈芝を生ず、よりて獣を作らしめ一一獣と名づく。班固、兩都賦序「白麟赤雁、一一實開之歌、薤二于宗廟一」

【芝眉】シビ 人の顔色をたたへ稱す。帝王世紀「呂望一一」唐書、皇行傳「元

德秀、字叔芝、賀厚少二孫飾一、房琯毎レ見二德秀一歎息曰、見二叔芝眉宇一、使二人名利之心都盡一」‖叔芝。

【芝蘭】シラン　れいしと、蘭草と。一說に芝は芷の誤。家語、六本「與二善人一居、如レ入二芝蘭之室一、久而不レ聞二其香一、與レ之俱化矣」轉じて善人才子に喩ふ（晉書、謝安傳）

【芝蘭玉樹生二庭階一】シランギョクジュニテイカイニショウズ　人才の多く一門より出づるに喩ふ。晉書、謝安傳「安嘗戒二約子姪一、因曰、子弟亦何預二人事一、而正欲レ使二其佳一、諸人莫レ有二言者一、謝玄答曰、譬如二芝蘭玉樹一、欲レ使二生二於庭階一耳」

【芝蘭生二於深林一】シランシンリンニショウズ　君子の逆境に處して節操を守るに比す。家語、在厄「——、不二以レ無レ人而不レ芳、君子修レ道立レ德、不レ爲二困窮一而改二節操一」

【芝栗】シリツ　山の名。之罘に同じ。

【芷】シ　紙

よろひぐさ、水に生ずる一種の香草、夏時淡黄色の花を著け根は藥用とす。范仲淹、岳陽樓記「岸芷汀蘭」‖白芷・澤芳。

【芯】シン　侵

ほそる、髄ゃの一種、葦細長く三四尺に至る、編みて席を造り、又葉心の髄を燈心に用ふ、とうしんぐさ（燈心草）

【芻】ス　虞　通音スウ　芻は俗字

○まぐさ。○まぐさを與へて飼ふ。○くさかり、草を刈る人「——蕘者」○わら（藁）○まこも。○草を食ふ動物、牛・馬・羊の類。○芻ーは梵語の音。

【芻輦ノ迹】スクレンノセキ　芻ヲを運搬し、醫食を轉送する。漢書、鄭安傳「使二掌持將一兵以北攻二強胡一、辟レ地遠レ塞、戍二于北河一、——、以固二其後一」

【芻堂】スクリン　芻は草を食ふ畜類、牛羊の屬、糞は穀を食ふ畜類、犬豕の屬。孟、告子「理義之悅二我心一、猶二芻豢一之悅二我口一」

【芻言】スゲン　賤者の言。舊唐書、王縉傳「不レ廢二一、則端士賢臣必竊二自効一」

【芻狗】スクウ　わらを結びてつくりたるいぬ、祭に用ひ、祭終れば之を棄つ、故に用あれば用ひ、用なければ棄つるに喩ふ。老子「聖人不仁、以二百姓一爲二一一」

【芻蕘】スジョウ　わらと、たきぎと。禮記、學記「三十車、禾三十車、一一倍レ禾、嗜二芻蕘一」

【芻秣】スマツ　まぐさと、もみと。宋史、太祖紀一「指二其錢帛一一來上」

【芻米】スベイ　馬を飼ふまぐさと、米と。左、僖二九「分二其レ脤、償二之一一、禮也」

【芻秣】スマツ　まぐさ。周書、王思政傳「營二田農一積二一一」

【芻稾】スコウ　まぐさと、兵糧と「五代史、唐臣劉延朗傳」

【芻蕘】スジョウ　草を束ねて人形となし死者の從衛と爲して葬むる者、禮、檀弓、注「一一、束レ草爲二人形一以爲二死者之從一」

【芮】㊀ゼイ　霽　㊁ゼツ　屑

㊀みづぎは（水涯）‖汭。○一一は草の生ずる貌。又、小さき貌。○夏殷周時代の國名、今の山西省ー城縣の地。㊁一一ゼツは爽の一族。‖蝙蝠蒸然。

【芮芮】ゼイ　草の初めて生じて小さき貌。本草、注「其葉一一細小」

【芋】㊀チ　㊁シュ　虞　遇

㊀みくり（三稜草）○からむし。‖芋。㊁くわゐ（甘藷）又、其の實、どんぐり。莊、齊物「狙公賦ー」‖杼。○一一栗は小栗。

【芫】㊀トン　㊁チュン　眞　元

㊀木の始めて生ずる貌。㊁おろか、無知の貌。莊、齊物「聖人愚ー」

【芭】ハ　麻

○一蕉はばせを。○はな、葩に通ず。

【芭蕉】ばせを　熱地に生ずる植物の一、高さ十數尺、莖はやはらかにして草の如く、葉は長大にして莖頂にむらがり生ず、莖の纖維をつむぎて、芭蕉布を織る。南方草木狀「甘蕉一名ー一或曰二芭苴一、蕉解葩如レ蕉可レ績爲二絺綌一、名二蕉葛一」張說詩「蛾間ー葉、何慙心不レ開」‖甘蕉・芭苴。

【芳】ハウ　陽

○かをり、にほひ、草のよきにほひ。引伸してひろく物のよ

き香をいふ。儀禮「嘉薦令ー」〇かんばし。かをる。〇にほひよき草（香草）〇ほまれ「一名」聲譽の美くしきをいふ。晉書「流ー後世」〇賢者、能士。〇他人の事物を敬していふ「ー志」「ー筆」「ー翰」

【芳塵】ハウヂン　はなの下のほこり。孟郊詩「朝朝沒レ脚走ニーー」

【芳宴】ハウエン　〇はるのおもむき。溫庭筠詩「池塘ーー遠」〇人の深切なる心。‖芳志。

【芳友】ハウイウ　蘭ウの異名。

【芳訊】ハウジン　よきはかりごと。訊、謀也。賦「結二德音一而爲ニーー一服」

【芳郷】ハウキヤウ　にほひが盛んなり。宋史、樂志「嘉薦ーー」‖芳郁。

【芳茵】ハウイン　かをりよきしとねの形容。杜子「借二景麗之ーー一、就二流俊之淫液一」

【芳陰】ハウイン　よきかをりする花のかげ。任逍詩「歌舞向ニーー一」

【芳猷】ハウイウ　よきかをりのしる。書、斷序「流ニーー於筆端一、忽飛騰而光耀」‖芳猷。

【芳醪】ハウラウ　かんばしくうつくし。白居易詩「衆目悅ニーー一、松獨守二其貞一」

【流二芳後世一】ハウコウセイ　芳名を後の代までのこす。晉書、桓溫傳「不レ能レ流二芳後世一、不レ足レ復遺二異萬載一」通鑑綱目に後を百に作る。

【芳芽】ハウガ　かんばしき草木の芽、特にかをりある茶の芽にいふ。徐世隆詩、半勝華蓋二美醞一、兔豪蓋孕堅二ーー一」

【芳香】ハウカウ　〇よきにほひ。秦嘉詩「ー去二垣樓一、素琴有二清聲一」〇よろひくさの異名。本草「白芷、一名ーー」

【芳郊】ハウカウ　かんばしき花のさけるの。王勃詩「ー花柳遍、何處不レ宜レ春」

【芳汗】ハウカン　かんばしきあせ。王僧孺詩「ー似二蘭湯一、形金鈿二龍媒一」

【芳翰】ハウカン　芳札に同じ、翰は手紙。

【芳顏】ハウガン　おかは。‖尊顏・尊容・芝眉。

【芳卉】ハウキ　かんばしきくさ。潘岳賦「仰瞻二芳木一、俯察二ーー一」

【芳紀】ハウキ　年わかき女子のよはひ、紀は歲。

【芳氣】ハウキ　よきにほひ。晉書、樂志「蘭風發二ーー一、蕙世同二其芳一」‖香氣・馨氣。

【芳規】ハウキ　前人の立てたる善き規則。史、樂毅傳、書隱逢贊「ーー不レ絕」

【芳菊】ハウキク　かをりよき菊。後漢書、胡廣傳、注「菊水出二穰縣一、ーー被レ流、水極甘香、太尉胡廣所レ患風疾、休沐南歸、恒飲二此水一、後疾遂癒」‖芳菊・香菊。

【芳筵】ハウエン　かをりよきむしろ。謝朓賦「遊二ーー一、門榱二長楊一」

【芳花】ハウクワ　かんばしきはな。梁簡文帝文「折二此ーー一、擧二芸經袖一」‖香花。

【芳華】ハウクワ　にほひよきはな。趙冬曦詩「爽塏三秦地、ーー二月初」‖芳花。

【芳桂】ハウケイ　にほひよきかつら。李白詩「空搖ーー色、不レ屈古松姿」

【芳景】ハウケイ　花のかぐはしき春のけしき。

【芳蕙】ハウケイ　かをりよきくさ。蕙は蘭の一種。孟郊詩「春色捨二ーー一、秋風遺二枯蕙一」

【芳弊】ハウヘイ　よきかをり。謝惠連、塘上行「蕙蓮蔚二雨潤一、蕨薇含二ーー一」‖芳蕤。

【芳蕤】ハウスイ　春の時節。鮑照詩「ー短白可、日夜望二君歸一」

【芳草】ハウサウ　かをりよきくさ。杜牧詩「ーー復ーー、腸腸又斷腸」‖香草。

【芳札】ハウサツ　他人の書簡の敬稱。梁書、劉孝綽傳「遲二遷ーー一」‖芳翰・芳墨。

【芳志】ハウシ　他人の深切なるこころざし。‖芳情。

【芳枝】ハウシ　かんばしき花のえだ。楚辭「折ニーー與二華琼一」

【芳秀】ハウシウ　かんばしくひいでる。雜川外篇「紫芝ーー、不レ限二千斤盧之嶺一」

【芳洲】ハウシウ　かんばしき花のさける洲ス鄭僧詩「不レ覺ーー暮、蒼啾處處聞」

【芳袖】ハウシウ　よきかをりを含めるそで。陸機詩「緩緩ーー揮、冷冷絃指彈」‖香袖。

【芳心】ハウシン　芳志に同じ。

【芳辰】ハウシン　かんばしき春の時節。辰は時。李嶠詩「早開年欲レ至、勞綵擧ニーー一」

【芳情】ハウジヤウ　芳志に同じ。

【芳蘭】ハウラン　にほひ高きがま。華陽國志「園有ニーー香芝一」

【芳樹】ハウジユ　花のさける木。李華詩「ー無レ人花自落、春山一路鳥空啼」

【芳宴】ハウエン　かんばしきはる。晉知賢詩「今夜啓二城圍一、韻レ伴ニーー一」

【芳潤】ハウジユン　かんばしくうるほふ。文賦「傾二葉言之瀝液一、漱二六藝之ーー一」

【芳醇】ハウジユン　かんばしくよき酒。張華詩「對レ酒誠可レ樂、此酒復ーー」

【芳椒】ハウセウ　かんばしきさんせう。楚辭「折ニーー一以自處」

【芳節】ハウセツ　春の時節。唐太宗詩「鳴笳凝二樂館一、疏管韻ニーー一」

【芳餌】ハウジ　かんばしくしてやはらか。餌は俗は敕に作る。徐陵書「加以二五腴具足、七菜ーー一」

【芳鮮】ハウセン　あたらしき魚。傅毅、七激「酌二旨酒一、割ニーー一」

【芳俎】ハウソ　よき供物ヲを載せたるつくえ。宋史、郊祀樂章「乃奠ニーー一以薦二嘉明一」

【芳蹤】ハウシヨウ　花のさけるくさむら。劉憲

詩「蜂蜜ニー一舞不レ前」

【芳醑】ハウ よき酒だる。又、善き酒。晉書、阮籍傳「醉臥竹林之會、劉畢ー一之友」‖芳尊。

【芳醪】ハウ かをりよきさけ。‖芳醇。

【芳躅】ハウ 前人の善き行跡。史、萬石君傳、索隱述贊「敬行訥言、俱嗣ニー一」

【芳朝】ハウ はるのあした。李百藥詩「少年不ニ歎樂ニ、何以盡ニー一」‖春暁。

【芳劍】ハウ はなかんざし。庾肩吾詩「ー一發ニ石榴ニ」‖花釵。

【芳苞】ハウ かをりある花のつぼみ。元好問詩「ー一一破不ニ更合ニ」

【芳茅】ハウ にほひあるちがや。拾遺記「夢下一章女授以ニー一華上」

【芳菲】ハウ 花のよきにほひ。又、香ある草の繁生する貌。庾肩吾詩「春日生ニー一」

【芳弦】ハウ かんばし。陸龜蒙詩「假閣任ニー一」

【芳蘭】ハウ かんばしくにほふ。王褒詩「文葉長ニ青葱ニ、綠莖吐ニー一」‖蘭都。

【芳芬】ハウ かんばし。王融賦「披ニ華裳ニ兮ー一」‖芬芳・芳郁。

【芳墨】ハウ 人の手紙の敬稱。‖芳札・芳翰。

【芳味】ハウ よきあぢはひ。西陽雜俎「鮸酒之ー一」‖芳旨。

【芳名】ハウ ○かんばしきほまれの‖名譽・令名・令聞。○おなまへ、尊名。

【芳茗】ハウ かをりよき茶。陸希聲詩「半坡ー一鮮華鮮」

【芳醪】ハウ かをりよき濁酒。李商隱詩「一醆ー一不レ得レ嘗」

【芳蘭】ハウ よきにほひのらん。說苑「十步之內、必有ニー一」

【芳醑】ハウ かをりよきあまざけ。洛陽伽藍記「ー一盈レ罇、佳賓滿レ席」

【芳烈】ハウ ○かんばしきいさを。晉書、溫嶠傳「俾ー一垂ニ乎百世ニ、休ニ風被ニ于萬紀ニ」○はげしき香氣。

【芳香】ハウ かんばしくしげれるくさむら。沈約詩「帳殿臨ニ春藥ニ、雜宮繞ニー一ニ」‖芳叢。

【芼】

㊀ バウ・モウ 號 ㊁ バウ・モウ 篠

㊀草がはびこる。○ぬく、とる、野菜をえらびて抜き取る。○菜を雜へたる肉羹。㊁くさ（草）柳宗元詩「野蔬盈ニ傾筐ニ、雜ニ池沼ー一」

【芼羹】モウ 野菜と肉とをまぜたるあつもの。禮記「ー一ニ夏羔ニ、秋ニ冬用レ雉、雜ニ以蜃ニ」

【芾】

㊀ ヒ 去 ハイ 泰 ㊁ フツ 物 ㊂ ヒツ 質

㊀厥ーは小なる貌。詩、召南「厥ー甘棠ニ㊁しける（草木茂盛）㊂ひざかけ、まへだれ「朱ー一」‖韠韓。

【芘】

㊀ ヒ 支 ㊁ ヒ 寘

㊀くさ（草）○しける。㊁かけ（麾）おほふ。‖庇。

【芙】

フ 虞

ー蓉は蓮の異名。爾雅、疏「江東人呼ニ荷華ニ爲ニー一蓉ニ」‖芙蕖。又、灌木の一、葉は掌狀、秋の末に梔花に似たる紅又は白き美花を著ける、もくふよう（木芙蓉）

【芙蕖】蓮花の異名。揚雄「荷、ー一（中略）其花菡萏、其實蓮」

【芙蓉】字解を見よ。

【芙蓉劍】古の寶劍の名。越絕書「薛燭說劍云、揚ニ其華ニ、如ニ芙蓉始出ニ」‖唐昭陵詩「相逢俠客ー一」

【芙蓉洞】ほらあなの名。清一統志「ー一在ニ福建閩候縣北六十里ニ、洞口可ニ丈許ニ、游人乘レ炬以入、紆迴十餘里、莫ニ窮ニ其際ニ、洞內有ニ五代僧義存所レ闢開山堂ニ、石林・石筍・石盆猶存」

【芙蓉姿】美人の姿に喩ふ。李白詩「美人出ニ南國ニ、灼灼ー一」

【芙蓉峯】○蓮花に似たる峯をいふ。荊州記「衡山一峯名ニ芙蓉ニ」又海鹽沙「ー一在ニ衡山ニ、芙蓉嶺在ニ峯頂ニ」○駿河富士山の異名。‖蓮嶽。

【茱】

フウ 尤

ー萸はおほばこ、一年生草の一、葉は長卵形、平行脈を有し、地上に叢り生ず、花は穗狀綠黃色にして長き梗あり。

【茱萸】おほばこ。詩、周南「采ニ采ー一」‖馬鬣・車前・蝦蟆衣。

【茱萸】前條に同じ。

【芬】

フン 文

○かをる、かうばし、草が初めて生じて香の分ち布くをいふ「芳ー」「奇ー」「清ー」○かをり、にほひ、か、花草の香氣。○よきほまれ（芳名）晉書、王彌傳「揚ニ千載之上ニ」○草が初めて生じて香がわかれ布く。○おほし（衆多）紛と通ず。漢書、禮樂志「ー一芬ニ」○泥ーフンは亂れる貌。○ーー然は墳起する貌。○はびこる。

【芬郁】にほひの盛んなる貌。梁昭明太子詩「名香曉ー一」

【芬馥】盛んににほふ。枚乘文「衆芳ー一」

【芬香】よきにほひ。張衡詩「從レ風

衣起貌ニ―一」

【芬華】フン　はなやかにかがやく。史、幽君傳「有ル功者顯榮、無ル功者、雖レ富無ル所ニ―一」

【芬馥】フン　かをり。蘇武詩「―一良夜發」

【芬然】フン　土塊の高くもちあがる貌。管子、地員「―一若レ灰」

【芬陀利】フン　佛　白蓮華。‖妙好華。

【芬芳】フン　かをりよし。書經「治之至者、―一香氣、動ニ於神明一」

【芬盤】フン　たばこぼん。

【芬菲】フン　花草のよきにほひ。蘇軾詩「草木繁ニ―一」

【芬芯】フン　かんばし。荀子「故關―一、所ニ以養ル鼻也」‖芬芬。

【芬馥】フン　花香の盛なる貌。左思吳都賦「光色炫晃、―一眩曜」拾遺記「洞庭山有ニ靈洞一、異香―一、泉石明朗」

【芬芬】フン　○香ふ貌。詩、大雅「旨酒欣欣、燔炙―一」‖芬郁・芬馥。○亂るる。逸周書「汝無ニ泯泯―一、厚須忍ル酸」注「泯芬、亂也」

【芬烈】フン　○強き香氣。「司馬相如、美人賦」○かんばしきいさを。「晉書」

【芳】

㊀ブツ　㊁コツ　月　物

㊀こまか（緻密）○菜の名、蔊に似て葉厚く毛あり。‖菲。㊁―然・―乎ははっきりせぬ貌。

荀、正名「愚者之言、―然而粗」‖惚。

五畫

【芟】

イ　麻

○蒨―はずずだま、薬草の一。又、蓮の實。○茅―はおほばこ。‖茅苢。

【芟米】イ　薏苡の實。‖苡仁。

【苢】

前條に同じ。

【英】

エイ　庚

○はな、草木の華。詩、鄭風「顏如舜―一」○はなぶさ（蕚）はなしべ（蕊）「落―一」「殘―一」「繁―一」「丹―一」○は（葉）悲歌「夕餐秋菊之落―一」○物事の秀でて美くしき所。韓愈、進學解「含ニ英咀一華」（文章の妙味を咀嚼する）○かざりあること、羽にて矛を飾る、矛を飾りし羽根。詩、小雅「二矛重―一」○才能のすぐれたる人、賢才の絶異なる稱「―才」「俊―一」「豪―一」○國名、英吉利の簡稱。○玄―は冬の稱。○雲―は雲母。○美くしき石の名。‖瑛。○―は雲の貌。又、美くしき貌。又、和ぎて盛んなる貌。

【英偉】エイ　すぐれてえらし。又、其の人。晉書、陳頵傳「詩稱維岳降ル神、生ニ甫及申一、夫―一大賢、多出ニ于山澤一」‖秀偉・俊偉。

【英畝】エイ　すぐれたるはかりごと。晉書、宣帝紀「雄略内斷、―一外決」‖芳猷。

【英英】エイ　○雲の貌。又、輕く明かなる貌。詩、小雅「―一白雲、露ニ彼菅茅一」○和ぎて盛んなる貌「呂覽、古樂「其音―一」○美くしき貌。晉書、荀閎傳「京中―一荷道明」

【英霤】エイ　かしこくすぐれる。晉書、李胤傳「武昭―一、忠勞當世」

【英姿】エイ　はなやかなるひかり。夏侯湛、抵疑「風柄五葉、龍蟠六年、―一飛務、羽儀擢幹」

【英姿】エイ　すぐれてうつくし。張纘、蕭子顯墓誌「開澄動ニ于容止一、―一發ニ于流盼一」

【英遠】エイ　すぐれて遠大なり。北史、來護兒傳「雄略秀出、志氣―一、常慨然有ニ立ニ功名一之意一」

【英乂】エイ　すぐれて賢き人。賈逵文「今世事紛擾、復有ニ瓦解之勢一矣、誠―一有ル識之時也」

【英概】エイ　すぐれたるきりやう。許衡詩「雄名與ニ―一、一日領ニ九州一」

【英豪】エイ　すぐれてえらき人。李白詩「時清不レ及―一人、三尺童兒重ニ豚

關一」‖英傑・英雄豪傑。

【英奇】エイ　すぐれて異り。五代史、周世宗紀「壯而器貌―一」‖英特。

【英氣】エイ　すぐれたる氣象。舊唐書、程咬等傳論「―一動レ人」

【英規】エイ　すぐれたるのり。江淹文「遠承ニ雄範一、近貴ニ―一」

【英毅】エイ　すぐれてつよし。唐書、承天皇帝俊傳「―一有ニ才略一、善ニ騎射一」

【英徽】エイ　すぐれてよし。齊太廟樂歌「妙感崇深、―一彌亮」

【英儀】エイ　すぐれてたかし。開皇、禁擾傳「風骨挺正、氣調―一、當レ朝無レ所ニ顧濡一」

【英果】エイ　すぐれてたけく、おもひきりよし。晉書、西戎祝髮傳「性―一有ニ雄略一」‖英毅・英斷。

【英華】エイ　○はなやかなるひかり。禮、樂記「和順積ル中、而―一發ル外」○詩文などのすぐれて味あるにいふ。詩品「―一曜ニ新飫青澤一」○ほまれ、名聲。漢書、敘傳「尋ニ―一滅ニ道德一」○はな。

【英皇】エイクワウ　舜の二妃、娥皇と女英と。列女傳「有虞二妃者、帝舜之女也、長娥皇、次女英」蘇軾詩「歷ニ舜九疑一帶ニ―一」

【英傑】エイ　すぐれたる人物。荀子「其窮也俗儒笑之、其通也―一化之」

【英彥】エイ　すぐれてぬきんでたる人。晉書、温嶠傳「衣冠斯盛、―一如

ル林」‖英俊・英賢。

【英姿】エイシ　すぐれてあやあり。晉書、孫楚傳「負ニ一ノ之姿、超然出レ類」

【英賢】エイケン　すぐれてかしこし。後漢書、馬援傳「兄子嚴、能通ニ左氏春秋ニ因撰ニ百家要言ニ遂変ニ姓名ニ一、京師大人成器ニ異之ニ」‖俊賢。

【英悟】エイゴ　すぐれてさとし。舊唐書、肅宗紀「上仁愛ニ一、得ニ之天然ニ」

【英骨】エイコツ　すぐれた骨相。李白、贈ニ宿行融ニ詩「行蔵赤俊發、吾知有ニ一ニ」

【英魂】エイコン　すぐれた人のたましひ。賈彦璋詩「度績當年原、一ニ此地路」‖英霊。

【英才】エイサイ　すぐれたるはたらき。又、其の人。孟、盡心「得ニ天下一ニ而教ニ育之ニ」

【英壮】エイサウ　秀でてさかんなり。徐幹詩「平生一ニ飾」

【英爽】エイサウ　原、朱がすぐれてけだかし。晉書、王濟傳「風姿一ニ、氣爽ニ一時ニ」‖俊爽。

【英作】エイサク　すぐれたる詩文。文心雕龍「高祖大風・鴻鵠之歌、亦天縱之一ニ也」‖傑作。

【英草】エイサウ　すぐれたるはかりごと、算一ニ筆に作る。宋書、劉粋傳「故知ニ一ニ所ニ乏者、先勝而後戰也」‖英略・妙算。

【英士】エイシ　英父に同じ。高鄴文「贈劇者同、魯國一ニ」

【英姿】エイシ　すぐれたるすがた。杜甫、丹青引「一ニ颯爽來ニ酣戰ニ」

【英資】エイシ　すぐれたるうまれつき。晉書、謝夷吾ニ表「厥土檢潤、而一ニ挺特、奇像秀出」‖英質。

【英秀】エイシウ　すぐれてひいでる。吳志「弘雅之素、一ニ之德、文章之采」‖俊秀・挺秀。

【英將】エイシヤウ　すぐれたる將軍。‖名將。

【英主】エイシユ　すぐれたる君主。‖名君・明君・賢君。

【英淑】エイシユク　○すぐれてよき妃。漢雜事秘辛「爰求ニ一ニ、共臨ニ海内一」○八十一御女の一「北史、后妃傳」

【英俊豪傑】エイシユンガウケツ　衆にぬきんでたる人。淮南、泰族「智過ニ萬人一者謂ニ之英ニ、千人者謂ニ之俊ニ、百人者謂ニ之豪ニ、十人者謂ニ之傑ニ」

【英稱】エイシヨウ　すぐれたるほまれ。後漢書、雅望傳「大人少有ニ一ニ」‖英名・英聲。

【英縱】エイシヨウ　才智すぐれてほしいまま。宋書、武帝紀「命世一ニ、蔵レ器待レ時」

【英聖】エイセイ　すぐれて事理にあきらか。又、其の人。宋明帝、皇業頌「緯繣啓ニ一ニ」‖明聖・叡聖。

【英発】エイハツ　すぐれたるほまれ。庾信文「八風迎唱、未レ足レ頌ニ其一ニ」‖英名・英聲・英稱。

【英照】エイセウ　藤花が美くしく水を照す。李建裕、詠ニ藤花一詩「遠條紫藤垂、紫英照ニ深綠一」英照皇太后の諡號は此句に本づくと伝聞す、蓋し藤原氏に因みたるならん。

【英族】エイゾク　すぐれたる家すぢ。孫顯世文「奕奕ニ一、盛德舊紀」‖名族。

【英達】エイタツ　すぐれてまさる。吳志、孫策傳、注「有ニ周瑜者、與レ策同年、亦一ニ風成」

【英斷】エイダン　おもひきって決斷する。晉書、安帝紀「忠武一ニ、誠延ニ終古ニ」‖果斷。

【英挺】エイテイ　すぐれてぬきでる。任昉文「伏惟聖武一ニ、踰不世出」

【英哲】エイテツ　すぐれてさとし。左思、魏都賦「一ニ雄豪、佐ニ命帝室ニ」‖英俊。

【英国】エイコク　すぐれたるはかりごと。北齊書、文宣帝紀「一ニ夏傑、抑ニ揚千古ニ」‖英略・雄圖。

【英特】エイトク　ひとりすぐれてぬきでる。魏收文「以ニ宿有之姿一遊ニ一ニ之氣ニ」

【英芳】エイハウ　にほひよき花。梁簡文帝文「飲ニ三芝之淳露、食ニ六氣之一ニ」

【英髪】エイハツ　すぐれたるわか者、髪は少年の髪形。王韶之詩「美哉玆土、世載ニ一ニ」‖英俊。

【英抜】エイバツ　すぐれてぬきんでる。南史、江總傳「神采一ニ、辭賦詩「先生早貴重、剛論推ニ一ニ」‖秀抜・俊抜・超抜。

【英發】エイハツ　才智がすぐれてわき生ず

る。南史、梁元帝紀「天才一ニ」

【英範】エイハン　すぐれたるのり。晉書、裴秀傳「漢ニ近世之流弊一、創ニ千齡之一ニ」

【英粟】エイリツ　すぐれたるうまれつき。黃庭堅、業浩堂銘「三子承ニ學、皆有ニ一ニ」‖英資。

【英武】エイブ　すぐれてたけし。晉書、何無忌傳贊「安城一ニ、繼ニ玆忠烈ニ」

【英風】エイフウ　すぐれたる敎化。孔稚圭、北山移文「張ニ一ニ于海甸、馳ニ妙譽于朝右ニ」

【英物】エイブツ　傑出せる人物。晉書、桓溫傳「生未レ期、溫嘗見ニ之曰、此兒有ニ奇骨ニ、可ニ試使ニ啼、及レ聞ニ其聲ニ曰、眞ニ一ニ也」

【英辯】エイベン　すぐれたる辯說。陸龜蒙詩「劉生吐ニ一ニ」

【英輔】エイホ　すぐれたる輔佐の大臣。晉書、刑法志「一ニ與賢、遊雍世周」

【英譚】エイタン　すぐれたるはかりごと。陳書、高祖紀「一ニ雄算、電赫風行」‖英圖・英略・雄謀。

【英謀】エイボウ　すぐれたるはかりごと。錢珝文「光承ニ丕構一貴擴ニ一ニ」‖英圖・英略。

【英遇】エイグウ　才智がぬきんでてすぐれる。宋史、鄧雅傳「高明一ニ、遇出ニ千古ニ」

【英名】エイメイ　すぐれたるほまれ。李紳詩「公子擅ニ一ニ」‖英聲・英稱。

【英明】エイメイ　すぐれてあきらか。‖英

達。

【英妙】エイミョウ　オのすぐれたるわかもの。潘伝賦「終童山東之一一、貫生洛陽之才子一」

【英茂】エイモ　秀でてすぐれる。晉書、裴頠傳「才德一一、足三以興二隆國胤一」＝秀茂・俊茂。

【英華】エイカ　すぐれたる人物。魏志、太祖朗二劉備一曰、天下一一、惟使君與レ操耳」

【英雄欺レ人】エイユウアザムク　英雄が策略を設けて人を欺く。李攀龍、唐詩選序「太白（李白）縱橫、往往雄豪之末、開雜二長語一、——耳」

【英傑】エイケツ　すぐれたる俊れ。＝英名・英豪・英傑。

【英朗】エイロウ　すぐれてあきらか。梁書、文學傳「觀レ時夷二其韜鞱一、視色見二其一一一」＝秀朗。

【英略】エイリャク　すぐれたるはかりごと。晉書、安帝紀「一一蓋發、忠勇絕世」＝英圖。

【英邁】エイマイ　すぐれてうるはし。陳子昂文「何雲木之一一、而池館之崇幽」

【英華】エイカ　○すぐれたる人。英華能秀の氣の鍾りて生ぜし人。隋書、李德林傳「目二送之一曰、此河朔之一一也」○すぐれたる人の靈魂。＝英魂。

【苑】㊀エン・ヲン　㊁カツ　物　厥

㊀その、かこひを設けて禽獸を畜ふ所（古、囿といひ、淡に一といふ）○草木を植うるはたけ「禁一」「宮一」「御一」「藥一」「酒一」「廢一」○物事のあつまりたる一かこひの所「文一」「藝一」○木がしげる、苑に通ず。㊁ふさがる、積もる、屈まる「一結」＝鬱（鬯部十九畫）に同じ。

【苑囿】エンユウ　鳥獸を畜ふその。史、高祖紀「諸故秦一一園池、皆令二入得レ田レ之」＝園囿・園苑。

【苑囿】エンユウ　その内のいけす。金史、太宗紀「在位十三年、宮室一一、無レ所二增益一」

【苑花】エンカ　そののはな。儲光羲詩「一一落二池水一」＝園花。

【苑樹】エンジュ　その樹木。宋之問詩「河堤柳新翠、一一花先發」

【苑沼】エンショウ　そのと、ぬまと。晉書、江逌傳「遊獵不レ以二一一一一」＝苑池。

【苑結】ウツケツ　氣がふさがる。詩、小雅「我心一一」＝鬱結。

【苛】カ　歌

○ちいさき草（小草）○こまかし（細）わづらはし、政が煩し「細一」「小一」○きびし、からし（嚴酷）「一酷」「嚴一」「殘一」「暴一」○おもし（重）「一疾」○かゆし（疥）「一瘡」○せむ（譴）せめとがめる。訶向に通ず。○ねたむ（妒）嫉妬をいふ。○みだる。みだす（擾）さわがす。周語「一我邊鄙」○いかる（怒）

【苛殃】カオウ　きびしきわざはひ。元倉子「因無不レ入レ身、無二一一一」

【苛役】カエキ　くるしきえだち。周楙詩「猶傳鬼神風雨夕、知是當時苦二一一一」

【苛急】カキュウ　きびしくからし。宋史、王嗣宗傳「爲レ政一一、盜賊皆起」＝刻急・嚴急。

【苛禁】カキン　きびしきいましめ、むごき禁制。漢書、宣帝紀「今郡國二千石、或擅爲二一一一」

【苛慝】カトク　くるしめしへたぐ。禮記、注「言君不二一一一、臣無二姦心一、則刑可二以措一矣」＝苛酷。

【苛求】カキュウ　きびしくもとめる。

【苛厳】カゲン　甚だやかましくきびし。宋史、劉摯傳「御レ下一一少二縱舍一、好面二折人短一、以レ故多數二譴怒一」

【苛刻】カコク　むごたらし。漢書、成帝紀「毋レ行二一一一」

【苛酷】カコク　きびしくむごし。後漢書、王常傳「政令一一、穡失二百姓之心一」＝苛刻・殘酷。

【苛細】カサイ　くだくだしくこまか。後漢書、宣秉傳「擧二大綱一、簡二略一一、百僚敬之」＝煩苛・苛碎。

【苛碎】カサイ　きびしくくだし。晉書、文帝紀「蠲二除一一一不レ奪二農時一」＝苛細・煩瑣。

【苛察】カサツ　きびしく人のをちどをしらべる。莊子「君子不レ爲二一一一」

【苛慘】カサン　むごくそこなふ。後漢書、袁紹傳「亂政一一、科防互設」與志、孫權傳「性一一、用レ法深刻」

【苛忮】カシ　きびしくしてそこなふ。晉子「主者人之所二仰而生一也、能寬裕純厚而不二一一一、則民人附」

【苛疾】カシツ　おもきやまひ。＝重病。素問「一一不レ生」＝重病。

【苛征】カセイ　きびしきとりたて、征は徴稅。＝苛稅。

【苛政】カセイ　きびしきまつりごと、煩苛なる政令。禮、檀弓「一一猛二於虎一也」

【苛稅】カゼイ　からきとりたて。＝苛征。

【苛性加里】カセイカリ　白色の結晶物、水酸化カルウム。

【苛責】カセキ　むごくせめる。

【苛擾】カジョウ　わづらはしくみだる。宋史、齊傑傳「惊居鄉里、恂恂稱二君子一、臨二政府一、明白簡約、不二一一一所レ至人愛レ之」

【苛切】カセツ　甚だきびし。後漢書、章帝紀「帝素知二人賦一明帝一一、事從二寬厚一」

【苛重】カジュウ　きびしくおもし。唐書、敬

取ㇾ一」
【苛虐】カギャク　からし。唐書、循吏傳序「猶二廢酷吏一懲二無良一羣臣化ㇾ之、革二一一一之風一」
【苛斂】カレン　きびしくあらし。漢書、帝紀「惟一一吏、多拘二繫犯ㇾ法者一」‖誅暴。
【苛法】カハフ　わづらはしきおきて。史、高祖紀「父老苦二秦一一久矣」
【苛煩】カハン　むごくわづらはし。古雍門太守行「敎吏正ㇾ獄、不ㇾ得二一一一」
【苛評】カヒヤウ　むごき批評。劉克莊文「訐於評而濫二於敎一」‖酷評。
【苛濫】カラン　きびしくみだら。文化雕龍「銓評昭鑒、一一不ㇾ作矣」
【苛吏】カリ　むごくきびしき役人。漢書、魏賞傳「一一縱役、失二農桑時一」‖酷吏。
【苛酷】カコク　きびしく人を引きとどむる。淳書、成帝紀「勿二一一一」
【苛令】カレイ　きびしきいひつけ。厳酷なる政令。‖苛法・酷法。
【苛厲】カレイ　むごくはげし。晉書、文帝紀「武選二寬廣一、一一不ㇾ作」
【苛禮】カレイ　くだくだしき儀式。史、鄭食其傳「皆掃二儀狄一、一一、自用不ㇾ能ㇾ聽二大度之言一」

【茄】カ　麻

○なす、なすび、野菜の一、夏秋のころ卵形濃紫色の實を結ぶ。本草「一一名落蘇」‖茄子。○はすのくき（荷莖）爾雅「荷、芙蕖、其莖一」○はちす、荷に通ず。

【甘】カン　覃

かんざう（甘草）藥用とす。一名靈通。王十朋詩「閒庭勝」蔣「一」

【苣】キ　薺

○たいまつ、苣を束ねて燒くもの。後漢書、皇甫規傳「東一乘城」‖炬。○葛一ツ　はちさな。
【苣藤】シヨウ　胡麻の異名。曾唐詩「喫盡滄頭一一花」

【苦】㊀コ・ク　㊁コ　遇　虞

㊀にがな（苦菜）一名は茶。○藥草の名。‖大苦。○にがし。又、にがきあぢ「鹹一」甘の對。○くるしむ、事の耐へ難きもの。○つとむ（勤）せまる（急）まづし（貧）「貧一」○ねんごろ、深切「一諫」杜甫詩「不用憑ㇾ欄一囘首」○なやます。○うれふ（患）○くるしみ、くるしむこと「艱一」「辛一」「窮一」「困一」○こころよし（快）○いたむ（悼）○あらし、もろし、器がもろく損じ易し。‖楛。○月の色がさえきる。李華、弔古戰場文「月色一兮霜白」㊁くるしむ（困）○一船は俗語、船にゑふ。

類語対照 苦・愁・愍・勤・丁寧・歎の別は愁（七〇二頁一段）の條を見よ。

【苦雨】クウ　ながあめ。人の患苦する所なるが故。左、昭四「春無二愆風一、秋無二一一一」‖霖雨・淫雨・淫霖。
【苦役】クエキ　くるしきしごと。史、楚世家「國人一一」
【苦悩】クナウ　心をくるしむ。白居易詩「君是旅人猶一レ一」‖苦心。
【苦河】クカ　苦海に同じ。法苑珠林「少習二周孔之文典一、晩慕二黃老之玄言一、俱是未ㇾ越二一一一

光藻、性惑レ苦、曹作レ詩、以レ茗爲二——一」

【苦困】クコン　くるしむ。くるしみ。李陵詩「遠處二天一隅一、一獨零丁」‖困苦。

【苦恨】クコン　くるしみうらむ。杜甫詩「狼藉——葉霜氣、涼侵新亭濁酒杯」

【苦楽】クガク　にがな。暦、月令「孟夏之月、——秀」

【苦草】クサウ　ていれぎの一名、芹に似て辛き草。齊民要術「蔵欲」早——先生」注「苦歴也」

【苦評】クヒヤウ　きびしくいさめあらそふ。唐書、崔玄亮傳「——、反覆數百言、俯伏流涕、帝感悟」‖苦諫。

【苦死】クシ　くるしみてしぬ。

【苦健】クケン　むごくつかふ。‖虐使。

【苦心】クシン　心をくるしめる。淮南子「以二知慮一爲レ治者、一レ一而無レ功」‖苦慮。

【苦辛】クシン　〇くるしむ。くるしみ。杜甫詩「與レ子俱白頭、役役常——」‖辛苦。〇にがくからき一種の草の名。山海經「陽華之山、其草多二——一」注「——可二以已一レ癘」

【苦身】クシン　みをくるしめる。列子「苦二其身一、焦二其心一」

【苦参】クシン　多年生草の一、山野に自生す、葉は羽狀複葉にして互生す、夏、黄花を開き、長穂を成す、細長の莢を結ぶ、小豆の如し、根を薬用とす、疝痛を治す。

【苦情】クジヤウ　圖不平を言ひたてる。

【苦譲】クジヤウ　ねんごろにゆづる。北史、薛聰傳「帝欲三進以二名位一、輒——不レ受」

【苦酒】クシユ　醋、醋酒、ビール。

【苦蓼】クリヤウ　にがな。蜀照詩「鳧雛掇二——一、黄鳥衛二櫻梅一」

【苦笑】クセウ　にがわらひ。

【苦節】クセツ　逆境に在りて節義を守る（易、備卦）

【苦戦】クセン　くるしみたたかふ。苦しき戰。李白詩「——竟不レ侯、當年顏憫恩」

【苦楚】クソ　くるしみ。杜荀鶴詩「獨共寒酸客、對坐——吟」宋寒詩「十年——得失裏、醉醒夢覺今超然」‖苦痛。

【苦帶】クタイ　にがきへたの古詩「甘瓜抱二——一」

【苦桃】クタウ　にがもも。東方朝文「斬二伐楯柚一分、列二樹——一」注「——惡木」

【苦竹】クチク　まだけ。孟浩然詩「歳月書松老、風霜——疎」

【苦茶】クチヤ　にがきちゃ。爾雅、注「今呼二早采者一爲レ茶、晩取者爲レ荈、一名蔎、蜀名之——」‖苦茗。

【苦衷】クチユウ　心中のくるしみ、心のせつなさ。

【苦中作レ楽】クチユウノガクヲナス　苦の中に樂あるの意。大寶積經「心如レ春レ鋤、苦中作二樂想一故」

【苦痛】クツウ　くるしみ。韓非、解老、「——雖二於腸胃之間一」‖痛苦・苦楚。

【苦酣】クカン　にがきと、あまきと。韓愈、苦寒詩「草木不二復抽一百味失二——一」‖苦甘。

【苦土】クド　白色の粉末マグネシウム。

【苦茶】クチヤ　〇にがな。詩、邶風「誰謂二荼苦一、其甘如レ薺」〇茶をいふ（茶經）‖槚。

【苦登】クトウ　くるしみてのぼる。元稹詩「魚貫終何益、龍門在二——一」

【苦悩】クノウ　くるしみたたかふ。くるしきたたかひ。隋書、陳棱傳「——不レ息」

【苦辱】クジヨク　くるしみなんぎ。魏志、涼茂傳「譬公愛二國家之危敗一、憫二百姓之一一、率二義兵一、爲二天下一誅二殘賊一」‖辛苦・苦難。

【苦悩】クノウ　くるしみなやむ。法華經「老死愛悲——」‖悩惱。

【苦肉之計】クニクノケイ　圖己の身をくるしめて、敵をあざむくはかりごと。

【苦然】クネン　くるしきあつさ。白居易詩「不レ堪二——一」

【苦悩】クノウ　ひさご。國語「叔魚曰、——不材、於レ人共濟而已」

【苦梨】クリ　きはだ。李賀詩「頭上無二幅巾一、——已染レ衣」

【苦味】クミ　にがきあぢはひ。

【苦味丁幾】クミテイキ　藥品の名、橙皮・龍腦・酒精等を以て製す、多く健胃劑として用ふ。

【苦苓】クレイ　にがき茶。‖苦荼。

【苦悶】クモン　くるしみもだえる。

【苦窳】クユ　厳惡にしてもろし、窳はいびつ、ゆがむ。陶器の焼け損じたるにいふ。史、五帝紀「陶二河濱一、河濱器皆不二——一」

【苦労】クラウ　〇くるしみつかれる。莊子「苦レ心勞レ形、以危二其眞一」‖勞苦。〇しんぱい（心配）

【苦楽】クラク　くるしみと、たのしみと。史、趙世家「臣聞句踐食不レ重レ味、與二百姓一同二——一、此人不レ死、必爲二國患一」‖憂樂。

【苦楽之境】クラクノサカヒ　苦と樂とのさかひ。溫子昇、定國寺碑「竝馳二于——、皆入於生死之門一」

【苦李】クリ　にがみあるすもも。晉書、王戎傳「樹在二道邊一、而多レ子、必——也」

【苦慮】クリヨ　しんぱい。范泰詩「郭髮飄二悴容一、——悽二便抱一」‖苦心。

【苦力】クリク　〇くるしみつとむ。江淹文「安能精竭——、求二身後之名一哉」〇クーリー支那音、支那の下等の勞動者。

【苦涙】クルイ　思ひわづらひて出づるなみだ。庾肩吾詩「思レ君一歎息、——應レ有垂」

【苦楝】クレン　あふちの木。何夢桂詩「風吹二——一葉二輕寒一」

【苔車】タイシャ 車にあふ。次條參看。
【苔船】タイセン ふねにあふ。西漢叢語「今人不レ善レ乘レ船、謂二之一一一猶二北人謂二之苔車一一」＝雇船。
【苔良】タイリョウ あしきと、よきと。轟惡なると精良なると。周禮、考工記「辨二其一一一」＝功否。

【苫】 コ 虞

まこも、一名菰胡。＝菰。
【苫米】コマイ まこもの實、古、六穀の一。＝菰米。

【苟】 コウ 有

○かりそめ、ちょつと、まにあはせ、いささか（聊）論、子路「一合矣」○まことに（誠）論、里仁「一志於仁矣」○ただ（但）もし（若）○かりそめにも、いやしくも。

同音異義 苟・信・眞・誠・固・實・允・良・諒・倘の別は信（三七頁二段）の條を見よ。

【苟安】コウアン 一時の安をむさぼる。後漢書、西羌傳「朝議欲二兵力之損一、情存二一一一」＝偸安。苟且偸安。
【苟合】コウゴウ ○みだりに他人の氣に合ふやうにする。史、孟子荀卿傳「此豈有レ意下阿二世俗一一、而已哉」＝苟同。○いささか聚り合ふ。荀完を見よ。
【苟免】コウメン ○一時逃をまぬかれて得意てゐる。論、爲政「民免而無レ恥」に出づ。後漢書、法防傳「多、則一一之行興」○己の務すべき務を忘りて恥と思はず。曲禮「臨レ難毋二一一」
【苟且】コウショ かりそめに、なほざり。漢書、賈誼傳「品式備具、上下相安、莫レ有二一一之意一也」
【苟全】コウゼン かりそめに生命を全くする。諸葛亮、出師表「一二性命於亂世一」
【苟存】コウソン 一時の安をぬすみていきながらへる。晉書、劉毅傳「志」嫉二愚思一、頓然一一」
【苟同】コウドウ かりそめに他人の說に同意する。韓詩外傳「儉合一一、以持レ祿養レ交、是謂二國賊一也」＝苟合。
【苟偸】コウトウ 一時の安をぬすむ。宋史、魏了翁傳「風俗一一、邊備脆弛」
【苟得】コウトク 當然に得べからざる者を得る義。曲禮「臨レ財毋二一一」
【苟容】コウヨウ いささかまつたし。論、子路「子謂二衛公子荊一善居レ室、始有、日、苟合矣、少有日、一一矣、富有日、苟美矣」
【苟官】コウカン かりそめなることばの後漢書、郎顗傳「有下違二臣言一者、苟當レ愛二一一之罪一」
【苟進】コウシン かりそめに進みて利祿を求める。楚辭「或偸合而一一兮、或隱居而逕窮」

【苴】 サ 麻

○草木が初めてめぐむ、草の初めて生ずる貌。詩、召南「彼一一者蒭」○めばえ（萌芽）○動物の生長する貌。孟、萬章「牛羊一一北長而已矣」
【苴出】サシュツ 草のはじめて生ずる貌。蔡邕、釋誨「一一青蒲等」

【苑】 ㊀シ ㊁サイ 紙

㊀むらさきさう、野草の一種、葉は細長く互生し、根は綠紫色にして紫色の染料とす。○はじかみ、しやうが。○一蔵は、のうぜんかづら。蔓生にして葉互生、花五瓣漏斗狀赤色、夏秋の交に開く。＝紫蘇。凌霄花。㊁一胡は藥草の名、山中に自生す、其の根を柴胡といふ。

【若】 ㊀ジャク・ニャク ㊁ジャ・ニャ 藥 馬

㊀もし、もしくは、爲一、假定の辭。○ごとし（如）孟、離婁「一合符節」○かくの如し。論、公冶長「君子哉一人」○すなはち（乃）○したがふ（順）孟、萬章「蓉腹亦九一」○なんぢ（汝・爾）史、項羽紀「一不レ趣降漢、漢今廢一」○一一は物のたれ下れる貌。○わたつみ、海の神「海一」莊、秋水「向一而嘆」○形容詞の下に添へる助字、如に同じ「顓一」「自一」○しく（如）禮記、師說「彼與彼年相一也」○水の名。○赤蕪一は十二支の丑の異名。○杜一は香草やぶめうが（俗にかきつばたに宛つるは誤）㊁かわける草。○梵語の音譯、般一は智慧の義。又、蘭一は寺。○

同音異義 若・如・猶・由○若は如と通用すれども、寧輕し。○如は同也と註す、やうなと譯す「君子之

交、淡如レ水」は、君子の交の淡きことは、水のやうなといふ義なり。又、似也と註す、不レ如とよむときは、似ざるなり「不レ如二丘之好一學也」の如し。○猶はなほ何の如しと、かへりて訓む字にて、似也と註す、譬を引きて、大抵これと似よりたりとの意なり「譬猶下居二高屋一之上一建中流水上也」の如し、猶如二字を連用する例もあり「其猶二建成一課猶如レ此、況庸人乎」の如し。○由は猶と皆義ともに通ず。孟子「民之歸レ之、由二水之就一レ下、沛然誰能禦レ之」

○【若】ジャク 汝・女・爾・乃・而の別は汝（一〇四九頁四段）の條を見よ。

○【若】ジャク 如・設・設若・設使・縱・脫・或○若は、もしくはと訓むときは、或と同義なり、若くは何、若くは何といふときは接續詞となる、もしと訓むときは、如に同じ。孟子「若夫成功則天也」○如は若に同じ、假設之辭、或は未定之辭などと註す、無き事を設けて、是の如きことが、假にありとせばの義。論語「如有二王者一必世而後仁」○設は假設之辭と註す、柳文「設有下不幸王以二桐葉一封上弟者中亦將二聚而從一之乎」とあるが如し。○設若・設使と二字連用すれば、もしとも、たとへともと訓む、設と、略、同義なり。○儻は、ふとさうなればなり、或然之辭と註す、俗語に萬一といふが如し、倘は儻に同じ、俗語に多く用ふ。○或は、あるひはとも、もしくはとも、あらばとも課す、迷也、疑也とも、未必之辭とも註す、どちらともきまらぬ辭なり。易繫「或出或處」

【若爲】ジャクイ いかほど（幾許）そこばく。演繁露「一一猶レ言二幾何一也」□若干。○【若干】ジャクカン いかほど（幾許）そこばく、定まらざる數、千は一十に從ふ、一の如く十の如しの意。墨子、天志「攻二國殺一レ軍、殺二將一一人」□如干・若箇。

【若箇】コジャク いかほど、そこばく。演繁露「一一猶レ言二幾何一也」□若干。○いづれ、沈佺期詩「京華一一遊」

【若曹】ジャクソウ なんぢら。楚國先賢傳「一一敬聽二吾言一」□若輩。

【若而人】ジャクジン 某某といふ意。左、襄十二「夫婦所レ生一一、妾婦之子一一」

【若若】ジャクジャク 長く垂れ下がれる貌。漢書、石顯傳「印何晏晏・綬一一耶」

【若惟】ジャクイ ○なんぢら。宋史、伊尹傳「不レ可レ屈二一一一、必當二從レ吾死一」□若曹。○國おかもの、青年。□弱冠。

【若父】ジャクフ なんぢのちち（史、伍子胥傳）

【若木】ジャクボク 古、日の入る處をいふ（山海經）李白詩「四海救二一一一、東溟植二扶桑一」

【若邪】ジャクヤ 山の名、漢の武帝、東越を擊ちし時、兵を分ちて此に出づ、浙江省紹興縣の南に在り、下に溪あり、一一溪といふ、卽ち西施が紗を晒ひし處（會稽志）□若耶。

【若櫧】ジャクショ 果木の名。廣雅「一一、石櫧也」□若留。

【若何】ジャクカ どのやうに、いかほど。左傳「秦伯謂二子桑一曰、一一而戰」□奈何。

【苴】

㊀シ・ソ 魚 ㊁サ 麻

㊀しく（藉）履の中に草をしく。又、其の草。漢書、賈誼傳「冠雖レ敝不レ以一履」○つつむ（包）○つつみ、つと「苞一」○實のあるあさ（子麻）○色黯ロク也」○巴一は芭蕉。㊁かる（枯）○草木の枯れ落ちて水上に漂ふもの。○水中に浮く枯草。㊂土一は肥料にするあくた（糞草）莊、讓王「其土一以治天下」○おぎなふ。韓愈、進學解「補一闕漏」

【苴杖】ソジョウ 喪中に用ふる黒き色の竹のつゑ。禮、喪服小記「一一竹也」淮南子「衰絰一一、哭踊有レ節、所二以飾一哀也」

【苴絰】ソキョウ 喪の時首と腰とにつける麻、實のある麻にてつくる（儀禮、喪服傳）

【苴布】ソフ あさにておりし布。莊、讓王「一一之衣、而自飯レ牛」

【苴麻】ソマ 實を生ずる麻。夢溪筆談「有レ實謂二一一一、無レ實謂レ枲」

【苦】

㊀ク 虞 ㊁コ 姥

○とま、菅茅などにて編みし席。家や舟の屋根を覆ふに用ふ。○こも、とまむしろの敷物、忌中に喪主の敷きて寢るもの。儀禮、喪服傳「居倚廬、寢一レ○覆ふ、草にて屋を葺ふ。

【苫】

セン 先

莞に似たる一種の草、編みて席とす「一席」

【苒】

ゼン 琰

○草の盛んに茂る貌。○荏一ニン一ゼンは時ののびのびになる貌。□荏苒・侵尋。

【苒荏】ゼンジン ○次第に同じ。○遷延の親の喪に陳情文「時去一一」

【苒苒】ゼンゼン 草の盛んに茂る貌。陳琳詩「因レ風初一一、襲レ岸欲二離離一」□苒荏。

【苔】

タイ 灰

こけ（蘚）木石又濕地の面に生ずる微細なる下等植物の總稱

「青ー」「綠ー」「碧ー」「ー蘚」「海ー」

【苔衣】タイ　こけの總稱。本草「ーー之類有レ五（中略）在レ牆曰二垣衣一、在レ地曰二地衣一」

【苔蘚】タイ　こけのむしろ。顧況詩「蘚古布二ーー一」

【苔蓮】タイ　こけのむしろ。

【苔階】タイ　こけむしたるきざはし。梁簡文帝詩「ー一沒二故基一」

【苔磯】タイ　こけむしたるいそ。趙嘏詩「宅邊秋水漫二ーー一、日日持レ竿去不レ歸」

【苔花】タイ　こけのはな。李山甫詩「ー一千點濕二松陰一」

【苔徑】タイ　こけむせるこみち。風綸詩「ーー綠無レ廣」

【苔磯】タイ　こけむしたるいしぶみ。宋凍詩「ーー猶堪レ剔」

【苔痕】コン　こけのあと。劉禹錫、贈二僧室銘一「ーー上レ階綠、草色入レ簾青」

【苔紙】タイ　水苔にて製せし紙。負暄雜錄「ーー以二水苔一爲レ之、名二側理紙一、隋薛道衡有二ーー詩一」

【苔鬚】タイ　こけむしたるしきがはら。權德輿詩「ーー銅花落、山窗桂樹薰」

【苔岑】タイ　同志の友をいふ。郭璞、贈二温嶠一詩「人亦有レ言、松竹有レ林、及レ爾臭味、異レ苔同レ岑」とあるに本づく。

【苔髭】タイ　ひげの如く長きこけ。范成大、梅譜「又有二ーー一垂二于枝間一」

【苔色】タイショク　こけのいろ。王維詩「坐看蒼ーー、欲レ上二人衣一來」

【苔砌】タイ　こけむしたるいしだたみ。冷朝陽詩「秋色生二ーー一、泉聲入二梵宮一」

【苔泉】センイ　こけむしたるいづみ。宋之問詩「夜絃春二松月一、朝楫弄二ーー一」

【苔箋】タイ　苔紙を以て小箋となしたるもの。國史補「紙則有二蹟之剡藤一、蜀之麻子十色箋一」

【苔錢】タイ　ぜにの形したるこけ。劉孝威詩「素琴點二ーー一」

【苔蘚】タイ　こけ。呉芳遠「雲庭幽室陰將無二人行一、則生二ーー一」ニ蘚苔。

【苔磴】タイ　こけむしたるいしだん。孟浩然詩「釣磯平可レ坐、ーー滑難レ步」

【苔梅】タイ　梅の根幹にこけの著きたるもの。乾淳起居注「ーー有二二種一、宜興張公洞者、苔蘚甚厚、花極香、一種出二越土一、苔如二線縷一、長尺餘」

【苔蔚】タイ　こけむしたるいしぶみ。張正見詩「山雨濕二ーー一」

【苧】チョ　圖　通じて紵に作る

○からむし、麻の一種、葉は楮に似て裏白く、高四五尺に至る、皮の纖維を絲につむぐ、まを「桑ー」「麻ー」○圖を、麻又はからむしの皮の纖維をより合せて絲・繩に製するもの。

【苧蘿】ラ　山名、浙江省諸暨縣の南五里に在り、西施の居りし所、下は浣江に臨む、江中に浣紗石あり、西施紗を此に浣ふ。ニ李白。

【苔】タン　圖

○のるんどう、野生の豌豆。○ーは高き貌。張衡賦「狀亭亭以ーー」○のうぜんかづら。詩、小雅「ーー之華、芸其黄矣」ニ陸璣、紫葳・凌霄花。○菜莖ハナヂ取りて羹ニスと爲す「ーー帯」

【苔溪】ケイ　水の名、一名苔水、東苔・西苔の二源あり。呉興縣城中に至り、兩溪合して一となり、太湖に入る、岸を夾みて苔花ハナ多し、秋時水上に飄散すること飛雪の如しといふ。

【苔苔】タウ　高き貌。水經、注「虎牢臨レ河ーー孤上」

【茶】デツ　屑

○疲レツルる貌「衰ー」○わする（忘）

【茶然】ゼン　つかれる貌。一說に、忘れる貌。莊、齊物「ーー疲役而不レ知二其所レ歸一」

【苓】トウ　多

○苣ーは冬生ずる一種の草。○圖ふき、宿根野草の一、食用とす。ニ蘇頌冬。

【苺】バイ　賄

○くさいちご（覆盆草）○蛇ーニビは覆盆草に似て毒あり。

【苞】ハウ　肴

○つと、つつみ、つつむ（包）「一苴」○もと（本）木の根。○あぶらがや、莖、堅韌にして履を織るべし、卽ち今の蔺草「ー一茅」○むらがる、しげる。○草木が叢リ生ずる。○圖わらにて包みしもの、轉じてみやげ、みやげもの「家ー」

【苞苴】ショ　しげりたるいばら詩經「薪薪楚斯、集二于ーー一」

【苞苴】ショ　つつむ。莊子「充二滿天地一、ーー六極一」

【苞桑】サウ　桑の木の根、苞は本。易、否卦「其亡其亡、繫二于ーー一」ニ堅にて根本の牢固なる義とす。

【苞苴】ショ　○おくりもの、苞はつと、苴はわらを下にしく。曲禮「凡以二弔一ーー一束帛一、問レ人者」○轉じて、賄賂の義とす。說苑、君道「ーー行乎、宮室營乎、女謁盛乎」

【苗蟲】ビョウ 稻を害する蟲の名、蝶類の幼蟲、長さ寸餘、體の色は淡綠、老ゆれば雜色に變ず、頭は大に頸は細く、白絲を吐き稻葉を捲合して其の中に潛居し、夜出でて稻葉を蝕む。

【苗天】ビョウ 天をつつむ。蟲の大いなるにいふ。莊子「陸下以ニ一一之大一治二海内一」

【苗裔】ビョウ 多くのものをつつみひっくるめる、罹は網。柳宗元、陸先生墓表「一一勞能」勞能は勞績。

【茅】 バウ 肴

○かや、ちがや(菅)「菅一」「叢一」白一・黄一・青一・蒼一の數種あり、白一は屋根を葺き、黄一は索になひ、青一は染料となし、蒼一は祭の時に酒を縮むに用ふ。○國ちがや、山野に自生する宿根草の一、高三四尺、すすきの如く叢生し、夏、白きわたある穗を出す。

【茅庵】バウ かやぶきのいほり。五代史、馮道傳「爲二一一一一所一設林廂一」ロ茅廬。

【茅舖】バウ かやのまど。晉槁文「蓬戸一一、原憲之宅也、閭巷蓬蒿、顏子之居也」

【茅簷】バウ かやぶきやねののき。張繼詩「一一日午雞鳴」ロ前檐。

【茅屋】バウ ○かやぶきの家。左、桓二「湫隘一一、大路越席」宋書、裴松之傳「起ニ一一一數間一妻子恒苦二饑寒一」○己の家の謙稱。王維詩「終南有ニ一一一、前對二終南山一」ロ茅舍。

【茅茨】バウシ 茅茨を刈り除く。屋根、卜居「寧誅二草茅一以力耕乎」杜甫歌「侍レ江神樹興堂前、故老相傳二百年、一一一、居總舊レ此、五月梅熟開二寒蕚一」

【茅花】バウ つばな。本草「一一氣味甘溫無レ毒」ロ茅針。

【茅軒】バウ かやぶきののき。又、其の家。周朴詩「松店一一向レ水開」ロ茅舍。

【茅坤】バウ 字は順甫、歸安の人、嘉靖十七年の進士、古文を善くし、居宋八家文鈔を撰し、世に行はる、又好んで兵を談ず、神宗の萬曆二十九年卒す。

【茅柴】バウ にごりざけ、うすき薄酒、一一は燃えても直ちに消ゆ、以て薄酒の醒め易きに喩ふ。陸游詩「僧レ飲ニ一一一謂二苦硬一」

【茅齋】バウ かやぶきのへや。齊書、劉善明傳「質素不レ好二華色一、所居一一祭末而已」

【茅紙】バウ ちりがみ。

【茅鴟】バウ ○ふくろふの一種。爾雅「一一、怪鴟」注「似レ鷹而白」○古の逸詩ナルシの名、無禮の者を刺りしもの。左傳「使三工爲レ之誦ニ一一一」

【茅蓴】バウ あかぞめのくさ。爾雅「茹一一」あかね(茜草)

【茅夷不レ剪】バウイ ふきたる屋根のかやを切りそろへず、富殿の粗末なるにいふ。漢書、司馬遷傳「堂高三尺、土增三等、一一、采椽不レ斵」

【茅室】バウ かやぶきやねの粗末なるいへ。後漢書、班固傳「客二居杜陵一、一一土階」南史、孔惇之傳「一一蓬戸、庭草蕪穢、惟牀上有二數帙書一」ロ茅宇。

【茅針】バウ つばな。本草「一一、茅初生苗也、氣味甘平無レ毒」

【茅舍】バウ ○かやぶきのいへ。晉志、秦必傳「隱レ疾臥在ニ一一一」○己の家の謙稱。ロ茅屋。

【茅社】バウ かやにて社をいふ。茅土參看。

【茅縮】バウ かやにて酒をしたむ。蘇軾詩「社酒劇ニ一一一」

【茅茹】バウ 茹は茅の根の相ひきつらなれる貌、君子の相ひき連りて朝に立つにいふ、同類相牽引する義。易、泰卦「拔レ茅連レ茹」

【茅旌】セイ かやを以て旌ハタと爲すもの。祭祀に之を執りて神を導く。公羊傳、鄭伯肉袒、左執ニ一一、右執ニ鬯刀一、以逆ニ犂子一」

【茅編】バウ かやを束ねて之を列ね、以て位次を表する者ノ音語「楚爲ニ荊蠻一、置ニ一一一」

【茅塞】バウ 欲の爲めに心がおほはる。孟、盡心「一一二子之心一矣」

【茅宇】バウ かやぶきのいへ。温庭筠詩「一一對二蒼蘚一爐煖一裘輕」

【茅綯】バウ かやにてなひたるなは。神仙傳「以ニ一一一縣レ之」

【茅蜩】バウ ひぐらし、蜂の一種、秋の末、旦暮に鳴く「爾雅」

【茅店】バウ かやぶき屋根のみせ、おなかの茶店。温庭筠、商山早行詩「雞聲ニ一一月、人跡板橋霜」

【茅土】バウ 諸侯を封ずるにいふ、擧の時、天子諸侯を封ずるに、其の方色(東は青、西は白、南は赤、北は黒、中央は黄)の土を白茅に包みて賜ひしに本づく。蔡邕、獨斷「天子大社以ニ所レ封之方色一、苴以ニ白茅一授レ之、使三之歸レ國以立ニ社一、謂二之茅社一」李陵、答二蘇武一書「足下當レ拜ニ一一之薦一、愛乎千乘之賞上」

【茅堵】バウ あなかや、かやぶきのかやねにてとりまきし家。

【茅棟】バウ かやぶきのむね。杜甫詩「一一蓋ニ一牀一、清池有ニ餘花一」

【茅葺】バウ しげれるかや。柳宗元、始得二西山一宴遊記「斫ニ榛莽一、焚ニ一一一」

【茅蒲】バウ 竹の皮にて作りたる筵。蒲夫の兩具ノ齊語「首戴ニ一一一、身衣ニ雚蒯一」ロ蒲團・蓐笠。

【茅門】バウ 門の名。說苑「立ニ於一一之内一」

【茅栗】バウ しばぐり。本草「一一似ニ板栗一而細、其樹雖レ小、然葉與レ栗不

レ殊」【字彙】バウ かやぶきやねのいほり。張九齢詩「亂生堆裏結ニ一一一已共ニ紅塵一遠斷絶」‖茅廬。【字彙門】モウロ茅坤を見よ。

【茆】 バウ 肴

○ぬなは、じゅんさい（蓴菜）氷草の一、莖は細長く、葉は楕圓形、水上に浮ぶ嫩芽を食用とす。詩、魯頌「薄采其ニ一」‖鳧葵。○かや。‖茅。

【茨】 ㊀バッ ㊁ハイ 泰 曷

㊀草の根。○やどる、とまる（舍）【路旅】する。詩、召南「召伯所ニ一」○こゆ「一渉」跋に通ず。㊁のうぜんかづら（苕）の白き華のもの。

【茨舍】ボク のじゅくする。草中に止舍する義。周禮、夏官、大司馬「仲夏教ニ一一」‖草舍・露宿。

【茱】 バツ マチ 曷 通音 マツ

ー莉リツは暖地に生ずる常緑灌木の名、もと波斯より支那に移植す、夏時、枝端に五瓣の白花を著く、香氣愛すべし、素馨の一種。戴復古詩「香薫 莉秣」‖末利。

【范】 ハン 豏

○はち（蜂）禮、官号「一則冠而蟬有緌」○いがた（詩器）のり「矩ー」「軌ー」古、範に通ず。○人の姓「一增」「一仲淹」

【范曄】ハン 字は蔚宗、劉宋の順陽の人、博學にして文を善くす、文帝の元嘉二十二年反を謀りて誅に伏す、年四十八、著はす所、後漢書九十巻あり。

【范成大】セイ 字は正能、石湖と號す、宋の吳縣の人、紹興二十四年の進士、文を善くし、尤も詩に工なり、紹熙四年卒す、年六十八、著すところ石湖集・吳船録あり。

【范丹】タン 後漢の高士。後漢書列傳七十一に范丹字は史雲、好んで時に違ひ俗を絶ち、漫遊の行を爲す、桓帝の時、莱蕪の長と爲る、母の憂に遭ひ、官に到らず、世を遁れ、籠事を推し、妻子を棄せ、拾拾して自ら養ふ、或は客廬に寓息し、或は樹陰に依宿す、此の如きこと十餘年、乃ち草室を結びて居る、時ありて粒を絶つ、箕居自若たり、閭里之を歌ひて曰ふ「甑中生レ塵范史雲、釜中生レ魚范莱蕪」と。

【范增】ゾウ 項羽の謀臣、居巢の人、年七十、羽を輔け、諸侯に「霸」たらしむ、羽之を用ふることを終へず、増憤りて仕を辭し、直、胥に發して死す、縣賦に范増論あり、文章軌範に出づ。

【范仲淹】チュウエン 字は希文、宋の吳縣の人、大中祥符の間、進士に及第し、慨然として當世に志あり、嘗て曰く、士は當に天下の憂に先ちて憂ひ、天下の樂に後れて樂むべしと、仁宗の時、右司諫となり、時政を極論す、數州に歴任し、至る所、惠政あり、龍圖學士を以て延州に知たり、西賊憚れ服す。召されて樞密副使に拜し、參知政事に進む、未だ施す所を竟へず、皇祐四年卒す、文正と謚す。

【范鎛】ハク かねをとかして、いがたに入れる。唐書、百官志「少府監掌ニ冶署一、學ニ一金銀銅鐵一」

【范蠡】レイ 春秋の楚の人、越王勾踐を佐けて、呉を滅し、會稽の恥を雪ぐ、爲もなく相を辭し、徒屬と共に齊に入り、鴟夷子皮と變名し、又、陶に居りて陶朱公と稱し、巨萬の富を致す。

【茫】 ボウ 陽

○かっぱし、かをり。かをる（薫香）「芬ー」「芳ー」大戴禮「與君子遊、ー乎入ニ芝蘭之室一」○ー洋ヤウは比丘、卽ち僧侶、もと印度の草の名、柔かにして風の吹くままになびく、因りて物に拘らざる出家に比す。釋氏要覽「ー洋西天草名、具ニ五德一、故將喩ニ出家人一」

【茫茫】ボウボウ かっぱしき貌。詩、大雅「ー一芬芬」‖芬芬。

【芬芬】フンフン かっぱし。詩經「ー一孝客」

【芬烈】フンレツ 香氣の盛んなる貌。司馬相如賦「庵曖ー一」

【芬芬】フンフン 衆多なる貌。陽華、太玄經「人ー一面ニ乎中一」

【莨】 ロウ 陽

○たけのかは（竹膚）○おほし、衆多の貌。

【荇】 ㊀フッ ㊁ホッ 月 物

㊀草が深くしげる。○ふさがる（塞）國語「道ー不ニ可一行也」○をさむ（治）草を刈りとる。詩、大雅「ー一厥豐草」○さいはひ（幸福）○つよくさかんなり

【茘】

（強盛）○婦人のくびかざり（首飾）かんざしの類。易、既濟「婦喪二其ー一」○婦人用の車の前後の障にて自ら蔽ひ隠すもの。一説に車の後の戸。詩、衛風「翟ー以朝」○ひつぎなは、柩を引くもの。左、宣八「用二葛ー一」縅に通ず。㊁ー然はいきをする貌。莊、人間世「歐死不レ択レ音、氣息ー然」

【蒲茸】フジョウ ○強く盛んなる貌。詩、小雅「臨衝ー一」臨衝は兵車。○草の茂る貌。

【蒲綠】フロク さいはひ。詩、大雅「固受レ命長矣、ー一時康矣」＝福祿。

【蒲然】ボゼン いきをする貌。字解參看。

【苹】 ㊀ ヘイ・ヒャウ 庚 ㊁ ハウ・ヒャウ

㊀よもぎ、蒿の一種。詩、小雅「呦呦鹿鳴、食野之ー一」＝白蒿。精蒿。○うきくさ。＝萍。○ーは草の貌。○ー果は林檎。㊁ー蘩はめぐる（廻旋）馬融賦「爭遊ー蘩」

【苹苹】ヘイヘイ 草の貌。宋玉賦、「涉二蒲藤一、踰二ー一」

【苗】 ベウ 蕭

○なへ、禾の初生のもの。又、廣く栽培する草木の初生のもの「禾ー」「麥ー」「良ー」○ちすぢ、たね（胤子孫）○もろもろ（衆庶）○夏の獵、苗稼の爲めに害を除くを目的とするによりていふ。○種族の名「三ー」「ー族」「有ー」雲南・貴州兩省に多く住む。

【苗胤】ベウイン 遠き子孫、胤はたね。後漢書、樊宏陰識等傳贊「恂恂ー一、傳レ繼レ祀」＝苗裔。

【苗裔】ベウエイ 遠き子孫、裔は衣のすそ、故に喩ふ。離騷「帝高陽之ー一兮」＝末裔・苗末。

【苗稼】ベウカ いねのなへ。歐陽修文、「貧財盡二予私室一、ー一盡二于農田一」

【苗心】ベウシン なへのしん。春秋、隱五、注「螟食ニー一、食レ災」

【苗緒】ベウショ 遠きちすぢ。後漢書、寇恂傳「功臣ー一」＝苗胤・苗裔。

【苗族】ベウゾク ○ちすぢ。蜀志、諸葛亮傳「大王劉氏ー一紹レ世而起」○支那の南方に住む種族。＝苗民。

【苗民】ベウミン 三苗の民。史、夏本紀、注「昏レ人讒説殄滅無レ理 名曰二ー一」＝苗族。

【苗脈】ベウミャク 地中に在る鑛物などのつづき。金史、食貨志「大定十六年遣レ使分レ路、訪二察銅鉄ー一」

【茂】 モウ 有

○しげる、しげし、草木が豐かに盛んなり「繁ー」「豐ー」「秀ー」○うつくし（美）○材徳の秀でて美くしき義「ー才」「ー徳」「俊ー」「淑ー」○ゆたか（豐）さかんなり（盛）○つとむ（勉）周語「ー正其徳」古、懋に通ず。○閼ーは十二支の戌の異名。

同訓異義 モウ茂・繁・蕃・稠・盛の訓は繁（一四九八頁三段）の條を見よ。

【茂献】モウケン 美くしく盛んなるはかりごと。王融之、宗廟登歌「思我ー一、如レ玉如レ金」＝芳猷・令猷。

【茂陰】モウイン しげれるこかげ。詩經、疏「行人之歇レ息於ー一、似二諸侯朝一レ王如レ会」＝芳猷・令猷。

【茂樾】モウエツ しげれるなみ木。又、其のこかげ。馮子振、十八公賦「儼如レ對二于ー一」

【茂行】モウカウ 秀でて美くしきおこなひ。楚辭「夫維聖哲、以ー一兮」

【茂勳】モウクン さかんなるいさを。晉書、元帝紀「ー一格二於皇天一、清暉光二於四海一」

【茂科】モウクワ 賢良方正の科をいふ。揮麈錄「張咸應ニー一」

【茂績】モウセキ さかんなるわざ。陸雲賦「俊徳ー一、邦家之彦」

【茂才】モウサイ 官吏登用試驗の科目の名、後漢の世、光武帝（劉秀）の諱を避けて、秀才をー一といふ。後漢書「我後舉ニー一、讓二於重一、不レ應レ命」我は當我、重は陳重。

【茂材】モウサイ 才能のすぐれたるもの。漢書、董仲舒傳「州郡舉ニー一學諸生、皆自二仲舒一發レ之」＝秀才。

【茂宰】モウサイ 府縣の知事の尊稱。李白詩「天子思ニー一」

【茂草】モウサウ しげれるくさ。陸雲賦「燔ニー一以爲レ田」

【茂士】モウシ 才徳すぐれたる人。漢書、朱邑傳「明主游二心太古一、廣延ニー一」

【茂秀】モウシウ すぐれひいでる。唐書、王丘傳「其擧用如二孫逖・張鎬・張晉明・王冷然一、皆一時ー一」

【茂樹】モウジュ しげれる木。白居易詩「潛魚返二清源一、ー一潤魚返清源」

【茂松】モウセウ しげりたるまつ。世説、言語「臣所レ須者ー一清泉、山中不レ乏」

【茂植】モウショク しげくうゑる。陸雲賦「脩遠踏、蕃根ー一」

【茂遂】モウスイ さかんに生長する。宋史、樂志「物性ー一、民俗阜昌」

【茂生】モウセイ しげり生ずる。

【茂盛】モウセイ さかんなり。四京雜記、杜子夏墓前、種二松柏樹五株一、至レ今ー一」＝盛茂。

【茂枯】モウコ しげれるえだ。宣和畫譜「ー一勁節、吟レ風瀉レ露、挿レ雲節レ月」楮は木末。

【茂篠】モウセウ しげれるしのだけ。梁簡文帝文「有二嬪娟之ー一、寄二江上一而

叢生」

【茂苦】モクセツ 盛んにかくれたる事迹。晉書、文苑傳「嘉辭――、陳二諸列傳一」＝茂跡。

【茂竹】モクチク 生ひしげりたるたけ。北史、楊愔傳「宅內有二―一」

【茂長】モチャウ しげりそだつ。呂覽「樂二於樹木一、與二其―一」

【茂木】モクボク しげれるき。鹽鐵論「―之下無二雙草一、大塊之間無二美苗一」

【茂林】モリン しげりたるはやし。王義之、蘭亭集序「此地有二崇山峻嶺、―修竹一」

【茂陵】モリョウ 漢の武帝の陵の名。陝西省興平縣の東北に在り、司馬相如病みて此に家居せり。

【苜】ボク モク 屋

―蓿はうまごやし、原野に自生し、葉は互生複葉、春末葉間に小黃花開く、肥料、又、かひばとす。

【苜蓿】モクシュク うまごやし。史、大宛傳「馬嗜二―一一、漢使取二其實一來」＝目宿。

【苯】ホン 阮

―草は草のむらがり生ずる貌。

【苹】リフ 職

○をり(蘋)豕類を畜ふかこひ。○藥草の名。＝白苹。

【荅】レイ リャウ 青

○をなもみ、みみなぐさ(卷耳)菜の一、高三四尺、葉は卵形、周圍に鋸齒狀のきざみあり、夏、白色の花を著く。＝菉耳。○かんざう、一種の藥草。○おつ「―落」＝荅。○茯―ブクリョウは漢藥の名、和名まつほど。○稀―レイは菌の一種、和名はぎほど、藥用とす。＝豬荅。

【荅耳】ミミナグサ みみなぐさ。爾雅「蒉耳、―也」

【荅通】タウ 荅は荅、猪荅、通は馬鞭。王安石詩「人間藥餌付二―一」

六畫

【茵】イン 眞 又、裀に作る

○しとね、しきもの(蓐)主として車中に敷く重席―セキノ班固、西都賦「乘二―一步輦」○―蓐はみやましきみ。○―陳はねずみよもぎ。蓬葉共に藥用とす、冬を經て死せず、舊苗に因りて生ず、故に亦因陳とも書く、陳は又一に蘟に作る。杜甫詩「―蘟春藕香」

【茵席】インセキ しとね。潘岳、舞賦「陳二―一而設坐兮」

【茵褥】インジョク 前條に同じ。

【茵蓐】インジョク もうせんのしとね。國史補「韋陟有二疾、母大尉健子弟問レ之、延入二臥內一、行步柔弱一一、房氏子弟疑而後登、侍婢皆笑」

【茭】カイ 灰

ね、草の根。漢書、禮樂志「青陽開動、根―以遂」

【荐】カン ギャウ 霰

あさざ、はなじゅんさい、水草の一、葉は心臟形にて夏時黃花を著く、わかばを食用とす。

【荐菜】カンサイ あさざ。詩、周南「參差―一、左右流レ之」＝蓴菜・接余。

【莖】㊀カウ・ケウ 巧 ㊁ケキ 錫

㊀うまぜり、水澤中に生ずる一種の草。○まぐさ、乾きたる稈マグサ書、費誓「峙乃―一」○なは。竹、又、草をなひたる縄ぶ後漢書、溝洫志「寧長一兮、湛美玉」㊁ゆだめ(弓檠)

【江】カウ 江

―蘺カウリは川芎センキュウの苗。＝蘼蕪。

【茴】クヮイ 灰

―香はうゐきゃう、宿根草、葉は互生して細きこと絲の如し、莖と共に白色を帶びて香氣あり、夏時、枝上毎に小黃花を翠り開くこと傘の如し、實を藥用とす。

【荒】クヮウ 陽

○ある(無)草が地を掩ふ。あれち「―蕪地」○果物穀類がみのらず「―歲」韓詩外傳「四穀不レ升曰―一」○やぶる(敗)す つ。すたる(廢)○みだる(亂)○むなし(空)○すさむ、おほる、迷ひ亂る。○おほふ(掩)、藥)詩、周南「葛覃―一之」○くらし、心がうっとりとする。＝慌。○かたほとり、國のはて、えびす(蠻裔)賈誼、過秦論「併呑八―一」○大いなり。又、大いにする。○―唐ハタハタはとりとめなし。○圖ハタ亂暴。

「隋末——」

【荒壞】クヮウクワイ あれくづれる。晉杭、謝恩賦「紹二平當之舊居一、感二——一而蒞レ孤」

【荒蕪】クヮウブ うすぐらし、黯淡たる貌。杜甫詩「野日——白」

【荒擾】クヮウジョウ あらあらし。北史、趙綽傳「氏俗——、粗威愼以レ禮」

【荒畦】クヮウケイ あれたるはたけ。王安石詩「蘆落——草自生」‖荒圃。

【荒蹊】クヮウケイ あれたるこみち。韋應物詩「風雪殘宵深夜、園田掩二——一」‖荒徑。

【荒鷄】クヮウケイ 鄭の時ならぬ時に鳴くもの。左傳、襄公廿七年「鄭人請レ賂以免二——一」

【荒圃】クヮウホ くづれかけた垣根。左傳、襄公卅年、制度——」

【荒穢】クヮウヱ すたれたるしごと。申器疏傳「國無二游民一、野無二——一」

【荒原】クヮウゲン あれたる野はら。晁補之詩「停レ舟倚二河濟一、回顧盡——一」‖荒野。

【荒怨】クヮウヱン〇うっとうする。楚辭「寤——而流二萬兮一」〇空漠なる義。唐書、蘇頲傳「古稱二荒服一、取二——之義一」

【荒歲】クヮウサイ ききんどし、果穀の熟せざる凶年。盧綸詩「可レ憐——青山下、惟有二松枝可一寄レ君」

【荒草】クヮウサウ あれたるくさ。韋應物詩「繁鞘頻レ有レ雪、——似レ無レ人」

【荒殘】クヮウサン あれそこなはる。晉書、張光傳「綏二撫——一、百姓悅服」

【荒池】クヮウチ あれたるいけ。謝朓詩「——秋草滿」

【荒略】クヮウリャク あれたるはたけ。曹植文「棄而不レ耕、故爲二——一」

【荒廢】クヮウハイ 荒れ廢たれる。宋書、禮志「詩書——、頗廢叙賓」

【荒頽】クヮウトン あれすたれる。魏略「鍾繇上書自劾曰、久病沈滯、衆職——」‖荒陵。

【荒敗】クヮウハイ あれやぶれる。晉書、張光傳「漢中——」‖荒壞。

【荒棄】クヮウキ あれすたれる。禮記、表記「国無レ主則——、故用レ人爲レ主」

【荒亡】クヮウバウ 田獵飲酒などの樂に耽る。孟、梁惠王「先王無二流連之樂一、——之行」‖荒淫。

【荒淫】クヮウイン あればてる。左思賦「伊洛繚繞、觸函——」

【荒服】クヮウフク 支那九州の外の最も遠く隔りたる地。王畿を距る二千里より二千五百里に至るの地。五服（九六頁二段）を見よ。

【荒弊】クヮウヘイ あれおとろへる。管弼詩「幽居近二銅駝一、——仍三淪底一」

【荒酒】クヮウシュ すさみおぼれる、酒は溺れる。舊唐書、李密傳「——於酒、俾二盡作一レ毒」‖荒亡。

【荒遠】クヮウエン かたよりて遠くはなれたる地。晉書、陸玩江任二序「——側境」‖邊荒・荒陬。

【荒民】クヮウミン ききんにくるしめる民。後漢書、文苑傳「被二水年一、乃分二

【荒穢】クヮウヱ すさみてほしいまま。史、李斯傳「簡節仁義之人立二於朝一、則——之業廢矣」

【荒神】クヮウジン 國經人を祠する神の名。

【荒榛】クヮウシン あれはてたるはやし。蘇軾詩「故山桃李作二——一」

【荒酒】クヮウシュ さけにすさむ。晉書、慕容皝載記「——縱觀、不二復設レ備」

【荒酔】クヮウスイ 甚だしく酒にゑふ。梁武帝文「勿下詔二留賞一長夜——上」

【荒陬】クヮウスウ あれたる國のはて。柳宗元、寄二許京兆一書‖荒遠。

【荒政】クヮウセイ 凶年に備へる政。周禮、地官「大司徒之職、以二——一十有二聚二萬民一」

【荒疇】クヮウチウ 土地があれてやせる。蘇軾、答二張文潛一書「——尿糞」

【荒淺】クヮウセン すさびてあさはか。李德裕策「臣學術二——一、久病喪贏」

【荒怠】クヮウタイ すさみおこたる。書、泰誓「紂二侮五常一、——弗レ敬」

【荒唐之言】クヮウタウノゲン とりとめなきことば。莊、天下「譊悠之說、——、無端崖之辭」

【荒亂】クヮウラン たのしみにすさみふける。雲笈七籤、治家裏書、悟レ心悅レ耳、以致二——一之過一」

【荒誕】クヮウタン とりとめなきことばで、たらめ。李白、大猷賦「晒二秦王之一——、賦二日蝕之西舜一」‖虛誕。

【荒地】クヮウチ あれたる土地。原坡集「得二——數十畝一」

奉祿一及所レ得賞賜、班賜二貧者一、子レ是祭富之家、各出二義穀一助二官稟一、貧ニ一一、猿レ全」

【荒野】クワヤ　あれたるのはら。杜甫詩「地卑ニ一一大、天遠暮江遲」‖荒原。

【荒蕪】クワブ　あれはてたるかき。高啓詩「墓在ニ一一荊棘邊一」

【荒涼】クワリヤウ　あれはててさびし。蘇軾詩「一一殘園秋、寂歷幽花晩」

【荒廢】クワハイ　あれたるしほはま。唐書、李大亮傳「臣遠在ニ一一」

【荒路】クワロ　あれはてたるみち。王粲詩「悠悠涉ニ一一、勝曆我心愁」

【荒樓】クワロウ　あれたるたかどの。岑參詩「一一荒井閉ニ空山一」

【荒唐】クワタウ　あれがれる。莊書、馮跋載記「今雖宇無慶、百姓寧レ業、而田畝ニ一一、有司不二開レ時督一レ蠶」‖荒蕪・無稽。

【荒惑】クワワク　すさみまどふ。司馬光文「襄王之心自ニ一一」

【苦】クッ　㊢

一菜　はきがらすうり、根は澱粉を製すべし、天花粉といふ。‖瓜蔞。

【荊】ケイ　㊥　刑は正字

○いばら、うばら（茨）「一棘」「楚一」○にんじんぼく（楚木）○しもと、笞刑に用ふる杖。○己の妻の謙稱、後漢の梁鴻の妻孟光がいばらのかんざしをさしたる故事に本づく「一妻」「拙一」○支那の古の九州の一、今の湖南湖北兩省竝に廣東の北部、貴州・四川・廣西の東部を奄有す。

【負レ荊】ケイヲオフ　謝罪の意を表する爲めに背にしもとを負ふ。むちうたんことを望むなり。史、藺相如傳「肉袒ニ一一レ」

【班レ荊】ハンケイ　荊草を敷き、途中で相遇ふ。左、襄二六「楚伍擧與二鄭子一相善、擧子如レ晉、遇二之鄭郊一、一一レ相與食」

【荊軻】ケイカ　戰國時代の衛の人、燕の太子丹これを客とし、荊卿と稱す、軻、丹の爲めに秦に入り、秦王を刺きんとし、成らずして殺さる（史、刺客傳）

【荊浩】ケイカウ　字は浩然、五代の畫人、歷史に博通す、太行の洪谷に隱れ、自ら洪谷子と號す、山水樹石を畫きて以て自ら適す（五代名畫補遺）

【荊妃】ケイヒ　にんじんぼくと、くこと。杜甫詩「溪家山東二百州、千村萬落生ニ一一」

【荊棘】ケイキク　○いばら。東征賦「踏二蒲城之丘墟一兮、生ニ一一之榛榛一」○讒賊の人に喩ふ。楚辭「一一滿レ前成レ林」

【荊關】ケイクワン　五代の荊浩と宋の關仝と、共に名畫工。梅堯臣詩「山水樹石嶙、一一藝能至」

【荊妻】ケイサイ　己の妻の謙稱。荊布を見よ。‖荊婦。

【荊榮】ケイエイ　○うはらと、しばと。○しばの戸。高叔嵒詩「歸臥守ニ一一ニ」‖柴門。

【荊鈒布裙】ケイフヒンフクン　荊布を見よ。

【荊尸】ケイシ　春秋時代、楚國の陣法。左、莊四「楚武王一一授二師子一焉」

【荊榛】ケイシン　いばらと、はしばみと。雜木ばやしをいふ。吳儆、浮丘仙賦「翠ニ一一一隊二堆埼一、臨二絕壁一俯二清溪一」

【荊蠻錢時記】ケイバンセンジキ　一卷、梁の宗懍撰す、楚國の土俗三十六事を述ぶ、漢魏叢書中に收む。

【荊布】ケイフ　いばらの赤き實のかんざし、木綿のもすそ、己の妻の謙稱。皇甫謐、列女傳「後漢梁鴻之妻孟光、肥醜而黑、力舉石臼、德行甚高、鴻レ對不レ嫁、年三十、父母問二其故一、曰、欲レ得二如二梁鴻一者一、鴻遂娶レ之、常荊釵布裙、舉レ案齊レ眉」

【荊婦】ケイフ　荊妻に同じ。

【荊璞】ケイボク　卞和が荊山にて得たるあらたま。潘岳、籍田賦「似二夜光之剖ニ一一一、若二良松之依二山巓一也」‖荊璧・荊山之璞。

【莢】ケウ　㊥

こあふひ、ぜにあふひ。葵の一種、莖は直立し高三四尺、花は一寸餘、淡紫色にして瓣に深紫色の線紋あり。‖荊葵・錦葵花。

【莧】コン　㊥

毛一ゲンはきんぼうげ（金鳳花）原野に自生する毒草の一、葉は掌狀にして莖に細毛密生す、春時五瓣の小黃花を著く。

【草】サウ　㊦　別に艸に作る

○くさ「豐一」「水一」「蔓一」「腐一」「春一」「香一」「芳一」「毒一」○のはら。○あらし、そまつ（粗）「一具」○はじめ（創初）はじむ（始）「一創」○いやし（鄙）「一野」○轉じて在野の稱「一茅」「一澤」○おこす（起）○しばし（造次）○詩文のしたがき「一稿」「諫一」したがきを書き起す。後漢書、陳龍傳「蕭何一律」○書體の名、行書を更にくづしたるもの「眞行一」○一一はうれへる貌。又、いそぐ、いそがはし。‖匆匆、又、てがる（苟

簡）あらまし。○くさかる。禮、祭統「朱發秋政、則民弗敢」也」○一斗は棟實ノ○醫ーはもぐさの異名。‖艾。

【草鞋】サウアイ　次條に同じ。

【草履】サウリ　わらぐつ。張詠詩「雲居山客草履ノ報」‖草鞋。

【草鞋銭】サウアイセン　わらじせん、行脚僧の旅費（傳燈録）

【草案】サウアン　詩文のしたがき。‖草稿。

【草庵】サウアン　くさぶきのいほり。朱熹詩「尋入二半峯裏一、寒棲一ーー」

【草衣】サウイ　○隱者の服。張雲叟詩話「梅聖俞詩、如二深山道人一、ーー葛屨、王公大人、見之不ノ覺風ノ靡」○轉じて隱者の稱。景雲詩「瀟灑塵埃外、扁舟一ーー」

【草屋】サウオク　くさぶきのやね。陶潛詩「方宅十餘畝、ーー八九間」‖草堂。

【草芥】サウカイ　くさと、あくたと。轉じてつまらぬ物に喩ふ。孟、離婁「視二天下悅而歸一己、猶二ーーー一也」

【草稿】サウカウ　詩文のしたがき。史、屈原傳「屈平屬二ーーー一未ノ定」‖草槁・草案。

【草閑】サウカン　草野のあひだ、民間。李白詩「金赤ーー人、顧慙拯ノ物情」

【草閒求ノ活】サウカンニモトメテカツヲ　民間に於て生活することを求む。晉書、周顗傳「吾備二位大臣一、豈可二復草閒求ノ活一哉」

【草圏】サウケン　くさぶきのくら。宋史、李肅之傳「結二ーー一、以儲二庾粟之赤露者一」

【草屨】サウク　わらぐつ。漢書、卜式傳「布衣ーー而牧ノ羊」‖草履。

【草屋】サウヲク　わらぐつ。晉書、孫晷傳「有二一老父一、縕袍ーー」‖草履。

【草具】サウグ　粗末なる膳部。戰國、齊策「願寄二食門下一、左右食以ニーー一」注「草、不ノ精也、其餌食」‖粗食。

【草花】サウクワ　くさばな（史、李斯傳）

【草屨】サウク　わらぐつ。杜荀鶴詩「山衣ーー染二苔痕一」

【草檄】サウゲキ　檄文を起草する。南史、蔡景歷詩「武帝將ノ討二王僧辯一、召令ノレレ、景歷援筆立成」

【草根木皮】サウコンボクヒ　○くさのねと、きのかはと。金史、食貨志「山東行省僕散安貞言、河朔被レ災、道殣相望、所ノ食者ーー而已」○漢法の醫藥の原料。

【草莽】サウモウ　○いそがはし。杜甫詩「聞君適二萬里一、取ノ則何ーー」‖匆匆。○心を勞する貌。詩、小雅「勞人ーー」

【草創】サウサウ　○粗略につくりはじめる。漢書、恩澤侯表「庶事ーー、日不ノ暇ノ給」○文書のしたがきを作る。論衡問「初謀ーニーー之」

【草草】サウサウ　○いそがはし。杜甫詩「聞君適二萬里一、取ノ則何ーー」‖匆匆。○心を勞する貌。詩、小雅「勞人ーー」

【草蝨】サウシツ　草はらに生ずるひる、やまびる。本草「生二深山草中一者、爲ニーーー」

【草師渡】サウシワタル　もぐさの異名。本草「艾、一名ーー」‖蓬草。

【草蹊】サウケイ　のじゅく。何承天、安邊論「楸風沐雨、不二以爲一ヒ労、露宿ーー、惟其常性」

【草盧】サウロ　はたはた（爾雅）

【草宿】サウシュク　のじゅく。宋書、孫法宗傳「單身勤苦、猶行ーー」‖露宿。

【草書】サウショ　書體の一、字畫を略して速記せること草の如くする。說文序「漢興有ニーーー」晉書、衞恒傳「靖與二尚書令衞瓘一俱以ノ善ニーーー知ノ名」

【草聖】サウセイ　くさぶきのあばらや。曹植詩「劇哉邊海民、寄二身於ーーー」‖荒墅・村墅。

【草色】サウショク　くさのいろ。劉禹錫、陋室銘「苔痕上ノ階綠、ーー入ノ簾青」

【草蘚】サウセン　くさのしとね。阿含經「沙門皆ーー爲ノ牀」‖草蓐。

【草食動物】サウショクドウブツ　草を常食とする哺乳動物、馬・牛・羊の類。肉食動物の對。

【草聖】サウセイ　草書を巧にかく人。又、特に唐の張旭を稱す。杜甫詩「張旭三杯ーー傳」

【草石蠶】サウセキサン　ちょろぎ、野菜の一、塊は二三尺、花は淡紫色、根は蠶に似る。

【草績】サウセキ　こぬすびと、草野の竊盜。晉、徐邈子「般固ノ不二小大一、舒ニーー盜究一」

【草蔬】サウソ　やさい、あをもの。後漢書、茅容傳「自與ニーー、與ノ客同飯」‖菜蔬。

【草叢】サウソウ　くさむら。‖草莽。

【草賊】サウゾク　こぬすびと。又、亂民（唐書、僖宗紀）‖草寇。

【草卒】サウソツ　あわただしい。‖忽卒・倉卒。

【草堂】サウダウ　かやぶきのいへ。古人の隱居して自ら樂む者多くーーを營む、杜甫の浣花ーー、白居易の廬山ーーの類。孔稚圭、北山移文「鍾山之英、ーー之靈」

【草澤】サウタク　在野の義。史記「原憲仁在ニーー中一」左思詩「何世無二奇才一、遺ノ之在ニーーー」‖草莽。

【草魚】サウ　○いなご。詩、召南「喓喓ー」注「蝗屬」○草間に棲むすべての魚類。

【草藥】ヤク　草を刈りたひらげる。韓愈「ー一而萬三類之二盡二根株一痛斷乃止」‖驅除。

【草朋】ホウ　未だ開墾せざる田。漢書「屬縣ー一」注「ー一謂二荒田未一耕墾一也」

【草店】テン　くさぶきのやどや。吳鎭詩「ー一月初晴、村原迸更長」

【草頭】トウ　はずれ、草葉の上。杜甫詩「富貴何如ー一露、草は久しきを持し難きに喩ふ。

【草茅】バウ　くさと、ちがやと。轉じて在野の意。「ー一之臣」唐實、馬周伸「由二一介ー一一旦二大下事一」‖草莽。

【草茅危言】ゲンン　民間に居りて國政を論議する。李覯、袁州學記「ー一者、折レ首而不レ悔」

【草如レ走】ソウジュ　草書の勢の形容。米芾志林「眞生レ行、行生レ草、眞如レ立、行如レ行、草如レ走」

【草履】リ　草の履になびく如くなびきしたがふ。開居賦「調者二風行一、應如二ー一一」

【草服】フク　野人のきもの。疑、郊特牲、野夫黃冠、黃冠ー一也」

【草本】ホン　○したがき、草稿の底本（蕃書、傳觀傳）‖草案。○くさ、木の實の柔かき植物。木本の對。

【草麻】サマ　詔の文を草する、唐の制、黃麻紙を用ひて詔を寫すが故（舊唐書、韋弘景傳）‖草詔。

【草昧】サマ　世の開けはじめにて未だ眞味の時をいふ。易、屯卦「天造ー一、宜レ建レ侯而不レ寧」

【草莽之臣】サウモウ　仕官せずして草野にある者。孟、萬章「在レ國曰二市井之臣一、在レ野曰二ー一一」‖草茅之臣。

【草木】モク　草と木と。易、坤卦、文言「百穀ー一臨二乎土一」

【草木黃落】ワウラク　秋の末に、草木の葉が黃ばみおちる。禮、月令「季秋之月、ー一、鴻雁來賓」

【草木萌生】ホウセイ　草木が芽に當りて發ひて芽を出す意。外物「ー一、盲乘二陽氣一而出而不レ可レ遏也」

【草木俱腐】フ　次條に同じ。唐書「百藥賢愚、不レ遑二興遷一、埋レ光銷レ采、與二草木俱腐者、可二勝咤一哉」

【草木俱朽】キウ　くさきと共にくちはてる。世に聞ゆることなくして死する。後漢書、朱穆傳「彼與二草木一俱朽、此與二金石一相傾」

【草木皆兵】ヘイ　敵を畏るるの餘り、全山の草木皆敵兵と見ゆるをいふ。晉書、苻堅載記「堅登レ城、望二八公山一、草木皆類二人形一、顧謂二苻融一曰、此勁敵也、何謂二兵少一乎」

【草野】ヤ　○いやし。吳、韓非傳「ー一而倨傲」○民間、在野の義。杜預文「布二行於ー一一著二德於閭閻一」

【草葉】ヨウ　あればてたる地。史、趙世家「文レ侯順レ天、救二ー一一而邑居舊」

【草履】リ　わらぐつ、わら製のはきもの。五色線「或乘二柴車一、或服二ー一一」‖草屨。

【草綠】リョク　草書と、隸書（楷書）と（書體）

【草率】ソツ　くさぶきのいへ。戴表元詩「鄰屋依然一ー一」

【草廬】ロ　くさの上のつゆ。王粲詩「ー一沾二我衣一」

【草廬】リョ　くさのいほり。諸葛亮、前出師表「三顧臣於ー一之中」

【結草】ケツサウ　結草（二四六八頁三段）を見よ。

【打ー一頓ー一】トン　甲を慾して乙を留むるにいふ。開元遺事「王涯爲二宰相一、時貴爲レ政、會部民進狀、訴二主簿貪賄一、涯即判曰、汝雖レ打レ草、吾已蛇驚」

【草臥】ガ　困つかれ。つかる、疲勞。

【茨】シ　支

○いばら、うばら、刺ゲある小灌木の總稱。○かや、屋根を葺くに用ふ「茅ー一」○ふく、茅にて屋根を葺く。莊、讓王「環堵之室ー一以生草こくさぶき。○あつむ（聚）つむ（積）詩、小雅「曾孫之稼、如ー一如レ梁」○はまびし（濱藜）地に布き生ずる一種の蔓草、夏時黃花を著け、三稜ある實を結ぶ。

【茨棘】キョク　いばら。○なかの義。後漢書、仲長統傳「清潔之士、往往自苦二ー一之間」‖蕀茨。

【茨蒺】シツ　蒺藜（蒺藜）の異名（本草綱目）

【茨菰】コ　慈姑（ヲモダカ）の異名（本草綱目）

【茨草】シサウ　○草をやねにふく（揚雄元文「築レ室ー一、伐二圃于湘之西一」○いばらと、くまと。宋書、樂志ー一總二章陳一」

【茨繞】ジョウ　いばらのかきね。周禮、圍師「一說、はまびしのかきね」詩、鄭風「綢有レ茨」

【如レ茨如レ梁】ニョシ　木隊の積むが如く多きをいふ。茨は屋蓋、梁は橋梁、其の高大なるに喩ふ。詩、小雅「曾孫之稼、ー一一」

【莖】シ　梗

よろひぐさ。川芎ゼンキュウに類する一種の香草。一說に、川芎の苗。‖白芷・蘼無・高蕪。

【莖蘭】ラン　よろひぐさ。疊韻「風眠「風眠ー一」

【茲】シ　支

○ます、ますます（益）滋に通ず。漢書「賦斂ー一重」○むしろ、わらのむしろ（蓐席）○ここ

に、これ、この(此)荏(一二三頁三段)と混用せしなり。○とし(年)「今ー」「來ー」とき(時)

同訓異字 荏・菽・叔の別は菽(一二九頁一段)の條を見よ。

【如レ荏】ジンのごとし かやうである。陶潛詩「衆善有二代謝一人道每ーレー」

【荏】 ジン ニン 寝

○やはらか(柔)(論、陽貨)「色厲而内ー」○そらまめ(大豆)○え、紫蘇ソの一種、實をしぼりて油を採る。○ー苒ゼンは、ながびく。

【荏弱】ジンジャク よわし。禮記、疏「小人顏色嚴厲、而心内ー一貧レ怯」‖柔軟懦弱。

【荏苒】ジンゼン 歳月のだんだんに延びる(漸進)貌。張華、勵志詩「日駛月邁、ー一代謝」‖侵尋。

【荏菽】ジンシュク ○やはらかなる豌。詩、大雅「ー一柔木」○歳月がながびく。‖荏苒。

【菜】 シュ 寘

○ー蕀ジュは、かはらじかみ、葉は橢圓形にして厚く、黄緑の小花を開く、實は簇生す、九月九日(重陽)に高山に上りて此の實を頭に插めば邪氣を拂ふといふ(續齊諧記)風土記「九月九日折ー蕀房、插」頭可レ辟レ惡氣」○圃ニ植ゑ灌木の一、枝細長く叢生し、葉は橢圓形、赤く小さき實を結ぶ。‖胡頽子。

【莞】 ジュ 東

ーー蔚はめはじき。‖益母草ヤクモサウ

【莪】 ジュ 東

○ー蒿ジュクは大豆の一種。列、力命「進其ー蒿」○ー蒸ジュウは、からあふひ、葵の一種。

【萄】 ジュン 眞

○人の姓、ー況(荀卿)は春秋戰國の趙の人、孟子の性善説に對して性惡説を唱ふ。○草の名。山海經「青要之山有草焉、黄華赤實、名曰ーー草」

【荀子】ジュンシ 書名、二十卷、周の荀況撰す、大旨、周孔の教を明かにし禮を崇び學を勵むるに在り、唐の楊倞の註あり。

【荀氏八龍】ジュンシハチリュウ 人の良兄弟多きをいふ。後漢書、荀淑傳「有二子八人一、儉・緄・靖・燾・汪・爽・肅・專並有二名稱一、時人謂二之八龍一」

【茹】 ジョ ジュ 遇 魚 虞

○草の根のひき連なる貌。又、其の根。易、泰卦「拔ー茅連ー」○くらふ(食)主として野菜を食ふにいふ。孟、盡心「飯レ糗ー草」○うく(受)○すする(啜)○飲食を貪る。○かる(枯)○くさる(臭敗)「ー魚」○はかる(度)詩、邶風「不可以ー」○やはらか(柔)○な(菜)菜の總名。枚乘文「白露之ー」○うでる、ゆでたもの。○かふ(飼)○ー蘆ジョロはあかねぐさ(茜)詩、鄭風「ー蔘在レ阪」‖蒨草。

同訓異字 茹・食・喫・吃・啜・昭・咄・飧等の別は食(部首九畫)の條を見よ。

【茹哀】ジョアイ 有心にかなしみをいだく、梁陳文帝文「唯レ痛ーレー」

【茹魚】ジョギョ くさりたるうを。呂覽「以二ーー一臭レ蜚、蜚愈至而不レ能レ禁」‖臭魚。

【茹葷】ジョクン 臭菜をくらふ。莊、人間世「回之家貧、不レ飲レ酒不レレー者數月矣」

【茹漿】ジョショウ 野菜をくらふ。後漢書、羊陟傳「常食二乾飯一ーレー」

【茹草】ジョソウ くさをくらふ。淮南子「古者民ーレー飲レ水」

【茹素】ジョソ ○野菜と、豆と。後漢書、陳蕃傳「青徐貴旱、五穀損傷、民物流離ーー不レ足、○豆をくらふ。

【茹湿】ジョシツ なまぐさきものを食ふ。路温舒傳「變ニーー之食一」

【茹素】ジョソ 菜食して肉なき食。東方朔見「ーー、謂二之蓄戒一」

【茹毛飲血】ジョモインケツ 上古飲食の道未だ備らず、ただ禽獸を獵取して生食せしをいふ。禮記、「未レ有二火化一、食二草木之實、鳥獸之肉一、飲二其血一、茹二其毛一」

【茸】 ㊀ジュウ ㊁ジョウ 多 腫

㊀しげる、しげし、草の盛んに生ひ茂る貌。○蒙ー杉ーは草や毛の散り亂るる貌。○細きもののの入りまじること。○あつまる(聚)○鹿ー。ロクジョウは藥名、鹿のふくろづのを陰乾カゲボシにせしもの。㊁おす(推)次ぐ。漢書、司馬遷傳「僕又ー以二蠶室一重爲二天下觀笑一」○草の生ずる貌。○閒ーは細き毛。猥賤なる者に喩ふ。○圖たけ、きのこ。又、たけの如く生えるもの「鼻ー」

【茸茸】ジョウジョウ 草の盛んにしげれる貌。令狐楚詞「細茸綠レ頭綠ーー」

【茸縣】ジョウケン 刺繍ししゅうに用ふる絨縄(元

史、輿服志」

【茜】 セン　俗 又、倩に作る

○あかね、あかねぐさ、蔓草の一、莖は方形にして中空、外に細き刺あり、夏時小白花を著け黒き實を結ぶ、根は赤色の染料とす。‖茅蒐・地血・過山龍。○あか（緋色）高啓詩「踏席繚裙ー」

【荃】 セン　先

○かをりぐさ（香草）○ふしづけ（魚筍）柴を水中に積みて魚を捕ふる者。莊、外物「ー者所以在魚、得魚而忘ー」荃に通ず。○ほそぬの（細布）‖絟。

【荃蕙】ケイ　かをりぐさの名。離騒「ー化而爲茅矣」

【荃宰】サイ　君主に喩ふ。任昉文「使ニー有ニ寄」

【荃麝香】カンジャ　名香の名。洞冥記「招仙閣上、燒ニ――ー其氣三月不ル絶」

【荐】 セン　霰

○かさねて（重）かさねがさね、しきりに。左、僖十三「晉ー饑」○くさ（草）○むしろ（席）薦に通ず。

【荐】 シキ・仍・頻・連・累・切の訓は仍（一〇四頁一段）の條を見よ。

【荐及】センキフ　しきりに至る。晉書、食貨志「兵革屢興、荒饉ー――」

【荐居】センキョ　荐は草、野蠻人が水草を逐ひて移住する義。左、襄四「戎狄ー――」

【荐仍】センジョウ　しきりにかさなる。柳宗元文「痛毒ー――、振古所ル無」‖頻仍。

【荐食】センショク　踐食なり。左、定四「吳爲ニ封豕長蛇、ー――ニ上國ニ」

【荐問】センモン　しばしばおとづれる。

【茶】 タ　サ　麻　俗 通俗チャ或は様に作る

○ちゃ（茗）「摘ー」「名ー」「新ー」○茶の葉を煎じたる汁「煎ー」「烹ー」○古、聘禮ソウレイに多くーを用ふ、故に受聘を受ーといふ。天中記「凡種ー樹必下子、移植則不ル生、故聘ー婦必以ー爲ル禮」○山ーー花はつばき。○ーー梅はささんくわ。

【茶湯】サトウ　ちゃを煮るけむり。林逋詩「霏霏ーー出ニ松杪ニ」

【茶引】サイン　茶商の執る所の特許券をいふ。鹽商の鹽引あるが如し、宋代より起る。

【茶烟】サエン　茶を煮るけむり。杜牧詩「今日蚕絲禪榻畔、ーー輕颺落花風」

【茶莫】サバク　茶の湯の會。‖茗宴。

【茶陌】サハク　茶をわかす小さき機。朱慶餘詩「閑來尋ニ古道ー、未ル晚執ニーー」

【品ル茶】ヒンスル　茶の良否を品評する。蘇田集「病後ーレー」

【茶甌】サオウ　ちゃうす、甌はひきうす。陸游詩「ーー細香供ニ隱几ー、松風幽韻入ニ戰詩ー」‖茶臼。

【茶香】サコウ　茶のよきにはひ。元稹詩「夢覺ーー熟」

【茶律】サカツ　政府が茶を專賣して利を占める。王安石、轉運劉君墓誌銘「朝廷施ニーー」

【茶技】サギ　茶道に同じ。

【茶旗】サキ　茶の葉。皮日休詩「ーー經ル雨展」茶槍參看。

【茶儀】サギ　茶の湯に關する儀式。

【茶巾】サキン　茶碗をふくふきん。ちゃぶきん。

【茶臼】サキウ　ちゃうす。柳宗元、夏室詩「日午夢覺無ニ餘響ー、山童隔ル竹敲ニーー」‖茶甌。

【茶供】サキョウ　ちゃを煮てすすむ。方岳詩「山泉與ル佛結ニーー」

【茶具】サグ　煎茶の道具。雲溪友議「烹茶所用之具、陸羽所ル造者、凡二十四事」‖茶器。

【茶果】サカ　ちゃと、くだものと。晉書、陸納傳「所ル設惟ーー而已」

【茶菓】サカ　前條に同じ。

【茶課】サカ　茶の稅金。宋史、程之邵傳「得ニーー四百萬緡ニ」‖茶征・茶租。

【茶經】ケイ　書名、三卷。唐の陸羽撰す。茶事を說くこと備はれり。

【茶戶】コ　茶商の家。元史「以ニーー消乏ニ爲ル名、轉賣與ニ新興之戶ニ」

【茶甌】サオウ　茶を入れるつぼ。明史概「恭紀進ニ下內使持ニ金ーー一遵ニ其程式ニ上」

【茶楷】サカイ　茶の芽。貢茶錄「茶芽數品（中略）一芽帶ニ一葉ニ者、號ニ一槍一旗ニ、次曰ニ中芽ニ、乃一芽帶ニ兩葉ニ者、號ニ一槍兩旗ニ」

【茶鍰】サカン　茶をわかすなべ。馬戴詩「別有ニ一條投ル澗水ニ、竹筒斜引入ニーー」‖茶鍋・茶鼎。

【茶市】サシ　茶を貿易する市場。宋史「置ニーー、交易者必由ル市」

【茶事】サジ　○茶に關するしごと。品茶要錄「ーー起ニ於鷰笠前ニ」○茶道「皮日休、茶經序」

【茶匙】サシ　茶の湯に用ふるさじ。蔡君謨、茶錄「ーー要ニ重ニ擧拂有ニ力」

【茶漬】サセキ　ちゃがら、茶の煎じかす。

【茶肆】サシ　ちゃみせ。聞見前錄「范蠡公一日坐ニ封丘巷ーー、中有ル人貌怪陋」‖茶店。

【茶人】サジン　○茶を採る人。茶經「籃一曰籠、一曰籯（中略）ーー負以採ル茶」○閑ニ於茶道ニ好む人。轉じてものずき、畸人の義とす。

【茶神】サシン　唐の陸羽を尊びて稱す。唐書、陸羽傳「時稱ル茶者重下陸羽形、

記錄突出一紀錄ナリ」と
【茶鹽】サヤ　茶の汁にて煮たるかゆ。
【茶蠶】サヤ　茶の汁にて養たるかゆ。
【茶色】サヤ　○茶の種類「宋史、食貨志」○茶のいろ。岑參詩「賜香ー
ー」○ちゃいろ。梅堯臣詩「寒衣ー
ー梅、歸變褐色服」
【茶食】サヤ　圖餅餌の類「松漠紀聞」
【茶船】サヤ　茶托に同じ。
【茶鋌】サヤ　茶代。古杭夢遊錄「多下ニー
ー」
【茶湯】サヤ　○茶の湯。夢粱錄「無ニー
ー、湯則飲ニ硯水ニ」○圖ヤヤ抹茶を點
すの會合、茶會。＝茗讌。
【茶話】サヤ　茶のみばなし。方岳詩「ー
ー略無ニ塵土雜ニ」＝茗話。
【茶店】サヤ　○茶をうるみせ。＝茶
肆。○ちゃや、かけちゃや。＝茶亭。
【茶薑】サヤ　つのざし。本草「蔓蠻、一名ー
ー」＝香娘子。
【茶綿】サヤ　ほいろ。茶錄「ー編ニ竹爲
レ之、納ニ火其下ニ、去ニ茶尺許、常溫溫
然、所ニ以養ニ茶色香味ニ也」
【茶梅】サヤ　さざんくわ。草花譜「ー
花開ニ十一月中ニ、正踏ニ花過落之後ニ」
【茶坊】サヤ　ちゃや。米芾、畫史「ー
店」＝茶肆。
【茶博】サヤ　茶博士の略。西湖志餘「王
希範西湖賜ニ沈ー
ー詩云云」
【茶博士】サヤ　茶を賣る人。轉じて茶
道に通ずる人「封氏聞見錄」＝茶
博。
【茶磨】サヤ　ちゃうす。明一統志「ー
ー、以ニ石門山石ニ爲レ之」
【茶芽】サヤ　ちゃ。五代史、楚世家「馬殷
始修ニ貢京師ニ、然歲貢不レ過ニ所レ產
ー
ー而已」（茶は新茶、茗はばんちゃ）
【茶寮】サヤ　茶を煎る處。升菴外集
「僧寺茗所曰ー
ー、寮小窗也」
【茶爐】サヤ　茶を煮るろり。陸游詩「ー
ー烟起知ニ高興ニ」＝茶爐。
【茶梗】サヤ　ちゃみせのたかどの。戴復
古詩「賦レ舟楊柳下、一笑上ニー
ー」
【茶園】サヤ　茶畑。白居易詩「架巖結ニ
茅宇ニ、剪壁開ニー
ー」＝茶畑。
【茶褐色】サヤ　黑みがかりたる茶色
〔字彙、注〕＝黃黑色。
【茶器】サヤ　茶の道具。宋史、禮志「賜ニ
ー
名果ニ」＝茶具。
【茶會】サヤ　茶の湯の會。＝茶宴・茗
讌。
【茶師】サヤ　茶を賣る人。
【茶室】サヤ　茶の湯のへや、數寄屋。
【茶湯】サヤ　茶のあきうど。唐書、食貨
志「ー
ー所レ過州縣有ニ重稅ニ」
【茶筅】サヤ　○ちゃはき。抹茶をかき
まはす具。大觀茶論「ー
、以ニ觔竹
老者ニ爲レ之」＝茶筅子。○圖ヤヤ
を長くー
の形に結ぶもの。
【茶托】サヤ　茶碗をのせる小さき臺。＝
茶船。
【茶椀】サヤ　茶を飲むに用ふる椀。戴叔
倫詩「老稱供ニー
ー」＝茶碗。

【荅】タフ　合

○あたる（當）ひきうける。○
こたふ、むくゆ（報）洛誥「奉ー
天命」荅（一四一六頁一段）に通
ず。○厚き貌。○あづき（小豆）
○ますめの名。史、貨殖傳「千
ー」合に通ず。

【葉】㊀テイ　㊁イ　齊　支

㊀つばな、茅の初生のもの。
夏時、白く柔かき穗を出す。
詩、衞風「手如ニ柔ー」○いぬび
え。＝稊。○めぐむ、のぶ。㊁かる（刈）「芟ー」

【莢稗】ハイ　いぬびえと、ひえと、草の
穀に似て食ふべきもの。孟、告子
「荑稗レ不レ熟、不レ如ニー
ー」

【茼】トウ　東

ー蒿ハ、しゅんぎく　野菜の
一、葉は羽狀にして互生し、香
氣あり、冬春の間之を食ふ、花
は野菊に似て黃又は白色。

【茷】㊀ハイ　㊁ハイ　隊　泰

㊀茨（前畫）の㊀に同じ

【茫】バウ　陽　養

㊀草がしげる。しげみ。㊁はたあし、古、旆に通ず。○ー
ー洋ー
は、ととのひて法度ある貌。詩、魯頌「其旂ー
ー」㊂草の根。
○とほし（遠）ひろし（廣）遠くして廣し、はるか。○ー
ー洋ー
渺ー
は水の遠くつづける貌。又、廣大なる貌。○ー
然はぼんやりしたる貌、とりとめなき貌。莊子「ー
然自失」
【茫惚】ボウコツ　ぼんやりする、うっとりする。韓愈詩「ー
ー使ニ人愁」
【茫然】ボウゼン　ぼんやりしたる貌。氣を喪ふ貌。莊子「子貢ー
ー自失」＝惘然。
【茫茫】ボウボウ　○廣く遠き貌。左、哀四「ー
ー禹跡、畫爲ニ九州ニ」○つかれ倦む貌。孟、公孫丑「ー
ー然歸」＝芒芒。
【茫漠】ボウバク　ぼっとしてはるかなり。＝肹漠。
【茫昧】ボウマイ　ぼっとして知りがたし、昧は暗。陶潛詩「天道幽且遠、鬼神ー
ー然」＝冥茫。
【茫洋】ボウヨウ　芒洋（一六一五頁一段）に同じ。

【筆】ヒツ　質

○一種の草。○俗に筆と同じ

く用ふるは非。

【荂】フ　㊀フ　㊁ク。　麻　虞

㊀はな（華）さかゆ「華ー」㊁皇ークワウは古の歌曲の名。莊、天地「大聲不ー入于里耳折楊皇ー、則嗤然而笑」

【荻】フク　屋

ーキフは松の根に寄生するきのこの類、形圓く、皮は黒くして皺あり、藥用とす、まつほど。

【茗】ベイ　ミャウ　週　通音メイ

○ちゃ、特にばんちゃ、晩く採りし茶（茶は新茶）「苦ー」「芳ー」「佳ー」「嚥ー」○茶の芽。○ー邈は高き貌。

【茗宴】ミイ　茶の湯の會。‖茗讌。

【茗園】ミイ　茶ばたけ。‖茶園・茗圃。

【茗醪】ミイ　茶の湯の會。‖茗讌・茗宴。

【茗飲】ミイ　○茶をのむ。洛陽伽藍記「專習ニーーニ」○茶。閩書「茲滿爲レ飯、ーー爲レ漿」

【茗香】カウ　茶のかをり。‖茶香。

【茗器】キイ　茶の道具。舒元輿文「凡茶筆硯、簪幌茵榻、果蓏ーー、皆新作也」‖茗具・茶器。

【茗具】グイ　茗器に同じ。宣情詩「拾レ薪供ニーーニ」

【茗果】クワイ　茶と、くだものと。汪藻詩「ーー話ニ疇昔」‖茶果。

【茗皁】シイ　茶を煎るみせ。‖茶肆。

【茗汁】ジフ　茶を煮出したるしる。洛陽伽藍記「湯飲ニーーニ」

【茗樹】シユ　茶のき。李咸用詩「匡山ーー朝陽樹」

【茗粥】シユク　ちゃがゆ、茶の煮汁にて煮たるかゆ。茶錄「吳人採レ茶、煮レ之名ニーーニ」

【茗戰】センイ　茶のゆの巧拙をあらそふ。雲仙雜記「建人謂ニ鬪茶ー爲ニーーニ」

【茗坊】バウ　ちゃみせ。說苑「中衢下レ馬入ニーー呼レ衆共吸」

【茗麋】ビイ　茶の煮汁にて煮たるかゆ。王維詩「無ニ個ーー一雖レ御レ暑」‖茗粥。

【茗園】ホン　ちゃばたけ。孟郊詩「菱湖有ニ餘景ー一ー無ニ荒蹊」‖茶園。

【茗盞】シン　茶を飲む椀。蘇軾詩「ーー仍添謝豸乾」‖茗椀。

【茗荷】ガフ　一種の香気ある草、食用に供す。‖蘘荷。

【莚】ユ　麌

茱ーシュはかはじかみ。茱（本讀）を見よ。

【荊】リ　レイ　齊　霽

○ー枝イは國廣地方に産する木、高さ三丈許、葉の狀は箭鏃の如くにして平滑、其の果は龍眼に似て、肉は白くして甘き汁多し。○薛ーイは香草の名、まさきのかづら。

【荊子】シイ　果物の名。荊枝の果實。韓愈、羅池廟碑「ーー丹兮蕉黃」

【荊枝橘】キツシ　形のれいしに似たるみかん。橘錄「ーーー多出ニ於橫陽ニ」

【荊丹】タン　荊枝の實のあかく熟せるをいふ。蘇軾、潮州韓文公廟碑「於餐ニーー與ニ蕉黃ニ」

【荊】レツ　屑

あしのほのはき、邪氣を掃ふに用ふる。左、襄二九「乃使ニ巫以桃ーー先祓除ニ」

七畫

【莽】イウ　有

○はぐさ、稻に似たる惡草、一名狗尾草。孟、盡心「惡ーー恐ニ其亂ニ苗也」○轉じて善に似て實は惡なるものに喩ふ。みにくし（醜）

【莽言】ゲン　みにくきことば、醜惡の言。詩、小雅「舒ニ其自レ口、ーー自レ口」

【莚】エン　嚴

○つづく（續）「蔓ーー」○國むしろ、筵の字の誤用。

【荷】㊀カ　㊁カ　哿　歌

㊀はす（蓮）の葉（實を蓮といひ、根を藕といふ）「池ー」「碧ー」「衰ー」「枯ー」又、廣くはちすの義に用ふ。㊁になふ（擔）肩に承けて擔ふ。論、憲問「有ーー賈而過ニ孔氏之門ニ者」○に、になふ物。○ひき受ける「負ー」任ずる。張衡賦「ーー天下之重任ニ」○人より受けたる恩をありがたく感ずる「感ー」「拜ー」○からし、わづらはし「ー體」荷に通ず。○ーーは怨み怒る聲。○薄ーバクは葉草、香氣高し。○國荷物を數ふるにいふ「薪一ー」

【荷葉】エフ　はちすのは。高適、漁父歌「荷皮笠子ーー衣、心無ニ所レ容ニ釣磯ニ」

【荷葉杯】ハイ　はすの葉のさかづき、葉の中心に穴をあけ、莖より吸ひて飲む。留青日札「ーーー名象鼻杯、剌ニ葉心ニ而飲ニ其莖ニ也」

【荷葉飯】ハフ　はすの葉を細かに切

り、まぜて烹たる飯。通鑑、梁敬帝紀「人人以一一混以二鴨肉一雜煮」【荷葉披麻】ヒヤマ 農家が石の類を蔓く法、荷葉は蓮の葉、披麻は麻の葉を敷きたる如き狀（芥子園畫傳）【荷恩】カオン めぐみをうけ負ふ。蘇軾文「生則一一、而死無一所一怨」【荷荷】カカ 般みいかる聲。南史、梁武帝紀「疾久口苦、索一蜜不一得、再曰二一一一遂崩」【荷香】カカウ はすの花のかをり。梁元帝文「花飛拂一袖、一一入一衣」＝荷氣。【荷芰】カキ はちすと、ひしと。杜審言詩「辭一羅山徑入、一一水亭閑」＝芰荷。【荷紀】カキ はすの花のかをり。草應物詩「微風遠二一一、坐客散二座縁一」＝荷香。【荷鋤】カヂヨ はちすの花。王延壽、靈光殿賦「圃渭方井、反植二一一」＝芙蕖・芙蓉。【荷擔】カタン くはをになふ。周祇詩「一一一穿一雲得一秧苗、作一壟從一此謝二塵囂一」【荷花生日】カクワシヤウジツ 陰暦六月二十四日を觀蓮節と爲し、亦一一と名づく（吳都記）【荷巻】カケン めぐみをになふ。北史、高允傳「沙門道登過二高遠一、進以三道登一一於孝文一、多奉以一貨、深託二仗之一」【荷鋪】カホ 徹ヲをになふ。晉書、劉伶傳「當乘二鹿車一、携二一壺酒一、使二人一一レ一而隨レ之、謂曰、死便埋レ我」【荷擔】カタン ○になふ、肩にするを荷といひ、背にするを擔といふ。謝承、後漢書「許荊字子張、家貧爲レ吏、無一レ有二船車一、休假當單歩一一」○國 力を添へる、加勢する。【荷擔】カタン はすの葉が枯れてなくなる。蘇軾詩「一一已無二擎一雨蓋一、菊殘猶有二傲一霜枝一」【荷包】カハウ ○はすの葉にてつつむ。高啓詩「小舟盛レ餉一一飯、遠餉招レ沽竹醞醅」○つつみ、袋の類をいふ。【荷負】カフ 物を肩にになふ。轉じて事を引き受ける。詩經、疏「能一一二一天之美譽一也」＝負荷。【荷蕖】カキョ はすの葉におくつゆ。孟浩然詩「欲レ知二臨レ池久、十一一漸成レ珠」＝荷珠。【荷爲智】カヰチ 圖荷造人は荷を擔保として銀行より金を受取り、荷受人は金を銀行に拂ひて荷を受出す手續に由る爲替手形。【荷物】ニモツ 國携帶品。＝行李。

【莪】ガ

つのよもぎ、蒿ヨモギの一種、濕地に生す、わかばを食用とす。詩、小雅「菁菁者一一」＝蘿蒿・我蒿。

【莖】キャウ 庚 通音ケイ

○くき、草本植物のみき、地上に延びるものと地中を這ふものとあり「細一」「紫一」「修一」○ささへばしら（支柱）○つか（劍及）○物の柄。又は細き物を數ふるに用ふ。杜甫詩「數一白髮那拋得」

【荅】カン 通音ガン

つぼみ（蕾）花の將に開かんとするもの。

【荈】キン グン 侵 眞

ささも、やなぎもの葉大にして莖長き一種の漢。＝牛藻・衆藻。

【莒】キ 魚

○いも（芋）○周代の國名、今の山東省一縣。

【莞】㊀クヮン 潸 ㊁クヮン 諫 ㊂ヲン 刪

㊀一剛はにっこりと笑ふ貌、ほほゑむ。㊁る、まるがま（蒲）濕地に生ずる一種の草、葉は針狀長さ四五尺に至り、中にずゐを含む、織りて席ムシロにつくる。＝苻離莞蒲。○るむしろ。

【莞爾】クヮンジ 微笑する貌。論、陽貨「夫子一一而笑曰、割レ雞焉用二牛刀一」【莞蓆】クヮンセキ るむしろと、たかむしろと。詩、小雅「上莞下席、乃安斯寢」王維、苦熱詩「一一不レ可レ近、絪縕再三溫」【莞蒲】クヮンホ ○ると、がまと。後漢書「樹レ之以二竹葦一一一」＝蒲莞。○まるがま。

【莢】ケフ 葉

○さや（包）豆類の實を包める殻ガラ＝豆角。○錢の名、形が楡ニレの實のさやに似たる故に名づく。漢書、食貨志「今民鑄二一錢一」○莢一ケフは堯の時の瑞草の名。○皂一樹ソウケフは樹の名、さいかち。

【莧】ケン 霰

○ひゆ、草の名、長尺餘、葉は卵圓形、秋黃白色穗狀の花開

く、わかばを食用とす。〇ー陸、ヤマゴバはやまごぼう、利水劑に用ふ。‖酈陸。

【莎】 ㊀サ 歌 ㊁スヰ 支 ㊂サ 麻
㊀はますげ（香附子）海邊に生ずる草の名、赤褐色の花さく、地下莖を藥用とす。〇ー車は漢時代の西域の國名、今の新疆省ー車縣の地。㊁按ーダは手にてこする、もむ（切韻）㊂ー雞ダイはははたおりむし。
【莎雞】ダイ はたおりむし。螽蟖の屬。詩、豳風「六月ー振レ羽」

【莖】 ザ 圖
〇きざみわら（新藁）細かに切りしわら、馬糧に用ふ。〇輕小なる義。
【莖豆】ダウ きざみわらと豆とをまぜたるもの、馬の食料。史、范曄傳「匿ニー其前ニ」

【莘】 シン 眞
〇ながし（長）詩、小雅「魚在在藻、有ニ其尾ニ」〇ー莘は衆多なる貌。班固、東都賦「俎豆ーー」〇細ーシンは藥草の名、柔莖細根、味極めて辛し、葉は心臟形にして三瓣の花開く。

【苾】 ジン 軫
ー芳ホウは藥草、すひかづら。

【莊】 シャウ サウ 陽 俗に庄に作るは非
〇おごそか（嚴）行儀作法が嚴重なり「齊ー」「矜ー」「嚴ー」論、爲政「臨之以ー則敬」ただし（正）「端ー」「肅ー」莊、天下「不可與ー語」おもおもし（重）〇草の盛んなる貌。〇さかんなり（盛）〇盛んにかざる。〇城市外に設けたる一區劃の地。〇ゐなかや（田舍）「村ー」「溪ー」〇六方に達する道「康ー」〇しもやしき「別ー」「山ー」〇みせ（店肆）「衣ー」「茶ー」「錢ー」〇臺灣の行政區劃の一、社よりは小、町よりは大なり。〇ー周は周代の哲學者。〇圖ー園の略稱。
【莊嚴】シャウゲン 圖衣服・宮殿等を立派に飾りたてておごそか（無量壽經）
【莊司】シャウシ 圖莊園の所有者の命を受けて、其の地の事務を司る者。
【莊園】サウエン 〇しもやしき、別莊。語林「李夫人曰、子弟成長、當ニ設ニー一ニ」〇圖中古、皇子大臣などに賜ひし田園。
【莊敬】サウケイ おごそかにつつしむ。禮記「致レ嚴以治レ躬則ーー、ーー則嚴威」
【莊潔】サウケツ おごそかにしてきよし。魏書、高道傳「形貌ーー、容氣雄暢」
【莊語】サウゴ 正しきことば。莊、天下「以ニ天下一爲ニ沈濁不ニ可與ーー一ニ」
【莊叟】サウソウ 莊周、叟は長老の稱。白居易詩「大抵宗ニーー一ニ」
【莊莊】サウ さかんなる貌。管子、小問「ーー乎何其士也」
【莊騷】サウサウ 莊周の莊子と屈原の離騷と。韓愈、進學解「下逮ニーー太史所レ錄」
【莊士】サウシ おごそかに正しきさむらひ。唐書、白居易傳贊「杜牧謂、微婉不遇、非ニーー雅人所レ爲」
【莊子】サウシ 書名、十卷、周の莊周著す、要旨、老子に本づく。一名、南華眞經。
【莊周】サウシウ 戰國の宋の人、蒙國の吏と爲る、其の學說はざる所なし、書十餘萬言を著す、率ね寓言なり、其の要旨老子に本づく、楚の威王其の賢を聞き迎へて相と爲さんとす、辭して就かず。
【莊周之夢】サウシウノユメ 莊子が夢に蝴蝶となり、覺めて後、周が蝴蝶となりしか、蝴蝶が周となりしかを知らずとて、我と外物とはもと、同一なる理を述ぶ（莊、齊物）
【莊稼】サウカ きはめて長壽なるにいふ。莊、逍遙遊「上古有ニ大椿者ー以ニ八千歲ー爲レ春、八千歲爲レ秋」とあるに本づく。薩都剌詩「惟期扶ニ莊ーー一ニ論」
【莊重】サウヂウ おごそかにしておもおもしし。‖嚴重。
【莊老】サウラウ 莊周と老聃と。又、其の著書即ち莊子と老子と。宋史、王昭素傳「昭素、博通ニ九經ー兼究ニーー一ニ」
【莊課】サウクワ おごそかにしておそるべき義。書經、疏「ーー謂ニ矜莊愼ニーー也」
【莊列】サウレツ 莊子と列子との二書。白居易文「ーー寓言、風騷比興」‖列莊。

【莞】 シュウ 東 又、笔に作る
ー蔚は藥草の一、かこさう（夏枯草）めはじき、やくも（益母）‖野天蓼。

【葵】 スキ 支
ここにし、こえんどろ（胡荽）香草の一。

【莛】 テイ 青
〇くき（草莖）漢書、東方朔傳

「以ー衝ㇾ鏃」○はり、うつばり（屋梁）

【荻】 テキ 錫

をぎ、蘆の類、多く水邊に生じ、葦よりも節短し「蘆ー」「枯ー」

【荻花】をぎのはな 韋應物詩「想子今何處、扁舟蘆ニーー」

【荻洲】をぎの生ずる洲。庾信詩「錦纜遊ニ沙嶼ー、蘭橈遊ニーー」

【荻筍】をぎのたけのこ。歐陽修詩「ーー時魚方有ㇾ味」

【荻筆】をぎを筆に代用せしもの。南史、陶弘景傳「恆以ニ荻篦ㇾ筆、上ニ灰中ー學ㇾ書」

【荻滅】をぎと、あしと。張舍詩「兩人相見ーー遠」

【貝ㇾ荻北ㇾ地】ナンクリクス 宋の歐陽修、少時家貧し、荻を筆に代へ地面に畫して習字せし故事（宋史、歐陽修傳）貧爭略有。

【荼】 ト ダ 虞 麻

○のげし、莖は中空にして折れば白くして苦き汁を出す。花は春夏の交に開く、黄にして菊に似たり、けしあざみ、にがな（苦菜）○をぎのほ（萑苻）○あれたるくさ（穢草）○つばな（茅秀）詩、鄭風「有ㇾ女如ー」○害惡、くるしみ「ー毒」○いつはる（僭）○古、茶に同じ。○あしのほ（芽）

【荼蓼】ト にがなと、なづなと。善人と惡人とに喩ふ。楚辭、九章「ーー不ㇾ同ㇾ畝兮」

【荼毒】トク にがなの毒。害惡に喩ふ。書、湯誥「罹ニ其凶害ー、弗ㇾ忍ニーー」

【荼藍】ヒト 莖生の灌木の名、香氣多し。益部方物記「蜀ーー多ㇾ白而黄者時時有ㇾ之、俱香減ニ於白花ー」‖醉醒。

【荼毘】ビ 梵語、火葬をいふ。閻魔多の略、火化と譯す。翻譯名義集「天竺第九類人滅、柴以ニ檀香油、屈ニ雜寶體ー、厥維卽ーー燒化也」‖茶吠。

【荘】 ト 虞

ーー蘅はかんあふひ、葵の屬、冬時花開く。

【荳】 トウ ヅ 宥

○まめ（菽）豆の俗字。○ーー蔻は其の實を藥用とす、龍眼子に似て尖る。‖草豆蔻。

【莓】 バイ 通ㇾ苺 マイ 灰

○きいちご（前）山野自生の灌木、莖に刺多く葉は楓に似たり、簇粒狀黄色の實を結ぶ。‖懸鉤子（莓はくさいちご）○こけ（苔）「ー苔」○ーーは草の美しくあをあをしたる貌。

【莓苔】バイタイ こけ。杜甫詩「閑意坐ニーー」

【莓莓】バイ ○草のあをあをしたる貌。左思、蜀都賦「蘭渚ーー」○田の美くしき貌。陳信詩「原野自ーー」

【莇】 バ 麻 陽

はぐり（貝母）花葉共に韭に似て根は岡く白くして小貝の形をなせる一種の草。

【莫】 ㊀バク・マク ㊁バク ㊂ボ 藥 陌 遇 通 ㊂は㊀㊁に通ず

㊀なし（無）否定する辭。孟、梁惠王「晉國ー強ㇾ焉」○むなし（虚）ひろし「廣ー」○なかれ（勿）魏志、鍾會傳「ー多飲ㇾ酒」○くらし（闇）○つとむ（勉）○さだまる（定）詩、大雅「求ㇾ民之ー」○はかる（謀）詩、小雅「聖人ー之」○やむ。やます。古、瘼に通ず。○けづる（削）○ーーは草木の密に茂る貌。又、風塵の起る貌。○うすかは、膜に通ず。○おほいなり（大）○さく。古、幕に通ず。○遮ーサダ ㇾはままよ。‖任他。㊁ーーはしづか（靜）なる貌。又、きよし（淨）㊂くれ。‖暮ー春」「歲ー」○な、菜の一種。詩、魏風「言采ㇾ其ー」（言はここに）

同訓異字 莫・無・靡・毋・亡・勿・非・沒・微の別は無（一七六頁四段）の條を見よ。

【莫賓】バクヒン 古の歌曲の名。杜甫、短歌行「王郎酒酣夜ㇾ劍舞ニ地歌ーー」

【莫敖】バクゴウ 古の楚の官名、位令尹に次ぐ（左傳）

【莫逆友】バクギャクノトモ 互に氣の合へる友。莊、大宗師「四人相視而笑、莫ㇾ逆ニ于心ー、遂相與爲ㇾ友」

【莫愁湖】バクシュウコ 金陵（南京）に在る湖水。古、歌謠を善くせし女子莫愁の舊居なりと傳ふ。三位傳「今金陵有ニーー、在ニ西城南ー」

【莫須有】バクスユウ 有るべきことなからんや、卽ち必ず無しとはいはれず、半信半疑の語。宋史、岳飛傳「秦檜曰、其事體莫ㇾ須有、韓世忠曰、——三字、何以服ニ天下ー」

【莫大】バクダイ この上なく大いなり。孝經「父母生ㇾ之、續ーーㇾ焉」‖最大。

【莫莫】バクバク ○茂密なる貌。詩、周南、維葉ーー」○靜かなる貌。詩、小雅「君

婦ー（ー）しの美女の貌。漢書、揚雄傳「ー（ー）紛紛、由谷俯レ之風奏」

【莫府】バク　將軍の營所。莫は幕。史、廉頗藺相如傳「市租皆輸入ニ（ー）ー（ー）」＝幕府。

【莫邪】バク　古の名劍の名。戰國策「雖ニ干將ー（ー）、非レ得ニ人力ニ、則不ニ能ニ割斷ニ」＝鏌鋣。

【莫邪爲鈍】シテハ　世俗の人が賢人を愚なりとするに喩ふ。賈誼、弔ニ屈原ニ文「ー（ー）ー分、鉛刀爲レ銛」銛は利。

【莫春】ボ　はるの末。論、先進「ー（ー）者春服既成」＝暮春・晩春。

【莫夜】ヤ　よるの易、夬卦「ー（ー）有レ戎」＝暮夜。

【莫大小】タイショウ　西域羽織なりといふ。

【莩】

㊀フ　㊁ヘツ　㊀虞　㊁霽

㊀葦の莖の中にある白きうすかは。○轉じて至りて薄きものに喩ふ。漢書、中山靖王傳「非有ニ餘ー之親、鴻毛之重ニ」㊁うえじに（餓死）ぬに通ず。孟、梁惠王「野有ニ餓ー（ー）」○めあさ（蔵母）

【蒲】

フ　㊀虞

蓮ーは堯の時生ぜし瑞草。

【扶】

フ　㊀虞

はちすのは（荷葉）

【蒻】

ベツ　㊀屑

○わりふ（符）わかつ。＝別。○うつしうう（移蒔）○佛家にて、作文の稱「記ー」

【蓖】

㊀ラツ　㊁ラ　㊀㊁㊂㊃

㊀藏ーは牛馬の鼻にとおす草の名。㊁ー宕（ラトウ）ははしりどころ、をめきぐさ、毒草の名。＝天仙子。○圖たばこ（煙草）

【莉】

リ　㊀霽

茉ーリは花卉の一。茉（一六三二頁二段）を見よ。

【莅】

リ　㊀寘

のぞむ（臨）其の場に出席する。其の位に即く。＝蒞・涖。

同訓異字　莅・蒞・臨・瞰の別は望（九九頁三段）の條を見よ。

【莅位】リイ　くらゐにのぞむ。＝臨位。

【莅事】リジ　其のことにのぞむ。書、周官「不レ學ー（ー）レ官、ー（ー）レ惟煩」

【莅職】リショク　職務にのぞむ。魏合璽、ー（ー）才俊海、歸山路未レ通」

【莅盟】リメイ　其の場所にのぞみてちかふ。春秋、「公子友如レ齊ー（ー）レ」

【莅戎】ジュウ　其の所又其の事にのぞむ。詩經、疏「ー（ー）ニ其政ニ」

八畫

【菴】

㊀アン　㊁エン　㊀覃　㊁鹽

㊀ー閭はくさよもぎの一種。○ー羅は一種の果。謝靈運、山居賦「希ニ羅之芳園ニ」○いほり。＝庵・菴。㊁ー蔼はおほふ（翳ふ）

【蓼】

㊀リウ　㊁リョウ　㊀尤　㊁篠

㊀しをる、草木が衰へしぼむ。○おとろへつかる、衰弱する。○やむ（病）倦り「智人其ー乎」なゆ、支へる力なし。㊁ー蕭はは藥草の名、ゑぞよもぎ。＝蔵蕭。

【蓼末】マツ　しをれたるなへ。陸雲賦「ー（ー）蝉面振レ頽兮」

【蓼縮】シュク　なえちぢむ。

【蓼薄】ハク　つかれうら。國書、薛眞度傳「民人ー（ー）、無ニ以濟ニ之」

【蓼蓼】リョウ　なへしぼむ。

【蓼落】ラク　しぼみおちる。晉書、五行志「儀仗生ニ蓮葉ー（ー）一、五六日而ー（ー）」

【菟】

㊀エン　㊁ウツ　㊀㊁阮

㊀しける、しけし、草木の茂盛の貌。○しげれる草木。○紫ーンは花卉の一、秋時、淡紫色の花開く、おにのしこぐさ。○その。苑に通ず。㊁積み重なる。古、纏に通ず「ー熱」

【菟結】ケツ　むすぼる。埤雅「凡物盛而成ニ糾葛ー（ー）ー」＝鬱結。

【菟熱】ネツ　つもれるあつさ。素問「五藏ー（ー）ー」＝積熱。

【菸】

㊀エン　㊁ヨ　㊀先　㊁魚

㊀たばこ（淡巴菰）＝煙草。㊁しなる（撓）「ー色」

【菡】

カン　㊀感

ーはすの花、又、蓮花の蕾の將に開かんとするもの。＝萏。雅「荷、芙蕖、其華ー（ー）萏」

【蓁】

キ　㊀支

○まめがら（豆莖）豆の實を取りしあとの莖枝。書、禹貢「厥ー（ー）貢漆絲」（然は燃の正字）○萁に似たる一種の草。古、簀ニを編む料とす。

【萁萁】キキ　まめがら。潘岳賦「木石前ー（ー）ー空虛」

【萁服】フク　萁草にて編みたるえびら。

艱は厳の漢書、五行志「厳弧ニ―」

【萓】キ 支 来、宜に作る

―勇草は、わすれぐさ。‖宜男草・鹿蔥。

【菊】キク 入 古、鞠に作る

花弁の一。艾ヨモギの属、花は香気多し「芳―」「細―」「寒―」「黄―」「裁ニ―」「東籬ニ―」‖節華・延寿客・霜下傑。

【餐レ菊】サクキク 菊の花弁を食ふ。離騒「朝飲ニ木蘭之墜露ヲ兮餐ニ秋菊之落英ニ」

【菊の重陽】キクノチョウヨウ 重陽の節句ニ同じ。

【菊の花盛】キクノハナザカリ 菊の花を採るの陶潜、飲酒詩「採レ菊東籬下ニ悠然見ニ南山ニ」

【菊月】キクヅキ 陰暦九月の異名「事物異名録」

【菊水】キクスイ ○南陽の酈県（今の河南省内郷県の西北五十支那里に在り）の甘谷の上に大菊あり、人其の谷の水をいふ。次条参看。‖菊潭。○圖流水に菊花を配せし紋所。楠木氏の紋。

【飲ニ菊水ヲ】キクスイヲノム 菊のしづくをのむ。風俗通「南陽酈県有ニ甘谷ニ、谷中水甘美、云其山有ニ大菊ニ、水従ニ山上ニ流下、得ニ其滋液ニ、谷中有ニ三十余家ニ、悉飲ニ此水ニ、上寿百二三十、其中百余、下七十八十者、名ニ之大夫ニ」

【菊枕】キクマクラ 菊の花を入れたるまくら。潘岳「秋菊ニ有ニ落花ニ、貯ニ以布裏ニ、作レ枕用、能清ニ頭目ニ、去ニ邪穢ニ」

【菌】㊀キン ㊁キン 真 侵

㊀きのこ、たけ（地蕈）「松―」「異ニ―」「栄ニ―」○極めて細微なる下等植物、他物に寄生して醗酵又は疾病の媒を為す「微ニ―」○たけのこ（竹筍）筍と通ず。○朝ニ―はむくげ（槿）「朝ニ―」○芝ニ―は霊芝。㊁ニ―桂は薫草。一説に竹に似たる植物。

【菌蕈】キンジン 菌の頭、かさの形に似るが故。

【菌褶】キンシュウ 菌傘の下面にあるひだ。

【菌蠅】キンヨウ きのこ、たけ（蠅もきのこ）

【菌毒】キンドク 菌類の毒。

【菌類】キンルイ きのこ類の総称。

【蓳】㊀キン ㊁キン・ゴン 侵 吻

㊀すみれ、原野に自生する草、春時紫又は白の小花を著く。‖紫花地丁。㊁とりかぶと、かぶとぎく（烏喙）毒草の一。蘇洵、高祖論「猶ニ醫者之視ニ―一也」‖烏頭。○―は少き貌（―は毒あれども少用すれば薬となる、故に僅の字ニ従ふ）

【蓳蓳】キンキン 少し。漢書、地理志「採ニ章山ニ黄金ニ、然ニ―一」‖僅少。

【蓳茶】キンチャ とりかぶと。にがなと。詩、大雅「周原膴膴、―如レ飴」（一説蓳は、蔬の類、一名旱芹）

【華】㊀クヮ ㊁クヮ・ゲ 麻 禡 花の古字

㊀はな。○はなさく（開花）禮、月令「桃始ニ―」○つや、いろ（光沢）○はなやか、美くしくかがやく（鮮美）ひかり（光輝）「光ニ―」○いろどり、もやう（彩色）○かざり（修飾）○白粉オシロイ「鉛ニ―」「亜鉛ニ―」○さかゆる、盛んなり「栄ニ―」○内にみちて外に発するもの。○たちる、ふるまひ（容貌）○名望「一名」○文徳。○れいぎ、文事。○禮文盛んなる地、支那人自国を称していふ「ニ夏」「中ニ―」○髪白し「ニ首」○外形、虚飾、外観の美「ニ寄」「去ニ就実」㊂五嶽の一、華に通ず、陝西省ニ陰県の南十支那里に在り。‖西嶽。○かば。‖樺。

【華押】カオウ かきはん。花押を見よ。

【華英】カエイ ひかりかがやく（南都賦注）「ニ―、光耀也」

【華奕】カエキ かかやきてさかえる易林「春桃萌生、蔦物ニ―」

【華衍】カエン うるはしくゆたか。唐書、懿安皇后郭氏伝「帝亦愛ニ其、朝夕作御、務ニ―修大、稱ニ后意ニ」

【華嶽】カガク はなやかにしてやさし。晋書、李重伝「雖ニ文物ニ―、而理存ニ切要ニ」唐書、崔融伝「為レ文ニ―、当時未レ有ニ類者ニ」

【華屋】カオク 立派なる家。史、平原君伝「趙ニ亟於ニ―之下ニ」一説に宮殿の名。

【華夏】カカ 華はなやか、夏は大、支那人自国を誇称していふ。蜀志、關羽傳「威震ニ―ニ」

【華甲】カコウ 華の字を分てば六十一となる、よりて六十一歳の称とす。荒

成大詩「觀我劇周——子、謝人梁動玉東西」

【華紳】クワシン 人の冠帽を稱す。劉禹錫文「每ㇾ拳二——一、賜二之哀言一」‖華纓・華簪。

【華紱】クワフツ はなやかにかざる。北史、周武帝紀「帝衣二布袍一、冠二布被一、無二金寶之飾一、謂二宮壁一——者皆撤二毀之一」

【華裾】クワキョ 美くしき衣服、裾はもすそ。李賀、高軒過「——織ㇾ翠青如ㇾ蔥」

【華皖】クワクワン うつくし、美好なり。禮、檀弓「華而皖、大夫之贄也」注「華、華也、皖、明貌」

【華簡】クワカン 美くしきやかた。劉楨詩「——寄二流波一」‖花館。

【華管】クワクワン 白華を水にひたして管となせば、白茅にて之を束ぬ、二物微なりと雖も、相待ちて用を爲す。夫婦の離るべからざるに喩ふ。詩、小雅「白華兮白茅束兮、之子之遠、俾ㇾ我獨ㇾ兮」

【華京】クワケイ うつくしきみやこ。張鏡賦「觀二夫天官之羅布一、故作二則於一一」‖華洛。

【華冒】クワボウ 徒にうはべを飾れることばにはいふ。——盧也、至言實也」

【華軒】クワケン 貴人の乘る美くしき車。

【華袞】クワコン 天子の御衣。穀梁傳序「一字之褒寵、踰二——之賜一、一言之貶辱、過二市朝之撻一」

【華采】クワサイ はなやかなるいろどり。南史、庾杲之傳「杲之美二容貌一、善言笑（中略）杲之爲二蜂蜜所一レ映、頗有二——一」‖華彩。

【華粧】クワシャウ はでやかによそほふ。晉子夜歌「輕袖拂二——一、窈窕登二高臺一」‖妍粧。

【華侈】クワシ はでやかにおごる。晉書、何曾傳「性奢豪、務在二——一」隋書、楊素傳「第宅——、制擬二宮禁一」‖華奢。

【華耐】クワタイ 美くしきことば。南史、崔慰祖傳「口吃無二——一」

【華恍相稱】クワクワウサウショウ 華は詞章、實は操行、二者相かなひて全人たるを得（南史、齊衡陽王鈞傳）

【華奢】クワシャ はなやかなるおごり。‖紛奢侈奢・奢奢。

【華首】クワシュ しらがあたま。後漢書、陳蕃傳「蹇諤之操、——彌固」‖華顛・白首。

【華燭】クワショク ○はなやかなるともしび。徐陵詩「終宵處二幽室一——光燭燭」○結婚の宴にいふ。花燭參看。

【華胥之夢】クワショノユメ 黃帝が夢に華胥の國に遊びし故事によりて吉き夢。又は單に夢の義に用ふ。列、黃帝「黃帝晝二天下不ㇾ治（中略）其展而夢、遊二於華胥氏之國一、其國無二帥長一、自然而已、其民無二嗜欲一、自然而已、不ㇾ知ㇾ樂ㇾ生、不ㇾ知ㇾ惡ㇾ死、故無二夭殤一、不ㇾ知ㇾ親ㇾ己、不ㇾ知ㇾ疎ㇾ物、故無二愛憎一、乘ㇾ空如ㇾ履ㇾ實、寢ㇾ虛若ㇾ處ㇾ牀（中略）黃帝既寤、悟然自得曰、今知二至道不ㇾ可二以情求一矣、又二十有八年、天下大治、幾若二華胥氏之國一而帝登假」

【華楨】クワテイ 美くしき名がけるたるき（張衡、西京賦）

【華褧】クワケイ はなのしべ（南都賦）‖花蘂。

【華鬣】クワリョウ 華山と蓋山と。轉じて高大なる喩とす。北史、魏薛孝通傳「微臣信慶渥、何以答——一」‖蓋華。

【華清宮】クワセイキュウ 唐の時、驪山（陝西省臨潼縣の南）の離宮の名。唐書「開元五年、改二溫泉宮於驪山一、天寶六載、改賜二——一」

【華篆】クワテン ○美くしき料紙。杜甫詩「作句乘二——一」○人の手蹟を稱す。‖華翰・華墨。

【華戩】クワセン 美くしき模樣のある毛布。

【華贈】クワゾウ 文章のはなやかにして意味のゆたかなる義。周書、薛寘傳「中書監盧柔、學業優深、文藻——」

【華族】クワゾク ○貴族。柳宗元文「公以二令望一、頃於——一」○國公侯伯子男の爵ある者の稱。士族の上に位す。

【華佗】クワダ 古の名醫の名。魏志、方伎傳「——字元化」

【華大】クワダイ 美くしく大いなり。唐書、姚崇傳「以二館局一——一、不二敢居一」

【華誕】クワタン ○浮虛。逸周書「心氣——者、其華流散」○㊟人の誕生日をいふ。

【華冑】クワチウ 貴族の子孫。晉書、石季龍載記「衣冠——、宜ㇾ擢二優免一、從ㇾ之」

【華輔】クワホ 美くしき車の轅。轉じて美くしき車の義とす。盧倗詩「出入陪二——一」

【華桑】クワサウ 雉子の異名。書、益稷「日・月・星・辰・山・龍、——作ㇾ會」

【華職】クワショク 榮く光榮ある地位。後漢書、崔琦傳「林林外戚、——熾煌」

【華堂】クワドウ 美くしきたかむしろ。晉子夜四時歌「反覆——上」

【華顛】クワテン 老人のあたま。又、老人。朱松詩「可二是太平無ㇾ象、溪橋醉舞——」

【華而皖】クワニテクワン はなやかにして美くし、皖は美好。禮、檀弓「童子曰、——、大夫之贄與」

【華而不ㇾ實】クワニフジツ はなのみにて、みなし。行其言に反するに喩ふ。左文五「陽處父——、怨之所ㇾ聚也」

【華年】クワネン 少年。魏書、王叡傳「漸二風教於——一」

【華報】クワホウ ㊟今世にてうけるむくい。來世に受ける報を果報といふの對。

【華美】クワビ はでやかに美くし。論、堯典「侃二侃鄂鄂一、祭祀之服、大——也」

【華廡】クワブ 美くしくはでである（韓愈、許公碑）‖妍靡・奢靡。

【華表】クワヒョウ ○墓所の前に立てる門。標

神記「司空張華曰、世說燕惠王塚前有二一一一、本已經二千年一」○圖神社の前に立てる鳥居。

【華饌】クワセン はなやかなるくつわ。陸倕詩「上宰嚴二祀事一、清塗飯二一一一一」‖花饌。

【華冠】クワカン 美くしくかざれる冠。北史、柳虬傳「時論稱二其一一一」

【華簪】クワシン きれいなみせ。立派なる商店。

【華封三祝】クワホウノサンシュク 華の封人が堯を祝するに、壽・富・多二男子の三を以てせし故事、よりて人を祝するに用ふ。莊、天地「堯觀二乎華一、華封人曰、嘻聖人、請祝二聖人一、使二聖人壽一、堯曰辭、使二聖人富一、堯曰辭、使二聖人多二男子一、堯曰辭」

【華盥】クワカン 人の手傳を稱す。‖華輪・華篤。

【華幔】クワマン 花のさき亂れて長く垂きたるを幕に比していふ。又、美くしきまく。韓康詩「光煌吐二一一一一長舒」

【華名】クワメイ 美くしきほまれ。後漢書、周燕傳「釣二采一一一、庶二幾三公之位一」

【華陽巾】クワヤウキン 隱者のづきん。梁の陶弘景が自ら華陽隱居と號して、此頭巾を著けしによりて名づく。王禹偁、黃州竹樓記「戴二一一一一手執二周易一卷一」

【華厥】クワケツ ○衣食の美くしく豐かなる義。宋史、王安石傳「性不レ好二一一一、自奉至儉」○貴族。唐書「凡三世有二令譽一者、曰二一一一一」

【華容】クワヨウ うつくしきすがた。庾世南、史略「洗レ面作二一一一一」

【華洛】クワラク 美くしきみやこ。‖花洛・華京。

【華騮】クワリウ 周の穆王の八駿馬の一、よりて良馬の義とす。淮南子「一一綠耳、一日而至二千里一、然其使二之捧一レ兎不レ如二豺狼一」

【華嚴】ケゴン はなやかにうるはし。梁書「宮室則願二一一一一、姬嬪則願二美豔一」‖華美。

【華嚴宗】ケゴンシュウ 佛教の一派。馬鳴菩薩の創始。華嚴經を所依とす。

【華鬘】ケマン もと西域婦女の首飾。今、佛像の頂、又、佛前の莊具として用ふ。守護國界經「以二種種寶一、用作二一一一一而爲二莊嚴一」‖花鬘。

【華萼草】クワガクサウ 草花の一、葉は牡丹に似、春時、紅紫色絳狀の花さく。‖荷包牡丹。

【華文綾】クワモンリョウ 花のもやうあるあやぎぬ。

【華不二再揭一】カフサイケツ 落ちし花は、ふたたび枝にのぼらず。陸機賦「時無二重至一一一」

【菓】クワ

圖本、果に作る

○このみ、くだもの（果實）○■一子レ茶うけとして食ふもの、古は果實を用ひ、今は主として澱粉などに砂糖を和して製す「茶一」

【菅】クワン

圖

○かや、ちがや、すげ、すが、茅の一種、莖に似て裏に硬きすぢあり、笠又蓑を作る。○ちがやにて編みたるとま（苫）

【菅蓋】カンガイ すげと、あしと。緇、少儀注「葭蓋、謂下東二一一一一以裹中魚肉上也」

【菅滿】カンマン わらぐつ。淮南子「必有二一一一一邀時、短褐不レ完者一」

【菅家文草】カンケブンサウ 十二卷、菅原道眞の詩文集、第一卷より第六卷までは詩、餘は文を載す、其の太宰府に貶せられし以後の詩文は菅家後草一卷に收む。

【菅茅】カンバウ かやの一種。本草「一一只生二山上一、似二白茅一而長、入レ秋抽レ莖開レ花成レ穗、如二荻花一」

【菴】ケン

眞

一耳はをなもみ。‖卷耳。

【菰】コ

虞

○まこも（菰蔣）水草の一、菖蒲に似て高さ四五尺、春末、白色の蘂を生ず、之を一一菜又莖白といふ、夏秋の間、花開き實を結ぶ、之を一一米胡一、又、雕胡米といふ、食ふべし。○淡巴一一はたばこ。○蘚一一は菌の一種（一一に茹に作る）

【菰米】コベイ まこもの實。宇解を見よ。儲光羲詩「夏來一一飯、秋至菊花酒」

【菰蒲】コホ まこもと、がまと。黃增錄「一一魚稻、采取不レ盡」

【菰蘆】コロ まこもと、あしと。史、司馬相如傳「蓮藕一一」

【昆】コン

元

○香草の一、かをりぐさ。○圖一蒟は植物の名。又、其の根塊にて製したる食品。一一は蒻の俗用。

【菜】サイ

隊

○な（蔬）あをもの、やさい、葉莖又は根を食用に供する草の總稱「野一」「蔬一」○おかず、酒又は飯の副食物、俗に肴饌をいふ。○うるて顏色の青くなるにいふ「一色」

【菜圃】サイホ 菜園に同じ。詩、齊風、東方未レ明「折二柳樊一レ圃」注「圃、一一也」

【菜般】カイ やさいのさかな。揚雄、疏

「筍、竹萌也、可ニ以爲一一一」

【菜羹】サイカン やさいのあつもの。新序「夫子陳蔡之厄、豆飯一一、不レ足ニ以接ニ餘」＝蔬羹。

【菜華水】サイクワすい 春の末の水の名。宋史、河渠志「春末蕪菁華開、謂ニ之——一」

【菜畦】サイケイ やさいばたけ（漢書、食貨志）＝菜園・菜圃。

【菜根】サイコン やさいのね。聞見錄「汪信民言、人咬ニ得一一、則百事可レ做」

【菜根譚】サイコンタン 二巻、明の洪自誠（還初道人）著す、語錄體の書にして、天理人情に本づき、徳行を尚び、名利を輕んじ、文雅風流の意多し。

【菜市】サイシ なつのつけもの。南史、宗慤傳「設ニ菜飯一一」

【菜色】サイショク人の飢えて青くなりたるかほ色。禮、王制「雖レ有ニ凶旱水溢ニ、民無ニ一一一」

【菜食】サイショク やさいのみを食ふ。肉食の對。漢書、王尊傳「聞公一一愛レ民深矣」

【菜食者】サイショクシャ ○ことさらに野菜類のみを食ひて肉食を爲さざる人。○貧しき食事を爲す人。梁武帝勅「率ニ土來レ歸、——衆」

【菜蔬】サイソ やさい、あをもの。晉書、王湛傳「命取ニ一一ニ分ニ對而食レ之」＝蔬菜。

【菜飯】サイハン そまつなるめし。蘇轍詩「每煮ニ一一ニ分ニ齊鉢ニ、時乞ニ香泉一洗ニ病身一」＝蔬飯。

【菜圃】サイホ 野菜ばたけ。蘇軾詩「……漸練花漠漠」＝菜園。

【菑】シ 菑（艸部九畫）に同じ。

【菽】シュク 尤 ○むらがる、草があつまり生ずる（草叢生）○しとね。○好き爺。左、宣十二「射以ニ一一」

【菖】シャウ サウ 陽 通じて昌に作る ○しゃうぶ、さゝぶ、あやめぐさ、水邊に生ずる香草、葉は劍の如くにして深綠色、根を藥用とす「一蒲」「一蒲酒」○あやめぐさの一種、葉は淡綠色、濃紫色又白色の花を著ける、はなしゃうぶ。＝溪蓀。

【菖浦】シャウホ 香草の一、即ち菖ともいふ。南方草木狀「番禺澗中生ニ一一、一寸九節」＝昌蒲・昌陽。

【菖蒲酒】シャウホシュ しゃうぶざけ。歲時記「端午以ニ菖蒲一、或縷或屑泛ニ酒」

【萩】シュウ 東 通音スウ たゞな、葉は蕪菁ブに似て青白し「晩一」＝白菜・黃芽菜。

【蔵】ソウ 陽 よく寒に耐ふ、松の操あり、故に字松に從ふ。

【蓮】レン 先 まめ、豆類の總稱。

【蓮菪】シュクタウ まめのしほづけ。譚子「有ニ懶一一一若ニ鎖蟆一者、有ニ愛ニ鮑魚一若ニ風齊一者上」

【蓮水之歡】シュクスイノクワン 豆を食ひ、水を飲み、貧しく暮す中にて善く父母を孝養するよろこび。禮、檀弓「孔子曰、曏レ蓮飲レ水盡ニ其歡一、斯之謂レ孝」

【蓮豆】シュクトウ まめ。易林「且樹ニ一一、蓁成ニ蒲蘆一」

【蓮蓼】シュクリョウ まめと、むぎと。左、成十八「周子有レ兄、而無ニ一一、不レ能レ辨ニ一一」

【不レ辨ニ蓮蓼一】シュクリョウズンレズ 豆と麥とさへも別つ能はず。至愚者をいふ、不慧の至なり、蓮は大豆。前條參看。

【菹】ソ 魚 ㊀つけもの、かうのもの、酢菜「菜一」「芹一」「瓜一」○肉を醃づけにする。漢書、刑法志「一一其骨肉於市」㊁草の生ひ茂れる澤。孟、滕文公「驅ニ蛇龍一而放ニ之一一」

【菹醢】ソカイ 酢又は鹽につけたる菜と、ししびしほと。轉じて、誅戮の義とす。漢書、吳王濞傳「至ニ于窮國一、敢請ニ一一之罪一」

【萃】スイ 寘 ㊀あつまる、むらがる（羣）あつむ（聚）「會一」「叢一」「拔一」○草の貌。○類頓の頼と通ず。荀子「勞苦煩一而無功」○易の卦の名、坤下兌上。㊁一萃ヂは衣服のすれあふ聲。＝摩挲。

【萃萃】スイスイ 萃・聚・集・羣・輯・輯等の別は聚（一五四九頁三段）の條を見よ。

【萃聚】スイシュ あつめる。あつまる（易經）

【萃然】スイゼン あつまる貌（揚雄、長楊賦）＝萃如。

【萃如】スイジョ よきものをあつめる。

【拔萃】バッスイ 羣衆中よりぬき出る。孟、公孫丑「出ニ於其類一、拔ニ於其萃一」

【萑】㊀カン 寒 ㊁クワン 支 ㊀藥草の名、めはじき、やくも（益母）○草の多き貌。㊁をぎ（亂）荻の長大なるもの。○蘭ランは涙の流れる貌。漢書、息夫躬傳「涕泣流兮一蘭」＝闌干。

【蓁】シン サイ 眞 齊

○草の盛んなる貌、しげし。○雲の行く貌。○力を盡くす貌。○ー麥は文章相錯はる貌。○つつしむ貌。うやうやし。詩、周頌「有ー有甘」

【萎萎】ヰヰ ○草の盛んなる貌。詩、周南、維葉ー〻」○雲の行く貌。詩、小雅「有ン滃ー〻」（滃は雨氣）○力を盡くす貌。儀禮「盡ンレ力ー〻、臣盡ン力也」

【萎見】ヰケン 文章の相錯はれる貌。詩、小雅「斐分斐分、成ニ是貝錦一」

【蓍】

○セイ
○セイ 齊 灰

○かぶ、かぶらな「蔓ー」○にらばな（韭華）○うるはし。○茅の一種、たまぼ「ー茅」物を包むに用ふ。○ーは草木の茂り盛んなる貌。

【蓍莪】セイガ 人材を教育する義。詩、小雅、蓼蓼者莪篇、序「蓼蓼者莪、ン育ン材也」蓼蓼參看。

【蓍華】セイクワ うるはしきはなぶさ。物事の純粋なるもの。隋唐書、薛戎傳「論語者、六經之ー一也」＝精華・精粹。

【蓍藻】セイサウ うきぐさの一種。上林賦「噏ニ喋ー藻一、咀ニ嚼菱藕一」

【蓍蓍】セイセイ 茂りて盛んなる貌。詩、小雅「ー者莪、在ニ彼中阿一、既見ニ君子一、樂且有レ儀」此詩は人材を長育することを樂む意を述ぶ、よりて蓍莪は育英の義とす。

【若】

タ。 藥

實ーうは一種の毒草、はしりどころ、おにしるぐさ。

【菊】

タウ 藥

浦ーグは蔓生の果樹。＝葡萄。

【蓄】

タン 寒

蒨ーサンは、はちすの又、はちすの莖に開かんとする者。詩、陳風「彼澤之陂有ニ蒲菡萏一」＝芙蓉芙蕖。又、艸華の貌にいふ、はなやか。杜甫賦「雲閣ー以張蓋」

【葵】

タン 寒

○をぎ、葦の小なるもの。＝蒹葭。○をぎの葉の如く青白き色。詩、王風「毳衣如ニ菼一」

【葬】

チャウ 陽

○いらくさ（羊桃）花實ともに形桃に似て味甚だにがし、夾竹桃の類。○人の姓、ー弘は周の太史。○鳥ー是は北天竺の國名。

【葬楚】ソウソ いらくさ、灌木の名、花葉實桃に似、實は苦くて食ふべからず。詩、檜風「隰有ニ萇ー一」

【葯】

テキ 錫

はすのみ（蓮實）王延壽賦「綠房紫ー」

【蒭】

㊀ー絲はねなしかづら、蔓草の一、夏の末、白色微紅の小花開く。○うさぎ、兎に通ず。㊁於ー菟は虎（楚國の方言）

㊀ トツ
㊁ ト 遇 遇

【蒭婁】ソロ 魯國の邑名。泰山梁父縣の南に在り、陰公の隱居せし所、轉じて隱棲の地の義とす。左、隱十一「陰公曰、使ン予ニー一、毋ン將ン老焉」蘇軾詩「一林叢竹晉ー一」

【蒭狐】トコ からすうりの類。爾雅、疏「ー一、一名蔦、苗及實似ニ土瓜一、土瓜者卽王瓜也」

【蒭蕘】スウゼウ ふきの異名。本草「冬冬、一名ー一」

【菠】

ハ 歌

ー薐菜はうれんさう、野菜の一、もと西域の頗陵國の產、唐代、支那に移植す。葉扁平、花穗狀、初夏の頃開く、莖の根部は色あかく甘味あり。＝菠菜。

【莽】

バウ 養 莽は俗字

○くさ（草）雜草「草ー」「林ー」「磯ー」○大いなり。○草の深き貌「深ー」○くさむら、くさはら。易、同人「伏ン戎于ニー一」○ー蒼はひろき郊野。又、其の色。○宿ーは冬生じて枯死せざる草。○あらし、そそっかし（粗率）「鹵ー」

【莽卓】バウタク 艸に從ひ、犬に從ふ、犬の艸中に伏して兎を伺ふ會意。

【莽草】バウサウ 一種の毒草、常綠灌木の一、葉は柳に似たり。山海經「朝歌之山有ン草、名曰ニー一、可ニ以毒一レ魚」

【莽蒼】バウサウ ひろびろとしたるのはらの色。莊、逍遙遊「適ニー一者、三食而反、腹猶果然」

【莽蕩】バウタウ 草原の廣き貌。＝曠漠、北征賦「野蕭條以ー一、涸千里而無レ家」

【莽鹵】バウロ はるかにして、はてしがない。顧況詩「裝束淩ニー一、夜泊記ニ招搖一」

【莽莽】バウバウ ○草深き貌。楚辭、天問「陶陶孟夏兮、草木ー一」○のはらのひろく連なれる貌。漢書、註「ー一招搖ニ」

ー、平野貌」＝暮漠。

【萌】 ボウ ミャウ 國 俗字は朙

○きざす、もゆ。○ひこばえ、草木のめばえ「ー芽」○おこり、物事のはじめ、きざし。○たがやす(耕)○たみ(民)古、氓に通ず。○のぎ(芒)○ー乎は動かざる貌。荘、應帝王「ー乎不ー震不正」＝牢乎。

【萌芽】ボウガ 次條に同じ。牙・芽通ず。漢書「霍氏有二事ー一」

【萌芽】ボウガ ○めばえ。暦、月令「仲春之月、安ニーー一」＝發芽。○始まる。○漢書、劉向傳「詩始ーー」

【萌蘖】ボウゲツ 芽ばえと、ひこばえと。物の發生する義。孟、告子「雨露之所ー潤、非ー無ーー之生ー」

【萌芻】ボウスウ くさのめがもえいづる。楚辞「百卉已ーー」

【萌生】ホウセイ 多く生ずる。說文段「師儉ーー」

【萌兆】ボウテウ きざし。晉書、孫楚傳「見ー機而作、周易所ー貴、小不ー事大、春秋所ー誅、此乃吉凶之ーー、聖哲所二由生一也」

【萌動】ボウドウ めざす。禮、月令「天地和同、草木ーー」

【萌蘖】ボウゲツ 小民をいふ。後漢書「皆制二割ーー一、競恣二奢欲一」＝氓蘖。

【萌蘖】ボウゲツ 萌は民、蘖はけらい。戰國策「施及ニーー一」＝氓蘖。

【菲】 (一)ヒ (二)ヒ 國 尾 未

(一)うすし(薄)「ー薄」うすくする。論、泰伯「ー飲食」○蕪菁に似て紫赤色の花さく菜。○わらぐつ、ざうり(草履)＝扉。(二)草の茂れる貌。花のうるはしき貌。○ーーはかばし(香)き貌。又、美くしき貌。又、高下の定まらざる貌。又、亂雜なる貌。

【菲薄】ヒハク 非・薄・涼・薄・薄・薄・薄の別は薄(一六八三頁四段)の條を見よ。

【菲儀】ヒギ うすき謝禮の故事成語考「白讓二禮薄一曰ニーー一」＝薄謝。

【菲才】ヒサイ うすき才能。

【菲資】ヒシ にぶきたち。唐太廟樂章「顧惟ーー、忝二位椒宮一」

【菲食】ヒショク 粗末なる食物。梁武帝文「ーー薄衣、請王ー孤始」＝惡食・粗食・疏食。

【菲徳】ヒトク うすき徳「梁書、武帝紀」＝薄徳・寡徳。

【菲薄】ヒハク ○うすし。禮記、疏「君子不下以二貧寒一ー陵中禮」○うすくする。諸葛亮、出師表「妄自ーー」徳をうすくし輕んずる。

【菲薄】ヒハク ○草の茂れる貌。又花の美くしき貌。左思、吳都賦「暉暉ーー」○かばしき貌。司馬相如、上林賦「郁郁ーー」○みだれ雜ずる貌。太玄經「白黑ーー」○高下の定まらざる貌。後漢書、梁鴻傳「志ーー于升隆一」

【萁】 (一)キ (二)ヘイ 國 支 齊

(一)ーー薪は、ところ、野生の蔓草、葉は心臟形にして山の芋に似て大いに、根は多くして苦し、藥用とす。＝野老・黃薥。(二)おほふ。漢書、韓信傳「ー山而望趙軍」＝蔽。

【菔】 フク 職 屋 又、服・蔔に作る

菜ーフク・蔬ーフクはたいこん、すずしろ。＝萊菔・蘿蔔。

【萍】 ヘイ ヒャウ 青

○うきくさ、水草の一、葉はかたばみに似、花は四瓣にして白く、水面に浮びて生ずる。又、廣く浮草の義とす「浮ー」「細ー」「漂ー」「流ー」○青ーは古の名劍の名。

【萍梗】ヘイカウ 處處にさすらひて一定の住所なき義。許渾詩「客路隨ニーー一、鄉園失二蔣蘇一」

【萍郷】ヘイキャウ 縣の名、三國の吳にて置く、故城は今の江西ーー縣の東に在り、縣の境に石炭鍊あり。

【萍蓬】ヘイホウ うきくさの如く處處にさすらひ住む。高士傳「殺二于水良ノ晉ーニ一於西河一」

【萍藻】ヘイサウ うきくさ。吳姫文「冬温而ーー育」

【萍身】ヘイシン うきくさの如くさまよへるみ。劉滄詩「ーー不定逐二波瀾一」

【萍蹤】ヘイセウ うきくさの跡、あちこちときまよひて、一處に定住せざる喩。王萬傳詩「十年滄海客ーー一」＝萍跡。

【萍蹤難ー定】ヘイセウのシテイ 四方に流寓して一處に定住せざるにいふ。故事成語考「來往無ー憑、則曰二萍蹤難ー定」

【萍水相逢】ヘイスイアフ 旅にて偶然出逢ひたるにいふ。王勃、滕王閣序「ーー、盡是他鄉之客」

【萍迹】ヘイセキ 次條に同じ。黃公度詩「王孫線二底事一ーー久他鄉」

【萍跡】ヘイセキ うきくさのあと。又、其の如く處處に移り行く。牟融詩「十年飄泊如ニーー一、一度登臨一恨ー神」＝萍迹・萍蹤。

【萍泊】ヘイハク うきくさの如くあちこちと、さまよふ。前定錄「沈氏孫亦ーー」＝飄泊。

【萍泛】ヘイハン うきくさの浮く如く處處にさすらふ。王榮、賈賦「先生跡似ニ

一一家如二寮愚一」

【菩薩】ボサツ うきくさ。孟郊詩「一一浪草、孤蒲片池葉」

【浮萍】フヘイ うきくさの如くただよふ。羅隠詩「六年悲二梗断一、神地各一一」

【菩】 ホ 東

○一種の香草。○圓一提ダイはさとり（悟道）正覚の義。

【菩薩】ボサツ 梵○梵語、菩提薩埵の略。仏道にて衆生を成就する者、仏に亜ぐ位階。金剛経註「一一者梵語、唐言道心衆生、亦云二覚有情一」○四吉、朝廷より神又高僧に賜へられし称号。

【菩薩低眉】ボサツテイビ人の慈愛を形容する語。金剛忍日の対【成数】

【菩薩面】ボサツメン 巧婦ケフフの異名。

【菩提】ボダイ 梵仏語の音訳、仏道のさとり、仏道の至極なる者、正覚智恵、註「一一正覚、仏果異称、開法為レ種、発心為レ芽」

【菩提樹】ボダイジュ ○圓即度の迦耶山の辺に産する名木の名。四域記「仏坐二其下一成二等正覚一、因而謂二之一一」為」○圓しなの木、葉は心臓形、五瓣の小白花開く。

【蓽】 ホウ 董 東

一一はくは草木の茂り盛んなる貌。詩、大雅「一一蓬蓬」

【萊】 ライ 灰

○あかざ。‖藜。○ある（荒）○草を除く。○おひしげれる雑草、くさむら、耕作せざる廃田、あれち。○一蔽ライはざいこん。埤雅「一能制二勃海一」‖蘿蔔。

【萊衣】ライイ 老萊子が五色の衣を著て、老親の心を慰めたりといふ、其の衣。列女伝記「孝子伝曰、老萊子至孝、幸二親一、行年七十、著二五綵斑爛衣一、嘗汲奉レ堂、詐レ跌臥為二嬰児啼一状」‖萊綵。

【萊妻】ライサイ 老萊子の妻、夫を諫めて道化せざらしめ、深く満貧に安んず【列女伝】

【萊子】ライシ 古の孝子、老萊子の略称。萊衣参看。

【萊綵】ライサイ いやしくしてかよわしの況約文「臣只二一一、幼無二秀業一」

【萊婦】ライフ 萊妻に同じ 陶潜文「雖下二伸二室無一一」

【萊蕪】ライブ ○雑草のしげれるあれ地。○縣名、漢代に置く、山東省兗安府に属す。

【菱】 リョウ 蒸 薩に同じ

ひし。水草の一、葉四出して水面に浮ぶ、夏時、小白花を著け、黒くして稜角ある実を結ぶ、其の二角なるを一、四角又三角なるを芰といふ、食用に供す。

【菱角】リョウカク 実に稜角あり、故に艸に従ひ稜の省声に従ふ。

【菱葉】リョウヨウ ひしのは。儲光羲詩「渇水一一肥、清水一一鮮」

【菱荷】リョウカ ひしと、はちすと。杜甫詩「一一枯柳随二風波一」

【菱歌】リョウカ ひしを采る者のうたふ歌。李白詩「菱花遮二寒楊柳一、一一清唱不レ勝レ春」‖菱唱。

【菱芡】リョウケン ひしと、あさざと。王維詩「漾漾汎二一一一澄澄映二蒲葦一」

【菱芰】リョウキ ひし。字解参看。列子「夏日則食二一一一、冬日則食二稲粱一」

【菱藕】リョウグウ ひしの実と、はすの根と。設宴「冬處二於山林一食二芰菜一、夏處二於洲澤一食二一一一」

【菱花】リョウカ ○ひしの花。三柳軒雑識「一一偽二水客一」○鏡の異名。雅燕外伝「七尺一一鏡一奩」庾信、鏡賦「照レ壁面一一自生」‖菱華。

【菱湯】リョウトウ ひしと、もと。李嘉玉、野鴨詩「雲披一一地、任汝作二羹飛一」

【菱鳴】リョウメイ ひしをとる者のうたふ歌。羅隠詩「中流一一泊二何處一」‖菱歌。

【菱米】リョウマイ ひしの実の中に在るこめ、食ふべし。南史、魚弘伝「采レ菱作二一一飯一」

【菱葉】リョウヨウ ひしの葉（弱縷レ定、揚花軽易レ飛）

【萊】 リョク 沃

○かりやす（王芻）葉は竹に似て細く薄し、染料とす。‖綠萊竹。蓋草、淡竹葉。○しるす。録に通ず。

【莽】 九 董 尾

蓳（一六四六頁三段）の古字。

【莫】 ボ 尾

○あし、水邊に生ずる宿根草、葭の大いなるもの、高さ丈余、秋末に穂状の花を著く「蒹一」「蒲一」「枯一」○一一は一つの小さき舟。赤壁賦「縦二一一之所レ如」

【編レ莫】ヘンバク あしをあむ。南方草木状「南人一レ一為レ筏」

【莫巣】バクソウ 依るところ堅固ならざれば其の身も安からざるに喩ふ。荀勗撃「南方有二鳥焉一、名曰二蒹鳩一、以レ羽為レ巣、而編レ之以レ髪、繋二之葦苕一、風雨至折、卵破子死、巣非レ不レ完也、所レ寄者然也」

【蓄汙】ヂヨ あしにて作れるつな。五代史、高季興傳「以ニ一一一維二大艦一爲二蓄汙一、莊宗大喜、賜レ衣賜レ之」‖蓄索。

【蓄車】ヂヨ 柴車に同じ。後漢書「貴忠爲二沛相一、乘二一一一到レ官、以二清定一」

【蓄廬】ヂヨ あしにてあみたるむしろ。

【蓄汙】ヂヨ あしの生えたるみぎは。李白詩「結レ廬一一最立處、遠波微興二翠如一レ黛」

【蓄積】ヂヨ ○あしと、がまと（周禮、澤虞）○柔かにして軽きに喩ふ。陽城嶺、焦仲卿妻樂府「君如二磐石一、妾如二一一一」

【蓄蘆】ヂヨ あしにて作りたるふとん。古の寢具。唐、明皇雜錄「王毛仲賜二以者氏之故也」

【蓄流】ヂヨ あし。大戴禮「蓄未レ秀者爲レ蓄」‖蘆葦。

【蔵】

○一藏ヂヨは花又は葉のさかんなる貌。又、草の名、ゑみぐさ、あさどころ。葉は卵形、花は管状、根莖より澱粉を採る。‖玉篇「竹姿藏。○蔵一はのうぜんかづら。蔵（一六二八頁三段）參看。

【蔵姓】ヂヨ ○花又は葉の盛んなる貌。

【蓋】

ウン　オン　文

一一は盛んなる貌。又、かんばしき貌。

【蓑】

エ　蓑

○山野に自生する花卉の一、根を藥用とす、ひめはぎ（遠志）○草の盛んなる貌。

【葉】

㊀エフ　㊁セフ　葉　葉

㊀草木のは「竹一」「枝一」「紅」「翠一」○かず、ふだ、頁。○ひら、まい（枚）紙數をかぞへるにいふ。○すゑ、わかれ（支末）○よ（世代）「中一」「末一」「葉」○はの如く薄きもの「鐵一」「甲一」○圖一書ヂヨ上圖明信片。㊁春秋時代の楚國の邑名、今の河南省南陽府一縣。

【葉脈】エフ 葉と莖との部。

【葉菜】エフ 葉を食用とする菜類。根菜の對。

【葉子戲】ヂヨ 骨牌ヂヨ 宋史、呂公主傳「好爲二一一一」

【葉庄】ヂヨ 葉の莖幹に排列して生ずる狀態、互生・對生・輪生等の別あり。

【葉托】ヂヨ 葉脚の左右にある子葉。

【葉肉】ヂヨ 葉の葉脈以外の部分。

【葉柄】ヂヨ 葉片の下端なる細長き柄。

【葉片】ヂヨ 葉の廣く開展せる部分。

【葉脈】ヂヨ 葉片に分布するすぢ。

【葉綠素】ヂヨ 葉肉中に含有せる綠色の物質。

【葉公好レ龍】ヂヨ 最に似て非なるをいふ。又、名を好みて實を好まざるに喩ふ。莊子「葉公子高之好レ龍、雕レ文畫レ之、於レ是天龍聞而下レ之、窺二頭於牖一、施レ尾於堂一、葉公見レ之、五色無レ主、是葉公非レ好レ龍也、好二其似一レ龍非一レ龍也」

【葉蕨】ヂヨ おちばの上をあるく。王勃詩「一一下二清溪一」

【蔟】

カ　麻

○あし、葦の未だ秀でざる者、よし（蘆）「蔵一」○ふえ、あしぶえ。謝靈運詩「鳴一戾朱宮一」猶に通ず。

【蔟笳】カ あし。漢書、李陵傳「抵二大澤一一一中一」‖蘆蘆。

【蔟拳】カ あしの中にある薄き膜、轉じて薄くて薄き親族の關係、申山靖王傳「今皇帝非レ有二一一之親一、鴻毛之重一」

【蔟蘆】カ あしの別名、太祖紀「偃二戈於一一中一聞二笳聲一而起」‖蘆葦。

【蔽】

㊀芾（一六一頁三段）に同じ。㊁蔀（一六八一頁一段）に同じ。

【蓋】

蓋（一六九三頁三段）に同じ。

【蓼】

ガク　藥　古、鄂に作る

はなぶさ、はなのうてな、花被の外側の部分、葉質のもの「紅一」「萼一」「萬一」

【苔色】

カツ　カチ　曷

○くず、くずかづら、山野に自生する蔓草の一、葉は三裂し、夏は稍白色を帶ぶ、秋、帶紫紅色の蝶形花を著く、莖の纖維にて布を織りかたびらに作る、根よりくず粉を製す。○かたびら、くずぬの。○一天氏は太古の帝號、無爲にして化せしといふ。○古の國名「一伯」○瓜一は親族の緣つづき。

【葛衣】カツ くずぬのにて製したるかたびら。史記、自序「窮二一一一、冬日葛裘」

【葛裘】カツ ○夏きる葛衣クワイと冬きる皮衣ヒイとの。○轉じて夏冬、一年間の服とす。‖裘葛。

【葛巾】カツ くずぬのにて製りたる頭巾。宋書、陶潛傳「值二其酒熟一取二頭

上ーー一號ノ酒」

【葛洪】コウ　晉の人、字は稚川、抱朴子と號す、神仙道術を好みて、その祕奥を得たり、羅浮山に入りて丹を煉り、山に在ること七年、抱朴子を著し、年八十一にして卒す。

【葛龍】コウ　古代未だ衣服を知らざりし時、葛にて尸體をつつみて葬の中へ藏めたるをいふ（晉書、禮圖新儀目錄序）

【葛衫】カツ　くずぬのの じゅばん。陸游、冬初詩「冬初尚衣ーー」

【葛屨】カツ　詩經、周南の篇名。后妃、葛を采りて絺綌を成すの事を敍す、已に貴くして能く勤め、已に富みて能く儉し、已に長じて親に事ふるに勉べず、已に嫁して後、父母に憂へず、故に小序に以て后妃の本と爲す。

【葛絞】カツ　くずにて製りたる性その の。莊子「夏日衣ーーー」

【葛巾】カツ　くずにて製したるひもの衣の時首と腰とにつくるもの。陸、少傅「ーー而歸宿」

【葛藤】カツ　○葛も藤も共に蔓草。邪曲のことに喩ふ。出澤經「其有衆生隨二愛網一者、必敗二正道一、猶如ーー纏レ樹絞結」○今、紛爭が關者の義に用ふ、どたばた。

【葛亹】カツ　○かづら。詩、周南「南有ニ樛木一ーー纍レ之」○轉じて一身の煩累となる困難に喩ふ（易、困卦）

【葛嶺】カツ　浙江省杭縣西湖の北に在り、相傳ふ晉の葛洪の丹を鍊りし處なりと、南宋の賈似道、第を此に築く。

【葛藟】カツ　つづら（宋史、日本傳）

【葵】キ　支

○あふひ、花卉の一、花は五瓣にて木槿に似、日に向かひて傾く。○蒲ーは常綠喬木、熱地に産す、葉は櫻桐に似て厚く又、笠に製すべし。○山ーはわさび。○兎ーは蘘荷。○はかる（度）詩、小雅「天子ーレ之」古、揆に通ず。○圖救所の名。

【葵藿】カク　葵類を見よ。藿は豆の葉。江淹詩「況我ーー、松柏蔽前檻」

【葵麵】カク　ひまはりの花が日に向かひ傾くが如くに、君主又は長上の德を仰ぎ慕ふ喩とす。陳志、陳思王傳「若ニ葵藿之傾レ葉、太陽雖レ不ニ爲レ之回一光、然向レ之者誠也」

【葵心】キン　前條を見よ。宋書、彭城王傳「敢竭ニーー傾陽之心一」

【葵扇】キン　蒲葵の葉にて製したる團扇。唐書、謝安傳「有ニ蒲葵扇五萬一、遇ニ風大至一、風以ニーー一風一」日蒲葵扇。

【葷】クン　コン　文

○味の辛きもの。又、臭氣ある菜。○俗になまぐさきものにいふ。○くさし、からし。○薫、又、葱に同じ、一粥は匈奴の別名の匈奴粥、獫狁。

【葷菜】キン　ねぎ、にんにくの如きくさき野菜。爾雅、疏「郭、說文云、ーー也」

【葷辛】シン　野菜のくさきものと、からきものと、佛家は戒めて食はず。宋典、顧愷傳「以ニ母病一ーー不レ入レ口者十歲」

【葷酒】コン　くさき野菜と酒と。齋戒には此の二者を用ひず「不レ許ニーー入ニ山門一」註、養生主、顏回曰、回之家貧、唯不レ飲レ酒、不レ茹ニ葷者數月矣」

【葷膋】クン　くさき野菜と、なまぐさき肉との白居易詩「以ニ地清淨一故、蔥蒜無ニーー一」

【葷肉】コン　臭菜と生肉と、なまぐさきもの。

【葱】クッ　屋

獨ーグワツは一種の藥草、ししうど。

【葷】ケン　クン　元

○くゝんざっ、わすれぐさ。宿根草の一、莖長二尺許、葉は菖蒲ショウブに似、花は紅黃色六瓣。一名宜男草忘憂草。○圖かや。葉ヤウに似たる一種の宿根草、秋菜に似たる花を著く。

【萱堂】カン　古、母は北堂に居り、其の庭に萱草をうう、よりて、母親の稱とす。詩、衛風「焉得ニ諼草一言樹ニ之背一」諼は萱、背は北堂」葉夢得詩「白髮ーー上」ニ北堂。

【葫】コ　虞

○おほひる、にんにく（大蒜）菜菜の一、葉は細長く、臭氣甚だし。○一蘆はふくべ。東軒筆錄「堤突輸林閻皇士、年年依ニ標置一ニ蘆」

【葉】サイ　佳

一胡サイはのぜり。日柴胡、

【葬】サウ　寒

○はっむる、かくす（藏）尸を土中に埋めをさめる「土ー」「火ー」「合ー」「改ー」「埋ー」「厚ー」「薄ー」「會ー」「歸ー」「斂ー」○轉じて土中に埋める如くをさめて見えなくする。楚辭、懷沙

賦「寧赴常流而ー乎江魚腹中耳」○はっむり「冠婚ー祭」

【葬送】ソウ 死なり、死して棺中に在るなり。

【葬儀】ソウ はうむる儀式。＝葬式・葬礼。

【葬玉埋香】マイギョクウズムコウ 美人を葬りし所。玉渓編事「漂深葬玉、錦嶂埋香」

【葬具】ソウ 葬式に必要の道具。

【葬穴】ソウ 尸を埋めるあな。＝墓穴・墳穴。

【葬祭】ソウ はうむりと、まつりと。

【葬式】ソウ 葬儀に同じ。

【葬送】ソウ のべのおくり。後漢書、陳忠傳「令レ得ニー一」＝送葬。

【葬儀】ソウ 葬式に同じ。

【菩】

㊀ ソン
㊁ サイ 斉 灰 支
㊂ シ

又、苞に作る

㊀あれち、あれたる田、耕さざる田。○開きて一年目の新田。○あれちをひらく。㊁わさはひ、災に遇ふ。詩、大雅「無ー無害」㊂さく（割裂）○たちがれ、木が立ち枯になる。

【菩災】サイ わさはひ、沴は悪気、癘鬼悪疫などの災。曾棠、救荒書記「ーー之行」

【菩爺】コン あれ地をひらく。易、无妄「不二耕穫一、不二ーー一」

【葱】

シ 紙

おそれる（畏懼）論、秦伯「懐而無ー則ー」

【萩】

シウ 尤

○よもぎ、くさよもぎ（蒿）○ひさぎ。漢書、食貨志「山居千章之ー」古、楸に通ず。○圖はぎ、山野自生の灌木、幹叢生し、高四五尺、葉は一柄に三小葉を著け、秋、紫紅色又は白色の小花を簇生す。＝胡枝子。

【葬】

シフ 麌

○ふく、茅などにて屋根を覆ふ。つくろふ（修補）おほふ（覆）「完ー」「修ー」「補ー」「結ー」左、襄三一「ー繕」○かさなる（累）

【葬繕】ゼン をさめつくろふ。漢書、源子恭傳「練レ朝儀」旨、即加ニーー一」＝修繕。

【葬茅】ボウ かやにて屋根をふく。南史、呂僧珍傳「取二雑茨材竹一、製為二船艦一、葬之以レ茅、竝立旗」白居易詩「ーレ茨為二我護一、編レ蓬為二我門一」

【葭】

ジン 眞

又、槙に作る

くはのみ（桑實）

【葩】

ヘン（艸部八画）に同じ。

【葩騒】ソウ ししびしほ。又其の刑。李陵文「幹彭ーー」錦信・彭越二人ポーーの刑に處せらる。

【葩殺】サツ ころす。後漢書、二十八將傳論「信越終見ニーー一」

【葵】

㊀ スキ 支
㊁ シュン 眞

㊀蕨の一種。㊁大いなり。しげる（茂）

【葮】

ソ 遇

○くわる（水芋）○しく（藉）唐書、李揆傳「ー枕經史」

【葱】

㊀ ソウ 東
㊁ サウ・ソウ 江

葱は古字

㊀ねぎ、蔬菜の一、葉は筒状中空、花はくすだま状をなし、黒胡麻に似たる實を結ぶ。蓬葉共に臭氣あり。＝圖葱白。禮、内則「脂春用ー」○あをし、あを（蒼）○ーーは氣の通達する貌。○ーー嶺は西域に在る山の名。㊁ーー騶はにぐるま（輜車）

【葱嶺】ソウ 西域に在る山の名、其の山脈の東して新疆に入る者を見崙山といひ、天山といふ。西河舊事「ー在二敦煌西八千里一、其山高大、上悉生レ葱、故名」

【葱嶺教】ソウレイキョウ 佛教。葱嶺は印度地方に在る山の名、釋迦此の山にて修業せしが故。

【葱纁】ソウ 衣服などを載するにぐるま（輜車）の名。左、定九「載ニーー一、軽二子其中一而逃」

【葱青】ソウ 青くしげる貌。郭璞賦「滄ー一」

【蓄】

シュク（艸部十一画）に同じ。

【蓄菜】スサイ みどりいろ。岳陽風土記「層巒疊暁、望レ之極ーー」＝蒼翠。

【葱青】ソウ ○あをあをとしげる。沈約詩「林薄斉ーー」＝蒼蒼。○ねぎの葉。本草「葱初生曰レ蔥、針葉曰ニーー一」

【葱葱】ソウ ○草木のあをあをとしげる貌。李白詩「日出瞻二佳氣一、ーー繞二聖君一」○氣の通達して佳なる貌。後漢書、光武紀「氣佳哉、鬱鬱ーー然」

【葱白】ソウ 藍色の最も淺きもの（禮記、雑記、注）

【葱翠】ソウ あをし。王維詩「色似ニーー一遊琅玕」

【葱嶺】ソウ 西域に在る山の名、其の山脈の東して新疆に入る者を見崙山といひ、天山といふ。西河舊事「ー在二敦煌西八千里一、其山高大、上悉生レ葱、故名」

【葱嶺教】ソウレイキョウ 佛教。葱嶺は印度地方に在る山の名、釋迦此の山にて修業せしが故。

【葱纁】ソウ 衣服などを載するにぐるま（輜車）の名。左、定九「載ニーー一、軽二子其中一而逃」

【葱青】ソウ 青くしげる貌。郭璞賦「滄ーー一」

【蒂】

テイ（艸部十一画）に同じ。

班固、答賓戯「上無所ㇾ、下無所ㇾ根」

【著】㊀チョ　㊁チャク　㊂チョ　㊃

㊀あらはる(明顯)明かに知れる、名高くなるㇾ名」○あらはす(表・見)あきらかにする、廣く知らせる。○しるす(圖錄)○のべる(紀述)書物をえらぶ、文書に書きのせる「新ㇾ」「雜ㇾ」○あきらか、いちじるし、特にめだちて知れる。○おもふ(思)○たくはへ。たくはふ。貯に通ず。○門闕の間。○くらゐ(位次)朝廷の席次。左、昭十二「若不廢君命、則固有ㇾ矣」㊁つく、きる、俗に著に作る。○きもの(被服)○ひらく(開)「ㇾ花」○をる(處)○つく(附)漢書、賈誼傳「匿如黑子之ㇾ面」○般の時のさかだち。○きまりがつく「落ㇾ」○おく(置)棋子ㇾを下し置く。又、其の棋子「勝ㇾ」「敗ㇾ」○動作をあらはす助字「逢ㇾ」「說ㇾ」○土著ㇾは其の地に田宅常居ある人。○執ㇾは心が物に紮がれる。○沈ㇾは

おちつきて輕躁ならず。㊂ㇾ雍は十十の戊の異名。○圖衣服を數ふるにいふ「和服三ㇾ」

【著】ㇾ著・見・現・顯・形・表・露・表・彰・旌の別は見(部首七畫)の條を見よ。

○ㇾ著・附・付・就・即・傳・粘の別は附(阜部四畫)の條を見よ。

【著作】ㇾ文章を書はし作る。論衡「ㇾ者爲ㇾ文儒、說經者爲ㇾ世儒」

【著作權】ㇾ著作物を複製又は繙譯し若くは興行する權利。‖版權。

【著作郎】ㇾ朝廷の著作を掌る官。事物紀原「晉明帝太和中、始置ㇾ——」

【著者】ㇾ著作をあらはしたる人。‖著作者。

【著述】ㇾ文書を著はす。班固、答賓戯「以ㇾ——爲ㇾ業」

【著書】ㇾ○書をあらはす。史、老子傳「關令尹喜曰、子將ㇾ隱矣、强爲ㇾ我ㇾ——ㇾ」○あらはしたる書。

【著姓】ㇾ名高きいへがら。後漢書、張衡傳「世爲ㇾ——」

【著述】ㇾ いさををあらはす。晉書、侯史光傳「歷ㇾ官ㇾ——ㇾ、文理奏議、皆有ㇾ條理」

【著撰】ㇾ 文書を著はしえらぶ。宋史、杜鎬傳「士大夫有ㇾ所ㇾ——ㇾ、多訪以ㇾ古事、雖ㇾ晚輩卑品ㇾ請ㇾ益、應答無ㇾ倦」

【著大】ㇾ いちじるしく大いなり。

【著聞】ㇾ名高きはなし。

【著名】ㇾ名をあらはす。又、名高し。

【著明】ㇾ いちじるし。晉、摯虞「賦象——、莫ㇾ大乎日月」

【著譯】ㇾ 書を著し又繙譯する。

【著錄】ㇾ ○あらはししるす、姓名を帳簿に記する。後漢書、張興傳「弟子自ㇾ遠至者、——且二萬人」○書物をあらはす。‖撰錄。

【著意】ㇾ ○こころをつける、工夫する。歐陽修詩「誰知——春二新香」○氣をつける。‖留意。

【著力】ㇾ 力につく。吳志、呂蒙傳「漸漬ㇾ——ㇾ」

【著眼】ㇾ めをつける。蘇軾詩「逢車都露皆假設、——翻看君勿ㇾ誤」‖注目。

【著御】ㇾ 圖陛下又殿下のおつき。

【著花】ㇾ はなをつく。趙彦昭詩「繁條最是ㇾ——遲」

【著想】ㇾ 考をつける、おもひつき。‖著意。

【著實】ㇾ おちつきてまじめ。膚淺の反對。

【著信】ㇾ 圖到著したる手紙又電報。

【著手】ㇾ てをつける、事を爲しはじめる。晉書、杜預傳「兵威已振、譬如ㇾ破ㇾ竹、數節之後、皆迎ㇾ刃而解、無ㇾ復ㇾ——處ㇾ也」

【著色】ㇾ いろどりする「——山水」劉勳詩「船行ㇾ——屏風裏、人在ㇾ迴文錦字中」‖設色。

【著席】ㇾ 圖席につく、其の座につく。

【著帶】ㇾ 圖懷姙五箇月目に腹帶(いはたおび)をしめる。又、其の式。

【著到】ㇾ 目的の場所につく。‖到著。

【著彈】ㇾ 發射せし彈丸が先方に達する「——距離」

【著著】ㇾ 次第に、一步一步に。

【著服】ㇾ ○きものをきる。又、きものの。晉書、杜預后傳「天公縱ㇾ死爲ㇾ之ㇾ——」○圖他人の金品をひそかに我がものとする。

【著粉】ㇾ おしろいのこをつける。宋玉賦「ㇾ——則太白、施ㇾ朱則太赤」‖傅粉

【著鞭】ㇾ ○むちをあてる。高適詩「ㇾ——驅二駑馬一、操ㇾ刀解二全牛一」○人に先だちて事をする。‖著二先鞭一。

【著目】ㇾ 著眼に同じ。

【著用】ㇾ きものをきる。世神記「好二五色衣服一、我御ㇾ——」

【著落】ㇾ おちつく。朱子語錄「分合各有二——一」‖歸宿。

【蓼】タイ　㊂

——蘆ㇾは芹に似たる水草、食

用とすゐいぬなづな。

【董】㊀トウ ㊁シュウ・シュ 園

㊀ただす(監督)みはりする「一正」「一理」○佛寺内の衆僧並に一切の法務を監督する「前ー」「後ー」○はかる、とりしまる。又、其の人「綱ー」「商ー」○かくす(深蔵)○骨ー㊀は古道具、種種の食品をまぜて煮たなべものを骨ー羹、又、骨ー飯といふに本づく。一説に鶻突の轉、鶻突は糊塗に同じく物の分明ならざる義。○骨ー㊁は両手を相拳ちて拝む。○振ー㊂は両手をあはせくめし。○振ー㊃はすのね、れんこん(藕根)㊄みじかし(短)

同訓異義 葦・正・規・繩・糾・格・匡・訂・實の別は正(一〇〇九頁三段)を見よ。

【董其昌】字は玄宰、明の華亭の人、萬暦十七年の進士、官禮部尚書に至る、書畫に精し、崇禎九年卒す、年八十三。

【董巨】宋の巧畫者、董源(字は北苑)と鉅然と、並に山水を善くす。

【董狐之筆】直筆してにばかる所なきをいふ、董狐は晉の史官。左宣二「趙穿攻二霊公於桃園一、宣子未レ出レ山而復、太史書曰、趙盾弑二其君一、以示於朝一、宣子曰、不レ然、對曰、子爲二正卿一、亡不レ越レ竟、反不レ討レ賊、非レ子而誰(中略)孔子曰、董狐古之良史也、書レ法不レ隠」

【董事】㊀公司部ち會社の取締役。

【董正】ただす(後漢書、李暁傳「慨然有アーニー天下之志」)晉正。

【董仲舒】ジュショ 漢の廣川の人、少くして春秋を修め、帷を下して講誦す、武帝の時、賢良方正に擧げられ、火に用ひられて江都の相となる、後に公孫弘の嫉む所となり、斥けられて膠西王の相となる、竟に病を以て免れ、著述を以て業とす、仲舒、學淵源あり、正誼明道を以て主とす、漢の醇儒たり、著すところ、春秋繁露あり。

【董督】ただしとりしまる。晉書、孫綽傳「二省尚不レ能レ知、安可二一一在レ遠顧二遥決一耶」

【董理】ただしをさむ。

【葩】ヘ 麻

はな(華)「丹ー」「奇ー」「春ー」

【葩卉】くき花。王安石詩「山路ーー繁」

【葩經】詩經の異名。韓愈、進學解「詩正而葩」とあるに本づく。

【葆】ハウ ホウ 豪

○つつむ、かくす(藏)○な(菜)○草の盛んなる貌、しげる、おどろ、草木の叢生する貌。○大いなり「一大」○さしもの(蓆)はねかざり「羽ー」○むつき、襁に通ず。史、留侯世家「在繈ー之中」○たから。史、留侯世家「果見二穀城山下黄石一取而ー祠之」寶に通ず。○とりで「一塞」堡に通ず。○やすし。やすんず(安)○たひらか(平)○ひこばえ(蘖苗)

【葆光】光を藏す。ちゑをおほひかくす。莊、齊物「注焉而不レ滿、酌焉而不レ竭、而不レ知二其所一由來一、此之謂ニー一」

【葆蓋】とりで(史、貨殖傳)

【葆蔵】其の本質の性を保つ。莊子「可二以ー一ヒー、可二以全一生」

【葆葆】草のしげれる貌。博雅「ー一、茂也」

【萬】バン マン 圓 俗に万に作る

○よろづ。○千の十倍、轉じて多數の義とす、あまた「ー國」「千紫ー紅」○蜂の異名。○般の湯王の創めし舞樂の名。‖千歳舞。○萬に一つも、決して。史、淮陰侯傳「ー不レ失」「ー一」○千ーは丁寧にする辭「ーー珍重」

【萬安】極めてやすらか。漢志、武帝紀「請君之謀、ーー之計」‖萬全。

【萬有】地てのもの。子華子「太初胚胎ーー」‖萬物。

【萬姓】多くの民、姓は二十兩、又二十四兩。戰國策「富二秦之陵一、黄金ーー爲レ用」

【萬葉】萬代に同じ、葉は世。晉書、武帝紀「見二土地之廣一、謂ーー而無レ慮」

【萬緒】多くの世俗のゆかりの煩惱。錬「苦息ニーー、心如二枯木一」

【萬億】數の甚だ多きにいふ。漢書、禮樂志「經營ーー、誠遂二厥宇一」

【萬壑】おほくのたに。晉書、顧愷之傳「千巖競秀、ーー爭流」

【萬感】おほくのかんじ。謝靈運詩「千念集二日夜一、ーー盈二朝昏一」

【萬幾】おほくのまつりごと、幾は萬事の機微を謹む義。書、皐陶謨「兢兢業業、一日二日ーー」‖萬機。

【萬金】おほくのかね。史、平準書「富商大賈、財或累ニーー一、而不レ佐二國家之急一」

【萬金不換】萬金にもかへず。盛經「凡遭日日用レ之、一歳機減二半

寸、萬金不レ換」

【萬化】バンカ　○萬物の化育する義。漢書、京房傳「古帝王以レ功垂レ賢、期二一成、瑞應著」○色色にかはる。

【萬花】バンクワ　おほくのはな。宋伯仁詩「一一新種小亭奏」＝千花・萬芳。

【萬劫】バンコフ　原野又は水面などの極めて廣きをいふ。岑參詩「滄湖一一深見底、清冰一片光照レ人」

【萬古】バンコ　○むかし。魏書「高祖創定九流、軌二後一一」宋史、陳亮傳「能倒二一世之智勇一、開二拓一一之心胸一」○永久、いつまでも。杜甫詩「不レ廢二江河一一流」＝千秋・萬世。

【萬日】バンジツ　○多くの人の日。胡銓、上二高宗一封事「一一一談」○多くの人。

【萬國】バンコク　萬邦に同じ（易、乾卦）

【萬國如在二紅塵中一】バンコクノゴトクコウジンノウチニアリ　某の甚だしきにいふ。曾鞏、書懐行「日輪高午凝不レ去、——」

【萬戸侯】バンコノカウ　一萬戸の封地を有する諸侯の義。李廣傳「如今子當二高帝時一、——豈足レ道哉」

【萬歳】バンザイ　○古、祝賀の辭として上下、一般に用ひしが、唐末より、專ら天子の壽を祝するに用ふ。漢書、武帝紀「東幸成陽下呼二——一者上」○國初新年に島帽子直垂を著て民家を賀ひあるく者。

【萬歳樂】バンザイラク　○舞樂の名。通典「鳥歌——、武太后所レ造也」○國初古、正月五日に宮中にて行はれたる舞樂。又、踏歌の異稱。

【萬歳後】バンザイノチ　○天子の死後をいふ。史、高祖紀「——告魂魄、猶樂二思沛一」＝百歳後。○臣下の死後にも用ふ。漢書、翟方進傳「萬歳之期近、恨二朝政一」

【萬歳山】バンザイザン　圖天皇御即位の時祝意を表してたてるはた。

【萬草】バンサウ　もろもろのくさ。杜甫詩「一一千花動二凝碧一」

【萬死】バンシ　萬が萬まで死ぬべき危き場合。史、張耳陳餘傳「出二一一不レ顧二一生之計一」

【萬死不レ顧二一生一】バンシイチヲカヘリミズイッセイ　必死を期するにいふ。史、張耳陳餘傳「將軍胆レ目張レ脣、出二萬死不レ顧二一生一之計一」

【萬事】バンジ　よろづのこと。晉書、百官得二其宜一、一一得二其理一」

【萬事休】バンジキフ　何事も休止する（宋史、蔣南金氏世家）

【萬紫千紅】バンシセンコウ　いろいろの美くしきはな。朱熹詩「等閑識得東風面、——盡是春」

【萬仞】バンジン　其の高き義、仞は八尺。又、四尺。唐書、王勃傳「孤峯絶岸、聳立一一」

【萬謝】バンシャ　○いく〳〵にもわびる。○厚く御禮をいふ。＝多謝・深謝。

【萬狀】バンジャウ　種種のかたち有樣。唐書、杜甫傳「渾瀣汪茫、千變一一、肇二古今一而有レ之」＝千態。

【萬祥】バンシャウ　あまたのめでたき事。聖主得二賢臣一頌「遐夷貢獻、一一畢至」

【萬象】バンシャウ　いろいろのもの。萬物のかたち。淮南、俶眞「四時未レ分、一一未レ生」

【萬障】バンシャウ　あらゆるさしさはり、多くの故障。

【萬殊】バンシュ　さまざまのちがひ。王羲之、蘭亭集序「趣舍一一、靜躁不レ同」

【萬世】バンセイ　いのちながし。詩、小雅「樂只君子、一一無レ期」

【萬世無レ疆】バンセイムキョウ　人の長壽を祝する語。詩、小雅

【萬壽山】バンジュサン　北京の西に在り、山麓の湖を昆明池といふ、湖畔の園を頤和園といふ。

【萬壽節】バンジュセツ　支那の天子の誕生日。＝聖誕・天長節。

【萬衆】バンシュウ　多くの人。一有衆・衆庶。

【萬緒】バンショ　よろづのいとぐち、萬端の義。列、周穆王「憂レ國一一起矣」

【萬乘之君】バンジョウノキミ　兵車萬乘を出す國の君、卽ち天子。孟、公孫丑「不レ受二於陽虎一、亦不レ受二於——一」

【萬緒綠】バンショリョク　おほくのふち、一鍾は六斛四斗。郊廟詩「終居二天下宰一、食二此一一一」

【萬場】バンジョウ　おほくのともしび。王建詩「一一當レ樓寶扇開」

【萬水】バンスイ　多くの川。張喬詩「北闕東臨路、千山一一入」

【萬姓】バンセイ　○もろもろのつかさ。晉、咸有一德「傳二一一咸曰二大哉王言一」○天下の萬民。漢書、谷永傳「益選二溫良上德之士一、以親二一一一」

【萬姓統譜】バンセイトウフ　一百四十六卷、明氏族博考十四卷、明の凌迪知編す。上古より明の中葉までの、上、帝王より、下、士庶に至る略傳を、二十一史の列傳・通志等より抄出し、四聲一百六韻を以て姓を分ち類編す。和版あり。

【萬世一系】バンセイイッケイ　天子のちすぢが永久にかはらず續くる。＝萬葉一統。

【萬世之業】バンセイノギョウ　永世くちざるわざ。賈誼、過秦論「自以爲關中之固、金城千里、子孫帝王、——也」

【萬世之功】バンセイノコウ　後世まで殘る大いなるいさを。漢書、蕭何傳「奈何以二一旦之功一、加二——一哉」

【萬世不易】バンセイフエキ　永世かはることなし。荀、正論「萬世不レ能レ易也」＝萬代不易・百世不易。

【萬世不刊】バンセイフカン　いつまでも削りさるべからず。揚雄、郵商銘「金紫煌煌、——」＝萬世不磨。

【萬千】バンセン　數の多き義。范仲淹、岳陽樓記「氣象一一」＝千萬。

【萬全】バンゼン　十分に全し、少しもておちなし。史、淮南王傳「聖人萬舉一一」

【萬全計】バンゼンケイ　決してあやまちなき

はかりごと。北史、祖珽傳「今宜命二皇太子一早建二大位一以定中君臣上若事成、中宮少主皆德レ君、此——也」

【萬族】バンゾク おほくのやから。陶潛詩「——各有託、孤雲何無レ依」

【萬字】バンジ 多くの兵士。

【萬衆】バンシュウ おほたのえだ。□萬枝。

【萬里】バンリ いろいろのさま。吳融詩「——千端一醉中」□萬狀。

【萬般】バンパン よろづのかたち。禮記、疏「物雖二一一、皆同一理」

【萬端】バンタン ○いろいろのいとぐち。あらゆることがら。史、禮書「人道經緯、——規矩、無所レ不レ貫」○色色のてだて。史、信陵君傳「客辭去、說二王一一」□萬方。

【萬雉】バンチ 王城をいふ。雉は縮の長さ三丈、高さ一丈なるをいふ。班固、西都賦「建二金城之一一」

【萬重】バンチョウ いく〳〵にもかさなる。李白詩「輕舟已過一一山」□萬疊。

【萬不失レ一】バンパイツ 決して少しも違はざる義。史、淮陰侯傳「貴賤在二於骨法一、憂喜在二於容色一、成敗在二於決斷一、以二此參レ之、——」

【萬年芝】バンネンシ 靈芝をいふ。抱朴子「——令二人不レ老、延レ年九千一」

【萬年青】センネンセイ おもと。

【萬能】バンノウ ○すべての病にききめがある。○なんでもできるはたらき。

【萬歲】バンザイ おほくのえだがは。李建勳詩「一一爭流雨過時」

【萬方】バンポウ ○四方のくにぐに。書、湯誥「嗟爾一一有衆」○種種に力を用ふる。史、周紀「嬖似不レ好レ笑、幽王欲二其笑一、一一故不レ笑」

【萬邦】バンポウ おほくのくにぐに。書、堯典「協二和一一一」□萬國。

【萬般】バンパン あまた、色色に異る。儲嗣宗詩「一宿郵亭事一一」□千般。

【萬萬】バンバン ○非常なる多數。○決して、とても。韓愈文「況一一無二此理一」

【萬福】バンプク ○おほくのさいはひ。詩、小雅「和鸞雝雝、一一攸同」○國人の健康を祝するに用ふる語。

【萬物】バンブツ よろづのもの。易、乾卦、彖傳「大哉乾元、一一資始」

【萬物一齊】バンブツイツセイ 萬物皆同等なり。莊子「——、孰短孰長」

【萬物之靈】バンブツノレイ 萬物の中にて最も靈智あるもの即ち人。書、泰誓「惟人——」

【萬物皆備二於我一】バンブツカイビヲガニ 天下の萬事は皆我が性分内に具備する。孟、盡心「孟子曰、——矣、反レ身而誠、樂莫レ大レ焉」

【萬夫之望】バンプノボウ 天下萬人が仰ぎ衆ふ。易、繫辭「君子知レ微知レ彰、知レ柔知レ剛、——」

【萬變】バンペン いろいろにかはる。韓詩外傳「千舉一一、其道一也」□萬化。

【萬民】バンミン よろづのたみ。易、謙卦「勞謙君子一一服也」

【萬雷】バンライ 多くのかみなり。瀑布・大砲などの大いなる聲の形容「一一之聲」

【萬籟】バンライ 萬物の音響。常建詩「一一此俱寂、唯聞鍾磬音」

【萬里侯】バンリノコウ 京師より遠く離れたる地の諸侯。後漢書、班超傳「燕頷虎頸、飛而食レ肉、——之相也」

【萬里同風】バンリドウフウ 天下統一して萬里の遠方まで風俗を同じくす。漢書、終軍傳「天下爲レ一、萬里同レ風」□百代同風。

【萬里之任】バンリノニン 地方官の職。孝文帝文「授レ之以二一一一任一之以二一方之事一」

【萬里比隣】バンリヒリン 萬里の遠きもとなりの如し。曹植詩「丈夫志二四海一、萬里猶二比隣一」

【萬里連雲勢】バンリレンウンセイ 萬里の長城の遙に天に接する形容。注連、長城詩「焉知——、不レ及二燕階三尺高一」

【萬綠叢中紅一點】バンリョクソウチュウコウイツテン ○多くの綠の葉の中に、唯一つの赤き花あるにいふ。王安石、石榴詩「——、動レ人春色不レ須レ多」○轉じて多くの平凡なる物の中に一つのすぐれたる物あるに喩ふ。後漢書、杜篤傳「蓋生——、城池百尺」

【萬類】バンルイ おほくのたぐひ。後漢書、杜篤傳「蓋生——、城池百尺」

【萬靈】バンレイ よろづのかみ。史記、自序「——冏レ不二經紀一」

【萬曆】バンレキ 明の神宗の年號。

【萬一】マンイチ 萬に一つ、萬分の一。後漢書、鄧隲傳「本非二區宇所一能二一一一」

【萬鈞】バンキン 甚だ重し、鈞は三十斤。重百「——之所レ壓、無二不レ摧滅一」

【萬行淚】マンコウノナミダ 多く下るなみだ。李白詩「預借二九江流一添成——」□千行淚。

【萬卷】バンカン 多くの書物。李嘉祐詩「一一長開レ鉄、千峯不レ閉レ門」□萬峽。

【萬斛】バンコク 甚だ多くの分量。杜甫詩「一一之舟行若レ風」□萬石。

【萬劫】バンゴウ 極めて永き時間、劫は佛家にて世をいふ。李白詩「吾浮浩茫茫、——太極長一」

【萬尋】バンジン 甚だ高く又、深し、尋は一ひろ。嵇康、琴賦「丹崖嶮嶼、青壁一一」

【萬病】バンビョウ 多くのやまひ（黃庭內景經、注）

【萬分之一】バンブンノイチ 多くの中にて一つ。莊子「其存之國也、無二一一一」

【萬別】バンベツ 多くのわかち「千差一一」

【萬目】バンモク 多くの目、衆くの人が視る。

【萬兩】マンリョウ 小灌木の一、葉は茶に似、花は繖狀、冬紅色球狀の小實を結ぶ。

【葛】フク 圖

蓳生の野菜、莖赤く葉大きく、根は形指の如く色白くして、食用とす。

【蓋】 ㊀ フン・ボン 文 ㊁ ホン・ボン 元

㊀一蓋は盛んなる貌。㊁餐一子はなついちご。

【葡】 ホ ブ 圖

○一萄ブドウは蔓生、果木の一、葉は蔦ツタに似て大きく、球形の漿果を叢生す。廣志「一萄有二黄白黒三種一」晉陶・馬乳・黒水晶。○欧洲の國名、一萄牙ポルトガルの略稱。

【葡萄酒】ブドウシュ 葡萄にて醸したる酒。王翰詩「葡萄美酒夜光杯、欲レ飲琵琶馬上催」

【蓱】 ㊀ ホウ ㊁ ホウ 東 冬

㊀かぶ、かぶら（楚辭・蕪菁）㊁蓯ヤマノイモの根の盤結せしもの。

【朶蓱朶葬無以二下體一】ホウトウヒトヲホウスルニシタヲモツテスルナシ 蓱はかぶら、葬は大根、此二物は根塊皆食ふべしと雖も、其の根は時に美惡あり、其の根の惡を以て其の塊の美を捨つべからず、以て人の惡しき行あるにより他の美を捨つべからざるに喩ふ（詩・邶風）此詩に本づきてすべて一節の取るべきある者を蓱葬といふ。

【蓱田】デンボウ 蓯の根が年久しく積みて田となりしもの。宋史、蘇軾傳「取二西湖一作二三十里蓱田一築レ堤」

【勃】 ボツ 月

蓱一は香氣の盛んなる貌。

【葯】 ㊀ ヤク ㊁ テキ 藥 錫藥

㊀藥（神部十五畫）の略字。○よろひぐさ（白芷）の葉。○植物の生殖器、雄蕊の先端に在りて花粉を藏するもの。㊁まとふ（纏）

【落】 ラク 藥

○おつ、おつる「零一」「枯一」「衰一」「凋一」草木の花又葉が散る。しぼむ、かる。○くだる、さがる。○へる（減）散りて少くなる。史、鄭當時傳「賓客益一」○すてる。すたる（廢）やぶる（壞）疏、天地「無一善事」○ぬける（脱）「脱一」うしなふ（失）○しぬる、歿する。○手に入る、歸す「一手」○おちぶれる、さすらふ「淪一」「一魄」○はぐ（剝）○やめる、しりぞける「一職」○おちしむ、おとす「振一」「擯一」○一一は相入れざる貌。又、志大いにしてすぐれたる貌。又、まばら（稀疏）なる貌。○宮室の成りたるとき行ふ祭。左、昭七「楚子成章華之臺、願與諸侯一之」○できあがる「一成」○はじむ。はじめ（始）○まがき、かこひ「籬一」○むら、さと「村一」「聚一」「部一」「里一」「邑一」○まとふ、絡に通ず。○新に成りたる鐘に犠豬の血をぬる。○大荒一は十二支の巳の異名。

同訓異義 落・墜・墜・零・隕○落は何にても上から下へ落つるなり。草木黄落・落第の如し。○墜は毀也、おちくづれるなり。史記「士卒墜レ指」○墜はくづれ落つるなり「墜落」○零はこぼれ落つるなり。詩經「雲雨既零」○隕は真直にずんと落つるなり。左傳「星隕如レ雨」

【落胤】ラクイン 圖おとしだね、貴人の私生兒。

【落英】ラクエイ おちたるはな。楚辭「餐二秋菊之一一」一説におちたる葉。

【落葉】ラクヨウ おちば。陸機賦序「一一依二微風一以隕、而風之力靈寡」＝堕葉。

【落葉松】ラクヨウマツ からまつ、日光松、富士松。山中に自生する落葉樹の茶筌狀の葉は冬期落葉す。

【落宴】ラクエン 座敷びらき、新築落成の祝宴。

【落霞與二孤鶩一齊飛】ラクカヨニコボクトセイヒス 日暮水邊の景をいふ、落霞は低くたなびくかすみ、一説に、飛蛾、篤はあひる。王勃、滕王閣序「一一、秋水共二長天一色」

【落雁】ラクガン 空より洲に飛び下るかり。

【落雁峯】ラクガンホウ 華山の一峯。雲仙雜記「李白登二華山一一一曰、此山最高、呼吸之氣、想通二帝座一矣、恨不レ攜二謝朓笙一入詩一來、振二首問一事天上耳」

【落陣】ラクジン 入り日のひかり。劉長卿詩「回レ首川長共二一一一」＝落日。

【落句】ラクク 五七言律詩の七八の兩句（倉浪詩話）

【落花】ラクカ ちるはな。＝落英。

【落花難レ上レ枝】ラクカハエダニノボリガタシ おちたる花は再び枝に上ること難し。一度去りし婦は再び復歸し難きに喩ふ。五燈會元「一一、破鏡不二重照一」

【落花水面皆文章】ラクカスイメンミナアヤヲナス 風景の自然にあやあるにいふ。朱熹詩「好鳥枝頭亦朋友、一一」

【落花生】ラクカセイ なんきんまめ。典籍便覽「一一藤蘆、葉似二扁豆一」

【落花風】ラクカノカゼ 花を吹きおとす風。劉延芝詩「今人還對二一一一」

【落花時節】ラクカノセツ 春の末、花の落つる

頃。杜甫詩「正是江南好風景、——又逢レ君」

【落款】ラクカン　書畫に作者の名を記し、又は雅印をおす、落成款識の略。又其の印。

【落月】ラクゲツ　入りかかりし月。戴叔倫詩「高樓逈ニ——、壁鼓遥ニ殘更ニ」

【落月屋梁】ラクゲツオクリョウ　友を思ふ情の切なるにいふ。杜甫、夢ニ李白ニ詩「落月滿ニ屋梁ニ猶疑照ニ顏色ニ」

【落伍】ラクゴ　兵士がなかまからはづれる。又足弱き者が同伴者に離れて後になる。

【落後】ラクゴ　人におくれる。李白詩「風流豈曾落ニ人後ニ」

【落語】ラクゴ　○話の結局のところ。方洲雜言「及ニ——一莫レ不ニ絶倒ニ」○圖おとしばなし。

【落紅】ラクコウ　散りおちるあかき花。‖落花。

【落想】ラクソウ　おもひつき。‖着想。

【落葡紅】ラクソウコウ　うめもどき（梅擬）高さ一丈許、夏淡赤色五瓣の小花をつけ、冬紅色の實を結ぶ。

【落葉】ラクヨウ　ものさびし（源氏家訓）‖落莫。

【落札】ラクサツ　入札せし物件が我が手に入る。

【落字】ラクジ　書きおとしたる文字。‖脫字。

【落日】ラクジツ　ゆふひ。杜甫詩「——照ニ大旗ニ馬鳴風蕭蕭」

【落盞】ラクサン　おとしつくす。おちてつきる。李白詩「楊花——子規啼」

【落城】ラクジョウ　圖しろがおちる、城陷。

【落掌】ラクショウ　圖うけとる。落手。

【落手】ラクシュ　○手に入る。杜甫詩「豈意青草湖、扁舟落ニ吾手ニ」○受け取る。‖落掌。

【落首】ラクシュ　圖嘲弄滑稽などの意を寓し路傍等に落しておく狂歌。

【落書】ラクショ　圖○門又壁などにいたづらがきをする。又、其の書畫。○ショウ嘲弄又諷刺の意を寓して書き、人通り多き所に立ておく匿名の文書。

【落飾】ラクショク　髪をそりて佛門に入る、出家する。慈恩傳「風塵行業、既ニ——一」‖落髪。

【落職】ラクショク　役をやめる。‖職を落す。

【落成】ラクセイ　宮室ができあがる、落は其の成りたる祭の義。劉克莊詩「故園難ニ歸去一新巢前——」

【落足】ラクソク　古の名高き樓名。金陵地記「吳嘉禾元年、於ニ桂林苑落星山一起ニ三重樓一、名曰ニ——樓一」梁莊詩「——樓上吹ニ殘角一」

【落照】ラクショウ　ゆふひ。梁簡文帝詩「寒砧寒日晩、——度ニ空閨一」‖落日、落暉。

【落籍】ラクセキ　○戸籍簿に脫けおちたもの。大學衍義補「唐穆宗方荒寒、軍士——者衆、皆聚ニ山澤一爲レ盜」○圖みうけ、遊女などの名籍より名を除きて身を退く。

【落選】ラクセン　えらびにもれる。

【落蘇】ラクソ　茄子の異名。本草「茄子名ニ——一」

【落第】ラクダイ　試驗に及第せず。唐詩記事「——者、至ニ省門一散去」

【落托】ラクタク　ものさびし（晉樂府、懊憹歌）‖落寞。

【落拓】ラクタク　氣が大いなり。拓落の俗用。北史、楊素傳「少——有ニ大志一」

【落魄】ラクハク　ぬけおちる。‖脫落。

【落膊】ラクハク　力をおとす。文同詩「職事有ニ出入一抱ニ——膂一」唐書、温造傳「今日監ニ温卿史一矣」

【落地】ラクチ　此地上に生れ出る。陸游詩「——爲ニ兄弟一何必骨肉親」

【落丁】ラクテイ　圖書物の紙がぬけて不足する。‖脫簡。

【落着】ラクチャク　事がきまりておちつく。朱子語類「卻有ニ一個——一」

【落潮】ラクチョウ　ひきしほ。劍長卿詩「——過ニ野艇一」‖退潮。

【落馬】ラクバ　うまよりおつ。南史、義宣大懼、——仍便步レ地、宋書、沈懷文傳「託レ疾——」

【落梅花】ラクバイカ　笛曲の名。李白詩、黃鶴樓中吹ニ玉笛一、江上五月——」

【落帽之辰】ラクボウノシン　九月九日の節句、晉の桓溫が九月九日龍山に宴せし時、風至りて孟嘉の帽を吹き落しかば、溫人をして文を作り、嘉を嘲らしめしに嘉の之に答へし文甚だ美なりきとの故事に本づく。晉書紀瞻「授衣之月、——」

【落泊】ラクハク　をちぶれる。陳書、杜稜傳「少——不レ爲ニ當世知一」‖落魄、落托。

【落莫】ラクバク　さびし、落は洛諧、莫は漠。韓愈、送ニ楊少尹一序「不ニ——一否」‖寂莫。

【落寞】ラクバク　さびし。經辨才詩「披レ雲同——一、步レ月共徘徊」‖落莫。

【落魄】ラクタク　おちぶれる。史、酈生傳「好讀書、家貧——、無ニ以爲ニ衣食業一」‖落泊、落托、流落。

【落髪】ラクハツ　髪をそりて僧となる。北史、魏宗室河南王傳「自レ——爲ニ沙門一」‖剃髪。

【落帆】ラクハン　ほをおろす。浜方生詩「——修江浦」

【落筆】ラクヒツ　筆を下して書く。杜甫詩「閑レ書百紙盡、——四座驚」

【落筆點レ蠅】ラクヒツテンヨウ　畫家の妙技をいふ。吳錄「曹不興善レ畫、雖使レ畫ニ扇風一、誤落レ筆點レ素、因就以作レ蠅、既畫御、權以爲ニ眞蠅一、舉レ手彈レ之」

【落木】ラクボク　秋になりて葉のおちたる木、冬がれの木。杜甫詩「吉城——疎、蕭度寒雲」

【落命】ラクメイ　圖いのちをおとす、殺すること。

【落雷】ラクライ　かみなりがおちること。又、其の雷。

【落落】ラクラク　○相入れざる貌。老子「碌碌如レ玉、―如レ石」○志の大いにしてすぐれたる貌。晉書、石勒載記「大丈夫行レ事、當二磊磊落落一如二日月皎然一」○さびしき貌。左思、詠史詩「――窮巷士」○まばらなる貌。劉禹錫詩、序「今來――、如二晨星之相望一」

【落落穆穆】ラクラクボクボク　心の大いにして清きをいふ。晉書、王澄傳「衛玠不レ如二郭――一然也」

【落涙】ラクルイ　なみだをおとす。魏文帝詩「妻子垂二衣袂一―――霑二懐抱一」

【葎】リツ　㊥

むぐら、蔓生の雜草の一、莖には密生せる細き刺あり、葉は節の周圍に輪生す。‖猪殃殃。

【葎草】リツソウ　むぐらの本草「――、莖有二細刺一善勒二人膚一」

【葛】カツ　㊇

―荄ガイは、ねざし、野菜の一、ちしゃ。

十畫

【蓁】㊀ナウ　㊁ラウ　㊥東　㊦篠

㊀たう(たう)草花の莖のこまかき葉がむらがり出づるもの「―莖」㊁草木の盛んに茂る貌。

【蓁蓁】ラウラウ　草が茂る。文同詩「――滋二蒿穴一」＝蓁蓁。

【蓁蓁】ラウラウ　草木が茂りて蔽ふ、陸機の貌。漢書、司馬相如傳「觀二乎樹之――一兮」

【蓁蓁】ラウラウ　さかんなる貌。張華賦「朱夏當陽、――蕃華」

【蓁郁】ラウイク　草木の盛んにしげれる貌。張衡賦「暉映――、含レ芬吐レ芳」‖蓁鬱・香郁。

【蓁鬱】ラウウツ　○草木の盛んなる貌。左思、蜀都賦「松柏――二於山峯一」‖蓁蓁・蓁郁。○轉じて雲などのさかんなる貌。魏文帝賦「瞻二玄雲之――一、仰二沈陰之杳冥一」‖蓁蓁・蓁郁。

【蓁蓁】ラウラウ　草木の盛んなる貌。韓愈賦「樹――其相摎」

【蓁草】ラウサウ　茂り盛んなる貌。左思賦「――蔚瑟」

【蓁然】ラウゼン　物の盛んなる貌。關尹子「我之與レ物、――耐然、在二大化中一、性一而已」

【蓁勃】ラウボツ　盛んなる貌。張協、雜詩「龍賦「觸二幽石一而――其色」

【蓁青】ラウセイ　草木のしげれる貌。孫子「軍旁有二險阻潢井蒹葭林木一――一者、必謹覆二索之一、此伏レ姦之所也」

【蓋】㊀カイ　㊁カフ　合泰　又、蓋に作る、盖は俗字、通音ガイ

㊀おほふ。おほひ(覆)おほひかくす(掩蔽)者、蔡仲之命「商尚―前人之愆」○ふた、容器の口のおほひ。○かさ、きぬがさ、車の上に立てる傘「車―」○からかさ(傘)晉康文「仲尼不假―于子夏」○けだし、おしはかることば、推量の辭、疑ふ辭。孟、滕文公「――上世嘗有レ不レ葬二其親一者」○なんぞ(何)戰國、秦策「――可レ忽乎哉」○略奪する辭。孝經「――天子之孝也」○とま(茅苫)○くはふ(加尚)㊁なんぞ何何せざると讀む、何不の合音、盍に通ず。孟、梁惠王「――亦反二其本一矣」○齊の地名。孟、公孫丑「―大夫王驩」

【蓋棺】ガイクワン　蓋レ棺事定(九畫四百二頁)を見よ。

【蓋形】ガイケイ　かたちをおほふ。漢書、伍被傳「男子疾耕、不レ足二于糧餉一、女子紡績、不レ足二於一レ」

【蓋愆】ガイケンカン　行を勵まし善を爲して罪惡をおほひよめる。字解參看。今は功を以て罪を贖ふ義とす。

【蓋塹】ガイシヤウ　天地。韓愈詩「威風挾二恩氣一――兩劇拂」

【蓋世】ガイセイ　一世をおほひ蓋するほどにすぐれる。史、項羽紀「項王乃悲歌慷慨、自爲レ詩曰、力拔レ山兮氣―レ」

【蓋然】ガイゼン　けだし然らん、推定の辭。必然の對。‖或然。

【蓋擁】ガイヨウ　世俗のほだし、俗累をいふ。王筠、答二釋法雲一書「遯二彼――一」

【蓋纏】ガイテン　おほひ、ふた。儀禮「遣有二――一」

【蓋等】ガイトウ　かぶりがさ。晉書、天文志「周髀者卽蓋天之說也、其言、天似二――一、地法二覆槃一」

【蒿】カウ　㊅

○よもぎ、くさよもぎ、艾の類「青―」「白―」「牡―」「蓽―」「茵陳―」○蒸―は氣の蒸し上がる貌。祭義「蒸―悽愴」○つかる(耗)疲勞する。楚語「使民―焉」○ちりにまみれるにいふ。○みだれる(亂)愛ひ視る。○遠―は卑賤に喩ふ。李白詩「我輩豈是蓬―人」

【蒿矢】カウシ　よもぎにて作りたる箭、邪氣をはらふといふ。後漢書「桑弧―、以射二四方一」

【蔮林】ヨクリン よもぎのゆか。高士傳「茅居ー〻、守道不ㇾ仕」

【蔮雀】ヨクジャク 候鳥の一、黄雀より小、色青黒、嘴も亦黒色、胸腹は淡黄、あをじ。‖草雀。

【蔮目】ヨクモク 蔮は亂、目を亂して視る。一説によもぎは原にまみれ易し、故に君子眼を原中にくらくするに喩ふ、憂ひ視る氏。葉、雖棹「今之君子ー〻、而憂二世之患一」

【蔮菜】ヨクサイ あれくさ。又、草のしげれる所。吳師道詩「不ㇾ妨歸臥守二ー〻一」

【蔮里】ヨクリ ○墓地の名。○葬式の時うたふ歌。搜神記「ー〻歌曰、ー〻誰家地、聚二蒿裏一、無賢愚鬼伯一何催促、人命不ㇾ得ㇾ少留」‖挽歌・輓歌。

【蔮蒙】ヨクボウ よもぎと、あかざと。曾鞏詩「樹以二松栢一、植以二蔮蒙一、不ㇾ宜ㇾ間二ー〻一」

【蔮盛】ヨクセイ 草がかきいばり、自己の家の譬喩。東方朔文「何必深山之中、ー〻之下」

【蒟】ク 麌

ー蒻はこんにゃく、宿根草の一、高さ二尺許、夏紫褐色の花を著く。球狀の地下莖を食用とす。蜀都賦「其園則有二蒟蒻瓜畦芋區一」

【蒯】クワイ 卦

○萱スの屬、あぶらがや。莖の高さ四尺許、秋、茶褐色の小花を著く、莖の纖維を織物とす。左、成九「雖有二絲麻一無二棄ー〻一」絲麻は美物、徒に美物を持みて賤物を捨つべからざる喩。○姓、ー通は楚漢の時の說士、蒯通。其の計を用ひて齊の地を定む。

【蒹】ケン 霰

ひめよし（蘆）なぎ（荻）

【蒹葭】ケンカ をぎ。詩、秦風「ー〻蒼蒼、白露爲ㇾ霜」

【蓑】サ サイ 歌 灰

又、簑に作る

○みの（草衣）雨をふせぐ外衣「短ー」「烟ー雨笠」詩、小雅「何ー何笠」○おほふ（覆）○草葉の下垂せる貌。

【蓑衣】サイ みの。江萬詩「何時洞庭上、春雨綠二ー〻一」

【蓑衣】サイイ 草葉の下垂せる貌。張衡、南都賦「敷華蕊之ー〻一」

【蓑笠】サリュウ みのと、かさと。列子「吾君方將二被ー〻一而立乎畎畝之中一」

【蓌】サ 遇 禡

いつはる（詐）曲禮「介者不ㇾ拜、爲二其拜而ー〻拜一」（容飾を失ふをいふ）

【蒼】㊀サウ ㊁サウ 養 陽

㊀は倉に通ず

㊀あを、草のあを色、深青色「ー〻ー〻」○しげる（茂）○ー〻は物の老いたる貌。又、髪の班白の貌。又、草木の青く茂る貌。又、晴れたる天の色。○ー黄・ー卒は急遽の貌（ー〻は倉に同じ）㊁葬ー〻は草木の青青したる貌。近郊の色。莊、逍遙遊「適二莽ー〻者三湌而反」

【蒼蒼】サウサウ あをきもや。白居易詩「蛤蘇煮倘ニー〻一」

【蒼頡】サウカツ あをうなばら。‖滄海・蒼溟。

【蒼庚】サウカウ うぐひす。晉灼「ー〻鳴」‖倉庚・黄鳥・搏黍・黄鸝。

【蒼皇】サウクワウ あをぞら。樂書、武帝紀「日月無二編照一、何由睹ニー〻一」‖蒼漢・皇蒼。

【蒼旻】サウビン 天をいふ。李白賦「廓二區宇一以立ー〻、縣ニー〻之維綱一」‖蒼天。

【蒼顏】サウガン 年老いて衰へたるかほ色。歐陽修、醉翁亭記「ー〻白髮、頽二乎其中一者、太守醉也。

【蒼穹】サウキウ あをぞら、穹は天の弓窿なれの狀をいふ。李白詩「ー〻浩然沚、萬劫太極長」‖蒼空。

【蒼王】サウワウ あをきたま。禮記「衣二青衣一、服ニー〻一」

【蒼極】サウキョク 天をいふ。陳子昂詩「ー〻神功被」

【蒼狗】サウク 雲の形容。杜甫詩、天上浮雲如二白衣一須臾變爲ニー〻一」

【蒼空】サウクウ あをぞら。李白詩「青山映二蒼道一碧樹搖ニー〻一」‖蒼天・蒼穹・蒼旻。

【蒼檜】サウクワイ 郭祥正詩「淮南亭子有ニー〻一」

【蒼梧】サウゴ あおてる。杜甫詩「ー〻已就二長途一往、還遠無二端出餞遲一」‖蒼皇・倉黄。

【蒼鼠】サウソ ○あおてる貌。漢書、郊祀志「ー〻若二飛爲一」‖倉黄・蒼皇。○あを色又は黒色に反覆して定らざるにいふ。孔稚圭、北山移文「終始蒼蒼、ー〻反覆」

【蒼官】サウクワン 松の異名。王安石詩「歲晩ー〻聊自保」

【蒼頡】サウキツ 黄帝の臣、鳥跡を見て文字を作る、蒼一に倉に作る。許愼、說文序「黄帝之史ー〻初造二書契一、依二類象一形、故謂二之文一、其後形聲相益、即謂二之字一、著二於竹帛一謂二之書一」

【蒼玄】サウゲン あをぞら、天。梁書、朱异傳「聖明御宇、上順二ー〻一、北土遺黎、唯不二慕仰一」

【蒼梧】サウ　○縣の名、今の廣西省一一道の治、開きて岡埠と爲す。○山の名、舜帝を其の下に葬る、一名九疑、今の湖南省寧遠縣に在り。檀弓「舜葬二於一一之野一」

【蒼黑】サウコク　あをぐろし。劉禹錫詩「洞門一一煙霧生」

【蒼蒼】サウ　○物の老いたる貌。詩、秦風「兼葭一一、白露爲レ霜」○髪の白くなりかけたる貌。韓愈、祭二十二郎一文「親戚洸洸而笑一一」○草木のあをく茂れる貌。曹植詩「山樹鬱一一」○天の青き色。莊、逍遙遊「天之一一、其正色耶」

【蒼杉】サウサン　あをく茂れるすぎ。僧惠洪詩「千木一一俱合抱」

【蒼梁】サウ　みどりと、むらさきと。毛詩「遠岫分二一一一」

【蒼鵝】シュン　はやぶさ。靈苑「要離刺二王子慶忌一一擊二於臺上一」趙壹、窮鳥賦「前見二一一一、後見二騙者一」

【蒼松】ショウ　あをきまつ。張說詩「一一虎徑深」

【蒼翠】スイ　あをし。揮塵後錄「北岸萬竹一一蓊鬱、仰不レ見レ明」

【蒼生】セイ　あをひとぐさ、百姓、草木の青蒼然として衆きに喩ふ。晉、益州「至二于海隅一一」晉書「安石不レ出、如二天下一一何」‖蒼民・蒼黔・蒼民。

【蒼然】ゼン　○あをき貌。白居易詩「秋陰和二晴色一、萬木暮一一」○日暮のうす暗き貌「暮色一一」○ふるびたる色の形容「古色一一」

【蒼蠅】ヨウ　あをあをとしたるこけ。蠅邊詩「臥石餌二一一一」‖綠蘚・碧苔。

【蒼蠅虫】ソウヨウ　松の異名。高僧傳「晉愷法橈、隱二剡山一、或問二脉友爲レ誰、乃指レ松曰、此一一也」

【蒼卒】ソウ　あわただし。唐書、韋述傳「一一録遍、能存二國史一」‖倉卒・倉皇・蒼黄。

【蒼苔】タイ　あをあをとしたるこけ。杜甫詩「先生早賦歸去來、石田茅屋一一一」‖翠苔・蒼蘚。

【蒼竹】チク　あをきたけ。戴昺詩「一一颺レ風涼意足、碧梧留レ雨夜聲多」

【蒼朮】ソウジュツ　をけら、野生の草草、秋、葉ありに似たる白花を著く、根を藥用として濕氣を拂ふの效あり。木草「一一服レ之可レ成レ仙」

【蒼鳥】ソウチョウ　鷹の異名。楚辭「一一擊飛」

【蒼天】テン　○あをぞら。詩、王風「悠悠一一」‖蒼空・蒼穹。○春の天。爾雅「春爲二一一一、夏爲二昊天一、秋爲二旻天一、冬爲二上天一」

【蒼頭】トウ　○青き頭巾にて頭をつつむ兵卒。戰國魏策「一一二十萬、奮擊二十萬、厮徒十萬」○しもべ。漢書、鮑宣傳「一一廬兒、皆用致レ富」

【蒼蠅】ヨウ　あをあをとしたるふぢ。朱熹詩「寒泉下二碧澗一、古木垂二一一一」

【蒼蠅】ヨウ　あをじろし。劉克莊詩「髮因二時事一一秋二一一一」‖蒼白。

【蒼茫】ボウ　あをあをとしてひろき貌。潘岳、哀二永逝一文「親二天日一兮一一、面二邑里一兮廬故」

【蒼蠅】ヨウ　もろもろのたみ。羅隱頌「愛啓二劉侯一、袞二公一一」‖蒼生・蒼民。

【蒼茫】ボウ　○あをぞら。孟郊詩「閩水無二白日一、滿流響二一一一」‖蒼天。○秋のそら。

【蒼莽】モウ　あをあをとしげれるくさ。又、其の場所。張光義、登二秦嶺一作「九迭合二一一一、五陵滅瞳朧」

【蒼艾】ソウガイ　あをきあや。山堂肆考「一一面白首、皆如二鷹雛一」

【蒼生】ソウセイ　○あをあをとしてとぼし。韓詩外傳「齊桓公問二于管仲一曰、王者何貴、曰貴レ天、桓公仰而視レ天、管仲曰、所レ謂天、非二一一一之天一也、王者以二百姓一爲レ天、百姓與レ之則安、非レ之則危」○草木のあををとしげれる貌。蘇軾、黃樓賦「山川開闔、一一千里」

【蒼民】ソウミン　蒼生に同じ。陳眉公、小乘閑三治道一、大慶搖二一一一」

【蒼溟】ソウメイ　蒼海に同じ（溟は海）‖倉溟。

【蒼蠅】ヨウ　あをばへ。人を讒言する小人に喩ふ。詩、齊風「匪二雞則鳴一、一一之聲」歐陽修、憎二一一一賦あり。

【蒼鷺】ソウロ　○しらたか、羽毛蒼白色を帶ぶ。戰國策「一一擊二于殿上一」○しらたかは鷺鳥なるが故に酷吏に喩ふ。史、酷吏傳「漢郡郡用レ法嚴酷、尤不レ謂二蒼鷹一列侯宗室見レ之、側レ目而視、號曰二一一一」

【蒼浪】ソウロウ　頭髪の衰ふる貌。白居易詩「病來憔悴轉一一」‖蒼蒼。

【蒼龍】リュウ　○東方七宿の星の名（三輔黃圖）‖青龍。○老松の形容。李山甫詩「地墜二一一勢抱レ雲」

【蒼鷺】ロ　どろさぎ、水鳥の一、形鷺に似、背は蒼灰色、魚蛙などを捕へ食ふ。

【蒭】　スウ　芻

植物の種子を包める殻が熟し後破裂して種子を吐き出す種類のもの。一果といふ、朝顏・百合の類。

【蒜】　サン　𦮗

にんにく、おほびる、宿根草にして葉菜の一種、葉は細長く、花は葱に似て、根は球狀をなし、甚だ臭し。

【蓍】　シ　支

○めどぎ、草の一種、一根より數十莖を叢生し、三葉づつ集著す、高さ四五尺、夏日、淡紫又は紅・白の花開く、めどは

ぎ、其の莖をうらなひに用ふ。○轉じてうらなひに用ふる五十本の竹の棒。‖筮竹。

【蓍龜】シキ　うらなひ、龜は龜の甲を灼きてうらなふ。中庸「見二于ー一、形二乎四體一」‖卜筮・選擧。

【蓍龜】シキ　蓍龜に同じ、蓍は地名、大龜を出すが故。蓍龜ー一ー分顚躍

【蓍草】シサウ　うらなひに用ふるめどぎ。劉禹錫詩「蓍花照後容顏改、ーー古來命已通」

【蒔】㊀シ・ジ　㊁シ・ジ　支　㊀うう、移し植う。晉書、姚萇載記「ー二樹一根以旌戰功」國　○種を地に下す、播種する。又、粉末を散らし落す「ー繪」　㊁ー繪には、苗香の一種。

【蒔繪】俗田植ウエ‖分映。

【蒔繪】野菜などを移しうゑる。唐書、百官志「司苑・典苑・掌苑各二人、掌二園苑ー一蔬果一」‖藝植種植。

【蒔物】圖法と金銀粉とにて畫を作る技。來集之倘湖稿書「日本所二附貢一有二金銀ーー硯一」‖泥金畫法・描金。

【蒐】シウ　尤　○あつむ(聚)「ー集」○しらべる(簡閱)左、襄二四「ー軍實」○かくす(隱)左、文十八「服ー讒ー愚」○茅蒐はあかね(茜)‖地血。○かる。かり、春の田獵、人衆を聚める義、苗は夏、獮は秋、狩は冬のかり。左、隱五「春ー夏苗、秋獮冬狩」註「ー、索擇取不孕者」苗、爲苗除害也、獮、殺也、以殺爲名、順二秋氣一也、狩、圍守也、冬物畢成、獲則取之、無所擇也」

【蒐索】シウ　えらびもとめる。字解參看。‖搜索。

【蒐集】シウ　あつむ。‖蒐輯。

【蒐選】シウ　しらべえらぶ。宋史、李植傳「ー二一強壯、以重二軍勢一、度二地險阨一、以保二居民一」‖揀選。

【蒐討】シウ　聚めしらべる、討は討究。

【蒐田】シウ　かり。かりをする。周禮、遂以ー一」

【蒐畋】シウ　かりする。元稹詩「ー一想二淵津一」‖獵田。

【蒐苗】シウ　春と夏とのかり。左、隱五「春蒐夏苗」

【蒐補】シウ　あつめおぎなふ。宋史、職官志「ー二一闕牧一」

【蒐練】シウ　聚め取る、練は揀。‖蒐輯。

【蒐獵】シウ　春のかり。何水天詩「ー一宣二其健命一」

【蒐練】シウ　兵士を訓練する。唐書、突厥傳「戰士雖落、兵甲鈍弊、事急則勝、天下雖然盜發、則疾驅以殘、是謂二宿敗之師一、此不二ー一之過」

【蔑】シツ　質　ー藥は、はまびし(濱菱)海濱の沙地に生ずる蔓草の一、藥用とす、夏、葉の開に五瓣の小黃花開き、三角又は四角のとげある實を結ぶ。後世蠡又木にて此の實の形を作り敵の進路を繫ぐに用ひる「蠡ー藜」

【蔑】シン　眞　○しげし、草の盛んに茂る貌「深ー」○くさむら。○木の叢生する貌。‖棒に通ず。○おほし、多く積み聚まる貌。

【蓁蓁】シン　○盛んにしげる貌。詩、周南、桃之夭夭、其葉ー一」○積みあつまる貌。‖態對、招魂「娭光ー一」

【蓁莽】シンバウ　草木がさかんにしげる。

【蓼】ジュク　ニャク　藥　○がまのめ、わかきがま。○がまのしきもの「ー席」○錦ー‖蓐に通ず。

【蓊】オウ　董　○おほし、もろもろ(衆)「ー民」○むす、あつし(熱)○火氣又は水氣がむしのぼる。○ふかす、湯氣をあてて食物を煮る。○ほそきたき(細薪)詩、小雅「以薪以ー」箋「蘇曰、薪、細曰ー一」○をがら、あさがら、古、用ひて燭とす。○ーーは善き方へ進む貌。又、純一の貌。○冬の祭の名。‖燕。

【蓊鬱】ウツ　むしあつくして氣が結ぼる。蘇軾詩「風從二南來一雨欲ー一」‖鬱蒸。

【蓊流】ジュ　むしひたす。江賦「由二滙之所一ー二歸漾一、雲霧之所ー一ー」

【蓊氣】ジュ　ゆげ、蒸發せし氣體。淮南子「草木之發若ー一、鳥獸之歸若ー一流泉」

【蓋溫】シフ　むし暑くしてしめる。南方草木狀「可ー二ー一之氣」

【蓋底】ジョ　もろもろのたみ。漢書、武帝紀「何以佐二殺烝一幽隱、勸二元元一爲ー一ー」‖蒸民・蒸庶。

【蓐草】ジョク　むしあつし。北史、崔浩傳「南土下濕、夏月ー一、非二行ー師之時一」‖溽暑。

【蓐蓐】ジョク　蓮む貌、向上する。又、純一の貌。書、堯典「克諧以ー孝、ー一又不ー格ー姦」今本、烝烝に作る。

【蒸湯】ジョウ むしあつし。蘇軾詩「澤國梅雨餘、衰年困ニ一一一」‖溽暑。
【蒸炊】ジョウスイ むしかしぐ。韓愈詩「如下坐ニ深甑一遭中一一上」
【蒸騰】ジョウトウ むされて水氣がのぼる。元稹詩「雲雨晴交構、川澤方一一」‖蒸發。
【蒸熱】ジョウネツ むしあつし。詩經、疏「延ニ一一之服一」
【蒸炮】ジョウホウ むしやきにする。齊民要術「一一美ニ於常魚一」
【蒸亮】ジョウリョウ むしにる。張衡詩「一一氣味元不レ改、今晨一食如ニ兩世一」
【蒸發】ジョウハツ 液體又は固體が氣體となりて發散する。‖蒸騰。
【蒸浮】ジョウフ むす。李綱詩「疑下在ニ烟冶一遭中一一上」
【蒸餅】ジョウヘイ 饅頭。〔名義考〕‖籠餅。
【蒸民】ジョウミン もろもろの人民、たみぐさ。列、仲尼「立ニ我一一一」‖烝民・衆民庶・衆庶・品庶。
【蒸茗】ジョウメイ 茶の芽をむす。項斯詩「一一氣從ニ茅舍一出」
【蒸溜】ジョウリュウ 液體を蒸發せしめ、其の氣を冷して又、液體となしてまざり物を去る「一一水」
【蒸籠】ジョウロウ むす。宋濂詩「今年度ニ庾嶺一、熱氣蒸一一」
【蒸藥】ジョウヤク むしたるくすり。煉志、鍾乳條、注「美玉白如ニ截肪一、黑聲ニ純淡一、赤服ニ雞冠一、黃伴ニ一一一」
【蒸藜】ジョウレイ あかざをむす。王維詩「一一炊ニ黍飯一、漉ニ露葵一」‖藜羹。

【蒸】ジョウ 艸 9 蒸

○しきぐさ、しきわら（馬の藉草）○しきもの、しとね（茵席）「牀一」「茵一」「臥一」褥に通ず。○ふるき草のめばえがしげく生ずる。○こも、むしろ（蓆席）○産一は産室のしとね。
【蒸褥】ジョクジョク 婦人の産褥に臨む醫師。夢溪筆談「有ニ一一一、適在ニ其家一」
【蒸月】ジョウゲツ うるうづき、臨月〔備門事親〕
【蒸疫】ジョウエキ 久しき病人が林蓐に在りて皮膚が壓せられて生ずる潰瘍モノ
【蒸敬】ジョウケイ 秋の神。禮、月令「孟秋之月、其帝少昊、其神一一」
【蒸會】ジョウカイ 早朝ねどこの上に在りて食事する。左、文七「秣レ馬一一、治レ師夜起」
【蒸母】ジョウボ とりあげばば、産婆。宋史「一一不レ能レ收、易ニ七人一始娩」

【蒸】セキ 艸 9 席

○おほいなり（大）詩、鄭風「綢衣之一兮」○むしろ、しきもの「茵一」六韜「坐以ニ文綺之一一」席に通ず。
【蒸戸】セキコ むしろを下げたる戸。梁昭明太子文「一一幽人、蓬門下客」
【蒸薦】セキセン 座に敷くむしろ。因りて人の下に居るに喩ふ。韓非子「出則爲ニ扞蔽一、入則爲ニ一一一」

【蒨】セン 艸 9 霰

○あかね（茜）赤色の染料とす。‖茅蒐。○草のさかんなる貌。‖芊。○一一はあざやか（鮮明）なる貌「妍一」
【蒨蒨】セン 草などのしげれる貌。水心題跋「意秀一一」
【蒨倩】セン ○鮮明なる貌。宋玉詩「一一士子、溫而不レ愈」○草の盛んにしげる貌。‖芊芊。

【葙】ソ 艸 9 虞

○茅ちに似たる一種の草。又其の草にて織りしあらごも、祭祀に用ふ。○一種の菜。

【蓀】ソン 艸 9 元 又、荪に作る

○香草の名。○溪一ソンはなあやめ、菖の一種（花菖蒲）‖水菖蒲。

【蓎】ダ 艸 9 禡

【蓎】ダ 艸 9 合

一種の香草、葉は栟櫚に似て小。‖山檳榔。

【蓄】（一）チク（二）キク 艸 9 屋 又、畜・畜に作る

㊀たくはふ（畜）「儲一」「積一」「貯一」○あつむ（聚）○つむ、（積）○やしなふ（養）○をさむ。をさまる（藏）たくはへ。○やしなふもの。○冬の用にたくはへる菜。㊁冬のあをもの（冬菜）

同訓異義 蓄・貯・儲○蓄はすこしづつよせ集めておくことなり、蓄積と連用す。禮記「子婦無ニ私蓄一」○貯は入用だけ收藏して置くなり、蓄は用ひずにおくなり、貯は用ひつつ、品切のせぬやうにするなり。○儲は、かはりにたくはへて置くなり、太子を東儲といふも、この義に本づく。漢書「家無ニ儲石之儲一」
【蓄艾】チクガイ やしなひそだつ。禮は育。
【蓄狐】チクコ 聞狐及詩「雄狐一一時乃宜」
【蓄怨】チクエン ○つもるうらみ。漢書、賈誼傳「一一宿禍、孰視而不レ定」○心一蓐は、ねなしかづら。‖女蘿・唐蒙。

たくらみをたくはへる。

【蓄音機】チクオンキ　音響をたくはへ、必要の時に發せしむる機械。‖蘇音機・留聲機。

【蓄火】チククワ　火種をたくはへる。淮南子「以二其所一レ蓄而游二不レ用之鄉一」辟猶下樹二荷山上一ルヤ井中上」

【蓄財】チクザイ　金錢をたくはふ。貯金。

【蓄思】チクシ　つもるおもひ。嘯賦「舒二一一之排憤一、蓄二久結之縕結一」

【蓄積】チクシキ　つみたくはへる。詩、邶風、匏「二一一美菜一」

【蓄縮】チクシュク　事に怠る。漢書、息夫躬傳「丞相王嘉能面一一、不レ可レ用」

【蓄積】チクセキ　○つみたくはへる。‖蓄積。○たくはへ。管子「一一自多、用レ莫レ自強」‖貯蓄。

【蓄泄】チクセツ　收めると散らすと。崔駰文「一一雲霧」‖聚散。

【蓄電機】チクデンキ　多量の電氣を蓄へる機器、レイデン瓶・蓄電器の類。

【蓄念】チクネン　つもるおもひ。柳宗元詩「踊二躍殘魂一、蓄二陽一一一」

【蓄髮】チクハツ　かみの毛をのばしたくはへる。

【蓄米】チクベイ　こめをたくはへる。五代史、劉鄩傳「將軍一レ、將擁レ飢乎、將被レ敵乎」‖貯米。

【蓄力】チクリョク　ちからをたくはへ發ふ。晉語「一レ一紀、可二以遠一矣」註「蓄、養也」

【蓑】ハウ　ベウ　養

牛一はごばう、菜蔬の一、葉は芋に似、根は長さ二三尺、色黑く一種の香氣あり。

【蓖】ヘイ　㊥通音ヒ

一麻はたうごま、藥草の一、高さ五六尺、中空にして節あり、葉は掌狀に分裂し、夏秋の交、黃綠色の花を著く、實より一麻子油を製す、下劑に用ふ。

【蔤】ベイ　㊥通音メイ

一莢イは堯の時生じたりといふ瑞草ナンバの名。月の一日より十五日まで日毎に一莢を生じ十六日より晦日まで日毎に一莢を落す、之によりて曆を作りしといふ。玉篇「曆得二其分度一則一莢生于階」‖曆莢。

【蒲】ホ　ブ　虞

○がま、水草の一、莖の高さ四五尺、葉は細長く、夏日、矛形茶褐色の花を著く、葉にて席を織る「菰一」「深一」○がまのむしろ。○かばやなぎ「一柳」○くさぶきのまるやね。○古、捕（次條）に通ず。○はらばふ「一伏」匍に通ず。○一萄ブダウは葡萄に同じ。○一盧ロは蠱の名。‖細腰蜂。○蔔ブクは水草の一、蔔（一六五〇頁二段）を見よ。

【蒲魚】ホギョ　がまと、あしと。晉書、食貨志「良田變生二一一」‖蒲葦。

【蒲萄】ホトウ　がまにて作りたるむしろ。周禮「諸侯祭祀席二一一」‖蒲席。

【蒲屋】ホヲク　がまにてふける屋根。唐書、楊於陵傳「教下民陶瓦易二一一、以絕中火患上」

【蒲葵】ホキ　桓郷ビンの一名、葉にて扇ヲを製す「一一扇」李商隱詩「何人書蔗一一扇、記著南塘種樹時」

【蒲月】ホゲツ　陰曆五月の異名。蒲節參看。

【蒲公英】ホコウエイ　たんぽぽ、野草の一、春末菊花に似たる黃又は白の花開く。‖黃花地丁。

【蒲莉】ホリ　がま。華陽國志「陵池出二一一一」

【蒲席】ホセキ　がまむしろ。禮、雜記「一一以爲レ裀」

【蒲節】ホセツ　陰曆五月五日の菖蒲の節句。續晉故事「端午即爲二一一一」

【蒲筅】ホセン　がま、又、蒲葵にて造りたるうちは。本草「一一」釋名「方言曰、自レ關而東、謂二之箬一、自レ關而西、謂二之蘆一、東人多以レ蒲爲レ之、橫南以二蒲葵一爲レ之」

【蒲蕨】ホセン　がまむしろ。釋名「青齊間人、謂二一一一爲二蒲席一」‖蒲席。

【蒲鞭】ホベン　がまむしろにて造りたる鞭。唐書、李密傳「以二一一一乘レ牛、挂二漢書一鉄角上一行且讀」

【蒲團】ホトン　○がまにて作りたるしきもの、圓座ザの類。歐陽修詩「草席一一不レ掃塵、松間石上似レ無レ人」○圓クワンしとね、被衾。

【蒲博】ホハク　ばくち、博奕ヤクと博奕と。

【蒲帆】ホハン　がまにて織りたるほ。劉禹詩「一一出レ浦去、但見浦邊樹」

【蒲阪】ホハン　帝舜の都、今の山西省永濟縣の地。一名蒲都城。

【蒲伏】ホフク　はふ、はらばふ。史、淮陰侯傳「俛出二袴下一一」‖匍匐・扶匐・蒲服。

【蒲服】ホフク　前條に同じ。史、蘇秦傳「委蛇一一、以レ面掩レ地」

【蒲編】ホヘン　がまにて造りたる書物。漢書、路溫舒傳「取二澤中蒲一、破以爲レ牒、編用爲レ書」‖蒲牒。

【蒲鞭】ホベン　がまのむち、打ちてもいたくなし。後漢書、劉寬傳「吏人有レ過、但用二一一一罰レ之、示レ辱而已」

【蒲楊】ホヤウ　かはやなぎ。古今注「蒲柳生二水邊一、葉似二青楊一、曰二一一一」

【蒲牢】ホラウ　鐘ガネの異名。班固、西都賦、注「海中有二大魚一、曰レ鯨、又有レ獸名二一一一一、一一一一一長レ鯨、鯨魚畏二一一一一一

一於上、所二以撞一之者、爲二鯨魚一」

【蒲柳】ホリウ ○かはやなぎ。楊雅「楊、一」日水楊。○身體のかよわきに喩ふ。晉書、顧悦之遇「松柏之姿、超二蒲柳之質一、望秋先零」

【蒲輪】ホリン 蒲稭をふせぐ爲めがまにてつつめる車輪。漢書、武帝紀「安車一、束帛加レ璧、徵二魯申公一」

【蒲盧】ホロ がまと、あしと。盧は蘆、生じ易く成長速かなるもの、政治の行はれ易きに喩ふ。一說に蜾蠃ガラをいふ。日士綸・細腰蜂中項「夫政也者、一一也」

【蒲鞭】ホベン 蒲稭に同じ〔史、大宛傳〕

【捕】 ホ ブ 麌

○搏一チ はばくち、ばくえき（博奕）博物志「老子入胡作二搏一」日捕戯。○がま、蒲に通ず。

【蒙】 ボウ モウ 東

○くらし（闇）「冥一」○こども、をさなきもの（幼者）「童一」「幼一」「啓一」おろかなるもの（愚人）「愚一」○あざむく（欺）左、僖二四「上下相一」○かぶる、かぶる、うける（受）「一」恩」「一」命」○らる、せらる（被）○つつむ（裹）おほふ（覆）○をかす（冒）進みて事をひきうける。柳宗元、箕子碑「正一」雜」○おほひたるもの、かぶりたるもの、おほひかくす。左、昭十三「以幕一之」○あらはれず。○自己の謙稱。張衡、西京賦「一羣惑焉」○女蘿ガラセの別名。○易の卦の名、坎下艮上。○山東省に在る山の名。○蒙古の略稱「滿一」

【蒙頭】モウトウ おほひかぶさる。唐書、孟郊傳「林薄一一、下有二秋水一」日蓬頭・垢髮。

【蒙幼】モウヨウ いとけなくおろか。傅咸文「太甲成王年在二一一、故有二伊周之事一」日蒙稚。

【蒙レ塵振レ落】モウヂンシンラク 物の上に覆へる塵を拂ひ、落葉を振ふ。事の甚だ容易なるに喩ふ。史、汲黯傳「至レ說二丞相弘一如下發レ蒙振中落耳上」弘は公孫弘。

【蒙供】モウキョウ おにやらひをする時に、かぶるめん。荀、仲尼「仲尼之面如二一一」日方相神。

【蒙求】モウキウ 三卷、石晉の李瀚著す、經史中より古人の事蹟の互に類似せるものを編對せしめ、四字句の韻語を以て標題とし記誦に便す（純正一一三卷は元の胡炳文著す）

【蒙鳩】モウキウ 鵜鶘ダイゲの異名。荀、勸學「南方有レ鳥焉、名曰二一一」

【蒙昧】モウマイ おほひしげれるいばら。詩經「葛生二一一」

【蒙古】モウコ 元朝の國號。堯山堂外紀「北狄稱レ銀曰二一一、元之先號二一一者、因二女直號一レ金、乃以レ銀號二其國一也」

【蒙恬】モウテン おろかにして、かたくな。顏延之文「末臣一一、側聞二重訓一」日蒙陋。

【蒙塵】モウヂン つみをかうむる。漢書、成帝紀「日月不レ光、百姓レ一、朕甚閔焉」日蓬塵。

【蒙士】モウシ 智の開けざる人、蒙昧の士。晉、伊訓「具訓二于一一」

【蒙死】モウシ 死を冒す。漢書、賈山傳「忠臣之所二以一レ而竭レ知也」

【蒙耳】モウジ 耳をおほひて聞かず。國語「今子聞而寫レ之、猶二一一」

【蒙戎】モウジュウ みだれる貌。詩、邶風「狐裘一一」注「一一、亂貌」日蒙茸。

【蒙茸】モウジョウ ○草のみだれ生ずる貌。謝朓詩「稍睹紛綸鎖、秋町靡一一」○物のみだれる貌。史、晉世家「狐裘一一」日尨茸・蒙戎。○亂れ走る貌。

【蒙衝】モウショウ いくさぶね。呉志、周瑜傳「取二一一鬪艦數十艘一、實以二薪草膏油一」日艨艟。

【蒙然】モウゼン くらき（昏闇）貌。顏氏家訓「及有二大事一、識慮失レ一一張レ口、如レ坐二雲霧一」

【蒙戰】モウセン 毛織物をかぶる。宋史、曹有終傳「賊築二月城一以自固、爲二乘矢一、中者立死、有終令二卒一レ一レ蒙レ櫬以入一」

【蒙叟】モウソウ 蒙縣の長老、莊子の異稱。李白詩「一一悲二藏舟一、股宗借二清川一」日蒙莊。

【蒙塵】モウヂン 天子は常に道を清めて後に路行す、出奔せらるる時は、其の暇なし、故に塵ありて外に遁るを一一一といふ。左、僖二四「天子一一一于外一敢不二奔問一官守一」

【蒙恬】モウテン 秦の始皇帝の武將、兵三十萬を率ゐて、北、長城を築き、威名匈奴に振ふ、恬始めて雖を造る、枯木を管と爲し、鹿毛を柱と爲し、羊毛を被と爲す〔博物志〕

【蒙純】モウジュン おろか。易林「蓬老一一、不レ見二東西一」

【蒙厖】モウボウ 大いなり。杜牧詩「流品極一一」

【蒙被】モウヒ かうむる。易林「一一恩澤、長大成就」

【蒙冠】モウクワン 冠の如き帽。宋書「帽名貓レ冠也、義取三于一一其首、其來尚也」

【蒙福】モウフク さいはひをうける。後漢書、鄧后紀「普聞活二千人一者、子孫有レ封（中略）天道可レ信、家必一レ一」

【蒙鷙】モウシ おほひかぶせる。柳宗詩「鈞レ鷹覓二四山一、雲亦何心故一一」

【蒙昧】モウマイ おろかにして道理にくらし。晉書、阮籍傳「臣誠一一、所二以

爲ㇾ罪」‖懇昧・昏昧・頑昧。
【蒙蒙】モウモウ ○盛んなる貌。楚辭「紛ニ總ㇾ轡ヲ路之ー一」○くらし（暗）楚辭「雲ー一而藏ㇾ之」
【蒙養】モウヨウ 童蒙を敎育する。易、蒙卦「蒙以養正、聖功也」に本づく。
【蒙絡搖纓】モウラクエウエイ 草草などの一面にからみ被ひて枝葉がつらなり動く（柳宗元、小石潭記）

【蓉】 ヨウ 多

○芙ー一はすは。文海披沙「ー一蓮花也、一名荷、一名芙蕖」又、灌木の名、きはちす、葉は掌に似、秋日、紅又白色の花をつける。‖木蓮・木芙蓉。○阿ー一は阿片の異名。

【蔵】 ラ 祃

○草の實、地に在る瓜の類。木の實を果といふの對「果ー」「蔵ー」○核なきくだもの。

【蒜】 蒜（一六四六頁三段）に同じ。

十一畫

【蔚】 ㊀ ウツ 物 ㊁ ヰ 未

㊀をとこよもぎ（牡蒿）詩、小雅「匪ㇾ我伊ー一」○草木の盛んに茂る貌「ー然」「翁ー」「芊ー」○くさむら（榛叢）かけ（蔭翳）「陰ー」○あきらか（明）○つや、文彩の美くしくこまやかなる貌「炳ー」「縟ー」「煥ー」㊁州の名、直隸省に屬す。○こんもりとしげる、さま（鬼部十九畫）に通ず。

【蔚藹】アイ 多く盛んなる貌。拾遺記「卿雲ー一于蒼海一」
【蔚興】ウキ さかんにおこる。
【蔚樹】ジュ 樹木の茂りたる小島。吳筠詩「ー一非ニ一狀一」
【蔚然】ゼン ○しげれる貌。歐陽修、醉翁亭記「望ニ之一ー一而深秀者」○盛んなる貌（史、天官）
【蔚香】カウ ○草木の盛んに茂る貌。詩、唐風「蔚彼林令」○雲の盛んにおこる貌。張正見、石賦「上雲興而ー一」
【蔚園】ウヱン 盛んなる貌。王惲文「ー一同二萬世之家一」
【蔚藍】ラン 深きある色（青物詩、水色）
【蔚藏天】ウヅウテン 深きある色のそら、蔚は鬱。杜甫詩「上有ニ一一一垂ㇾ光抱ニ瑰室一」‖碧空・碧落・蒼空。

【蔭】 ㊀ イン 侵 ㊁ イン 沁

本、陰に作り、又、廕に作る

㊀かげ、ひかげ（日景）草、又は木のかげ「樹ー」「美ー」「涼ー」「茂ー」「綠ー」○おほふ、かばふ、かざす。○しげる（繁茂）○たすく。おかげ「庇ー」曾鞏文「仰祈ニ眞ー一」○父祖の功によりて官に敘するにいふ「父ー」「恩ー」㊁かげ。○かくす、さへぎる、かざす。○しげる（繁茂）

【蔭涼】イン 樹木の盛んにしげる貌。枚賦「含桃朱杏、灼爍ー一」
【蔭財】イン しげりおほふ。班固賦「茂樹ー一、芳草披ㇾ靡」
【蔭翳】ヨウ しげりあふ。曹植詩「夏炎百木盛、ー一增ニ凉陰一」
【蔭映】エイ おほひかくす。王琦詩「重重相ー一」
【蔭官】クワン 父祖の蔭によりて得たる官。通鑑、後漢桓帝紀、注「蔭、庇也、今人謂ニ藉ニ世資一得ㇾ官者ニ爲ニ一一」「選取ㇾ木爲ㇾ喩、能蔭ニ庇其本根一也」蔭補參看。
【蔭子】シ 父祖の功勳によりて官を得る人。‖蔭生。
【蔭室】シツ 器物に漆をぬりたる時、日光、又、風にあてざる爲めに入れ置く室。史、滑稽傳「優孟曰、君爲ㇾ漆耳、願難ㇾ爲ニ一一一」
【蔭生】セイ 蔭子に同じ。先代の餘蔭に藉る義。‖廕生。
【蔭羅】ラ おほひかくす。西京雜記「上枝ー一數十畝一」
【蔭補】ホ 父祖の功勳によりて、官に補せらるる義。唐書、李德裕傳「德裕、吉甫子也、卓犖有ニ大節一、不ㇾ喜ニ與ニ諸生一試ニ於有司一、以ㇾ一ー一校書郎一」
【蔭林】リン 樹の茂りたるかげに休む。宣和畫譜「貯ニ名園一、一ㇾ一、坐ㇾ石臨ㇾ水、俯然終ㇾ日」

【蔵】 眞

いたる（至）左、隱六「猶懼不ー一」

【蔵】 ㊀ キウ 尤 ㊁ ク 虞

㊀烏ー一はをぎ。㊁あたたむ。太玄經「陽ー一萬物」‖煦煦。

【蔵】 クン 文 蒙に同じ

ー溝は氣の蒸し出づる貌。

【蔵】 クヮイ 隊

笄なき縞布冠。

【蔵】 ゲイ 霽

○うう（種）植ゑ付ける、うゑつけ。‖藝。○わざ「材ー」「術ー」古、藝（一六八八頁四段）に通ず。

【蔻】コウ ク 俗 又蔻に作る

豆ー（ズ）は熱地に生ずる草、草荳ー（ズ）肉荳ー（ズ）白荳ー（ズ）の三種あり、實は龍眼肉（リョウガンニク）に似て皮殻厚く、味甚だ辛くして香しく、藥用とす。‖豆蔻。

【蔔】コク 國

石ー（ダイ）は藥草いはぐすり、いはどくさ「ー菜」

【蓑】コン 阮

つちかふ。土を苗の根にかける。左、昭元「是穡是ー」

【蔡】㊀サイ 泰 ㊁サツ 黠

㊀ごみ、あくた（草芥）○占トするに其の甲を焼きて占ひし大龜ー（地名）より出づるが故。論、公冶長「臧文仲居ー」○周代の國名、今の河南省上ー、新ー等の地。㊁はなつ（放）左、昭元「ー（ザイ）叔」○ころす、殺と音通。

【蔡侯紙】サイコウシ 蔡倫を見よ。

【蔡興】サイキョウ 宋の人、字は君謨、天聖の進士、吏事に精しく、文章を善くし、小楷草書は當時の第一と爲す。

【蔡邕】サイヨウ 字は伯喈、後漢の陳留の人、性至孝、博學にして能文、六經の文字を較正し親から碑に書し、之を太學門外に置く。

【蔡倫】サイリン 字は敬仲、古より書契多くは編むに竹簡を以てす、其の繊維を用ふる者は、之を紙といふ、縑は貴くして、簡は重し、竝に便ならず、倫、乃ち意を加へて樹膚麻頭及び敝布魚網を用ひて、以て紙を爲くる、和帝其の能を嘉す、是れより天下從ひ用ひざる無し、故に蔡侯紙と稱す（後漢書、蔡倫傳）

【蔪】㊀サン 咸 ㊁セン 豏

㊀かる（芟）草を刈る。㊁ーは麥のひいづる貌。箕子歌「麥秀ー（シ）ー」（史、微子世家には漸漸に作る）

【蔪去】サンキョ かりのぞく。漢書、賈誼傳「ー不義諸侯、而擇其國」

【蓬】シ 紙 支

五倍の數。孟、滕文公「或相倍ー」

【蓽】㊀シン 震 ㊁サン 旱

㊀にんじん、藥草の一。‖蓽人參。㊁垂る貌。

【蔗】シャ 禡 通音シ

○さたうきび「甘ー」暖地産の禾本草、莖は竹に似て中實し、甘き汁を含む、砂糖を製すべし。○轉じてうまし、佳し「ー境」

【蔗漿】シャショウ さたうきびのくき。

【蔗境】シャケイ 談話・文章又は景色などの次第に面白くなる所の義。晉書、顧愷之傳「毎ー食ニ甘蔗ー、常自ー尾至ー本、人或怪之、愷之曰、漸入ニ佳境ー」とあるに本づく。

【蔗霜】シャソウ 白砂糖（照朝樂事）‖白糖・糖霜。

【蔗糖】シャトウ 甘蔗にて製せしさたう（砂糖）

【蔣】㊀シャウ 養 ㊁シャウ 養

㊀まこも（菰）㊁山の名、江蘇省江寧縣の東北に在り。‖鍾山。

【蔣】ショウ 陽

○ー蓼はおほあかざ。○ー蓬はしろよもぎ。‖蓼蒿。○ー蔭はやまごぼう、陰地に生ずる草の名、根を利水劑とす。‖蔣

【蔬】㊀ショ・ソ 魚 ㊁ショ・ソ 語

㊀な、あなもの（野菜）「美ー」「園ー」「野ー」もと疏に作る。○あらし、そまつ、疎・踈・麤に通

【蔗】ソク 屋

首ー（シュ）はうまごやし。首ー（シュク）六三四頁一段）を見よ。

【蓴】ジュン 軫 又、蒓に作る

水草の一、池沼に生ず、葉は楕圓形にて滑か、食用とす。じゅんさい、ぬなは。‖水葵。

【蓴羹鱸膾】ジュンカイ じゅんさいのあつものと、鱸魚のなますと、晉の張翰が之を味はんとして官を辭して歸郷せし故事。晉書、張翰傳「因ニ秋風起ー、思ニ吳中菰菜蓴羹鱸魚膾ー、曰、人生貴ニ得ー適意ー、何爲羈ニ宦數千里ー、以要ニ名爵ー乎、遂命ー駕歸」

【蓴菜】ジュンサイ 水草の名、ぬなは。陶振、湖賦「春水桃花之鯽、秋風ー之鱸」

【蓴絲】ジュンシ じゅんさいの絲の如く細きもの。陸龜蒙賦「ー分欲ー千里」‖絲蓴。

【蓴鱸】ジュンロ 蓴羹鱸膾を見よ。

【蔵】㊀な、あなもの（野菜）「美ー」「園ー」「野ー」もと疏に作る。○あらし、そまつ、疎・踈・麤に通

す。○嘉一は稲の異名。㊁つぶ（粒）疋、天道「鼠壌有二余一」〓糈。

【蔬果】ソク　野菜と果物と。南史、梁武帝紀「天監十六年、冬十月、宗廟薦二蔬果一、始用二一一」。

【蔬菜】ソサイ　あをもの。南史、張齊傳「糧食一一、行者皆取レ給焉」〓菜蔬。

【蔬食】ショク　○粗末なる飯。論、述而「飯二一一飲レ水」〓蔬食・疏飯。○ショクス菜食に同じ。

【蔬菽】ソシュク　菜と豆と。蘇軾詩「隣人無二一事一、午飯飽二一一」。

【蔬筍】ソジュン　野菜と、たけのこと。次條參看。

【蔬筍之氣】ソジュンのキ　常に蔬菜又、筍などを食ひ居る氣、僧侶の氣味をいふ。蘇軾、贈二詩僧道通一詩「語帶二蔬筍一、經從レ古少、氣含二蔬筍一到レ公無」

【蔬穀】ソコク　あをもの、野菜。陳書、時「嗟此玉食品、納二我一一腸」

【蔬奠】ソテン　祭に供へる粗末なる物。宋書、江夏傳「遺命薄斂一一、務存二儉約一」〓薄奠。

【蔬飯】ソハン　粗末なるめし。唐書、宗室傳「一一水飲、席レ地以臥」〓蔬食・疏食。

【蔬圃】ソホ　野菜ばたけ。明書、高大圖傳「一一房前、集レ蔭而看二濃翠一」〓菜畦。

【蔬茗】ソメイ　野菜と茶と。李章玉詩「清晨瀹二一一」

【蔬蘭】ソラン　野菜と、うりの類と。唐書、流鬼傳「粟似レ黍而小、無二一一他穀一」

【蔬蘞】ソレン　野菜と玄米と。又粗末なる玄米のめし。北史、張湛傳「滿兄銑、性至孝、母喪、哀毀過レ人、服制雖レ除、而一一勿レ改」

【彗】セイ　スキ　置　支

ははきぐさ、夏秋の頃、小白花開く、束ねて帚に造る。

【蔵】セツ　サツ　易　屑

○茶の別名。茶經「三日一、四日茗」○一一はかつぱし（香）

【蔗】セン　殿

一蔗はをぐるまさう。

【蔌】㊀ソウ　㊁シュウ　皆　多

㊀草木の茂れる貌。○すけぐさ「芽一一」㊁肉一一は薗ナノの一、全體黄褐色、藥用とす、きもらたけ。

【蔑】

蔑（艸部九畫）の古字。

【蔟】㊀ソク　㊁ソウ　屋　厚

㊀な、あをもの、野菜類の總名「蔬一」「肴一」「山肴野一」詩、大雅「其一維何、維筍及蒲」○一一はいやし、やつやつし（憂陋）詩、小雅「一一方有レ穀」又、風の聲の強き貌。鮑照、蕪城賦「一一風威、孤蓬自振」○落花の貌。元稹詞「風動落花紅一一」㊁あをもの。又、なのさかな。

【荻蔟】ソクソク　○やつやつしき貌。字解を見よ。○風の強く吹く貌。字解を見よ。

【蔟】㊀ソク　㊁ソウ　屋　厚

㊀す（巢）○まぶし（蠶蓐）十分に成長したるかひこを入れて繭をつくらすもの。○あつまる（聚）むらがる。〓簇。㊁太一タイは十二律の一。禮、月令「律中二太一一」轉じて正月の異名。〓太簇。

【蔡】タイ　灰

めはじき（莞蔚）やくもさう（益母草）初夏花開く、葉草の一。詩、王風「中谷有レ一」

【蔀】㊀テイ・タイ　齊　㊁タイ　卦　又、帶に作る

㊀へた、ほぞ、果實が枝又莖と結びつく所。○うてな（花の託處）㊁ね、もと、草木の根、「根一」老子「深根固一」○小さきとけ（小鯉）轉じてわづかのさまり（細故）〓蔀。

【蔀芥】タイカイ　小さきとげと、あくたと、微細なるさわり、滯凝と香孔璋檄、豫州、服員賦「細故一一、何足二以疑一」

【蔀蔕】タイテイ　前條に同じ。

【蔌】チク　屋

しのねぐさ、しぶくさ、濕地に生ずる惡菜、夏日花を著け實を結ぶ、根は赤黄色。〓羊蹄、牛舌菜。

【蔦】テウ　篠　嘯

つた。寄生性の蔓草、葉は掌狀に分裂し、秋日紅葉して美し「一蘿」詩、小雅「一與女蘿、施于松柏」（此語に本づきて兄弟親戚の緜綿依附するに比して「一蘿といふ）

【蔽】デウ　嘯

あじか、竹又、竹にて作り、土を運ぶ具。論、微子「丈人以杖荷一」

【藪】ソウ　㊀

ーは旱氣の蓋だしき貌。詩、大雅「旱既太甚、ーー山川」

【蔓】㊀バン・マン　㊁バン・マン　㊀寒

㊀つる、つるくさ、かづら（木本を藤といひ、草本をーといふ）○のぶ（延長）はびこる、ひろがる。左、隱元「無使滋ーに」まとふ、からむ（纏繞）㊁ーー菁ーはかぶら。ー蘿菁諸葛菜。【蔓引】互にひき連なる。元史、烏古孫澤傳「使者旁午、隨ー地置ー驛、枝連ーー」【蔓延】つるくさがのびひろがる。廣延。謝靈運詩「松爲歲ーーー」ー蔓衍。【蔓衍】○はびこりひろがる。漢書、鄧通傳「土山丘陵、ーー相屬」○言語の多きにいふ。蔡邕文「繁多而ーー、非二所ー論理約而速一也」【蔓草】つるくさ。詩、鄭風「野有二ーー一」零露溥兮」【蔓草寒烟】はびこれる草と、さびしきけぶりと、あれはてし古跡などの荒れはてたるさま。吳融詩「曾從二建業城邊一過、——滿二六朝一」ー寒烟荒草。【蔓草猶不ノ可ノ除】事は微細の中に處置せざれば、增長して後は如何ともすべからざるに喩ふ。左、隱元「姜氏何厭之有、不ノ如早爲二之所一無ノ使二滋蔓一ー難ノ圖也、——況君之寵弟乎」【蔓生】つるを出してはえる。南方草木狀「凡草ーー、其花 難應色淺紫」

【蔭】かぶら。ー無菁。【蔓說】つまらぬむだばなし。傳燈錄文「枝詞ーー」【蔓延】からみまとふ。陸游詩「弱松困ーー、何日見二詰屈一」【蔓草】はびこりひろがる貌。又、長く久しき貌。漢書、樂志「ーー日茂」【蔓蔓】つた。梅堯臣詩「幸擬如二ーー一」

【蕈】ヒツ　ヒチ　㊀

○いばら（荊）＝篳（一四二九頁四段）○まめ（豆）【蕈門】いばらにて造りたるもん、貧者の居宅。禮、儒行「ーー圭竇」＝篳門。

【蔺】藺（艸部八畫）に同じ。【蔺相】だいこんと、ゆふがほと、粗食の喩。唐書、柳玭傳「夕食惟藍二ーー一而已」

【薛】ヘイ　ヒャウ　㊀

○うきくさ（浮草）＝萍。○ー翳は雨の神（雨師）

【蔑】ベツ　㊁

○なみす、ないがしろにす、かろんず（輕）「輕ー」「侮ー」「陵ー」○すつ（棄）周語「不」ー民功」○けづる（削）○こまか（微小）法言「視二日月一而知二衆星之一ーー也」○くはし（精微）○なし（無）否定の辭。左、襄二九「ー以加於此矣」○目勞れてくらし。○はろぶ、滅に通ず。【蔑事】あなどりすてる。國語「不ノ共二神祇一而ーー二五則一」【蔑視】見くだす、ないがしろにする。＝輕視。【蔑閑】かろんじて無きが如くする。北史、張彝傳「非二其意一者、視ノ之ーー」【蔑如】○いやしみ輕んず。禮記「吐涅正直有二操行一、性不二苟合一、雖ー令不二與ノ己同一者、視ノ之ーー也」○滅ぶる。漢書、東方朔傳「其流風遺書ーー也」【蔑蔑】飛び揚がる。史記「ーー路躍」

【蓮】㊀ホウ　㊁ホ　㊀有

㊀しとみ、ひよけ、日光をふせぐための戸。○おほひ（蔽）光明をおほひ障ふるもの。○くらし（暗）㊁古の曆法の名稱、七十二歲を一ーといふ。

【蓬】ホウ　㊁東

○よもぎ（蒿）艾の一種、莖は一尺許、葉は柳に似て鋸齒あり、小白花を著く、秋に至り根が枯れて找け、風にふかれてとぶ、故に飛ーともいふ。○轉じて轉轉して處を定めざるにいふ。○物のみだれるにいふ「ー髮」○ーー葉は仙人の居る海島の名。○こも、まこも（菰）○ーーは風の起る貌。又、盛んなる貌。○ーー勃は氣の出る貌。【蓬廬】よもぎの屋根のいほり。陶綸詩「南北與ー山隱、ーー廬二一身一」＝蓬蘆・蓬戸。【蓬宇】よもぎにて葺きたる軒。禮書、宗欽傳「蠲二捐ーー一、敦慕加何」【蓬瀛】蓬萊と瀛洲と。方丈を合せて三神山といふ。拾遺記「歷ーー一而超二碧海一」

【蓬萊】よもぎなどのしげみ。三輔決錄「隱レ身不レ仕、所レ居ー一沒レ人」

【蓬丘】蓬萊に同じ。十洲記「ー一、蓬萊山是也」

【蓬盧】神仙の住めりといふ海島。拾遺記「三壺海中三山也、一曰方壺、則方丈也、二曰、ー一則蓬萊也、三曰、瀛壺、則瀛洲也」＝蓬萊。

【蓬戸甕牖】よもぎを編みて作りたる戸、敗甕ヤブレガメの口を以てしたるまど、貧家の形容。禮、儒行「儒有二一畝之宮、環堵之室一蓽門圭竇、ー一」

【蓬矢】よもぎにて作りたる矢、邪をはらふといふ。禮、內則「射人以二桑弧ー一六、射二天地四方一」桑蓬之志（九四三頁三段）參看。

【蓬茨】よもぎと、いばらと。

【蓬室】よもぎの屋根のいへ、いぶせきいへ。列子「居則ー一、出則徒行」＝蓬庵。

【蓬心】こせこせしていやしく小さき心。莊、逍遙遊「夫子猶有二蓬之心一也夫」注「蓬非二直邊者一也」晉義「蓬者短不レ暢、曲士之謂」

【蓬舍】草ぶきのつまらぬいへ。陳陶詩「矻矻ー一下、羅二君蘇蘇閒一」

【蓬沙】明砂に同じ「本草」爽堅志「汪友良誤呑二一骨一、梗二于咽中一、百計不レ下、忧惚夢一朱衣人曰、惟ー一最妙、盛取二一塊一、含化咽レ汁、脫然而失」

【蓬首】髮の亂れたるかしら。晉書、王徽之傳「ー一散帶、不レ綰二府事一」＝蓬頭。

【蓬島】仙人の住めりといふ海島。劉長卿詩「ー一如レ在レ眼、羽人那可レ逢」＝蓬丘・蓬萊山。

【蓬轉】蓬飄に同じ。呂温詩「ー一星霜改」＝蓬徙・轉蓬。

【蓬頭】よもぎの如くに髮のみだれたるかしら。莊、說劍「皆ー一突鬢」＝蓬首。

【蓬頭垢面】みだれたる頭髮と、あかつきたる顏と。後漢書、封軌傳「何必ー一然後爲レ賢」

【蓬髮】みだれたるかみ。晉書、阮孚傳「ー一飲レ酒、不レ以二王務一嬰上レ心」

【蓬蓽】蓬戸と蓽門と、貧賤人の住家。晉書「ー一有二藩悅之樂一」蓬戸甕牖を見よ。

【蓬飄】よもぎの風に飄る如く、所を定めずあちこちと移る。錢起詩「蓬飄久厭ー一苦」＝蓬轉・飄蓬。

【蓬蓬】○盛んにしげれる貌。詩、小雅「維柞之枝、其葉ー一」○風の吹き起る貌。莊、秋水「鉅謂レ風曰、今日ー一起二於北海一」

【蓬勃】雲氣の盛んなる貌。賈誼、白雲賦「蓬望二白雲之ー一」＝蓬学。

【蓬門】よもぎを編みてしつらへたる門、貧家又、隱者の居をいふ。杜甫詩「ー一今始爲レ君開」＝蓬戸。

【蓬萊】神仙の栖めりといふ海島。漢書、郊祀志「使二人入レ海求二ー一・方丈・瀛洲一、此三神山者相傳在二渤海中一」＝蓬丘・蓬壺。

【蓬萊弱水】相隔るの遠きにいふ。太平廣記「蓬萊隔二弱水一三十萬里、非二飛仙一無二以到一」

【蓬笠】よもぎにて作りたるかぶりがさ。鄭利登詩「短蓑ー一種二荒田一」

【蓬累】頭に物を戴き、兩手にて之を扶持して行く義。一說に、累は轉じ行く貌にて、蓬の風に從ひ轉轉して移るが如きをいふと。史、老子傳「君子得二其時一則駕、不レ得二其時一則ー一而行」

【蓬廬】よもぎにてふけるいはり。劉向、雅琴賦「撥坐ー一之中、礎石之下一」＝蓬庵・蓬室。

【蓬生麻中不レ扶而直】ソダノヨウニヒクイモノデモマスグニセヨ不善人も善人と交はれば自然に善に化するに喩ふ「荀、勸學」

【蔆】リョウ 蕭 通じて菱に作る

ひし。三角・四角のものは菱、兩角のものはー一。呂覽「夏食ー一、冬食橡栗」

【蔆花】○ひしのはな。三柳軒雜識「ー一爲二水客一」○鏡の異名。騎實王、王昭君詩「古鏡ー一暗、愁眉柳葉顰」

【蔆】（一）レ。（二）リク 錫 屋

（一）たて、溫地に生ずる草、秋穗狀淡紅色の花開く。葉は味甚だ辛し。（二）ーー一は草の長大なる貌。詩、小雅「ー一者莪」

【蔆花】たてのはな。方干詩「蟬噪ー一發、鴈來山果香」

【蔆隈】たてのはな。莊莊詩「來時楚岸楊花白、去日隋堤ー一紅」

【蔆蟲不レ知レ苦】レタデヲクフムシ 俚諺の「たで食ふ蟲もすきずき」といふ意。羽林玉露「冰蠶不レ知レ寒、火鼠不レ知レ熱、ーー、鄭姐不レ知レ臭、左思、嬌都賦「蔆蟲忘レ辛」

【蔆頻】たてと、うきくさと。盛唐、焦山賦「萑葦被レ渚、ー一拂レ涯」

【蔆莪之詩】孝子、親を養はんとして、養ふことを得ざる哀を詠ぜし詩。詩、小雅「蔆蔆者莪、匪レ莪伊蒿、哀哀父母、生レ我劬勞」

【蔀】ホウ

はすのね（蓮根）

【蔀】ラルキ 支 歌

ふご。土を盛る籠。＝蔀。

【蔀】ヨツ 質

【蓮】レン　先

○はす、はちす（荷・芙蓉・芙蕖）水草の一、葉は大いにして傘状をなし、夏、紅又白色の美花開く「白ー」「紅ー」「池ー」周敦頤、愛蓮説「一花之君子者也」○はすのみ「ー房」

【蓮華】レンゲ　はすのはな。史、倉公傳「鬼千歳乃游二ー上一」

【蓮荷】レンカ　はすと、あさざと。洛陽名園記「百畝園（中略）有レ池、宜二ーー一」

【蓮峯】レンポウ　○山の名。曹之謙詩「ーー三峯對、松林一逕通」‖蓮峯。○圖富士山の異名、山頂の八峯、八葉蓮花に似たる故。‖蓮岳・蓮峯・芙蓉峯。

【蓮境】レンキャウ　てら。楊巨源詩「方尋二ーー一去」‖浄境。

【蓮炬】レンキョ　蓮花の形に作りし平燭台。宛新書「唐令狐綯爲二翰林學士一夜對二禁中一、時燭盡、上勅以二金蓮華炬一送レ綯還レ院」‖蓮燭・華燭。

【蓮幕】レンマク　はすのね。史、司馬相如傳「ーー蒲蔵」

【蓮花】レンクワ　れんげ、はすの花。‖蓮華・荷華。

【蓮花似二六郎一】レンクワニロクラウニタリ　容貌の秀めてうるはしきをいふ。唐書、楊再思傳「嘗昌宗以二恣寵一侮二再思一、再思毎日、人曾六郎似二蓮花一非也、正謂ーー耳」

【如二蓮花在一レ水】アタカモレンクワノミヅニアルガゴトシ　世の俗塵にけがされざるに喩ふ。法華經「不レ染二世間法一、ーー」

【蓮花潮】レンゲ　はちすの形せる水時計。翻譯名義集「隋山遠公之門、有二僧慧要者一、患二山中無一刻漏一、乃於二水上一立二十二葉芙蓉一、因レ波而轉、以定二十二時一、晷景無レ差、今曰二蓮公ーー一是也」

【蓮華】レンゲ　はすのはな。梁元帝、采蓮賦「ーー亂二臉色一、荷葉雜二衣香一」‖蓮花・荷華。

【蓮華草】レンゲサウ　圖野草の一、晩春紅紫色の花開く。‖紫雲英。

【蓮華峯】レンゲホウ　山の名。華山記「華山頂上有二ーー一、山有二千葉蓮花一、服レ之羽化」

【蓮經】レンキャウ　法華經の別名。西陽雜俎「三萬ーー三十春、半生不レ踏二院門一」

【蓮客花】レンキャククワ　夏草、原野に自生す、葉は卵狀、春日紅紫白等の花開く、優花に似たり。

【蓮根】レンコン　はすのね。周雲霄詩「文園近日眞消渴、莫レ種二ーー一引レ根長」‖蓮藕。

【蓮座】レンザ　蓮華の形に作りたる佛像の座。王勃詩「ーー神容儼」‖蓮華座・蓮臺。

【蓮像】レンザウ　れんげの上に坐せる佛像。馮有經詩「ーー開二唐代一、菅碑識二漢官一」

【蓮子】レンシ　はすの實。古樂府、子夜夏歌「乘レ月采二芙蓉一、夜夜得二ーー一」‖蓮實・蓮的。

【蓮舟】レンシウ　はすを採るふね。爾子範詩「水鳥衝レ煙上、ーー拂レ芰歸」温庭筠詩「鮫鏡方塘兩舊秋、此來重見採ーー」

【蓮社】レンシャ　東晉の慧遠、廬山の東林寺に住し、賢士劉遺民・宋炳・雷次宗等を招きて社を結び、四方の淨業を修す、北院に多く白蓮を植えて白蓮社と稱せし故事に本づく。事は蓮社高賢傳に詳かなり。

【蓮炬】レンキョ　蓮燭に同じ。周邦彦詩「夫街ーー照二修隗一」

【蓮塘】レンタウ　はす池。方干詩「細雨ーー晩、疎蟬柿岸秋」‖蓮池。

【蓮皃】レンバウ　はすのはな。西京賦「色如二ーー一、肌如二凝蜜一」‖蓮花。

【蓮房】レンバウ　はちすの實の外包。楊炯詩「ーー若二個實一、竹節幾竿虛」

【蓮幕】レンバク　蓮府に同じ、幕は莊府。李商隱詩「下客依ーー一、明公念二竹林一」

【蓮府】レンフ　大臣のやしきの稱。晉の王儉の故事。南史、庾杲之傳「齊領二儉書一日、盛府元僚、實難二其選一、庾最行泛二緑水一候二芙蓉一、何其麗也、時人以二儉府一爲二蓮花池一」盧綸詩「幕府樓ーー一、請我拜二柳營一」‖蓮幕。

【蓮歩】レンポ　美人のしなやかにあゆむ形容。南史、齊東昏侯紀「鑿二金爲一蓮華一、以帖レ地、令三潘妃行二其上一曰、此步步生二蓮華一也」孔平仲詩「裊裊應レ節低、ーー隨レ歌轉」

【蕘】（一）ロウ・ル　尤　（二）リウ・ル　有　丸

（一）しろよもぎ、葉は艾に似て食用とす。（二）ー薬は棺の車の羽飾ハネカザリ

【蕘蒿】ロウカウ　しろよもぎ。蘇軾詩「ーー滿地蓬牙短」

十二畫

【蕩】タウ　梗　又、盪に作る。

○楚の地名。○姓。

【蔗】イウ　尤

○臭氣クサキある野草の一、莖方にして高さ三四尺、葉は卵形、秋月紫碧色の花開く。○轉じてくさみ（臭氣）又、惡人などの義とす。左、僖四「一薫一ー、十年尚猶有レ臭」

【蔗薫】イウクン　惡しきかをりと善きかをりと。善惡の喩とす。韓愈詩「今我及二數子一、固無二蔗與一レ薫」‖薫蔗。

【蔭】陰（艸部十一畫）の俗字。

【蕓】ウン 文
一蕓ダイはあぶらな、なたね、葉は濃緑大形、春日黄花を著け、長き莢に包まれたる實を結ぶ、實より油をしぼる。‖芸薹・蘆菔・油菜。

【蓴】蓴（艸部九畫）に同じ。

【蔺】カン 刪
ふちばかま、野草の一、花は淡紫色にして管狀を爲し、葉は細長くして光る。香氣清くして遠し、故に古人刈りて之を佩ぶ。詩、鄭風「士與」女、方秉一兮」‖蘭草。

【蕨】㊀キ ㊁クヮイ 㕣 灰
㊀あじか、土などを運ぶかご。竹、又は藁ワラにて作る。論、憲問「有荷一而過孔氏之門」者」㊁つちくれ（土魂）‖塊。
【蕨粉而土散】クヮイフンニシテツチチラス 土くれにて造りしばちと散と、太古の香樂の簡朴なりしをいふ【禮、禮運】

【蕹】ヨウ 東
一蕹ヨウはかんこう。‖空心菜。

【蕺】シフ 緝
一蕺シフはどくだみ。‖魚腥草。

【蕷】イ 支
一蕷イはやまいも。‖薯蕷。

【蕹】ヨウ 送
一蕹ヨウはかんこう。‖空心菜。

【蕺】シフ 緝
一蕺シフはどくだみ。‖魚腥草。

【蕷】イ 支
一蕷イはやまいも。‖薯蕷。

【蕤】㊀スイ 寘 ㊁ズイ 紙
㊀垂れる貌。○小さき貌。一爾」㊁繞（本畫）に同じ。漢書、叔孫通傳「爲綿一野外」【蕤賓】ヂヒさき貌。左、昭七「一一國」【蕤內】ヂイ あつまる貌。淮南、四征訓「一一手城隅一者、百不一處一」

【蕞】サイ 泰
一蕞サイまれる貌。○小さき貌。一爾」㊁繞（本畫）に同じ。漢書、叔孫通傳「爲綿一野外」【蕞爾】ヂヒさき貌。左、昭七「一一國」

【蕕】ジン 眞
きのこ、たけ、くさびら（地菌）「地一」

【蕺】シュン 眞
○むくげ、はちす（木槿）「朱一」「朝一」詩、鄭風「顔如舜華」‖舜。○圖あさがほ（牽牛花）

【蕞】スイ 支
○やはらか（柔）○草木の花又は葉の垂れさがる貌。○垂れたる花。○蕤一ヤは宿根草の一、あまどころ。‖蕤蕤。○冠又は旒などにつける垂れたる飾「冠一」‖綏。

【蕨蕨】ケツケツ わらび、其の初生のもの蹶脚パチョンに似たるが故【禮、雜記、疏】‖蕨薇。

【蕨】ケツ 月
わらび、山野に自生する羊齒類の草、初生の拳狀を爲す者を食用とす。詩、召南「言采其一」‖山菜。
【蕨菊】ケツキク わらび、たけのこと。韓、清珙詩「黃土坡邊多一一」
【蕨薇】ケツビ わらび、ぜんまいと。詩經「山有一一」「陟有二杞菊一」‖薇蕨

【蕤賓】ジヤ 十二律の一。陰暦五月に配す。よりて又五月の異名とす。禮、月令「仲夏之月、律中ニ蕤賓ニ」

【蕊心】ズヰ 〔紙〕 蕊に同じ 蕊は俗字 ○しべ、花の生殖機官、雌雄の二より成る、多くは花心に在りて目立ず。○はな（花）又、花の未だ開かざる者、つぼみ。

【蕋】ズヰ 蕊（前條）の俗字。

【蕉】セウ 〔蕭〕 ○芭ハは暖地に生ずる草の名。葉に一ともいふ「綠一」「敗一」芭（一六二〇頁四段）を見よ。○たきぎ（薪）列、穆王「覆之以一」○ごみ、あくた（草芥）○やつれる、顦顇に通ず「一萃」

【蕉葉】エフ ○芭蕉の葉。庾信、南越傳「有ニ椰子葉ニ無ニ食器ニ以ニ一一ー一ー一ー之」○底の淺き小杯の名。東坡志林「晉少時、望ニ見酒杯一而醒、今亦能飲ニ三一一ー一矣」

【蕉葉白】ハクエフ 蕉布の淡硯の名、其の石質純白にして大片を成す者「廣東新語」

【蕉萬】カツ 蕉布に同じ。左思、吳都賦「一一竹越」

【蕉紗】シヤ 芭蕉布。白居易詩「魚弁朝衣鮑、一一暑服輕」‖蕉布。

【蕉萃】セウスヰ やつれていやしき人。左、成九「雖レ有ニ姬姜ニ無レ蕉ニ一一ー一」‖顦顇・顦悴。

【蕉布】セウ ばせをの纖維にて織りし布。後漢書、王符傳、注「南越志曰、一一之品有レ三、有ニ一一ー一ー一、有ニ竹子布ニ、又有ニ葛子布ニ、雖ニ精麤之殊ニ、皆同出而異レ名」

【蕉鹿夢】セウロクノ 人間の得失の夢の如くはかなきをいふ。昔、鄭人、鹿を殺し芭蕉の葉にて掩ひて蔽し置き、後に他人に取り去られ、卻つて之を夢なりとしてあきらめし故事。列、周穆王「鄭人有下薪二於野一者上遇ニ駭鹿一、擊而斃レ之、恐ニ人見一也、遽而藏ニ諸隍中一、覆レ之以レ蕉、不レ勝ニ其喜一、俄而遺ニ其所一レ藏之處一、遂以爲レ夢焉、順レ塗而詠ニ其事一、傍人有ニ聞者一、用ニ其言一而取レ之、既歸告ニ其室人一曰、向薪者夢得レ鹿、而不レ知ニ其處一、吾今得レ之、彼直眞夢ニ其夢一矣、室人曰、若將是夢、見ニ薪者之得一鹿耶、且有ニ薪者一邪、今眞得レ鹿、是若之夢眞邪、夫曰、吾據得レ鹿、何用レ知ニ彼夢我夢一邪」

【蕘】ゼウ 〔蕭〕 ○しば、たきぎ（草薪）草の燃料とすべきもの。○しばかり、きこり。○きこる人、しばかる人。詩、大雅「先民有レ言、詢ニ于芻一」○きのこがんび、落葉小灌木の一、高さ三四尺、葉は橢圓形にして端尖る、秋、黃花をつく、山地に自生す、皮は製紙の料とす（本草綱目に草部に入るは非）

【蕘童】ゼウ しば刈るこども。淸高文「一一牧豎」

【蕝】セツ 〔屑〕 朝會にちがやをつかね、位次を表するに用ふるもの「綿一」晉語「楚爲ニ荊蒯一置ニ茅一」‖蕞。

【蕁】ソン 〔阮〕 ○あつまる、むらがる（衆叢）○むらがるさま。

【蕁蕁】ソンソン あつまりむらがる貌。左思、吳都賦「嘉穀合レ穗以一一」

【蕩】タウ 〔養〕〔漾〕 ○あらひのぞく、はらふ、はらひのぞく「掃一」禮、昏義「一一天下之陰事」たひらぐ（平）「一平」「一定」○うつる。うつす（播）○うごく（動）震ひ動く。左、莊四「余心一」うごかす。左、僖三「乘ニ舟於囿一」公」○まどはす（惑）禮記「一ニ上心一」○一一は水勢のおほいなる貌。又、廣く大いなる貌。又、おだやか。論、述而「君子坦一一」○ゆるやか（緩）○ほしいまま、わがまま（放縱）論、陽貨「今之狂也一」○酒色におぼれる「放一」○やすし（平易）○やぶる（壞）後漢書「宮室焚一」すたる（法度廢壞）○空しく無くなる。○さは（水澤）ぬま（湖沼）「蓮一」○駘一ダイは和らぎてのどか。謝朓詩「春物方駘一」○跌一は擬横ママ。後漢書、孔融傳「放言跌一」

【蕩蕩】タウ 蕩・蕩・蕩の別は動（三五一頁四段）の條を見よ。

【蕩佚】タウ しまりなくほしいまま。‖蕩逸・放佚。

【蕩逸】タウ 前條に同じ。

【蕩搖】タウ ○うごく。うごかす。于石詩「一一水中月、水定光復圓」蘇軾海市詩「一一浮世生萬象、豈有貝闕藏二珠宮一」‖搖蕩。○うごかす。左、成十三「來一ニ我邊鄙一」

【蕩恐】タウ 大いにおそれる。史、張儀傳「百倍一一、當日、張儀能言」‖震恐。

【蕩蕩】タウタウ 寛廣をはらひ平げしいきを。李商隱詩「雲臺高議正紛紛、誤定當時――」

【蕩子】タウシ 酒色に溺れるをのこ。古詩「昔爲二倡家女一今爲二蕩子婦一」

【蕩心】タウシン 心を惑はしとらかす。

【蕩盡】タウジン のこらずつかひはたす。

【蕩槳】タウシャウ かぢをうごかす。王禹偁詩「舟子斜ㇾ――、牧童倒騎ㇾ牛」

【蕩析】タウセキ さすらひ分れうつる。書、盤庚「今我民用――離居、罔ㇾ有二定極一」‖離散。

【蕩船】タウセン ふねをうごかす。史、齊世家「桓公與二夫人蔡姬一戲二船中一、蔡姬習ㇾ水――ㇾ」注「蕩、搖也」‖蕩舟。

【蕩法】タウハフ そそぎのぞく。抱朴子「――一掃埃塵ㇾ革ㇾ邪反ㇾ正」

【蕩蕩】タウタウ ○廣大なる貌。論、泰伯「――乎民無二能名一焉」○平易なる貌。荀卿「路――其無ㇾ人兮」○おだやかなる貌。論、述而「君子坦――」○水勢の大いなる貌。書、堯典「――懷ㇾ山襄ㇾ陵」○法度のやぶれたる貌。詩、大雅「――上帝」

【蕩蕩】ほろぶ。徐陵、勸二進梁元帝一表「梟獍虔劉、宗社――」‖滅亡。

【蕩定】はらひさだめる。後漢書、賈琮傳「歲閒――、百姓以安」‖蕩平・平定。

【蕩滌】あらひきよめる。史、樂書「萬民咸――ニ――邪穢一」

【蕩婦】あそびめ、藝娼妓の類。簡文帝詩「倡樓復――」‖淫婦・娼婦。

【蕩沒】やぶれしづむ。晉書、五行志「五郡大水、稻稼――、黎庶饑饉」

【蕩摩】うごきて互にすれあふ。杜甫、觀ㇾ薛將軍歌「檣竿旣遠不二敢動一、梁摧雲旗相――」

【蕩漾】ただよふ、水が動く貌。孫逖詩「仙翁何時還、綠水空――」

【蓍】タン 通音ジン

一麻ハいらぐさ、いたいたぐさ、高二三尺、葉はからむしに似て葉莖共に刺あり。纖維にて線を製す。

【蘗】㊀ヂ。㊁ジ。 魚魚

㊀ねばりつく(黏著)史、張釋之傳「――漆其閒」㊁――蘿はあかねぐさ。‖茜蔵。

【蘂】ダイ 禾

稗ヒエの一種、いぬくろびえ。‖稊。

【蘵】テン 鐵

○そなふ(備)○いましむ(敕)○已にをはる(結了)左、文十七「以――陳事」

【蕃】ハン 元 通音バン

○しげる(草茂)「――蕪」しげし‖繁。○ふゆ、ふえる(息)「――息」○まがき(籬落)古、藩に通ず。○えびす、野蠻、又、外國の義とす。古、番に通ず。○吐――ハンは國名、今の西藏の地。

補遺 番・蕃・樊・燔・蘩・茂の別は繁(一四九八頁三段)の條を見よ。

【蕃遲】バンチ しげくあつし。唐書、李光弼傳「賜與――」

【蕃夷】バンイ えびす。‖蠻夷・番夷。

【蕃衍】バンエン ○しげりひろがる。詩、唐風「椒聊之實、――盈ㇾ升」○轉じて子孫の多く盛んなるにいふ(北史、于謹傳)‖繁衍。

【蕃客】バンキャク 外國人。唐書、百官志、凡――主二通譯一以二其國山川風土一爲ㇾ圖奏ㇾ之」

【蕃扞】バンカン ふせぎまもる。漢書、賈誼傳「陛下所ㇾ以爲ニ――一及皇太子之所ㇾ恃者、唯淮陽・代二國耳」

【蕃輪】バンリン 蕃は藩、輪は幹、國家の守護の義。詩、大雅「維申及甫、爲二周之――一」‖藩輪。

【蕃域】バンイキ 野蠻人の住める土地。‖境地。

【蕃圃】バンポ えびすのくに。周禮「九州之外、謂二之――一」注「九州之外、夷服・鎭服・蕃服也」

【蕃菜】バンサイ 支那にて四洋料理の菜。蕃はえびす。‖番菜。

【蕃滋】バンジ しげりふえる。漢書、儒林傳「武帝立五經博士、百有餘年、傳業寖盛、支葉――」‖蕃息。

【蕃息】バンソク 野蠻人のかしら。宋史、李參傳「――乘ㇾ衆作ㇾ亂、討平ㇾ之」‖酋長・酋帥・蠻酋。

【蕃薯】バンショ たうがらし。蕃椒參看。

【蕃神】バンシン 野蠻國のかみ。酉陽雜俎「佛教內四座――、甚古質」

【蕃社】バンシャ 野蠻人の組合、又部落。

【蕃昌】バンシャウ さかんなり。左、閔二「吉孰大焉、其必――」‖繁昌。

【蕃情】バンジャウ 夷狄のやうす。李約詩「遊軍蔵二漢戰一降騎說ニ――一」

【蕃別】バンベツ 夏后氏の良弓の名。司馬相如賦「雲――、滿二白羽一」‖樂弱。

【蕃熟】バンジュク しげりみのる。史、滑稽傳「五穀――、倉廩滿ㇾ家」

【蕃書】バンショ 國外國の書物「――調所」

【蕃薯】バンショ さつまいも。‖小說「――萬曆中、閩人得二之外國一、瘠土砂磽之地、皆可ㇾ種」‖甘薯。

【蕃植】バンショク しげりふえる。淮南子「草生遂長、五穀――」

【蕃殖】バンショク 前條に同じ。國語「財用――、于ㇾ是乎始」

【蕃椒】バンセウ たうがらし(唐辛)葉は細長く、夏白色の小花開き實は熟すれば赤く、味甚だからし、なんばん

がらし。‖蕃椒・番椒。
【蕃俗】バンゾク えびすのならはし。
【蕃息】バンソク しげくふえる。史、孔子世家「皆爲二司機吏一而蕃二一一一」
【蕃地】バンチ えびすの住める土地。‖蕃境。
【蕃南瓜】バンナンクワ たうなす、南瓜ナンクワの別名。
【蕃息】バンソク さかえてさかんなり。宋史、樂志「百物一一、四方咸成」‖蕃昌・蕃殖・繁息。
【蕃茂】バンモ 草木がしげる。庾信の賦「庶草一一」
【蕃屏】バンヘイ 藩鎮となりて蔽ひふせぐ。左、僖二四「封二建親戚一、以一一一周一」‖藩屏。
【蕃別】バンベツ 國上古歸化せし人の後裔。神別・皇別の對。
【蕃民】バンミン 未だ開けざる民。‖蛮民・蕃人。
【蕃務署】バンムショ 蝦夷經營府の一部局、生蕃に關する事を司る。
【蕃茂】センモ しげる。蘇軾詩「一一爭二新春一」‖繁茂。
【蕃蕪】バンム まがき。‖藩蕪。
【蕃蕪】バンム おかきたてがみ。禮記、注「一一、赤鬣也」

【蕪】ブ 圓 ム

○ある、雜草が生ひしける。陶潛、歸去來辭「田園將一一」○しける(茂)○生ひしける雜草「榛一一」○雜草の生ひしける地、あれち。○のがる(道)○ごたごたとみだれる、文辭が亂雜「繁一」唐書、馬周傳「舉要刪一一」○湖の名。又、縣名、安徽省に在り、清の光緒二年開きて商埠とす。○一菁ブセイは野菜の一、かぶら。‖蔓菁。○圓かぶら。
【蕪音】ブオン 繁雜なる聲。宋書「雖二清濁一、而一一累氣、固亦多矣」
【蕪梗】ブカウ あれはてて、みだれる。晉書、宋纖傳論「王室多難、中原一一」‖荒梗。
【蕪荒】ブクワウ 草がみだれしげる。元稹詩「鉛鈍丁寧淨、一一幾轉耕」‖荒蕪。
【蕪穢】ブクワイ あれはててむなし。北史、李元忠傳「裂二帛擁一レ被、對レ妾獨酌、庭室一一」
【蕪徑】ブケイ あれたるこみち。南史、孔淳之傳「茅室蓬戸、庭草一一、唯琴上有二數帙書一」‖荒徑。
【蕪雜】ブザツ みだれていりまじる。晉書、陳子昂別傳「常恨二國史一一一」
【蕪辭】ブジ 無雜なることば。
【蕪菁】ブセイ かぶら。詩、邶風、疏「舜、一一、幽州人或謂二之芥一」‖蔓菁。
【蕪穢】ブワイ 草がしげりて掩ひかくす。南史、梁元帝紀「庭草一一、令二親去ヒ之」
【蕪昧】ブマイ あれてくらし。陳子昂文「其城池蕪廢、迹已一一矣」
【蕪沒】ブボツ 雜草が茂りて掩ひかくす。南史、梁元帝紀「庭草一一、令二親去ヒ之」
【蕪蘇】ブソ 茂れる貌。謝朓賦「上一一兮薩景」
【蕪然】ブゼン 草の荒れ茂る貌。李白詩「一一臨草莽、颯爾涼風吹」
【蕪廢】ブハイ あれすたる。漢史、食貨志「田間一一者、則給二牛種一以助レ之」
【蕪蘇】ブソ 茂れる貌。謝朓賦「上一一兮薩景」
【蕪沒】ブボツ 雜草が茂りて掩ひかくす。南史、梁元帝紀「庭草一一、令二親去ヒ之」
【蕪昧】ブマイ あれてくらし。陳子昂文「其城池蕪廢、迹已一一矣」
【蕪沒】ブボツ あれしげる。陶潛詩「南園久一一、我來空撫陶」
【蕪俚】ブリ 粗俗なり。宋史、李之純傳「以爲一一之宜、不レ治」
【蕪菁亭】ブセイテイ 地名、今の直隸省饒陽縣の東北に在り、馮異が光武帝に豆粥を進めし所。
【蕪穢】ブワイ あれがれる。史、司馬相如傳「填二一一一而不レ修兮」屈原、離騷「衆二衆草之一一一」‖蕪蕪・荒穢・荒廢。

【賁】フン 因

○あさのみ(麻子)○草木の實多し。詩、周南「有二一其實一」

【蔽】ヘイ 圓 ヘツ 屑

㊀おほふ(掩)かぶせかくす(隱)「掩一」「蒙一」ふさぐ(塞)○つつむ、ひっくるめる。論、爲政「一言以一之」○あつ(當)○かざす(翳)晉書「西風扇起、乘二扇自一日、元規塵汚人」○くらます。○さへる(障隔)史、項羽紀「項伯亦拔レ劍起舞、常以二身翼一二沛公一」○ふせぎ、さへ(障)おほひ「落一」○かき、ついたて(屏風)○事に通ぜず(塞)理に明らかならず。○さだむ、きめる、決斷する「一罪」「一獄」○一蕾イは小さき貌。又、かすかなる貌。一說におほひ茂る貌。○すごろくのさい(陣筌)㊁車上の風塵をふせぐおほひ。㊂わかつ(別)○うつ(擊)○はらふ(拂)史、刺客傳「踞而一レ席」
【蔽障】ヘイショウ おほひかくす。史、荊燕傳「有レ能者不二敢一一一」‖隱蔽。
【蔽掩】ヘイエン さへぎりかくす。蘇洵文「卻過一一、不レ使二自覺一」‖掩蔽。
【蔽扞】ヘイカン おほひふせぐ。通典「身不二一一、手無二寸刃一」‖扞蔽・蔽捍。
【蔽塞】ヘイソク 草木茂りて日光が缺けて

見えず。梁昭明太子詩「屑峯蔽一ノ」

【蔽牛之木】ヘイギュウ　牛をおほひかくす程の大木。莊、人間世「匠石之ノ齊、至二于曲轅一見二櫟社樹一、其大蔽ノ牛、絜ノ之百圍」

【蔽護】ヘイ　おほひかばふ。五代史、吳越世家「常一ニ之ニ」＝庇護・擁護。

【蔽遮】ヘイ　おほひさへぎる。宋史、蘇軾傳「以二雖陽一ニ一江淮一」

【蔽上】ヘイ　君主の聰明をおほひかくす。鶡冠子「遠レ下一ノ一、使二事兩蔽一」

【蔽塞】ヘイ　おほひふさぐ。宋史、劉敞傳「勸レ帝收二親威權一、無レ使二聰明一一」＝目蔽塞。

【蔽匿】ヘイ　おほひかくす。史、武帝紀「唯一一者罪レ之」＝隱蔽・蔽匿。

【蔽芾】ヘイ　小さき貌。一說に、蔽ひ茂る貌。詩、召南「一一甘棠」

【蔽美】ヘイ　仙人の素行をおほひかくす。管子「羣臣朋黨、一レ揚レ惡」

【蔽日】ヘイ　日をおほひかくす。張蘊古、大寶箴「難二蔽一レ、而視二于未形一」

【蔽野】ヘイ　のをおほふ。後漢書、光武紀「旗幟一レ、埃塵連レ天」

【蔽寧】ヘイ　すがたをかくす。李尤文「輪以代レ步、屏以一レ」

【蔽厲】ヘイ　おほひふさぐ。東方朔賦「僕三沙棲一以自沈兮、不レ忍レ見二君之一一」＝壅蔽。

【蔽廡】ヘイ　せきをはらふ。史、刺客傳「卻行爲レ導、跪而一レ」

【蔑】ホウ　東

一レは草の亂れる貌（潘岳、射雉賦）

【蔣】リ　レイ　支　霽　薬に通ず

茨一レイはまびし。易、困卦「據二于蒺一」蒺（一六六六頁三段）を見よ。

【蓄】ロ　ル　遇

○つるむらさき、蔓草の一、葉は圓く尖り、夏の末穗狀花をつけ圓き實を結ぶ、實を紫色の染料とす。○かんざう（甘草）○圖ふき。蓡（一六三〇頁四段）を見よ。

十三畫

【蓼】アイ　隊

○かをる、かうばし（香）○一蒔ジ・蓍一は草木の盛んなる貌。張衡賦「管蓍一蒔」

【蓺】イク　オク　廣

藝一エイクは野衛菊、えびづる。

【蓴】㊀ヲン　㊁ウン・テン　㫋　元

㊀みづくさ、も（藻）金魚の好みて卵をうみつける水草。左、隱三「蘋蘩一藻之菜」＝聚藻。㊁つむ（積）つみかさねる。＝蘊（一六九二頁二段）

【蓴藻】ソウ　みづくさ。左、隱三「澗溪沼沚之毛、蘋蘩一一之菜」

【蓴蔵】ウン　つみたくはへる。詩經、序「一一在レ心、謂レ之爲レ志」

【蓴崇】シュウ　高く積みあげる。左、隱六「爲二國家一者、見レ惡如二農夫之務去二草焉一、芟二夷一ニ之一、絕二其本根一」＝蘊崇。

【蓴積】ウン　つみたくはへる。左傳「蓄而弗レ治將レ蘊、一一民將レ生レ心」＝蘊蓄。

【蓋】カイ　泰

おほにら、らっきゃうは辣韮ラッキョウの轉音、葱に似たる葷菜。＝鴻薈。

【蓋葉】ガイ　蓂莢の一種。書苑菁華「殷湯時、仙人務光作二倒薤書一、今之一一蓂是也」

【蓋覽】ガイ　鄰を送る時に歌ふ歌。搜神記「薤上露何易レ晞、露晞明朝更復落、人死一去何時歸」初學記、挽歌辭有二一一一、滿里二章一、出二田橫門人一、橫自殺、門人傷レ之、悲歌、言人如二薤上露一、易二晞滅一也、亦謂人死精魂歸二於蒿里一、故有二一章一、至李延年一、乃分爲二二曲一、薤露送二王公貴人一、蒿里送二士大夫庶人一、使二挽者歌レ之」

【蓍】キ　支

くさぎる。田の草を抜き去る。詩、周頌「以一茶蓼」

【蔣】カ　陽

○かをり（香氣）史、滑稽傳「徹聞二一澤一香に通ず。○かうばしき物、香料。○米穀の氣。曲禮「黍曰一一合一蓼曰一其」○穀物。

【薑】キャウ　陽

しゃうが、はじかみ。野菜の

一、根は掌狀にして味辛くして香氣あり。【薑桂之性】キャウケイはじかみと肉桂とは共に古くなる程、味辛くなる、より老いて益剛直なる人に喩ふ。宋史、忠敎復傳「——、到レ老愈辣」【不レ撫レ痛食】ブヒツセンヲクラフ孫權は口喰を爽かにし毒を解くの功あり、故に孔子食する毎に薑を取り除かずして食はれし故事「論、鄕黨」

【薑】クワ 歌 寬大なる貌。詩、衛風「碩人之——」一說、饑うる意。

【薊】ケイ 國 ○あざみ、野草の一、大小二種あり、葉莖共に刺あり。○周代の一諸侯の國。今の京兆大興縣の西南。

【薨】㊀コウ ㊁クワウ 庚 ㊀ みまかる、をはる(卒)貴人の死をいふ、現今我國にては皇族、又は三位以上の人の死にいふ。㊁——は多く集る貌。又、疾き貌。【薨去】コウキョ 貴人の死をいふ。字解參看。

【薨薨】クワウクワウ ○衆多なる貌。詩、周南「螽斯羽——兮、宜爾子孫繩繩兮」○はやき貌。詩、大雅「度レ之——」

【薤】シ 置 ○たがらし(韮)○——然は寬舒なる貌。‖肆然。

【薤】シ 寘 藥草の一、どくだみ。濕地に生ず、莖は七八寸、葉は心臟形白色四瓣の花開く、臭氣甚だし。藥根を藥用とす「一菜」【薤山】ガイザン 今の浙江省紹興縣の東北に在り、薤を產す、越王句踐葬りて之を會ふ、春の王義之の宅此に在り。【薤山書院】シヨヰン 明の嘉靖周の學を講ぜし所、一時徙ひて遊ぶ者を薤山學派と稱す。

【薪】シン 眞 ○たきぎ、まき、燃料にする木。しば(柴)雜草。○きこり、しばかり。○——水は俸給、簡稱して——ともいふ「一金」○平——之憂は士人の病ある謙辭。【薪桂】シンケイ 極めて物價の高きにいふ。戰國策「齊國食レ貴二於玉一、薪貴二於桂一」【薪菜】シンサイ たきぎと、しばと。謙辭「折二芳枝與一蕪菜一兮、樹二枳棘與一——一」【薪採】シンサイ たきぎ。又それを採る者。戰國策「芻牧——、蒐二戰國一東門一」注「大者薪、小者採」【薪蕘】シンジョウ たきぎと、まめと。梅堯臣詩「行歌樂二幕節一、——甘二自刈一」【薪水】シンスヰ まきと水と、共に生活上必要のもの。轉じて俸給又は食費の義とす。‖薪金。【薪水之勞】シンスヰノラウ たきぎを採り、水をくむほねをり。陶潛文「豈二能力二助汝一——」力は僕。【薪樵】シンセウ たきぎ。漢書、食貨志「必持二——一」【輕重相分】【薪蘇】シンソ たきぎと、まくさと。舊唐書「家貧無二遊惰一、妻採二——一」【薪炭】シンタン たきぎと、すみと。【薪木】シンボク しば、たきぎ。孟、離婁「無レ寓二人於我室一、毀二傷其一——一」【薪燎】シンレウ かがりび。禮、月令「共二郊廟及百紀之一——一」共は供。【抱レ薪救レ火】ホウシンキウクワ 害をのぞかんとして能はざるのみならず、卻りて其の害を大ならしむる。戰國策、魏策「以レ地事レ秦、譬猶二抱レ薪救一レ火」【撏レ薪誦レ書】ジンシンセウショ 薪を撏ひ行きつつ誦書する。漢書、朱買臣傳「買臣家貧、好讀レ書、嘗芻二薪樵一、資以給レ食、擔二束薪一行行且誦レ書」

【薇】シン 眞 藥草の一、根は人の形を成す、朝鮮に產するものを上品とす。にんじん。‖人蔘。人蔘神草。地精。

【薔】㊀シヤウ ㊁シヤウ 陽 養 ㊀ みづたで(澤蓼)㊁——薇はばら、いばら、灌木の一、高さ四五尺、枝に刺あり、花は香多し、觀賞用とす。【薔薇露】シヤウビロ ○いばらの花のつゆ。雲仙雜記「柳宗元、得二韓愈所レ寄詩一、先以二——一澆レ手、然後發讀」○美酒の名。老學庵筆記「詠泉時、禁中供二御酒一名二——一」

【蔗】シヤ 禡 ——蔘はたらあふひ。‖葵。

【蕭】セウ 蕭 ○よもぎ(艾蒿)○ものさびし(寂寥)「一條」「一寂」○ふかくしづか(深靜)○——は風のものさびしく吹く聲。又、馬の鳴

く聲。○さわがしく勞動する貌。いそがしくつかれる。○男女相愛する者の稱「一郎」「一娘」○つつしむ。肅に通ず。○姓「一何」「一荀」

【蕭何】セウカ　沛の豐の人、漢の高祖に從ひて關に入るに及び、獨り先づ秦の律令及び圖書を收めて之を藏す、漢楚の雌を爭ふや、何常に關中を守り、鐵劍を軺給し、軍中乏しきことなからしむ、天下既に定り功第一を以て酇侯に封ぜらる、開國の名相たり。

【蕭颯】セウサツ　さっぱりと清き貌。南史「俄而流父至、神韻一一」‖蕭灑。

【蕭曹】セウサウ　漢の高祖の功臣、蕭何と曹參との併稱。西京雜記「高祖開レ基、一一爲レ冠」

【蕭條】セウデウ　ものさびしき貌。謝靈運詩「紫菊解二春榮一、楚醒笑二君江畔一雨一一」‖蕭條。

【蕭索】セウサク　ものさびし。江淹、恨賦「秋日一一、浮雲無レ光」

【蕭颯】セウサツ　ものさびしく吹く風のこと。陳後主詩「季冬初陽始、寒氣尙一一」

【蕭散】セウサン　しづかにしてひまである。唐書、裴度傳「治二第東都一、野服一一」‖蕭閑。

【蕭史】セウシ　春秋の時、好みて簫を吹き鳳鳴をなす道士の名、乘龍（六五頁二段）を見よ。

【蕭寺】セウジ　梁の武帝、佛を信じ寺を造りて、其の姓蕭を寺に名づけしより、寺の通稱となす。南史、任孝恭傳「少從二一一一受法師一、讀二經論一、明二佛理一」

【蕭瑟】セウシツ　ものさびしき貌。宋玉、九辯「悲哉秋之爲レ氣也一一兮、草木搖落而變衰」

【蕭條】セウデウ　さびしき秋のあしらい。殷仲文詩「晉匠感二一一一」‖秋氣。

【蕭森】セウシン　○ものさびし。張九齡詩「江城何寂歷、秋樹亦一一」○樹木の多き貌。潘岳、射雉賦「一一繁茂」

【蕭牆之憂】セウシャウノウレヘ　內より起る憂をいふ。內亂、蕭牆は君臣會見する所に立てる屏、蕭は肅ッ即ち敬の心を生ずる義。論、季氏「吾恐、季孫之憂不レ在二顓臾一、而在二蕭牆之內一也」

【蕭然】セウゼン　○ものさびしき貌。晉書、陶潛傳「環堵一一、不レ蔽二風日一」○さわがしくいそがはしき貌。史、平準書「江淮之間、一一煩費矣」

【蕭灑】セウサツ　さびしくまばら。又、錯落として清致ある貌。杜甫詩「東蘚已零落、甍葉轉一一」

【蕭條】セウデウ　ものさびし。班固、西都賦「原野一一」‖蕭索・蕭騷。

【蕭郎】セウラウ　愛する男子の稱。又、夫の全唐詩話「侯門一入深如レ海、從レ此一一是路人」

【蕭林】セウリン　さびしきはやし。劉伶詩「蚊蚋聞二麈草一、枯葉散一一」

【蕭瑟】セウシツ　さびしくおとろへる。李商隱表「班超覽レ鏡、不レ覺一一」

【蕭蕭】セウセウ　○ものさびしき貌。史、劇客傳「風一一兮易水寒」○馬の鳴く聲。詩、小雅「一一馬鳴」

【蕭寂】セウジャク　ものさびし。世說「門庭一一」‖蕭索・蕭條・幽寂・靜寂。

【蕭然】セウゼン　○ものさびしき貌。晉書、陶潛傳「環堵一一、不レ蔽二風日一」○さわがしくいそがはしき貌。史、平準書「江淮之間、一一煩費矣」

【蕭魂】セウコン　さびしくまばら。又、錯落として清致ある貌。杜甫詩「東蘚已零落、甍葉轉一一」

【薛】セツ　風

○よもぎ（蒿）○はますげ（莎）海濱に生ずる草の一、葉は細長く花は赤褐色、穗狀をなす、地下莖を藥用とす。‖香附子。○國の名、戰國の時、齊に滅ぼさる、齊、田嬰を封ぜし地、今の山東省、滕縣の西南の一城は其の故地。

【薛燭】セツショク　善く劍を鑑定せし人。越絕書「越王句踐有二寶劍五一、問二於天下一、孰有二相レ劍者一、名二一一一一、王召問レ之」

【薛瑄】セツセン　薛文清を見よ。

【薛濤】セツタウ　唐代の名妓の名、もと長安の良家の女、淪落して蜀中に在り、詩を善くす、蜀の浣花溪の水にて十色箋を造る、一一箋・浣花箋といふ。

【薛文清】セツブンセイ　名は瑄、字は德溫、敬軒と號す、明の山西の人、永樂十九年の進士、禮部左侍郎兼翰林院學士に至りて數仕す、諡して文清といふ、厚躬行を貴び、明朝理學の宗たり、讀書錄を著す。

【薛卞】セツベン　古、善く刀劍を鑑定せし薛燭と、卞玉を鑑見せし卞和と、よりて鑑賞の才の秀でたるにいふ。李白、與二韓荊州一書「應曾那結縷二個於一一之門一」

【薦】㊀セン　㊁シン　㊀霰　㊁震

㊀すすむ、物品を進上する。○人を推しすすめる、擧げ進める「推一」「一擧」「稱一」「褒一」孟、萬章「諸侯能一人於天下」○こも、しとね、むしろ（褥席）「新一」「蒲一」○しく（藉）敷物とする。○くさよもぎ。○こまかきくさ（細草）○深く茂れるくさ。○まぐさ、獸の食ふ所の草。莊、齊物「麋鹿食一」○そなへもの（供物）「嘉一」○受封、敍官。○しきりに（荐仍）詩經「饑饉一臻」かさねて（重）たびたび。㊁身分のある人。古、搢紳に通ず。

同訓異義　薦・進・奉・薄・羞・獻・勸・奬の別は進（是部八畫）の條を見よ。

【薦擧】センキョ　人材をすすめ擧げる。後漢書、馮衍傳「王莽時、諸公多一一一

之ニ者ハ舒辭不ニ肯仕一」‖推挙。

【薦羞】センシュウ 薦は供物クモツを進める、羞は供物を進めて、祖先の霊の降臨を祈る〔韓愈、南海神廟碑〕

【薦骨】センコツ 脊柱の下端にして、骨盤を形成する骨。

【薦享】センキョウ 祭のそなへもの。周禮、籩人「ニ一之事」

【薦新】センシン 時節に出づる新らしき物をそなへて祭る。通禮「歲逢ニ令節一薦ニ新物一」

【薦章】センショウ 人をすすめ挙げる封章。歐陽修詩「況子多才兼ニ美行一ニ一期即達ニ承明一」

【薦脩】センシュウ しきもの。風俗通「汝南應劭聞レ之、歸取ニ衣車一厚ニ其ニ一一」

【薦牲】センセイ いけにへをすすむ。禮記「士ニ一レ一用ニ特豚一」

【薦擢】センタク すすめぬき挙げる。湘山野錄「宰ニ二公ニ一ニ不ニ數年一薦升ニ于樞閣一」‖薦抜。

【薦達】センタツ 人をすすめて仕官せしめる。北史、蘇綽傳「凡所ニ一ニ一皆至ニ大官一」

【薦レ枕】センチンスル 寢に侍する。宋玉賦「夢見ニ一婦人一曰（中略）聞君游ニ高唐一願薦ニ枕席一」

【薦抜】センバツ 人才をぬき挙ぐ。舊唐書、陳叔達傳「江南名士、薦ニ澄長安一者、多爲ニ一ニ一」‖薦擢・進抜。

【薦福神】センプクシン 李北海の文を歐陽詢（舉更）の書せし錢州の薦福寺の碑

【薦客揮星】人物を君主にすすめて申し上げる〔韓愈、祭十九日再上ニ宰相一書〕

【薦登】センドウ 人才をほめてすすめ挙げる。漢書、賈捐之傳「更相ニ一ニ一、欲レ得ニ大位一」

【薦論】センロン 人の性行を論じて、すすめ挙げる。范仲淹文「其庶僚中、有ニ高才異行一、多ニ所ニ一ニ一」‖論薦。

【薦紳】センシン 身分ある人の稱。薦は縉。史、五帝紀「一ニ先生難レ言レ之」‖紳笏。

【薩】サツ 易

おほばこ。‖馬鳥・車前。

【薝】タン セン 感 豏

○一蔔は木の名。○一蔔センは花の名、香多し。萬花谷「宰相杜悰建ニ一蔔館花形六出、器用之屬、亦皆象之」古人の題詠多くニ一蔔を以て梔子花クチナシと爲すに似たり。陸龜蒙詩「一蔔冠ニ諸香一」

【薙】テイ チ 霽 紙

○なぐ、草を芟りたふす「芟ニ一」「剃ニ一」○のぞく、きる（伐除）○俗に髪をそる義とす。‖鬚。

【薙刀】ナギナタ 長刀。‖眉尖刀。

【薙髪】ティハツ かみをそる。‖剃髪。

【薄】ハク 藥

○うすし、あつみが少し「一冰」「一板」厚の反對。○すくなし、分量が少し（少徹）「一情」「德一」○せまし（狹）○あはし（淡）味がうすし。韭、胜饌「魯酒一而邯鄲圍」○かろし（輕）○いやし（賤）史、鄭當時傳「年少官一」○土地がやせて收穫少し。○きらふ（嫌）○うすんずる、輕んずる。○幸に通ず。○いささか（聊）詩、周南「一澣吾衣」○つとむ（勉）○いたる（至）至りとどく。書、禹貢「外一四海」○かこむる（被）○せまる（迫）「一暮」「一午」○をかす（侵）○ちかづく（近）「肉一」○つく（附著）史、蘇秦傳「心搖搖如ニ懸旌一而無所ニ終一」○あつまる（集）○しばらく（少時）○すだれ（簾）曲禮「帷一之外不ニ趨一」○す、まぶし（簇）「蠶一」十分に成長したるかひこを入れて繭をつくらせるもの。○くさむら「林一」「叢一」○おほふ（掩）○姓。○一一は馬を疾く驅らす聲。又、廣大なる貌。薄は博に通ず。○一荷ハスは藥草の一。○一樞はつかばしら。○圖すすき、茅に似て、長さ四五尺、秋、穗狀の白花を著く、尾花ヲバナといふ。

（附録索引 ハク・薄・聊の別は附（一五四六頁）の條を見よ。）

○レ薄・菲・涼・漓・澆・偷・淡○薄は厚の反、分ケのうすきなり。轉じて德のうすきにも用ふ。薄德・薄俗の如し。○菲は野菜の和末なるものなり。轉じて菲薄の義に用ふ。論語「菲ニ飲食一而致ニ孝乎鬼神一」○涼は薄と同義、涼德は、薄德に同じ、涼薄と連用す。左傳「虢多ニ涼德一」○漓は醨に通ず、醇の反にて、薄き酒なり。轉じて人情世態のうすきに用ふ。○澆は、うすしと訓む、次第にうすくなる義、漓に同じ。後漢書「澆淳散レ樸」○偷は苟且なり。又、薄なり、俗なり、人情・風俗などの次第にかはりてうすらぐをいふ。○淡は、あはしとも訓む、濃の反なり、色又は味のうすきなり。○薄・迫・逼・窘の訓は迫（走部九畫）の條を見よ。

【薄衣】ハクイ 粗末なるころも。梁武帝文

「菲食ー一、晴白ノ孤蝉」
【薄酔】ハクスイ うすぐもり。盧機詩「和風飛三清霄一、薄雲靡ニ翠林一」
【薄雲】ハクウン うすぐも。何遜詩「ー一巌際出、初月波中上」
【薄暈】ハクウン うすき月がさ。張協詩「歴歴華屋遷、霏霏ー一繁」
【薄運】ハクウン 薄命に同じ。
【薄煙】ハクエン うすけむり。諸葛穎詩「ー一浮ニ遊色一、高樹霜ニ清陰一」
【薄荷】ハッカ 薬草の一、高さ二三尺、葉は卵形、淡紫色の小花を著く、蠻繁共に香氣多し、蒸酒してー一油を製す。
【薄行】ハクカウ 軽薄なる行。十八史略、春秋戦国「興起殘忍ー一人也」
【薄倖】ハクカウ ふしあはせ。杜牧詩「十年一覚揚州夢、贏得青樓ー一名」ニ薄幸・薄命。
【薄綿】ハクメン うすきねりぎぬ（雅南子）
【薄學】ハクガク 浅薄なる學問。後漢書、楊秉傳「又以ニー一充在ニ論勲一」
【薄技】ハクギ 少しばかりのつまらぬわざ。司馬遷、報ニ任安一書「使ノ得ノ幸ニー一」ニ小技。
【薄儀】ハクギ 少しばかりの謝禮。ニ寸志・薄謝。
【薄餅】ハクヘイ てうすきそなへもの。東晳文「敬厲ニー一、魂兮來食」ニ薄奠。
【薄給】ハクキフ すこしの給料。ニ薄俸・薄祿。
【薄姿】ハクシ うすきふすま。張籍詩「遠稿更疎、ー一中夜涼」
【薄曲】ハクキョク 葦簀の具、葦にて作りしす。史記「以ノ緘ニー一ノ為ノ生」ニ蘧蒢。
【薄具】ハクグ そまつなる肴饌。司馬相如賦「修ニー一而自設兮」
【薄遇】ハクグウ 粗末なるもてなし。優待の反対。ニ薄待。
【薄官】ハクカン 地位ひくき官吏（南史、顧越傳）柴襄詩「世事勞勞ー一身」ニ冷官。
【薄観】ハクカン せまりて見る。左傳「欲ノ観ニ其裸浴、薄而観ノ之」
【薄刑】ハクケイ かろき刑罰。重刑の反対。國語「ー一用ニ鞭扑一」
【薄儀】ハクギ すこしの田わざ。劉克莊文「杜曲桑麻、頼有ニ先人之ー一ニ」
【薄話】ハクワ ふしあはせ。魏武帝詩「自嗟ニ薄祚ー一」ニ薄福。
【薄材】ハクザイ はたらき少し。陸游詩「ー一猶ニ耽飲一、樸學敎ニ兒童一」ニ非材。
【薄細】ハクサイ うすくしてこまか。蔡邕文「帛必ー一、衣必輕暖」
【薄葬】ハクサウ 粗末なるはうむり。厚葬の反対。南史、王徽傳「遺令ー一、不ノ設ニ糒脩鼓吹之屬一」ニ儉葬。
【薄物】ハクモツ うすきしも。沈佺期詩「ー一沾ニ上路、殘雪繞ニ離宮一」
【薄暮】ハクボ 少しばかりのとり入れ。范成大詩「去年ー一飯不ノ足」
【薄志弱行】ハクシジャクカウ 意志弱ぐして實行する力乏しき義。
【薄謝】ハクシャ 薄儀に同じ。
【薄情】ハクジャウ 人情うすし。雪窗廣錄「欲ノ遡ニ西去雁一、寄ニ與ー一看ノ」
【薄暮】ハクボ ○うすくよわし。○圖たしかならず、不確實、證據ー一」
【薄酒】ハクシュ うすきさけ。
【薄粥】ハクシュク うすきかゆ。
【薄暑】ハクショ すこしくあつし。初夏の氣候。儀妙嚴詩「虚窗停ニー一、獨坐撿ニ餘清一」
【薄蝕】ハクシキ 日月の光のうすきと、かけると。史、天官書「熒星遶行、日月ー一、皆以為ノ占」注「日月無ノ光曰ノ薄、虧缺為ノ蝕」
【薄脆】ハクセイ うすくもろし。ニ脆薄。
【薄俗】ハクゾク 輕薄なる風俗。漢書、元帝紀「ー一去ニ繁文一、觀ニ刑法一」
【薄田】ハクデン やせたるはたけ。蜀志、諸葛亮傳「成都有ニ桑八百株、ー一十五頃一」
【薄徳】ハクトク うすきとく。左傳「齊桓公存ニ三亡國一、以屬ニ諸侯一、義士猶曰ニー一」ニ薄德・涼德。
【薄薄】ハクハク ○廣大なる貌。荀子「ー一之地、不ノ得ノ履ノ之」○狹く馬を驅る聲の形容。詩、齊風「蕢簡ー一」○うすき貌。蘇軾詩「ー一酒醪ニ茶湯一、纖纖布靜ニ無雲一」
【薄潤】ハクジュン 刑罰をかろくす。吳越春秋「越王歸ノ國、緩ノ刑ー一ノ」
【薄皮】ハクヒ うすかは。百錬鏡「ー一複ノ上」
【薄屋】ハクヲク うすくつけたるまゆずみ。飛燕外傳「合德為ニー一、號ニ遠山黛一」
【薄冰】ハクヒョウ うすごほり。詩、小雅「戰戰兢兢、如ノ臨ニ深淵一、如ノ履ニ薄冰一」ニ危險の甚だしきに喩ふ。前條參看。
【薄夫】ハクフ 人情うすきをいふ。孟、盡心「聞ニ柳下惠之風一者、鄙夫寛、ー一篤」
【薄陋】ハクロウ ふしあはせ。北史、李諧傳「我ー一託ニ劉氏一為ノ女」ニ薄幸・薄命。
【薄暮】ハクボ ひぐれ、甚に迫る義。廣雅「日將ノ落、曰ニー一」
【薄修】ハクシュウ すこしのふち。薄給。陸龜蒙詩「不ノ嫌酒ニー一」ニ薄祿。
【薄膜】ハクマク うすかは。
【薄霧】ハクム うすききり。沈約文「朝吐ニ輕煙ー一」
【薄命】ハクメイ ふしあはせ。列、力命「北宮子、厚ニ於德一、薄ニ於命一、汝厚ニ於命一、薄ニ於德一」王昌齡詩「眞成ー一久尋思、夢見ニ君王一猶後疑」ニ薄福。
【薄利】ハクリ ○少しの利益。朱元詩「為ノ貧ニー一故輕ノ生」○少しの利息。
【薄酌】ハクシャク うすきさけ。李涓詩「一盞ー一酒、數枝零落梅」
【薄植】ハクショク 淺上の短き社、ますがた。薄は蔑。柏梁臺詩「桂柍ー一相支持」
【薄陋】ハクロウ うすくいやし。漢書、郊陽

傳「病肉ー不ニ敢道一也」

【薇蕨】ビケツ　すこしのふち。宋親詩「ー一ー菜ノ親甘旨少」

【薇】ビ　微

○ぜんまい、山野に自生する草、若葉は巻きて白毛を被る、食用とす。○紫ーはさるすべり、樹身光滑にして花は六瓣、紫紅色、又、白色、六月頃、花開き、開謝接續して八九月に至る、唐代、之を中書省に植う、故に開元元年、中書省を改めて紫ー省と名づく。‖百日紅。○薔ーは、いばら。薔（本艸）を見よ。

【薇垣】ビエン　中書省の異名、唐代、紫薇花を中書省に植ゑ、開元元年、改めて紫薇省と稱せしに由る（明清は布政司をーーといふ）‖薇省。

【薇蓋】ビカイ　やぶれがさ。一種の草の名。水經、注「錫長山、山高谷深、多生ニーー草一、其草有ル風水ノ便、無ル風獨搖」

【薇蕨】クビ　ぜんまいと、わらびと。孟郊詩「野菜薇竹經、山蔬ーー新」

【薇省】ビセイ　薇垣に同じ。

【薇無】ビ　香草の名。陸志「ーー香草、漢武帝以藏ニ衣中一」‖蘼無。

【薛】ヘイ　霽

荔枝は、蔓草の一、まさきのかづら、葉厚くして圓く、饅頭狀の實を結ぶ、木饅頭。離騷「貫ニ荔之落蘂一」‖杜貴。

【薜蘿】ヘイ　○かづら。齊書、宗測傳「展ル腹而遊ニ松花一度ノ形而衣ニーー一」○轉じて隱者の服をいふ。

【薤】ベツ　屑

○ほそし（細）○薄に同じ。

【薥】ショ　御

蜀ーはやまのいも。薯（次艸）を見よ。杜甫詩「充腸多薯ー」‖山藥。

【薩】コウ　多

○あつまる。あつむ（萃）○野菜の名、莖は柔かに葉は菠薐（ハウレン）に似、秋、白花開く。‖空心菜。

【薏】㊀ヨク　㊁イ　沃　職

○はすの實の中のみ。酈雒「荷其實蓮、其中的、的中ー」注「中心苦者也」○ー苡（ヨイ）は藥草の一、ずずだま。後漢書、馬援傳「援在交阯、嘗餌ー苡實、用能輕ル身省ル慾、以勝ニ瘴氣一、南土ーー苡實大、援欲ニ以爲種一、軍還、載ニ之一車一（中略）及ニ卒後一、有ニ上書譖一之者一、以爲前所載還ニ皆明珠文犀一、帝益怒」

【薷】ライ　賄

つぼみ。花の將に綻（ほころ）びんとするもの「蓓ー」「珠ー」

【薟】㊀レン　㊁ケン　豏　琰

㊀やぶからし、蔓草の一。‖蕪。㊁稀ーは藥草、めなもみ。

【薕】レン　寒

葉の類、細くして高きもの、すだれよし、ひめよし。

【薊】ロウ　蕩

菠ーー草（ハロウはうれんさう。菠（艸部八畫）を見よ。

【薈】ワイ　エ　泰　通音クワイ

○くさむら（樓叢）「榛ー」「叢ー」○草木が盛んに茂る「蔚ー」○さかんなり、雲霧が興る。○さへぎる（障）○蔥ーは藥草、熱地に產し、葉大いにして尖り、肉質にして鋸齒あり、穗狀の花開く。

【薈蔚】ワイ　○草木の盛んにしげる貌　陸游詩「靜岸一蓑巾一穿ニーー一」○雲の興る貌。詩、曹風「甸ニ彼ー一ー一、南山朝隮」‖薈蔚。

【薈蔚】ワイ　盛んにしげる貌。李賀、長班賦「卽崇山之奧區、騁ニーー其若ー」

【薈翳】ワイ　おほひしげる。韋夏侯文「茂ニーー一而松桂出」‖翳薈。

【蕞】ワイ　灰

藾（一三九二頁二段）に同じ。

十四畫

【蔓】㊀キ　㊁エン・ヨン　阮　紙

㊀姓、ー子馮は、春秋の楚の大夫。㊁ー蔓（エンは藥草、ひめはぎ。‖逸志。

【藁】カウ　コウ　篠　藁に同じ

○わら。○したがき（稿本）○かる（枯）‖槁。

【藁街】カウガイ　京師にあるえびすの居留地。漢書、陳湯傳「斬ニ郅支及名王以下一、縣ニ頭ーーニ一‖藁街。

【藁人】カウジン　わらにんぎょう。晉、林玉露「夜縛ニーー數千一、衣以ニ甲冑一、持ニ矛戟矛一、偃立成ル行」

【藁稍】カウセウ　わら。易林「安樓茂盛、多

穫ニ一一」

【孚砧】フチン　妻が其の夫を稱していふ。晉字箋に、砧は杵砧石なり、美石を碪夫と名づく、故に孚砧を借りて以て夫に喩ふ、一說に蘞砧は農家の搗草石なり、蘞砧の切音は天とす、婦人は夫を以て天とす、故に夫の字の隱語とす。古樂府「一一今何在、山上更有レ山、何堂二大刀頭一、破鏡飛上レ天」

【蘞】ギ　ギョク　國　紙

一ザは禾穀の茂れる貌。詩、小雅「或耘或耔、黍稷一一」

【薰】クン　文　國

○かをりぐさ、香草の一、蘭の類。葉は細長く對生し、赤花黑實をつく、古人之をおびて惡氣をふせぐ、故に佩蘭ともいふ。‖蕙草。○かをり（香氣）「馨一」「餘一」「鬱一」○かをる、にほふ。○やく（灼）くすべる、たく、煙に通ず。○香氣に近づきてうつりかがする。轉じて善人に親みて善に化する「一化」○一然は溫和なる貌。莊子「一然慈仁」又、耳目の明かなる貌。○いさを、動に通ず。○一育はえひすの名、一は孺に通ず。‖纁黃。

【薰蕕不レ同レ器】クンイウフドウキ　蕕は香草、蕕は臭草、善人と惡人と一處に居るべからざるに喩ふ。世說「培壅無二松柏一一一」

【薰育】クンイク　○善に化するやうにをしへそだてる。○えびすの名。字解參看。

【薰灸】クンカク　權勢の盛んなる義。張九齡詩「玆邦稱二資近一、與レ世常一一」‖薰灼。

【薰化】クンクワ　德を以て人を感化する。

【薰灼】クンシャク　○ふすべやく。○勢のさかんなるにいふ。唐書、王鉷傳「天子使者、賜遣相望、權勢一一」‖薰炙・薰赫。

【薰蒸】クンジョウ　宮刑に處せられし者、宵は他人の跡にまきぞへとなりて誅せらるる義。史、宋隱序贊「嗚呼史遷一一以刑」

【薰染】クンセン　香氣がしみこむ。轉じて善にうつりそましむ。程子、論二經筵事一疏「使二之一一成二性」

【薰陶】クンタウ　火にて物を煮し、又、土をこねて陶器を造るが如く人才を敎育する義。宋史、道學傳「善敎二其子弟一者、必甚二名德之士一、使二與レ之處一、以二一一一成レ性」

【薰芳】クンハウ　かをばし。陳閣文「道術一一、鮮レ不二玉折一」

【薰以レ香自焚】クンイカウジフ　才ある者は、其の才をつつみ晦ます能はずして卻つて其の身を害ふに喩ふ。漢書、龔勝傳「一一、非以レ明自銷」

【薰風】クンフウ　溫和なる夏のかぜ。史、五帝紀「南風之薰兮、可二以解一二吾民之慍一兮」‖南薰。

【薰沐】クンモク　香を衣に薰し髮を洗ひて身をきよめる。齊語「三薰而三沐之」

【薰陸】クンロク　乳香に同じ、くんろく。五代史「日焚二薰陸一一諸香數斤」‖薰陸香。

【藏】㊀サウ・ザウ　㊁サウ・ザウ　漾　陽

㊀をさむ。をさまる。○たくはふ（貯蓄）「祕一」「珍一」「收一」「畜一」○かくす。かくる「潛一」「韜一」「退一」○たくはへおく物。㊁くら、物品を收めて居く所。○はらわた「五一」「古、臟に通ず。○國名、西藏の略。

同訓異義　藏・修・治・理・收・斂・納・御の別は修（一四七頁三段）の條を見よ。

○藏・隱・潛・匿・祕の別は隱（阜部十四畫）の條を見よ。

【藏奸】ザウカン　惡人をかくす。左傳「容二姦一一爲二內主一」

【藏機】ザウキ　はたらきをかくす。李紳文「發レ論開レ蒙、一レ一匿レ祕」

【藏經】ザウキャウ　一切藏經の略。‖一切經。

【藏弆】ザウキョ　書畫等を所藏する、藏・弆同義。漢書、陳遵傳「嗜一一以爲レ樂」

【藏篋】ザウケフ　かくれのがれる。揚志、司馬期傳「郊境之內、民不レ安レ業、相二棄居一流亡一一、此明之所二以於邑一也」‖伏匿。

【藏舟】ザウシウ　舟ををさめ入る。莊、太宗師「一一二于壑一、藏二山于澤一、謂二之固一矣」

【藏收】ザウシウ　をさめたくはへる。蘇軾詩「片紙要字皆一一」

【藏修游息】ザウシウイウソク　藏修は常に學問を心に藏め修習して忘らず、游息は正課以外の休息の時にも亦心を學問に存する義。禮、學記「君子之於レ學也、藏焉、修焉、游焉、息焉」

【藏疾】ザウシツ　惡をかくす。顏氏家訓「含レ垢一レ、容レ賢容レ衆」

【藏相】ザウシャウ　圖大藏大臣の略稱。

【藏作隱】ザウサクイン　書色を收めたくはへるつつみ。長編「刀約作二一一一日遊二其中一」蘇軾詩「一一裏餐花圖、仁詩植遍日月長」

【藏書】ザウショ　所藏の書物。唐書、歐文忠「一一之盛、莫レ過二于開元一」‖藏本。

【藏拙】ザウセツ　拙劣をかくして人に示さず。劉勰文「徐陵聘レ齊、魏收餞二其文一盡レ陵、陵還江沈レ之曰、吾與二魏公一一レ一」

【蔵智】ゾウ ちゑをかくしてあらはさず。文子「臣下ー〻ー而不ー用」
【蔵書】ゾウ をさめたくはへる。呉萊詩「富蔵億ー、官府更金繒」
【蔵茶】ゾウ ちゃをたくはへる。茶錄「ー〻ー宜二鼎業一而畏二香奩一」
【蔵匿】ゾウ かくす。かくる。史、鄭生傳「乃深自ー〻」
【蔵骸之地】ゾウガイ 肉體を埋むる地。轉じては魂に對して肉體をいふ。
【蔵板】ゾウ 次條に同じ。
【蔵版】ゾウ 其の書物の板木を所藏する。‖蔵板。
【蔵匿】ゾウ かくす。訓書、王倪傳「疑掘ー〻地得二銀百萬一、意甚惡ー〻之、一皆ー〻」‖隱匿。
【蔵経】ゾウ 佛法の語、字を書くに筆端を收して露ださざる義。書訣「用ー〻筆如二印ー〻泥書一沙、貴ー〻ー〻也」
【蔵本】ゾウ 蔵書に同じ。
【蔵六】ロク 龜の異名、頭尾兩手兩足を甲の中に收藏するが故。雜阿含經「有ー〻龜被二野干所一得、ー〻ー不ー出、野干惡而去、佛告二諸比丘一、汝當ー〻如二龜ー〻ー、自藏二六根一、魔不ー〻得ー〻便」
【蔵土】ゾウ 圖菩薩の一、悉怒降魔の相を現し、右足を揚げ、右手に三鈷を持つ。
【蔵人】クラウド 圖殿上に近侍して、機密の文書及び詔詞を掌り、小事を奏宣する職。

【薩】サツ サチ 曷
○すくふ(濟)○菩ー‖は佛語、菩は普、ーは濟、普く衆生を濟ふの義。菩(卑部八畫)を見よ。
【薩陸】サツ 圖佛に亞ぐ位位、即ち大乘猛心を以て菩提即ち佛道を求め、大悲悲を以て衆生を濟ふ人。‖菩薩。
【薩都剌】サツ 元の雁門の人、字は天錫、詩文に工なり、雁門集の著あり。

【蒲】ジ 紙
蒻のさかんなるにいふ。

【藎】シン ジン 軫
○あつし、まこと(篤)すすむ(進)誠意を以て進みて忠を盡す「忠ー」「誠ー」○もえさし。‖燼。○かりやす、草の一種、黃色の染料とす。‖黃草。
【藎臣】シン 忠愛の情篤く進みて已まざる臣。詩、大雅「王之ー〻、無ー〻念ー〻爾祖ー〻」

【藉】㊀シャ ㊁セキ・ジャク 圓禡 古、籍に通ず
㊀しく、草を物の下にしく。易、大過「ー〻以ー〻白茅」○しきもの(席)○たすく(助)○かる。‖借。かす。○かこつける、口實とする「ー〻口」よる(依託)○たより、たすく。○なぐさむ、いたはる「慰ー〻」○おだやか「醞ー〻」○もし、たとへ「ー〻使」賈誼、過秦論「ー〻使子嬰有ー〻庸主之材」‖借使。○すすむ(侑)㊁みだれる(亂雜)「狼ー〻」○ふむ(踏)ふみにじる「踏ー〻」○人の姓。○なは(繩)○つなぐ(繫)○ー田(セン)は天子の親ら耕したまふ田地(漢書、文帝紀)
【藉】(籍の項参照) 布・數・錦・席・搖の別は布(五六四頁二段)の條を見よ。依・寄・憑・凭・賴・據・仗・倚の別は依(一二七頁四段)の條を見よ。使・縱・縱令・假令・借令等の別は縱(一四九五頁一段)の條を見よ。
【藉口】シャ 口實を設けていひわけする。左、成二「ー〻人曰、苟有二以ー〻ー而復二于寡君一君之惠也」
【藉草】シャ くさをしきものとす。吳志、朱據傳「ー〻ー待ー〻罪」
【藉手】シャ てをかる。他人の手を借りて我が用をなす。左、昭十六「敢不二ー〻ー以拜一」‖借手。
【藉甚】シャ 評判たかし。漢書、陸賈傳「游二漢廷公卿間一名聲ー〻ー」‖籍甚。

【蔗】シャ 禡
○甘ー‖はさとうきび。‖甘蔗。番藷。

【蔑】ベツ マツ 屑 圓
○なし、…なし「ー〻以加之」○ちひさし「微ー〻」○みだる「亂ー〻」○おとしめる「侮ー〻」○ほろぶ「滅ー〻」○ほろぼす「滅ー〻」○ほろぼす「滅ー〻」○ほろぼす

○すけ、菅の類、高さ二四尺、夏、長き穂の花さく、葉を乾して笠などに作る。通じて蓋に作る。‖莎草。○蓑―ダイはあぶらな、蔊（艸部十二畫）を見よ。‖油菜。○たゞ、野菜類の花莖の立ち出るもの。蔓心。

【蓍】 ダイ 隊

聲―ダイは草木の盛んに茂る貌。

【藐】 ㊀ べゥ ㊁ バク 覺 通音 バク

㊀小さき貌。○かろんず、さけすむ（輕視）「―視」孟、盡心「說大人則―之」○視る容の好き貌。㊁遠く離れたる貌。邈に通ず。○―は美くしき貌。又、人の教を注意して聞かざる貌。○むらさき、紫色の染料とす。‖莇草。

【藐視】バク かろんじ視る。孟、盡心「說ニ大人一則藐レ之、勿レ視ニ其巍巍然一」‖蔑視。

【弥藐】ビョウ 小弱なるみなしご、孤は父なき者の稱。藐は助字。左、僖九「以ニ是―孤一、辱在ニ夫夫一、其若レ之何」‖寡孤。

【藐遠】エン はるかに離れて遠し。

【藐邈】ビョウ 遠くしてはるか。馬融賦「―勿問、審諦察決」

【藐姑射之山】バクコヤノ ○仙人の棲めりといふ山、貌は遠く隔たれる貌。莊、逍遙遊「―、有ニ神人一居焉、肌膚若ニ冰雪一、淖約若ニ處子一」○國 上皇。又、法皇の當の敬稱。‖仙洞。

【藐然】ゼン 遠くして及ぶべからざる貌。漢書、酈助傳「―甚難」

【藐藐】バクバク ○美くしき貌。詩、大雅「綏爵既成、既成――」○敬の心に入らざる貌。詩、大雅「誨レ爾諄諄、聽レ我――」

【藕】 ヘン 銑

―豆はいんげんまめ。‖扁豆・蛾眉豆・沿籬豆。

【藩】 墀（三八五頁上段）に同じ。

【藍】 ラン 覃

○あゐ、蓼に似たる草、青色の染料とす。荀、勸學「學不」可ニ以已一、青出ニ於―一而青ニ於―一」（此語に本づき弟子の師より優るを出―といふ）詩、小雅「終朝采―」○あゐいろ、青よりは濃く、紺よりは淡し。○ぼろ。‖襤。○蔚―は天の青き色。○伽―ランは寺の異稱。略して單に―ともいふ「精―」○洎夫―ランは藥草の一。

【藍彩】ランサイ あゐいろのころも。彩は小袖。阿閦見聞志「昔吳道士、善ニ繪ニ菩薩一、衣ニ―一、飄二足一、妙二一目一、腰レ劒巾レ首而逢髮」

【藍綬】ランジュ ○あゐいろの印綬、綬は官印の紐。齊已詩「―乍稱新學士、白衫初配舊神仙」○國 ―綬章 ハクシュは公共の利益を興したる功勞者に賜はる褒章。

【藍水】ランスイ 陝西省に在る川の名。杜甫詩「―遠從二千澗一落」‖灞水。

【藍田】ランデン 山名、名玉を產す。陝西省西安府藍田縣に在り。班固、西都賦「陸海珍藏、―美玉」

【藍田生レ玉】ランデンタマヲショウス ○賢父が賢子を生みしを譬めていふ。吳志、諸葛恪傳「恪少有二才名一、發藩岐嶷、辯論應レ機、英二與偽ヒ對、孫權見而奇レ之、謂二其父瑾一曰、――、眞不レ虛也」○容貌の美なるをいふ。宋書、謝莊傳「莊風令美二容儀一、太祖見而異レ之曰、藍田出レ玉、豈虛也哉」

【藍靛】ランデン あゐだま。本草集解「波斯青黛、亦是外國――花」‖藍青。

【藍袍】ランポウ あゐいろの內衣。本草「逸史云、唐高祖時、純旭應レ舉不レ第、觸レ階而死、後明皇夢有二小鬼一、盛二玉笛一、一大鬼破帽――、捉レ鬼吹レ之、上問レ之、對曰、臣終南山進士鍾馗也、蒙レ賜二袍帶之葬一、誓除二天下虛耗之鬼一、乃命二吳道士一圖レ象傳二之天下一」

【藍尾酒】ランビシュ 最後に飲む酒杯。藍は裝に通ず、貪なり、最後は得る所多きが故。仇池筆記「蘇鶚云、以二酒巡匝一爲二藍尾一、一作二藍尻一」

【藍碧】ランペキ あをくみどり。李元賓文「遠行二里許一、見二石山一、―如レ染」

【藍本】ランポン 原據とすべき書。唐書、藝文志「今惟二統志一、似レ當レ以二其通志一爲二―一よ」‖原本。

【藍面】ランメン あをきかほいろ。郗經、唐十臣像贊「盧杞―不二敢望一」

【藍縷】ランル ぼろ、やぶれごろも（襤褸）左、宣十二「筚路―、以啓二山林一」‖襤褸。

十五畫

【藭】 キュウ 東

芎―キュウは藥草の一、蘼蕪共に香氣高し、根を藥用とす、せんきゅう、なんなかぐら。‖川芎。

【藝】 ゲイ 霽

○わざ（才能）「道―」「武―」「學―」「經―」「工―」「經―」「六―」は禮樂射御書數。○文「一文」「文―」文の德。○きはまり、は

て(極)(泉の轉音)音語「貪欲無ー」○まと、めあて(的)のり(準)左、文六「陳之ー極」○わかつ(分)○うう(種植)「種ー」「耕ー」孟子「樹ー五穀」‖藝。○聖人の著したる書。經に通ず。上林賦「游ー于六ー之圃」

藝 ゲイ 種・植・栽・樹の別は種(一三九七頁一段)の條を見よ。

【藝苑】ゲイエン 藝林に同じ。韓愈賦「朝聽ー于書林」○別に翔乎ー「ー」

【藝技】ゲイてわざ。漢書、食貨志「家畜ニ金鐵ニ手ー」‖技藝。

【藝妓】ゲイうたひめ、げいしゃ(藝者)‖校書・妓女。

【藝蓬】ゲイまめをうう。臧良詩「結ー蓼在ニ西市ー」ー仍種ノ菜

【藝業】ゲイ學術技藝。類延之文「輔以ニー」ー「令以ニ文辭ー」

【藝術】ゲイ技藝と學術と。後漢書、安帝紀「校ニ定東觀五經、諸子傳記、百家ーー」

【藝植】ゲイショク うえる。つける。王維詩「ーー老ニ丘園」‖種藝。

【藝祖】ゲイ ○文德ある祖先。書、堯典「歸格于ーー」用ノ特」‖文祖。○轉じて太祖の通稱「日知錄」

【游ニ於藝ー】ユウゲイ 藝術を學ぶ。論、述而「依ニ於仁ー」

【藝人】ゲイニン 園種種の遊藝を以て業とするもの。

【藝能】ゲイノウ 藝術と技能と。史、龜策傳「ーー之路」

【藝文】ゲイブン 學術と技藝と。後漢書、輔衡傳「英才卓犖、初涉ニーー」

【藝文類聚】ゲイブンルイジュ 書名、百卷、唐の歐陽詢、敕を奉じて撰す、凡そ四十八門に分ち、事實を前に居き、詩文を後に列す、類書中に在りて稍例最も善し。

【藝林】ゲイリン ○典籍の薈萃する所。魏書、常爽傳「頃因ニ暇日ニ陶ニ意ーー」‖藝苑。○學藝の仲間。

藕 ゴウ 有 通雪 グウ

○はすのね(蓮根)蓮の地下莖、食ふべし。○はす、はちす(芙蕖)「ー花」

【藕花】グウカ はすのはな。張籍詩「夜月紅柑樹、秋風白ーー」‖荷花。

【藕根】グウコン はすの根。北史、羊敦傳「采ニーー食ニ之」‖蓮根。

【藕絲】グウシ ○はすよりひき出すいと。朱超、采蓮曲「搖ニ除蓮上葉ニ牽ニ出藕中絲ニ」○裙帶の名。李賀詩「粉霞紅綬ーー裙」

【藕斷絲連】グウダンシレン 表面は斷絶するも中心は連續する、情意の未だ絶えざるに喩ふ。孟郊詩「妾心藕中絲、雖ノ斷猶連牽」

【藕粉】グウフン 園蓮根よりとれる澱粉「西湖ーー」

藪 ソウ 有

○さは、草木生ひ茂りて鳥獸などを養ふ大いなる澤「ー澤」「林ー」「山ー」「園ー」○轉じて物事の多く集り歸する所「淵ー」○草野の義、在野。潘方生詩「辭ニ朝歸ー」○園ヤブ たかむら、竹林。

【藪澤】ソウタク 草木の叢生せる大いなる澤。史、司馬相如傳「鵰明日搏ニ乎藪澤ニ而羅者猶親ニ乎ーー」

藜 ソク 沃

おもだか、水草の一、葉は、箭狀三尖、夏、三瓣の白花開く。‖澤瀉・牛脣草。

藤 トウ 蒸

○かづら(蔓)すべて蔓生植物の總稱をいふ「葛ー」「亂ー」「瓜ー」○ふぢ、藥生の落葉木本、四五月の頃、淡紫、又、白色穗狀の花開きて下垂す「紫ー」「白ー」○園四姓の一なる藤原氏の略稱「源平ー橘」

【藤棨】トウケイ ふぢだな。杜甫詩「舞袖想ニ絳ーー」「烟霧想ニ絳棨ー」

【藤紙】トウシ 紙の一種。李嶠啓事「紬術ー」「藤林」トウリン ふぢかづらのゆか。白居易詩「六尺白ーー、一竿青竹杖」

【藤蘿】トウラ ふぢかづらがまつはる。杜甫詩「猨猱將ノ絶拒、倒石頼ノーー」‖藤蘿。

【藤蔓】トウマン ふぢかづら。崔顥詩「青翠通ニ衆山ー」ーー夏ニ冬滋ー」

藩 ハン 元 古、帶に通ず

○かき、まがき(籬)易、大壯「羝羊觸ー」○さかひ(域)○おほひ(屏)○封建時代に王室のおほひ(屏)となる諸侯。又、節度使などの稱。○轉じて諸侯の國「一王」「一邸」「親ー」漢書、明帝紀「東平王蒼、罷歸ー」○ー司ンは明以後、各省の布政司の異稱。○まもる(守護)左傳「貨以ー身、子何愛焉」○車のおほひ。‖蕃。

【藩屏】ハンペイ 藩屏に同じ、藩は蔽、翰は幹、國家の屏蔽棟幹たる義。詩、大雅「侯人維藩、大師維垣、大邦維屏、大宗維翰」

【藩臬】ハンゲツ 明代、布政司を藩といひ、按察使を臬といふ、藩は藩屏、臬は法、準限の義。【雜事大全】

【藩國】ハン 王室の藩屏となる國即ち諸侯の國。漢書、異姓諸侯王表「一ー大者、夸ル州兼ル郡」

【藩溷】ハン かはや（廁）晉書、左思傳「構ル思十年、門庭ー一皆著ニ雜紙一」

【藩司】ハン 明清時代、布政使の異稱。

【藩軍】ハン おほひのある車。後漢書「司馬陳寵、勒ヲ奏陳逸乘ニー一入ニ閭巷ニ上注「車之有ニ屏蔽一者」

【藩陰】ハン かこひ、まがき。晉書、庾衮傳「嫂ニ臨ミ階ニ杜ニ蹊徑ニ修ニ墻塹ニ樹ニー一こ」＝藩屏・屏除。

【藩侯】ハン 國大名に召聘せられて其の藩の教育、又政務の顧問たる學者。

【藩祚】ハン 天子の一門なる大名。徐陵文「足下宗枝ー一、德聲早隆」

【藩雉】ハン 其の藩の主君の祖先。

【藩鎭】ハン 唐代の地方官即ち節度使。唐明皇詩「ー一記歌滿、行宮雨露深」

【藩邸】ハン 大名のやしき。

【藩方】ハン 諸侯。宋史、李綱傳「朝廷者根本也、ー一者枝葉也、根本固則枝葉蕃」

【藩閥】ハン 國勢力ある藩の出身者が結合して政府の要路を占め他藩の人を排斥するにいふ。

【藩府】ハン ○諸侯又藩鎭の役所。聞見前錄「王懿恪拱辰、熙寧初、拜ニ宣徽使ニ過ニ藩ニー一」○國昔、大名が江戸に居きしやしき。

【藩附】フン 屬國。北史「常朝貢雖ル稱ニー一、誠節未ル遽」

【藩服】フク 九服の一、王城を去ること五千支那里の地。＝藩服。

【藩屛】ハン ○まがき、かこひ。又、車のおほひ。周禮、春官、巾車「掌ニー一」○諸侯の稱、天子の守護となるべきもの。左、僖二四「封ニ建親戚ニ以ー一ニ周こ＝藩翰・藩蔽。

【藩蔽】ヘイ 前條に同じ。揚雄、徐州牧箴「實列ニー一ニ侯衛ニ東方」

【藩輔】ホ 王室の守護となる者、諸侯などの稱。史、魯世家「諸侯ー一、臣子一例、古今之制也」魏志、彭城王傳「王以ニ懿親之重ニ處ニー一之位こ

【藩老】ロウ 諸侯の家臣の長、家老。

【藩落】ラク まがき。晉書、楊裒傳「物各有ル所ル施、椅梓之材、不ル合ニ以爲ニー一也」＝藩籬・藩蔽。

【藩籬】リ ○まがき、柴竹を編みてつくり宮室の屏蔽と爲すもの。左傳、疏「封立ニ親戚ニ以爲ニー一ニ屏蔽周室ニ」○範圍の義。史通「馮衍・許劭不ル足ル窺ニ班范之ー一ニ」班范は班固と范曄と。

【藩籬之鷃】ケン 見識のせまき小人に喩ふ、鷃は小鳥、ふなしうづら。宋玉、答ニ楚王問ニ「風上擊ニ九千里ニ、絕ニ雲霓ニ、負ニ青天ニ、翔ニ乎杳冥之上ニ、夫ー一、豈能與ル之料ニ天地之高ニ哉」鳳は鵬に通ず。

【藩鎭】チン 其の藩にて主唱する議論。

【藨】ヒョウ ヘウ 艸 俗

㊀あぶらがや（蒯）用ひて席に作る。㊁いちご（莓）

【藦】マ 艸

蘼ーはがやいも。

【藥】ヤク 樂 俗に葯に作る

○くすり「醫ー」「一石」病を治する草の總名。又、草木金石禽獸蟲魚の類、すべて病を治するに效あるもの。○他の物に力を及ぼす作用あるもの「火ー」「炸ー」○どく、身體を害するもの「仰ー而死」○いやす（癒）くすりを飲みて病をなほす。詩、大雅「不可ー救ー」○俗に鴉片の稱とす、支那産のを土ー、外國産のを洋ーといふ。○芍ーシャクは牡丹に似たる花卉の名。略して單にーともいふ「紅ー」

【藥園】エン 藥草を植えたるはたけ。舊唐書、職官志「ー一師以ル時種蒔收采」

【藥圓】エン くすり代。杜甫詩「遠尋ニ醫ニー一」

【藥艾】ガイ くすりと、もぐさと。呂覽、說「余臥ニ疾京師ニ、實得ニ此術ニー一之間、手自灸ル之」

【藥衡】コウ 藥物をはかるはかり。

【藥學】ガク 藥品の性質又其の製造法等を研究する科學。＝藥物學・調劑學。

【藥氣】キ くすりのにほひ。李賀詩「膏ニ香ー一濃」

【藥笈】キュウ くすりばこ。陸游詩「著ル衰ー一毎隨ル身」

【藥莢】キョウ 火藥を裝塡したる金製の筒。

【藥牒】チョウ くすりばこ。五代史、伶官傳「自負ニ淸狹ー一ニ」＝藥笈・藥筒。

【藥局】キョク 藥を調合するへや。

【藥盲】モウ いましめになることば、藥石之言の略。史、商君傳「苦言藥也、甘言疾也」

【藥材】ザイ くすりの材料「張志、趙隱傳、注」避暑錄話「過ル江後、難ル得ニー一毎記ニ藥問、勞供有ル常、飲食有ル節、似ル膳ニ服藥ニ也」

【藥劑】ザイ 調合せしくすり。史、孝武帝紀「事ニ化ニ丹砂諸ー一ニ燒ニ黃金ニ矣」

【藥劑師】シ 國醫師の處方に據りて藥劑を調合する者。

【藥草】ソウ ○くすりに用ふるくさ。朱慶餘詩「貧ル身唯ー一、數ル子但詩書」○植ニ藥ヲ

【藥籠】ロウ くすりなべ。陸游詩「山童睡熟青燈暗、自撥ニ殘爐ニ候ー一ニ」

【藥鍊】ヤクレン　藥草をほり採るすき。陸游詩「正合二不遇一亦何慊、一一丹爐老二青嶂一」

【藥筒】ヤクトウ　くすりばこ。神仙傳「有二一侍者一、負二書笈一、一隨二一一」‖藥籠。

【藥師】ヤクシ　○唐の李靖の字。○醫師をいふ。○佛　轉じて如來の名。衆生の病患を救ひ、法藥を與へて无明の病を治する義。大寶積經「如來一持二藥器一、自身病不レ能二療治一」

【藥肆】ヤクシ　くすりを賣るみせ。紺珠集「徐儉棄レ道、隱於一一中、家植二海棠一、結二巢其上一、引レ客登レ木而飲」‖藥店・藥舖。

【藥餌】ヤクジ　くすりと、滋養物と。勉雅、贈「枯犀之角能辟二邪惡一、寧心神、散二風熱一、良於一一」

【藥酒】ヤクシュ　くすりざけ。又、藥酒。史、蘇秦傳「吾已作二一一一待レ之」

【藥種】ヤクシュ　くすりの材料。吳融詩「一一玉苗弓」

【藥水針】ヤクスイシン　注射器の一名。

【藥性】ヤクセイ　くすりの性質。陸佃、小園賦「問二鷲洪之一一一、訪二京房之卜林一」

【藥石】ヤクセキ　○病を治する方劑と砭石と。祖庭事苑「夫攻レ病曰レ藥、劫藥曰レ石、古以二砭石一爲レ針也」○轉じて人を戒むる言に喩ふ。左、襄二三「孟孫之惡我、一一也」

【藥石之言】ヤクセキノゲン　人を戒めて、其の非を改めしむることば。唐書、高瑀傳「上書言二得失一、辭誠切至、帝賜二鐘乳一劑一曰、而過二一一、缺以二藥石一相報」

【藥籠】ヤクロウ　藥の調合を記せし書附。‖處方箋。

【藥袋】ヤクタイ　くすりを入れるふくろ。‖藥嚢。

【藥湯】ヤクトウ　○煎じたる藥。張籍詩「公疾沒日加、扶人視一一」○圖　藥を入れたる浴湯。

【藥罐】ヤクカン　○くすりなべ。‖藥鍋。○道家にて丹藥を煉るなべ。范成大詩「雄大鍋何知、偶誤二一一餘一」‖丹鼎。

【藥壺】ヤクコ　くすりぶくろ。戴復古「侍醫夏無レ且以二其所レ有一一、提二荊榼一」

【藥方】ヤクホウ　くすりのもりかた。後漢書、百官志「太醫令丞主二一一」

【藥品】ヤクヒン　くすりの品類。元結、菊圃記「在二一一一良藥、爲二蔵藥一是佳蔬」

【藥物】ヤクブツ　くすり。杜甫詩「多病所レ須惟一一」‖藥材・藥品。

【藥物學】ヤクブツガク　藥性及び内外科の處方を研究する學科。‖處方學・本草學。

【藥苗】ヤクビョウ　藥草のなへ。高適詩「秋韮何滋滋、一一數百畦」

【藥圃】ヤクホ　藥草を植ゑたるはたけ。王維詩「荷レ鋤修二一一、散レ帙曝二農書一」‖藥園・藥苑。

【藥膳】ヤクゼン　藥草をつけたる乾肉。乾肉の條、梁傳「臘藥以レ酢爲レ酒、一レ一以レ薤」

【藥舖】ヤクホ　くすりや。賣藥店。‖藥肆。

【藥味】ヤクミ　○藥のあぢ。○藥の品類。○山椒・胡椒などすべて食物に添へて食ふ香料。

【藥園】ヤクエン　藥圃の關リス又、芍藥の畑のかこひ。王維詩「一一花徑衡門裏」

【藥餌】ヤクジ　くすりを飲みて體を養ふ。顏延之、自陳表「乞解レ所レ職、隨就二一一一」

【藥力】ヤクリョク　くすりのきめ。雲笈七籤「凡一切五辛、皆害二於一一一」

【藥價】ヤクカ　圖醫者へ支拂ふ藥價と謝禮と。

【藥料】ヤクリョウ　○藥材に同じ。○藥代。‖藥價。

【藥攝】ヤクセツ　くすりを煎るゐろり。白居易詩「一一有レ火丹應レ伏、雲碓無レ人水自舂」

【藥籠中物】ヤクロウノモノ　必用の人物といふ義。唐書、元行沖傳「行沖謂二狄仁傑一曰（中略）鼎鼐臚膊以供二滋膳一、參朮芝桂以防二疾疢一、門下充爲二旨味一者多矣、願以二小人一備二一一藥石一、可乎、仁傑曰、君正言——、不レ可二一日無一也」

【藥王】ヤクオウ　藥師如來。維摩經「佛告二天帝一、過去無量阿僧祇劫時、此有二佛號一曰二一一一」

【藥研】ヤクケン　圖藥を粉にする金製舟形の具。

【藥罐】ヤクカン　圖銅又は眞鍮にて作りしゆわかし。もと藥を煮るに用ひしもの。

【藾】リョウ　蒿（一六四〇頁一段）を見よ。詩、鄭風「葛一在一阪」‖茜・地血。

【藷】ルイ　圖　○かづら（藤）唐書「藷一而上」○あまちゃ（巨瓜）詩、周南「葛一藷之」

【藜】レイ　圖　○あかざ、葉は卵形にして縁に鋸齒狀のきざみあり、若葉を食用とす、莖の大にして生長せし者を杖とす。○蒸一レイ　はまびし。

【藜烝】レイジョウ　藜者不レ足レ與二大牢之滋味一、人は與に天下の大事を論じ難きに喩ふ。王褒、聖主得二賢臣一頌「夫荷レ諾被レ譴者、雖レ與道二純絲之異一、一」

【杖レ藜】ジョウレイ　あかざの杖をつく。杜

艸部（十五―十六畫）藹・譪・蘊・藹・藹・藹

（參別）「品ー」「ー鑑」

【藻繪】ソウカイ うつくしくかがやく。張協「雜詩」「綵幣ー」

【藻雅】ソウガ 文雅に同じ。黃汝良文「文人學士、ー奇芳」

【藻芳】ソウホウ もと、あさざと。宮和歌譜

「ー魚岡ー」

【藻飾】ソウシキ あやある文詞。王勃、採蓮賦「何平叔之神彩、潘安仁之ー」

【藻鑑】ソウカン 鑑識ノ職官分紀「所レ選士七十二人、多至三公卿一人、服二其ー」‖藻鏡。

【藻火】ソウカ 水藻と、火繡と、古人其の形を繡して服飾と爲す。書、益稷「ー粉米」

【藻體】ソウタイ 次條に同じ。史、平準書「終以ニー一爲二皮幣一直四十萬」

【藻彩】ソウサイ いしき、文采。梁元帝文「表若二聯環一文同ニー一」‖藻飾、藻潤。

【藻飾】ソウショク あやあるはね。陸機詩「金雀垂ニー一、瓊佩結二瑤璐一」

【藻潤】ソウジュン あやかざり。江總文「煙霞舒卷、五色成二其ー一」

【藻思】ソウシ 詩文の才。總書、那威傳「幼孤、早立二操尚一、博學有ニー一」

【藻飾】ソウショク ○容貌を美くしくかざる。晉書、裴康傳「美二詞氣一、有二風儀一、而士二木形骸一、不二自ー一」‖修飾。○文詞をかざる「文心雕龍」

【藻井】ソウセイ からくさを畫ける天井。俗通「今殿作二天井一、井者東井之象也、漢水中之物、皆所二以厭一火也」

【藻悅】ソウエツ 悅（梁上の短柱）即ちうだちに水草を畫がきて飾る。天子の宗廟の飾。字解參看。

【藻仗】ソウジョウ 五彩の儀仗。宋史、樂志「ー星陳、肆容金鼓」

【藻棲】ソウセイ 玉がけるむなぎ。王建詩「ー臨レ流啓」

【藻蘋】ソウヒン もと、うきくさと。梁武帝詩「舟楫互容與、ー相推移」

【藻文】ソウブン からくさのあやもやう。禮記「藻梲、畫二侏儒柱一、爲ニー一也」

【藻類】ソウルイ 水草の總稱、大別して綠色藻・褐色藻・紅色藻の三とす。

【藻鷹】ソウヨウ かざりてとぎみがく、修飾既瑩。南史、江夷傳「夷少自ー一、爲二後進之美一」

【藷】ショ 薯

藷（艸部十四畫）に通じ用ふ。

【藥】ヤク 葯

しべ（花の内心）「花ー」「金ー」「蘤ー」‖蕊（一六七七頁一段）

【蘇】ソス 囌 又穌に作る

○よみがへる、いきかへる、死して更に生ずる。○いこふ（息）困苦をのがれて休息する。孟、梁惠王「后來其ー」（后は君主）○とる（取）くさをかる、草を刈り取る。史、淮陰侯傳「樵ー後炊」○くさ（草）○流ルヽはふさ。○ー（ソ）は氣の索くる貌。又、恐懼して安んぜざる貌。又、躁ぎ動く貌。○熱帶地に産する木の名、すはう、絳色の染料とす。‖蘇木・蘇枋。○扶ー（ソ）は小木の名。○紫ー（ソ）は草の名、葉莖皆紫色、芳香あり、食用とす。○姑ー（ソ）は春秋の時、吳の邑の名、江蘇省に在り。○姓。三ー（ソ）は宋の文人ー洵と其の子の一軾ー轍と。

【蘇合香】ソガウカウ 蘇葉喬木、波斯國に産す、葉は掌狀を爲し、分裂す、長柄ありて互生す、樹皮中より膠を取る、これを——と爲し、以て藥に入る、蟲を殺すべし。

【蘇活】ソクワツ よみがへる。搜神記「晉武帝世、河間郡有二男女二人一許二配適一、舉而男從レ軍不レ歸、女家更欲レ適レ之、女不レ願レ行、父母逼レ之去、尋病死、其男戍還、至レ家哭レ之、女卽ー一」

【蘇公隄】ソコウテイ 蘇軾の築きし西湖の隄。升菴外集「東坡先生在二杭州一（中略）取二湖田一、積二之湖中一爲二長隄一、以通二南北一、則湖田去而行者便矣、隄成、杭人名レ之曰ー——」

【蘇秦】ソシン 戰國の時の縱橫家、洛陽の人、秦の惠王に說きて用ひられず、往きて燕・趙に說きて六國の合縱を策し、同盟して秦を拒がしめ、自ら六國に幷せ相たり、後、縱約は張儀の爲めに破らる。

【蘇頌】ソショウ 字は明允、老泉と號す、宋の眉州眉山の人、年二十七、始めて發憤して書を讀む、遂に六經百家の說に通じ、筆を下せば頃刻にして數千言を成す、至和中、二子軾・轍を携へ京に到る、翰林學士歐陽修、その文を見て之を愛し、以て晉誼も過ぎずと爲す、治平三年契す、年五十八、著すところ、嘉祐集全集あり。

【蘇軾】ソショク 字は子瞻、又號四方に遊學す、母程氏親ら授くるに書を以てす、弱冠にして博く經史に通じ、文を屬すること日に數千言なり、大理評事簽書に除す、軾爲る所の詩、忌諱に觸れ死に處せられんとす、神宗之を憐み、黃州團練副使を以て安置す、室を東坡に築き、自ら東坡居士と號す、哲宗の時、召還せられ、翰林學士・兵部尚書に累官す、卒する年六十、大節を贈り、文忠と謚す、著すところ東坡全集一百十五卷あり、軾の文、縱橫奔放、百世に雄視す、詩も亦飄逸にして不羈なり、餘て書畫に工なり。

【蘇生】ソセイ よみがへる。‖回生・更生・蘇活。

【蘇小小】ソセウセウ 錢塘の名妓の名。轉じて廣く藝妓の稱とす。吳地記「嘉興縣前有二晉妓一墓一」‖蘇小。

【蘇蘇】ソソ 氣のつくる貌。又、恐れて安んぜざる貌。又、躁ぎ動く貌。易、震卦「震蘇蘇」

【蘇息】ソク 苦をのがれていこひやすむ。書經「后來其蘇」傳「待二我君來一、其可二一一」宋史、陳良傳「陛與初與二金人一約レ和、天下忻然、幸得二一一」

【蘇長公】コソチヤウコウ 蘇軾（東坡）をいふ。長とは洵の長男にて轍の兄なるが故。

【蘇張舌】ソチヤウゼツ 蘇秦は六國の君に游說し、合從して秦に當らしむ。張儀は六國を連ねて秦に事へしむ。二人共に辯舌に長ず、よりて策士などの雄辯を稱していふ。杜甫詩「御假二一一、高談周宋鄭」

【蘇轍】ソテツ 字は子由、蘇洵の第二子にして軾の弟なり、年十九、父兄に隨ひ京師に至り、兄弟同じく進士の科に登り、歷進して倘書右丞と爲り、門下侍郎に遷る、徽宗位に即き、出でて永州・筠州に知たり、崇寧中致仕し、室を許に築き、潁濱遺老と號し、また欒城と號す、政和二年歿す、年七十四、文定と諡す、著す所ろ、老子解・古史・詩傳・春秋傳・欒城集あり、轍、性安詳高潔、文その人と爲りに似たり。

【蘇鐵】ソテツ 園觀賞用植物の一、椰頭に羽狀の葉を叢生す、性纖氣を好む。‖鳳尾蕉。

【蘇東坡】ソトウバ 蘇軾を見よ。

【蘇武】ソブ 字は子卿、漢の杜陵の人、武帝以て匈奴に使せしむ、至れば卽ち單于、之を降さんと欲す、武從はず、乃ち武を窖中に幽して、飮食を給せず、天雪ふる、武雪と毳毛とを併せ嚙みて、之を咽む、數日を經て死せず、匈奴以て神なりとす、乃ち武を北海上に徙して、羝を牧せしめて曰く、羝乳せば歸らしめんと、昭帝位に卽きて、武始めて還ることを得たり、匈奴に留ること十九年、始め壯きしとき强壯なりしも、還るに及びて、鬚髮盡く白し、宣帝立ちて關內侯を賜ふ、年八十餘にして卒す、形を麒麟閣に圖せしむ。

【蘇木】ソボク 蘇枋に同じ。

【蘇迷盧】ソメイロ 梵語、須彌山（シュミセン）の音譯。舊譯名義集「——、四城記云、唐云二妙高一、晉曰二須彌一」

【蘇門嘯】ソモンセウ 屐のすぐれたるうそぶき、晉の孫登の故事。晉書、阮籍傳「籍嘗於二蘇門山一遇二孫登一、與語二略終古一、及二栖神道氣之術一、登皆不レ應、因長嘯而退、至二半嶺一聞下其聲若二鸞鳳之音一者中、乎嶽谷一乃登之嘯也」

【蘇老泉】ソラウセン 蘇洵を見よ。

【蘇芳】スハウ 次條に同じ。

【蘇枋】ソバウ 熱地に產する喬木黃花を著く、材は楊弓などに作り、其の削屑は赤紫色の染料とす。南方草木狀「一一出二九眞一、南人以染レ絳」‖蘇方・蘇芳・蘇木。

【擽】タク 藥 ○おちば、かれは。詩、豳風「十月隕一一」○竹の皮。‖籜。

【躅】ドク 屋 一一活（ドククワツ）はししうど。‖獨活。

【躆】バク 陽 つとむ（勉）書、洛誥「汝乃是不一一」

【蘱】ヒン 眞 うきくさの一、根は泥中に莖延し、葉は四枚に分れ、田字の狀を成す、夏日、四瓣の小白花開く、萍の大いなる者、かたばみも、かつみ。詩、召南「于以采一一」‖田字草。

【蘱花】ヒンクワ うきくさのはな。柳宗元詩「春風無レ限瀟湘意、欲レ采二一一一不二自由一」

【蘱菜】ヒンサイ かたばみもと、もと。みづくさ。張九齡詩「一一生二南澗一」‖藻蘱。

【蘱蘩】ヒンハン うきくさと、しろよもぎと。左、隱三「苟有二明信一、澗溪沼沚之毛、一一藻薀之菜（中略）可レ薦二于鬼神一、可レ羞二于王侯一」

【蘱風】ヒンフウ うきくさの上を吹く風。吳樹琳詩「一一草雨晩霑蘿」

【蘱萍】ヒンヘイ うきくさ。沈約、郊居賦「其水草、則一一灰芝」

【蘱末】ヒンマツ うきくさの上。宋玉、風賦「夫風生二于地一、起二于青蘋之末一」陸贄賦「桂華不レ定、多因二一一之風一」

【蘺】磨の如くに讀む 一菌（コン）は菌類の一、わが椎茸に似たり、多く吉林に產す、而して寫古塔の產を以て美味とす（吉林志）‖蘑菰。

【蘼】ラ 麻 ○かげになる、おほふ（蔭）○くさよもぎ、蒿の屬。

【蘞】ラウ 豪 かわかしたる梅實。

【蘚】リン 震 ○る、苑の屬、水田に生ずる

草、葉は線狀を爲す、織りて席と爲す。‖燈心草。○姓、―相如は戰國の時の趙の上卿。○―石は城上の雷石、人に投すべきもの。漢書 顏師古注「具ニ―石ニ」

【蘺】レキ 齊

―芽はいぬなづな、形芹に似て味はわさびに似たり、食用とす。

【蘆】ロ 虞

○あし、よし、蘆の未だ秀でざる者「岸ノ―」「碧ノ―」○―菔ロはだいこん。‖蘿蔔。藥艏。○葫ノ―はふくべ（瓠）○―管クワンは藥草の一、蓋（典部十三畫）なる見よ。

【蘆葉】ロエフ あし。唐詩「夜來窗ニ―ノ、曉色明ニ西林ニ」

【蘆孝】ロカウ あしのめ。芽一に牙に作る。唐詩「蘆筍湧地ノ―短、正是河豚欲ノ上時」‖蘆筍。

【蘆草】ロサウ あしの生えたるさま。杜牧詩「煙彰徑ニ―ノ、潮長在ニ竹扉ニ」

【蘆笛】ロテキ あしの洲に下れるかり。陳造詩「聞道崔公作ニ―ノ、端如莊舄玩ニ仲魚ニ」

【蘆花】ロクワ あしのはな。江總詩「―ノ留ニ外白、楓葉水前丹」

【蘆灰】ロクワイ あしのはひ。淮南子「女媧積ニ―ノ、以止ニ淫水ニ」

【蘆花之窮】ロクワノキウ あしの穂のわたの如きもの。孝子傳「閔子騫、事ノ親孝、後母生ニ二子ノ、衣ニ之蘆ノ、衣ノ寒以ニ――ニ」‖蘆絮。

【蘆管】ロクワン あしの葉を卷きたるふえ。李益詩「不ノ知何處吹ニ―ノ、一夜征人盡望ノ鄉」‖蘆笛・胡笳。

【蘆洲】ロシウ あしのあるす。盧九皐詩「別延緡ニ柳岸、征棹入ニ―ニ」

【蘆筍】ロシュン あしかび、あしの根に生ずる筍に似たるもの。張籍詩「南塘水深ノ―ノ齊」‖蘆笋・蘆芽。

【蘆錐】ロスイ あしのめばえ、尖りて錐に似る故。元稹詩「冰泊田地ノ―短、春入ニ枝條ノ柳眼低」‖蘆芽。

【蘆石】ロセキ 鐘乳石の異名。

【蘆雪】ロセツ あしの穗の雪の如く白きをいふ。王良臣詩「風旋飛來更灑ノ―、一枝ノ―印ニ波心ニ」

【蘆中人】ロチウノヒト あしの中の人。吳越春秋「伍子胥奔ノ吳、至ノ江、漁父渡ノ之、見ニ子胥有ニ飢色ニ、曰、吾ノ子取ノ鉤、子胥乃潛ニ身深葦中ニ、有ノ頃父來、呼ノ之曰、――、――、豈非ニ窮士ニ乎」

【蘆汀】ロテイ あしの生えたるみぎは。閻選詩「蘆ノ―月未ノ生」‖蘆渚。

【蘆荻】ロテキ あしと、をぎと。司空曙詩「―ノ―湘江水、蕭蕭萬里秋」

【蘆笛】ロテキ あしぶえ。黃滔詩「我郎解來得ニ小婦ノ―ノ、聲聲吹ニ訛調ニ」‖蘆笳・胡笳。

【蘆簾】ロレン あしにて編みしかき。幽棲詩「―ノ蓬戶臥ニ黃昏ニ」

【蘆菔】ロフク だいこん。‖蘿蔔。一說に薺ナヅナの根。

十七畫

【蘢】ロウ 東 ㊀いぬたで、おほけたで（馬蓼）○草木のしげりおほふ貌「葱ノ―」㊁―茸ロウジョウはあつまれる貌。

【蘢茸】ロウジョウ 聚まれる貌。司馬相如、大人賦「攢羅列聚、蘢以ノ―兮」

【蘢從】ロウジウ あつまりあふ。淮南、俶眞「窮窈ノ―」注「―、聚會也」

【蘞】ア 侯 ―蔓はえびづる、のぶだう、野生の蔓草、葡萄の一種、實は小にして酸味を帶ぶ（「本草」）‖蘞舌・山葡萄・野葡萄。

【蘤】キ 紙 はな（花）華が榮える「花ノ―」「紅ノ―」「珍ノ―」「落ノ―」

【蘞】レン 先 しげる、おほふ、草木の盛んに茂る貌。

【蘞香】レンカウ しげりおほふ。孫子「蘞度林木ノ―」‖聯香。

【蘞】レン 霰（四〇八頁一段）に同じ。

【蘚】シャウ 陽 ○―鮮はすべりぐさ、てんもんどう。○治ノ―はからよもぎ、菊の異名。○蕭に同じ。

【蘧】キョ 魚 ○―然は形ある貌。又、自得の貌。○―然は驚く貌。‖瞿然。○―廬はたごや。莊、天運「仁義先王之ノ―廬也、止可以一宿而不ノ―以久處」‖傳舍。○―麥はなでしこ。‖瞿麥。

【蘧蘧然】キョキョゼン 形ある貌。又、自得の貌。莊、齊物「昔者莊周夢爲ニ胡蝶ノ、栩栩然胡蝶也、俄而覺、則――周也」

【蘧麥】キョバク 瞿麥に同じ、なでしこ。

【蘧伯玉】キョハクギョク 名は瑗、伯玉は字、衛

の賢大夫、靈公に仕ふ、孔子衛に至りし時、其の家を主とす。淮南、原道「——年五十、而有二四十九年非一」

【蓮】ケツ 屑 蠶に同じ

○きりかぶ、木を斫り倒したるあとのかぶ。○ひこばえ、きりかぶより生ぜししんめ「由ー」「萌ー」

【蘘】ジャク 陽

ーはめうが（茗荷）蘘荷に似たる菜、高二三尺、根より瞬ぶの苞ある白花を生ず。

【蘇】セン 魚

こけ（苔）陰地に生ずる苔の一種「苔ー」「蒼ー」「緑ー」＝垣衣。

【蘇屋】こけの生えたるがけ。

【蘇岸】苔のはへたるきし。方干詩「ー和二風草一松泉濺二浸沙一」

【蘇花】こけのはな。曉鳥詩「氣濕蘇綿機、蘚爛ー一階」

【蘇衰】こけのあと。可止、哭二置鳥一詩「暮雨滴二神字一、年年添二ー一」＝蘇斑・蘇蕨。

【蘇繡】こけの生えたるかき。李建勳、新竹詩「遇去侵二花地一、斜來疎二ー一」＝蘇垣。

【蘇苔】こけ。孟郊詩「古衣如二ー一」＝苔蘇。

【蘇理】こけの生えたる石段。陸游詩「ー一高學不レ計レ程」

【蘇斑】こけの石上に生じて斑を成すもの。胡嶷賦「掃二ー一一而來二古跡一兮」

【蘇】ソ 虞（九九三頁一段）の俗字。

【蘩】ハン 元

しろよもぎ（蓬蒿）ノ春生ず、食ふべし「頻ー」詩、周南「于以采ー」

【蘩縷】はこべ。＝蘩蔞・蘩縷。

【蘧】ビ 支

ーは香草の一、をんなかづらのなへ、芎藭の苗。＝薇蕪。

【蘭】ラン 寒

○香草の一、葉は細長く平行脈を具へ、根より叢生す、春日黄緑色の花開く、一莖一花にして香多きものはー、一莖數花にして、香少きものは蕙。琴操「爲王者香」秋、花開くものを建ーといふ、福建省に産するが故。○木ーは喬木の一、あららぎ、いちゐ、其の材は緻密にして紅色を帶ぶ。＝杜蘭。○玉ーは花の名、花は九瓣にして色白く微碧、春開く。○かたなかけ、やりかけ（兵架）○横に通ずる血脈。○姓。○まだら、爛に通ず。○ー省は尚書省。ー臺は御史臺の異稱。○ー若は佛寺。○和ー國の略稱「ー學」「ー書」○可ーは回敎の經典。

【蘭英】らんのはな。魏文帝文「俯折二ー一、仰結二桂枝一」

【蘭橈】木蘭にて造りたるかぢ。屈原、九歌「桂棹兮ー一」＝蘭槳・蘭楫。

【蘭殿】美くしき奥御殿。又太子の宮廷。鄭正一詩「桂宮初服晃、ー一早升レ羣」

【蘭晩】らんをうゑたるはたけの畷。「既滋二蘭之九畹一兮、又樹二蕙之百畝一」＝蘭畹。

【蘭艾】らんと、よもぎと。君子（蘭）と小人（艾）とに喩ふ。任昉文「火炎崑岡、神嶽崩潰、ー一同焚、玉石俱碎」

【蘭交】心を同くするまじはり、蘭の香の美くしきに比す。易、繫辭「二人同レ心、其利斷レ金、同レ心之言、其臭如レ蘭」李嶠詩「ー一棄二北堂一」＝蘭契。

【蘭膏】よき香の油。楚辭、招魂「ー一明燭、華容備設」

【蘭客】良友をいふ。活虞舟賦「ー一方來、蕙坐斯至」

【蘭學】圖和蘭國の學問。

【蘭氣】らんのかをり。張正見詩「風移ー一入、月遠二桂香一來」＝蘭香。

【蘭菊】らんと、きくと。李嶠、秋色賦「惟ー一之芬芳與二松筠之茂密一」

【蘭姜】らんのよきかをり。皓首王文「常山王之玉潤金聲、博望侯之ー一桂馥」＝蘭芬・蘭馥。

【蘭契】蘭交に同じ。

【蘭徑】らんをうゑたる園のこみち。草應物詩「晴蜂飄ー一、遊蜂遶二花心一」

【蘭畦】らんをうゑたるはたけ。徐貴詩「水鶴晴時行二麥隴一、園蚕晩處識ー一」＝蘭畹。

【蘭閨】○皇妃の御ねま、班固の西都賦「後宮則被庭、椒房、后妃之室、蘭林、蕙草、披香發越」とあるに本づく。後漢書、后妃傳贊「班二敧ー一、宜二椒房一」＝蘭省。○婦人の美くしきねや。王勃詩「自有ー一數十重、安知檐霤三千里」＝蘭房・香閨。

【蘭薰】かをりぐさ。蕙も蘭の一種。字解參看。後漢書、趙壹傳「被レ褐懷二金玉一、ー一化爲レ塵」

【蘭交】互に氣味の相投ずることば、晉書王文「推ー一於斷金一、効二蓬心於蘭石一」蘭交參看。

【蘭語】ラン 和蘭オランダ國の言語。
【蘭摧玉折】ランサイギョクセツ らんがくだけ玉が折れる。名士又は佳人などの死をいふ。世說、言語「毛伯成既負其才氣、常稱、管・葛ニ――ニ、不レ作二蕭數文一」
【蘭藻】ランサウ 文章の美くしきに喩ふ。謝靈運詩「清暉發ニ――一」
【蘭芷】ラン 蘭も芷も皆香草、轉じて賢人美女などに喩ふ。後漢書、馮衍傳「播ニ――于中庭一兮」說苑「鮑魚ニ――不二同レ襟而藏一」
【蘭舟】ラン 木蘭ラランにて造りたる美くしきふね。謝士隆詩「桂權ニ――兮、泝洄翱翔」
【蘭臭】ラン 氣味の相投ずるをいふ。倪謙文「心學氣以ニ――一号、結二新盟于儀鄭一」
【蘭秀菊芳】ランシュクキクハウ らんと、きくとのかをり。漢武帝、秋風辭「蘭有レ秀兮菊有レ芳」
【蘭室】ラン 蘭香の室、善人の居所にいふ。王融、善友奨勸篇頌「――改レ蓬心、梅屋變二伊草一」
【蘭省】ラン 圖○四竺にて人を譽める語。朱子語錄「王導――レ相、只圖二說人二過一生一、管仲奢二三歸一、攘二人一國一、只稱レ賢、獨不レ及二四傑一、徐詞レ倍曰、――レ」○てら。‖蘭若。
【蘭書待】ランショタイ 圖奈良の東大寺正倉院御藏の名香、聖武天皇の命名、此三字中に東大寺の三字を含む。
【蘭鮮】ラン 名香の名。晉書、石崇傳「崇婢妾數十人、皆蘇ニ――一、被二羅穀一」
【蘭省】ラン ○尚書省の異名。白居易詩「――花時錦帳下、廬山雨夜草庵中」○皇妃の御ねま。‖蘭閨。
【蘭槳】ランシャウ 木蘭にて造りたるかぢ。李嶠詩「渾葉泊ニ――一、林花拂二桂旗一」‖蘭棹。
【蘭書】ラン 圖和蘭オランダ語の書物。
【蘭燭】ラン 美くしき燭臺。陳橋文「秉ニ――一以命レ客、慕二四園之夜遊一」‖蘭燈。
【蘭蕙】ラン ○らんと、はせを。善きものと、あしきものとに喩ふ。釋無可詩「猿鶴同レ枝宿、――夾レ道生」○だんどくさう。‖蘭草。
【蘭橈】ラン 蘭槳に同じ。梁簡文帝詩「桂櫂ニ――浮二碧水一」
【蘭石】ラン 蘭の芳香と、石の堅實と、節操の高きに喩ふ。三國志、注「生有ニ――之姿一」
【蘭菱】ラン らんのくさむら。楊巨源詩「會看春露滿ニ――一」
【蘭臺】ラン ○楚王の宮殿の名。宋玉、風賦「楚襄王遊二于ニ――之宮一」○後漢の世の官名。後漢書、百官志「――令史六百石」注「掌二奏及印工文書一」○漢代の帝室の文庫。後漢書、王允傳「悉收二敵ニ――石室圖書一以從」○御史臺の異名。
【蘭湯】ラン らんの香を入れて沸したるふろ。歲華紀麗「大戴禮云、午日以ニ――一沐浴」
【蘭櫂】ラン 木蘭にて造りし船のかい。隋煬帝詩「泛泛輕搖ニ――一裡、沈沈寒影上二仙宮一」‖蘭槳。
【蘭魚】ラン 圖金魚の一種、體短くして圓く、頭底くてし短く、背鰭なし。
【蘭亭殉葬】ランテイジュンサウ 唐の太宗が王羲之の書せし蘭亭帖を愛し、遺命して共に棺中に入れて葬らしめたる故事「書聖」
【蘭亭會】ランテイクワイ 晉の穆帝の永和九年春三月三日に、當時の名士四十一人、會稽山陰の蘭亭（浙江省紹興縣の西南二十七支那里に在り）に會し、曲水に觴を流して、禊事を修め、皆詩を賦し、王羲之これが序を作る。孟浩然詩「不レ及ニ――一空吟二被謨詩一」
【蘭田】ラン らんのはたけ。張協賦「倍二畹重滋、稅三畝ニ――一」‖蘭苑・蘭畹・蘭畦。
【蘭燈】ラン 美くしき燈籠トウロウ。齊書、謝超宗傳「賜二宝字留レ光、――有レ時不レ照」‖蘭紅。
【蘭若】ラン てら、寺院。阿――の略。釋氏要覽「梵言阿――、唐言二無諍一」杜甫詩「――山高處、遠隔障幾重」
【蘭梅】バイ 蘭と梅と。瑯嬛記「曾夫人性喜ニ――一、下レ筆精妙、不レ讓二水仙一」
【蘭芳】ラン 蘭の芳ばしき香。宋書、樂志「濟濟多士、同二契ニ――一」‖蘭芬。
【蘭餐】バン ○清くかんばしきへや。阮籍詩「仙者四五人、逍遙宴ニ――一」○婦人の美くしきねや。劉孝綽詩「日暗人聲靜、微步出ニ――一」
【蘭芬】ラン らんのかをり。瑯都賦「信陵君之名、著ニ――一」‖蘭香・蘭芳・蘭馨。
【蘭圃】ラン 蘭を栽ゑたるはたけ。舊唐書、音樂志「桂筵開二玉俎一、――薦二瓊芳一」
【蘭陵美酒】ランリョウビシュ 蘭陵（江蘇省武進縣）にて造りたるよきさけ。李白詩「――鬱金香、玉椀盛來琥珀光」
【蘭陵王】ランリョウワウ 舞樂の名。北齊の――長恭が五百騎を率ゐて周の師を金墉城下に擊破せし狀を象る。蘭陵は春秋時代楚の邑、今の山東省嶧縣の東の地。‖羅陵王・陵王。
【蘭露】ラン らんのつゆ。陳昔賦「羣鳳――一沐レ我以二芳馨一」

【鼓】レン 圖 鼬

○藜草の一、やぶからし、ぴんぱっかづら。葉は五六裂し、夏四瓣の淡紅色の小粒花をむらがりつく、根莖を藥用とす。‖莟。○白――は藥草、やまかがみ。

十八畫

【蘺】グヮ 書 連ーはいたちぐさ、枝は蔓狀を爲し、春日、黃花を著く。‖連翹皐蓮子。

【豎】ホウ 東 かぶら（蕪青）‖封。

十九畫

【藤】サン セン 寒 ひたす、物を以て水に沾す、影が水にうつる。庾信賦「黛ー油檀ニ」

【藿】セイ サイ 霽 又、靉に作る ○なます。細かに切る、あへもの、種種の味を合せ調へたる料理。○鹽づけの菜。【藜藿】詩 粟食をいふ。朱松詩「讀書有味ー好」

【蘼】ビ 支 ○てんもんどう「薔ー」○蕪菁は川蘇カラナのなへ。古詩「上山采ー蕪」

【蘿】ラ 歌 ○つた、かづら「女ー」「蒿ー」「綠ー」○つのよもぎ（我蒿）○蔦ハはすずしろ、だいこん。‖菜醸蔥服。○海ーカイは海の藻。【蘿衣】イさるをがせ。‖女蘿・松蘿。【蘿徑】ケイつたのしげりたるこみち。林逋詩「片月通ニー一、幽雲在ニ石林ニ」【蘿月】ゲツつたにかかれる月。沈佺期詩「夕臥深山ー一春」【蘿軒】ケン つたかづらのからめるのき。孟浩然詩「昔聞春泉滿、ー一夜月閑」【蘿窗】ラつたのからめるまど。宋元詩「ー一月自明」【蘿簾】ラつたかづらのからめる竹やぶ。方干詩「雨樹窈冥ー一陰」【蘿磨】トク つたのからみたる石だんのみち。陳詩詩「ー一靜鎖雲共通」【蘿蔔】フクだいこん。‖羅勒・蔥薤・菜蔬。【蘿蔔】フク 前條に同じ。【蘿蔔】フク ががいも。山野に自生する宿根草本、葉は先端の尖れる楕圓形にして對生し、夏、紫色の小花さく、莖・葉共に白汁を出す、實の長さ二三寸、長毛を有す、採りて絹の代用とす。【蘿蔓】マン つたかづら。盧綸詩「松高ー一輕、中有ニ石牀平ニ」

【蘺】リ 支 ○まがき、かき、かこひ（籬）‖籬。○川芎キュウのなへ。‖江蘺・蘼蕪。

廿一畫

【藥】ルキ 紙 かづら。‖蔦。

【藥】㊀ルキ ㊁ラ 歌 支 ㊀かづら、草木の蔓。㊁ふご、もっこ、土を運ぶかご。孟、滕文公「反ニ一埋ニ而掩之ニ」（埋ももっこ）

【蘺】蘆（本頁一段）に同じ。

虍部

【虍】コ 虞 ○あや、虎の皮の文ニ。○圖カラ 漢字構造の稱。

二畫

【虎】コ 虞 ○とら、猛獸の一、猫に似て體六尺餘、皮は黃色にして黑條の斑文あり、坐褥と爲すべし。○借りて勇猛・威武・暴虐・猛惡などの意とす。史、孟嘗君傳「秦ー狼之國也」○ー子はおまる（便器）ーの子の形に象りて作りし故。○琥に通ず「ー珀」【虎威】コ とらの威勢。‖國策「狐假ニーー一」【虎闕】コ 國子監の異名。‖隋書「ーー一調ニ鳴鏑之音ニ」【虎斑】ハン 殼に虎の斑の如き文あるかに似る。‖嶺表錄異「ーー、殼上有ニ虎斑ー一、可ニ裝爲ニ酒器ー一、與ニ紅螺ー一皆產ニ瓊崖海邊ー一、雖ニ非ニ珍奇ー一亦不ニ易ー一得也ニ」【虎賁】コホン 猛き將兵の稱。魏志、武帝紀「戰良久、乃縱ニーー一突撃大破レ之」【虎眼】コガン 眼病の一、トラホームの俗稱。【虎魚】コギョ をこぜ、ふぐに似て醜き海魚。‖鯃。【虎牓】コボウ ○とらの如くうづくまる。‖博物志「其人ーー而髭趾」○地勢の雄大なるにいふ。李白詩「龍蟠ーー帝王州」○怪石の形容。王劭、遊ニ北山ニ賦「石當ニ階而ーー」【虎搏】コハク とらの如く強くたてこもる。‖魏志、常林傳「今主上幼沖、賊臣ーー、聚夏實擾、雄才奮用之秋也」【虎薊】コケイ おにあざみ。‖馬薊。【虎溪三笑】コケイサンショウ 慧遠法師、廬山の東

林寺に居り、足未だ虎溪を渡りしことなかりしに、一日、陶淵明・陸修静の二人を送りつつ共に語りて道合し、覚えず虎溪を渡り、虎の嘯くを聞きて心づき、三人相顧みて大笑せりといふ。虎溪は江西省、九江府なる廬山の東林寺の前に在り（廬山記）

【虎穴】コケツ　とらの住むあな。おそろしき地に喩ふ。後漢書、班超傳「不レ入二虎穴一、不レ得二虎子一」

【探二虎穴一】タンコケツ　虎の穴をさぐる。甚だしき危険をおかすに喩ふ。吳志「呂蒙曰、不レ探二虎穴一、安得二虎子一」【不レ入二虎穴一不レ得二虎子一】コケツニイラザレバコシヲエズ　危険を冒さざれば、奇利を得ざるに喩ふ。虎穴参看。

【虎圏】コケン　虎を養ふ所、圏はをりの史、張釋之傳「從行登二虎圏一」

【虎口】コウ　甚だおそろしきこと、又は其の場所に喩ふ。莊、盜蹠「疾走料二虎頭一、編二虎鬚一、幾不レ逃二虎口一哉」

【虎子】コシ　〇とらのこ。虎穴を見よ。〇おまる、便器。西京雜記「漢朝以二玉唾壺一、以爲二便器一、使二侍中執一レ之、行幸以從」〇圖俗に大切なる物に喩ふ。

【虎耳】コジ　ゆきのした、葉は圓く心臓形にして初夏一尺許の細き花莖を出し、小白花を著く。本草集解「一生二陰濕處一」

【虎児出二於狗一】コジイヌヨリイヅ　虎児がをりの中より逸し出るは、守る者の不注意による。児は野牛。論、季氏「——、龜玉毀二於櫃中一、是誰之過與」

【虎視眈眈】コシタンタン　とらの目を張りて、下視する如く威嚴ある貌。眈は目に從ふ。耽とは異り。易、頤卦「——、其欲逐逐」

【虎臣】コシン　勇武なる臣。詩、大雅「矯矯——、在レ泮獻レ馘」

【虎鬚】コシュ　〇とらのひげ。莊、盜蹠「編ニ——一」（編は結）〇とらのひげの如くこわきひげ。〇蓬心草の異名。

【虎脯】コホ　とらの皮のしきもの。玉篇「安二茵——一」

【虎噬】コゼイ　虎がかみつく。

【虎視】コシ　英雄の志を得て活躍する形容。北史、張定和傳「——風生、龍騰雲起、英賢奮発、亦各因レ時」李白詩「子房未二——一」

【虎跡】コセキ　虎の足あと。草廳物詩「深林疲望倦、沮洳——新」‖虎迹。

【虎鬚】コシュ　とらひげ。

【虎韜】コトウ　太公望の著なりといふ兵書の六篇の一篇、とらのまき。

【虎鈕】コチュウ　とらのかたちをきざみたる印のつまみ。（揭斯「皇帝六璽皆玉螭一一」（鈕は印章）

【虎杖】コジョウ　いたどり。宿根草、春、新芽を生ず、煮て食ふべし、根を藥用とす。

【虎擲龍拏】コテキリョウダ　英雄の互に戰ふに喩ふ。李賀、龍夫詩「——王伯事、天荒地老古今情」王伯は王覇。

【虎頭】コトウ　頭の形の虎首に似たるもの。威ありて貴くなる相。後漢書、班超傳「相者曰、生燕頷——、飛而食レ肉、此萬里侯相也」

【虎榜】コボウ　選士及第の人の姓名を掲示する木札。虎は俊才に喩ふ。唐書、歐陽脩傳「皆天下選、時稱二龍一——」

【虎魄】コハク　松樹の脂の永く地中に埋もれて石に化したるもの。吳子、註「俟聞——、不レ取二腐芥一」‖琥珀。

【虎斑】コハン　とらのまだら。縫書、運筆傳「——龍文」

【虎皮】コヒ　とらのかは。揚子、吾子「羊質而——、見レ草而悦、見レ豺而戰」‖羆皮。

【虎皮下】コヒカ　虎の皮の敷物の下。手紙の宛名の脇付、主に學者に用ふ。

【虎狼】コロウ　とらと猛きけもの。書、牧誓「尚桓桓、如レ虎如レ貔、如レ熊如レ羆」‖虎貔。貔虎。

【虎尾春氷】コビノシュンピョウ　危險なることをなす喩。易、履卦「——、不レ咥レ人亨」書、君牙「踏二虎尾一、渉二于春冰一」

【虎符】コフ　銅虎符の略、銅にて虎の形に作りし兵符。史、信陵君傳「得——一奪二晉鄙軍一」同、蒙文紀「初與二郡國守相一爲二銅——一、有レ伸符」蘇軾、表忠觀碑銘「金券玉牒、——龍節」‖兵符。

【虎吻】コフン　とらのくちもと。轉じて人を害する相貌。又、其だ危險なることに喩ふ。漢書、王莽傳「有レ所二方技一待詔黃門一者、或問以二幷形貌一、待詔曰、幷所レ謂瞻目——射狐之屬者也、故能食レ人、亦當二爲レ人所一レ食」

【虎豹】コヒョウ　〇とらと、ひょう。共に美しき文采ある皮を有す。論、八佾「——之鞟、猶二犬羊之鞟一」〇虎豹の形せし岩などの形容。後漢竇融「據二——一」〇強基なる者に喩ふ。王安石、贈二孟嘗君傳一「殿二於——之衆一」

【虎豹豈受二犬羊欺一】コヒョウアニケンヨウノアザムカンヤ　虎豹は君子に喩ふ、犬羊は小人に喩ふ、君子は小人の侮を受くることなしとの喩。故事成語等「君子不レ受二小人之侮一」‖虎豹豈受二犬羊欺一」

【虎豹之駒】コヒョウノク　虎と豹との子、駒は二歳までをいふ。尸子「——、能不レ咸レ文、已有二食レ牛之氣一」

【虎皮】コヒ　とらの皮の斑文の如く明かにかはる。易、革卦「大人——、其文炳也」‖豹變。

【虎歩】コホ　威武をいふ。三國志、夏侯淵傳「——二隅右一、所レ向無レ前」

【虎賁】コホン　勇士をいふ。賁は奔、虎の

如くはしる義。孟、盡心「―一三千人」‖虎奔。

【虎鷹】コヨウ 虎豹を捕ふるおほたか。隋志「―能飛捕二虎豹一、大如レ牛、翼廣二丈一」

【虎冠更】コカンコウ 虎につばさをつけたる如き役人、殘忍なる酷吏(蘇軾、再上二神宗一書)

【虎列刺】コレラ 恐るべき傳染病、英語の音譯。‖虎疫。刺一に拉とも書く。

【虎狼】コラウ とらと、おほかみと。貪欲殘忍にして厭くことを知らざる者に喩ふ。漢書、鄒陽傳「是以烏獲之弱二而乎二一敵一也」

【虎狼之國】コラウノクニ 貪欲にして厭くことを知らざるくに。史、蔡澤傳「夫秦、―――也、有レ呑二天下一之心一」

【虎落】モガリ 虎を防ぐ垣、落は垣。屋外のかき(外籬)何遜詩「―一夜方疑」

【虓】虎類の狗 イヌニニタルケモノ 凶悪の人に喩ひ卻つて輕薄に陷るに喩ふ。後漢書、馬援傳「戒二兄子嚴敦一曰、龍伯高敦厚周慎、吾願二汝曹效一之、杜季良俠好レ義、吾不レ願二汝曹效一之、效二伯高一不レ得、猶爲二謹敕之士一所謂刻レ鵠不レ成、尚類二鶩者一也、效二季良一不レ得、陷爲二天下一輕薄子一所謂畫レ虎不レ成反類二狗者一也」

【虓】虎に同じ。〇虓に同じ。〇虓に同じ。物事の奥儀絶妙。又、其の書付。

【虓】虎の子。

【虓】虎の子。

【虓】虎の子

【虎】 ㊀シ ㊁チ 紙 支

㊀―祁は春秋の晉の平公の築きし宮の名、其の故址は今の山西省絳縣の南に在り。㊁祁―は齊しからざる義。

五畫

【虐】 虚（次畫）に同じ。

【虖】 コ 虞

○ああ（歎聲）「嗚―」漢書、武帝紀「嗚―何施而臻此歟」＝呼。○―沱は川の名、山西省に發源す。＝滹沱。○虎ほゆ。○や、か、乎の古字、疑問。又、反語の辭。漢書、汲黯傳「寧令従欺承意、陷主于不義―」

【處】 ㊀ショ・ソ 語 ㊁ショ・ソ 御 又、処に作る。處は俗字

㊀なら（居）すむ（住居）「巷―」「巖―」韓詩外傳「巖居穴―」○仕官せずして家に居る「出―進退」○おく、其の所に住居せしめる。通鑑、梁武紀「魏立永明寺、以―沙門」○とどむ。とどまる（止）おちつく、やすんず（安）左、襄四「民有―幾廟」疏「有茂草、各有―欲」―○さだむ。さだまる（定）晉語「蚤―之」○おもむく（歸）○わかちさだめる。○きりもりす「―分」「―事」「―置」制する。左、文十八「德以―事」○治む、刑にあてる「―刑」晉書、食貨志「雖―以嚴刑、而不能禁也」㊁ところ（位置、場所）史、五帝紀「遷徙往來無常―」○㊂雖も、然るにの意「―最難堪」

【處】 虚（次畫）に同じ。

【虔】 ケン 先

○つつしむ（敬）「―敬」○かたし（堅）「―劉」○ころす（殺）「―殺」○うばう（奪）「―奪」○うれえる（憂）「―憂」○ほしいまま（縦）「―縦」○あな、すきま（孔竅）○そなえる（備）「―備」○つつしみ（敬）○姓。

【虔劉】 ケンリウ 殺害。

【虔誠】 ケンセイ 敬虔誠實。

【虔恭】 ケンキョウ 敬虔恭謹。

【虔敬】 ケンケイ 敬虔。

【虔肅】 ケンシュク 敬虔肅然。

【虔修】 ケンシュウ 敬虔修行。

【虔祈】 ケンキ 敬虔祈禱。

【虔禱】 ケンタウ 敬虔禱祈。

【虔誦】 ケンショウ 敬虔誦讀。

【虔奉】 ケンホウ 敬虔奉行。

【虔守】 ケンシュ とどまりまもる。るすやく。孟、告子「季任爲二任―一」＝居守・留守。

【處所】 ショショ ありどころ。史、晉世家「一蛇獨怨、終不レ見二―一」

【處處】 ショショ ○ところどころ、諸處。雍陶詩「村國門巷多相似、―春風恨殺花」○ありどころ。佛法正宗記「遠離云、衆人長迷二―一」＝處所・居所。

【處暑】 ショショ 二十四氣の一、立秋の次、白露の前に來る氣節、八月二十三日頃。

【處世】 ショセイ よわたり。李洞詩「―堪レ防又堪レ拙」

【處靜】 ショセイ 心を安靜の境におく義。佛家七識「有レ事無レ事、常若二無心一レ處レ喧、其志惟一」

【處斷】 ショダン とりさばきて決する。晉書、王導傳「不レ宜二刑名一―一明允」

【處置】 ショチ それぞれ宜しきやうにとりはからふ。李衛公問對「番漢之兵、如何―一」＝處理。

【處女】 ショジョ 未だ嫁せざる女。孫子、九地「始如二―一、敵人開レ戸、後如二脱兎一、敵不レ及レ拒」＝處子。

【處方】 ショホウ 病に應ずるくすりの配劑。―箋は其の書附。

【處罰】 ショバツ つみにあてる。＝處刑。

【處分】 ショブン ○とりはからふ、處置する。古詩、「―適二兄意一、那得二自任專一」○官吏の違犯を懲戒するにいふ。

【處辦】 ショベン 宜しきやうにとりあつかふ。＝處理。

【處民】 ショミン 人民を分ち住まはす。國語「晉聖王之レ―也、擇二瘠土一而處レ之」

【處務】 ショム 事務を處理する「―細則」

【處約】 ショヤク 困窮の境遇にをる。論、里仁「不仁者不レ可二以久一レ―」

【處理】 ショリ 事を處分しをさめる。

【虙】 フク 屋 虚（前條）の俗字。

【虚】 キョ 魚 **六畫**

○むなし、から（空）中味が無し「空―」「盈―」盈、又は實の對。○むなしくする、からにする「―心」○よわし「―弱」○ほしいまま（縦）○あな、すきま（孔竅）○そなへなし、敵のす

【虞】 虚（次畫）に同じ。―氏は伏羲。○宓（四九〇頁二段）に同じ。―妃は洛水の神。＝宓妃。

きまの竹子「釋賓而攻」〇そら、こくう「一空」「太一」「碧一」蘇軾、赤壁賦「馮ー御ー風」〇むき、くらゐ（方位）〇いたづらに、ただに、むなし。〇うそ（僞）「一邪」そらごと「一言」〇地名。〇とみて、二十八宿の一、北方の星宿。〇大いなるをか（大丘）古、墟に通ず。

虛誕 うそいつはり。王僧孺詩「及ー綺靡空無、方知悉ーー」

虛僞 うそいつはり。〓虛妄。

虛器 〇用に立たぬもの。左傳「仲尼曰、臧文仲其不知者、三作ー！」〇其の實なくして名義ばかりのもの「擧ーーこは君主の位あれども實權なきをいふ（後漢書、和熹鄧后紀）

虛氣平心 氣をしづめ、心を平らかにす。管子、版法解「ーーー、乃生惡言」〓虛心平氣。

虛欵 心にもなきうはべのうやまひ。孟郊詩「賢人多二安排一偷士多ーー」

虛偽貨賣 互に虛實の評價を盡してあひ賣ふ。

虛屋 わだかまりなきこころ。杜甫詩「一見耐ー座、ーー只愛レ才」〓虛心。

虛言 うそ、眞實ならざることば。老子「古之所謂、動則全者、豈ーー哉」〓虛說。

虛詐 うそいつはりのことば。史、鄒陽傳「臣聞、忠無レ不レ報、信不レ見レ疑、臣常以爲然、徒ーー耳」〓虛言。

虛控 むだに弓をひく。王粲文「鼓不二ーー一、矢不二徒往一」

虛構 無根のことをかまへてこしらへる。

虛左 尊位をむなしくあけて、賢者を待つ義。史、信陵君傳「說酒大會二賓客一、坐定、公子從二車騎一、ーー自迎二侯生一」

虛士 其の實なくして空しく名を成す士。北史、薛道衡傳「名下固無ーーー」

虛字 漢文にて助詞、形容詞として用ふる字。名詞を實字といふの對。

虛辭 うそ、そらごと。鄒陽文「此不レ可下以ーー借上也」

虛舟 積物をのせざるからのふね。易經、疏「以二忠信一而濟レ難、若下乘ーー一以涉中川也」〓虛船。

虛日 其の事のなき日。

虛實 〇そなへのあると無きと。唐書、王忠嗣傳「乃發二木剌山一、據ーーー」〇うそと、まことと。〓虛僞。

虛室生レ白 すきまより日光がさし入りて自し。心を空しくするときは純白自ら生じて福あるに喩ふ。莊、人間世「ーー、吉祥止止」

虛心 〇心をむなしくす。莊、漁父「得聞二聖教一、敢不ーーー」〓虛懷。〇私意妄想などのなき心。管子、九守「ーー平意」

虛弱 〇むなしくよわし。後漢書、任光傳「勢力ーー」〇からだがよわい。

虛愛 己をむなしくして人の言をきく。晉書、禮志「君子ーー、心無二適莫一」

虛所 席中の交易場、商起地方の方言「柳宗元、童區寄傳」〓野市。

虛徐 〇容止のゆったりとして都雅なる貌。閑雅「其虛其徐、威儀容止也」〓虛邪。〇ゆるやか（舒緩）杜牧詩「公步ーーー」〇狐疑する、躊躇賦、承二靈詔一其ーー兮」

虛飾 みえ、うはべのかざり。

虛勢 〓虛威に同じ。

虛靜 心にわだかまりなくしづか、老莊の唱へたる倫理說。漢書、翼奉傳「陛下明聖、ーー以待レ物」北史、韋夐傳「晚年ーー、唯以二經道一命二諸門一レ務」〓恬靜。

虛擧 〇からおとし。文章論考、四病考「特爲ーーー以動二中國一」〇實に過ぎたるほまれ。後漢書、黃瓊傳「起二士純室一ーー」〓虛名。

虛說 まことならざる言說。俚說「信非ーーー」〓空言・虛談。

虛船 人の無きふね。莊子「方レ舟而濟二於河一、有二ーー一來觸レ舟、雖レ有二褊心之人一不レ怒」〓虛舟。

虛脫 氣力體力が急にぬけ衰へる。

虛疑 いつはり、てだまし。王毓之、臨亭集序」〓妄誕。

虛談 まことならざる談話、そらごと。後漢書、吳漢傳「信二其ーー、不レ爲二之備一終受レ制矣」〓虛說。

【虛中】キョチュウ すきはら、空腹。南史、郭原平傳「―竟日、義不二獨飽一」【虛中子】キョチュウシ 竹の異名（清異錄）【虛沖】キョチュウ 心むなしくしてやはらぐ。張華詩「壯士須二憤激一、安能守二―一」＝沖虛。【虛奈】キョナ 功勞なくして空しく俸祿を受くる義。晉書、傅咸傳「義無二親疎一、―二陳聞一」＝曠奈。【虛傳】キョデン ねなしごと。＝虛聞。【虛洞】キョドウ ほらあな。趙冬曦詩「吹レ笙―一答」【虛而往實而歸】キョニシテオウジツシテキス 智慮なき者が聖賢の教を受けて智德を充實してかへる。莊、徐无鬼「―、固有二不言之教一無形而心成者耶」【虛拳】キョケン 敵をして力を加ふること能はざらしむる義。管子「善者之爲レ兵也、使二敵若レ搏レ虛、若レ搏レ影」【虛妄】キョモウ うそいつはり。宋書、後漢之傳「懼厥二―一」＝虛僞。【虛報】キョホウ いつはりのしらせ。【虛白】キョハク ○むなしい處の意。文「一室之中、不レ免二―一」○虛室生レ白の略。【虛泊】キョハク 私慾なく淡泊なる貌。柳宗元文「一一曾閔、易之遯レ世無レ悶者、其近レ是歟」【虛發】キョハツ むだにはなつ、矢などの中らぬをいふ。北史、豆代田傳「登レ樓射レ賊、矢無二―一」【虛乾】キョカン むなしきたに、乾は蔣谷。韓愈詩「可レ憐無二根二精神一有レ似二黃金擲一」【虛文】キョブン やくに立たぬ文辭又規則など。＝空文。【虛無】キョム むなしい處、太史公自序「道家無爲、其術以二―一爲レ本」【虛無因應】キョムインオウ 虛無は體、因應は用、虛無は心體のむなしく明かにして、一物をも留めざる義、因應とは因つてこれに應ずる義にて、外物の來るにまかせ我意を以て取捨せざるをいふ。史、老子傳「太史公曰、老子所レ貴道、――、變二化於無爲一、故著レ書辭微妙難レ識」【虛無黨】キョムトウ 現在の社會組織を打破して共產主義を實現せんことを目的とする秘密團體。【虛名】キョメイ 實にすぎたるほまれ。漢書、周榮傳「私竊二―一」魏志、崔浩傳「純興好レ名二―一、而無二實用一」＝虛譽・浮名。【虛譽】キョヨ 實に過ぎたるほまれ（漢書、公孫弘傳）＝空譽。【虛勞】キョロウ からだがおとろへて精力がなくなる。＝虛脫・虛耗。【虛屬】キョゾク 虛は居宅に人なきをいひ、屬は死して後なきをいふ。莊子「國爲二―一」【虛體】キョタイ 形式のみにて誠意の認はざる體式。【虛靈不昧】キョレイフマイ 心の體用を形容する語、心は空しくして形の認むべきなきも、其の用はすぐれて明かなること鏡の物を照らす如きをいふ。朱熹、大學、注「明德者、人之所レ得二乎天一而――、以具二衆理一而應二萬事一者也」【虛論】キョロン まことならざる議論。文心雕龍「不レ變二旨趣一、徒張二―一」＝虛說。【虛空藏】コクウゾウ 菩薩の名、右に劍を持ち、左に如意寶珠を持つ、智慧慈悲の廣大なること虛空を藏とせる如しとの意。【虛無僧】コムソウ 普化宗の僧侶の稱、深編笠をかぶり、尺八を吹きて錢を乞ひ、諸國を修行す、こもそう、ぼろんじ。

虜 ロ

虜 通音リョ 慮に通ず

○とりこ、いけどり「捕―」「俘―」○かすめうばふ（掠奪）○えびす、敵を罵りていふ「胡―」「索―」○しもべ、めしつかひ（奴隸）「格―」「臣―」古は俘―を以て家奴と爲すが故。○とりこにす、いけどる。生得をいといひ斬首を獲といふ。生得する者は則ち索を以て縛きて之を拘す、故に字、毋ノ𠂤に從ひ力に從ふ、俗に、男に從ふは非なり。

同訓異字 虜・囚・俘・獲の用は囚（三四頁一段）の條を見よ。【虜獲】リョカク えびすのいくさぶね。＝敵艦。【虜獲】リョカク いげどると、首を取ると。漢文轉義「生得曰レ虜、斬首曰レ獲」【虜囚】リョシュウ とりこ。＝俘囚・俘虜・囚虜・捕虜。【虜酋】リョシュウ みにくきえびす。＝醜虜。【虜將】リョショウ えびすの大將。敵將を罵りていふ。【虜掠】リョリャク 人をとりこにし財物をうばふ。漢樂詩「天子討二―一」

七畫

號 ゴウ

㊀ カウ ゴウ 通音ガウ又ラウに作る

㊁ カウ ゴウ 號は俗字

㊀さけぶ、大聲にて呼ぶ「呼―」「呼―」○なく（哭）大聲にて泣く「―泣」韓愈文「冬燄而兒―寒」○鳴く、聲を引きて長鳴する。晉書、律歷志「雞始二―一」㊁となへ（名稱）「名―」○本名・通稱字の外につけるとなへ

「雅ー」「別ー」例へば襄は本名、久太郎は通稱、子成は字、山陽はーの如し。○おくりな（諡名）「諡ー」○いひつけ、さしづ（命令・教令）「一令」「大ー」○ー令する「ー召」○しるし「記ー」「信ー」「商ー」「牌ー」「符ー」○あひづ（符語）○くちずさみ。○いひふらす「兵ー百萬」○數詞の下に添へる「三ー活字」○船舶の下に添へる、國語の常陸丸の丸に同じ「鎭遠ー」○商店の下に添へる「萬昌ー」國語の伊勢屋の屋に同じ。

補注 日に从ひ号に从ふ、号は音考、俗に号に作るは非。

【號衣】ガウイ　軍服、兵士の制服。高啓詩「如今又賜征南策、早晩健縫帶ー」

【號旗】ガウキ　あひづのはた。‖信號旗。

【號泣】ガウキフ　さけびなく。孟、萬章「ー于旻天」于中父母」

【號外】ガウグワイ　定期以外に發行する新聞又は雜誌。

【號叫】ガウケウ　さけぶ。南史、謝述傳「ー呼ノ天地ノ免」‖叫號。

【號呼】ガウコ　大いに呼ぶ。詩、大雅「式號式呼」

【號哭】ガウコク　こゑをあげてなく。史、循吏傳「子產病死、鄭民ーー」‖號泣。

【號鐘】ガウシヨウ　○あひづのかねのね。○古の名琴の名。傅休奕文「齊桓有ニ鳴琴一曰ニーー」

【號隨】ガウセキ　さけびうそぶく。

【號咷】ガウタウ　なきさけぶ。易、同人「同人先ーー而後笑」‖大哭。

【號怒】ガウド　さけびいかる。李白詩「惟有ニ北風ーー天上來」‖怒號。

【號筒】ガウトウ　軍中の吹器、口圓くして長く、竹筒の如し、吹きて號令を傳ふるもの（通雅）簡稱して單に號ともいふ。

【號砲】ガウハウ　あひづにうつてっぱう（水滸傳）

【號令】ガウレイ　○さしづ、制裁命令。書、冏命「愛ノ號施ニ命令一」○大聲に呼ばはりて指令する。國語「ーニー於三軍一」

【號令如ノ汗】ガウレイハ　一度發布したる命令は、取り消しがたきをいふ。漢書、趙元王傳「號令如ニ汗之出而不ニ反者也一」

【虞】グ　虞

○はかる（度）おもんばかる（慮）予カジめ料かる。孟、離婁「有ニ不ーー之譽一」○そなへる（備）○たのしむ（樂）娛の轉音。孟子「霸者之民驩ー如也」○安んず（安）○うれへ、しんぱい、そなへ、おもんばかり「外ー」○うれ（憂）○父母の葬式を了へ歸りて殯宮にて其の精をまつる。○山澤又は原野をつかさどる官名「山ー」「澤ー」「野ー」「ー人」○あやまる（誤）うたがひ（疑惑）詩、魯頌「無貳無ー」ー○朝の名、舜が堯の禪りを受けて帝位に在りし間の稱「有ーー氏」○ー芮グイは二國の名、ーは今の山西省平陸縣の一城。○騶ーグは仁獸の名。

【虞淵】グエン　日の入るところ。淮南、天文訓「日至于ーー、是謂ニ黃昏一」

【虞衡】グカウ　山林を掌る官。周禮「ーー作ニ山澤之材一」

【虞官】グクワン　虞人に同じ。詩經、秦譜「舜命作ニーー一掌ニ上下草木鳥獸一」

【虞集】グシフ　字は伯生、道園と號す、元の臨川の人、吳澄に從ひて學ぶ、諸官を經て翰林學士兼國子祭酒經筵官となる、命を受けて經世大典を修す、書成り、病を謝して歸り、順帝の至元八年卒す、年七十七、文靖と諡す、著す所る道園學古錄五十卷あり。

【虞人】グジン　山澤などを掌る官「山虞」「澤虞」孟、萬章「招ニーー一以ノ旌」‖虞官。

【虞舜】グシユン　虞は帝舜（姚姓、性重孝、堯の禪を受けて天子と爲る、在位四十八年）の朝の名、其の先、虞に國せし故。字解參看。

【虞初】グシヨ　前漢の武帝の時、小說を作りたる人。轉じて小說の義とす「ーー新志」張衡、西京賦「小說九百、本自ニーー一」

【虞世南】グセイナン　字は伯施、唐の餘姚の人、兄世基と共に學を顧野王に受く、十年精思懈らず、文藻博なり、貞觀中、弘文館學士となる、書を褚遂良に學び、其の法を究む、太宗每に其の五絕を稱す、一に德行、二に忠直、三に博學、四に文詞、五に書翰。

【虞芮之訟】グゼイノショウ　虞芮の二國、田を爭ひて決せず、西伯に質さんとて其の境に入れば、耕す者は畔を讓り、行く者は路を讓る、其の邑に入れば、男女路を異にし、班白の者提挈せず、其の朝に入れば士大夫皆讓あり、二國の君、相ひて言ふ、我は小人なり、君子の朝に入るべからずと、相與に退き、爭へる田地を以て閒田と爲しき（史、周紀）漢書、毋將隆傳「安諫之道興、則ーー息」

【虞舜】グシユン　虞舜の作りし韶樂。陶潛賦「ーー美而儀風兮、孔子忘ニ味于千載一」陳陶詩「ーー九奏音猶在、只是巴童自棄遺」‖風韶。

【虞唐】グタウ　堯と舜との世。堯は陶唐氏、舜は有虞氏。宋書「審官欲明、配ニ陳ーー一」‖唐虞・堯疑。

【虞美人草】グビジンソウ ひなげし。罌粟ケシに似て小なり。碧巖浸淡「雅州名山縣、出二—一」鳴二虞美人曲一「應レ拍面舞」＝麗春花・仙人草・美人草。

八畫

【虎】 キョ コ 劇

猛獣を數ける名の兩旁の柱、猛獣の形を飾りつけたるあしだい。漢書、司馬相如傳「立二—闕一」＝鐻・鐻。

九畫

【虢】 カク 陌

春秋時代の國の名。西—は今の陝西省寶雞縣—城。南—は平王の東遷するや、西—が上陽に徙りしもの、今の河南省陝州。東—は今の河南省滎澤縣。北—は今の山西省の平陸縣、左傳に「晉假二道於虞一以伐二—一」とあるは卽ち是れなり。

【虢國夫人】クワクコクフジン 唐の楊貴妃に姉三人あり、天寶七載、大姨を封じて韓國夫人と爲し、三姨—を虢と爲し、八姨秦國夫人と爲す、同日拜命す、—は紋粉を施さず、自ら美艶を衒ひ、常に素面にて天に朝す。

【虧】 ハウ ボウ 號 又、號に作る爲に通ず

○たけし(猛)あらし(暴)周禮「以二刑罰一禁二而去一盜」○強ひて侵す。○しへたぐ(虐)

十畫

【戲】 サン 鑑 又虧に作る

—貔ヒは虎の毛のあさきもの。

十一畫

【虧】 キ 支

○かく(缺)損失する、減少する(減損)○かけ、缺損。

【虧盈】キエイ 缺・欠・闕・珀の別は缺(一五二〇頁三段)の條を見よ。

○かけると、みちると。春渚紀聞「其色明暗、隨二月—一」＝盈虛・盛衰。○みつるをかく。易、謙卦「天道—レ—而益レ謙」

【虧空】キクウ 財貨などがかけて空しくなる。＝虛乏。

【虧月】キゲツ かけたる月、闕くなき月。＝缺月。

【虧蝕】キシヨク ○日月がかける、日月が食する、日蝕・月蝕(宋書)○國費本金が缺損する。

【虧欵】キイ かけておほはれる。庾信、終南山義谷銘「日月—一」＝蔽虧。

十二畫

【虧】 虧(前條)の俗字。

【虩】 ケキ 陌

○—はおそれ(恐懼)る貌。易、震卦「震來—一」○はへとりぐも。＝蠅虎蟲。

虫部

【虫】 キ 尾 蟲に蟲の略字とす

○鱗介類の總名。○まむし(蝮)虺の古字。

一畫

【虬】 虯(次條)に同じ。

【虬蟠】キウバン 虬は角ある龍、螭は角なき龍。抱朴子「大川沼澤、則——蓄遊」

二畫

【虯】 ㊀キウ ㊁ケウ 尤 蕭

㊀みづち、龍の子の角あるもの。㊁蟄—は曲がる貌。

【虯髯】キウゼン みづちの如く曲れるほほひげ。五代史、梁唐通傳「有二勇力一—一善射」

【虯螭】キウミ みづちの盤屈する如く相蟠るは蛟。左思賦「輪囷—一」

【虯龍】キウリウ 角のある龍、みづち。埤雅「有レ角曰二—一」＝虬龍。

【虱】 蝨(蟲部九畫)に同じ。

三畫

【虾】 ウ 虞

跋—はけぢけぢ。＝蝦蟆。

【虾】 カン 寒

○ぼうふり。＝子子。○をかす(犯)

【虺】 ㊀キ ㊁クヰ 灰 尾

㊀まむし、毒蛇の一、大いなる者は八九尺に及ぶ、扁頭にして大眼(蝮蛇)「毒—」「蜂—」○小さき蛇。吳語「爲—所レ攜、爲蛇將若何」(小蛇の時に殺さずば大蛇となりし後は奈何とも爲し難し)○王—は大蛇。○—は雷の聲。㊁—隤はやむ(病)又つかれる貌。○かまびすし(喧)

【虺蜴】キエキ ○(ひと、いさむしと。○

人を害する姦人・小人などに喩ふ。子帰子「殺ㇾ本塞ㇾ原、蓋二子一ㇾ二【鳰鳰】〓雷の聲。詩、邶風「喈喈其鳴、一一其雷」【鳰蛇入ㇾ夢】〓女子を生む祥。鳰蛇共に陰性の獣、故にいふ。詩、小雅「維鳰維蛇、女子之祥」【鳰鼠】〓やみつかれる貌。詩、周南「卷二被施耳、我馬一一」ⅱ鳰鼠。

【虹】㊀コウ　㊁カウ　江　東　絳

㊀にじ、日光が空中の水蒸氣に映じて七色の橋狀を成す現象、古は龍の一種とし、雄を一、蜺を蜺といふ「長一」「晩一」ⅱ天弓・帝弓・紅橋・彩橋・蟠蛛。○日光が水蒸氣に映じて現す白氣。戰國策「白一貫ㇾ日」○橋に喩ふ。庾信詩「跨一連絕岸」○流彩一は古の寶劍の名。㊁みだす。みだる（惑亂）詩、小雅「寔一小子」註に通ず。【虹蜺】〓次條に同じ。字解參看。【虹霓】〓㊀にじ。霓は蜺に同じ。春秋元命苞「一一者陰陽之精、陰陽交爲ニ一一」○星の名。北斗樞「樞星瑤ニ一一」【虹橋】〓㊀にじ。上官儀詩「雨霽一一映、花落風塵春」○虹の形せるはし。【虹彩】〓眼球の瞳孔をとりまきて放射輪狀に列せる筋纖維。ⅱ虹彩膜・眼廉。【虹梯】〓にじの如く高きかけはし。薩都剌詩「縣ㇾ崖一一危、搘ㇾ竹流絹晒」【虹梁】〓たき（瀑布）張說文「一一飛射、雲水盧岭」【虹洞】〓○深く遠き貌。馬融、廣成頌「天地一一」ⅱ鴻洞。○相連る貌。枚乘、七發「一一兮蒼天」【虹洽】〓あしきにじの氣。江淹賦「一一陽子上京、鯨妖扇ニ子下國一」

【虾】シ　紙

一蚓〓は稼を害する蟲、いなむし。唐書、五行志「檢閱一一蟲、害稼入ㇾ州界有ㇾ雀來食之、一月而盡」

【蛇】

蛇（虫部五畫）の俗字。

【虻】

蚊（虫部九畫）に同じ。

【蚤】

蚤（虫部九畫）の俗字。

四畫

【蚓】イン　軫　又、蚓に作る

蚯一一はみみず、土中にすむ、體圓くして細長く、色は赤黑し、老いたる者は頭白し「寒一」「春一」「紫一」ⅱ土龍歌女・曲蟮。【蚓竅】〓行く時は體を引きて而る後に伸ぶ、故に引に从ふ。

【蚜】カ　麻

あぶらむし、草木の新芽を害ふ小蟲、種類甚だ多し、綠色、緋色・黑色諸種あり、形、蝨の如く、口吻は管狀を爲し、竹木の新芽嫩葉にたかりて其の養液を吸收す。ⅱ木蝨・竹蝨。

【蚊】キ　支　微

○はふ、蟲がありく、蟲の行く貌。○蟲等の通稱。張協文「千畦昆一感惠」○長一〓はあしたかぐもの古今注「長一蟷蜘也、身小足長、故謂長一」ⅱ長跂。【蚊行】〓蝨がはひ行く。王褒、洞簫賦「一一喘息」（喘息は疾息〓）【蚊蚋】〓蝨の行く貌。漢書、東方朔傳「一一脈脈、薄ㇾ暮宵ㇾ興、是非ニ守宮一即蜥蜴」

【蚍】クヮイ　灰　蛔に同じ

はらのむし。人の腹の中の長き蟲、くゎいちゅう。ⅱ蛔蟲。

【蚖】ゲン・グヮン　元　又蝯に作る

㊀蝯一一はゐもり。㊁まむし。蝮の屬。

【蚣】コウ　東

蝯一一はむかで。蜈（虫部七畫）を見よ。

【蚤】サウ　ソウ　皓

○のみ、細小にして善く跳ね、人畜の血を吸ふ。○つとに、はやし、早に通ず。○つめ。つめきる。曲禮「不一一」古、爪に通ず。

同音の熟語　蚤・夙・早○蚤は、のみの飛ぶこと早きによりて、轉じてはやく又、つとにと訓む。○夙は說文に早敷也とあり、はやくよりつつしみて後れぬやうにする意。詩經「夙興夜寐」○早は晨なり、つとにと訓む、意に通用す。

【蚤天】〓わかにに。史、伯夷傳「固也屢空、糟糠不ㇾ厭、而卒一一」ⅱ夭世。【蚤甲】〓つめのかたき物「爭ㇾ利如一一」ⅱ而爽「北堂」ⅱ爪甲。【蚤起】〓朝はやくおきる。孟、離婁「一一施ㇾ從ニ良人之所ニ之」ⅱ早起・夙興。

【蚤起】サウキ 早くねて、おそくおきる。禮記「――――」
【蚤世】サウセイ わかじにに。‖早世・蚤天。
【蚤知之士】サウチノ 先見の明ある士。樂毅、報二燕惠王一書「――、名成而不レ墮、故稱二後世一」
【蚤莫】サウボ あさと、ひぐれと、英は晨。曲禮「君子欠伸、撰二杖屨一、視二日――一、侍坐者請レ出矣」傷光義詩「猛獸讒二蜜僕一、頼覆知二――一」‖早暮・旦暮。

【蚩】シ 支

○あなどる（侮）○みにくし（醜）‖嫫。○みだれる（紛亂）○――はおろか（癡）なる貌。又、敦厚ツツシの貌。○蟲の名。○わらふ。‖嗤。○――尤イウは黃帝の時の諸侯、兵亂を好み、刀戟大弩を作り、天下を暴虐す、帝之を征して涿鹿に戰ふ、――尤大霧を作す、帝指南車を造りて之を破り、遂に――尤を戮す、尚書の孔傳には古の九黎國の君と爲し、禮記の鄭註には三苗を以て――尤と爲す、其の說一ならず。○兵亂の前兆を示すといふ星の名。彗星に似たり。‖蚩尤旗。

【蚩尤】シイウ 星の名。晉書、天文志「――、類レ彗而後曲、象レ旗、主二所レ見之方下有レ兵」字解參看。
【蚩鼅】シダン あなどりくらます。張衡、四京賦「――――遯鄙」
【蚩蚩】シシ ○無知なる貌。一說に敦厚なる貌。詩、衞風「氓之――」○みだれもとる（悖亂）法令「六國――」
【蚩笑】シセウ あざけりわらふ。‖嗤笑。
【蚩尾】シビ しゃちほこ。蘇兵演義「嵩、海獸也、漢武作二柏梁殿一、有二――一、水之精也、能卻二火災一、因置二其象於上一、今謂二之鴟尾一、非也」
【蚩侮】シブ あなどる。

【蚋】ゼイ 霽

――蛇ダはけぢゆち。‖蚺蜲。

【蚕】テン 銑 俗に蠶の略字とするは非

みみず（寒蚓）

【蚪】ト 有

蝌――はおたまじゃくし、蛙の幼蟲。蝌（虫部九畫）を見よ。‖科斗。

【蚌】ボウ 講 漾 通音バウ

○どぶがひ、からすがひ、湖沼等の泥中にすむ一種の貝、介殼は橢圓形にして外部は眞黑色、內面は眞珠色を帶ぶ。說文「蜃屬」「鷸――之爭」○はまぐり、蛤の一種、殼內に眞珠を生ず「老――」「互――」
【蚌蛤】ボウカフ はまぐり。大戴禮「――含レ珠、與レ月盈虧」
【蚌珠】ボウシュ はまぐりより出づる眞珠
【蚌胎】ボウタイ シンジュ張衡、南都賦「互蚌含レ珠」
はまぐりの珠を孕むもの、懷胎の如し、月と盈虧を同くすといふ。高適詩「日出見二漁目一、月圓知二――一」‖蚌珠。

【蚍】ヒ 支

――蜉ヒフはおほあり。韓雅「――、大蝘」（蝘は蠍）
【蚍蜉撼二大樹一】ヒフカンタイジュ 見識狹き者が妄に大學者を批評するに喩ふ。韓愈詩「――、可レ笑不二自量一」

【蚊】フ 文

○青――ブンは支那の南海に生ずる水蟲の一。搜神記「青――似レ蜂而稍大、生二于草間一、如レ蠶、取二其子一、母卽飛來、以二母血一塗二錢八十一文一、以二子血一塗二錢八十一文一、每レ市レ物、或先用二母錢一、或先用二子錢一、皆復飛歸、輪環無已」
○轉じて錢の異名とす。

【蚡】フン 文

○むぐらもち、田中の鼠。‖鼢。
○人名、田――は漢の武帝の時の宰相。

【蚊】ブン 文

蚡（前條）に同じ。

【蚕】テン 蠶に同じ 蠶は古字

か。小さき飛蟲、夏時人畜をさして血を吸ふ、子子ブンの羽化せしもの「朝蠅暮ー」

【蚊脚】ブンキャク かのあし。細字などの形容。顧愷之、書品序「ー―勁征、鵠頭仰立」

【蚊雷】ブンライ かのむれを軍勢に喩へていふ。＝蚊虻。

【蚊帳】ブンチョウ かや。元稹詩「ー―雨來捲、燭蛾撲上稀」＝蚊幮。

【蚊市】ブンシ 夕方、かの聚り集るにいふ。陸龜蒙「蠅成ー市於朝、蚊成ー市於暮ー」

【蚊蚋】ブンゼイ か。古今注「今人呼ー―、曰ー蚋民ー」＝白鳥。

【蚊蚋負ー山】ブンゼイフザン 力微にして、重任にたへざるに喩ふ。莊、秋水「知不ー知ー是非之竟、而猶欲ー觀ー於莊子之言、是猶ー使ー蚊負ー山、商蚷馳ー河也、必不ー勝ー任矣」

【蚊聲】ブンセイ かの鳴く聲。梁簡文帝詩「ー―合似ー雷」

【蚊睫之蟲】ブンショウノチュウ 蚊の睫ヤッに栖むむし。極めて微細なるに喩ふ。列、湯問「江浦之閒生ー―蟲、其名曰ー焦、朝ー生暮死ー、蚊睫ー、弗ー相觸ー也、栖宿去來、蚊弗ー覺也」（原は微細）

【蚊帳】ブンチョウ かや。隋史、高士傳「黃昌貧、傭債作ー―ー」

【蚊蛆】ブンショ かちゅう、かや。＝蚊蠋、蚊蜮、蚊蛹。

【蚊蛹】ブンユウ かや。諫能詩「高擁ー―ー」

【蚊蠅】ブンヨウ 蚊と蠅。

【蚊蠋】ブンショク 蚊蛆。

【蚊虻】ブンボウ かと、あぶと。莊、天運「ー―噆ー膚、則通昔不ー寐矣」

【蚊睫皆見】ブンショウカイケン 知の明かなること明月の如くなれば、蚊睫の如き小人もことごとく見ゆとの意。淮南、中山靖王傳「明月夜曜、――」

【蚊喙走ー牛羊ー】ブンカイソウギュウヨウス 小能く大を制するに喩ふ。喙はあぶ。說苑、說叢「蚉蠅創ー梁柱ー、――」

【蚊負】ブン 微力にして重任に耐へざる喩。蚊蚋負ー山を見よ。

【蚊母鳥】ブンボチョウ よたか、鬼ブクの類。唐國史補「江東有ー――、亦謂ー吐蚊鳥ー、夏則夜鳴、吐ー蚊子ー叢落聞ー湖州尤甚ー」＝怪鵄。

【蚊雷】ブンライ かのあつまりて鳴く聲の形容。曹雅望、蚊者惡水中子子所ー化、碧ー入肌膚ー、其聲如ー雷ー」演義、中山靖王傳「衆吻淵ー山、聚蚊成ー雷ー」周必大詩「潮聲遙聽訝ー――」

【蚊力】ブンリョク 極めて少しの力。韓愈盧詩「螢光向ー日盡、ー―負ー山疲」

【使ー蚊負ー山】シカンフザン 力微にして重きに堪へざるに喩ふ。蚊蚋負ー山を見よ。

【蚤】 蚊（前條）に同じ。

【蚋】 蚋（虫部八畫）の略字。

五畫

【蚴】イウ 有 ー蟉は龍の貌。又、龍の行く貌。司馬相如、上林賦「青龍ー蟉於東廂」

【蚰】イウ 尤 ー蜒はけぢけぢ。蜈蚣ムカデに似て小さく、細長にして脚多く、其の脚脫し易し、害蟲を捕食す、蜈蚣と同じく農家に益あり。劉子「蒼蒲去ー蚤蝨而來ー―」＝蜒蚰衣蟲。

【蚵】カ 歌 ー蠣はとかげ。＝蜥蜴。○ー仔は臺灣語にて牡蠣。

【蚶】カン 寒 あかがひ、蛤に似て殻に縦のひだある貝。

【蚯】キウ 尤 ー蚓はみみず。蚓（虫部四畫）を見よ。禮、月令「孟夏之月ー蚓出、仲冬之月ー蚓結」＝曲壇。

【蚷】キ 齊

【蚿】ケン 先 馬ー腰はやすで、むかでに似て小さき蟲。莊、秋水「夔憐ー―、ー憐蚿」

【蛩】 蛩（虫部六畫）の俗字。

【蛄】コ 虞 ○蠐ーセイはけら。蠐（虫部十一畫）を見よ。＝天蠐・仙蛄。○蠐ーセイは、むぎはらぜみ、なつぜみ。蠐（虫部十二畫）を見よ。

【蛀】サク 屋 ○ー蟲はせみの一種、其の殻直くして長し。＝馬蜩。○ー蝕はいなご、蝗の屬。

【蛇】㊀ジ、ダ 麻 支 ㊁イ 紙 支 又蛻に作る ㊀へび、くちなは、爬蟲類の一、體圓くして細長く、足なくして、體、鱗を被り、脊骨を伸縮して行く「耳ー」「大ー」「長ー」「神ー」○古、支那にて、龍の屬となす「龍ー」○星の名。晉書、

天文志「騰ー二十二星」○委ー（ヰ）はどぢやう。莊、達生「食之以委ー」‖泥鰌。㊁委ー（ヰ）は委曲自得の貌。詩、召南「退食自公、委ー委ー」又、蛇のうねりゆく貌。史、蘇秦傳「委ー蒲伏」

【蛇蛇】（イ）安舒の貌、やすらかにのびのびする。詩經「ー ー碩言」

【蛇皮線】（シャゼン）國琉球の樂器、えらぶうなぎの皮にて胴を張りし三味線。

【蛇鰈】（ダフ）鰯鰈（カレイ）に似て頭の大いなる魚。方言「宇宮、南楚謂二之ー ー一」‖魚鰯・蛇鯆。

【蛇行】（コウ）○蛇の行く如く、はらばひて行く。戰國策「嬰ー ー伽伏四拜、自跪而謝」注「ー ー猶匍匐也」（史、蘇秦傳には ー ーを委蛇に作る）○水流などのまがり流れる貌。柳宗元文「斗折ー ー、明滅可ー見」

【蛇角】（カク）珍寶の名、能く毒を解く。山海經、注「古都之ー ー、魏曰二碧犀一」楊基詩「衣以二亂綫一分二縫織一、帶二將ー ー一飾二粧裝一」‖犀帶犀・骨篤犀。

【蛇蝎】（カツ）へびと、さそりと。最も畏るべきものに喩ふ。陳陶詩「ー ー愁聞骨髓寒」‖蛇蠍。

【蛇鷹】（ヤウ）○へびと、まむしと。元稹詩「ー ー吞二鷓雀一、豺狼逐二野鹿一」○大へびと、小へびと。蛇は大、鷹は小、人を害する者に喩ふ。國語「爲ー鷹犀一搏、爲ー蛇將二若何一」

【蛇化爲ー龍不ー變二其文一】（ダクワシテリウトナルモソノブンヲヘンゼズ）小物が大物と化すとも猶ほ其の舊態を變へず。史、外戚世家「ー ー、家化爲ー國、不ー變二其姓一」

【蛇呑ー象】（ダドンゾウ）其たしく貪るに喩ふ。羅洪先詩「人心不ー足ー ー、世事到頭螳捕ー蟬」

【蛇豕】（ダシ）○へびと、ゐのこと。○神じて慈深く凶暴なる人に喩ふ。晉書、皇甫謐傳「ー ー放ー命、息斯平ー之」陳書、高祖紀「聚二徒百萬、悉威ニー一、淇水浿水、一飲而竭」‖封豕長蛇。

【蛇身人首】（ダシンジンシュ）古、支那の帝王伏羲氏の異樣なる相貌。司馬貞、三皇本紀「ー ー、有二聖德一」

【蛇身人面】（ダシンジンメン）神の異形をいふ。拾遺記「又見二一神一ー ー、馮因與語、神卽示二萬八卦之圖一、列二於金板之上一」

【蛇牀】（シャウ）はまにんじん、はまぜり、海濱の砂地に生ずる多年生草。葉は羽狀を爲して分裂互生す、夏、白色五瓣の小花を開く。淮南子「ー ー似二蘼無一而不ー能ー芳」

【蛇珠】（ダシュ）へびの口より吐きたるたま。述異記「南海俗云、ー ー千枚、不ー如二一玫瑰一」搜神記にも出づ。‖隨侯珠・靈蛇珠・明月珠。

【見二蛇首一知二長短一】（ケンダシュタルヲシッテチャウタンヲシル）蛇の首を見れば其の身の長短を知る。一斑を見て、全豹を窺ひ知ると同義。淮南、氾論「蛇舉ー首尺而脩短可ー知也、象見二其牙一而大小可ー論也」

【蛇蛻】（ダゼイ）へびのぬけがら、蛇の解く所の皮。晉書、張華傳「華曰、此必蛇化爲ー蛾也、開二緑蛾側一、果有二ー ー一焉」

【蛇蟠】（ダバン）へびと、みみずと。荀、勸學「蟹六跪而二螯、非ニー ー之穴一無ー所二寄託一者、用ー心躁也」（螣は蛇に似て鱗なく、ぬめりあり、淺水の泥窟中に生ず、一本に鰼・螣・鰧に作る、うみへびの類）

【蛇蟠】（ダバン）前條に同じ。

【蛇足】（ダソク）へびを畫きて足を添へる。無用の事を爲すに喩ふ。戰國齊策「楚有二祠者一、賜二其舍人一巵酒一、舍人相謂曰（中略）請畫ー地爲ー蛇、先成者飲ー酒、一人蛇先成、引ー酒且ー飲、乃左手持ー酒、右手畫ー地曰、吾能爲二之足一未ー成、一人蛇成、奪二其巵一曰、蛇固無ー足、子安能爲二之足一、遂飲二其酒一、爲ニー ー者、終亡二其酒一」

【蛇年】（ダン）巳の年。李商隱詩「ー ー建午月、我自ー梁還ー秦」

【蛇蟄】（バ）えらぶうなぎ。‖海蛇。

【蛇苺】（バイ）へびいちご。山野に自生す、實はいちごに似て、毒あり、食ふべからず。

【蛇蚊】（ブク）へびと、まむしと。周禮、注「鄭司農云、地所ー生惡物者ー人者、若ニー ー之屬一」‖蝮蛇。

【蛇紋石】（ジャモンセキ）鑛石の一、綠又は黃色にして白色の斑紋有り、蛇皮に似たるが故に名づく。‖温石。

【蛇ー足】（ダソクヲナス）蛇には足なし、足を畫くは、無用の事を爲すに喩ふ。蛇足を見よ。

【蛙】（ワ）

【蛙】（ワ）

きくひむし（木蠹蟲）「ー ー蟲」‖蝙蝠。

【蛙商】（シュ）むしくひばち。‖蝙蝠。

【蛆】（ショ）

【蛆】（ソ）

○うじ、腐敗せし者に生ずる小蟲、羽化して蠅と爲る「蟲ー」○酒の面の浮渣（カス）猶ほ蟻といふに同じ。蘇軾詩「桑落初嘗漉玉ー」○螂ー（ショウラウ）は螻蛄（ケラ）の異名。關尹子「螂ー食蛇、蛇食ー蛙、蛙食ー螂、互相食也」

【蛆蟲疾】（ソチウシツ）うじと、はへと、くそと。蝕をいやしめて言ふ（蘇軾、論二商鞅一）

【蛄】（コ）

【蛄】（セン）

ー蜥（セキ）はけむし（毛蟲）草木の葉を害す、化して蝶、又蛾となる。‖蚕蟲。

【蜪】蚘（前出）の俗字。

【蛋】タン 寒

○鳥たまご（鳥卵）○あか、古、螽（虫部七畫）に通ず。南蠻の一種。柳宗元文「胡夷―蠻」

【蛋殼】カン 卵のから。‖卵殼。

【蛋黃】タン たまごのきみ。‖卵黃。

【蛋戶】カン 文脈の南方の蠻人の家。‖蜑戶。

【蛋子】イン 南蠻人を以て食に供するもの（宋史、高宗紀）

【蛋白】【蛋白質】タンパクシツ 炭素・水素・窒素及硫黃とより成る物質、動植物の成分を爲す。

【蛆】チ 支

○ありのたまご（蟻卵）古、食品とす。證、内則「―醢」註「蚍蜉子也」○姓。五、公孫丑「―蟲」

【蚳】チ 支

蛆ーはむぎわらぜみ、色黑く、翅は無色透明、夏秋の間、高樹に鳴く。‖蚻蟬・蜩蛄。

【蛇】ダ 支

蛇ーはけぢけぢ。‖蛇蜒。

【蛇】チ・ 紙

ー螻はむぎわらぜみ、色黑く、翅は無色透明、夏秋の間、高樹に鳴く。‖蚻蟬・蜩蛄。

【蛇】ハウ 肴

○意義未だ詳かならず。○國ホウ（鮑）海産の貝の一、殼は扁平にして數個の穴を有す。‖石決明。

【蛑】フ 遇

蛇の下腹にある横鱗。莊、齊物「吾待蛇ー蚹翼耶」

【蛉】レイ 青

○蜻ーはあをむし、蝶の幼蟲、蜆（虫部十畫）を見よ。○蜻ーはとんぼう、とんぼ。蜻（虫部八畫）を見よ。

【蛎】レキ 錫 隔

蜾ーはばった、はたはた。

六畫

【蛙】ア 麻 佳 又、蝸・鼃に作る

○かへる、かはづ、蝦蟆の屬、蝌蚪の成長せしもの「青ー」「怒ー」「鳴ー」「非ー」「翠ー」「亂ー」○みだり、みだら（淫）

【蛙黽】ア 車前草の異名。

【蛙蛤】ア かへる、蛤は石鷗の類

【蛙黽】ア かへるのむれ。張栄、鳴蛙賦「ー夜鳴、君緩其聽、考二之周官、酒ン灰驅蛤」

【蛙鼓】コ かへるの鳴くこと。花鏡「蛙性好ン坐、以ン腹鳴、生子最多、一蛙鳴、百蛙皆鳴、其聲甚壯、名ニ一一、王ン秋則無ン聲」曾維則詩「樹根ー一鳴二殘雨一」

【蛙市】シア かへるのむらがり鳴くをいふ。耕餘錄「晩蛙聚鳴、謂二之ー一」杜庚詩「ー一無ン聲萬籟沈」

【蛙吹】スイ かへるの聲。蛙鳴を見よ。

【蛙聲】セイ ○かへるの聲。章孝標詩「田家無二五行一、水旱卜ニー一」○みだりがはしき音樂の聲。漢書、王莽傳「紫色ー一」注「淫蛙之聲」‖淫聲。

【蛙吠】ハイ 蛙鳴に同じ。吠はほえる。杜景純、草花詩「發例蛙雨後、ー一殘陽影」

【蛙鳴】アイ かへるの鳴く聲。南史、孔珪傳「門庭之內、草萊不ン翦、中有ニー一、或問ン之曰、欲ン爲二陳蕃一乎、珪笑答曰、我以ン此當二兩部鼓吹一。何必效ン蕃、王晏嘗鳴二鼓吹一候ン之、開二室ー一、曰、此殊聒二人耳一、珪曰、我聽二鼓吹一殆不ン及ン此、晏甚有二慙色一」‖蛙吹。

【蛙鳴蟬噪】センソウ 蛙や蟬の鳴く如くかまびすしく鳴ぎ立つ。陋劣なる文章又は無用の爛論を嘲りていふ。韓愈、平淮西碑、儲欣評「段文昌以二排四儷六一之音一、易二釣天之奏一、直不ン知二人間有一ニ流水事一」文昌が碑の文を改作せしを譏りていふ。

【蛙黽】ア 車前草の異名。

【蛘】イ 支

ー城はわらぢむし。韓愈詩「破蘆ー城盆」‖伊威（詩、豳風）

【蛟】カウ ケウ 肴

みづち、龍の一種、蛇に似て四足あり、大いなる者は數圍、卵は一二石の甕の如く能く人を呑むといふ「潛ー」證、月令「孟夏命二漁師一伐ー」

【蛟】ー の眉相交る、故に交に从ふ。

【射ン蛟】シャコウ みづちを射る。漢書、武帝紀「元封五年冬、行南巡狩、至二於盛唐一、望二祀虞舜於九疑一、登二灊天柱山一、自二潛陽一浮ン江、祠ニー一江中一逐ン之」

【蛟虵】カウダ ○あまりょう。段成己詩「慨然議誅二肝膽一、願開古劍鳴ニー一」○蟠屈する狀に喩ふ。紺珠文詩「五嶽不朽之長松、潛ン骨入ン地盤ニー一」

【蛟蛇】カウダ みづち。漢賦、西京賦「蜿二蜒蛟蛇一」

【蛟螭】カウ みづち。左思、蜀都賦「鮮介異族、或蛟ニ一、或螭ニ碧玉ニ」

【蛟龍】カウ 錦船に銘ぜし紫文ノシ博古圖「昔張懷瓘在ニ翰林ニ時、見ニ古錦紀ニ夏禹之績ニ背紫金、細以ニ一ニ」

【蛟門】カウ 山の名。明一統志「一ニ山、在ニ寧波定海縣東四十里ニ一名蓬門山、山ル此即大海洋、古人稱ニ一虎蹲、天設之險、卽此地」

【蛟羊】カウ 獬の名。遁齋ニ一ニ「似羊而無ル角、曉ル之亜」

【蛟龍得ニ雲雨ニ】カウ 英雄が一旦時に逢へば忽ち榮華を成すに喩ふ。史記、周瑜傳「劉備非ニ久屈ス人用ニ者ニ也ニ——、終非ニ池中物ニ也ニ」

【蛟龍得ニ水ニ】カウ 北史などの大いなるに喩ふ。杜甫詩「把ニ情開ニ得伏ニ我語ニ酒酣擊ル劍ニ——」

【蛤】カフ コフ 名

○はまぐり、海產の貝の一種、介殼は形、栗に似、黑、又は褐色の斑紋を有す、肉は食用とす。‖文蛤・花蛤（蜃は一の大いなるもの、蚌は蛤の類にて稍ひらたきもの）○蛙の一種、小にして色黑く聲美くし。かじか「山一」

【蛤蜊】カフ はまぐりと、しじみと。呉風土記「一一蚫蠃之屬、淡水洋中、可ニ接而得ニ一」

【蛤仔】シフ あさり。

【蛤柱】カウ はまぐりのはしら、食品の一。陸游詩「君看大羹玄酒味、蟹螯一一蛤柱珍」

【蛤粉】フン どぶん。貝均、楡文「打ニ蛤一面爲ル粉」

【蛤蜊】カフ あさり、蛤の類。南史、王融傳「食ニ一一」‖海蚌・河蛤・蛤蜊。

【蛤蜆】カフ ケン はまぐりと、しじみと。呉風土記「一一蚫蠃之屬、淡水洋中、可ニ接而得ニ一」

【蛤灰】カフ はまぐりの殻をやきたるはひ。周禮、掌蜃、疏「以ニ一一一爲ニ叉灰ニ」又とは叉取して灰と爲すが故。

【蛩】キョウ 多 蛬・蛬は俗字

○いなご（蝗）淮南、本經「飛ニ一蒲ニ野ニ」○こほろぎ「吟ニ一」「鳳ニ一」‖蜚（次條）○ニ一は蜚へおもふ貌。又、馬に似たる海獸の名。

【蛩蛩】キョウ ○うれへ思ふ貌。劉向、九歎「志ニ一而俱顧兮」○北海中にありといふ馬に似たる獸の名「山海經」‖瓦鷹。

【蛩蛩】キョウ 蟋蟀ショツソツと。文章の神髓「悲加ニ一一日ル吟」其の文章の音節の一一の秋吟の如きをいふ。

【蛩聲】キョウ こほろぎの聲。白居易詩「西窗絡緯鳴、滿耳新ニ一」‖蛩語。

【蜚】キツ 入

こほろぎ、きりぎりす。形蝗に似て黑褐色、よく飛ぶ、秋夜草間脚下等にて鳴く「吟ニ一」爾雅、釋蟲「蟋蟀、ニ一」‖螽蟖・蟋蟀・促織。

【蜚聲】キツ きりぎりすの聲。‖蛩聲。

【蜩】クヮイ 灰

はらのむし、寄生蟲の一、人の腹中にわき、身體を害するもの。色白くして赤を帶ぶ、形みみずに似る。‖蜩・蛕・蜩蟲。

【蛸】クヮイ 灰 灰 灰

はらのむし。‖蜩（前條）

【蛞】クヮツ セツ 屑 屑

○蝦蟇の子。○一蝓はなめくぢ、溫濕の地に生ずる軟體動物、常に沾液を分泌して物にねばりつく。說文「附嬴背負殼曰蝸牛、無殼者一蝓」○一蝓は蝮蛞の別名。‖杜狗。

【蛸】ケン 先

○はたる（螢火）呂覽「腐草化爲ニ螢ニ」○やすで（馬蜂）淮南、兵略「故良將之卒、若ニ一之足」

【蛾】シン 眞

けむし（毛蟲）

【蛭】シツ チツ 質

ひる（蛾）池沼水田等に生ずる小蟲、好みて人の血を吸ふ、醫療に用ふ「水一」論衡「一食ニ血之蟲也」又、草一あり、深山の草中に在り。

【蛛】チュ　虞　蜘―はくも、節足動物の一、蜘（虫部八畫）を見よ。【蛛絲】チュ　くものす。くもの脾より分泌する細線。杜甫詩「蟲蛛穿二畫壁一、巫覡醉二一一」【蛛蝶】ヂュ　くものすと、蝶蟲と。楊萬里詩「只有二蜘仙留レ句趣一、春風掌管拂二一一」【蛛網】チュ　くものあみ。韓愈「道衡詩「暗屋蛛二一一、空梁落二燕泥一」」

【蜘】チ　支　又、蛛に作る　―蛛は山川木石の怪物、狀三歳の小兒の如く、赤黒色にして長耳美髪あり、好みて人の聲をまねて人を惑はすといふ。すだま。魯語「木石之怪、曰二夔一蜩一」張衡、南都賦「追水豹分搏二一蛛一」＝圀南・魍魎・山精。

【蛛】ボウ　尤　○蛸―はかざめ、かざみ、蟹に似て大いなるもの。蛸（虫部九畫）を見よ。○かまきり。＝螳螂。

七畫

【蜎】㊀エン　先　㊁ケン　先　銑　㊀たわむ（撓）屈曲する。ふるふ（掉）○ぼうふり（子子）蚊の幼蟲。○―は蠕の動く貌。㊁○星中の深廣なるにいふ。㊂人名。○うるはし「便―」蜎に通ず。

【蜒】エン　先　○蚰―はけぢけぢ、蟲（虫部五畫）を見よ。○うねうねと長し「蜿―」楚辭、大招「蝮蛇―只」只は助字。【蜒蜒】エン　龍などのうねりてわだかまる貌。蜿行の貌。韓愈文「海之百靈鬼怪、恍惚畢出、蜿蜿――、來享二飲食一」＝蜿蜒。

【蛾】㊀ガ　㊁ギ　歌　紙　㊀かひこのてふ、蠶の蛹の羽化せしもの、黄蝶に似て小、其の眉は曲りて蠶の如し「蠶―」○ひとりむしの類「燈―」「飛―」○かひこのてふの觸鬚に似たる美くしき眉「―眉」○にはかに。漢書、外戚傳「―而大幸」注「―俄古字通用」＝俄。㊁あり。禮、學記「―子時術之」（術は遂）＝蟻。【蛾翠】ガスイ　蛾眉のみどり色。轉じて美人の眉の黒く美くしき形容。温庭筠詩「韶光染色如二―一」【如二蛾赴一レ火】ガノニモユクガノゴトシ　ひとり蟲は火に入りて死す。飛んで火に入る夏の蟲。欲を貪りて身を滅すに喩ふ。事文類聚「愚人貪レ財、――」【蛾眉】ガビ　○蠶蛾のまゆは眉細く曲りて長し。美人の眉の美くしきに喩ふ。詩、衛風「螓首―、巧笑倩兮、美目盼兮」○轉じて美人をいふ。白居易詩「黄金不レ惜買二一一」○三日月に喩ふ。王涯詩「唯看新月吐二一一」【蛾揚】ガヤウ　前條に同じ。揚は眉の美稱。神女賦「眉聯娟以―兮」【蛾術】ガジュツ　蛾は蟻の子が親蟻の爲す所を學び、土を銜みて漸くに大いなる蛭を成す如く、人も常に聖賢の教を習ひて大成すべきをいふ。禮、學記「蛾子時術之」【蛾賊】ガゾク　賊の多きこと蟻の如きをいふ。後漢書、皇甫嵩傳「張角等、一時俱起皆著二黄巾一」爲二標幟一、時人謂二之黄巾一、亦名爲二一一」【蛾伏】ガフク　蟻の如く伏す。揚雄賦「皆稽顙縞頷、扶服―二十餘年矣」注「―如二蟻之伏一也、蛾、古蟻字」

【蚴】ケウ　篠　或は蛭に作る　―蟯ケウはあけはのてふ、蝶の大いなるもの。元稹詩「―蝶戀秋花」＝厲蝶。

【蜆】ケン　銑　○しじみ（小蛤）隋書、劉臻傳「好啖二―一、以二父諱一顯、因呼爲二扁螺一」＝蛤女・縊女・扁螺。○湖の名。【蜆蛤】カン　しじみと、はまぐりと。北史、齊文宣紀「詔禁レ取二蜆蛤一之類一」【蜆妹】ケンマイ　あまの家の小さき妹。夢溪小志「蛋家女、大者曰二魚姉一、小者曰二一一、魚大而蜆小、故姉曰レ魚、而妹曰レ蜆云」蛋家はあまの家。

【蜈】ゴ　虞　又、蜙に作る　―蚣コウはむかで（百足）毒蟲の一、體細長く長さ四五寸、節多くして頭と足とは赤く、背は黒し、二十對の足を有す。＝蜙蝑。

【蛞】ゴ　㊥
○ー蚓コウは、むかで。‖蜈蚣。○むささび。‖鼯。

【蛸】㊀サウ・セウ　㊁セウ　㊐消
㊀蝤ーはあしたかぐも。蝤（虫部十六畫）を見よ。㊁蝤ーはいか（烏賊）の一種の又、かまきりのたまご、おほむかふぐり。○㊐たこ（章魚）海中に産する軟體動物の一。‖蛸。

【蜃】シン　㊐　又、蜄に作る
○おほはまぐり（大蛤）‖蛤。○蛟の一種、赤き鬣ありて腰部以下の鱗が逆立す、氣を吐けば海市を現すといふ。

【蜃蛤】はまぐり。犬を狗といひ、小を蛤といふ。逸異記「黄雀秋化爲ㇾ蛤、春復爲二黄雀一、五百年爲二一蛤一」

【蜃気樓】光線と水蒸氣との關係にて海邊又は沙漠の空に山川城郭等の現出する現象（舊說、蛟の氣を吐くに由ると爲す、字解參考）淡書、天文志「海旁蜃氣象二樓臺一」‖蜃樓・海市。

【蜃市】前條に同じ。

【蜃樓】蜃氣樓に同じ。孫綽賦「一一百尺橫二滄海一」

【蜄】㊀シン　㊁シン　㊐震
㊀うごく（動）史、律書「辰者言二萬物之一也」‖娠。㊁おほはまぐり。‖蜃（前條）

【蜍】シ　㊐魚
○蟾ーは、ひきがへる、蛙類の大いなるもの。○月の異名。月中にひきがへるが居るといふ古傳說による。蟾（虫部十三畫）を見よ。

【蜀】ショク　㊐沃
○いもむし。淮南、說林訓「螽與一、狀相類而愛憎異也」蠋（虫部十三畫）に通ず。○たつまる、雞の大いなるもの「一雞」‖鶤雞。○國名、今の四川省地方、漢末劉備之を占有し、成都に都す、吳・魏と竝びて三國と稱す、二世四十四年にして魏に滅ぼさる、世に蜀漢と稱す。○巴ーは地名、秦ー郡を置く、卽ち今の四川省の異稱。

【長ク蜀如ク虎】魏の司馬懿が蜀の孔明を畏れたるをいふ。蜀志、諸葛亮傳、注「亮國二郡山一司馬宣王（名懿）自二荊州一入朝、後明帝使三西屯二長安一以宣王一登ク山視ク營、不二肯戰一、賈詡竊料二王必固ク戰、四日、公——、奈二天下笑一何」

【蜀江錦】蜀錦に同じ。白氏六帖「蜀成都有二濯錦之江一」

【蜀客】海棠の異名（三柳軒雜識）

【蜀漢】○蜀郡と漢中と。戰國策「棧道千里、通二於一一一」○國名。字解參考。

【蜀黍】からあふひ、はなあふひ。多年生草、莖高く枝なく、梅雨の頃、紅・紫・白等の花開く。

【蜀錦】蜀の錦江の水にて綠をさらして織りたるにしき。轉じて美麗なる錦にいふ。杜甫詩「錢難一一金盈尺」‖蜀江錦。

【蜀郡】漢代に置く、今の四川省の地、卽ち古の蜀國。

【蜀犬吠ユ日】蜀は山高く霧深くして、日を見ること少なく、犬日を見る時は怪みて吠ゆ。見識狹き者が賢人のすぐれたる言行に對して怪み疑ひて非難するに喩ふ。韓愈文「蜀中山高霧重、見ル日時少、毎ル至二日出一、則羣犬疑而吠之也」

【蜀魂】ショクコン　ほととぎす、蜀の望帝の魂魄、化してこの鳥となりしとの傳說に本づく。華陽國志「望帝禪二位於開明一、升二西山一隱焉、時適二月子規鳥啼、故蜀人悲二鳥鳴一也」益宇記「蜀之後主、名杜宇、號二望帝一、讓二位鼈靈一、望帝自逃、後欲レ復レ位不レ得、死、化爲レ鵑、每二春月閒一晝夜悲鳴、蜀人聞レ之曰、我望帝魂也」‖蜀魄・杜宇・杜鵑・子規。

【蜀山】○江蘇省宜興縣の東南三十八支那里に在り、本、獨山と名つく、宋の蘇軾、其の風景の蜀に類するを愛して今の名に改む、山下の居民、善く紫泥壺器を製して名あり。○蜀の山。杜牧、阿房宮賦「六王畢、四海一、一一兀、阿房出」

【蜀黍】高粱の別名。

【蜀椒】落葉灌木の一、さるはじかみ、もと蜀中に產す、其の子、は光黑、香料とす。‖巴椒・川椒。

【蜀道】四川省卽ち古の蜀へ通ずる重險の道路、所謂蜀の棧道。轉じて人情世路の困難なるに喩ふ。李白、蜀道難「嗚呼巍乎高哉ー一之難、難二於上一青天一」

【蜀道難】李白が蜀道の險難を述べて玄宗の西幸の不利なるを諷せし詩。古文前集に出づ。

【蜀鳥】杜鵑ホトトギスの異名。‖蜀魂。

【蜀椀】トウワン　蜀に產するきりの木、椀器に作るに適す。李賀詩「吳絲ー一張二高秋一」

【蜀魂】ショクコン 杜鵑ホトトギスの異名。＝蜀魂。
【蜀布】ショクフ 精細なる布、蜀郡より出づ。漢書、張騫傳「臣在二大夏時一、見二邛竹杖一一、一布一。」

【蜕】ゼイ タイ 國 遂

○ぬけがら、もぬけ、蛇・蟬などの解き脱せし外皮「蟬一」「蛇一」「委一」○もぬける、蟲類が外皮を脱ぐ。史、屈原傳「蟬二于濁穢一」

【蜑】タン 早 又、蛋・蜑に作る

○南方の蠻族、舟中に住み、又、水に沒して眞珠貝其の他の海產物を取るを業とす（桂海虞衡志）○國あま（海人）

【蜑戶】タンコ ○支那の南海の蠻人の家。又其の人。蘇軾詩「艤レ舟一一龍岡麓一」＝蜑舍。○國あま（海人）の家。
【蜑人】タンジン 前條に同じ。後山叢談「二廣居二由谷間一、不レ踰二嶺嶠一、謂二之猺人一、亦居謂二之一一、島上謂二之黎人一」
【蜑舍】タンシャ 蜑戶に同じ。
【蜑船】タンセン 南方の蠻族の乘るふね。元史、安南傳「市二一一百卿者千艘一」
【蜑丁】タンテイ ○支那の南海のえびすのわかもの。宋史、高宗紀「詔二廉州貢珠一、減二一一自便一」○國あま（海人）

【蜓】テン 銑 青 ティ

㊀蜻一はやもり。蜻（虫部九畫）を見よ。＝守宮・壁虎。㊁蜻一はとんぼう。蜻（虫部八畫）を見よ。＝蜻蛉。

【蜉】フ 尤

○蚍一はおほあり（大蟻）韓愈詩「蚍一撼二大樹一可レ笑不レ自量一」○一蝣はかげろふ、とんぼに似たる小蟲、夏秋の間に出づ、朝生れて暮に死すといふ、故に人生のはかなきに喩ふ。淮南、說林「鶴壽千歲、以極二其遊一、蜉蝣朝生而暮死、而盡二其樂一」＝渠略。
【蜉蝣一期】フユウイチゴ かげろふの生涯。人生の短きに喩ふ。蘇軾、赤壁賦「寄二蜉蝣於天地一」

【蜂】ホウ 圣 又、蠭に作る

○はち、腰細くくびれ、尾に毒針を有して人畜を刺す飛蟲。熟語は蠭を參看せよ。○ほこさき。唐書、高駢傳「突厥一銳、所向無完」＝鋒。
【蜂腰】ホウヨウ ○はちのこし。○轉じてほそきこし。＝細腰・柳腰。○歷詩をいふ、詩の一句中の第二字と第五字と上去入を同じくするもの。梁の沈約の詩格八病の一。詩苑類格「詩有二八病一、三曰二一一一

ノ知二其幾千萬落一」
【蜂蜜】ホウミツ　はちみつ。孟浩然詩「傍レ崖采二―一」
【蜂目豺聲】ホウモクサイセイ　蜂の如き目つき、豺の如き聲、凶惡なる人相。左、文元「蜂目而豺聲、忍人也」蜂一に蠭に作る。
【蜂王】ホウワウ　はちのかしら。爾雅、翼「蜂出二千百一蜂、中有二大者一爲レ王」

【蛹】ヨウ　通　さなぎ。蠶が化して―となり、―が化して蛾となる。

【蜋】ラウ　陽　○螳―はかまきり。螳（虫部十一畫）を見よ。○蜣―はくそむし。蜣（本頁三段）を見よ。‖蜋蜣。

【蜊】リ　支　○蛤―はしほふき、はまぐりの一種、介殻は灰色。‖開始合黎。○蜃淺―は蛤の類。介殻は淡蒼色にして白色又淡黒色の斑紋あり。

八畫

【蜼】キ　支　遙に同じ

―蛇はうねりゆく貌。柳宗元、天對「有虬―蛇、不レ角不鱗」‖委蛇逶蛇。

【蜴】エキ　陌　蜥―はとかげ。蜥（次頁二段）を見よ。

【蜼】キ　寘　くもざる、をながざるの類（長尾猴）鼻孔は上に向ひ、尾長さ四五尺、雨降る時は自ら樹に懸り、尾にて鼻孔を塞ぐといふ。爾雅「一卬鼻而長尾」註「似獮猴而大」
【蜼彝】キイ　禮器の名、くもざるを畫き、又漆塗りの周禮の六彝の一。

【蜿】㊀エン　元　㊁エン　阮　㊂ワン　潸　㊀虎の行く貌。楚辭、大招「虎豹―只」只は助字。○―は龍蛇などのうねり行く貌。○―蜒は蛇の行くにいふ。㊁―壇蜒は蚯蚓の異名。又、わだかまりて動く貌。㊂蟠―は龍蛇の動く貌。
【蜿蜒】エン　○龍蛇などのうねり行く貌。易林「蛇行―、不レ能レ止レ阪」‖蜒蜿。○屈曲する貌。李尤賦「蟠二虬文之―一」
【蜿蜒】エン　龍蛇のうねりくねりして行く貌。張衡、西京賦「海鱗變而成レ龍、狀―以蟠蟉」
【蜿蟤】エン　盤曲する貌。楚辭「乘二六螭一分――」

【蜵】エン　先　―蜎は屋宝の深く廣き貌（漢書、揚雄傳）

【蜞】キ　支　○あしたかぐも。‖蟢蜞。○せみ（蟬）

【蜣】キャウ　陽　―蜋はくそむし。全身黒く漆の如し好みて人畜の糞を推轉して丸となし、卵を其の中に産す。‖蜋蜣。蜣（虫部六畫）を見よ。

【蜾】クワ　哿　―蠃はじがばち（似我蜂）すがる、蜂の一種、腰細長し、この蜂は雌なく、螟蛉の子を取りて之を育て我に似よ我に似よといひ、七日にして化して己の子と爲すといふ。詩、小雅「螟蛉有レ子、―蠃負レ之」（螺―に果に作る）‖土蜂・細腰蜂・蒲蘆

【蜕】ゲイ　霽　○ひぐらし（寒蜩）○にじ「虹―」「雲―」爾雅「―雌虹也」（虹は雄）虹（虫部三畫）を見よ。‖霓。

【蜷】ケン　先　○蟲の屈まり行く貌。○連―は長く曲る貌。揚雄、甘泉賦「蛟龍連―于東崖兮」○圓みな、にな、田螺などに似て殻は細長く黒し、川溝などにすむ。‖河貝子、蝸蠃。
【蜷蜿】エン　わだかまる（蟄旋）貌。劉基詩「水蛇雪鼠相――」
【蜷局】ケンキョク　蟲の屈まり行く貌。又、詰屈して行かざる貌。局促なりの屈原、離騷「――顧而不レ行」

【蜡】サ　禡　一年の最終即ち陰暦十二月に行ふ祭の名「一祭」禮、禮運、註「夏曰清祀、殷曰嘉平、周曰―」、秦曰臘」
【蜡月】サゲツ　陰暦十二月の異名。周語「正二畎位一禮在二―一」

【蜡祭】サイ　歳末に萬神を饗するまつり。禮、郊特牲「蜡也者索也、歳十二月合二聚萬物一而索二饗之一也、蜡之祭也、主二先嗇一而祭二司嗇一也」【蜡氏】レ周禮、秋官の屬。周禮「一一」註「月令曰、掩レ骼埋レ藏、此官之職也」

【蛩】蟨（虫部十八畫）に同じ〔韻學集成〕

【蛩】シ　支　一蟲の名は蟋蟀の異名。

【蜻】㊀セイ　㊁セイ　靑　庚　㊀一蜻はこほろぎ。‖蜻蜻。㊁一蜓ティ一蛉はとんぼ、とんぼう、あきつ、飛蟲の一、水蟲の羽化せしもの、頭大きく、腹は細長く六足にして、四枚の翅あり。‖青蜓・赤卒・赤衣使者・赤弁丈人。【蜻蜓】ティ　とんぼう。杜甫詩「翡翠鳴二衣桁一、一一立二釣絲一」【蜻蜓洲】ティヂウ　國我國の古名をあきつしまといふの漢字、あきつはとんぼの古名。‖蜻洲。【蜻蛉】セイレイ　とんぼう。呂覽「海上有レ人好二一一一者一」

【蜎】ゼイ　ゼツ　齊　厥　又、蚋に作る　○か（蚊）有、動學「醯酸而一聚焉」「蚊一」「蠅一」○國ぶよ、ぶと、草間に棲む小さき羽蟲、人畜の血を吸ふ。

【蜥】セキ　錫　一蜴はとかげ、爬蟲類の一、やもり（壁虎）に似たる蟲、四足あり、雌は褐色、雄は青緑色、草間、石垣の間などに棲みて小蟲を食ふ。說文「在レ草曰二蜴、在レ壁曰二蜥蜴一」‖石龍。【蜥蜴類】セキエキ　動物學の名詞、此類の動物の特徴は體細長く圓柱狀を爲し、被るに細鱗を以てし、四肢短小にして蹼なし、兩顎に細齒あり、蜥蜴など是れなり。

【蜘】チ　支　一蛛はくも、八足ある小蟲、頭胸は小さく、腹大きく絲を吐き網を張りて昆蟲を捕へて其の血を吸ふ。關尹子「聖人師二一蛛立二網罟一」

【蜕】テイ　霽　蛻に同じ　一蛛は、にじ（虹）詩、衛風、蝃蝀篇に虹に比して男女の淫奔をそしれるに由りてまた淫亂の義に用ふ。詩、衛風「一蜕在レ東、莫二之敢指一」‖蜘蛛。

【蜩】㊀テウ　㊁テウ　蕭　嘯　㊀せみ（蟬）青斑ある蟬。詩、豳風「五月鳴一」○寒一ケンはつくつくぼふし。‖寒蜩。○青一セイ・茅一バウはひぐらし。○馬一バは おほぜみ。○蟬の總名「馬一」「秋一」「痦一」㊁一螭レウは龍の首を掉ひ動かす貌。漢書、司馬相如傳「一螭偃蹇」【蜩甲】エフ　せみのぬけがら（蟬蛻）薬、寓言「予一一也」【蜩蟬】センテウ　せみ。【蜩螗】タウ　ひぐらし。【蜩螗沸羹】タウカウ　次條に同じ。【蜩沸】フツ　さけぶ聲の甚だかまびすし（讙譁）き形容。詩經の「如レ蜩如レ螗、如沸如レ羹」に本づく。王勃文「百度一一、聽二鼓鉦一而懷レ音」【蜩螗】タウ　ひぐらし。爾雅、疏「一一、蜩蟬、舍人曰、皆蜋也」【蜩螳】タウラウ　ひぐらし。

【蜨】蝶（虫部九畫）に同じ。

【蜋】トウ　東　蟷（虫部九畫）の俗字。

【蜎】ハン　阮　一蜎は小蟲の一。柳宗元、蝜蝂傳「蜎一者善負小蟲也、行遇物、輒取而負レ之、雖二困劇一不レ止」‖負版〔爾雅〕

【蜚】㊀ヒ　㊁ヒ　尾　微　未　㊀あぶらむし、褐色にて前後に翅あり、塵所などに棲む、一種の惡臭ある害蟲。○いなむし、體輕くして蚊の如し、稻花の上に羣集して之を食ひ、蟲一ケツ蜎一ケンは、にじ（虹）蜎（本畫）を見よ。

【蜳】トン　元　蹲一ソンは氣の安定せざる貌。むなさわぎ。莊、外物「蹲一不レ得レ成」

【蜢】バ　馬　麌　一蚱は蝗ヲウの類。

【蜂】蜂（虫部四畫）に同じ。

【蜩】蜩（虫部六畫）に同じ。

【蜎】蟲（虫部九畫）の俗字。

【蜚】㊀ヒ　㊁ヒ　尾　微　未　㊀あぶらむし、褐色にて前後に翅あり、塵所などに棲む、一種の惡臭ある害蟲。○いなむし、體輕くして蚊の如し、稻花の上に羣集して之を食ひ、

稻をして實らざらしむ。㊀とぶ、飛に通ず。史、楚世家「三年不ㇾ一、一將沖ㇾ天」

【蚊蚋】ブン　とぶとり。史。封禪書「殺二道方奇獣一一及白蛾諸物一」‖飛禽・飛鳥。

【蜚語】ヒゴ　ねなしごと、誰いふとなくいひ出したるうはさ、無根の語。漢書、酈夫傳「乃有二一一一爲二惡言一聞レ上」‖飛語・流言。

【蜚廉】ヒレン　○蟲蛭ユウシツの異名、ぬかが。史、周紀「一一一鹿ㇾ野」○良馬の名。東方朔文「騏驥驕耳、一一騄駬、天下良馬也」

【蜚鳥盡良弓藏】ヒテウジンリヤウキウカクス　敵國已に亡ぶれば、もはや謀臣を要せざるに喩ふ、蜚一に飛に作る。史、越世家「一一一、狡兎死、走狗烹」

【蜚蠊】ヒレン　とびあがる。‖飛揚。

【蜚蠊】ヒレン　あぶ。

【蜚廉】ヒレン　○殷の紂王の諛臣。孟、滕文公「紂ニ一一於海隅一而戮レ之」○風の神。風俗通「一一、風伯也」○能く風を起す神禽。後漢書、班彪傳、注「一一神禽能致二風氣一者也」

【蜚蠊】ヒレン　あぶらむし（油蟲）腐穢間に生ずる害蟲、體は赤褐色にして觸角甚だ長し、脚は扁平にして行くこと迅し、之に觸るれば悪臭を發す。‖蜚蠊。

【蜚虫】ヒ　國　風

あぶらむし（蜚）「蠊ー」‖蜚蠊。

【蜜】ビツ　ミチ　風　通音キツ

○みつ。○はちみつ。蜜蜂ホウが花より採りて巣の中にかもし造る甘き粘液「ー糖」○崖ー ガイは櫻桃の異名。

【蜜印】ミツイン　死後に官を贈るに蠟に刻みて印と爲すをいふ。晉書、山濤傳「濤薨、勅贈二司徒ー一榮祕、侍中貂蟬、新安伯ー一青朱綬一」

【蜜香】ミツカウ　波斯ペルシア土耳其トルコ等に產する樹の名、高さ丈餘、春末黃花を開く、質は黑く味甘酸食ふべし、仁に劇毒あり、人を殺す、歲久しくして根本甚だ大なり、之を伐り、凡そこと四五年にして其の腐らざる者を取りて香を製す。‖沒香・木蜜。

【蜜香紙】ミツカウシ　紙の一種。南方草木狀「一一、以二蜜香樹皮一作レ之、微褐色、有レ紋如二蕨子一、極香而堅韌、水漬レ之、不二浸爛一」

【蜜月】ミツグワツ　四洋の風俗、新婚後三十日間の稱、此間蜜糖水或は蜂蜜酒を飲むを例とす。英語の譯。

【蜜汁】ミツジフ　みつ。蘇軾詩「酸酒如二醯汁一甜酒如ニ一一」

【蜜人】ミツジン　水乃伊リの異名。

【蜜漿】ミツシヤウ　はちみつにて造りし暑中の飲料。魏志、注「其術還至二江亭一、時盛暑欲レ得ニ一一」

【蜜酒】ミツシユ　蜜より製したる酒。宋史、三佛齊國傳「有二花酒・椰子酒・檳榔酒・一一、皆非二醞製所一レ醞、飲レ之亦醉」

【蜜煎】ミツセン　蜜につけたる果品モノ。吳自牧、夢粱錄「凡經紐果時果一一糖煎等品」

【蜜餞】ミツセン　前條に同じ。‖蜜漬（南史）

【蜜蜂】ミツホウ　みつばち。杜甫詩「風簾粉蝶晝、花塢一一喧」

【蜜蜆】ミツラウ　蜜蜂の巢窠にて製したる蠟。

【蜜林檎】ミツリンキン　甘き酒の名。味は蜜の如く、色は林檎の如きもの（事物紺珠）

【蜜柑】ミツカン　國　橘ナツの類、紀伊より出づるを上品とす「紀州ー一」‖蜜橘。

【蜮】ヨク・キキ　風　通

○いさごむし、水中に在る怪蟲の一、蜮ヨクに似て三足あり、水中に在りて沙を含みて岸上を行く人の影を射て之を殺し、又害すといふ。‖射工・射影・短狐。○詛じて人を害する者に喩ふ。詩、小雅「爲ー鬼爲ー」○まどはす（魅惑亂）○ひきがへる（蝦蟇）‖蝦。○苗を食ふ蟲。呂覽「又無二一心一」心苗を食ふを蜮といひ、苗を食ふをといふ。

【蚩】シ　風　通

蚑（前條）に同じ。

【蛸】リン　風

蜃ーシンは行く說。郭璞、江賦「神蜃ー以沈遊」

【蛹】リヤウ　義

蛹ーヨウはすだれ（虫部六畫）を見よ。

【蛾】レイ　ライ　風

一種の神蛇、神泉の中に潛み、能く雲を興し、雨を降らすといふ。張景陽詩「黑ー躍重淵」

【虫】　畫　未

はりねずみ。鼠に似たる小獸、脊及び側面の毛、針の如く、之をさかだたせて敵を防ぐ。玉篇「似豬豬而小」古、蟲に通ず。‖蝟鼠。

【蝟起】イキ　はりねずみの毛が竪つ。事端の紛起するに喩ふ。蝟毛參看。劉禹錫文「一一蠭連」

【蝟蘇】イソ　はりねずみの毛のあつま

れるが如く、事の一時にどたと多く生ずるにいふ。漢安期賦「文翠發起以天矯、蟉虯ー一而縈繚」【蟉繚】リウリョウ　長れちぢかまる形容、蟉が敵に遇へば身縮するが故。皮日休詩「如何鄉里徵、見レ之乃ー一」【蟉虯】ヂウキウ　はりねずみのけ、多き數の形容。漢書、賈誼傳「反者如二ー一一而起」

【蠙】ヒン　眞

蜯ーはわらぢむし、おめむし。‖伊威。

【蠙】イウ　尤

ーは龍蛇などのうねうねせる貌。司馬相如、大人賦「駮赤螭青虯之ー蟉虯蜒ー」‖蟉虯。

【蠙】イウ　尤

蜯ーはかげろふ、蜉（虫部七畫）を見よ。

【蠙】イウ　尤

○ーは龍蛇の貌。韓愈詩「山勝電突突、水洚龍ー一」○ーは龍蛇の行く貌。郭璞、江賦「神娭ー蜿以沈遊」

【蠙】キン　眞　ウン　文　エン　元

○ーは龍蛇の貌。韓愈詩「山勝電突突、水洚龍ー一」○ーは龍蛇の行く貌。郭璞、江賦「神娭ー蜿以沈遊」

【蠙】エン　元

○なつぜみ、むぎわらぜみ。詩、大雅「如ー如蜩如螗」傳「螗、ー也」‖蟬蛄。○ー蜒はやもり、人家の壁などに棲む爬蟲、體細長くしてひらたく、灰褐色にして四足の指先に吸盤あり。古今注「蜒一名龍子、一曰守宮、一曰蛇醫」‖守宮・壁虎・蜥蜴。

【蠙】エン　元

てながざる。爾雅「猱ー蝯」‖猨。

【蠙】エン　先

○蚯蚓（みみず）の子。說苑「蠙ー仆柱梁」○蟾（ひきがへる）の子の未だ翅あらざる者。春秋、宣十三「冬ー生」

【蠙】カ　麻

○えび（海老・沙虹）種類甚だ多し、草ー龍ー斑節ー等あり。○ー蟆（がま）は蛙（かへる）の大なるもの、背に黑點あり。○ー夷（えぞ）は蝦に通ず。○ー蟆は蛙の大いなるもの、背に黑點あり。○ー夷はえぞ、關東・奥羽・北海道等に住せし種民。唐書、日本傳「使者與ー夷人偕朝」‖蝦

【蠙】エン　先

○蚯蚓（みみず）の子。說苑「蠙ー仆柱梁」○蟾（ひきがへる）の子の未だ翅あらざる者。春秋、宣十三「冬ー生」

【蠙】カ　麻

○えび（海老・沙虹）種類甚だ多し、草ー龍ー斑節ー等あり。○ー蟆（がま）は蛙（かへる）の大なるもの、背に黑點あり。○ー夷はえぞ、關東・奥羽・北海道等に住せし種民。唐書、日本傳「使者與ー夷人偕朝」‖蝦

【蠙】ケン　先

○みぞごろさぎ。○ー蛤は獸の名。○ー輦は車の名。南史、殷孅傳「作大ー輦車」○ー蠙は蠙蠃の異名。

【蠙】カイ　灰

【蠙】カン　刪

【蠙】カン　刪

【蠙】カン　刪

【蝸角之爭】クワクカクノアラソヒ 爭ふ所の小なるをいふ。莊、則陽「有ㇾ國ニ於蝸之左角一者曰ニ觸氏一、有ㇾ國ニ於蝸之右角一者曰ニ蠻氏一、時相與爭ㇾ地而戰、伏ㇾ尸數萬、逐ㇾ北旬有五日而後反」ㇾ蠻觸之爭。

【蝸牛角上爭】クワギウカクジヤウノアラソヒ つまらぬあらそひ。前條參看。白居易詩「蝸牛角上爭ニ何事一、石火光中寄ニ此身一」

【蝸牛廬】クワギウロ 蝸廬を見よ。

【蝸舍】クワシヤ 蝸廬に同じ。李商隱詩「自喜蝸牛舍」

【蝸跡】クワセキ かたつぶりのはひたるあと。西陽雜俎「睿宗爲ニ巽王一時、寢牀上一一蝸迹。

【蝸涎】クワゼン かたつぶりのよだれ。白居易詩「蝸牆絡ニ一一」

【蝸兒】クワジ こどものかみの古今注「一一謂ニ小兒髮如ニ蝸一」

【蝸篆】クワテン かたつむりのはひたる跡の篆書に似たるをいふ。毛滂詩「泥銀四壁蝸ニ一一」

【蝸牛】クワギウ ちひさいへ。魏志、管寧傳、注「焦先作ニ圜舍一形如ニ蝸牛廬一、故謂ニ之蝸牛廬一」蜂窩王詩「一一未ㇾ卜ㇾ安」ㇾ蝸舍。

【蝌】クワ 本、科に作る

一斗ㇾはおたまじゃくし、蛙の幼蟲、頭大きく尾小さく、黑色にして足なし、春月水中に游泳す。

【蝌蚪】クワト おたまじゃくし。ㇾ蝌斗・科斗・活東。

【蝌蚪字】クワトジ 古代文字の一種、其の形おたまじゃくしの頭大にして尾細きに似たり、故にいふ。蝌蚪一に科斗に作る。晉書、東哲傳「太康元年、汲郡人不ㇾ準、發ニ魏安釐王冢一、得ニ竹書數十車一、漆書皆科斗字」ㇾ科斗文。

【蝴】コ 本、胡に作る

一蝶ㇾはてふ。蝶（本集）を見よ。

【蝴蝶花】コテフクワ しゃが、陰地に生ずる多年生の常綠草、かきつばたの屬、春日白くして紫暈あり、心は橙黃色の美花を開く、蝴一に胡に作る。ㇾ蝴蝶蝴蝶。

【蝴蝶夢】コテフノユメ 莊子、夢に蝶に化し、樂んで彼我の別を忘れたる故事。莊、齊物論「昔者莊周夢爲ニ胡蝶一、栩栩然胡蝶也、自喩適ニ志與一、不ㇾ知ㇾ周也、俄而覺、則蘧蘧然周也、不ㇾ知ㇾ周之夢爲ニ胡蝶一與、胡蝶之夢爲ㇾ周與、周與ニ胡蝶一則必有ㇾ分矣、此之謂ニ物化一」胡は一に蝴に作る。ㇾ胡蝶夢・蝶夢。

【蛸】㊀シウ ㊁イウ 尤 尤

㊀一蜻ㇾはきくひむし、木中に在りて木のしんを食ふ害蟲、色白き故に美人の領の形容とす。詩、衛風「領如ニ一蝤一」○一蛑ㇾはがざみ、がざめ、蟹の一種、海に産し、形大きく、煮れば紅色を呈する。㊁古、蝣に通ず。蜉ㇾはかげろふ。漢書、王褒傳「蜉一出以陰」註「蜉一、渠略也」

【蝨】レッ 質 又、虱に作る

○しらみ（半風子）寄生蟲の一、六本の足と二本の觸角とを有す、人畜の血液をすふ。說文「搔」人蟲也」淮南、說林「大廈既成、燕雀相賀、湯沐既具、蝨一相弔」○狗一ㇾは胡麻ㇾの異名、形の似たるが故。

【蝨】孔に從ふ、孔は卽ち迅の字、疾なり、行くこと迅疾なる蟲の會意。

【貫ㇾ蝨之技】クワンシツノワザ 弓術のすぐれたるにいふ。列、湯問「飛ニ蝨於牖一而望ニ之（中略）以ニ燕角之弧、朔蓬之幹、射ㇾ之、貫ニ蝨之心一」

【捫ㇾ蝨】ブンシツ 人の前にてしらみをひねる、旁若無人の狀をいふ。晉書、苻堅載記「桓溫入ㇾ關、王猛被ㇾ褐而謁ㇾ之、一面談ニ當世之事一、捫ㇾ蝨而言、旁若ㇾ無ㇾ人」

【蝨處ニ褌中一】シツシヨコンチウニ しらみがふんどしの中にひそみて居る、見識狹くして一時の安をむさぼる者に喩ふ。晉書、阮籍傳「寓ニ處褌中一、逃ニ乎深縫一、匿ニ乎壞絮一、自以爲ニ吉宅一也」

【蝨ㇾ頭面黑】シツガトウメンクロシ 変る處によりて、化せらるるに喩ふ、朱に交れば赤くなる。文選「一一、蝕食ㇾ袖面香」

【蝕】ショク 職

○かく、やぶる。○むしばむ、侵し蟲ㇾむ「侵一」「斜一」「蟲一」○日月が虧ける、卽ち月が月に遮られ、又月が地球の影をうけて光を失ふ、春秋には食に作る。又、其の現象、日食・月食をいふ「日一」「月一」「薄一」

【蝕既】ショクキ 日食・月食のかけ盡くる機。劉禹錫賦「如ニ蝕既面一一今」

【蝍】ショク 職

○一蛆ㇾはむかで。蜈（虫部七畫）を見よ。ㇾ蜈蚣。○一蠋ㇾは尺蠖ㇾシヤクトクム

【蝻】セン 銑 又、諧に作る

○動くむし。一說、足のなき蟲。○蟲がうごめく。

【蜿】 ゼン　シュン　㊥ 又、蠕に作る　㊦ うごめく（動）蟲が蠢動する。

【蜿動】うごめく。漢書、匈奴傳「跋行喘息ー」漢賈、匈奴傳「跋行喘息ー之類、莫ン不ン就二安利一避二危始一」‖蠢動。

【蜓】 テイ　㊥ 蜻ー＝はとんぼ。‖蜻蜓・蜻蛉。

【蝶】 テフ　㊥ もと蛈に作る　てふてふ、かはびらこ。けむし類の羽化せしもの、棍棒狀の觸角と長き舌とを有し、花の蜜を吸ふ「狂ー」「紛ー」「野ー」「蛺ー」「蝴ー」「鳳ー」

【蝶形花】植物學の名詞、蝶を張りたる狀に似たる花の總稱、豆類の花など之に屬す。

【蝶兒】蝶の兒は動靜。

【蝶粉蜂黃】蝶の羽の白き粉、蜂の黃なる色。鶴林玉露「蝶交則粉退、蜂交則黃退、周美成、滿江紅詞、——淚退了、正用ン此也」

【蝶夢】○昔、莊周が夢に蝴蝶となりきといふ故事。蝴蝶之夢を見よ。○轉じてゆめの義とす。陳遘詩「家山ー隔、節物雁空來」

【蝶翅】てふのはね。溫庭筠詩「ー朝粉盡、猶背夕陽多」‖蝶翅。

【蝘】 ベン　㊥ 又、虹・蠉に作る　○あぶ、人畜を螫み血を吸ふ飛蟲、又花の蜜を吸ふものもあり。蠅に似て大いなり「牛ー」「花ー」「食蟲ー」漢書、中山靖王傳「明月曜」夜、蚊ー背見」○はくり、あみがさゆり、野草の一、春、淡黃色の花開く。詩、衛風「言采其ー」‖蒭・貝母。

【蝠】 珀（二四九頁一段）に同じ。

【蝙】 ビ　㊥ 龜の殼中に寄生する、蝦に似たる小蟲。又、之を食へば顏色に愛嬖を益すといふによりて愛嬖の義とす。唐書、慶后王氏傳「挾ー道」蠱」上、帝信ン之、下ン詔廢后」

【蝜】 フ　㊥ ○わらぢむし、おめむし。○ー蛾ハは一種の蟲の名。柳宗元蝜蛾傳「ー蛾者善負小蟲也、行過ン物輒取印其首負ン之、雖困劇不ン止」‖負版。

【蝮】 フク　㊥ まむし、くちばみ、毒蛇の一、普通の蛇よりは大きく短く、背に圓き斑紋あり「ー蛇」史、田儋傳「ー螫手則斬手、螫足則斬ン足」

【蝮蛇】蛇の一種、まむし。爾雅、ー傳三寸、首大如ン擘」

【蝮蠍】まむしと、さそりと、惡人に喩ふ。宋史、楊龜傳「小人譬ン之ー一、其兒惡害ン人、根二乎天性一」

【蝮蛇】まむし。論衡「曉使二捽入二大澤之野一、虎狼不ン搏、ー不ン噬」

【蝮蠆】まむしと、さそりと。說苑「爲人不ン搏ー不ン螫」

【蝠】 フク　㊥ ○蝙ー＝はかはほり。蝙（次條）參看。○まむし、蝮（前條）に通ず「ー蛇」

【蝙】 ヘン　㊥ 蝙に同じ　ー蝠＝はかはほり、かうもり、翼の如き膜あり、夜間飛び翔りて蚊などを食ふ小獸。韓愈詩「山石犖确行徑微、黃昏到寺ー蝠飛」‖仙鼠・服翼・飛鼠。

【蝥】 ○ボウ・ム　○ベウ・メウ　㊥ 又、蟊に作る　○稻の根を食ふ害蟲、ねきりむし。‖根白蛆。○轉じて害をなす者に喩ふ。○ー弧ハは古、諸侯の旗の名（左、隱十一）○斑ー＝はんめう「螫ー」毒蟲の一。‖斑猫。

【螫賊】螫は苗の根を食ひ、賊は苗の節を食ふ蟲。良民を害する惡人に喩ふ。左、成十三「帥二我ー一、以來蕩二搖我邊疆一」‖蟊賊。

【蝓】 ユ　㊥ 蛞ー＝はなめくぢ、なめくぢら。蛞（虫部六畫）を見よ。

十畫

【蝨】 イ　㊥ ○ー女ハは蜆ハ。‖縊女。○圖ゐる、ゐい、たいのゐ、海濱の泥中にすむ蚯蚓に似たる蟲、鯛を釣る餌とす。

【蝠】 キウ　㊥ ○蝠ー＝はじかばち、こしぼそばち（細腰蜂）蜾（虫部八畫）を見よ。○牛馬などの皮中に生

ずる一種の小蟲「牛ー」

【蝎】カツ　曷

蝎ーカツは目を搖かし舌を出す貌（漢書、司馬相如傳）

【蟣】蟣（虫部十二畫）に同じ。

【蟢】ギ　紙　尾

あり。‖蟻。

【蟢塚】ギチョウ　ありづか。王安石詩「巴屋如二ー一、蔽膀難二縦閒一」‖蟻封。

【蜕】クヮイ　キ　祭　霽

さなぎ（蠶蛹）

【蜎】クッ　物

あしはらがに、盤の一種にして小さし「蜎ー」

【螢】ケイ　青

ほたる、夏日、水邊に生じ、晝は草間にひそみ、夜間燐光を放つ飛蟲「流ー」「飛ー」「螢ー」禮、月令「腐草爲ー」‖焰夜光。實燭・宵行・耀夜・照燿・丹鳥・景天・燐。

【螢案】ケイアン　車胤の故事により、苦學する義とゝ、案はつくゑ、螢雪參看。

王逢詩「十年ー一書連レ屋、八月龍灣浪拍レ天」‖螢窗。

【螢影】ケイエイ　ほたるの光のかげ。王維詩「玉窗ー一度、金殿人聲絶」

【螢燈】ケイトウ　ほたるのひかり。許渾詩「螢照聞レ戲散、ー一觸レ簾回」‖螢光。

【撲螢】ハクケイ　螢をうちて捕ふ。高駢國初「ー一レー涼夜沉沉月、隙レ面清歌濟濟秋」

【螢火】ケイクヮ　ほたるのひ。北史、隋煬帝紀「上於二景華宮一徵二求ー一得二數斛一、盛以二大爽一、夜出遊レ山、放レ之、光偏二巖谷一」李白詩「微身奉二日月一、照若二ー一光一」

【螢火照飛】ケイクヮショウヒ　ほたるがみだれ飛ぶ。元稹、夜坐詩「ー一秋已近、辰星早沒夜初長」

【螢光】ケイクヮ　ほたるのひかり。杜牧文「ー一燈火、何預二日月之明一」

【螢燈】ケイトウ　ほたるのひかりと、たいまつの火と、微光又、微力の喩に用ふ。張說文「大明朝昇、ー一無レ助」

【螢石】ケイセキ　ほたるいし、暗處にて熱すれば燐光を發する一種の鑛物。

【螢雪】ケイセツ　螢や雪を燈火に代へて、苦學する。晉書、車胤傳「車胤字武子、幼恭勤博覽、貧不二常得一レ油、夏月以練囊一盛二數十螢火一、照レ書誦レ之、以レ夜繼レ日、後官至二尚書郎一」晉書、孫康傳「孫康少清介、交游不レ雜、家貧無レ油、仰映二雪讀一レ書、後官至二御史大夫一」

【螢窗】ケイソウ　苦學する書齋、前條參看。許渾詩「殷勤爲謝南溪客、白首ー一未レ見レ招」

【螢窗雪案】ケイソウセツアン　苦學する。古文眞寶前集、王安石、勸學文、注「ー一窗、宜二勤看一二古書聖賢之書一」

【螢爨】ケイサン　ほたるを入れるふくろ。螢雪參看。陳造、秋興賦「ー一之晉伊」

【螢貝】ケイバイ　螺にの一種、ほたるがひ、大さ四五分、外殼は黒色、内部は眞珠光を放つ。

【螇】ケイ　霽

○ー蜥ケイセキはなつぜみ、むぎわらぜみ。‖蜻蜓。○ー跋ケイバツはばたはたと飛ぶ。飛ぶ時、翅がはたはたと鳴るが故。

【螈】ゲン　クヮン　元

○蠑ーエイはゐもり。蠑（虫部十四畫）を見よ。‖蠑蚖・蛇螈。○なつこ（夏蠶）淮南、泰俗「ー一蠶一歲再收、非二不利一也、而王法禁之者、爲二其殘一桑也」‖原蠶・再蠶。

【蝨】シン　眞

むぎわらぜみ、なつぜみ、蟬の類にして小なり、其の額の廣く方なるが故に、美人のひたひの形容とす。

【螓首】シンシュ　○美人のひたひにいふ。詩、衞風「ー一蛾眉、巧笑倩兮、美目盼兮」○轉じて美人の義とす。

【螗】タウ　陽

なつぜみ。背青く頭に斑紋あるせみ、其の聲清し。

【螗蜩】タウチョウ　なつぜみ。‖蜩螗・蜩蜩。

【蝕】蠹（虫部十八畫）に同じ。

【螣】㊀トウ　㊁トク　職　蒸

㊀龍に似たる蛇。㊁はくひむし、蟲ヶの一種、葉を食ふ蟲。詩、小雅「去二其螟ー一」傳「食二葉曰ー一疏「ー一蟲也」

【螣蛇】トウダ　龍に似たる神蛇、能く霧雨を興して其の中に遊ぶといふ。莊、齊物論「ー一無レ足而飛、梧鼠五技而窮」

【螃】ハウ　陽

ー蟹はかにの一種、つがに、どうがに。

【螫】ハン　刪

○一螯ガウは一種の毒蟲。‖斑猫。○一貪ガウは臭蟲、あぶらむし。‖螯貪。

【蜧】 ヘイ 霽

○だに、うしじらみ(牛蝨)牛馬犬などにたかって血を吸ふ小蟲「牛一」○蚍に通ず。

【螟】 ベイ ミャウ 靑 通音 メイ

○くきむし、ずゐむし、苗稻の心を食ふ害蟲。說文「吏冥冥犯法、卽生一」○一蛉レイはあをむし、蝶などの幼蟲にて色青く、桑又は菜の葉などにたかるものの總稱。○焦一は極めて小なる蟲の名。列、殷湯「江浦之間、生蜚蠊、其名曰焦」、莊飛而集于蚊睫」

【螟蛉】メイレイ ずゐむしと、いなごと、共に稻を害する蟲の總稱。超然臺賦序「螟二除一一、遂二捕盜賊一」

【螟蠕】メイヂュ くきむし、苗の心を食ふ蟲の幼蟲。公沙穆傳「縣界有二一一食レ稼、百姓憧憧」

【螟螣】メイトク ずゐむしと、はくひむしと、共に害蟲。詩、小雅「去二其一一、及二其蟊賊一」

【螟蛾】メイガ いなむし。後漢書、顯宗紀「勸二督農桑一去二其一一、以及二蟊賊一」

【螟蛉】メイレイ あをむし、字解參看。詩、小雅「一一有レ子、蜾蠃負レ之」蜾蠃カラ卽ち土蜂ハチがあをむしの子を取りて之を負ひ、己の子とすといふ傳說によりて養子を一一子といふ。

【螾】 ユ 虞

六斛四斗「一斛」

【融】 ユウ 東

○やはらぎたのしむ(和樂)○甚だあきらか(明)詩、小雅「昭明有一」○ほがらか(朗)○とける、きえる(鎔銷)固體が液狀になる、鎔解する。王安石詩「瓦溝已石雪花一」○ゆげがあがる、火氣が上出一散する。說文「炊氣上出也」○とほる(通)流通する。景福殿賦「品物蕃一」「金一」通鑑長編「公家之費、敗於民間者、謂之國一」○ながし(長)○うしとらのかぜ(東北風)○縣の名、明代に置く、廣西、柳江道に屬す。○祝一ジュクは火の神。禮、月令「其神祝一」

【融泄】ユウエイ とけちる、發散する貌。景福殿賦「隨レ雲一一」

【融裔】ユウエイ 聲の大いにして長き貌。潘岳賦「泓宏一一」

【融液】ユウエキ とかしながす。晉書、王濬傳「吳人於二江險要害之處一以二鐵鎖一橫二截之一、濬乃作二火炬一長十餘丈、大數十圍、灌以二麻油一、在二船前一、遇レ鎖燒レ之、一一斷絕」

【融解】ユウカイ ○とける。とかす。‖融釋。○熱學にて固體が熱によりて變じて液體となる現象をいふ。

【融合】ユウガフ とけて一つになる。華陽國志「涪縣縣水出二縣山一、其源出二金銀一、取レ火一一之一爲二金銀一」‖融和。

【融化】ユウクワ とけあひてかはる。朱德潤詩「綢繆一一初、元氣下磅礴」

【融會】ユウクワイ とけて一つにあつまる、とかしてあつめる。隋煬帝、重與二智者一講說啓「智者一一、盡有二階盞一」

【融氷】ユウヒョウ とけたる水銀。宋敏求詩「水面如二一一一」

【融釋】ユウシャク とく、とける。又疑がさっぱりと解ける。蘇適、沈子淵文集序「便下讀レ之者、如レ設二方丈珍殽一、足飫賓客而無二醉飽之失一、又能一一一衆疑上」

【融然】ユウゼン 氣分ののびやかなる貌。晉、陶潛傳「每二一醉一、則大醉一一」

【融暢】ユウチャウ とけやはらぐ。黃庭堅文「使二義理一一、則下レ雖時不二來吃一也」

【融通】ユウツウ ○とどこほりなくかよふ。任昉、文宣王行狀「道識優遠、裏裏一一」○圓ヱン通鏡を流通する。

【融通念佛宗】ユウツウネンブツシュウ 佛教の一派、已か十界の衆生に念佛を回向すれば十界の功德がまた己に滙なく通ずるといふ教義。漢德帝の時、良忍創む。‖念佛宗。

【融風】ユウフウ うしとらのかぜ、立春節に吹く風の名稱、注「東北曰一一一」‖炎風・條風。

【融融】ユウユウ ○やはらぎ樂む貌。左、隱元「其樂也一一」○のどやかなる貌。阿房宮賦「歌聲喉聲、春光一一」

【融朗】ユウラウ すきとほりてあきらか。蘇頲文「風韻一一、文詞富贍」

【融和】ユウワ ○融合に同じ。○のどかにやはらぐ。王禹偁文「氣候、風雪、雨露一一」○圓ヱン通鏡を流通する。

【螂】 蜋(虫部七畫)に同じ。

十二畫

【螾】 イン 眞

○みみず(蚯蚓)蚓(虫部四畫)に同じ。○つくつくぼふし(寒螿)

【螯】 ガウ 豪

○蟹のはさみ、蟹の前足にある鋏刀ケウ形の爪、其の中の肉は味美なり「蟹一」晉書、畢卓

傳「左手持酒杯、右手持螯ー」〇車ーはおほはまぐり、其の殻は紫にして鮮明なること玉の如く斑點ありて花の如し、火を以て炙れば殻開く、肉を取りて之を食ふ。梁元帝謝車螯啓「車ー味高二食部一名陳二物志一」

【蝌】 カク　麻

蝌ーは色あをく形小にして長股ある蛙。禮、月令「蝦ー鳴」注「蝦ー、蛙也」

【蠉】 ケツ　薛

蛇に似て四足ある水蟲、能く人を害す。賈誼、弔屈原文「偭二蝮蛇一以隱處兮」

【蠧】 サク　藥

蠧ーは穀土中に生ず、形蠶の如くにして大、根、又、芽を食ふ害蟲、ぢむし、すくもむし、ねきりむし。〓地蠶。

【蠧害】 政に從ふ、曹は官曹、其の多きこと官曹の如きを言ふ意。

【蟋】 シツ　質

ーはこほろぎ、きりぎりす、草間又は牀下などにすむ、長さ六七分、全身黒色にして薄き翅あり、秋夜翅をすり合せて聲を作す、性鬬を喜ぶ。詩、唐風「ー蟀在レ堂、歲聿其莫」〓促織・吟蛩・蟋織。

【蟅】 シャウ　陽

蟅ーはつくつくぼふし。蟬の小にして色青きもの「嘒ー」〓寒蜩。

【蟲】 シュウ　東

〇いなご、いなむし、蝗類の總稱。〓螽。〇ー斯ーはははたおり。〓蜤蝑。〇草ーはははたはた。

【蟲斯說說】 螽斯は蝗類の蟲、はたおり、一回に九十九子を生む、說說は和ぎて多く集まる貌。夫婦和合して子孫の多きに喩ふ。詩、周南「螽斯羽說說兮、宜レ爾子孫振振兮」

【蟀】 シュツ　質

蟀ーはこほろぎ、きりぎりす。蟋(本書)を見よ。〓螽。

【螯】 セキ　陌

〇さす、毒蟲がさす「嚆ー」史、田儋傳「蝮ー手則斬レ手」(一本ーを蠆に作る)史、淮陰侯傳「猛虎之猶豫、不如二蜂蠆之致一ー」〇害毒を致す義「毒ー」

【蟲斯說說】 螽・刺・條・指の別は刺(三三二頁四段)の條を見よ。

【蠌】 ダ　歌　又、蠃に作る

ーˍ蠃はかまきり、體長く頭は扁平三角形にして眼は凸起す、前肢は鎌の如く、害蟲を捕へ食ふ。禮、月令「仲夏ー螂生」注「ー螂、蜋蜻母也」〓蟷蠰・石蠰。

【蠌斧】 かまきりが前の兩足を擧ぐることを斧を執るに似たるが故にいふ。蟷螂之衛を見よ。

【蟷螂拒レ轍】 徒に利をむさぼりて害を察せざれば、轍を受くるに至るに喩ふ。說苑、正諫、吳王欲レ伐レ荊、告二其左右一曰、敢有二諫者一死、舍人有二少孺子者一、欲レ諫不レ敢、則懷レ丸操レ彈、遊二於後園一、露沾二其衣一、如レ是者三旦、吳王曰、子來、何苦沾レ衣如レ此、對曰、園中有レ樹、其上有レ蟬、蟬高居悲鳴飲レ露、不レ知二蟷螂在二其後一也、蟷螂委レ身曲附欲レ取レ蟬、而不レ知二黃雀在二其傍一也、黃雀延レ頸、欲レ啄二蟷螂一、而不レ知二彈丸在二其下一也、此三者、皆務欲レ得二其前利一、而不レ顧二其後之有一レ患也、吳王曰、善哉、乃罷二其兵一」

【蟷螂之衛】 微弱なる兵備。左思、魏都賦「弱卒鎖甲、無レ異二蟷螂之衛一」後漢書、袁紹傳「還二蟷螂之斧一、禦二隆車之隆一」

【蟷螂之力】 微弱なるちから。駱賓王、破レ賊露布「螳二ー拒レ轍當レ車、蟻二蚊納之窠一、蟄二山滿レ谷」

【蟷螂怒レ臂當レ車轍】 弱者が強者に競たんとするに喩ふ、徒に氣のみつよくして力薄ければ事を濟すことなき義。莊、天地「猶二蟷螂之怒レ臂以當二車轍一、則必不レ勝レ任矣」

【蠍】 ケツ　屑　又、蠆に作る

〇みづち、あまりょう、龍の角なきもの。一說に黃色の龍。又、龍の雌「虬ー」「蛟ー」〇獸の形せる山神、古、魑に通ず。

【蠍首】 碑の額又は柱頭に蠍の形を雕るもの。六典「碑碣之制、五品以上立レ碑」注「ー龍趺」

【蠍紐】 蠍の形を刻みたる印のつまみ。蔡邕、獨斷「天子璽、以二玉蠍虎紐一」〓蠍鈕。

【蠍頭】 蠍首に同じ。韓愈詩「金蠍香動ー暗」

【蠍院】 天子の殿閣。宋中、禮志「設二香案殿下ー一聞」

【蠍魅】 獄の形せる山中の怪物。左、宣三「ー一圖二其象一、使レ民知レ神姦一」

【螭龍】チリョウ 角なき龍。埤雅「無ノ角曰二螭一一」

【蟄】チツ ジツ 通音 質 入

○かくる(蔵)蟲類が土中などにかくれる。易、繋辞「龍蛇之ー、以存ー身也」轉じてとぢこもる、外出せぬ。○しづか(靜)○ーは和ぎ集まる貌。○啓ーは二十四節の一、春分の前、即ち三月六日頃。

【蟄居】チッキョ ○こもりをる、かくれをる。○徳川時代、士人の刑、一室に幽して外出せしめざるをいふ。

【蟄蔵】チッゾウ あなごもり。淮南子「脩務ー一、飛鳥時移」

【蟄獣】チッジュウ 熊羆などのふゆごもりするけもの。周禮「掌ー攻ー一、各以二其物一火ノ之、以時獻ー其珍異皮革ー」

【蟄虫】チッチュウ ○和ぎあつまる貌。詩、周南「宜爾子孫ー一今」傳「ー一、和集也」一説に多き貌。○靜かなる貌。荘、天地「ー一始作、吾驚ノ之以二雷霆一」

【蟄戸】チッコ ふゆごもりせるとし。禮、月令「孟春之月(中略)ー一始振」

【蟄伏】チッフク 蟲などが土中に冬籠りする。又、こもりをる。淮南子「秋三月地氣下藏、百蟲ー一」

【蟄雷】チツライ はつがみなり、春雷の始めて聲を發するもの、聲を發して蟲を啓く。杜荀鶴詩「和二君詩句一吟聲大、蟲多聞ノ之謂ニー一」

【蟄龍】チツリョウ ○かくれをるりょう。朱熹詩「君看ー一臥二三冬一、頭角不二與ノ蛇爭一雄」○轉じて未だ時を得ざる英雄に喩ふ。‖伏龍。

【蜴】テイ 齊 蠐に同じ

ー蛛テイチュはにじ(虹)の別名。蠐(虫部八畫)を見よ。

【蟆】バ マ 麻 又、蝦に作る。

蝦ーはひきがへる。蝦(虫部九畫)を見よ。

【蟇】蟆(前條)に同じ。

【蟁】蚊(虫部四畫)の古字。か。漢書、中山靖王傳「粲ー成ー雷」

【蟁首】シュン 蚊のくび。微細に喩ふ。淮南子「權ニ輕重一、不ノ若ニー一ニ」

【蟆】ヘイ 庚

ー蛸は螳螂のたまご、おほちがふぐり。

【蟁】蚤(虫部九畫)に同じ。

【蟅】ラ 歌

ーにし、貝類の殻に左巻の渦形をなせるものの總稱。田ー螺ー螄ー菜ー法ーなど。‖蠃。○指紋のー旋狀をなせるもの稱。齊軼文「齊安王江上得美石、其文如指上ー」○青ーの殻は酒杯と爲すべし「ー杯」略して酒杯をーといふ。唐の李適之の飲器に舞仙ー海山ー等の名あり(逸源記)

【蟅階】ラカイ 螺旋形の階梯

【蟅殻】ラカク ○ほらがひの如く卷れたるもとどり。古今注「童子結髮、亦髻ニー一ニ、開稱して螺ともいふ。侯宮詩「復留香螺卷窗前」○青山に喩ふ。裏洪詩「落日遠山ー一青」‖青螺。

【蟅旋】ラセン ○螺の殻の線の如くぐるぐる旋れる筋。○ねぢ。

【蟅細】ラサイ 鸚鵡貝・蟅貝・鮑などの殻の裏の光彩ある部分をきざみて、器物の飾とせるもの、青貝細工。もと古の印度に起り、傳へて支那に入る。癸辛雜識「作ニー一卓面屏風十副ニ」‖螺填(泊宅編)

【蟅鋸合】ラキョガッ あをがひの細工の參合づき。張籍詩「涼酒白ー一、醪ノ流去復同」

【蟅貝】ラバイ ほらがひ。唐書、南蠻傳「ー一大者、可ノ受二一升一」

【蟅髻】ラケイ ちぢれて螺のからの如くに見えるかみ、佛像の髪など。

【蟉】(一)リウ・キウ 尤 嘯 (二)レウ

(一)ー虯キュウリュウは龍蛇のうねり行く貌。(二)蟉ーリョウは龍の首の動く貌。

【蟉虯】リュウキュウ 龍蛇のうねり行く貌。曹植光殿賦「蜿蜒ー一而遊ノ庭」

【蟉】ル 虞 尤

○ー蛄ロウコ天ーはけら、おけら、しゃうらいむし。いなごに似たる蟲、全身黒褐色、土中に穴居し、前肢にて穴をほり、植物を害す。‖仙蛄硕鼠。○ー蠐ロウセイは肢の長きかへる。禮、月令「孟夏之月、ー蠐鳴」○地ーは蠐の異名。

【蟉剔】ルテキ けらと、みみずと。つまらぬものに喩ふ。韓愈、贈二張立之評事一詩「才藝無ニ易ノ言、往往蚊蟉蟉ニー一ニ」‖蟉蟉。

【蟉蟉】ルルウ 前條に同じ(注音、閭流)

【蟉螻】ルロウ 次條に同じ。

【蟉螻】ルロウ ○けらと、みみずと。小人に喩ふ、むしけら。賈誼、弔二屈原一賦

「横二江湖一之鱷鰐兮、固將レ制二於一一一」○徴力に喩ふ。無可詩「丘山恩怨積、一一力難レ任」

十二畫

【蟫】（一）イン 震 タン 覃（二）ジン 震

（一）衣魚中の蠹蝕レ銀色を爲す、しみむし、しみ、きらむし。‖白魚。（二）一一は蟲の動く貌。漢書、禹融傳「蝗蝝一一」

【蟢】キ 紙

一子ははあしたかぐも、ささがに。劉勰新論「野人喜見二一子一者、以爲二有一喜樂之瑞一」‖喜子。蠨蛸。

【蟣】キ 尾 微

蝨レシラミの子

【蟣蝨】シラミ。漢書、賈誼傳「分寄生二一蝨一」（飛の永くつづく貌）

【蟪】ケイ 霽

一蛄コケイは夏ぜみ、むぎわらぜみ（蜩）體小さくして黒く、透明なる翅あり、夏の末に鳴きつづける。

【蟪蛄不レ知二春秋一】ケイコフシュンジュウ 蟪蛄は夏月中生存し春秋を知らず、以て生命の極めて短きに喩ふ。莊、逍遙遊「朝菌不レ知二晦朔一、――」蟪一に蕙に作る。‖蕙蛄。

【蟪蛄聲】ケイコノ なつぜみのなきごゑ。王維詩「夜靜蟪蛄息、――悠悠」

【蟜】ケウ 篠

○天一エウは龍のわだかまる貌。魯靈光殿賦「旁天一以橫出」又、猿に似て長き尾ある獣。漢書、司馬相如傳「天一支格」○一牛は人名、舜の祖父。

【蟙】シ 支

蛄一レンはけむし。蛄（虫部五畫）を見よ。

【蟙】シュウ 東

いなご。申培詩說「一斯羙一周室多男之詩」‖爾雅。

【蟨】スキ 支 一音シ

一蟨レツはしりうがくばう（正覺坊）うみがめ。形瑁ダイに似て大さ七尺に達す。‖蠵。

【蟨】セツ シュク 屋 又、蟨に作る。

一蛸ソウはあしたかぐも。‖蛸。

【蟯】ゼウ ゲウ 蕭 篠

はらのむしの一種、蟯蟲ゼウチウに似たる小蟲、長さ三分許、人の腸内に寄生す。說文「腹中短蟲也」

【蟯寢】ゼウシン はらのむし。史、倉公傳「一一爲レ病」

【蟬】セン 先

蜿一エンは龍の屈する貌。楚辭、九思「龍屈兮蜿一」

【蟬】（一）セン・シン（二）ゼン 銑 先

○せみ、蟬蛻ゼンゼイの羽化せし昆蟲の總稱、四翅は堅くして透明なり、雄は胸部と腹部との界の縦膜を收縮振動して聲を發す「鳴一」「秋一」「涼一」「亂一」「蜩一」大戴禮「一飲而不食」‖蜩。齊女。○一聯レンは一婦エンはつらなる、つづく、語が續きて切れず。○うつくし「一娟」婵に通ず。○織物の名、紬の極めて薄く一の翼の如きもの。急就篇「縑帛素一」○冠の飾に用ふ。後漢書、輿服志「侍中中常侍、黃金璫、附一爲」文、貂尾爲レ飾」蟬の清虛にして愛を識るに取る。○蟾に通ず。一蜍はひきがへる。又月の異名とす。（二）蜿一エンは舞ひて盤曲する貌。蟬一ゼンは屈する貌。又、卷りたる蚊タイの形。

【蟬羽】センウ せみのはねゝ張衡、七辯「京城阿綸、譬二之一一」

【蟬蜎】センエン 連ヅなる貌。漢書、揚雄傳「有二周氏之一一一兮、或鼻二祖于汾隅一」

【蟬吟】センギン ○せみが鳴く。蘇軾詩「白水淸時鸞鵠下、綠槐高處一一一」○せみの聲。陳遊詩「安得門前無二俗客一、岸巾臨レ水聽二一一一」‖蟬語。

【蟬冠】センクワン 蟬の羽にて飾りしかんむり。字解參看。錢起詩「一從レ解二貂僧一三入偶二一一一」‖蟬冕。貂蟬。

【蟬娟】センケン うつくしくみやびやかなる貌、妍雅。左思賦「擅美一一」‖蟬娟。

【蟬鬢】センビン せみの翼の白玉蟬詩「暑退淸生蟬有レ韻、水長天遠雁無レ書」‖蟬吟・蟬娟・蟬冕。

【蟬紗】センサ うすきしゃ。海物異名記「泉女織レ紗、輕如二蟬翼一、名二一一一」泉女は泉州の女なり、福州府志を按ずるに、漳州の紗、海内に名あり、漳紗といふ、漳州は唐初、泉州に屬す。

【蟬】（センせみがやかましく鳴く。王籍詩「一ー林逾靜、鳥鳴山更幽」

【蟬翼】（センヨク）蟬や、かひこの形せる香の名。名香譜「一ー香交趾所レ貢、唐宮中呼爲二蟬龍腦一」

【蟬冠】（センクワン）冠の飾。古、侍臣の冠の飾に貂とーとを加ふ。南史、朱异傳「异除二中書郎一時、秋日始拜、有二飛蟬二正集二异武冠上一、時咸謂二ーー之兆一」轉じて近侍の臣の義。北齊書、趙郡王叡傳「遷居二ーー之榮一、退當二委要之職一」ll翻翔。

【蟬蛻】（センゼイ）○せみのぬけがら。蟬の解く所の外皮、藥用とす。ll蟬衣。蜩甲。○轉じてせみのぬけがらの如く、きっぱりとぬけ出る。史、屈原傳「ーニ於濁穢一、以浮二遊塵埃之外一」

【蟬聲】（センセイ）せみのこえ。陰鏗帝詩「露濕山氣冷、風急ーー哀」

【蟬脫】（センダツ）せみの皮を脫する如く、惡習を脫しすてる。

【蟬劍】（センケン）せみ。王琢詩「清新沸二ーー一」

【蟬鬢】（センビン）せみのはねの如くにすき通りて見ゆるかみ。女の髮の美くしきに喩ふ。古今注「風文帝宮人莫瓊樹、始來爲二ーー一、望之縹緲如二蟬翼一、然」白居易詩「ーー加レ意梳、蛾眉用レ心掃」

【蟬冕】（センベン）蟬冠に同じ。齊書、崔祖之傳「風範和順、爲二ーー所レ照、更有二器采一」

【蟬翼】（センヨク）せみのはね。極めて輕きものに喩ふ。晉書、周顗傳「質輕二ーー一、事宜二手鈞一」ll蟬羽・蟬翅。

【蟬聯】（センレン）○つらなりつづく。陸龜蒙詩「是時春三月、桃レ郭花ーー」○ことばがつづきて絕えぬ。晉書、王濛傳「與二阿大一語、蟬連不レ得レ歸」連・聯通す。

【蟲】（チュウ　東　虫は別字）

○むし「草ー」「羽ー」「夏ー」○動物の總稱、羽ー（鳥）の長は鳳凰、毛ー（獸）の長は麒麟、甲ーの長は龜、鱗ーの長は龍、裸ーの長は人（大戴禮、易本命）人と禽獸魚介を除きし他の動物「禽獸ー魚」○足ある動物の總稱。足なきを蚓といふの對。爾雅、釋蟲「有レ足謂之ーー」○華ーは雉の異名（書、益稷）○ーーは熱き貌、むしあつし。

【蟲害】（チュウガイ）作物等が蟲の爲めにうむる害。

【蟲蟲】（チュウチュウ）むしと、ありと、蟻は蟻に通ず。史、五帝紀「時播二百穀一草木淳化、鳥獸ーー」

【蟲魚】（チュウギョ）むしと、うをと。金史、樂志「威震二遐邇一化漸二ーーー一」（下等の動物までも感化を被る義）

【蟲媒】（チュウバイ）むしと、しもと。農作の害を爲すもの。貨殖錄「蟲傷宜レ爲二ーー一、蚤晉農水旱之外、抑有二蟲蝕霜損一、此四者田農之大害」

【蟲出】（チュウシュツ）死して罪らず、うじむしの出るをいふ。漢書、陳萬年傳「自縊死者、歲數百千人、久者ーー腐爛」

【蟲書】（チュウショ）秦の八體書の一、蟲の形をなして蟲信符に書するに用ふ（漢書、注）ll鳥蟲書。

【蟲聲】（チュウセイ）むしのこえ。歐陽修、秋聲賦「但聞二四壁ーー唧唧如二助二余之歎息一」

【蟲蛆】（チュウソ）うじむし。李商隱詩「喧豗搥鍾生ーー」

【蟲蛇】（チュウダ）むし、へび。晉書、崇神傳「草書之爲レ狀也、ーー蚪蠆、或往或還」

【蟲豸】（チュウチ）○むしけら。ずは足なき蟲。昆蟲の總稱。吳志、薛綜傳「日南郡男女裸體、不二以爲一レ羞、由レ此言之、可レ謂ーーー一」○之を賤める辭。五代史、黃損傳「梅何ーー、悖二姉家力一耶」

【蟲蟲】（チュウチュウ）熱氣甚だしき貌。詩、大雅「旱既太甚、藴隆ーー」

【蟲篆】（チュウテン）篆書の一體、蟲のはひまつはる如し、故にいふ。論書譜「餘行草書之法、其源出二于ーー・八分・飛白・章草等一」ll蟲書。

【蟲媒花】（チュウバイクワ）昆蟲の媒介により、種子を生ずる植物、油菜・蒲公英の類。風媒花の對。

【蟲臂鼠肝】（チュウヒソカン）蟲のひぢと鼠のきもと。萬物賦形の微細をいふ。莊、大宗師「以レ汝爲二蟲臂一乎、以レ汝爲二鼠肝一乎」謝枋得文「爲レ輪爲レ輿、化往來、——、隨二天付予一」

【蟲籠】（チュウロウ）むしかご。錦林玉露「取二草蟲一、滿而觀レ之」

【蠢】（シュン　㝡　㝡　諄）

○うごめく。蠢動。○愚かなり。○動く。○乱る。○ふとる。○大いなり。

【蠢動】（シュンドウ）わだかまりうねる。徐陵賦「左則青龍ーー、右則白虎蹲踞」

【蠢蚓】（シュンイン）わだかまれるみみづ。蘇軾詩「下有二千歲根一蟄蚯如ーーー」

【蠢蠕】（シュンゼン）わだかまりうづくまる。ll盤踞。

【蠢擾】（シュンジョウ）わだかまりよる。杜甫、病柏詩「出非レ不レ得レ地、ーー亦爲大」

【蠭】（ハン　㝡　蠭に通ず）

○わらじむし（草鞋蟲）ll風負・伊威。○わだかまる。○ふす（伏）○かがむ（屈）○めぐる（周）○大いなり。

【蠭蠕】（ハンゼン）わだかまりうねる。徐陵賦「左則青龍ーー、右則白虎蹲踞」

【蠭蚓】（ハンイン）わだかまれるみみづ。蘇軾詩「下有二千歲根一蟄蚯如ーーー」

【蠭蹲】（ハンソン）わだかまりうづくまる。ll盤踞。

【蠭擾】（ハンジョウ）わだかまりよる。杜甫、病柏詩「出非レ不レ得レ地、ーー亦爲大」

‖盤鑿。

【蟠屈】バンクツ　わだかまりかがむ。又、心がむすぼれてのびず。宋史、蘇軾欲傳「隨ノ飛上下、心志ニ―不ノ開、固亦極矣」‖盤屈。

【蟠結】バンケツ　わだかまり、むすぼれる。‖盤結。

【蟠桃】バンタウ　仙家に在りといふ大いなる桃の實。長壽を祝するに用ふ。漢武故事「西王母降出二桃七枚一、自啖二枚一、五枚與レ帝、帝謂レ核欲レ種、母曰、此桃三千年一開レ花、三千年一結レ實、指二東方朔一曰、此桃三熟、此兒已三偷」

【蟠踞】バンキョ　わだかまりたるみづち。馮翼、咏松詩「龍蟠如二―一」‖盤踞。

【蟠蜿】バンエン　わだかまれるをろち。宋玉、神女賦「狐子馬、牛、麋鹿、―ノ―、蜿蜒、蟠委、大小四千有三」

【蟠木】バンボク　わだかまれるき。大木の蟠屈するもの。鄒陽、獄中上梁王書「―根柢、輪囷離奇、而爲二萬乘器一者、何則以左右先爲二之容一也」白居易詩「―詰屈明生用、雖レ禽徒與二故人一疎」

【蟠龍】バンリョウ　わだかまれるりょう。莊子「嬰兒伏虎、―連組、此道二於命一也」‖盤龍。

【蟟】レウ

蛁ノ―（ヒウ）はつくつくぼふし。蛁　書　又、蓼に作る

（虫部五畫）を見よ。

【蟧】ロウ

蟟（前條）に同じ。

十三畫

【蟹】カイ　圖　蠏は本字

かに、水陸兩方に棲む一種の蟲、形蜘蛛に似、四對の足と、一對の螯（はさみ）とあり、全身に硬き甲殼を被り横行す「魚ノ―」‖無腸公子。

【蟹行】カイカウ　○かにがあるき行く。參同契「郭索、―貌也、揚雄太玄曰、蟹之郭索、用レ心躁也」○かにのあるく如く旁行（よこあるき）する。張子容、謝二青衣一賦「―來レ妃、旁行求レ屬」○圖―文字は西洋文字。

【蟹螯】カイガウ　かにのはさみ、其の中の肉は極めて美味し。晉書、畢卓傳「有手持二酒杯一、左手持二―一、指二浮酒船中一、便足レ了二一生一矣」

【蟹甲】カイカフ　かにのかふら。‖―衆レ匡」‖蟹殼。

【蟹眼】カイガン　湯の沸き立つにいふ、泡がかにの眼に似るが故。蘇軾、茶錄「候レ湯最難、未レ熟則沫浮、過熟則茶沈、前世謂二之―一者、過熟湯也」蘇軾詩「―已過魚眼生」（魚眼は大いなるあは）

【蟹火】カイクワ　かにを捕るかがり火。白居易詩「春前星撥雪―ノ―」

【蟹戶】カイコ　かにを捕る漁人。又其の家。蟹譜「置二魚戶一―一、專掌レ捕二魚蟹一」

【蟹舍】カイシャ　水邊の漁人のいへ。張志和詩「松江―主人數、孤舟藉爲亦共レ釜」‖蟹戶・蟹戶。

【蟹斷】カイダン　すだれを以て流を隔ててて蟹を捕るもの。陸龜蒙、蟹志「蟹指レ江而奔、漁者繚レ繒、承二其流一而障レ之、曰―一、謂二其江之道一也」

【蟹杯】カイ　かにの甲のさかづき。蟹譜「其斗之大者、漁人或用以酌レ酒、謂二之―一」

【蟹尼】カイ　多くの蟹が田稼の害を爲すをいふ。平江記事「吳中―如レ蝗、平田皆滿、稻殺萬畝」

【蟹簖】カイ　蟹譜に同じ。蟹略「吳越之人取レ蟹、編レ蔑以障レ之、謂二之―一」

【蟹殼】カイカク　蟹の假高きによりて食はざりし故事。古事成語考、注「宋仁宗食二新蟹一、有三十八枚一、問二左右一曰、蟹殼幾何、對曰、二十八千、帝曰、一下レ筋殺二二十八千一、既不レ忍也、遂命撤去不レ食」

【蠏】

蟹（前條）の本字。

【蟻】ギ　紙　尾　又、蟻、蛾に作る

○あり、地中、又は朽木中に羣り棲み、王―職―などありて一社會を爲す昆蟲。其の大いなるを蚍蜉といふ。○くろいろ（玄色）書、顧命「麻冕―裳」○浮―は酒のあぶら、酒の澤。酒初めて熟せし時、かすが浮きてーの如き故。張衡、西都賦「浮―若萍」轉じて良き酒を香―といふ。○白―はしらあり。又、古の名馬、周の穆王の八駿の一。

【蟻合】ギガフ　ありの如く集り合ふ。世說「遠近歸レ―」‖蟻集。

【蟻酒】ギシュ　ありの如くに舞り浮べる。柳宗元、劍門銘序「―風蛙、險無二以開一、取二赤利地一、以須二王師一」

【蟻穴】ギケツ　ありのあな。應璩詩「勿微可レ不レ堤、隄潰自―一」‖蟻孔。

【蟻孔】ギコウ　前條に同じ。陳忠文「堤潰―一、氣洩二銀芒一」

【蟻垤】ギテツ　小さきあだにて異るに足らざるをいふ。宋書、張興世傳「孟虬―、必無二能爲一」蟻一に蟲に作る。‖小垤。

【蟻酸】ギサン　赤蟻などの害蟲に含める一種の酸、皮膚に觸れば劇痛を惹に水腫を生ず。

【蟻蟲】ギサン　かへりたてのかひこ、蟻に似たるが故。

【蟻視】ギシ　ありの如くに他を輕んじ視る。李白詩「魏帝營二八極一、―一一

細衡」＝蔑視・輕視。

【蟻集】ギシフ　ありの如く多くあつまる。同様詩「人煙一一一同市」＝蟻聚・蟻屯・蟻合。

【蟻壌】ギジヤウ　ありづか。戰國策、齊桓公伐二孤竹一、山中無レ水、隨レ群曰、去二一寸有レ水、螘之巢得レ水」鮑照詩「一一漏二山河一」＝蟻穴。

【蟻聚】ギシユウ　ありの如く多くあつまる。北史、于仲文傳「河南一一之徒、應レ時殲定」

【蟻冢】ギチヨウ　蟻垤に同じ。埤雅「垤、一一也、蟻將レ雨則出而壅二土成レ峯」

【蟻垤】ギテツ　ありづか。轉じて小さき山に喩ふ。王勃文「抗二五岳于阿峯一、如レ蔑二一一一」＝蟻封・蟻壌。

【蟻附】ギフ　ありの如く多くあつまりつく。諸葛亮文「海内英雄、望レ風一一」

【蟻蛭】ギシツ　○ありがなどぐさき物をしたふ。莊子「羊肉不レ羶蟻、一一羊肉一類也」○轉じて尺牘の用語にて仰慕の義とす。

【蟻封】ギホウ　ありづか。東觀漢記「一一穴レ月、大雨將レ至」＝蟻垤。

【蠁】キャウ　養　梁

○聲を知るといふ一種の蟲。○肹ーキャウは蠁ぎんに作る。○一曾ソウはすみやか、はやし。揚雄、羽獵賦「昭光振耀、一曾如レ神」

【蠁】キャウ　漾　陽

蠶の白くなりて死するにいふ。

【蠍】ケツ　屑　月

さそり、ぜんかつ、くも類の毒蟲、長さ三寸許、八足にして二螯、尾端に刺ありて人を螫す、甚だ毒ありて生命を失ふに至る、故に惡み嫌ふべきものに譬ふ「蛇ー」

通音カツ　蝎は俗字

【蠉】ケン　先

○ぼうふり（子子）井中の小赤蟲。＝蜎。○はふ、蟲の行く貌。

【蟾】セン　鹽

○ー蜍ショはひきがへる、蛙の一種、多く人家附近下濕の地に棲む、形大にして行歩おそし。＝蝦蟆。○月の異名。ひきがへるが月中に居るといふ傳説あるが故。淮南、精神「日中有二踆烏一而月中有ー蜍」○文房具の一。字解參看。

【蟾宮】セン　月。晉郤、月詩「桂樹生二月中一、人間二高下一」

【蟾桂】セン　ひきがへると、かつらと。月中に在りといふ。李賀詩「古祠近レ月ー寒、椒花墮二紅淚雲一」

【蟾彩】セン　月の光。鮮于侁詩「清宵望二一一、宜レ付二一杯酒一」＝蟾光・蟾輝。

【蟾蜍】セン　ひきがへる。爾雅「ー一似二蝦蟆一」＝蟾蜍。

【蟾蜍】セン　○ひきがへる。爾雅、注「似二蝦蟇一居二濕地一、通作二蟾諸一」○月の異名。後漢書、天文志、注「羿請二無死之藥于西王母一、姮娥竊之以奔レ月、是爲二一一」○水いれ、文房具の一。字解參看。

【蟾兎】セン　月の異名。古詩「三五明月滿、四五ー一缺」

【蟾魄】セン　月の異名。歲華紀麗、娥眉ー一皎兮出矣」

【蟾蜍】セン　月の異名。曾松詩「無レ雲世界秋三五、共看ー一上海遲」

【蟾輪】セン　月の異名。元稹詩「ー一何事色全微、疑二得佳人出二繡幃一」

【蟺】㊀セン・ゼン　㊁セン・ゼン　銑　先

㊀蚓ーセンは蚯蚓くきゅうの異名。㊁ーセンは、じがばち（土蜂）

【蠆】タイ　卦

○さそり、ぜんかつ、蠍の一種。左、僖二二「謹ー有レ毒」註「ー長尾謂之蠍」○水ーダイは水中にすみ、形さそりに似たり、蜻蛉の幼蟲。○とけ、蛸に通ず。張衡、西京賦「蜚蝀ー芥」註「ー芥、刺鯁也」

【蟷】タウ　陽

かまきり。＝螳（虫部十一畫）

【蟷螂】タウラウ　かまきり。爾雅「ー一」注「蜱蜋別名」＝螳螂。

【蠋】チョク　レキ　沃　錫

○いもむし、形蠶に似、植物の葉を食ふ。蛾蝶類の幼蟲。詩、豳風「蜎蜎者ー一」通じて蜀に作る。○人名、王ーワクは戰國の時の高士。

【蠋蝀】チョクトウ　蜘蛛の別名（爾雅）

【蠌】テイ　霽

まて、蚌の一種、形細長く筒狀を爲す、閩粵ビン・エツ即ち支那の南方にて之を養殖する地を一田といふ（正字通）

【蠙】蠙（虫　十二畫）に同じ。

【蠅】ヨウ　蒸

はへ、蚰の羽化せし小さき飛蟲。其の前足を交ぶして繩をなふ狀を爲す。說文「蠅之大腹者」埤雅「青ー亂色、黃ー亂聲」轉じて佞人・小人に喩ふ。

【繩繩】の省文に從ふ。字解參看。

【蠅營】はへの往來營營たる如くに、あくせくと小利をいとなむ兒。詩、小雅「營營青蠅」に本づく。魏書、崔浩傳「從三萬匹一以ー一」

【蠅虎】はへとりぐも。蜘蛛の一種、大さ三四分、板上などを徘徊し、跳りて蠅を捕へ其の血をすふ。古今注「ー一、蠅狐也、形似二蜘蛛一而色灰白、善捕レ蠅、一名蠅蜘、一名蠅豹」

【蠅市】はへの朝に羣集するをいふ。埤雅「蠅成二市於朝一蚊成二市於昏一」

【蠅燭】はへがあつまるの縁故、燈智傳、注「執レ燭作レ喜、ー一燭蟲」

【蠅鼠】はへと、ねずみと。謝靈運文「蠅最喙頑、無二牙利一而其捷レ人尤甚、至下于鮮二處可一レ逐、無物可レ逃、且變二芳臭一爲二臭腐一、況淨業二爲緇穢一、煩而復來、死而復生、比二之讒人一不二亦宜一乎、物之最小而可レ憎者、蠅與レ鼠耳、蠅以レ喙、鼠以レ齒、其害レ物、則鼠過二於蠅一、其捷レ人則蠅過二於鼠一、世閒若無二此二種一、晝夜遂得レ帖レ席矣」

【蠅頭】○はへのかしら。○轉じて、細字をいふ。南史、齊衞陽王鈞傳「ー一細書」陸游詩「未レ忘墨尾清談興、常讀ー一細字書」○小利をいふ。蠅利を見よ。

【蠅拂】はへはらひ、ほっす。南史、陳顧野王傳「慶尾ー一、是王謝家物」

【蠅蓋】はへのふん。尤もよく物を腐らすもの。埤雅「青ー一、尤能敗レ物、雖レ玉猶不レ免、所レ謂ー一點レ玉是也」

【蠅利】はへの頭の如き少しの利益。蘇軾詞「蝸角浮名、ー一微利」

【蠅】（一）ラ　（二）ラ　歌　哿

（一）になし、にし、蚌の屬。‖螺。（二）螺ーはじがばち。螺（蟲部八畫）を見よ。‖土蜂。

【蠃蜾】にしと、しじみと。梅堯臣詩「ー一固無數」

【蠃蚌】にしと、はまぐりと。博物志「東南之人、食二水產蠃蚌一、以爲二珍味一」‖蜾蠃・蠃蛤。

十四畫

【蠆】サ　卦

あぶのちひさきもの（小蟲）

【蠆】ガ　禡

かき（蠣）本草「初生二海旁一、如二拳石一、四面漸長、高一二丈、黏附如レ山、俗呼ー一山」

【蠑】エイ　庚

ーー螈はるもり、水陸に兩棲する蟲、長さ四五寸、四足を具へ、體は黑く、腹部は赤くして黑斑あり。又、やもり。揚子方言「守宮、南楚謂二之蛇醫一或謂二之ー一螈一」‖守宮・壁虎。

【蠑】セイ　齊

○ー一螈はすくもむし、ちむし、ねきりむし、金龜子の幼蟲。初夏出でて羽化す。‖地蠶。○蠑ーセイはきくひむし。蠑（蟲部九畫）を見よ。

【蠕】（一）ゼン　（二）ジュ　先　銑

（一）うごめく（蠢動）‖蠕。○ーゼンは人種の名、匈奴の種、今の外蒙古地方に住せし者、蠢蠕にして俗を衣る（南史、ー一傳）（二）はふ、蟲の行く貌。

【蠕形動物】ゼンケイドウブツ　足なくしてうごめく蟲、蛭蚓・蛔蟲・條蟲等の總稱、體柔軟にして、形細長し。

【蠕蠕】ゼンゼン　○うごめく貌。○人種の名、又其の國名。自ら柔然と號す、魏の太祖、其の無知にして蟲に類するを以て號を改めてーーと爲す。南史、夷貊傳「ーー爲レ族、蓋匈奴之別種也」‖芮芮・柔然。

【蠕動】ゼンドウ　○うごめく。蟲の行く貌。易林「蜎飛ーー、各具二配偶一」‖蠢動。○蟲動する貌。荀、勸學「端而守、蠕而動」註「蠕、蟲動也」

【蠙】ヒン　眞　蠙は俗字

蚌（蟲部四畫）の異名。書、禹貢「淮夷ー珠暨魚目」

【蠔】ボウ　豪　皓

かつをむし、ぬかが、雨後などに亂れ飛ぶ小蟲、蚋に似て白く、首に絮を被る。爾雅、註「小蟲似レ蚋、喜亂飛」‖蠛蠓。

【蠔蚋】ボウゼイ　かつをむし。列、湯問「春夏之月、有二ーー者一、因レ雨而生、見レ陽而死」‖蠛蠓。

【蠖】ワク　藥　通音クヮク

○しゃくとりむし、蠖に似たる蟲、一屈一伸して進むさまが尺度にてす法を量る如く見える故。說文「尺ー、屈伸蟲也」‖尺蠖。○ー濩は退き縮められる貌。又、奥深き貌。○ー略は進み、又、止る貌。○温ー は昏く慣れる貌。史、屈原傳「安能以皓皓之白、而蒙世之温ー乎」

【蠖屈】人の昏く屈するに喩よ。易、繫辭「尺蠖之屈、以求ー信也」（信は伸）劉峻文「龍驤ー、徑二道汙隆一」

虫部 五画

【蜜】カク・チャク 薬 セキ・シャク 陌

○さす（螫）山海經「竟嵩之山、有ー鳥焉、名欽原、ー鳥獸則死、ー木則枯」○いたむ（痛）○さす毒。

【蠢】シュン 軫

○うごめく、蟲が動く、蠕動する「ー動」證、鄒飲酒「春之爲言ー也」○おろか、無智にして事理を辨ぜず。書、大禹謨「ー茲有苗」○不遜なり。詩、小雅「ー爾蠻荊」疏「ー動爲惡、不謙遜也」

【蠢愚】シュン おろか。貫誼泰詩「或驍者ニー一、或狡若二鼷鼠一」

【蠢動】シュン ○蟲がうごめく。○轉じて無智にしてさわぎ動く。吳志、呂岱傳「武陵蠻夷ー一」

【蠢爾】シュン 小蟲のうごめく貌、事理をわきまへず不遜なる貌。詩、小雅「ー蠻荊、大邦爲レ讐」

【蠢蠢】シュン ○うごめきさわぐ貌。左、昭二三、「今王室實ー一焉」○猥雜なる貌、無作法。楚辭、惜賢「爽ー一之潤濁」

【蜈】ベツ 屑

ー蠓はかつをむし、ぬかが。蠓（前出）を見よ。甘泉賦「浮ー蠓而鄉天」‖餐雲。

【蠜】ヘン ハン 元

○いなご、いなむし、蝗の屬。‖旱蠜草蟲。○氣ー はへひりむし。長さ八分許の昆蟲、黄色にして翅に二つの黒斑あり、危きに臨めば尻から臭氣を放つ。‖行夜。

【蠟】ラフ 合 蠟・蜡は俗字

○みつらう（蜜蠟）蜜蜂の巢から製せし硬き脂肪。○黄ー燭の質などをしぼりて取りたる蜜ーと同じき性質のもの、ー燭の原料又塗料等に用ふ。○らうそく「ー燭」皮日休詩「夜半醒來紅ー短」○いぼた「ー樹」「水ー樹」○ー梅は花木の名、なんきんうめ。○ー黄は鳥の名、まめまはし、いかるが、其の背の黄にしてーに似たるが故。‖桑扈。

【蠟人】らうをかむも味なし、詩文又は筵遇などの平凡なるに喩ふ。‖晉殷經「當二讌坐時一、味如ー一、楊萊詩「狂遊頗二飲レ酎、清宵避ー一」

【以レ蠟代レ燕】たきぎの代りに蠟を用ふる、奢侈の甚だしきなり、晉の石崇の故事（晉書、石苞傳）

【蠟炬】らうそく。宇文虛中詩「堂中ー一紅生レ花」‖蠟燭。

【蠟花】らうそくの火の花の如きをいふ。冷齋夜話「如ー一似二石榴花一」

【蠟丸】らうを丸めて其の内に書狀を入れる、祕密を要する爲めの唐書、玄宗紀「顏眞卿以ニー一通レ表」

【蠟屐】もしだにらうをぬりて光澤を生ぜしむ。晉書、阮籍傳「阮孚性好レ屐（中略）或有レ謂レ阮、正見二自一ー一、曰一生當二蠟兩屐一」

【蠟梅】花梅の異名。貫耳集「蠟梅開、開于臘レ梅曰二蠟梅一、一種二狗蝨一曰ニー一」

【蠟珠】蠟淚に同じ。南史、王敬則傳「僧綽探二蠟燭珠一餉二敬則一」白居易詩「花房綽ー一」

【蠟書】らうにてつつみたるふみ。朝野類要「ー一以レ帛寫二機密事一、外用レ蠟固」

【蠟石】滑石の一種、印材・石筆等に造る。

【蠟燭】紙・絲等を心とし蠟を纏長くかためて點燈用とするもの。‖蠟炬。

【蠟梅】かろうめ、なんきんうめ。釋名「ー一本非二梅類一、因下其與レ梅同時、香又相近、色似中蠟而故得二此名一」

【蠟淚】らうそくのながれ。元稹詩「ー一短光宵」‖蠟珠。

【蝴蝶】ルキ 支 蠂に同じ

むささび「飛ー」‖飛鼠。

【蠣】レイ 霽

かき（蠔）「牡ー」貝の一種、多くは海中の巖石に附著して動かず、殻は凸凹不規律にして粗なり、肉は灰白色、味美な

り。‖蠣。

【蠣黃】クワウ かきの肉を鹽漬にせし食品、鄞波の象山港及び台州灣の産、最も著名なり。南越筆記「蠣、生食曰二蠔白一、醃レ之曰二蠔一、味皆美」

【蠣奴】レイ 蟹の一種、閩雅遐「蟹類甚多、在二蠣殼中一爲レ蠣取レ食者、名二蠣奴一」

【蠣房】バウ かきの殼。本草「牡蠣附レ石而生、魂魄相連如レ房、呼爲二蠣房一」‖蠣殼。

【蠣灰】クワイ かきがらの灰、其の用は石灰に同じ。‖蠣灰。

【蠡】

㊀木の心をかむ蟲。說文「蠡齧木中也」○彭一蠡は澤の名（書、禹貢）一名は鄱陽湖。㊁ひさご（瓠瓢）㊂ひさご（瓠瓢）○一ラはつらなる（行列）貌。○になし、ほらがひ、螺に通ず。○ひぜんがさ（疥病）

【以レ蠡測レ海】レイヲモツテカイヲハカル 蠡はひさご、ひさごを以て海を測るは見識のせまき義。東方朔、答二客難一「以レ管闚レ天、以レ蠡測レ海、以レ莛撞レ鐘、豈能通二其條貫一、考二其文理一、發二其音聲一哉」

【蠡斟】ラク つらなれる貌。劉向、九歎「登二長陵一而四望兮、蠡二正圃之一一」‖歷歷。

十六畫

【蠆】

ゲン なつご（晩蠶）　元

【蠕】

セン 蜎は、あしたかぐも。蜘蛛の一種、長さ四五分、淡灰色、細長き脚を有よ。詩、豳風「一蜎在レ戸」‖長蹻・親客・喜蛛。　遊　又、蠕に作る

十七畫

【蠟】

エツ はじがばち（土蜂）蜾蠃（虫部八畫）を見よ。　所　通音エイ

【蠶】

ケン　先

○蟲の一種、蚕の屬。○あきらか（明）明かにする。左、襄十四「惠公一其大德」○のぞく（除）「一除」「一免」○いさぎよし（潔）詩、小雅「吉一爲レ館」

【蠶苦】カン わづらはしき政令をのぞく。後漢書、左雄傳「克慎二擇官一、一レ一レ救レ敝」

【蠶救】サン 租稅をのぞきて、すくひたすける。唐書、劉晏傳「常歲平斂レ之、荒年一二之一」

【蠶吉】サン 齋戒沐浴して吉日を擇ぶ義。蠶は涓と同じ。‖涓吉。

【蠶潔】ケツ いさぎよし。黃庭堅文「食了酔レ器、三正三反、汰拭一一」‖涓潔。

【蠶減】サン 租稅などをのぞきへらす。蕭子良文「凡在二荒民一、應レ加二一一」

【蠶租】ソ みつぎものをのぞく。楊維禎詩「聖主方一一」‖蠲稅。

【蠶損】サン のぞきへらす。宋史、梁燾傳「元豐時、久旱、燾上書曰、一二一緡錢一、歛率四起」‖減損。

【蠶除】ジョ 其の身をいさぎよく清める。張衡賦「湯一レ一以蘄新兮」

【蠶除】ジョ はぶきのぞく。前政凍餒を免し去る。晉書、簡文帝紀「以二比歲荒儉一、大赦自二太元三年一以前、逋租宿債、皆一一之」‖蠲免。

【蠶滌】テキ のぞきあらふ。後漢書、桓帝紀「惠二我勞民一、一二貧弊一、以新二休祥一」

【蠶賦】フ 稅をのぞく。元史、泰定帝紀「宜布德澤一レ一群生一、賑二恤貧民一、愿ア與二聖元一共享有生之樂ト」

【蠶免】メン 租稅などをはぶきのぞく。元史、食貨志「一一者、免二其差稅一、都周官大司徒所謂海征者也」

【蠱】

コ　虞

○腹の中の蟲。○穀物中の蟲。○まじなひに用ふる蟲。○あしき氣。○そこなふ（毒）害毒。通志、六書略「造一之法、以百蟲置二皿中一、使相啖食、其存者爲レ一」○ごくもん、はりつけの刑に處せられし者の鬼。○うたがふ（疑）まどふ（惑）まどはす（惑亂）「一惑」○易の卦の名、巽下艮上。○こと（事）易、蟲卦「幹父之一」（幹はただす）○まじなひ（禁呪）又、みこ（巫覡）

【蠱毒】ドク 皿蟲を一と爲す、皿は器なり、器の蟲害を受くる者を一と爲す。

【蠱疾】シツ 蠱は惑疾、心志の惑亂するやまひ。左、昭元「晉侯克有二一一」

【蠱害】ガイ 害する。害毒。左傳、疏「以二毒藥一殺レ人、令三人不二自知一者、謂二之一一」

【蠱毒罪】ドクザイ 軍中の珍品、能く一切の蟲毒ハヒモノを吸ふもの（蜘蛛）

【蠱惑】ワク 蠱もる弊害。宋史、楊泰之傳「總二覺威權一、無レ率於私一、無レ容二於邪說一、以救二一一、以新二治功一」‖蠱弊。

【蠱惑】コワク まどはす、たぶらかす。

【蠻】 ジャク　藥

蠍ー　はかまきり。

【蠭】 ホウ　多

○はち、蜂（虫部七畫）に同じ。說文「飛蟲螫人者」熟語は蜂を參看せよ。○はこ、鋒に通ず。漢書、韓王信傳「其ー東向、可以爭天下」註「ー、鋒同」

【蠭起】　はちの飛びたつ如く衆くむらがりおこる。蜂起參看。

【蠭氣】　鋒說のごときの氣をいふ。蠭は鋒と通ず。漢書、趙廣漢傳「豪傑謂肚ー」註「蠭與鋒同、言ニ鋒銳之氣ー」

【蠭窠】　はちのす。轉じて、小屋に喩ふ。蘇軾詩「竹屋茅屋半擁倚、皆向ニー一寄ニ此生ー」

【蠭生】　蜂のむらがり起る如く諸處にみだれおこる。漢書、中山靖王傳「設ニ司之徒ー一」ー蜂生。

【蠭蠆】　はちと、きそりと。螫物（人を刺す虫）。亦能く人の害を爲すに喩ふ。左、僖二二「君夫無ニ謂ニ郤小ー一有ニ蠭蠆、而況國乎」

【蠭目豺聲】　目つきあしく聲聲の惡しきをいふ。左、文元「ー忍人也」

十八畫

【蠍】 ケイ　キ　齊　支

蠍ー　はうみがめ、しゃうがくば。○蠏（虫部十二畫）を見よ。玉篇「蠏ー似ニ玳瑁ニ而有ニ文ー」

【蠶】 サン　覃

○かひこ、長さ二寸許、灰色、十餘の環節あり、數次皮をぬぐ。蟲の名、桑葉を食ひ絲を吐き繭ユを作り、蛹サナギとなり、後、化して蛾となる、繭を絹の原料とする。ロ巧娘・馬頭娘。○野ー　は山野に自生するかひこ。後漢書、光武紀二野ー成ニ繭ー（野ーの絲にて織りたる帛を繭綢サンチウといふ。山東直隸等より多く產す）○原ー　はなつこ。桑の晩葉を以て養ふかひこ。ロ再ー　○こかひす。蠶を養ふ「農ー」「耕ー」「ー績」

【蠶衣】　○きぬのころも。後漢書、輿服志「自ニ二千石夫人ー以下、至ニ皇后ー皆以ニ一ー一ー爲ニ朝服ー」○絹布を衣る。沈約文「肉食ー一、皆須ニ番曲ー」

【蠶家】　發ー　するいへ。李益詩「妾本ー女、不レ識ニ侯門儀ー」ロ蠶屋。

【蠶蛾】　かひこのきなぎより化したる蛾ガ（廣志「有ニー一天蛾ー」）

【蠶繭】　かひこの初めて孵化せしもの、色黒くして蛾に似たるが故。梅堯臣詩「蠶居ー一尙憂ー寒」

【蠶宮】　貴人の養ー　する〈や。東觀漢紀「明德皇后、置ニ蠶室ー一ー」

【蠶具】　養ー　に用ふる器具。

【蠶駒】　幼きかひこ。廣東新語「ー　皆類ー馬、故曰ニー一ー」

【蠶館】　ー　宮に同じ。青箱、卞太后誄「親桑ニー一、爲ニ天下式ー」

【蠶月】　養ー　をする月、陰暦の四月をいふ。詩、豳風「ー一條桑」

【蠶繭】　かひこのまゆ。後漢書、樂羊子妻傳「此織生」自ニー一、成ニ於機杼ー」

【蠶沙】　かひこの糞、肥料と爲す。ロ蠶屎。

【蠶柔】　くはをうる、かひこをかふ。後漢書、辰尙傳「土地肥美、宜ニ五穀、知ニー一作ニ繭布ー」

【蠶繅】　かひこをかひ絲をとる。孟、滕文公「夫人ー一以爲ニ衣服ー」

【蠶史】　史記の異稱。漢書、武帝紀「李陵戰敗降ニ匈奴ー、司馬遷爲ニ之非ニ貳師、帝怒遷ニ宮刑ー、幽ニ於ー室、後遷作ニ史記ー、帝嘗任ニ中書令ー一室參看。

【蠶市】　かひこを養ふ器を賣るいち。蘇鶚、詩序「月之二月望日、賣ニー器於市ー、因作ニ樂歌ー、謂ニ之ー一ー」

【蠶見】　かひこ、見は助辭。蘇舜欽、檢書詩「魚子或破碎、ー一猶蟄蛰」

【蠶事】　かひこを飼ふわざ。3月、月令「孟夏ー一畢、后妃帥ニ九嬪ー」

【蠶師】　善くかひこを育ふ者「桑親、ー書」

【蠶絲】　きぬ絲。柳宗元詩「ー一盡ニ輸ニ稅、機杼空倚ニ壁ー」

【蠶室】　○かひこをかふへや。轉、祭義「古者天子諸侯必有ニ公桑ー一ー」○宮刑せられし者の入る獄の名。漢書、司馬遷傳、注「ー一宮刑獄名、有ニ刑者畏ニ風須ニ暖、作ニ密室ー、蓄ニ火如ニー一ー、因以名焉」

【蠶神】　かひこを司る神。淮南子、俶眞「嫘以ニ中牢羊豕ー、祭ニー一ー」

【蠶種】　○かひこのたね（唐書、李邕傳）ロ蠶卵。○圖かひこの種類。

【蠶食】　かひこの桑を食ふが如く、土地などを漸漸に併呑する。史、始皇紀、秦繆公以來、稍ニー一諸侯ー」

【蠶尊】　草を以て席・なす、かひこを飼ふ具。務本新書「四月刈ニ麥草ー作ニー一、則宜ニ蠶ー」

【蠶綫】　こがひしてきぬをおる。詩經「婦無ニ公事、休ニ其ー一ー」

【蠶稙】　こがひすると田を作ると。顏延之文「ー一者就ニ之類、猥則物之所ニ鄙」ロ蠶耕。

【蠶妾】　蠶女に同じ。左傳「ー一在ニ

其上ニ以告ニ婁氏ニ姜氏殺レ之」齊民要術「三月淸明節、令ニ――治ニ蠶室ニ熏ニ除穴ヲ」

【蠶叢】サン　古の蜀王の名（揚雄、蜀王本紀）成都記「――氏、蜀君也」轉じて蜀の異名とす。李白詩「見說――路、崎嶇不レ易レ行」

【蠶簇】サンソウ　かひこが繭ヲを成すに供する具。蠶書、左貴嬪傳「修ニ成――一、分ニ繭理レ緒」ニ蠶族。

【蠶女】サン　かひこを飼ふをんな。陸游詩「――採桑至ニ者繭一何暇ニ汗林梳ニ髻鬟ニ」ニ蠶婦。

【蠶豆】サントウ　蠶の形に似たる豆の名、そらまめ、莢ガ皆空ニ向ふが故にいふ。

【蠶苗】サンビョウ　いちご。ニ覆盆子。

【蠶箔】サンハク　かひこを入れて繭を作らせるすだれ、葦にて造る。まぶし。陸龜蒙詩「房成倚ニ――一家家下ニ魚堂ニ」ニ蠶薄。

【蠶簿】サンボ　前條に同じ。

【蠶蜂】サンホウ　蠶の手傳をする雇ひ女。

【蠶婦】サン　こがひするをんな。北史、蘇綽傳「使レ婢夫不レ失ニ其業一――得ル就ニ其功一」ニ蠶女。

【蠶眠】サンミン　かひこのねむり、蠶の皮を脫する時、食はず動かず、其の狀、眠る如きをいふ。初眠・二眠・三眠を經て最末を大眠といふ。蘇軾詩「――初上レ綱、麥熟正夢レ蠶」

【蠶蛾】サンガ　かひこのきなぎ。陸璣、管

絡傳「先說ニ雞子一、後道ニ――一」

【蠶卵紙】サンランシ　かひこのたねがみ。

【蠢】

トン　蟲（兩條）に同じ。

【蠢】　通　又、蠢蠢に作る

○きくひむし、木中に生じてしんを食ふ蟲。說文「木中蟲也」ニ蛀蟲。○こめのむし。○しみ、衣服や書物を食ふ蟲。ニ蠹魚・衣魚・紙魚・銀魚。○むしくひ、むしばむ。莊、人間世「以爲ニ門戸一則液樠、以爲ニ柱一則――、是不材之木也」○轉じて物事を害する。又、其の物。左傳「國之ニ――也」

【蠹蛾】トガ　きくひむし。蛾は蚍蜉の子。淮南子「――部ニ梁柱一、蟻走ニ牛羊一」

【蠹艾】トガイ　○しみが物を食ひそこなふ。○物事をそこなひやぶる（後漢書、宦者傳）ニ蠹毒。

【蠹簡】トカン　むしばみたるかきもの。陸龜蒙詩「――有ニ遺字一」ニ蠹編・蠹冊。

【蠹魚】トギョ　○しみ。李白詩「委レ之在ニ深閨一――壞ニ其翅一」ニ銀魚。○書を讀みて活用の才なき者を嘲りていふ。陳造詩「笑我――座前中、口角儒墨紛ニ異同一」

【蠹居雜處】トキョザッショ　木くひ蟲が木の中に居る如く、又苔石が盤面に散布する如く、惡しき物事の散らばって在る形容（韓愈、潮州刺史謝上表）

【蠹害】トガイ　○むしばみたる書物。ニ蠹簡。○書物の蟲干をする。穆天子傳「――ニ――于羽陵一」ニ曝書。

【蠹書蟲】トショチュウ　しみ。韓愈詩「投珠――、生ニ死文字間一」

【蠹蝕】トショク　むしばむ。陸游詩「發レ篋覓ニ舊書一嘆悼――損」

【蠹賊】トゾク　物事を害する。又、其の者。

【蠹毒】トドク　○きくひむしの害。○轉じて害毒の義。ニ蠹害。

【蠹損】トソン　むしばみたる書物。陸游詩「一點殘燈守ニ――一」

十九畫

【蠻】

バン　蟲（兩條）に同じ。

○南方のえびす「南ノ――」「八ノ――」「百ノ――」周禮、夏官、大司馬「――夷戎狄」疏「――者簡也、簡絜之以政教也」○轉じて廣く文化の開けざるにいふ「野ノ――」○古、外國人をいやしめていふ「ノ國」「ノ船」○綿ノバンは鳥の鳴く聲の形容。詩、大雅「綿ノ――黃鳥」

【蠻夷】バンイ　えびす、爽は東方のえびす。漢書「斬ニ其首一傳ニ京師一、蘇ニ――郎門一」元稹詩「忠信敵ニ――一」

【蠻奇】バンキ　遠方のえびすの國。王粲文「無ニ――一、不ニ屆ニ攸レ敬」ニ遠蠻・邊爽。

【蠻行】バンコウ　蠻野蠻なる行爲。

【蠻境】バンキョウ　えびすの土地。ニ蠻地。

【蠻荒】バンコウ　遠き南方のえびす、荒は荒服。韓愈、潮州刺史、上表「雖レ在ニ――一」

【蠻觸】バンショク　南方のえびす。詩、小雅「蠻觸ノ――、大邦爲レ讎」

【蠻語】バンゴ　○えびすのことば。世說「參軍何爲、不レ作ニ――一」○外國人の語を用ひていふ。

【蠻國】バンコク　えびすのくに。輟耕記「八蠻之國、南門之外、北面東上」

【蠻酋】バンシュウ　野蠻人のかしら。ニ酋長。

【蠻人】バンジン　野蠻人。ニ蠻民。

【蠻瘴】バンショウ　南方の熱病をおこすあしき山澤の氣。張九成詩「須臾倒ニ江湖一」ニ瘴ノ――腥」

【蠻觸】バンショク　小さき事を爭ふにいふ。蝸角之爭（一七九頁一段）を見よ。

【蠻箋】バンセン　蜀より出づる詩箋。韓湘詩「十樣ノ――出ニ益州一」ニ蜀箋。

【蠻氈】バンセン　えびすの製する毛布。桂海虞衡志「――出ニ西南諸番一、以ニ大理者ニ爲レ最、蠻人盛披夜臥、無ニ貴賤一、人有ニ一氈一」

【蠻族】バンゾク　未開の種族、野蠻の民族。

【蠻書】バンショ　人をののしりていふ語。晉書、王敦女傳「嵇紹妻荀（中略）初紀曰、何故反耶、王焉曰、――、我欲

レ謀二反國一、可レ謂レ反乎」

【蠻船】バン　外國の大船。五國故事「仍鑿二巨舟一、號二蠻船一、無二失墜者一、人因謂二之招財侍郎一」

【蠻貊】バク　えびす、貊は北方のえびす。論、衛靈公「言忠信、行篤敬、雖二蠻貊之邦一行矣」‖南蠻北狄。

【蠻風】バン　○えびすのならはし。‖蠻俗。○賤しき風俗。

【蠻野】バン　文化がひらけず。‖野蠻。

【蠻勇】バン　圖亂暴なる勇氣。

【蠻虜】ロン　えびす。漢明帝、詔責行「我祖我征、伐二彼一一一」

【蠻力】バン　蠻勇に同じ。

【蠻夷】イ　えびすの地より徵發する人夫。柳宗元、嶺南節度使軍堂記「則一一是徵」

二十畫

【蠻】カク　㊀

おほざる(母猴)「一猿」

血部

【血】ケツ　タチ　㊁

○ち、ちしほ、のり、心臟より出でて體内の脈管に循環する赤き液體「一液」○こむ(染)○うれふる色。○ちぬる、血を塗りつける「一刃」○血を分けたる閥柄「一統」「一族」「一胤」○あかね(地血)‖茜。○強く盛んにしていきいきしたるにいふ「一氣」「熱一」○一食ショクは牲ニクを殺しー血を取りて神を祀マツる。

【血胤】イン　血統に同じ。胤は血つづき。

【血液】エキ　ちしる、動物の體内に滿ちて、養分をつかさどる液。

【血行】カウ　體内に於ける血液の循環。一一器は心臟と血管と。

【血氣】キ　はやりぎ。論、述而「少之時一一未レ定、戒レ之在レ色」

【血球】キウ　血液の一成分、赤血球と白血球とあり。‖血滴。

【血盛】セイ　圖貧血症。

【血塊】クワイ　ちのかたまり。

【血管】クワン　體内の血の通ふくだ。‖血脈。

【血痕】コン　ちのつきたるあと。蒙陰比郷「猶二去其墨一即見二一一一」

【血祭】サイ　○いけにへを殺し血を取りてまつる。周禮、春官「以二一一一」祭二社稷五祀五嶽一」○圖出陣の時、いけにへを殺して軍神を祭る。又、其の敵とする者を殺して見せしめにする。

【血相】ソウ　かほいろ、顏色。‖血色。

【血潸】サン　刀の刃に刻みたる細きみぞ、ちながし。

【血祀】シ　いけにへをそなへてまつる。藤原書「君レ人者、當宜二一一一一、況自有二其臣一乎」‖血食。

【血潤】ジュン　ちすぢ。後漢書、張綱傳「去レ順效レ逆、非レ忠也、身絕二一一一一、非レ孝也」註「凡祭皆用レ牲、故曰二一一一」‖血統・血胤。

【血晶】ショウ　水晶の赤くして血の如きもの、珍貴にして得易からず。

【血漿】ケツ　濃くして透明なる水様液、血液の成分をなすもの。

【血書】ケツ　ちにて書く。又、其の文字。

【血色】ショク　○ちのいろ。○かほいろ。‖血相。○赤色。白居易詩「一一羅裙翻酒汚」

【血食】ケツ　毛血ある牲ニクをすすめて神を祭る。左、莊二十四年「非二宗廟社稷所一一一君將取レ俘」（不二血食一は國の亡ぶるをいふ。前條參看。

【血清】ケツ　血液より析出する帶黃色の澄める液。

【血税】ケイ　圖徵兵の義務をいふ。

【血腥】セイ　ちなまぐさし。

【血戰】セン　血まみれになりてたたかふ、身命をなげうちて劇烈に戰ふ。五代史、張承業傳「大王父子、與レ梁一一三十年、本欲レ雪二家國之仇一而復二唐之社稷一」

【血族】ゾク　同じ先祖より出でたる親類。‖血屬。

【血屬】ゾク　血をわけたる親族。唐少雍「某山門有レ庵、一一在焉」‖血族。

【血點】テン　ちの滴りたるあと。陸游詩「楠中出レ劍秋水滿、一一丹旌新報レ仇」

【血統】トウ　血をわけたるつづきあひ。‖血緣・血胤。

【血肉】ニク　ちとにくと。無二飲詩「況我有一一、又生二名利一」

【血珀】ハク　琥珀の深紅色のもの。

【血脈】ケツミャク　○血液の通ふ脈管。呂覽「一一欲レ其通也、筋骨欲二其固一也」‖血管。○ちすぢ。梁書、劉杳傳「訪二查一一所レ因」○圖ケツミャク佛法の奧義を傳へる系。‖法脈・傳統。

【血脈貫通】ケツミャククワンツウ　身體に血脈が通ずる如く文章などの一篇の連絡あるに喩ふ。大學蒙引「一一者、人之四肢百骸、雖二各爲一一體一、然惟血與レ脈、則貫相貫通」

【血瘤】ケツ　血便をくだす傳染病。‖赤痢。

【血淋】ケツ　淋病の尿に血液を含むもの。

【血輪】リン　血球に同じ。

【血淚】ケツ　ちのなみだ。白居易文「棟二甘是非一一盈レ襟」

【血路】ケツ　敵の圍を切りぬけてやっと逃げ出づるみち。韓愈、城南聯句「羽空翮二雖健一一迸二氣候一」

【喋レ血】チョウケツ　戰場に赴くをいふ。喋は躡に通ず、履ムなり。戰闘のはげ

しきさま。史、淮陰侯傳「将一ニ一國與ニ」(國與は地名)

【以レ血洗レ血】ヲチモッテヲアラウ ○血にて血を洗へば益けがる、悪事を盛分する爲めに更に悪を爲すに喩ふ。唐書、源休傳「汝國已殺二突蜜等一、吾又殺レ汝、是二以レ血洗レ血、汚益甚耐」○國血を分けたる親類が互に相爭ふにいふ。

【血流漂レ杵】チカバカンジョ 戰死者多く、流血の盛んなるをいふ。書、武成「前徒倒レ戈、攻二于後一以北、——」

三畫

【盃】クッ 陽

ち(血)左、億十五「士刲レ羊亦無一也」(羊をさき殺して血の出ざるは不吉の兆)

【郤】卻(二八二頁一段)の誤字。

四畫

【衄】ヂク 屋

○はなぢ、鼻の穴の粘膜より出る血。又、はなぢが出る。○くじく(挫)「挫一」「沮一」「折一」○やぶる(敗北)「敗一」「奔一」曹植、求二自試一表「師徒小一」

【衄血】ヂクはなぢ(鼻血)=蚘。

【衂】(前條)の俗字。

【衃】ハイ 尤 灰 ㊀くさりてこりかたまりたるち(敗悪凝聚の血)㊁蚯蚓ノ血は草の名、こあふひ(葵)

五畫

【衊】キン 震

ちぬる。牲血ノ釁ヲ貝ニ盛テ器ニ塗ル。禮、樂記「車甲一而藏之府庫」=釁(西部十八畫)

六畫

【醑】カク 陌

○はく(喀)血をはく(嘔血)血)雑語「吾伏弩一血」(弩は弓弩)○咳ト共に血を吐く。

【衂】ジ 寘

○ちぬる(釁)○ちまつり(血祭)○耳の血。

【衆】シュウ シュ 國 衆の俗字

○おほし(多)○もろもろ、多くの人。論、衛靈公「一惡之必察焉、一好之必察焉」○人數をいふ。○僧をいふ。

【衆怨】シュウエン 多くの人のうらみ。

【衆論】シュウロン おほくの人の議論。唐書、禮樂志「博採二一一」

【衆議院】シュウギイン 帝國議會の一部、一般の人民より選擧せられし者を議員とする。=下院。

【衆愚】シュウグ おほきと、すくなきと。吳志、孫韶傳「推問二諸屯要害遠近、人馬一一、魏將姓名一盡具識レ之、所レ問成對」=多寡。

【衆蟻茅茹】シュウギシュジョ 茅茹は茅の根の相連る如く互にひきあふ、多くの賢人が相共に朝廷に進み出て仕へる。易、否卦「朝六拔二茅茹一」に本づく。

【衆口】シュウコウ 多くの人のざんげん。周語「衆心成レ城、一一鑠レ金」

【衆口鑠レ金】シュウコウシャクキン 衆人のざんげんの恐るべきに喩ふ。史、鄒陽傳「一一、積毀銷レ骨」

【衆心成レ城】シュウシンセイジョウ 衆人の心一致すれば、城の如く堅固なる義。衆口參看。

【衆庶】シュウショ もろもろのたみ。上林賦「務在二獨樂一、不レ顧二一一一」=庶民、億兆。

【衆寡】シュウカ 大ぜいの人の中にてはちしめる。

【衆生】シュジョウ ○世の中の一切の人。禮、祭統「一一必死、死必歸レ土」○佛ありゆる人人。釋氏要覽「衆共生レ世、故名二一一一」法華經「一切一一」

【衆小】シュウショウ 多くの小人。漢書、劉向傳「一一在レ位而從二邪議一」

【衆少成レ多】シュウショウセイタ 少しのものも衆くあつまれば多くなる。漢書、董仲舒傳「一一、積小致レ鉅」

【衆中】シュウチュウ おほぜいのなか、多人數の中。

【衆徒】シュウト 多くの僧侶。=衆僧・大衆。

【與レ衆同レ好惡レ不レ成】クミトカウヲトモニセヌハナラズ 衆人と好む所を同くすれば、何事にても成らざるなし。三略「一一、與レ衆同レ惡離不レ傾」

【衆芳】シュウホウ 多くの花。=萬芳・衆葩・百花。

【衆評】シュウヒョウ おほくの人のうはさ。

【衆妙】シュウミョウ おほくすぐれたる自然のことわり。老子「玄之又玄一一之門」

【衆目】シュウモク おほくの人のめ。梁簡詩「滿堂虛レ左待、一一望二將還一」

【衆陽之長】シュウヨウノチョウ 太陽をいふ。漢書、李尋傳「日者一一」

【衆枉】シュウオウ 多くのよこしまなるもの。淮南子「聖人無二思慮一、無二設儲一、來者勿レ迎、去者勿レ將、人雖二東西南北一、獨立中央一、枚處二一一之中一、不レ失二其直一」=眾枉。

九畫

【鉻】 カク　キャク　俗に略に作る

○はく（嘔）血を吐く。‖鉻。○氣を吐く。○吒かる貌。

十五畫

【衊】 ベッ　バツ　㊀　㊁

○けがれたるち、汚血。○けがす・けがれる（汚）○はづかしめる、恥をかかす「汚ー」○はなぢ（鼻血）

同訓異義 かす・汚・汚・涜・瀆・黷等の別は汚（一〇四七頁二段）の條を見よ。

十八畫

【衋】 キョク　㊀

いたむ（傷痛）書、酒誥「民罔不ー傷心」

行部

【行】 ㊀ カウ・ギャウ　㊁ カウ　㊂ カウ・ギャウ　㊃ カウ・ギャウ　皮　蒸　陽　敬　宋音アン

㊀ゆく（往）あゆむ（歩）說文「人之歩趨也」すすむ（前進）いたる（臻）○かへる（還）さる（去）去りて他にゆく。○ながる（流）うつる（移）めぐる（周）ふる（歴・經）「一年」○山の名。○おこなふ、なす。論、爲政「先ー其言」なさる（爲）○ほどこす（施）○やる、ゆかす。○官名「一人」○もろし、堅からず。○たび、たびぢ（旅程）たびじたく、かどで。○姓。○まづ（先）○しばらく（且）○やがて、ついで。○みち（道路）詩經「一有死人」又義理。○路の神。禮、月令「孟冬其祀ー」○ぎゃう、書體の一種、楷書を少しくくづしたるもの「一書」「眞ー草」○詩の一體「歌ー」「琵琶ー」「短歌ー」漢書、司馬相如傳「爲鼓一再ー」○ゆくゆく。○天地萬物成立の元氣、五ーは水・火・木・金・土。○外に在る義「ー幸」「ー省」○位と職との間に添へて、位が高く職が卑きことをあらはす、唐代の制。我國にても倣ひ用ふ。守の對。㊁年齢の次第「輩ー」「排ー」○ともがら（等輩）「丈人ー」○ーは剛健なる貌。㊂くだり、ならび、つら、なみ（隊列排列）「一列」「一札十ー」「淚數ー」○古代の兵制、二十五人一組の稱。左、隊十一「ー出ー入難」○とひや（問屋）貨物を積みて商賈の紹介を爲すもの「一棧」○百工の執る所の業、同業を同ーといふ。○太ーは山名、其の脈、山西・河南兩省に連る。㊃しわざ、おこなひ、ふるまひ（德行）行爲・所業）心に在るを德といひ、之を施すをーといふ。○體身を潔くして佛に奉ずるを修ーといふ「難ー」「苦ー」

同訓異義 ルヲ行・繞・逸・環・巡・周・旋・運・回・週・循の別は繞（一四〇一頁三段）の條を見よ。

○ユク行・往・之・如・逝・徂・征・適・于の別は往（六一八頁三段）の條を見よ。

【行爲】 カウヰ　おこなひ。善く惡しきによりて生ずる動作をいふ。‖所業。

【行雲流水】 カウウンリウスヰ　一定の形質なく、種種にうつりかはるに喩ふ。又、心情の活潑なるに喩ふ。宋史、蘇軾傳「ー、初無ニ定質ー」

【行營】 カウエイ　○唐代節度使が任地を定めずして、暫時軍を留むる處をいふ（柳宗元、段太尉逸事狀）○陣營をいふ。○陣容を巡り視る。

【行役】 カウエキ　○政府より命ぜられて土木事業又は國境を守る事などに從ふ。禮記「大夫七十而致仕、若不ー得ー謝、則賜ニ之几杖ー、ー以ニ鳩ー人ニ○巡守と役作と（周禮、地官、州長）○轉じてたびする、行旅の苦。詩經「自ー古斯ニー」

【行遠】 コウエン　とはきにゆく中庸「辭如ニ行ー遠必自ニ邇ー」

【行轅】 カウエン　大官の出張して駐まる所。

【行猷】 カウイウ　歩みながらうたふ。漢書、朱買臣傳「獨ー道中」

【行行】 カウカウ　○剛強なる貌。○論、朱進「子路ー如也」○行き行く貌。古詩「ー且ー、與ニ君生別離ー」○道中にて隊伍をなす。後漢書、桓典傳「ー且止、避ニ驊馬御史ー」

【行者】 カウジャ　たびびと。李頎詩「ー暮帆遠、主人庭樹秋」‖行子・遊子。

【行間】 カウカン　○軍中、行は行列の名。後漢書、衞青傳「青幸得以ニ肺腑ー待中鄙ーーと」○オンカウ　開者を用ひて仲へだてをさす。五代史、楚世家「皆使ニ諜者ーニ於殷ニ殷不レ知」○カンカウ　文書の行と行との間。

【行商】 カウショウ　事を省きててがるにする。論、雍也「居レ敬而ーレー、以臨ニ其民ー」

【行義】 カウギ　正しき道をとりおこなふ。

禮記「皆由二順正一以行二其義一」‖行義。

【行館】ギャウクワン おこなひ、義理にかなふ、正しきおこなひ。品行と道誼と。漢書、董仲舒傳「民以レ故、奪二一一一而畏、董仲舒傳「民以レ故、奪二一一一而死二則利一、是以犯レ法而罪多、一歲之獄、以二萬千一數」

【行器】ギャウ ○旅行の器具。左、昭元「具二一一一矣」‖行具。○圓食物を盛りて運ぶ具。圓くして高く、蓋を具へ、脚は三本ありて外へ反ッる。

【行賂】ギャウ 賄賂を行使する。潛夫論「事曲、則詔意以一一」‖行賄。

【行吟】ギャウ 歩みながら詩をうたふ。楚辭、漁父「屈原既放、遊二於江潭一、一一澤畔一」

【行痩】カウ ゆきだふれ、路傍にてうゑじにせしもの。趙延之、行痩賦「嗟我來之既遠、覩二一一于水隅一」‖道殣「左、昭二」

【行虐】ギャク 苛酷なることをほどこす。書經、傳「託レ天以一二於民一」

【行具】グ 旅立のしたく。戰國策「急約レ車爲二一一一」‖行裝、旅裝。

【行軍】グン 軍隊を進めやる。孫子「不レ知二山林險阻沮澤之形一者、不レ能レ一一」‖用兵。

【行火】クワ ○火を用ふる。大藏經「使二益一一、以辟二出藥一」○圓クワン持ち運べるこたつ、主に足を暖めるに用ふ。

【行資】シ ○貨物を運び販ぐ。孟子、衆皆「一一日レ商」○賄賂ワイロをつかふ。元傳「善告女所二一一一」

【行官】クワン 唐代の官名。四方に使することを掌る。通鑑、注「節鎭州府皆有二判官、有二一一一、判官供二判前驅使一一一使之行役出二四方一」

【行卷】クワン 官吏登用試驗及第者が、其の呈出せし文章を卷物とし、試驗の主任者の閲覽に供するもの（演繁露）

【行樒】ギャウケイ ゆききのこみち。六帖「蓬蒿滿レ室、惟開二一一一」

【行詣】ギャウ すすみゆく。南史、羊欣傳「辭不二朝覲一、白レ非レ尋二省近親一、不二妄一一、行必由二城外一、未レ嘗入二六門一」

【行業】ギャウ おこなひと、わざと。履志、武帝紀「任俠放蕩、不レ拘二一一」

【行視】ギャウ 旅行用のすずり。韻畧後集「一一錄、世路難、人心異、唯石交、不二相棄一」

【行檢】ギャウケン 品行が正しくしてしまりがある。晉書、石崇傳「任俠無二一一」

【行伍】ゴ 軍隊をいふ。古、二十五人を行とし、五人を伍とす。漢書、陳勝傳贊「踐二足一一之間一、而擢二起阡陌之中一」

【行賈】コ 行商人。史、貨殖傳「貨賣一一偏二都國一」‖行商、行販。

【行國】コク 部落の者が水草を逐ひて轉徙し、城郭なき者。漢書、西域傳「大月氏、本一一也、隨レ畜移徙、與二匈奴一同レ俗」

【行脚】キャク いつはりを行ふ。論、子罕「久矣哉由之一一也」

【行裝】サウ たびじたく。墨客揮犀、行李、謂二行人一也、今人乃謂二一一一」爲二行李一、非也」‖旅裝。

【行像】ギャウザウ 佛像を奉じて出行する（佛國記）

【行藏】ザウ すすみ出でて道を行ふと退きて隱れ居ると。論、遯而「用レ之則行、舍レ之則藏」‖出處。

【行子】シ たびびと、旅客。鮑照詩「居人愁二閨閣一、一一夜中飯」‖遊子、行客。

【行止】シ ○ゆくと、とどまると。程賦「一一屬伸、與レ時息兮」○德行。又は行迹の義。止は容止、舉止の止。外史檮杌「鄭突叔二子文遂」其兄曰、莫レ學二沈湎、嘲レ風弄レ月、汗二人一一」

【行使】シ ○行人ギャウニンを使してゐふ（左、桓十一、疏）○圓つかひ用ひる、使用する。

【行乖】クワイ ○おこなひしことがら、事實（史、自序）○使命を奉じて行く事に關係せしことがら。孟、公孫丑「未レ曾與レ之言一一也」○圓ギャウ古、朝廷の儀式、佛事などに主として其の事をとりあつかひし役。又其の行ふ事がら「年中一一」

【行事人】ギャウジニン 事を取扱ふ人、當事者。後漢書、杜根傳「私語二一一」

【行舟】シウ ふねをやる。論、立レ行而不レ立レ信、猶レ無二倚而一レ一也」

【行尸走肉】カウシサウニク 死尸にして能く行き、死肉にして能く走るが如し。不學無能の人をそしりていふ。拾遺記「任末曰、夫人好レ學、雖レ死如レ存、不レ學者雖レ存、謂二之一一」

【行宮】キウ 其の人の行ひし事實。劉寶夫、監獄記「故君之一一敢不二詳知一」

【行人】カウ ○使者の事を掌る官。論、憲問「一一子羽修二飾之一」○道を行く人。史、李斯傳「有二一一一入二上林中一」○圓ギャウニン行者ジャに同じ。

【行神】カウシン 道をまもるかみ。野客叢書「漢陸江王傳、註、黃帝之子累、好二遠遊一、道死、故後人以爲二一一一」

【行文】カウブン 譖愬ソサを傳へはこぶ。南史、王琨傳「傳レ酒一一、皆委內戚」

【行陣】ギャウヂン ついたて屏風の類。南史、宗測傳「測答、自圖下阮籍遊二蘇門一於一一上、坐臥對レ之」

【行賞】シャウ 賞をあたへる。周禮、疏「春・夏一一、秋冬行レ罰」

【行縢】ギャウトウ さかづきをまはす。禮記「命レ酌曰、請一一、酌者諾」‖行レ酒。

【行成】カウセイ ゆきて邊境をまもる。又其のまもりの兵。漢書、鼂錯傳「陳勝一一、爲二天下先倡一」

【行酒】シュ　○酒令を行ふ。漢書、高帝紀「請得下以二軍法一ー上」○サカヅキ酒を酌みて客に奉ずる。後漢書、辰韓傳「弓爲レ弧、賦爲レ矰、ー二人行酒一」

【行春】シュン　巡、太守が縣を巡りて農桑を勸むるをいふ。後漢書、鄧弘傳「弘少爲二鄉嗇夫一、太守第五倫、ー二見而深異レ之」

【行色】コウショク　人の旅立せんとするやうす。莊、盜跖「車馬有ニー一」

【行食】コウショク　○職業なくあそびてくらす。管子、君臣「淫倖ー二之徒」注「ー二游食也」‖游食。○食膳をはこぶ。孔平仲詩「侍レ膳ー二皆官妓」

【行水】スイ　○水をやる、水を注め通ずる。孟、離婁「若二禹之ー一レ也」○水をめぐる、水勢を巡視する。戰國超策「智伯出ー一レ」○ユヅキ神佛に祈る時、水をあびて身を清める。梁高僧傳「祖使ニー一ー」○圖又月、盥タラヒにて湯をあびる。

【行成】カウセイ　和を講ずる、たひらぎを行ふ。左傳「四二吳太宰一以ー一レ」注「ー一、求レ和也」

【行星】カウセイ　恆星の周圍を運行する星、金星・地球など。‖遊星・惑星。

【行清】カウセイ　かはや。史、萬石君傳、注「廁、ー一、牏、中受レ糞者也」

【行迹】カウセキ　おこなひ、品行。漢書、鄒陽傳「長君ー一」

【行走】ソウ　專任の官を設けざる處。又專任官にあらざる者「軍機處ー一」

【行第】ダイ　排行の次第、としじゅん、年齒の次第。老學庵筆記「亦以ニー一稱レ之矣」

【行貨】カウクワ　物を乞ひあるく。荀子「解然藏二千溢之寶一、雖ニー一而食二人謂二之富一矣」

【行臺】ダイ　○隋・唐以後、尚書省を中臺と稱す、臨時に外州に置きて尚書の事を行ふ者をー一と稱す、專ら征討の事を掌る。元に至りて行省といひ、又、行御史臺と行樞密院とありて法律・軍事を掌り、事定れば罷せて行省に歸す。明・清時代の總督・巡撫等は此の官制に本づきしものなり。○轉じて高官大吏の駐在せる所をいふ。

【行素】カウソ　旅行用の底なきふくろ。五代史、雜傳「錢悉取二其ー一ー一」‖征裝。

【行誅】カウチュウ　誅伐をおこなふ。東京賦「高祖膺レ籙受レ圖、順レ天ー一レ」

【行厨】カウチュウ　べんたう。杜甫詩「竹裡ー一洗二玉盤一」‖筵食。

【行通】カウツウ　ゆきかよひ、交通「ー一遮斷」

【行程】カウテイ　みちのり。楊萬里詩「峽裏撐レ船更不レ行、楊郎相語改ニー一ー」

【行樓】カウロウ　婦人、帛ヌノにて其の足を束ねるをいふ、樂府に「雙ー一詩あり【名義考】

【行動】カウドウ　おこなひ、動作。‖果動。

【行業】カウゴフ　寺の召使のこども。唐事志「朱三有レ子 年十三四、傳二於慶天寺僧一爲ニー一ー」

【行頭】カウトウ　○漢時代、店の番頭ドンをいふ、古は肆長といふ（周禮、疏）○將校をいふ、行列の長の義。吳語「ー一皆官號」‖行長（通俗編）

【行縢】カウトウ　むかばき、脛にまとふ衣、きゃはん。陸游詩「溪南閒道更幽絕、明日裂レ布縫ニー一」‖脚巾。

【行同能偶】カウドウノウグウ　おこなひ相同じく、才能相ならぶ。漢書、食貨志「ー一、則レ之以レ射、然後酋命焉」

【行遞】カウテイ　郵便物逓送用のふくろ。

【隨レ行而入】アトニツイテイル　多くの行列の中に加はりて役所に出勤する。韓愈、與二陳給事二書「ー一、逐レ隊而趨」

【行年】カウネン　行は歷、經過せしよはひ。莊、天道「ー一七十老二斲輪一」‖享年。

【行能】カウノウ　品行と才能と。漢書、馮野王傳「野王ー一第一」行同能偶參看。

【行馬】カウバ　貴人の門外に設くるこまよせ【遮欄】漢官儀「門施ニー一、以維二馴之一」‖駟馬・馭・轡馭。

【行媒】カウバイ　なかうど。曲禮「男女非レ有ニー一、不二相知一名」

【行輩】カウハイ　年齒。韓詩「詩家ー一如レ君少」

【行伴】カウハン　みちづれ（同伴）白居易詩「旅館二奚酒一爲ニー一ー」

【行厨】カウチュウ　行商に同じ。又、ゆくゆく商ふ。晉書、石勒載記「年十四、隨二邑人一ー二洛陽一、王衍見而異レ之」‖行賈。

【行聘書】カウヘイショ　博識にして記憶力強き人をいふ。隋唐嘉話「唐太宗嘗出行、有司請下破二封書一以從上曰、不レ須、虞世南在、此ー一也」

【行部】カウブ　部屬の地方を巡視する。後漢書、蘇章傳「故人爲二清河太守一、章ー一按二其貪穢一」

【行文】カウブン　○文章の筆づかひ、文を作る。○官文書の往復。又、其の文書。○武事を棄てて文事を行ふ。漢書「偃レ武ー一レ」

【行剛】カウゴウ　軍行中、臨時に立てる廟。晉書、溫嶠傳「創二建ー一、廣設二壇場一、告二皇天后土祖宗之靈一、親讀二祝文一、聲氣激揚、流涕掩レ面、三軍莫二能仰視一」

【行步】カウホ　あゆむ。體、經解「ー一則有二環佩之聲一」‖步行。

【行荏】カウカク　ゆくゆく年がくれる。陸賈賦「感二年華之ー一兮、思二乘レ烟而遠遊一」

【行木】カウボク　山林の木をみまはりあるきする。呂覽、季夏「入レ山ー一レ」

【行藥】カウヤク　くすりを飲みて後、歩行して之を消化せしむ。陸龜蒙詩「更擬三結レ茅臨二水次一、偶因ニー一到二

村前」

【行竊】カウセツ　器物がもろくしてゆがむ。物の平かからざるを行といひ、苦惱を竊といふ。唐書、韓琬傳「器不二一一」（一說、行は汗の誤）＝苦竊。

【行餘】カウヨ　道を行ふ餘力。論、學而「行有二餘力一則以學レ文」

【行潦】カウリウ　途上のたまりみづ。には たづみ。孟、公孫丑「何海之於二一一一類也」

【行樂】カウラク　たのしみをなす。楊惲詩「人生一一耳、須二富貴一何時」李白詩「一一須レ及レ春」

【行李】カウリ　○使者なり。李、理通ず、理は吏。左、襄八「不レ使二一人一一告二于寡君一」＝行人。○轉じて後世、旅行者の携ふる荷物の義とす「一一匆匆」

【行理】カウリ　前條に同じ。左傳「一一之命、無二月不レ至」注「一一、使人通二聘問一者」

【行圍】カウヰ　ゆくと、とどまると。唐書、房喬傳「軍伍一一、悉裁二檢之一」

【行果】カウクワ　道を衰する樹木。左、莊九「魏絳斬二一一一」

【行旅】カウリョ　たびびと。孟、梁惠王「一一皆欲レ出二於王之塗一」＝行客。

【行路】カウロ　○みちすぢ。○途上を行く人。痛痒に關せざる他人の喩。蘇武詩「四海皆兄弟、誰爲二一一人一」蘇唐書、魏徵傳「儉レ物則皆肉爲二一一」○世渡り。白居易詩「一一難、不レ在レ水不レ在レ山、只在二人情反覆間一」＝世路。

【行路樹】カウロジュ　園道傍に沿うてううる樹木。＝行樹。

【行路】カウロ　まひなひをつかふ。國語「願以二子之鮮一一一焉、其可乎」

【行篋】カウケフ　道上のつゆ。詩經「厭浥一一、豈不二夙夜一謂二行多一露」女子が禮を以て自ら守り、淫奔の事を爲すを恥づる義。

【尋レ行數レ墨】ジンカウスウボク　行は文字のならび、讀書して、唯だ文字のみに拘りて、文義を悟らざるをいふ。朱熹詩「須知二經傳編一者、不二是一一人一」

【行幸】カウカウ　天子の他所に出行する義、みゆき。禁過、周禮「天子車駕所レ至、賜二食帛一、民爵有レ級、或賜二田租一、故謂二之幸一一、巡行也」漢書、武帝紀「元鼎四年十一月、一一雍」

【行香】ギャウカウ　○佛に事へる禮、香爐を執りて佛殿中を繞り行く儀式。南北朝の時に始まる。○近世は文武の官吏が廟に入り香を焚きて拜するにもいふ。＝進香。

【行儀】ギャウギ　園坐作進退及之に關する禮式作法、たちゐふるまひ。＝坐作・舉止・行狀・品行。

【行啓】ギャウケイ　皇后・皇太子などのおでまし、啓はさきばらひ。

【行司】ギャウジ　園劍道・相撲などの勝負の審判役。

【行者】ギャウジャ　佛家・道家などにて、其の道を修め行ふ人。又、行脚して乞食する僧。羅氏雅談「經中多呼二修行人一爲二一一一」＝頭陀。

【行狀】ギャウジャウ　○おこなひ、品行。○人の一生の履歷を記せる文體の名、碑誄の開に始まる。文體明辯「先賢謚誄、竝有二一一一」＝行述。

【行書】ギャウショ　書體の一、楷書を少しく略したるもの、後漢の劉德昇始めて之を作る。書斷「一一者、後漢潁川劉德昇所レ作也、即正書之小譌、務從二簡易一、相間流行、故謂二之一一一、昔鍾元常善二行押書一、謂後王羲之・獻之竝造二其極一焉」

【行政】ギャウセイ　法律、勅令の規定に從ひて行ふ國家の政事。國家の立法・司法以外の政務の總稱。＝機關は國務大臣、自治體の長。

【行住坐臥】ギャウヂウザガ　行くと止まると、すわると、ふすと。即ち、たちゐふるまひ、佛家にて、之を四威儀といふ。心地觀經「一一、受二諸苦惱一」

【行列】ギャウレツ　立ちならぶ。通鑑、隋文帝紀「以レ次一一」

【行脚僧】アンギャ　一定の住處なくして諸國を廻りあるく僧。草木子「程道南與二弟伯淳一同レ席食レ羹、道元誦二梁南、賦二豆詩一、應レ聲作二四句一云、頭子光光脚似レ丁、藏皇三豆腐與二波羅一、釋迦見了呵呵笑、煮殺許多——、閑者絕倒」＝雲水僧。

【行宮】アングウ　天子の出行の時のごてん。左思賦「梁岷有二陪方之館一、一一之基一」盧象詩「綉章終朝陪二步輦一、垂楊幾處繞二一一一」行在。

【行在所】アンザイショ　巡幸の時などのかりみや。通鑑綱目集覽「天子以二四海一爲レ家、故行曰二乘輿一、止曰二行在一」＝行宮。

【行燈】アンドン　燈火をともしてすゑ置く具。

【行不レ由レ徑】ユカズケイ　道を行くに邪徑をふまず。行の正大なるにいふ。論、雍也「有二澹臺滅明者一、——、非二公事一、未レ嘗至二於偃之室一也」

【行常帶レ經】ユクツネニキョウヲオブ　道を行くに經書を携へる、學問に熱心なる義。史、儒林傳「——、止息則誦二習之一」

三畫

【衍】エン　㊥銑

○あふる（溢）みちひろがる（充滿・盈溢）「充一」張衡賦「仁風一而外流」○水がゆったりと廣がり流れる。○うつくし（美）詩、小雅「醼酒有一」○曼一ンは極りなし。○しく、はびこる（布）「蔓一」のぶる（演）「一義」○ひろし（廣）「廣一」○廣

き澤。○水の中の洲「沙―」○地が下く平か。○肥えて美くしき地「―沃」○―は水の流れ行く貌。○おほし、ゆたか（饒）○遊―は自ら恣にする義、常規より溢れ出る義。○誤りて多くす、あまる「―文」「―字」

同訓異義　衍・餘・羨・贏・剰・贅の別は餘（食部七畫）の條を見よ。

【衍溢】ひろがりあふれる。春秋繁露「仁往而義衆、德澤廣大、―二于四海」

【衍盈】あまりみつる。韓詩外傳「國無二侠士一、皆用二於世一、猶二盛歡樂一―」‖盈衍。

【衍延】のべひろめる。禮記序「脩二其教一、而附以二臣見之言一」‖引申。

【衍衍】行く貌。謝朓詩「―清風爾」

【衍義】意味をひろめて說き明かす「大學―」

【衍字】文中にてむだなる不用の字。

【衍聖公】孔子の後裔が世襲する所の爵の名、漢の元帝、孔子の後の孔霸を封じて褒成君といひ、平帝、孔均を封じて褒成侯と爲してより歷代名號同じからず、宋の仁宗改めて――に封じてより元明清を歷て今に至るまで之に因る。

【衍文】あやまりて餘れる文字。中庸、朱注「子曰、二字―」

【衍愛】極りなくひろがりはびこる。司馬相如賦「―流爾」‖曼衍。

【衍沃】肥えて美くしき地。左、襄二五「井――」（美田を井田の制に區分する）

【衍】カン　寒　早

○たのしむ（樂）詩、小雅「君子有酒、嘉賓式燕―」○よろこぶ（喜）○―然カンゼンは安く定まる貌。○―は、ゆたかにあまる貌。又、和樂の貌。又剛直の貌。‖侃侃。

【衍衍】カン　○たのしむ貌。易、漸卦「飲食――吉」○剛直の貌。一解に強梗の貌。漢書、張敞傳「張敞――履レ忠進レ言」

【衍資】カン　資財をたのしましめる。曹植、嫂省賦「遂――而高會兮、丹幹曄以四張」

五　畫

【衒】ケン　ゲン　霰　先

通じて眩に作る

○てらふ、自らほこりて見せびらかす「誇―」○自ら己をとりもちて世に廣告する、自ら媒する、自ら行きてひらき賣る「―估」越絕書「―女不貞、―士不信」（自己の美貌學才などを自ら世に廣告する者）

【衒異】ケン　すぐれたる所あるをほこる。劉勰新論「含レ奇偉美、―レ露レ才者、未レ有下不二以レ此傷一レ性殞中レ命者上也」

【衒鬻】ケンイク　自ら才能をてらひて賣らんことを求める。漢書、東方朔傳「上書言二得失一自―者、以レ千數」註「衒、行賣也」

【衒耀】ケンヨウ　己の才學をほこりてらふ。晉書、甘卓傳「博涉二經史一、恥ニ―取一レ逸」

【衒學】ケンガク　才學をてらひほこる。

【衒氣】ケンキ　自らてらひたかぶる氣分。

【衒レ玉賈レ石】ケンギョクコセキ　甘行の一致せざる喩。法言「衒レ玉而賈レ石者、其狙詐乎」

【衒才】ケンサイ　自ら才能をほこる。

【衒士】ケンシ　己の才學をてらひほこる男。字解參看。

【衒張】ケンチョウ　物事を大袈裟にいひたてる。‖誇張・誇衒。

【衒女】ケンジョ　きりゃうじまんする女。字解參看。

【衒賣】ケンバイ　てらひうる。後漢書、龐參傳「百姓調二取穀帛一、―二什物一以應二吏求一」

【術】㊀ジュツ　㊁スキ　質　寘

㊀わざ、てわざ（學問・技藝）「學―」「藝―」「技―」「劍―」「算―」○こころだて「心―」心の由る所。○みち、邑中の道。○のり（道理）みち。晏子、雜篇「言有二文章一、行有二條理一」○ちまた（徑路）○おきて（法律）○すべ、てだて、しかた（方法）孟、梁惠王「是仁―也」○はかりごと（計略）「一數」○まじなひ、又、魔法などを行ふわざ「方―」「妖―」○ならふ（習）○のぶ、古、述に通ず。㊁周代の自治團體、萬二千五百戸を一組とする稱。禮、學記「一有レ序」‖述。

同訓異義　―は邑中の路なり、行に從ふ、尤の意、倫に求に從ひて衒に作るは非。

【術學】ジュツガク　藝術と學問との總稱。晉書、潘彥傳「少有二―一」

【術計】ジュツケイ　てだて、はかりごと。蔡邕賦「乘羊役二爭一―一、而缺刻二爭刑名一」‖權略。

【術藝】ジュツゲイ　技術と、文藝と。列子「管之君子多二―一」‖藝術。

【術業】ジュツギョウ　學術藝業。韓愈、師說「一有二專攻一」

【術語】ジュツゴ　學術語の略、學問上の專

門語。

【術策】ジュツサク はかりごと。‖權謀・術數。

【術士】ジュツシ ○個術に通ずる人。史、儒林傳、敍「焚二詩書一、坑二一一、六藝從レ此缺矣」‖儒士。○後世は方術に精しき人、方技の士をいふ。‖方士。

【術數】ジュツスウ ○はかりごと、たくらみ、權略。晉書、王濬傳「臨レ難而後可二以見一レ勇、臨レ事而後可二以見一レ智之士」○法制を以て國を治むるすべ。管子「人主務學二一、務行二正理一、則變化日進」‖術策。○陰陽家・卜筮家などの術。

【術知】ジュツチ 巧にはかりごとをめぐらすちえ。孟、盡心「人之有二德慧一一者、恒存二乎疢疾一」‖術智・巧智。

【術ヲ】ジュツヲ 前條に同じ。

【術中】ジュツチュウ はかりごとのうち。史、張儀傳「此吾在二一一一而不レ悟、吾不レ及二蘇君一明矣」

六畫

【街】 カイ 佳 通音ガイ

○ちまた、まちのおほどほり、四達の道「市ー」○ー亭は地名、卽ち街泉亭、陝西省に在り（蜀志、諸葛亮傳）○天ーは星の名。史、天官書「紫宮閨藩閉爲二天ー一」○國臺灣の行政區劃の一、莊よりは大いなり。

【街巷】カイコウ ちまた、街は直にして廣、巷は曲りて狹きまち。周禮、宮正、疏「大駕行幸使二衞士填一レ塞ー一、以止二行人一、備二非常一也」‖街衢。

【街區】カイク まちのくぎり。‖市區。

【街衢】カイク ちまた。北齊書、文宣帝紀「風俗更始、私枉路絕、乃勝二於ー一、具論二經國政術一」

【街官】カイカン 市街を巡視する官吏。張籍詩「ー一閑吏相傳呼」‖街使。

【街鼓】カイコ 京師にて朝夕にうつつづみ。劉禹錫大唐新語「舊制京城內、金吾衞傳呼以警二行者一、坊門以二擊鼓一爲レ節、始置二一一一、晨昏鼓二通一、公私便レ之」

【街市】カイシ ちまた。‖街巷。

【街使】カイシ 街官に同じ。唐書、左右ー一掌二分察六街一、徼中巡乙夜上」

【街上】カイジョウ まちのほとり。‖街頭・陌頭。

【街衙】シコウ ちまた。漢都賦「內則ー一輻輳」

【街卒】カイソツ 市街の掃除などを掌る人夫。後漢書、范式傳「孔嵩家貧親老、乃變二姓名一、傭爲二新野縣阿里ー一」

【街道】カイドウ ○まちの區きみち。北魏書、賈伯傳「雖二一一一、停レ車下レ馬」○國中のおほどほり。

【街談巷語】カイダンコウゴ まちなかのつまらぬうはさ。漢書、藝文志「小說家者流、蓋出二於稗官一一一、道聽塗說之所レ造也」‖街談巷議。

【街廛】カイテン 町にたつちり。‖市廛。

【街頭】カイトウ まちのほとり。杜甫詩「ー一酒債常苦レ遍」‖街上。

【街燈】カイトウ まちをてらすともしび。

【街邏】カイラ ちまたをみまはる兵、今の巡兵の如き者。宋史、歐陽修傳「聚二一一一一一、一一不レ能レ制」‖循邏。

【街路】カイロ ちまたのみち。白居易詩「ー一難レ長君不レ嫌」‖衢路・街道。

【衒】 トウ 東 通

ちまた（通街）北方の街巷を衞ーといふ、今省して胡同に作る。

七畫

【衙】 ㊀ガ ㊁ギョ・ゴ ㊂ギョ・ゴ 麻 魚 語

㊀やくしょ（官廳）「官ー」「ー門」○天子の護衞兵、儀仗なり、又、唐の制、天子居るにーといひ、行くに護といふ（儀衞志）‖牙。○あつまる、まるる（參集）朝廷に出勤する「ー參」陳遺詩「高山如二受一衆峯一」○ならぶ（行列・排列）「柳ー」「蜂ー」㊁ーーは疎遠なる貌。又、行く貌。㊂とどむ（止）○ふせぐ（扞拒）‖禦。

【衙官】ガカン 刺史の屬官。唐書、杜審言傳「晉文章當下二屈宋一作ー一上」（屈宋は屈原と宋玉と）

【衙參】ガサン 朝夕、羣臣が朝廷に參集するをいふ。元稹詩「科試詮衡局、ー一典校庭」

【衙推】ガスイ 軍府の屬官。唐書、百官志「節度使・觀察使・團練使、皆有ー一、刺史領使、亦置ー一」

【衙前】ガゼン 宋代の賦役の名。蘇軾、上二神宗一書「ー一雇直」（林伐山「宋代役人之名、有ー一散從、ー一、今之內班門子也、散從、今之外班皁隸也」）

【衙內】ガダイ ○唐代の禁兵、分ちて五仗と爲す、禁衞官。○唐末より宋初に至るまで、貴族の子弟を用ひて諸鎭親衞の官に任ず、より轉じて其の子弟の稱とす。

【衙兵】ガヘイ 宮城を護る軍隊。唐書、兵志「天子禁軍者、南北ー一也、南衙、諸衞兵是也、北衙者、禁軍也」‖牙兵・禁兵・禁軍。

【衙門】ガモン 兵營の門。又、すべての役

所ノの門。又、役所、古は牙門に作る、牙兵を以て守る故、牙・衙音通ず。晉唐書、張仲方傳「―未開、百官齊二立於朝堂一」

【衙衙】ガガ　行く貌。又、両遠なる貌。楚辭、九辯「源二飛廉之―一」

九畫

【衛】　衛（本頁三段）の俗字（正字通）

【衝】　コウ　㊥

ちまた―衛は北方の巷、今、胡同に作る。日下舊聞「北方謂二巷曰一衝、元人有レ以レ之入詩者一」

【衝】　㊀ショウ　㊁シュウ　㊥

㊀大いなるみちすぢ、とほりみち（通道）漢書、鄒食其傳「陳留天下之―、四通五達之郊也」○うごく（動）○つきあたり、つきあたりの所。○敵に向ひてつきあたるやうに作りし兵車「臨―」―車」詩、大雅「臨―」疏「兵書有レ作臨車一車之法一」又は其の兵艦「蒙―」○あたる（當）五行説にて干支の相當るをーといふ。相制するを剋といふの對。○むかふ。むかひ（向）○つく（突撞）○直上ニスグルの貌。史、酷相如傳「怒髮上―レ冠」㊁かなめ「要―」

同訓異字　衝・突・搗・撞・舂・抬。第○衝はつきあたる、折衝と用ふ、また通道なり。○突はにはかにつきあたる義、衝突・驕突・唐突と用ふ。○搗・舂の二字は同じ、うすつくなり、また搗衣は、きぬたにて衣をうつなり。○撞は突也、撃也、手にてつきあてるなり。禮記「善待レ問者如レ撞レ鐘」○舂は臼に同じ、うすつくなり、衝也、撞也、搗也と註す。○抬は突也、つきあてるなり。戰國策「布衣之怒、亦以レ頭搶レ地耳」○築は、きつくと訓む、きねにてつきかたむるなり。書經「說築二傅嚴之野一」

【衝要】ショウヨウ　緊要の處にして衝に當る地。後漢書、王常傳「防二淮一―、疏二決溝渠一、十里立二一水門一、令二更相洞注一、無二復溢漏之患一」

【衝角】ショウカク　軍艦の艦首に裝置したる銅鐵の尖角、敵艦を衝き破るもの。

【衝撃】ショウゲキ　城壁などをつき破る道具。六韜「無二甲兵一而勝、無二―一而攻、無二溝壑一而守」

【衝激】ショウゲキ　はげしくつきあたる。庾信賦「島嶼愁陵、波瀾―一」

【衝口】ショウコウ　卒爾に口をつきて出る。蘇軾文「此數十紙、皆文忠公、一レ一而出、綴二手而成一」文忠公は歐陽修。

【衝心】ショウシン　腳氣が心臟をつきをかす。

【衝車】ショウシャ　兵車の名。淮南子、注「―、大鐵著二其轅端一、馬被レ甲、車被レ兵、所三以衝二突敵城一也」

【衝天】ショウテン　天をつく。勢の盛んなる形容。

【衝レ斗】トツク　北斗星をつく、意氣の盛んなる形容。杜甫詩「明月無レ瑕豈容易、高風激烈衝レ斗」

【衝撞】ドウ　つきあたる。韓愈詩「白頭巨浪白―一」

【衝突】トツ　○つきあたる、南史、蕭摩訶傳「常二精騎八千一、準先―一」○轉して爭端を生ずる義、雙方の意見が合はずして互に相抵抗する。

【衝陣】ジン　馳せて敵陣を突く。魏書「―一斬級一百折鋒。

十畫

【衛】　エイ　㊥　衛は俗字

○ふせぐ（防捍）「扞―」「防―」まもる（護）「―生」「護―」「守―」公羊、定四「朋友相―」又、まもり、ふせぎまもる者「宿―」「侍―」「門―」晉書、元帝紀「禁―嚴警」○國のはて（邊境）邊圻をいふ「―圻」書、康誥「侯甸男邦采―」○いとなむ（營）魯語「有貨以―身也」○明の太祖の時の兵制、五千六百人を一組とする稱。○周代の國名、今の直隸省大名府開州以西より河南省の衛輝府僕懐府に至るまでの地。○精―エイは鳥の名。山海經「發鳩之山、有鳥焉、文首白喙赤足、名曰精―」常衛二西山之木石一以堙二東海一」○威海―は港名、山東省文登縣の北に在りて最良の軍港たり、英國の租借地。

【衛尉】エイ　天子の門衛及び屯兵を掌る官、九卿の一、秦代に置く、漢・唐之に因る。事物紀原「秦官也、掌二宮門衛屯兵之職一」

【衛玠】カイ　晉の安邑の人、字は伯玉、神秀異、童人の目あり、官、太子洗馬に至る、家を建業に移す、人其の名を聞きて、觀る者堵の如し、年二十七にして卒す、時人、―一を看殺すと謂ふ。

【衛青】エイセイ　漢の武帝の武將、衛皇后と霍去病と、二人共に匈奴を征して功あり「史、衛青・霍去病傳」江淹詩「常恥―一將、建レ功在二河源一」衛青參看。

【衛瓘】カイカン　晉の安邑の人、字は伯玉、尚書令たりし時、尚書郎索靖と倶に草書を善くす、時人評して一盧二妙と爲す、官、太保に至り、賈后

の爲めに殺さる。

【衛恒】ヱイ　晉の安邑の人、字は巨山、草隷を善くし、四體書勢をつくる、其の父瓘と共に賈后の爲めに殺さる。

【衛士】ヱイ　○宮中を守る兵士。衛衛の兵士。史、李斯傳「詐詔二一一令二士皆素服持レ兵內鄉」○國ヱ古、諸國より徵され一年更代にて宮中を守りし兵士。

【衛士坐甲】ヱイヲ　天子の喪に、衛士が甲を地に置き、非常の事あらば、之を身に著ける義。文獻通考、王禮考「嘉祐八年三月、仁宗崩、命二衛士一坐甲東門一三日」

【衛身】ヱイ　みをまもる。淮南子「世治則以レ貴レ一」

【衛戍】ヱイ　軍隊が永く一地に屯して守る「一一地」日保衛戍守。

【衛生】ヱイ　衣食住などに注意して身體を大切にまもる。莊、庚桑楚「越雞不二能一一之雄一而已」日養生・攝生。

【衛生林】ヱイセイ　保安林の一、部會の近傍に在りて空氣を清くするに必要なる森林。

【衛青】ヱイ　字は仲卿、漢の平陽の人、本姓は鄭氏、武帝の時大中大夫に拜す、屢ゝ兵に將として匈奴を伐ち大功を立て、長平侯に封ぜらる。

【衛星】ヱイ　遊星の周圍を週轉しつつ、其の遊星と共に太陽を周る星の稱。地球の一一は一あり、卽ち月。火星には一一二あり、木星には一一四あり、土星には八、天王星には四、海王星には一あり。

【衛送】ヱイ　まもりおくる、護送する。北史、齊廣川公潤傳「引與相見、如二客禮一、仍宴設、放二還其國一一一出レ境」

【衛道】ヱイ　道をまもる。宋史、劉爚傳「劉爚表二章朱子四書一以修二勸講一一一之功、莫レ大レ焉」

【衛護】ヱイ　天子の外出の車駕をまもる。五代史、東漢世家「張永德以二禁兵一一レ一」

【衛夫人】ヱイ　名は鑠、晉の衛恒の從妹にして李矩の妻なり、最も正書に妙、王羲之皆て之を師とす。

【衛兵】ヱイ　宮城を護衛する兵の又、廣く番兵の義。唐書、百官志「左右神策軍大將軍、掌二一一及內外八鎭兵一一日禁兵。

【衛楯】ヱイ　まもりたすく。陶弘景文「蓋欲レ一一我躬一」

【衛矛】ヱイ　にしきぎ。落葉灌木の一、高さ六七尺、夏、淡黃綠色の小花開く、秋月紅葉して愛すべし。

【衛府】ヱイ　國書時、左右近衛府・左右衛門府・左右兵衛府を六一一といふ。宮城の內外を守る。

【衛鞅】ヱイ　戰國の燕の人、秦末中原多故なり、鞅、兵を起し朝鮮を擊破し、國王箕準を逐ひ、自立して王となり、王險城に都す、再傳して孫右渠に至り、漢武帝、楊僕を遣して之を滅ぼす。

【衡】カウ　㊥

○はかりのさを、權ヲに對して其のさををいふ「一石」○轉じてはかり「度量一」○はかる、物の輕重をはかる。○平正を持するもの。○てすり（欄干）漢書、袁盎傳「百金子不レ騎一」○勾柄のかしら。○よこ（横）「合從連一」○よこぎ（横木）○かぶきもん（冠木門）○冠をさすへとめるかうがい。○くびき（車轅）馬車の馬をつける横木。論、衛靈公「在レ輿則見二其倚於一一也」○たひらか、ひとし（平正）「均一」○あらそふ（爭）○姓。○かんあふひ、香草の一、蘅に通ず「杜一」○眉と目との間。蔡邕、釋誨「揚一含笑」○星の名、北斗の中央の星。○古、山林を掌る官名「虞一」○天子を輔佐する顯官「阿一」○渾天儀（天文を觀る器械）のよこぎ。書、堯典「在二璿璣玉一一」○山名、五嶽の一。

【衡宇】カウ　木を横へたるのき、粗末なる家。一說に衡はかぶき門。陶潛、歸去來辭「乃瞻二一一、鼓レ枻軼奔」○轅じて宮室をいふ。兩史、劉祖傳「爲二吳郡太守一、至二昌門一、便入二太伯廟一、時期室頹毀、祖曰、淸レ廉尙可二修葺一、一一一何擢爾、卽令二修葺一」

【爭衡】ソウカウ　優劣をあらそふ。魏志、賈詡傳「楚漢一レ一、曾無二爭衡逐一」

【衡行】カウ　橫に行く。又、おもふままにふれまふ「孟、梁惠王「一人一一於天下一、武王恥レ之」日橫行。

【衡巷】カウ　ちまた、民間の義。歐陽修文「故二鬼林丘一、幅巾一一」

【開二衡嶽一】カイカンカク　衡山の雲を開きてはっきりと望む。韓愈、謁二衡嶽廟一詩「我來正逢秋雨節、陰氣晦昧無二淸風一、潛心默禱若レ有レ應、豈非二正直能感通一、須臾靜掃衆峯出、仰見突兀撐二蒼空一」蘇軾、潮州韓文公廟碑「公之精誠、能開二衡山之雲一」

【衡鑑】カウ　はかりは物の輕重を知り、かがみは物の妍醜を別つ。轉じて是非を辨別する意とす。范仲淹文「賞罰、天下之一一也、一一一私、則天下之輕重妍醜、從而亂焉」

從ひて衡に作るは非。

【衡計】カウ　衡・謀・圖・策・庶・術・測・料・忖・揣等の別は計（言部二並）の條を見よ。

【衡鈞】カウキン　平かにひとし、衡も鈞も平か、國家の公平を保つ政。又其の職（韓愈、祭二馬僕射一文）

【衡權】カウケン　はかりのさをと、おもりと。（管子、乘馬）「度量一一、皆本二於歷一」

【衡客】カウカク　宰相の役名。（郭炎傳）「絳灌臨二一一」＝台宰。

【衡山】カウザン　○五岳の一、湖南省一一縣の西北三十支那里に在り、嶂が南に巡狩して南嶽に至りしは卽ちこの山。風俗通「南方一一名レ嶽」＝南岳。○縣名。晉代に置く、宋・齊・梁・陳皆之に因る。

【衡人】カウジン　戰國時代に連衡說を唱へたる策士。（史記）「蘇秦一一日夜具二秦惟一說之說一」合從連衡（二六四頁三段）參看。

【衡湘】カウシヤウ　衡山と湘水と。（柳子厚、湘源篇）「一一以南爲二進士一者、皆以二子厚一爲レ師」

【衡縱】カウシヤウ　橫と縱と（合從、連衡）

【衡記】＝雜記。

【衡嶽】カウガク　五岳の中の衡山と嵩山と。（蘇軾詩）「勿レ笑一一前國、蜿蜒賽二一一」

【衡石】カウセキ　はかり、石ははかりのおもり（史、秦紀）「以二一一一量レ書、日夜有レ程」

【衡軸】カウジク　軸は車のしん木。轉じて、樞要なる官職。北史、高熲傳「熲既當二一一、每レ事任レ己」

【衡度】カウド　はかりと、ものさしと。（隋書、律歷志）「累黍積銖、同二於王一量一」

【衡門】カウモン　かぶき門と、かやぶきの家と。（陶潛詩）「養眞一一下」（白居易詩）「吾亦后二青雲一一一足レ容レ膝」

【衡泌】カウヒツ　隱居の地の義。（詩、陳風）「衡門之下、可二以棲遲一、泌之洋洋、可二以樂一飢」

【衡經】カウケイ　よこぬひ、橫にぬふ。縮縫（喪の對）の稱。（禮記）「古者冠縞縫、今也一一」

【衡門】カウモン　かぶきもん、隱者などの家の門。（詩、陳風）「一一之下、可二以棲遲一」

【衡陽】カウヨウ　縣の名、三國の吳の時に置く、今は衡山と改む、其の故城は今の湖南省衡山縣の東北に在り。

【衡廬】カウロ　衡山と廬山と。（王勃、滕王閣序）「地接二一一」

十八畫

【衢】ク　衢

道（辵部九畫）の古字。

○みち、四つつじ、四達の道（爾雅、釋宮）又、九交の道（楚辭、天問、注）「康一」「通一」「街一」「廣一」○よこみち、わかれみち（岐路）「一道」

【衢巷】クカウ　ちまた。（晉書、張方傳）「大敗、殺傷滿二於一一一」＝街巷。

【衢肆】クシ　ちまたの店。（唐書、王世充傳）「每レ出輕騎無二警蹕一、游二歷一一一、行者俱止立」＝市肆、街肆。

【衢道】クダウ　えだみち。兩方に枝れる道。荀、勸學「行二一一一者不レ至、事二兩君一者不レ容」（業は專一ならざれば成功せざる喩。

【衢塗】クト　わかれみち、途は塗に同じ。（荀子）「楊朱哭二一一一」＝岐路、衢道。

【衢路】クロ　わかれみち、四方に通ずるみち。（後漢書、馮衍傳）「楊朱號二乎一一一之一、墨子泣二乎白絲一」＝衢道、衢塗、岐路。

衣部（ころも）

【衣】㊀イ・エ　㊁イ・エ　支

㊀きぬ、ころも、きもの「白一」「素一」「錦一」「朝一」「布一」「好一」「惡一」「敝一」「僧一」○腰より上のころも。腰より下のを裳といふの對。○轉じてきものの如く、物の外部を掩ふものの稱「面一」「耳一」○垣衣は苔の異名。㊁きる、きせる（著被）一を著る。論、子罕「一敝縕袍」○おこなふ（服行）服膺す

【衣被】イヒ　きものをしちにおく。

【衣推食】イスイショク　己の衣をぬぎて人に著せ、己の食を譲りて人に食はしむ、厚く恩を施す義。（史、淮陰侯傳）「解レ衣衣レ我、推レ食食レ我」

【衣裳】イシヤウ　きものをぬぎて裸體になる（莊、田子方）

【拂レ衣】フツイ　衣をはらひて面ひ起つ。（晉語）「叔向一レ之」＝投袂。

【衣架】イカ　いかつ衣服をかけ置く具。

【沈佺期詩】「朝霞散二彩盖一一一晚月分二光劣一鏡奩」＝衣桁。

【衣香】イカウ　きものにしみこんでゐるよきにほひ。（庾信、春賦）「屋裏一一不レ如レ花」

【衣香鬢影】イカウビンエイ　衣のかをりと髮のかげと。閨閣婦女の粧飾をいふ。（陳

後主詩「倦身移二風響一挙レ袖起二衣香一」李賀詩「彈琴看二文君一春風吹二鬢影一」

【衣桁】イカウ　いかけ、ころもかけ、衣服をかけ置く具。李嘉祐詩「蒼色侵二――一」＝衣架。

【衣架】イカ　あらぬののきものをきる。戦国策「西施――レ、而天下稱レ美」

【衣裘】イキウ　ころもと、皮ごろもと。周礼、天官、宮伯「以レ時頒二其――一」

【衣巾】イキン　○きものと、てぬぐひと。朱熹、雲谷記「器用――、皆漏如レ沐」○衣服と頭巾と。鮑溶詩「――多二雲気一」

【衣衾】イキン　ころもと、ふすまと。衣服と夜著とも。孟、梁恵王「謂二棺槨――之美一也」

【衣襟】イキン　きもののえり。北史、田式傳「有レ蠱上二其――一、揮レ袖拂二去之一」

【衣錦之榮】イキンノエイ　にしきを著て故郷にかへる名誉。欧陽修、晝錦堂記「昔人比二之――一也」魏志、張既傳「張既爲二雍州刺史一、太祖謂レ既曰、遷二君本州一、可レ謂二衣錦晝行一矣」とあるに本づく。衣錦参看。

【衣魚】イギョ　しみ（蠹）本草「――生二久蔵衣帛及書紙中一、其形稍似レ魚、其尾又分二二岐一、故得二魚名一」

【衣裾】イキョ　もすそ。漢書、張敞傳「愴長以緒污二其――一」

【衣冠】イクワン　○きものと、かんむりと。論、堯曰「君子正二其――一」○衣冠を著けたる官吏などの稱。漢書、游俠傳「所レ到――懐レ之」＝搢紳。

【衣冠族】イクワンゾク　衣冠をつける貴き家がら。後漢書、羊陟傳「羊陟字嗣雅、太山梁父人也、家世――」

【衣冠被像】イクワンヒゾウ　衣冠を著けて甚だ立派なる肖像。漢書、張良傳「四人者從二太子一、年皆八十有餘、鬚眉皓白、――」

【衣袴】イコ　ころもと、服衣と。袴はももひき、約に作るも同じ。漢書、匈奴傳「其得二漢繒絮綵一輒二草棘中一、――皆裂、以視レ不レ如二旃裘堅善一也」

【衣工】イコウ　したてや、衣を製する者。郭泰、機詩「――凍二刀尺一」

【衣冪】イベキ　衣服に香をたきしめるに用ふるかご。陳游詩「不レ惜――重燻レ火」＝薫籠

【衣綵】イサイ　五色の衣を著る。高士傳「老萊子七十、衣二五綵衣一、爲二嬰兒戯一」趙嘏詩「――獨歸去」

【衣裳】イサウ　きもの。呉均詩「客子挽衣多、江上――薄」

【衣食】イショク　きものと、くひものと。史、儒林傳「備員以給二――一」鹽鐵論「――者民之本、蚕桑者民之務」

【衣食足知二榮辱一】イショクタリテエイジョクヲシル　飢寒の患なくして、始めて身を修め、榮と辱とを知るを得るをいふ。管子、牧民「倉廩實則知二禮節一、衣食足則知二榮辱一」

【衣食住】イショクジュウ　衣服と食物と住居と。生活に必要なる三要件。

【衣食於奔走】イショクヲホンソウニ　闕口の爲めに彼處此處と走りまはる。奔二走於衣食一の倒裝法。韓愈、與二陳給事一書「貧賤也、――、不レ得二朝夕一矣見二」

【衣笥】イシ　きものを入れるはこ。金嘉紀聞「蔵二――中一、能辟二蠹魚一」

【衣緇】イシ　黒色の衣をきる。列子「天雨解二素衣一、レ而返」

【衣繐】イスイ　にしきのぬひとりしたる衣を著る。史、項羽記「富貴不レ歸二故郷一、如二――夜行一」＝衣錦。

【衣裥】イセン　ころもと、かんざしと、官吏の服裝、因りて官吏の義とす。宋書、禮儀志論「若夫孝立二門庭一、忠表二史策一、多發二溝畎之中一、非レ出二――之下一、以此而可二廢教一、不二亦卿大夫之晩一乎」＝衣冠簪纓。

【衣車】イシャ　○衣服を載せる車（釋名）○蔽のある車。漢書、揚雄傳、注「輜、――也」說文「輜車、有二牀帳一者レ衣」

【衣裳】イショウ　上衣と下衣と。易、繫辭「黄帝堯舜垂二――一、而天下治」

【衣裳冷】イショウヒヤヤカ　衣がひやゝか。杜甫詩「天閣象緯逼、雲臥――」

【衣帶】イタイ　おび。漢書、王莽傳「脩二疾親一、乗二輿行塩官一、不レ解二――一連月」

【衣帶中賈】イタイチウコ　宋の忠臣文天祥が衣帶の中に書置きたる贈詞。宋史、文天祥傳「天祥臨レ刑、殊從容謂二吏卒一曰、吾事畢、南向再拜、年四十七、其衣帶中有二贊曰、孔曰成レ仁、孟曰取レ義、惟其義盡、所二以仁至一、讀二聖賢書一、所レ學何事、而今而後、庶二幾無一レ愧」

【衣苧】イチョ　○きものを織る。南史、姚察傳「吾所二――一、止是麻布」○きもの（衣服）陶潜、桃花源記「男女――、悉如二外人一」＝被服。

【衣裳】イショウ　きものに著りたるふくろ。かくし。王安石詩「斂レ書付二――一」

【若レ不レ勝レ衣】ジャクシテフショウニ　衣の重さにたへざるが如く、身體のやせてかよわきをいふ。韓非外傳「身――、言若レ不レ出レ口」＝懦弱。楚辞「退然如不レ勝レ衣」

【衣不レ重レ帛】イフヘカサヌルニ　衣を著るに、帛の衣を重ねて著ず。尹文子、大道「昔尋國苦貧、文公以儉矯之、乃――、食不レ兼レ肉、無幾時、人皆大布之衣、麤粟之飯」

【衣被】イヒ　○きもの。史、盧綰傳「――飲食、賞二賜羣臣一」＝衣服。○あまねくおほふ。蘇軾、潮州韓文公廟碑「草木――昭回光」

【衣服】イフク　きもの　論、泰伯「惡二――一而致二美乎黻冕一」＝衣被・襟衣・衣裳。

【衣袂】イベイ　きもののたもと。周禮、注「士之――、皆二尺二寸」

【衣裏】イリ　ころもと、かんむりと「北

史、蝸蝸傳」‖衣冠。

【衣紋】モン・きもののあや。晉史「蘇氏古賢像十一人、一一自非二晉筆一」○圖衣服のえりの胸にて相合ふ部分の稱。

【衣魔】マ　きものと扶持米と。元史、文宗紀「每歲賜給二其一一一」‖衣服廩食。

【衣領】イリヤウ　衣のえり。又衣服。南史、王思遠傳「整帽一一、無レ不二整潔一」

【衣裳】イサウ　きもの、かてとの衣服と食物と。漢書、嚴助傳「衣二一一一、入二越地一」

【衣鉢】エハツ　○圖衣は袈裟、鉢は應器(托鉢して施物を受けるはち)なり、禪宗の始祖(達磨)が、二祖(慧可)に正法眼藏を授けし時、其の證として此の二品を傳へたる故事。因りて法を受けつぐことを衣鉢を傳ふといふ。傳燈錄「初祖達磨、奉二佛衣一來二東土一、得レ道者付レ之、以爲二眞印一、至二六祖大鑑一、乃置二其衣一而無二傳焉一」○轉じて廣く師の道を傳ふる義とす。陸游詩「八十到頭終強項、欲レ將二一一一付二西兒一」

【傳二衣鉢一】フエハツヲ　圖祖師の法を傳ふる義の前條參看。

【披二衣千仞岡一】ヒコロモヲセンジンノヲカニフル　俗界を超脫せる形容。左思詩「一一、濯二足萬里流一」

【衣至レ肘】コロモヒヂニイタル　肘は腋なり。衣短くして僅かに腋に至る。宋祁、牛角歌「短布裁衣適レ肘」

【衣莫レ如レ新人莫レ如レ故】コロモハアタラシキニシカズヒトハフルキニシカズ　衣は新しきを善とし、友は舊きを善とす。晏平仲の景公に語りし言(晏子春秋)

【卒】二畫

卒(二七三頁二段)の正字。

【衩】三畫 衣部

サイ　サ　㊥㊥

○えり(衽)○もすそ、すそ(裾)「裙一」○膝に及ぶ衣「一衣」

【衫】サン　㊥

○らひさく短きころも(小補)○單衣の短きころも。○そでの端なきころも「汗一」○ころも、單衣の通稱「青一」

【衫子】サンス　婦人の服。中華古今注「秦始皇詔二宮人一皆服二一一一、赤曰二半衣一」

【表】ヘウ　㊥㊥

○うはぎ(上衣)○上衣をきる。論、鄉黨「必一而出」きせる(著)○轉じておもて、うはべ、そと(外面)「海一」「一面」○あらはす(顯)明かに知らしむ「一異」書、畢命「一厥宅里」○こすゑ(杪)○しるす(識)○しるし、めじるし(標的・標準)○のり、みち。○すぐれたるやうす「儀一」「異一」○たちる(擧止)○ひかけばしら、時を計るために目をもりし柱。史、司馬穰苴傳「立一下漏」○とけい(時計)俗に錶に作る。○君主又は官府に奉る書。章奏の類。「箋一」「賀一」「謝一」「上一」「辭一」「出師一」「陳情一」文體明辯「一者標也、明也、標著事緒使之明白以告乎上也」○母方又は妻の方の親類、外姻「一兄弟」○偉大なる相。○ぬきんでたる貌。○種種のいりくみし事物を列記して一目に見易からしむるもの「年一」「統計一」「豫算一」○のべしく(宣布)「一白」「代一」(衆人に代りて意見をのべ布く)圖○おもも公然「一向」○外面に取りつけるもの「壘一」○屋外「一の方」

【表記】ヘウキ　○綴記の體名、男子の德の儀表たる者を記す。○あらはしるす。‖記號。○表面に書きしるす。

【表具】ヘウグ　圖かけもの・額・襖などをしたてる。‖表裝・裱裝・裝潢。

【表揭】ヘウケイ　あらはしかかげ。宋史、忠義傳「優二恤其家一一一門閭一」

【表慶】ヘウケイ　よろこびをあらはす。晉書、元帝紀「屈斗星一祥、金陵一一」

【表兄弟】ヘウケイテイ　母の兄弟姉妹の子。呂本中詩「表弟今何在」‖中表兄弟。

【表決】ヘウケツ　議案の可否を明にする。

【表現】ヘウゲン　あらはす。

【表顯】ヘウケン　明かにあらはす。後漢書、孔融傳「更置二成色一、立二學校一、一一儒術一、融皆裝設具一」‖標顯。

【表裝】ヘウサウ　表具に同じ。

【表札】ヘウサツ　門又入口に掲げる名ふだ。‖門標。

【表示】ヘウジ　○あらはししめす。○表かに作りて示す。

【表次】ヘウジ　あらはして順序を立てる。史、十二諸侯年表贊「太史一一、折有二條理一、起自二共和一、迄二于孔子一」

【表字】ヘウジ　字ナヅをいふ、字は名を取るの義を表するが故、孔子の子の名は鯉、字は伯魚の類「一一印」

【表匠】ヘウシヤウ　圖時計師。‖錶匠。

【表章】ヘウシヤウ　あらはし明かにする。漢書、武帝紀「一一一一六經一」

【表情】ヘウジヤウ　心情をあらはす。白居易

「人之相弁者何、所二以ー一ー見一レ意」【表象】ヘウシヤウ○あらはれたるしるし。後漢書、天文志「星辰之變、ー一之應」【表彰】ヘウシヤウ あらはす。後漢書、光武帝紀「感二致神祇一ー一ー徳信、是以化致二升平一、稱二中興一」‖表章。【表趣】ヘウシユ おもむきをあらはす。謝靈運賦「呈レ美ー一レ、胡可二勝舜一」【表叔】ヘウシユク 母方のをぢ。‖叔父。【表旌】ヘウセイ あらはす。旌は旗を立ててあらはす。高士傳「不レ遵二明時一、徒貧ー一ー」‖旌表。【表誠】ヘウセイ まことの心をあらはす。宋書、禮志「議曰、郊二望山瀆一、以レ質ー一レ、器尚二陶匏一、藉以二茅席一」‖開誠。【表則】ヘウソク のり、てほん。晉書、良純傳「詔曰、河南京畿大都、四方ー一」‖矩則・準則。【表則之地】ヘウソクノチ 宰相の位、官民の儀表として則る義。晉、仲雅之誥「表二正萬邦一」註「表正則影正矣、ー一、指二宰相之位一言億之所二以賢而則效一也」【表率】ヘウソツ 身を以て則ヲとなりて衆を率ゐる。漢書、韓延壽傳「帥得レ備レ位、爲二郡ー一」【表題】ヘウダイ 書物の名目。‖標題。【表徴】ヘウチヤウ 外面にあらはれたるしるし。【表著之位】ヘウチヤクノクヰ あらはし示せる公會の位次。左、昭十一「昏朝之官、必開二ー一、所二以昭一レ事一也」【表的】ヘウテキ まと、めあて。後漢書、馬援傳「四海已定、兆民同レ情、而季孟閒拒宵畔、爲二天下ー一、背擯海内切齒」‖標的。【表妊】ヘウテイ 母方のいとこの子、中表兄弟の子（舊唐書、楊愼矜傳）【表土】ヘウド うはつち、地のうはつらにありて耕作に適する土壌。【表背匠】ヘウハイシヤウ 表具師。岡田鎌、裝潢匠、恐是今之ー一」表また標に作る。【表白】ヘウハク ○申し上げる、言上ヲスする。○あかす、發表して明白にする。【表裸】ヘウラ あらはす、自ら暴露して人にみせびらかす。裸は表。唐書、李晟傳「戒曰、將務二持重一、豈宜自ー一爲二賊餌一哉」【表發】ヘウハツ あらはして世に示す。姚察題跋「獨無二文詞翰墨一ー一其勝一」【表皮】ヒヤウ 生物體の外面を被ふ薄き皮。【表文】ヘウブン 君主又は政府に上つる文章。【表表】ヘウヘウ ○すぐれて目につく貌。文心雕龍「陳事之ー一也」○大いにあらはれる貌。陳興義詩「龍兒爭レ地出、頭角已ー一」【表木】ヘウボク めじるしに木を立てる。又其の木。史、夏本紀「行レ山ー一レ」宋陸「ー一謂二刊レ木立一レ表記一」【表面】ヘウメン おもて。裏面の對。‖外面。【表裏】ヘウリ ○そと、うちと。うらおもて。朱熹、大學補傳「衆物之ー一精粗無レ不レ到」○そと、うちとにする。左傳「ー一山河、必無レ害也」【爲二表裏一】ナスヘウリ 内外に在りて互に相たすける。漢書、蕭望之傳「中書令弘恭・石顯、久典二樞機一、明二習文法一、亦與二車騎將軍高ー一」高は史高。【表閭】ヘウリヨ 里門にあらはしほめる。後漢書「淳于恭、幽居養レ志、潛二于山澤一、雖レ勤必由二禮度一、病篤、使者數存問、詔書褒歎、刻レ石ー一レ」‖旌閭。

四畫

【袁】エン 元

○ころもの長き貌。○姓、一紹。一術は共に漢末の英雄。○州名、陷置く、今の江西省宜春縣は其の舊治の地。【袁安】エンアン 字は邵公、後漢の汝南の人、章帝の時、河南尹となる、政嚴明と號す、官、司徒に至る、漢室中ごろ微に外戚强盛なり、朝廷の士、皆ー一に倚頼して以て寃をなす、安未だ達せざる時、洛陽大雪地に積む丈餘、人多く出でて乞食す、洛陽の令、按行して、安が僵臥するを見る、問ふ何を以て出でざると、安曰く、大雪人皆餓う、人に干ればからずと、令以て孝廉に舉ぐ。【袁彦道】エンゲンダウ 博奕ガクに巧なりし人。轉じてばくちの稱。晉書、貢敺傳「少有二才氣一、桓溫少時、遊二于博徒一、資産俱盡、求二救于敺一、敺變レ服與二布帽一、隨レ溫與二億主一錢、敺素有二蓺名一、債者開レ之、而不二相識一、謂レ之曰、卿當レ不レ辦ー一ー也、遂就レ局、十萬一擲、直上二百萬一、敺投レ馬絕叫、探二布帽一擲レ地曰、竟識ー一ー否」‖彦道は敺の字。【袁氏世範】エンシセイハン 三卷、宋の袁采撰す、立身處世の道を說くこと懇切なり。【袁枚】エンバイ 字は子才、簡齋と號す、清の錢塘の人、乾隆四年の進士、江南の知縣に官す、年甫めて四十、遂に意を仕宦に絕ち、隨園を江寧の小倉山下に闢き、詩文を以て自ら樂む、嘉慶二年十一月卒す、年八十二、隨園詩文集・小倉山房集等の著あり。

【衿】キン 侵 袷

㊀えり（交領）詩、鄭風「青青子ー一」（此語に本づき學生又、秀才を青ー一といふ）‖襟。㊁むすぶ（結）○おぶ（帶）【衿纓】キンエイ ひもをむすぶ。禮、內則「ー一レ一纓」【衿契】キンケイ 衿はえり、心胸なり。心友

の磯。世說、方正「得レ之欣然、遂爲二一一一」

【衿喉】キンコウ えりと、のどもとと。要害の地に喩ふ。唐書、李晟傳「三州刺史、各勒レ兵、以遏二蜀漢一一一」‖襟喉。

【衿帶】キンタイ ○えりと、おびと。要害の地に喩ふ。晉書、殷仲堪傳「一一之形、事異二疇昔一」○山川のめぐりかこむに喩ふ。潘岳、西征賦「磯二函谷之重阻一、看二天險之一一一」‖襟帶。

【衾】キン 侵

○ふすま、よぎ（大被）「布一」「孤一」「重一」「綿一」「錦一」詩、召南「肅肅宵征、抱二一與禂一」○喪禮に尸を斂むる具、斂衣の外に加ふるもの、古は黄表素裏を用ふ。

【衾影無慚】シンエイムザン 人の見ざる所にても品行を修さざるにいふ。劉子新論「獨立不レ慚レ影、獨寢不レ慚レ衾」に本づく。

【衾枕】シンチン しとね。枕席の間の義。宋書、文帝紀「言論二一一一」‖衾裯。

【衾裯】シンチュウ ふすまと、まくらと。李白詩「醉來臥二空山一、天地卽一一一」

【衾裏】シンリ ふすまと、しとねと。宋史、曹彬傳「仁宗一一用二黄綾一、服御用二錦繡一」

【衾襖】シンオウ ふすまと、ねまきと。襖は ひとへのよぎ。字解參看。杜甫詩「城中卧來換二一一一」‖衾被・衾幅。

【衾幅】シンプク 前條に同じ。曹植詩「何必同二一一、然後展二慇懃一」

【衾嚬】シンヒン ふすまと、かやと。

【衾堂】シンドウ ふすまと、たかむしろと。李中詩「漸疎一一爽、頓覺夢魂清」

【衱】ケフ 葉

○すそ（裙）衣の後裾（ソロノスソ）○えり（衣領）○圖（ジョ）一幅の布帛をしごいて帶とするもの、扱帶（ソウタイ）

【衲】キン 眞

○いくさぎぬ（戎服）○よじりなし（純）

【衲服】ノウフク いくさぎぬ。左思、呉都賦「六軍一一、四騏龍驤」‖衲服。

【衮】コン 阮 通じて袞に作る

○龍のぬひとりしたる古の天子の禮服、古代の禮制に一冕十二章とて上衣に日・月・星辰・龍・山・華蟲（雉）下裳に宗彝（器物の名）藻・火・粉米（米）黼（斧のかたち）黻（亞字形の模樣）をぬひとりする。○古、上公も亦一を服す、故に後世三公を稱して亦一といふ「台一」「一命」○一はねんごろに說く貌。又、ひきつづきて多き貌。

【衮衣】イン 龍の縫ある天子のころも。詩、豳風「我覯二之子一一一補袞」‖龍衣。

【衮闕】コンケツ 天子の失德、卽ち過失。詩、大雅「袞職有レ闕、惟仲山甫補レ之」に本づく。後漢書「王暢李膺、彌二縫一一」

【衮衣】コンイ ○ねんごろに說く貌。晉書、王戎傳「前官往行、一一可レ觀」○ひきつづきて多き貌。杜甫詩「贈公一一登二臺省一、廣文先生官獨冷」

【衮職】コンショク ○天子の職掌。袞闕を見よ。‖王職。○三公の職、三公も亦袞衣を服す。晉、陳大丘碑「弘農楊公、東海陳公、每レ在二一一一、莫レ能レ賢レ之」

【衮冕】コンベン 袞龍の衣と、冕冠と、天子の服裝をいふ。左、桓二「一一、賤職、帥二冕輅一、衡紘紘綖、昭二其度一也」

【衮命】コンメイ 三公の任。北史、章世康傳「亟登二一一一、夙在二方岳一、志除二三惡一、心慎二四知一」

【衮龍】コンリョウ 天子の法服。轉じて、天子の稱。周禮「一一衣也、衣五章、裳四章凡九、皆絺繡而畫以爲レ裘」

【衱】㊀ジツ ㊁ヂツ 質 質

㊀ふだんぎ。㊁婦人のじゅばん。左、宣九「皆衷其一服以處」于朝」

【衽】ジン ニン 侵 又、裎に作る

○おくみ、衣服の前の左右に在りて上はえりに續き、下はつまに至る半幅のきれ、左一はひだりまへにて、古の夷狄の風俗。○えり（襟）○しとね（臥席）「一席」○ちぎり、兩頭廣く中央小さくして棺を作るに材と材とを連ね合すに釘の代用とするもの。

【斂衽】レンジン えりを正し容（カタチ）を改めて敬意を表する、史、齊侯世家「楚必一一而朝」

【衽席】ジンセキ ○しとね、しきもの。周禮、天官、玉府「掌二王之燕衣服一一牀第凡褻器」註「一一、單席也」‖褥席。○轉じてねま（閨）寢處。陳詩外傳「執二巾櫛一振二一一」

【衾】シャ 麻 通音ジャ 斜・邪に通ず

○よこしま、正しからず「奇一」「回一」「姦一」○ななめ「一視」

【衰】㊀スキ ㊁シ ㊂サイ 灰 支 微 支

㊀おとろふ、よわる。盛の反対「一微」「一弱」論、徴子「鳳兮鳳分何徳之ー」㊁そぐ（殺）へらす（減）「等ー」㊂喪服の名。生麻布にて製す「斬ー」「齊ー」‖縗。㊃みの、古、蓑・簑に通ず。詩、小雅「何ー何笠」

【衰絰】スイテツ　衰は喪服、絰は喪に居る時に首と腰とに著ける麻。禮記「君子ー則有二哀色一」‖絰経。

【衰萎】スイヰ　おとろへしぼむ。‖萎萎。

【衰運】スイウン　おとろへたる運命。‖衰勢。

【衰衰】スイスイ　おとろへると、さかえると。陶潜詩「ー無二定在一、彼此更共レ之」‖盛衰・栄枯。

【衰槁】スイカウ　おとろへかれる。陸游詩「病気無レ功日ー一」‖衰朽。

【衰眼】スイガン　視力のおとろへたる目。‖落眼。

【衰頽】スイタイ　おとろへたるかほ。盧綸詩「西條涼夜永、秋草對二ー一」‖類顔。

【衰朽】スイキウ　おとろへくちる。韓愈詩「肯將二ー一惜二殘年一」

【衰颯】スイサツ　おとろへたるからだ。‖衰殘。

【衰減】スイゲン　おとろへてへる。後漢書、崔寔傳「予是憂ー一」‖衰耗。

【衰困】スイコン　おとろへつかれる。後漢書、班超傳「臣不二敢望一封二酒泉郡一、但願生入二玉門關一、臣老病ー一、皆死賜レ骨」‖衰憊。

【衰殘】スイザン　よわりはてる、おちぶれる。林逋詩「蕭蕭蘆葦半ー一」

【衰死】スイシ　おとろへしぬ。

【衰弛】スイシ　おとろへゆるむ。

【衰日】スイジツ　陰陽家の語、生れたる年のえとによりて忌むべき日の稱。

【衰弱】スイジャク　おとろへよわる。晉書、江統傳「ー不レ能二自存一」

【衰世】スイセイ　おとろへたる世。盛世の反対。李咸用詩「ー一難レ作レ道、花時不レ稱レ貧」

【衰征】スイセイ　土地の等差によりて税を課する。國語「相レ地而ー一、則民不レ移」

【衰勢】スイセイ　おとろへたるいきほひ。

【衰境】スイキヤウ　年老いておとろへたるひげ。李中、漁父詩「雪鬢ー一白布袍、笑擡二新鯉一換二村醪一」

【衰息】スイソク　おとろへてやむ。減少してなくなる。漢書、賈誼傳「百姓素樸、狐盜ー一」‖滅息。

【衰損】スイソン　體力などのおとろへる喪。南史、陶潜傳「疾患以來、漸就二ー一」

【衰退】スイタイ　おとろへる。陶傳良詩「卻因二ー一更蹉跎」

【衰替】スイタイ　おとろへすたる。‖陵替・衰類。

【衰態】スイタイ　おとろへたるありさま。陸游詩「此生本幻戲、ー一棘レ眼是」

【衰頽】スイタイ　おとろへすたる。

【衰年】スイネン　おとろへたるとし。‖老年・衰齢・頽齢。

【衰齢】スイレイ　おとろへすたる。陸游文「性苦笑頑、問學ー一」

【衰憊】スイハイ　おとろへつかれる。王安石詩「晩扶ー一客二人閒一」‖衰弊。

【衰亡】スイバウ　おとろへほろぶ。‖衰滅。

【衰老】スイラウ　老いぼれる。宋史、張永徳傳「俄以ー一命還二本鎮一」‖衰老。

【衰白】スイハク　體力がおとろへて髪がしろくなる。杜甫詩「生意甘ー一」

【衰疲】スイヒ　おとろへてつかれる。

【衰微】スイビ　おとろへてかすかになる。史、周紀「王道ー一」

【衰敝】スイヘイ　おとろへやぶる。李嶠文「窓二末法之ー一」

【衰暮】スイボ　年とりおとろへる。顔延之詩「幼壯重二寸陰一、ー一反輕レ年」

【衰滅】スイメツ　おとろへほろぶ。‖衰亡。

【衰門】スイモン　おとろへたる家。南史、謝贈傳「禍過二災生一、特名二降黜一、以保二ー一」‖楽門。

【衰容】スイヨウ　おとろへよわりしやうす。韋孝標詩「管開一粒功、足三以返二ー一」

【衰老】スイラウ　としよりておとろへる。又、其の人。禮記「養二ー一、授二几杖一」‖老衰。

【衰齢】スイレイ　衰年に同じ。‖頽齢。

【衱】ゼン　デン・ネン　㊀㊁

○うはぎ、婦人嫁する時の上衣。○婦人のまへだれ（漪膝）○衣のへり（縁）

【衲】ダフ　ナフ　㊀

○ころも（僧衣法衣）「一衣」○轉じて僧侶の稱「老ー」「拙ー」「貧ー」○ぬふ（縫綴）おぎなふ（補）

【衲衣】ナフイ　けさ、僧衣。南唐近事「著二ー一負レ匣」

【衲子】ナフシ　○僧をいふ。六一詩話「賈島嘗爲二ー一、○僧の雅稱。

【衲僧】ナフソウ　僧をいふ。貫休詩「只有二ー一來」

【衷】㊀チュウ　㊁チュウ　㊀東

㊀まこと（誠）まごころ。○なか（中）「一正」○こころ、おもひ（中心）○したぎ、はだぎ（襲衣）又、したに著る「一甲」○よし（善）書、湯誥「惟皇上帝降ー一于下民」○かたよらず、偏せず「折ー」「一正」㊁あたる（當）○かなふ（適）適當する。左、僖二四「服之不ー」（衣服が其の人につりあはぬ）○たひらか（平）○かたよらず「折ー」中に

通す。一說に平聲とす。

【裏衣】イウ　したぎ（裏衣）廣韻「褻、ー也」

【誘レ裏】イウクワ　中心を開き導きて善を爲さしむ。左、僖二八「今天誘二其衷一、使二背降レ心以相從一」

【裁レ裏】サイクワイス　中正の道によりて裁斷する。‖折裏。

【折レ裏】セツクワイス　中正にかなふやうに裁斷する。史、孔子世家「ー二ー于夫子一」‖折中・裁レ裏。

【裏甲】カフ　きごみ、衣の下に甲を着る。左、裏二七「楚人ー二レ甲在二衣中一」

【裏慮】クワイ　こころ。‖裏心・裏情。

【裏欵】クワン　まごころ。徐陵、論二和親一書「希新親レ睦、敦固ー二ー一」‖裏誠・誠款。

【裏心】シン　心の中のまこと。梁簡賦「ー二ー之雅尙」‖中忱。

【裏心】シン　まごころ。‖裏情・裏懷・衷情。

【裏情】ジヤウ　まごころ。‖裏心。

【裏誠】セイ　まごころ。陳書、虞寄傳「妙算違圖、殺二予ー一者也」‖誠實。

【衯】フン　文　ーーは長き衣の貌。子虛賦「ーー裨裨」

【衸】ベイ　霽

たもと。袖の下の袋の如くに垂れたる部分。轉じて袖の義にも用ふ。論、鄉黨「褻裘長、短右ー」

【投袂而起】トウベイジキ　たもとをふりはらひて奮ひ起つ。左、宣十四「楚子聞レ之、ー」

【振袂】シンベイ　たもとをはらひて勢よく起つ。史、都陽傳「ーレ而正議」‖投袂・奮レ袂・揮レ袂。

【分レ袂】フンベイカク　人とわかれる。杜甫詩「誠晩仍ーレー」‖分レ手。

五畫

【袂】イ　支　又、褘に作る

○そで（衣袖）○すそのへり（裳下緣）ふち。衣服の裾の裏の布を表へ折返して緣としたるもの。

【衸】○エイ　霽　○イ　寘

○長きふすま（長被）○衣の長く被ふ貌㊀そで（袖）‖純。

【袈】カ　麻

ーー裟は僧のころも、五條衣七條衣・大衣（九品あり）これを三衣といふ。釋氏要覽「ー裟者、蓋從色彩、稱也、梵音具云迦羅沙曳、此云不正色（青黃赤白黑の五正色にあらざる義）業疏云、本作二迦沙一、至二梁葛洪撰二字苑一、下方添レ衣、言道服也」通鑑「武后賜二僧法朗等紫ー裟一」‖褐色衣・忍辱衣・出世服・法服。

【袈裟袋】ケサブクロ　僧の遊行中、三衣の雨露に冒されざる爲めに藏める袋、兩肩にかけて行く。

【袪】キョ　魚

○そで、たもと（衣袂）○そでぐち（袖口）○ふところ（褱）○ひらく（開）○さる（去）○あげる（擧）袖を擧げる。韓詩外傳「孟嘗君、明日ー衣請二受業一」

【袷】ケン　霰

○くろぎぬ、黑色の衣。○盛んに好き衣。左思、蜀都賦「ー服觀敷」

【袷服】ケンフク　盛裝の服。鄒陽、上二吳王一書「莊二服豪傑之下一者一旦威レ市」‖ーー、大盛玄黃服也」

【袴】コウ　尤

○裳の兩側のひだ（襞）○褻服

【袖】シウ　宥　又、褎・褏に作る

○そで（衣袂）「長ー」「羅ー」「窄ー」「闊ー」○そでにす、物を袖の中に入れる「ー手」「ー刃」○領ーシウはえりと、そでと、人の儀表たる者に喩ふ「晉書、裴秀傳「後進領ー、有二裴秀一」

【袖手】シウシュ　手の由りて出入する所、故に由に從ふ。

【袖口】シウコウ　そでぐち。錢氏私志「客人綻取二針線一、縫二聯ーー一」

【袖レ剌】シウシリツス　名剌ナダを袖の中に入れる。四軒客談「有レ客曳二長裾一、ーレー過二定國一」

【袖刃】シウジン　暗に兵器をそでの中に藏める。劉向列女傳「探レ丸害二公叔一、ーレー當二婦家一」

【袖手】シウシュ　○靜かに手をそでにす。陳遵、延接賓賦「陸レ几者懈怠、ー傾聽而無レ遺」○手をそでにして何事もせず「ーー傍觀」韓愈文「巧匠旁觀、縮二手袖間一」

【袖箭】シウセン　長さ六七寸の圓筒中に箭を入れ彈機の力にて之を發つ、二三丈に過すべし、箭端に毒藥をつけ、能く人を殺す、明の劉綎最も善く之を用ふ。

【衰】スイ　支　衰（衣部四畫）に同じ。

【袖薛】ショウ　市街の盛華なる形容、通行人の袖が連りて幕を成す。左思、魏都賦「鴻儒縞ㇾ衣、一一紛半」揮は牽。

【袖珍】シウ　その中に入れて攜へられるほどの小形の書物「一一本」＝袖珍本。

【袖中冊】シウチウ　その中の小形の書物。東軒筆錄「廣加文忠ㇾ相、袖中有二一小方冊一、名曰二林間錄一」

【袖要】シウ　そのうち。無名氏、朝元閣賦「納二經緯於一一一、看二日月於掌上一」＝袖中。

【袗】

㊀シン　㊁シン　㊂㊃

㊀へり(緣)○畫きたる衣、ぬひとりしたる衣。○ひとへ(單衣)○黑色のころも(玄服)㊁衣の色を同じくする。儀禮、士冠禮「兄弟畢ㇾ玄」註「古文ㇾ爲ㇾ均」＝襯。

【袗衣】シン　ぬひとりしたるものやうあるきもの。孟、盡心「被二一一一」

【袗縕】シンウン　ひとへの葛布の服。縕は細く、綌はあらきもの。論、鄉黨「當ㇾ暑——、必表而出ㇾ之」

【袋】

タイ　㊀㊁　又、帶に作る

ふくろ、布・革・紙などにて作る、囊の類「布一」「皮一」「劍一」

【袋鼠】タイ　ふくろねずみ、脊椎動物の有袋類中の肉を食ふ者、形狐に類す、身長三寸許、全體灰色、腹は灰白色、牝の腹部に兒を容れて育つる皮嚢あり、大一一ガルと同じ、唯昆蟲を以て食と爲して草を食はず。

【袒】

㊀タン　㊁タン　㊂㊃

㊀はだぬぐ(裼)衣を脫ぎて肩をあらはす。曲禮「勞毋ㇾ一」○古の禮法の一、左の肩をぬぐ、吉凶共に行ふ(刑を受くるには右の肩をぬぐ)儀禮、鄉射禮「司射適堂西一決遂」又罪を謝する爲めに行ふを肉一といふ。○意思を表はす爲めに片はだをぬぐ、庇護する意。○偏一は一方のみを庇護する。漢書、高后紀「爲呂氏者右一、爲劉氏左一」㊁ほころぶ(綻)

【袒肩】タン　かたはだをぬぐ。李華文「江南律師、編戴第一、納衣一一、跣足行乞」

【袒幅】タンフク　頭に冠を著けず。漢書、五行志「成帝微行、從人皆白衣一一」

【袒裼裡裎】タンセキリテイ　はだぬぐ(裼ㇾ裼)と、はだか(裎ㇾ身)になると、皆無禮のふるまひ。孟、公孫丑「雖ㇾ袒二裼裸裎於我側一、爾焉能浼ㇾ我哉」

【袒跣】タンセン　はだぬぎと、はだしと。白居易詩「一一北窗下、萬天之遺民」

【袒護】タンゴ　はだをぬぐ。陣は髀に同じ。李賀詩「背經來二漢地一、一一過二冬天一」＝袒裼。

【袒綰】タンワン　はだをぬぎ、手をしばる。賈至、虎牢關銘「爲卿一一而請ㇾ命」＝肉袒面縛。

【袒免】タンメン　左の肩をぬぎ、又冠を免して髮を括る、高祖を同うする從兄弟は死して服なく、一一して哀意を表する。禮記「五世一一、殺二同姓一也」

【袒裡】タンリ　はだぬぐと、はだかになると。宋史、流求傳「語言不ㇾ通、一一盱睢、殆非二人類一」＝袒裼裸裎。

【袂】

チツ　㊀㊁

○かたなぶくろ(劍衣)「劍一」○ふみぶくろ(書衣)＝袌、帙。○ついで、ついづ、秩序。○下ㇾは妾御。楚辭、惜誦「遂下一於後堂分」○十年を一一と爲す「七一」「八一」＝秩。○ふち、秩に通ず。唐書、蕭至忠傳「官一益輕」

【衰】

衰(前條)に同じ。

【衹】

テイ　㊀㊁

一襯ㇾは短きはだぎ(汗襦)後漢書、羊續傳「其資藏、惟有二布衰數一襯麤麥數斛一而已」

【袍】

ホウ　㊀㊁

○ぬのこ、わたいれ、衣に表裏ありて中に綿を入れしもの。「綿一」「同一」「綿一」○したぎ(衷衣)長きしたぎ、腰より踝に至る)長袍の詩、秦風「豈曰ㇾ無ㇾ衣、與子同一」朋友互に困窮を救ふの義あり、故にその著る所の一を貸して、之を共にするをいふ。○うはぎ(表衣)○まへえり、衣の前襟。公羊、哀十四「反袂拭ㇾ面涙沾一」○國古、束帶用の上衣の總稱にて種種のものうなつけ、まるえりにして膝までとどく、仕立方に縫腋・闕腋の二種あり。

【袍笏】ホウコツ　うはぎと、しゃくと。朝服の義。玉海「選士賜二一一、自二黃圖二年一始」

【袍仗】ホウジャウ　軍裝をいふ。仗は兵器。唐書、楊弘禮傳「跳出二賊背一、所ㇾ向摧靡、帝自ㇾ山下、望二其衆一一一精整、人人盡ㇾ力」

【袙】

バツ　㊀㊁

○はちまき、古、軍人の額の飾

とせしもの。後漢書、輿服志「爲二絳一以表二貴賤一」＝帕幎。幎。○國ベツ中古、婦人のしたぎ。一説に、袒字の誤用。

【袜】（一）バツ（二）バツ　月㊦

㊀おび、衣を束ぬる所以のもの。○はらおび。隋煬帝、詩「錦袖催南舞、寶ー趁宮腰」㊁たび（足衣）＝襪。○きゃはん（脚衣）

【被】（一）ヒ　㊦（二）ヒ　支　㊦

㊀おほふ（覆）楚辭「皋蘭ー徑兮」○およぶ（及）書、禹貢「西ー于流沙」○おもて（表）○くはふ（加）史、高祖紀「高祖ー酒」○きる（著・服）○おぶ（帶）○かぶる、かうむる、頭にいただく、うける（受）「ー恩」「ー禍」○かうむらす。○る、らる、受身の助字。○おふ。後漢書、賈充傳「ー羽先登」おはす（負）㊁ひらく、披に通ず。○ひらひらとする貌。㊂婦人のかみかざり（首飾）詩、召南「ー之僊僊」○ふすま、ふとん、よぎ（衾）ねまき（寢衣）

同訓異義　被・見・所○被はもと寢衣也と註し、被かむる義、それを助辭に用ひて、らると訓む、被レ知は、知ることを被むるなり、魯仲連傳に「以二萬乘之國一被レ圍二於趙一」とあり、詩には多く被の字を用ふ。○見は見らるるの義にて、らると訓む、被よりは輕し、見二輕侮一は、人に侮らるるを見るなり、多く現在に用ふ。左傳「隨之見レ伐、不レ量レ力也」○所はらると訓む、ばしょの義より轉用す、所二親厚一は、人の親厚する所たるなり。

【被衣】ヒイ　○衣をきる。○堯の時の高士の名。高士傳「許由之師、曰二齧缺一、齧缺之師、曰二王倪一、王倪之師曰二ー一一一」並、知北遊「齧缺問二道乎ー一一」

【被害】ガイ　他人に害せられる。加害の對。損害をかうむる。

【被褐】カツ　賤人の着る毛布の粗衣を著る。老子「知レ我者希、則我貴矣、是以聖人ー懷レ玉」世人の知るを求めざる義。

【被衾】キン　よぎ、ふすま。

【被官】クワン　國其の官職に附屬する役所。又其の役人。

【被徑】ケイ　こみちにおほひかぶさる。楚辭「皋蘭ー兮」

【被堅】ケン　堅き甲冑を著る。戰國策「吾ーレー執レ銳、赴二強敵一而死、此猶二一卒一也」銳は銳兵。

【被讒】ザン　とがめられる。漢書、公孫賀傳「石慶雖二以レ謹得一レ終、然數ーレー」＝遇レ譴。

【被告】コク　法律の用語、訴へられたる方の人。原告の對。

【被簑】サ　みのをきる。淮南子「若ニーレー而救レ火、毀レ瓦而止レ水」

【被讒】ザンセラル　ざんげんせられる。漢書、賈誼傳「屈原楚賢臣也、ーレー放逐、作二離騷賦一」＝見レ譖、遭レ譖。

【被酒】ヒシュ　甚だしくさけを飲む、被は加。史、高祖紀「ーレー夜徑二澤中一」＝中レ酒サケニアタル

【被治者】ヂシャ　人に治められる者、即ち國民。治者の對。

【被底寫盆】ヒテイシャボン　ふすまの中の男女に喩ふ。開天遺事「明皇與二紀子一寢二於未央宮被底一、機在二睡鄉一、鼾聲如レ雷、帝曰、卿等愛二水中鴛鴦一、爭如二我一——」

【被髮】ヒハツ　そしられる。史、屈原傳、信而見レ疑、忠而ーレー」

【被縛】ヒバク　しばられる。唐書、哥舒翰傳「末ー至面縛ーレー云」

【被髮】ヒハツ　かみをふりみだす。禮記「東方曰レ夷、ーー文身、有レ不二火食一者上矣」＝披髮。

【被髮纓冠】ヒハツエイクワン　かみをふりみだしたるまま、かんむりの紐をむすぶ、極めて急ぐにいふ。孟、離婁「今有二同室之人鬬者一、救レ之雖二ーー一而救一レ之、可也」

【被髮左衽】ヒハツサジン　髮をかうむりて結ばず、ひだりまへに衣を著る、夷狄の風俗。論語憲問「微二管仲一、吾其ーー矣」

【被風】ヒフウ　僧・隱者などの衣の上に著る羽織に似たる服、襠ばの深く左右に合ひてまるえりに仕立てる。

【被覆】ヒフク　○おほひかぶせる。○ねまきにておほふ。南史、丘巨源傳「少好ニ學、居貧屋漏、恐レ濕二墳典一、乃舒レ被覆レ書、書獲レ全而被大濕」

【被服】ヒフク　○きもの。史、貨殖傳「諺曰ーー飲食、奉レ生送レ死之具」○身に行ふ、身に離さずして實踐する。漢書、河間王傳「ーニー儒術」

【被毛】ヒモウ　からだをおほふ毛。

【袢】ヘン　バン　元　㊦

○無色のころも。○夏日に著るみじかき衣。詩、豳風「是絺ーー也」○國襦ージュは短きはだぎ。○襯衣。

【裹】ボウ　皆

○ながさ（長）東西を廣、南北をーといふ「廣ー」「周ー」史、蒙恬傳「築二長城一延ー萬餘里」○たて（縱）○衣の帶より上の稱。

六畫

【袧】 イン　眞

○みごろ(袵)衣身。○しとね、しきもの(重席)褥の上にしくもの。‖唐琴子。茵・絪に通ず。

【袧褥】インヂョク　しとね。晉書、劉寔傳「晉諸ニ名崇家一見ル有ニ綠紋帳一ヲ甚麗」

【袧】 禪(衣部五畫)に同じ。

【袼】 カク　陌

そで(袖)腋ワキの下の袖の縫。禮、深衣「一之高下可ニ以運ル肘一」

【袷】 ㊀カフ　㊁ケフ　洽　無

㊀あはせ(複衣)表裏二枚の布を合せ縫ひしきもの。玉篇「衣無ニ絮也一」‖袷・複衣夾衣。○衣の縫目、一說にえり(衿)㊁えり(衣領)曲禮「天子視不上于ニ袷一」(天子に拜謁するには御衣の襟より上の方を見ざるやうにする)

【袿】 ケイ　圭

○うちかけ、婦人のうはぎ、しかけ(褂襠)後漢書、皇后紀「一裳鮮明」‖褂。○もすそ(衣裾)

【褶】 シフ　緝

㊀ヒフ　㊁シフ　㊂シフ　緝

㊀ひだ(襞)。衣のおりめ。○ひだをとる。○ひだのある衣服。○ひだのある袴。○ひだのある上着。○ひだのある下着。○ひだのある袴。○ひだのある上着。○ひだのある下着。

【褓】 ホ　皓

㊀つつみ(包)。ふろしき。○つつむ。○おむつ。○おしめ。

【袴】 コ　虞

㊀はかま(股)。○ももひき(脛衣)。○ももひきをはく。○ももひきをぬぐ。○ももひきをつける。○ももひきをとる。○ももひきをかける。○ももひきをかけて。

【袴】 コ　虞

㊀はかま(股)。○ももひき(脛衣)。○ももひきをはく。○ももひきをぬぐ。○ももひきをつける。○ももひきをとる。○ももひきをかける。○ももひきをかけて。

【褫】 チ　紙

㊀うばふ、奪ひとる。○はぎとる。○はぎとられる。○はぎとられた。○はぎとられて。

【裁】 ㊀サイ・ザイ　㊁サイ　灰　咳

㊀たつ、さく(裂)衣服をしたてる爲めに布帛をたちきる「一ニ縫一」○つくる(製)衣を製する。○わづか(僅)纔に通ず。漢書、功臣傳「戸口可ニ得而數一仕二三一」○ただす(制)ただし治める。楚辭、大招「篤ニ棄讒蠹之所一」○みわける、めきき(鑒別)○はかる(度)「品ニ一財と通ず。○きれ(布帛の斷片)○さだめ、かた(制型)○ていさい「體ニ一」○きりもり、はからひて程よくす(節制)○さばく、善く判斷する「一判」「奏ニ一」○へらす(減省)物事を適宜にへらす。吳語「救ニ其不足一有餘」○刑殺。自ニ一ス一は自殺。㊂たつ(斷制)「製ニ一」○つくる(製)

同訓異義 裁・絕・截・製の別は絕(二四頁四段)の條を見よ。

○裁・節・機・劣・才・財の別は節(二六頁一段)の條を見よ。

【裁可】サイカ　○きりもりして可決する。唐書、董晉傳「一ニ一大事一不ル關ニ吾晉一」○君主又は大臣が臣民の申出を裁決して許可す。書經指南「允許又曰ニ一ニ一」‖裁許・允許。○議會にて議定せし法律を君主又は大統領が親裁して可決する。

【裁許】サイキョ　裁決してゆるす。後漢書、趙充國傳「唯陛下一ニ一」‖允許。

【裁決】サイケツ　事をとりさばきてきめる。‖裁斷・裁定・剖決。

【裁罰】サイバツ　つみをただして刑決する。後漢書、大王裁ニ其罪一」

【裁詩】サイシ　詩を作る。杜甫詩「故林歸未ル得、排ル悶强一ニ一」‖作詩。

【裁敕】サイチョク　はからひて罪をゆるす。漢書、賈奉傳「臣奉愚戇狂惑、唯陛下一ニ一」

【裁成】サイセイ　程よくきりもりして成就する(天地、律歷志)荀悅詩「初仰一ニ一德、特ル酬分寸功」裁は財。鳥、獸卉「財ニ成天地之道一」に本づく。

【裁制】サイセイ　○衣服などを程よくたちて仕立てる。‖裁製。○おさへつけ制する。‖裁抑・制裁。

【裁斷】サイダン　たちきる、斷は剪の正字。南史、梁武帝紀「斷ニ仙人鳥獸之形一、以爲ニ錦衣一ニ一有ル乖ニ仁恕一」

【裁答】サイタフ　手紙をしたためて答へる。唐書、袁滋傳「其ニ一受ル意而已」‖裁書答覆。

【裁斷】サイダン　きりもりしてさだめる。又其のはたらき。晉書、劉琨傳「性清儉有ニ一ニ一」

【裁定】サイテイ　裁決に同じ。

【裁判】サイハン　曲直をさばきわける。‖裁

決・裁定。

【裁割】サイカツ　前條に同じ。唐書、崔成傳「日與二賓客僚屬一痛飲、未二嘗醒一、夜分輒決レ事、一一精明、吏稱爲レ神」

【裁縫】サイホウ　布帛をたちぬひして衣服をしたてる。周禮、縫人、注「女御ニ一ニ王及后之衣服一」

【裁抑】サイヨク　おさへつけて制する。宋書、江夏王義恭傳「宜應二慨然立レ志、念二自一一一」‖抑損・抑制・裁制。

【裁量】サイリョウ　とりはかる。後漢書、許劭傳「其多所二一一一者レ此」‖稱量。

【裡】リ　裏（衣部四畫）に同じ。

【裸】ラ　㊥　㊦

○うつくし、みめよし（好佳）○あか。朱に通ず。

【裲】チョウ　㊥

○裸ー　はやぶれごろも（敝衣）○衣ー　は舟の漏れを塞ぐに用ふるもの。

【裨】ヒ　㊥

ー腹　は　はらまき、はらあて。‖裨襠。

【裾】キョ　㊥

ふるしき、ふくさ「包ー」

【裾紗】キョサ　圓絹の小さきふるしき。又、茶の湯に用ふる、方八寸許の絹のきれ、茶器の塵を拂ひ又は茶碗を受けるに用ふ。

【裂】レツ　㊥

○布帛のきれ、たちあまり、きれ（絹除）裁斷せし餘リ○さく、やぶる（割破）「車ー」「割ー」「決ー」「碎ー」「拆ー」○はなす。はなれる（分離）「分ー」○滅ー　は、たちほろぼす。韮、則陽「治民焉勿滅ー」

同訓異字　裂・割・剖・析・劈・擘○裂はひきさくなり、大小に通じて廣く用ふ。爰子「裂二其衣一、繼二其帶一」○割は刀にてさくなり、刃物を横にして切り分くるなり。左傳「未レ能レ操レ刀、而使レ割也」○剖は析也、判也、まん中から二つにたちわるなり。漢書「剖二符封一功臣一」○析は木をさくなり、縦ずると、明らかにするとの義を兼ぬ。詩經「析レ薪如レ之何、匪レ斧不レ克」○劈は裂破也と注す、刀にてとんと二つにさくなり、晶字箋に「以二斧刀一破曰レ劈」とあり。○擘はつんざくと訓む、手にて二つに分ちさくなり。

【裂繒】レッソウ　きけめ、われめ。‖坼綵。

【裂果】レッカ　植物の種子の熟せし後に裂けて出る者。油菜・豌豆などの類。

【裂地】レッチ　さけやぶる。王褒詩「坐看二長堤一裂ニ一一」

【裂紋】レツモン　きぬをさく。漢書、注「縫、合也、舊開出入（中略）因ー二一頭一合以爲二符信一也」

【裂繒】レッソウ　きぬをさく。帝王世紀「妹喜好レ聞ニ一一之聲一」‖裂帛。

【裂眥】レッセイ　まなじりをさく、甚だ怒りし時の目つき。史記「怒髮ー一、墓虞馮河之流」‖目皆盡裂。

【裂帛】レッパク　○きぬをさく。又其のこゑ。琴の清厲悲壯なる形容。琵琶行「曲終收レ撥當レ心畫、四絃一聲如二一一一」○杜鵑（ホトトギス）の聲の形容。

【裂痕】レッコン　はだへをやぶる、寒氣のはげしき形容の李華文「繒纊無レ溫、膚レ指ー裂ー」

【裂紋】レツモン　鑛物學にて鑛物の結晶が、常に一定の方向に滑りて自然に分離する痕迹を現すをいふ。

【裃】〔國字〕

かみしも。古の禮服、肩衣と袴と同じ模様に染めしもの。

【裄】〔國字〕

衣服の脊縫より袖口までの長さ。ゆき。

【裔】エイ　㊥

○すそ、もすそ（衣裾）○轉じてかたほとり（邊地）くにざかひ「四ー」「海ー」「荒ー」「邊ー」○夷狄の總名。宋書「華ー充レ王庭」○ほとり、さかひ、はて（邊涯）○すゑ（末）つづき、あとつぎ（後嗣）「苗ー」「後ー」○ーは行く貌。又、飛び流れる貌。○容ー　は纖長なる貌。又、高低ある貌。

【裔裔】エイエイ　○行く貌。司馬相如、子虛賦「翼乎溶溶、般乎ー一」○飛び流れる貌。漢書、禮樂志「沛然以雨般

七畫

【裒】ホウ　㊥　㊦

○うるほす。杜甫詩「雨ー紅蕖冉冉香」‖潤。○まとふ（邊）班固、西都賦「ー以二漢繡一」○かうばし、うつり香、香が衣を襲ふ。杜甫詩「杉ー寒微潤」又、うつり香のしたる衣。○ふみづつみ（書囊）鉄の類。

【裔】エイ　㊥

一ー」【裔孫】ソン 遠き子孫。‖裔胄。【裔胄】ソウ 裔は遠、胄は後、遠き子孫。左、襄十四「是四嶽之ー也」

【袂】カ 泰

あはせ「一衣」‖袷。

【裘】キウ 尤

○かはごろも（皮衣）「羊ー」「羔ー」「狐ー」「鹿ー」「輕ー」中論「敝裘莫如重ー」○披ー公は古の高士の名。高士傳「披ー公曰、五月披ー負薪、豈取金者哉」○莵ー[illegible]は魯の地名。今の山東省萊蕪縣の地。左、隱十二「使祭ー」、吾將老焉」轉じて隱居所の義とす。

【反ー裘而負ー薪】ハンキウジフシン 薪を負ふに、かはごろもを裏返して著る。毛を愛して、かへりて皮が擦り切れることを知らざる愚をあざける。鹽鐵論「愚人ー、愛二其毛一而不レ知二其皮盡一」

【焚ー裘】フンキウ 晉の武帝が異服を燒き捨てし故事。晉書、武帝紀「詔二雜頒異一帝以二奇技異服、典禮所レ禁、焚二之於殿前一」

【裘葛】キウカツ ○かはごろもと、かたびらと。韓非、五蠹「冬日麑裘、夏日葛衣」○一年に一たび被易へるもの轉じて一歲の義とす「三易二ー一」

【裘褐】キウカツ ○かはごろもと粗ク短き毛布の衣と。○轉じて儉素なる衣服の義。莊子「與二ー一爲レ衣」後漢書、梁鴻傳「吾欲ー一之人、可二與俱隱二深山一者一哉」

【裘氏】キウシ かはごろもを製する者「考工記」

【裘裝】キウサウ かはごろものもすそ。曲禮「童子不レ衣二ー一、立必正レ方」

【裘馬】キウバ かはごろもと、うまと。杜甫詩「五陵ー一自輕肥」

【裙】クン 文 又、帬・裠に作る

○もすそ（下裳）裳の裙ら「羅ー」「紅ー」○中ー[illegible]は、はだぎ（近身衣）史、萬石君傳「取親中ー廁牏、身自浣滌」○[illegible]の甲の邊へ

【裙屐少年】クンゲキセウネン 只能く自ら邊幅を修飾して重任に耐ふる器にあらざるわかもの。北史、郎基傳「嵩深謀、是ー、未レ洽二政務一」

【裙釵】クンサイ ○婦人のしたぎと、かんざしと。○轉じて婦人の義とす。金丹大要「ー一之下有二金人一」

【裙子】クンシ 僧侶の服、袴の如く腰以下をおほふもの、ひだをつけて製す。

【裙襦】クンジュ はだぎ。南史、殷不害傳「錦ー一重席」

【裹】 果に同じ。

裙（前條）に同じ。

【褁】コク 屋

○もすそ（衣裾）○衣ー[illegible]は、形囪の如く、佛家にて花を盛りて佛に擎ぐる具。柳宗元文「蔥衣ー之賦」

【裟】サ 麻

袈ーはけさ、僧の衣。袈（衣部五畫）を見よ。

【裨】シン 眞

みごろ（衣身）衣服の身、即ち袖襟衽などを除きし總身の部分。

【裝】シャウ サウ 陽

○よそほふ、身じたくする「嫁ー」「ー束」○旅立の用意する「行ー」「治ー」○よそほひ。○衣食調度など。○かざる、外部をかざる「ー飾」「ー演」ととのふ。かざり。○もたらす（齎）○つつむ（裹）をさむ（藏）悵に入れておく。孔稚圭、北山移文「牒訴倥偬ー其悵」○つつみ。行旅の携ふる所のもの。漢書、陸賈傳「佗賜賈橐中ー直千金」

【裝甲】サウカフ ○よろひを著る。○物の外部に鐵板を張る「ー巡洋艦」

【裝具】サウグ けしやう道具。後漢書、陰皇后紀「親二太后鏡奩中物一感動悲涕、令易二脂澤ー一」‖裝飾品。

【裝潢匠】シャウクワウシャウ 裝具師、又、經師屋。潢は紙を染める。唐書、百官志、注「熟紙匠十人、ー六人」

【裝裨】シャウヒ よそほひあつめる。洪邁文「每レ撫二一書一、即日勘校ー一」

【裝飾】サウシキ よそほひかざる。齊書、皇后傳「聞二鐘聲一、早起ー一」‖打扮。

【裝飾品】サウシキヒン 主として美觀の爲めにする品、金銀珠玉の類。實用品の對。

【裝送】サウソウ よめいりじたく。後漢書、鮑宣傳「宜皆就二少君父母一、父奇二其清苦一、故以レ女妻レ之、ー一裝賄甚盛」‖嫁粧。

【裝束】シヤウゾク ○旅行のしたく。北史、李弼傳「至レ夜勒二所部一云、陳悅欲レ向二秦州一、命皆一一」○みじたくする。李白詩「渾成一一皆綺羅」

【裝置】サウチ しかけ、こしらへ。

【裝著】サウチヤク 衣物をきかざる「李義山雜纂」

【裝釘】サウテイ 書物をとぢてしたてる。

【裝塡】サウテン 銃丸をこめる。

【裝彈】サウダン 弾薬をこめる。

【裎】ジュ 裹通

○やぶれたる短き布の衣（敝衣襦）史、秦紀「寒者利二一褐一」注「一一作レ短、小襦也」○竪ジュの衣る布の長襦。

【裎褐不レ完】ジュカツカツ やぶれごろもが完からざる程貧し、褐は賤人の服する粗き毛布の衣。漢書、貢禹傳「妻子糠豆不レ厭、——」

【裨】セイ 裹

○死者に贈る衣被。漢書、鮑宣傳「一以二衣衾一」○日月已に過ぎて後、喪を聞きて忌服する。

【裎】テイ 裹

○はだか（裸體・保身）○はだかになる。孟、公孫丑「祖二裼裸一於我側一」

【裎袒】テイ はだかと、はだをぬぐと。字解參看。‖裎袒。

【裊】デウ 裹の俗字

○たをやか。‖嫋。○しなやか、柔かく美くし。

【裊娜】デウ しなやかなる貌。王逢詩「芙蓉一一堪」‖婀娜・宛轉。

【裊裊】デウデウ ○風が木を搖かす貌。謝靈運詩「白楊信一一」○葉のつづきて絕えざる貌。杜甫、詠レ懷詩「一一啼二虛壁一」‖嫋嫋。○しなやかに絲ソクする貌。徐伯陽詩「圖龍一一掛二青絲一」

【補】フ 裹

○おぎなふ、おぎなひ。つくらふ、つくろひ、衣服のほころびを縫ひて完くす。說文「完二衣也一」○轉じてすべて物の破れたるを修めなほす。念就篇、註「修二破謂一之一」○たすく（助）○ます（益）裨益する。○物のかけたる所を足す、うめあはす。孟、梁惠王「一二不足一」○官職に敍する「一任」○つぎなひ。

【補胃】ホヰ ねぶくろをととのへる。梁昭明太子文「不周之禾、調レ腸一レ」

【補遺】ホヰ 書物などのもれたる所をおぎなふ。‖拾遺。

【補益】ホヤク たすけおぎなふ。後漢書「賜二諸女各數二一通一、庶有二一一一補一助汝身一」‖裨益・神益・毗益・輔益。

【補綴】ホテツ 缺點をおぎなふ。陸游詩「屋漏從二我牀一、窗破補二其綴一」‖補缺・補破。

【補過】ホカ 天子のあやまちをおぎなひ正す。過の補レ過拾レ遺（一九六頁四段）を見よ。

【補鍋匠】ホクワシヤウ 鍋の損せしをなほす職工、いかけし。

【補完】ホクワン おぎなひてまったくする。宜和叢話「後之名手、莫二能一一一」

【補缺】ホケツ かけたるをおぎなふ。淮南子「周公以レ義一レ、相公以レ功滅レ醜」‖補闕。

【補闕】ホケツ ○かけたる所を補ふ。史、汲黯傳「拾レ遺一レ」○官職などの闕員を補ふ「一一選擧」‖補缺。

【補衮】ホコン 宰相たるはたらき、衮職即ち天子の職を補ふ才。衮は衮龍の衣、天子の服なるが故。貢禹詩「一麺想垂裳治、深求——」

【補劑】ホザイ おぎなひとして飲む藥。‖補藥。

【補齒】ホシ いればをする。陸游詩「染レ鬚種レ齒笑二人痴一」自註「近聞レ有レ以レ補二種墮齒一爲レ業者一」

【補習】ホシフ 所定の學科を修了してなほ足らざる所を補ひならふ「一一科」

【補葺】ホシフ 家屋城壁などのやぶれをつくろふ。王安石詩「蓬蒿稍要除、茅竹隨二一一一」‖完葺・修葺・繕葺。

【補輯】ホシフ 書物などの足らざる所をおぎなひあつめる。江總、陶貞白集序「門人一一、若レ逢二蓬東之本一、好事研覈、如レ誦二河西之說一」‖補綴・完輯。

【補償】ホシヤウ おぎなひつぐなふ。又、つぐなひ。

【補授】ホジユ 官職をさづける。晉書、劉弘傳「敍レ功錄レ德、隨レ才一一」

【補充】ホジユウ 不足をおぎなひ滿たす。

【補充兵】ホジユウヘイ 戰時に、現役兵の缺を補ふ爲めに召集する兵士。

【補苴】ホシヨ 缺點をおぎなひつくらふ、苴はつくらふ。呂覽「衣敝不レ補、履決不レ苴」韓愈、進學解「一一罅漏、張二皇幽眇一」‖彌縫。

【補助】ホジヨ ○足らざる所をおぎなひ助ける。又、其の人。○民の困窮を救ひ助ける。孟、梁惠王「春省レ耕而補レ不レ足、秋省レ斂而助レ不レ給」

【補助貨幣】ホジヨクワヘイ 本位貨幣を助ける貨幣、金貨本位の我國にては銀・白銅・銅貨をいふ。

【補植】ホショク おぎなひうゑる。金史、食貨志「河南茶樹稍 者、命一一之一」（槭は枯）

【補正】ホセイ 足らざるをおぎなひただ

す。何承天文「若得有ㇾ可ㇾ採、庶或一一、以備二萬分一」

【補選】ホセン　人をえらび職を授ける。宋書、自序「周旋異ㇾ常、可二以一一一、子ㇾ是拜二彌牙將軍一」

【補足】ホソク　おぎなひ足す。

【補導】ホドウ　○過をおぎなひて善にみちびく。○おぎなひたすける。儀志、左慈傳「知二一一之術一」

【補短】ホタン　○みじかきをおぎなふ。孟、滕文公「今滕截ㇾ長一ㇾ、將二五十里一也」○短所をおぎなふ「採ㇾ長一ㇾ一」

【補綴】ホテツ　ほころびをぬふ。杜甫詩「壯前兩少女、一一才過ㇾ都」

【補治】ホチ　おぎなひをさめる。王安石詩「騎尾稍一一」‖補理。

【補註】ホチュウ　註釋の足らざる所を補ひ加へる。又、其の註釋。‖補注・增註。

【補定】ホテイ　おぎなひさだめる。晉書、禮志「喪服最多二疑闕一、宜ㇾ見二一一一」

【補綴】ホテイ　○おぎなひつづる。禮、內則「衣裳綻、紉ㇾ針請二一一一」○轉じて古人の字句をとりあはせて詩文を作るにもいふ。

【補貼】ホテフ　やぶれをつくろふ。方岳詩「身似二漏船一難二一一一」

【補天】ホテン　○天の缺けたるを補ふ。淮南子「女媧煉二五色石一、以補二蒼天一」○轉じて世運を挽回する義とす。舊唐書「高麗縮地一一、重張二區宇一」

【補天浴日】ホテンヨクジツ　補天は女媧氏が天の缺けたるを補ひし故事（列、湯問）浴日は羲和が日を甘淵に浴せしめし故事（山海經）轉じて國家に大功勞ある義。宋史、趙鼎傳「淩有二一之功一、陛下有二礪山帶河之誓一、君臣相信、古今無ㇾ二」（淩は張淩）

【補塡】ホテン　缺けたるを補ひうづめる。‖塡補。

【補任】ホニン　職に補し官に任ずる、官職を授ける。後漢書、竇憲紀「可二以一一一」

【補破】ホハ　やぶれたる衣をおぎなふ。黃庭堅詩「飄空見ㇾ乞ㇾ衲、兒寒教ㇾ一一」

【補筆】ホヒツ　足らざる所を書きたす。‖加筆。

【補弊】ホヘイ　やぶれをつくろふ。蜀志、劉後主傳、注「昭烈皇帝、丞二天序一、一一興ㇾ衰、存二復舊業一」

【補理】ホリ　おぎなひをさめる。後漢書、光武紀「分ㇾ將施ㇾ刑、一二城郡一」‖補治。

【補陀】ホダ　山名、浙江省定海縣の東海中に在り、一名普陀山。

【補陀落】ホダラク　梵海島と譯す、觀音の宮殿の在る處地をいふ。翻譯名義「四域記云、梵語寶陀洛伽山、此言二孤絕處一、觀自在菩薩所ㇾ居之山、在二南海中一」

【裒】ホウ　㊀ホウ　㊁ハウ　㊂ボウ　尤

㊀あつむ。あつまる（聚）詩、小雅「原隰一ㇾ分、兄弟求ㇾ矣」○へる。へらす（減）易、謙卦「君子以一ㇾ多益ㇾ寡」○おほし（多）㊁褒（衣部十一畫）に同じ。

【裒斂】ホウレン　租稅などをよせ集める。唐書、桑甫鼎傳「一一厥咎」‖裒斂。

【裒次】ホウジ　聚めて編次する。唐書、蕭德言傳「一ㇾ一經史百氏、帝王所二以興衰一者、右上ㇾ之」

【裒聚】ホウシュウ　あつめひろふ、採はひろふの唐書、劉吳等傳贊「隨世一一」

【裒斂】ホウレン　稅を多くとりたてる。陳書「一一無ㇾ厭」‖聚斂。

【裕】ユ　遇　ユウ

○ゆたか、衣服がゆったりとする。○轉じて物が饒ㇾかにしてありあまる。「餘一」○のびやか。ゆるやか（寬緩）「恬一」「優一」書、康誥「一乃以民寧」○心がひろくしてつつみいれる（包容）「寬一」「弘一」賈誼新書「包二衆容一物謂之一」

【裕貨】ユカ　財貨のゆたかなること。

【裕福】ユフク　財産のゆたかなること。

【裕民】ユミン　人民を富ませる。

【裕寬】ユカン　ゆるやか。管子「人能正靜、則皮膚一一」‖寬裕。

【裕裕】ユウユウ　心のゆるやかなる貌。白居易詩「窮通各有ㇾ命、不ㇾ繫二才不才一、推此自一一、不三必待二安排一」‖寬綽。

【裏】リ　紙　○うら、うち、衣服の內がは。詩、邶風「綠衣黃一」○轉じてすべて物の內面「竹一」「匣一」「扉一」「門一」「甕一」表の反對。

【裏海】リカイ　○世界最大の湖水、亞細亞・歐羅巴の二洲に跨る。○瀨戶內海などの義。

【裏行】リコウ　正員にあらずして其の列に加はれる官吏、唐代より創まる「御史一一使」「殿中一一使」

【裏面】リメン　うらがは（內面）表面の對。

【裏書】リショ　圖○紙のうらに文字をかく。○證書・手形などの裏に證明をする。

【裡】リ　紙　裏（前條）の俗字。

【裙】エン　ケン　元　阮

○づきん、かしらづつみ（帕幞）韓非、外儲說「以其一一塵之爲」○衣に通ず。荀、富國「天子袾一一衣冕」

【裾】 ㊀キョ ㊁キッ 御 魚

㊀すそ(裙)衣服の下縁、「衣ー」「華ー」「輕ー」「鞶ー」○ーは衣服の盛んなる貌。荀、子道「子路盛服見孔子、孔子曰、由是ーー何也」㊁おごる、古、倨に通ず。漢書、趙禹傳「禹爲人廉ー」○國ス山のふもと、一野スソ

【裾香】すそのかをり。劉滑詩「裙ー散風ー杉銅鞮傳」

【裹】 クヮ 禡

○つつむ「苞ー」詩、大雅「乃ー糇糧」○つつみ(包)包みし物。○はなぶさ(花房)高唐賦「綠葉紫ー」○草の實。郭璞、江賦「灑顆散ー」

【褂】 クヮイ ケ 卦

うはぎ、うちかけ、外衣。清朝時代の禮服の一種、外ーは袍の上に加ふるもの、馬ー行ーは其の短き者の稱。

【裾】 褌(衣部九畫)に同じ。

【裳】 シャウ 陽

○も、もすそ(下裙)したばかま、腰以下をおほふ衣。釋名「下曰ー、ー、障也、所以自障蔽也」衣の對「衣ー」「絳ー」詩、鄭風「綠衣黃ー」○ーは光明ありて立派なる貌。詩、小雅「ーー者華」‖堂堂。○越ーエツシャウ

【裳裳】もすそをかかげる。詩、鄭風「子惠思レ我、ーレー涉レ溱」

【裳裾】もすそにぬひもやうする。後漢書、明帝紀「衣盡而ーー」

【製】 セイ 霽 通じて制に作る

○たつ(裁)衣服をしたてる。左、襄十一「雖有美錦、不使學ーレ爲」○つくる(造)物品をこしらへる「官ー」「私ー」「新ー」「巧ー」○詩文を作る。又、作りし詩文「御ー」「聖ー」「近ー」杜甫詩「瀛洛富清ー」○あまぐ(雨衣)左、哀二七「成子衣ー杖戈」○かた、かたち(形式・體裁)「體ー」漢書、叔孫通傳「通儒服、漢王憎之、迺變其服、服短衣楚ー」註「謂裁衣之形ー」○かはごろも「狸ー」○すがた(姿儀)おもむき(致・意態)唐書、張易之傳「頎皙美姿ー」

【製形】かたちをつくる。古畫品錄「賦レ彩ーレー、皆創二新意一」

【製裁】つくる。又、つくりかた。顏氏家訓「宜下以二古之ーー一爲レ本、今之新調爲上末」

【製造】つくる。梁簡文帝、大法頌「垂拱南面、克己纖廊、權二興教義一、ーニ一衣裳」‖製作。

【製作】物品を造る。‖製造。

【製産】物品を製造し産出する。

【製絲】○いと類を作り出す。○特に繭より生絲を取る。

【製酢】酢を製し造る。

【製法】物を造る方法。程敏政詩「ーー來レ自二東山東一」

【製版】文字圖書などを版に造る。‖製板。

【製筆】ふでをつくる。雜經、ーー之法、榮者居レ前、纖者居レ後、強者爲レ列、弱者爲レ輔」‖造筆。

【褐】 ㊀セキ ㊁テイ 錫 霽

㊀はだぬぐ(肉袒)衣を脱して肩をあらはす。詩詁「去二上衣一曰ー」「袒ー」○禮服の一、ひとへの皮衣、禮、玉藻「裘之ー也見美也」㊁むつき(襁褓)詩、小雅「載衣之ー」

【褄】 セン 塩

○へり、龜甲の邊緣、○車のたれぎぬ(裳帷)

【褫】 タッ 曷

つづる(綴)破れ衣を補ひつづる(補綴)

【褐】 ㊀チウ 尤 ㊁タッ 薬

㊀とばり(牀帳)○ひとへのふすま(禪被)ねまき。詩、召南「抱レ衾與ー」㊁あせとりの短きじゅばん。後漢書、羊續傳「唯有布衾敝裋ー」○たもと(袂)

【褐任】しとれ。說苑「左ニーー一右ニ朝服一」

【褻】 トク 沃

○かたへぎぬ(偏衣)晉語「衣偏ーレ之衣」○せぬひ(衣背縫)衣服のせすぢのぬひめ。史、佞幸傳「顧見二其衣ー」

【裴】 ハイ 灰 又、徘・裵に作る

○ーは長き衣の貌。○古、徘に通ず、ー徊ハイクワイは便旋トキツカヒスル漢書、燕剌王傳「ー徊兩楹間兮、君子獨安居」‖徘徊・徘徊。○姓、ー松之は南北朝の宋の聞

喜の人、詔を奉じて陳壽の三國志に注す。

【裴度】ハイ　字は中立、唐の聞喜の人、貞元の初、進士となり、中書侍郎に至り、兵を督して淮蔡を討平し、晉國公に封じ、中書令を加へらる、度身を以て天下の安危に係る者三十年、四朝に歴事し、全徳を以て終始す、晩年職を辭し別墅（綠野堂）を作り、野服閑散、白居易・劉禹錫等と其の間に觴詠す、開成三年卒す、文忠と謚せらる。

【裨】ヒ　支

○おぎなふ（補）布帛を接ぎておぎなふ、ます（益）つくろふ「一益」埤に通ず。○つく（附）たすく。たすけ（輔佐）○ちひさし（小）稗と通ず。史、衛青傳「得ㇾ右賢ー王十餘人」註「一王、小王也」○姓。ー諶は春秋の時の鄭の大夫。論、憲問「爲」命、ー謀草創之」

同訓異字　裨・助・輔・弼・翼・扶・佐・佑・掖・贊・資・介の別は助（二四七頁三段）の條を見よ。

【裨海】カイ　小さきうみ。史、孟荀傳「有ニー一瑕ㇾ之」

【裨將】ショウ　副將軍、裨は助の義、項羽傳「籍爲ニー一」注「裨、相輔助也」

【裨助】ジョ　たすく。たすけ。後漢書、班昭傳「作ニ女誡七章ㇾ、頗諸女各竊ニ通ㇾ旨有ㇾ補ニ益ー一ㇾ汝身」宋史、崔與之傳「惟直言可ㇾ以ー一君德ㇾ、於ㇾ格天心ㇾ」＝補助。

【裨販】ハン　ちひさきあきうど、小資商。韋衍賦「ー一夫婦」注「ー一、買ㇾ賤賣ㇾ貴、以自裨益」＝小販・稗販。

【裨補】ホ　たすけおぎなふ。吳志、孫權傳「豈不ㇾ望ニ忠言ㇾ以自ー一上耶」＝毗補。

【裨輔】ホ　たすく。たすけ。後漢書「起ニ綱濟國ー一ニー先君ニ」

【裱】ヘウ　蕭　豪

○ひれ（領巾）婦人の肩かけ。○へうぐ（表裝・裝潢）＝標。

【裱背匠】ハイショウ　へうぐや。＝表背匠・裝潢匠。

【裸】ラ　哿　又、保・祼に作る

○はだか、あかはだか（赤體）「裎」左、傳二三「聞ニ其ー一裎ㇾ、欲ㇾ觀ニ其ー一」○はだかになる。

【裸躬】ラキュウ　はだか身。野客叢書「漢王嘉爲ニ宰相ー一受ㇾ答」

【裸花】ラカ　花の花冠及萼なき者、牛夏ゲンの類。

【裸臥】ラガ　はだかになりてねる。晉林「ー一失ㇾ朝、要ニ我貝錦ニ」

【裸形】ラケイ　はだか。世說「脫ㇾ衣ー一在ニ屋上ニ」

【裸國】ラコク　衣服を著けざる風俗の國（異稱）＝裸國。

【裸子植物】ラシショクブツ　胚珠が子房内に存せず全く外にあらはれ出るもの、松・杉・檜など。

【裸出】ラシュツ　むきだし。＝露出。

【裸跣】ラセン　はだかと、はだしと。新論「是猪見ㇾ冠與、而作ㇾ夜ー一也」

【裸體】ラタイ　はだか「ー一畫」裸」に傑に作る。吳志、薛綜傳「日南郡、男女ー一、不ニ以爲ㇾ羞」＝裸身・赤傑・裸躰・露身・露體。

【裸蟲】ラチュウ　はだかむし、人類をいふ。管子、五行志「ー一人類而人爲ニ之王ニ」

【裸裎】ラテイ　はだか、又、はだをあらはす。孟、公孫丑「雖ニ袒ニ裼裸ー一於我側ㇾ爾焉能浼ㇾ我哉」

【裸麥】ラバク　はだかむぎ、麥の一種、壓穂は大麥よりも大きく芒も多し。

【裲】リャウ　養

○裲襠はそでなし。胸と背との兩方に當る衣（背心）＝兩當。○圖近古の婦女の禮服の一、帶をなしめたる上にうちかけて著る小袖のやうしかけ、袿。

【褄】【國字】

つま（裸）袿の腰より下の縁へ

九畫

【褫】チ　紙

奪ひ（衣部五畫）に同じ。

【褫】エ　薺

こしおび、腰に纏ふ襷。

【褐】カツ　カチ　曷

○あらきけごろも（毛布）賤しき者の服。詩、豳風「無ニ衣無ー一何以卒ㇾ歲」○あらきぬの（麤布）「麤ー一」「敝ー一」裘、大略「衣則豎ー不ㇾ完」○いやしき人、ーをきるによりて寒賤の人の稱とす。左、哀十三「余與ー一之父ㇾ覩之」○黄黑にして光澤なき色、かちいろ。

【被ㇾ褐懷ㇾ玉】カツカイタマヲ　褐は毛布にて賤者の服、外を飾らずして内に德あるに喩ふ。老子「知ㇾ我者希、則我者貴矣、是以聖人ー一」

【解ㇾ褐】カイカツ　次條に同じ。南史、梁武紀「不ㇾ遷ニ一經ー一不ㇾ得ニ一ㇾ」

【釋ㇾ褐】シャクカツ　賤しき衣を脱ぎすてる、初めて仕官する義。正字通「士

初入仕、謂之一ノ一」揭雄、解嘲、或一ノ一而傳」＝解ノ褐。

【褐寬博】カツクワンパク　いやしき者のきる服、寬博はゆったりとしまりなく仕立てたる衣。性にていやしき者。孟、公孫丑「不ノ受ニ於萬乘之君ニ」

【褐色】カツショク　かちいろ、茶色「茶一一」

【褐炭】カツタン　未だ十分に化石せざる一種の石炭にて、尙ほ木理を存し、黒褐色を帶ぶ。＝褐木炭。

【褐父】カツフ　褐はあらき毛布、毛布を被る賤人。左、哀十三「旨酒一盛兮、予與ニ褐之父一晛ノ之」

【褐夫】カツフ　あらき毛織の布を著るいやしき者。孟、公孫丑「如ノ刺ニ一一」疏「投ノ褐之窮夫」＝褐父。

【褘】

㊀キ　㊁ヰ　㊂

㊀雞・雉の彩文ある皇后用の祭服。禮、玉藻「王后一衣」一は翬の如く翟む、翬(雉)を畫きて飾とす。㊁婦人の持つにほひぶくろ(香嚢)香纓。＝幃。○ひざかけ(蔽膝)○うつくし(美)

【褌】

コン　元　又、裩に作る

したおび、ふんどし、したもも引き。釋名「一貫也、貫ニ兩脚、上繫ニ腰中ニ也」「一襠」「幞肩一」「花下曬一」

【褌衣】コンイ　ふんどしと、きものと。晉紀「晉劉伶、縱ニ酒放蕩、或脫ノ衣裸形在ニ屋中一、人見譏ノ之、伶曰、吾以ニ天地一爲ニ宅舍一、以ニ屋宇一爲ニ一一一」

【褌中】コンチュウ　ふんどしのなか。晉書、阮籍傳「聚虱之處ニ一一、逃ニ乎深縫、匿ニ乎褌衩一、自以爲ニ吉宅奧一也」

【褒】

㊀シウ　㊁イウ　宥　有

㊀そで。詩、唐風「羔裘豹一」＝袖。㊁盛んに衣服を飾る貌。○笑ふ貌。○すすむ(進)

【褒然】ホウゼン　進む貌。又、盛んに衣服を飾る貌。漢書、王仲舒傳「今子、大夫一一爲ニ縣官一、除ニ苦窶一之」

【褒如ニ充耳一】ホウジョジュウジ　唯笑ふのみにて耳をふさぎてきかず。充耳は瑱ヲ以テ耳ヲ塞ケルヲ謂ふ。一解に、大夫褒然として尊盛の服ありて辭ふ能はざる義。詩、鄭風「叔兮伯兮、一一」

【褒】

褒(前條)に同じ。

【褒褒】ホウホウ　盛んなる貌。漢書、敘傳「安樂一一、古之文學」

【褫】

タン　寒

赤きふちある黒色の衣裳「一衣」

【褚】

チョ　ト　虞

○衣をよそほふ。又、わたを入れる。○わたいれ。○ふくろ(嚢)唐書、樊澤傳「傾ノ一以濟」○ふくろに入れて藏ヲさむ。○たくはふ(蓄)左、襄三十「取ニ我衣冠而ノ之」○まく、棺を覆ふ物「一幕」○姓「一遂良」

【褚遂良】チスイリャウ　字は登善、唐の錢塘の人、博く文史に渉り楷隷に工なり、貞觀中歷官して諫議大夫兼起居注に至り、高宗の朝、尙書右僕射に遷る、性直言を好むを以て、後ち累りに愛州ノ刺史に貶せられ、憂を以て卒す。

【褓】

ハウ　皓

襁ハウはむつき、小兒の被、かいまき。史、魯世家「成王少在ニ襁褓之中一」

【褓乳】ハウニウ　幼少。鄭俠詩「汝生未ニ三月一、正當時一一」

【褻】

褻(衣部十一畫)の俗字。

【複】

フク　屋

○あはせ(袷重衣)轉名「衣服有ニ裏曰一一」○わたいれ(綿衣)○かさぬ。かさなる(重)すべて事物の重疊せるもの「一數」「重一」「一道」單ヒトへの對。

【複衣】フクイ　○あはせ、世說「晉孝武年十二、冬天盡日不ノ著ニ一一、○○きものをかさねて著る。南史「房伯玉患ノ冷、夏月常一レ一」

【複葉】フクエフ　○一つの葉柄に數多の小葉を有する葉、羽狀・掌狀の別あり。○飛行機の翼の二重になれるもの。

【複壞】フクエン　二重のかきね、にぢうがき。晉唐書「作ニ一一洞穴一」

【複閣】フクカク　かさなれるたかどの。王勃詩「一一重樓向ノ晩開、秋風明月滿ノ江來」＝層閣・重閣。

【複眼】フクガン　昆蟲類・甲殼類などの眼の稱、無數の單眼の集りて成るもの。

【複襲】フクシフ　かさなりたるもの。張協詩「層樓一一此雜構」

【複語】フクゴ　同字をかさねたる語、明明・綿綿の類。洛翁雜說「古人書ニ一一則書ニ二字一」＝重語。

【複雜】フクザツ　かさなりまじる、こみいりてとどこほる。

【複式】フクシキ　簿記法にて收支又は取引毎に貸借を仕分けて雙方を記入

し、科目を分ちてそれぞれの口座を設ける方法。單式の對。

【複寫】フクシャ　一度うつしたるものを更にうつす。

【複數】フクスウ　二つ以上のかず。

【複成】フクセイ　○かさねて作る。○同じものを別に作る。＝複製。

【複成火山】フクセイカザン　地文學にて舊の噴火口の上に更に噴火口を生ぜし火山。

【複姓】フクセイ　支那にて二字の姓。諸葛・歐陽の類。萬姓統譜「凡例、一一取二上字一爲レ據」

【複壁】フクヘキ　二重にめぐらしたる壁。遷同し。李商隱詩「梓澤東來七十里、長溝一一埋二雲子一」＝重壁。

【複線】フクセン　國二軌以上設けたる汽車・電車の線路。

【複遠】フクヱン　上と下と二重の廂下、上下に遠あるが故に複といふ。史、始皇紀「殿屋一一、周閣相屬」

【複文】フクブン　文法にて附屬句を有する文。單文・重文の對。

【複壁】フクヘキ　二重にめぐらしたるかべ。居室の內壁が二重になりて、其の中を空くし、人を匿すべきもの。後漢書、趙岐傳「逃レ難、自匿二姓名一、竇二卿北海市中一、時孫嵩游レ市見レ岐、察二非常人一、載與俱歸、藏二岐一一中一、後因レ救乃出」

【複本】フクホン　原本のうつし。＝副本・副書。

【複名】フクメイ　支那にて二字の名。天祥・枋得の類。石林燕語「宰相一一者皆不レ出レ姓、唯單名則出レ姓」

【複利】フクリ　預金又は貸借にて毎期の終に其の利子を元金に加へ置き、最後の元利總計より最初の元金を減じたる高。＝重利。

【複額】フクガク　かさなれるみね。胡曾詩「重岡一一勢雄豪、一卒當レ關萬卒同」＝重嶺。

【褊】ヘン　㊀

○ちひさし、衣が小さし、せまし（狹隘）○むねせまし、きばやし（急）偏に通ず。

同訓異字　褊・狹・窄・隘の別は狹（二二八頁四段）の條を見よ。

【褊隘】ヘンアイ　心又は土地がせまし。南史、王弘傳「弘性一一、人有レ忤意、輒加二凌侮一」＝褊狹。

【褊急】ヘンキフ　心せまくして人をねたむ。唐書、李義府傳「義府、貌柔恭、與レ人言、嬉怡微笑、而陰賊一一蓄二乎心一、時號二笑中刀一」

【褊急】ヘンキフ　きみじか。詩經、序「其君儉嗇一一、而無二德以將一レ之」＝卞急。

【褊狹】ヘンケフ　○土地がかたよりてせまし。北史、齊高祖紀「以爲洛陽雖レ有二山河之固一、土地一一、不レ如レ鄴、將還レ都」○心がせまし。史、酷吏傳「化隆者剛博、治漫者一一、可レ不レ勉與」＝褊隘。

【褊躁】ヘンサウ　心せまくしてさわがし。北史、劉昶傳「天性一一、喜怒不レ常」

【褊心】ヘンシン　心せまく氣短し。詩、魏風「糾糾葛一一、是以爲レ劍」＝褊心。

【褊小】ヘンセウ　せまくしてちひさし。左傳「衛國一一」＝狹小。

【褊淺】ヘンセン　せまくしてあさし。韓愈文「臣性資一一、學術荒唐」

【褊促】ヘンソク　心せまく氣みじかし。南史、何承天傳「承天性一一」＝褊急。

【褊忿】ヘンフン　こころせまくしてねかる。

【褊忿】ヘンフン　陸游詩「習氣深知要二掃除一、時時一一獨何傷」

【褊陋】ヘンロウ　見識がせまくしていやし。史、禮書「一一之說」

【褊】㊀ユ　㊁エ。　虞　㐌

㊀きじのはね（翟羽）にて衣を飾る。○襜一ユは短きひとへもの。漢書、禹不疑傳「有二一男子一、衣二黃襜褕一」○衣うつくし。㊁一狄ヂキは雉雞の羽にて飾りし服、皇后のきるもの。又、雉雞を畫ける衣服。

【褕衣】ユイ　うつくしききもの。史、淮陰侯傳「一一甘食」＝美衣。

十畫

【褞】ウン・オン　㊀　元　㐌　褞は俗字

㊀ころも（衣）○うはぎ（袿）㊁ぬのこ（褐衣）そまつなるきもの。

【褞袍】ウンパウ　ぬのこ。轉じて賤者の義。王洗、釋時論「衰龍出二於一一、卿相起二於匹夫一」

【褞視】ウンシ　ぬのこ。史、酷吏傳「衣二敝一一一與下衣二狐貉一者上立而不レ恥者、其由也與」

【褻】　㊀　屑（七四頁一段）の古字。

【褻】ケイ　㊀　霽に通ず

ひとへぎぬ（禪衣）裏なき衣。詩、衞風「衣錦一衣」箋「褻也、尙之以禪衣爲二其衣之表一」

【褰】ケン　先

○ももひき（袴）左、昭二五「公在二乾侯一、徵二與褊一」○かかぐ（牽掘）すそをかかげる。曲禮「暑毋レ褰」＝攓。○ちぢむ（縮）「一縮」

同訓異字　褰・撩・攓の別は撩（七五〇頁四段）の條を見よ。

【褰裳】ケンシャウ　もすそをかかげる。詩、鄭風「子惠思レ我、褰レ裳涉レ溱」

【褥】ジョク　沃　蓐に通ず

しとね、ふとん、しきもの（坐臥具）「茵ー」「席ー」「牀ー」

【褥席】ジョクセキ　しとね。南史、柳慶遠傳「吾嘗夢下大財以ニー一見与上」

【褞】タイ　隊

ー袍タイホウは夏月、日光を防ぐために被る日笠ヒガサ。邪正醉編「ー袍、涼笠也」

【褞子】タイシ　○日笠を戴く人。○轉じて屋中に盛服して人を伺候する者の辺闢にして事情に通ぜざるを喩りていふ。魏程曉、伏日詩「今世——、聞レ熱到二人家一、主人聞二客來一、驚愛レ此何」

【褫】㊀チ　㊁テ　紙　支

㊀はぐ、うばふ、衣を奪ひとる。轉じて官職をとりあげる。○神志の喪失するにもいふ「ー魄」㊁とく（解）ぬぐ（脱）衣帯を去る。

【褫魄】フハク　褫・奪・奩の別は奪（同前）の條を見よ。

【褫職】シショク　職位を奪ふ、免職さす。＝奪職。

【褫奪】ダツ　はぐ、うばふ、官位をとりあげる。

【褫魄】ハク　たましひを奪ふ。張衡賦「奪レ氣ー一」＝奪魄。

【褪】トン　願

○おろす、ぬぐ、衣を脱ぎ卸す。○あす、色がさめる（色減）周邦彦詩「蝶粉蜂黃都ー了」○花が散る（花謝）蘇軾詞「花ー殘紅青杏小」○卻退する。沈與求詩「十篤八九ー、逆勢何乃爾」

【補】ハク　藥

○短き袂タモトの衫ヒフ博物志「日南有二野女一、裸行裸袒、無レ衣ー」○ひとへぎぬ（褝衣）○うすし、薄に通ず。

十二畫

【褰】キ　未

しく（蹇）左、袁十一「寘之新篋、ー之以二元纁一」

【褭】オウ　尤　有

【褓】ヘウ　巧

小兒のよだれかけ（涎衣）

【褓】キャウ　養　又、襁に作る

○むつき、小兒をせおふ衣。又、其のおびひも「ー褓」○負はむつきにて小兒を負ふ。

【褓抱】ハウ　おひいだく。幼稚の義。大戴禮「成王處ニー一之中一、朝二諸侯一、周公用レ事也」

【褓褓】ハウ　褓はむつき、襁は其のおびひもの漢書、宣帝紀「皇孫龍在二ー一一、猶坐二乳母一抱ー」＝強葆・襁褓・襁緥。

【褓負】フ　むつきにて小兒をせおふ。論、子路「四方之民、ー二其子一而至矣」（民の寇ひ歸する所たるをいふ）

【褶】シ　支

ー襏は毛羽の衣の貌。

【褰】ケン　阮

○のぼる、あがる（上）○はらふ（攘）のぞく（除）詩、鄭風「豬有レ洩、不レ可ー也」○なす（成）しとげる。左、定十五「事定公、雨不レ克ー」事、證也」○たすく（贊成）「贊ー」○のる。のりもの（輿）上ー一は馬の最良なる者。○たかし（高）張衡賦「ー峯夷途」○かへる（還）かはる（更）星がうつりゆく。詩、小雅「跂彼織女、終日七ー」○衣を解きて耕す。○州名、今の湖北ー陽縣治。

【褰陵】ケンリョウ　大水が陵上にのぼる。書、堯典「懷レ山ー一」註「色」山上陵也」

【褰】セキ　シャク　陌

ひだ、衣服の折りこみ「襞ー」

【褰】セツ　屑

○なかぎ、したぎ、はだぎ（表衣）○ふだんぎ（平服・私服）論、鄭黃「紅紫不レ以爲ー一服」貴と淫とを防ぐ爲めなり。○けがす「ー瀆」けがる（穢）「ー器」けがらはし「猥ー」○やぶれぎれ、ぼろ。○なる、なじみて心やすくなる（狎近）論、鄭黃「雖ー必以貌」○あなどる（慢）蘇洵、上田樞密書「其名曰ー一天」蝶に通ず。

【褰裳】セツショウ　褻・狎・蝶・蹀・挾の別は狎（二二六頁一段）の條を見よ。

【褻衣】セツイ　ふだんぎ。司馬相如賦「表二其ー一」＝褻服。

【褻濁】セツ　おまる、溲便の器。史、石奮

傳、注「居静曰、一一也、穢悪之欠也」周禮、注「一一虎子ノ之屬」＝便器。

【褻翫】セツグワン みだらなる、けがらはしきたはむれ。唐書、元載傳「爭蓄二侫妾一、皆二絶色一、錦綉環擁不レ慊也」

【褻衣】セツイ ふだんにきる皮衣。論、鄉黨「一一長、短二右袂一」

【褻玩】セツグワン なれもてあそぶ。又其の品。＝翫玩・翫玩。

【褻昵】セツヂツ なれなれしく近づける臣。後漢、呉祐傳「吾之一一也」＝卿臣・卿近之臣。

【褻瀆】セツトク ○けがす。けがれる。易經「再三瀆」疏「師若遲疑不レ定、或再或三、是一一」○かろんじあなどる。輕慢する。

【褻服】セツフク ふだんぎ、日常私居の服。論、鄉黨「紅紫不二以爲一一一」

【褶】（一）テフ 慶（二）シフ 慶

○あはせ（給衣）禮、玉藻「君爲レ裘、裼レ之、一衣有レ表裏而無レ著」無著とは綿を入れざる義。○かさね。＝襲。（二）袴。一ツは騎兵の著くるはかま、馬のりばかま。晉書、輿服志「弓弩隊各五十人、黑袴一（三）ひだ。衣服の折りこみ、襞積。

【褰】（一）ケン・ホウ 慶 俗字（二）ホウ

○ほむ、ほめる、美を揚ぐ（褒揚）「稱一」「寵一」「旌一」○ほめ、はうび（賞）○大いなる裙ズの衣服「一衣」○古の姒姓の國の名。○一斜ハウは陝西省の終南山の谷の名、南口を一といひ、北口を斜といふ。元和志「一斜道、一名石牛道、至二今猶爲一往來要途一」○一娘は周の幽王の寵姫。（三）あつまる。あつむ（聚）＝衰。

【同音異義】衰・褒・美・頌・賞○褒は貶の反、善をほめすすめる、褒美するなり。○褒は毀の反、ほめすごすなり。莊子「好面譽レ人者、好背面毀レ之」○美は刺ルの反、善き事のあるを、よしとほめあらはすなり、褒美と熟す。○頌は容と通ず、人の徳を詩歌などに作り、形容してほめるなり。○賞は罰の反、褒美するなり。

【褒貶】ハウ ほめなぐさめる。唐書、尹愍良傳「循二撫境内一、獨無レ褒、武后離書一一」＝賞慰。

【褒優】ハウイウ ほめて待遇をあつくす。漢書、匡衡傳「上新即レ位、一二一大臣一」

【褒衣博帶】ハウイハクタイ 大いなる裾ある服をき、幅のひろきおびをしめる。儒者の服。漢書、揚不疑傳「一一、盛服至レ門上謁」＝大衣廣帶。

【褒嘉】ハウカ ほめよみす。宋元詩「國封鄭二典禮一「宮祀尚二一一」

【褒勸】ハウクワン ほめすすめる。文心雕龍「書中能盡二一警飭之意一」

【褒顯】ハウケン ほめあらはす。漢書、西吉傳「宜二一一」＝賞揚・稱揚・旌顯。

【褒讚】ハウサン ほめたたへる。魏志、許靖傳「帝思二靖忠孝一、下レ詔一一」

【褒詞】ハウシ ほめことば。＝賞詞。

【褒賜】ハウシ ほめて物をたまふ。漢書、郊祀志「一二一大臣」

【褒章】ハウシヤウ 奇特の行ありし人にほめて賜はる徽章。我國にては紅綠・藍・黄の四綬章あり。

【褒錫】ハウシヤク ほめてたまふ、錫は賜。唐書、高祖諸王傳「高宗嘉レ之、雖レ詔一一」＝褒賜。

【褒升】ハウシヨウ ほめて其の位をすすめのぼす。白居易文「嘉二其忠効一宜可二一一一」

【褒稱】ハウショウ ほまれ。ほめる。後漢書、第五倫傳「乃上疏一二一盛美」＝稱褒。

【褒崇】ハウスウ 孔子をたふとびていふ。漢の孝平帝の元始元年、孔子の後、孔均を一一侯に封じ、孔子を追紀して褒成宣尼公といふ（漢書、平帝紀）＝揚烱文「尊二一一之際一、殷二崇聖之褒班一」

【褒懲】ハウチヤウ 善き者を賞め、惡しき者をこらす。唐書、呂元膺傳「請明二賞直一、以顯二一一一」＝勸懲。

【褒寵】ハウチヨウ ほめいつくしむ。歐陽脩、晏公碑「一一優異」＝寵榮。

【褒美】ハウビ ○ほめる。後漢書、東平王傳「稱二一一、班二之四海一」○圖 ほめて物を與へる。又其の物品。

【褒貶】ハウヘン 人をほめるとそしるとの仕事、左傳序「春秋雖下以二一字一爲中一一、而然皆須二數句一以成上レ旨」＝褒揚。

【褒揚】ハウヤウ ほめたたへる。漢書、禹樂志「功德既信美矣、一一之意、蓋二乎天地之間一」＝賞揚・稱揚・褒美。

【褒賞】ハウシヤウ ほめてたまふ。北史、賈越傳「以レ時一一、厲二其忠款一」＝賞賜・褒賜。

【褾】ヘウ 解 曜

○そでのはし（袖端）○書のかざり。○へうぐ「褾一」＝裱（衣部八畫）

【褫】リ 支

きんちゃく、婦人の持つにはひぶくろ（裨・香纓）繍に通ず。

【褸】ル 慶

通じて縷・屢に作る

衣壞ぶる、やぶれごろも（敝衣）ぼろ、つづれ「襤―」

【褝】〔國字〕ちはや、巫女の服、白布にて作り、山藍にて水草・蝶などの模様を摺りつける。

十二畫

【襭】キュク　屋　えり（衣領）

【襬】サイ　泰　かざりぬひ、衣の邊縫。

【襍】雜（十三畫）に同じ。

【襐】シャウ　漾　○未だ冠笄せざる男女のあたまかざり（首飾）兩耳の後に在り。○盛服の飾「―飾」

【襏】ゼク　藥　袂（一つ）はつるぎぶくろ（劍衣）‖夫襏。

【襌】タン　寒　單に通ず　ひとへもの（單衣）說文「衣不重也」‖涼衣・衫。

【襞】ハッ　曷　○一襞（ひとへ）はあまぎ（雨衣）かっぱ。舜語「首戴三茅蒲一身服一襞」○粗ツく堅き服。勞動者の著るもの〔管子、中匡〕

【襒】ヘッ　屑　はらふ、衣にて拂ふ。史、孟荀傳「側行一席」

【襲】慴（五七四四頁）に同じ。

十三畫

【襖】アウ　皓　○うはぎ（袍・表衣）「破―」長きを袍といひ、短きを―といふ。國○ふすま、からかみ。○素―は布地五つ所紋にて其の仕立方は直垂などに同じ。‖素袍。

【襟】キン　侵　衿に通ず　○えり（交衽）衣服の頸にまとふ部分「正―」「羅―」「前―後裾」○轉じてえりの當る所、即ちむね、こころ「胸―」「―懷」「哀―」「虛―」○分（ブン）は人に別れる。‖分袂。○雨堉相謂ひて達―といひ、隣稱して―といふ「―兄」「―弟」

【襟語】キン　心と人品と。杜牧詩「盧陽裴太守、――苦超越」宋史、文同傳「與可―、如二晴雲秋月一、塵埃不レ到」‖襟期風韻。

【襟要】えりと、こしと、要は腰。轉じて要害の地に喩ふ。晉書、石勒載記「據二其―一以守レ之」‖襟喉。

【披レ襟】ヒキンヒラク　○えりをひらく。高僧傳「王遙―レ解レ帶」‖開懷。○心を打ちあける。

【襟期】キン　心に思ふ。杜甫詩「時赴二鄭老一同二―一」‖襟抱。

【襟裾】キンキョ　えりと、すそと。轉じて衣服を著る義の熟語。詩「人不レ通二古今一、馬牛而―」

【襟曲】キンキョク　心のうち。陶弘景文「隱遁情端、志支二―一」‖心曲。

【襟懐】キンクワイ　心のうち。杜牧詩「光潔疑レ可レ掇、欲下以二―一貯上」‖襟抱・懷抱。

【襟契】キンケイ　至りて親しき交。世說「得レ之欣然、遂爲二―一」‖至友。

【襟喉】キンコウ　えりと、のんどと。轉じて要害の地に喩ふ。唐書、李晟傳「以通二劉漢之一―一」‖襟要。

【襟情】キンジャウ　こころ。唐詩紀事「泉飛議愚、雲散―一」‖心情。

【襟素】キンソ　襟抱に同じ。李商隱文「每レ披二―一、常賜二語言一」

【襟帶】キンタイ　○えりとおびと。後漢書、蔡邕傳「未二嘗解一―一、不二疑旅一者七旬」○襟は首をめぐり、帶は腰をめぐる。よりて山川のめぐりかこむに喩ふ。唐書、唐彌傳「懷州控レ河通レ運、襟帶二―一」杜牧詩「山河地―一」

【襟度】キンド　こころのうち。宋史、鍾若水傳「推レ誠待レ物、――豁如也」‖襟懷・度量。

【襟抱】キンパウ　○ふところ。韋表微文「納二願氣于一―一」○こころの世說「中郎―一未レ虛」杜甫詩「一生―一向レ誰開」‖襟懷・懷抱・襟裏。

【襟脰】キンまこころの源乾曜詩「安レ人在二動地一、保レ大歸二―一」

【襟鉄】キンテツ　えりと、たもとと。杜甫詩「人生意氣合、相與―一連」

【襜】クヮイ　卦　○えりの曾ツふ所（領窩）左、昭十一「衣有レ―、帶有レ結」○帶のむすびめ。說文「帶所結也」

【襩】㊀シュク　㊁トク　屋　㊀ながじゅばん（長襦）○短き衣。○こしまき（要衣）㊁つつむ（包藏）韜ツに入れる。禮、內則「斂簟而―之」

【襚】スキ　㊀
○きものを死人に贈る。禮、少儀、疏「一者以衣送死人之稱」又、其の衣。きゃうかたびらの類。○ひろく生存せる人に衣を贈るにもいふ。又、其の衣。西京雜記「謹上一三十五條、以陳踴躍之心」

【襜】セン　㊀
○車のとばり、車上の帷。○まへだれ、衣の前を蔽ふ服。詩、小雅「終朝采藍、不盈一一」○一幅は短きひとへもの。○一如は衣服の著たるさまのととのへる貌。○一一は衣などの動く貌。司馬相如、上林賦「拂一帷襳之一一」【倏如】シン　著たる衣の正しくととのへる貌。禮、郷飲「揖所二與立一、左右手、衣前後一一也」

【襠】タウ　㊁
○褲一ダウは胸と背とに當てて著る衣服、うちかけ、褲（衣部八畫）を見よ。○したおび、ふんどし（褻褲）褲一ダウの隱所に當る所の義。‖當「袴一」「褌一」○袴の内脇の處。

【襬】ヒ　㊁
○ふんどし（褌）‖犢鼻褌。

【襭】ケツ　㊁
○もと韠に作る
たび（足衣）くつした「羅一」

十四畫

【襚】クン　㊁
うすあかいろ（淺絳色）三たびそめたるあか。繡海「三染絳也」‖纁。

【襦】ジュ　㊁
○じゅばん、短きはだぎ。○一絆ジュバンは肌に親しくつけて著る單ヒトヘの短き衣。‖襯衣。【褌袴】コシュ　はだぎと、ももひきと。禮、内則「衣不二帛一一」【褌袖】シュ　はだぎのそで。唐書、車服志「婦人褌、不レ過二五幅一、曳レ地不レ過二三寸一、一一不レ過二一尺五寸一」

【襪】ビ　㊁
ふんどし（褌）‖犢鼻褌。

【襬】ラン　㊁
○線ヘをとらぬころも。○一樓ラウはぼろ、つづれ、一は古、藍に通ず。‖藍樓。【襤縷】ラン　ぼろのきもの、つづれ。揚子方言「南楚凡人貧、衣被醜弊、或謂之一一」

十五畫

【襭】ケツ　㊀
つまばさむ。衣服のつまを帶にはさみて中に物を入れる。詩、周南「薄言一之」

【襜】セキ　㊃
○ぬひとりせしえり（襴領）○おもて（表）あらはす、之を表明する。唐書、李晟傳「豈宜自表一」

【襲】シフ　㊁　通じて褶に作る
○おそふ、不意うちにする「一擊」「夜一」左、莊二九「凡師有鍾鼓曰伐、無曰侵、輕曰一」○其のまま掩ひて取る。孟、公孫丑「非義一而取之也」轉じて人の詩文などをぬすみとる「剽一」「鈔一」○あふ。あはす（合）○よる（因）もとのよ

十六畫

【襭】ハク　㊁
○袴一ハはあまぎ（雨衣）襪（衣部十二畫）を見よ。

ま「因ー」○かさぬ。かさなる（重）玉篇「重衣也」○いる（入）○うく（受・承）つぐ（繼）「世ー」○よそほふ。○きる、服する。司馬相如、上林賦「ー朝服」○かさねぎ、衣服を重ねて著る。禮、内則「寒不敢ー」○かさね、上下の衣の具はる義、ひとそろひの衣。漢書、昭帝紀「賜衣被一ー」○雜ーザフはごたごたこんざつする。漢書、嚴通傳「魚鱗雜ー、燦雲風起」‖雜沓。

同訓異字　襲・襲・繼・嗣・紹・紹・接・承・次・亞の別は續（一五〇七頁三段）の條を見よ。

【褒衣】イフ　きものをかされて著る。

【褒因】インン　うけつぐ、よりしたがふ。李光、雲臺碑「周氏舊居、維漢ーー」因襲・踏襲。

【褒ー虜】ホウオウ　敵の備なき不意をうつ。韓愈文「遂ニ驍騎一以ーレー」

【褒玩】グワン　衣服と玩好と。宋之問詩「ーー憧裕者」

【褒繼】ケイ　あとをうけつぐ。‖承繼。

【褒撃】ゲキ　おそひうつ、敵の備なき不意をうつ。後漢、袁紹傳「曹操遣ニ奇兵一ーニ紹運車一大破レ之、遂焚ニ其糧一」

【褒殺】サツ　不意にうちてころす。唐書、實建德傳「建德ーニ其軍數千人一」

【褒雜】ザフ　ごたごたと、いりまじる。王褒文「是以海内歡慕、莫レ不ニ風馳雨集、ーー並至、塡レ庭溢レ閭」‖錯雜。

【褒胙】ソ　華族が先代の牲位をうけつぐ。

【褒取】シユ　不意におそひて取る。孟、公孫丑「是集義所レ生者、非ニ義襲而取レ之也」‖掩取。

【褒速】シユクソク　重疊ナルして至る。宋書、符瑞志「禮レ乾統レ極、休符ーー」

【褒奪】ダツ　不意にうちて奪ひ取る。史、淮陰侯傳「項王已破ニ西楚一、ーニ齊王軍一」

【褒芳舍】ホウシヤ　㊀古、柴中の正寢舍の後方に在りし御殿の名、かみなりのつぼね。

【褒封】ホウ　諸侯が領地をうけつぐ。春秋胡傳「吉者諸侯、繼レ世ーレー」

【褒用】ヨウ　もとのままに用ひる。‖踏襲。

【褒來】ライ　敵兵がおそひきたる。

【襯】シン　㊥

○はだぎ、じゅばん、身に近き衣、衣の裏に在るもの。○襯じてちかづく（接近）したしむ。○表裏を相爲す義「陪ー」○ほどこす（施與）齊諧記「以ー衆物」

【襯衫】シン　前條に同じ。東京夢華錄「青罩ーー」

【襲】ロウ　㊥

もものひきのもの所、袴の兩股。

十七畫

【纖】セン　㊦

○小さき縞。○および、裡衣に結ぶ長き帶。○ーー纖は毛羽の衣の貌。張衡、西京賦「被ニ毛羽之ーー纖一」

【襴】ラン　㊤

○ひとへ（衫）衣と裳との連なれるひとへもの「ー衫」○國金ーンは錦の類にて綿に平金絲ヒラキンを加へて織りたるもの。

【襷】【國字】

たすき。勞作する時に、袖をからげるに用ふる紐。

十八畫

【襦】セフ　㊦

○かがむ（謙）○衣のひだ、しわ。衣の摺疊。

【襴】タイ　㊥

纔ーダイはひがさ（日笠）纔（衣部十畫）を見よ。

十九畫

【襼】ダイ　㊤

たもと（袂）潘岳賦「持裳連ー」

【襠】ケン　㊦

わたいれ（袍衣・綿衣）

【襲】シ　㊦

纖ーセンは毛羽の衣の貌。西京賦「被ニ毛羽之纖ーー」

【襷】ハン　㊥

ころものひも（衣系）俗に紐ーといふ。

【襷】リ　㊦

纔ーは毛羽の衣の貌。又毛羽始めて生じてけばだつ貌。韓愈詩「玄花著ニ兩眼一視レ物隔ニ纔纔一」‖纔纔・離纔・纔纔。

【纔纔】リ　毛羽の始めて生ずる貌。木華賦「毳纔ーー」皮日休、白鷗詩「雪

羽一一牛蒸ン泥」

廿一畫

【襯】 シン　㊥

○長きはだぎ（長襦）腰に連る衣。○衣と裳との上下つらなれるもの。

而部

【而】 ア　㊥

おほふ（覆）掩蔽する。

【而安】 府の名、漢に京兆といふ、明、一一府と改む。今の長安縣は其の治。

【而立】 中央亞細亞及び印度地方の稱。史記に一一傳あり。漢書、段會宗傳「一一敬二事國一」

【而郊】 ○版外又市外の四方にあるのべ。○秋の野邊。五行説にて西を秋に配當する故。凉の野を東郊といふの對。或、月令、以迎二秋於一一」

【而垓】 西域の異稱。晉、舜典「八月西巡守、至二于一一一」註西域。

【而音】 梵語アの異名。楊文公談苑「唐僧曰二一一一」

【而域】 四岳に同じ。佩觿「華山爲二一一一」

【而曲】 ○古、荊鄙地方に行はれし樂曲（古今樂錄）○西洋の音曲。

【而極】 ○四の最もはての國。漢書、地理志「天馬徠、從二一一一」○漢の武帝の烏孫國より得たる名馬の名。

【而樂】 西洋の音樂。日洋樂。

【而學】 ○周時代の小學校。漢書、賈誼傳「帝入二一一一」○西洋の學問。

【而瓜】 すゐくわ、地上に蔓延し球狀又楕圓狀の大瓜を結ぶ、青皮紅肉、味甘し。

【而京】 ○漢唐時代の長安、張衡に一一賦あり。○唐の至德二年以後の鳳翔府。○五代の唐の莊宗以後の太原。○遼の大同府。○圖 京都の異稱。

【而弦】 西洋の宗教、耶蘇教。

【而診】 西洋のことわざ。

【而湖】 浙江省杭縣にある湖水、湖畔なる孤山は林和靖の隱遁せし處。平湖秋月・蘇堤春曉・斷橋殘雪・雷峰落照・南屏晚鐘・柳院風荷・花港觀魚・曲院風荷・三潭印月・兩峯插雲の十景あり（明一統志）

【而國】 ○西のくに。圖 ○極樂淨土をいふ。○西方の國。又特に九州地方をいふ。

【而化禪】 宋人が唐の李商隱（義山）溫庭筠の詩の般に倣ひて作る詩體、西崑は周穆王が西の方崑崙山の瑤玉の府（古帝王の藏書の處といふ）に遊びし故事による、略して崑體ともいふ。

【而廂】 ○西のひさし側の小座敷。○一一記は元の王實甫の著したる人情小說、もと唐の元稹の會眞記に因りて演して傳奇としたるもの。

【而藏】 地名。チベット、四川省の西に在り、古の三危、漢の羌、唐の吐蕃の地、俗に圖伯特といふ。前藏・後藏の二部に大別す。

【而子】 西施に同じ。孟、離婁「一一蒙二不潔一、則人皆掩レ鼻而過レ之」

【而子湖】 西湖に同じ。蘇軾の詩に「若把二西湖一比二西子一、淡粧濃抹總相宜」とあるに本づく。

【而史】 西洋史の略。

【而施】 ○古の美人の名。拾遺記「一一越女、所ン謂西子也、有二絕世之美一、越王勾踐、獻二之吳王夫差一、莊、天運「一一病ン心而矉二其里一、其里之醜人見而美レ之、歸亦捧ン心而矉二其里一、其里之富人見レ之、堅閉ン門而不レ出、貧人見レ之、挈ン妻子一而去レ之走、彼知二美ン矉一、而不レ知二矉之所一レ以美一」○魚の名。東坡寶物志「魚有レ名二一一一者、以美人魚也、出二於中大海一、食レ之令二人善媚一」李商隱詩「期得一一一前二人一」

【而施乳】 河豚ノの腹中の白きところ、味最も甘肥、吳人甚だ之を珍とす。

【而周】 朝代の名、周の武王より幽王に至るまでの稱、鎬京に都せしによる。平王東遷して洛邑に都せし以後を東周といふの對。春秋、序「一一之美可レ尊」

【而人】 ○春秋時代、周の都の人をいふ。詩、小雅「一一之子、粲粲衣服」○宋時代、西夏の人をいふ。○

㊀西洋人の略。
【西廠】セイシャウ 明の憲宗の朝、宮廷内に設けし裁判所。宦官がほしいままに慘刑を施したるところ(明史、刑法志)
【西戎】セイジウ 西方の夷びすの。曲禮「東夷北狄ー(南蠻)」＝西域。
【西伕】セイタイ 日が西にかたむく。又、ひぐれ。伐旃文「邪臣忘ニ其ー一」
【西蜀】セイシヨク 今の四川省。史、李斯傳「ー一丹青不レ爲レ采」
【西垂】セイスイ 次條に同じ。
【西陲】セイスイ にしのはて。漢獻帝詔「當ニ定ー一、縣ニ旌高里ー」＝西垂・西邊。
【西陬】セイスウ 西の方のはなれ、隅は隅。
【西成】セイセイ 秋に物の成熟するをいふ。五行説にて秋は西にあたる故。書、堯典「平ニ秩ー一」白居易詩「見レ此令二人ー一、何必待ニー一」
【西清】セイセイ ○宮中に在る清く静かなる西方の殿、即ち小座敷(司馬相如、子虚賦、注)○清朝の宮廷内の一室、翰林學士の出勤せし所。＝南書房。
【西清古鑑】セイシンコカン 四十巻、清の乾隆帝の勅撰、内府所藏の古器を印刷せしもの、考證頗る綿密なり、西清は清朝の宮内南書房の別稱。
【西席】セイセキ 師の居る席、太公望が四面して武王に黄帝の書を教へたる故事に本づく(禮、學記、鄭注)
【西漸】セイゼン 次第に西方にすすむ。
【西僧】セイソウ 西域地方の僧侶(元史、世祖紀)
【西内】セイダイ 唐の大極殿をいふ。大明殿を東内といふの對。唐書、睿宗紀「徙ニ居二于ー一甘露殿ー」
【西大陸】セイタイリク 西半球の大陸即ち南北亞米利加をいふ。東大陸の對。＝新大陸。
【西端】セイタン 西のはし、西方のはて。
【西曙】セイチヨ にしの方にあるはたけ。又、秋のはたけ。陶潛、歸去來辭「農人告ニ余以二春及一將レ有ニ事二于ー一」
【西晉】セイシン 西洋の賢哲。
【西天】セイテン 支那にて印度を斥す稱。元史、輿服志「書ニー一呪語ー」
【西土】セイド ○西洋。○西方の國。○國支那をいふ。
【西都】セイト ○西京に對し、周の鎬京の稱。○漢の長安の稱。班固ニー一賦あり。其の故城は今の陝西長安縣の西北に在り。
【西方美人】セイハウノビジン 西方に居る美德ある人。詩、衛風「山有レ榛、隰有レ苓、云誰之思、ー一、彼美人兮、西方之人」
【西方淨土】サイハウジヤウド 佛三毒五濁の業なき世界、西方十萬億土の彼方にありといふ極樂世界。
【西伯】セイハク 周の文王をいふ。殷の紂王、文王に命じ、西方諸侯の長たらしめたる故(史、殷紀)
【西賓】セイヒン 師傅をいふ。隋書、禮儀志「君位在レ東、賓位在レ西」柳宗元詩「往年何事ゐニー一」＝西席。
【西風】セイフウ ○にしかぜ。○秋の風、五行説にて秋を西に配するが故。李白詩「八月ー一起」
【西母】セイボ 西王母の略。傅玄賦「ー一使ニ二星之靈禽ー」
【西溟】セイメイ 西の方の大うみ。＝西海。
【西銘】セイメイ 宋の張載(橫渠)の作りし書齋の西のまどにかかげし銘にて仁道の原理を明かにす。
【西門豹佩弦】セイモンヒョウのハヅルヲオブ 西門豹は戰國の魏の文侯の臣、性急なるが爲めに、柔かきなめしがはを佩びて自ら戒むる韓非、觀行「西門豹之性急、故佩ニ韋以自緩ー一、董安于之心緩、故帶レ弦以自急」
【西洋】セイヨウ 歐米各國をいふ。＝四土・泰西。
【西陸】セイリク 星の名。尚書「ー一、昴也」
【西旅】セイリヨ 西方の夷びすの國。柳宗元詩「旃裘越嶲雉、再返ー一雙」
【西曆】セイレキ 西洋のこよみ、基督の誕生後四年を以て紀元元年と定む。
【西王母】セイワウボ ○古の國名。即ち西戎。淮南子「ー一、在ニ流沙之瀕ー一」○仙人の名。列仙傳、漢元封元年、ー一降ニ武帝殿ー一、遺ニ蟠桃七枚於帝ー一」○桃の一種、碧星桃の異名。
【西寧】セイネイ 地名、佛領安南の首邑。＝柴棍。

【要】 三畫

㊀エウ ㊁エウ 平聲

㊀もとむ(求)「ー一求」孟、告子「修ニ其天爵ー一以ニ人爵ー一」○とる(取)○あはす、あつめる(會)禮、樂記「ー一其節奏ー一」○こしおび。＝腰。○おさふ(勒)○ちぎる、むすぶ(約)○ちぎり(約束)○論、憲問「久ー一不レ忘ニ平生之言ー一」○まつ(待)○しらべる、あきらかにす(察)書、康誥、傳「ー一察ニ囚情ー一」○さはり(勒)○かたくとどむ(堅止)ひきとどむ、さへぎる(遮遏)微に通ず。○おびやかす(劫)論、憲問「難ー一言ー一」君、吾不レ信也」○こし、古、腰に通ず。○一服は五服の一、王城を距ること千五百里外の地。○一妙は美好なる貌。㊁もと、かなめ「主ー一」「切ー一」「肝ー一」「亜ー一」「一道」書、宣帝紀「軍事大ー一有ニ五」○物事のしめくくり。○すべる(總)○ー害は地の險隘なる所。

同訓異字 要・求・索・干・需・須・徼・遮・覓等の別は求「一〇四六頁一段」の條を見よ。

【要説】ヨウセツ 面會をもとめる。‖干謁。
【要害】ガイ 地勢險隘にして、敵には害となり、味方にはかなめとなる所。賈誼、過秦論「良將勁弩、守ニ―一之處一」
【要港】コウ 軍事上重要なるみなと。軍港に次ぐもの。
【要項】コウ かなめなることがら。‖要件・要目。
【要義】ギ 大切なるわけ、肝要なる義理。‖要旨。
【要求】キュウ しひてねがひもとめる。楚辭「下垂釣於豁谷ニ兮、上ノニ―於仙者一」
【要近】キン 顯要貴近の地位。沈約文「頗蒙ニ―一」
【要緊】キン たいせつ。水滸傳「打開袋ニ―一」沒ニ―一は肝要なることなしといふ俗語。‖緊要・肝要。
【要具】グ 必要の道具、必要品。
【要區】ク 重要なる區域。
【要會】カイ 計算の義、月計を要、歲計を會といふ。周禮「聽ニ出入一、比ニ其―一」
【要克】コク 要服と、荒服と。王城より遠くはなれたる地。五服（六六頁三段）を見よ。典引「卓ニ乎方州一、淹ニ乎―一」
【要劇】ゲキ 肝腎の位地にありていそがはし。唐書、李逸吉傳「皆任ニ―一」孫逖文「或累登ニ―一、屢請ニ―一」

【要擊】ゲキ まちぶせしてうつ。漢書、匈奴傳「ニ―漢軍」兵書要訣「正正之旗、前後正治、不ノ可ニ要而擊」‖邀擊。
【要訣】ケツ かなめなる奥義。又、それを説きし書物。唐書、藝文志「隋高祖―一一卷」
【要結】ケツ 約束する。左傳「不腆先君之敝器、使下臣致ニ諸執事一、以爲ニ瑞節一、―ノ好命上‖約結・契約。
【要件】ケン ○すておきがたき用事。○必要なる事件。
【要言】ゲン ○約束する。左、僖二八「―曰、皆驕ニ王室一無ニ相害一也」○要を得たることば。世說、言語「平叔含ノ笑曰、可ノ謂ニ―一不ニ煩」
【要營】エイ 次條に同じ。
【要塞】サイ 敵軍の侵入を防がんが爲め、要害の地に築きたるとりで、砦は寨に同じ。疇、月令「孟冬備ニ邊城一、完ニ―一」‖要營。
【要斬】ザン こしを斬る刑。周禮、注「斬以ニ鉄鉞一、若ニ今―一」‖腰斬。
【要指】シ 重要なるむね、指は旨。漢書、司馬遷傳「乃論ニ六家之―一」‖要旨。
【要因】イン 四人をくはしくしらべて罪をきめる。書、康誥「ノ―聖念五六日」
【要人】ジン 顯要なる地位に居る人。魏徵、陳紀「我少年以來、與ニ―一多矣」韓愈、柳子厚墓誌銘「諸公ニ―一」

【要津】シン ○肝要なる舟のわたしば。○轉じて顯要の地位に喩ふ。古詩「何不下策ニ高足一、先據ニ要路津上」杜甫詩「賓從雜遝實ニ―一」
【要償】ショウ 損害のつぐのひを求める。
【要處】ショ ○大切なるところ。○かはや（廁）便所。胡應麟、甲乙剩言「不ノ能ノ不下爲ニ蠅蠅ニ―一掩ニ鼻耳」
【要衝】ショウ 肝要なるところ、衝は要所。杜甫詩「此邦治ニ―一」
【要樞】スウ 肝要なるばしょ。韋應物詩「萬古爲ニ―一、往來何時息」‖樞要。
【要請】セイ しひてもとめ乞ふ。‖要求・求請。
【要索】サク 必要にして缺くべからざる物事のもと。
【要道】ドウ 大切なるみち。孝經「先王有ニ至德一ノ―」
【要地】チ ○肝要の場所、要害の地。後漢書、荀彧傳「此實天下之ノ―、而將軍之關河也」○樞要の地位。唐書、房玄齡傳「玄齡身處ニ―一、不ノ言ノ權、善ノ始以終、此其成ニ令名一者、豈其然乎」‖要路。
【要衝】ショウ 要害なるおさへ、要害の地にある兵營。淮子舜文「定襄陵劇之至重、平城守國之ノ―一」
【要服】フク 五服の一、王畿を距ること四方一千五百里より二千里に至る地の帶。
【要妙】ミョウ 好き誤、妙は妙に通ず。楚辭、湘君「美ノ―兮宜ノ修」‖幼妙・要妙。
【要務】ム 肝要なるつとめ。史、叔孫通傳「諸生竟日、叔孫生誠聖人也、知ニ當世之ノ―一」
【要略】リャク 強力を以ておびやかしてちかふ。史、孔子世家「孔子曰、―也神不ノ聽」
【要目】モク ○條目。○會計。又、統計をいふ。○大切なる條目、かなめ、眼目。
【要門】モン もんにてまちうける。呂覽「秦師過ノ周、王孫滿ノ―而窺ノ之」
【要挾】キョウ 脅をまちぶせしてくひとめる、挾は抶・掐に同じ。
【要約】ヤク 約束をむすぶ。史、蘇秦傳「ノ―曰、諸侯有ニ不ノ如ノ約者一、以ニ五國之兵一共伐ノ之」
【要用】ヨウ ○かなめ、肝要。漢書、藝文志「凡百八十二家、删ニ取一―一、定著ニ三十五家一」○重大なる用事。
【要領】リョウ ○こし、くびと。呂覽、季秋「ノ―不ノ屬、首足異ノ處」○轉じて事のかなめなるところ。漢書、張騫傳「竟不ノ能ノ得ニ月氏ノ―一」
【腰ニ要領一】ヨウリョウ 腰斬の刑を蒙るの義。管子「幸以救ノ生、以―、臣之祿也」前條參看。
【要略】リャク ○要を取り、不要を略す。朱熹に「孟子ノ―一」あり。○文章・書などの大要をとりまとめる。
【要路】ロ ○肝要なる道すぢ。北史、李崇傳「充當士多ニ朝紫、崇乃村置ニ酵、湘君「美ノ―兮宜ノ修」‖幼妙・要妙。

一棟、棲息二一說、盜發之處、雖經亂離、四面諸村開ノ放、皆守二一一一」○顯要なる地位、大臣など。唐書、崔湜傳「丈夫當下據二一一以制ス人上、豈能默默受二制于人一哉」＝要地。

【要緩】ヨウクワン　ふちをもとめる。陸雲賦「彼貪夫之死ノ權ヲ、固遺ノ生以一ノ一」

五畫

【要之】ヨウ　圖　○とほし(乏)唐書、宋務光傳「公私一竭、戶口誠耗」○くつがへる。くつがへす(覆)「一覺」＝泛。

六畫

【覃】㊀タン　㊁エン　㊀寒　㊁鹽　㊀ひく、のぶ(延)詩、周南「葛之一兮」○およぶ。およぼす(及)「一智」「一遠」「一及」○ふかくひろし(深廣)「一思」㊁とし(利)よくきれる(劍)詩、小雅「以我一銛」

【覃及】タンキフ　ひきおよぶ。詩、大雅「一二一鬼方」(鬼方は地名)

【覃思】タンシ　ふかくおもふ。孔安國、尚書序「研精一一、博二考經籍一、采二謀羣言一、以立二訓傳一」

十二畫

【覆】㊀フク　㊁フウ・フ　㊀屋　㊁看　㊀くつがへる。くつがへす、ひっくりかへす「反一」○たふる。たふす(倒)易、鼎卦「鼎折二足一、一公餗」○かへる。かへす。＝復。○くりかへす、反復する。○ほろぶ(滅)やぶる(敗)敗北させる。李華、弔二古戰場一文「常一三軍一」○しらせ(報知)まうす。(白)「一函」○つまびらかにする(審)詳かに察する「一査」「一試」○かへって。㊁おほふ(蓋)孟、離婁「仁一天下」おほひ。○ふせぜい(伏兵)左、隱九「君爲二三一以待之」○かくす(隱蔽)○かばふ(庇護)○かぶる。かぶせる(被)

【覆按】フクアン　くりかへしてよくしらべる。漢書、元帝紀「今不良之吏、一一小罪二、微二召詣案一、與二不忠之事一、以妨二百姓一」

【覆考】フクカウ　二度くりかへしてしらべる。後漢書、周嘉傳「勳ノ燕因ノ家、守ノ國保ノ寃、詔遣二一一一」燕は嘉の父の名。＝覆校。

【覆校】フクカウ　くりかへしてしらべる。校は考。荀勗、讓二樂事一表「臣掌二著作一、又知二祕書一、二一錯誤二十萬餘卷一、不ノ可二倉卒一、復檢二他職一、必有二疑惑一」＝覆考。

【覆講】フクカウ　くりかへして講ずる。梁書、許懋傳「入二太學一受二毛詩一、旦領二師說一、晚而一一」

【覆啓】フクケイ　お返事を申す。＝復啓。

【覆檢】フクケン　かさねて十分にとりしらべる。宋史、食貨志「遣ノ官一一」

【覆巢無二完卵一】フクサウムクワンラン　くつがへりし巢の下には全き卵はなし。根本が亡ぶれば枝葉は從ひて亡ぶるに喩ふ。世說、言語「孔融被レ收、時融兒大者九歲、小者八歲、敵謂二使者一曰、冀罪止二於身一、二兒可レ得レ全不、兒徐進曰、大人豈見二覆巢之下、復有二完卵一乎」

【覆試】フクシ　再び重ねて試驗する。宋史、太祖紀「一一遣二士于講武殿一」

【覆舟之下無二伯夷一】フクシウノシモニハクイナシ　君子は危きに近よらざる喩。韓非、安危「奔車之上無二仲尼一」——」

【覆審】フクシン　○くりかへしてつまびらかにしらべる。＝覆檢。覆按。○上訴せし事件を裁判所にて更にしらべる。

【覆掌】フクシャウ　てのひらをひるがへす。事の易きに喩ふ。唐書、李翺傳「太平可二一一而致一」＝反掌。覆手。

【覆車之戒】フクシャノいましめ　前人の失敗を見て戒となす。潘岳、四征賦「追二覆車一而不レ寤」覆轍を見よ。

【覆手】フクシュ　覆掌に同じ。後漢書、桑虞傳「昭問二得失一、規對曰、今與二改善一政、易二于一一、而羣臣莫二肯正言一、伏願陛下容二受審直一」＝翻手。

【覆誦】フクショウ　くりかへしてそらんじむ。唐書、蘇瓌傳「一覽至二千言一、輒一一」

【覆水】フクスヰ　○こぼれたる水。○水をおほふ。水經、注「芙蓉一一、秋蘭被レ渥」

【覆水不レ返レ盆】フクスヰフカヘルボン　こぼれたる水はもとの盆に返らず。離縣せし妻は再び復歸する能はざるに喩ふ。拾遺記、太公初娶二馬氏一、誠レ書不レ事レ產、馬求レ去、太公對レ齊、馬求二再合一、太公取二水一盆一、傾二于地一、令二馬收一レ水、惟得二其濕一、太公曰、若能離更合、覆水定難レ收」

【覆姓】フクセイ　支那にて二字の姓。歐陽・皇甫・司馬の類。＝複姓。

【覆奏】フクソウ　よくしらべて申し上げる。晉唐書、太宗紀「初令二天下、決二死刑一必三一一、在京諸司、五一一」

【覆轍】フクテツ　かなへのもりものをくつがへす。宰相の其の任に堪へずして事を敗るに喩ふ。後漢書、謝弼傳、注「易曰、鼎折レ足覆二公餗一、鼎以喩三公、餗羹實也、折レ足一ノ一、言

ン不ン勝ニ其任一」

【覆墜】フクツイ　くつがへりおちる。莊、徐光符「天地ー一」柳氏家訓「成立之難如ン升ン天、一一之易如ン崩ン毛」

【覆没】フクボツ　くつがへりおぼれる。貫師泰詩「誰ン云ン見ニ一一一」誰復辨ニ倒懸一」‖覆沒。

【覆轍】フクテツ　車のくつがへりしわだちの跡。前人の爲したる失敗に喩ふ。漢書、賈誼傳「前車覆、後車戒」新論「欲能覺ン阪勉ン險、無ニ一一之敗一」

【覆敗】フクハイ　戰にまける。‖擊敗。

【覆翻】フクハン　ひるがへる。范成大詩「由來事成敗、只繫手一一」

【覆基】フクキ　俗にいふ蕁りし後の三日月の異稱。柳氏要覽「蕁後三日再往、謂ニ之一一一」

【覆舟】フクシウ　○船がくつがへりしづむ。説苑、杜瓊傳「於ニ孟津ニ試ン船、遂至ニ一一一」○轉じて戰に大敗する義とす。

【覆滅】フクメツ　くつがへりほろぶ。‖覆亡。

【覆輪】フクリン　圓鏡などの器の緣を金銀等にて覆ひ飾れるもの。‖被裝。

【覆壓】フクアツ　上よりおほひておしつける。杜牧、阿房宮賦「一一一三百餘里ニ隔ニ離天日一」

【覆育】フクイク　天地が萬物をおほひそだてる、天覆ひて地育す。禮、樂記「煦ニ嘔一ニ一萬物一」

【覆盛】フクセイ　酒を入れるかめをおほふ。著衣などの無用なるに喩ふ。晉書、左思傳「陸機與ニ弟雲書」曰、此間有ニ伧父ニ欲ン作ニ三都賦一、須ニ其成一當ニ以覆ニ酒甕一耳、及ニ思賦出一、機絕歎伏、以爲ン不ン能ン加」‖覆瓿。

【覆瞼】フクケン　眸をおほひかくす。瞼は眸。梁簡文帝、鏡臺賦「紅毛一ン一、翠鬢垂ン心」

【覆載】フクサイ　天おほひ地のす。轉じて、天地の德とす。周禮、小宰、疏「一一之德、其功光盛」

【覆蓋】フクガイ　心におほひかくす。大集經「從ン佛懺悔、不ニ敢一一」

【覆醬】フクシヤウ　醬油瓶をおほふ。著書の世に行はれずして反古となるにいふ。漢書、揚雄傳「劉龔使ン雄居ニ一一、受ニ其太玄法首一焉、劉歆亦嘗觀之、即ン雄曰、空自苦、今學者有ニ祿利ニ、然尚不ン能ン明ン易、又如ン玄何、吾恐後人用ニ一一瓿一也、雄笑而不ン應」瓿は小甕。‖覆瓿・覆ニ醬瓿一。

【覆照】フクセウ　おほひてらす。揚雄文「高明足ニ以一一一」

【覆蔽】フクヘイ　おほふ。中庸「辟如ン天地之無ニ不ニ持載一、無ニ不ニ一一一」‖蓋被。

【覆被】フクヒ　おほふ。宋史、紹興明堂樂章「一一一萬紀、寧ニ晃百王一」

【覆蔽】フクヘイ　おほふ。詩經、箋「蔽者爲ン蔀、蔀所ニ以一一一也」

【覆頭】フクトウ　かめのふたをする、覆盛を見よ。

【覆盛】フクセイ　○盆をふせる。又ふせたるはち。論衡「天與ン地無ン異、若ニ一一一」○ふせたる盆の中は暗し。晉書、郭璞傳「璞嘗ニ爲ニ人筮一一一」○ガイはちの古をくつがへす。大雨の形容。說文「雨皃雷雨一ン一」‖雨盆。

【覆盆子】フクボンシ　苺ボンシの異名。

【覆面】フクメン　○面をおほひかくす。又、其の爲めに用ふる物。○圖ブク神佛に物を供へる時、紙又は帛にて口鼻をおほふもの。

十三畫

【覈】カク　圓

○しらぶ(驗)實をあきらかにする。「綜ー」「檢ー」「考ー」「研ー」「審ー」「精ー」張衡、西京賦「何以ー諸」○はけし、きびし(深刻)「峭ー」○さね(實)果中の實。核と通ず。

【覈實】カクジツ　明らかにしらべて裁け用ふる。後漢書、虞詡傳「使ニ州郡ー一一良一」

【覇】霸(雨部十三畫)の俗字。

十七畫

【覇】羈(一五一八頁二段)の本字。

十九畫

【覇】羈(一五一八頁二段)の俗字。

見　部

【見】㊀ケン　㊁ゲン　眞霰

㊀みる(視)目に視て能く辨別する。中庸「視之而弗ー一」○のぞむ(望)○あふ(音見)「引ー」○みるところ。○かんがへる、おもふ(意識)「愚ー」「一地」「一解」「管ー」「淺ー」「意ー」○まみゆ「謁ー」「宴ー」「進ー」易、乾卦「利ー大人」○まみえしむ、紹介する。○すすめいたす(薦達)○らる、せらる(被)史、屈原傳「信而ー疑、忠而被謗」所ー爲ー受も同じ。韓愈、潮州謝表「所ー推許」柳宗元文「爲ー息嫉者、橫致ー辱吻」拾得詩「本來求ー解脫卻ー受ー縛縛」㊁まのあたり(目前)げんに、現の本字。○あらはる(顯露)○出仕する。論、泰伯「天下有ー道則ー」○あらはす(顯)○日出る。

見・現・顯・著・形・彙・覓・

表・彰・著。○見は音ゲン、かくれたる者が出て來る義、顯露の義なり。○現は見と音義同じ、現在は見在なり。○顯は光著、見也、明也などと註す、てり耀く程にあらはるるなり、高位高官に在る人を顯途・顯者などといふも、この義なり。○著は、あらはる、あらはす、いちじるしなどと訓む、明かに見ゆる義、著途・著姓などと運用す。○形は現也と註す、隠れたものの出現して、形の見ゆること。大學「誠二於中一形二於外一」○暴は日にさらす義なり、暴露とは、衣は日に照らされ、夜は露にうたれるをいふ、轉用して外へあらはし出す義とす。○顯はむき出しにする義。史記「暴レ兵露レ師、十有餘年」○表はうはがはへ出してあらはすなり。世說「謝之寬容、蹄表二於貌一」旌に似て用法廣し。○彰は一に章に作る、同じ、明也、著也と註す、物のちや紋様などの、明かに外に見ゆる義。書經「旌二別孔彰一」○旌は、はたと訓む、もと、はたを立てて功績を人に知らする義より轉用す。書經「旌二別淑慝一表二厥宅里一」

○見・視・親・覩・看・瞧・瞰・覩・覩・覩・覩・瞥○見はちょつと目にふれるなり、まみゆと訓むときは、對面の義。孟子「不レ見二諸侯一者、何義也」○視は氣をつけてみるなり、熟視・親察と用ふ、親は聽に對し、見は聞に對す、又親は、比也と註し、たくらべ見る義となる。○覩は親よりは一層念を入れてみるなり、又わきから見物するなり、みものとも訓む、壯觀・大觀の如し。○覩は一通り目を通す義、流覩・周覩・通覩などと用ふ。○看は手をかざして見るなり、又久しく守り見る義、看病の類。○瞻は仰ぎ視るなり「瞻二彼日月一」詩經「赫赫師尹、民具爾瞻」○瞰は俯して視るなり。○覩は見と同じくして、やや重し、睹に同じ。○覩は下の人が、上の人にまみゆるなり、朝覩の類。禮記「諸侯北面見二天子一曰レ覩」○覩は互に逢ひ見るなり。○覩は當テキ識見也。論語「私覩愉愉如也」○瞥はちらと見るなり。

○見・被・所の別は被(一七五二頁一段)の條を見よ。

【見一】ケン 圖珠算にて二桁以上の割算。

【見員】ケンイン 現在の人員。員は物の數。魏書、鄧恭業傳「館宇既修、生員闕構、每生一、足レ可二講習一」‖現員。

【見解】ケンカイ 道理を見て心に悟る。又、かんがへ(識力)林玉露「甘蔗之一一、頗得二其之工夫一」

【見堅】ケンケン 圖實地に就きて學問する。

【見識】ケンシキ 事のきざしを見て知る。事前に明察する識。易、繫辭「幾者、動之微、吉之先見者也、君子一レ而作、不レ俟レ終レ日」

【見機】ケンキ 前條に同じ。

【見金】ケンキン 現在手元にある錢。唐書、姚璹傳「一不レ足」‖現金・見錢。

【見外】ケンガイ 親て外人と爲して疏んずる義。搜神紀「願過二檢舍一、無二一一也」

【見口】ケンコウ 現在の人口。通鑑、齊紀「恒計二一一一」

【見在】ケンザイ まのあたり。金剛經「過去心不可得、一一心不可得、未來心不可得」‖現在・目前。

【見在佛】ケンザイブツ 僧侶が帝王を尊稱する語。歸田錄「宋太祖、初幸二相國寺一、至二佛像前一、問當レ拜否、僧縁贊寧奏曰、——、不レ拜二過去佛一」

【見參】ケンサン 圖おめにかかる。に拜謁。

【見レ笑】ケンショウス 笑ふ義、笑へば歯をあらはすが故。禮、檀弓「泣血三年未二嘗一一一、君子以爲レ難」

【見識】ケンシキ かんがへ。二種金書「無二他一一一」‖識見。

【見習】ケンシュウ みならひ、他人の爲す所を見て之を學習する。又其の人。

【見性】ケンショウ 圖もろもろの妄念を去りて眞の佛性を見窮める。傳燈錄「一一成佛」

【見證】ケンショウ 明かなるしるし(明效)推南子「仁者積恩之一一」

【見小】ケンショウ ○能く人の見難き所を見る義。老子「一一曰レ明」韓非子「賁子見二桑害一以知二天下之飢一、故曰、一一則明」○見る所が小さし。韓詩外傳「以レ管窺レ天、以レ錐刺レ地、所レ窺者大、所レ見者小」

【見錢】ケンセン 見金に同じ。漢書、王莽傳「元帝時、外戚貴子萬者少、故水衡少府一一多也」註「見在之錢也」

【見素】ケンソ かざりなき所を示す。老子「一一抱レ朴、少レ私寡レ欲」

【見卒】ケンソツ 見兵に同じ。史、張儀傳「一一不レ過二二十萬一而已」

【見存】ケンソン 圖書を讀む時に、本をのせる臺。

【見當】ケンタウ 圖あて、めあて、みこみ。

【見地】ケンチ ○自分のかんがへ、見識に同じ、其の程度に遠近高下の別あり、故に地といふ。○現在に有する所の地。皇甫湜文「山水之餘、即爲二一一一」

【見知之法】ケンチノホフ 吏たる者犯罪を見て知りながら檢舉せざる時は、其の官吏をも同罪に處する法、張鳳と張湯との定めたるもの「史、酷吏傳」

【見背】ケンハイ 人死して我に離れ去る義。親(父母)の喪をいふ。李密、陳情表「生孩六月、慈父一一」

【見物】ケンブツ 圖ながめる、遊覽する「東京一一」又其の人、見物人。‖觀客・看客。

【見聞】ケンブン 見ると聞くと。又、それによりて得たる學問智識。

【見兵】ケン 現在其の所に在る兵士。通鑑、唐紀「當分ニ一一一爲ス五番ト」‖見卒。

【見米】ケン 現在に積みてある米。呉志、華覈傳「州郡ニ一一」

【見錢】ケン 現在其の所にある兵糧。史、項羽紀「軍無ニ一一」

【見本】ケン 圖 實品などの金額を知らしめる爲めに示す一部分の物。‖圖貨標。

【見料】ケン 圖 其の物をみる代金。‖親資料。

【見說】ケン 見る、說は助字。見ならくと訓む。白居易詩「一一白楊堪レ作レ柱」

【少所見多所怪】スクナキトコロヲミテオホキトコロヲアヤシム 平生見る所僅き者は、あやしく思ふ物多し。牟子「一一、見二藏經一謂二誕妄一者」

【覓】 四 畫

覓（見部十三畫）の古字。

【規】 キ

俗に規に作るは非

㊀ぶんまはし、圓形を正す具、こんぱす。矩に不レ能成二方員一（員は圓）○圓形のもの、半一は半圓。○圓形をゑがく。○のり、おきて（法度）「一則」「家一」「官一」○ただし（正）○ただす、法を以て人を正す。書、胤征「官師相レ一」いましむ（誡）いさめる（諫）「一諫」○いましめ、いさめ。韓愈、送許郢州序「不レ以レ頌而以レ一」○はかる（謀度）○はかりごと（謀計）○のっとる。○ゑがく（畫）○かぎる（劃）○井田の四分の一。○子一ンは杜鵑のオス。○一魚は河豚の異名。㊁一はおどろき視る貌。又、自失する貌。莊、秋水「一一然自失也」

【規矩準繩】キクジュンジョウ 規、正圓。矩、方。準、水平。繩、直。董仲舒「貴の別は正（一〇八頁三段）の條を見よ。

【規爲】キイ はかる。禮記「其一一有二如レ此者一」

【規院】キイン 規戒清淨の地、禪院をいふ。王灣詩「滄林新聲入、一一小涼通」

【規誡】キカイ ただしいましむ。郭璞文「聞二善一則拜、見二一一一則懼」‖規箴。

【規行矩步】キコウクホ 行步の規矩にかなふ義、品行の方正なるにいふ。陸機詩「規行無レ曠レ迹、矩步豈遠レ人」

【規諫】キカン いましめいさむ。又いさめ。新序「好レ學智也、受二一一一仁也」‖規箴・規誡。

【規求】キキュウ いろいろと計りて貪りもとめる。左、昭二六「一一無レ度」‖貪欲。

【規銀】キギン 上海にて通用する銀、又、規元ともいふ。‖豆規銀。

【規矩】キク てほん。規はぶんまはし、矩は方をつくるさしがね。孟、離婁「一一方員之至也、聖人人倫之至也」員は圓。

【規矩準繩】キクジュンジョウ 規はぶんまはし、圓を正すもの、矩はさしがね、方を正すもの、準はみづもり、平をはかるもの、繩はすみなは、直を正すもの。孟、離婁「聖人既竭二目力一爲レ規矩一以レ之以二一一一」

【規訓】キクン ただしきをしへ。南史、王瑒傳「居家猶睦、每二誡時一親遺德及二近親一、敦誘二諸弟一、篤二其一一一」‖儀訓・箴訓。

【規海】キカイ ただしをしへる。曾鞏詩「相期在二一一一、庶以輔二疎頑一」

【規畫】キカク ○はかりごと。○はかる。森鴎、高帝論「陳平・張良、智之所レ不レ及、則高帝皆先爲二之一一處置一」‖規圖・籌度。

【規元】キゲン 規銀に同じ。

【規誡】キカイ いましめ、いさめ。徐幹詩「養生非二榮貴一、常語是一一」‖規誡・規諫。

【規準】キジュン のり、てほん、準はみづもり、平を正す具。陳章、水輪賦「輻輳必稱二乎一一一」

【規制】キセイ 一定の法則。

【規定】キテイ きめさだめる、確め規則を定めて以て行爲の標準と爲す。又其のさだめ。

【規程】キテイ さだめ、きまり。徐霞賦「豈使二入一關域一、方能知二彼一一一」‖規則。

【規天】キテン 天をいふ、圓形なるが故。盤銘詩「一一有レ光、矩地無レ疆」

【規圖】キト ○はかりごと。○はかる。蜀志「爲二智略耳目一一一益州一」‖規度。

【規那】キナ 南米に生ずる植物の名、葉は卵形、花は筒狀、樹皮は藥品規尼涅ネを含む。‖奎那。

【規範】キハン のり、てほん。孔安國文「所レ以脩二治正道一示二人主一以一一也」‖法式・模範。

【規畫】クワク　ただしたすける。北史、李賢傳「詔曰、念其―ー、功勞甚茂」
【規模】ボ　○のり。てほん。模はかた（型）。漢書、高帝紀「―ー弘遠矣」‖規事。○物のみま（ゝ）、構造「―ー宏大」
【規矩】キク　はかりごと。後漢書、百官志、注「高祖創業、務維―ー弘遠」
【規約】ヤク　さだめ。人人相互に訂する所の條約。‖規程。
【規律】リツ　紀律（一四四九頁）の誤用。
【規略】リヤク　はかりごと。魏書、郭祚傳「征討不ー息、內外ー―、誠爲二多事一」‖規畫。

【覓】ベキ　⑧

もとむ（求）さがしもとむる「一索」「一句」「一路」「一錄」
【通俗】爪に從ふ、爪にてかきさがしもとめる、不に從ひて覓に作るは非。
【同訓異字】覓・求・索・干・需・須・要・徵・邀等の別は求（一〇四五頁）の條を見よ。
【覓索】サク　士人が詩託して權門を求むる義。唐書、薛登傳「明詔方下、而已謁二驍府寺之庭一、出二入王公之第一、陳請希レ恩、委記奔レ競、故俗號二舉人一皆稱二ー―一」舞文を弄りていふ。
【覓レ句】クモトム　詩人が苦吟して句を求める。杜甫詩「ー―能知レ律」
【覓得】エル　もとめ得る。元稹詩「須臾ー―又連催、特勅二街中一許二燃燈一」ー―又連催、特勅二街中一許二燃燈一」

【覓】　覓（前條）の俗字。

五畫

【視】シ　⑧　通　又、眡・眎に作る

○みる、氣をつけて見る「注ー」「凝ー」「熟ー」「諦ー」「檢ー」○のぞむ、うかがふ。○明らかに察する「ー察」○あしらふ、とりあつかふ、もてなす（遇接看待）孟、離婁「君之ー臣如手足一○ならふ（效）手本としてならふ書、太甲「ー乃厥祖」○なぞらふ（比擬）くらべる（比）孟、萬章「子受ー地ー侯」○しめす。古、示に通ず。○をしふ（教）○明ー―は兎の異名。
【同訓異字】視・見・觀・覩・看等の別は見（一七七三頁一段）の條を見よ。
【視学】ガク　○天子が國學に幸して釋奠・養老の禮を行ふをいふ「禮、學記、疏」○學事を視察する官の名。
【視覺】カク　目の物を見るはたらき。‖視感。
【視官】カン　五官の一、目。‖視覺器。
【視察】サツ　實地に就き見てしらべる。
【視事】ジ　事を治める。左傳「雖子稱レ疾不ー―一」‖治事。
【視準】ジュン　望み見んとする物體の方向に望遠鏡の軸を平行せしめる。
【視神經】シンケイ　物を視ることを掌る神經、即ち眼球より腦髓に通ずる神經。
【視線】セン　目のむき、眼が見る物體に向ふ方向をいふ。‖凝視線。
【視體】シ　みる。禮記「入レ戶奉レ扃一ー毋レ回」‖瞻視。
【視息】ソク　眼にて物を見、鼻にて息をする、此の世にいきながらへる義。宋書、徐湛之傳「視然ー―、忍二此餘生一」‖生存。
【視端】シ　目つき正し。宋史、張洎傳「洎自レ幼行直ー―」
【視聽】チョウ　みると、きくと「ー―言動」
【視眺】チョウ　ながめみる。吳師道詩「花前三載閒、ー―猶宋レ璧」
【視レ朝】チョウ　天子が朝廷に臨みて政を視る。周禮「王ー―則前、正レ位而退、入亦如レ之」‖眡朝。
【視肉】シ　人の不學をそしりていふ。南華逸篇「人而不レ學、謂二之ー―一、學而不レ行、謂二之機蟲一」
【視養】シ　氣をつけてやしなふ。唐書、李密傳「賜二東帛一、勅二其家一曰、善ーニー之一」‖養視。
【視力】シリョク　目の見る力。‖目力・眼力。

【覘】セン　⑧　通　支

うかがふ（伺候）のぞく（窺見）そっと見る。揚子方言「凡相竊視自レ江而北謂二之ー―一」
【覘候】コウ　○さぐりみる。晉唐書、職官志「ーニー姦諂一」○敵のやうすを探偵する。‖偵候。
【覘望】ボウ　うかがひのぞむ。吳志、甘寧傳「ー―知レ之」

【覗】ベツ　⑧　俗

○さく（割）○ちらとみる、目にて暫く見る。‖瞥見。

六畫

【覜】テウ　⑫　通

○まみゆ、めみえす。周代、三年目毎に諸侯相會して天子に謁見せし儀式「聘ー」○ながめる、遠く視る。‖眺（一一二六頁三段）

【覛】ベキ　⑧　俗

みる、ながしめにみる（窃視）

七畫

【覡】ゲキ　編　かんなぎ。男のみこ「男ー」神明に事へて人の吉凶などを豫言する者。後漢書、張衡傳「或窮巫ー之言」(巫は女のみこ)

八畫

【覬】キ　サク　冏　覓　ケキ　ー一ケキは驚き惶れる貌の莊、天地「ー一然驚」

九畫

【親】シン　眞　○したしい。したしむ「和ー」「一睦」孟、離婁「愛人不ー、反其仁」むつぶ(睦)○めぐむ(惠)○いつくしむ、かはゆがる(愛)○ちかづく(近)したしみて近づける。○おや(父母)「慈ー」「老ー」「雙ー」○みより、みうち「一戚」「周ー」「近ー」六ーは父母兄弟妻子。○みづから(躬)自身にて。論、陽貨「一於其身」爲不善者」又、特に天子の事にいふ「一征」「一政」「一兵」「一耕」

補説　引親・自・躬の別は自(一五六七頁三段)の條を見よ。

【親愛】シンアイ　したしみいつくしむ。大學「人之ー其所ー一而辟焉」

【親近】シンキン　したしみてあつくする。唐書、婁師德傳「恩顧ー一、承ー間欲ー有ー開說ー帝儲ー垣戒使ー勿ー言」

【親友】シンユウ　心からしたしく交る友。戰國策「所ー信ー衣車ー者非ー一一則兄弟也」‖親朋・好友。

【親姻】シンイン　えんつづきの結婚によりて結ばれたる親族。

【親衛】シンエイ　天子の親兵。北史、婁仁基傳「仁基少驍武、便ー弓馬ー平陳之役、以ー一一從ー征、先登陷ー陣」‖親兵・禁衛。

【親閲】シンエツ　天子が自ら陸海軍隊を檢閲すること。

【親族】シンゾク　親族に同じ。

【親ー親者不ー敢慢ー於人ー】ハンタイヒトヲアヘテシンヲシンスルモノハアヘテヒトヲアナドラズ　親を愛する者は、其の心仁に篤し、故に他人を輕むことをなさず。古文孝經、天子章「子曰、——、敢ー親者、不ー敢慢ー於人ー愛ー敬盡ー於事ー親、然後德教加ー於百姓ー刑ー於四海ー蓋天子之孝也」

【親ー親】シンシンス　みよりの者をしたしくすること。盡心「ー一而仁ー民」

【安ー親】アンシンス　○親を安心せしめんために鄉に歸りて見舞ふ。歐陽修に「送田畫秀才ー一蔦州一序」あり。○親を安心さす。法言、孝至「孝莫ー大ー於ー一ー」

【親家】シンカ　親類に同じ。唐書、蕭嵩傳「嵩妻入謁、帝呼爲ー一ー」

【親好】シンコウ　したしみよし、なかがよし。北史、王誼傳「與ー共遊ー一序ー一、遂相ー一ー」

【親耕】シンコウ　天子が自ら耦田を耕すこと。穀梁、桓十四「天子ー一以共ー一粢盛ー一、王后親蠶以共ー一祭服ー一」

【親客】シンカク　○したしき賓客。○蟾蜍の異名「方言」

【親狎】シンコウ　したしみなれる。南史、張弘策傳「弘策與ー一建武帝ー一年相ー一、幼見ー一ー一、恒侍ー一帝游處、每ー入ー一室、常覺ー有ー一靈氣ー一體輒香然」‖昵狎。

【親貴】シンキ　○天子に親まれて貴き位にゐる。史、叔孫通傳「公所ー事者十主、皆面諛以得ー一ー一」‖親近貴幸。○天子の一門。晉書、荀晞傳「每ー一得ー一珍物ー一卽貽ー一都下ー一ー一」

【親舊】シンキュウ　○親故に同じ。親戚と故舊と。唐書、崔祐甫傳「帝嘗謂曰、人盲聰擬ー一官、多ー一ー一何耶、對曰、進擢者必悉其才行、如不ー一與聞知、何由得ー一其實ー一、帝以爲ー一然」○ふるなじみの者をしたしむ。魏文帝文「禮ー一賢ー一、帝王常務也」

【親近】シンキン　○したしみちかづく。韓非、說難「ー一不ー一疑」○親臣に同じ。

【親遇】シングウ　したしみもてなす。北史、崔子謙傳「雖ー一被ー一ー一而名位未ー一顯」

【親軍】シングン　帝王の親兵。唐書、兵志「乾寧元年、詔ー一諸王一閫ー一ー一」‖親兵・禁軍。

【親串】シンクワン　したしみなれる。又其の客。串は慣。謝惠連詩「聯翩布ー一ー一」‖親狎。

【親敬】シンケイ　したしみうやまふ。後漢書、來歙傳「光武甚ー一ー一之ー一」‖愛敬。

【親迎】シンゲイ　○結婚の六禮の一、壻が自ら嫁の家に至りて迎へ來る儀式。○親しく自ら出迎へる。

【親見】シンケン　したしくみる。後漢書、馬援傳「臣愚以爲、傳聞不ー如ー一、覩ー一不ー如ー一察ー一形ー一」百聞不ー如ー一見ー一」漢書、趙充國傳)

【親眷】シンケン　○みうち。親類姻戚。六朝の人、すべて此語あり。齊書、郡超傳「超性好ー一施、一日中散ー一與ー一親ー一ー一」

【親告罪】シンコクザイ　被害者又は其の親族の告訴によりて公訴となる罪。姦通罪の類。

【親裁】シンサイ　天子が自ら裁決すること。

【親后】シン　皇后が自ら蠶を養ふ。親耕參看。

【親臣】シン　したしく召仕ふけらい。孟、梁惠王「王無二一一矣」

【親信】シン　○親近して信任する。漢書、霍光傳「出二入禁闥一二十餘年、小心謹慎、未二嘗有一過、甚見二一一一」○親近して信任せらるる人。李商隱文「陛下平生、盡已委付、帳中一一、卽起二他謀一」

【親炙】シン　其の人に近づきて感化を受ける、親しく教化を受ける、親近薫炙、炙の正音セキ。孟、盡心「況於下一一之者乎」

【親手】シン　自らしたしく手を下す。范成大詩「雜角黃花一一栽」

【親書】シン　天子自ら御名を書す。

【親征】シン・セイ　天子自ら征伐する。書、甘誓序、疏「諸侯有扈氏叛二王命一、率レ衆一一之一」

【親政】シン・セイ　政をみづからする、天子自ら政をとり行ふ。

【親戚】シン・セキ　○みうち、親は內親、戚は外親。曲禮「兄弟一一、稱二其慈一也」○父母。大戴禮、曾子疾病「一一既沒、雖レ欲レ孝、誰爲孝」

【親切】シン・セツ　ねんごろ。朱子文集「未一一一」‖懇切。

【親接】シン・セツ　したしくまじはる。後漢書、宦者傳論「內外臣僚莫レ由一一、所二與居一者、惟閽豎而已」

【親能】シン・ノウ　天子自ら出征者にはなむけする。晉書、王濬傳「及二石勒侵二阜陵一、詔加二濬大司馬一、假二黃鉞一、出討レ之、軍次二江寧一、帝一一于郊一」

【親陣】シン・ジン　したしきと、うときと。曲禮「夫禮者、所下以定二一一一決二嫌疑一、別二同異一、明二是非一也」定とは近親と疎遠とによりて禮の別あるをいふ。‖親疏。

【親疏】シン・ソ　前條に同じ。

【親族】シン・ゾク　みうち、みより、緣者。‖親類・親戚・眷族・親網・族族・親屬（我國の法律にては六親等內の血族と、三親等內の姻族及配偶者との總稱、支那にては血族のみの稱）

【親屬】シン・ゾク　みより。禮記「六世一一竭矣」白虎通「天下太平、乃封二一一者、示レ不レ私也」‖親族。

【親率】シン・ソツ　○天子自ら衆に率先して事を行ふ。漢書、文帝紀「詔曰、夫農天下之本也、其開二籍田一、朕一一躬以給二粢盛一」○みづから兵をひきゐる。吳志、孫堅傳「一一二將士、施二設方略一」

【親知】シン・チ　したしきしりあひ。謝朓詩「浩蕩別二一一一」‖親友。

【親昵】シン・ジツ　したしみむつぶ。北史、田式傳「有二犯レ禁者一、雖二至一一、無レ所レ容貸一」

【親暱】シン・ジツ　前條に同じ。

【親長】シン・チヤウ　めうへ。范質詩「恰恰率二一一、不三敢生二驕易一」

【親展】シン・テン　○親しく會ひて心をうちあける。陸贄與二陸典一書「無レ因二一一一、書以盲レ心」‖會晤。○自ら書簡の封を開きて見る、多く書簡の脇付として受信人の自ら開封せんことを求むる意を示す。

【親等】シン・トウ　親族の親疎の等級。‖等親。

【親任】シン・ニン　○したしみ任用す、親近して信任する。後漢書、朱穆傳「甚見二一一一」○國天皇がしたしく其の官職を任命せらる、其の辭令書は御親署にして御璽をおされ、內閣總理大臣之に副署する。

【親不レ因レ媒】シンニンメイ　夫婦の親愛は媒妁に因らずして互に生ずるをいふ。韓詩外傳「晉桂因レ地而生、不二因レ媒而親一」

【親藩】シン・ハン　○君主にしたしき大名。○國德川時代將軍家のみうちの大名。水戸・尾張・紀伊など。

【親父】シン・フ　ちち。莊、寓言「一一不レ爲二其子一媒一」

【親扶】シン・フ　したしくたすける。北齊書、萬俟洛傳「一一上レ馬」

【親附】シン・フ　したしみつく。漢書、嚴助傳「近者一一、遠者懷レ德」

【親兵】シン・ヘイ　天子の自ら率ゐる兵、近衛兵の類。晉書、陳騫傳「賜二騫一一百人一」

【親廟】シン・ビヤウ　天子のおたまや、主として父より高祖までをいふ。漢書、韋元成傳「蓋聞明王制レ禮、立二一一四、祖宗之廟、萬世不レ毀」

【親母】シン・ボ　生母。禮記、疏「一一尙不レ服、庶母不レ服可レ知」

【親朋】シン・ホウ　したしきとも。北史、李元忠傳「國庭羅二種果一、一一非レ時、必遍遺二宴賞一」‖親友。

【親睦】シン・ボク　したしみむつぶ。易林「仁政獲レ民、四國一一」

【親密】シン・ミツ　○したしみあつし。○天子に親近する。吳志、吳五子傳「中庶子官最一一」‖親近密邇。

【親用】シン・ヨウ　したしみもちふる。親任して用ふる。漢書、賈捐之傳「又多二其材一、欲レ一一之、以レ故未レ擊」

【親樂】シン・ラク　したしみたのしむ。晉書、孫登傳「攜二一絃琴一、見者皆一一一之一」

【親隣】シン・リン　天子したしく其の場にのぞむ。後漢書、曹褒傳「與二當制度一、以二八月一發二長安一」

【親類】シン・ルイ　みより。魏書、崔亘傳子武奭傳「亘倫有レ姉、明惠有二才行一、憙眇二一目一、內外一一、莫レ有二求者一」‖親族・姻類・親屬。

【親和】シン・ワ　○なかよくする。‖親睦・親密・親好。○化學にて異種の物質が結合する。

【親王】シン・ワウ　○皇子及び皇兄弟をいふ。唐六典「皇兄弟皇子皆封レ國、謂二之一一」○國皇子以下皇玄孫までの男子の稱、五世以下は王。

【覩】ト　國 諸は古字　みる(見)易、乾卦「聖人作而萬物—」

同訓異字 覩・見・覩・観・看・覧等の別は見(一七七二頁一段)の條を見よ。

【覩】ユ　國

○こひねがふ。○覩—ユは身分不相應の事を得んとのぞみて其の機會をうかがふ。‖觀覩。

【覩心】シン　身分不相應の事をこひねがひのぞむ心。左、襄十五「能官ノ人、則民無二—一」註「無二覩覦以求一レ幸」

【覧】　覽(見部十五畫)の俗字。

十畫

【覩】キ　國 或は幾に作る　のぞむ、こひねがふ(希望)下の者が上のことをのぞみ願ふ「希—」「窺—」

【覩幸】カウ　こひねがひのぞむ。元史、仁宗紀「出二入內庭一、—二名爵一」‖希二覬徼幸一・窺幸。

【覩望】バウ　のぞむ。のぞみ。潘夫論「衣冠無レ所二—一」

【覩覦】ユ　望むまじき事をうかがひのぞむ。魏顯「—希望也」左、桓二「民服二事其上一、而下無二—一心一」註「下不レ貳二望于上一也」

【覩】コウ　俗 遘と通ず　○あふ(遇)思ひがけなくあひ見る(遇見・邂逅)「奇—」○あはす(合)

【覩閔】コウビン　うれへにあふ。親は遘。詩經「—レ—既多、受レ侮不レ少」集傳「覩見、閔病也、言レ見レ怒於衆妾也」

十一畫

【覲】キン　國

○まみゆ(謁見)古、秋季、諸侯が北面して天子にお目にかかるをいふ「入—」「朝—」○あふ(會見)○僅と通ず。

同字 見に從ひ、勤の省に從ふ、勤は謁見勤王の義。

【覲會】キン　諸侯が天子に謁見する儀式。儀禮「—レ、天子不レ下レ堂而見二諸侯一」

【覩】シュ　國 覩は俗字　うかがふ、ねらふ、伺ひ視る。唐書、張說傳「北寇—邊」古、狙に通ず。

【覩歩】ホ　○且つ行き且つ視る、視察しつつ巡行する。元稹詩「强梁御史人—」○探偵をいふ。

十二畫

【覩】カン　ケン　諫　刪　○みる(視)うかがふ。‖瞰。○まじふ(雜)‖閒。○人名、成—は齊の景公の臣。

【覩】ラ　歌 羅に通ず　覩は俗字　○好み視る鏡。○—縷はこまか(委細)詳かに言ふ。左思、吳都賦「嗟難得而—縷」‖羅縷。又、ついで(次序)

十三畫

【覺】㊀カク　㊁カウ　效 覺

㊀さとる(悟・解)迷を解きて智を開く、さとす(暁)さとり知らせる。孟、萬章「使先知—」後知—○さとり「正—」「淨—」莊、齊物「且有大—而後知此大夢」○さとれる人。孟、萬章「予天民之先—者也」○おほゆ、感ずる「—知」○あらはる「發—」○あきらか(明)明かにする。○なほし(直)○高く大いなり。詩、小雅「有—其儀」

㊁—玉・淨—は竝に佛陀の稱。㊂夢がさめる(醒)詩、王風「倘寐無—」さます。○圖 おぼえ、記憶する「—書」「—帳」

同訓異字 覺・悟・曉・曉・了○覺は寤なり、曉なり、目の覺めたる如く、知らぬことのさっぱりと、明らかになりたるなり。白虎通「學之爲レ言覺也、悟レ所レ不レ知也」○悟はわが心の迷がひらけて、目のさめたるやうになるなり、佛書に、頓悟・悟道などと用ふ。○曉は、さとすと調み、人に物を合點するやうにさとすなり。又さとると訓むときは、わが心によくのみこむことなり、論に同じ。○曉はあかつきの義、暗きを開き、明かにするなり。論語序「當時已曉二文義一」○了はさっぱりと、悟りをはるなり、了解・了悟などと用ふ。

【覺苑】カクエン　心に喩ふ。惠洪詩「——長開智慧花」

【覺海】カクカイ　佛教をいふ、海は其の教義の深廣に喩ふ。圓悟語文「投二心—一、東二遊玄門一」

【覺劍】カクケン　覺悟の力に喩ふ。能く邪執を破るによりて劍を以て喩とす。王勃文「揮二—一而破二邪山一」

【覺悟】カクゴ　○迷がさめてさとる。佛經

經「―一無レ惑」＝悟覺。○圓決心して用意す

【覺寤】カクゴ　夢をさます。又、さとす。さとる。史、項羽紀「倘不二―一一」＝覺悟。

【覺星】カクセイ　妖星の一。晉書、天文志「妖星三日三天掃二一名―一」

【覺醒】カクセイ　目がさめる。轉じて今までの迷がさめる。

【覺知】カクチ　さとり知る。知覺。

【覺羅】カクラ　滿州語、部落の名。轉じて姓氏とす、淸の顯祖の本支子孫を宗室といひ、其の旁支子孫を―一といふ。

【覺輪】カクリン　發性の圓融して息まざるに喩ふ。關尹子「修眞鍊圓、性通―一」

【覺書】オボエガキ　圓忘れざる爲めに記し置く書き附。

十五畫

【覿】テキ　國

○あふ(會見)覿(會見)を以て相見る。○まみゆ(謁見)○私―ンは一個人の資格にて私ヲに見る。論、鄕黨「私―愉愉如也」＝私面・私見。

【覿武】テキブ　たけき德を外にあらはししめす。周語「武不レ可レ覿、文不レ可レ匿―レ―無レ烈、匿レ文不レ昭」注「覿、見也」

【覽】ラン　國　覽は俗字

○みる(觀)「閱―」「游―」「衆―」○あまねく見る(周視)「博―」「洽―」「徧―」史、始皇紀「登二茲泰山、周―一東極」○遠く望む。

同訓異義　みる・見・視・觀・看等の別は見(一七七三頁一段)の條を見よ。

【覽揆之辰】ランキノシン　誕生日。屈原、離騷「惟庚寅吾以降、皇―二余于初度一兮」皇は皇考即ち父、覽は觀、揆は度。

【覽觀】ランカン　みる。＝觀覽。

【覽古】ランコ　古蹟を尋ねて古を思ふの意。唐詩「臨レ邊無二策略一レ空徘徊」李白「蘇武―一」の詩あり＝懷古。

【覽示】ランジ　しめす。史、大宛傳「―二漢富厚一焉」

【覽勝】ランショウ　勝れたる景色を觀る。王安石詩「―一倚二前簷一」

【覽照】ランショウ　ながめみる。

十八畫

【觀】㊀クヮン　㊁クヮン　㊂勸に通ず　英　佛

㊀みる(視)念を入れて見る(諦視)あきらかにみる(察)論、爲政「視其所レ爲、―其所レ由」○のぞむ(望)遠く見わたす「一望」○ながめる(眺)「一月」「一花」見物する。孟、梁惠王「吾何修而可レ以比二於先王之一也」○あそぶ(遊)○かんがみる(鑑)○あらはす(顯)○うらなふ(占)㊁しめす(示)人に見せる「一兵」○みえ(外見)「壯―」「美―」「奇―」○かたち(容儀)「容―」「儀―」○たかどの(樓臺)「樓―」○姓。○あつし(熱湯)○あそび(遊行)○かんがへ、意識「主―」「容―」○もの、城門のやぐら「樓―」「厝―」○宮門の左右のもの「兩―」「像―三輔黃圖「周置二兩觀一」以表二宮門一蓋之可レ以遠レ故謂之―」○かふのとり、古、觀に通ず。○道士の居るたてもの(道宮)「道―」○京―は尸を積みて土を其の上に高く封ぜしもの。左、宣十二「收二晉尸一以爲二京―一」○易の卦の名、坤下巽上。

同訓異義　みる・見・視・看等の別は見(一七七二頁一段)の條を見よ。

【改レ觀】カイカン　みちがへる、面目を一新する。北夢瑣言「朱溫盛禮郊迎、人士―レ―」

【觀音】カンノン　觀世音の略。唐人、世の字を諱みて―一と簡稱す、大勢至と共に阿彌陀佛の脇士にして勢至は智慧門を、觀音は慈悲門を司る「―一經」は法華經の普門品をいふ。

【觀音菊】カンノンギク　萩の異名。西湖志「―、天竺花是也、自二五月一開至二九月一、花頭細小、其花觀縱」＝胡蝶花。

【觀音堂】カンノンダウ　觀世音を祀れる堂。西陽雜俎「―、在二寺西北隅一」

【觀レ海】カンカイ　觀る所の大いなるに喩ふ。孟、盡心「孟子曰、孔子登二東山一而小レ魯、登二太山一而小二天下一、故觀二於海一者、難レ爲レ水、遊二聖人之門一者、難レ爲レ言」既に海を見れば、他の水流を見るも、水とするに足らざる感ありとの義。

【觀客】カンカク　見物人。＝看客。

【觀艦式】カンカンシキ　天子がみづから軍艦を一所にあつめて兵威をしめし見る儀式。

【觀機】カンキ　宮門の樓觀、門闕。琉球文「集二羽族於―一」

【觀レ覺】カンカクニアラズ　乘ずべきすきまをうかがひて闘る所あらんとする。左、宣十二「―レ而動」

【觀花】カンクヮ　はなをみる。楊萬里詩「已入二玉堂一同視レ草、更趁二瓊林一共―レ―」

【觀光】カンクヮン　○他國の文物光華を視察する。易、觀卦「觀二國之光一、利レ用レ賓二于王一」○轉じて他國の山水風

俗などを遊觀するにいふ「――團」

【觀感興起】クワンカンキヨウキ　目に見、心に感動して奮起する。宋史、禮志「是皆因二性自然一發二我觀感之一端一、盡心百世之下、聞者莫レ不二興起一也」

【觀劇】クワンゲキ　芝居を見物する。

【觀國之光】クワンコクノヒカリ　孔子が少正卯を誅門の閾の下にて誅したる故事によりて、天子が不正の臣を誅する義とす。漢書、王莽傳「當レ伏二――一、故レ子無二人之禍一」

【觀相】クワンサウ　人の容貌骨格を見て運命などを判斷する、人相見。‖看相。

【觀察】クワンサツ　精しく見てしらべる。孔叢子、記義「寡人之任レ國、無二小大一一自二――一之」

【觀察使】クワンサツシ　諸州を巡視して政事の良否をしらべる官の名。唐書、方鎮表「至德元載、置二――一」

【觀止】クワンシ　觀ることは此にて止む、他は觀るを要せずとの義。左、襄二九「――矣、雖レ有二他樂一吾不二敢請一也」

【觀視】クワンシ　あきらかにみる。漢書、郊祀志「長安城上之居、皇天所二――一也」‖諦視。

【觀自在】クワンジザイ　觀世音の別名、觀力自在の義。

【觀象】クワンシヤウ　○天文の現象を觀察する。晉書、魔術傳「――二貨物一」○易の占のおもてを見る。易、繫辭「聖人設レ卦――繫レ辭焉、而明二吉凶一」

【觀象臺】クワンシヤウダイ　天文家なり、北京に在り、明清時代、欽天監に屬す。

【觀色】クワンシヨク　かほいろをみる。莊子「雜レ之以レ處、以觀二其色一」

【觀星的】クワンセイテキ　俗　天文學者。

【觀世音】クワンゼオン　佛　菩薩の名、惡趣の化身と稱せらる、略して觀音ともいふ。千手觀音・馬頭觀音・十一面觀音・如意輪觀音などあり。楞嚴經「觀世音者、觀二世音音一圓悟應」之號也、於レ音音レ觀者、以二觀智一觀レ之、不下以二耳識一聞中之也」‖觀自在。

【觀戰】クワンセン　戰爭の有樣を見る。

【觀賭】クワンセン　みる。唐白文「南陽諸葛、幸屈二――一」李密物詩「――蔣樹逕、見二此洪流詩一」

【觀測】クワンソク　天文を觀て天體の運行等を測る。‖觀察測量。

【觀潮會】クワンテウクワイ　うしほを觀る會。月令廣義「八月十八日錢塘觀潮之會、最盛」

【觀燈】クワンドウ　上元の夜、燈火を見る。舊唐書、睿宗紀「景雲二年上元日、夜上皇御二安福門一――、由レ是內人一連二夜出一觀レ之」‖看燈。

【觀念】クワンネン　○感覺・知覺などの心の刺戟已に去りし後、留りて心に在る想像概念などの稱。○目をふさぎ氣をおちつけて一心に悟道を思念する。それが爲めに靜坐するを「――定坐」といふ。

【觀望】クワンバウ　去就を決せんために樣子を見る。史、信陵君傳「賈持二兩端一以――」

【觀榜】クワンバウ　標出せしふだを見る、試驗の成績の掲示を觀る。蘇軾聞賈「梁頴、狀元及第、謝恩詩「――レ一更無二閑官在一、到レ家惟有二子孫迎一」

【觀風】クワンフウ　他鄉の風俗人情を觀察する。禮記「命二太師一陳レ詩以觀二民風一」

【觀兵】クワンヘイ　兵威をしめす。左傳「――于周郊一」

【觀梁】クワンラク　見てたのしむ。莊子「其於二――一玩好一也、必命二之有一所レ由」

【觀蓮節】クワンレンセツ　長曆六月二十四日の稱、內觀月疏」

【觀者如堵】クワンシヤジヨト　見物人多くして牆壁の如く竝び立つ。晉書、衞玠傳「京師人士、聞二其姿容一、――」

十九畫

【觀】シ　紙　みる（視）‖觀。

角　部

【角】㊀カク　㊁ロク　覺　屋

㊀つの（獸角）象、大壯「羝羊觸二藩一其――」○すみ（隅）がど「屋――」「牆――」「稜――」「圭――」○兩線が一點に相合ふところ「銳――」「鈍――」○日――は額の骨。○さき（芒端）「頭――」○つのとり、獸の角をとりて生捕にする。左、襄十四「譬如二捕レ鹿、晉人――之」○くらぶ（較校）きそふ（競）「――逐」「――力」○――抵は相撲に似たる戲の名。○はかる（試）○あけまき、小兒の髮の結び方、髮を左右に分けて角に似たる故「總――」○ます（枡）支那の四升を容れるもの「升――」○さかづき（杯）○軍中にて用ふる樂器の名「銅――」「號――」「吹――」○五音の一「宮・商・――・徵・羽」管子「凡聽――、如雉登木以鳴、音疾以遠」○すぼし、二十八宿の一「――宿」○支那の貨幣の稱、一元の十分の一、一は凡我が拾錢位。㊁人名、一里先生は商山四皓の一人、角、訛りて角に作る。圖○方形の義。○こぐちの方形なる材木。○將卒の勵の一「一行」○他人と和合し難き性癖「――が有る」

【角抵】カクテイ　彼の藝を以て名ある者をいふ、角は藝を較べる義。晉樓集

「連枝秀、姓孫氏、京師一―也、酒酣則自起舞」單に角ともいふ「名角」

【角掎】カクキ つのとり、あしとる。左、襄十四「譬如ㇾ捕ㇾ鹿、晉人角ㇾ之、諸戎掎ㇾ之」

【角巾】カクキン かどのあるづきん、隱者のかぶりもの。晉書、羊祜傳「既定ㇾ遼事二留ニ―一東路陽二故里一」高適詩「臣閭有二―一」

【角弓】カクキウ つのにて飾れる弓。詩、小雅「騂騂―一」

【角弓鉤】カクキウカウ 詩、小雅の角弓の章に本づきて、君王の怪人を近づけて、宗族を親まず骨肉相怨むのそしり。魏志、陳思王傳「仁及二草木一、則行草之詩作、恩澤衰薄、則角弓之章刺」

【角距】カクキョ 牛のつのと、雞のけづめと。

【角冠】カククワン 道士の冠。王建、贈二王屋道士一詩「戒瑠頭簪白―一」‖道冠。

【角材】カクザイ 〇はたらきをはかる。漢書、賈誼傳「陛下之與二誦公一非ニ親ㇾ一而臣ニ之也」〇図こぐちの方形なる材木。

【角脚】カクキャク みみづく。‖木菟・鵂鶹。

【角黍】カクショ ちまき。蘆葦にて包みて角の如し、故にいふ。風土記「端午烹ㇾ鵝蒸二筒粽一、一名―一」‖粽子・糉。

【角色】カクショク 図娼優の名ある者の稱。色藝をくらべて他より優る義。‖名角。

【角座】カクザ 軍中にて用ふるつのぶえのこゑ。杜牧詩「百感中來不二自由一、―一孤起夕陽樓」

【角閃石】カクセンセキ 火山岩中に在る一種の礦石、褐色又は綠色の長柱狀の結晶を爲す。

【角ㇾ智】カクチカラフ ちゑをたたかはす。漢書、仲長統傳「―ㇾ者皆竭ㇾ力者負」‖競智。

【角逐】カクチク 互にあらそひて逐ひかける、競爭驅逐する。戰國策「罷二軍首二而驚二馬服一與ㇾ秦―一」

【角枕】カクチン つのにて飾れるまくら。詩、唐風「―ㇾ粲兮、錦衾爛兮、予美亡ㇾ此、誰與獨旦」

【角抵】カクテイ すまふ、抵は當る、兩兩相當りて力をきそふ。漢書、武帝紀「三年春、作二―一戲一」‖角觝・觝抵。

【角觝】カクテイ 前條に同じ、觝は抵。

【角笛】カクテキ つのぶえ、牛角にて造るが故に唐書、儀衛志」

【角度】カクド 二直線が交叉して成るあきの開き、圓の周圍を三百六十分したる其の一を一度とす。

【角帽】カクバウ 〇かど立てる帽子。續書、癡唐傳「其俗兄弟共二一妻一、夫無二兄弟一者、其妻數二―一、若有二兄弟一者、依二其多少一數加ㇾ角焉、衣服類加二纓絡一、頭皆覆髮、其語與二蝙蝠高車及諸胡一不ㇾ同」〇図帽子の頂の方形なるもの、大學生の制帽。

【角膜】カクマク 眼球の白目ノの皮膜「―ㇾ炎」

【角面堡】カクメンホウ 多角形の堡壘。

【角膺】カクヨウ くまたか。本草「鷹以ㇾ胸擊、故謂二之鷹一、其頂有二毛角一、故曰二―一」

【角力】カクリョク 〇ちからをくらべる。ちからくらべ。禮記「講ㇾ武習二射御一ㇾ―ㇾ」角抵參看。〇図スマフ角抵・相撲。

【角列】カクレツ かどだちてつらなる。柳宗元、小邱記「其衛然―一而上者、若二蓮花之菡萏於山一」

【角樓】カクロウ 城の隅に在るやぐら。城上の望樓ともいふ。宋史、禮志「御二東華門及東西―一」

【角里先生】カクリセンセイ 漢の四皓の一。黃暐錄「――、角音祿、今多以二變音一呼、誤也」

【角】 二畫

角（前條）の㊁の誤用。

【觔】 二畫

㊀筋（一四一四頁三段）に同じ。淮南、道應「良馬者、可以形容―骨相也」㊁俗に斤（八二九頁一段）に通用す「一兩」

【觖】 四畫

㊀ケツ 屑 キ 質 ㊁キ 紙

㊀かく。‖缺。〇うらむ、望む所に滿たずして怨む、不滿足に思ふ。〇かかく、あばく（抉）「摘―」後漢書、孫寶傳「故欲摘―以揚我惡」㊁こひねがふ（冀）

【觖如】ケツジョ 心に滿たざる貌。淮南、繆稱「爲無二廢功一無二廢財一、自視缺―也」

【觖望】ケツバウ 〇のぞむ所にみたずして怨む。不平に思ふ。史、刺客世家「獨此尙―」‖怨望。〇ケツバウこひねがひのぞむ。史、循吏傳「齊三桑弘―」‖冀望。

【觚】 ン 觚と別

〇あふ（合）〇さかづき。‖觶。

【觝】 ㊀ソ 遇 ㊁ソ 虞

㊀あらし、物が精しからず、粗・麤に通ず。㊁ほぼ、おほよそ、あらまし（大略）漢書、敘傳「―舉二條職一」注「―粗略也、大略也」

【觚】 五畫

コ 虞

○さかづき(酒器)二升(我が一合八勺弱)を容れるものにて古は稜ありしといふ。論、雍也「一不ㇾ一」○しかく(方形)○かど(稜)史、酷吏傳「破ㇾ觚爲圜」○つか(劍拇)○ふだ、古、文字を書するに用ひし方形の木札。陸機、文賦「或操ㇾ觚以率爾」○のり(法)○ただし(方正)

【操ㇾ觚】ソウコ　簡策をとる。轉じて筆を執りて文を作る。字解參看。柳宗元文「宗直善ㇾ觚ㇾ翰」

【破ㇾ觚斲ㇾ雕】ハコテンチョウ　繁雜なる法律を省きて簡約にする。觚に方形、雕は彫刻、かどだちたる酷刻文實にし、厳密なる規則を廢る義。史、酷吏傳「漢興、破ㇾ觚而爲ㇾ圜、斲ㇾ雕而爲ㇾ樸」

【觚不ㇾ觚】コフコ　觚は鄕飲酒に用ふるさかづき、古は稜ありしが後世は稜なし、名のみありて其の實なきをいふ。論、雍也「――、觚哉觚哉」

【觚竹】コチク　古の北荒ハクの國【國名】‖孤竹。

【觚牘】コトク　文字をかきしるす木札。轉じて書物をいふ。柳宗元、陸文通墓表「秉ㇾ二一ㇾ觚二墨一」‖簡・簡策・翰札。

【觚稜】コリョウ　殿堂の最も高くとがり出てたるかど。班固、西都賦「上ニ一ㇾ而棲ニ金爵一」‖觚稜。

觝 テイ 齊

○ふる(觸)‖抵。○角ーカクはすまふ。‖角抵。

【觝觸】テイショク　ふれさはる。周禮、注「觸ニ謂ニ所ㇾ以令ㇾ己不ㇾ得ㇾ二ニ人一一」

【觝掉】テイトウ　ふれておしのける、拒絶する。韓愈、進學解「一ニ一異端、攘ニ斥佛老一」‖拒絶。

觖 六 畫 キュツ 質 ケツ 屑

○ふる(觸)‖抵。○角ーカクはすまふ。‖角抵。

【觖望】キボウ　不滿の望。史、淮陰侯傳「漢王ㇾ一ㇾ衣ㇾ我、推ㇾ食食ㇾ我、言聽計用」莊子「一ㇾ一ㇾ壁薄」注「壁薄、猶ニ蚤虱一也」‖脫衣。

【解ㇾ圍】カイイ　敵のかこみを解く。晉書「王凝之弟獻之、曾與ニ賓客一談論、詞理將ㇾ屈、道韞遣ニ婢白ニ獻之一曰、欲ㇾ爲ニ小郎一ー、乃施ニ青綾步障一自蔽、申ニ獻之前談一、客不ㇾ能ㇾ屈」

【解維】カイイ　解纜に同じ、維は舟を繋ぐ索。‖朱熹詩「一ー春雨外」‖開帆。

【解ㇾ頤】カイイ　○おとがひをとく、大いに感服し口を開きて自失せしむる義。漢書、匡衡傳「匡鼎來說ㇾ詩、解ニ人頤一」○口を開きて大いに笑ふ。蘇軾詩「京岡自携ㇾ手、同途欵ニ一ー一」‖脫頤。

【解由】カイユ　○宋代官吏の赴任に關する公文書(「癸辛雜識」)○圖ユ古、國守交替の時、前任者が後任者(事務引繼に關する文書を交附するをいふ。

【解慍】カイン　いかりを解き和げる。家語、舜、南風歌「南風之薰兮、可ニ以解ニ吾民之慍一兮」

【解額】カイガク　舉人卽ち鄕試に及第せしむる者の總ての數。小學、外篇「損ニ一ー一以去ニ利誘一」(損は寔)

【解渴】カイカツ　のどのかわきをなほす。方言、解ㇾ列なり、刀を以て牛角を列かつ會意、俗に解・解に作るは非。

す、講義する「一說」「一義」○わく、わかつ(判)○ゆるむ(緩)舒緩なり。○へだつ(間)○はなす。はなる(離散)ばらばらになる、人心が離散する。漢書、張耳陳餘傳「恐天下一ー也」○ぬぐ(脫)○ゆるす(免)漢書、孔光傳「於ニ法無一所一」○いひわけする(分疏)○とほる。とほす(達)○けづる(削)○ひらく(開)○結ほれたるをほどく「一紛」○たひらぐ(和睦)なかなほりする。○樂曲、又、古詩の一節「一一」「二一」○易の卦の名、坎下震上。○しる、さとる(曉)○文の一體。文體明辨「一者釋也、因ニ人有ニ疑、而解釋之一也、揚雄始作「嘲ニ世遂倣之一」○かに。‖蟹。○澥に通ず。○蠏に通ず。(三)さとる(曉)「曉一」○物が自然に解け散る。○おこたる。‖懈。○あふ、一后は邂逅に同じ。‖邂。○やくしょ。‖屬。○やる(發遣)○發ーカイは州縣の學徳の秀でたる者を都に送り出して試驗を受けさす。轉じてすべて物を送り出す(一編は兵糧を送る、一犯は犯罪人を護送する類)

四詩「四瓜足レ一レ、割裂膏腴膚」【解頤】カイイ　よろこびわらふ。列子、黄帝「五年之後、夫子始一レ一而笑」【解義】カイギ　意義をときあかす。論語一レ一、何晏、郭象傳「先レ是注二莊子一者数十家、莫三能究二其旨統一、向秀於二舊注外一、而義二一レ一、妙二演奇致一、大暢二玄風一」＝釋義。【解職】カイショク　やくをやめる、解職に同じ。諸葛亮詩「一レ一在二蓬平一」李善注「一レ一去レ仕也」魏は金剛。【解憂】カイユウ　かはごろもをぬぐ。後漢書「見二其寒一、一レ一而衣之」＝脱裘。【解巾】カイキン　仕官する、出仕する、幅巾は隠者のかぶりもの、それを解くと義。後漢書、韋義傳「詔書通切、不レ得レ已一レ之レ郡」＝辞褐。【解紐】カイチュウ　衣のえりをうちひらく、容儀を正さずしてくつろぐ。蘇軾詩「一一頭巾易二角巾一、解剣看歌長鋏一レ鋏」【解禁】カイキン　いましめをとく、禁止せしをときてゆるす。後漢書、皇甫嵩傳「解二黄巾一」【解環】カイカン　連りたる環を解きたる故事によりて、難き問題を解く義とす。戦国策「秦昭王使二使者遺一二后玉連環一曰、齊多知解二此環一不、后以示二羣臣一、羣臣不レ知レ解、后引レ椎擊レ破之、謝二秦使一曰、謹以解矣」【解嘲】カイチョウ　さとる。＝暁解。【解決】カイケツ　もめたる事がとける。【解元】カイゲン　郷試即ち官吏登用試験の予備試験に首席にて及第せしもの。明珠載「郷試中レ頭、名曰二一一一、又曰二解首・領解・拔解・發解一」＝解頭。【解道】カイドウ　罪人などをときはなつ。晉書、樂廣傳「既即便一一」【解隊】カイタイ　敵すでに退きて兵のそなへをゆるべる。正字通「斂退稍弛レ備、曰二一一一」【解悟】カイゴ　さとる。潘佳子「一切弟子衆、皆聞即一一」＝領会。【解詁】カイコ　古言の意義をときあかす。後漢書、何休傳「休作二春秋公羊一一一」＝釋詁。【解屨】カイク　解脱に同じ。【解骨】カイコツ　人人離散する。岡語「忠臣一一」＝星散。【解語花】カイゴカ　昔語の通ずる花、美人の稱。天寶遺事「太液池、千葉蓮開、明皇與二妃子一賞、指二妃子一謂二左右一曰、何如二此一一耶」明皇は玄宗、妃子は楊貴妃。【解説】カイセツ　精選おとした解釈、今人久節、素、面其観若二隣設一酒肴之具一以相饗熟、名曰二開筵一、於レ理合レ曰二一一一、此風已見二六朝一」【解除】カイジョ　ものいみをときやめる。【解裘】カイキュウ　たびの支度をとりのぞく、休息の義。顔延之賦「一レ一息レ甲」【解散】カイサン　○人人がばらばらになりてそむき去る。○分れ離れる。孔安國文「天下學士、逃レ難一一」○會合をやめる。○議會にて任期中の議員の資格をときさる。【解弛】カイシ　とけゆるふ。漢書、賈山傳「臣恐朝廷之一一」＝弛解。【解事】カイジ　事を聴ける。杜甫詩「小兒強レ一レ」【解式】カイシキ　運筆の順序を一定の記號方式によりて記せしもの。【解金】カイキン　○ときゆるす。管子「是故上必寛裕而有二一一一」＝釋放。○やくしょ。商君書「高二其一一一」＝解舍。【解釋】カイシャク　○とく、消す。太玄外傳「一二一春風無限恨、洗香亭北倚二闌干一」○ときあかし。＝解説・解義。【解組】カイソ　組は印綬、それをとくは官を辭む義。孟應物詩「一レ一歸二園林一」＝解綬・挂冠・致仕。【解題】カイダイ　書物の題目の解説。即ち著者、巻数、來歴及び内容のときあかし。【解頤】カイイ　○人人はなれ噺く。左傳「四方諸侯、其誰不二一一一」○身體を解きわける、かいぼうする。【解道】カイドウ　人の言ふことを聞く、轉じて用ふる語、道は言。李白詩「一一流江清如レ練」＝開道・開説。【解嘲】カイチョウ　人のあざけりを辨解する。揚雄の一一といふ文、嘲文章號也に載す。＝解調。【解蔣】カイショウ　荷が生長して花と落し実る。元稹詩「新菱繞一レ一、寒色已青葱」【解行】カイギョウ　説明してこたへる。こたへ。【解組】カイソ　はだをぬぐ。晉書、王羲之論「若乃一一登レ枝、裸形飛レ淵」且レ此詞レ連、謂二之高致一、輕毒是非、風流遠及」【解紐】カイチュウ　結びしひもがとけ解きむ。政治の亂れるに喩ふ。千寶、晉紀總論「名實反錯、天網一一」【解註】カイチュウ　書物の意義のときあかし。荀悦文「大司農鄭衆・侍中賈逵、各爲二春秋左氏傳作二一一一」＝注解。【解脱】カイダツ　○さっぱりとのぞく。易林

「憂患ー」、喜重慶來」○ときのぞく、やめる。
【解停】カイテイ　さしとめたる事をときゆるす。‖解禁。
【解醒】カイセイ　酲ココロをさます。晉書、劉伶傳「天生ニ劉伶ー以ー酒爲ー名、一飲一斛、五斗ー醒」
【解頤】カイイ　州の試験に、第一等にて及第するをいふ。北史類苑「黄魯直傳「洪州ー一起ニ貧試ー」全唐詩話「京兆ー一」‖解元。
【解任】カイニン　其の職務をやめさせる。‖解職。
【解放】カイホウ　ゆるしはなす、束縛をときてはなし遣る。‖釋放。
【解帆】カイハン　ふなで、出帆する。‖解纜・解纜・開帆。
【解紛】カイフン　もつれをとく。史、魯仲連傳「所謂貴ニ於天下之士ー者、爲ー人排ー患釋ー難ー而無ー取也」
【解弁】カイベン　くみたる頭髪をとく。唐書、吐蕃傳「天子爲御ニ延喜樓ー臨ニ觀ー、ー訖、ー畢ー易ー服」
【解剖】カイボウ　○動物の身體を解きて組織をしらべる。○物事を細かに分けしらべる。
【解明】カイメイ　ときあかす。‖說明。
【解免】カイメン　○いひぬける、まぬかれる。史、老莊傳「雖ニ當世宿學ー不ー能ニ自ー一也」○職を免ぜられる「唐書、明皇紀」
【解悶】カイモン　しんぱいをはらす。悶は憑。白居易詩「秋館清涼日、書閑ニー一看」‖遣悶・排悶・散悶・釋悶・消悶。
【解纜】カイラン　艫ヘサキにひまを出す。‖解纜。
【解禮】カイレイ　ふねのともづなをとく、出帆する。任昉詩「ー一將ー長吟」‖開帆・解纜。
【解夏】ゲカ　僧が夏安居ゲアンゴの制を解きて出堂剃髪に入るをいふ。夏解ゲゲに同じ。夏は夏安居の略語。續高僧傳ー一注「四月八日結夏、至ニ七月十五日ー解、衆生長養之節、在ー外恐ー傷故ー不ー出ー」故九十日安居」
【解脫】ゲダツ　○圓生死の迷苦を脫し得て佛の道を悟る。卽ち無拘・無礙・自在の調なり。法華經「念ー彼觀音力、釋然得ニ一ー」○ゲダツときはなしてゆるす「史、酷吏傳」
【解脫門】ゲダツモン　人欲をはなれたる佛道のさとり。法苑珠林「若主入ー此門、卽入ニ一ー」
【解脫繩】ゲダツジョウ　圓袈裟ケサをいふ、——の法衣ホフエ袈裟は解脫を求むる佛道修行者の標識なるが故。
【解毒】ゲドク　毒けし。藥にて體内の毒をけす「ー一丸」
【解熱劑】ゲネツザイ　ねつさまし、ねつをさます藥。

【觥】クワウ　庚　もと觵に作る

○さかづき、兕牛ジギュウの角にて作りし支那量の七升(一說五升)を容れる大杯「兕ー」○大いなり、ー羊は大羊。○ー一クワウクワウは剛直ナホシなる貌。後漢書、郭憲傳「關東ー一郭子橫」
【觥籌】クワウチウ　さかづき。孔平仲詩「左手把ニ玉肩ー、右手進ニ一ー」
【觥船】ヒセン　大いなるさかづき。杜牧詩「ー一一棹百分空、十載青春不レ負レ公」‖大白。
【觥籌】クワウチウ　勝負を爭ふ杯の數とり。陽修、醉翁亭記「ー一交錯、坐起而喧譁者、衆賓歡也」
【解禁獄】クワウゴク　甚だしく酒を強ひられる困苦をいふ。晉書、鍾雅「荊南面判單天粹、性耽レ酒、日延ニ親朋ー、強以ニ五杯ー、多致ニ狼狽ー、時歲酒日、單家酒甕、乃ー一也」
【觥飯】クワウハン　觥は大、大飯は盛饌をいふ。越絶書「ー一不レ及ニ盛饌ー」飢ゑて虚しく盛饌を待つは粗食の飢を救ふの拙きに及ばず」

【觜】ケン　先　厳

○曲りたる角。○まく(捲)

七　畫

【觫】キウ　尤

○角のまがれる貌。詩、小雅「兕觥其ー」○弓の健ツヨき貌。詩、魯頌「角弓其ー」

【觫】ソク　屋

殺ーコロスは死をおそれる貌。觳(角部十畫)を見よ。

八　畫

【觭】キ　支

○ひとつ、かたかた(片隻)漢書、五行志「晉敗ニ秦師ー、匹馬一輪、無ー反者」○奇數。莊、天下「一偶」○かたむく(傾斜)牛の角の一は低れ一は仰きたるもの。○かたよる。‖畸。

【觬】殘(一二四六頁二段)に同じ

韓愈文「把ー相飲」

九　畫

【觱】ヒツ　ヒチ　質

○えびすぶえ、羌人の吹く角。○一篥リチは笛に似たる樂器、表七孔、裏一孔、葦の舌を上端にさし入れて縦に吹くもの、もと龜茲に出で支那に入る。唐の九部夷樂に之を用ふ、俗に

幕葉に作る。○―發ハツは風寒き貌。○泉のわきいづる貌「沸ー」

【觱發】ハツ風の寒き貌。詩、豳風「一之日ー―」

【觱沸】ヒツフツ泉の湧き出づる貌。詩、小雅「ー―檻泉、言采二其芹一」（言はここに）

十畫

【觳】㊀コク ㊁カク・コク 屋 覺

㊀つのさかづき。○うすし（薄）○―辣コクは死をおそれる貌。○ます。古、斛に通ず。○一斗二升（一説に三斗）を容れる量器。㊁つく（盡）とどまる（止）史、始皇紀「雖二監門之養一、不レ過二於此一」○かわく、潤ルホなし、やせる（痛）「ー土」○あぶらいれ。○あしのかふ（足跗）○ひづめ（蹄）○くらぶ、きそふ（較）韓非、用人「強弱不レ一レ力」＝角。

【觳抵】カクテイ力をくらべるすまふ。史、李斯傳「二世在二甘泉一方作二ー―優俳之觀一」＝角觝・角抵。

【觳觫】コクソク死をおそれる貌。孟、梁惠王「吾不レ忍二其ー―若一無レ罪而就二死地一」

【觳薄】ハクうすし、儉約する。唐書、薛苹傳「治レ身ー―」

十一畫

【觴】シャウ 陽

○さかづき、酒尼ハカの總名。「羽ー」「流ー」「壽ー」○人にさかづきをさす。人に酒を飲ます。左、襄二三「ー二曲沃人一」（曲沃は地名）○盈ー―ランシャウはさかづきを泛べる。始めて出る水源の微なるをいふ。家語、三恕「夫江始出於濫觴、其源可二以盈一レ舟」轉じて事の始の義とす。

【觴詠】シャウエイ酒のみながら詩を賦す。王羲之、蘭亭集序「一觴一詠、亦足二以暢一敘幽情一」白居易詩「ー―歸來賓閣閉」

【觴酒】シャウシュ さかづきのさけ。吳越春秋「ー―既升、請稱二萬歲一」＝杯酒。

【觴政】シャウセイ酒を飲む宴席にて酒を勸めることを掌る。又、其の人。說苑、「魏文侯與二大夫一飲酒、使二公乘不仁爲一ー一、曰飲不レ嘗者、浮以二大白一」＝觴令・酒令。

【觴豆】シャウトウ さかづきの酒と、豆ハカの肉と。飲食をいふ。禮記「觴酒豆肉、讓而受レ惡」張衡賦「奉ニー―於國叟一」

【觴杯】シャウハイ さかづき。○阮瑀詩「嘉殽設不レ御、旨酒盈ニー―一」

【觴令】シャウレイ觴政に同じ。楊維楨詩「ー―嚴行卷二白波一」

十二畫

【觶】シ 寘 支

○さかづき（酒觴）支那産にて三升入の酒杯。增韻「實曰レ觴、虛曰ー」○つのさかづき。

【觿】ケイ 觹（角部六畫）の本字。

十三畫

【觸】シック ソク 沃

○ふる、ふれさはる。○あたる（抵當）角にてつきあたる「抵ー」「牴ー」「撃ー」易、大壯「羝羊ー二藩一」○をかす（犯）漢書、元帝紀「去二禮義一、刑法」○つく（衝）○心に感じ動く。易、繫辭「ー二類而長之一」○けがれ（汚）韓愈詩「不受二塵事一ー」圖○ふれ廣く命令する。○政府よりの告示・命令。

【觸穢】ショクエ 圖服忌・産・月經等のけがれにふれる（神事にあづかることを忌む）

【觸角】ショクカク 下等動物の觸覺をつかさどる器。蜘蛛の口頸にある脚など。

【觸感】ショクカン ○ふれうごく。郭璞文「氣之相感、ー―而作」○皮膚にふれるかんじ。＝觸覺。

【觸諫】ショクカン いみきくべき旨をかす。晉書、齊王攸傳「攸至性過レ人、有下觸二其諱一者上輒法繩流レ涕」

【觸激】ゲキ 水などがはげしく石にふれあたる。柳宗元、石渠記「交絡之流、ー―之音、皆在二林下一」

【觸撃】ゲキ ふれうつ。史、封禪書「子レ是上使二驗小方閭一ヒ葉、葉白和ー―」

【觸手】シュ 下等動物の觸覺を掌る手、水母ラクの口のまはりにある手など。

【觸髏】シュロ 下等動物の觸覺をつかさどる髏、蜘蛛の口頸にある脚など。

【觸處】シショ 到る處。岑參詩「春風ー―到」

【觸戰】センシュク 敵に接してたたかふ。史、越世家「句踐欲レ殺二妻子一、燔二寶器一、ー―以死上」＝接戰。

【觸突】トツシュク ふれつく。後漢書、西羌傳「西羌之兵、常在二山谷一、短二于平地一、不レ能レ持レ久、而果二于ー―一」＝抵突・冒突。

【觸捧】ホウショク ふれうつ。海賦「更相ー―、飛沫起レ霧」

【觸發】ハツショク あつさにさはる。杜甫詩「ー―レ生二病根一」

【觭銳】ハツサウ　物にさはりておこる。
【觭犯】シヨクハン　ふれをかす。晉書、王渾傳「敢陳ニ愚見一ニ一天威一」
【觭逆】ハツギヤク　蝸角之爭（一七一九頁二段）を見よ。
【觭目】シヨクモク　目につく、目に見えて感ずる。世說「一一見ニ琳琅珠玉一」
【觭羅】シヨクラ　あみにかかる。白居易詩「魚能ニ深入一緣ニ愛餌一、鳥解ニ高飛一爲ニ愛一ノレ一」

十六畫

【觸】　觸（次條）に同じ。

十八畫

【觶】　ケイ　支　齊

○くじり、つのぎり、章子のおびもの、象牙にて錐の如く尖らせて作り、ひもなどの結び目をとくに用ふ。詩、衛風「童子佩ニ一一一」○蟣に同じ。

言　部

【言】　㊀ゲン・ゴン　㊁ギン　眞　元

㊀こと、ことば。周禮、大司樂、註「發端曰ニ一一一、答述曰ニ語一」史、商君傳「貌ニ華也一、至ニ實也一、苦ニ藥也一、甘言疾也」○いふ、ものいふ、宣ノべる、心に思ふことを、ことばに發表する。論、鄉黨「食不ニ語一、寢不ニ一一一」○字、又は何。一一ゲンイは一何。論、爲政「一一以蔽ニ之一、曰、思無ニ邪一」又は一字。揚雄、解嘲「獨說四十餘萬ニ一一」○いふところ、きいふわけは。○はかりごと（謀）○われ、わが（我）爾雅、釋詁「一一、我也」○いひつけ（命令）○ここに、無意味の助字、詩經に多く用ふ。孟、公孫丑「詩云、永ニ配ニ命一」○一一ゲンは高大なる貌。㊁古、閒（言部十畫）に通ず、一一ゲンは和ぎ敬む貌。‖閒閒。

同訓異義　フイ言・謂・曰・云・道○言・謂の二字は義略ゝ同じ、言は心に思ふ所を、口に述ぶるなり、言論・言說などと熟す。謂は、報也、告也と註す、人に對して言ふなり「子謂ニ顏淵一曰」の如し。又人に對して言ふにあらずして、其の人を評して言ふにも用ふ「子謂ニ子賤一」の如し、又謂は、おもへらくとも訓む、心に思ふことは、必ず口にあらはるればなり。○曰・云の二字は義略ゝ同じ、正字通にも「云與ニ曰、音別義同、凡經史、曰通作ニ云一」とあり、但し云は、意稍輕く、曰は稍重し、云の字、文の終におきて誰氏云との如く結ぶことあり、これは誰が此の如く云へりとの意なり、かかる所に、曰の字を用ふることなし。○道は言と同じ、ただ言は、多く實用にして重く、道は虛用にして輕し、孟子に「道ニ性善一、言必稱ニ堯舜一」また「非ニ先王之法言一、不ニ敢道一」の如し。

【言甘】ゲンカン　聞きて心地よき言。左傳「觀承而一一誘レ我也、不レ如レ無レ往」國語「言之大甘、其中必苦、譖在レ中矣」
【言意】ゲンイ　○心に思ふことをいふ。陸雲文「風風至心、謹復言レ意」○ことばと心と。
【言云】ゲンウン　ことば。左傳「子之一一、又焉用レ盟」
【知レ言】チゲンル　知言（一三三七頁二段）を見よ。
【立言】リツゲン　立言（一四〇三頁一段）を見よ。
【食レ言】シヨクゲン　いつはりをいふ、前言を履行せず。書、湯誓「余不レ一一一レ」
【言管】ゲンクワン　ものいふこと。南史、宋長沙王道憐傳「道憐案無ニ才能一、一一又善ニ管絃一」‖語管。
【以レ言取レ人】イゲンシユジン　人の言論のみを聞きて、其の人を取る。史、仲尼弟子傳「一一、失ニ之宰予一、以レ貌取レ人、失ニ之子羽一」
【言下】ゲンカ　一言の下に。傳燈錄「師於ニ一一一悟」
【言行】ゲンカウ　ことばと、おこなひと。易、繫辭「一一君子之樞機、樞機之發、榮辱之主也」戸の開閉は樞ニに由る、機は弩の引き金、弩の張弛するは、機に由る、因りて事の肝要なるに喩ふ。
【言行相悖】ゲンカウアヒモトル　言ふ所と行ふ所と相そむきて一致せず。淮南子「言與レ行相悖、情與レ貌相反」‖言行相反「荀子」
【言行錄】ゲンカウロク　一人の嘉言善行を記せしもの、行述の類、朱熹に「宋名臣一一」の著あり。
【言輕則招レ辱】ゲンケイルレバハヅカシメヲマネク　ことばを輕しく出すときは、後日の愛を招く。法言「一一、行輕則招レ辱、貌輕則招レ侮、好輕則招レ淫」
【言藪】ゲンソウ　ことばにてたはむれる。北齊書、司馬子如傳「性滑稽、不レ治ニ檢裁一一一藪、識者非レ之」
【言外】ゲンガイ　口に出して言はざる所、言文にいひあらはしたる以外。
【言官】ゲンクワン　君徳又は政事の失を諫むる官。正字通「一一、諫官也」‖諫官・言職。
【言言】ゲンゲン　○高大なる貌。一解に將に壞れんとする貌。詩、大雅「懷ニ堉一一一」○ギンギン和ぎ敬む貌。禮、玉藻「二爵而一一斯」‖閒閒。
【言語】ゲンゴ　面會してはなしする。閒

史、温嶠傳「道中可レ得ニ一一」‖語言。

【言語】ゲンゴ　○ことば。周礼、大司楽、註「発レ端曰レ言、答述曰レ語」○孔門四科の一。論、先進「一一宰我・子貢」

【言語学】ゲンゴガク　言語の性質・発達・構造などを究める科学。‖博言学。

【言語道断】ゴンゴドウダン　○圓ことばに述べきやうもなき奥深き真理。理境経「一一、心行所滅」○圓以ての外のこと、いふにたへぬ。

【言次】ゲンジ　ことばのついで。論語、注「郡国従容一一談叙之」郡は令狐郡。‖語次。

【言志】ゲンシ　○己の志をのべる。書、舜典、詩ノレー、歌永レ言」○種じて詩をいふ。

【言辞】ゲンジ　ことば。漢賈文「威儀駢蕃、一一溢溝」‖言詞。

【言質】ゲンチ　圓ことばのしち、後日のしようことなる約束のことば。

【言上】ゴンジョウ　上に申しあげる。宋史、顧師伯傳「辞考二政最一、以レ時一一」‖上奏。

【言職】ゲンショク　諫言をするやく、諫官の職。‖諫官、争臣論‖諫議大夫・言官。

【言責】ゲンセキ　ことばの上のちかひ。左傳「一一未レ就、景公即レ世」

【言鯖】ゲンセイ　ことばに味ある義。事新録「笑靨一一、足レ添二腹笥一」

【言笑】ゲンショウ　ものいひ且つわらふ。詩、衛風「総角之宴、一一晏晏」（晏晏は和柔の貌）

【言責】ゲンセキ　○言論をなすべき責任、諫官などの任。孟、公孫丑「有二一一一」者、不レ得二其言一則去」○圓言説せし責任。

【言泉】ゲンセン　言語のわき出づること泉の如き義。晋書、文苑傳序「一一会二于九流一、文律諧二于六芸一」（会二于九流一とは九流の説に合する博辯弘辞をいふ）陸機賦「一一流二於筆端一」

【言筌】ゲンセン　ことばのりくつ、言語文字の末に拘泥される義、筌は筌蹄の筌にて魚筍なり、一に荃に作る。荘子、漁父傳「不レ渉二理路一、不レ留二一一一者上也」

【言詮】ゲンセン　○ことば、論は事理をのべ明かにする。張説詩「窮真不二世識一、心解豈一一」○前條に同じ。朱熹詩「不レ渉二一一一不レ落レ空」

【言対】ゲンタイ　面合して語す。何承天書「永絶二一一一、聊以代レ面」‖晤談。

【言談】ゲンダン　はなし。礼記「礼而者仁之貌也、一一者仁之文也」

【言談之林藪】ゲンダンノリンソウ　言談の多きに喩ふ。晉書、裴頠字逸民、挙厥容與レ頗清言、欲二以レ理服一レ之、而頠辞論縦博、風笑而不レ言、時人謂二頠之一一一」

【言近而指遠】ゲンキンシエンシ　言葉は卑近にして意味は深遠なり、指は旨。孟、盡心「一一者、善言也」

【言動】ゲンドウ　ことばと、ふるまひと。北史、劉炫傳「記二一一於綺閣一」

【言猶在レ耳】ゲンユウアリテミミニ　昔て聞きたる言の耳に存じて忘れざる義。左、文七「晉樓嘱曰、今君雖レ終、一一」

【言於言一敏二於行一】ゲンニオケルハビンナリオコナイニオケル　言は易く行は難し、故に言ふことは遅鈍にして、行ふことは敏疾にす。論、里仁「子曰、君子欲レ訥二於言一而敏二於行一」

【言之無レ文行之不レ遠】コレヲイフニブンナケレバコレヲオコナウトモトオカラズ　言語に文章なきは之を行ふこと遠大ならず。孔子の語（左、襄二五）

【言貌】ゲンボウ　ことばと、かたちと。後漢書、范冉傳「窮居自若、一一無レ改」

【言心聲也】ゲンハコエナリ　言語は心の聲にあらはれたるもの。揚子法言「一一、書、心畫也」

【言身之文】ゲンシンノブン　ことばは我が身の文飾、即ち身の飾。左、僖二四「一一也、身将レ隠、焉用レ文レ之、是求レ顯也」

【言足二以飾一レ非】ゲンタルニカザルヲモッテス　辯舌の巧なるをいふ。史、殷紀「帝紂資辯捷疾（中略）智足二以拒一レ諫、一一」荘、盜跖「強足二以拒一レ敵、辯足二以飾一レ非」

【言文】ゲンブン　言語と文章と。「一一一致」

【言文一致】ゲンブンイッチ　言語と文章とを同一にする、文語と口語と同じくする。

【言文深剤】ゲンブンシンセキ　議論と、文法即ち法律とがきびしくひとし。史、曹相國世家「参代レ何為二相國一、更之一一、欲レ変二畫名一者、概斥二去之一」

【言明】ゲンメイ　いひあかす、公言する。‖声明。

【言悖而出者亦悖而入】ゲンモトリテイデルモノハマタモトリテイルナリ　道理にもとりたる言を人に加ふれば、人も亦道理に戻りたる言を我に加へる。大學「是故一一、貨悖而入者、亦悖而出」

【言路】ゲンロ　上に建言するみち。後漢書、黄紹傳「杜二絶一一一」陸游詩「近聞下詔通二一一一」

【言論】ゲンロン　議論をいふ。後漢書、許陳傳「李膺風性高簡、時レ見二賓客一、唯二其一一一」

訇 コウ 東

○大いなるこゑの形容「一一」○鐘鼓の聲。○いかりさけぶ聲。

【訇隠】コウイン　大いなる響きの聲。又鐘鼓の聲。枚乗文「一一匈磕」‖隠訇。

【訇然】コウゼン　雷の聲。何晏賦「聲一一其若レ震」

【訇磕】コウカイ　水のはげしく流れる聲の形容。史、司馬相如傳「砰一一」

【訇哮】コウコウ　大風の勢の盛んなる貌。

緯徹洋「鵬起最可ㇾ畏、一一鉅二陵丘一」【初學】クワクガク　大いなること。楊炯文「文理赤豹、筆策雷車、歴二陸中道一、一一太虛」‖個然。【個然】ゼンカク　大いなる皃。韓愈詩「一一雲動如二湧愛一」

【計】ケイ　圏

○かぞふ(算・數)數をかぞへる「合ー」○算術・數學。禮、內則「學書ー」○かんぢやう、決算「會ー」「月ー」「歲ー」○はかる(謀)みつもる。○はかりごと(策)「奇ー」「長ー」「妙ー」「謀ー」「祕ー」○決算の帳簿「一簿」「一帳」圖○處置する。○其ればかり、其れだけ。

【計算】ケイサン　計・謀・圖・量・度・稱・權・測・料・忖・揣・商・揆・略・策・籌・算・授・識・量・程・登・衡・酌・詢○計は物の數をかぞへるなり、總計は數の總じめなり、心計は、胸算用なり。轉じて謀計の義に用ふ。三國志「言行計從」○謀は心に慮るなり、人と相談してはかるに用ふ。韓文「謀二於所親一」又、はかりごとと名詞にしても用ふ。○圖は、はかると訓むときは、料度・計量等の義なり。はかりごとと訓むときは、謀略の義、雄圖・後圖・壯圖の類。○量は、ますなり、轉じて分量をつもり見る意、商量・量度・測量などと用ふ、名詞としては識量・度量・酒量などと用ふ。○度は、ものさしのときに、音下轉じて大度・遠度などと用ふ。また、はかると訓むときは音タク尺度にて、長短を慮る如く、心につもり見る意、料度・揆度などと用ふ。左傳「不ㇾ度ㇾ德、不ㇾ量ㇾ力」○稱は、はかりなり、はかりにかけて、輕重を知るやうに、釣合よくする義。世說「劉眞長爲ㇾ藥、荷令則量ㇾ水」○權は稱錘なり、物の輕重をかけて見るやうに、さしひき見はからふなり。轉じて權謀・權變などと用ふ。○測は水の淺深をはかるなり。轉じて奥底のはかり知られぬ義とす、推測・測量などと用ふ。歐文「少忤二權要一、其謀不ㇾ測」○料は、ますめを數ふる義。轉じてどれ程と、心にはかりつもるに用ふ。史、蘇秦傳「外料二其敢之强弱一、內度二其士卒賢不肖一」○忖は先方の心を推量するなり。詩經「他人有ㇾ心、吾忖二度之一」○揣は量也と註し「度高曰ㇾ揣」とも註す、又手にてさぐりはかる義あり、これ轉てあらんかと、頭を傾けて思案する意。孟子「不ㇾ揣二其本一而齊二其末一」○商は商量・商略などと用ふ、彼此をつもりはかるなり。世說「商二較人物一」○揆は度に同じ、一つのかたに合ふか、合はぬかをはかるなり、揆度と用ふ。○略は田地の境を計畫する義、こりもりするに用ふ、はかりごとと訓するときは、軍略・籌略などと用ふ。○策は、はかりごとと訓むときは、籌策・籌略などと用ふ。はかると訓むときは、著策にてかくすれば善かくすれば惡と、一つ一つにはかるなり。孫子「策ㇾ之知二得失之計一」○籌は數とりなり。轉用してはかりごとの義に用ふ、籌策・勝籌などと用ふ。史記「運二籌帷幄之中一」○算はさんぎなり。轉じて謀略の義に用ふ、勝算・腹算の類。○挍は比較してはかり見るなり、校に作る同じ。唐書「挍ㇾ功爭ㇾ能」○議は事の宜しきを評定するなり。曲禮「公事不二私議一」○猷は圖に近し、もと線を引きて、此の通りがよからんと、差圖する意。史、晉仲連傳「爲ㇾ梁畫二長平之事一」○程はこれ程と限量を立つるなり。禮、儒行篇「引二重鼎一不ㇾ程二其力一」○詮ははかりにて物をかける如く、品位の高下を精しく品評して分つをいふ、詮評・品詮と連用す、吏部の官を銓官といふは、人材を選びて官を銓授することを掌るによる。晉書「文帝數ㇾ與銓論」○衡ははかりのさをなり。轉じて左右を見合せ、公平にはかる義とす。漢書、衡平也、所二以佚ㇾ權而均ㇾ物平一輕重一也」○酌は梁りて事を相談する義、說文に「梁謀也」とあり。○詢はとひ謀る義。詩、小雅「周爰咨詢」

【計畫】ケイクワク　はかりごと。又、はかり見るなり。校に作る同じ。唐書「挍ㇾ功爭ㇾ能」○議は事の宜しきを評定するなり。曲禮「公事不二私議一」

【計較】ケイカク　○はかる。二國志、孫堅傳「後聞見二袁紹一、當ㇾ還ㇾ地一」‖計校。商量。○爭論する。漢書、注「相與一也」

【計校】ケイカウ　はかりくらべる。晉書、裴頠傳「‖計較。

【計較】ケイカク　○はかる。二國志、孫堅傳「後聞見二袁紹一、當ㇾ還ㇾ地一」‖計校。商量。○爭論する。漢書、注「相與一也」

【計學】ケイガク　個經濟學。

【計議】ケイギ　はかりごと。又、はかり議する。史、張儀傳「願大王審定二一一」

【計謀】ケイボウ　はかりごと。史、魏冉相秦、謂二范一一有二可ㇾ乘者一、願大王用ㇾ之」‖謀略。

【計策】ケイサク　はかりごと、事前に謀りて勝を制するもの。吳志、呂蒙傳「引二見諸將一、問以二一一」

【計算】ケイサン　○かぞへ(はかる。○國家の會計。史、平準書「桑弘羊以二一一」用ㇾ事」

【計臣】ケイシン　國家のはかりごとを爲す臣。孔叢子「子高謂二魏王一曰、臣入二魏國一、見二君之二一一一焉、張叔謀有ㇾ餘、荒威智不ㇾ足」‖謀臣。

【計數】ケイスウ　○はかりごと。北史、祖瑩傳「有二勇略一、多二一一一」‖計策。○數をかぞへる。

【計省】ケイセイ　個國家の會計を司る役所、宋

代の制、三司（鹽鐵・度支・戶部）を總べたる役所、其の會計の府たるが故に（蘇軾、上神宗二書）

【計緒】ケイ　計策に同じ。漢書、張湯傳「明二習天下國家一ー一」

【計然】ケイ　春秋の越の人、名は研、范蠡の師、嘗すでに會稽の恥を雪ぎ、教じて曰く、ーーの策十あり、越其の五を用ひて志を得たり、今晉之を家に用ひんと欲すと、乃ち陶に之きて產を治め、富豆萬に至る。

【計度】ケイ　かぞへはかる。詩經、疏「亦助二之ーー一」

【計帳】ケイ　○戶籍簿。漢書、武帝紀「受二郡國計一」注「計者二今之諸州ーー也」後漢書、光武紀「遣二使奉レ計」注「計謂二人口名籍一若二今ーー一」○會計の帳簿。

【計圖】ケイ　はかりごと。＝計謀。

【計簿】ケイ　會計を記したる帳面。漢書、宣帝紀「上ーー一其文而已、諸爲二欺誤一以避二其課一」＝計帳。

【計謀】ケイ　はかりごと。＝計略・謀計。

【計吏】ケイ　會計を司る官吏。又其の會計簿を朝廷に上ツる官吏。漢書、朱買臣傳「買臣除ーー一爲レ卒」

【計略】ケイ　はかりごと。後漢書、杜詩傳「詩善二於ーー一」北齊書、段韶傳「長二於ーー一」＝謀略・謀慮。

【計慮】ケイ　はかりごと。元史、皇后傳文「賢二ーー一」

【計料】ケイ　數へはかる。＝計量・計較。

【訂】

㊀ テイ　㊁ チョウ　㊂ テイ　通

㊀はかる、公平に議する。說文「平議也」○くらべあはす。㊁はかる（校）○ただす（正）「ーー正」「校ーー」「增ーー」○定める、結ぶ「ーー盟」「ーー交」

【訂交】カウ　まじはりを定める。＝締交。

【訂盟】メイ　訂・正・規・繩・糾・格・匡・董・質の別は正（一〇〇八頁三段）の條を見よ。

【訂議】ギ　あやまりを正し定める。議は論。清の胡渭玉の著にーー雜錄（十卷）あり。

【訂正】セイ　文章のあやまりを改め正す。晉書、荀崧傳「其書諸所二發明一、或左氏・公羊所レ不レ載、亦足レ有レ所ーーー」

【訂盟】メイ　やくそくを結ぶ。＝締盟。

【計】

ケ　國　古、勘に作る

○つぐ（告）人の死去を知らせる。○つげ、しらせ（報）死去の報知「ー音」「ー報」「奔ーー」「傳ーー」柳宗元文「捧ーー哀號」○いたる（至）

【計書】ケイ　死去のしらせ。左、襄七「凡諸侯同盟、薨則赴以レ名」古は、計・赴・報の三字通用す。

【計聞】ブン　死去の知らせ。喪を人に告げる。古は計を赴に作る。＝訃報。

【訑】

㊀ イ　㊁ タ　㊂ タン　支　歌　諫　本、詑に作る又、詫に作る

㊀ーーは自ら滿足して他人の言を用ひざる貌。㊁あざむく（欺）「ー謾」＝詑。㊂ほしいまま（放誕）「ー慢」＝誕。

【訑謾】イ　自ら其の智を足れりとして、善言を容まざる貌。孟、告子「ーー之聲音顏色、拒二人於千里之外一」

【訌】

コウ　東　江　國

○うちわもめ「內ーー」○みだる（亂）○やぶる（敗）つひゆ（潰）

【記】

キ　國

○しるす（錄識）一一分別してしるす。かく（書）「筆ーー」「錄ーー」「書ーー」「追ーー」○おぼえ（覺）「强ーー」「請ーー」「一問」「一誦」○かきもの（文書）「ーー錄」「舊ーー」○すべて事物を記載する書物。證ーー史ーの類。○經緯をいふ。新序「子臧曰、前ーー有」云、聖達節、次守節、下失節」○しるし（文符）「ーー號」○印章「鈐ーー」宋史「鑄二銅ーー給レ之」○一種の文體、事實をありのままにしるすもの。文體明辯「金石例云、ーー者紀二事之文也、再貢顧命、乃ーー之祖、而ーー之名、則昉於戴ーー學ーー諸篇」○國古事記の略稱「ーー紀萬葉」紀は日本書紀。

【記憶】キオク　心におぼえて忘れず。南齊書、沈攸之傳「史漢事多所ーーー」

【記室】シツ　記錄を掌る職官。今の書記、又祕書官の類。後漢書、百官志「ーー令史、主二上書奏一報一書記一」續事始「幕府皆有ーーー、掌二章表書記文檄一」

【記室參軍】サングン　手にて聽いてゐれば、記憶を呼び起すといふ不思議なる珠。開元天寶遺事「賜段秀實水精、有レ人書二記一珠一、紺色有レ光、名曰二——、或有二銅忘之事一、則以レ手持二此珠一、便覺二心神開悟一、事無二巨細一、一舉所レ憶、記錄無二重複一」

【記事】キジ　事實をしるす。又、其の文章。記言參看。

【記言】キゲン　ことばを書きつける。漢書、藝文志「左史ーー一、右史記レ事」

【記載】キサイ　しるしのせる。＝載錄。

【記錄】キロク　記事參看。

【記取】シュ　おぼえる、取は助字。實伯啓詩「一一平生作二盛緣一」＝記得。
【記誦】ショウ　詩書をおぼえそらんずる。記憶誦讀。宋史、選擧志「今諸科擧二一一非二取二士之意一」
【記憶】カイオク　かずとり。僧祇律「少年比丘不レ解二時事一、日月無レ由レ用二算子一一等一」
【記性】セイ　ものをおぼえる力。記憶力。趙甌北詩話「人之學術、皆可二勉強一、惟一一各有二分限一」
【無記性】ムキセイ　記憶力なし。朱子語類「陳烈先生甚二無記性一」
【記濟】セイ　㊀はっきりと記憶する。
【記錄】キロク　かきのせたる帳面。漢代、尹翁歸任二治東海一、明察二郡中豪宗姦猾及吏民罪名一、盡知レ之、縣縣各有二一一一一一」＝簿籍。
【記傳】キデン　歷史傳記。後漢書、盧植傳「校二中書五經一一、補二續漢記一」
【記得】キトク　おぼえ、得は助字。劉禹錫詩「昔陪二織女一度二天河一一雲開第一歌」＝記取。
【記念】キネン　かたみ、物をとどめて後のおもひでにする（俗に紀念と書くは非）。遊仙窟「破レ愁成レ笑、逢喚二奴曲琴一、取二想思枕一、留與二十娘一、以爲二一一一」＝遺念。
【記前】キゼン　しるせし文章、佛家にて文を作るを前といふ、未來にて受くべき果報の豫言を記せし文。梁簡文帝文「已於二覆舟佛所一、經レ受二一一」

【記名】メイ　姓名をしるす「一一投票」＝署名。
【記問之學】キモンノガク　徒らに古書を記誦し學者の問を待つのみにて、心に得るところなき學問。禮、學記「一一、不レ足二以爲一二人師一」
【記錄】キロク　書きしるすの又、其の文書。後漢書、班彪傳「一二時功一、作二漢春秋九篇一」

【訖】キツ　物

○おわむ、とどむ（止）○畢、竟、終九「始レ一レ一」○つくす。ことごとく（盡）○すむ、をはる（終了）廿一は渡しすみ、收一は受取すみ。○いたる、およぶ（至）漢書、成帝紀「一今不改」＝迄。○つひに（竟）漢書、王莽傳「劉歆一不レ告」

【訐】㊀ケツ　㊁コツ　屑　㊁屋

㊀はこる（誇）○一一ッは大いなる貌。詩、大雅「川澤一一」㊁さけぶ（叫）○かまびすし。

【訐】ケツ　月　厥

○あばく（發）「告一」「一揚」○人の陰私（カクシゴト）をあばきてまのあたり責める。論、陽貨「惡一以爲レ直者」○そしる（誹）「誣一」
【訐揚】ケツヨウ　人の陰私をあばきあらはす。漢書、外戚傳「一二幽昧之過一」

【訓】クン　問

○をしふ（教誨）說文「說教也」○みちびく（導）「一導」○いましむ（誡）○したがふ（順）書、康誥「皇天用一厥道」○をしへ（教）いましめ（戒）「教一」「一語」「戒一」「遺一」「家一」「庭一」「明一」「儀一」「聖一」○古言の法則とすべきもの「古一」「大一」「經一」「一典」○とく、よむ、字義を解釋す。○わけ、よみ（解釋）「一詁」「一釋」○圖よみ、漢字にあてたる國語「和一」
同訓異字　訓・教・誨の別は教（九〇九頁三段）の條を見よ。
【訓誘】クンユウ　をしへ導く。晉書、王延傳「農桑之暇、一二宗族、假倘不レ倦」＝開誘・誨誘。
【訓育】クンイク　○をしへそだてる。＝教育。○兒童の感情意思を鍛練して、道徳的品性を陶冶すること。管理・教授の對。
【訓戒】クンカイ　訓誡に同じ。
【訓解】クンカイ　よみかたと意義の說明と。史記、集解序「列二異同一、彙遷二一一一」
【訓誡】クンカイ　をしへいましむ、誡は警。＝訓戒・教誡。
【訓皓】クンコウ　訓は教へ導く文、誥は告諭の文。孔安國、尙書序「典謨一一皆命之文凡百篇」
【訓飭】クンチョク　をしへただす。家訓「日不レ吐二一一之言一」
【訓義】クンギ　文字のよみと意義と。
【訓化】クンカ　をしへみちびきて善に化せしむ。晉書、禮志「古之聖王、躬二帥幣一、以供二郊廟之粢盛一、且以二一一天下一」＝敎化。
【訓誨】クンカイ　をしふ。又、をしへ。萬唐書、王友貞傳「一二子弟一、如二嚴君一焉」＝敎誨。
【訓故】クンコ　古語の解釋。漢書、劉歆傳「學者傳二一一而已」＝訓詁・詁訓。
【訓詁】クンコ　古文の字句の意義を解きあかす。漢書、揚雄傳「少而好レ學、不レ爲二章句一一一」＝訓故。
【訓告】クンコク　いましめつげる。＝經「古之人猶有一一」
【訓示】クンジ　をしへしめす、さとし。
【訓辭】クンジ　をしへいましめのことば。左傳「綏レ之以レ德、加レ之以二一一」
【訓練】クンレン　をしへはげます。蘇軾詩「師儒昔一二、仲季時童孩」
【訓授】クンジュ　をしへさづく。魏書、宋敏傳「篤勤一一爾而有レ禮、京師大族、貴遊之子、皆敬二憚威嚴一」＝敎授。

【訓辛】クンシン　兵卒を訓練する。晉書、羊祜傳「繕甲ー兵、廣爲二戎備一」

【訓導】クンダウ　○をしへみちびく。北史、明山賓傳「累居二學官一、有ニー之益一」‖訓迪。○圖　小學教員の資格の名。

【訓迪】クンテキ　教へみちびく。迪はみちびく。王安石、周禮義序「ーー在レ位」‖教訓啓迪。

【訓典】クンテン　古先王、聖賢の書。左傳「昔之ーー」陶潛文「言合ニーー一、行合二世範一」

【訓點】クンテン　圖　漢文の送り假名と返り點と。

【訓讀】クンドク　圖　漢字又漢文を和讀する。

【訓範】クンハン　てほんとすべきをしへ。陸雲文「內修ニーー一、外陶二風俗一」

【訓導】クンダウ　童蒙ををしへさとす。晉、伊訓「具訓二于蒙士一」疏「蒙、謂二蒙稚一卑小之稱」小學、明倫篇、小序「逃二此道一以ーニ士一」

【訓喩】クンユ　をしへさとす。魏志、諸葛恪傳「使二孫弘參二軍事一、每ーー事ーー、遂相親睦」‖訓諭。

【訓諭】クンユ　をしへさとす。又、其のをしへ。‖訓喩。

【訓練】クンレン　軍隊の訓練。王儉詩「治兵間二晉策一」ーー見二周禮一」

【訓令】クンレイ　上官が下官に對して、事務の方針などに關して下す命令。

【訓練】クンレン　をしへならす。唐書、郝廷玉傳「吾處二兵間一久、今始識ニーー法一」‖教練。

【訕】サン　セン　諫　翰

○そしる(謗)論、陽貨「惡居二下流一而ーー上者」○そしり、そしることば(毀語)

同訓異字　訕・譏・誚・短の別は譏(言部八畫)の條を見よ。

【訕上】カツジヤウ　上の位に在る者をそしる。字解參看。

【訕笑】サンセウ　そしりわらふ。唐書、狄仁傑傳「盜竊增給、引レ聖爭二四海之惑一、雖レ蒙ニーー一、詔而復奢」‖譏笑・非笑。

【訕謗】サンバウ　そしる。北史、賈彝傳「坐ニーーー擧レ試」‖誹謗・誹謗・毀謗。

同訓異字　訕・問・詢・壹・訪・諏の別は問(三八頁三段)の條を見よ。

【訊鞫】ジンキク　きびしくとひただす。史、張湯傳「ーー論報」後漢書、郭賜傳「雖無二申證一、獄不ニーーー」‖鞫訊。

【訊檢】ジンケン　たづねしらべる。北史、源賀傳「時武邑袁人石率、告沙門道可與レ賀謀レ反、有司以聞、文成曰、賀保レ無レ此、乃精加ニーー一、事果引レ誣」‖訊問檢察。

【訊問】ジンモン　罪人をとりしらべる。文獻通考、刑考「御加ニーーー」‖問訊。

【訒】ジン　ニン　圖　軫

○かたし(難)はばかる。論、顏淵「仁者其言也ーー」○しのぶ(忍)○ことば鈍なし。○いつくしむ(仁)

【討】タウ　皓

○うつ(伐)兵力を以てせめる「征ーー」「伐ーー」「誅ーー」「奮ーー」○をさむ(治)罪あるを治めて惡を絕たしむ。左、宣十二「其君無ニ日不ーー國人而訓レ之」○こころよ(詠)○せむ、しかる(訶)○のぞく(除)○もとむ(求)さぐる(探)たづぬ(尋)きはめる(究)「尋ーー」「探ーー」「ーー論」陸機、文賦「或沿レ波而ーー」源

【討伐】タウバツ　討は治なり、言に從ひ寸に從ふ、寸は法なり、法を奉じて罪を伐つ、故に言に從ふ會意。

同訓異字　討・伐・征・擊・打・撲・拍・搏・拶等の別は伐(二一五頁二段)の條を見よ。

【討論】タウロン　○スル討・尋・原・探の別は尋(三八頁一段)の條を見よ。

【討論】タウロン　たづねしらべる。唐書、王珪傳「珪雅識、數從二高祖一遊、途窮二其術一、因以レ所レ學、作ニ書數二外事一、號要ーー精明、世資レ焉」‖探尋。

【討議】タウギ　互に相談する。議論をたたかはす。

【討究】タウキウ　物の理をたづねきはめる。唐書、韓愈傳「ーー儒術、以興二典籍一」‖研習。

【討擊使】タウゲキシ　唐の武后の時の官名、其の職守、招討使と略ゝ同じ、地方の變亂によりて中央政府より臨時に派遣するもの(唐書、高力士傳)

【討尋】タウジン　根本をさがしたづねる。論衡、文賦「或沿レ波而ーレ」‖探源。

【討尋】タウジン　しらべたづねる。

【討春】タウシュン　春色を尋ねる。陸龜蒙文「閭門城北有二賣花翁一、ーー之士、往往造焉」‖尋春。

【討賊】タウゾク　そむく者をうつ。左、宣二「仁不レ越レ竟、反不レーレ」

【討度】タウタク　たづねはかる。柳宗元、答二蕭翼求一爲二師道一「翼以見レ投、爲レ賜甚大、俯用ーー、不二自謂一宜」

【討逐】タウチク うちはらふ。後漢書、鄧遵傳「神機將兵――」

【討幕】タウバク 圖徳川幕府をうつ「尊王―」

【討伐】タウバツ 罪あるものをうちただす。史、十二諸侯年表「挾二王室之義一以―」

【討核】タウカク 圖名丐ショナをいふ。陳遵詩「―一売閥上二岳陽一」

【討捕】タウホ うちて敵をとらへる。晉書、薛定方傳「膽氣絶倫、年十餘歳、隨レ父―一、先登陷レ陣」

【討滅】タウメツ うちほろぼす。‖撃滅。

【討練】タウレン たづねきはめて練習する。北史、李業興傳「博二渉百家一、閲緯風角、天文占候、無レ不二―一」

【討論】タウロン ○正當の道理をたづねきはめる。論、議問「世叔―二之一」○衆人集りて議論をたたかはす。

【託】タク 麻

○よす、よせる（寄）「―身」○よる（憑依）たよる。○まかせる（委任・信任）「委―」たのむ（賴）「付―」○たのみ「依―」「請―」「寄―」漢書「以防請―」○かりずまひ（寄寓）○かこつける、寓言、ほのめかす「假―」後漢書、姜肱傳「―以他辭一、終不言盜」○不―フタクは剳餅、うどんの類。‖餺飩。

【託意】タクイ こころをよせる。陸機詩「寄レ情在二玉階一―レ催二陳后一」

【託交】タクカウ 交情を以て相結託して友となる。李白詩「―一從二劇孟一」

【託寄】タクキ ゆだねまかす、次第參看。晉書、張華傳「帝問レ華、誰可二―一者」‖寄託。

【託孤寄命】タクコキメイ 先君の遺孤を託し、諸侯の國政をゆだねる。論、泰伯「可三以託二六尺之孤一、可三以寄二百里之命一、臨二大節一而不レ可レ奪也、君子人歟、君子人也」

【託疾】タクシツ やまひにかこつける。瞥誤、司馬相如傳「―一辭レ官、蔥二此卿相一」‖稱疾（史、項羽紀）

【託宿】タクシュク やどをかる。莊子「假二道于仁一、―二一宿一」‖寄託。

【託處】タクショ 寄居ダクキョに同じ。漢書「寥廓而―一」

【託食】タクショク 寄食に同じ。晉子「有二百乘之宗一、而無二尺寸之用一、是謂二―一之君一」

【託迹】タクセキ 身の蹤跡カトを寄せ託する。陸機文「―二黄老一、辭レ世絶レ粒」

【託宣】タクセン 神佛のおつげ。‖神託。

【託陀】タクタ 梵古語にて國老をいふ「元史、塔本傳」

【託付】タクフ たのみまかす。諸葛亮、出師表「恐―一不レ效、以傷二先帝之明一」‖付託・委託・委任。

【託意】タクイ 人にたよりて重宝取る。舊唐書「―二一雄宰一」

【託寓】タクグウ 事にかこつけて己の意を寄せる。陸機詩「寓辭類二―一」

【託名】タクメイ ○人の麾下となる。託附といふに同じ。後漢書、趙壹傳「壹以下公卿中、非レ陵無二足三以―一レ者、乃日往到レ門」陵は羊陵。○他人の姓名に假託する。

【託喩】タクユ 故事にことよせてきとす。曾植、七啓「假二豪貴一以―一、寧捽二尾於塗中一」

【訛】カ 四 畫 尤

とが、つみ、あやまち。詩、國風「俾レ無二―一」‖尤。

【訣】エツ 通

○わざはひ（災）○ことば巧みにいふ。あやしきことば。漢書、文帝紀「除二―言之罪一」‖妖。

【訣怪】エツクワイ あやし。荀、非十二子「―一狹猾之人」‖妖怪。

【訝】ゲ 禡

○むかふ、人を出迎へる、相迎へる。‖逆。○迎へて勞ネギらふ。○いぶかる、うたがふ（疑）あやしむ（怪）「怪―」「驚―」唐書、李勉傳「使至高祖―一無レ表」

【訝迓】ゲゲイ 君命を以て客をむかへねぎらふ。儀禮、聘禮「―二賓於館一」

【訟】ショウ 宋

通昌ショウもと此に作る

○あやまる。あやまり（非・誤）○文字言語のあやまり「一字一」○いつはる（偽）いつはり「一言」○なまる。なまり（歸語）○あやしきいひふらし（妖言）○かはる（化）○うごく（動）‖訛。○圖一頭は過失の端ハシの義にて財物を詐取するをいふ。又其のもの。

同訓異字 訛・誤・謬・錯・過・失の別は誤（言部七畫）の條を見よ。

【訛音】カイン なまれることば。李觀詩「疑兒踏二吳歌一姬姹是二―一一」‖訛語。

【訛言】カゲン ○僞りのことば、ねなしごと（流言）詩、小雅「民之―一、寧莫二之懲一」‖僞言。○なまれることば。‖訛言。

【訛弊】カヘイ あやまりたおふ。隋書、食貨志「世載遒遽、風流―一」‖衰弊・弊害。

【訛傳】カデン あやまりつたへる。

【訛謬】カビウ あやまり。五代史、宦者傳

紋「雖以ニ一一ニ」‖誤認。

【訢】 ㊀キン 文 ㊁ギン 眞 ㊂キ 支

㊀よろこぶ（喜）‖欣。たのしむ（樂）㊁一一は和ぎつつしむ貌。漢書、石奮傳「憧僕一一如也」‖閒閒。㊂むす（蒸）禮、樂記「天地一合、陰陽相得」（和氣の交感するをいふ）

同訓異字 コフ 訢・欣・喜・悦・歡等の別は喜（三三九頁四段）の條を見よ。

【訢訢焉】キンキンエン よろこぶ貌。孟、盡心「終身一一、樂而忘ニ天下一」‖欣然・欣欣。

【訢戴】キンタイ よろこびて推しいただく、悦服して推戴する。訢一に欣に作る。史、周紀「庶民不レ忍、一ニ一武王ニ」

【許】 ㊀キョ ㊁コ 語 麌

㊀ゆるす。○きく（聽）○したがふ（從）其の言に聽き從ふ「聽一」孟、梁惠王「則王一之乎」○まかす（任）○うべなふ（諾）「一諾」○くみす（與）公羊、文九「一ニ夷狄者」○なだむ（宥）罪過をゆるす。○よしとす「一可」ゆるし。○すすむ（進）○まことなり（期）孟、公孫丑「管仲・晏子之功可レ復一乎」うけあひて任する。○ほど、ばかり（程度）「幾一」「少一」○この（此）かく（斯）蘇軾詩「明朝門外泥一尺、始悟三更雨如一」○ところ（所）がり、もと（場所）晉書「山公出ニ何一」○國名、周の一諸侯、今の河南開封府一呂縣の地。○姓。

一由は堯の時の高士。㊁一ニ邪一ニは衆人が一齊に力を用ふる時のかけごゑ、きやり。

同訓異字 スル 許・教・宥・貸・恕・免・放・縱・原・宥等の別は赦（一八八頁四段）の條を見よ。

【許由】キョユウ 堯の世の高士、堯が天下を讓らんとしたるを拒絶して箕山に隱る。高士傳「一一隱ニ箕山一以レ手捧レ水飲レ之、人遺ニ一瓢一得ニ以取飲一飲訖掛ニ於樹上一風吹歷歷作レ聲、傷ニ以雜一煩一去レ之」

【許可】キョカ ○長上の者が目下の者の願をゆるす。世說「世尊默然、即爲ニ一一」○政府が人民の願意を聞きとどける。‖免許・允許・裁許。

【許嫁】キョカ いひなづけ、夫婦約束の曲禮「女子一一、笄而字」

【許衡】キョコウ 元の河內の人、字は平仲、魯齋と號す、程朱の書を得、恍然として斯道を以て自ら任ず、世祖の至元十八年卒す、年七十三。

【許レ國】キョコクス 身をすてて國のためにつくす。孔稚圭詩「本持ニ一一志ニ祝復武德彰」

【許渾】キョコン 唐の人、字は用晦、詩に工なり、別墅丁卯橋に在り、故に詩集を丁卯集と名づく。

【許史】キョシ 許と史との兩姓、並に漢の外戚、宣帝の時、共に貴顯にして事を用ふ。

【許慎】キョシン 後漢の汝南の人、字は叔重、性惇厚、少くして博く經籍を學ぶ、馬融、常に之を推重す、時人語して曰く、五經無雙許叔重と、說文解字十四篇を作り六書の義を推究す、後世小學（說文の學）を言ふ者、皆之を宗とす。

【許多】キョタ あまた、甚だ多し。范成大詩「認與ニ鄰曲一疎、方覺年一一」

【許諾】キョダク うけがふ、うべなふ。公羊傳「童子顓曰、君一一、頴公曰諾、童子請レ殺」‖許容。

【許否】キョヒ ゆるすと、ゆるさざると。‖諾否。

【許容】キョヨウ ゆるす。

【許詐】キョコ 衆人の力を共にすること。詩、小雅「伐木一一」‖邪許。

【許邪】キョヤ 前條に同じ。淮南、道應「今夫擧ニ大木一者、前呼ニ邪許一、後亦應レ之、此擧レ重勸レ力之歌也」‖邪許。

【詡】 ㊀ク 虞 ㊁キョ 語

㊀おごる（驕）○ほこる（誇）○いつはる（詐）○ほめる（稱）○ひらく（開）

㊁一一は大言する貌。

【詡詡】クク やかましくさわぎ立つ。晉書、劉毅傳「天下一一只爭ニ品位一」‖恂恂・恂恂・洵洵・詢詢。

【詡詡】 キョキョ 多

○あらそう（訟）みだる（亂）みだれ。詩、小雅「降ニ此鞫一一」○やかましくさわぐ 衆語の狀。‖詢。

【訣】 ケツ 屑

○わかつ。わかれる、わかれ（別）人と永くわかれる「永一」「一別」史、吳起傳「與ニ其母一一」又、しにわかれ（死別）○たゆ。たつ（絕）○決と通ず。引決は又引一に作る。○いとまごひす（辭）○おくぎ、おくのて、よき方法「秘一」「妙一」「神一」列、說符「衛人有ニ善ニ數者一以一喩ニ其子一」魏書、釋老志「大禹聞ニ長生之一」

同訓異字 ワカ 訣・分・別・判等の別は分（二三三頁四段）の條を見よ。

【訣要】ケツヨウ 經術の義。魏書、釋老志「銷ニ鍊金丹雲英八石玉漿ニ之法、皆有ニ一一ニ」‖要訣。

【訣別】ケツベツ ながきわかれ。又其のいとまごひ。後漢書、耿弇傳「今子遠適ニ千里ニ會面無レ期、故輕行相候、以

展ニ一一一ニ一ニ決別。

【訣別】ケツベツ 聲音が清く厲しくして決斷ある如き貌。潘岳賦「一一悟切、又何辭折」

【訐】 サク べつ 藥 看

○みだる(擾)○はやし(疾)○すばやし(敏捷)○かろがろし(輕躁)○わるがしこし(猾)「一輕」○たかし(高)○一婧はしなやか、細腰の貌。張衡、思玄賦「舒ニ婧之纖腰ニ」一解に姿スガタの媚コビぶる貌。

【訟】 ㊀ ショウ ㊁ ヨウ 多 宋

㊀うったふ、うったへ(訴)「訴ニ一「健ニ一」論、顏淵「必也使無ニ一乎」○あらそふ(爭)曲直を法廷にて爭ふ。又、廣く是非を辯論する「聚ニ一」○せむ(責)自ら反省する。論、公冶長「吾未見能見其過而內自ニ一者也」○おほやけ(公)吏、呂后紀「未敢ニ一言誅之」註「一公也、猶明言也」○易の卦の名、坎下乾上。㊁いる。容と通ず。

【訟ノ獄】ショウノゴク うったへを聽きて裁判する。論、顏淵「子曰、一ニレ一吾猶ノ人也、必也使ニレ無ニ訟乎」

【訟庭】ショウテイ うったふ。うったへ。孟、萬章「朝覲ニ一者、不ニレ之ニ益而之ニレ啓」ニ獄訟。

【訟師】ショウシ 圖人を教唆して訟を興さしむる者。

【訟訴】ショウソ うったへ。ニ訴訟。

【訟庭】ショウテイ うったへを聽く役所、裁判所。李白詩「一一垂ニ桃李」ニ訟廷・法廷。

【訟費】ショウヒ 訴訟入費。

【設】 セツ 屑

○まうく。まうけ。○おく(置)○つらぬ(陳)施ッさ陳ねる「陳ニ一「施ニ一」易、繫辭「聖人ニ一」卦觀象」○たてる(立)「建ニ一」「一立」「一官」○おほいなり(大)○たとひ、もし。假設の辭。史、魏其傳「一百歲後」一使ヒとも連用す、義は同じ。

【設計】セツケイ もくろみ、建築などのみつもり。

【設ノ險】セツケンノ 防備を要害の地にまうける。易經「王公ニレ一以守ニ其國ニ」

【設弧】セツコ 設帨を見よ。

【設施】セツシ はかりまうける。規畫施行。朱熹詩「願謨參ニ一一」ニ施設。

【設色】セツショク いろどる、畫に彩色を施す。考工記「一一之工、謂ニ之畫ニ」揮麈錄「李思訓一一山水」

【設ノ弄】セツノロウ おとし穴をまうけろ、計を以て人を陷るに喩ふ。家語「是謂ニ爲ノ民一レ一而陷ニ之」

【設帨】セツゼイ 女子を生むをいふ。禮、內則「子生、男子設ニ弧于門左、女子一ニ一于門右ニ弧は弓、帨は人に事ふるの佩巾。この二物を以て男女の表とす。轉じて女子の生日を一一又帨辰といふ。

【設置】セツチ まうけおく。後漢書、劉瑜傳「惟陛下一ニ一七臣ニ以廣ニ諫道ニ」

【設張】セツチョウ まうけはる、施設する。韓愈文「一一舉措」

【設定】セツテイ まうけさだめる。

【設定行爲】セツテイコウヰ すべて法律上の權利關係を設定する行爲。

【設備】セツビ まうけそなへる。又、其のそなへ。史、孝文紀「是以一一不ニレ息」

【設伏】セツフク ふせぜいを設け置く。漢書、藝文志「自ニ春秋ニ至ニ于戰國ニ出ノ奇一レ一、變詐之兵竝作」

【設問】セツモン 問題をまうけて問ふ。ニ設題。

【設立】セツリツ まうけたてる。

【設令】セツレイ ○命令を設ける。新論「懸ニ教一レ一、以示ニ人者法也」○たとひ。ニ設使。

【設醴】セツレイ 師を待つ禮の厚きをいふ、醴は甘酒。漢書、楚元王傳「元王以ニ穆生白生申公二舊ニ中大夫ニ禮生不ニ嗜ニレ酒、元王每置酒、常爲ニ穆生ニ設ニレ醴、及ニ王戊(元王孫)卽位ニ常設、後忘ニ設焉、穆生退、曰、可ニ以逝ニレ矣、醴酒不ニレ設、王之意怠、不ニレ去、楚人將ニレ鍤ニ我於市ニ稱ニレ疾臥」醴酒不ニレ設は敬禮の漸く衰ふるをいふ。

【設論】セツロン 文體の名、文選に一一あり、東方朔の答ニ客難ニ揚雄の解嘲等の爲、皆假設して問答を爲す、故に名つく。

【訥】 トツ 月 或は吶に作る

○どもる(吃)おそくにぶし(遲鈍)「木一」「拙一」○しゃべられず、口おもくして辯するを得ず「一辯に說文「言難也」老子「大巧若拙、大辯若一」

【訥言敏行】トツゲンビンカウ ことばは遲鈍にして行ふことは敏捷ならにする。論、里仁「子曰、君子欲ニ訥ニ於言一而敏ニ於行一」

【訥口】トツコウ どもる、すらすと辯しゃべれぬ。史、李將軍傳「廣一一少言」漢書、左思傳「口訥而辭藻壯麗」ニ吶口・訥言・訥遲。

【訥遜】トツソン 言語どもりしぶる、言ふことを難し。南史、齊東昏侯紀「性―― 少言」

【訥言】ゼン どもる。柳宗元文「拔二去―― 一、纔以二工言一」‖訥口。

【訥直】トツチョク 口がどもりて正直。南史、郭祖深傳「上二封事一曰、飾口利辭、競相推薦、――守レ信、坐見二埋沒一」

【訥訥】トツトツ いふことが能はざる貌。‖吶吶。

【訥敏】ビン 空言を諱みて實行をさとくする。訥言敏行を見よ。

【訥辯】ベン にぶくつたなき辯舌。‖訥口。

【訪】ハウ 漾

○とふ、たづねる、人をたづね問ふ、おとづれる「來―」「歷―」○よみゆ（訓見）○ききただす。○はかる（謀議）汎く人に就きて相談する「詢―」「咨―」○さがし求める（索）「採―」○まさに。古、方に通ず。漢書、高五王傳「以呂氏故幾亂天下」

同訓異語 ブン・問・訊・詢・咨・諏の別は問（三九頁三段）の條を見よ。

【訪問】ホウモン とひてなぐさめる。張華、車馬客行「論レ今無二新喜一、談レ昔有二舊悲一」

【訪レ樂】ガクヲ 音樂の事を問ひたづねる。家語「孔子至レ周、問二禮於老聃一――ニ――於萇弘一」

【訪議】ギ たづねはかる。戰國策「趙武靈王曰、窃計之事、決而不レ疑、――之行、窮而不レ憂」‖諮議。

【訪求】キウ たづねもとむ。宋史、李道傳「雖レ不レ及レ登二朱紫之門一、而――所二皆從學一者」

【訪古】コ 古跡を探りたづねる。李白詩「――登二覩者一」

【訪採】サイ たづねてあつめ取る。北史、煬帝紀「咸宜ニ――一」‖採訪・搜訪。

【訪覓】ベキ たづねさがす、おとづれる。黃庭堅詩「必有二人材備ニ――一」‖尋訪。

【訪問】モン ○たづねとふ。左傳「朝以――政、晝以――」○おとづれる。

【訪レ戴】タイヲ 晉の王徽之、山陰に居る、雪夜月色清明、忽ち戴逵（安道）の剡溪に在るを憶ひ、小舟に乘じて之を訪ひ、門に至りて返り「乘レ興而來、興盡而返、何必見レ戴」といひし故事（世說）李商隱詩「應乘――船」

五畫

【詒】イ タイ 支 置

㊀おくる、物品を人に贈る（遺）左、昭六「叔向使二人――子產書一」‖貽。○のこす（遺）つたへる（傳）子孫にのこし傳へる。詩、大雅「――厥孫謀」○あざむく（相欺）㊁あざむく（欺）列、黃帝「狎侮欺――」古、紿に通ず。

同訓異語 タイ・紿・欺・瞞・誑の別は欺（一〇〇〇頁三段）の條を見よ。

【詑】タ 歌

詒（言部三畫）に同じ。

【詮】セン 先

詒（言部三畫）に同じ。

【詘】エイ セイ 霽

――はことばおほし（多言）‖泄泄。

【詞】カ 歌

通じて呵に作る

○せむ（責・諫議）○しかる、大言して怒る、とがむ（咎）「護―」「証―」

【詞護】ゴカ しかりそしる。‖譏呵・証呵。

【詞詰】キツカ しかりなじる。唐書、則天皇后傳「凡言レ變、吏不レ得ニ――一、雖二私夫婦子一、必親延見」‖譴詰。

【詞止】シ しかりてとめる。‖呵止【史、李廣傳】

【詞辱】ジョク しかりはづかしむ。‖陶侃傳「切勵――」

【詞詆】カテイ しかりそしる。北史、何妥傳「更相――」‖詆訶。

【詞呰】カシ しかる。陸機豪士賦「而我心憂煩、安能致ニ――一」

【詞怒】カド しかりのしる。魏書、劉昶傳「――童僕、晉難二夷夏一」

【詎】キョ 語 御

○なに、なんぞ、なんすれぞ（何）あに（豈）反語の辭。宋書、沈約自序「若馳一介四方、不レ辱レ應」（一介は一人の使者）又、且・豈に作る。又、聞――ともに連用す。莊、大宗師「聞――知二吾所一謂天之非二人乎一」○とどまる（止）○いたる（至）

同訓異語 詎・何・焉・胡等の別は何（一一八頁四段）の條を見よ。

【詎爲】イ いくばく。北史、盧玄傳「樂レ貧之者、――人也」

【詘】㊀クツ ㊁チュツ 物 質

㊀かがむ。史、管晏傳「君子――於不レ知己一而信二於知一己者」（信は伸）‖屈。○まがる（曲）

まげる（枉曲）をる（折）○ちぢむ（縮）○ことばつまる（辞塞）○やむ（止）つく（盡）○絶え止む貌。○充ー ジュウは塞びて節を失ふ貌。禮、儒行「不充ー於富貴」㊁しりぞく（貶下）戰國策「彼公仲者、秦勢能ー之」‖黜。

【詘指】シッ ゆびををりてかぞへる。漢北、陳湯傳「ー計二其日一」‖屈指。

【詘伸】クツシン かがむと、のびると。禮、樂記「習二其俯仰ー一」‖屈伸・屈信。

【詘信】伸縮。

【詘坐】クツザ しりぞけ罪す。詘は黜。易林「ー不レ伸、道無二良人一」

【詗】ケイ 圏 敬

○うかがふ（伺・視）さぐる（探さぐりを入れる、候伺ウカガするところある義「窺ー」「覘ー」「ー選」○まはしもの（反間）

【詗察】ケツサツ うかがひさぐる（刺探）唐書、竇威傳「參無二安邊一策、不レ能二稽古立レ制、惟樹二親黨一多レ所ニー一、四方畏レ之」

【詁】コ 圏 慶

○よむ、とく。○よみ、現代の語にて古語を解釋せしもの「訓ー」「釋ー」「解ー」通じて故に作る。

【詁訓】コクン 古書の解釋、詩、周南、關雎ー一傳」‖故訓。

【詁經精舍】コケイセイシャ 浙江杭縣西湖の上に在り、清の嘉慶の時、阮元、浙江巡撫たりし時、創建す、經史の疑義及小學・天文・地理・算法を以て士に課し、其の文の尤も雅なる者を刻して「ー集」といふ、多く人才を出す。

【詢】ジュン 圏 眞

語（言部六畫）に同じ。

【詐】サ 圏 禡

○いつはる（僞）○あざむく（欺）○書、刑法志「背信藏巧、謂之ー」說苑、貴德「巧ー不如二拙誠一」○いつはり、うそ（虛言）

同訓異語 詐・僞・譎・詭・佯・陽・矯の別は僞（一六六頁四段）の條を見よ。

【詐レ詐】サカサク 人、我をあざむかざるに、我よりあざむくならんかとむかへて疑ふ。論、憲問「不レ逆レー、不レ億二不信一」

【詐巧】サコウ いつはりたくむ。晉書、安平獻王傳「夫攻者、借二人之力一以爲レ功、且當ニー一、不レ可二力爭一也」

【詐欺】サギ あざむきだます。韓非子「智者不レ得ニー一」‖欺詐。

【詐僞】サギ うそ、いつはり。管子「不二強レ民以二其所レ惡、則ー一不レ生」

【詐狂】サキョウ いつはりてきちがひになる。晉書、公孫永傳「詭錄ー一」

【詐猾】サカツ わるがしこし。揚子方言「凡小兒多レ詐而猾」

【詐譎】サケツ いつはり。劉向、戰國策序「秦孝公捐二禮讓一而貴二爭戰一、棄二仁義一而用ニー一」‖譎詐・詐欺・詭譎。

【詐故】コサク 機智をいふ。荀子「不レ循二舊法一而好ニー一」

【詐辭】シサジ いつはりのことば。鶡冠子「ー一者狙レ物者也」

【詐疾】シッサ 詐病に同じ。後漢書、鄧禹傳「鄧康ーレ一而實不通、太后大怒、遂免二康官一」

【詐術】ジュツサ いつはりのてだて。‖詐數・詭術。

【詐稱】ショウサ 姓名・官位などをいつはりとなへる。

【詐數】スウサ いつはりのはかりごと。唐書、秦瓊傳「世充多ニー一」‖詐術・詐謀。

【詐時】ジサ 久しく雨ふる間に、一時しばらく、空がはれる。李覯詩「天雨還有ニー一時」

【詐善】ゼンサ 人前をつくろひて善人らしくする。後漢書、張湛傳「湛在二鄉黨一、詐言正色、人或謂レ湛爲レ詐、湛聞笑曰、我誠詐也、人皆詐レ惡、我獨レ詐レ善、不二亦可一乎」‖僞善。

【詐謏】サショウ いつはり、でたらめ。胡銓、上二高宗一封事「惟陛ニー一」‖虛謏。

【詐忠】チュウサ うはべだけの忠義。漢書、張湯傳「臣固愚思、若二張湯一乃ー一」

【詐妄】モウサ いつはり。郭璞文「妖夢ー一」

【詐拘】コウサ やまひなりといつはる、さくべつ。史、孝文紀「吳王レ不レ朝、就賜二几杖一」‖稱レ病・詐疾。

【詐騙】ヘンサ あざむく、かたり。政刑大觀「ー一財物一者」

【詐謀】ボウサ いつはりのはかりごと。史、淮陰侯傳「常稱二漢兵、不レ用ニー一奇計一」

【詐力】リョクサ いつはりと暴力と。史、秦紀「先ニー一而後二仁義一」

【詐詭】キサ いつはりのてだてをたくむ。‖作詐。

【詈】シ 圏 寘

○そしる（詆誹毀）他人のわるくちをいふ。曲禮「不レ苟ー一」○にくむ（惡）管子、形勢「ー貧者不肥體」○みだりなり、ほしいまま（恣）○ー一は職務を怠る。詩、小雅「爾爾ー一」詛誡。○おもふ（思）禮、少儀「不レ、ー一重器」○かぎる（限）○やまひ（病）○なんぞ（何）○はかる（量）并ベにてはかる。商子、壹

令「ー粟而稅」○ああ、あ。‖吾。○たから(財)もとで、古、貨に通ず。漢書、司馬相如傳「以ー爲ー郎」

訾議【シギ】皆・謗・非・譏・論・詆・刺・譏・誚の別は誹(言部八畫)の條を見よ。

【訾短】【シタン】そしる。唐書、李宗閔傳「李訓・鄭注、始用ー事、綴二德裕一共ーニ之一」‖詆毀・毀短・疵短。

【訾厲】【シレイ】やまひ。管子、入國「歲凶、庶人ーー」注「訾、疾也、厲、病也」‖疾病。

【詆】

詆（前條）に同じ。

【詞】

シ　支

○つぐ(告)諫、曾子問「其ー于賓ー曰」○いふ(言)○ことば(言語・文章)「文ー」「祝ー」「ー賦」「博學宏ー」史、儒林傳「是時天子方好文ー」辭と通ず。○韻文の一種。詩の變體「ー曲」唐に始まる、古樂府の變體せしもの。○ー臣は翰林の官。

【詞雄】【シユウ】詩文にすぐれたる人。詞伯參看。‖詞宗・詞伯。

【詞鋒】【シホウ】○ことばのひびき。言談の風調。齊書、周顒傳「每二賓友會同一、ーー如レ流、聽者忘レ倦」○韻書をいふ、詞家の用ひて詞を作るに供するもの。

【詞客】【シカク】詩文を作る人。張子容詩「沒レ雲ーー語、遍レ雪舞人姬」‖詞人・詩客。

【詞學】【シガク】詩文の學。劇談錄「盧者仰二卿材器一、今日視二卿ーー」

【詞翰】【シカン】詞章に同じ。南史、王儉傳「廣正爲二中書舍人一、詔綱ニーー」

【詞華】【シクワ】ことばのあや、立派なる詩文。杜甫詩「ーー領二後輩一、風雅望二孤高一」‖文藻・詞藻。

【詞兄】【シケイ】詩文の友に對する敬稱。

【詞藪】【シソウ】詩文などのわざ。宋史、孫何傳「何榮名敎、勉接二士類一、後進之有ニーー一者、必爲二稱揚一」‖文壇。

【詞業】【シゲフ】詩文のわざ。宋史、査道傳「未レ冠以ニーー一稱」

【詞源】【シゲン】文詞の出でて窮らざるを水源に喩へていふ。林甫詩「ーー倒流三峽水」

【詞彩】【シサイ】ことばのあや。宋書、顏延之傳「延之與二陳郡謝莊一、俱以ニーー一齊レ名」

【詞曹】【シサウ】詞林に同じ。高適詩「星使出ニーー一」

【詞藻】【シサウ】○ことばのあや。又詩文の才。‖文藻。○書名、四卷、清の彭孫遹撰す、皆詞調を論ずる語、唐宋より清初に至るまで、各其の佳句名篇を拈り、長短を品題す。

【詞人】【シジン】詩文を作る人。舊唐書、張九齡傳「張說常謂レ人曰、後來ーー稱吾也」

【詞章】【シシヤウ】詩文。韓愈、柳子厚墓誌銘「務二記覽一爲ニーー一」‖辭章・詞翰。

【詞舌】【シゼツ】ことば。搜神記「常以ニーー過レ人、同輩莫レ不二畏憚一」

【詞宗】【シソウ】詩文の大家。‖詞伯。

【詞綜】【シソウ】書名、三十四卷、清の朱彝尊撰す、宋金元の詞、凡五百餘家を錄す、採摭繁富にして鑒別精審なり。

【詞壇】【シダン】詞場に同じ。

【詞致】【シチ】ことばのおもむき。盲論の風致。世說「陸士衡入レ洛、見ニ一少年一、玄妙有ニーー一、士衡心服其能一」

【詞場】【シヂヤウ】詩文などを作る處。又詩人文士のなかま。王勃、益州夫子廟碑「虛舟猶泛、乘二學海之波瀾一、直聲高騫、蹊ニーー之關隘一」超遐詩「莫下將二雲閣一輕中科第上、須レ作ニーー一第一人一」‖文壇。

【詞伯】【シハク】詩文を善くする人の敬稱。宋之問詩「書乃翰場絕、文稱ニーー雄一」‖詞宗。

【詞表】【シヘウ】ことばのうへ。許敬宗文「理超ニーー一、意生二文外一」‖言外。

【詞辯】【シベン】辯說。唐書、李邕傳「ーー注射、坐人皆風」

【詞鋒】【シホウ】文章言論のするどくして當るべからざるに喩ふ。庾信文「水勁ーー、風飛文雅」

【詞律】【シリツ】文詞の格律、ことばの規則。劉長卿詩「金石懸ニーー一」

【詞林】【シリン】○詩文などのあつまり、林は多くある形容。梁昭明太子、答二晉安王一書「殺二核文史一、流二漏一ーー一」‖文林・文苑。○翰林の別稱。殿閣詞林記「洪武初、建二翰林院於皇城內一、扁レ之曰ニーー一」

【詞話】【シワ】詞調の源流、作家の得失を評論するの書、其の體裁は略、詩話に同じ「滿毛奇齡ーー」の類。

【診】

シン　軫　寒

○みる(視)脈を視る、病狀を察する「ー病」「往ー」「求ー」「善ー」○かんがへしらべる(驗)○うらなふ(占)夢を占ふ。莊、人間世「匠石覺而ー其夢」

【診候】【シンコウ】脈をうかがひて病狀を知る。北齊書、馬嗣明精二醫術一、爲レ人ーー、一年前知二其生死一」‖視病・診察。

【診察】【シンサツ】病性をうかがひ見わける。南史、張譏傳「徐文伯子雄、亦傳二家業一、尤工ニーー一」

【診切】【シンセツ】脈搏(ハク)をみて病狀を察する、切も診と同意。史、倉公傳「ニ切其脈一」‖診察・候脈。

【診斷】【シンダン】病性を見きはめる「ーー書」「ーー學」

【診病】【シンビヤウ】やまひの容態をみる。史記「ーー知二人死生一」

【診脈】シンミャク　脈を察しみる。史、扁鵲傳「特以ニ一一一爲レ名耳」

【診夢】シンム　ゆめをはんだんする。字解参看。‖占夢。

【診療】シンリョウ　診察と療治と。

【說】　呪（三二五頁一段）に同じ。

【誄】ジュツ　㊥　又、怵に作る　いさなふ（誘）いさなはる。利害の爲めに誘はれる。漢書、韓安國傳「ニ邪臣浮說一」

【詛】ショ・ソ　遇　魚　いさなふ（誘）いさなはる。利害の爲めに誘はれる。漢書、韓安國傳「ニ邪臣浮說一」

○のろふ（呪）神に祈りて怨ある人に禍を下させる「一祝」○のろひ。又、のろふことば「呪一」○ちかふ、大事に盟といひ、小事にー一といふ。○うらみそしる（怨謗）「誇一」

【詛盟】ソメイ　ちかふ。誓約する。書經「以殷ニ一一一」字解参看。

【詛誓】ソセイ　のろひのゝしる（書經）

【証】セイ　シャウ　㊥

○いさむ（誄）戰國齊策「士尉以ニ一靖郭君一」○俗に證據の證（言部十二畫）に代用す。晉書、范寧傳「皆有ニ典一」

【詔】㊀セウ　㊁セウ　嘯　篠

㊀みことのり、古はひろく上より下に告ぐるにいひ、秦漢以後は專ら天子の命令に限りて用ふ「一書」「一敕」「手一」「聖一」「明一」○文體の名、卽ち詔敕の文。文體明辯「夫一者昭也、告也、古之詔詞皆用ニ散文一、故能深厚爾雅、感動乎人、六朝而下、文尙徧儷而詔亦用ニ之一」○つぐ（告）をしふ（敎）明かに告げ敎へる。莊、盜跖「爲ニ人父一者必能ニ其子一」註「敎也」○みちびく（導）○南一ちは南方の野蠻國、其の長を一といひ、六一あり（唐書、南蠻傳）㊁擯一ちは贄と主との紹介をなすもの、應接がかり。禮、禮器「禮有ニ擯一」紹に通ず。○みちびく（誘）

【詔書】ショウショ　つぐ。禮記「所ニ以一ニ一於天地之間一也」

【詔格】ショウカク　みことのり。容齋三筆「法令之書、其別有レ四、敕令格式是也、神宗聖訓曰、禁ニ於未然一之謂レ敕、禁ニ於已然一之謂レ令、設ニ於此一以待ニ彼之至一謂ニ之格一、設ニ於此一使ニ彼效レ之謂ニ之式一」

【詔黃】ショウコウ　天子のみことのり。古、黃紙を用ひし故。南史、王韶之傳「凡諸一一、皆其辭也」

【詔獄】ショウゴク　漢代に天子の詔を奉じて罪人を鞫する獄。又、其の獄舍。漢書、成帝紀、註「凡詔所ニ繫治一、皆爲ニ一一一」

【詔冊】ショウサク　詔勅の文。周書、王褒傳「凡大一一、令ニ褒具ニ草一」

【詔旨】ショウシ　みことのりのむね。李商隱詩「鳳凰傳ニ一一ニ雜多述ニ朝綸一」‖敕旨。

【詔書】ショウショ　みことのりのかきつけ。文心雕龍「漢命有ニ三品一、三曰、一一、詔告也」

【詔敕】ショウチョク　みことのり。北史、張須陀傳「歲饑、須陀勝ニ開ニ倉賑一給官屬一、成曰、須待ニ一一、須陀曰、如待ニ報至一、當ニ委ニ溝壑一、吾若以レ此獲レ罪、無レ所レ恨、先開レ倉而後狀、帝嘉而不レ責」‖詔書。

【詔條】ショウジョウ　みことのりの箇條。唐書、憲宗紀「奉ニ我一一、恤隱爲レ心」

【詔板】ショウバン　みことのりのかきつけ。後漢書、竇武傳「召ニ尙書官屬一、使レ作ニ一一一」‖詔書。

【詔勘】ショウカン　みことのりしてさとす。五代史、後蜀世家「明宗一一不レ許」‖敕勘。

【詔令】ショウレイ　○みことのり、天子の命令。○上より下に告げる文、天子の言を詔といひ、皇后・太子のを令といふ（文選、注）

【訴】ソ　遇　想に同じ

○うつたふ、上へ申し出て曲直の判決を乞ふ、己の寃罪をうつたへる「上一」「告一」「直一」「哀一」「陳一」「一寃」うつたへ（訟）○そしる、ざんげん（讒・毀）そしりて告げる、讒言する。左、成十六「郤犨一公於晉侯」

【訴訟】ソショウ　訴・想・訟・獄○訴は告也、訟也、寃枉を告げ訴ふる意。史記「王有ニ讒臣一、故來告訴」○想は訴に同じ、論語の「膏受之想」の註に、己の寃を想ふるなりとあり。○訟は爭也、曲直を官に爭ふ義、言に從ひ、公に從ふ、公の場所にて言ひ爭ふなり。○獄は對決するなり。論語「片言以折レ獄、其由也與」

【訴權】ソケン　裁判所にうつたへ得べき權利。

【訴願】ソガン　○うつたへねがふ。○法律にて、行政官廳の不當處分にて權利及び利益を侵害せられし時、之を其の上級官廳に訴へ出づるをいふ。

【訴狀】ソジョウ　うつたへのかきつけ（宋書、竟陵王誕傳）‖訴牒・訴訟狀。

【訴訟】ソショウ　うつたへ。後漢書、陳寵傳「一一日百數」

【訴牒】ソテフ うつたへ出るかきつけ。弘簡錄「湖田有二水旱一即有二一一一一按レ圖示レ之鑑二可否一」＝訴狀。
【訴人】ソニン うつたへ出し人。太平廣記「案牘分明、一一不レ逃」

【詘】

㊀クツ　㊁タン・テン　國　國

㊀たくみに言ふ(巧言)㊁ことばおほし(多言)○たはむる(謔)○一嘲はくだくだしくかたる。元稹詩「蘇醒絲縷縷、論報語一嘲」
【詘詘】クツ 巧に言ふ貌。王安石詩「擧世徒一一」

【註】

チュ　國　もと、注に作る誤字

○文字の意味を明かにする(訓釋)○ときあかす、解釋する「頭一」「旁一」「標一」「疏」晉書、向秀傳「始秀欲一一莊子」舊唐書、向秀傳「始秀欲一一莊子」舊康曰、此書誰須一」○かきしるす、物を記する。穀梁、昭十一「一一事一於志、所以懲楚子也」(志は誌)○のぶ(述)
【註解】チュカイ ときあかし。＝注釋・注疏
【註釋】チュシャク ときあかし。＝注解・注疏
【註書】チュショ 書物に解釋をほどこす。
【註疏】チュソ 本文の間に註して意味をときあかす。又、其の解釋。疏は註を更に解說せしもの「十三經一一」

【詆】

テイ　國　唐

○そしる(毀)「譏一」「面一」「毀一」「排一」○しかる(訶)しかりとがめる。蘇軾、韓文公廟碑「作書一佛骨君王」○はづかしめる(辱)「一挫」○しふ(誣)「一欺」「誣一」○あばく(訐)史、設論傳「刀筆吏、喜深文巧一、陷人于罪」
【詆訶】テイカ そしりとがめる。何遜詩「投レ文被二一一、折レ翮終二章句一」＝詞詆。
【詆毀】テイキ そしる。漢書、枚乘傳「故其賢有レ一一東方朔一」＝譏毀。
【詆欺】テイギ いつはりしひる。漢書、哀帝紀「除二誹謗一一法一」
【詆謾】テイマン そしる。宋書、顏延之傳「一一朝士」
【詆訐】テイケツ 人の陰私をそしりあばく。唐實、楊嗣復傳「萬紀等未レ聞二大

同訓異語 誹・謗・訕・譏・毀・譖・詆の別は誹(言部八畫)の條を見よ。

【詖】

ヒ　國　支

○かたよる(偏陂)ねぢける(佞邪)不正ならず「險一」「傾一」＝陂。○へつらふ(諂)○辯論する。
【詖行】ヒコウ ねぢけたるおこなひ。孟、滕文公「正二人心一息二邪說一、距二一一一、放二淫辭一」
【詖辭】ヒジ 一方にかたよりたることば。不正の言。孟、公孫丑「一一知二其所一蔽」

【評】

ヘイ　ヒョウ　國

○しなさだめ(論定)物事の是非優劣につきて論定する。あげつらふ、しなさだめする、事物の是非を平かに定める「品一」「批一」「論一」「公一」「妄一」「史一」「詩一」後漢書、許劭傳「好二一一論一鄉黨人物一、毎月輒更二其品題一、故汝南俗有二月旦一一焉」○たひらかにはかる(平議)
【評價】ヒョウカ ○品物のねぶみ。○物のよしあしを品さだめする。
【評議】ヒョウギ ○相談してきめる。後漢書、京兆傳「一一乃殺レ之」○公平に是非を論ずる。
【評決】ヒョウケツ はかりさだめる、評議して決定する。魏書、唐和傳「一一獄訟、不レ加二捶楚一」＝評定。
【評定】ヒョウテイ 批評のことば。
【評語】ヒョウゴ 前條に同じ。
【評釋】ヒョウシャク 詩文を批評し、且つ解釋する。＝批評註釋。
【評論】ヒョウロン 公平にはかりえらぶ。晉書、孫楚傳「孫楚逸士宜二一一」
【評斷】ヒョウダン 品定めしてさだめる。晉書、傅休奕傳「一一得失、各爲二區例一」＝評決。
【評註】ヒョウチュウ 批評と註釋と。＝評注。
【評定】ヒョウテイ 評決に同じ。
【評點】ヒョウテン ○詩文などの妙處眼目などに施す、○●などの點。○生徒の試驗の答案に施す點數。
【評判】ヒョウバン 國○世間のうはさ。○批評して判斷する。
【評品】ヒョウヒン しなさだめする。元史、實默傳「爲人樂易、平居未レ嘗一一

人物ニ興久居、温然儒者也」‖品評。
【評林】ヒョウリン　批評を集めしもの「史記ー一」
【評論】ヒョウロン　是非得失を品評し論ずる。隋書、楊素傳「ー二ー得失」‖論評。
【評話】ヒョウワ　我が講談の類。揚州淸話「ー一盛ニ於江南ニ」‖說書。

【詈】リ　眞

○ののしる、惡口をいふ「怨ー」書、無逸「小人怨汝ー汝」○あてこすりして惡口をいふ「罵ー」（罵は直言してののしる）
【詈等】リトウ　ののしりはつかしめる。魏志、袁煥傳「呂布欲レ使ニ煥作ニ書ー一劉備一煥不レ可」
【詈罵】リバ　ののしる。韻會「正斥曰レ罵、旁及曰レ詈」漢書、賈誼傳「司寇小吏、ー一面榜ニ於之ー」‖罵詈。

【詭】㊀レイ・リャウ　靑　㊁レイ　敬

㊀うる（賣）㊁てらひ賣る（衒賣）己の物をほこりて人に賣りつける。
【詭符】ケイフ　ばかを賣る札。即ち揭げ文を名文らしくてらひて恥をきらすにいふ。顏氏家訓、文章「無ニ才思ー、自謂ニ淸華ー流ニ布醼揭ー亦已衆矣、江南謂爲ニ詭ー一ー」

【詠】エイ　敬　或は咏に作る　六畫

○うたふ（歌）○聲を永くひきて詩歌をうたふ「吟ー」「朗ー」「誦ー」「一觴一ー」○鳥が鳴く。○うた（詩歌）「遺ー」「高ー」又、詩歌を作る。圖○ながむ、見渡す、眺望する。○よむ、和歌を作る。
【詠歌】エイカ　○うたをよむ。又、其のよみたる詩歌。李白、春夜宴ニ桃李園ー一、序「古人ー一、聊ー二康樂ー」○圖道德、又は淨土宗の信者が佛をつけ聲を引きてうたふ短き讃美歌「御ー一」
【詠懷】エイクワイ　郊外の風景をながめ詩を吟じつつ歸る、風流を樂む意。論、先進「莫春者春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴ニ乎沂ー一、風ニ乎舞雩ー一、詠而歸」朱熹詩「舞雩ー一春花香」‖歸詠。
【詠懷】エイクワイ　おもひをうたふ、懷抱せる事を物に託して詩歌に述べる。又、其の詩歌。晉の阮籍にー一詩あり。「溫庭筠詩「仙時ー一作、猶得レ比ニ南金ー」
【詠草】エイサウ　圖歌のしたがき。‖歌稿。
【詠史】エイシ　歷史のことがらを詩に作る。又、其の詩歌。文選に魏の王粲のー一詩あり。
【詠進】エイシン　圖詩歌を作りて貴人又神などにたてまつる。
【詠絮】エイジョ　次條に同じ。
【詠雪之才】エイセツノサイ　女子の才あるを稱す。晉書、列女傳「謝安姪內集、俄而雪驟下、安曰、何所レ似也、安兄子朗曰、撒ニ鹽空中一差可レ擬、道韞曰、未レ若ニ柳絮因レ風起ー」兄は謝安の兄謝奕、道韞は奕の女、王凝之の妻。‖柳絮之才。
【詠嘆】エイタン　次條に同じ。
【詠歎】エイタン　うたひほめる。韓愈、聽琴詩序「猶ニ舞雩之ー一」‖詠嘆。
【詠物】エイブツ　禽獸魚花月草木などの物名を題として詩歌をつくる。又、其の詩歌「佩文韻ー一詩選」

【詼】カイ　灰　通音ガイ

○そなはる。そなふ（備）すべて十分に備はる「一備」かぬ（兼）あまねく兼ねそなはる「兼ー」○みな（皆）ことごとく（盡）○あたる（當）「一當」よろし（宜）○借りてその（其）指定の我とす「一省」「一案」「一校」「一處」
同訓異義　該・兼・賅・包の別は兼（三〇五頁四段）の條を見よ。
【詼洽】ガイコウ　かねてひろくわたる。晉書、儒衞傳「ー二ー典墳、研ニ精數術ー」‖該博。
【詼究】ガイキュウ　ひろくかねきはめる。陳書、儒林傳「窮ニ心經典、經論二歷ー不ニ一ー」‖窮究。
【詼曉】ガイケウ　ひろくかねさとる。資和靈論、徐知常、建陽人也、能レ詩、善屬レ文、凡道儒典敎、與ニ夫制作ー無レ不ニ一ー」
【詼悉】ガイシツ　ひろくしりつくす。北史、貴顯傳「唐鹿以上、事難ニ一ー」
【詼涉】ガイセフ　ひろくわたる。玉海「乙夜觀レ書、無レ不ニ一ー」‖博覽。
【詼贍】ガイセン　かねそなはりて十分に足る。南史、賀琛傳「在復經營、義理ー一」‖淵博。
【詼當】ガイタウ　あたる、よくあてはまる。
【詼通】ガイツウ　ひろくわたり通ずる。北史「學業ー一」‖該曉・博通・兼通。
【詼博】ガイハク　ひろくかね通ずる。搜神記「經書雖不ニ一ー一」‖該洽・博聚多識。
【詼敏】ガイビン　ひろくそなはりてさとし。唐書、薛收傳「收道衡子也、爲ニ書擬露布、或馬上占レ就、ー一如ニ素構ー」

【詖】カ。　カ・ケ　支　叫・嘵に同じ

さけぶ、よぶ。北史、周朱世隆傳「忽聞局上ー然有ニ聲」

【詻】 ガク　陷　通音カク

○いひあらそふ（論訟）○一一は辭氣の厲しき貌。韋、親士「支荷者一一」○敎令の嚴なる貌。禮、玉藻「戎容暨暨、言容一一」‖嚴猛。

【詭】 キ　紙

○あざむく（欺）いつはる（詐）いつはり「一辭」「虛一」○せむ（責）漢書、京房傳「臣出守郡、自一效功」註「自以爲憂責也」○たがふ（違）もとる（戻）漢書、董仲舒傳「有所一於天之理數」○そしる（毀）○あやし（怪）ことなり（異）異樣に怪しき貌「卓一」「奇一」○みだり（妄・謾）○かはる（變）「誡一」○正しからず「一遇」

同訓異語　僞・詭・詐・譎・悖・惑・矯等の別は僞（一六六頁四段）の條を見よ。

【詭異】キイ　あやしくふしぎ。後漢書、王充傳「充好二論說一、始若二一一、終有二理實一」‖詭怪。

【詭衛窮猾】キエイキュウカツ　馬が縄束を受けざる貌、詭衛はくつわを吐き出す、猾轄はたづなをかむ（莊、馬蹄）之を制することと愈甚だしければ、抗拒することと愈力ひむるに喩ふ。

【詭求】キキュウ　せめもとめる。後漢書、陳重傳「有二同署郎一貧息錢二數十萬、責主日至、一一無レ已、重乃密以レ錢代還」‖誅求。

【詭遇】キグウ　正しき軌轍の道に由らずして禽と遇ふ。正理公道を踐まずして世に容れられ富貴を得る。孟、滕文公「爲レ之一一、一朝而獲レ十」

【詭怪】キカイ　ふしぎ、あやし。後漢書、四城傳「論二神迹一一、則理絕二人區一、感驗明證、則事出二天外一」‖奇怪・神怪・譎詭・詭異。

【詭形】キケイ　あやしくめづらしきかたち。宣和畫譜「好畫二古雜人物一一一殊狀、格雖二清古一意務二新奇一」‖異形。

【詭計】キケイ　いつはりのはかりごと。晉書、羊祜傳「吳石城守、去二襄陽一七百餘里、每爲二邊害一、祜患レ之、覓以二一一、令二吳罷一守」‖詭謀・詭策。

【詭矯】キケウ　いつはりためる。王勃、福會寺碑「痛二逆生之一一、濟二正覺之陵夷一」

【詭激】キゲキ　言行が常度を失ひてはげし、中正を失する。南史、張緬傳「文辭一一、獨與レ衆異」‖矯激・激詭。

【詭譎】キケツ　あやしくかはる。班固、東都賦「瑰異一一、柴燎煟煥」‖詭怪・譎詭・奇怪。

【詭言】キゲン　いつはりのことば、うそ。‖詭辭。

【詭詐】キサ　いつはり。隋書、王世充傳「沈辭多二一一」‖譎詐。

【詭策】キサク　詭計に同じ。‖詭謀。

【詭辭】キジ　實を以てせざるいつはりのことば。殷梁、文六「一一而出」‖詭言。

【詭狀】キジョウ　ふしぎなるかたち。南史、康絢傳「或人頭魚身、或龍形馬首、殊類一一、不レ可二勝言一」‖奇狀・詭形。

【詭色】キショク　あやしきいろ。木華、海賦「翻動成レ雷、擾翰爲レ林、更相叫嘯、一一殊音」

【詭隨】キズイ　是非を問はずして、安に人にしたがふ。詩、大雅「無レ縱一一、以謹二無良一」

【詭說】キセツ　いつはりの言說。史、自序「能說一一、解二惑于圍城一」

【詭道】キドウ　いつはりて人をまどはすみち。孫子「兵者一一也、故能而示二之不能一」

【詭設】キセツ　いつはりてまぬかる。唐書、宇文融傳「一一緣賦一」

【詭遁】キトン　いつはりてうばふ。魏志、鍾繇傳、注「既有二乘昭登壇之觀一、而無二闔生一一之誅一」

【詭選】キセン　でたらめ。宋史、樂黃目傳「論者嗤二其一一一」‖虛誕。

【詭特】キトク　あやしく異る。柳宗元文「長樂・未央・建章・昭陽之臨麗一一」

【詭妄】キモウ　いつはり。唐書、李鎭裕傳「是書敎宗時、以二一一一出二入禁中一」

【詭祕】キヒ　あやしくしてひめかくす。順宗實錄「交遊親睦一一、莫レ有レ知二其端一者」

【詭譬】キヒ　あやまり。晉書、桓溫「羅章發軟、去レ聖彌遠、衰制一一、固其宜矣」

【詭辯】キベン　○人をまどはす、いつはりのことば。史、屈原傳「毀二一一於懷王之寵姬鄭袖一」○理非をまげて人をまどはす辯論。一一學派は西暦紀元前五世紀頃希臘に行はれたる學派。

【詭變】キヘン　いつはりてかはる。唐書、則天武后傳「有二權數一、一一不レ窮」

【詭謀】キボウ　詭計に同じ。

【詭遊】キユウ　いつはりみだる。文心雕龍「相如憑レ風、一一愈甚」

【詭麗】キレイ　珍らしくうるはし。潛夫論「辭語者以二信順一爲レ本、以二一一一爲レ末」

【詭遷】キセン　まどはす。四征賦「履二夫我之徒地一、疾二幽后之一一一」

【詰】 キツ　質

○なじる、せむ、せめとふ、罪を責め問ふ「窮一」「難一」「面一」○をさむ（治）書、立政「一一戎兵」○いましむ（禁）周禮、大宰「五曰、刑典以一一邦國」○つつしむ（愼）○かがむ（屈曲）○一朝はあくるあさ。一說に詰

（哲の古字）の誤用とす、哲は明。圖○ヴはて、かぎり「橋ー」入れる「鑓ー」「箱ー」○ヴ迫る「年がおしーる」窮する、こまる「辭がーる」○ヴ煮ーむ」

【詰窮】キツキウ とひきはめる。劉向文「詰獄ーニー其詞」＝究詰・窮詰。

【詰曲】キツキヨク まがりくねる。韓愈詩「ー思增綫」＝屈曲。

【詰屈】キツクツ ○かがまりてのびず。易林「其旨ーー、不ル能ニ解脱」○字の勢が曲折する（晉書、衛恒傳）

【詰屈聱牙】キツクツガウガ 詰一に佶に作る。佶屈聱牙（一九頁四段）を見よ。

【詰詘】キツクツ かがまりてのびず。王逸賦「思慮啞兮ーー」＝詰屈。

【詰晨】キツシン 詰旦に同じ。梁昭明太子詩「清管出ル塞ノ悶、ーー屈ニ鐃鼓ニ」

【詰責】キツセキ なじりせむ。漢書、賈山傳「章下ーー」

【詰旦】キツタン あくるあさ（明朝）北史、齊德安延王宗傳「ーー遵攻ニ東門ニ克レ之」＝詰朝・詰晨。

【詰朝】キツテウ あくるあさ。左、僖二七「ーー相見」說文長箋に本、詰朝に作る、詰はさの智の字、借用して明の義とす、故に明朝を詰朝とす、今俗に誤りて詰に作る。

【詰問】キツモン なじりとふ。漢書、王嘉傳「吏ーニー嘉ニ」＝詰責。

【詎】キヨ 通 去 ○あやまる（謬）○あざむく（誑）

【詢】キユウ 通 去 ○かまびすし（喧・衆言）○さわがし（騷）

【詢詢】キユウキユウ さわがし。五代史、四夷元敬傳「紊而謀者ーー」＝恂恂・恂恂。

【詡】ク 眞 ○ほこる（誇）大言をはく「誇ー」○やはらぐ（和）○あまねし（普）證、證聲「德發揚、ー萬物ニ」○おほいなり（大）○敏くして勇ましと。はっきりとして氣のきいたる言ひかた。證、少儀「會同主ーー」○ことばづかひが明かで盛んなり。

【詡詡】ククク 大言する貌。一解に嫌と通ず、媚びへつらふ貌。韓愈、柳子厚墓誌銘「酒食遊戲、相徵逐、ーー強笑語、以相取下」漢書、張敞傳、注「北方人謂ニ嫌好一爲レ詡」

【誇】コ 通 麻 ○ほこる、大言をはきてたかぶる「浮ー」「矜ー」杜甫詩「賜簪ー父老」○ほこり、自慢す

とくあらし（粗大）漢書、外戚傳「妾ー布服、麤食」

【詞訟詞】シヨウ 誇・矜・伐○誇は大言するなり、奇に同じ。○矜は自ら賢とするなり。書經「汝惟不レ矜、天下莫ニ與レ汝爭レ能」○伐は自ら其の功を稱するなり。易經「勞而不レ伐」

【誇稱】コショウ ほこりてかがやかし示す。＝奇稱。

【誇競】コキヨウ ほこりてきそふ。後漢書、梁冀傳「冀大起ニ第舍一、而窮ニ極土木一、互相ーー」

【誇衒】コケン ほこりてらふ。文中子「不レ貧ニーー若レ愚似レ鄙、今人以爲レ能、我則不レ恥也」

【誇示】コシ ほこりしめす。後漢書、鄧禹傳「宜ニ揚ニ漢和親一、ーー鄰敵ニ」

【誇稱】コショウ ほこりて大げさにいふ。

【誇色】コショク ほこるかほいろ、自負する顏色。

【誇多】コタ 多きにほこる。韓愈文「讀レ書以爲レ學、貴レ貫以爲レ文、非ニ以ーーレ一而已ニ貴也」

【誇大】コダイ ○事實より大げさにいふ。＝夸大・誇張。○じまんしてゐばる。

【誇張】コチヨウ 事實より大げさにいひ立てる。列、天瑞「ーー於世」＝誇大。

【話】クワイ・エ 卦 通 皆 ク、ワ

○はなし、ものがたり「談ー」「情ー」「閑ー」「嘉ー」「佳ー」「對ー」○はなす、かたる、つげる（告言）○よきことば（善言）左、文六「著ニ之ー言」

【話言】ワゲン ○はなし。＝談話。○善きことば。字解參看。

【話次】ワジ はなしのついで。

【話談】ワダン ものがたる。又、ものがたり。四子講德論「ーニー于公卿之門」＝談話。

【話頭】ワトウ はなしのいとぐち。官談の端緒。陸游詩「不レ用殷勤寮ニーー」

【話柄】ワヘイ 次條に同じ。錢林玉露「今目到ニ湖南一又成閑ーー」

【話柄】ワヘイ はなしのたね、稱は柄、談話の資料。羅湖野錄「蘇ノ身歷險百千般、冷地看他成ニーー」＝話柄。

【話柄】ワヘイ はなしのたね。＝談柄。

【誄】ルイ 灰 ○たはむる、おどけ（戲謔）ふざける。○あざける（嘲）「ー笑」○そしる（謗）○たはむる、かちかふ（調戲）

【誄謔】ルイギヤク おどけたはむれる。漢書、敘傳「東方朔滑稽、ーー倡優」＝滑稽・諧謔・戲謔。

【誄笑】ルイセウ あざけりわらふ。漢書、枚乘傳「枚皐ーー類ニ俳倡ニ」

【誄嘲】ルイテウ 次條に同じ。嘲・嘲弄も略同

じ。蜀志、馬忠傳「一大笑、忿怒不レ形二於色一」
【詼嘲】クワイテウ たはむれあざける。宋史、梅堯臣傳「一一譏刺、託二于詩一以晩益工」
【詼俳】クワイハイ たはむれどと。歐陽修詩「奇レ詩盤ニ一一」司馬光詩「狂詩寄二一笑一、聊用當ニ一一」＝俳諧、俳調。

【註】クヮイ 去

○あやまる(誤)○あざむく(欺)他人をあざむきて惡しき方へみちびく。漢書、王莽傳「臣莽當ニ受ニ上誤一朝之罪」
【註誤】クヮイゴ ○人をあざむきあやまらす。史、孝文紀「背レ德反レ上、一一吏民一、爲二大道一」○官吏が罪に問りて證據せらるるにいふ。證據にて罪に作る。＝冤誤。
【註亂】クヮイラン 民をあざむきみだす。史、吳王濞傳「一ニ一天下」

【詼】クヮウ 陽 俗 又、謊に作る

○ねごと(寢言)うはごと(夢言)○みだりなることば(妄言)○だます(誑)○ばける(忽)

【詣】ケイ 霽

○いたる(至)「前一」「馳一」史、秦紀「代王乘傳一長安」○ゆく(往)○すすむ(進)○造一ダウは學藝などの進み到るところ「造一甚深」○圖ル、神社佛寺にまゐる「參一」
同訓異義 詣・至・到・臻・造等の別は至(一五九二頁三段)の條を見よ。
【詣レ闕】ケイケツクワツ 天子の宮闕にいたる。漢書、朱買臣傳「一一上書、書久不レ報」
【詣レ門】ケイモンニイタル 人をとひたづねる。劉琨詩「一レ一謁二朱亥一、謁左上二侯嬴一」

【話】コウ 宥 俗 又、詬に作る

○はち(恥辱)屈原、離騷「忍尤而攘一」はづかしむ(辱)○ののしる(罵)「噂一」「謗一」○いかる(怒)唐書、劉文靜傳「君雅一日、反人欲レ殺レ我耳」
同訓異義 話・恥・辱・忝・愧・慙等の別は恥(六五九頁四段)の條を見よ。
【話謗】コウバウ ののしりそしる。黃庭堅詩「謗言來ニ一一」
【話詈】コウリ そしる。郝經詩「事幾成一失、千載貽ニ一一」＝謗詈。
【話叱】コウシツ ののしりしかる。宋史、黃中傳「衆捽レ而一一曰、爲二爾不順一詩レ累二我輩一」
【話辱】コウジョク はづかしめる。五代史、延照傳「宦者專レ政、每一ニ一路レ賦一」
【話怒】コウド ののしりいかる。元稹詩「不レ勞生ニ一一」
【話罵】コウバ ののしる。魏書、高遵傳「逼二民家一求二縑練一、不レ滿レ意、則一一不レ去」
【話病】コウビヤウ そしりはづかしむ。證、備行「常以レ備相一一」＝話罵、恥辱。
【話言】コウゲン はづかしめののしる。魏書、趙修傳「修之邪レ父也、道路嬉戲、殆無二虧容一(中略)從者噂沓喧譁、一一無節」＝話罵。
【話厲】コウレイ 話病に同じ(莊、人間世)

【答】

祭(五〇八頁二段)に同じ。

【詩】シ 支

○からうた、文の聲韻ありて歌詠すべきもの、古は四言の句多し、詩經に載する一の如し、漸く變じて樂府長短句となる、魏晉以後は五七言多し、五言は蘇武と李陵との贈答の一に起り、七言は漢の武帝の柏梁臺の一に始まるといふ、唐に至りて一學大に盛んにして古體近體に分る、古體は即ち樂府の體に倣ひ、近體は即ち律詩及絕句なり、古詩と今體との二あり、志を述ぶる詞章「新一」「惡一」「一歌」「一集」毛詩序「在レ心爲レ志、發レ言爲レ一」○經書の名、孔子が取捨選定せし古代の詩三百十一篇を收む。中庸「一曰、衣錦尚レ絅」＝詩經。毛詩。詩經。○六一は風、雅、頌、賦、比、興。
【詩人】シジン ○詩の題字「一一名英」○詩の香奩風韻。白居易詩「一一清緻玉不レ如」
【詩人】シジン 詩歌。圖繪寶鑑「頗況字遠翁、好二一一一善畫二山水一」
【詩人】シジン うたの孔叢子「天子謁狩、命レ史采二一一一以觀二其風一」唐書、蘇瓌傳「每以二一一一託レ諷」
【詩翁】シオウ 詩を作るおきな。徐積詩「一一兩眼看二孫兒一」
【祭レ詩】サイシ 自分の作りし詩を祭る、其の苦心を慰める意。唐書、賈島傳「島苦吟、當以二歲除之夜一取二一年所レ作詩一、以二酒脯一祭レ之、曰、吾勞二精神一以レ此補レ之」
【詩家】シカ 詩人。楊巨源、城東早春「一一清景在二新春一、柳絮梅英各自呈一レ香」＝詩客。
【詩癡】シチ 詩人のすぐれたるもの。唐書、劉禹錫傳「禹錫善レ詩、晩節尤精、白居易以レ詩自名者、皆推爲二一一一」＝詩伯、詩案。
【詩稿】シカウ 詩のしたがき。＝詩草。

【詩窮子】シキウ 詩才に富める人の稱。唐書故事「詩人才多號二一一高仲裕一詩窮子一」‖詩窮。

【詩客】シカク 詩を作る人。姜夔詩「城南一一今寥寂」‖詩人・詩家・騷人。

【詩格】シカク ○詩を作る法則。○詩の品格。初學新語「蘇黃雖出、然後一一極二于高古一」

【詩眼】シガン 詩を思ふ人の眼力。范成大詩「道眼已空一一在、梅花欲レ動雪花稀」

【詩經】シキヤウ 五經の一、古、采詩の官ありて、四方の詩を采り集め、政治の得失を知る參考としたもの、もと三千餘首ありし中にて、孔子刪りて三百十五篇とす、古は單に詩と稱す、毛亨(大毛公)毛萇(小毛公)の學を傳ふ、故に毛詩とも稱す。

【詩興】シキヨウ 詩のおもしろみ。杜甫詩「東閣官梅動二一一一」‖詩趣。

【詩課】シクワ 詩を作る課程。劉說詩「一一學經遠レ不レ誤、東風早送二錦衣一還」

【詩會】シクワイ 詩人のよりあひ。孟郊詩「昔遊一一滿、今遊一一空」‖吟社。

【詩卷】シクワン 詩を集めたる書物。杜甫詩「一一長留天地間」

【詩形】シケイ 圖詩のかたち、詩の形式。

【詩語】シゴ 詩のことば。漢書、禮樂志「其威儀足二以充一レ國、音聲足二以動一レ耳、一一足二以感一レ心」

【詩囊】シナウ 詩の題に富める地。白居易詩、擁李二吟詠二風一一、興入二笙歌一好醉鄉」

【詩材】シザイ 詩を作る材料。唐子西語錄「收二拾一一一以備レ用」‖詩料・詩資。

【詩債】シサイ 作るべき詩を作らずにある詩の負債。白居易詩「願我酒狂久、負二君一一一多」

【詩草】シサウ 詩のしたがき。‖詩稿。

【詩史】シシ 詩を以て時事を述ぶるもの。唐書、杜甫傳「甫遭二陳二時事、劉切指深、至二千言一不レ少衰、二時號二一一一」

【詩思】シシ 詩を作るかんがへ。北夢瑣言「鄭綮曰、吾一一在二灞橋風雪中驢子背上一」

【詩仕】シシ もと、詩十篇の義。轉じて詩綴の義とす。宋史、張洎傳「爲二近臣一一」

【詩集】シシフ 詩をあつめたる書物。

【詩人】シジン 詩歌に巧みなる人。揚子法言「一一之賦、麗以則」‖詩家・詩客。

【詩識】シシキ 作りし詩の語が、偶然後日に起りし事の前兆をなせるをいふ。南史、侯景傳「初簡文寒食詩云、雪花無レ有レ蔕、冰鏡不レ安レ奩、又詠月云、飛輪了無レ轍、明鏡不レ安、レ奩、後人以爲二一一一」

【詩酒】シシユ 詩を作りさけを飲む。又詩と酒と。南史、袁粲傳「粲負レ才尚レ氣、雖二位任隆重一、不レ以二事務一經レ上、唯與二一時名勝一、詩酒流宴」

【詩聖】シセイ 古今第一人の詩人、杜甫を稱す。楊升菴文「李白神二於詩一、杜甫聖二於詩一」

【詩抄】シセウ 詩のぬきがき。隋書、經籍志「梁有二雜一一一卷一」‖詩鈔。

【詩鈔】シセウ 前條に同じ。

【詩仙】シセン ○詩才の特にすぐれたる大家。‖詩聖。○李白をいふ。滄浪詩話「太白仙才、長吉鬼才」○作詩に耽りて世外に超然たるもの。牛僧孺詩「一一有二劉白一」

【詩癖】シヘキ ○詩をかくかみ。陳書、徐陵の頻。○清名、漢の鄭玄が毛詩に注せしもの、箋は其の意義を表識する義。

【詩宗】シソウ ○詩の大家。‖詩伯。○詩經專門の大家。漢書、儒林傳「博士江公世爲二一一一」

【詩人】シジン 詩を作る人。草木子「某一一也、逢二命蹇一、詩人玉屑、卷一

【詩體】シタイ 詩の體。詩人玉屑、卷一「守二法度一曰レ詩、載二始末一曰レ引、體如二行書一曰レ行、放情曰レ歌、雜レ之曰二歌行一、悲如二訴怨一曰レ吟、通二乎俚俗一曰レ謠、委曲盡レ情曰レ曲」

【詩壇】シダン 詩を作るなかま。劉禹錫詩「卻憶南澗一一叢」

【詩腸】シチヤウ 詩を作るこころ。‖詩情・詩思。

【詩腸鼓吹】シチヤウコスイ 腸の辭をいふ、戴顒の故事。世說、曾謂「戴仲若、晉日攜二雙柑斗酒一、人問二何之一、答曰、往聽二黃鸝聲一、此俗耳針砭、——」仲若名は顒。

【詩中有レ景】シチウアリケイ 詩句中に巧に景を寫し出せるを稱する語。東坡志林「味二摩詰之詩一——、畫中有レ詩」摩詰は唐の王維の字。

【詩的】シテキ 圖詩の情趣ありて美感を動かす形容。

【詩敵】シテキ 詩を作るによきあひて。白居易詩「別來少レ逢レ新一一、老去難レ逐二酒徒一」

【詩筒】シトウ 詩を入れる竹のつつ。唐語林「白居易爲二杭州刺史一、與二吳興守錢徽・吳郡守李穰一酬唱、多以二竹筒一盛レ詩往來、謂二之一一一」

【詩箋】シセン 作りたる詩を寫れるふくろ。唐書、李賀傳「李賀有二古錦囊一、則得レ句納二其中一」陸游詩「古錦一一覓レ句忙」

【與二於詩一】ヨシニオケル 詩をよみて心を引き

立てる。論語、泰伯「――、立ニ於禮ニ、成ニ於樂ニ」

【詩有ニ別才ニ】シニベツサイアリ　詩作は天才ありて必ずしも學問の、淺深のみによらずとの意。滄浪詩話「――、非レ關レ書也、詩有ニ別趣ニ、非レ關レ理也」

【詩牌】シハイ　○詩を書きたる木の板。王安石詩「當ニ挂ニ廟壁ニ爲ニ一一ト」○上下平韻三十字を一枚毎に記したる紙の札、韻字を分けて詩を作るに用ふ〔考槃餘事〕＝韻纔。

【詩伯】シハク　詩の大家。晉陽秋「張植謂、陸機兄弟文籍滿腹、號ニ人曰ニ二陸乃今之ニ一一也」杜甫詩「平公今ニ一、秀發吾所レ羨」＝詩宗・詩豪。

【詩言レ志】シハイフコトアリ　詩は己の意志を述べるもの。書、舜典「――、歌永レ言、聲依レ永、律和レ聲」

【詩品】シヒン　○詩の品格。＝詩格。○書名、三卷、梁の鍾嶸撰す。漢魏晉代の古詩を批評せしもの。

【詩賦】シフ　詩と賦と、共に韻文。

【詩文】シブン　詩賦と文章と。

【詩癖】シヘキ　作詩を嗜む性癖。梁書、簡文帝紀「七歲有ニ一一ニ、長而不レ倦」

【詩篇】シヘン　詩の篇章。元稹詩「李杜一一歌、蘇張筆力匀」

【詩魔】シマ　○作詩の念を生ぜしむる一種のふしぎなる力。白居易詩「惟有ニ一一降未ニ得、每レ逢ニ風月ニ一閒吟」○詩が魔道に堕つ、野鄙にして正しからざる詩想。滄浪詩話「學レ詩者、當下以ニ漢魏晉盛唐ニ爲ニ師、不作ニ開元天寶以下人物ニ、若自退屈、即有ニ下劣ニ一一ニ入ニ其肺腑之間ニ」

【詩聖】シセイ　詩を作るなかま。＝吟社。

【詩餘】シヨ　詩體の名、樂府の變じたるもの、詞の異名。劇中詩話「唐人長短句、詩之餘也、始ニ於李太白ニ、太白以ニ草堂一名ニ集、故謂ニ之草堂一ニ」文體明辯「――者古樂府之流則、而後世歌曲之濫觴也」＝詞曲・塡詞。

【詩流】シリウ　○詩のながれ。理園賦序「賦者、古詩之流也」○詩人。杜甫詩「轉前失ニ一一ニ」

【詩律】シリツ　詩の規則、又、格調。杜甫、遣悶詩「晩節漸於ニ一一ニ細」

【詩侶】シリヨ　詩を作るなかま。白居易詩「醉思ニ一一有ニ同年ニ」＝詩友。

【詩禮之訓】シレイノオシヘ　子が父の教を受くるにいふ。伯魚が父の孔子より詩と禮との學ぶべき所以を聞きし故事に本づく〔論、季氏〕

【詩料】シリヤウ　詩を作る資料。楊萬里、過ニ太湖石塘ニ詩「松江是物皆ニ一一、隨レ燥寧レ湖即水仙」

【詩話】シワ　詩につきての說話。

【詩話總龜】シワソウキ　書名、前集・後集共に九十八卷、宋の阮閱撰す、漢魏以來北宋に至るまでの詩話を集む。

【試】シ　寘

○こころみる、ためす。こころみ、ためし（驗）「考ニ一」「ニ驗」○もちふる（用）論、子罕「吾不ニ一、故藝」○こころみに。

【試航】シカウ　ためしに航海する。＝試船。

【試毫】シガウ　かきぞめ。＝試筆。

【試金石】シキンセキ　金銀をすりつけて、其の眞贋を判つに用ふる黑色緻密の石。轉じて、物の力をためす材料となるもの。

【試掘】シクツ　ためしに鑛山などをほる。

【試官】シクワン　○試驗をつかさどる官吏。＝考官。○みならひの官吏〔雅考〕＝試補。

【試卷】シクワン　官吏登用試驗の答案。宋史、選擧志「凡發解舉人合格ニ一一姓名、類ニ申禮部ニ」

【試業】シゲフ　學業を試みためす。＝試驗。

【試ニ劍】シケンコロ　つるぎの銳鈍又は其の使用法をためしこころみる。孟、滕文公「好ニ勇ニ一一」

【試驗】シケン　こころみしらべる。

【試驗管】シケンクワン　理化學の實驗に用ふるガラス管の容器。

【試作】シサク　圖ためしにつくる。＝試植。

【試見】シケン　兒の性質を試みる。顏氏家訓「江南俗兒生一期、爲製ニ新衣ニ一盤ニ浴裝飾、男則用ニ弓矢紙筆ニ、女則用ニ刀尺鍼縷及珍寶物玩ニ一ニ之兒前ニ、觀ニ其所ニ取、以驗ニ貪廉智愚ニ」

【試紙】シシ　試驗に用ふるかみ。＝藩書。

【試習】シシフ　苗晉卿傳「手持ニ一一ニ、竟日不レ下ニ一字ニ」時謂ニ之鬼白ニ」

【試新】シシン　○新穀を試み食ふ。孟浩然詩「授衣同ニ一一」＝嘗新。○茶の名。四溪叢話「建州茶有ニ十種ニ、第一名曰ニ一一ニ」

【試植】シシヨク　ためしにうゑる。

【試涉】シセフ　僞のわたりぞめ。玉堂叢話「金水河橋成、詔簡ニ有德者ニ一一」

【試船】シセン　ふねの運轉をためす。魏志、杜畿傳「帝幸ニ許昌ニ、畿居守、受レ詔作ニ御艘船ニ、於ニ陽河ニ一レ」

【試探】シタン　こころみさぐる。後漢書、應劭傳「中興初、有ニ廳鄙者ニ一生ニ四子ニ而窮、見ニ神光照ニ社ニ一ニ之、乃得ニ黃金ニ、自ニ是諸子宦學竝有ニ才名ニ」

【試筆】シヒツ　かきぞめ。＝試毫。

【試補】シホ　みならひの官吏。

【試問】シモン　ためしに問ふ、試驗して問ふ。

【試用】シヨウ　こころみに用ふる。晉樂詩「丈夫ニ一一何時遭」

【誇】シ　支　紙

○わかる（離別）○一臺は別館、はなれざしき。說文「周景王作ニ洛陽ニ一臺ニ」

【誦】 シウ 尤

こたふ。こたへ、いらへ（答）‖酬（二〇一〇頁二段）

【誦答】ダフ こたへる、返答する。北史、劉芳傳「一一論難」‖酬答。

【読】 シン セン 眞 霰

○おほし（衆多）○和ぎ集る貌。

【読読】シン おほき貌。又、やはらぎ集る貌。詩、周南「葛覃斯羽一一兮」‖読読如。

【詳】 ㊀ シャウ ㊁ ヤウ 陽 漾

○つまびらか（審）くはし「一審」「精一」語が備はる。孟、萬章「其一不可」得聞也」○つまびらかにする、つまびらかに議する。○あきらか（諦）○つくす（悉）ことごとく（盡）漢書、武帝紀「一延天下方聞之士」○めでたし、よし（善）古、詳に通ず。左、成十六「一以事神」㊁いつはる（詐）史、殷紀「箕子一狂爲奴」古、佯に通ず。

【詳審】ダフ つまびらかにそらんず。賈島詩「居名未一一」

【詳允】イヤウ 物事にくはしくして處置の善く平かに當る義。沈約、授二蕭嶷休右僕射一詔「才學沈通、識裁一一」‖該允。

【詳雅】シャウガ 善くしづかにしてみやびやか。晉書、王衍傳「神情明秀、風姿一一」‖安詳温雅。

【詳審】シャウシン 詳密にしらべる。‖詳察。

【詳確】シャウカク つまびらかにしてたしか、詳細にして明確。唐書、盧從愿傳「升退一一」

【詳察】シャウサツ くはしくしらべる。陳書、傅綽傳「隨レ理一一」‖詳覈。

【詳計】シャウケイ ○よくはかりかんがへる。漢書、翟方進傳「君其熟念一一、審二絶姦原一」○よくかんがへたる謀計。

【詳妍】シャウケン 善くおちつきてうつくしい。陶潛、閑情賦「神情嫵媚、擧止一一」

【詳細】シャウサイ つまびらかにくはし。‖委細。

【詳察】シャウサツ つまびらかにかんがへる。史、淮陰侯傳「願足下一一之」

【詳悉】シャウシツ つまびらかにつくす。北史、毋丘儉傳「四方縣遠、難レ可二一一」

【詳審】シャウシン つまびらか。論衡「聖賢下レ筆造レ文、用意一一」‖審詳。

【詳述】シャウジュツ くはしくのべる。‖詳陳・詳說。

【詳正】シャウセイ くはしくしてただし。魏記、序「章句一一、微稽衆旨」

【詳說】シャウセツ くはしく說き明かす。孟、離婁「博學而一一レ之、將二以反說一レ約也」

【詳撰】シャウセン つまびらかにえらぶ。王植文「謹勵二愚誠一、靈思一一」

【詳選】シャウセン つまびらかにえらぶ。後漢書、和帝紀「詔有司一一郎官、寬博有レ謀、才任二典城一者三十人」

【詳悉】シャウシツ あきらかにとりさばく。宋書、孝武紀「當二悉一一一、庶無二留レ獄」‖審悉・精悉。

【詳諦】シャウタイ つまびらか。唐書、權德輿傳「德輿知二禮部一三歲、甄品一一」

【詳傳】シャウデン くはしき傳記。

【詳報】シャウハウ くはしらせ。‖細報。

【詳敏】シャウビン くはしくさとし。周書、柳慶傳「幼弟弘、占對一一、見レ稱二於時一」

【詳平】シャウヘイ とりさばきが明かにして公平。漢書、孔光傳「左遷廷尉、久典二尚書一、練二法令一、號稱二一一」

【詳密】シャウミツ ○くはしくこまか。後漢書、左雄傳「論陽一一」○思慮がこまやかにゆきとどく。唐書、楊綰傳「性一一、出納雖二冗尺一、皆自按省」

【詳明】シャウメイ ○くはしくあきらか。○くはしくあきらかにする。

【詳覽】シャウラン つまびらかにみる。後漢書、樂恢傳「一二軍言」

【詳略】シャウリャク つまびらかなると、あらまかなると。孔穎達、春秋序「辭有二一一」‖精粗。

【詳料】シャウリャウ つまびらかにはかり考へる。王儉文「重於規矩細行、雖レ可二一一」

【詳練】シャウレン つまびらかに習ふ。北史、叱羅協傳「歷二事二京、一二故事一」‖審練・精練。

【詳錄】シャウロク つまびらかにかきしるす。公羊傳、注「一一其傳一」

【詳論】シャウロン くはしくあげつらふ。賈公彥、儀禮序「一二可否一」

【詢】 ジュン 眞

○とふ（咨）謀、坊記「一于芻蕘」○はかる（謀）相談する「細一」「諮一」書、舜典「一事考二言一」○まこと（信）‖洵。

周訓別記 ㊟詢・問・訊・咨訪・諏の別は問（三三八頁二段）の條を見よ。○詢・計・謀・圖・度・測・料・忖・揣等の別は計（一七七頁一段）の條を見よ。

【詢按】アンたづねしらべる。唐書、裴休傳「休分二遣官一一二其繇一」

【詢察】サツたづねしらべる。元史、耶律楚材傳「燕多二剽賊一、楚材一一、得二其姓名一、靈捕下レ獄」‖審訪。

【詢考】コウとひはかる。國語「文王詢二于八虞一而咨二于二虢一」‖咨詢。

【詢訪】ハウとひはかる。晉書、張重華傳「嘗下盧レ己引納、一一政事上

【詢謀】シュン とひはかる。又、はかりごとをとふ。晉語「詢志先定、一一会同、鬼神其依、龜筮協従」＝咨謀。

【詮】セン 先

○そなふ。そなはる(具)○つぶさに事理を説きあかす。又、其のことば「言ー」○事の真理。杜甫詩「衣裓向ー眞」○えらびたることば(撰言)○さとす(解喩)○たひらか(平)○のり(則)圖○かひ、しるし「ー無し」○つまり、つまる所「ー帰する所」

【詮較】セン はかりしらべる。白居易詩「一一天下郡」

【詮徴】セン 其の職理をつまびらかに説き明かす。呉越春秋「惟夫子経二此疑一也」

【詮議】セン とりしらべはかる。くはしくとりしらべる。

【詮釋】シャク ときあかす。又、ときあかしのことば。類聚古、銑賢良問「厥宜如何、行聞二一一」＝詮解・訓解。

【詮證】ショウ ときあかし、事實によりて解説する。梁経、疏「前儒一一、各擅二一家一」

【詮論】ロン 事理を明かにして講論する。晉書、武陵傳「文帝数與一一」

【詹】㊀セン ㊁タン 覃 咸

㊀いたる(至)詩、魯頌「魯邦所ー」○一はことばおほし、多言の貌。○みる。瞻に通ず。○一事は秦の官名、皇后・太子の家事を掌る(一は省なり、給なり、事を省み給する義)○占に通ず。一尹は占卜の長官。○簷に通ず。一諸はひきがへる。＝蟾蜍。㊁たる(足)呂覧、適音「不充則不ー」

【詹詹】セン 多言なる貌。莊、齊物「大言炎炎、小言一一」

【託】タク 禡 或は咤に作る

○ほこる(誇)「誇ー」○あざむく(誑)大言を吐きて人を驚かす。唐書、史思明傳「思明一日、朝義怯、不能成我事」○訑タクる、驚き異ヤむ「一異」「驚ー」○謝罪する。

【誅】チュ 虞 通音チュウ

○罪人を殺す「族ー」證、月令「詰ー暴慢」○つみ。つみする(罰)○やぶる、きずつく(傷)○うつ(討伐)兵力にて罪人をせめうつ「天ー」○せむ(責)とがめる。論、雍也「於予與何ー」○のぞく、きりはらふ、蔣除する「ー鋤」「ー茅」○ほろぼす(滅)○罪が其の血族にまで及ぶ。

【誅夷】チュ うちたひらげる、夷は平。

【誅賞】チュ 賞めしかる。韓維詩「尚畏官長来ー一」＝譴訶。

【誅求】チュ きびしくせめて貨財をむさぼり取る。左、襄三一「一一無レ時、是以不二敢寧居一」＝苛責。

【誅降】チュ つみしころす。吳志、陸抗傳「徙容列位、而竝旋受二一一一、或妃レ族誉レ記、或投二棄荒裔一」

【誅殺】チュ ころすと、ゆるすと。晉書、劉頌傳「此爲レ政一一之準式也」

【誅賞】チュ 罰を賞め、善をほめる。周禮、大宰「三誅則大計羣吏之治、而一一之一」後漢書、陳忠傳「選舉一一、一由二尚書一」

【誅鋤】チュ ○すきのぞきて、ねをたやす。楚辭、卜居「寧一一草茅、以力結乎」○わるものを殺しつくす。子華子「一一醜厲一」

【誅罰】チュ つみあるものを殺す、罰はきる。後漢書、襄楷傳「其所二一一、皆合二人望一」

【誅逐】チュ わる者をせめておひはらふ。漢書、蕭何傳「高祖一一亂臣、務求二賢聖一、是以衆聖輔レ德、賢能佐レ職、教化大行、天下和洽」

【誅珍】チュ つみを正してうちほろぼす。隋書、高祖紀「以二上天之寵一、助二親定之力一、便可二出レ師授レ律、應レ機一一」＝誅滅。

【誅放】チュ つみしはなつ。書經「集編レ惡自棄放一一」

【誅茅】チュ かやをきりて屋をつくる。杜甫詩「卜二此幽棲一茅可レ誅」＝誅鋤芟荒。

【誅伐】チュ 罪人をせめうつ。又うちころす。史、律書「刑罰不レ可レ措二于國一、一一不レ可レ廢二于天下一」

【誅罰】チュ 賞めて罰する。周禮「犯レ禁者、執而一一之一」

【誅戮】チュ ころしたふす。禁令、朱公叔謚議「一一貪暴、刺二殘賊一」

【誅滅】チュ 罪ある者をせめほろぼす。

【誅戮】チュ ○つみし殺す。史、始皇紀「逆二興師旅一、一一無道一」＝殄戮。○賞めて罪に行ふ。周禮、秋官、職士「一一暴客者一」

【誂】㊀テウ ㊁デウ 嘯

㊀いどむ、微言を以ていざなふ。說文「相呼誘也」史、吳王濞傳「使二中大夫應高一誂二西王一」○もてあそぶ(弄)○たはむる(戯)○嗷一テウは聲の清らかにして暢びる貌。楚辭、九思

「聲噭ー兮清和」㊁にはか（卒然）淮南、兵略「雖ー合刃于天下、誰敢在ー其上者」○圖アツラヘ注文して作らす。又、其の品物。

【誄】 誄（管邨九誄）の俗字。

【誄】 ルキ 祭

○しのびごと、ーは累、死者の生前の功徳を累列して之を稱する。左、哀十六「孔丘卒、公ー之」又、其の文詞「哀ー」「ー曰」周禮、春官、大祝「作六辭」以通ニ上下親疎遠近六日ー」○神にねぎり福を求める詞。論、述而「丁曰、禱ニ爾于上下神祇ニ」【約レ誄】ツルキヲ 死者を哀シノみて誄辭を作る。晉書、郗超傳「及ニ死之日、貴賤操レ筆ーレー者四十餘人」

【誘】 イウ 有 畫

○いざなふ、さそふ。○ひきすすむ（引進）「開ー」論、子罕「夫子循循然善ー人」相勸むる「勸ー」○そそのかす（唆）おびきだす。○まどはす（惑）言を以て人を惑はす。淮南、主術「秦穆公以ニ女樂ー之」

【誘引】イウイン さそふ、いざなふ。後漢書、張興傳「ーニー東莞ニ與共盟誓」

【誘益】イウエキ みちびきたすける、誘導裨益。後漢書、孔融傳「好レ士、喜ーニー後進ニ」＝誘掖。

【誘掖】イウエキ みちびきたすける、掖は傍に在りてたすける。詩、陳風、衡門箋、序「ーニー其君ニ」＝誘益・匡導扶翼。

【誘拐】イウカイ いつはりてかどはかす。

【誘騎】イウキ できをおびき出す騎兵。史、李將軍傳「廣徒百騎ニ張ニ左右翼ニ、得ニ匈奴有ニ子騎ニ見レ廣以爲ニー、皆驚上ニ山陣」

【誘誨】イウクワイ すすめをしへる。甘誓文「ーニー學者ニ」＝誘教。

【誘勸】イウクワン みちびきすすめる。唐書、陽嶠傳「遣ニ國子司業ニ嗣岌ー飭ニ釋奠ー勸ニ學ー、岌ーニー後生ニ」

【誘教】イウケウ みちびきをしへる。集仙錄「每欲レーニー後進ニ」＝誘導。

【誘殺】イウサツ いざなひ出してころす。左傳「而沃伯誘ニ晉小子侯ニ殺レ之」

【誘進】イウシン ○いざなひすすめる。史、儒林傳「ーニー以ニ仁義ニ、束縛以ニ刑罰ニ」○いざなひて引きあげ用ふる。晉書、張華傳「性好ニ人物ニー不レ倦」

【誘導】イウダウ いざなひみちびく。吳志、士燮傳「ーニー益州豪姓雍闓等ニ」＝誘致。

【誘致】イウチ さそひいだす、おびきよせる。漢書、武帝紀「ーニー單于ニ」

【誘東】イウトウ 心をみちびきて善をなさしむ。左、僖二八「天誘ニ其衷ニ」

【誘敵】イウテキ できの兵をおびき出す。左傳「鍼ニ其軍ニ以レー」

【誘兵】イウヘイ ことさらに敗れたる風をして敵兵をおびき出す兵。漢書、趙充國傳「此皆驍騎難レ制、又恐ニ其爲ニーニ也」

【誘慕】イウボ 他に心をひかされる。淮南子「使ニ耳目精明ニ而無ニーニー」

【誘惑】イウワク いざなひまどはす。淮南子「天下莫レ易ニ手爲ニ、適レ情辭レ欲、無ニ所ニーニー」

【誡】 カイ 卦 又、戒に作る。

○いましむ（警敕）注意して謹む。易、繫辭「小德而大ー」○いましめ（敕令・戒告）「家ー」「箴ー」荀、強國「發ー布令而敵退、是主威也」○つぐ（告）○いひつけ（命）

【誡勅】カイチ 經誡・戒・警・敕・箴・敎の別は戒（七（五三）の條を見よ。

【誡海】カイカイ いましめをしへる。魏志、趙王幹傳「賜ニ幹璽書ー誡ニーニ之ニ」

【誡勉】カイベン いましめ、はげます。北史、蕭琮傳「璽書ー誡ニーニ之ニ」

【誥】 ㊀カウ ㊁コク 沃 號

㊀つぐ（告）上より下にさとし告げる。易、姤卦「后以施ニ命、ー四方」又其のことば。書經の「大ー」「康ー」の類。周禮、春官「大祝作ニ六辭ー以通ニ天下親疏遠近ニ日ー」○さとす（諭）をしふ（敎）いましむ（戒）○ちかひ、いましめ、をしへ、つけ。○唐以後、一品より、五品官に至る官吏を任命する辭令書「制ー」「ー命」「ー授」㊁つぐ（告）

【誥誡】カウカイ つげいましむ。梁昭文「願ニ符策ーニ之誥ニ」

【誥命】カウメイ 明清時代、五品官以上を任ずる時に授ける辭令（「通考」）

【誂】 キ 支 寘 又、唆に作る。

○ああ、あ、歎息の聲、厭惡の聲。然諾の聲。○しふ（強）又、たのしむ（娛）「ー笑」○ー誥は慫慂（ショウヨウ）の貌。

【記】 キ 寘

○いましむ（誡）○つぐ（告）○まこと（信）

【註】 註（言部八畫）に同じ。

【誑】 キャウ 養 又誤に作る

○たぶらかす。○かたる、あざむく（欺）「欺ー」曲禮「幼子常視無ー」（視は示）○まどはす（惑）

同訓異字 誑・欺・瞞・給の別は欺（一〇〇〇頁三段）の條を見よ。

【誑誘】キャウイウ たぶらかしいざなふ。晉書、孫惠傳「浮狡有ー小才」ー二百姓、愚者敬之如ー神、皆竭ー財産、進ー子女」以求ー福慶」

【誑惑】キャウワク たぶらかしまどはす。後漢書、皇甫嵩傳「轉相ー」

【誰】 ㊀スイ ㊁タイ 支 灰

㊀だれ、はなす「私ー」「耳ー」「笑ー」「低ー」○とく（說）論ずる。人と議論をする、答へ述べる（言は自ら言ふ）家語「孔子之ー鄭、遭程子于塗、傾蓋而ー、終日」○ことば（言辭）もんく「古ー」○ことわざ（諺言）穀梁傳「一曰、脣亡則齒寒」○鳥蟲の鳴き聲「烏ー」「雞ー」「馬ー」○論語の略稱「ー孟」○動作にて意を示す、手ーは琴を彈ずる義。目ーは目じらせして意を通ずる。㊁をしへる、敎戒する。○つげる（告）言を以て人に告げる、いひきかせる。（禮、陽貨「居吾ー」汝」

【誰何】スイカ 何も疑問。誰ぞと問ふ。

【誰某】スイボウ 某も疑問。誰某と名を問ふ。

【誰昔】スイセキ 昔も疑問。昔誰の時代。

【誰人】スイジン 人も疑問。誰人ぞ。

【誰某】スイボウ 某も疑問。誰某と名を問ふ。

【誰氏】スイシ 氏も疑問。誰氏ぞ。

【誰家】スイカ 家も疑問。誰家ぞ。

【誰彼】スイヒ 彼も疑問。誰彼と名を問ふ。

【誰某】スイボウ 某も疑問。誰某と名を問ふ。

【誰何】スイカ 何も疑問。誰ぞと

【詼】ケ、 諧

○うそつく(妄語)○しゃべる(多言)

【誤】ゴ 圖

○あやまる、まちがへる。あやまり(謬)あやまち「過ー」「舛ー」「錯ー」「謬ー」「脫ー」呉志、周瑜傳「瑜精音樂雖三爵後、其間缺ー、知之必顧、故時人諺曰、曲有ー、周郎顧」○まどふ。まどはす(惑)惧に通ず。

同訓異義 ゴ誤・謬・訛・錯・愆・過・失 ○誤は氣づかずして、しそこなふなり、誤字はかき損じの字なり。漢書「誤持二同金一與二金一」○謬は狂者之妄言也と註す、轉に作る、同じ、もと織物の縒すぢの違ひたるなり、紕繆と連用す、それより筋道のゆき違ひたるに用ふ、謬見と熟す。後漢書「差以二豪釐一謬以二千里一」○訛は譌と音義同じ、いつとなくあやまり遂ふ義、訛字・訛言と用ふ、誤字とは、犬を大と誤る如きをいひ、訛字とは歩を步と書く類をいふ。○錯はやすりの類、鎚の入り違ひたるより、轉用して、彼此入りちがふに用ふ。家禮序「錯二認金根一爲二金銀一者」○愆はあやまちと訓む、心得違ひなり、罪愆と連用す。書經「罔ノ愆期ノ譯」○過は惡心なく、誤りて犯したるをいふ。論語「過則勿ノ憚ノ改」○失は過失・失火と熟す、失ノ手はあやまりて取りおとす義。

【誤解】ゴカイ あやまれるかんがへ、考へちがひ。

【誤謬】ゴビュウ あやまりてつまづく。杜甫詩「宿昔歷塊誤一蹶」

【誤差】ゴサ ちがひ、あやまり。

【誤殺】ゴサツ あやまりてころす。元史、答里麻傳「有二牧童一持二鐵連結一擊二野雀一ー二ー同牧者一斃ノ獄」

【誤算】ゴサン かんぢゃうちがひ。

【誤字】ゴジ あやまれる文字。

【誤事】ゴジ 事を害する。晉書、愍帝紀「愍帝將二出降一、歎曰、誤二我事一者、劉粲二公也」魏允と粲琳との二人。

【誤寫】ゴシャ うつしあやまり。

【誤書】ゴショ ○あやまりて書く。○誤字ある書物。世說、文學「邢子才有ノ書甚多、不二甚讎校一、嘗謂ー人ー「思之、更是一適」

【誤植】ゴショク 活字のうゑあやまり。

【誤脫】ゴダツ 文字をあやまり、又はおとす。誤字と脫字と。‖脫誤。

【誤置】ゴチ まちがへておく。史、外戚世家「宣者忘之、ー二ー其轉代位中」

【誤傳】ゴデン あやまりつたへる。‖誤報。

【誤認】ゴニン あやまりてみとめる。認は識。司馬光、晚庵亭詩「聳立二斜陽一頭似ノ雪、往來ー白公家」‖錯認。

【誤報】ゴホウ あやまりのしらせ。王逢詩「ー迎ノ鑾出二兼宮一階前草是胭來紅」

【誤讀】ゴドク あやまり。史、章綸傳「懵ノ有ニー一數數省讀」‖遺讀・誤讀。

【誤聞】ゴブン きゝあやまり。

【誤惑】ゴワク まどはす。まどふ。司馬光文「不ノ可下改二成法一、復徇二流俗一ー後生上」

【誌】シ 圖

○しるす(記)かきつける。○心におぼえる、記憶する。唐書、褚亮傳「圖史一經目輒ー于心」○しるし(標記)荊楚歲時記「以二血點一衣以爲ー」○ふみ(文書)事實をしるせし文章「墓ー」「碑ー」「地ー」「名山ー」志に通ず。○あざ(黑子)南齊書、江祏傳「高宗胛上有二赤ー一」古、痣に通ず。

【誦】ショウ・ジュ 宋

㊀㊁ 訟(言部四畫)に通ず。

㊀となふ(唱)唱へ讀む「讀ー」「精ー」ふしをつけてよむ。○うたふ(歌)謳みて音節あるもの「諷ー」「ー詠」證、文王世子「春ー夏弦」○そらんじよむ「背ー」「暗ー」「記ー」○言ふ、說く、はなす、論ずる「稱ー」○うらみそしる(怨謗)左、襄四「國人ー之」㊁うったふ、あらそふ(爭)

同訓異義 誦・讀・念・諷の訓は讀(一八三九頁一段)の條を見よ。

【誦詠】ショウエイ 詩歌をそらんじうたふ。南史、宗豫傳「好ノ學博聞、善談二雜俗一、每與二較古今一、依以ニー一證者多ノ當」

【誦諫】ショウカン 戒となるべき詩歌をうたひて人をいさめる。國語「使三工ー二ー於朝一」

【誦經】ズキョウ ○聖人の經書を讀む。唐書、呂才傳「子方幼、七歲能ノ誦ー」○ズキョウ佛の經文を誦讀す。張籍、宿二山寺一詩「好是遲淺水、房房伴ニー一」‖讀經。

【誦言】ショウゲン おほやけにいふ(公言)謠言、未二敢ー一誅一也之」‖訟言。

【誦功】ショウコウ いさををときたてる。史記「羣臣ノ一、請ノ刻二于石一」‖頌功。

【誦詩】ショウシ 詩をそらんじよむ。論記「ー二ー三百一、不ノ足二以一獻一」

【誦習】ショウシュウ そらんじならふ。史、儒林傳「兒童冠帶ノ誦、止息則ー二ー之一」

【誦呪】ジュジュ 道士などが經文を唱へて

所ゝ謂ゝ尹子「有二一ノ一者一有二事ノ一神者一」

【通說】セツ　○よむと、說きあかすと。韓非、儲說、註「一ニ一言事二也」○經書をよみて解說する。荀子「一一而不ノ陵不ノ狼、可二以爲ノ師」

【通說】セツ　そらんによむ。漢書、王褒傳「太子宮襲所ノ爲甘泉及洞簫頌、令二後宮貴人左右、皆一ニ一之」

【通說】セツ　よみて其の意味をかんがへあきらかにする。晉書、文苑傳「袁宏、作二北征賦一、王珣一一久之、謂二伏滔一曰、當今文筆之美、故當二共擅一此生一」

【誠】セイ　ジョウ　㊥

○まこと（眞實）まごころ（信心術・言行などの純一にしていつはりなき義。易、乾卦「閑邪存レ其一一」○まことにす、まことの道を實行する。中庸「誠者天之道也、一一之者人之道也」註「一者眞實無妄之謂」○まことに、けに、眞に、實に。孟、公孫丑「子一一齊人也」○つまびらかに（審）

【同訓異義】誠・信・忠・實・允・良・諒・洵の訓は信（一三七頁三段）の條を見よ。

【誠意】セイイ　○まごころ。心をまことにす。大學「欲レ正二其心一者、先誠二其意一」

【誠意伯文集】セイイハクブンシフ　二十卷、明の劉基の詩文集、其の詩は沈著にして頓宕、自ら一家を成し、高啓に次ぐべし、文も亦宋濂の亞なり。

【誠心】セイシン　二心なく純一にしてまことなり。心志專固。史、貨殖傳「皆一一之所ゝ致也」

【誠懇】セイコン　まことのこころ、懇も誠。楓弘「忠信一一之心」

【誠感】セイカン　まことの心の神人を動す義。南史、劉穆傳「奉ゝ母孝、母疾、夢二歐進一藥、及二覺日一、轉有ゝ間、故二其一一如ゝ此」

【誠然】セイゼン　まことと、いつはりと。何晏賦「察二俗化之一一」

【誠惶誠恐】セイクワウセイキョウ　おそれかしこまる、臣民が天子に上る書に用ふる辭。蘇軾、湖州謝上表「臣某——、頓首頓首」

【誠款】セイクワン　まことの心。懇志、鄧艾傳「君之一一、乃當レ爾耶」

【誠敬】セイケイ　○まごころありてつつしみうやまふ。南史、謝弘微傳「晨夕晬奉、盡二其一一一」○程朱學にて存誠と居敬と。

【誠悃】セイコン　まごころ。陶弘景、論書啓「伏願聖慈、照二臨一一一」

【誠懇】セイコン　まごころありてつつしむ。隋煬帝、奏孝王誄「愛自二聖衷一、天性誠懇、信二於天一」

【誠意】セイイ　○まごころ。○

【誓】セイ・ちかう・ちかい・ちかひ 矢○誓は盲矢に
てちかはぬ様に約束するなり、誓
書・誓詞の如し。○盟は牲を殺し、
血をすすり、神にちかふなり、誓よ
りは重し、春秋左傳には、盟の字多
し、書經には、誓の字多し、後世人
心の疑心深くなりたる證なり。○
矢は矢の誓直に向うへゆく如く、
何時までもかはらぬ義。
【誓詰】カキ 君が臣にちかふと、告ぐる
と、書經の泰誓・酒誥の類。孔穎達、
尚書正義序「湯武革レ命而一レ興」
【誓願】グヮンかけ。ちかひを立ててねがふ。
ぐゎんかけ。法華經「我本立二
一二一」＝立誓。
【誓言】ゲン ちかひのことば。書、湯誓
「女不レ從二一一」
【誓券】ケン 約束の證文。＝誓約書。
【誓師】シ 出兵の時に將士に誡めち
かふ。書經「禹乃會二群后一誓二于師一」
曰、濟濟有衆、咸聽二朕命一」
【誓紙】シ 國誓文に同じ。
【誓詞】シ ちかひのことば。正字通
「宋元盟以後、神前一一曰二誓狀一」
＝誓言。
【誓祉】シ 土地の神に誓ひを立てる。
總記「君親一レ、以習二軍旅一」
【誓書】シ ちかひのかきつけ〔文獻通
考、四裔考〕
【誓文】セイブン ちかひのかきつけ。後唐
書「令レ立二一一於明堂一」＝誓書。
【誓墓】セイ 父母の墓前にてちかふ。晉
書、王羲之傳「王遙爲二揚州刺史一、
檢二察會稽義之稱病去レ郡、於二父
母墓前一自誓、朝廷以二其誓苦一、亦
不二復徵一之」後人、官を去りて歸隱
するに、毎にこの故事を用ふ。
【誓命】メイ 君上の臣下に對するちか
ひと命令と。孔安國、尚書序「典謨
訓誥一一之文、凡百篇」
【誓盟】メイ ちかひ。＝誓約。
【誓約】ヤク ちかふ。又、ちかひ。蜀志、
彭羕傳「昔與二龐統一共相一一、庶
托二足下來躍一、盡二心于主公之業一」
＝契約・盟約。

【誥】コク 譙の古字

○せむ(責譴)「責一」「誡一」、「誥
一」書、金縢「王亦未敢一公」しか
りとがめる。○そしる。○せめ
る。
同訓異字 誥・評・謗・論・詆・刺・譏等の別は評(一八一四頁一段)の條を見よ。

【誥誡】カイ せむ、譴も責。漢書、鄒陽
傳「項王數使二使者一一召レ布」＝譴
責。

【說】㊀セツ 風 ㊁エツ 屑 ㊂ゼイ 霽 ㊃タツ 曷

㊀とく(解釋)意旨を釋明す
る。○のぶ(述)意想を述べる。
又其の言語文章「新一」「邪一」
「異一」○いふ(言道)談る「陳
一」「演一」「稱一」○ちかひのこ
とば、誓約の言。詩、邶風「死生
契闊、與子成一」○いのる、のろふ。いのり、鬼神にねがひ求
める。○文體の名「師一」「愛蓮
一」文體明辯「一、解也、述也、
解二釋義理一而以二己意一述レ之也」
㊁よろこぶ(懌)古、悦に通ず。
論、學而「不二亦一乎」○心から
服する。○人名。㊂ときすすめ
る、人に說きて己の意見に從
はしむ「游一」孟、盡心「一大人」
則說之」○やどる(舍)とまる。
詩、召南「召伯所一」＝稅に同じ。
○ゆるす(赦)
同訓異字 說・喜・悦・欣・歡・怡等の
別は喜(三九頁四段)の條を見よ。

【說卦】カ 義理を說く。漢書、藝樂志
「今學者不レ能二昭見一、但推二主意一以
及二天子一一レ一文頗謬異」＝釋義。
【說卦】カ 周易の篇名、孔子の作りし
十翼の一、八卦の德業變化及法象
を說きしもの。
【說經】ケイ 經書を說說する。後漢書、楊
政傳「幸二一書、京師爲レ之語曰、
一一經銘鄭子行、手行是楊家の字。
【說教】キョウ 宗教上のはなし。＝法話。
【說客】カク ○宋代の官名、天子の側に
侍して經書を進講する者。＝侍講。
○はなし家、講談師〔異聞總錄〕
【說談】ダン かたる。淮南子「一一者游二
於辯一、修行者覽二於往一一」＝談說。
【說得】トク ときさとす。
【說破】パ ○いひひらきさとす、ときつ
くす。白玉蟾詞「慨歎宋風清虛、活
計與レ君一一」○他人の意見主張を
說きやぶる。
【說法】ホウ ○道家にて其の道の話を
する。道藏大上經「末世道士、講レ經
一レ一」○佛教を說く。維摩經「爲爲二一一」
【說郛】ブ ○郛は郭ヲ。張說曾其の郭
內にある義。○法言、問神「大哉天地
之言、萬物郛、五經之爲二衆一一」
○書名、百二十卷、明の陶宗儀の原
本に、郁文博、及び清の陶珽の增
補せし一大叢書。
【說夢】ム ゆめをはなす。夢じて言語
の脈絡なるに喩ふ。冷齋夜話「此正
所謂癡人一一耳」
【說明】メイ ときあかす。ときあかし。
【說文】モン 說文解字の略、三十卷、漢
の許愼撰す、六書卽ち指事・象形・
形聲・會意・轉注・假借の義を推究
して其だ精し、清の段玉裁之に注
す。
【說盡】ジン ときさとす。
【說鈴】レイ 鈴の如き小さき聲、小說を
いふ。法言、吾子「好レ書而不レ要二諸

仲尼、書肆也、好ノ說而不ノ見ニ諸仲尼ノ一ー也」注「給以驗ニ小解ニ稱ニ小說不ニ合ニ大雅ニ」

【說話】セツワ　はなし、ものがたり。‖話說。

【說苑】セツエン　書名、二十卷、漢の劉向撰す、軼事ノ法戒と爲すべき者を錄す、其の著新序と體例を同くす。

【說客】セツカク　ときすすめする辯者、游說の人。史、酈食其傳「常爲ニ一ー」

【戰國】センゴク　戰國の時、韓の韓非の作りし文、游說は難し、先づ人主の意を知りて說するを訣とすべき旨を述ぶ。

【說喜】セツキ　心に滿足してよろこぶ。漢書、鮑宣傳「衆庶翕然莫ノ不ニ一ー」‖喜悅・欣喜・歡喜。

【說懷】セツワイ　よろこびなつきて心服する。司馬法「諸侯一ー、海內來服」‖悅服。

【說樂】エツラク　よろこびたのしむ。漢書、禮樂志「因ニ先王之樂ニ以敎ニ化百姓ニ一ー其俗ニ」‖悅樂。

【誕】タン　㊥

○あざむく（欺）「欺ー」「怪ー」「虛ー」「荒ー」史、扁鵲傳「先生得無ー」之乎」○いつはる（詐）○うそ、そらごと、妄りに大言を吐く。○ほしいまま（縱）わがまま「放ー」○ひろし（闊）詩、邶風「何ー之節兮」○おほいなり（大）おほいに。書、大禹謨「ー敷文德」○うむ。うまる（生）「ー日」降ーは天子の生るる後。○そだつ（育）○ここに、發語の辭。詩、大雅「ー賓之盤旋」

【誕欺】タンギ　あざむく。漢書、藝文志「ー怪迂之文、彌以益多」‖欺誕。

【誕謾】タンマン　方士などのとりとめなきいつはりごと。唐書、張鷟傳「出ニ入郎中ニ一ー敢言」乃岳詩「黃冠ー一謾勿ノ信」

【誕幻】タンゲン　いつはりてとりとめなし。楊炯碑文「佛老氏之ー一、奚啻菁瓊之殊ノ塗」

【誕育】タンイク　とりとめなく大いなること。孫楚文「放ニ此ー一」

【誕辭】タンジ　實なきでたらめ。後漢書「東名實ノ者、以ニ柱下一爲ニ一ー一」

【誕日】タンジツ　次條に同じ。唐書、德宗紀「上ー一、不ノ納ニ于中外之貢ニ」‖㊀壽辰。

【誕辰】タンシン　うまれたる日。開中古今錄「世稱ニ生辰ニ曰ニ一ー一」‖生日・誕日・寶誕。

【誕章】タンショウ　國の大いなる法典。漢書、敍傳「贊ニ國之ー一ニ」注「誕、大也、謂ニ鴻章之大者ニ」

【誕生】タンジョウ　うまれる、出產。後漢書、虞美人傳「ー一聖皇ニ」

【誕縱】タンショウ　とりしまりなくほしいまま。梁書、謝朏傳「二人意願相得、如ノ此情ー一」‖恣縱・跳放。

【誕妄】タンモウ　でたらめ、まことならず。王令詩「仙書虛荒喜ニ一ー一」‖妄誕。

【誕放】タンホウ　大いにほしいまま。唐書、賀知章傳「知章、晚節尤ー一、遨ニ遊里巷ー一自號ニ四明狂客ニ」

【誕敷】タンフ　大いにしき施こす。雅、舜典「帝乃ー一ニ文祖ニ、舞ニ干羽于兩階ニ」

【誕謾】タンマン　みだりに大言して實なし。史、龜策傳「人或忠信、不ノ如ニ一ー一」‖誕妄・放誕。

【誕膺】タンヨウ　大いにあたりうける、膺は當。書經「ー一天命ニ以撫ニ方夏ニ」

【認】ニン　㊥

○みとむ、見つける。○事物をはっきりと辨へ識る。後漢書、卓茂傳「時營出行、有ノ人ノ其馬ニ一ー識」「誤ー」「妄ー」○ゆるす（允許）「承ー」「公ー」㊀○手紙を書く。又、飯をたべる。○ハ‖みとめ印の略。證印の對。

【認可】ニンカ　みとめてゆるす「ー一狀」‖許可・認許。

【認許】ニンキョ　認容に同じ。

【認識】ニンシキ　○みとめ知る。○心が內界及び外界の對象を感知又は意識する作用。其の研究を認識論といふ。

【認眞】ニンシン　苟且ノ‖にせざる義。元史、王克敬傳「臨ノ事不ニ一ー一、覺ニ壞ノ志之遠乎」

【認ノ賊爲ノ子】ニンゾクイシ　㊀妄見を以て眞覺と爲すに喩ふ「楞嚴經」‖認賊作子。

【認知】ニンチ　みとめる、承知する。

【認定】ニンテイ　みとめてきめる。

【認得】ニントク　みとめる。劉禹錫詩「莫ノ言堆案無ニ餘事ー一、詩人在ニ此間ニ」

【認容】ニンヨウ　みとめてゆるす。‖認可。

【諉】ブ　㊥　通音ヲ

○しふ、有を無といひ、無を有といふ、あざむく（欺罔）いつはる（詐）「ー妄」「矯ー」「欺ー」易、繫辭「ー善之人、其辭游」○けがす（毀）○そしる（誘）「讒ー」○まく（枉）罪なき人を罪におとす。周語「其刑矯ー」

【諉引】ヲイン　罪なきものをしひてひきだす。宋書、沈約自序「妄自ー一」

【諉汚】ヲオ　いつはりてみだら。柳宗元、非國語序「左氏國語、其文閎深傑奧、固世之所ニ耽嗜而不ニ已也、而其說ー一、不ノ繫ニ于聖ニ」

【諉汙】ヲオ　しひけがす。史、田叔傳「吾非ニ敢有ニ諂言ー一也、願少卿無ニ相ー一也」

【譖陷】カン　罪なき者をしひて罪におとす。晉書、賀充傳「賈謐爲二常侍一、侍二講東宮一、太子寵有レ不レ悅、謐深憂レ之、遂與レ后成レ謀、一一太子一」‖讒陷・枉陷。

【譖欺】セン　あざむきいつはる。荀子「妄人者、門庭之閒、猶可二一一一」

【譖言】ゲン　しひごと、なきことをある如くいつはりいふ。

【譖告】コク　無實の事をしひいつはりてつげる。漢書、宣帝紀「酸棗令劾二故廢昌邑之人、爰書證驗、血氣衰微、赤仁慈之心、自今以來、諸年八十以上、非二一一殺傷人一、他皆勿レ坐」

【譖殺】サツ　罪をしひてころす。唐書、[illegible]珠傳「一一參軍衡方厚一」

【譖潤】ジュン　しひそしる。許棠詩「一一道二退讓一、明君即自知」

【譖說】セツ　いつはりのうはさ、ねなしごと。‖譖言。

【譖染】セン　いつはりけがす。後漢書、宦者傳論「大考二鉤黨一、轉相一一」‖譖汙。

【譖訴】ソ　事實のなきことをある如くいひてうったへる。‖讒訴。

【譖謎】テイ　しひそしる。唐書、武元衡傳「王承宗上疏、請二赦二吳元濟一、使二人自二郡中書一、悖慢不恭、元衡叱去、承宗銜、數上レ章一一」

【譖妄】ボウ　無きことをしひてうそをいふ。‖譖罔。

【譖謗】ボウ　しひそしる。北史、崔光傳「光少有二大度一、喜怒不レ見二于色一、有下毀二惡之一者上、必善言以報、雖レ見二一一一、終不二自申一」‖譖詆。

【譖服】フク　其の罪なきに已むを得ず服して刑をうける。史、李斯傳「趙高、治レ斯、榜掠千餘、不レ勝レ痛、自一一」

【譖毀】キ　いつはりしひて人の名節をけがす。唐書、來俊臣傳「陰嗾二不逞百輩一、使三飛語一二一公卿一」

【譖罔】ボウ　いつはる。漢書、薛宣・朱博傳「事發見レ詰、遂陷二一一一」

【譖托】タク　罪なき人をしひて罪におとす。荀悅、王商論「無レ罪猶見二一一、而況敢有レ罪乎」唐書、李德傳「復坐二一一一且得レ罪」‖嫁譖。

【詩】シ　月　フツ　物

○みだる(亂)○まどふ、まどはす(惑)○さかふ(逆)○そむく(乖)○もとる。‖悖。

【詩殺】サツ　もとる。漢書、外戚傳、長書有二一一一一、長は淳于長。‖悖慢。

【詛】ソ　八畫　支

はかる(謨・謀)

【誼】ギ　圓　又、誼に作る、義に同じ

○よし、義に通ず、みち、制裁の宜しきに合ふをいふ「仁一」「古一」「證一」○はかる、議に通ず。○したしみ、よしみ「情一」「交一」「高一」

【誼】ギ　義（革部八畫）に同じ。

【誾】ギン　眞　文

一一はやはらぎ悅びて諍ふ。一說に和ぎ敬レむ貌。論、鄕黨「朝與二上大夫一言、一一如也」

【誳】クツ　物

○かがむ。淮南、氾論「一一寸而伸レ尺、聖人爲之」‖屈・詘。○一一は非常にあやしく異る。左思、吳都賦「一一之殊事」

【課】クワ　箇

○わりあて、みつぎもの(租稅)舊唐書、職官志「凡賦、人之制有四、一曰租、二曰調、三曰役、四曰一」○租稅をわりあてる「賦一」「一稅」○仕事をそれぞれわりあてる。又、其の仕事。○ほど(程)わりあてたるきまり「一程」「日一」「學一」○こころみる(試)○こころみ(考科・試驗)○つい(序)○はかる(議)○官省中の事務の一部分「一長」

【課役】エキ　○仕事をわりあててつかふ。後漢書、樊宏傳「一二童隸、各得二其宜一」○課稅と縣役ケヤクと。隋書、高祖紀「詔以二河南八州水旱一免二其一一」

【課校】カウ　はかりしらべる。史、倚夫傳「一二人計一」

【課業】ゴフ　わりあてたるしごと。

【課試】シ　仕事をわりあててためす。漢志、明帝紀「博士一一」

【課切】セツ　わりあてて嚴しく催促する。蘇子良文「嚴レ期急レ夜、一一新稅一」

【課程】テイ　○わりあてたるしごとの程度。唐書、百官志「勳陽喊噴、徒役一一、遺欠之物」○物品に課する稅。物の賣買によりて定める。元史、世祖紀「諸路一一、歲銀五萬錠、恐擾二民力一、宜減二十分之一一」

【課入】ニフ　稅金の收入（官等、會計錄序）

【課利】リ　稅金（蘇軾、論二積欠一狀）

【誩】ケン　怨（六八二頁二段）に同じ。

【諍】ソウ　㊀サウ　㊁サウ　庚　敬

㊀いさむ（諫）いさめ正す。○とどむ（止）其の失を救ひ止む。漢書、王褒傳「諫ー卽見諫」㊁うったふ（訴）「爭ー」○あらそふ。＝爭。

【諍氣】サウ　人と爭ひて勝たんとする氣。韓詩外傳「有ニーー一者勿二與論一」

【諍臣】シン　いさめあらそふ忠臣。＝爭臣。

【諍訟】サウショウ　うったふ。うったへ。後漢書、劉聖公傳「平二理ーー一」

【諗】シン　㊀

○深く謀る。○おもふ（念）○はかる（謀）○つぐ（告）思ふことを述べて告げる。左、閔二「昔辛伯ー周桓公ニ」

【諏】シュ・ス　㊀　尤

○はかる（謀）衆りて謀る。○とふ（咨）政事を問ふ「咨ー」左、襄四「咨事爲ー」

同訓異語　諏問・詢・訊・詢・咨・訪の訓は問（三八四頁二段）の條を見よ。○諏・訐・謀・咨・探等の訓は計（一七九頁一段）の條を見よ。

【諏訪】ホウ　とひはかる。唐書、張鎬封傳「軍中事多ル所ニーー一」＝咨訪・詢訪・咨問。

【諏謀】ボウ　事をとひはかる。陶潛孤及詩「委棄二外府一ーー咨二賢良一」＝咨謀。

【諏詢】シュン　いつはりて正しからず。莊、繕充符「彼且ル蘄以ニーー幻怪之名一聞ト」

【諄】シュン　㊀　眞　通音ジュン

○ーーはねんごろ（誠懇）又忠謹なる貌。くりかへして教へさとす貌。○いたる（至）○あつし（厚）○たすく（佐）

【諄諄】シュンシュン　○ねんごろに教へる貌。敎へて倦まざる貌。詩、大雅「誨ル爾ーー」○忠謹なる貌。後漢書、卓茂傳「勞ル心ーー、視ル民如ル子」

【誰】スイ　支

○たれ、なにがし、たれか、姓名を尋ね問ふときに用ふる疑問代名詞。又、不明の人の代名詞、いづれ（孰）○發語の助字。詩、陳風「ーー昔然矣」

同訓異語　誰・孰・疇○誰は人を指す辭。孟子「夫誰與ル王敵」○孰はどのやうなものがと問ふ辭なり、いづれとも訓む、また誰と同じく人をも指す。論語「女與ル回孰愈」○疇は誰也と註す、もと類也、衆也などの義を兼ぬれば多くの類を以て分れたるものを指すなり。說命「疇敢不ル祗若王之休命ニ」

【誰何】スイカ　○誰ぞと其の姓名を詰問する。實誼、過秦論「信臣精卒、陳ニ利兵一而ーール」＝誰何。○たれ、姓名の明かならざる者。莊、應帝王「不ル知ニ其ーーニ」＝何人ゼンヒト阿誰。

【誰昔】スイセキ　きのふ、先日。誰は發語の辭。詩、陳風「ーー然矣」＝疇昔。

【誰勤二君王一回二馬首一】スイキンクンワウクワイバシユ　唐の韓愈の過二鴻溝一詩の句、曰く「龍疲虎困割二川原一、億萬蒼生性命存、ーー、誠成一擲賭二乾坤一」

【誰知二烏之雌雄一】スイチウノシユウユウ　烏の雌雄は相似てわかちがたし、故に是非のわかち難きに喩ふ。詩、小雅、正月「具曰二予聖一、ーーー」

【誰無二兄弟一】スイムケイテイ　何人にても皆兄弟あるをいふ。陶潛、祭二程氏妹一文「ーー、人亦同生、曙我與ル爾、特百常情」次條參看。

【誰無二夫婦一】スイムフフ　何人にも皆夫婦ある義。李密、弔二古戰場一文「皆蒼悉民、誰無二父母一、提攜捧負、長二其不一ーー、誰無二兄弟一、如ル足如ル手、ーー、如ル賓如ル友、生也何恩、殺ル之何咎」

【誰無二父母一】スイムフボ　天下の人は誰も皆父母あるをいふ。詩、小雅「曙我兄弟、邦人諸友、莫二肯念一ーー」次條參看。

【誰能出不ル由ル戶】スイノウシユツフユウコ　何人も家を出るには必ず戶に由る、道は猶ほ戶の如くなるに何故に人は斯の道に由らざるかと歎ぜし語。論、雍也「子曰、ーー、何莫ル由二斯道一也」

【誰知ル吾】スイチゴ　誰一人として我の心中を知れる者なし。楚辭「吁嗟嘯祭兮、誰知二吾之廉貞一」

【誰哉】スイサイ　人を誰何する義。獸鳴悠詩「有二敢下二筆知ーー一」

【諒】スイ　㊀　寘　㊁　宋韋シン

○せむ（讓）吳語「吳王遂自伐齊、ーー申胥」○ののしる（罵）○そしる（譖・訴）○つぐ（告）○とふ（問）○いさむ（諫）

【諒語】スイゴ　せめののしる。漢書、賈誼傳「母取二箕帚一、立而ーー」注「諒猶ル罵也」

【諒罵】スイバ　ののしる。柳宗元、與二大學諸生一書「有ル凌厲長上、而ーー有司一者と」

（訢）「訢ー」○うく（受）○ねがふ（願）○召す、人を招く「ー客」○おめにかかる、謁見する。漢書、張湯傳「造ー諸公」○漢代諸侯が、秋、天子に参内するにいふ。史、呉王濞傳「使人爲秋ー」○國ふ受け取る「ー書」引き受ける「ー負」「ー合」

【訢合】キン　ふ詩・弓・乞の別は弓（二画三段）の條を見よ。

【請ー告】セイコク　○すでに数を受けて更に其の上の数を請ふ儀。論、子路「ーレー、日無ー倦」○給與品などを増し加へられんことをねがふ。論、堯也「ーレー、民、與之庾」（庾は十六斗）

【請謁】セイ　○貧人に面會をこふ。○權力ある人にたのみ入る（左、隱十一）＝請託。

【請假】カ　官吏などがいとまをねがふ。假は暇。隋書、陸彦師傳「遇ー疾ーレー還ー鄴」＝請暇。

【請暇】カ　前條に同じ。

【請求】キュウ　こひもとむ。後漢書、卓茂傳「不ー當ー乘二威力一強ーー之耳」

【請願】ガン　こひねがふ。又其のねがひ「ーー書」

【請謝】シャ　謝をこふ。漢書、賈誼傳「遊ニーー而請ー皋耳」

【請罪】ザイ　○神に祈らむことをこふ。論、通而「子路ーレー」○こひいのる。後漢書、寒帝紀「詔二郡國一有ー名山大澤能興二雲雨一者上二千石長吏、各齎ーー、竭ー誠盡ー禮」

【請託】タク　權力ある人にこひもとめる、たのみ入る。又、其のたのみ。漢書、何武傳「欲ー除ー直、先爲二科條一以防ニーーー」

【請帖】チョウ　圖招待狀、案内狀。

【請命】セイ　○官吏に任ぜられんことをねがふ。五代史、雜傳「盧光稠擁以二陵・韶二州一、請ー命于京師ニ」○解職をねがふ。後漢書、魏霸傳「夫以二子之賢、勤二銘兩國一、猶ー辭ーレ職、ーレー乞ー身」

【請老】ロウ　退隱をねがふ。＝告ー老。

【誂】セン　銑

○よきことば（善言）○たはむる（謾）○ーーはたくみにいふ（巧言）劉向、九歎「讒人ーー」又、へつらふことば（諂言）後漢書、樊準傳「習ーー之辭」

【詠】タク　篤

○そしる（毀）○しこづ（譖）○うったふ（訴）そしり訴へる。○せむ（責）

【諂】タン　忝

○そらごと（妄語）○ーーは、ことばおほし（多言）苟、正名「愚者之言、ーー忝而諱」＝昏昏。

【談】ダン　覃　又、語に作る　通昏ダン

○ものがたる（話）はなす（話）「面ー」「對ー」「縦ー」「閑ー」「劇ー」○はなし、言論、ものがたり「一話」「史ー」「文ー」「政ー」「快ー」「農ー」「講ー」「街ー」公羊、閔二「魯人至今以爲美ー」○手ー は圍碁。○漢ーは玄虚の言談、即ち老子・莊子の主義者のはなし。

【談叶】キョウ　かたりうたふ。南史、王延之傳「獨處二齋内一、雖二子弟一亦不二妄前一、時時見二親賓一、未ニ嘗及二世事一、從容ーー而已」

【談綴】テツ　ものがたりするばしょ。梁書、昭明太子傳「書幌空張、ーー罷ーレ設、舊居書、銘班傳「講席ーー、務盡二忠規之道一」

【談客】キャク　はなし相手の客。晉書、韓康伯傳「筒文帝居ー殯、初作ー相、與二王濛一終夜ニーーー」

【談合】ゴウ　圖はなしあふ、相談する。＝談商。

【談義】ギ　○義理をかたる。南史、張裕傳「與ノーー飲ー酒、唯啼不ーー絕」（續は頗廷之）○圖説教。＝法話。

【談叙】ジョ　はなしてたはむる。魏志、王肅傳、注「貫洪好ー學、特與二子春秋、左傳一、善能ニーーー」

【談論】ロン　互にはなしあふ。南史、劉瑱傳「不ー爲二文章一、不ー喜ニーーー」

【談空】クウ　○虚無の理をかたる。孟浩然詩「ーレー對二機叟一」○圖佛教のはなし。蘇軾詩「誰似龍邱居士賢、ーレー脱有夜不ー眠」（佛教に有と空との二宗あり）

【談笑微中】ビチュウ　明白にいはず、暗暗の中に人の急所をつく如きはなしぶり。史、滑稽傳「ーー、亦可二以解ーレ紛」

【談話】ワ　ものがたる。惟南子「ーー而不ノ稱ノ師是過也」

【談次】ジ　はなしのついで。梁奚臣詩「晩蛩ーー改」＝言次・話次。

【談商】ショウ　相談する、商はかる。

【談笙】ジョウ　談話の時に手に執るはっす。黄庭堅詩「每來提ニーーー」

【談助】ジョ　はなしのたすけ、はなしのたね。漢書、王充傳、注「翫以爲ニーーー」

【談結】ケツ　はなしのいとぐち、話頭。梁昭明太子文「遣ー愧ーー、皆爲二禍崎一」

【談笑】ショウ　ものがたりしてわらふ。孟、告子「越人關ノ弓而射ノ之、則已ーー而道ノ之」

【談說】セツ　はなしする。漢書、雅樂五

傳「每二宴見一ー二ー得失」
【談宗】ダンソウ　言談を善くして世の宗とする所たる者。晉書、阮修傳「王衍當時ー一」
【談藪】ダンソウ　○談論廣博にして、つきざるをいふ。晉書「裴頠辯語豐博、時人謂ー頠爲二言談之林藪一」○書名。宋史、藝文志「陽松玠八代ー一二卷」
【談叢】ダンソウ　前條に同じ。宋の陳師道の著に后山ー一あり。
【談天雕龍】ダンテンチョウリュウ　天象を談ずるが如く、辯論の宏博遠大なるをいふ。史、孟荀傳「談天衍、雕龍奭」（衍は鄒衍、奭は鄒奭、共に周代の人）
【談吐】ダント　はなし。南史、賀革傳「子徽美二風儀一能ニー一」‖談論・言論。
【談何容易】ダンカヨウイ　談論すること易からざるをいふ。漢書、東方朔傳「吳王曰、可二以談一矣、先生曰、於戲可乎哉、可乎哉、——」
【談判】ダンパン　談話の時、手に執る拂子ホッスを轉じてはなしのたね。傳燈錄「檀霊寺大朗法師、每二談論一手執二松枝一、以爲ニー一」‖話柄・談柄。
【談柄】ダンペイ　ものがたり。ものがたりの五代史、任圖傳「爲ル人明敏善ニー一」
【談辯】ダンベン　言論の勢のするどき義。蘇軾詩「寳主ー一敵二兩鄒一」
【談錄】ダンロク　はなしのついで。‖談次・話次。
【談理】ダンリ　理を談ずる。主に老莊の學理を談ずるにいふ。晉書、殷仲堪傳「其ー一與二韓康伯一齊レ名、士咸愛二慕之一」
【談論】ダンロン　かたり論ずる。後漢書、郭太傳「博通二墳籍一、善ニー一」‖辯論・言論。
【談話】ダンワ　ものがたる。ものがたり。石崇詩「文藻替二春花一ー一猶二蘭芳一」‖言論。

【委】ヰ　支　眞

○ゆだぬ（委）○わづらはす（累）漢書、胡建傳「執レ事不ー一上」○かかる（係）○まかす、たのむ、たよる（託）漢書、賈誼傳「倘有レ可ー一者」○ことよせる、かこつける。

【諈】ッキ　質

○かさなる（重累）○わづらはす。○わづらはし（煩累）うるさし「ー一隊」

【調】㊀チョウ　蕭　㊁チ　虞　尤

○ととのふ（和合）「和ー一」○あはす。あふ、かなふ（適）やはらぐ（和）○てうしがそろふ、音樂のてうしがととのふ。○したがふ（順）「順ー一」ならふ（習）○ならす「ー一馴」○まもる、もりたてる「ー一護」○あざける（嘲）世說「王丞相每ー一之」からかふ（嘲笑）たはむる（嘲）○あざむく（欺）○ーは木の枝葉のうごく貌。○姓。○官名。㊁もとむ、をさむ、ととのふ。○めしだす、徵發する。○官職をうつす。うつる（遷）轉任する。漢書、張釋之傳「十年不得ー一」（長く其の地位に沈滯して居る）○はかる（度）かぞへはかる（算）「一度」漢書、鼂錯傳「ー一立城邑」○つき、みつぎもの（賦課）戶稅「租庸ー一」○ふし、しらべ、音樂のてうし、音律「聲ー一」「格ー一」「同ー一」「曲ー一」○やうす、おもむき（趣致）「雅ー一」「風ー一」「オー一」○うた（詩章）㊂あした、古、朝に通ず。詩、周南「怒如ー一飢」圖○ヂョウ「ー一查」「取ー一」吟味する。○ヂョウ物を買ふ。

【調和】チョウワ　名詞・動・形・副○圖はよく和合する義、調和と連用す、四二五味ー一四ー一義は、音圖樂ガクをよくする義。音圖は、音樂のしらべにて、まぐなり。○整は齊なり、物を束ねて又少し撃ちて、正しくそろへる意、整理・修整・齊整などと用ふ。禮記「整ー一衣危坐」○齊は整なり、偏頗なく、平等に正しきなり、出入なく、一樣にそろふこと、樹樹齊は、參差の反にて、樹木が高低なく、そろひたるなり。○匀は物のまんべんにむらの無きなり、均に通用す、杜甫の麗人行に「肌理細膩骨肉匀」とあるは、骨肉の完全に發育せる意なり。

【調胃】チョウイ　ゐぶくろのはたらきをととのへる。名醫別錄「陳廩米、ー一止レ洩」
【調印】チョウイン　圖印形をおす。‖押印・捺印。
【調役】チョウヤク　布帛のみつぎものと夫役とヤクと。後漢書、光武紀「時兵革既息、天下少レ事、文書ー一、務從二簡事一」
【調合】チョウガフ　圖藥をもりあはせる。‖圖劑。
【調戲】チョウギ　あざけりたはむる。左、襄六「少相狎、長相優」注「狎、親習也、優、ー一也」
【調琴】チョウキン　ことをしらべる。鄭谷詩「留下ー一鴻二溢水一解前嘲鳥背二秋蟬一」
【調謔】チョウギャク　みどけたはむる。孫楚文「ー一之巨賊也」‖調戲。
【調絃】チョウゲン　琴をしらべる。龍城錄「酒酣時、請吹要二君玉一ー一命二綠琦一」

【調護】テウゴ　たすけまもる。史、陳侯世家「須ル公幸ク一ニ一太子ニ」＝保護・看護。
【調貢】テウコウ　みつぎもの。又それを獻上する。
【調査】テウサ　○事實をしらべもとめる。漢書、王莽傳、注「以求二事物之實一也ニ一ニ」＝考察。○圖しらべる。
【調劑】テウザイ　くすりを圖合する。
【調子】テウシ　國○音樂のふし、子は助字。○物事のぐあひ、ほど。
【調試】テウシ　馬をならしてためす。齊書、長沙王晃傳「每ニ選州獻二駿馬一、上輒令下晃于二玄林中一ニ調ニ試之一」
【調惑】テウワク　ことをしらべる。晉書、傳咸傳「且膠柱、不レ可二以ニ一ニ一、況乎官レ人而可レ以限乎」＝調查。
【調習】テウシフ　ならす。詩經、疏「謂馬皆須ニ一ニ一也」
【調人】テウジン　○周代の官、人民の爭鬪を和解することを掌る。○轉じて仲裁人。＝調停人。
【調進】テウシン　圖注文通りにこしらへて差出す。
【調獸】テウジウ　鳥獸をならす。史、秦紀「一ニ一鳥獸」
【調書】テウショ　圖審察などにてとりしらべたる事を記したる書類。
【調製】テウセイ　圖物品をしらべ作る。
【調笑】テウセウ　からかひわらふ。李白詩「一ニ一二千石、日暮岸幘歸」＝調弄・戲謔。
【調節】テウセツ　物事を程よくととのへる「物價一ニ一」白居易詩「藥能自一ニ一、醯鹽必甘鬯」
【調攝】テウセフ　からだをととのへ養ふ。沈遼詩「衰齡易レ生レ病、攝生就一ニ一」＝攝生。
【調愛】テウアイ　ととのへやはらぐ。顧野、劉禪銘「龍二衣裳之顚倒一、配二蟲極一而一ニ一」＝調理・調和。
【調選】テウセン　選ばれて上官に榮轉する。韓愈、贈二侯喜一狀「愈從ニ一ニ一」
【調達】テウタツ　○ととのへ通ずる。阮籍、樂論「陰陽一ニ一、和氣均通」○圖注文通りの品をととのへて送る。＝調進。
【調暢】テウチャウ　やはらぎのぶ。書經、疏「樂之感レ人、使二和易一ニ一、若樂音合レ度、則言必得レ理」＝調達。
【調停】テウテイ　なかなほりをさせる。間に居て和解させる。宋史、蘇軾傳論「不レ主ニ一ニ」
【調鼎】テウテイ　かなへの食物をほどよく料理する。宰相の國家を治むるに喩ふ。杜甫詩「調二和鼎鼐一新」
【調才】テウサイ　風のそよぎて樹上の枝葉の振動するにいふ。蓋其昌詩「一ニ一閑二爽籟一次韻參看。
【調調】テウテウ　枝葉の動搖する貌。莊、齊物「而獨不レ見二之一ニ一才才乎」
【調度】テウド　○區畫の義。離騷「和一ニ一、以自娛」○ととのほどよくはかる。
【調和】テウワ　○天下の政をととのへやはらげる。漢書、丙吉傳「三公典二一ニ一陰陽一」元稹詩「一ニ一中外無二兵戈一」○音樂の調子がよくととのふ。賈誼新書「偏和相應而一ニ一」○味がよくととのふ。王維詩「金鼎一ニ一天廚美」
【調理】テウリ　○物事をととのへをさめる。徐陵、陳公九錫文「一ニ一陰陽一」＝調和・整理。○食物を料理する。
【調練】テウレン　圖兵士を訓練する。
【調弄】テウロウ　○からかふ。宣和畫譜「作二一ニ一語一以戲」＝嘲弄・諧戲。○樂器をかきならす。方干詩「幾年一ニ一七條絲」
【調伏】テウブク　圖○心・口・意の三業を調和して諸惡を制伏する。法華經「一ニ一其心一乃敢二大智一ニ一」○所謂によりて惡魔を降伏させる。
【調味】テウミ　食物の味を程よくととのへる。鬪雞子「一ニ一蜜レ色正レ聲」
【調布】テウフ　圖古、みつぎものとして官に納めたる布、たづくり、てづくり。
【調伏】テウブク　圖○心・口・意の三業を調和して諸惡を制伏する。法華經「一ニ一其心一乃敢二大智一ニ一」○所謂によりて惡魔を降伏させる。
【調味】テウミ　食物の味を程よくととのへる。鬪雞子「一ニ一蜜レ色正レ聲」
【調理】テウリ　○物事をととのへをさめる。徐陵、陳公九錫文「一ニ一陰陽一ニ一」＝調和・整理。○食物を料理する。
【調練】テウレン　圖兵士を訓練する。
【調弄】テウロウ　○からかふ。宣和畫譜「作二一ニ一語一以戲」＝嘲弄・諧戲。○樂器をかきならす。方干詩「幾年一ニ一七條絲」
【調和】テウワ　○天下の政をととのへやはらげる。漢書、丙吉傳「三公典二一ニ一陰陽一」元稹詩「一ニ一中外無二兵戈一」○音樂の調子がよくととのふ。賈誼新書「偏和相應而一ニ一」○味がよくととのふ。王維詩「金鼎一ニ一天廚美」

【詔】テウ　國語とは別
○へつらふ（諛）易、繫辭「君子上交不レ一ニ一」へつらひ、おもねる（佞）「讒一ニ一」「姦一ニ一」○屈ししたがふ（卑屈）
【詔巧】テウコウ　たくみにへつらふ。史、張丞相傳、贊「世俗一ニ一浮沈而見レ謂二一ニ一」＝佞巧。
【詔詐】テウサ　へつらひいつはる。唐書、百官志「居レ官一ニ一貢湖有レ狀爲二下下一ニ一」
【詔媚】テウビ　上にへつらひ人をにくむ。陳書、江總傳「羣小一ニ一作レ威」
【詔笑】テウセウ　強ひてへつらひわらふ。孟、滕文公「脅レ肩一ニ一、諂二於人一ニ一」

【詆】テイ　尾　紙　未
しふ（誣）「誣一ニ一」に通ず。
○そしる（誇。非議）古、非に通ず「詆一ニ一」「怨一ニ一」○そしり。非難。

【同訓異義】ソレ誹・非・謗・論・責・詆・刺・毀・譏・誚・短○誹は人の非をさしてそしるなり、非に通用す、漢書の顧誹の註に「口不レ言、心非レ之也」とあり。○非は誹に同じ。○謗はかげ口をいひ、人をそしるなり、誹謗と連用す、誹謗之木は、失政あらば、書きしるして諫むる爲め、宮門にたてたる柱なり、人の事を惡しくつげあげたる書を謗書といふ。戰國策「文侯示二之謗書一篋」○論は叙語なり、わるくいひなすなり、謗に近し、論謗と連用す。○責は相當レ責と註す、本、征に作る、疵を見つけ出して非難するなり。禮記「毋レ責二衣服成器一」誤に作る、同じ。○詆は苛也、訶也、訐也、辱也と註す、ひどく叱りつけて詆るなり。漢書「楊王孫詆二○刺は美の反、美はほむるなり、きずとも訓む、先方の心に、何となく針にてさされる如く、感ぜしむるやう刺るなり、風刺は、とほまはしにそしりて先方にそれと感ぜしむるをいふ。○毀は譽の反、人を毀ちやぶる如く、ひどくそしるなり。○譏は先方のおちどをとがめそしるなり。詩譜序「刺レ過譏レ失、所三以匡二救其惡一」○誚は譏に近し、讓也、責也と註す、人をしかりとがむるなり、譏讓と連用す。○短は人の短所をそしるなり。史記「短二屈原於頃襄王一」

【誹毀】そしり。そしる。＝非毀・誹謗。

【誹謗】人をそしるかきもの。後漢書、馮緄傳「中官相寃、遂共ー二緄一」

【誹謗之木】木を橫上に立て政治の過失をそしる言を書せしめて反省せし故事。淮南、主術「堯置二敢諫之鼓一、舜立二ー一」

【誹聲】そしりと、ほまれと。晏子「ー一爲レ類、聲響相應」＝毀譽。

【諒】

㊀リャウ　㊁リャウ　㊐　漢

㊀まこと（誠・信）うそをいはぬ。亮に通ず。論、季氏「友直友ー一、友多聞」○まことに（信）詩、小雅「不我知」○さとる、おもひやる（寬恕）人を恕する「原ー」○あきらかにす、照察する「ー察」○小いさき義理を固く執り守る（小信）論、憲問「豈若匹夫匹婦之爲ー一也」㊁よし（良）○ー闇アンは喪に居るへや。

【同訓異義】諒・信・眞・誠・實・允・良の別は信（一三七頁二段）の條を見よ。

【諒陰】次條に同じ。論、憲問「高宗ー一三年不レ言」

【諒闇】天子喪に在るの室。又、其の喪に在る間の稱、諒は信、闇は默の義。後漢書、和熹鄧皇后紀「ー一既終」＝亮陰・諒陰。

【諒察】おもひやり察する。韓愈文「惟吾子ー一焉」

【諒恕】おもひやりてゆるす。

【諒不レ足而說有レ餘】信實は不十分なるも、甘說は十分に餘りあり。漢書、杜鄴傳贊「可レ謂二諒不レ足而說有レ餘者一」

【論】

㊀ロン　㊁リン　眞　元

㊀はかる（議）○ついづ（序）淮南、修務「惟聖人ー一之」○とく（說）○よしあしを批評する「評ー」○のぶ（述）物事の理、又、己の志を述べ明かにす。○ときあかす（解釋）○あげつらふ、互に論じ合ふ。○をさむ（理）○かたる（語）○意見、主旨「公ー」「定ー」「正ー」「輿ー」○えらぶ（撰）○さばく、罪を決する。史記「乃捕ー一之」○文の一體「過秦ー」「縱囚ー」文體明辯「ー者議也、劉勰云、ー者倫也、彌綸羣言而研ー一理者也」○論語の略稱「ー孟」㊁すぢみち（條理）禮、王制「凡制ー五刑必即ー天ー」＝倫。

【論纂】あげつらひたづねる。唐書、郗士美傳「相與ー一」

【論解】論じて解きあかす。後漢書、馬融傳「ー一經傳、多レ所二改正一、後儒服度等以爲二折中一」

【論衡】三十卷、漢の王充撰す、聖を勗め邪を闢くるの旨多く、世教に裨あり。

【論客】議論を好む人、議論家。

【論難】義理を論じきはめる。世說「陸ー几安坐、讀レ書ー一自若」

【論議】事を論じはかる。史、平原君傳「毛遂比レ至レ趙、與二十九人ー一」＝議論。

【論究】是非を論じきはめる。北齊書、文宣帝紀「可レ令二百官更加ー一」

【論敎】㊀事の曲直を論じて人をたすける。唐書、馬植傳「援二故事一ー一」

【論詰】論じなじる、いひこめる。

【論及】論じおよぼす。

【論猶】議論のよりどころ。

【論外】○論するほどのねうちなし。○議論の範圍外。

【論決】論じきめる。＝論斷。

【論述】己の意見を述べて官に申したてる。後漢書、孔融傳「陳二其ー一漸慶一」＝議論・論說・理由。

【論語】二十卷、四書の一、孔子が弟子及び時人に應答し、又、弟子相與に言へる語を記す。

【論功】ロンコウ　てがらの大小をとりしらべる「ー—行賞」史、蕭相國世家「ー—行レ封」

【論告】ロンコク　〇檢事が被告の罪を論定して求刑する。〇事を論じつげる。

【論爭】ロンサウ　是非を論じあらそふ。

【論評】ロンヒヤウ　前條に同じ。

【論策】ロンサク　時事問題などに就きての策略を論ぜし文章。

【論贊】ロンサン　〇功徳を論じほめる。〇史傳の記述の末に作者の論評を加へしもの。史記は太史公曰と稱し、班固の漢書には贊と稱し、荀悦の漢紀には論と稱し、其の他、評といひ、議といひ、詮といひ、述といひ、史官の撰する所は史臣曰と稱す、名稱は種種にして同じからざれども、統べて之をーーといふ。

【論士】ロンシ　議論をするもの。‖論客・論客。

【論旨】ロンシ　議論の要旨。

【論次】ロンジ　己の意見に從ひて論定して次第する。史、倚相傳「孔子因二王道廢而邪道興一、於レ是ーー二詩書一、修二起禮樂一」

【論者】ロンシヤ　論士に同じ。

【論證】ロンショウ　是非曲直を論じ證明する。

【論說】ロンセツ　あげつらひとく。主張、得二賢臣一頌「千載一會、ーー無レ疑」

【論撰】ロンセン　議論して撰述する。唐書、姚璹傳「以ニーー學一進二祕書郎一」

【論戰】ロンセン　議論をたたかはす。

【論選】ロンセン　論じえらぶ。〇選は撰。漢書、藝文志「門人相與、緝而ーー、故謂二之論語一」‖論撰。

【論討】ロンタウ　是非を論じきはめる。北史、齊文宣帝紀「軍官可三更ーニ新令一」‖論究・討論。

【論壇】ロンダン　議論をたたかはす場所。又は其の社會。

【論斷】ロンダン　論じきめる。‖論決。

【論著】ロンチヨ　論じあらはす、著述する。漢書、叔孫通傳「述二諸儀法一、皆所ニーー一也」‖著作。

【論定】ロンテイ　議論してさだめる。禮記「ーー然後官レ之」‖論決。

【論定】ロンテイ　言論の篤實なる者。論、先進「ーー是與、君子者乎、色莊者乎」

【論難】ロンナン　議論して非難する。‖論駁。

【論駁】ロンバク　論難に同じ。顏師古文「案說ーー、互執レ所レ見」

【論法】ロンポフ　議論をする方法、論理の法則。

【論列】ロンレツ　〇是非を論じわかつ。‖論決。〇圖いひあひ、いひあらそふ、爭論、口論。

【論文】ロンブン　議論をかきし文章。‖議論文。

【論兵】ロンヘイ　兵事を談論する。李白詩「莊周空說レ劍、墨翟恥レ論レ兵」

【論辨】ロンベン　〇事理を論じわかつ。禮記「ーー然後使レ之」〇文體の一、活の姚鼐の古文辭類纂にーー類あり。‖論說。

【論難】ロンナン　意見をのべて論ずる。元史、嚴忠傳「遇レ事英發、掀レ髯ーー法家拂士、不レ能レ過レ之」

【論評】ロンヒヤウ　議論のほこさき。

【論語】ロンゴ　論語と孟子と「大學章句」

【論理學】ロンリガク　思想の法則に基きて、物事を正しく論述する法を研究する科學。

【論列】ロンレツ　其の是非をならべ論ずる。司馬遷、報二任安一書「仰レ首伸レ眉、ーニ一是非一」

【諚】〔國字〕

おやう、上の命令。

九 【諳】 アン 畫 平

〇そらんず(背誦)「ー記」そらよみす「ー誦」〇つくす(悉)〇しる(知)〇十分に聞きて知る(熟聞)「熟ーー」「詳ーー」〇ねる(練)〇さとる(曉)〇ふ(歷)

【諳委】アンヰ　くはしくそらんじ知る。韓愈、與二柳中丞一書‖諳悉。

【諳記】アンキ　そらんじおぼえる。唐書、姚崇傳「無レ不ニーー一」

【諳究】アンキウ　十分にきはめそらんずる。晉書、王隱傳「博學多聞、受二父道業一、西部舊事、多レ所ニーー一」

【諳曉】アンゲウ　そらんじさとる。南史、宗元鼎傳「性公平善持レ法、ーニ故事一、明二練政體一」

【諳算】アンサン　むなざん。‖暗算。

【諳誦】アンシヨウ　そらんじ知る。隋書、姚察傳ーニ一內典一」

【諳悉】アンシツ　ことごとく十分に覺えつくす。北史、刁柔傳「皆所ニーー一」

【諳誦】アンシヨウ　そらんじよむ。‖暗誦【蜀志】

【諳練】アンレン　十分になれおぼえる。晉書、刁協傳「久在二中朝一、ーニ一舊事一」‖熟習。

【諷】 フウ 畫 去

〇いふ(言)つげる(告)かたる(語)とく(說)はなしする。論、子張「周公ー魯公曰」〇となふ(稱)〇おもふ(思)おもへらく、以ーと連用するも同じ。〇いはれ(理由)さういふわけ。孟、梁惠王「所謂故國者、非二有喬木之ー一也」有二世臣之ー一也」〇となへ、いひ「稱ーー」〇となへる、名づける。孟、滕文公「此之ー大丈夫也」〇うはさをする、評論する。論、公冶長「子ーー子賤」〇おもはく(思念)〇つとむ(勤)詩、小雅「退不ーー

矣」○所謂ハユルハは世間にて言ふ所のの意。○何ーヒは如何。戰國策「毋ー天下何」

同訓異字 カイ 謁・言・白・云・道の別は首（一七八五頁一段）の條を見よ。

【謁】 ㊀エツ ㊁アイ 入月

㊀なふだ（名刺）人に面會する時にさし出すもの「上ー」○轉じてめみえする、貴人に面會する「拜ー」「伏ー」「入ー」「迎ー」「一見」○まゐる（詣）至りて告ける。○まうす（白）申し上ける。○こふ（請）㊁くもる（謁）

【通ー謁】名刺を出してめみえを乞ふ。後漢書、李南傳「轉ー」

【謁見】まみえる。後漢書、卓茂傳「茂詣二河陽一ー二光武一」

【謁刺】謁見を請ふ爲め差し出すなふだ。事文類聚「唐傅方坐二廳事一、閽ー一ー、置二案上一不レ問」＝名刺。

【謁者】宮中にて賓客の告請の事を掌り、又、四方に使する官の名。漢書、百官公卿表「ー一掌レ賓」

【諧】 カイ 佳

○かなふ、あふ（合）○ととのふ、やはらぐ（和）調和する「和ー」書、舜典「八音克ー」○をどけ（謔）たはむる（戲）「ー謔」「謔ー」「俳ー」「嘲ー」○たひらか（平）物の價を平かに論じきめる。後漢書、宦者張讓傳「ー價然後得去」○齊ーは古の怪しき事を記せる小說の書。莊、逍遙遊「齊ー者志怪者也」

【諧易】やはらぎてうちくつろぐ。說苑和易。唐書、陳長源傳「好ー一、無二威儀一而清白自將」

【諧婉】やはらぎかなふ。唐書、李嗣眞傳「金石ー一、將レ有二大慶一、在二唐室子孫一乎」

【諧偶】ねだんを論じととのへる。後漢書、宦者傳「皆先至二西園一ーレー」

【諧嫗】たはむれたのしむ。王安石詩「便脫二市靴一相ー一」

【諧謔】をどけ、だうけ、謔は戲言。晉書、顧愷之傳「愷之好ー一、人多愛二狎之一」

【諧和】○やはらぎかなふ。周禮、地官「調二人掌一司二萬民之難一而ー一之」○音律がよくととのふ。舊唐書、裴知古傳「金石ー一」

【諧協】やはらぎかなふ。沈遼詩「蕭箏合二古律一、宮羽自ー一」

【諧語】○をどけ、じやうだん（漢書、東方朔傳）○うちとけてかたる。＝歡談。

【諧止】調子のよくととのふ。舞。金史、樂志「儀容既莊、樂亦ー一」

【諧絡】やはらぎあつまる。南史、徐勉傳「中外ー一、人無二間言一、先レ物後レ己、然後可レ貴」

【諧浹】やはらぎてよし。王義慶詩「暄景轉ー一、草木日滋長」

【諧聲】漢字の構造上の稱、六書の一。江、河の如く偏は意を示し、旁は音を示す類（周禮、注）＝形聲。

【諧暢】やはらぎのびる。南史、褚彥回傳、宮商既調、風神ー一」

【諧比】したしくなれる。又其の人。唐書、吳競傳「競少勵レ志、貫二知經史一、方直孝ー一」＝親狎。

【諧穆】やはらぐ。魏書、關元明傳「兄弟雍和、鄰里ー一、安レ貧樂レ道、自首同レ歸」＝諧和・和穆・雍穆。

【諤】 ガク 藥 又、咢・鄂に作る

ただしくいふ（直言）忌み憚らずして正しく言ふ「侃ー」

「諤ー」

【諤諤】直言する貌。史、酈君傳「千人之諾諾、不レ如二一士之ー一」＝咢咢・鄂鄂。

【諫】 カン 㒳

○まこと（誠）誠の物に感通する義。書、大禹謨「至干感神」○やはらぐ（和）

【諫】 カン 諫

○いさむ。忠告する「直ー」「諷ー」「切ー」「極ー」いさめ。○ただす（正）さとす。

【諫院】諫官のやくしょ。司馬光に一一題名記あり。周必大文「明道元年、復置二一一一」＝諫垣。

【諫垣】前條に同じ。舊唐書、元稹傳「既居二一一一、不レ欲二疎二人自薄一」

【諫議大夫】君主の過失を諫める官。事物紀原「秦置二諫大夫一、後漢光武增置二一一一」＝諫官。

【諫果】橄欖の異名。倦遊雜錄「味苦澁、食久方回レ甘、故名二一一一」

【諫官】天子の過失をいさめる官。韓愈文「留侯二大守爲一、得レ兼二諫諍官一」＝諫議大夫。

【諫勸】いさめて善行をすすめる。漢書、谷永傳「因二天變一而切二一、上納用レ之」

【諫言】いさめることば。北周書、馮景傳「最有二一一一」

【諫鼓】古、君を諫めんとする者をして、打ちて其の意を通ぜしむる爲めに宮門に置きたる鼓。管子、桓公問「爲立二一一於朝一」淮南、主術「堯設二敢諫之鼓一、舜立二誹謗之木一」

【諫爭】いさめあらそふ。＝諫諍。

【諫諍】前條に同じ。漢書、王褒傳

【諫止】いさめとどめる。諸葛亮文

「數有二一一」

【諫紙】カンシ　天子をいさめる文を書きつける紙。白氏長慶集「僕爲二諫官一、月請二一一、詩云、月慚二一一百張、錢愧俸錢三十萬」

【諫書】カンショ　君主をいさめる書。岑參詩「聖朝無二闕事一、自覺一一稀」

【諫臣】カンシン　君主をいさめるつかさ。司馬光文「臣備二位一一三年有半」＝諫官。

【諫正】カンセイ　いさめただす。漢書、鮑宣傳「唐林數上疏一一、有二忠直節一」

【諫說】カンセツ　いさめとく。史、淳于髡傳「博聞彊記、學無レ所レ主、其一一慕二晏嬰之爲一人也」

【諫疏】カンソ　いさめる爲めの上書。李中詩「一一縱橫上、危言果敢陳」

【從諫】カンタイ　人のいさめに從ふ。漢書、梅福傳「昔高祖納二善若一レ不及、一一若レ轉レ圜」圜は圓き球。

【從諫若轉圜】カンヲシタガフコトエンキュウノゴトシ　人の諫に從ふこと盤上にまろき球を轉ばす如く、少しも逆はず。前條參看。

【諫輔】カン　いさめたすける。書經「劉二爽元良一、賊二虐一一一」

【諫喻】カン　いさめさとす。魏志、曹爽傳「城時以二一一不レ納、涕而起」＝諫諭。

【諱】キ　未

○いむ(忌)「忌一」いみ。○さく(避)きらふ「避一」○かくす(隱)其の事を隱藏して言はず「隱一」○おそれる(畏)史、范雎傳「擊斷無一」○いみな、死者の生前の本名、生に名といひ、死に一といふ。○不一は死をいふ(死は人の忌み避くること能はざるものなるが故)史、商君傳「公叔病、如有レ不レ可」一、將奈二社稷一何」＝不可諱。

同訓異義　諱・忌の別は忌(六三六頁三段)の條を見よ。

【諱疾】キシツ　いみかくす。北史、楊愔傳「卿有レ所レ聞、愼勿二一一」

【諱忌】キキ　○いみおそれる。宋史、石介傳「當時無レ所二一一」＝忌諱。○いみ、陰陽道などにて、いみきらふこと。後漢書、郭鎭傳「不レ恤二一一」

【諱名】キメイ　なをいふを忌む。孟、盡心「一レ一不レ諱レ姓、姓所レ同也、名所レ獨也」

【諶】クヮウ　陽

語る聲、大いなる聲。＝喤。

【諠】㊀ケン　㊁ケン　元　阮

㊀わすれる(忘)＝諼に通ず。㊁わする(忘)大學「有斐君子、終不レ可レ一兮」○かまびすし(囂)＝喧。

【諠囂】ガン　さわぎおどろく。晉書、惠羊皐后傳「百姓一一」

【諠競】ケンキョウ　かまびすしくあらそふ。顧況詩「終哉無二一一」

【諠譁】ケンカ　かまびすしくさわぐ。史、叔孫通傳「無敢一一失レ禮者」＝呼譁。

【諠呼】コケン　かまびすしくよばはる。後漢書、蜀期傳「一一滿レ道」＝喧呼。

【諠語】コウゴ　かまびすしくのゝしる。五代史、李愚傳「兩人途相一一、乃俱罷」

【諠援】ケンエン　かまびすしくさわぐ。南史、褚彦回傳「那中一一」

【諠呶】ケンドウ　やかましくさけぶ。劉毅文「酒酣耳熱、屢舞一一」＝喧呶・喧呼。

【諠傳】ケンデン　かまびすしくつたはる、やかましくうはさする。＝喧傳。

【諼】ケン　元

○いつはる(詐)「詐一」あざむく(欺)○わする(忘)詩、衛風「終不可一兮」＝諠。○わすれぐさ。＝萱草。

【諼草】ケンサウ　わすれぐさ。神、衛風「焉得二一一、言樹二之背一」注「諼、忘也、一一合歡、食レ之令二人忘一レ憂者」＝忘憂草。

【諺】ゲン　㊀ガン　㊁ゲン　霰　願

㊀ことわざ(俚言・俗言)世俗に言ひ傳ふるさとびたる語「里一」「俚一」「俗一」「鄙一」左、昭元「一所謂老將至而耄及之者」＝喩。○一文は朝鮮の俗用文字、其の字、子母連結すること、略ゝ西藏文及梵文に似たり、字母二十八字あり、後減じて二十五字と爲す、士大夫の漢文を用ふる外は通俗皆此を用ふ。＝喩文。㊁畔一はたけくつよし(剛猛)○皈諺は恭しからず、禮容なし。

【諢】コン　㊁　通音コン

たはむれをいふ、じやうだんをいふ。又、其のたはむれごと(戲言)

【諢名】あだな「水滸傳」＝綽名・綽號。

【諟】シ　紙

○つまびらか(審諦)○ただし(正)○この。書、太甲「先王、顧二天之明命一」＝是。

【諡】 レ　㊥　笑ふ義の諡とは別

○おくりな。死者に贈る名、即ち生前の行迹によりて命ず「美ー」「賜ー」說文「行之迹也」周禮、春官、大史、疏「賜ー之制、實始於周也」○おくりなす、おくり名をつける。

【諡號】ガウ　おくりな。晉書、礒志「登二封禪山一者、七十有四家、其ー可レ知者、十有四焉」

【諡議】ギ　文體の名。文體明辯「天子崩、則臣下制二誄子南郊一、明受二之於天一也、諸侯薨、則太子逆二告于天子一、明受二之於君一也、嗣子不レ得レ議レ父、臣不レ得レ議レ君、故受之於レ天於レ君（中略）故歷代以來有二帝后ー・臣僚美惡ー一傳一於今一、而其體有レ四、一曰ー一、二曰改議、三曰駁議、四曰答駁議、蓋二其往復論辯一皆得レ已哉、不レ過レ欲レ論二於是非之公一而已」

【諡法】ハフ　○おくり名をつける法。周書、諡法解「謚者行之迹、號者功之表」容齋續筆「今世傳二周公ー一、故自二文王武王一以來、始有レ謚、周之政尚レ文、斯可レ驗矣」○書名、四卷、宋の蘇洵撰す。

【談】 ダン　㊥　音に同じ

○はかる（謀）貴き人が卑き人に相談する。○とふ（問）「ー問」同訓異語　ア諮・問・詢・訪等の別は問（三三八頁三段）の條を見よ。

【諮議】ギ　政府の諮問に應じて是非を議する。漢來、各省にー一局を置く。

【諮求】キウ　とひもとむ。何承天文「ー二ー雅旨、來答周至」

【諮詢】シュン　上より下にはかり問ふ。＝諮問。

【諮稟】ヒン　事をはかり命をうける。後漢書、明德馬皇后紀「后時年十歲、幹二理家事一、勤二劬僮御一、內外ー一、事同二成人一」

【諮問】モン　とひはかる。後漢書、趙典傳「朝廷每レ有二災異一、輒ー二ー之」＝諮詢・咨諏。

【諰】 シ　㊥　ー然は懼れる貌。荀、議兵「ー一然常恐二天下之一合而軋己也」

【詵】 シン　㊥　○まこと（信・誠）書、咸有一德「天難ー一命靡常」＝忱悃。○まことに、けに（實）屈原、九章「ー在窮而離ー持」

【諸】 シ　㊥　○もろもろ（衆）物事の多くあること「ー君」「ー事」○これ、之於の合字。論、衛靈公「君子求ー一己、小人求ー一人」○之乎の合字にて疑辭とす。孟、梁惠王「武王伐紂有ー一」（別に乎を添へることもあり。史、殷本紀「信有ー一乎」の如し）○つけもの（菹）「桃ー一」「梅ー一」○や、字句に添へる無意味の助字。詩、邶風「日居月ー一」○ー葛ーは複姓「ー一亮」

同訓異語　ロ諸・之・此・是・維・斯等の別は之（六三頁四段）の條を見よ。

【諸役】シヨエキ　各種の稅金。又夫役。唐書、食貨志「耗ー七者、ー一皆免」

【諸家】カ　○多くの家。諫王經「ー一內外」○多くの流派。

【諸夏】カ　中國內の諸侯の國國、夏は大。四方の夷狄に對していふ。論、八佾「夷狄之有レ君、不レ如二ー一之無一」

【諸葛巾】キンカツ　諸葛孔明のかぶりし冠、一名綸巾（三才圖會）

【諸葛菜】サイ　蔓菁の異名、諸葛亮の至る所に蔓菁をうゑて軍食と爲したるが故（劉禹錫、嘉話錄）

【諸葛亮】リヤウ　字は孔明、瑯琊陽都の人、隱中に隱れ、自ら管仲・樂毅に比す、劉備の三顧に遂ひて出で仕へ、遂に水魚の交をなし、備のために死力をつくし、成都を平げて蜀の地を定め、備をして漢室を興さしむ、劉備卒し、遺詔を奉じて、後主を輔け大業を悉して斜谷より五丈原に據り、魏の司馬懿と對戰中、病みて陣中に卒す、年五十四、忠武と諡せらる。

【諸般】パン　種方の多くのをさ。詩、小雅「既有二肥牡一、以速ー一」

【諸行無常】シヨギヤウムジヤウ　圓諸行は一切萬物をいふ、萬物は皆うつりかはりて、しばらくも常住せず、人生の常なきにいふ（涅槃經）傳燈錄「世尊說二無常偈一曰、ー一、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂」弘法大師のいろは歌は此語の意を和譯せしなり。

【諸君】クン　みなさん。＝各位・諸彥。

【諸彥】ゲン　○多くのすぐれたる士、彥は男子の美稱。謝靈運文「昆弟友朋、二三ー一」○幾くの人に對していふ敬稱。＝諸君。

【諸賢】ケン　○もろもろの賢人。＝羣賢・衆賢。○衆人に對する敬稱。＝諸彥・諸君。

【諸侯】コウ　多くの大名。禮記、曲禮「祖公九二合ー一」

【諸侯之選】ノセンコウ　列國より選擧せし材能衆にすぐれたる士。左傳「皆ー一也」

【諸見】ケン　おほくの兄。杜甫詩「聽猶憶ー一」

【諸士】シ　もろもろの士。史、魏其・武

安傳「——在二已之左一」

【諸子】シヨ　○おのおのがた、君等。先生長者が目したの者に對して呼ぶ第二人稱。○周代の官名、諸侯の世子の事を掌る。○多くの子類の書。次條を見よ。

【諸子百家】シヨシヒヤクカ　すべての子類の書物。漢書、藝文志、法「諸子百八十九家、係下合二賈生以後諸家一言上之、皆二百家一稱二成數一也」

【諸司】シヨおほくのつかさ。左傳「訓二——一以レ德」‖百官・庶僚。

【諸事】シヨ　いろいろの事がら。〔史、李斯傳〕

【諸人】シヨ　多くの人人。晉書、劉頌傳「——莫二能識一」‖衆人。

【諸色】シヨシキ　○もろもろの方面。韓愈、停二舉選一狀「今年——堪選」○いろいろの品物。太平廣記「——假借什物」

【諸生】シヨセイ　學生。史、叔孫通傳「臣願徵二魯——一、與二臣弟子一、共起二朝儀一」

【諸道】シヨダウ　○いろいろの方面。又、場所。○いろいろの技藝の道。

【諸天】シヨテン　佛　もろもろの天上界。又、そこに住する佛。

【諸等數】シヨトウスウ　二つ以上の單位の名數を以て表はされたる數。

【諸方】シヨハウ　各地方。晉書、何劭傳「每二——一貢獻一」

【諸般】シヨハン　圖　いろいろ。‖百般。

【諸父】フ　父方の多くのをぢ、父の兄弟、即ち伯父・叔父・季父の總稱。詩、小雅「既有二肥牡一、以速二——一」

【諸陵寮】シヨリヨウ　圖　宮內省の一局、陵墓に關する事を掌る。

【諸王】シヨワウ　○もろもろの王。○圖　親王の宣下セラレなき皇子・皇孫の稱。

【求二諸己一】コヒトヲ我身に責めもとめる。論、衞靈公「君子——　小人求二諸人一」

【貴二諸紳一】コレヲシンス　紳は大帶、上流の人は前に垂る、之を紳に喩するは忘れざるやうにする。論、衞靈公「子張——」

【昔諸往而知レ來】コレヲアツテキタルヲシル　往は過去にて既に語られたるをいひ、來は未來にて未だ語られざるをいふ、一を聞きて二を知るの謂。孔子の語〔論、學而〕

【諾】ダク　シ・

語　四

○しる(知)○さとし(哲)才智ある稱○いつはる(詐)「許ー」

【諾】ダク

癸

○こたふ(答)はいはいと應答する、ゆっくりとへんじする。禮、玉藻「父命呼、唯而不ー」「唯は早くこたへる、へんじの緩急は敬意の多少によるこたへ。○ゆるす、言を以て人に許す、うけあふ「許ー」「承ー」「然ー」○うなづく、うべなふ、承知する。論、顏淵「子路不レ宿ー」(うけあひたる事は猶豫せずしてすぐ實行する)

【諾唯】ダクイ　うけがふ。諸は應ずること緩かにして慢る、唯は速にして敬し。蘇軾詩「心知二其非一口ー——」‖唯諾。

【諾諾】ダクダク　ひたすらにはいはいと人の言に從ふ貌。史、商君傳「千人之ー——、不レ如二一士之諤諤一」

【諾否】ダクヒ　うけがふと、うけがはざると。

【諵】ダン　ナン

堪　感　又、喃に作る

○かまびすし(聒語)○ーー　ナン　は多言する貌。韓愈詩「論詩說賦相ーー」‖喋喋。

【諦】テイ　タイ

霽

○あきらか(明)○つまびらか(審)「審ー」○あきらむ、明かにする、審かにしらべる。關尹子「ー達天者不見天地之大」○まこと(誠)○佛佛道のさとり、眞言の義「眞ー」「俗ー」○圖　あきらめる、思ひきる、斷念する。

【諦觀】テイクワン　明かにみる。‖諦視。

【諦思】テイシ　つまびらかによくかんがへる。魏志、杜畿傳「畿治二河東一、民有二相告者一、畿親見輒加二大杖一、遣令二歸ーー一之」

【諦視】テイシ　あきらかにみる。魏志、明帝紀「君ーー一之、勿レ誤也」‖諦觀。

【諦聽】テイチヨウ　つまびらかにきく。白居易詩「凝視ーー珠不レ足」

【諦料】テイレウ　あきらかにはかる。列子「王ーー一之」

【諜】テフ

葉

○さぐる、うかがふ(伺)敵のやうすを探りて害に味方にしらせる。左、哀元「使女女ー」○まはしもの(細作)軍中の反間ハンカン即ち敵國の人となりて其の軍中に入り間隙を伺ひ、反りて其の主に報ずるもの「間ー」「偵ー」左、宣八「晉人獲二楚ー一」○ーーはことばおほし。‖喋喋。○文字を記したるふだ、牒に通ず「諺ー」「ー記」

【諜候】テフコウ　まはしもの。‖反間・細作。

【諜人】テフジン　まはしもの。‖諜者。

【諜賊】テフゾク　しのびもの、まはしもの。

【諜知】テフチ　周禮「遍二邦國一、掌二ーー一」

【諜諜】テフテフ　ことば多き貌。史、張釋之傳「坐二敎二此輩夫ーー利口捷給一徒」

（漢書には喋喋に作る）【諜報】ハウ　敵のやうすを探りて味方に知らす。宋史、理宗紀「遣ニ細書一ニ一通事一」

【諷】フウ　㊥

○そらんず（誦）そらでよむ「吟ー」「背ー」漢書、藝文志「ー書九千字以上」○ほのめかす、正言せずして、とほまはしにいふ、それとなくいさめる。古、風に通ず。○たとふ（譬喩）

【諷意】イフ　あてこするこころ。

【諷詠】エフ　詩歌をそらでうたふ。晉書、應詹傳「優遊ー一、無ー所ニ關一ー」

【諷諫】フウ　それとなくとほまはしにいさむ。家語、辨政「孔子曰、忠臣之諫レ君有ニ五義一、一曰譎諫、二曰戇諫、三曰降諫、四曰直諫、五曰ー一」

【諷規】キフ　とほまはしに諫め正す。張衡、東京賦の風規バウとは異り。

【諷動】フウ　それとなくさとしすすめる。後漢書、班固傳「造ニ楨文辭一、終以ー一ー」ニ風動。

【諷刺】フウ　それとなくそしる、あてこすりてそしる「ー一ー體」文心雕龍「詩人ー一」

【諷書】シフ　そらんじかく。漢書、藝文志「太史試ニ學童一能ー一ニ九千字以上一、乃得レ爲レ吏」

【諷誦】シフ　そらでふしをつけてよむ。周禮、春官、大司樂、註、倍レ文曰レ誦、以ニ聲節一之曰レ誦」晉書、阮略傳「ー一ニ遺言一、不レ若ニ親承ニ音旨一」

【諷嘯】セウ　詩歌を吟じうそぶく。晉書、王獻之傳「時吳中一士大夫家、有ニ好竹一欲レ觀レ之、便出坐レ輿、造ニ竹下一ー一良久」

【諷讀】フウ　そらんじよむ。北史、蘇威傳「恐ニ論及一己、逃入レ山、以ニ一一一爲レ娛」ニ諷誦。

【諷味】フウ　そらんじ讀みてあぢはふ。劉長卿詩「夫君多ニ遠作一、而我背ー一」ニ諷誦玩味。

【諞】ヘン　先　㊥

○へつらふ（佞）便佞の便に通ず。○たくみにいひまはす（便巧言）「一言」

【謀】ボウ　ム　尤

○はかる（計）時に先だちて度る、おもんばかる（慮）易、說卦「君子以作ニ事一始」○いとなみ求める（營求）○とふ（問）人と相談する。○はかりごと、たくらみ（術策・計略・策略）「計一」「智一」「嘉一」

同訓熟語　謀・計・圖・量・度・稱・權・測・料・忖・策・畫等の別は計（一七八七頁二段）の條を見よ。

【謀猷】ボウ　はかりかんがへる。詩經「載謀載猷」

【謀猷】イウ　はかりごと、猷は道にかなへるはかりごと。書、君陳「明ニ謀斯猷一、惇ニ叙厥后之德一」ニ謀計。

【謀議】ギ　相談してはかる。はかりごと。漢書、韋賢傳「孝宜卽位、賢以與ニー一」

【謀畫】クワク　はかりごと。後漢書、馬援傳「具言ニー一」ニ計畫。

【謀計】ケイ　はかりごと。書經、疏「自有ニー一之言一」ニ計謀・謀略。

【謀詐】サ　いつはりのはかりごと。漢書、文帝紀「漢大臣皆故高帝將、習ニ兵事一多ニー一」ニ詐謀。

【謀臧】ザウ　はかりごとがよい。詩經「ー一不レ從、不レ臧ニ厥用一」

【謀殺】サツ　あらかじめはかりて人を殺す。

【謀者】シヤ　とびはかる。晉植文「仰ニ其聰一以ー一」

【謀臣】シン　巧にはかりごとをめぐらす臣。史、淮陰侯傳「敵國破ー一亡」

【謀將】シヤウ　はかりごとに長けたる武將。晉書、賀若弼傳「楊素是猛將、非ニー一」

【謀主】シユ　はかりごとを定むるかしら、參謀長、主謀者。左、昭九「專棄ニー一」

【謀レ生】セイ　生計の道をはかる。萬里詩「萬方口業拙ニー一」

【謀反】ボン　○謀叛に同じ。○君主を弑逆すること。

【謀判】ハン　圖にせばんを押す、僞印。

【謀叛】ハン　○むほん、君に背きてあだする。又、君に背くことをはかる。ニ謀反。○圖ニ王朝時代の罪名、國に背き僞朝に從ふ罪。

【謀畫】クワク　はかりごとがもれる。戰國策「蘇秦曰、ー一者事無レ功、計不レ決者名不レ成」

【謀略】リヤク　はかりごと。晉書、刑法志「二人對議謂ニ之謀一、攻ニ惡謂ニ之略一」唐書、薛逢傳「持論鯁切、以ニー一高自標顯」ニ謀計・計略・策略。

【謀慮】リヨ　はかりかんがへる。漢書、高帝紀「ー一之士」ニ計慮。

【謀定】テイ　はかりごとがきまる。晉書、李光弼傳「用レ兵ー一而後戰、能以ニ少擒レ衆」

【謀及ニ婦人一】フジンニオヨブ　男子事をなすに婦人に謀れば、外にもるる恐あり、故に之を戒る。左、桓十六「桓公曰、ー一、宜其死也」

【諭】ユ　㊥

○さとす、教へ告げて悟らせる「教ー」「開ー」「說ー」「曉ー」「詔ー」○さとし（曉）○さとる、さとり（悟）○あきらか（明）○たとへ。たとふ、他の物に比べていふ（譬）漢書、賈誼

傳「誼追ニ傷屈原一、因以自ー」‖喩。○いさむ（諫）○つぐ（告）○官より下民へさとしきかせる。○上ーは天子のみことのり。

【諭敎】ユカウ　さとしをしへる。漢書、賈誼傳「太子之漸、在ニ于早ーー與一レ選ニ左右一」

【諭告】ユカウ　○さとしつぐ。○文體の名。文體明辯「按、字書云、諭、曉也、告、命也、以ニ上敷ニ下之詞一、商周之書、未レ有ニ此體一、至ニ春秋内外傳、始載ニ周天子ーニ諸侯一及列國往來相告之詞一、然皆仁人傳レ言、不レ假ニ書辭一、故今不レ錄」

【諭示】ユジ　さとしをしめす。‖諭告。

【諭旨】ユシ　○むねをいひきかす。○清代、天子のみことのり。‖上諭。

【諭德】ユトク　○道德をさとし敎へる。○唐代、太子の侍從。事物紀原「唐龍朔三年、初置ニ太子左右ーー、蓋取下文王世子敎之以レ事、而諭ニ諸德一之義上

【諛】ユ　國　諛は俗字

へつらふ。へつらひ（諂）人の氣に入るやうに媚び順ふ「諂ー」「阿ー」「面ー」史、叔孫通傳「先生何言之ー也」

【諛悅】ユエツ　こびへつらひてよろこばす。金史、侯幸傳「小人侯大、爭進ニ諛悅一ーー」

【諛嘆】ユタン　こびてわらふ。韓愈詩「左右供ニ諂笑一、親交厭ニーー一」

【諛言】ユゲン　へつらひのことば。鹽鐵論「富貴多ニーーー」‖諛辭。

【諛辭】ユジ　へつらひのことば。劉向、九歎「卽聽ニ夫讒人之ーーー」‖諛言・諂言。

【諛語】ユゴ　こびへつらふ。戰國策「秦臣相紹以レ功、ーー用レ事」‖諛媚。

【諛媚】ユビ　へつらひこびる。唐書、安祿山傳「百計ーー、多出レ金諂ニ結左右一」‖阿媚。

【諛墓】ユボ　死者にこびて墓誌などを作りて揭揚する。唐書、韓愈傳「劉父者、持ニ貴金數斤一去曰、此謝ニ墓中人一得耳、不レ者、與ニ劉君一爲ニ諛」蓋し韓愈が人の金を受けて墓誌を作るを刺れるなり。

十畫

【謠】エウ　新

○うたふ、樂器に合さずに歌ふ、徒歌。詩、魏風「我歌且ー」傳「曲合ニ樂曰歌、徒歌曰ー」○はやりうた「俗ー」「童ー」「俚ー」‖繇。○うはさ、ねなしごと、風說「一言」「一傳」○そしる（毀）○國　猿樂の能に合せてうたふ歌詞「一曲」

【謠諑】エウシヤク　うたふ。元結詩「諸謠ニーー靡ニ顧公旦譖一」

【謠俗】エウゾク　世間の風俗。史、貨殖傳「人民ーー、山東食ニ海鹽一、山西食ニ鹽鹵一」‖繇俗（漢書、李尋傳）

【謠諑】エウタク　そしる（譖毀）楚辭「ーー謂レ余以ニ善淫一」

【謠傳】エウデン　謠言に同じ。

【證】エキ　陌　證とは別字

笑ふ貌。

【謂】ヰ　歌（一〇〇三頁一段）に同じ。

別項參照　フタ　謠・歌・謳の別は歌（一〇〇三頁一段）の條を見よ。

【謠誌】エウシ　うたふ。晉書、江統傳「關中土沃物豐、厥田上上、委穢之餘、猶種二穀百姓ーー、其殷實帝王之都、每以爲レ居」

【謠諑】エウサク　うたふ。晉書、樂志「凡樂章古辭、今之存者、並漢世街陌ーー、江南可採蓮・烏生十五子・白頭吟之屬也」‖謳謗。

【謠歌】カウタ　はやりうた。史、始皇紀「始皇聞ニーー一、而問ニ其故一」

【謠曲】ヨウキヨク　國　うたひ。字解參看。

【謠言】ヨウゲン　世間のうはさ、證據の實、盛に傳りて造言する。傳聞の未だ實ならざる者。三國志「ーー遠聞」‖謠傳・流言。

【謠誦】ヨウシヨウ　うたふ。元結詩「諸謠ニーー靡ニ顧公旦譖一」

【謠俗】ヨウゾク　世間の風俗。史、貨殖傳「人民ーー、山東食ニ海鹽一、山西食ニ鹽鹵一」‖繇俗（漢書、李尋傳）

【謠諑】ヨウタク　そしる（譖毀）楚辭「ーー謂レ余以ニ善淫一」

【謠傳】ヨウデン　謠言に同じ。

【講】㊀カウ　㊁コウ　平　講

㊀あきらかにす（明）物事の意味を說きあかす（解釋）「ー書」「ー經」○あけつらふ（論）○ならふ（習）稽古する「ー習」「ー學」左、隱五「ー事也」○きはむ（究）○はかる（謀）もくろむ。左、襄五「ー事不ー令」○なかなほりする（和解）「ー和」史、甘茂傳「秦與魏ー罷兵」‖媾。㊁なかなほりをする、和解する。○國　神佛の信者があつまり結ぶ團體「一中」「富士ー」又、金錢の融通のための會合「賴母子ー」

【講和】カウワ　きはめたづねる。唐書、李勉傳「ーー政事」‖講究尋繹。

【講究】カウキウ　講義する席。南史、孫瑒傳「每ー遣ーー一時有ニ抗論一、注侶莫レ不レ傾レ心」晩會詩「裂殺ーー鄰二御座一」‖講席・講帷・講堂。

【講解】カウカイ　○なかなほりする。史、項羽紀「業已ーー」‖講和。○書物を說きあかす。‖解釋。

【講學】カウガク　學問を研究する。互に疑を析かちて義理の精當を求める。晩起

「——以講ㇾ之」

【講義】カウギ　文書又は學說の意義を說き明かす。又、其の說き明かしの書物。倉卒「先讀二經文一通熟、然後按ㇾ文ㇾ義」‖解義。標識。

【講談】カウダン　ときあかし論ずる。後漢書、章帝紀「諸儒會二白虎觀一、——五經異同ニ」

【講求】カウキウ　しらべもとめる。宋史、陳襄傳「以ㇾ——民間利病一爲ㇾ急」（病は弊）

【講究】カウキウ　事物の理をかんがへきはめて善を盡すことを求める。宋史、食貨志「神宗——ニ方田利弊ニ」

【講貫】カウクワン　業をならふ。貫は習、習ふ。四書「士朝而受ㇾ業、晝而——」‖講習。

【講經】カウケイ　聖人の書を講說する。晉書、職官志「述馬八人、職如二說者祕書一、掌二圖籍一、釋奠——、則掌二其事一」

【講義】カウギ　學業をみがき究める。樓德儀文「——ニ于筵奏之下ニ」

【講古】カウコ　古の道をとく。柳宗元文「晉ㇾ道——ㇾ、爲二文師一以爲ㇾ師」

【講座】カウザ　圖講經に同じ。大學教授が擔任する學科目の爲め定められし地位。

【講師】カウシ　○僧官の名、佛教を講ずることを掌る。圖○學術の講義をする人。○歌合などに歌を讀み上げる人。

【講試】カウシ　きはめこころみる。詩經、疏「如ㇾ此長壽、相與——ニ氣力一、奇二其老而不ㇾ衰也」

【講習】カウシフ　講じならふ。易、下象「麗澤兌、君子以朋友——ㇾ」‖講貫。

【講釋】カウシヤク　書物の意味を說明する。南唐書、升堂——ㇾ」‖解釋。

【講授】カウジュ　ときあかしてさづける。漢書、夏侯勝傳「勝每ニ——一、謂二諸生一曰、士病ㇾ不ㇾ明二經術一」

【講須】カウシユ　圖宮中歌の御會に、發聲に次ぎて第二句より同音に吟唱する職。

【講誦】カウシウ　書物の意義をきはめ讀む。史、儒林傳、董仲舒、廣川人也、以ㇾ治二春秋一、孝景時、爲二博士一、下ㇾ帷——、弟子以次相ニ授業一、或莫ㇾ見二其面一、蓋三年不ㇾ觀二於舍園一、其精如ㇾ此」‖講讀。

【講席】カウセキ　○書物を講義する席。晉說「在ニ——一」‖講筵。○師に送る書簡文の宛名の脇に用ふる敬語。‖師史。

【講說】カウセツ　ときあかす。又、ときあかし。文同詩「君能爲ㇾ我再——ㇾ」

【講堂】カウダウ　書物を講義する室。後漢書、明帝紀「親御ニ——一、命二皇太子諸王一說ㇾ經」

【講道】カウダウ　道を說き究める。宋史、李燔傳「居ㇾ家——ㇾ」

【講談】カウダン　○義理を解きあかして話をする。○圖軍談實錄などを巧みに話す。‖講釋。

【講堂】カウダウ　講義する席。‖講筵。

【講中】カウチウ　圖神佛の信者の組合。又、其のなかま。

【講讀】カウドク　書物を說き明かし讀む。宋史、黃裳傳「爲ㇾ人簡易端純、每ニ——一、國ㇾ事納ㇾ忠」

【講者三番一會】カウジヤノサンバンイチエ　よくととのひたる形容、調和整齊。漢書、晉參傳「蕭何爲ㇾ法、——」史記には講を緒に作る、互に通ず。

【講武】カウブ　武備をならふ、武事を講習する。儀、月令「命二將帥一——ㇾ」

【講明】カウメイ　義理を講究しあかす。

【講旅】カウリヨ　軍隊の操練をする。旅は師旅、兵五百人の稱。王粲、羽獵賦「因二時隙之餘日一、陳二苗狩一而——」

【講論】カウロン　義理をときあかし論ずる。後漢書、光武紀「——ニ經理一、夜分乃寐」

【講和】カウワ　和睦する、兩國が仲なほりする。唐書、張說傳「——以休息」（詩ㇾ和とかへり讀むは非）‖媾和。

【講話】カウワ　學術上のはなし。

【詬】

㊀カク・コク　㊁カウ　名　㊀——は禍を樂み虐を助くる貌。㊁さけぶ（叫）疾呼する。晉子、修慝、註「雖有ニ——之人一亦皆恬靜」‖嗚。

【誥】

キャク　業　通音ギャク

○たはむる、じゃうだんをいふ、おどける、たはむれ（戲）おどけ（調戲）「謔ー」「笑ー」「戲ー」「調ー」「嘲ー」詩、衛風「善戲ー兮、不ㇾ爲二謔兮一」○——は盛んにして烈しき貌（爾雅、疏）又、喜び樂む貌。詩、大雅「天之方虐、無ニ——一」

【謔謔】キャクキャク　たはむれる。梅堯臣詩「酒半時ー——ㇾ」‖謔浪。

【謔笑】キャクセウ　おどけわらふ。顏延詩「談ㇾ玄昧二妙理一、——雜二嘲謔一」‖戲笑・笑謔。

【謔浪】キャクラウ　たはむれる。たはむれ（謔は戲弄、浪は放蕩）詩、邶風「——笑敖、中心是悼」

【謀】

ク　陷

——然は遽かなる貌。莊、養生主「動力甚微、——然已解」

【謀】

㊀ケイ　㊁ケイ　通　㊀——語はいはづかしむ（恥辱）又、ののしりて辱かしめる。㊁——慢は正しからざる貌。莊、天下「——慢無ニ任、而笑二天下之尚賢一」

【謙】

㊀ケン　㊁ケン　國　或は嗛に作る

㊀へりくだる(讓)卑下する。己を屈して人に下る「卑ー」「恭ー」○うやまふ(敬)○つつしむ(謹)○うたがひ、きらひ。＝嫌。○易の卦の名、艮下坤上。㊁あきたる(足)安靜の貌。○こころよし(快)大學「此之謂自ー」＝慊。

【謙抑】ケンヨク　へりくだる。北史、于謹傳「謹有二智謀一、善二于事上一、名位雖レ重、愈存ニ一ー一」＝謙遜・謙損・損抑。

【謙謹】ケンキン　へりくだりてつつしむ。＝謙愼・恭謹。

【謙遜】ケンソン　へりくだり、ゆづるむなしうしてわだかまりなし。晉書、周訪傳「智勇過レ人、性ー一、未二嘗論一レ功伐一」＝謙沖。

【謙虚】ケンキョ　へりくだるの意。愍懷太子傳「質識茫有レ餘二於中宮一、而有二不順之色一、若一旦交構、大事去矣、宜深自ー一以防二其漸一」

【謙和】ケンワ　へりくだりてやはらぐ。宋史、陳堯傳「ー一、不レ與レ物競」

【謙光】ケンクワウ　へりくだりて更に光明なり。易經「謙尊而光」疏「謂二尊者有レ謙而更光明一也」

【謙敬】ケンケイ　へりくだりつつしむ。左傳、注「存ニ一ー一、序二脫動一也」

【謙謙】ケンケン　へりくだりうやまふ貌、卑遜の貌。易、謙卦「ー一君子、用涉二大川一」

【謙懇】ケンコン　へりくだりて誠實。唐書、蕭瑀傳「ー一儉簡、事多二循仍一、故軍程安」＝謙恕。

【謙克】ケンコク　へりくだりて己に克つ。蔡邕文「雅性ー一、不レ吝二于利欲一」

【謙辭】ケンジ　へりくだれることば。後漢書「深載ニ一ー一、言レ無二功德一」

【謙柔】ケンジウ　へりくだりてやさし。唐書、肅宗皇后傳「后性ー一」

【謙愼】ケンシン　へりくだりつつしむ。張九齡文「所レ致二休徵一、必加ニ一ー一」＝謙謹・謙敬。

【謙讓】ケンジャウ　へりくだりゆづる。卑遜の貌。史、淮陰侯傳「假令韓信學レ道ー一、不レ伐二己功一、不レ矜二其能一、庶幾載、于二漢家勳一、可下以比二周召太公之徒一、後世血食上」＝謙遜・謙讓・退讓。

【謙順】ケンジュン　へりくだりしたがふ。晉書、楊駿傳「公提二大權一、輔二弱主一、當仰思二古人至公至誠ー一之道一」＝恭順。

【謙恕】ケンジョ　へりくだりて人をおもひやる。孔文仲文「天資ー一、思レ得二深謀重計一以補二所レ未レ照也」

【謙稱】ケンショウ　へりくだりていふとなへ。左傳「與二不穀一同レ好」注「孤寡・不穀、諸侯ー一」

【謙遜】ケンソン　へりくだりてゆづる。與は遜。韓愈、答二田儋射二書一「位望益隆、ー一滋甚」＝謙讓。

【謙損】ケンソン　へりくだりてたかぶらず。晉書、殷紹傳「今大事始定、宜下省二起造之煩一、深思ー一之理上」＝退損。

【謙退】ケンタイ　へりくだりしりぞく。漢書、王莽傳「深執ニ一ー一」＝謙遜。

【謙沖】ケンチュウ　へりくだり己をむなしうす。晉書、姚興載記「殷湯夏禹、德冠二百王一、然猶順二守ー一、未レ居二崇極一」＝謙虛。

【謙抑】ケンヨク　へりくだりつつしむ。唐書、路巖傳「循循ー一、若レ不レ在二勢位一者上」

【謙德】ケンドク　へりくだる德。史記、自序「景公ー一、奬惡退行」

【謙默】ケンモク　へりくだりてだまって居る。＝謙抑寡默。

【謙約】ケンヤク　へりくだりてつづまやか。漢書、成帝后傳「ー一爲レ右」

【謙裕】ケンユウ　へりくだりて心ゆるやか、裕は寛なり、寛なり。元史、后妃傳「雅性忠恕、ー一靜淑」

【謙抑】ケンヨク　へりくだりて己の身をおさへる。＝謙下・損抑。

【謙遜】ケンソン　へりくだりて心いさぎよし。北史、源明根傳「ー一不レ諂」＝謙遜。

【謇】ケン　簡　蹇に通じて蹇に作る

○まこと(忠)○ただしくいふ(正言)直言する。○どもる(吃)口どもりて言ひ難し。○なやむ(難)○ああ。感歎の發語辭。屈原、九歌「ー吾法二夫前修一兮」

【謇吁】ケンウ　次條に同じ。後漢書「ー一之操、獨首彌固」

【謇諤】ケンガク　直言しておもねらず。忠直なる義。魏志、高堂隆傳「ー一足二以勵レ物」＝謇愕。

【謇謇】ケンケン　○忠貞にして直言する貌。後漢書、魯丕傳「廣納ニ一ー一、以開二四聰一」○艱難の甚だしき貌。晉書、王豹傳「王揖ー一」＝蹇蹇(易、蹇卦)

【謇正】ケンセイ　直言して正し。北史、徐紇傳「紇性浮動、墓二權利一、外似ニ一ー一、內實諂諛」

【謝】シャ　禡

○たつ(絕)ことわる、拒絕する「固ー」「ー絕」○しりぞく(退)辭する。史、汲黯傳「ー不受」○さる(去)辭し去る。○おとろふ(衰)○しぼむ(凋)しぼみおちる「花ー」「凋ー」「開ー」○つぐ(告)辭令を以て相告ぐ、○れいをのべる「鳴ー」「感ー」「深ー」「謹ー」○あやまる、わ

びる「一罪」「陳一」「一過」史、項紀「旦日不可ニ不ニ蚤自來一項王」○ゆるす(聴)○やくをひく(致仕)(一)病は病氣をいひたてて官を辭する)正韻「致仕曰一」○うてな、樹に通ず。○一鴂ケツは子規ホトトギスの異名。

【謝安】シヤ　晉の陽夏の人、字は安石、少くして重名あり、徴辟皆就かず、東山に隱居し、妓を以て相從ふ、人爲めに語して曰く「安石不ン出、如ニ蒼生一何」と、年四十餘、始めて出でて桓溫の司馬となり、累官して太保に至り、卒して太傅と贈らる、世に謝太傅と稱す。

【謝意】イヤ　○お禮のこころもち。○わびをする心。

【謝恩】シヤ　受けたるめぐみの禮をのべる。後漢書、儀志「愛ニ三老五更一之儀、明日皆謁ン闕一レ、以見ニ謝恩一」

【謝候】ゼヤ　謝禮に同じ。

【謝金】シヤ　お禮の金。

【謝惠連】レヤイ　晉の人、十歳にして能く文を賦す、族兄靈運之を嘉賞す、云ふ篇章ある毎に、惠連に對すれば輒ち佳句を得と、靈運皆て永嘉の西堂に於て詩を思ふ、竟日就らず、忽ち夢に惠連を見る、即ち池塘生ニ春艸一の句を得、甚だ以て工と爲す、常にいふ此れ神助あり、吾が語にあらざるなりと、年三十七にして卒す。

【謝違】ケヤ　ことわりて去らしむ。方干詩「有ン客姑一一」

【謝公墩】トヤコク　晉の謝安の王羲之と同じく遊びし丘。江蘇省、江寧縣城の北隅に在り。金陵圖經「謝安石住ニ東山一、有ン墩、曰ニ一一一」

【謝公之屐】ノヤコウ　晉の謝靈運が木屐を著けて山に登りし故事。世說、任誕「常著ニ木屐一上レ山、則去ニ前齒一、下レ山、去ニ其後齒一」柳宗元、馬退山茅亭記「一一顧不ン及」

【謝罪】ザイ　己のつみをわびる。史、廉頗・藺相如傳「至ン門一レ(中略)卒相與驩、爲ニ刎頸之交一」

【謝辭】シヤ　お禮のことば。又謝罪のことば。

【謝晏】シヤ　衰退せしあつさ。蕭琛詩「夕風凄ニ一一一夜氣應ニ新秋一」

【謝絕】ゼツ　ことわる。史、儒林傳「一一賓客一」

【謝朓】シヤ　南北朝の南齊の人、字は玄暉、學を好み美名あり、文章清麗、章疏を善くし、五言の詩に長ず、宣城の太守たり、故に世に謝宣城と稱す。

【謝枋得】トヤウ　字は君直、疊山と號す、宋の信州の人、人と爲り豪爽、性直言を好み、忠義を以て自ら任ず、德祐の初め、信州に知たり、元の兵と戰ひて利あらず、山中に入る、拘せられて元の都に到り、絕食して死す、其の編する所の文章軌範は大いに世に行はる。

【謝病】シヤビヤウ　病氣といひたててことわる。鞏固策「應侯因一レ一、請ン辭ニ相印一」

【謝表】シヤ　恩遇を受けたるに因りて、上書して自ら敢て當らざるを陳ぶるをいふ。又其の上書。東觀漢記「和熹鄧后遜ン位、手書一一、深陳ン不ン足ヲ以奉ニ宗廟一克ニ小君之位一後世、臣下が升遐又は貶黜あれば皆一一を遣む、其の詞皆駢儷を用ふ。〃謝章。

【謝豹】シヤヘウ　子規ホトトギスの異名。禽經「子規啼苦、則倒ニ懸於樹一、自呼曰ニ一一一」〃杜宇・杜鵑。

【謝良佐】シヤリヤウサ　宋の上蔡の人、字は顯道、程門の高弟にして、上蔡學派の祖なり、論語說を著す。

【謝禮】レイ　世話になりし禮。〃謝儀。

【謝靈運】シヤレイウン　晉の謝玄の孫、上庸に家す、少くして學を好み、博覽を務め、文章は江左第一たり、宋に仕へ永嘉の太守と爲り、祖父の封爵を襲ぐ、故に世に謝康樂と稱す、玄曾て康樂縣公に封ぜられたるが故。

【謖】　シュク　屋　通音ソク

○たつ(起)おきあがる。○一然は衣服を斂めととのへる貌。後漢書、蔡邕傳「公子一然斂ニ袂而興一」○一一は高くぬきんでる(峻拔)又、松風の聲。

【謖謖】シュクシュク　峻ケンづる貌。世說新語「世目ニ李元禮一、一一如ニ勁松下風一」一說に、松風の聲。元禮は李膺の字。

【謾】　セン　㊥有

○いざなふ、さそふ(誘)○ちいさし(小)一說は小說。○すくなし(少)禮、學記「足ニ以一開ニ不ニ足以動ニ衆一」

【謁】　タフ　㊥合　又、牐に作るは別

うたがふ(疑)左、昭二六「天道不一、不ニ試其命一」(天道は信ずべきをいふ)

【謄】　トウ　蒸

○うつす(寫)原本のままに寫す(移書)「一寫」「一本」○つたへうつす(傳鈔)

【謄黃】トウクワウ　黃紙を以て詔書を謄寫する。清會典、恩詔下、各省奉ニ一一恭繕、頒ニ所ン屬州縣衙一宣布」

【謄抄】トウ　かきうつす「一一版」‖傳鈔・謄錄。
【謄本】トウホン　原本のうつし。山谷題跋「借來未一一」
【謄錄】トウロク　うつしとる。元史、選擧志「一一試卷」

【謗】ボウ

そしる。そしり、悪しさまにいふ(誹毀)「誹一」「讒一」「怨一」「誣一」史、孝文紀「朝有進善之旌、誹一之木」

同訓異義　ボウ　謗・誹・非・論・毒・詆・刺・毀・譏・譖・短の別は誹一八一九頁一段の條を見よ。

【謗怨】ボウエン　そしりうらむ。韓非子「眾仲以レ公而周人一一」‖譖怨・怨謗。
【謗毀】ボウキ　そしる。そしり。文天祥詩「一一平生無レ不レ有」‖毀謗。
【謗讒】ボウザン　そしる。そしり。漢書、司馬遷傳「負下未レ易レ居、下流多二一一一」
【謗讒】ボウザン　そしりて讒言する。蘇軾詩「慎勿レ怨二一一、乃我得二直言一」‖讒謗。
【謗嗤】ボウシ　そしりてあざけりわらふ。晉林「有二絕擧之節一、必受二一之恥一」‖嘲嗤。
【謗書】ボウショ　そしる。そしり。韓非子「子產聞レ畝樹レ桑、鄭人一一、民智之不レ足」用、亦明矣」‖毀謗。
【謗沮】ボウソ　そしりはばむ。唐書、實參傳「宦侍一一不レ已」
【謗書】ボウショ　人をそしれる手紙。戰國、秦策「樂羊反而語レ功、文侯示二之一一一篋一」
【謗詛】ボウソ　そしる。そしり。晉奚文「下使二恩臣免二于一一一」
【謗嘲】ボウチョウ　そしりあざける。王安石詩「一一出レ異已、傷被固二讒略一」
【謗書】ボウショ　そしりにくむ。左、昭元「民無二一一一」
【謗罵】ボウバ　そしりのの しる。魏書、李業興傳「性豪俠、重二意氣一、與レ其好合、傾レ身無レ吝、若有二相乖忤一、便即疵毀、乃至摩色加以二一一一」‖詬罵。
【謗排】ボウハイ　そしりしりぞける。陳師道詩「詩レ論排レ道不レ須レ同」
【謗毀】ボウキ　そしりと、ほまれと。國語「古之王者、考二百事于朝一、問二一于路一」‖毀譽。
【謗論】ボウロン　そしり論ずる。孔平仲文「斧鉞不レ足二以禁一一一」

【謨】ボ　模

いたむこころ、寃痛の聲「一懣」

【謐】ヒツ　質　通音ヒツ

○しづか(寂・靜)「靜一」○やすらか(安・寧)「安一」「恬一」漢武內傳「內外寂一」○つつしむ(愼)「愼一」

【謎】メイ　霽　通音メイ

なぞ、なぞなぞ(隱)別の意味を隱し藏して人をして迷はしめることば。

十一畫

【謀】ボウ　尤

○門堂壁樹の別に出でたる者。○一門ボウは別に建てたる門。晉書、劉曜傳「一門且空」又、冰室の門。張衡、東京賦「一門曲樹、邪沮城洫」

【謳】オウ・ク　尤　虞

㊀うた「樵一」「歌一」○うたふ(歌)「善一」衆人が聲をひとしくして歌ふ(齊歌)○すうた、樂器を用ひずしてうたふ。徒歌。○唱と通ず、呪一は小兒の語聲。㊁あたたむ(煦)○於一は化せんと欲する貌。又、歌ひて樂む貌。

同訓異義　オウ　謳・歌・謠の別は歌(一八〇三頁一段)の條を見よ。

【謳吟】オウギン　歌をうたふ。黃滔詩「夜聽二一一館二鷹參一」
【謳謠】オウヨウ　うたふ。うたふ。唐明皇詩「鑾一一滿、行宮雨露深」
【謳歌】オウカ　天子の功德をしたひてよろこびうたふ。孟、萬章「一一者不レ一一堯之子一而一一一舜」
【謳吟】オウギン　○謳歌に同じ。漢書、敘傳「民皆一一思レ漢」○歌をうたふ。蘇軾、潮州韓文公廟碑「一一下招道二巫陽一」
【謳唱】オウショウ　うたふ。開元天寶遺事「美二泰色一、善一一」
【謳誦】オウショウ　はやりうた。李嶠詩「登レ原采二一一、俯レ谷求二才術一」‖謳誦。

【謦】㊀ガク　㊁ガク　藥　㊂ガク　覺

㊀そしる(誹)○一一はそしる聲がやかましく又、悲む聲が止まざる貌。衆人の愁ふる聲。‖謦咳。○わづらはし。○いはる(詐)○大いなる貌。○みだりにいふ(妄語)たはこと(譁)○不肖の人のことばの煩はしき義。○はなはだし(甚)㊁おごる。唐書、周燾傳「宿將驕一不循」令者、燾命鞭

其背」‖倣。

【謹言】ゴンゲン　○人の話首を終かずして安否する語。楚辭、九思「令尹兮一一」○悲ふる辭の多き語。又そしる辭のやかましき語。漢書、食貨志「天下一一然、陷ル刑者衆」

【謹乎】コヲ　大いなる貌。莊、德充符「一一大哉、獨成二其天一」

【謹醜】ゴンシウ　そしる。呂覽、慎大「一二一先王一、排二詐虞一」‖詆毀。

【謹】キン　㊀

○つつしむ(愼)物事に注意する「慎一」易、乾卦「閑行之一」○つつしみ。○うやうやしくす(敬)「敬一」「恭一」「恪一」「醇一」うやうやしくかしこむ。○おもんず(重)○いましむ(戒敕)詩、大雅「以一無良」○儉にしく禁ずる。荀、王制「一盜賊」

同訓異字　謹・愼・敬・恭・肅・恪○謹は一點に念を入るる義、こまかに、ぬけめなきなり、細謹・謹信と用ふ。○愼は內ばにして、用心する義、慮に近けれども、大事に用心するのみにてあがめる意はなし。○敬は事をうやまひ、大切にするなり、禮記の註に「貌ニ在ルヲ恭トナシ、心ニ在ルヲ敬トナス」とあり。曲禮「修ル己以ル敬」○恭は行儀正しく、つつしむこと、容貌のつつしみは恭なり、心のつつしみは敬なり。禮記「手容恭」○肅はつつしみのきびしくして、ひきしまる意あり。屬肅・嚴肅と用ふ。○恪は敬なり、つつしみて、まちがひの無き義、恪勤と用ふ。詩經「溫恭朝夕、執ル事有ル恪」

【謹介】ゴンカイ　つつしみて心かたし。宋史、王顯傳「性一一不ル好ル殺」

【謹恪】キンカク　つつしみて職務に忠實なり。‖恪謹・慤恪。

【謹慤】キンカク　つつしみて誠實。謹愼・誠慤

【謹空】キンクウ　書翰の後に書して敬意を表する語。胡曉玉、訂譌雜錄「崇文雜談云、前世風俗、卑者致二書於所ル尊、尊者但批二紙尾一答ル之曰ル反、故人謂二之批反一、如二官司批狀・簡書批答之類一、故紙尾多作二敬空字一、自謂不二敢抗敵一、但空二紙尾一以待二批反一耳」‖敬空。

【謹完】キンクワン　謹みぶかくして缺點なし。唐書、李友傳「風操一一」

【謹啓】キンケイ　つつしみて申し上げる。書狀の首に用ふる語。‖敬白・肅啓・拜啓。

【謹敬】キンケイ　つつしみうやまふ。新語「夫道莫ル大二乎無爲一、行莫ル大二乎一一一」

【謹言】キンゲン　つつしみて申し上げる。書狀の結尾辭。‖謹白。

【謹愿】キンゲン　つつしみ深くしてこまやか。古董瑣錄「精微一一」

【謹狷】キンケン　つつしみてただし。後漢書、吳漢傳「在二朝廷一斤斤一一、形二于顏貌一」

【謹身】キンシン　身をつつしむ。荀賓「潔莫ル潔二于一一一、吉莫ル吉二于知ル足」

【謹審】キンシン　つつしみぶかくして心があきらか。唐書、長孫無忌傳「性一一」

【謹愼】キンシン　○つつしむ。諸葛亮、出師表「先帝知二臣一一一」○國綠川時代に士分以上に科したる閉刑、門戶をとざして自盡出入を禁ぜしもの。

【謹上】キンジヤウ　つつしみてたてまつる、書狀の結尾語。

【謹狀】キンジヤウ　謹みて狀す、人の行狀傳記などを記するときに用ふる語。

【謹愼】キンシン　つつしみうやまふ。史、司馬相如傳「王吉愈益一一」北史、李穆傳「小心一一、未二嘗倜儻一」‖謹愿・謹慤。

【謹正】キンセイ　つつしみて心正し。北史、李穆傳「性一一涉二書史一」

【謹束】キンソク　つつしみて天子に申し上げる。

【謹勅】キンチョク　つつしみてうけがふ。史、項羽紀「謁良曰、一一」

【謹聽】キンチヤウ　つつしみて人の言を聽く。管子、山權數「一二其言一」‖敬聽・肅聽。

【謹直】キンチョク　つつしみぶかく正し。

【謹敕】キンチョク　つつしみいましむ。漢書、李元皇后傳「不ル如二御史大夫晉一一、敢以死保ル之」‖謹愼。

【謹飭】キンチョク　つつしむ。飭は整備なり。南史、程文季傳「臨ル事一一、御ル下嚴制」‖敬飭。

【謹勉】キンベン　つつしみて兄や姉によくしたがふ。唐書、李元素傳「奉二昆姊一一一」

【謹度】キンド　つつしみて行を守る。孝經「制ル節一一、滿而不ル溢」

【謹篤】キントク　つつしみて心あつし。晉史、王珣傳「少一一、爲二從伯司徒簡一所ル愛」

【謹敏】キンビン　つつしみて事を行ふにさとし。後漢書、宦者傳「鄭衆爲ル人、一一有二心機一」‖敬敏・恪敏・恭敏。

【謹撲】キンボク　つつしみぶかくしてかざりなし。杜牧文「風俗一一、法令明具」

【謹慥】キンソウ　つつしみぶかくして手ぬ

かりなし。漢書、史丹傳「親省二醫藥一不レ離、然心甚―レ―」

【譴責】ケンセキ つつしみ深くいさぎよし。唐書、王劇傳「劇性譴柔歷二山南東道節度使一、代宗目爲二純臣一、世稱二―レ―一」

【誖】ク コ 虞

―輿ゴ はきやりうた。類篇「―輿、擧重勸レ力歌也」‖輿謌（呂覽、淫辭）

【謦】㊀ケイ ㊁ケイ 梗 通

㊀しはぶき、せきばらひ。㊁かたりわらふ（言笑）

【謦欬】ケイ ○せきばらひ。莊、徐無鬼、註「輕目レ脣、張口レ欬」轉じて貴人に面會するを――に接すといふ。‖咳咳、○言笑の聲。

【誖】呼（三三頁一段）の古字。

【謯】謯（言部五畫）に同じ。

【謪】謫（言部十五畫）に同じ。

【謫】タク チャク 陌 一音テキ 又讁に通ず

○せむ（責）とがめる（咎）譴責する。左、成十七「國子―我」○つみ（罪）罰する。○官職を降し黜ケる「貶―」又、遠方へ流す「遷―」○とがめ、つみ（罪過）○怪しく變りたる雲氣。左、昭三一「日始有―」

【謫降】カク ○とがめによりて官位をさげ、遠方へ遷される。甲申雜記「將レ引二用嶺南一―一人」‖左遷・遷謫。○仙家にて墮落の後に用ふ。高啓詩「何年―在二人間一」

【謫仙】セン ○天上界より人間界になされたる仙人。李白をほめていふ。唐書、李白傳「賀知章見二其文一嘆曰、子―人也」○酒杯をいふ（趙水燕談錄）

【謫居】キョ 罰によりて遠方へながされてをる。元稹詩「我是玉皇香案吏、―猶得住二蓬萊一」

【謫戍】ジュ 罪を蒙りて邊境へまもりの兵としてやられる。漢書、武帝紀「發二―一、屯二五原一」

【謫所】ショ 罪を得てながされ居る所。‖配所。

【謫數】スウ せめあばく。謫は過を責める。發は惡を訐ク。列子「窮年不二相―一」

【謾】マン バン 諫 通 曼マン

○あざむく（欺）いつはる。又、其のこと「欺―」晉書、刑法志「遠二忠欺一上謂二之―一」○あなどる（侮）‖慢。○なる（嫚）○けがす（汚）○おこたる（惰）「情―」○ゆるやか（緩）‖慢。○ひろし、とりとめなし（汗漫）「誕―」○そしる（毀）

【謾易】イ あなどる。誤一に慢に作る。史、張耳傳「高祖箕倨詈、甚―二之一」

【謾欺】キ あざむく。史、始皇紀「慴伏―一、以取レ容」‖欺謾。

【謾吟】ギン そぞろに詩を吟ずる。元結詩「醉或漫歌、醒聞亦―一」‖漫吟。

【謾語】ゴ いつはりのはなし。てたらめをいふ。聞見後錄「光（司馬溫公）年五六歲、弄二青胡桃一、女兄欲三爲脫二其皮一不レ得、女兄去、一婢以レ湯脫レ之、女兄復來問、光曰、自脫也、先公適見、詗二此之一曰、小子何得二―一、光自レ是不敢―一」‖漫言・妄語・誑言。

【謾天謾地】マンテンマンチ 上下を欺き瞞ふをいふ。錢塘遺事「賈似道當レ國、陳藏一作雪詞二譏レ之云、沒レ耙沒レ鼻、要時開做出―」

【謾味】イ あなどりくらます。宋史、食貨志「無賴子弟、一―尊長一、經不レ入レ家」

【謬】ビュウ 困 通じて繆に作る

○あやまる、まちがふ。あやまり、まちがひ（誤）「舛―」「訛―」「誤―」「―誤」書、問命「鬼瞰厥糾―、格其非心」○たがふ（差）「差―」「錯―」漢書、司馬遷傳「差以毫釐、―以二千里一」○みだる（亂）○あざむく（欺）いつはる（詐）

同訓異義 謬・誤・訛・錯・舛・過・失の別は誤（言部七畫）の條を見よ。

【謬悠】ビュウ いつはり誤りてとりとめなし。莊、天下「―之說、荒唐之言」‖謬妄無稽。

【謬計】ケイ あやまるはかりごと。‖誤算。

【謬誦】ジュ あやまりいつはる。方言「―、詐也」

【謬見】ケン まちがへるかんがへ。

【謬誤】ゴ あやまり。新語「―出二手口一、則亂及二萬里之外一」‖誤謬・舛訛。

【謬錯】サク まちがひ、あやまり。蘇軾詩「我疑臨レ政多二―一、淡君精采如二秋鷹一」‖錯謬。

【謬算】サン あやまれる計算。あやまるはかりごと。唐書、舒元輿傳「流鮮―一」‖謬計。

【謬字】ジ 字畫ただしからざる文字。北史、李欽傳「鮮以五文字多二謬誤一、

逸覽二說文倉雅一刪三正一一、名曰二字辨一」‖譌字。
【譌舛】ビン　あやまりたがふの唐書、元載傳「文武官功狀多二一一一」‖訛舛・錯舛・乖舛。
【譌僞】ビン　人をみあやまりて上にすめる。北史、貴嗣傳「實二其一一一、劃二其僞詐一、如レ此則衆人不レ得レ挾二其私一、受レ任不レ得レ孤二其擧一」
【譌傳】ビン　あやまれるうはさ。‖訛傳・訛傳。
【譌成】ビン　あやまりたがふ。韓維詩「有レ詔論二一一一」
【譌老】ボウ　年老いて智識くらし。晉書、馬隆傳「年老一一、不レ宜レ服レ戎」‖昏老。
【譌遞】ビン　あやまりみだる。冥通記「勿然曰、何以一一」
【譌戻】ビン　あやまりもとるの意。指海論「梁陰陽之一一者爲二小人一、故兇詐姦邪」‖悖戻・悖逆・乖戻。
【譌謬】ビン　あやまり、おちど。郭璞、方言序「演二其末一及、摘二其一一一」
【譌論】ビン　あやまれる議論（漢書、刑法志）

【謀】ボ　㒳

○はかる（議）一事一計をはかるは謀、汎く議りて其の謀を定むるは一。はかりごと（謀・計策）「宏一」「皇一」「聖一」「剛一」「淵一」周禮、秋官、大行人「以陳二天下之一一」○なし（無）南唐書、黨與傳「越人一信」注「一信、無信也」‖莫。
【謀訓】ボン　國家の大計。又、後王の戒となるべきをしへ。書經の大禹謨・皐陶謨・伊訓の類「典一一誥」

十二畫

【譏】キ　㒳

○そしる。左、隱元「稱二鄭伯一、失二敎也一」そしり（誹謗）「刺一」「衆一」○とがめる（詰問）しらべる（呵察）吟味する。孟、梁惠王「關市一而不レ征」○うかがふ（伺）○せむ（謎）○きらふ（嫌）○いさめる（諫）微言を以て諫める。

同訓異字 譏・誹・非・謗・論・嘗・訴・刺・毀・詆・短の別は誹（言部八畫）の條を見よ。

【譏呵】キカ　○しらべる（察）周禮「宮正譏二其出入一」注「一一其衣服持操及疏數者一」○次條に同じ。
【譏詞】キシ　そしる。蜀志、孟光傳「光好二公羊春秋一而一一二左氏一」
【譏議】キギ　そしる、非難する。漢書、楊惲傳「用レ此爲一一一」
【譏嫌】キケン　そしりきらはる。傷嚴超「誹謗比丘、罵二詈徒衆一、計二露人惡一、不レ避一一一」
【譏素】キソ　しらべせめる。又、一一使は其の官名。金史、百官志「一一使、掌一一一審察一」
【譏陳】キチン　そしりしこづ。蘇軾詩「世事漸艱吾欲レ去、永隨二二子一脫一一一」
【譏刺】キシ　そしる。そしり。漢書、劉向傳「顯二訟宗室一、一一王氏一」‖刺譏。
【譏揣】キシ　人の長短をそしりはかる。‖誹譏揣摩。
【譏請】キセイ　せめそしる。宋史、孫全照傳「全照知レ兵、以二嚴殺一整レ衆、中書初進擬二虢州刺史一、上曰（中略）今擬二此州一、似レ涉一一一、乃改焉」‖訕謗・誹謗・謗譏。
【譏詆】キテイ　そしる。唐書、崔昭度傳「數上書、一一朝政一」
【譏罵】キバ　そしりのしる。孔平仲文「武而文、一一古者刀」
【譏排】キハイ　そしりしりぞける。韓愈、唐故相權公墓碑「一一擯俾一」
【譏誘】キユウ　そしる。南史、顧延之傳「積與一一一訕二幾朝士一」
【譏評】キヒョウ　そしりて非難する。舊唐書、陸贄傳「互相一一」
【譏諷】キフウ　とほまはしにそしる。韓愈文「皆紕脫含一一一」

【譆】㊀キ　㊁噫に同じ。　支

㊀ああ、あ（噫）莊、齊物「一、善哉技」○痛み恨みて之を呼ぶ聲。○愁へ恨みて發する聲。噫に通ず。○懼れて發する聲。○一一は熱し。㊁恨む聲。

【譎】ケツ　㒳

○いつはる（詐）○うそつく、たはこと（妄言）一說に譎の俗字。

【譒】ケ　麻

又、嘩に作る　かまびすし、やかまし（喧譁）かまびすしく呼ぶ。
【譒呼】ケコ　衆人がかまびすしく呼ぶ「紛一」「諠一」「讙一」
【譒譁】ケカ　かまびすしくさわぐ。宋史、狄棐傳「士卒一一趨二訴門一、棐不レ能レ治」‖讙譁・喧譁。
【譒咲】ケショウ　かまびすしくさわぎわらふ。柳宗元文「觀一一之一、以爲二狂人一」
【譒沸】ケフツ　かまびすしくさわぐ。唐書、袁恕傳「李愼光謀反、因纂二百盧杞罪惡一、士譁一一一」‖囂譒・喧沸。

【譌】

詖（言部四畫）に同じ。

【譓】ケイ　霽

○したがふ(順)○あきらか、智謀多し。

【譎】 ケツ　入

○ただす(糾)人の罪を發ク「糾ー」○ことばおほし(多言)

【譎】 ケツ　屑

○いつはる(權詐)あざむく(欺)たくらみてだます、權謀を用ふる「邪ー」「狡ー」「險ー」「權ー」「詭ー」『論、憲問』「晉文公ー而不正、齊桓公正而不ー」註「詐也」○いつはり(詭)たくらみ。○とはまはしにいふ「ー諫」○糾ーハ曲折マガ

同訓異字　譎・僞・詐・詭・佯・陽・弔・燭・贋の別は僞(一六六四頁)の條を見よ。

【譎諫】カツ　直言せずしてとほまはしにいさめる。詩、巧言、關雎序「主レ文而ー、言レ之者無レ罪、聞レ之者足二以戒一、故曰レ風」

【譎數】ケツ　いつはりあざむく。‖譎詐・譎詭・詐僞。

【譎詭】ケツ　○いつはりあざむく(欺瞞、虞書、舜典)‖譎詐。○物體の奇異なるにいふ。史、司馬相如傳「奇物ー一、俶儻瑰瑋」

【譎弁】ケツベン　わるがしこし。田況詩「市人ー亦射レ利」

【譎怪之談】ケツクワイ　いつはりてあやしむべきものがたり。文心雕龍「原圖傳レ地、夷羿彈レ日、木夫九首、土伯三目、……也」

【譎計】ケツケイ　人をあざむくはかりごと。‖譎謀。

【譎權】ケツケン　いつはりのはかりごと。蜀志、秦宓傳「戰國之ー一」‖權譎。

【譎詐】ケツサ　いつはる。魏書、劉仁之傳「仁之外示二長者一、内懷二ー一」‖詭詐。

【譎謀】ケツボウ　あやしくして正しからず。禁遏、隷勢「心亂目眩、奇姿ー一」

【譎敵】ケツテキ　いつはりのはかりごと。後漢書、王渙傳「又能以二ー一、疑二強盜一、使二京師稱歎一爲二渙有二神算一」

【譎妄】ケツバウ　いつはり。唐書、裴延齡傳「極二論延齡ー一不レ可レ任」

【譎謀】ケツボウ　いつはりのはかりごと。史記、自序「漢既ー一、倉二信於陳一」‖詐謀。

【譎諷】ケツフウ　あざむきしふる。

【譎諭】ケツユ　いつはりのはかりごと。人物志「權在二ー一、失在二依違一」‖譎諫。

【識】 ㊀シキ　㊁シ　職　寘

㊀しる(知)物事をさとり知る「博ー」○みわける、みとめる「一認」○みわけ、さとり。○かんがへ「見ー」「學ー」「器ー」「達ー」○相ーはしりあひ(知・八)○絶對不滅なる人性の根原。法華經、註「一是託胎、一分氣息」㊁しるす(記)志・誌と通ず。○おぼえ(記憶)論、衛瓘公「女以二予爲多學而ー一之者與」○のす(記錄)○あらはす(表)○はたじるし。‖幟。○めじるし(目標)「標ー」○しるし、おぼえ(記號)○鏡鋲などにきざみたる四刻の字「款ー」‖陰文(凸刻即ち陽文を款といふ)○轉じて廣く器物書籍等の題字をいふ。

同訓異字　識・知の別は知(一三三六頁四段)の條を見よ。

【識域】シキイキ　心理學にて意識の及ぶ範圍。‖覺域・識野。

【識達】シキタツ　見識ふかし。釋皎然詩「懷高ー一不レ可レ屈、功成固レ首破微瞳」

【識韓】シキカン　韓荊州を識るといふ義。初めてすぐれたる人に面會するにいふ。李白、與二韓荊州一書「白聞二天下談士相一曰、生不レ用レ封二萬戸侯一、但願一ー二ー荊州一」

【識量】シキリヤウ　事物の善惡を明かに見わける。陳書、徐敬成傳「以二ー一ー知名」‖識見。

【識果】シキクワ　果報の道理をさとる。徐陵文「識レ因レ、不レ以爲レ疑」

【識解】シキカイ　識悟に同じ。

【識慧】シキケイ　さとし。三十六天内音「第三十緣梵自然ー一」‖識悟。

【識見】シキケン　見識と才藝と。南史、謝覽傳「梁武帝訪二張於覽一曰、ー一過レ臣甚遠、惟欽酒不レ及二於臣一、帝大悅」覽は謝朏の兄。

【識學】シキガク　見識と學業と。任昉文「ー一深通」

【識見】シキケン　かんがへ、すぐれたる意見。梁武帝勸二農於覽一曰、ー一過レ臣甚遠、惟欽酒不レ及二於臣一、帝大悅」覽は謝朏の兄。

【識學】シキガク　見識と學業と。任昉文「ー一深通」

【識慮】シキリヨ　おもひ。法苑珠林「佛言、學不二必多一、行レ之爲レ上、多學不レ行、徒褒二ー一、有二何益一哉」

【識悟】シキゴ　事理をよくわきまへさとる。蜀志、費禕傳「ー一過レ人」

【識悳】シキトク　しりつくす。南史、孝義傳「郭原平、每出貿レ物、錢來二半假一、邑人皆共ー一、輒加二本假一與レ之」‖知悳。

【識者】シキシヤ　物事をよく悟り知れる賢人。

【識達】シキタツ　見識ありて事理に通達す。晉書、李雄載記「雄美二容貌一、少以二烈氣一聞、每周二旋鄉里一、ー一之士、皆器二重之一」

【識丁】シキテイ　字を識る。唐書、張弘靖傳「面覺擬二兩石弓一、不レ如レ識二一丁字一」後世說に丁を个に作る、个・丁

と字形相似て誤る、後に又誤りて丁を以て字の義とす。

【識度】シキ　見識と度量と。南史、陸玠傳「弘雅有ニ一ー一、好ニ學善屬ニ文」

【識認】シキ　みとめる。吳志、鍾離牧傳「種ニ稻二十餘畝、臨レ熟、縣民有ニ一ー之ニ牧曰、本以ニ田荒一故墾レ之耳、遂以ニ稻與ニ縣人一」＝認識。

【識拔】シキバツ　人物を見わけてぬきあげる。唐書、石雄傳「爲ニ李德裕一所ニ一ー一」＝識擢。

【識別】シキベツ　見分ける。意見を以て分別する。魏志「誠非ニ愚臣所ニ能ー一ー」＝鑑別。

【識面】シキメン　顏を見知る。師友談記「李文正嘗言、士人當レ使ニ王公閔レ名多面ーレー少ニ」

【識量】シキリヤウ　見識と度量と。晉書、裴楷傳「明悟有ニ一ー一、弱冠知レ名」＝識度。

【不レ識不レ知】ズンバ　思はず知らず。詩、大雅「ー一、順ニ帝之則ニ」

【識】

㊀シン　㊁セン　職　沁

㊀そしる、しこづ（譏）○うったふ（愬）訟ひてうったへる（讒訴）「誣ー」「構ー」公羊、莊元「夫人ー公於齊侯」㊁いつはる（不信）僞に通ず。

【誣毀】シンキ　そしる。そしり。唐書、皇甫無逸傳「帝勞曰、比多ニ一ー一」＝毀謗。

【誣詐】シンサ　そしりいつはる、うそをつきて人のわるくちを言ふ。

【誣說】シンセツ　人をそしりしこづ言。魏書、解斯椿傳「ー一既行、因相恐動」

【誣短】シンタン　あしざまにそしる。短もそしる。唐書、李峴傳「爲ニ要近ー一、遂失レ恩」＝毀短・譏短。

【證】

シヨウ　徑

○あかす（明）あかしをたてる。論、子路「其父攘ニ羊而子ー之ニ」○しょうこ、しるし（驗徵）あかし「ー據」「明ー」○つぐ（告）○疾病の證候ショウコウ俗に症に作る。○佛さとる「ー得」「ー入」「ー菩提」

【證引】ショウイン　證據ショウコをあげる。後漢書、明德馬皇后紀「時楚獄連年不レ斷、因相ー一、坐繫者甚衆、后乘レ間言及、惻然、帝感ニ悟之一、多ニ所ニ降宥ニ」北史、邢邵傳「每ニ公卿會議一、邵引ニ典故一、證援レ筆立成、ー一詮洽」

【證因】ショウイン　因をあきらかにす。司空圖詩「華北幽亭願ーレー」

【證果】ショウクワ　佛修行の因によりて得たる悟りの果（果は佛の妙道）煩惱を斷滅して眞理を證する。

【證券】ショウケン　てがた、證文。

【證言】ショウゲン　○言語を以て或る事實を證明する。○證人の述べたることば。

【證人】ショウニン　あかし、しるし。後漢書、張衡傳「采ニ前世成事一以爲ニ一ー一」＝徵驗。白虎通「稽ニ度辰之ー一ー」

【證據】ショウコ　あかし、よりどころ。後漢書、鍾彪傳「彪爲ニ一ー其事一」よりどころを明かにす。韓愈、柳子厚墓誌銘「論ー一古今」

【證左】ショウサ　○當時左右にありて、其の事を見て證するもの、即ち、證人。史、五宗世家「請遂ニ勅所ニ與奸謀ー一ー」と○しょうこ、左はわりふの左片、即ち我方にとめ置きて他日のあかしとするもの。＝左驗。

【證審】ショウシン　しらべてあきらかにす。後漢書、皇后紀「陛下曾不ニ一ー一、遂伏ニ其辜ー一」＝檢審。

【證書】ショウショ　證據となるかきつけ、證文。

【證跡】ショウセキ　しょうことなるべきあとかた。

【證道歌】ショウドウカ　歌の名。冷齋夜話「景德初、四土有ニ異僧一、到ニ都下一、問ニ永嘉ー一、即作ニ證道歌一」

【證人】ショウニン　しょうこに立つ人。北齊書、循吏傳「諸ー一莫レ不レ泣レ泣」

【證券】ショウヒ　しょうこ、たとへ。何承天文「ー一堅明、文辭清富」

【證據】ショウコ　しょうこ、よりどころ。＝證驗。

【證廣】ショウクワウ　證據として述す札。

【證明】ショウメイ　○あかし、よりどころ。○あかしを立てて明かにする。證畢岐文「如ニ證所ニ說、願悉ー一」

【證文】ショウモン　證券に同じ。＝證書。

【譙】

㊀セウ　㊁セウ　蕭　嘯

㊀せむ（責讓）＝誚。とがめる、しかる（呵）㊁ものみ、やぐら、城門の上のものみ（城樓）「闕ー」○ーは鳥の羽のやぶれ（垂斂）たる貌。

【譙呵】セウカ　せめしかる。史、衞綰傳「及ニ景帝立ニ諸絵不ーニ一綰一」＝譙讓・責讓。

【譙讓】セウジヤウ　ことばにてせめる。史、高祖紀「因ニ一項羽一」史、蘇秦傳「子孫有ニ過失一、不ニ一ー一」

【譙誚】セウセウ　鳥の羽のやぶれたる貌。詩、豳風「予羽ー一」

【譙誚】セウセウ　しかりてしりぞける。唐書、魏徵傳「時上ニ封事一者衆、或不レ切レ事、帝厭レ之、欲レ加ニ一ー一」＝責讓・譴讓。

【譙門】セウモン　遠きを望み敵を候ふ爲めに城門の上にたてたるたかどの（美麗なるを譙樓といふ）史、陳涉世家「戰ニ一ー中一」

【譙樓】セウロウ　城上に組てて遠望すべきものみの高樓（廣韻字典）＝城樓・麗譙。圖版樓。

【譔】セン　先　厳
○をしふ(教)○よきこと(善言)よく言ふ、ほめたたへる、稱說する。禮、祭統「論ニ其先祖之美」○のぶ(述)えらぶ。‖撰著。
同訓異義　フラ譔・撰・撰・選・簡・練の別は撰(七八三頁三段)の條を見よ。

【譫】タイ　隊
○うらむ(怨)○にくむ(惡)孟、萬章「凡民罔不ニ―一」慾に通ず。

【讀】ダク　ネ。　看
○憑り呼ぶ。○かたる(語)○あらそふ(爭)○聲高くさわぐ(喚)

【讀說】ダクゼイ　○憑り呼ぶ聲。後漢書、儒林傳「雖所謂ニ―一之學、各習ニ其師一」○爭ひさわぐ聲。法言「ニ―者天下皆欲也」

【譚】談(言部八畫)に同じ。

【譚峭】セン　南唐泉州の人、字は景升、幼にして聰敏、仙術を好み、終南山に入り、後、南岳に居り丹を煉る、相傳ふ、丹成り、水に入りて濡れず、火に入りて灼けず、青城山に入りて仙し去る、亦紫霄眞人と稱す、化書を著す。

【譜】ホ(三畫二頁三段)に同じ。

十三畫

【譎】アイ　泰
ニーは臣の心力を盡す貌。又、おほ(衆多)き貌。詩、大雅「ニ―王多吉士」‖濟濟。

【譯】エキ　ヤク　陌
○つたへる、四夷の言を傳へる、他國の言を自國の語になほして其の意を通ずる「通ニ」「翻ニ」「重ニ」「漢ニ」周禮、秋官「象胥」疏「北方曰ニ―者、ニ即易、謂ニ換易言語一使相解一也」○わけをとく(解・釋)經義を解く「詳ニ」○國わけ、いはれ理由。
【譯官】ヤククワン　つうべんの役。漢書、百官公卿表「典客名ニ大鴻臚一屬官、有ニ行人ニ―一」
【譯語】ヤクゴ　飜譯したることば。顧況詩「浪波仗ニ忠信一ニ―辨ニ區譯一」
【譯書】ヤクショ　飜譯せし書物。

【譽】オウ　徑　嘉
○こたふ、言を以て對ふ。應に通ず。蘇軾詩「車馬敢門定不ニ―一」○こたへ(答言應答)

【議】ギ　寘
○はかる(謀)相談する、はかりて事の宜しきをきめる(評定)「評ニ」「謀ニ」「集ニ」曲禮「公事不私ニ―」○あげつらふ(論)「ニ論」「審ニ」又其の論說「公ニ」「正ニ」「朝ニ」○えらぶ(擇)○そしる(誹・謗)そしりて彼此と批評する。論、季氏「天下有ニ道則庶人不ニ―一」○周代の制にて刑罰を群臣する「八ニ」○文の一體、事の可否を論定する「奏ニ」「駁ニ」文體明辯「ニ者宜也、周爰諮謀、以審ニ事宜一也」
同訓異義　ロン議・計・謀・圖・慮・商・謀・詮・諮の別は計(言部二畫)の條を見よ。
【議案】ギアン　議會に提出すべき原案。
【議院】ギヰン　國帝國議會の略稱。又之を開設する議事堂。
【議會】ギクワイ　○事を決議する合議制の機關。○國帝國議會の略稱。‖議院。
【議決】ギケツ　評議して定める。漢書、酷吏傳「按ニ創始ニ比ニ羣臣一、即日ニ―一」‖議定。
【議郎】ギラウ　つみを論じしらべる。晉書、劉和傳「贓汙百萬、付ニ法ニ―一、百僚慴ニ之一」
【議事日程】ギジニッテイ　其の日の議事の順序を豫め定めたるもの。
【議奏】ギソウ　國昔、武家よりの奏聞を天皇に奏上することを掌りし公家の職名。
【議題】ダイ　○評議すべき問題、議案の題目。○詩文などの題を相談してきめる。業夢得文「帝命ニ吾儕一作ニ來歲狀元賦一當レニ―一」
【議度】ギタク　相談してはかる。晉經、傳「凡制レ事必以ニ古義一ニ―終始一」
【議長】ギチヤウ　議會のかしら、議員を統率し議事を整理し又其の議會を代表する者。
【議定】ギテイ　評議して決定する。漢書、呂后紀「ニ―奏レ之」
【議定書】ギテイショ　相談して定めたる覺書。
【議謀】ギボウ　事をはかり定める。蜀志、許靖傳「周慈等三吏部尚書、與レ靖共ニ―、遷ニ退天下之士一、沙ニ汰穢濁一」‖謀議。
【議體】ギタイ　禮のことを議す。禮記「毎ニ經ニ―レ一」
【議了】ギレウ　相談がすむ。
【議論】ギロン　各意見を論じあふ。韓愈文「ニ―平正、有ニ經據一」
【上下議論】ジヤウゲギロン　互に議論をたたかはす。

【警論風生】ケイロンフウセイ　議論の勢の盛んなる形容。

【警】ケイ　キョウ　梗

○いましめ。いましむ(戒敕)氣をつける、用心する。○おこす(起)○つつしむ(敬肅)○そなへ(防禦)軍事上のそなへ。左傳「且雖二諸侯相一見軍衝不一レ徹一レ警也」○まもり(守備)「一備」「嚴一」○非常のしらせ「邊一」「一報」○すばやし、さとし「敏一」魏志、太祖紀「太祖少機一」○さきばらひ(喝道)行幸の時、道をいましめ行人を避けしむる。漢書、梁孝王傳「出稱一レ蹕、入言一レ警」蹕は蹕に同じ。

同音異義　シャク　釋・戒・誡・儆・箴・敕の別は戒(七一〇頁四段)の條を見よ。

【警衛】ケイエイ　非常をいましめまもる。漢書、諸侯傳「一一不一レ備、則忠生二非常一」‖警護。

【警戒】ケイカイ　いましめる、用心する。警は一に儆に作る。書、大禹謨「儆二戒無虞一」

【警戒線】ケイカイセン　軍用語、敵狀を偵察する爲めに歩哨兵を各要地に置く、其の所在の線の稱。

【警告】ケイコク　いましめつげる。宋史、賈昌朝傳「近年寺觀屢災、此殆天示二一一(可レ勿二緯治一以示中畏レ天愛レ人之意上」

【警角】ケイカク　軍中にて吹くつのぶえ。晉の桓溫、軍中にて夜一一を吹く、御史中丞、司馬恬、大不敬と奏劾す、當時は唯天子のみ鼓角を用ふるを得、宋代は天下の郡邑竝に皆一一を用ふるを得(通攷)

【警覺】ケイカク　いましめさとる。眞德秀文「一念一一、船到二彼岸一」

【警起】ケイキ　いましめおこす。周禮、注「呼レ旦以一二百官一、使二夙興一」

【警急】ケイキュウ　○急變をいましめ其の用意する。○かはりごと、急に起りし變事の高士傳「聶レ有二一一一、與レ人不レ通」

【警句】ケイク　短くしてすぐれたる句。本事詩「崔曙作二明堂火珠詩一、擢第云、夜來建月滿、曙後一星孤、當時以爲二一一一」

【警備】ケイビ　萬一をいましめ用心する。

【警惕】ケイテキ　いましめおそれる。易經、注「錯然者、一一之貌」‖戒懼。

【警官】ケイカン　警察事務を司る官吏、警視・警部・巡査など。‖警吏・警察官。

【警悚】ケイショウ　さとし。南史、王融傳「融少而神明一一」‖警悟。

【警固】ケイコ　非常をいましめて防ぎ守る。‖警衛・警護。

【警悟】ケイゴ　さとし、南史、鮑泉傳「性甚一一」‖警敏。

【警鼓】ケイコ　非常をしらす爲めにつづみうつ。又、其のつづみ。韓非子「楚厲王有レ警爲鼓、以與二百姓一爲レ戒」

【警語】ケイゴ　人を警め動すに足る奇拔なることば。宋史、李綱傳「十議爲レ詩、往往有二一一一」

【警蹕】ケイヒツ　非常をいましめまもる。‖警衛。

【警策】ケイサク　馬をいましめて走らせる爲めうつ鞭(チュ)轉じて文中にて全篇を活躍せしむるに足る主要の短き句。馬は警策によりて益〻駿となる、因りて文の片言により益〻明かとなるに喩ふ。陸機、文賦「立二片言一以居レ要、乃一篇之一一」

【警察】ケイサツ　國家及人民の安寧幸福を害する者を除くことを掌る行政機關。

【警視】ケイシ　警視總監の長官、內務大臣の指揮を受けて東京府下の警察・消防・衛生事務などを管理し又檢事と同じく犯罪を檢索する職權を有す。

【警手】ケイシュ　國立銀行を守る警官。

【警蹕】ケイヒツ　非常をしらせるかね。

【警世】ケイセイ　世人をいましめる。

【警醒】ケイセイ　ねむりをさまさせる。轉じて世人の迷をさまさす。

【警捷】ケイショウ　さとくすばやし。‖警敏。

【警枕】ケイチン　眠を戒むるため熟睡すれば傾くやうに造りし圓木の枕。晉越備史「武丁在レ位、未二嘗睡一、宋年用二圓木一作レ枕、熟睡則敬名二一一」宋の司馬光も亦之を用ふ。

【警報】ケイホウ　暴風雨又、すべて非常のしらせ。

【警拔】ケイバツ　文章のすぐれて奇拔なる義。唐書、李程傳、遺語一一、士流推レ之」

【警發】ケイハツ　いましめ引き起こす、蘇軾、答二張文潛一書「一一愧儒者一」

【警備】ケイビ　萬一をいましめて用心する。‖警戒守備。

【警蹕】ケイヒツ　行幸の時、道をいましめ通行とめをする、蹕は行人を止むる義。漢書、文三王傳「從二千乘萬騎一、備二非常一」‖警護。

【警蹕】ケイヒツ　前條に同じ。

【警敏】ケイビン　すぐれてさとし。‖敏悟。

【警捷】ケイショウ　

【警保局】ケイホキョク　國內務省の一局、行政警察・高等警察・圖書出版・著作權等の事を掌る。

【警夜】ケイヤ　夜まはりをする、又よまはり。瀛奎律髓、嚴挺之傳「誰何一レ、伐レ鼓通レ神、以備二非常一」

【警邏】ケイラ　いましめめぐる。元史、鄭温傳「統二四千人一一一一釣魚山一」‖巡警・巡邏。

【警吏】ケイリ　警官に同じ。

【警勵】ケイレイ　いましめはげます。唐書、張

建封傳、帝又使二左右一以二所レ持雜一劇之目、頗節誼歲察弗レ徹、故用レ此貧レ況、建封又　賦レ詩以自一一」‖誠勵。

【譸譸】ヂウ すぐれて奇抜なる議論。楞史「皆于二文席間一時發二一一」

【譹】ケ　㊥

○おほいにさけぶ(大呼)○痛く呼ぶ。○あばく(訐)「一者」

【譴】ケン　㊥先

○さかし(慧)○ちゑ(智力)智多し。○しゃべる(多言)

【譟】サウ　㊥噪に同じ

○みだる(擾)羣り呼びてさわぐ「鼓一」「狂一」「衆一」「喧一」左、文十三「魏人一而還」○かまびすし(聒)

【譭】ジョウ　㊥蕭　㊦嘯

○ほまれ。ほむ(譽)○一一は言語の質朴なる貌。

【譫】セン　㊥㊦琰

○かたましきことば(妄言)○かたよる(跛)○わるがしこくしてへつらふ。又、其の人(佞人)

【譜】タフ　㊥合　㊦緝

○ことばおほし(多言)○たはごと、うはごと、病みてうはごとをいふ(病中妄語)本草綱目、序例「心病一妄煩亂」

【譫言】ヂン うはごと。素問、熱論「不レ欲食、一一」‖譫語。

【譫語】ヂン たはごと、うはごと。

【譬】ヒ　㊥本、辟に作る

○たとへ。○たとふ(比喩)彼の事を假りて此の事を說き明す。論、雍也「能近取一一」○さとす(諭)さとる(曉)後漢書、鮑永傳「言之者雖レ戒、而聞之者未レ一」

【譬喩】ヒユ たとへ。王逸、遠游章句「離騷之文、依レ詩取レ興、引レ類一一」

【譬論】ヒロン たとへてさとす。又たとへ。

【譬類】ルイ たとへ。後漢書、西南夷傳「言語多好二一一一」

【譜】フ　㊥慶

○しるす(籍錄)○つづく。つづき(屬)しく(布)事物のつづき合を順序を逐ひて布列する。又、其の書物「系一」「家一」「年一」「羣芳一」○系圖ヂイをつくる。次第を立てて記錄する。史、三代世表「自レ殷以前、諸侯不レ可レ得而一一」○音樂の曲節をしるしたるもの「樂一」「音一」一一不レ明、有レ闕レ疑」

【譜紀】フキ 系圖の記錄。史記、自序「一一

【譜曲】フキョク 音樂のふし。‖樂譜・樂曲。

【譜系】フケイ けいづ(系圖)晉林、序「醫代名臣一一」唐書、經籍志「一一以統二世俗繼序一」

【譜牒】フテフ 事實の順序を正して記したる文書。史記、自序「取二之一一一」‖譜系。

【譜代】フダイ 圖○祖先以來、數代引き續きて其の君家に仕へし者。‖世臣。○家譜代代の義。‖譜第。

【譜第】フダイ ○けいづ。晉書、杜預傳「又參二考衆家一一、爲二之釋例一」‖譜系。○しんるゐ、血脈。宋元通鑑「晉陽公主之一一也」

【譜圖】フヅ 譜系に同じ。

【譜錄】フロク ○譜系に同じ。北史、高德正傳「親表一一四十餘卷」○子部の圖譜の書。四庫全書總目に器用・食譜・草木鳥獸蟲魚の三門に分つ。

十四畫

【讉】ギョク　㊥

齊敬ヂャンギョムの貌。史、龜策傳「齊戒以待一然」

【讄】クン　㊥

○せむ(責)とがめる「一責」「呵一」しかる(呵・怒)○せめ、とがめ。○つみ(罪)「大一」「罪一」北史「臣有大一、則造二室請一死」

【讄攻】クンコウ 讄・責・讓・數の別は攻(八〇三頁三段)の條を見よ。

【讄呵】クンカ 次條に同じ。‖呵讄。

【讄詞】クンシ とがめしかる。漢書、薛宣傳「求二吏民過失一一一及「微細一」‖讄呵。

【讄責】クンセキ とが、あやまち。北史、高允傳「親和淡薄、朝士多見二杖罰一、允歷二事五帝一、出二入三省一、五十餘年、初無二一一一」

【讄告】クンコク ○災害を下してとがめいましめる。詩經、疏「天之爲レ災、所二以一一一」○其の罪をとがめ告げる。

【讄勉】クンベン せめてはづかしむ。南史、王弘傳「將レ加二榮爵于人一者、每先呵二責一一一之一然後施行」

【讄責】クンセキ 過失をとがめせめる。唐書、魏徵傳「帝常二洛陽一、次二記仁宮一、多レ所二一一一」

【譖訴】サンソ　つみする。つみとがめ。韓愈詩「前年遭ニ―一、探懷得ニ邂逅一」【譖點】サンテン　つみをせめて官位を下す。晉書、陳壽傳「壽獨不ニ爲レ之屈一、由レ是屢被ニ―一」唐書、選擧志「小加ニ―一、大正ニ刑典一」‖貴點。【譖愬】サンソ　せめいかる、とがめておこる。詩、小雅「豈不レ憤レ懣、畏ニ此―一」【譖訶】サンカ　あやまちをせめて郎に行ふ。北史、蘭陵王傳「登入朝而出、僕從譖訶、唯有ニ二人一、王獨遣、無レ所ニ―一」

【護】ゴ　國　通音

○まもる(守)「守ー」○たすける(助)すくふ(救)「救ー」史、蕭相國世家「高祖爲ニ布衣一時、何數以吏事ニ―高祖一」○擁ヨウきて全うす、かばふ(掩蔽)「保ー」「庇ー」「擁ー」【護衛】エイ　つきそひてまもる。又、其の者。漢案儀、四校之外、不ニ在以ニ―一爲ニ義也一」【護河】カ　とがめまもる。晉槐、七賦「五岳貢賦、百蠻ー一」‖呵護。【護軍】グン　軍隊の名、親兵、我が近衛兵の類。漢書、百官公卿表「ー一都尉秦官、元壽元年、更ニ名ー一」【護役】ヤク　喪を治むる家にて家長若くは親戚の能く事を幹する者一人を以て喪事を主持せしむるをいふ「司馬光、書儀」喪主を護して哀を盡し禮を盡すことを得しめるため。【護身刀】ゴシントウ　まもりがたな。【護照】ゴショウ　外國人が支那内地を旅行する時、支那政府より下付する旅行免狀。【護送】ソウ　罪人などを護り送る。【護短】タン　○其の性の短所をまもりすけて、強ふるに藏きを以てせず。禮記、康文「仲尼不レ假ニ盜於子夏一、護ニ其短一也」○自ら過失を諱ひ。魏書、游雅傳「性ー一レ、因以爲レ嫌」【護持】ジ　まもりたもつ、神佛の加護。唐書、劉禹錫傳「其詩在ニ處、傳有ニ神物ー一」【護符】フ　まもりふだ。‖護身符。【護國】コク　はか穴をまもる。宋史、王琪傳「琪卒、葬ニ於眞州一、詔ニ眞、揚二州一、發ニ卒護ニ其窆一、蓋異數也」【護法】ホウ　佛法をまもりて外敎にあたる。晉南晉時「ー一護身惟堪錫、石橋雲溪深寂寂」【護摩】マ　梵語、智慧の火にて煩惱の網を燒きはらふ義にて火を燒きて佛に祈り、一切惡事の根本を燒滅する。大日經疏、十五「ー一是燒義也、由ニ―一能燒ニ除諸業一」【護摩壇】ダン　前條の護摩を修する密壇にして中央に火爐あり。樒木・乳木といふ長短二種の薪木を用ひて法を行ふ。【護膜】マク　○英語の音譯、熱帶地方に產するゴムの木の液より製せし强力性に富みたるもの。‖樹膠皮の○セルロイドの俗稱、植物の纖維素にて製したる一種の物質。【護衛】エイ　衛兵をいふ、保護の責に任ずるが故。

【譸】チウ　尤

○あざむく(欺)たぶらかす(誑)○はかる(度)後漢書、虞詡傳「以ニ詡ー一之、知ニ其無ニ能爲一也」註「ー一當作レ譬」‖譬。○言を以て答へる。‖訓。【譸張】チョウ　あざむきいつはる、ほらをふく。晉、無逸「民無ニ或胥ー一爲ニ幻一」‖欺譸。

【譽】ヨ　御　遇

○ほまれ、よききこえ(美名)「名ー」「令ー」○ほめる、たたへる(稱)「稱ー」「毀ー」莊、盜跖「好面ノ人者、亦好ニ背而毀之一」○ほめすぎる、人の善を揚けて其の實に過ぐる(過美)○たのしむ(樂)詩、小雅「是以有ニ―一歲分」古、豫に通ず。

譽・褒・美・頌・賞の別は褒（一七六頁二段）の條を見よ。【譽兒癖】ヘキ　己の子をほめるくせ、唐の王勃の父福時の故事。唐書王勃傳、武子有ニ―一癖一、所有ニ―一」【譽歌】カ　ほめたたへる。王安石文「以ニ文學一爲ニ一時賢士大夫ー一」【譽望】ボウ　ほまれ、名望人望。唐書、馬植傳「ー一在ニ當時議公右一」【譽髦】ボウ　名譽ある俊才の士。詩、大雅、「古之人無ニ斁ー一斯士」【聲聞】ブン　よきほまれ。‖名譽令聞。

十五畫

【讀】ドク　屋　通音（言部十九畫）の俗字。

【讖】シン　鹽　又、讖に作る

あさし、あさはか(淺)史、李斯傳「能淺而材ー」【讒劣】レツ　才疲くしておとる。

【讒】タク　チャク　陌　讀（言部十一畫）に同じ

○せむ(責)詩、邶風「宣人交徧ー一我」○とがむ(咎)○つみとが(罪過)「刑ー」○つみする(罪)「逆ー」「瀆ー」

【讀】㊀トク・ドク　㊁トウ　五　國

㊀よむ、書を誦する。又、よみ。㊁文章のくぎり、句中の小點、よみきり「句ー」增韻「凡經書成文、語絕處謂之句、語未絕而點分之、以便誦詠謂之ー」ー」は通じて投に作る「句投」

同訓異語 讀・誦・念・課○讀は書に對してよむなり。韓文「晉少時讀ニ酔鄉記ー」○誦は書に背きてそらんじよむなり、背誦と熟す。○念は讀と誦とに通じて用ふ、念書と熟す。○課はふしをつけてよむなり、吟誦・諷誦と熟す。

【讀書】ドクショ　○靈中の詩趣を味ひ評する、或は鑑賞する。瀋陽館詩「ーレー論レ詩日往還」○ーー錄は書名、四卷、清の周亮工撰す、明末清初の畫家凡七十六人の畫品竝に其の生平の梗概を記す。

【讀會】ドクカイ　議案の審査討議、其の條文を朗讀する必ず三度を經、三ーーといふ。

【讀經】ドクケイ　經書を讀む。漢書、循吏傳「綬レ歷以給、方進ーニ博士ニ受ニ春秋ー」

【讀史方輿紀要】ドクシハウヨキエウ　百三十卷、清の顧祖禹撰す、正史に據りて地理を考訂し、山川の形勢險要、古今用兵、攻守成敗の跡、皆折衷する所ろあり。

【讀心】ドクシン　人の心中をさとる「ーー術」

【讀書】ドクショ　書を誦む。杜甫詩「ーー破ニ萬卷ー下レ筆如レ有レ神」

【讀書作文訣】ドクショサクブンケツ　十二卷、清の唐彪撰す、讀書作文の心得を述べて初學に便す。

【讀書三到】ドクショサンタウ　讀書するには、眼にて見、口にて讀み、心にて會得すべきをいふ。朱熹の語。訓學齋規「余謂讀書有ニ三到ー心到・眼到・口到、三到之中、心到最急」

【讀書人】ドクショニン　學者をいふ。宋史、太祖紀「太祖謂ニ侍儀一曰、作レ相須ニ讀ーー」

【讀書不求甚解】ドクショフキウジンカイ　書を讀みて解し難き所は姑く置きて強ひて解せんことを求めず「陶潛、五柳先生傳」

【讀書尚友】ドクショシヤウイウ　書を讀みて古人を友とす。孟、萬章「天下之善士、斯友ニ天下之善士ー、以レ友ニ天下之善士ー爲レ未レ足、又尚ニ論ニ古之人ー、頌ニ其詩ー、讀ニ其書ー、不レ知ニ其人ー、可乎、是以論ニ其世ー也、是尚友也」

【讀書種子】ドクショシュシ　學問好きの子孫をいふ。明史、方學漸傳「殺ニ季彌ー、——絕矣」

【讀書亡レ羊】ドクショバウヤウ　心、外に馳せて道を失ひたる喩。莊、駢拇「臧與レ穀二人相與牧レ羊、而俱亡ニ其羊ー、問ニ臧奚事ー、則挾レ策讀レ書、問ニ穀奚事ー、則博塞以遊、二人者事業不レ同、其於ニ亡レ羊均也」

【讀書百遍義自見】ドクショヒヤクヘンギオノヅカラアラハル　難度も熟書すれば、通じ難き義理も自ら明かになる。魏略「董遇曰、——」

【讀書萬卷始通レ神】ドクショバンクワンシツウジンス　萬卷の書を讀みて後、始めて能く神に通ずる如く立派になる。蘇軾詩「運筆如レ山未レ足レ珍、——」

【讀書錄】ドクショロク　書名、十一卷、呻錄十二卷、明の薛瑄（字は德溫）撰す、明代の醇儒瑄を以て首と爲す、この書錄するところ、皆躬行心得の言にして、一も門戶を語爭するの語なし。

【讀誦】ドクジュ　よむ。漢書、兒寬傳、休息輒ーーニ誦讀。

【讀時令】ドクジレイ　四時ごとに其の政令を民閭に讀みきかせる布令「歐陽修、縱樂志論」

【讀破】ドクハ　多くの書物を讀みやぶる、讀みつくす。杜甫詩「讀書破ニ萬卷ー、下レ筆如レ有レ神」

【讀法】ドクハフ　○周代の制にて正月に州民を集めて法令を讀み聞かせる儀式「蘇軾、策略五」○國ドクハフ新入兵に盲ひ渡す規則。

【讀レ律】ドクリツ　法律を習ふ。蘇軾詩「讀書萬卷不レーレ、致ニ君堯舜知レ無レ術」

【讀禮】ドクレイ　親の喪に居る。禮記「未レ葬讀ニ喪禮ー、既葬讀ニ祭禮ー」古人親の喪中には禮を講究して唯禮書の喪祭に關する者を讀む、故に居喪を稱していーといふ。

【讀十遍不如ニ寫一遍】ドクジフヘンハシヤイツペンニシカズ　讀むこと十たび讀むよりも一度うつす方が益多し。鶴林玉露「高宗親書ニ晉論ー遍ニ九經ー、又嘗御ニ書洪光武紀ー、賜ニ執政徐俯ー曰、卿勤ニ於讀ー光武紀ー、厥恩ーー」

十六畫

【讐】シウ　㊀　又讎に作る

○いつはる（詐）うそをつく。○いつはり、うそ。左、哀二四「是ー言也」○ねごと（寐語）

【讌】エン　㊀　もと燕に作る

○かたりあふ（相語）集りて話をする。○さかもり。さかもりする、集りて酒を飲む（會飲）ー酣。

【讌飲】エンイン　さかもりして飲む。讌一に燕に作る。ー飫・ー飲。

【讌設】エンセツ　さかもりしてたはむれる。晉書、劉聰載記「與ニ宮人ーー、或三日不レ醒」

【讌會】エンクワイ　さかもりのよりあひ。後漢書、樊準傳「爲ニーー二面論ニ縣術ー」ー宴會・ー會。

【讌閒】エンカン　うちとけてかたる。南史、謝朓傳、「從容ーー」

【讌坐】エンザ　うちくつろぎ、語り合ひて

すわる。戰國策「孟嘗君ー」

【讄】誄（言部九畫）に同じ。

【讎】シウ　又　又讐に作る

○あだ、かたき（仇敵）「仇ー」「私ー」「敵ー」「復ー」「報ー」「恩ー」詩、邶風「反以我爲ー」疏「ー者、至怨之稱」○むくゆ（報）酬に通ず。○つぐのふ（倍）價をはらふ。史、高祖紀「高祖毎酤留飲酒、ー數倍」○こたへる（對答）報ずる。詩、大雅「無言不ー」○たぐひ（匹・儔）○ひとし（等）同じ。漢書、霍光傳「皆ー有功」○あたる（當）○しらべ（應驗）史、封禪書「其方盡多不ー」○くらぶ、ただす、兩書を讀み合せて字句の誤を正す「校ー」

【讎校】二人相對して書の誤を校正する、其の誤を發見するにつとむるさま、仇怨ある者に似たり、故にいふ。後漢書、鄧皇后紀「詣東觀ー定ー傳記」＝校讎。

【讎仇】あだかたき。＝仇讎・讎敵。

【讎作】應接する。戰國策「處之ー」＝酬酢。

【讎殺】あだとしてころす。唐書、張琦傳「傳相ー、遂無已時」

【讎正】よしあしを見くらべてただす。唐書、歐陽厚傳「性嗜ー學、家書ー至萬卷」

【讎敵】あだ。＝仇敵・仇讎。

【讎校】てらしあはせてしらべる。唐書、谷那律傳「仕爲ー總書省正字、ー二國書、多ー所ー判定」」

【讋】讋（言部）に同じ。

【讅】テン　拯

へつらふ。へつらひ（諛）「佞ー」＝諂。

【讋】セフ　葉

○おそる（懼）おそれて氣を失ふ「震ー」懾に通ず。○いむ（忌）ねたむ。淮南、氾論「因其資以ー之」

同訓異義　懾・恐・懼・畏・怖・怕・惶・怯・憚の別は恐（六五五頁異）の條を見よ。

【讋伏】おそれてしたがふ。＝聾服。

【讋服】おそれしたがふ。漢書、項籍傳「諸將ー」注「讋、失ー氣也」

【變】ヘン　霰

○かはる（化易）○かふ（更）○うつす。うつる（轉）○あらたまる（改）うつり改まる。○うごく。うごかす（動）禮、檀弓「夫子之疾病矣、不可ー以變」○わざはひ（災異）平常とかはりし事、非常の事「災ー」「天ー地異」○横道、經に反して道に合する義、はがりごと（權略）方便、臨機の手段。文中子「非ー君子不可以語ー」○みだれ（亂）「事ー」○うつりかはり（轉化）○も（死喪）穀梁、昭十五「有ー以聞」○ふしぎ（奇異）○もののけ（妖怪）後漢書「又多見怪ー」

同訓異義　變・化・易・替・代・更・遷・渝・換○變はうつりかはる意、變化と用ふれども「變者化之漸、化者變之成」と註すれば、義やや異れり。○化は、かはりきたるなり「腐草化爲ー螢」の類。○易は一物の變ずるにも、他物のふり變るにも用ふ。孟子「以ー小易ー大」漢書「欲ー易ー太子」○替は彼と此となり代るなり、惡しき者と善き者とのかはる意あり、人を初は優待して、終は薄遇するを變替といふ。○代は俗にいふ名代の義なり、同じやうなるものが、なり代るなり。孟子「暴君代作」世を代といふも、父と子となりかはる故なり。○更は改也、代也と註す、物を新に代ふるなり、更ー衣、更ー僧の類。○遷は互にあちこちも變るなり、轉遷の類。○渝は變に同じ、約束をかふるを、渝盟といひ、染色のうすらぎわるくなるを、色渝といふ、用法せまし。○換は彼と此と交換するなり、惡錢銅貨の背に「以二百枚一換二惡錢一」とあるが如し。宋詩「三公不ー換此江山」

【變移】かはりうつる。＝變遷

【變異】ふしぎなることがら。書經、疏「變ニ遷ー一、則正ニ其事ニ而異ニ自常也」＝天變地異。

【變易】かへる。かはる。後漢書、左雄傳」＝變改・變更。

【變改】かはりあらたまるっかへあらためる。＝變換改易。史、禮書「少レ所ニー一」＝變更・變易。

【變更】かへあらためる。

【變格】常のきまりとかはれる格式。＝正格の對「ー一動詞」

【變化】○あらたまりかはる。易、乾卦「乾道ー一」○佛一切法は如幻如化にして、實事にあらず、因緣に從ひて假に存するのみなるが故に、種種にかはる。法華經「神通ー一、不可思議」○佛もののけ、妖怪の義。

【變幻】まぼろしの如く忽ちにかはる。

【變故】かはりたるできごと。漢

書、楊惲傳「還ニ過ー一ニ」‖事變・變事。

【變相】ヘンサウ 圖○佛菩薩を指していふ、佛菩薩の本相は唯一にして即ち法身なり、されども其の現する所の相は種種にして同じからず、これをー一といふ。○淨土又地獄の種種の變化したる相。又、其の畫圖。瑞應經「見ニ西方ー一ニ」

【變造】ヘンザウ 形をかへつくろふ‖改造。

【變死】ヘンシ 災難にあひ又は自害して死ぬ。‖橫死。

【變心】ヘンシン ○今までの心をかへる。史、張儀傳「乃且願ーレ易レ慮、割レ地謝ニ前過ー一」○氣がかはる、心がはり。

【變狀】ヘンジャウ 平常とかはりたるありさま。

【變成男子】ヘンセイナンシ 圖女子が未來にて佛となる爲めに其の性を變じて男子となる。

【變種】ヘンシュ かはりだね。動植物が其の同種類中に在りて普通よりかはれるもの。

【變色】ヘンシク ○物の色がかはる。劉禹錫詩「雨晴偏ニー一ー」○驚き又、怒りて顏色をかへる。

【變衰】ヘンスイ かはりおとろへる。楚辭、九辯「悲哉、秋之爲レ氣也、草木搖落而ー一」

【變生】ヘンセイ うまれかはる。

【變說】ヘンセツ これまでの持說をかへる。

【變節】ヘンセツ ○みさををかへる。淮南子「不下爲ニ秦楚ー一ヤー、不下爲ニ胡越ー一改ニ其ー一」○これまでの主義をかへる。漢書、朱雲傳「年四十乃ーレー、從ニ博士白子友ー一受レ易」‖折節。

【變遷】ヘンセン うつりかはる。‖變轉。

【變則】ヘンソク 定まれる規則に外れてゐる。正則の對。

【變態】ヘンタイ ○いろいろに形をかへる。金壺記「隨レ手生レ姿、入レ神ーレー」○普通とかはれるすがた。

【變體假名】ヘンタイカナ 圖普通の平假名とかはれる形の假名。いはゆるもじの類。

【變設】ヘンセツ おきかへる、改めてかへ置く。孟、盡心「諸侯危ニ社稷ー一則ー一」

【變徵之聲】ヘンチノセイ 悲壯なる音樂のふし。七音の一つ、史、刺客傳「高漸離擊レ筑、荊軻和而歌、爲ニ變ー一ー一」

【變通】ヘンツウ 變に應じてよく通達する。易、繫辭「化而裁レ之存ニ乎變一、推而行レ之存ニ乎通一、推而ー一者盡レ時者也」

【變調】ヘンテウ かはれる調子。又、調子をかへる。

【變轉】ヘンテン うつりかはる。易、繫辭「生生之謂レ易」疏「陰陽ー一、後生次ニ於前生ー一」

【變動】ヘンドウ かはりうごく。かへうごかす。韓愈、送ニ高閑上人ー一序「故旭之書ー一、猶ニ鬼神不ニ可ニ端倪ー一」

【變報】ヘンポウ かはりたる事のしらせ。非常のできごとの報知。

【變法】ヘンポフ 法律をかへる、惡しき政法を改める「ー一自強策」

【變名】ヘンメイ 名をかへる。史、貨殖傳「范蠡既雪ニ會稽之恥一、乃乘ニ扁舟一浮ニ于江湖一、ーレー易レ姓適レ齊」

【變亂】ヘンラン ○國のみだれ、いくさ、兵亂。○かへみだす。書經「乃ーニー先王之正刑ー一」

十七畫

【讌】 イン 吻

なぞ、かくしことば(庾語)呂覽、重言「好ー一」隱に通ず。劉向新序「齊宣王發隱書而讀之」

【讒】 サン 國 圖 通音ザン

○そしる(譖)他の善をにくみ能を忌みてそしり傷ける「ー一言」○へつらふ(佞)莊、漁父「好言人之惡謂之ー一」しこづ(邪)○つけぐち、好みて人の惡をいふ。○よこしま(邪)

【讒佞】ザンネイ ざんげんをおそる。詩經、序「采苓ーレー也」

【讒巧】ザンカウ 人をたくみにそしる。韓愈、遊聯句「德風變ニー一ー仁氣銷ニ戈矛ー一」

【讒閉】ザンヘイ ざんげんして人と人との仲をさく。晉書、劉元海載記「ー一因レ之而進」

【讒陷】ザンカン 人をざんげんして罪におとす。後漢書、來歷傳「ー一ニー大尉楊震ー一」

【讒毀】ザンキ そしりきずつく。漢書、馮衍傳「論レ功當レ封、以ニー一被ニ貧不レ行ー一」‖毀讒・譖毀。

【讒言】ザンゲン ざんげんしてそしる。詩、小雅「豈弟君子、無ニ信ー一ー一ー一」‖讒說。

【讒口】ザンコウ 好みて人の惡口をいふ、ざんげん。後漢書、劉陶傳「國命出ニ子ー一ー一」‖讒舌。

【讒構】ザンコウ 人をざんげんして罪におとす。李康、運命論「ー一不レ能レ離ニ其交ー一」

【讒狹】ザンキョウ そしりねたむ。宋史、陳東傳「邦彥等、ー一無レ所レ不レ至」

【讒邪】ザンジャ よこしまにして人をざんげんする。漢書、劉向傳「養ニ不斷之威一者、來ニー一之口ー一」

【讒舌】ザンゼツ 人をそしる口。王禹偁詩「ー一箴ニ前其ー一」‖讒口。

【讒說】ザンセツ 人を惡しくそしる。魏書、楊椿傳「天疾ニー一、汝其至矣、無妄之疇、行將レ及矣」鄭還古詩「ー一能令ニ骨肉離ー一」

【讒訴】ザンソ ざんげんして人を訴へる。史書、劉向傳「勉強以從ニ王事一、則反見ニ憎ー一ー一」

【讒言】ザンゲン ざんげんして天子に申し上げる。

【讒奏】ザンソウ しひあばく。唐書、趙憬傳

「遣二竜人一―一」
【讒諂】ざんげんし（つらふ）譖記「―一之民、有二比黨而危一レ之者」
【讒慝】人をざんげんする惡しき心あるもの。左、僖二八「開二軌一―之口」
【讒佞】ざんげんして（つらふ）韓愈、上二宰相一書」
【讒誘】しひそしる。そしり。權德輿文「竟以二一一獲一レ罪」
【讒話】無實の事をいひたててそしる。歐陽修詩「―一不レ須レ辨、亦止百年閒」
【讒路】讒言の遏むべきみち。唐令、武平一傳「斥二姦人一塞二一一一」

讖 十七畫

シン　讖は俗字

しるし（驗）未來の吉凶禍福の前兆。又、其の豫言。未來記「圖一」「符一」
【讖緯】未來の驗を言ふ語。又、未來記。晉書、武帝紀「秦始三年十二月、禁二星氣一―之學一」
【讖記】未來のことを書きしるせしもの。未來記。漢書、王莽傳「好二天文一―一」後漢書、光武紀「―一曰、劉秀發レ兵捕二不道一、卯金修德爲二天子一」
【讖語】未來の事を言ふ。揮麈餘話「張步逢中有レ石、里人號曰二圖石一、有二一一一云、圖石圓、出狀元、圖石仰、出二宰相一」＝預言。
【讖術】未來の事を知る一種のみち。晉書、藝術傳「漢武雅好二神仙一、世服尤耽二一一一」
【讖書】未來の事をしるせし文書。張衡、駁二圖讖一疏「立二首子前一、有レ徵二子後一、故智者貴焉、謂二之一一一」＝讖記。
【讖歩】未來を知る術。唐書、則天皇后傳「治二銅匱一爲二一室一（中略）四曰二申冤一、受二抑枉所一レ欲レ言、北曰二通玄一、受二一一秘策一」

讓 十七畫

ジャウ　深

○ゆづる。○あたへる（予）授ける「一與」「一位」○ゆづり。○へりくだる（謙）「謙一」「退一」「遜一」○ことわる、辭退する。○せむ（責）辭にて責める、なじる（詰問）「責一」左、僖五「公使一レ之」○手を平衡に擧げて行ふ禮。

同訓異字　讓・攻・責・數・譴の別は攻（八〇三頁三段）の條を見よ。

【讓位】くらゐをゆづる。淮南子「公子札不下以レ有レ國爲レ尊、故一レ一」
【讓渡】ゆづりわたす。
【讓詞】せめしかる。南史、鄱陽之傳「荒泰嘗衆中一二一鮮之一」
【讓譯】くらゐをゆづる。＝禪讓。
【讓畔】田の界を讓る。古、仁德の君、世に出づれば、民其の化を受けて、互に畔をゆづる、黃帝・堯・文王の時、皆これあり。讓路參看。
【讓歩】自己の主張、又は利益をまげて、相手方にゆづる。
【讓與】ゆづりあたふ。說苑「大賈賜一一者、人之所レ好也」
【讓路】行くみちを人にゆづる。魏志、井辰國傳「其俗行者相遜、皆住一レ一」唐書、朱敬則傳「兄仁軌常謝二子弟一曰、終身一レ一不レ枉二百步一、終身讓レ畔、不レ失二一段一」

讕 十七畫

ラン　寒　旱　翰

○しふ（誣）春秋繁露「則是非之情不可以相一已」○くちばしる、口がすべる（逸言）「一言」唐書、張堯傳「堯一辭曰、囚等畏死見誣耳」○滿一ランは欺罔ブアルの意。漢書、谷永傳「滿一誣天」

十八畫

讚 十八畫

サン　諫　霰　翰　諫は俗字

○ほむ、ほめる（稱美）人の美を稱する「贊一」「一歎」「稱一」○ほめことば「一辭」○たすく（佐）孔安國、尚書序「一易道以黜八索」贊に通ず。○佛經中の歌頌の詞。寺塔記「明一來事、滿地現舍利」○あきらか（明）○文の一體「畫一」贊に通ず。

【讓路】よろこびうたふ。禪宗元文「野夫一一、欲レ聖信レ神」
【讓放】かまびすし。荀、禮論「百姓一一」＝讙噪、諠譁。
【讓噪】かまびすし。說苑「雞豚一一、則寧二鎗啟之音一」
【讓譁】かまびすし。白居易詩「芳草供二杖藝一、觀棊助二一一一」＝喧譁、諠譁。
【讓喧】かまびすし。諠、樂記、注「閙一一則人意動作」
【讓咋】大聲を發する。又、かまびすし。劉峻文「訊隣一一、無レ論斯起」
【讓嗷】かまびすし。韓愈文「最下數有中一二一叫二號於城郭一者上」＝諠嗷。

十九畫

讙 十九畫

嘩（三五九頁一段）に同じ。

讚 十九畫

サン　諫　霰　翰　讚は俗字

○ほむ、ほめる（稱美）人の美を稱する「贊一」「一歎」「稱一」○ほめことば「一辭」○たすく（佐）孔安國、尚書序「一易道以黜八索」贊に通ず。○佛經中の歌頌の詞。寺塔記「明一來事、滿地現舍利」○あきらか（明）○文の一體「畫一」贊に通ず。

【讃揚】ヨウ　ほめたたへる。‖稱讃・嘆稱。
【讃嘆】タン　感心してほめたたへる。稱美すること甚だし。隋煬帝文「忍聞一一、惟唱二希有一」‖讃歎。
【讃歎】タン　前條に同じ。
【讃美】ビ　ほめたたへる。‖讃美。
【讃美歌】ビカ　耶蘇教にて神の徳をたたへほめる歌。

二十畫

【讞】ゲツ　ゲン　㊥　㊦

○はかる、罪を議す（評議）すでに決定せし罪獄の疑はしきものをば更に評議して公平にする。漢書、景帝紀「於レ人心不レ厭者輒一之」○とふ（問）○ます（白）禮、文王世子「獄成、有司一二于公一」○一一は正直の貌。石介文「立レ朝一一」
【讞局】キョク　評議を審理せし記錄。

【讜】タ　㊥　㊦

○ただしきことば（直言・正言）「忠一」○よきことば（善言・美言）
【讜論】ロン　ただしき議論。唐書、李紳傳「紳好二縱横大言一、時時一一、能寤二移人主一」‖正議。
【讜言】ゲン　ただしくよきことば。漢、鈹傳「晉久不レ見二班生一、今日復聞二一一一」‖善言。
【讜節】セツ　ただしきことば。又、善き言。典引「既感二皇后之一一一」‖讜言。
【讜直】チョク　ただし。李吉甫文「進賀咸曰、一一必容」‖正直。
【讜論】ロン　正しき議論。宋史、蘇軾傳「忠規一一、挺挺大節、冣臣莫レ出二其右一」‖讜議・正論・正議。

廿二畫

【讀】トク　ドク　㊥

○そしる（謗）左、昭元「民無二謗一一」注「一、誹也」○うらむ（怨）痛み怨む「怨一」○にくむ（惡）にくみ言ふ。

谷部

【谷】㊀コク　㊁ヨク　㊂ロク　㊥　㊦　谷（次條）とは別

○たに、たにがは、兩山の間のながれ、水が川に注ぐを谿といひ、谿に注ぐを一といふ「山一」「谿一」「岡一」「陵一」○やしなふ（養）（一は穀の音通、穀は生を養ふが故）○一風はこち（東風）○きはまる（窮）軸の轉音。詩、大雅「進退維一」○たけどひ（竹樋）○暘一は日の出る處。昧一は日の入る處。○夾一は地名。春秋、定十「公會二齊侯于夾一」㊁吐一渾は青海地方の國名、魏晉の際に、鮮卑の種族の立てしもの。㊂一蠡は匈奴の藩王の封號。史、匈奴傳「置左右一蠡王」
【谷飲】たにの水を酌みてのむ。隱者の形容。淮南子「單豹倍レ世離レ俗、巖居一一、不レ衣二絲麻一、不レ食二五穀一」宋玉、諷次宗傳「與二汝南一周二耕槃畝一、山居一一、人理久絶」
【谷間】たににかけたるかけはし。魏志、劉焉傳「住二關中一、斷二絶一一」
【谷氣】谷間の空氣。淮南子「一一多レ痺、丘氣多レ狂」
【谷口】谷の入口。史、三皇紀「駕二六羽一出二一一」
【谷山硯】硯の一種。硯箋「澄州、一、色淡青、有レ紋如二亂絲一叩レ之無レ聲、得レ墨快、發墨有レ光」
【谷神】道を形容する語、道の體の空虚なるを谷に喩ふ。老子「一一不レ死、是謂二玄牝一」既、谷は養、神は五藏の神、人能く神を養へば死せず。
【谷泉】たにより出づるいづみ。隋煬帝詩「一一落二暗石一、風松動二夜琴一」
【谷庭】たにそこ。張衡、南都賦「蓄二鬱於一一一」
【谷風】○こちかぜ、物を生長する風の義。字解參看。詩、邶風「習習一一、以陰以雨」‖東風・春風・穀風。○詩經の邶風の篇名、夫婦の道を失ふを刺る、衞の人、其の上に化して、新婚に淫し、其の舊室を棄て、夫婦離絶して國俗傷敗せしを述ぶ。又、小雅の篇名。周の幽王の時、天下の俗薄く、朋友の道絶えたるを刺る。
【谷王】海の異名。老子「江海所レ以能爲二百谷之王一」

【谷】キャク　㊥

笑ふ貌。嚆に通ず。

三畫

【征】コウ　㊥　㊦

おほたに（大壑）‖徑。

四畫

【徑】カ　㊥　㊦

徭一ヨウは谷の中の大いにうつろなる（大空）貌。又、谷の深き

貌。‖谿呀。

【弦】 カン　㊥谿に同じ

○ふかし（深）古、宏・閎に通ず。○―は谷の中のおほごゑ（大聲）の形容。法言、問道「非雷非霆、隱隱――」○鏗―は谷中のひびき。

【弦譎】カンケツ　掉く大いなる議論、弦は深し。漢書、司馬相如傳「崇論―議」史記に閎議に作る。‖吭譎・宏議。

五畫

【谾】 カン　㊥もと谿に作る

―闇カンは陵谷の形。

六畫

【谹】 コウ　㊦

おほたに（大壑）「呂梁―」‖谿。

七畫

【谽】 カン　㊦㊥

―呀カンは山谷の空しき貌。又、谷の大いに開けたる貌。谷の深き貌。司馬相如、上林賦「―呀豁閜」‖谽嚇・谽谺。

【谽谺】カンカ　谽呀に同じ。漢書、司馬相如傳、通谷谽呀―仰」字解參看。

【谽呀】カンカ　前條に同じ。張衡、思玄賦「紲二―之洞穴一」

八畫

【谾】 ㊀コウ ㊁ロウ　㊦㊥

㊀谷のうつろ（空）なる貌。吳儔、浮丘仙賦「―壑窲窿」㊁―は山谷の深き貌。又、深く通ずる貌。又、長く大いなる貌。漢書、司馬相如傳「巖巖深山之――兮」

【谾谾】コウコウ　山谷の深き貌。字解參看。

十畫

【谿】 クワツ　㊥

○開け通じたる谷（通谷）○開ける「―然」「―達」「開―」○ほがらか（敞）○むなし、うつろ（空）韓愈、進學解「頭童齒―」○深き貌。○とほる（流通）大學「而一旦―然貫通焉」○大いなる度量「―如」「―達」

【谿閜】クワツ　むなしく開く貌。史、司馬相如傳「谽呀――」注「―――、空虛也」‖谿閜。

【谿挙】ケンクワツ　けん、拇戰をいふ。六研齋筆記「倩飲以二手指一屈伸相搏、謂二之―一」

【谿悟】クワツ　からりとさとる。沈約詩「迷盆既已復、―非レ無レ漸」

【谿開】クワツ　ひろびろと開けたる貌。張衡、南都賦「或―而中絕」

【谿宿】シクワツ　宿直を免ず。谿は開放しゆるす義。宋の制、館閣の官人、一人づつ輪番にて宿直す、もし事故あれば宿せず、谿免して其の夜を虛うす、之を―といふ（夢溪續筆）

【谿如】クワツジョ　心のひろびろしたる貌。開大の貌。史、高祖紀「高祖寬レ人、仁而愛レ人、喜レ施意―也」‖谿刻。

【谿然】ゼンクワツ　○開けて大いなる貌。陶潛、桃花源記「行數十步、―開朗」○疏通トオルの貌。大學「一旦―貫通焉」

【谿蕩】タウクワツ　心廣くして拘束せられず。晉書、祖逖傳「性―――、不レ修二儀檢一」

【谿通】ツウクワツ　○四方がうち開ける。何晏、景福殿賦「開二閤殿之―――一」○度量廣し。唐書、高祖紀「倜儻―――」

【谿通大度】タイクワツツウ　心ひろく度量大いなり。陸賈、奏議「漢高―――、天下之士、歸者納用」

【谿免】クワンメン　ゆるす。谿宿を見よ。

【谿寧】クワツネイ　うち開けてひろし。雲笈七籤、百方手印、莫レ不二―――一」‖寧谿。

【谿】 ケイ　㊦谿とは別

勃―はそむきもとる（反戻）

莊、外物「室無空虛、則婦姑勃ー」勃は爭。

十二畫

【徹】 カン　寒

ー如は深き谷の貌。又開く貌。江賦「ー如地裂、榕若天開」

【澗】 澗（一四五頁四段）に同じ。

豆部

【豆】 ㊀トウ・ヅ　宥　㊁トウ　有

㊀まめ、莖は俗字、穀物の一、花は蝶に似て莢の實を結ぶ。又其の莢の中の種子の稱。‖菽。○たかつき、木製の食器、祭式の時に食物を盛る器「俎ー」○古の量目の名、十六黍を一ーと爲し、六ーを一銖と爲し、二十四銖を一兩と爲す。○鐙ーはそらまめ。○紅ーは木の名、相思樹の一名、其の實珊瑚に似たり。㊁斗に同じ。國○まめ。すべてまめの形せしもの。粒子。○皮膚に生ずるー狀の水腫。‖肉刺。○小さき形容「一盤」「一人形」○特に大豆の稱。

【豆芽】ガ　水にて黄豆又綠豆を發芽せしめて作る、肥えて白き者を佳と爲す、蔬菜中の美品とす。

【豆羹】トウカウ　○たかつきに盛りたるあつもの。又、少量のあつもの。孟、盡心「一簞食、一ーー」○まめのあつもの【急就篇】

【豆萁】トウキ　まめがら。曹植、七步詩「煮レ豆然二ーー一、豆在二釜中一泣」‖豆莖。

【豆花雨】トウクワウ　陰曆八月節ち豆花の開く頃にふる雨。荊楚歲時記「里俗以二八月雨一爲ーーー」

【豆花水】スヰクワ　陰曆七月に出る水。宋史、河渠志「七月蔽豆方秀、曰二之ーーー」

【豆蔻】トウコウ　草ーー（草本）肉ーー（木本）の二あり、藥用とす。‖荳蔻。

【豆豉】トウシ　みそ。齊民要術「香美乃勝二ーーー一」‖麪豉。

【豆汁】シフ　まめかす、肥料とす。

【豆人】トウジン　遠方より見たる人物の形容。荊浩、匡山水賦「丈山尺樹、寸馬ーーー」

【豆漿】トウシヤウ　大豆にて製す、豆腐の未だ固まらざる汁、滋養の效ありて牛乳と相當る。

【豆粥】トウシユク　まめがゆ。後漢書、馮異傳「天寒烈、衆皆飢餓、異上ニーーー」

【豆肉】トウニク　たかつきに盛れる肉。膳、坊記「觴酒ーー」

【豆飯】トウハン　まめめし。戰國策、民之所レ食、大抵ーー藜藋」

【豆糜】トウビ　まめがゆ。唐書、韋貫之傳「居レ貧嗷ニーー一、以自給」‖豆粥。

【豆腐】トウフ　大豆にて製したる一種の食品。本草集解「ーー之法、始二於漢淮南王劉安一」黎邵・淮南は其の異名。

【豆分】トウブン　豆をわる如く國を分裂する。飽照、蕪城賦「竟瓜割而ーー」

【豆舖】トウホ　菜盛をいるる器、鉢は鹽の類にして圓きもの。博古圖「簠簋ーー、同爲二一類一」

【豆剖】トウボウ　まめをわる如く、土地を細かに列つ。晉書、地理志、平王東遷、星離ーー、當塗駁雜、瓜分鼎立」

【豆剖瓜分】トウボウクワブン　豆や瓜をわる如く、國土を分裂す。前條參看。漢書、賈誼傳「高皇帝瓜二分天下一、以王二功臣一」‖瓜分瓜剖。

【豆滿江】トウマンカウ　間島江に同じ。長白山に發源し、鴨綠江の源と相對し、松花江の源に接近し、東流して吉林・朝鮮の界を爲して海に入る。‖土門江。

三畫

【豇】 カウ　江

四畫

【豈】 ㊀キ　㊁ガイ　尾　㊂

㊀あに、いづくんぞ（安・焉）なんぞ、反語の辭。史記「ー非士之願與」○其ーに同じ。億度の意あり。戰國、燕策「將軍ー有意乎」㊁かちどき、振旅の樂。古、凱（二一八頁二段）愷（六八五頁二段）に通ず。

【豈樂】ガイカク　勝軍の時の音樂。詩經「ーー飲レ酒」‖愷樂・凱樂。

【豈弟】ガイテイ　やはらぎたのしむ（樂易）の貌。詩、小雅「ーー君子、民之父母」‖凱弟・愷悌。

四畫

【豉】 シ　寘

豆と鹽とを和して造りし食品（圓赤）味噌の類「豆ー」「鹽ー」

【豉酒】シシュ　みそを浸したる酒。王羲之、豉酒帖「小服ニーー重佳」

六畫

【豇】カウ 江 一名はささげ。‖豇豆。

【登】トウ 蒸 登と豆は別

瓦にて作りしたかつき（瓦豆）詩、大雅「于豆于―」儀禮には鐙に作る、後世は銅を用ひて造る。

【豐】ホウ（一三七三頁三段）の古字。禮・醴等の字、此に从ふ、俗に豐（木貢三段）の略字として用ふるは非。

八畫

【豎】ジュ 虞 豎は俗字

○たつ（立）横のものがたてになる「―立」後漢書、靈帝紀「槐樹自拔倒―」○たて（縱）○なほし（直）○ただし（貞）○こどものめしつかひ、わらはのしもべ、こぞう（童僕）「僕―」「牧―」童僕の未だ冠せざる者。列、說符「鄰人亡羊、請楊子之―追之」○轉じて人をいやしめていふ語「―子」「豎―」「―儒」○たけひくし。○宮廷内の小臣、君の左右の小吏「内―」「閹―」左、僖二四「晉侯之―頭須守藏者也」

同訓異義 豎・建・立・植・樹・起の別は建（五九九頁三段）の條を見よ。

【豎褐】ジュカツ しもべのきるべき褐衣。荀、大略「衣則―不完」一說に豎は裋に通ず、破れたる短きもの。

【豎官】ジュクワン 内廷の小臣。後漢書、黃瓊傳「請梁冀ノ罪、―充ノ朝」‖閹官。

【豎子】ジュシ ○こども。左、成十「公夢疾爲二一一一一一」‖童子。○あいつ（彼奴）人をいやしめて呼ぶ語。史、孫子傳「遂威二一一之名」

【豎臣】ジュシン 小臣。後漢書、孔融傳「每レ有二一一一一一」‖豎吏。

【豎儒】ジュジュ 儒者をいやしめていふ。史、諸侯世家「一一幾敗二両公事」（両公は乃公）

【豎毛】ジュモウ おそけが立つ、驚き懼れて毛髪豎立する。唐書、李訓・鄭注・王涯傳贊「訓等、拌二禍怪一、支二大厦之顚一、天下爲寒心レ」

【豎吏】ジュリ こやくにん。‖小吏。

【豎理】ジュリ たてのすぢ。異苑「晉陶侃左手有レ紋、直達二中指上橫節一便止、有二相者師圭一謂レ侃曰、君左手中指有二一一一、若徹二于上一、位在二無極一」

【豎立】ジュリツ まっすぐにたつ。又、たてる。

【豌】ワン 寒 通音エン又、豎に作る

―豆は豆の一種。本草「―豆種出二西胡一、其苗柔弱宛宛、故得二豌名一、百穀中最先登レ者」

十畫

【豏】カン 豏 豆が半ば生ずる。

十一畫

【豐】ホウ ブ 東

○たかつきの豐かに滿てる者。○ゆたか、とよ。○ゆたかにす、ゆたかならしめる。○大いなり。○おほし（多）○穀物がよく熟す「一年」○しげる（茂）「一草」○さかんなり（盛大）○あつし（厚）○こゆ（肥）「一頰」○しきもの（席）○易の卦の名。離下震上。○漢代に置きし縣の名、沛郡に屬す、今の江蘇省―縣。○―隆は雷師ライシ一說に雲師。

解字 豆の豐滿なるに象る、豆に从ふ象形、二の丰に从ふ、丰は艸をあらはす。豐（禮の古字）とは別。

同訓異義 豐・饒・裕・寬・優・腴○豐は多大盛足の義、財の多く、穀の大なるに常用ふ、豐厚・豐富・豐盛と熟す。○饒は物多くして滿ち足る義、富饒・豐饒・財用饒と用ふ。○裕は衣服のゆったりとひろきより、轉じて物のゆったりと、迫らぬ義に用ふ、寬と緩との二義を兼ぬ。書經「自用則小、好問則裕」○寬は窄の反、くつろぎゆるやかなる義、家居や、器物や、人の氣象や、ゆったりしたるに用ふ、ゆるやかとも訓む。○優は劣の反、力の優りて、餘りある義より、何事にても、つきらず、苦にならざる義。論語「仕而優則學」○腴は大なり、安舒也、裕に近し。大學「心廣體腴」

【豐衣】ホウイ 豐厚なる衣服。李翔賦「躬不レ由而館食兮、妻不レ織而―」

【豐偉】ホウイ からだが肥えて大いなり。晉書、宗室傳「體貌―、自稱二直八百斤一」‖魁梧

【豐頤】ホウイ 肉のたっぷりと肥えたるおとがひ。王褒、責二匈奴一文「賜乃附以二―一、裹以二鏡眉一」

【豐腴】ホウユ ゆたかにしてありあまる。唐書、杜佑傳「開元天寶中、四方無レ虞、編戸九百餘萬、倉廩―」

【豐蔚】ホウイ ○ゆたかにみつ。揚雄賦「―鷸所レ棲兮、名鴈鵠所レ巢」‖豐滿。○肉づきがふっくりと肥え

る。宋玉、神女賦「貌——以莊姝兮」【豐衍】ゆたかに餘る。後漢書、應劭傳「臣累世受ノ恩、榮祚——」【豐豔】こえてあでやか、美人の形容。舊唐書、楊貴妃傳「資質——、善ニ歌舞一通ニ音律一」‖豐艷・豐麗。【豐盛】大いなるいへ。白居易詩「——中極比、高牆外遮ノ環」‖豐殿・豐廈。【豐恩】大いなるめぐみ。上官儀文「襲ニ簡曲流、——傍洽」【豐給】周の酒都。史、周紀貨「成王使ニ召公ト一レ居、居ニ九鼎一焉、而周復ニ都——一」【豐亨豫大】豐も豫も易の卦名、豐は盛、豫は樂、盛んなれば亨り、樂なれば大いなり、故に天下太平の義とす。易、豐卦「豐亨、王假ノ之、勿ノ憂宜ニ日中一」又、豫卦、彖傳「聖人以ノ順動、則刑罰清而民服、豫之時義大矣哉」とあるに本づく。宋史「蔡京倡ニ邪說一以爲ニ——之運一事以ニ紊ニ修一勳」上、劉ニ綝土木之功一」【豐下之姿】あごが肥えふとる。富貴の相。左、文元「穀也、豐下、必有ノ後ニ於晉一」宋史、文天祥傳「天祥偉ノ人豐下」【豐肌】こえふとりたるはだへ。司馬相如、美人賦「皓體呈ノ露、弱骨——」【豐給】ゆたかにして十分に足る。後漢書、王景傳「墾闢倍多、墳内——」【豐筋多力】文字の筋骨がゆたかにして力多し。宣和書譜「三國之初、字學缺然不ノ講、蘇於ノ是爲ニ一家法一而議者謂ニ其——、有ニ雲遊雨驟之勢一」【豐凶】穀物の出來の良きと惡しきと、豐作と凶作と。‖豐敗。【豐華】ゆたかにして、うつくし。北史、景業敬傳「善自奉養、食膳——、必致ニ他方遠味一」【豐藝】すぐれたるわざ。潘岳、楊荊州誄「多才——、强記洽聞」【豐潔】ゆたかにして、きよらか。左傳「晉享ノ祀——」【豐賴】ふとりたるほほ。韓愈、送ニ李願一序「曲眉——、清揚而便體、秀外而慧中」【豐妍】ゆたかにしてうるはし、書法の秀潤なる稱。宣和書譜「林藻作ニ行書一、其編約——處、得ニ智永筆法一爲ノ多」【豐儉】ゆたかなると、つづましやかなると。晁沖之詩「自可ノ隨ニ——一、誰能問ニ有無一」【豐歉】豐年と凶年と。宋史、食貨志「坐觀ニ六路——一」‖豐凶。【豐狐】大いなるきつね。莊、山木「——文豹、棲ニ于山林一、伏ニ于巖穴一、靜也、夜行晝居、戒也」【豐功】大いなるいさを。班固、王命論「——厚利、積累之業」‖偉績・偉勳。【豐厚】ゆたかにあつし。國語「子孫——、令聞不ノ忘」【豐殺】十分ゆたかなると省略せるとの。晉書、禮志、禮典執度、——隨ノ時」‖豐約・豐儉・損益。【豐澹】ゆたかなるとしと。白居易詩「清晨承ニ詔命一、——閑ニ田園一」‖豐年・樂歲。【豐草】しげりたるくさ。詩、小雅「漉湜鼓ニ斯、在ニ彼——一」‖蕘草。【豐韓】肉づきのよきひたひ。‖豐上。【豐作】豐登に同じ。【豐熾】ゆたかにさかんなり。後漢書、郭伋傳「爵祿益用——」‖豐盛。【豐蓋】ゆたかなる滋味ある食物。晉書、樂志「——萬俎、旨酒千鍾」【豐愁】ゆたかにみのる。杜光庭、麻姑洞記「洞門開、即豐年物最、其後果——」‖豐熟・豐登。【豐上】肉づきのよきひたひ。淮南子「涙注而鳶肩、——而殺下」‖豐類。【豐上銳下】額がふっくりと肥え、ほほのあたりがやせこけてゐる。遼史、太祖紀「身長九尺、——、目光射ニ人一」‖豐上而殺下【淮南子】【豐昌】ゆたかにさかんなり。漢書、天文志「五星不ノ失ノ行、則年穀——」【豐腹】こえたる土地。晉書、阮种傳「夫廉恥之於ノ政、譬ニ樹藝之有ニ——一、良歲之有ニ膏澤一」【豐穰】穀物がゆたかにみのる。漢書、食貨志「歲設——、石至ニ五錢一」‖豐熟。【豐城劍氣】豫章の豐城の地に埋れ居たる龍泉・太阿の二名劍が光を放ちて天に徹せしといふ故事【晉書、張華傳】豫章記「斗牛間常有ニ紫氣一、張華聞ニ雷煥妙ニ曉緯一、問ノ之、煥曰、寶劍精氣也、在ニ豫章豐城一」【豐爵】よきくらゐ。後漢書、楊震傳「各受ニ——一不次之寵」【豐熟】ゆたかにみのる。韋應物詩「唯當識ニ——一、閭里一歡顏」‖豐稔・豐穫。【豐潤】〇ゆたかにうるほふ。李白、任城縣壁記「城池爽塏、邑屋——」〇甘き液などの多き狀【鍾會、蒲桃賦】【豐殖】ゆたかにふえる。後漢書、王符傳「殺之所ニ以——一者、以ノ有ニ民功一也」【豐悴】さかんなると、やつれると。盛衰の義。韓愈、送ニ石洪一序「——有ノ時、一去一來而不ノ可ノ留者耶」【豐洋】前條に同じ。【豐盛】ゆたかに盛んなり。宋史、藤岡正傳「年穀方登、庶物——一」‖

豐昌。

【豐饒】ゆたかに多し。蔡邕、黃鉞銘「儲廩ー―、室家不ㇾ懸」

【豐席】ゆむしろ。書經「東序西嚮、敷重ー―」傳「豐、茵也」＝茵席。

【豐茨】ゆたかにして餘りあり。歐陽修詩「官榮日清近、廩給亦ー―」

【豐贍】財物がゆたかにたる。後漢書、第五倫傳「悉倚二其ー―一者一遣二還之一」＝豐富。

【豐泰】ゆたか。南史、謝弘微傳「家素貧儉、而所ㇾ繼ー―」

【豐儉】食物のゆたかなると、乏しきと。魏志、崔琰傳「魏定數州、頻遭二水雹一、穀減曰、豈天德不ㇾ均、致二地偏同一有二豐ー―一」

【豐堂】大いなるい（。洛陽伽藍記「ー―掘起、高門洞開」

【豐澤】ゆたかなるうるほひ。王粲、公讌詩「曼天降二ー―一、百卉挺二葳蕤一」

【豐注】さかんに雨ふる。陸機詩「ー―溢二修瀆一、流潦浸二階除一」＝大雨。

【豐膴】てあつし。膴は脩なり、厚なり。晉書、羊曼傳「羊曼與二羊固一同時拜ㇾ官、相飾供饌（中略）而固待ㇾ客尤精美、論者以固之ー―、乃不ㇾ如二曼之眞率一」＝豐厚・精膴。

【豐登】ゆたかにみのる。舊唐書、憲宗紀「南畝勸二播植之功一、西成失二ー―之望一」＝豐稔・豐年。

【豐肉】こえふとりたるにく。楚辭「ー―微骨、體便娟只」周禮「其民ー―而庳」＝豐肌。

【豐寧】ゆたかにしてやすし。道連指歸論「國亂既夷、萬物ー―」＝豐安。

【豐年】ゆたかなるとし。詩、周頌「ー―多ㇾ黍多ㇾ稌」＝豐歲。

【豐浦】〇多きをいふ。宋玉賦「猗猗ー―」〇地名、江蘇省、徐州府に屬す、漢の高祖の出生地、天子の位に卽きて、其の民を復（賦役をゆるす）す、後人因りて帝王の故鄉をー―と爲す。

【豐度】ゆたかにして厚し。方岳詩「文有二氣骨一豐而隆」

【豐美】ゆたかにしてうつくし。後漢書、西羌傳「水草ー―、土宜二產牧一」

【豐碑】〇棺を墓穴に下す時に綍ナハを繞らす木の柱。禮記「公室視ニーー一」〇功德を記する大いなる石碑。

【豐宮】〇財物がゆたかに富む。晉書、和嶠傳「家產ー―、擬二於王者一、然性至吝」〇すべて物がゆたかに足る。＝豐足。

【豐腴】こえふとりたるはだへ。王粲、七釋「ー―曼肌、弱骨纖形」＝豐肌。

【豐福】ゆたかなるさいはひ。國語「受二天之ー―一、厚二民之勳力一」

【豐豐】多き貌。宋玉、九辯「歷二草木之ー―一」

【豐本】韭の異名。其の根本の茂るが故。儀禮「凡祭二宗廟一之禮、韭曰二ー―一」

【豐潤】〇物がゆたかに十分ある。戰國策「毛羽不二ー―一者、不ㇾ可二以高飛一」〇肉がふっくりとこえる。

【豐茂】ゆたかにしげる。漢書、王莽傳「百穀ー―、蔬草繁殖、元元驩喜」

【豐約】〇ゆたかなると、つづまやかなるとの申鑒「ー―勞佚、各有二其制一」＝豐儉・豐殺。〇貧富又、盛衰の義。韓愈、與二衡中行一書「比二之前時一、ー―百倍」

【豐腴】地が肥えて作物がよく出來る。＝肥沃。

【豐裕】ゆたかに十分なり。＝饒裕。

【豐褥】ゆたかに盛んなる貌。嵇康賦「ー―披雜」

【豐餘】ゆたかにあまる。唐書、張文瑾傳「同列以二堂饌一ー一欲二少損一」＝豐洽。

【豐樂】物ゆたかに民たのしむ。蜀志、先主傳「蜀中殿盛ー―、先主置ㇾ酒、大饗二士卒一」

【豐樂亭】安徽省滁縣の西南瑯琊山谷泉上に在り、宋歐陽修建て、自ら記を爲ㇾり、蘇軾書して石に刻す。

二十畫

【豔豆】豔（次條）に同じ。

廿一畫

【豔】エン　豔又、艷に作る

○かほよし、あでやか、うるはし、うつくし、つややか、容色豔麗にして美好なり。○轉じて文詞の美をいふ。穀梁傳序「左氏ー―而富」○ほしいまま（縱）○いろ、つや（光彩）○むさぼる、うらやむ（欲羨）「欲ー―」熟語は艷（一六一二頁四段）を見よ。

豕部

【豕】シ 紙 ぶた、ゐのこ(猪)家畜の一種、性卑穢を好み、體肥え、孕むこと四ヶ月にして生まる。俗に之を豬といふ。ぶたの類の總稱「封—」曲禮「—曰剛鬣」【豕喙】シカイ ゐのこの如き長く鋭き口ばし。轉じて、人の貪慾なる相。晉語「虎目而—」【豕肩】ケン ゐのこのあぶら。後漢書、東夷傳「挹婁國、冬以—膏ル身、厚數分、以禦二風寒一」‖洋解「周體、庖人、注」【豕交獸畜】シカウのゐの如くに交り、獸の如くにやしなふ。人を獸類と同じ取扱にする。孟、盡心「食而不レ愛、豕二交之一也、愛而不レ敬、獸二畜之一也」【豕視】シ 甚だしく反りかへりて視る。戰國策「太子狙不仁、過レ—」【豕心】シン ぶたの如き心。貪慾なる心に喩ふ。左、昭二八「貪有二—一、貪淋無レ饜」【豕腊】シセキ ぶたの乾肉。禮記、備二其鼎俎一、設二其—一」【豕突】シトツ ゐの如くに突きかかる。豕は性觸れ突くことを好むが故。後漢書、劉陶傳「今四海逆類、已攻二河東一、恐盜轉、更—二上京一」【豕牢】シラウ ぶたごや。國語「大任少浹二子—一而生二文王一」

【豚】トン 元 阮 ㊀ぶた(小豕)曲禮「凡祭宗廟之禮、—曰腯肥」肫に通ず。○鮒と同じ、河—はふぐ。○墩に通ず、土—はどへう(土俵)魏志、蔣濟傳「豫作二土—一遏二絶湖水一」㊁ひきずる、足を擧けずに踵を曳きずり行く。禮、玉藻「圈—行不レ擧レ足」【豚魚之信】トンギョノシン ぶたと魚とは物の感動せしめ難きもの、而るに其の信能く之を感孚するは信の道の至れる義。信及豚魚二(三八頁二段)を見よ。【豚犬】トンケン ○ゐのこ、いぬと。蔡語「士有二—一之質一」○己の子を謙していふ。吳志、吳主傳、注「明然嘆曰、生レ子當レ如二孫仲謀一、劉景升兒子、若二—一耳」景升、名は表、兒子は琮、表死して琮、曹操に降る。‖豚兒。【豚肩不レ掩レ豆】トンケンフエンハズ 齊の婁敬、面僧にして祭に供へる豚の肩肉が微少にして豆を掩はざりしといふ故事の禮器「婁平仲託二其先人一——、猶衣濯冠以朝、君子以爲レ隘矣」【豚欄雞栖】トンランケイセイ ぶたごやと、雞の棲ラクと。王襲、社日詩「湖山下稻粱肥、——半掩レ扉」【豚兒】トンジ ぶたの如きおろかなる子。己の兒の謙稱。豚犬參看。【豚蹄盥酒】トンテイカンシュ 少しばかりの酒さかな。史、滑稽傳「見二道傍有二饑レ田者一、操二一豚蹄酒一盂而祝曰、隆窪滿篝、汙邪滿車、五穀蕃熟、穰穰滿レ家、臣見二其所レ持者狹一而所レ欲者奢一」【豚蹏】トンテイ ぶたと、こうしと。轉じて豚兒と同義に用ふ。水經、注「程氏有レ言、曹氏丹生二此一—一」【豚尾漢】トンビカン 國支那人の男子をあざけりていふ語。清時代、男子の辮髪が豚の尾に似たる故。

【豘】豚(前條)に同じ、通じて豘・豚に作る。

【豝】ハ 麻 又、豝に作る ○めすのゐのこ(牝豕)一說に二歲の豕。詩、召南「彙發五—」○おほいなるゐのこ(大豬)

【象】シャウ ザウ 養 ○きさ、ざう、熱帶地方に産する長鼻牙を有する大獸、三年にして一乳ス、○ざうげ、ざうの牙「一笏」「一箸」左、襄二四「一有レ齒以焚二其身一」賄也」○かたどる、にせる(似)韓愈、送高閑上人序「則其於二書得一無レ之然乎」○のり、おきて、のっとる(法)書、舜典「一以二典刑一」○かた。○かたち「一形」○うらかた(占兆)「易—」○きざし「星—」「氣—」○あや(文章)○おもむき(趣勢)すがた(容姿)○おもふ。像に通ず(想像)人、生—を見ること罕なり、死—の骨を得、其の圖を按じて生—を想ふに本づく。○—笏は酒器の一種。○つうべん(通辨)の官「—胥」もとは南方の話につきていふ。禮、王制「南方曰—」○祭に假面を蒙りて行ふ一種の遊戲。○周の武王の時の樂曲の名。詩、周頌、序

「維清奏ニ―舞一也」○舜の弟の名。舜を殺さんとして後、其の感に化せらる。○一説は佛教の別名（形像を作りて人を教ふるが故）○四―は水中の怪物。

【象棋】シャウキ　将棊に同じ。もと、象牙にて棋を飾りしが故。説苑「雍門周謂二孟嘗君一足下燕則閼ニ―一、赤戦闕之事乎」

【象戯】シャウギ　前條に同じ。藝文類聚「周武帝造ニ―一」

【象魏】シャウギ　宮城の門。象は法象即ち法律、魏は高し。古、法律を高き城門に掲示したる故の稱「周禮、天官、冢宰」＝象闕。

【象外】シャウガイ　心が形象の外に超然として常法に拘束せられざる義。晉斷「西蜀王宰畫二山水樹石一、出ニ於一―一」孫逖詩「畑花ニ―一闕」

【象刑】シャウケイ　國法。天道に象りて作るが故。一説に古の刑罰はただ罪人の衣服を異にして其の形象により恥辱を與へたるが故にいふ「荀、正論」

【象形】シャウケイ　○さまの形。○形をかたどる。史、樂書「凡音由ニ於人心一、天之與レ人、有ニ以相通一、如ニ景之一レ、響之應レ聲」○六書の一、日、月、山、川などの如き形をかたどりたる文字。周禮、地官、保氏、注「六書、一―、會意、轉注、處事、假借、諧聲也」

【象形文字】シャウケイモジ　物の形にかたどりて作りたる文字。六書（一九九頁三段）を見よ。

【象教】シャウケウ　佛教の異稱。木を刻み佛像を作りて拜するが故。王巾、頭陀寺碑「正法既沒、―一陵夷」

【象闕】シャウケツ　象魏に同じ。闕は宮城の高き門、即ち城門。許渾詩「雲擬―一陰」

【象山學派】シャウザンガクハ　宋の陸九淵の開きし學派（象山は江西省に在る山名、九淵講學の地、故に世に象山先生と稱す）陽明學派の本づくところ。

【象事】シャウジ　六書の一「漢書、藝文志」＝指事「說文」

【象人】シャウジン　○てく、偶人の韓非子「磐石不レ生レ巢、―一不レ可レ置レ激也」○人に似せる「孟子」

【象胥】シャウショ　譯官名の稱、周禮、秋官「―一掌二蠻閩夷貊、戎狄之國使一、掌ニ傳ニ王之言一而譯說上焉」

【象嵌】ゾウガン　○漢字の構造をときあかす規則、六書の一「漢書、藝文志」＝形聲。○同時に一人にて各種の聲のまねをする曰技。＝隔壁戲。

【象徴主義】シャウチョウシュギ　文藝上にて言語文字は思想の代表にあらずして直接に思想其の者なりとして之を音樂的に排列し、讀者の感情を動かす主義。

【象比】シャウヒ　かたどりくらべる。鬼谷子「其有ニ―一、以親ニ其次一」

【象舞】シャウブ　文武二王の樂、童子の舞ふ所ろ「史、樂書」詩、周頌序、注「文王時、有ニ擊刺之法一、武王作レ樂、象而爲レ舞、號ニ其樂一曰ニ―一」

【象譯】シャウヤク　通辯。通譯は北國語の通辯。周禮、王制「東方曰レ寄、南方曰レ象、西方曰ニ狄鞮一、北方曰レ譯」

【象眼】ザウガン　○銅鐵などの面に、模様を刻み込みて、中に金銀などをはめたるもの。○古、布又は紙などに施したる細かき泥畫。○鉛版中の誤字等を切り抜きて正字をはめこむこと。

【象牌】ザウハイ　象牙の手版。宋史、度宗紀「陳宜中、鄧鼎奇請ニ誅ニ―一一、劇談錄「凡有ニ―一竹笏一、以レ手捻レ之」

【象管】ザウカン　筆をいふ。羅隱詩「蟾蜍―一夜深時、晉賦陳宮第一詩」

【象牙】ザウゲ　ざうのきば。後漢書、西南夷傳「獻ニ―一水牛封牛」

【象牙扇】ザウゲセン　ざうげにて作りしうちは。鄭中記「後趙石季龍、作ニ――一」

【象限儀】ザウゲンギ　物體の高度をはかる器械。

【象笏】ザウシャク　象牙にて作りたるしゃく。禮、玉藻「史進ニ―一、書思ニ對命一」

【象眉】ザウビ　象牙に同じ。左傳「象有レ齒、以焚ニ其身一、賄也」入財多ければ禍を取るに喩ふ。

【象簡】シャウカン　象牙のくし。禮、玉藻「笏畫用ニ―一」晉は乾燥。

【象牀】ザウショウ　象牙にて飾りし寢牀「戰國、齊策」舊唐書、訶陵國傳、悉用ニ象牙一爲レ牀」

【象陵】ザウリョウ　象に騎する軍隊。舊唐書、眞臘國傳「有ニ戰象五千頭一、尤好者飼以ニ飯肉一、與ニ隣國一戰、則ニ―一在レ前、於ニ背上一、以レ木作レ樓、上有ニ四人一、皆持ニ弓箭一」

【象箸】ザウチョ　象牙のかずとり。魏文帝賦「―一列植、一雙雙鮮」

【象筯】ザウチョ　象牙のはし「史、宋微子世家」

【象奴】ザウド　象を飼ふ人。桂海虞衡志「交趾出レ象、牧レ象者、謂ニ之一―一、又名ニ象公一」

【象皮】ザウヒ　ざうのかは。桂海虞衡志「―一可ニ以爲ニ甲一」

【象】六畫　豕部

象（前條）の俗字。

【豥】ガイ　豕部

○なのる（猴）○老いたるるのこ、一説に三毛の豕。通じて艾に作る。

【豢】クヮン ケン 諫

○やしなふ(養)穀物にて家畜を飼ふ。○穀物にて飼ふ家畜。犬豕など、草食の家畜卽ち牛馬などを芻といふの對「芻ー」○利を以て人を誘ふ。左、哀十一「子胥懼曰、是ー吳也夫」

【豢園】クヮンエン 牛馬を養ふ所。五代史、李守貞傳「行營所ー至、居民ーー一空、至二於草木皆盡一」

【豢擾】クヮンジョウ やしなひならす。豢龍劉擾。宋史、祭五龍樂章「欲ニーー一兮、無二庸與一劉」註父と劉累と、竝に古、龍を畜ひし人。

【豢養】クヮンヤウ やしなふ。

【豢龍】クヮンリョウ 古の官名、因りて氏とす。舜の時、董父といふ者あり、能く龍を畜ふ、帝其の氏を命じてーーといふ「左、昭二九」

【豜】ケン 先

おほゐのこ(大豕)又、三歳のゐのこ。詩、豳風「獻ー于公」通じて肩に作る。

【豝】コン 阮 又豻に作る

○かむ(齧)○齒が深くくひいる。○ねんごろ、まこと、懇に通ず、ーーは款誠の意。漢書、劉向傳「ーー數奸死亡之誅」ー懇懇。

七畫

【豪】カウ・コウ 豪 通音ガウ

○やまあらし、豚に似たる野獸、背上に角質のあらき毛あり。○すぐれる(俊)ひいでる(英)智識又は勢力などが人にすぐれる。又其の人「ー傑」「人ー」「英ー」「文ー」「賢ー」○つよし(強)たけし(健)「ー勇」「ー健」○おとこだて(俠)「ー俠」○はしいまま(縱恣)又、以上の者。○かしら(帥長)「邑ー」○おごる。又、其の者。○資産多し。又、其の者「ー農」「富ー」○すこし、わづか(細微)幸に通ず「ー釐」

【豪友】ガウイウ すぐれたるとも。漢書、鮑永傳「以二賤貧一自絕二ーー一耳」

【豪右】ガウイウ 豪強に同じ。右は右族。後漢書、羊陟傳「帝拜二陟河南尹一、禁制ーー、京師憚之」左思詩「ーー何足レ陳」

【豪遊】ガウイウ さかんにおごりてあそぶ。又、其の遊。

【豪飲】ガウイン さかんに酒をのむ。金史、隱逸傳「劇談ーー、飽若レ無レ人」

【豪雨】ガウウ はげしきあめ。楊維楨詩「雄風ーー將レ吞去、剩水殘山送二客愁一」ー猛雨。

【豪家】ガウカ 富みて勢力あるいへ。史、呂不韋傳「子楚夫人、趙ーー女也」ー豪族・豪門。

【豪芥】ガウカイ すこし、わづか。豪は毫。南史、沈攸之傳「不レ犯二ーー一」ー細微・毫芒・毫釐。

【豪客】ガウカク ○盜賊。李渉の夜、皖口の舟中にて盜賊に逢ひし時の詩「暮雨蕭蕭江上村、綠林ーー夜知聞、他時不レ用逃二姓名一、世上如今半是君」に出づ「話腴」○だいじん。豪遊する人。

【豪氣】ガウキ 才氣すぐれて人に屈せず。世說、言語「陳元龍淮海之士、ーー不レ除」

【豪強】ガウキャウ 豪猾に同じ。漢書「誅二鉏ーーニ」

【豪強】ガウキャウ 勢力がすぐれてつよし。漢書、程方進傳「爲二京兆尹一、搏二擊ーー一、京師畏レ之」ー豪猾。

【豪舉】ガウキョ さかんなるをとこだてのしわざ、豪俠なる擧動。史、信陵君傳「平原君之遊、徒ーー耳」

【豪句】ガウク 氣象の大いなる詩句。蘇軾詩「願君登ーー一、嘲笑破二天慳一」

【豪傑】ガウケツ さかんにおごりてはでやか。許渾詩「英雄一去ーー盡、惟有旦青山似二落中一」ー豪者。

【豪將】ガウシャウ つよくしてずるしの者。魏志、趙儼傳「縣多ーー一、無レ所二畏忌一」

【豪勁】ガウケイ たけくつよし。山谷題跋「ーー清潤、眞天下之奇書也」

【豪傑】ガウケツ ○才德衆にすぐれたる人物。孟、盡心「若夫ーー之士、雖レ無二文王一猶興」ー豪雄。○武勇の衆にすぐれたる人。史、淮陰侯傳「後雄ーー、建レ號一呼、天下之士、雲合響第」

【豪俠】ガウケフ すぐれたるをとこだて。宋史、楊美傳「倜儻任レ氣、結二豪ーー一」

【豪健】ガウケン つよくしてたけし。黃庭堅詩「歸來ーー臨二胡牀一」ー豪勁・勁健。

【豪語】ガウゴ えらきことをいふ。ー大言・壯語。

【豪壯】ガウサウ すぐれていさましい。謝靈運詩「前年膽レ鎭東海上、白浪如レ山客ニーー一」

【豪爽】ガウサウ 志氣がつよくしてさはやか。晉書、桓溫傳「ーー有二風槩一、眞貌遠傳」

【豪士】ガウシ 才力のすぐれたる士、豪傑の士。史、游俠傳「魯人皆以儒教、而朱家用レ俠聞、所二藏活一ーー以レ百數、其餘廣人不レ可二勝言一」ー豪傑・俠士。

【豪侈】ガウシ 甚だしくおごる。大いなる

おごり。洛陽伽藍記「高陽王雍、貨殖二人臣、資金二山海一、自二漢書一以來、諸王――、未二之有一也」晉書、夏侯湛傳「性頗――、侯服玉食、窮レ滋極レ珍」‖豪奢・豪汰。

【豪恣】ガウシ　勢力つよくしてほしいまま。宋書「戴法興、專權――」‖豪蕩。

【豪習】ガウシフ　豪豪のならはし。韓愈、曹成王碑「刮二磨――一」

【豪臣】ガウシン　権勢のつよきけらい。史記「賂二其――一、以亂二其謀一」

【豪奢】ガウシヤ　贅だしきおごり。張正見詩「駒持自娛樂、未三是關二――一」‖豪汰・豪華。

【豪俊】ガウシュン　才徳のすぐれたる人（賈誼、過秦論）‖豪傑・英俊・豪雄。

【豪勝】ガウショウ　すぐれぬきんでる。又其の人。何景明詩「自レ昔慕二――一、重レ義遺輕レ身」

【豪姓】ガウセイ　其の地方にすぐれて名高きいへがら。劉氏墓銘「觀津世族、平陵――」‖豪族・著姓・豪宗。

【豪制】ガウセイ　勢を以ておさへつける。唐書、元載傳「二―鄉曲一、聚二無賴少年一、以伺レ變」‖劫制・猛制・威制。

【豪族】ガウゾク　すぐれて勢力ある家がら（晉武、魏元傳）‖豪姓・豪家・著姓。

【豪恣】ガウタ　贅だしくおごる。恣一に汰に作る。後漢書、南蠻傳「人俗――」‖豪侈・豪華・豪奢。

【豪宕】ガウタウ　志氣が大いにほしいまま。金史、姬汝作傳「性――不レ拘二細行一」‖豪放。

【豪蕩】ガウタウ　〇えらくしてほしいまま。任俠にして行檢なし。唐書、杜伏威傳「少――、不レ治二生貨一」‖豪恣・豪放。〇思想があらくおほまか（文章軌範、侯字集序）

【豪黨】ガウタウ　黨派を結びて大勢力をふるふもの。漢書、食貨志「衆井――之徒、以武二斷於鄉曲一」

【豪奪】ガウダツ　むりに人の物を奪ひ取る。漢書、食貨志「大賈富家、不レ得レ――二―吾民一」‖強奪。

【豪誕】ガウタン　心の大いにしてほしいままなる義。任士林、公子舜歌「人生――有レ如レ此、況有二開レ筵柳公子一」

【豪猪】ガウチ　やまあらし、野猪（ヰノシシ）の一種、刺の如き毛あり。

【豪奴】ガウド　つよくわがままなるめしつかひ。蘇洵、高帝論「家有二主母一、――悍婦、敢不レ與二嫡主一抗レ」‖悍僕。

【豪農】ガウノウ　地方にてすぐれて富み且つ勢力ある農家。

【豪芒】ガウバウ　豪芥に同じ。芒は毛のさき。後漢書「肉没――」‖毫釐。

【豪放】ガウハウ　豪宕に同じ、放は肆。唐書、李勉傳「資――、不レ能レ治二細行一」

【豪武】ガウブ　すぐれてたけし。魏賈、射戎行「勢レ弓走レ馬出二東門一、傾レ城來看者二――一」‖豪勇。

【豪富】ガウフ　大金持（オホガネモチ）。史、始皇紀「徙二天下一――於咸陽一」‖富豪・巨富。

【豪邁】ガウマイ　すぐれてえらし。宋史、李綱傳「委棄勁特、氣節――」‖英邁・俊邁。

【豪民】ガウミン　富みて勢力ある人民。

【豪雄】ガウユウ　すぐれてえらし。李白詩「所レ交盡――」‖英雄。

【豪吏】ガウリ　すぐれたる勢力ある官吏。漢書、曹參傳「參參時爲二獄掾一、而豁何爲二主吏一、居レ縣爲二――一矣」

【豪籠】ガウロウ　豪芥に同じ。漢書、律曆志「度二長短一者不レ失二――一」‖籠に逃ず。

【豪力】ガウリキ　すぐれたる勢力。又、其の者。唐書、劉弘下戶、爲二――所レ籍」

【豪橫】ガウワウ　あらくほしいままにして人をしのぐ。左傳、疏「――者、惡二陵邑一」‖強橫。

【豨】キ　尾　微

〇ゐのこ（豕）〇おほゐのこ（大豕）〇封―は神獸。說文「古有封―修蛇之害」

【豨膏】キカウ　ゐのこのあぶら。史、田完世家「――煉輔、所二以爲一滑也」‖豬膏。

【豨突】キトツ　猪の如くたけりて進みつく。‖豬突。

【豨勇】キユウ　ゐの如くにいさむ。漢書、食貨志「王莽大募二天下囚徒人奴一、名曰二豨突一―一」

【豨苓】キレイ　豬苓（チョレイ）の異名、其の塊黒くして豬矢（チシ）に似たり、藥用とし、池澤を主る。韓愈、進學解「譬醫師以二昌陽一引レ年、欲レ進二其――一也」

九　畫

【豭】カ　ケ　麻

〇をゐのこ（牡豕）‖豭。〇寄―は夫が他人の妻に淫する義。史、始皇紀「夫爲二寄―一」

【豬】チョ　魚　猪は俗字

〇ゐ、ゐのこ、ぶた（或豚）〇家の子。〇野―はゐのしし。〇山―は豪豬（ヤマアラシ）。〇みづたまり、水の停（トド）る所。書、禹貢「大野既―」‖瀦。

【豬水】チョスイ　たまりみづ。書、禹貢、疏「往前漫溢、今得二――一爲レ宅」‖瀦水。

【豬突豨勇】チョトツキユウ　ゐのしし武者。漢書、食貨志「匈奴侵寇甚、募大募二天下囚徒人奴一、名曰二――一」

【豬肉】チニク　ぶたの肉。孟子の母、――を買ひて孟子に食はしめし故事、列女傳、孟軻の母の條に出づ。‖豚肉。

【豬苓】チレイ　ゐのくそぐさ、藥用とす。本草「――引レ水之功多矣、久服必

揭二晉紀一晉二人目一二猪奢・豬矢。

【豫】㊀ヨ ㊁シャ セ 遇

㊀たのしむ（樂）「逸一」孟、梁惠王「我王不一」○やすんず（安）○あそぶ（遊）孟、梁惠王「二遊一一爲二諸侯度一」○よろこぶ（喜悅）○おこたる（怠）○あらかじめ（預）かねて。○あらかじめ備へる「一定」「一備」○いとふ（厭）○くみす、あづかる「一盟」與に通ず。○象の大いなる者。○易の卦の名、坤下震上。○姓。○古の九州の一、今の河南省と、山東省の曹州、湖北省の襄陽・鄖陽は皆其の地。轉じて河南省の異稱。書、禹貢「荊河惟一州」爾雅「河南曰二豫州一」○猶一ユウは疑ひてためらふ、ぐづぐづする。＝猶與（曲禮）㊁まなびや（州學）

同訓異字 シュウ預・預・逆○豫は事に先だちて早く謀るなりと註す、まへかたからと譯す。中庸「凡事豫則立」○預は豫に同じ。○逆は事に先だち預めをむかへて度かるなり。出師表「非二先帝之明所二能逆睹一也」○コウ豫・寧・悦・欣・歓・怡・愉等の別は寧（三三九頁四段）の條を見よ。

【豫期】キ かねてより心にあてにする。

【豫見】ケン 事の未だあらはれざる先に、明かに知る。後漢書、袁安傳「功有レ難レ圖、不レ可二一一一一、事有レ易レ斷、較然不レ疑」＝先見。

【豫言】ゲン 未來の事をいふ。又、其の言。後漢書、申屠剛傳「夫未レ至一一、固常爲レ虛」

【豫言家】カゲンカ 豫め事前に於て吉凶禍福などをトしいふ者。術士の類。

【豫後】ヨゴ 醫者が病人を診察してあらかじめ斷定する今後の病のなりゆき。

【豫告】ヨコク さきぶれ、あらかじめ告知する。

【豫想】ヨソウ 事の起る前に、あらかじめ推しはかる。

【豫參】ヨサン 其の事にあづかる。晉書、譙秀傳「一一謀略一」＝參與・參預。

【豫算】ヨサン ○あらかじめ見つもりを立てる。耶律楚材詩「雄才能一一大略固難レ量」○國家又は公共團體が次の一會計年度の收入と支出とを豫め計算せしもの。

【豫察】ヨサツ あらかじめならふ。

【豫審】ヨシン 犯罪のしたしらべ。

【豫章】ヨショウ 二木の名、くすのきの類。豫は杭木、章は樟木。司馬相如、子虛賦、注「一一二木、生至二七年一、乃可二分別一」

【豫讓】ヨジョウ 戰國の晉の人、知伯に事へて寵用せらる趙襄子、韓・魏と知伯を滅す、讓、身に漆し厲となる、炭を呑み啞となり、襄子を刺さんことを謀り、襄子の爲めに獲られて自殺す（史、刺客傳）

【豫設】ヨセツ 事に先だちてまうける。漢書、辛慶忌傳「大將不二一一一一、則亡二以應一レ卒、士不二素勵一、則難レ使レ死レ敵」

【豫選】ヨセン 選擧に先だちてあらかじめ適當の人をえらぶ。

【豫測】ヨソク まへもつておしはかる。＝豫料・逆睹。

【豫怠】ヨタイ たのしみおこたる。書、太甲「王懋二乃德一、視二乃烈祖一、無二時一一一」

【豫知】ヨチ 事の未だ起らざる前にしる。＝前知。

【豫定】ヨテイ あらかじめさだめる。後漢書、申屠剛傳「扉扇之計、既不二一一一」＝素定。

【豫防】ヨボウ 事の起るに先だちてふせぐ。易、既濟「君子思レ患而一二一之一」

【豫報】ヨホウ 前以てしらせる。

【豫備】ヨビ 事に先だちて用意する。漢書、趙充國傳「宜レ遣二使者一行二邊兵一、豫爲レ備、敕中視諸侯上」＝預備。

【豫備役】ヨビエキ 國常備兵役の一、現役を終へたる後、更に服する兵役。陸軍にては四年四箇月、海軍にては三箇年。

【豫附】フ 心に悦びて歸向する。史、陸賈傳「將相和調、則士一一、士一一則天下雖レ有レ變、而權不レ分」＝款附・樂附。

【豫盟】メイ 會盟に參與する。後漢書、東夷傳「亦來一レ一」

【豫約】ヤク あらかじめ約束する、事の未だ成らざる前に約束し、成りて後、之を履行する。又、其の約束。

【豫樂】ヨガク よろこびたのしむ。＝娯樂・歡樂・喜樂・悦樂

【豫料】リョウ 前以つておしはかる。＝逆料。

十畫

【豳】㊀ヒン ㊁ヘン 眞 先

㊀古の國名、周の文王・武王の祖先、公劉が居りし地、今の陝西省邠州。詩、大雅「篤公劉、于レ斯一一邠。㊁まだら、あや「一文」＝斒。

【豳風七月篇】ヒンプウシチゲツヘン 豳風は詩經の國風の一、中に七月篇あり、周公の作、農業勤勞の事を述ぶ、其の序に「七月、陳二王業一也、周公遭レ變、陳二后稷先公風化之所レ由、致二王業一之艱難一也」

十一畫

【豵】ソウ　東　多
○生れて六箇月（一說に一歲）の豚。○小さきものこ。詩、召南「壺餕五―」

十二畫

【豶】キ　エイ　寘　霽
ものこの息ヰ

【豯】フン　文　又猥に作る
牙をとりたるものこ。又、去勢せしものこ。易、大畜「―豕之牙吉」

十八畫

【貜】クヮン　寒
○ものしし（野豬）○牡のおほかみ。‖繭。

豸部

【豸】㊀サ　㊁タイ　蟹　㊀紙
㊀むし、足なきむし（蟲は足あるむし）「蟲―爾雅、釋蟲「有足謂之蟲、無足謂之―」○とく（解）ゆるむ。左、宣十七「廬有―乎」○跳―はたなやか（嫺娜）○狸―は漸くに平かなる貌。史、司馬相如傳「陂池狸―」○―ヂは獸の背の高く長き貌。㊁貍―ダイは一種の神羊、能く曲直を別つ、よりて法冠に作る（後漢書、輿服志）○㊀むじなへん（豸偏）漢字の偏になる時の稱。

三畫

【豻】㊀ガン　㊁ガン　寒　翰　又、犴に作る
㊀胡地の野狗。又、狐に似て喙の黑き野犬。㊁ひとや、らうや。漢書、刑法志「獄―不平之所致也」注「鄉亭之繫曰―、朝廷曰獄」‖岸。

【豺】サイ　佳　又、豺に作る
○やまいぬ、狼の類、性猛惡にして貪殘ナンサンなり。禮、月令「季秋之月、―乃祭獸」○轉じて猛惡の人。又貪慾の人に喩ふ。
【豺虎】サイコ　やまいぬと、とらと。猛惡の人に喩ふ。詩、小雅「投ニ畀ヒ―一、―不レ食」
【豺祭】サイサイ　やまいぬが獸を祭る。禮、月令「季秋之月、豺乃祭レ獸」疏、王制「獺祭レ魚然後虞人入ニ澤梁一、―レ獸、然後田獵」
【豺豦】サイシ　五加皮の異名（本草綱）
【豺聲】サイセイ　やまいぬの如き聲、惡人の相。左、僖三三「是人也、蠆目而―、忍人也、不レ可レ立也」
【豺鵙】サイゲキ　やまいぬと、かはをそと。漢書、貨殖傳「―未レ祭、罝罔不レ布ニ於藪澤一」
【豺狼】サイラウ　やまいぬと、おほかみと。貪慾、無慈悲、又、猛惡なる者に喩ふ。孟、離婁「嫂溺不レ援、是―也」
【豺狼之吻】サイラウノフン　やまいぬや、おほかみのくちばた。以て殘酷にして飽くことなき者に喩ふ。蜀志、諸葛亮傳、注「百姓困ニ于―一、一夫有レ死、皆宛之邸」
【豺狼當レ路】サイラウチニアタル　奸人が要路に居て權勢を專にするに喩ふ。後漢書、張綱傳「孝順帝時、遣ニ使者八人一分ニ行州郡一、張綱獨埋ニ車輪於洛陽都亭一曰、―、安問ニ狐狸一、竟入朝劾ニ奏大將軍梁冀一」狐狸は地方官の奸惡なる者に喩ふ。‖豺狼橫道【漢書、孫寶傳】

【豹】ヘウ　效
猛獸の名、虎に似て稍小。背に黑き斑ブチありて美くし。俗に金錢―といふ、行走迅速、牛羊雞豕等を捕食す「文―」「全―」
【豹隱】ヘウイン　豹は其の毛を愛する故に、雨霧の時は山中に隱れる。資暇錄「豹性潔、霧雨霏霏、伏而不レ出、慮レ汚ニ其身一、列女傳云、南山有ニ文豹一、霧雨七日而不レ食者、欲下以澤ニ其毛衣一而成中文章上」
【豹韜】ヘウタウ　驍勇なる騎兵（唐六典）
【豹裘】ヘウキウ　ヘウの皮衣。淮南子「――而禪、不レ若ニ狐裘而粹一」
【豹脚紋】ヘウキヤクモン　やぶか、足に白き斑紋あるが故。爾雅翼「蚊生ニ草中一者、咿尤利而足有ニ花紋一、故與ニ――子一」
【豹韜】ヘウタウ　六韜の一、六韜三略（一九九頁）を見よ。
【豹頭純】ヘウトウまくらの名。唐書、五行志「章后妹菩薦ニ――一以辟レ邪」
【豹死留レ皮】ヘウシリウヒ　死後に芳名を留むるに喩ふ。五代史、王彥章傳「王彥章目、――、人死留レ名」
【豹皮】ヘウヒ　豹の毛皮。周禮、大行人、注「執ニ束帛一而已、――裹之爲レ飾」
【豹尾】ヘウビ　豹の尾にて飾れる大將（又天子）の乘る車（漢書、揭雛傳）
【豹文】ヘウブン　豹のごとき美くしき文ヤ山海經「玉山是四王母所レ居也、有レ獸焉、其狀如レ犬而―、其角如レ牛、其名曰レ狡、其音如ニ吠犬一、見則其國大穰」
【豹變】ヘウヘン　豹の斑文の明かなる如く、君子の善惡を改めて善に遷るの著しき喩。易、革卦「君子―、小人革

ン面」

四 畫

【鮂】 鮂（魚部六畫）に同じ。

【貔】 貔（豸部十畫）に同じ。

五 畫

【貁】 イウ 名 又、貁に作る ○をながざる。猴の一種、鼻があふむきて尾の長きもの。漢書、揚雄傳、注「一似猴、卬鼻而長尾」○鼠の屬。

【貂】 テウ 國 又、鮉に作る てん。鼠の屬、大にして黄黒色、皮は輕暖にして裘に作る「一裘」古、其の尾を冠の飾とす。

【貂寺】テウジ 宦者をいふ、貂は其の冠の裝飾、寺は侍に同じ。宋史「弄ル權之一一、業爲天下所二共惡一者以屏レ之絶レ之」＝貂璫。

【貂珥】テウジ 貴顯の者の稱、珥はみみだま。徐陵文「一一雅容、尋二豐漳水一」

貂璫參看。

【貂蟬】テウセン 位高き侍臣の冠の飾に貂尾と蟬羽とを用ふるをいふ。轉じて、高官の人を呼ぶ稱。車服雜志「侍臣加二一一一者、取二其清高飲レ露而不レ食也」

【貂璫】テウタウ ○漢代の侍中常侍の冠、黄金のみだまと貂尾との裝飾あり。後漢書、輿服志「武冠侍中常侍加二黄金璫一、附レ蟬爲レ文、貂尾爲レ飾」○轉じて宦者の職に用ふ。＝貂寺。

【貂不レ足狗尾續】テウフソクコビヲツグ 貂蟬の冠を著くべき高官につぐに下賤の人を以てする喩。晉書、趙王倫傳「倫諂黨皆登二卿相一（中略）至二於奴卒廝役一、亦加以二爵位一、每二朝會一、貂蟬盈レ座、時人爲二之諺一曰、――」＝續貂。

六 畫

【貉】 ㊀カク 陌 ㊁バク 陌 ㊀むじな、狸の屬、頭銳く鼻とがり、毛深くして斑文あり、性よく眠る。論、鄉黨「狐一之厚以居」＝貉。㊁北方のえびす。孟、告子「子之道一道也」＝貊。

【貅】 キウ 尤 又、貅に作る 猛獣の名、古、馴らして戰に用ひきといふ。史、五帝紀「教二熊羆貔貅一貙虎一以與二炎帝一戰二阪泉之野一」（轉じて勇猛なる武夫を貔一といふ）

【貊】 クヮン 元 ケン 寒 又、貆に作る ○まみ（貓）○貉の屬。詩、豳風「有二狐一兮」○一貉は妄稱の異名（山海經、毫彘、注）＝貆。

【貊】 バク 陌 ○支那の北方のえびす。中庸「施及二蠻一貊」＝貉。○獣の名、大いさ驢の如く、狀は熊に似たり、多力にして觸るる所、拉けざるなし。後漢書、西南夷傳「哀牢夷出一獣」＝獏。○しづか（靜）靜かにす。詩、大雅「一一其德音」

七 畫

【貌】 ㊀ベウ 效 ㊁バク 覺 又、皃・貌に作る ㊀かたち。○かた（形象像）○すがた（姿容儀）「容一」「形一」「美一」「風一」「玉一」論、季氏「一思恭」○かほ（顏）かんばせ、顏色「面一」「顏一」屈原、九章「情與一一其不變」○おもむき（狀態）○ふるまひ（擧止）○みえ（外觀）「外一」○うはべ、表面だけ。○つつしむ態度。論、鄉黨「雖二褻必以一一」㊁かたどる、うつす、人物を描畫して其の狀を似せる。唐書、后妃傳「命二工一一妃於別殿一」○はるか、とほし（遠）＝邈。

【貌閱】ベウエツ 年と容貌とをしらべる。附書、文帝紀「大索一一、戶口不レ實者、里正當二長遠一配」注「一一閱二其形貌一也」

【以レ貌取レ人】ベウヲモツテヒトヲトル 才德を問はず、容貌の美なるを以て人を採用する。史、仲尼弟子傳「一一、子之子羽一」

【貌合心離】ベウガフシンリ 交りて誠意なきをいふ。漢書、一一者疏、親レ讒遠レ忠者亡」

【貌形】ベウケイ すがた。洞簫賦「不レ覩二天地之體勢一、闇二於白黑之一一一」＝形貌。

【貌敬】ベウケイ 外面のみのうやまひ。韓愈詩「各言生死兩道路、直催心親無二一一」

【貌言】ベウゲン うはべを飾る實なきことば。史、商君傳「一一舉也、至言實也」

【貌執】ベウシフ 體貌を以て人をもてなす。莊、徐無鬼「一一之士者、百餘人」

【貌侵】ベウシン からだの短小なる謂。一解に容貌醜侵一に賤に作る。史、

其武安傳「爲」人―」【貌狀】ケイジョウ かたち。後漢書、李固傳「固―有二奇表一」‖狀貌。

【貍】リ 支 又、狸に作る

たぬき（猫に似て関頭大尾、善く雛等を窃む）を猫―、虎に似て尖頭方口、善く鼠等を捕食するを虎―、麝香猫を香―といふ、即ち靈猫（正字通「―野猫也」

【貍鼠】ねこと いたちと。荘、秋水「鵷鶵騰一日而飛二千里一、捕レ鼠不レ如二―一、言非二捷技一也」‖貍狸。

【貍製】タヌキのかはごろも。左傳「狐裘尨茸、――」注「製、裘也」‖狸裘。

【貍奴】猫の異名。李商隱詩「爲寫二上―一雛大經詩「陌宝偏遭踏鼠欺、――憐小策勳奇」

【貍豆】ふぢまめ。豆の斑文ありて貍文の如きもの（古今注）‖藜豆。

八畫

【貎】ゲイ 支 貌とは別

貌（一二二〇頁四段）に同じ。一説に麑（鹿部八畫）に同じ。

【貏】ヒ 紙

―豕とは漸次に平かなる貌。司馬相如、上林賦「陂池―豸」

九畫

【貑】カ 麻

○しぐま（熊）○おほざる（猿）

【貑熊】ヒユウ しぐま。爾雅、注「關西呼曰二―一」

【貓】タン 寒

まみだぬき。家に似て肥えたる獣、穴居して蟻を食ふ、一名貛。

【貓】ベウ メウ 篠 猫（犬部九畫）の正字

ねこ。貍の属、能く鼠を捕ふ。

【貓頭】ベウトウ ○竹の一種、桂海虞衡志「―竹、質性類二筋竹一」○筍の異名。陳師道詩「茶味遜二―一」

【貓頭鷹】ベウトウヨウ 角鴟（梟）の異名。‖鴟鵂。

十畫

【貔】ヒ 支 又、貅に作る

○虎、又、熊に似たる猛獣の名、一名、執夷、古、馴らして戦に用ひたるが故に勇猛なる將士、又、軍隊の義とす。書、牧誓「如レ虎如レ―」○―子嶽は遼東半島南岸の海港の名、大連灣の東に在りて、口門環抱、半規の如し、形勢要扼、日清戦役に、我が兵、此の岸より登り、以て旅順の後路を襲ふ。

【貔貅】ヒキウ ○猛獣の名（貔は牡、貅は牝）史、五帝紀「教二熊―一―羆虎、以與二炎帝一戰二於阪泉之野一」○轉じて勇猛なる將士に喩ふ。‖貔虎。○旌旗の名。―の形を畫くが故。曲禮「前有二摯獣一、則載二―一」

【貔虎】ヒコ ○猛獣の名。○轉じて勇猛なる將卒に喩ふ。書、牧誓「尚桓桓、如レ虎如レ―」後漢書、光武紀「募二敢死百萬一、―爲レ羣」周幡詩「十萬樓船―二―一」‖貔貅・虎貔。

【貔貙】ヒチ 猛獣の名。轉じて勇猛なる兵士に喩ふ。史記、春秋「軍伍雜更号、勢如二―一」

十一畫

【貙】チ 虞

虎の属、古、馴らして戦に用ひたる故に勇猛の兵士に喩ふ。柳宗元文「鹿―一、―畏」虎、虎畏―」

【貙虎】チコ ○猛獣の名、貔に同じ。搜神記「―化爲レ人、好著二裘衣一」‖貙豻。○轉じて勇猛の兵士に喩ふ。

【貘】バク ミャク 陌 又、獏に作る

熊に似て黄黒色なる一種の猛獣、俗に人の夢を食ひて邪氣を除くといふ。唐の世之を畫に畫く。白居易、―屏贊序「生南方山澤中、圖其形辟邪」

十三畫

【貜】アイ 隊

支那の東方のえびすの名、漢代、朝鮮・遼東の境に居る。‖濊。

十八畫

【貜】クヮン ケン 寒 先 環と通ず

○まみ（貘）○をのおほかみ（牡狼）狼は牝。

二十畫

【貜】クヮク 藥 又、攫に作る

おほざる（大猿）黄黒色にして長七尺許、人の如くに走る、やまをとこ。爾雅、注「似二猴而大、色黄黒、能攫二持人一好顧盼」

貝部

【貝】バイ　畫

○かひ、水中の介蟲類、石灰質の殻を有する頭足動物。○かひがら(介殻)○ほらがひ。○うるはしき錦の名。書、禹貢「其篚織ー」○かざり(飾)○たから(貨幣)古、介殻を用ひて通貨とす。史、平準書「農工商、交易之路通、而龜ー金錢刀布之幣興焉」○楓(九五〇頁一段)に同じ。貝多樹。佛教徒、其の葉を以て經を寫す。○州の名、今の直隸省清河縣の地。

【貝葉】バイエフ　○貝多葉に同じ。○印度にて佛經を寫すにより、轉じて佛書をいふ。鄭剛中、山齋賦「開ー謎塗於ー一、窺二奥義於義經一」貝多葉參看。

【貝殻】バイカク　かひがら。‖介殻。

【貝加爾湖】バイカルこ　西伯利亞にある大湖、水清く魚多く、汽船の運輸甚だ便なり、漢代、匈奴、蘇武を北海上に置き、羊を牧せしむ、北海は即ちこの湖。‖拜喀勒湖・白海。

【貝錦】バイキン　かひがらの文の如き美くしきにしき。詩、小雅「萋兮斐兮、成二是ー一」

【貝貨】バイクワ　かひの貨幣。漢書、食貨志「是爲二ー一五品一」

【貝闕】バイケツ　葉のかひがらにて飾れる宮にて河伯の居る所、俗にいふ龍宮の類。楚辭「築ー兮紫宮」王褒、四濱銅碑銘「鑄銅鑄立、ー一雲浮」

【貝子】バイシ　○たからがひ、子は助字。○爵の名、清代、宗室及蒙古外藩に授く、親王の子を貝勒、貝勒の子をー一といふ。○元代、雲南省地方にて通用せし海の貝の貨幣。

【貝鐘】バイショウ　寺にて鳴らす法螺の貝と、つりがねと。

【貝多葉】バイタヨウ　印度の多羅樹の葉。佛經を寫すに用ふ、貝多羅葉の略。舊唐書、陳寶積傳「亦有二文字一書二之於ー一」‖貝葉。

【貝勒】バイロク　佛經、又佛書をいふ　もと貝多葉に寫したる故。酉陽雜俎「ー一袋、皆錄二釋典中事一」

【貝母】バイモ　藥草の一、はまぐり　編笠百合。‖浙蔴。

【貝勒】バイロク　○滿洲語、多羅ー一の略、部長の義にて、清國皇族の稱、親王の子、位、郡王の下、貝子の上に在り。○貝にて飾りし馬のくつわ。儀禮、既夕「纓轡ー一」

【貞】テイ　チャウ　畫　庚

貝（三二〇頁四段）に同じ。

○ただし(正)易、乾卦「元享利ー一」疏「ー、正也」○さだまる(定)心が正しく定まりて惑はず。書、太甲「一人元良、萬邦以ー一」○女がみさをを守る「ー操」○心を清くして自ら守る「忠ー一」「ー潔」○卜ふひて問ふ。○易のうらなひの内卦、卦の下三爻をいふ。外卦を悔といふの對。書、洪範「曰ー曰悔」○女ー一は木の名、ねずみもち。‖冬青。

貞　卜に從ひ貝に從ふ。卜問なり、貝は以て贄と爲す。

【貞一】テイイツ　ただしきをまもる。雪賦「白玉離レ白、空ー一兮」

【貞葉】テイエフ　四時綠なる葉。高知之詩「天花多二靚姿一、寒竹有二ー一一」

【貞婉】テイエン　みさをただしくして、しとやか。晉書、列女傳「ー一有二志節一」

【貞固】テイコ　ただしく堅固なるみさを。梁簡文帝文「儒術弘長、志履ー一」

【貞確】テイカク　ただしくしてたしか。陳書、宣帝紀「詔曰、我心ー一、堅誓二蒼昊一」

【貞懇】テイコン　ただしくしてまことなり。風俗通「言二其天下蒙レ化皆貴二ー一一也」

【貞幹】テイカン　○貞は楨、牆の兩頭の立木、幹は根幹、猶ほ屋宇の棟梁の如し。莊、列禦寇「以二仲尼一爲二ー一一、國其有レ禍乎」○建築用の材料。書、費誓「峙二乃楨幹一」

【貞晦】テイカイ　心ただしく才能をくらましてあらはさず。舊唐書、崔從傳「少以二ー一一裴諫一自處」

【貞堅】テイケン　志ただしくしてかたし。舊唐書、高宗紀「守文孝伯、忠亮存レ心、ー一表レ志」

【貞固】テイコ　ただしくして誠あり、正道を固く守る。易、乾卦、文言「ー一足二以幹レ事」

【貞壯】テイサウ　ただしくしてさかんなり。顏延之、陽給事誄「ー一之氣、勇烈之志」

【貞操】テイサウ　ただしきみさを。晉書、戴天錫傳「觀二松竹一則感二ー一之賢一」

【貞士】テイシ　正しき人。董仲舒、士不遇賦「ー一耿介而自束」

【貞志】テイシ　ただしくして堅固なるこころざし。袁枚、亞倫亭銘「保二ー一以遂レ初兮、考二銘言一于蓍叟一」

【貞秀】テイシウ　ただしくしてひいでる。陶潛誄「愼二此ー一婺、卓爲二霜下傑一」

【貞蒸】テイジョウ　正しくまめやか。楚志、荀爽傳、注「性ー一、文懇篤誠、保家之主也」

【貞人】テイジン　正義を守る人。抱朴子「不レ改二操於得失一、不レ傾二志於可レ欲者一、ー一也」

【貞臣】テイシン　みさを正しき臣、忠正の臣。說苑「守レ文準レ法、辭二祿讓一レ賜、不レ受二贈賄一、此ー一也」

【貞風】テイフウ　ただしくしてまこと。李白

詩、燕石非ニ一ニ」

【貞潔】テイケツ　ただしくつつしむ。晉書、山濤傳「初濤布衣家貧、及ニ居ニ槐貴ニ一ニ儉約」

【貞淑】テイシュク　みさををただしく心善良なり。後漢書、匡衡傳「能致ニ其ニ一ニ下、貳ニ其操ニ」

【貞純】テイジュン　ただしくしてまごころあり。蔡邕、博奕論「孝友之行立、ニ一之名彰也」

【貞靚】テイセイ　ただしくしてあつし。草書物詩「爲ニ文類嫵麗、裏度自ニ一ニ」

【貞正】テイセイ　志固くしてただし。魏志、管寧傳「清儉足ニ以激ニ濁、ニ一足ニ以矯ニ世時」

【貞靜】テイセイ　女德ただしくしてしとやか。曹昭、女誡「幽閑ニ一、守ニ節整齊、行ニ已有ニ恥、動靜有ニ法、是謂ニ婦德ニ」

【貞石】テイセキ　○石の堅固なる者。尚書故實「謝太傅墓碑、但樹ニ一ニ、初無ニ文字ニ」○轉じて墓碑をいふ。‖貞珉。

【貞節】テイセツ　○夫死して再嫁せず、みさををかたく守る（唐律、斷獄律）。‖貞操・貞烈。○堅貞なる德操。張衡賦「伊中情之信脩兮、羌ニ古人之ニ一ニ」

【貞烈】テイレツ　ただしくして心が烈一なり。劉歆、遂初賦「彼屈原之ニ一兮、卒放ニ沈於湘淵ニ」

【貞女】テイジョ　みさを正しきをんなの史、

田單傳「王蠋曰、忠臣不ニ事ニ二君、ニ一不ニ更ニ二夫ニ」‖貞婦・烈女。

【貞女峽】テイジョキョウ　地名。三齊略記「秦時有ニ女子、化入ニ石、在ニ岩穴中、貞潔ニ作ニ一ニ詩ニ」

【貞直】テイチョク　しっかりとしてただし。後漢書、吳延史傳論「仁柔用ニ情、多ニ乏ニ一ニ」

【貞遯】テイトン　正しき道を守りて、のがれかくれる。晉書、隱逸傳贊「探ニ幽ニ一ニ」

【貞方】テイホウ　みさををただし。柳宗元文「英風超倫、孤風ニ一ニ」‖婦方。

【貞白】テイハク　ただしくして潔白。後漢書、第五倫傳「在ニ位以ニ一ニ稱」

【貞珉】テイビン　かたくして美くしき石、石碑に用ふ。轉じて石碑の美。汪道會、墨賦「鐫ニ謎ニ一、點ニ畫斷梢ニ」

【貞敏】テイビン　ただしくしてさとし。魏書、游明根傳「風度清幹、志尚ニ一ニ」

【貞婦】テイフ　みさを正しきをんな。禮記「孝子弟弟ニ一ニ」‖貞女。

【貞婦石】テイフセキ　石の名。寰宇記「琅琊有ニ一ニ、相傳時有ニ貞婦ニ夫及無ニ子、事ニ姑甚孝、郡而嫁、不ニ從、身沒、所ニ居室有ニ大石ニ湧出、後人號爲ニ一ニ」

【貞木】テイボク　○女貞（ネヅミモチ）の一名（山海經）○木の堅固なる者。晉、顧凱之詩「疾風知ニ勁草ニ歲寒識ニ一ニ」

【貞亮】テイリョウ　心ただしくまことあり、亮は諒。諸葛亮、出師表「ニ一死節之臣」

【貞烈】テイレツ　みさををかたく守る。杜甫、八哀詩「好學尚ニ一ニ」‖貞節。

【貞操】テイソウ　ただしくしていきぎよし。漢書、翼奉傳「公正ニ一ニ」晉書、石苞傳「夫ニ一之士、未ニ必經ニ濟世務ニ」

【貞觀政要】ジョウガンセイヨウ　十卷、唐の吳兢撰す、太宗と羣臣と政事を論ぜし語を君道・政體以下すべて四十門に分ちて類輯す、和版あり。貞觀は太宗の年號。

【負】フ　フウ　通音　フ

○おふ、背にになふ（荷・擔）「ニ一薪」「荷ニ一」詩、大雅「是任是ニ一」○うしろにする、そむく（背）「ニ一山」○たがふ（違）○よる（依）たよる。左、襄十八「ニ一其衆庶」○うく（受）ひきうける。○うしなふ（失）○わすれる（忘）ニ一德（ソムクコト）は恩を忘れる義。李陵、答蘇武書「陵雖ニ孤ニ恩、漢亦ニ一德」○おひめ「ニ一債」○うれふ（憂）○はづ（愧）○やぶる、まける。まけ（敗）「勝ニ一」孫子、謀攻「ニ一勝ニ一」○せめ、ひきうけ、責任。○たのむ（恃）「ニ一勇」「ニ一氣」「自ニ一」たのみ。○老母（老婦人）の稱。○代數學にて消極性の數、マイナス。正の對。○ニ一は愧づることの甚だしき義。

助字　負は恃なり、人、貝を守るに從ふ、恃む所有るなり、貝は寶なれば、人之れを守るときは心強し、故に人と貝とに從ふ、俗に力に從ひ、又刀に從ふは並に非なり。

同訓異語　ワム　負・叛・畔・倍・背・反・非の別は叛（ニ九四頁四段）の條を見よ。

○オヒ　負・恃・怙・賴・憑　○負は後にたよりとするものある義、自負と用ふ。史記「武安負ニ貴而好ニ權ニ」○恃は、あてにして、たのむ。史記「書曰、恃ニ德者昌、恃ニ力者亡ニ」○怙は、かたく、あてにしてたのむ。詩、小旻「無ニ父何怙、無ニ母何恃ニ」○賴はたよりとする。晉經「萬世永賴ニ」○憑は依也、託也と註す、先方へもたれかかる、憑ニ几の憑の意なり。伯夷傳「衆庶憑ニ生ニ」

【負扆】フイ　扆は屏風の類、柄のなき斧を畫くは設けて用ひざる義、故に斧扆ともいふ、王者は之を坐背に備へて南面す。淮南子「ニ一而朝ニ諸侯ニ」

【負荷】フカ　おひになふ、父祖の職をうけつぐ義。左、昭七「其父析ニ薪、其子弗ニ克ニ一ニ」

【負氣】フキ　いきほひをたのむ。五代史、周太祖紀「爲ニ人ニ一、好使

ノ酒」

【負貴】フキ 地位のたふときをたのむ。史、魏其・武安傳贊「武安、ーレー而好ノ士」

【負笈】フキフ 遊學するにいふ。笈は書箱。漢書、蘇章傳「ーレー遊ノ師、不ノ遠ニ千里ニ」

【負戴】フキタイ 物を負戴して歩行になやむ。戰國策「戰服ニ騎車ニ而上ニ太行外阪ニ、遲延ーー而不ノ能ノ上」

【負嵎】フグ 山曲の險をたのみて依る。孟、盡心「有ノ衆逐ノ虎、虎ーレー、莫ニ之敢攖ニ」

【負郭田】フクカクノデン 城に近くして、よくこえたる田。史、蘇秦傳「使ニ秦有ニ洛陽ーー二頃ニ吾豈能佩ニ六國相印ノ乎」

【負荊】フケイ ふかく罪を謝する意。荊は杖、杖を受けんことを願ふ義。史、廉頗・藺相如傳「肉袒ーレー、因賓客ニ至ニ藺相如門ニ、謝ノ罪ノ」

【負嚢】フジ ひなたぼこり、古、宋の田夫が春日ひなたぼこりしてこの快味を君に獻じたしといひし故事。列、楊朱「負ニ日之暄ニ、人無ニ知者ニ」杜甫詩「濃烈能ニ幾冬ニ、ーー晴ニ飛翮ニ」＝曝背。

【負劍】フケン つるぎをおふ、劍を帶ぶるに上長くして之を抜くに害を出てず、故に之を背に推して、負ふが如くし、抜き易かもしむる義。史、刺客傳「王ーレー、ーレー拔以擊ニ荊軻ニ」

【負固】フコ 地の險固なるをたのむ。周禮「以ニ九伐之法ニ正ニ邦國ニ(中略)ーレー不ノ服則伐ノ之」＝負險。

【負材】フザイ 自己の材能あるをたのみにする。漢書、季布・欒布傳贊「彼自負ニ其材ニ、受ノ辱不ノ羞」＝負才。

【負責】フサイ 次條に同じ。漢書、鄭通傳「通家尚ーー數鉅萬」

【負債】フサイ おひめ、借金。漢書、淮陽王傳「ーー數百萬」

【負志】フシ 意志にたがふ。史、蘇秦傳「蘇代求ノ見ニ燕王ニ曰、臣東周之鄙人也、至ニ于邯鄲ニ、所ノ見者繊ニ于所ノ聞ニ、於東周ニ、臣蘇負ニ其志ニ也」

【負薪之憂】フシンノユウ 病を稱する謙辭(薪を負ひたるつかれによりて病む義。一說に病みて薪を負ふこと能はず)曲禮「君使ニ士射ニ、不ノ能則辭以ノ疾、曰ニ、某有ニ負薪之憂ニ」

【負薪之資】フシンノシ いやしきつまらぬうまれつき。後漢書、袁紹傳「臣以ニ負薪之資ニ、拔ニ于陪隸之中ニ」

【負傷】フショウ きずをうける、けがする「ーー兵」

【負雀】フジャク すずめだか。爾雅「鷽、ーー」

【負手】フシュ てを背にのせる。禮、檀弓「孔子曳ニ杖、逍ニ遙于門ニ」

【負租】フソ おひめのみつぎもの。未納の猶税。韓愈文「民輸有ノ程、公無ニ ーー」

【負俗之累】フゾクノルイ 志高く、世間の俗人にそむきて、そしられるわづらひ。漢書、孝武紀「士或有ニ ーー而立ニ功名ニ」

【負戴】フタイ 荷物をせおふと、首にのせると、皆殺する義。孟、梁惠王「頒白者、不レーニ于道路ニ」

【負擔】フタン ○荷物をせおふと、肩にになふと。左、莊二二「徴仲辭「齊侯」曰、免ニ于鄙戻ニ、魄ニ于ーー、君之惠也」○身に引き受ける。左、莊二二「不ノ關ニ於ーー」＝負荷。

【負荷】フカ 背におにひもつ。埤雅「鄭云、蒲盧取ニ桑蟲之子ニ而ーー而去」

【負特】フトク たのみにすつ尊貴、盛ニ李墨ニ序「好ノ謀而ーー、爭ノ妍而取ノ憎」

【負弩】フド ○いしゆみを負ふ、征伐に從ふをいふ。逸周書「武王伐ノ紂、散宜生・閎夭ーレー前驅」○導長の別稱。風俗通「亭長者、一亭之長也、舊名ニーー」

【負敗】フハイ まけやぶれる。陸賈、楚子發傳「在ノ軍持重、未嘗ーー」

【負販】フハン ○國の地圖。又、戸籍簿を背に負ふ。又其の者(販は坂)論、鄭箋「式ニーー者」○商の名。＝鴨蝦。

【負擔】フタン 物を負ひて賣り行く。曲禮「夫負者、自卑而尊ノ人、雖ニーー者ニ必有ノ辭也」

【負弄】フロウ そむく、たがふ。後漢書「有ニ商人之行ニ、ーニーー于世ニ」

【負貧】フヒン 甚だしくはづる義。後漢書、張步傳「ーー無ニ訂ノ言者ニ」注「負、愧也」

【負米】フベイ 米を背におふ。家語、致思「子路嘗曰、昔者由也事ニ二親ニ之時、常食ニ藜藿之實ニ、爲ノ親ーニーー百里之外ニ」

【負役】フエキ 重き物などをおひ、又炊事の役に服する者。史、張儀傳「而厮徒ーー、在ニ其中ニ矣」

【負力】フリョク 己の力をたのみにする。後漢書「張者ーレー、弱者管窺」

貝 書

【貶】(一)イ・シ (二)イ 支 寘

(一)のぶ、ひく(延)○かさなる(重)次第に重なる。(二)うつる(移)

【貢】コウ 送

○みつぐ、たてまつる(獻)「朝ー」「入ー」「來ー」○みつぎもの、朝廷にたてまつる地方の産物「ー賦」○すすむ(進薦)賢者を朝廷に薦めること「ー士」「ー生」○つげる(告)易、繫辭「六爻之義易以ーー」○夏の時代の稅法。孟、滕文公「夏后氏五十

而—」○姓、—禹は漢人、字は少翁、明經高行を以て徵されて博士と爲る。

【貢院】コウ　州縣より薦めし貢士を試驗する所。宋史、選擧志「知貢擧宋白等、定二—一故事一」

【貢御】コウギョ　みつぎもの、御は天子の御用品。後漢書、貢紹傳「匱心轉盛、—一綵繒」

【貢擧】コウキョ　州郡より人材を選拔して薦める。隋唐書、選擧志「遂移二—一于禮部一」

【貢獻】コウケン　○みつぎものをたてまつる。後漢書、光武紀「遣レ使—」○世の中の爲めに力をつくす。

【貢士】コウシ　○才學ありて政府に推薦せられし人。禮、儒行「大儒古者諸侯之於二天子一三年一—レ—」○國維新の際、諸藩より選拔して政府へ薦めし人才。

【貢試】コウシ　貢士を試驗する。又其の試驗。

【貢生】コウセイ　薦擧せられし學者をいふ、科擧時代に生員の學行優れる者、擧げて以て入仕せしむ、副貢・拔貢・優貢・歲貢・恩貢等の名あり、之を五貢といひ、總稱して—一といふ。

【貢法】コウホウ　夏の代、各戶に田五十畝をさづけ、內五畝の所得を稅とする法。孟、滕文公「夏后氏五十而貢」

【貢賦】コウフ　みつぎものと賦稅と(書、禹貢、傳)

【貢物】コウブツ　みつぎもの。

【貢奉】コウホウ　物を朝廷に獻ずる。後漢書、班超傳「日之所レ入、莫レ不二化向一、大小欣欣、—一不レ絕」‖貢獻。

【財】サイ　ザイ　因

○たから、かね、金穀及すべての有價物「資—」「家—」「貨—」(利とは食る義)○わづか(纔)才に通ず。○たつ、きりもりする「—成」古、裁に通ず。○はたらき(才能)孟、盡心「有二達—一者一」才材に通ず。

同訓異字　財・値・纔・劣・才・裁の別は值(一六二頁二段)の條を見よ。

【財運】ザイウン　たからを得る命運。拾遺記「人生—有レ限、不レ得二強求一」

【裁財】サイザイ　たからをつみ貯へる。顏氏家訓「諺云、—レ—千萬、不レ如二薄藝隨レ身」

【分レ財】ブンザイ　財產をわける。伍助、奏二彈劉整一文「辭色—レ—、取二其老弱一」

【財界】ザイカイ　圖金錢取引に關する社會。‖經濟界。

【財交】ザイコウ　貨財によりて交る。戰國策「以レ色交者、華落而愛渝、以レ—一者、財盡面變絕」

【財貨】ザイカ　たから。‖貨財・財幣。

【財賄】ザイカイ　たから、錢穀をいふ。周禮「以二九賦一斂二—一」

【財源】ザイゲン　財貨の出づるもと。荀、富國「財貨渾渾如二泉源一」‖財本。

【財產】ザイサン　しんだい、資產。後漢書、齊武王縯傳「悉推二—一與二諸弟一」

【財取】サイシュ　法かりてきり取る。漢書、貨殖傳「所レ賜金隨二廉下一、軍士過、輒令二—一自用」‖裁取。

【財成】ザイセイ　きりもりしてつくる。易、繫辭「—二天地之道一、輔二相天地之宜一、以左右民」‖裁成(漢書、律曆志)

【財政】ザイセイ　國家又は會社などの經濟に關する事柄。轉じて廣く個人の金融。

【財政學】ザイセイガク　人類及國家の財に關する事を研究する科學。‖理財學。

【財勢】ザイセイ　金錢上の勢力。拾遺記「皆不レ管二其盛里一、羚其—一」

【財團】ザイダン　法律にて、人格ある財產の集合體「—法人」

【財帛】ザイハク　かねぐら、財物を入れる庫、藏はくら。

【財產】ザイサン　ぜにいれ、財布。

【財物】ザイブツ　財物に臨まば義に合ふや否やを考へて有も得んことを欲する勿れ。曲禮「—、臨レ難毋二苟免一」

【財寶】ザイホウ　たからもの、金銀珠玉など。漢書、楊玄傳「不レ得二貪以二—一

からを贈る、賄賂ワイをつかふ。孟、公孫丑「無處而饋之、是ー之也」○うる(賣)

【貨】ー は財なり、變化交易する物、故に化に從ひ貝に從ふ。

【貨賄】クワクワイ　かねと布帛と。周禮、天官「太宰之職、以二九職一任二萬民一、六曰、商賈、阜通二ー一」注「金玉曰レ貨、布帛曰レ賄」＝財帛。

【貨財】クワザイ　たから。＝財貨。

【貨産】クワサン　財産に同じ。唐書、陸贄傳「幼有レ志二於學一、不レ治二ー一、長通二經術一、以二謀道一爲レ娛」

【貨殖】クワシヨク　かねを增やして利を得んとする義。柳宗元、蕃氏衍傳「ー二之一」

【貨車】クワシヤ　汽車の貨物を運ぶ列車。

【貨殖】クワシヨク　かねをまうけてふやす。論、先進「賜不レ受レ命、而ー一焉」

【貨泉】クワセン　ぜに。王莽錢幣を稱してー一と曰ふ〔漢書〕

【貨總】クワソウ　うりかひ。後漢書、孟嘗傳「遷二合浦太守一、郡不レ產二穀實一、而海出二珠寶一、與二交趾一比レ境、常通二商販一、ニー一糧食一」

【貨殖】クワシヨク　財貨をむさぼる。蘇轍、を誅二竟呂惠卿一狀「ー一レ一無レ厭」

【貨寶】クワホウ　たから。史、項羽紀「燒二秦宮室一、三月不レ滅、收二其ー一婦女一而東」

【貨物】クワブツ　たから、しなもの。漢書、食貨志「盡籠二天下之ー一」

【貨幣】クワヘイ　政府にて發行するかね、雜貨。硬貨と紙幣とあり。後漢書、光武紀「初王莽亂後、ー一雜二用布帛金粟一、是歲始行二五銖錢一」

【貨悖而入者亦悖而出】クワボツジテイルモノハマタモトリテイヅ　不正にて入りたる財貨は、亦不正にて出づる。大學「貨悖而出者、亦悖而入、ー一」

【貨利】クワリ　たから。書、仲虺之誥「不レ邇二聲色一、不レ殖二ー一一」＝財利・財貨。

【貨賂】クワロ　まひなひ。司馬遷、報二任安一書「家貧ー一不レ足二以自贖一」＝賄賂。

【貫】

㊀ クヮン　㊁ ワン　㊀ 願

㊀ぬく、つらぬく。○つらぬき統べる。論、里仁「吾道一以レ之」○つきとほす。とほる(通)○うがつ(穿)○かさぬ(累)○あつ。あたる(中)○ならふ(習)慣に通ず、ならはし(習慣)孟、滕文公「我不ー一與小人一飛」○ぜにさし、さし(繩)穴あき錢をとほすなは。○にんべん(名籍)「鄉ー一」「ー籍」○すぢ、すぢみち(條理)左傳序「經之條ー一、必出於傳」○こと(事)論、先進「仍舊ー一」○十分に極まる、極量「罪惡ー盈」○千錢を一ーといふ。金史「興定元年二月、初用二貞元通寶一、凡一貫、當二貞祐寶券千ー一」㊁ひく(挽)「ー弓」＝彎。圖○ワン　古の通貨の單位、錢一千文の稱、德川時代には九百六十文、今は金十錢。○重量の單位、千匁の稱。○音、武士の知行高の換算に用ひたる單位、十石に當る。

【貫盈】クヮンエイ　罪がみちわたる。書、泰誓「商罪ー一、天命誅レ之」

【貫行】カンカウ　事をつづけておこなふ。漢書、谷永傳「以レ次ー一、固執無レ違」

【貫休】カンキウ　唐の僧、字は德隱、蘭溪の人、詩を善くし書畫に工、吳越王錢鏐の爲めに重んぜられ、後、蜀に入り、王建、之を禮遇す、號して貫月禪師と爲す、嘗て句あり「一瓶一鉢垂垂老、萬水千山得得來」人又稱して得得和尚と爲す、卒する年八十一、禪月集あり、世に行はる。

【貫魚】クヮンギョ　魚の異稱、魚は陰の物、婦人の象、貫は宮中の索縄をつらぬき統ぶる義。易、繫辭「ー一レ以二宮人寵一、無レ不レ利」に本づく。

【貫朽而不可校】クヮンキウシテカウベカラズ　ぜにがくさりて錢の數をかぞへることが出來ぬ。史、平準書「漢興七十餘年之間、京師之錢、累二巨萬一、ー一」

【貫月查】クヮンゲツサ　いかだの名、查は槎。轉じて舟楫の義とす。拾遺記「漢槎レ位三十年、有二巨查浮一於四海一、查上有レ光、夜明查還、常浮二滄四海一、十二年一周、周而復始、名曰二ー一」

【貫日】クヮンジツ　○日をつらぬく、日光を遮り蔽ふ。史、鄭陽傳「白虹ー一レレ、太子畏レ之」○日を積む。荀子「若夫ー一而治詳」

【貫習】クヮンシフ　次條を見よ。

【貫風之技】クヮンフウノギ　紀昌がしらみを射ぬきたる故事、虱一に蝨に作る。弓術に巧なるをいふ。列、湯問「紀昌以レ氂懸二虱於牖一（中略）以二燕角之弧、朔蓬之幹一射レ之貫二虱之心一」

【貫習】クヮンシフ　ならひなれる。梁武帝文「經史文義、多レ所ニー一」＝慣習。

【貫首】クヮンシュ　○かしらだつ人の稱。孝經、註「謂同門弟子者孔門三千人弟子ー一」○圖亟人頭の異稱。○佛一宗・一山の管長の稱。＝貫主。

【貫珠】クヮンジュ　○結にてたまをつらぬく。摩訶の美妙なる形容。詩、樂記「樂樂乎、嗣加ニー一」○珠數ジュズ玉泉子「手持ニー一、閉レ目以誦レ經」＝念珠。

【貫主】クヮンジュ　佛比叡山（天台宗）の山門の座主の稱。＝貫首。

【貫籍】クヮンセキ　うまれ故鄉　本籍地。＝鄉

貫で。

【貫穿】クワンセン　つらぬきとおす。博く學問に通ずる義。漢書、司馬遷傳「一二一經傳」

【貫通】クワンツウ　貫穿に同じ。

【貫道之器】クワンダウのキ　文章をいふ。宋濂、蘇平仲集序「文者——也、不ノ深ニ於斯道ニ有ノ至焉者、不也」

【貫通】クワンツウ　條理がつらぬきとほる。朱熹、中庸序「此書之旨、支分節解、脈絡一一」‖通貫・貫徹。

【貫徹】クワンテツ　つらぬきとほす。金史、完顏京傳「幸不ニ一一、得ノ不ノ成ノ罪」

【貫滿】クワンマン　なれあなどりてけがす。左傳「一ニ一鬼神、慢ニ棄刑法」

【貫流】クワンリウ　其の地をとほりぬけて流れる。

【貫弓】クワンキウ　ゆみを十分に引きしぼる。史、伍子胥傳「一レ一執レ矢、爲ニ使者」‖彎弓。

【責】

㊀セキ・シャク　㊁サイ　庚陌

㊀せむ(譴)責めとがめる。○なじり問ふ「問一」「詰一」非としてせめる。○とがむ、しかる「叱一」「譴一」○そしる(刺)○せまる(催)「督一」○當然爲すべきことを其の人に責め求める「一善」○つとめ「任」「塞ニ」○貸したる金を收め取る。恭ニ陳レ善閑レ邪謂ニ之敬ニ」

【責任】セキニン　せめ、ひきうけて爲すべき當然のつとめ。莊、天道「帝王聖人休焉、休則虛、虛則實、實者倫矣、虛則靜、靜則動、動則得矣、靜則無レ爲、無レ爲也、則任レ事者責矣」

【責任內閣】セキニンナイカク　施政の成績に對して責任を負ひて進退を決する內閣。

【責罵】セキバ　せめののしる。魏書、爾朱兆乃陷レ水一一」

【責望】セキバウ　人に責むるに難んずる所を以てして相怨む。史記「衡山王・淮南王、兄弟相一一(世家)」

【責付】セキフ　豫審判事が豫審中に、拘留となりし刑事被告人を、何時にても召喚に應ぜしむべき保證を爲さしめて、其の親戚故舊に預ける義。

【責賦】セキフ　納稅をせめ立てる。唐書、高崇文傳「一レ一充急」‖責課。

【責問】セキモン　せめとふ、とがめる。後漢書、馬援傳「乘レ驛一ニ一援」

【塞ノ責】ソクのセキ　せめふさぎ、己の責任を果す。韓詩外傳「卞莊子曰、前與レ母處、是以戰而北也、今母沒矣、請一レ一」

【責怒】セキド　せめいかる。魏志、杜畿傳「鄉邑父老、自相一一、曰有レ君如レ此、奈何不ニ從ニ其教ニ」

【責難】セキナン　能くし難きの事を責め望む。孟、離婁「一ニ於君、謂ニ之

【貴】タン　トン　早韻

○むさぼる、物を欲する「慳一」「欲」○むさぼり。

同訓異字　貪・婪・冒・餐○貪は物を欲するなり、離騷の「衆皆競進、以貪婪兮」の註に「財ヲ愛スルヲ貪トイヒ、食ヲ愛スルヲ婪トイフ」とあり。○婪は貪なり、強欲の義。○冒は取なり、利をむさぼり取る。史記「富商大賈、無レ所レ不ニ冒一大利一」○餐は昔タ飲食を貪り嗜む義、また財を貪るにも用ふ、餐婪と連用す。左、文十八「貪ニ於飲食一、貨ニ於貨賄一、天下之民、謂ニ之饕餮一」

【貪婪】タンラン　むさぼりこのむ。左傳「一ニ一不ノ解一」

【貪惡】タンアク　欲ふかくしてあしき。詩經、鄭「鳥之一一者也」

【貪汙】タンヲ　むさぼりて心けがる、官吏が賄賂をむさぼるなどにいふ。漢書、循吏傳「潔行一一」

【貪墨】タンボク　むさぼりておろか。獨孤及、大雲寺鐘銘「静ニ其音一者、一一澄ノ聲、聽而知ノ方」

【貪強】タンキョウ　よくが深くしてつよし。史、自序「蘇子能存ニ諸侯一、約ノ從以抑ニ一一」

【貪戾】タンレイ　欲ふかくしてもりあひむさぼる。晉書「管鮑之餘、人懷ニ一一」

【貪虐】タンギャク　むさぼりて人をいぢめる。

【貪寶】タンホウ　たからをむさぼる。左傳「一レ一寶ノ命、亦君所ノ惡也」

【貪婪】タンラン　むさぼりみだる。後漢書、師宣傳「有司明ニ慎選ニ一、進ニ柔良一、

退ニ一一、順二時令一、理二蒐狱一」
【貪婪】タンラン 欲界・色界・無色界の一切煩悩の境に執著して起るいろいろの見。貪は五鈍使（貪・瞋・癡・慢・疑）とて五つの邪悪なる心的作用の一。
【貪惏】タンリン むさぼりてほしいまま。宋史、仁宗紀「一一者罰、以レ殉レ貨、以レ苟為レ寧」
【貪生】タンセイ 生命をむさぼる。淮南子「或一レ一而死、或輕レ死而得レ生」
【貪惜】タンセキ むさぼりをしむ。後漢書、光武紀「諸將皆一ニ財貨一」
【貪泉】タンセン 支那の廣州に在る泉。之を飲めば貪欲の心を生ずといふ。晉書、吳隱之傳、古人云此水、一歃懐二千金一、試使二清廉飲一、終當レ不レ易レ心」
【貪煙】タンエン むさぼりて、よわし。倭人に就に作る。陳高詩「首陽餓二石貶二至一今猶一一」
【貪渇】タンカツ むさぼりて心けがる。世説「王含作二廬江郡一、一一狼藉」＝貪墨。
【貪忍】タンニン 欲ふかくしてなさじ。法訓「一一者墓レ為レ患」
【貪悖】タンボツ 欲ふかくして道にもとる。人物志「一一之性、勝則邪猛為二勝梯一」
【貪冒】タンボウ 慾ふかくむさぼる。左、昭三二「一一之民」
【貪鄙】タンピ むさぼりて心いやし。詩、魏風、伐檀序「在位一一無レ功而受レ祿」
【貪夫】タンフ 欲ふかきひと。史、伯夷傳「語曰、一一徇レ財、烈士徇レ名」徇レ財とはかねの為めに一命をすてる）
【貪兵】タンヘイ 敵の土地貨財をむさぼる兵。漢書、項籍傳「利二人土地貨寶一者、而三之一一」＝貪者敗」
【貪把】タンハ よく深くして心せまく急なり。北史、高閭傳「一一於後」
【貪官】タンカン 官吏の利をむさぼりて心のけがるをいふ。左、昭十四「貪以敗レ官為レ墨」
【貪侵】タンシン 慾深くしてほしいままにあなどる。北史、李順傳「順勲、性一一」
【貪慾】タンヨク 慾ふかくむさぼる。張衡、東京賦「進二明德一而崇レ業、滌二邊慾之一一」＝貪欲。
【貪狼】タンロウ 食をむさぼるおほかみ。耶律楚材詩「更驅二虎豹一逐二一一」
【貪婪】タンラン むさぼる。貪は金錢、婪は食物をむさぼる。離騒「衆皆競進以一一」
【貪慢】タンマン 前條に同じ。左、昭二八「一一無レ藝」
【貪吏】タンリ むさぼりて賄賂などを取る官吏。＝汙吏。
【貪昏】タンコン むさぼりてけち、次條參看。
【貪浩】タンコウ むさぼりてやぶさか。南史、何敬容傳「晉宋以來、宰相以文義一自通、敬容獨勤二庶務一」＝一、為二時所一嗤鄙一」＝貪吝。
【貪戻】タンレイ むさぼりもとる。大學「一一人一一、一國作レ亂」
【貪婪】タンラン むさぼると心清く欲少きと。貪欲と清廉と。
【貪慾】タンヨク 慾ふかくして心が其の方にひかれる。
【貪狠】タンコン むさぼりていやし。狠は鄙。宋史、王旦傳「官二輔臣一者、多二一一一」
【貪枉】タンオウ むさぼりて心がまがる。九思「一一於比、良臣守二斯國一」
【貪横】タンオウ むさぼりてほしいまま。宋史、高宗紀「鎮江都統制劉寶、以二專閫一一」

【販】ハン 願

○あきなふ、ひさぐ、やすく買ひて高く賣る。說文「買賤賣貴者」○ふりうり「負一」「一鹽」あきなひ。
【販粥】ハンシュク きぬをうる。史、酷吏傳、雒陽一一者也」
【販賣】ハンバイ ○物をやすく買ひて高く賣る。漢書、貢禹傳「市井勿レ得二一一」法「賤買貴賣曰レ販」○圖賣りさばく「一一所」
【販賣鋪】ハンバイホ 珍寶をひさぐ老人。張騫「農夫秘多長幸者、賣二鐵金為一一」
【販夫】ハンプ ほてふり、行商人。周禮、地官、司市「夕市、夕時而市、一一販婦為レ主」
【販婦】ハンプ 行商する女。前條參看。
【販貿】ハンボウ あきなふ。魏書、崔寬傳「一一來往、家產豐富、而百姓樂レ之」
【販路】ハンロ 物品のはけくち。

【貧】ヒン ビン 眞

○まづし、とぼし。富の對。財產が乏し「清一」「赤一」書、洪範「六極、四曰一」傳「困於財」○縛じて才學などの少きにもいふ。文心雕龍「才富而學一」○まづしきもの、びんばふにん。
【貧窮】ヒンキュウ 分貝に從ふ、貝は財を分ては少なく貧しくなる會意。
【貧窮】ヒンキュウ 貧・窮○貧は財なきなり。詩、邶風「終窶且貧」○窶はやつやつし、貧のおとしくして禮を備ふること無きなり、貧陋をいふ。○貧・乏の二字は並にとぼしと訓む、貧の類なり。
【貧邑】ヒンユウ まづしきむら、貧乏人の集まれる村。＝窮村。
【貧社】ヒンシャ まづしくとぼし。耗は又耗に作る。漢書、刑法志「徭役煩數、百姓一一」＝空耗。
【貧交行】ヒンコウコウ 杜甫の詩。曰く「翻レ手作レ雲覆レ手雨、紛紛輕薄何須レ數、

君不レ見管鮑貧時交、此道今人棄如レ土」

【貧漢】ヒンカン まづしき男。陽明文錄「一一作レ事、大難、富人豈知レ之」

【貧窮】ヒンキュウ まづしくくるしむ。晉、月令「賜二一一一」＝貧苦。

【貧苦】ヒンク まづしくくるしむ〔史、淮南王傳〕＝貧窮。

【貧儒】ヒンジュ まづしくしてやつれる。晉書、劉寔傳「少一一、杖レ策徒行」晉、郭璞「終窶且貧、莫レ知二我親一」＝貧陋。

【貧餓】ヒンガ まづしきをとこやもめ。鰥は六十にして妻なき者。魏書、高祖紀「太和十三年、出二宮人一以賜二北鎮人一一無レ妻者」＝窮鰥。

【貧血】ヒンケツ 體内の血液少し、又其の病「一一症」多血の對。

【貧乏】ヒンボウ びんぼう人の住むちまた、貧民窟。

【貧困】ヒンコン まづしきくに。富國の對。漢書、景十三王傳「以二母微一一寵故王二車騎一一」

【貧困】ヒンコン まづしくくるしむ。史、管晏傳「管仲一一、管與二鮑叔一」＝貧苦・貧窮。

【貧相】ヒンソウ まづしき人相。

【貧者】ヒンジャ まづしき人の稱。記「一一不下以二貧財一爲上遺」＝貧人・貧民。

【貧弱】ヒンジャク ○まづしくくるしてよわし。史、周紀「賑二一一一萌黎」○國やつれてみすぼらし。

【貧生】ヒンセイ まづしき人、貧しき書生。

【貧賤】ヒンセン まづしくくしていやし。中庸「素二一一一行二乎一一」＝貧賤。

【貧賤親戚離】ヒンセンシンセキハナル 人情の輕薄なるをいふ。曹植、感舊詩「富貴他人合、——」

【貧賤之交不レ可レ忘】ヒンセンノマジハリハスベカラズ 貧賤の時の交友は、いつまでも忘るべからず。後漢書、宋弘傳「——糟糠之妻不レ下レ堂」

【貧賤不レ能レ移】ヒンセンモヨクスルコトナシ 如何に貧賤に至るも志を變ぜず。孟、滕文公「富貴不レ能レ淫、——、威武不レ能レ屈、此之謂二大丈夫一」

【貧窶】ヒンロウ まづしき體の太平廣記「客陵之側、有二一一一居レ之」

【貧村】ヒンソン まづしきむら。＝貧邑・寒村。

【貧餒】ヒンダイ まづしくしてうゑる。晉書、天文志「盛二籠粥一以給二一一一」＝窮餒・困餒。

【貧道】ヒンドウ 僧又、道士の謙稱。石林燕語「晉宋間佛教初行、未レ有二僧稱一、通曰二道人一、自稱則曰二一一一」世說、言語「無法深在二簡文坐一、劉尹問、一一何以遊二朱門一、答曰、君自見二其朱門一、一一如レ遊二窪戸一」

【貧而樂】ヒンジテラシム 貧しくして道を樂む。論、學而「一一、富而好レ禮」

【安レ貧】アンヒン 貧窮に安んじて樂む。後漢書、蔡邕傳「一レ一樂レ賤、與レ世無レ爭」陶潛詩「一レ一守レ賤者、自古有二歎嗟一」

【貧乏】ヒンボウ 俗、貧しくして金錢・財産なきこと。

【貧病】ヒンビョウ まづしきものと、やめるものと。南史、周捨傳「救一一不レ能二自立一者」

【貧富】ヒンプ まづしきと、とめると。

【貧到レ骨】ヒンイタル 赤貧をいふ。杜甫詩「已訴二微祿一一一、正思二我馬一涙盈レ巾」＝貧微レ骨。

【貧民窟】ヒンミンクツ 國貧巷に同じ。

【貧約】ヒンヤク まづしくくるしむ。晉書、卞壼傳「廉潔倹素、居若一一」

【貧陋】ヒンロウ まづしくしていやし。宋書、徐湛之傳「初高祖微時、一一過甚」＝貧窶。

五畫

【貽】イ 支 通じて詒に作る

○のこす(遺)のこる。○おくる(贈)

【貽訓】イクン をしへを子孫にのこす。又、其のをしへ。擴徳房文「萬石一一、根二於孝友一」＝詒訓。

【貽厥】イケツ 孫をいふ。又、子孫に遺す謀の義。詩、大雅「一一孫謀、以燕二翼子一」より出でたる歇後の語。南史、到溉傳「得無二一一之力一乎」

【貽範】イハン てほんをのこす。隋銘文「憲章令典、一一萬世」＝貽則。

【貽謀】イボウ 父親が子孫にのこせるはかりごと。蔡襲詩「一一實訓明」貽厥孫看。

【賀】ガ カ 國

○よろこぶ。よろこび(慶)禮物を以て相奉慶する「慶一」「一喜」「朝一」詩、大雅「四方來一」○いはふ。いはひ(祝)○になふ(擔)

【賀正】ガセイ いはひのさかもりの席。

【賀儀】ガギ いはひのことば。＝賀詞。

貽・詒・遺・餽・饋・貺の別は詒(走部六畫)の條を見よ。○貽・餽・遺・剩の別は餽(一〇二頁四段)の條を見よ。

【貽笑】イショウ わざはひをのこす。晉書、嵇康贈秀才入軍詩「一一柳下惠」、負乘招レ悔」

賀・喜・悦・欣・歡・怡・慺・慶等の別は喜(三三九頁四段)の條を見よ。

【賀狀】ガジャウ　いはひのてがみ。
【賀頌】ガシュウ　ほめたたへる。又、其のことば。
【賀知章】ガチシャウ　字は季眞、唐の永興の人、玄宗の時、禮部侍郎と爲り、集賢學士を領ぬ、晩而放誕、四明狂客と號す、天寶の初、乞ひて田里に歸り道士となる、詔して鏡湖剡川の一曲を賜ふ、肅宗の太子たりし時、曾て總書監を授けらる、世に賀監と稱す。
【賀裝】ガサウ　朝廷又、國家に慶事ありし時、臣民より奉るよろこびの文書。南史、垣崇祖傳「高帝卽位、方鎭皆有二賀一一一」‖賀箋。

【貴】キ

㊟又、貲に作る

○たふとし（尊）賤の反對。○たふとき位、たかし（高）位高し「高ー」「富ー」「尊ー」價高し「臨ー」晉書、文苑傳「洛陽爲之紙ー」○尊稱の接頭語「ー姓」「ー國」「ー意」○たふとぶ（尚）重んずる。中庸「賤貨而ー德」○ねがふ（欲）戰國、魏策「ー合於秦以伐齊也」○省名、貴陽府に治す。

同訓異字　貴・尊・崇・上・尙・右の別は尊（五一八頁三段）の條を見よ。

【貴遊子弟】キイウシテイ　王公貴族の子弟、貴遊は上流。周禮、地官「凡國之ー學焉」
【貴要】キエウ　身分貴くして要路に居る。又、其の人。晉書、杜預傳「預在ー鎭、數斷二浪落中一一」‖權要。
【貴遠】キエン　とほきをたふとぶ。漢書、揚雄傳「凡人賤ー近而ー一」
【挾貴】キャウキ　身分の貴きことを鼻にかける。孟、萬章「不ー挾ー長、不ー一ー、不ー挾二兄弟一而友」
【貴價】キカイ　他人の召使。又使者を敬稱す。
【貴介公子】キカイコウシ　貴公子に同じ、介は大。劉伯倫、酒德頌「有二ー一指神處士一」
【貴介弟】キカイテイ　人の弟の敬稱。介は大。左、襄二六「寡君之ー一也」‖令弟。
【貴幸】キカウ　たふとびて寵愛する。史、倭幸傳「以二外戚一一」‖貴寵。
【貴庚】キカウ　おとし、人の齡をいふ敬稱。‖尊庚。
【貴客】キカク　○たふとき客。桂海志「有二一一則設二老酒冬酢一」○牡丹の異名（花譜）
【貴ン貴】キソンキソン　貴き在上の人をたふとぶ。孟、萬章「用ー下敬ー上、謂二之ー一、用ー上敬ー下、謂二之尊一ー賢」
【貴義】キギ　正義をたふとぶ。穀梁傳「春秋ー一」
【貴近】キキン　貴くして君に親み近づく。又、其の人。唐書、羅萬紀傳「不ー阿二ー一」
【貴金屬】キキンゾク　價のたかき金屬。白金、金・銀の類。
【貴玉】キギョク　○たまをたふとぶ。禮記「敢問君子ー一、而賤ー珉者何也」○たふとき玉。
【貴貨】キクワ　○たからをたふとぶ。逸周書「賤ー貪一一、是不ー知ー政」○たふときたから。
【貴官】キクワン　貴顯の稱。王僧虔、技錄「短歌行仰瞻一曲、魏文製二此辭一、以撫ー箏和ー歌、歌者云、ー一彈箏」貴官は卽ち魏文帝。
【貴ン賢】キケンケンソンケンタフトブ　賢者をたふとぶ。荀子「ー一者霸、敬ー賢者存」
【貴顯】キケン　位たふとくあらはれる。又、其の人。南史、減靈傳「雖二外戚一一、而彌自沖約、茅屋蓽門、不ー改二其舊一」
【貴公子】キコウシ　貴き家のわかもの、きんだち。‖貴介公子。
【貴國】キコク　たふとき國。國語「其ー一之寶玉、則以班加二等一益庇」
【貴仕】キシ　高き位。左、僖二三「有二大功一而無二ー一一」‖貴官。
【貴姉】キシ　○あねの敬稱。西京雜記「今日佳辰、ー一無ー二洪冊一」○女の友の敬稱。
【貴酬】キシウ　おへんじ。‖貴答。
【貴ン耳賤ン目】キジソンキソンモクタフトビミヲイヤシムモクヲ　聞く所を重んじて見る所を輕んずる。張衡「書ン客所謂末學膚受、貴ン耳而賤ン目者也」顏氏家訓「世人多ン蔽、ー一」
【貴人】キジン　○たふとき人。漢書、高帝紀「欲ン奇二此女一與ー一」○漢代、女官の名。後漢書、皇后紀「ー一金印紫綬」光武帝置く、皇后の次位。
【貴臣】キシン　位高き臣。漢書、五行志「木者少陽、ー一爾大夫之象也」
【貴爵】キシャク　○爵位をたふとぶ。禮記「夏后氏ー一而尙ン齒」○貴き爵位。又、其の人。
【貴珠】キシュ　たふときたま。抱朴子「ー一出二平牒蚌一」
【貴遲】キチ　位高くしていのち長し。易林「隆二北極一、ー一無ン極」
【貴書】キショ　御手紙。‖貴簡・貴翰・華翰。
【貴盛】キセイ　位たかく家盛んなり。史、蔡澤傳「謀位ー一」
【貴戚】キセキ　貴き人君などの親類。孟、萬章「有ー一之卿一」
【貴賤】キセン　○たふときと、いやしきと。中庸「序ー爵、所ー以辨ー一一也」‖尊卑。○價高きと、やすきと。‖高低。
【貴息】キソク　他人の子の敬稱。‖令息・令郎。
【貴族】キゾク　たふときやから。晉書、列女傳「連二姻一一、將來庶有二大益一」
【貴族院】キゾクヰン　二院制度の國家の上院。貴族・勳功者・多額納稅者を以て組織す。衆議院の對。

【貴族政治】キゾクセイジ 少數の貴族が國家の主權を握る政體。
【貴大】キダイ ほこる。誇張亮文「聖立生自一一、臧二否挙士一」＝尊大。
【貴宅】キタク 御宅。他人の家の敬稱。錢塘志「一一何所」
【貴地】キチ ○高き地位。南史、張弘策傳「不下以二一一一自高上」＝尊位。○他人の居住地の敬稱。御地。＝歸地。
【貴門】キモン 貴顯の家の子孫。唐書、王縉傳「佳高識博知二書傳一、無二一一一氣一」＝華胄。
【貴女】キジョ ○身分の高きをんな。貴婦人。○女子に對する敬語。
【貴様】キサマ たふときしるし。史、外戚世家「漢姫曰、昨暮夜、姿夢二蒼龍一、高帝曰、此一一也、吾爲レ汝、遂二感之一一幸生レ男、是爲二代王一」
【貴寵】キチョウ 位高くしてめで愛せらる。國語「身二一一一貨二功勞一」＝貴幸。
【貴賤貧富】キセンヒンプ 自ら重んじ憎みてみだりに遇まず、賤は憎（韓愈、柳宗元墓誌銘）
【貴重】キチョウ 時の相場より高く米を買り出す。北史、盧潛傳「二一其米一」
【貴賣】キバイ 時の相場より高く賣ふ。越絶書「一二粟藁一」
【貴人】キジン 人の郷里をたふとびていふ。三國志「蜀卓氏寡女、亡李二司馬相如一一風俗、何以乃爾乎」孫注が張爺に問ひし語。
【貴徳】キトク 德行をたふとぶ。禮記、昔者有虞氏一レ一而尚レ齒」＝尚德。
【貴且】キショ 高く賣ふ。晉書、載記「二一其善一」
【貴賣】キバイ 高く賣りつける。漢書、食貨志「內官一一惠妃・麗妃・華妃各一人、正一品、掌佐二皇后一論二婦禮一於內一」
【貴妃】キヒ 唐代の女官の名。唐書、百官志「內官一一惠妃・麗妃・華妃各一人、正一品、掌佐二皇后一論二婦禮一於內一」
【貴賓】キヒン たふとき客。魏書、崔逞傳「我魏不レ足二以報一一一」
【貴嬪】キヒン 女官の名。魏志、后妃傳「文帝增二一一淑媛・修容・順成・良人一一夫人位次二皇后一」
【貴婦】キフ たふとき婦人。＝貴女。
【貴富】キフ ○財貨多きを貴ぶ。禮記「殷人一レ而尚レ曲」○位高く財實多し。史記「執珪一一」＝富貴。
【貴謀】キボウ はかりごとをたふとぶ。趙充國、屯田疏「是以一レ而賤レ戰」
【貴門】キモン ○たふときいへがら。晉史、張華傳「不下爲二一一一屈上意、人士莫二然稱一レ之」＝權門・豪門。○人の家の敬稱。古詩「謝レ家來二一一」
【貴物】キブツ 物品を貯へ置き其の價の高くなるをまちて賣る。漢書、食貨志「以防二一一者一」
【貴老】キロウ ○老人を尊びて稱す。○としよりをたふとぶ。禮記「貴二有德一、貴レ貴、一レ一敬レ長慈レ幼」

【貶】 ヘン

○たなふ（賜）あたふ（與）詩、小雅「中心一一之」○たまもの、人よりの贈品の敬稱「厚一」「嘉一」「惠一」儀禮、昏禮「吾子有二惠一一室某一也」

同訓異字 貶・賜・錫・賚・給の別は賜（一八七四頁二段）の條を見よ。

【賄】 クワイ

術（一七四〇頁二段）に同じ。

【賀】 ガ 支

○たから、しんだい（財貨・財産）「家一」「傾一」○輕き罰をば、たからを出して自ら贖アガふ「一贖」○はかる（量）數へる。
【賀産】ガサン しんだい。後漢書、樊巴傳「遷二豫章太守一、郡土多二山川鬼怪一、小人常被二一一一以祈禱一」＝財産。
【賀錢】ガセン 金錢の出入をかきつける帳簿。唐書、牛僧孺傳「悉收二一一一校二計出入一」
【賀郎】ガラウ たからを出して郎官となる。又、其の人。史、司馬相如傳「以一貲爲一郎」轉じて廣く賞を納れて官となる者をいふ。
【不賀】フガ 數へきれざる程多くある。晉書、陳休奕傳「不レ得二其人一一日則所レ攜一レ一、況積レ日乎」＝無レ算。

【貳】 ジ ニ 去

○ふたつ、金穀などの數字に用ふ。＝二。○そふ（副）そへ、ひかへ「副一」「儲一」「一車」○つぐ。○かさぬ（重）曲禮「雖一不一辭」（殺膳を重ねる、二の膳）ます（益）○ふたたび（再）○うたがふ（疑）書、大禹謨「任賢勿一」○そむく、兩方に屬する「一臣」左、隱二一命「西鄙北鄙一於己」○ならぶ（竝）たぐひ（匹敵）左、哀十七「君之一也」○ふたごころ。○はなれる（離）左、襄二四「諸侯一」○わかつ（分）

補字 一は副益なり、貝に从ふ、式の聲、式は古文の二。

同訓異字 貳・添・副・倍・增の別は添（一一一頁三段）の條を見よ。

【貳公】ジコウ 三公の副官。少師・少傅・少保の書、周官「一一弘化」
【貳室】ジシツ 離宮。孟、萬章「帝館二甥于一一一」＝副宮。
【貳心】ジシン ふたごころ。詩、大雅「無レ貳二爾心一」
【貳臣】ジシン 臣節を全うせずして二君に仕ふる者。一一傳は乾隆四十一年の敕撰、明の遺臣の清朝に降附せし者の傳をあつむ。

【貳車】ジシャ　そへぐるま。補、少儀「乘二一一一則式」＝副車。
【貳味】ジミ　二品以上の食物。禮記「食不レ一一」

【貰】セイ　㊥

○おぎのる(賒)現金を拂はずに借りて物を買ふ、かけがひ「一酒」○ゆるす(恕赦)「一死」○國ヲラ物を贈られる「一物」助力を受ける「助けて一ふ」
【貰ひ酒】セタケオヒザケ　酒をかけ買する(史、高祖紀)＝賒酒。

【貸】㊀タイ　㊁トク　㊥㊎

㊀かす、金品を用立てる「一與」「一假」かし。○ほどこす(施與)○ゆるす(寛)おほめに見る「寛一」「恩一」「假一」㊁たがふ(貳)「差一」○かる(借)
【貸敷】タイ　ほどこしすくふ。蔡邕文「公開二倉廩一以一一」
【貸減】タイ　常の法律より輕くする。唐書、王世充傳「乃除結二豪傑有二聚レ衆者一皆授レ法一一、以樹二私恩一」
【貸子】シタイ　借價をいふ、子は利子を生ずるが故。周禮、注「稱レ貸、謂二一一一」
【貸除】タイ　かけにてかふ。黃庭堅詩「深恐煩二鄉里一記レ窮禁二一一一」
【貸借】シャク　かしかり。南史、王薩傳「起主聚集、輒論二夫族一更相賙誘、不レ可二一一一」
【貸賜】シイ　ほどこしにさはす。後漢書、朗顗傳「陛下誠宜レ廣二被恩澤一、一一元元」
【貸費生】タイヒセイ　官、又は其の學校より學費を貸與して學ばしむる學生。
【貸與】タイ　かす、かしあたへる。

【貯】チ　㊥　俗、又、著に作る

○たくはふ、藏ヲサめ置く、積みて備へる「積一」「滿一」○たくはへ。
同訓異義　貯・蓄・儲の別は蓄(一六六七頁)の條を見よ。
【貯金】チキン　金をたくはへる。錄異記「一一多則草木無枯」
【貯蛤】チコウ　こくもつをたくはへる。越絕書「多一一一富二百姓一」
【貯藏】チゾウ　たくはへをさめる。
【貯積】チセキ　たくはへつむ。たくはへ。法苑珠林「廢蓄二田財一過レ分一一」＝積貯・積蓄。
【貯藥】チヤク　財貨などをたくはへあつめる。魏書、王朗傳、注「兵既久屯、不レ務二營佃一、不レ修二器械一、無二有一一一」
【貯罌】チオウ　たくはへのもみ。公羊、僖三「無一一一」
【貯蓄】チチク　たくはへる。
【貯米】チベイ　米をたくはへる。唐書、李大亮傳「大亮卒、惟一一五斛、布三十端」
【貯墨筆】チボクヒツ　萬年筆。＝圖自來墨水筆。
【貯藏】チソウ　十分にたくはへ滿つる。王惲詩「清氣一一詩人牌」
【貯積】チセキ　かてをたくはへる。實地記「晉門南有二儲場一、越王一レ一處」

【貼】チョウ　㊥

○つく(依附)附金する、其の足らざるを補ふ。○安んじおちつく(安置安適)「一服」「一然」「安一」○切近する。事が相密合する「一切」○ねばりつく(黏置)はりつける「招一」「揭一」○借金のかたにおく、物を質におく「典一」○戲劇の脚色の名、元曲に一旦の名あり(正旦の對)明代の傳奇に省して一と爲す。○圖ヲ藥の包ミツを數へる數詞。
【貼黃】チョウ　○唐代、詔敕を改めるにいふ、詔敕は黃紙に記す、故に之を改むるときは、同じく黃紙をはりつける。石林燕語「唐制降レ敕、有レ所二更改一、以レ紙貼レ之、謂二之一一」、凡敕書用二黃紙一、則貼者亦黃紙也」○政府又は君主に奉る文書の大要を黃紙にしたためて其の文書の末にはりつけるもの。
【貼書】チョウショ　書吏カクの助手。金史、赫レ用二一一」＝貼寫。
【貼夫】チョウフ　まとこ(雜助職)＝義夫。私夫。
【貼墨】チョウボク　試驗の一法、經書中の一行を示し前後を掩ひて之を通讀せしむるもの。＝帖試・帖括。
【貼用】チョウヨウ　はりつけ用ふる「印紙一一」

【買】バイ　㊥

○かふ(市)金錢を出して物品を求める。說文「出物曰レ賣、入物曰一一」○求める、受ける「一一」「一怨」
同訓異義　買・沽・酤・市・賈・貿・糴○買はかひて、あきなひする、大買する義。○沽は、うるとも、かふとも訓む、小買する義。○酤は沽に同じ。○市は店にあるものをかふ。論語「沽酒市脯不レ食」○賈は價を出して物を受け、あきなひするなり。韓非子「長袖善レ舞、多錢善賈」また、うるとも訓む。論語「求二善價一」賈儲○貿は物と物とを交換するなり。呂覽「男女貿レ功」○沽は音チキかひよねと訓む。米を買ひ入れる義。
【買嫌】バイ　わざはひを受ける。戰國策

「所レ謂市レ駿而ーレー者也」

【買官】バイ　費を納れて官を求める。後漢書、崔寔傳「崔公冀州名士、豈待ーレー」

【買骨】バイ　涓人の死馬の骨を五百金にて買ひたる故事、賢人を求むるに急なるにいふ。戰國、燕策「古之人君、有下以二千金一使中涓人求上二千里馬一者上馬已死、買二其骨五百金一而歸」

【買山】バイ　隱退せんが爲めに山をかふ。雲溪友議「匡廬載符山人、遊二三尺童子一、竇二數編文書一、乞ニーレー錢百萬一」溫庭筠詩「誰言有二策堪一經世一、自是無錢可ーレー」世說「求レ開巢由、ーレー何能」

【買收】バイ　〇かひ取る。〇國金錢又は他の利を贈はせて人を我が味方にする。

【買笑】バイ　寶買。張羽詩「一紙千金爭ーー」

【買笑】バイ　うれひを求め招く。鄭谷詩「買花不レ得ーレー來」

【買臣之妻】バイシンノ　漢の朱買臣の妻、夫の貧乏を恥ぢて自ら去る、後、買臣會稽の太守となるに及び其の妻自ら縊れて死せし故事「漢書、朱買臣傳」

【買取】バイ　買ひ取る。西域記「ーニー此處ニ與二遠ニ斯寺一」

【買春】バイ　酒を買ふ。司空圖詩品「玉壺ーレー、貰二南茅屋一」

【買棄錢】セイシュン　酒食の費用。承平舊事「進士不レ第者、視レ供二酒肉費一」

【買醉】スイ　酒を買ひて醉ひを求めること。李白詩「託レ交從二劉孟一、ーレー入二新豐一」

【買笑】セウ　〇人にわらはれる。〇妓に狎るるをいふ。劉禹錫詩「猶自經營ーー金」

【買辦】バイ　國洋行・銀行等にて交易の媒介を爲す人をいふ。

【買名】バイ　名譽を求める。南史、陳寄傳「吾豈ーレー求レ仕者乎」江淹賦「率歸二骨於松柏一、不レ一ニー於城市一」

【買惡】コ　ほまれを求める。王陵更文「實二劉廷之罠一以ーレー」‖沽名。

【買鄰】バイリン　鄰を擇びて居る義。南史、宋季雅傳「潛康郡市レ宅居二呂僧珍宅側一、僧珍問二買レ宅價一、曰、一千一百萬、怪二其貴一、季雅曰、一百萬買レ宅、千萬ーレー」

【費】ヒ　㊀ヒ　㊁フツ　物　未

㊀つひやす、つかふ（使用）金品をつかひへらす、財を散ずる。〇へらす（耗損）「ーー力」「ー心」〇つひえ、いりめ、ものいり「入ーー」「ー用」「私ーー」「官ーー」「歲ーー」「經常ーー」〇むだ（冗）「ー何」「辭ーー」〇道の用の廣大なる義。〇姓。ーー禕は三國の蜀の人、董允と名を齊うす。㊁もとる。〇道の功用廣し。

【費隱】ヒイン　費は聖人の道の功用の廣く大いなる義、隱は其の至小至細なる義。中庸「君子之道、費而隱」

【費耗】カウ　つかひへらす。又、つひえ。漢書、黃霸傳「公私ーー、皆出二於民一」

【費句】ク　むだな文句。梁武帝文「遊詞ーー、無レ取二於實錄一」

【費散】サン　つかひちらす。魏書、李平傳「有司繩以ーー之條、免二其官一」‖耗散。

【費目】ヒモク　口をむだにつひやす。易林「徒非二其人一、ーレー無レ功」

【費心】ヒシン　心を用ひへらす。杜甫詩「ーー姑息是一役、肥肉大酒徒相要」‖費神。

【費精】ヒセイ　つかひつひやす。‖消費。

【費長房】ヒチヤウバウ　後漢の汝南の人、壺公に從ひて仙を學ぶ「後漢書、方術傳」

【費途】ヒト　金品のつかひみち。

【費目】ヒモク　費用の細目、いりめのくちわけ。

【費用】ヒヨウ　いりめ、つひえ。史、體書「執知二夫輸ーーー之所中以養中財也」

【費力】ヒリキ　精力を耗費する。故に爲し難きの事をーーと謂ふ。

【貢】コウ　㊀と　國㊁フン　㊂フン・カン　㊃フン　㊄カン　元　冬　物

㊀かざる（飾）あや、かざり（文飾）光明の貌。易、賁卦「山下有二火一」〇易の卦の名、離下艮上。㊁おほいなり（大）「ー鼓」㊂わきたつ（湧起）穀梁、僖十「覆酒於地一而地ーー」〇いきどほる。‖憤。㊃やぶる（覆敗）「ー軍」‖僨。㊄いさむ。又、勇士。〇はしる、古、奔に通ず。〇人名「虎ー」「孟ー」

【賁來】ライ　人の己の家に訪ひ來ることの敬稱。賁は飾、光彩を添ふる義。詩、小雅「皎皎白駒、賁然來思」思は助字。

【賁臨】リン　人の來ることの敬稱。御來臨。前條參看。‖賁來・光臨。

【賁軍】グン　やぶれいくさ。禮、射義「ーー之將」‖敗軍。

【賁鼓】コ　大いなるつづみ。詩、大雅「ーー維鏞」‖巖鼓。

【賁育】イク　孟賁・夏育の二人、共に古の勇士。戰國策「烏獲之力而死、ーー之勇而死」

【貶】ヘン　琰

○おとす。おつ（失墜）○しりぞける（謫）官位をしりぞける「一官」「一秩」○へらす（減損）○そしる（刺）褒の對「褒一」

同訓異義 貶・退・屏・斥・卻・黜・擯の別は退（辵部六畫）の條を見よ。

【貶降】官位をおとししりぞける。後漢書、陳球傳「順朝無二一一之文」‖貶退。

【貶黜】稱號の名號を引き下げる。史、衞世家「更一レ一曰レ侯、嗣君五年、更一レ一曰レ君」

【貶坐】官をしりぞけおとす。後漢書、馬嚴傳「選舉不レ實、皆無二一一、是使二臣下得一作二威福一也」

【貶殺】へらしそく。蘇軾、再上二鼎書一「一二一軍分」

【貶爵】くらゐをおとす。孟、告子「一不レ朝、則貶二其爵一」

【貶斥】おとししりぞける。柳宗元文「凡吾之一一亦幸矣」‖貶黜。

【貶責】官をおとしてせめる。左傳、注「不レ待二一一一、而自明也」

【貶損】へらす、おとす。周禮、秋官「刑劇國事、有レ所二一一一一」

【貶退】官をおとししりぞける。漢書、魏相傳「考二案郡國守相一、多レ所二一一一」‖貶降。

【貶謫】官位をおとして遠方へ流す。‖貶流・配流。

【貶竄】おとしうばふ。晉書、庾純傳「敢以二私讐一一一公論一」

【貶黜】官をおとししりぞける。漢書、章元成傳「自傷レ一一父爵一」‖貶斥。

【貶削】おとす。蘇軾文「輒一一命二一錢不一直」

【貶流】貶謫に同じ。

【貶戮】官をおとししりぞけて罪する。晉書、荀堅傳「資陳無二成實一、宜二一一一」

【貿】ボウ　㊃

○かふ、かへる、賈ナルを爲して品物をとりかへる（交換）「一易」○かはる。昭明太子文「炎涼始一、觚與白高」○うる（市）かふ（買）時、衞風「抱レ布一レ絲」あきなふ（商）○一一は目のかすみて明かならざる貌。

同訓異義 貿・買・沽・酤・市・賣・糴の別は買（一八六七頁四段）の條を見よ。

【貿易】各地の產物を取り換へてあきなひする。史、貨殖傳「以レ物相一一」今は外國との物品の取引に用ふ。

【貿易風】赤道の南北三十度以內の海上に生ずる恒風。風向きが一定して貿易船の航行に便なるが故。

【貿功】互にほねをりを、とりかへる。元倉子「男子不レ織而衣、婦人不レ耕而食、男女一レ一、相資爲レ業」

【貿首之讐】くびを易へ取らんとする程のかたき。不二共戴一レ天といふに同じ。戰國策、甘茂與二樗里子一一一也」

【貿販】品物を交換してあきなひする。晉書、荀堅載記「自二長安一至二諸州一、皆夾レ路樹二槐柳一、二十里一亭、四十里一驛、旅行者取二給于途一、工商一一于道一」

【貿貿】目の明かならざる貌。檀弓「有二醉者一、扶レ持レ屋、一一然來」‖蒂昏。

【貿名】名を求める。淮南子「公孫龍棄二於辭一而一一」‖沽名・買名。

六畫

【賄】クワイ　㊥　㊦　通音ソイ

○たから（財貨）「財一」財帛の總名。○おくる（贈）財を人に贈る。左、文十二「厚一レ之」○利益を得んが爲に密に物を贈る、まひなふ。又其の贈物、袖のした「一賂」「收一」「贈一」○㊥食事のしたく。又、其の所。又其の人。○㊦食事をとりつくらふ。

【賄賂】まひなひ、義に合はざるたからを人に贈る。春秋胡傳「一一公行、上下離析」

【賈】㊀コ　㊁カ　㊥　㊦

㊀かふ（買）もとむ（求）物をあがなひ求める。○轉じて廣く求める、まねく、來す「一怨」「一禍」「一害」○うる（市・售）○あきうど（商人）「商一」「富一」史、老子傳「良一深藏而若レ虛」行きて賣るを商といひ、處りて賣るを一といふ。○しろもの（商品）○あきなふ。あきなひ。㊁あたへ（直）ね。子罕「求善一而沽諸」‖價。○姓、一說は漢の洛陽の人。

同訓異義 賈・賣・沽・售・糴の別は賣（貝部八畫）の條を見よ。○賈・買・沽・酤・市・貿・糴の別は買（貝部五畫）の條を見よ。

【賈奔】㊥㊦四楚天の一、雲夢七澤「四楚天元始曰二常融天一、主路天一、楚度天一一天」

【賈怨】人よりうらみを受ける。國語「以レ誼一レ一、不レ可レ謂レ賈」

【賈客】自らわざはひをまねく。左、桓十「四夫無レ罪、懷レ璧其罪、吾焉用レ此、其以一レ一也」

【賈倫】口錢をとるあきうど、さいとり。朱松文「惟勞利之狗、乃無二以異一於一一之突一」

【買胡】ばいこ　えびすのあきうど。後漢書、馬援傳「烏伏波擊二西域一、到二一處一輒止、以レ是失レ利」

【買奴】ばいど　商人をいやしめていふ。漢書、張良傳「其將屠者子、一一易二動以一レ利」

【買舶】ばいはく　商船。漢書「破毒一一轉盛致レ之」＝賈舶。

【賈舶】あきなひぶね。周邦彥文「越鯷吳艘、官幾一一」＝商舶・賈船。

【賈誼】かぎ　漢の洛陽の人、少にして頴悟、年二十、孝文帝に召されて博士となり、一歲中に太中大夫に至る。誼、正朔を改め禮樂を起さんことを請ひ、大臣の忌む所となり、長沙王の大傅に貶せらる。後、梁の懷王の大傅に拜せらる。年、三十三にして卒す。新書・賈長沙集の著あり。治安策・過秦論の文最も著る、世に賈太傅と稱し、又年少にして秀才なるを以て賈生と稱す。

【賈山】かざん　漢の潁川の人、書記を沙汰す、孝文の時上書して治亂の道を言ふ、秦を借りて喩となし、名つけて至言といふ。

【賈生】せい　賈誼を見よ。

【賈島】かう　字は浪仙、唐の范陽の人、初め僧となり、無本と號せしが、其の詩を善くするを以て、韓愈の知る所となり、還俗して長江の主簿となる、時に賈長江と稱す。

【賈晁錯】かちょうさく　漢の賈誼、晁錯のともに文帝の時に名あり、時人賈晁と稱す。

【賈人】こじん　あきうど。商人。

【賈豎】こじゅ　商人をいやしめていふ。漢書、張良傳「其將屠者子、一一易二動以一レ利」

【賈船】こせん　商船。漢書「破毒一一轉盛致レ之」＝賈舶。

【賈舶】こはく　あきなひぶね。周邦彥文「越鯷吳艘、官幾一一」＝商舶・賈船。

【賈誼】こぎ　漢の洛陽の人、少にして頴悟、年二十、孝文帝に召されて博士となり、一歲中に太中大夫に至る。誼、正朔を改め禮樂を起さんことを請ひ、大臣の忌む所となり、長沙王の大傅に貶せらる。後、梁の懷王の大傅に拜せらる。年、三十三にして卒す。新書・賈長沙集の著あり。治安策・過秦論の文最も著る、世に賈太傅と稱し、又年少にして秀才なるを以て賈生と稱す。

【賈山】こざん　漢の潁川の人、書記を沙汰す、孝文の時上書して治亂の道を言ふ、秦を借りて喩となし、名つけて至言といふ。

【賈生】こせい　賈誼を見よ。

【賈島】こかう　字は浪仙、唐の范陽の人、初め僧となり、無本と號せしが、其の詩を善くするを以て、韓愈の知る所となり、還俗して長江の主簿となる、時に賈長江と稱す。

【賈晁錯】こちょうさく　漢の賈誼、晁錯のともに文帝の時に名あり、時人賈晁と稱す。

【賈客】こかく　あきうど。商人。

【賈胡】ここ　えびすのあきうど。後漢書、馬援傳「烏伏波擊二西域一、到二一處一輒止、以レ是失レ利」

【賈豎】こじゅ　商人をいやしめていふ。漢書、張良傳「其將屠者子、一一易二動以一レ利」

【賈船】こせん　商船。漢書「破毒一一轉盛致レ之」＝賈舶。

【賈舶】こはく　あきなひぶね。周邦彥文「越鯷吳艘、官幾一一」＝商舶・賈船。

【賈誼】こぎ　漢の洛陽の人、少にして頴悟、年二十、孝文帝に召されて博士となり、一歲中に太中大夫に至る。誼、正朔を改め禮樂を起さんことを請ひ、大臣の忌む所となり、長沙王の大傅に貶せらる。後、梁の懷王の大傅に拜せらる。年、三十三にして卒す。新書・賈長沙集の著あり。治安策・過秦論の文最も著る、世に賈太傅と稱し、又年少にして秀才なるを以て賈生と稱す。

【賈山】こざん　漢の潁川の人、書記を沙汰す、孝文の時上書して治亂の道を言ふ、秦を借りて喩となし、名つけて至言といふ。

【賈生】こせい　賈誼を見よ。

【賈島】こかう　字は浪仙、唐の范陽の人、初め僧となり、無本と號せしが、其の詩を善くするを以て、韓愈の知る所となり、還俗して長江の主簿となる、時に賈長江と稱す。

【賈晁錯】こちょうさく　漢の賈誼、晁錯のともに文帝の時に名あり、時人賈晁と稱す。

【賈客】こかく　あきうど。商人。

【資】シ　圖

○たすく(助)たすけ「師一」○あたふ(給)戰國、秦策「王一臣萬金」○とる(取)易、乾卦「萬物一始」○もちふる(用)○よる(託)○もたらす(齎)○はかる(謀)○よりどころ(託所)○たから(貨)「一財」○いりめ(費用)「嫁一」「學一」「軍一」○もと、たね(材料)○もとで「一本」○もとでとする。韓、送溫造「一幹甫適諸趙」○みぶん(身分)くらゐ(地位)「一格」○うまれつき(性質)「天一」「英一」

【資助】しじょ　資・助・輔・弼・翼・扶・佐・佑・援・贊・襄・介の別は助(三四七頁三段)の條を見よ。

【資取】しゅ　取・執・秉・把・操・採等の別は取(三九三頁二段)の條を見よ。

【資薦官】しせんくわん　父祖の功績の蔭ゲにて其の子孫の授けられたる官。通鑑、胡三省、注「資薦謂下隨二資品一得上薦二其子若孫及曾孫一」＝蔭緒。

【資格】しかく　○身分又、地位。唐書、選擧志「用循二一一無問二能否一」○其の事物につきての要件。

【資給】しきふ　たすけあたへる。職志、鄭玄傳「恰二其家貧一一資厚」

【資財】しざい　○たから。＝貨財。○うまれつき、財は材(漢書、食貨傳)

【資質】ししつ　女の嫁入などの仕度。

【資産】しさん　しんだい。＝財産。

【資始】しし　取りてはじまる。易、乾卦「大哉乾元、萬物一一」

【資質】ししつ　うまれつき。後漢書、吳良傳「一一敦固、公方廉恪」＝資性。

【資須】しゅ　とりてもちふる。南史、蔡廓傳「有レ所二一一、皆就二典者一請焉」

【資生】しせい　取り用ひて生ずる。易、坤卦「至哉坤元、萬物一一」

【資性】しせい　うまれつき。漢書、霍光傳「止進有二常處一便射竊視之、不レ失二尺寸一、其一一端正如レ此」＝資質。

【資政】しせい　宮殿の名、宋の眞宗、龍興閣を建て、閣の東序を以て一一殿と爲す、王欽若、參政を罷む、眞宗特に一一殿學士を置きて之を寵す、班、翰林學士の下に在り、欽若悅ばず、眞宗欽若を以て一一殿大學士と爲す、班、翰林學士承旨の上に在り、後、宰相の職を罷むる、多く此官を授く。

【資送】しそう　よめいりの支度をととのへておくる。晉書、紀瞻傳「一一同二子所生一」

【資治】しち　國家を治めたすけとする。唐書、陸贄傳「上書言、治或生レ亂、亂或レ一、有二以レ無一レ難而仁二有レ以二多難一而興一」

【資治通鑑】しぢつがん　二百九十四卷、宋の司馬光撰す、周の威烈王より五代に至る事實を編次す。

【資蓄】しちく　金銀の類。北史、獨孤羅傳「資二田宅一、遺以二一一」

【資儲】しちょ　たくはへ。晉書、簡文帝紀「詔、今一一漸豐、可二漸量增修一」

【資望】しばう　家資ガと名望と。蔡襲、制策「王者用二人之要術一、惟一一而已」＝資格名望。

【資品】しひん　うまれつき、たち。晉書、賀循傳「臨機蒞レ衆、識量一一、謹修二一一、乞レ與二簡察一」

【資斧】しふ　ろぎん。旅費、斧はをの、古、旅行の時、攜へて荊棘をきりはらふ用に供す。易、旅卦「得二其一一一」＝川資。

【資辯捷疾】しべんせふしつ　辯舌がすぐれてはやく氣がきく。史、殷紀「一一金」「一一家」轉名、取音二一一也」

【資本】しほん　もとで「一一金」「一一家」轉名、取音二一一也」

【資用】しよう　入用の金品。

【資力】しりょく　基本となる力。又、もと

で。魏志、鍾會傳「蜀國小民疲、一一單弱」
【資料】シリョウ　もと、たね。‖原料・材料。
【資歴】シレキ　資格と經歴。張九齢文「一一之者、更修其德」

【賊】ゾク　ソク　㊥

○ぬすむ(盗)ぬすびと。○そこなふ(殘害)論、先進「一夫人之子」やぶる(敗)こわす(殺)書、舜典「結繩一刑」○おびやかす(刼)○しへたぐ(虐)○害悪をなす者。○國家を亂すもの、不忠不孝の者、邦上「亂臣一子」○外國よりせめ來るあだ、外寇。○苗の節を食ふ害蟲。詩、小雅「去其螟螣及其蟊一」

【賊害】ゾクガイ　そこなふ。劉楨、爲二曹植一贈二上書一「一一忠臣一副二助好盛一」
【賊戦】ゾクセン　正しき道をそこなふ。孟、梁惠王「一一者、謂二之殘一」
【賊虐】ゾクギャク　そこなひしへたぐ。書經「一一無辜」
【賊魁】ゾクカイ　賊のかしら。‖賊首。
【賊巣】ゾクソウ　賊のすみか。唐、杜牧傳「一一一一」
【賊子】ゾクシ　○大不孝の子。論、魯文公「孔子成二春秋一而亂臣一一懼」○むほん人、反逆の徒。
【賊臣】ゾクシン　不忠の臣、むほんする臣。‖叛臣・逆臣。
【賊情】ゾクジョウ　賊のやうす　賊の形勢。
【賊首】ゾクシュ　○賊のくび。宋史、韓琦傳「一一已梟二麾下一矣」○賊のかしら。‖賊魁。
【賊盗】ゾクトウ　ぬすびと。春秋、注「反與二小人一爲一一之計一」‖盗賊。
【賊徒】ゾクト　賊のなかま、むほん人のともがら。
【賊発】ゾクハツ　倍を荒りていふ。閒耕餘錄「今人罵レ人、輒云一一一、按梁荀濟表云、朝夕敬二妖怪之胡鬼一、曲躬供二酒漿一曰、我不二同レ汝反一、何不二我殺一、衆前殺レ之、後益二忠烈一」文天祥、正氣歌「或爲二一一一」

【賊レ賊先撃レ王】ゾクヲタツニハマズオウヲウツ　其の部下をとりこにするには、先づ其の渠魁をとりこにすべしとの義。杜甫、前出來詩「射レ人先射レ馬、一一」

【賃】チン　㊥

○やとふ。やとはる(傭)「春一一史、范雎傳「臣爲二人傭一」○かす。○やとはれ、やとひ。○ちんせん、やとひ人にやる報酬「一金」「僕一」○國代價、報酬「家一」「運一」
【賃銀】チンギン　やとひ人に渡す錢。‖賃錢。
【賃借】チンシャク　賃錢を受けてはたらく。漢書、兒寬傳「時行一一、帶レ經而勤」
【賃傭】チンヨウ　ちん錢を出して人を雇ふ。放翁絶詩「月窠供一一一」
【賃雇】チンコ　賃錢をもらひて字をうつす。南史、庾震傳「喪レ親、貧無二以葬一、一一以營レ事」‖傭書。
【賃直】チンチ　人にやとはれてうすをつく。後漢書、梁鴻傳「爲レ人一一」
【賃錢】チンセン　賃銀に同じ。

食淫之一一、則此語自二六朝時一已有レ之」
【賊盗】ゾクトウ　盗賊に物をうばひとられるわざはひ。
【借二賊兵一】ゾクヘイヲカス　賊に便利を與へる。兵は兵器。荀、大略「非二其人一而教之、斎二盗糧一」――也」‖藉二寇兵一(李斯、諫二逐客一書)
【賊匪】ゾクヒ　ぬすびと。‖盗賊。
【賊軍】ゾクグン　賊軍のとりで。

【賂】ロ　遇

○おくりもの、財を以て人に與へる。○まひなひ、賄み入れる事ありて私ㇾに物を贈る、賄一ワイ一を贈る。○おくる(遺)まひなふ。○たから(貨財)
【賂遺】ロイ　まひなふ。又其の物。
【賂謝】ロシャ　まひなひの金品。宋史、方技傳、爲二轉運小吏一不レ受一一一一」‖賄謝。

七畫

【賦】キュウ　尤

まひなひ(賄賂)財を以て法を枉げる、賊を受ける。史、酷吏傳「又恐受一一枉レ法」
【賦賂】キュウロ　まひなひ。漢書、王莽傳「郡縣賊盗、遮相一一、白黒紛然」‖賄賂。

【賑】㊀シン　㊁シン　軫　震

㊀にぎはふ、にぎやか「殷一一」○とむ(富)繁昌する、財に豊かなり。㊁あたふ(給)○めぐむ、ほどこす、にぎはす。振に通ず。○たす(贍)○國にぎやか、さわがし、陽氣である。

同訓熟語 救・給・賑・賂・賚・賓・賜

【賑】シン　にぎはす・にぎはし・にぎはふ　貧しきものを救ひめぐむ。振と通ず。史記「虚二郡國倉廩一以賑二貧民一」○則は不自由なきやうに給し與へる義。類聚、出二倉見穀一以賑二貧乏者一」○胆は周くゆきわたるやうに給する、論なり。家訓「劇レ窮卹レ匱」

【賑救】シン　にぎはしすくふ。＝振救・賑濟。

【賑給】シン　にぎはしあたへる。後漢書、第五訪傳「開レ倉一一」

【賑貸】シン　にぎはしまもる。後漢書、安帝紀「其務農二一勸課一」

【賑濟】シン　にぎはしすくふ、財を以て災害流凶を救ふ。＝賑救。

【賑恤】シン　財物をにぎはしたまふ。後漢書、安帝紀「一一貧人」＝賑與。

【賑恤】シン　にぎはしめぐむ、ほどこす。沈約文「詳加二一一」＝賑卹。

【賑給】シン　にぎはし足す。後漢書、鄭頴傳「稟二卹貧人一一二孤寡一」

【賑田】シン　賑濟に備へる田地、義田にあれり「續會典」

【賂】ロ　○おぎのる、現金を拂はずして物をかふ、かけがひ、かりて買ふ「一酒」＝貰。○かす、かけうり。○とはし（遠）はるか（遙）杜甫詩「爲一一去國一一」ながし（長）久し。○おそし（遲緩）梁簡文詩「珠簾夕漏一一」○おごる。おごり。後漢書、仲長統傳「楚楚衣服戒二窮一一」＝奢。

【賂遙】ロヨウ　はるか。嵇康文「宅之吉凶、其報一一」

【賂貰】ロセイ　かす。周禮、地官、注「民無レ貨、則一一而予レ之」

【賂貸】ロタイ　かす。漢書、食貨志「夫周幣有二一一一、樂語有二五均一」

【賓】ヒン　㊀ヒン　㊁ヒン　㊂ 賓は俗字

【賓客】ヒンカク　○きやく、來客の總、公治長「可レ使レ與二一一一言一也」○官名、太子の輔導の役「太子一一」「東宮一一」

【賓館】ヒンカン　賓客の居る所。評論詩「一一有レ魚爲レ客久、鄰舊無レ雁到レ家遲」

【賓貢】ヒンコウ　外國人が從ひ來りてみつぎ物を奉る。儀禮、覲上三等相一書「九夷八蠻之在二堂廟之外一者、皆已一一」

【賓興】ヒンコウ　周代、士人を採用する法、鄉飲酒の禮を以て賓客として禮ぐる。興は擧。周禮、地官「以二鄉三物一一二萬民一而一一之」

【賓次】ヒンジ　賓客を請待するところ。宋史、禮志「諸王納レ妃、視二前一日、主人設二一一一如二常儀一」

【賓師】ヒンシ　大名より客分として待遇せらるるもの。孟、公孫丑、注「孟子之於レ齊、處二一一之位一」

【賓辭】ヒンジ　論理學にて命題の主辭の意義を表はす語。文法上の客語に同じ。

【賓主】ヒンシュ　お客と主人と。孟、萬章「迭爲二一一一」＝主客。

【賓從】ヒンジュウ　來り從ふ。史、五帝紀、諸侯皆來一一」＝賓服。

【賓接】ヒンセツ　賓待に同じ。宋史、徐國長公主傳「夫凜數千人、一一甚盛レ禮」

【賓待】ヒンタイ　お客としてあひしらふ。南史、騶衍牙傳「知二其非常人一、一一甚厚」＝賓接。

【賓頭盧】ビンズル　㊀自頭尊者の名ある羅漢、佛敕を受けて涅槃に入らず、天竺摩利支山に住して、末世の供に應じ大福田となるといふ「雜阿含經、又、梵網經」＝賓頭盧尊者。

【賓白】ヒンパク　せりふ「西河詞話」＝科白。

【賓服】ヒンプク　來りてしたがふ。禮、樂記「皆民不レ作、諸侯一一」

【賓朋】ヒンホウ　まらうど、來賓。孔貶仲詩「時邀二一一一飲二野史一」

【賓禮】ヒンレイ　賓客をもてなす儀式。禮記「一一親レ親以レ讓」

【賓】ヒン　賓（前條）の俗字。

八畫

【賡】カウ　○つぐ（續）○歌をつぐ。＝揚は一歌揚言にて連續して歌言する義。揚は唱

同訓熟語 つぐ・續・繼・嗣・紹・繩・接・襲・尋・次・亞の訓は續（一五〇七頁二段）の條を見よ。

【賡歌】カウカ　人と詩歌をつぎうたふ。書、益稷「乃賡載歌」

【賡酬】カウシウ　人と詩を贈答する。張耒詩「朝有二西隣詩句好一一一日自忘レ機」＝酬賡。

【賢】 ケン　先　賢は古字

○かしこし、才智がすぐれる、善行がある「―能」易、鼎卦「大亨以養聖―」○かしこしとする。論、學而「―賢易レ色」○かしこし（善）○まさる、すぐれる（勝）論、子張「子貢―於仲尼」○他の語に冠して敬稱とす「―兄」「―郎」

同訓異語　カタ賢・優・勝・愈の別は優（一七四頁三段）の條を見よ。

【賢友】ケンユウ　かしこきともの論、季氏「樂レ多ニ―一益矣」

【賢英】ケンエイ　かしこくすぐれたる者。漢書、武帝紀「陛下從レ代來、每レ朝郎官上二書疏一未レ嘗不三止レ車受二其書一、或下以二其言一而天下―士大夫一日聞レ所レ不レ聞以益レ聖」

【愛レ賢】アイケン　賢才を愛する。宋之問、梁王挽詞「――慨軸レ國」

【賢レ賢】ケンケンス　賢人を賢人としてたつとびうやまふ。論、學而「―レ―易レ色」

【希レ賢】ケンニキガフ　賢人たらんことをのぞむ。通書、士―レ、賢希レ聖、聖希レ天」

【新レ賢】ケンヲアラタム　賢人をねたむ。史、高祖紀「項羽―レ―嫉レ能、所三以失二天下一也」

【見レ賢思レ齊】ケンヲミテハヒトシカラントヲオモフ　賢人を見て、己もかそれと等しくならんことを思ふ。論、里仁「子曰、――焉、見二不賢一而内省也」

【賢豪】ケンガウ　かしこくすぐれたる者。詩、大雅「獨能容レ我眞―一」

【賢愚】ケングウ　かしこきと、おろかなると。千寶、晉紀總論「―― 咸懷、小大爭レ力」＝賢不肖。

【賢君】ケンクン　かしこききみ。漢、親士「雖レ有ニ―一、不レ愛三無功之臣一」＝賢主。

【賢兄】ケンケイ　朋友などに對して用ふる敬稱。

【賢彦】ケンゲン　かしこくすぐれたる者。彦は美士。晉書、諸葛傳「華池戰屋、廣延ニ―一」＝俊彦・英彦。

【賢才】ケンサイ　すぐれたるはたらき。又、其の人。書經「任レ官惟―一、左右惟其人」

【賢勞】ケンラウ　かしこきをひ。王維詩「聖親爲二令子一、似レ別卽―一」

【賢操】ケンサウ　かしこきみさを。漢書、張湯傳「湯客田甲、有ニ―一」

【賢人】ケンジン　○かしこきひと。易經「可レ久則賢人之德、可レ大則―一之業」＝賢者。○濁酒の異名。聖賢（一五頁七段二段）參看。

【賢臣】ケンシン　かしこき臣。漢書、司馬遷傳「貴以二古―一之義一」

【賢相】ケンシャウ　かしこき宰相。史、齊相國世家「秦以二黃老術一相レ齊九年、齊國安集、大稱ニ―一」史、自序「國有ニ―良將一、民之師衆也」＝良相・名相。

【賢者過レ之】ケンジヤコレニスグ　賢人は中庸に過ぎて、高卓の行を爲す。中庸「子曰、道之不レ行也、我知レ之矣、知者過レ之、愚者不レ及也、道之不レ明也、我知レ之矣、――、不肖者不レ及也」

【賢主】ケンシュ　かしこききみ。呂覽「―― 務レ求レ人、而佚二于治一事」

【賢首宗】ケンジュシュウ　佛教の一派、華嚴は法經の玉たり、唐杜順和尚經に依りて觀を立つ、是を初祖と爲す、其の道を繼ぐ者、雲華智儼・賢首法藏、搜玄・探玄等の記を作り、清涼國師、華嚴疏鈔を作り、奥義大いに明かなり、一名華嚴宗又法界宗と名つく。

【賢淑】ケンシュク　かしこくして善し。白居易詩「掖門女淸貧、婁氏纔―一」

【賢俊】ケンシュン　才のすぐれたる者。漢書、文帝紀「延二登―一」

【賢聖】ケンセイ　○かしこくすぐれる。○賢人と聖人と。孟、公孫丑「―一之君、六七作」

【賢聖障子】ケンジャウノシヤウジ　圖古、紫宸殿内にある障子、東四各四間に支那の三代より唐代までの賢聖名臣三十人の像をかきしもの。

【賢智】ケンチ　ちゑありてかしこし。韓非子「―― 未レ足二以服レ衆」

【賢弟】ケンテイ　かしこきおとうと。史、孟政傳「妾其奈何、長二殺レ身之讐一、絶滅ニ―一之名一」

【賢哲】ケンテツ　かしこくさとし。又、其の人。高適詩「世情逐レ貴賤、夫子愼ニ―一」

【賢内助】ケンナイジョ　賢妻に同じ。宋史、孟后傳「宜仁太后語レ帝曰、得ニ――、非二細事一也」

【賢哉】ケンナル　人の才德のすぐれたるを賛歎する辭。論、雍也「―― 回也」

【讓レ賢】ジヤウケン　己にまさりたる者にゆづる。荀子「人臣輕二職業一―― 而安陋二其後一」

【賢能】ケンノウ　德あるものと才智あるものと。漢書、董仲舒傳「―― 佐レ職」

【賢髦】ケンバウ　すぐれて賢き士。李嶠詩「左右環列俱ニ―一」

【賢妃】ケンピ　女官の名。唐書、百官志「内官有ニ――一正一品」

【賢婦】ケンプ　かしこきつま。女德のすぐれたる女。後漢、梁鴻傳「配レ所レ謀、門生走入告二其婦一、婦正在二機中一、神色怡然曰、蚤知二御耳一、阮氏之達、吾以爲レ非ニ――一也」

【賢母】ケンボ　かしこきはは。詩經、疏「文王所二以得一聖一由二其――所一レ生」

【賢輔】ケンホ　かしこき補佐の大臣。後漢書、梁商傳「梁商稱爲ニ――一」

【賢明】ケンメイ　かしこくあきらか。王褒、聖主得二賢臣一頌「故世必有二聖智之君一、而後有ニ――之臣一」

【賢郎】ケン人のむすこの敬稱。世說補「遠察公七歲詠二荒山一、其師謂二其父一曰、一一非レ凡」‖令郎・令息。

【賢愚】ケン賢才あるが爲めにかへりて禁苦する者。孟、萬章「此莫レ非二王事一、我獨一一也」

【賢良】ケン〇かしこくしてよく良。周禮「二曰二友行一、以賓二一一一」〇一一方正は漢唐以後、官吏登用試驗の科目の名（漢の文帝の時に始まる）事物紀原「漢唐遂レ今取レ士之制有二一一方正・茂才・異等六科一、謂二之制擧一」

【賢良祠】ケン京師並に各省に皆之れあり、官吏の民に功德ある者を年祭祀に祭るを致す（清會典）

【避二賢路一】ケンロヲサク賢者の爲めに仕官の路を避けて讓る。史、萬石君傳「願歸二骸骨一、避二賢者路一」

【妨二賢路一】ケンロヲサマタグ賢者の仕進のさまたげを爲す。說苑「臣爲二令君一、蔽レ士不レ升、妨二賢路一」

【賢王】ケンかしこき王。孟、盡心「古之一一、好レ賢而忘レ勢」

【賢所】ドコロ國宮中に於て神鏡を奉安し奉祀をまつりたまふ所。‖內侍所ドコロ

【賛】

貝部十二畫の省字。

【賜】シ 寘

〇たまふ（錫）貴人より物を與へられる「賞一」「寵一」「恩一」「特一」〇あたふ（予）〇めぐむ。めぐみ（惠）論、憲問「民到于今「受其一」〇ほどこす（施）〇たまもの、下される物品、下されもの。

【賜與】ヨ賜・錫・貺・資・給〇賜は拜領する義。孟子「尊者賜レ之者義乎」また其の物をいふ。左傳「將レ拜二君賜一」〇錫は賜に同じ、貨賜なり。易經「永錫二爾類一」〇貺は、くだしたまふ。また其の物をいふ。厚貺は、てあつき、たまもの。唐書「當二公事一而受二私貺一邪」〇資は說文に、賜也、爾雅に與也。また其の品物をいふ。資、說命「夢帝資二與良弼一」論語「周有二大資一、善人是富」〇給は供給する義、閒に合せてよしきことなきやうにする義。左傳「敢不二供給一」

【賜假】カ休暇をたまはる、假は暇。南史、謝靈運傳「靈運表陳レ疾、一一東歸」‖賜暇・給假。

【賜暇】カ休暇をたまはる。‖賜假。

【賜號】ゴウ名稱をたまはる。史、趙世家「趙使二趙奢將擊一秦、大破二秦軍閼與下一、一一一爲二馬服君一」‖錫號。

【賜金】キン たまはりしかね。又金をたまはる。

【賜見】ケン まみえることをゆるされる。魏書、太祖紀「諸士大夫、詣二軍門一者、無二少長一、皆引入一一」

【賜進】シン 物をたまひてつかはす。北史、西域車師國傳「天子降念、一一甚厚」

【賜遊】シュ おくりなを君よりたまはる。周禮「小宰一一」注「小宰、卿大夫也」

【賜書】シュ 朝廷よりたまはりし書物。漢書、敍傳「班氏家有二一一一、內足二於財一」

【賜田】デン 古、朝廷より功臣に賜ひし田地。

【賜物】ブツ 物をたまはる。又、其の物、下されもの。

【賜肺】ハイ 乾肉ホシをたまふ。呂覽「更賜二之脯二束一」

【賜酺】ホ 朝廷より人民に命ぜして酒を飲み樂しむことを許す。又、官より飲食物をたまはる（漢書、文帝紀）唐書、太宗紀「王者一一推レ恩、與レ衆共樂、所下以表二升平之盛事一、契中德兆之歡心上」

【賜爵】シャク たまもの。儀光儀詩「公卿時見レ賞、一一雖二具記一」

【賙】シウ 尤

〇めぐむ。〇たまふ（給）たす（贍）〇すくふ（救）にぎはす（賑）賑卹する。周禮、地官、大司徒「五黨爲レ州、使レ之相一一」古、周に通ず。

【賙卹】ジュツ 周・貺に從ふ、財を周くめぐみ給する會意

【賙卹】ジュツ にぎはしめぐむ。卹は憐。金史、霄淵傳「其友陶衝、爭爲レ之辯、且一一形」‖卹賙。

【賙贍】シン にぎはし足す。北史、陽休之傳「雖レ有二待養之名一、曾無一一之實一、明加二檢校一、使レ得二存養一」‖贍賙。

【賫】㊀シッ・シチ 霽 寘 ㊁チ 支 ㊂シ 虞

㊀もの「物一」「形一」〇からだ（體）〇もと（本・主）物のどだい「本一」「素一」論、衛靈公「君子義以爲レ一」〇ただす（正）是非をきはめる。中庸「一一諸鬼神而無レ疑」〇なほし（直）〇よし（善）〇さだむ（定）〇たひらぐ（平）〇なす（成）曲禮「疑事無一」〇こたふ（對）〇とふ（問）〇うまれつき「性一」禮、禮器「增レ美一」〇もちまへ。〇すなほ（樸淳）かざりなし。文の對「一素」「一朴」〇まこと（信實）まごころ（誠）〇くびきり

たい（斫撲）史、范睢傳「不當」以當穩一」鎖に通ず。○てがた（證券・券契）周禮、地官、質人「大市曰一、小市曰劑」○また（標的）十尺を侯、四尺を鵠、二尺を正、四寸を一となす。荀、勸學「一的張而弓矢至焉」○にぎり（弓附）○ちかひ（盟約）左、哀二十「先主與吳王一有」一」㊁しち、抵當物。又、人じち。㊂にへ、君主、又は師に差出す穀物。‖贄。

同訓異語 賀・正・規・繩・約・格・匡・董・訂の別は正（一〇〇八頁二段）の條を見よ。

【貿要】ボウヨウ てがた、證書。左傳「由一一」法「一一、券契也」

【貿行】ボウカウ 貿買なる行。史、萬石君傳「雖二齊魯諸儒一一皆自以爲レ不レ及也」

【貿認】ボウカク かざりけなくまこと。後漢書、第五倫傳「性一一少レ文」

【貿論】ボウロン 義理を質問する。漢書、劉歆傳「貿二問大義一」

【貿疑】ボウギ うたがひをただし問ふ。漢書「張姚居貧無二資産一、時時好レ事者、從レ之一レ問レ事、論二道經書一而已」‖問疑。

【貿卿】ボウケイ あつかり證文、貿は其の大なるもの、卿は其の小なるもの。周禮「以二一一結レ信、而止レ訟」

【貿賓】ボウヒン かざりけなくまこと。

【貿遷】ボウセン かざりけなくまこと。淮南子「太清之始也、和順以寂漠、一一而素樸」

【貿遷】ボウセン ただしせめる。後漢書、皇甫嵩傳「直前一一、責以二大義一叩頭流涕」‖貿貿。

【貿正】ボウセイ 是非をただす。後漢書、崔瑗傳「從二侍中貿遷一一二大義一」

【貿成】ボウセイ 爭を正して公平にする。詩、大雅「廬旅貿二厥成一」

【貿性】ボウセイ うまれつき。齊民要術「一一有二強弱一」‖性質・資性。

【貿貿】ボウボウ せめただす。史、汲黯傳「黯數二一一湯子上前一」

【貿貿】ボウボウ ぢみにてかざりなし。南史、劉善明傳「一一不レ好二華色一」

【貿直】ボウチョク ぢみにてまっすぐ。貿樸正直。論、顏淵「一一而好レ義」

【貿的】ボウテキ 弓のまと。荀、勸學「一一張而弓矢至焉」（物は類を以て集るをいふ）

【貿而不レ俚】ボウニフズ かざりけなれどもいやしからず（漢書、司馬遷傳贊）

【貿物】ボウブツ 抵當物件。唐堅志「媚蔵從假二一一」

【貿勝レ文則野】ボウショウブンソクヤ 質實が禮文より勝てば野鄙イヤとなる。論、雍也「一一、文勝レ質則史」

【貿木】ボウボク かざりなし。漢書、地理志「天水隴西數郡、民俗一一、不レ恥二盜竊一」‖貿朴。

【貿朴】ボウボク かざりなし。後漢書、何休傳「休爲レ人、一一訥口」‖貿樸・素朴・樸素。

【貿樸】ボウボク 貿朴に同じ。漢書、夏侯勝傳「一一守レ正」

【貿明】ボウメイ 夜あけがた、貿は正。儀禮、冠禮「一一行レ事」‖正旦・翌明。

【貿問】ボウモン ただしとふ。陸游詩「穉子挾レ賓勤二一一」

【貿野】ボウヤ 貿朴にして禮文アヤなし。避暑錄話「狀極一一、而博學純至」‖樸野。

【委レ質】イシツ 贄（を差出して君に仕へる。晉語「一レ一爲レ臣」一說に質音シツ身體をいふ、君に臣事して己のからだをまかせる義）

【質子】シシ ひとじち。史、秦紀「莊襄王爲レ秦一二于趙」

【賞】 シャウ 漾

○ほめる、人の功、又、善行をほめる「褒一」「恩一」「激一」○たまふ（賜）ほめて物品を賜ふ。あたふ（與）おくる（貽）物を贈る。柳宗元、送薛存義序「以酒肉二〇すすめる（勸）〇よみす（宴）〇もてあそぶ（玩）めでたのしむ「一玩」一一鑑」陶潛詩「奇文共欣一」〇たまもの、はび、ほめて賜はりし物。

同訓異語 賞・褒・誉・善・美・頌の別は譽（一七六三頁二段）の條を見よ。

【賞鑒】シャウカン 人物・書畫・骨董などをめきゝしめてる。宋史、劉溫叟傳「立レ朝有二德望一、稱二一一一」‖賞識。

【賞鑑】シャウカン 前條に同じ。鑑定賞翫「格古要論」‖賞識鑑別。

【賞勳】シャウクン てがらをほめる。後漢書、光武紀「褒レ德一レ」

【賞勳局】シャウクンキョク 圖内閣に關する一局、勳章位記等の事を掌る。

【賞玩】シャウグワン ほめてもてあそぶ。晉書、紀瞻傳「園池竹木、有レ足二一一一焉」‖賞翫。

【賞刑】シャウケイ 善をほめ惡を罰する（左傳「不失二一一」‖賞罰。

【賞賢】シャウケン 賢者をほめすすめる（前子「一レ一使レ能」

【賞功】シャウコウ てがらをほめる。韓非子「爵祿所二以一一一也」

【賞誉】シャウヨ 前條に同じ。

【賞詞】シャウシ ほめことば。‖賞辭・賞辭。

【賞賜】シャウシ 功勞善行をほめて金品・官位などをたまふ。周禮、小宗伯「掌二衣服車旗宮室之一一一」‖賞錫。

【賞心】シャウシン 景色をめでる心。心底が歡び樂む。謝靈運、擬魏太子鄴中集詩序「天下良辰美景一一樂事、四者難レ并」

【賞首】シャウシュ　第一等の賞を受ける者。
【賞銀】シャウギン　褒めて物をたまはる。
北史、景穆十二王傳「有ㇾ所ニ――一、
【賞賜】シャウシ　次條に同じ。
【賞勵】シャウレイ　感心してほめやすゝ。唐書、杜元穎傳「敍二文辭一、遊宗特所ニ
【賞典】シャウテン　褒美にたまはる金品。
【賞典錄】シャウテンロク　明治維新の際、國家に功勞ありし者に賞賜せられし
【賞罰】シャウバツ　めたる。優等者に與ふる
【賞從一等】シャウジュウイットウ　賞與は務めて重くする。元史「明君之制、――、罰從
【賞罰無章】シャウバツムシャウ　賞罰當を失ひて
【賞不ㇾ踰ㇾ時】シャウハトキヲコエズ　賞は即時に之
を行ふべし、遷延すべからず、民の
【賞美】シャウビ　ほめたたへる。晉史、柳惲
【賞味】シャウミ　ほめてあぢはふ。南史、謝
【賞掛】シャウクワイ　ほめあげる、ほめはやす。
【賞與】シャウヨ　ほめて物を與へる。又、其
の物。
【賞譽】シャウヨ　ほめる。韓非子「――厚而
【賞養】シャウヤウ　ほめもてあそぶ。李白詩

【賤】セン　【賤】

○いやし。貴の對「貴ㇾ――○ひくし（低）身分卑し、等級が低し「卑ㇾ――」「貧ㇾ――」「微ㇾ――」○やすし（廉）ねだんやすし。○いやしきもの。○いやしむ、さげすむ「輕ㇾ――」「ㇾ易」○自ら謙する辭「ㇾ子」

同訓異字　賤・卑・陋・僿・鄙・野・固　○賤は貴字の反、位の卑きなり。又價の少きにも用ふ。漢書「穀貴傷ㇾ民、甚賤傷ㇾ農」○卑は尊の反、尊下と連用す、卑幼とは、年幼く席の下きをいふ。○陋は下品なること、陋巷とは、行きづまりの裏店等をいふ。○僿・鄙・野の三字は田舍らしく、いやしきなり、僿は雅の反、鄙は都の反、野は朝の反なればなり。史記「貧而不ㇾ僿」左傳「肉食者鄙」論語「質勝ニ於文一則野」○固は、かたくなにしていやしきなり、固陋と熟す、位などには用ひず、學識などの上に用ふ。

【賤易】センイ　いやしみあなどる。漢書、趙
【賤家】センカ　いやしきいへ。又其のいへ
がら。
【賤傭】センヨウ　ねだんをやすくする。唐
【賤役】センエキ　次條に同じ。
【賤技】センギ　○いやしきわざ。江淹文
【賤妾】センセフ　○いやしめしつかひの
【賤丈夫】センヂャウフ　いやしきおとこの謙
【賤工】センコウ　いやしき職工（孟、滕文公）
【賤子】センシ　自己の謙稱。杜甫詩「大人
【賤事】センジ　つまらぬ俗事、己の事を謙
【賤女】センヂョ　いやしきつまれつき。後漢
【賤賣】センバイ　いやしきたとへの語。
【賤業婦】センゲフフ　藝娼妓・淫賣婦の類。
【賤業婦】センゲフフ　いやしき生業。
【賤業】センゲフ　いやしき生業。
【賤賣】センバイ　たからを貴ばず。禮記、
【賤貧】センビン　いやしからだ。李陵詩
【賤幅】センプク　いやしきからだ。李陵詩
【賤婦】センプ　ねだんをやすくする。唐
【賤賣】センバイ　いやしみすてる。易林、刺
【賤近】センキン　近き者をいやしむ。魏文
【賤役】センエキ　次條に同じ。
【賤技】センギ　○いやしきわざ。江淹文
【賤妾】センセフ　○いやしめしつかひの
【賤丈夫】センヂャウフ　いやしきおとこの謙
【賤工】センコウ　いやしき職工（孟、滕文公）
【賤子】センシ　自己の謙稱。杜甫詩「大人
【賤事】センジ　つまらぬ俗事、己の事を謙
【賤女】センヂョ　いやしきつまれつき。後漢
【賤賣】センバイ　いやしきたとへの語。
【賤業婦】センゲフフ　藝娼妓・淫賣婦の類

鄉ニ」

【賤貧】セン　いやしくまづし。盧綸詩「遠レ性在二耕家一所レ変惟ニ一」＝貧賤。

【賤伊】セン　いやしきとりこ。李密、陳情表「今臣」國ニ一、至微至陋」

【賤傭】セン　いやしめあなどる。北史、牛弘傳「恃レ才矜レ貴、一ニ一朝臣一、唯見レ弘未三嘗不二改レ容自斂一ニ」＝輕蔑・卑侮・輕侮。

【賤物】セン　ものをいやしむ。管子「聖人上レ徳而下レ功、尊レ道而一レ一」

【賤隷】セン　いやしきしもべ。傳咸、禁奢賤「今一ニ、乗レ輕駟レ肥」

【賤劣】セン　いやしくをとる。漢書、鄭食其傳「願「偏」注「言其一ニ如二偏邑一ニ」

【賤陋】セン　いやしくおとる。漢書、董仲舒傳「此臣一ニ之罪也」

【賓】ソウ　多

ニ布は南蠻人のみつぎもの（貢賦）（後漢書、南蠻傳）

【賣】バイ　メ　卦　一音マイ

○うる、ひさぐ、あきなふ「商一ニ」「叫一ニ」○てらふ、求める「一名」「衒一ニ」○あざむく（欺）史、范雎傳「自知見一ニ」○みかたの内情を敵に通ずる「一國」

賤貧・沽僧・買・賣○賢はあきなひうりなり、ひろく用ふ、買の對なり。○沽はうる、かふ、兩用字なり、小賣小買なり、賣は大うりなり。○僧は賣主ノ手也と註す、誰故爲の老學菴筆記に「紙肆作二手簡一賣也並僧」とあり、賣・僧二字の別を知るべし。○買はみせうりする義、行きて賣るを賠といひ、坐して賣るを買といふ。○糴は音チウうりよねと訓む、糶はその反なり、買ひ儲きたる米をうり出す義。左傳「晉閉二之糴一ニ」

【賣嬖】バイ　しほをうる。晉書、食貨志「鹽者食之急也、縣官可二自一ニ一、武帝時、施二行之一ニ名曰二均輸一ニ」

【賣官】バイクワン　金を取りて官を授ける。

【賣券】バイクワン　うり手形。晉書、盧循傳「按ニ一ニ一而取レ之」

【賣國】バイクワ　己の私利の爲めに國を敵人に與へる。史、蘇秦傳「左右一レ一、反爲二之臣一也」

【賣婚】バイコン　婚姻の時、女の家に贈る資。史記、山東士人尚二門閥一ニ嫁娶必多取レ貨、謂二之一ニ一ニ」

【賣漿家】バイシヤウカ　こんずを賣る家。史、信陵君傳「酒公藏二于一ニ一ニ」

【賣笑婦】バイセウフ　娼妓・淫婦の類。南宋市肆記「親裝迎門、爭レ新賣レ笑」

【賣鬼天】バイタウ　鶴は米を煮て作るあめ、鮨屋が笛を吹きて賣り行くそら、寒食の節の天氣をいふ。宋祁、寒食詩「簫聲吹レ賣一ニ」

【賣買】バイ　うりかひ。史、平準書「民一ニ一之一ニ」

【賣文】バイ　文章を作り其の報酬にて生活する。杜甫詩「本一レ一爲レ活、翻令二室倒懸一ニ」

【賣卜】バイ　うらなひをして生計を立てる。後漢書、姜肱傳「一レ一給レ食」

【賣名】バイ　名をてらひ賣る。莊、天地「子非下狗紲哀歌、以一ニ一擠於天下一者乎」

【賣藥】バイ　○藥をうる。後漢書、張劭傳「家貧一レ一給レ食」○うりぐすり。

【賣奔】バイホン　てらひもてあそぶ。後漢書、楊震傳「一ニ一威福一ニ」

【賣僧】バイ　あきなひする僧。又、こびへつらふ僧をいふ。バイは宋音。

【賠】バイ　灰

つぐのふ（辨償）

【賠款】バイクワン　損失をつぐのふ款項。戰勝國の戰費を戰敗國より賠償する類。

【賠償】バイシヤウ　他人に蒙らしめたる損害をつぐのふ。

【賦】フ　遇

○みつぎ、とりたて、わりつけて取る、みつぎもの、ねんぐ（年貢）「田一」「一稅」「貢一」「租一」○しく（布）○わかつ（頒）○あたふ（給予）○さづける（授）○うける（稟受）○はかる（量）○ぶやく。○兵、古は田一によりて兵を出したる故「兵一」○軍隊にてつかふ食物金錢。軍費。論、公冶長「可使治其一也」○詩の一體、六義の一、其の事をありのままに敷き陳べる。文體明辯「按詩有六義其二曰一ニ、所謂一者、敷陳其事而直言之也」○詩を作る。又、詩を誦する「一詩」○詔文の一體「阿房宮一」「赤壁一」文選、兩都賦序「一者古詩之流也」○貢士。

【賦詠】フエイ　詩をつくる。晉史、何點傳「招二攜勝侶及名德羣門一、清言一ニ、優游自得」＝吟詠。

【賦斂】フレン　みつぎものと、ぶやくと。蕭唐書、突厥傳「使二內部黎庶各安二其業一、擇二其宰輔一、經二其一ニ一」＝賦役。

【賦役】フエキ　ぶやく（夫役）韓愈詩「齊民逃一ニ一」＝賦斂。

【賦課】フクワ　ねんぐをわりつけてとる。

【賦詩】フシ　詩をつくる。赤壁賦「橫二槊一ニ一、固一世之雄也」

【賦與】フヨ　人にわりつけてにぎはしめぐむ。後漢書「帝疑ニ一有二虛」

【賦性】フセイ うまれつき。‖賦命・賦稟。
【賦稅】フゼイ わりつけて取り立てるみつぎもの。唐、田敬仲世家「其收二一於民、以二小斗一受レ之、其粟予レ民以二大斗一」‖賦租。
【賦租】フソ みつぎもの。蘇軾詩「人間行路難、踏レ地出二一一」‖租賦・賦稅。
【賦粟】フゾク 租稅として取り立てるもみ。孟、離婁「一一倍二他日一」
【賦斂】フレン うまれつき。梅堯臣詩「禍當二一一一、不直如二勁節一」‖稟賦・賦性。
【賦分】フブン うまれつき。溫庭筠詩「一一知二前定一」‖賦性・賦命。
【賦命】フメイ うまれつき。蘇軾、石常州居住「裏「一一奇窮」
【賦與】フヨ わりつけて與へる。
【賦用】フヨウ みつぎもの。周禮「凡邦之一一取具焉」‖賦租。
【賦斂】フレン 租稅をとりたてる。方言、註「一一所三以養二動民一也」

【賚】 ライ 陷 又、陳に作る

○たまふ(賜)あたふ(予)「寵一」「賜一」「恩一」○たまもの。論、堯曰「周有二大一」」
【賚賜】ライシ たまふ。たまもの。
【賚錫】ライシャク 前條に同じ。唐書、舉文本傳「既任レ職久、一一懇篤」
【賚予】ライヨ たまふ、あたへる。

【賻】 フ 九 畫

書(貝部五畫)の本字。

【賢】 ジン 陷 又、陳に作る

○おくりもの。○はなむけ、行に贈る財幣。○たから(財貨)

【賣】 バイ 卦

○かく、かけをする。晉書、謝安傳「安與二兄子玄、弟一一別墅一」○かけ、かけもの。○かけごと。のあそび。晉書、慕容德傳「望君依レ品一一」‖博奕。
【賣弄】バイロウ ばくち。北史、趙任城王湝傳「往復一一、遂至レ極レ貧、晝夜乃罷」
【賣書】バイショ 書の優劣を爭ふ。南史、王僧虔傳「高祖素善二書、笑好不已、與二僧虔一一レ曰、誰爲二第一一對曰、臣書第二、陛下亦第一、帝笑曰、卿可レ謂二善自爲一矣」
【賣射】バイシャ 物をかけて弓を射り勝負を爭ふ。魏書、楊播傳「上已設レ賞一一」
【賣場】バイジョウ ばくちば。‖賭坊。
【賣坊】バイボウ ばくちする場所。水滸傳「開二一一一」‖賭場。
【賣博】バイバク ばくち。‖博奕・博掩。

【賭】 ト 遇

○かく、かけをする。晉書、謝安傳「安與二兄子玄、弟一一別墅一」○かけ、かけもの。○かけごと。のあそび。晉書、慕容德傳「望君依レ品一一」‖博奕。
【賭賣】トバイ ばくち。北史、趙任城王湝傳「往復一一、遂至レ極レ貧、晝夜乃罷」
【賭書】トショ 書の優劣を爭ふ。南史、王僧虔傳「高祖素善二書、笑好不已、與二僧虔一一レ曰、誰爲二第一一對曰、臣書第二、陛下亦第一、帝笑曰、卿可レ謂二善自爲一矣」
【賭射】トシャ 物をかけて弓を射り勝負を爭ふ。魏書、楊播傳「上已設レ賞一一」
【賭場】トジョウ ばくちば。‖賭坊。
【賭坊】トボウ ばくちする場所。水滸傳「開二一一一」‖賭場。
【賭博】トバク ばくち。‖博奕・博掩。

【賜】 シ 寘

○おくる、死者をとぶらふために車馬を贈る(車馬を贈るをー一といひ、貨財を贈るといふ)「贈一」○喪を助けて物を贈る。又、其の物。春秋、隱元「天王使二宰咺來歸二惠公仲子之一一」
【賜賻】シフ 賜・錫・贈・贊・歸・遺等の別は巡(一九四五頁二段)の條を見よ。
【賜錄】シロク 車馬衣服などを死者におくる。穀梁、元「乘馬曰レ賜、衣衾曰レ襚」范注、王導傳「一一之禮」
【賜弔】シチョウ 死者に物を贈りて弔ふ。唐書、韋玉臬傳「淮四平、乃詔護レ喪歸二東都一帝走二中人一一一」

【賴】 ライ 泰 賴に作るは非

○よる、たよる(依)「依一」「倚一」○たのむ(恃)よりたのむ。書、禹貢「萬世永一」○たのみ、たより(憑藉)「憑一」孟、告子「富歲子弟多一」(一說に一は善)○う(得)まうけ(福・利)○さいはひに。○亡一ア、はならずもの。又酢りてずるし。‖無賴。○一鄉は老子の出生地、一一に

【購】 コウ 宥

○あがなふ(買)財を以て買ひ求める「一求」○賞をかけて募り求める。漢書、高祖紀「乃多以レ金一一購一レ將」(購は陳稀)○はかる(謀議)古、講(一八二五頁四段)に通ず「一和」
【購客】コウカク かひて、物をかふ人。
【購求】コウキュウ あがなひもとめる。漢書、季布傳「高祖一一布千金一」(註貫して人を捕へる)
【購得】コウトク あがなひ得たり。陳書、沈烱傳「王僧辨素聞二其名一、於二軍中一一一レ之」
【購讀】コウドク 書物などを買ひてよむ。

【賕入】コフ 物を買ひ入れる。
【賕賣】コバイ あがなふ「一一力」
【賕捕】コホ 賄を贈けてとらへる【後漢書、呂布傳、注】
【賕問】ゼン 賞をかけて尋ね問ふ。史、刺客傳「一一暮ノ知二荊子一」

【賽】 サイ 國

○れいまつり(報祭)神佛にお禮參りする「一神」○勝を詩ふりあふ。○優劣を比べて勝負をする「一馬」○雙六又は賭博に用ふる立方形の具、六面に一から六までの數を記せしもの。‖骰子。
【賽客】カイ 神佛におまゐりする人。‖賓人。
【賽會】クワイ ○儀仗鼓樂雜戲などを具して神を迎ふるをいふ。陸游詩「鄰家賽神會」○圖博覽會をいふ。
【賽神】シン 神に報賽する。お傳祭。陸游詩「到レ家更約四鄰女、明日河橋賽二一一一」
【賽社】シヤ 農事終りて田の神を報賽する、秋社ジヤキの祭「事物紀原」‖賽。
【賽會】クワイ ○儀仗鼓樂雜戲などを具して神を迎ふるをいふ。陸游詩「鄰家賽神會」○圖博覽會をいふ。
【賽神】シン 神に報賽する。お傳祭。陸游詩「到レ家更約四鄰女、明日河橋賽二一一一」
【賽社】シヤ 農事終りて田の神を報賽する、秋社ジヤキの祭「事物紀原」‖賽。
【賽錢】サイ 參詣して神佛に奉る錢。
【賽日】ニチ 圖やぶいりに開帳にまゐる日。
【賽馬】バ 金をかけてする競馬

【蹟】 サク シヤク 陌 俗字

○おくぶかし。○幽深にして見かたき道理「精一」「奥一」易、繫辭「聖人有以見二天下之一一」

【賺】 タン レン 豏 咸

○すかす、あざむく(欺)だまして物を高く賣りつける。○すかされる、商人にだまされて高く買ふ。すべてあざむかれる「被一一」○圖すかす、やさしき言葉をかけて子供をなぐさめる。

【賻】 フ 遇

おくる(贈)死者の家族をとぶらひて金品を贈る、財を以て喪儀を助ける。又、其の金品。香奠カウデンの類「弔一」「賞一」「贈一」
同訓異義 賻・送・贈・餽・歸・遺・贈等の別は送(一九四五頁、上段)の條を見よ。
【賻儀】ギ かっでん(香奠)
【賻祭】サイ 死者に品物を贈りて祭る。後漢書、馮勤傳「後追二加其賻一一一」
【賻助】ジヨ 死者ある家に物をおくりてとむらひをたすける。後漢書「爲二喪事一一一甚豐」‖助贈。
【賻贈】ゾウ 死者に贈る貨財と衣衾と。張仲素、碑文「追二念舊勳一一一加レ等」
【賻贈】ゾウ 死者の家に物を贈る。漢書、敍傳「一一甚厚」白虎通「貨財曰レ賻、車馬曰レ贈」‖贈賻。
【賻賚】ライ 貧人より贈られし喪儀を助ける爲めのおくり物、かっでん。宋史、文苑傳「一一甚厚」

【贖】 ショク 屋 俗に作る 贖

○あまる(餘)あまり。物が增し加はる。○轉じてむだ(贅)「贅一」
同訓異義 賸・餘・衍・溢・羨・剩の別は餘(食部七畫)の條を見よ。
【賸言】ゲン むだごと。閑見後錄「陳忠獻公皆祖無官、以二忠獻貴一贈二太保一、無レ可レ書、李邦直追二作神道碑一、至二三百餘言一、其文無二一一一、世尤以爲レ難也」‖贅辭。
【賸語】ゴ あまりのにほひの唐書、杜甫傳「後賓一一沾二丐後人一」多矣」

十一畫

【贇】 ウン 眞

贇(貝部十畫)の俗字。

【贊】 サン 翰

又、筆に作る。質に通ず

にへ、みやげもの、古、會見の時に其の身分に應じ、執りて贈りし禮物。左、莊二四「男一大者玉帛、小者禽鳥、以章二物也一、女一榛栗腶脩、以告二虔也一」
同訓異義 人に初見する時に執る所の禮物なり、敬に執と具とに從ふ。
【執ノ贄】シツ ○人の相ま見ゆるとき、にへを執りて敬意を表するをいふ。儀禮、士相見禮「○轉じて東脩を修め、門人となるにいふ。

【贅】 ゼイ 霽

○むだ、用にたたぬ。○むだな物。○しち。しちいれ(質)○こぶ(瘤肉)懸肉が體に著く(附肉)「附一」「疣一」○つく(屬)○むこ、いりむこ(女壻)「一壻」又、いりむことなる。漢書、賈誼傳「家貧子壯則出二一一ことば煩贅し。
【贅疣】ユウ 贅は瘤肉、疣は贅瘤で無用のものに喩ふ。莊、駢拇「附贅懸疣、出乎性一哉、而修二於性一」
【贅言】ゲン 無用のことば、むだぐち。法言、問神「書不レ經非レ書也、言不レ經非レ言也、言書不レ經、必多贅矣」‖贅辭。
【贅壻】セイ いりむこ、壻子。漢書、嚴助傳、注「一一者、謂レ令二子出就二舍

隷二爲中贅壻上耶」

【贅壻】ゼイセイ むこ。史、滑稽傳「淳于先生贅ニ一」

【贅澤】ゼイタク 圖おごり「一一品」‖奢侈。

【贅文】ゼイブン 無用の文句。‖贅語。

【贅辯】ゼイベン むだぐち、無用の辯論。‖贅言。

【贅木】ゼイボク こぶある木。

【贅疣】ゼイユウ 贅は瘤、疣は旒の垂るるもの、皆屈せる疣は下の爲めに執りて動かさる。轉じて君主が臣下の爲めに動かされて危きに喩ふ。公羊、襄、十六「君若ニ一一然」

【贅瘤】ゼイリュウ こぶ。王禹偁詩「身世喩ニ泡幻ニ去延如ニ一一」

十二畫

【贇】イン 圓

うつくし、美好なる貌。

【贋】ガン 贋(貝部十五畫)の誤字。

【贊】サン 贊は俗字

○ほめる、ほめたたへる、人の善を稱述する辭「賞ー」「褒ー」「ー揚」證に通ず。○たすく(助・佐)助力する「翊ー」「參ー」「ー理」中庸「ー天地之化育」○すすむ(進)漢書、東方朔傳「朔自ー日」○あきらかにする(明)○みちびく(導)周語「內史ー之」○會見の禮を相ける人。○つぐる(告)○ひかふ(控)○まみゆ(見)○とく(說)文の一體「傳ー」「論ー」「讃ー」文體明辯「ー、稱美也、字本作讚、昔漢司馬相如初ー荊軻、其詞雖ヒ亡、而後人誦之」

同訓異義 貝に从ひ、兟に从ふ。

同訓異義 贊・助・輔・弼・翼・扶・佐・侑・援等の別は助(三四七頁三段)の條を見よ。

【贊畫】サンカク 助けはかる。元史、楊果傳「贊ニ一宜ー一、民賴以安」

【贊決】サンケツ たすけてとりきめる。元史、和尚傳「ー一機務、精敏明敏」

【贊辭】サンジ ほめことば。‖讚辭・賞辭。

【贊襄】サンジョウ 君徳をたすけて其の治を成す。史、秦陳襄「思ニ自ー一哉」柳宗元文「厥ニ一之證ニ賜與有レ加」

【贊述】サンジュツ ほめあらはす。隋煬帝文「功德圓滿、贊述ニ一一」

【贊助】サンジョ たすけて成す。‖贊翼・贊翼。

【贊稱】サンショウ ほめたたへる。‖稱贊・稱讚。

【贊成】サンセイ 同意してたすけ成す。

【贊善】サンゼン 官名、唐、ー一大夫を置く、東宮の官と爲す、詹事府に屬し、侍從・規誨を掌る、諫議大夫に比す。歷代之に因る、俗ー一と稱す。

【贊否】サンピ 贊成と不贊成と。

【贊美】サンビ 人の善事をたすけ成す。晉、衛恒傳「故竭ニ愚思ニ、以贊ニ其美ニ、愧レ不レ足レ補ニ前賢之作ニ」‖讃美。

【贊府】サンフ 唐代、縣丞の異稱。又贊公ともいふ「容齋四筆」

【贊揚】サンヨウ ほめあげる。後漢書、孔融傳「融與ニ禰衡ニ更相ー一」

【贊翼】サンヨク たすける。魏志、邢顒傳、並ー一其美ニ」‖贊助・翼贊・輔翼。

【贈】ソウ 徑

○おくる、物をおくり與へる「寄ー」「分ー」詩、鄭風「維佩以ー之」○つかはす、送與す。○言を以て人に贈る「ー序」「ー言」檀弓「子路去魯、謂顏淵曰、何以ー我」○死後に官位を追賜す「追ー」「ー位」○おくりもの、つかひもの。

同訓異義 貝に从ひ增の省に从よ、物をおくれば本より增し加ふる義。

同訓異義 贈・送・餽・遺・賂等の別は送(一九四五頁二段)の條を見よ。

【贈位】ゾウイ 人の死後に位を贈る。又、其の贈られし位。

【贈遺】ゾウイ 人に物をおくる。又、其のおくりもの。

【贈言】ゾウゲン 正しき言を以て人におくりはげます。說苑「子路將ニ行、辭ニ於仲尼ニ、曰、贈レ汝以ニ車乎、以ニ言乎」

【贈詩】ゾウシ 詩をおくる。又、其の詩。杜甫詩「呼ニ見檢ニ一一」

【贈賜】ゾウシ おくりたまはる。吳志、朱治傳「屢ー一、恩敬特篤」

【贈序】ゾウジョ 別に臨み文を作りて送るもの。‖送序。

【贈錢】ゾウセン はなむけをおくる。國語「資ニ一一、餞ニ其上ニ從レ之」

【贈答】ゾウトウ おくると、こたへると。又、贈物のやりとりをする。

【贈賄】ゾウワイ 賄をたすける爲めのおくりもの。北史、盧光傳「周武帝、少嘗愛ニ棗於光ニ、敕ー一有レ加」

【贈別】ゾウベツ ○見送る。馬戴詩「年年御溝柳、ー一南苑宮」‖送別。○ゾウベツ人の旅立つ時に文詩又は物品をはなむけとして贈る。

【贈賻】ゾウフ ○しんもつ。左、僖三二「齊國莊子來ー一、禮成而加レ之以レ馬」○■まひなひをおくる。

【贓】タン 感

○てつけ、さぎぎん。物を買ひて先づ價を入れる。○はりぎぬ、書物の巻首の帖綾（玉池）「錦ー」

十三畫

【贏】 エイ 庚

○あまる。あます（餘）「餘ー」「豊ー」○あまり、のこり（殘餘）○うく（受）收容する。左、襄三一「ー諸侯」○つつむ（包裹）韭、胠篋「ー糧而趨之」○になふ（負擔）漢書、刑法志「三日之糧」○ゆるむ（緩）○のびる、進む。縮の對。○とく（解）○みつ（盈）○あふる（溢）○まうけ（利得）おうける。左、昭元「賈而欲ー」○すぐ（過）○かち（勝利）輸ユの對「輸ー」

同訓異字 贏・餘・衍・溢・剰・賸の別は餘（食部七畫）の條を見よ。○贏・勝・克・捷・戰の別は勝（三五二頁前段）の條を見よ。

【贏縮】エイシュク あまると、ちぢまると。細は屈。苟、非相「緩急ー」‖屈伸・屈縮。

【贏縮】エイシュク のびると、ちぢまると。又、進むと退くと。淮南、本經「ー卷舒、淪于不測」

【贏餘】エイヨ 餘りあるたくはへ。唐書、百官志「藏貨ー之準、悉以資ン之」‖餘儲。

【贏得】エイトク まうけ、これだけは利得となれりとの義、詩に用ふる語。杜牧詩「十年一覺揚州夢、ー青樓薄倖名」蘇軾詩「ー兒童語音好、一年強半在三城中一」

【贏餘】エイヨ あまり。‖餘贏。

【贏利】エイリ まうけ、商賣してあまり得たる利益。左、昭元、註「商賈求ー」

【贍】 セン 豏

○たる（足給）孟、梁惠王「此惟救死而恐不ー」十分である、ゆたか、富む「富ー」○たす、すくふ、にぎはす（潤）「賑ー」「收ー」○やすし（安）漢と通ず。

同訓異字 贍・賑・賙の別は賑（貝部八畫）の條を見よ。

【贍逸】センイツ ゆたかにして、すぐれる。南史、王道規傳「鮑照文辭ー」、晉作古樂府二文甚遒麗」

【贍給】センキフ にぎはしあたへる。晉書、羊祜傳「修ー所ン資、皆以ー」ー九族、賞二賜軍士一」

【贍足】センソク にぎはしかばひまもろ。吳志、朱桓傳「性輕ン財好ン義、愛二養吏士一」ー六親一俸祿充實、皆與共分」

【贍賑】センシン たすけにぎはす。北史、高允傳「散ン財帛ン歳、以相ー」‖賑贍。

【贍卹】センジュツ にぎはしめぐむ。南史、梁武帝紀「ー各有ン差」‖卹贍。

【贍敏】センビン 十分に足りてさとし。唐書、封敖傳「屬ン辭ー、不ン爲二奇澁之語一、切而理勝」

【贍富】センフ とみてゆたか。晉書、王接傳「當謂、左氏辭義ー」‖富贍。

【贍脫】センエツ ゆたか。後漢書、杜篤傳「論二十有二、是爲ニー一」

【贍足】センソク ゆたかにしてうるはし。南史、蕭洽傳「辭旨ー」‖足贍。

十四畫

【贔】 貲（貝部八畫）の古字。

【贓】 ゾウ 陽 通音ザウ 通じて臧に作る

○不正の道を以て得たる物品を藏しおく。又、其の物品「ー品」○竊盜して得る所の物「ー物」○賄賂を受ける（納賄）「受ー」

【贓狀】ゾウジョウ 官吏の貪物を藏むありさま。晉書、呂公戰記「ー狼藉」

【贓汚】ゾウオ まひなひを貪る好吏。蠹は木のしんを食ふ蟲、故に喩ふ。

【贓品】ゾウヒン まひなひ又は他の不正の手段即ち竊盜などして得たる品物。‖贓物。

【贓物】ゾウブツ 罪を犯して得たる財物。前條參看。‖贓品。

【贓吏】ゾウリ 不正の財を貪る吏、まひなひを取る役人（後漢書、桓帝紀）

【贐】 ジン 國 又、贐に作る

○はなむけ、旅立つ人に贈る品物、せんべつ（餞別）○おくる、はなむけす、せんべつの品物を贈る。

同訓異字 贐・送・贈・餞・賂・遺等の別は送（一九四五頁二段）の條を見よ。

【贐ノ賄】ジンノワイロ はなむけの品を贈るの次條參看。

【贐行】ジンカウ たび立ちの人にはなむけする。孟、公孫丑「予將ン有二遠行一、行者必以ン贐、辭曰、路ン贐、予何爲不ン受」

【贐儀】ジンギ はなむけとして贈る金品。說苑「送ン行之贐、謂二之ー一」

【贐錢】ジンセン はなむけ。餞も贐と同義。

【贐送】ジンソウ はなむけする。又、其の品物。梁書、梁公則傳「ー無二所ン取」

【贔】 ヒ 實

○ー屭にはさかんに力を用ふる貌。又、大いなる貌、龜の屬。○

贔―屓は力を添へ引き立てる義。

【贔屓】ヒイキ　○さかんに力を用ふる貌。張衡「西京賦」「巨黿―」○大いなる龜。蜘蛛の類。本草「―大如二牀榻一好負レ重、今石碑下龜趺、象二其形一」

【憤怒】フンド　○いかる。○水經、注「河神―」○水はげしく流る。○水經、注「懸流迅千丈、濤浪―」

十五畫

【贋】ガン　㊥贋は俗字

にせ、にせもの（偽物）韓愈詩「居然見二眞―一」

【贋造】ガンゾウ　にせてつくる。又、にせもの。‖偽造・僞作。

【贋作】ガンサク　前條に同じ。

【贋札】ガンサツ　にせのさつ、變造紙幣。

【贋鼎】ガンテイ　○にせのかなへ。韓非子「齊伐レ晉、索二讒鼎一、晉以二其贋一往」○轉じて僞く假託の物の譬とす。

【贋天子】ガンテンシ　にせの天子。南史、蔵法興「陸帝未レ親二萬機一、凡詔敕施爲、悉決二法興之手一、朝廷中、事無二大小一、專斷レ之、號帝年已漸長、欲レ有二所爲一、法興每相禁制、道路之言、稱二法興爲一眞天子一、帝爲二――一」

【贋物】ガンブツ　にせもの。‖僞物。

【贋本】ガンボン　にせの書籍。竹坡詩話「公可レ無」疑、此一一耳」

【贖】ショク　㊐

○あがなふ「厚―」○かふ（貿易）物を以て物を買ふ。○財を納れて罪をまぬかれる「―罪」

【贖刑】ショクケイ　金錢を出して刑を免る。又、其の刑。書、舜典「金作二―一」疏「誤而入レ刑、出レ金以贖レ罪」

【贖罪】ショクザイ　金錢を出して罪を免る。蔡邕表「西辰詔書、以二一月俸一―レ」

【贖】トク　㊐

○卵いまだ孵化せずして敗る。○獣が胎内にて死して獣とならず。

十七畫

【贛】㊀コウ　カン・コウ　㊁カン　㊐　㊎　㊏

㊀おろか。‖戇。○たまふ。たまもの（賜）○古、貢に通ず、子―は孔子の弟子の子貢。㊁江西省に在る州名。轉じて江西省の簡稱。

赤部

【赤】セキ　シャク　㊐

○あか、朱色。曲禮「周人尚―」○南方の色、あかし。○あかくす、朱色にする。○まごころ「一心」杜甫詩「以レ絃報主寸心―」○むなし（空）空しく盡きて何物もなし「一貧」「一手」「一地」○はだか、むきだし、本體をあらはす「一身」

【赤・紅・丹・絳・緋・朱】○赤はきらきらと、あかきなり。○紅は桃色なり。○丹は丹砂の色なり、大赤なり。○絳は大赤色なり。○緋は深紅色なり。○朱は昏アン赤黒色なり、血の古くなりて、黒色を帶びたるをいふ。

【赤烏】セキウ　太陽の異稱。日の中に三足の烏が居るといふ傳說に本づく。蘇軾中詩「白兎落二天西一、―飛二海底一」

【赤衣】セキイ　○罪人の着る赤色のきもの。轉じて其の罪人。說苑、善說「―蓋レ路」‖緒衣。○圖緋の袍、古、五位以上の人の着用せしもの。

【赤衣使者】セキイシャ　赤蜻蛉ヤンマの異名。古今注「一名――、赤名二赤弁丈人一」‖赤卒。

【赤翼】セキヨク　あかき夕やけ。李白詩「―動二金光一」

【赤鵬】セキホウ　あかき色のかり。史、武帝紀「行二幸東海一、獲二――一作二朱鳳一」歌一」

【赤眼魚】セキガンギョ　鰯スの異名。

【赤金】シャクキン　○あかがね、銅。山海經「岐山其陽多二――一」○黄金の赤色を帶ぶるもの。

【赤錦袍】セキキンポウ　赤地のにしきの陣羽織。

【赤闕】セキケツ　○仙人の名。神仙傳「―仙人、古之得道李君也」○はぎをあらはす。すあし。杜甫、苦熱詩「安得―蹋二層冰一」

【赤脚大仙】セキキャクタイセン　すあしの仙人、道教の神。附錄の前の解等看「支那風俗」

【赤血】セキケツ　なまなましたる赤きもの。李白詩「白刃血二――一、流沙爲レ之丹」

【赤血球】セキケッキュウ　高等動物の血液中にある小球、扁圓形の赤き色素を有す。

【赤魚】セキギョ　鶴の異名。正字通「一一、鶴別名」

【赤縣神州】セキケンシンシュウ　漢土の異稱。史、孟軻傳「中國名曰二――一」

【赤根菜】セキコンサイ　はうれんさう（菠薐菜）

【赤子】セキシ　あかご、色赤きが故。書、康誥「若二保二――一」‖嬰兒。

【赤子之心】せきしのこころ　うまれままにしていつはりなき心。孟、離婁「大人者不レ失二其――一者也」

【赤縣】せきけん　赤きほくろ。南史、梁丁貴嬪傳「生而有二一一一」

【立二赤幟一】せきしをたつ　韓信が趙の城の幟を抜きて漢の赤幟を立てしめたる故事。史、淮陰侯傳「韓信與二張耳一擊レ趙、遣二輕騎二千人一人持二一赤幟一、間道、背レ山而望レ趙軍一曰、趙見二我走一、必空レ壁逐レ我、若疾入二趙壁一、抜二趙幟一、立二漢赤幟一」

【赤貧】せきひん　あかき地色。陸機詩疏「又有二紫貝一一一如レ玉、紫點爲レ文」

【赤十字社】せきじゅうじしゃ　博愛同仁の主義に本づき、交戦中にても、病院のみは中立と見とめ互に患者負傷者を救護すべき約束により設立せられたる世界公共の社團、赤色の十字を以て徽章とす。

【赤心】せきしん　○まごころ。次條參看。○果物、又、木材などのあかいろのなかみ。趙嘏詩「内實有二一一一」

【推二赤心一置二人腹中一】せきしんをおしてひとのはらのうちにおく　己の心の誠を人に移して、人も亦かくあるべしと思ひて疑はざる。後漢書、光武紀「嘉王――」

【赤身】せきしん　まるはだか。‖赤裸・赤裸裸。

【赤手】せきしゅ　すて。蘇軾詩「當年老使君、――降二於蒐一」‖徒手・空手・空拳。

【赤手二一陣二江河一】せきしゅにいちじんをこうがにつらぬく　獨力にて大事に當るに喩ふ。陳書、連「大廈既焚、不レ可二復レ之以一滴、長河一決、不レ可二障レ之以レ手」

【赤繩】せきじょう　縁つなぎのなは。幽怪錄「唐章固旅二次宋城一、遇二異人一、倚レ囊向二月下一檢レ書（中略）因問二囊中一一子、云此以繫二夫婦之足一、雖二仇家異域一、此繩一繫レ之、終不レ可レ易」

【赤松子】せきしょうし　仙人の名。史、留侯世家「願棄二人間事一、從二――一游耳」列仙傳「赤松、神農時雨師」

【赤誠】せきせい　まごころ。韓偓詩「暫時勝下何須レ恥、自有二蒼蒼鑒二一一一」‖赤心・丹心・丹誠。

【赤帝】せきてい　天の色の赤きをいふ。淮南子「背二青天一、陶二赤一一」

【赤鳳】せきほう　あかぐつ。鳳は二重にかさねし履、祕服の時に用ふ。詩、豳風「一一九九」

【赤脛】せきけい　はだし、すあし（裸足）‖徒跣。

【赤箭】せきせん　藥草の名、氣味辛温、惡氣をはらふ。夢溪筆談「一一即今之天麻也、藥草上品」爾雅、鴻藻解「一一背芝」

【赤髭】せきし　あかきひげ。蘇軾詩「一一碧眼老鮮卑」‖赤鬚。

【赤鬚】せきしゅ　赤きたてがみ。‖赤鬃。

【赤族】せきぞく　一族悉く誅せられる、赤は空なり。揚雄、解嘲「不レ知二一映時一レ赤二晉之族一也」

【赤卒】せきそつ　あかとんぼ。古今注「小而赤者曰二一一、一曰二蜻蜻一」

【赤帶】せきたい　婦人病の名、婦人の帶下に五色あり、受くる所の寒熱に因りて異なり、赤液を受くる者を一一といふ。白帶の對。

【赤道】せきどう　地軸に直交して兩極より九十度の距離に在る大圏（漢書、天文志）

【赤道祭】せきどうさい　船艦が赤道直下を通過する時に行ふ船まつり。

【赤地】せきち　草木の生ぜざる地、不毛の地。史、樂書「晉國大旱、一一三年」‖赤土。

【赤墀】せきち　墀は階上の地、天子の殿階の庭には丹をぬる。神じて皇宮の元とす。後漢書、光后陵「曲蠲侯祺、驕蹇負レ上、一一脅瑕」‖丹墀。

【赤帝】せきてい　南方の神。又、夏をつかさどる神（禮記、天文志）

【赤帝子】せきていし　漢の高祖を尽す、漢は火徳にして色は赤を尚ぶが故。史、高祖紀「吾子自帝子也、化爲レ蛇當レ道、今爲二一一一斬レ之」

【赤潮】せきちょう　あかしほ、にがしほ、鞭毛蟲類の如き微細生物の増殖に因りて海水變色混濁する現象、其の發生によりて其の中に棲息する生物の斃ることあり。

【赤條條】せきじょうじょう　圖はだか。永濟傳「脫二得一一地一」‖赤身。

【赤鬼】せきき　良馬の名。西京雜記「文帝有二良馬九匹一、其二日一一一」

【赤土】せきど　草木の生ぜざる地。白居易詩「不レ見二青苗一空一一」‖赤地。

【赤銅】しゃくどう　あかがね百分と黄金一乃至十分とより成る紫黒色の合金。‖銀銅・烏銅。○あかがね。山海經「櫃谷山多二一一」

【赤鳥】せきちょう　○あかうま（北史、王熊傳）○はやぶね。古今注「孫權時名二樓船一爲二一一」

【赤芝】せきし　あかくきらきらするひかり。郁經「長庚遥二一一」

【赤飯】せきはん　圖あづきめし。こはめし。

【赤貧】せきひん　甚だしくまづしき時。史、汲黯之傳「黯家一一、賓客滿二門庭一」

【赤楓】せきふう　あかきかへで。杜甫詩「赤葉楓林百馬嘶」‖丹楓。

【赤伏符】せきふくふ　後漢の光武位に即く時、赤色の符を風ぜしものあり、天より授くといふ。後漢書、光武紀「光武先在二長安一時、同舍生彊華自二關中一齎二一一一日、劉秀發レ兵捕二不道一、四夷響集、龍鬪レ野、四七之際、火爲レ主」劉秀は光武の名。

【赤紱之朝】せきふつのちょう　詩經の侯人の章により、君主の群子を遠ざけて小人を近づけ、又、位に在る者其の徳にたへざるそしり。後漢書、東平王蒼傳「將レ被二詩人三百一一」

【赤鬱若】せきうつじゃく　丑の歳の異名。開寶「太歳在レ丑、曰二一一」

【赤豹】せきひょう　赤毛に黒き斑點ある豹。宮經「一一黄龍」傳「毛赤而文黑、圓二

之ー一」

【赤壁】セキヘキ ○山の名。三あり。青潮北の境に在り、一は嘉魚縣の東北、揚子江南に在り、周瑜が曹操の軍を破りし所。○一は黄岡城外に在り、赤鼻磯と名づく、蘇軾之に遊び、遂りて周瑜の戰ひし赤壁と爲し、前後ー一賦あり。○一は武昌縣の東南七十里（支那里）に在り、又、赤磯と名づく。

【赤壁賦】セキヘキフ 宋の蘇軾が赤壁に舟遊して作れる賦、前・後二篇あり。文章融縦、古文眞寶等に載す。東坡年譜「元豊五年壬戌、先生年四十七、在二黄州一寓二定惠院一、是歳五月過二赤壁一有二前後ー一一」

【赤面】セキメン 恥ぢて顔をあかくする。慚顔。

【赤楡】セキユ 楡の異名。果實樹皮皆染料とすべし。

【赤裸】セキラ まるはだか。‖赤身・赤裸裸。

【赤裸裸】セキララ ○まるはだか。‖赤身。○あからさま、ありのまま。‖明明地。

【赤羅刹】セキラセツ 俚赤鬼、羅刹は生番、人を食ふ魔物。

【赤痢】セキリ 病名、はげしく下痢する傳染病、あかはら。

【赤鯉】セキリ ひどひ。古今注「兗州人、呼ニー一為二赤鯉一」水經注「越人有二採蒲者一、以二蒲葉一貫レ之、為二康王舍人一、行二彭澤之湖一、浮二蓮根郡閣一、二百餘年、後入二鵝水中一、取二鯉子一、與二弟子一期レ日、皆當レ待二於水傍一、設レ屋祠、果乘ニー一魚一出、入坐二祠中一、祠中有二千萬人一觀レ之、留月餘復入レ水也」

四 赦 畫 シャ 酒

○ゆるす（釋）なだむ、罪を宥す「大ー」「恩ー」「免ー」○三ー一は罪をゆるす三條件。漢書、刑法志「三ー一、一日、幼弱、二日老耄、三日蠢愚」○おく（置）放ち置くの通じて舍に作る。

【赦宥】シャユウ 赦・宥・釋・聽・允・許・放・縦・原・免・貸・容・與○赦は罪をゆるしやるなり。易、解卦「赦レ過宥レ罪」○宥はなだめゆるすなり、赦宥と連用す。左傳「將二十世宥レ之」○釋はときゆるすなり、開釋・放釋と連用す。○聽は先方の望を、きき入れるなり。○允は肯也、うけがふなり、允許と連用す。○許はそれにてよしとゆるすなり、聽也、縦也、可也と註す。○放は追ひはなしてやるなり。○縦は放に近し、ほしいままにさすなり。○原は罪人の實情をおしたづねてゆるすなり。恰も「太宗嘗二其誠信一、悉原レ之」○免はゆるして免れしむるなり。左傳「楚子曰、孤之罪也、嘗免レ之」○肆は放・縦二字と略ー同じ、心任せにゆるすなり。○容は堪忍してゆるすなり。○與は同意してゆるすなり、許に近し。論語「吾與二汝弗一如也」

【赦宥】シャユウ ゆるす。左傳「君不ニー一、臣亦不二帥職一」‖赦免。

【赦過】シャクワ あやまちをゆるす。易、解卦「君子以ー一レ宥レ罪」

【赦原】シャゲン 赦宥に同じ。原は情狀をたづねて酌量する。魏志、武帝紀「後見ニー一「赦二之弃鉞一」‖原赦。

【赦罰】シャバツ つみすべき者をゆるす。韓非子「明君無二徳賞一、無ニー一」

【赦免】シャメン 罪をゆるす。史、淮南王傳「ーニー罪人」‖免赦。

五 赧 畫 タン 潤

○はぢらふ。あからむ。恥ぢて顔を赤くす「羞ー」○周代最後の王の名。

同訓異字 赧・恥・辱・忝・慙・慚・羞・慙

の別は恥（六五九頁）の條を見よ。

【赧慙】タンザン 顔をあかくしてはぢる。世說「阮德如嘗於ー廁見レ鬼、長丈餘、色黑而眼大、徐徐語レ之曰、人皆鬼可ー慙、果然、鬼ーー而退」‖慙赧・慚赧。

【赧顔】タンガン 周の赧王と後漢の獻帝と、並に暗君にして權臣に制せられ國を亡ぼす。十八史略、唐紀「ーー受二制強臣一」

【赧然】タンゼン 赧赧然に同じ。

【赧赧】タンタン 次條に同じ。

【赧赧然】タンタンゼン はぢらふ貌。孟、滕文公「觀二其色一ーー」‖赧赧・赧然。

六 赩 畫 キョク 職

○大いに赤し。○赤色にして草木なき貌。

【赩赫】カクカク 赤き色の貌。射雉賦「赩二朱冠之ーー一」

【赩紅】コウコク 甚だ赤し。宋之問賦「夕陽勾ーー」

七 赫 畫 カク 陌

○赤し、火の赤き貌。詩、邶風「ー如渥赭」○かがやく、ひかる、光明を發する貌。○かっと怒る貌「ー怒」○ーーはあつし、ひでり（旱氣）又顯はれて盛んなる貌。大學「ーー師尹」○ー青赫は上古の帝王。一說に炎帝

をいふ。

【赫奕】光のかがやく貌。又、盛んに美くしき貌。何晏、景福殿賦「―照曜、若二日月之麗一レ天也」

【赫曄】かがやきあきらか。王令詩「行俟不二―一名聲無二素絲一」

【赫然】○あらはれて盛んなる貌。詩、大雅「―明明」○熱氣の發する貌。詩、大雅「―炎炎」

【赫赫之名】盛んに顯るる名譽。漢書、何武傳「所レ居無二――一去後常見レ思」

【赫赫之光】盛名の世に輝ける義。韓愈、與二于襄陽一書「高材多二感戚之氣一、盛位無二――一」

【赫戲】光明を發する貌。顏延年「陪二陸皇之一―一今」

【赫曦】盛んにかがやける日光。潘岳詩「遠紹方―一」

【赫居世】新羅の始祖、姓は朴氏、前漢の五鳳元年、推されて國君となり、六部の君長と爲る、是を新羅王と爲す、其の事蹟頗る神怪多し。

【赫火】さかんなるひ。李白賦「氣―一而蔽虧」

【赫喧】いちじるしく盛大なる貌。大學「赫兮喧兮」

【赫赫】勢の盛んなる貌。潘道源詩「及二茲眷事深一、涅丹始―一」‖短赫。

【赫顯】いちじるしくあらはる。宋史、吳時傳「以二周謹一自嫌、無二一毫一以惟一時豪傑、推爲二稱首一」

【赫胥氏】上古の帝王の名。莊子「夫――之時、民居不レ知レ所レ爲、行不レ知レ所レ之、含二哺而嬉一、鼓レ腹而遊」一說に炎帝をいふ。

【赫然】○かっといかるさま。○さかんなる貌。

【赫咤】かっと怒る。吳志、陸凱傳「賢良憤悒、智士―一」‖憤怒。

【赫怒】さかんにいかる。詩、大雅「王赫斯怒」

九畫

【赩】カ　庚

○日出の時の光、のさやけ「晨―一」‖曦。○あか色。郭璞賦「絕岸高丈、壁立―一駮」

【赭】シャ　馬

○あかつち（赤土）「丹―」「渥―」‖赬。○あか、あかし（赤）詩、邶風「赫如二渥一」○むなしく盡きて物なし、山を燒き又は木を伐りてはだかにする。史、始皇紀「―其山」○轉じてはげやま（禿山）

【赭堊】○あか土と白つち。漢書、司馬相如傳「其土則丹青―一」○赤土にてぬる。

【赭衣】罪人のきるあか色のきもの。轉じて罪囚の稱とす。漢書、刑法志「―塞レ路」‖赤衣。

【赭衽】血の如く赤きあせ。名馬のあせ。盧世南詩「―千金馬、繡軸五香車」

【赭山】○はげやま。‖禿山。○山の草木を伐り盡してはだかにする。史、始皇紀「伐二湘山樹一、赭二其山一」○浙江省海寧縣に在る山の名、土石皆赤しといふ。

【赭石】自然に産する赤鐵礦石、土の如くにして碎け易く、色殷紅にして顏料と爲すべし、山西省の代縣に産す、故に代―一ともいふ。

【赭白馬】つきげうま。又、古の駿馬の名。晉書、桑虞傳載記「有二駿馬一、曰二赭白一」

【赭鞭】あかきむちの捜神記「神農以二――一親二百草一、盡知二其毒及寒溫氣味所一レ主」‖尊じて本草學者を――一家といふ。

【赭面】○かほを赤く塗る。唐書、吐蕃傳「貞觀八年、弄贊遣二使者一來朝、十三年娶二以二宗女文成公主一、公主經二國人一――弄贊下二令國中一效レ之」○あかきかほ。

【赬】テイ　敬　顏は俗字

あか、あかし、再度染めし赤色。

【赬霞】あかきあさやけ、又ゆふやけ。王融詩「白石映二丹羽一、――支二翠旆一」

【赬顏】あかきかほいろ。李賀詩「送レ客飲二朗酒一千觴無二――一」

【赬尾】魚の赤き尾。詩、周南「魴魚――」傳「赬、赤也、魚勞則尾赤」（魴魚――は人民の虐政に困めらるるに比す）

走　部

【走】ソウ　有

○はしる（趨）かける、早足にて行く「奔―」「疾―」はしらす「―馬」○ゆく（往）○にげる（逃）いくさに負けてにげる、敗北する「逃―」「敗―」「遁―」孟、梁惠王「棄甲曳兵而―」○めしつかひ、小使（奴僕）○地上を走るもの、獸類「飛―」○自稱の謙辭、猶ほ僕といふが如し「―」「下―」「牛馬―」班固、答賓戲「―亦不任」廁於彼列」○圖―續は字畫上、走字の稱。

圖 走・奔・舟○走はかけりゆく兵、奔走・飛走と通用す、敗れてにげるにも用ふ。○奔は走より

は見に勢よくかけ出す義、事に趨くに後れんことを恐るる意なり、轉じて結婚に際の備はるを待たず、父母の家をかけおちするをも奔といふ。○補は早くこばしりをする義。論語「鯉趨而過レ庭」禮記「童子先生手遠レ趨而進」疾行して直ちに目的の處に至る義より、敬意を帶ぶ。

【走舸】ソウカ はやぶねの異志、周瑜傳「孫權ニ一一、各繫二大船後一引レ次俱前」＝輕舸。

【走介】ソウカイ はしりづかひ。歐陽脩功詩「一一奉二一札一」

【走二江湖一】ソウコウニ ○江湖の間に隱居する義。謝靈運「范蠡——、梅福入レ城市」○四方に海食する者をいふ。

【走狗】ソウク よくはしる獵犬の史、句踐世家「良弓藏、一烹」

【走敵】ソウテキ ちりぢりににげる。宋書、武帝紀「彼求レ戰不レ得、自然一一」＝奔散。

【走竄】ソウザン にげかくれる。禮記、注「一一鳥雀之一一也」＝奔亂。

【走使】ソウシ はしりづかひ。通典「魏以二諸侯一一日急鶴、取二其迅速一」

【走集】ソウシュウ 四方より寄りあつまる。又邊境のとりで。左、昭二三「修二其土田一、險二其一一一、親二其民人一」

【走筆】ソウヒツ おもむきはしる。韓愈文「贈玉長安、不レ利二一一一」

【走船】センソウ 早く走るふね〔三國志〕＝快船・走舸。

【走卒】ソウソツ はしりづかひ。漢書、胡建傳「貳亡二車馬一、常步與二一一一一起居」

【走肉】ソウニク 生きてはしる肉、無用の人を譏る語。拾遺記「不レ學者謂レ存、謂二之行尸一一一」

【走馬看花】ソウマカンカ 事物の皮相のみをざっと觀ひ觀て、其の底蘊を究めざるに喩ふ。孟郊詩「春風得意馬蹄疾、一日看遍長安花」に本づくか。

【走馬燈】トウマ まはりどうろう〔荊楚歲時記〕元の夕觀二鰕蟆、郭文擧詩——の詩あり＝馬蹄燈。

【走避】ソウヒ はしりさる。漢書、高祖紀「親二一一一一」

【走筆】ソウヒツ はしりがきの白居易詩「一一操二狂詞一」

【走百病】ソウヒャクビョウ 俗にいふ數入イリ五雜俎「齊俗人多以二正月十六日一遊二寺觀一謂二之一一一一」百病を除去するといふ年中行事)

【走浪】ソウロウ はやせのなみ。江淹賦「驗二一一一一、漂沙擊石」

【走利】ソウリ きそひて利益にはしる。魏書、李諧傳「威宇レ逐レ以レ一一」＝趨利。

【走禽類】ルイソウキン 翼が不十分にて高く飛ぶこと能はざる鳥類、駝鳥の類。

【走路】ソウロ にげみち。＝血路。

【奏】

走(前條)に同じ。

【赴】

二畫

㊀キウ 有

㊁キウ 宥

㊀——はたけくつよき貌の又、果毅の貌。詩、周南「一一武夫、公侯干城」又輕く力づよくしてオある貌の㊁——奮は龍などの頭を伸べ低昂して行く貌〔史、司馬相如傳〕

【赴】

フ 遇

○おもむく(趨)行く「奔一」「電一」○いたる(至)○向ふ「一一義」「歸一」○死去のしらせ、聲を告ける。＝訃。

同訓異義 赴・趨・趣・趨・歸○赴は先方へかけつける義。謝枋得、卻聘書「雖レ赴レ死易、從容就レ義難」また計に通じて、喪を告ぐる義とす。○趨はこばしりにはしりゆく義。○趣は一定の所に志して走りゆく義。孟子「趣之者如レ歸レ市」また、おもむきと訓みて、名詞にも用ふ。趨勢・志趣・旨趣・雅趣の如し。○歸はおちつくべき所へ向ひゆく義。易經「雖レ往而同レ歸」

【赴援】エン 其の場所におもむきたすける。

【赴義】フギ 義の爲めにおもむく。魏志、袁紹傳「輕レ財一一」

【赴救】フキュウ ゆきてすくふ。魏志、陳矯傳「來レ從二之國一、望レ風赴附、此王霸也、太祖乃遣レ兵一一」＝赴援。

【赴告】フコク ○死去を告ぐるを訃といひ、喪禮を告ぐるを告といふ〔左傳、序〕○死去のしらせ。＝訃告・訃音。

【赴討】フトウ ゆきてうつ。吳志、朱桓傳「桓督二領諸將一、周旋一一、應二機皆平定一」

【赴レ敵】フテキニムカフ 敵に從ひて敵地にゆく。隋書、于仲文傳「人各一心、何以一一」

【赴難】フナン はしりて國難を救ふ。隋書「士一一不レ愛二其死一」

【赴任】ニン 任地におもむく。宋史「其一一川陝一者、給二驛券一」

【赳】

三畫

起(走部七畫)に同じ。

【起】

キ 紙

○おく。おこす(興)おこる「興一」「決一」「錚一」「選一」○たつ(立)おきあがる、身をおこす。○おこす、目を驚かす。目を覺す「喚一」「早一」「曙一」「晨一」

○ふるひおこる(奮興)書、益稷「元首―哉」○おこり、はじめ(開始)「一因」「一原」「一事」ひらく(啓發)悟らしむ。論、學而「―予者商也」○人を引き擧げて用ふる「―用」戦國、秦策「―。稽里子于國」○建築する。漢書、郊祀志「武帝―建章宮」

起居郎　建・立・竪・植・樹の別は建(五九九頁三段)の條を見よ。

【起煙】けむりをおこしたつ。陳志、劉廙傳「―二―於寒灰之上、生華於已枯之木」

【起稿】したがきをかきはじめる。＝起草。

【起跪】たつと、ひざまづくこと。李白光詩「白石如二白羊一、――變化速」

【起義】○記事文の義例を立てる。左傳、序「一曰、微而顯、文見二於此一、而―レ―在レ彼」○義に仗りて兵を起す。晉書、元帝紀「後唐莊宗初從二太祖一―二―雲中一」

【起居】○たちふるまひ。人の飲食寢興をいふ。資、閻命「出入――、例有二不レ欽一」＝動靜・擧止。○轉じてきげん、安否「―― 佳勝」

【起居注】天子の左右に居る史官が天子の言行を記するをいふ。

【起居無時】隱者の身の自由なるをいふ。韓愈、送二李愿一序「――、惟適之安」

【起居萬福】書簡の用語、先方の無事を賀する。司馬光、書儀「伏惟某位、尊體――」

【起句】詩の第一句。滄浪詩話「――舒光難レ得」

【起臥】おきふし。＝臥起。

【起敬】うやまふ心をおこす。禮記、祭者不レ入、―レ―起レ敬」

【起業】しごとをはじめる。＝創業。

【起原】はじめ、おこり。

【起工】土木工事をはじめる。

【起坐】おきてすわる。王安石、僧約「鼓四―、夜半益」勤」白居易詩「―一思量更無レ事、身心安樂復誰知」

【起債】○金をかりる。清史、谷永傳「爲レ人―レ、分レ利受レ謝」○國家又は自治團體にて公債を募集しはじめる。

【起草】詩文のしたがきを書きはじめる。後漢書、百官志、注「一曾有二六人一、主作二文書一―レ―」＝起稿。

【起死】死人を生きかへらす。吳語「―二―人一而肉二白骨一也」

【起死回生】死をおこし生にかへす。よみがへらせる。

【起林】ねどこより起き出る。

【起誓】○神佛に誓ひし約束文。＝誓詞。○互に取りかはす約束の證書。

【起首】事のおこり、はじめ。

【起誼】約束の證書。法苑珠林「―二―同行」

【起承轉結】詩の第一句を起、第二句を承、第三句を轉、第四句を結とす。結は一に合といふ。范德機詩法「作詩有二四法一、起要二平直一、承要二春容一、轉要二變化一、合要二渾永一」

【起訴】うったへをおこす。

【起端】ほこりをたてす。左傳、注「曳レ柴―レ、詐爲二衆走一」

【起重機】おもき物をあげおろしするに用ふる滑車仕掛の機械。

【起程】旅立つ。＝發程・登朝。

【起碇】いかりをあげて船出する、ふなで。＝拔錨・開帆・解纜。

【起點】○國はじまりの所。＝出發點。

【起動】○たちふるまひ。易林「世緣久長、―― 安寧」＝起居。○うごく。梁昭明太子文「眞理寂然無二―一相一」

【起拜】立ちてをがむ。漢書、韋賢傳「拜子乃―――、賀漢得二眞臣一」

【起舞】よろこびて奮發する貌。漢書、楊惲傳「頓足―――」

【起伏】おきると、ふすと。高くなると低くなると。後漢書、郭后紀「物之興衰、情之―――、理有二固然一矣」

【起復】○官吏の喪中に在る者、喪期未だ終たざるに出仕せしむる事。通鑑、注「―者、起二之於苫塊之中一、復二其位一也」○轉じて除服出仕の義とす。

【起滅】いづると、きゆると。皇甫曾詩「寒雲虛空裏、孤雲―――間」

【起レ予】わが興づかざることを他より注意せられて悟る。論、八佾「―レ―者商也、始可二與言一詩已矣」

【起用】一旦休職・免職となりし人を更に復任用ふる。

【起立】席からたちあがる。指月錄「見二代宗來一―――」

【起聯】律詩の一二兩句の聯をいふ。文體明辯「近體律詩、一二名二―一、又名二發句一三四名二頷聯一、五六名二頸聯一、七八名二尾聯一、又名二落句一」

五畫

【越】㊀エツ・ヲチ　㊁クヮツ　㊂月

㊀こす。こゆ(踰)「超―」「踰―」通り過ぎる。○すごす、度をすごす。過ぎる、分に過ぎる「僭―」○わたる(度)○ふむ(踰)○つまづく(蹶)○おつ。おとす(墜)「隕―」○うしなふ(失)失墜する。○ちる。ちらす(散)○あがる。あぐ(發揚)○とほし(遠)左、襄十四「―在二他竟一」○まはりどほし(迂)魯

語「一哉臧孫氏之爲」政也」○ここに(於)發語の辭。曰・爰・粤に通ず。○惡の下面の孔。禮、樂記「清廟之瑟、朱絃而疏一」○春秋時代の國名、今の浙江省紹興縣の地。轉じて浙江省を一省と稱す。‖粤。○種族の名、古の江・浙・閩・粤地方に住せしもの。○一裘は古の國名、安南の南部。○布の名「一布」○姓。一石父は史、管晏傳に見ゆ。㊀一席はがまむしろ。左、桓二「大路一席」(路は輅)圖○ヨこす「申しー す」又、遞る「引ー」○ヨ國名、今の三越の地。

越・趁・踰・踰の別は趁(本畫)の條を見よ。

【越階】エツカイ 順序によらずして上位にすすむ、不次の昇進。‖越遷。

【越騎】エツキ つよくして自由に障害物などをとびこえる騎兵、唐代に設けしもの。

【越桶】エツトウ こけもも、高山に自生する小灌木、葉楕圓形、花淡紅、小果を結ぶ。

【越錦】エツキン 越の國に産するほこ、天子の武器、錦は飾。禮記「一一大弓、天子之武器也」

【越冕】エツベン 來にこゆ。鮑白鳥賦「別ー一一、綢繆曾絕」‖超軼・拔萃。

【越瓜】エツクワ しろうり、もと南越より出づるもの、其の皮白し。

【越勁】エツケイ すぐれてつよし。荀子「業射筋力ー一、百人之敵也」

【越月】エツゲツ つきをこゆ。月令廣義「我ー一日ー一」‖過月。

【越限】エツゲン 程度をこゆ。綠名「量力而動、不二敢ー一ヒー」

【越權】エツケン 權限外の事をする。‖僭越。

【越獄】エツゴク 牢やぶり。‖脫獄・脫監。

【越在】エツザイ 流浪ヲして涇きに在る。左、昭二十「矢ー守二社稷一ー一草莽一」

【越次】エツジ 順序をこえる。漢書、王莽傳「臣以二外屬一ー一ー備ー位」宋史、神宗紀「王安石ー一ー入對」

【越日】エツジツ あくるひ。列子「ー一過二見王一」‖明日・翌日。

【若三越人視二秦人之肥瘠一】ジャクエツジンシシンジンノヒセキ 越は今の浙江省、秦は陝西省の地方、共の地甚だしく隔絕せり。因りて何等の關係なきに喩ふ。韓愈、諍臣論「親二政治得失一ー一、忽若不ー加二喜戚於其心一」

【越絕書】エツゼツショ 書名、十五卷、撰者未詳、其の文纖橫是衍、與越春秋と相類す、而して博麗奥衍は之に過ぐ、原本二十五篇、今五篇を佚す。

【越先】エツセン さきをこす。吳志、顧雍傳「才照二人物一、德服二衆望一、誠非二愚臣所一レ可ニー一」

【越訴】エツソ 圖順序を經ずして直ちに上官に訴へる。

【越俎之罪】エツソノツミ 已の職分をこえて他人の事に干渉する罪。莊、逍遙遊「庖人雖ー不ー治ー一庖、尸祝不ー越二樽俎一而代ー一之矣」

【越桃】エツトウ 楔子ヲシの異名〔本草〕

【越女齊姬】エツジョセイキ 越と齊との國の美人。七發「越女侍ー前、齊姬奉ー後」史、楚世家「左抱二鄭姬一、右擁二越女一」

【越鳥】エツテウ ○南方の鳥。次條參看。○孔雀の異名〔本草釋名〕

【越鳥巢二南枝一】エツテウスクフ 越の國は南方に在り、故に越の鳥は他國に在りても樹の南の枝に巢を構ふ。故鄕の忘れ難きに喩ふ。古詩「相馬依二北風一ー一」

【越度】エツド ○度をこえる。舊唐書、明皇紀「葵丑犯ー一、至二心星一ー一而過」○圖ヲチあやまち、過失。

【越波】エツハ こえわたる。魏志「比年以來復遣ー一船ー一ニー大海一多持二貨物一往餬二遊民一」

【越年】エツネン としをこす。黃滔詩「幾到二人閒一便ー一」‖超歲。

【越方】エツハウ まじなひの術、古、越人之を善くせし故。後漢書、趙炳、字公阿、東陽人、能爲ニー一」注「善二禁呪一也」

【越俎之思】エツソノシ 已の職を踰み守りて他人の職權を侵すことなき心がけ(晉書、思政堂記、沈約碑評)左、襄二五「行無二越思一、如二農夫之有一ー一畔」より出づ。

【越遷】エツセン 順序をこえてみだる。禮記、疏「次序不ー有ニー一也」

【越趨】エツスウ 應ヲに循ふべき禮法に越える。晉書、裴頠傳「昔穆叔不ー拜ニー一之嬖一臣亦不二敢闕二殊常之昭一」

【越王蛇】エツワウダ 兩端にあたまのあるへび。本草「兩頭蛇、一名ー一、會稽人首、是越王弩弦所ー化、故名」

【越王臺】エツワウダイ 今の廣東省越秀山上に在り、趙佗、山に因りて臺を築く。一統志には「句踐登眺之所、在二會稽稷山一」

【越王式二怒蛙一】エツワウシキドアヲ 越王が軍上にて怒れる蛙に敬禮せし故事。韓非、內儲「越王將ー伐ー吳、欲二人之輕ー死也、出見二怒蛙一乃爲ー之式、從者曰、奚敬二於此一王曰、爲二其有ー氣也」式は軾。

【越蹇斯】エツケンス 英語の音譯、食物、又、藥物の主要成分を煮つめて少量の容積とせしもの。‖精。

趄 ショ 魚

○たたずむ。○趑ー一は行きなやむ。‖趦趄・趑趄。

趁 タン 寒

坐立不動の貌。‖跕。

【趁】 ㊀チン 眞 ㊁チン 眞 迹は俗字

㊀ゆきなやむ(躓)○おふ(逐)後より之に及ぶ。㊁こえふむ(越限)○さわぐ(躁)

同訓異字 ヲ趁・追・逐の別は追（一九四八頁一段）の條を見よ。

【趁熱】タイネツ あたたかき所をおひあるく。中山詩話「頑童ー レー食二春睡一」

【趁趙】タイチョウ 行きて進まざる貌。‖也遲。

【趁】 趁（前條）の俗字。

【超】 テウ 蕭

○こす、こゆ(越)「ー越」こえて前に出る、飛びこえる。孟、梁惠王「挾二太山一以ー北海一」○ぬきでる、すぐれる、秀でる「ー羣」「ー倫」○わたる(渡)○たかし(卓)とほし(遠)○すぎる(過)○をどる(跳)○常格に拘らず、順序によらずして進む「ー脫」

同訓異字 ヨ超・越・踰・躍○超は躍りこゆるなり。超乘は、車に飛び乘ることなり。○越は界をふみ越え、又高き墻を飛び越ゆるに通用す、越職は、下官の者が、上官の職務に立入るをいふ。○踰は踰越と連用す、踰垣・踰月などに用ふ、ひとまたぎに踰ゆるなり、通に作る、同じ。○躍はこえて進むなり、超に略同じけれども、躍る意はなし。

【超逸】テウイツ ぬけでる、すぐれてまきる。漢史、阮孝緒傳「冒行ー ー」‖超軼。

【超軼】テウイツ すぐれてぬきんでる。莊、田子方「夫子ー ー絕塵、而回瞠二若乎後一矣」一本奔逸に作る。‖超逸。

【超逸】テウイツ 遠き貌。顏延之詩「ー ー行人遠」

【超越】テウエツ ○こえる。魏志、管寧傳「卑敎日將、ー ー周成」○とびこえる。劇談錄「善ニー ー」‖超躍。

【超階】テウカイ 順序をとびこえて官位がのぼる。‖超升・超遷。

【超格】テウカク 常格に過ぎる。晉紀、荀勗守二尙書令一詔曰、勗肆二力先朝一、忠動ー レー」

【超距】テウキョ をどりこえる。史、王翦傳「方投石ー ー」

【超羣】テウグン 衆にぬきんでる。淮南子「同レ師而ー レー者、必其樂レ之者也」‖超倫・絕羣。

【超過】テウクワ ○常よりこえる。法苑珠林「ー ー三乘」○減數量が他の數量に比して多し「輸出ー ー」

【超悟】テウゴ 人にすぐれてさとし。又、すぐれたるさとり。晉書、鳩摩羅什傳「大師聰明ー ー。天下無レ二」

【超歲】テウサイ 年をこす、新年を迎へる。‖越年。

【超次】テウジ 順次によらずのりこす。張說文「既立二殊常之勳一、遂蒙ニー ー之命」

【超常】テウジャウ 常格にとびこえる。晉書、嵇康傳記「蒙ニー ー之遇」

【超選】テウセン とびてはねあがる。張衡賦「八乘騰而ー ー」

【超授】テウジュ 順序をこえてさづける。晉書、嘉寧時敎記「推レ錄陷レ銳、宜二論レ功ー ー擢而不レ錄」‖歷授。

【超升】テウシャウ 官位が順序をとびこえて進む。後漢書、皇甫規傳「多從二郎官一、ニー ー此位」（唐書、趙憬傳「今課拙高者、不次ー ー」‖超遷。

【超乘】テウジョウ ○くるまにとびのる。左、僖三三「秦師過二周北門一、左右免レ胄而下、ー ー者三百乘」○數用してのりこす義。日本外史「高洲則ー ー而過」

【超世】テウセイ ○一世にこえすぐれる。魏志、武帝紀「ー ー之傑」○世俗に遠ざかる。宋薰詩「ー ー塞二肥遯一」‖脫俗・超俗。

【超迹】テウセキ 衆にこえすぐれたるおこなひ。江淹詩「五緘既漫漫、ー ー絕二塵網一」

【超絕】テウゼツ こえぬきんでる。謝靈運文「不レ杜二其根一、于レ何ー ー」

【超然】テウゼン ○高くこえぬきんでる貌。漢書、董仲舒傳「人受二命于天一、固ー ー異二于羣生一」○世俗の拘束を脫して心だかき貌。

【超然臺】テウゼンダイ 山東省諸城縣の北城の上に在り、宋の蘇軾、郡守たりし時、官舍に因りて起て、臺榭を列して之を臺中に置く。

【超然內閣】テウゼンナイカク 政黨に關係せざる內閣。

【超塵】テウヂン 順序をこえて官をのぼす。漢書、張釋之傳「今陛下以二啬夫口辯一、而ニー ー之一」

【超俗】テウゾク 世俗より遠くぬきんでる。人物志「ー レー衆レ高」‖脫俗・超世。

【超卓】テウタク すぐれて高くぬきんでる。晉書、孟嘉傳「文辭ー ー、四座歎レ之」‖卓越不羣。

【超擢】テウタク 他人をとびこえてぬき用ふる。韓孟聯詩「耶位蒙ニー ー、官階幸二擢升一」

【超逸】テウイツ こえすぐれる。戴良詩「逸至終ー ー、道窮姑退藏」

【超脫】テウダツ 世俗の拘束を受けず、とびはなれてけだかし。劉克莊詩「從レ今詩律應ニー ー、靈運三潘湘一入二肺腸一」

【超渡】テウト こえわたる。吳志、孫權傳、注「著レ鞭以助二馬勢一、遂得ニー ー二」‖越渡。

【超脩】テウシュウ なかまをこえる。後漢書、左雄傳「踰躍升騰、ー レー踰レ匹」‖超倫。

【超騰】チョウ とびこえる。劉勰新論「―絕レ塵」

【超序】チョウ 順序をこえて官につく。張九齢詩「遠國僭二踰レ地、――乃登レ暄」

【超拔】バツ 衆にこえぬきんでる。蘇軾詩「恐其立二異勳一、超然自―一」

【超舞】ブ 身を起してまひ踊る。詩經、疏「數―一、儻儻然不レ能二自正一也」

【超凡】ボン 凡人よりぬきでる。‖超倫。

【超邁】マイ こえすぐれる。梁書、武帝紀「文質彬彬、―二―今古一」

【超編】ヘン はるか。李白詩「原野曠―一」

【超倫】リン なかまにとびぬけてすぐれる。蔡邕文「潁川郡陳君、絕世―一」‖絕倫・超羣。

六畫

【趑】シ 支 趦は俗字

―趄シヨは、行きて進まざる貌、たちもとほる。張載、劍閣銘「一人荷レ戟、萬夫―趄」‖趦趄。次且。

【趄】 七畫 趄（走部十畫）の俗字。

【趕】カン 早 おふ（追逐）‖赶。

【趙】チョウ 篠 ○はしる（趨）急に走る。○春秋戦國の時、晉の卿、韓―魏の三家、晉を分ち國を立つ。―は今の直隷省の南部、山西省の北部地方。○又晉の時、劉曜・石勒の二人が先後して建てたる國「前―」「後―」○五代の次に起りし宋朝の天子の姓「―宋」

【趙充國】コウク 字は翁孫、漢の上邽の人、騎射を善くす、壯勇にして方略あり、武帝の朝、中郎將車騎將軍に拜す、霍光と定冊して宣帝を立つ、また金城に屯して四羌を破り、營平侯に封ぜらる、其の屯田十二便を言ふ、尤も後人の宗とする所となる、卒する年八十六。

【趙普】フ 字は則平、宋の幽州薊の人、沉厚寡言、太祖に仕へ、累遷して相に拜す、天下の事を以て已の任となす、又太宗に相とし太師に拜す、卒するに及び韓王に追封せられ忠獻と諡す、昔初め學術寡し、太祖勳ひるに讀書を以てす、是より手に卷を釋てず、私第に歸る毎に牘を啓き書を取りて之を讀む、乃ち論語二十篇なり、嘗て太宗に謂つて曰く「臣有二論語一部一、以二半部一佐二太祖一定二天下一、以二半部一佐二陛下一致二太平一」と。

八畫

【趣】（一）シュ ス （二）シュク・ソク 趨（通）

（一）おもむく、向ふ所を定めて疾く行く、はしる。○おもむき「詩―」「野―」「佳―」○わけ、むね、意味、すぢみちの歸著する所「旨―」「理―」（二）せまる、うながす。‖促。○すみやかに（疾）○局―ソクは蹙小ナリの貌。

同訓異義 おもむき・趣・趨・趣・歸の別は趨（一八六頁三段）の條を見よ。

【趣意】イ おもむき、意のおもむく所、むね。‖趣旨。

【趣向】カウ ○おもむき。目的を定めてそれに向ふ。唐書、陳子昂傳「是―之反也」○こころもち、意向。鄭谷詩「其如二―一卑一」

【趣旨】シ おもむき、むね。文心雕龍「陳思稱二楊馬之作一、趣關旨深」‖趣意・旨趣・指趣。

【趣舍】シヤ 進むと止まると。歐陽修、石曼卿墓表「―大節」‖趣舍。

【趣尚】シヤウ おもむき、このみ。蔡邕文「由二其機範一、從二其―一」

【趣走】シユ おもむきはしる。列子「――往還」

【趣味】シユ おもしろみ、おもむき。永心題跋「怪得伏二平易之中一、――在二言語之外一」

【趣レ裝】ソウ 急ぎて旅支度をする。漢書、曹參傳「及二蕭何卒一、參乃趣治二行裝一」

【趣織】ソク 促織に同じ（文選、注）

【趁】チン 震 おふ（追逐）‖趂。

【趟】タウ 養 ○はしる（走）小足に疾く走る。貴人の前を過ぐる時の禮「進―」「拜―」論、子罕「過之必―」○おもむく、歸向する「―利」‖趣。（二）いそぐ、せまる（迫）うながす。促・趣に通ず。すみやかに（速）漢書、高帝紀「使―銷印」‖促。

同訓異義 趟・趣・趣・歸の別は趨（一八八頁三段）の條を見よ。

九畫

【趍】趨（來眞一段の俗字。

十畫

【趨】（一）シュ ス （二）シュク・ソク 尤・屋 （一）の通音スウ

（一）はしる（走）小足に疾く走る、貴人の前を過ぐる時の禮「進―」「拜―」論、子罕「過之必―」○おもむく、歸向する「―利」‖趣。（二）いそぐ、せまる（迫）うながす。促・趣に通ず。すみやかに（速）漢書、高帝紀「使―銷印」‖促。

同訓異義 趨・趣・趣・歸の別は趨（一八八頁三段）の條を見よ。

○趨・趍・奔の別は走（一八五頁四段）の條を見よ。

【趨訪】走りて訪見する。蘇不期賦「公侯適退而容レ容、卿士俛仰而ー一」

【趨レ炎附熱】炎附熱趨（炎附のある人に取り入る。宋史、李垂傳「焉能——、看二人眉睫一以窺二旨趣一乎」

【趨賀】他人の家に赴きて祝ふ（參賀）

【趨向】おもむき。日趣向。

【趨レ義】義俠の爲におもむく。婦嬰文「重レ諾而ー一レ、負レ氣而尚レ俠」日赴レ義。

【趨迎】走り急ぎて出迎へる。

【趨競】はしりてきそひ爭ふ。宋史、呂祐之傳「純謹長者、不レ喜ー一」

【趨附】朝廷にはしりのぼる。韓愈文「與二衛道一レ、變レ服詭行」

【趨舍】他人の家にまゐる。推薦臣詩「權門誰解更ー一」日參趨。

【趨時】時世をおふ。易經「變通者ー一レ時者也」

【趨向】はしりづかひのこもの。皮日休文「ー一走養」

【趨舍】逃むと止まると。史、伯夷傳「跼穴之士、ー一有レ時（逃むにも退くにも各〻時機がある）日進退・趣舍。

【趨翔】たちゐ、ふるまひ。呂覽「ー一閑雅、辭令遜敎」

【趨出】はやあしにて出る。晉經「軍公既皆聽レ命、相揖ー一」

【趨勢】世のなりゆき。

【趨走】はやくはしる。戰國策「不レ能ー一」

【趨庭】子が父の敎を受ける處。論、季氏「嘗獨立、鯉趨而過レ庭、曰學レ詩乎」鯉は孔子の子伯魚。

【趨登】はしりのぼる。左傳「其右提彌明、知レ之ー一」

【趨拜】小足にて疾く走りゆきてをがむ。唐書、元德秀傳「傷レ足不レ能ー一」

【趨風】貴人の前を疾く走り過ぐる敬禮。左、成十六「見二郤子一必下見二宮而ー一」

【趨步】はやくこばしりにはしる。王儉詩「ー一明月輝二堦裏一」

【趨利】競ひて利を圖る。列子「農赴レ時、商ー一レ」

【趨綫】蚊蟀の異名（詩經、豳）日促綫。

【趨不レ謹】朝廷の上を行くに小足にて早く走るに及ばざる許可をたまはる、功臣に賜ふ特別の優遇（漢書）

十一畫

【趁】サン 旱

ー趨（サン）は驅り走る貌（吳都賦）

【趁】（一九〇頁二段）に同じ。

【趙】クヮウ 篠

ーー（クヮウクヮウ）は武き貌。又、張り設ける貌。張衡、西京賦「洪鑪陶鈞、猛虡ーー」

【趫】ケウ 蕭

○すばやし、みがるに善く走る。○すばやく善く木にのぼる。張衡、西京賦「非都盧之輕ー一、孰能超而究升」（都盧は國名、其の人善く高きに緣る）○たけし（健）「勇ー一」○足を舉ける。

【趫悍】すばやくあらあらしき（崇衛賦「ー一尨猛、如レ虎如レ羆」

【趫健】すばやくたけし。陸游、南唐書「陳海生數月、ー一能騎走」日趫捷。

【趫才】○すばやきはたらき。唐書、姜確傳「太宗選二ー一、衣二五色袍一」○輕滑にしてすばやき少年。留青日札「凡輕滑挑達少年曰二ー一」

【趫勁】たけくつよし。唐書、長孫皇后傳「父端ー一晩兵」

【趫捷】身がるにすばやし。後漢書、朱儁傳「輕勇ー一、軍中號曰二飛燕一」日趫矯。

【趫足】足を舉げる。漢書「仁可ニーー一レ待也」（時の速かなるに喩ふ）

【趫踔】たけくして善くはしる。何景明賦「衆ー一而便捷兮」

十二畫

【趮】サウ 皓

躁（一九〇五頁三段）に同じ。

十四畫

【趯】○ヤク ○テキ 藥 錫

○をどる（踊）＝躍。○跳ねる貌。○書法にて筆鋒の上に出づる者の稱。永字八法（一〇四五頁二段）參看。

【趯趯】○をどる貌。詩、召南「ー一阜螽」

足部

【足】○ソク ○シュ・スシ・ソ 沃 遇 虞

○あし、動物の下肢「手ー一」「跣ー一」股より趾まで。日脚。○踝（クワ）以下の稱「ー一跡」○すべて足の形せるもの「鼎ー一」○あゆむ、

はしる。漢書「高材疾一者先得之」○もと(下・本)「山一」○たる「厭一」「滿一」「知一」老子「知一不辱」禮、學記「學然後知不一」十分に全し、たす。論、顔淵「一食一兵」十分にする、充たす、缺かなし(滿)㊁なす(成)○すぐ(過)「一恭」

【足衣】ソク　たび。說文「襪、一一也」

【足音跫然】ソクオンキョウゼン　あしおとのひびく貌。莊、徐無鬼「夫逃空谷者、聞人之一一而喜矣、況乎昆弟親戚之謦欬其側乎」

【足下】ソクカ　○あしもと。老子「千里之行、始二於一一」○同輩に對する敬稱。古は人主にも用ふ。樂毅、報二燕惠王一書「恐下侵二先帝之明一以傷上先王之明、又害中於一一之義上」

【足骨】ソクコツ　足のほね、卅骨・踝骨・趾骨の總稱。

【足趾】シソク　あし、趾は蹠以下。左思、吳都賦「耳目之所不レ談、一一之所不レ蹈」

【足疾】ソクシツ　あしのやまひ。左傳「先傷二一一一一入二乎掘室一」‖脚疾。

【足心】ソクシン　足のうらの中心、つちふまず。後漢書、黃昌傳「左一一有二黑子一」黑子はほくろ。

【足跡】ソクセキ　あしあと。‖足迹・蹤跡。

【足用】ソクヨウ　費用を十分に足す。國語「恭所二以給一事也、儉所二以一一一也」

【足容】ソクヨウ　あしのやうす。禮、玉藻「手容恭、一一重」

【足附】ソクフ　あしのかた。‖足痕。

【足勞】ソクラウ　圖足をはこぶ骨をり。

【足恭】ソクキョウ　うやまひて度を過ごす。おもねりへつらふ。論、公冶長「巧言令色一一、左丘明恥レ之」

【折レ足覆レ餗】セツソクフクソク　鼎の足を折るときは、其の中實をくつがへす。小人を用ふる時は、其の任に堪へずして國家を覆すに喩ふ。易、鼎卦「鼎折レ足覆二公餗一」

【重レ足仄レ目】チョウソクソクモク　甚だしく恐るる形容。漢書、汲黯傳「令二天下重レ足而立、仄レ目而視一」

【重レ足側レ目】チョウソクソクモク　前條に同じ。(史、汲黯傳)漢書には側を仄に作る。

【躡レ足而待】ジョウソクジタイ　かかとをつまだてて今か今かと待つ。史、淮陰侯傳「亡可二翹一足而待一」

【不レ知レ足而爲レ屨】フチソクジカリク　人の足の大小を知らずして、屨を製する。足の大小は略ゝ同じ、故にその寸法を知らざるも、作り得らるるなり。孟、告子「聖人與レ我同レ類者、故龍子曰、屨之相似、天下之足同也」

【憂レ足】ユウソク　足をつつみて進まざる貌。史、滑稽傳「杜レ口一レ一、莫二昔稱レ楽耳」

【覆二足萬里流一】フクソクバンリノナガレヲ　氣だかく世外に超然たる形容。左思、詠史「振二衣千仞岡一」——」

【蹑レ足附レ耳】ジョウソクフジ　他人にさとられざるやうにそっと謀め告ぐる。史、淮陰侯傳「蹑二漢王足一、因附レ耳語曰、云云」

【足レ足】ソクソク　履物の足に適するにいふ。莊、逍遙遊「一一一履之適也、匡レ要帶之適也」「要は腰」

【如レ足如レ手】ジョソクジョシュ　兄弟の情の親き形容。李華、弔二古戰場一文「誰無二兄弟一」——」

【知レ足】チソク　足ることを知りて分に安んず。老子「一一一不レ辱、知レ止不レ殆」

【知レ足不レ辱】チソクフジョク　分を守るものは辱を受けず。前條參看。

【知レ足者富】チソクシャフ　足ることを知る者は心常に富む。老子「勝レ人者有レ力、自勝者強、——」

【足袋】ソクタビ　圖足衣に同じ。

三　畫

【趾】シ　ハ・ヘ　支　尾

○あしくび。○あしのうら。○とまる。○はじめ。○ふむ(踐)○ゆく(往)○ただす(正)○やむ(止)○ほとり(邊)○ふさぐ(塞)○ふさがる(塞)○ふさがる(塞)○ふさがる(塞)○ふさがる(塞)

【趾高氣揚】シコウキヨウ　得意の形容。史、酷吏傳「一一一一、莫二敢仰視一」

【趾美】シビ　足あと。詩、大雅「履帝武敏歆、攸レ介一一一、乃生二后稷一」

【趾踵】シショウ　あしくびとかかと。

【趾骨】シコツ　あしのほね。

【趾痕】シコン　あしあと。

【趾節】シセツ　あしくび。

【趾甲】シコウ　あしのつめ。

【趾間】シカン　あしのまた。

【趾端】シタン　あしのさき。

【趾趺】シフ　あしのうら。

【趾爪】シソウ　あしのつめ。

【趾掌】シショウ　あしのうら。

【趾尖】シセン　あしのさき。

【趾踵】シショウ　あしくびとかかと。

【趾頭】シトウ　あしのさき。

【趾髁】シカ　あしくび。

【趾】シ　ハ・ヘ　支　尾

○あしくび。○あしのうら。○とまる。○はじめ。○ふむ(踐)○ゆく(往)○ただす(正)○やむ(止)○ほとり(邊)○ふさぐ(塞)○ふさがる(塞)○ふさがる(塞)○ふさがる(塞)○ふさがる(塞)

【趾高氣揚】シコウキヨウ　得意の形容。史、酷吏傳「一一一一、莫二敢仰視一」

【趾美】シビ　足あと。詩、大雅「履帝武敏歆、攸レ介一一一、乃生二后稷一」

【趾踵】シショウ　あしくびとかかと。

【趾骨】シコツ　あしのほね。

【趾痕】シコン　あしあと。

【趾節】シセツ　あしくび。

【趾甲】シコウ　あしのつめ。

【趾間】シカン　あしのまた。

【趾端】シタン　あしのさき。

【趾趺】シフ　あしのうら。

【趾爪】シソウ　あしのつめ。

【趾掌】シショウ　あしのうら。

【趾尖】シセン　あしのさき。

【趾踵】シショウ　あしくびとかかと。

【趾頭】シトウ　あしのさき。

【趾髁】シカ　あしくび。

【跂】キ　支　㊁シ　支　紙　寘

㊀はふ、蟲がはひあるく。‖蚑。○ゆるくはしる。○むつゆび、指の數が普通より多し。莊、駢拇「故合者不レ爲レ駢、而枝者不レ爲レ一」㊁くはだつ、つまだつ、踵を擧ぐ。詩、衞風「一一予望之」‖企。㊂蹤一ヤは心力を用ふる貌。

【跂行喙息】キコウカイソク　かかとにてはひ行き、くちばしにて呼吸する、卽ち蟲鳥の類。史、匈奴傳「一一、蠕動之類、莫レ不下就二安利一而辟中危殆上」

【跂跂】キキ　蟲の行く貌。漢書「一一脈脈、普偏レ壁、是非二守宮一卽蜥蜴」

【跂想】キソウ　のぞみおもふ。宋史、韓琦傳「琦與二范仲淹一富弼一皆以二海內人望一同時登用、中外一一一其勳業一」

【跂足】キソク　足をつまだてて望む。次條參看。

【跂望】キボウ　かかとをつまだてて遠きを望む。詩、衞風「誰謂二宋遠一跂予望レ之」傳「跂レ足則可二以望一見之一」

【趺】㊀フ　㊁ケイ　眞　㊂ケツ　屑

㊀はしる(奔)○馬の疾行する貌。㊁ふむ(踐)

【跰】ゲツ　コツ　月　あしきる（断足）‖刖。

【趾】シ　紙　○あし（足）踝以下の称「足ー」「玉ー」禮、内則「奉席請何ー」○転じて城のどだい。又、物事のあと（踪跡）の義とす「城ー」「遺ー」「基ー」通じて止阯に作る。

【跰脚】ケツ　足骨の尖端の骨、左右各十四枚（掛鉄に二枚、他は皆三枚より成る）

【跲】ナン　寒　蹔に同じ　ー躓は片足にて行く貌。びっこをひく。又、行きて進まざる貌。荘、秋水「吾以ー一足ー躓而行」‖躓躓。

【跌】フ　屑　蹉に同じ　○あし。転じて物のあしだい。劉禹錫、笑砂碑「蝸首龜ー」○地を下視するさまに儘を屈して敬する貌「ー然」○あしをくみてすわる。

【跌坐】ケツ　儘が足をくみて坐する、あぐら。圓満安坐の義。婆娑論「結跏ー」是相最圓滿安坐義」

五　畫

【跏】カ　麻　あぐらをかく、両足をくみ合せて坐する。婆娑論「結ー趺坐」

【跏趺】カフ　両足をくみてすわる。仏教の坐法。柳宗元詩「一飯不ー願ー餘、ーー便終ー夕」‖結跏趺坐。

【距】キ　語　○けづめ、雞の足の後の爪「雞ー」○さかはり（刀鉾倒刺）○へだつ。○さる（去）「相ー三里」へだたり「ー離」○いたる（至）書、禹貢「子決ー九川ーー四海」○いたす（致）○たがふ（違）書、禹貢「不ー」朕行」○あたる（抗）○大いなり（鉅）○ふせぐ、こばむの拒に通ず。荀、法行「欲ー來者不ー」、欲ー去者不ー止」○とづ（閉）○鉤ーはkoの秘密の事を探り出す。○ーー躍は跳り越える。

【距離】キリ　距・至・到・達・造・遭・格・抵・起等の別は至（一五九一頁三段）の條を見よ。

【距躍】キヤク　○距・去・進・行○距は年月或は里程の相へだたるなり「横浜距ー東京ー七里」の如し。○去は來の反、その場を立ちのくなり。去來・往來と用よ。○遠はくひ違ひて離れ去るなり。中庸「忠恕違ー道不ー遠」○行は他所へたちのくなり。孔子「孔子去ー魯、不ー接ー淅而行」

【距堙】キイン　城を攻むるの具、土を築き少しく高くして城に近づくもの、堙はつき山。孫子「三月而後ーー成」

【距掌】キショウ　ふせぎうつ。漢書、田儋伝「田榮殺ー兵、ーー田都ー田都走ー楚」

【距絶】キゼツ　ふせぎたつ。後漢書、陳龜伝「固ー辺門人ーーー知友ー唯在ー公家ー而已」‖拒絶。

【距戦】キセン　ふせぎたたかふ。晉書、明帝紀「遣ー將軍ー騎屯ーーー于堂邑ー大破ー之」‖拒戦。

【距塞】キソク　へだてふせぐ。漢書、項籍伝「參分關中ー王ー秦降將ー以ーーー漢道ー」

【距跳】キチョウ　をどりあがる。易林「飲酒醉酣、ーー爭鬪」

【如ー距之斯拔】ニスルコトキョノゴトシ　雞のけづめをとりはなしたる如く、もはや抵抗力なし「宋史」

【距破】キハ　ふせぎやぶる。漢書、高帝紀「遂將韋邯ーーー之ー」

【距躍】キヤク　をどりて越える。左、僖二八「ーーー三百、曲踊三百」‖超越。

【距離】キリ　へだたり。

【跼】ク　屋　○かがむ、天寒くして足が伸びず。○蹐ーはをどる（跳躍）史、張儀傳「蹐ー科頭」又、片足を擧ける。

【跚】サン　寒　蹣に作る　蹣ーは行きて進まざる貌、しざる、よろめく、ひょろつく。びっこをひく（跛行）「醉步蹣ーー」‖槃散・槃珊。

【趄】㊀ショ・ソ　㊁ショ・ソ　魚　㊀ーーは行きて進まざる貌。あとしざる。㊁趑ーは趣りて進まざる貌（ーはもと趄また且に作る）‖趑趄。

【跖】セキ　陌　蹠に通じて蹠に作る　○あしのうら（足下・脚掌）准南、說山「善學者、若齊王之食雞、必食其ー」○古の大盜の名「盜ー」

【跖蹻】セキキョウ　盜跖と非躋と、共に古の大盜。鬼谷論「無ー其能ー而竊ー其位、無ー其功ー而有ー其祿、雖ー曰ー富貴、由ーーー之業ー也」

【跖之狗吠ゆ】其の仕ふる所の主に忠を盡すをいふ。戰國、齊策「——、非二貪ル跖而腰ヲ曉也、狗固吠レ非二其主一也」轉じて惡に黨し賢を嫉むに喩ふ。‖桀之犬吠レ堯。

【跖之徒】古の大盜の跖のなかま。孟、盡心「雞鳴而起、孳孳爲レ利者、——也」跖、一本蹠に作る。

【跕】ク　俗　又蹈に作る

○たがふ(違)○つまづく。○蹉ノ字は因循シテ時機ヲ失ふ。晉書、周處傳「欲二自修一而年已蹉ノ」

【跆】タイ　医

跕(前條)に同じ。

【跆】タイ

ふむ(踏)漢書、天文志「竝興兵相ー藉」

【跡】タク　セキ　陌　職

ゆるむ(弛)しまりなし、檢束せず。

【跡弛】檢束なくして、ほしいまゝの漢書、武帝紀「法禁之弛、ーー之士、亦在レ御ノ之而已」

【跡蕩】前條に同じ。蕩はおほまか。漢書、註「跡者ーー無檢制」

【跌】テツ　屑

○こゆ(越)○すぐ(過)「ーー過」○つまづく(躓)たふる(仆)つまづきたふれる。漢書、鼂錯傳「ーー而不振」○あやまつ、たがふ(差失)顚躓する「差ー」○はしる(疾行)○ー蕩はほしいまま(恣)

【跌失】つまづく。列子「雖走往還、無ーー也」‖蹉跌。

【跌宕】檢束なくして、ほしいまま。蜀志、陳壽傳「佳簡雖ーーー」‖跌蕩・放佚不羈。

【跌倒】つまづきたふれる。

【跌蕩】しまりなくして、ほしいまま。後漢書、孔融傳「爲二大學生一ーー放言」晉書、魏元忠傳「爲二大學生一ーー少レ檢」‖佚蕩・跌宕。

【跌咲】つまづきおつ。新論「登二前坂一而不ーーー者、慎二于大一也」

【跌踢】疾く走る。淮南、修務「驥子ーー前趁二千里一、以在二楚宋一」

【跌】テツ　薬

○ふむ(履)あしぶみする。史、貨殖傳「鳴ー屣ー履」○をどりてふむ。○ーーは墮ちる貌。後漢書、馬援傳「仰視二飛燕ーー墮二水中一」

【跋】(一)ハツ　(二)ヒ　月　黠

(一)あしなへ、びっこ(足偏廢)又、其の不具者を(二)かたよる、片足にて立つ。曲禮「立毋ー」

【跋渉】ちんば。莊、達生「蹇者ーー」‖蹇跛。

【跋扈千里】ちんばのすっぽんも千里の遠きに行く、勉強して已まざれば鈍の人も成功するに喩ふ。荀、勸學「蹉歩不レ休、——」

【跋立胥坐】跋は片足にてたつ、胥坐は兩足を展ばして、恰も箕の如くにすわる無禮の狀。曲禮「立毋ー跋、坐毋ー箕」

【跋渉之苦】山川無險の者のなかま。鳥渕自序「猶レ欲下戰二勳於鳥踏之墓一、越中逸跡子ーー之」

【跋】ハツ　馬　跋は俗字　通音バツ

○ふむ(踐)ふまへる。韓愈、進學解「ー前蹤後、動則得レ咎」○こゆ(越)あるく、草野を行く「ー渉」○もとる(基)もと(本)物のにぎり(把處)○くびす(足後)轉じておくがき、書物の終に題する文「題ー」「序ー」「ー文」

【跋胡】進退に窮する義。詩、豳風「狼跋二其胡一、載疐二其尾一」(胡は老狼の頷下ノ懸肉、老狼に胡あり、進めば則ち其の胡を踏み、退けば則ち其の尾に躓ク、よりて進退自由を得ざるに喩ふ)

【跋扈】強くしてわがまま。又、人臣が權を恣にして上をおかす。扈は魚を捕る水中の竹籬、大魚はそれを跳り越えて脫し去るが故にいふ。後漢書、梁冀傳「貴帝少聰叡、知二冀驕横一、晉朝二羣臣一、目レ冀曰、此ーー將軍也、冀聞深惡レ之、遂鴆殺」

【跋遮羅】跋羅刹娑の略。淸異錄「天福三年、鵝二僧法域一ーー」

【跋渉】苦みて山川を歩きまはる。詩、邶風「大夫ーー、我心則憂」傳「草行曰レ跋、水行曰レ渉」

【跋文】書物のおくがき、後序。

【跋刺】○魚のぴちぴちと跳ね躍る貌。李白詩「ーー銀鱗一欵二飛出一」‖撥剌・潑剌。○鳥の飛び起つ貌。岑參詩「ーー飛鵬鶚」

【跋扈】ふみあるく。左、成十三「ーー山川、險二越險阻一」‖經歷・跋渉。

【跋】　跋（前條）の俗字。

【跗】　フ　虞　遇

○あしのかた（足背・足上）○だい、あし、物のだい。附跌に通ず。○草木の實の殼（子房）　庾信詩「蓮實補ニ栗一」○疏一は黄帝の時の名醫の名（史、扁鵲倉公傳）

【跗骨】　足のかたのほね。下腿骨と蹠骨との間に在りて共に七枚一

【跗注】　戎服、脚袴に縛りつけて裤と連るもの。左、成十六「有ニ詛章之一一君子也」

六畫

【跲】　カフ　洽　業

つまづく（躓）けつまづきころぶ。中庸「言前定則不一」

【跪】　キ　紙

○ひざまづく、兩膝を地に著けて、腰と股とを伸して、姿勢が危くなるをいふ。禮、曲禮「授立不一」○膝を地につけて禮拜する「拜一」○あし（足）荀、勸學「蟹六一而二鰲」

同訓異字　ヒザマヅク　跪・跽　○跪は膝がしらを地に著け、爪だちして居るなり、膝と股とを伸べて勢の危きなり、禮法の一。史記「跪取ニ履、進ニ子黄石公一」○記は小跪也と註す、跪よりは輕し。戰國策「秦王距ニ荊、先生不ニ宜敎ニ寡人一乎」

【跪坐】　ひざまづきてすわる。敬意を表す。禮記「侍ニ食於君一、君一嘗レ食、則跪坐ニ而祭一」

【跪謝】　ひざまづきてことわる。孔子家語「陳王一一」

【跪授】　ひざまづきてさづける。魏志、張良取レ履、一一無レ辭」

【跪拜】　ひざまづきてをがむ。玉篇「男兒一一謝ニ君王一」

【跪伏】　ひざまづきてふす。

【跪捧】　ひざまづきてささげる。蘇軾詩「紫衣中使傳ニ詔旨一、一一再再聞ニ天香一」

【跬】　キ　紙

かたあし（半步）一たび足を擧ぐるを一（三尺）といひ、兩足を擧ぐるを步（六尺）といふ＝闕。

【跬步】　かたあし、半步。禮、祭義「故君子一一而不レ忘レ孝也」＝闕步。

【跫】　キョウ　多　江　圖

○あしおと（足音）○行く人の聲。

【跫音】　あしおと。跫然を見よ。

【跫然】　地を踏む聲。蘇軾詩「一一深源馬蹄響」

【跫然】　足音の貌。莊、徐無鬼「聞ニ人足音一一而喜矣」一說に喜ぶ貌。

【跨】　㊀　ク、　㊁　コ　禡　遇　音　コ

㊀またぐ、のりこす。○また、またくら、兩股の間。＝胯。○わたる（渡）○こゆ（越）左、昭十三「康王一之」㊁うづくまる（踞）○またがる、兩股を開きて乘る「一馬」○よる（據）「一據」○わたる（亙）兩方に連りわたる。○ほこる。誇と通ず。列子「而欲ニ貪禮義一以一ニ人」

【跨有】　またがりて己の所有とする。

【跨駅】　またがりこえる。放鹿囘跋「太宗皇帝、天縱聖學、一一百王、萬機之餘、尤留ニ神翰墨一」

【跨越】　またがりこえる。梁沈文「一一古今一標ニ格實宇一」

【跨鎭】　○鎭に乘る。雲笈七籤「一一昇ニ九霄一未レ易レ致也」○轉じて仙人となる義。又、俗に人の死を謂ふといふにより「一四歸」といふ。

【跨據】　またがりて占め據る。魏志、諸島亮傳、今對、假ニ憑威力一一ニ一州一、初有ニ其國一求レ垂ニ撫慰一」

【跨鬲】　子、父に勝るをいふ。鬲の上に釜あり、釜と父と音近し、故に此の熟語あり「晉宮故事」一說に馬權を阜といふ、鬲は阜の俗字、馬生れて阜を過するは凡馬に非ず、故に取りて喩ふ「札樸」

【跨制】　兩方にまたがりてとりしまる。管子、陸機傳「謀無ニ遠計一、察不ニ失機一、故遂割ニ據山川一一一一前矣」李斯の上書に「跨ニ海內一、制ニ諸侯一」とあるに本づく。

【跨躡】　またがりふむ。晉書、石勒載記「一一燕趙一、并ニ吞韓魏一」

【跨年】　二年どし。晉書、郭璞傳「去秋以來、沈雨一レ一」

【跰】　ケン　先　銑

○皮が起る。○足にできるたこ（胝）○足の指のあかがり。趾、天道「百舍重一而不敢息一」（一に重繭に作る）

【跟】　コン　元

○くびす、かかと（踵）足の後下部「脚一」○人の後に從ひ行く（隨行）

【跟尋】　きびすと、かひなと。蘇軾詩「踏曲猶能辨ニ一一」

【跡】 セキ シャク 囚 迹に同じ

○あと、あしあと。○あとかた、蹟に通ず「寂ー」「古ー」「足ー」「筆ー」「鳥ー」「馬ー」○あとをつける、追っかける。

【跡盗】ぬすびとのあとをつける。宋史、王安中傳「開封獲ー者、盜說去、民有ー與ー出入ー與ー卒遇、縛以爲ー盜、安中出ー民、抵ー死罪ー」

【跡捕】あとをつけてとらへる。宋史、羅點傳「民以ー妖幻ー相教授、點ー、殺ー三十餘人ー」

【倒ー跡】あしあとをなくする、踪跡を晦ます〔莊、山木〕‖削迹。

【跣】 ㊀セン 銑 ソン 兜 ㊁セン 銑 ソン 兜

㊀はだし、すあし。說文「足親ー地也」書、說命「若ー船ー視地、厥足用傷」㊁蹁ー、㊂は旋り行く貌。又、舞ふ容。

【跣行】はだしにて歩する。韓非、說林「越人ー」

【跣走】すあしにてはしる。淮南子「申包胥求ー救於諸侯、乃贏ー而ー」

【跣足】はだし。五代史、王彦章傳「能ー一ー負ー薪、行二百歩ー」‖徒跣。

【跧】 ㊀セン 銑 ソン 元 ㊁シュン 眞

㊀かがむ（局・屈）○ける（蹴）○はらばふ（匍）○ひくし（卑）㊁伏す貌。魯靈光殿賦「狡兎ー伏」○打ーは溝洲人が一膝を屈する禮法。

【跧伏】はらばふ（匍匐）王逸賦「兎ー耳ー」

【踁】 チ ガ 紙

○とどまる（止）○〜躇は行き悩まざる貌。‖躊躇。○そなふ（具）「備ー」たくはへる「ー糧」‖峙。

【跳】 チュ 遇 尤

○行く貌。○をどりゆく貌。

【跳踁】跳り行く貌。左、昭二五「魯昭公、顓鵲ー」

【跳】 ㊀テウ ㊁タウ 蕭 旨

㊀をどる（躍）をどらす。○はねあがる（上）○とびあがる（驟）㊁のがる。史、高祖紀「漢王ー」‖逃。

【同訓異語】跳・踊・躍・躍○跳ははねあがる義。莊子「東門跳梁」○踊は小をどりするなり、其の所を離れずして、をどりあがる義。○躍は踊の俗字。○躍は勢よく、すみやかに飛びあがるなり。六書故に「大馬ー躍、小馬ー踊、躍去ー其所、踊不ー離」とあり。

【跳梁】をどりあがりてはえる。修行道地經「又入二樹間一、跳ー哮吼」

【跳驟】疾く馬を馳す。漢書、張王傳傳「遂ー至二長安一」‖疾驅。

【跳丸】〇百戲の一、たまを弄ぶ技。傳燈「ー一擊劍」〇時の速なるに喩ふ。杜牧詩「ー日月十經ー秋」

【跳趠】をどりはねて善くかける。元稹、望雲騅歌「頗頗絳甲騅ー地、往往ー一騎不ー得」

【跳擲】すばやくをどり走る。詩經、疏「ー一之獸兎、逐ー犬則能捷ー得之ー」

【跳ー身】からだをはねをどらすの意。高五王傳「步ー追ー亡ー飛、ー一ー誰者數矣」

【跳然】とびあがる貌（王安、洞簫賦）

【跳刀】刀をはげしくふりまはす。晉書、王敦傳「左右人皆ー一ー大呼」

【跳盪】をどりふせぐ。唐書、百官志「矢石未ー交、陷ー堅突ー衆、敵因而敗者、曰ー一ー」唐臧傳「年十一、立ー一ー功」

【跳怒】はねあがる。梅堯臣詩「捽ー刀欲ー刺ー憐、ー一番就縛」

【跳舞】をどりまふ。四洋のダンスー‖圖舞蹈。

【跳脫】つよくふきあがる。宋景、招二北客一文「酒解ー酣、食ー於水濱、ー一清波、上潑二飛鳥一」

【跳沫】水けむりををどらす。司馬相如、上林賦「蹶波ー一」

【跳躍】はねをどる。曹植賦「魚ー一」

【跳梁】〇ほしいままにをどりあがりはねまはるの莊、逍遙遊「東西ー一、不ー避二高下一」‖跳踉。〇悍しくて謀叛人などの跋扈するをいふ。漢書、灌嬰之傳「今先啼一隅小虫、ー一於山谷間一」

【跳踉】〇前條に同じ。莊、秋水「ー一乎井幹之上一」〇足の亂れ動く貌。諸葛長民傳「服中起足ー一、如二與ー人相打一」

【跳奔】のがれはしる。唐書、王世充傳「密以二數十騎一ー一」‖逃奔。

【路】 ロ 遇

○みち（道）人や車馬の由りて行く所「山ー」「行ー」「熟ー」「險ー」「遠ー」○みちす、往來する。○すぢ（條理）「筆ー」「思ー」物事のすぢみち。之に由りて行く者。孟、告子「義人之正ー也」

○くらゐ(位)重要の地位「要ー」孟、公孫丑「夫子當ー於齊」○たびぢ(旅途)○道につかれる(疲)孟、滕文公「率ー天下而ー也」○傾ケイ圮ヒの貌。衛、宮國「田疇徹、都邑ー」(一説に路は露ロウ城郭墻垣なき襃)○大いなり。ー弓は大弓。主に君主に關することにいふ「一門」「一寢」○あらはる(暴露)＝露。○つづみの一種。○弓の一種。弓の大いなるもの「一弓」○はしる(奔走)○くるま「大ー」＝輅。○宋代の行政上の區劃。唐の道。元の省の類。

【路岐】ロキ みちすぢの分れるところ、わかれみち。王褒、笙賦「詠二別鶴于ー一」

【路扼】ロヤク 前條に通用す。

【路衢】ロク 城郭内のちまた。公羊傳「楚莊王伐レ鄭、縛二乎皇門一放二乎ー一」

【路鼓】ロコ 四面に皮を張りたるつづみ、宗廟を祭る用具。周禮、地官「以ニー一鼓鬼享」

【路次】ロジ みちすぢ。晉書、哀帝紀「戎旅ー一、未レ得レ經二關賦役一」＝途次。

【路人】ロジン ○みちゆく人。詩、經二乘、始息兮二詩「一稱背山秋草裏、ー一唯拜漢文陵」＝行人。○轉じて自分と關係なき人。＝他人。

【路寢】ロシン 天子諸侯の正殿、寢は常室。公羊、莊三二「ー一者何、正寢也」

【路車】ロシャ 諸侯の乘るくるま。白虎通「諸侯ー一、大夫軒車」

【路程】ロテイ 行くみちのり。＝行程・旅程。

【路殿】ロデン 天子諸侯の正殿。劉楨、魯都賦「ー一臨其深榮」

【路頭】ロトウ 路旁に同じ、頭はほとり。＝路畔。

【路馬】ロバ 王者の馬車の馬、路は輅。曲禮「下二公門一式ニー一」

【路旁】ロボウ みちばた。韓偓詩「征馬嘶嘶立ニー一」

【路費】ロヒ ろぎん、旅行の費用。王禹偁詩「道福無二斗粟一、ー一無二青錢一」＝旅費。

【路邊】ロヘン 路旁に同じ。

【路門】ロモン 天子のもん。左、桓二、疏「君之所レ在、以レ大爲レ號、門曰ニー一、寢曰二路寢一」

七 畫 紙

【跽】キ

○ひざまづく(長跪)莊、人間世「擊ー一拳曲、人臣之禮也」○體を伸ばして尻をかかとから離す。史、項羽紀「項王按レ劍而ー一」

同訓異義 跽・跪の別は跪（一八九五頁一段）の條を見よ。

【踞】キョ 沃

○せぐくまる、かがむ(曲)背をかがめてあらく。○踏ートウ・トウは伸びざる貌。又、局に作る。

【踞路】キョロ せぐくまりて伸びず。蓋し恐るる貌。踞天蹐地を見よ。

【踞跧】キョセン かがみ伏す。范成大詩「百日籠廂閑ニー一」

【踞蹐】キョセキ 行きて進まざる貌。たちもとほる。史、淮陰侯傳「騏驥之ー一、不レ若二駑馬之安步一」

【踞天蹐地】キョテンセキチ 天の高きにもせぐくまり、地の厚きにもぬきあしす、おそれて身のおきどころなき貌。詩、小雅「謂二天蓋高一、不二敢不一局、謂二地蓋厚一、不二敢不一蹐」局は跼。

【踞頓】キョトン つまづく。晉書、劉曜載記「背乘二赤馬一、無レ故ー一、乃乘二小馬一」

【踞歩】キョホ せぐくまりてあゆむ。杜甫詩「ー一凌二艱埒一、側レ身下二畑疇一」

【跋】 ㊀ シュン ㊁ ソン 元 㫖

㊀しりぞく(退)とどまる(止)＝逡。㊁ふむ、蹴たふす。○うづくまる。＝蹲。

【跋烏】ソンウ 日中にうづくまり居るといふ三足の烏。淮南、精神「日中有ニー一」註「跋猶レ蹲」

【跋跳】ソンチョウ 幸その異名、形の似たるが故【淺書】史、貨殖傳には蹲鴟に作る。

同訓異義 踏・跳・踊・躍の別は跳（前頁二段）の條を見よ。

【踏實】トウジツ ○僞が高くなる。荀悦「漢紀」「踏實隆レ之、綵遂ー一」＝騰貴。○足をきられし罪人のはきものが高くなる、犯罪人の多きが故。左、昭三「履踏ー一」

【踊】 ヨウ 腫 俗字 踴は

○をどる、はねあがる(跳)「一躍」「飛ー一」○まふ(舞踏)○支那にて葬式の時、もだえかなしみてはねをどる。檀弓「辟ー一哀之至也」(辟は胸をうつ)○のぼる、あがる(上)○刑を受けて刖アラられたる者のはく履。○圖をどり、樂曲に合せてをどるまひ「都ー一」

同訓異義 踊・跳・踴・躍の別は跳（前頁二段）の條を見よ。

【踊現】ヨウゲン 高くあらはる。梁簡文帝文「菩提妙塔、多寶――」

【踊塔】ヨウタフ たかきたふ。閻孤及詩「雲扶―― 青霄庫、松廕三神庭」白日寒」

【踊躍】ヨウヤク とびをどる。よろこびたのしみ（歓楽）て勇み立つ。坐作撃刺の勢よき形容。詩、鄭風「桴レ鼓其鏞、――用レ兵」

【踉】リャウ 陽

○跳―はをどる（躍）又、はねまはる。荘、秋水「跳―乎井幹之上」○―蹌はよろめく貌。○―踏は行くこと正しからざる貌。韓愈詩「―蹌越門限」又徐行ユクの貌。潘岳賦「―蹌而徐来」

八 畫

【踠】エン ヲン 阮

かがむ、かがまる（屈）足がかがまる「擧―」

【跨】㊀キ 支 ㊁ィ 眞 紙

㊀ちんば、あしなへ（蹇）○かたあし（一足）かたわれ、かたかた（攲・奇）漢書、段会宗傳「亦足以復雁門之―」○―幅はけはし、そばだつ。＝崎嶇。㊁よる。古、倚に通ず。韓非、亡徴「其強弱相―者也」㊂ふるまひ（態）荘、養生主「膝之所―」○はぎ（脛）○長―は蜻蛉アシナガバチ爾雅

【跨跂】キキ あしなへ（蹇）晉語「―挙行」

【跨鴟】クヰシ けはしき貌。左思、蜀都賦「山卑狐穢而―」一解、傾側クヰソクの貌。

【跨人】キジン かたはもの。＝畸人。

【跨閾】キヰキ 門により立つ。公羊、成二「二大夫出、相與―レ―而語」＝倚閭。

【跂】キ 紙

―踵はなけずわり（蹇踵）箕に通ず。

【跍】キク 屋

○ふむ（蹲）○―鞠にて作りしけまり（毬）「蹋―」＝鞠。

【踞】キョ 御

○うづくまる（蹲）膝を立てて坐する「虎―」「蹲―」○其の上に坐る。○こしかける。漢書、高帝紀「沛公方―牀」○箕―は両足を前になげだして坐す。漢書、陳餘傳「箕―詈甚慢之」

【踝】クヮ 馬

○くびす（跟）○くるぶし、足くびの左右に高く凸起せる骨。

【踝跣】センクヮ すあし、踝はくるぶし。後漢書、馮衍傳「飢者毛食、寒者―」」

【踡】ケン 先

かがまる、せぐくまる、蹐をまける。

【踡渦】ケンクヮ せぐくまる、縮りて伸びざる貌。淮南、精神「――而詘、亟タ不レ能」

【踡跼】ケンキョク 曲がる貌。一解に特起の貌。晉宮光殿賦「連巻―寒、綸囷――、倚欹傾兮」＝蜷跼・踡曲。

【踖】セキ シャク 陌

○さとし（敏）すばやし。詩、小雅「執爨――」○長き脛にて行く。○踧―はシュクシュクの貌。論、鄉黨「踧―如也」○ふむ（蹴）ふみこえる。曲禮「毋―レ席」

【踖踧】セキシュク つつしむ貌。文同詩「一徑レ入二仕路一行歩毎―レ―」＝跼蹐。

【踧】シュク 屋

○ふむ（履）足にてふむ。○其の位をふむ。―阼ソは天子の位に即く。禮記「―阼臨二祭祀一」（阼一に祚に作る、祚は位）○ふみ行ふ（履行）「―約」「實―」「―言」○したがふ（循）論、先進「不――迹」○ゆく（往）呂覽、古樂「王命二周公一―伐之」○しく（綜）○つらなる（列）又、列なる貌。詩、關風「邇豆有―」

【踧踖】シュクセキ 踧・履・蹈・踏・踖・蹴の別は儀（冠五冊一丁）の條を見よ。

【踧行】シュクカウ 言ひしことをふみ行ふ。＝履行。

【踧更】シュクカウ 漢代の制、兵卒として徴発せられたる者が金銭を以て代人を雇ひて出すをいふ。

【踧極】シュクキョク 踧阼に同じ。魏照、河清頌序「聖上天飛―レ、遊レ鼓二十四載」＝登極。

【踧履】シュクリ はきものをふむ。曲禮「毋―レ―」

【踧會】シュククヮイ いひたることを實行する。曲禮「能レ身―レ、謂二之善行一」

【踧踏】シュクタフ ふみをさむ。左傳「―二青

好、要二結外援一」
【踐躡】センジフ　ふみにじる。嬉嘉臣詩「餓獸相扶持、老鷹貪二一一一」＝蹂躙、蹂躪。
【踐阼】センソ　阼は主人の登る階。天子、宗廟の阼階に登り祭祀を主る。因りて即位の義とす。晉語「一レ一臨二祭祀一」註、文王世子「成王幼不レ能レ莅レ阼、周公相一レ而治」（阼一に祚に作る、祚は福、天子の位）
【踐祚】センソ　天子の即位の儀。発表、陛下一レ一、聖政維新」前條參看。
【踐言】センゲン　こけの上をあゆむ。李白詩「一レ一朝霜滑、弄レ波夕月圓」
【踐踏】センタフ　ふみにじる。南史、梁宗室韶傳「酒闌乃徵上二韶牀一一一脊偏一」
【踐統】センタウ　位にのぼりて政をすべる。魏志、公孫度傳、註「一二一洪緒一、克壯二徽猷一」
【踐年】センネン　年を歴る。魏文帝文「漢歷レ世二十有四、一一四百二十有六」＝歴年。
【踐冰】センヒョウ　冰をふむ。甚だ危きに喩ふ。南史、宋江夏王傳論「一一之風已除、大山之安可レ恃」＝履冰。
【踐約】センヤク　約束をふみ行ふ。
【踐履】センリ　○あゆむ。漢荊舒、李綱傳「一有二脚疾一不レ能一一一〇ふみつける。詩經「牛羊勿二一一一」〇ふみ行ふ。又おこなひ（品行）
【踐履】花綱僕をふみ行ふ。綱僕、士相見禮「夫子之贄私、不レ足二以一一レ一」【踐歷】多くの官をつとめ歴る。蘇軾文「早回二翔于近密一、久一二一于中外一」＝閲歴・履歴。

【踪】

蹤（足部十一畫）に同じ。
【踪跡】あしあと。轉じてゆくへ、ありか（所在）宋史、寇序辰傳「一一深絕、包二藏禍心一」

【踔】

㊀ソツ　㊁スキ　圓月
㊀ふる（觸）○にはか「猝一」＝猝。㊁のつまる（渋）太玄經「蹇レ於林一」

【踔】

タク　㊥㊦
○こゆ（踰・越）後漢書、蔡邕傳「一宇宙而遺俗兮」○はしる（走）○まさる（勝）「一絕」＝卓。○はるか、とほし（遠）＝卓。○踔一はちんばがくるしみ行く貌。一解に常なき貌。
【踔遠】エンク　はるかに遠し。史、貨殖傳「上谷至二遼東一一一」
【踔絕】タクゼツ　甚だしくすぐれる。漢書、孔光傳「非レ有二一一之能一、不レ能二踰越一」＝卓絕。
【踔厲風發】タクレイフウハツ　踔厲は卓絕してはげし。風發は風の如く勢よく議論が口を衝いて出る。韓愈、柳子厚墓誌銘「踔厲二奮今古一、出二入經史百子一一一、卓犖風二發議人一」

【踏】

タフ　㊀
○ふむ（踐）「踐一」書經「心之憂危、若一一虎尾涉二于春冰一」＝踏踏。○ふみつける、足が地に著く。○あしぶみする「舞一」「一歌」○あゆむ（歩）

同訓異字　踏・蹈・履・踐等の別は履（第三五四一頁）の條を見よ。

【踏襲】タフシフ　おちばをふむ。温庭筠詩「一一階一レ行」
【踏歌】タフカ　足にて地をふみ節奏をなして歌ふ。晉書、樂志「上元夜（中略）出二內人一、連袂一一」＝踏歌。
【踏月】タフゲツ　月下を歩む。温庭筠詩「折レ花使一レ」
【踏碓】タフタイ　ふみくだく。陸游詩「青牡一一白雲堆」
【踏殺】タフサツ　ふみころす。傳燈錄「出二馬駒一一一天下人一」
【踏青】タフセイ　○春日郊外のもそびの賞遊詩「白白紅紅相間開、三三五五一一來」○上巳の曲水の宴。○正月八日士女相與に嬉遊するをいふ。蘇軾詩序「正月八日士女相與嬉遊、謂二之一一」○○圖清明の日の郊遊。
【踏靴】タフカ　こけをふむ。東莊詩「一レ一青黏レ屐、擧レ蘚映レ衫」＝踏青。
【踏踏】タフ　ふむ。劉孝威詩「一一纖珠鳴」
【踏破】タフハ　ふみつける、破は助字。傳燈錄「一二一蠻鞋一無二窟處一一」
【踏白】タフハク　軍隊の名、さぐりなへ。宋史、吳拱傳「自二北邊一至二武興一、列二五寨一以一一・推錄・選鋒・策選鋒・遊奕」
【踏舞】タフブ　足ぶみしてまふ。陳師道詩「舖筵一一獻二雅儛一」

【跠】

チ　㊁
一躇（チュ）はたちもとほる、行きて進まざる貌。詩、邶風「擊鼓」首一一踟躕（チチュ）＝踟躕・躊躇。
【跠跦】チチュ　○ためらひて進まざる貌。王延壽、魯靈光殿賦「四隅一一以開宴」
【跠躇】チチョ　たちもとほる、足を住めること。荀成大詩「每レ逢二絕勝一即一一」＝跠躇。

【蹴】

㊀チキ　㊁シュク　屋　錫
㊀一一（チキ）は道路の平易なる貌。詩、小雅「一一周道」＝坦坦。㊁一踏（シュクタ）は恭敬なる貌。論、鄉黨「君在一一如也、與與如也」

【蹟】

㊀チキ・チャク　㊁シャク　錫　藥

㊀ける、足にて物を蹴る。㊁驚く貌「驚ー」忽遽クツキョなる貌。

【踏】 トウ・タフ　㊥　ハイ　㊦　ホウ　㊦　ホツ

たふす。たふる（倒・仆）左、襄十一「與晉ー之」つまづきたふる「傾ー」「顚ー」

九　畫

【踽】 ク　㊦

○親しむものなき貌。○ひとり行く貌。詩、唐風「獨行ー」【踽踽涼涼】ク・ク・リョウ・リョウ　獨り行く貌の、親しむものなき貌。呉、盡心「行何ヨウ――」

【蹂】 ㊀ジュウ　㊁ジュウ　㊦　㊦

㊀ふむ（履・踐）○ふみにじる、ふみあらす。㊁禾をふみて穀を取る。詩、大雅「或簸或ー」

同訓異字　踐・履・践・蹈の別は履（第三画五一頁）の條を見よ。

【蹂踐】ジュウセン　ふみにじる。史、項羽紀「餘騎相ー――」‖踐蹂・蹂躪。

【蹂躪】ジュウリン　ふみつける。王源詩「縱經ニー――」遠遊塵」‖蹂踐。

【蹂轢】ジュウレキ　ふみにじる。後漢書「東擢ニ身植」「ー――」‖蹂躪。

【蹂踐】ジュウセン　前條に同じ。淮書「百姓奔走相ー――」‖蹂踐。

【躊】 シュン　㊦　セン　㊦

○そむく（乖）たがふ‖舛。○まじる、まだら（雜）○ーーは失意の貌。盧照鄰文「客色ー――」

【躊躇】チュウチョ　たがひまじる。後漢紀、光武紀「謀ニー――於王義」‖躊躇。

【踵】 ㊀ショウ　㊁ショウ　㊦　㊦

㊀くびす、きびす、かかと（足後跟）「接ー――」○いたる（至）「ー門」○あつまる（衆）○おふ（追）「追ー」○ふむ。○よる（因）漢書、刑法志「ー秦而置ニ材官於京師ニ」○つぐ（繼）ひきつぐ。○つづく（接）「ー接」○しきりに（頻）莊、德充符「ー見ニ仲尼ニ」㊁躡ーは、行くこと能はざる貌。

同訓異字　踵・重・到・疎・諸・遝・捨・戾・記等の別は重（一五九一頁三段）の條を見よ。

【踵ル踵】シュウシュウ　あしをつまだてる。魏志、公孫瓚傳、注「東西歩卒、ーー來附」

【接レ踵】セッショウ　かかとをつづける。人が續きて往來する。轉じて物事の續きて起る義とす。戰國策「韓魏父子兄弟ーー而死ニ於秦一者世矣」

【踵繼】ショウケイ　ひきつづきてとらはれる。唐書、元結傳「百姓轉徙、ーー不レ絕」

【踵接】ショウセツ　かかとがつづく、人がたえずつづき行く。宋史、李顧忠傳「入ニ城宜ニ布徳意ニ不レ殺ニ一人ニ中原歸附者ーー」‖接踵。

【踵踵】ショウショウ　ふみにじる。漢書、項籍傳「餘騎相ーー爭ニ項王ニ」‖踐踵。

【踵息】ショウソク　きびすに徹する如く深く呼吸する、即ち心を靜かにし生を養ふ術。莊子「至人之息以レ踵、衆人之息以レ喉」

【踵武】ショウブ　あとをつぐ、武はあしあと。漢書、司馬相如傳「車轍者ーーレー、迹轢者風靡」

【踵レ門】ショウモンニ　親しく其の門に至る。孟、滕文公「ーーレー而告ニ文公ニ」

【重レ踵屏レ息】チョウショウヘイソク　足をかさねいきをころす。甚だしく恐れる形容。

【不レ旋踵】フセンショウ　○時をうつさざる義、直ちに。史、吳起傳「其父――逃死ニ於敵ニ」○後へしりぞかざる義。漢書、鼂錯傳「前死――」

【蹌】 ㊀ソウ　㊁ソウ　㊦　㊦

㊀ふむ（踐）「奔ー」小さしく踏む。莊、馬蹄「怒則分背相ー」㊁ー踉ソウは跛者コビの行く貌。莊、秋水「吾以ニ一足一蹌而行」（蹌は踏に同じ）又、常なく定まらざる貌。陸機文賦「故ーー於短韻」又、暴かに長ずる貌。楚辭、七諫「馬蹌ーー蹄而日加」

【蹄】 ㊀テイ・ダイ　㊁テイ　㊦　㊦

㊀ふむ（踐）「奔ー」小さしく踏む。莊、馬蹄「怒則分背相ー」㊁ー跂シは心力を用ふる貌。莊、馬蹄「蹩躠爲ニ仁ー跂爲ニ義ー」

【蹄死】テイシ　ふみころされる。傳燕、與ニ柳中丞一書「祭ニーー之士ニ」

【蹄】 ㊀テイ　㊁テイ　㊦　㊦　又、蹏に作る

㊀ひづめ、獸の足。又、其の爪「牛ー」「豚ー」「馬ー」○わな、兎をとるわな(兎罝シヤ)㊁ふむ(踐)ける。ーけする。

【蹄鐲】ティダイ ひづめにてけろと、くちにてかむと。名詩記「北齊楊子華畫ニ馬騁圖ニ夜聞ニーー長鳴ー」

【蹄涔】ティシン 牛馬のあしあとにたまりたる水。轍にて微少なるものに喩ふ。淮南、氾論「夫牛蹄之涔、不レ能レ生ニ鰌鮪ニ而蜂房不レ容ニ鵠卵ー、小形不レ足ニ以包ニ大體ー也」晉書、劉曜載記「ーー不レ容ニ尺鯉ー」

【蹄筌】ティセン 兎をとるわなと、魚を捕ふる竹器と。轍にて道を記きたる言文に喩ふ。言文は其の道を悟り得るまでの具なるが故。晉藤文「文字言說兮、固レ非ニーーー」(一四一六頁、良)參看。

【蹄鐵】ティテツ 馬のひづめにうつ鐵。かなぐつ。

【蹄迹】ティセキ ひづめのあとの、くぼみ。新論「ーー之內、不レ生ニ蛟龍ー」(せまき地には大人物の出でざる喩)

【蹀】チヤ 葉

○ふむ(履踏)○踐ーは行く貌。○蹀ーは小步(スコシヅヽ)の貌。張衡、南都賦「羅機蹁ー而容與」

【蹀躞】チヤシヤ 行く貌。范成大詩「ーー悉ニ馬性ー」

【蹁】ヘン 先 國

ーー躚(シヤク)は聚まる貌。馬融、長笛賦「ー躚攢仄、蜂聚蟻同」一說に追蹤(ツイソウ)の貌。

【蹁】ヘン 先

○よろよろとあるく、ちどりあし、足正しからず。○ーー躚(シヤン)はめぐりゆく(旋行)貌。又、まふ貌。

【蹁躚】ヘンシヤン ○めぐりゆく貌。張衡、東都賦「蹴蹋ーー」○めぐり舞ふ貌。赤壁賦「羽衣ーー、過ニ臨皐之下ー」

【蹉】(一)ユ (二)エ 虞 遇 國 途に通ず

㊀こえる。こす(越)「ー過」○わたる(度)左、隱元「士ーー月外姻至」○すぐ(過)をかす(犯)左傳「以ニ禮防ニ民、猶或ーレ之」○のぼる(登)○をどる(跳)とびこす。○いよいよ(愈)淮南子「亂乃ーー甚」㊁はるか。=遙。

【蹉越】ユエツ 踰・越・蹉の別は越(一八九九頁一段)の條を見よ。

【蹉過】ユクワ ○己の分限に過ぎる。史記、自序「明ニ分職ー、不レ得ニ相ーーニ」○のりこえる。左、襄三一「門不レ容レ車、而不レ可ニーーー」

【蹉迕】ユゴ こえる、すぐ(經過)南史、王弘之傳「拂レ衣揚ーー、ニーー三紀ー」

【蹈】タウ 皓 國

「踏」(足部七畫)の俗字。

十 畫

【蹊】ケイ 霽 國

○こみち(徑道)「山ー」「幽ー」「荒ー」史、李將軍傳「桃李不言、下自成ーー」○すぐ(徑)こみちをまっすぐにわたる。左、宣十一「牽牛以ー人之田」

【蹊隧】ケイスイ 山間のこみち。莊子「山無ニ蹊隧ー、澤無ニ舟梁ー」

【蹇】ケン 銑

○びっこ、ちんば、あしなへ(跛)「ー跛」○なやむ(難)くるしむ(困阨)「屯ー」○まがる(屈)○にぶし(遲鈍)にぶきもの。○ぬく(拔)○かかぐ、衣をかかげる。=蹇。○とどまる(停)○易の卦の名、艮下坎上。○ーはなやむ貌。又、忠貞なる貌。=蹇蹇。○偃ーはおごる、たかぶる(驕)左、哀六「彼皆偃ーー」又、高き貌。離騷「望ニ瑤臺之偃ーー兮」又、衆く盛んなる貌。離騷「何瑾佩之偃ーー兮」〜

同類相從 ㊥蹇・悃・悾・蹻・蹻・阻・屯の則は悃（六四頁一段）の條を見よ。

【蹇傷】ケンショウ ちんばと、せむしと。唐書、楊國忠傳「士之醜野ニ者、呼ニ其名一而笑ニ於堂上一」

【蹇吃】ケンキツ どもる。又、話が出で難し。蘇軾詩「改ニ更前格一各ニ一」

【蹇蹇】ケンケン ○なやみ苦しむ貌。易、蹇卦「王臣ニ一、匪ニ躬之故一」○忠貞なる貌。漢書、鄒陽傳「引ニ經義一、陳ニ謀策一、至ニ於滿紙一ニ一無ノ已」ニ蹇蹇。

【蹇産】ケンサン 屈折する貌。楚辭「思ニ一而不ノ釋」ニ蹇產。

【蹇士】ケンシ 忠直のさむらひ。唐書、元德秀傳「德秀、善ニ文辭一、作ニ一ニ賦一以自況」

【蹇脩】ケンシウ 伏羲氏の臣にて、始めに巧なりし人。離騷「吾令ニ一ニ以爲ノ理」ニ轉じて媒人をいふ。ニ蹇修。

【蹇澁】ケンジフ 蹇滯に同じ。白居易詩「喪行雖ニ一ニ」

【蹇滯】ケンタイ なやみとどこほる。ふしあはせで苦む。王禹偁詩「胡爲ニ一ニ多ニ窮愁一」ニ蹇澁。

【蹇兎】ケント ちんばのうさぎ。戰國策「譬若下騙ニ韓盧一而搏中ニ一ニ上也」韓盧は戰國の韓の俊犬の名。

【蹇跛】ケンパ ちんば、あしなへ。白居易詩「他時ニ一能行得、笑殺平原樓上人」

【蹇連】ケンレン 行路の難くして進まざる貌。くるしみなやむ。揚雄賦「遭遇道其ニ一ニ兮」易經の「往蹇來連」に本づく。

【蹉】サ シ 支 紙

○つまづく（跌）足を失ひたふる。○つまづき。○すぐ（過）張華、輕薄篇「賓客不ノ得ニ一ニ」○時機を失ふ、くひちがふ。「爽ニ一ニ」

【蹉跌】サテツ ○つまづく。楚辭、九懷「臨ニ乘ニ謬耳一兮、中阪ニ一ニ」ニ顚躓。○時機を失ふ。晉書、周處傳「欲ニ自修一而年已ニ一ニ」○ふしあはせにて志を得ず。張九齡詩「宿昔青雲志、ニ一ニ自堪年」

【蹉跌】サテツ ○つまづく。○しくじる、失敗する。漢書、朱博傳「當職案不ニ敢ニ一ニ」ニ失蹉。

【蹌】シャウ サウ 陽

○うごく（動）よろよろ。うごく。○巧に趨る貌。○ニ一は舞ふ貌。又、行く貌。又、士大夫の擧動の威儀ある貌。○一ニ揖は馬の疾走する貌。傅毅賦「ニ一凌越」

【蹌蹌】サウサウ ○うごく貌。猶ニ翔ニ一ニ、動也」○士大夫の威儀ある貌。詩、大雅「ニ一濟濟」○舞ふ貌。書、益稷「鳥獸ニ一ニ」

【蹌踉】サウラウ よろめく。ニ踉蹌。

【蹕】ヒツ 陌

ぬきあし、さしあし（小步）足を累ねて行く「局ニ一」詩、小雅「謂ニ地蓋厚ニ不ノ敢ニ不ニ一ニ」

【蹈】タウ 號

○ふむ（踐）蓍、君牙「心之憂危、若ニ一虎尾ニ涉ニ于春冰ニ一ニ」（ニ虎尾は極めて危險なる喩）○足にてふみしく、ふみつける。○足びゃうしをして地をふむ「舞ニ一ニ」○慎びてこをとらする。禮、樂記「故不ニ知ニ手之舞之、足之ニ一之ニ」○ゆく（行）左傳、宣二一「使ニ我高ニ一ニ」○うごく（動）○いたむ。ニ悼。○ふみおこなふ（履行）實行する。宋史「躬言ニ之、躬ニ一之ニ」

同類相從 ㊥蹈・踐・踏・蹋等の別は履（五三五頁一段）の條を見よ。

【蹈歌】タウカ ○あしぶみしてうたふ。舊唐書、睿宗紀「上元夜、上皇御ニ安福門一觀燈、出ニ內人一連ニ袂一ニ一、謂ニ百寮一觀ノ之」ニ踏歌。○國古、正月十五・十六日に男女の巧に歌舞する者を禁中に召して、年始の觀覽を供ひ舞はしめしもの。

【蹈海】タウカイ 海に投じて死する。高潔なる節操をいふ。史、魯仲連傳「秦卽肆ニ然爲ノ帝、過而爲ニ政於天下一、則連有ニ蹈ニ東海一而死耳」後漢書、逸民傳「ニ一之節、千乘莫ノ移ニ其情一」

【蹈義】タウギ 正しき義理をふみおこなふ。荀植文「遭ノ變則以ノ斷ニ一ノ」

【蹈襲】タウシフ 前人の說論、又は詩文を盜みて、己のものとする。韓愈文「ニ一前人自句」ニ金史、李經傳「作詩極ニ刻苦一不ノ一ニ一前人一」ニ勦襲。

【蹈跡】タウセキ ふみにじる。魏收、爲ニ東魏ノ檄ノ梁文「剣騎之所ニ一ニ」

【蹈敵】タウテキ 敵地にふみ入る。魏志、曹仁傳「今千里ニ一ノ、進不ノ能ノ克、退必褒ノ威」

【蹈藉】タウセキ たたら、足にてふむふいど。

【蹈舞】タウブ ○足をふみならしてよろこびまふ。唐書「武后召ニ宰相一、時ノ用ノ之、問曰、卿輩皆、稱言ニ一ニ謝」ニ踏舞。○あしぶみして舞ふ。ニ舞蹈。

【蹋】タフ 合 踏（足部八畫）に同じ

○ふむ（踐）○ける（蹴）

【蹋鞠】タフキク けまり。古、武備を練るためにする、後世は遊戲の一とす。史、蘇秦傳「六博ニ一者」ニ蹴鞠 蹴踘 蹴球。

【蹐】セキ 陌

跡（足部九畫）に同じ。

○足　部　（十一—十二畫）　蹎・蹍・蹴・蹟・蹙・蹤・蹠・蹣・蹕・蹯・蹲・蹶・蹻・躁・躄・躇・躋・躊・躓・躔・躙・躡・躢・躣・躥・躪・躬・躯・躰・躱・躳・躴・躵・躶・躷・躸・躹・躺・躻・躼・躽・躾・躿・軀・軁・軂・軃・軄・軅・軆・軇・軈・軉・車・軋・軌・軍・軎・軏・軐・軑・軒・軓・軔・軕・軖・軗・軘・軙・軚・軛・軜・軝・軞・軟・軠・軡・転・軣・軤・軥・軦・軧・軨・軩・軪・軫・軬・軭・軮・軯・軰・軱・軲・軳・軴・軵・軶・軷・軸・軹・軺・軻・軼・軽・軾・軿・較・輀・輁・輂・較・輄・輅・輆・輇・輈・載・輊・輋・輌・輍・輎・輏・輐・輑・輒・輓・輔・輕・輖・輗・輘・輙・輚・輛・輜・輝・輞・輟・輠・輡・輢・輣・輤・輥・輦・輧・輨・輩・輪・輫・輬・輭・輮・輯・輰・輱・輲・輳・輴・輵・輶・輷・輸・輹・輺・輻・輼・輽・輾・輿・轀・轁・轂・轃・轄・轅・轆・轇・轈・轉・轊・轋・轌・轍・轎・轏・轐・轑・轒・轓・轔・轕・轖・轗・轘・轙・轚・轛・轜・轝・轞・轟・轠・轡・轢・轣・轤・轥・车・轧・轨・轩・转・轫・轭・轮・软・轰・轱・轲・轳・轴・轵・轶・轷・轸・轹・轺・轻・轼・载・轾・轿・辀・辁・辂・较・辄・辅・辆・辇・辈・辉・辊・辋・辌・辍・辎・辏・辐・辑・辒・输・辔・辕・辖・辗・辘・辙・辚・辛・辜・辞・辟・辠・辡・辢・辣・辤・辥・辦・辧・辨・辩・辪・辫・辬・辭・辮・辯・辰・辱・農・辳・辴・辵・辶・辷・辸・边・边・辻・込・辽・达・迁・迂・迄・迅・过・迈・迉・迊・迋・迌・迍・迎・运・近・返・迕・还・这・进・远・违・连・迟・迠・迡・迢・迣・迤・迥・迦・迧・迨・迩・迪・迫・迭・迮・迯・述・迱・迲・迳・迴・迵・迶・迷・迸・迹・迺・迻・迼・追・迾・迿・追・退・送・适・逃・逄・逅・逆・逇・逈・选・逊・逋・逌・逍・逎・透・逐・逑・递・逓・途・逕・逖・逗・逘・這・通・逛・逜・逝・逞・速・造・逡・逢・連・逤・逥・逦・逧・逨・逩・逪・逫・逬・逭・逮・逯・逰・週・進・逳・逴・逵・逶・逷・逸・逹・逺・逻・逼・逽・逾・逿・遀・遁・遂・遃・遄・遅・遆・遇・遈・遉・遊・運・遌・遍・過・遏・遐・遑・遒・道・遖・遗・遘・遙・遚・遛・遜・遝・遞・遟・遠・遡・遢・遣・遤・遥・遦・遧・遨・適・遪・遫・遬・遭・遮・遯・遰・遱・遲・遳・遴・遵・遶・遷・選・遹・遺・遻・遼・遽・避・邀・邁・邂・邃・還・邅・邆・邇・邈・邉・邊・邋・邌・邍・邎・邏・邐・邑・邒・邓・邔・邕・邖・邗・邘・邙・邚・邛・邜・邝・邞・邟・邠・邡・邢・那・邤・邥・邦・邧・邨・邩・邪・邫・邬・邭・邮・邯・邰・邱・邲・邳・邴・邵・邶・邷・邸・邹・邺・邻・邼・邽・邾・邿・郀・郁・郂・郃・郄・郅・郆・郇・郈・郉・郊・郋・郌・郍・郎・郏・郐・郑・郒・郓・郔・郕・郖・郗・郘・郙・郚・郛・郜・郝・郞・郟・郠・郡・郢・郣・郤・郥・郦・郧・部・郩・郪・郫・郬・郭・郮・郯・郰・郱・郲・郳・郴・郵・郶・郷・郸・郹・郺・郻・郼・都・郾・郿・鄀・鄁・鄂・鄃・鄄・鄅・鄆・鄇・鄈・鄉・鄊・鄋・鄌・鄍・鄎・鄏・鄐・鄑・鄒・鄓・鄔・鄕・鄖・鄗・鄘・鄙・鄚・鄛・鄜・鄝・鄞・鄟・鄠・鄡・鄢・鄣・鄤・鄥・鄦・鄧・鄨・鄩・鄪・鄫・鄬・鄭・鄮・鄯・鄰・鄱・鄲・鄳・鄴・鄵・鄶・鄷・鄸・鄹・鄺・鄻・鄼・鄽・鄾・鄿・酀・酁・酂・酃・酄・酅・酆・酇・酈・酉・酊・酋・酌・配・酎・酏・酐・酑・酒・酓・酔・酕・酖・酗・酘・酙・酚・酛・酜・酝・酞・酟・酠・酡・酢・酣・酤・酥・酦・酧・酨・酩・酪・酫・酬・酭・酮・酯・酰・酱・酲・酳・酴・酵・酶・酷・酸・酹・酺・酻・酼・酽・酾・酿・醀・醁・醂・醃・醄・醅・醆・醇・醈・醉・醊・醋・醌・醍・醎・醏・醐・醑・醒・醓・醔・醕・醖・醗・醘・醙・醚・醛・醜・醝・醞・醟・醠・醡・醢・醣・醤・醥・醦・醧・醨・醩・醪・醫・醬・醭・醮・醯・醰・醱・醲・醳・醴・醵・醶・醷・醸・醹・醺・醻・醼・醽・醾・醿・釀・釁・釂・釃・釄・釅・釆・采・釈・釉・釋・釐・釓・釔・釕・釖・釗・釘・釙・釚・釛・釜・針・針・釟・釠・釡・釢・釣・釤・釥・釦・釧・釨・釩・釪・釫・釬・釭・釮・釯・釰・釱・釲・釳・釴・釵・釶・釷・釸・釹・釺・釻・釼・釽・釾・釿・鈀・鈁・鈂・鈃・鈄・鈅・鈆・鈇・鈈・鈉・鈊・鈋・鈌・鈍・鈎・鈏・鈐・鈑・鈒・鈓・鈔・鈕・鈖・鈗・鈘・鈙・鈚・鈛・鈜・鈝・鈞・鈟・鈠・鈡・鈢・鈣・鈤・鈥・鈦・鈧・鈨・鈩・鈪・鈫・鈬・鈭・鈮・鈯・鈰・鈱・鈲・鈳・鈴・鈵・鈶・鈷・鈸・鈹・鈺・鈻・鈼・鈽・鈾・鈿・鉀・鉁・鉂・鉃・鉄・鉅・鉆・鉇・鉈・鉉・鉊・鉋・鉌・鉍・鉎・鉏・鉐・鉑・鉒・鉓・鉔・鉕・鉖・鉗・鉘・鉙・鉚・鉛・鉜・鉝・鉞・鉟・鉠・鉡・鉢・鉣・鉤・鉥・鉦・鉧・鉨・鉩・鉪・鉫・鉬・鉭・鉮・鉯・鉰・鉱・鉲・鉳・鉴・鉵・鉶・鉷・鉸・鉹・鉺・鉻・鉼・鉽・鉾・鉿・銀・銁・銂・銃・銄・銅・銆・銇・銈・銉・銊・銋・銌・銍・銎・銏・銐・銑・銒・銓・銔・銕・銖・銗・銘・銙・銚・銛・銜・銝・銞・銟・銠・銡・銢・銣・銤・銥・銦・銧・銨・銩・銪・銫・銬・銭・銮・銯・銰・銱・銲・銳・銴・銵・銶・銷・銸・銹・銺・銻・銼・銽・銾・銿・鋀・鋁・鋂・鋃・鋄・鋅・鋆・鋇・鋈・鋉・鋊・鋋・鋌・鋍・鋎・鋏・鋐・鋑・鋒・鋓・鋔・鋕・鋖・鋗・鋘・鋙・鋚・鋛・鋜・鋝・鋞・鋟・鋠・鋡・鋢・鋣・鋤・鋥・鋦・鋧・鋨・鋩・鋪・鋫・鋬・鋭・鋮・鋯・鋰・鋱・鋲・鋳・鋴・鋵・鋶・鋷・鋸・鋹・鋺・鋻・鋼・鋽・鋾・鋿・錀・錁・錂・錃・錄・錅・錆・錇・錈・錉・錊・錋・錌・錍・錎・錏・錐・錑・錒・錓・錔・錕・錖・錗・錘・錙・錚・錛・錜・錝・錞・錟・錠・錡・錢・錣・錤・錥・錦・錧・錨・錩・錪・錫・錬・錭・錮・錯・錰・錱・録・錳・錴・錵・錶・錷・錸・錹・錺・錻・錼・錽・錾・錿・鍀・鍁・鍂・鍃・鍄・鍅・鍆・鍇・鍈・鍉・鍊・鍋・鍌・鍍・鍎・鍏・鍐・鍑・鍒・鍓・鍔・鍕・鍖・鍗・鍘・鍙・鍚・鍛・鍜・鍝・鍞・鍟・鍠・鍡・鍢・鍣・鍤・鍥・鍦・鍧・鍨・鍩・鍪・鍫・鍬・鍭・鍮・鍯・鍰・鍱・鍲・鍳・鍴・鍵・鍶・鍷・鍸・鍹・鍺・鍻・鍼・鍽・鍾・鍿・鎀・鎁・鎂・鎃・鎄・鎅・鎆・鎇・鎈・鎉・鎊・鎋・鎌・鎍・鎎・鎏・鎐・鎑・鎒・鎓・鎔・鎕・鎖・鎗・鎘・鎙・鎚・鎛・鎜・鎝・鎞・鎟・鎠・鎡・鎢・鎣・鎤・鎥・鎦・鎧・鎨・鎩・鎪・鎫・鎬・鎭・鎮・鎯・鎰・鎱・鎲・鎳・鎴・鎵・鎶・鎷・鎸・鎹・鎺・鎻・鎼・鎽・鎾・鎿・鏀・鏁・鏂・鏃・鏄・鏅・鏆・鏇・鏈・鏉・鏊・鏋・鏌・鏍・鏎・鏏・鏐・鏑・鏒・鏓・鏔・鏕・鏖・鏗・鏘・鏙・鏚・鏛・鏜・鏝・鏞・鏟・鏠・鏡・鏢・鏣・鏤・鏥・鏦・鏧・鏨・鏩・鏪・鏫・鏬・鏭・鏮・鏯・鏰・鏱・鏲・鏳・鏴・鏵・鏶・鏷・鏸・鏹・鏺・鏻・鏼・鏽・鏾・鏿・鐀・鐁・鐂・鐃・鐄・鐅・鐆・鐇・鐈・鐉・鐊・鐋・鐌・鐍・鐎・鐏・鐐・鐑・鐒・鐓・鐔・鐕・鐖・鐗・鐘・鐙・鐚・鐛・鐜・鐝・鐞・鐟・鐠・鐡・鐢・鐣・鐤・鐥・鐦・鐧・鐨・鐩・鐪・鐫・鐬・鐭・鐮・鐯・鐰・鐱・鐲・鐳・鐴・鐵・鐶・鐷・鐸・鐹・鐺・鐻・鐼・鐽・鐾・鐿・鑀・鑁・鑂・鑃・鑄・鑅・鑆・鑇・鑈・鑉・鑊・鑋・鑌・鑍・鑎・鑏・鑐・鑑・鑒・鑓・鑔・鑕・鑖・鑗・鑘・鑙・鑚・鑛・鑜・鑝・鑞・鑟・鑠・鑡・鑢・鑣・鑤・鑥・鑦・鑧・鑨・鑩・鑪・鑫・鑬・鑭・鑮・鑯・鑰・鑱・鑲・鑳・鑴・鑵・鑶・鑷・鑸・鑹・鑺・鑻・鑼・鑽・鑾・鑿・長・門・閂・閃・閄・閅・閆・閇・閈・閉・閊・開・閌・閍・閎・閏・閐・閑・閒・間・閔・閕・閖・閗・閘・閙・閚・閛・閜・閝・閞・閟・閠・閡・関・閣・閤・閥・閦・閧・閨・閩・閪・閫・閬・閭・閮・閯・閰・閱・閲・閳・閴・閵・閶・閷・閸・閹・閺・閻・閼・閽・閾・閿・闀・闁・闂・闃・闄・闅・闆・闇・闈・闉・闊・闋・闌・闍・闎・闏・闐・闑・闒・闓・闔・闕・闖・闗・闘・闙・闚・闛・闞・闟・闠・闡・闢・闣・闤・闥・闦・闧・闬・闭・问・闯・闰・闱・闲・闳・间・闵・闶・闷・闸・闹・闺・闻・闼・闽・闾・闿・阀・阁・阂・阃・阄・阅・阆・阇・阈・阉・阊・阋・阌・阍・阎・阏・阐・阑・阒・阓・阔・阕・阖・阗・阘・阙・阚・阛・阜・阝・阞・阠・阡・阢・阣・阤・阥・阦・阧・阨・阩・阪・阫・阬・阭・阮・阯・阰・防・阳・阴・阵・阶・阷・阸・阹・阺・阻・阼・阽・阾・阿・陀・陁・陂・陃・附・际・陆・陇・陈・陉・陊・陋・陌・降・陎・陏・限・陑・陒・陓・陔・陕・陖・陗・陘・陙・陚・陛・陜・陝・陞・陟・陠・陡・院・陣・除・陥・陦・陧・陨・険・陪・陫・陬・陭・陮・陯・陰・陱・陲・陳・陴・陵・陶・陷・陸・険・陹・険・陻・陼・陽・陾・陿・隀・隁・隂・隃・隄・隅・隆・隇・隈・隉・隊・隋・隌・隍・階・隐・隑・隒・隓・隔・隕・隖・隗・隘・隙・隚・際・障・隝・隞・隟・隠・隡・隢・隣・隤・隥・隦・隧・隨・隩・險・隫・險・隭・隮・隯・隰・隱・隲・隳・隴・隵・隶・隷・隸・隹・隺・隻・隼・隽・难・隿・雀・雁・雂・雃・雄・雅・集・雇・雈・雉・雊・雋・雌・雍・雎・雏・雐・雑・雒・雓・雔・雕・雖・雗・雘・雙・雚・雛・雜・雝・雞・雟・雠・雡・離・難・雤・雥・雦・雧・雨・雩・雪・雫・雬・雭・雮・雯・雰・雱・雲・雳・雴・雵・零・雷・雸・雹・雺・電・雼・雽・雾・雿・需・霁・霂・霃・霄・霅・霆・震・霈・霉・霊・霋・霌・霍・霎・霏・霐・霑・霒・霓・霔・霕・霖・霗・霘・霙・霚・霛・霜・霝・霞・霟・霠・霡・霢・霣・霤・霥・霦・霧・霨・霩・霪・霫・霬・霭・霮・霯・霰・霱・露・霳・霴・霵・霶・霷・霸・霹・霺・霻・霼・霽・霾・霿・靀・靁・靂・靃・靄・靅・靆・靇・靈・靉・靊・靋・靌・靍・靎・靏・靐・靑・青・靓・靔・靕・靖・靗・靘・静・靚・靛・靜・非・靟・靠・靡・面・靣・革・靥・靦・靧・靨・革・靪・靫・靬・靭・靮・靯・靰・靱・靲・靳・靴・靵・靶・靷・靸・靹・靺・靻・靼・靽・靾・靿・鞀・鞁・鞂・鞃・鞄・鞅・鞆・鞇・鞈・鞉・鞊・鞋・鞌・鞍・鞎・鞏・鞐・鞑・鞒・鞓・鞔・鞕・鞖・鞗・鞘・鞙・鞚・鞛・鞜・鞝・鞞・鞟・鞠・鞡・鞢・鞣・鞤・鞥・鞦・鞧・鞨・鞩・鞪・鞫・鞬・鞭・鞮・鞯・鞰・鞱・鞲・鞳・鞴・鞵・鞶・鞷・鞸・鞹・鞺・鞻・鞼・鞽・鞾・鞿・韀・韁・韂・韃・韄・韅・韆・韇・韈・韉・韊・韋・韌・韍・韎・韏・韐・韑・韒・韓・韔・韕・韖・韗・韘・韙・韚・韛・韜・韝・韞・韟・韠・韡・韢・韣・韤・韥・韦・韧・韨・韩・韪・韫・韬・韭・韮・韯・韰・韱・韲・音・韴・韵・韶・韷・韸・韹・韺・韻・韼・韽・韾・響・響・頀・頁・頂・頃・頄・項・順・頇・須・頉・頊・頋・頌・頍・頎・頏・預・頑・頒・頓・頔・頕・頖・頗・領・頙・頚・頛・頜・頝・頞・頟・頠・頡・頢・頣・頤・頥・頦・頧・頨・頩・頪・頫・頬・頭・頮・頯・頰・頱・頲・頳・頴・頵・頶・頷・頸・頹・頺・頻・頼・頽・頾・頿・顀・顁・顂・顃・顄・顅・顆・顇・顈・顉・顊・顋・題・顎・顏・顐・顑・顒・顓・顔・顕・顖・顗・願・顙・顚・顛・顜・顝・類・顟・顠・顡・顢・顣・顤・顥・顦・顧・顨・顩・顪・顫・顬・顭・顮・顯・顰・顱・顲・顳・顴・页・顶・顷・顸・项・顺・须・顼・顽・顾・顿・颀・颁・颂・颃・预・颅・领・颇・颈・颉・颊・颋・颌・颍・颎・颏・颐・频・颒・颓・颔・颕・颖・颗・题・颙・颚・颛・颜・额・颞・颟・颠・颡・颢・颣・颤・颥・颦・颧・風・颩・颪・颫・颬・颭・颮・颯・颰・颱・颲・颳・颴・颵・颶・颷・颸・颹・颺・颻・颼・颽・颾・颿・飀・飁・飂・飃・飄・飅・飆・飇・飈・飉・飊・飋・飌・飍・风・飏・飐・飑・飒・飓・飔・飕・飖・飗・飘・飙・飚・飛・飜・飝・飞・食・飠・飡・飢・飣・飤・飥・飦・飧・飨・飩・飪・飫・飬・飭・飮・飯・飰・飱・飲・飳・飴・飵・飶・飷・飸・飹・飺・飻・飼・飽・飾・飿・餀・餁・餂・餃・餄・餅・餆・餇・餈・餉・養・餋・餌・餍・餎・餏・餐・餑・餒・餓・餔・餕・餖・餗・餘・餙・餚・餛・餜・餝・餞・餟・餠・餡・餢・餣・餤・餥・餦・餧・館・餩・餪・餫・餬・餭・餮・餯・餰・餱・餲・餳・餴・餵・餶・餷・餸・餹・餺・餻・餼・餽・餾・餿・饀・饁・饂・饃・饄・饅・饆・饇・饈・饉・饊・饋・饌・饍・饎・饏・饐・饑・饒・饓・饔・饕・饖・饗・饘・饙・饚・饛・饜・饝・饞・饟・饠・饡・饢・饣・饤・饥・饦・饧・饨・饩・饪・饫・饬・饭・饮・饯・饰・饱・饲・饳・饴・饵・饶・饷・饸・饹・饺・饻・饼・饽・饾・饿・馀・馁・馂・馃・馄・馅・馆・馇・馈・馉・馊・馋・馌・馍・馎・馏・馐・馑・馒・馓・馔・馕・首・馗・馘・香・馚・馛・馜・馝・馞・馟・馠・馡・馢・馣・馤・馥・馦・馧・馨・馩・馪・馫・馬・馭・馮・馯・馰・馱・馲・馳・馴・馵・馶・馷・馸・馹・馺・馻・馼・馽・馾・馿・駀・駁・駂・駃・駄・駅・駆・駇・駈・駉・駊・駋・駌・駍・駎・駏・駐・駑・駒・駓・駔・駕・駖・駗・駘・駙・駚・駛・駜・駝・駞・駟・駠・駡・駢・駣・駤・駥・駦・駧・駨・駩・駪・駫・駬・駭・駮・駯・駰・駱・駲・駳・駴・駵・駶・駷・駸・駹・駺・駻・駼・駽・駾・駿・騀・騁・騂・騃・騄・騅・騆・騇・騈・騉・騊・騋・騌・騍・騎・騏・騐・騑・騒・験・騔・騕・騖・騗・騘・騙・騚・騛・騜・騝・騞・騟・騠・騡・騢・騣・騤・騥・騦・騧・騨・騩・騪・騫・騬・騭・騮・騯・騰・騱・騲・騳・騴・騵・騶・騷・騸・騹・騺・騻・騼・騽・騾・騿・驀・驁・驂・驃・驄・驅・驆・驇・驈・驉・驊・驋・驌・驍・驎・驏・驐・驑・驒・驓・驔・驕・驖・驗・驘・驙・驚・驛・驜・驝・驞・驟・驠・驡・驢・驣・驤・驥・驦・驧・驨・驩・驪・驫・驯・驰・驱・驲・驳・驴・驵・驶・驷・驸・驹・驺・驻・驼・驽・驾・驿・骀・骁・骂・骃・骄・骅・骆・骇・骈・骉・骊・骋・验・骍・骎・骏・骐・骑・骒・骓・骔・骕・骖・骗・骘・骙・骚・骛・骜・骝・骞・骟・骠・骡・骢・骣・骤・骥・骦・骧・骨・骩・骪・骫・骬・骭・骮・骯・骰・骱・骲・骳・骴・骵・骶・骷・骸・骹・骺・骻・骼・骽・骾・骿・髀・髁・髂・髃・髄・髅・髆・髇・髈・髉・髊・髋・髌・髍・髎・髏・髐・髑・髒・髓・體・髕・髖・髗・高・髙・髚・髛・髜・髝・髞・髟・髠・髡・髢・髣・髤・髥・髦・髧・髨・髩・髪・髫・髬・髭・髮・髯・髰・髱・髲・髳・髴・髵・髶・髷・髸・髹・髺・髻・髼・髽・髾・髿・鬀・鬁・鬂・鬃・鬄・鬅・鬆・鬇・鬈・鬉・鬊・鬋・鬌・鬍・鬎・鬏・鬐・鬑・鬒・鬓・鬔・鬕・鬖・鬗・鬘・鬙・鬚・鬛・鬜・鬝・鬞・鬟・鬠・鬡・鬢・鬣・鬤・鬥・鬦・鬧・鬨・鬩・鬪・鬫・鬬・鬭・鬮・鬯・鬰・鬱・鬲・鬳・鬴・鬵・鬶・鬷・鬸・鬹・鬺・鬻・鬼・鬽・鬾・鬿・魀・魁・魂・魃・魄・魅・魆・魇・魈・魉・魊・魋・魌・魍・魎・魏・魐・魑・魒・魓・魔・魕・魖・魗・魘・魙・魚・魛・魜・魝・魞・魟・魠・魡・魢・魣・魤・魥・魦・魧・魨・魩・魪・魫・魬・魭・魮・魯・魰・魱・魲・魳・魴・魵・魶・魷・魸・魹・魺・魻・魼・魽・魾・魿・鮀・鮁・鮂・鮃・鮄・鮅・鮆・鮇・鮈・鮉・鮊・鮋・鮌・鮍・鮎・鮏・鮐・鮑・鮒・鮓・鮔・鮕・鮖・鮗・鮘・鮙・鮚・鮛・鮜・鮝・鮞・鮟・鮠・鮡・鮢・鮣・鮤・鮥・鮦・鮧・鮨・鮩・鮪・鮫・鮬・鮭・鮮・鮯・鮰・鮱・鮲・鮳・鮴・鮵・鮶・鮷・鮸・鮹・鮺・鮻・鮼・鮽・鮾・鮿・鯀・鯁・鯂・鯃・鯄・鯅・鯆・鯇・鯈・鯉・鯊・鯋・鯌・鯍・鯎・鯏・鯐・鯑・鯒・鯓・鯔・鯕・鯖・鯗・鯘・鯙・鯚・鯛・鯜・鯝・鯞・鯟・鯠・鯡・鯢・鯣・鯤・鯥・鯦・鯧・鯨・鯩・鯪・鯫・鯬・鯭・鯮・鯯・鯰・鯱・鯲・鯳・鯴・鯵・鯶・鯷・鯸・鯹・鯺・鯻・鯼・鯽・鯾・鯿・鰀・鰁・鰂・鰃・鰄・鰅・鰆・鰇・鰈・鰉・鰊・鰋・鰌・鰍・鰎・鰏・鰐・鰑・鰒・鰓・鰔・鰕・鰖・鰗・鰘・鰙・鰚・鰛・鰜・鰝・鰞・鰟・鰠・鰡・鰢・鰣・鰤・鰥・鰦・鰧・鰨・鰩・鰪・鰫・鰬・鰭・鰮・鰯・鰰・鰱・鰲・鰳・鰴・鰵・鰶・鰷・鰸・鰹・鰺・鰻・鰼・鰽・鰾・鰿・鱀・鱁・鱂・鱃・鱄・鱅・鱆・鱇・鱈・鱉・鱊・鱋・鱌・鱍・鱎・鱏・鱐・鱑・鱒・鱓・鱔・鱕・鱖・鱗・鱘・鱙・鱚・鱛・鱜・鱝・鱞・鱟・鱠・鱡・鱢・鱣・鱤・鱥・鱦・鱧・鱨・鱩・鱪・鱫・鱬・鱭・鱮・鱯・鱰・鱱・鱲・鱳・鱴・鱵・鱶・鱷・鱸・鱹・鱺・鱻・鱼・鱽・鱾・鱿・鲀・鲁・鲂・鲃・鲄・鲅・鲆・鲇・鲈・鲉・鲊・鲋・鲌・鲍・鲎・鲏・鲐・鲑・鲒・鲓・鲔・鲕・鲖・鲗・鲘・鲙・鲚・鲛・鲜・鲝・鲞・鲟・鲠・鲡・鲢・鲣・鲤・鲥・鲦・鲧・鲨・鲩・鲪・鲫・鲬・鲭・鲮・鲯・鲰・鲱・鲲・鲳・鲴・鲵・鲶・鲷・鲸・鲹・鲺・鲻・鲼・鲽・鲾・鲿・鳀・鳁・鳂・鳃・鳄・鳅・鳆・鳇・鳈・鳉・鳊・鳋・鳌・鳍・鳎・鳏・鳐・鳑・鳒・鳓・鳔・鳕・鳖・鳗・鳘・鳙・鳚・鳛・鳜・鳝・鳞・鳟・鳠・鳡・鳢・鳣・鳤・鳥・鳦・鳧・鳨・鳩・鳪・鳫・鳬・鳭・鳮・鳯・鳰・鳱・鳲・鳳・鳴・鳵・鳶・鳷・鳸・鳹・鳺・鳻・鳼・鳽・鳾・鳿・鴀・鴁・鴂・鴃・鴄・鴅・鴆・鴇・鴈・鴉・鴊・鴋・鴌・鴍・鴎・鴏・鴐・鴑・鴒・鴓・鴔・鴕・鴖・鴗・鴘・鴙・鴚・鴛・鴜・鴝・鴞・鴟・鴠・鴡・鴢・鴣・鴤・鴥・鴦・鴧・鴨・鴩・鴪・鴫・鴬・鴭・鴮・鴯・鴰・鴱・鴲・鴳・鴴・鴵・鴶・鴷・鴸・鴹・鴺・鴻・鴼・鴽・鴾・鴿・鵀・鵁・鵂・鵃・鵄・鵅・鵆・鵇・鵈・鵉・鵊・鵋・鵌・鵍・鵎・鵏・鵐・鵑・鵒・鵓・鵔・鵕・鵖・鵗・鵘・鵙・鵚・鵛・鵜・鵝・鵞・鵟・鵠・鵡・鵢・鵣・鵤・鵥・鵦・鵧・鵨・鵩・鵪・鵫・鵬・鵭・鵮・鵯・鵰・鵱・鵲・鵳・鵴・鵵・鵶・鵷・鵸・鵹・鵺・鵻・鵼・鵽・鵾・鵿・鶀・鶁・鶂・鶃・鶄・鶅・鶆・鶇・鶈・鶉・鶊・鶋・鶌・鶍・鶎・鶏・鶐・鶑・鶒・鶓・鶔・鶕・鶖・鶗・鶘・鶙・鶚・鶛・鶜・鶝・鶞・鶟・鶠・鶡・鶢・鶣・鶤・鶥・鶦・鶧・鶨・鶩・鶪・鶫・鶬・鶭・鶮・鶯・鶰・鶱・鶲・鶳・鶴・鶵・鶶・鶷・鶸・鶹・鶺・鶻・鶼・鶽・鶾・鶿・鷀・鷁・鷂・鷃・鷄・鷅・鷆・鷇・鷈・鷉・鷊・鷋・鷌・鷍・鷎・鷏・鷐・鷑・鷒・鷓・鷔・鷕・鷖・鷗・鷘・鷙・鷚・鷛・鷜・鷝・鷞・鷟・鷠・鷡・鷢・鷣・鷤・鷥・鷦・鷧・鷨・鷩・鷪・鷫・鷬・鷭・鷮・鷯・鷰・鷱・鷲・鷳・鷴・鷵・鷶・鷷・鷸・鷹・鷺・鷻・鷼・鷽・鷾・鷿・鸀・鸁・鸂・鸃・鸄・鸅・鸆・鸇・鸈・鸉・鸊・鸋・鸌・鸍・鸎・鸏・鸐・鸑・鸒・鸓・鸔・鸕・鸖・鸗・鸘・鸙・鸚・鸛・鸜・鸝・鸞・鸟・鸠・鸡・鸢・鸣・鸤・鸥・鸦・鸧・鸨・鸩・鸪・鸫・鸬・鸭・鸮・鸯・鸰・鸱・鸲・鸳・鸴・鸵・鸶・鸷・鸸・鸹・鸺・鸻・鸼・鸽・鸾・鸿・鹀・鹁・鹂・鹃・鹄・鹅・鹆・鹇・鹈・鹉・鹊・鹋・鹌・鹍・鹎・鹏・鹐・鹑・鹒・鹓・鹔・鹕・鹖・鹗・鹘・鹙・鹚・鹛・鹜・鹝・鹞・鹟・鹠・鹡・鹢・鹣・鹤・鹥・鹦・鹧・鹨・鹩・鹪・鹫・鹬・鹭・鹮・鹯・鹰・鹱・鹲・鹳・鹴・鹵・鹶・鹷・鹸・鹹・鹺・鹻・鹼・鹽・鹾・鹿・麀・麁・麂・麃・麄・麅・麆・麇・麈・麉・麊・麋・麌・麍・麎・麏・麐・麑・麒・麓・麔・麕・麖・麗・麘・麙・麚・麛・麜・麝・麞・麟・麠・麡・麢・麣・麤・麥・麦・麧・麨・麩・麪・麫・麬・麭・麮・麯・麰・麱・麲・麳・麴・麵・麶・麷・麸・麹・麺・麻・麼・麽・麾・麿・黀・黁・黂・黃・黄・黅・黆・黇・黈・黉・黊・黋・黌・黍・黎・黏・黐・黑・黒・黓・黔・默・黖・黗・默・黙・黚・黛・黜・黝・點・黟・黠・黡・黢・黣・黤・黥・黦・黧・黨・黩・黪・黫・黬・黭・黮・黯・黰・黱・黲・黳・黴・黵・黶・黷・黸・黹・黺・黻・黼・黽・黾・鼀・鼁・鼂・鼃・鼄・鼅・鼆・鼇・鼈・鼉・鼊・鼋・鼌・鼍・鼎・鼏・鼐・鼑・鼒・鼓・鼔・鼕・鼖・鼗・鼘・鼙・鼚・鼛・鼜・鼝・鼞・鼟・鼠・鼡・鼢・鼣・鼤・鼥・鼦・鼧・鼨・鼩・鼪・鼫・鼬・鼭・鼮・鼯・鼰・鼱・鼲・鼳・鼴・鼵・鼶・鼷・鼸・鼹・鼺・鼻・鼼・鼽・鼾・鼿・齀・齁・齂・齃・齄・齅・齆・齇・齈・齉・齊・齋・齌・齍・齎・齏・齐・齑・齒・齓・齔・齕・齖・齗・齘・齙・齚・齛・齜・齝・齞・齟・齠・齡・齢・齣・齤・齥・齦・齧・齨・齩・齪・齫・齬・齭・齮・齯・齰・齱・齲・齳・齴・齵・齶・齷・齸・齹・齺・齻・齼・齽・齾・齿・龀・龁・龂・龃・龄・龅・龆・龇・龈・龉・龊・龋・龌・龍・龎・龏・龐・龑・龒・龓・龔・龕・龖・龗・龘・龙・龚・龛・龜・龝・龞・龟・龠・龡・龢・龣・龤・龥・龦・龧・龨・龩・龪・龫・龬・龭・龮・龯・龰・龱・龲・龳・龴・龵・龶・龷・龸・龹・龺・龻・龼・龽・龾・龿・鿀・鿁・鿂・鿃・鿄・鿅・鿆・鿇・鿈・鿉・鿊・鿋・鿌・鿍・鿎・鿏・鿐・鿑・鿒・鿓・鿔・鿕・鿖・鿗・鿘・鿙・鿚・鿛・鿜・鿝・鿞・鿟・鿠・鿡・鿢・鿣・鿤・鿥・鿦・鿧・鿨・鿩・鿪・鿫・鿬・鿭・鿮・鿯・鿰・鿱・鿲・鿳・鿴・鿵・鿶・鿷・鿸・鿹・鿺・鿻・鿼・鿽・鿾・

ず。をどる、あしぶみす「一躍」㊁ひづめ（蹄）詩、小雅「有」家白一」○なげる（投）投げすてる。莊、徐無鬼「齊人一子於宋者」＝擲。

【蹈】トウ　㊀　○足を以て地をうちて靜かならず。易、繫辭「窮家學一一」○たちもとほる、行きて進まざる貌。禮、三年問「一一焉、如」＝躊躇。

【蹣】ハン　マン　㊀　○よろめく「一跚」○こゆ、騰をこゆ。

【蹣跚】よろめく貌。嵇康賦「兩足一一」＝蹣連。

【蹕】ヒツ　㊀　もと蹕に作る　○さきばらひ、君王の出で行くに道路を警戒して行人をとどめる。古今注「秦制出警入一」○轉じて天子の行幸。又、其の御車「駐一」「屯一」○偏足にて立つ。列女傳「立不一」【蹕路】○道を清める。曹植詩「蓋先一一、風與雨停」○轉じて天子の行幸の道筋。

十二畫

【蹻】㊀キョウ　㊁キャク　㊀藥　㊁藥　㊀あぐ、足を高く擧げる。漢書、高帝紀「可」足待「也」足を擧げて行かんとするの間、其の迅速をいふ。○一一は武き貌。又、つよく盛んなる貌。＝矯矯。㊁はしる貌。○かんじき（屐）山行に乘るもの、錐の如き鐵を履下に施したるもの、○わらぐつ（草履）○一一は小人の志を得ておごれる貌。

【蹻警】一一は草履、警は長柄のかさ、共に旅行の用具。史、滑稽傳「躡レ蹻擔レ簦、設二辯幸成王一」

【蹻蹻】○武くつよき貌。詩、周頌「一一王之造」○彊く盛んなる貌。詩、魯頌「其馬一一」○小人の志を得て驕れる貌。詩、大雅「小子一一」＝驕蹇。

【蹻健】はやく走る。＝趫健。

【蹻陌】莊蹻と盜陌と。竝に古の大盜。宋玉、神女之傳「一一橫行乎原野步」（曾原は、曾參と原憲と）＝陌路「漢書、賈誼傳」

【蹻捷】足早し、すばやし。＝趫捷。

【蹻腹】勢よく走る。韓愈詩「行行事二結束一、人馬何一一」

【蹻勇】力多くしてつよし。唐書「以二一一一聞」五代史「弘傑爲レ人一一、走及二奔馬一」

【蹺】蹻（前條）に同じ。

【蹶】㊀ケツ　㊁ケイ　㊀月　㊁霽　通音ケツ　○つまづく（失脚）けつまづきたほれる（僵）「顚一」孟、公孫丑「今夫一者趨者」○たふす、くつがへす。くじける、挫く。史、孫子傳「一二上將」○をどる、はねる（跳）○ける（蹴）○一起はたほれる（顚倒）㊁とびたつ、はね起きる「一起」「一然」おどろき起つ（驚起）うごく（動）○あわてる、あわただし（急遽）曲禮「足毋一」○一一はさとし（敏捷）

【蹶起】はねおきる。

【蹶蹶】動きて事に敏なる貌。詩、唐風「好樂無レ荒、良士一一」

【蹶然】急に驚き起つ貌。禮、孔子閒居「子夏一一而起」

【蹶失】つまづく。五代史、馮道傳「過二井陘之險一、懼二馬一一、不三敢急於御一、及レ至二平地一、謂レ無レ足慮、遽鞭而傷」＝跌失。

【蹶張】脚力强くして强き弩ゆみを踏みおさへて張る。史、甲居傳「以二材官一一、從二高帝一擊二項籍一」

【蹶】蹻（前條）に同じ。

【蹶】シュク　㊀屋　○ける、ふみつける（踏・蹋）○一然は愼むる貌。又、安からざる貌。

【蹶毬】まりをける。唐代、古の蹴鞠戲を變じて一一と爲す。白居易詩「一一應不レ起、發火雨新晴」＝蹴鞠。

【蹶角】けまり。又、其の遊戲。則は鞠に通ず。舊唐書「跨赤作レ鞠、蹋鞠戲以レ柔爲レ之、實以二柔物一、今謂二之毬一」＝蹴鞠・蹙鞠・蹴毬。

【蹶鞠】前條に同じ。後漢書、梁冀傳、六博一一」

【蹶碎】ふみくだく。戴表元詩「馬蹄一一塵四草」

【蹶躡】足にて物をけとばす。孟、告子「一一而與レ之」

【蹶躠】心の安からざる貌。莊、天運、子貢一一然立不レ安」＝踧踖。

【蹶然】おそれて安んぜざる貌。孟、公孫丑「曾西一一曰、吾先子之所レ畏也」＝蹙然。

【蹶踏】ふみつける。杜甫詩「新蹄一一長楸間」郝經詩「一一千年雪、驟馳萬里駒」

【蹶】蹻（前條）に同じ。

【躧】躧(足部十六畫)に同じ。

【躇】ソウ　經

―躇(ソウ)は道につかれる貌。又、勢を失ふ貌。木華、海賦「或乃―躇窮波」李白詩「―躇遺讒毀」

【躋】㊀ソン　元　㊁シェン　眞

㊀うづくまる(蹲)しゃがむ。莊、外物「―於會稽」㊁―(シェン)は舞ふ貌。又、行くに節ある貌。行儀の正しきあるさかた。㊂あつむ(聚)左、成十六「―甲而射之」

【躋踞】(ソン)うづくまる。符子「陶朱公褒レ子、隣人往弔レ之、朱公方擁レ膝―レ、捧レ頭而笑」

【躋坐】(ソン)うづくまる。張翥詩「山寺取レ涼宮裏後、共レ僧―石階前」

【躋躇】(ソン)孝の異名、茅頭の形の似たるが故。史、貨殖傳「汝山之下沃野、下有ニ―一」

【躋僧】(シュン)あとしざりする貌。晁補之詩「不レ拜下レ馬拜、僮奴亦―レ」‖逡巡。

【躋躋】(シュン)○舞ふ貌。詩、小雅「―舞レ我」○行くに節ある貌。漢杳、揚雄傳「穆穆肅肅、―如レ此」

【躓】タイ　灰

○たふる(仆)○つまづく(蹇・頓)

【躓】チ　㊀或は踬に作る

しさる、たちもとほる「踟―」

【蹬】トウ　徑

○踏―(トウ)は勢を失ふ貌。又、道につかれる貌。木華、海賦「或乃踏―窮波」○ふむ(履)

【蹯】ハン　フン　元　文

○獣のてのはら、即ち足のうら。‖番。○獣の足のうらの肉。左、文元「食熊―」

【蹩】ヘツ　ベチ　屑　又、鼈に作る

○ちんば、おしなへ(跛)○ふむ(踶)○―躠(ヘツ)は心力を用ふる貌。莊、馬蹄「―躠爲レ仁、踶跂爲レ義、而天下始疑矣」又、旋りゆく貌。張衡、東都賦「―躠蹁躚」

【蹩躄】(ヘツ)蹩躠に同じ。字解を見よ。

【蹴】蹩(前條)に同じ。

【蹴踘】(ツク)前條の蹩躄に同じ。

【蹼】ボク　屋

みづかき。水鳥などの脚指の間に相連絡せる膜。趾間の膜。

【蹼鞠】(ボクキク)けまり。劉向別錄「―兵勢也、因ニ蹋就一而蹴ニ練之一」‖蹋鞠・蹴鞠。

【蹲】蹯(足部十五畫)に通ず。

【蹠】セキ　陌

○ふむ(履)○あしうら(足心)○あたる(當)○ふみつぶす(踏)○ふみはたす(踐)○ふみおこす(起)○ふみはづす(失)○ふみあらす(蹂)○ふみとどまる(止)○ふみあつむ(聚)○ふみあらはす(現)○ふみかへす(反)○ふみかへる(還)○ふみこたふ(應)○ふみこむ(入)○ふみこえる(越)○ふみこぼす(漏)○ふみこぼる(漏)○ふみしだく(蹂)○ふみしめる(踏)○ふみすべる(滑)○ふみたがふ(違)○ふみたつ(立)○ふみたる(足)○ふみつく(附)○ふみつける(踏)○ふみつぶす(踏)○ふみとどまる(止)○ふみとる(取)○ふみなほす(直)○ふみならす(習)○ふみならはす(習)○ふみなる(習)○ふみにじる(蹂)○ふみぬく(貫)○ふみぬける(貫)○ふみのぼる(登)○ふみはたす(踐)○ふみはづす(失)○ふみはる(張)○ふみひらく(開)○ふみまよふ(迷)○ふみもとほす(徘徊)○ふみもとほる(徘徊)○ふみやぶる(破)○ふみわたす(渡)○ふみわたる(渡)○ふみわる(破)○ふむ(踏)○ふむ(履)○ふむ(踐)○ふむ(蹈)○ふむ(蹋)○ふむ(蹂)○ふむ(躡)○ふむ(蹶)○ふむ(蹴)○ふむ(蹻)○ふむ(蹻)○ふむ(躡)○ふむ(躡)○ふむ(躡

【躇】㊀チョ ㊁チャク 魚 藥 遇

㊀躇―はためらふ、たちもとほる。漢書、李夫人傳「哀裘罔以慰―」「躊―」㊁躇躇。㊂こえる(超)あわててとびこえる(超遠)公羊、宣六「―階而走」

【躅】㊀チョク ㊁タク 屋 沃 燭に同じ

㊀あしずりする、あがく、行きなやむ、あしぶみする、たちもとほる「踟―」「躑―」「躅―」○たたずむ。㊁あと、あしあと(足跡)○古人の行ひしあと(事蹟)「芳―」「遺―」漢書、敍傳「伏周孔之軌―」

【躉】トン 阮

【躉船】㊀○岸旁に繋したる大船に繋して客の乗往、又は荷物の搬卸などに備ふる舟、はしけ(解舟)○米穀をいふ。―貨は客貨の對。

【躄】ヘキ 陌 又躃に作る

るざり、兩足倶に廢する、あしなへ、こしぬけ。又、其の者「老―」「跼、王制「瘖聾跛―」【躄者】あしなへ。史、平原君傳「民家有ニ―一臨レ厠行汲」【躄躄】行きなやむ、行きて利ならざる貌。李賀詩「日車何―一」

【躃】ヘキ 陌 躄(前條)に同じ。

【躋】躋(足部十五畫)に同じ。

十四畫

【躋】セイ サイ 齊 霽 又、躋に作る

のぼる。のぼす(升・登)「―一」詩、秦風「道阻且―」【同訓異字】躋・上・升・昇・陞・登・騰・陟の別は上(三六頁二段)の條を見よ。【躋升】セイショウ のぼる。宋史、禮志「嘗催塤圭幣、悉有二明旗一天神定位、雖二以―一一」【躋攀】セイハン のぼりよぢる。杜甫詩「一丘藏二曲折一緩歩有ニ―一一」=攀躋。【躋覽】セイラン 高き所にのぼりてみる。呉均詩「―一何所レ見」

【躊】チウ 尤

―躇はためらふ、たちもとほる。漢書、李夫人傳「哀裘罔以慰―躇」=躊躇・猶豫。【躊躇】チウチョ たちもとほりて進まず。鮑照詩「舟人不ニ―一一」

【躍】㊀ヤク ㊁テキ 藥 錫

㊀をどる「踊―」「雀―」「鷹―」易、乾卦「或レ在レ淵」をどらす(跳)などり。○あがる(上)とびあがる、はねあがる、大なり、小を踊、又、跳といふ。○すすむ(進)○こゆ(越)○―は喜ぶ貌。又、心動く貌。㊁―はやく走る貌。【同訓異字】躍・跳・踊・踴の別は跳(一八九六頁二段)の條を見よ。【躍起】ヤッキ ○をどりたつ、をどりあがる。○㊁せきこむ、いらだつ。【躍進】ヤクシン をどりすすむ、勢よく進む。【躍出】ヤクシュツ をどり出る。晉書、王祥傳「冰忽自解、雙鯉―一」【躍如】ヤクジョ をどりたつ貌、勢よき貌。=躍然。【躍升】ヤクショウ をどりのぼる。謝靈運、善哉行、陽谷―一、虞淵引落、景曜東馳、晩晩四溟」【躍然】ヤクゼン をどりたつ貌。=躍躍・躍如。【躍蹄】ヤクテイ 馬を走らす。賈島詩「―一蹄レ碧日、帰鞍則二幾盤一」【躍馬】ヤクバ 勢よく馬を走らす。左思、蜀都賦「公孫―一而稱レ帝」【躍躍】ヤクヤク ○心の動きて定まらざる貌。夏侯湛賦「握二遊形之―一一」又喜ぶ貌。韓愈文「大得レ利則―一以喜」○㊁をどりはねて疾かなる貌。詩、小雅「―一鳧鷖」

十五畫

【躐】チ シツ 質 寘

○つまづく(跲)「困―」「顚―」左、宣十五「杜回―而顚」=蹙。○ころぶ(顚)○ふむ(踏)○くじける(挫折)故障が生じて事がやぶれる。【躐顚】つまづきたふれる。易林「―一踬レ足」=顚躐・躓跲。

【躔】チュ 先 通音チュウ 蹰は俗字

―蹰はためらふ。

【躙】テキ 陌

―躙はあしぶみする。荀、禮論、註「一躙以足擊地也」又、行きて進まず、たちもとほる貌。=躙躙・躅躅。又、つつじ、灌木の一種、四五月頃美花を開く、花に毒あり、羊之を食はんとしてたちもとほる、故に名づくといふ。=杜鵑花。

【躪】テン 先 躪は俗字

○ふむ(踐)ふみ行く。○脚の踐む處。日月星の循行する軌道。○日月星辰の次ぎ(星次)

【躔次】テンジ　星のやどり、星の躔舍。韓愈詩「赫奕當二一一一」

【躔度】テンド　日月星辰の經行する所の度數、周天を分ちて三百六十度とする。

【躐】

レツ

○ふむ(踐)前に行くものを踐む。○こえる(踰越)順序を經ずして飛び越える「超一」

【躐等】トウ　順序によらずしてとびこえる。禮、學記「幼者聽而勿レ問、學不レ一レ一也」

十六畫

【躪】

エイ　クワイ　齊　卦

○あやまつ(過)○いつはり(僞)信ならず。

【躪言】ゲンイツはりの言。又あやまちの言。左、哀二四「是一一也」

【躚】

セン　先　又、蹮に作る

○よろめく。○舞ふ。

【躚躚】セン　舞ふ貌。蜀都賦「紆二長袖一而屢舞、翩一一以翩翩」＝翩躚。

【躙】

リン　侵　又躪に作る

○ふみにじる、ふみあらす「蹂一」○きしる。＝蹸。

十七畫

【躩】

サツ　セツ　屑　藥

蹙一セツは旌行ユクの貌。又、心力を用ふる貌。

【躡】

躡(前條)に同じ。

【躩】

セツ　葉

○蹀一テフは行く貌。＝躞蹀。○柚の心シン米芾書史「隋唐藏書、皆金題玉一」

十八畫

【躩】

躩(前頁四段)の俗字。

【躡】

ヂャ　セキ　陌　通ず

ふむ(踐)史、司馬相如傳「人民之所蹈一」

【躑】

タク　合

ける、ふむ「一躅」＝蹋踏。

【躅】

デキ　葉

○ふむ(蹈)「踏一」「一足」○はく(履)うがつ「一履」「一鑿」○後からおっかける(追隨)「追一」曹植文「忽一景而輕騖」景即ち日影を追ふは甚だ疾きをいふ。○のぼる(登)「登一」○いそぐ(急)

同訓異義　躅・履・踐・蹈・踏・躡の別は履(第三頁四段)の條を見よ。

【躅躇】テキチョ　わらぐつをはく。史、荊燕傳「廣卿一レ一搶レ篋、一見二趙王一」

【躅レ虛】テキキョ　おぼぞらをふみゆく。揚雄、逐二天台山一賦「王喬撰レ轡以沖レ天、應眞飛レ錫以一レ一」

【躅屣】テキシ　はきものをはく。蘇鶚記「東帶一一而詣焉」

【躅後】テキゴ　あとを追ふ。尉繚子「其三敢偽二其前一、無二敢躅二其後一」

【躅レ島】テキトウ　くつをふみてあるく。高道衡賦「振レ袖歡レ月、一レ一揚レ埃」

【躅レ足】テキソク　あしをふむ。史、淮陰侯傳「張良・陳平躡二漢王足一」

【躅蹤】テキショウ　てきのあとを追っかけて行く。韓奇經「遊軍從レ後一レ一」

【躅蹀】テキチョウ　小步テキテキの貌。張衡、南都賦「裸褕一一而容與」

十九畫

【躧】

シ　紙　支　齊

○あゆむ(步)○舞ふ時にはくくつ、舞履。漢書、地理志「彈弦跕一」○わらぐつ(草履)戰國策「猶二釋レ轡而隨一レ一」躧・蹤。○はきものをちょっとつまさきにひっかける。漢書、舊不疑傳「一履相迎」

【如レ躧レ履】ジョシリ　躧は足袋、之を脫ぎ棄つるも惜しからず。以て事の易きに喩ふ。史、封禪書「吾視レ去二妻子一、一一耳」

【躧步】シホ　舞の步のはこび。張衡賦「郢一一」

二十畫

【躩】

ゲク　藥

○をどる(跳)淮南、精神訓「飛浴蝯一」○とくゆく(疾步)○一

如クワクはたちもとほりて敬を爲す、進むこと能はず。論、鄉黨「足一如也」

【躐歩】セフ　疾く行く。莊、山木「蹇レ裳一一」

【躐】　猟（前頁二段）に同じ。にじる、きしる（躪）漢書、王商傳「奔走相蹂一」

廿二畫

【躩】チョク　㊥　あと、あしずり。‖躅。

身部

【身】㊀シン　㊁ケン　㊀㊁

㊀み（躬）からだ、身體。轉じて樹の幹。雨雅「樅、松葉柏一」又、刀の身。○みづから（親）われ（我）自分。書、伊訓「檢」若不及」○己の愈思言行「修」「一」「守」「一」○はらむ（懷妊）詩、大雅「大任有一」○世「前一」「後一」㊂身毒シンドクは天竺即ち印度の古稱「史、西南夷傳」

【身基】シンキ　我が身を立てるもとゐ。左傳「體身之幹也、敬身之基也」

【身火】シンクワ　閨人の私慾に喩ふ。梁簡文帝文「縣雨微垂、卽滅ニ一ニ」

【身計】シンケイ　己の一身上のはかりごと。王禹偁詩「官途多ニ離絆一ニ一頗悲涼」‖身圖。

【身言書判】シンゲンショハン　唐代、官吏を登用するに此の四事を以てす。身は體貌の豐偉、言は言辭の辯正、書は楷法の遒美、判は文理の優長をいふ。唐書、選擧志「凡擇レ人之法有レ四、一曰身、言ニ體貌豐偉一、二曰言、言ニ言辭辯正一、三曰書、書ニ楷法遒美一、四曰判、言ニ文理優長一、四事皆可レ取」

【身後埋金】シンゴノマイキン　死後金を高く積みて北斗をさゝへる。白居易詩「一一、不レ如ニ生前一杯酒一」

【身後之譏】シンゴノキ　死後に君をいさめる。蘇洵、管仲論「吾觀ニ史鰌一、以レ不レ能下遇ニ蘧伯玉一、而退ニ彌子瑕一、故有ニ一一一」‖尾誅。

【身後訂】シンゴテイ　死後のはかりごと。朱熹測詩「蓋天官貴那　足レ情、原繰未レ爲一一」

【身後名】シンゴメイ　死後のほまれ。晉書、張輪傳「輪曰、使ニ我有ニ一一一、不レ如ニ卽時一杯酒一」

【身材】シンザイ　からだ、材は幹。傳燈錄「一一沒重大」‖軀幹・體軀・體幹。

【身上】シンジョウ　○わが一身上のこと。宋書、庾炳之傳「一一之慮、既自藩薄」○㊂シンしんだい、所帶。

【身仗】シンヂャウ　みのかざり、卽ち衣服。左、閔二「衣身之章也」陸游詩「閑雲野鶴作ニ一一一」

【身首】シンシュ　からだと、くびと。

【身世】シセイ　○この身と、この世と。杜詩「君平擁寂寞、一一兩相寬」○己の一生涯、生命。溫子昇、常山公主碑「奄辭ニ一一一、從ニ窓妃於伊洛一」

【身全】シンゼン　からだが無事に全し。孫綽文「匪レ躬而一一、濟レ功而勳集」

【身代】シンダイ　○人の一生。白居易詩「早年以ニ一一一、直赴ニ遺憲一」‖身世。○みがはり。胡野衆戰「請ニ以レ一一一」○しんしゃう、財產。

【身體髮膚受之父母】シンタイハツプジュノフボ　我がからだはすべて父母より受けたるもの。孝經「一一、不敢毀傷、孝之始也」

【身長】シンチャウ　みのたけ、後漢書、光武紀「光武一一七尺三寸、美須大口」（須は鬚）

【身圖】シントウ　身計に同じ。

【身貌】シンバウ　すがた、かたち。史、外戚世家「視ニ其一一形狀一、不レ足ニ以當ニ人主一矣」

【身薄】シンハク　徒手にてせまる。枚乘文「殺ニ武孔猛一、狙ニ湯一一」

【身分】シンブン　みぶん、己の位地境遇。宋書、王僧達傳「退省ニ一一一」

【身謀】シンボウ　一身のためにはかる。唐書、許孟容傳「乃臣下一一」

【身命】シンメイ　からだと、いのちと。漢書、鄭崇傳「以ニ一一一當ニ國咎一」‖軀命。

【身力】シンリキ　からだぢからと。管子「察知ニ短長與ニ一一之所レ不レ至」

【身若不レ勝レ衣】シンジャクフショウイ　○おそれつつしむことの甚だしき形容。韓詩外傳「昔者周公事ニ文王一、行無ニ專制一、事無ニ由己一、一一」○體質の甚だ柔弱なる形容。楚辭「趙文子、退然如レ不レ勝レ衣」

【出レ身】シュツシン　○我が身を投げ出だして、國家の爲めに盡す。漢書「鄧都尉、曰、吾レ親而一レ、國急而レ忘レ家、臨レ難而レ一レ、國急而レ忘レ身也」○㊂シュツシンを起す「一一地」

【修レ身】シュウシン　己の身を修め謹べる。大學「欲レ齊ニ其家一者、先レ一レ」

【傾レ身】ケイシン　おのれのできるだけの力をつくす。漢書、張湯傳「湯一レ一事之」

【乞レ身】コツシン　君にささげし身を乞ひ下げる、辭職を願ふ。後漢書、李通傳「以ニ洞上書一レ一」

【殺レ身成レ仁】サッシンセイジン　一身をすてて世の爲めに盡す。生命をなげうちて仁の德を全うす。論、衞靈公「子曰、志士仁人、無ニ求レ生以害レ仁、有ニ殺レ身以成レ仁」

【身綿】シンメン　身をさまる、綿は能。大學「心正而后一一」

【立レ身以行レ道】リッシンヲモッテミチヲオコナフ　一身を立つるは孝と悌とを以て本とする。唐書、柳玭傳「——、以二謹默一爲レ本、以二畏愼一爲レ務、以二勤儉一爲レ法」

【立身行レ道】リッシンコウドウ　わが身を起して古の道を行ふ。孝經「——、揚二名於後世一、以顯二父母一、孝之終也」

【脫レ身】ダッシン　やっと一身を脫して逃げ去る。史、張耳傳「耳是時乃——」

【保レ身】ホシン　己の身をたもち守る。詩、大雅「既明且哲、以保二其身一」莊、齊物「可二以——一、可二以全一生」

【身逃】シントウ　子をはらむ。詩、大雅「大任有レ身」傳「——也」

【挺身】テイシン　○身をひきて逃る。漢書、劉屈氂傳「——遁」○一身を引き出し逃む。蘇軾、留侯論「——而關、此不足レ爲レ勇也」後世は已ひとり勇往驀進する態度をあらはすに用ふ。

【謀身】ボウシン　わが身のためにはかる。北宮詩「傷嗟豈——」劉商詩「謀レ道不——」

【以身役レ物】ミヲモッテブツヲエキス　吾が一身を以て、物欲の爲めに使役せらる。淮南子「聖人不二以レ身役一レ物」

【以レ身殉レ利】ミヲモッテリニジュンス　一命を擲ちて利益を求む。莊、駢拇「小人則——、士則以レ身殉レ名、大夫則以レ身殉レ家、聖人則以レ身殉二天下一」

【忘レ身】ボウシン　己の身を忘れて主の爲めに盡す。次條參看。

【忘レ身爲レ家忘レ私】ボウシンヰエノタメニシヲワスル　君・國・公の爲め盡すをいふ。漢書、賈誼傳「化成俗定、則爲二人臣一者、主耳忘レ身、國耳忘レ家、公耳忘レ私」

【漆レ身爲レ厲】シッシンヲレイトナス　身體に漆を塗りて癩病人の如く粧ふ。戰國、趙策「豫讓又——、滅レ鬚去レ眉、自刑以變二其容一、爲二乞人一」

【身代】ミガハリ　わが身を以て君父に代り死する。朝野僉載「崔暉至孝、母病祈レ神、請二以レ身——一」

【身在二江海之上一】シンハコウカイノホトリニアリ　わが身は江海の上に在りて閒散なり。莊、讓王「——、心居二魏闕之下一」

三畫

【躬】キュウ　東　舘の俗字

○み(身)「聖ー」「腰ー」詩、邶風「我ー不閱」○みづから、自分。○みづからする、自分で行ふ「實踐ー行」詩、小雅「不」ー不レ親、庶民不レ信」

同訓異字　躬・自・親の別は自(一五八頁)の條を見よ。

【躬稼】キュウカ　みづから穀をうゑる。淮南、氾論「禹憂ー——、而有二天下一」ⅱ躬耕。

【躬行】キュウコウ　みづから行ふ。論、述而「ーニー君子一、則晉宋之有二得」ⅱ實踐。

【躬耕】キュウコウ　○天子みづから耕田をたがやす。禮記「帥二三公九卿、諸侯大夫一ーニー帝籍一」○みづから田を耕す。諸葛亮、出師表「臣本布衣、ーニー於南陽一」

【躬圭】キュウケイ　人の形を以て璋飾とせし圭。周禮、春官「伯執ーーー」

【躬倹】キュウケン　みづからけんやくする。詩、周南、葛覃、小序「葛覃、后妃之本也、ーレ節レ用、儉二於澣濯之衣一」

【躬桑】キュウサウ　古、后妃自ら桑を採り蠶を養ふ。民に蠶事を勸める爲め。禮記「季春之月、后妃親東鄉ーレ」

【躬耕】キュウコウ　みづからひきゐる。虛懷慨文「人之所レ仰在二于孝一、陛下ーニ此道一、爲二天下先一」

四畫

【躰】躰(一五四五頁三段)の俗字。

【躬】〔國字〕

せがれ(倅)己の子の謙稱。

五畫

【躰】體(骨部十三畫)の俗字。

【躯】ク　尤　軀の正字

【躯】〔國字〕

み(身)みづから。

附録　身に從ひ、呂に從ふ、呂は古の脊の字、もと脊椎の象形。

六畫

【躰】タ　哿

○み(身)みづから。○かはす、身をかはしてにげる「ー避」○かくれる(匿)

【躰閃】タセン　からだをひらりとかはしてにげる。元典章「避怕ーー」

【躰避】タヒ　前條に同じ。爲堅志「可二以出二他處一ーー一」

七畫

【躰】キュウ　東　躬の正字

【躰】〔國字〕

はだか(裸)史、陳丞相世家「ー而佐レ劉」ⅱ裸(一七五八頁二段)

【躰身】ラシン　はだか。史、陳丞相世家「臣ーー來、不レ受レ金、無二以爲一レ資」

九畫

【躾】〔國字〕

しつけ、禮儀作法を教へこむ、

禮容を整へる。

十一畫

【軀】ク　図

み(身)からだ、むくろ「體ー」「ー幹」「微ー」「忘ー」

【捐レ軀】エンクウ　己の一身をすてる。晉書、郗鑒傳「ー一九原ニ」‖棄軀。

【軍軀】クン　からだ。蘇軾詩「奈何此ー一、未レ免混ニ世俗ニ」‖軀體。

【軀殼】クカク　からだ、精神に對していふ。孔武仲詩「龍死ー一在」

【軀幹】クカン　からだ、身體。杜甫詩「子猷ニー小、老氣橫ニ九州ニ」

【軀體】クタイ　○人體の一部、人體の中央、上は頭と爲し、下は脚と爲し、中に臟腑を具し、頭・胸・腹の三部に分つ。○からだ。後漢書、陳龜傳「臣無ニ文武之才ニ而忝ニ應揚之任ニ、上懃ニ聖明ニ、下憚ニ衆姦ニ、雖レ沒ニー一、無ニ所ニ云補ニ」‖身體。

【軀命】クメイ　からだと、いのちと。‖身命。

十二畫

【軅】　軀（一五七三頁二段）の俗字。

【軈】タ　俚

○垂れ下がる貌。軈の俗字。

○假りて躲避の躲の義とす。

【軈閑】カン　人目をぬすみてなまける。方岳詩「睡丁ー一欲ニ誰欺ニ」

十七畫

【軈】〔國字〕

やがて。直ちに、ほどなく、まもなく(無幾)

車部

【車】シャ・セキョ　麻　魚

○くるま、輪の回轉によりて人又は物をはこぶ具。牛ー馬ー汽ー電ー荷ーなどの總稱。○回轉する輪の總稱「滑ー」「水ー」「紡ー」○はどこ、はぐき(牙牀)「齦」「輔ー」圖○ワル人カーの略稱。○車輪の如く圓き形せるもの「一座」「一鍛」

【車右】シャユウ　武士、兵器を執りて兵車の右にある者、勇者をえらびて之にあてる。公羊、宣二「趙盾之ー一郎彌明者、國之力士也」‖戎右・驂乘。

【車殆】シャタイ　車をひくむながひ。汝南先賢傳「憲乃當レ車拔ニ佩刀ニ以斷ニー一」

【車屈盤レ蚤】シャクツバンソウ　蚤の車廬の故事。晉書、車胤傳「風宇武子、幼恭勤博覽、夏不ニ常得ニ油、夏月以ニ練袋ニ盛ニ數十螢火ニ照レ書讀レ之、以レ夜繼レ日、後官至ニ尚書郎ニ」

【車轅】シャエン　くるまのながえ。趙師秀詩「人生苦ニ行役ニ、不定如ニー一ニ」‖軌。

【車駕】シャガ　天子の御くるま。轉じて行幸中の天子を指す。漢書、高帝紀「ー一西都ニ長安ニ」‖鑾輿・鳳輦。

【車遮】シャシャ　車上をおほふきぬがさ。漢書、黃霸傳「賜ニー一特高一丈ニ」

【車航】シャコウ　くるまと、ふねと。法言「ー一混混、不レ捨ニ晝夜ニ」‖車船。

【車掣】シャセイ　おほはまぐり、殻の色紫にして堆積玉の如し、斑點あり、火を以て之を炙れば則ち開く、肉の味美なり。梅堯臣詩「ー一與ニ月蛤ニ、寄自ニ海陵郡ニ」‖硨磲。

【車軸】シャジク　くるまのくさび、車の軸端の鍵。‖轄。

【車軌】シャキ　くるまのあと。中庸「車同レ軌、書同レ文」後漢書、寇榮傳「追ニ位者極ニー一ニ」

【車騎】シャキ　○いくさぐるまと騎馬と。曲禮「前有ニー一、則載ニ飛鴻ニ」○將軍の號、勳功者又竊臣を以て之に任ず。漢の文帝の時置き、唐に至りて廢す。

【車駢】シャベン　牛車のながえの端にありて軛をしばるもの。韓非子「不レ如ニ爲ニー一者巧ニ也」

【車遮】シャシャ　○はまぐりの殻の最も大いなる者、殻甚だ厚く、儼きて玉と爲す、七寶の一。梁は車輪、其の大いなるに喩ふ。王粲文「惟ニ君子之変坐ニ實ニー一之妙珍ニ」‖硨磲。○古の國名。北史「眞臘國、南接ニー一國ニ四有ニ朱江國ニ」

【車螯】シャゴウ　車のこしきと、こしきとすれあふ、甚だしく雜沓する形容。戰國、秦策「臨淄之途、――、人肩摩」‖毂擊。

【車載斗量】シャサイトリョウ　車にのせ斗升にてはかる、物の數多くあるにいふ。吳志、吳主傳、注「吳如ニ大夫者擬人、吾曰、聰明特逸者、七八十人、如ニ臣儕ニ――、不レ可ニ勝數ニ」

【車箱】シャソウ　はこぐるまの箱。蘇秦傳「偽ニ弊車ニー一駑馬ニ一ヵ而就ニ帝見面著レ之」

【車士】シャシ　御車。戰國策「譬如ニー一之引ニ車也」

【車掌】シャショウ　國汽車・電車などに在りて、車中の事を掌るもの。

【車書】シャショ　車と文字と。中庸「車同ニ軌、書同レ文」金主亮詩「萬里ー一合ニ混同ニ」

【車水馬龍】シャスイバリュウ　車馬の盛んなる形容。後漢書、馬皇后紀「濕龍門外家間ニ起居ニ者、車如ニ流水ニ馬如ニ游龍ニ」

【車前】シャゼン　○車のまへ。許渾詩「ー一臟病舞胎遲、架上鷹閑鳥雀高」○お

ほばこ（其の實を一一子といふ）‖當道・來百。
【車前草】シャゼンサウ　かたくり、春地下莖より二葉を出し、傍に花を著く、根は片栗粉を製す。‖山慈姑。
【車戰】シャセン　いくさぐるまにて戰ふ（宋史、兵志）
【車道】シャダウ　馬車の往來する道。晉書、孫毓傳「富春一一既少」
【車磔】シャタク　人體を兩車につなぎて左右に引きさく。孔叢子「齊王行二一一之刑」‖車裂。
【車軸】シャジク　車のしんぎ。大雨の形容とす。長阿含經「漸降二大雨一、流如二一一」
【車塵】シャジン　車のちりの濛靡約詩「天籟思二林嶽一、一一條二郡邑一」
【車轍馬跡】シャテツバセキ　車のわだちと馬の足あと。左、昭十二「昔穆王欲レ肆二其心一、周二行天下一、將レ皆必有二一一一焉」
【車站】シャタン　停車場、ステーション。
【車徒】シャト　兵車と步卒との馬體「皇吏撰二一一一」
【車馬】シャバ　くるまと、うまと。論、鄕黨「朋友之饋雖二一一一非二祭肉一不レ拜」禮記「君賜二一一一乘以拜レ賜」
【車馬有二行色一】シャバニカウシキアリ　人の將に旅行せんとするけしきあるをいふ。莊、盜跖「孔子說二盜跖一歸、遇二柳下季一、季曰、閒然數日不レ見、——、似レ復二往見一跖耶」
【車夫】シャフ　くるまひき、人力車を挽く者。
【車服】シャフク　車と衣服と。書、舜典「一一以レ庸」
【車輻】シャフク　くるまのや。陸璣、詩疏、楊、葉似レ槐、木皮厚數寸、可レ爲二一一一」
【車兵】シャヘイ　くるまに乘りてたたかふ兵。左傳「賦二一一一徒卒甲楯之數一」
【車輞】シャマウ　車輪の外周をつつむもの。陸游詩「匡山如二香爐一、藍水似二一一一」
【車笥】シャイ　くるまのとどろく音。韓琦詩「一一晴起曲江塵」
【車力】シャリキ　園荷車などにて貨物をはこぶを業とする者。
【車輪】シャリン　くるまのわ。後漢書、張綱傳「漢安元年、遣二八使一、循二行風俗一、網羅埋二其一一于洛陽都亭一」（理とは車を進めざる義）
【車輪楽】シャリンおほばこ。‖車前。
【車兩】シャリョウ　くるま、車は兩輪より成る故にいふ、兩一に輛に作る。宋書、張暢傳「一一在レ後」
【車輛】シャリョウ　前條に同じ。
【車裂】シャレツ　くるまざき。人體を兩牛車につなぎて左右に引きさく。戰國策、惠王一一商君一而桀人不レ憐」
【車駱】シャロ　天子の車。宋史、職官志「太僕寺掌二一一一廐牧之令一、國有二大禮一、供二其車輅一」
【下レ車】クダルヤ　地方官がはじめて任地に到著する（乘車して行く故）漢書、敍傳「班伯爲二定襄太守一、定襄閑二伯素貴年少一、畏二其一レ作レ威、吏民疎息」
【車同レ軌】シャドウキ　車のわだちの間の寸法が同じ、天下統一の意。車書を見よ。
【引レ車避レ道】ヒクルマミチヲサク　貴人に途中にて出遭ひし時、敬ひて道を避ける。後漢書、馮異傳「馮異爲レ人謙退不レ伐、行與二諸將一相逢、輒——」
【膊レ車】ハクシャ　車のちくにあぶらさす。夏侯湛、抵疑「一レ一以須レ放、秣レ馬以待レ御」
【式レ車】シキシャ　車上にて敬禮する、支那の車は前に式（軾）といふ横木あり、車上にて敬禮を表する場合に之に手をかける。
【車如二流水一】シャジョリュウスイ　車は水の奔流する如く速かなり。後漢書、四德馬皇后紀「——、馬如二游龍一」

軋 アツ 軫

○きしる、車が輾る、すれあふ。○轉じて仲がわるくなる、不和になる、勢が相傾く。莊、人間世「名也者相一也」○古代の刑の一。漢書、匈奴傳「罪小者一、大者死」○軋茀はこまやか（緻密）○一忽は長く遠き貌。漢書、禮樂志「清風一忽」○軼一は涯際なき貌。揚雄、甘泉賦「軼一無垠」
【軋軋】アツアツ　○舟の櫓、又は車・機などのきしる音。劉克莊詩、大車小車磨一一‖咿軋・軋軋。○物の摩り生ずる貌。史、律書「乙者言二萬物生一一也」
【軋伊】アツイ　いとぐるまの摩。馬融常詩「縕車一一調抽レ緑」
【軋摩】アツマ　きしりこする。宋濂、題岡「六經之作、如レ不レ可二以一一一」‖磨軋。
【軋轢】アツレキ　○車がきしる、すれあふ。○不和になる、互に反目する。

軌 キ 紙

○わだち、車のあと（車轍）車輪のあと。○車の左右兩輪の間。○ちくのさき（軸頭）○みち、のり（法）きそく（則）てほん「一範」「儀一」（不一は法度に循はず）○ゆきみち。○したがふ（循）漢書、賈誼傳「諸侯一一道」○よこしま、古、究に通ず。左、成十七「衛在二外寫一姦、在二內寫一」

軌 軌は車轍なり、車に从ふ、九の聲、俗に軌に作るは非。

【軌儀】キギ のり、てほん。史通「官司制度、朝廷一一」‖軌則。

【軌憲】キケン のり、おきて。晉書、孫盛傳「性方鑿有二一一一、雖子孫寒賤、而庶訓愈峻」唐書、道武帝紀「示二一一於萬世一」

【軌則】キソク ○さだまり、法度。唐書、韋述傳「一一遠定」○圓軌條の規則「一一司評會」

【軌迹】キセキ ○くるまのあと。○前人の正しき行爲のあと。漢書、劉向傳「遵二前聖之一一一、循二詩人之所レ刺」

【軌轍】キテツ ○のり、てほん。晉書、張華傳「抑レ之以二權勢一、納レ之以二一一一」‖法度。軌度。○てほんとしてのっとりならふ。左思、吳都賦「四方之所二一一一」

【軌道】キダウ ○日月星辰の運行するみち。○電車、汽車の通ずる道、レールを敷きたる道。○正しきみちに循ふ。漢書、鮑梁志「諸侯一レ、獄訟衰息」

【軌踏】キタウ ○くるまのわだちのあと。左思、吳都賦「外則一一八達、里開四出」‖軌轍。○前人の道したるてほん。漢書、敍傳「伏二周孔之一一」‖遵踏。先軌。遵轍。

【軌條】キデウ 軌道に敷くレール。

【軌轍】キテツ ○くるまのわだち。水經、注「小隴山嶮峰高峻、不レ通二一一」

○歸じて、法則の轍とす。○過去の事跡。溫庭筠詩「後庭遺二一一一前席詠二傾刑一」

【軌度】キド のり きそく。史、始皇紀「皆遵二一一一和安敦勉」‖法則。

【軌範】キハン のり、てほん。孔安國、尚書序「興二滅繼絶一命之文凡百篇、所レ以恢二宏王道一示二人主一以一一上也」‖範軌。法式。

【軌範學】キハンガク 從ふべき標準を立てる學問、倫理學・論理學等の類。

【軌物】キブツ 法度。左傳「君將レ納二民于一一一者也」

【軌模】キモ のり、てほん。張衡、歸田賦「揮二翰墨一以奮レ藻、陳二三皇之一一一」‖法式。

【軍】グン 文

○いくさ。○つはもの（兵士）○兵士の團隊。○周の兵制、一萬二千五百人の稱。天子は六一、諸侯の大國は三一。○たむろす（屯）陣どる。左、桓六「一」於瑕一以待レ之」○たたかひ、戰爭。○宋時代の行政上の區劃、路の管轄に屬するものにて縣の如きもの。

【軍醫】グンイ 軍隊の醫員。其の長を一一總監といふ。

【軍營】グンエイ ○ぢんや。盧綸詩「亂山臨二野渡一、落日照二一一一」‖陣營。○日に喩ふ。御覽引、發生經「一一之中、有二甘泉一」甘泉は嵯。

【軍役】グンエキ いくさ。史、蘇秦傳「卽有二一一一」‖兵役。

【軍歌】グンカ 軍隊の士氣をはげます爲め軍事思想を發ふ爲めに作りし歌。

【軍行】グンカウ ○軍隊の行進。○軍隊の組織。左、昭三「戎馬不レ駕、卿無二一一」

【軍樂】グンガク 軍中に用ふる音樂（後漢書、禮儀志、注）韋應物詩「伐レ鼓一一陣」

【軍學】グンガク 戰術に關する學問。‖兵學。

【軍監】グンカン 軍事のめつけ。漢書、王莽傳「設二一一一十有二人一」‖監軍。

【軍艦】グンカン いくさぶね。戰鬪艦・巡洋艦・海防艦・運送艦等の總稱。

【軍紀】グンキ 軍法に同じ。‖軍律。

【軍記】グンキ 戰爭の事を記錄したる書物。‖戰記。

【軍旗】グンキ ○いくさに用ふるはた。○團體隊の表彰とする旗、旭日をかがく、聯隊殺立のとき天皇陛下より下賜せられ其の聯隊の生命となるもの。‖聯隊旗。

【軍儀】グンギ 軍中の儀式。北史「陽平王熙、奉レ詔晉二十二軍一校閱武得一一一賞賜隆厚」

【軍機】グンキ 軍事上の機密。南史、顏竣傳「竣出二入臥內一、斷二決一一一」

【軍機處】グンキショ 清の世宗の時、設けたる官署、軍事の機密を掌る、後には內外文武の要務を總理す、漢の尙書省と同じ。

【軍器】グンキ 戰爭に使用する器具。唐書、百官志「一一出レ十」‖兵器。武器。

【軍議】グンギ いくさに關する評議。

【軍區】グンク 軍事行政の施行區域。

【軍刑】グンケイ 軍人に科するしおきの刑罰「以二五刑一糾二萬民一（中略）三曰一一」

【軍警】グンケイ いくさのいましめ。晉書、毛穆之傳「近親無二復一一一」

【軍鏗】グンケイ しゃも、雞の美く鬪ふもの、邏羅に產す、故に名づく。

【軍燃】グンネン いくさのふれぶみ。馬定國時「鼓來久幾日、一一忽四驍」

【軍紀】グンコ 軍隊のおきて。宋書、孝武帝紀「擢敍二一一一可二普加二寬」

【軍鼓】グンコ ぢんだいこ。軍隊の行動をととのへ、又、軍氣をはげますためにうつ太鼓。

【軍功】グンコウ いくさの手柄。史、項羽紀「無二一一一」‖武功。

【軍港】グンコウ 鎭守府所在のみなと。

【軍國】グンコク ○交戰中のくに。晉紀總論「善二於一一一謀二屋中一」○交戰中の地所と戰爭なき平和の內地とを。唐書、李元紘傳「是時幾二京師幾田一、諸者欲レ盡二屯田一、元紘曰、一一不レ同、中外制異、內地實レ也、古未レ有也」

【軍國主義】グンコクシュギ 軍備を以て立國の

精神とするをいふ。‖軍制主義。

【軍曹】グンソウ　國○古代鎮守府に屬せしさくわん。○陸軍下士官の一。

【軍裝】グンソウ　いくさのよそほひ。蘇軾詩「一一乘ン曉發」‖戎裝・武裝。

【軍使】グンシ　交戰中敵の軍營に赴くつかひ。

【軍資】グンシ　いくさの費用。晉書、食貨紀「內則鎭二百姓一、外供二一一一一」‖軍需。

【軍師】グンシ　軍中にて謀を定むる者、參謀。勳志、諸葛亮傳「成都平、以レ亮爲二一一將軍一」

【軍事指揮】グンジシキ　將軍に附屬する官（唐書、百官志）

【軍實】グンジツ○兵甲、又、戰利品の類。左、襄二四「齊侯祭レ社、冕二一一一」○軍人。楚語「射不レ過レ講二一一一」○分捕品（戰利品）と兵器と軍人とをすべていふ。左、隱五「數二一一一」

【軍人】グンジン　軍籍に在るもの。將校より兵卒に至るまでの總稱。‖軍士。

【軍神】グンジン　いくさのかみ、武運を守る神。

【軍將】グンショウ　一軍の將帥。晉「天子以二其賢一、任爲二一一一」

【軍資】グンシ　いくさの財貨。漢書、陳湯傳「一一不レ踰レ月」

【軍餉】グンショウ　軍隊の糧食、餉はかれいひ。馮惟訥詩「指二揮一一一收二夜郎一」‖兵食・兵糧。

【軍須】グンシュ　いくさに用ふるもの。唐書、陶瑾傳「一一期會爲レ急」通鑑、唐紀「凡行軍資糧器械可レ須者、皆謂二之一一一」‖軍需。

【軍需】グンジュ　いくさに入用の金品。十六國春秋「以供二一一一」‖軍資。

【軍所】グンジョ　兵營。漢書、蕭何傳「莫レ若下遣二子弟一能勝レ兵者一、悉詣中一一上」

【軍書】グンショ　○軍中往復の文書。漢書、息夫躬傳「一一交馳而輻輳、羽檄重疊而狎至」○軍事に關する書物。木蘭歌「一一十二卷、卷卷有二爺名一」

【軍職】グンショク　軍事を司る官。宋史、楊崇勳傳「性貪鄙、久任二一一一」

【軍帥】グンスイ　一軍の大將。左、宣十二「命爲二一一一」

【軍制】グンセイ　兵事に關するおきて。晉書、石季龍載記「百姓窮窘、鬻レ子以充二一一一」五代史、朱珍傳「創二立一一一、選レ將練レ兵、甚有レ法」‖兵制。

【軍政】グンセイ　○軍事上のまつりごと。左傳「百官象レ物而動、一一不レ敢而惰」○戰時中一定の區域內に其の他の司令官が行ふ行政警察

【軍勢】グンセイ　○いくさのいきほひ。晉書、姚萇載記「一一彌盛」○關ル兵士の軍。

【軍歷】グンレキ　軍中のさわがしきひびき。張衡、東京賦「坐作進退、節以二一一一」

【軍籍】グンセキ　軍人の住所氏名を記したる帳簿。東觀漢紀「校二覆一一一無二一卒虛額者一」

【軍扇】グンセン　國軍陣を指揮する具、鐵骨にて表に日輪、裏に月輪を畫く。‖軍配團扇。

【軍船】グンセン　陸海軍中の役員、戰鬪の事に任ぜざるもの、書記・會計・軍醫など。

【軍伐】グンバツ　國大名の陣を守る重役。‖陣代。

【軍隊】グンタイ　兵士のくみ。‖隊伍。

【軍刀】グンタウ　いくさに使用するかたな。

【軍團】グンダン　○兵士の團隊。唐書、百官志「卒伍一一之名數、器械車馬之多少」國○王朝時代、諸國に置きし常備兵。○作戰上、數個師團を一司令官の下に置く軍隊。

【軍談】グンダン　○いくさのものがたり。戰爭のはなし。○國軍書を面白く節をつけて語みあげ、又いくさばなしをする「一一師」

【軍荼利】グンダリ　梵明王の一、南方を守る、一面八臂、忿怒の相をなし、一切の惡魔を降伏すといふ。

【軍持】グンヂ　梵水を入れる瓶。賈島詩「我有二一一遺子弟一、佩陽江裏汲二寒流一」

【軍箏】グンソウ　いくさのはかりごと。杜牧詩「玉帳一一籌二使彦一、錦帷環觀立二神仙一」

【軍陣】グンヂン　軍隊の陣取り。漢書、武十三王傳「見二天下之興地及一一圖一」

【軍氣】グンキ　軍隊の守備。白居易詩「山何地慕容、一一國藩」

【軍場】グンヂョウ　戰場。宋書、周朗傳「復呵二於一一之閒一」

【軍中】グンチュウ　陣營のうち。漢書、周勃傳「一一聞二將軍之令一、不レ聞二天子之詔一」

【軍馬】グンバ　軍事用のうま。漢書、食貨志「保二養一一一」注「保者、不レ辭二其死傷一」

【軍配團扇】グンバイウチワ　國軍扇に同じ。

【軍閥】グンバツ　いくさのいきを。唐書、郭虔瑾傳「開元初錄二一一一」

【軍法】グンパフ　軍中のおきて。史、司馬穰苴傳「召二軍正問一一一」漢書、高帝紀「蕭何頒二律令一、韓信申一一一」‖軍紀・軍律

【軍備】グンビ　いくさのそなへ。歐陽修文「課レ田而貢二一一一」

【軍費】グンピ　いくさの費用（後漢書、虞詡傳）‖軍需・軍資。

【軍夫】グンプ　國從軍の人足。

【軍府】グンプ　○兵器を藏する處。左、成七「晉人以二鍾儀一歸、因二諸一一一」○將帥の幕府。柳宗元、江運記「一一之儲」

【軍服】グンプク　軍人の制服。‖戎服・戎衣。

【軍分】グンブン　兵士の給料（蘇軾、再上二皇帝一書）

【軍票】グンピョウ　軍用手形、軍隊にて通用する紙幣。

【軍壁】グンペキ　とりで。說文「壁、一一也」

【軍旛】グンパン　軍隊のちうめん。漢書、李

歲傳「吏治二―一至レ明」
【軍鋒】グンホウ　いくさのさきて。史、馬布傳「布常爲二―一」‖先鋒。
【軍謀】グンボウ　いくさのはかりごと。王遠詩「元帥統二將權一、皆貴在二―一」
【軍務】グンム　軍事に關するつとめ。
【軍門】グンモン　○軍營の門。古、行軍の時、兩旅を樹てて門と爲す。左傳「晉甲趙穿當二―一、呼曰、云云」○明代より統兵官の尊稱とす。清代は提督の敬稱。
【軍用】グンヨウ　いくさの費用。漢書、薛宣之傳「不レ加レ賦而―給」‖軍費。
【軍用票鈔】グンヨウヒョウセウ　戰時に臨みて政府が發行する紙幣。
【軍容】グンヨウ　○いくさのかたち、武裝。司馬法「―不レ入レ國」○行軍の氣象。紀律。新書「士卒執練也、―執整也」
【軍吏】グンリ　○軍隊に屬する官吏、主に文官をいふ。○國軍隊の會計官。
【軍律】グンリツ　軍法に同じ。
【軍略】グンリャク　戰爭のはかりごと。‖戰略。
【軍旅】グンリョ　○軍隊。○いくさ、戰爭。論、衞靈公「―之事、未之學也」
【軍壘】グンルイ　とりで。杜甫詩「邊秋隔二―一」‖城壘。
【軍令】グンレイ　軍事上の法令。又軍事上の制規。管子「作二內政一而寓二―一焉」
【軍禮】グンレイ　軍事に關する禮式。五禮の一。周禮「大宗伯之職、以二―一同二邦國一」

【軏】　ゲツ　月　軌とは別

よこがみ、馬車（小車）の轅（ながえ）の端に在りて衡（くびき）を持するもの。大車に輗といひ、小車に―といふ。論、爲政「小車無レ―」

【軒】　㊀ケン　㊁ケン　元

㊀くるま。古、支那にて大夫以上の乘用車。左、閔二「鶴有二―一乘」者ニ○轉じてひろく車の通稱とす「朱―」○たかし、車の前が高い（低きを軽といふ）○あがる（擧）「―昂」○のき、ひさし（楹宇）「茅―」轉じて家。○長廊の敞ある者「開―」張衡賦「承二倒景一而開レ―」○おばしま（欄版・殿檻）○―は舞ふ貌。又、自得の貌。○―渠―然は笑ふ貌。○古、諸侯の禮にて樂器を室の三面にかけるをいふ。周禮、春官、小胥「諸侯―縣」（縣は懸）㊁大きく切りたる肉片。禮、內則「棗鹿田豕麕、皆有レ―」○國家を數ふる數詞「三―
【軒舸】ケンカ　たけ高きくるま。北史、崔浩傳「父子竝乘二―一」
【軒擧】ケンキョ　きんり、宮猿をいふ（史、呂后紀贊）張九齡詩「―殊清聽」
【軒轅】ケンエン　黃帝の名（史、五帝紀）―の丘（今の河南新鄭縣）に生る、故に氏とす。
【軒翥】ケンショ　軒は軒轅氏、天子の游幸に喩ふ。范曄、樂遊應詔詩「―時未レ暮」唐高宗銘「道光二―一、慶流二姬迹一」
【軒昂】ケンコウ　○高くあがる。柳宗元、招二海賈一文「舟航―一兮、下上飄鼓」○元氣の盛んなる貌。吳志、孫堅傳「―自高」
【軒岐】ケンキ　軒は黃帝軒轅氏、岐は岐伯、共に醫學の祖、轉じて醫學・醫術の義とす。帝王世紀「黃帝使二岐伯司二醫藥一」丁復詩「傳家況有二―一夔一」
【軒義】ケンギ　軒轅と伏義と。梁元帝賦「俯觀二羲於―一」
【軒鰭】ケンキ　ひれをふるひたてる。前趙錄「有二一白魚一頭在二一角一、レ―躍レ鱗」
【軒渠】ケンキョ　笑ふ貌。後漢書、劉子訓傳「見論二父母一、―笑悅、往欲レ就レ之」‖軒然。
【軒擧】ケンキョ　高くあがる。魏信、周王遠神道碑「儀範清冷、風神―一」
【軒頊】ケンコウ　軒轅と顓頊と、皆古の聖徳の君。檢段、與二王僧辯一書「―比二於諸侯一、湯武方二於見戲一」
【軒轎】ケンキョウ　高く張りたるたれぎぬ。左思、吳都賦「樣二流蘇一、間二―一」
【軒豁】ケンカツ　にがらかにうちひらける。韓愈、南海神廟碑「乾端坤倪、―呈露」‖開朗。
【軒軒】ケンケン　○舞ふ貌。淮南、道應―然方迎二風而舞一ニ○自得する貌。唐書、孔戣傳「―自得」○高く擧る貌。世說、容止「諸公每レ朝、朝堂猶暗、惟會稽王來、―如二朝霞擧一」（夜の中天にあがりたなびくは容止の美なる形容）
【軒騫】ケンケン　飛び擧る貌。吳兢詩「雙鶴翼雨仍―」
【軒秀】ケンシュウ　たかくひいでる。唐書、嚴挺之傳「泰質―一」
【軒舉】ケンキョ　飛び擧る貌。楚辭「鸞鳥―而翔飛」‖軒騫。
【軒序】ケンジョ　のきと、ひさしと。歐陽修、答二吳充秀才一書「終日不レ出二於―一」
【軒然】ケンゼン　笑ふ貌。天祿外史「韓王―仰笑」
【軒輊】ケンチ　○軒は車の前の高きをいひ、輊は其の下きをいふ。詩、小雅「戎車既安、如レ輕如レ軒」○轉じてまされると、おとれると。漢書、馬援傳「居前不レ能レ令二人輕一、居後不レ能レ令二人軒一」
【軒峙】ケンチ　たかくそばだつ。鍾會、孔

雀賦「或舒ン翼ー—奮迅洪姿、或踝ン足跑踏鳴噭都呼」‖高峰。

【軒特】ケントク　たかくすぐれる。唐書、李栖筠傳「莊重寡言、髣貌ー—」

【臨ン軒策ン士】リンケンサクシ　軒は殿堂の前の檐ヤの特に高く起るをいふ、天子御座をここに移して賢士を試問せらるる義。蔡邕「人主親試ニ賢士ー曰ニ臨ン軒策ン士、臨ン軒宇、出ニ後漢書、李膺傳ー」

【軒軺】ケンヨウ　車と舟と。韓愈連詩「ーー遡ニ遙路ー」‖舟車。

【軒眉】ケンビ　眉を揚げる、心舒びて眉を展べる。陸游詩「挾纊照ン影一ーー」

【軒廡】ケンブ　のき、ひさし。晉書、食貨志「車如ニ流水、馬若ニ飛龍、照ニ映ーー、光ニ華前戦ー」

【軒闢】ケンヘキ　たかくしてうちひらける。蘇軾欽文「公襟度ーー、不ン屑ニ細務ー」‖軒豁。

【軒則】ケンソク　國家ごと。‖戸則。

【軒冕】ケンベン　○軒は大夫以上の人の乗用車。冕は貴人のかんむり。漢書、揚雄傳「俄ニーー雑ニ衣裳ー」○轉じて貴き位。杜甫詩「本無ニーー意ー」

【泥ニ塗軒冕ー】ケンベンノ　高官をどろの如くに輕んずる。范仲淹、嚴先生祠堂記「得ニ聖人之清ー」

【軒朗】ケンロウ　ひらきて、からりとする貌。歐陽玄賦「翰園ーー」‖開暢。

【軒廊】ケンロウ　のきしたのわたどの。大業雑記「ーー周匝」

【軒酒】ケンシュ　あまざけ。後漢書、儒林傳「前當ニーー、北面跪」‖薄酒。

【軔】ジン　圓

○くるまのとめぎ、車の輪を止める木。轉じて出發するを發ーといふ。○ひろ、八尺をいふ。孟、盡心「掘ニ井九ーー」‖仞。

四畫

【軟】ゼン　ナン　俗字

○やはらか(柔)「柔ー」「輕ー」剛の對。○轉じて意志の柔かに弱き義「ー弱」硬の對。○ー水ナンスイは纖物質のまじらぬ水。硬水の對。

【軟膏】ナンコウ　膏藥ナウの一種。‖油膏。

【軟肌】ナンキ　やはらかなるはだへ。翻譯名義集「柔膚ーー」

【軟脚病】ナンキャクビョウ　かっけ(脚氣)韓愈、祭ニ十二郎ー文「比得ニ——、往往而劇」

【軟玉】ナンギョク　○豆腐の異名。蘇軾詩「筋上凝脂滑、鑑中ーー香」‖輭玉。○玉ギョクをいふ。色は白或は淡綠、桃瀉乳白色を以て貴と爲す、種種の飾品及印章等に用ふ。

【軟化】ナンカ　堅きものが柔くなる。轉じて強硬なる主張議論をやめて人に服從する。

【軟滑】ナンカツ　やはらかにしてなめらか。賈民要術「津汁ーー無ニ物能比ー」‖柔滑。

【軟紅】ナンコウ　やはらかなるはなびら。蘇軾詩「ーー猶戀ニ京塵ー」

【軟骨】ナンコツ　柔かにして彈力ある骨、關節の間に附著して調節するもの。轉じて意思弱くして人に屈從するものをいふ。

【軟脉】ナンミャク　布を用ひて作り、以て病人を運ぶもの。

【軟弱】ナンジャク　かよわし。劉琨詩「吾余ーー、弗ン克ニ負荷ー」

【軟然】ナンネン　よわくやさし。宋史、孔文仲傳「世方貴ニーー而惡ニ剛峭ー」

【軟毫】ナンゴウ　やはらかなる毛。元稹詩「有ン鳥有ニ鳥名ー爲ン鳩、毛衣ーー心性柔」

【軟靡】ナンビ　なまめかしくやさしきこと。婦人の聲などに。梁簡文詩「衆體隔ニ流脈、婉歌逐ニーーー」‖輭靡。

【軟體動物】ナンタイドウブツ　體内に骨格を有せず體質の柔かなる動物、烏賊ゾク章魚ヲの類。

【軟塵】ナンジン　やはらかきちり、主ににぎやかなる花柳界などの事にいふ。許有壬詩「東華足ーーー」

【軟紬】ナンチュウ　純絲に百分の一の屑絮を含みて質の柔かなるもの。

【軟派】ナンパ　○手強き主張又反對を爲さざる主義の黨派。○新聞又雜誌などにて艶物モノなどを掲載する記者のなかま。

【軟飽】ナンポウ　酒を飲む。四溟詩話「商人以ン飲ン酒爲ニーー、北人以ニ蜜漿ニ爲ニ黑甜ー」蘇軾詩「三盃ーー後、一枕黑甜像」

【軟肥】ナンピ　柔かにしてふとる。文選詩「蓴菜鱸魚正ーー」

【軟美】ナンビ　やはらかにしてうまし。白居易詩「ーー仇家酒、幽閒葛氏豚」

【軟紬】ナンチュウ　やさしくなまめかし。宣和畫譜「皆非ニ優柔ーー取ニ悅ニ見女子ー者ー」

【軟風】ナンプウ　○やはらかくそよそよと吹くかぜ。温庭筠詩「ーー吹ン春星斗稀」○げんきのなきやうす。

【軟輪】ナンリン　蒲にて車輪をつつみて柔かにせしもの。白帖「ーー車、蒲輪安車也」王維詩「願隨露板詔、時降ーー車」後漢書、明帝紀「安車ーー」‖蒲輪・軟車。

【軛】ヤク　陌

くびき。車の轅エの端の横木、馬の首を扼するもの。‖軶。

五畫

【軺】ア。　麻

ーー軺ケンアは車のきしるこゑ。(軋ケツ聲)又遠く相映ずる貌。又、廣

大にして限なき貌。揚雄、甘泉賦「忽ー軋而無垠」＝坱圠。

【軼】 ㊀イツ ㊁テツ 屋 質

㊀すぐ（過）車にて走り過ぎる、後より前にぬけて出る「超ー」「驕ー」後漢書、馮衍傳「ー塵之絶迹」○つく（突）をかす（侵）「侵ー」○ちる（散）うせる「亡ー」「遺ー」逸に通ず。○あふる。古、逸に通ず。㊁訓義㊀に同じ。○わだち、古、轍に通ず。○たがひに。史、封禪書「ー興ー廢」＝迭。

【軼材】すぐれたるはたらき。漢書、王褒傳「實有ニー材一、上遇微ノ奚」＝逸材。

【軼事】人の行の實く世に知られざる事實。史、管晏傳、贊「至ニ其書、世多有レ之、是以不レ論、論ニ其ー一」＝逸事。

【軼詩】亡失して今の詩經中に存せざる詩。史、伯夷傳「觀ニー一」可レ異焉」＝逸詩。

【軼態】すぐれたるやうす。傳毅、舞賦「ー横出、瑰姿譎起」

【軼倫】なかまのものよりすぐ。魏徵「ー超レ等」

【軺】 エウ セウ・テウ 蕭 蕭

○をぐるま、立乘の小車。○ものみぐるま、四方をながめる展望車。○馬車。

【軺車】一馬に駕する輕き車。史、季布傳「朱家乘ニー一之洛陽一」注「ー謂ニ輕車ニ一馬車也」

【軺傳】輕快なる驛つぎのくるま。漢書、平帝紀「駕ニ一封ー一、遣ニ京師一」

【軻】 カ 歌

○轗ー、は、車行の不利なる貌。轉じて志を得ずしてふしあはせの義とす。＝坷軻。○周の孟子の名「丘ー」（丘は孔子の名）○荊ーは戰國時代の刺客。

【軨】 ク 虞 尤

くびき（軛）の下に曲れるもの。

【軱】 コ 虞

おほほね（大骨・盤骨）莊、養生主「而況大ー乎」

【軹】 シ 紙

○ふたまた（岐）○車の軸の端＝轄頭。○いたちぐさ（藥草の一種）＝連翹。○字句に添へる無意味の助字。莊、大宗師「許由曰、而奚來爲ー」＝只。

【軹首蛇】頭頭ある（へび。爾雅「北方有ニー一ー」＝岐頭蛇・枳首蛇・兩頭蛇。

【軫】 シン 軫

○くるまの後の横木。○めぐる（轉）○うごく（動）○もとる（戻）＝紾。○いたむ（痛）うれへる「ー念」「ー愍」○くるま（輅）○ーーは車、又、すべて物の衆く盛んなる貌。揚雄、羽獵賦「殷殷ーー」○あぜみち。＝畛。○星の名、みつうち、二十八宿の一「ー宿」○琴の下に在りて絃を轉ずる用を爲すもの。李白詩「拂ー弄瑤琴」○紆ーシンは心の屈曲マガルせる貌、かくる（隱）楚辭、惜誦「心鬱結而紆ー」又、地形の盤曲マガルせる貌。後漢書、馮衍傳「路紆ー而多艱」

【軫憂】いたみうれふ。軫は痛。楊雄、承詔盤賦「輪蹄悔レ過、富民ーー」

【接レ軫】車をつづける。史、司馬相如傳「羣英ーレー」

【軫悼】痛みなげく。陳弘景文「每對ニ月泣歎、臨レ風ーー」

【軫懷】心を痛める。楚辭、九章「出ニ國門一而ーー」＝痛念。

【軫軫】物事の盛んなる貌。史、作書、軫者、言ニ萬物益大而ーー然一」揚雄、羽獵賦「殷殷ーー」「殷殷は多き貌」＝殷軫。

【軫恤】あはれむ。宋史、張鑑傳「願ニ此疲羸、尤堪ニーー一」＝憐憫。

【軫悼】天子の崩だしき御なげき。宋史、楊疇傳「眞宗ーー、贈ニ兵部尚書一」

【軫念】天子の御こころ。又其の御心を痛める。軫は痛。徐陵文「ニーー過ニ曹、猶感ニ軫殘之惠一」

【軫慈】かなしみしたふ。梁元帝文「人祇ーー、由海含レ悲」

【軧】 ㊀ジュウ ㊁ヲ 魔 麌

㊀かろきくるま（輕車）㊁おす（推）

【軸】 ヂク 屋

○しんぎ、しんぼう、車の輪の中心となりて轂をささへるもの「車ー」○まきもの、かけもの。巻物のしん「巻ー」「牙ー」又、巻物にする。歐陽修、集古錄目序「ー而藏之」○巻物の數をかぞへるにいふ。韓愈詩「鄴

侯家多書、插架三萬ー」○物事の中心。又は樞要の地位「地ー」「中ー」「樞ー」漢書、田千秋傳「當ー處中」（當ー＝國政を執る義）○よこざき（織具）「杼ー」○たちもとほりて行かざるにいふ。○病みて行く能はず。詩、衛風「碩人之ー」國○俳句用語。柳などの選者の句。巻の最後に載せるが故。○車の柄。草の莖など。

【軫】 シン　ヒャク　庚　車部八畫）の俗字。

【軒】 ハ。　ヒャク　庚

○雷の聲。張衡、思玄賦「豐隆ー其震怒兮」豐隆は雷神。○鐘鼓の聲。○車の行く聲。

【軷】 バツ　ハイ　泰　隊

門出に道祖神を祀る祭の名。詩、大雅「取ー既以ー」【軷祭】ハツサイ　門出せんとする時のまつり。梁簡文帝詩「ー＝遂二前脚一」

【軨】 ボン　阮

車上のおほひの篷。雨水をふせぐもの。＝車上篷。

【軨】 レイ　青

○車のはこの間の横木、車の箱に取りつけてある格子（車闌）○れんじ。櫺に通ず。○ー軒は車の窗。○和鈴ある車。○一種の獵車「ー獵車」○車の轄（くさびの頭につける革。○ーレイは獸の名、牛に似て虎文ありといふ（山海經）

【軨獵車】レイリョウシャ　かりに用ふるくるま。漢書、宣帝紀「太僕以二ー＝一車二會孫一」＝獵車。

六畫

【較】 ㊀カク　㊁カウ　覺　效

㊀車の箱の左右の板の上に曲り出たるところ、多くは銅にて造る。車中に立つ時につかまるもの。○車の箱、即ち人の乘る所。○きそふ、あらそふ、古、角に通ず。孟、萬章「魯人獵ー」㊁ほぼ、おほむね、あらまし（略）「大ー」やや。杜甫詩「春寒花ー遲」○いちじるし（著）あきらか（明）「ー炳」「ー然」○ちがひ。○くらぶ（比）「比ー」＝校。

【軫】 キク　沃

○ふご、もっこ。土を運ぶ具。漢書、五行志「陳ー畚ー」○大いなる馬車。

【載】 ㊀サイ　㊁サイ　㊂タイ　隊　隊

㊀のす、のせる（乘）物を車又舟にのせる「車ー」「船ー」又物の上にのせる。○こと（事）中庸「上天之ー」○助辭、すなはち（則）孟、梁惠王「ー戢ー干戈」○うく（承）○つぐ（載）○たふ（勝）○なす（成）○まうける（設）詩、大雅「清酒既ー」○はじむ。孟、滕文公「自ー葛ー」はじめ、はじめて（始）詩、豳風「春日ー陽」哉に通ず。○おこなふ（行）○みつ（滿）詩、大雅「厥聲ー路」○しる（知）○ふみ（文辭）「ー籍」○ちかひのかきつけ、誓約の文書。左、哀八「景伯負ー」○しるす「記ー」「登ー」○ー籍はしょもつ（典籍）○かざる（飾）淮南、兵略「ー以銀錫」㊂とし（歲）書、堯典「朕在位七十ー」（夏の世にては歲。商は祀。周は年。唐虞即ち堯舜時代はーといふ）㊃いただく。古、戴に通ず。

同訓異字 載・乃・酒・則・即・便の別は乃（ナ一九）の條を見よ。

【載記】サイキ　史臣が列國の事を敍述するをいふ。班固に始まる。後漢書、班固傳「固又撰二功臣平林新市公孫述事一作二列傳一ー二十八篇一」晉書に十六國を附敍する、亦ーといふ。

【載舟】サイシュウ　ふねにのせる。歐陽修詩「築ー室旗水岸、買ー書ー載ー歸」

【載酒】サイシュ　さけをもちゆく。漢書、揚雄傳「劉棻嘗從ー雄學作二奇字一」又「雄家貧、素嗜ー酒、人希ー至二其門一、時有二好事者一ー載ー酒從ー遊學」王維詩、揚子載ー經處、淮王ー載ー過」

【載書】サイショ　列國盟約の事を記したる

文書の左、裏九い(車に載ともいふ、字解參照)
【載積】サイ のせつむ。‖積載。
【載籍】サイ しょもつ。史、伯夷傳「夫學者ー博也、猶考ニ信於六藝一」
【載拜】サイ 再拜に同じ。載・再音通ず。晉書、寄ニ歐陽合人一書「羅頓首ー
ー」
【載筆】サイ 筆をのせ持ちて書く。曲禮「史ーレー、士載レ言」
【載縞】サイ 縞紈をうける。易林「ー綺厚」
【載物】サイ ものをのせる。中庸「博厚所ニ以ーヒー也」
【載弁】サイ かんむりをいただく。詩、周頌「ーレー俶依」‖載弁。

【輔】

輔(車部十四畫)の本字。

【軾】

シク シキ 古、式に作る

○車の前の横木、車中にて敬禮する時に撫でて之に憑る「憑ー」「伏ー」○車の横木に伏して敬禮をなす。淮南子「魏文侯過ニ其閭一而ー之」‖式。○宋の蘇東坡の名。

【軽】

セン 先

○はかる(量)古、銭に通ず「ー量」○幅のなき車、即ち圓き板を車輪とせし車。

【軽】

チ 支

ひくし(低)車の前が重くさがる。軒の對。詩、小雅「如レー如軒」

【軿】

チウ 尤

○ながえ(轅)小車即ち兵車。田車・乘車の曲れるながえ(轅は大車のながえ)「文ー」「華ー」○ー張はてづよし。
【軿張】チウ ○てづよき貌。後漢書、竇皇后傳「汝今ー、詰ニ汝兄一邪」竇后が何后に謂ふ語、兄は何進。‖張梁。○驕き慢れる貌。劉琨詩序「ー国ニ於遊亂一」

【軿】

軿(車部八畫)の俗字。

【軺】

㊀ロ ㊁ラク・カク ㊂ガ 禡 藥 馬

㊀大いなる車。論、顔淵「乘殷之ー」○王ーは天子の車。○大いなり。天子の服御の物に添へる詞「ー馬」「ー寢」路に通ず。○ながえしばり(轅縛)㊁人力を以て推挽する小車。史、婁敬傳「脫ー」㊂むかふ(迎)左、傳十五「ー秦伯」

七畫

【輓】

㊀クヮン 旱 ㊁グヮン 潸

㊀まるぎり。㊁まろめる、けづる。削りてかどを去る。

【輕】

㊀ケイ・キャウ ㊁ケイ・キャウ 敬 庚

㊀かろし、物のめかたが少し「ー車」「ー舟」重の對。○轉じてすべて事の甚だしからざるにいふ「ー罪」「ー寒」「ー暖」○うすし(薄)いやし(賤)少し「ー微」「ー少」○てがる(簡易)○かろきもの。○かろんず、かろくする「ー刑」あなどる「ー侮」㊁かろはづみ、かろがろし「ー忽」「ー佻」「ー浮」○はやし(疾)
【輕埃】ケイ かるきほこり。謝朓詩「空濛如ニ霧露一、散漫似ニー一」
【輕晴】ケイ うすぐもり。梁元帝詩「細柳浮ニー一、大樹棲ニ栖烏一」
【輕易】イ かろんじあなどる。新論「ー二其足一、難ニ表路一亦躓」‖輕侮。
【輕陰】イン うすぐもり。蘇舜欽詩「斷雲積外卷ニー一」○うすきかげ。徐陵文帝詩「夜樹有ニー一」
【輕裘】キウ ○かよわく、たをやかなる容姿。古詩十九首、注「盛衣ー謂也」○かろくして滿ち足らへる貌。陸憲詩「餞裏新粧伸ニ皎潔一、鬱前風ー手巾ニー一」
【輕銳】エイ みがるにしてするどき兵卒。戰國策「趙王出ニー一以遮ニ其後一」
【輕捷】ケフ かるくうごかす。王勃、採蓮曲「桂楫蘭橈下ニ長浦一、羅裙玉腕ニー一ノ橈」
【輕颸】シ うすけぶり。李白詩「水光浮ニ落照一、霞彩淡ニー一」
【輕舸】カ かろくはやきふね。慢舸の對。晉書、陶興傳「率ニー一出ニ其上流一」‖走舸・飛舸。
【輕霞】カ うすき夕やけ、又朝やけ。‖淡霞。
【輕侯】カウ かろがろしくずるし。後漢書、楊終傳「而要ニ結ー無行之客一」
【輕航】カウ かろきふね。曹植賦「渺ニ浮濟一兮泛ニー一」
【輕筇】キョウ かろきつなざを。柳宗元詩「攜レ漉戦ニ長楯一、乘レ深屐ニー一」
【輕汗】カン すこしのあせ。謝惠連詩「微芳起ニ兩袖一、ー染ニ雙題一」‖薄汗・微汗。
【輕悍】カン かろがろしくしてきづよし。後漢書、蘇不韋傳「遣ニ閻膺之威ニ因ニー一之勢一、討ニ超等一」
【輕悠】ユウ 少しくさむし。少しのさむさ。劉孝綽詩「季秋弦望後、ー一朝

夕殊」

【輕艦】ケイ かろくして速かなる戰艦。何承天文「給ニ一一百艘一」

【輕罷】ケイ かるはづみにしていつはる。元史、工悍傳「民情一一」‖洗流。

【輕騎】ケイ 身がるによそほひたる騎兵。史、淮陰侯傳「選ニ一一二千人一」

【輕浚】ケイ かろくしてよきかはどろも。論、雍也「願車馬衣ニ一一與ニ朋友一共敝レ之而無レ憾」

【輕裘緩帶】ケイキウクワンタイ かろき皮衣と、ゆるき帶と。手輕なるよそほひ。晉書、羊祜傳「在レ軍常ニ一一、身不レ被レ甲」

【輕氣球】ケイキキウ ふうせん（風船）

【輕金】ケイ かろきふすま。張華詩「懷擁ニ虛軟ニ一一蓋ニ空牀一」

【輕金】ケイ かろく飛ぶとり。李顒詩「一一翔ニ雲漢ニ遊鱗憩ニ中沚一」

【輕銀】ケイギン アルミニューム。‖鉛。

【輕金屬】ケイキンゾク 比重四以下の金屬の稱。

【輕裾】ケイ かろきもすそ。張翰文「一一隨レ風、飛霧流レ塵」

【輕擧】ケイ ○かろくあがる。陸機詩「一一乘ニ翠霞一」○かるはづみ「一一妄動」○高き位地にあがる。張華、上巳篇「高飛翔ニ鳳翼ニ一一擧ニ龍鱗一」

【輕軀】ケイ かろきからだ。拾遺記「陋非ニ細骨一一、那得ニ百琲眞珠一」

【輕科】ケイクワ かろきおきて。‖輕刑。

【輕快】ケイ ○かろくすみやか。王世貞文「步驟未レ熟、時見ニ一一ニ○病少しくこころよし。

【輕刑】ケイ ○つみをかろくす。魏文帝、輕刑詔「廣ニ一一レ、以惠ニ百姓一」韓詩外傳「省レ事一レ、則疾不レ作」○かろきつみ。‖輕罰。

【輕輕】ケイ かろんずる貌「一一視」

【輕矯】ケイ かろくあがる。韓愈詩「鷺旅慙ニ和鳴ニ囚拘念ニ一一」

【輕鷁】ケイ 輕き小舟。古、鷁を舟首に畫く故。張子容詩「一一大江浮」

【輕決】ケイ かろがろしくきめる。晉書、郗超傳「但恐ニ此計一一、公必務ニ其持重一耳」

【輕俠】ケイ かろがろしきをとこだて。漢書、趙廣漢傳「閭里一一」

【輕減】ケイ へらしてかろくする。漢書、刑法志「其蠲ニ肴律令可ニ蠲除一一者ニ條奏、惟在レ便ニ安萬姓一而已」‖減。

【輕忽】ケイ かろがろしくそそっかし。漢書、孔光傳「一一簡誤」

【輕財】ケイ たからをかろんず。顧歡論「重レ義而一レ」

【輕罪】ケイ ○かろきつみ。‖微罪。○薄刑法にて禁錮又は罰金を課せられしつみ。

【輕妝】ケイ うすげしやう。梁簡文帝詩「一一薄粉光ニ閨里一」左思、嬌女詩「一一喜ニ樓邊ニ臨レ鏡忘ニ紡績一」‖淡妝。

【輕裝】ケイ 身がるのよそほひ。梁書、高祖三十三王傳「一一赴ニ南豫州一」

【輕艘】ケイ かろき舟。周顒詩「初著ニ重裀一、猶レ如ニ一一」

【輕操】ケイ おもつかずしてさわがし。魏志、高貴鄕公紀、評「一一忿肆、自蹈ニ大禍一」

【輕薪】ケイ うすきしも。梁簡文帝詩「一一中夜下、黃葉遠酔レ枝」

【輕殺】ケイ かろがろしくころす。元史、藍文炳傳「一ニ一人ニ則害ニ大計ニ況屠ニ一縣一耶」

【輕死】ケイ 死をかろんずる。後漢書、黨錮傳「一レ一重氣、懇惠必讎」

【輕恣】ケイ かろがろしくほしいまま。詩經「無ニ易由レ言、無ニ曰苟ニ矣」鄭箋「無ニ曰苟且ニ如レ是、今人無レ持ニ我舌一者ニ而自一一也」

【輕視】ケイ かろんじ視る。‖蔑視。

【輕駛】ケイ かろくしてはやし。魏書、杜銓傳「方レ春南民爲ニ競渡故ニ亟欲ニ一一ニ乃梁ニ船底一」

【輕颸】ケイ かろく涼しき風。朱熹詩「疎樹含ニ一一ニ」‖細颸。

【輕舟】ケイ かろきふね。はやふね。魏志、武帝紀「作ニ一一ニ治ニ水軍一」

【輕舟已過萬重山】ケイシウイクワバンチョンサン 輕く走る舟の迅速に流を下るをいふ。李白詩「兩岸猿聲啼不レ住、——」

【輕柔】ケイ かろくやはらか。元好問詩「白雲何許來、嵐林秀ニ一一ニ」

【輕身】シン ○みをかろくす。史、留侯世家「良乃學ニ辟レ穀導引一レ一レ」○ひとり身「丹鉛錄」‖單身。

【輕迅】ジン かろくすみやか。傅休奕贈「一一者莫レ如レ鷹、猛絕者莫レ如レ虎」‖輕疾。

【輕進】シン かろがろしくすすむ。晉書、張華傳「時大臣皆以爲、未レ可ニ一一ニ難固堅執、以爲ニ必克一」

【輕車】シヤ ○かろくはやきくるま。大雅、崧高「申伯信邁、王餞于郿、申伯乘ニ一一ニ」○いくさぐるま。後漢書、輿服志「一一、古之戰車也、藏在ニ武庫一」

【輕車熟路】ケイシヤシュクロ かろき車にてなれたるみちを行く。物事に熟練せるに喩ふ。韓愈、送石處士序「若レ驅ニ駑駘一而策ニ一一ニ就ニ熟路一而王良造父爲ニ之先後一也」

【輕傷】シヤウ うすで、かろききず。‖微傷。

【輕業】ゲフ かろきわた。潘岳筠詩「兩園裁地堆ニ一一ニ」

【輕捶】スイ かろくむちうつ。後漢書、崔寔傳「乃定ニ律減ニ笞一レ一、自レ是之後、笞者得レ全」

【輕生】セイ いのちをかろんず。沈約詩「一レ一未レ悟」韓愈詩「一レ一學ニ其術一、乃在ニ金泉山一」

【輕脆】ゼイ かろがろしくして意志よわし、輕薄脆弱。脆は脆の俗字。晉書、石崇傳「與人一一、絕無ニ能篤一」

【輕少】セウ すこしばかり、いささか。

‖輕微・鮮少。
【輕石】ケイセキ 浮石(ふせき)の異名。
【輕捷】ケイショウ みがるにしてすばやし。宋史、沈作賓傳「一一善騎」‖捷疾。
【輕蹈】ケイトウ かろきうちは。抱朴子「貴ニ一於堅冰之節一」時に合はざれば佳品も無用視せらるる喩。
【輕蔑】ケイベツ かろきふね。北齊書、陸法和傳「乘ニ一一不ニ介意一、潛ニ流而下一」‖輕舟・輕帆。
【輕舸】ケイカ かろがろしくはしる。左傳、注「國君一一、羣臣不ニ知ニ其謀一」
【輕率】ケイソツ かろがろしくしてきめあらし。
【輕足】ケイソク 足をかろくす。かろき足。心貴「有ニ一善歩、走如ニ奔馬一者」と
【輕速】ケイソク かろくすみやか。晉書、劉暾傳「躯動一一、無ニ大臣之節一」諸兒漸官」渾は王渾。
【輕卒】ケイソツ ○そそっかしい。‖輕率・輕忽。○みがるなる兵。戰國策「一一銳兵、長驅至レ國」
【輕騎】ケイキ かろがろし。儀衛の對。南史、晉安王子懋傳「身是天王、豈可ニ過謝一一」‖輕忽・輕率。
【輕舸】ケイカ かろく細長き小舟、はやふね。李白詩「我來揚都市、迺レ客問ニ一一」
【輕蕩】ケイトウ かろがろしくみだら。劉勰新論「鄭衛之風好レ淫、故其俗一一而忘レ返」
【輕諾】ケイダク やすうけあひ、かろがろしくうけがふ。老子「一一必寡レ信」
【輕幔】ケイマン かろくあたたかき衣服。孟、梁惠王「一一不レ足ニ於體一與」‖輕暖。
【輕鷹】ケイヨウ かろきたち。王維詩「渭城朝雨浥ニ一一、客舍青青柳色新」‖輕埃。
【輕重】ケイチョウ ○かろきと、おもきと。輕意、甚ニ殿員外一序「豈不ニ眞知ニ一一大丈夫上哉」○おもさ、めかた。左、宣三「楚子問ニ鼎之大小一一」焉」○ぜに、物價の一一を支配する力ある故。史、貨殖傳「設ニ一一九府一」
【輕佻】ケイチョウ かるはづみ。尉繚子、治本「民有ニ一一、則欲心生、爭奪之患起矣」(欲、一に好に作る)‖輕薄・浮薄。
【輕挑】ケイチョウ かろがろしくいどむ。宋史、劉挙傳「極言ニ一一兵端一、爲ニ國深害一」
【輕蔑】ケイベツ 輕佻に同じ、蔑は侮。左、襄二六「楚師一一、易ニ霍蕩一也」一說、蔑は放肆。
【輕艘】ケイソウ かろき小舟。宋書、沈攸之傳「一一一萬、載ニ北津要一」
【輕典】ケイテン かろき法律。
【輕軟】ケイナン 次條に同じ。
【輕輭】ケイナン かろくやはらか。高駢詩「柳絲一一小桃香」‖輕軟。
【輕以約】ケイニヤク 人に望むこと甚だかろく、一善一藝に長ずればそれに十分なりとして其の人をきびしく責めず【輕愈、厲反】
【輕肥】ケイヒ かろくつめにてかく。朱熹詞「一一短劇浪未レ歇」
【輕望】ケイボウ 國身分いやしき者ども。
【輕砲】ケイホウ 口徑十二珊以下の大砲。
【輕紡】ケイボウ かろくはやきふね。南史、齊魚復侯子響傳「一一運レ劒、唯願ニ矜倚一」‖輕舟。
【輕薄】ケイハク ○かろがろしく德うすし。後漢書、馬援傳「效ニ季良一不レ得、陷爲ニ天下一一子一」○かろんじうすんずる。漢書、王莽傳「一一國家一」○かろくうすし。史、平準書「姦或盜、摩ニ鑄錢一取レ鎔、錢益一一而物資、則遠方用レ幣、煩費不レ省」
【輕薄兒】ケイハクジ かろがろしく德うすき人。沈約詩「洛陽繁華子、長安一一」‖輕薄子。
【輕帆】ケイハン かろく浮ぶ小舟。杜甫詩「一一好去便、吾道付ニ滄洲一」‖輕舟。
【輕肥】ケイヒ かろきかはごろも、こえたるうまと。論、雍也「赤之適レ齊也、乘ニ肥馬一衣ニ輕裘一」杜甫詩「五陵裘馬自一一」
【輕微】ケイビ すこしばかり。かろくかすか。漢書、食貨志「一一易レ賊」
【輕侮】ケイブ かろんじあなどる。後漢書、徐防傳「一一道術一」‖輕易・輕蔑・輕慢。
【輕浮】ケイフ かろがろしくおちつかず。宋史、虞允文傳「論ニ士風之弊一以ニ文章一邀、必抑ニ其一一、以ニ旨稽一邀、必黜ニ其巧僞一」‖輕薄・輕佻・浮薄。
【輕鳧】ケイフ かろく浮べるのがも。鳧は野鴨。吳蘂詩「浴水浴ニ一一一」
【輕風】ケイフウ そよそよとかろく吹くかぜ。杜甫詩「一一生ニ浪遲一」‖微風・輕颸。
【輕粉】ケイフン 水銀に明礬・鹽を和して製したる藥品、水銀粉。‖甘汞。
【輕便】ケイベン ○みがる。後漢書、朱暉傳「騎一一者、旨ニ飛燕一」方回詩「吟奇不レ憚ニ歷ニ添程一、足以ニ日放業一一」○てがるで便利「一一鐵道」
【輕歩】ケイホ かろくあゆむ。鮑照詩「一一逐ニ芳風一旨笑弄ニ丹脣一」
【輕毛】ケイモウ かろきけ。曹植雜詩「朔落一一散、飄距往往傷」
【輕慢】ケイマン かろんじあなどる。愧はあなどる。顏氏家訓「凌ニ忽長者一一ニ同列一」‖輕侮。
【輕霧】ケイム うすききり。江總詩「渠蓋

乘二一一、金羈照二落暉一」

【輕命】ケイメイ　いのちをかろんず。曹植文「雄俊之徒、交レ黨結レ倫、重レ氣一レ一」‖輕生。

【輕妙】ケイミョウ　あっさりとして面白し。邊韶燕禽賦「美二繁手之一一兮、喜二新聲之頻降一」

【輕揚】ケイヨウ　かろがろしくしておちつかず。留雅「江南之氣、躁動、厥性一一」

【輕浮】ケイフ　かろくただよふ。古逸詩「乘樓一一著二日傍一」

【輕約】ケイヤク　かろくつづまやか、人に望むことかろくして多きを求めず。韓愈、原毀「其待レ人也輕以約」

【輕窯】ケイヨウ　紗やの玉りて輕く薄きもの。〔齊東野語〕老學庵筆記「越州進貢二一一紗五匹一」‖涼傘紗。

【輕羅】ケイラ　かろきうすぎぬ。鮑照詩「一一含二夕煙一」

【輕雷】ケイライ　すこしく鳴るかみなり。高適詩「殘雨擁二一一一」隨游詩「一一無レ斷斷梅初」自注「鄉人謂二梅雨有一レ雷、曰二斷梅一」斷梅はつゆあけ。

【輕利】ケイリ　○利益をいやしみかろんずる。荀子「許由善卷、重レ義一レ」○兵器などの輕くするどき義。程史「奢極一一、能破二堅于三百步外一」○かろくして便利。韓愈祭詩「竹標一一鐏短斜」

【輕攏】ケイロウ　手にてかろく琵琶の絃をおさへる。白居易、琵琶行「一一慢撚復挑」

【輒】テフ　葉　俗に輒に作るは非

○わさぎ、車箱の兩傍の上端、前に向ひて反ッり出たる者（車耳）○もっぱら（專）○すなはち（卽）史、文帝紀「有二不便一一弛利民」○たちまち（忽然）○たやすく、容易に。歐陽修、春秋論「既一加之、又一殺之」○足の疾。○一然は直立して動かざる貌。莊、達生「一然忘二吾有二四肢一形體一也」

同訓異字　輒・乃・則・卽・便・遂の別は乃（六一頁一段）の條を見よ。

【輇】テン　先

一一は車の聲。左思、魏都賦「振旅一一」

【輔】フ　慶

○ほほぼね（頰骨）「一牙」うはあご（上顎）○車のそへぎ、車に重荷を載せたる時、車輪をはさみて強くする材（一說に積荷の落ちざるやうに車の輿の兩傍につける板。又一說に輔は伏兎の合音、伏兎は車の轅の下にはめこみて動かざるやうにするもの）○たすく。たすけ（助・扶・弼）力を添へて事を成さしむ「匡一」「翼一」○そへ（副）○天子を助ける大臣。師・保・疑・丞を四一といふ「台一」「卿一」「宰一」又、小役人（府吏・胥徒）○一然は親しみ附く貌。○帝京に近き地「畿一」鮑照詩「家世宅二一一」○三一は郡名、漢の京兆・左馮翊・右扶風。

同訓異字　輔・助・弼・翼・扶・佐・侑等の別は助（三四七頁三段）の條を見よ。

【輔牙】ホガ　ほほぼねと、きばと、物の相倚り相助けるに喩ふ。唐書、李正己傳「與二田承嗣・薛嵩・李寶臣・梁崇義一一相倚」‖輔車。

【輔行】ホコウ　たすけて事を行ふ、副使の義。孟、公孫丑「王使二蓋大夫王驩一爲二一一一」

【輔然】ホゼン　たすけひろめる。白居易文「一一庶續、敢怠二旁求一」

【輔護】ホゴ　たすけまもる。吳志、朱治傳「所二以供率一一、甚有二恩紀一」

【輔佐】ホサ　たすく。又、たすける人。左傳「皆有二親暱一、以相一一」

【輔贊】ホサン　たすける。唐書、房杜列傳「一一弼綴、而藏二諸用一」‖翼贊。

【輔時】ホジ　ときをたすける。管子「聖人能一レ一、不レ能レ違レ時」

【輔仁】ホジン　朋友が互にはげましたすけて德を修養する。論、顏淵「以レ文會レ友、以レ友一レ一」

【輔車相依】フシャサウイ　輔はほほぼね、車は歯牙の下骨、互に助け合ふ義。一說に、輔は車の兩旁に在りて車を夾む木。左、僖、五「諺所謂一一、脣亡齒寒者、其虞虢之謂也」

【輔相】ホショウ　○たすけ匡ける。易、泰卦「一一天地之宜」○大臣宰相。南史、王曇首傳「一一之才也」‖輔弼。

【輔助】ホジョ　たすく。たすけ。趙非文「謂爲二羽翼一、以自一一」

【輔濟】ホサイ　たすけて事を成す。晉書、王渾傳「公旦、武王之弟、左二右王事一、一一大事」

【輔台】ホタイ　三公。晉、設命「朝夕納レ誨、以一一德」

【輔導】ホドウ　たすけみちびく。漢書、敍傳「武陽殷勤、一一副君一、既忠且謀、饗二技藝一動」

【輔治】ホヂ　政をたすけ行ふ。又、たすけをさむ。論衡「禹王二天下一、伯益一レ一」

【輔弼】ホヒツ　○天子の政をたすける。‖輔翼・匡弼。○轉じて宰相をいふ。左、昭右弼なり。漢書、高惠高后文功臣表「自レ古帝王之興、曷嘗不レ藉二一一之臣一、所二與共成一天功一者乎」

【輔翊】ホヨク　たすける。崔瑗座右銘文「參謀一一、天地二大寶一」‖輔翼。

【輔翼】ホヨク　前條に同じ。禮記「愼二其身一以一一之一」‖贊翼。

【輓】 ベン　バン　國 阪　或は挽に作る

○車を引く。前より牽くをいふ。左、襄十四「或ー之、或推之」○轉じて人を引き上げ用ふるにもいふ。推薦する「推ー」

【輓歌】バン　○柩車の綿を執りてひく時のうた。薤露・蒿里の類。摯虞文「ー因二倡和一而爲二挽歌一」○轉じて人の死を悼む詩歌。略して輓ともいふ。

【輓近】バン　近世の義。史、貨殖傳「ー世室二民耳目一、則幾無レ行矣」（一説に輓は晩に通じ、季世の義とすれども非）

【輓舟】シウ　ひき舟。舟をひく。范成大詩「輓與如ニー一、絶叫斷二雙竿一」

【輓車】シヤ　くるまをひく。後漢書、江革傳「自在二輦中一ーレー」

【輓輪】リン　くるまにてはこぶ。漢書、韓安國傳「轉粟ーー、以爲二之資一」

【輓推】スイ　○前後より引きすすめる。左、襄十四「或輓レ之、或推レ之」○轉じて人を推薦する義。‖推輓。

【輓駕】ガ　ひく。李白詩「解レ冠從二放蕩一、大呼誰ーー」

【輓送】ソウ　車を引きておくる。後漢書、郭躬傳「但白盖雙騎、門生ーー」

【輓歩】ホ　てぐるまをひく。詩經、疏「徒行ーレー者與二車上御レ馬者一」

【輓聯】レン　死者を哀む詞にて聯句に作り、棺舍に懸くるもの。輓歌の變體。石林燕語、韓康公、得解過省・殿試、皆第三人、後爲レ相四遷、皆在二熙寧中一、蘇子容輓云、三登慶歴三人第、四入熙寧四輔中」此をーーの始とす。

八畫

【軻】 カ　國　總（車部十三畫）に同じ

ーー軻は車行の利あらざる貌。轉じてふしあはせ（不遇）の義。志を得ざる貌。馮衍賦「非惜身之ーー軻兮、憐衆美之憔悴」‖坎坷・軻軻。

【輝】 キ　國　煇に同じ

○かがやく（耀）光を發する。○かがやき、ひかり（光）火の光「光ー」「明ー」「素ー」

【輝映】エイ　かがやきうつる。拾遺記「ーニー一室一」‖暉映・映輝。

【輝耀】ヨウ　ひかりかがやく。晏殊、運二牡丹歌詩一啓「洪二惟聖運之會昌一、可レ謂二重華之ーーニー」‖晃耀・炳耀。

【輝煌】カウ　かがやく。李白詩「路逢二劍客一、冠蓋何ーー」

【輝光】クワウ　かがやく。又、かがやく光。易經「剛健篤實、ーー日新二其德一」

【輝煌】クワウ　かがやききらめく。曹植詩「花燭步張、ーー皎若」‖煇煌。

【輝煥】クワン　前條に同じ。陳書、蔡景歴傳「雖魔ーー」

【輝燦】シヤク　かがやく。雲笈七籤「肩體ーー目瞳映朗」

【輝煬】シヤク　かがやきてらす。淮南子「昭昭之光、ーー四海一」

【輝石】セキ　鐵石の一種。褐色又は綠色にして其の結晶は角閃石に似たり。通稱して玉といふ。

【輗】 ㊀ クヮ　㊁ クヮイ　詩　馬

㊀つつ、あぶらつぼ（筒）車軸に油をさすもの。㊁めぐらす（廻轉）車輪をまはす。禮、雜記「圍轂而ー一輪」

【輞】 クヮン　平

かりも。車の轂の端をおほふ鐵。

【輒】 ゲイ　國

○牛車即ち大車の轅の端に在りて軛をしばるもの。論、爲政「大車無ーー」○轅端の橫木、即ち衡。

【輦】 ㊀ シン　㊁ シ　支　眞

㊀衣あるくるま。○にぐるま。貨物、又、兵糧などを運ぶ車。㊁車輻の轂に入る部分。

【輦車】シヤ　○戰時又は平時に用ふるにぐるま。史、淮南王傳「載以ニーー一」‖輦重車。○ほろぐるま。後漢書、桓榮傳「榮爲二太子少傅一、詔賜二ーーー」

【輦重】ヂウ　○輦は衣車。重は重物を載する車。旅人の荷物をいふ。老子「君子終日行、不レ離二ーー一」○軍隊の荷物。史、淮陰侯傳「從二間路一絶二其ーー一」

【輦重兵】ヘイ　食料其の他の軍用品を運送することを掌る兵。

【輦舁】ヨ　四面に屏障ある婦人用の車。北史「魏聖武皇帝、昔田二山澤一、見二ーー自レ天下一、既至、見二美婦人一、自稱二天女一」

【輔】 フ　國

○車輻（前頁二段）の俗字。

【輙】 轍（前頁二段）の俗字。

【轍】 テツ　國

○やむ（已・歇）○とどむ。とど

まる(止)事を爲しはじめて又ちょつとやめる「ー耕」「作ー」論、徴子「輟而不ー」

【輟耕】テツカウ　輟・已・息・止・歇・能・弭・廢・休の別は已(五六一頁三段)の條を見よ。

【輟耕】テツカウ　田をたがやすことをやむ。史、陳涉世家「ーレー之壟上」

【輟食】テツシヨク　食物をくひさしにする。漢書、張良傳「王ーレー吐ー哺罵曰、豎云云」

【輟朝】テツテウ　主上の御慟、又は大臣の死を悼みたまふあまり、朝政を聽きたまはざる義、歴朝。唐會要「開元十八年十一月、張說薨、ーレー罷二元會一」

【輩】ハイ　隷

俗字

○おほくの車が列をなす。說文「軍發二車百兩一爲ー一」六書故「車以列分爲ー一」○ともがら、たぐひ、やから「等ー」「同ー」「我ー」「汝ー」○あひて、なかま(等類)「吳志、張溫傳「當今無ー」ー」○くらぶ(比)ならぶ(班)「ー出」○ついで(次)「一行」「先ー」「後ー」

【輩行】ハイカウ　○前輩・後輩の順序。韓愈文「當時名公、皆折二官位一ー一輩ー爲ー交」○同になかま。文天祥詩「二三ー一催須ー醉」＝同輩。

【輩出】ハイシユツ　つづきて多く出る。後漢書、蔡邕傳「名臣ー一、文武並興」

【輩流】ハイリウ　なかま、同じともがら。韓愈詩「同時ー一多士道、天路幽遠難二追尋一」＝流輩・儕輩。

【輖】ハウ　庚

やぐらぐるま(樓車)敵陣を陷るるに用ふるもの。いくさぐるま(兵車)「ー車」「衝ー」

【輇】ベウ　篠

は、くるまの輪の外周を包むたが、車牙ルヘ

【輇谷】ベウコク　次條に同じ。雍大記「商洛水流至二藍橋一伏流至二ー一、如二車轍狀一湊二落二疊嶂一入二深潭一唐有丞王維別業在焉、卽輞川也」

【輞川】ワウセン　陝西省藍田縣の地名、唐の詩人王維(摩詰)の別莊あり。唐朝名畫錄「王維畫二ー一圖、山谷疊嶂、雲水飛動、窈出二塵外一怪生二筆端一、秦太虛云、余臥ー病、高符仲携二ー一圖示レ予曰、閱レ此則可二以愈一病、予芸窗、恍然若レ與二摩詰一入二ー一上、數日而疾愈」＝輞谷。

【輣】㊀ヘイ・ヒヤウ　㊁ヘン　㊂ハウ・ヒヤウ

庚 先 青

輣は俗字

㊀婦人の乘る牛車、四方にほほのあるもの「轀ー」㊁ー輬ハウクワウは車馬の聲。＝輣句。

【輪】リン　眞

○わ、車のわ「車ー」「蒲ー」○くるま。○たて(縦)南北の長さ、廣(東西)の對。周禮、地官、大司徒「周知二九州之地域、廣ー之數」○めぐる(廻旋)「ー轉」まがる(屈曲)かはる(更迭)「ー出」「ー講」○物のめぐり、外周、外廓「ー郭」○まる(圓)圓周、すべてーの如く圓形のもの「日ー」「月ー」「氷ー」○車のわを作る工人「ー人」○車をかぞふるにいふ。○ー焉は高大なる貌。○國花の大いさ「大ー」又、花を數ふるにいふ「梅一ー」

【輪轂】リンコク　くるまと、うまと。轂は馬のむながひ。陶潛詩「野外罕二人事、窮巷寡二ー一」＝車馬。

【輪運】リンウン　わの如くにぐるぐるめぐる。柳宗元、封建論「ー而輻集」＝輪轉。

【輪廻】リンクワイ　佛因果應報のまはりあはせ、罪障ある衆生が地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道に旋轉し此處に死し彼處に生じて窮りなきこと、車輪のめぐりて盡きざるが如きをいふ「心地觀經」＝輪回。

【輪焉奐焉】リンエンクワンエン　輪奐に同じ。

【輪講】リンカウ　順番に講義する。大學衍義序「以レ次ー一」

【輪轄】リンカツ　くるまのわと、くさびと。

【輪困離奇】リンコンリキ　まがりくねり「屈曲盤戾」たる貌。木のふしこぶのある貌。漢書、鄒陽傳「蟠木根柢、ーー」

【輪郭】リンクワク　まはりのすぢ、周圍の線。書、武成、疏「謂二月之ー一無レ光之處一名レ魄」＝輪廓・邊緣。

【輪廓】リンクワク　前條に同じ。隨園詩話「五色流蘇齊レ地、三重ー一欲レ彌レ天」

【輪奐】リンクワン　屋宇の壯大美麗なるをいふ。奐はあざやかにして衆多。禮、檀弓「晉獻文子成レ室、晉大夫發焉、張老曰、美哉輪焉、美哉奐焉」

【輪轂】リンコク　くるまのわと、こしきと。晉書、輿服志「蓋輪車、駕レ牛、以二綠漆一塗二ー一、故名二漆輪一」

【輪彩】リンサイ　太陽。許渾詩「ー一漸移金殿外、鏡光猶挂玉樓前」

【輪藏】リンザウ　佛藏經の架、以て旋轉すべきが故。四湖志畧「高麗寺ー一甚偉」

【輪作】リンサク　毎年順次に土地をかへて作物を作る。連作の對。＝輪種・輪栽。

【輪次】リンじゅんまはり、順次。

【輪人】リン ○くるまの輪を作る官の周禮、考工記「一一爲ㇾ輪」○車を作る工人。淮南子「一一斲ニ輪于堂下一」＝輪匠。

【輪扁】リン 車のわの如くに造りたるうちは、室内にて涼を取る器、一人之を運すれば滿堂涼を生ずといふ。四京雜記「長安巧工丁緩、作二七一一」

【輪旋】リン ぐるぐるめぐる。柳宗元、晉問「若ニ輪之旋一」

【輪船】リン ○くるまのわの如きものをつけたるふね。元史、阿朮傳「乘ニ一一一順ㇾ流東走」○汽船、火輪船。

【輪對】タイ 百官が順番に政の得失を奏上する。諸課錄「宋太祖建隆三年、初定ニ百官一一制」＝輪班參對。

【輪臺】ダイ 西域の地名、漢の時、此地に屯田す、卽ち今の新疆一一縣。

【爲ㇾ輪爲ㇾ弾】ダンタリ 車輪ともなり、弾丸ともなる、唯天の付與する所に任ずるの意、大宗師「化予之右臂、以爲ㇾ弾、予因以求ニ時夜一、化予之尻以爲ㇾ輪、以ㇾ神爲ㇾ馬、予因而乘ㇾ之」

【輪直】チョク かはりばんに當直する。

【輪蹄】テイ 輪鉄に同じ。車輪と馬蹄と。杜牧詩「限前迎送不ニ暫休一、相續一一似ニ水流一」

【輪轉】テン めぐる。淮南子「一一而無ㇾ窮」＝廻旋・廻轉。

【輪轉機】テンキ 紙の兩面に同時に、又は二色以上の色に印刷するを得る機械。

【輪燈】トウ 佛前に供ふる燈、承盤の上より垂れて其の圓きこと輪の如きが故。陳文帝文「十方世界、若ニ一一一而明朗」

【輪讀】ドク 順番に書を讀む。

【輪伐】バツ 林木を順まはりに伐る。

【輪班】ハン まはり番を定めて事に任ずる。宋史、職官志「詔宰相與ニ參政一一任ㇾ事」

【輪番】バン ○かはるがはる番にあたる。漢史、營衞志「每日一一千人」○國本願寺の別院をとりしまる役僧。

【輪轉】リン くるまのわ。考工記「一一三十、以象ニ日月一也」

【輪文】リン くるまのわの模樣。異苑「船中有ㇾ鏡、鑄ニ一一」

【輪奥】コウ 車のわを造る人と、車の輿を造る人と。論、滕文公「子何舍ニ梓匠一一、而師ニ爲ニ仁義一者ㇾ哉」

【輪王】リンワウ 國佛をいふ。轉輪聖王の略。隋煬帝文「帝釋一一、既授ニ神劍一」

【輔】 リャウ

車の數をかぞへる數詞、車一乘を一一といふ。

【輬】 リャウ 陽

古、兩に作る。

【輭】 レン 銑

○てぐるま、人の步して輓く車「步一」○特に天子の御車「鳳一」「帝一」「駐一」轉じて京師を一下といふ。又宮中の道を一道といふ。○ひきはこぶ、ひく（輓運）左、莊十一「南宮萬以ニ乘車一一其母一」○國たごし、人の手にてかく輿。

【輦下】カ 天子の御車のもと、おひざもと。京師の稱。杜牧詩「一一唯能憶ニ弟兄一」＝輦轂下・京師。

【輦轂下】レキコクカ 天子のおますみやこ、おひざもと。司馬遷、報ニ任安一書「賴ニ先人之緒業一得ㇾ待ニ罪一一ニ十餘年矣」＝輦下。

【輦車】レンシャ てぐるま。漢書、淮南厲王傳、注「一一人輓行以載ニ兵器一也」

【輦道】レンダウ ○宮中の道。上林賦「一一經ㇾ營」○廣く天子の御車の通るみち。張衡、天象賦「一一清ㇾ塵而俟ㇾ駕」＝輦路。

【輦夫】フ 器物を車輪するくるまひき。唐書、李德裕傳「常以ニ盛夏一重、地苦ニ蒸暑一一多死」

【輦郎】ロウ 官名、御輦を引く者。漢書、劉向傳「向以ニ父德任一爲ニ一一」

【輦路】ロ 天子のみゆきのみち。魏書、音樂志「一一千門、王城九軌」＝輦道。

【輬】 イウ 尤 有

○かろし（輕）詩、大雅「德一如ㇾ毛」○かろきくるま（輕車）

【輬軒】ケン かろきくるま。天子の使臣の乘る輕き車。風俗通序「周秦常以ニ歲八月一遣ニ一一之使一、求ニ異代方言一」

【輬車】シャ かろきくるま。詩、秦風「一一鑣鐮」＝輕車。

【輞】 ㊀ カツ ㊁ アツ 易 曷 又、輻に作る

㊀轂一一は鉄輪の形。又、馳驅する貌。車馬の喧雜なる貌。㊁輻輳は輻湊（ふうそう）りうごく貌。又、

目を揺し舌を吐く貌（史、司馬相如傳）めぐりゆるぐ貌。

【輞】 クヮウ 庚

○車のとどろく聲。‖司・轟。○輞ーは大いなる聲の形容。‖輞輞。

【輞輞】 クヮウクヮウ 車のとどろく聲。史、蘇秦傳「ーー殷殷」‖轟轟・轟轟。

【輢】 輞（車部八畫）の本字。

【輗】 ジウ 有

○おほわ（車輞）車輪の外周をつつむもの。○ふむ「ー蹈」‖蹂。○ためる。揉に通ず。直き者を曲げる。易、說卦「坎爲矯ー」

【輗蹈】 ジウタウ 車にてふみにじる。晉書、孫楚傳「ーー沙漠、南向稱ン王」

【輯】 シフ 緝と通ず

○あつむ。あつまる（集）より合ふ。○書物の材料を集める「編ー」「纂ー」漢書、藝文志「門人相與ー而論纂」○やはらぐ（和）「和ー」○顏色がやはらぎてやさしい「ー柔」○むつましくする（睦）書、湯誓「ー寧爾邦家」○ことばが和ぎてむつましくする。○をさむ（斂）

同訓異字 アツム 輯・聚・集・纂・萃・蒐等は聚（一五四九頁三段）の條を見よ。

【輯柔】 シフジウ やはらげる。詩、大雅「ーー爾顏」

【輯和】 シフクヮ 風がそよそよとやはらぎ吹く聲の貌。東晳詩「ーー和風」‖習習。

【輯紋】 シフモン あつめてのべついづる。魏志、王粲傳、注「應劭撰二通風俗一、又著二中漢ーー、漢官儀及禮儀故事凡十一種、百三十六卷一」

【輯寧】 シフネイ ○やはらげやすんずる。書、湯誓「俾予一人ーー爾邦家」‖輯安・和輯・緝寧。○やはらぎてやすし。晉書、索靖傳「今四表ーー、將レ行二鄉射之禮一」

【輯睦】 シフボク やはらぎむつぶ。左、僖十五「寡臣ーー、甲兵益多」

【輯穆】 シフボク むつまじくやはらぐ。晉書、謝安傳「盧忠屈膝、終能ーー」‖輯睦。

【輯錄】 シフロク あつめしるす。收集して錄存する。宋、中庸序「凡石氏之所ーー、僅出二於其門人之所一記」

【輸】 ㊀シュ ㊁シュ 庚 通音 遇 通音

㊀おくる（送）はこぶ（轉運）「運ー」「轉ー」「委ー」○つくす（盡）○十分に心をうちあけて示す「ー誠」○いたす（致）物を送りはこぶ。左、僖二「秦於」是乎ー粟於秦」○まける（負）杜甫詩「家無二儋石一、百萬」贏の對。○やぶる（壞）破損する。㊁にもつ、送る所の貨物。○經脈の穴。

【輸贏】 シユエイ まけかちをいふ俗語。元稹詩「如三湯探二冷熱一、似三博賭二ーー一」‖勝負・勝敗・雌雄。

【輸貨】 シユクヮ たからをいたす。陳琳文「與二袁紹一書」ーー檄門」

【輸貢】 シユコウ みつぎをいたす。漢史、地理志「吳越雨唐、航レ海ーレー」‖納貢。

【輸寫】 シユシヤ 誠を盡ク。晉書、皇甫謐傳「上有二明聖之主一、下有二ーー之臣一」

【輸寫】 シユシヤ 心中を十分にうちあけて示す。詩經「既見二君子一、我心寫兮」傳「ーー其心一也」漢書、趙廣漢傳「皆ーー心腹」

【輸將】 シユシヤウ 物を運送する。漢書、地節傳「屯戍之事益省、ーー之費益寡」‖輸送。

【輸出】 シユシユツ 國內國の物產を外國に送り出す。‖移出口。

【輸出稅】 シユシユツゼイ 外國へ輸出する物品に課する稅、從價稅・從量稅等の別あり。

【輸出超過】 シユシユツチヨウクヮ ある一定の期間に於ける輸出品の總價額が輸入品の總價額より多きをいふ。

【輸誠】 シユセイ 誠の心を致す。范成大詩「香火婵ーレー」‖輸寫。

【輸稅】 シユゼイ 租稅をおさめる。經濟雜誌「願爲二南州民一ーレー事二朝廷一」

【輸送】 シユソウ はこびおくる。南史、齊武帝紀「自」是令僕以下、皆不ニーー」

【輸卒】 シユソツ 軍隊の荷物を運ぶ兵卒「輜重ーー」

【輸寫】 シユシヤ まける。勝は數とり。僧齊傳「賦局ーー御不レ問」

【輸入】 シユニフ ○はこび入る。史、李牧傳「市租皆ーニ莫府一爲二士卒一饗」○國特に外國の物產を內國に買ひ入れる。‖移進口。

【輸入超過】 シユニフチヨウクヮ ある一定の期間に於ける輸入品の總價額が輸出品の總價額より多きをいふ。

【輸尿管】 シユニヨウクヮン ゆばり（小便）をおくる管、腎臟より通じて膀胱の底に至る、左右各一あり。

【輸來】 シユライ 物をはこび來る。岡房富賦「ーニ其間一」

【輸掠】 シユリヤク 物をかすめ取りて送り來る。左傳「斬二刈民力一、ーニ其聚一」

【輪】 セン 眞

ひつぎぐるま（載柩車）禮、雜記「載以ー車」

【輇】ゼン ナン 國 軟の正字

○よわし（弱）「龍ー」「羸ー」人が柔弱にして力なし。施肩吾詩「酒入四肢紅玉ー」○やはらか（柔）「甘ー」「柔ー」「細ー」軟（車部四畫）の字參看。

【輇玉】ナンギョク 豆腐をいふ。蘇軾詩「鎗中ーー一番」＝軟玉。

【輇語】ナンゴ 柔婉なることば。維摩經＝軟語。

【輇紅】ナンコウ 嬪華にして紅塵のみなぎる都會の地を稱す。蘇軾詩「ーー猶戀風車塵」

【輇弱】ナンジャク よわし。史、貨殖傳「夫子ーー」＝軟弱。

【輇聲】ナンセイ やさしくこびる（柔婉）聲。隋煬帝詩「婚歌遞ニーーー」＝軟聲。

【輇飽】ナンパウ 飲酒するをいふ。續齊諧記「南人以ニ飲酒一爲ニーーー」＝軟飽。

【輇半】ナンパン 半分に少しく足らず、半分弱。強半の對。白居易詩「家醞唯餘ーー甌」＝小半。

【輇美】ナンビ 和柔がにして喜ぶべきをいふ。唐書、李絳傳「殿太苦勁、然顏ーー可ニ喜」嚴は嚴擬之、顏は顏誠。＝軟美。

【輇風】ナンプウ やはらかに吹くかぜ。溫庭筠詩「ーー吹ニ春星斗稀」＝微風。

【輇輪】リン 輪を滑にてつつみて乘心地よくしたる車輪。後漢書、明帝紀「安車ーー」＝蒲輪。

【輊】ソウ 有

○車の轅の轂に來る所。○轉じてあつまる（聚）物事が一所に集まる「輻ー」湊に通ず。

同訓異語 輊・聚・集・蒐・糾・萃・鍾の別は聚（二五四九頁三段）の條を見よ。

【輊輳】ソウ 車の輻が轂にあつまるを云ふ同契「如ニ輻之ーレー、水之朝レ宗」

【輊】チュン 眞

○ひつぎぐるま（載柩車）○そり（橇）泥上を行くにはく箕の形せるもの（書、益稷、注）

【輻】フク 屋

や、車のや、車の轂と輪とをささへる木。老子「三十ー共ニ一轂」

【輻射】フクシャ 熱や光が物體から四方に直射する形を車のやにたとへていふ。

【輻湊】フクソウ 次條に同じ。戰國策、諸侯四通、條達ーー」

【輻輳】フクソウ 車のやが轂に聚る。轉じて物の一所に來る義とす。綱一に湊に作る。史、張儀傳「四通ーー」漢書、叔孫通傳「四方ーー」

【輾】フク 屋

ぢくしばり、車の心棒をしばりつけるもの。＝伏兎。

十畫

【輶】エン 元

○ながえ（轅）車のかぢぼう、主として大車（牛にひかせる運搬車）にしかけたるもの、車輿の傍より出たる二本の直木。○軒ーケンは黃帝の氏。又、星の名。○行ーカウは高等官の地方に出張せし時の次舍（やどり）の稱（熟語の轅門參看）＝行館。

【駕レ輶就レ軫】エンヲガシテシンニツカス 車のながえを駕し、車のわだちに臥して進行を拒む、地方官の去るを惜みて、罷任せんことを請ふ情の切なるをいふ。漢書、侯覇傳「覇爲ニ臨淮太守一、被レ召、百姓ーー、願ニ留覇年一」

【輶下】エンカ ○くるまのながえの下。史、魏其・武安傳「今日廷論、局促效ニーー駒一」駒は二歳の馬、力微にして車を引くも動かず、ーー駒は人の束縛を受けてぐづぐづするに喩ふ。○轉じて人の部下。晉林「我輩皆出ニ其ーーー」＝門下。

【轅門】エンモン ○軍門。古者巡狩田獵、又、戰陣などには車を以て藩をつくり、其の出入の處は車を仰むけ、轅相向ひて門を表するが故。周禮、掌舍「設ニ車宮ーーー」史、項羽紀「召ニ見諸侯將一入ニーーー」○轉じて後世は衙署の外門の稱。

【北レ轅適レ楚】ホクエンニテキシテソニユク 車のながえを北に向けて、南の楚にゆく。志と行との相反するに喩ふ。白居易詩「欲レ望ニ風來百獸舞一、何異ニ北レ轅將レ適レ楚」戰國策「猶ニ至レ楚而北行一也」に本づく。

【軽】フン 元

ーー轅フンエンは臥車、ねながら乘られる車。又、喪車、車に窗ありて閉づれば溫かに、開けば涼し、故に名づく「ー涼」「ー轅車」

【軼】カツ 黠 又、棄に作る

○くさび、車軸が軸より脫せざるやうに軸の端にさしこむ鍵。○轉じて、物事のとりしまり。又、とりしまる義とす「贅ー」「統ー」「所ー」「總ー」○車の聲。

【投レ轄】トウカツヲナグ 投轄（七三一頁二段）を見よ。

【轂】コク 屋

○こしき、車輪の中心の園木、輻の湊まる所にして軸を其の中に貫けるもの。○轉じて車の義「載ー」○推ーは人をおしすすめる。史、鄭當時傳「其推ー士、常以爲賢于己」○すべる(總)あつめる(聚)○しめくくる。輻を一所に集めるに喩へていふ。史、貨殖傳「綰ー其口」

【轂下】コッカ　天子のおひざもと。史、司馬相如傳「胡越起二於ー一而莞爾接レ軫也豈不レ始二於轂下一哉」‖轂下・轂轆下・京師。

【轂擊】コッゲキ　車のこしきと、こしきとがすれあふ。繁華にして人の輻集する地の形容「肩摩ー一」史、蘇秦傳「臨淄之塗、車ー一、人肩摩」

【轂殺】コクサツ　珠玉の地に落つる聲。太平廣記「座上明珠、ー一而落」

【轂轆轤】コクロクロ　轆轤(ロクロ)の異名〔本草綱目〕‖轂轆鳥。

【輾】　㊀テン　㊁デン　㊀銑　㊁霰

㊀めぐる、まろぶ(半轉)展に通ず。㊁きしる(軋)すれあふ。㊂水ーは、みづぐるま(水車)轉輪して穀を治むるもの。

【輾轉】テンテン　ねがへりする。輾は半轉、轉は周轉。臥して席に安んぜざる意。詩、周南「悠哉悠哉、ー一反側」

【輿】　㊀ヨ　㊁ユ　㊀魚　㊁虞

㊀くるまのそこ(車底)車上人ののる所。○轉じて物を載せて行くもの、物事の基礎の義とす。左、僖十一「敬、德之ー也」○くるま(車)のりもの「乘ー」「車ー」「仙ー」「神ー」「鷺ー」「肩ー」○車を作る人「ー人」○おふ(負)○かく(舁)漢書、嚴助傳「ー轎而隃レ領」○のす(載)○おほし(衆多)「ー人」○めしつかひ、こもの。○萬物を載せる大地の稱「ー地」「坤ー」○權輿は物事の始、衡を造るは權より始め、車を造るには輿より始むる故(一說に權ーは藏瀋の假音、藏瀋は草木の萌芽)○こし、てごし。兩手にてかくこし(一說に魚韻に入る)‖轝。

【輿衞】ヨエイ　天子ののりもの。南史、儒林傳「梁武帝、親解二ー一、釋二輿于先師先聖一」

【輿議】ヨギ　おほくの人の輿論。陳琳文「咨二ー于多方一」‖輿論。

【輿皁】ヨソウ　いやしきつかへびと、賤しき臣。任昉、求レ廢二士謚「屋敷九功、物二色ー一」輿來營看。

【輿尸】ヨシ　戰敗れてしかばねをになひて還る。易、師卦「六三、師或ーレ輿レ凶」

【輿志】ヨシ　地理書、志は誌。‖輿地誌。

【輿師】ヨシ　おほくの軍隊。尚書語「敢稱二ー一」

【輿疾】ヨシツ　病を扶けて車に登る。後漢書、劉淑傳「桓帝聞二淑高名一、切二責州郡一使ーレ詣二京師一」

【輿人】ヨジン　○衆人。左、僖二八「聽二ー之謀」○車を作る人。韓非、備內「ー成レ輿、則欲二人之富貴一」○賤しき人「左、昭四」

【輿臣】ヨシン　おほくのけらい。左、昭九「虐二其ー一」‖衆臣。

【輿薪】ヨシン　くるまに載せたるたきぎ。孟、梁惠王「明足二以察一秋毫之末一、而不レ見二ー一、則王許レ之乎、曰否」

【輿櫬】ヨシン　棺をこしに載せる、自ら死罪あるを示す。櫬は棺。左、僖六「面縛銜レ璧、大夫衰絰、士ーレ櫬」‖輿棺。

【輿誦】ヨショウ　衆人の口に誦する言。左、僖二八「晉文公聽二輿人之誦一」晉書「訪二ー一於羣小一」

【輿臺】ヨダイ　身分ひくきめしつかひ。僕隷。左、昭七「王臣公、公臣大夫、大夫臣士、士臣皁、皁臣輿、輿臣隸、隸臣僚、僚臣臺、馬有レ圉、牛有レ牧、以待二百事一」杜甫詩「越羅及蜀錦、照耀二ー一軀」

【輿談】ヨダン　世の中の衆人のうはさ。郝賦「安足レ救二ー一參差一」

【輿地】ヨチ　大地、全地球。地は萬物を載す、故に喩ふ。淮南、原道「以レ天爲レ蓋、以レ地爲レ輿」‖地輿。

【輿地圖】ヨチズ　世界地圖。史、三王世家「御史奏二ー一」

【輿圖】ヨト　世界地圖〔周禮、職方氏、注〕‖輿地圖。

【輿丁】ヨテイ　かごかき。范成大詩「ー一挾レ我如二騰狙一」

【輿徒】ヨト　おほくのともがら。孟、盡心「耀レ武六旬、ー一不レ疲」

【輿馬】ヨバ　○かごと馬と。旬、勸學「假二ー一者、非レ利二足也、而致二千里一」‖車馬。○九錫の一〔晉梁傳、注〕

【輿望】ヨボウ　多くの人望。‖衆望。

【輿服】ヨフク　車輿と冠服と。史、平準書「室屋ー一、僭二于上一」

【輿梁】ヨリョウ　車輿の通行するを得る橋。孟、離婁「十二月ー一成」

【輿隸】ヨレイ　賤しきめしつかひ。輿臺參看。

【輿輦】ヨレン　天子の御くるま。後漢書、趙憙傳「同ー一、至二長安一」

【輿論】ヨロン　天下の公衆の論。類書纂要「ー一、輿衆也、謂二衆人之議論一也」

十一畫

【轄】　エイ　㊥

又車に作る

車のしんぼうのさき。‖軸端・

軓。

【轇】カ。 清

ー轕は、蚊の形。又長遠の貌。又雜亂の貌。‖膠葛。

【轆】サ。 唐

やぐらぐるま。兵車の高くして巢を加へ敵を望むべき者。‖巢車（左、成十六）

【轉】㊀テン 銑 ㊁タン 銑

㊀ころがる、ころぶ（轢）まろぶ。詩、周南「輾ー反側」たふれる（仆）○まはる、めぐる（旋）○うごく（動）○うつる（遷徙）○うつす、かへる（變）史、秦本紀「ー禍爲福」○ころばす、力を以て物を運轉するの○めぐらす、まはす（以上に他動、銑韻は自動、今は通用す）○運家にて最重要死の用棄を練るにいふ。變化の義。白居易詩、河車九ー宜精鍊○車上の衣裝。衣類を入れたる嚢。左、襄二四「載ー而鼓琴」

【轉移】イ 場所をうつす。又うつる。‖轉徙。

【轉運】ウン ○運行して已まざる義。温子昇文「天地開闢、陰陽ー一」○貨物をはこぶ。後漢書、百官志「尚書主二ー徙一事」○ー使は唐宋の代、水陸運路に於ける官物の轉運を掌る官名。

【轉廻】エン 輪廻に同じ、すでに死してまた生じ、生じてまた死す、車輪の廻轉の如き義。心地觀經「有情ー生二六道一、猶如二車輪无一始終一」

【轉下】カ ころげおちる。‖轉墜。

【轉嫁】コウ ○二度のよめ入り。再嫁。改嫁。○己の過失を人にぬりつける。

【轉挙】ガク 學生が中途にして此校より彼校に轉ずる。

【轉眄】ベン 目をころばす、速かにして限なき形容。後漢書、馬援傳「譬如二汎泉一轉如ニー一」

【轉變】ヘン 文字の本來の意義より轉じて更に生ぜし意義。上下の上を主上の上とする類。

【轉筋】キン こむらがへり（脚氣論）

【轉居】キョ やうつり、やどがへ。‖轉宅。

【轉句】ク 一ー の絕句の第三句。起承轉結（一八七頁三段）を見よ。

【轉化】カ うつりかはる。淮南子「ー一推移」

【轉訛】カ ことばがうつりなまる。又、其の語。

【轉丸】ガン ○たまをころばす。極めて容易なるに喩ふ。文心雕龍「ー一騎二其功一」○蜣螂（フンコロガシ）の異名。

【轉換】カン 入れかへる、おきかへる。

【轉結】ケツ 絕句の轉句と結句と。起承轉結（一八七頁三段）を見よ。

【轉乾旋坤】カンセン 天を轉じ地をうごかす、天下の大變動をいふ。‖驚天動地、旋乾轉坤。

【轉歌】カ くるまを轉ずる。漢、匡衡傳「ー一百數」注「ー一謂二以ノ車載一物而遂ノ利者一」

【轉載】サイ 他の新聞雜誌よりうつし取りて載せる。

【轉漕】ソウ 兵糧をはこぶ。俗は車にて、清は船にて。史、蕭相國世家「ー一關中一」

【轉宇】ウ 接續詞。

【轉徙】シ あちこちとうつる。‖轉移。

【轉寫】シャ またうつしとる。またうつし。

【轉輸】ユ 兵糧をはこぶ。漢書、高帝紀「丁壯當二軍旅一、老弱罷二ー一」

【轉借】シャク またがり、他人のかりたる物をまたがりする。

【轉手】シュ ○てをめぐらす。蘇軾詩「過ノ眼青錢ノー一空」○琵琶などの頭（海老尾）に貫きて絃をまきつける棒。

【轉宿】シュク ○やどをかへる。○やうつり。‖轉宅。

【轉瞬】シュン またたきする、極めて短き間に喩ふ。樂遊詩「擾ノ擾回停昇、解ノ甲仍ー一」‖轉眄。

【轉石】セキ いしをころばす。漢書、訓向傳「用ノ賢則如ノー一、去ノ佞則如ノ拔ノ山」

【轉摺】セツ まろばしたたむ。晉書、謝鯤傳「部無二回互一之勢一」

【轉旋】セン めぐる。又一度めぐる程の間。漢書、許后傳、注「ー一言二須臾之間一」

【轉戰】セン あちこちとうつりたたかふ。‖轉鬪。

【轉遷】セン うつりかはる。王粲文「猶ノ秩自二百石一、ー一而至於公也」

【轉送】ソウ 直途にあらずしてあちこちとはこびおくる。漢書、高帝紀「東送二衣冠一、給敛、ー一其家一」

【轉舵】ダ かぢをめぐらす、舟の方向をかへる。王粲詩「ー一涉二春滿一、支ノ節入二幽蹟一」

【轉舵】ダ 前條に同じ。

【轉貸】タイ またがし、人より借りたる物を他へ貸す。

【轉對】タイ 百官が順番に天子の政治上の問にこたへる。詰課錄「五日一次、內殿百官ー一」‖輪對。

【轉宅】タク やどかへ。‖轉居。

【轉注】チュウ ○漢字の構造の名、六書の一、或る文字の義を轉化して他の義に注ぐ、例へば尺度の度ノを忖

度の度クとする如し。○めぐりそそぐ。夏竦、蓮花漏銘「金龍一一、下激二衝製一」

【轉地療養】テンチリョウヤウ　其の病に適する地に轉居して治療する。

【轉墜】テンツイ　ころげおちる。‖顛墜。

【轉跌】テンテツ　ころびつまづく。‖顛跌。

【轉候】テンコウ　ねがへりする。‖寢轉。

【轉轉】テンテン　○だんだん、いよいよ。うたた。漢書、賈禹傳「後世爭爲二奢侈一一一益甚」○それからそれへとうつりかはる。

【轉運】テンウン　あちこちにうつりたたかふ。史、淮陰侯傳「一一逐レ北、至二於滎陽一」‖轉戰。

【轉讀】テンドク　大般若經などの大部の經文の要所のみをぬきよみにする。

【轉任】テンニン　○他の官に遷る。○任地がかはる。晉書、劉頌傳「一二一河內一」

【轉賣】テンバイ　買ひし物を更に他に賣る。

【轉變】テンペン　うつりかはる「有爲一一」‖變轉。

【轉補】テンポ　補欠として他の官に轉ずる「元史」

【轉蓬】テンポウ　風に吹かれてとぶよもぎ。流浪して居處の定まりなきに喩ふ。曹植詩「一一離二本根一飄颻隨二長風一」

【轉法輪】テンポフリン　佛法輪を轉ずる、即ち教法を說きて衆生の迷を破るをいふ。大盛法數「佛之說法、則能摧二魔衆生一切惑業一、故名二一一一」

【轉迷開悟】テンメイカイゴ　迷を轉じ悟を開く。

【轉任】テンニン　轉任と免職と。

【轉門】テンモン　ふりかへり見る間。わづかの間。異聞錄「蛛之結レ網也（中略）始舍二旦暮一、至二於綴而織一之一一一可レ畢」‖轉瞬。

【轉羅】テンラ　ころがりおどる。柳宗元文「崩石之所二一一、大木之所二擢拔一」

【轉用】テンヨウ　くりかへしてもちふる。‖流用。

【轉落】テンラク　轉下に同じ。

【轉輪經藏】テンリンキヤウザウ　一切經藏の中に軸にて廻轉するやうに造りたる書棚。白氏文集に「蘇州南禪院一一」右記」あり。

【轉輪藏】テンリンザウ　南條に同じ。‖輪藏。

【轉輪王】テンリンワウ　印度の神、其の所有する輪寶の旋轉によりて一切を威伏する、輪に金・銀・銅・鐵の四種あり、威力各殊り「俱舍論十二」

【轉漏】テンロウ　水時計の時刻のうつる至りて微かの聞。漢書、王莽傳「一一之間、忠良輯建、綱紀咸張」

【轆】ロク　屋

○ながえしばり。○轤一一一は車の走る聲の形容。○轤ロウは井戸の上にありて、釣瓶縄をかける滑車。又、圓木を廻轉して重き物を輕く動かす機器。くるまき。張籍詩「橫架下轤二畫素縄一」‖鹿盧。

【轆轤】ロロ　○滑車・旋盤などの稱。宇宙參考。圖○回轉して圓形の器物を造る機械、ひきもの細工の機械。‖旋盤。○傘の骨を集め統べる白形のもの。

【轆轤】ロロ　車の行くこと。元好問詩「白沙渡沒車一一」

十二畫

【轎】キヤウ　嘯

○こぐるま（小車）○たけごし（竹輿）「一與」漢書、嚴助傳「與下面險一巖」○あけごし。○やまかご。山一「兜一」通じて橋に作る。

【轎子】キヤウシ　かご。同輿に同じ。子は助字。默記「周秦帝卽衣二白褐一乘二一一、出二居一天清寺一」

【轎車】キヤウシヤ　支那の北方にて旅行用の馬車、一騾又は二騾を以て挽かしむ。車の形、轎に似たるが故。‖騾車。

【轎夫】キヤウフ　かごかき。龍圖公案「假二扮一一一」‖輿丁。

【轏】セン　潸　又、轞に作る

○いくさぐるま（兵車）○臥車。左、成二「逢丑父寢于一車一」

【轍】テツ　屑

○わだち、車の輪の礫ひり過ぎしあと「車一」「覆一」○轍じて已に過ぎ去りし事がらの跡「不レ結レ轍」車の返らざる處、車を返す時はわだちの迹が錯を結ぶが如き故。管子「車一一、士不レ旋レ踵」

【轍迹】テツセキ　○車のわだちのあと。曹閻、六代論「親二前車之傾覆一而不レ改二其一一一」○車のわだちと、馬の足あと。左、昭十二「昔穆王欲レ肆二其志一、周二行天下一、將レ皆必有二車轍馬跡一焉」○事のあとかた。老子「善行無二一一、善言無二瑕讁一」

【轍環二天下一】テツクワンテンカ　車にて天下をあまねくめぐる。韓愈、進學解「一一、三レ黜二于朝一」

【轍鮒之急】テツフノキフ　人の困窮にせまるに喩ふる莊、外物「莊周家貧、故往貸二粟於監河侯一、監河侯曰、諾我將レ得二邑金一、將レ貸二子三百金一可乎、莊周忿然作レ色曰、周昨來、有二中道而呼者一、周顧視、車轍中有二鮒魚一焉、周問レ之曰、鮒魚來、子何爲者邪、對曰、我東海之波臣也、君豈有二斗升之水一而活レ我哉、周曰、諾我且レ南

逆二吳越之王一、激二西江之水一而迎レ之、可乎、鮒魚忿然作レ色曰、吾失二我常與一、我無二所レ處、吾得二斗升之水一、然活耳、君乃言レ此、曾不レ如二早索一我於枯魚之肆一」常與は水。

【轅亂旗靡】ケンランキビ　軍の敗れ潰ゆる狀。左、莊十「晉親二其轅一亂、望二其旗一靡、故遂レ之」

【轔】 ハン　ホン　元

車のおほひ、蔽屏となりて塵泥をふせぐもの、簾シ又は革にて作る。漢書、景帝紀「二千石車朱兩ー」

【轒】 フン　文

○ー轀はいくさぐるま(兵車)　○ー轀は匈奴の車の名。

【轔】 リン　リン　眞　國

○車のきしりとどろく聲。通じて鄰に作る。○きしる(軋)　○かどぐち(戸限)「戸ー」○殷盛なる貌「殷ー」○ー囷は象鼻の下垂する貌。張衡賦「垂鼻ー囷」

【轔轔】リンリン　車のきしる聲。楚辭、九歌「乘レ龍兮ーー」＝鄰鄰・轔轔。

【轔轢】リンレキ　車にてひきにじる。轢じて他のものををかしおさへつける。隋書、何妥傳「太常曹魏祖不レ識二北辰一、今復ニ一ー太史一」

十三畫

【轕】 カツ　曷　又、葛に作る

ー轕は馳驅する貌。羽獵賦「縱橫ー轕」又、戰ふの形。又、交り加はる貌。

【轗】 カン　國　翰　又、軻に作る

ー軻は車行の利ならざる貌。轉じて、人のふしあはせにいふ。韓愈詩「誠ー軻面艱難」＝坎坷・軻軻。

【轗軻】カンカ　車の進まざる貌。轉じて不遇アハセの義とす。廣韻「轗軻、ーー也」＝齟齬。

【轙】 ギ　寘

僕人が駕を整へて發するを待つ。

【轘】 クヮン　諫　刪

くるまざき。說文「車裂人也」古の酷刑、二車にて人體を兩方にひきさきて殺す。又、其の刑に處する。左、桓十八「齊人ノ高渠彌」＝車裂。

【轘轅】クヮンエン　まがりくねりたる險隘の地。管子「凡兵主者、必先審知二地圖一ーー之險」

【轘磔】クヮンタク　くるまざき。陳書、始興王叔陵傳「陰懷奔竄、遂行悖逆、ーニー形儀」＝車裂・轘裂。

【轘裂】クヮンレツ　くるまざきの刑。後漢書、宦者呂強傳「疾二姦忠良一、有二趙高之禍一、未レ被ニ一ー之誅一」＝車裂。

【轂】 ゲキ　陌

○車の轄ツが相擊つ。○ー互ゴは車などのすれあふ迫隘セマの處。周禮、秋官「凡道路舟車ー互者、序而行之」

【轉】 シュ　虞

○まじろ(交錯)車の箱の木が縱橫に交りて方格を成す。○氣がむすぼる、氣が堅く塞がる。枚乘、七發「邪氣襲逆、中若結ー」

【轃】 ロン　感

○轞ーカンは車行利ならず。○轉じてふしあはせの義。＝轗軻。

十四畫

【轞】 カン　豏

○めしうどぐるま(囚車)罪人をのせる車。上に板を著けて四周すること檻の形の如し。をりぐるま。○ーーは車のとどろく聲。＝檻檻。

【轞車】カンシャ　○囚人をのせるくるま。漢書、張耳傳「ーー詣二長安一」＝檻車。○上に檻欄を施して、猛獸を格する車「釋名」

【轟】 クヮウ　クヮウ　敬　庚　又、轰に作る

○とどろく、衆車のきしり行く聲「ーー」「喧ー」又、雷鳴・大砲などの聲の形容「雷ー」○圖火藥を爆發せしむる發「ー沈」○圖驚きて胸がどきどきする。

【轟飲】クヮウイン　むやみに酒を飲む。劉因詩「ーー高歌救勃川」＝狂飲。

【轟庭】クヮウテイ　かまびすしくうちあふ。韓愈詩「衆樂驚作、ーー雜沓」

【轟轟】クヮウクヮウ　○かまびすしき聲。韓愈詩「蘇竹徒ーー」○盛大なる貌。文天祥詞「要二烈烈ーー做一場一」

【轟酔】クヮウスイ　甚だしく酔ふ。元好問詩「ーー春風一千日、悲城從レ是不レ能レ兵」＝狂酔・潮酔。

【轟笑】クヮウセウ　大いにわらふ。圖樓志「宋景濂編二伴梅花閒一、ーー驚レ日」

【轟沈】クヮウチン　圖艦船を砲撃してしづめ

る。＝爆沈。

【轜】ジ　支　もと輈に作る　ひつぎぐるま（喪車）「一車」

【轝】與に同じ。

【轝絲】ライ　のりもののかき。しもべ。徐禎卿異林「亟呼二家人一設レ酒勞二一一」＝輿舁。

十五畫

【轡】ヒ　寘　通音ビ

○たづな。馬の銜クツにむすびつけて馬を御する索ナハ（馬韁）「按ー」「連ー」「停ー」「操ー」詩、鄭風「執ー在レ手」○國クツわ。くつわ、くつばみ（銜）

【轡銜】カン　たづなと、くつわと。淮南子「轡銜者、人臣之ー一也」

【轡勒】ビク　馬銜クツと衝勒クツと。大戴禮「御レ民者案二其德法一、譬猶レ御レ馬、案ニー一而車以レ策御レ馬、馬必傷、車必敗」

【轣轆】ラク　ライ　灰　ー轆ロクは連屬して絕えざる貌。揚雄、羽獵賦「繽紛往來、ー轆不レ絕」一說に瑕轉ルクの貌。

【轢】レキ　錫　ー轢レキは車の軌道ナハ又、車のすれあひてきしる聲。

十六畫

【轤】ロ　虞　○つづきて絕えざる貌。○轤ロは井の上の車、水を汲むに用ふ。轆（車部十一畫）を見よ。

【轔】リン　眞　きしる（軋）「一轢」＝轔。

【轔轔】リン　車か踐みにじる。司馬相如賦「從車之所ニー一」＝轔轔。

二十畫

【轡】ケン　先

辛部

【辛】シン　眞　○からし、五味の一、古、葵菜・薤薤・韭を五ー一といふ。○あたらし（新）○かのと、十干の第八位。爾雅「太歲在ー一、曰ー重光」○からみ、からき味。○かなしみいたむ（悲傷）「悲ー」「酸ー」○むごし、くるし（苦）「艱ー」○細ーシイは藥草の名、癌を癒やす、其の根細くして味辛し、故に名つく。＝少辛。國○シンからみのある一種の野菜、芥子。○カラからうじて、やつと。

【辛夷】シン　こぶし、落葉する喬木、其の花の初めて出づる時、尖りて筆の如し、故に木筆ともいふ、春初、花開く。白居易詩「北村尋二古柏一、南宅訪ニー一」

【辛夷塢】シンヰ　こぶしを植ゑたるつつみ、唐の王維の輞川の別墅に在り。

【辛芥】シンカイ　からしな。方言「燕齊小者謂二之ー一」

【辛螺】シンカン　くるしみなやむ。高啓詩「登高不レ知日幾里、但怪力盡愁ニー一」＝艱辛。

【辛勤】シンキン　からきつとめ。韓愈詩「ー一三十年」

【辛苦】シンク　○くるしみ。くるしむ。史、吳太伯世家「句踐爲レ人能ー一」○からみと、にがみと。賈、洪範、正義「ー一之味入レ口、猶二困阨之事在一レ身」

【辛酸】シンサン　くるしみ。阮籍詩「感慨懷二ー一」＝辛楚・酸辛。

【辛螫】シンセキ　蜂などにさされる。轉じて共だしき苦の義。詩經「自求ニー一」

【辛楚】シンソ　いたみくるしむ。楚は人を笞ウつしもと。陸機詩「俯仰悲二林薄一、慷慨含ニー一」＝辛酸。

【辛癘】シンレイ　くるしみ。詩經、疏「言ア才薄莫二之藩援一、則自得中ーー一」＝辛苦。

【辛抱】シンバウ　國こらへしのぶ。＝忍耐。

【辛螯】シンバン　五ー一の略、元旦に蔥・蓼・韭・薤・蓾芥を雜和アヘして之を食ふ、名つけて五ー一といふ、迎新の意に取る（風土記）五臟の氣を進じ健康を保つといふ。

【辛椹】シンナン　またたび、漆木の一。＝木天蓼。

【辛味】シンミ　からきあぢはひ、からみ。

【辛辣】シンラツ　○ひりりとからし。酉陽雜俎「形似二蕷椒一、至ー一」○甚だきびし。＝辛烈。

【辛烈】シンレツ　甚だきびし。＝辛辣。

【辛勞】シンロウ　なんぎ、くるしみ。＝辛苦。

【辛】ケン　先

つみ(辠)

五畫

【辜】

○つみ(罪)とが(「無ー」「罪ー」害、大禹謨「其殺不ー」遺失。不經」○はりつけ(磔)神を祭るに牲をはりつけにする。○さまたげ(障)○かならず(必)漢書、律歷志「陽氣洗物、ー潔之」○そむく、俗に、孤と音通。○一月は陰暦十一月の別名(爾雅)

【辜較】あらまし、大略。概括の精神。幸紹「蓋天子之事也」注「蓋者ー之辭也」

【辜榷】辜は障、他人の商賈をさまたげて利益を獨占する、榷は獨占(一說に辜榷の轉音、大略・大概の義。物事を總括する意によりて、財利を獨占する義とす)

【辜負】俗に孤負クと同じく用ふ。白居易詩「猶有二般ーー非一不ー特歌錄皆驚ー來七

六畫

【辠】

罪(一五二三頁四段)の古字。

辛部 刑にふれて自ら辛苦する意、秦の始皇、皇字に似たるを以て改めて罪に作る。

【辞】

辭(辛部十二畫)の俗字。

【辟】

㊀ヘキ ㊁ヒ ㊂ハク 㐌 ㊀ヘキ 㐌 ㊁ヒ 㐌 ㊂ヘイ 㐌

㊀きみ(君)天子 諸侯の通稱。○のり(法律)○あきらか(明)明かにする。禮、祭統「對揚以ー之」○めす(徵)在野の賢才を召し出す「徵ー」晉書、王褒傳「三徵七ー」○あめ、天の敬稱。詩、大雅「蕩蕩上帝、下民之ー」㊁よこしま(邪)「非ー」○つみ、つみする(刑)「八ー」○かたむく(傾)○かたよる(偏)僻に通ず。○むねうつ。古、擗に通ず、悲のあまり胸をたたく。詩、邶風「寤ー有摽」○そばだつ(側)○のぞく(除)○うすし、かろし。○はばかる(忌)○地をひらく。開墾する。孟、告子「ー土地」闢に通ず。○しりぞける(退)○びっこ、古、躄に通ず。○古、霹に通ず、ー歷は雷の聲。㊂さく、よける。禮、儒行「內稱不ー親、外舉不ー怨」‖避。○たとへば。中庸「ー如ー行遠」‖譬。㊃にらむ、疾視する。‖睥。㊄さく(裂)‖擘。○うすくきる(疏切)

開闢 辟・開・闢・啓・發・披等の別は開(門部四畫)の條を見よ。

【辟引】召し出して引き連める。梁書、楊公則傳「所ニー一皆州郡著姓」

【辟易】開き退きて處を易へる。退避する。史、項羽紀「人馬俱驚、ー數里」

【辟舉】召し出して採用する。宋史「紹興五年詔ニー一復元豐選法」

【辟公】諸侯。詩、周頌「相維ー一、天子萬邦」

【辟穀】穀物を食ふことをさけ腹する。史、留侯世家「乃學ニー一、導引輕ニ身」

【辟邪】○邪穢(アシキ)を除き去る。博物志「白犬白雞、可ニ以ー一」○獸の名、漢人其の形を刻みて印鈕・帶鉤などの飾と爲す、之を佩ぶれば邪惡を避く。

【辟瘴】瘴癘の氣をはらふくすり。宋史、眞宗紀「大中祥符二年九月、遣ニ使賜ニ沈瀘軍民ーー一」

【辟書】めしぶみ、官よりの召出し狀。裴子野碑「玉帛贲ニ于丘園一、ー一交ニ乎盤路一」

【辟召】官よりの召し出し。後漢書、郎顗傳「當稱ニ病、不ニ應ニ州郡ー一」‖徵辟。

【辟除】○召し出して官に任ずる。○はらひきよめる。管子、心術「館不ニー一、賢人不ニ舍一」

【辟雍】在野の賢人をめし出す。陸龜蒙詩「麗公業ニ幽隱一、ー一無ニ所ニ就一」

【辟命】君主よりのお召し。後漢書、賈逵傳「隱居教授、不ニ應ニー一」

【辟踊】悲むこと甚だしく、おどりうちて跳ること。禮記「ー一哀戚」‖踊躃。

【辟雍】天子の學宮、四面水を湛へ、ふち、形圓くして門無く水を環らす。雍は和、雍和にして明達諸和ならしむる意。一說に雍は澤、辟は壁、水を環らすこと壁の如く、以て親る者を飾すと。禮、王制「大學在ニ郊、天子曰ニー一、諸侯曰ニ頖宮一」‖辟廱。

【辟歷】はげしくかみなり。史、天官書「ー一夜明」‖霹靂。

【辟纊】練りたる綿を詰む。孟、滕文公「彼身織ニ屨、妻ー一以易ニ之也」

【辟陋】かたいなかの地にて風俗いやしい。荀子「ー一之國」‖僻陋。

【辟王】きみ、君王。詩、大雅「濟濟ー一、左右趨ニ之」

【辟睨】にらむ。史、滑稽傳「ニー一兩宮間」‖睥睨。俾倪。

【辟寒香】寒き氣をさけ除くといふ香の名。述異記「唐開昌公主、有ニ一一ー外國所ニ貢、大寒焚ニ之、滿

氣燒然、人皆識レ衣」

【辟寒丸】ヘキカン　寒き氣を避けるといふ丸藥の名。唐、馮宗紀「賜二從官一——」

【辟寒屋】ヘキカン　寒き氣を避けるといふ家の名。開元遺事「開元二年冬、交阯國進二一株一、色黃如レ金、使者請以二金錢一贖二殿中一、溫然有二暖氣一、殿中人、上問二其故一、使者對曰、此——也、文帝時、木國皆進二一株一、直二百金一、今日「上甚悅、厚賜之」

【辟易】ヘキエキ　わざはひをよける。避記「君子當以レ——」

【辟人】ヒトヲサク　此君を避けて彼君に就く義、人を擇びて事ふるにいふ。論、微子「而與二其從一レ——之士一也、蔓者レ從二辟世之士一哉」

【辟世】セイヲサク　世をさけ隱れる、辟は避。論、憲問「賢者——」↓次辟レ地、次辟レ色、最次辟レ言」

十一畫

【辣】ラツ　㊀

又、辢に作る

○からし、甚だ辛し。○きびし、むごし「辛——」「酷——」

【辣韭】ラツキウ　葉は葱に似て細く、其の球根は鹽漬として食すべし。和漢。

【辣手】ラシュ　惡事を辭ずるに猛烈なる者の稱。

【辣腕】ラワン　すごうでまへ。↓辣手。

【辢】

辣(前條)に同じ。一說に辣の正字。

八畫

【辟】

辭(辛部十二畫)に同じ。

九畫

【辟】セツ　㊀　㊁

つみ(罪)通じて辟に作る。

【辨】ベン　㊀　㊁

○わかつ(判別)區別する「分——」「——別」「論——」易、乾卦「問以——之」○わかち、わきまへ。○わきまふ(識別)考へわきまへる「明——」「精——」「審——」中庸「有弗學、學之弗明弗措也」○かはる。かふ(變)○ただす(正)○わかち(區別)○そなふ、辦に通ず。○分明にしてうたがひなし。○明かに察する。○非地の數。圖○古の辨官の略「——內侍」○かへす(還)「——償」「——濟」

【辨校】ベンカウ　わきまへかんがへる。集異記「燕昭王墓前碑銘、變作二書生一、能二張演一、論二及文義一、一一——厚賞一」

【辨駁】ベンバク　是非をわかち明かにする。何承天文「一一同異一」

【辨姦論】ベンカンロン　宋の蘇洵の作、唐宋八家文讀本に載す。張文定、老蘇墓表「安石亦願レ交二於先生一、先生曰、吾知二其人一矣、是不レ近二人情一者、辭レ不レ爲二天下患一、安石性死、士大夫皆往弔、先生獨不レ往、作二——一」安石は王安石。

【辨詰】ベンキツ　正がしなじる。北史、柳虬傳「一一事狀」

【辨訛】ベンクワ　あやまりを明かにす。曾鞏文「正レ謬一レ、公爲二耳目一」

【辨括】ベンクワツ　善惡をわきまへてすべくくる。齊書、東昏侯紀「一一選序、訪二搜貧屈一」

【辨官】ベンクワン　圖王朝時代、太政官に屬する判官。左大辨・左中辨・左少辨・右大辨・右中辨・右少辨に分ち、八省の事務を分管す。

【辨告】ベンコク　事理をわけてさとし告げる。晉書、高帝紀「東以二文法一敎訓一一、勿二習呼一」注「一一者、分二別義理一以曉二喩之一」

【辨濟】ベンサイ　圖借金をかへす。↓返濟・還濟。

【辨財天】ベンザイテン　圖辯才天(一九三五頁三段)の略。

【辨士】ベンシ　辯說に巧みなる人。史、范雎・蔡澤傳「范雎・蔡澤、世所謂一切——」↓辯士。

【辨ㇾ惑】ベンワク　其の惑の向ふ所を辨別する。禮、學記「一年視二離經一辨レ志」

【辨章】ベンシャウ　平章に同じ、平和章明の義。班固文「修二——之化一」

【辨別】ベンベツ　圖つぐのひかへす。

【辨認】ベンニン　うつたへをきわける。曉記「分レ爭一レ、非レ——不レ決」

【辨覈】ベンカク　直覺又は經驗によらずして、概念を分析して事理を研き究める。

【辨色】ベンショク　物の黑白を見わける。劉禹錫詩「庭曉初一レ、林秋微有レ聲」

【辨析】ベンセキ　理否を分ちきめる。南史、王倫傳「一一未二曾煩一」

【辨說】ベンセツ　是非をわかちとく。

【辨當】ベンタウ　圖外出の先にて食ふため器に入れて攜ふる食物、弁當とも書く。↓行厨。

【辨天】ベンテン　辨才天(一九三五頁三段)の略。

【辨白】ベンパク　わかちて明かにする、判別明瞭なり。文心雕龍「世之作者、或好二煩文博採一、深二沈其旨一者、或隘二——一、分レ析二叢雜一者」

【辨駁】ベンバク　他の說の理非を分ちてあらそひうつ。辨難駁撃。唐書、王世充傳「人或一一、世充以二口舌一緣飾」

【辨法】ベンポフ　法をわきまふ。周禮「凡一一者攷其、不レ信者刑之」

【辨別】ベンベツ　わきまへわかつ、見わける。易經、疏「用レ愼レ德、一一衆物」

【辨明】ベンメイ　是非をわかち明かにする。

【辨理】ベンリ　事務をとりはからひ、をき

める。柳宗元文「逮祖匿役、期月一一」‖辨理。

【辨理公使】ベンリコウシ　或特別の事項につき全權を有する公使。特命全權公使の次に位す。

【辨惑】ベンワク　人のまどひをわきまへさとす。元の謝應芳一一續四卷を著し災の俗の鬼神を信ずる惑を辨正す。

【辨】

辨（前條）に同じ。

【辦】ベン　圖

○そなふ（具）とりはからふ、處理する。漢書、韓信傳「臣多多益一一」○罔科罪ヲオホイフ「重一」「剛一」○つとむ（力）物事に力を盡して周旋する。又其の人「總一」「會一」史、項羽紀「項梁常爲主一」

【辦嚴】ベンゲン　旅支度ヲヂタクをする。漢の明帝の諭を避け裝を改めて嚴と爲す。後漢書、陳紀傳「紀見二禍亂一、不二復一一、卽時之官」‖治裝。

十二畫

【辭】シ　支

又、辝に作る。辭は俗字

○ことば（言語）「片一」「卑一」「異一」「訣一」「一言半一」言の文を成すもの「言一」○ふみ（文章）「文一」易、乾卦「修一立其誠」○うったへのことば（訟辭）○ことわる（謝）應ぜず「固一」○ゆづる、卻ケて受けず「一讓」中庸「辭祿可一也」○せめる（責讓）左、昭九「一于晉」○つげる（告）○いとまごひ、別を告げて去る「一行」○文體の一、情深くして歌ふべきもの。古文眞寶、辭類、注「詩變而爲騷、騷變而爲一」

【辭章】シショウ　ことばをあつめたる書。‖辭典・辭書。

【卑辭重幣】ヒジヘイヘイ　言葉をひくくし贈物をあつくして賢者を招き、又は強國に事ふる。史記「齊懼必一一以事一秦」同、魏世家「卑一辭厚一幣以招二賢者一」

【辭氣】シキ　ことばと聲氣と。論、泰伯「出二一一一斯遠一鄙倍一矣」

【辭義】ジギ　ことばの意義。詩經、疏「一一皆仁、無三以知二其篇第之處一」

【辭決】ジケツ　次條に同じ「史、信陵君傳」

【辭訣】ジケツ　わかれのことばをのべる、いとまごひする。後漢書、公孫瓚傳「力戰不一能、乃與二士卒一一一」

【辭言】ジゲン　ことば。後漢書「一一嫻雅」

【辭藻】ジソウ　あやあることば。詩文の華采。南史、簡文帝紀「博二綜羣書一、一一一致、當時號爲二宮體一」‖詞藻。

【辭指】シシ　ことばの趣旨。魏志、鍾會傳「推一一意固顯、一一欲實」‖辭旨・辭趣。

【辭謝】ジシャ　ことわる。史、呂后紀「大臣相與共陰使二人召二代王一、代王使二入一一一」

【辭狀】ジジョウ　はなしの次第。吳志、顧雍傳「雍和二顏色一問二其一一一」

【辭賦】ジフ　文章詩賦。後漢書、蔡邕傳「少博學、好二一一一」‖詞賦。

【辭讓】ジジョウ　へりくだりことわりて人にゆづる。禮記「長者問、不二一一」而對、非一一禮也」

【辭讓之心】ジジョウノココロ　自らことわりて人にゆづる心。孟、公孫丑「一一、禮之端也」

【辭趣】ジシュ　文辭の意趣。蘇子良文「一一翩翩、足一有二才藻一」

【辭書】ジショ　辭典に同じ。

【辭色】ジショク　ことばと、かほいろと。言辭容色。晉書、祖逖傳「一一壯烈、衆皆慨歎」

【辭職】ジショク　役をやめる。梁書「遭父終一此官一、因一一一」‖辭任・退職。

【辭世】ジセイ　○この世を去りて死する。○圍死に臨みて作る詩歌。‖絶命詞。

【辭宗】ジソウ　辭章の宗師。後漢書、列女傳「學窮二道奧一、文爲二一一一一」‖詞宗・文宗。

【辭退】ジタイ　○へりくだりて辭し退く。晉書、華廙傳「實宜二一一一」○ことわりて身をひく。

【辭致】ジチ　もののいひぶり・態度。晉書、嵇康傳「共談二許律一一一法辨、因索二素琴一彈之、制爲二廣陵散一」

【辭典】ジテン　字引。‖辭書・字典。

【辭吐】ジト　ことば。北史、景穆十二王傳「一一儻然、若一無一所一卻」‖談吐。

【辭任】ジニン　やくをやめる。‖辭職。

【辭鏡】ジキョウ　ことばと、かたちとで後漢書、馬融傳「爲」人美二一一一有二使才一一」

【辭避】ジヒ　ことわりてにげる。宋史、劉保勗傳「吾受二君命一、不二敢一一一」

【辭病】ジビョウ　病氣なりといひたてことわる。後漢書、郭丹傳「一一一不一レ就」

【辭賦】ジフ　詩の變體なる辭と賦と。史、司馬相如傳「景帝不一レ好二一一一」

【辭服】ジフク　恐れ入る、罪を謝する。

【辭柄】ジヘイ　物いひのたね、いひぐさ。

【辭表】ジヒョウ　辭職を乞ふ上書。

【辭別】ジベツ　いとまごひする。‖訣別・告別。

【辭辯】ジベン　ことば。程子、程伯淳行狀「先生不一飾二一一一、猶以二誠意一感二動人主一」

【辭命】ジメイ　一國の使者としてのことば。孟、公孫丑「諸侯雖一有二尊二其一一一而重者一不一レ受也」

【辭老】ジロウ　年老いて官を辭せんこと

を請ふ。史、高帝紀「及二其見の疑乃恕一レ一、願賜二骸骨一歸二卒伍一」‖告ゝ老。

【辭林】ジリン ことばの聚る所。文章に熟達する義。陳書、周弘正傳「學業通備、一一義府」

【辭令】ジレイ ○ことばづかひ。人と應對することば。史、屈原傳「明二於治亂一、嫺二於一一一」○國官職に任ずるかきつけ。

【辭達而已矣】コトノミナリ 文辭は意思を通じ得ば十分なり、必ずしも富麗を以て工となさず。論、衞靈公「子曰、――」

十三畫

【辮】ベン 銑

○あむ(編)くむ(交織)○まとふ(繆)(一四九七頁四段)の辮を見よ。

十四畫

【辯】㊀ベン 銑 ㊁ヘン 霰 ㊂ヘイ 庚

㊀わかつ(別)易、履卦「君子以一上下一定二民志一」わかる(判)○つまびらか(詳審)周禮、天官、惟王建國、一方正一位」○あきらか(明)○いひあらそふ(論)○なさむ(治)○ただす(正)○とく(說)○さとす(諭)○たくみにいふ、言說に巧なり(巧言)「大一」「巧一」「俊一」「雄一」○文體の一、論議して是非を決斷するを主とす「桐葉封弟一」「諍一」文體明辯「一、判別也、其字從二言或從一リ、蓋執二其言行之是非一而以二大義一斷之也」㊁あまねし、徧に通ず。禮、樂記「其治一者、其禮具」㊂ひとし(平均)平に通ず。

【好レ辯】ベンヲコノム 議論を好む。孟、滕文公「予豈一レ一哉」

【以レ辯飾レ知】ベンヲモツテチヲカザル 巧なる辯舌を以て、其の智の足らざる所をかざる。莊、繕性「古之存レ身者、不二以レ辯飾一レ知」

【辯解】ベンカイ いひひらき、いひわけ。唐書、諸公主傳「帝有レ所レ怒、必伺二顏色一、後一一」‖辯疏。

【辯巧】ベンコウ くちまへがたくみなり。晉書、裴頠傳「一一之文可レ悅、似衆之盲足レ惑」

【辯給】ベンキフ 辯口が十分に足りて巧なり。北史、辛慶傳「楊愔風流一一、取レ士失二於浮華一、崔衞性尚良明、取レ士以レ才以レ器」‖辯捷。

【辯慧】ベンケイ くちまへたくみにさとし。漢書、息夫躬傳「一一則破二正道一、深則傷二恩惠一」

【辯給】ベンキフ 正しからざる辯舌。錄異記「以二一一一相高尚」‖詭辯。

【辯護】ベンゴ 辯舌にて分疏して庇護する。漢書、貢禹傳「以二王命一一二一生家一」

【辯護士】ベンゴシ 國法庭にて他人の爲めに辯論して其の利益をはかるもの。‖辯律師。

【辯口】ベンコウ 能く官ふはたらき。史、范雎傳「齊襄王聞二雎一一一」‖辯舌。

【辯才】ベンサイ ○言說の巧なるはたらき。李白詩「乘然有二一一一」○辯舌と才智と。

【辯才天】ベンザイテン 印度の女神、梵天の妃なり。辯說才智に富み、無量の福德を與へ又音曲に長ずといふ、我國にては七福神の一とす。‖辯天・大辯功德天・妙音天・妙音樂天。

【辯士】ベンシ ○辯舌に巧なる人(莊、天道)○國演說講話などする人。又、活動寫眞の說明者。

【辯舐】ベンシ たくみなることば。史、仲尼弟子傳「宰予利口一一」

【辯舌】ベンゼツ 說もあかす。晉書、儒林傳「徐邈識論精審、朝類一一、聞則有レ對」

【辯舌】ベンゼツ 辯口に同じ。

【辯護】ベンゴ くちまへよくさとし、裴駰集解論「期悟一一、皆二充朝典一」

【辯難】ベンナン あらそひて論難する。後漢書、曹褒傳「爽父充拜二侍中一、作二難一一一」文章軌範、王安石集小序「一一攻擊之文」

【辯佞】ベンネイ くちまへ巧にしてこびへつらふ。晉書、夏侯湛傳「暗喁一一」

【辯妄】ベンマウ 他人の妄りなる論を辯じ明かにす。

【辯駁】ベンバク 他人の言論の非なる點をあらそひ擊つ、辯難攻擊。‖辯難。

【辯足二以飾レ非】ベンハクヒヲカザルニモチヰルニタル 辯舌たくみにして己の非をも飾り得る。莊、盜跖「強足二以拒レ敵、――」

【辯辯】ベンベン よくすぢみちを立てて明かに論ずる。史、孔子世家「一一言、唯謹爾」‖慇懃。

【辯明】ベンメイ 辯解に同じ。

【辯論】ベンロン いひあらそふ。禮記「司馬一一官材」

【辯舷】ベンゲン 口才が巧にして義理が十分に足る。晉書、王羲之傳「羲之年十三知レ名、及レ長一一以二骨鯁一稱」

【辯晓】ベンゲウ 辯解に同じ。‖辯明。

【辯智】ベンチ ○事理をわきまへしる。道德指歸論「上レ務二之君、一一聰明」○くちまへよくさとし。戰國策「欲レ決二霸王之名一、不レ如レ備二兩周一一之士一」

辰部

【辰】シン 圓

○たつ、十二支の第五位、方角にては東南。時刻にては午前八時。爾雅「太歲在」ー、曰執徐」○十二支の通稱、子より亥に至る十二日。それを一周するを決ーといふ。○ひ(日)「吉ー」「良ー」○とき(時)「霜ー」「芳ー」○日月星の總稱「三ー」○日月交會の所「星ー」○北ーは北極星の在る處。‖天樞。○大ーは大火星の稱、卽ち心宿。

【辰緯】シンキ 星辰をいふ。宋書、拓跋氏傳「智士研ー慮、勇夫震ー節、嘉謀訓ー前、天人精氣貫ー一」

【辰韓】シンカン 古の國名、今の朝鮮東南部の慶尙道の地、韓族の居る所、凡十二國、內に新羅國あり、其の後、遂にーーを統一す。

【辰刻】シンコク とき、時刻。宋史、天文志「宋刻漏制極ー精巧、司天掌ー之所ー以定ーーー也」

【辰砂】シンシャ 朱砂の辰州(湖南省)に産するもの、水銀と硫黃との和合せしもの。‖朱砂。

【辰宿】シンシュク ほしのやどり。千字文「ーー列張」

三畫

【辱】ジョク ニク 灰

○はづかしむ「榮ー」「廷ー」「屈ー」けがす(汙)○はづ、はづかしめらる、けがされる。論、里仁「事ー君數斯ー矣」○かがむ(屈)屈する。呂覽、愼行「不ー足ー以ー令尹」○かたじけなし、ありがたし、受けたる好意をはづかしめるといふ意の謙辭。○はぢ(恥)はづかしめ「恥ー」「侮ー」「榮ー」

【同訓異字】辱・恥・羞・愧・慙・媿・靦・忸・怩・面等の訓は恥(ハヂ)九九四頁)の條を見よ。

【辱友】ジョクイウ 卽に同じ。

【辱交】ジョクカウ 次條に同じ。

【辱知】ジョクチ 其の人の知を受けてしりあひとなるといふ謙辭。

【辱臨】ジョクリン 貴人の己の方に來りたるをいふ敬語。晉書、郭翻傳「使君不ー以二鄙賤一面ーーレ之」‖光臨・貴臨。

六畫

【農】ノウ 冬

○たつくる。たつくり、たがやす(耕)うふる(種)○たつくる業「ー業」「耕ー」「勸ー」漢書、食貨志「闢土植穀曰ー」○三ーは山・澤・平地(周禮、註)○田を掌る官(田畯)○たつくる人、耕作に從ふ人「ー民」「老ー」○つとむ(勉)努の轉音。左、襄十三「小人ーー力以事其上」○神ーは古の帝王、炎帝の號、民に農業を敎へし人。○司ーは官名、秦に治粟內史といふ。漢の景帝更めて大司ーと名づく。○弘ーは郡名、漢置く、今の河南省靈寶縣。

【勸農】クワンノウ 農業をすすめる。史、文帝紀「ーー之道、未ー備、其除二租稅一」

【農家】ノウカ ○ひゃくしゃうの家。○古の九つの學派の一。漢書、藝文志「ーー者流、蓋出二於農稷之官一」

【農圃】ノウホ 田をたがやして穀をうゑる。後漢書、樊宏傳「宏父重、世善ニーー一、好二貨殖一」‖耕圃。

【農郊】ノウカウ 農作のさかんなる郊野。上林賦「地可二墾辟一、悉爲ニーー一」

【農學】ノウガク 農業の改良發達を研究する學。

【農圃】ノウホ 次條に同じ。

【農閑】ノウカン 農事のひまなとき。‖農暇。

【農勤】ノウキン 農夫のつとめ。梁簡文帝文「設弘則公田已治、ーー則我庾維億」

【農具】ノウグ 農業に要するだうぐ。鍬・鎌などの類。管子「精二ーー一」

【農科】ノウクワ 大學の七科の一、農學・農藝化學・林學・獸醫學の四門に分つ、修業年限を三年とす。

【農藝】ノウゲイ 農業と園藝と。‖農業。

【農隙】ノウゲキ 農業のあひま。左、隱五「春蒐夏苗、秋獮冬狩、皆于ニーー一以講レ事也」‖農閑・農暇。

【農月】ノウゲツ 立夏以後農業の頻用の月。

【農業】ノウゲフ 耕作のわざ。漢書、宣帝紀「樂府減二樂人一、使ー歸ニーー一」‖田業。

【農業時代】ノウゲフジダイ 人類進化の一階段、農業を主とし、旁ら漁獵を營みし時代、牧畜時代の一步進みし時代。

【農工】ノウコウ ○農業と工業と。○農夫と工人と。

【農工銀行】ノウコウギンカウ 農工業の改良發達に要する資本の貸付を目的とする株式組織の銀行。

【農功】ノウコウ 耕作のわざ。左、襄二五「子產曰、政如ニーー一、日夜思レ之」‖農事。

【農桑】ノウサウ 耕作のわざとかひこを養ふわざと。漢書、揚雄傳「世世以ニーー一爲レ業」

【農作】ノウサク 農民のしごと。宋史、李防傳「役二民丁一興ニーー一」

【農夫】ノウフ 耕作と、かひこを養ふと。揚雄、徐州牧箴「民好ニーー一、大野以賑」晉書、孝友傳「ーー之暇、副二誘宗族一、侃侃不レ勸」‖耕夫。

【農産物】ノウサンブツ　農業の生産物。
【農時】ノウジ　耕作すべき時期。孟、梁惠王「不レ違二―一」
【農人】ノウジン　ひゃくしょう。詩、小雅「食二我―一」‖農民。
【農相】ノウショウ　國農商務大臣の異稱。
【農商】ノウショウ　農業と商業と「史、太史公自序」
【農商務省】ノウショウムショウ　農業・工業・商業・殖産・專賣特許などの事を掌る中央官廳。
【農時】ノウジ　耕作のわざ、農はうるつ時、種はかりとる。左、莊九「其底人力、―止穀登、野膳惟慕張」
【農夫】ノウフ　耕作に從事するわかもの、百姓男。
【農業は立國の根本】ノウギョウハリッコクノコンポン　農業は立國の根本。帝範「夫食爲二人天一――」
【農夫】ノウフ　ひゃくしょう。詩、豳風「嗟我―一」‖農人。
【農民】ノウミン　平時農業に從事せるもの

を徴して組織する軍隊。
【農歌】ノウカ　○はたけ。又、おなか。戰國策「舜起二―一」○農業の後漢書、高鳳傳「家以二―一爲レ業」
【農末】ノウマツ　農民と末利を逐ふ商賈と。史、貨殖傳「夫靈、二十病レ農、九十病レ末、末病則財不レ出、農病則草不レ辟矣、上不レ過二八十一下不レ過二三十一、則一―俱利」
【農民】ノウミン　耕作に從ふたみ、百姓「史、日者傳」
【農務】ノウム　○農事のつとめ。宋史、食貨志「民有下飲博百三千一―者上、農師謹察レ之」○農に關する政務。‖農政。

十二畫

【曩】シン　㊀一に囅に作る　わらふ貌。
【曩然】シンゼン　笑ふ貌。莊、達生「桓公―而笑」‖曩然。

辵部（辶）

【辵】チャク　㊀　○はしる（疾行）○たたずむ。○國之繞の音便、字畫上のみの稱。

一畫

【辶】〔國字〕　○すべる（滑）足がなめらかにしてとどまらず。○まかる、退出する。

二畫

【辺】國邊（辵部十五畫）の略字として用ふ。
【込】〔國字〕　○こむ、入れる、やる「申しー む」○いりこむ、雜閙する。○こめ。
【辻】〔國字〕　つじ（十字街）「ー占」「ー便所」‖邊。

三畫

【迦】カ　㊀㊁又、遮に作る　○ゆく、ななめに行く（邪行）○ななめにたてかける（邪倚）○ー遮ははつらなる（連接）
【迦迦】カカ　○遠なる貌。宋楊時「水花碧圃圃、雲葉白ー―」○斜めに延びる貌。沈與求詩「廻廊ー―穿二危檻一」
【迦陵】カリョウ　相連る貌。揚雄賦「封巒石閭ー―乎延屬」

【迂】ウ　㊀　又、遇に作る　○とほし（遠）まはりどほし。○事情に遠ざかる、實際に適せず。にぶし（鈍）「ー遠」「ー愚」論、子路「有是哉子之ー也」○ねぢく、まげる。まがる（曲）書、盤庚「ー乃心」かがまる（屈）○さく（避）○やや（良）すこし「ー久」○廣く大いなり。
【迂遠】ウエン　まはりどほくして實地の役に立たず。史、孟荀傳「ー而闊二於事情一」‖迂闊。
【迂久】ウキュウ　やや久し。後漢書、劉寬傳「ー大辭而還」‖良久。
【迂曲】ウキョク　あちこちとめぐりまがる。‖紆曲。
【迂愚】ウグ　世事にうとくおろか。元稹詩「拙劣仍非レ遠、ー且異レ庸」‖迂拙。
【迂回】ウカイ　とほまはりする。
【迂闊】ウカツ　○とほまはりどほくして實地の役にたたず。漢書、王吉傳「上以其言ー―不レ達レ權異一也」‖迂遠。○國うっかりする。
【迂緩】ウカンぐずぐずしてゐる。王榮、儒吏論「竹帛之儒、覺生而ー―也哉、起二於講堂之上一遊二於鄉校之中一、無二緩猛制斷以自戰一、雖レ欲レ不

一一弗レ能レ得矣」‖遷滯。

【迂言】ウゲン　まはりどほきことば。呂覽、先己「寡人以爲ニ一一一」

【迂人】ウジン　世事にうとき人。迂遠なる人。

【迂儒】ウジュ　世の中の事情に通ぜざる學者、くされ儒者。僧道濟詩「結レ交蓽ニ家產ニ、個箇非ニ一一」‖腐儒。

【迂生】ウセイ　自己の謙稱、拙者・小生。

【迂拙】ウセツ　おろかにしてつたなし。白居易詩「晉道本一一、世途多ニ險艱ニ」

【迂疎】ウソ　世事にまはりどほくうとし。‖疎迂。

【迂叟】ウソウ　世事にうときおやぢ、司馬溫公の自稱。石林燕語「司馬溫公自レ少開ニ一一ニ著ニ迂書四十一篇ニ」

【迂誕】ウタン　まはりどほき大言を吐きて實なき義。晉書、裴秀傳「禹貢地域圖序、或荒外一一之言、不レ合ニ事實ニ、于レ義無レ取」

【迂鈍】ウドン　世事にくらくにぶし。

【迂腐】ウフ　おろかにして役にたたず。

【迂路】ウロ　まはりみち。隋書、禽獸傳「一一出ニ賀蘭山ニ」

【迂陋】ウロウ　見識がうとくしていやし。‖愚陋。

【迄】

迂（前條）に同じ。

【迄】キツ　質

○およぶ、まで、いたる（至）詩、大雅「以一于今」○つひに（竟）後漢書、孔融傳「一無成功」

同訓異字　迄・至・到・臻・詣・造・格・屆・等の別は至（一三九二頁三段）の條を見よ。

【迅】ジン　震

○すみやか、はやし、とし（疾）「一疾」「勁一」○猿の子の甚だ力あるもの。

【迅翼】ジンヨク　はやし。晉書七盖二「清筆一一、雲飛高古」

【迅羽】ジンウ　鷹の異名。張衡賦「一一輕足」阮籍書「九蒼之高、一一不レ能レ時ニ其願ニ」

【迅雨】ジンウ　はげしくふる雨。後漢書、劉愷傳「遭ニ烈風一不レ迷、遇ニ一一一不レ惑」

【迅羣】ジンクン　月日がはやく移る。朱熹詩「一一諒難レ留、歸驂忽已駕」

【迅擊】ジンゲキ　すみやかにうつ。魔世南文「逐ニ退獸一距、若ニ秋鷹之一一一」‖急擊。

【迅駛】ジンシ　極めてはやし。蘇軾詩「忽驚飛電穿ニ戸隙一、一一不三復容ニ追防一」

【迅翔】ジンショウ　はやくはしる。抱朴子「一一之駿足也」

【迅捷】ジンセフ　はやし。傅休奕、走狗賦「既一一而無レ前、又閒暇而有レ度」

【迅走】ジンソウ　すみやかにはしる。詩「狒狒如レ人、被レ髮一一」‖疾走。

【迅速】ジンソク　すみやか。北史、杜鈐傳「爲レ文一一、有レ如ニ宿構一」‖迅急。

【迅閒】ジンカン　滑ぐことのはやきかい。夏侯湛文「輕帆一一、橫ニ絕江流一」

【迅電不レ及レ目】ジンデンメニおよばず　いなびかりの迅くして目をふさぐ暇なし。事の急にしてふせぐ暇なきに喩ふ。六韜「疾雷不レ及レ掩レ耳、一一」‖疾雷不レ暇レ掩レ目（淮南子）

【迅動】ジンドウ　感動しやすし。南史、王筠傳「性一一好ニ文章一、讀范滂傳ニ未ニ嘗不ニ歎慨一」

【迅馬】ジンバ　はやくはしるうま。劉峻詩「一一晨風趨、輕輿流水散」

【迅疫】ジンエキ　急におこる。貫和遺譜「震雷一一、雲物冥晦」

【迅風】ジンプウ　はやて。王粲詩「一一拂ニ雲袂一」

【迅邁】ジンマイ　はやくすぎ行く。邁は行。晉書、桓沖傳「日月一一、高風日起」‖速邁。

【迅猛】ジンモウ　はやくたけし。元史、河渠志「黃河伏槽之時、水勢似レ緩、一遇ニ暴漲一、濁浪一一」‖猛迅。

【迅雷】ジンライ　はげしきかみなり。論、鄭玄「一一風烈必變」‖疾雷。

【迅湘】ジンソウ　はやせ。劉禹錫詩「一一下嘶叫、隔岸勢爭衡」‖急湘。

【迅流】ジンリウ　はやきながれ。馬融文「瞰ニ臨風一陵ニ一一一」

【迪】テン　先

○たどる、ゆるゆるあゆむ（緩歩）○開たどる、道を探りながら行く。又、それからそれへと思索する。

【迂】

遷（辵部十二畫）の俗字。

【迷】ガ　四　畫　禡　江　陽

むかへ、相迎へる「郊一」

同訓異字　迓・迎・向・逆・遡・迕の別は向（一一〇六頁四段）の條を見よ。

【迄】

㊀カ・ガ　㊁カ・ゴウ

㊀うさぎみち（兎道）○けもののあしあと（獸迹）㊁わだち（車迹）

【近】

㊀キン・コン　㊁キン・コン　㊂キ　置　問　物

○ちかし。遠の對。時間、又、距離が短かし「一世」「一代」「鄰一」○そば、かたはら（左右）○てぢか、分りやすし、知り易し、

見なれ聞きなれる「卑ー」「淺ー」○似る。中庸「好學ー乎知」○よくあてはまる（切實）「ー切」公羊、哀十四「撥亂世反諸正」「莫ー於春秋」○したし（親）したしきもの。みうち。李密、陳情表「外無ー強功彊ー之親」○君主のちかづけ親むもの「ー習」「ー臣」○ちかごろ「ー者」㊁ちかづく。○つく（附）○したしむ（親）書、五子之歌「民可ー、不可下」○せまる（迫）㊂無意味の助辭。詩、大雅「往ー王舅」

同訓異語 近・邇 ○近は遠の反なり「近ノ水樓臺先得ノ月」の如し。○邇は遐の反なり、近と同じ、但遠近は常用字なれども、遐邇は古き字なり。

【近憂】キンイウ 目の前のうれへ。論、衛靈公「人無ー遠慮、必有ニーー」

【近因】キンイン 直接の原因。遠因の對。

【近姻】キンイン ちかぢかの近き親戚。＝近親。

【近海】キンカイ 陸地にちかき海。其の地に近き海。

【近郊】キンカウ 邑外五十里までの地、轉じて城下に近きあたり。唐書、賈耽傳「優詔許ノ還ニーー」

【近幸】キンカウ ○ちかづけいつくしむ。史、刺客傳「臺子必ーニー子」○ちかづけ親む臣。

【近郷】キンカウ 圖近在に同じ。

【近刊】キンカン 近きうちに出版する。

【近眼】キンガン ちかめ。＝近視眼。

【近畿】キンキ 都にちかき地。許棠詩「幷州去路殊遐邇、風雨何當ノ遽ニーー」

【近況】キンキャウ ちかごろのやうす。＝近狀。

【近火】キンクワ 近所の火事。韓非、說林「遠水不ノ救ニーー也」

【近境】キンキャウ 城市に近きのはら。楊巽臣詩「月出至ニーー」＝近郊。

【近縣】キンケン ちかまの縣、附近の縣「ー旅行」

【近午】キンゴ ひるまへ、正午に近き時。程明道詩「雲淡風輕ーー天」＝薄午。

【近古】キンコ 近きむかし。年代の多くへだたらざるむかし。歷史上にて近世と中古との間の稱。

【近在】キンザイ 圖城市に近きあたり、近き在所ザイ＝近郷。

【近歲】キンサイ 近年に同じ、ちかごろの世。宋史、秉常傳「西蕃表云、臣自ニ歷世ー以來、貢ニ奉朝廷ー無ノ所ニ虧怠ニ、至於ーー尤甚歡和」

【近作】キンサク ちかごろ作りし詩文など。宋史、周必大傳「其以ニーー一適上」＝近業。

【近似】キンジ よくにる。金史、徒單鎰傳「凡天下之事、叢來者非ニ一端ニ、形似者非ニ一體ニ、法制不ノ能ノ盡、隨ニ手ーニ乃生ニ異論ー」

【近事】キンジ ちかごろ起りし出來事。

【近事女】キンジジョ 佛に事ふる女子。翻譯名義集「優婆夷傳云、亦譯ニーー」

【近侍】キンジ 近く君主の左右にはべる。又、其のけらい、親近侍從の臣。漢書、王嘉傳「ニー幃幄」＝近習。

【近思】キンシ 己の身に近くあてはめておもふ。論、子張「切問而ーー」

【近思錄】キンシロク 十四卷、朱熹・呂祖謙ニ人共撰す、宋の周茂叔・程明道・程伊川・張橫渠の語を類聚す。

【近邇】キンジ ちかし。又ちかづく。

【近視眼】キンシガン ちかめ。＝近眼。

【近什】キンジフ ちかごろ作りし詩、什はもと詩經に十篇の詩をすべ稱したるに本づく。

【近習】キンシフ 君主のそば近くなれつかふる者。君主の親狎する所の人。禮、月令「雖ノ有ニ貴戚ーー、毋ノ有ノ不ノ禁」＝近臣。

【近臣】キンシン 君主のそば近くつかふるけらい、左右侍從の臣。孟、萬章「親ニーー一以ニ其所ヒ主」＝近習・近侍・侍從。

【近臣暗】キンシンアン 左右近侍の臣、默して言はず。晉子「臣下蒙ニ其爵位ー而不ノ言、近臣則喑、遠臣則唵」

【近信】キンシン ○ちかごろのおとづれ。○近づけ信用する。＝信近。

【近親】キンシン ちすぢの近き親類。漢書、何武傳「太后ーー」

【近者】キンシャ ○ちかごろ。韓愈、與ニ李漸東ニ書ーー閣下從事」＝近來・頃者。○近き處に居る人。論、子路「ーー悅服、而遠者懷ノ之」

【近狀】キンジャウ ちかごろのやうす。＝近況・近情。

【近情】キンジャウ 前條に同じ。

【近ノ朱】キンシュノシュ 朱の色に近づく。傳玄簒「ーレー者赤、近ノ墨者黑」人の性情、習染に因りて化するに喩ふ。

【近就】キンジュ ちかづきしたしむ。漢書、傅介子傳「其王ーニー人、易ノ得」

【近衆】キンシュ 近臣に同じ。

【近所】キンジョ 近き場所「史、陳涉世家」＝近處・近邊。

【近稱】キンショウ 文法にて自身に近き物事又場所に用ふる代名詞。これ・この・ここの類。

【近世】キンセイ 近き時代。＝近代・近歲。

【近屬】キンゾク 血統のちかき親類。漢書、韋慶忌傳「ーー主ノ內、異姓疏ノ外」＝近親。

【近切】キンセツ ひったりとあてはまる、て近くして切實。

【近接】キンセツ ちかくつづく。＝接近。

【近遠】キンエン ちかくしてあさし。李嶠表「臣行能ーー、職性凡陋」＝淺近。

【近代】キンダイ 近き時代。晉書、何劭傳「陳ニ說ーー事ニ、若ノ指ニ諸掌ー」＝近世。

【近體】キンタイ　○古詩に對して律詩絶句をいふ。○廣くちかごろ行はるていさい。金史、趙秉文傳「小詩精絶、多以ニー一爲レ之」

【近著】キンチョ　圖ちかごろ到着する。‖新到。

【近傍】キンボウ　ちかきところ。‖近所・近邊。

【近邊】キンペン　○國禁卽ち邊土にちかづく。漢書、陳湯傳「單于遁逃、遠舍不ニ敢ー一ー」○ちかき所。智度論「譬草生處、ー必有ニ良藥ニ」‖近所・近傍。

【近密】キンミツ　君主に近づくを得る所。後漢書、袁紹傳「陛下以ニ寵容在ニー一、親ニ握權勢ニ」

【近名】キンメイ　ほまれをむかへ求める。莊子「爲レ善無レー一レ、爲レ惡無レ近レ刑」

【近來】キンライ　ちかごろ。‖頃者。

【近隣】キンリン　きんじょとなり。‖鄰近。

【近衛】キンエイ　圖皇宮を守る軍隊。

【近レ近】キンキンク　○近づくべきものを近づけ愛する。春秋繁露「ーレー而遠レ遠」○圖ちかいうち。‖近日。

【近者說遠者來】キンシャエンシャライ　近所の民が恩惠に慶び服して、遠方の民もそれを聞きて慕ひ來る。論、子路「葉公問レ政、子曰、——」

【迎】

㊀ゲイ・ギョウ　㊁ゲイ・ギョウ　敬　庚

㊀むかふ、物が來りて迎へ接する「數ー」○あらかじめかぞへる（逆數）史、五帝紀「ー日推策」㊁むかふ（迓）物が未だ來らざるに往きて迎へる。詩、大雅「親ニ于滑」

同訓異字　迎・向・邀・迓・逆・遌・逢の訓は向（三〇六頁四段）の條を見よ。

【迎阿】ゲイア　人の心をむかへてへつらふ。唐書、杜淹傳「方ニ煬帝幸ニ江都ー、羣臣ー一、獨候ニ意執不レ可」郭慎道を謂ふ。‖逢迎阿諛。

【迎意】ゲイイ　人の心をさぐりて氣に入るやうにする。唐書、貴妃楊氏傳「智窮ニ迎ー一レ輒悟」

【迎引】ゲイイン　客をむかへてもてなす。魏志、李彪傳「彪有レ女、幼而聰令、臨ー一レ、召爲ニ嬪妤ニ、以ニ禮ー一」‖迎接。

【迎謁】ゲイエツ　むかへてまみえる。漢書、疏廣傳「愛ニー一師對」

【迎合】ゲイゴウ　○人の氣に合ふやうにつとめる。おもねりへつらふ。‖逢迎。○諛め則を約して合する。齊書、陳顯達傳「中司州、志節堅明、分見ー一」

【迎閤】ゲイコウ　中門まで出でむかへる。閤は小閤。後漢書、彭寵傳「寵謂王宮ニー一レ握レ手、交歡並坐ニ、今既不レ然、所ニ以失ニ望ー一」

【迎候】ゲイコウ　出でむかへる。晉書、傅咸傳「乃自往ー一、同乘而歸」

【迎歲】ゲイサイ　新年をむかへる。淮南子「ー一ニー於東郊ニ」‖迎年・迎春。

【迎日】ゲイジツ　あらかじめ日をかぞへる。史、五帝紀「黃帝ー一レー推レ策」

【迎レ刃】ゲイジンヤエバ　をむかへる。晉書、杜預傳「今兵威已振、譬如レ破レ竹、數節之後、皆ー一レー而解、無ニ復著レ手處ニ也」事の甚だ易きに喩ふ。

【迎晨】ゲイシン　しののめに向ふ。儲光羲詩「ー一レー起飯レ牛」

【迎祥】ゲイショウ　さいはひの來るを待ちうける。謝莊文「祚靈集レ祉、慶臨ー一レー」

【迎春】ゲイシュン　○春をむかへる。禮、月令「ー一ニー於東郊ニ」○小灌木の名、莖の上部纖細にして延長すること蔓の如し、早春葉に先だちて六瓣の黃花を開く、春花中の最も早く發く者、故に名づく。○辛夷ジンイの異名。

【迎接】ゲイセツ　客をむかへてあしらふ。李中敏、陽家開ニ戶相ー一」‖迎引。

【迎送】ゲイソウ　でむかへ、みおくりと。‖送迎。

【迎聽】ゲイチョウ　日を以て迎へ接する。劉劭、新論「來而ー一ニ之ニ、去而目ニ送之ニ」

【迎潮】ゲイチョウ　うしほのさし來るをむかへ待つ。項斯詩「沙島戲ー一レ」

【迎年】ゲイネン　新年をむかへる。荊楚歲時記「以迎ニ新年ー一」‖迎歲。

【迎拜】ゲイハイ　むかへてをがむ。

【迎梅雨】ゲイバイウ　陰曆三月の雨、うのはなくだし。陸龜蒙「江南三月爲ニ——、五月爲ニ送梅雨ー一」

【迎賓】ゲイヒン　客をむかへる。戴禮「冠之日、主人納而ー一レー」

【迎風觀】ゲイフウカン　避暑の爲めに立てたるものみ。關中記「晉帝作ニ——、寒露ニ以避レ暑」

【迎聘】ゲイヘイ　人を迎へてもてなす、招待。

【迎逢】ゲイホウ　むかへてあふ。杜甫詩「一笑喜ー一」

【迎勞】ゲイロウ　むかへてねぎらふ。後漢書、光武紀「吏人喜悅、爭持ニ牛酒ー一」

【迎立】ゲイリツ　他所に在る人をむかへて君主の位にたてる。

【迓】

ゴ　遇　馬　午、悟に通ず

○あふ（遇）遭遇する。後漢書、陳蕃傳「王甫時出與ニ蕃相ー一」○たがふ（違）○さかふ（逆）「乖ー一」○錯ー一はさかさま（交雜）

【迍】

チュン　㊀眞　㊁元

たちもとほる、進まず（邅）「ー邅」

【迍邅】チュンセン　行き難く進まざる貌。‖屯邅。

【返】

ヘン　㊀阮　反に通ず

○かへる、もどる。かへす（復・還）「往ー」漢書、伍被傳「往者不ー」○しりぞく。しりぞける（退）○さる（去）○たび、度數をあらはすことば「十ー」○圖カ、反對になる「ー討ウチ」

同訓異字　返・還・反・歸・復・回・旋

の別は歸（一〇二六頁二段）の條を見よ。

【返歃】ヘンサフ　圖かへしうた。歃のかへし。

【返歃】ヘンサフ　返盃に同じ。

【返卻】ヘンキヤク　かへす。＝還卻。

【返還】ヘンクワン　かへす。＝返濟・償還。

【返景】ヘンケイ　夕日の影。王維詩「ー入二深林一」＝返照。

【返濟】ヘンサイ　借りたるものをかへします。

【返札】ヘンサツ　へんじの手紙。＝返書・返章・返信。

【返事】ヘンジ　圖手紙のかへし。＝返答・返書。

【返信】ヘンシン　へんじの手紙。

【返章】ヘンシヤウ　手紙のへんじ。＝返簡・返書。

【返償】ヘンシヤウ　かりたるものをかへしつぐのよ。＝返濟・償還。

【返書】ヘンシヨ　へんじの手紙。晉書、陶侃傳「母ー貴レ侃」＝返簡。

【返生香】ヘンセイカウ　香の名、死者其の氣を開けば活きかへるといふ。十洲記「聚窟洲有二返魂樹一伐二其根心一於二玉釜中一煮レ汁、煎成レ丸、名曰二返魂香一、一名還ー、一名卻死香、死者聞レ氣卽活」

【返照】ヘンセウ　てりかへし、ゆふひ。杜甫詩「ー入二江鄰一石壁」＝斜照・斜陽・返景。

【返答】ヘンタフ　へんじ。＝答書。

【返湯】ヘンタウ　湯き去るうしほ。沈約詩「碣石送ニー一」

【返納】ヘンナフ　かへしをさめる。＝還納。

【返杯】ヘンパイ　受けたるさかづきをかへす。＝酬杯。

【返報】ヘンパウ　しかへしする、しかへし。＝復讐。

【返堵】ヘント　たづなをかへす。李商隱詩「千馬無ー一、萬車無レ還轅」

【返附】ヘンフ　かへしわたす。＝還附。

【返璧】ヘンペキ　○人の物をかへす譬。藺相如が璧を完うして趙にとりかへしたる故事に本づく。○人の贈り物を受けざる義。左、僖二「公子受レ斧反レ璧」

【返戻】ヘンレイ　圖かへしもどす。＝返還。

【返禮】ヘンレイ　圖受けたる禮に報いる。又其の報いる禮物。

【返路】ヘンロ　かへりみち。謝朓詩「徒念關山近、終知ー一長」＝歸路。

【返魂香】ヘンコンカウ　香料の名。之を焚けば亡き人の靈を呼びかへすといふ。香譜、――趣直上、可レ見二先塋一」

【返魂草】ヘンコンサウ　紫苑ヲンの異名〔本草〕

【迂】

㊀ウ。㊁キヤウ　虞　養　麌

㊀ゆく（往）左、襄二八「一勞于東門之外」㊁あざむく、たぶらかす（欺）詩、鄭風「人實ー女」○おそれる（恐懼）左、昭三一「子無我ー」

【迕】

〔國字〕

○とても、到底ー一も成功の見込なし」○とて、と言ひて「さればー」

五畫

【迤】

イ　紙　支

○ななめにつらなる。＝逶。○ななめに行く貌。○委ーは自得の貌。

【迤邐】イリ　連り延ぶる貌。杜牧詩「橋形柳樹斜、浪態ー一好」＝逶迤。

【迤衍】イエン　地勢の斜めに廣く平かなる貌。羅浮山圖經「其下ー一有二函水一與二潮汐一應」曰二猪滷一」

【迤邏】イラ　水のななめにめぐる貌。李華文「因ー一而瀦レ之」

【迤靡】イビ　ななめに長くつづく貌。甘泉賦「封樹石闕、ー一平連屬」

【迤運】イウン　つらなりつづく貌。秀行運延の義。陳琳文檄、從軍行「ー一隨二鶯翼一、參差覩二雁行一」

【迦】

カ・ケ　麻　歌

○釋ー一シヤは佛陀の名。增韻「身毒國、翟曇號曰釋ー一」○梵語のカの音に借り用ふ「ー葉」「ー陵頻伽」○邏と通ず「ー遮」

【迦葉】カセフ　釋迦の十大弟子の一人。摩訶ー一波の略。釋迦沒後、佛教の長老たり〔五燈會元〕＝迦葉尊者。

【迦葉佛】カセフブツ　飮光と譯す、過去七佛の第六位、釋迦の出現はこの佛の滅後、五十六億七千萬年の後に在りといふ。

【迦藍】ガラン　僧舍の佛國記「名二衆僧止處一爲二僧ー一、凡有二五百僧ー一、皆小乘學」魏書「ー一淨土、理絕二塵穢一」＝伽藍。

【迦闍陀】ガシヤダ　天竺の寺の名、一名竹林精舍〔佛國記〕

【迦陵頻迦】カリヨウビンガ　圖極樂淨土に居て聲の最も美にして、女の面に似たりといふ鳥の名〔正法念經〕＝好聲鳥・妙聲鳥・迦陵鳥。

【迥】

ケイ　迥　通は俗字

○はるか。とほし（遠）「遼ー」「修ー」杜甫詩「江ー月來遠」○かがやく（輝）

【迥遠】ケイエン　はるかにとほし。王粲文

「楚魏絕義、山河ー一」【迥空】ケイクウ とほきそら。元稹詩「晴烟蓋ニー一」【迥遐】ケイカ 遠き貌。張說詩「山亭ー一面ニ長川ニ」【迥眺】ケイチョウ 遠方をながめる。左思、吳都賦「曠論遐觀、ー一冥察」【迥抜】ケイバツ 高く抜きでる。杜甫文「ー一孤秀、出ニ於常情ニ」【迥遠】ケイエン はるかにとほし。陸雲賦「望ニ故皓之ー一ー一兮、泝ニ南風ニ而頓泣」ニ遼遐・窮遠。

【迮】 サク 陌

○ちぢむ(蹙)○せまる(迫・逐)後漢書、陳忠傳「鄰舍比里、共相歷ー一」

【迹】 ジュツ 質

○のぶ(陳)布陳する「陳ー一」「稱ー一」「紹ー一」「纘ー一」論、述而「ー一而不レ作」とく(說)つぐ(告)○あらはす(著)「著ー一」○えらぶ(選)「撰ー一」○したがふ(循)由りしたがふ。中庸「父作レ之子ー一レ之」○つぐ(繼)○通天冠の前の飾。○文證の名「行ー一」

同訓異語 ノ述・陳・宣・布・展・舒・申・伸・信・暢・演・延・紓○述は下地ある言を、うけつぎていひ、又人のなしたることを、うけつぎてするをいふ、循也、修也、讀也、陳也と註するにて、解すべし、祖述と用ふ。論語「述而不レ作」○陳は、つらぬとも訓み、陳列と用ふ、物をならべ立つる意、官職に用ひても一一數へたてとくなり。明陳二大義一、指ニ陳得失一の類。○宣は弱ヤクくあらはし、ひろむるなり、宣旨・傳宣などと用ふ。○布は滞りなく、しきのべ列ぬるなり、しくとも訓む。左傳「敢布ニ腹心一」○展はひらきのぶるなり、展レ巻・展レ席の類、親展は、親しく開封し見れよとの義。玉篇「展ニ所レ藏法帖墨蹟書巻一」續ニ觀之一」○舒は巻の反、展と略ゝ同じ、凡展レ物謂ニ之舒一と註す、舒レ席・柳葉舒などと用ふ。○申・伸の二字は、義同じ、屈の反、舒也、理也、屈者使レ直也と註す。○信はのぶると訓むときは、伸に同じ。易經「往者屈也、來者信也」○暢は達也、通也と註し、通暢・舒暢と用ふ、のびのびとして通るなり、皃と同義なり。易經「美在ニ其中一而暢ニ於四支一、發ニ於事業一」○演は衍と音義通ず、通也、潤也、引也、廣也、延也と註す、ひろげのぶるなり、演義は、衍義に同じ。○縯は舒に同じ、但形聲の上には用ひず、意志の上にのみ用ふ。文選「賓戲縯ニ憤懣之意一」○延はひきのぶるなり、展とのちがひは、展はひらきのぶるなり、蔓延は、つるのはひのぶるなり、延年・延齡と用ふ。○紓はゆるめるなり、紓レ災・紓レ兵の類。左傳「紓ニ楚國之難一」【述異記】ジュツイキ 書名、二卷、舊本、梁の任昉の撰と題す、張華の博物志の如く半眞半僞の書なり。【述懷】ジュツカイ 己の思をのべる。=言志。【述戰】ジュツセン 昔をのべて書きのせる。後漢書、應奉傳「著ニ漢書後序一、多レ所ニ述戰一」【述作】ジュツサク 述は舊を傳ふる、作は創めつくる。論、述而「述而不レ作」晉書、南陽王子保傳「少有ニ文義一、好ニ述作一」【述遵】ジュツジュン 由りしたがふ。後漢書、光武紀「太宗識ニ終始之義一、最帝能ー一ニ季道一」【述敘】ジュツジョ のべついづ。後漢書、班固傳「又作ニ典引篇一、ー一漢德一」=敘述。【述職】ジュツショク 諸侯が天子に朝して己の職務上の事を申しあげる。孟、梁惠王「ー一者、述レ所レ職也」【述聖】ジュツセイ 元の文宗、子思を封じて沂國ー一公と爲す、明の嘉靖の時、封爵を改めて止ー一と稱す。【述製】ジュツセイ 詩文をつくる。梁元帝文「至ニ子忠臣一、言無ニ一ー一」【述奏】ジュツソウ 天子へ申しあげる。魏書、劉芳傳「尚書ー一」

【迤】 イ 支 歌

㊀遂ー一は行く貌。㊁委蛇の蛇に同じ。

【迨】 タイ 賄

およぶ(及)詩、召南「ー一其今兮」=逮。

同訓異語 及・逮・遡・暨・洎・覃の助は及(二九一頁三段)の條を見よ。

【迭】 テツ 屑

遞(走部六畫)の俗字。

【迭】 テイ 霽

こゆ(超踰)漢書、禮樂志「體容與、ー一萬里」

【迢】 テウ 蕭

○とほし(遠)はるか(遥)○ーは高き貌。

【迢遞】テウテイ はるかに遠し。江淹賦「ー一衡山、崎曲抱レ津」=迢遞。【迢峣】テウケウ 高き貌。王延壽賦「ー一偶傲」【迢遰】テウテイ ○はるかに遠し。水經、注「ー一相望」=迢遞。○高き貌。附錄詩、遡瀧帶ニ綠水一、ー一起ニ朱樓一」

【遐遐】カカ　○高き貌。古詩「――華中星」○はるかなる貌。潘岳詩「――遵行客」

【迪】テキ　㊥　通に作るは非

○すすむ(進)○ふむ(蹈)ふみ行ふ。實踐躬行する。書、皐陶謨「允ー厥德」○ただす(正)○みち(道德)書、大禹謨「惠ー吉」(惠は順)○ひらきみちびく(開導)「啓ー」「訓ー」書、康誥「矧民罔ー不適」○いたる(至)漢書、敘傳「漢ー于秦有革有因」

【迭】㊀テツ　㊁イツ　質　屑

㊀かはるがはる(更)たがひに。易、繫辭「一用柔剛」○かはる「更ー」たがふ。㊁すぐ。軼に通ず。○通過しつつ亂暴する、侵しのぐ(侵陵)左、成十三「ー我殺地」○にげる。古、逸に通ず。家語「馬將ー」

【迭起】テツキ　たがひにおこる。莊子、四時ー――、萬物循生」水經、注「有三赫巖ー――、冠以三青林與二雲霞一」‖迭興。

【迭去】テツキョ　たがひに去る。晏子「迭處レ之、ー――レ之」

【迭擊】テツゲキ　かはるがはるうつ。北史、稚浩傳「屢レ農積レ穀、爲二遊軼之資一、邪四ー――、故漢末レ破、而匈奴已弊」

【迭興】テツコウ　たがひにおこる。史、封禪書「ー――軼廢」

【迭遞】テツテイ　たがひにうつす。宋書、謝惠連「三國之崩、萬世不レ改、其餘四廟、親盡ー――」

【迭代】テツダイ　互に世を受け繼ぐ。後漢書、仲長統傳「以レ之ー――」

【迫】ハク　ヒャク　陌

○せまる(逼)「脅ー」「逼ー」○ちかづく(近)○きびし(急)○くるしむ(窘)「窘ー」「窮ー」○ちぢむ(縮)せばまる「局ー」「壓ー」○すみやか(速)○いそぐ(急)きりつまる「急ー」漢書、武帝紀「外ー公事」○うながす(促・催)「催ー」杜甫詩「能事不ー受相促ー」

同訓異義　迫・逼・薄・壓の別は逼(一九七四頁一段)の條を見よ。

【迫害】ハクガイ　せまりそこなふ、くるしめる。くるしみ。

【迫念】ハクネン　せまるの後漢書「光武至レ懷、雖欵ー――迎降」‖急迫。

【迫劫】ハクゴウ　せまりおびやかす。漢書、吳王濞傳「――二萬民、以殺無罪、蓋爲二陛暴一欵迫痛レ之」

【迫脅】ハクキョウ　○せまりおどす。漢書、趙王倫傳「――二王侯一号」‖脅迫。○地勢がせまし(狹隘)張衡、西京賦「增二九逵之ー――」

【迭】テツ　㊥　屑

うつす。うつる(遞徒)「推ー」楚辭「屢懲艾而不ー」‖移。

【迴】㊀クヮイ・エ　灰　㊁クヮイ・エ　隊　又、廻に作る

㊀めぐる「ー轉」「輪ー」‖回。㊁まがる(曲)

同訓異義　迴・繞・遶・環・遍・周等の別は繞(一五一一頁三段)の條を見よ。

【迴旋】クヮイセン　まはりどほし。陳師道詩「隣レ事ー――種種遲」

【迴合】クヮイガフ　めぐり合ふ。謝靈運詩「淵鳥曉ー――、析岸屢摧奔」‖環繞。

【迴曲】クヮイキョク　めぐりまがる(彎曲)江總詩「縱レ棹憐ニー――」

【迴首】クヮイシュ　首をめぐらして顧みしたふ。李陵別詩「那堪ー――レ處、雙照滿二衣裳一」‖回首。

【迴天之力】クヮイテンノチカラ　天は君、君の心を長遠する力。唐書、張元素傳「弘論レ事、有二――一」‖回天之力。

【迴風】クヮイフウ　つむじかぜ。杜甫詩「急雪舞ニー――」‖回風・旋風。

【迴文】クヮイブン　詩詞の循環して讀を成すもの、晉以後盛んに行はる。傳咸に――反覆詩あり、梁簡文帝に――詠扇銘あり、金石索に六朝の呼の――鏡銘あり。侍兒小名錄「前秦苻南將軍竇滔有寵姬趙陽臺、滔之別所、秦蘇來而寵瑤、苦加二錘撻一、滔深恨之、滔鎭二襄陽一、與二陽臺一之任、絕二蘇氏音問一、蘇悔恨自傷、因織レ錦ー――圖二詩二百餘首一、計八百餘字、縱橫反覆、皆爲二文章一、名二曰璇璣圖一、遣二者頭二寧玉一、襄陽、滔覽二錦字一感其妙絕、因具二車徒一迎二蘇氏一」

【迴鸞】クヮイラン　天子の車駕の都に還るにいふ。宋之問詩「――指二帝疇一」

【迴雪】クヮイセツ　古の舞曲の名。初學記「古之舞曲、有二――一七盤一」陳信陵、陽春綠水之曲、對編ー――之舞」

【迭】クツ　㊥

○はやし、すみやか(疾)○人名。南宮ー――は魯の大夫(論、憲問)

【逆】ゲキ　ギャク　陌

○さからふ(迕)道理にしたがはず。順の對。書、大禹謨「從」「凶」たがふ(違)物事の順序がちがふ、もとる(戻・拂)○そむく(反)「畔ー」「反ー」○みだる

(亂)○むかふ、むかへる(迎)「日ー」○まちようける。○うく(受)儀禮、聘禮「衆介皆ー命、不辭」○しりぞく(卻)○あらかじめ、前以て、事に先だちて豫め度る、推測する。論、憑問「不ー」詐」○のぼせ、のぼす。○さか、さかさま。

同訓異語 逆・忤の訓は忤(六四〇頁三段)の條を見よ。○迎・向・迎・邀・迓・逢の訓は向(三〇六頁四段)の條を見よ。

【逆詐】ギャクサ　人が己を欺くことなきかと未だ終らざる前に豫め疑ふ。論、憲問「不ー」詐、不ー」億」不信」

【逆睹】ギャクト　あらかじめ見る、事前に豫め知る。諸葛亮、出師表「至於成敗利鈍、非臣之明所ー」能ー」也」‖逆觀・先見。

【逆備】ギャクビ　あらかじめ備へる。左、宣三、注「鼎ニ鬼神百物之形ニ使ニ民ー」ー之」‖預備。

【逆防】ギャクボウ　むかへてふせぐ。周禮「凡諸侯入、王則ー」ニ」于畿」

【逆鱗】ギャクリン　天子のいかり。韓非、說難「夫龍之爲ノ蟲也、柔可ニ狎而騎ニ也、然其喉下有ニ」徑尺ニ若人有ニ逆鱗ノ之者ニ則必殺ノ人、人主亦有ニ」ー」、說者能無ニ」嬰ニ人主之ー」ー」鱗矣」

【逆旅】ギャクリョ　やどや。莊、山木「市南宜僚見ニ魯侯ー」ー、魯侯有ニ」憂ノ色ー」ー」ー」

冬愈二風水ノ一ー開紙幅」＝狂瀾。
【逆流】ギャクリュウ　○ながれにさかのぼる。又、さからひながれる。留雅「レー而上曰二溯洄一」○佛ブッ生死の流に逆ひ六塵に染まずして道に入る。
【逆診】ギャクシン　わざはひ。江淹賦「ー一鬼、函妖鎖舒」

【迓】コウ　宥　有

遐ーはたまさかにあふ、期せずしてめぐりあふ。詩、邶風「遐ー相遇」

【迹】セキ　シャク　陌　跡・蹟と通ず

○あと、あしあと「足ー」「鳥ー」「馬ー」「躁ー」○たづぬ、あとを追ふ。漢書、杜欽傳「將以求天心」「得失ー也」○ゆくて、ゆくへ。○事實のあとかた「王ー」「勲ー」「治ー」「陳ー」「遺ー」「舊ー」○おこなひ（行爲）いさを（功績）わざ（事業）すべて功業の見るべき者「勤ー」○事實に循ひて考へる。漢書、功臣表「ー漢功臣、亦皆割符世爵」○以前のしさたり、先例、舊慣。論、先進「不踐ー」
【蹤ノ迹】ソウノセキ　あとかたを留めぬ、消えて無くなる。唐書、劉栖楚傳「宿姦老黠レー」
【違レ迹】イセキ　遠方へにげる。業餘、報二魏惠王一書「レー王都」
【不レ踐レ迹】フセンノセキ　前人の行に遵ひ由らずして己の意のままに行ふ。論、先進「子張問二善人之道一子曰、——、亦不レ入レ室」
【遵レ迹】ジュンセキ　足あとを消す。淮南子「欲レー而走二塗中一」其の爲す所、其の目的とする所と反する喩。

【送】ソウ　送

○おくる、人をみおくる「ー行」「餞ー」「郊ー」「奉ー」「贐ー」○みおくり。○やる（遣）あちらへやる「ー舊迎新」「ー往迎來」○つかはす、物を致す「傳ー」「遞ー」「運ー」○物を贈る。○おくりもの。史記「受故吏ー」「國除」
【同訓異字】送・贈・餽・餞・餌・歸・賄・遺・贐・餞・贐・賄○送は送迎・送別と連用す、人の出立を見おくるなり、また目送は目にて見送る義。又物をおくり届けるにも用ふ。送レ罪・送レ茶の類。○贈は人に物をやる義、贈の字の意あり、物をやれば、先方が富み増すなり。○餽・餞の二字は食物をおくるなり、餞は生物をおくるなり。○餌は餽に同じけれども、食物のみに限らず。孟子「餽二兼金一百一」○賄はおくりつけてやりきるなり。論語「齊人歸二女樂一」○賂は贈りて先方へのこすなり。韓文「作二師說一以貽レ之」○遺は香物又は使などを人につかはすなり。○贐・餞の二字は、共に旅立の人に、はなむけをおくるなり。○賄・賂は共に香奠をおくるなり。
【送疫】ソウエキ　疫病神をおひはらふ。後漢書、禮儀志「侲子備、請遂レ疫（中略）持二炬火一ーレ出二端門一」
【送窮】ソウキュウ　びんぼふ神をおくり出す。韓愈、送窮文「主人三揖二窮鬼一而告レ之曰、聞子行有レ日矣、我有二資送之恩一、子有レ意於行乎、子之儕朋各有二名字一、智窮・學窮・文窮・命窮・交窮、凡此五鬼、爲二吾五患一」
【送歌】ソウカ　よしみの心を餌にはこぶ。賂資王詩、「許望多情偏ーレ」
【送迎】ソウゲイ　人をおくると、むかへると。晉書、袁甫謙傳「吾ー一不レ出レ門、貧不レ過二蓽門一」
【送敬】ソウケイ　れいをのべる。後漢書、周燮傳「遊生ー一、遂辭レ疾而歸」注「ー猶二致謝一也」＝致敬。
【送目】ソウモク　ことばを以て人をおくる。史、孔子世家「老子曰、富者送レ人以レ財、仁者送レ人以レ言」
【送葬】ソウソウ　柩をおくりながら泣く。
【送レ故迎レ新】ソウコゲイシン　前任者を送り新任者を迎へる。漢書、王嘉傳「孝文時、吏或居レ官數月、而——、交二錯道路一」
【送葬】ソウソウ　死者をのべにおくり葬る。後漢書、梁竦傳「帝親臨ーレー」＝葬送。
【送死】ソウシ　○父母を送葬する。孟子「能ーレー可三以當二大事一」○自ら身を殺すの道を取ることいふ。三國志、諸葛瑾日、據自ーレー、而可レ迎レ之耶」
【送車】ソウシャ　旅行する人をみおくる車。蘇洵、送石昌言北使序「從騶數百、ーー千乘」
【送車千乘】ソウシャセンジョウ　葬式、又、旅立を送る者の多きをいふ。漢の酈孟、其の母を葬る、送車五千乘。前條參看。
【送婦】ソウフ　宿借を他の家の戸籍中に移す。
【送達】ソウタツ　次條に同じ。
【送致】ソウチ　物をおくりとどける。＝送達・送遣。
【送電】ソウデン　電流を通ずる。
【送梅雨】バイウ　五月にふるあめ、つゆあがりの雨。韓雅「江南三月爲二迎梅雨一、五月爲二——一」
【送別】ソウベツ　たびだちする人を見送る。李嘉祐詩「淮南頻ーレー、臨レ水惜二殘春一」
【送老】ソウロウ　老後の時日を消遣する。杜甫詩「何時一茅屋、ーレー白雲邊」

【退】㊀タイ　㊁トン　隊　願

㊀しりぞく(卻)退の對。○さる(去)しざる、あとへひく(引)「一卻」○ゆづる、へりくだる(遜讓)「謙ー」○さく(避)○かへる(返)○ことわる(辭)官を辭する。漢書「功遂身ー、天之道也」○とほざける(遠)「ー小人」すつ(舍)○やむ(罷)○へる、衰へる「衰ー」陸游詩「病ー初皆酒」○ほらす(減)「減ー」○くじく(挫)○さげる、おとす、官位などをおとす。○氣よわし。論、先進「求也ー」○ー然ば和柔かの貌。㊁おつ、色がさめる。‖遲。

同訓異字　退・屏・斥・卻・黜・擯・貶○退は進の反なり、又逃讓の義にも用ふ、退士は退きて隱れる士。退筆はかきさしたるちび筆なり。老子「功成名遂身退、天之道也」○屏は除也、去也、斥也、放去也、又退也と註す、其の場をはらひのけるなり。衍義「屏二竄小之曲說一」○斥は斥逐・屏斥と連用す、屏よりは強し。唐太宗紀「親二君子一斥二小人一」○卻は止也、不レ受也、又退也と註す、そこを避けて退き、又ことわりてかへすなり。且職且卻・卻要與レ雨者雲の如し。○却は卻の俗字なり。○黜は貶の反、官位を貶し下ぐるなり。論語「柳下惠爲二士師一三黜」○擯は斥也、棄也、外へしりぞけ棄つる義、擯斥・擯棄と連用す。○貶は損也、壓也、おとしさげる。左傳序「以二一字一爲二褒貶一」

【退引】タイイン　○後へひく、ひきさがる。‖引退。○國のきひきの音便、まぬかれる。

【退院】タイイン　○寺僧の隱居する義。瀧山清話「長老遂ー而去」○國入院患者が病癒えて病院を去る。

【退屛】タイヘイ　しりぞきかくる。劉滄詩「白雲深處昇二郎庶一ー二衙門一與レ俗疎」

【退嬰】タイエイ　しりぞきまもる。進取の對。

【退役】タイエキ　國退職に同じ「ー一軍人」

【退衙】タイガ　役所よりしりぞく。白居易詩「一レ一歸遲夜、拜レ表出較レ晨」‖退廷・退朝。

【退行】タイコウ　しりぞきさる。史記、自序「最公謙德、堯惡ー一」‖退去。

【退耕】タイコウ　官を退きて耕作する。史、吳世家「子胥退而耕二于野一」

【退朗】タイロウ　官をやめてひまで居る。宋史、吳奇傳「ー一者十四年」‖退職閒居。

【退休】タイキュウ　○しりぞきてやすむ。○辭職。

【退卻】タイキャク　あとへひきしりぞく。魏志、少帝紀、注「當今宜レ捐二淮漢以南一ー一遠之」

【退去】タイキョ　しりぞきさる、たちのき。

【退匿】タイトク　○しりぞき屛する。宋史、李綱傳「創業中興之主、盡二其在レ我而已、其成功歸二之於天一、今未嘗盡二人事一、敵至而先自ー一、而欲レ責二功於天一、其可乎」○あきはてる。地持論「起ー一心」

【退軍】タイグン　軍隊をあとにひく。‖退陣。

【退化】タイカ　生物の器官の構造作用などが漸次に簡單或は衰失するに至るをいふ、男子の乳房の類。進化の對。

【退官】タイカン　官職をやめる。‖退職・退任。

【退藏】タイゾウ　しりぞきかくれる。易、繫辭「聖人以二此洗一レ心、ー一二于密一」

【退散】タイサン　しりぞきて散り去る。後漢書、班超傳「因各ー一」

【退士】タイシ　官を辭して家に退隱せる士。范成大詩「恰如ー一重車後、紗利交親不レ到レ門」

【退止】タイシ　しりぞきとどまる。陸機文「知レ進而ー一」

【退社】タイシャ　其の社に勤めることをやめる。

【退讓】タイジョウ　へりくだりて人にゆづる。曲禮「君子恭敬撙節ー一以明レ禮」‖謙讓。

【退守】タイシュ　しりぞきまもる。唐書、張仁願傳、兵貴二攻取一謀ー一」

【退縮】タイシュク　しりぞきちぢまる、元氣が衰へよわる。‖縮退。

【退出】タイシュツ　まかる、ひきさがる。

【退食】タイショク　朝廷より退き私宅にかへりて食事する。官吏が務を終へて家に歸り休息する義。詩、召南「ー一自レ公、委蛇委蛇」

【退職】タイショク　官職をやめしりぞく。‖退官・退任・致仕・辭職。

【退省】タイセイ　○しりぞきて我が身を反省する。論、爲政「退而省二其私一、亦足二以發一」○官省より退出する。‖退廷・退食。

【退靜】タイセイ　隱遁せずして心やすらか。南史「外雖ー一、內不レ免二心鏡一、故見レ譏二于時一」‖退棲。

【退栖】タイセイ　國ねつざまし。‖辭職。

【退斥】タイセキ　しりぞく。杜甫詩「吾聞古昔士、窮達各有レ時、終不レ免、竄二逐荒徼一、以致レ貴、亦於ー一」

【退席】タイセキ　其の座席より引きさがる。‖退座。

【退然】タイゼン　へりくだりて柔和なる貌。楕弓「ー一、如レ不レ勝レ衣」

【退走】タイソウ　しりぞきはしる。殷梁傳、注「望レ風ー一」

【退息】タイソク　しりぞきていこふ。朱熹詩「遁蹤橋二虎溪一ー一常端莊」

【退卒】タイソツ　退役せる兵卒。劉後村、老馬詩「身同ー一二支二廚料一」

【退損】タイソン　へりくだる。晉書、安平王孚傳「孚性至慎、宣帝時執レ政、常自ー一」道德指歸論「開易ー一、勝二

於無爲ニ」
【退懦】タイ　ひかへめにしてよわし。歐陽修詩「心志亦ー〻」＝懦退。
【退治】タイ　敵又は害惡を爲すものをうち滅ぼす。
【退陣】タイ　退軍に同じ。
【退職】タイ　官職から退出する。
【退廷】タイ　○朝廷より退きて家に歸ること。＝退朝。○法廷即ち裁判所より退出する。
【退朝】タイ　朝廷から退出する。＝退廷・退食。
【退潮】タイ　ひきしほ。＝落潮。
【退轉】タイ　○破產して他にひきうつる。○佛　佛を信ぜずして他へ心を移すこと。
【退屈】タイ　しりぞきかくれる。世說「諸公望ニ其神雲ニ一時ー〻」
【退任】タイ　退職に同じ。
【退敗】タイ　しりぞきやぶる。南史、謝幾卿傳「軍主沿陽ー〻」
【退避】タイ　しりぞきさける、引退する。漢書、張禹傳「禹乞ニ骸骨ニ歸ニ故鄉ニ一ー〻」
【退筆】タイ　さきのきれたる筆、ちびふで。蘇軾詩「ー〻如ニ山未ニ足ニ珍、覆ニ瓿萬卷始通ニ神」＝禿筆。
【退筆塚】タイヒツ　ちびふでを埋めしつか。尙書故實「僧智永積年學ニ書、有ニ禿筆頭十甕ニ瘞ニ之、號ニ一ー〻」
【退歩】タイ　あともどりする。進歩の對。
【退老】タイ　官をやめて隱居する。白居易、洛陽池上篇「白氏叟樂天ー〻之地」
【退路】タイ　にげみち、しりぞくみちすぢ。
【退紅】コウ　うすべに。王建、牡丹詩「紛光深紫膩、肉色ー〻鮮」＝淺紅。
【退色】シキ　色がさめる。又、其の色。＝褪色。

【迺】

乃（六一五）に同じ。迺は俗字

【逃】

タゥ　逃は俗字

○にぐ、のがる、にげる（出亡）「ー亡」「遁ー」○さく（避）さる（去）孟、盡心「ー〻必歸於楊」○まぬかれる（脫）逃し去る。史、項羽紀「漢王ー」○まじろく（瞳轉）孟、公孫丑「不ニ目ー」（目のむきをかへず）

同訓異義　逃・遁・避・逋・道・北・竄

○逃はたちのく、にげる、遁逃と用ふ。史記「伯夷曰、父命也、遂逃去」○遁はにげかくれる。左傳「臾ニ柴而遁」○避は遁に同じ。○逋はにげなり、とりにげ、借りにげに用ふ。書經「于伐ニ殷逋播臣ー」○道は逃なり。書經「自作孽不ニ可ー〻」○北はうしろを見せる義。史記「吾三戰三北」○竄はにげかくれる。逋竄・鼠竄と用ふ。

【逃逸】イツ　にげのがれる。北史、劉延明傳「懼ー罰ー〻」＝遁逸。
【逃隱】イン　のがれかくる。史、伯夷傳「魏闕ニ天下於許由ニ許由不ニ受、恥レ之ー〻」＝遯隱。
【逃河】カ　鳥の名。鵁鶄ともいふ、もと滄河に作る（詳瓊、詩疏）がらんてう。
【逃嫁】カ　夫を棄てて更に他にとつぐ。史、始皇紀「妻爲ニ一ー〻子不ニ得レ母、風化廉清」
【逃歸】キ　のがれかへる。左傳「晉太子圉爲レ質ニ于秦ニ將ニ一ー〻」
【逃去】キョ　にげさる。史、荊軻傳「荊軻踐ニ與ニ荊軻ニ博爭レ道、荊軻怒而叱レ之、荊軻默而ー〻」＝遁去。
【逃藏】ゾウ　にげかくれる。
【逃散】サン　にげちる。唐書、禮樂志「黃巢之亂、樂工ー〻」
【逃竄】サン　にげかくれる。魏志、田疇傳「時負レ義、ー〻之人耳」＝逃匿。
【逃暑飲】ショインショ　暑氣を避けんために酒宴を開く。陸游詩「安用更爲ニ——、虛堂三伏自蕭然」
【逃世】セイ　隱居して世と交らず。陳奠義詩「老夫ー〻久、堅坐廬ニ陰晴」
【逃席】セキ　宴會の時、辭せずして去る。木華詩「連飛ニ數十觥、不レ勝ニ其困ー〻而去」
【逃潛】セン　にげかくれる。裴度文「隱ニ飮ニ啄於仁義ニ豈ー〻於阻艱ニ」
【逃禪】タン　浮世を脫して禪に入る。杜甫詩「醉中往往愛ニ一ー〻」＝戰に臨んでおのがる、酒を飮んで佛戒にそむき離れる義（訂譌雜錄）
【逃走】ソウ　にげはしる。＝遁走。
【逃匿】トク　にげかくれる。孟、滕文公「益烈ニ山澤而焚レ之、禽獸ー〻」＝逃竄。
【逃遁】トン　にげる。史、魏相國世家「失レ軍亡レ將、逃レ身遁者數矣」＝逃避・逃竄・逃遁。
【逃背】ハイ　のがれそむく。金史、太宗紀「其奴婢部曲、昔離ニ一ー〻今能復歸者、竝聽レ爲レ民」
【逃亡】バウ　にげうせる、逐電する。
【逃避】ヒ　のがれさける。詩經、疏「雖ニ則勤苦ニ無レ所ニ一ー〻」
【逃逋】ホ　のがれる。王延壽「三年竟亦無ニ一ー〻」＝逋逃。
【逃北】ホクホイ　にげやぶれる。賈誼、過秦論「百萬之徒、ー〻而逐奔」＝遁北。
【逃名】メイ　名譽をさけて求めず。漢書、法眞傳「レ一ー而名彌隆、避レ名而名我追」
【逃逸】ヨク　ふちをじたいする。後漢書、何敞傳「豈俱子文レ一、公儀退レ食之比哉」

【追】

㊀ツヰ　㊁タイ　灰　支

㊀おふ、おひかける「ー敵」「ー捕」「窮ー」したがふ（隨）○およぶ（及・逮）○すくふ（救）論、微子「來者猶可ー」○おくる

（送）みおくる。○おひはらふ（斥）おひのける（逐）「ー放」○さかのぼる（遡）已往にさかのぼる「ー念」「ー慕」「ー尊」○とぐ（遂）㊀みがく、玉石をみがき治める。詩、大雅「ー琢其章」○鐘をかけるひも（鐘紐）孟、盡心「ー蟲」（鐘の紐を蟲が喰ふ）○母ーは夏后氏の冠。

追加 フォ 追・逐・趁 ○追は遂也、猶也、遂也と註す、逃る者を追ひかけ捕ふる義。漢書「霸何日、臣非ニ敢亡ニ、追ニ亡者ニ耳」○逐は此の方より物をおひ拂ふ義、驅逐と通用す、逐臣とは國外へ、逐ひ拂ひたる臣をいふてまた追と同じく物をおひまはす義にも用ふ。史記「逐ニ水草ニ而居」○趁は音チン逐なり、あちこちとおふなり。杜甫詩「羨魚情趁ニ魚」

【追捧】ツイホウ 敵の後をおほひおそふ、追撃陣牽。北史、魏宗室元維傳「乘ニ勝ー一、襲ニ其父母妻子ニ」

【追遠】ツイエン 祖先の德を追ひ思ふ。論、學而「愼ニ終ー一、民德歸ニ厚」

【追憶】ツイオク 過ぎ去りし事をおもふ。細照詩「ー一宿昔時、靡容滿ニ心耳ニ」

【追加】ツイカ ○あとから增し加へる。○あとからくは（贈る。漢書、五行志「ー一章號」‖追贈。

【追行】ツイカウ ○後からおこなふ。○後からおひかけてゆく。

【追考】ツイカウ 過去の事をかんがへる。‖追思。

【追孝】ツイカウ 死にたる父母によくつかへる。書、文侯之命「ー一于前文人ー」

【追號】ツイガウ あとから死者に名をつける。唐書、睿宗紀「ー一天后、曰ニ大聖天后ー」

【追感】ツイカン 過去の事を思ひて心に感ずる。北史、趙修傳「ー一舊意ニ經ニ恒其家ー」

【追記】ツイキ あとからかきしるす。文心雕龍「仲尼微言、門人ー一」‖追錄。

【追睎】ツイキ 追慕に同じ、睎は慕。晉書、寄ニ歐陽舍人ー一書「ー一雅德ー」

【追騎】ツイキ おひかけて來る騎兵。史、李將軍傳「射ニ殺ー一ー」

【追究】ツイキウ 其れから其れへと深くおしきはめる。

【追來】ツイライ ○あとからおひかけてきがす。漢書、王溫舒傳「吻都ー一」○あとから慶來する。

【追給】ツイキウ あとからとがめる。王義之、與ニ殷浩ー一書「ー一往事ニ詠何所ニ復及ー」

【追及】ツイキフ おひつく。漢書、高帝紀「高祖乃ー一、問ニ老父ー」

【追悔】ツイクワイ あとからくいる。易經、疏「悔者其事已過、意有ー一之ー也」

【追懷】ツイクワイ 追思に同じ。‖追憶。

【追歡】ツイクワン たのしみを尋ねる。蘇軾詩「往歲ー一地、寒窗夢不ー成」‖尋歡。

【追啓】ツイケイ 手紙の本文に添へて書き加へる時、其の冒頭におく語。‖追白・追申。

【追擊】ツイゲキ おひかけてうつ。史、項羽紀「楚又ー一」

【追悔】ツイクワイ あとからくいうらむ。唐書、侯宮宋若照傳「帝悔ニ其讒ー一ー之ー」

【追想】ツイサウ 追思に同じ。

【追殺】ツイサツ おひかけてころす。史、高祖紀「使ニ騎將灌嬰ー一項羽於東城ー、斬首八萬、遂略ニ定楚地ー」

【追思】ツイシ 過去の事をおもひ出す。揚志、劉馥傳「揚州士民ー一之ー」‖追念・追想・追懷・追憶。

【追諡】ツイシ 死後におくりなを贈る。漢書、元帝紀「元始元年五月、ー一孔子、曰ニ褒成宣尼公ー」

【追申】ツイシン 手紙の本文に書き加へることば、なほなほがき。‖追啓。

【追補】ツイホ 死亡せし人をあとから補官する。

【追謝】ツイシヤ あとからことわる。南史「非ー一之ニ謝所ニ不ー及矣」

【追賞】ツイシヤウ 事後又其の人の死後におつかけて褒美をやる。‖追奬。

【追盛】ツイセイ おひつめる。唐書、劉黑闥傳「驍將劉弘基ー一、賊不ー得ー休」

【追從】ツイシヨウ 國こびへつらふ。‖諂諛・慢諛。

【追頌】ツイシヨウ 死後にほめたてる。‖追釋・追奠。

【追贈】ツイゾウ 死後に其の人の善行をほめたたへる。後漢書、祭遵傳「范升上疏、ー一遵ー」‖追奠。

【追蹤】ツイセウ 人のあとを追ひて尋ねる。轉じて、前事を尋ねる。杜甫詩「ー一話潛莊」‖追跡。

【追隨】ツイスイ 人にしたがひて遊ぶ。杜甫詩「看君多ニ道氣ー一、從ー此數ー一」‖隨從。

【追捕】ツイホ おひかけみだる。蘇軾、積欠駄「逋逃ー一」

【追惜】ツイセキ 死後其の人をかなしむ。現志、郭嘉傳「ー一奉孝ー一、不ー能ニ去レ心」

【追跡】ツイセキ あとをつけて尋ねる。

【追善】ツイゼン 死者の冥福に佛事を行ひて其の冥福をいのる。無量壽經、疏「孝子ー一」‖追福。

【追餞】ツイセン 去りし人の後を追ひ行きて送別の宴を設ける義。宋史、洪遵傳「ー一至ニ十里ー一、勞苦如ニ平時ー」

【追薦】ツイセン 死者の追善供養の佛事。釋氏要覽「人亡每ニ至ニ七日ー一、必營ニ齋ー一」

【追訴】ツイソ 後からつけたしてうつたへる。

【追贈】ツイゾウ 死者に官位をおくる。後漢書、公孫述傳「ー一ニ少ニ爲ニ太常ー一」

【追尊】ツイソン 死後にあがめたふとぶ。史、始皇紀「ー一莊襄王ニ爲ニ太上皇ー一」

【追儺】ツイナ　おにやらひ、節分ブンの夏まき。

【追逮】ツイタイ　おひかけとらへる。宋史、吳遵路傳「駅吏殿廬、略無二一一」

【追肘】ツイチウ　にぐるをおひうつ。後漢書、光武紀「都尉一一」

【追悼】ツイタウ　死後に其の人を悲みいたむ「一一會」

【追奪】ツイダツ　生前に授けたる位をとりあげる。

【追逐】ツイチク　○おひつおはれつして爭ふ。宋史、蔣堂傳「一一聊嬉娛」‖競逐。○互に相競ふ。宋史、蔣堂傳「與二京師少年一一一角紙鳶鬪、繞レ簷不レ去」

【追徵】ツイチウ　あとから租稅をとりたてられる。韓愈、論二太皇一書「有者皆已收納、無者徒被二一一一」

【追市】ツイシ　死後に其の人をとむらふ。

【追跡】ツイセキ　あとから追ひかける。魏志、鄧艾傳「楊欣等一一二于彌川口」大戰」

【追納】ツイナフ　あとからつけ加へてをさめる。

【追認】ツイニン　事後に承認する。

【追念】ツイネン　追想に同じ「左、成十三」

【追隨】ツイスイ　あとにつきしたがふ。韓愈詩「一一移日相一一」‖陪從。

【追放】ツイハウ　罪人をおひはなつ。‖放逐。

【追奬】ツイシヤウ　死後に其の功德をほめる。‖追賞・追美。

【追自】ツイジ　追啓に同じ、自はまうす。‖追申。

【追迫】ツイハク　おひせまる。後漢書、王常傳「賊一日數合、賊反走入レ城、當二一一之」

【追尾】ツイビ　○後をつけて行く。○圖電報の受信人が指定の場所に在らざる時に、其の行先をおうてわたす手續。

【追美】ツイビ　死者をあとよりほめる。漢書、趙充國傳「四美咨有レ管、上思二將帥之臣一一一充國」

【追贈】ツイゾウ　死者の爲めに官職をいのる。北史、隋文獻皇后傳「上爲立レ寺一一一」‖追薦。

【追兵】ツイヘイ　敵を追ひ撃つ兵。通鑑、唐紀「李晟等晝夜一一一」

【追捕】ツイホ　○おひかけてとらへる。漢書、韓延壽傳「吏無二一一之苦一、民無二離楚之憂一」○圖一一使ツイは王朝時代に諸國に置きし官、賊を追捕することを掌る。

【追贈】ツイゾウ　死者又は遠く去りたる人をおひしたふ。後漢書、陰皇后紀「明帝性孝愛、一一無レ已」

【追錄】ツイロク　後から書きしるす。又其の書。‖追記。

【追王】ツイワウ　死後に王號を奉る「中庸」

【迸】ヘウ　五　逢とは別

人の姓。孟、離婁「一蒙學射於夫一一於羿、羿殺二逢蒙一」

【迸信】ツイシン　理非をわきまへずして、みだりに信ずる。‖妄信。

【迸淚】ツイルイ　○わたしばの所在をふみまよふ。孟郊詩「桃源何處是、游子正一一」○轉じて、すべて方向にまよふ。○圖衆生の迷苦する三界・六道に喩ふ「一一慈航」慈航は佛法に喩ふ。

【迷煩】メイハン　まよひわづらふ。魏武帝、秋胡行「作二爲清角韻一、窓中一一」

【迷謬】メイビウ　まよひあやまる。抱朴子「一一者、無二自見之明一」

【迷昧】メイマイ　まよひてくらしい。南史、齊高帝策文「張淹一一、弗二顧二宋朝一、爰自二南區一、志圖二東吳一」

【迷妄】メイマウ　心のまよひ。

【迷悶】メイモン　心みだれてくらむ。列子「桑人逢氏子、有二一一之疾一」

【迷夢】メイム　心のまよひ。

【迷霧】メイム　方角の分らざる深ききり。心のまよひに喩ふ。

【迷悶】メイモン　まよひもだえる。楞嚴經「汝自一一幾二未受一」

【迷離】メイリ　明かならざる貌（一說に散亂の貌）古詩「雌兎眼一一」‖模糊。

【迷路】メイロ　方角の知れざるみちすぢ。

【迷盧】メイロ　蘇迷盧（一六九四頁二段）の略。須彌山をいふ、頂上は高さ八萬由旬ありといふ。

【迷樓】メイロウ　迷宮に同じ。古今詩話「煬帝時、新宮既成、帝幸レ之、曰使二眞

仙遊ヒ此、亦當ニ自迷ニ乃名ニ一一」【迷惑】ワク　○道ヲ失ひてまよふ。韓非、說林「―ニ失レ道」○心にまどふ。楚辭「中餐風以―ニ一」○圖やくかいで困る「―ニ―をかける」

【洌】レツ　レイ　屑　厲

○さへぎる(遮)○とどむ(遏)○さきばらひ、車駕出づる時、道を清め、行人を止める。後漢書、輿服志「遮ニ一出入ニ」【迾辛】ソン　道を清める辛。張衡賦「―ニ清候」

七畫

【迶】イツ　先

○氣の行く貌。○一爾はにこにこと笑ふ貌。又、顏色の寬舒ニこやかなる貌。○一然はくつろぎ(寬緩)たる貌。○ところ。‖攸。○よる。より。由の古字。【迶爾】イツ　顏色を和げて笑ふ貌。班固、答賓戲「主人―ニ而笑」‖莞爾。【迶然】ゼン　○自得の貌。くつろぎたる貌。史、趙世家「列侯―ニ一」○笑ふ貌‖迶爾。

【迷】キツ　先

○つれあひ、あひて(匹偶・配偶)詩、周南「君子好ニ一」○あつめる。あつまる(衆敎)詩、大雅「以爲ニ民ニ一」○あふ(合)

【逕】ケイ　徑　徑と通ず

○みち、こみち、ちかみち、歩道。○すぐ(直)○ちかし(近)まっすぐにして近し。○とし(疾)○いたる(至)○すぐ(過)みちす、こみちをとほりて至る。【掃レ逕】ソウケイ　門前のこみちを掃除して賓客の來るを待つ。杜甫詩「―レ掃ニ三益ニ」【逕庭】テイケイ　相へだたること遠きをいふ。逕は狹く庭は廣し、故に喩ふ(一說に逕と中庭とはかけはなれてゐるが故)莊、逍遙遊「大有ニ一ニ一、不レ近ニ人情ニ焉」‖徑庭。

【這】㊀ゲン　㊁シャ　馬　祃

㊀むかふ(迎)㊁これ。この(此)者(者は俗語にては此と同義に用ふ)に同じ「一個」「一般」唐書、史思明傳「一賊誤ニ我」○圖はらばふ(匍匐)

【這箇】シャコ　這般に同じ。五燈會元、如何有ニ一箇消息ニ」‖此箇。【這般】ハン　この。これ。朱子語錄「―ニ一人占得、便把ニ作那般用ニ」【這麼】マ　このやうに。かやうに。

【造】㊀サウ・ゾウ　㊁サウ　晧　號　㊀平聲

㊀つくる(作爲)物を製作する「製ニ一」○たつ(建設)「建ニ一」「築ニ一」○はじめて物をつくる「創ニ一」「肇ニ一」「肇ニ一」○はじむ(始)はじめて。書、伊訓「―ニ攻自ニ鳴條ニ」○いつはる(虛構)「假ニ一」㊁なす。なる(成就)○きたる(來)「原被兩ニ一」(一說に造は曾、兩方の人の義)○いたる(詣)「一ニ家」○ゆく(適)○すすむ(進)○ならぶ(比・竝)「一ニ舟」○とき(時)「來ニ一」○いる(納)○卜するとき龜を灼き荊を燒く處。○一次はにはか(倉卒・急遽)○圖みやつこ、古、朝廷に奉仕する文武百官の稱。

【造士】ザウシ　○學問の成就せし士。禮、王制「升ニ于學ニ者、不レ征ニ于司徒ニ」曰ニ―ニ一」‖俊士。○士を養成する。

【造次】ザウジ　つくりはじめる。易、屯卦「天造草昧」注「屯者、天地ニ一之時也」阮籍、樂論「故ニ一之敎、謂ニ之風ニ習而行レ之、謂ニ之俗ニ」【造次顚沛】ザウジテンパイ　わづかの間。造次は倉卒の際。顚沛は顚覆流離の際。論、里仁「君子無ニ終食之間違ニ仁、造次必於レ是、顚沛必於レ是」【造就】ザウシュウ　○往きて謁する。諭賓王書「蘇門清切、一一無レ緣」○其の才に因りて養成する「一ニ人才ニ」【造詣】ザウケイ　○人の家に往く。晉書、陶潛傳「醉輒便反、未ニ嘗有レ所ニ一ニ」○學問が深く進む。唐書、崔咸傳「咸一ニ窮道、閒遊ニ終南山ニ乘レ月吟嘯」【造言】ザウゲン　無根のことを言ひふらす。劇祿、地官「以ニ鄕八刑ニ糾ニ萬民ニ一七曰ニ一ニ之刑ニ」‖讒言。【造構】コウ　かまへつくる。後漢書、儒林傳序「凡所ニ一ニ二百四十篇、千八百五十室」【造作】ザウサク　○物をつくる。造は造、作時に作傳「緝治ニ一ニ」○圖家屋の建具裝飾など。

【造化】ザウクワ　天地自然の理。又、造物者。創造化育の謂。淮南、覽冥「懷ニ萬物一而友ニ一ニ」注「天地也」【造化小兒】ゼウクワセウジ　造物主を指していふ、小兒といふは戲言。唐書、文藝傳「杜審言疾甚、宋之問等省候、答曰、甚爲ニ一ニ所ニ苦ニ」【造花】ザウクワ　圖つくりばな。【造詣】ザウケイ　○學問が深く進む。唐書、崔咸傳「咸一ニ窮道、閒遊ニ終南山ニ乘レ月吟嘯」【造言】ザウゲン　無根のことを言ひふらす。劇祿、地官「以ニ鄕八刑ニ糾ニ萬民ニ一七曰ニ一ニ之刑ニ」‖讒言。【造構】コウ　かまへつくる。後漢書、儒林傳序「凡所ニ一ニ二百四十篇、千八百五十室」【造作】ザウサク　○物をつくる。造は造、作時に作傳「緝治ニ一ニ」○圖家屋の建具裝飾など。

【造士】ザウシ　○學問の成就せし士。禮、王制「升ニ于學ニ者、不レ征ニ于司徒ニ」曰ニ一ニ」‖俊士。○士を養成する。【造次】ザウジ　つくりはじめる。易、屯卦「天造草昧」注「屯者、天地ニ一之時也」阮籍、樂論「故ニ一之敎、謂ニ之風ニ習而行レ之、謂ニ之俗ニ」【造次顚沛】ザウジテンパイ　わづかの間。造次は倉卒の際。顚沛は顚覆流離の際。論、里仁「君子無ニ終食之間違ニ仁、造次必於レ是、顚沛必於レ是」【造就】ザウシュウ　○往きて謁する。諭賓王書「蘇門清切、一一無レ緣」○其の才に因りて養成する「一ニ人才ニ」

【造請】ザウ いたりてきげんを伺ふ。漢書、張湯傳「其一一諸公に不レ遜二乗輿一」＝往候。

【造船】ザウ ふねをつくる。祈禱、吾修傳「王濬將レ伐レ吳、一一于蜀一修二大之請一增レ兵爲二備」

【造端】ザウ 始めをなす。中庸「君子之道、一一乎夫婦」＝發端・發始。

【造酒】ザウ 酒をかもす。張載文「一一在レ秋、昔レ成在レ春」＝醸造。

【造謗】ザウ そしりの言をなす。史、李斯傳「入則心非、出則巷議、挾二主一以レ下レ之」

【造筆】ザウ ふでをつくる。顧愼子錄「愚恬一レ、古非レ無レ筆、但用二兎毛一、自レ恬始耳」

【造物者】ザウブツシャ 天地間の萬物を創造せし神。莊、大宗師「偉哉夫、一一」＝造物主・造化・天。

【造兵】ザウヘイ 兵器を製造する。

【造幣】ザウヘイ 貨幣をつくる。史、平準書「天子與二公卿一議二更レ錢一レ一以賤レ貴」

【造父】ザウホ 周の穆王の御者、善く馬を御せし人。荀、王制「王良・一一者、養二服叡者一也」

【造昧】ザウマイ 世の未だ開けざるとき。傳亮文「誼レ理本二于一一一而運二周于萬葉一」

【造立】ザウリフ 造り立てる。南史、竟陵王誕傳「一一第舍、窮二極工巧一、園池之美、冠二於一時一」＝建築。

【逍林】シャウリン 樹を植えて林をつくる。

【逡】

㊀ シュン
㊁ シュン
國風

㊀しりぞく、しざる（退）次第にあとしざりする。○足はやき兎。古、錢に通ず。戰國、齊策「東郭一一者、海内之狡兎也」㊁あとしざり。行きて進まず。賈誼、過秦論「九國之師、一一逃遁而不二敢進一」

【逡巡】シュンジュン あとしざり。行きて進まず。賈誼、過秦論「九國之師、一一逃遁而不二敢進一」

【逡遁】シュンドン 前條に同じ。漢書、平當傳「一一有レ恥」

【逡遯】シュンドン 逡巡に同じ。禮記、注「三退三一一也」＝遁道。

【逝】

セイ
ゼイ
國

○ゆく（往）○さる（去）論、陽貨「日月一一矣、歲不二我與一」○行く、進む。史、項羽紀「騅不一一分可二奈何一」○死亡する「長一」「去」「永一」○ここに、發語の助字。詩、邶風「一不二古處一」

【逝將】セイ ゆきさる。詩經「一一去レ汝、適二彼樂土一」

【逝水】スイ 次條に同じ。孟郊詩「四時如二一一一」

【逝川】セン ○ながれ去る川水。論、子罕「子在二川上一曰、逝者如レ斯夫」○一度去りて再び還らざるに喩ふ。李白詩「一一與二流光一、願念不レ待レ時」

【逍】

セウ
齊

ぶらつく、ぶらぶらとさまよふ。

【逍遙】セウヨウ ぶらぶらとさまよふ。徜徉自適の義。詩、鄭風「河上乎一一」說文「一一猶二翔翔一也」＝消搖・徜徉。

【逍搖】セウヨウ 前條に同じ。禮記「負レ手携レ杖、一一於門」

【逍遙遊】セウヨウユウ 莊子の篇名、開放にして拘らず、恰然として自適するの義に取る。

【逍遙自在】セウヨウジザイ 拘束する所なきをいふ。五燈會元「性空妙普薩主、建炎初、衛レ策往見二賊魁徐明一、明欲レ斬レ之、爲レ文自祭、有レ云、二十四歲、一一、逢レ人則喜、見レ佛不レ拜、賊驚異釋レ之」

【速】

ソク
屋

○すみやか、とし、はやし（急疾）「迅一」「急一」「疾一」「敏一」「神一」孟、公孫丑「德之流行、一一於置郵而傳レ命」○まねく（招）易、艮卦「有レ不」一之客三人來」めす（召）來たす「一」鵬」よぶ（呼）「一」友」○一一は相親附せざる貌。楚辭「一一而不二吾親一」又、蔌蔌と通じ、いやしげ（鄙陋）き貌。後漢書、蔡邕傳「一一方轂」○鹿の足迹。（爾雅）

【速寫】ソクシャ 其の行を速かにする。左傳「從者曰、噫、一一」轉じて今人の書寫、客を遊かふるに亦一一といふ。

【速記】ソクキ はやくしるす、速記法（簡單なる符號にて他人の口語を記錄する法）にて書き取る。

【速鬪】ソクトウ わざはひをまねく。左傳「去レ順效レ逆、所二以一一一也」

【速決】ソクケツ すみやかにきめる。晉書、陸機傳「陸機持二兩端一、軍不二一一一」＝速斷。

【速率】ソクリツ つみをまねく。書經「天非レ虐、惟民自一一」

【速射砲】ソクシャホウ 特別の裝置にて彈丸を速かに發射する火砲。

【速成】ソクセイ すみやかになしとげる。論、意問「非二求レ益者一也、欲二一一者也」

【速戰】ソクセン すみやかにたたかふ。左傳「隨侯曰、必一一、不レ然將レ失二楚師一」

【速斷】ソクダン すみやかに決定する。宋

書、王僧繍傳「臣謂、唯宜ニ一一ニ、不レ可ニ階梯一」‖速決。
【速度】ソク　物の運動するはやさ。‖速力・速率。
【速客】ソク　客をまねく。禮記「主人親一レ一」
【速赴】フク　すみやかにおもむく。易經、蒙「則以ニ一一ニ爲レ善」
【速力】ソクリョク　速度に同じ。
【速了】レウ　はやおてん。

【逐】チク　屋

○おふ(追)おひはらふ。○おひかける、おひまはす、かる(驅)「驅一」○したがふ(從)あとをつけて行く。韓愈、上張僕射書「一隊而趨」○しりぞく(斥)「斥一」「一出」おひはらふ。史、李斯傳「爲客者一」はなつ(放)「放一」○きそふ(競)「角一」「爭一」○もとむ(求)○物事を歷數するにいふ「一一」○一一ははやく馳する貌。又、駑鈍なる貌。又、物を追求して止まざる貌。

同訓異語　逐・追・逮の別は追(一九四四頁)の條を見よ。

【逐一】チクイツ　ひとつびとつ。東城老「一一指揮」‖一一。
【逐疫】チクエキ　やくはらひ。後漢書、禮儀志「先レ臘一日大儺、謂ニ之一一一」
【逐客】チクカク　外國より客分として來り仕ふる臣を逐ひはらふ(李斯、諫ニ一一一上書)
【逐次】チクジ　しだいに。‖漸次。
【逐臭】チクシュウ　くさきものを逐ふ、嗜好の偏僻なる喩。呂覽「人有ニ大臭者一、其親戚兄弟妻妾知識無ニ能與居者一、自苦而居ニ海上一、人有ニ說レ臭者一、其夜閭而不レ去」曹植文「謝ニ臣荀惠之芳、衆人之所レ好、而海畔有ニ一一之夫一」
【逐日】チクジツ　○日を逐ひて、毎日。○太陽を逐ひかける。列、湯問「夸父不レ量レ力、欲レ逐ニ日影一」○馬の行くことの速かなる形容。洞冥記「條國有ニ馬如レ龍、騰レ虛一レ」
【逐臣】チクシン　天子より放逐せられしけらい。劉禹錫詩「同作ニ一一君莫レ違、青山萬里一孤舟」
【逐逐】チクチク　きそひすすむ。左傳、晉侯一一‖競逐。
【逐鹿】チクロク　かちに乘りて逃むる。史、自起傳「諸軍一レ、逐ニ其鹿一、秦嘉兵二萬五千人、逐ニ趙軍後一」‖乘ノ勝。
【逐勢】チクセイ　優勢のある人をおひゆく。列子「工遖レ衡、仕一レ」
【逐斥】チクセキ　おひしりぞける。‖擯斥。
【逐翔】チクセン　なまぐさきものをおふ。王禹偁詩「一レ一甚ニ蚍蜉一」
【逐走】チクソウ　はしるをおふ。詩經、傳「遖レ飛一レ、取ニ其疾一而已」
【逐隊】チクタイオイ　衆人の行くに隨ひて行く。韓愈文「若使ニ隨レ行而入、一レ一而趨ニ」
【逐逐】チクチク　○必ず之を得んと欲する貌。一說、漸進して已まざる貌。易、師卦「虛視眈眈、其欲一一」○驚貨なる貌「正韻」
【逐遖】チクおふ(追逐)王逸、楚思楚歌「寒來暑往疎ニ一一」
【逐條】チクジョウ　○順次に個條なおふ「一一審讀」○ひとすぢ毎に。鮑照詩「珠水一一垂」‖毎條。
【逐電】チクデン　○電光を逐ふ如く極めてはやし。劉勰、新論「追レ風一レ、絕レ塵滅レ影」○圖チクかけおち、にげうせる。
【逐北】チクホク　にげるをおふ。管子「追ニ亡一一レ者、逐レ北」
【逐貧賦】チクヒンフ　漢の揚雄の作りし文。
【逐北】チクホク　にげる兵をおひかける。史記「齊人追ニ亡一一レ、所レ過城邑、皆降レ焉、遂北ニ一一」
【逐末】チクマツ　商賈をいふ。古、農を以て本と爲し、商賈を末と爲すが故。漢書「棄レ本一レ」‖書「農桑不レ修、遊食者多、皆由ニ去レ本一レ」故也」
【逐涼】チクリョウ　夏のすずみ。白居易詩「中有ニ一一人、羅敷猶掩レ息」‖納涼。
【逐鹿】チクロク　○しかをおふ。盧堂銘「一一者不レ見レ山、攫レ金者不レ見レ人」○鹿を以て帝位に比し、之を爭ふに喩ふ。史、淮陰侯傳「秦失ニ其鹿一、天下共逐レ之」轉じて廣く、或る目的の物を互に競ひて得んとするに喩ふ。

【遅】　チ　㣺

俗字　遲は

○たくまし、勢がさかんなり。たくましくす、思ふ通りにふるまふ「一一勢」「一意」○こころよし。こころよくす(快)左、隱十一「鬼神實不ニ一一於許君ニ」○つくす(盡)きはむ(極)○とく(解)左、隱九「乃可レ以一一」註「可ニ以解ニ患也」○はなつ(放)論、鄭黨「一一顏色」○しめくくる(檢束)不一は不檢の義。
【遅憶】チオク　うらみを思ふままにむくゆ。唐書、李紳傳「李宗閔故寒脊當レ路、固一是一レ」
【遅志】チシ　我が思ふままにする左傳「不レ說ニ一一於我ニ」‖遂意。
【不遅】フチ　○快しとせず。左、隱十一「鬼神實一レ一於許君ニ」○不檢束せず「正韻」

【遲】　チ

遲(辵部十畫)の俗字。

【遫】　ソク　㣺

○とほし(遠)書、牧誓「一矣西土之人」○とほざく。左、僖二八「絆ニ一王愚ニ」とほざかる。○

一一は利を欲する貌。楚辭、九章「悼來者之一一」

【途】 ト　ツ　園　又、塗・塗に作る

みち、みちすぢ（道路）「中一」「旦一」「窮一」

【途中】トチウ　みちのなかば。論、皇侃義疏「一一見二兩虎共食一牛一」‖道中。

【途牛】トギウ　みちのなかば。隋煬帝詩「渡舟水盡處、還輪途始牛」

【透】 トウ　名

○とほる。とほす（通徹）通過する。韓愈詩「表裏忽通一一」○すく。すかす、すきとほる「一明」○とびはねる（跳）「騰一」

【透映】トウエイ　すきとほりうつる。宋書「江波一一」‖徹映。

【透視】トウシ　心理の作用にて不透明體をすかして物を視る。

【透徹靈】トウテツレイ　遠近に從ひて物體を眼に映ずる大きの割合に異く法。

【透寫】トウシヤ　書畫などをすきうつしにする。

【透水層】トウスヰソウ　砂地などの如くよく水をとほす地層。

【透徹】トウテツ　すきとほる。杜甫詩「漢光初一一、秋色正清華」

【透明】トウメイ　すきとほりて明か。

【透明體】トウメイタイ　空氣・硝子の如くよく光をとほすもの。

【通】 トウ　ツウ　東　通音ツウ

○とほる（徹亨）とどく（達）いたる（至）晉語「道遠難一」○およぶ（及）○したがふ（順）淮南、主術「則治道一矣」○とどこほりなく行はる。○明かに知る、了解する「一曉」呂覽、簡選「此不一」孟兵者之論」○ひらく（開）「開一」○つらぬく（洞）「貫一」○のぶ（陳述）○すく（透）○ふ（經）過ぎる「一過」○すべて（總）すべくくる「一計」禮、王制「以三十年之一」制二國用」○あまねし（徧）一般「一常」「普一」○したしみまじはる「一好」「一歡」漢書、季布傳「非二長者一勿レ與一」○かよふ、ゆきゝする（往來）かよはす。○ひといろ、物の色の純なるもの「一出」○うまのくそ（爲矢）○文書の首尾完きものを數ふる數詞「一一」‖道。○男女がひそかに情を交ふはす「私一」左、莊十八「齊侯一焉」○井田上の區劃の名稱。漢書、地理志「方里爲井、井十爲一成」圖○みちすぢ。○人情に通じ歌舞遊藝などに關か、粹○注文品の品名、代價などを記する帳面。○如し「右の一」○似る「似一ふ」

【通有】ツウウ　一般の者が通じてもつ「一性」

【通有性】ツウイウセイ　其の部類に屬する者のすべてが有する性質。‖通性。

【通邑】ツウイフ　四通八達の都會。司馬遷、報二任安一書「一一大都」

【通韻】ツウイン　漢字の兩韻、又はそれ以上の韻の五に通用するをいふ。東・冬・江相通じ、魚・虞相通ずる類。

【通運】ツウウン　荷物を送りとどける。

【通家】ツウカ　父祖の代より親しく交際せるいへ（後漢書、孔融傳「融造二李膺門一曰、我是李君一一子弟、膺問レ之、對曰、先君孔子與二君先人李老君一同レ德比レ義而相師友、則融與二君累世一一」

【通曉】ツウゲウ　○事理に通じてただし。魏志荀彧傳「清秀一一、有二王佐之風一」○書名、五十五卷、明の方以智撰す、名物・訓詁・音韻等の考證を主とす。

【通行】ツウカウ　○道をとほりゆく。漢書、高帝紀「爭開レ門待二足下一、足下一一無レ所レ累」○あまねく行はれる、普く流布する。

【通紓】ツウジヨ　互によしみを通ずる。北史、柳帶韋傳「江鄧二州、與二梁部陸南平一二王一一レ」

【通航】ツウカウ　ふねがかよふ。

【通學】ツウガク　寄宿舍に入らずして日日學校に登りて學ぶ。

【通治】ツウヂ　滯りなくあまねくゆきわたる。晉書、王沈傳「沈、經二綸墳典一、才識一一」

【通規】ツウキ　通則に同じ。

【通義】ツウギ　○天下にあまねく通ずる義理。孟、滕文公「治二於人一者食レ人、治レ人者食二於人一、天下之一一也」‖通則。○次條に同じ。

【通誼】ツウギ　世間一般の人の履行すべき道。漢書、董仲舒傳「春秋大一統一者、天地之常經、古今之一一也」

【通勤】ツウキン　かよひつとめ、自宅よりかよひつとめる。

【通渠】ツウキヨ　みぞをとほす。史、河渠書「四方則一二一漢水雲夢之野一」

【通共】ツウキヨウ　互に通じ合ひける。呉志「周瑜與二孫策一同年、相友善、瑜推二道南大宅一以居レ策、升レ堂拜レ母、有無一一」‖共通。

【通衢】ツウク　四方に通ずるちまた。宋史、高宗紀「詔禁二交阯所レ貢翠羽於一一一」

【通貨】ツウクワ　あまねく天下に通用する貨幣。管子、輕重「黃金刀布者、民之一一也」

【通過】ツウクワ　○道路をとほりすぎる。‖經過。○會議などにて議案が可決

せられる。○願書などが許可せられる。
【通脚】ツウキャク　ひろやか。清異錄「婁師德位貴、而性ー〻」‖豁達。
【通患】ツウカン　通弊に同じ。
【通ノ敵】ツウノカタキ　敵によしみを通ずる。北史、盧柔傳「舉三利之地、ー〻ー梁國、可二以庶ー身、功名圭矣、策之下者」‖通好。
【通計】ツウケイ　總數のしめだか、そうかんざん。禮記、注「ー〻三十年」‖總計。
【通暁】ツウギョウ　さとる。北史、邢邵傳「博覽二墳籍一、無不ニー〻」‖通達。
【通玄】ツウゲン　おくふかき理に通ずる。靈笈七籤「ー〻ノ妙」
【通覚】ツウカク　かけひの水をかよはす。陸游詩「山果論ー登廚食足、石泉ー〻ー藥苗肥」
【通顯】ツウケン　位が高くあらはれる。北史、邢邵傳「此子後當二大成一位望ー〻ー宝海」‖應氏自ー幸ノ場、七世皆ー〻ー」
【通悟】ツウゴ　明かにさとる。又、さとし。唐書、長孫無忌傳「性ー〻、博涉二書史一」
【通侯】ツウコウ　諸侯をいふ。其の功德王室に通徹する義（獨斷）史、李斯傳「斯上蔡閭巷布衣也、上幸擢爲二丞相一、封爲ニー〻」‖列侯・徹侯。
【通告】ツウコク　しらせる。しらせ。‖通知・通報。
【通國】ツウコク　一國の人のこらず。孟、離婁「ー〻皆稱二不孝一焉」‖舉國。
【通才】ツウサイ　事理に明達にして才能ある者。後漢書「ー〻兼正」宋之問詩「試劇仰ニー〻」
【通草】ツウソウ　あけび。通一に通に作る。‖木通。
【通士】ツウシ　物事によく通じたる人。荀、不荀「可ノ謂ニー〻矣」‖通人。
【通刺】ツウシ　名札を出して面會を求める。漢代に始まる。李商隱文「辦裝無ノ錢、ー〻有ノ期」‖通謁。
【通事】ツウジ　○通辭。通譯官。癸辛雜志「譯者今北方謂二之ー〻」○取次役、古の謁者の職。○兩國の交際往來の事。周禮「掌二邦國之ー〻一、而結二其交好一」○事を處理する。梁元帝文「勤勞ノー〻、多歷二年所一」
【通日】ツウジツ　日の光をとほす。薛能詩「燒成杏葉縫ノー〻」
【通人】ツウジン　○物事によく通じたる人。史、田叔仲完世家「易之稱二剛遠柔、非ニー〻達才、孰能注ノ意焉」‖通士。○國人情に通じ、又花柳界の事に通ぜし人。
【通身】ツウシン　からだぢゆう。‖全身・渾身・滿身。
【通信】ツウシン　おとづれ。晉書、王澄傳「王敦謂ノ澄曰、何與二杜弢一ー〻」
【通商】ツウショウ　○あきなひする。柳宗元文「ー〻ー平ノ貨、有二來貢悅一」○外國と貿易する。左傳「ー〻ー裏ノ工」
【通常】ツウジョウ　なみ、普通。‖尋常。
【通儒】ツウジュ　萬事に通達する學者。後漢書、杜林傳「博洽多聞、時稱ニー〻」
【通路】ツウロ　何れにも通じ用ひらるるのり。漢書、刑法志「以爲ニー〻」
【通稱】ツウショウ　○普通一般に通ずるとなへ。孟子題詞「子者男子之ー〻」○普く通行する官說。禮記、樂生論「大田種者、一畝十斛、謂二之良田一、此天下之ー〻也」
【通性】ツウセイ　通有性に同じ。
【通宵】ツウショウ　よもすがら、よどほし。舊唐書、裴寂傳「開以二博奕一至二宵ー〻連日、情忘二厭倦一」‖通夜・通昔。
【通夕】ツウセキ　よどほし。白居易詩「長歌醉ニー〻」‖通宵・通宵。
【通昔】ツウセキ　よもすがら、よどほし。昔、夕通ず。莊、天運「蚊蝱噆膚、則ー〻ー不ノ寐」‖通夕・通霄・通夜。
【通籍】ツウセキ　○宮門の出入を許されし者の姓名・年齡等を記載したる掛札。漢書、魏相傳「霍光夫人顯及諸女、皆ー〻ー長信宮」○仕官する。
【通設】ツウセツ　○ひろく通行する官說。○よく通達せる說。孫廷之、釋遠性論「徒謂二支離一以爲ニー〻」
【通則】ツウソク　すべてに通ずる法則。沈約文「誠秩居ノ官、前代ー〻」‖通規。
【通俗】ツウゾク　俗人にもよくわかる。
【通塞】ツウソク　仕合よきと仕合惡しきと。北史、孫惠蔚傳「雖二久滯一小官一、頗體ニー〻、無二夜夜之望一、儒者以ノ是爲」‖通否・窮通。
【通態】ツウタイ　一般に通ずるありさま。
【通道】ツウドウ　○人人の通行するみち。‖通路。○天下萬民の共に順ひよるべき道理。史、公孫弘傳「君臣・父子・夫婦・長幼・朋友之交、五者天下之ー〻也」○道路を開き通ずる。史、五帝紀「披ノ山ー〻ー、未二嘗寧居一」
【通達】ツウタツ　○とどこほりなくとほる。莊、則陽「ー〻之國」○物事の理を明かにさとり知る。
【通脫】ツウダツ　むとんぢゃくにして小節に拘泥せず。晉書、裴秀傳「其ー〻若ノ此」
【通旦】ツウタン　あくるあさまで、よどほし。馬融、長笛賦「ー〻ノ忘ノ寢、不ノ能二自禁一」
【通知】ツウチ　しらせる。しらせ。‖通告。
【通徹】ツウテツ　明かにさとる。魏書、景穆十二王傳「晝夜誦ノ之、旬有五日、一皆ー〻」‖洞徹。
【通牒】ツウチョウ　書面にて通知する、主に公事につきていふ「最後ー〻」
【通天】ツウテン　かんむりの名。後漢書、輿服志「ー〻冠高九寸」
【通天御帶】ツウテンギョタイ　通天犀（犀角の名）にて飾りし天子の帶。韓愈、平淮西碑
【通天冠】ツウテンカン　天子のかんむり。獨斷「天子冠ニ――、諸侯王冠三進賢冠一」
【通典】ツウテン　○古今に通ずる法則。北

史、蘇威傳「帝令ㇾ朝臣議ニ改舊法一爲ニ一代一ー上」○書名、二百卷。唐の杜佑撰す、食貨・選擧・職官・禮樂・兵刑・州郡・邊防の八門に分ち、上は黄虞に溯り、下は唐、天寶に至る政典を記す、包括宏富、典例最精なり。清朝、續ー一・皇朝ー一を撰す。

【通都】ツウ 四通八達の都會。蘇軾、民政策「ー一大邑、十里之城、萬戸之郭」

【通讀】ツウドク 始から終まで通じて讀む。

【通報】ツウ しらせる。‖通知。

【通榜】ツウ 唐代の科擧即ち官吏登用試驗の制度にて試驗の成績によらず、履歴によりて及第する者（蘇軾、議ニ貢擧ー一劄子ニ）

【通貨】ツウカ 天下に通用する貨幣。唐書、食貨志、武德四年、始ニ開元ー一、其文以ニ八分・篆・隸ニ體ー一ー‖通寶。

【通判】ツウハン 宋代に藩鎭の權を削らんが爲めに一州の政事を監督せしむる官。宋史、職官志「乾德初、始置ニ諸州ー一知ニ府公事ー」

【通比】ツウヒ 數學にて各數に通ずる割合。

【通融】ツウユウ 物事にさとく通達する。漢書、趙廣漢傳「廉潔ー一」

【通風】ツウフウ かぜとほし「ー一採光」

【通弊】ツウヘイ 一般にわたる弊害。‖通患。

【通表】ツウヘウ 上疏の文を通達する。晉書、張駿傳「假ニ道於劉ー一ニ一京師ー一」

【通變】ツウヘン 變化の理に通ずる。崔駰文「君子ー一レー、各審ニ所ㇾ履」

【通辭】ツウジ 甲の國語を乙の國語に譯して兩者の意思を通ずる。又、其の人。‖通譯・通事。

【通謀】ツウボウ 互にはかりごとをかよはす。淮南子「三國ー一レー攜ニ智伯ー」

【通名】ツウメイ 名札を出して面會を求める。漢書、倘不疑傳、注「上謁者ニ令ー一也」

【通明】ツウメイ 事理に通達してあきらか。漢書、劉向傳「資質淑美、道術ー一」‖通曉。

【通問】ツウモン おとづれをする。互に相稱謝する。禮記「姉妹不ニー一ー」

【通夜】ツウヤ ○よどほし。晉書、佛圖澄傳「ー一不ㇾ寢」‖徹夜・通宵。○圖ツウヤ 死者を弔ふ爲め屍の旁に侍りて夜を明かす。

【通約】ツウヤク 分數の分子と分母との中より互に有する因子をひとしく除き去る。

【通譯】ツウヤク 通辭に同じ。後漢書、和帝紀「都護四指、則ー一四萬」

【通用】ツウヨウ とどこほりなく用ひられる「ー一貨幣」

【通利】ツウリ すきとほりて明か。晉書、桓彝傳「彝、性ー一、早獲ニ盛名ー」

【通覽】ツウラン 一とほり目を通してみる。

【通流】ツウリウ ○ひろく布き流れる。南史、中天竺國傳「水陸ー一、百貨交會、器玩珍琦、恣ニ心所ㇾ欲」○滯ることなく、かよはす。史、樂書「音樂者、所ㇾ以動ニ盪血氣ー一ー一ー精神ニ而和ニ中正心ー一也」

【通力】ツウリキ 佛 萬事に通じて自由自在なるはたらき（阿毗曇論）‖神通力。

【通令】ツウレイ 命を傳へる。周禮「內豎掌ニ內外之ー一ー」

【通例】ツウレイ ○一般に通ずる例規。唐書、韓滉傳「著ニー一ー」○よのつね、なみ、普通。

【通曉】ツウギョウ 廣く世間に通行する禮節。清代に大清ー一五十四卷あり。

【通歷】ツウレキ 歷年を通じ算する。史、梁孝王世家「梁王自ニ初王ー一ー已十一年矣」‖通算。

【通路】ツウロ 通行するみち。晉書、杜預傳「北無ニー一ー」

【通論】ツウロン ○すべてに通ずる正しき議論。馮衍賦「講ニ聖哲之ー一ー」○道理に合する議論。

【通鑑綱目】ツウガンカウモク 書名、五十九卷、宋の朱熹撰す、司馬光の資治通鑑に據り綱と目とに分ち記す。

【逗】トウ ヅ 圖 投に通ず

○とどまる（止・住）後漢書、張衡傳「ー一華陰之潼渚」○曲り行く、曲行して敵を避く。○投に通ず、物が相投合する、とまりあふ。杜甫詩「遠ー一錦江波」

同訓異字 逗・止・留・駐・停等の別は止（一〇〇七頁二段）の條を見よ。

【逗撓】トウドウ 敵を見て長れとどまりて進まず、撓は屈み望む義。漢書、韓安國傳「延尉當ニ以ー一ー罵ㇾ詐」（條は王條）

【逗留】トウリウ 一所にとどまりて通まず。漢書、匈奴傳「郡連知ニ虜在ニ前、ー一ー不ㇾ通」‖逗遛。

【逗遛】トウリウ 前條に同じ。漢書「長慮ー一」‖遛・留連。

【連】ホ フ 圖

○のがる、にぐ（亡）「亡ー一」○かくれる（匿）○にげかくれる（窺）○おふ（負）おひめ（欠）「酒ー一」課稅の負欠ㇾ未納稅「ー一負」

同訓異字 逋・逃・遁・遯・竄等の別は逃（一九四七頁二段）の條を見よ。

【逋客】ホカク ○世を避けたる隱者（山堂肆考）○のがれ（逋逃）たる士。孔稚圭、北山移文「請ニ徵ニ逋士薇ニ蕨ー一」‖逋士。

【逋欠】ホケン 租稅の納りて未だ納めざるもの。宋史、孝宗紀「已蠲ニー一者ニ、令ニ漕臣覈奏ニー一」‖逋租。

【逋責】ホセキ のがれかくれる。左傳「猶有ニ諏于君父君母ー一ニ一于晉ー」

【逋租】ソ 租稅の未だ納めずしてあるもの。後漢書、光武紀「設ニ――一ニ」‖逋賦。

【逋積】ガ 納稅などをのがれおこたる。北史、魏太宗紀「刺史守宰、率多ニ――一」

【逋貸】タイ 官債を返さずしてにげる。漢書、武帝紀「――未レ入者、勿レ收」

【逋逃】トウ 罪をのがれる。左、昭七「村爲ニ天下一ニ主ニ逋藪一」‖逃逋。

【逋道】トウ のがれる。陳琳文「晨夜――」‖逋逃。

【逋亡】バウ にげさる。書、大誥「予役ニ殷逋播臣一」註「――播遷之臣也」‖亡逋。

【逋髮】バツ みだれ髪。髪の亂れて未だ埋せざるもの。

【逋播臣】ハウ 他國にのがれさまよへるけらい。播は遷移。書、大誥「予惟以ニ爾庶邦一于伐ニ殷――一」

【逋負】フ 租稅の未納。文獻通考「玄宗免ニ天下七年以前――一」‖逋欠・逋租。

【逋賦】フ 租稅の未だ納めずしてあるもの。宋史、哲宗紀「蠲ニ元豐六年以前――一」

【逋慢】マン 命令を受けながらぐづぐづしておこたる。李密、陳情表「貴ニ臣――一」

【逢】

㊀ ホウ
㊁ ホウ
東 多

㊀あふ、であふ（遇・値）左、宣三「不ニ――一不若」○むかふ（迎）迎合する。孟、告子「ニ君之惡一」○大いなり「ニ掖之衣一」○ぬふ、縫に通ず。○閼ニは十干の甲。爾雅「太歲在ニ甲曰ニ閼一」㊁のろし。‖燧。○ニは鼓を擊つ。

同訓異字 逢・遇・値・合・會・晤の別は遇（一九六七頁三段）の條を見よ。○逢・向・迎等の別は向（三〇六頁四段）の條を見よ。

【逢衣】ホウ 儒者の服。莊、盜跖「ニ――淺帶」‖逢掖之衣。

【逢掖之衣】ハクエキ 儒者のきる衣服。掖は腋ワキ即ち腋下（袖）の大いなる衣。禮、儒行「丘少居ニ魯、衣ニ――一」（丘は孔子の名）‖逢衣。

【逢遇】グウ ふと、であふ。吳均詩「一朝相ニ――一、依然舊相識」

【逢花】クワ はなにであふ。陳信詩「値レ泉傾ニ盞飲一、ニ――一駐レ馬看」

【逢迎】ゲイ ○人をでむかへ接待する。王維詩「主人能愛レ客、終日有ニ――一」○歸じて人の氣に入るやうにする。‖迎合。

【逢原】ゲン 原は源、水源に逢ふ、徹底する義。孟、離婁「君子深造レ之以レ道、欲ニ其自ニ得之一也（中略）資レ之深、則取ニ之左右一逢ニ其原一」

【逢世】セイ 世に合ひて用ひられる。

【連】

㊀ レン
㊁ レン
先 軫

㊀つらぬ。つらなる（聯）「貫ニ――一」○あふ。あはす（合）「ニ合」孟、離婁「ニ諸侯一者」○およぶ（及）○つづく（續）ながく引きつづく、つぐ（接）つく（屬）○つづきて、しきりに「ニ戰一捷」○えんつづき、つづきあひ、みうち（姻戚）史、尉陀傳「及ニ蒼梧秦王有ニ一」○かかりあひになる「ニ坐一」○つれ、くみ（伴）○周代の制にて十國の稱、其の長を帥といふ。○もちにて烏をとらへる。○鉛の未だ鍊らざるもの「ニ錫」○ニ山は夏の代の易の名。○祈ニは山の名、卽ち天山。㊁ひさし（久）○なやむ（難）圖○古の八姓の一。○みちづれ、同伴者。なかま「ニ中」「若者ニ」

同訓異字 連・仍・頻・荐・累・切の別は仍（一〇四頁一段）の條を見よ。

○連・聯・羅・列・陳・綿○連は一つづつある事物を、接續せしむるなり、珠をつなぐを、連珠といふ、連山・連年・連戰と用ふ、陳・列などの義とは異り。○聯は連と通用す、相續ぎて絕えざる義、前後持ち合せて切れぬなり、聯合と用ふ。○羅は網の目のそろひたる如く、正しく列ぶなるなり。小學「子婦羅ニ列階下一」大寶箴「羅ニ八珍於前一、所レ食不レ過レ適レ口」○列は位序の正しくつらなるなり、羅列・排列と連用す。○陳は列に同じ、陳列・陳情と用ふ。名詞のときは、軍陣をいふ、今は陣に作る。○綿は緜に同じ、ながくつづく義、連綿・綿綿と用ふ。

【連尹】レン 楚國にて射を司る官。左傳「屈蕩爲ニ――一」

【連引】レン ひきつらなる。關係する。史、陳豨傳「多ニ――一豨」

【連印】レン 二名以上の者が、一つの書面に連名にて印を捺す。‖連判。

【連姻】イン 結婚によりて親類となる。

世說「若ノ一一貴族、將來或大益」
【連陰】レンイン ○連日くもる。漢書、鮑宣傳「一一不ノ雨」○木のかげの茂りて連る義。洛陽伽藍記「芳草如ノ積、參木一ノ一」
【連替】レンタイ とりでをつらねる。魏志「文帝聞二備兵重下、與ノ權交戰一樹ノ幡一ノ一、七百餘里」
【連延】レンエン つらなりつづく。宋史、宋琪傳「澄ノ山村墅一一、溪湖相接、採ノ薪汲ノ水、我占二上游一」＝聯延。
【連笞】レンチ つらなりつづく。水經、注「一一相屬」
【連枷】レンカ からさを、くるりぼう。三才圖會「俗名曰、枷、加也、加二杖於柄頭一以擣ノ穀而出ノ穀也」枷、亦勘に作る。
【連歌】レンカ 図三十一文字の歌の上句（五句）と下句（七句）とを二人にてよむもの。
【連衡】レンコウ 連橫に同じ。漢書、刑法志「合縱一一」
【連旗】レンキ つらなれるはた。王績詩「出沒望二一一一」
【連及】レンキュウ つらなりおよぶ。後漢書、史弼傳「詔書下、舉二鉤黨一、郡國所ノ奏、相一一者、多至二數百一、唯弼獨無ノ所ノ上」
【連檐】レンエン 簷端をいふ。顧況子「江北人、呼二簷堺一曰二連袂一、又呼二一一一一」
【連句】レンク 二人以上あつまりて、一句づつ作り、之を連ねて一篇の詩とするもの。白居易詩「秋燈夜寫一一詩」＝聯句。
【連火】レンクワ 漢字の字畫上にて火を㷔と書く時の稱。宇書にて火部に屬す。＝燔火。
【連和】レンクワ 二つ以上の獨立せしものの、連合する義。史、項羽紀「使ノ使欲二與一一俱西一」
【連橫】レンクワウ 戰國時代に秦を首として東西に列する國國を連合せしむるをいふ。合縱の對。戰國策「蘇秦始將二一一一」＝連衡。
【連環】レンクワン つらなりて解け難きたまき。戰國策「直君王后玉一一」
【連雞不二俱止於棲一】レンケイトモニヤドラズ 縱にてつなげる雞は、一つの塒に止まること能はず。以て英雄ならび立つこと能はざるに喩ふ。戰國策「諸侯不ノ可レ一、猶二連雞之不ノ能二俱止於棲一、亦明矣」
【連翹】レンギョウ いたちぐさ、木犀科に屬する灌木の一種、枝は夏を成し、春日黃花開く。
【連月】レンゲツ まいつき。漢書「舉ノ之一一不ノ盡」＝累月。
【連結】レンケツ ○互につらねむすぶ。唐書、常袞傳「若相一一、以乘ノ無ノ備、其變不ノ細」＝聯結。○交をむすぶ。後漢書、賈逵傳「融家二長安一、出二入貴戚一一一一閭里豪傑一、以二任俠一著ノ名」
【連綿】レンメン 纖弱なる貌。又、長き眉の曲りて細き貌。漢武帝、悼二李夫人一賦「美一一以修揚兮」
【連乾】レンケン 乘馬のかざり。晉書、王濟傳「嘗乘二一馬一、著二一一鄣泥一」
【連衡】レンコウ つらねひく。晉書、五行志「苻堅初、童謠云、阿堅一一、三十年」
【連卷】レンケン 困みなやみて連まざる貌。ふしあはせ。揚雄、解嘲「孟子雖二一一猶爲二萬乘師一」歐陽修、江鄰幾文集序「仕宦一一」＝蹇蹄。
【連蜷】レンケン ○長く曲る貌。揚雄、甘泉賦「蚖龍一一于東厓一兮」○困みて進まざる貌（楚辭、遠遊）
【連翹】レンギョウ ならびとぶ。陳陶詩「秋鴻一一暮曳レ緜」
【連昏】レンコン 婚姻を連ねて親戚となる。漢書、王商傳「大將軍鳳一一楊彤、爲二琅琊太守一」＝連姻、結婚。
【連婚】レンコン 前條に同じ。
【連坐】レンザ まきぞへとなりて處罰せらる。史、商君傳「令民爲二什伍一、而相收司一一之」
【連鎖】レンサ ○兩方をむすびつらねるくさり。○相關聯してつながる「一一比例」
【連誕】レンタン まいねん。王禹偁詩「終朝望二孫雖一一事二戈矛一」＝累歲。
【連作】レンサク 年年同一の作物を同一の地に栽培する。輪作の對。
【連檣】レンショウ つづけるとりで。五代史、張敬達傳「敬達爲二長城一一雲梯飛橋、以攻レ之」
【連山】レンザン ○夏の時の易の名。周禮、太卜「掌二三易之法一、一曰二一一、二曰二歸藏一、三曰二周易一」○つづける山。＝連峯。
【連枝】レンシ ○つらなれるえだ。庾信詩「細果上二一一一」○兄弟。千字文「同氣一一」○國貴人の兄弟をいふ敬語。
【連枝草】レンシサウ 首蓿（ウマゴヤシ）の異名。西京雜記「百藉爲二懷風一蔎陵人謂二之一一一」
【連漪】レンイ 淚のながれる貌。王粲獻「涕流一一」
【連日】レンジツ まいにち（毎日）南史、何尚傳「一一累夜」＝累日。
【連軫】レンシン 車の多く引きつづく貌。魏都賦「百隧駢轂、一一萬貫」韓愈詩「晉從二關外一來二上都一、隋ノ身卷軸事一一」＝接軫。
【連狀】レンジョウ 連名狀。通鑑、唐穆宗紀「一一人皆柯ノ脊」注「謂二連名告一狀者」
【連檐】レンエン つらなりたるはばしら。郭璞文「舳艫相尾、萬里一一」
【連城璧】レンジョウノタマ 次條に同じ。元稹、賦二得玉屑無窗一詩「共惜——、翻成無窗屈」
【連城壁】レンジョウノタマ 趙の惠王、卞和の璧を得、秦の昭王十五城を以て之に代へんことを請へり、故にいふ

（史、龐涓傳）楊炯詩「趙氏——、由來天下傳」
【連借】レンシャク 圓連名にて金品をかりる。‖連帶借用。
【連珠】レンジュ ○物を假りて物を陳べて諷諭の詞を述ずる一種の文體。沈約文「一一之作、始二於子雲一」○つらねたる玉。宋史、符瑞志「五星如二一一一」
【連漿】レンジュ ながあめがふる。王禹偁詩「秋來一一百日雨」
【連署】レンショ 二人以上が、姓名を連ねて書く。通鑑、唐憲宗紀「自今奏レ事、必取二裴垍一一、然後進レ之」‖連名。
【連綿】レンメン つづきたるこにま。梅堯臣詩「一月陰晴一一閒」
【連勝】レンショウ つづけざまにかつ。後漢書、光武紀「諸部共乘レ之、斬首數百千級、一一逕前」‖連捷。
【連帥】レンスイ 周代に諸侯の上に立ちて、一地方を支配せし長官。禮、王制「十國以爲レ連、連有レ帥」
【連宵】レンセウ まいよ。魏書、李謐傳「隋冬連レ曙、盛暑一レ一」‖連夜。
【連珍】レンチン つづく。綽愈詩「周楚仍一一、川原乍風盤」
【連錢】レンセン ○容令馬の異名（詩、騶虞疏）○馬の飾。梁元帝詩「長安美少年、金絡帽一一」‖連乾。○馬の毛色、錢を連れたる如きもの、れんぜんあしげ。爾雅、注「色有二深淺一、斑駁雜、今之一一驄」
【連錢草】レンセンカウ 草の一種、かきどほし。
【連錢苔】レンセンタイ あさざの一種。洞冥記「漢宮太一池、有二一一一一」
【連錢馬】レンセンバ あしげのうま。錢がたの斑紋ある馬。吳均詩「朱輪班班車、紫轡一一」
【連戰】レンセン しきりにたたかふ。後漢書、皇甫嵩傳「嵩一一無レ功、所レ費者多、數二左車騎將軍印綬一」
【連續】レンゾク つらなりつづく。宋史、食貨志「不レ許二一一一馬一之」
【連檣】レンシャウ しきりに波をうつ。汪元量詩「鼓鼙一一月上レ樓」
【連體言】レンタイゲン 文法にて動詞の語尾變化の第四段の活用、下に名詞をうけるもの。
【連中】レンチウ 圓なかま。‖同類・同志。
【連連】レンレン まきぞへによりて共に捕へられる。史、秦紀「以二罪過一一二一少近官三郎一」
【連帶】レンタイ ○つらなりつづく。潘岳文「華髮班鬢、一二一城邑」○圓二人以上の人が共同して責任をおひてひきうける。
【連持】レンヂ つらなりたもつ。後漢書、仲長統傳「奢二什伍一以相一一」
【連汀】レンテイ つづきたるみぎは。謝朓詩「平原周二遠近一、一一見二紆直一」
【連根】レンコン つらねつづく。禮記、疏「以根思者、紋調二一一一、思調二屈根一」
【連朝】レンテウ まいあさ。杜甫詩「說レ詩能累夜、醉レ酒或一一」‖每朝。
【連弩】レンド 一時に多くの矢を發し得るいしゆみ。漢書、李陵傳「發二一一一射二單于一」
【連綿】レンメン 莧ヒケ杜甫詩「一一進二小園一」
【連年】レンネン まいねん、まいとし。古樂府「婦病一一累戰、傳呼丈人前一日」‖每歲・連歲。
【連波】レンパ つらなるなみ。西京雜記「重山累嶂、一一疊浪」
【連敗】レンパイ まけつづけ、しきりに敗れる。連戰の對。
【連甍】レンバウ いらか（屋棟の瓦）が連なる。左思、蜀都賦「比屋一一」
【連發】レンパツ ○しきりにおこる。連發、疾故傳「望權不道、賊一一不レ得、敵以二百日一殺二賊主名一、匹婦孺二其果帥一」○つづけざまに放射し、又弓いる。北史、崔彭傳「彭一二一數矢、皆應レ弦而落、突厥莫レ不二歎服一」
【連判】レンパン ○同官の者が名を連ねて公文書を判定する。唐律疏義「同職謂二一一之官一」○圓同志の者が約束を堅くする爲めに連名捺印する「一一狀」
【連鬢】レンビン つづきてよぢのぼる。元稹詩「既過歎子嶺、屢轉相一一」
【連比】レンピ つらなりならよ。夏鼎論「良田一一」‖齊比。
【連管】レンクワン たづなをつらねる。張說詩「一朝驅二駟馬一、一レ一入二龍樓一」
【連枝】レンシ ○たもとをつらねる。‖聯袂。○姉妹の壻、おひむこ。晉書、三筆「遲參看。
【連翩】レンペン くつばみをつらねて行く。晉書、張協傳「者輩一レ一、洞庭方レ軒」
【連聲】レンセイ 才の共にすぐれたる兩友。晉書、潘岳傳「夏侯湛美二於容一、與二潘居一友善、每二行止一同レ輿接レ茵、京師謂之一一一」
【連袂】レンベイ 袖を連ねて行く。‖聯袂。
【連綿累牘】レンメンルイトク おほくの文章。晉書、李密傳「上書曰、一一、不レ出二戶庭之形一、積案盈箱、唯是風雲之狀」
【連章】レンシャウ つらなれるみね。環統詩「時倉吟二長瀾一、萬嶺吹二一一一」‖連山。
【連名】レンメイ 名をつらねる。漢書、霍光傳「光與二羣臣一、一一奏レ王」‖連署。
【連名狀】レンメイジャウ 連列狀。通鑑、唐昭宗紀「作二瓶一一、使レ署レ名」‖連狀。
【連盟】レンメイ ちかひを結ぶ。‖聯盟。
【連綿】レンメン 長くつらなりてたえず。宋史、河渠志「漳水之水、每レ過二春夏一、天雨一一、上源奔湧、則分二一派之水、自二衛門外一直入二于江一、故泰淮無二泛濫之患一」‖連綿・聯綿。
【連夜】レンヤ まいばん。‖連宵。

【連川】文法にて動詞語尾変化の第二段の活用、独立する二語を合せて一熟語となし、又動詞形容詞の用言に連るもの。

【連絡】つらなりつづく。‖聯絡。

【連理枝】幹を異にせる両樹の枝の連りて一つとなる義。夫婦の契に比す。白楽天、長恨歌「在レ地願為二――一」

【連綿】ながあめ。漢羽詩「一一啓二秋期一」金気最已兆」

【連累】犯罪のかかりあひ。

【連類】○なかま、連中に同じ。○同じ種類の物をつらね挙げる。韓非子「一レ比レ物」

【連蜷】つらなりて屈えざる貌。一説にしづか（徐除）なる貌。詩、大雅「執レ訊一一、俾レ臧安安」

【連綴】一舟のともをならべる。柳宗元文「若二一一一レ縦レ壑、與レ波上下一」

八画

【逶】ヰ 支

―迤―邐はななめに行く貌。淮南子「河―池故能逆」

【逶迤】ななめに行く貌。漢の紀歌「原然逝旗―一」‖逶遅・逶移・逶遅。

【逶移】ななめにつつく歩。楚辞「遵二曲江之―一兮」‖逶遅。

【逶遅】ななめにまがる。李徳裕、知止賦「俾二雙鯉之音翠一若二天漢之―一」

【遊】

遊（辵部九画）の俗字。

【逸】イツ イチ 質

古、陝・扶に通用す

○あやまつ、あやまる（過）あやまち（過失）あやまり。○はしる（奔）にける（亡逃）「亡―」「奔―」左、成二二馬一不レ能レ止」○はなつ（縦）左、成十六「乃―」楚辞「―」○ほしいまま「放―」○かくれる（隠）「一民」「隠―」○隠れたる君子。○うす、うしなふ（失）ぬける「一詩」「一名」○はやる（激）心が物に感じて激する。○こゆ、すぐ（超越）すぐれてまさる「秀―」「一品」○すぐれたる人、賢者。○やすらかにたのしむ（安楽）「安―」○ゆるやか（寛）○みだら（淫）○―は往来に次序ある貌。詩、小雅「畢酔―」

【逸遊】なまけて度なく遊ぶ。論、季氏「乗二一一一」

【逸隠】世の中をさけかくれる。又、其の人。諸葛亮文「提二拔一―一、以進二賢良一」‖隠逸。

【逸羽】早く飛ぶ鳥。翁巻詩「寧知一一飛相背、我入レ山来君出レ山」‖逸翮。

【逸越】すぐれこえる。法書要録「字之一一、不レ過二此二途一」

【以逸待労】我は安逸して、敵の遠く来りて疲労するを待つ。孫呉拳「以レ近待レ遠、――」

【逸欸】すぐれてよきうた。呉融逸文「一一長句、駭俗驚動」

【逸暇】やすらかにしてひまあり。邵子「或創二業于艱難一、或守二成于一一」

【逸格】逸品に同じ。名画錄「夫之一一、最難二其儔一」

【逸闌】すぐれたるつばさ。沈佺期詩「一一凌二北海一」‖逸翰。

【逸翰】逸羽に同じ、鵬は羽。李白、大鵬賦「遥二一一一以後挙、蔽二雲霓一」

【逸気】○すぐれたる気象（昭明太子、二月啓）○俗を脱したるすぐれしきしやう。晋書、王舒傳「正足レ舒二其一一一耳」

【逸駿】すぐれたる名馬。江総文「明帝一一、遥日千里」

【逸禽】すぐれたるとり。後漢書、崔駰傳「乗二斯時一也、猶下一一之触二深林一、羅納之徒中大沛一、胡焉獣駭而久洗澤也」

【逸走】にげる、のがれる。

【逸居】なまけてあそび居る。蓋膝文公「飽食暖衣一一而無レ教、近二禽獣一」‖安居。

【逸興】世俗を脱してすぐれたる風流のおもむき。王勃、滕王閣詩序「遥吟俯畳、一一遄飛」

【逸群】衆にすぐれる。蜀志、諸葛亮傳「少有二一一一之才、英霸之気一」‖超衆。

【逸荒】なまけてすきみ楽む。逸豫荒忘。蘇洵、嘉祐州重修記「無二敢一一一」

【逸目】あやまりたることば。書、盤庚「罔レ有二一一一」‖逸口。

【逸虎】檻よりぬけ出でたるとら。傅休奕詩「往年若二洞鶚一、超騰如二一一一」

【逸口】いひそこなひ。書、盤庚「猶言二汝悪言一、其爰有二一一一一」‖失言・逸言。

【逸才】衆にすぐれたるはたらき。又、其の人。晋書、袁宏傳「宏有二一一文章絶美、曾詣二咏史詩一、是其風情所レ寄」‖逸材・逸羣之才。

【逸材】すぐれたるはたらき、材一に才に作る「後漢書、蔡邕傳」‖逸才・駿材。

【逸材之馭】衆のすぐれて猛き馭。司馬相如、上諫レ獵書「卒然遇二――一不測之地一」

【逸想】無だかくして世をのがれるおもひ。宋高詩「張レ顛生二一一一」

【逸態】すぐれたる詩文の才。潘

尼戴侍中銘「雅論弘博、一一波瀾」
【逸散】イツサン 圓ひとすぢにいそぐ、一目散。‖奔然。
【逸史】イツシ ちりうせて正史に傳はらざる事實を記せし歷史。
【逸志】イツシ ○すぐれたるこころざし。袁宏、三國名臣傳贊「公瑾卓爾、一一不羣」（公瑾に周瑜の字）○世俗に超越せし志。張華詩「君子有一一、棲遲于一丘」
【逸事】イツジ 世の中にあらはれざる事實。柳宗元に段太尉逸事狀の文あり、唐宋八家文讀本に載す。‖軼事。
【逸詩】イツシ 古詩の今の詩經にぬけてゐる詩。羊舌の類。史、伯夷傳「觀一一一可レ異焉」‖軼詩。
【逸群】イツグン すぐれた四頭立のうま。晉書、費昶傳「執二杓響一以御二一一一、承二勁風一以握二秋蓬一」
【逸秀】イツシウ すぐれてひいでる。晉書、愍懷太子傳「幼稟二英悟一、高明一一」‖秀逸。
【逸情】イツジヤウ 世俗をはなれたる心情。後漢書、逸民傳贊「遠性風疎、一一雲上」
【逸出】イツシユツ にげだす、はなれでる。
【逸駿】イツシユン すぐれたるうま。歸亡論「巨象一一、擾二于外圍一」
【逸書】イツシヨ ○失せて今の書經になき文。史、儒林傳「一得十餘篇」○世間に失せたる書册。歐陽修、日本刀歌「一一古篇今猶存」
【逸率】イツソツ 淫佚なる音樂。國語「口不レ食二羶味一耳不レ樂二一一一」
【逸足】イツソク はやあし。蜀志、龐統傳「陳子可レ謂二駑馬有二一一之力一」‖俊足・駿足。
【逸態】イツタイ すぐれたるさま。張協、七命「天驥之駿、一一超越」
【逸宕】イツタウ さっぱりして小事に拘泥せず。梁簡文、玄圃公子賦「在二文林一而一一」
【逸蕩】イツタウ 常度をこえ、ほしいままにして酒色にふける。列、楊朱、衆篇二累世之資一、居二南面之尊一、智足三以距二羣下一、威足三以震二海內一、逸二年目之所レ娛、窮二耳目之所レ樂一、熙熙然以至二於死一、此天民之一一者也」
【逸彈】イツダン それだま、狙ひのはづれたる彈丸。
【逸致】イツチ すぐれたるおもむき。‖雋永・俊逸。
【逸味】イツミ すぐれてよきあぢ。傳休奕賦「入口流澌、一一難レ原」
【逸民】イツミン 世をのがれたる隱者。論、微子、興二滅國一、繼二絕世一、舉二一一一一」こ‖隱君子。
【逸豫】イツヨ あそびたのしむ。書、五子之歌「大康尸レ位、以二一一一滅二厥德一」‖逸樂。
【逸樂】イツラク あそびくらす。史、伯夷傳「終身一一富厚、累世不レ絕」
【逸話】イツワ 世人に多く知られざるはなし。
【逸物】イツブツ 圓人・馬・犬・鷹などの特にたくましく強き者。

【逵】キ 支

おほぢ、九達の道。左、隱十一「入及大一一」

【逭】クヮン 翰 早

のがる、にげる（逃避）書、太甲「自作孽不可一一」

同訓異義 ノガル 遖・逃・避等の別は逃（走部六畫）の條を見よ。

【週】シウ 尤

○めぐり、まはり（廻）＝周。○一一は日・月・火・水・木・金・土の七曜日。
【週刊】シウカン 一週間毎に刊行する。
【週期】シウキ ○ひとまはりの時期。‖周期。○物理學にて一回の振動の時間。
【週報】シウホウ ○一週間毎に發行する新聞の類。○一週間のしらせ。
【週番】シウバン 一週間に交代して勤める務。

【進】 ㊀シン ㊁ジン 震 眞

㊀すすむ（前）すすましむ。退の對。○のぼる。のぼす（升登）「一級」○ひきあげて用ふる。推薦する。呂覽、論人「貴則觀二其所一一」○いたす（效）○奉じて人に與へる、たてまつる「一上」「一呈」史記「奉二銅鼎一而一之建王」○ます（益）加へる、良くする。易、乾卦「一德修業」○つとむ（勉強）○ちかづける（近）禮、檀弓「蓋引而一之也」㊁はたらけ、おくりもの。‖賄○收入、賦斂。史、高祖紀「蕭何爲二主吏一主一」

同訓異義 スス 進・晉・前・薦・薦・漸・亀・奬○進は退の反、次第に向うへゆくこと、學德などの上達するにもいふ。表記「君子三揖而進」易經「進レ德修レ業」○晉は日のじりじりと

異る義、進と同じく用ふ。○前は後の反なり、前方へ出ろなり。史、賈誼傳「至二夜半一文帝前レ席」○膳は神に物を献ずること、轉じて人に物を進上するにも、人才を推擧するにも用ふ。左傳「可レ薦二于鬼神一、可レ羞二于王公一」○羞は進獻也と註す、食物を勧走し進むる義、膳羞と連用す。○漸はいつと無く、漸次に進むなり。詩說約「諸侯被二周之澤一而漸二於善一」○勸は勉の字の義に近し、人に勸めて精を出さすなり。○奬はほめあげて勵ますこと、推奬・奬勵と連用す。

【進行】シンカウ　○すすみあるく「一一曲」○物事がはかどる、はかがゆく。

【進航】シンカウ　船を進め行く。

【進講】シンカウ　君主の御前にて講義す。元史、泰定帝紀「詳定帝紀「詳師敬編二類帝訓一、成、請于二經筵一一一」

【進學】シンガク　○學に進みて益する。禮、學記「此皆一一之道也」韓愈に「一解あり。○入學。

【進御】シンギョ　天子の御そばに進みはべる。唐書、百官志「閤門局二人、掌二宴見一一之次敘一」

【進軍】シングン　軍隊を前に進める。

【進化】シンクワ　物事が漸次善き方へ化しゆく。退化の對。

【進化論】シンクワロン　生物はもと同類の祖先より次第に進化せしものなりとの論。英國人、ダーヴインなどの首唱せし說。

【進奏吏】シンソウリ　進奏院の職吏、進奏院は給事中に隸し、詔勅及、諸官省の符牒等を全國に頒布し、又、天下の章奏等を奏進することを掌る（宋史、職官志）

【進退】シンタイ　○すすむと、しりぞくと。易經「變化者、一一之象也」○進みて仕へると、退きて隱れると。‖出處・去就。

【進退維谷】シンタイコレキワマル　進むことも退くことも出來ざるほど苦む、谷は窮。詩、大雅、桑柔「人亦有レ言、一一」

【進遞】シンテイ　書類などを上へ取り次き進める。

【進捗】シンチョク　すすみのびる、捗が次第に發達する。‖發展。

【進陟】シンチョク　官位などをすすめのぼす。北史、高準傳「何足二以階一一之報一」

【進呈】シンテイ　他人に物を贈る。魏觀詩「方物紛紜敷一一」‖進上・進獻。

【進拔】シンバツ　人才をぬきすすめる。漢書、外戚恩澤侯表「興文學、一一賢能、以公孫弘自二海濱一而登二宰相一」

【進發】シンパツ　すすみ發する。隋書、楊玄感傳「不時一一」

【進歩】シンポ　足をすすめる、漸次前の方（進む。傳燈錄「百尺竿頭須一一、十方世界是全身」

【進舉】シンキョ　さきげたてまつる。唐書、百官志「司衣典二衣掌一、衣各二人、掌二宮内御服首飾一、整比以レ時一一」

【進止】シンシ　すすむと、とどまるとと。ちゐふるまひ。漢書、薛宣傳「宣爲レ人好二威儀一一一雍容、甚可レ觀也」‖擧止。

【取二進止一】シュシンシ　朝廷の指揮を仰ぐ義。進むも退くも、只命令のままにする意、唐宋以後、上奏文の結尾に用ふる常套語とす。通鑑、唐則天武后紀「軍國大事、有二不レ決者一、皆取二天后進止一」

【進仕】シンシ　進みて仕宦する。

【進贄】シンシ　○神社又は朝廷などに魚鳥などのにへを奉る。○他國の君主に初めて謁見する時、みやげものを獻ずる。

【進上】シンジャウ　物をすすめたてまつる。（後漢書、馬援傳）‖進呈。

【進取】シンシュ　すすみ出でて功名を取る。又進みて事を行ふ。保守の對。論、子路「狂者一一」

【進退】シンタイ　こばしりに、すすみはしる。朱熹詩「一一極慶恭」

【進水式】シンスイシキ　ふなおろし、新造の船經を初めて水に浮べる儀式。

【進寸退尺】シンスンタイシャク　得る所少く、失ふ所多き喩。老子「不二敢進一寸而退一尺」

【進善之旌】シンゼンノハタ　帝堯の時、誹を五達の道にたて善言を進めんとする者をして其の下に立ちて言はしめし故事。史、孝文紀「古之治二天下一、朝有二一一、誹謗之木一」‖進善旌・告善旌。

【進物】シンモツ　○時令によりて物を進呈する。唐書、百官志「内給便掌二諸門一―之屏一」○国人に贈る物品。
【進用】シンヨウ　入用のたから。進は費、財なり。史、呂不韋傳「子楚賢二子諸侯一、車乗―不レ饒、居處困不レ得レ意」注、進、財也」＝財用。
【進覧】シンラン　上の人にすすめて一覧を乞ふ。唐書、韋澳傳「撰二次一書一、―一」
【進旅】シンリョ　すすみ行く軍隊。梁簡文帝文「制二六師之―一」
【進路】シンロ　進み行く道すぢ。

【逮】（一）タイ（二）テイ　寘　隊

（一）およぶ（及）論、里仁「恥二身之不一レ―也」＝追。○おふ（追）追ひかけ捕へる「一捕」（二）棣に通ず。―は安和なる貌。

同訓異字　逮・及・追・遡・溯・遡の別は及（二九一頁二段）の條を見よ。

【逮繋】タイケイ　とらへてつなぐ。逮捕拘囚。漢書、刑法志「有レ罪當レ刑、詔獄―二長安一」
【逮捕】タイホ　とらへて罪を問ひただす。宋史、盧士宗傳「有レ罪當二鞫問一、不レ宜二―一」
【逮捕】タイホ　罪人を追ひかけとらふ。漢書、高帝紀「貫高等謀レ逆、事覚、竟―二高等一」（一説に其の人在りて、直ちに追取するを逮といひ、其の人亡げて、之を討捕するを捕といふ）
【逮夜】タイヤ　○夜になりて。左傳「―レ―玉三子奔二國人知レ之」○國忌日の前夜、宿忌。＝途夜。
【逮遽】タイキョ　安和なる貌。禮、孔子閒居「威儀――不レ可レ選也」＝棣棣。

【逮】タク　チャク　藥　覺

○とほし、はるか（遼遠）＝卓。○こゆ、すぎる（超絶）○あしなへ（蹇）
【逮行】タクコウ　遠方へ行く。史、倉公病傳「―一殊遠、而擢不レ絶」
【逮遠】タクエン　はるかにとほき貌。宋玉賦「春秋―一而日高宇」
【逮躍】タクヤク　超絶の貌。班固、西都賦「―一諸夏」＝逾年。

【遑】

逗（走部七畫）の古字。

【逝】（一）ハツ　ヒツ　ウ　敏　（二）ヘイ　霽　又、避に作る

（一）ほどばしる、涌く。○ちらす、とばす。○はしる。はしらす「奔―」（二）しりぞく。古、屏に通ず。大學「―諸四夷」
【逝散】ハツサン　ほどばしりちる。孔平仲詩「曙光―一、夜氣掃若レ失」
【逝水】セイスイ　ほどばしるみづ。劉孝綽詩「晨征復二―一、暮宿犯二猿風一」
【逝泉】セイセン　ほどばしるいづみ。姚合詩「―清勝レ酒、深洞股如レ春」
【逝流】セイリュウ　ほどばしるなみだ。潘岳文「――交揮」
【逝沫】セイマツ　ほどばしるあわ。裕朝陽詩「念流雖レ起レ浪、――祇如レ煙」

【遙】リョウ　ヨウ　蕭　宥

○―は榮き貌。○―然は爲す所なくして忽然として往く貌。淮南、精神「涇然而來、―然而往」

九畫

【遏】アツ　アチ　曷　易

○やむ、とどむ（止）停止する「防―」書、武成「以―亂略」○たつ（絶）禁ずる「禁―」易、大有「君子以―惡揚善」（一説に―は匿ス人の惡を隱す義）○ひきとめる（按）阻止する。孟、梁惠王「以―沮莒」
同訓異字　遏・止・留・駐・停・遣・堵の別は止（一〇七頁一段）の條を見よ。
【遏密】アツミツ　歌聲のすぐれたるをほめていふ。列、湯問「薛譚學二謳於秦青一、未レ窮二青之技一、自謂盡レ之矣、遂辭歸、秦青弗レ止、餞二於郊衢一、撫レ節悲歌、聲振二林木一、響遏二行雲一、薛譚乃謝、求レ反、終身不レ敢言レ歸」
【遏水】アツスイ　みづをとどむ。隋書、馬懿傳「懿于下流一以二絙繩一繫二車數百一、絶レ河、截二土臺一―一而後度」
【遏絶】アツゼツ　とどめたつ、とどめ滅ぼす。書、呂刑「―二苗民一」
【遏寇】アツコウ　とどめうばふ。淮南子「至道之人、不レ可二―一」
【遏防】アツボウ　とどめふせぐ。晉書、劉毅傳「夢陽接レ虜、實示レ有二―一」＝防遏。
【遏雲】アツウン　鳴り物をとどめて靜にする、音曲停止。晉、殷興「三載四海、―二八音一」
【遏劉】アツリュウ　王者が殺戮を絶ち止むる、劉は殺。詩、周頌「勝レ殷―レ―、者二定爾功一」

【違】＊　微

○たがふ、ちがふ、もとる（背）○たがひ、ちがひ（差異）○そむく（背）○さる（去）はなれる（離）中庸「忠恕―道不レ遠」○とほざかる（遠）○はなす、とほざく、さく（避）易、乾卦「盥則―之」○はしる（奔放）○よこしま（邪惡）左、桓二三昭「德塞―」○あやまち（過失）「一失」○うらむ、怨を含ふ。○依―はぐづぐづして決せざる貌。

猗遠。

【違】（ヰ）遠・去・行の別は距（一八九三頁三段）の條を見よ。○違・差・爽・舛の別は差（五六〇頁三段）の條を見よ。

【違怨】（ヰエン）うらみの心に蓄ふるもの。曾經「否則厥心ー」

【違忌】（ヰキ）險氣をいみさける。國語「夫陳不ー一聞也」注「違、避也、忌謂ノ聞也、晦險氣盡、兵亦除、故忌レ之」

【違科】（ヰクワ）法令にそむく。晉書、王導傳「補二吳興太守一、郡荒、人飢、輒開倉贍卹、輒ノ紿ノ省十七八萬、朝廷以レ一レ免二縮官一、士庶謂ノ開盜レ之」＝犯科。

【違警罪】（ヰケイザイ）重罪輕罪以外の極めて輕き罪にて拘留又は科料に處すべきもの。

【違言】（ヰゲン）○さからふことば、互に爭ふことば。左、隱十一「鄭・息有二ー一」（鄭・息は二國の名）○道理にそむけることば。管子「邪行亡於體一ー不レ存レ口」

【違憲】（ヰケン）○おきてにそむきたがふ。後漢書、第五倫傳「縱以法則傷レ恵、私以レ親則ー一レ」＝違法。○國憲法にそむく。

【違忤】（ヰゴ）さからふ。後漢書、馬援傳「初隗囂二子郭氏二不三敢復ー二一禁家一」

【違作】（ヰサク）國ふさく、凶作。

【違算】（ヰサン）○計畫ガイカクの相違、目算ちがひ。○勘定ちがひ。

【違旨】（ヰシ）他人の意にそむく。

【違貳】（ヰジ）二心をいだく。又、其の人。晉書、荀勗傳「明公以二至公一宰二天下一、宜五正義以伐二ー一」

【違式】（ヰシキ）一定の法式にたがふ。

【違失】（ヰシツ）あやまつ。あやまちの後漢書、百官志「有二ー一舉二劾之一」

【違捨】（ヰシャ）たがひすてる。宋書「愛二好文義一、未二曾ー一」

【違常】（ヰジヤウ）通常の行とちがふ。魏志、袁紹傳「紹前後數陳、皆以二語言不一節、舉動ー一也」

【違舛】（ヰセン）たがひあやまる。北史、宇文愷傳「明堂圖題曰、後魏不レ依二古制一、室開二通巷一ー一處多」＝乖舛・錯舛。

【違道】（ヰダウ）道よりへだたり去る。中庸「忠恕ー一レ不レ違」

【違敕】（ヰチョク）みことのりにそむく。＝違勅。

【違背】（ヰハイ）たがひそむく。禮記正義序「ー一本趣、多引二外義一」＝違反・違戻。

【違戻】（ヰレイ）そむきすてておこなはず。後漢書、中興諸將傳論「挑レ情、則ー一ー禁典」

【違法】（ヰハフ）規則、又法律にそむく。＝犯法。

【違反】（ヰハン）たがひそむく。後漢書、律歷志「ー一經文、謂之蔽者」

【違犯】（ヰハン）おきてにたがひをかす。戰死、君道「刑法ー一」

【違叛】（ヰハン）たがひそむく。侯喜浩文「由レ卿修二妾道一、乃ー一」＝違反。

【違遇】（ヰグウ）たがひあやまる。宋書、謝晦傳「晦陰レ問酬辨、曾無ー一」

【違羅】（ヰラ）反覆の義、違は厓。事柄のうたがはしき點をつまびらかにたづね明かにする。

【違變】（ヰヘン）これまでのしきたりをかへる。

【違命】（ヰメイ）命令にそむく。

【違約】（ヰヤク）約束にそむく。史、項羽紀贊「ー一レ王レ漢、背二懷義一、楚」

【違離】（ヰリ）そむきはなれてゐる。周伯琦詩「九載ー一得二還書一」

【違戻】（ヰレイ）たがひもとる。後漢書、范升傳「太史公ー一五經一、謬二孔子言一」＝違反・違背。

【違例】（ヰレイ）○これまでのしきたりとちがふ。○國食人の病氣にいふ、御不例。

【違和】（ヰワ）身體の調和を失ひて病む。魏書、彭城王傳「聖躬ー一」

【遖遖】（ヰヰ）迷ひて道にそむく。漢仲舒賦「聖賢不レ能レ開二愚夫之ー一」

【違而道】（ヰジダウ）命令には違へども道に合へる義。國語「子夕曉爰、子木有二幸饒一而無二妄費一、君子曰、ー一」（子木は、楚の大夫）

【遊】（イウ）

（尤）勝に同じ

○あそぶ（遨）あそび「春ー」「雅ー」「佚ー」「出ー」○たのしむ（樂）心を慰サめたのしむ。○たはむる（戲）「ー戲」○修學・見物又は仕官を求めるために他國の客となる、たび（客旅）「ー子」「浪ー」○己の說をさまはる「ー說」○まじはり、よしみ。○まじはる友、ともだち「交ー」○ひまびと、常業なきもの。○一定の所屬なきもの「ー兵」「ー軍」「ー魂」

【遊意】（イウイ）あそびたしと思ふこころ。＝遊情。

【遊遨】（イウガウ）あそびたのしむ。北史、魏南安王楨傳「飲酒ー一、不レ擇二交友一」

【遊宴雜戲】（イウエンザツギ）あそぶ宴と、驚く能と。雜戲の巧妙なる喩（晉書、王戎之傳）

【遊衍】（イウエン）あそびたのしむ。詩、大雅「及レ爾ー一」

【遊燕】（イウエン）遊びてさかもりする。陳子昂詩「歸レ楚復ー一」＝遊讌・遊宴。

【遊讌】（イウエン）前條に同じ。

【遊幸】（イウカウ）天子の出遊。唐書、楊貴妃傳「紀每從ー一乘レ輿、則力士授ー一轡」

【遊敖】（イウガウ）あそぶ、散歩。遊の漢書、食貨志「平凱ー一、冠蓋相望」

【遊學】（イウガク）他國に出でて學問する。史、荀卿傳「ニー於齊一」

【遊閑公子】イウカンコウシ 遊樂にふける富貴の子弟（史、貨殖傳）

【遊氣】イウキ ○空中にたなびく雲氣。晉書、天文志「一一蔽レ天、日月失レ色」○いきのこれる氣息。殘喘。元史、貞黎殘姓、一一驚魂」

【遊嬉】イウキ おもしろくあそびたはむる。呂向、美人賦「左右相視、一一未レ已」

【遊戲】イウギ あそびたはむれる。史、周紀「其一一、好レ種二樹麻蔑一」世說、排調「蘇長公在二黃州一、天下傳二其已死一、後七年北歸、見二南昌太守孫祖洽一、問曰、世傳端明已歸二道山一、今何爲一ニ一人間一耶」

【遊戲三昧】イウギサンマイ ○佛專心衆生を救濟する。傳燈錄「頓悟忘レ筌、一一」三昧は專心。○轉じて藝術などの妙を極めたる義。冷齋夜話「想二見其高韻一、氣壓二羣賢一、獨二立萬象之表一、筆端三昧、遊戲自在也」

【遊燕】イウエン 酒宴などを催してきょうじ樂む。

【遊君】イウクン 圖うかれめ。‖遊女。

【遊軍】イウグン 遊兵に同じ。魏志、荀攸傳「張繡以二一一一仰二食於劉表一」

【遊郭】イウクワク 遊里に同じ。‖遊鄭。

【遊宦】イウクワン 他國に行きて仕宦する。漢書、匡衡傳「士之一一所レ以至二所レ欲者一」

【遊觀】イウクワン ○あそびみる。四子講錄「一一乎道德之域」‖遊覽。○遊ぶために棄てしものみ御殿。晉書、文苑太子傳、造二一一一數百聞一」

【遊騎】イウキ やすらかにいこふ。水經、注「道路一一者、惟得二疲倦一而已」‖遊息。

【遊藝】イウゲイ ○心を藝術によせて樂む。論、述而「依二於仁一、游二於藝一」より出づ。○圖敵舞音曲など。

【遊屐】イウゲキ 遊びあるくにはく下駄。趙孟頫詩「山好壁一一、溪清一釣船」

【遊擊】イウゲキ 遊軍を以て敵をうつ。漢書、蘇建傳「一一詩事」

【遊闕】イウケツ 缺けたる所を補充する遊兵。闕は缺。左、宣十二「率二一一一四十乘一」

【遊俠】イウケフ をとこだて。一身を忘れて弱者を保護し、勢力を張りて國法を畏れざる行爲。又其の人（史、遊俠傳）‖任俠。

【遊山】イウザン ○やまあそび。遊船參看。○圖ユサン 山又は水にあそびたのしむ。‖行樂。

【遊子】イウシ たびびと。李白詩「浮雲一一意、落日故人情」‖旅客。

【遊絲】イウシ かげろふ、いとゆふの快晴の日に蜘蛛の網の如きものが空中に見える現象。梁武帝詩「曜靈曖二一一一」‖陽炎・野馬・游絲。

【遊辭】イウジ まじめでなきことば。左傳「今侵二其一一偽詐一」

【遊人】イウジン ○あそび樂む人。○圖ユウジン 一定の業務の無き者、遊民。又ばくちうち、博徒。

【遊刃有二餘地一】イウジンアリヨチアリ 肉を割くに庖刀を自由につかふ事を喩するに從容として餘裕あるに喩ふ。莊、養生主「恢恢乎其于二遊刃一、必有二餘地一矣」

【遊將】イウショウ 遊軍の大將（兵衛）

【遊翔】イウショウ かけりて飛び遊ぶ。宋書、符瑞志「白鳥集二齊郡城一、一一庭字、經二九日一乃去、來蘇隨從無數」

【遊手】イウシュ ○手をあけて使用せず、手をあそばす。儀禮、聘禮「大夫二手受レ束」注「受授不二一一一、愼レ之也」○爲すことも無くぶらぶらと暮す。又、其の者。後漢書、章帝詔「務盡二地力一、勿レ令二一一一」

【遊說】イウゼイ 善良の士に說きて變る。荀、勸學「君子居必擇レ鄉、遊必就レ士」

【遊食】イウショク 職業なく只食ひて遊ぶ。荀、成相「臣下職莫二一一一」

【遊説】イウゼイ 日を遊ばしながめる。晉書、會稽王道子傳「府內有レ山、因得二一一一」說者也、然修飾太過、非下示二天下一以レ儉」

【遊星】イウセイ 各自の軌道に循ひて太陽の周圍をめぐる星。恒星の對。‖行星・惑星。

【遊說】イウゼイ 諸侯を勸動して己の說を說きすすめる。史、齊太公世家「一二一諸侯一無レ所レ遇」

【遊涉】イウセフ あそびあるく。晉書、謝安傳「一一二紀一一境內晏清」

【遊惰】イウダ あそびおこたる。南史、孔靖傳「無二一一一其任一」

【遊船】イウセン ふねに乘りてあそぶ。又、其の船。ゆさんぶね。宋史、閻婆國傳「五月一一、十月遊山」

【遊仙窟】イウセンクツ 一卷、唐の張文成が仙窟に遊びたる事を記したる小說、和版あり。

【遊仙枕】イウセンチン 枕して寢ぬれば仙境に遊ぶ夢を見るといふ枕。開天遺事「龜玆國奉二遊枕一枚、其色如二瑪瑙一、溫潤如レ玉、製作甚工、枕レ之寢則十洲三島四海五湖、盡在二夢中一見」帝因賦二一一一」

【遊息】イウソク 心安くいこふ。揭傒斯、送貧賦「貧遂不レ去、與レ我一一」

【遊卒】イウソツ 諸侯・卿大夫士の庶子にして、父の事に副從する者。遊は未だ仕へざるもの、卒は停に通ず（禮、喪義）

【遊惰】イウダ あそびおこたる。南史、孔靖傳「無二一一一其任一」

【遊船】イウセン ふねに乘りてあそぶ。又、其の船。ゆさんぶね。宋史、閻婆國傳「五月一一、十月遊山」

【遊仙窟】イウセンクツ 一卷、唐の張文成が仙窟に遊びたる事を記したる小說、和版あり。

【遊仙枕】イウセンチン 枕して寢ぬれば仙境に遊ぶ夢を見るといふ枕。開天遺事「龜玆國奉二遊枕一枚、其色如二瑪瑙一、溫潤如レ玉、製作甚工、枕レ之寢則十洲三島四海五湖、盡在二夢中一見」帝因賦二一一一」

【遊息】イウソク 心安くいこふ。揭傒斯、送貧賦「貧遂不レ去、與レ我一一」

【遊卒】イウソツ 諸侯・卿大夫士の庶子にして、父の事に副從する者。遊は未だ仕へざるもの、卒は停に通ず（禮、喪義）

【遊惰】イウダ あそびおこたる。南史、孔靖傳「無二一一一其任一」

【遊船】イウセン ふねに乘りてあそぶ。又、其の船。ゆさんぶね。宋史、閻婆國傳「五月一一、十月遊山」

【遊仙窟】イウセンクツ 一卷、唐の張文成が仙窟に遊びたる事を記したる小說、和版あり。

【遊仙枕】イウセンチン 枕して寢ぬれば仙境に遊ぶ夢を見るといふ枕。開天遺事「龜玆國奉二遊枕一枚、其色如二瑪瑙一、溫潤如レ玉、製作甚工、枕レ之寢則十洲三島四海五湖、盡在二夢中一見」帝因賦二一一一」

【遊息】イウソク 心安くいこふ。揭傒斯、送貧賦「貧遂不レ去、與レ我一一」

【遊卒】イウソツ 諸侯・卿大夫士の庶子にして、父の事に副從する者。遊は未だ仕へざるもの、卒は停に通ず（禮、喪義）

【遊惰】イウダ あそびおこたる。南史、孔靖傳「無二一一一其任一」

【遊船】イウセン ふねに乘りてあそぶ。又、其の船。ゆさんぶね。宋史、閻婆國傳「五月一一、十月遊山」

【遊仙窟】イウセンクツ 一卷、唐の張文成が仙窟に遊びたる事を記したる小說、和版あり。

【遊仙枕】イウセンチン 枕して寢ぬれば仙境に遊ぶ夢を見るといふ枕。開天遺事「龜玆國奉二遊枕一枚、其色如二瑪瑙一、溫潤如レ玉、製作甚工、枕レ之寢則十洲三島四海五湖、盡在二夢中一見」帝因賦二一一一」

【遊息】イウソク 心安くいこふ。揭傒斯、送貧賦「貧遂不レ去、與レ我一一」

【遊卒】イウソツ 諸侯・卿大夫士の庶子にして、父の事に副從する者。遊は未だ仕へざるもの、卒は停に通ず（禮、喪義）

【遊惰】イウダ あそびおこたる。南史、孔靖傳「無二一一一其任一」

【遊船】イウセン ふねに乘りてあそぶ。又、其の船。ゆさんぶね。宋史、閻婆國傳「五月一一、十月遊山」

【遊仙窟】イウセンクツ 一卷、唐の張文成が仙窟に遊びたる事を記したる小說、和版あり。

【遊仙枕】イウセンチン 枕して寢ぬれば仙境に遊ぶ夢を見るといふ枕。開天遺事「龜玆國奉二遊枕一枚、其色如二瑪瑙一、溫潤如レ玉、製作甚工、枕レ之寢則十洲三島四海五湖、盡在二夢中一見」帝因賦二一一一」

【遊息】イウソク 心安くいこふ。揭傒斯、送貧賦「貧遂不レ去、與レ我一一」

【遊卒】イウソツ 諸侯・卿大夫士の庶子にして、父の事に副從する者。遊は未だ仕へざるもの、卒は停に通ず（禮、喪義）

【遊説】イウゼイ 諸侯を勸動して己の說を說きすすめる。史、齊太公世家「一二一諸侯一無レ所レ遇」

【遊涉】イウセフ あそびあるく。晉書、謝安傳「一一二紀一一境內晏清」

【遊逆】イウギヤク まじはり。交際の範圍。つきあひ。史、陳承相世家「一一日廣」

【遊蕩】イウタウ だらしなくあそぶ。放恣。武帝紀、注「少好二飛鷹走狗一、一一無レ度」‖遊蕩。

【遊說】イウゼイ ○遊說に同じ。戰國策「一一之士、無二敢處二患於前一」○むだばなし。後漢書、儒林傳「天子修二設大學一、狀但使二人一一一其中一」‖游談。

【遊女】ユウジョ うかれめ。娼妓。詩、周南「漢有ニ遊ー一、不ン可ン求思」‖游女。

【遊艇】ユウテイ 小舟に乗りてあそぶ。又、其の舟。曾鞏詩「泝ン險飛ニ一ー一、探ン奇漾ニ釣絲ー」

【遊兆】ユウチョウ 丙ヒノエの異稱。剛雍に柔兆に作る。史、曆書「ー一執徐三年」注「ー一、景也」（景は丙）‖游兆。

【遊戯】ユウギ 遊びめぐりてかりする。敏は變。‖遊佃・遊獵。

【遊陪】ユウバイ めうへの人に隨ひて遊ぶ。高適詩「孤言殊ニ語默一、何意忝ニ一ー一」

【遊方僧】ユウホウソウ 四方に雲遊する僧。‖行脚僧。

【遊放】ユウホウ あそびてほしいまま。南史、謝嶽運傳「在ン郡一ー一、不ン異ニ永嘉一爲ニ有司一所ン劾」

【遊盤】ユウバン あそびたのしむ。歐陽修詩「荷擔ニ四方志一、所在可ニ一ー一」

【遊兵】ユウヘイ 所屬を定めず、味方の危き處をすくふ爲めにはたらく軍隊。史、彭越傳「彭越常往爲ニ漢一ー一」‖遊軍。

【遊猟】ユウリョウ あそびながめる。曹植、盤石篇「南極蒼梧野、一一窮ニ九江一」‖遊覽。

【遊歩】ユウホ ○ぶらぶらと遊びあるく、散歩する。列仙傳「一ニ一仙庭一」○心を物事に寄せる。後漢、管輅傳、注「一ニ一道術一」

【遊牧】ユウボク 一定の住所なく水草を逐ひて牧畜を業とする者。清の張穆に蒙古一記の著あり。

【遊民】ユウミン 一定の職なくしてぶらぶらと遊び居る民。漢書、食貨志「末技遊食之民」‖遊手。

【遊目】ユウモク 目を動かしてみる。禮記「若父則一レ一、母ン上ニ於面一、母ン下ニ於帶一」

【遊冶郎】ユウヤロウ 酒色にふける男、たはれを。李白詩「岸上誰家ー一、三三五五映ニ垂楊一」

【遊預】ユウヨ あそび樂しむ。白居易詩「仙亭日登眺、虎丘時一ー」

【遊豫】ユウヨ ○帝王の遊幸。孟、梁惠王「一遊一豫、爲ニ諸侯度一」○あそびたのしむ。唐、謝詩「逍遙步ニ成陽一、暇日聊一ー」‖遊豫。

【遊弋】ユウヨク ○遊獵をいふ、弋は鳥を繳へる矢（史、李斯傳）○軍艦の海上に往來して警備する義。

【遊樂】ユウラク あそびたのしむ。爾雅「般者ー一也」

【遊覽】ユウラン あそびながら觀る。孫綽、天台山賦「ー一既周、轉都心開」

【遊里】ユウリ 圖 いろざとの花街・遊廓。

【遊離】ユウリ 化學にて單體が他と化合せずに存在する。又化合物が單體に分れる。

【遊覆】ユウフク 遊行して射獵する（史、呂后紀）晉の張華、梁の劉孝威並に一ー篇あり。‖遊獵。

【遊歷】ユウレキ 各地をへめぐり遊ぶ。晉書、王獻之傳「ー一既畢」‖歷遊。

【遊必有ン方】ユウヒツユウホウ 父母の存命中、子たる者の遊學するには、一定の場所を定むべきをいふ。論、里仁「父母在不ニ遊遠一、ー一」

【運】 ウン 問

○めぐる「旋ー」めぐらす、回轉せしむ。○ゆく（行）○もちふる（用）「ー用」南史、齊高帝紀「公神謀内ー」○うごく。うごかす（動）○うつる（移徙）○はこぶ（轉輸）「ー輪」はこび。○まはりあはせ、氣數。○天より人に賦したる命數「一命」「天ー」「ー祚」○とき、をり（機會）○地の南北。廣（東西）の對。越語「廣ー百里」

同訓異語 ルダ運・轉・遷・環・行・巡・周・旋・回等の別は續（一五〇二頁一段）の條を見よ。

【運意】ウンイ 工夫をめぐらす、考へる。

【運河】ウンガ ほりわり、人力にてきり開き舟を通ずるもの。吳王夫差に始まり、隋唐宋に繼續し、元に大成す。

【運行】ウンコウ めぐりゆく。易、繫辭「日月ー一、一寒一暑」

【運氣】ウンキ 運命に同じ。‖運勢。

【運斤成風】ウンキンセイフウ 運ン斤成ン風（六二九頁二段）を見よ。

【運輸】ウンユ 圖 運貨。運送料。

【運會】ウンクワイ 世のめぐり合せ。皇極經世書「三十年爲ニ一世、十二世爲ニ一運一、三十運爲ニ一會一、十二會爲ニ一元一」

【運座】ウンザ 圖 多人數集りて俳句を作り、互に優劣の點をつける陪席。

【運漕】ウンソウ 船にて物をはこぶ。通鑑、隋文帝紀「開ニ通濟渠一以通ニ一ー一」

【運籌】ウンチュウ 謀計をめぐらす。王褒文「ー一雖ン繩、參ニ謀幕府一」‖運筭。

【運筭】ウンサン 數學にて算用する器、そろばんをおく。

【運針】ウンシン はりのはこびかた。ぬひやう。

【運上】ウンジョウ 圖 德川時代、各種の租稅。又特に船の稅。

【運筆】ウンピツ たなごころをめぐらす。事の甚だ易きに喩ふ。孟、梁惠王「治ニ天下一可ン運ニ之掌上一」

【運輸】ウンユ 車馬船などにて物をはこぶ。司馬相如文「又擔爲ニ轉粟一ー一」

【運數】ウンスウ 運命に同じ。白居易詩「人命長短繫ニ一ー一」

【運勢】ウンセイ めぐりあはせ、運命のいきほひ。

【運船】ウンセン ふねをこぎやる。又、物をはこぶ船。晉書、石勒載記「會江南一ー玉、擅ニ布米數十艘一、將士爭ン之、不ン設ン備」

【運賃】ウンチン 運貨に同じ。

【運命】ウンメイ 世のめぐりあはせ。薑唐

貴、順宗紀論「克昌ニ一一」‖運命・天運・世運。

【運租】ウンソ　租稅を運び送る。晉書、食貨志傳「少減貲以ニ一一ニ貧ノ業」

【運送】ウンソウ　はこびおくる。北齊書、盧叔武傳「穀食豐饒、一一不ノ絕、彼衆求ノ戰、我不ノ應之、彼若退軍、即乘ニ其弊ニ、不ノ過ニ三年ニ、彼自破矣」‖運輸・輸送。

【運穿】ウンセン　はかりごとをめぐらす。漢書、高帝紀「一ニ雄幄之中、決ニ勝千里之外ニ、吾不ノ如ニ子房ニ」

【運貨】ウンカ　運送に要する費錢。

【運轉】ウンテン　○めぐる、はたらかす。莊子「惠者其一一、而不ノ能ニ自止ニ邪」○車などをうごかしまはす。

【運轉手】ウンテンシュ　圖汽車・電車などの機關をとりあつかふ人。

【運動】ウンドウ　○めぐりうごく。はたらく。魏仲舒、雨雹對「一一抑揚」○衛生の爲めからだをうごかす「一一令」○圖或る目的を遂する爲めに奔走盡力する。

【運之極】ウンノキハマル　運のつき（後漢書、宦者傳）

【運搬】ウンパン　運送に同じ。搬は移。

【運筆】ウンピツ　ふでづかひ、筆を動かす。北史、陳元康傳「運ニ一ノ、筆不ノ得ノ凍、俄頃數紙」

【運開】ウンヒラク　仕合がよくなる。謝蕙連詩「一一中ニ悲凉ニ」

【運否天賦】ウンナシテンプ　圖人の運不運は天命に由る義。

【運壓】ウンアツ　體力を強くせんが爲め勞動するをいふ。壓は壓ルの音書、陶侃傳「在ニ荊州ニ一朝運ニ百壓於齋外ニ」

【運運】ウンウン　はかりごとをめぐらす。後漢書、李膺傳「陳蕃與ニ竇武ニ共乘ニ胡政ニ一ノ誅ニ諂宦官ニ」

【運遇】ウングウ　めぐりゆく。陸雲文「日月一一、一何流速」

【運命】ウンメイ　まはりあはせ、人世に遭遇する吉凶禍福。魏の李康に一一論あり、曰く「治亂運也、窮達命也、貴賤時也」‖運數。

【運命論】ウンメイロン　世の治亂人事の吉凶禍福はすべて自然の運によりて豫め定まりといふ說。‖宿命論。

【運用之妙存ニ乎一ノ心ニ】ウンヨウノミョウソンコヲイチノココロニ　戰略は活用を貴ぶをいふ。宋史、岳飛傳「岳飛曰、陣而後戰、兵法之常、——」

【運路】ウンロ　物をおくりはこぶみち。宋史、地理志「眞州當ニ一一之要ニ」‖運道。

【遠】

遠（走部十畫）の俗字。

【遐】

カ　圖

○とほし、はるか（遠）「荒ー」「國家陵遐、同享ニ一一ニ」

【遐想】カソウ　遐は遠、遠く隔りたる人を思ひやる。又、遠く高きおもひ。晉書、謝安傳「作興ニ于我ノ之意ニ、遐ニ治城ニ、慨然ニ一一、有ニ高世之志ニ」（世說に遠想に作る）

【遐志】カシ　遠大なるこころざし。新論「大有ニ小察細計ニ者、知ニ其必無ニ一一ニ」

【遐邇】カジ　とほきと、ちかきと。司馬相如、難ニ蜀父老ニ「一一一體、中外禮備」‖遠近。

【遐壤】カジョウ　遠き土地。柳宗元、獻ニ平淮夷雅ニ表ニ「一一ニ」

【遐躅】カショク　遠き昔のあと。夏侯湛文「慕ニ望往代ニ、企想ニ一一ニ」

【遐眺】カチョウ　とほくみわたす。謝朓詩「方ノ曠ニ南樓ニ、憑ノ軒肆ニ一一ニ」

【遐陬】カスウ　かたいなか、遠き田舍。鄭玉詩「東四南北窮ニ一一ニ」

【遐逝】カセイ　とほくなる。楊萬里詩「鴈居忽飛動、一一即回轉」

【遐昔】カセキ　遠きおほぞら。何中詩「探ノ遂裂ニ蘂陰ニ源、顧洞ニ一一ニ」

【遐迹】カセキ　とほきあと。揚雄賦「軼ニ五帝之一一ニ」

【遐宜】カギ　遠方までのべしく。何承天頌、晉樂四廢、頌廢一一‖遐暢。

【遐開】カヒラク　大いに開けて明か。牛弘、明堂議「鳥獸一一、化覃ニ海外ニ」

【遐作】カサク　ながくつづくまいはひ。詩は嗣、作晉、樂志、后氏、延一一ニ安

樂推二萬方一」

【遐算】カサン 遠方にまでおよぶ。算は及。駱賓王、姚州破レ賊露布「玄謀廣遠、妙略ー一」‖遠算。

【遐祉】カシ ながくつづくさいはひ。前秦錄「垂二祚無窮一、永延二ー一」劉基、龍虎臺賦「天子萬年、以介二ー一」

【遐胄】カチウ 末孫の擧處賦「有二軒轅之ー一兮」

【遐齡】カレイ 遠方の美賓。釋妙聲、送二僧歸一自東一詩「王化能柔遠、ー一亦會同」

【遐福】カフク とほくゆきわたる幸福。漢、隋高祖頌「皇威遠振、帝德ー一」

【遐遏】カツ はるかにとほる。曹植文「天靜人和、兵敎ー一」

【遐眺】カチョウ はるかにながめる。嵇康詩「ー一二存亡」‖遠眺。

【遐登】カトウ はるかにのぼる。東晉詩「精爽ー一、形骸幽居」

【遐統】カトウ はるかに遠き系統。曹植、祭文「留二軒轅之高隆一、紹二虞氏之ー一」

【遐年】カネン ながいき、長命。‖遐齡。

【遐方】カハウ 遠き地方【晉書、宣帝紀】

【遐域】カヰキ とほくへだたりたる地にあるたみ。長楊賦「ー一爲レ之不レ安」

【遐邇】カジ とほくはるかで近苑珠林「聖德ー一、冠二絕人天一」

【遐被】カヒ 遠方にまでおよぶ。北史、秃髮傳植敎記「威德不レ能二ー一、經略無二以及一レ遠、何以荷二安黃、屋一、無レ愧二黔黎一」‖廣被。

【遐福】カフク 大いなるさいはひ。詩經「降二ー一、惟日不レ足」‖洪福。

【遐揚】カヤウ とほくあがる。潘岳詩「大晉統レ天、仁風ー一」

【遐齡】カレイ ながいき。魏書、常惠傳「以知命一爲二ー一、以二樂天一爲二大寶一」‖遐年。

【遖】ガク 遠

○心に見ることを欲せずして見る。‖逆○あふ(遇)楚辭、九章「重華不可ー一兮」‖迓。

【遇】グ 通音グウ

○あふ、であふ、道路にて相逢ふ、偶然に會ふ、期せずして逢ふ。○世に用ひられる、時世に合ふ、時めく「知ー一」「値ー一」「ー一合」(不ー一は不仕合)○まつ(待)もてなす(接待)漢書、季布傳「ー一人恭謹」もてなし「厚ー一」「寵ー一」「禮ー一」「優ー一」○あたる(當)對敵する。○をり、しほ。○またま、ちやうどであふ義。韓愈、柳子厚墓誌銘「ー一有レ以夢得事一白」上者」‖偶。

同訓異義 遇・逢・遭・値・合・會・晤○遇はふと行きあふなり。期せずして會するを遇といふ、偶字の意を兼ぬ。○逢・遭・値の三字は、略ー一同じ、兩方より行き逢ふなり。○合はひったりと符を合せたる如く、よく合ふなり、吻合・符合と連用す。詩經「妻子好合、如レ鼓二瑟琴一」○會は總べ集る義、會計は總算用なり、朝會・會同と熟す。○晤は人相見曰レ晤と註す、面晤と連用す。

【遇合】グガフ 賢君に出あひて用ひられる。君臣の遭遇。史、侯幸傳「力田不レ若レ逢レ年、善仕不レ若二ー一」

【遇遭】グサウ 貴められる、證責にあふ。魏書、東路頭傳「太宗性明察、左臣多以二職事一ー一レ」‖被譴。

【遇鏡】グキヤウ いぐるみに射られる。左思賦、精衛銜レ石、而ー一レ」

【遇榮】グエイ たたりにあふ。黃庭堅詩「年來ー一親三喪一」

【遇待】グタイ もてなす。後漢書、蔡邕傳「卓重二邕才學一、厚相ー一」(卓は董卓)‖待遇。

【過】㊀クヮ ㊁クヮ 歌 箇

㊀すぐ。すごす、こゆ(越)度を越える、あまる。論、先進「ー一猶レ不レ及」○まさる、すぐる(勝)○あやまつ、あやまる。あやまち「ー一失」「大ー一」「細ー一」論、學而「ー一而勿レ憚改」○つみ(罪愆)○とがむ、せむ(責)譴責する。呂覽、適威「ー一不識」㊁ふ、經る、すぐ、通る(經歷)「經ー一」○すぎ去りし時「ー一去」○わたる(度)○よぎる、たちよる。○おとづれる(訪問)「ー一訪」○易の卦名。大ー一は異下兌上、小ー一は艮下震上。

同訓異義 過・誤・謬・訛・錯・愆・失の別は誤二八の九頁一段の條を見よ。

【過愛】クワアイ 度にすぎてあいする。新書「失レ愛不レ仁、ー一レ不レ義」

【過惡】クワアク あやまちの荀子「君子正義直指二衷人之ー一、非二發疵一也」

【過優】クワユウ 己の分にこえすぐる。蘇軾詩「正作二御書一已ー一」

【過雨】クワウ とほりあめ、むらさめ。盧綸詩「ー一開レ樓看二晩虹一、白雲相逐水相通」

【過拾遺】クワシフヰ 天子の徳の缺けたるをおぎなふ。漢書、汲黯傳「出二入禁闥一、ー一」

【過客】クワカク 通行する人、たびびと。李白、春夜宴二桃李園一序「光陰者百代之ー一」

【過誥】クワカウ あやまち、とがめ。北史、韋世康傳「不レ顧二人ー一以求二名譽一」

【過量】クワリヤウ つみあやまち。馬融文「固

之一一、事合二諸辟一」

【過悪】クワアク しそんじ。漢書、叔孫通傳「人主無二一一一」

【過化存神】クワクワソンシン 聖人徳業の盛んにして其の経歴する處は、其の民必ず從はざるは無く、其の神心の存する處は、神妙不測にして、天地の化と同じく運行す。孟、盡心「夫君子所レ過者化、所レ存者神、上下與二天地一同レ流、豈曰レ小二補之一哉」

【過患】クワンあやまち、うれひ。顔氏家訓「有二盛名一而免二一一一」

【過観】クワンたちよりて見る。

【過計】クワイ ○あやまれるはかりごと。戦國策「燕國大亂、君臣一レ一」‖失計・失策。○はかりごとをあやまる。

【過激】クワゲキ あまりにはげし、はげしきにすぎる。

【過言】クワンいひそこなひ。論、顔淵「駟不レ及レ舌」集解「一一一出、駟馬追レ之、不レ及レ舌也」‖失言。

【過誉】クワヨ ことあつくかへりみる。宋書、鄭鮮之傳、「猥承二人主二謬蒙二一一一」‖殊寵。

【過午】クワゴ ひるすぎ、午後。李參詩「一一方始飯」‖午下。

【過去】クワコ すぎさりし時。搜神記「曾結善解二諸衛一、知二未來一一之事一」

【過去帳】クワコチヤウ 死者の俗名、法名、死去の年月日等を記したる帳簿。‖鬼籍。

【過誤】クワゴあやまち、あやまり。漢書、孝成許皇后傳「幸得レ免レ離二冷屋之下一、備二後宮掃除一、蒙二一一之罪一」

【過刻】クワコクさきほど、先刻。

【過差】クワサおごり。書經、傳「沈湎于酒、一一非レ度」

【過罪】クワイあやまち。つみと。戰國策「臣無二過失一、忠無二一一一」

【過褊】クワヘン 黒色の度の過ぎたるもの。魏收文「一レ一爲レ緇、踰レ緑作レ青」

【過失】クワシツあやまち。漢書、刑法志「三習、一日弗識、二日一一、三日直定」

【過日】クワジツ さきのひ、先日。‖前日・當日。

【過秦論】クワシンロン 漢の賈誼の作りし文。秦が法律に任にて仁義を修めず、故に二世にして滅びたるをとがむ、もと新書中に在りて、過秦篇といふ。

【過奨】クワショウ 過稱に同じ。

【過所】クワショ 旅客が關所を通過する時の手形。俘名「一一、至二關津一以示也、或曰、傳過也、移二所在一識以爲レ信」

【過稱】クワショウ ほめすぎ。實にすぎたるほまれ。後漢書、明帝紀「有二一一一虛譽一」‖過譽、過褒。

【過剰】クワジヨウ あまる。あまり。

【過貪】クワタン たべすぎる。‖暴食。

【過経】クワケイ 甚だしくすぎる。漢書、劉敞傳「博見強志、一二一于人」

【過存】クワソンおとづれる、見舞ふ。漢書、馬援傳「開至二河内一、一二伯卷一」‖候問・過訪。

【過多】クワタ ○おほすぎる。○過分に同じ。

【過大】クワダイ 大きすぎる。‖奢大。

【過怠】クワタイあやまち、てぬかり。

【過當】クワタウあたりまへよりすぎる。相當の數より過ぎる、卽ち味方の死者よりも敵の死者の方が多し。司馬遷、報二任安一書「所レ殺一一」

【過駭】クワガイ きちがひ、きゝあやまり。史記「將軍一レ以與二寂人一有レ隙」韓詩外傳「一一殺レ人」

【過重】クワヂウおもすぎる。

【過抵】クワテイ よぎりいたる。漢書、尹翁歸傳」

【過程】クワテイ 物事のうつり進む順序。

【過度】クワド ○舟のわたしば、度は渡。方言「一一調二之沙濟一」○轉じて文脈のうつりかはる所。○一度にすぐ「一一の勉强」

【過渡】クワト ○わたし場。○其時代より新時代にうつり代る「一一期」‖過度。

【過倍】クワバイ 甚だしく數が超過する。

【過訪】クワホウをとづれる。‖訪問。

【過褒】クワホウほめすぎ、褒は人の美を揚げる。‖過稱・過譽。

【過法】クワホウ おもきおきて。史、老莊申韓傳「不レ如下以二一一一誅之上」‖酸法。

【過半】クワハン 半分以上。孟、滕文公「蚓食レ實者一一矣」

【過半數】クワハンスウ 全數の半分以上のかず。

【過般】クワハン さきごろ。‖先般。

【過眉杖】クワビジヤウ 杖の長くして眉に過ぐるもの。陸游詩「瘦竹——、輕紗折角巾」

【過敏】クワビン 過度にするどし「神經一一」

【過不及】クワフキフ すぎると及ばざると。

【過不足】クワフソク あまると、たらざると。

【過分】クワブン ○身分に過ぐる。左、傳二八、注「無レ求二一一一」○圓十分なる滿足。

【過目】クワモク 目を通してみる。梁書、昭明太子傳「讀書數行竝下、一レ皆一一」

【過勞】クワラウ ほめすぎ。人物志「是故同體之人、常患二于一一一」‖過稱・過褒。

【過労】クワラウ 心身をつからしすぎる。

【過量】クワリヤウ 分量にすぎる。楊惲奏文「平爲二大臣一受レ恩一一」

【過慮】クワリヨおもひすごす。おもひすぎ。

【過料】クワリヤウ 罪過のつぐのひに出す金。‖罰金。

【過ㇾ過拾ㇾ遺】クワカシフイ 人臣が君徳の闕けたるを補ひすくふ。漢書、淮陽傳「出二入禁闥一一一」

【文ㇾ過】ブンクワ 過失あるも、之を改む

るを憚りて、外面を取りつくらふ。論、子張「子夏曰、小人之過也、必文」

【文レ過】クワヲツクラフ　あやまちをすくなくす。論、憲問「夫子欲レ寡二其過一而未レ能也」

【敎レ過不レ瞻】アヤマチヲシテカヘリミズ　己の過を救ふに日の足らざる点。史、酷吏傳「九卿碌碌、奉二其官一、——、何暇二繩墨之外一乎」

【不レ貳レ過】アヤマチヲフタタビセズ　あやまちをかさねてせず。論、雍也「有二顔回者一、好レ學、不レ遷レ怒、——」

【觀レ過知レ仁】アヤマチヲミテジンヲシル　あやまちを見て其の厚きに失する者は其の人の仁になるを知る。論、里仁「人之過也、各於二其黨一、觀レ過斯知レ仁矣」

【宥レ過】アヤマチヲユルス　あやまちをゆるす。管子「罰罪——、以慈レ之」

【過而不レ改、是謂レ過矣】アヤマチテアラタメズ、コレヲアヤマチトイフ　人は過失なしとせず、ただ能く改むれば過なき前にかへ、改めざるときは、其の過は遂に成りて真の過となる。孔子の語（論、衛靈公）

【過則勿レ憚レ改】アヤマチバカコトナカレアラタムルニ　過あるときは憚ればかることなく速に改むべし。孔子の語（論、學而）

【過猶レ不レ及】スギタルハナホオヨバザルガゴトシ　物事は中庸を貴ぶ、中をすぐれば、反りて及ばざるに同じ。論、先進「子曰、——」

【逞】　クワウ　陽

○ひま、いとま（暇）詩、小雅「不」ー啓處」書、無逸、注「ー在レ心、暇在レ事、事究曰不暇、心勤曰不」ー」○いそぐ（急）あわてる。古、皇に通ず。○ーはひまなくいそがしき貌。

【逞急】あわていそぐ。後漢書、馬援傳、諸郡ーー、各以レ狀聞」

【逞逞】心おちつかずうろうろする貌。いそがしき貌。孟、滕文公「孔子三月無レ君、ーー如也」後漢書、蘇竟傳「仲尼棲棲、顚子ーー、憂二人之其也」日皇皇・栖栖。

【遒】　シウ　尤

○せまる（迫）○かたし（堅固）詩、豳風「四國是ー」○つく（盡）なくなる。屈原、九辯「歲忽忽而ー盡兮」をはる（終）○あつまる（聚）詩、商頌「百祿是ー」○つよし（勁）鮑照詩「獵獵晩風ー」たけし（健）

【遒逸】文筆の力つよく、すぐれたるおもむきあり。北史、祖珽傳「神情機警、詞藻ーー」

【遒勁】つよくきびしの韓愈詩「朝作二百賦一追二鄒枚、暮作二千詩一轢ーー」

【遒勁】書蹟、又、文章の筆力つよし。阿梓貴鑑「李愿盤谷皆超絶、尤工二山水林泉一、筆格ーー」

【遒人】令を宣傳する官。書、胤征「奉二辭罰一、徇二于路一」

【遒盡】つよくしてととのふ。韓非子「蚡壞一寸而伽有レ水、乃擲レ地遂得レ水」○竟は究竟、また畢竟と熟し、あげくと訳す。史記に「及レ破二驪戎一、獲二驪姬一愛レ之、竟以亂レ晉」とある如し。○卒は終盡なり、はてはと訳す。事實を主としていふ、年のしまひを、卒歲といひ、事を終るを卒業といふが如し。○訖は盡也と註す、事の終りたるところを主とす。○畢はことごとくといふ義あり、十が十皆すみ盡くしたる意に用ふ。○終は窮極なり、始の反にて、しじうの意あり、事の全體にかかる、史記に「武安君終耐、不レ背レ行、遂稱レ病」とあるにて知るべし。

【遂過】あやまちを成しとげる。呂覽「飾非ーレー」

【遂古】いにしへ（おほむかし（遂は肆と音通、肆は陳即ち久遠）書、堯光殷賦「上紀開闢、ーー之初」＝往古・上古。

【遂材】はたらきあるものをあげ用ひて、其の材をつくさしむ。管子「選レ賢ーレー、而職二事一焉、則姦偽

地。周代の行政區劃の名、王畿より百里以外の地「六鄉六ー」周禮、大司徒「五縣爲ー」

【遂發】遂・竟・卒・訖・畢・終○遂は事をしとぐる意あり、つひにと訓むときは、因也、兩事相因而及也と註す、此の因ありて、たゆみなく彼の事をしとぐる義。韓非子「蚡壞一寸而伽有レ水、乃擲レ地遂得レ水」○竟は究竟、また畢竟と熟し、あげくと訳す。史記に「及レ破二驪戎一、獲二驪姬一愛レ之、竟以亂レ晉」とある如し。○卒は終盡なり、はてはと訳す。事實を主としていふ、年のしまひを、卒歲といひ、事を終るを卒業といふが如し。○訖は盡也と註す、事の終りたるところを主とす。○畢はことごとくといふ義あり、十が十皆すみ盡くしたる意に用ふ。○終は窮極なり、始の反にて、しじうの意あり、事の全體にかかる、史記に「武安君終耐、不レ背レ行、遂稱レ病」とあるにて知るべし。

止」

【遙字】ヨウジ よくそだてる。漢書 嚴安傳「五穀蕃熟、六畜ー一」

【遙事】ヨウジ ○事未だ成らざれども勢已むこと能はざるもの。論、八佾「成事不レ說、ー一不レ諫」○事を煩にする。公羊、莊二九「大夫無ー一」

【遙初】ショウ 官を退きて其の初志をなしとぐ。晉書、孫綽傳「孫綽居二於會稽一、遊二放山水一十餘年、作ー一賦、以敍二其意一」

【遙遙】ヨウヨウ 相隨ひて行く貌。禮記「陶陶ー一、如レ將二復入一然」

【遙長】ヨウチョウ 生を遂げ生長する。呂覽、去私「萬物得ニー一焉」‖生遂。

【遙民】ヨウミン 善良なる者を登用する。書、仲虺之誥「顧レ懷ーレー」

【遁】 セン 先

○しばしば、往來すること數數なり。○とし（疾）すみやか（速）詩、衛風「ー一琢于衛」

【遏】 ㊀タツ ㊁タク 曷 㔟 㔟

㊀すぐ（過）○うごかす（盪）○たふる（倒）○據を失ひて倒る。漢書、王式傳、陽醉ー一地」㊁つく（突）「迭ー一」

【道】 ㊀タウ・ドウ ㊁タウ・ドウ 皓 號 通音ダウ

㊀みち、通行する所、徑路「海ー一」「街ー一」「棧ー一」人の守るべき義理「人ー一」「孝ー一」「至ー一」「敎ー一」禮樂刑政「政ー一」「王ー一」「霸ー一」學術、技藝など「斯ー一」「武ー一」○すぢみち（理）やりかた、方法。孟、公孫丑「是或一ー一也」○したがふ（順）書、禹貢「九河既ー一」○行政上の區劃。唐代、天下を十ー一に分つ（今の省の類）明清は省を數ー一に分ち、其の官吏をー一員といふ（我國にては本國を畿內・八ー一に分ち、又朝鮮にも八ー一あり）○老子の敎「ー一」○學は宋の程朱などの學派。又道敎の學說。㊁いふ。（言）大學「如切如磋者ー一學也」○よる（由）よりしたがふ。中庸「ー一問學」○をさむ（治）論、學而「千乘之國」○みちびく（導）論、爲政「ー一之以政」○てびき、あんない。○より、から（從）韓非、十過「去鶴二八ー一南方ー一來」

周顯晉（一七八五頁三段）の條を見よ。

【道引】ドウイン 氣を導き體に引きて、和柔ならしむる義。莊、刻意「ー一之士、養形之人、彭祖壽考者之所レ好也」‖導引。

【道院】ドウイン 道士の居所、道敎の寺。王禹偁詩「ー一風清晒二藥罏一」‖道觀。

【道家】カウ 黃帝・老子の敎を祖述する學派。史、禮書「孝文好ニー一之學一」漢書、藝文志「ー一者流」

【道歌】ダウカ 國道德の意を詠ぜしうた。

【道交】カウカウ 德義の心を以てまじはる。

【道學】ダウガク ○宋の程子・朱子等の唱へし學派。宋史にー一傳あり。‖宋學・性理學。○儒學。論衡、量知「雖レ無ニー一、能力材能、優二於朝廷一」北史、儒林傳、經籍志「蓋公能言二黃老一、文帝宗レ之、自レ是相傳ー一業矣」

【道學先生】センセイ ○道學即ち程朱學を修めし學者。○人情世態に暗く頑固なる學者を罵りていふ。

【道義】ダウ 正しきすぢみち。抱朴子「正經爲ニー一之淵海一」

【道義】ダウ 人のふむべきみち。戴復古詩「ー一無二窮通一、文章有二是非一」‖道義。

【道義】ダウ 過ぎにし事を話す。蘭居會「相與ーレー以爲二美樂一」陶潛文「疎レ闊ー一」‖道故・敍舊・話舊。

【道損法守】ダウソンホウシュ 道理を以て事を量りて、其の宜しきを師すると、法を以て自ら守ると。孟、離婁上「無二道揆一也、下無二法守一也」

【道殣】ダウキン ゆきだふれ、道上にて餓死せし人。殣は餓死。左、昭二「宮室滋侈、ー一相望」‖行殣。

【道殣相望】ダウキンソウボウ 行路にうえにたる者多きをいふ。左、昭二「宮室滋侈、ー一」

【道經】ダウケイ 道敎の經典（隋書、經籍志）

【道具】ダウグ ○佛家應用の器具（釋氏要覽）○國すべての器具。

【道君】ダウクン 道敎の神の稱號。登眞隱訣「三淸九宮皆有二僚屬一、其高等稱曰二ー一ー一」

【道光】ダウクワウ ○道德のひかり。劉成詩「ー一誰不レ仰二淸塵一」○佛敎の光。法苑珠林「法水東流、ー一西照」○淸の宣宗の年號。

【道觀】ダウクワン 道士の居る寺の樣。道家すべし故に觀といふ。劉義慶「佛字ー一、遊覽者罕レ不二經歷一」

【道化】ダウクワ 國おどけ、をかしき所作をして人を笑はせる。又其の人。

【道藝】ダウゲイ 道德と學藝と。周禮「會二其什伍一而敎之ー一」

【道敎】ダウケウ 黃帝・老子の敎。後漢の張道陵に創り、晉の時、天師道と稱し、後にー一と名づく。玄室志「雅尙ニー一一屋加二尊號一」

【道訣】ダウケツ 道家の祕法。虞世南詩「尋

甲得ニ一ー一、経界服ニ人衆一」

【道眼】ダウガン　能く道を見るまなこ。禅語。開ニ我ー一」

【道ノ故】ダウノコ　故舊の情を語る。史、滑稽傳「若ニ朋友交遊一、久不ニ相見一、卒然相覩、僮然ーレー」ニ道義一。

【道根】ダウコン　道の本源。申鑒、恕者仁之術也、正者義之要也、至哉此謂ニ一ニ萬化存焉ー」

【道骨】ダウコツ　道士のよそほひ。蘇軾詩「朱雀橋邊看ニー一」

【道蔵】ダウザウ　道教に關する一切の經典。

【道山】ダウザン　學者、東觀を謂ひて、道家の蓬萊山と爲す（後漢書）故に借りて人文薈萃の地に喩ふ。陳師道詩「ー一今日有ニ崇英一」ニ文苑・儒林。

【歸ニ道山一】ダウザンニキスル　道家にて死をいふ。世說、排調「世傳、嵇明已ー一、今尚謂游ニ戲人間一耶」

【道士】ダウシ　○道教を修むる人。通鑑、胡注「道家雖レ宗ニ老子一、而四漢以前未ニ嘗以ニー一自名ニ至ニ東漢一、始有ニ張道陵・于吉等一、是道與ニ佛教一皆起ニ東漢時一」○仙術を修めたる人、方士の異名。王莽傳「衛將軍王涉、紫蓋ニー一西門君惠」○有道の士。春秋繁露「古之ー一有レ言」ニ君子。

【道次】ダウジ　みちすぢ。後漢書、郭伋傳「有ニ童兒數百一、各騎ニ竹馬一、ー一迎拜」ニ途次。

【道人】ダウジン　○佛又は道家の說を修むる人。智度論「得レ道者、名爲ニー一、餘出家者、未レ得レ道者、亦名ニー一」○道術を得たる人。漢書、京房傳、注「ー一有ニ道術一之人也」

【道心】ダウシン　○義理より發する心。人心の對。書、大禹謨「人心惟危、ー一惟微」○圓覺提心、悟道の心、佛道を信ずる心。李端詩「夜靜猿聲遠ニー一」ニ道念。

【道眞】ダウシン　道義の眞誠。漢書、劉歆傳「繇ニ同門一、好ニー一」

【道上】ダウジャウ　みちばた。ニ路傍・路上。

【道術】ダウジュツ　○道教又仙人の方術。後漢書、何烏后紀、注「道人謂ニー一人一」ニ仙術。○道德學術。

【道書】ダウショ　道教の書物。魏志「張陵客レ蜀、學ニ道鵠鳴山中一、造ニ作ー一、以惑ニ百姓一」

【道俗】ダウゾク　僧侶と俗人と。南史、梁武帝紀「ー一五萬餘人」ニ緇素。

【道祖神】ダウソジン　道路を守りて旅人の安全を得しむる神。さへのかみ。ニ道臨神。

【道徳】ダウトク　道德の本體。近思錄にー一篇あり。淮南、詮言「無爲者、道之體也」

【道臺】ダウダイ　官名、我が國の縣知事の類。

【道泰身否】ダウタイシンヒ　行ふ所ただしきも立身すること能はず。李商隱文「時享命屯、ー一」

【道地】ダウヂ　人の爲めにしたばなしをする。漢書、田延年傳「召ニ問延年一欲レ爲ニー一」

【道帙】ダウチツ　道教の書物。ニ道書。

【道場】ダウヂャウ　○佛教及道教の道を修する所。又、寺をいふ。白居易詩「紗籠燈下ー一前」○圓覺劍・柔道などを稽古する所。

【道中】ダウチュウ　○みちなか、たびぢ。漢書、王嘉傳「ー一過者皆飲食」ニ途中。○國遊女の道ゆき。

【道程】ダウテイ　道里に同じ。

【道聽塗說】ダウチャウトセツ　善言を聞くと雖も、深く心に留めて己の有となさざるをいふ。塗は途。論、陽貨「道聽而塗說、德之棄也」

【道途】ダウト　みちすぢ。ニ道路。

【道統】ダウトウ　佛教の道を承け傳へたる人人の系統。堯・舜・禹・湯・文・武・周公・孔子の如き者（孟、盡心）元史、趙復傳に「ー一相傳圖」あり。

【道德】ダウトク　人倫五常のみち。曲禮「ー一仁義、非レ師不レ成」

【道德經】ダウトクキャウ　書名、卽ち老子の晴書、經籍志「老子ー一二卷、河柱下史李耳撰」

【道德之符】ダウトクノフ　道を行ひし效驗。史、蔡澤傳「豈非ニー一、而聖人之所謂吉祥善事者ニ與」

【道德說】ダウトクセツ　道家にて七月七日の祭。雲笈七籤、七月七日名ニー一」

【道念】ダウネン　○義理より發する心。吳均詩「昔希ニー一」ニ道心。○佛道を悟りし心。ニ菩提心。

【道破】ダウハ　いひやぶる、いひ盡す、論破する。

【道傍】ダウバウ　みちのほとり、みちばた。白居易、青石詩「不レ願レ作ニ貴家一ー一德政碑、不レ願ニ賓緑一鎖ニ處衙一」ニ道旁・路傍。

【道貌】ダウバウ　道德ある相貌。後漢傳「卜珏情景恬憺、ー一秀異」

【道旁苦李】ダウバウクリ　路傍にあるにがき李の實。人に棄てらるるに喩ふ。世說、雅量「王戎七歲、嘗與ニ諸小兒一遊、看ニ道邊李樹多ニ子折レ枝、諸兒競走取レ之、惟戎不レ動、人問之、答曰、樹在ニ道邊一而多ニ子、此必苦李也、取レ之信然」

【道法】ダウホフ　○正しきのり。蘇非子「論編生ニ乎ー一、而不レ與ニ爭愛惡一」○道教の法。神仙傳「乃入ニ閑狄山一、精ニ思ー一」

【道味】ダウミ　みちのほとり、みちばた。論衡「ー一巨樹、緊連長溝」ニ道傍・道邊。

【道髮】ダウハツ　旅費。名山藏、明太祖紀「人賜ニ衣一襲鈔五錠、爲ニー一」ニ道里費。

【道服】ダウフク　○道士の服。遵生八牋「ー一不ニ必立ニ異、以レ布爲レ佳」○圓中古、貧人が外出の時に著けたる服よけ。

【道邊】ダウヘン　みちばた。詩經「采采芣苢」疏「今直前往草、大葉長穗、好生ニー一」ニ道傍。

【道謀是用】ダウボウコレモチヰ 道路に沿ひて家を作り、道を行く人と謀れば、路人の心は區區なれば、終に一致せず、家を成す能はず。一定の見識なく、他人の言のみを用ふる者は、終に事を成す能はざるに喩ふ。詩、小雅「如ア彼築二室于道一謀二是用一不レ潰二于成一」

【道味】ダウミ 道徳の意味。晉書、成公簡傳「不レ求二榮利一、潛二心一一」

【道明寺】ダウミヤウジ 國道明寺糒イヒの略、飯をほしたるもの、河内國河内郡——にて創製せしが故。

【道脈】ダウミヤク 其の道の系統。戴良詩「儒言存二一一一野超任二天眞一」＝道統。

【道門】ダウモン ○道徳に入る門戸。道徳指歸論「請爲二諸戸一、虛爲二一一一」○道徳のうち。晉林「投二腹衣一、遊二藝一一」○道教、又道家をいふ。圖繪寶鑑「多畫二一一一尊像一」

【道眸】ダウボウ 道の眞實、眸は青眸、其の味の美なるに喩ふ。班固、答賓戲「味二道之眸一」

【道樂】ダウラク 國○ものずき。○酒色にふける。＝遊蕩。

【道里】ダウリ みちのり。漢書、司馬相如傳「一一遼遠、山川阻深」＝道程。

【道里費】ダウリヒ 旅費の琉球國史略「賜二衣幣及錢一爲二一一一」

【道理】ダウリ すぢみち、人の守るべき正しき道。荀、修身「其行二一一一也篤」＝道徳。

【道理貫二心肝一】ダウリクワンシンカン 道理が深く心の底まで貫く。蘇軾、與二李公擇一書「一一、思義頗二精健一」

【道流】ダウリウ 道士、道家者流。皇朝物詩「玉書乎二一一一」

【道力】ダウリキ みちを修めて得たる力。姚合詩「纔レ琴知二一一一、學レ棄得二詩眼一」

【道路】ダウロ 通行のみち。禮記「一一男子由レ右、婦人由レ左、車由二中央一」

【道路側レ目】ダウロソバメ 次條に同じ。

【道路以レ目】ダウロノメ 國政に不滿をいだく者、公然非難するを長れ憚り、互に目を以て其の意を通ずる。周語「國人莫二敢言一、——」＝道路側レ目。

【道陸神】ダウロクシン 國道祖神の誤。

【道話】ダウワ 國心學者が道徳上に關する卑近なる訓話。又其の書、「心學一一」

【守レ道不レ如レ守レ官】シュダウハカンヲシュルニシカズ 能く官を守りてその職をつくすは、一ヾ守るの要旨たる義。左、昭二十「仲尼曰、——、君子韙レ之」

【守レ道不レ變】シュダウフヘン 人倫の道をまもる。許渾詩「筆硯貧一レ、書劍病応レ機」

【守レ道不レ如レ守レ官】シュダウハカンヲシュルニシカズ 能く官を守りてその職をつくすは、一ヾ守るの要旨たる義。左、昭二十「仲尼曰、——、君子韙レ之」

【道大莫レ容】ダウタイニシテヨウルルモノナシ 道大いにして、世に容れられず。史、孔子世家「夫子之道至大也、故天下莫二能容一」

【道難レ遍不レ行不レ至】ミチハアマネカラザレバイタラズ 近き道も、行かざれば到著せず。荀、修身「一一、事雖レ小、不レ爲不レ成」

【道遠知レ驥】ミチトホシテウマヲシル 遠道を行きて始めて千里の馬の能を知る。曹植、感志詩「一一、世傳知レ賢」

【道之大原出二於天一】ダウノタイゲンハテンニイヅ 道の根源は天より出づ。董仲舒、對策「一一、天不變、道亦不レ變」

【道出二一原一】ダウハイチゲンニイヅ 道理はもと一源に出で、二途なき義。淮南、俶眞「一一、通二九門一、敢二六關一」

【道在レ邇求二諸遠一】チカキニアルヲトホキニモトム 學問の道は之を己の身に本づくべし、故に近し、然るに人反りて之を外に求む、故に遠し。孟、離婁「道在レ爾而求二諸遠一」

【達】タツ タチ 辵

○とほる、行きわたる。中庸「天下之一一道五」道が通ずる「四通八一」とほす（通）○とどく、いたる（至）到著する「到一」とどける「送一」○およぶ（及）○あらはる（顯）世に知られる、窮の對「顯一」孟、盡心「一不レ離レ道」○すすむ（薦）人を引きあげ用ふる。禮、儒行「推賢進一之」○おふ（生）○さとる（曉）事理に通ずる「明一」「英一」論、公冶長「賜也一」○のぶ（暢）○とぐ（遂）○つらぬく（貫）○あまねし（徧）○よろし（宜）○みな（皆）○きめる（決）○まど（窗牖）○こひつじ（小羊）○すぐれたる人「一人」○ほしいまま（放恣）「挑一」「放一」國○ザ人員の複數を示すことば「友一」「公一」○たっし、官府の申しわたし「布一」「一書」

【達】タツ 辵 走に从ひ羍の聲。俗に幸に从ひて達に作るは非。

【達意】タツイ 己の意思を十分にのべ通ずる。史、滑稽傳「書以道レ事、詩以一一レ」

【達孚】タツフ よく父母に事へ、天下の人の認めて孝行とするもの。中庸「武王周公、夫一一也孚」二一記に常行して變らざる孝行）

【達官】タツクワン 顯達せる官。禮弓、疏「一一謂レ國之卿士大夫被二君命一者也」

北齊書「此是最大一一」‖顯官。
【遼闊】リャウクワツ　意に滯る所なく、ひろく見とほして境遇の爲めに拘束せられず。蘇軾詩「白足高僧解二一一一」
【遼敎】リャウケウ　ゆきとどきたるをしへ。陸雲文「開二先聖之一一一」
【遼見】リャウケン　理を十分にきはめ知る見識。晉書、賀充傳「雅帥宏高、一一明達」
【遼言】リャウゲン　道理に通達せし味あることば。曹植文「敕二此一一」「以爲二美談一」
【遼遠】リャウエン　遼は遠、上は天子より下は庶人に至る迄行ふべき費の節。禮、三年問「三年之喪、天下之一一也」
【遼士】リャウシ　ひろく事理に通じて事物に拘束せられざる士。呂覽「一一者、達二生死之分一」後漢書、仲長統傳「至人能變、一一拔レ俗」
【遼旨】リャウシ　意味を十分に通ぜしむる。又、十分に通達せしむね。晉書、裴頠傳「君子宅レ情、無レ求二於顯一、及二其立レ言、在レ乎一一一而已」
【遼識】リャウシキ　事理に明達して能く機を知り得る見識。北史、邢邵傳「高情一一、開二遠襟累一」‖達見・遠識。
【遼人】リャウジン　○ひろく道理に通達する人。晉康、紹交書「柳下惠・東方朔、一一也」‖達者。○圖藝術に熟達せし人。
【遼人大觀】リャウジンタイクワン　道理に通達する士は、公平に天地間の事物を觀察するの意。謝惠連賦「——分、物亡レ不レ可」
【遼者】リャウシヤ　○ひろく事理に通達せる人。左、昭七「吾聞將レ有二一一一、孔丘聖人之後也」‖達人。○圖丈夫どある、身體肚健なり。又、自由自在。
【遼曉】リャウケウ　よあけがたにいたる。
【遼政】リャウセイ　まつりごとの理に通達する。南史、孔琳之傳「乃累朝大臣、精才一一之士」
【遼望】リャウバウ　天下を通じてたつとばれるもの、遼は通。孟、公孫丑「天下有二一一三一尊一、齒一、德一」
【遼道】リャウダウ　天下古今の共に由る所の路、書經の五典、孟子の父子有レ親・君臣有レ義・夫婦有レ別・長幼有レ序・朋友有レ信の道。中庸「天下之一一五」
【遼德】リャウトク　天下古今常行して變ぜざる德。中庸「知仁勇三者、天下一一也」
【遼筆】リャウヒツ　圖佛書・文章などを自由自在に巧に書く。
【遼辯】リャウベン　圖巧みなる辯舌。
【遼理】リャウリ　事理に通ずる。柳宗元文「是必一レ、而聞レ道者也」
【遼僚】リャウレウ　高等の官吏。舊唐書、鄭注傳「一一權臣、爭湊二其門一」‖遼官。
【遼練】リャウレン　十分に熟練する。後漢書、胡廣傳「廣性溫柔謹素、遜言卑色、一二事便二明二解朝章一」‖練達・熟達・明練。
【遼普花赤】リャウプハチ　蒙古語にて官長の義「十八史略、南宋紀」
【遼雜】リャウザツ　四藏の黃敎の主、即ち一一喇嘛、俗に活佛と稱す。前藏の拉薩城の布達拉廟に居る。
【遼屋】リャウヲク　○梵語、一切の萬法。○天竺の僧、菩提一一の略、梁武帝の時、迎へて金陵に至る。江を渡りて魏に往き、嵩山少林寺に止り、面壁九年に及ぶ、法脈を二祖の慧可に傳へ、袈裟と「吾本來二玆土一傳二法救二迷情一一花開二五葉一結果自然成」といふ偈とを付與し、大通二年十月五日入寂す。塵一に塵に作る。

【遁】　テイ　庚

○うかがふ。偵に通ず。○圖さすが（流石）

【遁】　㊀トン　圖阮　㊁シュン　眞　又、遯に作る

㊀にぐ、のがる（逃）「一逃」「竄一」○うつる（遷）○かくる（隱）○隱れ去る「一思」○さける（避）後漢書、杜林傳「上下相一」㊁あとしさりする。賈誼、過秦論「一巡不敢進」‖逡。○めぐる。漢書、平當傳「遂一有恥」‖巡。

【遁甲】トンカフ　忍術の類、人目をくらまして身をかくし吉を取りて凶を避けるといふ妖術。後漢書、方術傳、注「一一推二六甲之陰一而隱遁也」
【遁藏】トンザウ　にげかくれる。韓愈文「虎豹遠レ跡兮、蛟龍一一」
【遁思】トンシ　この世を遁れ去る思。詩、小雅「勉二爾一一一」
【遁辭】トンジ　にげことば、いひぬけ。孟、公孫丑「邪辭知二其所レ蔽、一一知二其所レ窮」
【遁棄】トンキ　棄の消政をのがれ避ける。漢書、敍傳「四皓一レ、古之逸民」‖避棄。
【遁世】トンセイ　世をのがれる。世間を見棄てて隱れる。‖避世。
【遁走】トンソウ　にげはしる。史、孝文帝紀「匈奴一一」‖逃走。
【遁退】トンタイ　のがれしりぞく。魏志、陳留王紀「七月賊皆一一」
【遁辭】トンヂ　にげさける。唐彥謙詩「應叛非二善任一一一亦無術」
【遁北】トンホク　にげはしる。淮南子「前無二蹈難之實一而被無二一一之刑一」‖逃北。
【遁巡】トンジュン　疑ひ恐れてあとしざりする。賈誼、過秦論「九國之師、一一而不二敢進一」‖逡巡・徘遁。

関連語参考　遁・逃・避等の別は逃（注部六畫）の條を見よ。

【逼】 ヒク　國　通音フク　又ヒツ　偪に同じ

○せまる(迫)「―迫」○ちかづく(近)○せばまる、つまる、土地などがせまくなる、険狭。山川考「岸狭勢―」○いそぐ(急)○ちぢむ(縮)○をかす(侵)せまりおどかす(迫脅)左、襄二「以―予童子辛」○内―ルは大便がしたくて耐へられず。

同訓異義　逼・迫・湍・塞○逼は偪に同じ、間近くつめ寄する義、逼ルとは、畫などの眞物によく似て殆ど同じやうなるをいふ。○迫は逼と連用して、逼と大いに同じけれども小異あり、迫には急なる意あり、急迫・切迫の如し。○湍は迫に同じ、眺に迫るを湍目といふ、物滑れば透間なく、ぴったりと付きせまるなり、但急なる意はなし。○塞は一所におしよする義、轉じてせまり困む義とし、又ふさぐ義と通用す。

【逼塞】ヒクソク　○せまりふさがる。㊀おちぶれてかくれ居る。○徳川時代、武士に加へたる刑罰、門を閉ぢて白晝の出入を禁ずる(閉門ヘイモンよりは輕し)

【逼眞】ヒクシン　殆だ眞物に似る。繪畫詩「縦有二才華一詠、寧無二逼一レ」

【逼水】ヒクスイ　水邊にせまり近づく。晉書、苻堅載記「若懸軍深入、置レ陣一レ、此持久之計、豈欲レ戰者乎」

【逼奪】ヒクダツ　○君を犯して其の位をうばふ。蘇軾、唐論「一―之意」○おびやかし取る。欧陽新語「父子母子倶有二一一」

【逼迫】ヒクハク　○さしせまる、せまりうながす。晉書、朱序傳「郡縣一―、催二促上道一」○國ヒクの手づまる「金融―」

【逼拶】ヒクサツ　ちかづきたすける。唐子、陳良傳「徒行入レ都、將レ給レ者、逼一―一レ車」

【遍】 ヘン　國　又、遍に作る、偏に同じ

○あまねし「普―」○たび、回数を示す語。一―は一次。

同訓異義　遍・偏・普・洽・浹の訓は周(普ク行キ渡ル意)の條を見よ。

【遍照】ヘンジョウ　あまねくかねる。晉書、范平傳「平、研二覽墳索一―二一百氏一」(墳索は、三墳八索、古書をいふ)

【遍身】ヘンシン　あまねくうかがひみる。楊炯文「勞二衆勝境一―二一寶跡一」

【遍身】ヘンシン　頭身又、全身の義。無名氏、閨怨詩「―綺羅者、不二是養レ官人一」‖偏身。

【遍洽】ヘンコウ　あまねくかたる。世說「悉書二鄉邑名氏一、一宿レ日便三之一―一不レ誤二一人一」

【遍布】ヘンフ　あまねくしく。許棠詩「風威―二江山一靜、教化高同二日月一明」

【遍歴】ヘンレキ　諸國をへめぐる。

【逾】 ユ　國

○こす、こゆ(越)踰に通ず。○すぐ(過)過ぎ去る。書、秦誓「日月―邁」○わたる(渡)書、禹貢「―于洛」○とほし(遠)○すすむ(進)○いよいよ(愈)ますます。呂覽、慎大「欲」栄而―辱」

【逾月】ユゲツ　つきをこえる。李陵勵詩「相見未レ―一、君レ悲遠別離」

【逾日】ユジツ　他日にまたがる。魏志、江「―不レ一レ者、欲三民速覩二信一之利一也」‖踰日。

【逾邁】ユマイ　すぎ去る。晉、李密「表「以二逾邁之年一、日月―」

【逓】 〔國字〕

あっぱれ、賛美する詞。

【遙】 エウ　十　畫　國

○はるか、とほし(遠)「迢―」○遠、王制「千里而―」○遥ヨウはぶらぶらとあるく、さまよふ。‖徜徉・逍遥。

【遙夜】エウヤ　とほく見える青山。孟郊詩「―新蓋出、三十六峰時」

【遙青】エウセイ　遠きむかしの盛時。詩「伏杭鉢―一、寤言其子應一」

【遙泉】エウセン　とほくへだたりたるいづみ。馬戴、宿二翠微寺一詩「幽峯含二微月一、―韻二細風一」

【遙然】エウゼン　はるかなる貌。列仙傳「託二身風雨一、―嬉歩」

【遙村】エウソン　はるかなるむら。孔九齢詩「歸雲納二前嶺一、去鳥投二一一一」‖遠村。

【遙曳】エウエイ　はるかに長く引き垂れる。黃滔詩「青帘―一杏花中」

【遙映】エウエイ　はるかにうつる。南史、王僧辯傳「有二兩龍一自二城西江中一騰躍升レ天、五色分明、―二一江水一、百姓皆仰而目レ之」‖遥映。

【遙遠】エウエン　はるかなる貌。左、昭二五「―帰祖」‖遥然。

【遙嶂】エウシャウ　はるかに見ゆる山脈。

【遙看】エウカン　遠くから見る。韓愈詩「草色―一近卻無」

【遙祭】エウサイ　はるかにまつる。周禮、疏「爲レ壇―一レ之」

【遙指】エウシ　はるかにゆびさす。李遠詩「窗中―一三千界」

【遙望】エウバウ　とほくみゆるみね。陸游詩「但怪紫月生二一一」‖遥嶺。

【遙嶺】エウレイ　遠くからながめる。柳宗元詩「探レ奇極二一一一一レ妙聞二清響一」

【遙岑】エウシン　とほく見える青山。孟郊詩「―新蓋出、三十六峰時」

【遙昔】エウセキ　遠きむかしの盛時。詩「伏杭鉢―一、寤言其子應一」

【遙泉】エウセン　とほくへだたりたるいづみ。馬戴、宿二翠微寺一詩「幽峯含二微月一、―韻二細風一」

【遙然】エウゼン　はるかなる貌。列仙傳「託二身風雨一、―嬉歩」

【遙村】エウソン　はるかなるむら。孔九齢詩「歸雲納二前嶺一、去鳥投二一一一」‖遠村。

【遙望】ヨウバウ 遠方まで布きおよぶ。江淹文「盡心ー一、察ー政測ー俗」
【遙汀】ヨウテイ はるかなるみぎは。僧齊佳詩「征鴻初ー影、ー一ー一」
【遙眺】エウテウ 遠くよりながめる。沈約詩「ー一ー島城西阿、ー一想ー京闕」
【遙天】エウテン はるかなるそら。張正見詩「雨師清ー路、風伯靜ー一ー一」
【遙拜】エウハイ はるかに拜禮する。晉書、桓溫傳「溫威望甚隆、侍中謝安、見而ー一」
【遙望】エウバウ 遠くからのぞむ。諸葛亮、梁甫吟「步出城東門、ー一ー一ー」
【遙祭】エウサイ はるかなるあをぞらの到禹錫詩「前山正無ー雲、飛去入ー一ー一」
【遙遇】エウグウ とほくゆく。潘岳賦「翻ー一ー一、將ー遠ー遊兮東夏ー」
【遙夜】エウヤ 長き夜。方干詩「平明辭ー一ー一、白雲寺、ー一孤砧紙葉村」
【遠】㊀エン・ヲン 國俗字 遠は
㊁エン・ヲン
㊀とほし、はるか(遂)近の對。時間又距離が長し「長ー」「久ー」「永ー」「迢ー」「絡ー」○あまねし、ひろし。○おくぶかし「深ー」「高ー」高尚にして知り難し。孟、盡心「言近而指ー者」(指は旨)○まはりどほし「迂ー」○うとし、親しからず「疏ー」○とほきもの、とほき所。㊁とほざく。論、衞靈公「ー一佞人」うとんず。とほざかる。論、學而「ー一聘學也」
【遠謀】エンバウ とほきもや。張九齡詩「ー一千歲公、幽壑百瀾喧」
【遠意】エンイ ○古人の意志。水經、注「後人假合、多差ー一ー一」○遠方に在る人の心。李白詩「開レ緘識ー一ー一、遠ニ此南行舟ー」○遠く思を馳せる。賈誼詩「分首芳草時、ー一青天外」
【遠由】エンイウ 古きいはれ。又遠き原因。
【遠遊】エンイウ ○修學などの爲めに、遠方に行く。論、里仁「子曰、父母在不ニ一ー一、遊必有レ方」ニ遠游。○冠の名。漢以後諸王の服する所ろ。
【遠猷】エンイウ さきざきまでの遠きはかりごと。猷は謀。臨機詩「夫子按ニ一ー一、訣誠寄ニ遠音ー」ニ遠謀。
【遠域】エンヰキ 遠方の土地の稱。晉、張寔傳「孤州ー一ー」ニ遠境・絕域。
【遠因】エンイン 遠く久しき原因。梁武帝文「佛教爲レ法、本存ニ一ー一ー」ニ遠由。
【遠裔】エンエイ ○遠き後世の子孫。晉書、赫連勃勃載記「淳維ー一、名王之餘」ニ遠胄。○遠きはてのえびすのくに。張說、冀陽王神道碑「泣血上請、迎ニ喪ー一ー」
【遠役】エンエキ 遠地にやらるる役夫。張協詩「君子從ニ一ー一ー」
【遠慮】エンリヨ はるかにおもふ。李中詩「聞聽九秋雨、ー一四月僧」
【遠界】エンカイ 遠くへだたりたる地。後漢書、馬援傳「桑弘、四子騏ー一、去レ郡千餘里、請分爲ニ封溪・望海二縣、許レ之」庭は縣庭。
【遠行】エンカウ 遠方へ行く。呂覽「今臣將レ有ニ一ー一ー」
【遠郊】エンカウ 都よりすこし遠ざかりたるあたりなか。邑外百里の地。周禮「近郊十一、ー一ー二十而三」
【遠效】エンカウ 久遠の後に著りてあらはれるしるし。孔文仲文「人之常情、薄ニ一ー一而貴ニ遠效ー」
【遠航】エンカウ 船にて遠方へわたる。ニ遠洋航海。
【遠交近攻】エンカウキンコウ 遠國と交際して近國をせめ入る。史、范雎傳「不レ如ニ遠交而近攻ー」
【遠客】エンカク 遠方より來れる客。又遠國の旅人。李白詩「ー一投ニ名賢ニ眞堪レ慰ニ懷抱ー」
【遠隔】エンカク とほくへだたる。ニ懸隔。
【遠沿】エンエン とほくあまねし。前史、梁武帝紀、文德殿策、敕辭ー一」
【遠求】エンキウ とほくさがしもとめる。後漢書、安帝紀「舉ニ賢良方正ニ一ー一博選、開ニ不諱之路ー」
【遠救】エンキウ 遠方より來るたすけ。後漢書、實融傳「恃ニ一ー一、而輕ニ近敵ー」
【遠近】エンキン ○をちこち、遠きと近きと。管子「剛柔也、輕重也、大小也、實虛也、ー一也、多少也、謂ニ之計數ー」○遠方の民と近所の民と。史、始皇紀「ー一畢至」ニ遠邇・遠邇。
【遠近法】エンキンホフ 實法の語、遠近の位置をあらはす法。
【遠境】エンキヤウ 遠くへだたりたる地。韓非子「不レ謹ニ鄰國之患ー、而固ニ金城千ー一ー」ニ遠域・遠界。
【遠空】エンクウ とほきそら。李白詩「晴雲散ニ一ー一ー」ニ遠空。
【遠觀】エンクワン 遠方をのぞみみる。梁武帝文「近取ニ之身ー、無レ假ニ一ー一ー」
【遠駒】エンク 遠方の野。餘記、觀ニ將馬ー賦「蜚ニ耳長阪ー、翻ニ足ー一ー」
【遠業】エンゲフ 遠大の事業。後漢書、馬援傳論「若ニ馮異之不伐、寧公之孫ー、屈ニ下以感ニ三軍ー、而演ニ敵人ー、故能ー一ー成ー一、終全ニ其慮ー也」
【遠公迓】エンコウガ 高僧の人を見迎るにいふ。遠公は慧遠法師。梅堯臣詩「陶令歸時ー一、石苔秋雨步ー遲遲」虎溪三笑(一六九頁)參看。
【遠國】エンゴク 遠方のくに。後漢書、和帝紀「ー一珍羞」
【遠歲】エンサイ ながきとしつき。江淹、宋尚書墓銘「風流ニ擊於ー一ー」
【遠塞】エンサイ ○遠方のとりで。○とりでに遠ざかる。史、倚奴傳「倚奴亦去ー一ー」
【遠想】エンサウ ○遠くすぐれて高尚なるおもひ。世說「悠然ー一、有ニ高ー世之志ー」○遠くおもひやる。何承天、臨ニ高臺ー篇「任ニ窮遠ー隨レ所レ遭、何

爲ㇾ一令二人勞一」‖遐想。
【遠算】エンサン　遠大のはかりごと。‖遠謀。
【遠鳳】エンシン　○とほくにげかくれる。王粲詩「鷙鳥化爲ㇾ鳩、一一江漢邊」○遠方へ島ながしにする。‖遠謫。
【遠山黛】エンザンタイ　次條に同じ。黛は眉墨。飛燕外傳「飛燕妹合德爲二卷髮一、號二新興髻一、爲二薄眉一、號二一一一」
【遠山眉】エンザンビ　とほき山の如く青く引けるまゆげ、美人の眉に喩ふ。西京雜記「卓文君姣好、眉色如ㇾ望二遠山一」杜牧詩「笑別一一」‖遠山黛。
【遠旨】エンシ　ふかき意味。何遜、七召「談二遠句之一一」
【遠志】エンシ　○遠大なる志。魏志、注「董卓曰、鴻鵠固有二一一一、但燕雀自不ㇾ知耳」○藥草の名、ひめはぎ、をんじ。本草「一一、一名小草、李時珍曰、此草服ㇾ之能益ㇾ智強ㇾ志、故有二一一之稱一」
【遠邇】エンジ　遠きと近きと。書經「四夷咸賓、無有二一一一」‖遐邇。
【遠視眼】エンシガン　老年の人の患ふる所、遠き物を視るは明かにして近き物は反りて模糊タリたり。‖老眼。
【遠識】エンシキ　さきざきまでみぬく見識。晉書、盧欽傳「清淡有二一一一」
【遠日點】エンジツテン　天文學上、地球が日を繞りて運行する楕圓形の軌道上、日を距ること最も遠き點。
【遠人】エンジン　○遠國の人。遠物を見よ。○國トホツ同上。又古代の人。
【遠臣】エンシン　○君主のうとんずる臣。晉子「近臣則暗、一一則吟」○遠方の國より來り仕ふる臣〔孟、萬章〕
【遠親不ㇾ如二近鄰一】エンシンハシカズキンリンニ　遠き親類よりは近き鄰といふ意。明心寶鑑「遠水難ㇾ救二近火一」
【遠心力】エンシンリョク　物理學にて回轉する物體が、其の中心より遠ざからんとする力。求心力の對。
【遠翔】エンショウ　遠方へ飛びかける。說苑「鴻鵠高飛一一」
【遠戍】エンジュ　遠方の國ざかへをまもる。又邊境の守り。又其の兵。後漢書、龐參傳「重ㇾ之以二大軍一、疲ㇾ之以二一一」
【遠樹】エンジュ　遠方に見える木。何遜詩「水底見二行雲一、天邊看二一一一」
【遠所】エンショ　とほきところ。司馬相如、檄二巴蜀一文「恐二一一一、窮谷山澤之民不二得聞一」
【遠乘】エンジョウ　園とほのり、乘馬にて遠出する。
【遠色】エンショク　女色を遠ざける。中庸「去ㇾ讒一ㇾ、賤ㇾ貨而貴ㇾ德」
【遠謁】エンエツ　とほくまでながめる。梁簡文帝詩「一一託瀟ㇾ洞、徒自勞二心目一」
【遠水近火】エンスイキンカ　とほきものは急劇の用に立たざるに喩ふ。韓非、說林「失ㇾ火而取二水於海一、海水雖ㇾ多、火必不ㇾ滅矣、遠水不ㇾ救二近火一也」
【遠征】エンセイ　○遠方へゆきて討つ。左傳「不ㇾ和不ㇾ可二以一一一」○遠方へ行く。‖遠行。
【遠逝】エンセイ　○とほくさる。後漢書、蘇竟傳「故變ㇾ名一一」○死する。‖長逝。
【遠紹】エンセウ　遠く隔りたる前代のあとを承けつぐ。韓愈、進學解「尋二墜緒之茫茫一、閔二旁搜而一一」
【遠祖】エンソ　とほつおや、遠きせんぞ。高祖・曾祖以上の祖。後漢書、章帝紀「朕得下讀二昭穆之序一、審中一一之忌上」
【遠走】エンソウ　とほくはしる。後漢書、朱浮傳「凡人之生、畢居雜處、故有二經紀疇輩一、以相交接、汝獨不ㇾ欲ㇾ修ㇾ之、寧能高飛一一、不ㇾ在二人間一乎」
【遠送】エンソウ　とほくまで見送る。詩經「之子于歸、一一二于野一」杜甫詩「一一從ㇾ此別、青山空復情」
【遠贈】エンゾウ　遠方へ物をおくる。梅堯臣詩「後園有二佳果一、一一當二鯉魚一」
【遠足】エンソク　園運動の目的にて遠出する。
【遠大】エンダイ　志が遠くして大いなり。儒林外傳「臣本布衣、不二謀一一一」
【遠到】エンタウ　遊說する所の未だ曾り知るべからざる義。晉書、陶侃傳「此子終當二一一一、復何疑也」
【遠島】エンタウ　○遠く離れたる島。後漢書、張宗傳「深入二一一一」○園德川時代の刑の一、伊豆・薩摩の七島、肥後の天草・佐渡・壹岐・隱岐等にしまながしにせしもの。
【遠道】エンダウ　とほきみち。李白詩「奢ㇾ能跨ㇾ馬涉二一一一」‖遠路。
【遠謀】エンボウ　とほき慮へ。つみしながす。李白詩「我愁一一夜郎去、何日金雞放赦回」‖遠算。
【遠望】エンボウ　とほくおよぶ。望は及ぶ。牛弘、飢榮歌辭「帝德一一、天維宏布」‖遙望・遐望。
【遠孫】エンソン　遠き末孫。魏書「其旁枝一一、豈得ㇾ同二四廟三親一哉」‖遠裔。
【遠客】エンキャク　久しく遠きにわたるはかりごと。晉書、宣帝紀「昔孫子陳ㇾ謀以ㇾ食爲ㇾ首、今天下不ㇾ耕者蓋二十餘萬、非二經國一一也」
【遠逐】エンチク　遠方へおひはらふ。北史、崔浩傳「彼能遠走、我亦一一、非ㇾ難ㇾ制也」
【遠昵】エンジツ　疎のとほきものと近きものと。戸子「不ㇾ避二一一一」‖親疎。
【遠害】エンガイ　遠方にまで名があらはれる。魏志、賈詡傳「明公昔滅二袁氏一、今收二漢南一、威名一一」
【遠汀】エンテイ　遠くつづくみぎは。蘇舜欽詩「漁艇縱橫映二一一一」
【遠眺】エンチョウ　とほくながめる。朱熹詩「高瞻一一、四隣見二秋山一」‖遙眺。

【遠天】エンテン　遠方のそら。許敬宗詩「辭燕歸二寒海一、來鴻出二一一一」

【遠圖】エント　遠大のはかりごと。後漢書、賈復傳贊「奇鋒震レ敵、一一謀レ國」＝遠謀。

【遠洞】エンドウ　とほく深きほらあな。鄭谷詩「一一時聞レ磬、窮僧甚掩レ扉」

【遠摧】エンサイ　とほくつたはりしく。孫綽文「雷激一一、殆仰二芳流一」

【遠方】エンポウ　とほき所の義。準而「有レ朋自二一一一一來」左、宣三「昔夏之方有レ德也、一一圖レ物、貢レ金、九牧鑄レ鼎象レ物、百物而爲二之備一、使レ民知二神姦一」

【遠抱】エンポウ　遠大なるかんがへ。韓愈詩「大賢事業異、一一非二俗規一」

【遠所】エンショ　遠方にあるたみ。丘濬詩「當レ守二一一一、察災日以極」

【遠望】エンボウ　遠方をのぞむ。東方朔、七諫「登二神山一兮一一」＝遠眺。

【遠汎】エンハン　とほくうかぶ。方干詩「他年莫レ學騶夷子、一一二扁舟一用二鴟夷一」

【遠害】エンガイ　○帝都をとほくはなれたるえびす。北史「魏明元帝享二東廟一、一一助レ祭者數百國」○遠方に在る藩鎭。次條參看。

【遠藩】エンパン　遠く隔りたる藩鎭。章應物詩「一一朝叅二闕省一、三載居二一一一」

【遠慙】エンザン　とほくのえびす。宋史、柳元景傳「先レ是劉道產、在二雍州一、有二惠化一、一一悉歸懷」＝遠著。

【遠物】エンブツ　遠國に產する珍らしき物。貴、旅獒「不レ寶二一一一一、則遠人格」

【不寶二遠物一】フホウエンブツヲ　遠方に產する高價無益の物を寶ばず。前條參看。

【遠屬】エンゾク　血統のとほくうすき先代のたまや。禮、祭法「一一爲レ祧」

【遠望】エンボウ　遠き山のみどりいろ。蘇軾詩「行人指二孤光一、飛鳥投二一一一」＝遙碧。

【遠別】エンベツ　遠方にわかれ居る。白居易詩「兄弟唯二人、一一恆苦悲」

【遠步】エンポ　とほくあゆむ。杜甫詩「恣レ意同一一」

【遠謀】エンボウ　さきざきまでのはかりごと。左、莊十「劌曰、肉食者鄙、未レ能二一一一」＝遠圖・遠慮・遠猷・遠算。

【遠味】エンミ　遠方に產する珍らしき食品。○尸子「珍怪一一」

【遠洋航海】エンヨウコウカイ　遠く陸を離れたる太洋を船にてわたる。

【遠隰】エンシュウ　とほくこえる。張詠文「陸下識二士之風、一一二列聖一」

【遠來】エンライ　遠方から來る。許慎、范汪傳「謝二其一一意一」

【遠計】エンケイ　遠方にて鳴るかみなり。

【遠雷】エンライ　○とほくを見る。許慎、杜預傳「曠然一一、情之所レ安也」○遠大なる見識。班彪、王命論「超然一一、獨然深識」

【遠哲】エンテツ　遠方に見ゆる哲。＝遙哲・遠悊。

【遠流】エンリュウ　罪により遠方へながす。北魏書、源懷傳「臧冀者悉一一」

【遠略】エンリャク　○遠大のはかりごと。陸機、辨亡論「洪謨一一」○遠方の國を攻めるはかりごと。後漢書、蘇竟傳「武帝情存二一一一、志關二四方一」唐書「覆敗之餘、無二一一一」

【遠慮】エンリョ　○永遠のおもんばかり。論、衛靈公「子曰、人無二一一一、必有二近憂一」○ひかへめにする。○德川時代の武士の刑、遠慮の輕きもの。

【遠黎】エンレイ　遠方の民。沈佺期詩「歌舞將二金帛一、汪洋被二一一一」＝遠俘。

【遠路】エンロ　遠くへだたりたる道。論、泰伯「任重而道遠」注「能負二重任一致二一一一也」

【知レ遠而不レ知レ近】シルヲシリテチカキヲシラズ　他人のことは能く見ゆるも、己の事は見えざる喩。淮南、說山「養弘知二周之所レ存、而不レ知二身所一以亡一」

【遣】ケン　㊀やる、つかはす、行かせる「一使」「派一」○おくる（送）おふ（逐）○はなつ（縱）にがす「放一」「縱一」○もらす、はらす「一悶」「一情」○しむ（令・使）命令して事を行はしむる意をあらはす。㊁一車は葬式の際、君主より下賜せられし牲體を載せる車。圖○つかふ。つかひ「小一ツカヒ」「假名一カナヅカヒ」○バツ物を與へる。

同訓異字　遣・令・使・敎・俾の別は令（一〇九頁三段）の條を見よ。

【遣路】ケンロ　つかはしかへす。漢書「一一故都一」

【遣外】ケンガイ　人を外國につかはす。

【遣車】ケンシャ　葬式の時、牲牲を載する爲めに君主より賜はる車（柩弓）

【遣情】ケンジョウ　氣ばらし。陸機、文賦「獻者應レ絃而一レ一」

【遣唐使】ケントウシ　圖王朝時代に朝廷より唐朝へつかはされし使者。

【洪中】コウチュウ　さし使はさるる人數のうち。

【遣慎】ケンシン　いきどほりの心をはらしやる。孔平仲詩「一レ一詩千首」

【遣悶】ケンモン　うさばらし。李德裕文「宮中無レ事、以レ助一レ一耳」

【遡】ソ　圖　溯に同じ

あふ（遇）相値ふ。崔顥賦「嘉昔人之一レ辰兮」親と通ず。

【遡】ソ　○さかのぼる、水流に逆らひて上る。詩、秦風「一洄從之」○縛じて過去の時代をさかさ

にたどる。○水流に順ひて下る。詩、秦風「―遊從之」○むかふ(向・經)○さかふ(逆)○うったふ(訴告)愬に通ず。

【遡遊】ソユウ　流に順ひて下る。詩、豳風「―從レ之、宛在二水中央一」

【遡洄】ソカイ　水流にさからひて上る。詩、秦風「―從レ之、道阻且長」

【遡源】ソゲン　○水源にさかのぼる。○轉じて學術の本源を究める「天道―レ」

【遡風】ソフウ　風にむかふ。むかひかぜ。詩、大雅「如二飛―一、亦孔之懷」

【遜】ソン　圖

○ゆづる(讓)己を措きて他をすすめる。書、堯典、序「將―二于位一」○したがふ(順)書、舜典「五品不レ―」○へりくだる(謙卑)「謙―」「揖―」「恭―」書、說命「惟學―」志」孫に通ず。○にげる、のがる(逃遁)○おとる(劣)此が彼に及ばず「―色」「―一籌」

【遜位】ソンヰ　其の職位を人にゆづる。史記「唐堯―レレ、處舜不レ台」‖讓位。

【遜謝】ソンシヤ　つつしみ(へりくだりてすなほ)「唐書、褚遂良傳「損以二便柔一」‖謙遜。

【遜志齋集】ソンシサイシフ　二十卷、明の方孝孺の詩文集。其の文縱橫豪放、東坡・龍川の間に出入す。

【遜讓】ソンジヤウ　へりくだりゆづる。後漢書、高鳳傳「仁義―、奈何棄レ之、子是爭者慙レ愚、救レ兵謝レ罪」‖退讓・謙讓。

【遜色】ソンショク　他にひけをとるやうす。

【遜弟】ソンテイ　すなほにして兄長に順ふ。禮記「朝廷同レ爵則尙レ齒」疏「是―レ敬老之道、通二於朝廷一矣」

【道】

道(辵部九畫)の古字。

【遝】タフ　合

○あつまる、かさなる。衆くしてこみあふ「雜―」「紛―」○およぶ(及)‖沓。

【遞】テイ　國　圖　遞は俗字

○かはるがはる、たがひに(更迭)「更―」○かはる(代)○しゆくば(傳驛)「驛―」○物を驛より驛へつぎつぎに送る「―送」「郵―」○傳驛の發送に從ふ人夫。又車馬。○迢―は遠きさま、はるか。

【遞運】テイウン　運・輸・化・易・替・代・更・流・換の別は變(一八四〇頁三段)の條を見よ。

【遞衣】テイイ　同一の衣をかはるがはる傳へきる。後漢書、李充傳「家貧、兄弟六人、同レ食―レレ」

【遞加】テイカ　次第にましくはへる。

【遞減】テイゲン　次第次第にへらす。遞加の對。

【遞興】テイコウ　たがひにかはるがはるおこる。史、律書「――遞廢、勝者用レ事」元稹、葛時「爭望終非レ久、炎涼本――」

【遞次】テイじゅんばん、順次に。

【遞信省】テイシンショウ　國　郵便・電信・電話・商船等の事を掌る中央官廳。

【遞相】テイソウ　國　遞信大臣の異稱。

【遞戰】テイセン　かはるがはるにたたかふ。新論「千人――、不レ如二十人俱至一」

【遞送】テイソウ　次へ次へとかはるがはる送る。しゆくつぎにして送る。明律「若隣境官司、因到稽留、不二即―一者、罪亦如レ之」

【遞代】テイダイ　互にかはる、更迭する。楚辭「射――夔」

【遞夫】テイフ　驛傳ルビの役卒。燕翼貽謀「以二軍卒一代二百姓一爲二――一」

【遞往】テイオウ　かはるがはるゆく。後漢書、梁統傳「肱與二二弟伸浔・季江一友愛天至、常共臥起、及二各娶レ妻、兄弟相愛、不レ能二別居一、以二孫嗣當一レ立、乃―一就レ宮」

十一畫

【遨】ガウ　豪

○あそぶ(遊)後漢書、劉盆子傳「而猶從二牧兒一―」遇じて敖に作る。詩、邶風「以敖以―」

【遨恰】ガウ　あそびたのしむ。孫楚、井賦「枕二玄石一以盥漱、喜二―一而緩帶」

【遨遊】ガウイウ　あそぶ。後漢書、馬援傳「卿―二―二帝之閒一」‖敖遊。

【遨嬉】ガウキ　あそびたのしむ。後漢書、梁鴻傳「恥遺盛勻―一」

【遭】ソウ　豪

○あふ(遇・逢)曲禮「二先生於道一」めぐりあふ。○めぐる(巡)とりかこむ(囲)劉禹錫詩「山圍故國周―在」○たび(度・次・囘)幾―は幾次。○らる、せらる、他より仕向けられる。漢書、惠帝紀「―太后鴟損至德」

同訓異語　遭・遇・逢・値・合・會・晤の別は遇(辵部九畫)の條を見よ。

【遭遇】ソウグウ　めぐりあふ。漢書、禮樂志「幸―二其時一」

【遭難】ソウナン　危きなんぎにであふ。

【遭逢】ソウホウ　めぐりあふ。又、臣下が明君に遇合して信任せられる。范曄書「―二聖明后一、來儀桐樹枝」蘇軾文「追二敍終始之―一、以論二勇鄭之父老一」‖遭遇。

【遭罹】ソウリ　うれひにあふ。幽通賦「敬

遭二于强一而減縮」

【遮】 シャ　セ　麻

○さへぎる(攔)○とどむ(遏)○ひとめる、制しとどめる。○ささふ(支)○をかす(冒)○たつ(斷)○まちぶせ(要撃)○おほひかくす(掩蔽)「蔽ー」○この、これ、俗語の這に通用す「ー箇」○周ーは語多き貌。

【遮遏】シャ　さへぎりとどむ。易林「烈風雨雪、ー二我前一」‖遮止。

【遮扞】シャン　さへぎりふせぐ。扞一に捍に作る。漢書、王莽傳「扶服振救、ー二匡衛」‖扞扞。

【遮回】シャクヮイ　このたび。元稹詩「自レ識レ君來三度別、ー二白盡老髭須」‖今回・這回・此次。

【遮撃】シャゲキ　まちぶせしてうつ。後漢書、班超傳「伏レ兵ー二一」‖要撃。

【遮蓋】シャガイ　圖この、これ。蘇軾詩「ー二在二油鹽一不レ辨レ菜亦不レ熱」‖這箇。

【遮止】シャ　さへぎりとどむ。隋書、蘇威傳「十遮之而出、威又ー二之」

【遮車】シャシャ　くるまの行くをさへぎる。後漢文帝文「衞卒ー二レ、道民擁レ榜」

【遮絶】シャゼツ　さへぎりたつ。史、白起傳「發二年十五以上一、遮二絶其ー一レ糧救及糧食一」‖遮斷。

【遮說】シャセツ　まちぶせして說く。史、高祖紀「三老董公ー二漢王一」

【遮截】シャセツ　さへぎりとどむ。後漢書「烏桓寇二雲中一、ー二道上商賈車牛千餘兩一」‖遮截。

【遮斷】シャダン　さへぎりたつ。唐莊詩「紅塵ー二長安陌」

【遮抑】シャヨク　さへぎりとどむ。唐書、陽城傳「爲レ吏ー二」

【遮留】シャリウ　さへぎりとどむ。北史、唐永傳「宮路ー二、殆數日始得レ出レ境」‖遮止。

【遮遏】シャアツ　さへぎり蔽ふ。後漢書、興服志「張二弓帶一鞬、ー二出入一」(車駕の出行の時、道を清め行人をとどめる義)

【遮レ路】シャロヘギル　みちをさへぎり止める。後漢書、姚期傳「百姓聚觀、喧呼塡レ道、ー二レ不レ得レ行」

【遮莫】シャバク　それはそうであらうとも、ままよ(唐以後の俗語)李益詩「別レ君止有二相思夢一、ー二千山與二萬山一」‖任他・儘管。

【遮留】シャリウ　前條に同じ。白居易詩「ー二不レ道二君王思一」

【適】
㊀セキ
㊁テキ
㊂タク・チャク
陌　錫　陌

㊀の通音テキ

○ゆく(往)おもむく(歸)いたる(至)○よめに行く、とつぐ(嫁)○たのしむ(樂)「快ー」「濟ー」「娛ー」「醋ー」○かなふ、ほどよくあてはまる「ー當」○したがふ(從)○たまたま(偶)○まさに、ちゃうどそこへ。史、高祖紀「高祖ー從旁舍來」○ただ。孟、告子「則口腹豈ー爲尺寸之膚乎」○つねに。○よし(善)○自得する、安便なり「自ー」「暢ー」「舒ー」㊁よつぎ「ー子」嫡に通ず。○おもて(正位)○かみ(上位)○ーはおどろく貌。○あるじ、主なり。詩、衞風「誰ー爲容」○專一、專ら其の事に熱中する。論、里仁「無ー也、無莫也」○かたき。史、田單傳「始如二處女一、ー二人開レ戸」‖敵。㊂せむ(責)孟、離婁「人不レ足與ー也」‖謫。

適動詞連語 適・偶・會の訓は偶(一三五頁四段)の條を見よ。○適・正・政・方・祇等の別は正(一〇〇八頁二段)の條を見よ。○適・往・之・如・逝・行・徂・征・于の別は往(六一八頁四段)の條を見よ。

【適意】テキイ　己の心にかなふ、心が愉快に自得する。晉書、張翰傳「人生貴二ー一爾、何能羈二宦數千里一以要二名爵一」

【適飲】テキイン　ほどほどにのむ。韓非子「渴者ー二之一則生」

【適レ郊】テキカウ　みなかにゆく。左傳「實孟ー一、見二雄雞自斷二其尾一」

【適合】テキガフ　よくあてはまる。

【適歸】テキキ　其の人を主としてとつぐ。ひたまる。史、伯夷傳「我安ー一矣」‖適從。

【適宜】テキギ　よろしきにかなふ。‖便宜。

【適レ口】テキコウ　味覺にして口にかなふ。晉庾文「嘉肴珍膳、雖レ所レ未レ食、食必美レ之、適二於口一也」張蘊古文「雖二八珍千前一、所レ食不レ過一レー」

【適子】テキシ　長男。嫡子。‖嫡子。

【適然】テキゼン　偶然。偶ま其の事に當面而立」‖嫡子。

【適人】テキジン　○かたき。宇解參看。‖敵人。○女子が出でて嫁する。よめいりする。儀禮「凡女行二於大夫一以上一曰レ嫁、行二於人一曰レ適レ」

【適者生存】テキシャセイソン　生物の形態・習性等が其の生存する周圍の境遇に適するものはよく生存繁榮し、然らざるものは絶滅する。

【適戍】テキジュ　邊地へゆきて守備する。賈誼、過秦論「ー之衆、非レ抗二九國之師一也」‖謫戍。

【適從】テキジュウ　主としてゆきてしたがふ。左、僖五「狐裘龐茸、一國三公、吾誰ー一」‖適歸。

【適切】テキセツ　よくあてはまる。‖對切。

【適然】テキゼン　○たまたま。鬼谷子「事有二

一一」＝偶然。○つれ、あたりまへ。賈誼、治安策「以ㇾ是爲二一一一耳」＝當然。

【適卒】ソツ 部ありて邊境の守備に充てられし兵卒。史、鄒食其傳「令二一一分守二成皐一」＝謫卒。

【適長公主】コウシュ 漢代は天子の長女をいふ。適は嫡に通ず。史、劉敬傳「以二一一一妻ㇾ之」（唐代は天子の姑妹をいふ）

【適適然】セキセキ 大いにおどろく貌。莊、秋水「一一驚、規規然自失也」

【適ㇾ適】テキス 己の意に適することを適とする。莊、大宗師「是役二人之役一、適二人之適一、而不二自適一其適一者也」

【適任】テキニン はまりやく、よく其の任務に適當する。

【適莫】テキバク 適は專ら一事を主とし、熱中する。莫は適の反、背がぜざるなり。嫉ふ。論、里仁「君子之於二天下一也、無ㇾ適也、無ㇾ莫也、義之與比」

【適法】テキハフ 規定又は法律に適合する。＝合法。

【適評】テキヒヤウ よくあてはまる批評。

【適用】テキヨウ ほどよくあてはめてもちふる。晉書、職官志「戒嚴ノ時一一、或因ノ務遽革」＝應用。

【適欲】テキヨク よくをひかへめに程よくする。呂覽「聖人必先一ㇾ一」

【適齡】テキレイ 國或る規定の年齡にあてはまる「徵兵一一」

【適往】テキワウ 其の德をしたひてゆき従ふ。呂覽「帝也者天下之適也、王也者天下之往也」

【遫】ソク 沃

○とし、はやし（疾）「剽一」＝速。○ちぢまる、せまる。＝促。○僕一は才の凡庸にして短小なる貌。漢書、息夫躬傳「僕一不足數」

【遲】㊀チ ㊁チ 眞支

㊀おそし。速の對。○ゆるやか（緩）「舒一」徐行すること。鈍なし「一鈍」「一重」○しづか（靜）○おくる（晩）おそくなる。禮記「來何一也」○ひさし（久）○棲一は安らかに息ふ。○委一は廻りて遠き貌。○陵一は丘陵の漸くにひくくなる貌。轉じて事の漸く衰ふる貌にいふ。㊁まつ（待）「一明」○すなはち、そこで（乃）史、春申君傳「一令韓魏歸二帝重于齊一」

同訓異字 遲・待・俟・竢・徯・須の別は待（六二頁三段）の條を見よ。

【遲引】チイン ながびく。＝遲延・遲延。

【遲桂】チカン おくれてとどまる。蔡邕、文「狐疑一一、兩州空懸、萬里舊俸、無ㇾ所二管擊一」

【遲疑】チギ ぐづぐづして決せず。疑ひて猶豫する。後漢書「然猶折二意緒神一一陵厚」＝狐疑。

【遲久】チキウ おそくながし。又、まつこと久し。陸機、豪詩「眞君不ㇾ可ㇾ見、焚香空一一」

【遲回】チクワイ ぶらぶらさまよふ。李白詩「金花折二風帽一、白馬小一一」＝低徊・徘徊。

【遲遲】チチ ゆったりとして迫らず。晉書、謝安傳「性一一、久而方罷」

【遲刻】チコク 定めの時刻におくれる。

【遲日】チジツ 春の日。日永くして春るることおそき故。詩、豳風「春日遲遲」杜甫、詩「一一園林悲二昔遊一」

【遲疾】チシツ おそきと、はやきと。後漢書、律曆志「月行當ㇾ有二一一一、不三必在二衆中東非一衆角之間一」遂史、陳蕤傳「上命駟ㇾ馬、較二一一一、以爲二勝負一」＝遲速。

【遲熟】チジユク 時候におくれて成熟する。金史、食貨志「地寒宜種一一」＝晩熟。

【遲速】チソク おそきと、はやきと。列、楊朱「何遲一二於其間一乎」

【遲鈍】チドン 遲速に同じ。王安石、周官新義序「一一有ㇾ時」

【遲滯】チタイ ぐづぐづしてとどこほる。通鑑「後唐莊宗必誅二刑獄一一者」

【遲旦】チタン あさはやく、早朝。漢書、南越王傳「一一城中皆降二伏波一」伏波は伏波將軍路博德」＝遲明。

【遲遲】チチ ○ゆるやかにして迫らざる貌。禮、孔子閒居「威儀一一」＝舒遲。○徐行する貌。詩、邶風「行ㇾ道一一」○日の長き貌。詩、豳風「春日一一」

【遲遲鉗鉗】チチカンカン 成長すること遲き矯松の松。范質、贈二從子果一詩「一一、豐標含二晩翠一」

【遲鈍】チドン にぶく、おろか。吳志、孫奐傳「吾初憂二其一一、今治軍、諸將少二能及者一、吾無ㇾ憂矣」＝遲頓。

【遲頓】チトン おそくにぶし。漢書、龔方進傳「贓二一一不及ㇾ事」注「頓、讀曰ㇾ鈍」＝遲鈍。

【遲任】チニン 殷の賢人。其の言に曰く「人惟求ㇾ舊、器非ㇾ求ㇾ舊」

【遲莫】チバク だんだんとおそくなる。莫は暮の古字。屈原、離騷「惟草木之零落兮、恐二美人之一一一」＝暮年・晩歲。

【遲暮】チボ 前條に同じ。陸游詩「年光一一壯心違」

【遲明】チメイ 夜の將に明けんとする頃、遲は待。漢書、高帝紀「一一圍二宛城一三匝」＝黎明・遲旦。

【遲留】チリウ とどまる。元好問詩「傷ㇾ逢二花下一即一一」

【遵】㊀ティ ㊁セイ 寘霽

㊀ゆく（往）○ふる（五）○道一

はるかなる貌。㊂さや（刀鞘）○ゆく。史、賈誼傳「鳳漂漂其高ー」‖逝。

【遯】 ㊀トン 圓 ㊁シュン 眞 遁の本字

㊀のがる、にぐ、にげかくれる「嘉ー」「肥ー」○易の卦の名。艮下乾上。㊁あとしさり。‖遠。○めぐる。‖巡。

同訓異語 ナガ 遯・逃・遁等の別は逃（一九四七頁二段）の條を見よ。

【遯逸】イツ 世をのがれて安らかに居る。晉書、劉驎之傳「好遊ー山澤、志存ー一」

【遯隱】イン のがれかくれる。柳宗元、始得ー西山ー宴游記「尺ー寸千里ー、攝ー其榮ー、以ー其得ー一」

【遯跡】セキ にげかくれる。晉書、皇甫謐傳「上有ー務讓之愛ー、下有ー不ー名之臣ー、朝有ー待賢之禮ー、野有ー一ー之人ー」‖逃跡。

【遯心】シン そむきさる心、背叛の心。禮記、「教ー之以ー政、齊ー之以ー刑、則民有ー一ー」

【遯世】セイ 世をのがれ遁ける。易、文言「君子以ー獨立不ー懼、ー一ー无ー悶」‖遁世。

十二畫

【遺】 ㊀イ 支 ㊁ズイ 支

㊀わすれる（忘）○すつ（棄・亡失）「ー棄」見棄てる。詩、小雅「棄ー予如ー」すたる（廢）○うしなふ（失）漢書、賈誼傳「功不ー一矣」○おとす（落）「ー失」おとしたる物。○ぬける（脱）「ー落」○のこす「ー業」「ー產」のこり（餘）あまる「ー愛」禮、樂記「有ー一音ー者矣」○とどむ（留）○ておち。史、汲黯傳「拾ー補ー過」（人のおちどをひろひ補ふ）○ゆばり（便旋）漢書、東方朔傳「小ー殿上」○ーはなはだ。‖甚。○委蛇。㊁おくる（贈餽）物をつかはす、やる「贈ー」左、隱元「請以ー之」㊂したがふ。‖隨。

同訓異語 ユウ 遺・送・贈・餽・賄等の別は送（一九四五頁二段）の條を見よ。

【遺愛】アイ ○いつくしみをのこす。又、のこしたるいつくしみ。漢書、敘傳「淑人君子、時同功異、沒世ー一、民有ー餘思ー」○古人の仁愛の遺風ある義。仁愛が後世に遺存する。左、昭二十「及ー子產卒、仲尼聞ー之、出ー涕曰、古之ー一也」

【遺愛寺鐘欹ー枕聽】イアイジシヨウハクラクテンヲキクナリ 白居易の香爐峯下新ー卜山居ー草堂初成、偶題ー東壁ー詩の中の句。曰く「日高睡足猶ー未ー起、小閣重衾不ー怕ー寒、ーー、香爐峯雪撥ー簾看、云云」

【遺意】イイ 前人ののこせる心。蘇軾文「追ー遙東朝之ー一ー」

【遺佚】イイツ 君に見すてられて用ひられず。左、公孫丑「ー一而不ー怨、阨窮而不ー憫」‖放棄。

【遺骸】イガイ 親の死後にのこりし子孫。‖遺兒。

【遺詠】イエイ 古人のよみおきたるうた。謝朓、宣城郡内ー登ー三山ー還ー望ー京邑ー詩「ー既傾ー一日、復協ー一ー」

【遺恨】イコン すてる。すたる。晉楊濟「詩書往昔成ー一ー」

【不ー拾ー遺】フシフイ ○道路におちたる物を拾ひ取らず。道徳が行はれて民に源白の心あるをいふ。史、孔子世家「男女行者別ー予塗ー、塗ーー」○法律が嚴しく民が刑を畏れて人の物をひろひ取らず。史、商君傳「道ーー、山無ー盜賊ー」

【如ー拾ー遺】ジユシユイ 地上におちたる物を拾ひとるが如く至りてたやすし。漢書、梅福傳「高祖取ー楚ーー」

【遺恩】オン のこれるめぐみ。後漢書、王昌等傳論「劉氏之ー餘烈」

【遺戒】イカイ 後人の爲めにのこされるいましめ。宋史、李纖和傳「手錄唐李勣ー一、授ー纖和ー」‖遺誡。

【遺誡】イカイ 後にのこすいましめのことば。後漢書、祭遵傳「臨ー死ーー」‖遺戒・遺訓。

【遺骸】イガイ なきがら、死骸。‖遺骨。

【遺行】イコウ あやまれるおこなひ。宋玉、答ー楚王問ー「先生其有ー一ー耶」‖失行。

【遺誥】イカウ 後にのこしたるいましめ。高允、鹿苑賦「觀ー天規ー于今日ー、尊ー先哲之ー一ー」‖遺誡。

【遺業】イギヨウ 前人ののこせる詩文のしたがき。宋史、歐陽修傳「修得ー唐韓愈ー一ー于廢書籠中ー、讀而心慕焉」‖遺稿・遺稿。

【遺憾】イカン のこりをし、殘念。

【遺輪】イリン 死後にのこれる書き物。文心雕龍、辨人ー一、莫ー見ー五百ー」

【遺規】イキ のこれるのり。のこしたるいましめ。張籍詩「周任有ー一ー」

【遺業】イギヨウ わすれすてる。蘇軾文「ー一ー憂患、超然自得」‖委棄。

【遺卻】イキヤク わすれる。崔國輔詩「ー一ー珊瑚鞭、白馬驕不ー行」

【遺矩】イク 前人ののこせるのり。‖遺規。

【遺訓】イクン 殘しおける敎訓。阮籍、大人先生傳「誦ー周孔ー一、歌ー唐虞之道德ー」‖遺誡。

【遺訓可ー乘】イクンノルベシ 前人ののこしおける敎訓は取り用ふべし。沈約文「雖ー混成以無ー迹、宅遺訓之可ー乘」

【遺形】イケイ 已のからだをわすれる。莊子「故養ー志者ー一」

【遺計】イケイ ておちのはかりごと。後漢

貲、租稟傳「廩無二一一」‖失計・遺算。

【遺蘖】ゐ前人のこしたる文藝。蜀志、郤正傳「綴二墳典之流芳一、尋二孔氏之一一」

【遺教】ゐ前人のこしおけるをしへ。漢書、地理志「河東土地平易、有二鹽鐵之饒一、本唐堯所レ居、其民有二先王一一」君子深思、小人儉陋」‖遺訓。

【遺業】ゐ前人ののこしおけるわざ。漢書、鄭陽傳「今天子新レ報二先帝之一一、左規二山東一、右劃二關中一」‖遺緒。

【遺言】ゐ○臨終のことば。○前人の殘しおけることば。禮記「古之一一與二遺弧一、猶不レ能レ知也」

【遺老】ゐのこされたるのり。晉紀、辨亡論「數島率服、廢除二一一一、政無二大闕一」

【遺骨】ゐなき人のほね。通鑑、陳文帝紀「齊人收二永安上黨二王一一」歸レ之」‖遺體。

【遺恨】ゐのこれるうらみ。陸機、文賦「恢一一以終レ紙」朱熹詩「餘來一一滿二應禮一」‖遺憾。

【遺財】ゐ遺産に同じ。

【遺策】ゐ○ておちのはかりごと。呂覽、不苟「所レ冒無二一一」失策・失計。○前人の遺しおきたるはかりごと。賈誼、過秦論「擧二敎鞭一而笞二四一一」

【遺産】ゐ死者の殘し置きたる財產。‖遺財。

【遺算】ゐておち。吳志、三嗣主傳、注「課無二一一、衆不二失策一、故遂割二據山川一、跨二制荊吳一、而與二天下一爭レ衡矣」‖失計・遺計・遺策。

【遺山像】ゐ書名、四卷、金の元好問の詩文集。好問才雄にして學贍、最も詩文に長ず、遺山は其の號。

【遺士】ゐ世に用ひられずして、民間に隱れ居る學者。元史、董士選傳「論老儒及西蜀一一」

【遺矢】ゐ大便をする、矢は屎。史、廉頗傳「一飯三一一」

【遺志】ゐ前人ののこしおける志。高允、鄚國建學表「申二祖宗之一一、興二周禮之經業一」

【遺址】ゐ家又は城などののこれるあと。貢師泰詩「梵林一一在二松壑一」‖遺趾。

【遺兒】ゐ○わすれがたみ。父母に死なれたるこども。‖遺子。○すてご。‖棄兒。

【遺詞】ゐのこされしあとつぎ。張九齡、東封敎書「一一沈淪」

【遺賜】ゐ物を贈りたまふ。又、其の物。漢書、外戚傳「妾伏自念、入二椒房一、以來、一二一外家二、未レ嘗蒙二故事一」

【遺臭】ゐ惡名を後世にのこす。晉、桓溫傳「既、不レ能レ流二芳後世一、不レ足二復一二一萬載二耶」

【遺式】ゐのこれるのり。宋書、孝武帝紀「祖二九疑于蘇康一、紀二遙來于渤海一、皆前載流訓、列聖一一」舊唐書、香榮志「公莫舞、漢世謂二之巾舞一、舞用レ巾、以象二項伯衣袖之一一一也」

【遺失】ゐとりおとす。わすれる。後漢書、魯丕傳「無レ使二幽遠獨有二一一」

【遺臣】ゐ○先代より仕へたるふるきけらい。‖舊臣。○前朝のけらい、亡國の臣。

【遺堠】ゐもえのこり。溫庭筠詩「丙舍無二人一一香」‖餘燼。

【遺珠】ゐ○拾ひのこされしよき玉。〔莊、天地〕張籍、岡象得二玄珠一詩「赤水今何處、一一已渺然」○未だ人に知られざる賢人又はすぐれたる詩文などに喩ふ。

【遺書】ゐ○かきおき。蒙陰比事「途呼二族人一爲二一一、悉以レ財屬レ女」○亡逸せる書物。漢書、藝文志「使二諷者陳レ爲求二一一於天下一」○著して後世にのこしたる書物。大學章句「大學孔氏之一一」‖遺著。

【遺緒】ゐ先人ののこしおける事業。書、君牙「惟予小子、嗣守二文武成康一一一」‖遺業。

【遺蹤】ゐあとかた。蘆一詩「靜林深路遠、蕭帝有二一一」

【遺嘱】ゐ生前にたのみおく。‖遺屬。

【遺世】ゐ世の俗事をわすれ棄てる。孫興公、天台山賦「非二夫一レ一孰レ道絕二塵一、蓋レ之者烏能輕二舉而宅」前赤壁賦「如二一レ獨立、羽化而登仙一」

【遺制】ゐ○古人ののこせる制作。南史、張緬傳「幼喪レ母、有二節操一、卽母之一一、及二其所一レ識家人、具以告レ之、每二忌時一、輒對レ牀嗚咽不レ能レ勝」○古よりのこれる制度。白居易、禁庭「備二威儀一、助二郊祭一、循二舊太宗之一一」

【遺精】ゐ意識せずして精液をもらす病。

【遺陽】ゐ周御の際のみことのり。

【遺迹】ゐのこれる昔のあと。周易正義序「康成之說、一一可レ尋」‖遺跡。

【遺跡】ゐ○前條に同じ。王粲詩「先民一一、來世之矩」○あとをのこす。劉峻、廣絕交論「一レ一江湖之上」

【遺餘】ゐおとしたるぜに。酉陽雜俎「原嘗行得二一一」

【遺俗】ゐ今日までのこれるならはし。孟、公孫丑「其故家一一、流風善政、猶有二存者一」

【遺俗之累】ゐ世人に見すてられる縁。蘇軾、賈誼論「必有二一一一」

【遺族】ゐ主人に死なれたる家族。元好問詩「眼鄭膚兒識二名姓一、故鄉一一見二衣冠一」

【遺緒】ゐ○失ひしやにり。賈誼、過秦論「秦無二亡矢一一之費一」○のこ

れるやにも。

【遺存】ヰゾン　のこりながらふ。狄逸賦「願二薦要於一一一、得二什一於千百一」

【遺體】ヰイ　父母ののこし置きしからだ、即ち己の身。喪、祭義「曾子曰、身也者、父母之一一也」

【遺澤】ヰタク　後にのこれるめぐみ。楊氏家訓「死則遺二共澤一」⇒餘澤。

【遺蹟】ヰセキ　むかしのあと、蹟はあと。蘇軾詩「四韻詩二一一一」⇒遺跡。

【遺脫】ヰダツ　ぬけ、おち。⇒遺漏・脫漏。

【遺策】ヰサク　ておち。說苑「萬舉而無二一失策一」⇒遺策・失計。

【遺塵】ヰヂン　前人ののこしおける事業。左思、魏都賦「先王之桑梓、列聖之一一」

【遺著】ヰチョ　著して後世にのこしたる書物。⇒遺編。

【遺直】ヰチョク　古の直者の遺風ある人。左、昭十四「仲尼曰、叔向古之一一也」

【遺傳】ヰデン　祖先又、父母の體質性格の子孫につたはるもの。

【遺毒】ヰドク　のこれる害毒。漢書、董仲舒傳「其一一餘烈、至レ今未レ滅」

【遺德】ヰトク　前人ののこしおけるとく。諸葛亮、出師表「以光二先帝一一一」

【遺尿】ヰニョウ　小便をもらす。⇒遺溺。

【遺溺】ヰデキ　小便をもらす。史、太倉公傳「病見二寒氣一則一一、食二其足蹙陰之脈左右各一所一都不二一一一」⇒遺尿。

【遺念】ヰネン　死後に財物を遺め置く、俗にいふかたみ。水滸傳「自二父親詩レ危之日一存二錦箱子二十所一、與二哥哥一爲二一一一」

【遺忘】ヰバウ　わすれる。周禮、秋官、司刺「三宥曰二一一一」（宥は罪過をゆるす）⇒忘卻。

【遺芳】ヰハウ　後世にのこれるほまれ。晉書、后妃傳「后承二前訓一、率二遵一一一」

【遺髮】ヰハツ　かたみとして留めたるかみのけ。

【遺法】ヰハフ　のこれるのり。詩經、疏「衛有二康叔之化一存一一」

【遺聲】ヰセイ　前人ののこしたるあやまり。宋書、周朗傳「今擧若二一、猶布二于民一」

【遺風】ヰフウ　○古よりの風化、昔のおもかげ。宋書、謝靈運傳論「一一餘烈」⇒餘風。○疾ゐき風。王褒、聖主得二賢臣一頌「追二舜雷逐一一一」○千里の馬。呂覽、本味「馬之美者、青龍之匹、一一之乘」

【遺腹子】ヰフクシ　父の死後に生れたる子。史、李將軍傳「李當戸有二一一一、名レ陵」注「當戸、李廣長子名」⇒遺腹ともいふ。史、趙世家「趙朔妻有二遺腹一」

【遺物】ヰブツ　死者ののこしたる品、かたみ。

【遺憤】ヰフン　前人ののこせるいかり。傳亮文「祖宗一一、寄二予一旦一」

【遺乘】ヰジヤウ　○道におとしたる贈たば。詩、小雅「彼有二一一一、此有二滯穗一」○轉じて前人の著述等に譬らしたる事柄「荀子一一」

【遺弊】ヰヘイ　大臣などが死に臨みて君主にかきつけを奉る。又其のかきつけ。宋史、趙普傳「劉阿卒、一一薦二普於朝一」⇒遺疏・遺摺。

【遺編】ヰヘン　前人ののこしおける書物。舊唐書、章懷太子傳「往聖一一、咸窮二志業一」⇒遺著。

【遺民】ヰミン　○いきのこれる人民。⇒遺黎。○亡國の人民。○前朝の臣民にしてそを守り新朝に仕へざる者。

【遺命】ヰメイ　死にのぞみ遺言していひつける。

【遺老】ヰラウ　○先帝に仕へたる老臣。漢書、劉向傳「繼二漢厚恩一、身爲二宗室一一一」○前朝より生きのこれる老人、亡國の舊臣。晉書、徐廣傳「殿收レ淚而言曰、君爲二宋朝佐命一、晉乃許室一一」

【遺落】ヰラク　○うちすてる、なげやりにする。十八史略、東漢紀「一一一世事」○ぬける（脫）武帝內傳「無二一字一一一」⇒脫落。

【遺利】ヰリ　取りのこされたる利益。漢書、食貨志「地有二一一一、民有二餘力一」

【遺留】ヰリウ　のこりとどまる。春秋序「書史遺文」疏「史記已沒、策書一一、故曰二遺文一」

【遺闕分】ヰケツブン　死せし戸主の遺產中、法定の家督相續人、其の他法令に規定せられたる人へ遺留すべきものと定められたる部分。

【遺類】ヰルイ　生きのこれるやから。史、高祖紀「襄城無二一一一皆阬レ之」

【遺黎】ヰレイ　遺民に同じ。

【遺烈】ヰレツ　前人ののこしたるいさを。梁鷰、奚高士碣「乃刋二貞石一、以讚二一一一」

【遺漏】ヰロウ　おとしもらす。⇒遺脫。

【遹】

㊀イツ　㊁シュツ　質　質

㊀したがふ（循・遵）○のぶ（述）○ここに。發語の助辭。詩、大雅「一駿有レ聲」○皇は往來の貌。㊁よこしま（邪辟）正しからず「罔一」

【遹追】ヰツヰ　後を追ひしたふ。

【遝】

㊀ゴ　㊁ガク　藥　遏

㊀あふ（遇）偶然に出遇ふ。莊、達生「醉者一物而不レ懼」㊁おどろく。⇒愕。○さかふ（逆）⇒悖。○ふる（觸）

【遵】

ジュン　眞

○したがふ、したがひよる

(循)○事理又、法令に率ガヒ行フ、したがひまもる「一守」「一奉」中庸「君子」遵而行」○よる、より沿うて行く。詩、周南「一彼汝墳」○のっとる(法)○圖文鳳の下に行ふ。仿ーといひ、上に承ふを祇ーといふ。

同訓異語 遵・順・從・隨・循・率・徇の別は順(二八五頁三段)の條を見よ。

【遵由】ジュンイウ よりしたがふ。

【遵義】ジュンギ ○正しき道にしたがふ。貴、洪範「無偏無陂遵二王之義一」○貴州の縣名。

【遵古】ジュンコ むかしのままにしたがひよる。漢書、谷永傳「委任ーレー、未レ有二過政一」

【遵教】ジュンケウ をしへにしたがふ。史、萬石君傳「上時賜二食於家一必稽首俯伏而食レ之、如レ在二上前一、其執レ喪哀戚甚悼、子孫ーレー亦如レ之」

【遵守】ジュンシュ したがひまもる。‖遵奉。

【遵法】ジュンハフ 法律規則にしたがふ。

【遵奉】ジュンホウ したがひ守る。陳雲文「國家業承、務在ニー一」‖遵守・奉遵。

【遵命】ジュンメイ 圖仰の通りかしこまる。

【遵養時晦】ジュンヤウジクワイ 道にしたがひ志をやしなひ、時勢を見て昔行をくらまし愚人の眞似をする。詩、周頌「於鑠王師、ーー」

【遵用】ジュンヨウ したがひもちふ。漢書、韓延壽傳「爲二吏民一行二喪嫁娶種一、百姓ーー」

【遶】ゼウ・ネウ 俗 繞 又、繞に作る

めぐる。めぐらす、かこむ(圍繞)熟語は繞(一五〇一頁三段)參看。

同訓異語 遶・繞・環・圍等の別は繞(一五〇一頁三段)の條を見よ。

【遶築】ゼウチク めぐる。めぐらす。孟郊・登金陵聯句「脫レ實自開坼、率レ柔誰ーレー」

【選】㊀セン 感 ㊁セン 豏 ㊂サン 旱

㊀えらぶ、よりわける、衆人中よりえらび抜きて官職に任ずる(銓官)又、其のえらばれし人「一士」「一手」○めぐりまふ(瑣舞)㊁えらぶ(擇)えりわける、賢才をえらぶ。左、襄九「舉不レ失ーー」○古人の詩文をえりわけ集めて一書と成す「文ー」○少ーー聞は須臾(數)㊂かぞふと音通。漢書、公孫賀傳「斗筲之人、何足ーー」○よわし。罪に通ず「ー愆」

同訓異語 選・撰・擇・簡・揀の別は撰(七八八頁三段)の條を見よ。

【選紀】サンキ かぞへたてる。時憲、何蕃傳「蕃ー著名ニ文設一者ニ不レ可ニー一」

【選歌】センカ 圖 歌をえりぬく。又其の歌。

【選聞】センブン しばらくのあひだ。日覺「ーー食熟」‖須臾・少選。

【選舉】センキョ えらびて推擧する。後漢書、陳蕃傳「蕃與二黃瓊一共典ニーー一、不レ偏二擅當一」

【選科】センクワ 學校に定めし全科目中の一科若くは數科をえらびて學修する科。

【選鍊】センレン 鐵石をよりわける。

【選官】センクワン ○官吏をえらぶことを掌る官、即ち吏部の官。‖選舉。○官吏をえらび用ふる。

【選賢】センケン かしこき人をえらぶ。管子「四年ーレー、以爲レ長」

【選差】センサ えらびつかはす(薦轅、論二積欠一狀)

【選曹】センサウ 官吏銓選の事をつかさどる官。‖選官・選事。

【選士】センシ 士の秀でたる者。禮記「命レ鄉論二秀士一、升二之司徒一、曰二ニーー一」

【選次】センジ えらび出して次第する。儀禮、注「比二ニー一其才相近者一也」

【選擧】センキョ ○官吏を選任する事を掌る。唐書、劉政會傳「以二員外郎一主二南曹ーー一」‖選官・選曹。○其の職事を喜びて選擧する。魯語「其爲レーレー乎」

【選試】センシ 官にえらび試みる。後漢書、百官志「太常卿一人、天子傳ニーー一、博士祭二其能否一」‖揀試。

【選臣】センシン ○よきけらいをえらぶ。史、孔子世家「魯哀公問レ政、對曰、政在レーレー」○えりぬきたるけらい。

【選者】センジャ よりぬく役目の人。

【選手】センシュ よりぬきの上手。

【選授】センジュ えらびて官をさづける。陳書、徐陵傳「遷二吏部侍郎一、陵以三梁末以來、ーー失二其所一、於レ是授二事綱維一、綜二覈名實一」

【選勝】センショウ 名勝の地を尋ねて遊ぶ。王惲詩「ーー莫二泉石一」

【選奭】センセキ ねそれて遒まず。奭は弱。漢書、四南夷傳「譬者ーー復守二和誡一」‖衰奭。

【選懦】センダ よわし。後漢書、西羌傳「公剛ーー」‖懦弱・選奭・選媠。

【選體】センタイ 文選の中に在る詩の體。

【選擇】センタク えらぶ。孟、滕文公「ーー而使レ子、子必勉之」

【選擢】センタク えらびぬく。後漢書、伏湛傳「古者ーニ諸侯一、以爲二公輔一、是故四方回レ首仰二望京師一」‖拔擢・銓擢。

【選置】センチ えらびおく。漢書、金日磾傳「平帝卽位、ーニ師友一」

【選拔】センバツ よりぬく、選擇拔擢。漢書、田延年傳「ーニ尹翁歸等八以爲二爪牙一、群二勳豪強一、姦邪不二敢發一」‖簡拔。

【選佛場】センブツヂャウ 盆を開きて戒を授け

る所。傳燈錄「丹霞將ㇾ應ㇾ挙、道遇二一禪客一、曰、選官何ニ如選佛一、霞曰、選佛當ㇾ往ニ何所一、曰、江西馬大師出世、此——也」

【選兵】センペイ　すぐりたる兵卒。史、信陵君傳「得ニ——一八萬人一」

【選用】センヨウ　えらびもちふる。漢書、龔遂傳「——ニ賢良一、固欲ㇾ安ㇾ之也」‖擢用。

【選良】センリョウ　善き人物をえらびぬく。又其のえらばれし人。

【選練】センレン　十分にえらびぬく。史、趙世家「以ニ——一擧ニ賢、任ㇾ官使ㇾ能」‖簡練。

【遷】セン　先　迁は俗字

○うつる。うつす（移徙）物を移す。曲禮「先生書策琴瑟在ㇾ前、坐而遷ㇾ之」場所をかへる、官職又地位をかへる。漢書、賈誼傳「誼超ニ——一、歲中至ニ大中大夫一」○のぼる（登）高き方に上る「累ニ——一」「升ニ——一」詩、小雅「ニ于喬木一」○ゆく（之）○かはる。かへる（變易）あらためる（改）○とりかへる（交易）○國都をうつしかへる。左傳「季文子如ㇾ晉、賀ニ——一也」○罪して放ち遂ふ、しまながしにする（貶謫）

同訓異語　遷・移・徙の別は移（二三八頁二段）の條を見よ。

【遷移】センイ　遷徙に同じ。

【遷易】センエキ　うつりかはる。陸機詩「天道有ニ——一、人理無ニ常全一」

【遷延】センエン　○しりぞく、逡巡アトシサリする。宋玉、神女賦「——引ㇾ身、不ㇾ可ニ親附一」○のびのびになる。‖延引。

【遷改】センカイ　うつりかはる。李白詩「天地無ニ彫換一、容顏有ニ——一」我昱詩「冠冕凄涼激ニ——一、眼見桑田變成ㇾ海」

【遷幸】センコウ　天子が居所を他へうつされる。晉書、天文志「永嘉三年、熒惑犯ニ紫微一、太史令高堂沖奏、乘輿宜ニ——一」

【遷客】センカク　つみせられて遠方に流されし者。通鑑、後晉紀「池州多ニ——一」注「以ㇾ罪遷ニ降外州一者、其州人謂ニ之——一」

【遷革】センカク　善にうつり惡を改む。王融、策ニ秀才ニ文「治ㇾ曆明ㇾ時、昭ニ——之運一、改ㇾ憲勅ㇾ法、審ニ刑德之原一」

【遷御】センギョ　天子の居所をかへうつされる。‖遷幸。

【遷宮】センキュウ　みやうつし。

【遷化】センカ　○うつりかはる。陳設、舞賦「與ㇾ志——」○人の死をいふ。漢書、外戚傳「勿ニ——一而不ニ反兮一」○高僧の死。大乘義章「菩薩後時——ニ——他土一」

【遷訛】センカ　うつりかはる。後漢書、方術傳「不ニ探精遠一、易ニ惑ニ鑒效一、如或ㇾ——、實乖ニ玄奧一」宋書、恩倖傳論「歲月——、斯風漸篤」

【遷喬】センキョウ　○黄鳥がひくき谷間より高き木にのぼる。詩、小雅、伐木「伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶、出ニ於幽谷一、遷ニ于喬木一」○轉じて官位の昇進に喩ふ。桓溫表「幽谷無ニ——之望一」

【遷固】センコ　史記の著者司馬遷と、漢書の著者班固と。文中子「——而下、述作何紛乎」

【遷次】センジ　官職をすすめる。樂昌公主詩「今日何——、新官對ニ舊官一」

【遷徙】センシ　うつる。うつす。‖遷移。

【遷就】センシュウ　此を捨てて彼を取り、強ひて合はんことを求める。賈誼、新書「倚——而爲ニ之辭一也」

【遷情】センジョウ　心をうつしかへる。國語「死不ㇾ——、彌也、守ㇾ情說ㇾ父、孝也」

【遷逝】センセイ　うつりさる。死する。蘇軾詩「平生親友半——、公雖ㇾ不ㇾ怪旁人愕」

【遷染】センセン　習俗にうつりそむ。後漢書、黨錮傳論「嗜ㇾ惡之本同、而——之塗異」

【遷謫】センタク　罪により官を貶して遠地にやる。蘇軾詩「舊史饒ニ——一、恆情厭ニ苦辛一」‖遷竄。

【遷都】センド　都をうつす。左傳「武王克ㇾ商、遷ニ九鼎於洛邑一、義士猶或非ㇾ之」‖定ㇾ鼎、遷都。

【遷轉】センテン　うつす。うつる。後漢、倉慈傳、注「猶ニ遷轉一也」京兆太守、風化大行、於ㇾ是吏民更懷ニ其——一也」‖移轉。

【遷怒】センド　やつあたり。甲のいかりを乙にうつす。論、雍也「不ㇾ——、不ㇾ貳ㇾ過」

【遴】㊀リン　㊁リン　眞　震

㊀なやむ、かたんず（難）はばかる。○むさぼる（貪）古、吝と通ず。漢書、終軍王傳「晚節——、惟恐ㇾ不ㇾ足ニ于財一」㊁えらぶ（選）謹みて選ぶ、比べて選ぶ。

【遴選】リンセン　人才をえらぶ。遴も選。金史、陳規傳「——學術該博、通ニ曉世務一、骨鯁敢言者ニ以爲ニ廉謹一」

【遵】レ。　眞

○はるか、とほし（遠）距離又時間が長い「前途——遠」○川の名、直隸奉天を經て海に入る。漢代一東一西二郡を置く。○朝代の名、姓は耶律氏、初、契丹と名づけ、熱河に居る。後梁の時、阿保機帝を稱し、國を——と號す、其の境域東日本海

に至り、西天山に及び、内外蒙古を包み直隷山西の北境に及ぶ、九帝二百十年にして金に滅ぼさる。

【遼遼】レウ とほくはるか。阮籍賦「縣二―之闊度一兮」‖遼邈。

【遼遠】エン はるかにとほし。左傳「楚師―、糧食將レ盡」‖遼遼・遐遠。

【遼隔】カク はるかにへだたる。潘岳賦「眷二故鄉之―一」

【遼曠】クワウ はるかにひろし。張協詩「水國何―一」‖遼廓。

【遼廓】クワク 遠くひろびろとする。淮南子「通二性於―一」‖曠遠・遼落。

【遼闊】クワツ はるかにへだたる。李商隱詩「天地―誰相待、日日虛乘九萬風」

【遼遐】カ はるかにとほし。西征賦「人度量之乖戾、何相遠之―一」王禹偁詩「吹篪事―仙迹絕二尋求一」‖遐遼・遐遠。

【遼史】シ 百十六卷、元の托克托等撰す、考證すべき史料乏しかりし爲めに、疎略多しと爲す。

【遼豕】シ 遼東豕を見よ。

【遼東】トウ 國名、秦代に置く、今の奉天の東南境、遼河の東に在り、故に名づく、渤海・黃海の間に斗出す、今一半島と稱す。

【遼東豕】トウシ 人自ら其の功に誇るも、他人より之を見れば、異とするに足らざる喩。後漢書、朱浮傳「朱浮書二報彭寵一曰、伯通自伐以爲功高二天下一、往時遼東有レ豕、生レ子白頭、異而獻レ之、行至二河東一、見二羣豕皆白一、懷レ慙還、若以二子之功一論二於朝廷一、則爲二―一也」（伯通は寵の字）

【遼東鶴】ハクトウ 遼東の人丁令威、仙術を修し鶴に化して天に升りしといふ故事。丁令威化レ鶴（二二頁四段）參看。

【遼東帽】ハクトウバウ 漢末、管寧が清節を守りて遼東に隱居し、常に皁帽を著けたりし故事（魏志、管寧傳）。文天祥、正氣歌「或爲二―一、清操厲二冰雪一」

【遼哉】カナ はるかなるを嘆ずることば。蘇軾詩「―千載後、登二我一笑樓一」

【遼遠】エン はるかに遠し。臨濟詩「山用―一般衣裳」

【遼來遼來】ライライ 小兒の啼を止むるにいふ、れろれろ。魏志、張遼傳「遼武力過レ人、數有二戰功一、累二轉前將軍一、舊注曰、江東小兒啼、怖レ之曰二――、無二不レ止者一」

【遼落】ラク 遼廓に同じ。世說「江山―一、居然有二萬里之勢一」

【遼遼】レウ はるかに遠き貌。劉向、九歎「山修遠其―一兮」

十三畫

【邀】エウ 圖

○むかふ。○まちまうける、遮ゆる「一擊」徼・要に通ず。○まねく（招）「招―」李白詩「舉杯―明月」○もとむ（求）叨ふに求め受ける「―恩」「―賞」

同訓異語 邀・向・迎・逆・遊の別は向（三〇六頁四段）の條を見よ。○遊・求・干・需・要等の別は求（一〇四五頁四段）の條を見よ。

【邀遊】イウ 招きむかへる。韓愈詩「官租日輸納、村酒時―一」

【邀勳】クン 功をたてんとむかへ求める。王維詩「單車曾出レ塞、報國敢一レ辭」

【邀擊】ゲキ むか（うつ。‖要擊。

【邀斫】シヤク まちうけしてきる。唐書、李石傳「將レ朝、騎至二親仁里一狙盜發射、石傷馬逸、盜―一之坊門、絕二轡尾一乃得レ脫」

【邀招】セウ むかへまねく。‖招邀。

【邀討】タウ 敵兵をむかへうつ。魏志、劉放傳「欲レ―一之」‖邀擊。

【邂】カイ 卦 醒

―逅は思ひがけなくめぐり合ふ、期せずして出遇ふ。

【邂逅】コウ 期せずしてめぐりあふ。詩、鄭風「有二美一人一、清揚婉兮、―相遇、適二我願一兮」

【遽】キ 圖

○にはかに（卒）あわてる、うろたへる。左、僖二四「公―見之」○すみやか（急・疾）いそがし。○おそれをののく（戰慄）左、襄三一「豎不レ―止」○くるしむ（窘）○しゅくつぎ（驛遞）しゅくばの人夫。又、其の車馬。左、僖三三「且使レ―告二于鄭一」

同訓異語 遽・忙・閑・急・急の別は忙（六三九頁一段）の條を見よ。○遽・俄・驟・暴・頓・卒・猝○遽は速かなる意、あわていそぐこと、疾雷遽色と用ふ。唐鑑「遽使殺レ之」○俄は須臾也と註し、俄頃と連用す、まもなくなり、唐高宗紀に「王在二萬年宮一夜大水、上遽出乘レ高、俄而水入二寢殿一」とあるにて、遽・俄二字の別明かなり。○驟は物の急に來るなり、驟雨と熱す。玉篇「無二所一溜一驟二拔擢一」○暴は猝也、急也、驟也と註す、物の思ひがけなく、突然急に來るなり、人の頓死を、暴死といふ。史記「風雨暴至」○頓は漸の反にて、次第なく、すみやかなるなり、場に近し。歐文「舊茶稅盛、新茶不レ登、則頓虧二國用一」○卒・猝の二字、同じ、卒爾なり、急遽の意、暴・頓二字に近し、倉

卒と熟す。卒起二不意一」また其繁末ノ可二陳除一」の如し。

【遣人】ケンジン　○しゅくばの人夫。國語「一一來告」‖驛卒。○命を傳ふる使者。列子「使二一一誤レ之」

【遣色】ケンショク　あわてたるかほいろ。後漢書、劉寵傳「臧ノ在二倉卒一未二嘗疾言一一一」

【遣歩】ケンポ　いそぎてあゆむ。唐書、裴師德傳「師德、素豐碩不レ能二一一一」

【還】㊀クヮン・ゲン　㊁セン　先　劉

㊀かへる(歸)もどる、往きて復ノもとへ回る「生ー」「往ー」「凱ー」かへす(復)○しりぞく(退)○かへりみる(顧)ふりかへる。左、昭二十「無所ニ一忌」」○つぐなふ(償)持主にかへしやる「償ー」「賠ー」「返ー」○かへりて(卻)それに反して。後漢書、公孫淵傳「盡忠竭節、一被二患禍一」○ふたたび。○めぐる(遶)めぐらす。漢書、食貨志「一一鹽樹」桑」‖環。㊁すみやか(速)擧動が便捷なる貌。詩、齊風「子之ー兮」○すなはち(卽)○めぐる、めぐらす。‖旋。○また(又)多く詩に用ふ。魏徵詩「中原ー逐鹿」

【還幣】ケンペイ　人の答書をいふ。唐の韋陟の故事に本づく。五雲(八〇頁二段)參看。

【還俗】ケンゾク　僧尼が元の俗人にかへる。宋書、徐湛之傳「世祖命使レ一一」‖歸俗。

【還倍】ケンバイ　曾尼が元の俗人にかへる。「長二開成陽一一一已絕」‖歸路。

【還附】クヮンフ　品物を其の持主にかへす。

【還暦】クヮンレキ　圖六十一歳。干支が再びもとにかへる義。‖華甲。

【還路】クヮンロ　かへりみち。贈答運文「長二開成陽一一一已絕」‖歸路。

【還俗】ケンゾク　僧尼が元の俗人にかへる。宋書、徐湛之傳「世祖命使レ一一」

【還俗】ケンゾク　かかとをめぐらす、旋踵に同じ。極めて速かなるに喩ふ。漢書「雖レ有二漸國勁兵一不レ得レ一一而身爲レ禽」

【還風】ケンプウ　旋風カゼマキに同じ。易稽覽圖「一一者、善令レ還也」注「還、暴也」

【還】㊀テン　㊁テン　先　厳

㊀迅ーチュンー如シンはたちもとほる、行きなやみて進まざる貌。㊁おふ(遂)○めぐる(轉)遂はれてさまよふ。劉向、九歎「」彼南道兮」

【還向】クヮンカウ　行き離ゝみて進まざる貌。‖運如。

【還車】クヮンシャ　もどり車。西陽雜俎「因二一一一致二副車一」

【還直】クヮンチ　あたひをつぐなひはらふ。後漢書「買二人田一不レ肯レ一」

【還附】クヮンフ　品物を其の持主にかへす。

【還軫】クヮンシン　車をかへす、軫は車後の横木。國語「一一一踏候一可レ謂二窮困一」‖回車。

【還軸】クヮンジク　へんじの手紙。壞書、何胤傳「矯二首一一一、懇二其引一一領」‖答書。

【還忌】クヮンキ　かへりみていみはばかる。左、昭二十「肆行非レ度、無レ所二一一」注「還猶レ顧也」‖顧忌。

【還郷】クヮンキャウ　ふるさとにかへる。南史、劉之遴傳「令三刺衣レ錦一レ一、盡二榮養之理一」‖歸郷。

【還御】クヮンギョ　還幸に同じ。

【還啓】クヮンケイ　皇太后・皇后・皇太子などの行啓先よりおかへりになる。

【還元】クヮンゲン　○もとへもどす。もとへもどる。○酸素をふくむ化合物より酸素の總量又は其の幾分を去る。

【還魂】クヮンコン　死者がよみがへる。泊宅編「開封解榜出、廬復被レ黜、訴二有司不レ公、置考取二已落者七十餘人一、時號二一一秀才一」

【還魂紙】クヮンコンシ　すきがへしの紙。天工開物「殺レ手拾取再造、名曰二一一一」

【避】ヒ　圖　古、辟に通用す

○さく、よける「一暑」「一亂」「一雷針」「一三舍」孫子「水之形、一レ高而趨下、兵之形、一レ實而擊レ虛」○にげかくれる(隱遁)そらしてかくれる「遁ー」「逃ー」史、藺相如傳「望見廉頗引レ車一レ匿」○ひきかへしよける「週ー」○しりぞく(退)

【避席】ヒセキ　ささはりを、とりのける。揚雄文「水ノ一則通二于海一」

【避寒】ヒカン　さむさをさける。又其の爲めに暖地に移住する。

【避穀】ヒコク　穀食を避けて仙術を修める。郭侯家傳「既能辟レ穀、每導引、骨節堪然、人謂二銷子骨一」(辟は避)

【避災】ヒサイ　わざはひをさける。國語「周川之鳥獸、慌智而避二其災一也」

【避雷】ヒライ　あつさをさける。疫固、嗣詩「來風堪ノ一、靜夜致二清涼一」

【避暑之飲】ヒショノイン　あつさを避ける爲めのさかもり。初學記「劉松與二客料子弟一日共宴飲、常以三伏際、盛夜暗飲補時、以避二一時之暑一、故河朔有二一一一」‖河朔飲。

【避暑之會】ヒショノクワイ　暑を避けん爲めの

會。開元遺事「長安富豪之子、每レ至二晏伏中一、各於二林亭一、植二靈柱一、以二錦綺一結爲二涼棚一、設二坐具一、爲二一一」

【避水】ヒスイ　水害をさける。陸游詩「人家ノレー牛危樓」

【避世】ヒセイ　世と交ることを欲せずして遁け隠れる。易、遯卦、疏「相レ時度レ宜、ーレー而遯」＝辟世（論、微子）

【避匿】ヒトク　さけかくれる。史、魏相如傳「望二見廉頗一、引レ車ーレー」

【避難】ヒナン　災難ナイを避けて他所に立ち退くの。

【避熱】ヒネツ　あつさをさける。杜甫詩「ーレー時來歸、問二兒所一レ爲迹」

【避謗】ヒバウ　そしりをさける。唐書、陸贄傳「贄既放二荒遠一、常閉レ戸、人不レ識二其面一、又ーレー不レ著レ書」

【避病院】ヒビヤウヰン　傳染病患者を容れる病院。

【避風臺】ヒフウダイ　漢の成帝の築きしうてな。飛燕外傳「飛燕身輕不レ勝レ風、帝爲築二七寶ーー一」飛燕は成帝の皇后趙氏の號、體輕くして歌舞に妙なり。

【避雷】ヒライ　落雷のわざはひをさける。孟奥、西征記「有二白石室一、名ニーー一レ雷」

【避雷針】ヒライシン　落雷の災を避ける爲めに屋上に立つる金屬の棒。

【邁】マイ　卦

○ゆく（往）遠く行く。詩、小雅「我日斯ー」○すぐ（過）さる（去）月日がたつ。書、泰誓「日月逾ー」○おゆ（老）「老ー」○つとめはげむ（勇往力行）書、大禹謨「皐陶ー種德」○天子が時を以て巡行する。詩、周頌「時ー其邦」○ーーは願みざる貌。詩、小雅「親我ーー」

【邁進】マイシン　はげみすすむ。＝勇進・遒往。

【邁邁】マイマイ　すぐれる。晉書、王導傳「惟公ーー沖虛」

【邁德】マイトク　つとめてとくを修める。傳休奕、樂府「二帝ーー、竝二茲重光一」

【邁往】マイワウ　はげみ遒む。＝遒進。

【邇】ジ　十四畫　紙　通じて爾に作る

○ちかし。ちかづく（近）「密ーー」○近き所「遐ーー」「遠ーー」中庸「行遠必自ーー」＝爾。○卑近にして俗に通じ易し「ーー言」

同訓異字　邇・近の別は近（一九三九頁二段）の條を見よ。

【邇言】ジゲン　○俗に通じ易き卑近のことば、淺近の言。中庸「庸言之ーー、庸行之謹ーー」○書名、十二卷、宋の劉炎撰す、其の自序實にして事理に切近し、佞佛不情の論なし。

【邇臣】ジシン　君側の近臣。

【邇來】ジライ　近頃。

【邇年】ジネン　近年。

【遼】スキ　尤　本、遒に作る

○深く遠し、おくぶかし「幽ーー」「深ーー」○學問道理などが精しくして深し。唐書、韋夏卿傳「少ーー於學」

同訓異字　遼・深・浚・濬の別は深（一一〇二頁二段）の條を見よ。

【遼宇】スキウ　おくぶかき家屋。宋玉、招魂「高堂ーー、槍層軒些」

【遼洲】スキシウ　おくぶかきふち。李潤文「雲蛇下沈ーーー」

【遼曉】スキウ　ふかくさとる。唐書、貴妃楊氏傳「善二歌舞一、ーーニ音律一」

【遼敞】スキシヤウ　おくぶかく、おどそか。宋史、樂志「廟楹ーー、夜景澹清」

【遼戸】スキコ　おくぶかき門戸。謝朓文「因二閑寺一以傳請、排ーーー」以重深」

【遼古】スキコ　おほむかし。蔡邕文「仰ーーー、輝二昆裔一」＝遂古・太古・遠古。

【遼深】スキシン　おくぶかし。劉克莊詩「江亭俯二虛檻一、穴室窮ーーー」＝深遠。

【遼清】スキセイ　おくぶかくきよし。宋史、樂志「賓坐既興、鳳興戒行、奏解嚴」

【遑】ヘン　十五畫　先　遑は說字、辺は俗字

○ほとり(畔)「岸ー」「池ー」「道ー」「河ー」「海ー」○かたはら(側)○あたり、そば(近傍)「近ー」○くにざかひ(國境)「ー境」○るなか、かたほとり「ー邑」○きし(畔岸)○はて、かぎり、一方面。○衣の緣の飾。○つづく(接)となりあってるる。漢書、高帝紀「齊ー楚」○數學にて多角形をとりまく線「等ー二角形」

【邊夷】ヘン　國のはてにるる えびす。

【邊郵】ヘン　かたゐなかのしゅくば。戰國策「落日ー一鼎、秋風鼓角喧」

【邊城】ヘン　くにざかひの地。陸機文「我生二海狄一、或在二ー一」

【邊邑】ヘン　國の片ほとりにあるむら。禮、玉藻「在二其ー一」

【邊商】ヘン　くにざかひのはてで。隋書、煬帝紀「盜者百餘人、投二之ー一」

【邊役】ヘン　國のほとりをまもるえだち。後漢書、和帝紀「詔曰、幽・幷・涼州、戶口率少、ー一衆劇」

【邊遠】ヘン　遠き國境の地。陳琳文「恐ー一州郡、過聽而給與」

【安レ邊】ヘンヌ　國境の地を安んじ定める。漢書、趙充國傳「選下擇良吏知二其俗一者上以撫和輯、此全レ師保レ勝ノレー之策」

【邊戍】ヘン　國境にて外敵に備へるいましめ。＝邊警。

【邊界】ヘン　くにざかひ。晉書、殷仲堪傳「必使下ー一無二金二小利一、強弱不上レ得二相陵一」

【邊海】ヘン　國のはてに在る海。

【邊涯】ヘン　かぎり、はて。元好問詩「是時春夏交、紅綠無二ー一」

【邊豪】ヘン　邊土に居る豪傑の唐書、薛舉傳「好結二納ー一、爲二長雄一」

【邊扞】ヘン　邊守に同じ。宋書、氏胡傳「不レ顧二孝道一、陳二力ー一、竭レ忠盡レ誠、未レ爲二朝廷所一レ識」

【邊寄】ヘン　國境を守る委任の宋史、眞宗紀「任二ー一者二人」

【邊釁】ヘン　○邊境を守備する騎兵。漢書「發二惡少年及ー一」○邊境を犯す敵の騎兵。宋史、靖康元年、詔呼韓弓馬嫻習、乃中國長技、宜レ多行二教習一、以扞二ー一」

【邊堰】ヘン　くにざかひ、堰はかぎり。蘇軾詩「隄防阻二風水一、橫斜挂二ー一」＝邊界。

【邊境】ヘン　くにざかひ。史、文帝紀「漢與二匈奴一結爲二兄弟一、毋レ使二害一ー一」＝邊覺・邊陲。

【邊鄙】ヘン　くにざかひ。杜甫詩「念我荷レ戈士、窮年守二ー一」＝邊陲。

【邊圉】ヘン　くにのはて、國は無レ窮了翁詩「蕭條耕實二ー一」＝邊疆。

【邊和】ヘン　國境と接する外國との和親。

【邊患】ヘン　外敵が國境を侵すうれひ。北史、裴矩傳「由レ是數爲二ー一」

【邊便】ヘン　邊土より來るつかひ。張籍詩「無レ因レ見二ー一空待寄二寒衣一」

【邊際】ヘン　かたゐなか。柳宗元詩「得レ結二數十廬一、參錯置二ー一」＝邊陲。

【邊塞】ヘン　邊郡のはてにさすらひ居るうれへ。杜審言詩「遲日園林悲二昔遊一、今春花鳥作二ー一」

【邊臣】ヘン　國境の夷狄を攻めるけらい。邊功參看。

【邊城】ヘン　國境に在るしろ。戰國策「衝橹不レ施、而ー一降」＝邊塞。

【邊將】ヘン　國境をまもる將軍。えびすを征する將軍。後漢書、陳龜傳「家世ー一、便二習弓馬一、雄二于北州一」＝邊帥。

【邊障】ヘン　くにざかひのとりで。陳書、劉昌傳「歷レ田三年、軍有二淺食一ー一、公孫」＝邊塞。

【邊守】ヘン　邊境のまもり。後漢書、龐參傳「昔孝文皇帝、悟二馮唐之言一、而赦二魏尙之罪一、使レ爲二ー一、匈奴矛二敢南向一」＝邊戍。

【邊戍】ヘン　國境のまもり。又、其の人。劉商詩「山川萬里復ー一」

【邊垂】ヘン　くにのはて。左、成十三「及二爽我農功一、虔二劉我ー一」＝邊陲・邊境。

【邊帥】ヘン　邊將に同じ。

【邊陲】ヘン　邊垂に同じ。蘇軾衛州、威略碑ニー一」＝邊疆・邊障。

【邊鄙】ヘン　國境にて非常をしらせるのろし。魏書、高宗紀「虔貢屢レ通、

一一師息」‖邊幣。

【邊地】ヘン　かたゐなか。王融詩「寸心無二遠近一一有二風前一」‖邊土・邊鄙・邊陲。

【邊鄙】ヘン　邊境に關するはかりごと。劉克莊詩「郎君今復賢二一一」‖邊計。

【邊幅】ヘン　つくにざかひのまもり。張說詩「一一皮裘速夜動」

【邊土】ヘン　かたゐなか。高適詩「山川蕭條極一一」‖邊地・邊陲。

【無邊】ムヘン　はてなし、限りなく廣し。紀世經「一切諸天、行時來去、一一無礙、無有二邊畔一」

【邊防】ヘン　國境のまもり。唐書、兵志「兵之戍二邊者、大曰二軍、小曰二守捉一、曰城曰鎭、而總二之者曰一道、此自二武德一至二天寶以前一一一之制」‖邊守。

【邊備】ヘン　つくにざかひのそなへ。‖邊守・邊防。

【邊郡】ヘン　かたゐなか。左傳四「一一不レ遠」‖邊邑。

【邊幅】ヘン　布帛のへり。轉じて、外貌のこと。後漢書、馬援傳「反修二飾一一一、如二偶人形一」

【邊民】ヘン　邊境に居るたみ。後漢書、鄧訓傳「撫二接一一一、爲二國部所一レ歸」

【邊豆】ヘン　つくにざかひにあるとりて。齊康書、宣帝紀「左征輪鼓、一一連降」‖邊塞。

邏

【邏】ラ　圓　平

○めぐる、みまはる（巡）巡察する「巡一」○みまはり（游偵・巡査）「警一」「游一」「偵一」「候一」○とりまく（環繞）山などが取りかこむ。

【邏騎】ヘン　みまはりをする騎兵。史、匈奴傳「候騎至二雁甘泉一」注「候騎、一一」

【邏子】ヘン　みまはりする兵。唐書、康承訓傳「遣二一一一窺服胡一レ虓」‖邏卒・巡兵。

【邏卒】ヘン　○みまはりの兵卒。唐書、温庭筠傳「醉爲二一一一擊二折其齒一」○圓巡査の舊稱。

邐

【邐】リ　紙

つづく、めぐる、つらなる（連延）「迤一」

【邐迤】イ　つらなる貌。許有壬詩「遠山來一一、贏馬去遲遲」‖邐迤。

【邐倚】イ　道路の高下曲直相聞ゆる貌。班固、西京賦「雚道一一以正東」

邑部（阝）

【邑】㊀イフ・オフ　㊁アフ　合　緝

㊀むら、おほむら、多人數の聚り會ふ里「城一」「村一」○ちぎやうしょ（大夫の采地）「家一」「封一」「食一」「采一」○みやこ（都會）都は大、一は小。史、五帝紀「舜一年而所レ居成レ聚、二年成一、三年成レ都」○くに（國）古、王畿、卽ち天子直轄の畿内の地の稱「商一」又、侯國の稱。今は縣の稱。○一一はうれふ。‖悒悒。又、微弱なる貌。○於一は氣逆ひ結ぼれて下らざる貌。楚辭、九章「氣於一而不可レ止」又、短氣の貌。㊁阿一はおもねる。‖阿匿。○圓ヲヤネ字の旁ツクとなりて下の形をなす時の稱。阜のドテに對する稱。

【邑邑】イフ　○微弱なる貌。劉向、九歎「强二經維一以紾繯、風一一而栽レ之」○うれふる貌。史、淮南王傳「人生一世間、安能一一如レ此」‖悒悒。○多くのむらむらの班固、四都賦「都都相望、一一相屬」

【邑閒】カイン　○さとのもん。‖閭門・里閒。○轉じてむらざと。唐書、徐申傳「徙二治故州一、未レ幾一一如レ初」‖鄉閭。

【邑君】クン　女子の封號。後漢書、董卓傳「其子孫、雖レ在二封畿一、男皆封侯、女爲二一一一」漢書百官公卿表「皇太后・皇后・公主食レ邑所レ治稱レ邑、一一の稱、蓋し此に本づく。

【邑犬】ケフ　むらざとにすむいぬ。扈原、懷沙賦「一一羣吠兮、吠レ所レ怪也」

【邑宰】ライ　一邑の事を主るもの。又、知縣の稱。潘岳詩「雖レ爲一一一、令名終不レ勗」

【邑子】イフ　同じむらの人。史、張耳・陳餘傳「臣之一一素知レ之」‖邑人。

【邑人】ジン　○さとのひと。易經「一一三百戸」○同じ邑の人。史、司馬相如傳「臣一一司馬相如、自曾爲二此賦一」‖邑子。

【邑名二勝母一曾子不レ入】ソウシハキョウボトナヅクレドモソウシイラズ　母に勝つは不孝なり、故に勝母といふ名の邑には至孝の聞ある曾子

は入らずの說苑、說叢「――、水名。盜泉に孔子不レ飲、醜二其聲一也」

【邑長】ヤウ　むらのをさ。＝里正・村甲。

【邑入】イフ　知行所即ち封邑（領地）より入る租稅。封邑の租稅。史、孟嘗君傳「爲二孟嘗君一收二――一」

【邑落】イフラク　むらざと。北史、勿吉國傳「勿吉國、在二高句麗北一千餘里一。――各自有レ長」＝聚落・村落。

【邑里】イフリ　むらざと。蘇軾詩「――向二疎蕪一、鄉流自清泚」

【邑憐】イフリン　うれへをしむ。邑は悒、憐は愍。荀子「不レ察レ往、不レ閔レ來、無二――之心一」

【邑閭】ユフリョ　さとのもん。又、むらざと。周禮「遂二邦野之除一、辨二種稑之種一、以爲レ遂、主而懸二於――一」

三畫

【邛】キョウ　多

○やむ（病）○つかる（勞）○臨＝は縣の名、四川省に在り。史、司馬相如傳「素與臨二令王吉一相善」

【邙】バウ　陽

山の名。洛陽（河南省河南府）の北に在りて貴人の墓多し。一に芒に作る。＝北邙山。

【邕】ヨウ　多

○ふさぐ（塞）漢書、王莽傳「――河水不レ流」＝壅。○やはらぐ（和）＝雍。○めぐらす。○たまりいけ。○人名。蔡＝は後漢の學者。

【邕穆】ヨウボク　やはらぐ。晉書、秦秀傳「閨門――」＝雍穆。

【邕邕】ヨウヨウ　やはらぐ貌。蘇軾詩「臨レ觴奏二九韶一、雅歌何――」

四畫

【邱】　邨（邑部十畫）に同じ。

【邢】ケイ　青　邢は本字

周公の子孫を封ぜし國の名、今の直隸省＝臺縣の地。左、隱五「鄭人―人伐レ翼」

【邪】㊀ジャ　麻　㊁ヤ　麻　㊂ヨ　虞

㊀よこしま、正しくない（不正）正の對。○いつはり、心がねぢけてゐる（佞）「佞―易、乾卦「閑レ存二其誠一」○わるもの「姦―」「讒―」○ななめ（斜）ゆがむ「敝―」○四時の氣の人の病を發せしむるもの「風―」「―氣」○妖怪などの害をなすもの「妖―」㊁や・か（疑問辭）史、伯夷傳「怨―非―」耶に通ず。○莫―は古の名劍の名。○汗―は下地田。史、滑稽傳「汗―滿車」○呼韓―は匈奴の王の名。㊂あまり。史、屠書「歸―於終一」＝餘。

同訓の漢字　ヵ邪・耶・乎・歟・與の別は乎（六三頁四段）の條を見よ。

【邪惡】ヤアク　よこしまにして惡し。易、乾卦、疏「防二閑――一、當三自存二其誠實一也」

【邪意】イヤ　よこしまなる心。漢書、律歷志「作レ樂者、諧二八音一蕩二滌人之――一、全二其正性一、移レ風易レ俗也」後漢書、楊賜傳「從二小人之――一、順二無知之私欲一」

【邪淫】ヤイン　○心ねぢけて淫亂なり。新語「以塞二――之路一」○佛十惡の一、人の妻妾に通ずる。＝邪婬。

【邪音】ヤオン　ただしからざる音樂。新論「耳目不レ傾二不レ邪、則――不レ入」

【破レ邪】ハジヤ　よこしまなる說をうち破る。唐書、藝文志「法琳――論二卷」高適詩「談空忘二外物一、持レ戒破二諸邪一」

【邪巧】ヤカウ　よこしまにたくむ。後漢書、寇恂傳「恂曾孫榮、上書拒二讒愿之路一、絕二――之言一」

【邪氣】ヤキ　正しからざる惡氣。曾子「――入レ內、正色乃發」

【邪謀】ヤボウ　よこしまなるはかりごと。正義の反對。漢書、劉向傳「壅小在レ位、而從二――一、歔欷相是而背二君子一」

【邪慝】ヤトク　よこしまにして物をそこなふ。書經「播レ棄以レ寬、除二其――一」

【邪曲】ヤキョク　よこしまにしてねぢける。荀子「鄉二子――一而不レ遂、觀二乎雜物一而不レ惑」

【邪狹】ヤケフ　よこしまにしてわるがしこし。漢書、李尋傳「陽者陳有二變改一、小臣二――一、日月精光、時雨順應、此皆天右レ漢無レ已也」＝姦猾。

【邪計】ヤケイ　よこしまなるはかりごと。後漢紀、靈帝傳「外以勳厲、答二其功勳一、內以拘致、防二其――一」

【邪徑】ヤケイ　すぐならざるこみち。正しからざる心又行爲に喩ふ。漢書、五行志「成帝時、歌謠曰、――敗二良田一、讒口亂二善人一」

【邪逕】ヤケイ　よこしまにしていつはる。吳筠詩「漢氏方版蕩、羣醜恣――」

【邪見】ヤケン　○よこしまなるかんがへ。阿毗曇論「貪著――」○佛人をむどく取り扱ふ。＝邪慳。

【邪僻】ヤヘキ　邪僻のことば。孟、公孫丑「――知二其所レ蔽」

【邪眸】ヤボウ　よこしま。楊子「遠二正道一而稱――者有矣」

【邪道】ヤダウ　よこしまなるみち。＝邪

路。

【邪智】ジャチ わるぢえ。＝奸智・諂智。

【邪諂】ジャテン よこしまにしてへつらふ。易繫、辭「能自正レ心、不レ爲二一一」＝邪侯。

【邪侯】ジャコウ 心ねぢけてへつらふ。又、其の者。唐書、李邕傳「疾レ惡如レ讐、不レ容二於衆一一切齒」

【邪萌】ジャホウ よこしまなる心のきざし。後漢書、孔融傳「非レ所三以杜二塞一一」

【邪薄】ジャハク よこしまにして穢うすし。柳宗元文「貪冒苟進、一一之夫、庶得三少沮二其志一」

【邪法】ジャホフ ○邪惡なる法。隋唐嘉話「此一一也」○正しからざる宗教。＝邪宗。

【邪媚】ジャビ 心ねぢけてへつらふ。＝邪諂。

【邪病】ジャビヤウ あしきやまひ。述異記「可レ治二一一」

【邪繇】ジャエウ よこしまなる辯舌。淨住子「佛言、一一雜レ捨」

【邪魔】ジャマ ○佛道にもとれる妄見を抱き正道の障をなす者を魔物に喩ふ。藥師經「信二世間一一外道妖孽之師一」○人のさまたげをする、妨害する。

【邪路】ジャロ 正しからざるみちすぢ。王維詩「貪泉豈不レ飲、一一豈不レ弄」＝邪道。

【邪枉】ジャワウ よこしまにしてまがる。漢書、東方朔傳「行二一一之道一、經二淫辟之路一」＝邪曲。

【邪呼】ジャコ 衆人の聲。南史、曹景宗傳「與二人晴レ酒好レ樂、賸月於二宅中一、使二人作二一一一逐除一、備二笳二人家一一を二酒食一」

【邪許】ジャコ 衆人力を合せて重き物を動かす時のかけ聲、きやりのこと。淮南、道應「今夫擧二大木一者、前呼二一一一、後亦應レ之、此擧レ重勸レ力之歌也」

【邪馬臺】ヤマタイ 支那人が日本國をいふ稱、やまとの音譯。後漢書、倭國傳「國皆稱レ王、世世傳レ統、其大倭王、居二一一國一」

【邪捨】ユシャ からかふ。手を擧げて朝奉する、「後漢書、王霸傳「市人皆大笑、擧レ手二一一之一」＝揶揄。

【邨】

村（九二五頁三段）に同じ。

【那】

㊀ ダ・ナ 歌 ㊁ ダ・ナ 哿

㊀なんぞ、なにごとぞ（何）いかん（奈何）左、宣二「棄甲則一」○安き貌。詩、小雅「有」其居」○おほし（多）詩、小雅「受レ福不一」○刹一は時の極めて短きをいふ。㊁なに、いづれ（何）二一事」○かの、あの、俗語又、詩に用ふ。㊂語勢を助くる爲めに添へる助字。後漢書、韓康傳「公是韓伯休一」

同訓異義 ナ 那・何・奚・胡・曷・庸等の別は何（二一人稱四段）の條を見よ。

【那何】ナカ いかん。齊已詩「交親那レ喜何」＝奈何。

【那箇】ナコ かの、あの。

【那事】ナジ なにごとぞ。＝何事・底事。

【那時】ナジ いづれのとき。＝何時。

【那邊】ナヘン いづこ。李白詩「君家阿一一」（阿は助字）＝何邊。

【那羅延】ナラエン 梵語のナーラーヤナの音譯。勝力、又堅牢と譯す、印度の神の名、希臘天の參屬、惡を排し善を生ずるを以て務となし、力量甚だ大なり「——金剛力」

【那落迦】ナラカ 梵 地獄の略、苦具、又不可樂と譯す、地獄をいふ。

【那爛陀】ナランダ 梵 天竺の寺の名、施無厭の義、釋尊の宿世この地に王となり、衆生を憐み、樂を與へて厭ふことなかりしによりて名つくと「西域記」＝那蘭陀。

【那羅陀】ナラダン 前條を見よ。

【邦】

ホウ 江

○くに（國）一說、大を一、小を國といふ。論、衛靈公「顓臾問爲一一」○天子より賜ひし封土、諸侯の封土。○くにす、封する。領地をあたへる。書、蔡仲之命「乃命二諸王一一之蔡」

同訓異義 クニ 國なり、邑に從ふ半の聲、俗に邦に作るは非。

【邦域】ホウイキ くにざかひ。論、季氏「且在二一一之中一矣、是社稷之臣也」

【邦媛】ホウエン 國中の淑女。詩經「邦之媛也」傳、美女爲レ媛」

【邦家】ホウカ くに。詩經「有二蕡其香、一一之光」＝國家。

【邦交】ホウカウ 國と國との交際。周禮「凡諸侯之一一、議相問也」＝國交。

【邦紀】ホウキ 國家ををさめるのり。宋史、樂志「赫赫英皇、繩二揆一一一」＝國紀。

【邦畿】ホウキ 都にちかき方千里ある地、畿内の地。畿は疆の義。詩、商頌「一一千里、惟民所レ止」

【邦禁】ホウキン くにの禁令。書、周官「司寇掌二一一一詰二姦慝一刑二暴亂一」＝國禁。

【邦教】ホウケウ 國民の教育。書經「司徒掌二一一一」

【邦彦】ホウゲン 一國中にひいでたる士。彦は男子の美稱。詩、鄭風「彼其之子、邦之彦兮」陸機詩「一一應二運興一、衆若二春林葩一」

【邦憲】ホウケン くにのおきて。書經「文武吉甫、萬邦爲レ憲」＝國憲。

【吡二邦憲一】ホウケンヲカス 國の憲法律令をたすけ治める（韓愈、爲二裴相公一謝レ官表）

【邦國】ハウ　くに。書、周官「司馬掌二邦政一、統二六師一、平二一一一

詩「王公占二上讌一ー一角二奇致一」
【邸舍】ティシャ　〇やしき。宋書、褒興宗傳「王公妃主多立二ー一」〇みせ、市中の商店。經、王制、注「處、市ノ物ー」〇來朝せし諸侯の客館、やどや(宋史、黃庠傳)
【邸鈔】ティショウ　邸報に同じ。
【邸第】ティダイ　〇諸侯王の來朝せし時に居るやしき。漢書、燕王劉澤傳「臣願二諸侯王ー一百餘人皆高祖一切功臣」〇貴人のやしき。‖邸宅。
【邸宅】ティタク　やしき。‖邸第・邸舍。
【邸報】ティホウ　京師に在る諸侯王のひかへやしきより、諸令章奏等を傳抄して諸藩に報知するもの。全唐詩話「韓翃家居、一日有ノ人叩ノ門賀曰、ー一制誥闕ノ人、中書進二君名一、已除二駕部郎中知制誥一矣」‖邸鈔。

【邶】ハイ　隊

地名、周が殷を滅ぼして其の畿内を二邶・衛の三に分つ、一は今の河南衛輝府地方。詩、邶風、小序「武王克商、分二朝歌而北一謂二之ー一」

【邳】ヒ　支

下ー一は張良が黃石公に會せし地の名、今の江蘇省ー一縣。

【邺】ヒツ　質

春秋戰國時代、鄭の地名、今の河南省開封府鄭州管城縣、晉・楚交戰の地。左、宣十二「戰二于ー一」

【邴】ヘイ　梗　敬

〇春秋の鄭の地名。今の山東省費縣。〇姓、丙に通ず、漢の丙吉を一に一吉に作る。〇ー一はよろこぶ貌、和適の貌。
【邴邴】ヘイヘイ　よろこぶ貌。莊、大宗師「一ー乎其似ノ喜乎」

六畫

【郁】イク　屋

〇ー一は文物の盛んなる貌。〇ー一烈・ー馥は香氣の盛んなる貌。〇あたたか。煖に通ず「溫ー」
【郁郁】イクイク　雲の盛んなる貌。王起賦「祥雲爲ノ之ー一、佳氣爲ノ之蔥龍」
【郁伊】イクイ　氣が結ぼれて舒びざる貌。孫楚、笑賦「呻吟ー一」‖鬱伊。
【郁郁】イクイク　〇文物の盛んなる貌。論、八佾「ー一乎文哉」〇香氣の盛んなる貌。司馬相如、上林賦「ー一芬芬、衆香發越」
【郁馥】イクフク　盛多なる貌。左思、蜀都賦「蜜房ー一被二其阜一」
【郁馥】イクフク　香氣。王褒猫文「名香ー一、出二氤氳一而輕轉」‖馥郁。
【郁文】イクブン　文物の盛んなる貌。郁郁を見よ。
【郁氣】イクキ　かぐはしき氣。宋史、太廟樂章「元氣陶冶、非ノ煙ー一」
【郁李】イクリ　にはうめ、庭にうゑる落葉灌木の一。本草「子小若二櫻桃一、赤色而味甘酸」‖棣李・唐棣・棠棣。
【郁離子】イクリシ　二卷、明の劉基撰す、儒家類に屬す、基初め元に仕へて志を得ず、官を棄てて青田山中に入り、此の書を著す、離は火なり、文明の象、之を用ふれば其の文郁郁然として盛世文明の治を爲すべしとの意。
【郁烈】イクレツ　香氣はげし。曹植、洛神賦「踐二椒塗之ー一」

【郊】カウ　肴

〇くるわそと(郭外)周の制、國都を距る五十里以内を近ー、百里以内を遠ーといふ(周禮、地官、註)〇町つづきのそとなか(邑外)「東ー」「春ー」「農ー」〇天地の祭の名。古、天子が冬至の日に天を南ー一に祀り、夏至に地を北ー一に祀りしをいふ。
【郊圻】カウキ　城郭の門。楊嗣復詩「旌旆出二ー一」
【郊歌】カウカ　天地の祭をする時のうた。隋書「各編二廟樂一、自遊ニー一」
【郊寒島瘦】カウカンタウソウ　唐の孟郊の詩は寒乞の相あり、賈島の詩は枯瘦なり。元輯白俗(一七八頁一段)を見よ。
【郊圻】カウキ　邑の境界。書經「申二甫ー一、慎二固封守一」王安石詩「約ノ君職職勤ニー一」
【郊禋】カウイン　天地の祭に供へる純色のいけにへ。裴撝文「被讒何知、方論二其罪一、乃自斷二於ー一」
【郊丘】カウキウ　郊壇に同じ。通典「黃帝封二禪天地一、則ー一之始矣」
【郊墟】カウキョ　野や、をか。墟は大丘、おなかの義。韓愈詩「時秋積雨霽、新涼入二ー一」
【郊外】カウグワイ　町はづれのそとなか。詩經、傳「邑外曰ノ郊、ー一曰ノ野」‖郊野。
【郊垌】カウケイ　まちはづれの地、垌は林の外、郊外。杜牧詩「松筠侵二巷陌一、禾黍接ニー一」
【郊迎】カウゲイ　まちはづれまで出でむかへる。戰國策、淸ノ宮險ノ道、張ノ樂設ノ飲、ー一三十里」
【郊原】カウゲン　のはら、郊野平原。雜詠詩「憔ノ悴在ニー一」
【郊柴】カウサイ　郊にてしばを燒きて天を祭る。樂親詩「風馬雲車下二九天一ー一初告帝心康」
【郊祭】カウサイ　天地の祭。詩經、箋「成王以二周公功大一、命ノ魯ー一ニ天一、亦配レ之以二君禮后稷一」‖郊祀。

【郊祀】シコウ　○天子が郊外にて行ふ天地の祭。○郊外にてまつる。孝經「昔者周公、一ニ一后稷一以配レ天」

【郊祀歌】シコウカ　漢の武帝、郊祀の禮を定め、乃ち樂府を立て、李延年を以て協律郎と爲し、十九章の歌を作る（漢書、禮樂志）

【郊畛】コウシン　まちはづれのむら、畛は田のあぜ。孫綽詩「高井布二一一」

【郊社】コウシャ　天地のまつり。中庸「一一之禮、所三以事二上帝一也」

【郊祝】コウシク　天子が南郊にて天を祭る時に、即人をゆるすをいふ（宋史、趙普傳）

【郊野】コウヤ　ゐなかに在るしもやしき。唐書、崔玄暐傳「貧寓二一一」

【郊遂】コウスイ　まちはづれの地（國外レヒトを郊といひ、郊外を遂といふ）國京賦「便旋二閭閻一、周觀二一一」

【郊餞】コウセン　まちはづれまでみおくる。顔延之詩「一一有レ境、君豈有レ理」‖郊送。

【郊送】コウソウ　まちはづれまでみおくる。呂覽「淳于髡過レ齊、孟嘗君令二人禮送二而親一二一之」

【郊壇】コウダン　天子が町はづれの地にて天を祭るには。程敏政詩「一壑清踈下二一一」‖郊丘。

【郊禋】コウイン　郊は天子がくるわの外なる野べにて天地を祭る、禋は煙光の大まつり。禮、禮運「祭之一一非レ祖也、周公其衰矣」

【郊兆】コウチョウ　郊にて天を祭る所。漢書、翼奉傳「漢家一一祭祀之禮、多不レ應レ古」

【郊甸】コウデン　郡に近きゐなか。潘岳詩「登レ城望二一一」

【郊畝】コウホ　郊外にてかりする。張協詩「一一閑二邦政一」

【郊陌】コウハク　ゐなかのみち。孟郊詩「一一絶二行人一、原隰多二飛蓬一」

【郊保】コウホ　郊外の小城。左、襄八「焚二我一一一、馮二陵我城郭一」

【郊牧】コウボク　城下を離れたる地。爾雅「邑外謂二之郊一、郊外謂二之牧一」

【郊野】コウヤ　まちはづれのの。宋書、樂志「麒麟步二一一、黃龍游二津梁一」

【郊勞】コウロウ　まちはづれまで出でて客をねぎらふ。禮、聘義「君使レ士迎二于竟一、大夫一一」

【郊燔】コウハン　野原にたき火して天をまつる禮。後漢書、竇融傳「具二典儀一、修二一一之禮一」

【邻】カ　合

一陽は縣名。陝西省同州府に屬す。

【邽】ケイ　齊

漢の縣名。上一は今の甘肅省天水縣の地。下一は今の陝西省渭南縣の地。

【邢】ケイ　青

邢（邑部四畫）の本字。

【郗】キ　國

郤（邑部七畫）又隙（二一一九頁四段）に同じ。史、張釋之傳「雖二銅山一猶有一一」漢書には一を隙に作る。

【郗】コウ　有

春秋戰國時代、魯の邑名。今の山東省東平縣の地。

【郅】シツ　質

○のぼる（登）○いたる（至）○盛んなり「一隆」○姓、一都は漢の最帝の時、潯南の太守たり、後、中尉に遷る、其の治、嚴酷を尚び、貴戚を避けず、列侯宗室、目を側てて視る、號して蒼鷹と曰ふ（史、酷吏傳）

【郅治】シツチ　至りてをさまる。盛世を一一之世といふ。‖至治。

【郁】シュク　屋

戰國の時、晉の地名、今の山西省猗氏縣。

【郁公廚】シュクコウチュウ　次條を見よ。

【郁府】シュクフ　佳肴美味多きにいふ。世說補「唐章陟、封二郁公一、性好二奢靡一、廚中飲食、香味錯雜、人入二其中一、多飽飫而歸、時人語曰、人欲二不レ飯筋竹舒一、貪快須レ入二郁公廚一」（此故事によりて人の宴飲を謝するを飽二飫一一一といふ）

【郭】チュ　虞

戰國時代の國名、後、鄒と改む、今の山東省鄒縣の東。

【郢】エイ　七畫　靜

春秋時代、楚の都、淫風の盛んなりし地、今の湖北省江陵縣の西北。

【郢曲】エイキョク　○俗曲、つまらぬはやりうた。宋玉、對二楚王問一「客有下歌二於郢中一者上其始曰二下里巴人一、國中屬而和者數十人」‖郢歌。○國令樣歌の類。

【郢人】エイジン　俗曲を巧にうたふ者。前條を見よ。夢溪筆談「世稱二善歌者一、雪二一一」‖郢客。

【郢書燕說】エイショエンセツ　道理に合はざることを道理らしくいふ、牽強附會の說。郢人が燕の相國に書を贈らんとて、夜、書を認せし時、燭光明かならざる故、侍者に燭を擧げよといひ、遂に誤りて文中に擧燭の二

字を記入し其のまま贈りぬ、燕の相、書を受けて燕境は明を經ずよ我なりとて、王に白して賢人を擧げて之に任じ、國以て治りしといふ（韓非、外儲說）

【鄖正】ヰイ 次條に同じ。

【鄖政】ヰイ 次條を見よ、政は正。

【鄖瑣】ヲク 人に許文の添削を乞ふにいふ。晉、徐邈鬼「鄖人墜三漫其鼻端一、若二蠅翼一、使二匠石斲之一、匠石運レ斤成レ風、聽而斲レ之、盡レ堊而鼻不レ傷、鄖人立不レ失レ容」‖郢斤・郢斧・郢政。

【鄖斧】ヲイ 前條を見よ。

【鄖】 カン・コウ 呉 漢

春秋時代の國名。周の文王の子の封地。又、宋の邑名、共に山東省城武縣の境に在り。

【郝】 ㊀カク ㊁セキ 寘 陌

㊀漢の鄉名。今の陝西省の鄠・盩厔二縣の間。○姓。ー隆は晉の時人。ー經は元の學者。ー敬は明の學者。㊁ーはたがやす（耕）‖「姓譜」

【郟】 カ、ケ 治

ーは周の地名。成王の鼎を定めたる地、今の河南省洛陽縣の西。左、宣三「成王定二鼎于ー一ー鄏」

【郡】 グン 圓

○こほり、周以後宋以前の行政上の區劃。初、ーは縣より小なりしが、秦天下を幷せて三十六ーを置き、以て縣を統べ監するに至りて、郡は縣よりも大となる。○國府縣の下、町村の上に在る行政區劃の稱。

【郡縣制度】セイド 諸侯を廢して中央政府にて天下の萬機を統一する制度。秦始皇天下を定め海内を分ちて三十六郡と爲す、是れ——の始と爲すの對建制度の對。

【郡國】グン 漢代の制、郡は天子の直轄の領地。國は諸侯の領地。

【郡國利病書】リヘイコク 書名、一百二十卷、清の顧炎武撰す、本名は天下郡國利病書といふ、各省の利害に就きて之を錄す、天下の形勢治革、瞭として指掌の如し。

【郡縣】グン ○一郡を治むる官舍「ーー讀書志」○德川時代の代官役所。

【郡將】グン 一郡の守將、卽ち郡守。漢書、酷吏傳、註「謂二郡守一爲二ーー一者、以二其兼領一武事一也」北史、魚俱羅傳「御史、領俱羅以二ーー一突通內臣と

【郡主】ジ 親王の女の明史、禮志「皇姊妹曰二長公主一、皇女曰二公主一、親王女曰二ーー一」

【郡守】グン 一郡の太守。漢書、百官公卿表「ーー秦官、掌レ治二其郡一、秩二千石」

【郡丞】グン 郡の太守に副へる官の秩六百石（漢書、百官志）

【郡長】グン 郡のかしら、一郡のをさ。

【郡廨】ケン 一郡を支配する役所。趙非詩「落潮通レ池遶二ーー一」

【郡王】グン 爵の名、階に始まる、位、王に次ぐ、唐より清に至るまで之に因る。

【郤】 ゲキ 陌 郤とは別

○あふぐ（仰）○ひま、なかたがひ（怨隙）史、項羽紀「令將軍與臣有二ーー一」‖隙。○あひだ、すき（間隙）「一地」○骨と肉との間。莊、養生主「批大ー」○地名、又郤に作る。○姓。ー缺は晉の大夫、冀に縛ぐる、其の妻之に饋す、相敬すること賓の如し。

【郕】 セイ 庚

○春秋時代の國名。今の山東省寧陽縣の地「左、隱五」○鄭の地名、今の河南省武陟縣の西南「左、隱十一」

【鄴】 チ 支

○周の邑名。今の河南省河内縣の地。○姓。ー慮は漢の御史大夫。

【鄐】 フ 虞

くるわ（城郭）城外の大いなる郭「左、隱五「郛人鄭人伐二宋入一其ー」

【鄐郭】クワク ○城外の大いなるくるわ。隋書「ーー不レ修」○保障に喩ふ。法言「懷政慮レ世、然後知二聖人之爲二ーー一也」

【郎】 ラウ 陽

○をっと、つま、婦が夫を呼ぶ稱。晉書、列女傳「天壤之間、乃有二王ー一」○だんな、婢僕が主人を呼ぶ稱。唐書、宋璟傳「璟曰、君非二其家奴一、何ー之云」○なのこ、をとこ、年少き男子の稱。唐書、房玄齡傳「高孝基曰、僕閱二人多矣、無如二此ー一者」○女子もまたーといふ。古詩「不知木蘭是女ー」○男子のよび名に添へることば「太ー」「三

―」「十二―」○やくにん（官職）「尚書―」「侍―」「―中」○春秋時代魯の地名。今の山東省曲阜縣の地。○郎に通ず「―謁」

【郎官】ラウクワン　清の江西巡撫臬臺延俊の製せし瓷器、古に仿ひて酷だ肖たり、頗る得易からず。

【郎君】ラウクン　○わかだんな。通稱。注「今俗多呼二其主一爲二郎主一、又呼二其主之子一爲二郎君一」‖令息。○婦が夫を呼ぶ稱。ぬし。○唐代、新に進士に及第せし者の稱。摭言「薛逢第二嘉禮一赴レ朝、值二新進士一、前導曰、郎君―」

【郎君子】ラウクンツ　すがひ（酢貝）からくもがひのふた、皿に酢を盛りて、數個を其の緣に置けば皆くして沫を吐き、皿の底に集るといふ。‖相思螺。

【郎官】ラウクワン　郎中に同じ。後漢書、明帝紀「―上應二列宿一、出宰二百里一」

【郎子】ラウツ　他人のむすこの敬稱。北史、裴頠傳「幼時、見二沙門一、指レ之曰、此―好相表、大必爲二良將一、當極二人臣一、語終失レ之」‖郎君。

【郎従】ラウジュウ　國武家のけらい。‖郎等・郎黨。

【郎當】ラウタウ　○疲勞の俗語。憊れてくたたとなれる形容。漂倒の轉音。楊億、傚二劉禹錫一「飽老當レ益壯、笑他鍾離太―、若教二飽老當一レ益壯」‖蹣跚。○一解に衣服の寬大にして身に稱はざる貌。

【郎當】ラウタウ　國武家のけらい。‖郎從。

【郎中】ラウチュウ　官名、尚書をたすけて政務に參する官、もと尚書郎といふ。唐の武德三年―と改む。

【郎中令】ラウチュウレイ　秦代の官名、九卿の一、宮殿の門戸を掌り、諸郎官を統べるもの、漢の武帝、名を光祿勳と改む。

【郎等】ラウトウ　國郎從に同じ。

郵　八畫　尤

○しゅくば、つぎば（驛）馬傳を置といひ、步傳を―といふ。孟、公孫丑「遂于置―而傳レ命」○うまつぎ。ひとつぎ。○政府が發する文書物品運送制度「―便」「―送」「―券」○とがめ。尤と通ず。荀、議兵「罪人不―」其上」○すぐれる（最）義―は殿最の義。○はたけの中のいへ（田間舍）

【郵驛】イウエキ　しゅくば、うまつぎ。官文書を傳遞する所「唐六典」‖郵亭。

【郵遞】イウテイ　郵便にてかへす。飛脚にて遞す。

【郵館】イウクワン　しゅくばに在るやどや。宋史、王黼傳「公署―」‖客舍。

【郵券】イウケン　國郵便切手。‖郵票・印花。

【郵書】イウショ　郵便にて送る手紙。

【郵政】イウセイ　通信に關する政務。‖郵務。

【郵送】イウソウ　郵便にて物を送る。‖郵政。

【郵置】イウチ　しゅくば。置は馬休ヲ郵は步傳ヲ陳傳良詩「絕勝倚レ市看二―一」‖傳置・驛置・置郵。

【郵亭】イウテイ　しゅくば、はたごや。張祜詩「―下レ馬見二殘花一」

【郵遞】イウテイ　郵便に同じ。劉克莊詩「傷レ心―裏、隔レ日接書來」‖郵驛。

【郵傳】イウデン　しゅくば、うまつぎば。周禮「野路無二―一」‖遞第・郵遞・驛傳。

【郵筒】イウトウ　郵便の書信を入れる封筒。貫休詩「尺書裁罷寄二―一」

【郵便】イウビン　國公私の書信又は物品を傳遞する官府の事務。又其の書信。

【郵吏】イウリ　しゅくばの小役人ニヤク韓愈詩「舞走頻二―一、安聞魏二老僧一」

郭　十畫　藥

○くるわ（外城）「城―」「負―」城外を圍繞せる壁。孟、公孫丑「三里之城、七里之―」○すべて物のそとがこひ（外圍）「周―」「輪―」○國名。‖虢。○姓。○陵は戰國の時の燕の昭王の臣。―子儀は唐玄宗の時の功臣。

【郭熙】クワクキ　宋の河南の人、山水は李成を學び一時に獨歩す、年老いて落筆益壯、後ち山水志趣を著し、遠近淺深風雨晦明、四時朝暮を盡ひ、樓觀人物山水に至る、分布せざる莫し、畫式と爲すべし「宣和畫譜」

【郭巨】クワクキョ　二十四孝の一。孝子傳「後漢―、家貧養二老母一、妻生二子一、三歲、母常減二食與一之、巨謂レ妻曰、貧乏不レ能二供給一、共レ汝埋レ子、子可二再有一、母不レ可二再得一、妻不レ敢違、巨遂掘レ坑二尺餘一、忽見二黃金一釜一云云」釜に盡名。かまにあらず。

【郭公】クワクコウ　○瀕死の類。ふふどり。其の聲―と呼ぶが故。王士禎「香山處處―啼」注「―鳥名、即布穀也」○てく。樂府廣題「北齊後主高緯雅好二俠儀一、謂レ之―、時人號爲二―歌一」‖俠儀。○國名。杜詩。

【郭索】クワクサク　蟹がかさかさと行く貌。太玄經「蟹之―、用レ心躁也」

【郭駝】クワクタ　城のくるわと、ほりと。水經、注「更增二修―一」

【郭橐駝】クワクタクタ　種木屋。橐駝は駱駝の人背肉隆起して駱駝に似、種樹を善くするが故。柳宗元に種樹――傳あり。‖豪駝師。

【郭汾陽】クワクフンヤウ　唐の中書令郭子儀、安祿山の亂を平げ、功を以て汾陽王に封ぜらる。‖郭令公。

【酈】シウ　シュ　又、隙・鄒に作る　通音スウ
魯国の邑名。孔子の出生地、今の山東省曲阜縣内。

【鄭】タン　圏
春秋時代の國名。今の山東省一城縣の地。左、昭十六「子來朝」

【棣】チン　因
畑名。湖南省に在り、楚の項羽、義帝を此に擊殺せしむ。〔史、黥布傳〕

【部】㊀ブ　㊁ホウ　虞　有　一畜
㊀すべ（總・統）漢書、地理志「十三州」○つかさ、とりしまり、行政上の機關、清朝の制、吏・戸・禮・兵・刑・工の六一に分つ。○やくしょ（署）○わかつ。わかる（分）「一署」○かさのろくろ（斗蓋）○こわけ（區分）ぶわけ「一類」○軍隊のくみ「一曲」「一伍」○ぶわけを數ふる數詞「書籍三一」○星の名。○大いなる杖。‖棓。○百一は藥草の名、蓼生にして根をく百十相連る、一名野天門冬。㊁一妻は小皐ハ培壅。【部下】ブ　てした、配下、一部將の下に隷する兵。【部曲】ブキョク　軍隊の部わけ、曲は部の下の小わけ。漢書、李廣傳「廣行無二一行陳一」‖行伍。【部伍】ブゴ　軍隊の部わけのくみ。部曲行伍。杜甫詩「平沙列二萬幕一一各見レ招」【部署】ブショ　手分けしてきがす。漢書、許后傳「二一罪人一」【部將】ブショウ　一部隊の長。後漢書、寇恂傳「一一殺二人于潁川一、恂捕得數十人」【部首】ブシュ　漢字の字書索引のかしら字。山・木・石・金など。【部署】ブショ　てくばり、部分して配置する。史、淮陰侯傳「欲襲二呂后太子一一已定」【部隊】タイ　一部分の軍隊。（前書、流求國傳、隋兵各隊二二千人一留救助一」【部分】ブブン　○ぶわけ。顔延年文「指麾一一、爲二天子拜城一」○全體中の一一部。【部門】モン　いくつかに分ちし一つの類。【部落】ブラク　むらざと、人家の群れる所。又、種族のあつまり。又、猟人のあつまり。史、衛將軍傳、注「匈奴一一名」【部類】ブルイ　ぶわけの種類。【部勒】ブロク　兵を部わけしてをさめる、勒は治。史、項羽紀「以二兵法一一二一資容及子弟一」【部署】ブショ　ちひさきをか。左、襄二四「一一無松柏一」‖墳墓。附表。

九畫

【鄂】エン　㊀
漢代の地名。今の河南省一城縣。

【鄆】ウン　因
春秋の時、魯の邑名、東一は今の山東省汶水縣の地、西一は同省一城縣の地。春秋、成四「冬城一」註會「古兗州之域、魯附庸國、漢爲二東平國一」‖州一

【鄂】ガク　㊀
○殷の時の國名。又、春秋時代の楚の邑名。今の湖北省武昌縣の地。○轉じて湖北省を稱して一省といふ。○かきり（堺邊際）○おどろく。愕に通ず。漢書、霍光傳「羣臣皆鄂一失色」○外に見はれる貌。詩、小雅「一不韡韡」○一は正直にいひ爭ふ。‖諤詩。【鄂鄂】ガクガク　直言の貌。史、趙世家「諫大夫輔、唯聞二唯唯一、不聞二周舍之一一一」【鄂州】ガクシウ　湖は江夏郡といひ、鄂は一一と曰ふ、唐之に因り、亦江夏郡といふ、江夏等の郡五を領す、今の湖北武昌府。【鄂産】ガクサン　國德川時代に、露西亞人をそしる語。【鄂王墓】ガクワウボ　宋の忠臣岳飛の墓、鄂國王に封ぜられし故。西湖の畔に在り。趙孟頫詩「一一上草離離」

【鄔】ケン　先
春秋の時、衛の邑名。今の山東省濮縣の地。

【都】ト　虞
○みやこ、天子の宮城の在る首府「故一」「舊一」「帝一」「京一」「皇一」○ちぎょうしょ。周代の制、諸侯卿大夫の封邑。○周代行政上の區劃の名、邑よりは大いなるもの。君主の宗廟のあるを一といひ、無きを邑といふ。○みやびやか（雅）うつくし（美）「一雅」「嫻一」詩、鄭風「洵美且一」○さかんなり（盛）○ああ、歎美の聲。

書、皐陶謨「皐陶曰—」○あつまる(聚)○をる(居)其の地位に居る。東方朔、答客難「身—卿相之位」○すべ(總)皆否、與吳質書「頃撰遺文—爲一集」すべて(大—とも連用す)

同訓異字　都・凡・徧の別は渾(一一三頁一段)の條を見よ。

【都肆】トシ　軍隊をねりならはす。都は總檢閲、肆は演習。漢書、霍光傳「出—二—郎」

【都邑】トユウ　みやこ。五里を邑とし、十邑を都とす。字解參看。禮記「仲秋之月、可—以築二城郭一建—宮室上」

【都下】トカ　みやこのうち。‖都門。

【都雅】トガ　みやびやか。北史、韋津傳「容貌—、寬厚得二衆心一」‖嫻美。

【都講】トカウ　○學舍の長、塾頭。後漢書、楊震傳「—取レ魚而進」○講師。唐書、雜藝傳「遇爲二—一」

【都合】トガフ　○すべて、總計「臨書、律歴志」圓○つごうあはせる「—をつける」○便宜、勝手。

【都會】トクワイ　みやこ。史、貨殖傳「都—、冰漳河之間—也」‖都城。

【都護】トゴ　軍隊を以て一地方を鎮め護るもの、漢代、西域—を置きしに始まる。

【都賄】トクワイ　食物を炊ぐ大いなるかまど。漢書、五行志「豕出—園廚二—、衛其亡徴」

【都察院】トサツヰン　明代の官署の名、官吏の非行を彈劾し、各省を監察する職。漢以來の御史臺に當る「文獻通考」

【都市】トシ　衆人の聚り會ふ地、都會。韋莊「槐柏蟬聲——風」‖都門。

【都試】トシ　すべての官吏の成績をしらべる。漢書、蔡義傳「以二九月—一日一」

【都人士】トジン　みやこびと。都人の士の行ある者。詩、小雅「彼—、狐裘黄黄」

【都庾】トユ　水を治める官名。管子「左右各一人、使レ爲二—一水工一」

【都省】トセイ　尚書の官。今の總理大臣「韓愈、復讐狀」

【都城】トジヤウ　○みやこのしろ。左、隱元「—過二百雉一、國之害也」○みやこ。

【都亭】トテイ　都縣の治所。史、司馬相如傳「往舍二—一」

【都監檢】トケンケン　天子を護衛する官の名。略して點檢ともいふ。

【都統】トトウ　すべをきめる。又、其の官名。唐以後は主に諸道の兵馬を總ぶる官名とす。

【都督】トク　○すべただす。左傳、職官志「—二—中外諸軍事」○軍の總大將。‖總督。

【都伯】トハク　罪人の首を斬る役「通鑑、齊紀」‖僧子。

【都鄙】トヒ　みやこと、みなかと。左、襄三十「—有レ章、上下有レ服」

【都府樓】トフラウ　節度府の樓。我が吉の太宰府に相當す。

【都兵】トヘイ　音樂などを掌る兵。隋書、百官志「—掌二鼓吹太樂雜戸等事一」

【都門】トモン　○都の入口の門。札樸「—者、都中里門也」○みやこ。京師の稱。‖都下。

【都冶】トヤ　みやびにして美くし。又其の女。蔡邕、青衣賦「—嫺姿、卓礫多レ姿」

【都養】トヨウ　衆くの學生のまかなひかたの官。史、鬼谷傳「貧無二資用一、往爲二弟子一—一」

【都盧尋竿】トロジンカン　○門字皆あゝ訓し、都盧は贊成、尋竿は不贊成の意を表す、晉が羣臣と政を議せし時に用ひし語「書、堯典」○轉じて君臣相討論することゝ。

【都料匠】トレウシヤウ　大工のかしら、棟梁「柳宗元、梓人傳」

【都督】トクトク　みやこ。唐書「自二梁泚亂一—數駕」

【都盧】トロ　西域の國名。其の人身輕くして善く高きに緣る。漢書、西域傳「武帝享二四夷之客一、作二巴渝一—之戲一」

【鄙】ヒ　支

○地名。今の陝西省一縣。其の北に董卓の築きし一塢あり。○魯の邑名。今の山東省東平縣の西北。

十　畫

【郢】ウン　文

又、亦に作る

○春秋時代の漢南の國名。今の湖北省安陸縣の地。○同時代の衛の地名。今の江蘇省如皐縣の地。

【鄔】チウ　虞

○春秋時代の鄭の地名。今の河南省偃師縣に在り。○同時代の晉の地名。今の山西省介休縣の地。

【郜】カウ　豪

○春秋時代、晉の地名、後漢の光武帝、此地に卽位して高邑と改む、今の直隸省柏鄉縣の地。○周の武王の都邑。鎬に通ず。

【鄉】キャウ・カウ　陽　養　漾

㊀キャウ・カウ
㊁キャウ
㊂キャウ・カウ

㊀さと。周代の制、行政區劃の

稱、一萬二千五百戸ある地。○ふるさと。「同ー」「故ー」「家ー」「衣錦歸ー」客土に對する稱。○むら、むらざと（邑里）○同里の稱。論、鄉黨「一人傑」○むき（方向）○ところ（場所）㊁ひびき。‖響。○饗（食部十三畫）に通ず。㊂さきに（曩）論、顏淵「一也吾見夫子」‖嚮。○など（抔）○方位。むかふ。曲禮「請席何ー」‖向・嚮。○兩階の間。

【鄉友】キャウイウ 同鄉の友。蘇軾詩「贈二鄉老騎一鶴三酒直一、大呼ニー一作二新年一」

【鄉邑】キャウイフ むらざと（漢書、天文志）‖鄉里。

【鄉飲酒】キャウインジュ 周代、鄉學にて三年の業成り、其の德行道藝を考察し、優等者を君に推薦せんとする時、鄉の大夫が主人と爲り送別の宴を開くをいふ（儀禮、鄉飲酒禮）

【鄉音】キャウオン ふるさとのことばづかひ、國なまり。賀知章詩「ー無二改毫衰一」

【鄉歌】キャウカ みなかのうた。李咸用詩「ー寂寂荒丘月」

【鄉校】キャウカウ みなかの學校。左、襄十一「鄭人游二于ー一、以論二執政一」‖鄉黨。

【鄉學】キャウガク ○心を學事にむかふ。漢書、兒寬傳「由レ是ー一レー」‖向學。○鄉里の學校。‖鄉校。

【鄉曲】キャウキョク ざいしょ、みなか。史、平準書「豪強之徒、以武斷二于ー一ー」

【鄉貫】キャウクワン くにもとの戸籍。唐書、選擧志「自レ今一委二有司一、以ニー一三代名錄一、送二中書門下一」‖原籍。

【鄉關】キャウクワン ふるさと。くにもと。張說詩「相逢皆得意、何處是ー一」

【鄉原】キャウゲン 鄉中にて謹愿の人と譽めらるるもの、實は鄉里の俗人の氣に合ふやうにする僞善者。原は愿。論、陽貨「ー一、德之賊也」‖鄉愿。

【鄉賢祠】キャウケンシ 清時代、一鄉の名望ある者を死後其の鄉に祭祀する社。

【鄉月】キャウゲツ 其の土地の恒蔵ある民。宋史、蘇軾傳「役レ人必用ニー一」

【鄉貢進士】キャウコウシン 唐代、地方長官に推薦せられて進士の科目に及第せし者の稱。唐書、選擧志「唐制取レ士之科、多因二隋制一、然其大要有レ二、由二學館一者曰二生徒一、由二州縣一者曰二鄉貢一、升二于有司一而謂二之ー一」

【鄉國】キャウコク ふるさと。王粲詩「遊二目騁ニー一」

【鄉士】キャウシ ○六鄉の獄を掌る官（周禮、秋官）○圓ジャウ みなかに住みて平生は農を營む武士、はらざむらひ。

【鄉試】キャウシ 科擧の制、三年目に各省に於て行ふ試驗、合格者を鄉人と曰ふ、今は廢す。

【鄉塾】キャウジュク みなかの學舍。任昉文「ー一無二橫議之士一」

【鄉書】キャウショ ふるさとより來るてがみ。李嶠詩「月中逢二海客一、浪裏得二ー一ー」‖鄉信・家書。

【鄉遂】キャウスイ 都の外まはりの畿内の地。周の制、王城を去ること五十里より百里までを鄉（六鄉に分つ）百里以外を遂（六遂に分つ）といふ。三禮義宗、遂人所レ遺「溝澮者、是ー一之制」

【鄉選】キャウセン 鄉中のえりぬき。魏志、李孚伯傳「功曹之職、雖レ曰ニー一高第、猶是郡吏耳、北面事レ人、亦何容易」

【鄉薦】キャウセン 鄉里よりの推薦。

【鄉先生】キャウセンセイ 致仕して鄉に在る中大夫を太師とし、致仕の士を少師とし、鄉學の敎育に從はしむる者の稱。儀禮、士冠禮「冠者見二于鄉大夫ーー」

【鄉俗】キャウゾク 鄉里の風俗。孟浩然詩「異俗非ニー一、新年改二舊年一」‖鄉風。

【鄉導】キャウダウ みちしるべ。又案内者。

【鄉思】キャウシ ふるさとを思ふかなしみ。李參詩「孤燈然二客夢一、寒杵搗二ー一ー」

【鄉信】キャウシン ふるさとの音信。李參詩「也知ー一日應レ疎」

【鄉射】キャウシャ 周の制、士の能否を試み選ぶに射術を以てす。又其の射儀（儀禮、鄉射禮）

【鄉校】キャウカウ みなかの學舍。任昉文「ー一無二橫議之士一」

【鄉書】キャウショ ふるさとより來るてがみ。李嶠詩「月中逢二海客一、浪裏得二ー一ー」‖鄉信・家書。

【鄉遂】キャウスイ 都の外まはりの畿内の地。周の制、王城を去ること五十里より百里までを鄉（六鄉に分つ）百里以外を遂（六遂に分つ）といふ。三禮義宗、遂人所レ遺「溝澮者、是ー一之制」

【鄉選】キャウセン 鄉中のえりぬき。魏志、李孚伯傳「功曹之職、雖レ曰ニー一高第、猶是郡吏耳、北面事レ人、亦何容易」

【鄉薦】キャウセン 鄉里よりの推薦。

【鄉先生】キャウセンセイ 致仕して鄉に在る中大夫を太師とし、致仕の士を少師とし、鄉學の敎育に從はしむる者の稱。儀禮、士冠禮「冠者見二于鄉大夫ーー」

【鄉俗】キャウゾク 鄉里の風俗。孟浩然詩「異俗非ニー一、新年改二舊年一」‖鄉風。

【鄉導】キャウダウ みちしるべ。又案内者。

【鄉望】キャウバウ 鄉里に於ける人望。南史、韋叡傳「ー一宜二善敎一之」

【鄉味】キャウミ 故鄉の食物。元稹詩「ー一尤珍レ鮓」

【鄉民】キャウミン 其のさとの民。後漢書、循吏傳「孟嘗遷二合浦太守一、被レ徵當レ還、吏民攀レ車請レ之、嘗既不レ得レ進、乃載二ー一船一夜遁去」

【鄉夢】キャウム ふるさとのことをゆめみるゆめ。劉禹錫詩「孤燈春雪生二ー一」

【鄉老】キャウラウ ○周の官名。六鄉に三人のー一を置く、周禮の地官の屬。○孫子「不レ用二ー一一者、不レ能レ得二地利一」‖勝導。

【鄉黨】キャウタウ むらざと。一萬二千五百家を鄉といふ。孟、公孫丑「朝廷莫レ如レ爵、ー一莫レ如レ齒」齒は年齡。

【鄉土】キャウド ふるさと、生地「ー一地理」

【鄉三物】キャウサンブツ 周代、鄉學の敎科。周禮、大司徒「以ー一ー一敎二萬民一、一曰、六德、知仁聖義忠和、二曰、六行、孝友睦婣任恤、三曰、六藝、禮樂射御書數」

【鄉先達】キャウセンタツ 同鄉の先輩の賢き人、明代すでに此稱あり（谷應泰筆記）

【鄉背】キャウハイ ○向ふと、そむくと。劉長卿詩「夕陽山ー一、春草水東西」‖向背。○したがふと、そむくと。‖去就。

鄉中にて年たけたる者。禮記「國君不レ名二一世卿一」
【鄉里】ケウリ　○むらざと。後漢書、馬援傳「使二一一稱二善人一足矣」○同鄉の人。世說「許允爲二吏部郎一多用二一一一」‖鄉人。○夫が妻を稱していふ。南史、張彪傳「我不レ忍レ令二一一落二他處一」‖家里。
【鄉鄙】キャウヒ　きんじょとなりの意、轉じて「一一有二識者一」‖同里。
【鄉閭】キャウリョ　むらざと、閭は里の門。唐書、王恭好獎學、教授二一子弟數百人一」‖鄉黨。
【鄉往】キャウワウ　鄉は嚮、心がむかひゆく、仰慕する意。史、仲尼世家贊「雖レ不レ能レ至、然心一一レ之」
【鄉社】キャウシャ　國府縣社に次ぐ社格の神社。

【鄒】シウ　尤　邕　スウ

○春秋の邾國、戰國の時一と改む。又、騶に作る。今の山東省兗州府。○姓。一陽は漢の景帝の時の學者。
【鄒嶧】スウエキ　山名、嶧山、又、鄒山ともいふ。山東省鄒縣の東南に在り。‖嶧陽（黃、鳳翼）
【鄒魯】スウロ　孟子は鄒の人、孔子は魯の人、故に孔孟の異稱。莊、天下「一一之士、縉紳先生」
【鄒魯學派】スウロガクハ　孔孟の說を奉ずる儒學派。前條參看。
【鄒魯遺風】スウロノヰフウ　孔孟の遺風。堯典、羊侃傳「見二勇者有レ仁、可レ謂二一一一」
【鄒魯大儒】スウロノタイジュ　孔孟の學を修むる大學者。漢書、章賢傳「衆通二諸一・儒書一以レ詩教授、號稱二一一一」

【鄔】ジョ　虞

鄒一ジョウは周の邑名。鄒（邑部七畫）を見よ。

【鄖】ベイ　ユン　眞　メイ　通音

春秋の時、鄖の邑名。今の山西省平陸縣の地。

十一畫

【鄞】ユン　先　阮

○一陵は春秋の鄭の地名。晉楚會戰の所。今の河南省開封府一陵縣の地。○春秋時代の楚の地。今の湖北省宜城縣內。

【鄞】ギン　眞

漢代の縣名。今の浙江省寧波府治。

【鄐】コ　虞

漢代の縣名。今の陝西省西安府に在り。

【鄴】サ　禡

漢代の鄉名。今の河南省新野縣の地。

【鄣】㊀シャウ　㊁ケウ　㊀陽　㊁篠

㊀春秋時代の莒國の邑名。今の江蘇省鹽檢縣の地。㊁ふさぐ、ささへる。‖障。○國境のとりで（邊塞）古、塞上の要險の處に、城を築きて以て障蔽とせしもの。漢書、張湯傳「居一一間」

【鄭】テイ　敬

漢代の縣名。唐、一州を置く（後、莫州に改む）宋、廢す、故城は今の直隸省任丘縣に在り。

【鄙】ヒ　紙

○ひな、ゐなか、かたほとり（邊邑）「邊一」左、隱元「大叔命西一北一貳於己」鄙の對。○いやし（固陋）いやしむ。ゐなかじみて下品。又、いやしきもの。瀧夫論「貴一以招賢」○かざりなし（朴野）○公卿大夫の采邑。又、王の子弟の食邑の畿內に在るもの。○周代の行政上の一區劃、五百家ある地の稱。○せまし（狹）○ちひさし（小）○しわし（吝）財に吝嗇なり「一吝」「貪一」○己の事を謙するにいふ「一人」「一見」「一意」「一願」
【鄙諺】ヒゲン　鄙、賤、卑、陋、俚、野、固の別は瞭（一八七六頁二段）の條を見よ。
【鄙遠】ヒエン　とはきかたほとりの地。左傳「越國以一一一君知二其離一也」
【鄙近】ヒキン　いやしくあさはか。鍾嶸、詩品「使下人忘二其一一一自致中遠大上」‖淺近、膚淺。
【鄙悖】ヒハイ　いやしくしておろか。‖昧鄙。
【鄙狹】ヒケフ　いやしきからだ。列女傳「妾願以二一一易二父之死一」
【鄙悃】ヒコン　いやしきおもひ。蘇舜欽詩「作」詩寄二諸君一一一實所レ望」
【鄙鄭】ヒテイ　いやしきねがひ。己の志願をいふ謙辭。晉書、趙至傳「恢二維宇宙一、斯吾之一一也」
【鄙言】ヒゲン　いやしきことば、俗の言。世說「大眞移日拂二一一一」溫嶠をいふ。
【鄙陋】ヒロウ　いやしきことわざ。史、蘇秦傳「一一日、寧爲二雞口一、無爲二牛

後ニ」＝俗語。

【鄙語】ヒゴ　いやしきことば。白居易詩「一一不ㇾ可ㇾ聞」＝俚語。

【鄙詐】ヒサ　いやしくして、あざむく。論記「心中斯須不ㇾ和不ㇾ樂、而一一之心入ㇾ之矣」＝貪鄙詐僞。

【鄙事】ヒジ　いやしく、こまかきことがら、瑣細の事。論、子罕「孔子曰、吾少也賤、故多ㇾ能ㇾ一一」

【鄙人】ヒジン　○わなかもの。淮南、修務「一一有ㇾ得ㇾ玉璞ㇾ者」＝野人。○いやしき者、自ら謙していふ。戰國策「璜一一也」

【鄙心】シン　いやしくけちな心。世說「時月不ㇾ見ニ叔度ニ則鄙吝之心、已復生矣」

【鄙儒】ジュ　いやしき學者。漢書、叔孫通傳「若眞一一　不ㇾ知ニ時變ニ」＝陋儒・庸儒・俗儒。

【鄙笑】ヒショウ　いやしみわらふ。鄙薄して冷笑す。唐書、楊再思傳「披ニ紫袍ヲ作ニ婦人舞ニ鄙動合ㇾ節、滿座一一」

【鄙淺】セン　いやしくあさはか。隋書、經籍志「遐卒、以後好事者、亦頗著述、然多一一、不ㇾ足ニ相經ニ」＝卑淺・陋淺。

【鄙鈍】ドン　いやしくしてにぶし。韓愈文「愈少一一、於ニ時事ニ都不ニ通曉ニ」

【鄙倍】ハイ　いやしみそむく、倍は背。論、憲伯「出ニ辭氣ニ斯遠ニ一一ニ矣」

【鄙薄】ハク　○いやしくして　あさはか。禮記文「淺陋一一　不ㇾ足ニ觀省ニ」＝鄙陋。○いやしみかろんず。鍾嶸、詩品「一ニ俗製ニ」＝輕視。

【鄙夫】フ　心いやしきをとこ。論、陽貨「一一不ㇾ可ニ與事ニ君也」＝小人。

【鄙野】ヤ　○わなか。戰國策「士生乎一一、推選則縁焉」○いやし。宋書、王微傳「自怪、一一不ㇾ參ニ風流ニ」＝野鄙。

【鄙老】ロウ　老人自ら謙する稱。晉書、王接傳「明府求ニ賢與ㇾ能、小無ニ遺鋪ニ是以一一　思ニ獻ㇾ所ㇾ知」

【鄙俚】リ　風俗言語などがいやしく、其のもの。五代史、劉岳傳「姚餘慶爲ニ晉儀兩卷ニ事出ニ一一、皆當時家人女子、傳習所ㇾ見、轉失ニ其本ニ」＝蕪俚・鄙野。

【鄙吝】リン　いやしくけちである。吝は悋。漢書、黃霸傳「時月之間、不ㇾ見ニ黃生ニ則一一之萌、復存ニ乎心ニ」

【鄙累】ルイ　つまらぬわづらい。嵇康詩「遺ニ物寡ニ一一ニ」＝俗累。

【鄙劣】レツ　いやしくおとる。白居易文「勉樹ニ勳名ニ勿下以ニ一一ニ爲ニ念ニ」

【鄙陋】ロウ　いやし。見識學問などのいやしく劣れる義。漢書、楊惲傳「百ニ一一之愚心ニ」＝鄙野・陋鄙。

【鄙猥】ワイ　いやしくみだら。猥褻。

【鄙穢】ワイ　いやしくけがれる。隋書、王劭傳「劭久在ニ史官ニ既修ニ齊書ニ雜修ニ隋典ニ（中略）文辭一一、體統業報」

【鄙諺】ゲン　いやしきことば。白居易詩「一一不ㇾ可ㇾ聞」＝俚語。

十二畫

【鄘】ヨウ　因

○春秋時代の國の名。○周の邑名。今の河南省汲縣の地。○周の國名。武王殷に克ち、朝歌以南を分ちて一と爲し（以北を邶と爲す）管叔をして之を治めしむ。今の河南省汲縣の地。

【鄜】フ　多

秦代の地名。秦の文公、一時（時は止、まつりのには、神靈の依り止まるところ）を作りて白帝を祭りし地。今の陝西省西安府の北。

【鄖】ユン　因

○春秋時代の國の名。今の河南省新鄭縣の地。○隋末、王世充の僭して建てたる國。今の河南省洛陽縣の地。○てい・ねい、ねんごろ（殷勤）「一重」○姓。一玄ダンは後漢の大儒、字は康成。

【鄭衛桑閒】ケイエイソウカン　鄭・衛二國の音樂は淫靡、桑閒は淫靡なる亡國の樂曲。李斯、逐客上書「一一、韶虞武象者、異國之樂也」韶虞は、舜の樂、武象は、周の武王の樂。

【鄭音】ケイイン　鄭國の音樂にて淫靡なるもの。樂記「魏文侯曰、敢問溺音何從出也、子夏對曰、一一好ㇾ濫淫志、衛音趨ㇾ數煩ㇾ志、皆淫於色、而害ニ於德ニ是以祭祀弗ㇾ用也」或「鄭衛之音、即雅頌之樂」＝鄭聲。

【鄭康成】ケイコウセイ　鄭玄を見よ。

【鄭虔三絶】ケイケンサンゼツ　唐の鄭虔、詩書畫の三絶あり（唐書、文藝傳）三絶（一三二）參看。

【鄭聲】ケイセイ　鄭國の音樂。みだらなる俗曲。論、衛靈公「放ニ一一ニ遠ニ佞人ニ」＝淫、佞人物」

【鄭成功】ケイセイコウ　明末の人、初の名は

桑、父芝麻我が平戸に來り、田川氏を娶りて孫を生む、明の亡後、臺灣に旅り、水戸に仕へし朱舜水と謀り、明室恢復を企てて成らず、朱姓を賜ふ、因りて自ら國姓爺と號す　康熙元年病みて歿す、年三十九。

【鄭重】チヤウ　清の興化の人、板橋と號す、乾隆の進士、書・畫・詩共に妙、三絶の目あり。

【鄭重】チヤウ　○てあつし。ねんごろ。白居易詩「千里故人心ー一」○しばしばする。頻煩。漢書、王莽傳「非ヲ盡天所ニ以ー一降ニ其命一之意ヲ」

【鄭玄】チヤン　字は康成、後漢の高密の人、關に入り馬融に從ひ學ぶ、後ち鄉に歸り徒に授く、從學する者數百千人、北海の相孔融深く之を敬す、嘗て道にして黃巾の賊、數萬人に遇ふ、玄を見て皆拜し、敢て縣境に入らず、著す所ろ周禮・禮記の註あり。

【鄧】トウ　徑

○春秋時代の國名。今の湖北省襄陽縣の地。○姓。ー禹は後漢の光武帝の功臣。○古、魯の地名。今の山東省滋陽縣の地。

【鄧尉】ヰ　山名、梅の名所。江蘇省吳縣の西南七十支那里に在り、漢のー一此に隱る、故に名づく。前は太湖に瞰み風景極めて佳、山に梅樹多く、花時一望雪の如し（事類統編、地輿）‖萬峯山。

【鄧禹】トウ　後漢の新野の人、幼にして光武と相親む、後ち光武を輔けて功業だ大なり、大司徒に拜し、高密侯に封ぜられ、大事に參畫す、永平元年歿す、雲臺に畫かれたる功臣二十八人の首位たり。

【鄧艾吃】ハクガイ　鄧艾の故事。吃者のわらふべからざるにいふ。世說、言語「鄧艾口吃、語稱ニ艾艾ー一、晉文王戲レ之曰、卿云ニ艾艾ー一定是幾艾、對曰、鳳兮鳳兮、故是一鳳」

【鄱】ヘ　獸

古、番に作る

○ー陽は湖名。江西省の北境に在り、禹貢の彭蠡。ー陽は隋以後の稱。‖番陽。○ー陽湖に沿ふ縣名。今の江西省饒州府。

【鄰】リン　邑

又、隣に作る

○となり、ならび。○となる、ちかし。ちかづく（近）界を接する。又、其の國。つづく（接連）「比ー一○つれ、親み來る同類。論、里仁「德不ー一孤、必有ー一」○たすけ（輔）左右の輔弼をいふ。書、益稷「臣哉ー一哉」○周代行政區劃の稱。五家をいふ。周禮、地官「五家爲ー一」○ーーは衆車のとどろく聲。‖轔轔。

【鄰接】セツ　比鄰互に相援助クスする。隋書、敕ニ吐谷渾將相一書「國家與ニ大蕃一、親則鄰切、義則ー一」

【鄰郡】クン　居所を定める前に近鄰の風習の善き處をえらぶ。何晏、景福殿賦「偉ニ孟母之ー一ー」‖ノ鄰。三遷（三ニ頁二段）參看。

【貿ノ鄰】ボウリン　前條に同じ。南史、呂僧珍傳「宋季雅市ノ宅居ニ僧珍側一、僧珍問ニ貿ノ宅價一、一千一百萬、怪ニ其貴一、季雅曰、一百萬貿ノ宅、千萬ー一ー」

【卜ノ鄰】ボクリン　住所をえらぶに先づ其の近鄰の善惡をうらなふ。愛子「諺曰、非ニ宅是卜一、雜鄰是卜」‖擇鄰。

【善ノ鄰】ゼンリン　となりにしたしむ。左、隱六「親ニ仁ー一、國之寶也」

【鄰家】カリン　となりのいへ。漢書、匡衡傳「引ニー一火光ー」

【鄰交】カウ　となりきんじょの交際。‖鄰好。

【鄰好】カウ　となり近所とのよしみ。北史、陸逞傳「來聘、初修ニー一ー」

【鄰近】キンジ　きんじょ。ちかし。杜甫詩「武侯祠堂常ー一ー」‖近鄰。

【鄰境】キヤウ　となり。又、となりのくに。南史、孫瑒傳「還ニ右將軍一出鎭ニ公安一、爲ニー一所ー傳」

【鄰伍】ゴ　周の制、五家を鄰と爲す、故にー一といふ。陳子昂詩「鄰舍無ニー一ー」

【鄰國】コク　となりのくに。孟、梁惠王「察ニー一之政一、無ニ如ニ寡人之用ー心者ー」

【鄰國爲ノ壑】ガクトナス　壑は水を受くる處、自主、隣を築きて水を鄰國に注ぐは人を損して己を利するなり。孟、告子「白圭曰、丹之治ー水也、愈ニ於禹一、孟子曰、子過矣、禹之治ー水、水之道也、是故禹以ニ四海一爲ノ壑、今吾子以ニ鄰國一爲ノ壑」柳宗元、興州江運記「白圭壑ノ鄰、孟子不ノ與」

【鄰舍】シヤ　となりのいへ。戰國古諺「乞ノ火懷ノ燕ー一門」‖鄰家。

【鄰笛】テキ　晉の向秀が嵇康・呂安の死後、其の舊廬を經て其の鄰人の笛を吹くを聞きて昔日游宴の好を追思せし故事。向秀、思舊賦序「余與ニ嵇康・呂安一居止接近（中略）余經ニ其舊廬一、鄰人有ニ吹レ笛者一、追ニ思曩昔游宴之好一、感ニ音而歎、孔紹安詩「何言隔谷徙、翻驚ー一悲」

【鄰敵】テキ　我と鄰せる敵國。荀子「兵大齊則制ニ天下一、小齊則治ニー一」

【鄰比】ヒン　となり。‖鄰志、管蹄傳、注「與ニー一皃一共戲ニ土壤中一、輒畫ニ地作ニ天文一」‖比鄰。

【鄰保】ホ　となりきんじょの家、又其の人人。保は互に保證する。

【鄰睦】ボク　ちかづきむつましくする。陳書、虞寄傳「周齊ー一」‖親睦。

【鄰里鄉黨】キヤウタウ　鄰里と近在と。周代の制、五家を鄰とし、五鄰卽ち二十五家を里とし、萬二千五百家を

鄉とし、五百家を鄙とす。論、鄙也「舜、以異二閒一―一乎」【鄙郎】ヒロウ 衣耶のきしる聲。詩、豳風「有ノ車一一、有ノ馬白顙」＝繙繙。

十三畫

【鄶】クワイ 泰 古の國名。今の河南省密縣の地。又、檜に作る。詩經に檜風あり。

【鄴】ゲフ 葉 洽 漢の縣名、三國の時、魏の都。今の河南省臨漳縣の地。【鄴架】ゲフカ 書物の多きをいふ、架は書棚。唐の李泌、鄴縣侯に封ぜらる、家に藏書多し故にいふ。韓愈詩「鄴侯家多ノ書、插ノ架三萬軸」【鄴侯書】ゲフコウノショ 前條を見よ。

十四畫

【鄹】鄒(邑部八畫)に同じ。

十五畫

【鄸】鄰(本貫二畫)の略字。

【鄭】テン 先 陳(五九五頁一段)に同じ。

十六畫

【鄲】タン 寒 又、繙に作る

沛郡の縣名。一說に楚の地。

十七畫

【鄷】レイ 齊 ○漢の縣名、晉代に廢す。今の湖南省衡陽縣の東。○湖の名。衡陽縣の東に在り、其の水酒を釀すべし、一涂酒と名づく一に醽醁に作る。

十八畫

【鄸】ホウ 東 周の文王の都せし地名、又、豐に作る。今の陝西省鄠縣の地。

十九畫

【鄼】㊀サン 早 ㊁サン 寒 ㊀あつまる、むらがる(衆)○㊁周代、行政區劃の名。百家のむら。㊂漢の蕭何の封ぜられし地名。今の湖北省光化縣の北。

【鄾】㊀ヲ ㊁レキ 歌 支 ㊀春秋時代魯の地名。今の山東省兗州府の附近。㊁姓。一食其は漢の沛公に仕へし策士。【鄾道元】ヲダウゲン 北魏の豫郡の人、仕へて御史中尉となる、法を執る清剛、魏書、酷吏傳に詳かなり、學を好み、奇書を歷覽し、水經の注四十卷を作る、頗る藝林に重んぜらる。

酉部

【酉】イウ 有 ○とり、十二支の第十位。爾雅「太歲在一、曰二作噩一」方角にて西方。淮南、時則「招搖指一、天下皆秋」時刻にて、午後五時より七時まで。季節にては仲秋、即ち陰曆の八月。○なる(就)みのる(成熟)○あく(飽)○二一は湖南省の大一・小一二山の稱。古、石穴中に書千卷を藏せしによりて、藏書の多き義とす。○圖 字書上、左旁に在る時の稱。

二畫

【酋】シウ 尤 ○ふるざけ(糟酒)○さけを司る長官。禮、月令「命二大一一」○酒が熟する。○あつまる(衆)○をはる(終)○すぐれる(雄)人にまさる。○をさ、かしら(魁帥)野蠻人のかしら「一長」「蠻一」左思、吳都賦「僬耳黑齒之一」○なつ(夏)○一矛は長さ二丈ある矛の名。【酋渠】シウキョ 次條に同じ。渠は長。【酋長】シウチャウ ○野蠻人の部落のかしら。貞觀政要「一一悉授二大官一、謙厚位尊」＝酋渠、酋帥、酋豪。○盜賊などの長。漢書、張敞傳「求二問長安父老偸盜一一數人一」＝魁帥。【酋領】シウリャウ 前條に同じ。宋史、趙恩傳「峽以二蠻利一因置以レ兵、前後殺二其老弱數千一、得二馘一一十餘人一」

【酎】テイ 遇 酩一は甚だしく酒にゑふ。酩(酉部六畫)參看。

三畫

【酏】イ 支 紙 ○米にて造りしすみざけ。○黍にて造りし清みたる粥。○薄き粥。○すみざけ又、すみがゆの米。○こめのもち(稻餅)

○のむ（飲）○あまし（甘）

【酒】シュ　有

○さけ。漢書、東方朔傳「銷憂者、莫若ー」○さかもり（酒宴）「酣起舞」

【酒友】シュイウ　さけのみともだち。白居易、醉吟先生傳「安定皇甫朗之爲二ーー一」

【酒漿】シュシャウ　さけのみてほんのりと赤くなる。蘇軾詩「ーー無レ論上二玉肌一」

【酒量】シュリャウ　美人の頬にべにをつけて紅ふをいふ。紅蓮記「美人紅面既數粉、復以二燕支一雜二掌中一、施二之兩頰一、濃者爲二ーー一、淺者爲二桃花粧一」

【酒宴】シュエン　さかもり。漢書、疏廣傳「及レ置二ーー一、奉レ賜上レ諸」‖飲宴・酒盛・盛飲。

【酒餞】シュセン　○さかとうじ。唐書、段秀實傳「入レ市取レ酒、刺二ーー一壞之隨レ器」○酒ずきのおきな。白居易詩「寄與江城愛ーー」

【酒盞】シュサン　酒を入れるかめ。晉書、左思傳「此閒有二脩父一、欲レ作二三都賦一、須二其成一、當以覆二ーー一耳」

【酒戒】シュカイ　さけをのむを禁ずるいましめ。李純甫詩「ーー何曾破、詩魔先已降」

【酒香】シュカウ　さけのかをり。劉長卿詩「ーー開レ甕老、湖色對レ門寒」

【酒者】シュシャ　さけと、さかなと。後漢書、仲長統傳「陳二ーー一」‖酒殺。

【酒肛】シュカウ　さけを容れるかめ。杜牧詩「窗外正風雪、擁レ爐開二ーー一」

【酒酵】シュカウ　さけのもと。癸辛雜識「遂以二ーー一作レ湯、飲レ之而愈」

【酒幸】シュカウ　さけのみ、酒を嗜む人。漢書、陳遵傳「北史「齊神武東出、李元忠戰二潔華渦酒一卷迎、神武問二其ーー一、未二即見一之」‖酒徒。

【酒榷】シュカク　政府の營む酒の專賣。榷は獨占。漢書、循吏傳「龍二ーー一而論二酤錢一矣」

【酒渴】シュカツ　さけに醉ひてのどがかわく。杜甫詩「ーー愛二江流一、餘甘漱二晩汀一」

【酒楹】シュエイ　さかだる。白居易詩「牀頭殘ーー、欲レ盡陳編淨」‖酒樽。

【酒氣】シュキ　○酒のにほひ。沈佺期詩「林香ーー元相入」○酒を飲みて勢よくなる氣。柳宗元、裴府君墓碣「終身不レ以二ーー一加レ人」

【酒旗】シュキ　○さかやのかんばんのはた。杜牧詩「山村水郭ーー風」‖酒帘。○饗宴飲食を主るといふ星の名（晉書、天文志）‖酒星。

【酒器】シュキ　さかづき。說苑「智伯漆二其首一以爲二ーー一」

【酒禁】シュキン　飲酒を禁ずるいましめ。唐書、食貨志「唐初無二ーー一」‖酒戒。

【酒狂】シュキャウ　酒因に同じ。漢書、翟寬統傳「無二多酌一我、我狂ーー」

【酒興】シュキョウ　酒を飲みたるおもしろみ。元稹詩「顚狂ーー病來孤」

【酒軍】シュグン　多くの酒のみなかま。白居易詩「ーー詩敵如相遇、應レ老翁能一據レ鞍」

【酒訓】シュクン　さけのいましめ。北史、高允傳「高允被レ敕、論二集往世酒之敗一德、以爲二ーー一、孝文覽而悅レ之、常置二左右一」‖酒誡。

【酒綱】シュコウ　さけのわざはひ。禮、樂記「此先王之所二以儐一ーー一也」

【酒光】シュクワウ　酒の色。李白詩「ーー紅琥珀、江色碧琉璃」

【酒癡】シュチ　さけにすきむ。晉、鳳征「嶽和隱二厥職一、ニー於厥邑一」

【酒限】シュゲン　飲酒の定量をいふ。晉書、陶侃傳「侃命レ飲レ酒、有二定限一、常懼有レ餘、而限已竭、故史動二更少過一、侃便悽良久曰、年少曾有二酒失一、仁親見レ約、故不二敢縱一ニ」

【酒月】シュゲツ　○さけをのむ量。元稹詩「病瞳ニーー年年減一」‖酒量。○さかや。陸游詩「ーー知レ貧莫二賒券一」‖酒家。

【酒垂】シュスイ　さかつぼ。杜甫詩「呼レ紳取ニーー一」

【酒徒】シュト　酒を飲みたるあと。漢書、楊惲傳「ーー耳熱、仰レ天拊レ缶而呼二嗚嗚一」

【酒困】シュコン　酒に醉ひて則天地に在る心地する病。唐庚詩「硯田無二廣畝一、有二長春一」‖醉鄕。

【酒興】シュキョウ　さけに醉ひて心みだれる。晉、子罕「不レ爲二ーー一、何有二於我一哉」‖酒狂。

【酒盡】シュジン　さけのしみ。白居易詩「標上杭州酒ーー」

【酒材】シュザイ　酒を造る原料。稗粉麴蘗の類。周禮、酒正「以二式酒一授ニーー一」

【酒債】シュサイ　酒代のかり。杜甫詩「ーー尋常行處有、人生七十古來稀」

【酒槽】シュサウ　酒船に同じ。續耕錄「持ーー之金口一以遺」

【酒盞】シュサン　さかづき。東坡題跋「吾少年望二見ーー一而醉」‖酒杯。

【酒市】シュシ　さけを賣る市場。成都古今記「正月燈市、二月花市、三月蚕市、四月錦市、五月扇市、六月香市、七月七寶市、八月秸市、九月藥市、十月ーー、十一月梅市、十二月桃符市」

【酒肆】シュシ　さかや。酒を賣る店。李白詩「笑入胡姬ーー中」‖酒店・酒舖。

【酒臭】シュシュウ　酒に醉ひたるくさき氣。韓非、十過「入二其廐中一、閒ニーー一而

選」

【酒失】シュシツ　飲酒の上の過失。史、灌夫傳「數日ニ一ー得二過委和一」‖酒過。

【酒人】シュジン　酒を善く飲む人。史、荊軻傳「游ニ於ー一」

【酒誥】シュコウ　酒の戒シ漢書、游俠傳「黃門郎揚雄、作ニ一ー一以諷ニ成帝一」

【酒討】シュトウ　酒のみのなかま。蘇軾詩「一ー我當レ敵、詩句子有レ功」

【酒乳】シュニュウ　さけと、のみもの。詩、小雅「維北有レ斗、不レ可ニ以挹ニ一ー一」

【酒約】シュヤク　酒をつぐしゃく。唐書、地理志「邛州臨邛郡、土貢爲緑布ー一」

【酒所】シュショ　ほろよひ、すこしく酔ふ。漢書、荒暦傳「上章ニ一ー、往辭レ賀、又以レ法ニ禁ニ酔飲一、何如」‖酒醒・酒酔。

【酒色】シュショク　○さけと女色と。漢書、朱博傳「不レ好ニ一ー一」○酒を飲みて顔色にあらはれる。吳志、諸葛恪傳「昭先有ニ一ー一」

【酒盃】シュハイ　酒杯の分量のかず。李白詩「如詩不レ成、罰依ニ金谷一ー一」‖酒量。

【酒醉飯飽】シュスイハンポウ　圖諺。

【酒正】シュセイ　周代、酒を掌る長官。周禮、注ニ一ー一酒官之長」

【酒泉】シュセン　酒を生ずる泉の名。孔毓、與ニ曹操一論ニ酒禁一書「天垂ニ一ー之際、地列ニ酒泉之郡一」

【酒稅】シュゼイ　酒を造る稅。大學衍義補「唐德宗建中元年、稅ニ一ー一」‖酒租。

【酒聖】シュセイ　○酒の清める者。三國志、徐邈傳「酒ニ酒清者一爲ニ聖人一、濁者爲ニ賢人一」○善く酒を飲む者。唐書、地理志「少年氣與ニ節物一競、詩豪ー一雖レ爭レ錄」

【酒精】シュセイ　アルコール、酒の主成分を成す無色の液體。

【酒醒】シュセイ　さけのよひがさめる。白居易詩「眼重朝眠足、頭輕宿ー一」

【酒席】シュセキ　さかもりのばしょ。南史、皇侃傳「於ニ一ー一廣ニ設ー一ー」‖酒筵。

【酒石酸】シュセキサン　藥品の一、無色の結晶體にて酸味多く水にとけ易し。

【酒仙】シュセン　大酒を飲みて世事に関せざる人。杜甫、飲中八仙歌「李白一ー斗詩百篇、長安市上酒家眠、天子呼來不レ上レ船、自稱臣是酒中仙」

【酒泉】シュセン　○周代の邑名。今の陝西省涇城縣の西、其の地の泉にて酒を造れば、味尤も美なりといふ。○漢の郡名。今の甘肅省ー一縣の東北、金泉あり、味酒の如しといふ。○多量のさけ。漢書、文「有レ肉如レ丘、有レ酒如レ泉」

【酒船】シュセン　さかぶね、もろみざけをしぼるをけ。晉書、畢卓傳「右手持ニ酒杯一、左手持ニ蟹螯一、拍ニ浮ー一中一、便足レ了ニ一生事一矣」

【酒盞】シュサン　酒を賀ふぜに、さかだい。高適詩「今日相逢無ニ一ー一」

【酒戰】シュセン　酒の飲みくらべ。茅亭客話「筆耕園可レ傳三戰ー一、猶能敵ニ百夫一」

【酒漿】シュショウ　酒と食物と。魏書、薛慧傳「ー一相尋、餽饟繼至」

【酒壺】シュコ　さかだる。‖酒樽・酒罇。

【酒罇】シュソン　さかだる。後漢書、禮儀志「瓦ー一二、容ニ五斗一」‖酒壺・酒樽。

【酒醪】シュロウ　さかづきのかずとり。白居易詩「醉折ニ花枝一當ニ一ー一」

【酒池肉林】シュチニクリン　豪遊を極むる形容。史、殷紂「以レ酒爲レ池、懸レ肉爲レ林、使ニ男女裸相ニ逐其間一、爲ニ長夜之飲一」

【酒嗽】シュソウ　酒を飲むはらの中。劉伶詩「ー一覓レ叙レ海、詩酬大ニ於天一」

【酒中趣】シュチュウノオモムキ　飲酒のおもしろみ。世說、晉語「公損未レ知ニ一ー一耳」

【酒徒】シュト　酒のみ相手。酈は同じく酒を好する義。酈門傳「與ニ右北平ー一ー一」

【酒癖】シュヘキ　さけ飲みて心くるふ。白居易詩「別來只是成ニ詩癖一、老去何曾更ー一」‖酒顚。

【酒徒】シュト　さけのみなかま。史、酈生傳「吾高陽ー一也、非ニ儒人一也」

【酒壺】シュコ　酒のどく。王績詩「莫花揩ニ一ー一」

【酒德】シュトク　○酒の功徳。晉書、劉伶傳「著ニ一ー一頌一篇一」○酒の惡しき徳。書、無逸「迷亂酒ニ于一ー一」

【酒囊飯袋】シュノウハンタイ　酒や飯を入れるふくろ。無能にして遊食する者をののしる語。荊湘近事「文武之道、未ニ嘗習ニ一ー、時論ニ之一ー一」

【酒肉】シュニク　さけと、にくと。孟、離婁「其良人出、則必饜ニ一ー一而後反」

【酒杯】シュハイ　さかづき。錢起詩「欲レ盈封人酌、南山祝ニ一ー一」

【酒旆】シュハイ　さかやのはた。杜牧詩「吳苑春風起、河橋一ー一颺」‖酒帘・酒旗。

【酒坊】シュボウ　さかや。姚合詩「近接持齋來論藏、一ー魚市遠無レ人」‖酒店、酒肆。

【酒槽】シュソウ　酒屋の看板。附阮咸、張伯英草書歌「長安一ー醉後書」

【酒徒】シュト　酒のみ相手。白居易詩「一ー經旬久不レ同」

【酒悲】シュヒ　泣上戸なる通俗、後唐、莊宗紀、注「人有ニ醉後涕泣者一、俗謂ニ之一ー一」

【酒兵】シュヘイ　酒を兵に喩ふる南史、陳暄傳「江諸國有レ酒、酒猶ニ兵也、兵可ニ千日而不レ用、不レ可ニ一日而不レ備、酒可ニ千日而不レ飲、不レ可ニ一飲而不レ醉」唐彦謙詩「一ー無ニ計敵ニ愁鷁一」

【酒瓶】シュヘイ　さけびんを容れるかめ。白居易詩「第二石退中ニ一ー」‖酒鉼。

【酒盤】シュバン　さけを容れるふくべ。王禹偁詩「睡起雞花落ニ一ー」

【酒癖】シュ　さけをのむくせ。皮日休詩「妻仍嫌二一一一一一一」

【酒母】シュ　○酒屋のばあさん。列仙傳「子先一一在レ此」子先は人名。○酒のもと。王安石詩「謝二酒官屋一貯二一一一」

【酒保】シュ　○酒家の傭夫。保は保證人を立ててやとはれる義。史、樂布傳「窮困貧二傭於齊一爲二酒人保一」○さかとうじ、酒を造る者。又、酒を賣る者。○關兵營內にて酒食品物を賣る所。

【酒徒】シュ　酒のかり。陸游詩、秋穫先令レ入二一一一」‖酒賊。

【酒醑】シュ　大宴會を設けて相慰賀するをいふ。史、趙世家「主父滅二中山一還、治行賞大夫、置二一一五日」

【酒舖】シュ　さかみせ。‖酒家・酒肆。

【酒迭】シュ　さけを容れる鉢。杜牧詩「喚レ婚呼レ兒來二一一」

【酒醴】シュ　清酒と濁酒と。史、扁鵲傳「扶二在二腸胃一一一之所レ及也」

【酒亂】シュ　酒困に同じ。

【酒量】シュ　さけをのむ分量。范成大詩「年少王孫一一覓」

【酒場】シュ　さけと、かてと。後漢書、循吏傳「每設時邀二子、問以二一一」

【酒力】シュの　酒のききめ。白居易詩「驅レ愁知二一一一、破レ睡見二茶功一」

【酒令】シュ　飲酒上の規則、戲に設くるもの。背きし者には罰杯を飲ましむ。南史、王規傳、屬レ規爲二一一一」

【酒醑】シュ　さけと、あまざけと。漢經「若作二一一一、爾惟麴蘗」陸游、與二村陬一聚飲詩「俗似二山川古一、人如二一一一醇一」

【酒帝】シュ　さかやの目じるしのはた。李中詩「閃閃一一招二醉客一、深深綠樹隱二喧囂一」‖酒旗・酒旆・酒望。

【酒樓】シュ　料理屋ゐお茶屋。蜀檮杌「飲二於一一一」‖旗亭。

【酒盞】シュ　酒を盛る椀。南史、王琨傳「聖俞二於財用一、設レ酒不レ過二兩盞一」

【酒宴】シュ　宴席にて酒を飲み始める。儀禮、鄉飲酒禮「一一于賓」

【行酒】シュ　宴席にて酌をする。玉燭寶典錄「一一者皆中使也」

【被レ酒】カケル　酒の爲めに加へらる。被は加。大醉する。史、高祖紀「一一夜徑二澤中一」

【屬レ酒】サケヲ　杯を人にさす。寶皐詩「芳樽漸滿偏一一」

【伐レ酒】サケヲ　飲酒の相手をさす。漢書、高帝紀「召二故人父老子弟一一一」

【樂レ酒】サケヲ　飲酒をよろこぶ。詩經「一一今夕、君子維宴」孟、梁惠王「一一無レ厭、謂二之仁一」

【使レ酒】サケヲ　酒の勢に乘じて我がままにふるまふ。史、魏其田蚡傳「爲レ人剛直一一」史、李布傳「有レ言二其勇使一酒」

【亡レ酒】サケノ　酒席よりのがれ去る。漢書、高五王傳「諸呂有二一人一醉一レ一」

【縱レ酒】ホシイマヽニス　酒をきままに飲む。史、田儋傳「一一一」注「縱、放也、放レ意而飲レ酒」

【親レ酒如レ醬】シタシムコト　酒を輕んずるをいふ。漢書、劉德傳「一一、親レ肉如レ醬」醬は豆の葉。

【呼レ酒】サケヲ　酒を持ち來ることを命ずる。宋伯仁詩「小樓一一揖二青山一」‖喚酒・呼杯。

【酒盈レ罇】サケタル　酒がたるに滿つ。隋書、盧思道傳「蜀酒盈レ罇、高歌滿レ席」陶、歸去來辭「攜二幼入一室、有レ酒盈レ罇」

【酒闌】サケタケ　次條に同じ。漢書、高帝紀、注「闌言二希也、謂飲レ酒者、半酣半在、謂二之闌一」

【酒酣】サケタケ　酒宴のなかばを過ぐる頃。史、高祖紀「一一高祖擊レ筑」

【酒酣耳熱】サケタケテミヽアツシ　大醉の狀をいふ。漢書、楊惲傳「酒後耳熱、仰二天拊一缶一」魏文帝文「一一仰面吠一詩」

【中レ酒】サケニアタル　二日醉。韋莊詩「近來一一起常遲、臥見二南山一改二舊詩一」

【酒有二聖賢一】サケニカンアリ　清酒を聖人といひ、濁酒を賢人といひし故事。魏略「太祖禁レ酒、而人竊飲、故難レ言レ酒、以二白酒一爲二賢者一、清酒爲二聖人一」酒聖參看。

【酒有二別腸一】サケニベツチョウアリ　酒量の大小は、糟粕の大小に關せざるをいふ。五代史「閻寶謂二周維岳一曰、岳身甚小、何能飲之多、左右曰、一一、不二必長大一曠命二稚活一下レ殿、欲三觀二其酒腸一」

【酒天之美祿】サケノテンノ　酒をほめていふ。漢書、食貨志「一一、頤二養天下一」

【酒百藥之長】サケハヒヤクヤクノチョウ　さけは多くのくすりの中の第一。漢書、食貨志「一食殺之將、一一」

【酒無レ量】サケニリョウナシ　酒をのむには分量を定めず。論、鄉黨「惟一一、不レ及レ亂」

【酒吞レ人】サケノトム　多量に飲酒する者は卻りて酒に飲まれる。法華經抄「初則人吞レ酒、次則酒吞レ酒、後則一一」

【酌】シャク　藥

○くむ(酌)酒をくむ、酒をつぐ「小一」「對一」「獨一」說文「盛レ酒行レ觴也」○さかもりする。○ます(益)○くみとり、くみわける、彼此を照し合せて善惡を取捨する「參一」「斟一」○清一は酒の異名「曲一」

同訓異語 酌・汲・斟・挹の別は汲(一〇五二頁一段)の條を見よ。

【酌飲】シャクイン　一杓の水、酌・杓通ず。飲はのみもの。左、成十一「衞定公卒、夫人姜氏氓哭而息、不レ內一一」

【酌獻】シャクケン　くむ。程嘉燧詩「氓」衣貧レ酒君一一」‖斟酌。

【酌酒】シャク　さけをくむ。後漢書「諸侯―レ相賀」宋維詩「―レ與レ君君自寡、人情翻覆似二波瀾一」‖斟酒。捨レ酒。

【酌水】スイ　みづをくむ。杜陽雜編「以二金銀杓一―レ」

【酌濁】ショクダク　ますと、へらすと。易經「二事遺往无レ咎、―二一之一」

【酌量】シャクリャウ　事情の輕重をくみとりて適宜の處置をする。陸龜蒙詩「自與―一瓢藥水、別教二安置一罐書牀」

【酎】チウ　宥

○こきさけ（醇酒）三度重ねてかもしたる酒「芳―」「醇―」禮、月令「孟夏之月、天子飲―」○燒―は酒精分を多量に含む酒。‖火酒。

【酎金】チウキン　漢代の制、天子の初めて熟したる醇酒を宗廟に薦むる時、諸侯王皆獻金して祭を助くるなり―といふ。―一の量少く、若くは貿の惡しき時は其の領土を削らる。史、平準書「列侯坐二―一、失二侯者百餘人一」

【配】ハイ　隊

○あふ（合）たぐふ、ならぶ。たぐひ、つれ（匹・對）○あたる（相當）○つれあひ（夫婦）めあはす、夫婦になる「―偶」易、蒙卦、注「婦者―已而成二德者一也」○對になる。易、繫辭「廣大―天地一變通一四時一」○すすむ（侑）○ながす。しまながし（流刑）「―流」五代會要「刺面―軍州」○やっこ、つみびと（囚隷）○つく（屬）○つける、從へる。○くばる、わりあてる（頒賦）「―當」「分―」○酒の色。○圖殘缺ソンケツを完補する義。

【配下】ハイカ　國てした、部下、雜屬。

【配格】ハイカク　流刑の輕重によりて、配所の遠近を定める規格。宋史「政和編二一一一一有二特重・稍重・倚輕・稍輕四等一」

【配合】ハイガフ　○つりあふ。つりあひ。張衡賦「日與レ月―一也」○圖めあはせる、夫婦にする。

【配享】ハイキャウ　他の神と合せ祭りて供物をすすめる。支那にて功臣を宗廟に祭ると。孔子の廟に他の儒者を祭るとの類（周禮、夏官、司勳、注）‖從祀・配饗・配祀。

【配御】ハイギョ　妃嬪などが天子の夜のおとぎをする。漢書、元后傳「已背適レ人、於禮不レ宜一一一玉璽一」

【配偶】ハイグウ　つれあひ。後漢書、鄧訓傳、注「其無二妻者一爲二適一一一」‖配偶・配匹。

【配偶】ハイグウ　前條に同じ。偶は兩人相並ぶ。

【配軍】ハイグン　流刑になりて國境を守る兵。瑞桂堂暇錄「東坡入二京師一、有二相者一云、一變學士眼、牛個一一頭」

【配玄】ハイゲン　水仙花の異名（三餘帖）

【配劑】ハイザイ　○藥を程よくくみ合せる。○程よくくみ合せる「天の一一」

【配祀】ハイシ　配享に同じ。

【配祇】ハイシ　そへ、副貳の義。晉書、禮志「皇太子一一玉璽一、與レ國爲レ體」

【配神】ハイシン　合祀せられたる神。

【配社】ハイシャ　土の神のやしろに合せまつる。左傳、句龍既爲二后土一、又亦一一レ」

【配所】ハイショ　しまながしにしたる地。

【配食】ハイショク　配享に同じ。晉書、陸雲傳「捕二浚儀令一、稱爲二神明一、去レ官、百姓思レ之、圖二畫形像一、一一縣社」‖祔祭。

【配膳】ハイゼン　圖膳部を人人にくばりならべる。

【配島】ハイタウ　しまながし。宋史、馬默傳「默以爲二殘忍一、奏請レ更二定一一法一」‖流・流刑・流竄。

【配當】ハイタウ　○くばりあて。周禮、地官、疏「預爲一一一」○圖わりまへ、わりあて「一一金」

【配謫】ハイタク　島流しにする。‖配流。

【配遣】ハイケン　圖物品をくばりとどける「郵便一一」

【配置】ハイチ　それぞれくばりおく。

【配天】ハイテン　○律が廣大にして天と並ぶ。易、繫辭「廣大配二天地一」○王者が天を祭る時、其の祖先を之に配して祭る（詩、大雅、思文）有虞氏、黃帝を以て天に配せしより、夏后氏は之に因り、殷は帝嚳を以てし、周は后稷を以てす。其の後、歷代の帝王、皆其の制に倣ふ。

【配布】ハイフ　くばりしく、くばる。

【配賦】ハイフ　ねんぐなどをわりつける。又其のわりつけられし稅金。

【配分】ハイブン　くばりわかつ。‖分配。

【配兵】ハイヘイ　兵士をそれぞれの要所にくばりあてる。又其の兵士。

【配流】ハイル　配謫に同じ。

【配率之科】ハイリツ　民の貧富の等差によりて租稅を課する。

【配慮】ハイリョ　心をくばる、心配する。

【配錄】ハイロク　それぞれに分ち屬する。後漢書、馮異傳「部二分諸將一、各有二一一軍士皆言、願屬二大樹將軍一」‖分屬。

【配偶】ハイグウ　つれあひ。雜事祕辛「不レ有二一一、將率二天地宗廟一」‖配偶。

【酋】シウ　四　尤

やまぐは。史、夏紀「其儀一一絲」註「一桑蠶絲、中琴瑟絃」‖長。

【酗】ク　コ　國
○酒にゑひてくるふ（酒狂）酒亂「究ー」「一酒」悖、愎子「沈」于酒ニ○酔ひて怒る。
【酗怒】コウ　酒の失なり、酒に酔ひてくるふ。晉書、賈志傳「ー一斯作」
【酗訟】クヨウ　酒にゑひ狂ひてあらそひうったへる。魏書、刑罰志「年穀豐登、士民多因ー酒致ニー一ニ」

【酔】酔（西部八畫）の俗字。

【酖】㊀タン　㊁チン　㊀覃　㊁侵
㊀酒を嗜ム。○ふける、酒に溺れる。古、沈に作る。漢書、五行志「荒沈于酒」㊁一種の毒鳥、鴆（鳥部四畫）に通ず。○轉じて毒殺する。左、莊三二「使ニ鍼季ー一之」
【酖酒】シン　酒飲みて樂しむ貌。又、安樂の貌。說文「樂ー酒也」徐注「ー一然安且樂也」
【酖毒】ドク　酖は鴆といふ毒鳥、其の羽を以て、酒を攪して飲ましむるときは、人を殺すの物にて害毒の義とす。左、閔元「寘安ー一、不可ニ使也」ー一刺害。

【酢】サク　㊀

ー酌は極めてゑひたる貌（廣韻）姚合詩「過酒ー酌飲」

【酣】カン　㊀　㊁覃

○たけなは、十分に酒を飲む、酒宴のまさかり「宴ー」「ー酔」「沈ー」戰國策「平原君乃置酒、酒ー起前以ニ千金ー爲ニ魯連壽ニ」○轉じて廣く物事の最中「戰方ー」「ー睡」○花のまさかりに開く貌。王安石詩「荷花落日紅ー」○ーは酒を飲みて上機嫌なる貌。又、春景ののびのびとしたる貌。

【酣酣】カンカン　酣・闌の別は門（門部九畫）の條を見よ。
【酣宴】エン　騒んなるさかもり。後漢書「設酒ー一、賞賜數百千萬」
【酣歌】カ　酒を飲みてたけなはにうたふ。晉、伊籍「侍ニ舞于宮、ー一于室ニ」
【酣暢】チョウ　○春景ののびのびとたけなはなる貌。孔平仲詩「春天ー一睡正美」○酒を飲みて心ののびのびせる貌。白居易詩「不ー如ニ來飲酒、仰ニ面醉ー一」ー暢。○花のまさかりに開く貌。盛弘之詩「桃李正ー一」
【酣燈】トウ　酒を十分に飲みてたのしむ「ー一淋漓」ー酔燈。
【酣酔】スイ　酒にゑひてたはむる。晉書、石勒載記「勒與ニ一ー、引ニ陽臂ー一笑」
【酣眠】ミン　酒を飲みてねもしろくたのしむ。周書、長孫澄傳「好觀ニ人ー一ニ」
【酣臥】ガ　十分にねむる。唐書、李太亮傳「公在、我得ニ一ー一矣」ー睡・熟睡。
【酣楽】ラク　酒にふけりて賢淫にくらす、樂は愛。歐陽修、縉惟儉文集序「尚安能ー一ニ于富貴ニ」
【酣呼】カン　酒にゑひ、大聲にてよぶ。南史「顧廷之曰、彼有ニ人焉、由ニ是不ニ復ー一ニ」ー酔呼。
【酣嬉】キ　酒にゑひてたのしむ。古樂府「式宴ニ一ー一」ー宴娯。
【酣賞】ショウ　愛を恣にして遊び賞する。北齊書、邢邵傳「終日ー一、遠ニ山泉之致ニ」
【酣春】シュン　はるのまさかり。李賀詩「勞勞落燕愁ニ一ー一」
【酣謳】オウ　酒を飲みてしだらなくほしいまま。晉書、阮孚傳「終日ー一」
【酣睡】スイ　十分にねむる。朱慶餘詩「陳郎ー一未ニ知ニ曉ー一」ー熟睡。
【酣酔】スイ　大いに酒にゑふ。戴良和詩「恨於ニ一ー中ニ錯路乃不ニ迷ー一」
【酣戰】セン　戰のまさかり。まかんに戰ふ。韓非子「楚晉ー一之時、子反渴而求ニ飲ー一」
【酣適】テキ　酒にゑひたるやうす。盛弘之詩「高情邁ニ雲漢ー一坐ニ芳洲ー一」
【酣暢】チョウ　酒に酔ひて氣分がのびのびする。晉書、阮修傳「修常以ニ百錢ー挂ニ杖頭ー一至ニ酒店ー一便獨ー一」
【酣適】テキ　酒にゑひたのしむ。吳孫奮詩「驅ニ百齡ー一ニ萬事付ニ一ー一ニ」
【酣中客】チュウカク　富貴に沈溺する者をいふ。陶潛詩「寄ニ言ー一、日暮當ニ炳燭ー一」
【酣放】ホウ　○酣戰に同じ。○行文の縱恣なる貌。皇甫湜、韓昌黎墓誌銘「及ニ其ー一ニ豪曲快事、幾ニ紙怪發ー一」
【酣飫】エン　酒食に飽く。唐書、元德秀傳「性嗜ニ酒、陶然彈ニ琴以自娛、人以ニ酒肴ー一從之、不ニ問ニ貴賤ー一爲ニ一ー一ニ」ー酔飽。
【酣樂】ラク　十分にたのしむ。晉紀、傳「ー一ニ其身ー一、不ニ愛ニ政事ー一ニ」

【酤】コ　㊀魚　㊁遇

○ひとよざけ（一宿酒）「清ー」○うる（賣）酒を賣る「屠ー一○かふ（買）酒を買ふ。沽に通ず。ー沽。

酤・沽・買・市等の別は貝（二八六七頁頭書）の條を見よ。

【酤賣】コ　うりかひ。晉書、五行志「司馬道子府園内列肆、使二婢人一一」

【酤權】コ　政府が酒を專賣して利益を獨占する。蘇軾詩「對レ酒不レ管レ償二一一」‖榷酤。

【酤酒】コ　〇酒をうる。史、司馬相如傳「貰二酒舍一レ、令二文君當一レ壚」〇酒をかふ。史、滑稽傳「懷レ錢一レ」‖沽酒（論語）〇一夜づくりのさけ。詩經、傳「酢、一宿酒也」

【酢】

㊀すし（酸）〇す（醋）味の酸い液。隋書、酷吏傳「長安語曰、寧飲三升一、不レ見二寧弘度一」㊁むくゆ（報）客が主人に酒杯をさす。酬（主人が客に返杯する）の對「酬一」「一酢」

同訓異義　コ　酢・報・酬の別は報（三九二頁一段）の條を見よ。

【酢漿】シャク　かたばみ、草の一種、葉は三出複葉、花は淡黄色五瓣。‖三葉酸。

【酢敗】ハイ　酒が酸くなりてくさる。雪笈七籤「酒客、梁市上酒家人也、作レ酒常美、售日得二酒錢一、有レ過而遂レ之、主人酒常一一」

【酥】

ソ　ス　虞

〇牛・羊の乳にて製せし食品、牛酪・ミルクの類「一酪」〇餘は酒の名。‖屠蘇。〇俗油を以て麺に和せし者。又食品の粉ヲにして麼え易き者。

【酥燈】トウ　佛前の燈火。法苑珠林「請咒時然二八支一一」（然はもやす）‖佛燈。

【酥酪】ラク　乳製の酪。宋史、職官志「牛羊司乳酪院、供二造一一」

【酡】

タ　歌

ふふ、醉ひて顔を赤くする「微一」宋玉、招魂「美人既醉、朱顔一些」（些は助字）

【酏】

酏（前條）に同じ。

六　畫

【酌】

イ　有

むくゆ（報）すすむ、酒をすすめる、返杯をする（酳酒）‖侑。

【酬】

シウ　尤　又、詶に作る　酧は俗字

〇酒を勸すめる、主人が客に杯を返す。酢（客が主人に返杯するの對「獻一」〇かへす、むくゆ（報）むくい「一恩」「一勞」「報一」「應一」‖酳。〇手紙にて返事する「貴一」「答一」

同訓異義　コ　酬・報・酢の別は報（三九二頁二段）の條を見よ。

【酬謝】シヤ　へんれいのさかもり。韓耕錄「具二酒肴一延款、次日答一一」

【酬應】オウ　〇こたへる。南史、梁宗室蕭勱傳「尤好讀二東觀漢記一、略皆誦憶、劉顯執レ卷檢レ勱、一一如レ流、乃至卷次行數、亦不二差失一」‖應答。〇さかづきをかへす。吳師道詩「從來不レ解レ飲、杯勻强一一」

【酬恩】オンむくゆ。蔣唐書、徐有功傳「願以二執法一レ一」‖報恩。

【酬酢】シサク　〇主客互に杯のやりとりする。特牲篇「主答レ客曰レ酬、客報二主人一曰レ酢」〇轉じて應對の義。易、繫辭「是故可二與一一」

【酬唱】シヨウ　詩を以て互にとなへ和する。宋史、宋湜傳「有二清節一、居二長安一不レ仕、與二种放・魏野一遊、多篇什一一」

【酬對】タイ　酬答に同じ。宋史、熊克傳「有二問者一一如レ響」

【酬答】トウ　むくいこたへる。舊唐文「人間多事、堆レ案盈レ几、不二相一一一」‖酬和。

【酬直】チヨク　代價をつぐなひ拂ふ。直は値。三國志、倉慈傳、注「子許買レ物、酬レ價一一」

【酬報】ホウ　酬答に同じ。晉書、禮志「名位不レ同、本無二一一之酬一」

【酬勞】ラウ　骨をりに報いる。周書、武帝紀「尊レ年衛レ幽、列代弘規、序レ爵一レ一、哲王明範」

【酬和】ワ　詩文などを作りてむくい答へる。晉書、劉琨傳「以二音韻一一一」‖應酬・和酬。

【酘】

酬（前條）の俗字。

【酸】

サイ　泰　寘　寘

こめしる（米汁）こんす（漿）

【酪】

メイ　遇

〇あまざけ、糯米ナと麴とを煮て造りし醞ニ似た漢書、嚴鄭傳「食肉而飲二一」〇ふふ（醉）

【酪酊】テイ　はたしくふふ。晉書、山濤傳、日夕倒載酔、一一無レ所レ知」‖昏酔・酩酊。

【酪】

ラク　藥

〇ちちしる（乳漿）牛・羊・馬などの乳を煮て造りし飲料、ミルクの類「牛一」「乳一」「羊一」〇こんす（酢漿）〇果實をしぼりたる汁にて作りし飲料「杏一」漢書、食貨志「救民煮レ水爲二一一」

【酪漿】ショウ　牛羊の乳。李陵、答二蘇武一書「擧レ觴勸一一、以充二飢渇一」

【酪酥】ソ　牛羊の乳にて精製せし飲

科（唐書、穆寶傳）＝酥酪。
【酪奴】ラク　茶の異名。魏錄「王肅晉武、羊比二膻鬯之大邦一、魚比二郭莒之小國一、唯茗飲不レ中、與二酪漿一作レ奴」
【酪母】ボク　○さけのかす（酒滓）醴雅、疏「酒滓謂二之醪一」○乾酪（楊雄、長楊賦、注）

【酳】七畫　イン　震

○すすぐ（漱）酒にて口をすすぐ。禮、樂記「執爵而一」○尸に酒を獻ずる。

【酵】カウ　效

○さけのもと（酒母・醸母）○さけがす（酒滓）○わく、酒の熟する時、酒氣が發作する「發一」
【酵母】カウボ　酒のもと、酒を發酵せしむるに用ふる原料。

【酷】㊀コク　㊁カク　藥　沃　一音ゴク

㊀はけし、酒の氣が厚くしてはけし。○しへたぐ（虐）むごし（極）からし（苛）「苛一」「殘一」「慘一」○はなはだし（甚）きはむ（極）○いたみうらむ。うらみ（痛恨）顏氏家訓「銜二刺骨一、痛恨、徹二于心髓一」㊁しへたぐ（虐）

【酷刑】ケイ　苛酷・苦・太・泰・絕・孔・已の別は甚（二六〇頁二段）の條を見よ。
【酷愛】コクアイ　甚だしくあいす。張衆浩詩「年來一一香山老、都把二慈悲一付二醉吟一」
【酷寒】コクカン　甚だしくさむし。＝嚴寒。
【酷虐】コクギャク　くるしめしへたぐ。袁凱詩「牝雞肆二一一一、骨肉至二吞噬一」
【酷嗜】コクシ　甚だしくしへたげそこなふ。後漢書、戴就傳「主者窮二錮一一、無二復餘方一」
【酷似】コクジ　甚だしくよくによる。晉書、何無忌傳「一二其舅一」＝酷肖。
【酷肖】コクショウ　甚だしくくさし。抱朴子「形狀既醜、加之一一」
【酷署】コクショ　甚だしくあつし。李涉詩「人居一一苦」＝盛暑。
【酷肖】コクショウ　よくによる。＝酷似・逼似。
【酷痛】コクツウ　甚だしくいたむ。宋書、王微傳「一一煩寃、心如二焚裂一」
【酷熱】コクネツ　甚だしくあつし。＝酷暑・極熱・陸熱・痛熱。
【酷暴】コクバク　むごくしてあらあらし。北史、吐谷渾傳「前後李レ使、皆以二一一一爲レ名」
【酷薄】コクハク　甚だしくむごくする。＝苛酷。
【酷法】コクハフ　きびしきおきて。五代史、後蜀世家「置二獄于家一、務以二一一一、厚二斂蜀人一」＝苛法。
【酷評】コクヒョウ　てひどき批評。＝苛評。
【酷遇】コクグウ　甚だしくみだり。後漢書、郭陳傳「獄不二訊鞫一、遂令二臟等獲一二此一一一」
【酷吏】コクリ　○てきびしき官吏。史記・漢書に一一傳あり。○大暑に喩ふ。杜牧詩「大暑去二一一一、清風來二故人一」
【酷類】コクルイ　甚だしくによる。晁補之詩「秀オ一二東野貧一」＝酷似。
【酷烈】コクレツ　○甚だしくはげし。書經、疏「一一甚二于猛火一」○香氣甚だ盛んなり。史、司馬相如傳「一一淑郁」

【酸】サン　寒

○す（酢）○すし（醋味）すっぱい。禮、月令「孟春之月、其味一」○かなしむ（悲）、いたむ（痛）「悲一」○くるし、つらし「辛一」○まづし「寒一」范成大詩「洗盡書生氣味一」○一素は非金屬元素の一、水・空氣などを構成する無味無色の氣體。＝養氣。
【酸楚】サンカウ　かなしみて胸ふさがる。陳書、陸瑜傳「經レ紀投レ筆、恆以一一」＝酸嘶。
【酸甘】サンカン　すきと、あまきと。山海經「文鰩魚以レ夜飛、其味一一」
【酸寒】サンカン　まづしくしてくるし。蘇軾詩「故人圍飲慰二一一一」＝寒酸。
【酸化】サンクワ　酸素と他物と化合する。
【酸懷】サンクワイ　心をいためる。晉史、劉遐傳「苦得二遠辭事一、爲レ之一一」＝傷心。
【酸愴】サンサウ　いたみかなしむ。後漢書、列女傳「辭甚一一」
【酸辛】サンシン　つらし、くるし。杜甫詩「萬事益一一」＝艱辛・苦澁・辛酸。
【酸呻】サンシン　かなしみうめく。孟郊詩「病骨可レ制物、一一亦成レ文」
【酸楚】サンソ　ほほづき。多年生草、根塊花實皆藥に入る。齊民要術「可レ以院二治葛芽一、若二一一一」＝寒漿（爾雅）
【酸性泉】サンセイセン　泉水の多量の酸類を含有するもの。
【酸切】サンセツ　痛切にかなしむ。陳書、鄱陽王伯山傳「敘二他鄉離別之意一、辭甚一一」
【酸然】サンゼン　心をいたむる貌。陸游詩「平生知幾別、此別益一一」
【酸痛】サンツウ　かなしみいたむ。
【酸楚】サンソ　くるしみいたむ。李白詩「客心自一一」＝悲痛。
【酸鼻】サンビ　甚だしくくるしめる。後漢書、朱博傳「吏人一一道路歎嗟」
【酸敗液】サンハイエキ　胃中に停滯せる酸味の液、すでに腐敗して食物を消化する能はざるもの。
【酸鼻】サンビ　甚だしくいたみかなしむ。漢書、鮑宣傳「父子夫婦、不レ能二相保一誠可レ爲二一一一」
【酸類】サンルイ　酸性のものの總稱。硫酸・

硝酸・鹽酸など。

【醒】テイ　㊥

わるよひ、ふつかよひ、酒を病む「解」ー」詩、小雅「憂心如ー」

【醍】ト　㊥

〇にごりざけ、もろみざけ、どぶろく（白馬）〇さけのもと（酒母）〇ー醐ダイは重ねてかもしたる酒。

【醍清】テイ　醍醐に同じ〔揚雄賦〕

【醍醐】ダイゴ　醍醐（第三頁四段）に同じ。

【醍醐】ダイゴ　〇重ねて醸したる酒。一説、にごりざけ（醍ー）に醍に作る）盤下殿時記「長安毎歳清明、賜二宰臣以下ー酒ー」〇最生の落葉灌木、幹高さ四五尺、枝葉柄皆刺多し、葉は羽状複葉、夏初白花を開く、色ー酒に似たり、故に名づく。‖茶醍〔格物総論〕

【醐】ホ　㊥

〇酒を飲みてたのしむ。〇國に慶事あり、又は天子の徳が天下に普く布きたるをよろこびて、天子より臣民に乗りて酒を飲み楽しむことを許さる。史、始皇紀「天下大ー」〇天子より酒食を下賜せらる「賜ー」又其の酒食。

【醐宴】ホエン　天子が臣民に乗りて酒を飲むことを許さる。又、天子より賜るさかもり。唐明皇にー宴詩あり。‖醐燕。

【醐燕】ホエン　前條に同じ。唐書、張守珪傳「入見二天子一、賜二食醐田一、即ー」

【酌】シャク　㊥　ツク　㊥　ルホ　㊥

酒を地にそそぐ、酒を地に沃ソソぎて神を祭る。通俗編「ー酒之制、應レ防二自古祼禮一」

八畫

【酣】エン　㊥　アン　㊥　カン　㊥

〇塩につける。又、其のつけもの（菹）〇しほづけのうを（塩漬魚）

【醃臢】アンザウ　魚肉・野菜などをしほづけにしてたくはへる。

【醋】㊀サク・ザク　㊥　㊁ソ　㊥　又、酢に作る

㊀容より主人に酒を酌む。むくゆ（報）㊁す。‖酢（酉部五畫）〇㊀ー意は嫉妬心。

【醋酸】サクサン　無色酸性の液にて刺戟臭を有し、酢の主成分をなす。醫藥・染色・其の他工業上に用ふ。

【醞】サン・セン　㊥　ウン　㊥

〇さかづき（觶）‖盞・琖。〇徹しく清める濁酒「醞ー」

【醇】ジュン　㊥

〇味の厚き酒「芳ー」「ー酒」「清ー」〇もっぱら（專）〇まじりなし。純に通ず。〇あつし（厚）淳に通ず。〇くはし（精）易、繫辭「天地絪縕、萬物化ー」〇つつしみぶかし、てあつし（謹重）「ー謹」

【醇厚】ジュンコウ　醇・厚・篤・敦・淳・遇・醲の別は厚（二八四頁一段）の條を見よ。

【醇篤】ジュントク　もっぱらにしてまことなり。漢書、史丹傳「詔曰、左將軍丹、往時尊レ醇以二中正一、秉レ義ー、蓋徳優焉」

【醇謹】ジュンキン　てあつくしてつつしみぶかし。漢書、衛綰傳「ー無他」

【醇化】ジュンクワ　〇てあつきをしへの感化。東京賦「清風協二於玄籟一、ー通二於自然一」〇哲學にて雜駁なる知識を分類して純粋に且つ組織的ならしむる作用。

【醇厚】ジュンコウ　人情てあつくして輕薄ならず。漢書、景帝紀「繇民ー」‖醇篤。

【醇酒】ジュンシュ　こくしてよきさけ。史、信陵君傳「飲二ー一近二婦女一」

【醇備】ジュンビ　純正にして雜駁ならざる事。漢書、貢山傳「沙二譏書記一、不レ能レ爲二ー一」‖純備。

【醇醪】ジュンラウ　てあつき醪。老子「其政悶悶、其民ー」

【醇粹】ジュンスイ　粹しくしてまじりなし。晉經、傳「王之政事ー」

【醇酎】ジュンチウ　よき酒の名。四京雜記「漢制以二正月旦一酒、八月成、名曰二九醞一、一名二ー一」

【醇醲】ジュンノウ　〇味の濃き酒、厚酒。‖醇醲。〇轉じて民の風俗の醇厚なるに喩ふ。張衡賦「著二醇風之ー一」

【醇篤】ジュントク　てあつくねんごろ。朱熹文「學問ー一、雖二古人一猶レ未レ之」‖醇厚。

【醇美】ジュンビ　純粹にしてうるはし。晉書、阮种傳「擢二ー一之化一、杜二邪枉之路一」‖純美。

【醇備】ジュンビ　粹美にして闕失なし。晉書、王導傳「德行ー一、雖レ有二遺失一」

【醇朴】ジュンボク　人情があつくしてかざりなし。朱熹詩「風俗頽ー一」‖淳朴・淳樸・質朴。

【醇味】ジュンミ　よき酒のあぢはひ。梅堯臣詩「上樽ー一易二酔鄉一」

【醇醪】ジュンラウ　うまき酒、醪はにごり酒。漢書、貢禹傳「貢二石ー一」

【若レ飲二醇醪一】ジャクインジュンラウ　よき酒を飲む

が如く自然に其の人の德に化せらるるをいふ。吳志、周瑜傳「皆ㇾ人曰、與二周公瑾一交、——、不ㇾ覺二自醇一」公瑾は瑜の字。

【醇醪】ジュンラウ　○こきざけと、うすきざけと。○轉じて、風俗の厚きと薄きと。爾雅正義、序「——既異、步驟不ㇾ同」

【醇醲】ジュンノウ　○厚き清酒と、あまざけと。列仙傳、酒客贊「——殊ㇾ味」○濃厚なるあまざけ。杜預、酒論「亞醇——」

【醉】スヰ　圓　醉は俗字

○ゑふ、酒にゑふ「酣ㇾ——」「大ㇾ——」「泥ㇾ——」「昏ㇾ——」「歡ㇾ——」詩、大雅「既ㇾ——且ㇾ酒」○心が物に耽り迷ふ「心ㇾ——六經」○ゑはす。○ゑひ「宿ㇾ——」「買ㇾ——」

【醉翁】スヰオウ　酒にゑひて目がくらむ。劉因詩「昔涼蘇ㇾ洞骨、——學二記歐一」

【醉翁】スヰオウ　○酒にゑひたるおきな。○歐陽修の別號。鄒谷文「歐陽修自號二——一、作二——亭記一」

【醉翁亭】スヰオウテイ　安徽省滁縣の西南に在り、宋の僧智遵建つ、歐陽修滁州の知たりし時、此に飲宴して記あり。

【醉歌】スヰカ　酒にゑひてうたふ。王維詩「——田舍酒、笑憑古人書」

【醉鄉】スヰキヤウ　酒にゑひて、のどかかわくる。徐夤詩「錦里只聞消二——一」○酒鄉。

【醉眼】スヰガン　酒にゑひたる時のまなこ。蘇軾詩「——朦朧覓二歸路一」○醉眸。

【醉漢】スヰカン　さけにゑひたる男。開天遺事「李林甫語ㇾ事、如二——一懵語一也」○醉人。

【醉顏】スヰガン　酒にゑひたるかほいろ。白居易詩「春寒散二——一」

【醉吟】スヰギン　ゑひて詩をうたふ。鄒谷詩「紅藥黃花秋景覽、——朝夕在二吳川一」

【醉吟先生】スヰギンセンセイ　○唐の白樂天の號。唐書、白居易傳「居ㇾ官輒損、至無ㇾ立二功名一意、與二弟行簡一從ㇾ容敏中・安愛・東都所ㇾ居履道里、築ㇾ沼種ㇾ植、有ㇾ臺ㇾ有ㇾ樓、香山・鑿二八節灘一、自號二——一爲二之傳一」○醉吟居士。香山居士。白氏長慶集に、醉吟先生傳を載す。○唐の皮日休の號。唐才子傳「皮日休隱二鹿門山一、性嗜ㇾ酒、嘯ㇾ傲ㇾ詩、號二——一、又自稱二醉士一」

【醉狂】スヰキヤウ　○酒にゑひてくるふ。白居易詩「無ㇾ日花間不二——一」○圖ものずき（好事）

【醉鄉】スヰキヤウ　醉中の快樂を一種の別天地に比していふ。隋の王績に——記の文あり。曰く「醉之鄉二中國一、不ㇾ知二其幾千里一也、其土曠然無ㇾ涯、無二丘陵阪險一、其氣和平一撰、無二晦朔寒暑一、其俗大同、無二邑居室落一、其人甚清云云」○酒國。

【醉脚】スヰキヤク　酒にゑひてよろめく足。陸龜蒙詩「——從二蛾傾一」

【醉臥】スヰガ　酒にゑひてねむる。史、高祖紀「常從二王媼武負一貰ㇾ酒——、武負王媼、見二其上常有二龍、怪ㇾ之」○酣臥。

【醉月】スヰゲツ　月を觀つつ酒にゑふ。李白文「乘二羽觴一而——ㇾ」

【醉戶】スヰコ　酒のみ。白居易の自稱。皮日休詩、注「白樂天自稱二——一」

【醉語】スヰゴ　酒にゑひて語ることば。韓偓詩「——近二天眞一」

【醉筵】スヰエン　劉伶の自稱の皮日休詩、注「劉伶自稱二——一」

【醉殺】スヰサツ　酒によはせる、殺は助字。賀知章詩「——長安輕薄兒」

【醉人】スヰジン　酒にゑひたる人。西陽雜俎「如二——一」○醉士・醉客・醉漢。

【醉者神全】スヰシヤシンゼン　酒に醉ひたる人は私慾なし、故に其の精神全し。傳「皮日休隱二鹿門山一、性嗜ㇾ酒、嘯ㇾ傲ㇾ詩、號二——一、又自稱二醉士一」○居易詩「無ㇾ日花間不二——一」○圖ものずき（好事）

【醉鄉】スヰキヤウ　醉中の快樂を一種の別天地に比していふ。隋の王績に——記の文あり。曰く「醉之鄉二中國一、不ㇾ知二其幾千里一也、其土曠然無ㇾ涯、無二丘陵阪險一、其氣和平一撰、無二晦朔寒暑一、其俗大同、無二邑居室落一、其人甚清云云」○酒國。

【醉脚】スヰキヤク　酒にゑひてよろめく足。陸龜蒙詩「——從二蛾傾一」

【醉臥】スヰガ　酒にゑひてねむる。史、高祖紀「常從二王媼武負一貰ㇾ酒——、武負王媼、見二其上常有二龍、怪ㇾ之」○酣臥。

【醉月】スヰゲツ　月を觀つつ酒にゑふ。李白文「乘二羽觴一而——ㇾ」

【醉戶】スヰコ　酒のみ。白居易の自稱。皮日休詩、注「白樂天自稱二——一」

【醉語】スヰゴ　酒にゑひて語ることば。韓偓詩「——近二天眞一」

【醉筵】スヰエン　劉伶の自稱の皮日休詩、注「劉伶自稱二——一」

【醉殺】スヰサツ　酒によはせる、殺は助字。賀知章詩「——長安輕薄兒」

【醉人】スヰジン　酒にゑひたる人。西陽雜俎「如二——一」○醉士・醉客・醉漢。

【醉者神全】スヰシヤシンゼン　酒に醉ひたる人は私慾なし、故に其の精神全し。傳「皮日休隱二鹿門山一、性嗜ㇾ酒、嘯ㇾ傲ㇾ詩、號二——一、又自稱二醉士一」○居易詩「無ㇾ日花間不二——一」○圖ものずき（好事）

【醉聖】スヰセイ　酒を飲みて心の亂れざるを譽めていふ。酒德、李白每ㇾ醉輒七文、未ㇾ嘗羞二人日爲一——一」○醉生夢死】スヰセイムシ　何の爲す所もなく醉夢中に在りて一生を終る。程子語錄「雖二高才明智一、終身見聞、——、不二自覺一也」

【醉石】スヰセキ　陶淵明の醉後に眠りし石。廬山記「陶淵明所ㇾ居之栗里、有二大石一、淵明嘗醉二臥其上一、名曰二——一」

【醉鄉】スヰキヤウ　酒にゑひたる態度。白居易詩「野情遺二世累一、——任二天眞一」

【醉倒】スヰタウ　酒にゑひつぶれもの。岑參詩「斗酒相逢須二——一」

【醉罵】スヰバ　酒にゑひたる勢にてののしる。後漢書、班固傳「吏推呼之、奴二——一」

【醉飽】スヰホウ　酒にゑひ食にあく。後漢書、左慈傳「百官莫ㇾ不二——一」

【醉鄉】スヰキヤウ　酒にゑひたる容貌。白居易詩「——如二霜葉一、雖ㇾ紅不二是春一」

【醉筆】スヰヒツ　酒にゑひてかきし筆蹟。蘇軾詩「——蘧蛇走」○醉墨。

【醉朋】スヰホウ　酒のみなかま。法苑珠林「——近二法友一」○酒徒。

【醉眸】スヰボウ　醉眼に同じ。眸はひとみ。

【醉墨】スヰボク　醉ひて書きし筆蹟。歐陽修詩「新詩——時一揮」○醉瀋・醉筆。

【醉眠】スヰミン　酒にゑひてねむる。杜甫詩「秋沙敷坐穩、洛石——醒」○醉臥。

【醉夢】スヰム　ゑひてゆめみるゆめ。梁松年詩「枕上秋風吹——、門前沙鳥立二清深一」

【醉面】スヰメン　酒にゑひたるかほ。葛長庚

詩「月透二詩情一冷、風吹二酒興一涼」【酔樂】ヲ酒にゑひてたのしむ。常衰、謝二杜日賜二羊酒一表「一一空比二於窶人一、率平實慙二於漢相一」【酔態】スガタ　酔ひて臥する人に喩ふ。語林「紫邑飲レ酒、乃至二一石一、常酔在二路上一臥、人名レ之曰二一一」【酔而強レ酒】エヒテシヒフ　希望と實行と相反するに喩ふ。孟、離婁「惡二死亡一而樂二不仁一、是猶二惡レ酔而強レ酒」【酔如レ泥】エヒトロ　大いにゑひたる貌。泥は南海に生ずる骨なき蟲。異物志「南海有レ蟲無レ骨、名曰レ泥、在レ水則活、失レ水則酔、如二一堆泥一」李白詩「傍人借問笑二何事一、笑殺山翁酔似レ泥」＝混酔。

【酌】 タク　呉

酒ーはゑひたる貌。

【酸】 サン　テツ　テイ　寒　刪　霽

○諸神の座を聯綴して祭る。○酒をそそぎて地を祭る。

【酳】 ベイ　灰

○もろみざけ、にごりざけ、酒の未だ漉さざるもの「新ー」「村ー」杜甫詩「尊酒家貧只舊ー」○ゑひあく（酔飽）○醫か

もしわく、酒が熟する時わきたつ、醗酵する「醸ー」

【酥】 ラン　國

○ほしがき、藏柿。○ものつけもの。桃漬。○さはす。柿のしぶをぬく「ー柿」○俗に味淋の淋に誤用す。

【酥】 リョク・ロク　屋　沃

よきさけ、うまざけ（美酒・旨酒・芳醇）杜甫詩「喧呼且覆杯中ー」【酥酡】レイク　よきさけ。錢華紀聞「一一激二濁於清杯一」＝醴酪。

九畫

【酬】 コ　遇　國音ゴ

醍（本頁三段）を見よ。

【酵】 ショ　藥　滯に同じ

○したみざけ（醴酒）すみざけ。○よきさけ、うまざけ（美酒）「美ー」「清ー」庾信、燈賦「中山ー清」

【醒】 セイ　靑　迥　徑

○さめる、酒の酔が解ける。○夢がさめる「睡ー」「夢ー」○夢をさます。戴表剛詩「今日五風吹レ夢ー」○さとる、すべて事理の迷より覺に入る我。賈誼新書「昭然先寤乎所二以存一仁、故曰二先ー一」【醒悟】セイゴ　さとる。蕭穎士文「中心一ー、了無二遮蔽一」【醒寤】セイコ　ねむりがさめる。吳質文「一一之後、不レ識二所レ言一」【醒日】セイジツ　酒にゑはぬ日。醉日の對。晉書、孝武帝紀「湎二於酒色一、殆爲二長夜之飲一、一一既少、而後無二正人一、竟不レ能レ改焉」【醒酒石】セイシュセキ　唐の李德裕の平泉別墅に在りし醉を醒す石。唐餘錄「有二一一一、德裕尤所二寶惜一、醉卽置レ之」【醒然】セイゼン　さめたる貌。楊萬里詩「酒力欺人正作レ眠、夢中得レ句忽一ー」【醒目】セイモク　寢ねざるをいふ。梅堯臣詩「一一常不レ眠」

【酷】 タン　感

○ししびしほ（肉醬）○しほから。【酷蘇】カソ　ししびしほ、肉醬をいふ。詩、大雅「一一以腐、或燔或炙」

【醍】 ㊀ テイ・タイ　霽　㊁ テイ・ダイ　齊

㊀清酒ザケの紅色ならもの。禮、禮運「醴ー在レ堂」㊁ー醐ダイは牛酪の精純なる者、味甘美にして滋養に富む。轉じて佛性又、佛法の妙理に喩ふ。涅槃經「譬如從レ牛出レ乳、從レ乳出レ酪、從レ酪出二生蘇一、從二生蘇一出二熟蘇一、從二熟蘇一出ー醐、最上佛亦如レ是」法華經科註「如ー醐上味、純一無雜」○人品の粹美なるに喩ふ。唐書、穆寧傳「四子皆賢、貴兄弟皆和粹、世以二珍味一目之、貴少俗、然有レ格、爲レ酪、賢美而多レ入、爲レ蘇、員爲ー醐、儀爲二乳腐一云」【醍醐】ダイゴ　字解を見よ。

【醜】 醜（鬼部九畫）の俗字。

十畫

【醞】 ウン　オン　問　吻

○かもす（醸）酒を造る。○かもしたるさけ。王僧達詩「春ー時獻酎」○つくり成す、構成する。○しとやか、おくゆかし「ー藉」○溫・蘊に通ず。【醞月】ウンゲツ　酒を造る人。酒通考「紹興元年、潭州募ー一ー造レ酒」＝酒工。

【醞藉】ウンシャ おくゆかしくおだやか。寛博にして除あり。漢書、酷吏郅都傳「爲人温雅、有ニ―一レ」＝温藉・蘊藉。

【醞釀】ウンジョウ ○さけをかもす。醸造。後漢書、呂布傳「布怒曰、布禁ニ酒而卿等ー一レ○色と手をまはして罪を構成する。蘇軾、合浦狀「一ー百端、必欲レ致ニ臣於死一」○漸次に變ひ成す。蘇軾、時「一ニー老夫、成ニ搢紳一ニ○物事を程よく調和する。淮南、本經「其相嗢噦ー一、而成ニ育萬物一」

【醬】ショウ ヤイ 唐 呉

酒にふひてしくじり(酒失)わるさひ(酬)「注ー」「酬ー」

【醢】カイ 酸

○しほから、ししびしほ(肉汁肉醬)魚肉をきざみて鹽・麴・酒等にひけたるもの。○人體を鹽づけにする刑。呂覽、過理「殺梅伯而遣文王其ー」○にる(煮)

【醯】サ 歌

しろざけ(白酒)

【醜】シウ 有

○みにくし、容貌が見にくし、みめあしき人。後漢書、梁冀傳「狀肥ー而黑」美の對「ー惡」「妍ー」○心や行がけがれてきたなし。○しこ。にくむ。左、昭二八「惡直ー正」きらふ、にくみきらふべきもの、凶惡の者。○けがれ(汗穢)○はづ(羞)はぢ(恥辱)呂覽、慢人「蓋君子之所ー也」○たぐひ(類)○もろ(衆)○くらぶ(比)同類の者と比較する。禮、學記「古之學者、比ー物一類」○ひとし、おなじ(同)孟、公孫丑「地ー德齊」(地の廣さも德の大かも同じ)

同訓異字 醜・惡・醜・凶の別は惡(六六五頁四段)の條を見よ。○醜・惡・醜の別は惡(六六五頁四段)の條を見よ。

【醜惡】シウアク ○容貌がみにくし。漢書、五行志「形貌ー一」○心や行がきたなし。

【醜夷】シウイ ○衆くの同輩、醜に衆、夷は平、已と平等の者。曲禮「在ニ一不レ爭」○みにくきえびす、外國人をいやしめていふ。＝醜虜。

【醜行】シウカウ けがらはしき行ある男。○みにくき男。續雜纂「可レ惜、好女嫁ニ一一」

【醜鈍】シウドン かたちみにくくあやし。五代史、桑維翰傳「爲レ人ー一、身短而長」＝醜陋。

【醜婦】シウフ ぢごく。＝淫賈婦・野笑婦。

【醜黑】シウコク みめあしく色くろし。後漢書、逸民傳「孟氏有レ女、肥醜而黑」

【醜醜婦】シウシウフ みにくき女。東坡居士集「歐西趙明叔家貧、好レ飲、常云、薄酒酒醉ニ茶湯ー、――醉ニ洗足水ー其言雖レ俚而近ニ於達一」

【醜慮】シウリョ けがらはしくきたなくるしきうはさ、內行の修まらざる評判。漢書、賈捐之傳「頗有ニ一一」

【醜惡】シウアク はづべきさま。

【醜地】シウチ やせたる惡しき地。史、項羽紀「今盡王ニ故王於ー一」＝瘠土・瘠地・瘠壤。

【醜女】シウジョ みにくき女、しこめ。李白詩「ー一來效レ顰、還レ家驚ニ四鄰一」＝惡女・醜婦。

【醜詆】シウテイ 人をわるくそしる。罵詈する。漢書、楚元王傳「翠小寇ニ見聞隙ニ緣ニ飾文字ニ巧言ー一、流言飛文、譖ニ子貴閒一」

【醜徒】シウト 惡人のなかま。唐書、元結傳「ー一環居、在ニ四方ニ者、幾百萬」

【醜美】シウビ みにくきと、うるはしきと。後漢書、霍諝傳「傳曰、人心不レ同、譬如ニ其面一、斯蓋大小龐雜ー一之形、至ニ於鼻目衆毀毛髮之狀一、未レ有ニ不レ然者一也」＝美醜・妍醜。

【醜婦】シウフ みにくき女。吳志、華覈傳「極ニ粉黛一、窮ニ盛服一、未ニ必無ニ一一、寧ニ華采ニ去ニ文繡一、未ニ必無ニ美人一」

【醜聞】シウブン はづべきうはさの內行のみだれて修まらざるひやうばん。＝醜聲。

【醜態】シウタイ きたなくしてやぶれる。揚雄文「衛靈凡人衣被ー一、醜ニ之須捷一」

【醜末】シウマツ みにくき末裔、自己を謙する辭。南史、王薄傳「天恩所ニ覃、庶及ニ一一」

【醜名】シウメイ みにくき名。＝汚名、惡名。

【醜面】シウメン みにくきかほ。論衡「或以ニ一一惡色一稱」

【醜虜】シウリョ ○みにくきえびす、敵國人をいやしめていふ。胡銓、上高宗封事「劉豫臣事ー一」○衆くのえびす。後漢紀「仍執ニ一一」＝敵虜。

【醜類】シウルイ ○みにくきたぐひ。方、文十八「ー一惡物、頑靈不友」○衆くのなかま。左、定四「將ニ其ー一」註「醜、衆也」＝衆類。○類似の事を比べてさとる。禮、學記「古之學者、比ニ物一ー」

【醜慮】シウリョ みにくきと、うるはしきと。高適詩「與ニ世同ー一」＝醜美。

【醜陋】シウロウ ○心がけがいやしくけがらはし。＝醜陋・鄙陋。○容貌がみにくくいやし。＝醜怪・寢陋。

【醜輩】シウハイ みにくくして、けがれる。

隋書、宇文化及傳「所二共遊處一皆不遵之徒（中略）蒸淫ニー無レ所レ不レ爲」

十一畫

【醫】（一）イ　（二）イ　支　医　俗　又、醫に作る

（一）いしゃ、くすし（治レ病工）「名ー」「良ー」「牛ー」「村ー」「腐ー」「巫ー」○いやす、やまひを療治する。晉語「上醫ー國、其次救ニ人一」○轉じて廣く救ふ、なほして善くする義「ー湯」「一國」（二）のみもの（飲料）○うめず（梅漿）○あまざけ。○ー和は春秋の時、秦の良醫。

同訓異字　醫・痊・已・愈・瘉・癒・療の別は痊（一二八四頁）の條を見よ。

【醫院】イイン　病人を治療する家。

【醫學】イガク　病を治することを研究する科學。

【醫科】イクワ　大學の七科の一、醫學・藥學の二門に分つ。

【醫國】イコク　國の亂れたるをなをさめる。晉語「上醫ー レー、其次救ニ人一、國醫之官也」

【醫劑】イザイ　くすり。唐書、李逢吉傳「自料ニー ー、遂過ニ方書一」

【醫草】イサウ　もぐさ。本草「艾、一名冰臺、一名ー ー、一名黃草、一名艾蒿」

【醫師】イシ　○周代の官名、いしゃのかしら。師は長（醫長）周禮、天官、注「ー ー衆醫之長」○いしゃ（醫者）＝醫大夫（牙大夫は獸醫）

【醫者】イシャ　くすし、いし、病氣を治する人。＝醫師。

【醫匠】イショウ　醫生に同じ。いしゃ。

【醫術】イジュツ　病を治療する術。晉書、裴頠傳「通博多聞、兼明ニー ー一」

【醫書】イショ　醫學の書物。

【醫生】イセイ　○官學にて醫學を修める學生。唐六典「ー ー四十人」○俗醫師。＝醫匠。

【醫者意也】イヤノイ　醫術の奥義は、意を以て自得すべく口舌にて傳へ難し。因話錄「許胤宗名醫、人問何不レ著レ書、曰ー ー、脈之深趣、不レ可ニ言傳一」

【醫方】イハウ　病をいやす術。宋書、王微傳「兼解ニ音律ー ー陰陽術數一」＝醫術。

【醫伯】イハク　いしゃの美稱。＝醫手。

【醫不ニ三世一不レ服ニ其藥一】イハサンセイヒトヲフクセズソノクスリヲ　君父の病には三代もつづきて醫者をしてゐる程の經驗ある醫者の藥にあらざれば飲ましめず「曲禮」

【醫門多レ疾】イモンニオホシ　醫者の門前には、病者が多く集まる。莊、人間世「回（顏回）嘗聞ニ之夫子一、曰、治國去レ之、亂國就レ之、ー ー、願以レ所レ聞ニ其則一、庶ニ幾其國有一レ瘳乎」＝良醫之門多ニ疾人一「戰國、韓吉」

【醫鮮】イセン　あしきくせを治療する。伯固至詩「願余丘壑懶、大藥不ー レー」

【醫藥】イヤク　醫術と藥品と。又醫者の藥。史、三皇紀「神農氏嘗ニ百草一始有ニー ー一」

【醫埒】イラツ　醫術にて治すること「ー ー器械」

【醬】ショウ　㊥

○ししびしほ（醢）○しほづけ。○ひしほ、麥・麴・豆・米等をねかして鹽をまぜたる食料、菜肉などを漬ける料とするもの、みその類。論、鄉黨「不得ニ其ー一不レ食」○轉じて食物の搗きくだきて泥の如き者を皆ー といふ。齊民要術に鍛ー・魚ーを作る法あり。○ー油はしたぢ、むらさき。

【醬油】ショウユ　圖煮たる大豆に蒸ィりたる大麥と鹽とをまぜてかもしたる液、調味料として用ふ、したぢ。

【醥】ヘウ　㊥

すみざけ（清酒）「清ー」

【醪】ラウ　㊥

にごりざけ（濁酒）どぶろく「濁ー」「村ー」「醇ー」

【醪糟】ラウサウ　にごりざけと、糟食とを醸したるもの。

【醲】ロク　㊥

○うすきざけ（薄酒）醇の對。楚辭、漁父「衆人皆醉、何不ニ餔ニ其糟一而歠ニ其ー一」○轉じて人情の薄きにいふ。厚きを醇といふの對。醇ーは淳漓。

十二畫

【醯】ケイ・カイ　㊥　支

○すし（酸）す（醋）論、公冶長「或乞ニ ー焉一」○しほから、汁の多き醋レンジュ

【醯雞】ケイ　酒つぼなどにわく小蟲、かつをむしの列、天瑞「ー ー生ニ乎酒一」＝蠛蠓。

【醯雞甕裏天】ケイケイオウリノテン　かつをむしが酒のかめを以て天とする。見ると、ころの小なるに喩ふ。黃庭堅詩「老鮮胎中珠是胜、——幾大」

【醯醬】ケイシャウ　汁の多きししびしほの類、貨殖傳「ー ー千坡」

【醯醢】ケイカイ　こきざけ。轉じて醇厚なの義。仲長統文「ー ー之化既洽」

【醯】（一）セイ。　（二）セツ　㊥　薛

は糠ヒヤウ宋史、孫永傳「遼兵レ連レ營至二四十里一、永好謀レ之、嚴意解、但求ニー ー一、糒レ卻而旋」

㊀つくす(盡)○酒を供へて神を祭る。○酒を酌みて酬ゆることなし、古、冠婚の禮、皆之を用ふ。家語、本命解「禮無二再醮一之端一」（再ー は再婚）○倩又は道士が壇を設けて祈禱する。㊁やつれる、かじく。‖憔。

【醇】㊀タン ㊁タン 眞 諄 臻

㊀酒の味にがし。㊁あまし(甜美)厚き味。王褒賦「良ー一而有レ味」○こくしてよきさけ(醇)轉じて、てあつし。

【醇粹】あつくしてまざりけなし。左思、魏都賦「宅レ心ー一」‖純美・醇粹。

【醱】ハツ 曷

酒を重ねてかもす(重醸)李白詩「恰似二葡萄初一醗一」

【醱酵】酒母モトの作用により酒氣がわきたつ。發酵の轉訛。

【醭】ボク 屋

かび、酒又は他の物の腐りて生ずる白きかび。廣韻「醋生白ー一」楊萬里詩「梅天筆墨多生レ一」

十三畫

【醳】㊀エキ・ヤク ㊁セキ・シャク 陌 陌

㊀よきさけ(醇酒)○にがきさけ(苦酒)○ねぎらふ、酒食を以て兵をねぎらふ「ー一兵」○ふるざけ(昔酒)○としこしざけ、冬かもして春熟する酒。㊁ゆるす、とく。釋の古字。史、張儀傳「兵執張儀掠笞數百不レ服ー一之」

【醳兵】酒食を以て兵士をねぎらひ養ふ。史、淮陰侯傳「百里之內、牛酒日至、以饗二士大夫一ーレ一」

【醵】キャク 藥 御

○金錢を出し合ひて飲食する。又、其の金錢。又、其の飲食物。○轉じて或目的の爲めに金錢を出し合ふ。

【醵金】金錢を出し合ふ。輟耕錄「今之遊レ居者、鄰里一レ一レ治レ具、過二主人一飲、謂二之打ー一風一」

【醲】ヂョウ ノウ 多

○こきさけ(厚酒)「醇ー一」「村ー一」○こし、こまやか。‖濃。○味が濃厚なり、又其の味。○てあつし(厚)多し。後漢書、馬援傳「明主ー一于用レ賞、約二于用一レ刑」

【沈二沒醲郁一】ノウイクニ ヂョウイクニ 濃厚なる味にいりびたりになる。酉中の妙所を十分に玩味するに喩ふ。韓愈、遇李解「ー一、含レ英咀レ華」

【醨】レイ ライ 霽

○うまきさけ(甜酒)○ひとよざけ(一宿酒)あまざけ(甘酒)「甘ー一」「芳ー一」莊、山木「君子之交、淡若レ水、小人之交、甘若ー一」○美くして甘き水の出る泉。

【醴泉】レイセン あまざけ。列子「公孫朝好レ酒、朝之室、聚レ酒千鍾、積レ麴成レ封、望レ門百步、ー一之氣、遂二于人鼻一」

【醴酒】レイシュ あまざけ。漢書、楚元王傳「ー一不レ設、王之意忘、不レ去、楚人特レ酣二我於市一」（ー一不レ設とは、師を待つ禮の衰ふるをいふ、初め楚の元王、申公等を敬禮す、穆生酒を嗜まず、元王置酒する每に、常に爲めに醴を設く、王戊位に即くに及び、常に設く、後設くることを忘る、故に穆生此首あり）

【醴泉】レイセン あまきあぢのいづみ。禮、禮運「天降二膏露一、地出二ー一一」‖甘泉。

【醴泉銘】レイセンメイ 即ち九成宮ー一、唐の貞觀六年、太宗暑を九成宮に避け、泉を得て甘し、因りて醴泉と名づけ、魏徵に敕して銘を撰ばしめ、歐陽詢之を書して石に刻す、宮は今の陝西省麟遊縣に在り、廢圮已に久しく、石尚は在り、其の書法は唐楷第一と爲す。

【醴酪】ライラク あまざけと乳酪と。禮、禮運「以爲二ー一一」

十四畫

【醺】クン 文

○ゑふ(醉)「微ー一」「餘ー一」杜甫詩「愁多任二酒ー一」ゑはす。○酒を飲みて酒氣がぶんとする。○ー一は酒にゑひて和悅する貌。岑參詩「青門酒樓上、欲別醉ー一」

【醻】シウ 尤

むくゆ(報)主人が客に返杯する「ー一酢」詩、小雅「鐘鼓既設、一朝ー一之」‖酬（ー一酢は酬酢）

十六畫

【醾】實（四九二頁四段）に同じ。

十七畫

【釀】 ジョウ 漾

○かもす(醞)酒を造る「一造」○轉じてさけ(酒)をいふ「家一」「村一」「春一」「新一」○つくり成す、構へ成す「一禍」「一怨」薛載詩「醞一老夫成揖緋」

【釀熟】ジョウジュク さけをつくるかめ。唐書、石勒像「反接置二一甕中一、曰、令二姬骨醉一數日死」

【釀具】ジョウグ 酒を造る道具。世說「蜀禁レ酒、東得二人一一、欲レ罪レ之」

【釀造】ジョウゾウ 酒・醤油などをかもしつくること。日葡辭書。

【釀酒】ジョウシュ さけをかもす。史、孟嘗君伝「乃多一レ、貿二肥牛一、烹二羣文一「面縛銜レ璧、牽レ羊、釀レ酒、甘二于物醴一」杜甫詩「石泉春一レ、松火夜煎レ茶」

【釀費】ジョウヒ さけをかもす費用。唐書、食貨志「凡天下権レ酒爲レ錢百五十六萬餘緡、而一一居三三之一一」

【釀母】ジョウボ 酒をかもすもと。日酒母・酵母・醸母酒。

【釀工】ジョウコウ 唐の汝陽王璡の自稱。醉仙記「汝陽王璡家有二酒法一、號二甘露經一、自稱二一一一業醇部尚書一」

【醸】 ビ 支 又、釀・醸に作る

○酢一ビはにごりざけ、麥酒の滓を去らざるもの(濁醪)○重ねてかもしたるさけ(重醸酒)○蘖生の灌木、初夏花開く白くして微に香あり。歲時記「本酒名、以花色似レ故名」日茶麈。

【醸】 釀(前條)に同じ。

【醴】 レイ 青 又、醽に作る

○こしざけ(澁酒)○よきさけ(美酒)

【醴酸】レイサン よきさけ。抱朴子、嘉遁「安泉日一一」日醪洗。

十八畫

【釁】 キン 震 或は衅に作る

○ちぬる。ちまつり(血祭)牲などの血を器に塗りて神を祭る。孟、梁恵王「將レ以二一鐘一」○きず(瑕)「瑕一」「疵一」○ひま、すきま(隙)左、桓八「釁有レ不可一失也」○なかたがひ、不和、怨隙。○香料をからだに塗る、香にてふすべる。齊語「三一三浴之一」○つみ(罪)「罪一」「過一」○きざし(兆)「妖一」○うごく(動)左、襄二六「夫小人之性、一於勇」

【釁動】キンドウ 敵のすきまをうかがひて兵を動かす。次條參看。

【釁乘】キンジョウ 乘ずべき敵のすきまをうかがふ。左、宣十二「用レ師一一レ釁・隙レ釁。

【釁隙】キンゲキ すきま。轉じてなかたがひ。世說補「張承相與レ吾一一甚深」日釁部。

【釁レ鼓】キンスルコ 古戰爭の時に、牲を殺して祭り、其の血を以て鼓に塗る。左傳「君以軍行、祓レ社一レ一レ、史、高祖紀「祭二蚩尤於沛庭一而一レ一」

【釁レ鐘】キンショウスル かねに牲の血をぬる。孟、梁恵王「牛何之、對曰、將二以一一一」

【釁端】キンタン あらそひのいとぐち。春秋胡傳「楚子不レ假二道于宋一、以啓二一一兩國之一」日糾端。

【釁浴】キンヨク 身にぬりふすべ、湯にて身を洗める。釁は上の齊語「比レ至二三釁三浴之一」日三浴三薰。

【醻】 セウ 嘯

杯の酒を飲み盡す。曲禮「長者舉未一、少者不レ敢飲」註「盡レ辭曰一」

十九畫

【釅】 ゲン 豏

○す(酢漿)○こきさけ(醲)

【釅茶】ゲンチャ 濃きちや。脂月錄「仰山禪師曰、一一二兩薤、煮在鍋頭湯」

【釅】 シ・ジ 魚 紙 寘

○こす、したむ、漉にて酒をこす。○わかつ(分)漢書、溝洫志「乃一二渠以引其河」

【釅酒】シュ ○酒を漉にてこす。詩經「一一有レ酒」○酒を分ちつぐ。宋史、曹琮傳「懷以二恩信一、擊レ牛一一犒レ之」

【釅】 ゲン 霰

○す(酢漿)○こきさけ(醲)

【釅茶】ゲンチャ 濃きちや。脂月錄「仰山禪師曰、一一二兩薤、煮在鍋頭湯」

釆部

【釆】 ヘン ベン 辨の本字

○わかつ(辨別)わかる。○ノ米の義、漢字の字畫上の稱。悉・審・釋等の字、皆此に从ふ。

一畫

【釉】 ㊀ サイ ㊁ サイ 隊 泰

㊀とる（採）「樵ー」手に取る、爪にてもぎとる（採取）詩、周南「ー＝卷耳」○えらぶ（擇）○こと（事）しごと。やくめ、官職。書、堯典「疇咨若予ー」○かたち、やつす「風ー」○あや、もやう（文章）○かざり（飾）○いろどり。彩に通ず「ー色」○はかば（墓地）○ぬさ（幣）彩色せる帛。綵に通ず。○ちぎゃうしょ（知行所）「ー地」「ー邑」臣下の領地、食邑。禮、禮運「大夫有ー、以處子孫」○くぬぎ（櫟木）○すごろくの骰子ッ○ーは多くある貌。又、華やかに飾れる貌。又、盛んなる貌。㊁ちぎゃうしょ。○つかさ。○古、菜に通ず。周禮、春官「春入學、舍ー合舞」舍ーは釋菜。○國ー配ーは昔の戰具、細長き紙のたばに勝軍木ノの柄をつけたもの、兵を指揮するに用ふ。

通字　采は採取ニなり、爪に从ひ木に从ふ。采（前條）とは別。

同訓異字　采・採・取・執・菓・把等の別は取（二九三頁二段）の條を見よ。

【采衣】ノイ　いろどりたる衣物。儀禮、注「ーー、未ル冠者所レ服」＝綵衣。

【采邑】ノイ　采地に同じ。＝食邑・封邑。

【采旗】ノイ　いろどれるはた。東觀漢紀「段熲爲二幷州刺史一、曲蓋ーー」

【采芹】ノイ　學校に入る義。詩、魯頌「思樂二泮水一、薄采二其芹一」とあるに本づく。泮水は泮宮（諸侯の學舍）の東西門以南に通ずる水。＝入泮。

【采菌】ノイ　きのこをとる。賈島詩「ー レー依二餘耕一、拾レ薪逢二刈田一」

【采翟】ノイ　いろどれるる。諸葛亮文「翡翠飛眉冠雲、宛然如ニーー者一」

【采幟】ノイ　いろどれるしぼり。宋祁詩「鮮妝耀二綠酒一ーー生二風瀾一」

【采采】ノイ　○とりとる、重ねて多く取る。詩、周南「ーー芣苢」○盛んなる貌。詩、秦風「蒹葭ーー」＝萋萋。○衆を貌。詩、齊風「ーー衣服」＝鮮潔。

【采詩】ノイ　民間に行はるる歌詩をとりあつめて風俗を察し、施政の參考とする。漢書、藝文志「古有ニーー之官一、王者所レ以觀二風俗一、知二得失一、自考正レ也」

【采集】ノイ　とりあつめる。采、俗に採に作る。劉歆文「子雲獨ーニ先代經書、異國殊語一、以爲二十五卷一」

【采料】ノイ　○とりあつめる。宋史、楊徽之傳「詔二李昉等一ーニ前代文字一、類爲二文苑英華一、以三徽之精於風雅一、分命編レ詩、爲二百八十卷一」○廩を給ひて糧料と爲す。李白詩「國人賢二素手一、ーー作二綿裕一」

【采薪之憂】ノイシンノ　病を稱する謙辭、病みて薪を採ること能はざる義。一說、薪を采る爲めに疲れて病む義。孟、公孫丑「有ニーー之憂一、不レ能レ造レ朝」

【采色】ノイ　○五色をとりまぜたる美くしき色どり。孟、梁惠王「抑爲ニーー不ニ足レ視二於目一與」○かほいろ、顏采顏色。

【采色不定】ノイシキフテイ　喜怒常なきをいふ、采色は顏色。莊子「采色不レ定、常人之所レ不レ違」

【采飾】ノイショク　いろどりかざる。西京賦「設其館室次舍、ーー繼辟」

【采摭】ノイセキ　ひろひ取る。文心雕龍「ーニ英華一」＝摭拾・採拾。

【采石磯】サイセキキ　牛渚山の下の江中に突出せる磯の名、宋の虞允文が大金の軍を敗りし處。

【采色】サイシキ　五色にていろどれるふだ、詩などを書く。いろどれる紙、牋は箋。＝華箋・五色牋（唐書、韋陟傳）

【采地】サイチ　卿大夫のちぎゃうしょ（知行所）采は官、官によりて地を食む義。漢書、刑法志「此卿大夫ーー之大者也」＝食邑・采邑。

【采女】サイジョ　○漢代の女官。采擇せし女の義。後漢書、皇后紀論「置二美人宮人ーー三等一」○國ノ古、後宮にて御膳のことに預かりし女官の稱。

【采擷】サイケツ　采即ち摘ノの錦カンを施さざるたるき。一說、山より伐採し來りしままのたるき。質素なる建築の義。韓非、五蠹「堯之有二天下一也、茅茨不レ翦、ーー不レ斲」＝採擷。

【采配】サイハイ　國大將が士卒を指揮する時にもちふる具、さしづばた、ざい。

【采芳】サイハウ　香はしき草をとる。陳陽詩「吳洲ーー客、桂棹木蘭船」

【采菽】サイシュク　いろどれるはた。禁辭「縱二ーー兮、五色雜而炫耀」

【采薇歌】サイビカ　周の武王殷に代りて立つに及び、伯夷・叔齊、周の粟を食ふことを恥ぢ、首陽山に隱れ薇ビを采りて食ひ、死に臨みて作りし歌。史、伯夷傳「武王已平二殷亂一、天下宗レ周、而伯夷叔齊恥レ之、義不レ食二周粟一、隱二於首陽山一、采二薇而食一之、及二餓且死一作レ歌、其辭曰、登二彼西山一兮、采二其薇一矣、以暴易レ暴兮、不レ知二其非一矣、神農虞夏忽焉沒兮、我安適歸矣、于嗟徂兮、命之衰矣、遂餓二死於首陽山一」

【采蘋】サイヒン　詩經の篇名。大夫の妻が、文王の化を被りて能く祭祀に奉ずることを言ふ。蘋は水草の潔くして神に薦むべきもの。

【采萍】サイヘイ　うきくさをとる。李華詩「自言浮二水曲一ーレー被采レ稚」

【采葑】サイフウ　詩、邶風「ーー采ル葑」

【采毛】サイモウ　いろどりあるけ。射雉賦「率ーー之英麗兮、有二五色之名一」

【采名】サイメイ　ほまれをとる。漢書、終軍傳「將幸二詩不ニ加、欲二以ーー一也」＝手柄。

【釆用】ヨウ、えらびとりもちふる。後漢書、馬防傳「數百ニ政事ヲ多見ニ―一」＝採所。

五畫

【釉】イ。

○つや、ひかり（光澤）○陶器にかけて光澤を生ぜしむる藥、うはぐすり「一藥」＝油。

十三畫

【釋】㊀セキ・シャク　㊁エキ　陌　陌

㊀とく（解）意味を解きあかす。ときあかし「注―」「解―」「―義」○すてる（捨）管子、霸形「―賓而攻鹿」―堅而攻麗」やめる（壓）○きゆ、とける（消）「冰―」「消―」○緩ハれる。○ゆるむ（緩）○ちる（散）散らす。漢書、谷永傳「懇―皇太后之憂慍」○ゆるす（舍）○はなつ（放）「―放」○はづす、ぬく。ぬがす。○さる（去）○いる（發射）○のこす（遺）○うるほふ（潤）○米をとぐ（淅米）詩、大雅「―之舟之臾臾」傳「―、淅米也」○したがふ（從）○さとる（悟）○おく（置・舍）「―菜」「―奠」○―迦ハ佛の稱號、釋迦牟尼。略して―といひ、轉じて廣く佛法又は僧家の稱とす「―教」「―氏」㊁よろこぶ（悅）「懌―」＝懌。

関連熟語　釋・赦・寫・卸・免・許・放・縱・原・免等の別は赦（一八八四頁二段）の條を見よ。

【釋菜】セキサイ　牛羊等の肉を供へず、菜蔬の類を供へて孔子を祭るをいふ。學の經きもの。禮、文王世子「始立ル學者、既興ル器用ノ幣、然後―レ」（興は釁ヲ）＝舍菜。

【釋奠】セキテン　二字共に置く義、供物を神前にささげ置きて孔子を祭る禮。禮、文王世子「凡學春ノ、―ニ―于其先師ニ（先聖先師ヲ）―之」我國にては文武天皇の時に始り、陰暦二月・八月の上の丁日に大學寮にて行ひ、十哲を配祀す。

【釋褐】シャクカツ　褐は賤者の着るもの、之を釋ぎて官服を着くる、始めて仕官する義。揚雄、解嘲「或―レ而傳ニ正宇通ニ士初入仕、謂ニ之―一」

【釋甲】シャクカフ　よろひをぬぐ。左傳「公徒―レ」

【釋憾】シャクカン　心に怨恨する所あり、事に因りて之を消釋するをいふ。左傳「請君―ニ―于宋」

【釋菜】シャクサイ　禮義をときあかす。北史、課才を命ぜ「高祖ニ前ニ―、尤精ニ―一」＝解義。

【釋教】シャクケウ　釋迦のをしへ。高僧傳「周孔所ノ皆、略ホ二近迹ニ至テ于―一、開ニ備極ニ幽微ニ」＝佛教・佛法。

【釋尊】シャクソン　いひわけする。國語「使ニ行人季斯―ニ―於齊」

【釋像】シャクザウ　釋迦カシャの肖像。爲宇、遊ニ攝山ニ記「殿後有ニ石浮圖ニ、數丈、極精巧、磬ニ―於上ニ寸許者、眉髮皆具」

【釋藏】シャクザウ　大藏經をいふ、宋・元・明皆雕本あり。八千五百三十四卷。

【釋子】シャクシ　出家をいふ。＝僧徒・僧侶・沙門。

【釋氏】シャク　○佛、釋迦如來。皆書、何充傳「何充與ニ弟準ニ崇ニ―一」○佛家、佛徒。王惲詩「慈恩―尊」

【釋旨】シャクシ　佛教のむね。張協詩「高談窮ニ―一、清思挽ニ奇流ニ」

【釋然】シャクゼン　○心がさっぱりと爽かになる貌。○心がうちとける貌。莊、庚桑楚「南面而不ニ―一」

【釋迹】シャクセキ　釋迦牟尼世尊の略。

【釋智】シャクチ　智識をすてる。賈誼、鵩賦「―レ―遺レ形兮、超然自喪」＝捨レ智。

【釋耒】シャクライ　かたき所をすてる。管子、霸形「釋レ堅而攻レ脆、―レ―而攻レ易」

【釋放】シャクハウ　罪人をゆるしはなつ、放免する。吳志、呂蒙傳「誅ニ其首惡ニ、餘皆―一、復爲ニ平民ニ」

【釋法】シャクハフ　おきてをすてる。韓非子「人主―レ用レ私、則上下不レ別矣」

【釋奠】シャクヤウ　ほとけ。梁簡文「――尊ニ其身光ニ」

【釋名】シャクメイ　書名、八卷、後漢の劉熙著す、訓詁に倣ひて訓詁を說明す。

【釋門】シャクモン　佛の道を奉ずる者。＝緇門・佛門。

【釋耒】シャクライ　すきをすてて田を耕すをやめる。史、酈食其傳「兩雄不ニ俱立ニ、楚漢相持不レ決、百姓騷動、海內搖搖、投ニ―レ―、工女下レ機ニ」＝輟耒。

【釋老】シャクラウ　釋迦と老子と。又、其の道。周書、武帝紀「三論ニ―一義ニ」＝佛老。

【釋迦】シャカ　○印度の一種族の名。○佛教の開祖―牟尼メニの略。幼名は悉達タ。周の穆王の時に生る。父は淨飯王、北印度の迦毘羅城の主たり、母は摩耶夫人。＝釋加文佛・釋尊。

里部

【里】リ

○さと、むらざと「村―」「田―」「邑―」○周代の行政區劃、二十五家の稱「鄰―」周禮、地官「五家爲ニ鄰、五鄰爲ニ―一」○むど

ころ「郷ー」○みちのり「ー程」「道ー」三十六町を一ーとす。支那の一ーは我が凡六町。○うれふ（憂）悒に通ず。詩、大雅「瞻卬昊天云如何ー」○蒿ーサウ は葬を送るにうたふ歌。○古、夫が妻を稱して郷ーといふ。南史、張彪傳「我不忍令郷ー落它處」圖○、嫁壻などが己の舅家を稱する語。○子の養育を託する家「ー子」「ーにやる」

【里尹】リヰン 里正に同じ、尹はつかさ。

【里閭】リリョ 郷里。「ー一、閭胥里宰を謂ふ」

【里巷】リカウ むらざとの巷路、郷子の集る所。「ー相慕悦」

【里閈】リカイ 里門に同じ。閈は閎、郷里の義とす。後漢書、魏武侯郷傳「願四先武二同ニーー」＝里閭。

【里居】リキョ ○官を辞めて田里に居住する、致仕者をいふ。書経「百姓ー一」○人家の相連りて居る處。「人不二井処一」

【里君】リクン 里長に同じ。論語「邑乃命二百姓一遷二宇於家一、閭宰ーー、以為二己之畜一」＝村長・里宰。

【里諺】リゲン なかのことわざ。流布、賢諺作「ーー曰、欲レ投レ鼠而忌レ器、居善論也」

【里機】リキ いちりづか。王貨文「自レ此入レ山、詰曲登陟、無二復ーー一」

【里耳】リジ 俗人のみみ。莊、天地「大聲不レ入二於ーー一」里一に、俚に作る。

【里人】リジン むらざとの人。莊、庚桑楚「ーー有レ病」

【里社】リシャ 里中にて土地の神を祭るやしろ。史、封禅書「民ーー各自財以祠」漢書、陳平傳「里中社、平為レ宰、分レ肉甚均」

【里塾】リジュク 村の學校。仕昉文「郷校ーー、脩レ誦二五篇一」＝村塾・郷塾・村學。

【里胥】リショ 村やくにん、賀循小役人。唐志「ーー掌里正之事一右胥一」＝村吏・村役。

【里数】リスウ みちのりのかず。元史、地理志、有二驛ーー一而去者少」

【里正】リセイ むらのをさ。杜甫詩「去時ーー高堂頭」＝里長・村長・村官・里尹。

【里俗】リゾク むらざとのならはし、むらざとの風俗。

【里長】リチャウ さとのかしら。古、二十五家を一里としてーーを置く。＝里宰・里胥。

【里程】リテイ みちのり「ーー標」＝道程・路程。

【里布】リフ 周代の制度、宅地に植林せざる者より出さしむる税（周禮、地官）

【里門】リモン ○さとのもん。史、萬石君傳「入ーー趨至レ家」＝里閭。○轉じて郷里の義。

【里落】リラク むらざと。後漢書、孫期傳「ーー化二其仁讓一」＝村落・邑落・閭里。

【里閭】リリョ ○さとのもん。左思、魏都賦「班レ之以ーーー」＝里門。○むらざとの陌。顔延年詩「著到二清潭畔一、倘風懐ーーー」＝閭里・里巷。

【重】二画 里

㊀チュウ 東 ㊁チョウ 冬 ㊂ヂュウ 遇

㊀おもし。輕の對。禮、王制「輕任并ー任分」○あつし（厚）おもおもしくおちついてゐる。輕率ならず「ー厚」「慎ー」「嚴ー」「威ー」「沈ー」論、學而「君子不ー則不威」○はばかる（難）漢書、淮南王傳「文帝ー自切責之」○すなほ、まめやか。○たふとぶ（尚貴）おもんず。○ます（益）○しばしば（數）○ふかし（深）○はなはだ（甚）禮、檀弓「壽似ーー有」憂者」○おほいなり（大）○ただし（眞）○おもさ。又、おもきもの。○にもつ。○のろし、ゆるし（緩）○よし（善）㊁おほし（多）○かさぬ（複・累）かさなる「ー疊」「ーー」「ー陽」○はらむ（孕）「身ー」○おくて、穀物の後れて熟するもの。○圖かさなるものの其の一つ「三ー」「七ー」

【重衣】チョウイ ○ころもをかさねる。○ころものかさね。陳隋詩「朝風無ーー漾馬飢月寒」＝襲衣。

【重位】チョウヰ 貴く重きくらゐ。後書、常紀傳「有二経才一而無ーーー」＝高位。

【重圍】チョウヰ いくへにもとりかこむ。劉長卿詩「手中無二尺鐵一、征敵ー衆ーーー」

【重閨】チョウケイ ○幾重にもかさなれる門。○奥深き宮殿。曳志、貫郡傳「酒二歳ーー之内一」＝深宵。○舅父舟の橋。又はお隣りといふの對。

【重瞳】チョウドウ ○かさねぶとん。瞳はしきもの。宋史、趙普傳「設ーー地坐、常中藏レ書」○虞舜瞳子を重ねる。

【重瞳】チョウドウ 禾穂の末の重く熟したる義。陸機詩「嘉禾垂ーーー」

【重要】チョウエウ 大切・大事。

【重淵】チョウエン 極めて深きふち。九淵（六六頁二段）参看。

【重楹】チョウエイ かさなりたるのき。唐世南詩「萬瓦宵光曜、ーー夕靄敷」＝層楹。

【重綫】チョウセン 圖二重のえんぐみをする。親類同士にて重ねて縁を結ぶ。＝重親。

【重恩】チョウオン おもきめぐみ、高大なる恩。魏書、李崇傳「受二國ーーー」＝

大恩・鴻恩。

【重剛】ヂウガウ 剛の過ぎたる義。易、文言「一一而不ㇾ中」

【重客】ヂウカク 身分ほき客。漢書、高帝紀「賜ニ一一一」＝尊客。

【重閉】ヂウヘイ かさなりたるとびら。晉書、宋纖傳「高樓ニ一一、不ㇾ見ニ人物ㇾ」

【重光】ヂウクワウ ○明徳の君が相つぎて世に出る。書、顧命「文王武王寛ニ一一」○十干の辛の異名。爾雅、釋天「太歳在ㇾ辛、曰ニ一一ㇾ」＝昭陽。

【重紙】ヂウシ おつきわたいれ。補遺詩「豈ㇾ無ニ一一、誰與同ニ茂實ㇾ」

【重訪】ヂウハウ かさねて再びゆく。晉書、王羲之傳「代ㇾ通ニ此一書ㇾ、遂不ニ一ㇾ」

【重慶】ヂウケイ ○親父母・父母倶に存生するをいふ。禮論、攷異集「親父倶存者、今曰ニ一一」○地の府名。宋代に置く、四川省に屬す。今の巴縣は其の舊治。

【重言】ヂウゲン ○同じ戒昧のことを重ねていふ。○同字相重なる語。疫・洋洋・穆穆の如し。

【重肝】ヂウカン 足にたこができる。韓、天道「百舍ニ一而不ニ重趼ㇾ」＝重繭。

【重繭】ヂウケン おもて同じ、おもきおきて。晉書、呂光載記「縛刑ニ一、非ニ明王之義ㇾ」＝重典。

【重繭】ヂウケン ○足がきずつき、皮しわだちて、胼胝の如くなる。戰國策「足ニ一、而不ニ存息ㇾ」＝重趼。○綿入をかさねてきる。左、襄二一「ニ一衣裳」

【重午】ヂウゴ 重五に同じ。午と五と音通。貫休に「ニ一客中詩あり。」＝端午。

【重五】ヂウゴ 陰曆五月五日の前句。＝端午・重午。

【重厚】ヂウコウ おもおもしく、てあつし。史、高祖紀「周勃ニ一少ㇾ文」

【重載】ヂウサイ おもきにもつ。王惲詩「安得浮ニ一一、通清越二齊魯一」

【重創】ヂウサウ ○きずの上にきずをかさねる。殺。梁傳「古者不ㇾ重ㇾ、不ㇾ爲ニ二毛一」○おもききず。北史、宇文福傳「臨子延渥戰、身被ニ一ㇾ」＝重傷。

【重三】ヂウサン 陰曆三月三日の前句。張說詩「舟春三月日ニ一」＝上巳。

【重任】ヂウニン 重要の任ぬを帶びたるつかひ。班固文「數出ニ一、前後相屬」

【重酬】ヂウシウ 厚く相報ずる。左傳「衛侯欲ㇾ以ニ孔悝一酒于平陽ニ一ㇾ之」

【重囚】ヂウシウ おもき罪を犯したるとらはれ人。宋史、李衡傳「衡知ニ深陽縣一、以ニ誠意一化ㇾ民、歷任四年、獄中無ニ一ㇾ」

【重十】ヂウジフ 十月十日。陸龜蒙詩「前臨ニ一慶天、第二注、陳宇本五月五日生、以ニ俗忌一移ニ十月十日一、故有ニ一之句」

【重身】ヂウシン 身おも、はらむ。妻間二婦人ニ一」

【重親】ヂウシン ○重縁に同じ。○親父母と父母とを併せていふ稱。漢書金磾傳「一一致ㇾ慢」

【重賞】ヂウシャウ てあつきほうび。三略「一一之下、必有ニ勇夫ㇾ」

【重髓】ヂウスイ さかづきをかさねる。陶潛詩「賦酌朋情遠、一ㇾ一忽ニ夕天ㇾ」＝累觴。

【重出】ヂウシュツ かさねて出る。論語、義前「此章亦見ニ一一ㇾ衆賢文「記憶謂、卷各次前、類皆ニ一一」

【重衾】ヂウキン 厚き大そら。衾はそらの意。詩、翔風傳「一一ニ一ㇾ」＝九天・九霄。

【重寃】ヂウエン ○おもくせめる。抱朴子「以ㇾ少凌ㇾ長、則罹ニ重加ニ一一ㇾ」○重き責任。＝重任。

【重積】ヂウセキ かさねつむ。唐書、嚴挺傳「錢二萬餘緡、寘ニ于家ㇾ、以ニ一一留ニ置ㇾ物、一ニ其上ニ」＝累積。

【重舌】ヂウゼツ 通譯をかさぬる遠方のえびす。張衡、東京賦「一一之人九譯、各慕ニ内向ㇾ來」＝重譯。

【重泉】ヂウセン ○深きいづみ。淮南子「我ㇾ水ニ一、命曰ニ重泉之所ㇾ便也」○地下の義、死者の居る所。＝黄泉・泉臺。

【重頭】ヂウトウ かさねてにる。屈氏歷經「當下以ニ一一者ニ爲ㇾ良」

【重遷】ヂウセン うつるをはばかる。易林「安居ニ一ㇾ、不ㇾ去ニ其廬ニ」

【重鎖】ヂウサ 幾重にも設けし城の關。吳志、任旭傳「越ニ渡一ニ一、逃疾若ㇾ飛」

【重擔】ヂウタン おもき荷物。遺華經「如ㇾ持ニ一ニ」＝重荷・重負。

【重重】ヂウヂウ ○かさなれる貌。張說詩「便蒿ニ一掃ニ瑞雲ニ」＝層層。○幾重のかさなる貌。張籍詩「葉間除露翠ニ一」○深く心に思ふ貌。隋煬帝

詩「遠遊兮一一」○圓ヂウかさねがさね「一一不都合」

【重腫】ヂウシュ　屈のはれる病。脳氣の類。左、成六「有二沈溺一一之疾一」‖屈腫。

【重訂】ヂウテイ　かさねてただす。‖再訂。

【重鼎】ヂウテイ　おもきかなへ。禮、儒行「引二一一一一不レ程二其力一」

【重聽】ヂウチョウ　耳が遠くして幾度も聞きかへす。もと漢書、循吏傳「許丞廉史(中略)一一何傷」

【重畳】ヂウデフ　いく〳〵にもかさなる。後漢書、顯宗馬后紀「皆親二富貴之家一、尊位一一、猶二再實之木一、其理必傷」‖疊疊。

【重典】ヂウテン　○きびしき法律。周禮、大司寇「刑二邦國一用二一一一一」‖嚴法。○おもき儀式。‖大典。

【重剋】ヂウコク　かさねてはかり考へる。左傳「傳二執事一一七之」

【重瞳】ヂウドウ　二重のひとみ。史、項羽紀「吾聞二之周公一曰、舜目蓋一一子、又聞項羽亦一一子、羽豈其苗裔耶」

【重徳】ヂウトク　てあつくおもおもしき徳行。漢書、車千秋傳「居二丞相位一、德厚有二一一一一」

【重荷】ヂウカ　かさなりあひたるはなびら。梁都賦「華蓮一一而倒披」

【重寶】ヂウホウ　○たふときたから。家語「一一以悅二其心一、卑レ辭以導二其禮一」○圓便利よきもの「一一の品」

【重負】ヂウフ　おもに。後漢傳「昭公出奔、民如レ歸二一一一一」‖重任。

【重複】ヂウフク　かさなる。晉書、桓沖傳「表曰、臣細較二晉滅何守衛一一一」

【重幣】ヂウヘイ　○手厚き贈りもの(左、襄公二四)○贈物を多くする。○目方の重き貨幣。周語「作二一一一一」

【重辟】ヂウヘキ　重きつみ。辟は罪(陳書、孔奐傳)‖重科・重罪。

【重民】ヂウミン　農業をなすたみ。管子「輕民農商一一散」注「一一謂二務レ農者一一」(輕民は商人)

【重明】ヂウメイ　○日月ならび輝りて光明をかさねる。易、離卦「日月麗二乎天一、百穀草木麗二乎土一、一一以麗二乎正一」○轉じて君臣各其の正位に竝び立つ義。○二重のひとみ。淮南子「舜二瞳子一、是謂二一一一一」‖重瞳。

【重名】ヂウメイ　○人からおもんぜられる名望。後漢書「孔文舉有二一一一一」○名を重んずる、名譽を大切に思ふ。說苑「衆人重レ利、廉士一一レ」

【重沓】ヂウトウ　うみ(海)孫綽、天台賦「或倒二景於一一一」

【重門擊柝】ヂウモンゲキタク　幾へにも門を設け、ひゃうしぎをうちて非常を警戒する。易、繫辭「一一、以待二暴客一」

【重陽】ヂウヤウ　陰曆九月九日の節句。九は陽數。潘大臨詩「滿城風雨近二一一一一」‖重九。

【重譯】ヂウヤク　遠く隔りたる地にて、甲國の語を乙國の語に譯されたるを、更に丙國の語に譯す。史、三王世家「遠方殊俗、一一而朝」‖重舌。

【重用】ヂウヨウ　重く用ふる、高官に任用する。

【重疾重腫】ヂウシツヂウシュ　太平の世が久しくつづく、雍熙を重疾とする義。腫は雍。崔駰、東巡頌「盛哉大漢、既重疾而復腫」‖重腫氣治。

【重覽】ヂウラン　かさねて見る。梁昭明太子文「一一來示一」

【重憊】ヂウハイ　かさなれるみね。李綽、注「一一疊嶂、復衆峯爾」

【重巒】ヂウラン　かさなれるみね。水經、注「羅山疊秀、一一千霄」‖複巒。

【重賄】ヂウワイ　禮儀を重んずる。禮記「輕レ財而一一レ之義也」

【重路】ヂウロ　あつきおくりもの。史、あつくそひなふ。國語「立二其辱者一、可二以得一一一」

【重祿】ヂウロク　○おもきふち。○ふちを益し加へて厚くする。忠廉に忠信一一レ、所二以勵一士也」

【重壓】ヂウアツ　強くおしつける。又其のおし。

【重荷】ヂウカ　○おもに、おもき荷物。唐書、張建封傳「一一趨レ肆」‖重擔。○己の力に餘る負擔。‖重任。

【重寄】ヂウキ　おもき委任、重大の寄託。魏書、羊道穆傳「明公荷二國一一一、宜レ使二天下知一レ之」

【重禁】ヂウキン　おもき法禁。吳志、孫奮傳「皆有二一一一一」‖嚴法。

【重科】ヂウクワ　おもきつみ。南史、王弘傳「或由レ睹二慢事一、罰二一一一一」‖重罪・重辟。

【重患】ヂウカン　おもきやまひ。‖大事・重病。

【重婚】ヂウコン　○重ねて婚姻を結ぶ。‖再婚・再醮。○配偶者ある者が更に他の者と結婚する。○重縁に同じ。

【重罪】ヂウザイ　おもきつみ。後漢書、馬援傳「囚有二一一一一、按法而繩レ之」‖重科。

【重湿】ヂウシツ　重炭酸曹達の略語。

【重疾】ヂウシツ　おもきやまひ。後漢書、趙岐傳「年三十餘有二一一一一」‖重病・重患。

【重襲】ヂウシフ　○かさなる。又かさねる。○器具などを幾重にもつつみ。‖什襲。

【重心】ヂウシン　重力の中心。

【重臣】ヂウシン　國家に重んぜられるけらい。漢書、淮南王安上書「使二一一臨存、施レ德垂賞、以招二致之一、此必攜レ幼扶レ老、以赴二聖德一」

【重症】ヂウシヤウ　おもき病氣のたち。

【重徳】ヂウトク　おもきてきず、ふかで。

【重職】ヂウショク　おもきやく。又、其の人。

【重稅】ヂウゼイ　おもきみつぎもの。魏書、陳子遊傳「與二腹心吏一、設レ法一レ、民皆苦レ之」‖苛稅。

【重祚】ヂウソ　一度位を去りし天子が再び即位する。祚は位。‖復辟。

【重大】ヂウダイ　ことがらがおもくして容易ならず「一一事件」

【重代】ヂュウダイ 代代先祖代代。‖累世。
【重態】ヂュウタイ 病状が重くなる、危篤。‖重篤。
【重宝】ヂュウホウ おもきつゝみ○蘇舜欽詩「徴募候ニー一狼狽求二巾奥一」
【重炭酸曹達】ヂュウタンサンソーダ 白色粉状の醫薬、重炭酸ナトリウム、重曹。
【重量】ヂュウリョウ ○おもきおさ（○兵機を執りて要地に據る者。唐書、韓弘傳「二父居ニー一」杜甫詩「一一還須二濟世才一」○轉じて一方のおさ（となる者。‖柱石。
【重点】ヂュウテン 物理學にて槓杆ヂュウカンを以て動かさんとする物體のかかる點。
【重任】ヂュウニン おもきやくめ。東京賦「荷二天下之一一一而足以寄靜」‖重寄。
【重砲】ヂュウホウ 口徑九糎ヂセン以上の大砲。
【重望】ヂュウボウ おもき人望。老學庵筆記「張魏公有ニー一一」
【重犯】ヂュウハン おもきつみ、重き犯罪。‖重罪。
【重職】ヂュウショク 權勢つよき職銀。又、其の大名の地位。舊唐書、牛僧孺傳「爲レ出ニー一求ニ藩鎭一」
【重病】ヂュウビョウ おもきやまひ。法苑珠林「得ニー一」‖大病・大患・重患・重疾。
【重役】ヂュウヤク ○厄きやくめ。又其の人。○圖銀行會社などの重要なる役員。
【重油】ヂュユ 石油より揮發油・輕油を取り去りし黑褐色濃厚の殘油。ー重石油。
【重利】ヂュウリ ○利息計算法の一、利息に利息をつけ加へる。‖複利。○多く取る利。○利をおもんずる。白居易、琵琶行「商人ー一レー輕二別離一」
【重量】ヂュウリョウ おもみ、めかた。
【重力】ヂュウリョク 物體のおもさ。
【重レ重洋渡レ海】重洋はおほうみ遠地に行く家語、致思「子路見二孔子一曰、ー一、不レ擇レ地而仕、家貧親老、不レ擇レ祿而仕」
【重以周】シュウヲカサヌ 自ら聖賢の道を以ておもく任じ、一歩一善をもみなあまねくよくやらんとするの謂歟、原思

【野】ヤ

四畫　里部　業は古字

○の、のはら。原ー」「荒ー」「桑ー」「廣ー」○まちはづれ（郊外）のなか「四ー」「郊ー」詩、魯頌「在駉之ー」傳、邑外曰郊、郊外曰ー」○かざりなし、ゐなかびてゐる（朴直）論、公冶長「質勝文則ー」○いやし（鄙）○人文の開けざるにいふ。文の對「ー蠻」「文ー」○民間。朝の對「朝ー」「在ー」○王城を距る二百里以外三百里に至る間をいふ。○そむきたがふ、非望を企てる。○星のやどりを土地にわりあてたる稱「分ー」

同訓異義　ノ野・純・卑・陋・鄙・固の別は賤（一八七六頁三段）の條を見よ。

【野鄙】ヤヒ のはらのもや。李白詩「ー一晴拂レ杖、家航遙入レ軒」
【野意】ヤイ のべの間かなる心。陶潛詩「依稀代花ー一多」‖野情。
【野遊】ヤユウ のあそび。說苑「ー一則殺騎弋＝獵于平原廣囿」「借二寫眠一」
【野蠻】ヤバン ゐなかのばら。陳子昂「ー一習相擒」‖村鄙・野遽。
【野燒】ヤショウ 野にたなびくくも。秦觀詩「歸艇循堤流水闊、閒多翻笑ー一忙」
【野營】ヤエイ 軍隊がのはらにやどりてとまる。唐詩「ー一軒地蔽如レ雷」‖露營。
【野雲】ヤウン のべにたつくもり。張旭詩「隱隱飛樓隔ー一一」
【野翁】ヤオウ ゐなかおやぢ。白居易詩「昔是朝官今ー一」‖田翁・野叟・野老・村翁。
【野歌】ヤカ ゐなかの人のうたふ歌。論語「ー一相應路高低」‖山歌。
【野蠶】ヤサン 蠶の異名。古今注「蠶蛾、一名ー一、一名風蠶」
【野就】ヤシュウ おなかのわたしぶね。杜甫詩「秋水纔深四五尺、ー一恰受兩三人」
【野客】ヤカク 山野の人。杜甫詩「ー一茅茨小、田家樹木低」
【野鶴】ヤカク のに栖むつる。仕官せざる閑人に喩ふ。韋應物詩「心同ー一ー與レ猿遠、詩似二冰壺一見レ底清」
【若ス野鶴之在二雞羣一】ニワトリノムレニアルノガゴトシ 甲中にて獨りぬきいでたるに喩ふ。晉書、盛彪傳「遠謂二王戎一曰、裴叔則、可ー一人中一見」盛紹、語林「ー一ー」
【野合】ヤガフ ○正式の媒妁によらずして夫婦になる。史、孔子世家「ー一ー而生二孔子一」（一說に、男女老年にして生れ絕えたる後の結婚の意）○樂を野外にて合奏する。‖會樂。不二ー一一」
【野干】ヤカン 狐の類。祖庭事苑「ー一形小尾大、能上レ樹、疑二結木一不レ墮、狐即形小、疑レ水不レ渡、不レ能ー一レ樹」
【野古】ヤコ のべに生ずるくさ。陳陶詩「ー一綠孤蘇二平川起二亂鴉一」
【野牛】ヤギュウ 兕の異名。論、季氏「虎兕出二於柙一」朱注「兕、ー一也」
【野球】ヤキュウ 西洋遊戲の一、ベースボール。
【野菊】ヤキク のぎく。野生の菊。李嘉祐詩「幽懷坐陽日、空山ー一新」
【野吟】ヤギン 田野にて詩を吟ずる。杜甫「鶴、春日山居詩「ー一何處最相宜、春景暄和好入レ詩」
【野芹】ヤキン のぜり。釋道潛詩「曉斟雪

塊飢、午飯——香」

【野禽】ヤキン　のにすむ鳥獣。漢書、鯛通傳「——嘯、走狗烹」‖野鳥・野獣。

【野農】ヤク　野を守る役人。疇、月令、季春之月、命二——一毋レ伐二桑柘一」

【野火】ヤクワ　のべにてもやすひ。白居易詩「——燒不レ盡、春風吹又生」‖野焼。

【野花】ヤクワ　野に咲くはな。鄭谷詩「一徑入二荒苔一小繞レ籬——」

【野外演習】ヤガイエンシフ　戦術に熟せしめんがために平時野外にて行ふ軍隊の練習。

【野宴】ヤエン　野にある竹林。歐陽修詩「——翠筠」

【野外】ヤガイ　城外の野。陸機、皇太子「——祖二載陽一」

【野趣】ヤシュ　野のあぢはひ。杜甫詩「——遠二映郷江檣浴一鷺」

【野逸】ヤイツ　のはらのこみち。杜甫詩「——雲俱黒、江船火獨明」‖野徑。

【野営】ヤエイ　のべに飛ぶほたる。梁元帝詩「螢燭未能息、籌上——飛」

【野蠻】ヤバン　獣の異名。漢代に胡后の名雉を諱みていふ。史、封禅書、注「——、雉也」

【野合】ヤガフ　のなかのことば。論語、秋晩洞山道中、宿二陸喬一詩「——得二眞風一、山貌宜二古服一」‖野語。

【野語】ヤゴ　のなかのことわざ。諺は俗言。史、始皇紀「——曰、前事之不レ忘、後事之師也」‖里諺・俚諺。

【野蔬】ヤソ　野生のまゆ。風俗通「旅穀「公室二露祭一——」

【野望】ヤバウ　ゐなかのことば。陸龜蒙詩「漁蓑驚二狂歌一艇子喜二——一」

【野狐禅】ヤコゼン　禪學を修めて眞の道を得ざる者を嘲りていふ。蘇軾詩「六花簾幕擁二重裀一、九醞蒲萄石上仙、何似東坡錢荘杖、一時驅作——」

【野菜】ヤサイ　あをもの。遠史、太祖紀「時大軍久出、糧米不レ繼、士卒食二馬騎一、採二——一以爲レ食」‖野蔬・蔬菜。

【野草】ヤサウ　のべに生ずるくさ。漢書、揚雄傳「新二垂緑一兮——」

【野蚕】ヤサン　野生の蚕。南史、梁世祖紀「——成レ繭、有二一百二十六石一」

【野鉢】ヤハチ　獣の異名。本草「雉生二深山中一、人呼爲二——一」

【野宴】ヤエン　やまゆ。後漢書、光武紀「——成レ繭、被二千山一、人收二其利一」

【野山薬】ヤマノイモ　じねんじょ。

【野史】ヤシ　民間にて私に撰びし歴史。陳繹曾詩「自愛亜レ名——中」‖野乗。

【野史亭】ヤシテイ　金の元遺山が私に金史を撰ばんために建てたる亭の名。金史、元好問傳「晩年尤以二著作一自任（中略）構二亭於家一、署二遺其上一、因名曰二野史一」

【野次】ヤジ　のじゅくする。晉書、顧榮傳「公室二露祭一——」

【野寺】ヤジ　野中のてら。章應物詩「——望二山雲一、空齋對二竹林一」

【野狐】ヤコ　野生のきつね。漢書、皮景和傳「高祖皆令下景和射二——一、一發而斃上」

【野獣】ヤジウ　のにかふけもの。史、司馬相如傳、驅二逐——一」

【野狄鴛】ヤテキエン　おもだか（澤瀉）

【野人】ヤジン　○ゐなかもの。禮を知らざるいやしき人。孟、萬章「貴戚之謂也」○かざりけなくまごころある人。論、先進「先進於二禮樂一——也」○民間、在野の人。孟、滕文公「無二君子一莫レ治二——一」○米間の人民。

【野人献芹】ヤジンケンキン　人に物を贈る謙辞。芹はせり。列子「野人美レ芹、頁レ献二之至尊一」

【野人無二所日一】ヤジンナシショジツ　ゐなかに住みて世事に關係せざる者は所日の必用もなし。陸游詩、——、急喚如二四時一」‖山中無二所日一「太上隠者詩」

【野心】ヤシン　○驕れ服せざる心。豺狼の子は心山野に在りて、驕れ服すべからず、之を殪へば、必ず人を害するをいふ。左、宣四「豺狼也、豺虎之狀、而豺狼之聲、弗レ殺必滅二若敖氏一矣、諺曰、狼子——、是乃狼也、其可レ畜乎」○田園生活を樂む心。宋書、王僧達傳「閑性寡レ任、——素慎」‖野性。○園　身分不相應の望み。又たくらみ。

【野叉】ヤシャ　おに。梵語名義集「——此云二勇健一、亦云二捷疾一、亦云二閻叉一」‖夜叉。

【野合】ヤガフ　王の旅行先のやどや。周禮「司隷守二王宮與——之厲禁一」

【野情】ヤジヤウ　ゐなかびとのこころ。白居易詩「——遠二世累一、酔態任二天眞一」同詩「偶使二人事一、閑拙逢二——一」‖野意。

【野趣】ヤシュ　ゐなかのおもむき。宋詩「自然成二——一」‖都使「作情忘」‖野情・野興。

【野宿】ヤシュク　のべにやどる。のじゅく。玉篇「露宿也、夜度曰二——一」‖露臥。

【野處】ヤショ　家を離れずしてのはらにすむ。易、繋辞「上古穴居而——」

【野事】ヤジ　民間にて私に撰びし歴史。秦とは、孟、離婁「晉之乘、楚之檮杌、魯之春秋一也」とあるに本づく。「稗史——」‖野史。

【野色】ヤシキ　のはらのけしき。白居易詩「——何蒼蒼、秋聲亦漸繁」

【野蒿菜】ヤカウサイ　みつばせり（三葉芹）

【野水】ヤスイ　野の中を流れるみづ。劉長卿詩「一種荷依——、移レ柳待二山鶯一」

【野雀】ヤジャク　のべのみどりいろ。李白詩「白雪入二雲關一、——生二松竹一」‖野綠。

【野生】ヤセイ　○動植物の自然に野に生

ずるもの。○自己の謙称。‖僕・小生。

【野性】ヤセイ　○疎野にしてなれ親まざる性質。草廬雑詩「一一水藏レ玄、玩二周易繋辞上伝一而亦淪レ年」○静かなるみなかを愛する心。銚合詩「一一多二疎懶一、幽棲更稱レ情」

【野焼】ヤセウ　野火をいふ。厳維詩「一一明二山郭一」

【野製】ヤセイ　ひなびたるつくり。江総文「山情率易、一一疎斜」

【野泉】ヤセン　野に在るいづみ。庾倫詩「折レ花朝露滴、汲レ石一一清」

【野戦】ヤセン　野原にてのたたかひ。史、周相如傳「我為二趙将一、有二攻城一一之大功一」

【野戦病院】ヤセンビヤウヰン　戦時に後方に假設して傷病者を治療するところ。

【野蔬】ヤソ　やさい、青物。杜甫詩「應レ訝二湖橋常餐占一一一」

【野飯】ヤハン　みなかの僧侶。張籍詩「身屈二衙開一詞客説、家貧多見一一招」

【野蔌】ヤソク　やさい、菰・筍など。歐陽修、醉翁亭記「山肴一一雑然而前陳者、太守宴也」

【野態】ヤタイ　ひなびたるかたち。歐陽修詩「頑姿一一煩二造化一」‖野姿。

【野池】ヤチ　のにあるいけ。杜甫詩「沙上草閑柳新間、城邊一一連欲レ紅」

【野娘】ヤヂヤウ　みなかのむすめ。‖村娘・村娘。

【野醸】ヤヂヤウ　みなかざけ。文同詩「山有二佳賓一」‖僕・小生。

【野猪】ヤチヨ　○疎野にしてなれ親まざる性質。草廬雑詩「一一水藏レ玄、玩二周易繋辞上伝一而亦淪レ年」○静かなるみなかを愛する心。銚合詩「一一多二疎懶一、幽棲更稱レ情」

【野焼】ヤセウ　野火をいふ。厳維詩「一一明二山郭一」

【野製】ヤセイ　ひなびたるつくり。江総文「山情率易、一一疎斜」

【野泉】ヤセン　野に在るいづみ。庾倫詩「折レ花朝露滴、汲レ石一一清」

【野戦】ヤセン　野原にてのたたかひ。史、周相如傳「我為二趙将一、有二攻城一一之大功一」

【野戦病院】ヤセンビヤウヰン　戦時に後方に假設して傷病者を治療するところ。

【野蔬】ヤソ　やさい、青物。杜甫詩「應レ訝二湖橋常餐占一一一」

【野飯】ヤハン　みなかの僧侶。張籍詩「身屈二衙開一詞客説、家貧多見一一招」

【野蔌】ヤソク　やさい、菰・筍など。歐陽修、醉翁亭記「山肴一一雑然而前陳者、太守宴也」

【野態】ヤタイ　ひなびたるかたち。歐陽修詩「頑姿一一煩二造化一」‖野姿。

【野池】ヤチ　のにあるいけ。杜甫詩「沙上草閑柳新間、城邊一一連欲レ紅」

【野娘】ヤヂヤウ　みなかのむすめ。‖村娘・村娘。

【野醸】ヤヂヤウ　みなかざけ。文同詩「山有二佳賓一」‖僕・小生。

【野猪】ヤチヨ　○みなかの僧。黄滔詩「一一分レ耕祭二鹿田一」‖野僧。○僧の自己の謙称。

【野説】ヤセツ　いやしきかな、之を鄙しむ語。論、子路「一一由也、君子於二其所一不レ知、蓋闕如也」

【野無二遺賢一】ヤムイケン　賢者遠く任用せられて民間に隠れたる人物なき義。書、大禹謨「嘉言罔レ攸レ伏、一一」

【野無二青草一】ヤムセイサウ　饑饉のはたしきをいふ。左、僖二六「寧如二粢盛一、一一」

【野馬】ヤバ　○かげろふ（遊絲）莊、逍遙遊「一一也、塵埃也、生物之以レ息相吹也」○馬の一種。爾雅、注「一一如レ馬而小、出二於塞外一」

【野梅】ヤバイ　野に生ずるうめ。杜甫詩「市橋官柳細、江路一一香」

【野芳】ヤハウ　のべにさきにほふ花。歐陽修、醉翁亭記「一一發而幽香」‖野花。

【野径】ヤケイ　野戦のとき用ふるとりで。

【野航】ヤカウ　野川にうかべる小舟。陸龜蒙詩「釣家雖二一一一」

【野蛮】ヤバン　文化がひらけぬ。又其國民。

【野卑】ヤヒ　いやし。‖野鄙。

【野鄙】ヤヒ　○みなか。周禮「一一之委積以待二羈旅一」○いやし。‖野陋・野卑。

【野業】ヤゲフ　野生のなれしか。王禹偁詩「山中伴二一一一」

【野夫】ヤフ　田野に居る男。黄滔、嚴陵釣臺詩、終向二塵寰一作二一一竿竹不レ換二容顔一」

【野服】ヤフク　在野郎ち無官の者の着るきもの。晉書、陸機傳「年初髪落、不レ堪二衣冠一、請以二一一一入」

【野物不レ為二徳牲一】ヤブツフヰテイセイ　野獣は以ていけにへとして宗廟に供し難し。修學者は廟堂に用ふべからざる喩。財繍子「一一、雖學不レ為二通儒一」

【野猫】ヤベウ　狸の異名（本草）

【野幕】ヤバク　閭世情に通ぜず、ぶこつ、不粋（野夫の音轉か）

【野木】ヤボク　野に自生する木。漢書、五行志「一一生レ朝、野鳥入レ廟」

【野夏】ヤカ　のべにあるつるくさ。詩、鄭風「野有二蔓草一、零露溥兮」

【野民】ヤミン　農業を主とするたみ（周禮）

【野羊】ヤヤウ　山羊。家畜の一。

【野老】ヤラウ　○みなかのとしより。王維詩「山家應二珍菓一、一一開二芳尊一」‖野叟。○老人が自己の謙稱。○草薢ところの異名。

【野郎】ヤラウ　閭男子をののしりていふ語「馬鹿一一」

【野緑】ヤリヨク　野のみどり色。柳宗元、永州新堂記「邇延二一一一、遠混二天碧一」‖野翠。

【野路】ヤロ　みなかみち。論衡「縣直不レ通二於野一、一一不レ達二于邑一」‖野道。

【野處】ヤショ　○周代の官名の周禮「——氏掌ㇾ達二國道路一至二于四郊一」謹は道中にて賓客を宿せしむるいへ。○ゐなかのいへ。韋應物詩「——不二組理一、騎驢起二荒蹊一」

【野陋】ヤロウ　いやし。梁簡文帝文「僕雖二——一、頗悦二儒レ經」‖野鄙。

【野廬】ヤロ　野に栖むしか。青瑣高議「——遊二宮中一非二佳兆一也」

【野錄】ヤロク　野史に同じ。宋賈同「山東——十七篇」を著す〔本傳〕

五畫

【量】㊀リャウ　㊁リャウ　陽　㊂ハカル

㊀ます(斗斛)「度—衡」○かぎり(限)○はかり、ますめ。○めかた(輕重)ながさ(長短)かず(多少)かさ(容積)「分—」「酒—」論、鄉黨「酒無—、不及レ亂」○はらまへ、どりやう、きりやう「度—」「器—」「識—」○ほど(節制)㊁はかる。大小・長短・輕重などすべて分量をはかる。禮、王制「以三十年之通制國用一、入以爲出」○心にはかり考へる「考—」左、隱十一「—力而行之」

周制度量　量・計・圖・謀・度・稱・權・測・料・忖・揣等の則は計（一七八七頁二段）の條を見よ。

【量移】リャウイ　唐代、流罪によりて遠地に放置せられし官吏が、數にあひて近地に改めうつされる。舊唐書、明皇紀「大二赦天下一、左降官——二近處一」

【量入】リャウニフ　とかき、ますかき。徐鉉文「忙愧二靡之一也、斗斛——也」

【量器】リャウキ　物をはかるうつは。

【量決】リャウケツ　はかりさだめる、酌量して判決する。魏書、世祖紀「詔諸有二疑獄一、皆付二中書一、以二經義一——」

【量檢】リャウケン　はかりしらべる。宋史、律曆志「——彌レ年、則加減均同、異歲相課、則遠近應レ率」

【量試】リャウシ　はかりためす。後漢書、章帝紀「出二太倉米豆一、賜二錢人一作二廬舍一、經レ日而死者無數、帝疑二賑卹有レ虧、乃親于二御坐前一——作レ麋、乃知レ非レ實」

【量度】リャウタク　はかる。詩經、疏「經理而——」

【量知】リャウチ　おしはかりてしる。賈島詩「——愛レ月人、身願化爲レ蟾」

十一畫

【釐】㊀リ　㊁キ　支

㊀をさむ(治理)正しあらためる。書、堯典「允—百工」○みち、すぢみち(義理)○さいはひ(福)○極めて小なる數位の稱、りん、略して厘と書く、尺度の單位、分の十分の一。又、目方の單位、分の十分の一。又、錢の單位、錢の十分の一。○轉じて極めて少き義とす「毫—」○たまふ(賜)あたふ(予)○たぐひ、ふたつ(耦)○やもめ。‖嫠。㊁ひもろぎ(祭餘肉)祭の時に神に供へたる肉。○さいはひ(幸福)古、禧(一六六頁四段)に通ず。○古、僖(一六六頁四段)に通ず。

【釐捐】リエン　釐金稅に同じ。

【釐降】リカウ　堯女の降嬪、釐は治。書、堯典「二—二女于嬀汭」

【釐革】リカク　改めかへる。北史、魏韓麒麟傳「舊名一皆—、小者幷合、大者分置」

【釐金稅】リキンゼイ　清朝にて國内通行の貨物に對して普通の關稅以外に課する稅。其の貨物の原價の若干釐を徴收する義(其の稅を徴收する所を釐卡といふ)‖釐捐。

【釐正】リセイ　改め正す。唐書、顏師古傳「詔二於祕書省一考定、多レ所二——一」

【釐定】リテイ　をさめて改定する。唐書、禮樂志「詔二有司一——」

金部

【金】キン　コン　㊥

○かね、かなもの、金・銀・銅・鐵などの鑛物の總稱。漢書、食貨志「—有三等、黃金爲上、白金(銀)爲中、赤金(銅)爲下」○こがね、わうごん(黃金)○通用貨幣。○やり。かたななどの兵器。中庸「柔—」○きいろ(黃色)「—波」○堅き物の形容「—城湯池」○貴重なる物の形容「—言」「—科玉條」○美くしき物の形容「—殿玉樓」○金にて造りし樂器、八音の一つ○つぐむ、古、噤に通ず。荀、正論「—舌緘口猶將無益也」○五行の一、方位にては西。季節にては秋とす「—風」○漢代、黃金一斤を一—といふ。又、近世、銀一兩を一—といふ「百—」「千—」○朝代の名、女眞(ジュル)の種族、姓は完顏、遼及北宋を滅し、東三省蒙古及支那の北部に據る、十世一百二十年にして元に滅ぼさる。

【金鷄】キンケイ　太陽の異名。韓愈詩「—既鳴霜、六合俄清新」‖金烏。

【金模子】キンモシ　かじか(河鹿)蛙の一種、體やせて黑く、いぼがあり、漢

閑に生じて、其の塵最も清く愛すべし。‖綿津子。

【金鴨】キン 香爐をいふ。鴨の形につくる故。徐鉉詩「香煙結レ縷繞二金鴨一」

【金鞍】キン 黄金にてかざりし美くしき鳥のくら。後漢書、輿服志「象二金鴨一」

【金璞】キン かたなづか。高適詩「一一非二凡物一」‖金吾。

【金太公子】キンタイコウシ 金烏(カラス)の異名。天寶遺事「明皇於二禁苑中一見二黄衣一、常呼二金爲一」

【金印】キン ○黄金にて作りし將軍の印。史、孝武紀「拜二月侯霍去病一爲二冠軍一」○宰相の印。後漢書、百官公卿表「相國丞相皆秦官、一一銀印」

【金印紫綬】キンインシジュ 金紫を見よ。

【金員】キン かね、おあし、錢子、貨幣。

【金烏】キン 太陽の異名。太陽の中に三足の烏が居るといふ傳說に本づく。陳琳詩「一一飛城玉兎走」玉兎は月の異名。

【金烏玉兎】キンウギョクト 日と月と。劉林類聚「金烏東上人皆喜、玉兎西沈偏祖送」前條參看。

【金搖】キンの黄金にてつくりし步搖(步搖)をいふ。前條、七啓「耀二一一之熠燿一」【搖レ金垂レ紫】キンヲタレムラサキヲ 金印をいただき、紫綬を垂れる、貴顯の位に昇る義。

【金蘭】キンラン 易繫辭「二人同心、其利斷レ金、同心之言、其臭如レ蘭」【金蘭之契】キンランノチギリ 親友の交。

【金蘭譜】キンランフ 金蘭の契を結ぶ人の名を記した帳面。

【金蘭友】キンランノトモ 親友。

【金蘭之友】キンランノトモ 親友。

【金蘭之交】キンランノマジハリ 親友の交。

【金蘭之契】キンランノチギリ 親友の契。

【金蘭之誼】キンランノヨシミ 親友の誼。

【金蘭之好】キンランノコウ 親友の好。

【金蘭之友】キンランノトモ 親友。

【金蘭之言】キンランノゲン 親友の言。

【金蘭之臭】キンランノシウ 親友の臭氣。

【金蘭譜】キンランフ 親友の名を記した帳面。

【金蘭會】キンランクワイ 親友の會。

【金蘭之會】キンランノクワイ 親友の會。

【金蘭之好】キンランノコウ 親友の好。

【金蘭之契】キンランノチギリ 親友の契。

【金蘭之交】キンランノマジハリ 親友の交

【金玉君子】キンギョクノクンシ 節操の堅固なる有徳の人。宋史、傅堯俞傳「傅侍郎清直一節、終始不レ變、——也」

【金玉之世】キンギョクノヨ 太平にをさまりたる時世。晉衡、永平中、黃金貴二於銅一、國用流二夏之方盛一、貢二金九牧一、皆起二盛德一、翼二聖王一、——、故有二金玉之號一」

【金玉滿堂】キンギョクマンドウ ○金玉の寶が家にみつ。老子「——、莫之能守」○貴者の榮延に湧つるに喩ふ。

【金風】キンフウ 黃金にて作りたる扇面せる把手のあるさかづき。東京夢華錄「御宴酒杯、皆——」

【金貨】キンカ 黃金にて造りし通用貨幣＝金幣。

【金貨本位】キンカホンイ 金貨を本位貨幣とし、他の貨幣を補助貨幣とする制度。我國にては明治三十年三月以後實施せり。

【金堉】キンイク 黃金のかたまり。

【金科玉條】キンカギョクジョウ 黃ぶべき法律。揚雄、劇秦美新「跡律二——一、——」

【金丸】キンガン ○月の異名。蘇軾詩「浮槎擊流二——一、來上白鬚三更客」＝金彈。○黃金の彈丸。西京雜記「韓嫣好レ彈、常以レ金爲レ丸、所レ失者日有二十餘一、長安爲レ之語曰、苦二饑寒一逐二——一」張九齡詩「嬌嬌珍木巔、得レ無二——一懼」

【金冠】キンカン こがねづくりのかんむり。宋史、天竺國傳「戴二——一」

【金環】キンカン ○金にて造りたるゆびわ。晉書、羊祜傳「羊祜年五歲、會立孔伷取二所レ弄——一」

【金環食】キンカンショク 日蝕の一種、太陽の中央の蔽はれて周圍の金環の如く見ゆるもの。＝金環蝕。

【金匱】キンキ ○うつくしきねま。趙曦詩「閨燈垂玉柱、對レ月滅二——一」○金馬門の異稱。江淹賦「——之諸彦、閣筆之羣英」

【金毬】キンキュウ ○天上に棲むといふ鵬。祖庭事苑「入開本無二——之名一、以應二天上一——星一故也、天上一——鳴、則人間赤鳴」○桃都山の大桃樹の上に一——あり、日出でて鳴けば天下の雞皆鳴く（淮南子）

【金穴】キンケツ 大富もち。後漢書、郭皇后紀「后弟況家大富、賜二中黃一豐益無レ比、京師號二況家一爲二——一」

【金闕】キンケツ ○道教にて天帝の居る所。史、封禪書「黃金銀爲二宮闕一」＝黃金門。○天子の宮門。岑參詩「——曉繞千二百尺一」○黃金にて飾れる門。

【金言】キンゲン ○戒となるたふときことば。洛陽伽藍記「石室之篇二——一」○かたく慎ひしことば。白居易詩「——自銷鑠」

【金券】キンケン ○さつ、金札。○天子より賜はるかきつけ。黃金の札にかきつけたもの。隋書、燒君素傳「大唐又賜二——一、得以不レ死」

【金券玉冊】キンケンギョクサツ 天子より賜はる誥書。

【金吾】キンゴ ○漢代天子の護衛を掌る武官の名。執金吾の略。吾は禦。金革を執りて禦ぎ守る義。王建詩「——除夜遣二傩名一」○我が近衛府に當る「——中將秀秋」

【金庫】キンコ ○かねぐら。○政府の金を藏する所。「中央——」○貨幣や貴重品を入れて火災盜難を防ぐ箱。＝金匱。

【金盞】キンサン ○みづどけい。李白詩「銀箭——漏水多」＝漏刻。○金製の酒盃。韓翃詩「玉佩迎二初夏一、——醉二老春一」

【金鼓】キンコ かねと、つづみと。史、吳王濞傳「弓高侯將二——一見レ之」

【金海鼠】キンカイソ 圖 なまこに似た海產動＝光參。

【金口】キンコウ ○言語の貴重なるに喩ふ。夏侯湛、抵疑「——玉音漠然沈默」○口をつぐむ、金は噤と音通。＝噤口・金舌。○佛 佛のことば。又其の說きし敎。

【金口木舌】キンコウボクゼツ 敎令を發する時に、振りて以て衆聽を警動する木鐸をいふ。轉じて學者が位を得て敎を施すに喩ふ。法言「天之遺不レ在二仲尼乎、仲尼駕レ說者也、不在茲儒乎、如將二復駕一其所レ說、則莫レ若レ使二諸侯金口而木舌一」

【金谷酒數】キンコクシュスウ 金谷は晉の石崇の別莊の在りし地名（今の河南省洛陽縣の西に在り）。崇が一日賓客を會して詩を賦し、詩成らざれば罰するに酒三斗を飮ましむ。李白文「如詩不レ成、罰依二——一」

【金虎符】キンコフ こがねにて虎の形に造りたるわりふ。元史、兵志「最二萬夫者、佩二——一」

【金婚式】キンコンシキ 圖 西洋の風にならひて結婚後五十年目に行ふ夫婦の祝賀式。

【金沙】キンサ 黃金のこな、きんぷん。參同契「——入二五內一、精散若二風雨一」

【金座】キンザ 圖 德川時代に幕府の命を受けて金貨を鑄造せし所。

【金鎖】キンサ ○こがねにて造りたるくさり。北史、赤土國傳「家有之室、悉レ塗二華飾一、唯——非二王賜一、不レ得二服用一」○こがねの錠前。王涯、宮詞「各將二——一鎖二宮門一」

【金鍐】キンサイ こがねにて造りたるかんざし。白居易詩「細合——寄將去」＝金鈿。

【金剛】キンゴウ かたなきず。宋書、武帝紀「寧州督護二虎曉杖、光色甚麗、時將二北征一、以二虎曉治一、——、上大悅、命摧碎、分二付諸將一」＝金瘡・金瘭。

【金瘡】キンソウ 前條に同じ。盧仝詩「不レ堪秋氣入——」

【金鍼魚】キンシンギョ まぐろ。

【金裝刀】キンソウトウ こがねづくりのかたな。＝金飾刀。

【金策】キンサク ○こがねづくりの札。仙人などの文字を書くに用ふるもの。張衡、西京賦「乃爲ニ一一一鍚ニ用此土一」○こがねづくりの錫杖キンジャウ係綿、天台山賦「振ニ一一之鈴鈴一」○圓金錢の調達をくめんする。

【金札】キンサツ ○こがねのふだ。雲笈七籤「一一七枚」○さつ、紙幣。

【金刹】キンサツ 黄金にてかざりし寺。杜甫詩「一一青楓外、朱樓白水邊」

【金山】キンザン 山名、江蘇省丹徒縣の西北に在り、舊もと江中に在り、今は四周沙漲りて陸に接す、本名は浮玉山、裴頠陀、山を開きて金を得たるを以て一一と名づく。

【金錢】キンセン 黄金のさかづき。錢は盞に同じ。杜甫詩「誰能藏ニ酒開ニ一一一、喚ニ取佳人一舞ニ繡筵一」

【金盞銀臺】キンサンギン 水仙花の異名。雲笈漫鈔「水仙花、有ニ一莖一葉者ニ有ニ千葉者一、楊承慶云、世以ニ水仙一爲ニ一一一、一莖一葉者、其中或有ニ一酒錢一深黄而金色一」

【金史】キンシ 一百二十五卷、元の脱脱等勅を奉じて撰す、金の世一百十八年間の事を紀す。

【金耳】キンジ こがねのみみだま。耳は耳環かんむりに貝、禮志「一一珠玉銅鐵之物、一不レ得レ設」

【金絲】キンシ ○黄金のいと。杜陽雜編「一一爲ニ流蘇一」○金紙を細くよりしもの。

【金絲魚】キンシギョ いとよりだひ。

【金絲雀】キンシジャク かなりや。雀よりも小さく、羽毛黄色にして其の聲愛すべし。

【金絲酒】キンシュ たまござけ、酒と鶏卵とをかきまぜて煮たるもの「事物異名錄」

【金紫】キンシ 黄金の印と紫の印の綬と。高位の人の佩ぶるもの。轉じて貴顯の義。漢書、百官表「相國丞相皆秦官、金印紫綬」

【金鉦】キンセイ 圓神武天皇、長髄彦征伐の時、御弓の末にとまりし黄金色のあやしきとび。

【金鵄勳章】キンシクンシャウ 圓前條の故事に本づきて制定せし金鵄の模様ある勳章、軍功抜萃の者にたまはる。

【金鯽】キンセキ あきのかぜ。甘子布、光賦「銀河被レ暗、一一塗レ清」‖金風。

【金絛】キンセウ 金絲を用ひたる美くしきぬひとりの丈廷高詩「一一鴛鴦綠錦袍」

【金枝玉葉】キンシギョクエフ ○皇族をいふ。六帖「一一、帝王之子孫也」○うつくしき雲の形容。古今注「黄帝與ニ蚩尤一戰ニ于涿鹿之野一、常有ニ五色雲氣一、止於帝之上一」

【金字塔】キンジタフ 埃及ナイルのピラミッド。其の構造、金の字に似たる故。

【金字牌】キンジハイ 金泥にて記せしふだ。急要なる詔書に用ふ。宋史、岳飛傳「乞令レ班レ師、一日奉ニ十二一一、飛偵悔泣下」

【金人】キンジン 金屬にて造りたる人の像。賈誼、過秦論「銷ニ鋒鏑一鑄ニ一一一、爲ニ十二一」

【金管】キンクワン きんのかんざし。樂府文詩「一一繁下垂」‖金釵。

【金玉句】キンギョクク すぐれたる詩文を稱す。楊萬里詩「一一鳴ニ天球一」

【金城湯池】キンジャウタウチ 堅固なる城池。漢書、蒯通傳「必將ニ堅ニ城固守一、皆爲ニ一一一、不レ可レ攻也」

【金城鐵壁】キンジャウテッペキ 極めて堅固なる城。徐積詩「金城不レ可レ破、鐵壁不レ可レ奪」‖金城湯池。

【金雀枝】キンジャクシ えにしだ。灌木の一、わっぱいに似て互生し、春末黄花開く。‖金雀花、黄翠。

【金主】キンシュ ○かねの所有主。漢書、直不疑傳「一一程」○圓資本金又費用を出す人、資本主、投資者。

【金松】キンショウ 圓からやまき、槇やの一種高野槇、葉は槇よりも細く實は松に似たり。

【金鍼兒】キンシンジ すずむし。花鏡「一一似ニ促織一、身黑而長」

【金色】キンショク ○黄金の色。温庭筠詩「日影明滅一一鯉」○圓佛身の色。楞嚴經「世尊在ニ大衆中一、舒ニ一一臂一」

【金飾】キンショク こがねのかざり。温庭筠詩「白馬雕ニ一一一」‖金鏤。

【金子】キンス かね、おあし、金錢、子は助辭。搜神雜說「曾失ニ一一一包一」

【金蕊】キンズイ 菊の異名。本草「菊一名一一」‖金蘂。

【金樞】キンスウ 月の沒する處の穴。轉じて月の異名。木華、海賦「大明搆ニ轡於一一之穴一」

【金星】キンセイ 太陽系中の第二遊星、二百二十四日、七にて太陽を一周す、地球に近くしてよく光る、よひの明星。詩、小雅「東有ニ啓明一」朱注「啓明、長庚皆一一也」‖太白。

【金精】キンセイ ○月の異名。河圖帝覽「月者、金之精也」○太白星。史、天官書、注「太白者四方、金之精」

【金鑑玉鑒】キンカンギョクカン 鑑はあへもの、膾はなます、金玉は美味の形容。雲仙雜記、吳都獻ニ松江鱸魚一、煬帝曰、所謂一一、東南佳味也」

【金聲玉振】キンセイギョクシン 金は鐘、玉は磬、聲は宜ブ振は收ナリ、八音を合奏するに方り、先づ鐘を撃ちて、其の音を宣べ、終に特磬を撃ちて、其の韻を收めて、樂を一終す。よりて智德の大成せるに喩ふ。孟、萬章「集大成也者、金聲而玉振ニ之也」

【金石索】キンセキサク 書名、十二卷、清の馮雲鵬撰す、殷より元に至る金石の圖を掲げて考證す。

【金石絲竹匏土革木】キンセキシチクハウドカクモク 八音（一九四頁三段）を見よ。

【刻ニ于金石一】コクウキンセキ 功績などを鐘鼎碑碣に刻みて後世に傳へる。史、始皇紀「羣臣相與頌ニ皇帝功德一、一一」

【金石之樂】キンセキノガク　鐘磬を用ふる音樂。左傳「行レ之以二――一」

【金石之言】キンセキノゲン　戒めになる善き言。荀、非相「聽レ人以レ言、重二於金石珠玉一」‖金言。

【金石聲】キンセキセイ　詩文の格調のすぐれて立派なるにいふ。晉書、孫綽傳「晉作二天台賦一、擲地甚工、初成以示二范榮期一云、卿試擲レ地、當レ作二――一也」

【金石交】キンセキノマジハリ　極めてかたくしてかはらざるまじはり。史、淮陰侯傳「自以爲與二漢王一爲二――一」

【金石文】キンセキブン　鐘鼎(金)碑碣(石)などに銘記する文字。

【金千鎰日】キンセンイツニチ　金を貝て舌と爲して口をおほふ。不言の義。荀子「――、猶將無レ益也」一說に金は嘿と音通。

【金仙】キンセン　ほとけ。梁簡文詩「早知二清淨理一、常願寄二――一」

【金釧】キンセン　こがねにて造りたるうでわ。朱德潤詩「――紅裳肌體素」

【金錢】キンセン　○黃金のぜに。史、平準書「農工商交易之路通、而龜貝――刀布之幣興焉」○ぜに。漢書、西域傳「難レ有二珠玉一不レ如二――一」

【金蟾】キンセン　月の異名。蟾は月中に居るといふ蟾蜍(ひきがへる)。高啓詩「夢斷――隔レ煙小」‖銀蟾。

【金線蛙】キンセンかじかの一種。花鏡「背有レ作二黃路一者、謂二之――一」性好レ坐、而以レ脚鳴」

【金盞花】キンセンクワ　菊の一種。高さ四五寸、盞(さかづき)の形せる紅黃又淡黃の花開く。‖常春花。

【金線草】キンセンサウ　みづひき。山野に自生する多年生草。夏細長線狀の花莖を生じ、赤又は白色の小花を開く。

【金奏】キンソウ　○樂を奏するに先づ鐘を鳴らすをいふ。周禮、鐘師「掌二――一」○音樂の美。顏延之詩「遙レ音何用深、識レ微在二――一」

【金奏之樂】キンソウノガク　鐘を奏する音樂。周禮「凡祭祀鼓二其――一」

【金蹄】キンテイ　金馬に同じ。唐書、王睦傳「告以二禍福一、昭以二――一」

【金菜】キンサイ　○(圖經)蔓菁の異名。李白詩「――如來是後身」○金錢と米と。後漢書、光武紀「難二用――布帛一」○桂花の異名。(格物叢話)

【金屑】キンセツ　かねの類の總稱。

【金屑元素】キンセツゲンソ　金・銀・銅・鐵などの金屬性の元素。

【金章】キンショウ　黃金のさかだる。章は樽・鍾に同じ。李白詩「人生得意須盡レ歡、莫レ使二――空對レ月」

【金掎】キンキ　こがねにてかざりたるたる。陳子昂詩「銀燭吐二青煙一、――對二綺筵一」‖金罇・金樽。

【金蛇】キンジャ　○蛇の一種(本草)○電光の形容。謝靈運文「北獻二氈裘一、南貢二――一」○金音と竹音と。(鐘磬、詩「鼓鐘將將」、詩傳「將將、鏘鏘也」)

【金刀】キントウ　○漢代の貨幣の名、形の刀に似たる故。漢書、食貨志「――龜貝」○こがねづくりのこがたな。又はさみの類。皮日休詩「輕裁二鴨綠一任二――一」

【金舸】キンカ　金屬製のさかづき。李德裕詩「無聊然二蜜蛆一、誰復勸二――一」

【金湯】キントウ　堅固なる城池。(金城湯池の略。後漢書、光武紀「――失レ險、車舍共レ道」

【金璫】キントウ　○こがねのみみかざり。神仙傳「玉佩一一」○後漢の代、宦官の冠の飾。轉じて宦官の義とす。

【金柝】キンタク　軍中に用ふるどら(刁斗)と、ひゃうしぎと。唐書、段秀實傳「飛二候卒一一一擲レ之」

【金諾】キンダク　かたき承諾。史、季布傳「得二黃金百斤一、不レ如レ得二季布一一諾一」顏延之「果踐二玉言一、不レ移二――一」‖季諾。

【金鐸】キンタク　古、武事に關する敎令を宣告する時に振りならしし大鈴。周禮、鼓人「以二――一通レ鼓」(文事には木鐸を用ふ)

【金丹】キンタン　道士が金石を煉りて作れる藥、長生不死の效驗ありといふ。抱朴子「黃金入レ火、百鍊不レ銷、埋レ之擧天不レ朽、是爲二――一」

【金池】キンチ　すずりの異名。

【金竹】キンチク　○竹莖の黃色の者、廣東省に產す。謝靈運文「北獻二氈裘一、南貢二――一」○金音と竹音と。(鐘磬、詩「鼓鐘將將」、詩傳「將將、鏘鏘也」)

【金打】キンチョウ　(圖古、武士が誓を固むるしるしとして、刀の刃又鍔などを打合はすること。女子は鏡を打合す。

【金波】キンパ　金日磾と張安世と。二人は前漢宣帝に仕へて權勢を振ひし者。轉じて權力ある貴族の義とす。左思詩「――藉二舊業一、七葉珥二漢貂一」七葉は七世の榮を恣にせしをいふ。

【金柱】キンチュウ　黃金のはしら。晉書、石季龍載記「起二太武殿一、漆瓦金鋪銀槅――、珠簾玉壁、窮二極伎巧一」

【金泥】キンデイ　金粉を膠にときたるもの。書畫をかくに用ふ「紺紙――」白居易詩「錦軸――誥一通」‖金漿。

【金貂】キンチョウ　○漢以後、近侍の武官の冠、黃金の璫を附け貂の尾を飾りとす「晉書、輿服志」○轉じて貴き近臣の義とす。王維詩「――列二上公一」

【金的】キンテキ　(圖徑一寸四分の金色の板の中央に徑三分許の丸を描きし射術のまと。

【金鐵】キンテツ　○こがねと、くろがねと。漢書、五行志「工冶鑄二――一」○鐵製の刑具。手かせの類。司馬遷、報二任安一書「墨二――一受辱」

【金鑑】キンカン　○黃金の毛ぬき。杜牧詩「――洗二霜鬢一」○かんざしの類。(後漢書、輿服志「下有二珠玉一垂二黃――一左右各一」

【金天】キンテン　あきのそら。杜甫詩「爽氣

一一綸、清談玉露集」‖秋天。

【金鋪】キンプ　こがねにて造りたるかんざし。劉孝儀文「元妻長髪、無藉二金鋪一」‖金釵・金簪。

【金殿】キンデン　こがねにてかざりたる宮殿。江総詩「羽蓋驚二雲石一、流泉灑二金殿一」‖金屋。

【金殿玉楼】キンデンギョクロウ　金玉にてかざりし立派なるどてん。李白詩「玉楼巣二翡翠一、金殿鎖二鴛鴦一」

【金斗】キント　○ひのし。白居易詩「一一裂破刀剪紋」○酒を酌むこがねのひしゃく。戦国策「令二工人作一為一一」

【金縢】キントウ　書経の篇名、金を以て縅封する義。書、金縢、公歸、乃納二冊書一一之匱中一」

【金徳】キントク　秋の称。礼、月令「孟秋之月、盛徳在レ金」

【金椀】キンワン　こがねにてかざりたるはこ。晉語「使レ求得二之一一如レ之」

【金臛】キンカク　図一種の料理。栗・豆・葛姑等を酒の糟にくるみしもの。

【金納】キンナウ　金子にて租税を納める。

【金五京】キンゴケイ　金代の五つのみやこ。一、上京、会寧府（吉林省内）二、北京、臨潢府（内蒙古巴林）三、南京、遼陽府（奉天所在）四、中京、大定府（直隷省平泉縣内）五、西京、大同府（山西省内）

【金波】キンパ　○月の光。漢書、郊祀志「月穆穆以一一、日華耀以宣明」○月光に映じてこがね色に見ゆるなみ。梁武帝詩「一一揚二素沫一」

【金蕊】キンズイ　○こがね色の花。韓愈詩「庭燭折二一一一」‖金英。○玉に菊花をいふ。

【金杯】キンパイ　こがねのさかづき。黄金の杯。風信詩「紅袖捧二一一一」‖金盞。

【金牌】キンパイ　○黄金製のふだ。○図黄金メタル。

【金魚】キンギョ　鐘・笙の類。梁簡文帝文「一一既動、望二蜺蝀之遊一」

【金榜】キンボウ　官吏登用試験に及第せし者の名を掲示する黄金製のふだ、榜一に際に作る。西京雑記「列レ榜書二人姓名勝相一一、其次銀榜、州縣小官是銀榜」

【金馬玉堂】キンバギョクドウ　漢代の未央宮中の金馬門と玉堂殿と、皆文学の士の出仕する所。轉じて翰林院の異称とす。歐陽修詩「一一三學士」

【金帛】キンパク　黄金と絹帛と。史、淮南王傳「行二珠玉一一、賂二諸侯宗室大臣一」‖金貨。

【金箔】キンパク　黄金をうちのばして紙の如く薄くせしもの。宋史、仁宗紀「禁以一一飾佛像」

【金魄】キンパク　月の異名。李白詩「圓光満二中天一一」‖金輪。

【金髪】キンパツ　茶褐色にして光ある毛髪。西洋婦人の髪をいふ。

【金盤玉盆】キンバンギョクボン　こがねのひらたき皿と玉のぼんとゝみごとなる器具。

【金馬門】キンバモン　漢代未央宮に在り、俊秀の士の待詔の処。三輔黄圖「一一一者宦者署、在二未央宮、武帝得二大宛馬一、以銅鋳レ象、立二於署門一、因以為レ名、東方朔・主父偃・厳安・徐楽、皆待二詔一一一」

【金花笺】キンカセン　まつむし。

【金屏風】キンビョウブ　地紙に金箔を貼りし屏風。文献通考「宋制有二一一一」‖金屏。

【金白樓】キンビャクロウ　漆の塗方の一、金箔を一面におきてうすく漆をぬりたるもの。

【金風】キンプウ　あきのかぜ、秋は五行の金に配す。蔵経「玉帝規レ時、一一屈レ序」‖秋風・商風。

【金不換】キンフカン　萬金にもかへがたき貴重品。盤経「凡紫日日用レ之、一歳纔減二半分一、如レ是者萬金不レ換」

【金箍輪】キンコリン　図こがね又金まさをにて鍔縁などの縁、を細く丸び飾れるもの。「一一の銭」

【金文】キンブン　○きんもじ。金泥にてかきし文字。○金石文。

【金粉】キンプン　○黄金のこな。李白詩「軽如二松花落一一一」○鉛粉をいふ。婦女の化粧品「南朝一一、北地胭脂」○図博突に用ふる一種の賽。

【金幣】キンペイ　金貨に同じ。後漢書、南匈奴傳「賂遺一一、以通二善好一」

【金繩】キンジョウ　あきかぜ。王儉擬文「紫鑪レ節、一一戒レ序」‖金風・商飆・秋颯。

【金纓】キンエイ　こがねにてかざりしくつわ。隋書、礼志「綴二馬勒及鞦一一之上一」

【金鳳馬支】キンポウバシ　図黄金つくりの千成瓢箪のうまじろし。豊臣秀吉の所用。

【金碧】キンペキ　金色と青色と、美くしき色どり。後漢書、烏桓傳「飾以一一一」

【金僕姑】キンボクコ　矢の名。左、註十一「以一一一射二南宮長萬一」

【金盆】キンボン　月の異名。杜甫詩「夜闌接二軟語一、落月如二一一一」

【金毛】キンモウ　こがね色の毛。陸龜蒙詩「光裘好順一一麗」

【金明竹】キンミョウチク　まだけの一種。‖金竹。

【金面】キンメン　こがね色のかほ。温庭筠詩「一一青蓮院」

【金門】キンモン　金馬門の略。前漢書、揚雄傳「歴二一一一上二玉堂一」

【金銭】キンセン　金銭の総称。

【金當】キントウ　こがね色のつぼみ。陸游詩「宿雲滋二一一一、微霜點二鶴林一」

【金魄】キンパク　黄金のさかだるの意。雲霞の模様ある酒樽。詩、周南「我姑酌二彼一一、維以不二永懐一」

【金蘭】キンラン　したしく交きまじはりに喩ふ。易、繋辞「二人同心、其利断レ金、同心之言、其臭如レ蘭」

【金蘭簿】キンランボ　友人の宿所氏名等をしるす帳面。宣武盛事「戴洪正毎レ得二

密友、則書於編簡、焚ン香告ン神、號ニ――ニ」削條參看。

【金襴】キンラン 錦の類、緯に金絲キンシを加へて模様を織出せるもの。

【金利】キンリ 元金に對する利子、利息。

【金鯽】キンセキ ○いしもちの泉州府志「石首魚、俗ニ――ニ」○うつくしき魚。

【金柝】キンタク 戰國の時は越に屬し、後ち楚に屬す、習に建康といふ、晉・宋・齊・梁・陳、皆此に都すの所謂六朝の繁部ニ林陵・南京。

【金力】キンリキ かねのちから、金錢の威力。

【金鈴】キンレイ ○かねのすゞ、隋書、禮儀志「親貝ニ――ニ」

【金蓮見】キンレンケン 行燈アンドンの異名、はなじめんさい。

【金蓮燈】キンレンタウ 夫子の御殿にともす燈。唐書、金狐綺傳「綺爲ニ特林承旨ニ、在ニ對中ニ、賞賚、常以ニ乘輿金蓮華燈ニ送ニ還ン院」

【金蓮歩】キンレンポ いにしへ美人のうるはしきあゆみ。南史、齊東昏侯紀「鑿ン金爲ニ蓮華ニ貼ン地、令ニ潘妃行ニ其上ニ曰、此歩歩生ニ蓮華ニ也」

【金祿公債】キンロクコウサイ 明治維新の際、華族及士族に從來受けゐた俸祿を公債證書として下附せられしもの。

【金盥】キンクワン こがねの槽。五代史、孫晟傳「――玉杯而盛ニ菊屎ニ可乎」

【金剛】コンガウ ○金剛石の略語。○佛堅固にして破れざる佛果。又、無明を照破する智慧を金剛石に比していふ。○佛草履の異名「藤――」「板――」又芝居役者の許に寄公づとめする者。

【金剛界】コンガウカイ 佛眞言宗の教理にて智慧の一面より見たる世界觀。胎藏界の對。

【金剛幢】コンガウドウ 佛護摩壇の四方の柱。

【金剛草履】コンガウザウリ 佛普通のものよりも大きく繩にて造りし草履。略して金剛ともいふ。

【金剛篦】コンガウベラ やつで、てんぐのうちは、五加科の灌木の一。葉は掌狀にして甚だ大いに、冬球形の黑實を結生す。

【金剛盤】コンガウバン 金剛石の盾紋。

【金剛心】コンガウシン 極めて堅き心。

【金剛神】コンガウジン 二王(七八頁四段)に同じ。

【金剛砂】コンガウシャ みがきずな。石榴石ザクロイシを細末にしたる赤黑色のすな。河内の金剛由より出づ。

【金剛杵】コンガウショ 佛具の一。銅鉛・三鈷・五鈷の總稱。

【金剛石】コンガウセキ 寶石の一。質極めて堅く光澤強く、暗中にても光を發す。ダイヤモンド(英語)ニ譯石。

【金剛不壞】コンガウフエ 佛體性・力用・功德等の堅固にしてやぶれざる義、佛身をいふ。

【金剛夜叉】コンガウヤシャ 佛五大明王の一、三面六臂あり、北方を守り、一切可畏夜叉を伏す。

【金剛流】コンガウリウ 能樂の一派。

【金剛童】コンガウドウ 佛金剛菩薩の始めしもの。

【金翅鳥】コンジテウ 佛怪しき大鳥の名。兩翅の相去ること三百三十六里、快得自在にして、日日に四海に遊び、龍を見て食とすといふ。

【金身】コンシン 佛像をいふ。司空曙詩「百丈ニ――ニ」

【金神】コンジン ○陰陽家の祭る神の名、其のゐる方に對して物事をなすを忌む。○五行の金の神(玉海)

【金胎兩部】コンタイリヤウブ 佛眞言宗の教理に本づく世界觀。金剛界と胎藏界との稱。

【金毘羅】コンピラ 佛天竺の靈鷲山の神。梵語の音譯。日宮毘羅、威如王。

【金米糖】コンペイタウ 菓子の一種、冰糖に細粉を加へて粒狀に製せしもの。

【金輪際】コンリンザイ ○佛金輪のある所、即ち、大地の厚さ一百六十萬由旬の底(大唐西域記)○圖どこまでも。

針 (二)

【針】(一)シン (二)シン 俗字

㊀はり、ぬひばり。又醫療用のはり。易、乾卦「各從ニ其類ニ」疏「若ニ磁石引ニ一、琥珀拾ニ芥ニ」○はりの形せるもの「磁――」「秧――」「棘――」○懸――は書法の名。㊁さす(刺)○ぬふ(縫)

【針葉樹】シンヨウジュ 松・杉などの如く其の葉の針狀を成せる樹木。

【針灸】シンキウ 針術と灸をすること。南史、庾沙彌傳「――、親以ニ身先試ニ」鍼灸。

【針魚】シンギョ さより(鱵)くちばしが細長く尖る。ニ針魚。

【針術】シンジュツ はりを用ひて病を治療するわざ。南史、晉宋傳「以ニ善ニ――一ニ深被ニ太武賞愛ニ」ニ鍼術。

【針小棒大】シンセウボウダイ 圖はり程の小さきことを棒ほどに大げさにいふ。

【針線】シンセン ぬひばりと、ぬひいと。裁縫の義と十。白居易詩「獨對ニ燈前ニ事、不レ能レ理ニ――一ニ」ニ鍼線。

【坐ニ針氈ニ】シンセンニ 針のさしてある毛氈の上にすわる。危險の地に居るに喩ふ。蘇軾詩「劍來有ニ危色一、針氈無ニ穩坐ニ」

【針薪】シンシン 裁縫チソ縫なり。

【針女】シンヂョ 衣類をぬふ女。白居易詩「因命ニ染人與ニ――一ニ」

【針灸】シンキウ ○醫術のはり。針はかものはり、灸は石ばり。○轉じて人を戒めて過を匡正する義。世說、言語「往聽ニ賓客談ニ此俗耳ニ一、許鹏嘯吹ニ」ニ鍼灸・鍼灸。

【針路】シンロ 磁石の針の示す方向。舟の進みゆくみち。ニ鍼路。

【釗】㊀セウ　㊁ケウ　蕭　篠

㊀つとむ（勉）○けづる（刓）○まみゆ（見）㊁周の康王の名。

【釘】㊀テイ・チャウ　靑　㊁テイ　徑

㊀くぎ、物を貫き材と材とを堅く結合するかなもの「金ー」「銅ー」「竹ー」晉書、陶侃傳「以所ㇾ貯竹頭作ㇾ釘裝ㇾ船」○矛の名「鉾ー」㊁くぎうつ、くぎを物にうちつける。

【釘書】テイショ　圖書籍を裝釘する。

【釘頭】テイトウ　くぎのあたま。杜牧、阿房宮賦「ー鱗鱗、多ㇾ於ㇾ在ㇾ庾之粟粒ㇾ」

【釜】フ　麌　釜は俗字

○かま、まろがなへ、烹飪の器。古史考「黃帝始作ㇾ」○量ノ名、六斗四升、我が五六升位。論、公冶長「與之ー」

【釜】釜は補なり、父・金に从ふ、省して釜に作る。

【釜鬵】フジン　かまと、かなどと。新序「驊騮騏驥、天下之駿馬也、使之與ㇾ鹿ー之間、其捷未ㇾ必能ㇾ過ㇾ鹿也」

【釜山】フザン　地名、朝鮮慶尙道の東南角に在りて、絕影島其の口を扼す、商業殷盛なり。

【釜煮】フシャ　釜にて煮る。付法藏經「ー不ㇾ爛」

【釜脚墨】フキャクボク　鍋の底の煤氣なべずみ、古、藥品とす（本草）＝釜煤。

【釜甑】フソウ　かまと、こしきと。孟、滕文公「許子以ニー一ー一ㇾ釜、以ㇾ鐵耕乎」

【釜中生ㇾ魚】フチュウニウヲヲ　後漢の范丹（字は史雲、萊蕪の長）が、貧にして屢〻飯粒を絕ちし故事。後漢書、獨行傳「甑中生ㇾ塵范史雲、――范萊蕪」

【釜中魚】フチュウノウヲ　生存すること久しからざるに喩ふ。通鑑、漢順帝紀「廣陵賊張婁自稱ニ黃帝ー一、相聚偶ㇾ生、若ニ魚遊ニ釜中ー、知ニ其不ニ可ㇾ久ー」

【釜煤】フバイ　なべずみ。本草「ー一、又名ニ釜底煤ー」

【釜鳴】フメイ　釜が自ら鳴る神異をいふ。搜神錄「太廟齋郎歲當ニ所ㇾ居ー一ー」

【釜庾】フユ　少しの粟。釜は六斗四升、庾は十六斗。魏志、管寧傳「乃分ニー一之儲ー一以救ニ邑里之命ー」

【釜鬲】フレキ　かまと足の中空なるかなへと。史、蔡澤傳「入ニ韓魏ー一、過ㇾ客ニー一于傳ー」

【破ㇾ釜沈ㇾ船】ハフフチンセン　必死の覺悟にて戰ふをいふ。史、項羽紀「項羽乃悉引ニ兵渡ㇾ河、皆沈ㇾ船破ニ釜甑ー一、燒ニ廬舍ー一、持ニ三日糧ー一以示ニ士卒必死無ニ一還心ー一」

【釭】㊀カウ・コウ　東　江　㊁コウ・ク　東　多

㊀ひともし、あぶらざら（鐙）○ともしび（燈火）「殘ー」「寒ー」謝朓詩「蘭ー當ㇾ夜明」釭は俗字。○かりも、かも、車の轂中に在る中空の鐵具。○壁の帶の如く露出せる横木にうつかなぐ、車釭に似たるが故。漢書、趙皇后傳「壁帶往往爲ニ黃金ー一」㊁やじり（箭鏃）

【釬】カン　翰

○こて（鐙鐙）兩腕を被ふ鎧。○弓の兩端にある弦を鉤する具。

【釦】コウ　有

○ちりばむ（鏤）○金銀にて器の緣を飾る。○さわぐ（諠呼）「諠ー」＝叩。○國もと葡萄牙語、シャツ洋服などにぬひつけて上前うはまへと下前したまへとを連ね合するもの。

【釵】サイ　佳　通音　サ

○かんざし、二本足のかんざし、婦人の兩股笄「玉ー」「金ー」「寶ー」曹植詩「頭上金爵ー一」○松ーは松葉。形の似たる故。

【釵股】サイコ　かんざしの岐れ白居易詩「精細同ニー一ー一」

【釵梳】サイソ　かんざしと、くしと。王建詩「私縫ニ黃帔ー一捨ニー一ー一」

【釵劍】サイケン　かんざしと、うてわと。唐書、五行志「世俗尙以ニ琉璃ー一爲ニ一ー一」

【釵朶】サイダ　かんざしのえだ。庾信賦「ー一多而好ニ重髻ー一」＝釵股。

【釧】セン　霰

おほがま（大鎌）

○うでわ（臂環）「金ー」「玉ー」「腕ー」古は男女共に用ふ、後世は唯女子のみ用ふ。庾信賦「玉闕寄書、淚盈ニ腕ー一」○國もと葡萄牙語、ひぢまき、古、臂に施ひたる飾物。

【彭】サン　陷

【鈇】㊀テイ・ダイ　齊　㊁タイ　泰

○あしかせ（鐵鉗）鎖を以て足に加ふ、古の刑法の一。史、平準書「取ニ私鑄鐵器ー一煮ニ鹽者ー一左趾ー一」○くさび（車轄）漢

書、揚雄傳「肆三王一而下鞿」‖軼。

【釣】 テウ 國

○つる、鉤(カギ)にて魚をつる「漁一」又、其の漁法、つり。○轉じて人をおびきだす、誘ひて之を取るにいふ。○求める「一名」「一譽」國○「一錢」○ノベ垂れる。

【垂い釣】スヰテウ つりばりをおろしてつる。梁昭明太子、陶淵明集序「莊周一ニ於隆一‖垂綸。

【釣舟】テウシウ つりぶね。杜牧詩「子秋一一歌二明月一、萬里沙鷗幷ニ夕陽一」

【釣船】テウセン ○つりぶね。宰嚭詩「桑葉隔二村月一、蘆花映ニ一一」‖釣舟。○閩浙地方にて貨物船をいふ、船の形魚に似たり。‖刀船。

【釣鉤】テウコウ 酒の異名。酔ひて詩思をひき出すが故。蘇軾詩「壓ノ呼ニ一一、亦親ニ掃塵帚一」

【釣絲】テウシ 魚をつるいと。詩經、箋「綸、一一也」

【釣舟】テウシウ つりぶね。杜牧詩「桐廬一一、新安江水碧如レ藍」

【釣名】テウメイ たくみ偽りてほまれを得んことを求める。次條參看。

【釣レ利】テウリ 利益を得んことをはかる。管子、法法「釣名之人無二賢士一爲、一一之君無二王主一焉」

【釣綸】テウリン つりいと。杜甫詩「錦里殊二丹竈一、花溪得ニ一一一」‖釣絲。

【釣】 キン 國

○重量ノベ三十斤の稱。漢書「以一縷之任係千一之重」○圓形の陶器を作る回轉器械につける輪。其の回轉によりて自由に種種の陶器が製作せられる「陶一」轉じて、天。又、造物者を大一洪一といひ、又、物事の樞機の義とす「國一」○貴稱の辭。我が國の御の字の用法に近し「一安」「一座」「一警」○ひとし(同等)ひとしくす。ととのふ。‖均。○音調。大一は宮商、細一は角・徵・羽。

【乘レ釣】テウ 天下の政權を執る。次條參看。‖梁三國鈞。

【釣衡】キンカウ ○物を量りて均平を得しむる、宰相をいふ。晉書「中書地在二禁近一、乘レ釣持レ衡、多承二寵任一」‖衡。○人才をはかりえらぶ。宋書「推レ鈞叙レ衡、委二之選部一」韓愈詩「一逐一一、歳久不レ調」‖銓衡。

【釣圓】キンエン 天子、駟馬に駕するに、其の馬の毛色が皆齊しく同じきをいふ。典、平準書「自二天子一不レ能レ具二一一一」(國家貧しく天子均色の四馬を具する能はず)‖醇駟(漢書)

【釣樞】キンスウ 釣轄に同じく樞要の地位に在る者。樞は戸のくるる。韓愈詩「凡此座中人、十九持ニ一一一」

【釣石】キンセキ おもり。釣は三十斤、石は四鈞卽ち百二十斤。曁記、平二準書一、正ニ一一」

【釣旋磁轉】キンセンジテン 陶鈞・車轂の悼するが如く、事物の變遷するをいふ。淮南子「一一、周而復レ始」

【釣陶】キンタウ 人物を養成する、鈞を執じ

陶器を造る轆轤。雅琥詩「三千頭士在二一一一」。

【鈞軸】キンジク　鈞は物を断り、軸は車を輾す。以て要路の大臣に喩ふ。呂温文「大君一一、軍則委汝」

【鈞敵】キンテキ　力がひとしくして、まさりおとりなしの意味。「陶子相制、勇力一一」

【鈞天】キンテン　天の中央で上帝の都する所。鈞は平、四方の主たる意。史、趙世家「趙簡子、五日不レ知レ人、大夫皆懼。扁二日半、簡子寤曰、我之二帝所一甚楽、與二百神一遊于一一、広楽九奏萬舞、不レ類二三代之楽一」

【鈞天広楽】キンテンコウガク　天上の音楽。前條参看。‖鈞大楽。

【鉉】　ケン　㊥

○金の弾。○銃一ウツは鐵砲の弾の形容。‖鉄弾。

【鉛】　㊀ケン　㊁キン　㊥㊥　鈴とは別字

㊀くさび（車轄）○ぢゃう、かぎ（鍵）○印を押す「一印」「一鞭」○鞘一ウは兵法の書。又兵法。張説詩「鞘一用老臣」○茶一は茶を炙る具、金鐵を屈して作る。㊁矛の柄。古、矜に作る。

【鉛鍵】ケンケン　ちゃうま（、かぎ。阿雅序「六藝之一一」‖關鍵。

【鉛制】ケンセイ　くさびを軸にさして車を制する如く自由に制御する。

【鉛鈐】エンカン　○矛の柄と弓の弦と。○轉じて兵法又吳舟の義とす「一一家」‖鈐鉛。

【鈎】　鋤（金部五画）の俗字。

【鈑】　サ・ソフ　シフ　㊥㊤

○ほこ（戟鋒）「一鈸」陸雲文「舉一成雲、下一成雨」‖鎩。○ちりばむ（鏤）

【鈑花工】サクワコウ　けぼり師。

【鈑鏤】サクル　けぼり、象眼の六書故「相鏤金銀謂レ之、曰二一一一」‖鏤鈑。

【鈔】　㊀セウ　㊁セウ　㊥㊥

㊀とる（取）かすむ（略）略取する。後漢書、公孫瓚傳「攻一郡縣二○うつす（謄寫）ぬきがきする（抜錄）うつし、ぬきがき、通じて抄に作る。㊁さつ、しへい（紙幣）倭山外集「一之名、始見二金史一時有レ交一之制」○きって、政府より發行する受取證・證書（官符憑）「一票」

【鈔引】セウイン　○宋代、政府より發行せし紙幣。宋史「紹興元年（中略）願レ得二茶鹽香貨一一書鋪」今、紙幣を鈔票といふは此に本づく。○ぬきがきする。

【鈔校】セウカウ　書物をうつし正す。宋本、滋溪書堂記「作二屋三楹一、遠二書數十卷一、晨夕傳而晉王父威如先生、又手自一一得二數百一、貯レ之因名曰二遠溪書堂一」

【鈔關】セウクワン　稅關の明、宣徳より嘉靖中に至るまでに、關内前後、一一十二處を設けて貨物の運漕船に課稅せしに始まる。

【鈔劫】セウカフ　かすめる。倭創業起居注「招二集無賴一、一一都縣之間一」‖劫鈔。

【鈔寫】セウシャ　書物をうつしとる。○抄、紀曉嵐、筆性最拙、少二交遊一、好讀レ書、或手自一一、凡所二著述一、詩賦雜說數十篇、‖鈔寫。

【鈔胥】セウショ　うつしものをする小役人。‖書手。

【鈔盜】セウタウ　かすめぬすむ。後漢書、班勇傳「不レ爲一一則可矣」‖剽竊。

【鈔奪】セウダツ　かすめうばふ。五代史、唐文通傳「唐兵也二涿郡一、歲時饋遺、自二瓦橋關一至二幽州一、酸レ兵尿飲、常苦一一」‖劫鈔・略奪・掠奪。

【鈔暴】セウバク　武力を以てかすめあらす。後漢書「經レ歲無レ功、而匈奴一一日增」唐書、庫狄陀傳「無二城郭一、舒一一、商旅患レ之」‖抄暴。

【鈔票】セウヘウ　さつ、紙幣、票は手形。鈔引參看。

【鈔略】セウリャク　かすめとる。後漢書、袁術傳「術在二南陽一、不レ修二法度一、一一百姓患レ之」‖劫略・剽略。

【鈕】　ヂウ　㊥

○つまみ、とって（把手・印章）手にてつまみ持つやうに器具につけたるもの「印一」「虎一」「龜一」○圖ボタン釦。

【鈍】　ドン　㊥　頓に通ず

○にぶし、なまくら。鋭の對「利一」○にぶる。にぶらす。陳琳、檄吳文「兵不一一鋒」鋭が鈍くなる。○おろか「魯一」「愚一」「頑一」

【鈍角】ドンカク　九十度以上、百八十度以下の角度。鋭角の對。

【鈍漢】ドンカン　はかもの、愚人を罵りていふ。五代史、司空掃傳「張彦之論王正言曰、一一侮レ我」

【鈍器】ドンキ　鋭利ならざるはものの主謀、聚主得二賢臣一頌「工人之用二一一也、莫レ筋若レ骨、鈍日砥礪」

【鈍金】ドンキン　鋭利ならざるかね。悪鉄「一一必將待二驊騮一然後用」

【鈍根】ドンコン　鈍人の六根のにぶくおろかなる處。上根の對。指月錄「此地接二引一一人一路」

【鈍惰】ドンダ おろか。惟南子「按摩ニ―、日日無レ廢」

【鈍敗】ドンハイ 人の詩何をぬすむ詩人を知りている。詩藪類格「詩有三像ニ鈍ニ―」

【鈍刀】ドントウ なまくらがたな、鉈刀なども云ふ刀。

【鈍馬】ドンバ 足のおそきうま。蘇軾文「回レ鞭ニ如レ騎ニ―ニ」

【鈍物】ドンブツ 愚かもの。日用物。

【鈍兵】ドンペイ ○兵士の気おくれする。「久屯ニ―ニ」○兵士の気おくれする。「久屯ニ―ニ」

【鈍鋒】ドンポウ 刃先のにぶく切れ兵卒の鈍なるもの。武器の鋭利なるもの。「陷陣ニ―ニ」

【鈍磨】ドンマ にぶりやぶれる。唐書、突厥伝「大小二十餘戦、大抵皆全鋒ニ―ニ」

【鈍滞】ドンタイ にぶくしてやぶれる。国語「申背曰、徒二苦甲兵ニ―ニ」「民人離散、而日以懈怠」

【鈍位】ドンイ おろかなるしもべの貢宏道文集「有二四―ニ」

【鈍質】ドンシツ 性質にぶく心くらし。韓愈文「公天巧之付與、無二心手之ニ―ニ」日頑鈍。愚鈍。

【鈀】ハ 國

○戦に用ふる、ものみくるま（候車）○まぐは、鋤の屬、五齒ありて土を平かにし城を除く具。鈀は俗字。○かぶらや（鏑）

【鈑】ハン 問

○いたがね、おほばんきん（銅金）○版に同じ。莊、徐無鬼「金ニ六鈑ニ」

【鈑】ハン 問

さく（裂）やぶる（破）漢書、藝文志「則荷鉤ニ折轅面已」

【鈇】フ 虞

○ふの、ふとかり（斧）ニは大、斧は小ニ列、說苑「人有ニ―ニ者ニ」○斬ッるを斬る刀。

【鈇鉞】フエツ ちのと、まさかりと。漢、王制「諸侯賜ニ弓矢一而後征、賜ニ―ニ一然後殺ニ」記ニ一は一軍の大將として生殺の權を與へらるる義」

【鈇質】フシツ 次條に同じ。史記「請就ニ―ニ之誅ニ」日斧質。

【鈇鑕】フシツ 斧にて腰を斬る刑罰。又、其の刑具。鈇は斧、鑕は鑕ニ公羊、宣二年ニ「執ニ―ニ」

【鉞】エツ 五 質 月

まさかり、おほをの（大斧）古、征討の時、威信を示す爲めに天子より主將に授けられしもの「斧ニ―」「鈇ニ―」「節ニ―」書、牧誓「王左杖ニ黄ニ―ニ右秉ニ白旄ニ」

【鉞下】エツカ 節鉞の下、幕下といふに同じ。江淹文「寤惟明使君ニ―ニ」

【鉛】エン 先 又、鈆に作る

○なまり（黒錫）灰白色にして質軟く、火にとけ易し。○おしろい、鉛の酸化せしもの。曹植賦「芳澤無レ加、―華弗レ御」日鉛白、鉛粉。

【鉛華】エンクワ おしろい。曹植賦「芳澤無レ加、―華弗レ御」日鉛白、鉛粉。

【鉛黄】エンクワウ 鉛は字を書くに用ひ、黄は塗黄、誤字を塗滅するに用ふ。よりて文字を校勘する義とす。陶潜「終年事ニ―ニ」

【鉛汞】エンコウ なまりと水銀と。道家にてこの二物を共に鼎に入れて丹藥を煉る、之を服すれば長生すといふ。白居易、贈二別郡鍊師一詩「東心在ニ―ニ」

【鉛槧】エンザン 古、鉛にて墨の如に字を書く。よりて文筆の義とす。四京雜記「揚雄、倦ニ鉛槧一、從二諸計吏一、訪二殊方絕俗之語一、作二方言一」杜牧詩「可レ憐ニ―竟何功」

【鉛鋌】エンテイ なまりのおもり。王褒文「弱舌紙薄、―内藏」

【鉛筆線】センスイセン なまりのおもりを縄に懸けて垂下せし線。日天垂線・直立線。

【鉛筆】エンピツ 鉛筆と、きぬとの朝鮮語書「人拾二青紫一、家僮二―一、日紙筆。

【鉛黛】エンタイ おしろいと、まゆずみと。文心雕龍「夫―所二以飾一レ容」日粉黛。

【鉛刀】エンタウ なまくらがたな。史、貨殖傳「莫邪爲レ世分、―爲レ鈍」日鈍刀。

【鉛刀一割】エンタウイツカツ ○己の微力を謙していふ。後漢書、班超傳「況臣孝二先淺之誠一、而無二―之用一乎。○力の限りを盡くして、再び用ふべからざるに喩ふ。貞觀政要「君子小過、蓋白玉之微瑕、小人小善、乃鉛刀之一割」

【鉛糖】エントウ 醋酸鉛。

【鉛丹】エンタン 顔料の又工業用に用ふる赤色の粉末、一名光明丹。

【鉛鷲】エンダ なまりと、鷲馬とも白らず力の卑下なるに喩ふ。南齊書、王融傳「手紀一途、休明雅レ旨、思レ策二―一、樂レ陳二涓塵一」

【鉛毒】エンドク おしろいの毒。

【鉛錬】エンレン なまりの如くにおし。抑素元文「白顯―、無二以寬一レ懷」

【鉛白】エンパク おしろい。日粉・鉛華。

【鉛板】エンバン 組みあげる活版を紙型に取り、なまりを鎔込みて作る印刷版。日ステロ。

【鉛不レ可二以爲一レ刀】エンフカイヰヰタウ なまりに刃なし。

は刀劍に作ることを得ず、物は各用所の異るをいふ。淮南、齊俗「一一、木宜レ可二以爲一レ矢」。

【鉛筆】ヱン ○鉛粉を用ひて書く筆。東觀漢記「鍾離意一一書二諫書一」○木軸に黑鉛の細きしんを插入して作りし筆。〓木筆。

【鉛粉】ヱン ○どふん、香料をかくに用ふる白色の顏料。〓胡粉。○おしろい。金瓶梅「粉頭二一一、來粉二皆以傳レ面、取二光潔一也」〓鉛華。

【鉤】コウ　ク　尤

○おびどめ「帶一」○かぎ、物を引きかけるに用ふるもの。○かく（鍵）物を鎖る。○隱れたるものを引きかけてつり出す「一玄」○いたす（致）致し難きものを致す。○取る。易、繫辭「一深致遠」○めぐる（繞）○かがむ（屈）まがる（曲）○とどめる（留）○くじ。〓鬮。○ぶんまはし（規）「一矩」○ひく（牽引）互に引ばり合ふ。後漢書、靈帝紀「皆爲一黨下獄」○車の心木。○劍に似て曲れる武器、敵を引きかけて殺すもの。○つりばり。○劍の頭につけたる環。○刈一は木を刈る鎌。

【鉤校】コウ　さがしてしらべる。後漢書、陳寵傳「鉤性仁矜、及レ爲二理官一、一二律令條法、深於二前刑一者、除レ之」〓檢校。

【鉤距】コウキョ　けづめのあるつり針は、呑めば離ひ、吐けば逆ふ如く、人を術中に陷れて出づること能はざらしめ、以て實情を鉤索するに喩ふ。漢書、趙廣漢傳「先吾爲二一一、以得二事情一」

【鉤曲】コウキョク　つりばりの如くまがる。杜甫詩「途士如二吸直一、小人似二一一一」

【鉤指】コウシ　かぎにてひっかける。論衡、論衡「損練一一」

【鉤玄】コウゲン　おくぶかき義理を引きかけて取る。韓愈、進學解「纂二言者一、必鉤二其玄一」

【鉤爪】コウソウ　爪の甲の內に曲りて鉤の如き者。新論「鳳之方喙一一者、毛依レ此レ之」〓句爪。

【鉤索】コウサク　○おくぶかき道理をさがしもとめる。○金屬のかぎ。〓鐵鉤索。

【鉤止】コウシ　おさへとどめる、鉤り留。漢書、鮑宣傳「使二東一一一丞相掾吏一」〓牽制。

【鉤枝】コウシ　まがれるえだ。劉禪文「夫棟木盤根、一一癭節」

【鉤餌】コウジ　つりばりにつけたるえ。莊子「一一網罟」

【鉤心】コウシン　車の軸の叉、扇の中心の繫る所。杜牧、阿房宮賦「一一鬬角、盤盤焉囷囷焉」（鬬角は屋根と屋根とが近く相對して出る）

【鉤章繢句】コウショウワイク　とげのある章句。奇崛にして諷みにくき文章。韓愈、孟郊墓誌「一一、損二據胃腎一」

【鉤取】コウシュ　かぎに引きかけてとる。宋史、選擧傳「帝以二三司一一無法、至道初置二磨勘司一、以會二財用之數一、命レ盛主レ之」

【鉤鎖】コウサ　曲尺と矩なはと。莊子「匠人曰、我善治レ木、曲者中レ鉤、直者中レ繩」淮南子「譬猶二冰炭一一、何時而合」

【鉤援】コウエン　ひっかけてひろひ取る。揔奧文「一一徽纏、識有レ可レ觀、恐未レ盡レ言」

【鉤黨】コウトウ　互に相牽引して同じ黨を爲す。後漢書、黨錮紀「皆爲二一一一下レ獄」

【鉤輈】コウシュウ　鵜鶘の鳴く聲。唐本草「鵜鶘生二江南一、形似二鴈雛一、鳴云二一一格磔一」林逋詩「草泥行二郭索一、山木叫二一一一」（郭索は蟹の行く貌）

【鉤梯】コウテイ　甚だ高きかけはし、卽ち梯。管子「凌二山阪一、不レ待二一一一」

【鉤箔】コウハク　すだれをまきてかぎにかける。揔道潛詩「一一見二疎雲一」

【鉤用】コウヨウ　取り上げて用ふる。莊子「論二先王之道一而明二周召之迹一、一君無レ所二一一一」

【鉤欄】コウラン　曲れるてすり。李商隱詩「昔色上二一一一」〓句欄。

【鉤連】コウレン　ひきつらなる。李白詩「然後天梯石棧相一一」〓牽連。

【鉤聯】コウレン　まがりつらなる。司馬法「一一蟠曲、各有二條理一」

【鉤鐵】コウテツ　かま。論衡「山野草茂、一一刈斬」

【鉤勒】コウロク　雙鉤法を以て畫を作る。圖繪寶鑑「張選善二畫竹一、作二一一法、妙二絕當世一」

【鉀】カ　甲

よろひ（鎧）冑書、殺記「貫一上爲」〓甲。

【鉅】キョ　語

○大いなり。〓巨。○つりばり（鉤）○かたきくろがね（剛鐵）○かたし、こはし。○尊者の通稱「一公」○なんぞ（何）いづくんぞ〓詎。○にはか。遽に通ず。荀、正論「是豈一知見悔之不爲厚哉」

【鉅魚】キョギョ　おほいなるうを。莊子「尋常之溝、一一無レ所レ遯二其體一」

【鉅鍾】キョショウ　大いなるかな、鐘は足

なき大鼎。徐積詩「一一大鼎烹二牛羊一」

【鉅卿】キョケイ 身分貴き人。‖鉅公。

【鉅橋】キョキョウ 殷の紂王の米倉の名。其の遺址、直隷省広平府の東北に在り。周の武王、紂を亡し其の積粟を散じて民に施す。〔書、武成〕

【鉅闕】キョケツ 古の名剣の名。荀、性悪「干将莫邪一一辟閭、此皆古之良剣也」

【鉅公】キョコウ ○天子の稱。漢書、郊祀志、注「父曰ノ公、天子爲二天下父一、故曰二一一一」○尊き人。又、其の道にすぐれたる貴き人。李賀詩「云是東京才子文章一一」‖鉅卿。

【鉅儒】キョジュ 大學者。隋書、経籍志「四方鴻生一一、負ノ笈自ノ遠而至者、不レ可二勝算一」‖碩儒。

【鉅材】キョザイ 良弓の名の荀、性悪「繁弱一一、古之良弓」

【鉅細】キョサイ 大いなると細きと。注、荘子「夫物理之不レ齊、齊一一之異ノ宜」‖細鉅。

【鉅細】キョサイ 大いに開きはがね。奥、礦書「窺之一一脈ノ鐵如二蠶絲一」‖巨鐵。

【鉅漢】キョカン 大いなる酔漢の國。王十朋詩「駐蹕東南爲二一一一」‖大酒漢

【鉅費】キョヒ おほくの入費。宋史、食貨志「凡貨財不ノ領二于有司一者、則有二内藏庫、盡天子之別藏也、縣官有二一一、左藏之積、不レ足ノ給、則發二内藏一佐ノ之」‖巨費・大費。

【鉅野】キョヤ 澤の名。禹貢の大野、山東省一一縣の北に在り、澤最も廣大、元の末に黄河の決する所となりて遂に湮る。

【鉅鹿】キョロク 地名、戰國の趙の邑。今の直隷省平郷縣、項羽が大に秦の軍を破りし所。

【鈩】キョク ゴク 沃

○たから(貨)○堅き金。

【鉦】

鉦(七五七九四段)に同じ。

【鉗】ケン 塩

荀、正論「人之所ノ一一」

○くびがせ、くびがね、罪人の首にはめるかなわ。古の刑法の一。漢書、高帝紀「自殺一一爲二王家奴一」○物をはさみ取るもの。○かなばさみ(鉗)轉じて勢力を以て人を思み害する「一一忌」○とづ一一口」莊子「口一不二敢言一」古、鉗に通ず。○一一は妄行して誠實なき貌。

【鉗忌】ケンキ 鉗のせの能く物をはさみ取る如く努力をたのみて他を思み害する。後漢書、梁冀傳「有二一一一一忌ノ害ノ日、蓋人也」‖鉗子。

【鉗口】コウ 口をとぢて言はず。後漢書、班超傳「上下一一一」‖箝口。

【鉗桔】ケンキツ くびがせと、てがせと。又其の刑具をはめる。柳宗元、蕭氏寄傳「束二縛一一一之一」

【鉗髡】ケンコン 首がせをかけ、頭をそる。皆罪人のすがた。范成大詩「朝市有二機穽一、冠裳或一一」‖髡鉗。

【鉗子】ケンシ ○くびがせの刑を被りし者。‖鉗徒。○圖釘抜、くぎぬき。

【鉗赭】ケンシャ 罪人をいふ。赭は刑せられて赤衣を著る。宋書、竟陵王傳「田叔一一、志在二雪恥一」

【鉗制】ケンセイ 勢力を以て他を抑へつけて自由をさせぬ。易林「魏困東蜀、一一于吏一」

【鉗束】ケンソク くびがせをはめられて居る罪人ども。漢書、賈誼傳「有二一一一一和ノ者曰、蓋人也」‖鉗子。

【鉛】エン 先

○なまり。○白粉。○おしろい。

【鉱】コウ 養

○あらがね。○鉱石。

【鈷】コ 虞

○一鉧はひのし。柳宗元に一一潭記の文あり、唐宋八家文に出づ、潭は湖南省零陵縣の西三支那里に在り。‖鈷鉧潭十。○圖もと印度の護身用の兵器、煩惱を打破する義にて佛具の一とす、把手の兩端に爪あり、其の爪の數によりて獨一一・三一・五一の名あり。

【鍾】ショウ 冬

まはりかざり(香盤)巧機ある施して轉旋するも傾倒せざる香爐。司馬相如賦「金一一重ノ香」

【鉄】シ 紙

やのさき(箭頭)‖鏃。

【鉈】シャ 麻 支

通ず。○三一シャは三公をいふ、鼎を天位に比し、其の三足、又は一一を三公に比す。

【鉉席】ケンセキ 三公の地位。王筠文「宸愛一一一、覩二貔機延一」‖鉉台。

【鉉台】ケンダイ 三公をいふ。潘岳、西征賦「納二旌弓於一一一」‖台鼎・台鉉。

○ほこ、みじかき矛。○國なた、薪などを斬るに用ふる厚刃の刀、鉈刀。

【鉦】 セイ シャウ 庚

○軍中の樂器の一、かねどら、鐃の類。○鐘の體の正中の處。○伏せおきてたたき鳴らす佛具、ふせがね「鼓ー」

【鉦鼓】シャウどらと、つづみと。行軍の時、鉦は以て之を靜め、鼓は以て之を動かす。轉じて兵事の器に用ふ。漢書、東方朔傳「學孫吳兵法・戰陣之具・ーー之數」

【鉦聲】シャウどらと、すずと。周禮、注「謂ーーー之屬」

【鉥】 ジュツ 質

○いさなふ（誘）みちびく（導）恤父誄の假字。晉語「予盍入乎、吾謂爲子ーー」○長き針。

【鉏】 ㊀ショ 魚 ㊁ソ 虞 ㊂ショ 語

㊀すき（鋤）くは（鍬）○すく、たがやす、田を耕し治む。漢書「非其種者、一面去之」○誅除する、ころす。韓詩外傳「衆之所誅ーー也」○ーー麑ゲイは春秋の時の晉の賢人。㊁祭に用ふるしきもの。㊂ーー鋙はくひちがふ。

【鉏耘】ジョウすきくさぎる。韓愈詩「至寶非ー雕琢、神功謝ーーー」＝鋤耘・耕耘。○轉じて惡人を誅除する義。漢書、王章傳「擢ー貧窮ーーー豪強」＝誅除。

【鉏鋙】ソゴすき。張耒詩「飢寒不ー自勤ーーー」

【鉏鋙】ソゴくひちがふ。齒がみて相入れざる貌。楚辭、九辯「圜鑿而方枘兮、吾固知其ーー難ー入」＝齟齬。

【鉄】 サツ 鐵（糸部五畫）の古字

俗に、鐵の略字とするは非。

【鉎】 チュ シュ 遇

○おく（置）○あらがね（鑛物）「ー銅」

【鉎金】ジュ黄金のあらがね。管子、地數「上有ー丹砂一者、其下有ーーー、上有ー慈石一者、其下有ー鉎鐵」

【鈿】 テン デン 先 霰

○かんざし、造り花のかんざし。庾肩吾詩「誰忍去ー金ーー」○こがねのかざり（金華）○あをがひ「螺ー」

唐書、王鉷傳「以貲ー爲井幹」

【鈿螺】デンラあをがひのくびかざり。白居易詩「ーー累累佩珊瑚」

【鈿合】デンゴウあをがひ細工の香合。陳鴻、長恨歌傳「定情之夕、授ー金釵ーー、以固ー之」

【鈿筝】デンソウあをがひ細工のこと。温庭筠詩「ーー越斷雁行移」

【鈿釵】デンサこがねのかんざし。唐書、百官志「歲七月獻ーー、細月線ー白脂ー」

【鈿車】デンシャ金華にて飾りし車。元稹詩「ーー迎ー岐樂ー」

【鈿鑷】デンジョウかんざし。皮日休詩「ーー雖復侵ー淚」

【鈿鍼】デンシンあをがひざいく。李延壽詩「ーー機子象牙梳」＝螺鈿。

【鉋】 ハウ 效

○かんな、木の面を平かに削る大工道具。○馬を掻く具。

【鉑】 ハク 藥

○はく、金屬をのべて薄くなしたるもの「金ー」＝烏金紙。○白金。

【鉢】 ハツ ハチ 曷

○僧侶の食器「衣ー」「杖ー」圖○はち。皿の深く大いなるもの。又「植木ー」○兜ヨロイの頭にかぶさる部分。○あたまのはち。＝顱。

【鉢盂】ハツウ僧家の飯器、梵語の鉢多羅。

【鈸】 バツ 黠

銅ーガは樂器の一、兩片を合せうちならす。もと印度の樂器。＝鏡鈸ケイバツ

【鈹】 ヒ 支

○おほはり（大針）○つるぎ（劍）史記、刺客傳「皆持長ー」

【鉍】 ヒ ヒツ 寘 質

矛の柄。＝鋍。

【鋼】 ボ 麌 又、鎛に作る

鉏ーは火のし、鉏（前頁四段）を見よ。

【鉚】 リウ 有

美なる黄金。

【鈴】 レイ 青 唐音 リン

○すず、振り動かして音を發せしむる金器。○りん、鉢形、

又は鐘形の金器、振り又はうちたたきて音を出すもの。○物のなる音。通じて令に作る。

【引鈴】いんれい すずを引きて知らせる。

【鈴閣】れいかく 将帥の居る所の地。晋書、李臻伝「一一之下、伊尚者不レ過二数十人一」

【鈴下】れいか 書簡文に将帥を尊ずる敬語「麾下曰レ札」次條参考。

【鈴閣】れいかく 将帥の居る所の地。晋書、李臻伝「一一之下、伊尚者不レ過二数十人一」

【鈴語】れいご 鈴鈴の音。陸都劇詩「殺日擂鼓声一一」＝鈴撃。

【鈴鈴】れいれい 鈴の音。海岸などの警戒に当たる、風来れば鳴るの意。「鈴鈴文一一警二耳、徒増レ煩レ心」＝鈴鈴。

【鈴鈴】れいれい 鈴の震ふ音。雷などの形容。漢書、天文志「雨戒地大動、一一然」

六画

【銚】

㊀チョウ ㊁テウ 通

㊀かま、なべ、小さき釜の柄と口とのあるもの、飲食物を温めるに用ふ。㊁すき（鍤）大いなる鋤。○かる（刈）○けづる（削）圖○一子ゝは酒を盛りて杯に注ぐ器。転じて酒瓶や爵杯の類とす。

【銚子】ちょうし 酒を盛る器。

【銚期】ちょうき 酒を飲むこと。

【銚鑿】ちょうさく 鋤と鑿。

【銚鎒】ちょうとう 鋤と鎒。

【銚柄】ちょうへい 銚の柄。

【銚鎛】ちょうはく 鋤と鎛。

【銚耨】ちょうどう 鋤と耨。

【銚耰】ちょうゆう 鋤と耰。

【銚鎗】ちょうそう 鋤と鎗。

【銚鎛】ちょうはく 鋤と鎛。

【銚鑿】ちょうさく 鋤と鑿。

【銚鎒】ちょうとう 鋤と鎒

萬株」

【銀艾】ガイン 銀印と綠綬と。艾はよもぎにて染むる故。後漢書、張奐傳「吾前後仕進、十要二一一」

【銀海】ガイン ○ぎん色のうみ。陸游詩「天如二玻瓈鉢一倒覆、地作二銀海一盛二一一」○道家にて眼の稱。蘇軾詩「凍合二玉樓一寒起粟、光搖二一一眩生花」(玉樓は月)

【銀行】ガンカウ 政府の管理の下に金融をとりあつかふ一種の法人。

【銀甲】ガンカフ ○銀づくりのよろひ。唐書、禮樂志「按二一一一執一戟前雄」○琵琶などを彈ずるとき爪にかぶせるもの。杜甫詩「一一彈箏用」

【銀漢】ガンカン あまの川。白話「天河謂二之一一一亦曰二銀河一」

【銀杏】ガンキャウ ○いてふの樹。宣和畫譜「一一白頭翁圖」‖公孫樹・鴨脚樹。○又、いてふの果實、ぎんなん。劉基詩「一一子成金壓到」‖玉果。

【銀魚】ガンギョ ○魚の名。身圓くして細く潔白にして鱗なし。‖銀條魚。○銀にて飾りし魚袋、唐代五品官以上の佩用とする。劉禹錫詩「初佩一一一」隨レ仕入」

【銀花】ガンクワ ○燈火の形容。蘇軾道詩「火樹一一合」(放燈の夜、燈火を樹に懸くるをいふ)○雪の形容。杜甫詩「入レ市一一亂、傾レ筐雪片虛」○忍冬花ニンドウカの色の白き者、藥用とす。

【銀貨】ガンくわ ぎんにて造りたる貨幣。漢書、食貨志「一一二品」

【銀塊】ガンくわイ ぎんのかたまり。

【銀黃】ガンクワウ ○銀と黃金と。韓非子「隨侯之珠、不レ飾以二一一一一」‖金銀。○白色と黃色との○銀印と金印と。唐高官の佩ぶるもの。漢書、楊僕傳「懷二一一一一一一乘三組一」

【銀漢】ガンカン あまの川。又雜賦「一一之影橫レ秋、帝臺之漿映レ日」‖銀河・銀漢。

【銀魚】ガンギョ ぎんのさかづき。白居易詩「殷勤二曾長、各捧二一一一一」‖銀杯。

【銀礦】ガンクワウ ぎんのあらがね。魏書、食貨志「長安驪山有二一一一一石得レ銀七斛」‖銀鑛。

【銀環】ガンクワン ぎんのわ、ゆびわ又腕わなど。詩、邶風、靜女、傳「當レ御者以二一一一一進レ之」

【銀釭】ガンコウ 燈火をいふ。白居易詩「斜背二一一一半下一帷」

【銀鉤】ガンコウ○銀のすだれかけ。唐太宗、屛詩「彩散二一一上、文斜桂戶中」○銀のかぎ、巧なる草書の形容。衰苑「習索靖草書絕代、名二一一蘆尼一」

【銀根】ガンコン 圖金融の元。

【銀婚式】ガンコンシキ 結婚後二十五年目に行ふ夫婦の祝賀式。

【銀沙】ガンサ しろがねの如き白きすな。梁簡文帝文「靈堂玉砌、碧水一一」

【銀紙】ガンシ ぎんのかんざし。鄭嵎代酔編「一一猶在」

【銀裝刀】ガンサウタウ しろがねづくりのかたな。南史、席闡文傳「梁武帝將レ起レ兵、闡文勸仍遣レ客、私報レ帝、並獻二一一一帝報以二金如意一」

【銀山】ガンザン ○銀を產する鑛山。神異經「西南有二一一一一」○高く白き波の形容。張繼詩「落墨一一寒浪起」

【銀絲】ガンシ ぎん色のいと。

【銀燭】ガンショク あかるく光るともしび。韓愈詩「一一朱脊窗送レ曙」

【銀子】ガンス ぎんのおかね。子は助辭。‖銀貨。

【銀貨】ガンくわ 銀圓貨幣の略。金業の對。秦・漢時代、光祿大夫の佩びしもの(老學庵筆記)

【銀釵】ガンサ ぎんのふだ。通鑑節要「元武宗頒二行至大一一一」

【銀世界】ガンセカイ 雪中のけしきの形容。陳泊詩「眼觀銀色三千界、身到瑤臺十二層」

【銀劍】ガンケン しろがねのうでわ。劉禹錫詩「一一金釵來負レ水」

【銀鍵】ガンケン ぎんにて造りたる貨幣。後漢書、西域傳「一一十當二金錢一一」

【銀箭】ガンセン 漏刻ロウコクの目盛をつけたる銀の棒。宋之問詩「莫レ令二一一一曉一搖盡合歡杯」

【銀鈴】ガンレイ まっ白きほほひげ。‖雪鬢。

【銀蟾】ガンセン 月の異名。蟾は蟾蜍センジョ(ひきがへる)中にゐるといふ。李中原詩「一一飛出海東頭」

【銀蛇】ガンジャ ○ぎん色のへび。本草「一一亦名二鍮蛇一」○月光の波にうつりし形容。

【銀臺】ガンダイ ○官名。宋史、職官志「一一司掌レ受二天下奏狀案牘一」○仙人の居るところ。後漢書、張衡傳「盼二王母於一一一」

【銀刀】ガンタウ ○銀のかたな。張籍詩「劍帶二一一入二漢道一」○白く長き魚を形容していふ。蘇軾詩「恣看銀網出二一一一」

【銀條】ガンデウ ぎんのくみひも、銀モールの類。李商隱詩「鳳起騰二一一一」

【銀濤】ガンタウ 白く光るなみ。楊萬里詩「萬頃一一中忽開」‖銀浪。

【銀竹】ガンチク ゆふだちの雨の形容。李白詩「白雨映二乘山一森森似二一一一」陸游詩「瓦溝淙淙落一一」

【銀兎】ガント 月の異名。月中に兎ありといふ故。陳陽帝詩「漢露冷浸一一影」

【銀燈】ガントウ ○しろがねのあぶみ。王志堅詩「只敎一一踏二雙鳧一」○白く光るともしび。‖銀燈。

【銀波】ガンパ 白く光るなみ。徐陵詩「蒼天萬里生二一一一」‖銀浪。

【銀牌】ガンパイ ○ぎんのふだ。宋史、輿服志「符券唐有二一一一、發レ驛道一使則門下省給レ之」○銀製のメタル。

【銀髮】ガンパツ まっしろなるかみ。‖白髮。

【銀盤】ガンバン 月の異名。盧仝詩「團一一

從二海風一出、忽來照二我茅屋東一」‖銀蟾。

【銀椀】ギンワン　○酒などを入れる銀製のかめ。杜甫詩「指二點一一崇レ酒客」　○うつくしきしるべ。白居易詩「井底引ニ一一、欲レ上絲繩絕」

【銀浪】ギンロウ　白く光るなみ。梁武帝詩「一一翻二綠澤一」‖銀濤。

【銀鱗】ギンリン　白く見える魚。

【銀鈴】ギンレイ　ぎんのすず。中阿含經「金鈴銀舌、一一金舌」

【銀鏤】ギンル　月光のうつれるつゆ。詩令問、金樓賦「晴朝有レ日、分二金鏡一相射、清夜無レ雲、分、一一白圖」‖皓鏡。

【銀盞子】ギンサンシ　銀製の小さき箱。

【銀鑞】ギンロウ　銀にて造れる椀の類。忠盛傳「拜傳「柴只ニ一一、酌レ酒自飲」

【銀河】ギンガ　あまの川。李賀詩「一一曉轉流二天東一」‖銀漢。

【釜】キョウ　多

○矛刃の下口。○一一は物を撃つ貌。

【鉶】ケイ　青　又、刑・鈃に作る

鼎ナベの一種、あつものを盛る兩耳三足の祭器。儀禮、公食大夫禮「宰夫設一一」

【鉶羹】ケイカン　あつものの五味を和して鉶に盛りしもの。周禮、亨人「祭祀共二大羹一一一」注「大羹不レ和二五味一一一加二鹽菜一矣」

【鈃】ケイ　先　青

㊀鍾に似て頸のながきもの。一說に酒器。㊁人名。荀、非十二子「是惠施宋一也」

【鈺】コウ　尤

授書を受くる器、腹大に口小にして入るべく出すべからざるやうに造る。漢書、義縱傳「投一賻書囊一」注「一所以受二授書一也」‖篋。

【銖】シュ　虞

○量ノの名。一兩の二十四分の一。○轉じてわづかなるもの、輕小の義とす「錙一」「分一」○にぶし(鈍)「一鈍」淮南、本經「其兵戈一而無レ刃」圖○徳川時代の貨幣の名。一分ノの四分の一。○小數の名。一割の百分の一(分ノの十分の一)專ら利率に用ふ。又、朱に作る。

【銖稱差】シュショウサ　少しづつはかり數ふれば、大なる量に至りて、差違を生ずるをいふ。枚乘文「銖銖而稱レ之、至レ石必差、寸寸而度レ之、至レ丈必過」

【銖積寸累】シュセキスンルイ　銖をつみ寸をかさねる。細微を積みて大に至る義。侯鯖錄「寒女之絲、——」

【銖分】シュブン　こまかに知りわける。漢史、楊惲傳「陛下一一邪正、升黜分明、天下幸甚」

【銖兩】シュリョウ　甚だ少しのめかた。子華子「夫平猶二權衡一然、加ニ一一明レ校炎」

【銖兩之姦】シュリョウノカン　すこしの惡事。漢書、趙廣漢傳「一一、皆知レ之」

【銃】ジュウ　送

○弩のあな(弩窮)柄を受くる處。○借りて火器の名とす。○こづつ、鐵砲ノ「小一」「砲一」「鳥一」

【銃架】ジュウカ　小銃をよせかけるだい。

【銃眼】ジュウガン　鐵砲を發射する爲めに城や壁の櫓狹などに設けたるあな。

【銃刑】ジュウケイ　小銃にて撃ち殺す刑罰。

【銃撃】ジュウゲキ　小銃にてうつ。

【銃剣】ジュウケン　小銃の筒先ノにつけたる劍。

【銃丸】ジュウガン　てっぱうだま。‖銃彈・彈丸。

【銃口】ジュウコウ　小銃のつつぐち。

【銃創】ジュウソウ　てっぱうきず。

【銃殺】ジュウサツ　鐵砲にてうちころす。

【銃身】ジュウシン　小銃の丸の通る金屬製の筒。

【銃牀】ジュウショウ　銃身を裝置する木の臺。

【銃彈】ジュウダン　てっぱうだま。‖銃丸。

【銃砲】ジュウホウ　○てっぱう。○小銃と大砲と。

【銃獵】ジュウリョウ　小銃にて鳥獸をかり取る。

【銑】セン　霰

○つやがね、金の最も光澤あるもの。○つや、金屬の光澤。○さむき貌。○みづそそぐ(灑)酒の轉音。晉語「一者寒甚矣」○金を以て弓をかざる。○鐘の口の兩角。○一鏡は敵になげうつ小さき鏨ノしゅりけん(南史、蕭摩訶傳)○づく、俗に鐵の初めて煉りたるものをいふ。質堅く折れ易し、鍋釜等の材料とす。

【銑鏡】センキョウ　づく鐵にて鑄りしぜに。銅錢。

【銑鐵】センテツ　づく、半解を見よ。なべがね。‖生鐵・鋳鐵。

【鉦】セン　先

○はかり(權衡)輕重をはかる器。漢書、王莽傳「攷量以一」○はかる(量度)物の輕重をはかる、人物をしらべて官を授

ける。唐六典「吏部有三一法」○ついで（次）○未だ平かにする器。

【銓引】センイン　人才をはかりてすすめあげる。陳書、世祖紀二「隨レ才ー」

【銓考】センコウ　才能をしらべかんがへる。宋史、職官志「今不レ由二ー一、擢授二別司一、未レ経二銓試一者」

【銓校】センカウ　はかりしらべる。魏書、叔孫建傳「冀官上レ事、先由二後ー一、然後奏聞」後は規模後。‖銓考。

【銓衡】センカウ　○はかり。銓は分銅、衡ははかりのさお。抱朴子「ー不レ平、則輕重錯誤」○才能をはかりしらべる。又、其の職。晉書、吳隱之傳「淸者居二ー一、當レ盡二如レ此職一」

【銓叙】センジョ　はかりえらぶ。宋史、眞宗紀「使二兩制一ー一」‖銓選。

【銓品】センヒン　はかりしらべてすべてくくる。孫綽文「止身檢退、ー一百寮」‖銓綜。

【銓量】センリャウ　はかりてすべつかさどる。晉書、阮放傳「還二吏部郎一、在二ー一之任一、甚有二稱績一」

【銓次】センジ　才能をしらべて順序をつけて定める。晉書、羊琇傳「選用多以二得意者一居レ先、不レ盡二ー一之理一」

【銓掌】センショウ　はかりつかさどる。唐書、選擧志「初尚書ー二七品以上選、侍郎ー二八品以下選」

【銓敍】センジョ　才をはかりて、官位についでつかせる。晉書、張華傳「冀隙漢王、宜レ參二ー一」（ー一局は中都民國の官署の名、文官の任免等を掌る）

【銓選】センセン　才能をはかりしらべて官職をさづける。古、吏部は文官、兵部は武官の一：を掌る。揚雄解嘲「若復變二宣政一、赤手提二ー一」

【銓綜】センソウ　はかりすべる。晉書、良吏傳「莅レ職者、爲レ身擇レ利、ー一者爲レ人擇レ官」

【銓總】センソウ　前條に同じ。唐書、宋理傳「ー一平允」

【銓注】センチュ　善惡をよなげわける。唐書、李適秀傳「仍領レ選ー一、文武稱レ職」

【銓擇】センタク　はかりえらぶ。宋史、儒林傳「文海共取差謬、恐難レ傳レ後、壻レ參二前賢一ー一、以成二一代之書一垂二宗教一」

【銓揆】センキ　人才をしらべはかりてあげもちふる。北齊書、文襄帝紀「置二改制式一ー一慮在レ得レ人」

【銓判】センハン　よしあしをはかりわける。唐書、李衆府傳「不二復ー一、人人書レ勳」

【銓部】センブ　吏部省の異名。專ら人才を銓選することを掌る故。宋史「在二朝廷一則當レ量二人才一、在二ー一則宜レ守二成法一」

【銓別】センベツ　えらびわかつ。文心雕龍「指二養雜體一、切在二ー一」

【銓補】センホ　とりしらべてねぎなふ。北史、齊文宣帝紀「詔二郡國一修二立學序一、廣延二鄭俠一、敎述二儒風一、其國子學生、亦依レ舊ー一」

【銓量】センリャウ　はかる。揚雄、法言「ー一輕重一」

【銛】セン　鑯

○するどし、とし（鋭利）貫誼、過秦論「非ー一于鉤戟長鎩也」鋭に通ず。○すき、鋤の屬。○もり（銛）竹頭ヲケに鐵の距ヲケあり魚に擲ちて捕ふる漁具。【銛鋭】センエイ　するどし。杜甫、天狗賦「百獸讋跼以皆從兮、西猛兌ー二乎其開一」

【銛鋼】センカウ　よくきれるはがね。李製文「刻レ削之勁翮、ー一之利器」

【銛傷】センシャウ　よくきれるやいば。金庾載文「刓二雕英一比二其ー一」

【銛戈】センクワ　鋭利なるほこ。曹植、浮淮賦「浮二飛舟之萬艘一兮、越二千將之ー一」

【銛戟】センゲキ　するどきほこ。戰國策「强弩在レ前、ー一在レ後」

【銛鉤】センコウ　するどきつりばり。李白玉壺詩「須レ知香餌下、觸レ口是ー一」

【銛鉞】センエツ　するどききり。柳宗元詩「截玉ー一作二妙形一」

【銛刀】センタウ　よくきれるかたな。廣雅、疏證志「隆宗時、婁師德國、獻二人倒行以レ足舞、仰二橦ー一、術身就レ鋒云云」‖利刀。

【銛鋭】センエイ　するどきこと。にぶきこと。顧況文「不下以二一割一均中其ー一上」‖鋭銛。

【銛矛】センボウ　するどきほこ。「矛」は鋭利なり。唐書、高適傳「城有二朱鎧銅一、有二鐵甲ー一、妄言前燕擒、天所レ降」‖利矛。

【銛利】センリ　刀劍のきれあぢよし。淮南子「服レ劍者、期二于ー一」‖鋭利。

【鉦】セイ　靑

○かま（鎌）禾を刈るに用ふる短き鎌。○かる（傾）○いなほ（禾穗）（鉦にて刈る故にいふ）書、禹貢「二百里納ー一」

【銕】

鐵（金部十二畫）の古字。

【銅】トウ　ドウ　東

○あかがね（赤金）「紅ー」○あかがねに似たる赤色。○あかがねにて造れる貨幣「ー臭」「ー錢」○銅製の器の總稱。法言「半通之ー一」銅印を指す。

【銅器】ドウキ　あかがねにて造りたるもたひ。齊奈秩「以ー一盛レ水」

【銅匱】ドウキ　あかがねの水さし、はんざふ。夢溪筆談「於二開中一得二ー一

一一」

【銅印】ドウイン　あかがねの官印。漢書、百官公卿表「秩比二六百石一以上、皆ー一墨綬」

【銅角】ドウカク　楽器の一、銅にてつくる、上下二截とし形、竹筒の如く、本細く末大。‖胡琥倚。吹金。

【銅器時代】ドウキジダイ　人類が主として銅器を使用せし時代。石器時代と鉄器時代との中間。

【銅金】ドウキン　あかがね。管子「上有二慈石一者、其下有二ー一」

【銅勒鉄肋】ドウロクテツロク　あかがねのすぢと鉄のあばらと。身體の強健なる形容。前は筋〔宋識、秦士録〕

【銅瓦】ドウガ　あかがねにて造りたるかはらぐ。水中記「酉城湖波瀾宮中、有二七重樓一、覆二ー一」

【銅漿】ドウショウ　あかがねのあらがね。‖劍鐔。

【銅錢】ドウセン　あかがねにて造りたるわ。‖陽雍爽「餓下貧二ー一」

【銅漆】ドウセツ　○漏刻ドウケイに同じ。蜀志伝詩「ー一滴愁更漏長」○圓湯のわくすりに他の火器に取りつけたる銅製の嘴。

【銅鼓】ドウコ　あかがねにて造りたる陣太鼓。宋書、蛮夷伝「諸諸物物誌記」三才圖會「ー一鋳レ銅爲レ之、原其一面、懸而撃レ之、南蛮多鋳二此器一、其聲聞二數里一者、蛮人亦以爲レ珍」

【銅虎符】ドウコフ　あかがねにて虎の形に造りたるわりふ、右は京師に留め、左は郡守に與へ、兵を徴發するときの信とす。史、文帝紀「初與二郡國守相一爲二ー一」竹使符一」

【銅像】ドウゾウ　あかがねにて造りたる像。宋書、戴顒傳「鋳二丈六ー一於瓦官寺一」

【銅山】ドウザン　あかがねを出す鑛山の漢代、銅官を設きー一を採掘する事を掌らしむ。史、呉王濞傳「與二有二銅鹽一郡ー一」

【銅臭】ドウシュウ　金錢のにほひ、錢を納れて官を得たる人を嘲りていふ。後漢書、崔寔傳「崔烈入二錢五百萬一得二司徒一、問二其子一、吾爲二三公一、於二論者一如何（中略）對曰、論者嫌二其ー一」

【銅匠】ドウショウ　銅器を作る職工。‖銅工。

【銅鉦】ドウセイ　○どら。夢溪筆談「在二始興一、北中得二ー一」‖銅鑼。○日に喩ふ。薛能詩「銅頭初日光二ー一」

【銅雀硯】ドウジャクケン　銅雀瓦の瓦にて造りし硯。學範「ー一、銅雀臺瓦也、以二其入レ水之久一故、滋潤發レ墨」

【銅爵臺】ドウシャクダイ　魏の曹操の築きたる臺の名。屋上に銅製の鳳凰を樓ましむ、故に名つく。爵は雀。魏志、武帝紀「建安十五年冬、太祖乃于二鄴作二ー一」‖銅雀臺。

【銅青】ドウセイ　銅のさび、綠色の炭酸銅。法苑珠林「敍レ用二ー一而又無レ銅」‖銅綠。綠青。

【銅錢】ドウセン　あかがねのぜに。史、平準書「ー一濫日二牛刷一」‖銅貨。

【銅駝街】ドウダカイ　○洛陽の街の名。洛陽記「洛陽有二ー一、漢鋳二銅駝三枚一、在二宮四門會道一相對」‖銅街。○圓四京二條通を銅駝坊といふ。

【銅池】ドウチ　あかがねのとひ。銅にて作りし屋の承露ケイロ掌、漢書、宣帝紀「金芝九莖、生二函德殿一之中」

【銅柱】ドウチュウ　○あかがねにて造りたるしるしのはしら。後漢書、馬援傳、注「援到二交阯一、立二ー一、爲二漢之極界一」‖銅標。○あかがねのはしら。史、武帝紀「作二柏梁一ー一承露仙人掌之屬一」

【銅頭鐵額】ドウトウテツガク　甚だ勇悍なるを言ふ。龍魚河圖「蚩尤氏兄弟七十二人、皆ー一十洲記「祖洲有二鴟鵄長牙一ー一之獸」

【銅牌】ドウハイ　あかがねのふだ。宋史、輿服志「皆有二ー一、長七寸五分」

【銅鉢】ドウハツ　銅銅にて造りたる樂器の宋都雜記「今普賢持二ー一」

【銅鉦】ドウショウ　どらの類。漢官儀、晉樂志「ー一其圍數寸、脣起若二浮漚一、貫レ之以二韋皮一、相擊以和レ樂也」‖鏡鈸。

【銅版】ドウバン　銅にて作りし印刷版、硝酸にて銅板に畫畫をやきつけて作る。

【銅盤】ドウバン　あかがねにて造りたるひ。史、平原君傳「毛遂奉二ー一、而跪進レ之」‖銅槃。

【銅表】ドウヒョウ　あかがねにて造りたる標。隋書、天文志「祖暅之造二八尺ー一」

【銅標】ドウヒョウ　銅にて作りし柱、里程、又國境を明かにする爲めに建てるもの。‖銅柱。

【銅盤】ドウバン　銅印と墨綬と。陳子昂文「祖二襲公侯之瑞一、風二居ー一之寄一」

【銅鑼】ドウラ　どら。鉦銅にて圓の如く造れる軍用の鳴り物。東京夢華錄「各設二旗鼓ー一」‖銅鉦。

【銅綠】ドウリョク　銅青に同じ〔宋史、輿服志〕

【錛】ボウ　戈

○ほこ、矛（一三三四頁四段）の古字。○つるぎのきっさき（劍端）

【銘】メイ　青

○しるす（記）○深く心におぼえしるす「感ー」「ー心」○金石に刻せし文「刀ー」「鼎ー」「鏡ー」○文の一體。文體明辯「銘康成曰、一者、名也、劉勰云、觀器而正名也、故曰、作器能ー、可以爲二大夫一矣、考諸夏商鼎彝

像自盤匜之屬莫不有」ー、而文多殘缺、獨湯盤見于大學、而大戴禮載武王諸ー、便後人有所取法」「碑ー」「墓誌ー」○いましめのことば。「箴ー」「座右ー」○弥式に死者の官位姓名を旗にしるせるもの「ー旌」「ー明旌」○〔物品の精製せしもの〕の稱「ー茶」「ー酒」

【銘】メイ　銘は名なり、其の功を金石に記名するなり、故に金に从ひ名に从ふ。

【銘意】メイイ　ふかく心にしるす。李白詩「常恨迫二世網一ー俱未レ伸」ⅱ銘心。

【刻ー銘】コクメイ　銘文をきざみつける。又、刻める銘。宋史、宋白傳「泰山有二唐明皇ー一「白幕木貝碑」

【銘戒】メイカイ　心に深くしるしいましむ。漢魏詩「功銘留二剣鳥一ー一在二盤盂一」

【銘肝】メイカン　きもにほりつける。心に深くしるして忘れず。ⅱ銘肌鏤骨。

【銘旌】メイセイ　葬送の時、死者の官位姓名等を記せしはた。ⅱ明旌・銘旗。

【銘肌鏤骨】メイキロウコツ　皮膚に銘し、骨髄にきざむ、深く心にしるして忘れず。顔氏家訓「思二報乎昔之指一ーー」

【銘功】メイコウ　いさをを金石にほりつけしるす。左傳、作二林鐘一而銘二其功一焉」

【銘刻】メイコク　○金石に文字をほりつける。ⅱ刻銘。○心に深く記憶する。

【銘誌】メイシ　墓石にしるす文辭。宋史、盧士宏傳「戒二諸子一、勿レ爲二ーー一」ⅱ誌銘。

【銘心】メイシン　ふかく心にしるす。三國志「ーレー辱報」ⅱ銘肝。

【銘心鏤骨】メイシンルコツ　深く恩を感じて忘れざる義。成詩考「ーー、夢總難レ忘」

【銘書】メイショ　きざみしるす。王粲文「ー二ー金鼎一、辭及二後聖一」

【銘旌】メイセイ　銘旗に同じ。旌はは た。喪具の一。韜、俗に「銘」、明旌也、以二死者一爲レ不レ可レ別也、故以二其旌識レ之」字解多看ⅱ明旌。

【銘仙】メイセン　圓よりをかけざる絲にて織りし粗き絹布、紬メに似たるもの。ⅱ銘撰。

【銘佩】メイハイ　感じたることを深く心にしるす。江淹文「重光既深、ーー更積」

【銘ー背】メイハイ　せにきざみつける。家語「臧二其口一、而銘二其背一」

【銘膚】メイフ　はだへにきざむ。かたく證えて忘れず。令狐楚文「ーレー鍵レ骨、不二敢殞墜一」

【銘誄】メイルイ　死者の功德を記述せしもの。後漢書、种暠傳「昔先賢既葬、有二加贈之典一、崗幅盛德、有二ーー之文一」

七畫

【鋭】エイ　タイ

㊀するどし（利）刃物がよくきれる「ー利」鈍の對。○さとし、はやし（疾）「ー敏」孟、盡心「其進ー者其退速」○くはし（精）よく練れてゐる「精ー」左、桓十一「我以二師一ー」○きっさき（劍芒）○するどき勢。○とがる（上小下大）○ほそくちひさし、こまかし（細小）左、昭十六「且吾以」玉賈一罪、不亦ー乎」○はもの、きれもの、するどき武器「ー兵」「被堅執ー」○つよき兵士。○角度の直角より鋭く、九十度に及ばざるもの。㊁矛の屬。お、顧命「一人冕執ー」

【鋭意】エイイ　心をはげましてつとめる。後漢書、朱穆傳「及レ壯耽レ學、ーー講誦」ⅱ鋭志・鋭精。

【銳ー鋭】エイエイ　元氣をやしなひて事機の來るをまつ。醫書、裘慶德載記「閉レ關ーレー」ⅱ養鋭。

【鋭噛】エイコウ　するどくくちばし。周禮「ーー決吻」

【鋭角】エイカク　直角部ち九十度より小さき角度。鈍角の對。

【鋭悍】エイカン　するどくしてたけし（廣雅、釋五病傳）ⅱ勁悍・驍悍・彊悍。

【鋭氣】エイキ　するどきしうき。史、淮陰侯傳「ーー挫二于險塞一、糧食竭二于內府一」

【鋭騎】エイキ　するどき騎兵。

【鋭士】エイシ　するどく強き兵士。吳志、甘寧傳「自擇二選ーー五千人一」

【鋭志】エイシ　志をはげましてつとめる。歐陽修文「陛下喜ーレー、必不二自意一」ⅱ鋭意。

【鋭師】エイシ　するどく強き軍隊。贏師の反對。史、蘇秦傳「秦攻二趙、趙告レ急二出ーー一以佐レ之」

【鋭進】エイシン　するどくすすむ。ⅱ猛進・勇進。

【鋭上】エイジョウ　願がせまくしてとがる。唐書、侯希逸傳「長七尺、豐下ーー」

【鋭將】エイショウ　するどき大將。ⅱ驍將。

【鋭精】エイセイ　精神をはげましてつとめる。ⅱ鋭意。

【鋭卒】エイソツ　強くするどき兵卒。後漢書、吳漢傳「將二數萬ーー一擊レ之」

【鋭敏】エイビン　するどくきとし、かしこし。左、哀十一「子羽ーー」

【鋭兵】エイヘイ　○するどき武器。家語「ーー瓦甲、齊困二于晉一」○強くするどき軍隊。戰國策「輕卒ーー、長驅至レ國」ⅱ鋭卒・鋭師。

【鋭鋒】エイホウ　するどきはこさき。陳琳、武庫賦「清徑皓刃、蒲山ーー」

【鋭利】エイリ　するどくつよし。ⅱ勁勇・

精勇。
【鋭利】エイリ　するどくよくきれること。田錡、倚天劍賦「太一諗ニ一之符ニ」
【鍮】ユウ　アク　薬　氏　めっき(鍍金)いかけ、白金にてめっきする。詩、秦風「陰靭一緝」
【鉢】キツ　先　鑿の屬。詩、豳風「又缺我一ニ」
【鋪】㊀ボ　㊁ゴ　虞　陷　㊀銀一は相距く鋭。又、安からざる貌。鉏(金部五畫)の條を見よ。㊁鋏(次條)に通ず。銀一は山の名。
【鐫】㊀クッ　㊁ゴ　麻　虞　㊀もろはのすき(兩刃鋤)㊁銀一は、支國の山の名、金を出す。刀を作れば以て玉を切るべし。‖昆吾。
【鋏】ケフ　葉　○つるぎ(劍)戰國齊策「彈一歌曰、長一歸來乎」○つるぎのみ(刀身)○つか(劍把)莊、說劍「周宋爲鍔、韓魏爲一」○かなはし、鍛冶が燒したる金屬をはさむ具(鐵鉗)國○はさみ、剪刀。○蟹のはさみ。‖螯。
【鍋】ケン　銑　○こはち(小盆)○あしなきかなへ、無足の鬲。○玉の鳴る聲。漢書、郊祀志「展詩應律、一玉鳴」○殿中の掃除人、とものみやつこ「一人」中涓の涓に通ず。
【鍋鍋】クワクワ　食物を煮るなべ。古器評「刀斗如ニ一一、而無ニ緣」
【鋭】ケン　銑　一はなけうちて人を殺傷する小さき鑿、しゅりけん。南史、蕭摩訶傳「遙擲銑一」に
【鈔】サ　歌　麻　一鑼ヲはどらの類。一說に酒器。
【鉦】ザ　國　歌　○かま(釜)釜に似て大口の者。杜甫詩「土一冷殘煙」○くじく。史、楚世家「兵一籃田」‖挫。
【鋏】サク　ソク　藥　○あしかせ(足鉗)○あしかせを施す。
【鐃】シウ　宥　又、鏽に作る　○さび(鐵生衣)○さびる、鐵が酸化する。
【鋤】ショ　魚　通音ジョ　○すき(鉏)田を耕し草を去る農具「一犂」「荷一」釋名「一、助也、去穢、助苗長也」○すく、たがやす。漢書、兒寬傳「帶經而一」○ねをたやす、除き滅ぼす「誅一」「芟一」
【鋤禾】ショカ　いねを耕しすく。李紳詩「一日當午、汗滴禾下土」
【鋤霤斬斷】ショリウザンダン　ねだやしにする。根絶する。
【鋤除】ショジョ　○惡草をすき除く。○轉じて惡人をほろぼす。‖芟除・誅除。
【鋤艾】ショガイ　すきとる。王令詩「好木要存覓見實、惡草一一無ニ容ル茨」
【鋤掊】ショボウ　すきにてかく。齊民要術「亦有ニ一而掩レ種者」
【鋤理】ショリ　手を入れてすきをさめる。王建詩「良田少ニ一一蘭蕙香亦薄」
【鋤犂】ショレイ　すき。杜甫詩「歸來觀振荷ニ一一」
【銷】セウ　蕭　○とく、とらかす(鑠金)史、始皇紀「收天下兵聚之咸陽一以爲鍾鐻」とらける(鎔解)金屬がとける。○つく。つくす(盡)「一沈」○きゆ。けす(滅)消と通ず。○へる、衰へる。○ちる。ちらす(散)「一憂」○除き去る「注一」○貨物の售れる義「行一」○ちひさし(小)○けづる(削)○すき(鋤)○ふく、生鐵。
【銷夏】セウカ　暑氣に同じ。皮日休詩「別如ニ一天地一、流爲ニ一一溪」
【銷耗】セウカウ　つかひへらす。‖消耗。
【銷毀】セウキ　金屬にて造りたるものをとかしけす。唐書、宋璟傳「環諸レ禁斷惡錢、毀ニ使分ニ道檢括一ニ一之一」遼史「不レ得レ一ニ一金銀器一」
【鎖金】サキン　○とかしたるかね。淮南子「一在レ鑪、盜者弗レ揖」○かねをとかす。‖鑠金。○黃金を碎き散らして物を飾る「一一紙」○金錢を海水の如く浪費する「一一萬」
【鎖金紙】サキンシ　金箔をちらしたる紙。花蕊夫人宮詞「駐蹕五色——、碧鎖窗前學草書」
【鎖金帳】サキンチャウ　○金箔をちらしたる美くしきとばり。通鑑長編「於ニ——中一設樂侑觴」○俗に金錢を浪費する花柳の巷の喩に用ふ。

【鋪金窩】ホカク　金錢を海水の如く費消する所（武林舊事）窩一に鍋に作る。もと杭州西湖の絶景にして春遊の人、盛んに金を費すをいふ。今は主に遊廓などの歡樂所にいふ。

【鋪路】ホロ　けづめをかけすの兵を用ひざる義。史、律書「今未能ㇾ一、願且除ㇾ道而ㇾ修ㇾ兵、結ㇾ和通ㇾ使、休ㇾ息北陸ㇾ」

【鋪陽】ホヨウ　わざはひを除きまるの漢書。孔光傳「ㇾ一ㇾ與ㇾ編、較然甚明」

【鋪刻】ホコク　へらしけづる。＝鋪削。

【鋪骨】ホコツ　駆きほねもきえてなくなるの譬。古の街の甚だしきにいふ。都陽、獄中上書「衆口鑠ㇾ金、積毀ㇾ一ㇾ」李商隱詩「青歡讒ㇾ一ㇾ、今傷浪跡ㇾ應」

【鋪魂】ホコン　深く心に感動してたましひがきえいる（魂銷）天寶遺事「長安聞陵有ㇾ橋、迎ㇾ來送ㇾ去、皆至ㇾ此橋ㇾ爲ㇾ離別之地ㇾ故時人呼爲ㇾ一ㇾ橋ㇾ」

【鋪恨】ホコン　心を悩めうらみを消すといふ花の名。明皇雜錄「禁中千葉桃花盛開、帝與ㇾ妃子ㇾ日夕宴ㇾ花下ㇾ、目ㇾ不ㇾ暫離ㇾ左右ㇾ、此花亦能銷ㇾ恨ㇾ」

【鋪失】ホシツ　きえうせる。白居易詩「千歳不ㇾ言散ㇾ一沃赤ㇾ一」

【鋪啜】ホテツ　おとろへよわる。歐陽文「浮客孤懸、形勢ㇾ一ㇾ」

【鋪錢】ホセン　かねをとかしけづの宋之問詩「黃金鋪ㇾ一、案據坐論毀」

【鋪暈】ホウン　あつさをけす。白居易詩「能銷二江樓ㇾ一ㇾ否」＝鋪夏。

【鋪翠樓】ホスイロウ　樓の名。吳興掌故「湖州——、即故子城之南樓、後改二今名ㇾ與ㇾ卿題額」

【鋪衰】ホスイ　へりおとろへる（禮、樂記、註）

【鋪傾】ホケイ　元氣がおとろへてよわし。史記「綱紀ㇾ一ㇾ、宋史「四夷之末、士夫阿諛ㇾ一ㇾ、靡ㇾ然ㇾ予ㇾ仁ㇾ」

【鋪損】ホソン　けしそこなふ。隋史、齊武帝紀「十ㇾ一猶無ㇾ怠」

【鋪沈】ホチン　元氣がきえてなくなるの譬。晉書「人事ㇾ一、澌盡申、此身原合ㇾ付ㇾ天公ㇾ」

【鋪磨】ホマ　へらしてなくする。＝消磨。

【鋪設】ホセツ　金屬を火にてとかすの＝鎔解。

【鋪落】ホラク　きえおちるの＝消磨（初秋涼風發、庭樹微ㇾ一ㇾ）

【鋋】セン　エン　先　寒

○こばこ（小矛）鐵の柄のある短き矛「戈ㇾ一」「矛ㇾ一」○さす（刺）矛にてつきさす。

【鋹】セン　シン　震　寒

○ゑる（彫）きざむ（刻）公羊、定八「ㇾ其板」（板は食器の蓋）板ゲ爪を以て之を刻む、後世轉じて板木ゲに刻む義とす）○きり（錐）○するどし（銳）

【鋹板】シンバン　書物を板木に刻む。学解參看。＝刻書。

【鋋】ティ　遵

○あらがね、鋼鐵の鐵石。○いたがね（金鎧）南史、梁盧陵王傳「嗣子應不ㇾ慧、見ㇾ內庫金ㇾ問ㇾ左右、此可ㇾ食否」○つく（突進）○やのこみ、箭の足の藥中に入る部分。○疾く走る貌。左、文十七「一面走險、急何能擇」

【鈱】デ　霽

○けぬき（拔髮）＝鑷（金部十八畫）○かなばさみ（鐵鉗）

【鍠】バイ　灰

一の大いなる鏡が二小鏡を貫きたるくさり（子母鏡）詩、齊風「盧重ㇾ一」

【鍾】バウ　陽　又、鋒に作る

きっさき（刃端）「鋒ㇾ一」「劍ㇾ一」

【鋪】ホ　遇　俗に、鋪に作るは非

○しく（布）つらぬ。つらなる（陳）布きならべる。禮、樂記「ㇾ一筵席」○門首の環の金具「金ㇾ一」「銀ㇾ一」○あまねし（徧）○やむ（病）詩、大雅「滔夷來ㇾ一」古、痛に通ず。○黍稷を盛る器○みせ、商品を陳ねて賣る所（曾肆）○遞ㇾ一は驛站。

【同訓異語】鋪・布・敷・陳・列・播の別は布（五六四頁二段）の條を見よ。

【鋪綴】ホテツ　にしきをつらねる。南史、顏延之傳「君詩若ㇾ一ㇾ列錦ㇾ」

【鋪設】ホセツ　しきのべる。蘇軾士冥ㇾ一ㇾ路摩、宸襟關輔」

【鋪首】ホシュ　門上に著けて環を銜むるの傅說獸。ㇾ一銜ㇾ環」

【鋪陳】ホチン　しきつらねる。白居易詩「六義互ㇾ一ㇾ」市陳・敷陳。

【鋪張揚厲】ホチョウヨウレイ　しきひろげて、ほめたたへる。文心雕龍、頌贊「——、而以ㇾ典雅ㇾ爲ㇾ貴」偉觀を飾り非對天之闕休、揚ㇾ厲無前之偉績ㇾ」

【鋪遞】ホテイ　驛遞に同じ。金史、世紀「駿狄得ㇾ新荔枝、兵部遞於ㇾ道路、特設ㇾ一ㇾ」

【鋪兵】ホヘイ　巡査の類。東京夢華錄「ㇾ一五人、夜間巡警」＝邏卒。

【蒲若】ホウジャク　みどりの色をしきのべる。白居易詩「扶」青松直上、一一一水平流」

【鋒】ホウ　冬

○きっさき、ほこさき、兵器の先端の鋭利なる處「鋭―」「利―」○さきて、軍隊の前列「先―」○物事のするどききっさき「筆―」「論―」「藏―」

【爭鋒】ソウホウ　敵とほこさきを爭ふ。史、魯仲連傳「慎毋二與レ虜一―一ヒ一」

【鋩鋒】ボウホウ　兵器をとかし炸火ニ水かける。兵亂の靜まる喩。

【鋒芒】ホウボウ　ふでのさき。宋、池瑯錄「太祖則傷二神彩一、太濃則滯二一一一」＝筆錄。

【鋒起】ホウキ　鋒刃の如くするどく盛んに起る。晉、王制「誉試之說、一一」

【鋒鏑】ホウテキ　矢の名。庾信文「一一朝上、刀斗夜周」

【鋒支】ホウシ　ほこ。嘉容垂文「特出挑戰、一一屢交」＝戈鋒・戈矛。

【鋒刃】ホウジン　ほこさき。＝芒刃。

【鋒出】ホウシュツ　鋒起に同じ。論衡、答佞「權變一一」

【鋒銛】ホウセン　ほこさき。又、ほこさきがするどし。論衡「夫之金也、或爲二劍戟一、或爲二一一一」

【鋒鏑】ホウテキ　ほこのさき。徐悱詩「要レ功非二汗馬一、報効乃一一」

【鋒鏑】ホウテキ　刀のほこさきと、やじりと。史、始皇紀「收二天下之兵一、聚二之咸陽一、銷二一一一鑄爲二金人十二一」漢書には鏑を鍞に作る。

【青二鋒鏑一】セイホウテキ　ほこさきにあおらす。殺さるる義。庾信賦「沾二漬鋒鏑一、臨二青原野一」

【鋒芒】ホウボウ　○鋒鋩に同じ。後漢書「一一挫縮、厥圖不レ果」○わづか、微細の事に喩ふ。論衡「一一幸蓋之事、莫レ不二記載一」

【鋒鋩】ホウボウ　○刀のきっさき。趙孟頫詩「牛刀愛惜藏二一一一」○轉じてするどき氣象に喩ふ。孟郊詩「振慨丈夫志、可三以耀二一一一」＝鋒芒。

【鋒發韻流】ホウハツインリュウ　行文の條暢をいふ。文心雕龍「安仁輕敏、故鋒發而韻流」安仁は潘岳。

【鋒利】ホウリ　するどし。宋史、兵志「京師所レ製軍器、多不二一一一」＝銳利・銛利。

【鉦】ヤ　麻　銀・鄂・邪に通ず

鎭一ヤクは吳の名劍の名。＝莫邪。

【鉛】ヨク　沃

○ひかき（炭鉤）○あかがねのこな（銅屑）漢書、食貨志「姦或盜鑄二錢質一以取一」

【銀】ラ。　陽

○一鐺はくさり（鎖）古の刑具。＝琅當。轉じて重くしてあけがたし。六書故「俗以二困重不一レ擧爲二一鐺一」＝郎當。○鐘の聲。

【鋲】〔國字〕

びょう、釘の一種、頭大きく、物に打ちこみて之を固め、又かざりとするもの。

八畫

【鋺】エン　阮

○秤のさら、はかる物をのせる皿。○國かなまり、金屬の椀。

【鋼】カウ　陽　漾

はがね（鍊鐵）きたひて質の強き鐵「一鐵」「精一」「鍊一」列、湯問「鍊二赤刃一、用二之切一玉、如二切泥一」

【鋼玉】コウギョク　大理石・花崗石などの中に存する鑛石、硬度高くして金剛石に次ぎ、酸類に侵されず。＝剛玉。

【鋼槌砲】コウツイホウ　大砲の一種、砲身の内筒外部に多くの鋼環をまきつけて砲彈の力を增加せしめたるもの。

【鋼鈸】コウハツ　はがね。

【鋼條紙】コウジョウシ　鋼鐵にて張りたる罫紙。

【鋼線索】コウセンサク　鋼鐵にてつくれるなは。

【鋼筆版】コウヒツバン　印刷器の一、鋼筆を用ひて寫し、一版に一二百張を印すべきもの、一名謄寫版。

【錡】（一）キ　紙　（二）キ　支

（一）かま、三本足の釜。詩、召南「維一及釜」（釜は足なきかま）○琴を架けて置くもの。張衡、西京賦「武庫禁兵設在レ列」（列は他の兵器を架けるもの）（二）鑿の屬。詩、豳風「又缺二我一斨」

【錤】キ　支

鎒一ヤはすき（鋤）＝鎒基・鉉基。

【錦】キン　寢

○にしき、五色を雜ぜ織りたるあやおり「美一」「文一」「紅一」「蜀江一」○あやおりにてしたてたる衣「衣一夜行」○にしきの如く美麗にして鮮明なるも

の「一楓」「一鱗」「一霞」「一雲」○廣くほめたたへる詞「一心」「一地」「一繡」

【錦襖】キンオウ　にしきのうはぎ。北史、尉遲傳「綠巾一一、號曰二黃龍兵一」

【錦襪子】キンベツス　かじか。又、蛙皮をいふ。倭書紀賞「越人以二鼈甲一爲二上品一、所レ著皮最佳、故越人云、不レ可二脫去一、此乃——」

【錦衣】キンイ　○にしきのころも。漢、玉藻「君衣二狐白裘一、一以揚レ之」○美くしき衣「一一玉食」○一一衛の略。次條參看。野獲編「景陵陸武惠炳領二一一一最久」

【錦衣衛】キンイエイ　明代の軍隊の名、天子の宮城を護衛するもの。倉州史料「一一設二——」

【錦衣玉食】キンイギョクショク　美くしき衣と、おされる食物と。宋史、李處厚「處雖レ在二山林一、其文有二——氣一」

【錦囿】キンイウ　にしきのしとね。元稹詩「大道垂二珠箔一、當壚踏二一一一」

【錦茵】キンイン　にしきにてかざれるむしろ。韻會、詩「九重天樂降二神仙一、步舞分行踏二一一一」

【錦江】キンカウ　○四川省の境に在り、俗に府河と名づく。杜甫詩「一一春色來二天地一」○朝鮮の河の名。鴨綠江港に注ぐ。

【錦葵】キンキ　蜀葵の異名。花大さ徑寸、色は淡紫。〓花茶。

【錦旗】キンキ　○にしきのはた。李賀詩「搖搖——夾レ城聲」〓錦幡・錦旌・錦麾。○國にしきのみはた、天子の御はた。

【錦綺】キンキ　にしきと、あやおりと（書、禹貢）

【錦歸】キンキ　衣レ錦歸二故鄉一の略語、榮達して故鄉に歸る義。晉書故事「榮貴還レ鄉曰二一一一晝繡一」〓錦還。

【錦衾】キンキン　にしきのふすま。詩、唐風「角枕粲兮、一一爛兮」

【錦還】キンクワン　錦を衣て鄉に還る義。李白詩「功成衣一一」今、尺牘に人の歸鄉を稱するに用ふ。衣レ錦還レ鄉參看。

【錦官城】キンクワンジャウ　蜀の成都城の一名。錦をつかさどる官を置きし故。華陽國志「成都西城、故——也」杜甫詩「——外柏森森」〓錦城。

【錦雞】キンケイ　頭は雞冠に似、羽毛は雉に似たる美くしき鳥、にしきどり。桂海虞衡志「一一又名二金雞一、形如二小雉一、湖南北亦有レ之」

【錦鞋開祇候】キンケイカイシコウ　國華族及官吏の功勞ある者を優遇する爲め宮中錦鞋の間に祇候して陛下の御諮詢に奉答せしむる資格。

【錦繡】キンシウ　にしきと、しぼりてそめぬきたる絹と。元好問詩「東崖劫火餘、絢爛開二一一一」

【錦虹】キンコウ　にしきの如く、美くしきにじ。曹植詩「蜂蛤被二漢暹一、光彩如二一一一」

【錦葵】キンキ　○にしきのおび。李白詩「珠袍曳二一一一」○次條の略語。杜甫詩「香開一一幾」

【錦帶花】キンタイクワ　落葉灌木の一、山地に自生す、高さ七八尺、葉形は橢圓にして尖り、緣に鋸齒あり、夏の初、管狀の花開く、繁麗にして錦帶を曳く如し。山家清供「——、又名二文官花一、葉初生、柔脆可レ茹」

【錦褥】キンジョク　にしきのはだばかり。甘澤謠「見二婦人數人、一一負レ器而汲」

【錦地】キンチ　他人の居住地を稱する敬語、貴地。

【錦帳】キンチャウ　にしきのとばり。徐陵詩「流蘇一一挂二香麈一」〓錦帷・錦幄・綺帳。

【錦殿】キンデン　にしきにてかざれるごてん。王勃詩「紫閣丹樓紛照耀、壁是一一相玲瓏」

【錦雀】キンジャク　詩を入れるにしきのふくろ。唐書、李賀傳「賀小奚奴背二古一一、遇レ所レ得、詩、投二囊中一」〓囊囊。

【錦旌】キンセイ　にしきのはた。沈佺期詩「告レ蓍雕旌建、敢レ寇一一張」

【錦袍】キンパウ　にしきのおんばおり。又、にしきのうはぎ。南史、魚弘傳「率二部曲數百一、悉衣二一一一、赫奕滿レ道」

【錦帆】キンパン　にしきのほ。大業拾遺記「一一繚二綠修屋一」書言故事「問二人行一、曰二一一何日掛一」

【錦幡】キンパン　にしきのはた。幡一に旛に作る。黃庭內景經「現二劍百文舞二一一一」〓錦旗。

【錦被】キンピ　にしきのよぎ。異志、蔣欽傳「爲レ用作二一一一」

【錦楓】カニ　にしきの如く美くしきかへで。晁汝譏詩「祠堂列ニ一一」

【錦歩障】シンホウ　にしきのとばり。世説「石崇作ニ――五十里ニ」＝錦帳。

【錦爽】サン　にしきにて飾れるこし。元稹詩「公子文衣護ニ一一」

【錦機】ラン　にしきのともづな。論語陽秋、十三「揚州天下之樂園、隋煬帝不レ顧ニ天下之重ニ一一牙檣、來遊ニ此都ニ」（牙檣は象牙にて飾れるほばしら）庾信詩「一一回ニ砂磧ニ、蘭橈遊ニ荻洲ニ」

【錦里】サン　地名、四川省成都縣の南。華陽國志「錦江織レ錦濯ニ其中ニ、則鮮明、故命曰ニ一一ニ」後世は成都の泛稱とす。錦官城參看。

【錦鱗】リン　美くしき魚。鮑照、芙蓉賦「戲ニ一一ニ而夕映、曜ニ繡羽ニ以晨過」＝金鱗。

【衣レ錦還レ鄉】ニシキヲキテカヘル　富貴にして故郷に還る。南史、劉之遴傳「令下卿――、盡中榮養之理上」同、柳慶遠傳「爲ニ雍州刺史ニ帝餞ニ于新亭ニ、謂曰、卿――、朕無ニ西顧之憂ニ矣」

【衣レ錦褧衣】ケイイヲキテ　錦は文衣、褧は禪衣、錦を被て褧を加ふるは、文衣の甚だ著顯なるを惡みて之を蔽ふなり。詩、衞風「碩人其頎、――」（褧は中庸に綱に作る）次條參看。

【衣レ錦尚レ褧】ケイヲキテ　錦衣の上に褧即ちうすき單衣を加へる、君子は美德あれども、之を衒ひはざる譬。前條參看。中庸「詩曰、衣レ錦尚レ絅、惡ニ其文之著ニ也」絅は褧。

【衣レ錦晝行】ヒルユク　功遂げ名成り、富貴を擔ひて故郷にかへる。魏志、張既傳「既爲ニ雍州刺史ニ、太祖謂レ既曰、還ニ君本州ニ可レ謂ニ――ニ矣」

【衣レ錦夜行】ヨルユク　富貴にして故郷にかへらざれば人に知られざるに喩ふ。前條の反對。漢書、項籍傳「富貴不レ歸ニ故鄉ニ、如ニ――ニ」史記には錦を繡に作る。

【衣レ錦之榮】ニシキノエイ　立身出世して故郷に歸る名譽。歐陽修、相州晝錦堂記「昔人比ニ之――ニ者也」

【錦】キン　コ　侵

○のこぎり。○のこぎりにて足をきる刑の名（刖刑）漢書、刑法志「中刑用ニ刀ニ一」韓愈、送ニ李愿歸ニ盤谷ニ序「刀ニ一不ニ加」○のこぎりにてひききる。鶴林玉露「繩ニ一木斷、水滴石穿」

【錦牙】ゲ　のこぎりのは。李白、師孟贊「一一銜レ霜、鉤爪抱レ月」＝錦商。

【錦鑿】サク　のこぎりと、のみと。晉書、荀勗傳記「殺戮無ニ道、常懷ニ弓矢刃以見ニ朝臣ニ、鋒鋩ニ一、傷ニ設左右ニ」

【錦商】ショウ　のこぎりのは。論衡「魚之咿脅ニ一者、鱗族長レ之」＝錦牙。

【錦屑】セツ　おがくづ、のこぎりのくづ。言語のよどみなく出づるに喩ふ。晉書、胡毋輔之傳「王澄與ニ人書ニ曰、彦國吐ニ佳言ニ如ニ錦木屑、露霏不レ絕、誠爲ニ後進領袖ニ也」蘇軾詩「高論無レ窮如ニ一一ニ」

【錧】クヮン　早　寒

○くさび（轄）車轂の端の鐵。＝轄。○國たたら、ふいごの大いなるもの。

【錧鑰】カツ　くさび、車の運轉に缺くべからざるもの。よりて樞要、又、喉嚨などの義とす。趙岐、孟子序「論語者五經之ニ一、六藝之喉衿也」＝轄轄・樞轄。

【錮】錮（金部六畫）に同じ。

【錐】ケン　クヮン　阮　銑

金屬がまがる（屈金）呂覽「柔則ニ一、堅則折」

【錮】コ　遇

○ふさぐ、銅鐵を鎔て隙を塞ぐ（鑄塞）漢書、劉向傳「雖」南山猶有隙」○かたし（堅固）○禁ニ一はつなぎとどむ、罪人を一室にとぢこめて自由をさせぬ。又、仕宦の途をふさぎて世に出ること能はざらしむ。○ぢびやう（持病）ながき病、癌に通ず。

【錮疾】シツ　久しくいえざるやまひ。漢書、賈誼傳「夫レ今不レ治、必爲ニ一一ニ」註「堅久之疾」＝痼疾・沈痼。

【錕】コン　元　阮

一鋙コは西方の夷國の山の名、其の產する鐵にて劍を作る、其の利以て玉を切るべしといふ。列、殷湯「一鋙之劍」＝昆吾之劍。

【錚】サウ　庚　耕

○かね、どら（鉦）○一は金の聲。又、琴の聲。

【錚錚】ソウ　○金鐵の聲。後漢書、劉盆子傳「朝所レ講誦中一一、備中佼佼者也」○轉にてすぐれたる人物の義とす。晉洛中諺「洛中一一馮惠卿」○琴の聲。孟郊詩「前溪忽聞レ琴、隔レ林寒一一」○投壺の矢のひびき。王禹偁、竹樓記「矢聲一一然」

【錚鏗】ソウ　金の聲。潘岳、籍田賦「鏘牙一一」＝錚錚。

【錚錚】ソウ　前條に同じ。王禹偁詩「一一美金鏘」鏘一に縱に作る。皮日休詩「暴雨正錚摐」

【錯】㊀サク ㊁ソ 通 編

㊀黄金にてぬりてかざる、めっきする「金ー刀」漢書、食貨志「以ニ黄金一ー其文一」○やすり（鑢）○といし、あらと（厲石）玉石を治むるに用ふ。詩、小雅「他山之石、可ニ以爲一ー」○みだる（亂）○まじる（雜）まじはる（交）「交ー」○ななめにゆく（邪行）○そむく、たがふ（乖・舛）○あはぬ、合せず。漢書、五行志「與ニ仲舒一ー」○あやまる（誤）「一誤」「失ー」○かはるがはる、たがひに（迭）中庸「如ニ四時之ー行一」○ー然は敬愼の貌。○ー峩は高峻の貌。㊁おく（置）史、周紀「刑ー四十餘年不用」＝措。○安んずる。屈原、九章「各有ニ所一ー焉」○やめる、とどむ（停止）廢する。○ほろぶ（滅）○人名、趙ーソは漢の政治家。

同音異訓 錯・誤・謬・訛・愆・過・失の別は誤（八〇九頁一段）の條を見よ。○錯・交・接・雜・混・淆・參・間・厠・廁・糅の別は交（九一頁三段）の條を見よ。

【錯行】サクカウ たがひにかはるがはるめぐる。中庸「辟如ニ四時之ー一、如ニ日月之代明一」

【錯愕】サクガク あわておどろく。後漢書、宋則傳「二人ー一不ニ能ー對」

【錯覺】サクカク 心理學にて外界の事物をまちがへて知覺する。

【錯簡】サクカン 書物の字句、又は紙數が入りちがふ、簡は竹のふだ、古、用ひて字を寫す。大學、章句「蓋本頗有ニ一ー一」

【錯擧】サクキョ まじへあげる。左傳、序「年有ニ四時一、故ー一以爲ニ所ー記之名一」

【錯近】コクキン いりまじる（交雜）宋玉賦「迴穴ー一」

【錯誤】サクゴ あやまる。あやまり。李白詩「流俗多ニ一ー一、豈知玉與ニ珉一」＝舛誤・錯謬・錯過。

【錯過】サククワ 錯誤に同じ。

【錯崔】サクサイ たかくけはし（高峻）き貌。鳥賦、廣成頌「隆穹窿回、嶋嵸ー一」

【錯雜】サクザフ いりまじる。王褒、洞簫賦「絲脩ー一」

【錯綜】サクソウ ○まじへてぬひとる。寶應文「其峻潔而可ニ味者、往往ー一ニ其間一」○兩國の地形の入り雜れる險。史記「秦韓之地、形如ニ一ー一」

【錯節】サクセツ いりまじりたる木のふし。後漢書、度尚傳「不ニ遇ニ盤根一ー一、何以別ニ利器一乎」

【錯舛】サクセン みだれそむく、たがひそむく。蓋唐書、高祖紀「近代以來、多立ニ寺舍一ー一壞斷、誘ニ納姦邪一」

【錯然】サクゼン うやまひ愼む貌。易、離卦「履ー一」

【錯綜】サクソウ ○いりまじる。○いろいろに組み合せる。易、繫辭「參伍以變、ー一ニ其數一」

【錯刀】サクタウ ○漢の王莽時代の貨幣の名、形刀に似、金泥にて飾る。漢書、食貨志「ー一以ニ黄金一錯ニ其文一、一刀直五千」○俗玉石を治むる具。＝錯。

【錯峙】サクヂ いりみだれてそばだつ。呂温文「五色相宜、萬邦ー一」

【錯陳】サクチン まじへつらねる。王粲賦「劍旌ー一」＝錯列。

【錯認】サクニン あやまりみとめる。劉克莊詩「夢回殘月在、ー一是天明」＝誤認。

【錯總】サクソウ あやまりたがふ。漢書、董仲舒傳「陰陽ー一、氣氛充塞」＝錯誤・乖總。

【錯謬】サクビウ あやまりたがふ。漢書、元帝紀「陰陽ー一、風雨不ニ時一」唐書、百官志「校書郎、掌ニ校ニ理典籍一、刊正ー一ニ」＝錯總・舛謬。

【錯落】サクラク 入りまじる。班固、西都賦「隨侯明月、ー一ニ其間一」

【錯亂】サクラン ○いりみだれる。孔安國、尚書序「ー一磨滅、勿ニ可復知一」○ちがひくるふ「精神ー一」

【錯綸】サクリン まじへてちりばむ。漢書、劉之遴傳「金銀ー一、古雜二枚」

【錯戻】サクレイ まじはりもとる。韓愈「赤棒」注「皮理ー一、紆繞二生山中一」

【錯列】サクレツ 入りまじりならぶ。魏都賦「均田畫壄、基疆ー一」＝錯陳。

【錯連】サクレン まじはりつづく。鹽鐵論「閭道ー一、足ニ以游觀一」

【錯辭】ことばをおく。文詩の字句をえらぶ。左思賦「豐ニ比ニ物以ー一、遂ニ清都之閑館一」＝措辭。

【錙】シ 支

○六銖（一說に六兩、又、八兩の重さ）○極めて小量の義とす「一銖」「一介」

【錙銖】極めて僅小をいふ。禮、儒行「儒有ニ上不ニ臣ニ天子一、下不ニ事ニ諸侯一、愼靜而尚ニ寬、強毅以與ニ人、ー一分ニ國如ニ一ー一」

【不ニ失ニ錙銖一】少しの誤もなし。晉府元龜「唐陸贄良元中、爲ニ相、精ニ於吏事一、參酌裁斷、ー一」

【算ニ錙銖一】少しの利益をかぞへる。白居易詩「時情憂ニ寒窘一、世利ー一」＝計ニ較ー一。

【錆】シャウ 陽

○くはし（精）○さび。金屬の腐蝕して生ずるもの。＝銹。

【錞】㊀ジュン 眞 トン 元 ㊁タイ 隊

㊀鼓に和して鳴らす一種の樂器。周禮、封人「以金ー和ㇾ鼓」㊁いしづき(鐏)矛の柄の下端。

【錐】スキ　支

○きり、もんで小さき穴をあける大工道具。○はり(鍼)○きりの如く細小なるもの。○きりの如く細く尖れるもの、毛ーは筆の異名。蘆ーはあしの初生のもの。○とし(利)○金鏃箭羽の矢「ー矢」

【錐刀】スキタウ　きりにてほる(書苑)

【錐股】コキ　學を勉め睡氣を催ふせば、自ら錐にて股を刺したる故事。戰國策「蘇秦讀ㇾ書欲ㇾ睡、引ㇾ錐自刺ㇾ其股、血流至ㇾ足」

【錐矢】スキ　金のやじりの矢。淮南、兵略「疾如ニーー一」

【錐指】スキ　きりにて　大地をさす、見識のせまき喩。莊、秋水「是直用ㇾ管窺ㇾ天、用ㇾ錐指ㇾ地、不ニ亦小一乎」

【以ニ錐刀一陷ニ泰山一】スキタウヲモツテタイザンニコボツ　微力を以て大敵に敵するも、破ること能はざるに喩ふ。荀、議兵「以詐遇ㇾ齊、譬ㇾ之猶ㇾ以ニ銀刀一陷ニ泰山上也」

【錐刀之末】スイタウノマツ　わづかなる利益。左、昭六「ーー、將ニ盡爭ニ之」

【引ㇾ錐自刺】インスイジシ　錐股を見よ。

【錐處ニ囊中一】スイノナウチュウニアル　才智ある者が其の技倆をあらはすに足る地位に置かれる喩。史、平原君傳「夫賢士之處ㇾ世也、譬若ニ錐之處ニ囊中一、其末立見」

【錫】㊀セキ・シャク　㊁シ　㊂セキ・シャク　㊀㊁㊂通　㊁寘　㊂陌

㊀すず、鉛に似て稍堅く銀色を帶びたる金屬。○たまふ「優ー」「嘉ー」詩、大雅「孝子不ㇾ匱、永ー爾類」(孝行の至、能く延きて旁人に及ぶ義)たまもの(賜)○しゃくぢゃう、道士・僧侶などの用ふる杖「巡ー」「飛ー」「挂ー」○ー蘭ハ印度は印度洋中の大島、印度半島の東南端に在り、氣候炎熱、佛教最も盛んなり、首都を科崙埠といふ。㊁あたふ(予)＝賜。㊂貨のこまかなるぬの(細布)

【錫與】シヨ　錫・賜・貺・賚・給の別は賜(一八七頁二段)の條を見よ。

【錫杖】シヤクヂヤウ　錫杖のひびき。許渾詩「ーー空山虎豹驚」

【錫人】シヤクジン　すずを鎔て人の形をつくる、古、以て葬に殉ぜしめたるもの(顏氏家訓)

【錫鍋】シヤククワ　錫杖のひびき、錫杖を見よ。

【錫鉦】シヤクセン　すずにて造りたるぜに。唐書、食貨志「河東ーー皆廢」

【錫杖】シヤクヂヤウ　道士・僧侶などの杖。翻譯名義集「ーー由ニ振時作一ニ錫鍚聲一也、亦名ニ聲杖一」＝聲杖。

【錫奴】シヤクド　足をあたたむる器、ゆたんぽ。事物原始「ーー溫ㇾ足器也、俗名ニ湯婆子一」

【錫縞】シヤクカウ　さいはひをさづける。書、洪範「予攸ㇾ好德、汝則錫ニ之縞一」＝錫福。

【錫命】シヤクメイ　命をたまふ、天帝又、君主より命令を發る。左、莊元「來錫ニ桓公命一」

【錫類】シヤクルイ　字解を見よ。

【錫賚】シヤイ　たまもの。舊唐書、真臘國傳「貞觀二年、與ニ林邑國一俱來朝獻、太宗嘉ニ其陸海疲勞一ーー甚厚」＝賜賚。

【錢】㊀セン　㊁セン　先　㊀

㊀ぜに、かね、通貨「金ー」「銅ー」「銀ー」「緡ー」古、泉と通用す。○姓。ー起は唐の詩人、大歷十才子の一人。ー大昕は清の嘉定の人、竹汀と號す、著書に通ず、著す所、潛研堂集といふ。○はかり(衡)の名、兩の十分の一、其の制、宋より始まる。○圓貨幣の名。圓の百分の一。㊁すき(銚)地を剗りて草を除く具。詩、周頌「庤乃ーー錢」

【錢】セン　錢は人皆之を欲す、故に兩戈相爭ふに至る。會意文字。

【錢貨】センクワ　ぜに、雜貨。漢書、食貨志「ーー六品」＝錢刀・錢幣・泉貨。

【錢貫】センクワン　ぜにさし。漢書、食貨志、注、纘、謂ニーーー也」

【錢穀】センコク　ぜにと穀物と。轉じて賦稅をいふ。史、陳丞相世家「問ニ天下一歲ーー出入幾何一」

【錢財】センザイ　ぜに、たから。莊、徐無鬼「ーー不ㇾ積、則貪者憂」

【錢神】センシン　金錢の力を神に喩へていふ。晉書、魯褒傳「傷ニ時之貪鄙一、乃隱ニ姓名一、而著ニーー論一、以刺ㇾ之」

【錢樹子】センジュシ　かねのなる木、妓女をいふ。樂府雜錄「許子和吉州永新倡家女也、開元末、選入ㇾ宮、卽以ニ永新一名ㇾ之、既美且慧、善歌、能變ニ新聲一(中略)及ㇾ卒謂ニ其母一曰、阿母——倒矣」

【錢刀】センタウ　ぜに。○刀も錢。卓文君、白頭吟「男兒重ニ意氣一、何用ニーー一爲」＝錢貨・錢幣。

【錢湯】センタウ　圓ふろや、錢を取りて入浴させる湯屋。

【錢塘】センタウ　縣の名、杭州府城の南に在り。もと樂の錢唐縣。唐は其の國

錢に同じきを以て土を加へて塘と爲す。

【錢範】ゼンハン ぜにの鋳形ヲ＝錢范。

【錢穿】ゼンセン ぜにさし。韓琦詩「巧工近識知二楽實一、繕以假僞一窺二一一一」

【錢文】ゼンブン ぜにの面の文字。後漢書、光武紀「一一有二金刀一」

【錢幣】ゼンヘイ ぜに。漢書、食貨志「更造二一一一以贈レ用」＝錢貨。

【錢癖】ゼンペキ ぜにを愛するくせ。晉書、和嶠傳「和嶠家至富、性吝、雖二錢一不二散與一人、時人曰二之一一一」

【錢舗】センポ 兩替店ガヘヤ＝錢莊。

【錢龍】センリョウ ○りょうの一種 南史「梁元帝幸二荊州苑一、見二大黒蛇盤二屋於前一、衆小龍遶レ之皆黒色、宮人曰、此非レ怪也、恐是一一、乃取二錢數千萬一鎮レ之」○錢にてつくりたる龍。粧樓記「長安妓、上巳結レ錢爲レ龍、作二一一一會一」

【錟】（一）タン 覃 （二）セン 鹽 （三）エン 琰

（一）ながき矛。（二）とし、するどし（利）＝銛。（三）するどき刃、利刃「一戈」

【錟戈】タンカ するどきほこ。史、蘇秦傳「一一在レ後」

【錘】（一）ツキ 支 通音 （二）スキ 寘

（一）はかりのおもり、ふんどう（稱權）「稱一」○八錄の重さ。又十二兩の重さの稱。（二）金屬をきたへ成す器、鍛器。莊、大宗師「皆在二爐一之間耳」

【錠】テイ・チョウ テン 蒸 庚

○たかつき、熟物ニモルを神に薦むる足のある祭器。○通貨の銀片「銀一」圖○ちゃう、ぢゃうまへ（鎮）○平たくうすくのべたる藥「一劑ヂャウ」

【錣】テツ 屑

○馬の策鞭ムチにつけたる鐵の針。○圖しこみ（鋲）

【錛】ヘイ 梗 俗字 錛は

○おほばん、古の通貨。○金銀を錛ヘラの形に平たくのべたる板（鈑）「一金」○かま（釜）

【鋸】ヲイ 隊

○かんな（鉋）○圖もぢり。長き柄のさきに屈曲せる多くの針を植ゑたる武器。つくぼう、そでがらみ。

【錄】（一）ロク 屋 （二）リョク 燭

（一）しるす（記）記載する「登一」「詳一」「著一」「漫一」「輯一」公羊、隱十「春秋一」内而略二外一」○うつす、かきぬく（鈔寫）「抄一」○かきしるせしもの、文書。「記一」○歴史「實一」○品物又、書物の題目をしるせしもの「目一」○あらはす、明かにする、表明する。○とる（采取）○とりしまる、ただす（檢束）○とりまとめる、すべる（總領）○ついづ（次第）よはひす（齒序）○劍の名。＝綠。（二）一一は凡庸なる貌。又、衆に隨從する貌。＝碌碌。（三）ゆるしかへりみる（寛省）

【錄藏】ロクゾウ かきしるしてたくはへる。漢書、律歴志「叔孫通所レ撰、與二律令一同一一於理官一」

【錄事】ロクジ ○記錄文簿をつかさどり善惡を糾彈する官の名。晉の時一一參軍を置きしに始まる。職官要錄「總二錄衆事一」齊書、百官志「凡公督府置二佐諸曹一、有二一一一記室一」○昔人、妓を以て簿政を司らしむるを名づけて酒料といひ、又一一といふ（老學庵筆記）○圖軍法會議、又、宮中御厩所の關官。

【錄寫】ロクシャ 文書をうつしとる。＝錄。

【錄奏】ロクソウ 取調べて申し上げる。北齊書、孝昭帝紀「未レ叙二追贈一者、亦皆一一」

【錄簿】ロクボ 姓名を記したる帳簿。後漢書、李膺傳「景顯爲二膺門徒一、而未レ有二一一一、故不レ及二于誅一」

【錄問】ロクモン 罪狀を帳簿に記錄してたづねる。魏書、世宗紀「與二王公卿士一、親臨一一」宋史、眞宗紀「一二一大辟罪人一」

【錄用】ロクヨウ 采リ用ふる。後漢書、袁紹傳「廣羅二英雄一、隨レ瑕一一」＝采取。

【錄錄】ロクロク ○凡庸なる貌。漢書、蕭何・曹參傳贊「當時一一、未レ有二奇節一」○衆にしたがふ貌。史、平原君傳「公等一一、所レ謂因レ人成レ事者也」＝碌碌。

【鎚】ツイ 支 又、鎚に作る 通音アイ

しころ（頸鎧）かぶとの後方にたれて首筋をおほふもの「一鍛」

【鎗】【國字】

かざり、金屬を用ひてかざる。又其の裝飾せし金物「一職」

【錵】【國字】

にえ、刀の燒きに雲形のあやの現はるるもの。又其のあや。

九畫

【鍱】エフ セフ 葉 葉 いたがね。銅又鐵などを鎚錬してうすき薄片とせしもの。

【鍜】カ 麻 鍛と同じ 鍛と同じ しころ（錏）頸鎧。

【鍔】ガク 藥 ○は（刀刃）「剣ー」○剣のきっさき（剣端）漢書、蕭望之傳「底厲鋒ー」○刃のわき（刃旁）○はしきは、はて（端匡）場に通ず。西京賦「前後無有ニ垠ー」○ーは高き貌。○國つば。

【鑑】鑑（金部十四畫）に同じ。

【鍋】クヮ 歌 なべ、釜の類「土ー」「銀ー」「茶ー」

【鍋戸】コクヮ 鍋を販る民（宋史、食貨志）

【鍋爐】コクヮ 汽機の一部、鍋中に水を盛り、爐中に煤を燃し以て水蒸氣を發生し汽機をして運動するを得しむるもの。

【鍠】クヮウ 陽 庚 ○ーー鎗ー鏗ーは鐘鼓ケイコの聲の形容。後漢書、馬融傳「ーー鎗鎗」○樂器の名。文心雕龍「林籟結響、調如擊磬、泉石激韻、和若球ー」○まさかり（鉞）○一種の兵器。劍に似て三刃、柄と共に三尺五寸、虎豹の皮を以て装とす。

【鍧】クヮン エン 刪 諫 鏗ーはクヮンクヮンは鐘鼓の相雑る聲。

【鍰】クヮン エン 刪 諫 ○周代の貨幣のめかた、六兩の稱。○わ「銅ー」＝環。

【鍥】ケツ ケイ 屑 霽 ○きざむ（刻）苟、勤學「ー而不舍、金石可鏤」○きる（斷）たつ（絕）○かま（鎌）形鉤の如く、穀を刈るに用ふ。○むごし（刻酷、慘酷）

【鍥薄】ケツ ○銭をけづりて薄くする。後漢書、劉陶傳「願寛ニー上之繩」○むごくする。唐書、魏徵傳「道建之旨未ー弘、而ーー之風先扇」＝刻薄、慘酷。

【鍵】ケン 銑 霰 ○かぎ（錠牡・鑰）開閉のしまりをする爲め、じょうにさしこむ金物「扃ー」「關ー」「管ー」禮、月令「修ーー閉」「閉は鎖鑰ジヤク」○かなへのみみ（鉉）鼎を擧ぐる所以の者＝扃。○くさび（車轄）爾雅序「六藝之鈐ー」

【鍵盤】ケンバン 風琴・洋琴バなどの前部に排列する黒白の小盤、高低の音を發するもの。色の白きを白鍵といひ、黒きを黒鍵といふ。

【鍬】コ 虞 ○柔穀を盛る祭器。瑚に通ず。

【鍬】コウ 尤 有 ○や（矢）金鏃翦羽の矢。○やじり（鏃）

【鍬矢】コウシ かねのやじりをつけたる矢（周禮、矢人、注）

【鍤】サフ 治 俗字は俗字 ○すき（鍬）地につきさして土を起す農具「畚ー」「利ー」「荷ー」史、河渠書「擧ー如雲、決渠爲雨」又、雨插に作る。○はり（鍼）

【錨】錨（金部八畫）の本字。

【鍼】シン 侵 又、鍼・針に作る ○はり、ぬひばり、衣を縫ふ針「縫ー」「鐵ー」左、成二「執ー織紝」註「執ー女工之縫紝者也」○病を治すはり。又其の術「ー術」○さす、はりさす（刺）○人名。詩、秦風「子車ー虎」

【鍼艾】シンガイ やまひを治療するはりともぐさと。轉じて鍼灸の義とす。袁枚文「以二往古一爲二後鑒一、以二未來一爲二ーー一」

【鍼芥】シンカイ 磁石は能く鐵の鍼を引き、琥珀は能く芥ゴミを拾ふ。よりて人の情性投合するをーー相投といふ。王珪詩「ーー人身豈易レ投」

【鍼灸】シンキウ 針灸（二〇三頁四段）に同じ。

【鍼神】シンシン 裁縫にすぐれたる人の稱。拾遺記「魏文帝所レ愛美人薛靈芸、常改レ名曰二夜來一、妙二於鍼工一、避レ燭二深帷之内一、不レ用二燈燭一、裁製立成、宮中稱爲ニーー一」

【鍼工】シンコウ たちぬひ、裁縫、又其の人。拾遺記「妙二於ーー一」

【鍼指】シンシ 女工をいふ。楊奐詩「十三巧ーー、十四鍼歩趨」＝鍼黹。

【鍼術】シンジュツ 針術（二〇三頁四段）に同じ。

【鍼縫】シンホウ はりと、きりと。論衡「ーー所レ穿、無レ不二暢通一」

【鍼線】シン　○はりと、いとと。刺繍に用ふる所の者。喬知之詩「曲房理二ー一」杜甫詩「裁縫減二盡ー一跡」‖針線。○事物の頭緒及び條理に喩ふ。本草綱目に萬方ー一あり、諸病を以て門を分ち、詳かに治する所の藥を列す、蓋し檢査便利にして、鍼に因りて線を引くが如く、百病千方手に應じて之を得るの意。

【鍼治】チン　鍼術にて病を療治する。

【鍼灸】チン　針灸（二〇三三頁四段）に同じ。女工をいふ。

【鍼芒】ボウ　はりのさき。唐書、沙陀傳「驍射二百步外、ー一木葉無レ不レ中」

【鍼盤】バン　磁石盤。瑯琊代醉編「術家ー一、用レ水浮レ鍼、視二其所レ指、以定二南北一」‖羅鍼盤。

【鍼取】シュ　にらにはりをさす。自由を得しめざるに喩ふ。唐書、吳武陵傳「徐壓二其首一、梁蕩二其翼一、魏斯二其壓一、滑鍼二其脰一」

【鍼灸】キュウ　○肌膚にさして病を治するかねの針と、いしばりと。又其の術の淺書、蔡文志「周度鍼石」注「鍼所二以刺一病也、石謂二砭石一、即鍼石也、古者攻レ病則有レ砭、今其術絕矣」○轉じて鍼戒（次の義に用ふ。范成大詩「時時苦語見二ー一一」‖針砭・鍼砭。

【鍼錍】ケイ　はりのさき。微細に喩ふ。涅槃經「尖頭ー一、受二無邊衆一」

【鍼末】マツ　はりのさき。淮南子「離朱之明、察二ー一於百步之外一」

【鍼線】シン　はりと、いとすぢと。說苑「賦二ー一者成二帷幕一」

【鍼路】ロ　針路（二〇三三頁四段）に同じ。

【錍】ヒ　シ　支　麻

こぼこ（短矛）

【鍾】ショウ　冬

○あつむ「ー美」あつまる（聚）○壺の屬、酒を貯へる大器。孔叢子「堯舜千ー」○さかづき（酒器）○あたふ（予）天の賦予する所。杜甫、望嶽詩「造化ー神秀」○あたる（當）○かさぬ（重）○古の量ますの名。支那の六斛四斗、又、八斛、又、十斛。○つりがね。古、鐘に通ず。○龍ーは竹の一種。又、淚を垂れる貌。又、老いぼれる貌。‖鐘。

同訓異字　鐘・聚・集・募・輯・率・輳・醵・攅・屯の別は聚（一五四九頁三段）の條を見よ。

【鍾愛】アイ　めでいつくしむ心を一人にあつめる、非常に愛する。南史、江總傳「特所ー一」

【鍾馗】キ　三國の魏の人、字は元常、胡昭と並に劉徽升を師とし草書を學ぶ、蘇の書「飛鴻戲海、舞鶴游 レ天」が若しと稱す、世に胡肥鍾瘦の目あり。

【鍾馗】キ　疫病惡魔を驅る神、巨眼多髯にして、黑き衣冠を著け、拔劍して小鬼を捽する像に描く、唐の明皇（玄宗）が夢中に見る所、吳道子をして其の像を寫かしめしに始まるといふ。五代史「獻ー一擧レ鬼圖ー」（一說にーは考工記の終焉に同じく由來する所久しと）

【鍾山】ザン　○今の江蘇省江寧縣の東北に在り、俗に紫金山と稱す、諸葛亮のー一龍蟠と稱せしもの是れなり、吳の孫權、其の祖の諱を避けて蔣山と改む、宋代復ーー一と名づく。○晉尚の別名。淮南子「譬若ー一之玉」

【鍾子期】シ　春秋時代の楚の人。伯牙の彈琴を聽きて其の妙趣を解し得たりといふ。列、湯問「伯牙鼓レ琴、志在二高山一、子期曰、善哉峨峨兮如二泰山一、志在二流水一、子期曰、善哉洋洋兮若二江河一、伯牙所レ念、子期必得レ之」

【鍾聚】シュウ　あつむ。稱名「ー一也、上德之所ー一也」

【鍾張】チョウ　鍾繇と張芝と、皆善書を以て名あり（張懷瓘書估）

【鍾乳石】ニュウセキ　方解石が石灰洞内にて冰柱の如く垂下せしもの、つらゝいし。‖鍾乳石・石鍾乳。

【鍾念】ネン　あつくいつくしみおもふ。唐書、張鷟傳「希烈之母、ー一幼子、目不レ絕レ泣」

【鍾美】ビ　うつくしきをあつむ。左、昭二八「子路早死無レ後、而天ー一子是一」

【鍾愛】アイ　六斛四斗の量と六斗の量と、少しばかりの粟との義。任昉詩「ー一之秩、猶二之故榮一」

【鍾情】ジョウ　至りてあはれみいつくしむ。范曄文「生而甚慧、眸所ー一一」

【鍾王】オウ　魏の鍾繇と、晉の王羲之と、共に名高き能書家。蘇軾題跋「書論ー一之跡、蕭散簡遠、妙在二筆畫之外一」

【鍬】ショウ　蕭　作る

○すき（鍤）○國くは（鎒）土を掘り起す農具。

【鍬鎒】ショウカク　すきくは。指月錄「大衆各備ー一一刻レ草」

【鍫】ソウ　東

鍬（前條）に同じ。

【鍫】ソウ

馬頭につくる冠。蔡邕獨斷「金ー一者馬冠」

【鍛】タン　翰　鍛とは別

○きたふ、金屬の質を精錬する爲めにうちたたく「ー冶」「ー錬」晉書、諸葛傳「康好「ー、每

於柳樹下ー」○ねる、物事に熟達せしむる。○あらふ（濯）○ほじし（脯）「ー脩」＝腶。○といし（礪石）

【鍛甲】タン　よろひをきたへつくる。奥、主父偃傳「今天下ー兵、銷ー刃、鑄ー銚鋤、以ー耕織」○鍛、稽ー輪運ー掩、夫見二休時一」

【鍛金】タン　金鐵をきたへる。後漢書、烏桓傳「男子能作二弓矢鞍勒一、ーニー鐵一爲二兵器一」

【鍛石】タン　○といし（礪石）○石灰（本草）

【鍛鐵】タン　うちきたへし鐵。＝錬鐵。

【鍛冶】タン　金屬をきたへて器物を造る。又其の工人。かぬち。かぢ。

【鍛錬】タン　○きたへねる。方干詩「文章ー一猶相似、年齒參差不ー較ー多」○轉じて酷吏が色色に構成して人を罪におとす。漢書、路溫舒傳「上樂ー長ー卻、則ー一而周二內之一」註「精熟周悉、致二之法中一也」

【鍵】チン　㊥

だい、まくらぎ、木を斫る質。

【鍉】㊀ティ　㊁シ　㊂チキ　㊃支　㊄齊

㊀きっさき、ほこさき（鋒）○誓をする時、血を啜る器。㊁かぎ（鑰）「鑰ー」○さじ（匙匕）＝匙。㊂やじり（鏃）漢書、項籍傳「銷ー鋒ー」＝鏑。

【鍍】ト　㊥　㊇

めっき（滅金）金銀などをとかして物の面にながし著ける。又、其のめっきせしもの。

【鍍金】カン　めっき。極めて薄き黃金を以て銀・銅などの諸器の上に加へかぶせる。李紳詩「假金方用眞金鍍、若是眞金不ーレー」

【鍍銀】ギン　ぎんめっき。

【鍮】トウ　㊦　通音チュウ

○ー石は自然銅の精しきもの、色黃金の如く、之を燒けば赤くして黑からず。○眞ーチュウは銅十に亞鉛シン三を合せたる金屬。＝黃銅。

【鍑】フウ　フク　㊦　㊇

口のすぼめる大釜。漢書、匈奴傳、注「ー音富、釜之大者也」（一說に大口の釜）

【錨】ベウ　㊇

いかり。鐵にて造り水中に投じて船を止むる具「投ー」「拔ー」

【鍪】ボウ　㊦

○かぶと（兜首鎧）かぶとの鉢「兜ー」○かんむりまき（冠卷）

【鍑】鍑（金部七畫）に同じ。

【鍚】ヤク　㊄

○馬の額の飾とする金具。詩、大雅「鉤膺鏤ー」○たてかざり、屑の背後の金の飾。禮、郊特牲「朱干設ー、諸侯之僭禮也」

【錬】レン　㊁　煉・練と混用す

○ねる（冶金）銅鐵を煎り冶して精熟せしむ「精ー」「鍛ー」皇極經世「金百ー然後精、人亦如ー此」○ねりあげたる金屬。＝精金。○ねれる（精熟）すべて事物の精熟せるもの「ー句」「修ー」「ー丹」○轉じて酷吏が巧に構成して人を罪に入れるを鍛ーといふ。漢書、路溫舒傳「鍛ー而周二內之一」

【錬鋼】コウ　ねりたるはがね。傅休奕、劍賦「爪似ニー一、貝如二奔星一」

【錬氣】キ　道家にて氣をねる法。五代史、豆盧革傳「服二丹砂一ーレー以求二長生一」

【錬句】ク　句をねりて其の工程を求める。陸游詩「ー未レ安姑棄擲」

【錬形】ケイ　體を練りて健全ならしめる道家の術。神仙傳「仙家有二太陰ー一之法一」

【錬師】シ　道士の美稱。孔帖「道士修行、德高思精者、謂二之ー一一」

【錬鐵】テツ　ねりてとかす。七命「楚之闕劍、歐冶所レ鑄、乃錬乃鏌」

【錬石補天】セキホテン　古、天、四北に足らず、女媧氏五色の石を錬りて以て之を補ふ「列子・淮南子」

【錬丹】タン　道家にて丹藥即ち長生不死のくすりをねる術。又其のねりし丹藥。晉書、葛洪傳「從祖玄、吳時學レ道得レ仙、謂ニ葛仙公一、以二其ー一秘術一授二弟子鄭隱一」＝錬藥・煉丹。

【錬鐵】テツ　ねりきたへしてつ。＝鍛鐵。

【錬鳳】ホウ　鳳凰の前に吹くかぜ。道南志「鳳凰將レ發、有二微風細雨一、先錬二後命一、謂二之ー一」

【錬磨】マ　ねりみがく、深く道術をねり精熟する。＝練磨・研磨。

【錬藥】ヤク　くすりをねり合はす。又、其の藥。李白詩「桑然登二玉臺一、授以ー一說」＝煉丹。

十畫

【鎰】イツ　㊇

○金部（十畫）鎰・鑒・鏗・鏘・鏑・鐫・鐔・鎖・鑄・鏃・鎗・鏃・鎗・鏃・鎗

なる利器を抱くも、時勢の來るを待たざれば、功を成すこと能はざる喩。鹽ノ有二智慧一（八七一頁首段）を見よ。

【鎮】㊀チン 國 ㊁チン 國 ㊂テン 兜

㊀しづむ、おす（壓）重きものにて上からおしつける。○おさ（按）○やすんず（安）撫す で安んずる。○とどむ（止）○しづまる、をさまる。○おさへ、おし、おもし（重）又、其のもの。○一地方のおさへとなりて守備安撫に任ずるもの「一臺」「藩一」「雄一」「重一」○一州のしづめとなる大山。周禮、夏官「其山一曰會稽」○市集の大いなるもの、人口五萬以上ある市「漢口一」「景德一」○とこしなへに（長）陣と音通にて久しき義、詩に多く用ふ。○常の字の義と略ゝ同じ、六朝の人の詩に毎に用ふ、唐詩には尤も多し。褚亮詩「莫言春稍晩、自有二花開一」㊁まもる（戍）○寶器「玉一」㊂ふさぐ。ふさがる。＝塡。

【鎮遏】チンアツ しづめとどめる。北史、薛孝通傳「須下預計二一一以爲中後鎮止。

【鎮壓】チンアツ しづめおさへる。晉書、唐彬傳「諸軍已至足以二一一內外、願無二以爲一慮」

【鎮安】チンアン しづめやすんずる。宋史、呂公著傳「任二老成一二一百姓一、周知二百度一、無下如二陳襄佐一者上」＝鎮定。

【鎮慰】チンヰ しづめなぐさむ。後漢書、光武紀「一二一州郡一」

【鎮衛】チンヱイ しづめまもる。晉書、李武紀「一二一山陵一」唐書、劉貫傳「勇不レ足三以一二一社稷一、而智足三以伐一害國里一」＝鎮守。

【鎮靜】チンセイ しづめおさへる。後漢書、仲長統傳「當二君子困戹之時一、固二當下天一蹄二厚地一、猶恐レ有二一一之隕一也」

【鎮撫】チンブ しづめまもる。宋書、劉勔傳「持二節領一軍、置二佐史一、一二石頭一」

【鎮御】チンギョ しづめをさむ。晉書「一一有レ方、毋二將士死力一」

【鎮靜】チンセイ しづめふせぐ。賈至文「或謀府神深、才應二一一」＝綏靜。

【鎮護】チンゴ しづめて、護りまもる。吳志、宗室傳「諸孫、或賛二興初業一、或一二一邊陲一」

【鎮圭】チンケイ 帝王の執るたま、四鎮の山の象を以て綠飾とす、四方を安定する時に取る。周禮、玉人「一一尺有二寸、天子守レ之」

【鎮國】チンコク 國家をしづめ定める。元倉子「賢可二以一一レ一、亦可二以理一レ國」

【鎮座】チンザ 國神靈が其の地に鎭まりましまします。

【鎮子】チンシ けさん（徐氏筆精）＝卦算・文鎭。

【鎮止】チンシ しづめる。易經、疏「直說二一山一、已能一一」

【鎮紙】チンシ ぶんちん。文具の一、銅鐵玉石竹等にてつくる、或は禽獸鱗介の形に肖せ、以て紙をしづめて動かざらしむ。＝書鎭。

【鎮邏】チンラ ちかきをしづめる。隨機文「柔レ遠一レ一」

【鎮日】チンジツ ふだん、常月、盡閒のながき日をいふ。朱熹詩「一一空掩レ門」＝常日。

【鎮心】チンシン 心をしづめて安寧ならしめる。南史、鄭灼傳「常疏食講授、多苦二心熱一、若二瓜時一、輒覆臥、以レ瓜一レ、起便讀誦」

【鎮守】チンシュ ○しづめまもる。後漢書、伏湛傳「帝以二湛才任二宰相一、拜爲二司直一、行二大司徒事一、車駕每二出征伐一、常留一一、總二攝庶司一」國○チンシュ土地の守護神、うぶすなの神。○寺院のまもり神。

【鎮守府】チンジュフ 國○古、奥羽地方をしづめ守るために設けし軍管。○各軍港に置きて其の地軍區を管轄せしむる府。

【鎮戍】チンジュ 國境をしづめまもる。吳志、陸凱傳「夏口要衝、宜下選二名將一、以一一中一レ之」

【鎮紮】チンサツ しづめやすんず。晉書、劉弘傳「恢宏奧略、一二一南海一」＝鎭安・鎭撫。

【鎮西】チンゼイ ○新置省內の縣名。○國九州の古名。元明天皇の和銅十四年、筑紫に一一府を置きしに由る「續日本紀」

【鎮靜】チンセイ しづまりてしづかの義、晉書、高崇傳「吾閒嗣、德信不レ著、不レ能下一一繫庶一保中固維城上」＝綏靜。

【鎮場】チンバ しづめをさむ。魏志、注「司馬懿所レ善、皆爲二僚屬一、名位不レ殊、衆無二定分一、卒有二變急一、不二相一一一」

【鎮息】チンソク しづめやすんずる。宋書、臨川王道規傳「貞潔純素、潛居研志、耽二情墳籍一、亦足下一一煩戰一、牓中鎭浮動上」

【鎮塞】チンサイ 國一地方をしづめ守るために置く兵隊。又、其の陣營。今の師團の舊稱。

【鎮討】チンタウ 賊をおさへうつ。魏志、裴潛傳「太祖欲下授二潛精兵一、以一一中一之上」

【鎮宅符】チンタクフ 家內安全の祈禱の札、鎭宅靈府は北方を守る神にて龜蛇の象を爲すもの。酉陽雜俎「張東海、名曰レ能二辟一レ書二左右龍蛇如二一一一條一」

【鎮定】チンテイ しづめさだめる。＝平定。

安定・綏定。
【鎮続】チンゾク　しづめすべる。綱志、徐宜傳「今當二遠征一而此方未レ定、宜下得二清公大徳一、以レー之上乃以レ宜鎮二左護軍一、圖二統諸軍一」
【鎮撫】チンブ　しづめ安んずる。左、文十二「一一其社稷」
【鎮邊】チンペン　くにざかひをしづめる。晉書、盧viii尚傳「卿有二安邊之略一、爲レ我一レー、勿下以二道遠一爲上辭」‖安邊・綏邊。

【鎮】

鎭（前條）の俗字。

【鎖】

㊀ツキ　㊁タイ　灰　支

㊀おもり（錘）權（おもり）なり。○かなづち（金槌）抱朴子「以二鎖一鍛、其數千下」○かなづちにて擊つ。古琴疏「以二鐵如意一ー琴而破レ之」㊁きたふ（鍛）
【鎖撃】ツイゲキ　つちと、のみと。西軒客談「尊二戊戴一而起、乃命施二ー一、以混二其聲一」
【鎖殺】ツイサツ　かなづちにてうちころす。金史、宗室亨傳「吾能以レー一レ之」

【鎒】

㊀ドウ　㊁カ。　豪　哿

㊀くさぎる、草を除く。‖耨。㊁くは、田草を除く農具「銚」○くさぎる。
【鎒田】ドウデン　田草をくさぎりのぞく。淮南、說山「治レ國者若二ー一、去二害レ苗者一而已」

【鎛】

ハク　藥

○小さき鐘。○すき、くは（田器）鎒の類。○鐘を懸ける横木。又、其の横木の金華（かなはな）。

【鎞】

ヘイ　齊

○くし（櫛）杜甫詩「短髮不勝レ」俗に篦に作る。○かねべら、箭鏃（やじり）に似たる小刀。涅槃經「有二一人一謂二醫、醫即以レ金」刮二其眼膜一、使二復明一」

【鎔】

ヨウ　冬

○いる（鑄）○いがた（鑄型）漢書、董仲舒傳「上之化下、下之從レ上、猶二金之在一ー、惟冶者所レ爲」○とく、とける（銷）金屬が熱せられてとける。
【鎔解】ヨウカイ　金屬をとかす。又とける。
【鎔鑠】ヨウシャク　とかしたるしろがね。劉禹錫詩「皆波萬頃如レー一」
【鎔鋳】ヨウチュウ　とく。とかす。宋史、趙安易傳「募二工鋳一大鐘百餘一進レ之、極二其精好一、俄擊二殿階一皆碎、謂ー一盡二其精液一矣」
【鎔和】ヨウワ　とかしまぜる。

【鎌】

レン　鹽　又、鐮に作る

かま（鍥）草を刈る鐮狀の刃もの「利ー」韓愈詩「晴雲如二擘一絮、新月似二磨ー一」
【鎌刃】レンジン　かまの刃先（はさき）。春渚紀聞「鎌取二馬草一歸、ー一鍛成二金色一、或以レ草然」
【鎌府】レンフ　圖鎌倉の雅名、源頼朝幕府を此地に創めし故。
【鎌利】レンリ　かまの如くするどし。黃庭堅文「學二此書一、好作二芒角ー一」

【鏤】

【國字】

かすがひ（鉚）兩材を接合せしむる爲めに打ちつける二脚の釘。

十一畫

【鏖】

アウ　豪

○みなごろし、盡く人を殺す、苦戰して多く殺す。○かまびすし（喧譁）黃庭堅詩「市聲」
【鏖殺】アウサツ　みなごろしにする。
【鏖戰】アウセン　敵をみなごろしにするまで大いに戰ふ。唐書、王栖曜傳「引二兵三千一與レ賊ー一」

【鏗】

カウ　庚

○金石の鳴る聲。禮、樂記「鐘聲ー一」○琴の聲。○つく（撞擊）楚辭、招魂「一鐘搖虡」○彭ーは古の仙人。彭祖、ーは其の名、姓は錢。
【鏗然】コウゼン　○鏗鏘に同じ。禮、樂記、疏「金鐘の聲、ー一然」○言語の明瞭なる形容。後漢書、楊政傳「戰」經ー一楊子行」
【鏗鏘】コウショウ　金石又は琴などの聲、玉は鏘ルス‖鏗鏘。
【鏗鍧】コウホウ　鏗鏘に同じ。白居易詩「琴音急節十二遍、跳レ珠撼レ玉何ー一」
【鏗鏘】コウショウ　鏗鏘に同じ。漢書、刑法志「ー一鼓舞」註「ー一、金石之聲」
【鏗鏘】コウショウ　鏗鏘に同じ。禮記「君子之聽

ン音、亦下聽二其一一一而已ヒ也」＝鏗鏘。
【鏗鏘】カウ　鏗戛に同じ。論、先進「敔ン琴希、一一舍ン瑟而作」
【鏗鐘】カウ　つりがねをつく。楚辭「一一撞ン蕤、枹梓怨咎」
【鏗然】ザン　鏗戛に同じ。鏗鏘を見よ。

【鑒】カン　ゲン　感　豏

やきなべ、食物をいり焼にする器。

【鏡】ケイ　キャウ　敬

○かがみ(鑑)銅、又玻璃にて作る、物の形をうつし見る具「明一」「銅一」「粧一」「磨一」淡書、韓安國傳「清水明一、不可以形逃」○てらす(照)○あきらかにす(明)○かんがみる(鑑)明かに察する。漢書、韓安國傳「明一聖法」○めがね。○てほん、模範。○破一は父を食ふといふ獣の名。＝破鏡。
【鏡影】ケイエイ　かがみにうつるかげ。開天遺事「宋璟未ン第時、於二日中一覩ン一ン鏡、一一忽成二相字一」
【鏡戒】ケイカイ　かんがみいましむ。明かなるいましめ。後漢書、寇恂傳「以二前人一爲二一一一」＝鑑戒・鏡鑒。
【鏡考】ケイカウ　他の事を借りてかんがみる。漢書、谷永傳「願陛下追二親夏商川興所二以失之、以一一己行、有二不ン合者、臣當ン伏二妄言之失一」
【鏡匣】ケイカフ　かがみばこ。念奴嬌「一一盛ン鏡之器」＝鏡奩。
【鏡愛】ケイアイ　○かがみ。賓淑文「以二往古一爲二一一、以二未來一爲二鍼艾一」○てほん。＝鑑鏡。
【鏡岩】ケイガン　かがみいは、鏡物の一種、其の面光りて鑑すべきもの。
【鏡花】ケイクワ　かがみにうつりたるはな。庾信詩「日光銀箔動、窗影一一搖」
【鏡花水月】ケイクワスイゲツ　かがみに映りたる花と、水に映りたる月と。目に見ゆるも捕捉し難し。よりて詩歌などの言語を超絶したる妙趣に喩ふ。詩家直說「詩有三可ン解不ン可ン解者二——勿ン泥二其迹一可也」讀書參看。
【鏡彩】ケイサイ　かがみの如きひかり。唐太宗詩「鏡涵二桂枝一圓、輪劘二一一缺」
【鏡浮】ケイフ　かがみの如く清くすむ。水經、注「其水澄停、一一而不ン流」＝鏡清。
【鏡水】ケイスイ　かがみの如くすみてしづかなる水。國史補「凡酒ン物由二水土一、故江東宜二紗縠紙一者、一一之故也」
【鏡裏】ケイリ　かがみのうち、かがみに物の映ずる所。證道歌「一一看ン形見不ン疑、水中捉ン月爭拈得」＝鏡中。
【鏡奩】ケイレン　かがみばこ。後漢書、陰皇后紀「親二太后一一中物、感動悲涕」＝鏡匣。
【鏡鑑】ケイカン　前條に同じ。念奴嬌「一一疏比、各異ン工」注「一一盛ン鏡之器、若二今之鏡匣一也」

【鏍】サ　歌

くさり、ちゃう。＝鎖。

【鏘】ショウ　陽　平

○一一は高き貌。又、音樂の聲。玉の聲。○玉又は鈴などの鳴るこゑ「鏗一」
【鏘鏘】ショウ　○金石の聲。又、音樂の聲。又、鈴の聲。詩、大雅「八鸞一一」＝鏘然。○高き貌。後漢書、張衡傳「臨二高閑之一一一」
【鏘然】ザン　金石の聲。＝鏘鏘。

【鏟】サン　潸

○かんな(鉋)木を平かにけづる鐵器。○草を除く器。○けづる。木華、海賦「一一臨崖之阜陸」＝剗。○そこなひけづる(損削)○うむ。鮑照賦「一利鋤山」＝產。○一鉋は古の貴名。

【鏇】セン　銑（金部七畫）に同じ。

○まじろ(鏇)○精りて文采ある鏡。郭璞、江賦「鱗甲一錯」

【鑯】サン　感　豏　咸

○のみ(小鑿)たがね、金石に書畫をはりつける小さきのみ。○石にゑる(鐫)

【鏃】シュウ　サク・ソク　江　多
○ほこ（矛）小さき矟ボウ○つきさす、矛にてつきさす（撞刺）○一錚ソウは金屬の鳴る聲。歐陽修、秋聲賦「鏦鏃鏑錚、金鐵皆鳴」

【鏦】セキ　陌
なの（斧）まさかり「一柲」＝戚。

【鏇】㊀セン　㊁セン　戰　先
㊀くるくると軸を轉じて物を裁る器。㊁ろくろ（轆轤）旋盤。圓轉軸に物を取りつけて圓形の器を造る機械。

【鏥】セン　琰
一一センは銳進する貌。太玄經「銳一一」又、火炎のもえ上る貌。太玄經「揉厥一一」

【鏃】ソク　ソウ　屋　尤
やじり、矢の根。賈誼、過秦論「秦無亡矢遺一之費」＝箭頭。矢鏑。
【遂鋼括羽】ソクカツウ　學を修め、智を研きて有用の器となる喩。家語「子路曰、南山有竹不揉自直、斬而用之、達乎犀甲、如此言之、何學之有、孔子曰、括而羽之、鏃而礪之、其入之不深乎」

【鐺】タ。　陽
鐘鼓の聲。詩、邶風「擊鼓其一」傳「一然、擊鼓聲也」
【鐺然】タン　鼓るうつ聲の形容。字解參看。
【鐺鏘】タソウ　○鐘鼓の聲。盛世恭、講武賦「曳三虹旗之正正、振二鼉鼓之一一」＝鐺然。○泛く大聲の形容。五代史「磊磊其事、一一其聲」
【鐺鞳】タトウ　○波濤・瀑布などすべて大いなる聲の形容。蘇軾、石鐘山記「微波之一一者、猶歐陽子之歌鐘也」○鐘鼓の盛んなる聲。入蜀記「旗幟精明、金鼓一一」

【鏑】テキ　屋
○やじり（鏃矢鋒）○かぶらや。矢の先に蕪カブの球根に似たる中空の球をつけ、其の先に雁股マタをつけたる矢。之を發すれば鳴る「鳴一」「飛一」「鋒一」匈奴傳「作一鳴一」＝鳴箭。

【鏌】バク　藥
一鋣バクは古の吳國の人の名。又其の作りし名劍の名。說苑「干將一一、此至利也」＝莫邪鏌鋣鏌鋣。

【鏢】ヘ。　蕭
○こじり、刀の鞘サヤの下端に在るかざりの金物。○しゅりけん、遠方よりなげつけて人を殺傷するに用ふる兵器。＝鏢。

【鑅】鎒（金部五畫）に同じ。
鈷一ガはひのし。＝鈷鑅。

【鏈】ホウ　多　又、鋒に作る
○ほこさき、きっさき（兵端）史、東方朔傳「變詐一出、莫能窮者」○旗の名。

【鑒】ボウ　尤
かぶと（首鎧）「兜一」＝盔（金部九畫）の說字。

【鏡】マン　寒　又、墁に作る。鏝は俗字
こて（鐵杓）壁をぬる具「操一」「泥一」＝杓。
【鏝胡】マンコ　ほこの一種。揚子方言「戟而無刃、東齊秦晉之閒謂二其大者一曰二一一一」

【鏘】ロウ・ル　虞　有
㊀ちりばむ、ふるう、金屬又は木などに種種の模樣をほりつける「一刻」「彫一」禮記「管仲一鏤朱綠」○ひらく、とほす（疏通）漢書、司馬相如傳「一靈山」○はがね（剛鐵）㊁屬一一は劍の名。史、吳太伯世家「賜二子胥屬一之劍」
【鏤牙合子】カガシ　象牙をちりばめたるふたもの。
【鏤句】ク　巧に構へたる文句。又、巧に

句を構へる。元稹文「雕飾一一」
【鏤機】ルウキ　ほりきざめる美くしきひさし。晉書「玄神一一、若二雕虹之揚一レ眉」
【堕月銭雲】ダゲツセンウン　極めて巧なる細工。ダイに喩ふ。李義府詩「堕月爲二歌扇一、裁雲作二舞衣一」
【鏤刻】ルコク　ほりきざむ。劉勰「金銘二之鏤一レ木謂二之刻一」
【鏤彩】ルサイ　ちりばめいろどる。庾信詩「交林結二龍鳳一、一一織二雲霞一」
【鏤山】ルサン　山を開きて道を通ずる。漢書、司馬相如傳「鏤二鑿山一」
【鏤人】ルジン　三月三日の雛人形（文昌雜錄）
【鏤身】ルシン　はだにほりものする。左思賦「雕題之士、一一之卒」‖文身・鍼刺。
【鏤塵】ルジン　もりにきざむ。不可能のたとへ。以て勞して功なきに喩ふ。關尹子「言レ之如レ吹レ影、思レ之如レ一レ」
【鏤板】ルバン　板木に文字などをほる。板は版に通ず。宋史、眞宗紀「召二近臣於龍圖閣一、觀二御製文詞一、宰臣請二一一宣布一」‖鋟版。
【鏤冰】ルヒョウ　こほりにちりばむ。勞して功なきに喩ふ。鹽鐵論「內無二其實一而外學二其文一、若二畫レ脂一一、鏤レ冰三日工一耳」
【鏤膚】ルフ　いれずみ、肌膚を刻して、丹青を浸するをいふ。左思、蜀都賦「或鏤結而左衽、或一一而錯髮」‖文身。

十二畫

【鑢】キョウ　㊥　古、鐶と通用す
○ぜにさし（錢貫）左思、蜀都賦「蔵一巨萬」○圓白一は銀錢。
【鐶】ケン　㊥　○かけがね（紐）ぢゃう（鎖）莊、胠篋「固二扃一一」○轉じて樞要の義「一鑰」○舌ある環。‖鐶。○日旁の氣氣。
【鏽】シウ　シュク　㊥　さび、鐵の上の衣。‖銹。
【鏽澀】シウジフ　さびてざらざらする。李綱詩「鐵花一一若二蘚痕一」
【鐔】シン・ジン　㊥　㊦　㊦　○劍のつかがしら、つるぎのわがね（劍珥）つば（劍口）刀劍の身とつかとの界にはめて手を保護するわがね「劍一」○兵器の一、劍に似て小なるもの。漢書、韓延壽傳「鐔作二刀劍鉤一一」

【鐘】シュウ　㊥　古、鐘と通用す
○かね、つりがね「一鼓」○時を報ずるかねが「點一」「午一」「晨一」「晩一」○黃一は陰曆の十二月。夾一は二月。林一は六月。應一は十月の律の名。轉じて各其の月の異名とす。
【聞レ鐘爲レ日】ブンショウヰジツ　數の義理をとり違へて悟るに喩ふ。蘇軾、日喩「生而眇者不レ識レ日、問二之有レ目者一、或告レ之曰、日之狀如二銅槃一、扣レ槃而得二其聲一、他日聞レ鐘以爲レ日也」
【鐘鼓】ショウクヰ　つりがねと磬と。史、平原君傳「民困兵盡、攻劇レ木爲二矛矢一、而君器物一一自若」
【鐘鼓】ショウコ　かねと、つづみと。詩、周南「一一樂レ之」
【鐘鼓之樂】ショウコノガク　音樂のたのしみ。賈誼文「樂二一一一、勿爲可也」
【鐘筍】ショウシュン　かねの簴と笋のふえの簴と。周禮「凡祭祀賓射共二其一一之樂一、燕樂亦如レ之」
【鐘簴】ショウキョ　つりがねの簴。禮、樂記「君子聽二一一一、則思二武臣一」
【鐘鉦】ショウセイ　つりがねと、ねばすずと。拾遺記「勝深由二精鋼一、可レ爲二一一一」
【鐘鼎】ショウテイ　かねと、かなへと。魏志、鍾繇傳、注「以二功績一、勒二名一一」‖銘鐘。
【鐘鳴漏盡】ショウメイロウジン　時を報ずるかねが鳴りて水時計の水が盡きる。殘年の幾何もなき喩。隋志、田豫傳「年過二七十一而以居レ位、常猶二一一一夜行不レ休、是謂人也」
【鐘儔】ショウチュウ　大いなるつりがねと、小さきつりがねと。薛曜詩「一一陶魏、聲殷レ地」
【鐘漏】ショウロウ　㊥時計「一一匠」「一一銘」
【鐘銘】ショウメイ　つりがねのめい。金石錄「天寶三載、明皇撰二眞源觀一一一」
【鐘鳴鼎食】ショウメイテイショク　鐘をならして家人をあつめ、鼎を並べて食ふ。富貴の人の生活をいふ。王勃、滕王閣序「一一之家」‖撃レ鐘聞食（張衡賦）
【鐘摟】ショウロウ　かねつきだう、つりがねをかける樓。戴復古詩「老僧相對倚二一一一」

【鐮】セン　㊦　○なべ。○銚に似て物を温むる器、刁斗の類「一斗」
【鐏】ソン　サン　㊦　㊦　いしづき。槍矛等の柄の下端にはめたる圓錐形の金具（平かなるを鎲といふ）
【鐓】タイ　トン　㊦　㊦　㊦

いしづき、矛などの下端にはめたる平底の金具。鐏（前條）參看。

【鐃】㊀ダウ　㊁ダウ　㊀㊁

㊀ちんがね、どら（小鉦）陣中にて用ふる小さき銅鑼。○奏樂に用ふるねっぱち「一鈸」○さわがしき譬に通ず。㊁たわむ。莊、天道「萬物無足以動心者」‖撓。

【鐃歌】ダウカ　○雅樂。漢鐃歌十八曲あり。○かねを鳴らしうたふ。李白詩「一一列騎吹、觀者引二公駒一」‖鐃吹。

【鐃吹】ダウスヰ　軍樂。梁簡文詩「一一雜遊風」‖鐃歌、鼓吹曲。

【鐃鈸】ニョウハツ　圖樂器の名。銅にて作り、形鉢の如く、兩手に一面づつ持ち、相觸れしめて鳴らす。僧史略「勅集鳴二一一一、唱佛歌讃」‖銅鈸。

【鐙】㊀トウ　㊁トウ　㊀㊁

㊀あぶみ。馬具の一、馬腹の兩側につるして乘者の足をかけるもの「鞍一」㊁ひともしざら。○轉じてともしび。白居易詩「蘆荻花中一點一」‖燈。○やきもののたかつき（瓦登）「瓦一」‖登。

【鐮】ハツ　㊁

○かま（鎌）兩刃にて木の柄をすげたる鐵、草を刈る具。○かる（刈）

【鏷】ボク　㊁

づく（生鐵）あらがね。

【鐐】㊀レウ　㊁ラウ　㊀㊁　㊂レウ

㊀美くしき銀。㊁美くしき金。

【鐚】ワ　㊁

○しころ。‖鉦。○圖びた、質の惡しき錢。

十三畫

【鑁】㊀キン　㊁キン　㊀㊁

㊀かねかけ、鐘鼓を懸ける柱（金の足）史、始皇紀「收二天下兵一聚二之咸陽一銷以爲二鐘一」‖鐻。㊁夾鐘に似たる一種の樂器、木を削りて造る。

【鑁】クヮン　圖

○ゆびわ「指一」○わ、かなわ。「金一」すべて圓き輪郭ありて中に孔ありて貫き繋ぐべきもの。

【鐫】セン　㊁

○ほる（彫）ある（雕刻）ほりつける「雕一」○きる、うがつ（鑿）○しりぞく（謫）官吏が罪過ありて官位を降しさげられる「一級」

【鐫級】センキフ　官位の等級を下げる。正字通、中外官降級曰二一一一」

【鐫金】センキン　かねにほりつける。給遺記「研レ玉一一、其刃不レ卷」

【鐫切】センセツ　みがきけづる。又、深く善を責める。王安石、進說「應一一、泥浸灌葵」

【鐫說】センセツ　鐫喩に同じ。唐書、高祉傳「李師古叛、祉引二古今成敗一、前後一一不レ能レ入」

【鐫汰】センタイ　冗官をよりわけてしりぞけ去る。振鷺後錄「官冒混濫、宜レ徙二一一一」

【鐫黜】センチュツ　官吏が罪ありて位をさげられる。宋史、選擧志「有レ犯則一一」

【鐫悟】センゴ　深く勸め、切にさとす。唐書、令狐楚爲二河南尹一、解二去酷烈一、以二仁惠一一一人悅書」

【鐫磨】センマ　玉をみがく。孫綽詩「不レ屑二朱紫之飾一、不レ煩二鐫錄之一一一」

【鐺】㊀タウ　㊁サウ　㊀㊁

㊀銀一‥はくさり（鎖）鐵と鐵と相貫きて連係をなしたるもの。○轉じて、重くして容易に動き難き貌。六書故「俗以二困重不一爲銀一」○つづみの聲。‖鐘。㊁なべ、三足ある鍋「茶一」「破一」「藥一」「鐵一」宋史、太祖紀「鼎一猶有耳」○圖こじり（鐏）こて（鏝）

【鐺脚】ソウキヤク　脚のあるかなへ。唐書、武攸緒傳「所レ賜金銀一一野服」

【鐸】タク　㊂

○おほすず（大鈴）古、命令を發する時に鳴らして衆を警めしもの、銅にて作り、形は今のりんに似たるもの。文敎には木一（金口木舌）武事には金一（金口金舌）を振る。論、八佾「天將以二夫子一爲木一一」○鐸につるすよすず「鐘一」‖占風鐸。

【鐸鈴】タクレイ　すず。孟郊詩「冰雨相擊聲、風雷酸二一一一」‖鈴鐸。

【鐲】 タク　ドク　〔覺〕

かね(鉦)の屬、軍中にて大鼓の聲を調節する爲めに鳴らす樂器。周禮「以金ー節鼓」

【鐵】 テツ　テチ　〔屑〕　鐵は古字　鉄は誤字

○くろがね(黑金)色黑く質堅く種種の刃物又器具に作る「精ー」○かなもの。○ーの如く黑き色「ー驪」「驪ー」○ーの如く堅くして屈せざるものに喩ふ「ー腸」「ー漢」「ー石心」○はもの、武器「寸ー」「尺ー」

【鐵鞋】テツアイ　鐵にて造れる草鞋。拍案驚奇「踏ニ破ーー一無ニ覓處ニ得來全不ル費ニ工夫ー」

【鐵案】テツアン　たしかにして動かざる意見。

【鐵衣】テツイ　○よろひ。木蘭歌「朔氣傳ニ金柝ー寒光照ニーーニ」ニ鐵甲。○てつのきぬ。本草「鐵銹、釋名ーー」

【鐵鎖】テツサ　てつにて造りたるくさり。新序「驪ル有ニーー湯鑵之誅ニ而不ル懼也」

【鐵葉】テツエフ　○うすき鐵片(唐表、食貨志)○圓ぶりき。鍋を造りたるうすき鐵板。

【點ル鐵成ル金】テツヲテンジテキンスル　鐵を點化して黃金と爲す、前人の語を活用して傑作となす喩の聞見後錄「黃魯直稱、杜老詩如ニ靈丹一粒點ニ鐵成ル金ー」

【鐵鎧】テツガイ　てつのよろひ。周書、武帝紀「白刃違ル使貫ニ鐵甲ーー」ニ鐵甲。

【鐵甲】テツカフ　○鐵製のよろひ。陳書、乾ル公ー」ニ鐵衣。○堅固にて緩ア

【鐵漢】テツカン　剛直にして挽まざる男、李邊鑑が宋の太祖に褒められたる語(緑聞錄)

【鐵檻】テツカン　鐵をよそほひたるいくさぶね。ニ甲鐵艦。

【鐵肝御史】テツカンギョシ　心の強くして屈せざる御史、宋の錢顗の稱。宋史、錢顗傳「家貧母老、乞ル巧ニ貨賄ー以給ル朝晡ー、而怡然無ニ諂官之色ー、蘇軾遺ル詩ー、有ニ烏府先生鐵作ル肝之句ー、世因目爲ニーーーニ」

【鐵騎】テツキ　○馬に甲をよろひたる騎兵(後漢書、公孫瓚傳)○強悍なる軍馬。宋書、孔覬傳「ーー連翼、風驅電遞」

【鐵牛】テツギュウ　てつのうし。中華古今注「陝州有ニーー廟ー牛頭在ニ河南ー尾在ニ河北ー禹以鎭ニ河患ー、置ニ重有ニーー頃ニ蘇軾詩「誰能如ニーー、橫ル身負ニ黃河ー」

【鐵器時代】テツキジダイ　人文進歩上の一時期。最も多く鐵を利用せし時代。銅器時代の次。

【鐵鏡】テツケイ　てつにて造りたるかがみ。九國志「蜀王宗壽得ニーー、嘆不ル可ル視」

【鐵鍵】テツケン　のこぎり。南越志「鋸魚左右如ニーーー」

【鐵火】テツクワ　○てつのあかく熱せしもの。○彈丸の火。

【鐵郭】テツクワク　てがたき外城。吳林「金城ーー、上下同ル力」

【鐵綫】テツセン　鐵の足なき大鼎。肉又は魚などを煮るに用ふ。古は罪人を煮殺するにも用ふ。南史、侯景傳「以ニ大ーー一盛ル油煎ニ殺之ー」

【鐵管】テツクワン　てつのくだ「水道ーー」

【鐵橋】テツケウ　雲南省中甸縣の地名。晉書、德宗紀「貞元十年三月、南詔異牟尋攻ニ叶蕃ニーー已東、城柵二十六、擒ニ其王五人ー」

【鐵血】テツケツ　兵器と兵士のちしほと。

【鐵血政略】テツケツセイリャク　黑鐵と赤血と。兵力によりて國威を張る政略。

【鐵券】テツケン　てつにてつくりしよど、古、天子が功臣に賜ひし劵符の一。丹にて其の人の功績を記せしもの。史、高帝紀「與ニ功臣ー劵ル符作ル誓、丹書ーー、金匱石室藏之宗廟ー」

【鐵拳】テツケン　固きにぎりこぶし、げんこつ。

【鐵堅】テツケン　てつの如くかたし。杜甫詩「馬ル道有ル心如ルーー」

【鐵硯】テツケン　てつにて造りたるすずり。次條參看。

【鐵硯未ル穿】テツケンイマダウガタズ　硯を堅くして業を改めざるをいふ。晉書、故事「染絲輪、或令ニ其改ニ業、絲輪績ニ鐵硯ー以示ル人曰、硯穿則易ニ他業ー、卒以ニ通士ー及第」

【鐵劍】テツケン　鐵づくりの劍。史、范雎傳「跪之ーー利、而傷ニ擅ー」

【鐵鉤索】テツコウサク　てつにて作りしかぎあるなは。

【鐵骨】テツコツ　建築物の主要部に鐵材を用ひしもの。

【鐵鎖】テツサ　てつのくさり、鎖は鎖に同じ。晉書、王濬傳「以ニーー一橫截ル之」

【鐵窗】テツサウ　○てつがうしのまど。○らうや、獄窗。鐵格子をはめたる故。

【鐵雀】テツジャク　てつにて造りたる像。舊唐書、武宗紀「其ーー委ニ本州ー鑄ニ農器ー」

【鐵經】テツケイ　てつにて造れるなべ。錢藏「出ル酒以ニーー一温ル之」

【鐵樓】テツロウ　鐵にてつくりたるしがらみ、てつやらい。

【鐵鎖】テツサ　○てつのきりだい。後漢書、董卓傳「帶ニーー一詣ル門上書」○星の名。晉書、天文志「ーー星主ニ誅斬ー」

【鐵十字】テツジフジ　船のいかり。圖青日札「ーー即鐵錨、所ニ以打ル船」

【鐵錐書】テツスイショ　ひし形の尖りたる鐵、堆上に立てて、敵の侵入を防ぐ具、撰異はもと草の名。和名はまびし、

其の質堅に似たり、故に名づく。六韜「狹路鐵鉾、張ニ――一」

【鐵心石腸】テツシンセキチヤウ　志堅くして外物に動かされざるをいふ。蘇軾、與二李公擇一書「僕本以ニ――一待レ公」

【鐵鍼】テツシン　てつのはり。漢書、魏相傳「昭平不レ服、以ニ――一鍼レ之」

【鐵城】テツジヤウ　てがたきしろの世說「湯池――無二可レ攻之勢一」

【鐵漿】テツシヤウ　○生鐵を水に浸し、久しきを經たるもの。黑色の染料とす「本草」○國　おはぐろ、かね。

【鐵牆】テツシヤウ　てつにて造りたるたて。楯は盾。梁書、元帝紀「突騎短兵、犀函――、結隊千羣、持戟百萬」

【磨二鐵杵一】テツシヤウマス　鐵のきれを砥石にて摩きて針と爲す、專心業を勤むる喩。唐書「李白、少年學業未レ成、棄去、道逢二一嫗磨二鐵杵一、白問レ之、嫗曰、欲レ作レ鍼、白感二其言一、遂還卒レ業」

【鐵石】テツセキ　○てつと、いしと。○堅くしてゆるぎなき喩。晉書、忠義傳、序「守ニ――之操一、魔二松柏之雅操一」

【鐵圍】テツヰ　てつの骨のあふぎ。

【鐵船】テツセン　てつにて造りたる軍きふね。九國志「吏云、此猶レ造ニ――一渡レ海」

【鐵線】テツセン　鐵のはりがね。

【鐵錢】テツセン　てつにて造りしぜに。陳書、沈炯傳「ニ――十萬」＝惡貨。

【鐵鐵】テツテツ　てつのやのね。鏃、矯人傳「竹箭或ニ――一或骨鏃」

【鐵繩】テツジヨウ　てつにて造れるむち。宋史、衞融傳「元昊嘗ニ――一擊二契丹一」

【鐵道】テツダウ　汽車・電車などを走らせる鐵の軌道、レール。＝鐵路。

【鐵刀木】テツタウボク　たがやさん。熱帶地方に產する木、材質黑褐色にして甚だ堅く貴重の什器を造るに用ふ。天工開物「唯舵桿、必用ニ――一」

【鐵箍】テツコ　鐵のくまで。三才圖會「ニ――或四箇或六箇」

【鐵碓】テツタイ　鐵冶が用ふるてつの臺、かなとこ。碓は砧に同じ。瑯琊代醉編「ニ――鍛二金鐵一千年不レ毀」

【鐵枝】テツシ　鐵のつえ。呂覽「操ニ――一以戰」

【鐵腸石心】テツチヤウセキシン　鐵心石腸に同じ。皮日休、桃花賦序「余嘗慕宋廣平之爲レ相、貞姿勁質剛直毅狀、疑下其鐵腸與二石心一、不レ解レ吐二婉媚辭一、然觀二其文一、而有二梅花賦一、清便富麗得二南朝徐庾體一、殊不レ類二其爲レ人也」

【鐵柱】テツチウ　てつのはしら。易林「金梁――、十年牢固」

【鐵中錚錚】テツチウサウサウ　錚錚は金聲、鐵の少しく剛利なるもの。庸常の人より少しく勝れたるに喩ふ。後漢書、劉盆子傳「光武帝謂二徐宣一曰、卿所謂、――、庸中佼佼者也」

【鐵筋】テツキン　てつにて造りし火箸。通俗編、五代紀「以ニ――一、撥レ灰爲レ字」＝鐵箸。

【鐵椎】テツツイ　てつにて造りたるつち。史、信陵君傳「朱亥袖二四十斤ニ――一、椎二殺晉鄙一」＝鐵鎚。

【鐵蹄】テツテイ　○馬のかなぐつ。＝蹄鐵・馬蹄鐵。○軍馬の足。

【鐵線繃】テツセンホウ　鐵の劍ある針金を網の如く張り渡し敵を防ぐもの。

【鐵兜牟】テツトウボウ　くろがねづくりの、かぶと。張籍詩「行行――、隊隊金貉貔」

【鐵如意】テツニヨイ　鐵にて作りし如意。釋氏要覽「石季倫・王敦皆執ニ――一」

【鐵把】テツハ　鐵製のくまで。＝鐵搭。

【鐵馬】テツバ　○よろひたるうま。驍便、石關銘「ニ――千羣、朱旗蔽レ野」＝鐵馬。○風鈴の異名。孟昉、八月樂詞「風弄二鐵聲一ニ――」＝疾馬。

【鐵砲】テツパウ　武器の名、小銃の曾典「虎尾ニ――、石擂礮」

【鐵棒】テツバウ　鐵にて造れる棒。勇力者の揮ふもの。冥祥記「手把ニ――一」

【鐵幕】テツバク　てつにて造りたるたてを幕の如く列ねたるもの。史、蘇秦傳「當レ敵則幃二堅甲一ニ――一」

【鐵鉢】テツハツ　てつにて造りたる僧の食器。戴叔倫詩「木杯能渡レ水、ニ――背二降龍一」

【鐵筆】テツヒツ　○ほりもの用の小刀。＝刻刀。○ほりもの、彫刻・印刻。○國　寫版用の筆「ニ――版」

【鐵浮圖】テツフト　金の太祖の次子兀朮の兵士の稱。重き鎧を被るが故。宋史、劉錡傳「兵皆重二鎧甲一、號ニ――一」

【鐵掩】テツエン　○鐵製のかめ。晉休詩「深鐵燒ニ――一」○てつにて造りし湯わかし。

【鐵腰】テツエウ　てつにて造りたるてがたきどりで。徐積詩「金城不レ可レ破、ニ――不レ可レ客」

【鐵面】テツメン　○公直にして權勢をも畏れざる人を譬めていふ。宋史、趙抃傳「爲二殿中侍御史一、彈劾不レ避二貴倖一、京師目爲ニ――御史一」○てつのめん。晉書、朱伺傳「夏口之戰、伺用ニ――一自縛」○あつかましき面皮の喩。

【鐵面個書】テツメンコシヨ　現下の異名。

【鐵面皮】テツメンピ　あつかましく、厚顏にして恥を知らざるものをいふ。北夢瑣言「逸士王光遠手寫檄案無レ脈、或遭二譴黜一、略無二改悔一、時人云、光遠鐵厚、如二十重鐵甲一」

【鐵門】テツモン　くろがねのもん。蘇軾詩「蒸土爲二城築作一門」

【鐵鐶】テツクワン　くろがねのわ。月令「仲冬之月、天子駕ニ――一」

【鐵路】テツロ　＝鐵道に同じ。

【鐺】ソウ　庚

○かめ（甁）○つぼ（壺）○一柚

はは橘の大いなるもの。本草「最大者謂之香櫞、廣雅謂之一柚」

【鎞】 鎞（次頁二段）に同じ。

【鎌】 鉐（金部十畫）に同じ。

十四畫

【鑑】 カン　圖 又、監に作る

○かがみ（鏡）物體の象をうつす鏡。左、莊二二「王以后之璧一予之」○みわける（觀察）○かんがへ、かんがへる（考察）○てらす（照）左、昭二八「光可以一」○みる（觀）うつして觀る。莊子「仲尼曰、人莫一於流水而一於止水」○いましめ（戒）古今の成敗を觀て法戒と爲すもの、かんがみ「明一」「前一」大學「殷一不遠」監に通ず。○のり（法）てほん（模範）てほんとする「鏡一」

【鑑戒】カイ　かんがみて戒とする。後漢書、梁后紀「后常以二列女圖畫一置二於左右一、以自一一」‖監戒・監誡・鏡戒・法戒。

【鑑識】シキ　善惡のみわけする。又めき。鑑一に鑒に作る。晉書、王羌傳「王戎有二人倫鑒識一、當日二山濤一、如二瑤玉渾金一、人皆欲レ其實一、莫レ知二其器一」‖鑑定。

【鑑定】テイ　善惡をめききして定める。‖鑑識。

【鑑定人】ニン　裁判所にて學識技藝ある者をして事物をめききせしむる人、隣部をして犯人に精神病の有無を檢せしむる類。

【鑑銘】メイ　かがみのめい。大戴禮、武王一一、見二銘前一條二前後一」

【鑒】 鑑（前條）に同じ。

【鑒照】ショウ　鑒は鏡、自ら照しみる鏡を看はれる。人の本心を喪ふをいふ。左、僖二「是大寶之鑒一面紅二其疾一也」

【鑒機】キ　機微をみわける。晉書、載記「苻堅曰、燕宜可レ圖、一レ一識レ變、惟皇甫覆耳」‖鑑機。

【鑒悟】ゴ　智明かにさとし。北史、陸通傳論「一一明敏、節レ之以一溫恭」

【鑒止】シ　かんがみる。宋史、樂志「何以致レ祥、上天一一」

【鑒念】ネン　かんがみおもふ。後漢書、楊終傳「一一前世一可二爲塞一心」

【鑊】 クヮク　藥

おほがなへ。足なき大鼎、肉、魚などを煮る器。又、古かまいりの刑に用ふ「湯一」「斧一」文

天祥、正氣歌「鼎一甘如飴」

【鑊亨】クヮクハウ　かまに入れてにる刑。亨は烹。漢書、刑法志「有二鑿顚抽脅一一之刑一」

【鑄】 シュ　シウ　遇　宥　通音　チウ

いる。金屬を銷かして型に流し込みて器物をつくる「改一」「陶一」「鼓一」「鉛一」左、宣三「一鼎象」物」

【鑄金】キンシュ　かねをいる。吳越春秋「一レ一象范蠡之形」

【鑄型】シュケイ　いがた。‖鑄。

【鑄造】シュザウ　金屬をいて器をつくる。

【鑄山煮海】シュザンシカイ　山の銅を採りて錢を鑄、海水を煮て鹽を造る、鑄レ山煮レ海（五四ウ四段）を見よ。

【鑄綉】シュウ　鐵をいてすきをつくる。易林「銷レ鋒一レ一、鑄レ牛放レ馬」

【鑄人】ジンシュ　人才を養成する喩。揚子法言「或問、世言レ鑄レ金、金可レ鑄與、曰、吾聞二君子者一問一レ一、不レ問レ鑄レ金、或曰、人可レ鑄歟、曰、孔子鑄二顏淵一矣」‖陶二鑄人才一。

【鑄錢】シュセン　ぜにをいる。漢書、食貨志「卽二多一銅山一而一レ一」

【鑄銀】シュゴン　いると、きたへると。拾遺記「不レ雨而雷、實二其一一之靡盛一也」

【鑄鉏】シュソ　づく、づくてつ。‖生鐵・銑鐵。

【鎗】〔國字〕

やり（槍）

【鐵】 鐵（金部十三畫）の古字。

【鑓】 〔國字〕

十五畫

【鑞】 クヮウ　庚　又、鐳に作る

あらがね（金砂）山より掘り出したるままの金屬にて未だ銘錬を經ざる者「一石」「一物」王褒、四子講德論「精鍊藏於一朴」

【鑛區】クヮウク　政府より鑛物の採掘を許されたる區域。

【鑛泉】センクヮウ　鑛物質を含有するいづみ。

【鑛海】ドクヮウカイ　鑛山の採鑛又は製煉などによりて生ずる害毒。

【鑛夫】フクヮウ　かねほり。採鑛夫・坑夫。

【鑛脈】ミャククヮウ　鑛物の地中にあるすぢ道。

【鑌】 鑌（金部十九畫）の俗字。

【鑮】シツ　質　古、質に作る

○かなとこ(鐵礪)かぢやが金屬をのせてきたへる臺「砧ー」○をの(斧)臺にすゑつけて刃を上に向けたるもの。鉄鉞ちの上の刃と合せはさみて人又は物を斬る。古、刑を行ふ具の一。公羊、襄二七「執ー」

【鑕】シャク　藥

○とかす(銷)けす、火にて金屬を銷す。史、張儀傳、衆口ー金」○轉じてひろく消損の義。孟、告子「仁義禮智、非由外ー我也」○とく、とらける。○うつくし(美)「ー金」○する(摩)○あきらか(昭)○かがやく(輝)○髪ー ㇰㇰは老いて強壯なる貌。

【鑕腰】シンワ　にかはをとかす。淮南子「以冬ーレー、以レ夏遇レ冰」

【鑕金】シンキン　○金をとらかす。周禮「ーレー以爲レ刃、凝レ土以爲レ器」○美くしき金。史、李斯傳「ー百鎰」註「ー、美也」

【鑕鑕】シンク　光明なる貌。何晏、景福殿賦「故其華表則鎬鎬ーー」

【鑕石流金】リウキンシンシヤク　暑氣の甚だしきにいふ。淮南子「大熱ーー、火弗三爲

義の捶」に鍾に作る。劉峻文「雕三刻百工ーニー萬物」

【鑮鑿】ふいがら。淮南子「ーー墜坊設匪、巧冶不レ能二以冶レ金」

十七畫

【鑷】(一)サン　寒　(二)サン　陷

(一)はり、療治に用ふる石の針。史、扁鵲傳「ー石橋引」○さす(刺)○きざむ(刻)○すきのは(聖劍)藥草の根を掘る用具。杜甫詩「長ー長ー白木柄」○くすりなべ「藥ー」(二)土をほる具。

【鑲】ジャウ　陽

○いがたのなかみ。鑄型の空所をつくる爲めに嵌め込むもの。○はめこむ、嵌入する。

【鑲牙】いれば。＝義曲・精牙。

【鑓】ハク　藥

○おほがね(大鐘)○すき(鋤)＝鐸。

【鑰】ヤク　藥

○ぢやう。籥に通ず「管ー」「關ー」「鎖ー」「禁ー」抱朴子「堅玉ー於命門」○とづ(閉)「緘ー」○いる(入)淮南子「排二閶闔一」「天門」○事の樞要に喩ふ。

【鑰匙】ぢやうを入れる箱。宋史、河渠志「掌ニーー」

【鑰匙】ぢやうと鑰と。朝野僉載「宋掌ニーー、賊來宋、愼勿レ與」＝鎖牡。

【鑰牡】前條に同じ。宋書、戴法興傳「臨レ死封二閉廚藏一使二家人謹錄一ーー」＝牡鑰。

十八畫

【鑵】クヮン　㫖　俗に盥と混用す

○つるべ(釣瓶)水を汲む器。○藥ーは銅又は眞鍮製の湯を沸す甁、もと藥をにるに用ふ。○かま。蒸氣機關の釜「汽ー」○ケップリ＋の甁「ー詰ケツン」

【鑷】デフ　葉　又、氊に作る

○けぬき、はさみて毛髪を抜き取る器「ー子」「銅ー」雲仙雜記「王僧虔、晩年惡二白髮一、日對二客、左右進銅ー一、僧虔曰、卽老先生至矣」○くぎぬき。○はさみとる、けぬきにて毛髪を抜き去る。李商隱詩「羞」ー鏡中

絲」○かんざし(省飾)の類。【鑽笄】ケンケイ けぬきにて髪をぬき去る。司空圖、窯筆詩「年年一一到二花飯一、伝レ得花筆寄易レ師」

十九畫

【鑿】 ㊀ サク ㊁ サウ

○のみ(鑿)木材に穴をあける具「斧ー」「椎ー」「鉏ー」○あなをほる、うがつ(穿)「刻ー」「剉ー」○いれすみ(墨刑)〈漢書、刑法志〉「其次用鑽ー」註「一、黥刑也」○ひらく(開疏)「開ー」「疏ー」○つくる、もくろむ(造意)無理に理窟をつける。意を惑にして義理に合ふを求めず〈漢書、儒林伝贊〉「以意穿ー」○ーは鮮明なる貌。詩、唐風「白石ー」○しらげる、米を舂きて白くする。左、桓二「粢盛不ー」㊁あな(孔)

【鑿飲耕食】カウインコウショク 堯井を見よ。

【鑿開】サクカイ ほりひらく。雑部詩「書窓荒井甘平後、見設耕人又ー一」自開鑿。

【鑿渠】サクキョ みぞをほりて田に水をそそぐ。魏志、陳登傳、注「乃遍二土地之宜一、盡ニー一之利一、疏緒畎澮」

【鑿空】サククウ あなをうがつ。空は孔。新らしき道路を通ずる義。漢書、張騫傳「於レ是四北國始通二於漢一矣、然鑿ー一」

【鑿掘】サククツ うがちほる。論衡「銅鉄未レ採、在二衆石之間一、工師ー一」

【鑿窓】サクサウ あなをうがつ。宋雍詩「ー一壊レ金文銅器」

【鑿鉏】サクソ あなをほりうがつ。揚孤鉄賦「方ー一于夷子之墟一」

【鑿穴】サクケツ あなをほる。後漢書、李固傳「固陰二于武安山一ーレ一窟居、采レ根百葉」ロ穿穴。

【鑿鑿】サクサク 明瞭なる貌。詩、唐風「揚之水、白石ー一」

【鑿牆】サクショウ かきをうがつ。易林「穿レ室ー一、不レ出レ金」

【鑿井】サクセイ みどをほる。帝王世紀「帝堯之世、天下太和、百姓無レ事、有二八九十老人一撃レ壌而歌、歌曰、日出而作、日入而息、ーレ一而飲、耕レ田而食、帝力于レ我何有哉」

【鑿枘】サクゼイ 枘(ホゾ)の字解を見よ。

【鑿川】サクセン かはをほりわる。陳宗簡詩「舎楼人、廻頭郷母玉孝、掘奴食二鄰胡飯、鑿レ水ーレ一自種供畚、家近二太湖一湖中後生三雛胡、無二復餘草一」

【鑿泉】サクセン いづみをほる。蘇軾詩「聚レ糸西堰下、ーレ一東垣限」

【鑿船】サクセン ふねに穴をあける。周書、高祖傳「乃ーレ一沈レ米、斬レ溺而溺」

【鑿室】サクシツ ふさがれるをうがち通する。王令詩「耕レ荒食二新敢一ーレ一復二舊貫一」

【鑿渠】サクキョ 水のみちをうがつ。淮南子「猶二抱レ薪而救レ火、ーレ一而出レ水」

【鑿破】サクハ きりひらく。水經、注「始皇發レ民、ーニ一此國一」

【鑿八】サクハチ 二割べり。爾文類聚「ーレ一開二来一石、舊得八斗と」

【鑿壁讀書】サクヘキトクショ 前漢の匡衡が家貧しく、都合の壁を穿ち燈光を引きて書を読みたる故事。衡、字は稚圭、東海承の人、元帝の時に丞相に至る。西京雑記「匡衡勤レ學、無レ燭、鄰舎有レ燭而不レ逮、衡乃穿レ壁引二其光一而読レ之」

【鑿来】サクライ しらげたるこめ、白米。

【鑿落】サクラク 酒器なりの異名。漢書、「譯髪解二兜鍪一、鑿落に作る。顔師古曰「鑿落、酒器也」

【鏨】 ㊀ サン 㐂 サン 㐂 俗字

○きる(斬)○あしきる(腓刑)其の膚骨を一去スルする。○やじり(鏃)○ほこ(矛)○たがね。のみの類。○さす(刺)○きりもみする、錐にて穴をあける。○物事の義理を深く究める「研ー」論、子罕「仰之彌高、鑽之彌堅」○金剛ー一は金剛石。又其の質の劣れるもの。㊁孔ヲを穿つ器、きり(錐)みつめきり。

鑽・軒・斫・斬・殺・切・伐の別は斬(八三〇頁三段)の條を見よ。

【鑽仰】サンギョウ 聖人の道徳の高遠にして仰ぎたふとぶべき義。論、子罕「顔淵喟然歎曰、仰レ之彌高、鑽レ之彌堅」柳宗元詩「ーー曜高堅」

【鑽レ火得レ冰】サンクワトクヒョウ 因果の相反する喩、必ず無きをいふ。法苑珠林「未レ見ニー一、種レ豆得レ麥」

【鑽刻】サンコク きりけづる。揚佑民詩「如何百年後、雕琢加ニー一」

【鑽研】サンケン きりみがく。後漢書、許慎傳「以レ書戒二子曰、君子之道、ーー勿レ誉、敬二慎威儀一、以近二有徳一」江総詩「三篇編ーー、六書多補益」ロ研磨。

【鑽堅】サンケン かたきをきる。深く義理を研究する。論仰參看。

【鑽笠】サンリュウ 臏刑フルヒトと斬刑スルとを誓語「中刑用二刀鋸一、其次用ニー一」

【鑽レ燧】サンスイ 木に穴をあけて、すりもみて火をとる。論、陽貨「ーー改レ火」

【鑽石】サンセキ 金剛石の劣れるもの。雕刻及玻璃を切るに用ふ。ロ金剛鑽。

【鑽木】サンボク 古、木を穿ちすりもみて火を取る。関尹子「形之所二自生一者如ニー一得レ火」

【鑽摩】サンマ きりみがく。宋雍文、辛勤ーー、不レ爲レ不レ久」

【鐲】ダク　前條に同じ。江總詩「鑿渠遶ニ一一一」一に濁路に作る。一種、月令「孟春乘ニ鑾路一」

【鑾】ラン　通じて鸞に作る

天子の馬車の衡につける鈴、鸞鳥の和鳴に象る。轉じて天子の車駕をいふ「一輿」「保ー」「陪ー」「駐ー」李賀詩「隨ー」「鳴玉珂」

【鑼】ラ　貳

どら（鉦）銅にて造りし銅盤、邊に二孔を穿ち、繩を結び、提げて之を撃ち鳴らす「銅ー」

二十畫

【鑊】クヮク　藥

おはぐろ（大鍋）荒蕪地を開くに用ふ。

【鑊雷】クヮク　大いなるすき。淮南、精神訓「負ニ一一一」

廿一畫

【鑿】サク　號

もと鑿に作る

○すき（鍬）○すきにて除き取る。草木の根を除去する。

長部（長）

【長】㊀チャウ　㊁チャウ　㊂チャウ　陽　漾　養

㊀ながし。短の對。孟、滕文公「絕ー補短」たけたかし。○おくふかし。○ひさし（久）時が久し。○とほし（遠）距離が遠し。詩、秦風「道阻且ー」○つね（常）いこしなへ、いつまでも。陶潛、歸去來辭「門雖設而ー關」○おほいなり（大）南史、宗慤傳「願乘ニ一風破萬里浪一」○まさる、すぐれる、善し「一所」晉書、樂廣傳「論ニ人先稱其所ー一」○一庚（チャウカウ）は太白星。㊁ながさ、たけ。論、鄉黨「一一身有半」○あまる（餘）あまり（剩）○むだ（冗）「一物」「冗ー」㊂はじめ（孟）○そうりゃう（嫡首）○をさ、かしら（首領）「村ー」「社ー」「一官」○としかさ（高齒）としうへ「年ー」「一老」孟、萬章「不挾ー」○としより（年）○年がたける。年をとる。孟、告子「鄒人ー於伯兄一一歲」○すすむ（進）易、泰卦「君子道ー」○おひたつ、そだてる、やしなふ「一養」○おとな（成人）○めうへ（尊上）○さかんなり（盛）○つむ（積）ます（益）

【長安】チャウ　古の都城、漢の一一故城は惠帝の時築く、今の陝西省一一縣の西北に在り（三輔黃圖）

【長安似ニ奕棊ー】チャウアンジニエキキー　王者興亡の頻繁なるを奕棊の勝敗常なきに喩ふ。杜甫、秋興八首「開ー一」

【長安居大不ー易】チャウアンキョタイフエキ　都會は物價高くして暮し難し。全唐詩話「白居易未ー冠、以ー文謁ー顧況ー況觀ニ姓名一熟視曰、長安米貴、居大不ー易」居易の名によりて戲語せしなり。

【長衣】チャウイ　うらなしの人のきる服。（禮記）

【長逝】チャウセイ　○ながくつづきたるかこひ。南史、張郡傳「棄ニ一一ニ」○合圍して敵を苦める。南史、宋高祖紀「設ニ一一以守之」

【長圍之策】チャウヰノサク　敵を長くかこみて兵糧ぜめにするはかりごと。

【長育】チャウイク　そだてる。左傳「養ニ溫惠和一以效ニ天之生殖一一ニ」

【長揖】チャウイフ　人に對する敬禮の一、手を胸の邊に組つる左揖といひ、上より下へ揖て極まるを一一といふ。漢書、鄒生傳「一一不ー拜」

【長卬】チャウカウ　くゐんばう（謂語）

【長茱】チャウキュ　いつまでもさかえる。史、滑稽傳「澤及ニ後世一子孫一一」

【長銳】チャウエイ　ながくしてするどし。金

就簡、注「蓄有二數種一葉一一而薄、生二于水中一者、曰二水藜一」

【長夏】ヂャウカ 夏の異稱。陳晉、如「暮雲二發生、皆ニ一一」顧二作稿に作る。

【長幼之序】ヂャウエウのジョ 年長者と年少者との次序。五倫(六五頁圖參看)と

【長檠】ヂャウケイ ながくたなびくけむり。沈約詩「一一引二神香一」

【長遠】ヂャウエン ながくとほし。宋遠文「巴土一一、江山修隔」

【長恨】ヂャウコン ながくいつまでもおもふ。姚合詩「一一青山下、深居遂二性情一」‖長想。

【不レ挾レ長】ヂャウヲサシハズ 人に向ひて我が才智技術を恃みて鼻に掛けず。孟、萬章「敢問レ友、孟子曰、——、不挾二兄弟一而友」

【絕レ長補レ短】ヂャウヲタチテタンヲオギナフ 長き所を截ちて短き所を補ひ、幅員を正しくす。史、楚世家「西周之地、——、不レ過二百里一」禮、王制には絕を斷に作る。

【斷レ長補レ短】ダンヂャウホタンタチテ 前條に同じ。禮、王制「四海之內、——、方三千里」孟子には斷を絕に作る。

【以レ長擊レ短】ヂャウヲモツテタンヲウツ 我が長所を以て、彼の短所をうつ。史、淮陰侯傳「善用レ兵者、不二以レ短擊一レ長、而——」

【以レ長補レ短】ヂャウヲモツテタンヲオギナフ 人の長所を見て、己の短所を補ふ。說苑「以二人之長一補二其短一、以二人之厚一補二其薄一」

【長夏】ヂャウカ 日の長きなつ。綦毋「岐伯曰、春暮ニ一一」杜甫、江村詩「清江一曲抱レ村流、一一江村事事閑」

【長哦】ヂャウガ 聲をながくしてうたふ。宣和書譜「自レ酒觀解酲一一、惟酒以爲二風雅一」‖長吟。

【長嗟】ヂャウサ ながきくちばし、無用の者をしやべるにいふ。俚諺「一一短、短嘴鴉鳴」

【長江】ヂャウカウ 揚子江の異名。

【長江天塹】ヂャウカウテンザン 天然の要害をいふ。南史、孔範傳「——、古來限二隔南北一、騎軍豈能飛度」

【長庚】ヂャウカウ ○よひの明星。詩、小雅「東有二啓明一、西有二一一一」‖太白・金星。○彗星の一種、此の星見はるれば兵起るの兆とす(史、天官書)

【長庚星】ヂャウカウセイ よひの明星。唐書、白居易傳「白之生、母夢二一一一

「――出無レ車」と求ふ、よりて車に乗らしむれば、又「――無二以為一レ家」と歌ふ、よりて嫂の老母に食用を給せしむ。此の故事に本づきて、食客などの不平を喞ちすにいふ、鋏は剣のつかへ史、孟嘗君傳」

【長剣】ちやうけん　ながきつるぎ。王維詩「慷慨倚二一一、高歌一送レ君」

【長虹】ちやうこう　○ながきにじ。張衡賦「耿――於青青」○長き橋に喩ふ。韓愈詩「石橋先去路二一一」

【長公主】ちやうこうしゅ　天子の姉妹。後漢、帝之姉妹――、儀比二諸侯王一。公主（一九五頁三段）参看。

【長恨歌】ちやうこんか　唐の白樂天が玄宗皇帝と楊貴妃との情事を詠じたる長篇の詩。古文眞寶に出す。

【長沙】ちやうさ　地名、秦の郡、漢の國、今の湖南省の全部を包有す、明、府を置く、僅に湘江下流の地のみ。地理記「今湖南一一府、有二一一縣」

【長嗟】ちやうさ　ながくためいきしてなげく。任昉詩「恩レ君不レ得レ見、望望涕一一」

【長汀】ちやうてい　ながきすなはま。北史、張亮傳「故二火船一欲レ燒二河橋一、亮乃備二小艘一、皆載二一一、順レ流縦レ釘、火船勝レ重、觸レ橋小船、以レ釘釘之、引レ船向レ岸、火船不レ得レ及レ橋、橋全」

【長在】ちやうざい　いつまでも存在する。王昌齢詩「年年喜見山一一、日日悲看水東流」白居易詩「萬里路一一、六年今始歸」

【長逝】ちやうせい　終年蔵食する義。南史「劉虬傳二信摂氏一、衣二粗布一、禮レ佛一一」杜甫詩「蘇晉一一浦佛前」

【長嫂】ちやうそう　一番の兄の妻。後漢書、楚元王傳「丘嫂」注「丘、大也、一一稱也」

【長相思】ちやうそうし　久しく互に相思ふ。古詩「客從二遠方一来、遺二我一書札一上言二一一、下言二久離別一」

【長策】ちやうさく　○ながき鳥のむち。賈誼、過秦論「振二一一一而御二宇内一」○長策。○すぐれてよきはかりごと。曹冏、六代論「親二五代之存亡一而不レ用二其一一」

【長鑓】ちやうそう　ながきすき。杜甫、洞谷縣「――――白木柄、我生託レ子以為レ命」

【長子】ちやうし　○そうりゃうの男子。史、趙世家「家有二一一一、曰二家督一」○そうりゃうの娘。大戴禮、本命「喪レ父一一不レ取」

【長史】ちやうし　漢の相國丞相、又は三公の高官。後漢以後、王公府の屬官。後世は刺史の副官。

【長至】ちやうし　○冬至をいふ。御覽「冬至、日極レ南、影極長」○夏至をもいふ。正字通」

【長秋】ちやうしう　○皇后の宮を掌る官名、中長秋ともいふ、秋は萬物成熟の初、故に名づく。古今原始「漢高祖置二大長秋一、中長秋、諸官官屬」焉、一一之名所二由起一也」○轉じて皇后宮の異名。⇨秋宮。

【長袖】ちやうしう　○たけながきそで。資本の多きに喩ふ。韓非、五蠹「鄙諺曰、一一善舞、多錢善賈、此言二多資之易一レ為レ工也」○ながそで。又、其の衣を著けたる公卿・舞妓など。鄭元帝詩「一一慣レ賓待二華燭一」

【長史司馬】ちやうしばん　唐代の官名、州の刺史の下に一人づつ置く。

【長日】ちやうじつ　○晝の時間のながき日、夏の日。通鑑、唐宣宗紀「令狐綯薦二李遠杭州刺史一、上曰、吾聞遠詩云、一一惟消一局棊、安能理レ人、綯曰、詩人託レ此為二高興一耳、未二必一一然一」○冬至の節。冬至以後は晝が日一日と長くなる故。禮記「郊之祭也、迎二一一之至一也」

【長人】ちやうじん　身のたけ高き人。史、孔子世家「孔子長九尺有六寸、皆謂二之一一一」

【長信宮】ちやうしんきう　漢の宮殿の名、太后の居る所。長樂宮中に在り。

【長者】ちやうじや　○年よりも。孟、梁惠王「為二一一一折レ枝」○徳の高き人。又おとなしき人。漢書、高帝紀「沛公素寛大一一」○身分高き人。史、陳丞相世家「門外多有二一一之車轍」○かねもち。翻譯名義集「富商大賈、積二財鉅萬一、威稱二一一一」

【長者之言】ちやうじやのげん　温厚篤實なる君子のことば。後漢書、朱浮傳論「朱浮蕭望之、欲レ速之弊然矣、安得二一一之信一乎」

【長者萬燈】ちやうじやまんとう　長者即ち富者が神佛に一萬の燈を献ずるに反して、貧女はただ一燈を献ず、されども其の志だにあらば、貧女の一燈は長者の萬燈に比するを得るなり。阿闍世王受決經「貧女一燈、――」

【長上】ちやうじやう　めうへ。又としうへ。禮、儒行「不レ絕二君王一、不レ累二一一一、不レ闕二有司一、故曰レ儒」

【長城】ちやうじやう　○長く連れるしろ。「萬里一一」○戰國の時、燕・趙・秦の三國、各北邊の山險に因りて一一を築き以て胡戎に備ふ。秦の始皇、六國を滅し、乃ち之を首尾聯絡して、臨洮より起りて遼東に至らしむ。北史、北齊より唐に及び屢築するありて稍其の位置を變ず。○一國の重鎮たる人物に喩ふ。南史、檀道濟傳「濟見レ收、目光如レ炬、脫レ幘投レ地曰、乃壞二汝萬里一一一」

【長瘍】ちやうやう　わかじに。禮、喪服傳「年十六至二十九一死、為二一一一」

【長喜】ちやうき　ながいき。後漢書、西南夷傳「所主一一、子孫昌盛」傅休奕、菊賦「服レ之者一一、食レ之者通レ神」⇨長命・延壽。

【長髭】ちやうし　○ながきひげ。○轉じてしもべの異稱。韓愈詩「一奴一一不レ妻レ頭、一婢赤脚老無レ齒」

【長春花】ちやうしゅんくわ　薔薇の異名。

【長所】ちやうしよ　特に他人よりすぐれたる得意の點。短所の對。

【長庶】ちやうしよ　妾腹の長子。世祖「桓石虔司空謐之一一也」

【長松】ちやうしよう　たけたかきまつ。戰國策「荊有二一一文梓楩楠豫章一」

【長醉】ちやうすい　いつまでもえふ。戴叔倫詩「一一非二關一酒、多愁不一レ醉」

【長生】ちやうせい　ながいき。老子「深根固柢、一一久視之道」

【長生樹】ちやうせいじゆ　冬青樹の異名。洛陽宮殿簿「明光殿前、——二株」

【長生殿】ちやうせいでん　唐の華清宮中の殿名。白居易長恨歌「七月七日——、夜半無二人私語一時」

【長生瓊】ちやうせいけい　ながいきするくすり。白居易詩「中天或有二——一、下界應レ無二不死人一」

【長生不死】ちやうせいふし　ながいきして死せず。前條參看。

【長征】ちやうせい　遠方へ行く。又遠く征伐に赴く。王昌齡詩「萬里一一人未レ還」

【長星】ちやうせい　長き光芒ある星、彗星などの類。兵亂の前兆として現るといふ。漢書、文帝紀「有二一一一出二于東方一」

【長逝】ちやうせい　○遠くゆく。曹植、七哀詩「浮沈各異レ勢、會合何時諧、願爲二西南風一、一一入二君懷一」○死をいふ。李白文「屈宋一一、無レ堪二與言一」‖殞逝。

【長嘯】ちやうせう　聲をながくしてうそぶく。王維詩「獨坐幽篁裏、彈レ琴復一一」

【長嘯】ちやうせう　ながくする、おほくする。唐書、五行志「民爲甫及年十四、器長七尺餘、一一大嘯、三倍如レ初、幽餘死」

【長舌】ちやうぜつ　○婦人の多言するをいふ。詩、大雅「婦有二一一一、維厲之階」○辯廣一一は辨舌のすぐれたる義、雄辯。

【長卿主簿】ちやうけいしゆぼ　羊の異名。羊の糞は長く、毛は筆に製す、主簿は書記。故事成語考「羊曰二柔毛一又曰二——一」

【長屋】ちやうおく　はやあし。進歩の遲なるにいふ「一一の進歩」

【長息】ちやうそく　ながくなげく、ためいきをつく。東方朔文「喟然一一、仰而應レ之」‖長太息。

【長春】ちやうしゆん　生きながらえる。楚辭「隨二眞人一兮翱翔、食二元氣一兮一一」‖長生。

【長妬】ちやうと　○ながきへびの。殘忍にして戀深き人に喰ふ。左、定四「與爲二封豕一一、莽二食上國一」○へびの一種。山海經「大咸之山有レ蛇、名曰二一一、其毛如二蒲葦一」

【長蛇陣】ちやうじやじん　一列に長くならびし陣形。もと孫子九地篇に本づく。閔信賦「常山之陣、長蛇奔レ突」

【長大】ちやうだい　○たけたかくおほいなり。魏文帝文「年行已一一、所レ謀屢中。時有レ所レ慮、至二通夜不一レ寐」○才能すぐれてまさる。呂覽「孟夏之月、命二太尉一贊二傑俊一遂二賢良一舉二一一一」

【長太息】ちやうたいそく　ためいきをつきてなげく。賈誼、治安策「臣竊慟二哭於可一——一者六」

【長刀】ちやうとう　○ながきかたな。宋書、武帝紀「手書二一一一所二殺傷一甚衆」○薙刀。

【長短】ちやうたん　○ながきと、みじかきと。孟、梁惠王「度然後知二一一一」○まさり、おとり。‖優劣、賢愚。

【長短句】ちやうたんく　字數の多き句と少き句との雜りし詞曲。宋史、周邦彥傳「邦彥好二音樂一、能自度曲、製二樂府一二詞調清麗、傳二于世一」

【長短說】ちやうたんせつ　事を長からしめんとすれば、長く之を說き、短からしめんとすれば、短く之を說く、戰國策士の說。史、田儋傳「酈通者善爲二一一一」

【長歎】ちやうたん　ふかくなげく。晉書、索靖傳「或獨語獨笑、或一一涕泣」

【長枕大衾】ちやうちんたいきん　ながき枕、大いなるふすまは、兄弟同臥に便なり、因りて兄弟親愛の情とす。唐書、三宗諸子傳「玄宗爲二太子一、皆製二一一、與二諸王一同寢一衾一に枕に作る。蘇過賦「長枕橫施、大被竟舒」

【長ノ長】ちやうのちやう　長者をうやまふ。大學「上一レ一而民興一弟」

【長女】ちやうぢよ　そうりやうのむすめ。易經「巽一索而得レ女、故謂二之一一一」

【長汀】ちやうてい　ながくつづけるみぎは「一一曲溆」謝靈運詩「千頃帶二迴隰一、萬里滄二一一一」

【長打子】ちやうだし　○布袋和尚の別名。臨濟事苑「布袋時號二——一、蓋二定應大師一」○闘七誡人の一に加ふ。

【長亭】ちやうてい　長き道のりの宿驛「一一短驛」白帖「十里一一、五里一短亭」

【長程】ちやうてい　ながきみちのり。‖長途。

【長笛】ちやうてき　橫笛、尺八の類。通俗「馬殿所レ獻一一、空洞無レ底、劃二其上孔五一孔一出二其背一、但今之尺八」

【長鋏】ちやうきやう　本妻の生みたる長男。南史、徐湛之傳「湛之母會稽公主、身居二一一一、爲二文帝所一レ親」

【長天】ちやうてん　ながく遠きそら。王勃、滕王閣序「秋水與二一一一一色」

【長途】ちやうと　久しき旅路。又、遠き道のり。司馬相如、上林賦「一一中宿」

【長年】ちやうねん　○としより。嫣合詩「隨去知何日、相逢各一一」○ながいき。管子「專二血氣一以求二一一一」‖長命、長壽。○一一三老はせんどう。入到記「一一三老、精工也」杜甫詩「一一三老欺軍事、白屋憐錢高浪中」

【長夢】ちやうむ　盤を長く延ばす。唐書、玄宗紀、葉二白衣一一會一」

【長眉】ちょうびながきまゆげ。古今注「螓首蛾眉、宮人好事ニ――ニ」

【長病】ちょうびょう　久しき病気。梅堯臣「身――ニ――ニ」

【長嫭】ちょうこ　○あによめ。雅「――謂ニ雅婦ニ為ニ姉婦ニ、姉婦謂ニ――ニ為ニ娣婦ニ」○丈高きよめ。後漢書、馮衍伝「自恥ニ短陋ニ、恐ニ子孫似ニ已、為ニ子娶ニ――ニ」

【長庵】ちょうあんながきひさし。拾遺記「郭況、庭中起ニ高閣ニ――ニ、置ニ画石于其上ニ、以稱ニ最珠玉ニ也」‖修簷。

【長風】ちょうふう　遠くから吹きくる大風。晉書、宗慤傳「願乗ニ――ニ破ニ万里浪ニ」

【長物】ちょうぶつ　無用の物。無行。世說「王恭平生無ニ――ニ」‖冗物。

【長柄】ちょうへい　ながえ。世說「劉無ニ他――ニ、唯問東吳有ニ――壺ニ」

【長閉】ちょうへい　遠くながめる。漢方生詩「落帆修江浦、悠悠極ニ――ニ」

【長籠】ちょうろう　ながき詩文。文心雕龍「普趨清廟于――ニ」

【長靿不及馬腹】ちょうようふきゅうばふくはながくとも馬の腹まではとどかず。力強大なるも猫は及ばざる所あるの喩。左宣、十五「雖ニ靿と長ニ不レ及ニ馬腹ニ」

【長十二燃無ニ丁擇】ちょうじゅうにねんむていたく　長木の地にたふるる時は、物を擇ばずして撃つ。以て強悪なる大國の亡びんとする時は、所を擇ばずして攻伐するに喩ふ。擇は撃。左、哀十二「――也、國狗之噪、無レ不レ噬也」

【長廉】ちょうれん　ながきつる。蔵質詩「瓜縁ニ茅屋ニ抽ニ――ニ、蔬過ニ疏畦ニ出ニ矮葱ニ」

【長眠】ちょうみん　人の死をいふ。太平廣記「郡友路逢ニ一塚ニ、有ニ二竹ニ、郡為レ詩曰、塚上両竿竹、風吹常瑟瑟、塚中人有レ曰、下有ニ百年人ニ、――不レ知レ暁」

【長命】ちょうめい　ながいき。白居易詩「已為ニ海内有名客ニ、又占ニ世間――人」‖長生。

【長命富貴】ちょうめいふうきいのちながくしてとみ且つたふとし。唐書、婦宗傳「求ニ長命ニ得ニ長命ニ、求ニ富貴ニ得ニ富貴ニ、今人多く此を以て頌祝の語と為す。

【長命縷】ちょうめいる　五色の絲にて造れる粟玉ダスの類。風俗通「五月五日以ニ五綵絲ニ繫ニ辟レ兵、使ニ人不ニ病レ瘟、一名――、一名辟兵縷、一名五色縷、一名綵索、一日續命縷」

【長明燈】ちょうみょうとう　常夜燈。隋唐嘉話「江寧縣寺、有ニ菩――ニ、歳久火色赤、青而不レ熱、隋文帝平レ陳、已訝ニ其古ニ至ニ今猶存ニ」

【長目飛耳】ちょうもくひじ　書籍をいふ、往古の事をも遠方の事をも見聞し得るは書籍によるが故。管子「一曰長目、二曰飛耳、三曰樹明、明知ニ千里之外、隠微之中ニ、目動而動則變更矣」

【長夜】ちょうや　○ながきよ。李華玉詩「遠客坐ニ――ニ、雨霽孤寺秋」○埋葬をいふ。長夜はいつまでも明けず、人一たび死すれば復生ぜざるに喩ふ。左、哀十三「春秋寤夢之事」注「寤、厚也、夢、夜也、厚夜猶ニ――ニ、春秋謂ニ祭祀ニ――謂ニ葬埋ニ」

【長夜之飲】ちょうやのいん　夜既に明くるも、なほ窗戸を閉ぢ、燭を點じて酒宴するをいふ。韓非、說林「紂為ニ――ニ」

【長夜室】ちょうやしつ　墓をいふ。古詩「繁ニ此――ニ」蘇軾詩「願繁ニ――ニ」

【長老】ちょうろう　○年老いたる者。又、學德ある人の尊稱。漢書、外戚傳「近世之事、語尚在ニ――之耳」○佛禪宗にて年と德と共に高き者の稱。禪門規式「道高臘長、呼為ニ須菩提ニ、亦曰ニ――ニ」

【長老會】ちょうろうかい　基督新教の一、英國の監督教會と相反し、其の監督制度、及び儀文服式等を尊ばず、禮拜の儀も亦玉りて簡單なり、監督を置かずして長老あり、故に名つく。

【長浪】ちょうろう　おほなみ。鮑照詩「勢舟厭ニ――ニ、疲馬倦ニ行風ニ」‖長波。

【長廊】ちょうろう　ながき廊下。四京賦「ニ――ニ廣庭、途閣霞連」‖修廊。

【長利】ちょうり　○長久の利益。史、張儀傳「齊王曰、齊僻陋蹙ニ居東海之上ニ、未ニ嘗聞ニ社稷之ニ――也」○利益を獲ることを多くする。漢書、景帝紀「詔云、令ニ廉士久矢ニ職、貪夫ニ――レ」

【長流】ちょうりゅう　○ながくながれる。蘇軾詩「願逐ニ空水ニ――ニ」○ながきながれ。陳琳詩「通翔戲ニ――ニ」

【長簫】ちょうしょう　長きうけどひ。潘尼賦「瞻ニ中塘之清汗ニ、聽ニ――之洋洋ニ」

【長陵】ちょうりょう　漢の縣名、今の陝西省咸陽縣の東に在り。

【長齡】ちょうれい　ながいき。北史、昌國漢傳「願遂無ニ――ニ」‖長年・長壽。

【長】

長（前條）の古字。

門部

【門】モン　元

○かど、家の外圍に設ける出入口。一扇（扉はとびら）なるを一といふ。一說に堂室に在るを戸、垣牆に在るを一といふ「南一」「北一」「朱一」「家一」「里一」「閘一」○いりくち、でぐち。○すべて物事の必ず經由する關鍵の所。老子「衆妙之一」○仕進の路。書、舜典「闢四一」○いへ「家一」「求忠臣」必于孝子之一」○い

へがら「一閥」「名一」○みうち(家族)「一一」○よつぎ(正嫡)○門戸を守る。公羊、宣六「則無二人一爲者」○城門を攻める。左、僖十「諸侯之士一爲」○師のをしへをうけしなかまの人人「同一」「一人」○分類上の區別「部一」○學術上の一分類「專一」○宗教の種「儒一」「佛一」○大砲を數へる數詞「砲十一」○罹一は郡名。○圖(漢字の構造を示す語。

【門尹】門番の長。周語「一一除レ門」

【門院】圖天子の御生母の稱。

【門衛】もんばん。南史「羣盜潰、死者五千人、諸一一皆走」‖防門衛。

【門閭】門閭に同じ、閭は閭閻。唐書、張九齡傳、鄉閭榮有二一一一」

【門蔭】一門の分れ、門族。

【出レ門如レ見二大賓一】門を出ると大賓に對するやうに敬を以て身を持する喩。大賓は貴客。論、顏淵「仲弓問レ仁、子曰、——、使レ民如レ承二大祭一」

【同レ門而異レ戸】なれども、その見る所を少しく異にする義。揚子法言「喜於二荷卿一魴、見二同レ門而異レ戸也」

【叩レ門】叩は叩く、門を叩きて通ずるを求むる。晏子春秋、雜「前踏一一」‖訪問。

【杜レ門】門を塞ぐ。漢書、王陵傳「謝レ病免、一レ一」‖閉門。

【閉レ門】前條に同じ。中庸或問「古語所レ謂一レ一逸レ車、出レ門合レ轍、蓋言二其法之同一」

【門衰】家が衰微する。李密、陳情表「一一薄酒、晩有二兒息一」

【開レ門而揖レ盜】門が開きて盜人を迎へ入る。自ら好みて災禍をまねくに喩ふ。吳志、吳主傳「張昭曰、——、未レ可二以爲一仁也」

【門下】○おさもと、食客。史、信陵君傳「誠二一一一」○でし(弟子)後漢書、承宮傳「過二徐盛盧一、數レ經造請一門一一」‖門人。

【門下省】晉代に始りし官署の名。唐書、百官志「一一、侍中二人、正二品、掌レ出二納帝命一相二禮儀一」

【門戸】門戸と、門に入るこみちと。班固詩「村閭一一多相似、唐風根殼花」

【門衛】もんのよこぎ。范成大詩「方諸館二史冊一圖二一一一」

【門客】おさもと、門下の食客。晉書、謝安傳「孟嘗君有二一一一、詐作二雞鳴一」

【門閥】門の際。史、張耳傳「爲子齊相一出、其御之妻、從二一一一、而窺二其夫一」

【門鑰】門の出入の許可の點たる札。

【門火】かどび、葬送の時、門前に焚く火。顏氏家訓「喪出之日、門前燃レ火」

【門外多有二車馬一者車轍】門外多く貴人の多く訪ひ來るをいふ。史、陳丞相世家「家乃負郭窮巷、以二弊席一爲レ門、然一一」‖門外時聞二長者車一」

【門外漢】門外に在る男、其の事に關知することなき者。五燈會元「圓智禪三東坡詩、溪聲便是廣長舌、山色豈非二清淨身一、若不レ到二此田地一、如何有二這箇消息一、此義曰、是一一耳」‖門外可レ說二禪理一」

【門外可レ設二雀羅一】權勢を失ひて後は來り訪ふ者もなく、門雀來りあつまる、故にあみを張りて之を捕ふべし。史、汲鄭傳「下邽翟公有レ言、始翟公爲二廷尉一賓客闐レ門、及レ廢一一、門可レ以レ設レ雀」‖一に俗に作る。

【門閫】○門又は閫を司る職。周禮、注「一一、司門・司閫也」○もんと、せきしょと。周禮「一一之委積、以待二羈孤一」

【門逕】門前のこみち。范成大詩「故人能少レ駐、一一久誅茅」

【門闕】宮城の門觀。漢書、五行志「一一、號令所二由出一也」

【門業】其の家代代の職業。南史、賀瑒傳「探珠有二一一一」

【門限】○もんのしきみ。曲禮「不レ踐レ閫」注「閫、一一也」○圖門戸を閉づる刻限。

【門戸】○いりくち。易、智卦、注「天地者、易之一一」○いへ。古詩「鏡難持二一一一」(持二一一一とは猶ほ治レ家といふが如し)○いへがら。晉書、王敦傳「我兒老婢耳、一一衰矣」○一一は人家の私有する所、故に朋黨を結ぶを立二一一一といひ、一家言を立つるを一一之見といふ。唐書、韋雲起傳「自作二一一、附レ下罔レ上、爲二朋黨一」

【成二門戸一】自ら一家を成す。漢書、王莽傳「莽年數歲、爲二大父梁所レ異、常謂二親識一曰、此吾家之千里駒也、一一者、必此兒也」

【張二門戸一飛】住居を壯大にしてみえをはる。又勢力を張る。

【倚二門戸一飛】他人に依賴して立身するに喩ふ。晉書、故事「唐元和中、士人下第多爲レ詩刺二試官一、獨孤孝標作二歸燕詩一上二庾承宣侍郎一曰、舊壘危巢泥已落、今年放向二社前一歸、連雲大廈無二棲處一、更倚二誰家門戸一飛」(社前は春の社日の前)

【門鍵】時刻をうかがひて門の開閉を掌る官。漢書、嚴安之傳「署二小苑東一一」

【門闌】もんのしきみ。梅堯臣詩「看劇十九年、一一未二曾履一」

【門子】○門番。日知錄「一一者、守レ門之人」‖僧人。○古、卿大夫の嫡子(周禮、小宗伯)

【門資】モン　いへがら。官爵、官職に適ふ資格。○一家有二豪氣一者。門地。門閥。

【門人】モン　○でし。史、孟軻傳「孟軻鄒人也。受二業子思之一門弟子。○もんばん。博物異志「一曰、汝已至レ此、何不レ求二游學軍前一。」門下人。○ねざとら。門下の客。戰國齊策「鄧之竪徒、見二孟嘗君一。」

【門者】モン　もんばん。後漢書、孔融傳「融造二李膺門一、語二門者一。」門番者。

【門牆】モン　○もんと、かきと。家門をいふ。法言「在二夷貉一則引レ之、倚二門牆一則靡レ之。」○師の門をいふ。論、子張「夫子之牆數仞、不レ得二其門一而入、不レ見二宗廟之美、百官之富一。」

【門楣】モン　○もんのとぼそ。○轉じて門戸の義。古樂府「盛レ容亦不レ遠、足不レ過二門一。」

【門生】モン　○でし。後漢書、竇融傳「竇氏樹レ恩四世、一一故吏徧二於天下一。」門人。弟子。○唐代、進士の試驗を司る官吏を先生といひ、及第者自ら一一と稱す。

【門跡】モン　圖○字多天皇、剃髮して仁和寺に入らせ給ひ、之を御門の跡と稱す、よりて法親王の住し給ふ寺院の稱とす。○本願寺の俗稱とす。

【門閥】モン　もんのとびら。漢書、霍光傳「黃門宦者、各持二一一、主入門閤一。」

【門前剪啄】モンゼンセンタク　門の前のげたの音。宋、王子端、野堂「雲自知レ歸鳥自還、一堂足了一生閑。一一定佳客、簷外誤類皆好山。」

【門族】モン　家門のさいはい。又、家世の義。唐書、柳玭傳「衰亂以來、一一衰落。」家祿。

【門闥】モンタツ　宮中の大かのもん。漢書、金安上傳「非氏反、安上傳二禁一一、無レ內二霍氏親屬一。」

【門地】モンチ　いへがら。官爵、王遜傳「司徒王導以二一一辟レ遜。」門閥。

【門胄】モンチウ　いへのちすぢ。唐書、柳冲傳「其後一一、興替不レ常。」

【門庭】モンテイ　門內の庭き處。孟浩然詩「一一無二雜賓一、車轍多二長者一。」

【門庭若レ市】モンテイアヒシ　人の多く來りあつまる形容。戰國齊策「羣臣進レ諫、門庭若レ市。」

【門弟子】モンテイシ　門人に同じ。論、泰伯「曾子有レ疾、召二一一一曰、啓二予足一、啓二予手一。」

【門帖】モンテフ　もんにかける標札。淸沙亭雜記「北京宮闕成、太宗命二解縉一書二一一、以二古詩一書レ之、曰、日月光二天德一、山河壯二帝居一、上大喜、賚賜甚厚。」

【門斗】モントウ　くるる、戶を開閉する爲めに設けたる棧。訓纂字會「棧、俗呼二一一一。」

【門徒】モント　○でし。後漢書、郎顗傳「爲二一一四百餘人一。」門人。○佛敎の信徒。舊唐元和「唐開元二年、制、百姓家多以二僧尼道士一爲二一一、相與往還、妻子無レ所二避忌一、甚成二敗俗一。」○もんばん。周禮、司門、注「監門、一一。」○圖一一宗は一向宗の俗稱。

【門泊東吳萬里船】モンニハクストウバンリノフネ　唐人の詩の句。杜甫、絕句「兩箇黃鸝鳴二翠柳一、一行白鷺上二靑天一、窗含二西嶺千秋雪一、一一。」

【門不レ停レ賓】モンニテイヒン　賓客を待たれめず、直に應接する。晉書、王濛傳「虛懷綏納、靡無二空席一、一一、故江東之士、莫レ不二悅服一。」

【倚レ門望】モンニノゾム　倚門望レ閭（一一四五頁二段）を見よ。

【門牌】モンパイ　門のかけふだ、もんふだ。

【門榜】モンバウ　門如レ市心如レ水　コヽロハイリノゴトシ　我が門前には網を張して來り求むる者は甚だ多けれども、我が心は淸くして公平なり。漢書、鄭當時傳「上賢二當時一、日、君門如二市人一、何以欲レ禁二切主上一。崇對曰、臣門如レ市、臣心如レ水。」

【門望】モンバウ　いへがら高く人望多し。後漢書、韓顯宗傳「朝廷徵檢二其一一一。」

【門榜】モンバウ　もんのかけふだ。段成式詩「贈詩傳二謝客一、一一占二休公一。」

【門閥】モンバツ　いへがら。後漢書、宦者傳論「羣紫無レ譏二於一一一。」唐書、郎仁表傳「常以二一一文章一自高。」

【門法】モンパフ　家門の法則。後漢書、書鈔論「子貢俊才、一一不レ學。」家法。門風。

【門扉】モンピ　門のとびら。宋書、符瑞志「水涌出銀二一一。」

【門楣】モンビ　○門の上の橫梁。轉じて家門の義とす。嘉啓詩「男兒弧矢壯二一一一。」○女子をいふ。長恨歌傳「男不レ封レ侯女作レ妃、君看女卻爲二一一。」

【門廡】モンブ　もんのひさし。劉克莊詩「一一無レ人殿未レ開、白頭散吏久徘徊。」

【門風】モンフウ　一家の風儀。顏氏家訓「篤學修行、不レ墜二一一一。」家風。

【門裏】モンリ　いへのほまれ、家名。北史、柳遐傳「立レ身之道、進退有レ節、子莊、兢直之風、不レ殞二一一一。」

【門標】モンヒヤウ　かどふだ、姓名などをかきしるす札。門札。表札。

【門牡】モンボ　もんの戶のとざし。漢書、天文志「長安章城門、一一自レ亡。」

【門僕】モンボク　家に仕ふるやつこ。張籍祭退之詩「一一皆道道、尙我到二幾房一。」家僕。

【門蕭】モンマツ　もんのしまり。北史、四夷乞伏氏傳「盜二一一一。」關鍵。

【門鑰】モンヤク　前條に同じ。

【門不二夜閉一】モンヤヅカズ　世が太平にして盜賊の患なきをいふ。史記「子產爲レ相三年、一一、道不レ拾レ遺。」

【門裏】モンリ もんのうち。李商隱詩「風流大堤上、悵望白―人」

【門柳】モンリウ かどぐちにうえたるやなぎ。白居易詩「春色酔ニ―一、秋聲到二井桐一」

【門閭】モンリョ むらざとの入口のもん。轉、月令「仲夏之月、――毋レ閉」

【旌二表門閭一】セイヘウスルモンリョ 孝子節婦等の善行を其の里の門に表旌する。晉、畢命「旌二別淑慝一、表二厥宅里一」蔡傳「表二異善人之居里一、如二後世一――之類一」

【門隷】モンレイ 門を衛る賤吏、もんばん。莊、秋水「不レ賜ニ―一、貨財弗レ爭」＝門卒。

【門籍】モンセキ 門に題する對聯「駒陰冗記「都唐爲二州長一、書ニ―一云、架有二春風筆一、門無二暮夜金一」＝門帖。

【門樓】モンロウ もんのやぐら。後漢書、董卓傳「逢閉ニ―一」

一畫

【門】サン セン 刪

くゎんのき。門をとざす横の棒、門の横關。

二畫

【閃】セン 琰 豏

○ひらめく、ちらつく、ちらと見える（瞥見）ひらめかす。李賀用詩「風ニ雁行疎又密」○ぴかぴかする。○俗に電をいふ。○動く貌。○身を側ダテて避ける「躲ニ」

【閃人】人が門中に在りてちらと人を窺ふに象る。

【閃紅】コウ 赤き色をひらめかす。孟郊詩「一一驚二動虬一」

【閃爍】サン ひらめきてあきらかなる貌。劉秉忠詩「雲濤一一動二霓旌一」

【閃悍】セン ひらめきかがやく、光の定まらざる貌。王倍璠文「日流一一、風度清廟」譌、一に燦に作る。

【閃閃】セン ○ちらちらとひかりかがやく貌。袁枚詩「繁星一一漏沈沈」○動きひらめく貌。杜甫詩「一一浪花翻」

【閃刀紙】タウ たちのこりの紙、一角外みて紙中に在りて殘ち殘されたるもの（文房四譜）

【閃電】デン ひらめくいなづま、極めて疾キかなる喩。陳書、長孫覧傳「觀二其走馬一、猶爲二一一」

三畫

【閉】カン 諫

○里のもん。左、襄二一「高其一一閭」＝閭。○轉じてさと（邑里）「里一」「同一」「邑一」○かき（垣）○邑をかこむかき。○とづ（閇）

【閉】ヘイ 霽

○とづ、とざす、しめる。閇の對「一門」「一鎖」○ちぢう。論、月令「修ニ鍵一」（鍵は牡にてかぎ、一は牝にて孔あるぢゃう）○かくる、をさまる（藏）○ゆだめ、ゆみだめ（弓檠）○おほふ。おほはる（掩）○ふさぐ。ふさがる（塞）易、坤卦「天地一」疏「謂二氣不相交通一天地否一」○立秋・立冬をいふ。左、桓五「分至啓一、必書二雲物一」○閑一は婦人の淫刑。○俗語にて停止の義「一會」

【同訓異義】閉・掩・蓋・杜・閇・關○閉は門をとざすなり。開・啓・闢の反なり。孟子「閉レ門而不レ内」○鎖は錠をおろすこと、とざすと訓む、門戸器物共に用ふ。○閑は兩びらきのとびらなり、轉じてそのとびらを、とざす義とす。○杜は塞也、とぢふさぐ義、杜レ門・杜レ陳・杜二絶行路一などと用ふ。○關は閉に近也、大切にしめる義あり、扇を關窗といふ。○關はくゎんの木を入れること。文選「門扇レ設兮常關」

【閉閣】ヘイカク 家の小門をとぢる。漢書、陳遵傳「入臥二傳舍一、一レ一思レ過」

【閉レ門】ヘイモン わざはひをとぢふさぐ。曾子「一一在レ除レ憩」

【閉會】ヘイクワイ よりあひを終ふ。＝散會。

【閉關】ヘイクワン ○關所をとざす。易、復卦「先王以二至日一一レ一、商旅不レ行。○門をとぢて客を謝す、身を隱す。文中子「劉伶古之一一人也」＝藏レ身・杜門。

【閉口】ヘイコウ ○口をとづ、ものいはず。史、張儀傳「甯陳子一一レ一、毋二復言一」○圖答が出來ぬ、窮りきる。

【閉戸先生】ヘイコセンセイ 家にとぢこもりて、讀書にふける人。楚國先賢傳「孫敬常閉レ戸讀レ書、睡則以レ繩繋レ頭、懸二之梁上一、嘗入レ市、市人見レ之皆曰、――來也」

【閉鎖】ヘイサ とざす。杜牧詩「重門一一青山晩、深院重簾自日長」

【閉掩】ヘイエン 戸をとぢて來客をはらふ。南史、王亮傳「脩居一一、不レ通二賓客一」

【閉藏】ヘイザウ ○とぢかくれる。淮南、天文「萬物一一」○とぢふさぐ、物をしまひこむ。禮、月令、注「築二圏圄一、此以助二天地之一一也」

【閉肆】ヘイシ みせをとざす。漢書、王吉傳序「嚴君平、卜二筮于成都市一、裁日圏二數人一、得二百錢一、足レ自養一、則一一レ下レ簾而授二老子一」

【閉門】ヘイモン とぢこめとらはれる。沈佺期詩「一一斷二外事一、昧爽牛鈴期」

【閉息】ヘイソク いきをとぢる、いきをころす。蘇軾詩「念應ノ掩二長物一ー一眠自嬰」

【閉塞】ヘイソク とぢふさがる。禮記「天地不ノ通、ー一而成ノ冬」

【閉塞船】ヘイソクセン 敵艦の出入をふさぐために港口等に沈める船。‖杜塞船。

【閉堂】ヘイダウ 冬朝になりて諸司の士中にこもる義。啓堂の對。左、桓五「凡祀、啓堂而郊、龍見而雩、始殺而害、ー一而烝」

【閉店】ヘイテン みせじまひ、商賣をやめる。

【閉連】ヘイレン こほる。荀子「冬日之ー一也不ノ固、則春夏之長三草木一也不ノ茂」

【閉目】ヘイモク めをふさぐ。白居易詩「靜念三道經一深ーノー」

【閉門】ヘイモン ○門をとぢる。漢書、王莽傳「ーノー自守」‖杜門。○口をふさぐ。老子「塞二其兌一閉二其門一」注「兌、目也、門、口也」○國 徳川時代の士人の刑、門をとざして、當人をして外人の出入を禁ぜしもの。

【閉居】ヘイキョ ふさがりなやむ。後漢書、張綱傳「其窮刻ーー者、皆求二援救一、以濟二其惡一」

【閊】【國字】

つかへ、つかふ、さしさはりがある。故障が生ずる。

四畫

【閉】カ ゲ 【禹】

○うつろ（空虚）○さく（開裂）司馬相如、上林賦「谿呀谺ー」

【開】カイ 【灰】

○ひらく（發）あける、閉ぢたるものをあける。閉の對。○花さく。梁簡文帝詩「桃花含ー雨」○とく（解）○のべる（陳說）○さとる。さとらせる、啓發する。禮、學記「君子之教喩也ーー而勿ノ達」○はる（張）ひろげる。ひろがる。○はじむ、はじまる（始）「ー祖」「ー闢」「ー會」○とほる（通）暢達。晉書、胡奮傳「性ーー朗」○おこす。おこる（興）○人文が進む、文明になる「ー明」「ー化」○新に田畑をつくる「ー墾」「ー拓」○うごかす、發動する「ー車」「ー船」○わかす（沸）ー水は沸湯。○數、乘根を求める「ー平」「ー立」○國 宴會をとおる、婚姻の宴席にて閉といふ語を忌みていふ、おひらきにする。

【開闢】カイビャク 開・闢・啓・發・闡・拓・披・排・拆○開は閉の反、開ノ門・開ノ口・花開の如し、又口あけの義、天地開闢の類にて、始の字に似たり。○闢は開に同じ、開闢と連用す、辟に作るも同じ、闢ノ戸・辟ニ土地一の類。○啓はものの口をあけるなり、門戸をひらくなり、轉じて人の知らぬことを教へ導くに用ふ、啓發・啓迪の如し。○發は矢をはなつ義にて、開よりは急にひらくなり、花開は、次第に開くなり、花發は、口をきつてぱっと發くなり、發は伏藏したるものを取り出す意あり、發ノ棺・發二倉廩一の類、アバクとも訓む、發二掾案一の類。○闡は開也、明也、大也と註す、暗を開き、明かにするなり。闡幽と用ふ。○拓は開拓と連用す、地をひらくなり。○披は兩方へ分け開く意、披ノ襟・披ノ霧・披ノ封の類。○排は手にて推し斥くるなり。史、樊噲傳「排ノ闥直入」○拆はやぶりひらく、裂也、開也、解也と註す、坼に同じ。易經「雷雨作而百果草木皆甲拆」

【開悦】カイエツ をしへみちびく。晉書、郗鑒傳「薦二表爵弟一、敎二禮賢能一、興二立庠序一、ーー後進一」‖訓誘。

【開允】カイイン 許す義、允は許なり、許なり、從なり。唐書、于頔傳「帝晩務二姑息一、頔所二奏建一、無ノ不ーーノー」

【開運】カイウン 氣運をひらく。新らしき幸運に向ふ。南史、齊高帝紀、論「祭始ーレー、大拓二時服一」

【開筵】カイエン 座席をまうける。孟浩然詩「登二何處一ーレー偏覩山」

【開可】カイカ ゆるす、許可に同じ。後漢書、梁統傳「統陳二便宜一、以爲宜ノ重二刑罰一、議者以爲隆刑峻法、非二明主急務一、統令所ノ定、不ノ宜ニーー一」

【開河】カイカ 國 結氷せる河水が春に至り融解する。

【開港】カイカウ ○みなとを開き始める。○港を開きて外國と貿易する。又其の港。‖國 通商口岸。

【開端】カイタン 講義をはじめる。南史、羅質傳「大通元年、帝幸二同泰寺一、ーー

【開圃】カイホ あけると、とづるとの老子「天門ーー」‖開閉・開鍵。

【開顏】カイガン 顏をひらきて笑ふ。李白詩「ーー酌二美酒一、樂極忽成ノ醉」

【開基】カイキ ○もとゐをひらく。又、其の人。唐福殿賦「愛二天地一以ーレー、○後世は多く佛寺を創立するにいふ。‖開山。

【開襟】カイキン ○えりをひらく。杜甫詩「ーレー駈二癘鬼一、明ノ目掃二雲塵一こ」‖披襟。○襟じて心をうちあける。

【開豁】カイクワツ ひらきほる。宋史、食貨志「俟二飛隕一ーー」

【開導】カイダウ 精通ノおとし。許客義書「今人茹ノ素、而親郎設二酒殽一以相煖熱、名曰ニーー一於ノ理合ノ曰二開

素、白居易詩、月終書滿誰開著」

【開化】カイクワ ○人智が開けすすむ。‖開明。○文化を啓發する。顧凱之、定命論「通レ徹レ一、物理貫レ則、典訪之興、由來尚矣」

【開光】カイクワ 圖開眼に同じ。

【開曠】カイクワ ひろやかにうちひらける。謝靈運詩「江山共一レ、雲日相照曜」

【開豁】カイクワツ ○心ひろくゆたか。晉書、劉惔傳「惔性果毅、絶二弓馬一、一レ見二勇壯一」‖縁途・開期。○ひろやかにうちひらける。范成大詩「登レ嶺既一レ、入レ林更清涼」

【開花砲】カイクワハウ 圖榴散彈。

【開卷】カイクワン ○ひらくと、まくと。‖照、芙蓉賦「雖二衆愛一子開卷、閲二翠鬟一于将明一」‖卷初。○書物をひらきて讀む。韓愈詩「一レ讀且想二千載著一相期一」宋實錄「太宗曰、朕性喜レ讀レ書、頗得二其趣一、一レ有レ益、豈徒然也」

【開曉】カイケウ さとす。さとる。後漢書、種暠傳「宜二開遠一一一珠俗、眠山雜落、皆懷二服漢德一」‖開諭。

【開缺】カイケツ 圖官吏が職を去る。

【開業】カイゲフ 事業をはじめひらく。史、秦紀「爲二後世一一レ一開二光美一」

【開元】カイグワン ○もとゐをひらく。又、開國の義とす。班固、東都賦「大大漢之一レ一也、奮二布衣一以登二帝位一」‖業基・開國。○唐の玄宗の年號。

【開眼】カイガン ■佛道の眞理を悟る。又、佛像落成の時に行ふ式「一一供養」楞嚴經「一レ一見レ明、名爲二見外一」‖開光。

【開通】カイツウ さとる。さとす。宋史、程頤傳「釋二訂經史一一一後學一」

【開口】カイコウ ○くちをひらきて、ものいふ。陸機、贈二顧交阯一詩「一笑聊一レ一、千愛不レ上レ眉」○首ひだし、口をきる。○飲食する。曾子、海王「萬乘之國、人數一一千萬也」

【開國】カイコク ○くにをはじめ立つ。吳都賦「有二吳之一レ一也、遡レ自二太伯一、宜於延陵一」‖肇國・建國。○始めて天下を有つ。清一一方略（三十二卷）あり、太宗の擧兵より、世祖の入關に至る事を紀す。○外國との交際をはじめる。

【開墾】カイコン 荒地をひらく。齊民要術「凡開二荒山澤田一者、皆七月七日之二草乾卽放レ火、至レ春耕一一」

【開鎖】カイサ ひらくと、とざすと。‖開閉。

【開歲】カイサイ としのはじめ。後漢書、馮衍傳「一一發春兮、百卉含レ英」‖開年。

【開催】カイサイ 集會などを開きもよほす。

【開辦】カイベン 我より即を得たる義。戰國策「一一於先王一」

【開濟】カイサイ 物を開き務を濟す。晉書、楚隱王裒傳「裒性一一、能得二衆心一」杜甫、諸相詩「開朝一一老臣心」‖開物濟務。

【開山】カイサン ○寺をはじめ立てる。又、一宗一派の祖師をいふ「一一塔」「一一忌」‖開基。○國郡をはじめる。又、其の人。‖元物事をはじめる。又、其の人。‖元祖。

【開拳】カイケン 道路又、川などをひらきがつ。黃庭堅詩「壯產無二脩塵一、荒榛盡一一」

【開札】カイサツ 入札・投票の函をあけてしらべる。

【開士】カイシ 圖ぼさつ。明かに眞理に通達する士夫。一說に法を以て衆生を開導する士なるが故。釋氏要覽「經中多呼二爲一一一」

【開市】カイシ 貿易を開始する。易林「一一作レ賈、往二通利事一」

【開示】カイジ ひらきしめす。後漢書、馬援傳「來爲二山谷一、指二畫形勢一、一一衆軍所レ從道徑一」

【開肆】カイシ みせをひらく。陰書、循吏傳「伯讓亦一レ資卜」伯讓は、楊伯醜。

【開舟】カイシウ 船出する。天工開物「風息一一」‖開船。

【開秋】カイシウ あきのはじめ。阮籍詩「一一兆二涼氣一、蟋蟀鳴二牀帷一」‖孟秋。

【開謝】カイシヤ 花の開くと、ちると。謝は謝し去る。馬臻詩「一一幾年春」‖開落。

【開城】カイジヤウ ○朝鮮京畿道の一都市、京城の西北に在り、高麗王の舊都。多く人參を産す。‖松都。○圖城をあけわたす、降伏する。

【開手】カイシユ 圖始める、著手する。

【開春】カイシユン はるのはじめ。晉書、九章「一一發歲兮、白日出之悠悠」‖初春。

【開晴】カイセイ 夜あけ。拾遺記「熒光一一月低レ河」

【開水】カイスヰ 圖にえゆ、沸騰したるあつき湯（湯は吸物ヌモノ）

【開成】カイセイ ○開物成務カイブツセイムの略。○唐の文宗の年號。

【開霽】カイセイ 雨がやみてはれわたる。曹伯啓詩「秋雨忽一一、乾坤變二清涼一」‖開晴。

【開析】カイセキ ひらく。詩經、傳「雜卦可以一一之一」

【開釋】カイシヤク ゆるす。晉經「一一無辜、赤克用勳」‖開放。

【開設】カイセツ あらたにまうける。後漢書、西域傳「復令下一一屯田、如中永元時事上」

【開說】カイセツ まうしひらく。史、曹相國世家「辭而後去、終莫レ得一一其所一啓白。

【開船】カイセン ふなです、出帆するの風槎勝覽「自二大倉劉家港一一レ一」‖開舟。

【開戰】カイセン たたかひをはじめる。‖開仗。

【開闡】カイセン ひらきひろめる。梁簡文帝大法頌序「廣行二利益一、一一佛寺一」

【開巻】ひらけてゆたかにとぼる。沈佺期詩「大業永ー一、臣道日光輝」

【開拓】土地をひらく。李華文「欲ー一宅北ニ更記中新第ヒ」

【開示】ひらく。韓愈詩「脫ン實自ー一」‖開拆。

【開端】事をはじめる。宋史、范純仁傳「不ン可レ一」‖發端。

【開智】ちゑをひらく。淨住子「ー一生ン篇、不ン應ニ懸越ニ」

【開陳】ひらきのべる。陳述する。漢書、公孫弘傳「每ニ朝會議ー一ニ其端ヲ、使ニ人主自擇ニ、不ニ肯面折廷爭ニ」

【開張】〇開きはる。杜甫詩「卓立天骨森ー一」〇市を開きて貿易する。古杭夢遊錄「復起ー一」

【開帳】開帳子ヲ開きて中なる佛像を拜ます。西雜俎「夫人出レ手ー一、令ニ人得ヒ見」‖啓龕・開龍。

【開通】ひらき通ずる「疏道ー一」

【開廷】裁判所にて裁判をはじめる。

【開展】〇ひらきのびる。仲春郊詩「庭草有ニ除姿ニ、園英復ー一」‖開張。〇ひろげのべる。‖展開。

【開年】としのはじめ、歲始。庾信行雨山銘「ー一賽禱、正月遊春」‖開歲・開春。

【開方】算術の一科。周髀算經、注「勾股各自乘、幷之而レ開、實ー一除レ之即弦也」

【開放】〇ゆるしはなす。晉經、傳「ー一無罪之人、必無ニ枉縱ニ亦能用勳レ晉」〇あけはなす。ー一門戸ニは鎖國の對にて、各國と締交通商するに喩ふ。

【開發】〇ひらく。封を切る。漢書「宣官左右ー一」〇智識をひらきみちびく。北史、崔贍傳「朝夕遊處、ー一幼稚ニ」‖啓發。〇田畑をひらき新す。開拓・開墾に同じ。

【開發主義】兒童を教育するに成るべく兒童をして自ら發明せしむる方法。注入主義の對。

【開帆】帆をかける、船出する、出帆する。

【開眉】まゆをひらく。愁をとく義。朱弁詩「普請爲ー一」

【開敏】心ひらけてさとし。漢書、文翁傳「ー一有レ才」梁書、周拓傳「學問堅明、志行ー一、幼ニ勞機要ニ、多歷ニ識年ニ」‖通敏。

【開闢】ひらく。世界のひらけはじめ。揚雄、劇秦美新「配ニ五帝ニ冠ニ三王ニ、ー一以來、未ニ之聞一也」

【開府】〇漢の制、三公に役所を設けて屬官を置くことを許されたるをいふ。後世將軍も之に準じ、ー一儀同三司（儀制が三司即ち三公に同じとの義）といふ。〇巡撫・總督などの尊稱。

【開封】手紙などの封をひらく。魏詩「行人臨レ發又ー一レ」

【開復】〇恢復に同じ。晉書、庾亮傳「死有下ー一中原ニ之謀ヒ」〇休職の官吏が其の屬性の官に復せられしをいふ。

【開ン物成ン務】人の未だ知得せざる所を開發し、人の成さんと欲する所を成して之を全くす。易、繫辭「夫易ー一、冒ニ天下之道ニ、如レ斯而已者也」

【開閉】ひらくと、とづるとあけたて。易經、疏「ー一相須、陰陽運玄」‖開闔。

【開票】投票の數をしらべるために其の函をひらく。

【開目】まなこをひらく。實島詩「莫ニ居ニ暗室中ニ一ー一閉目同」

【開門】もんをあける、門戸を開く。吳志、吳主傳「ー一而揖レ盜、未レ可ニ以爲ニ仁也」

【開洋】ふなでする、出帆する。圖書編「遼河口ー一」‖開船・開帆。

【開險】ひらきさとす。元史、安南傳「天使之來、ニ一詔盜ニ、使ニ予喜懼交ニ一殿於胷中ニ」

【開期】〇ちひらけてほがらか。陶潛、桃花源記「豁然ー一」‖明期。〇心がうち開けて實明なり。晉書、胡奮傳「奮性ー一」

【開落】開闢に同じ。

【開立】立方根を求むる算法。

【開悳】〇みちをひらく。韓偓詩「百辟敬ン容ー一者」〇ー一神は我體に用ふる所の偶人。

【閂】カ。

〇盛んなる貌。〇ー閎は高き門の貌。

【開】

㊀カン・ケン　㊁カン・ケン

㊀あひだ「中ー一」〇あひま「時ー一」〇すきま（隙）「空ー一」〇なか（中央）〇うら（裏）〇ところ、場所「田ー一」「坊ー一」「行ー一」〇いる（容）禮、文王世子「凡侍坐於大司成者、遠近ー一三席」〇分別ある貌。〇車のくさびの聲。〇ちかごろ（近）「このごろ」ー者」〇やすんず（安）〇しづか（閑靜）「幽ー一」〇ゆるやか（寬）〇やすむ（息）晉語「可ニ以少ー一」やすみ（休息）〇てすき（無事）孝經、開宗明義「仲尼ー居ー一」〇あそび（無職）「ー一民」㊁あひ、あひだ。〇へだつ（隔）「ー一歲」へだたり（距離）〇ちがひ（差）〇ひま、すきま。〇なかたがひ（怨隙）〇をり、しほ（機會）〇かふ。かはる（代）〇ひそか（私）後漢書、龐安傳「ー一獻詩

家」○しのびのもの(倪)うかがふ。○そしる(譏)非難する。孟、離婁「政不足一也」○まじる。まじゆ(混雜)「一色」○たがひに(迭)○あづかる(與)左、莊十「肉食者謀之、又何一焉」○とほざく(遠)○いゆ(癒)病が少しくなほる。論、子罕「病一日」○はなる(離)○しばらく、暫時「有一」に關○けん、六尺の稱。○へや(室)「明一」

閒隙 隙なり、門に從ひ、月に從ふ。門は夜閉づ、閉ぢて而して月光を見るは、是れ間隙有るなり。俗に、日に從ひて間に作るは非。

同訓異字 閑・閒・靜・寂・寞・恬・謐 ○閒は安なり、忙の反、閒暇・閒居・閒話と用ふ。○閑はひま、しづかと訓す。後世は閒に通用す。韓愈文「投閑置散」○靜は動または躁の反、さはがず、安息する義。大學「定而後靜、靜而後安」○寂はさびしき義、寂寥と熟す。易經「寂然不動」○寞は雪ぐき人なくして、ひっそりと、しづかなる義。易經「闚二其戸一闃其无レ人」○恬は心安らかに靜かなるなり。莊子「以レ恬養レ志」○謐は世の中、をさまりて靜かなるなり。安謐・清謐と連用す。○閒・窺・密・私・窃の別は(一四〇二頁二段)の條を見よ。

【閒員】カン 定りたる任務なきあたまかず。舊唐書、李固言傳「總宗時、班行多二一、皆時乏レ才郎」

【閒雲】カン しづかなるくも。杜牧詩「醉鄉無レ迹似二一一」

【閒閑】カン しづかなるその。又、あきたるはたけ。劉基詩「地主多二一一」

【閒閒】カン しづかなるかもめ。鄭元祐詩「詩盟從レ此負二一一」

【伺レ閒】うかがふ すきをねらふ。

【承レ閒】うけたまはる ひまの時をみる。

【多レ閒】カンなり なかが惡し。閒は隙。史、晉世家「君臣一一」

【閒架】カン ○閒は梁と梁との間、架は桁と桁との間。唐書、德宗紀「建中四年、秘二屋一一、上屋錢二十、中一千、下五百」○轉じて文章の結構に比して一一といふ。

【閒雅】カン しづかにみやびやか。史、司馬相如傳「雅容一一援都」〓閒雅。

【閒暇】カン ○ひま、いとま。後漢書、王符傳「其民一一、而力有レ餘」○國が治まりてしづか。孟、公孫丑「今國家一一、及二是時一明二其政刑一」○儀容がおちつきてしづか。賈誼、鵩鳥賦「止二于坐隅一、貌閑一一」

【閒行】カウ しのびあるき。間隙に投じて決行する。漢書、高帝紀「布與二隱何一一一歸レ漢」

【閒隔】カク へだつ。へだたり。陶潛、桃花源記「遂與二外人一一一」

【閒間】カン 物を區別する。莊、齊物「大知閑閑、小知一一」

【閒吟】カン しづかに詩をつくる。白居易詩「惟有二詩魔降未一得、每レ逢二月下一一一」

【閒愛】カン すきまの乘ずべきをうかがふ。東京賦「巨猾一レ、竊二弄神器一」

【閒居】カン ○事なくしてしづかに居る。大學「小人一一、爲二不善一」○しづかなるすまひ。〓幽棲・幽居。

【閒愁】グワン しづかにいぬ。李白詩「澹然吟二高秋一一一瞻二太清一」

【閒曠】クワウ しづかにしてゆるやか。北史、崔彦穆傳「風韻一一、器度方雅」

【閒閑】カン ○路がけはしくして行きなやむ貌。漢書、王莽傳「士死傷略盡、驅入レ宮、一一至二漸臺一」〓艱關・崎嶇・展轉。○鳥の和ぎなく聲。白居易詩「一一鳥語花底滑」○車のくさびの聲。詩、小雅「一一車之舝兮」

【閒月】カン 一年中にて農事のひまな月。忙月の對。後漢書、劉般傳「冬春一一、不レ妨二農事一」

【閒歇泉】カンケツセン 時を定めてわき出づる温泉。

【閒歇熱】カンケツ おこり、隔日又は時を定めて熱の起る病。

【閒健】カン 身閑暇にしてすこやか。陸游詩「遣二物子一開二筆予一健」

【閒話】カワ しづかにかたる。史、信陵君傳「侯生乃屏レ人一一」〓閒談。

【閒候】カウ まはしものとなりてうかがふ。漢書、傅介子傳「常爲二匈奴一一、逃二漢使者一」

【閒隙】カイ 閒はへだてる。一年づつ閒をおく。漢書、食貨志「一一萬餘人」〓隔歲。

【閒作】カク 園或作物の間へ他の作物を植ゑ作る「一一林」

【閒廁】シン いりまじる。元稹文「雜亂一一、無レ可二奈何一」

【閒日】カン ○中一日をへだてる。〓隔日。○ひまな日。〓暇日。

【閒執】シン ふさぎとめる。左、僖二八「願以一二一讒慝之口一」

【閒人】カン ○まはしもの。後漢書「遣二一一閒諜一也」○ひまな人。〓閒人。

【閒者】カン ○まはしもの、しのびもの。○このごろ、單に閒とも書く。

【閒出】シュツ 人目をしのびて外に出る。史、張耳傳「趙王一一」

【閒究】キュウ 究は敵なり。閒敵に同じ、機務なくしてひまである。蔡邕、巴郡太守謝版「一章自聞、乞在二一一」

【閒色】シキ 二種以上の色の配合によりて成る色。閒はまじはる。青・黄・赤・白・黒の五色の相まじはりて生

ずる色。禮記「衣正色、裳ー一」

【閒食】シカン あひだくひ。

【閒解】カイ しづか。陶潛文「少學二琴書一、偶愛二ー一」

【閒稅】ゼイ 間接國稅に同じ。

【閒接】セツ 間に或るものを隔てて其のものに對する。直接の對。

【閒接國稅】コクゼイ 酒・煙草などの如く、其の品の消費者が間接に負擔する稅。⇔間稅。

【閒然】ゼン 間はすきま、其のすきまを指してそしる。論、泰伯「禹、吾無二ー一」矣」無二ー一は一點のすきまをさして非議すべき所なしとの義。

【閒不レ容レ息】カンソクヲ 氣息を容るる隙なし。事の甚だ急なるにいふ。淮南、原道「時之反側、ー一」

【閒道】カンダウ ぬけみち、人の多く通行せざる道。史、淮陰侯傳「從二ー一出二井陘一山而望二趙軍一」⇔間路。

【閒話】カン しづかにしてきまま。元稹、上二令狐相公詩一啓「ー一無事、逢二用力于詩章一」⇔閑放。

【閒適】カンテキ 心しづかにして欲すくなし。傳志、阮瑀傳「ー一寡欲」

【閒隨】カンズイ たえま、とぎれる。蘇軾詩「視聽眼前忘二ー一處所、赤嵐沖融無二ー一」

【閒地】チ 閑散なる地位。⇔閑地。

【閒停】テイ ひまにて手がすく。後漢、皮喜傳「無事ー一、豈是良將」

【閒適】カンテキ しづかに心が安んずる。唐書、白居易傳「言關二美刺一者、謂二之諷諭一、詠二性情一者、謂二之ー一一」⇔閑靜安適。

【閒課】カンクワ まはレもの、敵狀を探りて其の主に報ずるもの。史、李牧傳「蓄二烽火一、多ー一」⇔翻作、諜者。

【閒田】カンデン 所有主のなき土地。禮、王制「名山大澤不レ以封、其餘以爲二附庸一ー一」

【閒投詞】トウシ 文法にて感嘆詞(ホ七九頁二段)に同じ。

【居レ閒】カンニ 兩者の中間に立ちて雙方の紛議を和解せしむ。史、滿夫傳「資客ー一、達止俱解」⇔居中調停。

【閒放】カンパウ しづかにして氣まま。北史、源大圓傳「深信二因果一、心安二ー一」張謂詩「策レ馬從レ此辭、雲山保二ー一」

【閒不容レ髮】カンノウヲイレズ 一髮を容るるすきまもなし。事の甚だ急なるにいふ。枚乘、諫二吳王一書「其出不レ出、ー一」

【閒步】カンポ しづかにあゆむ。鄭谷詩「猫來新舞後、ー一濟烟中」

【閒民】カンミン 職業なきたみ。周禮、地官「以二九職一任二萬民一、九曰ー一」⇔遊民・逸民。

【閒脫】カンダツ みやびやかにうるはし。宋玉賦「體貌ー一、口多二微詞一」

【閒話】カンワ ○むだばなし。⇔閑話。○人の居らざる時に惡口をいふ。かげぐち、しりうごと。⇔後言。

【閒話休題】カンワキウダイ むだのはなしはやめにして。それはさておき、雙語の辭、さての義。水滸傳「且把二閒話一休題、只說二正話一」⇔閑話休題。

【閒】 カン 閒(前條)の俗字。

【閑】 カン

○ふせぐ(防禦)易、乾卦「ー一邪存二其誠一」○とづ(閉)○おほいなり(大)○ならふ(習)なれる、習熟する。詩、秦風「四馬既ー一」○のり(法)規則、法則。論、子張「大德不レ踰ー一」○をり、馬屋のしきり(馬閑)○こまよせ(樓板)○しづか、ひま「ー暇」⇔閙。○ーーは男女の別なく往來ゆきする貌。又、車の動搖ゆらする貌。又ひろく大いなる貌。

【閑閑】カンカン 閑なり、門中に木あるに從ふ。

【同義異語】 即・閒・靜・寂等の別は閒(前頁一段)の條を見よ。

○ファセ閒・防・禦・扞等の別は防(阜部四畫)の條を見よ。

【閑安】カンアン しづかにしてやすし。李白詩「何時天寧靖、郷子得ー一」⇔安閑。

【得レ閑】カンヲエ ひまを得る。蘇軾詩「因レ病ー一、殊不レ惡、安レ心是藥更無レ方」

【閑雅】カンガ ○しづかにしとやか。史、司馬相如傳「從二車騎一、雍容ー一(容都)」(閑)に閒に作る)⇔嫻雅。○場がしづかにして雅趣あり。

【閑暇】カンカ ひま、いとま。⇔閒暇。

【閑答】カンタフ ○ひまなる雅人。宋雷詩「杜郎ー一今爲是、謝守風流古所レ傳」○白き雛子の異名。楊文公談苑「白鷳曰ー一」

【閑閑】カンカン ○車の動搖する貌。一說盛んなる貌。詩、大雅「施衛ー一、崇墉言言」○男女別なく相まじりて往來する貌。詩、魏風「桑者ー一兮」○盛博なる貌。莊、齊物「大知ー一、小知閒閒」

【閑卻】カンキヤク なほざりにうちすてておく。卻は助辭。⇔閑却。

【閑居可二以遂一レ志】カンキヨシテカナフヘシ 世を避け閑居して其の志を遂ふべし。後漢書、梁鴻傳「大丈夫居レ世、生當二封侯一、死當二嗣食一、如其不レ然、ー一、詩書足二以自娛一」

【閑殺】カンサツ しづかにしてゆるやか。北史、李公緒傳「公緒ー一不レ任レ事、每被二譏誚一」

【閑古鳥】カンコドリ 鷓一名、よぶこどり、つつどり、くわくこうどりの轉。⇔布穀・郭公。

【閑坐】カンザ しづかにすわる。史、日者傳「司馬季主ー一、弟子三四人侍」

【閑散】カンサン しづかにしてひまに遊び居る。韓愈詩「況是備官鄉ー一」

【閑雅】カンガ しづかにしてほしいまま。歐陽修文「清光清淡、一一可ン喜」‖閑故。

【閑日月】カンジツゲツ ひまなる月日、物事にこせつかざる心。‖閑歳月。

【閑習】カンシフ ならふ。能く熟練する。後漢書、鄧禹傳「少爲二國將一、一一軍事一、數踐二戰場一、名振二當世一」

【閑人】カンジン ひまびと。無用の人。未信編「如有二一一混優者一、立余幽僻」‖閑人。

【閑邪】カンジヤ よこしまなる心をふせぐ。邪惡を防閑する。易、乾卦「一一存二其誠一」

【閑暇】カンカ しづかなるおもむきの沈潤文。劉勰論之一一、具二存物之方準一」

【閑澹】カンタン しづかにしてよし。逸史、夫緑后顧氏傳「一一有二儀則一」

【閑行】カンカウ しづかにしてのびのびする。白居易、呂元膺傳「魚城門、指二綾部分、遂無一一、人賴以安」‖寛舒。

【閑職】カンシヨク ひまな役。‖散官。

【閑清】カンセイ しづかにしてきよし。王融文「道場願讃、禪遥一一」

【閑性】カンセイ しづかにととのふ。唐書、尉遅恭傳「屯二扶風一、除伍一一」

【閑業】カンゲフ 心靜かにして質素なり。宋書、文九王傳「少而一一」

【閑途】カンタウならひて通達する。後漢書、陽球傳「一一故事」‖習熟通達。

【閑談】カンダン しづかにはなす。韋莊詩「絶倒一一坐到レ明」

【閑地】カン ○あき地。○轉じて、閑散なる位地の義とす。晉書、郗愔傳「乞二一一一自養」

【閑暢】カンチヤウ しづかにしてのびやか。陶潜歸去來詩「雲爲二飢鳥一、來レ得レ息二一一一」

【閑暁】カンケウ しづかにながめる。崇參詩「一一北園樓、醉眠湖上亭」

【閑話】カンワ しづかにひとりをる。北史、邢邵傳「性好二談賞一、又不レ能二一一一」

【投レ閑置レ散】トウカンチサン 身を閑散の位置に置く。韓愈、進學解「一一、乃分之宜」

【閑放】カンハウ のどかにしく氣まま。晉書、文苑、官史論傳、士衡一一」

【閑雅】カンガ しづかなる美。沈約文「七釣泉幽、貝慰二一一一」

【閑逸】カンイツ しづかにたのしむ。晉書、庾敳傳「一一自居」‖從容一一」

【閑和】カンワ しづかにしてやはらぐ。陶潜文「始妙密以一一」

【閑話】カンワ むだばなし。衡準詩「莫レ言一一是一一、往往事從二一一一來」‖閑言、閑語、閑言語。

【閑話休題】カンワキウダイ それはさておき、むだばなしはやめにして、發語の辭。

【閎】 クワウ 圏

○巷ヤの門、小路ヤの入口「閑一」○天上の門。九一は九天の門。漢書、揚雄傳「臘九一」○おほいなり（大）○むなし（虚）○中ひろし（中寛）○ひろくす。韓愈、進學解「一其中、肆二其外一」○門旁の長き杙ヤにて扉ヤを止むる者。○一廓クワクは深く遠し。○一一は敎美クワクヨウの貌。太玄經「大圄一一」

【閎衍】コウエン 文辭が富みて廣ヤくし。漢書、敘文志「枚乘、司馬相如、下及二揚子雲一、談爲二侈閎一一之詞一」（閎一に弘に作る）

【閎圖】コウト ○大聲の形容。石介、蝦蟇詩「鋼鼓欽欽、聲震一一」○廣ヤく美くしき貌。字附參看。

【閎廓】コウクワク 遠くふかし。史、司馬穰苴傳「余讀二司馬兵法一、一一深遠」‖恢闊。

【閎達】コウタツ ひろくとほりて闊狹なき。晉書、何曾傳「博物洽聞、明識一一」‖瞻達。

【閎肆】コウシ みだりに大言してとりとめなし。郭璞、山海經序「世之覽二山海經一者、皆以二其一一迂誕多二奇怪一」（閎一に宏に作る）

【閎中肆外】コウチウシガイ 文を作るに、藴蓄に富みて用筆の豪放なる義。字解參看。

【閎覽】コウラン ひろく物事を覽て知る。史、吳太伯世家「一一博物君子」（閎一に宏に作る）

【閏】 ジュン 圏

○うるふ、歴ヨミの上にて平年より日月數の多き稱、太陽歴にては一日增して三百六十六日となり、太陰歴にては一ヶ月增して十三ヶ月となる。又、其の年月「一年」「一月」○轉じてあまり（餘分）又正統ならざる天位「正」

【閏餘】ジュンヨ 法制の禮、天子每月宗廟に居る、惟ヨ一月は門中に居る、故に門に從ひ王に從ふ。

【閏位】ジュンヰ 正統に非ざる天子の位。漢書、王莽傳「紫色蕩二閏餘一、餘分一一、聖王之編除云爾」

【閏刑】ジュンケイ 古、士人又は爵位ある人、偕倡・婦女子・老幼・廢疾の人に未到に代へて科せし刑罰。正刑にあらざる義。

【閏月】ジュンゲツ うるふづき。書、堯典、以二一一一定二四時一成レ歳」

【閏年】ジュンネン うるふどし。平年の對。蘇軾詩「園中草木春無數、只有二黄楊厄二一一一」

【閏餘】ジュンヨ うるふづき。楊翔鴻「虫鏡」二閏雪、今年有二一一一」

【閔】㊀ビン・ミン ㊁ビン・ミン 眞

㊀あはれむ。＝憫・憐。〇いたむ（傷念）〇やむ（病）うれふ（憂）うれひ。疾病死喪などの憂。詩、衛風「靚」ー既多」傳「ー、病也」〇つとむ（勉）〇姓。ー損は孔子の弟子。㊁うれふ（病）〇秋のそら。＝旻天。

【閔憫】ビンビン あはれみなぐさむ。蘇軾、飲文「語言煦煦、ー一金陵」

【閔凶】ビンキョウ 父母の喪。左、宣十二「寂君少遭ー一、不ー能ー文」

【閔子騫】ビンシケン 孔子の弟子、名は損、子騫は其の字。早く母を喪ふ、父後妻を娶り、二子を生む、衣するに綿絮を以てし、損を藉みて衣するに蘆花を以てす、父損をして車を御せしむ、體寒えて轡を失ふ、父其の故を察知し、後母を出さんと欲す、損曰く、母在れば一子寒え、母去らば三子單ならんと、母聞きて悔い改む。論、先進「德行顏淵・ーー・冉伯牛・仲弓」

【閔惻】ビンソク あはれみいたむ。詩經、疏「作ニ是蟋蟀之詩ヲ以ー一之ー」

【閔情】ビンジョウ あはれみをしむ。宋玉、九辯、章句「ー一其師忠而放逐ー

【閔閔】ビンビン うれふる貌。左、昭三「ー一焉、如ニ農夫之望ヲ歲、懼以待ヲ時」

五畫

【問】カ 禹

〇ひらく（開）大いに開く。〇大いにさける（大裂）〇うつろ（空虚）史、司馬相如傳「當時盜ー」〇ー口は大いなる杯。〇ー硎は相扶持アクスケルする。

【閘】カフ コフ 合

〇とづ（閉）〇時時開閉して用水又は舟などを通ぜしめる水門。＝牐。

【閘牐】カフ うつろに開く貌。劉峻、金華山棲志「路側有ニ絕澗ー一、ー一序貌、俯窺ニ木杪ー」

【閘頭】カフ 時時開閉する水門。楊萬里詩「清遠溪中小ー一、遮ニ斷溪水ー不ヲ教ヲ流」

【閙】閙（三二七〇頁一段）に同じ。

【閱】ヒ 霽

〇とづ。とざす（閉）詩、衛風「我思不ー一」〇かくる、隱れて發せず「隱ー」〇をはる、をふ（終）左、閔二「ー一其事也」〇つつしむ（愼）〇かみ（神）〇ふかし（深）〇かすか（幽）〇くらし。

【閱閱】ヒツヒツ 小閉・閉・鎖・杜の如きは閉（二〇七四三頁）の條を見よ。

【閱宮】ヒツキュウ おたまや（靈廟）閟は深くとざす意。詩、魯頌「ー一有ヲ侐、實枚枚」

【閱覽】ヒツラン 前條に同じ。閱書、音樂志「純樂閱聞、ー一繁聲」

六畫

【閣】㊀ガイ 㐱 ㊁ガイ 㐱 陌

㊀とどむ（止）〇さまたぐ（礙）〇とづ、とざす（閉）外より閉ざす「關ー」〇塞・隊に同じ「九ー」㊁ふさぐ（藏塞）

【閣】カク 藥

〇たかどの（樓）二階つくりの家「樓ー」「層ー」「綺ー」「金ー」「珠ー」ものみ（觀）〇かけはし（棧道）〇やくしょ（禁省）「內ー」「臺ー」〇內ーの略語「ー議」「ー臣」「ー僚」〇ごてん（宮殿）「殿ー」〇くりや（庖廚）〇ぜんだな「庋ー」「ー板」〇書物。又、其の他の物をのせ置く櫓。〇やめる、とどむ、さしおく「ー筆」「停ー」＝擱。〇ー一は端直なる貌。又、襄言の道を實するにいふ。又、蛙の鳴くこゑ。〇邸ーは商店（唐書、裴休傳）〇姓。

【閣員】カクイン 內閣に列する國務大臣。

【閣ノ閣只應朝暮數】カクノカクタダマサニチョウボヲカゾウベシ 白樂天、春江詩「ーー、上ノ樓空望往來艘、鴛鴦誘引來ニ花下ー、草色如圍繞ニ水邊ー云云」

【閣下】カッカ 〇たかどのの下。漢書、敞延年傳「免ノ冠頓ニ首ーー良久」〇貴人に對する敬稱。もと閣下（次頁一段）に作る。

【閣閣】カクカク 〇端直なる貌。詩、小雅、斯干之ーー」〇蛙の鳴く聲。韓愈詩「蛙黽噪無ー一、ー一祇亂ー人」＝閣閣。

【閣老】カクロウ 內閣即ち國務大臣の尊稱。

【閣道】カクドウ 〇二階作りの廊下。史、始皇紀「周馳爲ニ一ー一自ニ殿下ー直抵ニ南山ー」＝複道。〇山谷などに作れるかけはし。岑參詩「劍門乘ノ險過、ー一踏ノ空行」＝棧道。

【閣帖】カクチョウ 淳化法帖の簡稱。

【閣筆】カクヒツ ふでをさしおく。ものかくことを止める。魏志、王粲傳「皆ー一不ノ能ノ措ノ手」＝擱筆。

【閣免】カクメン そのままにさしおきてゆるす。宋史、黃霦傳「ー一逋負、經額均等」

【閣老】カクロウ 〇唐代 中書舍人、又給事

中をいふ。唐書、楊綰傳「故事舍人年久者爲ニ一一ニ」○明代、宰相をいふ。國史補「宰相相呼爲ニ堂老ニ、兩者相呼爲ニ一一ニ」○國學川時代の老中職の稱。

【閣令】カクレイ　内閣より發する命令。

【閣僚】カクリョウ　内閣員のなかま。

【閣】カク　㊇

○くぐりど、大門の旁の小門。○へや、ねま、房室「閨ー」○ごてん、やくしょ（禁省）○國太ーカクは閤白の職を子に讓りし者の稱。其の剃髮すれば禪ーといふ。

【閣下】カッカ　貴人に對する敬稱。漢の公孫弘が東閣（東方の小門）を開きて賢士を延見せし如く、古、三公大臣にはみな閤の設あるが故。因話錄「古者三公開ー閤、郡守比ニ古諸侯ニ、亦有ー閤、故世俗書翰有ー一之稱ニ」韓愈與ニ于襄陽ニ書「謹率ニ書僧齊ー一ニ」（後世は通じて閣下に作る）

【閣閣】カクカク　柱のなき屋。陸游詩「遊愼溪青青、厭ー纍結ー一」＝閣閣。

【閔】

閩（門部十一畫）の俗字。

【閨】ケイ　圏

○こもん（小門）○宮中の小門（古、金馬門を金ー門といふの類）○ねや、へや（婦人の房室）「閫ー」「深ー」「春ー」「空ー」轉じて男女の情事。又、婦人のことにいふ「ー怨」「ー秀」○圭に通ず。

【閨禮】小戸、上は圜く下は方にして圭の形に似たり故に門圭に从ふ。

【閨女】むすめの子。輟耕錄「宇文公諒、少時嘗館ニ巨室ニ、其ー一中夜來奔、堅拒不ー納」

【閨閫】ねやのまど。後漢書、宦者傳序「ー一房閫之任」

【閨怨】妻が其の夫と別れ居るうらみ。又、其の怨を詠ぜし詩。黃庭堅詩「善吟ニ一ー一斷ニ人腸ニ」

【閨門内】ケイケツ　ねどこのうち。史、汲黯傳「汲黯多病、臥ニ一ー一ニ」

【閨閤之臣】ケイカフノシン　おそば近く仕ふる臣、近侍の臣。漢書、司馬遷傳「身直爲ニ一ー一ニ、鄉得ニ自引深藏ニ巖穴ニ耶」

【閨戸】ケイ　ねやのと。孟浩然詩「ー一綺窗閉、佳人掃ー綠衣」

【閨閫】ケイコン　女子のねま。白虎通「婦事ー夫有ニ四禮ニ焉、雞初鳴、咸盥櫛縫笄總而朝、君臣之道也、恩隆之恩、父子之道也、會ニ計有無ニ兄弟之道也、ー一之內、雜席之上、朋友之道也」

【閨秀】ケイシュウ　賢婦人、才學のすぐれたる婦人。世說、賢媛「顧家婦清心玉映、自是閨房之秀」

【閨心】ケイシン　春情をいふ、男女が戀ひ慕ふ心。王琪、美女篇「二八三五ー一切、盈ー隨捲帷迎春節」

【閨圖】ケイト　○宮女のへや。何晏、景福殿賦「青琐銀鋪、是爲ニ一ー一」○婦人のねや。徐幹詩「徽風起ニ一ー一、落月照ニ閨庭ー」＝閨幃・閨闥。

【閨中力】ケイチュウリョク　婦人のはたらき。杜甫詩「用ニ盡ー一君聽ニ空外音ニ」

【閨庭】ケイテイ　いへのうち。北史、郎道邕傳「撫ニ訓諸弟ー一之中、恰恰如也」＝家庭。

【閨竇】ケイトウ　くぐり、くぐりど、壁を穿ちたる小戸。轉じて貧しき人の居宅をいふ。左、襄十「蓽門ー一之人」＝圭竇・圭窬。

【閨内】ケイダイ　おくむき、後宮。左傳、疏「婦人主ニ一ー之事ニ」

【閨房】ケイバウ　ねや（内室）漢書、張敞傳「爲ー婦道ー眉、有司以奏、上問ー之、對曰、臣聞ー一之內、夫婦之私、有過ニ于畫眉ー者ー」

【閨範】ケイハン　女のをしへ、女の守るべきてほん、婦鑑。晉書、列女傳「其宜ニ一ー一、有ー稽ニ陰訓ニ」

【閨門】ケイモン　○へやの入口の戸。又へやのうち、家庭。禮、樂記「樂在ニ一ー之內、父子兄弟同聽ー之、則莫ー不ニ和親ニ」○家庭の風儀。唐書、李景讓傳「家行修治、ー一惟謹」

【閨裏】ケイリ　ねやのうち。鮑照詩「出入將ー一經過北堂陰」李白、擣衣篇「ー一佳人年十餘、眼蛾對ー影愁ニ能ー居ニ」＝閨中・閨内。

【閏】カ。　㊇　俗字

一說に閨の俗字

【閃】シュク　㊇

○おほし、もろもろ（衆）衆人が門中に在り。○阿ー鞞佛は佛の名。

【閒】バツ　㊇

○いへがら、門地「門ー」「名ー」○くらる。○いさを（功績）「動ー」「功ー」通じて伐に作る。○國出身を共にせし者の與黨「藩ー」「舉ー」

【閥閱】バツエツ　功狀を書して門に掲ぐる板の門の左に在るを閥、右に在るを閱といふ。閥は功を發し、閱は經歷。轉じて功績の義。史、功臣年表「太史公曰、古者人臣功有ニ五品ー一、以ー建立ニ宗廟ー定ニ社稷ー一日ー動、以ー言日ー勞、用ー力日ー功、明ニ其等ー一日ー伐、積ー日日ー閱」＝伐閱。

【閥族】バツゾク　○實まいへがら。○國藩閥

のやから。

【閩】 ビン　圓

○支那の東南地方の種族の名、東越の別名。今の福建省地方。周禮、夏官「四夷・八蠻・七閩・九貉・五戎・六狄」○轉じて福建省の異稱。○國名、五代の十國の一、南唐の爲めに滅ぼさる。

【閩越】ビンエツ　地名、今の福建省は周代の七閩の地、後、越人之に居る、故にいふ、閩は越。‖閩越。

【閩中】ビンチュウ　郡名、秦代に置く、今の福建省。

閱　エツ　屑

○けみす（檢）「校ー」○しらべる、あらためる「檢ー」「ー兵」○よむ「ー讀」○みる（觀・察）左、襄九「尚人ー其禍敗之衆」○かぞへる（數）○ふ（經歷）「ー歷」「ー月」漢書、文帝紀「ー天下之義理多矣」○えらぶ（簡）「簡ー」○いる（容）いれられる。詩、衛風「我躬不ー」○うく（蒙）老子「以ー衆甫」○てがら。○いへがら（門地）「閱ー」閥（前頁）の字解參看。○兵士の訓練を行ふ「ー兵」○車馬軍實をあらためる。○すべる（總）陸機賦「世ー人以成世、人冉冉而行暮」（衆人を總べて世を成す）○あたひ（價）折ー。○品物の價を損して賣る。荀、修身「良賈不ー折ー不ノ市」

【閱月】エツゲツ　つきをすごす。唐書、三宗諸子傳「ー數ー拜二諫議大夫一」

【閱歲】エツサイ　一年を經る。唐書、陸元貨傳「ー數ー遷二工部侍郎一」

【閱視】エツシ　しらべる。舊唐書、王起傳「令三宰臣一ー可否、然後下二詔旨一施行」

【閱試】エツシ　しらべたゞす。後漢書、蘇竟傳「曹操問二術數一於竟、乃言爲二數更一、因大會賓客ー二百餘一」

【閱實】エツジツ　犯罪を檢閱して實情を明かにする。晉、食貨志「ー二其虛一」

【閱書記】エツショキ　書を讀むもの。三國志、魏、親文帝紀「ー二讀書手卷一者、許ー登ー此、凡六人而已」

【閱世】エツセイ　時世を經歷する。蘇軾詩「ー閱ー如二郵傳一」

【閱武】エツブ　武事をしらべる。晉書、祖逖傳「募二心膽俱壯一者數百人、將ー以ー赴ー機ー、人爭觀ー之、渡未二半而覆一」‖閱武。

【閱兵】エツヘイ　兵を檢閱する。王惲詩「白羽清笳ー閱ー」‖閱武。

【閱覽】エツラン　しらべみる。宋史、藏多經傳「必遍ー閱ー、是以答申皆中」

【閱歷】エツレキ　すぎ去りし事蹟、又經過する。又、履歷。舊唐書、吐蕃傳「赤嶺ー兵以勒、ー閱三旬」‖經歷・更歷。

閭　ロ　魚

【閭閻】ロエン　仙人の居る處。書言故事「見樹圃、閭風苑、有二玉樓十二、玄室九扉一、左瑤池、右翠水、環以二湖水九重一、非二飛車羽輪一、蓋不ノ可ノ到」

【閭風瑤池】ロフウヨウチ　仙人の居る處。書言故事「見樹圃、閭風苑、有二玉樓十二、玄室九扉一、左瑤池、右翠水、環以二湖水九重一、非二飛車羽輪一、蓋不ノ可ノ到」

【閭苑】ロエン　仙人の居所（續仙傳）宣和遺事、院部作二仙女圖一、有二瑤池ー一風景」

【閭閻】ロエン　㊀むなし（空）うつろ（虛）○ひろし（闊）○ー風は山名、崑崙山の上に在り。㊁高し、門高し。又、高き門。○大いなり。○あきらか、ほがらか。‖朗。

【閭巷】ロコウ　㊀ろ　㊁ろ　㊂ろ　㊃ろ　㊄ろ　㊅ろ　㊆ろ　㊇ろ　㊈ろ　㊉ろ　㊊ろ　㊋ろ　㊌ろ　㊍ろ　㊎ろ　㊏ろ　㊐ろ　㊑ろ　㊒ろ　㊓ろ　㊔ろ　㊕ろ　㊖ろ　㊗ろ　㊘ろ　㊙ろ　㊚ろ　㊛ろ　㊜ろ　㊝ろ　㊞ろ　㊟ろ　㊠ろ　㊡ろ　㊢ろ　㊣ろ　㊤ろ　㊥ろ　㊦ろ　㊧ろ　㊨ろ　㊩ろ　㊪ろ　㊫ろ　㊬ろ　㊭ろ　㊮ろ　㊯ろ　㊰ろ　㊱ろ　㊲ろ　㊳ろ　㊴ろ　㊵ろ　㊶ろ　㊷ろ　㊸ろ　㊹ろ　㊺ろ　㊻ろ　㊼ろ　㊽ろ　㊾ろ　㊿ろ

【閭】 リョ　魚

○周の制、二十五家を里となし、其の門を一といふ「門ー」「里ー」○轉じて二十五家（里）の稱、むらざと（邑里）「鄉ー」「邑ー」「田ー」

【閭門】リョモン　里中の門。轉じて、むらざとの殿人。史、李斯傳「斯以ニ一ー一、隔二諸侯一、入事ノ秦」

【閭巷】リョコウ　むらざと。史、伯夷傳「一ー之士、欲ニ砥ノ行立ノ名者一、非ノ附ニ青雲之士一、安能施ニ于後世一哉」

【閭巷人】リョコウジン　官に仕へずして野に在る人。史、游俠傳序「及ノ若ニ季次原

憲二——也」

【閭閈】リョカン　○さとのもん。‖里門・閭門。○むらざと。王維建詩「能事二衆班輸一、何殺嚇二——一」

【閭伍】リョゴ　むらざとの賤民のなかま。史、司馬相如傳「臣素卑賤、曾無二汗馬之一一之中一」

【閭左】リョサ　秦代、賦役等を免じて里門の左側に置きし貧民の稱（富者を右に居く）漢書、食貨志「取二秦半之賦一、發二一一之戍一」

【閭市】リョシ　むらざとのまち。歐陽修詩「日落原野暗、天寒一一閉」

【閭娵】リョシュ　古代の美女の名（嬙、毛嬙）東方朔、七諫「閭二一一爲二醜惡一」‖閭娵。

【閭宦】リョカン　周代の官名、村里の小役人。周禮「一一各掌二其閭之徵令一」

【閭井】リョセイ　まち、むらざと。元稹文「因二其阡陌、制二之一一一」

【倚閭】イリョ　倚門之望（一四四頁二段）を見よ。

【閭門】リョモン　むらざとの入口のもん。漢書、于定國傳「于公謂曰、少高二大門閭一令レ容二駟馬高蓋車一」‖里門。

【閭里】リョリ　むらざと。又、其の民。史、盧綰傳「盧病免居レ家、與二一一一浮沈」‖閭巷・閭伍。

八　畫

【閑】（一）アツ　易　（二）ヨク　職　（三）エン　先

㊀ふさぐ。ふさがる（壅塞）「塞一」「滯一」「天一」「抑一」○とどむ。とどまる（止）○一逸　ホツ　は十干の甲の異名。單一　タン　は十二支の卯の異名。爾雅「太歲在甲、曰二一逢、太歲在卯、曰單一」㊁一與　ヨ　はゆるやか（容暇）なる貌（漢書、揚雄傳）㊂一氏　エン　は、匈奴單于の姻族　インゾク　の稱（史、匈奴傳）

【閼氏】エンシ　ふさがる　の異越春秋「帝堯之時、九州一一、四瀆壅閉」‖壅塞。

【閼伽】アカ　○佛　梵語の佛に奉る水。翻譯名義集「阿伽此云レ水」又、其の水を盛る器。雞林雜事「一一盛レ水器也、同盛二香水一器也」一一濕頗　タツカラン　は香水を佛道修行者の頂に灌ぎて其の修功を證明する作法。○給孤にたまる水。‖淦。

【閹】エン　豔　もと奄に作る

○こもの（豎）宦官、男子の去勢せられて後宮に仕ふる者、君主に近侍し、宮門の開閉其の他の雜役に從ふ。○もんばん。○一然はおほひかくす、己の意志を掩ひかくして世にへつらふ。○去勢せし家畜（豎豬語）○一茂は十二支の戌の異名。爾雅「太歲在戌、曰一一茂」‖淹茂・掩茂。

【閹尹】エンイン　尹は正、宮官のかしら。漢書、敍傳「一一之官」

【閹宦】エンカン　次條に同じ。後漢書、宦者傳「所二與居一者、惟一一而已」

【閹人】エンジン　宮刑にかかりて精氣の閉藏する者。轉じて宮官をいふ。後漢書、宦者傳「中興之初、宦官悉用二一一」‖奄人・宦官・閹奴・寺人。

【閹然】エンゼン　己の意志をかくして世に媚びる、深く自ら閉藏する貌。孟、盡心「一一媚二於世一也者、是鄕愿也」

【閹奴】エンド　閹人に同じ。居曾、顏眞卿傳「李希烈使二一一爭レ害二眞卿一」

閻　豔

○ちまた（巷）の門、里中の門、小路　コウヂ　の門。○ちまた（巷）里中。史、越世家「莊生雖レ居二窮一」然以應レ聞二於國一」○佛　梵語　マン　は地獄の大王の名、梵語の一‖閻羅・閻摩羅。‖閻羅・閻摩羅。

【閻浮提】エンブダイ　清の山四の太原の人、字は百詩、博學洽聞一世に比なく、考證に長ず、世宗手書して之を招き、常に先生といひて名いはず。著はす所、古文尚書疏證・四書釋地・日知錄補正等あり。康熙四十三年卒す、年六十九。

【閻扶】エンフ　‖印度にある木の名。西陽雜俎「釋氏書贍二部洲一、贍部洲南面有二一樹一」

【閻浮】エンブ　‖○閻に同じ。阿含經「須彌山外、所レ遶羅山北、有二大樹一、曰二一一一」○閻浮檀金の略。

【閻浮檀】エンブダン　須彌山の南海中にある三角形の島洲の名、一に、南贍部洲ともいふ。‖南閻浮提。

【閻浮檀金】エンブダンゴン　閻浮樹の下を流る河中に生ずるすぐれて善き沙金。法華經「一一爲レ莖、白銀爲レ葉」

【閻魔】エンマ　地獄の王。冥報拾遺「釋氏所レ謂十王者、一曰秦廣、二曰初江、三曰宋帝、四曰五官、五曰閻羅、六曰變成、七曰泰山、八曰平等、九曰都市、十曰轉輪、是也」

【閻羅】エンラ　‖閻魔に同じ。隋書、韓擒虎傳「生爲二上國柱一、死作二一一王一」‖閻摩羅・琰魔。

【閻羅王】エンラオウ　閻魔大王の役所。七寶を以て莊嚴するといふ、えんまが惡人の訴訟を審判する所、故に獄といふ。‖閻魔羅。

【閻羅人】エンラニン　地獄の卒。正法念經「一一答言、人云、汝等作二惡業一、爲二我等一所レ驅、彼時何不レ悔、今悔何所レ求」

閏　元

○もんばん、特に、宮中の門を

守る賤者「一人」○門。又、天の門。楚辭「吾令帝一開關兮」（帝一は天門）○轉じて御所のもん（宮門）＝禁門・宮闕。

【閽寺】昏時を以て門を閉づるの謂なり、故に門官に從ふ。

【叩ノ閽】宮闕に詣りて寃を訴へる義（正字通）

【閽寺】内廷に奉仕する宦官、もと宮刑に處せられし者を用ひて門番とせし故。寺は侍。禮、内則「深ク宮閨ノ門、一一守之」＝閽侍・寺人・宦寺・閹寺。

【閽侍】前條に同じ。李商隱文「會于二一一獲ノ拜二堂皇一」

【閽人】もんばん。周禮、天官「一一掌二守王宮中門之禁一」

【閽者】もんばん。禮、祭義「一一、守ノ門之賤者也」＝閽人。

【閽吏】もんばん。羅隱文「中朗諷以三所ノ著議一、上二于一一」

【閶】シャウ　陽

○天上世界の門。

【閶闔】○天上界の最初の門。淮南、原道「排二一一一、而出二天門一」○轉じて宮門の稱。○西の風。又、秋風。史、律書「一一風居二西方一」

【閾】コク・キキ　職

○しきみ、門の界の横木（門限）「戸ノ一」「門ノ一」「城ノ一」論、鄉黨「行不レ履ノ一」○轉じて、内外の區限。又くぎりをつける。賈至文「喉咽九州、關ニ中夏一」

九畫

【闇】㊀アン　㊁アン　勘　豏

㊀くらし（冥）光うすし「幽ノ一」「昏ノ一」暗と通ず。○とづ（閉門）○くらます、おほふ、くらくす。○くもる。くらむ。○おろか（蒙昧）「一昧」○くらがり。○ゆふぐれ（昏時）よる（夜）○日月の蝕。○隱晦シテの貌「一然」㊁衆に居るいほり「諒ノ一」○闇やみ、暗き夜。又、心がくらむ。

【闇虧】月蝕の時、地の影が蔽ふ所の暗き處（後漢書、天文志、注）

【不欺二闇室一】人の見ざる暗き室にても惡を爲さざるは愼みの至りなり。正字通「程子曰、學始二于不レ欺二闇室一」＝不レ愧二屋漏一。

【不レ侮二閉室一】前條に同じ。世說、德行「長之一生、——」長之は院長之。

【闇合】期せずして符合する。陸機、文賦「必所ノ擬之不レ殊、乃一一乎盡意一」＝暗合。

【闇然】自ら隱晦シテあらはさざる貌。中庸「君子之道、一一而日章」

【闇情】心くらくしておこたる。陶淵明文「伏願君以ニ一一一」

【闇同】期せずして自ら一致する。世說「老莊正與二人意一一一」＝闇合。

【闇莫】くらき貌。枚乘、七發「樾林深澤、煙雲一一」

【闇蔽】おろか。吳志、步騭傳「受性一一、不レ進二道數一」

【闇昧】○事理にくらくおろかの意。林「一一不明、耳聾不聽」＝暗昧・闇愚・蒙昧。○くらくして明かならず。論衡「上古久遠、其事一一、紀經不レ載」

【闈】ヰ　微

○宮中の大門の傍の小門「禁闈・皇一」○轉じて宮中のおくむき、后妃の居所（後宮）「宮一」禮、雜記「夫人至、入自一一門」○與座敷、内室。東晳詩「眷戀庭一、心不二遑安一」○試院、即ち官吏の登用試驗をする所の稱。會試を春一、鄉試を秋一といふ（唐國史補）

【闉】イン　眞

○ふさぐ（塞）○まがる（屈曲）○ついぢ（城門外の副城）○城内の二重門「城一」

【闊】クヮツ　黠　濶は俗字

○とほし（遠）○とほざかる（隔）○ひろし（廣）狹の對。○心が大きく細事にかかはらず。○まばら（疏）あらし「疏一」○てがるし（簡）「簡一」○ゆるやか（寬）ゆるくする、輕くする。漢書、王莽傳「一共租賦」○そむく（乖）○つとめくるしむ（勤苦）詩、衞風「死生契一」○うとし（疏遠）○久しく相見ず「久一」詩、邶風「吁嗟一兮」○まはりどほし、世事に通ぜず「迂一」

【闊狹】ひろ・廣・博・弘・汎・寬の對

杜甫（五九三頁三段）の條を見よ。

【闊葉樹】クワツエフ　葉のひろき樹木。ならくぬぎ・かしの類。

【闊屋】クワツ　ひろきいへ。淮南子「廣廈ー一、連閣通房、人之所ン安也」

【闊達】クワツ　ひろくむね。孫盛文「其爲ン相也、疏尾ー一」

【闊狹】クワツ　ひろきと、せまきと。史、天官書「大小有ン差、ー一有ン常、水火金木填星、此五星者天之五佐、爲二經緯一見伏有ン時」‖廣狹・寬狹。

【闊袖】クワツ　ひろきそで。唐袖の對。宋史、嘉祐胄傳「朱寨奏其衣服胄熱、使ー一優人裁冠ー一衆二大笑一、於ン前去ン冕遂去」‖寬袖。

【闊然】クワツ　廣き形容。除饑、與二宗室一書「三條不ン遵、五經非ン難、信乃ー一、遂不ン蒙ン問」‖豁然。

【闊疏】クワツ　事情にうとくぬけめあり。論衡、周法ー一、不ン可ン因也」

【闊大】クワイ　ひろく大いなり。

【闊遠】クワツ　心ひろくして小事にかかはらず。後漢書、馬武傳「爲ン人曙ン酒、ー一敢言」‖豁達。

【闊別】クワツ　久しく別れて面會せず。王毅之文「ー一稍久、眷戀ン時長」

【闊歩】クワツ　おほまたにあるく。安心して自由に動作する。魏文帝、漢文論「得ヨー一高談闊二危懼之心一」

【闊濶】クワツ　ひろくしてもなく廣き貌。南徐州記「京江萬頃北江也、ー一三十里」

【闊落】クワツ　細密にならず。蘇軾詩「設勢本ー一、結束入二細歷一」

【闊略】クワツ　〇おほまかにしてゆきとどかず。‖疎略。〇罪をゆるして見のがす。後漢書、鍾離意傳「改化之本、由ン近及ン遠、今宜ン先清二府內一、且ー一寬縣細微之愆上」

【閧】　ケキ　㊥　通音　ゲキ

ひっそりとしづか。靜かにして人なし「空ー」「閑ー」「寂ー」說文、豎卦「ー其无ン人也」疏「關ン視其室、ー寂无ン人也」

【閧寂】　しんとして物さびしく靜か。韓愈詩「林塘ー一偏宜ン夜」字解參看。

【閧然】　しづかなる貌。范成大詩「窮巷閉門本ー一」

【閔】　㊀ケツ　㊁ケイ　㊥屑

㊀をはる（訖）音樂の一曲が終る「樂ー」歌曲一首を一一といふ。漢書、張良傳「歌數ー」〇やむ（止）〇やすむ、いこふ（息）休息する。詩、小雅「俾ン民心ー一」〇つく（盡）漢書、王莽傳「日ー亡燭」〇むなし（空）莊、人間生「瞻彼ー者虛室生白」室は心に喩ふ、心空虛なれば則ち純白なる義。㊁やむ（止）

【闇】　㊀ト　㊁ジャ　㊥虞　㊥麻

㊀うてな、城門の臺。詩、鄭風「出ン其闉ー」有ン女如ン荼」〇ものみ（城上の重門）〇外城の市里。㊁梵語ジャ音の音譯に用ふ。闍ー維ジャは死せし僧侶を火葬する義。‖荼毘ビ〇闍阿ー梨アジャリは僧の師たるべき者。又、僧の稱號。

【闍梨】　僧の稱號。翻譯名義集「梵語阿遮梨耶、唐言二軌範一、今稱ニー一、隋言二正行一、能料二正弟子行一故、亦作ン黎」‖阿闍梨。

【闚】　ユ　㊥虞

窺ひ望む。私に視る。左思、魏都賦「距ン遠關一以闚ー」

【閑】　ラン　㊥寒

〇しきり、ませ、やらい、おばしま、てすり（欄）「ー干」〇さへぎる（遮）ふせぐ（閑）阻隔する。戰國策「晉國之去ン梁也、千里有餘、有ン河山一以ー之」〇たけなは（酣）まっさかりの時「酒ー」「宴ー」〇おそし（晚）時のおくれたる時、なかばすぎ、をはり（終）つく（盡）「夜ー」「歲ー」〇まばら（稀）〇みだりに（妄）〇わりふなくして門などを出入する、無斷ダンにてする「ー出」「ー入」〇かたなかけ。やりかけ、車上の兵架。‖關。

【闚闚】　開・瘤〇關は裸の半を過ぎたる貌、酒宴などに、人の半は去り、半は醒る頃をいふ、興闌はおもしろき興味の最中を過ぎたるをいふ。〇闚は醉の十分なるさま、ひろく事の最中をいふ、興闌・戰酣と用ふ。

【闌干】　〇てすり。李白詩「洗香亭北倚ー一」‖欄干・欄杆。〇淚の多く出づる貌。白居易、長恨歌「玉容寂寞淚ー一」〇まぶた（眼瞼）〔類合〕〇縱橫に散りみだれる貌。左思、吳都賦「金鑪晶爛、琼琲ー一」〇晶の光のあざやかにきらめく貌。

【闌珊】　衰へる貌。又、散り亂れる貌。李商隱詩「蘇帶ー一酒客壺」‖衰落。

【闌出】　制限以外にみだりに出す。史、汲黯傳「ー一財物予遠關」

【闌檻】　てすり。晉史、樂廣正論傳

「處二其路一、旁施二一一一

一ニー我宮室ニ侵中略我社稷上」＝擾攘。

【閙ノ外】ケウタウノ心に安からず思ふものは、そのままにしてさしおく。政、寛政「多見ノ一ノ、慎行ニ其餘ニ則寡ノ悔」

【閙腋】ケウエキ 國古、武官が行幸・節會などの時に著たる儀服。兩腋をぬひ合さず。

【閙ノ閙】ケウニケウ 朝廷にいたる。漢書、朱買臣傳「重車至ニ長安ニ一ノ上ノ書、書久不ノ報」

【閙已】バウイ わすれる。宋史、宋太初傳「因筆而閙ノ之、以備ニ一ニ耳」

【閙文】バウブン 字句の脱落したる文章。晩機、文賦「收ニ百世之ニ一、採ニ千載之遺韻ニ」

【閙水】バウスヰ はばん、急數の不足せる音物。＝缺水。

【閙里】ケウリ 今の山東省曲阜縣内の地。孔子の生地【曲阜志】

【閙略】ケウリャク かきてはぶく。唐書、太宗紀贊「詩書所ノ載、時有ニ一、然三代千有七百餘年、得ニ七十餘君ニ、其卓然著ニ見於後世ニ者、六七君而已」

【閙漏】ケウロウ ○おちもれる。てぬき。脱落。出師表「裨ニ補ニ一ニ」○あき、缺隙。

【闡】 ゲツ 屑

○門のしきみ（門樞門限）門中に豎てて内外を遮ぎる木「門ニ一」＝橛。○轉じて内外のしきり。漢書、馮唐傳「一以内寄人制之」

【闢】 タツ 合

○さと、むら（里）○ものみやぐら（門樓）のやね。○一茸ジョウ はいやし（下賤）又にぶし（鈍頓）

【闢茸】タフジョウ ○みだらにしていやしい（恣態）閹は下、茸は細かなる毛にて奢侈の反對。漢書、司馬遷傳「主ニ一之中ニ」○にぶし（鈍頓）不肖なの人。漢書、賈誼傳「一ニ貪夫」

【闖】 チン 寒 襲

○うかがふ（覘）○頭を出す貌。○偶不意に人の席に突入するを一席といふ「一門」○一王は明末の流賊、李自成の稱號。

【闖客】チンカク 無類の客。白頭吟話「都人或十五結ノ羣、横ニ行街市間ニ謂ノ爲ニ一ニ」

【闖然】チンゼン 頭を出す貌。公羊、哀六「開ノ之則ニ一公子陽生也」

【闖入】チンニフ ○うかがひ入る。○偶不意にあばれこむ、突き入る。

【闐】 テン 先

○みつ（滿）「一門」○一一は鼓の聲。又、乘り行く聲。又、車馬の聲。又、さかんなり（盛）○于一タンは西域の國名。＝于寘。

【闐溢】テンイツ 滿ちあふれる。韓詩外傳「精氣ニ一ニ」＝充滿。

【闐咽】テンエン みつ。左思、吳都賦「冠蓋闐ニ一ニ」＝闐溢。

【闐闐】テンテン ○鼓の聲。詩、小雅「振旅ニ一」○乘り行く聲「駟騵、轉天、注」○盛んなる貌。博雅「一ニ、盛也」○車馬の聲。揚都賦「車馬雷駭、轟轟ニ一」○雷の聲。宋玉、九辨「風ニ雷師之ニ一ニ兮」

【闐門】テンモン もんに滿つる。史、汲鄭傳「始翟公爲ニ廷尉ニ賓客ニ一ニ」

【闔】 カツ 合 支 寢に同じ

○うかがふ、ちらとのぞく、ひそかにさぐり見る。○いざなふ（誘）

【闚伺】キシ ひそかにすきをうかがふ。劉琨、請ニ北伐ニ表「一ニ閙隙ニ寇抄相尋」

【闚以ニ重利ニ】キイジュウリ 多くの利益を以て誘ひみちびく。史、刺客傳「愚以爲、誠得ニ天下之勇士ニ使ニ於秦ニ、以ニ重利ニ一ニ」

【闚望】キバウ うかがひのぞむ。晉語、傳「兵法攻ニ城築ニ土山ニ、以ニ一ニ城内ニ、謂ニ重壇ニ」

【闚視】キシ 望むまにきものをこひねがひもとめる。後漢書、河間孝王開傳「謀ニ叛不軌ニ一ニ神器ニ」＝覬覦。

【開】 ㊀ クヮン・ケン 刪・删 ㊁ カン 刪・删

俗に閒・閑に作るは非

○くゎんのき、門をとづる横木（門）○せきしょ、せき。國境又は要害の地に設けて通行者の出入を警める所「玉門ニ一」「居庸ニ一」孟、公孫丑「一市譏而不ニ征ニ」○港の入口「海ニ一」「江ニ一」○はかのもん（墓門）○しめくくり、物事のとりしまり（要旨）○しきり（界限）○とほる（通）つらぬく（貫）つらなる（聯）「一聯」うがつ（穿）いる（入）○とづ、とざす（閉）門をしめる。陶潛、歸去來辭「門雖ニ設而常ニ一」ふさぐ（塞）ふせぐ「一防」○からくり（機械）「機ニ一」○あづかる（與）かかはる「一與」「僕不ニ一焉」○わたる（渉）かかる（係）○よる（由）漢書、董仲舒傳「太學者賢士之所ニ一也」○もとむ（索）○まうす（白）○官文書。主として照會

文。○寸口と尺澤との間。○腹中に呼吸する氣のをさまるところ。○一は鳥のやはらぎ鳴く聲。○閒一はくるしむ貌。綺嶠展轉の貌。㊀弓をひく、ひきしぼる（轡）孟、告子「越人一ー而射之」國○せき、力士の首席。又強き力士の敬稱「大一ー」「一取」○へだて「人目の一」

【關知】クワンチ　關預與に同じ。論語「吾不一與祭、如不祭也」○干はをかすと訓む字なれば、我よりさし出て、事にかかり合ふ意。干渉と用ふ。

【關東】クワンとうせきしょとおくと。主要なる場所の義。南史、劉俊詩「三吳國之一ー」

【關宦】クワンくわんにかかる。梁昭明太子文「鴛鴦龍旗、初不一ー」‖關心。

【關右】クワンイウ　關西。關東を關左といふの對。王粲、從軍詩「相公征二一ー一、赫怒震二天威一」

【關尹】クワンインせきもり、關門を守る役人のかしら。列子「戰國賓至、一ー以告」‖關令・關令尹。

【關羽】クワンウ　三國時代の蜀の猛將、字は雲長、張飛と共に劉備に事へ、前將軍に拜し、威雄支に振ふ、死して神と爲る、即ち關帝廟。

【閉ー關卻掃】ヘイクワンキヤクサウ門を閉ぢて人と交際せず。江淹、恨賦「敬通見ー而屢歎二田里一、——、蓬ー門不ー仕」

【關說】クワンセツさきへとどめる。遮庇する、顏眞卿傳「不許二一ー一、所當以防二壅蔽一也」‖關礙。

【關門】クワンモンせきしょのもん。管子「一ー不ー開、善者無ー隙」

【關說】クワンセツせきしょにてしらべあらためる。孟、梁惠王「關市譏而不ー征」

【關懷】クワンクワイこころにかける。南史、蕭憺傳「出爲二永嘉太守一、郡有二名山水一、戴逵築所二愛好一、肆ー志遨遊、動經二旬日一、理ー人聽ー訟、不二復ー關ー懷」‖關繫。

【關關】クワンクワン鳥の和ぎて鳴く聲。詩、周南「一ー雎鳩、在二河之洲一」

【關荊】クワンケイ　關全と荊浩と、皆宋の名畫工。張羽、永南宮、張山水、洪谷之後有二一ー一登丘」‖荊關。

【關係】クワンケイ○かかはる。かかりあひ。‖關繫。○國另女が私かに情を通ずる。

【關局】クワンケイとざす。戰國策「秦下ー兵攻二衞陽一、晉必一ー一天下之匈一」

【關繫】クワンケイかかりあふ。‖關係。

【關徼】クワンケウ　國境に在るせきしょのもん。後漢書、四城傳「至二于宜元之世一、遂稀二繕臣一、一ー不ー閉、羽檄不ー行」

【關微之敬】クワンビノケイせきしょを設けて往來する人をあらためる警戒。後漢書、南匈奴傳論「韶二一ー一息三兵民之勞一、徼は警。

【關鍵】クワンケン　○くわんぬきと、かぎと。老子「善閉無二一ー一而不可ー開」○轉じて物事のかなめ、樞要。岳飛、答韓忠彥論「上以二周孔一爲二一ー一」

【關塞】クワンサイせきしょに立てたる一里づか。何承天文「界上破立二一ー一、杜二陵開蹊一」

【關左】クワンサ　關東に同じ。北史、孫紹傳論「孫紹一ー之士、又能指二論時務一」

【關鎖】クワンサ　門のかんぬき。門戸のしまり。韓翃詩「投衣開二客至一、一ー於ー此開」‖關鍵。

【關塞】クワンサイくにざかひに在る、せきしょと、とりでと。漢書、賈山傳「築二長城一、以爲二一ー一」

【關山】クワンザン　○關所と山山と。宋閻詩「萬里赴二戎機一、一ー度若ー飛」○鄉里の境なる山。轉じてふるさと。徐陵詩「一ー三五月、客子憶二秦川一」

【關市】クワンシせきしょと、いちばと。孟、公孫丑「一ー譏而不ー征」

【關人】クワンジンせきしょの役人。儀禮「及ー境謂二一ー一、一ー聞二從者數人一、遂以入ー境」

【關心】クワンシン心にかかる、心配。王維詩「晩年唯好ー靜、萬事不ー一ー」‖關窓。

【關津】クワンシンせきしょと、わたしばと。漢書、王莽傳「一ー苛關」

【關情】クワンジヤウ心にかかる。陳鵠蒙詩「酒香偏入ー夢、花落又一ー」‖關心。

【關雎之化】クワンシヨノクワ關雎は、詩經、周南の詩の篇名、周の文王の后妃の德を詠ぜしもの、よりて人君夫妻和合の德が天下の人民を化する義とす。張說文「內被二蠶斯之德一、外霑二一ー一」

【關隘】クワンアイ　關所に設けたるのろし。齊書、太祖紀「今一ー無ー虞、時和歲稔、還邇同風、華夷並軌」

【關西】クワンセイ　○函谷關以西の地。即ち陝西・甘肅二省の地。後漢書、楊震傳「一ー孔子、楊伯起」‖關右　○國近江國逢坂山（一說函根の關）以西の地方。

【關西出ー將關東出ー相】クワンセイシユツシヤウクワンとうシユツシヤウ漢代の諺（後漢書、虞詡傳）秦の白起・王翦・漢の李廣・趙充國などの名將は關西より出で、漢の蕭何・曹參・魏相・丙吉などの名相は皆關東より出づ。

【關西孔子】クワンセイコウシ　孔子は關東の人、それに對し、楊震は山西の人なるが故に孔子に比して關西といふ。後漢書、楊震傳「震字伯起、弘農華陰人、明經博覽、無ー不二窮究一、諸儒稱二之語一曰——、楊伯起」

【關征】クヮンセイ　せきしょにて取り立てる税。宋史、米信傳「掊二貨物一以免二一一一」＝關税。

【關税】クヮンゼイ　○古、關所にて物品に課する税。＝關征。○輸出入の物品に課する税。＝海關税。

【關說】クヮンセツ　旅人途中の關所を通ずる如く他人を中に立てて説く。史、梁孝王世家「大臣及賓客、有ン所二一一一子景帝一」

【關節】クヮンセツ　○よし。骨のつがひめ。案問「一一中流出、不ン得二風伸一」○要路に居る人に賄賂を贈りてたのみこむ。國史補「遊二請權要一、謂二之一一一」

【關涉】クヮンセフ　かかはりたづさはる。沈約文「結二遊勤勞一、觸ン事一一」＝干渉・關係。

【關係】クヮンケイ　あづかりて總べをきむる職務。崔寔傳「百家之言、無ン不二一一一」

【關內】クヮンナイ　せきしょのうち、函谷關より内をいふ。史、高祖紀「悉發二一一兵一、軼二三河士一」

【關內侯】クヮンダイコウ　○陛下の士。史、春申君傳「乘慈合而爲ン一以臨ン韓、韓必爲二關内之侯一」○六國時代より漢代にありし爵の名。領地を與へず、縣のみを給す。漢書、百官表「爵十九――」

【關鍵】クヮンケン　門戸の開閉に用ふるくわんぬきと、非常を警戒するひゃうしきと。晏林「一一開啓、幹僕解墮」

【關託】クヮンタク　他より手をまはして人にたのみこむ。關説請託の略。唐書、李德裕傳「一二一大臣一」

【關張】クヮンチャウ　關羽と張飛と、共に蜀漢の創備の勇將。李參詩「蜀相凌二一一一」李商隱詩「一一無ン命欲二何如一」

【關中】クヮンチュウ　陝西省をいふ。東は函谷關、南は武關、西は散關、北は蕭關にかこまれたる故。史、項羽紀「一一限二山河一四塞、地肥饒可二都以覇一」

【關格】クヮンカク　政府にて發行せし受取證書。格は紙（宋史）

【關帝】クヮンテイ　蜀の關羽を神としてまつりし稱號。「一一廟」關羽參看。

【關全】クヮンゼン　五代の時の長安の人、善く山水を畫く、好みて秋山寒林の圖を作る、荊浩を師として浩と名を齊しくす。

【關東】クヮントウ　○函谷關以東の地、河南・山東地方。越絶書「句踐伐ン吳、劉二一一一」＝關左。○山海關以東、奉天・吉林・黑龍江三省を一一三省と稱す。○關もと近江國逢坂山以東。後世、相模國箱根山以東、所謂一一八州の地。

【關東八州】クヮントウハッシウ　關相模・武藏・安房・上總・下總・常陸・上野・下野の八國。＝關八州。

【關防】クヮンバウ　○せきしょ。韓愈詩「蜀險兵一一二、秦師梁橫潰」○關防印の略。

【關防印】クヮンバウイン　○官府の公文書に奸僞をふせぐ爲めに押す印。明太祖實錄「設二初于二文華一、設二――記一者、本以絶二欺蔽一防二奸僞一、特一時權宜耳、果正人君子、焉用ン是爲」○書畫幅の右肩に押す長方形の印（引首印）

【關白】クヮンパク　○啓白して天下の政事をあづかり聽かしむ。又、其の職。漢書、霍光傳「諸事皆先一二一光、然後奏二御天子一」○關白名、光孝天皇の時、藤原基經始めて一一と爲る。

【關仕】クヮンジ　とざし、ちゃう。宋濂詩「等ン閑二鉄鏁一避ン人下二一一一」

【關門】クヮンモン　○關所の門。周禮、地官「國凶札、則無二一一之征一、猶ン徴」○門をとざす。蘇軾詩「長ン虎一一早、無ン村得ン米遲」

【關繆】クヮンビウ　くわんぬきと、ちゃうと。新論「口者言語之門戸、舌者門戸之一一」＝關鍵。

【關與】クヮンヨ　かかはりあづかる。晉書、羊祜傳「勢利之來、無ン所二一一一」＝關係。

【關覽】クヮンラン　其の事にわたりて目を通す。後漢書、文苑傳「少好ン學、多二一一而任ン情不羈」＝瀏覽。

【關吏】クヮンリ　せきしょの役人。漢書、終軍傳「一一誰之」

【關令】クヮンレイ　關尹に同じ。＝關令尹。

【關捩】クヮンレイ　機軸に同じ。撰一に樞に作る。黄庭堅文「四萬八千一一子、與ン君一開繪巵開」

【關聯】クヮンレン　かかりあふ、關係してつらなる。＝關關。

十二畫

【闇】

㊀ひらく（開）門を關ひらく。魯語「一門與之言、皆不ン踰ン閾」㊁門が斜に開く。司馬光詩「體疎長ン風冷、室處門常一」

【闕】

㊀カン　㊁カン

㊀みる（視）○のぞむ（臨）嵇康文「俯一一海湄」○魯國の邑の名。㊁虎の怒りて吼ゆる聲「哮一」○虎の怒る貌。詩、大雅「一如ン虓虎」

【闕闕】カンカン　○勇敢なる貌。周禮、地官、保氏「教ン之以二六儀一、五曰、軍旅之容」注「軍旅之容、一一仰仰」○虎のほえる聲。嵇康及、紹二北客一文「餓虎爭ン肉、吼怒一一」

【闔】

㊀キツ　㊁タツ　國　合

㊀やすくおちつく（安定）○とづ（閉）○てほこ（鉾）史、商君傳「持二矛而操一一戟者」○はこ（函）○たたずむ、住立する貌。

㊁ー茸は、いやし、おとろ(猥陵)古、閭に通ず。
【閭丘】キウ　○住立ぶする貌。管子、小問「ー一止、瞠然視」○安定ぶなる貌。史、匈奴傳「ー一更始」
【閭茸】ロウ　あしくおとろ(猥陵)任防文「閭閻ー一、名族所ノ絕」

【閶】キョ

○市の外門。○轉じて市の義とす「歡ー」○みち(道)「閭ー」

【閹】エン　㊀先

○あく、ひらく(開)○あきらか(明)「閹き明らかにする。○おほいおり(大)○ひろむ。ひろまる(廣)「慎ー」「開ー」○あらはす。あらはる(顯)「唱ー」
【閹閹】エン　閹・開・啓・發・披等の訓は開(二〇七八頁三段)の條を見よ。
【閹曉】エン　ふかくかくれたるものを開き明らかにす。易、繫辭「大易彰ノ往而察ノ來、而微顯ー一レ」
【閹繹】エン　ひらきのべる。後漢書、班固傳「厥有二民記一紹ノ天ー一者」
【閹校】エン　あきらかにしただす。謝靈運文「劉ノ規作ノ訓ー一修經」
【閹究】エン　あきらかにしきはめる。宋史、律曆志「蔡元定著二律呂新書一、朱子稱二其超然遠覽、ー一精微一
【閹弘】コウ　ひらきひろげる。晉紀、樂廣「明明篤ノ誠、ー一帝胤」
【閹濟】セイ　ひらきみちびきて成しとぐ。晉書、文帝紀「惟公啟ノ聖主一度、ー一大猷」
【閹士】シ　高爵の意稱。＝開士。
【閹綜】ソウ　ひらきあきらかにしてすべ治める。荀悦文「ー一大猷一、命立二國典一」
【閹提】ダイ　閹因果を信ぜずして佛法をそしる。闡底迦の略。＝信不具。
【閹發】ハツ　ひらきあらはす。
【閹明】メイ　ひらき明らかにする。
【閹揚】ヨウ　明らかにあらはす。晉書、孫楚傳「制ノ禮作ノ樂、ー一道化一」＝闡明・宣揚。

【闔】

【闔】コウ

○まち(市)○市の外門。又市の垣。○みち(道)
【闔閭】リョ　○市の門。轉じてまち(市肆)左思、魏都賦「設ー一ー一以禁ノ姦」○市の道路。揚雄「ー一、道也」

【闈】イ　㊀

○宮中の小門「禁ー」「宮ー」「黄ー」漢書、樊噲傳「排ー一直入」○轉じて、宮中。○小さき門。又、門の内。詩、齊風「彼姝者子、在ニ我ー一兮」

【闢ノ閭】ハイ　勢よくとびらをおしひらく。漢書、樊噲傳「噲乃ー一直入」

【闢】ヘキ　㊀　又、辟に作る

○ひらく。ひらける(開・啓)「開ー」○よける、さく(避)○しりぞける(屏除)荀、解蔽「是以ー一耳目之欲一」
【闢闔】カイ　闢・開・啓・發等の訓は開(二〇七八頁三段)の條を見よ。
【闢闔】カイ　開くと、とづると。林俊詩「楚蜀相犬牙、乾坤互ー一」＝開閉。
【闢壁】ヘキ　田畑をひらきをさむ。柳宗元文「乃闢乃疆、乃宜乃理」＝開墾。
【闢邪】ジャ　邪説をひらきしりぞける。徐陵文「ー一レ以ノ律」
【闢田】デン　田をひらく。晉唐書、王方翼傳「功與二儲保一齊ノ力勤作、苦心計功、數年ー一數十頃一」＝開田。

阜部（阝）

【阜】フウ　有　通音フ

○くが(大陸)○つちやま(土山)說文「山無石者」○をか(岡)「岡ー」「丘ー」「高ー」○高くあつし(高厚)○こゆ(肥)詩、秦風「騏ノ駵孔ー」○大いなり。
【阜財】ザイ　たからを厚くゆたかにする。又、ゆたかなるたから。舜、南風歌「南風之時兮、可ニ以阜ー一吾民之財一兮」
【阜蓄】チク　いなど。詩、召南「喓喓草蟲、趯趯ー一ー」＝蝗。
【阜成】セイ　大いに性命を成し遂げしめる。晉、周宮「六卿分ノ職、各率ニ其職ー一以倡ニ九牧ー一ー一兆民一
【阜通】ツウ　さかんにかよはす。周禮「關門ー一貨賄ー一」注「阜、盛也」
【阜陵】リョウ　こだかきをか。新論「登ニ崎坂ー一而不ニ跌墜ー一者、恃ニ於大ー一也、陵ー一ー一而好顛躓者、恃ニ於小ー一也」
【阜繁】ハン　さかんにしておほし。孫楚文「族類ー一、數則千億」＝繁阜・阜蕃。

【阪】ハン　㊀　㊁

〇はした(分數)のこり(餘數)はんぱの數。■仂。〇土地のすお、地の脈理。周禮、冬官、考工記「凡溝逆地ノ阯之不行」

【陂】

㊀シ・チ　㊁タ・ダ

紙　寘　眞

或は陁に作る

㊀やぶる(毀)〇すこしくくづれる(小崩)後漢書、李暬傳「綱紀頽ー」〇おつ(落)〇きし(崖)〇さか(坂)㊁陀に同じ。陂ーは土地の平かならざる貌。史、司馬相如傳「登陂ー之長阪」■陂陀。〇ー磨は山勢峻長の貌。

【陁頽】タイ　くづれる。周語「衆不ー一」■衆物有ノ所ノ隤」註「大曰ノ頽、小曰ノ陁」

【阡】セン　先　鍾

〇田間の南北のあぜみち(一説に、東西のあぜみち)〇草の密に茂れる貌。■芊。〇はかみち(墓道)歐陽修、瀧岡阡表「始克表於其ー」〇數字の千に通用す。又、仟に作る。

【阡阡】セン　草木の密茂の貌。謝朓詩「遠樹曖ーー」■芊芊・仟仟・阡眠。

【阡陌】セン・ハク　田間の道。東西を阡といひ、南北を阡といふ。一説に東西を阡、南北を陌といふ。四書備考「秦孝公用ニ商鞅ニ壞ニ井田ニ開ニーー」■仟佰。

【阡眠】セン　草木の茂りて密かなる貌。楚辭、九懐「遠望兮ーー」■芊眠。

【阬】

㊀カ。　㊁カ。

陽　庚

㊀あな(坎)大いなるあな。坑に通ず。〇たに(谷)〇からほり(濠)〇あなにす、あなに陥れて殺す。史、始皇紀「有仇怨者ーニ之」㊁をか(岡阜)漢書、揚雄傳、陳衆軍於東ーー」

【阬儒】コウ　儒者をあなに陥れて殺す(史、始皇紀)

【阬穽】コウセイ　としあな。後漢書、袁紹傳「曾操身統ニ三公之官ニ而行ニ奔虜之行ニ、猶縦ニ兎ノ跡ニ、ーニ塞ニ路」■陥穽。

【阮】

㊀ゲン　㊁ゲン

元　阮

㊀周代の國名。今の甘肅省涇州の地。〇姓ー籍」ー咸」は共に竹林七賢の一人。〇俗に人の叔姪を大ー小ーといふ。晉の

ー籍ー咸、叔姪にして共に盛名あり、故に借りて用ふ。紫微詩話「大ー平生予所ノ愛、小ー相逢亦傾盖」㊁原の古字。

【阮咸】ゲンカン　〇晉の竹林七賢の一人、字は仲容、籍の兄の子、仕へて散騎侍郎に至る、妙に音律を解し善く琵琶を弾ず。〇樂器の名、月琴の類、晉の阮咸の作、因りて名つく。其の形状は方或は圓なり(通雅、元行沖傳略)で單に阮ともいふ。宋史、樂志「筆ー等筑」

【阮元】ゲン　清の儒者、字は伯元、芸臺と號す、乾隆の進士、十三經注疏を校刊す。

【阮籍】ゲンセキ　晉の竹林七賢の一人、字は嗣宗、瑀の子、性不羈にして、喜怒形れず、尤も老莊を好み、酒を嗜み、能く嘯き、善く琴を弾ず、其の窖を得るに當りては、形骸を忘るるに至る、好みて山水に遊び、途窮るに至る毎に慟ち慟哭して反る、官歩兵校尉に至る、人阮歩兵と稱す。

【阮歩兵】ゲンホヘイ　晉の阮籍、歩兵校尉となる、故にいふ。世説、任誕「歩兵校尉缺、廚中有ニ貯酒數百斛ニ阮籍乃求ノ爲ニ歩兵校尉ニ」

【阯】シ

紙

或は址に作る

〇もとゐ(基)漢書、疏廣傳「願立產業基ー」〇なぎさ(小渚)沚と通ず。〇交ーは安南地方の國名。漢書、武帝紀「合浦交ー」ー一に趾に作る。

【阱】セイ

梗　敬

おとしあな。中庸「置ノ機辟ー」■穽。

【阱擭】セイカク　獣を捕へる爲めのおとしあなと、わなと。周禮、秋官、雍氏「ー一掌ニ溝瀆之利ニ與ニ禁ニ者」

【阬】

陽

韓(真部七畳)に同じ。

【防】ハ・バ

陽

〇ふせぐ(障)水などをせきとめる。〇ふせぎ「海ー」「邊ー」「國ー」〇つつみ(隄)土手「隄ー」〇かぎり(限)〇ついたて(屏)〇まもる。まもり(衛)〇そなふ。そなへ(備)用心する「豫ー」〇ささふ、ささへる、とどむ(禁)〇あたる(當)詩、秦風「維此仲行、百夫之ー」〇へや。房に通ず。

【防禦】ボウギョ　防・禦・扞・拒・閑〇防は預防と通用す。あらかじめ用心するなり。管義「防ニ未萌之欲ニ」〇禦はさし當りてふせぎ止むるな

り、禦ル敵・禦ル寇の類。〇扞は外の害をふせぎて、己を守るなり。捍に同じ。荀子「如三手足之捍二頭目一」史記「夷乃以二兩笠一自扞而下去」〇拒にこばみふせぐなり。距に同じ。孟子「能言距二楊墨一者、聖人之徒也」〇閑は防に近し、防閑と連用す、定りたる限界を出でざるやうに防ぐ意。晉經「雖レ敬レ放心、閑レ之惟艱」

【防遏】バウアツ　ふせぎとどめる、遏は止。後漢書、寇恂傳「一一他兵、勿レ令二北度一而已」北史、清河王懌傳「遮二其智力一」一一繁變」‖防止。

【防レ窓】バウサウ　私欲の生ずるを防ぎとめる。朱熹、敬齋箴「守レ口如レ瓶、一一レ如レ城」如レ城とは堅き城の敵を防ぐに喩ふ。

【防衛】バウエイ　敵をふせぎまもる。晉紀「五子威恕」疏「思二等道一以自一一一之一」‖防守・扞衛。

【防扞】バウカン　ふせぐ。魏書、高祐傳「押令レ入レ城、而以兵一一一」‖禦扞。

【防蔽】バウヘイ　よこしまなるをふせぐ。禮記「安以一二共行一、刑以防二其姦一」

【防窓】バウカン　さむきをふせぐ。庾信文「波瀾成レ雨、鱗甲一一レ」

【防寒具】バウカングヰ　寒氣をふせぐ用具。手袋・外套など。

【防葵】バウキ　藥草の名（本草）

【防禦】バウギョ　ふせぎすくふ。後漢書、張酺傳「臣官在二子等一、變誠ヲ災、恩レ任ニ一一、未レ知レ所レ由、夙夜怔營」

【防拒】バウキョ　ふせぐ。又ふせぎ。魏書、彭城王勰傳「劉坦等、鳩二動三齊一、蕃衛遺レ將攝二援邊隅一、防組有ニ一一之効一」

【防壞】バウクワイ　〇ふせぐ「一一力」〇一一使は唐代の官名。位、團練使の下に在り。事物紀原「舊唐書志曰、至德後、中原大都、要害之地、置ニ一一使一、以治二軍事一、不レ隸二旌節一也」

【防口】バウコウ　人のものいふことをとどむ。國語「子產曰、防レ民之口、甚二于一一一」‖防川」

【防溝】バウコウ　敵をふせぐ爲めのみぞ。管子「開二絕通道一、關二深一一一」

【防穀令】バウコクレイ　穀物を外國へ輸出し若しくは國内に輸入することを禁ずる法律。

【防材】バウザイ　鎖の鎖にて大いなる材木をつなぎ合せ、敵艦の進入をふせぐもの。

【防止】バウシ　ふせぎとどむ。‖防遏。

【防秋】バウシウ　北方の夷狄は秋季になれば、勢、盛んにして中國に侵入す、故に夷狄を禦ぐ義とす。爾雅、匈奴以レ秋至、故曰ニ一一一」高適詩「脊海只今將レ飲レ馬、黃河不レ用更一一レ」

【防臭劑】バウシウザイ　惡臭をふせぎとめる藥。にほひどめ。

【防身刀】バウシンタウ　身をふせぎ守る刀。通鑑、宋紀「取二帝一一一劍レ之」‖護身刀。

【防水】バウスイ　みづをふせぐ。史、周紀「防二民之口一、甚二于一一一」‖防川。

【防水布】バウスイフ　水をはじくやうに塗料をひきたる布の、雨具に用ふ。

【防泄】バウセツ　もるをふせぐ。韓愈詩「一一一架夜塞、懼レ衛城壺開」

【防川】バウセン　川をふせぐ。防口參看。

【防戰】バウセン　ふせぎたたかふ。‖距戰・禦戰。

【防寒】バウカン　ふさぐ。漢書、谷永傳「直二布聖德一、開二民所レ苦、以慰二綏元元之心一」一一一大姦之臧」

【防排】バウハイ　水をふせぐと、水はけをよくすると。水經、注「修ニ一一一、以正二水路一」

【防牌】バウハイ　たて。

【防波堤】バウハテイ　なみよけのつつみ。

【防備】バウビ　敵をふせぐそなへ。後漢書、和帝紀「復收二殭鎖一、以一一不虞、鄣二安邊境一」晉書、荒梁傳「愛明設ニ一一「敵不二敢犯一」

【防レ微】バウビ　〇微をふせぐ　わづかの事にも注意して之を未發にふせぎとどむ。春秋胡傳「春秋一一一杜レ漸之意、其旨二萬世一慮、深遠矣」〇徹行卽ち、天子がしのびあるきをせざるやうにいましめとめる。

【防腐】バウフ　腐敗をふせぎとどむ「一一劑」

【防風】バウフウ　〇はまがな。海邊の砂地に生ずる草、若芽を食用とし、根を藥品とす。中風を防ぐ功ありといふ。〇風をふせぐ「一一林」〇周代の國名。今の浙江省武康縣の地。

【防風林】バウフウリン　風よけに植ゑたるはやし。

【防人】サキモリ　國王朝時代の國境を防備せし兵。‖戍兵。

【阪】

㊀ハン　㊁ハン　通 坂に同じ

㊀さか、山の傾斜せし所（山坡）〇つつみ（坡）禮、月令「善相二丘陵一險原隰一」〇けはし（險）けはしくして石などの多き荒地。詩、小雅「瞻彼一一田」箋「一田、崎嶇墝埆之處」㊁一泉は地名、黃帝が蚩尤を破りし所。

【阪上走レ丸】ハンジヤウノハシヅ　勢に乘じて、便易なる喩。漢書、酈通傳「范陽令先下、而身官貴、必相率而降、發若二阪上走一丸也」

【阪泉】ハンセン　地名、直隸省保安縣の東に在り。黃帝、炎帝と一一の野に戰ふ。括地志「一一今名二黃帝泉一、在二懷戎縣東一」懷戎縣は卽ち今の保安縣。

【阪田】ハンデン　けはしくして石などある荒蕪地。字解參看。

【阪東】ハンドウ　關關東地方。一一大郎」

【阪路】ハンロ　さかみち。

【阯】

㊀ヤタ　㊁アイ　新用

㊀ふさがる（塞）礙がふさが

る。○運が開けぬ、くるしむ。くるしみ。漢書、元帝紀「百姓仍遭ニ困一」‖阨。㊁せまし、道路が窄狹ニなり。左思、呉都賦「邦有ニ湫一而踰蹋」‖隘。○けはしくせまきみち（隘道）史、始皇紀「閉ニ關據一」

【阨窄】サク　逼わるくるしむ。孟、公孫丑「一ニ而不レ問」‖阨困・厄窮。

【阨困】コン　くるしむ。くるしみ。史、游俠傳「其言必信、其行必果、已諾必誠、不レ愛ニ其軀一赴ニ士之一ニ一」‖窮困。

【阨窮】キウ　せまく小さし（狹小）揚雄賦「狹ニ三王之一ニ一」

五畫

【阿】

㊀ア　㊁ヲク　㊂アッ　㊃ア

㊀通音ア　㊁一音オ

㊀さし（水岸）穆天子傳「天子飲ニ于河水之一ニ」○をか、高き岡（大陵）○くま、まがりかど（曲隅）○よる、よりかかる、たよる（倚）○おもねる、へつらふ（諂諛）孟、公孫丑「汗不至レ阿ニ其所レ好」○むね（棟）のき（簷）はしら（柱）四一はあづまや。○太一は古の名劍の名。戰國策「龍淵太一」㊁やはらか（柔）き貌。‖猗。㊂人を呼ぶ時の冠詞、親しみの意を含む「一兄」「一妹」㊃佛弟子の名「一難」○梵語のア音にあてて用ふ「一彌陀」「一羅漢」

【阿姨】イ　○をば、母の姉妹。王獻之文「不レ審ニ一所レ患得レ差否」○妻の姉妹の稱（楊妃外傳）

【阿育】イク　佛の滅後百年、摩羯陀國に君臨し、八萬四千の塔を起てし人。‖譯名義集「一一、或阿輸迦、或阿輸柯、此云ニ無憂王一」

【阿育王山】アイクワウ　浙江省、寧波府に在る山の名。四晉の武帝の時、劉薩訶が、この山中にて古塔を發見し、阿育王所建の八萬四千塔の一と信じて崇拜せしによりて名つく。‖育王山。

【阿婦】アフ　うつくしき女。楊維楨詩「一一有レ才還有レ累、宮中盼殺啄ニ林梁一」

【阿翁】アヲ　○祖父をいふ。世說「一一謂ニ宜ニ以子戲ニ父一」○婦が夫の父をいふ。‖阿家翁。

【阿伽】ア　㊀○佛に供へる淨水。統譯名義集「一一此云ニ水一」‖閼伽。○又、其の淨水を盛る器。

【阿孩兒】アガイ　あかご。述異記「一雙前進士、兩箇——」

【阿結】アケツ　齊の東阿縣より產する精微なるねりぎぬ。史、李斯傳「一一之衣、錦繡之飾」

【阿衡】アカウ　○殷の時の宰相の官名、阿は輔み倚る、衡は平の義、伊尹之に任ず、因りて又伊尹の號とす。書、太甲「惟嗣王不レ惠于一一」○宰相をいふ。史、魏世家「魏雖レ得ニ一一之佐一、曷益乎」

【阿香車】アカウシヤ　晉の時、阿香といふ女子が雷車を推したりといふ故事に因りて雷の異名とす（法苑珠林）李嶠詩「阿香推ニ車散ニ飛雹一」

【阿監】カン　宮女を監督する女官。白居易、長恨歌「椒房ニ一青娥老」

【阿兄】ケイ　あに。焦仲卿妻古詩「一一得レ聞レ之、慚愧心中煩」

【阿嬌】ケウ　○古の美女の名。陳にて、美人の稱とす。漢武故事「帝爲ニ膠東王數歲、長公主抱問曰、兒欲レ得レ婦否、曰、欲レ得、指ニ女一一好否、笑曰、若得ニ一一當作ニ金屋一貯上レ之」○むすめの敬稱（關中曰ニ見女一爲ニ一一一」

【阿含】コン　梵　梵語の音譯。釋迦の說き し教法「一一經」‖無比法。

【阿二】ア　二番目の子女。順次に阿三、阿四といふ。

【阿字觀】アジクワン　梵　梵語にて一切の言語は皆アの音より出づ、故に阿字を觀ずれば一切諸法の根本義に達するとの教義。

【阿孝】アカウ　俗に乳母の夫の稱。通俗、應紀「實情貞烈婁二章后乳姆一爲レ妻、奏請、賴白署ニ皇后一一一不レ慙」‖阿奢。

【阿闍梨】アジヤリ　梵　和尙につく僧の稱。師範の義、阿闍梨耶の略。大藏法數「梵語一一、華言ニ軌範一、謂ニ其能爲ニ人軌範一故云ニ一一一也」

【阿戎】ジユウ　○いとこの通稱、晉紀、注「晉安帝人、多謂ニ從弟一爲ニ一一、至レ唐猶然」杜甫詩「守レ歲一一家」○他人の子を稱す。晉書「王衍、王渾子也、少ニ阮籍一二十歲、籍與爲レ友、籍每ニ過レ渾去一、輒過ニ視レ戎、良久、出謂ニ渾曰、共ニ卿言一、不レ如ニ一一一談」とあるに本づく。

【阿修羅】アシユ　梵　梵語、略して修羅ともいふ、强力にして梵天帝釋と戰ふ惡魔の神。‖非天・非類。

【阿誰】アスヰ　たれ。蜀志、龐統傳「先主曰、向者之論、一一爲レ失」‖何誰。

【阿世】セイ　世におもねる。史、孟子傳「豈有レ意ニ一一俗苟合ニ而已哉」

【阿僧祇】アソウギ　梵　數へきれざる程の非常の大數。‖無數。

【阿那】アナ　たをやかな美女のたをやかなる貌。陸機詩「俯仰紛一一、顧步成レ姿」‖阿娜・婀娜。

【阿娜】アナ　前條に同じ。洛神賦「華容一一令ニ我忘レ餐」

【阿孫】アソン　おもねる。禮記「是謂ニ一一則跡無レ有ニ掩蔽一」

【阿難】アナン　釋迦の弟子の名。釋迦と從兄弟たり、釋迦の沒後、弟子と諸

綴を採集して世に傳ふ。

【阿諂】アテン へつらふ。抱朴子「非二苟屈之親一一之人也」＝諛諂。

【阿堵】アト 晉の人の語の異名。阿堵は晉宋間の方言にて、あれ・あのといふ意。晉書、王衍傳「衍口未嘗言二錢字一、婦欲レ試レ之、令二婢以レ錢繞レ牀不レ得レ行、衍呼レ婢曰、舉二阿堵一一」

【阿耨多羅三藐三菩提】アノクタラサンミャクサンボダイ 梵語 諸佛所證の最上の妙道といふ。＝無上正覺。

【阿婆】アバ ばば、婦人年老いて尊き者の稱。朝野僉載「成亨已後、人皆云、莫二浪語一一嘎」

【阿呆】アホ 國おろか、ばか。

【阿保】アホ まもりそだてる、又其の人。史、范雎傳「不レ離二一之手一」

【阿房宮】アバウキュウ 秦の始皇帝の築きし宮殿の名、山のくまに建てたる故の稱。一說、四阿ありだての宮殿の義（杜牧、阿房宮賦）

【阿附】アフ こびへつらふ。抱朴子「一一曲從、以二水濟一レ水」＝阿諛。

【阿鼻】アビ 梵八大地獄の一。浮屠子「八大地獄、最下一一四萬由旬」＝無間地獄。

【阿父】アフ ○父を親しみ呼ぶ稱。○をぢ（伯叔父）を親しみ呼ぶ稱。又伯叔父自らいふ。通鑑、宋紀「一在、汝亦何憂」注「江南人士呼二叔父伯父一皆二一一、蓋二伯父叔父一者以自呼」

【阿附】アフ おもねりつく。後漢書、李膺傳、實陵侯以二一一宦官一爲二師恣一レ所レ愛」＝迎合。

【阿芙蓉】アフヨウ 鴉片の一名。大和參看。

【阿片】アヘン 英語のあて字。罌粟の實の汁より製せし麻醉劑。＝鴉片・阿芙蓉。

【阿母】アボ ○乳母を親しみていふ。史、倉公傳「故濟北王一一○母を親しみていふ。通鑑、晉紀「潘岳謝レ母曰、負二一一ご

【阿嬪】アヒン ○魏の曹操の小字。李嶠詩「鼎足分來漢祚移、一一曾困二火船一」○唐の玄宗の幼名。

【阿彌陀】アミダ 梵 西方淨土の佛の名。名義集「一一、清淨平等覺經譯無量清淨佛」

【阿家】アカ こどもといふ稱。三國志、江表傳「孫權謂二呂蒙及蔣欽、宜二學問以自開益一、蒙始就レ學、爲志不レ倦、晉施過二蒙言議、皆欲レ受レ師、附二蒙背一曰、吾謂、卿但有二武略一耳、今者學識英博、非二復吳下一一一蒙曰、士別三日、卽更刮目相待」

【阿耶】アヤ 次條に同じ。

【阿爺】アヤ ちち（父）＝水滸傳「一一無二大兒一、木蘭無二長兄一」＝阿耶・阿爸。

【阿諛】アユ おもねりへつらふ。おべっか。史、平準書「一一取レ容」＝諂諛・阿諂。

【阿羅漢】アラカン 梵 煩惱を斷ち盡して世間の供養を受くるに堪ふる聖者。又、ほとけ、如來十號の一。大藏法數「梵語一一、華言二無學一、謂二其生死已盡無二法可レ學」

【阿波堆】アハイ 唐の玄宗の作りたる笛曲の名。張祜詩「至レ今風俗羅山下、村笛猶吹一一」

【阿蘭若】アランニャ 梵 寺又は僧庵の總名。智度論「阿蘭若、秦言二淨居所一、居、四域謂二之蘭若一」遠離處・寂靜・無諍などと譯す。＝蘭若・阿練若。

【阿枉】アワウ おもねりまげる。後漢書、第五倫傳「平二銓衡一、正二斗斛一、市無二一一、百姓悅服」

【陁】エン テン 呉 漢

○あやふし（危）○くだす。くだる（下）おとす。おつ（墮）危くする。屈原、離騷「一一余身二分而危死」

【陁危】エンキ 岸に近づきて堅ちんとする、極めて危ふき處。漢書、食貨志「宏有レ偽二天下一一一者若レ是而上不レ驚者と

【陂】ヒ 呉 漢

をり、山谷に依りて作りし牛馬の圈

【阻】ソ 漢

○へだつ。へだたる（隔）詩、秦風「道一且長」○はばむ、氣が弱る。子華子「氣一而志奪」＝沮。○なやむ、くるしむ（艱）書、舜典「黎民一一饑」○とどむ、やむ（止）「一止」○けはし（險）けはしき處「險一」周禮、夏官、司險「周知其山林川澤之一」＝阻に通ず。○たのむ（恃）ほこりたのむ。左、隱四「一一兵而安忍」○よる（依）うたがふ（疑）「疑一」「猶一レ左、國二一狂夫一之」○うれふ（憂）○しきり、へだて、さまたげ。

【阻礙】ソガイ 阻・礙・隔・絶・離・屯等の別は礙（六畫）の條を見よ。

【阻隔】ソカク 阻・隔・障・閉の別は隔（十一畫）の條を見よ。

【阻阨】ソアイ けはしくせまし。又、其の處。阨は隘に同じ。史、律書「南越朝鮮、據二一一一」

【阻害】ソガイ さまたげ害する、じゃまをする。＝妨害。

【阻礙】ソガイ へだてさへぎる。易經、疏「四隣順位、平易之方、東北險位、一一之所」

【阻格】ソカク さまたげとどめる、じゃまをする。＝阻止・阻格。

【阻隔】ソカク 遠くへだたる。＝隔絶。

【阻絕】ソカツ 書、劉寧之傳「以二精卒五千一一之、去」賊十里、一一一列一陣」

【阻眼】ケン　けはしくしてくるしむ。白居易詩「貧細人窮痴、逢窒路一一」＝阻難。

【阻徑】ケイ　けはしきこみち。水經、注「或倚岸一一、或傾巖絕谷」

【阻絕】ケイ　へだたりそむく。陸機詩「寸晷憑言笑、佳期欲一一」

【阻限】ゲン　へだてかぎる。王粲文「河山一一、狐虎滿レ路、豈レ道二歸使一或至或否」

【阻隘】ケン　けはしきを恃む。賈誼、過秦論「非二人一一不レ守」＝恃險。

【阻固】コ　險をふせぐかため。左傳「高二其壘一、以爲二軍之一一」

【阻止】シ　さへぎりとめる。じゃまをする。＝阻格。

【阻滯】ソウ　へだたりてとほし。白居易詩、「雲浦多分散、關山苦二一一」

【阻深】シンシン　山川が遠くへだたる。史、司馬相如傳「道里遼遠、山川一一不レ能二自致一」＝阻隔。

【阻峻】シュン　けはしく高し。法約文「北京一一、東川題榜」

【阻折】セツ　けはしくしてまがる。李白、鳴皐歌「申二征軒一兮歷二一一」

【阻難】ナン　けはしくしてなやむ。陸機詩「故鄉一何曠、山川阻且難」

【阻兵】ヘイ　兵の多きをたのむ。左、隱四「一レ一而安レ忍」註「阻、恃也」

【阻遂】ソツ　へだたりてはるか。傅亮賦「想二故鄉之一一」劉琨、表勸行「崑崙城阻且遂」

【阼】ソ　サク　去　遇

○祭祀の時などに主人たる者の堂に升ぼる東方の階。支那の堂は東西に階あり、主人は東階よりし、賓客は西階よりのぼる。○天子の卽位の祭を行ふ時に升る東方の階、天子は天下の主たり、故に主階より升る。轉じて帝位の義とす「遂一」祚に通用す。○祚」ソ　は帝位に臨みて政を聽く義。○ひもろぎ（祭肉）胙に通ず。

【阼胤】ア　主人の堂に升る東方のきざはし。後、鄭玄「鄉人儺、朝服而立二於一一」

【陀】㊀タ・ダ　歌　㊁ヲ・ダ　哿　俗字

㊀陂一はけはし（險阻）又、地の平かならざる貌。○遂一は斜めなる貌。梵語多陀の略。如字「阿彌一」㊁やぶる。＝陁。

【陀羅尼】ダラニ　陀羅尼徳を具備する義。總持と譯す　一字の中に無量の教文を總攝し、一法の中に一切法を任持し、一義中に一切義を攝し、一聲中に無量の功徳を藏するが故。佛頂心經「觀世音菩薩說二此一一」○まじなひ。職原名義鈔「然則一一此梵語、呪字卽當二雜言一」＝呪文。

【陁】ダ　陀（前條）の俗字。

【陋】ロウ　有　寘

○をか（陵）さか（阪）○山の傍の堆くなりて崩れんとする貌。揚雄、解嘲「爵若二一一」

【陂】㊀ヒ　支　㊁ヘ　歌　㊂ヒ　眞

㊀さゝへ、つつみ（障）どて（隄防）○さか（阪）○ためいけ（貯水池）㊁かたむく（傾）○よこしま（邪）ななめ（斜）正しからず。易、泰卦「无平不一、无往不復」○勞の顏れる貌。㊂さか（阪）○ななめなる貌。○一陀は地の平かならざる貌。

【陂曲】キョク　かたよりてよこしま。書經、疏「無二偏私一無二一一」

【陂陀】ダ　くづれおつ。臨貝賦「望岸一一」

【陂池】チ　つつみ。又ためいけ。禮、月令「毋二伐二川澤一毋レ漉二一一、毋レ焚二山林一」

【陂陁】ダ　地のななめにして平からざる貌。司馬相如、子虛賦「登二一一之長阪一兮」＝陂陀。

【附】㊀フ　㊁ホウ　有　遇　付と通用す

㊀つく（著）ー著」○よる（依寄）○くはふ（加）「一加」○ます（益）「一益」○したがふ（從隨）つき從ふ「一屬」「除一」「新一」○したしむ（親）ちかづく（近）「依一」「親一」「畏一」○ほどこす（施）○わたす「一與」「交一」杜甫詩「一諸與六親」○合せまつる、合祀する。謚に通ず。謚、雜記「大夫一于士」㊁培壘に同じ。一婁は小さき土山。＝培婁。○附に通ず。漢書、劉向傳「臣幸托肺一」

【附箋紙】附・付・著・就卽傳粘○附は依也、近也、著也と註す　添へつくるなり　附屬・附託と用ふ。史記「附二驥尾一而行、名益三顯」○付は與フ也　授也、つけわたすなり。魏志、傳「得二財物一平均分付」○著はひたりとつくなり。漢書「黑子之著レ面」執著と用ふ。○就は卽也、從也、從ひ近づくなり、就二有道一の如し。○卽は直ちにそれにつくなり。卽レ位・卽レ席の如し。○傳は附に聞に。左傳、皮之不レ存、毛將安傳」○粘は糊にてねばりつくなり。

【附蛸】ボウ　みみず。本草「蚯蚓、一名一一」

【附益】ヲヤ　まし加へる。論、先進「而求也、爲ニ之聚斂一而ニ益之一」‖附加。

【附加】ヲカ　附益に同じ。

【附加刑】ヲカケイ　舊刑法にて主刑につけ加へたる刑罰。公權剝奪・公擔停止・監視・罰金・沒收の五種あり。

【附加稅】ヲカゼイ　地方稅の一種。國家の本稅に對し一定の割合を以て徵收するもの。

【附隨】ヲズイ　後進が先輩に附して名を成すをいふ。史、伯夷傳「顏淵雖ニ篤學一、附ニ驥尾一而行益顯」‖附ニ驥尾一。

【附近】ヲンキン　○もより、近所、近邊。○したがひちかづく。‖傳近。

【附化】ヲカ　他國の民が籍を此國にうつす。魏志、曹仁傳「徙ニ漢南一ニ民于淯北一」‖歸化。

【附會】ヲクワイ　○事の相關聯せざる者を會して一と爲す義。漢書「竟益雖レ不レ好レ學、亦善ニ一ニ」文心雕龍「何謂ニ一ニ、謂ニ越ニ文理一統ニ首尾一、弼ニ綸一貫一、使ニ雜而不ニ越者ニ也」○轉じてこじつける。歐陽修文「易之道深矣、況而不レ明者、諸儒以ニ一ニ之說ニ亂レ之也」‖傳會。

【附款】ヲクワン　つきしたしむ。情を通じて歸附する。晉書、荀洪載記論「荀洪ニ一ニ江東ニ而志圖ニ關右ニ」

【附言】ヲゲン　つけくはへていふ。又、其のことば。‖附說。

【附葬】ヲサウ　同じ穴にうづめる。漢書、哀帝紀「ニ一之禮、自レ周無レ焉、吾從レ凡」‖合葬。

【附子】ヲシ　とりかぶと、毒草の一。漢書、外戚傳「即擇ニ一ニ善入ニ長定宮一」‖烏頭。

【附耳】ヲジ　○口を以て耳にちかづけてこそこそと語る。淮南子「レ一レ之言、聞ニ於千里一」○事實の旁の小屋の名「史、天官書」

【附順】ヲジュン　つきしたがふ。漢書、王莽傳「一一者救擾、忤恨者誅滅」

【附贅】ヲゼイ　こぶ。無用の物に喩ふ。陳師道詩「功名如ニ一ニ、得失何用レ題」

【附贅懸疣】ヲゼイケンイウ　つきたるこぶと、ぶらさがれるいぼと。無用のものの喩。莊、駢拇「彼以レ生爲ニ一一、以レ死爲ニ決疣潰癰一」

【附箋】ヲセン　つけがみ、つけふだ。‖付箋。

【附屬】ヲクゾク　○つきしたがふ。○部下又所屬。‖從屬。

【附帶】ヲタイ　つきともなふ、つき添ふ「一一犯」

【附託】ヲタク　まかせる、あづけたのむ。‖委託。

【附著力】ヲヂャクリョク　異なれる物質間に行はれる分子の力。水の滴の物に附著する力の類。‖黏力。

【附比】ヲヒ　かたよりつく、つけしたがふ。左傳、序「分ニ經之年一、與ニ傳之年一相ニ一ニ」

【附與】ヲヨ　あたへさづける。‖付與。

【附庸】ヲヨウ　大諸侯に附屬する小國。禮、王制「天子之田方千里、公侯田方百里、伯七十里、子男五十里、不レ能ニ五十里一者、不レ合ニ於天子一、附ニ於諸侯一、曰ニ一ニ」

【附和】ヲクワ　よりたのむ。唐書、張善相傳「皆レ兵途レ盜、爲レ衆ニ一ニ」

【附驥】ヲキ　したがふ。又めしつかひ。北史、裴蘊傳「賓客ニ一、遍ニ於郡國一、侵ニ擾百姓一、帝弗ニ之知一也」

【附錄】ヲロク　○主なる文書に附屬せる記錄。○新聞雜誌などの規定の紙面以外につけ加へたる記事。

【附和】ヲクワ　己の定見なくしてかろがろしく他人の說に贊成する。‖雷同。

【阪】

○ヤク　㊁アイ　並阪に作る

㊀ふさがる(塞)路がふさがる。運が開けぬ。○あやふし(危)○なやむ(艱)○せまる(迫)○困難のこと。險艱の地。㊁けはし(險)○せまし(狹)‖險。せまき道。○へだたる(阻)

【阪狹】ヲイせまし。典、周勃世家「周亞夫擊レ吳、趙涉曰、吳必證ニ人於殽澠ニ一之間一」‖險陋、險狹。

六畫

【陔】

ガイ　灰

○きざはし(階)漢書、郊祀志「一壇三一」註「一、重也、三一、三重壇也」○上天の階級。九一は九天ニの上。○かさなる(重)○南一は孝子相戒めて孝養することを詠ぜし笙詩の名「詩經、序」○一又は古、宴會の終に奏せし樂章の名。○塀下の塀に通ず。

【降】

㊀カッ・コウ　㊁カッ・コウ　江絳

㊀くだる。くだす(下)○したがふ、敵にくだる「一伏」○むねがさがる、安心する。詩、召南「我心則一」○おちる(落)○鳥の死をいふ、おちる。禮、曲禮「羽鳥曰一」㊁くだる、おりる。論、鄉黨「出一等ニ階級を上よりして下る。○おろす、くだす、官位などをさげる「一官」又、皇族の女が臣下の者に嫁ぐ「一嫁」書、堯典「釐ニ一二女于嬀汭」○まける、おさへる、へりくだる(貶抑)「一志」○ふる。ふらす「雨一」「霜一」

【降下】なり、阜に从ふ者の誤。隊に从ふ、降は、古文の陊の字(陊字、古、音平聲、後世、分ちて陊伏の陊は平聲、升陊の陊は去聲とす)

【降意】ｺｳｲ ○心を下す、其の方に心を傾ける。後漢書、賈逵傳「肅宗ー二ー偏深、特好二古文尚書一、左氏傳」○へりくだる、謙遜する。晉史、梁始與王伏傳「ー一接ル士」○降參するしるしにかかぐるはた。陳師道詩「當三卻郎ニー一ニ」＝降旛。○立てたるはたをおろす。長楊賦「下ル將ー一ル」

【降省】ｺｳｾｲ 神を降してゆるす。後漢書、明德馬后紀「多有ル所ニー一ニ」

【降祐】ｺｳﾕｳ 天よりくだすさいはひ。漢書、哀帝紀「皇天降二非材之紂一、漢國再受二命之符一」

【降嫁】ｺｳｶ 國皇族の女が臣下に嫁するを云ふ。

【降綏】ｺｳｽｲ 天より幸福をくだす。晉四隨樂歌「惟天ー一、神祇保定」＝降福。

【降香】ｺｳｺｳ 香木の屑、蘇門答臘ﾄｳ地方に産す、根は堅實にして色は黑潤なり、醋香と和して之を燒けば芳香を發す、一名降眞香、之を燒けば能く神を降すといふ。

【降文明】ｺｳﾌﾞﾝﾐｮｳ 天文學にて變點の一、游星・綿星・摶星などが、北より南に向ひて黃道面を通過する點。

【降格】ｺｳｶｸ 神靈が天より降り至る、格は至。書經「惟帝ー一、撫二于時夏一」＝降臨。

【降靈】ｺｳﾚｲ 神靈が天より人間界の事をかんがみ見る。詩、王風、黍離「悠悠蒼天」傳「自ル上ー一、則稱二上天一、據ル遠視レ之蒼蒼然、則稱二蒼天一」

【降誕】ｺｳﾀﾝ ○降參するしるしにかかぐるはた。陳師道詩「當三卻郎ニー一ニ」＝降旛。○立てたるはたをおろす。長楊賦「下ル將ー一ル」

【降省】ｺｳｾｲ 神を降してゆるす。後漢書、明德馬后紀「多有ル所ニー一ニ」

【降祐】ｺｳﾕｳ 天よりくだすさいはひ。漢書、哀帝紀「皇天降二非材之紂一、漢國再受二命之符一」

【降嫁】ｺｳｶ 國皇族の女が臣下に嫁するを云ふ。

【降綏】ｺｳｽｲ 天より幸福をくだす。晉四隨樂歌「惟天ー一、神祇保定」＝降福。

【降香】ｺｳｺｳ 香木の屑、蘇門答臘ﾄｳ地方に産す、根は堅實にして色は黑潤なり、醋香と和して之を燒けば芳香を發す、一名降眞香、之を燒けば能く神を降すといふ。

【降文明】ｺｳﾌﾞﾝﾐｮｳ 天文學にて變點の一、游星・綿星・摶星などが、北より南に向ひて黃道面を通過する點。

【降格】ｺｳｶｸ 神靈が天より降り至る、格は至。書經「惟帝ー一、撫二于時夏一」＝降臨。

【降靈】ｺｳﾚｲ 神靈が天より人間界の事をかんがみ見る。詩、王風、黍離「悠悠蒼天」傳「自ル上ー一、則稱二上天一、據ル遠視レ之蒼蒼然、則稱二蒼天一」

【降誕】ｺｳﾀﾝ ○降參するしるしにかかぐるはた。陳師道詩「當三卻郎ニー一ニ」＝降旛。○立てたるはたをおろす。長楊賦「下ル將ー一ル」

【降省】ｺｳｾｲ 神を降してゆるす。後漢書、明德馬后紀「多有ル所ニー一ニ」

【降祐】ｺｳﾕｳ 天よりくだすさいはひ。漢書、哀帝紀「皇天降二非材之紂一、漢國再受二命之符一」

【降嫁】ｺｳｶ 國皇族の女が臣下に嫁するを云ふ。

【降綏】ｺｳｽｲ 天より幸福をくだす。晉四隨樂歌「惟天ー一、神祇保定」＝降福。

【降香】ｺｳｺｳ 香木の屑、蘇門答臘ﾄｳ地方に産す、根は堅實にして色は黑潤なり、醋香と和して之を燒けば芳香を發す、一名降眞香、之を燒けば能く神を降すといふ。

【降文明】ｺｳﾌﾞﾝﾐｮｳ 天文學にて變點の一、游星・綿星・摶星などが、北より南に向ひて黃道面を通過する點。

【降格】ｺｳｶｸ 神靈が天より降り至る、格は至。書經「惟帝ー一、撫二于時夏一」＝降臨。

【降雪】ｺｳｾﾂ 雪がふる。又よりし雪。

【降誅】ｺｳﾁｭｳ 降祐に同じ。史記、曲師頌「芒芒上天、ー一ニ有漢一」

【降損】ｺｳｿﾝ おとしくだす、へらしはよく。傅亮文「是故ー一盛制」

【降誕】ｺｳﾀﾝ 貴顯又非凡なる人の生まるるにいふ、誕は誕生。花蕊夫人詩「東宮ー一近二佳辰一」

【降祉】ｺｳｼ 天よりくだすさいはひ。天より幸を降す。後漢書、食貨志「今皇天ー一ル、嘉瑞竝臻」＝錫祉。

【降衷】ｺｳﾁｭｳ ○天より人にまごころを下し與ふ。衷はかたよらざる中正の德。書、湯誥「惟皇上帝、ー一ニ下民一」○天が善をくだし與ふ。吳語「今天ー一ニ於吳」

【降勉】ｺｳﾍﾞﾝ 官位をくだししりぞける。書經「天乃佑二命成湯一、ー一ニ夏命一」

【降陟】ｺｳﾁｮｸ くだすと、のぼすと。國語、漢皇頌「聖德登遐、ー一在レ天」

【降登】ｺｳﾄｳ くだると、のぼると。韓愈、南海神廟碑「ー一有レ數、時具酺禮」＝升降。

【降年】ｺｳﾈﾝ 天よりうけたるいのち。禮記、郭有道碑「ー一不レ永、民斯悲悼」

【降附】ｺｳﾌ くだりてつきしたがふ。後漢書、伏隆傳「招懷綏輯、多來ー一」

【降伏】ｺｳﾌｸ ○敵にくだる、降參する。○佛ﾌﾞｯ惡魔などをおさへつける。又、先方の自信を折きて信服せしむる。金剛經「ー一其心一」

【降服】ｺｳﾌｸ ○己に相當する喪服より、一等をくだす。また其の服。○うはぎを羅ﾈﾏきて罪を謝する。左、僖二三「公憊、ー一而囚」＝解冠。○降伏に同じ。

【降綸】ｺｳﾘﾝ 天よりさいはひをくだす。詩經「般涅將將、ー一福祿」

【降裝】ｺｳｿｳ 敵に降參する裝束。五代史、後蜀世家、李昊事二王衍一、皆三輸林學士、衍之亡也、昊爲草ニー一ニ

【降旛】ｺｳﾊﾝ 降參するしるしにかかぐるはた。劉禹錫詩「千尋鐵鎖沈二江底一一、片ー一出二石頭一ニ

【降魔劍】ｺｳﾏｹﾝ 佛不動明王の持てる惡魔卽ち煩惱を降伏せしむるつるぎ。

【降虜】ｺｳﾘｮ 降服したるとりこ。岑參詩「甲兵未レ得レ戰、ー一來如レ歸」

【降龍】ｺｳﾘｭｳ くだりよう。儀禮、疏「天子升龍、諸侯ー一」

【降臨】ｺｳﾘﾝ 天よりくだりのぞむ。張說詩「旋聞喜ニー一ニ」＝降格。

【阬】㊀キ　㊁キ　㊂支　㊀やぶれがき（壁垣）＝境。㊁けはし（險）

【限】グン　諫　○かぎり。へだて（阻）さかひ（界）「一界」戰國策「南有巫山黔中之一」○ほど（度）きまり、さだめ。程度「一度」「程一」「定一」○場所・時日などのとりきめし範圍「日一」「刻一」「期一」「一界」○しきみ（門閫）門下の横木「一戸」「門一」○はて。○かぎる、はかる、へだつ。

【限外】さかひ、しきり。宋史、劉昌言傳「今設二種植榛棘數十萬株一、使相連成一以爲二一一一」＝界限。疆界。

【限隔】かぎりへだてる。洛陽伽藍記「百姓聞入、無二復一一一」

【限局】かぎる。後漢書、伊長統傳「不二一一一一」

【限制】かぎり。一定の界を設ける。宋史、許光凝傳「是江平與、不レ爲二一一一一」＝制限。

【限定】かぎりさだめる「一一承認」

【限度】ほど。かぎり。史記「蜜屋與服、僭於上、無二一一一」＝程度

也、號令之所二一一一也」

【限列】條列して限界を設ける。漢書、哀帝紀「諸侯王・列侯・公主・吏二千石及豪富民、多畜二奴婢一田宅一レ限、與レ民爭レ利、百姓失レ職、實レ国レ不レ足。其議二一一一」

【陘】ケイ　徑　あづち（船梁）＝堺。

【陏】タ　寘　うり。蔓になる果物。瓜に通ず。史、貨殖傳「果一蓏」

【陊】ダ　箇　○おち（落）脱字。誤字。＝脱。○くづれ、やぶれ（壊）

【陌】ハク　ヒャク　○あぜみち、田間の東西（一説に南北）に通ずる道、阡（南北三筋）参看。○市中のみち（街路）「巷一」「街一」「衢一」まち。○はちまき「一頭」額に通ず。○もも。百に通ず。

【陌上桑】樂府の曲名、楚王秦氏の女羅敷の美なるを悦び、之を寡はんとせしが、羅敷——の歌を作りて之を斥く。古今注「——

省、秦氏女、邯鄲人也、名羅敷、採二桑陌上一、王登レ臺見而悦レ之、因飲レ酒欲レ奪、羅敷乃彈レ箏作二——一歌一」

【陌阡】田間のたてよこのみち。呉均詩「君不レ見西陵田、縱橫十字成二一一一」＝阡陌。

【陌刀】大刀をいふ。古の斬馬剣の類。通鑑、胡注「一一、大刀也、一人可レ殺二數人一」

【陌頭】○みちばた。部撮時「一一楊柳枝、已被二春風吹一」○はちまき（額當）＝額頭。

【陋】ロウ　宥　○せまし（狹小）場所がせまい「一室」「狹一」心がせまい「固一」「淺一」「凡一」○いやし（賤）「賤一」「卑一」身分が卑しい「寒一」家柄がみにくし（醜劣）「醜一」「鄙一」居室、區相傳、貌一心險」○あらくしてあし（疎惡）○兄誠が少くして卑し。證學記「獨學而無友、則孤一而寡聞」○みじかし（短）

【陋劣】陋・賤・卑・僅・鄙・野・固の別は賤（一九七頁三段）の條を見よ。○鄙・惡・醜の別は惡（六六頁四段）の條を見よ。

【陋屋】○いやしきいへ。謙譲時

「一一雨來初濕レ簷」○己が家の謙稱＝茅舍。

【陋巷】いぶせくせまきちまた。○らだな。論、雍也「一簞食、一瓢飲、在二一一一」

【陋恩】いやしくおろか。說苑「桑間之儀、民陋其恩」＝陋劣。

【陋俗】せまきやかた。南史、徐勉傳「負レ杖躡レ屐、遊二遨一一一、臨レ池觀レ魚、披レ林翫レ鳥」＝陋屋。

【陋見】○いやしきかんがへ、せまき意見。＝鄙見・卑見。○己の意見を謙していふ。＝愚見。

【陋識】いやしきちゑ。江淹文「仰賀二陋容一、俯慚二一一一」＝陋見・淺識。

【陋室】いぶせきへや。韓愈詩「一一有二文史一、滿門有二賓等一」唐の劉禹錫に一一銘あり。

【陋質】いやしき性質。宋曾鞏「以二才薄之一一、奉二君子之清職一」

【陋習】いやしきならはし。＝陋俗。

【陋心】せまきこころ。陸贄、登極赦「在二吾儕之一一一、豈取二樂于衆表一」

【陋情】見識のせまき品者。荀子「末世窮年、不免爲二一一一」

【陋小】みにくくして、小さし。南史、徐摛傳「形質一一、若レ不レ勝レ衣」

【陋遇】心がいやしくしてあさし。

唐書、鄭覃傳「博士一一、不ル能ニ正
経旨一」
【陋鄙】ロウヒ　いやし。晉書、卞壼傳「豈
以ニ一一一、不ル能ヲ棄レ親」‖卑賤。
【陋俗】ロウゾク　いやしきならはし。朱熹、
跋ニ三蘇家範一「蓋是一一、非ニ盛典也」‖陋風。
【陋族】ロウゾク　いやしきやから。魏書、劉
文靜傳「臣之一一、出ル自ニ平原一」
【陋屋】ロウオク　みにくきざま。‖醜態。
【陋態】ロウタイ　身のたけみじかし。唐書、
吉頊傳「色黒一一術僕」
【陋劣】ロウレツ　いやしくおとる。蘇軾詩
「凡俗未ニ免熱ニ習氣餘ニ一一」
【陋風】ロウフウ　いやしくしててうすし。潘
尼詩「陋物難ニ一一、識寛在ニ馬首一」
【陋屋】ロウオク　いぶせきいほり。東晉賦、
「抗ニ志蓬蓽ニ一一形一一」

【院】エン　ヰン　感　霰

○かき、かこひ（周垣）○宮室
の垣墻ある者。○やくしょ（官
省）「翰林一」「理藩一」○てら
（浮屠）「寺一」「僧一」「香火一」
○道士の居所「道一」○學者の
居所。又、學校「書一」○娼妓の
居る所「妓一」
【院宇】インウ　宋の宣和中、御前畫院を
置きて能かしめたる者。格古要論
「清風瀟有ニ南宋一一錄八卷ニ」
【院家】インケ　㊀○門跡の次に位する公
き寺院。○門主の隠居所。
【院公】インコウ　小說にて僕の稱（曠耕錄）
‖院子。
【院參】インサン　㊀上皇の御所に參上する。
【院省府署】インショフショ　すべての官省。大
審院・内務省・府廳・警察署などの
類。
【院主】インシュ　○寺の住職。○裁判所・孤兒
院などの長。又は其の持主。
【院政】インセイ　㊀上皇の行はせたまふ政。
【院宣】インセン　㊀上皇・法皇のみことの
り。
【院中】インチュウ　○やしきのかこひうち。
海山記「一一梅梅」○㊀上皇の宮殿
のうち。
【院内議理】インナイギリ　衆議院にて議會の
開會中其の黨派の議員をとりしま
る人。
【院本】インポン　演劇のすぢがき、脚本、淨
瑠璃本。輟耕錄「唐有ニ傳奇一宋有ニ
戲曲唱諢詞說一金有ニ一一雜劇諸宮
調一一一雜劇、其實一也、國朝、一一
雜劇、始盛而ニ一之」
【院落】インラク　かきねにて圍みたるざし
き。落は居。蘇軾詩「歌管樓臺聲細
寂、歌簾一一夜沈沈」

【陝】カフ　ケフ　洽　㊀又、狹に作る、陝とは別

せまし（隘）廣の對。‖陘。

【陘】ケイ　青

○さか（阪）○かぎり（限）○あ
な（坎）○連れる山脈の中斷せ
る處。○かまどのわきの鍋釜
などを載せる所。禮、月令「毀
主於竈一」

【陵】シュン　蒸

○たかし（高）○けはし（險）司
馬相如、上林賦「徑一一赴險」‖
峻。

【陞】ショウ　蒸

のぼる。のぼす（上・登）‖升。
同訓異字　陞・上・升・昇・登等の別
は上（三六頁二段）の條を見よ。
【陞敍】ショウジョ　勲位をのぼせる。
【陞等】ショウトウ　官等をのぼせる。
【陞任】ショウニン　官職をのぼせる。

【陧】セツ　㊀㊁　㊀に同じ

○きびし（急）○けはし（險）
「一陧」
【陧直】セツチョク　性急にして物を容るる能
はず。漢書、酷吏傳「寧人一一刻
深」‖峭直。

【陝】セン　琰　㊀陝とは別

○地名、今の河南省内の地。公
羊、隱五「自一一東者周公主
之、自一一而西者召公主之」○
一西省の略稱。

【陣】チン　ヂン　震

○ならぶ、つらぬ（列）軍隊を
排列する。古、陳に作る。○そ
なへ、ぢんだて（軍隊の設備、
軍營）「一營」「屯一」「背水一」○
すべて隊形をなしてつらなる
「雁一」「鶴一」○戰ふこと一次
を一一といふ。轉じて事物の
若干時を經るのみを一一といふ、ひとしきり。又、にはかに
至るの義とす。韓偓詩「昨夜三
更雨、今朝一一寒」
【陣雲】チンウン　○雲がかたまり起りて兵
陣の如くなるもの。湘中記「衡山遙
望如ニ一一一」‖陳雲。○戰場の空の
もやもや。
【陣營】チンエイ　ぢんや。英雄記「領所ニ攻

擊ニ無ニ不レ敵者ニ、名曰ニ陷ー一ー」‖軍營。

【陣行】ヂン軍隊の排列。李嶠詩「望レ月驚ニ弦影ニ、排レ雲結ニ一ー」

【陣首】ヂンシュ軍陣のさきて。顏延之詩「接レ綺趨ニ一ー、巻レ甲起ニ行前ニ」‖軍前。

【陣脚】ヂンキャク陣營のみはりするもの。宋史、宋琪傳「一ー不レ可ニ輕動ニ、當防ニ横騎奔衝ニ」

【陣代】ヂンダイ圖○古、大名の陣屋を守る武職。○地方の代官。

【陣屋】ヂンヤ いくさに用ふるはた。陳鴻祖詩「黄尤ー一ー」

【陣地】ヂンチ軍隊をしきつらねたる地。‖陣場・戰場。

【陣痛】ヂンツウ 産り經きて時時とぎれる。林逋詩「一ー霧香聚ニ霽鱗ニ」

【陣中】ヂンチュウ 陣列の中。周禮「傳ニ王命於ー一ニ」

【陣圖】ヂンヅ 軍陣を敷く圖。事物紀原「吳子序曰、諸葛孔明天地・風雲・龍虎・鳥蛇、本ニ一陣也、出ニ黄帝兵井之法ニ（中略）後人之爲ニ一ー一者從レ此。

【陣痛】ヂンツウ むしかぶり。出產の前に姙婦の腹のしくしくと痛むをいふ。

【陣頭】ヂントウ 軍陣の先頭。先鋒。王建詩「一ー多是用ニ降兵ニ」‖陣前・軍前。

【陣亡】ヂンバウ うちじにに「一ー兵」文獻通考、四裔考「國忠寺、本唐太宗爲ニ征遼ー一士ニ所レ造」‖戰死・戰殺。

【陣法】ヂンパフ 軍陣の排列法。李靖文「歸所レ制六花ー一出ニ何術ニ」

【陣沒】ヂンボツ うちじにする。宋史、理宗記「一ー者超ニ上姓名ニ」‖戰死・陣殺・陣亡。

【陣役】ヂンエキ 前條に同じ。

【除】ヂョ ㊀ザ・ジョ ㊁チ・ジ

㊀のぞく、さる（去）「一去」「一草」左、隱元「蓼草猶不レ可ー」○はらふ（掃）きよむ（清）「掃ー」○ころす（誅）○をさむ（治）○いゆ（愈）「病ー」○ひらく（開）○きだはし（殿階）「庭ー」班固賦「玉ー彤庭」○には、門と屏との間「庭ー」○まつりのには。○わる、割算ワリザンの乘の反。○新に官に拜する、故官ヤメタルヲを除き去りて新官に就く。‖敍。㊁四月の稱。㊂ひらく（開）詩、小雅「何福不ー」○のぞく（去）「願去ニ君之累ニ、除ニ君之憂ニ」

【除目】ジモク わづらはしき政をのぞき去る。張說詩「一ー園園息」曾鞏文「其治大方務ニ一ー去ニ煩」

【除夜】ジヤ とりのぞきてこぼつ。隋書、蘇威傳「見ニ宮中以ニ銀釦ニ幾釦ニ、因盛陳ニ飾僚之美ニ、上爲レ之改レ容、影飾舊物、悉命ー一」

【除疑】ジョギ うたがひをのぞく。鄧子晨文「臨以ー一」

【除虐】ジョギャク むごき政を除き去る。禮記「謂以ニ寬治ニ民、而除ニ其虐ニ」

【除去】ジョキョ のぞきさる。演雅、雜錯傳「一ニ一除刑ニ」

【除凶】ジョキョウ 凶惡のものをのぞきさる。唐太宗詩「一ニ一報ニ千古ニ」

【除繭】ジョケン わざはひをのぞき去る。舒頔詩「朝廷本ニ一、仁恩立ニ民極ニ」

【除外】ジョガイ 一般の規定よりとりのけること。とりのけ「一ー例」

【除官】ジョクワン 官に任ずる。夢溪筆談「除ニ拜官職ニ謂レ除ニ其爵秩ニ不レ然也、除猶レ易也、以ニ新易ニ舊曰レ除」

【除月】ジョゲツ ○除暦十二月の異名。‖臘月。○ジョ四月の異名。

【除屬】ジョゾク つみをゆるす。史、平準書「入ニ物者補ニ官、出ニ貸者ニ一ー」

【除裏】ジョリ もふくをぬぐ。いみあけ。禮記「期而祭禮也、期而ニ一ー siu也」‖除服。

【除殘】ジョザン 挪揄揚言中郎、歐時紀異「吳中十二月二十七日掃ニ屋塵ニ曰ニ一ー一ニ」

【除日】ジョジツ おほみそか（大晦日）

【除邪】ジョジャ よこしまなるものをのぞき去る。國語「湯以ニ寬治ニ民而除ニ其邪ニ」‖斥邪。

【除授】ジョジュ 官位をさづける。宋史、欽宗記「詔自レ今ー一黜陟、及恩數等事、必參ニ酌祖宗舊制ニ」‖除任・除拜。

【除召】ジョセウ 官に任ずる爲めに召される。宋書、王敬弘傳「敬弘辭レ被ニ一ー、詔便祇奉」

【除夕】ジョセキ おほみそかの夕。風土記「重ニ一ー一、逆レ旦不レ眠」‖除夜。

【除籍】ジョセキ ○官吏の籍をのぞく。宋史、寶鞏傳「被劾告損ニ二百日、御史臺言、當レ一ー」○戸籍中より其の名を除く。

【除期】ジョキ きりまる。左傳「我諸戎、一ニ一我荊棘ニ」

【除族】ジョゾク 圖華族・士族の人が罪により其の族名を除きて平民とせられる。

【除賦】ジョフ わるものをのぞきさる。王褒文「保レ民者除ニ其賦ニ」

【除隊】ジョタイ 現役兵が服役を免除せられる。

【除蟲菊】ジョチュウギク 多年生草、もと歐洲に產す、葉は羽狀にして分裂す、淡綠色、春夏の交、白花を開く、花を曝乾し粉末として蚊・蚤等を除くの效あり、其の紅花の者は除蟲の效なし。

【除雪】ジョセツ 木くひむしをのぞく。周禮「掌レ一ニ一物ニ」

【除拜】ジョハイ 官を授ける。除官參看。‖除授。

【除陌錢】ジョハクセン 唐代の稅法、公私の給與又は物品賣買の際、其の金額の幾割を上納せしめしもの（唐書、食貨志）

【除服】ジョフク 喪服を脱ぐ。いみあけ（忌明）「―ー出仕」
【除拂】ジョフツ のぞく。蘇軾詩「點二檢凡心一早ー一」
【除葺式】ジョシキ 圖 銅像などの工事の出来あがりて始めて其の上の覆はをとりはらふ儀式。
【除名】ジョメイ なかまの中より其の名をのぞく。通鑑、梁武紀「魏高肇奏、除二李平名一」
【除滅】ジョメツ のぞきほろぼす。陳琳文「ー二ー忠正一、寘爲二梟雄一」
【除免】ジョメン 官を免ぜられる。晉唐書、職官志「吏部凡敍階之法、有レ以二封爵一、有レ以二親戚一（中略）有レ以二勞考一、有レ以二ー一ー一」
【除目】ジモク ○官に任じたる報告書。晶字箋「拜レ官曰レ除、除書曰二ー一ー一」五雜俎「一日有二ー一ー一三年損二道心一」○圖 古、大臣以外の臣の官位を進級せしむる公事。
【除門】ジョモン もんを掃除す。圖 語「駒出郊勞、門尹ー一ー」
【除夜】ジョヤ ○おほみそかのよる。又、節分の夜。張說詩「ー一清樽滿、寒庭燎火多」○冬至の前夜。紫微雜記「太平廣記、有二盧貫傳一云是夕冬至ー一、乃知三唐人冬至前一日、亦謂二之ー一一」

【陟】 ㊀チョク ㊁トク 職

㊀のぼす、のぼる（陞登）「升ー」「ー登」詩、周南「ー二彼崔嵬一」○のぼる。すすむ（進）黜の對。高き地位につく。書、舜典「汝ー帝位」○たかし（高）㊁う（得）
同訓異字 陟・上・升・昇・陞・登等の別は上（三六頁二段）の條を見よ。
【陟降】チョクコウ ○のぼると、くだると。宋史、紹興郊祀樂章「風馬雲車、ー一在レ玆」‖上下・升降・登降。○或は天に上り或は人界に下る。詩、大雅「文王ー一、在二帝左右一」
【陟岵】チョコ 陟岵を見よ。
【陟巘】チョギョク 巘にのぼる。詩經「陟則在レ巘、復降在レ原」宋楊詩「ー一沮洳深、漸愛所レ歷低」
【陟岵】チョコ 詩經魏風の篇名、孝子が政府の役夫となりて遠方に行き、山に登りて故郷の父母を慕ふ意を詠ず、岵は草木多き山。詩、魏風「陟二彼岵一兮、瞻二望父一兮、陟二彼屺一兮、瞻二望母一兮」屺は禿山。
【陟升】チョクショウ たかきにのぼる。陸雲賦「ー一焦亮、降二涉洪波一」
【陟方】チョクホウ 天子の崩御、天に昇る義。書、舜典「五十載、ー一乃死」‖升遐・登遐。
【陟罰】チョクバツ 官位をのぼせると、わとし罰すると。出師表「ー一臧否二不レ宜二異同一」

【陸】 トウ 沃

又、斗・阡に作る
○にはか（頓）「ー然」杜甫、義鶻行「ー上捉二孤影一」○けはしくそばだつ（峻立）

【陛】 ㊀ヘイ ㊁ヒ 霽 薺

○きざはし、きだはし、天子の宮殿の階段。戰國策「秦舞陽奉二地圖匣一、以次進至ー一」○ー下は天子を呼ぶ敬稱。○ー一は衆多層次の貌。韓愈、曹成王碑「蹴蹴ー一、實取實似」‖比比。
【陛衛】ヘイエイ 天子のきざはしのもとを護衛する兵士。後漢書、馬援傳「盛陳ー一一、以延レ接レ入」
【陛下】ヘイカ ○天子を稱する語、直接に天子をさすを避けて、其の階下に在る護衛兵をさして告げ、卑より尊に達せしむる義。史、秦紀「海内賴ニー一神靈一」○圖 天皇・皇后・太皇・皇太后の敬稱。
【陛賀】ヘイガ きざはしの下にてよろこびを申し上げる。魏書、沮渠蒙遜傳「萬國來庭、百辟ー一」
【陛覲】ヘイキン きざはしの下にて天子に拜謁する。後漢書、禮儀志「朝賀畢、見二藩郡計吏一皆ー一」‖陛見。
【陛戟】ヘイゲキ きざはしの下にてほこをとりてまもる。漢書、霍光傳「期門武士、ー一陳二列殿下一」
【陛見】ヘイケン 天子にまみゆる。後漢書、戴封傳「公車徵ー一、對策第一、擢拜二議郎一」
【陛坐】ヘイザ 天子の御坐の側。儀禮、燕禮「周廬設ニー一之側一、因レ斯以談、所二以保一身全一レ德、其慈レ儉於レ此乎」
【陛辭】ヘイジ 天子に御いとま申し上げて都門を出る。
【陛楯郎】ヘイジュンロウ 天子のきざはしの下にたてを持ちて護衛する兵士。史、滑稽傳
【陛對】ヘイタイ 天子に謁見する。宋史、徽宗紀「諸監司未レ經ニー一、毋レ得二之任一」‖陛見。
【陛列】ヘイレツ 陛下の下に並び列なる。宋書、禮志「其在ニー一、及備二鼓吹一」

【陋】 陋（阜部六畫）の本字。

【陰】 八 侵

㊀イン・オン ㊁アン・オン ㊂イン・オン 侵 覃 沁

㊀易學上の語。靜柔・止閉・伏藏・後北・地女・臣月・夜などの如くすべて消極性の意を有するもの。陽の對。○おほひ（蔭）○日かげ、日光のあたらざる所。又、物におほはれ隱れる處

「樹ー」「花ー」○うつりゆく日かげ「光ー」「すー」「分ー」○くもる。くもり（曇）晴れず雨ふらず。詩、都風「以ー以雨」晴の對。○くらし（闇・幽冥）○ひそか（私）祕密にして人に知らさぬ。戰國、齊策「齊秦之交ー合」○しめる。しめり（濕）○よる（夜）くれ（暮）やみ（闇）○うしろ（背後）「碑ー」○きた、山の北「山ー」○みなみ、水の南「淮ー」○あさぐろ（淺黑）○水の精。○男女の生殖器。○電氣又磁氣の消極。○ー山は山西省東北部の長城以外に在る山脈の名。㊀天子が喪中にこもり居るいほり（喪廬）本、闇に作る。論、憲問「諒ー三年不言」‖諒闇。㊁うづめかくす（煙藏）○おほふ、おほはら（覆蔭）

解說 陰は闇なり、阜に从ふ會の聲、會・陰は古文の陰の字。陰は假字。

【陰嗚】イン　胸が噎び塞がる。後漢書、賈逵傳「ー一不レ得レ對」

【陰惡】アイアク　人の知らざる惡事。管子七法「人爲ニー一、鬼神治レ之」‖陰德。

【陰痿】イン　男子の勢（生殖器）がなえて力なし、婦人を御することの能はざる病。じんきょ「史、五宗世家」‖陽痿。

【陰道】イン　うすぐらくしげりあふ。六一詩「綠ー見ニ林樹ー一、池水窈然」

【陰陰】イン　○天氣のくもれる貌。蘇軾詩「ー一日光澄」○茂りてくらき貌。王維詩「ー一夏木轉ニ黃鸝ー」

【陰隲】イン　かくしてあらはさず。左傳「常行ニ讒疾ー一爲レ惡也」

【陰羽】ウイン　鵜の異名。藝林伐山「易曰、鳴鶴在レ陰、傳曰、鴻鵠鵬レ陽、故汲冢書、曰レ鵠曰ニー一鴻寶、名ニ陽鳥ー」

【陰雨】ウ　天くもりてあめふる。詩、小雅「其風淒苗、ー一膏レ之」

【陰鬱】ウツ　○むしあつし。うったうしい（鬱陶）元稹文「通州之地、蠻穢卑濕、蒸燠ー一」○心がふさがりて陰氣なり。

【陰雲】イン　あまぐも。宋書、五行志「ー一不レ雨」

【陰壑】エイン　空くもりて風吹く。東陽夜怪錄「方酣ニー一、不レ知ニ時之早晚ー」劉基詩「白日慘ニー一ー」

【陰翳】エイ　○うすぐらくくもる。陳子昂詩「陽彩皆ー一、親友盡飮造」○木の茂りてうすぐらきかげ。朱熹詩「雨餘鳴蜩歇、衆綠翳ニー一ー」

【陰煙】イン　くもる。劉長卿詩「徘徊空暝色、淡澹成ニー一ー」

【陰岡】カウ　日のかげの岡。王粲、大暑賦「帝ニ九嵕之ー一ー」

【陰室】インシツ　男子の生殖器。‖男根。

【陰黯】カイン　心がねぢけてわるがしこし。唐書、魚朝恩傳「ー一養ニ納韶令ー」

【陰蓄】カイン　かくれたる惡事。韓愈詩「孫沈固含貴、本以儲ニー一ー」

【陰乾】カンカン　かげぼしにする。抱朴子「ー一百日」

【陰寒】カン　○陰氣と寒氣と。詩經、豳「鴟鴞鴟鴞、既取ニ我子ー一、無レ毀ニ我室ー」○天がくもりてさむし。後漢書、劉毅傳「ー一不レ暖」

【陰戰】インセン　ひそかにぬんことをこひねがふ。既は希望。宋史、李清臣傳「帖ノ才操遣、ー一ニ稍用ニ首發ニ相述之說ー」

【陰鄙】インヒ　婦人のをしへ。晉書、列女傳「具宣ニ閨範ニ有レ裨ニー一ー」‖陰教・女訓。

【陰火】クワ　○おにび。‖陰燐・鬼火。○海水中の鬱氣が陰時の時に光を放つもの。木華、海賦「ー一潛然」

【陰晦】クワイ　くもりてくらし。後漢書、許楊傳「天火ー一」

【陰款】カン　凹入の文字にて銘をきざみたるもの。韓非錄「識ニ久金數ー一、則成ニー一、以ニ其刻畫省成ニ凹也ー」

【陰刑】イン　勢を割く刑、宮刑（四九六頁二段）に同じ。漢書、晁錯傳「除ニ去ー一ー」

【陰計】イン　祕密のはかりごと。戰國策「爲レ公竪ニー一ー」權書「能因ニ敵國之使ー而探ニ其ー一ー」‖陰謀。

【陰惠】イン　人に知らさぬやうに、恩惠を施す。齊書、張敬兒傳「推ニ此ー一、何慙ニ後施ー」‖陰德。

【陰霓】ゲイ　くもれるにじ。沈佺期詩「火雲燕ニ海鶴、陽雨濕ニー一ー」

【陰教】カウ　女子の教育。晉書、后妃傳敘「ー一治ニ于宮闈ニ、淑慝臨ニ于區域ー」‖女教。

【陰見】ケン　ひそかに面會する。戰國策「於レ是ー一ニ魏之君ー」‖私見。

【陰險】ケン　わるぎありておそろし。‖姦險・讒險。

【陰溝】コウ　地の中を通ずる溝。‖暗渠・闇渠・地下水道。

【陰黑】コク　うすぐらし。張籍詩「雨中長不レ出、ー一裴連レ宵」

【陰朔】サク　北方のえびすの地。王僧孺、感遇詩「蜀尤卓ニ長空ニ、漢兵出ニー一ー」‖幽朔。

【陰殺】サツ　ひそかにころす。漢書、高祖紀「使ニ人ー一ニ殺ニ帝江陽ニ、第九也」

【陰慘】サン　陰氣にしてかなしみいたむ。宋史、樂志「配ニ天作レ極、ー一陽舒ニ張衡、西京賦「夫人在ニ陽時ー則舒、在ニ陰時ー則慘、此ニ乎人一者也」

【陰祀】シ　陰に屬する神。周禮「陽祀用ニ騂牲ー毛レ之、ー一用ニ黝牲ー毛レ之」

【陰事】ジ　○祕密のことがら。史、儒陵井傳「有ニ能探ニ得趙王之ー一者ー」‖祕事。○後宮の事。妃が天子に進御すること。周禮、天官「掌ニ王

之ー＝陰合」

【陰識】インシキ　古器の文字に凹凸の別あり、凹を＝＝といひ、凸を陽識といふ。洞天清錄「三代用＝＝」↓識二之陽識一、其字凹入也、漢以來減用二陽識一、其字凹入而陰識一、其字凸」一說に陰字凹入の者を款、陽字凸出の者を識といふ（游宦紀聞）

【陰柔】インジウ　うはべは柔順にして人をそこなふ心ある奸人。唐書、李義甫傳「以＝＝害レ物、謂二之李猫一」

【陰翳】インエイ　けじらみ。＝毛蟲。

【陰溫】インオン　ひかげでしっける。

【陰騭】インチツ　○陰は定、天が冥冥の中にありてひそかに人民を安定する。書、洪範「惟天＝＝」○天がひそかに人類の行爲を見て賜福を下す（袁了凡、陰騭文）

【陰森】インシン　○うすぐらくものさびしき貌。温庭筠詩「霊壁＝＝九子堂」○木が茂りてくらし。孟浩然詩「萬木何＝＝」

【陰症】インショウ　外にあらはれざる病氣。

【陰助】インジョ　他人に知らさずしてひそかにたすける。唐書、楊綰傳「持二異議一、宰相常衰＝＝之」

【陰政】インセイ　後宮のまつりごと。南史、后妃傳論「轉二興君德一、變二理＝＝一」

【陰晴】インセイ　くもると、はれると。徐積詩「但恐舟行隨二早晚一、此時秋色半＝＝」

【陰翳】インエイ　翳に陰陽あり、＝＝は大呂・應鐘・南呂・函鐘・小呂・夾鐘を謂ふ（周禮）

【陰宗】インソウ　月の異名。後漢書、蔡邕傳「日爲二陽宗一、月爲＝＝一」

【陰賊】インゾク　そこいちわるく人を害する。史、遊俠傳「少時＝＝」

【陰地】インチ　日光のあたらさる地。王建詩「古苔＝＝冷凄凄」

【陰中】インチウ　○ひそかに人をおとしいれそこなふ。蘇軾文「臣豈敢持二聖公道之知一、而做二寡人＝＝之禍一」○秋。三統曆「秋爲＝＝一、萬物以成」

【陰蟲】インチウ　○秋鳴くむし。皇甫冉詩「＝＝切不レ堪レ聞」○蝦蟆。孫綽、雲虹賦「雲虹吐注、＝＝承レ流」

【陰重】インチウ　○性重厚にして人の陰事をもらさず。史、周仁傳「爲レ人＝＝不レ泄」○ひそかにおもんずる。

【陰德】インドク　○人に知られざる善き行。漢書、于定國傳「我治レ獄多＝＝」○地の徳。種じて結徳・婦道の義とす。禮、昏義「天子理二陽道一、后治二＝＝一」‖坤德。

【有二陰德一者必有二陽報一】インドクアルモノハカナラズヨウホウアリ　陰徳は已一人のみ之を知りて他人の知らざるをいふ。北史、李士謙傳「士謙躬處二節儉一、每以二服施一爲レ憂、或謂二士謙一、子多二陰德一、答曰、夫貧二陰德一、其猶二耳鳴一、己獨知レ之、人無二知者一、今吾所レ作、吾子皆知、何陰德之有」

【陰德陽報】インドクヨウホウ　ひそかに徳を修むる者は、人は知らずとも、天が之に報いて幸福を授ける。淮南、人間「有二陰德一者、必有二陽報一、有二隱行一者、必有二昭名一」

【陰慝】インドク　○陰惡に同じ。○物を害する天地の陰氣。齊民要術「陽氣始動、＝＝將レ萌」

【陰嚢】インナウ　きんたま、ふぐり。

【陰雲】インウン　くもりてつちふる。唐綸詩「苦霧沈二山影一、＝＝發二海光一」

【陰房】インバウ　○薄暗きへや。杜甫詩「＝＝鬼火青」‖陰室。○牢獄。文天祥、正氣歌「＝＝閉二夏火一」

【陰報】インポウ　人に知らさぬやうに、むくいをする。史、平津侯傳「弘爲レ人恣忌、外寬内深、諸嘗與レ弘有レ郤者、雖二詳與善一、＝＝其後一殺二主父偃一徙二蒲仲舒於膠西一、皆弘之力也」

【陰庇】インヒ　かばふ。子部文「私賜以＝＝之地、永爲二子孫之狀一」‖庇陰。蔭庇。

【陰謀】インボウ　ひそかに企つるはかりごと。史、陳丞相世家「陳平曰、我多二＝＝一、是道家之所レ禁」

【陰木】インボク　秋冬に生ずる木。一說、山の北に生ずる木。周禮、山虞「仲夏斬二＝＝一」

【陰密】インミツ　心に深くかくしてあらはさず。唐書、李林甫傳「性＝＝、誅殺不レ見二喜怒一」

【陰陽】インヨウ　易學上の語。天地の間の萬物を造り出す二つの氣。繹名「陰、闇也、氣在レ内、奥蔵也、陽、揚也、氣在レ外、發揚也」

【陰陽二理】インヨウニリ　天地の道を調和する、宰相が天下を治むるに譬ふ。理は治。書、周官「玆惟三公、論二道經一邦、——」

【陰陽爲レ炭分萬物爲レ銅】インヨウタンヲワカチバンブツヲドウトナス　天地が萬物を造り出すを、冶工が銅を以て物品を作るに譬ふ。史、賈誼傳「天地爲レ爐兮造化爲レ工、——」

【陰陽家】インヤウカ　天文・暦數・方位等に本づきて吉凶禍福を卜ふ學派、古の九家者流の一。漢書、藝文志「——風。○さびしくつめたき風。張九齡詩「此時腸切＝＝生」

【陰伏】インフク　人のかくしおけることがら。漢書、楊惲傳「好發二人＝＝一」‖陰私。

【陰蔽】インヘイ　かくしおほふ。國語「後無二＝＝一、先無二陽察一」‖隱蔽。

者流、盟出二子義和之官一」
【陰陽之交】インヤウノコウ　陰陽二氣が互に交り合ふ。禮記「人者天地之德、——、鬼神之會、五行之秀氣也」春秋元命苞「陰陽交爲二紅霓一」
【陰約】インヤク　ひそかに約束する。韓非子「知伯一ニ——綱挽、將二以伐一レ趙」＝密約。
【陰諭】インユ　ひそかにさとす。漢書、李陵傳「拠二其屈一ニ——一レ之」
【陰雷】インライ　さびしくふるながあめ。魏書、組楷傳「雲雨一ニ、動經二旬月一」＝陰霪。
【陰燐】インリン　おにび、李益文「君國不レ怪二——一磯一」＝鬼火・陰火。
【陰陵】インリョウ　山の名、安徽省和縣に在り、北は江湖縣の界に接す、卽ち項羽の道に迷ひし處。
【陰沴】インレイ　わざはひ。沴は妖氣。唐書、李石傳「帝曰、人心未レ舒何也、石曰、刑殺太甚、則致二——一」＝妖沴。
【陰禮】インレイ　○婦人の禮。周禮、內宰「以二——一敎二六宮一」○周代、男女婚姻の禮。周禮、大司徒「以二——一敎レ親、則民不レ怨」
【易二陰魔華一】インマヲカフ　後漢の光武帝が、微賤なりし時に、南陽の人陰麗華といふ美人を娶りたしと思ひしに遂に其の望みを果せり、陰皇后是れなり。後漢書、光烈皇后紀「光武陰皇后南陽人、名麗華、初光武聞二后美一、心悅レ之、後重二長安一見二執金吾車騎盛一、因歎曰、仕宦當レ作二執金吾一、娶二妻當レ得二陰麗華一、卽位立爲レ后」
【陰層】インソウ　太陰層（第二三頁圖表）の略語。＝霧層。

【陷】カン　陷　又、焰に作る。
○おとしあな（穽）獸などを捕へる爲めに掘りし穴「一阱」○おちいる、おつ、おちこむ、しづむ（沒入）○おとしいる、おとす。孫子「投二之亡地一然後存、二之死地一然後生」人を地に陷れす。故ゝらに人を罪におとす「檻一」「誣一」○人をあざむく、そこなふ（害）○あざむかれる。○あやまち（過失）○くづる（隕）○くづされる、やぶられる。○せめやぶる。破壞する「一城」「攻一」○かく（少缺）不足する。
【陷阱】カンセイ　陷は下なり、阱に從ひ臽に從ふ臽も亦窖、臽に從ひて陷に作り、又、刀に從ひて陷に作るは竝に非。【陷穽】カンセイ　つよき敵をやぶる。韓非子「一一之卒」
【陷害】カンガイ　わざはひにおちいる。忠經「小人不レ常、所二以自陷一其害一」
【陷阱】カンセイ　かたき城をぬく。史、灌夫傳「戰常一ニ——一」
【陷入】カンニフ　はまりこむ。左傳「無レ令二奧師一ニ——君地一」
【陷沒】カンボツ　おちいる。晉書、山簡傳「及二洛陽一ニ——一、簡又爲二賊敗疑所一レ逼」
【陷落】カンラク　○城がおちいる。○土地が自然におちこむ。
【陷敵】カンテキ　敵陣を攻めやぶる。陳書、周迪傳「攻レ城先登一レ一」
【陷陳】カンチン　敵陣をおとしいる。宋史、狼令孫傳「性仁恕、嘗語レ人曰、我從軍三十年、大小四十餘戰、多二摧堅一レ陳、未三妄殺二人一」
【陷溺】カンデキ　○水におぼれる。○酒色などにふけりて心がすさむ。孟子「非二天之降一レ才爾殊一也、其所二以一ニ——其心一者然也」＝沈溺・耽溺・覺溺。
【陷阱】カンセイ　○ほとり（邊）○國ざかひ（邊疆）「邊一」○あやふし（危）

【陬】ソウ　虞　遇　スウ
○すみ（隅）「海一」「荒一」「邊一」○春秋時代の魯の地名、孔子の生地。史、孔子世家「孔子生二魯昌平鄉一邑一」＝鄹。○正月の異名。爾雅、釋天「正月爲二——一」「孟一」
【陬遹】ソウエツ　とほきみなか。＝遹陬・窮陬。
【陬月】スウゲツ　正月の異名。爾雅「正月爲レ陬、二月爲レ如」

【陶】㊀タウ　豪　㊁エウ　蕭
㊀する、するもの、やきもの、せともの（瓦器）○せともの をつくる。○轉じて造る、化する、せともの を造りなす如く人を敎へみちびく「薫一」「一冶」○やしなふ（養）○ただす（正）○のぶ（暢）○をか、二重になれる丘。○頑固なる貌。○うれふ（憂）○よろこぶ（喜悅）心の中に悅ぶ。＝檮、檮弓「人喜則斯一」○葡一は果の名。＝葡萄。○たのしむ（樂）○鬱一

は真シナみ思ふ貌。書、五子之歌「ー乎余心」㊁皐ーカウは舜の臣。＝咎繇。○ーエウは相隨ひ行く貌。又、和ぎ樂む貌。㊂ーは驅逐する貌。詩、鄭風「叡介ーー」

【陶狗】タウク　陶朱公と、猗頓と。共に古の富者。抱朴子「夫結綠垂棘、非ニーニ不レ能レ市也」＝陶朱猗頓之富。

【陶鑄】タウヂュ　心がむすぼれる。樂廣賦「戚ニ滯女之ーー一兮、余安能乎置レ斯」＝鬱陶。

【陶淵明】タウエンミン　名は潛、字は元亮、晉の潯陽の人、侃の曾孫、性高尚恬貴、閑居にして詩文を善くす、若て五柳先生の傳を作り、自ら況ふ、性菊を愛し「採ニ菊東籬下一、悠然見ニ南山一」の句有り。宋、命を受くるに及び、劉裕擅ニ強せども就かず、酒を樂みて自ら適す、元嘉四年卒す、年六十三、世に靖節先生と稱す、五斗米（五斗三段）參看。

【陶家】タウカ　○やきものし。晉紀指南「燒瓷家曰ニーーニ」○陶淵明の家。又陶淵。

【陶侃】タウカン　字は士衡、晉の潯陽の人、元帝の時、廣州刺史となる、州に在りて朝に百壺を窰外に運び、暮に百壺を窰內に運ぶ、曰く吾方に力を中原に致さんとす、故に勞を習ふのみと、明帝の時、征西大將軍に拜し、蘇峻を平けて功あり、太尉に拜し、長沙公に封ぜらる。

【陶器】タウキ　やきもの、せともの。

【陶均】タウキン　やきものをつくるに用ふる具、ろくろ。晉樂章「至仁齊」民育レ物、操ニーーニ」＝陶鈞。

【陶鈞】タウキン　鈞は陶工の模型の下に備へて圓轉する旋盤の能く大小の器を製す、よりて人物を養成するに喩ふ。雅琥詩「三千碩士在ニーーニ」又天下の民を治むるに喩ふ。漢書、鄧陽傳「聖王制レ世御レ俗、猶ニ化ニ於陶ーーニ之上ニ」

【陶化】タウクワ　善にみちびき化する。皇甫規、女師箴「昔在軒轅、ーー正刑、雖ニ宇宙開ニ以臨ニ百官ニ」唐高宗、祀ニ亳山ニ玉牒文「凝ニ命為ニ姓、ーーニ八紘ニ」

【陶瓦】タウグワ　やきもののかはら。唐書、宗室傳「教ニ民作ニーーニ」

【陶硯】タウケン　陶製のすずり。硯史「相州土人自製ニーーニ」

【陶甄】タウケン　陶器をやきつくる具。陶鈞に同じ。轉じて、民を治めて善に化せしむる義。晉書、樂志「弘ニ濟區夏ニーーニ義方ニ」

【陶大瓦雞】タウダイクワケイ　陶製の犬と、瓦製の雞と。無用の物に喩ふ。會稽子「陶犬無ニ守レ夜之警ニ、瓦雞無ニ司レ晨之益ニ」

【陶弘景】タウクワウケイ　字は通明、南北朝の時の秣陵の人、六論の時、衰を以て葬を稱す（史、貨殖傳）

【陶然】タウゼン　心地よく醉ふ貌。陶潛詩「擧ニ盃一絕ニーー自樂」

【陶然亭】タウゼンテイ　北京の城南に在り、清の江藩之を建つ、一名江亭、士夫遊宴の所と爲す、白居易の「更待ニ菊黃家釀熟ニ與レ君一醉一陶然」の句に取りて名づく。

【陶潛】タウセン　陶淵明を見よ。

【陶陶】タウタウ　○かり逐ふ貌。詩、邶風「清人在レ軧、駟介ーー」○和ぎ樂しむ貌。詩、王風「君子ーー」○相隨ひ行く貌。禮、祭義「ーー遂遂、如レ將ニ復入一然」○陽氣の盛んにのびる貌。楚辭、懷沙「ーー孟夏兮、草木莽莽」

【陶唐氏】タウタウシ　帝堯初め陶に居り、後ち唐に徙る、故に——と稱す。

【陶土】タウド　陶器をつくる原料のつち。

【陶冶】タウヤ　○やきものしと、かぢやと。孟、公孫丑「以レ聖易ニ賢器一者、不レ爲レ厦ニーーニ」○轉じて陶工の器を造り鍛工の金を鑄る如く、人才を育成する義。漢書、董仲舒傳「或天或養或仁或鄙、ーー而成レ之」＝陶成、陶鑄、薫陶。

【陶泓】タウワウ　陶製の硯。又、廣く硯の異名とす。韓愈、毛穎傳「與ニ弘農ーーニ友善」

【陳】㊀チン・ヂン　㊁チン・ヂン　眞

㊀つらぬ、ならぶ(列)○しく(布)○のぶ(述)「ー情」「ー述」○はる(張)○ふるし(故)「ー腐」ひさし(久)○おほし(衆)○みち(徑)○國の名、周初、舜の子孫を封ぜし地。今の河南省開封府以東より、南、安徽省亳州に至る地。○朝代の名、南北朝代に一新先が建てし國、五世三十三年にして隋に亡ぼさる。○ならび、つら(列次)下ーは後列。史、李斯傳「所以飾後宮充下ー」㊁ちんだて。軍隊の行列「軍ー」論、衛靈公「問ー於孔子」‖陣。

【陳】ヂン　陣・遵・聯・羅・列の別は遵(一九頁六段同段)の條を見よ。

○ヂン陳・述・宣・展・舒・申・伸・信・延等の別は述(一九頁二段)の條を見よ。○ヂン陳・古・故・舊○陳は久也、物のふるびて、ひねになるなり、陳艾・新陳代謝などと用ふ。○古は今に對す、古人・古聖・古賢は、皆昔人なり。○故に新に對し、舊の字に近し、故人は猶知ヂンの人なり、殿子殿者、光武之故人也の如し、故大納言、故宰相などの故は、物故の意にて、死去の後にいふなり。○酉は新に對す、故舊と連用す、古詩・古歌は、わが邦時に作りし詩歌なり。

【陳賀】ヂン　かさなりてたなびけるくも。湘中記「衡山遙望如ニー一ー」‖陣雲。

【陳葉】ヂン　ふるくしてくされたる葉。劉孝綽詩「蘭芳隔ニー一、萩苗抽ニ故叢一」

【陳基】ヂ　どいしをならべる、どをうつ。禁暴文「夫張ニ局一ー一、取ニ法武備一」

【陳啓】ヂイ　まうし上げる。梁武帝文「宜レ有レ所レ論、可ニ入ー一」

【陳玄】ヂン　墨の異名。陳は古、玄は黒。韓愈、毛穎傳「毛穎與ニ絳人ー一友善」唐代絳州より墨を貢す、故に絳人といふ。

【陳言】ヂン　○陳腐なる言語の陳宿、答ニ李翊書「惟ー一之務去、其去乎其雷哉」○ことばをのべる。

【陳獻章】ヂンケンシャウ　字は公甫、石齋と號す、廣東新會の人、明の正統十二年の舉人、薦を以て翰林檢討を授けんとす、仕へず、白沙に隱れ、性命の學を講ず、其の學、靜を以て主となし、學者を教ふるに但端坐澄心せしむ、頗る禪に近し。門人白沙先生と稱す、宰相山皆て天下の人物を訶して、白沙を以て第一となす、緒餘詩筆を著くす、弘治十三年卒す年七十三、著す所る白沙集十二卷あり。

【陳告】ヂン　のべつげる。王令詩「帝此不ニ我陋一、敎陳ニ日ー一」

【陳設】ヂン　ふるきこくもつ。呂覽「新設熟而ー一敝」‖陳設。

【陳蔡之厄】ヂンサイ　孔子が陳蔡の地にて厄難に遂はれしをいふ。史、孔子世家「孔子遷ニ于蔡ニ三歳、吳伐レ楚、楚救レ陳、軍ニ于城父ニ聞ニ孔子在ニ陳蔡之間ニ、楚使ニ人聘ニ孔子ニ、孔子將ニ往拜禮ニ、陳蔡大夫謀曰、孔子賢者（中略）今楚大國也、來聘ニ孔子ニ、孔子用ニ於楚ニ、則陳蔡用レ事大夫危矣、於ニ是乃相與發ニ徒役ニ圍ニ孔子於野ニ、不レ得レ行、絶レ糧、從者病、莫ニ能興ニ、孔子講誦弦歌不レ衰」

【陳詩】ヂ　多くの詩を取りて觀る。禮記「命ニ太師ー一以陳ニ民風ニ」

【陳舟】ヂウ　ふねをならべる。漢書、朱買臣傳「東越王居ニ大澤中ニ、今發ニ兵浮レ海、直指ニ泉山ー一、列レ兵、挾ニ參南行、可ニ破滅ー一也」

【陳柔】ヂウ　のべつくす。吳志、孫權傳「各自以レ不レ學ニ民事ー一、不ニ肯便有ー一レ所ニー一ニ」

【陳人】ヂン　陳腐無用の人の譬。又自ら謙遜していふ。莊、寓言「人而無ニ人道ー一是之謂ニー一ニ」

【陳謝】ヂシヤ　○わけをいひてあやまる。附史、何承天傳「孝表ー一」○禮をのべる。

【陳狀】ヂジヤウ　有樣をいひのべる。漢書、劉向傳「願賜ニ清燕之閒ー一、指ー一ー一」

【陳情】ヂン　事情をいひのべる。楚辭「ー一以自レ行兮」

【陳情書】ヂンジヤウシヨ　事情をのべ記したる文書。

【陳酒】ヂウ　さけをならべてもてなす。周禮「賓客之ー一、亦如レ之」

【陳述】ヂンジユツ　のべる。五代史、韓熙傳「獨孤前自ー一」‖陳說。

【陳書】ヂン　三十六卷、唐の姚思廉、勅を奉じて撰す、陳代の史事を記す。

【陳勝吳廣】ヂンシヨウゴクワウ　秦の二世の時、陳人陳勝・吳廣の二人、首として秦に叛く、よりて邪の端緒を發するを——を謂すといふ「史、陳沙世家」

【陳說】ヂセツ　ところをのべあらはす。薛仲舒文「故輒披レ心ー一」

【陳迹】ヂンセキ　古き事のあと。王羲之、蘭亭記「俛仰之間、已爲ニ一ー一」‖陳跡・陳蹟。

【陳設】ヂンセツ　ならべまうける。後漢書、楊球傳「球爲ニ司隸校尉ー一、雅門閉レ之、莫レ不ニ屏氣ー一、陳ニ奢飾之物ー一、各飾ニ牆不ニ敢ー一ー一」‖陳列。

【陳說】ヂセツ　のべとく。易經、疏、記ー一卦者、ー一ー一八卦之德、象變化、及法象所ニ爲也ー一」‖陳述。

【陳訴】ヂンソ　事情をのべてうったへる。金史、哀宗紀「毋ニ致閉防護、禁ニ有

レ寇者ーー」

【陳述】チン　いひわけする。いひわけ。‖辯疏、陳辯。

【陳套】チンタウ　ふるし、套は套。‖陳腐。

【陳陳相因】チンチンサウイン　ふるくくされたる套がつみかさなる、世治り年豐かなる狀にいふ。史「太倉之粟、——」

【陳白沙】チンハクサ　陳獻章を見よ。

【陳蕃下榻】チンハンタフタフ　賓客に敬するにいふ。蕃客を特に一榻を懸け置きて、徐穉（孺子）の來る時は之を下して留待せし故事に出づ。後漢書、陳蕃傳「爲二豫章太守一、以二禮待一徐穉一、郡二功曹一、性方峻、不レ接二賓客一、唯穉來、特設二一榻一、去則懸レ之」

【陳皮】チンピ　蜜柑の皮をほしたるもの、藥用又家庭に用ふ。

【陳布】チンフ　しきならべる。宋史、藝文志「元正受朝、大朝會、ーニ一舉士子衍左右ーー」

【陳腐】チンフ　ふるくなりてくさる。宋史、食貨志「鹽ニーー」

【陳米】チンマイ　ふるきこめ。李覯詩「撫レ錢貫二腐陳一、乞レ火蒸ニーー」

【陳平宰レ肉】チンピンサイニク　漢の陳平が鄕里の社會に料理人となりて、肉を平均に客に頒ち、我天下の宰相たらば、亦此肉の如く國家を公平に治めんといひし故事。史、陳丞相世家「里中社、陳平爲レ宰、分レ肉甚、甚均、父老曰善、陳孺子之爲レ宰、平日、睦乎、使二平得一レ宰二天下一、亦如二是肉一矣」

【陳編】チンペン　ふるきしょもつ。‖舊編、遺學解「窮ニーー以益編」‖古書。

【陳賄】チンワイ　理由を述べて討ひらきする。‖陳疏。

【陳重】チンチョウ　重と厚と。二人は後漢の人にて友誼極めて厚し。後漢書、獨行傳「鄕里爲二之語一曰、陳重自謂レ重、不レ如二雷與一陳」

【陳葉作レ歡】チンエフサククワン　綾の陳葉は文章を飾るに最も緻文を作るに長ず。梁書「吳均曰、沈作二詩書及徐二庾成一、王朝作二太組一、太組作二頭風一、是日疾發、風頭疼所レ作、頓然而起曰、此語非レ病、疑加二陳葉一、徐文是文選に載す」

【陳列】チンレツ　ならべつらぬ。杜甫文「播二其遺書一以ーー、從二乎節奏一以進退」

【陳訴】チンソ　心の中をいひあらはす。吳志、周魴傳「發二露輸レ情、ーニ一肝膈ーー」‖布露。

【陳跡】チンセキ　のべあげつらふ。舊唐書、魏徵傳「臣以二事有一レ不レ可、所二以ーーニ一」

【陪】ヘイ　㊥　通音　ベイ

○かさなるつち（重土）○くはふ。ふくはは（加）○かさぬ。かさなる（重）ー臣は臣の臣。○ます（增益）みつ（滿）○たすく（助、輔）○はべる、したがふ、ともなふ（倅）玉たる者に隨伴する「奉ー」○たすけ、そへども。○またけらい（家臣）臣のまた臣「ー臣」「ー隸」○つぐなひかへよ（償還）竊軾詩「舊逋應許過時ー」今は賠に作る。

【陪侍】ヘイジ　君主の側にはべる。魏書、楊播傳「遐齡二傳師導之美一、退閑二聖祖之恩一、陪侍ーー之式」‖侍候。

【陪臣】ヘイシン　○またげらい、臣の臣、天子の臣たる諸侯の臣。論、季氏「ー執二國命一、三世希レ不レ失矣」○諸侯の大夫が天子に對していふ自稱【曲禮】

【陪審】ヘイシン　民間より選出して訴訟の審判に參與せしむ。

【陪從】ヘイツヨウ　貴人にしたがひゆく。柳公綽詩「飛レ蓋赤ーー」

【陪乘】ヘイジョウ　はべる。漢書文帝文「當レ乘ーニ車參乘ー」

【陪乘】ヘイジョウ　そひのり、貴人に陪從して其の車に同乘する。又其の人。魏策「臣入期編レ席、出則ーー」‖驂乘。

【陪食】ヘイショク　貴人にはんべりて食事する。おしょばん。‖侍食。

【陪席】ヘイセキ　目上の人と同席する。

【陪接】ヘイセツ　貴人にはべり近づく。宋史、高麗傳「遣二劉逖一、日夕ーー、尤伸二敬好一」

【陪都】ヘイト　國都外に別に設けたるみやこの名。漢、清の孝天の如き皆是れなり。李白詩「攀龍登二陪都一、仰望二金華殿一」‖陪京。

【陪殺】ヘイサツ　物を增してあつくする。左、定四「昭二四分之明德一、分二之土田ーー」

【陪侍】ヘイジ　しもべ。後漢書、陳元傳「百姓ーー皆非二其罪一」‖隸屬。

【陪從】ヘイジュウ　天子の御車につきしたがふ。盧諶詩「隨ーー清道旅」‖隨扈。

【陪隸】ヘイレイ　しもべ。後漢書、袁紹傳「援二於ーー之中一」‖陪臣。

【陪僕】ヘイボク　しもべ。荀勗、四簡奏議「胥子ーー、應玆復轄」

【陴】ヒ　㊥

ひめがき、ついぢ、城の上の女牆の左、成十五「閉門登ーー」‖俾倪、睥睨、埤堄。

【陴隘】ヒアイ　しろのひめがきと、ほりと。唐書、李晟傳「緣二甲兵一拍ーー、以圖二收復一」

【陣壘】ヂンルイ　城上のひめがき。唐書、高駢傳「蜀之土壘、成都城最堅、駢易以二磚壁一一完新」

【陸】リク　ロク　圉

○くが、をか、高く平かなる地「大一」「一地」海の對。○あつし（厚）たかし（高）○みち（道）舟によらずして步行又は車馬などにて行く道、旱路「一路」○をどる（跳）「一梁」○數字の六に借用す。○錄（一三五○頁三段）に通ず「一一」○雙一スゴクは博戲の一種。○一續ツヅクはつづく貌。

【陸游】リクイウ　字は務觀、宋の越州山陰の人、范成大、蜀に帥たるや、海、參議官たり、文字を以て交り、禮法に拘せず、人其の頽放を譏る、因りて自ら放翁と號す、其の詩、清新刻露にして出すに圓潤を以てし、自ら一宗を開く、嘉定三年卒す、年八十五、劍南集・老學庵筆記・入蜀記の著あり。

【陸羽】リクウ　唐の人、字は鴻漸、上元の初、苕溪に隱れ、自ら桑苧翁と號す、茶事に精しく茶經三卷を著す。

【陸海】リクカイ　○物產の豐富なる地をいふ。漢書、地理志「楚地號稱二一一」、爲二九州膏腴一○くがと、うみと。‖海陸。

【陸海軍】リクカイグン　陸軍と海軍と。

【陸行】リクカウ　くがちを行く。史、夏紀「一一載レ車、水行乘レ舟」

【陸機】リクキ　字は士衡、晉の吳郡の人、身の長七尺、その辭藻の如し、少くして異才あり、文章世に冠たり、醫術を服膺し、禮にあらざれば動かず、後ち人の爲めに異志ありと譖せらる、歎じて曰く、華亭の鶴唳復聞くべけんやと、遂に害せらる、時に太安二年、年四十三、著す所ろ陸士衡集十卷あり。

【陸九淵】リクキウエン　陸象山ザクシャウザンを見よ。

【陸龜蒙】リクキモウ　字は魯望、唐の長興の人、歌詩及び賦に工なり、松江の甫里に隱る、性茶を嗜む、或は時に舟に上り、圖書茶竈筆床釣具を資して往來す、初め天隨子と稱し、後ち自ら江湖散人と號す　また甫里先生と號す、高士を以て召さるれども至らず、頃苑・皮日休・襲隱・吳融と益友たり、吳興實錄四十卷・笠澤叢書三卷を著す。

【陸軍】リクグン　陸上の防備又は攻戰にあたる軍隊。海軍の對。‖陸師。

【陸產】リクサン　陸地に產する物。水產の對。

【陸詞】リクシ　證記「加豆一一也、其陸水物也」洛陽伽藍記「羊者是一一之最、魚者是水族之長、所レ好不レ同、故各稱レ珍」

【陸贄】リクシ　字は敬輿、唐の蘇州嘉興の人、年十八にして進士に第し、博學宏辭に中り、翰林學士となる、德宗の時、屢に奉天に從ふ、詔書を草し、又、屢に論諫し、懇到深切、人或は其の太だ過ぎたるを規す、對へて曰はく、貢、上は天子に負かず、下は學ぶ所ろに負かず、他を恤ふるに遑あらんやと、同平章事に累遷す、永貞元年、裴延齡に譖せられ、遂に遠竄に放たれて卒す、年五十三、宣と謚す、著はす所ろ陸宣公奏議・翰苑集等あり。

【陸相】リクシャウ　圓陸軍大臣の美稱。

【陸象山】リクシャウザン　名は九淵、字は子靜、宋の金谿の人、朱熹と時を同うす。象山に居り、象山翁と號す、乾道八年進士、官、泰議郎、知荊門軍に至り、紹熙三年卒す、年五十四、其の詩文集を一一全集といふ。

【陸輸】リクユ　陸地の運送。歐陽修詩「水載每連レ軸、一一動盈レ車」

【陸處】リクショ　陸上に居る。南史、張融傳「臣一一無レ屋、舟居無レ水」淮南子「一一者蠭」

【陸棲】リクセイ　陸上にすむ「一一動物」

【陸宣公】リクセンコウ　陸贄を見よ。

【陸續】リクゾク　つづきて絕えざる貌。陸游詩「我レ竹作レ馬走不レ休、小車駕レ羊聲一一」

【陸稻】リクタウ　をかぼ。證記「淳熬煎醢、加二于一一上」

【陸地】リクチ　をか、くがち。佛本行經「將レ至二於一一」

【陸沈】リクチン　○水なくしてしづむ義。國の滅ぶるにいふ。又、賢人の俗閒にひそみ隱れ居るにもいふ。莊、則陽「方且與レ世遊、而心不レ屑二與之俱一是一一者也」○くらくしづむ（俘沈）の貌。論衡「知レ古不レ知レ今、謂二之一一」

【陸田】リクデン　はたけ。水田の對。晉書、食貨志「畝多則土薄水淺、澇不二十調一、歲不レ有二水雨一、瘠復橫流、延及二一一」

【陸放翁】リクハウオウ　陸游を見よ。

【陸博】リクハク　すごろく、博奕の一種。事物紀原「烏胄始置二一一之戲」

【陸風】リクフウ　海岸の地方にて、夜、陸地より海に向ひて吹く風。

【陸兵】リクヘイ　陸上にて戰ふ兵士。本兵の對。

【陸味】リクミ　土地に生ずる食物。鄭良詩「一一萃二南品一」

【陸離】リクリ　○光輝の散亂する貌。又、美好なる貌。上林賦「宓一一、爛漫遠遷」○いりまじりて衆く盛んなる貌。楚辭「長二余佩之一一」‖參差。

【陸梁】リクリャウ　○亂れ走る貌。揭雄、甘泉賦「飛廉雨而走一一」○ほしいままにおどる貌。四京賦「怪獸一一」‖跳梁。

【陸龜蒙】リクキモウ　字は魯望、平湖の人、廣順九年の進士、嘉定縣に知たり、善く職せし時、民市を罷むること三日、

その學一に程朱を準とし、敬に居り理を窮むるを以て本となす、著すところ四書講義・困勉錄・讀禮志疑・讀朱隨筆・松陽講義・三魚堂文稿等あり、康熙三十一年卒す、年六十三、清獻と謚し、雍正二年孔子の廟廷に從祀せらる。

【陸王之學】リクワウ　宋の陸九淵（象山）と明の王守仁（陽明）との學說、陽明の良知の學は、九淵の頓悟を資ぶ說に本づく、故に併稱す。

【陸陸】リクリク　平凡なる貌。後漢書、馬援傳「今更共ニ一ニ」‖碌碌。

【陵】リウ　蒸

○大いなるをか（大阜）○つか（冢）みささぎ、天子の御墓「山ニ」○あなどる（侮）中庸「在ニ上位一不ニ一下」かろんず（遊）しのぐ（凌）加へ侵す。左、隱三「少ニ一長」○こえる（踰）禮、學記「不ニ一節而施之謂ニ孫一」○をかす（犯）禮、聘義「則不ニ相侵一」○ふ（延）○にらぐ（竦）○けはし（峻）○のぼる（升）○次第に衰へる（弛替）「一夷」「一遲」○次第に土地が低くなる。

【陵夷】リウヰ　盛んなりしものが次第に衰へる、丘陵の漸くに平かなる如きに喩ふ。漢書、成帝紀「帝王之道、日以ニ一ニ」‖陵遲。

【陵域】リウヰキ　みささぎの地内。魏書、汝陰王傳「賜ニ葬一ニ」

【陵雨】リウウ　暴雨。注曾「震風ニ一ニ、然後知ニ風屋之幹輮一」

【陵雲之志】リウウンノこころざし　○世外に超然たる志。後漢書、楊雄傳「課課有ニ一ニ」○高き地位にのぼらんとする志。天寶遺事「張垍登ニ科、貧ニ爺陸薄一、而爲ニ宇令所ニ抑、歎曰、丈夫有ニ陵ニ雲之志一而抱ニ於下位一、若ニ立ニ身矮屋之下一使ニ人摸ニ頭不ニ得、乃棄官而去」

【陵遲】リウチ　しのぎこえる。禮、樂記、疏「五聲不ニ和、則君臣上下、互相ニ一ニ」

【陵園】リウエン　天子のみささぎ。晉書、郗鑒傳「營ニ起ニ一ニ、功役甚衆」

【陵駕】リウガ　他人をしのぎこえる。‖凌駕。宋書、恩倖傳

【陵丘】リウキウ　をか、陵は大、丘は小。爾雅「如ニ陵如ニ丘一」‖丘陵。

【陵窘】リウキン　せまりくるしむ。枚乘、七發「汗流沫墜、寇伏ニ一ニ」

【陵虐】リウギャク　しのぎいぢめる。晉紀「無ニ虐ニ孤獨一而長ニ高明一」疏「天子無ニ一ニ孤獨一而長ニ驕高明貴龍者一」‖凌虐。

【陵虛】リウキョ　天空に升る。抱朴子「擬ニ六翮一ニ之用一」

【陵京】リウケイ　高く大いなる丘。蘇軾詩「功成志自滿、積慕如ニ一ニ」

【陵厲】リウレイ　のうぜんかづら。本草圖經「一ニ花、多生ニ山中一」‖陵苕・凌霄。

【陵雪】リウセツ　しのぎはづかしむ。石崇詩「父子見ニ一ニ、對ニ之慙且驚一」‖凌雪。

【陵侮】リウブ　しのぎゆるがせにする、あなどる。顏氏家訓「一ニ長者一、輕ニ慢同列一」‖陵侮・輕蔑。

【陵遲】リウチ　天子のみささぎ、宋は陵。宋史、職志「置ニ一ニ五當一、修ニ奉神器一」

【陵忽】リウコツ　しのぎゆるがせにする、あなどる。顏氏家訓「一ニ長者一、輕ニ慢同列一」‖陵侮・輕蔑。

【陵波】リウハ　なみをしのぐ。南史、隱逸傳「蔣員遊ニ孟諸際一、見ニ一ニ輕舟一レ一隱顯、俄而流父至、神儀遒邁、垂ニ綸長嘯一」

【陵駕】リウガ　しのぎのぼる。‖凌駕。

【陵曾】リウソウ　しのぎをかす。南史、齊東昏侯紀「不ニ一ニ卿三輩一ニ一雨驚一ニ」

【陵辱】リウジョク　人をしのぎてあばれる。尹文子「刑者所ニ以戒ニ不一ニ一所ニ

【陵序】リウジョ　しのぎしりぞける。後漢書、西羌傳「未ニ有ニ一ニ上國ニ如ニ陵五戸一ニ」

【陵誇】リウコ　しのぎをかしてほこる。元好問詩「得窺未ニ用相一ニ」

【陵谷】リウコク　○をかと、たにと。諸葛王詩「坐立山川險、嗟吁ニ一ニ變」○一ニ之變の略。晉書、杜預傳「焉知ニ此後不ニ爲ニ一ニ乎」

【陵谷易ニ處】リウコクエキショ　高下其の位をかへ、尊卑其の順序を失ふ譬。漢書、劉向傳「一ニ、列星失ニ行一」

【陵谷之變】リウコクノヘン　高き岡が變じて深き谷となり、又谷が變じて岡となる。世事の變遷の甚だしき形容。詩、小雅「高岸爲ニ谷、深谷爲ニ陵一」‖陵谷・桑滄之變。

【陵汨】リウコツ　をかしみだる。晉書、郗鑒傳「一ニ五常、侮ニ弄神器一」

【陵忽】リウコツ　しのぎゆるがせにする、あなどる。顏氏家訓「一ニ長者一、輕ニ慢同列一」‖陵侮・輕蔑。

【陵家】リウカ　をかの如く多くあつまる。揚雄、羽獵賦「丘果一ニ」

【陵岑】リウシン　しのぎはづかしむ。石崇詩「父子見ニ一ニ、對ニ之慙且驚一」‖凌雪。

【陵霄】リウセウ　のうぜんかづら。本草圖經「一ニ花、多生ニ山中一」‖陵苕・凌霄。

【陵雪】リウセツ　しのぎはづかしむ。石崇詩「父子見ニ一ニ、對ニ之慙且驚一」‖凌雪。

【陵苕】リウテウ　のうぜんかづら。本草圖經「一ニ花、多生ニ山中一」‖陵霄・凌霄。

【陵替】リウタイ　下の者が上をしのぎて上の威權がおとろへる。左、昭十八「下陵上替、能無ニ亂乎」梁武帝詔「晉氏一ニ、虛談爲ニ風」

【陵遲】リウチ　○丘陵の次第に低くなるもの。淮南子「河遠逃故能遠、山一ニ故能高」○盛んなりしものが次第に衰へる。詩經、序「譬猶一ニ一」‖陵夷。○人の肉をそぎ切る刑、古代に始まる慘酷なる刑罰。遼史、禁臣傳「一ニ而死」‖柳葉剮。

【陵霄】リウセウ　凌霄花リョウセウクワの別名。郭璞詩「一ニ哀ニ素秋一ニ」

【陵空】リウクウ　しのぎこえる。盧川書獄「此蛸超軼一ニ、似ニ欲ニ出ニ其家學一ニ」

【如ニ陵】ジョリョウ　をかの如く物が多くある。詩經「如ニ山如ニ阜、如ニ岡一ニ一ニ」左傳「有ニ酒如ニ淵、有ニ肉一ニ」

【陵波】リウハ　なみをしのぐ。南史、隱逸傳「蔣員遊ニ孟諸際一、見ニ一ニ輕舟一ニ一隱顯、俄而流父至、神儀遒邁、垂ニ綸長嘯一」

【陵駕】リウガ　しのぎのぼる。‖凌駕。

【陵曾】リウソウ　しのぎをかす。南史、齊東昏侯紀「不ニ一ニ卿三輩一ニ一雨驚一ニ」

【陵辱】リウジョク　人をしのぎてあばれる。尹文子「刑者所ニ以戒ニ不一ニ一所ニ

以生ニ—一」
【陵犯】リョウハン しのぎをかす。参同契「各自獨居不ニ相—一」
【陵侮】リョウブ しのぎあなどる。晉書、齊王攸傳「強暴使レ酒、數—ニ—弟罔一」＝陵忽。
【陵廟】リョウビョウ 天子のみたまや。後漢書、陳忠傳「河間許ニ叔父之罪一、清河有ニ—ニ—之一」
【陵蔑】リョウベツ しのぎあなどる。左傳「齊侯召ニ棠子一」疏「以ニ其比ニ於小國一、道ニ—ニ之一」＝陵侮。
【陵墓】リョウボ 天子のみささぎ。宋史、禮志「—雖レ存、不レ繼ニ繼承一」＝陵墳、山陵、陵園。
【陵遲】リョウチ しのぎてこえすすむ。晉紀總論「世族豪盛之子弟、—ニ超越一、不レ拘ニ資次一」
【陵轢】リョウレキ ○ふみにじる。史、孔子世家「楚昭王兵彊、—ニ—中國一」＝蹈躪、侵陵。○すれあふ、軋轢する。

九畫

【陻】イン 因 又、堙、湮に作る ふさぐ。ふさがる（塞）書、洪範「鯀—ニ洪水一」
【陰】ヲン 侵（阜部八畫）の俗字。
【陽】ヨウ 陽（阜部八畫）の俗字。
【隄】テイ せき。又水をせく。水を障ぎへ畜ふ。＝堰。
【階】カイ 佳 ○きざはし。だんだん（陛）堂に登る道「—級」「庭—」「土—」「石—」書、大禹謨「舞ニ干羽于兩—一」○はしご（梯）「—梯」はしごをかける。論、子張「猶ニ天之不可ニ—而升一也」○きだ（級）しな（官等）「位—」「官—」「文—」「武—」○物事の生ずるいとぐち。詩、大雅「誰生厲—矣」○轉じて物事のてびき案内。○棋閒の目數を數ふる數詞「二—」「五—」＝目。○碁—は三百目。
【階次】カイジ しな、等級の順序。孫楚、九品疏「敘ニ人才一不レ問ニ—ニ—一」
【階狀斷層】カイジョウダンソウ 土地の斷層の順次に階級狀をなすもの。＝階段層。
【階序】カイジョ きざはし、だんだん。漢書、異姓諸侯王表「廟堂之上、不レ降ニ—ニ而運ニ天下一」王褒、四子講德論「數年終日經營不レ能レ越ニ—一、附ニ驥尾一則涉ニ千里一、攀ニ鴻翮一則翔ニ四海一」
【階承】カイショウ 順次によりて受けつぐ。吳志、孫皓傳「孤以ニ不德一、ニ—統緒一」
【階前盈尺之地】カイゼンエイシャクノチ 階段の一尺ばかり前の所。尊者の面前へ出づる義。李白、與ニ韓荊州一書「今君侯何惜ニ——一不レ使ニ白揚レ眉吐レ氣激ニ昂青雲一耶」
【階前萬里】カイゼンバンリ 萬里の遠きも近く階前に在るが如く、地方の行政の得失は、皆天子の聞知せらるる所となりて、默くを得ざるをいふ。唐書、宣帝紀「宜宗以ニ于琮陵一爲ニ起州刺史一、入謝、上曰、去京師一幾何、曰、八千里、上曰、卿到レ彼、善惡皆知レ之、勿レ謂ニ其遠一、此階前卽萬里也」
【階磴】カイトウ あがり段のいしずゑ。水經、注「陛下—御在」
【階閣】カイカク ○はしごだんと、宮中の小門と。○轉じて宮中の稱。漢書、霍光傳「霍光以ニ結髮一內侍、起ニ于—ニ之閒一」
【階除】カイジョ きざはし。楊炯、幽蘭賦「循ニ—ニ而下、擇ニ見秋蘭之青青一」
【階梯】カイテイ ○はしごだん、きざはし。何遜、七召「九層儻梯以—ニ—」○てびき、いとぐち。易、繫辭「言語以爲ニ階レ梯」疏「言語以爲ニ亂之—ニ—也」
【階陛】カイヘイ 宮殿のきざはし。史、刺客傳「門戶—ニ左右皆王侯之親戚也」＝宮陛。
【隅】グウ 遇 ○すみ（角隈）「海—」「城—」「坐—」はて、かど、四角のところ（端角）論、述而「擧ニ—ニ不ニ以三—一反」○物の方形なる者皆四隅あり、よりて品行方正に喩ふ「廉—」○、詩、大雅「抑抑威儀、維德之—」○かたはら（旁）楚辭「我之—」○きし（崖）
【隅奧】グウオウ へやのすみ。顏延之、庭誥文「—有レ竈、祈侯竈レ奧、大馬有レ秩、管統輔レ機」
【隅坐】グウザ かたすみに坐す、成人と並び坐せず。禮記「童子—ニ而執レ爵」
【隅中】グウチュウ 將に正午にならんとする時。淮南子「臻ニ于衡陽一、是謂ニ—ニ」＝禺中。
【隅反】グウハン 類推といふが如し。物に四隅あり、一隅を擧げて、其の三隅を

知るべき義。論、述而「飛二隅二不レ以三三一一」お則不レ復也」に本づく。

【隍】 クヮウ 陽

○からほり、水の無き城池（水の有るは池）「池ー」「深ー」易、泰卦「城復二于ー一」城下の坑。○城ー は神の名、韓愈に、祭城ー」文あり。

【城隍】セウクヮウ ほり。水經、注「城中水泫、則四二周ー一」

【堤】 ゲツ ゲチ 屑 又、蹕に作る

○あやふし（危）安からず。書、泰誓「邦之杌ー」○あし（凶）○のり（法度）梟と通ず。

【堮】 シュ 圄

たなぎさ（小洲）渚と通ず。

【隊】 ㊀タイ 隊 ㊁ツキ 隊

㊀くみ、くみあひ、わかち。○兵士のくみ「軍ー」「前ー」「後ー」「部ー」「騎ー」左傳、注「百人爲一ー」○多くの人の整列するもの「一商」㊁おとす。おつ（落）古、墜に通ず。

【隊伍】タイゴ 兵士のくみあひ。伍は五人組。何承天文「復二一一坐二倉庫一」

【隊商】タイシャウ 隊を組みて沙漠を行く商人。

【隊主】タイシュ 軍隊のかしら。晉書「自二一將帥一以下、謝安無レ不二盡勉一」＝隊長。

【隊長】タイチャウ ○軍隊のかしら。史、孫子傳「以二王之寵姬二人一爲二一一、皆令レ持レ戟」＝隊主。○團隊のかしら。

【隊列】タイレツ 軍隊のつらなり、れつ。

【隋】 ㊀タ・ダ 哿 ㊁ズキ 支

㊀おつ（落）古、墮に通ず。○肉を裂く。○祭の供物をうづめる。○圓くして長き形（楕圓）古、楕に通ず。㊁朝代の名、始め楊堅（文帝）封を隨に受く、後、南北朝を混一して帝位に即くに及び、隨の走に从ひ、周齊弊走して亡からざりしを以て走を去りて國號をーといふ、四帝二十九年を經て唐に禪る。

【隋苑】ズヰエン 隋の煬帝の建てしその、江蘇省江都縣の西北七支那里に在り、即ち上林苑、一名西苑。

【隋和之材】ズヰクヮノザイ 隋は隋侯の珠（夜能光者）和は和氏の璧。以て材の美なるに喩ふ。司馬遷、報二任安一書「雖レ材懷二隨和一、行若二由夷一、終不レ可二以貴一矣」隋もと隨に作る。

【隋侯之珠】ズヰコウノタマ 隋侯が蛇を助けたる報に得たりしといふ寶珠。隋、もと隨に作る。淮南、覽冥、注「隋侯、漢東之國、姬姓諸侯也、隋侯見二大蛇腸斷一、以レ藥傅レ之、後蛇於二江中一、銜二大珠一以報レ之、因曰二ー一、蓋明月也」說苑「ー一、國之寶也、然用レ之彈、曾不レ如二泥丸一」＝明月之珠、夜光之珠。

【以隋珠彈レ雀】ズヰシュダンズヰ 隋珠は貴きたまもの。雀は小鳥なり、費多くして所得少きに喩ふ。莊、讓王「以二隋侯之珠一彈二千仞之雀一、世必笑レ之、是何也、則其所レ用者重、而所レ要者輕也」

【隋書】ズヰショ 八十五卷、二十四史の一、唐の魏徵等勅を奉じて撰す、隋代の史書。

【隋堤】ズヰテイ 隋の煬帝の築きたる運河のつつみ、多く柳をうう。吳融詩「一一風物已凄涼」＝隋堤。

【隋煬帝】ズヰヤウダイ 名は廣、文帝の第二子、文帝疾に寢ぬ、廣の行ふ所、無道なるを以て之を廢せんと欲す、廣遂に帝を弑し位に即く、奢侈を窮極し、衆怨沸騰す、宇文化及の爲めに弑せらる、在位十二年。

【隈】 ヲイ 灰

○つつみ、どて土を築きて水の溢出するを防ぐもの「一防」＝堤。○きし（岸）

【隈抃】クヮイベン つつみ。長嶺記「築二池爲二湫淵一、畚二石爲二ー一」＝隈障。

【隈溝】コイコウ つつみと、みぞと。管子「導二水源一利二ー一」

【隈塘】クヮイタウ つつみ。漢書、高帝紀「於二澤陂一ー之上一休息」＝堤塘。

【隈防】ワイバウ つつみ。禮、月令「季春之月、修二利一ー一」＝堤防、隄塘。

【陽】 ヤ。 陽

○易學上の語。動生・開上・前・南・夫・男・君・自・晝などすべて積極性の意を有するもの。陰の對。○ひ（日）「太ー」「夕ー」「秋ー」詩、小雅「湛湛露斯、匪ー不晞」○ひなた（日向）日光のさす所。○山の南、南面「岳ー」「衡ー」○水の北（川は低き故に北岸が日なたになる）「淮ー」「渭ー」「漢ー」○きよし（淸）○あやある統。○あたたか（溫）詩、豳風「春日載ー」○うはべ、あらは、いつはり（僞）「ー騖」＝佯。○おほやけ（公）○かみなづき、陰曆の十月の稱。詩、小雅「歲亦ー止」○あらは

ろ（類）○揚に通ず。○男子の生殖器「一道」○一一は明かなる貌。又、文章ある貌。又、得意の貌。又、心を用ふる所なき貌。○青一は春。○昭一は十干の癸ハツの異名。爾雅「太歲在癸、曰昭一」○端一は五月五日。○重一は九月九日。○昌一は菖蒲ショウブの別名。○一關は今の甘肅省敦煌縣の西に在る關の名。

【陽氣所ノ發金石亦透】ヨウキノトコロハッスレバキンセキモマタトオル　朱子の語。下に「精神一到何事不ノ成」とあり。

【陽九】ヨウキュウ　わざはひ。陽厄五、陰厄四、合せて九となす。漢書、匈奴傳「今天下遭二一一之厄一」文天祥、正氣歌「遭予遭二一一一」

【陽狂】ヨウキョウ　きちがひのまねをする。後漢書、丁鴻傳「一一不ノ識ノ駭ノ歎ハ鮑駭。‖佯狂・詳狂。

【陽旭】ヨウキョク　あさひ。王維、渡水曲「酒酔改二寒司一、交驚髮二一一」

【陽照山立】ヨウショウサンリツ　陽照は日の物を照むるが如く、山立は山の嶷然と立つが如く、人品の溫和にして端正なる形容。書言故事「宋朝王沂公曾、委質事二廖原、楊億目ノ之曰、王君一一、宗廟器也」

【陽關曲】ヨウカンキョク　送別の詩をいふ。王維、送二元二使二安西一詩「渭城朝雨浥二輕塵一、客舍青青柳色新、勸ノ君更盡二一杯酒一、西出二陽關一無二故人一」この詩の後の三句を二度重ねて唱ふ。故に陽關三疊といふ。‖渭城曲。

【陽龍】ヨウリュウ　いつはりておどろく。漢書、陳平傳「一一曰、以爲二亞夫使二乃項王使也」

【陽月】ヨウゲツ　陰曆十月の異名。陰極まりて陽生ずる義。爾雅「十月爲ノ陽」

【陽舒】ヨウジョ　陽氣にして心がのびる。陰慘（二〇六頁四段）參看。

【陽侯之波】ヨウコウノナミ　晉の陽陵國侯、溺死して、海神となり、風波を起して舟を覆す。よりて海の大波の稱とす。淮南、覽冥、注「武王、伐ノ紂渡二于孟津一一一逆流而擊」

【陽死】ヨウシ　いつはりて死す、しんだまねする。漢書、李廣傳「廣一一」‖佯死。

【陽祀】ヨウシ　春と夏とのまつり。周禮「凡一一用二騂牲一」

【陽秋】ヨウシュウ　皮裏陽秋（二三〇七頁三段）を見よ。

【陽日】ヨウジツ　太陽。晉書、李勢載記「漢及二四海一、恩過二一一一」

【陽春】ヨウシュン　○はる。李白、宴二桃李園一序「一一召ノ我以二煙景一、大塊假ノ我以二文章一」○恩澤仁政に喩ふ。晉書、荀勗傳「願ノ之如二一一一、與ノ之如二溫露一」○高尚なる音曲。宋玉對楚王問「一一一曲和者數二千人一」次條參看。

【陽春白雪】ヨウシュンハクセツ　楚國の歌曲にて、高尚の調曲の稱。宋玉、對二楚王問一「客有ノ歌二於郢中一者、其始曰二下里巴人一、國中屬而和者數千人、其爲二陽阿薤露一、國中屬而和者數百人、其爲二一一一、國中屬而和者數十人、引ノ商刻ノ羽、雜以二流徵一、國中屬而和者、不ノ過二數人一而已、是其曲彌高、其和彌寡」

【陽燧】ヨウスイ　日光より火をとるもの。晉書、天文志「火出二於一一一一一而不ノ眞也」

【陽數】ヨウスウ　○陽に屬すること。周禮、大師「一一、黃鐘・大蔟・姑洗・蕤賓、夷則・無射」○雷の數。晉書、五行志「雷者、一一」

【陽羨】ヨウセン　漢の縣の名、名茶の產地。其の故城は今の江蘇省宜興縣の西南に在り。

【陽宗】ヨウソウ　日をいふ。禮、月令、疏「日爲二一一一月爲二陰宗一」

【陽谿】ヨウケイ　○うはべだけたふとぶ。漢書、高帝紀「一一懷王二爲二義帝一」○陽に屬するものはたふとし。說苑「陽貴而陰賤、一一而陰卑」

【陽道】ヨウドウ　○天の剛健のみちの君主又は男子の道。禮、昏義「天子理二一一一、后治二陰德一」○男子の生殖器、男子の勢（禮、曾子問、注）務廣書、朱敬則傳「一一壯偉」

【陽中】ヨウチュウ　春の異稱。漢書、律歷志「春爲二一一一、萬物以生」

【陽鳥】ヨウチョウ　陽に隨ふの鳥、卽ち鴻雁の類。書、禹貢「彭蠡既瀦、一一攸ノ居」

【陽天】ヨウテン　東南の天。九天の一。四覽「東南曰二一一一」

【陽怒】ヨウド　○おこりしまねをする。‖佯怒。○うはべにあらはれしいかり。大戴禮「惡氣內畜、勝ノ欲ノ陰ノ之、一一必見」

【陽德】ヨウトク　陽の德、萬物を生長せしむ

る徳。易、乾卦、疏「九四ー一漸盛」

【陽爻】ヤウカウ やれの四隅に出でて短き横サルを承くる者。何晏、景福殿賦「承以ニーー一、接以二圓方一」

【陽報】ヤウハウ あらはなるむくい。說苑、復恩「有二陰德一者必有ニーー一」

【陽木】ヤウボク 春夏の候に生茂する木。楠など。一說、山の南に生ずる木。周禮、山虞「仲冬斬ニーー一」

【陽眠】ヤウミン たぬきねいり。ねたふりをする。南史、顏延之傳「何尙之號見偃ニーー一」＝佯眠・詐睡。

【陽明學】ヤウメイガク 明の王陽明（名は守仁、浙江餘姚の人）の唱へし知行合一を主とする學說。＝王學・餘姚派・姚江學。

【陽明四句訣】ヤウメイシクケツ 王陽明が道を學ぶの門戸として、其の徒に授けし教。傳錄「無レ善無レ惡心之體、有レ善有レ惡意之動、知レ善知レ惡是良知、爲レ善去レ惡是格物」＝四言教。

【陽陽】ヤウヤウ ○文在ある貌。詩、周頌「龜旂ーー」○得意の貌。又、心を用ふる所なき貌。詩、王風「君子ーー、左執レ簧」○自若たる貌。韓愈、張中丞傳後序「ーー如二平生一」

【陽六】ヤウリク 十二律の中にて、陽の律六。一、黃鐘、二、大蔟、三、姑洗、四、蕤賓、五、夷則、六、無射。後漢書、律歷志「律十有二、ーー爲レ律」

【陽林】ヤウリン 日あたりよきもり。左思詩「白雪停二陰岡一、丹葩曜ニーー一」雪一に雲に作る。

【陽禮】ヤウレイ 周代の禮の一。鄕射飲酒の禮。周禮、大司徒「二曰、以ニーー一教レ讓、則民不レ爭」

【陽曆】ヤウレキ 太陽曆（第二夏第四段）の略語。＝新曆。

【陽和】ヤウワ ○のどやかなる春の時節。史、始皇紀「時在二中春一、ーー方起」柳宗元詩「詔書許ニ逐ーー一玉ニ驛路開花處處新」＝春和。○仁政に喩ふ。蔡琰、胡笳十八拍「知是漢家天子兮布ニーー一」

【陰】ユ 寘

○こゆ（越）漢書、匡衡傳「卑不ニーー一踰」＝逾（踰）○はるか（遙）

【陰麗】ヰンレイ 漢の縣名。右扶風に屬す。温の產地。轉じて墨の異名とす。漢官儀、尙書令僕丞、月賜ニーー大墨一枚・小墨一枚ニ」

【陸】リウ 屋 陸は俗字

○たかし、なかだか、中央の高きにいふ。○高くする。戰國、齊策「ーー諸之城」○ゆたか（豐大）○さかんなり（盛大）○盛んにする。○おほし（多）○たふとし（尊）位又は身分が尊し。たふとぶ「ーー師」○あつし（厚）○窪に同じ「穿ーー」○ーーは雷の聲。○豐ーーは雷師ノ名ナリ又、雲師ノ名ナリ。離騷、注）＝豐隆。

【陸海】リクカイ 陸・高・崇・嵩・邵の別は周禮、大司徒の條を見よ。

【陸奧】リクアウ てあつきいつくしみ。陰雲時「ーー結二在貴一情誰貧三雲一」＝陸厚。

【陸遲】リクチ 君主のあつきめぐみ。唐書、楊師道傳「參二預朝政一親遇ニーー一」＝陸恩」

【陸贖】リクトク たかくして盛んにしげる。級耕錄「松檜ーー、秀者二天成一」

【陸運】リクウン 盛んなるまはりあはせ。＝昌運・盛運・盛時。

【陸永】リクエイ さかんにながし。薛道衡、隋、高祖頌「鼎業繁長、洪基ーー」

【陸窗】リクサウ 明の陸墀（穆宗の年號）中製する所の官窗にて製せし陶器。

【陸汙】リクヲ 世のさかんなると、おとろへると。＝陸汚・汙隆・盛衰・隆替。

【陸恩】リクオン 盛んなるめぐみ。徐陵文「斯實不世之ーー」＝洪恩・隆寵。

【陸赫】リクカク さかんにあらはれる。唐書、李抱玉傳「位望ーー、在レ鎭十餘年」

【陸治】リクヂ さかんにあまねくゆきわたる。漢書、王莽傳「莽威福ーー」

【陸梁】リクリヤウ さかんなるさむさ。揔志、王祖傳「朝華之草、夕而零殘、松柏之茂、ーー不レ衰」＝嚴寒。

【陸顚】リクテン 天子のおかほ。王惲詩「鬼揆レ貴尊ニーー一」＝天顏・龍顏。

【陸起】リクキ ○さかんにおこる。○中がたかくたつ。後漢書、張衡傳「造二候風地動儀一、以二精銅一鑄成、圓徑八尺、合蓋ーー、形似二酒尊一」尊は樽。

【陸貴】リクキ 盛んに貴し。史、張湯傳「湯奏狱、天子重、自嗤レ狱、其ーー如レ此」＝尊貴。

【陸遇】リクグウ 待遇をさかんにする。後漢書、明德馬皇后紀「後宮有二進見者一、每加二慰納一、若數所二寵引一、輒增ニーー一」＝優遇。

【陸刑】リクケイ 刑罰をたふとびて重くする。又其の刑法。晉書、刑法志「ーー峻レ法、非二明主之急務一」＝嚴刑・峻刑。

【陸慶】リクケイ 盛んにめでたし。陸雲、晉夏府君誄「惟神ーー、篤生二府君一」

【陸養】リクヤウ さかんなるいつくしみ。江淹、知己賦「心二年齒一而ーー」＝隆恩・隆寵。

【陸顚】リクテン 位高くして世にあらはれる。南史、歐陽頠傳「昌季ーー、莫レ非二國恩一」

【陸古】リクコ 盛んなりし古代。臨機、大田議「ーー之主、不レ改レ法而下治」

【陸興】リクコウ さかんにおこる。後漢書、來歙傳「陛下聖德ーー」

【陸續】リクゾク たかきひたひ。孔叢子「吾觀二孔仲尼一、有二聖人之表一、河目而ーー、黃帝之形貌也」（河目は細き目）

【陸師】リクシ 師をたふとぶ。荀、脩身「君子ーー而親レ友」＝敬レ師。

【隆盛】リュウセイ さかんなり。高居詩「我来冰未泮、時暑忽ニ一」

【隆深】リュウシン さかんにふかし。後漢書、宋意傳「陛下至孝烝烝、恩愛ニ一」

【隆準】リュウセツ 大いなる鼻、高き鼻。陳琳檄ニ豫州ニ文「欲下以ニ螳螂之斧ニ一御中ニ一之隧上」

【隆昌】リュウショウ ○隆盛に同じ。‖盛昌。○南北朝の時、齊の鬱林王の年號。任昉文「ニ一季年、勁王始著」

【隆儒】リュウジュ 儒者をたふとぶ。漢書、董仲舒傳「自下武帝初立ニ魏其侯・武安侯一爲ニ相、而ニ一矣」

【隆崇】リュウスウ たかし。漢書、司馬相如傳「其山則盤紆鬱ニ、ニ一律崒」

【隆暑】リュウショ さかりのあつさ。陸機、從軍行「ニ一固已慘、涼風厲ニ且苦」‖隆熱・盛暑。

【隆盛】リュウセイ さかんなり、さかえる。漢書、楊惲傳「惲家方ニ一」‖隆昌。

【隆準】リュウセツ たかき鼻ばしら。史、高祖紀「高祖爲ニ人ニ一而龍顏」‖隆鼻。

【隆中】リュウチュウ 山名。今の湖北省襄陽縣の西、二十支那里に在り、漢末、諸葛亮、此に隠れ、山腰に草廬を爲る、山中に抱膝石あり、陸起して敷の如く、十數人を坐せしむべし。

【隆冬】リュウトウ てあつさいつくしみ。晉書、傅咸傳「表無ニ親然虚忝ニ一」‖隆恩。

【隆替】リュウタイ さかんなると、おとろへるとの意。王羲之傳「悠悠者以ニ足下出處一足ニ一ニ一之ニ一」‖隆汗・盛衰。

【隆冬】リュウトウ 陰しき寒さの節。晉書、王羲之傳「觀ニ其字勢一疎瘦如ニ一枯樹一」‖嚴冬。

【隆徳】リュウトク 徳をたふとぶ。漢書、李尋傳「聞者、太白正盛經レ天、宜ニ一レ一克ノ躬、以執ニ不軌一」

【隆熱】リュウネツ さかりのあつさ。韓愈文「六月ニ一」‖酷熱。

【隆波】リュウハ 高くさかんなるなみ。謝向、九歎「乘ニ一以南遊兮」

【隆鼻】リュウビ たかきはな。淮南子「其人兒形小頭、ニ一大口」

【隆宮】リュウキュウ 盛んに富む。左思、蜀都賦「侈侈ニ一、卓郷塔名、公擬由ニ一、貨ニ殖私庭一」

【隆盛】リュウセイ 盛んに豊かなり。後漢書、仲長統傳「觀ニ一者、鑑ニ后妃盛衰之家也」

【隆盛】リュウセイ 盛んなると衰へると。蜀志、郤正傳「道有ニ一ニ一、物有ニ興廢一」‖隆窿・隆登。

【隆隆】リュウリュウ ○雷の聲。漢書、五行志「ニ一如ニ雷聲一」○勢の盛んなる貌。揚雄、解嘲「炎炎者滅、ニ一者絕」

【隆礼】リュウレイ ○禮儀を盛んにす。禮記「ニ一レ一由レ禮、謂ニ之有方之士一」○禮をたふとぶ。荀、勸學「凡學之經、莫ニ速ニ乎好ニ其人一、ニ一レ一次ノ之」

【隈】 ワイ 灰

○くま(隩)水の曲り入る處(水曲)「水ニ一」○山の曲りて入り込みし處「山ニ一」○弓の曲れる處(弓灣)○すみ(方隅)左思、魏都賦「考ニ之四ニ一」○また(股間)

【隈澳】ワイオク 入り込みたるみぎは。孟浩然詩「石潭傍ニ一、沙岸曉禽繞」

【隈曲】ワイキョク すみ、くま。司馬光詩「春塘名ニ薄冰、浙派隱ニ一ニ一」

【陲】 陝(二〇三頁四段)と陝(二一六頁四段)とに同じ。

【陲隘】アイ せまし。史、李斯傳「遂ニ奉地之ニ一ニ一、沈約、郡縣賦「何武關之ニ一、而蒲姐之渠雄」‖狹隘・偏陲。

【陰】 (一)アイ 霽 (二)ヤク 陌

(一)せまし(狹陋)土地せまし。○心せまし「狷ニ一」「褊ニ一」孟、公孫丑「伯夷ニ一」○いやし(賤)狹くしていやし「ニ一卑」○きびし(急)○けはし(險)せまきみち、けはしき地(險阻)「險ニ一」「峻ニ一」(二)ふさがる(塞)「困ニ一」‖阨・阸。

同訓異語 陰・狹・窄・褊の別は狹(二一二八頁四段)の條を見よ。

【陰害】アイガイ 要害よきところ。東京賦「守ニ位以ニ仁、不ニ一レ一ニ一」‖險要。

【陰巷】アイコウ せまくきたなきちまた。史、周紀「以爲ニ不祥一棄ニ之ニ一ニ一」‖狹巷・陋巷。

【陰窶】アイク せまきちまた。‖陰巷。

【陰陋】アイロウ せまし。史、司馬相如傳「追ニ匹中之ニ一ニ一分、舒レ細出ニ乎北垠一」

【陰險】アイケン せまくしてけはしの謂詩、疏「地又ニ一、而多ニ樹木一」

【陰湫】アイシュウ せまくしてしめる。韓愈詩「我恨採ニ詩翁一、貶ニ屬陰而湫一」

【陰鄙】アイヒ ○せまきみせ。○市店にふさがる。元稹詩「歲稔民四至、陰ニ廛亦隘一鄙」‖鄙陋通ず。

【陰勇】アイユウ 臺灣にて土人より募りし護境兵「ニ一一線」

【隕】 (一)キン ウン 軫 (二)エン 阮 先 通音 キン

(一)おつ。おとす(墜)「一石」高きより下ダす。左、莊七「星ニ一如雨」○やぶる(壞)○たふす。たふる。うしなふ(失)命を失ふ。古、殞に通ず。(二)ひとし(均)○ひろさ、はば、まるみ。古、員に通ず。詩、商頌「幅ニ一既長」

同訓異語 隕・落・墜・零・墮の別は落(一九六一頁三段)の條を見よ。

【隕越】インエツ ○下にころがりおちる。左伝九「恐ー二ー于下」以遺二天子羞一」＝顚墜。○事をしくじる。失敗する。

【隕涕】インテイ やぶる。漢書、武帝紀「顧二陽之後一、橋萩授レ首、幾成二南越一、痛以ー一」

【隕穫】インカク 困迫して志を失う貌の形、儒行「備有二不レ逢レ時、不レ充二詘於富貴一」

【隕結】インケツ しぼる。春秋「定公元年冬十月、ー一レ殺レ渡」

【隕泗】インシ なみだをおとす。梁書、張率傳「瞻二泪縄一以ー一」＝隕涕・垂泗・流涕。

【隕星】インセイ 地におつるほし。左、僖十六「隕二石于宋一五、ー一也」＝隕星石。

【隕石】インセキ 空中よりおつる石。前漢書参看。

【隕搖】インヨウ 草木が凋落する、隕は墜、蓼は落。詩、豳風「十月ー一、一之日于貉」

【隕墜】インツイ おちる。荀子「列星ー一、旦暮晦盲」

【隕涕】インテイ なみだをおとす。許渾、厳峻傳「去レ勢如二脱レ鞲一、路人爲レ之ー一」＝唐書、李勉傳「歳破レ賊、辞布至二梁州一、上覧レ之感泣、謂二臣無一不レレー」＝隕涙。

【隕墜】インツイ へたをおとす。牛弘文「厳風破レ塞、繁霜ー一」。

【隕穫】インカク 隕石より得たる鐵。

【隕顚】インテン おちたふる。舊唐書、吐蕃傳「競業賽渠、擒二其ー一」。

【隕涙】インルイ なみだをおとす。綱衡文「聞レ之者悲傷、見レ之者ー一」

【隅】 ウ 虞

○とりで、村中に立てし壁壘「村ー」後漢書、荀卓傳「築ー於郡高厚七尺、號曰寓歳ー」○こじろ（庫域）○つつみ（小隄）「烟ー」「花ー」「村ー」＝塢。

【隔】 カク 陌 又、南・陌に作る

○へだつ、さへぎる（障）物を中間に置きてさへぎる「ー水」史、始皇紀「防ー内外」○ふさぐ（塞）せく。○とほざかる、うとんずる「疏ー」○へだて、しきり。○へだたり（距離）○へだたる、ふさがる。

【隔別】カクベツ 隔・障・阻・閑○隔は中にしきりを入れるなり。史記「防二隔内外一」○障は隔也、昇也、さへぎる。へだつる義。禮、月令「毋レ有二障塞一」○阻は山川道路のへだたるに用ふ。詩、泰風「道阻且長」又、へだてて止むる義にも用ふ、阻レ諫の如し。○閑はすきまをこしらへる義。左傳「遠閒レ親、新閒レ舊」また閒をへだてておく義にも用ふ。閑歳は一年、間をおくをいふ。

【隔異】カクイ （へだてわかつ。史、南越尉陀傳「前日高后、ー二南越一、羈縻長沙王讒レ臣」

【隔意】カクイ 心にへだてがありてうちとけぬ。＝隔心。

【隔越】カクエツ 遠くへだたる。奚琰、胡笳十八拍「子母分離兮意難レ任、同天ー兮如二隔参一」＝隔絶。

【隔遠】カクエン （へだたりてとほし）の居。高帝紀「出レ兵必待レ報、今江都ー一、後期宗何」

【隔靴掻痒】カッカソウヨウ ○靴をへだててかゆき所をかく、未だ物たらぬ所ある喩。○傳燈録「上堂更或拈二話頭一挟二機境一、大似二隔レ靴抓レ痒」○事の適切ならざる喩。詩話總龜「詩不レ著レ題、如二隔レ靴掻レ痒」

【隔月】カクゲツ 中一月をへだてる 一月おき。事文類聚「ー一爲二農太子一講二周易一」

【隔日】カクジツ 中一日をへだてる 一日おき。＝間日。

【隔心】カクシン 隔意に同じ。

【隔水】カクスイ みづをへだてる。姚鵠詩「月影紋レ山盡、鐘聲ー一微」

【隔世】カクセイ へだたれる代「ー一遺傳」

【隔蔵】カクゾウ （へだてたちきる。陸機賦「断二遏海潮一、ー二曲隄一」＝隔絶。

【隔絶】カクゼツ 遠くへだてたつ。易經「水泄不レ通」注「不レ以レ状爲ニー一」＝隔絶。

【隔塞】カクソク へだたりふさがる。漢書、五行志「下情ー一」後漢書、賈逵傳「道路ー一、邑邑何已」＝隔塞。

【隔断】カクダン へだつ。へだたりたゆ。司空圖詩「悲腸ー一珠簾外」

【隔簾雨】カクレンウ 陰暦五月に降る雨、馬の脊を分つといふ又の雨。月令廣義「五月雨爲ニ——一、即分龍雨」

【隔年】カクネン 中一年をへだてる、一年おき。

【隔壁】カクヘキ 傍に壁を隔てる、甚だ近き義。酉陽雑俎「近如ニー一」

【隔離】カクリ ○へだてはなす。○傳染病患者を別所にはなし居らしむ「ー一室」

【隗】 ㊀ グヮイ ㊁ グヰ 灰 通 通作クヰイ

㊀たかし、けはし。㊁郭ーは人名。熟語参看。

【従レ隗始】ジュウカイシ 賢者を招くには、先づ劣者を用ひよとの義。戦國、燕策「郭隗曰、今王誠欲レ致レ士、先ー一、隗且見レ事、況賢於隗者乎」

【隙】 ケキ 陌 通 通作ゲキ 又郤に作る

○あな、壁際の孔「孔ー一」○すき、すきま（閑暇）「穴ー一」○てすき（閑暇）左、隠五「皆於二農

一以講事也」○なかたがひ（怨仇）不和「仇ー」「怨ー」「釁ー」史、項羽紀「今將軍與臣有ー」○あらそひ（爭）「爭ー」○つづく（際）境地が相接する。淡書、地理志「北ー烏丸夫餘」

語源　障は壁際の孔なり、卓に从ひ章に从ふ、章は亦聲、章は二小に从ひ中は日景に从ふ、壁の小孔より日のさしこむ會意文字、俗に隙に作るは非。

【障壁】ショウヘキ　すきまの蘇軾詩「至ノ今餘二一一一流出手斛孔」＝峰隙。

【障駒】ショウク　ひかげ。月日の過ぎ去ることの早きこと、奔馬をすきまからちらと見る如しとの意。韓、知北遊「人生三天地之間一若二白駒之過レ隙」朱熹詩「務レ學修レ身要レ及レ時、鏡レ辰須レ念一一駟」

【障壊】ショウカイ　裂けくづれる。左、昭元「猶之一一、誰之咎也」

【障穴之臣】ショウケツノシン　内に居てひそかに敵に通ずるもの。韓非子「以二一一一」而事二獨立之主一、此之謂二危殆一」

【障孔】ショウコウ　すきあな。詩經、疏「使室無二一一一、寒氣不レ入」＝孔隙・隙穴。

【障地】ショウチ　あきち、空地。左傳「宋鄭之間、有二一一一一焉」

【隒】 ゲン 㘝

○がけ（崖）○きし（岸）山の形、兩厓ノ如ヲ累ネたる如きもの。

十一畫

【隱】

隱（前頁四段）の俗字。

【隙】

サイ 㘝

○あひだ、あはひ。易、泰卦「天地一也」○あふ（合・會）であふ「一會」○あひめ（合會）「春夏之一」○つづく（接）○まじはる。まじはり「交ー」○かた（方）○ほとり（邊）きは（畔）「水ー」「海ー」「端ー」○かり、しほ、であひ（機會）○はて、かぎり（限）「天ー」「ー涯」「邊ー」「無ー」○いたる（至）淮南、原道「高不レ可レ一」

【際涯】サイガイ　かぎり。范仲淹、岳陽樓記「浩浩湯湯、橫無二一一」

【際可之仕】サイカノシ　先方が適當なる禮を以て交際するによりて仕へる。孟、萬章「有二一一公養之仕」

【際遇】サイグウ　たまたまであふ。君臣が遭遇する。宋史、何執中傳「以二善學」一一、用二太傅一致仕」＝際會・遭遇。

【際會】サイクワイ　たまたま其の時に出あふ。杜甫詩「君臣已異レ時一一」＝遇合。

【際限】サイゲン　はて、かぎり。＝際涯。

【際畔】サイハン　かぎり。列子「北海之北、其國名曰二終北一、不レ知二一一一之所一レ窮限一」

【障】

シャウ サウ 㘝 陽 又、鄣に作る

○つつみ（隄・防）「隄ー」以て水を遮ヘて汎濫せざらしむるもの。○あぜみち（畛）○ついたて（屏風）「屏ー」「錦ー」しゃうじ。○とりで（堡）「亭ー」「邊ー」「堡ー」まもり（衛）「保ー」○かき、ついぢ。○ささふ、さへぎる、ふせぐ（防）ふせぎ。○おほふ（蔽）○かかふ（擁）○へだつ（隔）界する、ふさぐ（塞）呂覽「一其源」○ふさがる、おほはる。○おほひ、さはり、じゃま「故ー」「ー礙」「罪ー」○さかひ、かぎり。

同訓異字　な障・隔・阻・間の別は隔（阜部十畫）の條を見よ。

【障蔽】ショウヘイ　おほひかざす。○日光を蔽ふためにかざすもの、扇の類

【障壁】ショウヘキ　へだてかこむ。又、かこひ。閑雅「在レ旁曰レ幃、幃、圍也、以自一一也」

【障塞】ショウソク　ふせぐ。說苑「外一一諸侯賓客、以蔽二其明一」

【障子】ショウジ　○室と室との隔に立てる建具、からかみ・ふすま。○圖明障子ノ略。

【障日】ショウジツ　日光を蔽ふに用ふる長き柄の扇ノ（振豹、古今注）

【障塞】ショウソク　○さへ、ふさぐ。又さはりふさがる。禮、月令「開二通道路一、毋レ有二一一一」○ショウとりで。＝障壁・堡障。

【障泥】ショウデイ　あふり、馬具の一。革にて製し、鐙ノと馬の腹との間に垂れて泥ノのはねるを防ぐもの。世說「此必是憎二一一一」＝鄣泥・蔽泥。

【障悶】ショウモン　さはり。なやみ。梁簡文帝、謝二香料啓一「臣比身心、得レ無二一一一」

【障蔽】ショウヘイ　おほひ。おほふ。陸游詩「簡中無二一一一、何處缺二光明一」＝蔽障。

【障壁】ショウヘキ　とりで。＝堡障。

十二畫

【隤】 タイ　灰

○くづる(壞)くづす(墜下)上林賦「一縡墳壓」＝頽。○くだす(降)揚雄、河東賦「疲」祥一レ紐」○一然はおとなし、柔順なる貌。○尪一はつかる(疲勞)やむ(病)詩、周南「我馬尪一」＝穨。

【隤雲】タイ　くづれかかれるくも。＝頽雲。

【隤陷】カン　穴などにおちいる。淮南子「先者一一、則後者以誡」

【隤舍】タイ　くづれや。＝頽舍・頽屋。

【隤牆】タイ　○かきをくづす。上林賦「一一一塡レ壑」○くづれたるかき。

【隤然】タイ　柔順なる貌。易、繫辭「夫坤一一、示二人簡一矣」

【隤陵】ダイ　くづれたるをか。＝頽陵。

【隘】 トウ　徑

○けはしきさか(險阪)穆天子傳「天子南遊、升於長松之一一」＝磴。○きだ(梯階)

【隣】 郷(二〇三五二)の俗字。

十三畫

【隩】 ㊀アゥ　㊁イク　屋　㊀

㊀くま(隈)水の厓「隈一」＝澳。○をさむ(藏)かくす。かくる(隱)㊁あたたか(煖)燠に通ず。一說に住居する。又其の室。書、堯典「歐民一」○四方の居るべき土地。書、禹貢「四一既宅」○くま。＝澳。

【險】 ケン　豏

○けはし「一阻」「絕一」「峻一」○けはしくして要害よし。史、吳起傳「在二德不一在一」○險に通ず。たかし(高)○あやふし(危)傾危の道。中庸「小人行一以徼幸」○やぶる(傷)なやむ(艱)○心に惡しきたくらみあり「陰一」○惡し、よこしま(邪)「一詖」「姦一」

【險阨】アイ　路がけはしくせまし。馮衍賦「悲二時俗之一一一兮、哀二好惡之無一レ常」＝險隘。

【險隘】アイ　前條に同じ。屈平、離騷「山林一一、虎豹蛇只」

【險惡】アク　○道がけはしくわるし。○物事のやうすが甚だ惡し「天鉄一一」

【險夷】イ　次條に同じ。夷は平。

【險易】イ　○けはしきと、やすく平かなると。鬼谷子「辨二地形之一一一」○逆境と順境と。＝險夷。

【險韻】イン　詩を作るに用ふべき文字の少き韻。又、生僻なる韻字。蘇軾詩「一一清詩苦別新」

【險要】ヨウ　けはしくして要害の地。地險阻にして要衝に當る。魏志、劉馥傳「開二拓邊守一、也二據一一一」＝要險。

【險遠】エン　けはしくとほし。北史、魏宗室傳「負二海一一、宜下分二置一州一、鎭二過海曲一」宋史、周子俾「行レ部不レ憚二勞苦一、雖二險遠一一、亦縱觀徐按」

【險乘】ジョウ　危則驅雖不レ如二孤狸一」けはしき所を經、危き所に乘るは、千里の名馬も狐狸に如かず「戰國策」

【視レ險若レ夷】シケンジャクイ　艱難の地に處ること、平地に居る如く晏れて心を動かすことなし、夷は平。傳亮、劉穆之傳「視レ旅陳一、——」

【險害】カイ　心惡くして人をそこなふ。後漢書、賈逵傳「性一一、邑里患レ之、改レ過自厲、終成二善士一」＝險賊。

【險岸】ガン　けはしきがけ。劉邈詩「駐レ車過一一一、飛レ蓋歷二平湖一」

【險艱】カン　けはしくなやむ。杜甫詩「九日應二愁思一、經レ時冒一一一」＝險難。

【險戲】ケン　あやふくけはしき戲。處世の艱難に喩ふ。戲一に巇に作る。東方朔、七諫「何周道之平易兮、然猶馳而一一」＝傾危。

【險艱】カン　前條に同じ。鳥賦賦「夫固危殆一一之所一也」

【險警】ケイ　邏わるし、不幸、警は誡。李密、陳情表「臣以二一一一、凤遭二閔凶一」

【險棘】キョク　けはしくきびし。蔡邕文「進路孔夷、人情一一」

【險句】ク　難字をならべたる句。王維詩「綴二一一一一最先投」

【險滑】カツ　けはしくしてすべる。韓愈詩「石級苦一一、頽趼莫二牽攀一」

【險猾】カツ　わるがしこし。五代史、雜傳「孔謙、爲二人柔佞面一一、安重誨尤親二信之一、凡循所レ言、無レ不二聽用一」

【險狸】ケイ　けはしきこみち。晉書、李充傳「遵二彼夷途一、而遊二此一一一」＝嶮邏。

【險譎】ケツ　いつはりて心正しからず。唐書、李遜吉傳「性忌刻、一一多端」

【險固】コ　けはしく要害よし。左傳「楚國方城以爲レ城、漢水以爲レ池」疏「言二其一一以爲二城池一」後漢書、第五倫傳「乃依二一一一築二營壁一」

【險語破二鬼膽一】ケンゴハキ　むづかしき語を用ひて、鬼神を驚かし怖れしむ。韓愈詩「一一、高調逼二皇墳一」皇墳は三皇の書、三墳。

【險塞】ケン　要害よきとりで、塞は塞。

漢書、酈食傳「說軍據二於ー一」
【險澁】ケンサウ こころけはしくしてさわがし。諸葛亮、誡ン子書「ー一則不レ能レ理レ性」
【險峯】ケンホウ けはしくしてせまし。梅堯臣詩「綴詞孤清仍ー一」
【險峻】ケンシン けはし。高唐賦「磐石ー一、傾崎崔嵬」＝峻險。
【險折】ケンセツ けはしくしてをれ曲がる。水經、注「黃金戍侈ン山依ン解、ー一七里」
【險阻】ケンソ けはしくしてへだたる。左、僖二八「ー一艱難」
【險詖】ケンヒ 心ねぢけて人をそこなふ。荀子「ー一而不レ弟」
【險道】ケンダウ けはしきみち。李德裕文「ー一傾仄、且馳且射」＝險路。
【險屯】ケンチュン なやみくるしむ。高允詩「時值ニー一、横難二塵網一」＝險難。
【險程】ケンテイ 平かならざるみちのり。元稹詩「來隨夢ニー一」
【險難】ケンナン けはしくしてなやむ。險艱、君子行「天道爽且簡、人道險而難」謝靈運、山居賦「分ニ一往之仁心一、拔二萬族之ー一」＝阻難。
【險魄】ケンパク あしきたましひ。柳宗元、招二海賈一文「死爲ニー一兮、生爲二貪夫一」
【險陂】ケンヒ さがしくよこしま。陂は傾。漢書、劉向傳「放二遠侯邪之黨一、擧二數ー一之案一」＝險詖。
【險詖】ケンヒ 心ねぢけてよこしま。晉書、桓伊傳「卿ニ泥紹邪而好レ利ー一之徒一」
【險膚】ケンフ いつはりて淺はか。武、盤庚「今汝聒聒、起レ信ー一」
【險路】ケンロ けはしきみち。後漢書、蔡邕傳「軍車方奔二乎ー一、安能與レ之齊レ軌」＝險道。

【隧】

㊀スヰ ㊁ツヰ 眞 質

㊀はかみち（墓道）あなみち、棺を埋むる爲めに地上より斜めに墓穴に通ずる道。左、隱元「闕地及泉、ー一而相見」○みち、こみち（徑）○とんねる、地下道「ー一道」○めぐる（回・轉）莊、天下「若磨石之ー一」㊁おとす。おつ（落）＝墜。
【隧墓】スヰボ ふせどひ。＝暗渠。
【隧道】スヰダウ ○はかみち。字解參看。南史、齊豫章王嶷傳「宋長寧陵ー一、出二鄧尉路一」＝墓道。○轉じて地中を通ずる道。トンネル。

【隨】

㊀ズヰ ㊁タ 支 歌

㊀したがふ（從）つく（附）附き從ふ「ー一從」「ー一行」「ー一伴」「追ー一」「肩ー一」○よりそふ（循）書、禹貢「ー一山刊木」○まかせる、まになる、順ふ「ー一時」「ー一風」○其の後からひきつづく。史、淮陰侯傳「公亦ー一手亡矣」○したがって、よって。韓愈、與二孟尚書一書「ー一亂ー一失」○易の卦名、震下兌上。○春秋時代の國名。左、桓六「楚武王侵ー一」隋に通ず。㊁橢圓の橢に通ず。

周隨貴 隨・從・循・率・遵・徇の別は隨（二八五頁三段）の條を見よ。

【隨意】ズヰイ 心のまま、かって氣ままにする。
【隨一】ズヰイツ 圖多くのものの中にて第一。又、さきがけ（魁）
【隨岡】ズヰカウ 清の道牧の別野の名。江蘇省江寧府小倉山に在り、枚、著す所「ー一三十六種」あり。
【隨緣】ズヰエン 圖其の機緣に隨ひて勉強を加へず。齊書、陸法和傳「文貴簡二法和奴婢二百人、法和悉免レ之、曰、各レ一去」
【隨緣赴如】ズヰエンフニョ 圖もろもろの因緣にしたがひて、眞如卽ち萬有の本體がたれぞれに差別の相を示す。
【隨處隱士】ズヰショインシ 車冪にしたがふ隱士、身は山中に在れども、志は仕官せんとするに在るを嘲りていふ。世說、桓溫「虛威用初隱二終南少室一、山中有レ窓二當世一、人目爲二ー一」
【隨行】ズヰカウ 日上の人にしたがひゆく。禮、王制「父之齒ー一」＝隨從。
【隨喜】ズヰキ 圖他人の爲す善根功德に隨ひ喜びて滿足する「ー一功德品」は法華經の第十八品にして一一の功德を說けり。法華經「世尊說二此法一、我等ー一」
【隨和】ズヰクワ ○隨侯の珠と、卞和の璧と。共に至寶とす。李斯、逐客上書「陛下致二昆山之玉一、有ニ一一之寶一」注「隨珠和璧也」隨一に隨に作る。○隋和之材（二一一頁二段）を見よ。○聲に隨ひて附和する。和は去聲。劉克莊、題歐陽文忠公「德度高雅、理有レ未レ然、頗二浮名虛譽一世所レ崇、不レ肯ー一」
【隨侯之珠】前條參照。隋侯之珠（二一一頁三段）を見よ。
【隨坐】ズヰザ まきぞへ。史、廉頗傳「姿得レ無ニー一乎」＝連坐。
【隨侍】ズヰジ 貴人につきしたがふ。君父の側に追隨して其の使役に備はる。後漢書、侯瑾傳「脫屣當レ盛、弗レ獲ニー一、而左右服事、唯務二忠勤一」
【隨時】ズヰジ ○時の宜しきにしたがふ。易、隨卦「ー一之義大矣哉」○をりをり。いつでも「ー一入院を許す」
【隨身】ズヰシン ○大臣の護衞兵。漢書、貢禹傳「ー一數十百」○圖古、攝政・關白などの護衞として朝廷より給せられたる侍人。
【隨手】ズヰシュ ○手あたりしだい。杜甫詩

「曉拯ー―抹」〇直ちに、引きつづきて。字解參看。
【隨珠】ズイシュ　隋侯之珠（二一頁三段）を見よ。
【隨從】ズイジュウ　つきしたがふ。晉書、王裒傳「門徒ー―者、千餘人」‖隨行・扈從。
【隨處】ズイショ　どこでも。到る處。杜甫詩「早花ー―發」孟浩然詩「客行ー―樂」
【隨俗】ズイゾク　世のならはしにしたがふ。史、稽詡傳「聞三樂人愛二小兒一、即爲二小兒舞一ー―爲レ變」
【隨意】ズイイ　つきしたがふ。南史、梁武帝紀「知二齊高有二大志一、當相ー―」
【隨程】ズイテイ　みちにしたがふ。金史、百官志「ー―幹辦、人各二百文」
【隨徳寺】ズイトクジ　圖にげる、逃亡する。逐電。
【隨伴】ズイハン　一しょにともなふ、同伴する。
【隨筆】ズイヒツ　筆にまかせて書きしもの。そぞろかき「容齋ー―」‖漫筆・漫錄。
【隨分】ズイブン　〇分限につれあふ。身分相應。白居易詩「ー―寒歌卿自樂」〇圖すこぶる、よほど。
【隨順】ズイジュン　樂園に從ふ、天子のみくるまのおともをする。李賀詩「汗血到二王家一ー―拯二玉阿一」‖隨駕。
【隨陸無レ武】ズイリクナシ　前漢の隨何と陸賈とは文學あれども武功なし。晉書、劉元海載記「晉每レ觀二晉傳一、常鄙二ー―、絳灌無レ文」（絳灌は周勃と灌嬰と）

・十四畫

【隱】㊀イン・オン　㊁イン　隱は俗字

㊀かくる。顯の反對。〇かくす（匿）見えざるやうにする。〇かくして人に知らさぬ。孟、公孫丑「進不ー―賢」〇のがる（逃）さる（去）世をすてる「ー―士」「ー―居」「ー―遁」〇ひそむ（潛藏）おほふ（蔽）かばふ。〇いむ（諱）論、子路「父爲二子一ー―、子爲レ父ー―」〇ふす（伏）「ー―伏」〇なぞ、かくしことば（謎語）「ー―語」史、滑稽傳「齊威王之時好レ」〇うらなふ（占）はかる（度）〇かすか（微・圀）明かに見えず。顯の對。〇しづか、おだやか。〇いたむ（痛）うれふ（憂）「ー―憂」あはれむ、殷と音通。孟、梁惠王「王若ー―其無レ罪而就死地」〇くるしむ、窮困。〇かき、短き牆。左、襄二三「踰ー―而待之」〇よる（倚）よりかかる「ー―几」〇きづく（案）〇琴の上のかざり。〇かけ、しのび。〇かくれたることわけ。〇威重ある貌。〇盛んなる貌、殷と通ず。〇ーは盛んなる貌。又、憂ひいたむ貌。又、水流のゆるやかましき聲。㊁よる（據）檳弓「其高可ー―也」

同訓異義　隱・蔽・匿・伏・痛・倚・憑・據・藏等の別は掩（六七一頁三段）の條を見よ。

〇ㇽ隱・潛・匿・藏・祕〇隱はかくれて見えず、月の雲に隱るる如し。〇潛は水底にひそみ隱れる義、潛龍と用ふ。轉じて深く隱れひそむに用ふ。柳文「王叔既死、黃氏逃來、潛二其深峭者一」潛焉」〇匿はにげ隱れる義、名姓を遁けて、あらはさぬを、匿名といふ。史記「張良更二名姓一、亡匿二下邳一」〇藏は物を收めて蓄ふる義、寶藏・府藏と用ふ。史記「高鳥盡、良弓藏」また論語に「用レ之則行レ之、舍則藏レ之」とあるは、人が我を用ふれば、わが道を取り出して行ひ、人が我を捨つれば、我が道をきめて行はずとの義。〇祕はひめかくす、祕文・祕書と用ふ。秘は俗字なり。

【隱蔽】イン　樹の盛んに茂れる貌の形容。「紫莉芳蘿ー―水松」‖蔭翳。
【隱憂】イン　いたみうれふ。詩、邶風「耿不レ寐、如レ有ー―」
【隱逸】イン　世の中をのがれる。又、其の者。後漢書、逸民傳「招二聘ー―、與參二政事一、無爲而化」
【隱逸花】イツイツカ　菊の異名。周敦頤、愛蓮說「菊、花之隱逸者也」
【隱隱】イン　〇憂ひ痛む貌の形容。檀弓「志ー―而圖佛」〇大いなる聲。晉書、惠帝紀「赤氣竟レ天、ー―有レ聲」〇微かにして明かならざる貌。王昌齡詩「青山ー―孤舟繫」〇盛んなる貌。潘岳、閑居賦「煌煌乎ー―乎」
【隱瞞】イン　ひかりをかくしてあらはさず。己の才德をかくしてあらはさざるにいふ。後漢書、鄭康成傳「漢商山四皓、有二園公・夏黃公一、潛光ー―、世嘉二其高皆憑附レ公」‖匿藏。
【隱匿】イン　かくしおほふ。禮記、疏「皆二見於外一、無二ー―一」
【隱遠】エン　かくれてとほし。後漢書、方術傳敍「斯道ー―、玄奧難レ盲」
【隱客】イン　ひそかに人をそこなふ。後漢書、廣陵思王荊傳「性刻忿ー―」
【隱客】イン　しゃうぶの異名。三柳軒雜識「菖蒲花爲二ー―一」
【隱几】イン　〇よりかかるつくゑ、臨息ソクの類。圀異志「葛玄所二隱處一、有二ー―一、化爲レ鹿」〇つくゑによりかかる。‖凭几。
【隱諱】イン　かくしいむ。晉書、石勒載記「甘露レ有二ー―一、使レ知二區區之心一」
【隱宮】イン　宮刑（四九六頁一段）に同じ、

宮刑に處せし後、百日開陰室に隱しおく故にいふ。史、始皇紀「一一徒刑者七十餘萬人」

【隱居】インキョ　○世をのがれて居る、仕官せずして家に居る。論、微子「一一放言、身中ノ清、廢中ノ權」○國家を相續人に讓りて退き居る。

【隱君子】インクンシ　世の中を避けて隱れ居る人。蘇軾、題候論「秦之世有二一一者、出而試之」

【隱晦】インクワイ　かくれ晦ります。又、姿を隱す。錢起、巨魚縱二大壑一詩「假危嗟二幕燕一、一一誰二泥蟠一」

【隱花植物】インクワショクブツ　雌雄兩蘂を有する花なく、唯胞子によりて蕃殖する植物、菌類・藻類など。顯花植物の對。

【隱形】インケイ　魔術にて形をかくす、忍術の類。晉書、夏統傳「逆二女巫韋丹・陳珠一、並有二國色一、莊服甚麗、善歌儛一、又能一一レ一レ形」

【隱見】インケン　かくれると、あらはれると。後耳目志「海山微茫而一一」‖隱顯・隱現。

【隱顯】インケン　かくれると、あらはれると。北史、儒林傳「一一人間二存二沈世俗一」‖顯晦。

【隱現砲】インゲンハウ　彈丸をこめたる時は砲身が艦壁中にかくれ、發射する時は其の上にあらはれるやうに作りたる大砲。

【隱語】インゴ　なぞ、意を隱して人をして之を探り求めしむる辭。單に隱ともいふ。漢書、東方朔傳「問二朔一一一」‖謎語。

【隱紅】インコウ　大いなるにに。楚辭「帶二一一之遠邁一」

【隱蔽】インペイ　かくれひそむ。晉書、天文志「一一休息之所」東方朔賦「懷二計謀一而不レ見レ用兮、巖穴處而一一」‖潛藏。

【隱士】インシ　世の中を避けてかくれ居る士。南史、何點傳「世論以レ點爲二幸一一一」

【隱就】インシュウ　かくれたるきず、人に知られざる惡事。宋史、哲宗紀「詔曰、正二風俗一、修二紀綱一、勿レ理二一一細故一」

【隱裝】インソウ　衣におはれて人に見えざる病。黑皆・黑胎の類。曲禮、名レ子不レ以二一一一」

【隱賑】インシン　富みてにぎはし、隱は殷に通ず。揚雄「賑、富也」注「謂二一一富者一」蜀都賦「邑居一一、夾レ江倚レ山」‖殷賑。

【隱身術】インシンジュツ　忍術ニインジュツ那媛記、「一夕有二神人一、自レ天而降、授二主父一以二隱身之術、九轉變骨之丹一」

【隱者】インジャ　世をいとひて避けかくれたる人。論、微子「子曰、一一也」‖隱士。

【隱恤】インジュツ　いたみあはれむ。魏志、王修傳「親二一一之一病愈乃去」

【隱處】インショ　世の中を避けかくれて居る。東方朔、七諫「賢士窮而一一兮、廉方正而不レ容」‖隱居。

【隱栖】インセイ　かくれすむ。

【隱棲】インセイ　前條に同じ。張憲詩「一棲林塘隱者樣」‖隱遯樣。

【隱然】インゼン　おもみのある貌。唐書、温造傳「威重一一」‖隱隱。

【隱鼠】インソ　鼹鼠モグラの別名。常に土中にひそみ居る故。

【隱退】インタイ　かくれしりぞく。易、遯卦、疏「遯者、一一逃避之名」‖退隱。

【隱宅】インタク　隱居せし人の住宅。

【隱地】インチ　○官府の帳簿につけざらの田地。宋史「括二一一二萬三千頃一」‖隱田。○隱居するに宜しき地。倪瓚詩「將レ尋二一一一看二長松一」

【隱秘】インピ　ふかくひめたる書籍。唐書、李勉傳「幸嶠試問二奧篇一一、子辯如レ響」

【隱田】インデン　人民が隱蔽して、年貢を納めざる田地。宋史、食貨志「丁謂計錄云、總得二百八十六萬餘頃一以是歲七百二十二萬餘戶一計レ之、是四戶耕二田一頃八田レ是而知二天下一一多一矣」

【隱德】インドク　人に知られざる德行。晉書、王濟傳「濟初有二一一一、人莫二能知一、其父獨異焉」

【隱匿】インニク　○かくる、又、かくれ居る者。史、五帝紀「堯曰、鰥二在民一一、朕及疇咨一一者一」○かくす。

【隱慝】インドク　かくれたる惡事。慝は惡。左傳「展氏有二一一一」

【隱者二一敵國一】インシャニイッテキコクアリ　威重の盛んなること一の敵國の如し。後漢書、吳漢傳「漢在レ軍、威嚴不レ利、意氣自若、上歎曰、吳公甚強二人意一、一一矣」敵國とは我と匹敵する國の義。

【隱遁】イントン　世をのがれ、遁一に遯に作る。齊書、孔稚珪傳「有二一一之懷一」‖遯世。

【隱逸】インイツ　市中にて身體を先せ掛ける大なるふくろ。王維詩「一一紗帽坐禪苔」‖幕府。

【隱忍】インニン　心にたへしのびて外にあらはさず。史、伍子胥傳「一一就二功名一」

【隱匿】インニク　かくしひめる。程氏通鑑「韶國師初參二遊禪師一、窮二極一一一」

【隱微】インビ　かすかにして見がたし。中庸「莫レ見二乎隱一、莫レ顯二乎微一」

【隱閉】インヘイ　かくしとづ。韋承慶賦「窗二萬仞一兮沈以精、牖二九重一兮隱而閉」

【隱避】インピ　かくれさける。後漢書、卓茂傳「割宅變二名姓一、抱二經書一一二林藪一」‖匿避・避遯。

【隱憫】インビン　いたみあはれむ。顏延之文「一一就レ孝、漸即二自堅一」

【隱伏】インプク　かくれふす。易、坎卦「坎爲レ水、爲二溝瀆一、爲一一一」‖隱匿・窺伏。

【隱蔽】インペイ　かくしおほふ。‖陰蔽・掩

蔽。

【隠没】インボツ　なくなる。唐書、百官志「戸口流散、籍帳一一、賦役不レ均」‖泯没。

【隠密】インミツ　○かくし秘める。○圖スンめあかし、探偵。

【隠約】インヤク　○はっきりとわからぬ、不分明。何遜詩「帝城窮一一、家園無二処所一」○くるしみ、難儀スルする。後漢書、矯慎傳「一ニ山谷、勤處ニ一一」○ことばは簡約にして意味は深微。史、自序「詩書一一者、欲レ遂二其志之思一也」

【隠淪】インリン　隠れておちぶれ居る。杜甫詩「此窟寧甘惟、行歌非ニ一一」

【隠良】インリョウ　善良なる人をおほひかくす。荀子「蔽レ公者謂ニ之姦一、一レ一者謂ニ之姉一」

【隰】シフ　圖

○さは、ひくくしてしめりけある地(下濕)詩、邶風「山有レ榛、一有レ苓」○ほとり、水邊「汾一」○新に發きたる田。

【隋】セイ　サイ　圖

○のぼる。のぼす(登)‖躋。○のぼるき(升氣)詩、鄘風「朝一于西、崇朝其雨」○にじ(虹)○おとす(墜)「顚一」

【隋堕】ダセイ　おちる。書、微子、傳「顚隕一一、如レ之何、其救レ之」

十五畫

【隳】キ　支

やぶる(壞)呂覽、順說「一人之城郭」くづれる、毀と通ず。

【同訓異字】隳・破・敗・壞・傷・毀等の別は破(二畳五貫一段)の條を見よ。

【隳敗】キハイ　こはれやぶれる。

【隤】トク　屋

みぞ(溝)‖瀆。

十六畫

【隴】リョウ　腫　通音ロウ

○をか(丘)○うね、はたけ(畝)「一畝」古、壟・壠に通ず。○地名。今の甘肅省隴昌府。○一西は甘肅省の異名。一山の西に在るが故。

【隴右】ロウウ　隴山の右の地、唐の十道の一。今の甘肅隴坻以西、新疆迪化以東の地。

【隴客】ロウカク　鸚鵡ムの異名。隴山に多く産するが故。梅堯臣詩「雪衣應レ不レ解、一一幸相憐」

【得レ隴復望レ蜀】コロクフクボウショク　貪りて、足ることを知らざる我。後漢書、獻帝紀「司馬懿言二於曹操一曰、今克二漢中一、益州震動、進兵臨レ之、勢必瓦解、操曰、人苦レ無レ足、既一一」同書、岑彭傳には得を平に作る。李白詩「物苦レ不レ知レ足、得レ隴又望レ蜀」

【隴山】ロウザン　陝西省隴縣に在る山の名。秦州記「一一東四百八十里、登二山巓一東望、秦川四五百里、極目悲然、山東人行役升レ此情愿歸者、莫レ不二悲思一、山下有二隴關一、即大震關、爲二秦雍喉咽一」‖隴坻・隴阪・隴首。

【隴山鸚鵡能言語】ロウザンインムノウゲンゴ　唐人の句。岑參、度レ隴思レ家詩「一一、爲報家人數寄レ書」

【隴樹】ロウジュ　○小高きをかの上の木。孔稚珪詩「一一枯無レ色、沙草不二常青一」○塞地の樹。劉長卿詩「一一隨レ人古、山門對二日暗一」

【隴種】ロウシュ　遺失の貌。はたけに種を下すに似たるが故。一說に播ケ散れる貌(荀、議兵、註)新序には隴錘に作る。

【隴坻】ロウテイ　隴山の別名。漢書、地理志、注「一一謂二隴坂一、卽今之隴山也」

【隴畝】ロウホ　○はたけ。蜀志、諸葛亮傳「亮躬耕二一一一、好爲二梁父吟一」○轉じて民間の義。史、項羽紀「羽非レ有二尺寸一、乘レ勢起二一一之中一」

【隴廈】ロウカ　古の隆窿の名。楚辭、哀時命「一一與二茅茨一同レ宮」

隶部

【隶】タイ　隊

およぶ(及)後よりおひつく。‖逮。

八畫

【隷】隸(次條)に同じ。

九畫

【隸】レイ　ライ　霽　又、隷に作る。

○つく、したがふ「一屬」つかふ(役)○けみす(閲)しらべる。史、酷吏傳「關東吏一郡國出入關者」○つき從ふ者、こもの、しもべ(僕)いやしきもの(賤者)けらい。左、隱五、注「士臣皁、皁臣輿、輿臣一」○つみびと(罪人)今の懲役人。○てした、とも。○書體の名「一書」○直一は省の名、禹貢の冀兗二州の域、京師に直屬するが故。

【隸圃】レイホ　しもべと、うまかひとの總稱。論レ士荷定二於志行一、一一不レ足二以爲一レ恥」

【隸事】レイジ　故事を以て相隸屬せしむ。南史、王撝傳「荀書令王儉嘗集二才學之士一、校二墳典一、類レ物隸レ之、謂二之ニ一ー一」‖數典。

【隸人】レイジン　○罪人の儀禮「ー一涅レ臼」註「ー一、罪人也」○轉じて賤役に從ふ者、しもべ。‖奴隸。

【隸書】レイショ　今の楷書をいふ。秦の始皇の時、程邈が小篆を更に省略して作りし書體。唐より以前皆楷字を謂ひてーーとなす、歐陽修の集古錄に誤りて八分を以てーーとなすと玉海に見ゆ。漢書、藝文志「秦時、始造ニーー一、起レ官獄多事、苟趨二省易一、施二之於徒隸一也」‖眞書。

【隸圃】レイホ　つきしたがふ。又、けらい。潘岳、上國中詩一首「齊萬年、羅戸ーー貧レ日久矣」

【隸篆】レイテン　隸書即ち楷書と、篆書と。晉存誠賦「得二先衛于ーー一」‖篆隸。

【隸僕】レイボク　○周代の官名、宮中の掃除を掌るこもの。周禮、夏官「ーー掌二五寢之掃除、糞洒之事一」○しもべ。‖僕隸。

【隸也不レ力】アトメヤ　奴隸の者即ち臣が力を君の爲めに盡さざる我。文天祥「正氣歌「隸也實不レ力」林四伸の古文析義、註に「ーー四字、乃楚公子徹服出亡、其僕罵レ之之詞、借以罵二所レ縛將士、不二肯力戰一致一レ己被レ執」（淵鑑類函、奴婢門、卷五）

隹部

【隹】㊀スイ　㊁スキ　紙　支　㊂サイ　㊃ソイ　㊄ソウ　㊅シュ　㊆シュウ　㊇ソウ　㊈ソウ　㊉ソウ　㊊ソウ　㊋ソウ　㊌ソウ　㊍ソウ　㊎ソウ　㊏ソウ　㊐ソウ　㊑ソウ　㊒ソウ　㊓ソウ　㊔ソウ　㊕ソウ　㊖ソウ　㊗ソウ　㊘ソウ　㊙ソウ　㊚ソウ　㊛ソウ　㊜ソウ　㊝ソウ　㊞ソウ　㊟ソウ　㊠ソウ　㊡ソウ　㊢ソウ　㊣ソウ　㊤ソウ　㊥ソウ　㊦ソウ　㊧ソウ　㊨ソウ　㊩ソウ　㊪ソウ　㊫ソウ　㊬ソウ　㊭ソウ　㊮ソウ　㊯ソウ　㊰ソウ　㊱ソウ　㊲ソウ　㊳ソウ　㊴ソウ　㊵ソウ　㊶ソウ　㊷ソウ　㊸ソウ　㊹ソウ　㊺ソウ　㊻ソウ　㊼ソウ　㊽ソウ　㊾ソウ　㊿ソウ　(1)ソウ　(2)ソウ　(3)ソウ　(4)ソウ　(5)ソウ　(6)ソウ　(7)ソウ　(8)ソウ　(9)ソウ　(10)ソウ　(11)ソウ　(12)ソウ　(13)ソウ　(14)ソウ　(15)ソウ　(16)ソウ　(17)ソウ　(18)ソウ　(19)ソウ　(20)ソウ　(21)ソウ　(22)ソウ　(23)ソウ　(24)ソウ　(25)ソウ　(26)ソウ　(27)ソウ　(28)ソウ　(29)ソウ　(30)ソウ　(31)ソウ　(32)ソウ　(33)ソウ　(34)ソウ　(35)ソウ　(36)ソウ　(37)ソウ　(38)ソウ　(39)ソウ　(40)ソウ

○すずめいろ「一弁」○ことをどりする「一躍」

【雀角鼠牙之争】ジャクカクソガノアラソヒ　人と訴訟を構ふるをいふ。詩、召南「誰謂雀無レ角、何以穿二我屋一、誰謂女無レ家、何以速二我獄一、雖レ速二我獄一、室家不レ足、誰謂鼠無レ牙、何以穿二我墉一、誰謂女無レ家、何以速二我訟一、雖レ速二我訟一、亦不二女従一」とあるに本づく。

【雀釵】ジャクサイ　婦女の首飾、雀の形をちりばめしかんざし。何遜詩「一一擬二暁粧一」

【雀舌】ジャクセツ　茶の異名、其の芽の至りて細ければかなるが故。劉禹錫詩「添レ鼎come二一一一」

【雀梅】ジャクバイ　にはうめの異名の樹雅、疏「一一、似レ梅而小」

【雀麦】ジャクバク　燕麦ムギの異名。稽雅、注「一一即燕麦」

【雀斑】ジャクハン　そばかす、面皮に生ずる褐色の斑点。

【雀盲】ジャクマウ　とりめ、鳥雀は日暮れては物を見ること能はざるが故「病源論」

【雀躍】ジャクヤク　こをどりしてよろこぶ。荘、在宥「鳥鼠挙動以レ一、一一不レ蟄」

【雀蛤】ジャクカフ　はやぶさの一種。説珠、詩疏「魚虫挙動以レ一、一一不レ蟄

王敦傳「音節雄暢、神氣自得、旁若レ無レ人、舉坐歎二其一一」【雄志】シヲ　ををしきこころざし。陶潛賦「屈二一一於威監一」【雄兒】シヲ　すぐれたる男。現志、鄧艾傳「姜維自一時一一也」‖好男子。【雄姿】シヲ　いさましきすがた。三國志「一一傑出、有二霸王之略一」杜甫詩「一一未レ受伏櫪恩、猛氣猶思戰捕利」【雄視】シヲ　威勢を張りて他を見くだす。宋史、蘇軾傳「軾與二弟轍一師二父洵一、爲レ之其聲渾涵光芒、一一百代一」【雄心】シヲ　ををしき心。阮瑀、與二孫權一書「大丈夫一一、能無二憤發一」‖壯志。【雄深】シヲ　文章の組立が雄大にして意味ふかし。冷齋夜話「一一雅健者、其氣長故也」【雄特】シヲ　すぐれて強き大將。後漢書、馮異傳「異與レ賊相拒且二數十日一、雖三屢獲二一一一、餘衆尚多」‖勇將・猛將。【雄俊】シヲ　すぐれたる才力。又、其の者。史、范雎・蔡澤傳「蔡澤天下一一、弘辯智士也」‖豪俊・英俊。【雄勝】シヲ　地勢のすぐれて險要なる處。蘇舜欽詩「盤桓擁二一一一、重此快二心賞一」【雄蕊】シヲ　をしべ、花粉を散らして雌蕊に受精せしむる植物の生殖器官の一。【雄膽】シヲ　ををしくしてゆたか。顧愷之畫、魏明帝像贊「一一奮發」‖雄健富贍。【雄大】シヲ　さかんに大いなり。王惲詩「中條鬱蒼蒼、首尾固一一」【雄斷】シヲ　思ひきりよくきめる。後漢書、光武紀「明明烱謀、超越一一」‖勇斷・英斷。【雄雉】シヲ　をすのきじ。詩、邶風「一一于飛、泄二泄其羽一」【雄鎭】シヲ　雄大にして險要なるかため。陶孤及、江州刺史廳壁記「世稱二一一一、且曰二天府一」‖雄藩。【雄長】シヲ　○すぐれてつよし。○一方に據りて勢をふるふ。陳書、虞寄傳「一一偏僻一」‖雄張。【雄張】シヲ　勢さかんにして威力をふるふ。後漢書、班超傳「于寘王、一一南道一」【雄圖】シヲ　すぐれて大いなるはかりごと。晉書、武帝紀贊「決二神算於妻斷一一于議表一」‖壯圖。【雄哉】シヲ　勢威の壯んなるをいふ。陳子昂詩「胡桀何密邇、河朔氣一一」【雄豪】シヲ　すぐれたるはたがしら。晉書、涼武昭王傳「大兄英姿挺傑、有二一一之風一」【雄湯】シヲ　○雄大なるかため。唐書、嚴綬傳「前後統二臨三鎭一皆雄二一一一」‖雄鎭。○勢力ある大諸侯。【雄飛】シヲ　をとりのををしく飛ぶ如く、大勢力を以て事を行ふ義。後漢書、趙典傳「丈夫當二一一、安能雌伏」【雄風】シヲ　○すずしく心地よき風。宋玉、風賦「清清冷冷、發二明耳目一、此大王之一一也」○盛んなるいきほひ。柳宗元詩「一一吞二七澤一」‖威風。【雄宮】シヲ　すぐれてとむ。鮑照賦「才力一一、士罕精研」【雄文】シヲ　氣力のすぐれたる文章。蘇軾、王元之畫像記「王公元之以二一一直道一獨立當世一」【雄憤】シヲ　ををしき、いきどほりの盛。梁、新修伍相神廟記「一一無レ所レ泄」【雄篇】シヲ　組立の大きくすぐれたる詩文。蘇軾詩「一一關二新語一」【雄辯】シヲ　辯舌がすぐれて善し。杜甫、飲中八仙歌「高談一一驚二四筵一」【雄辯强據】シヲキヨウキヨ　辯說すぐれて議論に確かなるよりどころあり。王令文「聞得二子厚文一皆——、源淵衍長」【雄謀】シヲ　すぐれたるはかりごと。蘇頌文「移レ孫爲レ忠、一一竟敎」【雄謀】シヲ　すぐれたるはかりごと。陶翰詩「儒服挾二諸將一、一一吞二八荒一」‖雄略。【雄略】シヲ　をあさ。儀禮、注「案、是一一」【雄邁】シヲ　氣象のすぐれてつよき我。閻振詩「淵歌發二一一一」‖豪邁。【雄民】シヲ　ををしき人。荀子野、碑文「義士一一、星羅雲集」【雄男】シヲ　すぐれてつよし。南史、杜幼安傳「至孝寬厚、一一過レ人」【雄略】シヲ　すぐれたるはかりごと。史、閻侯世家述贊「嗟彼一一、智非二魁岸一」‖雄圖。【雄力】シヲ　すぐれたるちから。江淹詩「驥才一一君何怨」【雄麗】シヲ　力がすぐれてうるはし。‖偉麗・逸麗。【雄劣】シヲ　すぐれてつよきと、おとりてよわきと。晉書、劉聰載記「一一不レ同、必致レ死距レ我、將軍宜二整レ陣接レ兵以擊二之、弗レ可レ輕也」‖強劣。【雄烈】シヲ　ををしくはげし。魏書、長孫肥傳「一一知レ名、軍鋒所レ指、罔レ不二奔散一」

【雅】㊀ガ　㊁ア　㊂ヤ

㊀ただし(正)正しき道。正しき義。正しき歌、正しき言。○正しき樂、正しき聲。○詩の六義の一、正樂の歌「大一」「小一」論、子罕「一頌各得其所」○みやびやか。俗の反對。○儀りあり、おくゆかし「嫻一」○轉じて人の文詩。又、言行などに對する敬語「一囑」「一鑑」○つね

（常）つねに。論、述而「子所ニ雅言一」○もと、もとより（素）○一ー は行列の整ふ貌。○爾ー ジは書名、字義を解せし書の最も古きもの。省稱して單にー ともいふ、後世の字書多く爾ーの體に仿ひて爲り、又多くーといふ、廣ー 埤ーの類。㊁みやまがらす。‖鴉。

同訓異義 雅・本・原・舊・故・元・素・固の別は本（九〇七頁ウ）の條を見よ。

【雅愛】ガアイ つねにめで愛する。顏氏家訓「吾ーニ其手迹一」

【雅意】ガイ つねのこころざし。漢書、嚴安之傳「安之ー一、在ニ永朝一、遠爲ニ都守一、內不ニ自得一」

【雅友】ガイウ ○茉莉ツの異名（三餘贅筆）○風流なる友。

【雅遊】ガイウ ○風流のあそび。詩文書畫音樂などのみやびなるあそび。‖清遊・勝遊。○つねに人と交際するを好む、遊一に游に作る。史、張耳傳「張耳雅游、人多爲ニ之言一」注「雅游、言ニ慣習游從一故多爲ニ人所ニ稱譽一一」

【雅韻】ガイン ○風流なるおもむき。宋書、謝方明傳「無ニ他伎能一、自然有ニ一ー一」‖雅致。○氣高き音樂のしらべ。李商隱、高松詩「有ニ風傳ニー一」

【雅歌】ガカ 正しきうたをうたふ。後漢書、祭遵傳「對ニ酒設ニ樂、必ー一投壺」

【雅號】ガゴウ 文人墨客が文藝上に用ふる名。俗名に對していふ。

【雅語】ガゴ ただしきいましめ。晉書、儒林傳贊「ー一弗ニ論、微言復顯」

【雅客】ガカク ○風流なる人。‖雅人・雅士。○水仙スヰセンの異名（三柳軒雜識）

【雅樂】ガガク ○ただしきおんがく。論、陽貨「惡ニ鄭聲之亂ニー一也」○國 雅樂寮ウタノツカサ・雅樂頭ウタノカミの略語。

【雅慧】ガカン 御覽に入れる、お目にかけるといふ敬語。己の書畫などを人に贈る時に用ふ。‖清鑒・雅鑑。

【雅曲】ガキョク ただしき音樂。吳志、周瑜傳、注「吾難ニ不ニ及ニ雙曠聞ニ絃賞上ニ音一、足ニ知ニー一也」

【雅會】ガクワイ 風流なるよりあひ。劉子翬詩「ー一欣開珠履集、新詞好付ニ雪兒一歌」‖雅集。

【雅謔】ガクギャク ただしきをしへ。後漢書、朱穆傳「希ニ李老之ー一、思ニ馬援之所ニ尙」‖清談。

【雅懷】ガクワイ 風流なるおもひ。李白、桃李園序「不ニ有ニ佳作一、何申ニー一」

【雅兄】ガケイ 友を稱する敬語。‖仁兄・學兄。

【雅潔】ガケツ ただしくいさぎよし。元史、戴表元傳「其文清潤ー一、化ニ陳腐一爲ニ神奇一」

【雅言】ガゲン ○つねにいふことば。論、述而「子所ニー一ニ、詩書執禮、皆ー一也」○ただしきことば。諸葛亮、出師表「告ニ諭善道一、察ニ納ー一ー一」○國 みやびなることば。俚言・俗語の對。

【雅健】ガケン 詩文がみやびやかにして力つよし。唐書、柳宗元傳「雄深ー一、似ニ司馬子長一」

【雅故】ガコ ○ただしき意義、故は訓詁の詁に同じ。漢書、敍傳「函ニー一、通ニ古今一」○ふるなじみ。論死新書「幸逢ニー一ー一」‖舊友。○つねづね、平素。史、荊燕世家「今呂氏ー一、本推ニ轂高帝一、就ニ天下一功至大」

【雅話】ガワ 正しくみやびなることば。俗語の對。‖雅言。

【雅士】ガシ 正しくして上品なるさむらひ。隱志、邢顒傳「少秉ニ高節一、玄靜澹泊、言少理多、眞ー一也」

【雅旨】ガシ ただしきむね。舊唐書、儒學傳贊「備道玄機、聖人ー一」‖雅意。

【雅志】ガシ ○平生のかんがへ。晉書、謝安傳「ー一未ニ就、遂遇ニ疾篤一」○みやびなる心。陶潛、閑情賦「夏ニー一子高雲一」

【雅思】ガシ みやびなるかんがへ。歐陽修詩「善政已成多ニー一」

【雅秀】ガシウ みやびやかにひいでる。宋史、李綱中傳「風神ー一、悟ニ於樂利一」

【雅集】ガシフ 雅會に同じ。

【雅人深致】ガジンシンチ 高尙なる志ある人の深遠なるおもむき。晉書、王羲之妻謝氏傳、「謝氏字道韞、聰識有ニ才辯一、叔父安毎問ニ毛詩何句最佳一、道韞稱ニ吉甫作ニ頌穆如ニ清風一、仲山甫永懷、以慰ニ其心一安謂ニ有ニー一ー一」安は謝安。

【雅章】ガシャウ 正しきおんがくの樂章。儲光羲詩「是日陪ニ乘輿一、勞ニ君奏ニー一ー一」

【雅趣】ガシュ 雅致に同じ（江淹、修心賦）

【雅儒】ガジュ 正しき道を行ふ學者。俗儒の對。荀子「故有ニ俗人者一、有ニ俗儒者一、有ニー一者一、有ニ大儒者一」

【雅馴】ガジュン 文辭がただしくしてよく熟す、馴は順。史、五帝紀贊「其文不ニー一、薦紳先生難ニ言之一」

【雅頌】ガショウ 詩經中の雅と頌との詩。雅は正樂の歌、頌は祖先の功德を贊歎する歌。詩經序「詩有ニ六義一、一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌」論、子罕「子曰、吾自ニ衛反ニ魯一、然後樂正、ー一各得ニ其所一」

【雅正】ガセイ みやびやかにただし。後漢書、輿服志「參ニ稽六經一、近ニ于ー一」

【雅節】ガセツ ただしきみさを。駱賓王詩「霜松貞ー一、月桂開ニ神標一」

【雅奏】ガソウ ただしき音樂のしらべ。奏は節奏。宋史、樂志「嘉慶斯備、ー一具舉」

【雅俗】ガゾク みやびやかなると、さとびたると。高尙なると下品なると。後漢書、郭泰傳贊「ー一無ニ所ニ失一」

【雅懿】ガイ　正だしき文徳。北史、文苑伝「並有ニ一一ー一ー一ー

は千百羣を成す、大なる者中に居り、小なる者外に圍み、以て動靜を察し、狐・人などの來り捕ふるに備ふ、故に名つく。元好問詩「一一辛苦候二寒更一」

【雁帛】ガンパク　てがみ。雁書參看。英士安詩「書封二一一感二蘇卿一、詩研二綺縠一歎二張翰一」柳貫詩「江歸北來無二一一」

【雁皮】ガンピ　落葉灌木の一、高さ三四尺、淡黄色の花開く、樹皮の纖維にて紙を製す。

【雁幣】ガンペイ　婚禮に雁を贄へとするをいふ。儀禮、士昏禮「昏禮、下達、納采用レ雁」白虎通「納采問名・納吉・請期・親迎、皆用レ雁者、取二其隨レ時南北不レ失二其節一、明レ不レ奪二女子之時一也」

【雁來紅】ガンライコウ　○はげいとう。花譜「秋色葉如レ花者、名二一一一一」又「葉全紅者、一名一一、紅綠相間者、名二十樣錦一」日老少年。○ひしの異名。吳郡志「一一、菱名」

【雇】（一）コ　（二）コ　遇　慶

（一）九一は鳩の一種。‖鳩・九區。（二）やとふ（傭）賃を與へて人を使ふ。やとひ、やとはれ人。○圓官廳會社等にて定員外に使用するもの「一員」通じて僱に作る。

【雇員】コイン　官廳などにて定員外の使用人。

【雇直】コチ　人夫などをやとふ賃錢。‖庸錢・傭錢。

【集】シフ　緝

○あつまる「會一」「雲一」「四一」「羣一」あつめる（衆會）鳥が木にあつまる。詩、周南「一于灌木」○すべあつめる（總覺）孟、萬章「孔子之謂一大成」○まじふ（雜）○なる。なす（成・就）成就する。書、武成「大統未一」○もろもろ（衆）○やすんず（安）やはらぐ（和）史、曹參世家「安一百姓」‖緝。○ひとし（齊）○とどまる（止）○とりで、邊境に在る壁壘。左、昭二三「險其走一」○いち（市場）商人が日を定めて一處に集りて交易する所。‖墟。○詩文などをあつめたるものの稱「詩一」「文一」○詩文などをあつめる「採一」‖輯。

【集字】本、義に作る、羣鳥の木上に在るに象れり。

【同訓異語】集・聚・纂・輯・萃・輳等の別は聚（一五四九頁三段）の條を見よ。

【集英】シフエイ　○すぐれたるものをあつめる。○宮殿の名。宋史、哲宗紀「御一一殿一策一進士一」

【集腋】シフエキ　衆力を集めて一事を成す喩。慎子「狐白之裘、非二一腋之皮一也」

【集合】シフガフ　あつまりあふ。あつめあはす。爾雅、註「匹、配合也、會、一一也」

【集義】シフギ　道義を積みあつめる。孟、公孫丑「是一一所レ生者、非二義襲而取レ之也」

【集議】シフギ　あつまりて相談する。史、叢錯傳「上令二公卿列侯宗室一一、莫三敢難二竇嬰爭レ之」‖會議。

【集句】シフク　古人の成句をあつめて一篇の新詩とする。又、其の詩。文體明辨「一一詩者雜二集古句一、以成レ詩也、自レ晉以來有レ之、至二宋王安石一尤長二於此一」

【集會】シフクワイ　多人數があつまる。

【集權】シフケン　政權を一所にあつめる。分權の對「中央一一」

【集古】シフコ　ふるき物をあつめる。歐陽修に「一一錄十卷」の著あり。

【集散】シフサン　あつめると、ちらすと「物產の一一地」

【集事】シフジ　事をなしとげる。左傳「可二以一一一」注「集、成也」

【集錦】シフキン　詩文、又、種種の材料をあつめる。‖萬集。

【集聚】シフジュ　あつまる。あつめる。左傳、疏「治レ民尙二其一一」‖聚二其流散一」易林「仁聖相遇、伊呂一一」‖聚集。

【集成】シフセイ　集大成を見よ。

【集抄】シフセウ　よせあつめてしるすの略。史、王僧孺傳「僧孺集二十八州譜七百一十卷。百家譜一一十五卷・東南譜一一十卷」

【集大成】シフタイセイ　成は音樂の一終、金・石・絲・竹・匏・土・革・木の八音には、各始終あり、之を合奏するとき、金を鳴らして始め、石を擊ちて終ふ、これ八音の小成を集めて一大成となすなり、よりて孔子が羣聖人の道を集め、統一して儒教を完成せしに喩ふ。孟、萬章「孔子之謂一一也者、金聲而玉振レ之也」

【集中】シフチウ　○ひところにあつめる。○詩文集のうち。

【集注】シフチウ　○一所にあつめる。○書物の解釋をあつめる。‖集註。

【集註】シフチウ　諸家の註釋をあつめる。又、其の書「論語、朱熹、一一」‖集注。

【集綴】シフテイ　事實をあつめて文につづる。唐書、鄭處誨傳「一一當世事」

【集配】シフハイ　圓あつめると、くばると「郵便一一人」

【集部】シフブ　詩文の書の總稱。四庫（三六一頁二段）參看。‖丁部。

【集服】シフフク　あつまりてやはらぎしたがふ。史、衞將軍傳「十萬之衆、威懷一一」

【集往】シュウ　あつまりゆく。呉都賦「鱗甲之所ニ―一」

五画

【雄】

雄（隹部四画）に同じ。

【雊】

コウ　㊥ 遇

なく（鳴）雄雉がが鳴く「―雉」

【雌】

㊀シ　㊁セイ・サイ　㊥ 支

○めす、めん、め、主に鳥類のめすにいふ。雄の對。○獣の牝をもいふ。古詩「―兎眼遠離」○勢よわし、めめし、にぶし。又、其の者「―伏」○まける、おとる（劣）史、項羽紀「決ニ―雄ニ」

【雌雄】シユウ　○鳥のめすと、をすと。○負けると勝つと。大雅奏有。‖勝敗。

【決ニ雌雄ニ】クツス　勝敗をさだめる。史、項羽紀「與ニ漢王ニ挑レ戦――」

【雌蕊】ズイ　めしべ、花の生殖器官の一。雄蕊の對。花の中央にありて後に實となるもの。

【雌節】セツ　柔順なる節義。淮南子「聖人守ニ清道ニ而抱ニ―一」

【雌懦】ダ　めめしくよわしく柔弱にして振はず。懦は愚に同じ。北齊書、永安簡平王浚傳「文宣、性ニ―一」‖柔懦・怯懦。

【雌雉】チ　めすのきじ。論、郷黨「山梁ニ―一、時哉時哉」

【雌竹】シチク　めだけ。雌雄洪詩「過レ猶ニ―一已敷子、出レ屋老蕪終九齢」

【雌風】フウ　しめりて心もち悲しき風。雄風の對。宋玉、風賦「楚懐王曰、願レ聞ニ温致レ涙、此所謂庶人之ニ―一也」

【雌伏】フク　○人の下につきしたがふ。後漢書、趙典傳「大丈夫當ニ雄飛ニ安能ニ―一」雄飛の反對。○しりぞきてかくれる（退藏）温庭筠詩「―覚非レ夫」

【雌黄】シオウ　○硫黄と砒素との混合して成る黄土、藥用、又、顔料とす。水經、注「鋼鐵及ニ―一」○古、黄紙に字を寫す、誤あれば―を以て塗る、故に轉じて詩文を改竄するを「加ニ―一」といふ。口中―（二九七頁一段）參看。

【雎】

シュ　㊥ 雎とは別

○―鳩シュウキュウはみさご、鶚に似て大いなる鳥、水邊に棲み魚を捕へ食ふ、雌雄の別正し、故に詩人夫婦間の和きて別あるに喩ふ。詩、周南「關關―鳩、在ニ河之洲ニ窈窕淑女、君子好逑」‖王雎。○越―シュは行き難き貌。‖趙雎。

【雋】

㊀セン　㊁シュン　㊥ 霰 震

㊀こえたるしし（肥肉）烏肥える、美味き肉。○轉じて味ある言「一永」○姓。―不疑は前漢の人、春秋を治め、進退必ず禮を以てす。㊁すぐれる。才が衆にぬき出る。漢書、龔遂傳「進用英ニ―一」‖俊傷。

【雋器】シュンキ　すぐれて才ある人。人物志「人材不レ同、成有ニ早晩ニ、逢爲ニ一―者ニ」

【雋傷】シュンショウ　才學が十分にすぐれて足る。嘉遯、宋弁傳「才學ニ―一、少有ニ美名ニ」

【雋哲】シュンテツ　すぐれてさとし。又、其の人。李陵賦「休矣時英、茂哉ニ―一」

【雋発】バツ　すぐれたる人。白居易詩「將校森ニ貔虎ニ、賓僚儼ニ―一ニ」‖俊発。

【雋抜】バツ　すぐれてぬきてる。東萊子「神峯ニ―一、珠壁相照」‖俊抜。

【雋敏】ビン　すぐれてさとし。六一詩話「文詞ニ―一、尤好ニ嘲詠ニ」

【雋武】ブ　すぐれてたけし。漢は儁・俊に通ず。陸雲、吳故丞相陸公誄「方剛爾清、烈文ニ―一」

【雋偉】イ　すぐれたる輔相。王猷之、明ニ謝安忠勤ニ疏「實大晉之ニ―一、義筋於叢臣ニ」

【雋茂】モ　才學がすぐれる。又、其の人。潘岳文「清才ニ―一、德盛日新」‖俊茂。

【雋永】エイ　肥えてうまき肉の如く義理深長にして味あり。漢書、嚴助傳「通論ニ戰國時說士權變ニ、赤自序ニ其說ニ、凡八十一首、號曰ニ―一ニ」

【雉】

チ　㊥ 紙

○きじ、きぎす、野禽の一、形雞に似、雄は羽毛甚だ美し、目赤く尾長し、漢の呂后の名―なるが故に諱みて野雞といふ。○城のかき。○城關の尺度、一丈四方を堵といひ、三堵を一―といふ。即ち長さ三丈、高さ一丈。左、隱元「都城過ニ百―一」○一門は公宮の南門（左、定二、註）‖應門。○牛の鼻づらの繩。○古、博戲、五木を以て子イと爲す、梟盧・―・犢・塞あり、勝負の采と爲す、梟形を刻む者を最勝と爲し、盧之に次ぎ、―犢又之に次ぎ塞を最下と爲す（山堂肆考）

【雉経】チケイ　くびれしぬ。雉は縄、經は道、呼吸の道を縄にてしめる。晉語「申生乃ニ―一於新城之廟ニ」‖縊死。

【雉兎者】チトシャ　きじと、うさぎとを捕ふる者。孟、梁惠王「爲ニ雉兎者往焉、

——往焉」

【雉堞】チテフ　城上のひめがき。鮑照賦「板築——之殷」王禹偁、竹樓記「子城西北隅、——圮毀」‖女牆・埤堄。

【雉頭裘】チトウキウ　雉の頭の美毛にて飾りつけたる珍らしきかはごろも。晉書、武帝紀「獻——、帝以奇技異服、尚禮所禁、焚之於殿前」

【雉媒】チバイ　獵師が雉の子を養ひ卵らして他の野雉を招引せしめて之を獵取するをとりとする者、故に媒といふ。司空圖詩「——解曉章方時」

【雍】

㊀ヨウ　㊁ヨウ　㊂ヨウ　冬　腫　宋　㊀は古、㊁㊂は腫に作る

㊀やはらぐ(和)むつまし。書、堯典「黎民於變時——」(於はああ、時はこれ)○歎コタ(ふ)辭の形容。家語、正論「言乃——」○辟——(ハイ)は天子の學校。‖辟雝。○著——は十干の戊の異名。爾雅「太歲在戊曰著——」㊁たすく(祐)○あつむ(聚)○ふさぐ(塞)‖壅。㊂古の九州の一。書、禹貢「黑水西河惟——州」今の陝西・甘肅二省、及青海地方。‖雝州。○いだく。‖擁。

【雍閼】ヨウアツ　ふさぎとどむ。雍は壅。閼は止。漢書、中山王傳「今臣——不ㇾ得ㇾ聞」

【雍熙】ヨウキ　○やはらぎてたのしむ。雍は和、熙は嬉。張衡、東京賦「上下交——」‖和樂。○宋太宗の年號。

【雍齒封ㇾ侯】ヨウシフウコウ　漢の高祖が張良の計を用ひて、先づ其の惡む所の雍齒を封じて以て他の疑懼して叛を謀らんとせし諸將を鎭撫せしをいふ。史、留侯世家「於ㇾ是上乃置酒、封ㇾ雍齒ㇾ爲ニ什方侯一而急趣ニ丞相御史一定ㇾ功行ㇾ封、羣臣罷ㇾ酒、皆喜曰、雍齒尚爲ㇾ侯、我屬無ㇾ患矣」

【雍樹】ヨウジュ　小兒をいだくをいふ。雍は擁に通ず。史、夏侯嬰傳「——而馳」註「南陽人謂ニ抱ニ小兒一爲ニ——一」

【雍徹】ヨウテツ　雍は詩經周頌の篇名、徹は撤、周の世、天子、宗廟の祭に供へたる物を撤去する時、雍の詩を歌はしむ、而るに臣下にして之を行ふは僭越なり。論、八佾「三家者以ㇾ——」‖雝撤。

【雍防】ヨウバウ　ふさぐ、とどむ、雍は壅。漢書「——百川」

【雍蔽】ヨウヘイ　やはらぎしたしむ。徐陵、碑文「家門——、孝友爲ㇾ風」

【雍穆】ヨウボク　やはらぐ。南史「家門——、爲ニ州郡所ニ重一」

【雍門鼓ㇾ琴】ヨウモンコキン　雍門周が琴を以て齊の孟嘗君を感動悲傷せしめたる故事。說苑「雍門周以ㇾ琴見ニ孟嘗君一、孟嘗君曰、先生鼓ㇾ琴、能令ニ文悲一乎、雍曰、千秋萬歲後、臺榭已壞、墳墓已下、嬰兒竪子樵採者歌ニ謁其足一、而歐ニ其上一目、夫以ニ孟嘗賢業一、乃若ㇾ是乎、於ㇾ是孟嘗泫爲ㇾ垂ㇾ臉曰、先生令ニ文若ニ破ㇾ國亡ㇾ邑之人一」

【雍容】ヨウヨウ　やはらげる貌。漢書、司馬相如傳「從ニ車騎一、——閒雅」

【雍雍】ヨウヨウ　音のやはらげる形容。張衡賦「延ニ臨輅之——一兮」

【雍和】ヨウワ　やはらぐ。後漢書、魏霸傳「霸兄弟同ㇾ居、州里慕ニ——一」

【雍和宮】ヨウワキウ　北京安定門內、舊の國子監の東に在り、清の世宗の潛邸なり、世宗即位の後、改めて喇嘛寺と爲す。

六畫

【雜】

雜(隹部十畫)の俗字。

【雛】

ラク　篠

○かはらけ、體黑くして驚ガイ白き馬。詩、魯頌「有ㇾ駰有ㇾ——」○おもがい、絡に通ず。莊、馬蹄「刻ニ之一之一」○水名、洛に通ず。漢は火德を以て王たり、故に光武帝以後、水に從ふ洛字を忌みて此字を代へ用ふ「——陽」○額に通ず「龍——侯」

【雛陽】ラクヤウ　古の帝都の名。史、蘇秦傳「使ニ我有ニ——負郭田二頃一、吾豈能佩ニ六國相印一乎」今の河南省洛陽縣。‖洛陽。

八畫

【鴦】

鴛(隹部十畫)に同じ。

【雛】

雛(次頁三段)に同じ。

【雕】

テウ　蕭

○わし、鷲の大なる者。埤雅「——似ㇾ鷹而大、黑色俗呼ニ皂一」‖鵰。○——は幸明なる貌。‖昭昭。○ゑる、ちりばむ。玉を刻む「一刻」彫に通ず。孟、梁惠王「必使ニ玉人一琢之」○しぼむ、しをれる、かれる、傷む、凋に通ず。

【雕楹】テウエイ　ほりものしたる大いなるはしら。楚辭、文「丹柱——、飛閣曼ㇾ榑」

【雕巧】テウカウ　たくみにほりかざる。蘇舜欽詩「扶疎珊瑚枝、本不ニ自——一」

【雕悍】テウカン　わしの如くあらあらしく、つよし。左思賦「料ニ其處勞一則——狠戾」

【雕朽】テウキウ　くちたる木にほる、物事の用を爲さざるに喩ふ。北史、儒林傳序「鎔冰——、迄用無ㇾ成」路賓王詩「有ㇾ志憐ニ——一、無ㇾ庸類ニ散材一」

【雕金】ケウ　金にちりばむ。南史、后紀傳「―レ―鏤レ寶、照二燭房幄一」

【雕琴】ケウ　刻みて飾れる琴。鮑照詩「奉レ君金屈巵美酒、瑇瑁玉匣之―」

【雕戈】ケウ　ゑり飾りたるほこ。國語「樓公衛――出見二使者一」

【雕繢】ケウクワイ　ほりものし、ゑがく、詩文などを美くしく飾る義。世說、文學「君詩若二鋪レ錦列一レ繡、亦―レ―滿レ眼」‖雕繪。

【雕軒】ケン　ほりものしたるのき。又、美くしき宮殿。漢沼詩「九種嘉禾垂二綺陌一、四時甘雨帶二――一」

【雕刻】コク　金石竹木などにほりきざむ。輟耕錄「倡成者、宋高宗朝匠人、――精妙無レ比」‖雕刻。

【雕胡米】コ　まこもの實、食ふべし。‖菰米。

【雕飾】ショク　きざみかざる。文心雕龍「――取レ巧、雖レ美非レ秀」

【雕繪】クワイ　ゑりうがつ。蘇軾詩「編愚臥龍公、挾レ策事――一」

【雕漆】シツ　つるしゅ（堆朱）塗生八膳「宋人雕紅漆器」

【雕人】ジン　骨角をみがき治むる工人（考工記）戸子「――裁レ骨、則知二牛長少一」

【雕章】シャウ　ゑりかざりたる文章。晉、摯虞「屠獸雖レ有二損益一愛猶在乎――一」

【雕飾】ショク　ほりものしてかざる。晉書「昔日費ニ―一、今倘二儉與一レ素」‖刻飾・鏤飾。

【雕鏤】ロウ　ほりきざむ。陳傅賦「――始就、剞劂仍加」‖雕鐫。

【雕題】ダイ　○題にほりものす。禮、王制「南方曰レ蠻、―レ―交趾、有下不二火食一者上矣」○轉じて書物の頭註「論語―一」

【雕琢】タク　○玉をきざみみがく。孟、梁惠王「必使二王人一―二之」○詩文などを巧に工夫して作る。司馬遷、報二任安一書「欲下自―二其辭一以自飾上」

【雕柱】チウ　ほりものしたるはしら。梁元帝賦「玉階紫閣、――錦檻」

【雕蟲小技】セウキ　次條に同じ。北史、崔浩傳「官謂二浩一曰、――、我不レ如レ婦、國典朝章、卿不レ如レ我」

【雕蟲篆刻】テンコク　文章を作るに、字句をらるはしくかざるをいふ。法言、吾子「或問、吾子少而好レ賦、曰、然、童子――、俄而曰、壯夫不レ爲也」‖雕蟲小技。

【雕離】リ　琵明なる貌。荀子「―――焉、懸二貴賤重貧於其前一」

【雕梭】サン　文字をはんぎに彫る。又其のはんぎ。隋末唐初より行はる。

【雕鷹】ヨウ　くまたか。揚子「―――高翔、在二腐鼠一也」

【雕梁】リャウ　ほりものしたるはり。江總詩「芙蓉作レ帳照ニ―――一」

【雕龍】リュウ　龍をきざむ如く文章を巧にかざる。史、孟荀傳「談天衍、―――奭」注「若レ雕二鏤龍文一」一說無用の辯をほしいままにする喩。

【雕鞍】アン　ほりものしたるてぐるま。晉書、佛圖澄傳「季龍陪位、恥レ心事レ澄、衣以二綾錦一乘以ニ―――一」

【雕輅】ロ　皇后のくるま。隋書、禮儀志「皇后之車十二等、五曰ニ―――一以錦飾一」

【雕鎪】シウ　ほりきざみて飾る。國語「不レ聞下其以二土木之崇高一―――一爲レ美」

九畫

【雛】スウ　支

○蚯蚓に似て大いなる蟲。○いへども、たとへば。○たとひ（假令）父―没は、父がたとひ、死なれてもの義。○おしはかることば。論、述而「―――違」家、吾從下」○文勢を轉ずるところに用ふる語「―然」又詩にては下の語にかかる。岑參詩「明主―然棄丹心猶未休」

十畫

【雞】ケイ　齊　又、鷄に作る

○にはとり、くだかけ、家禽の一、雌雄皆肉冠アリ、肉及卵は滋養の效あり。‖司晨鳥・啓闇。

【割雞焉用二牛刀一】ケイニギウトウヲモチヒン　小事を處するには大人物を要せずとの喩。論、陽貨「子之武城、聞二弦歌之聲一、夫子莞爾而笑曰、――」

【雞姦】カン　男色。隨園隨筆「楊氏正讀雞作二奚姦之條一、奚晉雞、特レ男作レ女也、今男淫爲ニ―――一誤矣」‖龍陽。

【雞距】キョ　にはとりのけづめ。白居易、――筆賦「不レ得二兎亳一、無二以成一起草之用一、不レ名ニ―――一、無二以裁二入木之功一」‖雞跖。

【雞冠】クワン　○にはとりのとさか。○雞頭に同じ。本草「――花、以二花狀一命レ名」

【雞冠石】セキクワンセキ　砒素の硫化石、紅色、又、橙黃色をなす。顏料又花火に用ふ。

【雞鶁】ケキ　ふくろふ。本草「鶁亦名ニ―一」

【雞犬相聞】ケイケンソウブン　雞の聲と犬の聲とがあちこちに聞える、人家のうちつづける形容。老子「鄰國相望、雞犬之聲相聞」

【雞口】コウ　小さき者の頭となる義。次條參看。

【雞群】グン　鳥の群。晉書、嵇紹傳「紹儀表堂堂、卓然不レ群、或謂二王戎一曰、昨於二稠人中一、始見二嵇紹一、昂昂然若二野鶴之在二雞羣一」

【雞肋】ロク　雞の肋骨。肉すくなく、棄つるに忍びざるもの。後漢書、楊修傳「曹操出レ教、――、操見レ之、乃收レ兵」

【爲二雞口一無レ爲二牛後一】(ケイコウトナルモ ギュウゴトナルナカレ) 小なりとも人の上に立つべし、大なりとも人の尻につくべからずといふ喩。史、蘇秦傳「鄙諺曰、寧爲二雞口一、勿レ爲二牛後一、今四面交レ臂而臣二事秦一、何異二於牛後一乎」

【雞狗馬之血】(ケイクバノチ) 古、誓をなす時、其の身分に應じて天子は牛馬、諸侯は犬豚、大夫以下は雞の血をすする。史、平原君傳「歃二血於堂下一」

【雞子】(ケイシ) ○たまご。雞卵。孔叢子「賦二於民一而食二人二一一一

王夜開金城西始林開有「鍾聲」、遥明遣二氣公視レ之、有二金色小鏑一、掛二樹枝一、白雞鳴二於下一、氐公還告、王使二人取レ樻開レ之、有二小男兒在一レ其中一、姿貌奇偉、王喜謂二左右一曰、此豈非二天祚一我以二胤乎一、名二閼智一、閼智郷音小兒之稱、以二其出一レ金櫃一、姓二金氏一、有二雞怪一、改二始林一名二雞林一、因以爲二國號一」

【雛籠】スウ 雛を入れる籠。列仙傳、鑒二一一鼠數枚于宅之東南一」

【雛助】スウ ○にはとりのあばらぼね。食ふ程の肉なけれども、少しく肉あるを以て棄つるには惜しといふ意。後漢書、楊修傳「夫一一、食レ之則無レ所レ得、棄レ之則如二可レ惜一」○雛助の如く體の小弱なるに喩ふ。晉書、劉伶傳「劉伶皆醉、與二俗人一相忤、其人褰レ袂攘レ拳往、伶徐曰、一一安足二以安一レ拳乎一、其人笑而止」

【雀】

㊀ クイ 支 ㊁ スキ 紙

二つ。るまの輪のひとめぐり、一周は一丈九尺八寸。○輪轉の度（規）○一周シウは子規ホトトギスの異名。省稱して一ともいふ。㊁越：は濮の郡名、今の四川省寧遠府。

【雙】

サウ ソウ 江 双は略字

○ふたつ、そろひ（兩）○ならぶ、たぐひ（偶）○一對の物を數ふるにいふ數詞「屏風一一」「儀禮、聘禮「凡獻、執一一」」○一陸ロクは博戲の一種。唐書、狄仁傑傳「一陸不勝二○國すごろく。‖雙六。

【雙】雙は隹二枚なり、雔又に从ふ、鳥二羽、即ち二隹を又（手）にて持つ形。

【雙艷】サウ 兩方のえくぼ。温庭筠、牡丹詩「欲レ綻似レ含一一笑」

【雙眼】サウ 兩方のまなこ。戎昱詩「暫收二一一淚」‖雙睛。

【雙眼鏡】サウガン とめがね（望遠鏡）

【雙柑斗酒】サウカンシュ 二つの蜜柑と一斗の酒と、之を携へて墓の壁を聞きに行く故事。續世說「戴顒、春日携二一往墅二黄鸝一曰、此俗耳針砭、詩腸鼓吹」

【雙魚】サウ 書信をいふ、雙鯉に同じ。黄庭堅詩「會思溫レ水寄二一一」

【雙關法】サウクワンホウ 文章構造法の一、相對する文句を相從ふて二篇一段をなすもの、韓愈の原毀の文の如きは此法を用ふ。‖雙扇法。

【雙肩】サウ ○左右兩方のかた。○二四の數、獸の三歳なるを肩といふ。張華、遊獵篇「機發應レ弦倒、一縱連二一一」

【雙句】サウク かご字。‖雙鈎。

【雙鈎】サウコウ ○かご字。文字の點畫の外邊に沿ひ、細線をひきてかきうつす。○運筆法の一、筆を把るに大指に對して食指と中指とを筆管にかける。大指と食指とのみをかけるを單鈎（單句）といふの對「段玉裁、論筆法」‖雙句。

【雙雙】サウ ふたつづつ。一對づつ。陸龜蒙詩「寒鷺驚起一一一」

【雙翅】サウシ 兩翼といふに同じ、翅はつばさ。許渾詩「一一欲レ開二千萬里一」

【雙翅類】サウシルイ 昆蟲類の一、中胸に膜質の翅が一對あるもの。蠅・蚊・虻など。

【雙子葉】サウシエフ 始めて芽を出だすとき、二枚の子葉を生ずる植物。

【雙日】サウジツ 偶數の日。隻日の對。宋史、仁宗紀「一一御二經筵一」‖偶日。

【雙親】サウシン ふたおや、父と母と。韓翃詩「不レ見一一辦二雙藷一」‖兩親。

【雙手】サウシュ もろて、左右の手。王維詩「一一向レ空如二鳥翼一」‖兩手。

【雙珠】サウシュ ○ふたつの眞珠。李白詩「一一出二海底一、俱是連城珍」○すぐれたる兄弟。又はすぐれたる兩友に喩ふ。三輔決錄「孔融見二韋元將・仲將一、與二其父書一曰、不レ意二一一生二於老蚌一」

【雙生】サウセイ ふたごをうむ。又、ふたご。空同子「一一以後當レ兄者昧二化理一者也」‖雙生兒・擧子。

【雙栖】サウセイ ○ならびすむ。曹植詩「仰見一一禽」○夫婦が共にすむ。鮑照芝詩「與レ君相對轉相親、與レ君一一共二一身一」

【雙棲】サウセイ 前條に同じ。沈佺期詩「海燕一一琉璃梁」

【雙聲】サウセイ 二字の熟語の上下の文字の發聲が子音を同じくするもの、「段玉裁」「凜レ烈ル」の類「南史、謝莊傳」

【雙全】サウゼン ふたつながらともにまつたし。杜甫詩「名器重二一一一」‖兩全。

【雙栄】サウエイ ふたつのえだ。雍陶詩「鄰湯紅芳一一重」‖兩枝。

【雙蛾】サウガ ふたつのてふ。盧瀚詩「風定草頭一一飛」

【雙方】サウホウ 相對する兩方の訴訟の原告と被告との如し。

【雙飛】サウヒ ○鳥が雌雄ならび飛ぶ。九國志「鳥鵲一一、不レ樂二鳳凰一」○轉じて夫婦の相離れざるに喩ふ。晉書「惟帝與后、契闊在昔、比二翼白屋、一一紫閣一」

【雙美】サウビ 二つながら美くし。又、一對の美くしきもの。晉書、桓彝等傳「座嘉重レ世、神秀一一」

【雙鏡】サウケイ ○兩方ともたふれる。晉書、蔡謨傳「謨語二所親一曰、才不レ副レ意、力不レ稱レ心、財殫力竭、智勇俱屈、此韓盧・東郭所二以一一一」○しんぢゅう（心中）情死。楊升庵外集「雲中之俗、女子與レ男征、鞭驍愛、

雑経ーー」

【雙廟】サウ　功績同じき両人をあはせ祭るおたまや。睢陽城の張巡・許遠の廟。濮州の狄仁傑・李憕の廟の類。

【雙璧】ヘキ　○一対のたま。○両方相並びて美くしきものに喩ふ。北史、魏収伝「見二其兄弟一歎曰、僕以二年老一、更観ニーー一」‖雙珠。

【雙眸】ボウ　両方のひとみ。世説、ーー閃閃、若二巌下電一」‖雙眼。

【雙鳳】ホウ　ふたつのつばさ。劉禹錫詩「鳴鳶弄ニーー一颯颯薄二青雲一」‖雙翅。

【雙鯉】リ　てがみをいふ。古楽府「客従二遠方一来、遺二我ーー魚一呼レ童烹二鯉魚一、中有二尺素書一」より出づ。‖雙魚・尺鯉。

【雙鬟】カン　ふたつ並びてゆかる。左思、呉都賦「日不二ーー一、世不二両帝一」

【雙瞼】ケン　雙睫に同じ、すどろく。

【雙涙】ルイ　両眼より出るなみだ。許渾詩「二毛統上雪、ーー枕前氷」‖雙漣。

【雑】ザフ　ソウ　合　通音ザッ本、誤に作る

○まじる、まじはる（糅）「糅ー」純の対。○いりみだれる（紛乱）「紛ー」「乱ー」「錯ー」後漢書「上下僭ー」○五色が相合ふ。易、坤卦「夫玄黄者、天地之ーー也」○まだら（斑）淮南子「貂裘雑而ー」○あつめる（衆）○はさまる（廁）混入する「混ー」○こまかし（細砕）易、繋辞「其称レ名也、ー而不レ越」○くだくだし（煩数）「煩ー」○あらし（麤）「麁ー」「粗ー」

【雑巾】キン　図板の間などをふく布。

【雑仕】シ　図雑多の用をつとめる召使人。

【雑兵】ヒヤウ　身分賤しき兵卒。‖雑卒。

【雑英】エイ　いろいろの花。謝朓詩「暗鳥鳴二春泉一、ーー満二芳甸一」‖繁芳。

【雑詠】エイ　いろいろの事物を詠じたる詩歌。‖雑吟。

【雑役】エキ　いろいろの賦役。唐書、楊炎傳「其租庸ーー悉省」元史、世祖紀「詔免二編戸ーー」

【雑役】エキ　こまごましきしごと。

【雑家】カ　種種の学説を取捨折衷して一家の言を立てたる学派。漢書、芸文志「ーー者流、蓋出二議官一、兼二儒墨一、合二名法一」

【雑学】ガク　種種の事柄を考究する。又、其の書。

【雑感】カン　さまざまと心に感ずる。

【雑伎】ギ　いろいろの遊戯のわざ。芝居・相撲・手品など。‖雑技。

【雑記】キ　○いろいろの雑事などを記録せしもの。○いろいろとりまぜて記せしもの。‖雑録。

【雑学】ガク　種種の説を混じたる雑駁なる学問。尉繚子「野物不レ為二雑牲一ーー不レ為二通儒一」

【雑偽】ギ　正しからぬものをまじふ。唐書、礼楽志「漢興六経在者皆錯亂、散亡ーー、而諸儒方共補緝以レ意、解詁未レ得二其真一」

【雑戯】ギ　いろいろのあそび。陳子昂詩「雲鳳依微満、魚龍ーー来」

【雑畜】チク　いろいろの家畜。唐書、百官志「駕部員外郎、掌二廐牧馬牛ーー之籍一」

【雑居】キョ　いりまじりてをる。隋書、顔宗傳「分二別士庶一、不レ令ーー」

【雑貨】カ　種種の貨物。又特に小間物・荒物類をいふ「ーー商」

【雑魚】ギョ　種種まじりたる小魚。

【雑課】カ　いろいろのかかりもの。

【雑玩】ガン　種種のもてあそびもの。南史、陳文帝紀「金銀珠玉、衣服ーー、悉皆禁断」

【雑劇】ゲキ　しばゐの類。古今詩話「山谷云、作レ詩如レ作ーーー」‖演劇。

【雑業】ギョウ　一定せざるつまらぬしごと。史、貨殖傳「倨ーー不レ中二什二、則非二吾財一也」

【雑言】ゲン　○いろいろのつまらぬはなし。陶潜詩「相見無ーーー、但道桑麻長」‖雑談。○図ゲンいろいろとのしる「悪口ーー」

【雑貢】コウ　色色のみつぎもの。陳陶、堅壁歌「ーー来山峙、駕炎入雁行」

【雑糅】ジウ　入りまじりてすわる。史、淳于髠傳「州閭之会、男女ーー」

【雑砕】サイ　わづらはしくこまかし。後漢書、仲長統傳「百家ーー、時用従レ火」

【雑綵】サイ　○くさぐさのあやぎぬ。晉詩、石勒載紀「綵一石、ーー四十匹」○五色の色どり。晏子「身服不レ一ーレ」

【雑草】サウ　いろいろのつまらぬ草。江淹、松木頌「翠木欲レ望、ーー不レ窺」

【雑錯】サク　いりみだれる。南都賦「巾幗鮮明、技服ーー」‖錯雑・雑糅。

【雑纂】サン　いろいろのものをかきあつめる。又、そのあつめたる書。西清詩話「李義山ーー、品目数十」

【雑史】シ　一事の始末。又、一時の見聞を記録せしもの。又、私人の手に成りし史傳類。

【雑施】シ　ごたごたと数へ授ける。礼、学記「ーー而不レ孫、則壊亂而不レ修」

【雑誌】シ　○いろいろの事をかきのせたる書物。‖雑志。○定期に発行する小冊子。

【雑糅】ジウ　いりこみてまじる。論衡「善悪ーー、何世無レ有」

【雑襲】シフ　ごたごたと多くかさなる。漢書、嗣通傳「衆合襲集、魚鱗ーー」

【雑掌】ショウ　図○古、宮中の雑事を取

扱ひし小役人。○伸奏家の家長。
【雜案】ザツ いろいろまじりあつまる。
戴表元詩「一一本無ㇾ算」
【雜種】ザツ シュ ○いりまじれる種類、あいの子。後漢書、度尚傳「尚躬率二部曲一與同ニ勞逸一、廣募ニ一一諸蠻夷一、明設ニ賞罰一、進撃」○異れる種族を罵りていふ。陸游老學庵筆記「俗呼ㇾ人曰ニ一一一、曰ニ畜生一」
【雜種稅】ザツシュゼイ 商工業の外の營業に課する地方稅、舟車・劇場稅など。
【雜樹】ザツ ジュ 種種まじりたる樹木。ざふき。方干詩「澄潭徹底看ニ心鏡一、一一含ㇾ芳讓ニ錦蔭一」‖雜木。
【雜書】ザツ ○いろいろととりまぜて書き誌せたる書物。○所說雜駁にして分類し難き書物。
【雜處】ザツ いりまじりてをる。漢書、高帝紀「粵人之俗、好相攻撃、前時秦徙ニ中縣之民南方三郡一、使ニ與ニ百粵一一一ㇾ之」‖雜居。
【雜色】ザツショク ○種種いりまじれる色。梁簡文詩「一一見滑水」○奴隷。北史、齊文宣紀「一一徒隷之徒」○國 紛古、識人所に屬して雜役に服する者。又走り使に供する中間足輕の類。
【雜稅】ザツ いろいろのとりたてもの。南史、宋武帝紀「東境去歲不ㇾ稔（中略）遠近咸ニ懲米票一者、可ㇾ停ニ道中一一一」
【雜揉】ザツ 秩序なくみだれる。書經、疏「三苗亂ㇾ德、民神一一」
【雜說】ザツ 雜多の事を說き明かしたる論說。又、其の文章。漢書、藝文志「漢興、曾中公修ニ詩訓故一、而齊魏間・燕韓生皆爲ニ之傳一、或取ニ春秋一采ニ一一、咸非ニ其本義一」
【雜然賦ニ流形一】ザツゼンリクケイフス 天地間の萬物がいりまじりて各其の形態性狀を天より受けてゐる。文天祥、正氣歌「天地有ニ正氣一一一」
【雜俎】ザツ 俎は東海に産するものにて、組卽ち五色のくみひもに似たり。因りて諸種のことを書きあつむる或「酉陽一一」
【雜卒】ザツソツ 身分いやしき兵。‖雜兵。
【雜多】ザツ いろいろさまざま。
【雜糅】ザツ いろいろまじりたるかたち。法書要錄「右軍草行一一如ニ清風出ニ袖、明月入ニ懷」
【雜閙】ザツ こみ合ひてさわがし。
【雜沓】ザツ 人がこみあふ。左思、蜀都賦「裏錄一一、延帶混幷」
【雜遝】ザツ ごたごたと、まじはりかさなる。漢書、劉向傳「周文開ニ基、四郊一一」孫岳頒「長幼一一以交集」
【雜談】ザツ よもやまのはなし。‖雜言。
【雜糅】ザツ いりまじる、糅も雜。國語「民神一一、不ㇾ可ニ方物一」
【雜著】ザツ 文體の名。文體明辯「按、一一者、詞人所ㇾ著之雜文也、以ニ其體ㇾ事命ㇾ名不ニ落ニ體格一、故謂ニ之一一、然稱ㇾ名雖ㇾ雜、而其本ニ乎義理一、發ニ乎性情一、則自有ニ致一之道一焉」
【雜誦】ザツ いろいろのみつぎもの。北史、魏文成帝紀「比年以來、一一減省、而所在州郡咸有ニ逋懸一」
【雜念】ザツネン いろいろ雜多なるかんがへ。‖雜慮・雜感。
【雜報】ザツ 世間のさまざまの出來事のしらせ。
【雜殽】ザツ ごたごたといりまじる。
【雜木】ザツボク いろいろまじれる立木、ざふ木。宋史、李昭遜傳「桂林之下無ニ一一、非ニ虛言一也」‖雜樹。
【雜務】ザツ 雜多なるこまかきつとめ。
【雜用】ザツ ○いろいろのごたごたしたる用事。○ザツいろいろのこまかき費用。‖雜費。
【雜亂】ザツラン いりまじりみだれる。‖雜糅・亂雜。
【雜流】ザツ ○九品官に入らざる等外の役人。‖未入流。○工商の類。唐書、曹確傳「工商一一」
【雜慮】ザツ 雜念に同じ。
【雜料】ザツ いろいろのあてがひ。唐書、楊綰傳「故事舍人年久者、爲ニ閣老・其公廨一一、獨取ニ五之四一、至ㇾ綰悉均給ㇾ之」
【雜話】ザツ いろいろのはなし「駿馬一一」‖雜談。

【雛】ス 國 漢音スウ

○ひな、ひよこ、雞の子。又、廣く鳥の子「鳳一一」○轉じて廣く幼少にして未だ一人前にならざる者の稱「一伶」「一妓」○小兒。杜甫詩「衆一嬉遊睡」○國 ひな、ひひな、人形。
【雛妓】ザスウ 國 おしゃく、牛王。
【雛禽】スウキン ひなどり。曾鞏文「一一乳鹿、往往睨ニ鏡顏一」
【雛形】スウケイ ○ひながた、物の原形に依り、縮小して模型とせし者。建築の繪圖、人體の繪像など。○書式。
【雛鷇】スウコウ ひなどり。管子「不ㇾ麛ニ一一、不ㇾ天ニ飛鳥一、仁ㇾ及ニ禽獸一」
【雛僮】スウコ こぞう。
【雛孫】スウソン をさなきまご。李商隱文「種子一一、滿ニ吾懷抱一」
【雛鳳】スウホウ 佳き子弟に喩ふ。李商隱詩「桐花萬里丹山路、一一清ニ於老鳳聲一」‖鳳雛。

【雝】 ㊀ヨウ 國 ㊁ヨウ 國 冬 東

㊀やはらぐ（和）「鷹一」‖雍。○一一は雁の和げる聲。㊁おほふ（蔽）詩、小雅「無將ニ大車一、維塵一兮」○ふさぐ。‖壅。
【雝渠】ヨウキョ 鵜鶘の異名【國雅】
【雝雝】ヨウ ○やはらぎ樂む貌。詩、周頌「有ㇾ來一一」‖雍雍。○雁の和げる聲。詩、邶風「一一鳴雁」

【雘】㊀ワク 薬 ㊁コ 遇

㊀あかつち(丹土)しんし。(辰砂)水銀と硫黄との化合物。顔料ノ又屋壁の塗料とす(善丹)「丹ー」㊁あかし(丹)赤色。

十一畫

【難】㊀ダン・ナン 寒 ㊁ダン・ナン 翰 ㊂ダ・ナ 歌

㊀かたし、むづかし。易の對。○かたしとす、かたんず。書、皐陶謨「惟帝其難之」○かたきこと、むづかしきこと。孟、離婁「責ー於君」㊁うれひ、心配(患)「患ー」「憂ー」○くるしみ(苦)「災ー」「困ー」「多ー」「危ー」「厄ー」○おそれはばかる(畏憚)史、貨殖傳「ー動搖」○かたし。○あた(仇讎)互に相敵する。○なじる(詰)せむ(責)孟、離婁「於ニ禽獸一又何ー焉」○ふせぐ、こばむ(拒)書、舜典「ー任人」はばむ。○みだれ(兵亂)「國ー」「殉ー」㊂盛んなる貌。詩、小雅「其葉有ー」○おにやらひ。禮、月令「季冬命ニ有司一大ー」=儺。

同訓異字 ナヤム 難・惱・懊・厭・煩・阻・屯等の別は惱(六八四頁一段)の條を見よ。

【難易】ナン かたきと、やすきと。老子「有無相生、ーー相成」

【排ー難解ー紛】ナンヲハイシ フンヲトク 人の爲めに困難と紛議とを除く。史、魯仲連傳「爲ニ人ー、而無ニ取也」

【難解】ナンカイ わかりにくし、さとり難し。法華經「其智慧門、ーーー入」

【難解難入】ナンカイナンニフ 佛法華の法理の幽玄にして悟入し難きをいふ。前條參看。

【難航】ナンカウ 舟をやりかたし。梁元帝、離合詩「離定方無ニ遠、合前不ーーー」

【難艱】ナンカン なんぎ、むづかし。=苦勞・艱難。

【難疑】ナンギ 不可なる點を非難し、又疑はしきことをたづね問ふ。

【難儀】ナンギ 國○むづかし。○まづしくくるしむ。=貧乏・困窮。

【難詰】ナンキツ むづかしくなにり問ふ。後漢書、戴憑傳「更求ニーーー、其有ニ不レ通、輒奪ニ其席一」

【難行】ナンギヤウ 佛 身心を苦めて行ふ。佛道修行の容易ならざるをいふ。法華經「ーー苦行、積功累德、求ニ菩薩道一」

【難行道】ナンギヤウダウ 佛 自己の力によりて佛果を得る道、自力本願。他力によれる念佛往生の行ひ易き淨土門を易行道といふの對(聖遺要論)

【難局】ナンキョク きりぬけ難き出來事。又、其の場合。局は事局。

【難句】ナンク むづかしき文字をならべたる句。蘇軾詩「淵源皆有レ考、奇險或ーー」

【難訓】ナンクン 漢字の訓のよみ難きもの。

【難關】ナンクワン ○通るにむづかしき門。又せきしょ。○きりぬけ難き境遇に喩ふ。

【難經】ナンケイ 二卷、周の秦越人撰す、內經の旨を發明して調義古奧、其のーーといふは難問を設けて說明するを以てなり。

【難月】ナンゲツ うみづき。儒門事親「臨ニーーー病ー嘔」=臨月。

【難險】ナンケン ○けはしく行きがたし。=險難・難阻。○はなはだむづかしと=困難。

【難攻不落】ナンコウフラク 國攻め難くして陷れ難き要害の地。

【難困】ナンコン くるしみ。班固賦「御レ雄乘レ險、ーーー不レ違」=困難。

【難産】ナンザン 國むづかしく、苦しきおさん。

【難字】ナンジ むづかしく讀みにくき文字。若狹紀聞「其人頗識ニーーー一」

【難澁】ナンジフ 國○行きしぶる。すらすらと進まず。○まづし。=貧困。

【難處】ナンショ 難險にして行き難き處。史、河渠書「時有ニーーー」

【難色】ナンショク かたしとするかほいろ。むづかしく引受け難しとするやうす。魏志、杜襲傳「有ニーーー」

【難船】ナンセン 國船が暴風雨に遇ひ、又暗礁等にのりあげて、破れ又、覆る。又其の船。=難破船・覆船。

【難阻】ナンソ けはしく行き難し。=難險。

【難素】ナンソ 難經と素問と。二書は古の醫書。金史、方伎傳「張從正精ニ於醫一、貫ニ穿ーー之學一」

【難陀】ナンダ 佛 ○八大龍王の一。=難陀跋難。○釋迦の異母弟、歡喜と譯す、釋迦に隨ひて得道す。=難陀尊者。

【難ー耐】ナンタイ たへ忍びがたし。五代史、史弘肇傳「弘肇不レ喜ニ貧客一、嘗冒ニ文人一ーー、呼レ我爲レ卒」

【難題】ナンダイ ○むづかしき問題。後村題跋「取ニ古人ーー軼事一」○國人の出來難きことを强ふる。

【難治】ナンヂ ○民がをさめにくし。○病がなほりにくし。

【難中之難】ナンチュウノナン 多くのむづかしき事の中にて最もむづかし。无量壽經「若聞ニ斯經一信樂受持、ーーー、无ニ過ニ此難一」

【陸ー難】ナンリク 鵬難又は兵亂などにあふ。曲禮「ーー毋ニ苟免一」晏子春秋「猛ニーー而遽倨レ兵」兵は武器。

【難破】ナンパ 國難船して船がやぶれる。

【難駁】ナンバク 非難して反對する。行書、和蜆傳「論ー難ーー」

【難風】ナンプウ 船の進むをさまたげる風。

【難問】ナンモン ○疑ひて問ふ。後漢書、和

章郭后紀「賭兄每レ讀二經傳一、輒下レ意一一」‖疑問。○むづかしきとひ。

【離】（一）リ　支　（二）チ　支　（三）ヲ　紙　（四）リ　置

㊀はなる。はなす、ばらばらになる。○とほざく。とほざかる（遠）○わかつ。わかれる（分別）「分一」「一別」近きを一、遠きを別といふ。○分ける、絶つ。禮、學記「一レ經」（經書の句讀をきる）○ひらく（開）思玄賦「一レ朱脣而微笑兮」さく（割）○つく。麗と音通。○あきらか（明）○あふ（遭）かかる（羅）遭遇する「一レ蹉而張衡」思玄賦「循法度而一レ殃」○ふ（歷）○ふたつ、ならぶ（兩）禮、曲禮「一レ坐一レ立」○すぐ（過）○さる（去）○つらぬ（陳）左、昭元「設レ服一レ衛」（盛んなる服飾をなし護衛兵をつらねる）つら（列）○ちる。ちらす（散）○たがふ（違）○むく（畔）○みなみ（南）○かき、かこひ（籬蔽）‖離。○一は親しまざる貌、遠ざかる貌。又、實の垂れる貌。雲の長く續く貌。○陸一はいりまじりて來き貌。又、美好の貌。又、分散する貌。○流一はさすらひて其の所を得ざる貌。又、琉璃と通ず。○かほよぐさ（芍藥）○せんきうのなへ（蘼蕪）「江一」○おほごと（大琴）○易の卦の名。○一黃はうぐひす。‖鶩倉庚。㊁みづち。蛟に通ず。㊂一隣とは相連りて絶えざる貌。㊃さる（去）中庸「道也者、不レ可二須臾一レ離一也」はなる。○一支は果の名、卽ち荔支。

【離狹】リケフ　わざはひにかかる。思玄賦「循二法度一而一レ一」

【離憂】イウ　うれへにかかる。史、屈原傳「離騷猶二一一一也」

【離宴】エン　わかれのさかもり。‖離筵・離酌・別筵。

【離筵】リエン　わかれのさかもり。宋之問詩「羽客空歌此地淫、一一數處白雲飛」‖離宴。

【離緣】エン　夫婦のえんを切る。‖離婚。

【離歌】カ　わかれを送るうた。‖離曲・驪歌。

【離隔】カク　はなれへだてる。曹植賦「盛二一一一分會无レ期」

【離合】ガフ　はなれると、あふと。杜甫詩「人生有二一一一」‖合離・聚散。

【離周】カン　なかたがひをさす。顏氏家訓「慳二唐孤遺一、二一骨肉一」‖疏閑。

【離奇】キ　○まがりねぢれてゐる、委曲整戾の貌。郡陽、獄中上書「蟠木根柢、輪囷一一」○轉じて事の常軌にしたがはざる義とす。

【離索】サク　みはなしすてる。南史、張邵傳「親故皆一二一之」

【離襟】キン　人にわかれるおもひ。韋莊詩「半年江上偕二一一、把二得新詩一喜又吟」

【離宮】キウ　天子のおしもやしき。漢書、賈山傳「起二咸陽一而西至レ雍、一一三百」‖行宮。

【離曲】キヨク　離歌に同じ。

【離群索居】リグンサクキョ　朋友の羣をはなれて獨り居る、索は散。禮、檀弓「吾離羣而索居亦已久矣」

【離會】クワイ　わかれると逢ふと。鮑照詩「哀樂生有レ端、一一豈無レ因」

【離經】ケイ　○經書の句讀を斷絕して其の意を解釋する。禮、學記「一年視二一一一辨レ志」○俗に經書を說きて正義に背く者を一一叛道といふ。

【離恨】コン　人とわかれるうらみ。李白詩「明晨掛二帆席一、一一滿二蒼波一」‖別恨・離愁。

【離魂】コン　旅人の夢中のたましひ。韋莊詩「旅夢亂隨二蝴蝶一散、一一漸逐二杜鵑一飛」

【離魂病】ビヤウ　睡眠中、起き出でて或動作をなし目さめし後、其の事を知らざる一種の精神病。‖夢遊病。

【離婚】コン　夫婦のえんをきる。晉書、羊祜傳「不レ能二一一一」‖離緣。

【離坐】ザ　朋人相並びてすわる。曲禮「一一離立、毋二往參一焉」

【離騷】サウ　○うれひにあふ、騷は憂。○同上の意味にて楚の屈原が作りし韻文の名。楚辭の起源を聞きしもの。

【離散】サン　はなればなれになる。孟、梁惠王「父母凍餒、兄弟妻子一一」

【離思】シ　人とわかれ居る悲しきおもひ。潘岳詩「何以敍二一一一」

【離貳】リ　異心をいだきてはなれそむく。後漢書、列女傳「命之所レ遭、天無二一一一」‖北史、周太祖紀「左右不二自安一、衆至二一一一」‖離叛。

【離愁】シウ　人とわかれるかなしみ。韋山民詩「惆悵捲二客夢一、帆影掛二一一一」‖離恨。

【離心】シン　心をはなしそむく。魏志、荀彧傳「今紹敗、其衆レ一、宜下乘二其困一遂定上之」‖叛心・異心。

【離酌】リシヤク　わかれのさかもり。白居易詩「樓中別曲催二一一一」

【離酒】シユ　わかれの酒もり。方干詩「交情如レ水淡、一一泛レ盃寬」

【離絮】ジヨ　はなれると、あつまると。劉孝威詩「浮萍離還聚、沿洄滅復張」

【離朱之明】リシユノメイ　離朱は古の明目者、目のよく見ゆるにいふ、離朱は卽ち離婁。愼子「一一、察二毫末於百步

之外二下レ水尺不レ能レ見二淺深一、非二目不レ明、其勢離レ親也」【離騷】リサウ　暗喩にのりあげし船がはなれて浮き上る。【離析】リセキ　はなれわかれる。論、季氏「邦分崩ー一、而不レ能レ守也」‖分裂。【離籍】リセキ　戸籍面より名籍を除き去る。【離石卿侯】リセキケイコウ　硯ズの異名。【離俗】リゾク　世の俗事をはなれる。淮南子「單豹倍レ世ー一、巖居谷飲」【離亭】リテイ　旅だつ人を送るざしき、離別の席。陳子昂詩「青雲生二秋浦一、秋月隱ニー一」‖離宮。【離逖】リテキ　○とほざかる。書、多方「我則致二天之罰一ニー爾士一」○はなしとほざける。逖はとほか。旨書、長沙王又啓「途二其讒慝一ニー骨肉」【離杯】リハイ　わかれのさかづき。‖別杯。【離背】リハイ　心をはなしそむく。詩經、疏「以二申伯忠臣一、不レ欲レニー王室一」‖離叛。【離別】リベツ　はなれわかる。國語「七德ー一、民乃攜貳」【離叛】リハン　心をはなしそむく。淮南子「ー一者謀而聽從者衆」‖離背・離貳。【離畔】リハン　はなれそむく。‖離叛。【離披】リヒ　枝葉又花がばらばらにはなれ開くの又花が十分に開く。李商隱詩「人世本來多二聚散一、紅蘭何事亦ー一」【離騷】リサウ　つらなりて絶えざる貌。司馬相如、上林賦「ー一廣衍」【離別】リベツ　○人とわかれる（近きを離といひ、遠きを別といふ）陸龜蒙詩「丈夫非レ無レ淚、不レ灑ー一間」○國離婚。【離落】リラク　そむきさる。吳語「甲兵鉦鼙、民人ー一」【離離】リリ　○心がはなれて親まざる貌。荀、非相「ー一然」○裂けみだれる貌。楚辭「心ー一分」○不種の秀でて垂れる貌。詩、王風「其實ー一」○ばらばらにみだれて繁る貌。詩、王風「彼黍ー一」○雲の長く續く貌。張衡、思玄賦「曳二雲旗之ー一」【離淚】リルイ　人とわかれる時のなみだ。樂府、華山畿曲「ー一沾二河漢一」‖別涙。【離婁之明】リロウノメイ　離朱之明に同じ。孟、離婁「ー一、公輸子之巧」

雨部

【雨】㊀ウ　㊁ウ　通　廣

㊀あめ「急ー」「驟ー」「猛ー」「時ー」「淫ー」易、乾卦「雲行ー一施、品物流形」○ー水穀ー一は竝に二十四氣の一。㊁あめふる、雨を下す、ふる。孟、滕文公「詩云、ー一我公田」○ふらす、すべて天空より降る「ー一雪」「ー一灰」【雨蛙】ウアマガヘル　あまがへる。‖雨兒・青蛙。【雨妓】ウギ　かっぱ・みのなどのあまぐ。許渾詩「白髮三青蓑綴ニー一」【雨意】ウイ　あまもやう。晁補之詩「巢居識二風聲一、穴藏知ニー一」【雨下】ウカ　○あめがふる。後漢書、光武紀「ー一如レ注」‖降雨。○雨注に同じ。【雨季】ウキ　一年中、最も多く雨のふる時節。‖雨期。【雨脚】ウキャク　あめのかみ。謝莊文「驚二衝兵一而開レ塵、先ニー一雨洒レ路」‖雨師。【雨氣】ウキ　あまけ。素問「谷氣通二於牌一、ー一通二於野一」‖雨意。【雨期】ウキ　雨季に同じ。【雨久花】ウキウカ　みづあふひ。水澤に生ずる一年生草。【雨奇晴好】ウキセイカウ　晴雨ともに景色佳し。蘇軾詩「水光瀲灩晴方好、山色空濛雨亦奇」‖晴好雨奇。【雨泣】ウキフ　なみだの雨の如く下る義。曹植文「延レ首歎息、ー一交レ頤」‖雨涙。【雨脚】ウキャク　あめのあし。杜甫詩「出レ門復入レ門、ー一但如レ舊」‖雨足。【雨虎風鬚】ウコフウシュ　雨はしへたげ、風はむさぼる。鬚は貪、風雨に苦しめられる形容。【雨具】ウグ　あまぐ、みの・かさの類。史、仲尼弟子傳「曹夫子當レ行、使二弟子持ニー一、已而果雨」【雨過天青】ウクワテンセイ　雨の新に霽れたる空の色。謝在杭、文海披沙記」【雨後】ウゴ　あまあがり。李俊民詩「ー一鱗鱗漲二鴨頭一」‖雨餘。【雨穀】ウコク　穀物をふらす。後漢書、光武紀「陳留ー一レ、如二糠實一」【雨矢】ウシ　あめの如く矢を降らす。唐書、柴紹傳「紹軍ー一、士失レ色」【雨兒】ウジ　あまがへる。形小さく、色青く、降雨の前に鳴く蛙。‖雨蛙。【雨蓑】ウサ　あめふりて物をうるほす。易、乾卦、上爻「雲行ー一、品物流レ形」【雨師】ウシ　あめのかみ。畢星をいふ。韓非子「風伯進レ掃、ー一灑レ道」【雨集】ウシフ　○雨の水があつまる。孟、離婁「七八月之間、ー一、溝澮皆盈」○雨の如くに多くもつまる。後漢書、彭修傳「競交射レ之、飛矢ー一」【雨濕】ウシツ　あめ降りてしめる。王維詩「草色全經二細雨一濕」【雨潤】ウジュン　雨にてうるほす。易、說卦「雨以潤レ之、日以晒レ之」‖雨沾。【雨水】ウスイ　○あまみづ。○二十四氣の一、立春の次、陽曆二月十八日に當る。時、月令「仲春之月、始ー一、桃始華、倉庚鳴」倉庚は鶯。【雨雪】ウセツ　あめのふるおと。杜甫詩

「一一嚴霜催早寒」

【雨雪】ウセツ　○雪をふらす。ふるゆき。詩、小雅「相二彼一一一、先集維霰」○雪のふる前には先づあられがふる。何事も突然に來るものにあらざる喩）○あめとゆきと。高適詩「近レ關多二一一一、出レ塞有二風塵一」

【雨前】ウゼン　○穀雨（二十四氣の一）の前。○又其の時に采りし茶の名。學林新編「茶之佳者、造在二社前一、其次火前、其次一一」社は春の社日、火は寒食。

【雨足】ウソク　あまあし。孟浩然詩「夕陽連二一一一、空翠落二庭除一」○雨脚。

【雨ノ翠】ウスイノミドリ　もみをふらす。淮南子「昔蒼頡作レ書而天一レ雨、鬼夜哭」注「書契成、詐僞萌生、天知二其將レ有レ機、故爲一レ雨」

【雨澍】ウジュ　あめそそぐ。李嶠詩「一一二萬木一鮮、霞照三千山一濃」

【雨中】ウチュウ　あめの降るなか。王維詩「雲裏帝城雙鳳闕、一一春樹萬人家」○雨裏。

【雨注】ウチュウ　矢石などが雨の如くそそぐ。吳志、朱然傳「弓矢一一、將士皆失レ色」○雨下。

【雨滴】ウテキ　あまだれ。禮、月令、疏「日照二一一一一則虹生」○雨點・點滴。

【雨天】ウテン　あまぞら、あめのふるそら。杜荀鶴詩「忽地晴天作二一一一、全無二暑氣一似二秋開一」○陰下雨的天。

【雨點】ウテン　あまだれ。李益詩「長樂花枝一一錦」○雨滴。

【雨雹】ウヒョウ　ひょう（氷雨）をふらす。左、昭四「大一レ」

【雨霧】ウム　あめと、きりと。四京雜記「噓吸爲二寒暑一、噴嘯爲二一一一」

【雨沐】ウモク　○雨にうたれてぬれる。劉因文「雲開山色、一一秋容」○あめにて髪をあらふ、雨を冒して勤苦するにいふ。劉宴、石勇妃詩「人歸人去我何心、一一風餐人自老」○沐雨。

【雨暘】ウヨウ　雨は雨天、暘は晴天。書、洪範「日雨、曰暘、曰燠、曰寒」

【雨餘】ウヨ　あまあがり。梁簡文帝詩「一一雲稍薄」○雨後。

【雨漲】ウチョウ　あまみづ。唐書、李見素傳「天寶十三載、玄宗苦二一一一」

【雨裏】ウリ　あめのふるなか。盛綸詩「一一花枝朝暮開」○雨中。

【雨笠煙蓑】ウリュウエンサ　煙雨を帶びたる笠と、みのと。漁父などの形容。陳摯、漁父詞「君不レ見扶安康莊九復九、——蘇入レ手」○煙蓑雨笠。

【雨淋鈴】ウリンレイ　樂曲の名。唐の玄宗が安祿山の亂を避けて蜀に幸せらるる途中、龍姫楊貴妃を誅し、後、蜀の棧道に入り、鈴聲と雨聲と相應ずるを聞きて貴妃を追念して作られし音曲（明皇別錄）○雨霖鈴曲。

【雨霖】ウリン　雨の地面に降りし分量。

【雨龍】ウリュウ　あまりょう、龍の類にて角なく、とかげに似たり。（蠕龍）

【雨淚】ウルイ　なみだくだりて雨の如し。洛陽伽藍記「發レ音一一、哀不二自勝一」

【雨露】ウロ　○あめと、つゆと。禮、祭義「春一一既濡」○大いなる恩澤。雨露の萬物をうるほすに喩ふ。高適詩「當代卽今多一一一」謝枋得、卻聘書「某與二太平草木一同沾二聖朝之一一一」

【雨一番】ウイチバン　翠はすき、一と翠耕すに都合よきほどのあめ。馮宸詩「東風花外錦旛啼、喚起西山——」

【冒レ雨翦レ韭】ボウウセンキュウ　雨をも冒れず、にらを翦りて、來客を款待する、友情の厚きにいふ。韭は韮。郭林宗別傳「林宗有二友人一夜冒レ雨至、翦レ韭作二飲餠一食レ之」

【雨收】ウシュウ　雨がやむ。柳宗元、馬退山茅亭記「每二風止一一、煙霞澄鮮」○雨歇。

【雨昏】ウコン　雨天にてくらし。鄭谷、鵁鶄詩「一一青草湖邊過、花落黃陵廟裏啼」

【雨催】ウサイ　雨が詩を作らんとする心を催し起す。杜甫詩「片雲頭上黑、應二是雨催一詩」

【雨如二車軸一】ウニシャジクノゴトシ　大雨の形容、軸は車の心木。長阿含經「漸降二大雨一滴如二車軸一」

【雨不レ破レ塊】ウフハカイ　あめがゆるやかに降る、太平の象とす。圖纖論「太平之時、——、而一雨必以レ夜」

【沐雨櫛レ風】モクウシップウ　風雨にさらされて勤苦する。莊、天下「昔者禹之湮二洪水一、決二江河一、而通二四夷九州一也、腓無レ胈、脛無レ毛、沐二甚風一櫛二疾雨一、置二萬國一」

【雨傾レ盆】ウケイボン　雨の盛んに降る形容。蘇軾詩「雨已傾レ盆落、詩仍翻レ水成」○雨翻レ盆。

【雨歇】ウケツ　次條に同じ。常建詩「一一楊林東渡頭、永和三日攜二輕舟一」○雨止・雨收。

【雨龍】ウリュウ　雨がやむ。梁元帝詩「波積山影渡、一一葉生レ光」○雨歇・雨收。

【雩】ウ　三畫　雨

○あまごひ（請雨祭）左、桓五「龍見而一一」龍は蒼龍星。○舞一一は雨乞の祭をする場所。論、先進「風乎舞一一、詠而歸」

【雩祭】ウサイ　あまごひのまつり。春秋繁露「大旱、一一而請レ雨」

【雪】セツ　風

○ゆき（凝雨）空中の水氣のこほりて降るもの「白一」「積一」「殘一」「深一」「曉一」「密一」堆雅「一八出而成レ華」○六花。○すすぐ（刷の轉音）あらふ（洗）洗ひ

清める「洗ー」○はらふ（除）○ぬぐふ（拭）○白色の義に借用す「ー肌」○梨ーはなしの花の形容。○香ーは白くして芳香ある花の形容。○大ー小ーは竝に季節の名。

【雪案】セツアン ゆきのつく机、晉の孫康の雪の光にて讀書せし故事により、苦學する義。劉克莊詩「雨窓兀坐忘ニ春去ニ一ー清談至ニ夜分ニ一」寶凱詩「眠場ーー同温習」映ニ雪讀ニ一書を見よ。

【雪意】セツイ ゆきもやう、ゆきぞら。朱德潤詩「ーー屏山欲レ放レ梅」

【雪衣兒】セツイジ 鸚鵡の異名。湯慤小品「陸龜蒙、鸚鵡ニ絲禽一、東坡號ニ——一」

【雪衣娘】セツイジヤウ 白き鸚鵡の異名。明皇雜錄「開元中、嶺南獻ニ白鸚鵡一養ニ之宮中一、頗聰慧洞ニ曉人言一、上及貴妃皆呼ニ——一」

【雪隱】セツイン かはや、便所。雪峯禪師常に此に在りて掃除のことを執りしによりていふ。烏巢沙彌經註「臨州雪峯義存禪師、常住掃除、於レ是大悟、故名矣」一說、雪竇禪師が靈隱寺の禪頭即ち便所の掃除を掌る役なりし故にいふ。

【雪冤】セツエン 無實の罪をそそぎ清める。青天白日の身となる。白居易詩「ーー多定國、犯諫甚辛酸」

【雪香冰豔】セツカウヒヨウエン 梅の異名。

【雪客】セツカク 鷺の異名。楊文公談苑「鷺曰ニ——一」

【雪卿霜節】セツケイサウセツ 梅の異名。

【雪肌】セツキ しろく清きはだへ。蘇軾詩「洗ニ盡鉛華一見ニ——一」雪膚。

【雪仇】セツキウ かたきをうち恥をすすぐ。魏志、辨濟傳「昭王恥レ病以ーレー」

【雪虐】セツギヤク 雪にしひたげられる。陸游、梅花詩「幽香淡影疎疎、ーー風雪亦自如」

【雪宮】セツキウ 戰國の時、齊國の離宮の名、齊の宣王、孟子をーーに見る。其の故址、山東省臨淄縣の東北に在り。

【雪魚】セツギヨ 鱭に似て稍扁平、色白くして雪の如し、冬月方に出で味肥美、福建に産す（閩雜記）

【雪君】セツクン 梅の異名。

【雪花】セツクワ ○ゆきを花に喩へていふ。陳叔達詩「ーー聯ニ玉樹一」雪華。○雪の如く白き花。溫庭筠詩「紅花初綻ーー雲」

【雪花菜】セツクワサイ 豆腐のから、きらず、うのはな。

【雪月花】セツゲツクワ ゆきと、つきと、はなと。白居易詩「琴詩酒伴皆地レ我、ーー時最憶レ君」

【雪妨】セツバウ せきれい。物類相感志「俗呼ニ鶺鴒一爲ニーー一、鳴則天當ニ大雪一、又性好食レ雪、故名ニーー一」

【雪後】セツゴ ゆきのふりたるあと。岑參詩「長安ーー似ニ春歸一」林逋、梅花詩「吟懷長恨負ニ芳時一、爲レ見ニ梅花一」

【雪谷】セツコク 鷺の異名。楊文公談苑「ーー星眸衆鳥驚」

【雪骨】セツコツ 梅の異名。

【雪爪】セツサウ しろきつめ。南唐近事「ー

【雪山】セツサン 西域の山の名、四時雪を戴けるによりて名づく。後漢書、班超傳、注「四域有ニ白山一、通謂有レ雪、亦名ニーー一」

【雪見】セツケン うたひめ。世說「ーー者、唐李紳之愛姬、能ニ歌舞一、每レ見ニ賓朋有ニ文章奇麗入レ意者一、卽付ニーー一、叶音律一以歌之、故謂ニーー歌一」

【雪肢】セツシ 白き手足。楊維楨詩「ーー欲レ透紅薔薇」

【雪鬢】セツビン しろき色のけごろも。劉禹錫詩「仙人披ニーー一、素女不ニ紅妝一」

【雪上加レ霜】セツジヤウカサウ 雪の上に霜を加へる。禍患の頻り至る形容。傳燈錄「雪上更加レ霜」

【雪蕊】セツズイ しろき花のしべ。白居易詩「ーー瓊葩滿院春」

【雪然】セツゼン 雪の降るが如く、白鷺の飛び下る形容。陸龜蒙、白鷺詩「ーー飛下立蒼苔、應下伴ニ江鷗一拒レ我來上」

【雪線】セツセン 地文學にて一年中常に雪のたゆることなき高所の限界線。

【雪霽】セツセイ しろきひげ。白居易、謝客詩「冷落若爲留レ客住、冰池竹ーー雪」

【雪駄】セツダ 國せきだ、草履の下に牛の皮を張りしはきもの。千利休が客中に用ひしに始まる。＝雪蹈。

【雪堂】セツダウ 蘇東坡の築ける堂、大雪中に成り、雪を四壁に畫くが故。故址、湖北黃岡縣に在り。蘇長公年譜「公年四十七在ニ黃州一、寓ニ居臨皐亭一、就ニ東坡一築ニーー一、自號ニ東坡一」

【雪恥】セツチ はぢをすすぐ。史、越世家「今旣以ーレー」＝洗辱。雪辱。

【雪中高士】セツチウカウシ 梅の異名。高啓、梅花詩「雪滿山中高士臥、月明林下美人來」＝雪中君子。

【雪中君子】セツチウクンシ 梅の異名。＝雪中高士。

【雪中四友】セツチウシイウ 玉梅・臘梅・水仙・山茶ヤブツバキの稱「月令廣義」

【雪中松柏】セツチウシヨウハク 松柏は雪中にても其の色を變ぜず。人の節操に喩ふ。謝枋得詩「ーー意青青」

【雪中騎驢孟浩然】セツチウキロバクカウゼン 唐の詩人孟浩然が雪中に驢馬に乘りて詩を賦せし故事。蘇軾詩「又不レ見ーー、驢眉吟レ詩肩聳レ山」

【雪涕】セツテイ なみだを拭ふ。荀悦、劉聰傳「入レ宮省訖、帝ーレー與レ之別」

【雪泥鴻爪】セツデイコウサウ 人生のはかなくして痕跡のこらざるに喩ふ。蘇軾、和子由一詩「人生到處知何似、應是飛鴻踏ニ雪泥一、泥上偶然留ニ指爪一、鴻飛那復計ニ東西一」

【雪浪】セツロウ すすきあらふ。宋書、何尚之傳「一一素憤」

【雪天】セツテン ゆきぞら。高適詩「一一重不開」＝釀レ雪天・欲レ雪天。

【雪洞】セツドウ ○風爐のおほひ〔茶經別錄〕○圓ぼんぼり。紙ばりの手燭。

【雪白】セツパク ○雪の如くまっしろ。○性行の潔白に喩ふ。後漢書、宋宏傳「清修一一」

【雪魄】セツハク 梅の異名。

【雪魂冰姿】セツコンヒョウシ 花の潔白なるに喩ふ。無名氏、詠茉莉二詩「冰姿素淡賦寒女、雪魄輕盈姑射仙」

【雪片】セツヘン ゆき。杜甫詩「梅花萬里外、「一一一冬深」

【雪毛】セツモウ しろきけ。元稹詩「一一皓白紅賢股」

【雪面】セツメン 雪の如き白きかほ。楊炎詩「一一淡眉天上女」

【雪裏清香】セツリセイカウ 梅の異名。

【雪嶺】セツレイ ○雪のつもれるみね。○四川省と西藏との境にある山脈。釋慧淨、雜言「沙河一一迷二朝徑一」

【雪鷺】セツロ しらさぎ。元稹詩「一一遠近飛、清牙深淺出」

【含レ雪】ガンセツ 窗より山に積れる雪を眺める形容。杜甫詩「窗含二西嶺千秋雪一門泊二東吳萬里船一」

【雪消】セツセウ ゆきがとける。許渾詩「湘雪纔銷暮山出、巴蜀一一春水來」

【雪千堆】セツセンタイ しらがの多き形容。白居易詩「孤舟泮一葉、雙鬢一一」

【映レ雪讀レ書】エイセツドクショ 雪の光にて讀書する。孫氏世錄「孫康家貧、常一一、清介交遊不レ雜」

【臥レ雪】ガセツ 雪中に臥する。後漢書、袁安傳、注「時大雪、積レ地丈餘、洛陽令自出按行、至二安門一、無レ有二行路一、謂安已死、令二人除レ雪、見二安僵臥一、問何以不レ出、曰大雪人皆餓、不レ宜レ干レ人」

【立レ雪】リツセツ 游酢・楊時の二子、冬夜に、程伊川の牀に侍立せし故事、弟子の師を重んずるの厚きをいふ。名臣言行錄「游酢・楊時來見二伊川一、一日先生坐而瞑目、二子立侍不二敢去一、久之、先生乃頭目、二子猶在レ此乎、日暮矣、姑就レ舍、二子者退、則門外雪深尺餘矣、其嚴厲如レ此」

【雪卻梅一段香】セツキャクバイイチダンカウ 宋人の句。盛梅坡、梅雪詩「梅雪爭レ春未レ可レ降、騷人擱レ筆費二平章一、梅須レ遜レ雪三分白、雪卻レ梅一段香」

【雪似鵝毛】セツジガモウ 雪の降る形容。白居易詩「一一紛紛亂、人被二鶴氅一」

【雪立徘徊】セツリツハイカイ

【雪擁二藍關一馬不レ前】セツヨウランカンバフスヽメ

【雪】ウン 四畫 支

○くも、山川の氣の昇りて高處に至り凝りて霧狀を成してただよへるもの「白一」「青一」「浮一」「陰一」「凍一」「夏一」易、乾卦「一行雨施」○雲の如く高き形容。又、高き所の義に用ふ「一車」○雲の如くに見えるもの「稻一」○一南は省名。

【雲遊】ウンユウ ○雲中に遊ぶ。李益詩「風駕昇レ天行、一一恣二遐宿一」○雲の如く自由に遊ぶ。杜荀鶴詩「栖坐一一出二世塵一」○雲があそぶ。宣和畫譜「豐筋多力、有二一一雨驟之勢一」

【雲雨】ウンウ ○くもと、あめと。後漢書、郅惲傳「託二日月之末光一、被二一一之澤一」○男女のちぎりにいふ。宋玉、高唐賦「楚襄王夢二一婦一曰、妾巫山女、朝爲二行雲一暮爲二行雨一、朝朝暮暮、陽臺之下」に本づく。

【雲英】ウンエイ ○きらきらの異名。本草「雲母、一名一一、色多青」○古の名妓の名。唐詩紀事「一一、鍾陵妓」

【雲影】ウンエイ くものかげ。盧綸詩「一一斷來峯影出、林花落盡草花生」

【雲翳】ウンエイ くものかげ。陸游詩「大空一一終當レ散、吾道常如二日正中一」

【雲液】ウンエキ 酒。白居易詩「一一酒二六觚一」

【雲煙】ウンエン ○くもと、けむりと。劉夢得詩「飛軒俯二松柏一、抗殿接二一一一」○筆跡のみごとなる形容。杜甫詩「揮レ毫落レ紙如二一一一」

【雲煙過眼】ウンエンクワガン 雲煙の忽ち目を過ぎ去る如く、一時の快を取りて長く心に留めざる意。蘇軾、黃綾堂記「譬二之煙雲之過レ眼、百鳥之感レ耳、景不二欣然接一レ之、去而不二復念一也」

【雲架】ウンカ たかきやね。王鞏詩「一一重樓出二都城一」

【雲娥】ウンガ 天女。張華詩「一一兩三瓊石一神紀侍二衣裳一」

【雲霞】ウンカ ○くもと、かすみと。新序「一一充咽、則春二日月之明一」○圓多人數の形容「一一の如く集る」

【雲嶂】ウンシャウ 雲のきれめ、くもま。陸游、傳舍詩「初疑一一暴、又似山際電」

【雲間】ウンカン 雲閒。

【雲海】ウンカイ ○くもの遙に積はれるうなばら。沈佺期詩「何堪萬里外、一一已冥茫」○雲におほはれたる山が其の頂上ばかり島の如く見える形容。宋之問詩「登レ高望不レ極、一一四茫茫」

【雲行】ウンカウ ○くもが空を行く。易、繫辭「一一雨施、品物流レ形」○圓物事のなりゆき、趨勢。

【雲客】ウンカク ○雲中の人。仙人など。水経注「是以林徒棲託、一一宅レ心」○図 雲のうへびと。殿上人。「月卿一一」

【雲壑】ウンカク 雲のかかれる深き谷。孔稚圭、北山移文「誚二我松桂一、欺二我一一」

【雲合霧集】ウンゴフムシフ 多くあつまる形容。史、淮陰侯傳「天下之士、一一」

【雲漢】ウンカン あまの川。詩、大雅「倬彼一一、爲二章于天一」 ‖天河・天漢・銀漢。

【雲翰】ウンカン 他人の手紙の敬稱。梁雲(九二二頁四段)を見よ。 ‖雲箋。

【雲氣】ウンキ 雲の如くに空中にあらはれる氣。漢書、高祖紀「季所レ居上常有二一一一一」事は高祖の字。

【雲錦裳】ウンキンシヤウ 美くしき錦の衣裳。裳は朝服ヲヤカ太上飛行羽經「七色夜光一一」蘇軾、潮州韓文公廟碑「天孫爲織一一」

【雲錦】ウンキン くもあし。杜荀鶴詩「半巖一一風未歇」

【雲衢】ウンク くものかよひぢ。王勃詩「看虵不レ可レ得、空望白一一」 ‖雲路。

【雲臥】ウンガ 雲とねるの雲のかかる高山などに臥する。杜甫詩「天閣象緯逼、一一衣裳冷」 ‖臥雲。

【雲外】ウンガイ くものう(へ)。元稹詩「遐想一一寺、峯巒渺相望」 ‖雲表。

【雲氣】ウンキ ○美人の髪を線の雲に喩へていふ。阿房宮賦「絲雲之擾擾、

槐二喩鬢一也」○うつくしきまげ。韋應物詩「高髻一一宮樣粧」

【雲髻】ウンケイ 女の髪の高く結べるをいふ。敦煌記「周文王於二靈上一加二琢翠翹花一傳二之鉛粉一、其髻爲二名曰一鳳髻一、又曰二一一一一、步步而搖、故曰二步搖一」

【雲覽】ウンラン くもと、にじと。孟、梁惠王「若二大旱之望一一一也」 ‖雲蜺。

【雲卷】ウンケン くもの如くにまくのべ書、王羲之傳「霞舒一一、無レ所二開然一」

【雲巒】ウンラン くもを帶びたる高きみね。蘇軾詩「海門沒二坤軸一、湖尾抱二一一一」

【雲根】ウンコン 石の異名。雲は石に觸れて生ずる故。賈島詩「過レ橋分二野色一、移レ石動二一一一」

【雲彩】ウンサイ 雲(ウン)くも。 ‖雲。

【雲際】ウンサイ くものきは。岑參詩「昨夜一一宿、且從二西峯一回」 ‖雲邊。

【雲錦】ウンサイ 圖綿布の地の厚き織物。足袋底などに用ふ。一一は人名。

【雲山】ウンザン くものかかれる遠く高き山。宋史、樂志「一一浩浩歸二何處一、但聞空際絲聲辭」

【雲棧】ウンサン 高く雲に入るかけはし。李賀、長嵰賦「升二一一一而心驚」

【雲散鳥沒】ウンサンテウボツ 雲の如く散り鳥の如く沒する。 ‖雲消霧散。

【雲鬢】ウンビン ふけ、頭髪の根に生ずるあか(五行記) ‖頭垢。

【雲輜】ウンシ 松ほくの兵車。後漢書、實憲傳「一一數千、萬有三千餘乘」注「輜、車也、稱レ雲者、其多一也」

【雲紬】ウンチウ くものかかれる山のほち。陸去來辭「雲無レ心以出レ岫」蘇軾詩「一一不レ知レ遠」

【雲集】ウンシフ くもの如く多くあつまる。後漢書、光武紀「四夷一一」 ‖雲萃・雲屯。

【雲集霧散】ウンシフムサン 忽ちあつまり忽ち散ずる形容。班固、西都賦「朝發二河海一、夕宿二江漢一、沈浮往來、一一」

【雲心月性】ウンシンゲツセイ 無欲にして世の名譽利益を求むる心なきにいふ。孟浩然詩「野客雲爲レ心、高僧月爲レ性」

【雲霄】ウンセウ ○やぐらのつきたる高き車。後漢書、光武紀「一一十餘丈、瞰二臨城中一」○くものくるま。杜甫詩「蓬萊織女廻二一一一」

【雲樹】ウンジュ たかきうてな。陸龜蒙詩「幾多一一侍二青冥一」

【雲上】ウンジャウ ○くもの上。○圖宮中、禁裡。

【雲上人】ウンジャウヒト 圖くものうへびと。 ‖雲客・殿上人。

【雲翔】ウンシャウ ○分れ散る。戰國策「楚燕之兵一一而不二敢校一」○そらをかける。曹植詩「九州不レ足レ步、願得二一一一」○雲のかけまはる如くあちらにもこちらにも起る。後漢書、馮衍傳「兵革一一、百姓震駭」○雲の如く、早く走る。晉書、陳騫傳「於レ時大邦之衆、一一電發」

【雲壤】ウンジャウ 雲と、つちと。韓偓詩「阡陌縱二一一一一、閑眠隔二支笠一」 ‖天地・霄壤。

【雲蒸】ウンジョウ くものたかくあがる如く豪傑などの勢の強きをいふ。晉書、武帝紀贊「一一雷駭、前烈暴興」圖

【雲雀】ウンジャク ひばり、雀より稍大いなる鳥、高く空中にのぼりつつ鳴く。 ‖告天子・天鶇。

【雲案】ウンアン 雲の如く多くあつまる。王融、上北伐圖一疏「滄弁星離、玉帛一一」 ‖雲集。

【雲樹】ウンジュ くものかかる程たかき木。王維詩「秦迴山河靜、天長一一微」

【雲仍】ウンジョウ 遠き子孫、仍はつぎ重なる。爾雅「曾孫之子爲二仍孫一、仍孫之子爲二雲孫一」

【雲梁龍變】ウンリョウリュウヘン 英雄の時運に會ひて起る形容。史、彭越傳「得二尺寸之柄一一一」

【雲水】ウンスイ ○くもと、みづと。溫庭筠詩「飄然隨二釣艇一、一一是天涯」○行脚僧、行雲流水の如くめぐり行くが故。瞿中溶詩「一身如二一一一、慈悲任二去來一」 ‖雲水僧。

【雲水僧】ウンスイソウ あんぎゃそう。元好問詩「一瓶一鉢百無レ累、惜我不レ如二一一一」 ‖雲僧。

【雲棲】ウンセイ 世俗を脱して、雲深き處に住む。陸游、醉園詩「一一擬卜レ築、起舞行歌亦足レ豪」

【雲綿】ウンセン　きららの異名。異物志「雲母、一名ー、入レ地萬歳不レ朽」

【雲霄】ウンショウ　〇あをぞら。晉書、陶侃傳「志凌ーー」〇高位に喩ふ。朱慶餘詩「ーー未レ得レ路、江海作二閒人一」

【雲擾】ウンジョウ　雲のみだれる如く大いにみだれる。漢書、敍傳「天下ーー」

【雲消霧散】ウンショウムサン　雲の如くきえ霧の如く散り失せる。あとかたもなき形容。

【雲笈】ウンキフ　うつくしきてがみ。陳逢詩「因レ風贈レ寄白ーー」＝雲翰・雲箋。

【雲孫】ウンソン　己より八代の後の孫（己・子・孫・曾孫・玄孫・來孫・昆孫・仍孫・雲孫）爾雅「仍孫之子、爲二ーー一」釋名「ーー言三去レ己遠如二浮雲一也」

【雲樹】ウンジュ　雲雷の模様を刻みたる酒だる。論衡「易曰、雲從レ龍、非二龍從一レ雲也、ーー刻二雷雲之象一、龍安肯來」＝尊線。

【雲臺像】ウンダイノゾウ　後漢の明帝の時、功臣二十八將の肖像を南宮の雲臺に畫かしめたる故事。後漢書、朱祐等傳論「永平中、顯宗追二感前世功臣一、乃圖二畫二十八將於南宮雲臺一」二十八將（七六頁）參看。

【雲堂】ウンドウ　㊀僧堂に同じ、禪家の用語、集禪工夫のために雲水僧の四方より參堂するが故。

【雲漢】ウンカン　遠くくものこめたるなみ。孟浩然詩「日夕望二三山一、ーー空浩浩」＝雲浪。

【雲丹】ウンタン　うに。＝海膽。

【雲中白鶴】ウンチュウハクカク　高尚なる人品に喩ふ。世說、賈粛「劉孝標目二劉歊一壻如二ーー一」

【雲汀】ウンテイ　くものかかれるみぎは。李翠玉詩「夕霏生二水寺一、初月淨二ーー一」

【雲泥】ウンデイ　くもと、どろと。甚だしく隔る喩。李紳詩「明日獨歸花路遠、可レ憐人世隔二ーー一」＝天地・霄壤。

【雲梯】ウンテイ　くもに通ずる程たかきはしご。古の攻城具。戰國策「墨子曰、公輸爲二ーー一將二以攻一レ宋」公は公輸般。

【雲天】ウンテン　雲のたなびけるそら。莊子「黃帝得レ之、以登二ーー一」

【雲棟】ウンドウ　たかくそびえたるむね。張正見詩「ーー疑二飛雨一、風簷似二望仙一」

【雲實】ウンジツ　雲の湧き出る穴。沈佺期詩「陰壑已水閑、ーー絕二探討一」

【雲屯】ウントン　兵卒などが雲の如くあつまる。後漢書、竇融奏「親二望風壁一、ーー鳥散」＝雲集。

【雲納】ウンノウ　雲水僧に同じ。納はけさ（袈裟）

【雲房】ウンボウ　雲のこめたる高きいへ、道士又は僧などの居室。仙傳拾遺「木公居ーー、以二雲霞一爲レ蓋、青雲爲レ城」馬戴詩「ーー出定後、岳月在二池西一」

【雲鬢】ウンビン　たかくそびゆるいらか。宋之問詩「ーー出二蓬家一臨覺皆已偏」

【雲幕】ウンマク　くもの如くにつらなるまく。西京雜記「成帝設二雲帳雲幄ーー于甘泉紫殿一」

【雲帆】ウンパン　とほく雲間に見ゆる舟。李白詩「直挂ーー濟二滄海一」

【雲版】ウンバン　寺にて用ふる樂器の名、青銅の版に雲形を鋳付ける。＝圓鈸。

【雲幡】ウンバン　高きのき。又、雲のかかれるうつばり。庾信詩「ーー承二武帳一」

【雲鬢】ウンビン　美人のうつくしきくろ髪。髻はびん。張正見詩「王孫春好レ遊、ーー不レ勝レ愁」＝雲髻。

【雲物】ウンブツ　そらの氣色や天文地異。左、僖五「凡分至啓閉、必書ーー、以爲二備故一也」

【雲陛】ウンペイ　高ききざはし、宮中のきざはしにいふ。謝朓詩「惟昔逢二休明一、十載朝ーー」

【雲表】ウンピョウ　くものうへ。水經、注「有二石人一峙二於山上一、狀有レ懷レ於ーー」＝雲外。

【雲母】ウンモ　きらら。漢書、王莽傳「常騎ーー屏一、面非二親近一莫レ得レ見也」＝雲綿。

【雲母車】ウンモノクルマ　きららにて飾りし車

【雲夢】ウンム　（管書、輿服志）

【雲封】ウンホウ　雲にとざされる。趙孟頫、飲酎用二韓樂一獻「銅駝月冷、金門ーー」＝雲鎖。

【雲屏】ウンペイ　くもがくづれる。水勢の激しきに喩ふ。皮日休詩「駭陵灘勢似ーー、釣具歸來放二石脣一」

【雲夢】ウンム　楚の七澤の一、方九百里ある大いなる澤。史、司馬相如傳「奢二皇乎海外一、吞若ーー者八九、其於二胸中一曾不レ滯芥一」

【雲霧】ウンム　くもと、きりと。管書、樂緯「若下掖ーー一面觀中青天上也」

【雲門宗】ウンモンシュウ　禪宗の一派、其の開祖、後漢の文偃禪師が廣東省雲門山に住せし故。

【雲膜】ウンマク　茶の異名。黃庭堅詩「我家江南摘ーー」

【雲亂】ウンラン　〇くもがみだれる。枚乘、七發「紛紛翼翼、波涌ーー」〇國の亂れる形容。＝雲擾。

【雲林】ウンリン　雲のかかれる林。白居易詩「亂藤遮二石壁一、絕澗護ーー一」

【雲路】ウンロ　雲の往來するかよひぢ。北史、文苑傳序「俱騁二龍光一、竝驅二ーー一」＝雲衢。

【雲樓】ウンロウ　たかきたかどの。杜甫詩「夜宿敵ーー」＝雲閣・危樓。

【雲和】ウンワ　〇琴材を出す山の名。〇轉じて、琴の稱。周禮、春官「孤竹之管、ーー之琴瑟」王昌齡詩「斜抱ーー二深見レ月」＝雲鼓。

【雲漢】ウンカン　くもがうすしろく光れる。元稹詩「雨香ーー乾二獸和一風送二香聲一入二棟歌一」程顥詩「ーー風輕近午天」

【雲井】ウンセイ　㊀くものうへ。＝雲上。

【雲斂】ウンレン　くもが散りてなくなる。謝莊、月賦「氣霽二地裏一ー一ニ天末一」歐陽修、秋聲賦「其色慘淡、煙霏ー一」‖雲收。

【遏レ雲遶レ梁】ウンヲアツトリテリョウヲメグル　歌聲の妙を形容す。韓は行雲をとどめ、餘音は梁をめぐる。事物紀原「昔秦青擯レ節悲歌、韓娥引二林木一、響遏二行雲一、韓娥東之齊、過レ糧、過二雍門一、鬻レ歌假レ食而去、而餘音繞レ梁、三日不レ絕」

【雲耶山耶】ウンカヤマカヤ　天外を望みて雲か山かと疑ふ。蘇軾、書二王定國所レ藏烟江疊嶂圖一詩「江上愁心千疊山、浮レ空欲レ雪如二雲煙一、山耶雲耶遠莫レ知、煙空雲散山依然」

【雲無レ心而出レ岫】ウンムシンニシテシュツ　岫は山の穴、雲は何の心もなく、唯だ山の穴を出る。人の出處の自然なるに喩ふ。陶潛、歸去來辭「ー――、鳥倦レ飛而知レ還」

【雲慘】ウンサン　雲がいたみかなしむ。劉威詩「ー一姻愁苑路斜」

【雲橫二秦嶺一家何在】ウンハシンレイニヨコタワリテカノカアリ　唐の韓愈「論レ迎二佛骨一表」を上りし爲め、潮州に左遷せられし途中、甥の湘迎に示したる詩の句「――、雪擁二藍關一馬不レ前」

【雲從レ龍】ウンリュウニシタガフ　聖主の賢臣を得る如く同氣相求むる喩。易、文言「――、風從レ虎」

【雲開見レ日】ウンヒラケテヒヲミル　長くふさがれるものの漸く通ずる意。後漢書、袁紹傳「超大使衛レ命來征、若二雲開見一レ日、何喜如レ之」

【雲破】ウンハ　雲が開く。白居易詩「ー一山昱レ色、冰融水放レ光」

【雲破月來】ウンハシテツキキタル　雲開きて月光が漏れ出る。入蜀記「坐花月亭、有二小碑一、乃張先子野ーー花弄レ影、樂章云、得二句於此亭一也」

【雲行雨施】ウンコウシアメホドコス　雲がそこに行き、雨となりて恩澤を萬物にほどこす。易、繫辭「ー――、品物流レ形」

【雰】ハン　陽

雪のさかんに降る貌。詩、邶風「雨雪其ー」

【雩】フン　文

○きり（露氣）○しも（霜）釋名「凝氣著草木遇二寒凍一、色白曰ー一」○ーーは雪のふる貌。

【雰圍氣】フンイキ　地球をとり圍める氣體。‖大氣・空氣。

【雰虹】フンコウ　にじ。陸憊詩「ーー照二連漪一」

【雰雰】フンフン　雪のふる貌。詩、小雅「上天同雲、雨雪ーー」

【雯】ブン　文

雲のうつくしきあや、雲が章を成す（雲文）

五畫

【電】テン　デン　眞

○いなづま、いなびかり「閃ー」「耀ー」空中の陰陽二氣の相激する際に發する光。春秋、隱九「大雨震ー」○いなびかりの如く明かに照す、他人に對する敬語に用ふ「ー覽」○いなびかりの如くすばやし「ー馳」○物理學にて宇宙に存在する陰陽二種の勢力「一氣」‖陰陽激燿するなり、雨に從ひ、申に從ふ。

【電解】デンカイ　電力にて物を分解する。

【電林】デンリン　いなづまの如く盛んにかがやく。幸蜀記「皇威ーー、聖略風馳」

【電氣】デンキ　宇宙に存在する陰陽二種の勢力。

【電訓】デンクン　電報にて訓示する。又、其の訓示。

【電光石火】デンコウセキカ　事の迅速なるに喩ふ。淮南子「人生二天地之間一、如二驟レ石見レ火、電火過レ隙」

【電光朝露】デンコウチョウロ　極めて短き時間。金剛經「一切有爲法、如二夢幻泡影一、如レ露亦如レ電、應レ作二如レ是觀一」‖露電。

【電頃】デンケイ　いなづまのひらめく程の極めて少しの間。馬明生詩「千齡猶一刻、萬紀如ーー一」

【電祇】デンギ　いなづまの如き光あるはこ。王勃、乾元殿頌「ーー掃レ霧、雲旌振レ景」

【電激】デンゲキ　いなづまの如くはげしくおこる。漢書、敍傳「游說之徒、風馳ーー」

【電擊】デンゲキ　いなづまの如く急にはげしくうつ。晉書、溫嶠傳「催二進諸軍一、一時ーー」‖疾擊。

【電信】デンシン　電報に同じ。

【電車】デンシャ　○電力を用ひて走らす車。○長くつづく車。晉書、張華傳「雲梯ーー」

【電燎】デンリョウ　いなづまの如くにひかりかがやく。漢書、揚雄傳「流星旄以ーー兮」注「如二星之流一、如二電之照一也」

【電瞬】デンシュン　電光に同じ。晉故事「投蘇武二采覽二云幸賜ニーー嚴電一、晉王戒親レ日不レ能」

【電統レ樞】デンスベテスウ　電光が北斗の樞星を繞る、古瑞とす。宋書、符瑞志「黃帝母曰二附寶一、見二大電光一、繞二北斗樞星一、照二郊野一、感而孕、二十五月、生二黃帝於壽丘一」

【電駕】デンガ　○いなづまの如くすみやかにひきつける。李白、大猷賦「紅旗ーー、卷二長空之飛雪一」○いなづまがひらめく。陸游詩「ーー半空雲黯黯」

【電閃】デンセン いなづまの如くひらめく。蘇軾詩「柳候運ノ筆如ニ一一ニ」

【電扇】デンセン でんきうちは、電氣力にて風を生ずる器。

【電線】デンセン 電氣を通ぜしむるはりがね。

【電奏】デンソウ 電報にて天子に申し上げたる。

【電池】デン 化學作用にて電氣を起させる裝置のもの。

【電燈】デントウ いなづまの如く、非常に早くかける。＝電燭・電騎。

【電柱】デンチウ 電線をかけ通ずる爲めのはしら。

【電燈】デントウ 電氣の發熱により光を發せしむるあかり。＝電氣燈。

【電波】デン 電氣の波動。

【電報】デンパウ 電氣の作用にて即時遠方へ通信する。又其の通信。＝電信。

【電掣】デンセイ いなづまのはらふ如く忽ちに消える。蘇軾詩「佳人猶唱醉翁詞、四十三年如ニ一一ニ」

【電赴】デンフ 極めてとくはせむかふ。晉書、識王承傳「足下若能卷ノ甲ニ一一、猶或有ノ濟」

【電駕】デン いなづまの如く極めてとくはせる。駕は奔驟なり。後漢書、班固傳「輕車電發、驍騎ニ一一」＝電驟。

【電文】デンブン 電報の文言。

【電報】デンパウ いなづま。電をむちに喩へていふ。劉孝威、正旦春雞賀「ニ一

夫ノ欲、雷車折ノ輪」＝電策。

【電母】デンボ いなづまの神。三餘贅筆「俗呼ニ雷電一爲ニ雷公ニ一一、未有ノ所ノ本也」宋史、儀衛志「雷公ニ一一旗」

【電命】デンメイ 電報にて命令を下す。又、其の命令。

【電波】デンパ いなづまの如くに怒ちはろびる。傅元詩「存若ニ流光一忽ニ一、何爲多念獨鬱結」

【電覽】デンラン 他人に見せることの敬稱。＝電觀・呈電。

【電流】デンリウ 導體を通じて傳はる電氣の流動。

【電力】デンリョク 電氣の力。

【電鈴】デンレイ 電氣仕掛けのよびりん、ベル。

【電路】デンロ 電流の通ずる路。

【電話】デンワ 電氣仕掛けにて隔り居る人と通話する。又其の裝置。

【雹】ハク ホク 入聲 沃

ひょう、ひさめ（雨冰）雷雨の時などに雨が凍りて氷となり雨にまじりて降るもの、小なる者は豆の如く、大なる者は拳の如し、能く禾稼を傷く。「飛ニ一」「降ニ一」禮、月令「仲夏行ニ冬令ニ則ニ一凍傷ニ穀」

【雹災】ヒョウサイ あられ。王逸賦「雷霆兮碌磕、ニ一兮霏霏」＝霰雹。

【雷】㊀ライ ㊁ライ 國俗 本、雷に作る

㊀かみなり、いかづち。陰陽の二氣が空中にて相觸れて電ガイを生じ大音響を發する現象。「迅ニ一」「驚ニ一」「轟ニ一」〇大いなる聲に喩ふ「蚊ニ一」「鼾ニ一」〇いかづちの如くはげしく發するものに喩ふ「地ニ一」「水ニ一」「魚ニ一」〇澤の名。〇ニ同は他に附きて聲を出す、附和する。㊁ころばす、石を推して高處よりころばす。＝擂。〇うつ、鼓をうつ、俗に擂に作る。古樂府「官家出遊ニ大鼓」

【雷雨】ライウ かみなりが鳴りあめふる。易、坤卦「ニ一之動、滿盈」

【雷收】ライシウ 雷の聲がやむ。禮、月令「仲秋之月、日夜分、雷始收ノ聲」

【雷聲】ライセイ 雷の鳴るひびき。庾世南、獅子賦「瞩ノ目驚曜、發ノ聲ニ一」

【雷霆雷激】ライテイライゲキ 雷霆の鳴りはためくをいふ。郭璞、江賦「溫流雷碓而雷激」碓一に砧に作る。

【雷火】ライクワ 落雷によりて起る火事。張衡、蟠松引「ニ一不ニ敢燒ニ其瘤ニ」

【雷管】ライクワン 發射の際、銃砲にこめし彈藥を炸發せしむるための發火物。

【雷煥】ライクワン 晉人、天文に精し、武帝の時、斗牛の間に紫氣あり、煥、豐城に寶劍あるを知り、獄を掘りて龍泉・太阿の二劍を得たり（晉書、張華傳）

【雷驚蟄藏】ライケイチツサウ 雷のうつ如く、蟄虫の驚する如し。威勢のはげしき喩。韓詩外傳「春ニ其刑罰ニ而信ニ其誅殺ニ、如ノ雷ニ擊之ニ、如ノ雷ニ壓之ニ」

【雷鼓】ライコ 〇雷のとどろく聲。朱慶餘、觀潮詩「鮮鯉出ノ海魚龍氣、晴雪噴ノ山ニ一聲」〇八面のたいこ。周禮、大司樂、注「ニ一八面鼓也、記ニ天神ニ則鼓ノ之」〇鼓を擊つ。＝擂鼓。

【雷公】ライコウ かみなり。杜甫詩「安得ノ健ニ一、滂沱洗ニ突兀ニ一」＝雷神。

【雷吼】ライコウ 雷鳴、吼はほえる。劉峻、東陽金華山棲志「躍流瀑瀉、濟湧決咽、電擊ニ一、駭ニ日驚ノ魂」

【雷芝】ライシ 蓬萊の異名。古今註「蓬萊、一名ニ一」

【雷師】ライシ かみなりを司る神。宋史、禮志「＝雷神。

【雷獸】ライジウ 〇深山にすみて形は貂ニに似て大きく、胸腹共に黃色なる獸、雷鳴の時、村里に出るといふ。＝木貂。〇雷の如き聲を發する怪獸。山海經「東海中有ニ流波山ニ、其上有ノ獸、聲如ノ雷、其名曰ノ夔、黃帝得ノ之、以ニ其皮ニ爲ニ鼓ニ、打ニ以ニ一一之骨ニ、聲聞ニ五百里ニ」

【雷神】ライシン かみなり。宋史、禮志「州縣祭ニ社稷ニ、祀ニ風伯雨師ニ一一、爲ニ小

記」＝雷公。

【雷霆】ライテイ　いかづちがひびきふるふ。漢書、敘傳「長驅大擊、電撃ー＝」

【雷車】ライシャ　かみなりのとどろく形容。鮑溶詩「ー＝隆隆雨山陽、電光煜煜北斗傍」

【雷撃】ライゲキ　雷の如くに烈しく引く。元稹、馬射賦「揮ㇾ弓ー＝、激ㇾ矢風迅」

【雷紋】ライモン　雷の模様を刻みたる酒樽。紋は樽。論衡、語増「ー＝、刻二雲雷一雷之形一」

【雷澤】ライタク　山東省濮縣の東南に在る澤の名。史、五帝紀「耕二歴山一、歴山之人、皆讓ㇾ畔、漁二ー＝一、ー＝之人、皆讓ㇾ居」

【雷陳膠漆】ライチンカウシツ　友誼の極めて厚きにいふ。後漢書、雷義傳「膠漆自爲ㇾ契、不ㇾ如二雷與一陳」陳は陳重。

【雷霆】ライテイ　はげしきかみなり。易、繋辭「鼓ㇾ之以ニー＝一潤ㇾ之以二風雨一」

【雷鳥】ライテウ　高山に棲む一種の鳥。＝松雞。

【雷電】ライデン　かみなりと、いなづまと。易、顯卦「ー＝合而章」

【雷同】ライドウ　みだりに他の説に附和する、雷の聲を發して萬物同じくこれに應ずるに喩ふ。曲禮「毋二勦説一、毋ニー＝一」後漢書、桓譚傳、注「雷之發ㇾ聲、衆物同應、俗人無二是非之心一、出ㇾ言同者、謂二之ー＝一」

【雷動】ライドウ　はげしく、ふるひ動く。漢書、息夫躬傳、讃覧ー＝、四野風起」子虚賦「ー＝轟至、星流電撃」＝震動。

【雷砰】ライホウ　かみなりの音。元稹詩「撃若ニー＝目流電」

【雷斧】ライフ　〇石にて作りたるをの。石器時代の遺物。＝雷斧石。〇雷が斧にてつんざく。怪しき石などの形容。宋濂詩「鬼工ー＝琢倒古」＝鬼斧。

【雷風】ライフウ　雷と風と。易、説卦「ー＝相薄、水火不二相射一」

【雷魯】ライロ　かみなりの如くにふるひうごかす。李嶠詩「ー＝六合開、天行萬乘出」

【雷撃】ライゲキ　いなびかり。故事成語考「閃電就曰ニー＝一」＝電撃。

【雷封】ライホウ　縣令の異名。六帖「雷霆三百里、故縣令稱ニー＝一」（百里は縣のひろさ）

【雷奔】ライホン　雷のはしる如くはげしくはしる。班固、西都賦「ー＝電激」

【雷名】ライメイ　他人の姓名又、名聲の敬稱「久仰ニー＝一」

【雷鳴】ライメイ　〇かみなりがなる。〇かみなりの如き大いなる聲。楚辭、卜居「黄鐘毀棄、瓦釜ー＝」＝雷吼。

【雷文】ライモン　いなびかりの如き屈折せる線を以てつくる一種のもやう。稻妻形。＝雷紋。

【雷門鼓】ライモンコ　雷門は會稽城門の名、大鼓あり、聲百里に聞ゆ。漢書、王尊傳「毋ㇾ持二布鼓一過中雷門上」（布鼓は聲なし。無學者に喩ふ）

【雷落】ライラク　雷が落ちる。沈佺期詩「驍ㇾ波如二電擊一激ㇾ石似ニー＝一」＝落雷。

【零】

㊀レイ　㊁レン　先　雨　庚

㊀のこりあめ（餘雨）〇しづかにふる雨。〇おつ（落・墮）葉の假字、草の枯れおちるを苓、木のおちるを落といふ。〇ふる（雨）雨が降る。詩、鄘風「靈雨既ー＝」〇はした。あまり（餘數）「奇ー」「ー碎」〇から、皆無。〇じげむ（困・病）「窮ー」㊁先ー＝は西羌ニシビス

同訓異語　零・落・墮・隕・頽の別は落（一六六一頁三段）の條を見よ。

【零雨】レイウ　こさめ、おつる雨。詩、幽風「ー＝其濛」＝微雨・徐雨。

【零散】レイサン　おとろふ。鮑照賦「雖二凌ㇾ霧以揮ㇾ奇、終從ㇾ歳而ー＝」

【零碎】レイサイ　〇おちくだける。白居易詩「雪花ー＝逐ㇾ年減、煙葉林疏隨ㇾ分新」〇些細なるにしてくだくだしし。水滸傳「把二些ー＝銀兩一賞了」＝零零碎碎。

【零細】レイサイ　甚だこまか。＝微細。

【零散】レイサン　おちぶれてちりぢりになる。白居易詩「歌伴酒徒ー＝盡、唯殘頑白老蘇翁」

【零殘】レイザン　おちそこなふ。夏侯湛賦「木蘭離以ー＝」

【零時】レイジ　十二時と一時との間。

【零星】レイセイ　〇すこし、整數に滿たざる數。＝零碎。〇おちぶれる。＝凋零。

【零丁】レイテイ　志を失ふ貌、孤單にしておちぶれる。李密、陳情表「ー＝孤苦、至二於成立一」＝伶仃。

【零丁洋】レイテイヨウ　廣東省珠江の口に在り。文天祥詩「惶恐灘頭説二惶恐一、零丁洋裏歎二零丁一」（惶恐灘は江西省贛江中に在り）＝伶仃洋。

【零落】レイラク　花がおちしぼむ。歐陽修詩「桃黄李白開次第、不ㇾ覺成ㇾ恨俱ー＝」＝凋零。

【零羅】レイラ　米の小ちり。閩書「凡過二四年一減ㇾ價ー＝」

【零點】レイテン　〇試驗などの點數の皆無なるにいふ。〇擂氏・列氏の寒暖計にて冰點。

【零貿】レイボウ　少しづつ買ふ　こがひ「古今鹽苑」

【零寶】レイホウ　こうり。晁氏客語「荊公托ㇾ人貿ㇾ金、ー＝了、餘兩不ㇾ足」

【零餘】レイヨ　すこしのこり、はした。字彙、凡數之ー＝也」＝奇零。

【零餘子】レイヨシ　むかご、山藥の莖に生ずる子。

【零落】レイラク　〇草木かれしぼむ。草の枯れるを零といひ、木の枯れるを落といふ。楚辭「惟草木之ー＝兮」〇

おちぶれてきびし。白居易、琵琶行「門前ー一落馬稀」＝落魄。
【零涙】レイルイ　なみだをおとす。沈約詩「ー一向レ誰通、離嗚徒歔息」
【零零碎碎】レイレイサイサイ　些細にしてくだくだし。朱子語録「洪範是治道最緊切處、這箇若理會不レ過、又去理二會甚麼零零細細一」＝零碎。
【零落】レイラク　おつろつゆ。詩、鄭風「ー一瀋今」

六畫

【需】㊀シュ・ジュ 遇 ㊁ダン・ナン 輸

㊀まつ(待)○ためらふ(逡疑)進まず、疑ひてためらふ、猶豫する。左、哀六「一事之賊也」○もとむ(索)要求する「應ー」＝須。○もちふ(用)いりよう(入用)又、其の品物「軍ー」「百ー」「必ー」○易の卦の名、乾下坎上。○韋の柔滑なる皺「ー弱」㊁よわし(弱)＝懦。

同訓異字　需・求・索・干・須・要・徴・邀・覓の別は求(一〇四五頁四段)の條を見よ。

【需要】ジュヨウ　いりよう。＝需用。
【需事之賊】ジュジノゾク　需は逡疑、疑ひてためらふは事を害ふ。左、哀六「子行抽レ劒曰、ー一也」
【需用】ジュヨウ　いりよう。又、其の品物「ー一品」＝需要。
【需用供給】ジュヨウキョウキュウ　入用なると、其れに應じてあてがひ給すると。＝需給。

【雷】 七畫

雷(雨部五畫)の古字。

【震】㊀シン 眞 ㊁ゾン 問

㊀ふるふ。○ちしん、なゐ、地がゆれ動く「ー災」「地ー」公羊傳「ー者何、動地也」○いかづち(疾雷)雷がひびきゆれる、雷が落ちて物を碎つ。春秋、僖五「ー夷伯之廟」○をののく(戰)うごく。うごかす(動)○おそる(懼)ふるへをそれる。をどす(威)○おこす(起)振ひおこす。○いかる(怒)○いきほひ、威光。左、成二「畏君之ー」○たかぶる(矜)○はらむ。古、娠に通ず。左、哀元「后緡方ー」○易の卦名。ー下ー上。位にて東と爲す。又、長男の殼とす(易、說卦)○澤の名、吳の大湖の異名。○ー旦は印度より支那を稱する語。一說、秦の譯聲。㊁はらむ(懷妊)＝娠。

同訓異字　震・雷・振・揮・戰・顫の別は雷(一〇四四頁二段)の條を見よ。

【震慴】シンショウ　ふるひおそれる。唐書、章見素傳「所レ至ー一」
【震恚】シンイ　はなはだしくいかる。文同賦「盈怨寤而ー一兮」
【震域】シンイキ　地震を感ずる區域。
【震掉】シンタウ　ふるひうごく。唐書、魏知古傳「羣心ー一、衆口銷鑠」＝震動・震驚・動搖。
【震慴】シンショウ　ふるひかがやく。左傳、注「雷電ー一、天之威也、聖人作二刑戰一以象二類之一」
【震耀】シンヨウ　ふるひかがやく。漢書、敍傳「靈祇皆至、天威ー一」
【震害】シンガイ　地震の被害。
【震駭】シンガイ　ふるひおどろく。晉書、孫盛傳「士卒奔遁、其會如レ林、煙塵俱起、震レ天駭レ地」唐書、盛彦師傳「殺二平生所レ惡數十家一州人ー一、皆亘レ足立」
【震駭】シンガイ　勢がふるひかがやく。唐書、黃巢傳「伐レ恩持レ權、ー一中外」
【震汗】シンカン　ふるひおそれて、あせかく。唐書、宋之問傳「得レ詔ー一、東西四步不レ能二引決一」＝戰汗。
【震撼】シンカン　ふるひうごかす。宋史、洪咨夔傳「ー一海宇、天下始知有二吾君一」
【震悸】シンキ　ふるひおそれる。李綱文「ー一命數臨、ー一交集」＝震懼。
【震懼】シンク　ふるひ、ひびく。南史、齊高帝紀「所レ樹驚衆柱、忽龍鳴、ー一山谷」
【震宮】シンキュウ　皇太子の御殿。易の震卦は東方の卦にて、長男の象とするが故。唐信詩「木總鼕ー一」盧僕、上幸二太子宮一膳御時「佳氣曉葱葱、乾行入ー一」＝東宮・春宮。
【震恐】シンキョウ　ふるひおそれる。＝震慴・震懼。
【震懼】シン　ふるひおそろ。後漢書、齊王縯傳「王莽梁閎二其名一大ー一、勝二伯升邑五萬戶黃金十萬斤位上公一」＝震悸。
【震悸】シンキ　ふるひおそれる。晉書、宗室傳「諸疏云、憂懼ー一、惴惴交集」＝戰慴。
【震慄】シンリツ　ふるひおどろく。書、堯典「ー一陟帝」
【震源】シンゲン　地震の起點たる地。＝震源地。
【震源地】シンゲンチ　おどろきて目がくらむ。李華、弔二古戰場一文「主客相摶、山川ー一」
【震災】シンサイ　地震のわざはひ。
【震驚】シンキョウ　ふるひさわぐ。唐書、韓滉傳「帝在二奉天一推許ー一、滉瞋二士卒一分レ兵成二河南一」＝驚駭。
【震悪】シンオ　心ふるひて甚だしくはじる。王伾擢文、奉レ命ー一、有レ約二丹寸一」
【震死】シンシ　落雷の爲めに死する。
【震霆】シンテイ　○雷の烈りにふるふ如く。漢

饒賦「冬雷ー雪」○光明の貌。四部賦「ー電煇煇、雷奔雨散」○殷盛なる貌。潘岳、藉田賦「ー塡塡」

【震主】シン　威光ありて主君を怖れさす。漢書、霍光傳「威ー者」

【震懾】シンショウ　ふるひつつしむ。後漢書、張禹傳「有二小譴一禹正二其法一、自二長史一以下、莫レ不二ー一」‖振慴。

【震悚】シンショウ　ふるへおそれる。晉書、齊王冏傳「百官ー、無レ不レ失レ色」

【震悼】シンタウ　ふるひおそれる。漢書、東方朔傳「聖帝流レ德、天下ー一」

【震慴】シンセフ　○おどす。宋史、趙普傳「驍二雄宇宙一、ー二靡夷一」‖震悸。○ふるひおそれて氣を失ふ。後漢書、何皇后紀「后性彊急、後宮無レ不二ー一」

【震疊】シンデフ　震慴に同じ。漢書、張湯傳「天下亟皆決レ湯、望二臣ー一」

【震川文集】シンセンブンシフ　三十卷、明の歸有光撰す。震川は其の號。文を作るに經術に本づく、唐荊川・王慎中と嘉靖の三大家と稱す。

【震悼】シンタウ　天子が臣下の死をなげきいたませられる。王倫、精潤碑文「聖朝ー二于上一、寮臣恒二勉于下一」

【震澤】シンタク　ふるひうごく。左傳「逸師經既、易二ー一」也」杜甫詩「朝野歡娛後、乾坤ー一中」

【震澤】シンタク　○今の太湖。震、禹貢「ー一底定」○江蘇省蘇州府の縣名。

【震怛】シンタツ　ふるひおどろかす。蘇洵文「ー二一下士一、莫二敢有一レ疑」

【震旦】シンタン　印度にて支那を呼ぶ稱。梵語の音譯、震は卽ち淸、且は斯坦にて地の義、淸地といふが如し。翻譯名義集「東方闇レ曙、是日出之方、故二ー一」とあるは附會の說なり。

【震蕩】シンタウ　いなびかり。長楊賦「疾如二奔星一、擊如二ー一」

【震盪】シンタウ　ふるひおそれる。詩、周頌「時邁震レ之、莫レ不二ー一」

【震天】シンテン　天をうごかす。勢の盛んなるにいふ。晉書、孫楚傳「士卒奔遁、其會如レ林、煙塵俱起、ー二駭レ地」

【震天駭地】シンテンガイチ　天地をふるはせ驚かす、勢力又、音響の盛んなる形容。前條參看。‖震天動地。

【震天動地】シンテンドウチ　前條に同じ。

【震怒】シンド　天子のおいかり。詩、大雅「王奮二厥武一、如レ震如レ怒」‖赫怒。

【震動】シンドウ　○ふるひ動く。書經「天休ー一」○ふるひ動きておどろく。李白詩「報レ漢雖レ不レ成、天地皆ー一」○ふるひうごかす。書、盤庚「ー二其惡民一」‖震撼・震蕩。

【震服】シンフク　ふるひしたがふ。遼史、耶律仁先傳「宋聞レ風ー一」

【震慎】シンシン　身をふるはしていきどほる。後漢書、張奐傳「彈二內獄一、人懷ー一」

【震慴】シンセフ　ふるひあぐ。後漢書、臧宮傳「ー二威靈一、風行雷照」‖振慴・震攝。

【震烈】シンレツ　地がふるひさける。後漢書、光武紀「二十二年九月、地ー一、詔曰、夫地者、任レ物厚德、靜而不レ動者也、而今ー一、厥咎懼焉」

【震慄】シンリツ　おそれふるへる。晉書、王導傳「導入、帝ー一」

【震雷】シンライ　はげしいかみなり。

【震雷無レ暇レ掩レ聰】シンライイトマナシトヲオホフニ　ことさらに超逸ぶりの文字を用ふるをいふ。宋景文公、歷史を修し好みて艱深の辭を以て、淺易の說を文る、歐公以て之を譏ること有らんと思ひ、一日其の壁に大書して曰く、宵雖レ鼈レ貞、札閽洪休と、宋之を見て曰く、夜夢不祥、題門大吉にあらずや、何ぞ必ずしも異を求むる此の如くなると、歐公曰く、李靖の傳に曰ふ、——と、亦是の類なりと、宋公慙ぢて退く、今所謂震霆不レ及レ掩レ耳とあるは、再改に係る（事類全書）

【震慄】シンリツ　ふるひ恐れる。吳志、呂蒙傳「軍中ー一、道不レ拾レ遺」‖振慄。

【雪】セツ　㊥

○そら（天上）天空の境「雪ー」「九ー」「碧ー」○日の旁の氣「消ー」○きゆ。‖消。○酸ーは花の名、のうぜんかづら。

【雪漢】セツカン　おほぞら、天際をいふ。後漢書、仲長統傳「遊二盛一世之上一、翔二觀天地之閒一、不レ受二當時之責一、永保二性命之期一、如レ是則可レ以使

ー一、出二宇宙之外一矣」

【雪月】セツゲツ　空に在る月。潘岳、哀詞「皎皎ー一、載盈載微」

【雪元】セツゲン　おほぞら。雲笈七籤「馮虛紘生、氣貫二ー一」

【雪擾】セツジョウ　○天地といふに同じ。張籍洛浩詩「籠恩ー一間、實與二造旅一均」○天と地との隔る如く大差あるに喩ふ。「ー一之別」‖雲泥。

【雪雪】セツセツ　みぞれ。雪は消ゆ甜雅、注「水雪雜下者、謂二之ー一」說會「ー一、今人所レ謂溫雪也、著レ物則消」

【雪宛】セツエン　高く峻ぶしき貌。淮南、原道「上遊二於ー一之野一」

【雪時】セツジ　たかく天空にそばだつ。晉書、樂廣勉勵敎記「遨遊ー一、秀閣雲亭」

【雪牛】セツギュウ　天牛に同じ。李德裕詩「潭窟入二海底一、岸壁徑ー一」

【雪嶺】セツレイ　おほぞらにそびえたるみね。陳子昂文「不レ能下投二身ー一、滅中景雲林上」

【雪】㊀タツ　㊁カツ　㊂セツ　㊃ケツ

㊀あめふる（雨）○ーータツは衆言の貌、かまびすし。又、震電の貌。○轍ーは走ることの捷き貌。○ー暗は鼓疾の貌。潘岳賦「ー暗岌及」○ー溪は川の名、浙江吳興縣の南に在り。㊁煜ーは光明の貌。班固、答賓戲

「其餘殊飛景附、煜ニ其間ニ者、蓋不ニ可ニ勝載ニ」‖炳煜。

【霆】㊀テイ 青 ㊁テイ 迥

㊀いなびかり(電)○いかづち、はげしく疾きいかづち(疾雷)○雷の長く引く餘聲。㊁いかづち(迅雷)

【霆撃】いなづまの如くはげしく一撃にうつ。漢書、匈奴傳「厳先日、宜ニ縦ニ先至者一合ニ臣等深入一一ト」‖雷撃。

【霆激】いなづまの如くはげしくおこる。張懐瓘文「颯風驟雨、雷怒一一」

【霈】ハイ 泰

○おほあめ(大雨)○水の流れる貌。‖沛。○霶ー…は雨の多くふる貌。○雨をいふ。沈瓊賦「喜甘ニ之流沛ニ」轉じて恩澤に喩ふ。

【霈霈】水の盛んに流れる貌。形容。宋玉、高唐賦「奔揚踊而相撃兮、雲興霞之一一ー」‖沛然。

【霖】ボク モク 屋

霢ー…はこさめ(小雨)詩、小雅「益之以ニ霢霂ー」‖霢霂。

【霍】八 畫 クック 藥

○揮ー…はにはか(猝遽)なる貌。又、疾き貌。俗に軽く財物を散ずるにいふ。○すみやかに散る貌。○さかんなる貌。○ー…は刀光のひらめく貌。○留ー…は開合の貌。一説、疾き貌。○大山の小山を圍み続れる稱。○衡山の別名。○國名、周の武王の弟ー叔の領地。今の山西省ー縣」○姓。ー叔の子孫、國を以て氏と爲す。ー光は漢の昭帝・宣帝に仕へたる名臣。○まめの葉。雚に通ず。

【霍焃】はやく馳する貌。馬融、廣成頌「霹靂ー…、別驚分奔」

【霍光】字は子孟、去病の異母弟なり、漢の武帝の朝奉車都尉となり、禁園に出入すること二十餘年、小心謹慎にして、未だ曾て過あらず、人と爲り、沈静詳審、出入して殿門を下るごとに、進止常處あり、郎僕射嘗に醳して之を履るに、尺寸をも失はざりきといふ、遺詔を受けて昭帝を輔く、百姓充實四夷賓服す、昭帝崩じ、昌邑王を迎へ立つ、淫行多し、之を廢して宣帝を立つ、甘露中に、功臣の形を麒麟閣に圖するや、光其の第一に居り、大將軍博陸侯霍氏といひて名いはず。

【霍霍】刀光のひらめく貌。木蘭詩「磨ニ刀ー一向ニ豬羊ー」元稹詩「ー一刀刃光」‖擺擺。

【霍閃】いなびかり(電)顧雲詩「金蛇飛狀ー一過、白日倒挂金繩長」

【霍然】にはかに消え失せる貌。司馬相如、大人賦「ー一雲消」

【霍亂】暑氣に中てられて起る、これらに似たる吐瀉病「傷寒論、注」揮霍撩亂の義。漢書、賈捐之傳「夏月暴時、歐濕ー一之疾」

【霓】ゲイ 齊

にじ。堺雅「雄曰ニ虹、雌曰ニー」」孟、梁惠王「若ニ大旱之ニ望ニ雲ー」」‖蜺。

【霓裳羽衣曲】月宮の音樂にまねて作りし樂曲の名。雑神錄「八月望日、唐明皇與ニ申天師ニ遊ニ月宮ニ、見ニ一大府ニ榜曰ニ廣寒清虚之府ニ、少前見ニ素娥十餘人ニ皓衣乘ニ白鸞ニ、笑ニ舞於殿ニ庭大桂樹下ニ、樂音清靡、上皇歸製ニ一一ー」

【霎】サフ・セフ 葉 治

○こさめ(小雨)○ー…は雨の聲。○極めて短き時間「瞬ー」「一ー」「ー時」楊萬里詩「萬頃銀濤半ー閒」

【霎時】すこしの間、しばし。

【霎霎】雨の聲。韓偓詩「ー一高林濕ニ雨聲ー」

【霑】テン 鹽 通じて、沾に作る

○うるほふ。うるほす「均ー」「普ー」「潤ー」ぬれる。ぬらす(沾)詩、小雅「既ー既足」しめる。しめす(漬)○轉じて仁惠恩澤の義とす。恩惠にあづかる。揚雄、長楊賦「仁ー而恩治」

【霑潤】めぐみにうるほふ。北史、魏太武帝紀「詔曰、去春小旱、東作不ニ及、夏勤既已、所ニ種麥苗、霑潤稍有ニ感、何報慶之速、雲雨霈滋、洪澤ー一」

【霑汗】あせがにじむ。漢書、揚雄傳「被ニ霑ニ鑽鑿ニ之汗ニ」

【霑肌】はだへをうるほす。揚雄、逐貧賦「或転或経、霑ニ肌ー一」

【霑漬】うるほしそそぐ。北史、賈秦傳「電光雰ニ日、驟雨ー一」

【霑濡】ぬれる。漢書、嚴助傳「使ニ陛下甲卒死亡ニ暴ニ露中原ニ、ー一ニ山谷ニ居者、谷那律傳「太宗出獵、遇ニ雨ー一」

【霑潤】うるほふ。晩機文「ー一既已渥」‖潤霑。

【霑隰】ヒフ　甚だしく乏ふ。漢書、游俠傳「鉄ニ遊ー一時ニ選ハ難シ。

【霑被】ヒフ　○うるほふ。うるほす。韓愈、上宰相一書「動植之物、風雨霑被之所ニー一」○轉じて仁恵を施す。又仁恵を被る。

【霏】ヒ　圓

○きり（霧）もや（靄）「林ー」「烟ー」謝靈運詩「雲開ー收夕ー」○煙のたなびく貌。○氣の立ちのぼる貌。○ー一は雪の甚だしくふる貌。又、雪のおこれる貌。又、雪の飛ぶ貌。又、霜のおく貌。又、草の茂る貌。又、談話の細かに續く貌。

【霏霏】ヒヒ　ふるあられ。登樓詩「檐外陰雲迎ー曉合、隔頭ー一與ー風俱」

【霏微】ヒビ　雨雪などのこまやかに降る貌。徐鉉詩「江澄霧色霧ー一」

【霏霏】ヒヒ　○雪の甚だしく降る貌。詩、小雅「雨雪ー一」○雲の飛ぶ貌。漢書、揚雄傳「雲ー一而來迎」○談話の永く細かに續く貌。晉書、胡毋輔之傳「吐ー佳言」如ニ鍾水溜ー一ー不レ絕」○霜の繁くおく貌。魏武帝、鶴石銘「繁霜ー一」○草の盛んに茂る貌。杜甫詩「宮草ー一承ニ露滋」○電光のひらめく貌。陸倕贈顧詩「疾電ー一作ニ天賛」

【霖】リン　侵

ながあめ（久雨）三日以上ふり續く雨「梅ー一」「秋ー一」「ー雨」左、隱九「雨自ニ三日ー一以往爲ー一」

【霖霪】リン　ながあめ。鮑照詩「奔泉多激射、霖雨夏ー一」ニ淫霖。

【霖雨】ウン　○ながあめ。左、隱九「凡雨自ニ三日ー一以往爲レ霖」ニ淫雨。○旱を救ふ三日以上の雨。思澤又、民の苦を救ふ人に喩ふ。書、說命「若ニ歲大旱、用ー汝作ニー一」

【霖潤】ジュン　ながあめがふりそそぐ。晉書、五行志「大曆四年、秋大雨、是歲自ニ四月ー一至ニ九月ー一京師米斗八百文」

【霖涼】リョウ　ながあめふりてひやかる。唐書、裴度傳「國不レ藏レ貨、有ニ糓川ニ給親畜ニ、宅處庫滿、無ニ歩厩ー一至ニー一則客舍雷屋、以就ニ外位ー一」

【霖潦】リョウ　ながあめにて濁流が溢る。晉書、宣帝紀「會ー一大水、平地數尺、三軍恐欲レ移レ營」范成大詩「壓レ屋雨雲密暗、環レ城ー一夏寒」ニ淫潦。

【霖霖】リン　雨の止まざる貌。楚辭、宋玉雨賦「雷聲聞而霆其響兮、雨ー一而又隕」

【霖霖】リン　ながあめがふる。張協詩「ー一過ニ二旬、散漫亞ニ九齡ー一」

【霧】ム　遇

くもる。くもり。雲が日を蔽ふ。

【霧晦】ムイ　風ふきてくもる。宋玉、九辯「忽昭昭而願レ見兮、然ー一而莫レ通」

【霙】エイ　庚

○みぞれ、雨が少しく凍りて來た雪とならざるもの。埤雅「雪寒甚則爲粒、溫則成霙、故謂之ー一」○あられ（霰）蘇軾詩「晩雨纖纖變ニ玉ー一」

【霞】カ　麻

○あさやけ、ゆふやけ、赤き雲氣、太陽の出沒する時、低空の雲氣に日光がさして赤くてるもの「朝ー一」「彩ー一」「晩ー一」「暮ー一」○はるか。遐に通ず「登ー一」○流ーは美酒の名。圖○かすみ、春日山野にただよへるもや。ニ霧。○鳥の通路に張りて之を捕へる網「ー一網」

【霞擧】キョ　赤き雲氣がたちのぼる。世說、容止「裴公儀レ朝、朝堂悄暗、惟會稽王來、軒軒如ニ朝ー一ー一」

【霞光】コウ　雲氣のひかり、朝やけ夕やけの類。白居易詩「ー一曙後殷ニ於火一、水色晴來嫩ニ於煙ー一」

【霞擧】キョ　雲氣のこめたるこみち。陶潛詩「敢投歸山吟、ー一ー一相勸」

【霞彩】サイ　雲氣押ち朝やけ夕やけの美くしきいろどり。陸道瀚詩「朝朝飲ニー一ー一暮暮登ニ秋色ー一」

【霞觴】ショウ　仙人などの用ふる酒杯。曹唐文「ー一共飲」ニ霞杯・九霞觴。

【霞宮】キュウ　雲氣の赤くこめたる所にやどる。李益詩「雲遊意ニー一ー一」

【霞洞】ドウ　○仙人の居る所。錄異記「長山楊譲洞在ニ蔚壁之中一、有ニ神仙一、或三人或五人、服色炎、往往出見、紹改ニ楊譲洞一爲ニ紫ー一ー一僊ニ紫霞殿ー一」○圖土皇の御所。ニ仙洞。

【霞帔】ヒ　○舞衣の明かに麗はしき形容。帔はもすそ。白居易詩「虹裳ー一步搖冠」○道士の服。劉禹錫詩「ー一仙官到ニ赤城ー一」○婦人の禮服。明史、輿服志「ー一褙子」

【霞氣】キ　東方の赤き雲氣。沈石來、錦詩「偶依世閒留不レ住、卻變ニ霞ー一出ニー一」

【霜】サウ　陽

○しも、露の凝りしもの「嚴ー一」「隕ー一」「繁ー一」詩、秦風「白露爲ー一」○霜は一年に一度降

る、故に歴年の義とす「星ー」李白詩「陛下之壽三千ー」○毛髪などの白きに喩ふ。李白詩「不ー知明鏡裏、何處得秋ー」○薬の白き粉末。清異録「却老ー、九錬松枝爲之」○霜の草木を枯らす如く、厳しきことの喩「秋ー烈日」○ー降は二十四気の一。

【霜鬢】ソウビン　○しものきびしき様。高適詩「城上ー侵三章木ー」○厳しき威光をいふ。秋霜の萬物を枯らすに喩ふ。晉書「孤恐ー一振、玉石俱焚ー」

【霜烏】ソウウ　しものふる寒き冬のからすの。白居易詩「曉霜翻ニ寒浦ー一聚ニ古城ー」

【霜葉】ソウヨウ　しもにて赤くなりたる葉。白居易詩「醉貌如ニー一、猶レ紅不ニ是春ー」杜牧之詩「停レ車坐愛楓林晩、ー一紅ニ於二月花ー」

【霜柯】ソウカ　秋の霜にあへる木の枝の梁武帝、簡文「秋木同ニー一」晉、潘岳「秋興賦」「仲子遊ニ於ー林ー」「鮮明百數見ニ秋實ー、繽紛衆葉傾ニー一ー」ニ霜枝、霜條。

【霜露】ソウロ　しもの降る時節のかに、最も美味とす。梅堯臣詩「ー一肥可レ釣、水鱗活潑レ斫」ニ霜鱠。

【霜降】ソウコウ　二十四気の一、甘露の次に来る気節、十月二十二三日頃。

【霜空】ソウクウ　しもの如くしろきけ・元稹詩「ー一引ニ銀蟬ー」

【霜下麗】ソウカレイ　菊の異名。陶潜詩「懐ニ此良秀姿ー卓爲ニ一ー」

【霜氣横秋】ソウキオウシュウ　霜の気の厳肅なるにいふ。孔稚圭、北山移文「風情張レ日、一ー」

【霜菊】ソウキク　しもを帯びたる菊。水經、注「雞頭ニー一金盌白沙細石ー」

【霜戈】ソウカ　白く光りてするどきほこ。漢書、武帝紀「ー一揮、五將奔進」ニ西京書、鄭畋傳「ー一萬隊、鐵馬千羣」ニ霜戟。

【霜瓦】ソウガ　霜の置ける屋根のかはら。白居易詩「殿宿ニー一漸初合、鄰ニ鼓ー一ー」

【霜花】ソウカ　霜を花に比していふ。唐太宗詩「朝光浮ニ曉野ー、ー一淨ニ霜空ー」ニ霜華。

【霜菅】ソウカン　しものかかれるかや。白髪に喩ふ。蘇軾詩「榮天雙鬢如ニー一ー」

【霜晴】ソウセイ　しものおりたるはたけ。岑參詩「ー一吐ニ炊煙ー」

【霜娥】ソウガ　しものおけるこみち。上官昭容詩「策杖臨ニ霞岫ー、危步下ニー一ー」

【霜月】ソウゲツ　○しも夜の寒き月。李商隱詩「九秋ー一五更風」○陰暦七月の異稱。ニ霜月。○國陰暦十一月の異名。

【霜草】ソウソウ　しもを經て白くなりしくさ。李白詩「白髪縁中人、白髪如ニー一ー」

【霜刃】ソウジン　白く光りてするどきやいば。賈島詩「十年磨ニ一劍ー一ー未ニ曾試ー」

【霜晨】ソウシン　しものあした。范成大詩「霜晴笑靨花、秀出謝ニー一ー」ニ霜旦、霜曙、霜曉。

【霜鬢】ソウビン　白き日ひげ。劉禹錫詩「玉人梁綺相輝映、卻愛ー一兩鬢」ニ霜鬢。

【霜署】ソウショ　御史臺をいふ。蘇味道詩「獬豸秉ニー一、直筆戒ニ冰心ー」ニ霜臺。

【霜縞】ソウコウ　しも夜のかねの聲。李白詩「客心洗ニ流水ー、餘響入ニー一ー」

【霜花】ソウカ　しもの如く白きはらげ。孟詵、白鳥呈レ瑞賦「明明露質、ー一潔朗」

【霜雪】ソウセツ　○しもと、ゆきと。史、貨殖傳「狙ニ擊奸時、間ニー一ー」○心の潔白にして厳しきに喩ふ。後漢書、嗣衡傳「忠果正直、志懐ニー一ー」

【霜鍔】ソウガク　しもと、あられと。隋煬帝賦「ー一落ニ今山谷寒、木葉下ニ分丘壑殘」

【霜鬢】ソウビン　白き毛ほほひげ。蘇軾詩「白魚紫筍不レ論レ錢、ー一三老如ニ松檜ー」

【霜臺】ソウダイ　○御史臺の異稱。御史臺は法律を掌る故に秋官に配して、ーといふ。殷尭藩詩「赤烏承ニ命使ー一、方「官重ー一紫綬光」ニ霜署。○國轉じて彈正臺の異稱。

【霜刀】ソウトウ　霜の如く光りて鋭き刀。杜甫、觀ニ打魚ー歌ー詩「細ー一、雪子左右揮ニー一、饋飛ニ金盤ー一白雪高」韓愈、芍藥歌「ー一勸レ汝天女勞、何事低頭學ニ桃李ー」

【霜檀】ソウダン　霜を經てよく熟せし九年母。杜甫詩「勤レ客駝蹄羹、ー一壓ニ香橙ー」

【霜砧】ソウチン　霜の降る夜のきぬた。馬臻詩「燕山起ニ水皆爲レ客、愼レ聽ー一搗ニ三月明ー」

【霜蹄】ソウテイ　○駿馬のひづめ。○駿馬をいふ。趙嘏詩「ー一曉駐ニ秦樓斷ー」

【霜天】ソウテン　しものそら。王昌齡詩「ー一起ニ長望、殘月生ニ海門ー」

【霜蹇】ソウケン　しもと、ひょうと。漢書、李尋傳「有ニー一之災ー」

【霜髭】ソウシ　白きかみの毛。李咸用詩

「年華逐ㇾ浪催ニ―一、旅恨如ㇾ雲拂ニ桂衣一」‖白髮・皓髮・雪鬢・鶴髮。

【霜眉】ソウビ　白きまゆ。蘇軾詩「何處―碧眼客、結爲ニ三友一易相看」

【霜鬢】ソウビン　しらがのびんのかみ。姜夔詩「灰心緣ㇾ怨ㇾ事、――爲ㇾ論ㇾ兵」

【霜楓】ソウフウ　しもに染みて赤くなりたるかへで。杜甫詩「青女―ㇾ風、黃牛峽水喧」

【霜刃】ソウジン　しもにて寒きもや。梁元帝詩「松風伏ㇾ曉哀、―ㇾ當ㇾ夜來」‖霜鋒。

【霜矛】ソウボウ　すゝどきほこ。文同詩「―雪甲寒如ㇾ水」

【霜鋒】ソウホウ　するどきほこさき。梁庾肩吾詩「蓮花生ニ寶鍔一、秋日照ニ―ㇾ」

【霜蓬】ソウホウ　しもにしほめるよもぎ。白髮に喩ふ。李白詩「洗爽能偕ㇾ人、終髮成ニ―ㇾ」

【霜毛】ソウモウ　しもの如くしろきけ。鮑照、舞鶴賦「壓ニ―ㇾ而弄ㇾ影、振ニ玉羽一而臨ㇾ霞」‖雪毛。

【霜蔓】ソウマン　しものかかりたるつる。柳宗元詩「風枝散ニ陳葉一、―ㇾ誕ニ寒瓜一」

【霜野】ソウヤ　しものふりたるのはら。李商隱詩「夕陽銜ㇾ山後、―ㇾ物屬ㇾ乾」

【霜羅】ソウラ　しもの如くしろきうすぎぬ。范成大詩「―ㇾ薄袖綠裙單」

【霜烈】ソウレツ　しもの如くはげし。後漢書、酷吏傳「風行―ㇾ、威容嚴勝」‖霜嚴。

【霜威】ソウイ　しもと、つゆと。禮、祭統「―ㇾ既降、君子履ㇾ之、必有ニ懷愴之心一」

【霜降逢堅冰至】ソウカウフケンヒヨウイタル　九月の履霜の節を經て十一月の堅冰の時が來る。災害の漸よりして漸く大に至る喩。易、乾卦」

【霜ㇾ縑】ソウケン　寒き節にも屈せず。蘇軾詩「菊殘猶有ニ―ㇾ枝一」

【霤】（雨部十六畫）の古字。

十畫

【霞】キン　侵

○かみなり（雷）○あめふる。○雲おこる。○おつ。おとす。公羊、莊七「星ー如ㇾ雨」‖隕。

【霢】バク　屋

○―霂はこさめ（小雨）詩、小雅「益之以ー―霂」○こさめの降る貌。

【霣】（雨部四畫）の本字。

【雷】リウ　有　一に雷に作る

○あまだれ、屋上より垂れる雨水。○あまだれうけ（承霤）○のき（屋簷）○へや（室房）○中ーは中央の室。禮、月令「其祀中ー」‖中室。○したたり。溜に通ず。漢書、枚乘傳「泰山之ー穿石」

【雷槽】あまだれうけのをけ。老學庵筆記「置ニ于人家ーー中」

【雷水屋ニ貝溜ニ盧檐一】雨滴の微かなるも、集めれば、つひや、たるに滿たすに足る。淮南、氾論「――、而江河不ㇾ能ㇾ氣ニ滿屋一」（漏屋は屋のなきさかづき）

十一畫

【霪】イン　侵

ながあめ（久雨）十日以上つづく雨。淫に通ず。

【霪雨】ながあめ。淮雨、修務「馬沐ニ浴ーー一」‖淫雨。

【霪霖】ながあめ。林寬詩「ーー霽ニ日月ニ新巷變ニ淺泥一」‖霪雨・霖潦。

【霏】ヒ　微

○雨止みて雲の消える貌。○ほがらか、開朗の貌、靡に通ず「ー靡ー」

【霧】ブ・ム　ボウ・ム　東　遇

○きり、地面に近き水蒸氣の冷え凝りて微細なる水滴となりてただよへるもの。雲と其の理を同うす、遠地は雲となり、近地はーとなる。後漢書、張衡傳「好ㇾ道術一能作ニ五里ーニ○地上にただよへる氣。瓦斯「瘴ー」「毒ー」「黃ー」○黑き髮に喩ふ。○輕く細かなる出ㇾ水に喩ふ「ー穀」

【霧杳】はるかにきりがこめて見分けがたし。郭璞賦「氣溟涬而ーー」

【霧穀】霧のこめたる谷。李白詩「秦商重疊雲巖近、河洛紫紆ーー深」

【霧合】きりの如くに多くあつまる。周書「若ニ親統ニ旅一、ーー星羅」張衡、羽獵賦「輕車鵲起、羽騎雲集、ーー雲集、波流雨注」‖霧集・雲合。

【霧氣】きり。後漢書、袁術傳「地震之後、ーー自滅、日月不ㇾ光」

【霧會】きりの如くに多くあつまる。陳琳文帝、曲水詩序「群人野宅、雲集ーー」‖霧集。

【鬖髿】サンセン　髪の黒く美くしき形容。何景明詩「霓裳羽衣世莫ㇾ聞、一一雪膚人難ㇾ見」

【霧晦】ムカイ　霧のこめたるあさ。宋和嶷贈「黄齊作二風烟欲ㇾ雨圖一、非ㇾ陸非ㇾ龔、如二梅天一一露微曦孤之狀一」＝霧朝・霧旦。

【霧穀】コク　うすぎぬ。宋玉、神女賦「動ニ一一以齊歩兮」

【霧散】サン　きりの如くちる。西都賦「朝發二河海一、夕宿二江漢一、沈李浮瓜、雲集一一」＝霧消。

【霧市】シ　後漢の張楷、道術を好み、能く五里霧を作す、弘農山中に隠居す、學者之に隨ひ、居る所、市を成す、因りて之を一一と謂ふ。晉唐書、黄巢傳「妖興ニ一一、盜囓二裂林一」

【霧柚】ユウ　うす絹の袖。梁簡文帝文「疾縄巧歩、一一芬披、舒ㇾ蛾眉之霧罷一」

【霧集】シフ　きりの如くに多くあつまる。史、淮陰侯傳「天下之士、雲合一一」＝霧聚。

【霧潦】シリョウ　きりの雨気。廣東新語「嶺南多ニ一一、濱黔多二風濕一、皆氣候之最惡者」

【霧聚】シュウ　霧集に同じ。後漢書、魏徴傳「雲合一一」

【霧凇】シヨウ　こほりたるきり。凇は氷ついて林に「寒夜結水如ㇾ珠、見ㇾ晛乃消、齊魯謂二之一一一」＝霧淞。

【霧草】ソウ　きりの如くに多くあつまる。潘尼賦「玄燈四会、雲蒸一一」

【霧綃】ケウ　うすぎぬ。曹植、洛神賦「踐二遊波之文履一、曳二一一之輕裾一」

【霧鬢】ビン　きりがこめふさぎてくらし。許渾衡賦「五岳靡飛、三巣一一」

【霧島】トウ　霧のかかれるしま。白居易詩「一一沈二黄氣一、風帆盡二白波一」

【霧朝】チョウ　きりのこめたる、あした。劉禹錫詩「桂水歩二秋浪一、火山渡二一一一」＝霧晩。

【霧髻】ケイ　髪の美くしき形容。蘇軾詩「一一風鬟水葉衣」

【霧穿】セン　きりと、もやと。尹樞文「如ㇾ排二一一一、似ㇾ拂二幹曙一」

【霧凌】リョウ　霧のなか。杜甫詩「一一江船度、風前裸竹斜」＝霧中。

【霧凌】リョウ　きりをもらし出す。幹寶、新婦順詩「噴ㇾ雲一一、嘘二牛腹一、雖ㇾ有二絕頂一誰能窮」

【霧亂】ラン　霧が亂れる。伍輯之、柳花賦「或風廻面遊、或一一而鎖雪」

【霧湧】ユウ　霧が湧き起る。劉峻、絶交論「枝附鱗相感、一一雲蒸、喉鳴相召、星流電激」

十二畫

【霰】セン　霰通書

○あられ（穀雪）雨が粒狀に凍りて降るもの「急一」「雪一」詩、小雅「如ㇾ彼雨雪、先集維一」○圓けて白く粒狀をなせる者にいふ「一石」

【霰雪】セツ　あられと、ひょうと。李咸用詩「丈室掩二孤燈一更深一一増」

【雲港】ダン　一鮒は雲の繁き貌。又、露の垂れる貌。左思賦「宵路一鮒」

【雲隆】リュウ　東　雷一はくものかみ（雲師）又、かみなりの神（雷師）＝雷隆。

【露】ロ　遇

○つゆ、空中の水氣の冷えて細滴となり草葉などに附くもの「草一」「霜一」「玉一」○あらはる。あらはす（見彰）「一見」「一顯」○むきだしにする、さらす（暴）「一營」○やせつかれる。つからす（臓）痩せて骨をあらはす。左、昭元「以一其體」○うるほす、つゆにぬらす。詩、小雅「一彼叢茅」○うるほふ（潤）○めぐみ（恩澤）めぐむ。恩を被らす。漢書、龔鮪傳「寛一萬民」○つゆの如くはかなきものに喩ふ「一命」○白一、寒一は立に氣節の名。○國名。露西亞（ロシア）の略稱「一國」＝俄。○國つゆ、少しの意。

【露布】フ　露・見・現・顯・著・形・暴・彰・誌の則は見（一七七一頁前見）の條を見よ。

【露營】エイ　野原に陣どる、軍隊の露宿するもの。晉書、周處傳「一一野次」

【露葉】ヨウ　つゆをおびたる草木の葉。崔蓉詩「一一疑二滴玉一、風花似二散金一」

【露芽】ガ　茶の異名。國史補「茶之名品、有二方山之一一一」蘇軾詩「試焙二一一烹二白雲一」

【露眼】ガン　高く出でたるまなこ。詩疏「齊一一黒睛則遠視」

【露針】シン　はぎをあらはす。唐書、南詔傳「衣二青布一、短褐一一」

【露氣】キ　つゆけ。杜甫詩「夜深一一清、江月照二江城一」

【露英】エイ　○藥草の異名。顔氏家訓「蔡朗父說、遼呼二菊菜一爲二一一一」○つゆを帯びたる滑菜。王維詩「松下清齋折二一一一」

【露禽】キン　雞の異名。禽經、注「一一、鳴也、群下則鳴、養二于家一者、飲ㇾ露則飛去」

【露花】カ　つゆにうるほへるはな。張說詩「一一香欲ㇾ醉、時鳥聽二啼音一」

【露氣】キ　のじゅく。後漢書、祭祀志、

注「百官以下、――水飲」‖露宿。

【露華】ロカ 光れるつゆ。李白詩「雲想二衣裳一花想レ容、春風拂レ檻――濃」

【露光】ロクワ 露の光。劉禹錫詩「風韻漸高梧葉動、――初重槿花稀」

【露澄】ロチ 封をせざるまはしぶみ。晉書、華譚傳「――遠近、極二言其非一、由レ此爲レ業所レ怨」孫は騰笑。

【露結】ロケツ つゆむすぼる。左傳、昭「八月――、九月乃成レ霜」

【露見】ロケン あらはれる。あらはす。漢書、王嘉傳「不二敢――一」

【露絃】ロゲン 露の草をうるほすをいふ、絃は琴の流るる義。潘岳運詩「嚴下雲方合、花上露猶絃」李咸用、巫山高樂府「――烟蓋巖上花、至レ今猶滴相思淚」

【露顯】ロケン 露見に同じ。

【露骨】ロコツ ○むきだしにする。邵雍詩「水寒覆見レ心、木落山――レ」○ほねをさらす。晉書、成都王穎傳「黃橋戰亡者、有二八千餘人一皆經二夏暑一、――ニ中野一、可レ爲二傷惻一」‖暴骨。

【露坐】ロザ 屋なきところにすわる。後漢書、周燮傳「天子親自――ニ祖陽殿東廂一、請レ雨」

【露草】ロサウ ○つゆをふくみたるくさ。杜甫詩「饕餮――招」○圖ツユ一名蟲草。漢名鴨跖草。

【露次】ロジ のじゅく、次はやどる。後漢書、獻帝紀「幸二華陰一、――道南一」‖露宿・露營。

【露積】ロセキ 屋根なき處に物を積み置く。漢書、李陵紀「太倉之粟、陳陳相因、充溢――ニ於外一、紅腐不レ可二勝食一」

【露刃】ロジン ぬきみ。宋元通鑑綱目「燕帖木兒率二其黨十七人一、兵皆――」

【露膝】ロシツ のじゅく。高士傳「焦先、野火燒二其廬一、因――遭レ冬、雪大至、先祖臥不レ移、人以爲レ死、就視如レ故」‖露宿。

【露車】ロシヤ おほひの無きくるま。魏志、蜀卓傳「行數里得二民家一、以二――一載送」

【露珠】ロシュ つゆをたまに比していふ。王涯詩「一夜清風滿二荷芰一、――翻盡滿池荷」

【露宿】ロシウク のじゅく。後漢書、王渙傳「境内清夷、商人――ニ於道一」

【露出】ロシユツ ○あらはれでる、むきだし。○あらはしだす。

【露井】ロセイ 屋根のなき井戸。古樂府「桃生二――上一、李樹生二桃旁一」

【露臺】ロダイ ○屋根の無きうてな。漢書、文帝紀贊「帝嘗欲レ作二――一、召二匠計一之、直百金、上曰、百金、中人十家之產也、吾奉二先帝宮室一、常恐レ羞レ之、何以二臺爲一」○屋上に設けし運動場。英語、バルコニー。

【露竹】ロチク 露を帶びたる竹。薛逢詩「風茅向レ暖抽二香筍一、――迎レ風舞二釣絲一」

【露地坐】ロヂザ 圖十二頭陀中の一、月光の徹く照す露地（屋外）に端坐して心裡を明朗ならしめる修行。

【露皇】ロクワイ あらはす。又あらはれる。‖皇露。

【露店】ロテン ほしみせ、大道店。

【露點】ロテン 大氣中の水蒸氣が液化せんとする時の温度。

【露電】ロデン 人世のはかなきに喩ふ。金剛經偈「一切有爲法、如二夢幻泡影一、如レ露亦如レ電、應作二如是觀一」

【露頭】ロトウ 鑛脈或は鑛層の地面にあらはれ出たるもの。

【露地樹】ロヂジユ たこのき、熱地に生ずる常綠亞喬木の一、枝より幹の形に似たる氣根を出す。‖槃蘭。

【露版】ロバン ○かちいくさの報告書。通鑑齊紀「上レ馬能舉レ賊、下レ馬作二――一」○むきだしにして封ぜざる書面。晉書、齊王冏傳「――檄諸」‖露板・露書・露布。

【露盤】ロバン ○承露盤の略。王逸詩「――迎二月早一、富潤出レ花遲」○圖塔の九輪の最下部に在る方形の盤。

【露布】ロフ 文體の名、軍中檄を奏する辭、辭を帛に書し、封ぜずして之を漆竿の上に建つ。搜神記「――捷書之別名、以二帛書一揭二之竿一」‖露版。

【露佛】ロブツ ぬればとけ（漏佛）露天にさらされたる佛像。

【露表】ロヒヨウ むきだしにあらはす。晉書、劉聰載記「爲二殿下一、――二其罪一」

【露眠】ロミン 屋なきところにねむる。冷齋夜話「――不レ管二牛羊踐一」‖露臥。

【露命】ロメイ つゆの如きはかなきいのち。

【露里】ロリ 露西亞の里程、其の一里は我が九町四十六間四尺餘。

【露拂】ロフツ ○露が拂ひ消ゆ。晉歌詩「――金堂路欲レ分」○圖古、儲侯の行列の先導をなすもの、露を拂ひ道を開く義。轉じて演藝・演說等の時、最初に出勤する者。

十三畫

【霸】ハ 鞏は音字古、伯に通ず

○はたがしら、諸侯の首長、我が國の德川氏の如きもの。王道に對し武力を以て天下を治むるを――道といふ。孟、公孫丑「以」力假二仁者一」○轉じて廣くかしら（首長）の義とす。文心雕龍「文采必――」○渭水の一支流、字或は灞に作る。

【霸業】ハギヨウ 霸は把なり、王者の政教を把持する義。

【霸氣】ハキ ○霸者とならんとする意氣。陳旅詩「山河――已銷歌、風颯老柳吹レ餘陽」○王士禛詩「――江東久寂寥、永安宮殿草蕭蕭」○通取し

て人に靜たんとする客氣。

【霸橋】パキョウ 陝西省長安縣なる霸水に架する橋の名。唐人送別する者、多く此橋に至りて手を分つ、因りて亦銷魂橋といふ。＝灞橋。

【霸業】パギョウ 諸侯のはたがしらとなる事業。管宴、諸葛孔明實「三略已陳、一一已振」

【霸權】ケンはたがしらとなりうる權力。

【霸功】コウ はたがしらとなりしいさを。淮南子「使二管仲出レ死捐レ軀不二過二後圖一、終有二此一一哉」

【霸氣之餘業】キノヨギョウ 霸者たりし國の殘れる功業。「樂毅、報二燕惠王一書」

【霸者】シャ 諸侯のはたがしらとなりて天子の政令を執るもの。孟、盡心「一一之民、睹レ此如」

【霸上】ジョウ 地名、陝西省長安縣の東、灞水の上に在り。史、項羽紀「沛公軍二一一一一」＝灞上。

【霸水】スイ 灞水に同じ。灞橋參看。

【霸政】セイ 霸者の行ふまつりごと。

【霸迹】セキ 霸者の功業のあと。王褒、聖主得二賢臣一頌「紫レ人求レ士者、必樹二一一一」

【霸道】ダウ 武力を以て天下を治むる道。王道の對。漢書「齊桓公宏二霸道一而行二一一一」

【霸朝】チョウ 霸者の朝廷。顏延之、家傳銘「或登二霸士一、列二英一一」

【霸圖】ト 霸者のはかりごと。陳子昂詩「一一振已英、猶レ馬復歸レ櫪」＝霸略。

【霸夫】フ すぐれて强き男子。陳琳文「一一烈士、奮レ命之良時也」

【霸府】フ 霸者の政を執る所。北史、崔季舒傳「雖二迹在二魏朝一、而歸レ心一一」＝幕府。

【霸略】リャク はたがしらとなるはかりごと。駱賓王詩「一一今何在、王宮尚緲然」

【霸陵】リョウ 漢の文帝の陵、陝西省長安縣の東に在り。

【霸陵醉將軍】リョウスイショウグン ○前漢の李廣、將軍の職を免ぜられし後、霸陵の陣將に故將軍なりとて侵辱せられたる故事。史、李將軍傳「嘗夜從二一騎一出レ人田間一飲、還至二霸陵亭一、霸陵尉醉呵二止廣一、廣騎曰、故李將軍、尉曰、今將軍尚不レ得二夜行一、何乃故也、止レ廣宿二亭下一」○轉じて ちび筆に喩ふ。林逋、秃筆詩「神鋒雖レ缺力能存、架冢二堆一欠波勢、日暮閉窗何所レ似、霸陵醉尉出將軍」

【霸王】オウ ○霸者と王者と。戰國、楚策「是一一之資也」○諸侯のはたがしら、大王といふが如し。史、越世家「諸侯畢賀、號爲二一一一」

【霸王樹】ジュ さぼてん、熱地に産する草の一。綠色多肉の葉を有し、葉無くして刺ありて叢生す。＝仙人掌。

【霹】ヘキ 風 陌

―靂は急に擊つかみなり、はたたく雷。爾雅、注「雷之急擊、爲二一靂一」＝疾雷・辟歷。

【霹靂】ヘキレキ 雷が急激にはげしく鳴る。韓愈、送高閑上人一序「雷聲一一、歌舞戰鬪」＝辟歷。

【霹靂車】シャ 軍中にて機を以て石を發する車。後漢書、袁紹傳「智操發二石車一擊レ紹、軍中呼曰二一一一」注「卽今擲車也」

【霹靂手】シュ 人の敎才あるをいふ。唐書「裴瑾爲二同州司戶參軍一、凡諸事來レ決、命二書吏數人一、連二紙數幅一、須臾剖斷竝畢、時人謂二一一一」＝霹靂手

【雳】（雷の二三四四頁）に同じ。

―靂は大雨。劉禹錫詩「山頂白晝明、人間已一靂」

十四畫

【霽】キ 圍 未

―は霽かならざる貌。又、霽の貌。

【霽】セイ 霽

○はる(晴)雨が止む、雲霧が散ずる「新一」「秋一」「晩一」○はれる。はらす。心がさっぱりする、怒がとける。唐書、魏徵傳「上爲之一一」「一威」

【霽威】セイ 怒がとける。さっぱりときげんをなほす。淺井、魏相傳「心喜二其言一、爲二一一一厭一」

【霽月】ゲツ 雨あがりのはれわたりたるつき。宋史、周惇頤傳「胸懷灑落、如二光風一一一」

【霽後】ゴ あめあがりののち。儲光羲詩「涼氣生二一一一」

【霽紅】コウ 陶器の色、明の寶德間、製する所、最も佳なり、寶石を雜ゆるが故に光澤甚だ美なりといふ。＝祭紅・際紅。

【霽朝】チョウ 雨のはれたるあした。孫逖詩「樓觀倚二晨霄一、霽朝及二一日一」

【霽氣】キ はれわたりたる氣。謝逸詩「水木涵二雅景一、雜擧引二一一一」

【霎】ドウ 尤

兜の子。韓愈、毛穎傳「明眸八世孫一」

【霾】バイ 灰

つちふる、つちぐもり。大風が土砂を空にまきあげてふらす「陰一」詩、邶風「終風且一」

【霾曀】カイ 土をふらしてくもる。郝經詩「從稽見二衆鳥一、孤城曀二一一」

【霾晦】カイ 風が土をふらしてくらし。儲光羲詩「郭鎭頃一一」

【雷風】ライフウ 土をふらすかぜの附称「風雨雷ノ土、日ノ雷」

十五畫

【雷】ライ 灰 雷の古字

○いかづち。漢書、中山靖王傳「聚鐵成ノ一」○一鼓はつづみの一種、六面あり。

十六畫

【雲】アイ アツ 易 泰

○たなびきあつまるもや(気)「煙ノ一」「霧ノ一」○雲の盛んなる貌。

【雲雲】アイアイ 雲の盛んに集る貌。陶潜詩「停雲ノ一、時雨濛濛」

【雲然】アイゼン 雲のたなびく貌。

【雲雀】スオ 紙 一雌は草の弱き貌。又、草の風に随ふ貌。

【雲迷雲】タイ 隊 一雲は、雲の狀、雲の盛んなる貌。明かならざる貌。雲の日をおほふ貌。又、老人のめがね(老眼鏡)洞天清錄「靉ノ一老人不ノ辨ノ細書ノ以此掩ノ目則明」

【雲】レイ リャウ 青 雲は古字

○たま、たましひ、死者の魂魄「亡ノ一」○かみ(鬼神)鬼神のみたま「神ノ一」「山ノ一」大戴禮「陽之精氣曰ノ神、陰之精氣曰ノ一」○よし(善)古、令に通ず。詩、邶風「一雨既零」○さいはひ(福)いつくしみ(寵)「寵ノ一」○まごころ(精誠)○いのち(命数)○かんなぎ、みこ(巫覡)○くしびなるもの(神妙)不可思議にして測り知り難きもの「一妙」「一藥」書、泰誓「惟人萬物之ノ一」○すぐれてふしぎなもの。○すべて物の敏活なる者「一巧」「一動」○日月星の稱。○あきらか(昭明)○いきほひ(稜威)かうがうしくたふとし。左、隱三「若以ノ大夫之ノ一」○天地人の稱。○俗に死者をいふ「一柩」「一位」○弱ノ一は茅を束ねて人の形とせしもの。○曙ノ一は太陽。○四ノ一は麟・鳳・龜・龍。

【雲位】ライヰ みたまの位、即ち位牌ノ目 靈座・木主。

【雲威】ライヰ くしびなる威勢。班固、碑銘「ノ一神祐、鴻漸是乘」

【雲異】ライイ すぐれてふしぎ。晉書、干寶傳「撰ノ集古今神祇ノ一、人物變化、名爲ノ搜神記、凡二十卷」‖神異・靈妙。

【雲圃】ライホ 民が文王の靈徳を楽みて其の臺を靈臺といひ、臺下の圃を一といふ。詩、大雅「經ノ始靈臺、經ノ之營之、庶民攻ノ之、不ノ日成ノ之、經始勿ノ亟、庶民子來、王在ノ一ノ、麀鹿攸伏」

【雲域】ライヰキ 神佛を祭りしくしびなる地。陸雲、陳常侍誄「組策協貞、一一斯列」‖靈區・靈地・神域。

【雲陰】ライイン 山の名、浙江省杭縣の西に在り、本名は武林山、亦靈苑と名づけ、又仙居と名づく、許由・葛洪皆此山に隱るといふ。一一寺あり、清時改めて雲林寺と名づく。

【雲雨】ライウ よきあめ。靈は善。詩、鄘風「一一既零、命ノ彼倉人」

【雲運子孫俱得ノ鳳】レイウンシソンクウトクノホウ 晉の謝雲運の子孫は皆賢きをいふ。蘇軾、答ノ馬忠王ノ一詩「一一、慈明兄弟孰非ノ龍」慈明は後漢の荀淑の子、爽の字。八龍(一五九頁三段)參看。

【雲曜】レイエウ 太陽の異名。陸機、演連珠「一一朝覩、稱ノ物納ノ照」

【雲揚】レイヤウ くしびなるひかり。又、太陽。中論「夫曆數者、聖人之所ノ以測ニ一一之賢ニ」‖靈曜。

【雲液】レイエキ 露の異名。張衡賦「露者、天地之一一也」稽康、琴賦「英ノ一一以播ノ雲、據ノ神丘而吐ノ溜」

【雲潤】レイジュン ○くしびなるふち(元史、世祖紀)○心に喩ふ。太玄經「去ノ此一一、谷ノ彼枯岡ノ一」

【雲應】レイオウ 靈妙なることへのしるし。後漢書、光武紀「地祇一一、而朱草萌生」‖瑞應。

【雲屋】ウンヲク おたまや。‖靈廟・靈殿。

【雲感】ウンカン 神佛の不思議なる感應。張說詩「詔書明日下、一一應ノ時通」

【雲鑑】レイカン ○すぐれたる鑑識。李德裕文「不ノ能ノ媚ノ忠、是負ニ一一ノ」○天鑑に同じ。曹植詩「一一無ノ私」

【雲祇】レイキ くしびなる地の神。東征賦「庶ニ一一之鑒照ニ兮」

【雲氣】ウンキ ○くしびなる氣。管子「一一在ノ心、一來一逝」○鬼(物怪)

【雲龜】レイキ くしびなるかめ。萬年の壽を保てる龜。賦注「一日神龜、二曰一一」

【雲蚓】ウンイン くしびなるみみづ。曹植、矯志詩「一一遊ノ雉、不ノ恥ニ汚泥ニ」‖神蚓。

【雲柩】ウンキウ 死骸を納めたる棺。王義之帖「兄ノ一垂ノ至」

【雲菊】ウンキク くしびなるきく。袁枚詩「一一植ニ幽崖、擷ノ組陵ニ寒風ニ」

【雲均】ウンキン 楚の屈原の字。離騷「皇覽揆ニ余于初度ニ兮、肇錫ノ余以ニ嘉名ニ、名ノ余曰ニ正則ニ兮、字ノ余曰ニ一一ニ」

名」余曰正則二兮、字レ余曰二一一」
【靈禽】レイキン　鸞鳥に同じ。
【靈墟】レイキョ　靈地に同じ。梁簡文帝、神山寺碑「獨有二靈岳一一浮土不レ燒」
【靈區】レイク　靈域に同じ。＝神區。
【靈煦】レイク　ふしぎにあたたかし。宋之問詩「致レ牲匪二玄享一、煙酒期二一一」
【靈果】レイカ　すぐれてよきくだもの。開元賦「竹木蓊鬱、一一參差」
【靈怪】レイクワイ　くしびにあやし。又、其の物。蘇軾詩「雲興一一聚、雲散鬼神還」
【靈活】レイクワツ　心又精神のすぐれて敏きはたらき。
【靈源】レイゲン　くしびなるみなもと。心をいふ。陳雲賦「淪二心靈一而洞二志一一」
【靈驗】レイケン　神佛のくしびなるしるし。天台山賦「觀二一一而遂祖」荊州記「宮亭湖神有二一一」
【靈鼓】レイコ　六面のつづみ。周禮、地官、注「一一、六面鼓也、記二地祇一則鼓レ之」
【靈魂】レイコン　たましひ。東方朔、七諫「一一屈而壓蹇」
【靈座】レイザ　死者の爲めに奠を設くる位をいふ。晉書、顧榮傳「榮好レ琴、家人置二琴於一一」
【靈祭】レイサイ　死者のたましひをまつる。たまつり。法事・追善供養の類。
【靈座】レイザ　牀の角は中心に穴ありて兩方相通ず。因りて人の意志の疏通接合するに喩ふ。李商隱詩「心有二一一一點通」
【靈草】レイサウ　めでたくよき草。不死の藥草。張衡、西京賦「一一冬榮、神木叢生」＝神草。
【靈山】レイザン　○くしびにすぐれたる山、神靈なる山。○佛　鷲山の略稱。其の條を見よ。○道家にて蓬萊山の別名。
【靈寺】レイジ　神靈なるてら。高允、鹿苑賦「盡二敬恭于一一」
【靈芝】レイシ　ひじりだけ、まんねんだけ、菌類の一。續古今註「一一、一名瑞芝、一名神芝、一名仙草、一名木芝」漢芝歌「因二露殿一分産二一一一、象二三德一分應二瑞圖一延二洪命一兮亮二此都一」
【靈祉】レイシ　すぐれてよきさいはひ。晉書、樂運勃勃載記「一一臻レ吕、世業彌盛」
【靈祠】レイシ　くしびなるかみの社こら。李商隱文「惟神愛二頴果一、遊啓二一一一」＝神祠・神社。
【靈時】レイジ　まつりのには。時は止、神靈の依り止まる所。司馬相如、封禪文「湲湲之鴻、遊二彼一一一」＝祭場。
【靈璽】レイジ　天子の御印。
【靈秀】レイシウ　すぐれてひいでる。晉書、五行志「築二土山一名曰二一一一」孟郊、石楠樹詩「龍龜抱二一一、簇簇抽二芳唇一」＝神秀。
【靈獸】レイジウ　くすしくすぐれたる獸。麟の類。
【靈辰】レイシン　めでたきよきひ。人日即ち正月七日。李嶠詩「三陽偏應レ節、七日最二一一」
【靈根】レイコン　みたまを安んずるひつぎ。棺は内の棺。潘岳、永逝文「撫二一一一号訣二幽房一」
【靈車】レイシャ　ひつぎを載せたるくるま。文公家禮「一一至」＝轜車・靈柩車。
【靈轜】レイジ　ひつぎぐるま、轜は喪車。青槨、王仲宣誄「一一回レ軌」＝靈車。
【靈杖】レイヂャウ　靈芝といふ木にて作りし杖。漢書、孔光傳「太后詔曰、國之將レ興、尊二師而重一レ傅、其令二太師毋レ朝、十日一賜レ餐、賜二太師一一一」註「應劭曰、木名」
【靈瑞】レイズイ　ふしぎなるめでたきしるし。漢書、敘傳「若乃一符應、又可二略聞一矣」晉書、樂志「一一告レ符、休徵薦レ臻」＝祥瑞。
【靈樞經】レイスウケイ　十二卷、古の醫書、鍼灸を論ず、素問と通じて内經と號す。
【靈沼】レイセウ　○文王の離宮に在る沼。詩經「王在二一一一、於牣魚躍」○廣くすぐれたる池沼。西都賦「離宮別館三十六所、神池一一往往而在」
【靈迹】レイセキ　神佛に關する古跡。李白詩「一一成二蓬草一」＝靈跡・靈蹟。
【靈泉】レイセン　○すぐれてよきいづみ。魏書、高祖紀「起二文石室一一殿于方山一」＝神泉。○溫泉をほめていふ。
【靈前】レイゼン　○神のみまへ。○死者のみたまのまへ。北魏書、夏侯史傳「至二史一一一」
【靈葬】レイサウ　すぐれてよきさいはひ。葬は國葬。晉書、赫連勃勃載記「於靈一一、配レ乾比陸」＝靈祉。
【靈祖】レイソ　すぐれたる德ある祖先。揚雄賦「皇皇一一」
【靈代】レイダイ　國　死者のたましひのしるしとして祭るかたしろ。
【靈臺】レイダイ　○たましひのある所、即ち心。莊、庚桑楚「不レ可レ內二於一一一」○文王のうてな。詩、大雅「經二始一一一」○雲氣を望むうてな。天文書の類。後漢書、注「一一、候二氣之臺也」
【靈澤】レイタク　よきうるほひ。張協詩「旱天降二一一、朝日輝二華精一」
【靈鼉之鼓】レイダノコ　鼉の皮にて張りしすぐれてよきつづみ。鼉一に鱓に作る、鱓二の類。李斯、諫二逐客一書「建二翠鳳之旗一、樹二一一一」＝鼉鼓。
【靈丹一粒】レイタンイチリフ　一つぶの妙藥。聞見後錄「黃魯直稱二杜老詩一、如二一一一點レ鐵成レ金」
【靈地】レイチ　かうがうしくすぐれたる地。劉叉詩「此法那能堅二此身一、心田自有二一一珍一」＝靈場・靈域・靈境。
【靈知】レイチ　こころ。王融詩「一一常湛然、符應有二盈缺一」
【靈長】レイチャウ　すぐれたるかしら。江賦

「實水總之―一」

【靈場】レイジョウ　まつりのにはの李嶠詩「圃旌駐羣降二一一」＝霊畤。

【靈椿】レイチン　甚だしく長生するといふ一種の木。馮道詩「―一株老、仙桂五枝芳」大椿之壽（莊二「八二」）參看。

【靈龍】レイリュウ　神佛などのたふときめぐみ。逸周書「神巫―一、以惑之」

【靈通】レイツウ　甘草ゲンの異名。記事珠「甘草、一名―一」

【靈艮】レイコン　くしびなるとり。論衡、難歲「惟西域之―一兮」＝靈禽。

【靈的】レイテキ　精神上の方面。肉體の對。

【靈殿】レイデン　おたまや。＝靈廟。

【靈洞】レイトウ　くすしくほがらかにとほる。梁武帝詩「色已非二眞實一、聞見皆―一」

【靈鮭】レイケイ　すぐれたるはまぐりの蚌は蛤、蜃に同じ。蔡邕、漢津賦「明珠胎二于―一兮、夜光晞二于玄淵一」

【靈寶】レイホウ　すぐれてよき寶物。靈は善。張協、七命「若二其―一、則辭窮無レ方」

【靈魂】レイコン　たましひ。莊莊、宣實紀謀「鎖二神宮于壙末一、散二―一于天海一」

【靈聰】レイソウ　くすしく、ひめかくす。江揔、修心賦「嘉二南斗之分次一、靈二東越之―一」＝神祕。

【靈品】レイヒン　すぐれてめづらしきしな。宋祁詩「―一羅二寶區一、仙芬圓二閣舍一」

【靈武】レイブ　○くしびにすぐれたる武勇。宋書、武帝紀「奮二其―一一、大振二羣惡一」＝神武・聖武。○縣名、甘肅省に在り、唐の肅宗此に卽位す。

【靈府】レイフ　たましひのあるところ。精神の宅、卽ち心。莊、德充符「不レ可レ入二於―一」＝靈臺。

【靈符】レイフ　どふ。靈驗ある神佛の御ふだ。晉樂章「於赫高祖、德協二一一」＝神符。

【靈物】レイブツ　ふしぎに、めでたきしるしのもの。後漢書、光武紀「今天下清寧、一一仍降」

【靈芬】レイフン　すぐれてよきにほひ。馮衍賦「披二綺季之服一兮、揚二風原之一一」

【靈氛】レイフン　古の善く占ふ者の名。離騷「命二―一一占レ之」

【靈苗】レイビョウ　すぐれてよきなへ。拾遺記「神芝發二異色一、一一擢二其嘉穎一」

【靈廟】レイビョウ　○おたまや。續高僧傳「勅記二一一於扶南臨淵之地一」＝靈殿・靈殿。○そとばの異稱。西域記「浮圖此翻二方墳一、亦翻二圓墳一、亦翻二高顯一、義二翻一一」

【靈木】レイボク　○神靈のしるしとするくしびなる木。＝神木。○すぐれたる木。靈草を見よ。

【靈夢】レイム　神佛の示したるふしぎのゆめ。劉峻詩「南柯一一莫二相通一」

【靈命】レイメイ　命令の敬稱。北史、蘇綽傳「魏帝祭廟誥曰、朕惟賓二數祖宗之一一、稽二于先王之典訓一、以大誥二乎爾在位一」

【靈妙】レイミョウ　くしびにして測り知り難きこと。＝靈異・神妙・玄妙。

【靈藥】レイヤク　ふしぎにきくくすり。白居易詩「又合五方土合二一一」＝神藥。

【靈鷹】レイヨウ　ふしぎにめでたきたか。

【靈腕】レイワン　ふしぎにすぐれたるうでまへ。

【靈鷲山】リョウジュセン　梵中印度の山の名。卽ち寂光淨土なり。法華經、壽量品「常在二一一」永經注「釋四域記云、耆闍崛山在二阿蘭遮王舍城東北二四里一其山二峯雙立、相去二三里、中道鷲鳥皆居二其嶺一、山名耆闍、鷲也、（中略）胡語云、耆闍崛山、是耆石頭似二鷲鳥一、阿育王使二人鑿一石假二安兩翼兩脚一、鑿治其身、今見存、遠望似二鷲鳥形一、故曰二一一也」＝鷲山。

【靆】レキ　雨　靆（雨部十二畫）を見よ。

十七畫

【靉】アイ　雨

一靆（タイ）は雲の盛んにたなびく貌。又、暗き貌。潘尼賦「朝雲一靆、行露未晞」又、老人の眼鏡の洞天清錄「一靆老人不辨細書、以此掩目則明、元人小說言、一靆出西域」

【靉靆】アイタイ　雲の盛んなる貌。樹木の茂りて密なる貌。顧瑤詩「高堂梧與レ竹、一一排二空青一」

【靉靆】アイタイ　字解を見よ。＝僾逮・曖昧。

【靉靄】アイヒ　雲の盛んなる貌。又、雲の暗き貌。木華、海賦「一一雲布」

十九畫

【靉】シュク　雨

一昱（イク）は疾き貌。木華、海賦「一昱絕電」

青　部

【青】セイ　シャウ　青

○あを。五色の一、天の色。又、藍の色の類。荀、勸學「一取之於藍而一於藍」○東方の色。よりて東・春・少年の幾に用ふ。○竹の皮「汗一」○草の色「踏一」すべてあをいろをなせるもの。○しげる、繁茂せる貌。青に通ず。○かはせみ（翠鳥）○ろくしゃう、一種の礦物。○

古の九州の一。山東省濟南府一帶、及、奉天の瀋陽地方の稱。○一島チンは山東省即墨縣の南に在り、鎭路、濟南に達す。

【青蠅】セイヨウ　わらぢ。杜甫詩「一一布履從レ此始」‖青鞋。

【青鞚】セイコウ　あをみをおびたるもや。蘇軾詩「一一逍相撲、白雲來復還」

【青衣】セイイ　○あをき色のころも。晉、月令「孟春之月、天子衣二一一一服二蒼玉一」○古、賤者の服。轉じて婢女の稱。蔡邕に一一賦あり。

【青一髮】セイハツ　遙かに一髮を引き延べたる如く見える山、又、陸地をいふ。蘇軾詩「青山一髮是中原」山陽の天草津詩の「水天髣髴——」は此に本づく。

【青雲糞壤之譬】セイウンフンジョウ　氣の合はざること、天に在る青雲と、地に在る糞壤との如く、誠だ懸隔せるそしり。范成大、姑蘇同年會詩序「當二此時一通レ榜之士、意氣相與甚厚、否則有二一一一」

【青雲志】セイウンシ　○立身出世せんとする志望。張九齡詩「宿昔——、躋跡白髮年」○高潔にして世外に超然たる志操。續逸民傳「郭康早有二青雲之志一」

【青雲之士】セイウン　○學德高き賢聖の人。史、伯夷傳「閭巷之人、欲レ砥レ行立レ名者、非レ附二一一一一、惡能施二于後世一哉」○轉じて高位高官にのぼりし人。

【青雲之交】セイウンノ　仕宦を共にするまじはり。晉書故事「江淹曰、袁叔明與レ余、有二一一一一非下直衡二杯酒一而已上」

【取レ青捨レ白】セイヲトリハクヲスツ　種種の色をとりならべる。詩文を作るに只美くしき字句を排列するにいふ。柳宗元文「模擬雕琢、一一」

【案レ青按レ白】アンセイアンパク　青き由、白き水をめぐらす。柳宗元、始得二西山一宴游記「一一、外與レ天際」

【青娥】セイガ　わかき美人、娥はみめよし。韓愈詩「一一額二長蛾一」

【青蛾】セイガ　青く美くしき眉。蛾は眉の蛾ガのまゆ。杜甫詩「想像顰二一一一」

【青苔】セイタイ　からしな。本草「有二一一一、似レ繊味極辣」

【青蓋車】セイガイシャ　青色のおほひのある車。古、天子又皇太子の乘用とす。吳志、三嗣主傳「青蓋入二洛陽一」

【青海波】セイカイハ　雅樂の曲名。又其の時用ふる靑束の染模樣、波の模樣を染めしもの。

【青眼】セイガン　親しき人に對するめつき。白眼の對。晉書、阮籍傳「籍不レ拘二禮教一、能爲二青白眼一、見二禮俗之士一、以二白眼一對レ之（中略）嵇康喜レ酒挾レ琴造レ焉、籍大悅、乃見二一一一」‖青盼。

【青旗】セイキ　さかやのはた。元稹詩「賣墟挂小一一」‖青帘・青帟。

【乘二青牛車一】セイギュウシャヲ　老子が青牛車に乘り函谷關を過ぎて西域に入りし故事。高士傳「老子曰二周柱下史一、後周德衰、乃一一去入二大秦一、過二西關一、關令尹喜望レ氣先知、乃物色遮候之、果レ見レ老レ焉、作二道德經五千餘言一、四關は函谷關。

【青衿】セイキン　青色のえりの衣服、古、學生の服。轉じて學生の稱とす。詩、鄭風「青青子衿、悠悠我心」

【青襟】セイキン　前條に同じ。劉長卿詩「蜀郡誦二一一一」

【青宮】セイキュウ　皇太子の稱。青は東方の色。神異經「東明山有レ宮、青石爲レ檻、高三仞、門有二銀堦一、以二青石一碧鏤、題曰二天子長男之宮一」‖東宮・春宮。

【青魚】セイギョ　○にしん（鰊）其の鱗の色を取の子といふ。○青き色の魚。曹植賦「一一躍二于東沼一、白鳥戲二于四渚一」

【青玉】セイギョク　○鋼玉石の一種、色青く、裝飾品とす。○竹の異名。曹植詩「一方一一絕二纖塵一」

【青玉案】セイギョクアン　青玉の椀の案は椀の古字。張衡詩「美人贈レ我錦繡段、何以報レ之——」

【青花】セイカ　○靚の花拔の實研究研辨「墜二荊端石一、以二一一一一爲二最佳一」

【青花魚】セイカギョ　さば（鯖）

【青串魚】セイカンギョ　秋刀魚サンマの一名。

【青鬚】セイシュ　○青くひかる。玉の光澤にいふ。班固賦「琳琅一一」李白詩「一一王孫色、標綉羽人家」○燈火の光。蘇軾文「識云昨來、風雨凄然、紙窗竹屋、燈火一一」（云はここに）

【青血】セイケツ　新らしく色のこき血、なまち。楊天子傳「剌二其左驂之頸一、取二其一一一、以飲二天子一」‖碧血。

【青衣】セイイ　おはぐろ。漢書、禮樂志「忽乘二一一一熙事備成一」‖蒼衣。

【青黛】セイタイ　○あをと、くろと。○あをぐろし。詩、衞風、疏「飾魚形似レ鱷而一一」

【青瑣】セイサ　天子の宮門、門扉に連鎖の模樣を彫刻し青漆にて塗る故。漢舊儀「黃門郎屬二黃門令一、日暮入對二一一門一拜、名曰二夕郎一」

【青草】セイソウ　○あをく茂れるくさ。淦氏時「一朝一一盡二遺基一」○湖の名。

湖南省湘陰縣の北一百支那里に在りて、南は湘水に接し、北は洞庭に通ず、湖に一一多し、故に名つく。

【青蓋】セイガイ あをあをとしたる色。韋應物詩「一一猶可レ濃、黒色不レ可レ移」

【青山】セイザン ○あをあをと見える山。○山の名、安徽省に在り、一名青林山、林壑秀美、南齊の謝朓、室を山南に築く、故に又、謝公山と名づく。李白詩「宅近二一一同二謝朓一、門對二緑柳一似二陶潛一」

【青山在二屋上一】セイザンヲクジョウニアリ 青山が高く屋根の上に聳ゆ。蘇軾、司馬溫公獨樂園詩「一一、流水在二屋下一、中有二五畝園一、花竹秀而野、花香襲二衣襟一、竹色侵二盞斝一」

【青山只麼青】セイザンタダモアス 青山の而に其の形を改めざるをいふ。宋、蘇詩「浮雲一任閑舒卷、萬古一一」

【青山白雲人】セイザンハクウンヒト 青山白雲の中に高臥せる人の稱。唐書、傳奕傳「常醉臥、蹶然起曰、吾其死矣、因自爲二墓誌一曰、傳奕一一也、因酒酔死、嗚呼哀哉、其縱逸皆此類」

【青山可レ埋レ骨】セイザンヨクウズムベシ 大丈夫は何處の青山にても骨を埋むべし、必ずしも故郷に死せずとの意。蘇軾詩「是處一一、他年夜雨痛傷レ神」

【青彩】セイサイ あをきいろのころも。白居易、琵琶行「就レ中泣下誰最多、江州司馬一一濕」

【青史】セイシ 歴史。古、紙なく、竹の青皮を火にあぶりてあぶらをぬき、事を記す、故に青といふ。大戴禮「一一之記」范賀詩「南朝掃二八迭一千載一一」‖殺青・汗青。

【青紙】セイシ 青色の紙。玉海「晉紹書以二一一紫泥一」晉書、楚隱王瑋傳「臨レ死、出二其懷中一一詔一、流涕以示二監刑尚書楊頤一」

【青詞】セイシ 道教の祭祀に用ふる文體、又其の文章。青藤紙に朱字にて記す、故にいふ。文體明辯「一一者方士饋遏之詞也」歐陽修、內制集序「一一露文」

【青記】セイキ 薄き綠色の釉藥をかけたる陶器。‖青磁。

【青紫】セイシ 漢代の制、公侯の印綬は紫、九卿は青を用ふ。よりて公卿の貴とする漢書、夏侯勝傳「士病レ不レ明二經術一、經術苟明、其取二一一一、如二俛拾二地芥一耳」拾二地芥一とは極めて易きに喩ふ。

【取二青紫一】トルセイシヲ 高官に任ずる意。前錢參看。

【青磁】セイジ 淡綠色又、淡藍色のうはぐすりをかけたるやきもの、あをに。‖青瓷。

【青州從事】セイシュウノジュウジ 美酒の異名。世說、衛解「桓公有二主簿一、善別レ酒、有レ酒輒令二先嘗一、好者謂二一一一、惡者謂二平原督郵一」青州に齊郡あり、齊は臍へなり、美酒は快く臍に至る、故に喩ふ。平原督郵（五七六頁四段）參看。

【青雀】セイジャク ○水鳥の名、卽ち鵟、古人其の形を船頭に畫く。古詩「一一白鷁舫」○漢の武帝の船の名「洞冥記」

【青蝴】セイコ あをききぬ。莊莊詩「佇踏蓬島後、綸詔渙一一一」

【青首】セイシュ あをくび、小兎の一種。史、楚世家「乘魏燕趙者獸雁也、齊晉韓衛者一一也」

【青珠】セイシュ 琅玕カンの異名。華陽國志「廣陽縣出一一一」

【青蔥】セイソウ たうな、ふゆな、つけな。葉大きく白き筋あり、漬物に適す。寒に耐ふること松の操に似たり。故に松に從ふ。陸游詩「一一綠韭論落落」

【青春】セイシュン ○はる。何晏賦「結實商秋、敷レ華一一」梁元帝纂要「春曰二芳春一一一陽春・九春一」李白詩「伯陽仙家子、容色如二一一一」○轉じて青年の義とす。水滸傳「一一年少」

【青筍】セイシュン 青き色のたけのこ。潘岳、閒居賦「菜則葱韭蓊茸、一一紫蓼」

【青松】セイショウ みどり色のまつ。李白詩「陶君一一心、努力保二霜雪一」‖翠松・緑松。

【青苔】セイタイ ○あをあをとしたる苔。古詩「一一河畔草」○青く茂れる苔。詩、衛風「瞻二彼淇奥一、綠竹一一」‖菁菁。

【青菁】セイセイ あをぞら。青松詩「匡山澹布三千仞、劃二破一一一始落斜」‖蒼空・碧漢。

【青絲】セイシ 青きひげ、髪は髪の正字、一一に類に作る、ほほひげ、毛髪の毛をいふ。公羊傳「鬼青純」注「純、緣也、謂二緑甲縁一也、千歳之龜、一一」

【青蛙】セイア ○青銅のぜに。蘇軾詩「過眼一一轉二手空一」○蓮の葉の形容。

【青蛾】セイガ ○青色の毛蛾。晉書、王獻之傳「獻之夜臥二齋中一、而有二偸人一入二其室一、盡レ取二物都盡、獻之徐曰、偸兒、一一我家舊物、可二特置一之、寧能盡走」○轉じて家の舊物の義に用ふ。

【青蟬】セイセン ひぐらし。李賀詩「一一獨噪日光斜」

【青黛】セイタイ ○あをきまゆずみ。李白詩「一一畫眉紅錦鞋」‖青螺。○まゆずみの如き紺青色。岑參詩「四時常作二一一色一」

【青苔黃葉】セイタイコウヨウ 青きこけと、黃色なる秋の木の葉と。山家のよき景色。劉長卿詩「欲下掃二柴門一迎中遠客上、一一滿二貧家一」

【青宰】セイサイ 合歡ガッカンの異名。古今注「一一、一名合歡」‖青裳・夜合。

【青紺甲】セイカンコウ 萌黃モエギをどしのよろひ。北轅錄「甲士皆一一居レ左、紅紺甲居レ右」

【青蛉】セイレイ あをむし、蜻蛉の別名。又蜻蜓の幼蟲、色青し、故にいふ。

【青女】セイジョ ○霜雪の神。淮南、天文「一一乃出以降二霜雪一」○轉じて霜の異名。

【青冢】セイチョウ　次條に同じ。
【青塚】セイチョウ　王昭君の墓。大明一統志「大同府王昭君墓、在二古豐州西六十里一、地多二白草一、此塚獨青、故名二ニ青冢一」‖青冢。
【青帝】セイテイ　春をつかさどる神。五行説にて青色は春に配す。尚書鍵「春爲二東帝一、又爲二ニ青帝一」‖青皇。
【青亭】セイテイ　とんぼ、やんま。古今注「蜻蛉、一名ニ青亭一、色青而大者是也」‖蜻蜓。
【青泥嶺】セイデイレイ　山の名、甘粛省鞏縣の南に在り、蜀に入るの要路たり。元和志「嶺懸屋萬仞、上多二雲雨一、行者屢逢二泥濘一、故名」
【青泥塞】セイデイ　地名、奉天金縣の南に在り、開きて通商港と爲す。鐵路あり、四は旅順に通じ、北は營口に通ず。
【青鳥】セイテウ　つかひ（使者）又、書簡の義とす。漢武故事「七月七日忽有ニ一ニ青鳥一飛集二殿前一、東方朔曰、此四王母欲レ來、有レ頃王母至、ニ一ニ夾二侍王母傍一ニ如レ此ノ。
【青天】セイテン　あをぞら。莊、逍遙遊「紀二雲氣一、負ニ一ニ青天一」‖青霄。
【青天白日】セイテンハクジツ　○快くはれたる天氣。韓愈、與二崔翠一書「ニ一、奴隷亦知二其清明一」○明白にして包みかくす所なき義。朱子文集「武侯爲レ漢復レ讐之心、如ニ一ニ人人得而見レ之」○冤罪嫌疑のはれたるにいふ。
【青天霹靂】セイテンヘキレキ　○急勢の飛動する形容。陳游詩「放翁病過レ秋、忽起作二陣雷一、正如二久蟄龍一、青天飛二霹靂一」○突然に起りたる事變に喩ふ。
【青田】セイデン　あをあをとしたる田。楊炯詩「樓臺橫二雲極一、城闕俯ニ一ニ」
【青綬】セイジュ　あをき色、綬はあおぞめ。鄭文寶詩「迴塘微雨流ニ一ニ」‖青葉。
【青蠅】セイヨウ　あをきたかむしろ。王維詩「ニ一日何長、閑門晝方靜」
【青奴】セイド　竹夫人の異名。景時、食中に入れて涼を取る具。黄庭堅詩「超子克示二竹夫人詩一、蓋涼寢竹器、組レ管休レ簇、似レ非二夫人之職一、予爲名曰ニ一ニ」
【青桐】セイトウ　梧桐の類、爾雅、翟「ニ一似二梧桐一而無レ子」
【青銅】セイドウ　○からかね（唐銅）銅七分、鉛三分より成る合金。‖紫銅。○あをざしの鏡。杜甫詩「恰有ニ一ニ三百錢一」○かがみ。李益詩「手中ニ一鏡、照我少年時」
【青燈】セイトウ　ともしびの青き光。韋應物詩「坐使ニ一曉漏傷夏衣薄」
【青曛】セイクン　あを色のひとみ。神仙傳「東方朔於二海濱一遇二黄眉翁一、目中瞳子有二青光一、能見二幽隱之物一」
【青藤】セイトウ　あをきふぢかづら。杖に作る。李洞詩「自有二閒行伴一、ニ一杖一枝」
【青童君】セイドウクン　仙人。黄庭經「仙人名ニ一ニ」
【青蓮】セイレン　○青きうきくさ。○古の名劍の名。太阿を見よ。
【青萍結綠】セイヒョウケツリョク　青萍は良劍、結綠は美玉の名。李白、與二韓荊州一書「ニ一、長二價於薛卞之門一」
【青蚨】セイフ　○蝉の一種（酉陽雜俎）○錢の異名。搜神記「ニ一似レ蝉而精大、生二子草間一如レ蠶、取二其子一母即飛來、以二母血一塗二錢八十一文一、以二子血一塗二錢八十一文一、每レ市レ物、或先用二母錢一、或先用二子錢一、皆復飛歸、輪環無レ已、故謂二南子名一錢一ニ一ニ」
【青蕪】セイブ　あをくしげれるくさ。又、其の地。白居易詩「暗資二紅藥一、護二馬路一ニ一ニ」
【青綾】セイリョウ　はなだいろ。爾雅、疏「山氣ニ一色、故曰二翠微一」
【青苗法】セイビョウホウ　宋の王安石のはじめし新法、春時苗の青き頃、民に金を貸し、收穫の時に元利とも返濟せしむる法。宋史、王安石傳「ニ一者、以二常平裁本一作二青苗錢一、散與二人戶一、令レ出二息二分一、春散秋斂」
【青碧】セイヘキ　あをき玉の色。山海經「帶山其上多レ玉、多ニ一ニ」
【青蒲】セイホ　青き蒲にて織りし天子所用の敷物、皇后の外は此處に至るを得ず。漢書、史丹傳「直入二臥內一、頓首伏ニ一ニ上一」
【青盲】セイモウ　○あきめくら。後漢書、李業傳「好レ學博古、公孫述遣徵命、待

以二高位一皆託二一一一一以避二世難一」○生理學にて色盲の一、諸色中に於て獨り青色を辨ずる能はざる患者。

【青蕪】セイ みどりのつるくさ。杜甫詩「幸結二白花一了、寧辭一一除」‖翠蔓・碧蔓。

【青天】セイ ○あをぞら。楚辭「據二一一而撫レ虹兮、遂儵忽而捫レ天」王維詩「連天遊二落色一、百里遶一一」‖蒼天。○劍の名(古今注)

【青門】セイ ○漢の長安城の東南門の名。其の色青き故。本名霸城門。○樂曲の名。李賀詩「玉琴彈二一一一」

【青陽】セイ ○春の異名。爾雅「春爲二一一一一夏爲二朱明一、秋爲二白藏一、冬爲二玄英一」○天子の東堂、孟春に居る殿堂。

【青楊】セイ 葉の長きかはやなぎ。古今注「白楊葉圓、一一葉長」

【青蠅】セイ あをばへ。其の糞は物を汚す、よりて讒言をする惡むべき蟲。小に喩ふ。詩、小雅「營營一一、止二于樊一」‖蒼蠅。

【青蠅染レ白】セイヨウセンパク 小人の君子を讒しけがすに喩ふ。丁儀文「疾二青蠅之染一レ白」陳子昂詩「青蠅一相點、白璧遂成レ冤」

【青螺】セイ ○あを色のにしがひ。柱海虹衡志「一一狀如二田螺一」○青き山の形容。劉禹錫詩「遙望洞庭山色翠、白銀盤裏一一一」

【青蓮】セイ あをきつた。李白詩「綠竹入二幽軒一、一一拂二行衣一」

【青琅玕】セイロウカン 青色の寶石、琅玕は其の屬の美なるに象る。張衡詩「美人贈レ我——、何以報レ之瓊玉盤」

【青柳】セイリウ 春の新芽を生ぜし柳。潘岳詩「綠池泛淡淡、一一何依依」

【青龍】セイリウ ○東方をつかさどる星宿。四神の一(禮記)四神(三六二頁)參看。○蝦蛄コウの異名。

【青令】セイ ○緋色の蝶。中華古今注「蝴蝶一名一一、似二蜻蛉一而色玄紺」○とんぼ。‖蜻蛉。

【青囊社】セイナウシャ あかざのつる。劉向列傳「有二老人一、黃衣植二一一一一、叩レ閽而進」‖藜杖。

【青帘】セイ 酒家のかんばんのはた。鄭谷詩「白鳥窺二魚網一、一一認二酒家一」‖酒旗・青旒。

【青蓮】セイ ○あをきいろのはす。法苑珠林「目譬二一一一、眉方二眾柳一」‖碧蓮。○唐の李白の號「李一一」

【青鸞】セイ 婚禮を行ふ爲めのいへ。酉陽雜俎「北方昏禮、用二青布幔一爲レ屋、謂二之一一一一」昏は婚。

【青樓】セイ ○美人の居るうつくしきたかどの。曹植、美女篇「一一臨二大路一、高門結二重關一」○轉じてあげや、遊女屋。劉邈詩「倡女不レ勝レ歎、結束下二一一一」

五畫

【靖】セイ 梗

○はかる(謀)○おもふ(思)○やはらぐ(和)○やすんず(安)○安く靜か。靜と通ず「安一」「綏一」「寧一」「恬一」「簡一」○しづめをさむ(治)○きよし、いさぎよし。清に通ず。

【靖謐】セイ やすらかにしてよくやはらぐ。曾鞏、制語「今方內一一、百廢レ敍」

【靖民】セイミン 天下をやすんじただす。蜀志、先主傳「臣謹二晉三軍一奉二辭於外一、不レ能レ掃二除寇難一、一一一王室一」

【靖共】セイキョウ 職務を大切に謀りつつしむ、共は恭。詩、小雅「一一爾位一」

【靖亂】セイラン 臣たる者、我の當に盡すべき所に安んじ、其の志を先王にさげる。書、微子「自靖、人自獻二于先王一」

【靖國遺言】セイコクイゲン 國八卷、淺見安正編、屈平・諸葛亮・陶淵明・顏眞卿・文天祥・謝枋得・劉因・方孝孺等の事蹟を記す、書名は前條の意に本づく。

【靖國】セイコク 國家をやすらかにする。左、僖二三「子文曰、吾以一レ一也」‖佩國。

【靖綏】セイスイ やすし。やすんずる。綏は安。發凱、始加二元服一表「通二謹太和一、一一六合一」‖綏靖・安綏。

【靖難】セイナン ○國難をたひらげ定む。唐書、陸贄傳「若有レ意二乎一一、則不レ可二兩強接一」○明の燕王棣が反を謀り、君側の姦を清めんと稱して起したる兵の稱。

【靖兵】セイヘイ いくさをやむ。靖は息。左、昭十三「諸侯一一、好以行レ事」‖息兵・弭兵。

【靖邊】セイヘン 邊境をしづめやすんずる。白居易文「一一之要、還レ將爲レ先」‖綏邊。

【靖亂】セイラン 天下のみだれしをやすんずる。左、僖九「寧侯不レ務レ德、而勤二遠略一、君務レ一一、無レ勤二于行一」

六畫

【靚】(一)セイ・シャウ 梗 (二)セイ 梗

(一)あをぐろ(青黒色)(二)しとやかなる飾。韓愈詩「桃李晨粧一一」‖靚。

七畫

【靚】(一)セイ (二)セイ 敬 梗

(一)よそほひかざる(裝飾)けしやう、白粉や、まゆずみにてめかす。(二)しとやか。○しづか。賈誼賦「潛乎若二深淵之一一」‖靜。

【靚衣】セイ　美くしく飾れる衣。太平廣記「仙妹愛梁容冶、一一明眸」
【靚妝】セウ　粧飾を用ひてうつくしくよそほひかざる。左思、魏都賦「都人士女、紈服一一」‖靚莊。
【靚莊】セウ　前條に同じ。司馬相如賦「一一刻飾」註一に粧に作る。
【靚粧】セウ　前條に同じ。
【靚飾】シキ　うつくしくかざる。後漢書、南匈奴傳「昭君豐容一一」

八畫

【靜】セイ　ジヤウ　梗

○しづか。動の對。定止して動かず。○音聲なし、だまる(默)喧の對。杜甫詩「喧一不同科」○はかる(謀)○やすし、やすらか。やすんず。靖に通ず。おだやか(安和)「安一」「寧一」○ただし、しとやか(貞淑)「一女」「貞一」○いこふ(息)○きよむ、清潔にする。○すむ(澄)莊子「水一則明燭鬚眉」○やはらぐ、しづむ。しづまる。しづかになる「鎭一」「綏一」○きよし、いさぎよし(潔清)詩、大雅「籩豆一嘉」○きよむ。清潔にす。國語「一其巾冪」【靜過】セイクワ　しづめととむ。北史、源賀傳「部二勒禁兵一、一一一外内」【靜晏】セイアン　しづかにして安し。徐陵文「中流一一、鼻鼾鼓來」【靜意】セイイ　心をしづかにおちつかす。後漢書、梁節王暢傳「王其安レ心一レ一」‖安意。【靜域】セイイキ　しづかなる處、寺など。李翰玉詩「松扉靜二白日一、聲夜來二一一」【靜影沈璧】セイエイチンペキ　月光がしづかなる波にうつる形容。范仲淹、岳陽樓記「浮光躍レ金、一一」【靜淵】セイエン　心が靜かにして深し。史記「一一以有レ謀」皆梁文「廣博一一、審二於世用一」‖寧靜淵深。【靜穆】セイボク　靜かにおだやか。又、世が太平無事である。‖安穆。平穆。【靜謐】セイヒツ　靜らかにして美くし。詩、大雅「其告維何、籩豆一一」【靜好】セイカウ　しづかにしてよし、靜穆良好。詩、鄭風「琴瑟在レ御、莫レ不二一一一」【靜境】セイキヤウ　しづかなる所。白居易詩「一一多獨往、幽懷竟誰知」‖靜域。靜處。【靜處】セイショ　心しづかにしてむなし。莊子「德者天地二而一一、化者二四時一而變物」【靜和】セイクワ　心しづかにおだやか。鬼谷子「一一者養レ氣」【靜謐】セイヒツ　ものしづかにしてゆるし。塩鐵論「猴性躁急、猿性一一」【靜觀】セイクワン　心しづかに物事を觀察する。程顥詩「萬物一一皆自得、四時佳興與レ人同」【靜嚴】セイゲン　しづまりておごそか。唐書、典思明傳「王師部伍一一、賊有二懼色一」‖靜肅。【靜話】セイワ　しづかにかたる。白居易詩「一一多同待漏時」‖閒話。靜談。【靜坐】セイザ　しづかに心をおちつけてすわる。王禪譜書「歐陽文忠公嘗問二杜祁公一何以禦レ暑、公曰、唯一一可二以避レ暑」姚鵉詩「一一無二時不下簾レ山」【靜坐法】セイザホフ　身體をしづかにおちつけ氣息を調和して健康を增進する法。【靜想】セイサウ　しづかにかんがふ。又、しづかなるおもひ。五色線「獨二處一室一、絕レ食一一」‖靜念。【靜躁】セイサウ　しづかなると、さわがしきと。王義之、蘭亭集序「趣舍萬殊、一一不レ同」‖暗靜。【靜止】セイシ　動かずして靜かに止まり居る。易、艮卦、疏「艮、止也、一一之義」【靜字】セイジ　形容詞。【靜思】セイシ　○しづかなるおもひ。說苑「寬以二一一一」○しづかに思ふ。梅堯臣詩「世事一一同二轉蓬一、物華催レ老劇二飛梭一」【靜修】セイシウ　心をおちつけて身を正しく修める。諸葛亮、戒レ子書「靜以修レ身、儉以養レ德」【靜念】セイネン　寺をいふ。唐林慎思、續幽怪錄「晉孝武崇二佛法一、立二一一於殿門一、引二沙門一居レ之」‖精舍。【靜淑】セイシュク　しづかにしとやかにして善良なり。【靜廟】セウビヤウ　○しづかにつつしむ。‖寧肅。○女官の名。北史、后妃傳、齊孝昭皇二一一項珠等八十一御女、比二正四品一」【靜水】セイスイ　ながれざるみづ。新論「人不レ鑑二於流波一而鑑二於一一一者、以二靜能清一也」‖止水。【靜養】セイヤウ　しづかにしておくぶかし。梅堯臣詩「一一無塵地、青葵滿舊畦」【靜寢】セイシン　しづかにひっそりとする。何劭詩「一一愴然歎、世事忽遷顚」【靜寞】セイバク　しづかにして心がもっぱらなり。宋史、樂志「功存二內治一、德協二一一一」‖良靜寞一。【靜息】セイソク　しづまりやむ。南史、江革傳「廣施二恩惠一、盜賊一一」‖靜止。【靜泰】セイタイ　しづかにもてやすし。莊子、發生篇「滑疑一一、少レ氣寡レ欲」‖靜安。寧靜。【靜治】セイチ　しづかにをさまる。歐陽修文「帝以二兵驕之功一、難二事一一一」【靜室】セイシツ　しづかなるひるま。國語「一一敗レ棋中食語、君王避レ暑在二閒平一」

【靜聽】セイ　しづかにきく。劉伶、酒德頌「一一不レ聞二雷霆之聲一、熟視不レ覩二泰山之形一」‖靜聽。

【靜女】セイ　みさを正しくしとやかなるをんな。詩、邶風「一一其姝」

【靜臥】セイ　しづかなる臥床。

【靜臥レ熟】セイガケル　心をしづかにすれば、熟氣にうちかつ。老子「躁勝レ寒、一一」

【靜謐】セイヒツ　○しづか、温も靜。若康、琴賦「疏簡頽以一一、寄微微其清閑」○世が安くをさまる。宋書、符瑞志、「江外一一、唐堯太陽樂章「河海一一、車書混同」

【靜候】セイコウ　しづかなるおとなひ。皮日休詩「一一無二人到一、幽深每自知」

【靜邊】セイヘン　邊境をやすんずる。晉書、孔嚴傳「徐二深レ根固レ本、一レ一レ國」‖經邊・靖邊・寧邊。

【靜歩】セイホ　しづかにあゆむ。七啓、遊二芳烈一而一一、抗二皓手一而清歌」‖閑歩・閑歩・徐歩。

【靜脈】セイミヤク　黒くなりし血を心臓におくりかへす脈管。↓回血管。

【靜默】セイモク　しづかにだまつてゐる。南史、齊高帝紀「深沈一一、常有二四海之心一」

【靜夜】セイヤ　しづかなる夜。魏明帝詩「一一不レ能レ寐、耳聽二衆禽鳴」

【靜養】セイヨウ　心身をしづかに養ふ。白居易、座右銘「飲レ外以及レ内、一一和與レ眞、養レ内不レ遺レ外、動靜二機與レ仁」

【靜樂】セイラク　しづかにたのしむ。段克己詩「一一盟二其願一塵緣脚解レ縛」

【靜慮】セイリヨ　しづかにおもんばかる。又、しづかなるおもひ。李中元詩「閑吟遊二古觀一、一一想二神仙一」‖靜想。

【靜聆】セイレイ　しづかにきく。梁簡、遊二雲門寺一詩序「動二步眞境一、一一法音一」‖靜聽。

【靜話】セイワ　しづかにかたる。白居易詩「一一開レ襟久、閑吟放レ盞遲」‖閑話。

【靛】テン　デン　藍

○そむ、あゐぞめ、藍にて染めたる色。○藍葉の汁を水と石灰とに和し沈澱して成りし染料、水一といふ。別に藍葉を乾かし搗きて塊とせしものを土一といふ。

非部

【非】ヒ　是　義

○あし(不是)正しからず。是の對。易、繫辭「辨二是與一一」○たがふ(違)「一レ禮」○そしる(誹)○せむ(責)○つみ(隱惡)○ず、あらず(不)うちけし、否定する、不の下は主に虚字を用ひ、一の下は多く實字を用ふ。論、先進「子曰、一一吾徒也、小子鳴レ鼓、攻之可也」○あらずや、反語の意に用ふ、豈を添へて見る。書、大禹謨「可畏一レ民」○いつはり(不眞)○とがむ(咎)○洲名、阿一利加の略。○そしる。誹に通ず「腹一」「怨一」

同訓異字　非・誹・謗・譏・訾・訿・毀・譏・譖・短の條は誹(八一八頁一段)の條を見よ。

【非道】ヒドウ　思ひもよらず、意料の外に出づ、だしぬけ、不意。晉書、衞玠傳「人有レ不レ及、可二以情想一一相干、可二以理遣一」

【非ざる】ヒ　法にそむく。道にたがひ悖る「檢一一使者」

【飾レ非】カザル　己のあしきことをかざりつくろふ。史、殷紀「紂、智足二以拒一諫、言足二以一レ一」

【發レ非】アバク　あしきことをさとる。劉爾詩「今日方知レ命、前年自一レ一」

【非行】ヒコウ　よからざる行爲。‖惡行。

【非義】ヒギ　非道のきざし。書、顧命「賜無二以劍一二貢于一一一」劍は周の康王の名。

【非毀】ヒキ　そしる。漢書、桓譚傳「辨析疑異二而遽一一一」

【非業】ヒゴウ　非分の貪望や身分不相應ののぞみ。後漢書、祕洪傳「恥望一一、多殺二忠良一以立二滋威一」

【非議】ヒギ　そしり論ずる。漢書、循吏傳「夏侯勝、一一留書一大不敬」‖誹謗・譏議。

【非據】ヒキョ　己の居るべからざる處に居る、實力なくして高き位に居る。易、繫辭「非レ所レ據而據焉、身必危」

【非レ關】ヒカンアズ　婚姻するに釣合はず、ふつりあひの左、恒六「齊侯欲下以二文姜一妻中鄭太子忽上、太子忽辭、人問二其故一、太子曰、人各有レ耦、齊大、非二吾耦一也」

【非訾】ヒシ　人の惡をそしりあばく。後漢書、申屠蟠傳「汝南范汎等、一一朝政」

【非業】ヒゴウ　○爲さずともよろしきわざ。不當の事業。漢書、元帝紀「遠離二父母妻子一、勞二於一一之作一」○佛　非命に同じ。

【非想天】ヒソウテン　佛　無色界に在る四天の一、無爲無思の境。駱賓王詩「我出二有爲界一、君登二一一一」

【非次】ヒジ　順序によらずして擢き用ふる。晉書、羊祜傳「一一之恩、臣有二何功一可二以堪一之」

【非時】ヒジ　佛　午後の食時。老學庵筆記「佛經戒二比丘一一食、蓋其法過レ午則不レ食也、西蜀僧招二客暮食一、謂二之一一一」

【非常】ヒジヤウ　○つねなみならず。常軌を逸脱、格二其ノ一一一、俾三克紹二先烈一」‖邪心。

【非心】ヒシン　ただしからざる心。非僻の心。書、閻命「履レ愆乗レ利、格二其ノ一一一、俾三克紹二先烈一」‖邪心。

【非望】ヒバウ　分にこえたるねがひ。身分不相應の望。北史、于宣敎傳「王猶是其ノ一一、奸臣杜二其邪謀一」‖非覬。○まちまうけぬ、豫期せず。南史、齊宗室子顯傳「一順之恩、一一而至」

【非法】ヒハフ　法にそむく。阿毘曇論「一一貪著」

【非非】ヒヒ　非を非とす、あしきをあしきとする。荀子「是是一一之謂レ智」

【非謗】ヒバウ　○誇きはかりごとにあらず。左傳「得二一夫一、失二一國一一レ一也」○惡事をはかる。

【非儔】ヒチウ　戰爭中、戰隊の人員に列せざるもの。軍醫・主計の類。‖非戰鬪員。

【非族】ヒゾク　其のやからにあらざるもの。王粲文「使下一一不レ干二吾盟一、異類不レ絕二善好一」

【非道】ヒダウ　○人の缺點。吳志、閻澤傳「性謙恭篤愼、人有二一一一口未二嘗及一」○そしる。‖非毀。

【非難】ヒナン　○人の非をせめる。○そしる。そしり。

【非人】ヒニン　○かたは、身體の不完全なる人。左、昭七「孟、一一也、將レ不レ列二於宗一不レ可レ謂レ長」注「足跛非二全人一不レ可三列爲二宗主一一」‖廢人。○圖乞食をいふ「職多一一」

【非圖】ヒト　よしとみとめず、承知せず。是認の對。

【非望】ヒバウ　○分にこえたるねがひ。身分不相應の望。北史、于宣敎傳「王猶是其ノ一一、奸臣杜二其邪謀一」‖非覬。○まちまうけぬ、豫期せず。南史、齊宗室子顯傳「一順之恩、一一而至」

【非法】ヒハフ　法にそむく。阿毘曇論「一一貪著」

【非非】ヒヒ　非を非とす、あしきをあしきとする。荀子「是是一一之謂レ智」

【非謗】ヒバウ　○誇きはかりごとにあらず。左傳「得二一夫一、失二一國一一レ一也」○惡事をはかる。

【非凡】ヒボン　つねなみならず、つねなみよりすぐれる。‖志、先主傳「住二此樹一一一」‖非常。

【非命】ヒメイ　天命にあらず、主に橫死するにいふ。正命の對。孟、盡心「盡二其道一而死者、正命也、桎梏死者、非二正命一也」

【非役】ヒエキ　圖官吏にして現職なき者。

【非理】ヒリ　非道に同じ。新書、王覽傳「屢以一一一使レ罪」

【非類】ヒルイ　己の族類にあらざるもの。左、僖十「狐突曰、神不レ歆二一一一、民不レ祀二非族一」不レ歆とは祭享を受けざる義。

【不レ歆二非類一】フキヤウヒルイ　鬼神は其の類族にあらざる者の祭をうけたまはず。前條參看。

【非議】ヒギ　譏傷にそむけること。論、顏淵「子曰、一一勿レ視、一一勿レ聽、一一勿レ言、一一勿レ動」

【非禮之禮】ヒレイノレイ　體にかなはざる禮式の義、離婁「一一、非義之義、大人弗レ爲」

七畫

【靠】カウ　圖

○たがふ(相違)○俗による(倚)もたれる、依り附く「依一」「倚一」。

十一畫

【靡】(一)ビ　(二)ビ　(三)バ・マ　縻(一)(二)の通　歷支の韻　麾ヒ

㊀なびく、偃ッす、草木、又族などが風に吹かれて伏す「披一」「風一」左、莊十「望其旗一」なびかす。○おごり(奢侈)「奢一」○ちひさし、こまか(細緻)細くして好し。○しなやか。○したがふ(順隨)○はなやか、うつくし(華美)「一衣」○なし(無)○つみ(罪累)○一一は遲き貌。一說、相隨順する義。○きし(岸)沼と通ず「江一」○一草は蓍の屬。㊁ちる。ちらす(散)○わかつ。わかる(分)○ほろぶ。ほろぼす(滅)「一散」‖盡。○へる。へらす(損)つひやす。○麾に同じ。㊂ちる(散)○する(摩切)‖磨。

【靡衣媮食】ビイユシヨク　美麗なる衣服を好み、苟も食を貪りて、永久の事を思はず、論は隱。漢書、敍傳「衆庶莫レ不二靡レ作忘慚一一」

【靡動】ビドウ　なびかしすすめる。晉武帝文「士操論資、因レ茲一一」

【靡傾】ビケイ　なびきかたむく。魏文帝文「寄二身流波一隨レ風一一」

【靡レ監】モニカントシ 監はもろし、堅固ならず、靡は無、堅固ならざることなき義。詩、唐風「晉不レ懐レ靡、王事レ靡レ盬、我心傷悲」王室の事は堅固ならざるべからず、故に王事に力を盡すといふ義。

【靡草】ビサウ 枝葉の細かき草、養ひ淨歷ゲの類。禮、月令「一一死」

【靡潔】ビケツ 綺淨にして驚實ならず。漢書、董仲舒傳「整二世俗之一一一」

【靡靡】ビビ ○相順ひ隨ふ貌。資、畢命「商俗一一、利口惟賢」○行くこと遲き貌。詩、王風「行邁一一、中心搖搖」＝遲遲。○翠の細く好き貌。王褒、洞簫賦「被二淸瀅一其一一」

【靡散】ビサン おとろへやぶる、四散潰壞の義。禮、少儀「國家一一」＝衰敗。

【靡曼】ビマン 肌が細かに弱くして美くし。列、周穆王「簡二鄭衛之處子嫺都一一者一」呂覽「一一皓齒」注「一一、細理嫩肌、美色也」

【靡拉】ビラ なびきくだける。四庫賦「梗林爲レ之一一、機戰爲レ之摧殘」

【靡麗】ビレイ はなやかにうるはし。史、司馬相如傳「恐後世一一、遂往而不レ返、非レ所三以爲二繼嗣創一業垂一統也」

面部

【面】メン 面は俗字 ○かほ、おもて、かんばせ（顏）つら「顏一」「對一」「笑一」「嬌一」「粉一」○まのあたり（眼前）其の人の面前「一從」「一折」○みる、まみゆ（見）曲禮、毋必告、反必一」○そとがは、うはつら「表一」「外一」○そむく、うしろむきになる（背）史、項羽紀「馬童一之」＝倒。○むく、むかふ（向）○かた、むき（方位）「方一」「北一」○まへ（前）○人の一に象りしもの、舞樂の假一の類。○便一は扇の類。○朝鮮にて町村の數。現に二千五百七一あり、其の長を「一長」といふ。圖○平たきものを數ふる數詞「二一」「三一」○平たきものの名に添へていふ「扇一」「紙一」

【面部】面は顏前なり、頁に從ひ人面の形に象どる、俗に面に作るは非。

【面友】メンイウ かほを知れるのみにて心より親しまざるとも。法言、學行「貌而不レ心、面朋也、友而不レ心、一一也」

【面諛】メンユ おめみえ、貴人に面會する。＝拜謁。

【皮レ面】ヒメン 顏の皮を剝ぎ取る。史、刺客傳「自一一抉レ眼」

【拂レ面】フツメン かほをはらふ。楚辭「長袂一一、善鞚レ客只」只は助字。

【面戒】メンカイ まのあたりいましめる。宋史、王顯傳「顏成失儀、難レ逃二面戒一、過レ改、上論一二之一」＝面誡。

【面交】メンカウ うはべのみのまじはり。宋史、常安民傳「吾心實惡レ之、姑以爲二一一一耶」＝面友。

【面汗】メンカン かほにあせをかく。詩、衞風「載馳」我痛、內傷一一」詳」

【面諳】メンアン まのあたりせめなじる。諳は責なり。宋史、王最傳「臨レ政不レ倘二剝削一、民有レ訴、必一二之一、不レ至二大過一、卽諭而撝去」

【面具】メングヰ めん、假面。宋史、狄青傳「臨レ敵被レ髮帶二銅一一、出二入賊中一、將校路莫二敢當一」

【面會】メンクワイ 兩人相見る、對面する。後漢書、劉植傳「如欲二一一、宜レ出二傳舍一」＝對面。

【面結】メンケツ ○まのあたり約束をむすぶ。史、吳王濞傳「身自爲レ使、使二於膠西一、一一之」○うはべのみの交際。明心寶鑑「古人結レ交唯結レ心、今人結レ交唯結レ面」

【面見】メンケン まのあたりみる。晉經、疏「萬能謀二所一一一之事一無レ所二疑滯一」

【面晤】メンゴ 面語に同じ、晤は會談。＝面談。

【面語】メンゴ 面會してはなす。唐書、房喬傳「陳二事千里之外一、猶二對一一一」

【面相】メンサウ かほつき、おもざし。紀世「長一一一輸出」

【面刺】メンシ まのあたりそしる。漢書、賈誼傳「一一主過」＝面責・面諫。

【面試】メンシ まのあたりこころみる。試は考試。後漢、曹褒傳「褒年十餘歲（中略）善誦レ文、太祖曹操二其文一謂レ植曰、汝倩二人耶、植跪曰、實由二己意一、下レ筆成レ章、顧無二一一、奈何倩人」南史、劉之遴傳「任昉曰、爲二之薦一談一不レ如二一一」

【面識】メンシキ 互にかほを知りてゐる、見おぼえがある「一一一」＝相識。

【面質】メンシツ 面前にて質し問ふ、質は對語。漢書、王俊傳「一一呂須於平前」

【面對】メンタイ まのあたり訴をわびる。

【面陳】メンチン かきに對する、さきの見えざる喩。又、見聞の疾き喩。論、陽貨「人而不レ爲二周南召南一、其猶二正牆面而立一也歟」＝牆面。

【面縛】メンバク まのあたりせめる。＝面責。

【面首】メンシュ 面貌首髮の美くしき男子。晉鑑、宋明帝紀「帝爲二始山陽公主一、置二一一男子左右三十人一」

【面從】メンジウ 人のめのまへのみにてへつらひしたがふ。書、益稷「汝無二一一退有二後言一」

【面從後言】コウジウゴゲン 人の面前にては從ひへつらひ、退きて後、惡口をいふ。前條參看。

【面縛】メンバク 面前にてはめたたへる。詩譜序、疏「自二書契之興一、朴略尙質、一一不レ爲レ詔、目謀不レ爲レ誘」＝面譽。

【面色】メンショク かほいろ。かほつき。折伏羅漢經「一一變」＝顔色。
【面飾】メンショク かほのかざり。化粧する。西陽雜俎「今婦人、一一用二花子一」
【面賀】メンガ まのあたり賞め咎める。＝面剌。
【面積】メンセキ 土地疏物などの表面のひろさ。坪數。
【面折】メンセツ まのあたり人の過をせめる。史、呂后紀「一一延爭、臣不レ如レ君」延爭は朝廷の上にて天子をまのあたり直諫する。
【面接】メンセツ 面會に同じ。
【面前】メンゼン まのあたり。＝眼前。
【面歎】メンタン 其の人の目の前にてほめる。韓愈文「愈一一日、公於レ是乎賢遠二於人一」
【面談】メンダン 面語に同じ。晉書、王猛傳「一一當世之事、猛レ對レ面言」
【面陳】メンチン 相逢ひてまのあたりのべる。＝面談。
【面桶】メンツウ 國飯を盛りて一人づつ面にあてて食るに用ふる曲物。桶ツウは宋音。
【面試】メンシ まのあたりそしる。宋史、王欽若傳「一一其短二爭二于帝前一」＝面剌。
【面朝】メンテウ 朝廷にのぞむの意。「左祖右社、一一後市」
【面有二七星一】メンニシチセイ 面に北斗七星の如き黒子ホクロがある。晉書、桓溫傳「委貌若レ偉、一一、少與二沛國劉惔一善、惔嘗稱レ之曰、溫眼如二紫石棱一、鬢作二蝟毛磔一、孫仲謀・晉宣王之流亞也」
【面無二須髯一】メンムシュゼン 面に鬚も眉もなし。荀、非相「伊尹之狀、一一」注「臞與レ眉同」
【唾レ面】ダメン 人我が顔に、唾するものある時、若し之を拭はば、其の人の意に逆ふ、故に拭はずして自然に乾くを待つべし。世に處するに忍耐の大切なることを極言す。唐書、裴伷先傳「伷先字宗仁、深沈有二度量一、其弟守二代州一、辭之レ官、敕二之耐一事、弟曰、人有レ唾レ面、潔レ之乃已、伷先曰、未也、潔レ之是逆二其怒一、正使二自乾一耳」
【面皰】メンポウ にきび。顔のふきでもの、皮膚病の一。＝粉刺。
【面貌】メンバウ かほかたち。史、田儋傳「田橫謂二其客一曰、陛下所二以欲一レ見レ我者、不レ過レ欲二一見一レ吾一一耳」＝顔貌。
【面方如レ田】メンホウジョデン 四角なかほ。南齊書「宋明帝目二李安民一曰、卿一一、封侯狀也」
【面白】メンパク ○かほしろし。史、刺客傳、注「武陽骨勇之人、怒而一一」○圖おもしろし、心に喜び樂む。
【面縛】メンバク 兩手を背にしばりて、其の面のみを見はす。左、僖六「一一銜レ璧」杜預の註に手を後に縛り、璧を以て賛と爲す、手縛せらる、故に之を銜むなりとあり。一說、面は背、後手ゴシュにしばる。＝反縛。
【面罩】メンタウ 紙又は帛を以て死人の面を掩ふもの。七修類藁「一一、人死以レ紙覆レ面（中略）只是生人不レ忍レ見二死者一之意」
【面皮厚】メンピアツシ つらの皮が厚い、恥を知らざるにいふ。南史、王彬傳「晉レ鼓三、徒有二八尺圍一、謂無二一寸腸一、面皮如レ許厚」＝鐵面皮。
【面皮薄】メンピウスシ 柔和なるかほ。陳信詩「向人長受瞼、由來薄二面皮一」
【剝二面皮一】ハクメンピ 厚顔の者を恥づかしめる。四京雜記「不レ如レ剝二面皮一夫」駢氏語林「賈充謂二孫皓一曰、何以剝二人面皮一、皓曰、憎二其類之厚一也」
【面部】メンブ 顔面の部分。圖繪寶鑑「一一手足」
【面壁】メンペキ かべに向ひて坐禪する。傳燈錄「達磨祖師至二少林寺一、一一九年、始悟而成佛」
【面朋】メンポウ かほを戲れるのみのとも、うはべのまじはり。面友を見よ。
【面誅】メンチウ 人の目のまへにてあざむきたぶらかす。漢書、季布傳「樊噲願ヲ得二十萬衆一橫ニ行匈奴中一、當面誅二單于一」曰、嗜妄言、是一一也」注「誅、欺罔也」
【面命】メンメイ まのあたりをしへる。詩、大雅「匪二一一一之、言提二其耳一」
【面面】メンメン ○各方面。陶潛詩「攜レ幼一一看二青山一」○めいめい。各自。
【面面風】メンメンフウ 四方より吹き來るかぜ。韓八元詩「十層突兀在二虛空一、四十門開一一」
【面目】メンモク ○かほ。史、項羽紀「何一一見レ之」恥づかしくして合はす顔がない。＝圖面子ミエ面孔メンコ○すがた、かたち。蘇軾詩「不レ識廬山眞一一、只緣二身在二此山中一」
【面目可レ憎】メンモクニクシ 貧しくして顔容あしくにくむべし。韓愈、送窮文「凡所二以使一レ吾一一語百無二一味者、皆子之志也」字とは、窮鬼を指す）
【面門】メンモン 口をいふ。楞嚴經「從二一一一放二種種光一」疏「從レ口放レ光也」
【面藥】メンヤク 顔面にぬりて寒熱をふせぐくすり。杜甫詩「口脂一一隨二恩澤一」
【面談】メンダン 人の面前にてこびへつらふ。孟、告子「誘二一一之人至一」
【面影】メンエイ まのあたりさとす。
【面參】メンサン 人の目の前にてほめる。莊姜詩「好レ一一人一者、亦好二其烏一而愛レ之」大戴禮「一一者不レ忠、師レ視者不レ情」
【面似二蓮花一】メンジレンクワ 人の顔の美くし

きをへつらひて褒めたる語。唐書楊再思傳「張昌宗以二姿貌一侍、再思毎曰、人言六郎似二蓮花一、非也、正謂蓮花似二六郎一耳、其巧諛無恥、類如レ此」

【面話】ワシ むきあひてはなす。賈島詩「相思堪二一一一、不レ著尺書傳」＝面語・面談。

五畫

【皰】ハウ 效

もがさ(面瘡)＝疱・皰。

七畫

【靦】テン 銑

○まのあたり人を見る貌。○面目の貌。○はづ。慙づる貌。詩、小雅「有二面目一」

【靦汗】テンカン はぢてあせをながす。沈約文「精舸踴躍、一一亡レ席」席は措。

【靦顏】テンガン 慙づるかほ。杜甫詩「野人曠蕩無二一一一、豈可＝久在二王侯間一」

【靦然】テンゼン はぢて顏をあかくする。常袞文「徘二徊遲懇一、一一一朝列一」

【靦慙】テンザン はぢおそれる。上官儀文「久戸二厚祿一、一一在レ躬」

【靦性】テンサウ はぢて顏をあからむ。上官儀文「敢請二骸骨一、心顏一一」

【靦慙】テンザン はぢて顏を赤くする。宋眞宗文「勉従二勤請一、良積二一一一」＝面慙。

【靦然】テンゼン 面目ありて人を見る貌。趙語「余雖二一一一而人面一哉、吾猶二禽獸一」

【靨】フ 虞 遇 又、輔に作る

ほほ(頬)ほほぼね(頬骨)

十二畫

【靨】クヮイ 卦

かほをあらふ(洗面)禮、内則「面垢、燻潘請一一」＝潘。

【洗面】クヮイメン かほを洗ふ。晉世南、史略「春日以二秫花一和レ雪、與レ兒一レ一、呪曰、取二紅花一取二白雪一、與レ兒洗レ面作二光悦一」＝洗面。

【靦】セウ 篠

顏色がやつれる。楚辭「顏色一一」＝憔顦。

十四畫

【靨】エフ 葉

ゑくぼ。笑ふ時、頬に生ずるくぼみ「笑一一」「嬌一一」「獻一一」「一子」

【靨飾】エフショク 婦人の装飾に同じ。甘鮑錄「唐章固妻、少時爲レ盜所レ刃、以レ妝掩レ之、女粧盛有二一一一」

【靨笑】エフセウ ゑくぼを生じてわらふ。温庭筠、牡丹詩「欲レ繪似レ含雙一一」

【靨鈿】エフデン 女のゑくぼの邊のかざり。西陽雜俎「一一之名、蓋自二吳孫和鄧夫人一也」＝靨飾。

【靨飾】エフショク ゑくぼ、口の旁の渦。淮南、説林「一一在レ頰則好、在レ頤則醜」

革部

【革】(一)カク (二)キョク 陌 職

(一)つくりがは、獸皮の毛を去りしもの「皮一一」「韋一一」(皮は毛がは、一はつくりがは、韋は一ガハをなめしたるもの)○あらたむ。あらたまる(改)「修一一」「變一一」「沿一一」○かふ。かはる(更)○皮を張りし樂器、八音の一「金石絲竹匏土一木」つづみ(鼓)ふりつづみ(鼗)○おゆ(老)○あつきかは(厚皮)○甲冑の屬、一にて作りし武具「兵一一」「金一一」「甲一一」○一の手綱の把るところの餘ありて外に垂るるもの(轡首)○鳥が翼ツバサをつくろひてかけり飛ぶ。詩、小雅「如二鳥斯一一」○易の卦名。離下兌上。○姓。(二)きびし、せまる、すみやか(急)病が危篤になる。檀弓「夫子之病一一矣」あらたまると訓むは誤。

【革】革の上は廿に从ふ、俗に廿に从ひて革に作るは非なり。

【革易】カクエキ あらためかへる。又、あらたまりかはる。＝改易・變易・改革。

【鞏革】キョウカク いくさ道具をふせて用ひず、戰を息めて太平になる。革は兵革。典、高祖紀「殷事已畢、武王一レ一爲レ軒」＝鞏武・鞏戈。

【革旅】カクリョ 師旅をいふ。韓愈に「下邳侯一一傳」の文あり。

【革言】カクゲン 事をあらため變へるべき言語。易、革卦「一一三就有レ孚」

【革故】カクコ ふるき事をあらためる。李商隱詩「鼎新隨二一變一、一一法三章」

【革製】カクセイ あらためて、けづり去る。製は削。孫逖文「一一浮華、導二淳雅頌一」

【革心】カクシン 心を改めかへる。魏書、刁雍傳「水石一レ一、鳥獸率舞」

【革選】カクセン ふるきをあらため、新らしき方にすすむ。

【革新】カクシン あらためてあたらしくする。又、あたらしくあらたまる。

【革車】カクシャ つくりがはにてよろひし兵車。孟、盡心「一一三百乘」＝兵車。

【革職】カクショク ○官職を免ずる。清朝の制、大臣に不都合の行爲ありし時は、其の頂戴即ち帽子の上につけたる珠をあらため去らしめしが故にいふ。○—留任とは—せられても尙ほ其の職務を執り行ふにいふ。‖革罷。

【革正】カクセイ あらためただす。改正する。魏志、夏侯太初傳「漢文雖三身衣弋綈一不レ—二法度一」‖改正・變革。

【革政】カクセイ 政治をあらためかへる。

【革船】カクセン かはを縫ひて造りし船。後漢書、南匈奴傳「作二馬—一」吳葉詩「婆羌航二—一」

【革裹】カクカ かはぶくろ。林寬詩「風波凍馬遙相見、—裹儀尙望行」‖革囊。

【革盛】カクセイ かはぶくろ。史、殷紀「爲二—一盛レ血」‖革囊。

【革弊】カクヘイ 弊害をあらため去る。新論「放立二禮教一、以革二其弊一」

【革木】カクボク 革を張りて作りし樂器即ち鼓の類と、木にて製せし樂器即ち柷敔ショクギョの類と、竝に八音の一。

【革命】カクメイ ○天子は命を天に受く、故に天子又、政府のかはるをいふ、天命既に革まるの義。易、革卦「湯武—レ—、順二乎天一而應二乎人一」○辛酉の歲。陰陽家の說にて、此歲には變動多しといふ。

【革面】カクメン 其の面貌をあらためるのみにて、其の心未だ盡く化する能はざる義。易、革卦「君子豹變、小人—レ—」

【革罷】カクヒ 革職罷任の略。革職參看。

【革令】カクレイ 陰陽家にて甲子の年の稱。

【革路】カクロ 次條に同じ。

【革輅】カクロ 革にて造りしいさぐるま。隋書、禮儀志「—以巡レ兵即レ戎」‖革路。

【軒】(三畫) ㊀ケン ㊁カン 刪 元

㊀ほしがは(乾革)㊁黎—は西域の國名。今の伊太利國に當る。

【軟】サイ サツ 佳 黠 麻

うつぼ、ゆき、矢を容れる具(箙)「箭—」

【軧】ジン 震

○しなやか、堅くして柔か。‖韌。○國ゆき。靭(前條)の誤用。

【軧帶】ジンタイ 生理學にて關節の兩方の骨をつなぎて其の分離を防ぐ膜、性彈力ありて能く伸縮する。‖靭帶。

【軨】テキ 錫

おもづら、馬を制御する爲めに頭よりくつわにつなぐ組ひも(馬繮)檀弓「則執—而從」註「—、靭也」

【軫】(四畫) インチン 軫 銑

むながい、ひきづな「車—」牛馬の胸の下にあてて車を引かしむる革紐。‖紖。

【靳】キン 隊

○はづ。はづかしむ(辱)左、莊十一「宋公—之」○むながい、馬の胸部に當てて馬を制する革の組ひも。○あざける、いやしむ(各)○兵車を曳く四頭立の馬の中の二匹。左、定九「如二驂之有一—」(驂は兩側にある二疋の馬)‖服馬。○とる(取)

【靴】クヮ 麻

くつ(履)かはぐつ。‖鞾。

【靴紐】クツヒモ くつと、しやくと。共に官服を著くる時に用ふるもの。師田錄「性時學士預二席故事一、見二宰相一不レ具二—一、繫二紐坐三玉堂上一、近時學士、始具二—一」

【靴搔レ痒】カクツカヒソウ 事を行ひて十分に本意を達する能はざる喩。無門關序「隔レ靴爬レ痒、有二甚麼交涉一」續傳燈錄「大似二隔レ靴抓レ痒」

【靴】サツ 合

○ふかぐつ。○小兒のくつ。‖靸。○—靸は走ることの疾き貌。

【靴鞋】カアイ 草にてつくりしくつ。輟耕錄「四海之人、以レ草爲レ履、而無レ跟、曰二—一」‖藁鞋。

【靶】ハ 禡

○たづなの人の把る處(轡首革)漢書、王褒傳「王良執二—一」○假射的をいふ「箭—」「鎗—」○え(柄)とって。把と通ず。王度、古劍記「劍連レ於—、盤圓龍之狀」

【鞅】(五畫) ㊀アウ ㊁アウ 養 陽

㊀むながい、馬の頸にとりつけて轅を負ふ革紐。○轉じて馬の義。輪—は車馬。○ほだし、きづな(羈絆)「世—」「塵—」「羈—」○になふ(荷)背に物をになふ「—掌」○うらむ、不

平に思ふ。＝快。㊁むながい。

【鞅掌】アウ　業まざる貌。心に滿足せず、不平に思ふ。史、推陰侯傳「由レ此日怨望、鞅掌―ー」＝快快。

【鞅掌】アウシャウ　○秩は荷フ、掌は之を捧ぐる、卽ち負荷捧持して容儀を修むるに暇あらず。故に容を失ふ貌とし、又、煩勞の義とす。詩、小雅「或燕燕居息、或王事―ー」○自得の意。一說に又煩勞の義とす。莊、庚桑楚「擁腫之與居、―ー之爲レ使」○衆多なる貌。一說に秩積の借字、秩積は禾葉の多き貌。晉康、絕交書「心不レ耐レ煩、而官事―ー」

【鞠】アク　エッ　㊥

まがる(曲)靴の曲るをいふ。隋書、禮儀志「長―靴、畋獵豫遊則服レ之」

【鞠】コウ　㊤

○おしまつき(靴)○かはおほひ(靴の中央の鞠革)

【鞢】セツ　㊦

たづな(轡革)

【鞜】タ。　㊦

ふりつづみ。淮南、主術「武王立戒愼之―ー」＝鞀鼓。

【鞄】㊀タツ　㊁タン　㊁㊀

㊀なめしがは(柔革)㊁韃―は靺鞨の別部、唐末始めて見ゆはら、後、蒙古の稱となる。

【鞄】ハク　㊀　ホク　㊁　ハウ　㊂

○なめしがはし。柔革の工人。○國かばん。革又、ズック製の箱にて提携すべきもの(革包)「提―ー」

【靺】バツ　マチ　㊁　通音　マツ

○―鞨は北方卽ち黑龍江省、吉林省地方に住む野蠻人の種族の名。周に肅愼、漢魏に挹婁、北魏に勿吉、三韓及び隋唐に―鞨といふ。北史、勿吉傳「勿吉國、在高句麗北二―曰―鞨ー」○―鞨に產する寶石の名、大いさ巨栗の如し。文與可詩「翡翠一盤紅―鞨」

【鞶】ハン　㊂

きづな、ほだし、牛馬をつなぎとめるたづな。＝絆。

【鞍】ヒ　㊀

むながひ、馬を車に繫する具。＝靼。

【鞆】〔國字〕

とも、古、弓を射る時、左の臂につける革製の具、巴の形をなせがく。

六畫

【鞍】アン　㊂

○くら、牛馬の背上に置きて物を載せる蓋とするもの「金―」「銀―」漢書、李廣傳「令レ君下馬解―ー」○くらす、馬にくらをつける「―ー馬」

【鞍街】アンくらと、くつわと。梁觀詩「―ー不レ施轡復脫、旁無二駈者一氣脈起」＝鞍鐙。

【鞍橋】アンくらをいふ、形が橋に似たる故。花蕊夫人、宮詞「幾回抛レ鞚―ー」

【鞍上】アンジャウくらの上「―ー無人鞍下馬」は馬術に熟達せる者の巧に馬を御する形容。

【鞍轡】アンくらと轡の下に敷くしたぐらと。木蘭辭「東市買二駿馬一、西市買二―ー」

【鞍廬肭】アンロツ　馬の鞍によりかかりて後をふりむきて威勢を示す。後漢書、馬援傳「馬援―ー、以示レ可レ用、帝曰、矍鑠哉是翁也」

【鞍馬】バン○くらをつけたる馬。後漢書、祖郎傳、注「騎都―ー刀劍」○馬にくらをつける。隋唐近事「―ー攜レ劍」

【鞍轡】ヒ　馬のくらと、たづなと。宋史、職官志「―ー庫、應レ奉二御馬鞍勒一」

【鞍鐙】ベウ　馬のくらと、くつわと「急就篇」

【鞍坪】ヘイ　㊁○鞍の上部卽ち人の乘るべき所。＝鞍盤・鞍局。○馬術にて身を鞍の前部又は後部に少しくよりてもたれる。

【鞏】鞏(前條)の古字。

地名。左、成二「及―侯戰一於―」今の山東省歷城縣の地。

【鞄】イン　㊁

車中の重席。韓詩外傳「齊君重―而坐」茵に通ず。

【鞋】カイ　アイ　㊀㊁　通音　アイ

○くつ(履)はく時、上部をしめ縮めて、履の如くしっかりと足にむすびつけるもの「麻

―」「絲―」＝轡。○國わらぢ、わらぐつ、わらを編みて作る賤人のはきもの「草―」

【鞋痕】くつのあと、足跡。＝輕屐。

【鞋底魚】ササウオ 比目魚の類、兩眼共に左に在りて相接近す、形牛舌の如し、故に牛舌魚とも稱す。

【鞋靴】くつと、くつたびと。＝履舄。

【鞜】（一）カツ（二）タツ 合 合 （一）ふくろ（袋）形狀の具。○堅き貌。○むねあて。（二）鞳に同じ、閨―は鐘鼓の聲。＝鏗鏘。

【鞟】キョウ 屋 ○かたし（固）「―固」詩、大雅「綿親冥天、無不克―」○つかぬ、牽ナラベにてしっかりと物を束ぬ。易、革卦「―用黃牛之革」○いる（煎）火にて乾かす。＝烘。○縣の名。秦代に置く、明清時代は河南省河南府に屬す。

【鞟鞣】拘束ルの貌。楚辭、懲思「故風節以從流兮、心――而不ン爽」

【鞟固】しっかりとしてかたし。＝堅固・牢固。

【鞟膜】眼球の前方以外の大部分の外面を被ふ所の纖ニシテ韌キ表膜。＝眼白。

【鞦】タ 豪 小さきふりつづみ（小鼓）詩、周頌「―鞉聲淵」＝鞉鼓。

【鞢】〔國字〕 こはぜ。書物の鉄、又足袋などの端につけて上下をひきかけとめるもの、多くは爪形を爲す。＝牙鐵。

七畫

【鞙】ケン 銑 ○くびきしばり、大車の轅ナガエをしばる革のひも。○―は腰に佩ビたる玉の形容。琄と通ず。詩、小雅「――佩璲」

【鞘】（一）サウ（二）セウ 肴 嘯 又、鞘に作る。（一）鞍の前後の兩輪につける紐、しほで。○むちさき。馬鞭の末。（二）さや、刀の身ををさめ入れる筒（刀室）「刀―」○轉じてすべてさやの形せしもの「筆の―」

【鞘翅類】昆蟲類の一目、口は咀嚼に適し、前翅は革質にて堅き鞘を成し、其の下に膜質の後翅を折り疊ム、天牛ハナムグリの類。

【鞅】テウ 蕭 【鞅革】かはのたづな（革轡）

かはのたづな。詩、小雅「―革沖沖」

【鞙】ボン モン 阮 もだゆ。呂覽、重己「胃充則中大―」＝懣。

八畫

【鞠】（一）キク（二）キウ 屋 東 （一）かうぢ（酒母）＝麴。○けまり（皮毬）革の毬子リ「蹴―」「蹴―」○をさなし、わかし（稚）○やしなふ（養）そだつ（生）詩、小雅「母兮―我」○きはむ、とりしらべる、ただす、罪を推し窮める、鞫に通ず「―罪」○きはまる。きはまり、ふさがる。詩、小雅「―爲茂草」＝鞫。○きはまりくるしむ。書、盤庚「自―自苦」○つげる（告）誓ひて告ける、注意する。詩、小雅「陳師―旅」（軍隊に誓告する）○みつ（盈）○かがむ（曲）○かはらよもぎ。菊に通ず。禮、月令「―有黃華」○麴即ち菊の花の如き色、黃色。（二）をんなかづら「―蘭」＝芍。

【鞠按】部をきはめしらべる。漢史、蕭輔傳「詔尽――、輔伏ン辜」

【鞠衣】鞠塵の色、即ち黃に青みを帶びたる色の衣にて天皇・皇后などの服ス禮服を見よ。

【鞠域】けまりの遊びをする場所。轉じて其れに似たる嚴室の稱ス。漢書、外戚傳「使ン居ニ―中ニ」＝鞠場。

【鞠育】やしなひそだてる。詩、小雅「母氏―、劬勞劬瘁」詩、小雅「母兮鞠ン我、長ン我育ン我」に本づく。＝養育・鞠養。

【鞠ン我】われをやしなひそだてる。鞠は養。詩、小雅「母兮―ン―」

【鞠勿】罪をとりしらべる。書經、說「上其――文辭」

【鞠獄】けまりのあそび。隋文獻通考「跡鞠之戲、蓋古兵勢」

【鞠躬】身をかがめてうやまひつつしむ。論、鄉黨「入ニ公門ニ――如也、如ン不ン容」

【鞠躬盡瘁】心身を勞して國事に盡力する。諸葛亮、出師表「―――、死而後已」一本瘁を力に作る。

【靭訟】ジンショウ　訴訟の多き義。訟は爭、一民、靭は窮、訟は亂、窮極せる亂の義。詩、小雅「昊天不ㇾ傭、降ニ此ー一ー」

【靭決】ジンケツ　とりしらべて罪をきめる。魏書、肅宗紀「兩狂滔狂、隨速ー一ー」

【靭子】ジンシ　おさなご。晉、襄王之器「無ㇾ遺ニー一之蓋ー」ニ稚子。

【靭室】ジンシツ　けまりをする（や。陸機、靭歌行、序「漢宮閑有ニ含章ー一ー」

【靭訊】ジンジン　罪をたづね問ふ。靭一に鞫に作る。謝莊文「孝宣信ニ深文之吏ー一立ニ靭訊之法ー」ニ靭問。

【靭斷】ジンダン　罪をしらべてきめる。通典「密奏請ニ讞誅ー之、上令ニー一之ー」ニ靭斷・靭決・審斷。

【靭治】ジンチ　罪をただしらべる。史、李斯傳「羣臣諸公子有ㇾ罪、輒下ㇾ高令ニー一之ー」（高は趙高）ニ靭治。

【靭蹙】ジンシュク　○花の名、黃色に青みを帶びたる花開く。○轉じて染色の名。周禮、天官「天子乃歲ニ靭衣ー」注「色如ニー一ー」

【靭場】ジンジョウ　けまりを蹴る場所。唐書、李憲傳「乃屯ニ兵ー一ー」ニ靭域。

【靭問】ジンモン　罪をしらべたづねる。ぎんみする。ニ訊問・靭訊・訊問。

【靭養】ジンヨウ　やしなふ。類氏家訓「慈兄ー一、苦辛備至」ニ撫育。

【靭旅】ジンリョ　兵士に督ひて告げきかす。詩、小雅「陳ㇾ師！ㇾー」

【靭靭】ユユジン　をんなかづら、蘘草の一。左、宣十二「有ニ山ー一ー乎」ニ川芎・芎藭。

【靱】　ジン　靭（革部十一畫）に同じ。

【靴】　カ　麻

おもがひ（勒）又くつわ（馬勒）隋書、陳茂傳「高祖將ニ挑戰ー茂固止不ㇾ得、因捉ニ馬ー」

【靸】　タフ　合

かはぐつ（鞾）漢書、揚雄傳「革ー不ㇾ穿」ニ革履。

【靹】　チョウ　篠

ゆみぶくろ（弓衣）ニ韔。

【鞁】　㊀ヘイ　通　ヒ　紙　㊁ヘイ　霽

㊀さや（刀室）㊁つづみ。禮、月令「命ニ樂師ー修ニ鞉ー一鼓ー」ニ鼙。

【鞁沙門】ヒシャモン　菩提沙門に同じ、四天王の一、遍開又は多聞と譯す、古、邊羅門教にて財神と爲す、須彌山の第四層に住し、夜叉羅刹を主宰る。

【鞅】　ホウ　董　又、鞄に作る

佩刀の鞘の上にある飾。ニ琫。

【鞅】　エウ　養

㊀むながい、牛馬の尾にかける繩。㊁ゆきあひ。㊂なかれ。㊃うしろ。㊄うしろみ。㊅うしろだて。㊆うしろめたし。㊇うしろぐらし。㊈うしろで。㊉うしろあし。

【鞅掌】エウシャウ　事の煩多なる義。詩、小雅「昊天不ㇾ傭、降ニ此ー一ー」

【鞅鞅】エウエウ　㊀不平の貌。㊁不足の貌。

【鞆】　㊀カツ　曷　㊁バツ・マチ　黠　易　又、鞢に作る

㊀鞆ー（カツ）は北方の蕃人の名。又、其の地より出づる一種の寶石、鞆（革部五畫）を見よ。㊁ー巾（バツ）はかしらづつみ。列、湯問「北國之人、ー巾而裘」ニ帕頭。

【鞋】　㊀ケン　㊁ケン　阮　元　銑

㊀ゆみぶくろ、やぶくろ、馬上にて用ふる弓矢を盛る器。左、僖二三「右屬ニ鞬ー」註「鞬以受ニ箭ー一以受ニ弓ー」㊁朝（アサ）に弓矢を入れ藏（オサ）める。元稹詩「文皇ー鞬干戈」ー或は建に作る。

【鞦】　シウ　尤

○しりがい、牛馬の尾にかける繩（ナハ）○ー繩（センジョウ）はぶらんこ。もと山戎の繩戲、漢唐以來、宮中にて多く之を用ふ。古今藝術圖「ー繩北方戲、以習輕捷者、本作ニ秋千ー」蘇軾詩「歌管樓臺聲寂寂、ー繩院落夜沈沈」

【鞣】　㊀ジウ　㊁ジウ　有　尤　㊂ヂウ　宥

㊀なめしがは（熟皮）○乾かしたる革。㊁柔き皮。皮をなめして柔かにする。

【鞘】　シャウ　篠

さや、刀（カタナ）のさや（刀鞘）ニ室。

【靭問】ジンモン　罪をとひきはめる。宋史、夏守恩傳「與ニ大名府通判李紘ー一ー」ニ鞫問。

【鞣】ヂウ 蕭

○ゆがけ、弓を射る時、右手の指に掛けて弦を持するもの。○鈀ーセフは馬の鞍の下にしく具、くらしき。

【鞮】ティ 齊

○かはぐつ（革履）靴の類。○狄ーは夷狄の語を通譯するもの。禮、王制「西方曰狄ー」疏「ー、知也、謂通夷狄之語、與中國相知」一說、地名、河内に在りて善く倡歌する者を出す。○ー鞻は脅鎧トウ司馬相如賦「ー鞻生孅蠒」＝兜鍪。

【鞭】ベン 先

○むち（笞・筆策）馬を打ちて進ましむる杖。○軍器の一「鐵ー」「竹節ー」○むちうつ、ぶつ、たたく。史、三皇紀「ー草木」○むちにてうつ、古の刑の名。舜典「ー作官刑」○竹ー、筍は竹の根。○ー爆は小なる爆竹ダク【韻影】ベン むちのかげ。指月錄「世尊曰、如二世良馬一見二ー影一行」武士はくつわの音に日を覺ますと同意。【茅ノ鞭】ベンク 先韻（一八二頁三段）を見よ。

【投ノ鞭斷ノ流】ベントウクタフ 鞭を投じて流をせきとめる。江を渡る兵の多きをいふ。晉書、荀堅載記「堅曰、以二吾之衆旅一投レ鞭於江、足ノ斷二其流一」

【停ノ鞭】テイベン 馬にむちうつことをやめる、馬の進行をとどめる。高適詩「風指論二前事一ーノ惜二酒遊一」

【鞭撃】ベンゲキ むちうつ。貢奎詩「誓二彼善牧者一ーー非ノ所レ先」

【鞭草】ベンサウ 草をむちうつ。搜神記「神農以二赭鞭一鞭二百草一、盡知二其平毒寒溫之性、臭味所レ主、以播二百穀一、故天下號二神農一也」（本草學者を指す家といふは此に本つく）

【鞭策】ベンサク 馬のむち。曲禮「乘二路馬一、必朝服載ーーー」（路馬は君主乘用の馬）＝鞭箠。

【鞭殺】ベンサツ むちうちてころす。晉書、荀堅載記「明レ法嫉レ刑、證二姦善惡一、禁二勒豪強一ーーー一吏二百姓上書訟レ之」

【鞭ノ尸】シベンノシ 死屍をむちうちて怨を報ずる。史、伍子胥傳「伍子胥求二昭王一、既不レ得、乃掘二楚平王墓一、出二其尸一、鞭レ之三百然後已」

【鞭絲】ベンシ むち。陸游詩「春潮二柳眼梅腮一處、愁在ーー馬影閒ーー」

【鞭扭】ベンヂウ むちと、てかせと。刑罰の器に用ふ。蘇軾、石鼓歌「掃二除詩書一陳二法律一、投二鞭俎豆一逍ーーー」

【鞭筍】ベンシュン 竹の根。范成大詩「鄰家ーー過レ籬來」

【鞭撻】ベンスイ むちうつ。高士傳「可三食以二活肉一者、可二臠而ーーー」＝鞭箠。

【鞭箠】ベンスイ 前條に同じ。

【鞭撲】ベンボク むちをふるふこと。陸游詩「何時夜出五原塞、不レ聞二人語一聞二ーーー」

【鞭打】ベンダ むちうつ。北史、魏孝武紀「日晏還レ宮、至二後門一、馬驚不レ前、ーーー入」＝鞭撻。

【鞭撻】ベンタツ ○むちうちこらす。晉書、王遐傳「披レ荒斜レ厲、收二聚離散一、專伏二威刑一、ーーー殊俗」＝鞭笞・笞撻・杖撻・捶撻。○轉じてむちうち勵ます義。

【鞭笞】ベンチ ○むち、笞は麻繩にて造れるむち。○むちうつ。賈誼、過秦論「ーーー天下、威震二四海一」＝鞭撻。

【鞭杖】ベンヂャウ むち。魏志、明帝紀「頃多以二無辜一死、其減ーーー之制二於令一」

【鞭ノ長不レ及二馬腹一】ベンノチャウフレドモバラニオヨバズ 力強大なるも、なほ及ばざる所あるに喩ふ。一說に勢力あまりあるも濫に用ひざるをいふ。左、宣十五「楚子圍レ宋、宋人使二樂奠齊告二急于晉一、晉侯欲レ救レ之、伯宗曰、ーーー、不可、古人有レ言曰、ーーー、天方授レ楚、未レ可二與爭一」

【鞭背】ベンハイ せなかをむちうつ。唐書、禮樂志「始禁ーーレ」

【鞭罰】ベンバツ むちうち罰する。北史、魏南安王傳「鄴城有二石季龍腳一人牽二紀之一、指告レ像云、三日不レ雨、當レ加ーーー」諸レ雨不レ驗、遂鞭レ像一百」

【鞭朴】ベンボク ○鞭は官吏を罰するむち、朴は學生を罰するむち。疑典「鞭作二官刑一、朴作二教刑一」○ひろくむちうつ刑。晉語「薄刑用ニーー」威レ民也」＝笞刑。

【鞭ノ笞ノ風】ベンチノフウ 仙人が鳳凰にむちうち、之に乘りて行くをいふ。韓愈詩「上界眞人足二官府一、遨如二散仙騎一笞鳳一、終日相追陪」裘萬頃詩「ーーー日相陪」

【鞴】ボウ 尤

鞴と同じ。鞴ーはかぶと（首鎧）＝鍪鞴兜鍪。

十畫

【鞵】カイ アイ 佳 灰

○くつ、かはぐつ（革鞮）底は麻糸を用ひたる革ぐつ。＝鞋（革部六畫）○圖わらんぢ「芒ーー」【鞵底】ティくつのした。＝鞋底。【鞵鞋】ティくつと、たびと。唐書、儀衛志「皆有二行纏ーーー」＝鞋鞵。

【鞹】コウ　尤　又、鞹に作る

○ゆごて（臂捍）弓を射る時、左の臂につける革製の具（臂衣）「射―」○ふいがう（韝）

【鞄】ホウ　合

鞄―は鐘鼓の聲。蘇軾、石鐘山記「寂坎鏜―者、魏獻子之歌鐘也」

【鞶】ハン　寒

○おほおび、革製の大帶、朝廷より賜はる。易、訟卦「或錫之―帶」左、莊二二「玉以庇之」「鏡―之」（「鏡」はかがみを以て飾りし大帶）○こぶくろ、手巾などを入れる小嚢。禮、內則「男―革、女―絲」

【鞴】ビ　寘　又、韝・鞴に作る

ふいがう、ふいご、革の袋より風を出して火をおこす具「鞴―」＝橐籥風櫃

十一畫

【鞹】クヮク　藥　又、韓に作る

つくりがは（革）毛を去りし皮。論、顏淵「虎豹之―、猶犬羊之―」

【鞾】シ　紙　寘

かはぐつ（革履）說文「靿屬」俗に靴に作る。

【鞲】タフ　陽　又、韜に作る

鞜―は鐘鼓の聲の形容。

【鞸】（二八〇頁四段）に同じ。

十二畫

【鞿】キ　微

○きづな、おもがい、馬のきづなの口に在るもの（頭を絡ふを羈といふ）○轉じて束縛をうける「絆―」「脫―」

【以レ靴面御二馳突一】きづなにてあれうまを制御する。馳突は惡馬。輕き刑罰を以て、奸兒を制するに喩ふ。漢書、刑法志「今漢承二衰周暴秦極弊之流俗一已滑於三代一、而行二輕易之刑一、是猶三以レ靴而御二馳突一」

【鞾】ヤ　馬のきづな。顏延之賦「旣剛且淑、服二―一今」字解參看。

【鞹】キ　クヮイ　灰　置

○ぬひとりせしかは（繡革）○盾をとぢて飾る革。○をる（折）をれくじける。淮南、原道「堅強而不―」註「―、折也」

【鞹厲】なめしがはにて綴ぢ鎧の如く飾れるたて。齊語「輕罪贖以二―一戟一」

【鞾】クヮ　麻

くつ、かはぐつ。晉書、劉兆傳「著―騎驢」＝靴。

【鞒】㊀ケウ　㊁キャウ　㊀篠　㊁蕭

㊀そり。橇（九八五頁一段）に同じ。㊁わらぐつ。屩（五三六頁一段）に同じ。

【鞴】ボク　屋　沃

○髮を絡ふ。○はなづな。牛頭を絡ふ繩。

十三畫

【鞨】カツ　曷　又、靺に作る

靺―は北方部ち今の蒙古地方の野蠻人の名、鞨（革部九畫）を見よ。

【韁】キャウ　陽　又、繮に作る

○きづな、はづな、馬を束縛して制御するつな。＝絆。○轉じて束縛の義とす、世の中のほだし。次の熟語參看。

【韁鎖】韁は馬を制し止めるきづな。鎖はとざしつなぐ。以て他の束縛を受ける義とす。漢書、敘傳「貫二仁義之韁紲一、繫二名聲之一一」白居易詩「身去―累、耳鮮朝市喧」

【鞫】シク　沃　又、鞠に作る

ゆぶくろ（弓衣）戰國策「因罷二兵倒一而去」

【鞭】セン　先

したぐら、あふり。＝繕。

【韃】タツ　曷　通音ダツ

―靼はタルタリーは今の蒙古地方のえびすの部落、もと靺鞨の別部、唐の末に始めて其の名を見はす。

十四畫

【韄】アク　クヮク　陌　麥

○かたなのさけを、佩刀の飾絲（刀緡）○つかぬ、しばる（束縛）皮にて物をかたくしばる。

莊、庚桑楚「夫外ー者不可ー繁」（外とは耳目の欲を謂ふ）

【鞦】ケン　銑

おもづら。絡頭より馬背に及ぶ革。左、僖二八、註「在ー背曰ー、在腹曰鞅」

【鞦韆】ブラン　事をひく牛馬の背につけるほだしと、腹につけるむながいとの左、僖二八「晉車七百乘、ー韅靷」

十五畫

【鞦】セン　先

鞦ーはぶらんこ、鞦（革部九畫）を見よ。

【韇】トク　屋

○めどぎづつ、箙竹を藏める器。○弓矢を入れるつつ（箭筒）「一丸」ㇾ胡鹿。

【鞨】ベツ　㊀鞨の俗字

たび（足袋）したぐつ、したうづ。韓非、外儲說「文王ー絜解、因自結」

十七畫

【鞹】カク　藥

○なめしがは（柔皮）皮の毛を去りしは革、革を熟治せしは韋。ㇾ熟皮。○なめしがはの如く柔か。屈原、卜居「如脂如ー」（佞諛の巧みを脂ーといふは此に本づく）○そむく（相背）ㇾ違。○依ーはやはらぎて乖かず、諧和して相乖離せず。○かこひ。圍に通ず。漢書、成帝紀「大風拔甘泉時中大木十ー以上」

【鞹】セン　先

したぐら、鞍下の被「馬ー」「蒲ー」「鞍ー」北史「織草爲ー」

廿一畫

【鞾】ラン　㊀　又、韈に作る

えびら。大いなる弓矢をいれる箙ㇾ藏ㇾ弩矢を藏める服ㇾ今の胡籙の如くにして短し。

【韇矢】えびらに入れたるや。史、平原君傳「平原君負ー矢、遶二公子一先引」ㇾ矰矢。

韋部

【韋】キ　微

【韋弦之佩】韋弦之佩を見よ。

【韋應物】唐の長安京兆の人、玄宗に仕へ、蘇州の刺史となり、惠政多し、韋蘇州と稱す、性高潔常に地を掃ひ香を焚きて靜坐す、詩は其の人の如し、世に王孟韋柳と稱す。

【韋革】○なめしがはと、つくりがはと。○なめしがは。漢書、注「以ニー一爲二柔宪一」

【韋曲】長安の地名、唐時、韋氏此に居る、故に名つく、樊川第一の名勝の地。杜甫詩「ー花無賴」韋杜參看。

【韋玄成】字は少翁、漢人韋賢の子、元帝の朝、相に拜し侯に封ぜらる、父子俱に明經を以て相に至る。漢書、韋賢傳「少子玄成字少翁、好學修父業、尤謙遜下士、復以ニ明經一位至二丞相一、故鄒魯諺曰、遺二子黃金滿籯一、不ㇾ如ニ一經一」

【韋弦之佩】韋はなめしがはにて柔かなるもの、弦は弓づるにてきびしきもの、之を身に帶びて己の氣質を矯に、身を修むる戒とす。韓非、觀行「西門豹性急、故佩ㇾ韋以自緩、董安于性緩、故佩ㇾ弦以自急」ㇾ佩韋・佩弦。

【韋韝】かはのゆがけ。李陵文「ー一ー韝、以禦ニ風雨一」

【韋袴布被】なめし皮の袴をはき、布の衣を著る、貧士のさま。後漢書、祭遵傳「遵爲ㇾ人廉約、克ㇾ己奉ㇾ公、賞賜盡與ニ士卒一、家無ニ私財一、身衣ニ韋袴布衣一、夫人裝不ㇾ加ㇾ綵、帝以ニ是重一ㇾ之」

【韋莊】字は端己、唐末の京兆杜陵の人、乾寧元年の進士、中原多故なるを以て王建に蜀に依り、掌書記となる、建の帝を稱するに及び、其の相と爲る、性疎曠、小節に拘らず、著すところ浣花集十卷補遺一卷あり、其の詩音節頗る高古、且つ詞に工なり。

【韋柔】なめしがはの如くやはらか、軟弱にして人にさからはざる。唐書、關播傳「盧杞雅知ニ播ー一可ㇾ制、因從容言、播材性ニ韋柔一」

【韋帶】ひとへのなめしがはのおび、貧賤の人の用ふる物なきおび。漢書、賈山傳「布衣ー之士、修ニ身於內一、成ニ名於外一」

【韋駄天】佛法守護の神、八大將軍の一、武裝して金剛杵を捧ぐ、犀王、佛舍利を求めて逃ぐ、此神追躡して之を取りかへす、故に俗に疾く走る者に喩ふ。ㇾ韋天將軍。

【韋杜】唐の時、韋氏、杜氏、世世望族たり、韋氏居る所を韋曲といひ、杜氏居る所を杜曲といふ。皆長安咸寧縣の南に在り。辛氏三秦記「城南ー一、去ニ天尺五一」とちうは其の極めて高貴なる形容。

【韋布】韋帶布衣の略、貧賤の服裝。司馬相如、報ニ文君一書「五色有ㇾ據

而不ㇾ捲ニ一ㇾ」【韋編三絕】（ヘンサン）古の書物は竹簡をなめしがはにて綴ぢ、其の韋（ヘイ）が幾度もたちきれるは、書を讀むことの甚だ頻繁なるにいふ。史、孔子世家「孔子晩而喜ㇾ易（中略）讀ㇾ易ニ——一」

三畫

【韌】 ジン　眞　又、靭に作る

しなやか。柔かにして固し「柔ニ——一」「強ニ——一」【韌帶】（ジンタイ）靭帶（三一七二頁三段）に同じ。

五畫

【韎】 バイ　隊　キ　未　バツ　曷

○あかねぞめのかは。○ー鞨（バツカツ）は西域染の草のひざかけ。詩、小雅「ー鞨有ㇾ奭」○ー樂は東夷の樂の名。韎に同じ。【韎韐】（バツカツ）あかねぞめのなめし皮にて造りたる戎服のひざかけ。左、成十六「有ニ——之甲注ニ君子也」（靺注は袴の類）

【靴】 と　薬　ヘツ　屑

ゆみだめ、ゆだめ、付にて作る（弓部）

【靺】 フツ　物　曷

○ひざかけ（韐）革にて作りし蔽膝（ヘイシツ）にて古の祭服に用ふ。もと市に作り、或は芾（フツ）・紱に作る。○くみひも（組）「聖ニ——一」

六畫

【鞨】 カツ　陷　合

韎ニ——一（バツカツ）は草の蔽膝。韎（本頁一段）を見よ。

八畫

【韓】 カン　寒

○ゐけた（井の垣）○國名、戰國時代の諸侯。今の河南省の中部、及山西省澤潞地方の地、後、秦に滅ぼさる。○もと朝鮮南部の地、卽ち古の三ー一の地、李氏に至りて朝鮮の總稱とす。○姓「ー愈」「ー琦」【韓娥】（カンガ）古の歌伎の名。列、湯問「昔ー——東之ㇾ齊、匱ㇾ糧、過ニ雍門一、鬻ニ歌假ㇾ食、既去、而餘音繞ニ梁櫨一三日不ㇾ絕」【韓海蘇潮】（カンカイソチョウ）韓愈の文は汪洋として海の如く、蘇軾の文は波瀾ありて潮の如しとの評語。丹鉛錄「李耆卿評ㇾ文云、韓如ㇾ海、柳如ㇾ泉、歐如ㇾ潮、蘇如ㇾ潮」【韓幹】（カンカン）唐の玄宗の臣、善く人物を寫し、尤も鞍馬に巧なり、帝詔して陳閎を以て師とせしむ、幹從はずして曰く、臣には自ら師あり、陛下の內廐の馬は、皆臣の師なりと。【韓琦】（カンキ）宋代の賢相、字は稚圭、相州の人、范仲淹と並稱せられ、名一時に重し、仁宗の朝、相となり、治績大いに顯はる、魏國公に封ぜらる、神宗の熙寧八年歿す、忠獻と諡せられ、後、魏王に追封せらる。‖韓親公。【韓魏】（カンギ）韓氏と魏氏と、春秋時代、晉の六卿中の富める者。轉じて富貴の家の稱とす。孟、盡心「附ㇾ之以ニ——之家一、如ニ其自視欿然一、則過ㇾ人遠矣」【韓信】（カンシン）漢の高祖の功臣、蕭何・張良と合せて三傑と稱せらる、攻城野戰の功最も高く、楚王に封ぜらる、後、叛を告ぐるものあり、淮陰侯に貶せられ、高祖の十一年、呂后の爲めに殺さる。【韓杜】（カント）唐の韓愈と、杜甫と。門戸新語「韓以ㇾ文爲ㇾ詩、杜以ㇾ詩爲ㇾ文、世傳以爲ㇾ戲、然文中要ニ自有ㇾ詩、詩中要ニ自有ㇾ文、亦相生法也」【韓伯愈】（カンハクユ）漢代の孝子、伯愈性至孝なり、時に過ありて、母之を杖てば、則ち大いに泣く、母曰く、他日汝を杖ちしに、汝悲びて之を受けしが、今日汝を杖つに何爲ぞ悲泣すると、伯愈曰く、往者杖を受けしに、常に痛めり、因りて以て母の康健なるを知れり、今や痛まず、母の力の衰ふるを知る、是を以て悲泣すと（漢書）愈、一に兪に作る。【韓范歐蘇】（カンハンオウソ）北宋の名臣、韓琦・范仲淹・歐陽修・蘇頌の四人。【韓非】（カンピ）戰國の時の韓の公子、刑名法術の學を喜む、李斯と共に荀卿に學ぶ、後、秦に使して拘へられ、李斯の爲めに毒殺せらる。次條參看。【韓非子】（カンピシ）書名、二十卷、周の韓非撰す、もと韓子と稱す、宋以後、非の字を加へて韓愈（文公）と別つ、其の說、刑名を主とす。【韓文】（カンブン）唐の韓愈の文。舊唐書、韓愈傳「當時作者甚衆、無ニ以過ニ乎之、故世稱ニ——一焉」【韓愈】（カンユ）字は退之、唐の鄧州南陽の人、其の文深く本原を探り、固深奧衍、後世の宗とする所たり、卒して文と謚し、昌黎伯に追封せらる、昌黎文集五十卷あり。【韓柳李杜】（カンリュウリト）唐代の文學者、韓愈・柳宗元・李白・杜甫の四人。韓・柳は文に長じ、李・杜は詩に長ず。【韓魏】（カンギ）戰國時代の韓國の俊犬の名。戰國策「以ニ卒之勇、重騎之

多ク以テ二諸侯一、騎猫ヲ關ニ一一而搏ツ雞兎ヲ也」

【韓】カン　同　かはつくり、つづみつくり、皮を攻ムる工人「一人」＝轉。

【韃】セフ　異　或は蹀に作る　ゆがけ（射決）弓を射る時、右の巨指にはめるなめし皮製の袋。詩、衛風「童子佩ー」

十畫

【韈】ベツ（前條）に同じ。

九畫

【韉】キ　尾　轡に通ず　よし（是・善）左、隱十一「犯ニ五不ー」

【韔】チャウ　深　○ゆみぶくろ（弓衣）「弓ー」○弓袋に入れる。つつむ（韜）詩、小雅「言ー其弓」＝弢。

【韋】ヰ　○なめしかわ。○よりしたがう。○めぐる。○とりまく。○そむく。○ほしいまま。○やわらか。○姓。

【韌】ジン　軫　○しなやか。○ねばり。○つよい。

【韎】マツ　曷　○東夷の樂。○赤黄色。

【韓】カン　寒　○國名。○姓。

【韜】タウ　豪　○つつむ（裹）○かきいろ、赤と黄との間色。○ゆみぶくろ（弓衣）○をさむ、かくす（藏）「ー藏」論、子罕「有ニ美玉一於斯ー匱而藏諸、求ニ善賈一而沽諸」

【韜晦】タウクワイ　光をつつみかくす。晉書、陸機傳「漱ニ流而激ニ其清一、藏ニ巢而ニ其精一」＝韜光。

【韜奇】タウキ　すぐれたる才能をつつみかくす。抱朴子「應侯ー二於潤資一」

【韜弓】タウキウ　○弓を袋に藏めて用ひず。○ゆみぶくろ（弓衣）

【韜晦】タウクワイ　○才德をつつみくらます。唐書、宣帝紀「無事ニーー二五色絲一」李密平九歳、賦ニ長歌一、傳寫者莫レ不ニ稱賞一、張九齡見而歎レ之曰、早得ニ美名一、必有レ所レ折、宜ニ自ーー一」＝韜藏。○うすぐらし。宋書、張充傳「家貧ーー、涼居未レ平」

【韜光】タウクワウ　○光を藏して外にあらはさず。孔融詩「美玉ーレー」○轉じて才德をかくして人に知らしめず。晉書、嵇康傳記「但時來之運未ニ至一、故ーレー俟レ斯耳」＝韜晦。

【韜鈐】タウケン　弓袋と、矛の柄と。古、兵法の書に、六韜と、玉鈐篇とあり。故に轉じて兵法の義とす。張說詩「禮樂逢ニ明主一、ーー用ニ老臣一」（兵法家を韜鈐家といふ）

【韜藏】タウザウ　才德をくらましかくす。歐陽修、仲君文集序「ーー掩抑、久伏而不レ顯」＝韜匿。

【韜日】タウジツ　日光をつつみかくす。陸游詩「薄雲ーレー不レ成レ晴」

【韜精】タウセン　つつみかくす。かくれひそむ。張仲素、霍賦「或廢棲而藏作、或滅沒而ーー」＝韜藏。

【韜筆】タウヒツ　筆を藏めて用ひず、書くことをやめる。晉書、王接傳「謝ニ世之士、館ニ口ーレー」＝廢筆。

【韜表】タウヘウ　上表の文をつつむ。唐書、李俊光傳「以レ蠟ーレー」

【韜面】タウメン　かほをつつみかくす。後漢書、姜肱傳「肱與ニ徐卿一俱徵不レ至、桓帝乃下ニ彭城一、使ニ畫工圖ニ其形狀一、肱臥ニ于幽閣一、以レ被ーレー、冒盛暑疫疾、不レ欲ニ出風一、工竟不レ得レ見レ之」

【韜略】タウリヤク　○兵法の書、六韜と三略と。○轉じて兵略の義とす。崔日用詩「胸藏能允迪、ーー又縱橫」

【韝】カウ　肴　ふいごう、火を吹きて熾んならしめる韋囊（フクロ）＝鞴。

十一畫

【韡】ヰ　尾　ひざかけ、窄（ナハ）の蔽膝（カケ）古、朝服に用ふ。＝韠・韍。

十二畫

【韓】ヒツ　質　ひざかけ、窄（ナハ）の蔽膝（カケ）古、朝服に用ふ。＝韠・韍。

あきらか、さかんなり、華の盛んなる貌。光明ある貌。

【韓煌】ケイ 盛んに明かなる貌。張華、感婚詩「――衆規整、於レ我猶若レ常」‖煌煌。

【韓韓】ケン 華の盛んなる貌。又、光明ある貌。詩、小雅「常棣之華、鄂不二韡韡一」

【韓曄】ヨウ ひかりかがやく貌。曄一に煜に作る。曹植詩「車服齊整設、―韓二天精一」

十三畫

【韜】トク 屋 ショク 沃 同じ

ゆみぶくろ、ゆぶくろ（韜）禮、少儀「弓則以左手「屈」―執レ拭」‖弓衣。

十五畫

【韈】ベツ 曷 紱の正字

たび（足衣）左、哀二五「褚師聲子―而登席」（古、君に見えるには―を解くを禮とす）‖襪。

【韈線】ベツセン オの短きに喩ふ。太平廣記、朝譚「僞劉韓昭、仕二王氏一爲二禮部尚書一脱文殿大學士、粗有二文章一、至二於蒙書算射法一悉皆涉獵、以レ此承レ恩於後主一朝士李台瑕曰、韓八座之藝、如レ析二―一無二一條長一」俚言にも出づ。‖襪線。

韭部

【韭】キウ 有

○にら、細長き葉を有して叢生する一種の葷菜、秋小白花を著く、莖葉を食用とす。杜甫詩「夜雨剪二春―一」曲禮「一曰―豐本」‖嫩人菜。○鹿―は牡丹の異名。

【韭黄】キウワウ にらの根の黄なるところ、最も美味とす。本草「韭根名二―一、韭之美在レ黄、家貴皆珍レ之」陸游詩「雞跖宜二瘟白一、豚肩雜二―一」

四畫

【韮】韭（前條）に同じ。

「一菹」

十畫

【韲】齏（二三四七頁四段）に同じ。

【韲】セイ サイ 霽

○あへもの、野菜類などをこまかくきざみて辛カラき類を入れまぜたる食品。○轉じてまぜる、混和する。莊、知北遊「以是非相―也」

音部

【音】㊀イン・オン ㊁イン・ナン 侵 庚

㊀こゑ、おと、ね。詩經、序「情發於聲、聲成文、謂之―」○おんがく（聲樂）八―は金石・絲竹・匏・土・革・木。○ふし、てうし、ひびき（聲文）○文字の讀みごゑ。訓の對。○詞章、言語。詩、小雅「金玉爾―」○おとづれ「―信」㊁かげ。古、蔭に借用す。左、文十七「鹿死不擇―」

附考 上部は二に從ふ、俗に亠に從ひて音に作るは非。

【音物】インモツ おくりもの。‖進物。

【音訓】インクン ○おと、ねいろ。白居易詩「蜀琴本性冥、楚絃――清」○文字の音と訓と（平・上・去・入の四聲の別）訓（音部十畫）參看。

【音耗】インカウ おとづれ。耗は消、消息の義（說文通訓定聲）因話錄「皆無二―一」‖音信。

【音樂】インガク 樂器の音を歌に合せ、面白く人心を樂ましむるものの總稱。吳志、周瑜傳「瑜少精二意―一」‖音曲。

【音學】インガク 音韻に關する學問「―五書」は清の顧炎武撰す、音論・詩本音・易音・唐韻正・古音表に分つ。

【音技】インギ 音樂のわざ。漢書、杜欽傳「太子即レ位、皇太后詔采二良家女一、欽因說二大將軍鳳一曰、將軍宜下擇二有レ行レ義之家一求中淑女之質上毋レ必レ有二聲色一―一爲二後世大法一」

【音義】インギ 音訓に同じ「一切經―」は一百卷、唐の釋慧琳撰す。

【音聲】インセイ ○おんと、ひびきと。傅休奕賦「昔我與二君兮一、―相和」○ひびき。古詩「上有二絃歌聲一、―何悲」

【音曲】インキョク ○音樂のふし。曲は樂曲。○音樂。論衡「―妙者、和者則寡」

【音訓】インクン 文字の發音と意味と。晉書、徐邈傳「邈撰二正五經―一、學者宗レ之」‖音義。

【音叉】インサ 物理學にて音の調子を計る具、鋼又は鐵にて製しU字形をなして柄を有し、一定の振動數の音を發するもの。

【音信】インシン ことばのむね。崔顥詩「此鄉多二離俗一、戎夏殊二―一」

【音字】インジ 一字一音をあらはすのみにて何の意味をも有せざるもの。我國の假名、西洋のアルファベットの類。義字の對。‖音標文字。

【音辭】インジ ことば。晉書、裴緯傳「善言二玄理一、―清暢、冷然若二琴瑟一」南史、徐湛之傳「湛之善尺牘、―流暢」‖

言辭。

【音信】インシン　おとづれ。沈約詩「若欲ㇾ寄ニ一ニ一、漢水向ㇾ東流」‖音問・音耗。

【音信斷】インシンタン　おとづれが絶える。李白、大隱曲「不ㇾ見ニ眼中人一、天長ニ――一」

【音訊】インジン　おとづれ。元稹詩「故交ニ一少、歸夢往來頻」‖音問・音信・音耗。

【音書】インショ　おとづれの手紙。宋之問詩「嶺外ニ一斷、經ㇾ冬復歷ㇾ春」‖消息・信書。

【音色】インショク　ねいろ、高さと強さとの外に發音體の種類及形、大小などによりて異るねいろ。

【音聲】インセイ　おと、こゑ。周禮、鼓人「掌ㇾ教ニ六鼓四金之ニ一ニ」‖聲音。

【音石】インセキ　磬石をいふ。異字記「廣漢有ニ音石山一、九州要記云、此山ニ一ニ、天下無ㇾ加、可ㇾ爲ㇾ磬」

【音塵】インヂン　おとづれ。陸機贈「紹ニ一ニ一於江介一詩「影響乎洛濱」‖消息。

【音程】インテイ　二つの樂音の高さの隔り即ち其の振動數の比。‖音比。

【音調】インテウ　○音樂のふし。○詩文又、語音の調子。

【音吐】インド　ものいふこゑ、語音。南史、齊豫林王傳「少美ニ容止一、遒退ニ一ニ、甚有ニ令譽一」

【音吐朗暢】インドロウチャウ　音聲がはきはきとしてのびる（宋史、王沔傳）‖音吐

洪亮。

【音頭】インドウ　國數人同時に歌ふ時、其の中の一人、先づ發聲して全體の調子をそろへるをいふ。又、其の人「ニ一取」

【音與政通】インヨセイツウ　音樂と政治とは互に相關係する。禮、樂記「治世之音、安以樂、其政和、亂世之音、怨以怒、其政乖、亡國之音、哀以思、其民困、歷音之道、與ㇾ政通矣」

【音波】インパ　物の音響が之に接觸せる空氣の波狀に傳りゆく振動。其の波動が耳に入りて音の感覺を生ず。

【音博士】インハカセ　國王朝時代に於ける大學の教官。漢吳音の教授を掌る。

【音八】インパチ　音樂に用ふる八器、即ち金・石・絲・竹・匏・土・革・木の稱。白虎通「歷五音八何、辨ㇾ吉ニ凶一、生ニ于五行一、音ㇾ來、象ニ八風一」

【音便】インビン　國語調の便宜によりて其の音を變へてよぶをいふ「書きて」を「書いて」、「讀みて」を「讀んで」とする類。

【音符】オンフ　樂譜に用ふる各音の高低長短を示す符號。

【音符文字】オンフモジ　音字に同じ。

【音問】オンモン　おとづれ。韓愈詩「遠道州人一遞ニ一ニ」‖音訊・音信。

【音標文字】オンピョウモジ　音字に同じ。

【音容】オンヨウ　こゑと、かたちと。おもかげ。（謝靈運詩「歷塗寓二斗日一、歌笑ニ一ニ」）‖音律　○音の調子。漢書、武帝紀贊「協ニ一ニ作ニ詩樂一、爲ニ封禪一、體ニ百神一」‖音調。○音樂。晉書、阮咸傳「咸妙解ニ一ニ、善ニ琵琶一」

四畫

【韵】ヰン　讀（次頁一段）に同じ。

五畫

【韶】セウ　新

○虞舜の作りし樂、能く堯の道を紹ぐ意「簫ニ一」論、八佾「子謂ニ一」○つぐ（紹・繼）○うつくし（美）うらら「ニ光」「ニ華」

【韶運】セウウン　太平の世のまはりあはせ。潘尼詩「碧雲感ニ一ニ」

【韶音】セウオン　虞舜の音樂。韶は紹、堯の德を紹ぐ意。史、孔子世家「孔子適ㇾ齊（中略）聞ニ一ニ一、學ㇾ之三月、不ㇾ知ニ肉味一」

【韶氣】セウキ　春の美くしき氣。宋之問詩「源園ニ一早、開ㇾ簾延ニ晉天一」‖韶景・韶光。

【韶暉】セウキ　あきらかにかがやく。あきらかなるひかり。皮日休詩「半甸飄ニ一ニ」

【韶華】セウクワ　○春ののどかなるけしき。韓維詩「迎ニ得ニ一ニ入ニ中禁一、和風次第扇ニ神州一」‖韶光。○轉にてわかきよはひ、青年の時代。白居易詩「勿ㇾ欺ニ一子、飛成ニ鐵叟仙一」

【韶光】セウクワウ　韶は美、春のうつくしけしき。唐太宗詩「ニ一開ニ令序一、淑氣動ニ芳年一」‖春景・韶華。

【韶景】セウケイ　春ののどかなるけしき。梁元帝詩「要ㇾ春景日ニ一ニ」‖韶光・韶氣・春景。

【韶筦】セウクワン　才智あきらかにしてさとし。唐書、上官昭容傳「天性ニ一、善ニ文章一」‖聰穎。

【韶濩】セウクワク　○殷の湯王の樂、韶は紹、其の德、大禹に繼ぐ義。韓愈、上ニ襄陽于相公一書「正聲譜ニ一ニ」‖大濩。○韶は虞舜の樂、濩は殷の湯王の樂。

【韶武】セウブ　韶は虞舜の樂、武は周の武王の樂。論、八佾「子謂ㇾ韶、盡ㇾ美矣、又盡ㇾ善也、謂ㇾ武、盡ㇾ美矣、未ㇾ盡ㇾ善也」

【韶舞】セウブ　舜帝の作りし韶の樂を奏し舞ふ。論、衛靈公「樂則ニ一、放ニ鄭聲一、遠ニ佞人一」

【韶則】セウソク　美くしくあきらか。陳書、世祖紀「親祠ニ南郊一、詔曰、雲物ニ一、風景清和、慶動ニ人祇一、忭流ニ庶僉一」

【韶和】セウワ　うつくしくやはらぐ。玉樂、磬寒鐘銘「表歷ニ一、民聽以睹」

十畫

【韻】ウン　キン　圓　又削に作る

○ひびき、音の末尾のひびき、てうし、聲音の和するをいふ。文心雕龍「同聲相應謂之一」○おもむき、やうす（風致）○漢字を其の發音のひびきによりて、平・上・去・入の四聲に別ち、更に之を現在通行の一音（清の毛奇齡に始まる）にて一百六に類別せしものの稱、即ち平聲は之を上平・下平に二分し、上平は東・冬・江・支・微・魚・虞・齊・佳・灰・眞・文・元・寒・刪の十五、下平は先・蕭・肴・豪・歌・麻・陽・庚・青・蒸・尤・侵・覃・鹽・咸の十五、上聲は董・腫・講・紙・尾・語・麌・薺・蟹・賄・軫・吻・阮・旱・潸・銑・篠・巧・皓・哿・馬・養・梗・迥・有・寢・感・琰・豏の二十九、去聲は送・宋・絳・寘・未・御・遇・霽・泰・卦・隊・震・問・願・翰・諫・霰・嘯・效・號・箇・禡・漾・敬・徑・宥・沁・勘・豔・陷の三十、入聲は屋・沃・覺・質・物・月・曷・黠・屑・藥・陌・錫・職・緝・合・葉・洽の十七一に分つ。○みやび（風雅）詩賦・歌曲などの風流なること「一事」○詩賦・歌曲。陸機、文賦「或託二言於短一而韻長一」

【韻字】ウンジ　すぐれたるやうす、人品。王儉、褚淵碑文「一一弘深、喜慍莫レ見」日風度・韻度。

【押レ韻】オウインフ　詩の韻をふむ。押韻（七三頁三段）を見よ。

【探レ韻】タンインフ　數人相集まりて詩を作る時、各其の韻字を求め、其の得たる韻字にて詩を作る。韻筮を見よ。

【次レ韻】シインフ　次韻（九九八頁三段）を見よ。

【勒レ韻】ロクインフ　詩を作るに押する、韻字を定めて移易せざる義。唐詩紀「王湾罷生殷陽レ宰、同勒二矣・前・短一年四韻一應レ制五言律詩」

【和レ韻】ワインフ　和韻（三二一頁三段）を見よ。

【韻學】インガク　音韻を研究する學問。

【韻鏡】インキョウ　一卷、著者未だ詳かならざれども、唐末の作たるは疑ひなし、開轉清濁四聲七音等の音韻を明かにするを以て主とす、故に鏡といふ。其の音韻圖は、第一轉に始り、第四十三轉に終り、毎轉字音の問合の則を立つ、音韻の學を爲す者の必讀書とす。

【韻脚】インキャク　詩賦の句末に用ふる韻。能改齋漫錄「唐開元二年、王邱知二貢舉一試二詩賦一、始有二八字一一、即風・日・雲・野・軍・國・清・聲八字也」

【韻語】インゴ　韻をふみたる文章、即ち詩賦の類、有韻の文。南史「臨川王義慶招二集文士一、何長瑜以二一一序二義慶州府僚佐一語薄二戲慢一、坐レ是貶謫」

【韻士】インシ　風流なる人、風韻ある士。日雅士・風流士。

【韻事】インジ　風流のあそび、詩歌書畫などの遊「風流一一」

【韻書】インショ　字書の韻字にて分類せしもの。五車韻瑞・佩文韻府など。

【韻籤】インセン　韻字を記したる小さき札。此の札を箱に入れ、みくじの如く振り出したる韻にて詩を作るを探韻といふ。

【韻致】インチ　風流なるおもむき。日風致・風韻・雅致。

【韻度】インド　韻字に同じ。世說「阮渾長成、風氣一一似レ父」（長成は渾の字）日風度。

【韻府一拾】インプイシュウ　十六卷、清の顏世功、佩文韻府に據り、二字より七字に至るまでの語を集む、詩韻含英と同じく、作詩家の必携書。

【韻府羣玉】インプグンギョク　二十卷、宋の陰時夫撰す、故實詞藻を摘錄して各韻の下に繫す、類書の韻を以て事を繫するものは、此書に始まる。

【韻文】インブン　一定の韻字を句末に用ひて聲調を調へたる文章、即ち詩賦の類、散文の對。

十三畫

【響】キョウ　養

○ひびき、こゑ、震ひ動く音「音一」「清一」「餘一」○さしひびき「影一」○俗に聲の高きものをいふ。○ひびく、ひびきを發せしむる。南史「震一山谷」

【響應】キョウオウ　響の聲に應ずるが如く、速に其の人に應じて來り從ふ。史、淮陰侯傳「天下風走而一一矣」

【響石】キョウセキ　音響に應じてひびきを發する石、江西省南豐縣に在り。輿地紀勝「縣東十五里、有二巨石一臨レ路、高百餘尺、其上平坦、可レ容二數百人一、往二來其旁一者、笑語高低、應答如レ響」

【響箭】キョウセン　矢の鳴るもの。鏑、流星、注「鳴矢、矢之鳴者、俗稱二一一」日鳴矢。

【響卜】キョウボク　○物のひびきにて吉凶を占ふ。撫宮、翠相公及第年、夜聽二一一二○除夜人の語を聽きて吉凶を占ふ、辻占ウラ「曲洧舊聞」

【響遏二行雲一】キョウアツコウウン　歌聲の美妙なるを稱す。列、湯問「薛譚學二謳於秦青一、未レ窮二青之技一、自謂盡レ之、遂辭歸、秦青弗レ止、餞二於郊衢一、撫レ節悲歌、聲振二林木一、響遏二行雲一、薛譚乃謝求レ反、終身不二敢言一歸」日謳雲曲。

十四畫

【韞】ウン　問

大ーは殷の湯王の樂の名。‖大濩。

頁部

【頁】 ケツ 屑

○かしら、かうべ（頭）○書物の紙の片面。又其れを數へる數詞、ページ（英語）○國おほがひ（大貝）宇書上の語。

【頁岩】ケツガン 地質學上の名詞、一名泥板岩、岩石の軟板狀を爲すもの、黏土の凝固して成り、灰色又は黑色を帶ぶ、砥石、又硯石として用ふ。

三 畫

【頃】 ㊀ケイ・キャウ 梗 ㊁ケイ 紙 庚 ㊂キ

㊀田百畝の稱「二ー田」後漢書「叔度汪汪若千ー陂」○しばらく（少時）「俄ー」「食ー」「一ー刻」荀、性惡「天下悖亂而相亡不待ー矣」（一之は、しばらくありてと讀む）○このごろ（比時）「一者」「一日」王羲之、十七帖「一積雪凝寒」㊂かたむく。頭が正しからず。‖傾。㊂かたあし（半步）「一步」‖跛頭。

【頃筐】ケイキャウ 口の傾きゆがめる籠。詩、周南「采ー采卷耳ニ不ー盈ニーー」‖敧筐。

【頃刻】ケイコク しばらく、少しのあひだ。蘇軾、雪詩「天巧能開ーー花」

【頃者】ケイシャ このごろ、ちかごろ。後漢書「ーー羣盜、至ー爲ニ園林翦牧之處ニ」胡銓、上高宗封事「只如ニーー醜虜陸梁」

【頃步】ケイホ かたあし、半步。禮、祭義「君子ーー而弗ニ敢忘ニ孝也ニ」‖跬步・蹔步。

【有ー頃】ユウケイキャウ 少時にして、やがて。史、張儀傳「ーー而病」‖有ー間・爲ー間。

【頃】 テイ ケイ 迥

○いただき（頭）頭の最上部。○轉じて物の最高所、てっぺん「山ー」「屋ー」「一上」「絕ー」○いただく（戴）頭の上、又物の上に置く。○國ーは髮を剃りたる出家をいふ。○さからふ、風に逆ひて船を行るをー船といふ。○國いただく、物をもらふ敬語、賜はる。

【然ー頂煉ー臂】ネンチャウレンピ 佛に祈る者は、油燭を以て頂を燃し、臂を燒く。宋史、徽宗紀「大觀四年二月庚午朔、禁ニーー・刺ー血・斷ー指ー」

【頂好】チャウハウ 國最上の義。

【頂光】チャウクワウ 國佛の頂より放つ圓光。大阿彌陀經「踏佛ーー」

【頂上】チャウジャウ てっぺん、いただき。‖頭上。

【頂戴】チャウタイ いただきと、かかとと。孟、盡心「盡子衆愛、譬ニ頂放ニ踵、利ニ天下ニ爲ニ之」任昉文「自ニ頂至ニ踵、功陶ニ造化ニ」

【頂戴】チャウタイ ○敬ひて頭にいただく。梁武帝文「ーー奉持、終不ニ捨離ニ」○清朝にて官吏の等級を示す爲めに、帽子の頂につける珠玉の名、珊瑚・寶石・水晶・硨磲などの別あり。○國いただく、物をもらふ敬語。

【頂肘】チャウチウ 首を下げてをがむ。梁簡文帝文「ーニ金山ニ踰ニ依月面ニ」

【頂棚】チャウホウ 國天井。

【頂門金椎】チャウモンキンツイ 頭上を鐵槌にてうつ、痛切に警醒せしむる義。黃庭堅詩、「頂門須ニ更下ニ金椎ニ」

【頂門一箴】チャウモンイツシン 頭上に一本の針をさす、箴一に針に作る、人の急所を抑へて痛切なる戒を加ふる義「蘇軾、荀卿論、王道篇評」‖頂門金椎。

【頂禮】チャウライ 國古、印度の最敬禮、跪命ーー、兩掌擎頭「以ニ己最勝之頂ニ、禮ニ佛最卑之足ニ、敬之至也」

三 畫

【項】 カウ コウ 講

○うなじ、くびすぢ（頸部）の後部。○冠のうしろ。○大いなり。○事物の條件「款ー」「事ー」○分數の分子又分母。又、級數を組み立てる各數。又、代數式にて多ー式を組み立てる各單式。○姓。ー羽、名は籍、力能く鼎を扛げ、才氣人に過ぐ、漢の高祖と覇を爭ひ、垓下に敗れ、烏江に死す。

【說ニ項斯ニ】セツカウシ 下の故事によりて先輩が後輩を引き立て稱揚するにいふ。唐詩記事「斯字子遷、始來ー爲ニ閩人ニ、因ニ以ニ卷謁ニ楊敬之ニ、楊贈ニ詩云、我慶見ニ詩詩益好、及ニ觀ニ標格ニ過ニ於詩ニ、平生不ニ解藏ニ人善ニ、到處逢ニ人ーー、未ニ識ニ詩逢ニ長安ニ、明年擢ニ上第ニ」

【項縮】カウシュク くびがちぢまる、畏ぢる貌。張衡浩詩「我聞ニ其語ニ汗面如ニ、始也解ニ頤終ーー」

【項籍】カウセキ 字は羽。字解を見よ。

【項背相望】カウハイサウバウ 互にうなじと、せなかとを相顧みる。往來の頻繁なるをいふ。後漢書、左雄傳「監司ーー、與同ニ疾疚ニ」‖前後相顧。

【項目】カウモク 事件のこわけ。

【項領】カウリャウ ○項は大なり、大いなる

くびすぢ。詩、小雅「駕二彼四牡一、四牡一一」○くび（垂）抱朴子「眼皓齒紅、而不レ能レ周二一一之間一」○要害の地に喩ふ。魏志、蘇則傳、注「蘇則導曲軍、臨二其一一一」

【須】シュ ス 虞

○まつ（待）まちうける。詩、邶風「人涉卬否、卬一我友一」○おそくす（遲）ゆるくす（遲緩）○とどまる（止）○もちふる（用）需と通ず。○とる（資）○すべからく何何すべしと返り讀む、決定の辭。應璩文「適有事務、一自經營一」○しばらく（少時）「斯一」「一臾」證、樂記「證樂不可斯一去身」○ひげ、下あごの毛。○な（菜）の一種、蓼菁カラ

同訓異字 ✓須・可・當・合・宜の別は可（二九八頁三段）の條を見よ。

○✓須・待・俟・竢・遲・後の別は待（六二一頁三段）の條を見よ。

○✓須・求・索・乞・需・要・覓の別は求（一〇四五頁四段）の條を見よ。

【須拾】シュ しばらく、少しのあひだ。漢書、禮樂志「神來宴、臨一一」注「須臾也」

【須捷】シュセフ 衣の破れてきたなきもの、ぼろ。方言「南楚、凡人貧、衣被醜弊、謂二之一一一」

【須逝】スンダツ 佛の在世時の舍衛國の長者ジャクヤ性慈悲心に富み、又佛に供養するを忘らず、祇園精舍を建立して佛に奉り、又多くの財を捨てて孤獨の者に給與す。＝給孤獨。

【須杖】シュヂャウ つゑにたすけられる。論衡「人有レ疾一レ行」

【須彌山】シュミセン 梵大海の中に在りて高さ八萬四千由旬、日この陰に入れば夜となり、現はるれば晝となるといふ大山。四域記「舊曰二須彌一、又曰二須彌樓一、皆訛、正云二蘇迷盧一、唐言二妙高一」

【須彌壇】シュミダン 佛像、又は佛龕を安置する壇、須彌山にかたどりて上下大、中部小、故に名つく。

【須臾】シュ ○しばらく、少しのあひだ。中庸「道也者、不レ可二一一一レ離也」＝少頃。○梵一日一夜を三十一一と爲す。

【順】シュン 震

○したがふ。道理にしたがひてさからはず。逆の對。論、爲政「六十而耳一」○やはらぐ（和）「和一」○うく（承）○つきしたがふ、服從する。降服せしむ「歸一」詩、大雅「四國一之」○よる（循）○ついづ（敍）次第が正しくして亂れず。○やさし、すなほ「柔一」○やすんじたのしましむ（安樂）よろこぶ。中庸「父母其一矣乎」○ならふ（放）

同訓異字 ✓順・從・隨・循・率・遵・徇○順は逆の反、何事にも眞直にゆきてさからはざるなり、柔順・孝順・順風と連用す。明通紀「上順二天心一、下從二民望一」○從は違の反、たがはぬことなり、つきて行くを從といひ、離れ去るを違といふ、就き從ふ義より、侍從・僕從と連用す。○隨は從行の義、きに任せて、その通りにつき從ふなり。萬葉集に、隨レ風と書きて、風のまにまにと訓めり。千字文「夫唱婦隨」○循は次序により、物に添ひ行くなり、循二法度一、循レ繩而走の如し。○率は循に同じ。中庸「率レ性之謂レ道」○遵は率・循二字に同じ。孟子「遵レ海而南放二于琅邪一」孟子、遵二先王之法一、而過者未二之有一也」○徇は殉に通ず、狥に作るは俗字なり、身を顧みずしてその事につき從ふなり、徇レ欲徇レ財の如し。論語、憲問、朱注「君子循二天理一、故日進乎高明一、小人徇二人欲一、故日究二汙下一」

【順易】イジュン 理にしたがひてやすし。韓愈、碑文「風雨一一、就稻盈レ場」

【順應】ジュンオウ 其の時の事情によくかなふやうにする。＝適應。

【順孝】ジュンカウ よく親父母又父母に事へて孝を盡す。禮記「學記云、宵雅肄三、則子孫一一」

【順氣】ジュンキ ○順當を得たる氣候。王粲、九成宮頌序「一一發生、遨遊之大功也」○氣候に相應ずる。後漢書、輿服志「乘輿二青幅一、立夏乃止、助レ微一レ、尊二其方一也」

【順義】ジュンギ 正しき道にしたがふ。書經、傳「以二富貴而能一レ」

【順境】ジュンキャウ 順當にして得意の境遇。逆境の對。

【順逆】ジュンギャク 理にしたがふと、さからふと。杜甫詩「人生半哀樂、天地有二一一」＝逆順。

【順次】ジュンジ ○次第を立てる、ついづ。人物志「或以二直道一爲二虛華一、或以二巧飾一爲二誠實一、是以雖レ拔多譽、不レ如二一一」＝順序・序次。○次第にしたがふ、遂次。

【順時】ジュンジ ○ときの宜しきにしたがふ。降下、晉樂志「成レ功謝レ亂、一一經レ國」○時運に應ずる。晉書、元帝紀「應レ天一一、受二玆明命一」

【順守】ジュンシュ 道理に從ひてまもる。史、陸賈傳「且湯武逆取、而以一一之、文武政用、長久之術也」

【順序】ジュンジョ ついで、次第にしたがふ。易、下繫辭、疏「震則剛尊在レ上、巽則柔卑在レ下、得二其一一、所二以爲一レ恆也」＝順次・次序。

【順レ職】ジュンシキ 己の職務の當に爲すべき所を爲すをいふ。論徴論「吾

開爲二人臣二者、謂レ思以一レ一、爲二人子一者、致レ孝以永レ業」

【順正】ジュンセイ 理に從ひて正し。禮記「心知百體、皆由二一レ一以行二其義一」

【順善】ジュンゼン 善にしたがふ。又、よし。詩經「探二此高邦一」箋「言探二高邦一、使一レ一也」

【順孫】ジュンソン よく祖父母に事ふるまご。漢書、黃霸傳「孝子弟弟、貞婦一レ一月以來多」

【順當】ジュントウ あたりまへのすぢみち、當然の理、常道。

【順道】ジュンダウ 道にしたがふ。漢書、谷永傳「若冰天一レ一、遵二先帝法度一」

【順逆】ジュンギャク ただしくととなふ。雲笈七籤、風雨一一、國家安泰」

【順潮】ジュンテウ うしほの流にしたがふ。

【順適】ジュンテキ 道に從ひて人の氣にさからはぬやうにする。泰然として自如たる貌。史、五帝紀「舜一一、不レ失二于道一」

【順天】ジュンテン ○天道にしたがふ。後漢書、楊秉傳「先王建レ國、一レ一制レ官」○府の名。今の北京。

【順德】ジュントク ○すなほなる德。易、升卦、象傳「地中生レ木升、君子以一一、積レ小以高大」○縣にしたがふ。

【順風】ジュンプウ ○おひての王風、得二賢臣一頌、譬乎如二順風一而呼、聲非レ加レ疾也、而聞者彰」

【順風耳】ジュンプウジ ○祕密の物事のよく聞える耳。目の千里眼に於ける類。○西洋にて發明せし音響を遠方に傳ふる器。

【順服】ジュンフク 德にしたがひ服從する。後漢書、種暠傳「烏孫諸昆來一一」

【順奉】ジュンポウ したがひうける。易、大有、疏「案二編其書一一一天德休美一」二遵奉。

【順民】ジュンミン ○よく己の本分に安んじて道にしたがふ人民。列、楊朱「不レ逆レ命、何美レ壽、不レ矜レ貴、何羨レ名、不レ要レ勢、何羨レ位、不レ貪レ富、何羨レ貨、此之謂二一一一」○民の心にしたがふ。逸周書「一レ一得レ和、順レ利財足」

【順命】ジュンメイ ○命令にしたがふ。史、管晏傳「國有二道卽一一レ一、無レ道卽衡レ命」○天命に順從する。易、臨卦、象傳「咸臨、吉、无レ不レ利、未レ順一レ一也」

【順順】ジュンジュン したがひよる。唐書、王方翼傳「力自而見レ功多、百姓一一」

【順理】ジュンリ 道理にしたがふ。晉書、宣帝紀「一レ一而察、易レ爲レ力、背レ時而動、難レ爲レ功」

【順流】ジュンリウ ○さからふ所なくながれる。新論、百川一一、各隨二其所一一○水の流にしたがふ。爾雅「一レ一而下、曰二泝洄一」

【順良】ジュンリャウ おとなしく、長上の命令にしたがふ、すなほ。□循良。

【頁】 ケツ 部首

【頁】 ケツ 屋

○あたま。首。人體の最上部。

【頁】 ケツ 屋

○あたま。首。人體の最上部。

【頂】 チャウ 迥

○いただき。物の最上部。

【頂】 チャウ 迥

○いただき。物の最上部。

【頂】 チャウ 迥

○いただき。物

「七尺——走二世塵一、十圍便腹貯二天眞一」

【頑健】グワンケン かたくなにしてわるづよし。又、其の者。元史、葉仙翁傳「素黠二夷情一、隨二地阨塞一、設レ屯鎭二撫之一、恩威兼者、——皆悅服」‖凶獰・強獷。

【頑健】グワンケン 己の身體の丈夫なるを稱する謙辭。瓚詩「自レ知二庄舸一、幸自——」‖頑強。

【頑固】グワンコ 〇かたくな。かたいぢ、いっこく。陸游詩「所願瞻二德容一、——或少痊」‖頑陋。〇愚かにして事理に通ぜず。北史、張偉傳「鄉里受レ業者、常數百人、雖レ有二一一問一、至二數十一、皆論說殷勤、曾無二懟色一」

【頑童】グワンドウ かたくなにしてしぶる。國語、晉語「被二昔之辭一、讓二其——一」

【頑石點頭】グワンセキテントウ 說法の功力にてかたくなる石が御辭儀する。蓮社高賢傳「竺道生入二虎邱山一、聚レ石爲二徒說一、涅槃經、羣石皆爲點頭」轉じて感化の深きにいふ。

【頑癬】グワンセン 皮膚病の一。たむし。

【頑嚚】グワンナン かたくなにしておろか。韋應物詩「一字都未レ識、飮酒肆二——一」‖癡頑

【頑童】グワンドウ かたくなにして愚かなる童子。晉、伊訓「遠二耆德一、比二——一」

【頑鈍】グワンドン かたくなにしてにぶし。史、陳丞相世家「士之——、唯レ利無レ恥者、亦多歸レ漢」漢書には鈍を頓に作る、同じ。

【頑朴】グワンボク かたくなにしておろか。漢書、陳平傳「士之——、唯レ利無レ恥者、亦多歸レ漢」‖頑鈍。

【頑癖】グワンヘキ かたきいしぶみ。楊萬里詩「黃塵二農器一打二——一」

【頑郵】グワンユウ かたくなにしていやし。陸雲詩「明德耀二——一、冥レ非二百人一、今我二——一、規範陳レ道」

【頑愎】グワンヒツ かたくなにしてもとる。元包經、傳「爲レ國者無下長二家敵之臣一以重中邦賊上、無レ綏二——一之彙一以茂二邦人一」

【頑夫】グワンフ かたくなにしてむさぼる男。孟、盡心「聞二伯夷之風一者、——廉、懦夫有レ立レ志」

【頑愚】グワング かたくなにしてあしき。晉書、周顗傳「不レ悟二天鑒一、忘二臣——一、乃欲レ使下臣內管二銓衡一、外綜中傅訓上、實輕二鴻翼一、事重二千鈞一」

【頑朴】グワンボク かたくなにしてかざりなし。蘇軾詩「御賜老餘輒、——謝二頑鈍一」

【頑昧】グワンマイ かたくなにしてくらし。舊唐書、王虔休傳「不レ揆二——一、敢懇二祖遠一」‖頑冥・愚昧。

【頑民】グワンミン かたくなにして命に從はざる民。書、多士「惟殷——、遷二於洛邑一」

【頑迷】グワンメイ かたくなにして理非を分たず。‖頑冥・昏迷。

【頑冥】グワンメイ かたくなにして道理にくらし。‖冥頑。昏頑・鈍冥。

【頑廉懦立】グワンレンダリツ かたくなにしてむさぼる人も清廉となり、いくぢなしの男も奮ひ立つ。孟、盡心「聞二伯夷之風一、頑夫廉、懦夫有レ立レ志」より出づ。‖立懦廉頑。

【頑慢】グワンマン かたくなにしておろか。晉書、阮神傳「臣猥以二——之質一、應二清明之舉一」‖頑愚・頑闇。

【頑陋】グワンロウ かたくなにていやし。王令詩「——徒老大」‖頑固・固陋。

【頌】㊀シヨウ 宋 ㊁ヨウ 多

㊀ほめる、ほむ、たたへる（稱述）其の功德の美を稱へる「褒」「稱」「——」〇ほめうた、ほめことば（稱詞）〇詩の一體、六義の一「周——」「商——」文體名詩「按、詩有二六義一、其六曰——、——者、容也、美二盛德之形容一、以其成功告二于神明一者也、若商之那、周之淸廟諸什皆以告二神、乃之正體也、至於魯——、閟宮等篇則用以頌二僖公一而——之體變矣、後世所作皆變體也、其詞或用二散文一、或用二韻語一」〇功德をほめたたへたる文の一體「酒德——」「聖主得二賢臣一」〇占兆のことば。‖繇。㊁かたち（容）容貌。漢書、儒林傳「魯儒生善爲二——一」〇おほやけ（公）〇從——は從容に同じ、和ぎ緩やかなる貌。

同訓異義 頌・褒・稱・美・賞の訓は褒（一七六三頁二段）の條を見よ。

【頌歌】ショウカ 〇ほめてうたふ。唐書、張玄素傳「天下翕然、一口——」‖讚歌。〇功德をたたへたる歌詞。宋玉、謝二賜宴一表「欣戴之聲、淡二于偉兆一、銜感之至、形二于——一」

【頌琴】ショウキン 琴の一種。左、襄二、程鄭使二擇下美檟上以自爲中——一」‖雅琴。

【頌辭】ショウジ ほめことば。柳宗元、箕子碑「古國——、獨在二後儒一」

【頌聲】ショウセイ 頌琴の類、箏なり。嵇雅、琴——長七尺二寸、廣一尺八寸、二十五絃、盡用レ之」

【頌述】ショウジュツ ほめてのべる。班固、典引「——二功德一」

【頌聲】ショウセイ 功德をほめたたへること。又、太平を歌頌する聲。傅休奕詩「聖道遇二乾坤一、天下興——」

【頌德】ショウトク 功德をほめたたへる。漢書、諸侯王表「或遏稱レ美——、以求二容媚一」集古錄に「唐獨孤府君——碑」あり。

【頌德碑】ショウトクヒ 石に刻みて德政を紀する。封氏聞見記「在レ官有二異政一者

秩已終、更人立ㇾ碑頌ㇾ德者、皆須ㇾ審ニ詳事實一、州司以ㇾ狀聞奏、恩勅聽許、然後得ㇾ建ㇾ之。故謂ニ之——一。亦曰ニ遺愛碑一」

【頌德表】ショウトクヒョウ　功德をほめたたへたる文。

【頌美】ビショウ　人の德功をほめること。唐書、徐浩傳「以ニ清毅一聞、吏民——」‖稱美・稱頌。

【頌繫】ショウケイ　經籍セキを用ひずしてつなぐ。は之を覽容するなり。漢書、刑法志「詔曰、年八十以上八歲以下（中略）當ニ踦髮一者、一ニ一之一」

【頓】㊀トン・ドン　㊁トツ　月　國

㊀ぬかづく、首を下げて地につける、おじぎする「一首」○とどまる。とどむ（止）史、王翦傳「三日三夜不ㇾ——舍一」○やどる。やどす（舍）○やぶる（敗、壞）左、襄四「甲兵不ㇾ——」○ととのふ（整）「整ㇾ——」○くるしむ（困）○くじく（挫）○すたる（廢）○つかる（罷）「疲ㇾ——」○すてる（捨）○たふる（僵）○つまづく（困躓）○にはかに、急に、立どころに、一時に「一悟」「一死」○たび（次）○たくはへ（貯）○やどり、たむろ（宿舍・屯營）隋書、煬帝紀「置ㇾ——」○食物のたくはへどころ、宿食の所。○一度の食「一ㇾ食」○にぶし、利からず。鈍と通ず。㊁は匈奴の單于（王）の名。

同訓異語　頓・遽・倒・躓・暴・卒・猝の別は遽（一九六頁）の條を見よ。

【頓棄】トンキ　やぶりすてる。王褒、九懷「鉛刀厲ニ御兮一、——太阿一」太阿は古の名劍の名。

【頓挫】トンザ　にはかにかけ挫する。列子「凡一銳不ニ頓挫一、一形不ニ——一」

【頓足】トンソク　あしをふみならす。韓愈文「抃ㇾ掌——ㇾ、失笑相顧」

【頓宮】トングウ　かりみや、行在所。‖行宮アン

【頓教】トンキョウ　佛　漸次に進修せず、直ちに佛教の眞理を悟る教。迅速に成佛することを說く教法。漸教の對。華嚴・天台・眞言などは之に屬す。

【頓悟】トンゴ　佛　にはかにさとる、豁下にさとる。漸悟の對。世說補「宋文帝嘗問ニ慧觀一之義、誰復習ㇾ之、答云、生公弟子道猷」

【頓挫】トンザ　○にはかにくじける。○轉じて文勢の急に轉折するをいふ。抑揚は先づ抑へて後に揚ぐ、——は先づ揚げて後に抑ふ。陸機、文賦「或——而清壯」

【頓才】トンサイ　とんち、機に應じて直ちにはたらく智慧。‖機智。

【頓死】トンシ　にはかに死す。‖暴死。

【頓進】トンシン　にはかにすすむ。晉書、羊祜傳「智力不ㇾ可ニ——一、恩寵不ㇾ可ニ久據一、夙夜戰慄、以ㇾ榮爲ㇾ懼」‖急遽。

【頓舍】トンシャ　止りやどる。史、王翦傳「三日三夜、不ニ——一」‖頓止。

【頓首】トンシュ　拜して頭が地を叩く。周禮、大祝「辨ニ九拜一、一曰、稽首、二曰、——」‖叩頭。

【頓證菩提】トンショウボダイ　佛　或機會に遇ひて急に心の暗を去り、佛道の眞理を悟りて佛果（卽ち菩提）を得る。‖頓證佛果。

【頓萃】トンスイ　くるしむ。萃・顇通ず。荀子「勞苦——而愈無ㇾ功」萃一に卒に作る。管子「頓卒怠倦以辱ㇾ之」

【頓漸】トンゼン　佛　頓教と漸教と。頓教參看。

【頓足】トンソク　足をばたばたする、足ずりする。韓非、初見秦「卽ㇾ戰——徒爲」

【頓智】トンチ　機に臨みてはたらくちゑ。‖頓才・機智。

【頓躓】トンチ　○たふれつまづく。謝靈運詩「四城有ニ——一、三世無ニ補已一」‖顚躓。○人の窮困の境に處るに喩ふ。晉書、杜夷傳「徵士杜君、德懋行絜、高ニ尙其志一、頃流ニ離道路一、聞ニ其——一、今都可下遣ニ一吏賚ニ五更一、恆餐中恤之上」

【頓著】トンチャク　○おちつけておく、安置する。楊萬里詩「廟堂沒下頓ニ新樓一處上——視監醪裏中」○關　貪者の轉訛。物をむさぼりてやまぬ。○國氣にかける。介意する。

【頓挫】トンザ　たふれすたれる。後漢書、仲長統傳「用ニ天性一、從ニ人理一、興ニ——一廢一斷絕一」

【頓僕】トンボク　くじけつかれる。唐書、李墟傳「靖乞ニ骸骨一、帝優旨曰、古富貴而知ㇾ止者蓋少、雖ニ疾——一猶力ニ於進一、公今引ニ大體一、厥其嘉ㇾ之」

【頓轡】トンピ　たづなをとどめる。陸機詩「——倚ニ高巖一、側聽ニ悲風聲一」

【頓服】トンプク　一劑を一度にのむ。

【頓弊】トンペイ　つかれやぶれる。‖疲弊。

【頓踣】トンバク　たふれる。逸雅「仆、踣也、——而前也」

【頗】㊀フン　㊁ハン　文　國

㊀魚の大いなる首の貌。詩、小雅「有ニ其首一」○衆き貌。㊁わかつ（分）○班と通ず「一白」○しく（布）法令などをわかち布く。‖班。○たまふ（賜）上より下の者に物を分ちあたへる。○びんづら（髮）

同訓異語　頗・分・別・判・班・析・訣の別は分（二三三頁）の條を見よ。

【頗首】フシュ　くびの大いなる貌。詩、小雅「魚在ニ在ㇾ藻、有ニ頗其首一」

【頗給】ハンキュウ　上より兵士に分ち賜はる慰勞の品物。犒は軍に餉する義。もと餉に作る。宋史、岳飛傳「凡有ニ——一、均給ニ軍吏一」

【頒レ金】ハンキン　田獵リにて獲たる所を羣臣に分ちあたふ。周禮「若大朝覲、則帥二有司一而頒二獻于郊一、遂ー」

【頒賜】ハンシ　上より物をわかちたまはる。‖分賜・班賜。

【頒日】ハンジツ　頭髪の半ば白く半ば黒きもの、中老人をいふ。孟、梁惠王「ー者、不レ負二戴於道路一」注「頒、班也、頭半白班班者也」‖班白〔儀、王制〕

【頒越】ハンエツ　和雑なはる鶏。潘岳賦「士女ーー而成戻」

【頒布】ハンプ　法令などを、わかちしく。

【頒資】ハンシ　物をわかちたまふ。又、たまもの。南史、梁武帝紀「詔賜二隱陵者少位一階、幷加二ーー一」宋史、北漢世家「賜二京城甲第一區一、歳時優加二ーー一」‖頒賜・班賜。

【預】ヨ　豫に同じ

○あらかじめ、かねて。漢書、趙充國傳「湊兵ー爲レ備」‖豫。○あづかる（參與）「參ー」かかはる（干）「干ー」世說、言語「子弟亦何ー人事」○たのしむ（快樂）‖豫。○あそぶ（遊）圖○あづける、金品を託し置く。あづかる、物を託せられて保管する。○かたじけなくうける、蒙むる「御招にーる」

〔同類異義〕預・關・與　干の別は關（一〇九二頁一段）の條を見よ。○預・豫・逆の別は豫（一八五三頁一段）の條を見よ。

【預金】ヨキン　圖金錢を個人。又、銀行などにあづける。又、其のあづけし金

（預は寄存の義）

【預言】ヨゲン　事の未だ至らざる前にあらかじめいふ。‖豫言。

【預想】ヨサウ　事に先だちて想像する。秦觀詩「ー江天回レ首處、雪風橫急雁聲長」

【預度】ヨタク　事に先だちてはかる。晉書、束晳傳「患不レ足二以衛一レ己、過不レ可二以ーー一」‖豫料。

【預買法】ヨバイホフ　民間にて賣れざる物を政府にてあらかじめ買ひ上げ置き、後日、其の物の不足の時に、相當の價を以て賣り拂ふ法律、宋の王安石の定めし新法の一。

【預備】ヨビ　あらかじめそなへる。漢書趙充國傳「湊兵預爲レ備」諸葛亮文「ーー而慮、古之善政」‖豫備。

【預慮】ヨリョ　事に先だちておもんばかる。賈誼文「天不レ可ニーー一兮」

五畫

【顧】

顧（頁部十二畫）の俗字。

【頗】ゼン　僅

ほほひげ（頬髯）莊、田子方「黑色而ー」‖鬚。

【頗】ハ　㊀ヘ　㊁ハ　歌

○うつくし（好）○人名。唐の韓愈が書を上りし于襄陽の名。

㊀かたよる（偏）公平ならず「偏ー」よこしま（邪）「險ー」○ー黎は玻瓈。㊁すこぶる、やや、ほぼ（略）ー多はすこしばかり多し（差多）史、三代世表「或ー有、然多闕」○ほど、ずるぶん多し。史、衛將軍傳「ー捕斬首虜萬餘級」○圖すこぶる、甚だ、最もの義。

【頗側】ハソク　かたよる。‖偏側。

【無レ頗】ムハ　かたよらず、公平。書、洪範「無レ偏無レ陂」釋文「陂、舊本作レ頗」

【頗僧】ハソウ　かたよる、ひがみてよこしまなり。崔駰、太尉箴「李葉ーー、禮用不レ匡」

【頗偏】ハヘン　かたおち、不公平。顧況詩「平帝無ニーー一」‖偏頗。

【頗牧】ハボク　○廉頗と李牧と。並に戰國時代の趙の名將。史記列傳に詳かなり。史、馮唐傳「陛下雖レ得二廉頗・李牧一、弗レ能レ用也」○轉じて名將の義とす。唐書、畢誠傳「帝悅曰、執謂ーー、在二吾禁署一」

【頴】エイ　㊀井に同じ　㊁極

ー宮は諸侯の學の名、ーは半、井に同じ、半水は、東西門以南は水にて圍み、以北は水無きが故。‖泮宮〔詩、魯頌〕一說にーは班、政教を班つ所以なりと。

【領】レイ　リャウ

○くび、うなじ（項頸）詩、衛風「ー如蝤蠐」蛣蠐は木の中に生ずる潔白なる蟲。○えり、衣の頸を纏る者。荀、勸學「若夫裂ー」○轉じて衣の一そろひ、一著を一ーといふ。○かなめ（要本）○をさめる（治理）○すべる（統）「管ー」○占め有する。○おもむき（趣）「要ー」○うく（受）受け取る「ー收」「受ー」○さとる（悟）心に受ける所あるなり「一會」「一解」○しるす（錄）○をさ、かしら（雄長）○みね。嶺に通ず。漢書、嚴助傳「奧轂而踰ー」○俗に才

能を本一といふ、木の本あり、衣の領ある義に取る。

【領有】リョウイウ 己の所領としてたもつ。

【引レ領】イウリョウヒク 首を長くのばして待ち望む。孟、梁惠王「天下之民、皆一レー而望レ之矣」

【領海】リョウカイ 港灣・內海と共に其の國の主權の下にある海面。干潮の時海岸より三里までの海面。公海の對。

【領解】リョウカイ 〇さとる、ゑとくする。元史、選擧志「理傳「幼穎敏、從レ師授二經史一、過レ目輒一一」||領悟。〇唐の制、鄉試及第の擧。解額(郷貢選士)を領得する義。

【領巾】リョウキン 婦人の首にかけるきれ、ひれ。雲笈七籤「崔生妻傳二一一」化爲二五色紵巾一、令二崔生路過一、隨レ步即減」

【領會】リョウクワイ さとる、ゑとくする。會得。向秀賦「託二運遇於一一一分、寄二餘命於寸陰一」注「一一、冥理相會也」

【領事】リョウジ 本國政府の命を受けて、條約國の要地に駐在し、通商交通の觀察保護、在留民の取締に任ずる官吏。

【領事裁判權】リョウジサイバンケン 在留の外人が其の駐在國の法律に支配せられずして自國領事の裁判を受ける權利。

【領收】リョウシウ うけとる。||受納・受領。

【領袖】リョウシウ 〇えりと、そでと。〇轉じて人の上に立ちて儀表となる人にいふ。晉書、魏舒傳「文帝深器二重之一、每二朝會一、目二送之一曰、魏舒堂堂、人之一一也」

【領承】リョウシヨウ きゝいれる 承知する。

【領地】リョウチ 所有の地。||領土。

【領土】リョウド 所有の地。||領地。

【領土主權】リョウドシュケン 國際法にて自國內に他國の主權の侵犯を許さざる權利。

【領納】リョウナフ 受け入れる。梁書、狼牙修國傳「今奉二海獻一、願大家曲垂二一一」||受納。

【領如二蜻蜓一】リョウジョテイノゴトシ 蜻蜓は本の中に生ずる潔白なる蟲、美人のくびの潔白なるに喩ふ。詩、衞風、碩人「手如二柔荑一、膚如二凝脂一、——、齒如二瓠犀一、螓首蛾眉、巧笑倩兮、美目盼兮」

【領分】リョウブン 所有する地域。||所領。

【領略】リョウリヤク 意識をさとる。梁昭明太子文「研二尋物理一、一一清言一」

【領袖】リョウシウ すべくくる。通考「一一一天下事一、似二其任一也」||統率。

六畫

【頷】アツ 㪍

はなばしら、はなすぢ(鼻莖)

孟、梁惠王「舉疾首蹙一而相告」(蹙一は鼻にしわをよせる、愁ひて心配する貌)

【頤】イ 支

〇おとがひ、したあご。〇ふかし(深)〇やしなふ(養)朔一は百歲の老人、飲食衣服皆他人の養を受くるが故。〇易の卦の名、震下艮上。〇語調を助くるに用ふる。史、陳涉世家「夥一渉之爲王沈沈者」(夥一はおびただしき義、沈沈は宮殿のおくぶかき貌。陳涉が王となりて堂堂たる邸をかまへたるを嘆じていふ)

【支レ頤坐】シヰテイサス 兩手にてしたあごをささへて坐する。白居易詩「薄晚——」

【脫レ頤】ダツイ あごをはづす。大いに笑ふ。蘇軾詩「撫掌笑一レー」||解頤。

【粲頤】サンイ 粲頤(九二五四頁)を見よ。

【解レ頤】カイイ 解頤(一七八二頁四段)を見よ。

【頤賢】イケン 賢才を養ふ。淮南、敍傳「既登二神位一、祿賜一レー」注「頤、養也」||養賢。

【頤使】イシ 次條に同じ。

【頤指】イシ あごにて人をつかふ。漢書、賈誼傳「今陛下力制天下、一一如レ意」||頤使。

【頤神】イシン 精神を養ふ。晉書、嵇康傳「庶公、適二榮廣一以レー、遂生適二南越一以保レ眞」||養神。

【頤養】イヤウ やしなふ、頤も養。後漢書、馬融傳「所下以平二和府藏一、一一精神一致中之無極上」

【頤令】イレイ あごにてさしづする。唐書、王鉷傳「家奇二聲伎一、目使一一、自擬二王侯一」||頤使。

【頤和園】イワエン 北京の西北、萬壽山の麓、昆明湖畔、圓明園の西に在り、清の光緒年間、改築して西太后(孝欽后)避暑の所とす。

【頤】頤(前條)の俗字。

【頸】ガイ 灰 皓

あご(頷頤下)韓愈詩「我手承一時拄座」

【頷】ガク 覺

〇ひたひ(額)||額。〇一一は休息せざる貌。

【頷額】ガクカク 休息せざる貌。晉、傅咸「四愁後一一一」傳「一一、猶レ愚無二休息一」

【頷】カン 感 豏

おとがひ、耳の下に在りてあ

ごの兩側を爲す曲骨、一車はあごのつがひ。

【頤】ケイ　ギ　紙　賄

○かしら(頭)○しづか(靜)○ならふ(閑習)頭が俯仰になれる。○人名。裴一は晉の人。

【頡】㊀ケツ　㊁カツ　黠　屑

㊀鳥がとびあがる。頡の對。詩、邶風「燕燕于飛、一之頡之」○すぐなるうなじ(直項)㊁へらす(減)のぞく(除)かすめる(掠)奪ひ取る。唐書、高仙芝傳「盜一資糧」

【頡頏】ケツカウ　○鳥が飛び上り又、飛び下る。詩、邶風「燕燕于飛、頡之頏之」○轉じて人と優劣を爭ふ義とす。○くびすぢが強く、人に屈せず(強項)揚雄、解嘲「鄒衍以ニ一一而取ニ世資一」一說に世と上下浮沈する貌。日韻兀。

【頡滑】カツ　○ちがひみだれる(錯亂)莊、徐無鬼「一一有レ實、古今不レ代」○まがりくねる貌。一說に正しからざるの語。莊、駢拇「一一堅白」

【頫】㊀フ　虞　㊁ベン　獮　㊂テン　㒳

㊀うつぶす、うなだる(低頭)「一視」＝俯(一五一頁二段)㊁まみゆ(謁見)大夫(家老)が家く來りて天子に謁見する(寡ニし)く來るを聘といふ)○とふ(訪問)大夫が君命を奉じて他國の君を訪問する義。○あきらかにみる、察視する。張衡、思玄賦「流目一乎衡阿一今」㊂てあらふ(盥)

【頫聘】フヘイ　大夫が多人數にて朝廷に來り聘すると、小人數にて來り聘するとの。周禮、秋官「一一」注「大夫衆來曰レ頫、寡來曰レ聘」

【頫視】フシ　おろす。日俯視・俯瞰。

【頫】（イ）　薺

○怒りて顏色の青くなる貌。宋玉、神女賦「一薄怒以自持」今に○氣の盛んなる貌。

七畫

【顁】額(一三九〇頁二段)の俗字。

【頷】㊀カン　㒳　㊁ガン　通音ガン

㊀おとがひ、あご(下顎)「燕一」「探ニ龍一」○面の黃色なるにいふ。㊁うなづく、頭を下げて承知する。左、襄二六「衛侯入、逆ニ于門者、一之而已」李商隱詩「言訖屢一天子顏」日點頭。

【頷可】カン　うなづきて承諾する。修辭指南「允許曰ニ頷許一又曰ニ一一」

【頷首】ガンシュ　うなづきて許す意を示す。歐陽修詩「先生一一遣、敎以レ勿ニ驚矜一」

【頷聯】ガンレン　五七言律詩の前の聯句(第三第四の兩句)をいふ。後の聯句(第五第六)を頸聯といふの對。滄浪詩話「有一一、有ニ頸聯一、有ニ發端一、有ニ落句一」(落句は七八兩句)

【頷】㊀クツイ　㊁キ・キウ　尤　㒳

㊀頤ヒが高く露ハれて美を發する貌。莊、天道「而顏一然」○はなはだ質朴なる貌。㊁つらぼね(顴骨)ほほぼね(頰骨)

【頮】クヮイ　㒳

あらふ、面を洗ふ。日穢。

【頸】ケイ　極　庚

○くびすぢ(頭莖)「長一」「頭一」「刎一」○特にくびの前面の部。後面を項といふの對。○すべて物のくびすぢに似たる所、中央部。

【延ニ頸】エンケイス　くびを長くして望み待つ、待ちどほく思ふ貌。呂覽、順說「莫レ不ニ一一一レ願レ聽」日引レ領。

【頸血】ケイケツ　くびより流れるち。史、藺相如傳「相如曰、五步之內、相如請得下以ニ一一一濺中大王上矣」

【頸飾】ケイショク　くびかざり。

【頸椎】ケイツイ　頸部の脊椎骨。

【頸腹】ケイフク　うなじと腹。韓愈詩「初從ニ壑田一入、願盼ニ一一」

【頸領】ケイレイ　くびすぢ。莊子「上斬ニ一一、下決ニ肺肝一」

【頸聯】ケイレン　五七言律詩の第五六の兩句。頷聯(本頁三段)を見よ。

【頰】ケフ　葉

○ほほ(面旁)よこづらの中央部「兩一」「豐一」○緩一クヮンは徐に言ひて譬喩を引く義。漢書、高帝紀「緩一往說魏王豹」

【莊頰】ケフケフ　ほほづえをつく。世說「陳道林見ニ如意一レ輒二頰讀一山一日支レ頤。

【頰語】ケフゴ　ほほぼねの貼落詩「面瘢漸生愛一一」

【頰車】ケフシャ　○下の齒の骨骼、すべての齒を載せるが故。○顎ガクの異名。亦物を載するが故。釋名「頤或曰ニ一一、亦所ニ以載ニ物也」

【頰上添レ毫】ケフジャウテンガウ　像を畫くに、ほほの上に毛を加へる。晉書「顧愷之畫

圖三裴楷象、頬上加三毛、觀者覺二神明殊勝一、この故事に本づきて、文章の神を得る者を評していふ。

【頬觜】ケイシ　口の旁の單に觜ともいふ。黃庭堅詩「大兒勝二衣冠一、小兒豐二頬觜一」

【頹】タイ　灰

もと隤に作り、又、穨に通ず、頽は誤字

○おとがひ（頬下）○くづれる。くづす（崩壞）檀弓「泰山其頽乎」○たふれる貌。歐陽修、醉翁亭記「蒼顏白髮、頽乎其中者太守也」○つかる（衰退）おとろへる「衰ー」「隤ー」○はげ、かぶろ（首禿）○おつ。おとす（墜）○水の下り流れる貌。○はやて、おろし、暴風上よりして下る。○したがふ（順）貌、物事に逆はざる貌。檀弓「ー乎其順也」○おもふ、いだく（懐）

同訓異語　頽・崩・壞・隤の別は崩（五四九頁一段）の條を見よ。

【頹雲】タイウン　くづれかかれるくも。傳休奕賦「起若二翔電一、墜若二ー一」

【頹運】タイウン　おとろへたるうんめい。李白詩「赤伏起二ー一、臥龍待二孔明一」＝頽勢・衰運。

【頹岸】タイガン　くづれかかれるきし。杜甫詩「帖レ石防二ー一、開レ林出二遠山一」

【頹賢】タイケン　くづれやぶれる。何承天、安邊論「古之城池、處處皆有、今雖二ー一、猶可二修治一」＝頽圮・破毀。

【頹磨】タイマ　くづれかける。崔琦、外戚箴「爰暨二末葉一、漸已ー一、貫魚不レ紲、九御羞レ池」

【頹朽】タイキュウ　くづれくちる。杜甫詩「荒哉梁家翁、製レ此今ー一」

【頹敎】タイキョウ　すたれたるをしへ。張嘉貞文「夢若二皐唐一、正二百王ー一」

【頹缺】タイケツ　くづれそこなふ。蘇過文「塞二隤坂之ー一」＝圮缺。

【頹岡】タイコウ　くづれかける。水經、注「黃巾之亂、殘毀ー一」＝頽缺・頽壞。

【頹乎】タイコ　○順ひて正しき貌。頽は順の檀弓「ー其順也」○醉ひくづれる貌。歐陽修、醉翁亭記「蒼顏白髮、ー一其中一者太守醉也」＝頽然。

【頹挫】タイザ　くづれくじける。韓愈詩「伊人去軒屬、其宇遂ー一」

【頹思】タイシ　かんがへにしづむ。司馬相如、長門賦「無二面目之可レ顯兮、遂ー一以就レ牀」注「言愼二其思慮一而就レ牀也」

【頹勢】タイセイ　くづれおとろへたるいきほひ。＝衰勢。

【頹雪】タイセツ　ゆきなだれ。＝雪頽。

【頹然】タイゼン　○くづれる貌。○醉ひてたふれる貌。柳宗元、始得二西山一宴遊記「引レ觴滿レ酌ー一就レ醉」

【頹惰】タイダ　志がくづれおこたる。陸游詩「老人ー一雖レ病笑、終勝胸中憤二不平一」＝隤惰。

【頹靡風靡】タイビフウビ　形體氣力などが次第にくづれ衰へる。韓愈、送二高閑上人一序「ー一、潰敗不レ可二收拾一」

【頹唐】タイトウ　くづれおちる、隤壞。王褒、洞簫賦「ー一迭往、長辭遠逝、源不レ遏兮」＝隤唐。

【頹墜】タイツイ　くづれおちる。論衡「ー一之類、常在二懸垂一」

【頹落】タイラク　くづれすたれる。晉書、華軼傳「大義ー一、經典無レ宗、朝廷滯讀、莫二能攸一正」＝頽廢・衰頽・隤替。

【頹波】タイハ　○くづれかかれる水波。水經、注「ー一瀠迴、一丈有餘」○轉じて物事の衰落の勢に喩ふ。韋應物詩「高文激ー一、四海願レ不レ傳」

【頹敗】タイハイ　くづれやぶれる。朱熹、大學章句序「敎化陵夷、風俗ー一」＝頽圮・頽廢。

【頹廢】タイハイ　くづれすたれる。後漢書、龐參傳「太學辟雍、皆宜二兼存一、故典傳至レ今、而頃者ー一、至レ爲二園林芻牧之處一、宜三更修繕、誘二進後學一」＝隤頽・傾圮。

【頹圮】タイヒ　たふれやぶれる。朱熹詩「百世種二謀訛一、彝倫日ー一」＝摧圮・隤落。

【頹風】タイフウ　○あらきかぜ。揚雄「羽獵賦」従レ上下、日ー一」○くづれたる風俗。晉書、桓溫傳「風靜ー一」

【頹陽】タイヨウ　ゆふひ。王冷然、初月賦「望ー一之朝落、見二凝月之孤生一」＝落月。

【頹落】タイラク　くづれおちる。曹植文「摘二蕩草木一、爲二之ー一」

【頹淪】タイリン　くづれしづむ。淪は沒。抱朴子「摧レ高則峻極ー一、蝮レ卑則洿池盈レ戰」

【頹齡】タイレイ　としよる。老衰せしよはひ。謝靈運詩「舊業橫二海外一、蕪穢積ー一」＝衰年・殘年。

【頹漏】タイロウ　くづれて雨がもる。葉適詩「宅舍空蒼莽ー一」

【頽】タイ　灰　通

頹（前條）の譌字。

【頸】ティ　チャウ　迥

○なほし（直）ただし（正）○人名。蘇ーは唐人、燕國公に封ぜらる。唐書、蘇瓌傳「瓌子ー一」

【頹】ティ　灰

あかし（赤）＝頴。

【頹羽】ティウ　赤色の鳥のはね。淮南子、謬稱訓「霜雹交下、草關ー一、泉涸山岳之瑞、草木金石之辭」＝赤羽。

【頹波】ティハ　赤色のしる。郭璞、蚍蜉賦「出二奇形于九眞一、洗ー一其如レ血」

【頹等】ティラ　赤きはなぶさ。張協、安石

榴賦「――挺ㇾ蕊、金芽承ㇾ蕤」
【頏紫】ヒイ　あか色と、むらさき色と。李賀詩「山實垂ㇾ――」
【頏雲】ケイ　あかきくちびる。江淹、麗色賦「赤盧曜而――」盧は黒。
【頏尾】ビイ　魚の尾が赤し。詩、周南「魴魚――、王室如ㇾ燬」朱傳「頏、赤也、魚勞則尾赤、魴尾本白、而今赤、則勞甚矣」魴は和名、おしきうを。
【頏頰】ビイ　赤く塗りたるはり。謝靈運、山居賦「因ㇾ丹霞ㇾ以――、附ㇾ碧雲ㇾ以翠椽」
【頏唇】フイ　あか色のはだへ。張載、安石榴賦「紫房既熟、――自析」
【頏文】ブイ　あかきあや。張衡文「珪ニ――於翠嶂ㇾ」

【頭】トウ　尤

○かしら、かうべ（首）あたま。○いただき、うへ（物の最高の所「山ノ――」○最もすぐれたる等級「一等」「一號」○はじめ（始緒）「年ノ――」○さき、はし（先端）「船ノ――」「一日」○ほとり、あたり「社ノ――」○かみ（毛髪）○をさ、かしら（魁長）○人をかぞへるにいふ、又、廣く頭カンある動物を數へるにいふ「牛十――」○蒼ノ――は奴ベ○烏ノ――は毒草の一。‖菫。圖○かみ。祭の長官「圖書ノ――」○とう。鐵人頭ノカタチの略稱。○かしら。消防夫の組長。轉じて消防夫、鳶をいふ。
【頭衣】トウ　帽をいふ。說文「曰、小兒及婢卑ノ――也」曰は冒の古字。
【改ㇾ頭換ㇾ面】カンメンカフ　内心は舊のままにて、只其の表面ベのみをかへる。五燈會元「崇梵謂二張無垢一曰、門下既得二此話柄一了――、說向二儒家一使ㇾ殊塗同歸上」
【懸ㇾ頭刺ㇾ股】ケントウシコ　古人の苦學せし故事。楚國先賢傳「孫敬到ㇾ洛、在二大學一、折ㇾ柳爲ㇾ筒以寫ㇾ經、睡則懸二頭于梁一」戰國策「蘇秦讀ㇾ書欲ㇾ睡、引ㇾ錐自刺二其股一、流血至ㇾ踵」
【領ㇾ頭】カントウ　首をかたむけて思案する。瀛庭筠詩「――不ㇾ覺金烏斜」金烏は太陽。
【垂ㇾ頭失ㇾ氣】スイトウシツキ　氣力の衰へたる形容。唐書「韓全誨等失ㇾ勢、皆――」‖垂ㇾ頭喪ㇾ氣（韓愈、送窮文）
【垂ㇾ頭塞ㇾ耳】スイトウソクジ　こびへつらふさま。後漢書、竇帝紀「刺史――、阿私下比」
【以ㇾ頭滿ㇾ堂】イトウマンダウ　古書の名人、張旭の故事。唐書、張旭傳「旭、蘇州吳人、嗜ㇾ酒、每二大醉一呼叫狂走、乃下ㇾ筆、或――而書、既醒自視以爲ㇾ神、不ㇾ可ニ復得一也、世呼二張顚一」
【以ㇾ頭搶ㇾ地】イトウソウチ　○怒る形容。戰國魏策「布衣之怒、亦免ㇾ冠徒跣、――耳」○地に伏して哀を乞ふ形容。司馬遷、報二任安一書「見二獄吏一則頭搶ㇾ地」
【頭角】トウカク　○かしら、あたまのさき。次條參看。○事のはじめ（緒緒）
【見二頭角一】トウカクヲアラハス　衆人にぬきんですぐれる形容。韓愈、柳子厚墓誌銘「幸二少年一已自成人、能取二進士第一、崭然――、衆謂、柳氏有ㇾ子矣」
【頭會箕斂】トウクワイキレン　頭會は民の頭數に應じて稅米を取り、箕斂は箕にてをさめ取る如く多く取る。史、張耳・陳餘傳「――、以供二軍資一」淮南、記論には斂を賦に作る。
【頭顖】トウシン　くびつぎ。禮記「――必中」
【頭顖】トウシン　あたまと、ひたひと。後漢書、程曾傳「昔資郎之寵、傾二動四方一、及二其破壞一、――墮ㇾ地、顚ㇾ爲二孤豚一、豈可ㇾ得哉」‖顖類。
【頭狀花】トウジヤウクワ　多くの花が密著して人頭の形にさく花。菊花・蒲公英ホホヅキなどの類。
【頭上安ㇾ頭】トウジヤウアントウ　物事の頂複する喩（傳燈錄）‖屋下架屋。
【頭上事】トウジヤウノコト　手近き事、眼前の事。白居易詩「忽忽不ㇾ知――、時時猶憶眼中人」
【頭腦】トウノウ　あたまのかみと口ひげと。後漢書、光武紀「鍾二發兵一、一一爲ㇾ白」
【頭緒】トウショ　○物事のいとぐち、事物の條理。○心におこる種種の感想など。黃庭堅詩「心似二亂絲一一一多」
【頭足異ㇾ處】トウソクイショ　屍斬せらるるをいふ。史、淮陰侯傳「殺二成安君泜水之南一、――」‖首足異處。
【頭足類】トウソクルイ　軟體動物の一、頭と脚とより成り、頭部の端に數本の觸手を有し、體をさかさまにして游泳する。章魚・烏賊などの類。
【頭等】トウトウ　最上等、第一等。
【頭童齒豁】トウドウシクワツ　頭ははげ齒はおちてまばらになる。老人の形容。韓愈、進學解「――、竟死何裨」
【頭取】トウドリ　圖銀行・會社などのかしら。‖圖總辦。
【頭白】トウハク　かしらが白髮になる。白居易詩「蓉湖何處堪二偶棲一、――宮人搏二影堂一」‖白頭。
【頭髮】トウハツ　かしらのかみ。釋名「七十曰ㇾ耄、――白髦髦然也」‖頭毛。
【頭髮種種】トウハツシユシユ　老いて髮の短く衰へたるをいふ。左、昭三「余髮如ㇾ此種種」
【頭風】トウフウ　頭痛に同じ。魏志、陳琳傳、注「典略曰、琳作二諸書及檄一、草成、呈二太祖一、太祖先苦二――一、是日疾發、臥讀二琳所ㇾ作、豁然而起曰、此愈二我病一」檄文は文選に出づ。
【頭蓬】トウホウ　頭髮の亂れて、よもぎの如きなり。揚雄、長楊賦「――不ㇾ暇ㇾ梳」
【頭毛】トウモウ　頭髮に同じ。晉顧愷「畫法軌、形容短小、李榮頭ㇾ之曰、身長三

尺牛、―一猶来レ生」

【頭目】トウモク　○あたまと目と。荀、議兵「下之子レ上也、若三手臂之扞二一一」也」○元代、軍中の將官をいふ。元典章「領軍官號二一一」○轉じてかしら、首領の義とす。‖頭領。

【從レ頭至レ尾】トウコツ　始より終まで。明楊忠愍公集「把二這手卷一、――、念一週、合家驚喜」‖從レ頭徹レ尾。

【頭領】トウリョウ　多くの人のかしら。宋眞、文穆王皇后傳「衣被故敝、必貴二一一」‖頭目。

【頭卿】トウケイ　あたまの頭は頭の骨。陸游詩「白首功名元未晩、笑人四十猶二一一」

【頭蓋骨】ズガイコツ　頭腦を保護する骨ぐみの總稱。

【頭巾】トキン　○頭にかぶるもの、帽子の類。劉長卿詩「寥寥古松下、幽晩掛二一一」○修驗者即ち山伏の頭に鉢卷をなし、更に頭に當てるもの。‖兜巾。

【頭陀】ズダ　禪僧が托鉢して修行する又、其の僧。法苑珠林「或有二山居閑若一一苦行」‖抖擻。

【頭陀袋】ズダブクロ　頭陀の僧の頸にかけるふくろ、さんえぶくろ。

【頭痛】ズツウ　かしらがいたむ。梁簡文帝文「胡蹄塵黒、縄牀二一一之痾」‖頭風。

【頭鑑】ズガン　○なうみそ。轉じて心思の義とす。范成大詩「長官――冬燒甚、命二汝青鐘買一酒回」○條理ズヂの義。朱子語錄「全無二一一」○判斷する力「――明敏」○かしら（首腦）○物の主要部。

【頭北面西】ズホクメンサイ　頭を北方に面を西方に向けて臥する、これ諸佛入涅槃時の方式にして、又釋氏の臥法とす、右脇をば林に著く「――右脇臥」といふ（敎誡律儀）

【頻】ヒン　㊥

猿（一八五五頁三段）に同じ。

○しきりに、つづけて、たびたび、しばしば（煩數）列子「汝何往來之一一」○いそがはし（急）危急。詩、大雅「國步斯一一」○ならぶ（比）○ひそむ、顔をしかめる「一蹙」‖蹙。○ほとり（濱）水厓。‖瀕。

同訓異字　ヒン　顔・頻・連・蘋・蠃・切の別は仍（一〇四九頁一段）の條を見よ。

【頻憶】ヒンオク　しきりに思ふ。劉禹錫詩「秋深一一故鄉事、目莫窮春三度催一歸」

【頻伽】ビンガ　梵語。――羅ビンガラの略。極樂淨土に住み常に妙音を發すといふ鳥。法華文句「――在レ殼、聲勝二衆鳥一」‖迦陵頻伽。

【頻數】ヒンサク　たびたび、しばしば。梅堯臣詩「從レ今裏會應二一一」

【頻蹙】ヒンシュク　顔をしかめる、心に安んぜざる貌。孟、滕文公「一一曰、惡用二此煦煦者一爲哉」‖蹙顔。

【頻婆】ビンバ　からなし。本草「柰、一名一一」‖蘋婆。

【頻煩】ビンパン　しばしば、たびたび、わづらはし。杜甫、蜀相詩「三顧一一天下計、兩朝開濟老臣心」煩一本繁に作る。

【頻繁】ビンパン　たびたび、いそがはし。庾元威文「沐二浴玄風一一二雀圖一」‖頻煩。

【頻頻】ビンピン　しきりに。杜甫詩「獻レ詩分二新衆一、佳句莫二一一一」‖頻數・數數・屢。

八畫

【顊】イ　支

おとがひ「貴一一」‖頤。

【頤】カン　㊥㊐

おとがひ、あぎと。漢書、王莽傳「修口盭一一」‖頷。

【頷】

頤（貝部七畫）の本字。

【頴】㊀クヮ　㊁クヮン　㊥㊐

㊀つぶ、穀き物「一粒」「熟一」又、其れを數へるに用ふる數詞。○ちひさきあたま（小頭）○つちくれ（土塊）漢書、賈山傳「使レ其後世曾不レ得二一一一」○家而托葬焉（蓬一はよもぎの生する塊土クヮイ）‖壞。㊁一一漣トウはふき。‖款冬。

【頴濱】エイヒン　蟲池の水が自然に化して成りし粒狀のしほ。名勝志「山西解州鹽池、得二南風一、水化而成レ鹽、之謂二一一一」‖苦鹽。

【頴粒】エイリフ　つぶ「一一性結膜炎」は傳染性の眼病、トラホーム。

【顇】スヰ　㊥

うれふ、やつれる（顦）やむ（病）「顦一」‖悴（六六九頁二段）瘁（一二八六頁四段）

【顋】エイ　㊥

くちひげ。口の上の須（俗に髭（二二六六頁四段）に作る。

【顋】ソウ　㊥

髭（二二六九頁一段）に同じ。‖須。

九畫

【顎】ガク　㊥

○頭の凹める貌。○大いなる首にて深き目の貌。

【額】ガク　㊥

本、顙に作る。

○ひたひ、ぬか（額）顔面の上部。眉の上、髪の下の部「廣ー」○かぎり、さだめ、たか「定ー」○門頭又は楣上などに掲ぐる札「扁ー」○篆ー（ガン）は石碑の上部に篆字にてしるせし題字。圖○がく、草花の一種、紫陽花（アヂサヰ）の類、がくあぢさゐ。○ー銀川時代銀貨の名、形が一面に似たる故、略して單にーともいふ。

【點ー額】（テンガクカン）ぬかづく、黄河の上流なる龍門は水勢甚だ急なり、魚能く之を過ぐれば、化して龍となる、然らざる者は額を點じて還る。因りて試驗に落第せし人に喩ふ。三秦記「江海魚集二龍門下一、登者化レ龍、不レ登者ーレ點レ額」【額黄】（ガクワウ）六朝時代婦女のひたひに黄色を塗りて飾とするもの。李商隱詩「壽陽公主嫁時粧、八字宮眉捧二ーー一」【額ノ手】（ガクノテ）手をひたひにあてる、敬意を表する態度。宋史、司馬光傳「衙士望見、皆以レ手加レ額曰、司馬相公也」【額數】（ガクスウ）制定せしかず、たか。元史、順帝紀「增二其ーー一」【額岬】（ガクカフ）ひたひのふち。異融詩「眉邊全失レ翠、ーー中國レ黄」額黄参看。

【額面】（ガクメン）○圖がく、扁額。○公債・株券などの券面の金額。

【顎】（ガク）

○面の高き貌。○あご、俗に腭・齶に通用す「上ー骨」「下ー骨」

【顑】（カン）

○飯飽かず、うゑたる貌。○やせたる貌。○うゑて面の黄ばみて艱ある貌。韓愈詩「欲レ以金吊酬二綠宝常一顑」【顑頷】（カンガン）飽かずして饑うる貌。離騷「長ーー亦何傷」

【顔】（ガン）

○かほ、頭部の前面。○眉目の間の稱。史、高祖紀「隆準而龍ー」○ひたひ（額）○かんばせ、つらつき（面容）かほいろ（面色）○いろどり（采色）「ー料」○がく（扁額）○文字を扁額に題する。○姓。ー淵は孔子の高弟。ー眞卿は唐の忠臣。○厚ー（ガンカウ）は山の高き貌。【顔如二渥丹一】（ガンジョアクタン）渥丹は濃赤なる色、顔色の紅く美くしきに喩ふ。詩、秦風「ーー、其君也哉」【顔淵】（ガンエン）顔回を見よ。【顔延之】（ガンエンシ）字は延年、臨沂の人、南北朝の時、宋に仕へて官太常に至る、文章當時に冠たり、謝靈運と名を齊らす、時に顔謝と稱す。【承ノ顔】（ウケガホ）○先方の顔色を伺ひてそれに承順する。淮書、倘恢傳「今乃ーレ望レ齡」○子が父母の顔色を伺ひて氣に入るやうに孝養する。【犯ノ顔】（ハンガン）君主の機嫌を損ふをも顧みず直言する。唐書、魏徵傳「毎二ーレ進諫一、雖二帝甚怒一、神色不レ撓」＝冒ノ顔。【解ノ顔】（トケガホ）喜び笑ふ、さうがうをくづす。列、黄帝「夫子一ーレ而笑」＝開ノ顔。【開ノ顔】（ヒラケガホ）喜びて笑ふ。李白詩「一ーレ酌二美酒一、樂極恕成レ醉」＝解レ顔。【和ノ顔】（ヤハラゲガホ）顔色をやさしくして、にこにこする。令狐青行錄「必ーレ温語待レ之」＝怡顔。【怡ノ顔】（イガン）うれしき顔色をする。蘇軾來辭「引二壺觴一以自酹、時二庭柯一以ーレ笑」【顔行】（ガンカウ）さきて、軍隊の前列。管子「士爭前戰爲二ーー一」＝雁行（淮書、厳助傳、注）【顔巷】（ガンカウ）顔回が陋巷に在りし故事【論、雍也】により、せまくきたなきちまたをいふ。白居易詩「陶廬閒自愛、ーー陋誰加」陶潜は晉の陶淵明のいほり【顔呆卿】（ガンタイケイ）字は昕之、唐の玄宗の時、常山の太守となる、安祿山の反、呆卿兵を起して賊を討つ、河北諸郡響應す、已にして賊將兵を引きて城下に至る、呆卿兵を擧げて幾に八日、守備未だ備らざるを以て陷る、賊將執へて洛陽に至りて之を殺す、死に至るまで賊を罵りて口を絶たず。【顔甲】（ガンカフ）面の皮が鐵のよろひの如く厚し、恥知らず。北夢瑣言「時人云、王光遠顔厚如二十重鐵甲一」＝鐵面皮。【顔筋柳骨】（ガンキンリウコツ）唐の顔眞卿と柳公權との筆法を得たりとの稱。晉の立派なる形容。范仲淹、祭二石曼卿一文「曼卿之筆、ーー」【顔回】（ガンクワイ）字は子淵、孔子の高弟、天資聰睿、一を聞きて十を知る、怒を遷さず、過を貳せず、陋巷に在りて其の樂を改めず、年三十二にして卒す、後世尊びて復聖と稱す。【顔厚】（ガンコウ）あつかまし、恥を知らざるにいふ。書、五子之歌「鄙夫予之ーー有二恒悲一」＝厚顔・顔甲。【顔氏家訓】（ガンシカクン）書名、二卷二十篇、北齊の顔之推撰す、立身治家の法を述べ、時俗の誤を辯正し、以て子孫を戒めたるもの。四庫總目、之を子部の雜家類に列す。

【顔師古】シコ　字は籀、唐の臨沂の人、顔子三十七世の孫、性簡傲、躬行を設て儼然たり、唐初詔書監となり歴史を校定し、班固の漢書を註す、時人班孟堅（固）の忠臣と爲す、世に顔籀学と稱す。

【顔之推】スイ　字は子介、南北朝の臨沂の人、墳書を博覽し、飲酒を好み、邊幅を修めず、齊亡びて周に入り御史上士となり、隋開皇中没す、文集三十卷・家訓二十篇あり、世に行はる。

【顔氏之子】シ　孔子の門人顔回をいふ、時に其の父顔路尚ほ生存せり、故にいふ。易、繫辭「子曰、——、其殆庶幾乎、有二不善一未レ嘗不レ知、知レ之未レ嘗復行一也」

【顔駟不遇】フグウ　漢の顔駟が三朝に仕へて皆不遇なりし故事。漢武故事「上至二郎署一、見二一老郎顚眉皓白一、問何時爲レ之、對曰、臣姓顔名駟、文帝時爲レ郎、文帝好レ文、而臣好レ武、景帝好レ老、而臣尚少、陛下好レ少、而臣已老、是以三葉不遇也、上感二其言一、爲擢爲二会稽都尉一」

【顔眞卿】ケイ　字は清臣、唐の琅琊臨沂の人、少くして博學、辭章に工なり、又、草・楷を善くし、筆力遒勁秀抜なり、玄宗の天寶十四年、安祿山の反するや、眞卿時に平原の太守たり、顔杲卿と共に義を倡へて之を討つ、粛宗の朝、李希烈反するに及び、数を奉じ往きて之を諭し、節を持して屈せず、爲めに縊殺せらる、眞卿、四朝に歴仕し、大師に任じ、魯國公に封ぜられ、文忠と諡す。

【顔謝】ガン　顔延之と謝靈運と。南史、顔延之傳「延之・靈運、自二潘岳・陸機之後一、文士莫レ及、江右稱二潘陸一、江左稱二顔謝一焉」

【顔常山舌】ガンジョウザンノシタ　唐の常山の太守顔杲卿が、安祿山に拘へられ罵りて止まず、舌を断ちきられたる故事。文天祥、正氣歌「爲二——一」顔杲卿參看。

【顔色】ガンショク　○かほいろ。論、泰伯「正二——一、斯近レ信矣」○圖いろ（色）色彩。

【無二顔色一】ナシ　恐れ又、恥ぢて顔色がなくなる。白居易詩「六宮粉黛無二——一」

【顔貶】ガンヘン　顔回と窆貶と。皮日休賦「既不レ辨二子一一兮、遂一一貴于魏桀一」

【顔冉】ゼン　孔子の門人の顔回（字は子淵）と、冉耕（字は伯牛）と共に徳行を以て著る。文中子「薇（魏徵）——一之器也」

【顔曾】ソウ　孔子の門人、顔回と曾參と。蘇軾詩「——本吾師」

【顔蝋】ガンロウ　戰國時代の齊の人、隠居して仕へず、嘗て言ふ「無事以當レ貴、早寢以當レ富、安歩以當レ車、晩食以當レ肉」と。

【顔之徒】ノト　顔回のなかま。法言「睹レ顔之屬、亦顔之乘也、睹レ顔之人、亦——也」

【顔貌】ガンボウ　かほかたち。沈炯、歸魂賦「思二我親戚之一一、寄二夢寐一而魂求」

【顔無繇】ガンムヨウ　人名。史、仲尼弟子傳「——字路、顔回父、父子皆各異レ時事二孔子一」

【顔面】ガンメン　かほ。蘇軾詩「顧土汙二一一、年難侵二顔鬢一」

【顔料】レウ　五のぐ。一一廊は清朝にて戸部三廊の一。‖塗料・染料。

【顔路】ロ　顔回の父。孔子の弟子、孔子より少きこと六歳。顔無繇を見よ。

【顔魯公】コウ　顔眞卿を見よ「——筆」は十五卷、其の道文をあつむ。

【顔役】カタ　圖其の地方にて勢力ある親分。

【顒】ギョウ　ゴウ　圖

○おほあたま（大頭）○うやうやし、つつしむ（敬）おごそか（嚴正）易、觀卦「有孚一若」○おだやか（溫和）○さかんなり（壯大）獸の丈夫にて大いなる貌。詩、小雅「四牡修廣、其大有一」（四牡は四頭立の馬）○あふぐ（仰）

【顒顒】ギョウギョウ　温和なる貌。詩、大雅「一一卬卬」

【顒若】ジャク　おごそか、嚴正なる貌。字解參看。

【顧】コ　圖

○面の肥えたる貌。○面を洗ふ。‖顧。

【顚】ゴン　圖

たはむればなし（弄言）‖譯。

【顙】サイ　㊥　腮は俗字

○あご、おとがひ（頤頷）○魚のあぎと、えら。

【顙腮】サイ　動物學の名詞、一名は頤腮、蝦・蟹類の頭と胸との下に在りて、其の數三對、以て食を納れ口に入る用を爲す、脚上に短き毛を密生するは、觸覺を司り、食物の良否を辨ずる所以の者なり。

【顓】セン　㊦

○もっぱら。古、專に通ず。○ひとり（獨）○おろか（蒙）○一一はうやうやし、頭の容の謹める貌。又、こまかし、せせこまし、區區の貌。漢書、賈捐之傳「一一獨居一海之中」○一一頊は、古の帝王。黄帝の孫「一

顓高陽氏」○一孫は複姓。一一師字は子張、孔子の弟子。

【顓制】セン　ほしいままに事を行ふ。漢書、袁盎傳「諸呂用レ事、大臣一一」

【顓房】バウ　專房に同じ　姫妾の寵を專らにするをいふ。漢書「上亦寵レ之一レ一」＝專房（晉書、胡貴嬪傳）

【顓蒙】モウ　おろか。法言、序「天降二生民一、俾レ倥一一」＝頑愚。

【顓門】モン　專門に同じ。漢書、夏侯勝傳「一一名レ經」後漢書、儒林傳贊「益分流別、一一竝興」

【顓臾】ユ　春秋の魯の附庸、今の山東省費縣の西北、小沂河の南に一一封あり。論、季氏「季氏將レ伐二一一一」

【題】

㊀ テイ・ダイ　㊁ テイ・ダイ　唐

㊀ひたひ（額）「髙一」○かしら（頭）○校正の切り口。孟、盡心「標一數尺」○卷頭にしるしたる文字「一辭」○見出し、書物の名號「標一」「一目」○事物に就きて述作せし詩文「一畫」「一肖像」○とひ（試問）「問一」「課一」○しるし（表標）○しるす（識）「一名」「一詩」○しなさだめ（品評）「品一」しながら（品藻）㊁みる（視）詩、小雅「彼脊令二（脊令は鶺鴒）○圖かふとの前にたてるかざり。

【題詠】ダイ　題を設けて詩歌を作る。

【題額】ガイ　匾額に書する。羊欣、筆陣圖「前漢蕭何善二篆題一、爲二前殿一成、算思三月、以題二其額一、觀者如レ流」

【題勳】クン　いさをを書きしるす。郭璞、南郊賦「五獄不レ足三以題二其勳一、九韶不レ足三以贊二其舞一」＝銘勳。

【題畫】グワ　山水人物などの畫に詩文を題し記す。歸田錄「趙昌每題二畫末一曰二劍南蜀叟一」

【題刻】コク　文字又は物の形をきざむ。水經、注「一一貞順之名一」

【題字】ダイ　書物の初、又、石碑の上部などにしるす文字。晉遺錄「飛白題二二十字一」＝題署。

【題辭】ダイ　書物のはじめ、又は石碑の上部などに記すことば。李參詩「劍閣揭一レ一」

【題者】シヤ　圍碁の棋題を出す人。

【題袞】コン　明代の題本（兵刑錢穀などの大小公事の上書）と奏本（私事の上書）と。

【題柱】チウ　はしらに書きしるす。成都記「司馬相如、初四去、過二昇仙橋一、一レ曰、不レ乘二高車駟馬一、不レ過二此橋一」

【題跋】ダイバツ　○額ぶちにいれずみする。疏、王制「南方曰レ蠻、一レ交趾、有下不二火食一者上矣」○書物の頭註「左傳一一」

【題跋】ダイバツ　○書物の題辭と跋文と、書漢文の一體。○跋文。文體明辯「一一者簡編之後語也」＝書後。

【題品】ヒン　しなさだめ。宋史、楊傑傳「當時文士、咸願二其一一一」＝品題。

【題壁】ヘキ　かべに詩文を書きしるす。孟浩然詩「染レ翰聊一レ一、傾レ盞一解レ顏」

【題墓】ボ　はかに死者の名字などをしるす。南史、陳暄傳「身沒之後、題二吾墓一、曰二陳故酒徒陳君之神道一」

【題鳳】ホウダイホウ　人を愚弄する譬、鳳の字を分てば凡鳥となる故。世說、嵇康與二呂安一善、每二相思一、千里命レ駕、安後來、値レ康不レ在、喜出レ戸延レ之、不レ入、題二門上一作二鳳字一而去、喜不レ覺、猶以爲レ欣、鳳字凡鳥也」喜は康の兄。

【題名】ダイ　漢文の一體。文體明辯「一一者紀二識登覽遊訪之歲月、與二其同遊之人一也、其叙事欲二簡而贍一」

【題名記】ダイメイキ　官署の壁に退官者の姓名・履歷を記するをいふ。唐代之を壁記といふ（封氏聞見錄）

【題名僧】ダイミヤウソウ　圀經供養などの時、經文の題名を讀みあげる僧職。

【題名錄】ダイメイロク　唐宋以後、科擧卽ち官吏登用試驗に同時に及第せし者の姓名・年齡・鄉貫等を記して冊子としたもの。＝科第錄・登第錄。

【題目】ダイモク　○しなさだめ。晉書「甄二拔人物一、各爲二一一一」＝品評・品題。○名號。北史「行殿初成、未レ有二一一一」○書物の標題。南史、王僧虔傳「謂レ子曰、往年取二三國志一、聚二牀頭一百日許、汝曾未レ竟二其一一一」○詩文の題。楊萬里詩「晚圃初夏無一一、小樹微芳也得レ詩」○圀日蓮宗にて、妙法蓮華經の五字の稱。

【題目宗】ダイモクシウ　圀日蓮宗の俗稱、所依の經たる妙法蓮華經の五字題目を一宗教義の眼目とする故。

十畫

【顰】ヒン　カク　覺　諫

○あきらか（明）史、曹相國傳「蕭何爲レ法、一若二畫一一」＝較。○なほし（直）○やはらぐ（和）

【顗】ギ　ガイ　尾　賄

○しづか（靜）やすし（婧）○たのしむ（樂）○うやうやし、謹莊なる貌。○周一は晉人、字は伯仁、少くして重名あり。

【顧】グヮン　圓

○ねがふ。ねがひ、のぞみ。○おもふ、ほっする（思・欲）のぞむ（望）○いのる（祈）たのむ

（請）「祈ー」「請ー」「ー書」「至ー」「本ー」「志ー」「宿ー」○ねがはくは、なにとぞ。○したひうらやむ（羨慕）禮、祭義「國人稱ー然曰、幸哉有子如此」○おほあたま（大頭）○ことに（偏）たびごとに。詩、都風「ー言思子、中心弨兮」（言は我）

【願意】ヰワン　ねがひのむね、ねがひの趣。

【願海】ヰワンハイ　志願の宏大なるを海に喩へていふ。江總詩「未ー泛慈舟遠、徒令二一葉一」

【願絲】ヰワンスー　七夕に裁縫などの巧にならんことを願ひて竹竿に絲をかけて織女の二星に祈るをいふ。白居易詩「憶得少年長乞巧、竹竿頭上ー一多」

【願望】ヰワンワン　○ねがひのぞむ。○ねがひごと。

【願力】ヰワンリー　佛佛に祈りてねがひごとを遂せんとする心力。陸游詩「香火徒勤ー一遠」日本願力。

【願與二殘花一俱自新】ヰワンユイツワンホアキウツイシンニ　唐の盧懷慎の人日立春詩の句、曰はく「年度春歸無二限意一、今朝方始覺レ成レ人、從レ今克己應二猶及一、——」

【顙】サン　陽　賓　顙は俗字

○ひたひ（額）顏の上部「方ー」「廣ー」○おじぎする（叩頭）稽ーの略語。公羊、昭二五「再拜ー者何、曰ー者猶二叩頭一矣」

【顙泚】サンツー　ひたひのあせ。文同詩「疑帶二朝露一ー常涓涓」

【顚】テン　先

【顚】顚（前條）の俗字。

○いただき（頂）あたま（頭上）○てっぺん（物の最高處）‖顚。○たふれる。論、季氏「ー而不扶」たふす（仆）○おちる。おとす（墜）○さかさまになる（倒）○くつがへす（覆）○まよふ（迷）○もと（本）「ー末」陸機、文賦「恆操末前綴ー」さき（先）○きちがひ（狂）「狂ー」‖顚。○ふさぐ。ふさがる（塞）禮、玉藻「盛氣ー實揚休」‖閼。○ーはうれへ思ふ貌。禮、玉藻「色容ー一」又、專一ばうの貌。莊、馬蹄「其視ー一」

【顚越】テンユエ　顚仆・踣・倒・僵・斃・蹶○顚はまっ逆さまに、たふれるなり。○仆はぺったりと、横にたふれるなり。小學「詐仆臥レ地」○踣はつまづき仆れるなり。○倒はまっ逆さまになるなり。顚倒と連用す。○僵はふんぞりかへるなり。凍僵と連用す。○斃は死にたふれるなり。檀弓「吾得レ正而斃」檀弓「射之斃二人一」○厭はけつまづき、たふれるなり。史記「厲」上時」

【顚飲】テンイン　甚だしく酒を飲む。開天遺事「選レ妓乘二小橋車一、謂二名園曲沼一、隨レ草喧呼、自謂二之ー一」‖狂飲。

【顚狂】テンクワン　氣がくるふ。杜甫詩「ー柳絮隨レ風舞、輕薄桃花逐レ水流」

【顚匿】テントー　くつがへりたふれる。韓愈詩「日四入二軍門一、孤馬顚且僵」

【顚躓】テンチー　たふれる。戰國策「ー之事、望拜之謁、盡レ得則薄矣」‖顚跌。

【顚實】テンシー　氣力を十分に體内にみたす。禮、玉藻「盛氣ー揭休」揭休は陽氣の萬物を休發するが如くに呼吸する。揭は陽の誤）

【顚頓】テントン　くつがへりくづれる。柳宗元文「民氣不レ舒兮、假路ー一」

【顚倒】テンタウ　○さかさまになる。詩、齊風「東方未レ明、ー一衣裳」或「以レ裳爲レ衣、令二上者在下、是爲ー一也」○たふれる。

【顚躓】テンチー　くつがへりつまづく。杜甫詩「時危話ー一曾筆文「豈在二孤顚ー一之中一忘氣類」

【顚躓】テンチー　くつがへりおちる。家語「不レ觀二高崖一、何以知ー一之患一」

【顚跌】テンテー　つまづきたふれる。曾筆文「歷二忤大姦一ー一蹶顚、至二于七八一」‖顚躓・顚躓・顚踬。

【顚顚】テンテン　○要思して舒びざる貌。禮、玉藻「色容ー一」○專一なる貌。莊、馬蹄「至德之世、其行塡塡、其視ー一」

【顚頓】テントン　くつがへりたふれる。韓愈文「ー一顚狽、失二其所一操持」

【顚沛】テンパイ　○つまづきたふれる。顚躓流離の際、とっさの場合。論、里仁「造次必於レ是、ー一必於レ是」○くじける、挫折する。

【顚仆】テンフー　ころげたふる。漢書、孔光傳「一旦ー一無二以報稱一」‖顚踣。

【顚覆】テンフー　○くつがへる。くつがへす。書、胤征「惟時羲和、ー一厥德一」○くつがへしほろぼす。

【顚木】テンムー　たふれたる大木。孟子「若二ー一之有二由來一」‖顚と。

【顚踣】テンポー　たふれる。北史、楊播傳「少因疎與レ人聚鬪、爲所二擊ー一、無レ不ー一」‖顚仆・仆踣。

【顚毛】テンマオ　頭のいただきの毛の國語「班二序ー一以爲二民紀統一」‖眉髮。

【顚末】テンモー　事の始より終までの經過。古詩「顚レ詩記ー一、政不レ假二人辭一」‖本末。

【顚冥】テンミン　まよひまどふ。迷惑する。莊子「固ー一乎宥使之地一」

【顚】顚（前條）の俗字。

【類】㊀ルイ　㊁ライ　隊　賄

㊀たぐひ、なかま、ともがら「種ー」「異ー」「儔ー」韓愈、進學

解「絕ー離倫」○しな、わかち（品別）易、繫辭「方以ー聚」○のり（法）○よし（善）幸福。左、隱元「詩云、孝子不匱、永錫爾ー」○かたち（形）○おほむね（大概大略）史、伯夷傳「ー名湮滅而不彰」○ためし（例）「ー例」○くらぶ（比較）○したがふ（順）云、襄九「晉君ー能而使之」（能くする所に隨ふをいふ）○もろもろ（衆）○ことごと（皆）○ならぶ（竝）○たぐふ、にる（似）「ー似」左、莊九「非君也、不ー」○かたどる（象）○まつりの名。天帝をまつる。又、軍隊のまつり。詩、大雅「是ー是禡」○籠の一種。○獸の名。㊀かたよる（偏）不公平。左、昭十六「刑之頗ー」

【類】稱類相似たるは、惟だ犬を若だしと爲す、犬に從ふ類の屬。

【出ニ於類一拔ニ乎萃一】多くのなかまの人より、特別に優る。孟、公孫丑「聖人之於ニ民亦類也、出ニ於其類一拔ニ乎其萃一自ニ生民一以來未ニ有ー盛ニ於孔子一也」

【絕ー類離ー倫】なかまの人より非常に優る。韓愈、進學解「ー、ー、ー、ー」

【引ー類】志の同じき者を引き寄せる。六經衍義「和睦之道、不ニ徒在ニーレー呼ー朋聚ー遊聚會一」

【以ー類聚】善惡邪正各其の同類を以て聚る。易、繫辭「方ー、ー、物以ー羣分」

【類圖】書名、唐ーー又測鑑ーーの略稱。

【類句】○詩歌文章の互に似よりたる句。又其れを集めたる書物。○圖同種類の佳句。

【類狗】いぬに似る。桃源憲、馬援傳「所謂畫ー虎不ー成、反ーレー狗也」

【類化】同化に同じ、新觀念を舊觀念の中に融合するをいふ。

【類火】他の家の火災の爲めに自家も共にやかれる。‖類焼。

【類次】種類によりて之を次第する。宋史、范正辭傳「固ー當ー其可ー行者一ーー以聞」

【類字】形の似よりたる文字

【類似】による。東方朔、七諫「同音者相和分、同類者相似」

【類聚】部類によりて聚める。易、繫辭「方以ー類聚、物以ー羣分」

【類書】○多くの書物中の事項を分類編纂して學者の檢索に便せし書物、事文類聚・淵鑑類函・古今圖書集成などの類。○圖似よりたる書物。

【類推】互に類似せる點より、其の他の事を推測する。漢書、終軍傳「夫明闇之徵、上亂ニ飛鳥一下動ニ淵魚一、各以ーー」淮南、說山「此ーニーー之ー者也」

【類抄】類を以て書きあつめる。趙翼甌北詩話「久而成ー卷、以ー類抄一聚」

【類招】類を以てまねく。韓愈詩「ーー錄ニ個龍一」

【類焼】近火の爲めに、共にやかれる。

【類族】たぐひによりて聚める、族は聚。易繫「君子以ーー辨ー物」‖類聚。

【類題】圖似よりたる題によりて和歌俳句等を集める。又其の集めたる書。

【類別】たぐひに從ひてわける。‖分類・種別。

【類例】によりたる例證、比類凡例の義。劉貢父詩話「有ニ山東士大夫ーー三卷一」

十一畫

【顯】シュク　セキ　屋　錫

しかむ、面をしかむ。憂愁して樂まざる狀「頻ー」

十二畫

【顥】カ。　哿

○光の白き貌、明かなる貌。皓に通ず。○大いなり。○天邊の浩氣。○ー天は西方の天（呂覽、有始）注「金色白、故曰ー天」‖昊天。

【顥顥】○天の白く光る貌。楚辭、大招「天白ーー、寒凝凝只」○元氣の博大なる貌。陳子昂文「聖人ーー」

【顥氣】天邊の白く明かなる氣。班固、西都賦「鮮ニーー之清英一」

【顥穹】おほぞら。穹は穹隆。蒼空、蒼「伊上古之初生、自ニーー之生民一」

【顥蒼】あをぞら。顥は天邊の氣。班固、答賓戲「超ニ忽荒一而越ニーーー」‖昊蒼。魏志、管輅傳

【顧】㊀コ　㊁コ　遇　屋

㊀かへりみる、みまはす、眷親する。孟、梁惠王「王ー左右而言他」○心にとめる。大學「ー諟天之明命」○後方に心をくばる。○おもふ（念）○いつくしむ（眷）目をかける「眷ー」詩、大雅「乃眷乃ー」○かへりみる（反省）書、康誥「ー乃德」○かへりて（反）史、刺客傳「不易邪」○おもふに。蘇軾、後赤壁賦「ー安所ー得ー酒乎」○むくゆ、やとふ、雇に通ず。○ひく（引）○乃と同じ。後漢書「卿

非剌客、一說客耳」

【同動異形】顧・思・慮・懷・意・念・想・惟の別は思（六四八頁三段）の條を見よ。

○【顧・省・省の別は省（一三二一頁二段）の條を見よ。

【顧哀】かへりみあはれむ。漢書、皇帝仁恩、無不二一一」‖顧念哀憐。

【顧影】自ら其の美に矜りて容態をつくる。晉書、何晏傳「粉白不レ去レ手、行歩自一一」影一に景に作る。後漢書、南匈奴傳「昭君豐容靚飾光明、漢宮顧レ景裴回、悚二動左右一」

【顧炎武】字は寧人、又の字は亭林。明末の江南昆山の人。明の滅ぶるや、其の母金を絶ちて殉し、遺命して、二姓に事ふるなからしむ。炎武、卓識宏才、心を經術に專らにし考證に長ず。清廷之を召せども應ぜず。清の聖祖康熙二十年薦陸に舉す、著す所日知錄三十卷・天下郡國利病書百二十卷あり。

【顧愷之】字は長康、晉の無錫の人、陶侃にして才氣あり尤も丹青を善くし、圖寫特妙、謝安、深く之を重んじ、以爲へらく蒼生ありてより以來、未だ之れ有らざるなりと、俗に傳ふ、愷之に三絶あり才絶・畫絶・癡絶と、その人を觀くや、成りて後數年まで目睛を點ぜず、曰く傳神寫照正に阿堵の中に在りと、嘗て虎頭將軍たりしを以て、人號して顧虎頭といふ（晉書、文苑傳）

【顧客】國とくい客。‖花客。

【顧忌】かへりみはばかる。遠慮する。漢書、楊雲傳「詔增二使者一大爲二阿母一修レ第、中常侍樊豐等、見二震連切諫不一レ從、無所二一一、各起二家合閥池臺觀一役費無數」

【顧遇】いつくしみもてなす。後漢書、李固傳「竊感二古人一飯之報一、況受二一一一而容レ不レ盡乎」‖眷遇。

【顧復】心を容せおもふ。揚雄、反離騷「覽二四荒一而一一兮」

【顧指】かへりみゆびさす。南史、任昉傳「飛沈出二其一一一、榮辱定二其一言一」‖指顧。

【顧眄】かへりみめぐむ。元史、世祖紀「所レ過州縣、不レ加二一一」者、按レ之」

【顧惜】次條に同じ。

【顧惜】己の身をかへりみてをしむ。自重する。晉は惜の韓愈、柳子厚墓誌銘「不二自貴重一一一」‖顧惜。

【顧瞻】ふりかへりて見る。詩、檜風「一一二周道、中心怛兮」韓愈詩「一一想二巖谷一興歌倦二歷覽一」

【顧愼爲】字は景范、清の無錫の人、地理の學に精し、讀史方輿紀要を著す、正史を考據し、山川の形勢險易、古今の用兵戰守成敗の迹に於て皆折衷あり、覽傑の地と雖も、群載して遺すことなし。

【顧託】たのみ。たのむ。主として君主が終に臨み、左右をかへりみてたのむにいふ。唐書、韓瑗傳「積遂良受二先帝一一一顧無二」‖付託。

【顧眺】ふりかへりながめる。李紳詩「一一臨二遊遠一懷二蕭條一卷舒」

【顧念】いつくしみおもふ。

【顧訪】とひはかる。南史、虞荔傳「帝嘗引二左右一朝夕一一」

【顧望】○かへりみはばかる。南史、劉瓛傳「多レ所二疑刺一、無レ所二一一一」‖顧忌。○かへりみ望みて決定せず。後漢書、申屠剛傳「西州人懷二一一一」○あちこちをふりかへりて見る。

【顧反】かへりて。反の一字を用ふるに同じ。十八史略、前漢紀「一一一居二臣爭上一何也」

【顧問】ふりかへりてみる。漢書、敍傳「庇卿以一一而指二相印一、阮籍如詩「一一懷二德報一、言思二我友生一」‖回視。

【顧步】左右をふりかへりみながらあるく。朱熹詩「一一一長嘯、笙鶴翔二秋空一」

【顧命】天子が臨終の時に遺言して後事を託する。書、顧命、序「成王將レ崩、命二召公、畢公、率二諸侯一相二康王一作二一一一」

【顧問】○天子が臣下の意見をかへりみ問ふ。又、其の問はれる人。唐書、後文昌傳「屢召入二思政殿一、準一一至レ夕乃出」○廣く相談する義に用ふ。又、相談役。

【顧野王】字は希馮、南北朝の吳郡の人、精記博識、天文地理卜筮說を通せざるなし、陳に仕へ著作を領し、史事を掌る、後に黃門侍郎光祿卿となる、玉篇及び輿地志等の著あり。

【顧覽】ふりかへりて見る。五代史、王鎔傳「失レ國無歸、相與登二城西高閣一、一一山川、泫然而泣」‖回視。

【顧慮】心配する　きづかふ。晉宋文「不下以二死生一一上」

【顧慚】おもひしたふ。後漢書、公孫瓚傳「一一其老小」

【顧而言レ他】答が出來ずして左右を見まはして他事にまぎらかす。孟、梁惠王「王顧二左右一而言レ他」

【顯】セ。通

やつれる、やせる（病）憂ふる貌。‖憔（六九七頁一段）

【顯顯】やせ衰へたる貌。又、憂ふる貌。風、凱風「母氏一一」‖憔悴。

【顯】十三畫

○ほほ(頰)○あごの下の毛、あごひげ。

【頷】 ㊀ガン 㕚 カン 感 ㊁キン 軫

㊀歯が参差(ガタヒシ)として脣にあらはれる。㊁―頤(イキン)はあごが上に曲りて醜き貌。

【顫】 ㊀セン 銑 獮 ㊁セン 先

㊀ふるふ、手足が寒くしてふるへわななく。○まがる、頭が正しからず。㊁氣臭をかぐに害かなること。莊、外物「鼻徹爲―」

同訓異字 ブル 顫・慓・震・振・揮・戰・慄の訓は畏(一四四四頁)の條を見よ。

【顫動】(センドウ) ふるひわななく。宮和畫譜「鄭尚子善爲二顫筆一、見二於衣服手足木葉川流一、皆勢著二一一一」

【顫慄】(センリツ) ふるはして書く筆法。前條を見よ。

十四畫

【顯】 ケン ゲン 銑

○あらはる、人に知られる、名高し、名譽聞あり。又達して高位に在る「―達」○あらはす、明かにする。孝經「―父母」○あらはれたる位。又、高位の人「―者」「貴―」「―官」○あきらか(光明)いちじるし(著明)あざやか(分明)○あらはに(陽)外部だけ。史、老莊傳「―爲二名高一」○むきだし、隱れたる物が外にあらはれる(露見)「隱―」○ひかり(光)○おもてむき(公然)○子孫が亡き父母などを稱するに用ふる敬語「―考」「―妣」

同訓異字 ケン 顯・見・現・著・形・呈・露・表・彰・旌の訓は見(一七七一頁四段)の條を見よ。

【顯位】(ケンイ) 貴きくらゐ。漢書、王貢兩龔傳「無二―尊一」貝著二漢室一」‖高位。

【顯異】(ケンイ) たふとびて特別にあつかふ。新序「―二一於他臣一」

【顯猷】(ケンユウ) あきらかなるはかりごと。東晉詩「王傳陽明、―一謀猷」

【顯允】(ケンイン) 明かにして誠實なり。詩、小雅「―君子、莫レ不二令德一」

【顯榮】(ケンエイ) 名があらはれ身がさかえる。戰國策「富貴―一、咸二理萬物一」‖榮顯。

【顯要】(ケンエウ) たふとき位にありて、國家の要職に當る。又、其の人。

【徹レ顯闡レ幽】(テツケンセンイウ) 顯れたる者をも更に究めて微妙の所に至り、幽(ユウ)かにして知れ難き原理を開きて明かにする。易、繫辭「夫易彰レ往而察レ來、微レ顯而闡レ幽」朱子本義には、微顯を顯レ微の誤とす。

【顯考】(ケンカウ) ○古、高祖の敬稱とす「―廟」○元以後は亡父の敬稱とす。

【顯赫】(ケンカク) 明かにあらはれる。盛んに光り輝く。後漢書、邊讓傳「遠二烏佐之高勳一兮、驅二仁摩之―一」

【顯貴】(ケンキ) たふとし。又、高位に在る人。史、儒林傳「諸齊人以レ詩―一者、皆固子弟也」固は轉固。

【顯晦】(ケンクワイ) 世に知られると、隱れて知られざると。晉書、隱逸傳「君子之行殊レ塗、―一之謂也」

【顯花植物】(ケンクワショクブツ) 花開き實を結び種子を生ずる高等植物。隱花植物の對。

【顯官】(ケンクワン) 貴き官職。又、其の官人。唐書、楊炎傳「後竟登二進士一、至二―一」‖高官。達官。

【顯教】(ケンケウ) 釋迦が機に應じ物に接して明かに衆生に說示せし法。天台宗・華嚴宗・淨土宗など。密教(眞言)の對。

【顯顯】(ケンケン) あきらかにかがやく貌。詩、大雅「和樂君子、―一令德」中庸には憲憲に作る。

【顯功】(ケンコウ) あきらかなるいさを。崔駰文「錄二玄珪一冊一一」

【顯士】(ケンシ) 名のあらはれたる士。韓詩外傳「皆學二問於孔子一、遂爲二天下一一一」‖名士。

【顯著】(ケンチョ) 富貴の人をいふ。孟、離婁「未二嘗有一一一來一也」

【顯章】(ケンシャウ) あきらかにあらはす。書、昭詩「一一功名一」‖顯彰。

【顯敵】(ケンテキ) あらはれてあきらか。晉書、虞溥傳「學庭序、高堂一一」王褒、甘泉宮頌「甘泉山、天下一一之名處也」

【顯彰】(ケンシャウ) あきらか。明かにあらはす。史、齊世家贊「不レ背二柯盟一、桓公以昌、九二合諸侯一、匡レ天下一一」

【顯賞】(ケンシャウ) 厚くあらはれたる賞賜。後漢書、岑彭傳「作レ功一一」

【顯爵】(ケンシャク) 貴きくらゐ。陳情文「存有二一一之榮一、歿有二大名之實一」‖顯位。榮爵。

【顯祖】(ケンソ) ○祖先の名譽をあらはす。書經「父義和汝克紹乃―一レ」陳琳檄「當レ報二讐禮一、―一レ揚二名」○祖先の敬稱。晉書、樂志「皇皇―一、受レ命レ世佐レ時」

【顯達】(ケンタツ) 身分が高くあらはれる、高位に登る。漢武帝文「非レ敢希二望高位一、庶幾―一レ」

【顯著】(ケンチョ) あきらかにいちじるし。魏志、王粲傳「才學一一、與二王朝廷一」‖彰著。

【顯証】(ケンセウ) あからさまにそしりはづ

かしめる。唐書、王皇后傳「先天元年立爲二皇后一、久無レ子、而武妃稍有レ寵、后不レ平 ―ニー之、然接レ上素有レ思、終無二脅語短者一」【顒朝】ギョウ 其の當時の朝廷の意味。晉楊文「―ー惟清、王道遐均」【顒報】ギョウ あらはれて明かなさま。いい晉書、孫楚傳「懿功ー―隆二于今日一矣」【顒若】ジャク 詩「爾雅「温温恭人、維徳之―ー」、理合レ有二隆功一」【顒祉】シ 仁母を敬ひ尊ぶ。王符、思賢「―ー」【顒若】ジャク あきらかにかがやく。馬融、廣成頌「―ー以ー二之一」【顒微】ビ ○微小なる物事をあらはし明かにする。○あらはれると、かすかなると。【顒微鏡】ビキョウ 微小なる物を大きく見せる光學の器械。【顒微無間】ビムカン 顯はれたることと、かすかなることとの間には何等のへだてなし、本體界と現象界とは不離の關係あるをいふ。程頤、易傳序「體用一源、―ー」【顒昧】マイ あきらかに知してしりぞける。後漢文「宜下加ー―一以誅中風敎上」【顒沒】ボツ あらはれると、かくれるとの列仙傳「―ー不レ窮」＝陸顒。【顒密】ミツ 顒敬（天台・華嚴・禪・淨土などの諸宗）と寂敬（眞言）と。【顒名】メイ 後世にかくれなきほまれ。中唐「身不レ失二天下之ー―一」＝顒譽。【顒揚】ヨウ 名をあらはしあげる、表章する。禮記「―ー先祖一所二以崇一孝也」【顒容】ヨウ いちじるしきほまれ。宋良、呂論之傳「不レ喜二趨競一所レ至無二ー―一」【顒戮】リク 罪人を誅して其の屍を公衆にさらし示す、戮は死罪に行ふ。書、泰誓「功多有二厚賞一、不レ迪有二ー―一」【顒隆】リュウ いちじるしくうるはし。晉楊賦「賢二宮宇之ー―一、貴大人之攸レ居」

【顓】シュ 囫

顓ーはこめかみ（耳門骨）顳（本頁四段）を見よ。

十五畫

【顰】ヒン 眞 又、顰・嚬・瞵に作る

うれひて顔をしかめる、ひそむ、眉にしわをよせる「ーー一笑」駱賓王詩「愁眉柳葉ー」【顰蹙】ヒンシュク 愛ひて眉をひそめる。＝頻蹙。【效ー】コウのヒンマネ 古、西施といふ美人が心臓の病ひの爲めに、顔をしかめたるを見て、其の里の醜婦もまねをして顰したるに、里人驚きて逃げ去りしといふ故事に本づきて是非善惡を考へず強ひて他のまねをするに喩ふ。莊、天運「西施病レ心而顰二其里一、其里之醜人見而美レ之、歸亦捧レ心而顰二其里一、其里之富人見レ之、閉レ門而不レ出、貧人見レ之、挈レ妻子一而去レ之走、彼知レ美レ顰、而不レ知二顰之所一以美一」（顰は顰に同じ）李白詩「蛾眉不レ可レ妬、況乃效二其顰一」

十六畫

【顱】ロ 囫

○かしら「頭ー」「圓ー」あたまの骨、頭蓋骨「一骨」○當ーは馬の首飾。【頭頂骨】トウチョウコツ 頭蓋骨の一部にて其の頭頂を構成する扁平にして方形の骨、左右二對あり。

十八畫

【顴】ケン 囫

○ほほぼね（權醜）「頬ー」北齊書、神武紀「長頸高ー」○つらがまち（輔骨）【顴骨】ケンコツ ほほぼね。練顱「面上有二骨卓起一、名爲二ー―一、主二權勢一」

【顯】ケン 囫

ーはこめかみ、耳前下に在る骨、物をかめば動く所。＝耳門骨。

風部

【風】㊀フウ ㊁フウ 東

㊀かぜ。空氣の動搖するもの。○かぜふく、かぜが吹く。詩、邶風「終風」傳「終日ー爲二終風一」○すずむ、ーに吹かれる（乘涼）論、先進「ー―乎舞雩一」○ーにあたる。孟、公孫丑「有二寒疾一、不レ可レ以ー―一」○ーの如くはやし。○はなつ（放伏）書、費誓「馬牛其ー」○をしへ（敎化）「敎」○ありさま、けしき。○やうす、すがた、容姿。○いきほひ、勢力「威ー」○うた、歌謠。古、朝廷にて習俗の良否を觀て施政の參考とする爲めに地方のはやり歌を採集したるものを國ーといふ。○ならはし（慣習）「ー俗」禮、樂記「移ー易俗、天下皆寧」○つたはる。○きちがひ（狂疾）＝瘋。○手足、

又身體の一部がしびれて自由ならざる病「中ー」「大ー」○かぜひき(感冒)「ー邪」○はなる(放屁)はなれ散る。○さかりがつきて牝牡相誘ふ。書、費誓「馬牛其ー」左、僖四「ー馬牛不相及也」㊁ほのめかしさとす。‖諷。

【風移】フウイ　風俗がうつりかはる。書経「世変ー」

【風蜂】フウホウ　かぜにゆれ動くとばり。郊祀詩「展轉反ー帷」

【風韻】フウイン　○すぐれたるやうす。晉書、桓石秀傳「幼有二令名一、ー操秀徹」‖風采。○おもしろきおもむき。李白詩「ー逸二江左一」○かぜのひびき。柳宗元詩「ー碎二枯竹一」

【風雨】フウウ　○かぜふきあめふる。易、繋辞「鼓レ之以二雷霆一、潤レ之以ー雨」○風と雨と。禮、禮器「壇二帝於郊一而ー節、寒暑時」

【不レ避二風雨一】フウウヲサケズ　艱苦を避けざる義。漢書「随二従士大夫一ー」

【風雨淒淒】フウウセイセイ　風雨にて物さびし。詩、鄭風「ー、雞鳴喈喈、既見二君子一、云胡不レ夷」

【風雨対牀】フウウタイショウ　唐の韋應物が、弟に贈りし詩に「雅知風雨夜、復此対レ牀眠」とありしを、蘇東坡が見て深く感じ、其の弟子由に詩を贈りて、永此の語を用ふ。因りて兄弟相会する故事とす。

【風雨時】フウウトキ　五風十雨(八六頁一段)といふに同じ。漢書、鬼谷傳「日月光、ー——」

【風雲月露】フウウンゲツロ　世道人心に益なき浮華の詩文をいふ。隋書、李諤傳「連篇累牘、不レ出二月露之形一、積案盈箱、惟是風雲之状」

【風雲見】フウウンケン　事變に際會して功を立つる男兒。

【風雲之会】フウウンノカイ　○龍虎が風雲に従ひて勢を得る如く、明君賢臣の際會するをいふ。易、文言「雲従レ龍、風従レ虎、聖人作而萬物覩」○英雄が時機に投じて志を遂するをいふ。後漢書、朱祐等傳論「咸能感二会風雲一、各其智勇」

【風誌】フウエン　○はやりうた。魏書、張彝傳「乃命二四使一、觀二察ー謡一」‖俗謡。○詩經の國風の詩。齊書、陳皇后等傳贊「后妃之徳著自二ー一」

【風炎】フウエン　地文學にて空中の風の作用によりて温熱を生じ、地上に不時の暖氣を感ずる現象。

【風烟】フウエン　風にたなびくかすみ。梁簡文帝、大法頌序「川嶽呈レ祥、ー一教レ融」

【風高】フウコウ　たこ、いかのぼり。唐書、田悦傳「以レ紙爲二ー一高百餘丈一」‖風箏・紙鳶。

【風燭】フウショク　風の吹きかよふのきば。‖風燈。

【風俗】フウゾク　前條に同じ。李商隱詩「新灘莫レ悟遊人意、更作二ー一夜雨聲一」

【移レ風易レ俗】イフウエキゾク　風俗を善き方に移しかへる。孝經「ー——、莫レ善二於樂一」字解參看。

【覗レ風】ノゾムフウ　やうすをのぞみ見る。唐書、李勉傳「衆親ー一導訪」

【風雅】フウガ　○詩經の國風と大小雅と。宋書、傅隆傳「詩之ー一、書之典誥」○轉じて、詩文の總。文選、序「ー一之道、粲然可レ觀」○みやび。‖風流。

【風害】フウガイ　かぜのために受けし損害。

【風疾】フウガイ　けだかきやうす。晉書、桓温傳「豪爽有二ー一、姿貌甚偉」‖風格。

【風角】フウカク　四方四隅の風をうかがひ、吉凶を占ふ術。後漢書、郎顗傳「學二京氏易一、善二ー一星算六日七分一」注「ー一謂レ候二四方四隅之風一、以占二吉凶一也」(六日七分は易の卦を一年間の日數に配して吉凶を卜する術)

【風格】フウカク　なりふり。氣高き人品。世説、徳行「李元禮、ー一秀整、高自標持」

【風岸】フウガン　○かどだちて親み難き性質。唐書、仇子良傳「李石輔政、稍被有二ー一一」‖風節崖岸。○風の吹く河岸。無可詩「折葦鳴二ー一一、遙煙起二拂嶺一」

【風眼】フウガン　目に塵ほこりが入りておこる眼病。

【風漢】フウカン　きちがひ、狂人。玉泉子「奈何放二此ー一、及第耶」‖瘋漢。

【風儀】フウギ　風采ありて人を感銘する。經一に盤に作る。晉書、王導傳「導少有二ー一、識量清遠」

【風紀】フウキ　風俗をとりしまる紀律。韓愈、祭二殿部張員外一文「分二司諫臺一、ー一由振」(臺憲は法律をつかさどる役所)

【風起】フウキ　風の如く疾くおこり立つ。史、淮陰侯傳「鴈擧雖選、燻至ー一」

【風気】フウキ　○風をいふ。淮南子「戸牖者、ー一之所二從往來一」○風俗に同じ。魏書、李琰傳「自云猶有二國四ー一」○風度に同じ。晉書、桓温傳「温少有二豪邁ー一」

【風規】フウキ　風習上のきまり。風教。張衡、東京賦「卒無二補二于ー一」

【風儀】フウギ　やうす、みめかたち、美くしき風采。晉書、簡文帝紀「帝少有二ー一、善二容止一」

【風框】フウキョウ　たうみ(唐箕)玉篇雛字「ー一風レ穀」

【風琴】フウキン　○オルガン(英語の音譯)洋樂器の一。○手風琴(ハンドオルガン)の略。○琴の一種。白居易詩「ー一秋拂レ匣」○風鈴フウリン‖簷馬。

【風狂夫】フウキョウフ　きちがひ、狂人。山谷

康考「寒山子翹ン身撫ン掌大笑、閭丘公見而拝ン之、寺僧曰、太守何禮ニ——一耶」‖風漢。

【風雲雲捲】フウウンウンケン　風や雲のゆれ動く如く彼處此處と移り行く。班固、四都賦「遂乃——、浮游薄覧」

【風魚之災】フウギョノサイ　海上に颶風の起るをいふ。韓愈、送二鄭尚書一序「嶺南帥得二其人一、則一邊鄙治、不二相寇盗賊殺一、無二——水旱癘疫之患一」一說、大風と鯨魚との災。又、一說、大魚の名、其の首の向ふ所を以て、風の起る方角を知るといふ。

【風化】フウカ　○上が善き教を垂れて下をして之に化せしむ。詩、豳風、七月、序「故陳二后稷先公一之所一ン由」‖風教。○地文學にて岩石が空氣中の水分を吸收して次第にくづれるをいふ。

【風光】フウクワウ　○けしき。晉書、劉毅傳「歎曰、——不ン殊、皐ン目有二江山之異一」○人のやうす、風采。晉書、劉毅傳「能令二國士宗一其——一」

【風教】フウケウ　それとなく民を導きて善に化せしむ、をしへ。史、五帝紀「皆各往往稱二虞舜黄帝之處一、——固殊焉」‖風俗教化。

【風月】フウグワツ　○清風と明月と。南史、徐勉傳「常與二門人一夜集、客有二度鷰一、求二贈事五言一、勉正色答云、今夕止可ン談二——一、不ン宜ン及二公事一、時人咸服二其無ン私」皆は誤。○風流をたのしむ、閑——」

【風月主人】フウグワツシュジン　風月を管領する主人公。五代史、歐陽彬善三文歌一、蜀主以ン彬爲二嘉州太守一、彬大喜曰、青山綠水中爲二千石一、作ン詩飲ン酒爲二——一、豈誠不ン幸乎、忻然就ン任」黄庭堅詩「試問淮南風月主」注「江山風月本無二常主一、閒者便是主人」

【風穴】フウケツ　風の吹き出す穴。淮南子「墓宿二——一」注「——北方寒風、從ン地出也」述異記「列禦寇鄭人、御ン風而行、常以二立春日一歸二乎八寒一、立秋日遊二於——一、是風王卽草木皆生、去則草木皆落」

【風厥】フウケツ　顚厥に同じ。南史、謝貞傳「苦二——一毎ン發便一二日不ン能ニ飲食一」

【風遊】フウケン　○風紀を取締る規則。後漢書、皇后紀「爰逮二戰國一、——逾薄」○風紀を司る官吏、目付役。明律「凡——官吏」

【風告】フウコク　それとなくとほまはしにつげさとす。漢書、趙廣漢傳、以二治行一爲二京兆尹一而新豐杜建爲二京兆掾一、素豪侠、宣帝爲二姦利一、廣漢聞ン之、先ニ——一建一、建不ン改、收案致ン法」‖諷告。

【風骨】フウコツ　すがた、風采骨格。すぐれたる骨相。宋書、武帝紀「身長七尺六寸、——奇特、家貧有二大志一」

【風采】フウサイ　○やうす、すがた。漢書、霍光傳「天下想二聞其——一」‖風貌。

【風裁】フウサイ　やうす、品格。後漢書、李膺傳「膺狷持ニ——一、以二辭名一自高」

【風操】フウサウ　けだかきみさを。晉書、裴秀傳「少好ン學、有ニ——一、八識能屬ン文」‖風節、風範操守。

【風箏】フウサウ　○いかのぼり、たこ。詢郤錄「——卽紙鳶、又名二風禽一」○ふうりん。李商隱詩「四樓一夜ニ——急」‖風鐸。

【風藪】フウソウ　○かぜと、しもと。後漢書、虞詡傳論「——以卽二草木之性一、危亂而見二貞良之節一」○年時の變遷をいふ。沈佺期詩「雁塔ニ——古、龍池識月深」○文章の森嚴なる形容。四京雜記「淮南王安、著二鴻烈二十一篇一、自云、字中皆挾ニ——一」次條參看。

【風藪之氣】フウソウノキ　文章の氣のつよくはげしきをいふ。世說「淮南王安、著二書二十篇一、號二淮南子一、自云、字中皆挾ニ——一」

【風聽】フウチヤウ　○詩經の國風と雅頌と。南史、庾肩吾傳「既殊二比興一、更背ニ——一」○轉じて詩歌などの風流韻事をいふ。高適詩「秋興引ニ——一」

【風草德】フウサウトク　上位に在る君子の德は風の如く、下民は皆其の風化を受けてなびき從ふ譬。論、顏淵「君子之德風、小人之德草、草上之ン風必偃」

【風餐雨宿】フウサンウシュク　風雨にさらされ苦しめられる。

【風餐露宿】フウサンロシュク　風を食ひ露にやどる、のにゅくする。陸游詩「老來世路諳盡、——未ン覺ン非」‖露臥。

【風示】フウジ　それとなくをしへを垂れて民に示す。元曲、「雁二張忠臣孝子義夫節婦之日一、以ニ——一天下一」‖諷示。

【風刺】フウシ　とほまはしにそしる。毛詩序「上以ン風化ニ下、下以ン——一ン上」顧田錄「聞以二滑稽嘲謔一、形ニ于——一」‖諷刺。

【風姿】フウシ　すがたかたち。晉書、王衍傳「王戎歎爽朗、神清明秀、——靜雅」韋莊詩「素髮者骨相ニ——一」

【風指】フウシ　○風趣と意旨と、指は旨。漢書、何武傳「大司空類雖ン不ン善ニ——一」○とほまはしにさとす。‖諷指。

【風師】フウシ　かぜの神。風俗通、祀典「——者、箕星也」‖風伯・飛廉・巽二。

【風字頭】フウジガシラ　風の字の形に作りし

視。視讀會稽有二老鬼一云、右軍之後、持二一——一、大尺餘、色正赤、用レ之不レ減二端石一云右軍所レ用石」右軍は晉の王羲之。

【風日】フウジツ かぜと日光と。晉書、陶潛傳「瑯琊顏然、不レ敢二一一」

【風疾】フウシツ ○氣の狂ふやまひ。後漢書、袁閎傳「遂稱二一一一、指不レ能レ言」○中風のやまひ。〓風患。○かぜの如くはやし。水經、注「流驗一一」

【風檐雨沐】フウエンウモク かぜにくしけづり、雨にかみあらふ。外に在りて甚だしく苦む形容。元史、禮樂志「相二我祖宗一——」〓櫛風沐雨。

【風習】フウシフ ならはし。ならひ、風俗習慣。〓染習。

【風人】フウジン 詩人に同じ。三國志「是以雅頌稱二一一一レ之」

【風信】フウシン おとづれ、風むき。司空圖詩「初程一一好、回望失二津標一」

【風神】フウシン ひとがら、人品。晉書、裴楷傳「一一高邁、容儀俊爽、時人謂二之玉人一」〓風采。

【風車】フウシヤ ○かざぐるま、風力によりて回轉する車輪。○たうみ（唐笑）〓風扇。

【風邪】フウジヤ かぜひき。道德指歸論「大藥之將レ生也、宿二一一之中一人」

【風尙】フウシヤウ ○けだかきやうす。魏書、崔子朗傳「涉二獵經史一、少溫厚、有二一一一」〓風采。○人人のこのみ。〓好尙。

【風情】フウジヤウ ○面白きおもむき。白居易詩「欲下於二殘春一招中酒伴上客中誰最有二一一一」○やうす、ありさま。晉書、庾亮傳「一一都雅、過二於所一レ望」

【風檣陣馬】フウシヤウヂンバ 滿帆に風を孕ませて進航し、健馬に跨りて陣頭に立つ、共に勇壯の事。よりて文章又は文字の遒健なるに喩ふ。全唐詩話卷三「李賀、杜牧之序二其文集一云——、不レ足レ爲二其古一也」

【風趣】フウシユ おもむき。古今圖書集成「雖遠情韻連綿、一一巧拔」

【風樹】フウジユ 亡き父母を思ふ譬、風木之悲を見よ。白居易詩「庶使二孝子心、皆無二一一悲一」

【風樹之歎】フウジユノタン 風木之悲を見よ。

【風水】フウスイ なびきしたがふ。帝王世紀「是以屋瀆二豐年一、遠近一一」

【風色】フウシヨク ○天氣。盧照鄰詩「今朝好一一、延酤愜二天涯一」○人の顏色。晉書、磯形二一一一」

【風燭】フウシヨク 風中燭に同じ。〓亭客話「陵陽費禹珪下第、因曰、人生百年、有レ如二一一、止可二恰レ神養レ志、詩酒寄レ情」〓風燈。

【風水】フウスイ 陰陽家の說にて 山川水流墳墓の地を相する術。張子全書「葬法有二一一一山岡之說一、此全無二義理一」〓堪輿家。

【風馬牛不二相及一】フウバギフフサウキフ 風は放、牝牡相誘ふ馬や牛も互に求めて相及ばざるほど遠くへだたる譬。——也」（この故事に本づきて相干渉せざるを風馬牛といふ）

【風生】フウセイ ○風がおこる。李白詩「一一松下涼」○議論のはげしく當るべからざる形容。漢書、趙廣漢傳「見レ事一一、無二所レ避一」

【風歷】フウレキ ○土地風俗によりて聚散の法を立てる。書、畢命「彰二善癉レ惡、樹二之一一」○人のおとづれを聞く。嵇志、許靖傳、注「王朗與二靖書一曰、聞二消息于一一一、托二諸情于思想一」

【風聲鶴唳】フウセイカクレイ 怖氣づきて風の聲、鶴の鳴聲を聞きても敵兵の來るならんと驚きし故事。晉書、謝玄傳「苻堅衆號二百萬一、列レ陣臨二淝水一、幼度以二兵八千一涉レ水、堅衆奔潰、棄レ甲曾遁、聞二一一一、皆以爲二王師一」

【風篠】フウジヨウ 風を帶びて音するしのだけ。梁元帝詩「一一雜二絃聲一」

【風雪】フウセツ ふぶき。世說「詩思在二灞橋一一一中驢子背上一」

【風說】フウセツ うはさ。〓風聞・風評。

【風節】フウセツ 風骨氣節。唐書、張仲方傳「仲方確正有二一一一」

【風船】フウセン 輕氣球。

【風旋】フウセン かぜにともなひてふるあられ。白居易詩「雨雪霏レ霏坐、——暗紛紛」

【風前燈】フウゼンノトウ 風中燭に同じ。

【風俗】フウゾク ○ならはせ、風は上の敎化、俗は下の之に倣ふならはし。曲禮「移レ風易レ俗、莫レ善二於樂一」○其の地方に行はれる詩歌。國ぶり。史、樂書「故博採二一一、協二比聲律一」〓國風。

【風袋】フウタイ 圖はかりにて量る物の入れ物の目方、其れを引き去りたるものを正味の目方とす。

【風帶】フウタイ 圖○几幀の上より垂れる帶の如き布帛。○掛物の上の方より垂れる二條の細長ききれ又は紙。〓經帶・驚蕉。

【風態】フウタイ おもむき。白居易、燕子樓詩序「盼盼善二歌舞一、雅多二一一一」

【風規】フウキ 風がたわめる。晏殊「燒二異物一者、莫レ疾二乎風一」韓愈文「草木之無レ聲、——レ之鳴」

【風濤】フウタウ ○風とおほなみと。唐書、路巖敎傳「海道一一、舟艦壞」○轉じて世路の困難に喩ふ。劉因詩「人情雲雨九疑山、世路一一八節灘」〓風浪。

【風雹】フウタウ 風に吹きさらされる、雹は食食。韓愈、祭二張員外一文「雪虐一一」

【風鐸】フウタク 風鈴に同じ。白居易詩「一

ー鳴二四蜚一」

【風致】フウチ　○人のやうす。六帖「崔遠ー一整峻」‖風采。○おもむき、おもしろみ。圓治資鑑「有二林下ー一」‖風趣。

【風塵】フウヂン　○風とちりと。陸機詩「京洛多ー一」○世間の俗事。杜甫詩「滔官走ー一」○俗世界。晉書、王衍傳「自然是ー一表物」○兵亂。次條參看。

【風塵之警】フウヂンノケイ　兵亂のいましめ。漢書、蘇軍傳「邊境時有ー一」‖風塵之變「晉書、陶璜傳」

【風塵表物】フウヂンヘウブツ　世俗の外に超出せる人物。晉書、王衍傳「王戎謂二王衍一曰、神姿高徹、如二瑤林瓊樹一、自然是ー一」

【風鐸】フウタク　掛物が風に吹き動かさるるを防ぐため、軸の兩端に下げるおもり、玉・水晶などを紐に貫きて作る。

【風打】フウダ　かぜが吹きあたる。徐賓詩「ー一二廬窗二佛幌一」

【風中燭】フウチュウノショク　風前のともしび。人生のはかなきに喩ふ。古樂府「百年未二須臾一、盛苦二風吹一燭」范仲淹詩「莫下將二恩愛刀一、刻中此ー一上」‖風燭・風燈。

【風通】フウツウ　圖浮繪にしたる綺紗の絹布。

【風雅】フウガ　なりふり、すがたかたち、風采容貌。梁書、蕭綱逸傳「ー一如レ故、準繩斯在」

【風鳥】フウテウ　熱帶地方に産する鳥の名、羽毛五色、尾長く黃色を帶び、鳴聲中最美のもの、飛ぶ時、首にて風を防ぎ羽毛を庇ふといふ。‖極樂鳥。

【風調】フウテウ　○やうす、おもむき。白居易詩「依稀ー一似二文君一」○詩歌などのてうし。○きまり、しきたり。晉書、張融傳「以晉平生之ー一、何至レ使二婦人行哭失聲一」○風采時に應じて順調に吹く。次條參看。

【風調雨順】フウテウウジュン　風雨が順調である。唐書「武王伐レ紂(中略)既克レ殷、ー一」盛貶詩「雨順風調百穀登」‖風雨時ニフウウジ

【風潮】フウテウ　○風につれて流れるうしほ。宋書、鄧琬傳「ー一奔迅」○世のありさま、時世の傾向。

【風蝶】フウテフ　こてふの異名。古今注「蛺蝶一名ー一」

【風土】フウド　氣候と水土のありさまと。周語「以省ー一二後漢書、西域傳「莫レ不下備二其ー一一、傳中其珍怪上焉」

【風土記】フウドキ　○書名。晉書、周處傳「ー一十卷」○圖五十卷、古代の地理風土誌。此の中、出雲・播磨・肥前・豐後・常陸の五ー一は、元明天皇の時、勅して奉らしめしものにて、古ー一といふ。他は皆後世の作。

【風度】フウド　なりふり。すぐれたるやうす。晉書、賀循傳「ー一儁暢、善談朗レ玆、準繩斯在」

【風鳥】フウテウ　熱帶地方に産する鳥の名、羽毛五色、尾長く黃色を帶び、鳴聲中最美のもの、飛ぶ時、首にて風を防ぎ羽毛を庇ふといふ。‖極樂鳥。

【風調】フウテウ　○やうす、おもむき。白居易詩「依稀ー一似二文君一」○詩歌などのてうし。○きまり、しきたり。晉書、張融傳「以晉平生之ー一、何至レ使二婦人行哭失聲一」○風采時に應じて順調に吹く。次條參看。

【風調雨順】フウテウウジュン　風雨が順調である。唐書「武王伐レ紂(中略)既克レ殷、ー一」盛貶詩「雨順風調百穀登」‖風雨時ニフウウジ

【風潮】フウテウ　○風につれて流れるうしほ。宋書、鄧琬傳「ー一奔迅」○世のありさま、時世の傾向。

【風蝶】フウテフ　こてふの異名。古今注「蛺蝶一名ー一」

【風土】フウド　氣候と水土のありさまと。周語「以省ー一二後漢書、西域傳「莫レ不下備二其ー一一、傳中其珍怪上焉」

【風土記】フウドキ　○書名。晉書、周處傳「ー一十卷」○圖五十卷、古代の地理風土誌。此の中、出雲・播磨・肥前・豐後・常陸の五ー一は、元明天皇の時、勅して奉らしめしものにて、古ー一といふ。他は皆後世の作。

【風度】フウド　なりふり。すぐれたるやうす。晉書、賀循傳「ー一儁暢、善談朗レ玆、準繩斯在」

【風鳥】フウテウ　熱帶地方に産する鳥の名、羽毛五色、尾長く黃色を帶び、鳴聲中最美のもの、飛ぶ時、首にて風を防ぎ羽毛を庇ふといふ。‖極樂鳥。

【風調】フウテウ　○やうす、おもむき。白居易詩「依稀ー一似二文君一」○詩歌などのてうし。○きまり、しきたり。晉書、張融傳「以晉平生之ー一、何至レ使二婦人行哭失聲一」○風采時に應じて順調に吹く。次條參看。

【風調雨順】フウテウウジュン　風雨が順調である。唐書「武王伐レ紂(中略)既克レ殷、ー一」盛貶詩「雨順風調百穀登」‖風雨時ニフウウジ

【風潮】フウテウ　○風につれて流れるうしほ。宋書、鄧琬傳「ー一奔迅」○世のありさま、時世の傾向。

【風蝶】フウテフ　こてふの異名。古今注「蛺蝶一名ー一」

【風土】フウド　氣候と水土のありさまと。周語「以省ー一二後漢書、西域傳「莫レ不下備二其ー一一、傳中其珍怪上焉」

【風土記】フウドキ　○書名。晉書、周處傳「ー一十卷」○圖五十卷、古代の地理風土誌。此の中、出雲・播磨・肥前・豐後・常陸の五ー一は、元明天皇の時、勅して奉らしめしものにて、古ー一といふ。他は皆後世の作。

【風波】フウハ　○かぜ吹きてなみたつ。漢書、賈誼傳「經制不レ定、是猶下使二江河一亡二維楫一、中流而遇ー一上風必覆矣」○世の中のあらそひどとに喩ふ。晉、人間世「晉者ー一也、ー一易二以動一」

【風靡】フウビ　風吹きて土が靡る。詩、鄭風「終風且霾」魏書、崔光傳「昨ー一暴興、紅塵四塞」

【風媒花】フウバイクワ　雄蕊の花粉が風の爲めに雌蕊の柱頭に點ぜられて生殖作用を營む花。蟲媒花の對。

【風牛】フウギウ　肥えてうるはしき風采、牛は豐滿ニホコリタルニ一說、美好の貌。詩、鄭風「子之丰兮、俟二我於巷一」

【風望】フウバウ　風采人望。魏志、楊俊傳「ー一不レ及レ朗」

【風貌】フウバウ　やうす、風采容貌。魏書、陸希道傳「有ー一ー一、美鬚髯、歷二覽經史一、頗有二文敎一」

【風伯】フウハク　かぜのかみ。史、封禪書「ー一雨師」韓非、十過「ー一進掃、雨師灑レ道」‖風師。

【風發】フウハツ　○かぜがおこる。論衡「飄風之發、不レ能レ終二一日一」○議論の盛んにはげしき形容。韓愈、柳子厚墓誌銘「辨風ー一ー」

【風帆】フウハン　かぜをはらめる船のほ。孤泛詩「海行信ー一ー一、夕宿逗二雲島一」

【風痺】フウヒ　手足がしびれるやよひ。宋書、周續之傳「素患ー一ー一、不二復堪レ講」又中風をいふ。

【風靡】フウビ　風が草をなびかす如くなびきしたがふ。後漢書、馮異傳「英俊雲集、百姓ー一」

【風評】フウヒヤウ　風說に同じ。

【風物】フウブツ　けしき。陶潛文「天氣淒厲、ー一朗美」‖風景。

【風聞】フウブン　○うはさ、うはさに聞く。漢書、南粵傳「ー一、老夫父母墓已壞削、兄弟宗族已誅論」○御史に當出して官吏の非行を彈劾する伍名書。蘇軾、上二皇帝一書「風采所レ及不レ問ニー一ー一」風采は其の風聞を採用する謂。

【風標】フウヒヤウ　おもむき、やうす、風趣の標識。齊書、丘靈鞠等傳論「文雅者雖性情之ー一、神明之律呂也」‖風格。

【風雅】フウガ　つむじかぜ。王儉、求レ解二侍中一表「秋葉辭レ枝、不レ假ニー一之力」‖風森・旋風。

【風雅之論】フウガノロン　定まらざる議論。傳燈錄「六祖惠能、初寓二法性寺一、風颺

ノ動ヲ動、有二仁者一爭論、一云風動、一云幡動、六祖曰、風幡非ノ動、動自心耳」

【風木之悲】フウボクノ　父母已に死して孝養すること能はざるなげき。韓詩外傳「夫樹欲ノ靜而風不ノ止、子欲ノ養而親不ノ待、往而不ノ可ノ返者年也、逝而不ノ可ノ追者親也」陸游詩「早歲已興風木歎、餘生永廢蓼莪詩」‖風樹之嘆。

【風味】フウミ　㊀上品にしてよきあぢはひ。開天傳信記「麴生一一、不ノ可ノ忘也」麴生は酒の異名。○人品のおだやかなる義。韓愈、答二李使君一書「慕二仰一一未ノ嘗敢忘ノ」

【風噂】フウソン　とほまはしにさとす。詩經、序「上風道ノ實、故一一之情寡」‖風諭。

【風容】フウヨウ　なりふり。後漢書、章德竇皇后紀「遣止有ノ序、一一盛」‖風丰・風姿。

【風來】フウライ　○風が吹き來る。李山甫詩「一一花若ノ知、雲過雨沽ノ衣」○圖佳所の不定なる義、浮浪「一一人」

【風邪】フウジャ　風のおと。蘇軾詩「閑愁向ノ暖盡、一一與ノ耳謀」‖風聲・風韻。

【風波】フウハ　風と、なみと。崔顥詩「下落多ニ一一、蓮舟漸覺ノ稀」‖風濤。

【風蘭】フウラン　常綠草、深山の樹幹上に寄生す、葉は蘭に似て短く、夏小白花を開く、微香あり。

【風流】フウリュウ　○なごり、先王の遺風餘流。後漢書、王暢傳「士女仰二敎化一、黔首仰二一一一」○みやびやか。晉書、樂廣傳「天下言二一一者、以二王衍一爲二稱首一」王は王弼。‖風雅。

【風流罪過】フウリュウザイクワ　法律に觸れざるみやびなるつみ。北齊書、郎基傳「基爲二瀛川太守一、清恪無所二營求一、唯頻令レ寫レ書、潘子義遺二之書一曰、在レ官寫レ書、亦是一一」

【風流宰相】フウリュウサイシャウ　みやびなる宰相。兩史、王儉傳「儉嘗請ノ人曰、江左一一、惟有二謝安一、蓋自況也」

【風力】フウリョク　○風のちから。方干詩「潮逐一一歸帆上」‖風勢。○やうすと、ぢねぐみと、風采骨力。魏書、張彝傳「一一警發、有二王臣之氣一」

【風呂】フウロ　かぜが至る。禮、祭義「衆二子公桑一、一一以食ノ之」註「風至則桑葉乾、故以食ノ露也」

【風鈴】フウレイ　軒端のふうりん。竹坡詩話「時聞二一一鏗然有ノ聲」‖鐸馬。

【風烈】フウレツ　かぜがはげしくふく。論、述而「迅雷一一必變」

【風籟】フウライ　かぜと、つゆと。戴叔倫詩「隔浦雲林近、隣川一一清」

【風爐】フウロ　ふろ、茶の湯をわかす具。茶經「一一以二銅鐵一鑄ノ之、如二古鼎形一」

【風不ノ鳴ノ枝】フウトメイエダ　太平の世の形容。論衡「太平之世、五日一風、十日一雨、——、雨不ノ破ノ塊」

【吸ノ風】キフノフウ　仙人が風を吸ひて生活する。莊、逍遙遊「一一飲ノ露」

【係ノ風捕ノ影】ケイフウホエイ　次條を見よ。

【繫ノ風捕ノ影】ケイフウホエイ　取り止め無き形容。荒誕無稽にして捕捉し難し。谷永、論二神怪一「求ノ之邊邊、如二繫ノ風捕ノ影、終不ノ可ノ得」繫一に係に作る。淺書、郊祀志「求ノ之邊邊、如二係ノ風捕ノ影、終不ノ可ノ得」

【風騷】フウサウ　風の急なる義。杜牧詩「一一欲ノ凝ノ秋」

【風斯在ノ下】フウシハシタニアリ　高きに上る義。鳥高く飛べば、風は其の下に在り、故にいふ。莊、逍遙遊「風之積也不ノ厚、則其負二大翼一也無ノ力、故九萬里、則一一矣」

【風吹二枯木一晴天雨】フウコボクヲフキセイテンアメ　こがらしの音が晴天に雨のふる如く聞ゆる形容。白居易、江樓夕望招ノ客詩「煙火萬家城四畔、足河一道水中央、——、月照二平沙一夏夜霜」

【風滿二滄江一易水寒】フウハソウカウニミチエキスイサム　燕の太子丹が荊軻を易水の上に送りし時、荊軻の歌ひし詩句。史、刺客傳「至二易水之上一既祖取ノ道、高漸離擊ノ筑、荊軻和而歌、爲二變徵之聲一、士皆垂ノ淚涕泣、又前而歌曰、——、壯士一去兮不二復還一」

【御ノ風】ギョフウ　風に乘りて空をかけ回る。莊、逍遙遊「列子一一、泠然善也」

【櫛ノ風沐ノ雨】シッフウモクウ　（九三頁四段）を見よ。

【順ノ風】シュンプウ　○風の吹く方に從ふ。荀、勸學「一一而呼、聲非ノ加ノ疾也、而聞者彰」○ブンカおひて。逆風の反對。

【從ノ風】ショウフウ　草が風になびき從ふ如く服從する。史、淮陰侯傳「發ノ使使ノ燕、燕一一而靡」

【如二風過ノ耳一】ジョフウクワジ　其の事に相關せざるをいふ。吳越春秋「宮賁之予ノ我、如二歌風之過ノ耳一」‖馬耳東風。

【風輪】フウリン　風がしづかに吹く、輪は俗に軟に作る。戴叔倫詩「一一扁舟穩、行依綠水堤」

凧　風（前條）の古字。

颱　〔國字〕

おろし、上より吹きおろす風。

四畫

颪　イツ

おほかぜ（大風）「迴一」

颫　カ

○風の貌。○一一は口を開きて氣を吐く貌。

颭　テン

○おほかぜ(大風)○一鶚ガクは上より吹きおろす風、ふきおろし、一は通じて扶に作る。‖扶搖。

五畫

【颯】 サツ ソク　合 遏韻 屋 サツ

○風の聲「一然」「一一」○はやて(翔風)○盛んなる貌。○衰へたる貌。岑參詩「鬢毛一已蒼」

【颯遝】サツイ　風の吹き飯らす貌。陸機帝詩「一一林花落、遶遶風柳散」

【颯爽】サツサウ　○勇ましく心地よし。杜甫詩「英姿一一酣戰來」○きびきびしく心地よし。杜甫詩「一一動二秋骨一」

【颯颯】サツサツ　○風のそよそよと吹く形容。楚辭、九歌「風一一兮木蕭蕭」‖颯然。○雨の聲にもいふ。杜甫詩「寒雨一一枯樹湍」

【颯沓】サツタフ　颯颯に同じ。李白詩「蘇然蕙草芬、一一涼風吹」‖颯然・蕭颯。

【颯纚】サツリ　長き袖の貌。班固賦「紅顏一一」張衡、西京賦「舞二長袖之一一」

【颯然】サツゼン　風の音の形容。宋玉、風賦「有レ風一一而至」

【颯姿】サツシ　○かさなりあふ貌。梁簡文帝詩「城闕自相望、雲霞紛一一」○衆く盛んなる貌。顧愷之詩「寶劍紛一一」

【颯遝】サツタフ　湧き立つ雲の盛んに起る貌。遝はかさなる。笙賦「又一一而繁沸」注「一一繁沸、盛湧起貌」

【颯綠】サツリク　勇ましく強き貌。嵇康詩「一一長鳴感里心」

【颯戾】サツレイ　清涼なる貌。楚辭、九歌「遭二颯風之一一一兮、回二飛雨之披披一」

【颭】 セン　琰

○なみたつ、風吹きて浪動く。柳宗元詩「驚風亂一芙蓉水」○うごく、物が風を受けて動く、又うごかす(動)

【颭颭】センセン　風に動く貌。陸游詩「一一亞船來二北港一」

【颱】 タイ　灰

○支那の南海に起る暴風。○氣象學上、風の一種、颶風よりゆるやかにして小低氣壓のあつまり生ぜし時に起る「一風」

【颮】 ㊀ヘウ　㊁ハク　㊀蕭　㊁覺

㊀あらし(暴風)班固、答賓戲「風一雷激、竝起而救之」‖驟。㊁一一は衆多なる貌。

【颮颮】ハクハク　衆多なる貌。班固、西都賦「一一紛紛、增繳相繆」

七畫

【颶】 颺(次條)の誤字。

八畫

【颷】 グ　遇

○つむじかぜ。海中の大風。多くは夏秋の交に支那の南海上に起り、次第に回旋しつつ北進す。○氣象學上最大暴風。

【颷氣】グキ　颷風に同じ。

【颷風】グフウ　つむじかぜ。南越志「一一者、是四方之風一也、常以二五六月一發、永嘉人謂二之風蜚一、陸游曰、嶺表有二瘴母一、初起圍黑、久漸廣、謂二之颷母一」

【颷母】グボ　つむじかぜ。前條を見よ。嶺表錄「夏秋之間、有レ雉如レ虹、謂二之一一一、必有二颷風一」白居易詩「天黃生二一一一」

九畫

【颺】 アン　㒳

一颺ニはははやち、はやて。沈佺期詩「一颺藥海若、霹靂驅天吳」‖颶風。

【颸】 シ　支

○すずかぜ(涼風)「涼一」「細一」「輕一」○風すずし。

【颸颸】シシ　風の颯々と吹く貌。蘇軾詩「破窗無レ雨風一一」‖颸然。

【颸然】シゼン　颸颸に同じ。李賀詩「碧魂尋レ夢風一一」

【颸風】シフウ　涼しき風(左思、吳都賦)

【颼】 シウ　セウ　尤 蕭

風の貌。‖颼。

【颼颼】シウシウ　風の聲。趙壹、迅風賦「啾啾一一、吟嘯相求」

【颼颼】シウシウ　前條に同じ。張正元、南風之薰賦「一一淒清」

【颺】 ヤウ　陽 蕩

○あぐ、ふきあぐ、風が物を吹き揚ける。揚に通ず。○おこす。おこる(起)あがる、かろくあがる。○鳥が空にとびさる(鳥飛去)○簸ひて糠を去る。簡書、孫綽傳「簸之一一之、糠粃在レ前」○こゑをはりあげる、大言して疾ばし「一言」○あらはる(顯)風采がひきたつ。左、昭二八「子不レ少一」○舟の徐行する貌。歸去來辭「舟搖搖以輕

―」

【風馳雨驟】グフ　風・雷・揚・稱・打・節・抗・拭・翅の例は限（一五九七頁四段）の條を見よ。

【風去】フウ　鳥が飛び去る。魏志、呂布傳「譬如養鷹、饑則爲用、飽則―」

【風言】フウ　ことさらに物事を大きくいふ。又、大聲に訂ふ。晉、益稷「皐陶拜手稽首―曰、念哉」＝揚言。

【風扇】フウ　農具の一、籾殻を去るに用ふ。＝風車。

【風塵】フウ　風がまくを吹きあげる。白居易詩「春多―」

【風帆】ハン　舟のほをあげる。許渾詩「江風―一急、山月下ノ樓遲」

【風儀】フウ　○風に吹き揚げられる貌。謝伯喩、歌賦「終沿ノ風以――」○ひるがへる貌。韋應物詩「―燕新乳」＝翩翩。

十畫

【颯】エフ　颯に作り搖に通ず

○ふきのほるかぜ。○風が物を動かす「颯―」

【颯颯】エフ　風の吹き動く貌。崔立之文「風聲―、郁郁紛紛」＝飄颯。

【颯颺】エフ　風が吹きあがる。左思、吳都賦「與ノ風――」

【颼】ソウ　颼（前頁四段）に同じ。

瀟―セウは風の聲の形容。周權詩「含」風自―」

【颼風】ソウ　すこしのかぜ。梁元帝纂要「小風曰――」

【颯】ハン　ヘン　陷

○はしる、馬が疾く走る。○風が船を吹きて進める。○ほ。左思、吳都賦「樓船舉―」＝帆。

【颯】リツ　質

○かぜ（風）○風雨暴疾アラシ

十一畫

【颺】ヨウ　養

○つむじかぜ（回風・旋風）○はやて（疾風）○めぐる（旋）○はやし（疾）○風の吹く貌。○飛ぶ貌。○あがる貌。○ひるがへる貌、ひらひらと吹かれて飛ぶ。○おつる（落）上よりひるがへりて墜落する。莊、達生「雖有ノ伎心ノ者不ノ怨ノ―ノ瓦」○吹く、ひるがへす。○さまよふ、ただよふ、おちぶれる「―零」漂に通ず。

【颺揚】ヨウ　ひるがへりうごく。曹權詩「轉蓬離ニ木根一、―隨ニ長風一」揚一に通に作る。

【颺颺】ヨウ　ひるがへりあがる。曹植、洛神賦「―兮若ニ流風之廻ニ雪一」＝飄揚。

【颺吝】ハク　たはれを、遊里に遊びうかれる者。頴書纂要「―訂ノ人輕ニ身于花柳之中一如ニ飄流而無ニ定也一」＝浮客。

【颺宮】グウ　魯郷にさすらひ住む。黃庭堅詩「新民數十家、―初樓託」＝飄泊。

【颺欵】クウ　忽ちうごきて定まらず。王行詩「長松更飛泉、霞彩互―一」

【颺瓦】グワ　屋根より落ち來りし瓦、天災の喩。莊、達生「雖ノ有ニ伎心一者ノ不ノ怨ニ―一瓦一」（偶然に落ち來りし瓦の爲めに傷をうくるも害心ある人と雖も怨を言はず）

【颺壓】アツ　疾くうつ。陳叢賦「迅雷疾風之所ニ―一」

【颺翔】ヨウ　ひるがへりとぶ。范成大詩「流活颺以翻」

【颺忽】コツ　○風の疾き貌。宋玉賦「―潏湧」忽一に習に作る。○忽ちの義。歐陽修詩「―不ノ見如ニ雲煙一」

【颺散】サン　ひらひらととびちる。陳後主詩「庭花――飛入ノ帷」

【颺厲】レイ　風の吹く如くすみやかなる貌。呂安、與ニ嵇茂齊ニ書「雞鳴戒ノ旦、則――晨征、日薄ニ西山一、則風首靡ノ託」＝飄然。

【颺疾】シツ　すみやか。說苑「或行安舒、或颺ニ―一」

【颺集】シフ　風にひるがへるはなしべ。葉は蕎。呂温、虢州三堂記「樂魚時翻、―雪飛」

【颺蕩】トウ　風のさびしくふく貌。杜甫詩「―覺ニ素髮一、瘦欲ノ衝ニ儒冠一」

【颺旋】セン　ひるがへりめぐる。白居易詩「舞過遠檣下、―深瀾隱」

【颺蕩】タウ　○ゆれ動く。李白詩「驚雲辭ニ沙磧一、―遂ニ河洲一」○さすらふ、流浪する。

【颺登】トウ　ひるがへりあがる。張華詩「―清雲間、論ノ道神皐隱」

【颺簸】ハ　ひるがへりあがる。韓愈詩「無ノ風自―、融流圍ニ柔荑一」

【颺泊】ハク　魯郷にさまよふ。流寓して定めなし。北史、寇式傳「雖ニ親族一―而清貧守ノ度、不ノ失ニ士節一」＝漂泊。

【颺泛】ハン　ひらひらと輕くうかぶ。李中詩「―經ニ彭澤一、扁舟思無ノ窮」

【颺颺】ヨウ　ひるがへりとぶ。蘇軾、秋夜賦「輕雲―一」＝零露。

【颺風】フウ　つむじかぜ、はやて。爾雅、釋天「回風爲ノ颺」詩、小雅「南山烈烈、―發發」＝暴風。

【颺風不ノ終ノ朝】フウフユウテウ　暴風は長く續きて吹かず、朝は晨より朝食までの間。勢のつよきものは早く衰

ふるに喩ふ。老子「――、驟雨不ㇾ終ㇾ日」

【飄搖】ヘウ ひるがへりおちる。白居易詩「須臾風日暖、處處看ㇾ――」‖飄零。

【飄眇】ヘウ 聲の清く長き貌。成公綏、嘯賦「洌ㇾ――而淸遒」

【飄飄】ヘウ ○ひるがへる貌。潘岳賦「雁ㇾ――而南飛」○風に吹かれて輕くあがる貌。陶潛、歸去來辭「風ㇾ――而吹ㇾ衣」○さまよふ貌。杜甫詩「――遠自二流沙一至」

【飄揚】ヘウ ひるがへりあがる。魏武帝詩「田中有二轉蓬一隨ㇾ風遠ㇾ――」

【飄颻】ヘウ ひるがへりあがる。子夜歌「秋風入二窗裏一、羅幃起ㇾ――」‖飄揚。

【飄落】ヘウ かぜに吹かれておちる。謝靈運、鄧氏桑「林乘ㇾ風而――、水襲ㇾ月而含ㇾ輝」

【飄零】ヘウ ○木葉がひるがへりおちる。新論「秋華誠危、因二微風一而――」○轉じて身世の不幸なる者に喩ふ。おちぶれる。陸游詩「不三敢歌二――一」‖零落・淪落。

【颸】（一）

○風の貌。○つむじかぜ（旋風）

【飂】リウ レウ リク 尤 篠 屋

高く吹く風。又、其の形容。

【飂戾】リウ 高く吹く風の貌。淮南、覽冥「至陰――、至陽轉移」

【飂戾】レイ 風の聲の形容。潘岳、西征賦「吐二淸風之――一」‖戾戾。

十二畫

【颺】（一）ヘウ 養

又、颺に作る。猋に通ず

○あらきかぜ（暴風）陳子昂詩「言―忽號怒」おほかぜ（大風）つむじかぜ（旋風）「回―」「狂―」「言―」○かぜ（風）、涼―」「寒―」○商―は秋風。

【颺言】ヘウ 風に吹かれるはたあし。宋降神曲「發二――一以弦二――一」

【颺風】ヘウ あらきつむじかぜの屬。雅「暴風從ㇾ下上、曰二――一」‖猋風・扶搖。

【颸】

颯（前條）に同じ。

【颷】リウ 尤

微風の聲の形容。淇方生、風賦「――微扇、歷歷淸舒」

十五畫

【飄】（一）

――は風の吹き行く聲。左思、吳都賦「翼二――風之一―一」

十八畫

【飆】

風（部首）の古字。

【飆師】ヘウ かぜの神。周禮、春官「祀二――一」‖風師・風伯。

飛部

【飛】ヒ 微 灰

○とぶ、鳥が空を翔ける「高―」「翠―」○とばす「―檄」○ちる（散）はねる「―沫」「―散」○あがる（颺）「―颺」○こゆ（超）○ひるがへる（飜）○疾し、速か「―報」「―檄」○根なしごと「―語」○―禍は意外のわざはひ。○とぶ鳥、又は疾き「―走」韓詩外傳「蜎―蠕動」○疾く馳する馬。司馬相如賦「騁六―」○屋宇などの高きにいふ「―軒」「―檐」○―廉は神禽の名。又、風の神。○圖とぶ、順序を經ずして進む。

【飛字】ヒ 高き家ののき。左思詩「―若二鏤浮一」‖飛軒・飛簷。

【飛雨】ヒ かぜに吹き飛ばされるあめ。謝朓詩「朔風吹―――、灞涘江上來」

【飛英會】ヒエイクワイ 宴會に、落花を杯に受けて飲みし故事。曲洧舊聞「范蜀公居二許下一、於レ所レ居造二大堂一、以二長嘯一名レ之、前有二脩竹一、脩竹有二高處可レ容二數十客一、每二春季花繁盛時一、燕二客於其下一、約レ有二飛花墮一酒中一者、輒飲二一大白一（中略）當時號爲二――一」‖蜀公流觴。

【飛燕】ヒエン 前漢の孝成帝の趙皇后の號、弱骨豐肌にして歌舞を善くするが故「漢書、外戚傳」

【飛挺】ヒテン 高く上に反り出たるのきの棰一に飛に作る。洛陽伽藍記「――峻宇」‖飛宇。

【飛螾】ヒエン 雲に喩ふ。梁簡文帝、詠雪詩「亂粉飄二落花一、雜縠亂二――一」

【飛柯】ヒカ はやふね。‖走舸・輕舸。

【飛蛾】ヒガ 火とりむし。梁書、到溉傳「如二――之赴レ火、豈羨レ身之可レ惜」自ら死地に投ずるに喩ふ。

【飛行】ヒカウ 空中をとび行く。列仙傳「偓佺槐里采藥入レ也、體毛數寸、能二――一逐二走鳥一」

【飛行機】ヒカウキ 發動機によりて空中を飛行する機。‖空中飛行機・航空機。

【飛行船】ヒカウセン 輕氣球にとりつけて空中を飛行するふね。‖空中飛行船・航空船。

飛絮。
【飛行殿】ひこうでん　帝好二夕出遊一、遊二――一」
【飛箸】ひちょ　矢の異名。呉越春秋「矢為二――一」
【飛閣】ひかく　○高きたかどの。崔顥賦「丹柱雕楹、――層樓」○高きかけはし。三輔黄圖「跨二城池一作二――一」＝複道。
【飛鋒】ひほう　天空をとぶつる。何劭、遊仙詩「遊遨陵二峻岳一、連翩御二――一」
【飛翰】ひかん　いそぎの手紙をやる。又、其の手紙。後漢書、孔融傳「收二合士民一、起二兵講一レ武、馳レ檄――一レ、引二謀州郡一」
【飛起】ひき　とびおころ。温庭筠詩「丹丹山雞紅尾長、一聲機杼驚――」
【飛騎】ひき　○早く走る騎兵。○騎兵の隊将の称。唐書、百官志「――隼擊将軍從第八品」
【飛鳧】ひふ　とび翔けるみづち。陳孚詩「恍似二――一巻一海來一」
【飛驒】ひだ　馬を疾く駆る。李商陽詩「游騎――レ不レ動レ塵」寝はきづな。
【飛脚】ひきゃく　圖昔時、手紙物品等を遠方に送る事を業とせし者。＝急使。
【飛空】ひくう　おほぞらをとぶ。儒光義詩「映レ地為二天色一、――レ作二雨聲一」
【飛花】ひか　ちるはな。裴子野詩、「拂レ幕如二遊蝶一、落レ樹似二――一」
【飛禍】ひか　意外のわざはひ。後漢書、周榮傳「若卒遇二――一、無得二殞一」＝奇禍・横禍。
【飛快】ひかい　圖非常に速か。
【飛黄】ひこう　○背に角ありて千年の寿を保つと云ふ神馬。淮南、覽冥「――伏レ阜」＝乗黄。○轉じて廣く名馬の義。韓愈詩「――臨路去、不レ能レ顧二螻蛄一」註「――龍馬」（俗に――臘琵に作り、以て仕路得意の状に喩ふ）
【飛蝗】ひこう　とびいなご。呉志、趙達傳「遠治二九宮一算之術一、應レ機者レ神、至レ計二――一射中隙伏無レ不二中効一」
【飛丸】ひがん　飛び來る弾丸。
【飛觀】ひかん　高き樓觀。隋書、食貨志「成陳二――一、瞰レ巖帶レ川」唐書、諸公主傳「造二第東都一、崇壘――相聯屬」＝飛閣。
【飛蓬】ひほう　とぶほたる。陳傳良詩「無數――競二案秩一」
【飛楊】ひよう　甚だ高きはし。徐陵詩「――對二石梁一」
【飛檄】ひげき　○いそぎの通文。杜甫詩「戚戚喧――、家家急二鼓鼙一」○いそぎの檄文を飛ばす。＝馳檄。
【飛血】ひけつ　とび散るち。劉禹錫詩「悼晴忽星墜、――濺二林楡一」
【飛言】ひげん　うはさ。無根の説をいひふらす。道徳指歸論「――傷レ事、以惑二敵人一」＝流言・飛語。
【飛軒】ひけん　たかきのき。劉瑤、扶風歌「願晴望二宮闕一、俯仰御二――一」
【飛語】ひご　無根のうはさ。史、魏其武安侯傳、適有二――一、為二惡言一聞レ上」＝流言・蜚語。
【飛轂】ひこく　車をとばす。唐書、薛收傳「――轉レ機、更相資噴」＝馳轂。
【飛鴻】ひこう　とびちる。杜荀鶴詩「雨林――日輪中」
【飛札】ひさつ　○いそぎの手紙。元稹詩「紫毫――看猶遇、黄字新詩和未レ成」○いそぎの手紙をやる。劉太眞詩「レ――謝二三守一」
【飛棧】ひさん　たかきかけはし。陸游詩「――連レ雲是坦途」
【飛矢】ひし　とび來るや。潘岳賦「彤珠星流、――雨集」＝流矢。
【飛翼】ひよく　疾くはしる四頭立のうま。七啓「駕二雲龍之――一」
【飛舟】ひしゅう　はやふね。王融詩「金華救二撃羽一、踰首望二――一」＝走舸。
【飛耳長目】ひじちょうもく　遠方のことを見聞する耳目。管子、九守「一曰長目、二曰飛耳、三曰樹明、明知二千里之外、隱微之中一」
【飛神】ひしん　心を馳せる。關尹子「離二情所一レ見、可二以――一」
【飛章】ひしょう　ふみを急ぎておくる。後漢書、蔡邕傳「使二八――言一レ邕」
【飛将】ひしょう　名将、飛とは其の行動の神速なる義。史、李廣傳「居二右北平一、匈奴聞之號曰二漢之――一軍一」
【飛翔】ひしょう　とびかける。關尹子「雲之巻舒、食之――、皆在二虚空中一」
【飛蹇】ひけん　かちをいそがしくこぐ。王安石詩「桐江路尤險、――レ下二鴨瀬一」陸游詩「渺渺煙波――レ去」
【飛錫】ひしゃく　僧侶の遊行するをいふ。錫は錫杖、高僧傳「有二神僧一、――レ浚レ雲而行」
【飛書】ひしょ　○手紙を急ぎて送る。又其の書面。揭傒斯詩「――九重天」○何處よりとも無く來たりし書。南史「左丹郎沈炯、為二――所一レ謗、將レ陷二重辟一」＝匿名書。
【飛翠】ひすい　風にとぶ柳の花。雍陶詩「落花門外春將レ盡、――庭前日欲レ高」
【飛生】ひせい　○飛鳳の異名。○飛狐の異名。
【飛星】ひせい　とぶほし。漢書、天文志「開明四年閏月庚午――大如レ缶」
【飛雪】ひせつ　かぜにとぶゆき。魔世南詩「散レ目巻二征蓬一、浮レ天散二――一」
【飛泉】ひせん　○たき。楚辭「吸二――之微液一兮」＝瀑布。○ふき出る泉。＝噴泉。
【飛箭】ひせん　とび來る矢。晉書、陸紹傳「――雨集」＝飛矢。
【飛鍵】ひせん　唐の憲宗の時、行はれたる切手の類、錢に代用せしもの。
【飛鼠】ひそ　蝙蝠の異名。揚子方言「蝙蝠自レ關而東、或謂二之――一」
【飛走】ひそう　禽獣、飛は鳥、走は獣。左傳、昊都賦「寫二――之樓宿一」
【飛瀑】ひばく　たき。劉克莊詩「成關二怪石一臨二――一」＝飛泉。

【飛刀】ひとう ○刀を遥すること飛ぶが如く速か。北史、裴康生傳「一一亂斫、投ニ河溺死者数衆一」○刀を空中に擲ちて人を殺す「征蘭紀略」＝飛剣。

【飛猱】ひどう をどるましら。陸游詩「人捨二絶駆一似ニ一一一」

【飛湍】ひたん はやせ。江南野錄「長江一條、一一千里」＝奔湍・激湍。

【飛彈】ひだん とぶはじきだま。戴復古詩「春風桃已紅、光陰等ニ一一一」＝飛丸。

【飛驒】ひだ とびはせる。朱熹詩「夢想一一不ニ自禁一」

【飛沖】ひちゅう 高くとびあがる。黄潤詩「報レ君身事漸一一」

【飛注】ひちゅう とぶが如くに流れる。水經、注「瀑勢一一、狀如ニ懸布一」

【飛梯】ひてい たかきはしご。高惜文「作ニ一一一、以上ニ其城一」

【飛鳥】ひちょう とぶとり。史、淮陰侯傳「一一盡、良弓藏、敵國破、謀臣亡」＝鷹鳥・飛禽・翔禽。

【飛超】ひちょう とびこえる。五燈會元、紅蓼「一一三界外」

【飛鏑】ひてき とび行くかぶらや。曹植文「足飢ニ白刃一手接ニ一一一」

【飛電】ひでん ○ひらめくいなびかり。○急ぎの電報。

【飛叔】ひしゅく はとの異名。開天遺事「張九齢少時、養ニ一鴿一、毎レ與ニ親知書一、繫ニ於餓足一、依ニ所レ寄處一往投レ之、目爲ニ一一一」

【飛棟】ひとう 高き家のむね。張正見詩「一一臨ニ黄鵠一、高窗度ニ白雲一」＝崇棟・隆棟。

【飛鳧】ひふ とびあがる。＝飛揚。

【飛鳧龍文】ひふりゅうぶん 飛鳧は古の良馬。使童に喩ふ。藝林伐山「田巴善ニ雪遥一日、魯連子乃飛鳧也、豈直千里駒哉、楊注目ニ揚惜一曰、此見駒齒未レ落、已是我家龍文、更二十歳一當レ求ニ之千里外一」

【飛肉】ひにく 鳥類。太玄經、明珠彈ニ于一一一」

【飛報】ひほう いそぎのしらせ。＝急報。

【飛白】ひはく ○書體の名。かすりがきに書く書體。漢魏の宮闕の扁額等多くこの體を用ふ。書斷「一一者、後漢左中郎蔡邕所レ作也」○圖かすり、織物の模様。＝絣。

【飛蓬】ひほう ひょう、とびちるひさめ。元好問詩「雷公怒擊散ニ一一一」

【飛漫】ひまん 高き所よりおちるたき。錢起詩「千峯挂ニ一一一百尺拖ニ翠微一」＝飛泉・奔澪。

【飛文】ひぶん ○無根の文書。又、根なくして至る說。漢書、淮南王一一、譖ニ於民閒一」＝飛書。○巧に文を作る。藝統、文選序「詞人才子、則名溢ニ於標榜一、一一一染レ翰、則卷盈ニ乎湘帙一」

【飛陛】ひへい 高ききざはし。青楓、七啓「華閣緣レ雲、一一陵レ虚」＝雲陛。

【飛變】ひへん 急に起りしできごと。漢書、張湯傳「使ニ人上ニ一一一、告ニ文森事一」(文は李文)＝急變。

【飛歩】ひほ 足をはやめてあゆむ。郭璞詩「一一登ニ金閶一」

【飛蓬】ひほう ○みだれたるよもぎ。詩、衛風「首如ニ一一一」○風に吹かれてとぶよもぎ。商子「今夫一一遇ニ風、而行ニ千里一、乘ニ風之勢一也」

【飛沫】ひまつ とばしり、しぶき。木華、海賦「更相觸搏、一一起レ湧」＝散沫・飛沫。

【飛鳴】ひめい 空をとびつつなく。錢起詩「白鷺江上鶴、亜レ翅送ニ一一一」

【飛螟】ひめい とぶいなむし。庾信文「一一出レ境」

【飛揚】ひよう とびあがる。漢高祖歌「大風起兮雲ニ一一一」＝飛騰。

【飛揚跋扈】ひようばっこ わがままにして法度に循はず。北史、侯景傳「寡ニ制河内一、常有ニ一一之志一」

【飛騰】ひとう とびあがる。九辯「從ニ風雨一而ニ一一一」＝飛揚・飛躍。

【飛躍】ひやく ○高くをどりあがる。○圖事をたくらみて活動する「暗中一一」

【飛蠅】ひよう とぶはへ。陸游詩「筆文似レ水一一遊」

【飛鷹走狗】ひようそうく 田獵して禽獣を取るをいふ。後漢書、袁術傳「少以ニ俠氣一聞、數與ニ諸公子一、一一、後頗折レ節」

【飛來】ひらい とびきたる。劉廷芝詩「落陽城東桃李花、飛去ニ一一落ニ誰家一」

【飛來峯】ひらいほう 浙江杭縣の靈隱山の東南に在る小山の名。輿地志「晉時、四僧懸理登レ此、嘆曰、此是中天竺國靈鷲山之小嶺、不レ知ニ何年飛來一、因號ニ其峯一曰ニ飛來一、亦名ニ靈鷲峯一」

【飛浪】ひろう とびあがるなみ。孔稚圭文「一一突レ雲、奔濤急レ箭」

【飛瀧】ひろう ○高き處より急にながれおつる水。瀑一に雷に作る。唐雲「四憐一一、懸若ニ瀑布一」○飛び下る水流。劉宋詩「崖懸一一直、岸峙綠澄覧」＝奔瀧・懸瀧。

【飛輪】ひりん 日の異名。許渾佐詩「流景弾レ節、一一頓レ勢」

【飛龍乘レ雲】ひりゅうじょううん 龍が雲に乘りて天に上る。英雄が時に乘じて勢を得るに喩ふ。韓非、難勢「一一、騰蛇遊レ霧、夫有ニ雲霧之勢一而能乘ニ遊之一者、龍蛇之材美也、今雲盛而蟠不レ能レ乘也、霧霽而螘不レ能レ遊也、有ニ盛賢醜霧之勢一而不レ能ニ乘遊一者、螘蟻之材薄也」

【飛龍在レ天】ひりゅうてんにあり 聖人が天子の位にあるに喩ふ。易、乾卦「一一、利レ見ニ大人一」

【飛廉】ひれん ○いしをとばす。又、其のこいしの號。七命「一一起而驅レ天」

【飛廉】ひれん ○かぜのかみ。廣雅「一一、風師也」○神禽の名。漢書、武帝紀、注「一一神禽、能致ニ風雨一」○殷の

紂王の佞臣。孟、滕文公「驅ニ一一海隅一而戮レ之」○怪獣の名。淮南、俶真「騏ニ一一而従ニ教圃一」

【飛鴞】ヒキョウ　とびゆくさぎ。杜甫詩「浴鳧一一晩悠悠」

【飛樓】ヒロウ　○高きたかどの。唐書、李光弼傳、史思明爲ニ一一、陰以ニ木幔一築ニ土山一臨レ城、光弼穴レ地預レ之」＝飛閣。○攻城の具、敵の城中をうかがふ高き車。六韜「視ニ城中一則有ニ一一一」＝樓車。○空中の樓閣。蜃氣樓。國史補「海上居人、時見ニ一一一」

【飛必沖レ天】ヒツチュウテン　鳥が一たび飛ばば天を突きて上る。一たび事を行はば人を驚かすに至ふ。韓非、喩老「莊王在レ政三年、楚無ニ令發一無ニ政爲一也、右司馬御レ座而與レ王隱曰、有レ鳥止ニ南方之阜一三年不レ翅、不レ飛不レ鳴、嘿然無レ聲、此爲ニ何名一、王曰、三年不レ翅、將レ長ニ羽翼一、不レ飛不レ鳴、將ニ以觀ニ民則一、雖レ無レ飛、一一、雖レ無レ鳴、鳴必驚レ人、子釋レ之、不レ穀知レ之矣、處半年、乃自聽レ政、所レ廢者十、所レ起者九、誅ニ大臣一五、舉ニ處士一六、而邦大治」史、滑稽傳には齊威王の故事とす。一鳴驚レ人ニ七九一段参看。

飛ぶ、ひるがへる。ひるがへす。王粲詩「荷非ニ鴻鵠一、孰能飛レ」＝翻。

【翻案】ハンアン　(一五三四頁四段)に同じ。

【翻雲覆雨】ハンウンフクウ　人情の反覆定まりなき喩。杜甫詩「翻レ手作レ雲覆レ手雨、紛紛輕薄何須レ數」

【翻刻】ハンコク　(一五三四頁四段)に同じ。

【翻然】ハンゼン　(一五三四頁四段)に同じ。

【翻潮】ハンチョウ　捲きかへすうしほ。謝朓詩「一一倘知レ恨、客思澁難レ裁」

【翻盆】ホンボン　雨のはげしく降る形容。杜甫詩「自帝城下雨一一」

【翻譯】ホンヤク　翻譯(一五三五頁一段)に同じ。

【翻譯官】ホンヤククワン　圖○外務省職員の一、外國文の書翰及通辯に從事す。○臺灣總督府職員の一、蕃語・邦語の通譯を掌る。

【飄流】ヒョウリュウ　さかさまにひるがへり流れる。岳陽風土記「荊州出ニ巴蜀一、自レ高注下、渦流洶湧、夏秋暴漲、則逆泛ニ洞庭一、瀟湘滿流、頓皆混濁、岳人謂ニ之一一水一」

十二畫

【飛】ヒ　ホン　元

食部

【食】㊀ショク・ジキ　職　㊁シ　寘　㊂イ　置

㊀くひもの、たべもの、人の口腹を養ふもの「美一」「酒一」○かて「糧一」○しょくじ、一事すら「飽一」「大一」○まどはす(蠱惑)管子、君臣「明君在レ上、便嬖不レ能レ一一其意」○むしばむ、きずつく。○たがやす(墾耕)○やしなはる(養)○もちふる(用)○いつはり(僞)「一言」○爲す。左、哀元「後雖レ悔レ之、不可一已」(後悔しても如何ともなしがたき義)○祭らる。○かむ、かじる(噬)○くらふ、くふ、はむ(喰・啗)○飲む「一酒」○まつり(祭祀)○くらし、すぎはひ(生計)○ふち、ちぎ。う(秩祿)ふちを受ける「一祿」「一邑」○日月の蝕。春秋、隱三年「日有一一」之」○寒一は二十四氣の一。冬至より一百五日目。○一指は手の第二指。㊁くはす、一を以て人に與ふ。詩、小雅「飲之一一之」○やしなふ、そだてる、養育する。左、文元「穀也一一子」(穀は人名)○動物を飼ふ「一牛」○めし、いひ(飯)論、鄉黨「一不厭精」(飯米は白きほど善し)㊂人名。酈一其人は漢の高祖に說せし策士。

【同訓異字】食・喫・吃・啖・噉・啗・哺・餔・茹・飡・餐・喰・咀・嚼○食は物をくらふ總、はむとも訓む。易經「君子以飲食宴樂」飯の時のときは音シ。論語「一簞食、一瓢飲」○喫は現在口に入れてくらふ義、俗語に多し、また飲む時にも用ふ、喫茶の如し。杜甫詩「對レ酒不レ能レ喫」○吃はどもりの義なれども、同音なれば、喫に通用す「一水」○啖はたくさんに食ふ。漢書「吉將軍取ニ霍氏啖一レ言」義に同じ。○噉は音義共に啖に同じ。○啗は啖・噉に同じ、また利を以て人に餌するをも亦啗といふ。史、高帝紀「使ニ酈生・陸賈往說一レ齊、時二酈以レ利」○哺は食物の口中に在るなり。史記「一飯三吐レ哺」○餔は哺に同じ。○茹は食なり、多くは菜を食ふに用ふ。莊子「不レ飲レ酒、不レ茹葷者數月矣」○飡は夕食なり、轉じてざっと少しばかりの食事する義とす。俗に飧に作るは非なり。○餐は飡に通じ用ふ、小飯なり。漢書、韓信傳「令其神時傳レ餐」○糜は熱食なり、朝食をいふ。孟子「糜飧而治」○咀は口に含みて味ふなり。咀嚼と熟す。○嚼はかみ食ふなり、咀と略同じ、說文にもと嚙に作る。齧なり。

【食不二二味】ショクフニニミ　日常の食物は一品にとどめておどらず、左、哀元「昔閻慶一一、居不レ重レ席」禮記「器不二刻鏤一一一、以與レ民同レ利」

【食醫】ショクイ　古の官名、調和飲食を掌る【周禮、天官】

【食邑】ショクイフ　領地。ちぎょうしょ。漢書、高帝紀「其有ン功者、上レ致二之王一、次爲二列侯一下乃一一」＝采地。

【食餌】ショクジ　食用に供する精製せしレほ。

【推レ食】スイショク　食物を譲りて人に食はす。史、淮陰侯傳「一レー食レ我」

【以レ食爲レ天】ショクヲモッテテントナス　食物は人民生命の本たる義。文子「食者民之本」とあると同じ。史、酈食其傳「王者以レ民爲レ天、民者——」

【輟レ食】ショクヲテッス　食事を中途に止める。漢書、張良傳「王一レー吐レ哺罵曰」

【食客】ショクカク　○客分としてかかへ置く臣。史、平原君傳「士不二外求一、取二于一一門下一足矣」＝門客。○おさふらふ、かかりうど。

【食氣】ショクキ　○物を食ひたく思ふ心もち。＝食欲。○氣味を食よ義。鬼神が供物をめしあがる。詩、大雅、疏「鬼神一レー謂二之一一」○空氣を假よ。道家養生法の一、今の深呼吸の類。五符經「一レー常有二少食一」○飯の氣、氣は穀氣。論、鄭玄「肉雖レ多、不レ使レ勝二一一」

【食既】ショクキ　日月の皆既蝕。春秋「桓公三年秋七月壬辰朔、日有レ食レ之既」

【食器】ショクキ　食事の道具、茶碗・皿の類。

【食牛氣】ショクギュウキ　幼にして大いなる氣象あるをいふ。戸子「虎豹之駒未レ成レ文、有二食レ牛之氣一」

【食レ玉炊レ桂】タマヲクイカツラヲタク　都會の物價の高きをいふ。戰國策、楚國之食、貴二於玉一、薪貴二於桂一、今臣——」＝米珠薪桂。

【食貨】ショクカ　食物と、たからと。飲食物と貨財と。書、洪範「三八政、一曰食、二曰貨」漢書、統傳「厥初生民、一一時レ先」＝貨食。

【食頃】ショクケイ　食事する位のわづかの時間。史、孟嘗君傳「出如一一、秦追果至レ關」＝一餉・一食頃。

【食犬】ショクケン　食用に供するいぬ。三才圖會「一一猶二今之菜牛一也」

【食言】ショクゲン　うそをいふ、いひたる言を履行せず、食は飲。書、湯誓「爾無レ不レ信、朕不二一一」

【食口】ショクコウ　人口をいふ。東坡集「一一猥多、不レ知二所レ爲」

【食菜】ショクサイ　青物をくらふ。陸游詩「一レー終年安二貧賤一」

【食事】ショクジ　めしをくふ。楚辭、九章「心煩憫兮忘二一一」

【食指】ショクシ　○手の第二指、くすりゆび。又、ひとさしゆび。左、宣四、注「五指、互指・一一・將指・無名指・小指」○轉じて人口の義とす「一一衆多」

【食指動】ショクシドウ　ひとさしゆびが自然に動く。美味を得る前兆とす。左、宣四「楚人獻二鼈于鄭靈公一（中略）于公之——、以示二子家一曰、他日我如レ此、必嘗二異味一」

【食土】ショクド　○土地より産出するものを食ひて生活す。左、昭七「封略之內、何非二君土一、一一之毛、誰非二君臣一」○ショクチ領地をうける。班固文「功成一レー、錫被二通邑一」

【食肉】ショクニク　鳥獣のにくをくらふ。禮記「孔子食二于季氏一、不レ辭、不レ食レ肉而飽」

【食不レ重レ肉】ショクニクヲカサネズ　一食に二品の肉を食はず。齊の晏嬰の節儉なりし故事。史、晏嬰傳「——、妾不レ衣レ帛」

【食者民之本】ショクハタミノモト　食物は人民生存の根本。文子「——也、民者國之基也、國者君之本也」

【食七】ショクシチ　さじ。劉拿詩「一一繞二浮世一、銀梢度二寸陰一」

【食貨】ショクカ　食物の代金。＝食料。

【食品】ショクヒン　食物のしな。＝食料。

【食封】ショクホウ　食邑に同じ。

【食俸】ショクホウ　くひぶち。俸一に事に作る、秩祿なり。晉書、職官志「諸公開府、位從公者、品秩第一、一一日五斛」＝食祿。

【食物】ショクモツ　たべもの。史、匈奴傳「得二漢一一皆去之」＝食餌・糧食。

【食用】ショクヨウ　食物として用ふる。又、其の食物。戰國策「使下人給二其一一、無中使上乏」

【食欲】ショクヨク　たべたく思ふ心。＝食氣・食慾。

【食ㇾ力】ちからわざにて生活する、工商農など。禮記「—ㇾ無數」

【食料】○食物に供すべき材料。魏書、高祖之傳「其中人功—ㇾ—」○食物の代價。‖食費。

【食祿】○ふち。史、魏世家「—千鍾」‖俸祿。○ふちを受ける。史、循吏傳「—ㇾ者不ㇾ得ㇾ與二下民一爭ㇾ利」‖食俸・俸給。

【食而不ㇾ知二其味一】心が他に放たれてゐる時は、物を食ひても味がわからず。大學「心不ㇾ在焉視而不ㇾ見、聽而不ㇾ聞、——」

【飢】キ　支　畿に通ず

○うう、かつゑる(餓)腹がへる。書、舜典「黎民阻—」○うゑ。韓詩外傳「一穀不升、曰—、二穀不ㇾ升曰—」○うゑしめる。孟、離婁「禹思二天下有—者一、由二己—之一也」○食物が乏し、五穀がみのらず、ききんなど(凶年)爾雅「穀不熟爲—」

同訓異字　飢・餓・饑・饉・餒の別は餓(食部七畫)の條を見よ。

【飢餓】がうゑる。‖饑餓。

【飢渇】キカツ　腹がうゑ喉がかわく。詩、王風「君子于役、苟無二—一」

【飢寒】キカン　うゑると、こごえると。後漢書、馮異傳「昨日得二公孫豆粥一、—俱解」‖饑寒・寒飢・凍飢。

【飢饉】キキン　穀物がみのらず。論、先進「因ㇾ之以二—一」‖饑饉・歉饉・荒饉。

【飢火】キクワ　甚だしくうゑて耐へ難き熱。白居易詩「壯者不ㇾ可ㇾ耐、—燒ㇾ腸作二牛吼一」

【飢困】キコン　うゑくるしむ。後漢書、桓榮傳「辭敗榮抱二其經書一、與二弟子一逃二匿山谷一、雖二窮—一、而講論不ㇾ輟」

【飢渇】キカツ　うゑたるやまいぬ。贈答詩「白首—夢裡驚」

【飢饉】キキン　凶年と饑年と。漢書、食貨志「世之有二—一、天之行也」

【飢者易ㇾ爲ㇾ食】キシャエキシ　飢うることの甚だしき者は、食物の如何を問ふに遑なし、困窮の民は豊少の恩寵にも感ずるに喩ふ。孟、公孫丑「—、渇者易ㇾ爲ㇾ飲」

【飢色】キショク　うゑたるかほいろ。孟、梁惠王「民有二—一、野有二餓莩一」

【飢凍待中】キトウタイチュウ　貧窶なる者に喩ふ。魏書、宗室傳「再遷二侍中一、領二右將軍一、凡在二禁中要密之事一、皆預參貳、藏二之於櫃一、唯皇入乃開、侍中監視、亦歳二恩賜一、故時人號曰二饑凍將軍一」

【飢不ㇾ擇ㇾ食】キフタクショク　孟子の「飢者易ㇾ爲ㇾ食」と同義(傳燈錄)

【飤】シ　寘　飼に同じ、食に通ず

○かて(糧)○くらはしむ、食を以て人に食はしむ。

【飡】サン　寒　飧(次畫)の俗字。

【飣】テイ　チャウ　徑

たべものをたくはふ(貯食)

【飣餖】テイトウ　○食餌をつらねて食はず。宋濂詩「偶逢二耽嬉張一、肴核列—」○雜じて徒らに意味なき文詞を排列するに喩ふ。韓愈詩「或如ㇾ國二企案一肴核分二—一」

【飧】セン　元　飡・餐は俗字

かゆ(粥)饘(食部十三畫)に同じ。孟、滕文公「一粥之食」

【飧】ソン　元

○ゆふめし(夕食)又、其の晩餐をととのへる。孟、滕文公「壅—而治」○は朝食。○ちゃづけ、しるかけ。○あひのめし(小食)○くらふ(食)「素—」○煮たる食物。‖熟食。

【解字】夕食を—と爲す、俗に飧に作るは非。

【飩】タク　阮

餺—は餅の屬。齊民要術「麥飩堪作餅」

【飲】㊀イン・オン　寢　㊁イン　沁

㊀のむ、酒又水などをのむ。杜甫詩「—如二長鯨吸二百川一」○そそぐ(漱)○のみもの。論、雍也「一—瓢—」○かくす。かくる(隱)人に知れざるやうにする。漢書、遊俠傳「—其德」○沒する。曹植、七啓「中必—羽」○こらへる、ふくむ(含受)「—恨」「—聲」○さかもり。㊁のます。みづかふ、牛馬に水を飲ます。左、昭二六「—馬于漏」

同訓異字　飲・呑・嚥・嚥の別は呑(口部三八畫三畫)の條を見よ。

【飲羽】インウ　強弓を引きて矢がふかく入りて羽を沒するに至る。曹植、七啓「—不二虛發一中必—一」

【飲酒】インシュ　大酒を飲む人。元稹詩「醉後風興未ㇾ闌、—猶恐玉盃乾」‖酒豪。

【飲河之願】インガノ 願望する所の些少なる義。次條を見よ。

【飲河滿腹】マンプク 人の性分には定りあるものなれば、各其の分に安んずべきに喩ふ。莊、逍遙遊「鼹鼠飲レ河、不レ過二滿腹一」河は黃河。

【飲器】イン ○酒を飲む具。さかづきの類。周禮「梓人爲二ー一」‖酒器。○しびん、溲溺の器。戰國策「殺二智伯一漆二其頭一以爲二ー一」一說、酒杯。

【飲餞】イン 酒を飲みてたのしむ。宋史、梁周翰傳「宴二諸博一、惟以二ー一爲レ務」

【飲泣】イフ ○流れて口に入りしなみだを飲む。漢書、賈捐之傳「老母寡婦、ー一巷哭」○すすりなき、聲を發せずして泣く。

【飲噱】イン きけのみて笑ひ樂む。唐書、劉伯芻傳「數過二友家一ー一」

【飲福】フク 酒より起るわざはひ。皮日休、酒箴序「不レ見二前世之ー一一耶」‖酒禍。

【飲灰洗胃】イフクワイセンヰ 甚だしく過を悔いて自ら新にせんとする譬。南史、荀伯玉傳「若許二染自新一、必呑レ刀刮レ腸、——、帝善二其答一、即釋レ之」

【飲恨】イン うらみを心中に忍びもつ。江淹賦「莫レ不二ー一一而呑レ聲」郝經詩「一一一復呑レ聲」

【飲至策勳】イシセククン 凱旋して、宗廟に至りて酒を飲み、戰功をしるす。策は冊。左、桓二「反レ行飲至、舍レ爵策レ勳焉、禮也」

【飲矢牛】ナメウシ 物を射て中りたる矢の半を沒する。金史「射レ之中二其背一、飲二矢之半一、俱而死」

【飲羣】イングン 匿名の書。飲は隱と音通。後漢書、蔡邕傳「臣一入二牢獄一、趣以二ー一、情辭何由復聞」

【飲漿】イン のみもの。夢溪筆談「有司具二茶湯一一」

【飲酒】イン きけをのむ。詩經「王在在レ鎬、豈樂二ー一」

【飲所】イン きけをのむところ。神仙傳「薛肯作二酒室一、爲二ー一」

【飲食】イン のむと、たべると。のみくひ。又其の物。禮、禮運「一一男女人之大欲存焉、死亡貧苦人之大惡存焉」

【飲酸】イン 酒をのみてふす。史、衞將軍傳「以爲漢兵不レ能レ至レ此、一一、漢兵夜至、圍二右賢王一」

【飲啄】イン のみすする。沈括文「蔡鯉有レ節、一一有レ宜」

【飲飲】イン のみすする。南唐書、黃毅傳「一一之外、一無レ所レ著」

【飲膳】イン 飲食物「一一正要」は書名、三卷、元の和斯輝撰す。

【飲餞】イン さかもりして人を見送る。酒食を以て人を送る。詩、邶風「一一于レ禰」

【飲啄】イン ○鳥が水を飲み餌をついばむ。何承天詩「一一雖二勤苦一、不レ願レ棲二園林一」○人が飲食して生活する喩とす。杜甫詩「一一慙二殘生一、食レ薇不二敢餘一」

【飲咀】イン のみくひする。咀は嚼に同じ。漢書、霍光傳「與二從官一一一」

【飲中八仙歌】インチユウハツセンカ 唐の杜甫の作りし當時名高き酒豪八人(賀知章・汝陽王璡・李適之・崔宗之・蘇晉・李白・張旭・焦遂)の事を詠じたる七言二十二句より成る古詩、唐詩選卷二に出づ。

【飲饌】イン さけのさかな。類說「下酒物謂之一一」‖下物。

【飲徒】イン 酒のみともだち。黃庭堅詩「招二得鄰丁一作二一一」‖酒伴・酒友。

【飲德】イン 德を蓄して顯はさず。又、其の德。漢書、游俠傳「終不レ伐二其能一、飲二其德一」‖隱德。

【飲馬】イン 馬に水かふ。馬に水を飲ます。馬俗通「漢黃子廉性廉介、每レ一一、輒投二錢於水一、文選に一一長城窟行の古樂府を載す。

【飲藥】イン くすりをのむ。禮記「君有レ疾一一、臣先嘗レ之」

【飲益】イヤク 酒をのむ分量。五雜俎「以二今人一一一較レ之」‖酒量。

【飲淚】イン こゝろを出さずしてなく。すすりなき。陸賈賦「長歎息而一一」‖飲泣。

【飲料】イン のみもの。飲用の料「一一水」

【飲如三長鯨吸二百川一】イヤウジヨケイキフヒヤクセン 甚だしく酒を飲む形容。杜甫、飲中八仙歌「左相日興費二萬錢一、一一」

【飪】ジン ニン 同 恁 又、餁に作る

○よくにる、大いに熟す「烹一」論、鄕黨「失一不レ食」(失一とは煮過ぎる)○よくにたる食物。

【飧】ソン 飧(前頁三段)の俗字。

【飭】チョク

○ととのふ、整備する。詩、小雅「我車既一」○ただす。ただし(正)「匡一」○つつしむ(謹)○つとむ(勤)○をさまる(治)○いましむ。命令して戒む「戒一」齊語「一二其子弟一」‖敕。

【飭躬】チョクキュウ 己の身を正しつつしむ。漢書、成帝紀「脩親一レ、郊二記上帝一」

【飭慤】チョクカク いましめつつしむ。蔡邕文「帝者宗廟、惟是一一自守」

【飭正】チョクセイ 謹みてととのへただす。禮記、疏「當二敬而又敬、必使一一一」

【飭厲】チョクレイ いましめはげます、戒勉する。漢書、文翁傳「親自一一」‖勉

助。

【飩】 トン ドン 元

○餛―は米麥の粉にて製し、中に餡又は肉を入れたるもの、むしもち。‖餛飩。○餺―はめんるゐの一種、うどん。

【飯】 ㊀ハン 諫 ㊁ハン 阮

㊀めし、いひ。五穀を炊きて熟せし常食物「炊―」「米―」「麥―」曲禮「毋搏―」㊁くらふ、―をたべる。論語「鄕黨「君祭先―」○やしなふ「―牛」くらはす、―をたべさす。史、淮陰侯傳「見信飢」信」○めし、食事。

【飯飲】めしと、のみものと。史、趙奢傳「所下奉二―一而進上食者、以レ十數」

【飯疏】めしをもるはち。馬祖常詩「―給二香積一夢納二華鬘一」

【掃飯】○めしをまるめる。曲禮「毋―レ―」○にぎりめし。

【吐飯成二飛蜂一】葛仙公が口中の飯を吐けば飛んで蜂となりし故事。事物賦、蜂賦、白注「葛仙公別傳曰、仙公與レ客對食、客曰、當請二先生作一奇戲一、食未レ竟、仙公卽吐二口中飯一、盡成二飛蜂一、滿レ屋、或集二客身一、莫レ不二震駭一、但皆不レ覺、良久、仙公乃張レ口、蜂飛入レ中、悉復成レ飯」

【飯糞】めしと、あつものと。宋史、劉錡傳「出二―一坐鎭二戰士一」

【飯牛歌】甯戚が明主に逢はずして賤役に服するを歎じて作りし歌。蒙求「齊桓公夜出二近舍一、甯戚疾擊二其牛角一、高歌曰、南山矸、白石爛、生不レ遭二堯與一レ舜、短布單衣適レ骭、從レ昏飯レ牛薄二夜半一、長夜漫漫何時旦、桓公與語、設レ之以爲二大夫一」

【飯館子】㊥料理店。

【飯僧】僧寺中にて飯時に際を撃ちて僧徒を召すをいふ。沈約詩「馴鳥逐二―一」

【飯後之鐘】期限に後るるにいふ。禪書「唐王播客二揚州木蘭院一、題レ僧舊壁、僧厭レ客、飯後擊レ鐘、播來則後レ時矣」

【飯食】めし。高適詩「所レ思強―一、永願在二鄕里一」

【飯匙】めしを盛るさじ。飯杓子。

【飯匙倩】はふ蛇の一種、琉球に産す。黃色の者を金――といふ。

【飯袋】飯嚢に同じ。酒囊―一（一〇六頁四段）を見よ。

【飯豪】衆人相並びて食事する豪。

【飯粒】めしに炊きしこめ。吳融詩「―一變盡隨復作」

【飯單】㊥○料理の獻立表。○食時に方繩又は布を以て衣を護するもの。ひざかけ。

【飯筒】ちまき（粽・糉）蘇軾詩「―仍聞レ楚」

【飯囊】めしぶくろ。無能にして徒らに生活するものを嘲る語。金縢子「綱衛云、荀良可二強與言一餘皆酒糟―一」‖飯袋。

【飯鉢】めしばち。張憲詩「胡綬西二貝葉一、―聚二椰瓢一」

【飯噴】食物をふき出す。大いに笑ふ貌。蘇軾文「失笑――滿レ案」‖噴飯。

【飯粒】めしつぶ。荀書、殷仲堪傳「―落盡、開二氈拾以噉レ之」

【飫】 ヨ 御

飯（前條）の俗字。

○あく、たべあきする（厭）「飽―」「厭―」○さかもり（燕食）○立ちて行ふさかもり（立酒饗）○たまふ（賜）「―賜」

同訓詩 飫飽・饜・厭の別は飽（次頁四段）の條を見よ。

【飫宜】さかもり。漢書、陳遵傳「進知二飫酒一―有レ節」

【飫賜】十分に飽くまで酒食を下賜せられる。左、襄二六「爲レ之加レ膳、加レ膳則―一」

【飫聞】聞き飽きる。韓愈文「次二其道塗之所レ經、宜其于二山水一――而厭見也」

【餡】 五 書 支 實

㊀あめ（餳）米・麥のもやしと煎りたる穀又は蒸したる糯とにて造りしねばりて甘き食品。詩、大雅「蓫荼如―」‖糖漿（我國にては麥のもやしと蒸したる糯とにて造る）○あまみ、美味き食物。㊁やしなふ、くらはす（食）荀書、王霄傳「以二私米一作二饘粥一以―餓者」

【餡餬】四波より出づる甘く淡き味あるしほ。周禮、天官、鹽人「王之膳羞共二―一」注「鹽之甜者、今戎鹽有焉」‖石鹽。

【餡津】甘きしる。益部方物略、柑贊「碧葉紫蔕、脈包之珍、丹裏輕披、香液―一」

【餡液】あめのしる。唐書、王重榮傳「帝每出或獻二―一、帝輒レ爲爲賀」

【餡蜜】あめと、はちみつと。‖、內則「棗栗―一以甘之」

【得レ餡以棄レ老、得レ餡以閉レ閉】仁人は餡を得て老人を棄ひ、盜賊は餡を得てわらまへをあけるに用ふ。同一の物も用

ふる人によりて其の用を異にするに喩ふ。呂覽「仁人之得飴、以養疾侍老也、跖與之企得飴以開閉取鍵也」淮南子「柳下惠見飴曰、可以養老、盜跖見飴曰、可以結牡」

【含飴弄孫】ガンイロウソン　祖母が孫を愛する故事。後漢書、明德馬皇后傳「皇后曰、吾爲天下母、而身服大練、食不求甘、欲率下也、吾但當含飴弄孫、不能復關政事」含飴とは、年老いて齒なきが故。

【餧】ヰ　紙

食を嬾ふ。又惡食ヲシヒ。管子、形勢「人主食則不肥」

【飼】シ　寘

○やしなふ。人に食を與へる。○かふ、動物を畜ひ養ふ。＝飢。

【飼養】シヤウ　動物をやしなふ。元史、張立道傳「雖知二蠶桑一、未得二其法一、教之一一、收利十倍於舊一」＝養飼・畜養。

【飾】シヨク　職

○かざる、物既に成りて其の外觀を美くしくする。○ととのふ。○ぬぐふ（拭）○よそほふ（裝）つくろひて好くする「一詞」「文一」○をさむ（修）物事の仕上げをする、物が出來あがりて文采を加へる。論、憲問「行人子羽修一之」○衣服のへり。詩、鄭風「羔裘豹一」○かざり「裝一」「盛一」「粉一」○守り備へる。飭と通ず。○國かざり、新年に門戸に設けるえんぎ物「松一」

【飾外】ショクグワイ　かざれるさかづき。爭は玉觴ヲクワイノ陳信、周宗廟歌「罍禾一一、象羽承樽」

【飾巧】ショクカウ　巧みにいつはりかざる。後漢書、蔡倫傳序「士之一一馳辯以要二能鉤一利者、不一期而景從矣」

【飾僞】ショクギ　かざりていつはる。顏氏家訓「世俗一一行詐」＝作僞。

【飾玩】ショクグワン　かざりもてあそぶ。南史、王僧首傳「手不一執二金玉一婦女亦不一得以爲一一一」

【飾言】ショクゲン　ことばをかざる。飾りたることば。韓非子「則羣臣莫二敢一一以惛一主」

【飾口】ショクコウ　○いつはりかざりたることば。南史、循吏傳「郡縣奉對奉旨、一一利辭、鏡相推藏」○ことばをかざる。

【飾詐】ショクサ　かざりいつはる、いつはりてうはべをかざる。史、公孫弘傳「誠一一欲二以鈞一名」＝矯飾。

【飾裝】ショクサウ　かざりよそほふ。孟浩然詩「一一辭二故里一」＝裝飾。

【飾詞】ショクシ　○ことばをかざりて美くしくする。論衡、非韓「韓詞文一一、爲二奇偉之觀一也」＝飾辭。○あやまちをかざりてごまかす。＝飾口。

【飾車】ショクシヤ　漆にてぬりてかざりたる車。前書大傳「得乘二一一駟馬一」

【飾腰】ショクエウ　うはべのみへりくだりてゆづる。南史、王華傳「宋世惟華與二南陽劉湛一不爲二一一」

【飾終】ショクシウ　死者を埋葬にする。隋書、豆盧毓傳「加一等一一」劉禹錫詩「一一鄰好重」

【飾緒】ショクセン　かざりつくろふ。晉書、劉曜載記「射親二郊一一一神祠二望二秩山川一、靡一不周及」

【飾擢】ショクタク　すすめてぬき用ふる、奬勵抜擢する。晉書、陸玩傳「聖恩厥厚、褒進二一一」

【飾智】ショクチ　巧に才智をかざる。莊子「一一以驚レ愚」史、汲黯傳「徒懷レ詐一一、以阿二人主一取レ容」＝弄巧。

【飾非】ショクヒ　あしき事を道理らしくかざりていふ。莊、盜跖「強足二以一一拒レ敵、辯足二以一一レ非」史、殷紀「智足二以拒一諫、言足二以一一レ非」

【飽】ホウ　巧

○あく（堅）たる、みつ（滿）腹一ぱいになる。論、學而「君子食無二求一一」○あかす、あかしむ。○あくまで、心ゆくまで、十分に滿足する。

【飽經世故】ホウケイセイコ　世故の甘・鹽・酢・蜜○飽は物を一ぱい食ふ義にて、ひだるきことなき程に食ふ義にて、いやになるまで過食するにはあらず。轉用して飽德・飽仁義などと用ふ。論語の「食無レ求レ飽」は腹八分目に食への意。○鹽はあき滿る程、大食するなり。孟子「鹽二酒肉一而後反」○飫は馳走すぎてあき足る意なり。詩經「飲酒之飫」○飫は鹽に通用す。左傳「食惰無レ厭」

【飽學】ホウガク　學問が腹に滿つる。文心雕龍「有二一一一而才鋭一」

【飽喫】ホウキツ　飽くまで飯を食ふ。黃庭堅、子瞻謫二海南一詩「子瞻謫二海南一、時宰欲レ殺レ之、一一惠州飯、細和二淵明詩一、彭澤千載人、東坡百世師、出處雖レ不レ同、氣味乃相似」

【飽聞】ホウブン　光緑寺卿の異稱。飲膳の事を主つかさどるが故。蘇東坡詩、注「世傳京師謂二光緑一爲二一一、掌二膳羞一、司農爲二走卿一、宗正爲二冷卿一」

【飽食煖衣】ホウショクダンイ　あくまでくらひ、あたたかにきる。孟、滕文公「一一逸居而無レ教則近二於禽獸一」＝飽

曖。

【飽暖】ホウ　あくまですする。梅堯臣詩「亦將二茶具一并、一一時出レ俗」

【飽粥】ホウ　食にあき、あたたかに香る。趙抃詩「郡邑豐穰眞可レ賀、人家一一更何憂」洪林廣記「一一生二淫欲一飢寒發二昏心一」‖飽食暖衣。

【飽經】ホウケイ　恩德を十分に受ける。詩經、既醉序「醉レ酒一レ、人有二士君子之行一焉」

【飽飯】ハン　あくまでめしを食ふ。杜甫詩「吾聖強強一一行」

【飽腹】ホウ　はらにみつる。劉禹錫詩「過二桓山一一聞二桔槔一」‖飽食。

【飽聞】ホウブン　あくまで聞きて知る。其の事の世に知れ渡れるをいふ。韓愈、與二李拾遺一書「勤儉之聲、寛大之政、幽閨婦女、草野小人、皆一一而服道レ之」

【飽飫】ホウ　あくまでくらふ、飫も飽。後漢書、劉盆子傳「困餓十餘萬人、皆得二一一一」‖饜飫。

【飽和】ワ　物理學にて二物相遇ひて一の現象を成すには、必ず一定の限度あり、此の限度を過ぐれば、又他の變化を生ず、此の限度を一一點といふ、空氣中の水蒸氣が一定の限度を過ぐれば、雨滴となるが如し。

【餅】ヘン　平

こごめもち（屑米餅）「五色一」

【餔】ホ　平

食物のかうばしき貌。必に通ず、芬香の義。詩、周頌「有レ其香」

六畫

【餃】カウ　巧

○あめ（飴）の類。○一餌は屑米等の麵を飴に和してつくる食品、一名、粉角。

【餈】シ　紙

むしもち、もち米を蒸してつきたるもち（稻餅）周禮、天官、漿人「羞濆之實、糗餌粉一」

【餈筒】シトウ　ちまき（粽）陸游詩「白白一一美」

【餌】ジ　紙　寘

○たべもの、食物の總名「果一」「藥一」○ゑさ、ゑばをくらはす。○轉じて利を以て人をいざなふ。劉禹錫文「吉張一一、不レ可二遽伏一」

【餌敵】ジテキ　計を以て敵をいざなふ。魏志、太祖紀「此所二以一一一、如何去レ之」

【餌口】コウ　食事をする、活計をたてる。戰國策「夜行而晝伏、無二以餌一其口一」‖糊口。

【餌呑】ジ　ゑばをくらはす。轉じて利を以て人をいざなふ。劉禹錫文「吉張一一、不レ可二遽伏一」

【餈】餌（食部四畫）に同じ。

【餈熟】ジジュク　ほどよく煮る。北史、趙琰傳「孝心色養、一一之節、必親調レ之」

【餉】シャウ　漾　養

○かれいひ旅人又は田にて働く人におくる食物、辨當ダの類。○兵糧。又、軍用金「餽一」「一道」「轉一」○かれひす（饋）食を送る。孟、滕文公「有二童子一以二黍肉一」○人に物をおくる。脫に通ず。○食事をする位の短き時間。韓愈文「雖レ得二一一樂有一如二聚飛蚊一」

【餉遺】シャウ　贈りもの。齊書、呂文顯傳「爲二舍人一、並見二親侍一、四方一一、識各數百萬」‖饋贈・餽遺。

【餉給】キフ　兵糧をおくり與ふ。後漢書、蔡茂傳「每所二一一一、計レ口取レ足而已」

【餉給】オ　おくり給する品、供給の品。唐書、和政公主傳「代宗以二主貧一、詔二諸節度一一一、主一不レ取」

【餉銭】シャウ　ひゃうらう（兵糧・軍食）史、高祖紀「鎭二關中一、撫二百姓一、給二一一一、不レ絕二糧道一」晉不レ如二諸何一」‖餽餉・餽饋・糧餽。

【餉酬】シャウ　金錢酒食などを返禮に贈る。唐書、韓滉傳「以二金帛一相一一」

【餂】㊀テン　㊁タン　豏　琰

㊀さぐる、おびきだす、ひっかける、鉤ケ取る。孟、盡心「是以言一之也」㊁貶（一二六〇頁三段）の古字。

【餅】餠（食部八畫）の俗字。

【養】㊀ヤウ　㊁ヤウ　養　漾

㊀やしなふ、そだてる、成長せしむ「生一」「一育」「愛一」「乳一」「長一」大學「未有學一子而后嫁者也」○十分につくり成す。保全する。孟、公孫丑「我善一一吾浩然之氣」○やしなひ。

○をさむ(治)孟、盡心「―」心莫善於寡欲」○をしふ(教)禮記「立太傅・少傅以―之」○はぐくむ、ちのます。○子を生む。○かふ(飼畜)○なつく(懐柔)○とる(取)○かくす(隠)○にぎはす(賑)○まかなふ(給)○しもべ(使役者)○まかなひかた(炊夫)「都―」公羊、宣十二「廝役區―」○かゆし。‖癢。○―は心愛ひて定まらざる貌。詩、邶風「中心―」○―氣は酸素の一名。㊀身分の卑き者が高き者をやしなふ。下の者が上に供奉する「供―」論、爲政「今之孝者是謂能―」、至於犬馬皆能有―」

【養蒼】ヤウサウ　やまひをやしなふ。養は治。魏書、製衍傳「―二中獄、練二石當歳」‖癆病。

【養由基】ヤウユウキ　春秋時代の楚の射術の名人、百歩はなれて柳の葉を射るに百發百中せしといふ(漢書、枚乘傳)淮南、説山「楚王有二白蝯一(中略)使―射之、始調弓矯矢、未發而蝯攫柱號矣」蝯は猿

【養育】ヤウイク　やしなひそだてる。史、始皇紀「―二―宗親」‖養贍・養視。

【養育院】ヤウイクヰン　自活の道なく又保護者なき老人小兒等を收容して養育する所。

【養贍】ヤウセン　やしなひそだてる、綿は育。梅堯臣、鵐雛詩「有レ志在二―一、勿レ論報德限」‖養育。

【養銳】エイクヤウエイ　鋭氣をやしなふ。晉書、慕容德載記「青齊沃壤號曰二東秦一、既據レ之、後閉レ關―レ、伺レ隙而動、此亦二漢之有二關中・河南一也」

【養家】ヤウカ　婿子に行きし家。

【養艾】ヤウガイ　老人をやしなふ。蘇頌文「寘レ壁重レ發、肆レ儒―レ」艾は老。

【養高】ヤウカウ　高尚なる志を養ひ保つ。周書、蘇綽傳「――不レ仕」

【養氣】ヤウキ　○道家にて氣力をやしなふ。五代史、前蜀世家「王宗諭以二練丹―一自養」‖養氣。○浩然の氣をやしなふ。孟、公孫丑「我善養二吾浩然之氣一」‖養性。○酸素の一名。

【養者】ヤウシヤ　としよりをいたはりやしなふ。魏志、陳登傳「登年二十五、舉二孝廉一、除二東陽長一、―レ―育レ孤、視レ民如レ傷」‖養老。

【養器】ヤウキ　○其の徳器を養成する「三國志、孫休詔」○我が身を奉養するに入用の器物。祝、王制「祭器未レ成、不レ造二燕器一」注「凡家造祭器爲レ先、――爲レ後」‖燕器。

【養魚】ヤウギヨ　魚をやしなふ。齊書、頑叡傳「屋前有レ池―レ―」

【養蜆】ヤウケン　わざはひをやしないつくる。五代史、宦者傳論「緩レ之則―レ―而益深」

【養晦】ヤウクワイ　己の徳をやしなひ迹をくらまして時機の來るを待つ。詩、周頌、遵養時晦」の略。宋史、郭怨傳「四二賓客一論レ意、使二―一以待レ用」

【養活】ヤウクワツ　やしなひいかす。白居易詩「辱二給俗事一盡、―一道情全」

【養花雨】ヤウクワウ　はなぐもりの時にふる雨。大鉢參看。

【養花天】ヤウクワテン　春のはなぐもり。花品「牡丹開日、多有二輕雲微雨一謂之――」

【養形】ヤウケイ　からだをやしなふ。莊、刻意「吐レ故納レ新、熊經鳥伸、爲レ壽而已矣、此道引之士、―一之人、彭祖壽考者之所レ好也」

【養蜈】ヤウケンヤウ　にはとりを飼ふ。易林「―レ―生レ雛、壻レ馬得レ駒」

【養賢】ヤウケン　賢才を養成する。易經、天地養二萬物一、聖人―レ―以及二萬民一」

【養虎】ヤウコヤウシ　後日の患となる敵をゆるし置くに喩ふ。史、項羽紀「漢欲二西歸一、張良・陳平說曰、漢有二天下大半一、而諸侯皆附レ之、楚兵罷極食盡、此天亡レ楚之時也、不レ如レ因二其機一而遂取レ之、今釋弗レ擊、此所レ謂―レ―自遺二患也一」易林「―レ―畜レ狼、還自賊傷」

【養護】ヤウゴ　教育學の用語。やしなひまもる。養育看護。

【養痾】ヤウア　きずの治療をする。北史、阿史傳「―レ―一月、復レ常、又無二復

癈一」‖治癒。

【養嬰】ヤウエイ　かひこをかふ。後漢書、循吏傳「勤二―レ―織紝一、民得二利益一焉」

【養子】ヤウシ　やしなひご。他人の子を養ひて己の子とす。後漢書、順帝紀「初聽二中官一得下以二―一爲レ後、世―封爵上」‖養息。

【養志】ヤウシ　○父母の志に順ひてたのしましめる。孟、離婁「曾二皙子一、則可レ謂―レ―也」○志を高尚にする。莊、讓王「―レ―者忘レ形、養形者忘レ利」

【養耳】ヤウジ　みみをたのします。史、禮書「鐘鼓管絃、所二以―一也」

【養親】ヤウシン　やしなひて世話する。後漢書、順陽侯商傳「甫頓君―レ―如レ子」‖養育。

【養心】ヤウシン　己の本心をやしなひ治める。孟、盡心「―レ―莫レ善二於寡欲一」

【養眞】ヤウシン　天より稟けたる吾が本眞の性をやしなふ。陶潛詩「―レ―衡茅下」‖養性。

【養親】ヤウシン　おやをやしなふ。史、孟荀傳「可下以旦夕得二甘旨一以―上」

【養生】ヤウサウ　○からだをやしなふ。新論「所二以―一、亦以傷レ生也」‖攝生。○生命をやしなひて長からしめる。莊、養生主「文惠君曰、善哉、吾聞二庖丁之言一、得二―一」

【養生論】ヤウサウロン　身心を養ふべきことを論ぜし文。晉書、嵇康傳「以爲時

仙薬二之自然ニ非ニ積學所ニ得、至ニ於導養得ニ理、則安期・彭祖之倫可レ及、乃著ニ――一」

【養壽】ヤウジュ　壽命を養ひて長くする。史、老子傳「以ニ其修ニ道、而レ――也」

【養正】ヤウセイ　正しき道をやしなふ。易經「蒙以ニ――一」疏「能以ニ蒙昧隱默ニ自ニ――一道」

【養成】ヤウセイ　養ひそだてる。呂覽「始生レ之者天也、ニ――一之者人也」

【養性】ヤウセイ　己の性をやしなひて全くする。孟、盡心「存ニ其心ニ、養ニ其性ニ、所ニ以事ニ天也」漢書、梅福傳「編ニ居レ家、當以ニ讀ニ書――一爲レ事」

【養靜】ヤウセイ　靜かなる心をやしなふ。趙師秀詩「――掩ニ書扉ニ清晝倚ニ枕囂」

【養痴】ヤウチ　生れつきのままのつたなき德をやしなふ。潘岳、閒居賦「修ニ僊游以――一」

【養拙】ヤウセツ　己の拙性を養ひて全くする。晉書、王濛傳「――歳庭ニ同ニ蹙下位ニ雖道難レ屈、高風不レ墜」蒙求「孟嗣――」

【養體】ヤウタイ　からだを養ふ。史、禮書「昧第几席所ニ以――一也」‖養形・養身。

【養治】ヤウヂ　やしなひをさむ。漢書、文帝紀「天生レ民、爲レ之置レ君、以ニ――之一」

【養女】ヤウヂョ　人の女子を養ひて我が子とする。北齊書、孫騰傳「養ニ貧家子賈氏ニ、以爲ニ――一」

【養德】ヤウトク　德をやしなふ。諸葛亮、誡子書「君子之行、靜以修レ身、儉以――一」

【養望】ヤウバウ　名望をそだて養ひて自ら高尚にする。北史、魏收傳「不レ――ニ於丘壑ニ、不レ待ニ價於城市ニ」

【養非】ヤウヒ　あしきことを增し長ずる。韓愈子「――レ長レ失、以レ靜爲レ擾、以レ安爲レ危」

【養病】ヤウビャウ　やまひをやしなふ。禮、射義「酒者所ニ以養ニ老也、所ニ以――一也」‖養痾・養痼。

【養病坊】ヤウビャウバウ　唐の開元時代に設けたる官設の施療病院。宋史、仁宗時、軍興多事、張士遜無レ所ニ補、謀官聊請ニ上疏曰、政事府、豈――邪」

【養父】ヤウフ　○養家のちち、やしないおや。五代史、劉后傳「幸ニ張全義第ニ、酒酣、命ニ后拜ニ全義ニ爲ニ――一」‖義父・寄父。○ちちをやしなふ。華陽國志、旨酒嘉穀、可ニ以――一」

【養分】ヤウブン　やしなひとなる成分。‖營養分。

【養兵】ヤウヘイ　兵卒をやしなふ。水滸傳、第六十回「――千日、用在ニ一朝ニ」

【養苗】ヤウミャウ　なへをそだてる。陸游詩「――一レ雨先去草、省レ事在レ清レ心」

【養母】ヤウボ　○養家のはは。‖義母・契母。○母をやしなふ。南史、馮道根傳「家貧傭賃以――一」

【養蜂】ヤウホウ　はちをやしなふ。郁離子「蠭丘丈人之――一也、國有レ蠭」

【養牧】ヤウボク　やしなひをさめる。漢書、王莽傳「――ニ兆民ニ事ニ稱明詔ニ」

【養目】ヤウモク　めをたのします。史、禮書「劉錢文章、所ニ以――一也」

【養夜】ヤウヤ　長きよ。大戴記「時有ニ――一」

【養養】ヤウヤウ　心憂ひて定まらざる貌。詩、邶風「願言思レ子、中心――」

【養老】ヤウラウ　としよりをやしなふ。孟、離婁「四伯善ニ――一者」後漢書、明帝紀「幸ニ辟雍ニ初行ニ――之禮ニ」

【養略】ヤウリャク　身に奉ずる衣食を少なくする。荀子「――而動、則天不レ能レ使ニ之全ニ」注「略、減少也、――謂レ使ニ人衣食不レ足也」

【養廉】ヤウレン　官吏の廉潔の心を養ふ。又、其の爲めに給する加俸。宋史、職官志「諸路職官、各有ニ職田ニ所ニ以――一也」

【養和】ヤウワ　○和平の精神を養ふ。後漢書周磐傳「節神――」○背をよせかける具。唐書、李泌傳「嘗取ニ松根ニ以隱レ背、名曰ニ――一」

七畫

【餓】ガ　圖

○うう、うゑる、飢の一層甚だしきもの「凍ニ――一」「寒ニ――」韓非、飾邪「家有ニ常業ニ雖レ飢不レ――一」○うやす、うゑしむ。孟、告子「――ニ其體膚ニ」○うゑ。

【餓鬼】ガキ　圖三惡又六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）の一、常に饑餓の苦を受くるを以ていふ。法華經「受ニ地獄畜生餓鬼之苦ニ」

【餓狗噬ニ枯骸ニ】ガクガイス　物の味なきに喩ふ。枯綾はされからべ（虛堂錄）

【餓虎】ガコ　○うゑたるとら。極めて危險なる喩。史、刺客傳「是謂ニ委ニ肉當ニ――之蹊ニ也、觸必不レ振矣」○轉じて人の貪婪に喩ふ「――將軍」‖飢鷹。

【餓殺】ガサツ　うやしてころす。魏志、袁紹傳「孤若窮軍、仰ニ我鼻息ニ譬ヤ之嬰兒在ニ股掌之上ニ、絕ニ其哺乳ニ立可ニ――一ニ」

【餓死】ガシ　うゑじに。

【餓鴟叫】ガシキョウ　うゑたるふくろふのさけび聲。南史、曹景宗傳「張倫三躍馬、衝如ニ――一」

【餓者】ガシャ　うゑたる人。檀弓「昔者孔子與ニ夫子爲レ弟與ニ國之一ニ――一」‖餓人。

【餓孚】ガフ　うゑじにせし人。孚一に俘に作る。孟、梁惠王「民有ニ飢色ニ、野有ニ――一ニ」

【餓莩】ガヒョウ　前條に同じ。皮日休詩、集

業作ニ一ー一、見ル之心若ル猟」

【餓狼】ガラ　うゑたるおほかみ。後漢書、仲長統傳「使ニ一ー守ニ庖廚一、餓虎牧ノ牢豚上、猶孤及詩「三桑千倉空、戰卒如ニ一ー一」

【餓狼之口】ガラウノ　危難なることに喩ふ。晉書、阮種傳「天下百姓之命、懸ニ一ー一ニ虎口。

【餐】

㊀サン　㊁ソン　元　寒

㊀のむ(呑)呑みくらふ「加ー」「晩ー」詩、魏風「彼君子兮、不素ー兮」○朝の食事、小食、點心。漢書、韓信傳「令其裨將傳ニ一ー」ー飧。○とる(採)王倫文「ー與論於丘里」○のみもの、くひもの(飲食物)㊁ゆふめし(飧)ー飧。

同訓異義　餐・食・喫・吃・噉・啗・哺・茹・飧の別は食(部首)の條を見よ。

【餐英】エン　菊の花をくらふ。楚辭「夕餐ニ秋菊之落英一」

【餐霞】サン　霞を食ふ、道家にて修煉の術。南史、褚伯玉傳「卻粒之士、一ー之人、乃可ニ智救一不レ宜ニ久羈一」顏延年詩「中散不レ偶世、本自ー一人」中散は嵇康。

【餐食】サンシキ　くらふ。漢書、張安世傳「願時銀強ー一」

【餐錢】サンセン　天子より臣下に賜はる膳料。漢書、高后紀「丞相平言、臣等謹ニ列侯一、幸得レ賜ニ一ー奉邑一」

【餐錢】タンセン　食物又、財物をむさぼる。又、其の者。朱松詩「一官厭ニ人間一、幾何非ニ一ー一」

【餐飯】サンハン　めしをくらふ。杜甫冒詩「曜場及ニ無事一、雅歌而ー一」

【餐肩】サンケン　はだへをくらふ。元稹詩「夜怯ーレ蚊、朝須拂レ面蠅」蚊は略して蚊に作る、蚊なり。

【餕】

シュン　セン　厳　寒

○くひあまし(食之餘)曲禮「一餘不レ祭」(たべのこりの物は神に供へず)○たべのこりをたべ盡くす。禮、玉藻「日中而ー」(朝食ののこりを晝食よ)○にたる食物(熟食)公羊、昭二五「一饋未就」飧に通ず。

【餕餘】シュンヨ　くひのこり。曲禮「ー一不レ祭、父不レ祭レ子」ー餘餕。

【餗】

ソク　サク　屋

○かなへの中にもりし食物(鼎實)易、鼎卦「鼎折レ足、覆ニ公一ー」大臣の職務を全うする能はざる喩。○轉じて三公などの任務を鼎ー一といふ。傅咸詩「安能任鼎ー一」

【餧】

本、餒に作る

○うう、かつゑる(餓・饑)「貧ー」「寒ー」「ー斃」孟、梁惠王「凍ー其妻子」○轉じて浩然の氣の足らざるにいふ。孟、公孫丑「其爲氣也、配ニ義與レ道、無レ是ー也」○ただる(爛)あざる、魚肉がただれくさる。論、鄭黨「魚ー而肉敗不レ食」

同訓異義　餧・餒・飢・饉・饑○餧は餓也、ひだるし。孟子「妻子凍餧」○餓は極めて、ひだるきなり、飢よりは重し。韓非子、飾邪篇「家有ニ常業一、雖レ飢不レ餓」○飢は食物のそしくしてううるなり、周禮に「穀ノ熟セザルヲ飢トイフ」飢饉と連用す。書經「黎民阻レ飢」○饉は不作なり。韓詩外傳に「一穀不レ升曰レ歉、二穀不レ升曰レ飢、三穀不レ升謂ニ之饉一」○饑は穀の熟せざるなり。論語「歳饑用不レ足」饑饉と熟す、飢渇の飢は几に從ふ、後世は互に通用す。

【餧羸】ダイルイ　うゑて身なげする。陳書、儒林傳「或纔登ニ於下士一、或ー一於溝壑一、惜矣」ー羸弊。

【餧饉】ダイキン　うゑかつゑる。韋承慶文「朝夕鳧鴈、惟憂ニ一ー一」

【餧士】ダイシ　うゑたるさむらひ。孟郊詩「山野多ニ一ー一、市井無ニ飢人一」

【餧斃】ダイヘイ　うゑてたふれ死す。皮日休文「今之田、貧者不レ足ニ于耕耨一、富而檢ニ于富者一、如ニ勢家一亦出ニ屋粟一、則盜無ニ一ー之民一矣」

【餔】

㊀ホ　㊁ホ　遇　虞

㊀くらふ(食)たべる。屈原、漁父「一ー其糟」(又一に哺に作る)○ゆふけ、申の刻(午後四時頃)の食事。㊁にごりあめ、飴ノ類の濁れるもの。○もち(餵餔)○やしなふ、くらはす。食を以て人に食はす。古、哺と通ず。

【餔時】ホジ　餔ノ時、七ツ時、即ち午後四時「淮南子」

【餔啜】ホテツ　くらひすする。從に食祿をむさぼる義とす。孟、離婁「孟子餔ニ一樂正子一曰、子之從ニ於子敖一來、徒ー一也」ー飲食。

【餔歠】ホテツ　くらひのむ。又、其の物。漢書、揚雄傳「溷ニ濁父之ー一兮」ー沐浴之掘衣一」

【餖】

ボツ　月

○茶の上の浮沫(ブクブク)薄きを沫といひ、厚きをー一といふ(茶經)○飣ーは、むぎもち。○ー一は飣類。又餑餖其の類。

【餘】

○のこり(殘)○はした(零數)「月ー」○大略を擧げてはしたを省く時にそへることば「死者萬ー」○あまり(賸)○ほか(以外)○すえ、のち(末後)「雨ー」「刑ー」○いとま(暇)「三ー」○あまた(夥多)○あまる。あます。

同訓異義　餘・衍・羨・贏・剩・賸○餘は物のたっぷりと、溢ちあまる義。老子「損二有餘一補二不足一、天之道也」○衍は水の溢れるなり、衍文とはあまりて不用の文字をいふ。衍義とは、引きのばして意味を說き盡むるなり。○羨は衍に同じ、餘なり、溢なり。羨餘・羨溢と連用す。○贏は生産の餘計のあるをいふ。贏利と連用す。○剩はまだ其の上にといふ意、あまつさへと訓む、物の多くして餘り添はる義なり、剩材・剩貨と連用す。○賸は音ジョウ剩と同じ、益也、餘也と註す。唐書、杜甫傳「幾齊臧穀、詑二丐後人一多矣」

【餘喜】ヨ　などりのかなしみ。杜甫詩「白鷗元水宿、何事有二ー一」

【餘殃】ヨウ　祖先の惡事によりて子孫にまでも殘るわざはひ。易、坤卦「積不善之家、必有二ー一」

【餘威】イ　前代よりのこれる威勢。賈誼、過秦論「一一震二于殊俗一」

【餘意】イ　言外にあまりある心。呂氏童蒙訓「讀二古詩十九首、及曹子建諸詩一、皆思深遠而有二ー一、言有レ盡而意無レ窮」

【餘音】イン　音聲のたえてなほほそく殘れるひびき。蘇軾、赤壁賦「一一嫋嫋、不レ絕如レ縷」

【餘音繞レ梁】ヨインニョウリョウ　歌聲の微妙なるを稱する故事。列、湯問「韓娥東之レ齊、匱レ糧、過二雍門一、鬻レ歌假レ食、既去、而餘音繞二梁櫚一、三日不レ絕」

【餘韻】イン　○あまれるひびき。○あまれるおもむき。○餘情。

【餘蘊】ウン　あまれるたくはへ。宋史、道學傳序「無二復一ー一」○餘藴。

【餘商】ショウ　末流。朱熹文「曲禮少儀弟子職諸篇皆小學之支流一ー」

【餘業】ギョウ　死後にまでのこるほまれ。華陽國志「若レ余者、可二少以爲一ー有二ー一矣」

【餘蔭】イン　あまり、のこり。漢書、食貨志「遂レ利之民、畜二積一ー一」

【餘姚之學】ヨヨウノガク　明の王陽明(守仁)の學派、陽明は浙江省紹興府餘姚の人なるが故。

【餘暇】カ　ひま。盧綸詩「公事多二ー一、看レ山到二遠村一」

【餘香】コウ　のこれるにほひ。又、うつりが。李商隱詩「幽夢欲レ乾殘菊露、一一猶入敗荷風」○餘芳・餘馥・餘薫。

【餘寒】カン　大寒があけて後の寒氣、立春後のさむさ。陸游詩「無賴一一開二臘花一」

【餘則】ソク　ひま、すきま。陶潛詩「處室有二ー一」

【餘甘氏】ヨカンシ　茶の異名。清異錄「胡嶠飛龍團飲レ茶詩云、沾レ牙旧姓一一、破レ睡須レ封不夜侯」○餘甘は橄欖の異名、前は苦く後に甘きが故(臨海異物志)○譬果。

【餘暉】キ　のこれる日のひかり、ゆふひ。王粲詩「白日半西山、桑柞有二ー一」○夕照・斜陽。

【餘燼】ジン　のこりのひびき。朱熹詩「千載聞二ー一、猶疑笙鶴來」

【餘興】キョウ　圓宴會などの席にて興を添へるために行ふ演藝など。

【餘韻】イン　のこれる音樂のふし。史、樂書、孫賛「洋洋盈レ耳、咸英一ー」

【餘照】ショウ　なごりのあたたかさ。上官儀詩「池色搖二晩空一、巖花斂二ー一」

【餘燼】ジン　のこれるかをりも蘇軾詩「烟空覺冷發二ー一」○餘香。

【餘醒】セイ　のこりのよひ。未だ十分にさめざる酒のよひ。陸龜蒙詩「强欺非二白紵一、聊以發二ー一」

【餘悔】カイ　のこりのくやみ。唐書、韓充傳「充歷二三鎭一、乘レ機決レ策、無二ー一、人愛賴レ之」○後悔。

【餘光】コウ　○あまれるひかり。次條參看。○おかげ。あまりの恩惠。歐陽修、畫錦堂記「禪内之民、聞二下風一而望二ー一」

【分二餘光一】コウヲワカツ　恩惠を人に施し及ぼす義。史、滑稽傳「貧人女曰、我無二以買一レ燭、而子之燭光、幸有レ餘、子可レ分二我餘光一、無レ損二子明一、而得二一斯便一焉」

【餘慶】ケイ　祖先が善を積みし爲めに其の子孫にのこしたる幸福。易、文言「積善之家有二ー一、積不善之家有二餘殃一」

【餘響】キョウ　あまりのにほひ。齊高帝、塞客吟「歇二閑琴之餘響一、想二遊雲之一ー一」○餘香・餘芳。

【餘教】キョウ　古よりのこれるをしへ。職國策「夫齊閔國之一ー、而驟勝之道事也」

【餘孽】ゲツ　滅びし者の子孫。孽は庶子。

【餘業】ギョウ　○先人ののこしたる功業。漢書、楊惲傳「幸賴二先人一ー一、得レ備二宿衞一」○本業以外のしごと。蘇軾詩「智氣未レ消一ー在、逐二人依一ー孤琢二詩章一」

【餘恨】コン　のちにまで殘れるうらみ。傳休奕詩「盤山有二ー一、詩人詠二采薇一」

【餘財】ザイ　○たからをあます。史、滑稽傳「起而爲レ吏、身實歸レ者一レ一」○あまれるたから。餘命を見よ。

【餘子】シ　○本妻腹の長子郎ち嫡子の同母弟。周禮「凡國之大事、致レ民大、故致二ー一」○大夫の庶子。呂

覽「張儀、魏氏ー一也」○本人以外の人、他のものども。後漢書、禰衡傳「ー一碌碌不ㇾ足ㇾ數」‖餘人。

【餘祉】ヨシ のこれるさいはひ。孫萬壽詩「若人惟傑出、餘ㇾ世承ニー一」

【餘師】シ 師と仰ぐべきものの餘りあり。孟、告子「夫道如ニ大路一然、豈難ㇾ知哉、病ㇾ不ㇾ求耳、子歸而求ㇾ之有ニー一」

【餘貲】シ あまれるたから。文同詩「ー一詎可ㇾ數」‖餘財。

【餘業】ショウ ありあまるたくはへ。管子「民發ニー一者、其禁不ニ必止一、發有ニ過度一者、其戰不ニ必勝一」

【餘臭】シウ のこれるくさみ。南史、到溉傳「到氏自有ニー一、途學ㇾ作ニ貴人一、說祖彦之、初以ニ攤薄一自給、故世以爲ㇾ談云」

【餘醜】シウ うちもらされて殘れる惡人ども。諸葛亮文「殘類ー一」

【餘業作ニ詩人一】ヨシヨウサクシジンイチ 學業を修めたる餘力を以て詩人となる。韓愈詩「多情擬ニ酒伴一、ー一」

【餘日】ジツ ○あまれる日數。○ひま。列、仲尼「請待ニー一」‖暇日・閑暇・餘暇。

【餘習】シフ 昔よりのこれるならはし。歷代名畫記「不ㇾ能ㇾ捨ニー一」

【餘人】ジン ほかの人。論、雍也「回也、其心三月不ㇾ違ㇾ仁、其餘則日月至焉而已矣」注「ー一暫有ニ至ㇾ仁時一、唯回移ㇾ時而不ㇾ變」

【餘津】シン のこりのしる。慧遠傳「激ㇾ流者、味ニ其ー一」

【餘燼】ジン もえさし、やけのこり。殘兵に喩ふ。左、成二「請收ニ合ー一」

【餘情】ジヤウ 十分にあまれるおもむき。周賀詩「閒坐有ニー一」

【餘饑】ジキ くひのこり。王令詩「食ㇾ豐不ㇾ辭ㇾ多、愛ㇾ美忘ニー一」‖餘餘。

【餘胥】ジヨ 婢僕のともがら。說苑「僧ニ其人一者、惡ニ其ー一」‖餘須。

【餘暑】ジヨ 秋までのこれるあつさ。陳基詩「到ㇾ州日亭午、ー一秋更虛」‖殘暑。

【餘剩】ジヨウ あまり、剩も餘。‖餘贏。

【餘生】セイ のこりのいのち。謝靈運詩「ー一不ニ歎惋一、猶賦ニ遂初一」‖殘老

海南村、帝遣ニ裴陽招一我魂一」‖殘年・餘命・餘年。

【餘喘】ゼン たえんとするいき、死に瀕するいのち。隋書、劉炫傳「殆及ニー一、薄言ニ胸臆一」‖殘喘。

【餘胙】ソ 祭りの餘りの肉。陸游詩「ー一殘壺手自携」

【餘杵】ソ のこしおかれたるきねひ。白居易詩「中郎ー一鐘ニ羊祜一」

【餘蔭】ヨイン のこれるなかま。後漢書、吳漢傳「追ニ討ー一ー一」‖殘黨・餘類。

【餘桃啗ニ君】ヨタウタンクン 衞の彌子瑕が、君の寵を受けたる故事。韓非、說難「昔者彌子瑕、有ㇾ寵ニ於衞君一、與ㇾ君遊ニ於果園一、食ㇾ桃而甘、不ㇾ盡、以ニ其半一啗ㇾ君、君曰、愛ㇾ我哉、忘ニ其口味一、以啗ニ寡人一、及ニ彌子色衰愛弛、得ニ罪於君一、君曰、是嘗啗ㇾ我以ニ餘桃一、故彌子之行、未ㇾ變ニ於初一也、愛憎之變也」

【餘澤】タク 先人ののこせるめぐみ。晉愛、葵告文「獲ㇾ蒙ニー一、備ニ位于朝一」

【餘地】チ ○あまりの土地。列子「馬蹄之外、可ㇾ使ㇾ無ニー一」○あまり、のこり、十分にしてなほあまりあり。莊、養生主「其於ㇾ遊ㇾ刃必有ニー一矣」

【餘塵】ヂン 古人ののこせる事のおもかげ。南史、南唐李氏世家「思ニ追ニ其祚之ー一、流慕ニ虞舜之高巍一」

【餘醒】セイ ふつかよひ。皮日休詩「冷臥空牀內、ー一夕未ㇾ消」

【餘燼】ジン のこりのしづく。蘇軾詩「空堆有ニー一、似ㇾ與ニ幽人一語ㇾ」‖殘滴。

【餘命】メイ のちにまで殘る害毒。李綱詩「萬騎掠ニ秦關一ー一被ニ陳汝一」

【餘肉】ニク のこりのにく。晉書、郭舒傳「鄉人監食ニ舒牛一、事覺來謝、舒曰、廚饌所ニ以食ニ牛耳一、ー一可ニ共啖ニ之、世以服ニ其弘量一」

【餘熱】ネツ 秋までのこれるあつさ。孫萬壽詩「高齋屏ニー一、珍簟宿ニ輕寒一」‖殘暑。

【餘年】ネン いきのこれるよはひ。石崇、思歸歎「高歌漫ㇾ多ㇾ勞、樂ニー一ニ

‖殘年・暮年・晚年。

【餘念】ネン ほかのおもひ。法苑珠林「唯在ㇾ得ㇾ戒無ニー一」‖他念。

【餘波】パ ○あまりのなみ。晉、馬賈「ー一入ニ於流沙一」○などり。あまりの影響。左、僖二三「其流ニ及晉國一者、君之餘也」

【餘芳】ハウ ○のこれるかをり。潘岳、悼ニ亡妻一詩「蕙蘭ㇾ不ㇾ及ㇾ門、勝ニ於ー一」○死後までのこるほまれ。晉書、儒林傳「ー一遺烈」

【餘白】ハク 字を書きたる紙の末に殘れる空白のところ。

【餘夫】フ 十六歲以上にして、丁年未滿の者。孟、滕文公「ー一二十五畝」周代、田地を授くる法をいふ。

【餘稿】カウ のこせるさいはひ。後漢書、黃香傳「疏曰、遭ニ值太平一、先入ー一、窮冠郎署二徹用一」‖餘慶。

【餘憤】フン あまりのいきどほり。未だはらしきらざるいきどほり。陸機、白雲賦「盈ニ八紘一以ニー一」

【餘命】メイ 餘生に同じ。孫子、九地「吾士無ニ餘財一、非ㇾ惡ニ貨也、無ニー一、非ㇾ惡ニ壽也」

【餘勇】ユウ あまれる勇氣。十二分にある勇氣。左、成二「欲ㇾ勇者、賈ニ余ー一」

【餘裕】ユウ ○ゆるやかにゆたか。孟、公孫丑「豈不ニ綽綽然有ニー一哉」○ありあまる。

【餘容】ヨウ 苟棄の異名。本草「苟

奥、一名ー一」＝燭客。
【餘流】ヨウ 本より分れし末流。蘇軾詩「ー一細不數、遠勢競相參」＝支流。
【餘力】ヨク あまりのちから、本務以外に、他の事をなし得る力。論、學而「行有ニー一、則以學レ文」＝餘暇。
【餘類】ルイ 餘黨に同じ。
【餘齡】レイ あまりのよはひ。蘇軾詩「吾僚便路老、亦足レ慰ニー一」＝餘命、餘年。
【餘瀝】レキ ○杯の酒などのあまれるしづく。史、滑稽傳「時賜ニー一」○後世、人の恩惠を受くるを「得レ霑ニー一」といふ。
【餘烈】レツ ○先祖ののこせるいさを、又、功徳。賈誼、過秦論「奮ニ六世之ー一」○先人ののこせる不徳の汚責、公孫弘傳「弘對策曰、若ニ湯之ー一」＝餘愛。

八畫

【餧】㊀ヰ ㊁ダイ 眞 賄

㊀めし(飯)くひもの(食物)○かふ(飼)くらはす(食)○ゑ、ゑば、動物の飼料。㊁うう(飢)漢書、魏相傳「振ニ乏ー一」○あざる(魚敗)＝餒(食部七畫)

【餡】カン 陷

○あん。餅の中に入れる雜味。○圖小豆アヅキを煮てすりつぶしたるものに砂糖を和したるもの。

【館】クヮン 輸 早 館は俗字

○やかた、たち、やどや(客舍)「旅ー」「客ー」孟、告子「可以假ー」○やかたにとまる、やどる(寓舍)又、やどす。孟、萬章「帝ー甥於貳室」○官舍學校の如き建物「學ー」「使ー」「公ー」○廣き庭苑内に設けし休息所。上林賦「離宮別ー、彌山跨谷」○みせ「商ー」

解字 館は多くの官屬と食膳を司る料理人とを備へたる大宅をいふ、故に食と官とに从ふ。

【館娃宮】クヮンアイノミヤ 吳王夫差、宮を硯石山に作り、以て西施を館す、吳人美女を謂ひて娃と爲す、故に宮に名づく、其の遺址、今の江蘇省吳縣の西南靈巖山上に在り。
【館宇】クヮンウ やかた。後漢書、郭躬傳「每レ入ニ官舍ー一輒更繕ニ修ー一」
【館驛】クヮンエキ しゅくば(宿驛)をいふ。柳宗元に「ー一使壁記」の文あり。
【捐レ館】エンクヮンスル 貴人の死をいふ。舍を見よ。
【館閣】クヮンカク 宋代より翰林の別稱。館は昭文館・史館・集賢院。閣は祕閣・龍圖・天章の諸閣、皆經籍圖書等を藏す、其の職に居る者は皆文學侍從の臣なり。館職參看。
【館閣體】カクカクタイ 翰林學士が詔に應じて作る文章の體。莊重典雅を以て貴しと爲すの書法にも亦此稱あり。
【館閣氣】カクカクキ 文の華實にして俗に近き氣分あるをいふ。錦田錄「王安國語レ子曰、文章須ニ是官樣ー一、最忌ー一ー一耶」
【館人】クヮンジン やかたを守り賓客の世話をする者。檀弓「孔子之レ衛、遇ニ舊ー一之喪ー一」＝管人(儀禮)
【館舍】クヮンシャ やかた。史、范雎傳「君卒然指ニー一ー一是事之不レ可レ知者ニ也」指ニー一は死する義。略して指館ともいふ。
【館職】クヮンショク 宋代朝廷館閣の職。容齋隨筆「國朝館閣之選、皆天下英俊、然必試而後命、一經ニ此職ー一、遂爲ニ名流ー一、其高者曰ニ集賢殿修撰・史官修撰・直龍圖閣・直昭文館・史館集賢院祕閣、次曰ニ集賢祕閣校理ー一、官卑者曰ニ館閣校勘史館檢討ー一、均謂ニ之ー一ー一」
【館舖】クヮンポ やしき。唐書、韓滉傳「置ニー一數十子石頭城ー一」

【餓】ガ 元 餓に通ず

ー飩(ガトン)はうどん粉にて餡(アン)を包みて蒸したるもの、むしもち。食物志「ー飩或作ニ渾飩ー一、飩象ニ其圓形ー一」＝餛飩。

【餞】セン 銑 霰

○はなむけ、酒食を設け、又、禮物を贈りて別を送る「飲ー」「祖ー」「宴ー」「郊ー」又其の贈物。みおくり、わかれのさかづき(送別會)○はなむけする、みおくる。○すべて送る義とす「ー一春」書、堯典「寅ニ納日ー一」同訓異字 餞・送・贈・餽・錢・餞・贐・遺等の別は送(一九頁五段二段)の條を見よ。
【餞筵】センエン 送別のさかもり。餞は酒食を以て行を送る義。元稹詩「ー一君置レ酒、隨レ俗我餔レ糟」＝餞筵。
【餞春】センシュン 春の去るを送る。春の去るを惜みて酒食を具して餞を爲すこと、餞を設けて人を送るに假たる故。崔駰賦「迎ニ夏之首ー一ー之杪ー一」杪は末。
【餞送】センソウ たびだつ人を見送る、北史、宗室傳「齊彭城王浟爲ニ定州刺史ー一、餞送ニ侍中ー一有ニ老公數百ー一具ー一、稱ニ其公廉ー一、敬重ニ其意ー一爲ニ飲ー一ロ」＝餞送。

【餞別】わかれを見送る、はなむけする。又、其の贈物。韋應物詩「英豪若レ雲集、一レ餞二城闉一」＝送別。

【餃】㊀タン 寒 ㊁タン 旱 ㊂タン 翰

㊀すすむ(進)増加する。詩、小雅「亂是用レ㊁くらふ。＝啖。○うすき餅にて肉を巻きて切りし食物。㊂くらはす(喰)利を以ておびきだす。史、趙世家「故以齊一天下」＝啖。

【餟】㊀テイ 霽 ㊁テツ 屑

まつる、多くの諸神の位を竝べ連ねて祭る。史、武帝紀「其下四方地爲レ食」＝醊。

【餅】ヘイ 梗 餅は俗字

○もち、むぎこのもち。麥粉をこねて蒸したんご。文選に束晳の一賦あり。○麪をこね合す。○物の一片を「一金」○圖すべて穀類にて製せしもち。

【餅金】もちの如く丸き金塊。續明道雜志「火滅視二罪中一、燭然一一矣」

【餅銀】もちの如く丸き銀塊。水經、注「室前盤石上、積二列十餅一、中悉是一一」

【餅餌】もち、だんご。餅は麥粉のもち、餌は米を蒸して作る。宋史、吳元扆傳「濟以二舟楫一、設二一一一以食」＝餅餌。

九畫

【餫】㊀ウン 元 ㊁コン 同

㊀兵糧又食物をおくる。左、成五「宣伯一＝諸穀」㊁餛(前頁三段)に通ず。＝飩コンはむしもち。＝餛飩。

【餲】エイ 霽 アツ 曷 封

すゆ、飯がすえて臭くなる。味が變る。論、鄕黨「食饐而一、魚餒而肉敗不レ食」

【餬】コ 虞

○かゆ(饘・糜)○かゆをたべる。○人に寄食する、ゐさふらふとなる。左、隱十一「寡人有レ弟、不能和協而使一＝其口於四方」○口すぎする、貧しくくらす。

【餬口】○寄食する。字解參看。○口すぎする。貧しくくらす。左、昭七「饘三于是一、饘三于是一、以餬二余口一」

【餬餘】かゆ。北史、吳悉達傳「見弟同居、四十餘載、雖下於二儉年一一一不レ繼、寒冬經過、必傾レ所レ有」

【餱】コウ 尤 糇は俗字

ほしいひ、かれいひ(乾糧)乾燥せしめし。

【餱糧】ほしいひのかて。詩、大雅「廼裹二一一一、于レ橐于レ囊」

【餳】飴(食部十二畫)に同じ。

【餳】タウ 陽

あめ。飴の固きもの。本草「膠飴乾柘者曰一一」

【餳粥】あめがゆ。唐書「天寶二年諸陵以二寒食一廢二一一一」都中記「寒食三日、作二醴酪一、煮二糗米及麥一爲レ酪、謂二寒食一一煮作レ粥」

【餳蕭】あめ簫(簫陽者)の吹く竹管。(周禮、小師、注)

【餮】テツ 屑 饕は俗字

むさぼる(貪)食をむさぼる。左、文十八「縉雲氏有二不才子一、貪二於飲食一、冒二於財賄一、天下謂二之饕一」註「貪財爲レ饕、貪食爲レ餮」

【餕】フン 文

米を一度蒸し、更に水を沃きて再熟せしめる。又其のめし。詩、大雅「挹二彼注一茲、可二以一饎一」

十畫

【餫】ウン〔國字〕

一飩ウンは麪類ムンの一。圖麪。

【餚】エウ 肴

○かれいひ、野夫が田畑にてたべるべんたうの類、田に餉する食(野饋)○かれいひをおくる。詩、豳風「一彼南畝一」

【餻】カウ 豪

こなもち(餌)＝糕。

【餽】キ 寘

○おくる(貽)食物又、物品を贈る「燕一」「饋一」孟、公孫丑「王一二兼金一百」○かれいひす。＝饋。

同訓異字　餽・送・贈・饋・貽・遺・餽等の別は送(一九四五頁二段)の條を見よ。

【餽歲】おくりもの。風土記「蜀風俗、歲晩饋問、謂二之一一一」

【餽餉】キフ　食物をおくる。又、其のおくりもの。吳志、劉繇傳「繇長子基、年十四、居二繇喪一盡レ禮、故吏一一、皆無レ所レ受」‖餽贈。

【餽饋】キフ　前條に同じ。漢書、食貨志「千里負擔一一」

【餼】キ　未

○こめ（禾米）又、米をおくる。○食物をおくる。又、其の食物。○いけにへ（生牲）生きて居る牛羊の類「一羊」○おくる物秣ブツ

【餼牽】キン　生けるいけにへ、牛羊豕をいふ。春秋、僖三三「一一弗去」〔一說に腥を餼といひ、未だ殺さずして來くべきものを牽といふ〕

【餼羊】ヤウ　いけにへのひつじ。論、八佾「子貢欲レ去二告朔之一一」

【餼牢】ラウ　いけにへ。禮記「聘介皆有二一一一一空食再饔」

【餬】コ　麻

あめ（飴）本草「飴即軟一」通じて糊陽に作る。

【餬口】コウ　粒粟ゾクの異名、味甘きが故（吳越語）

【餺】ハク　藥

一飥は餅の類、うんどん。‖不托飥飥。

【餾】リウ　有　尤

○むす（蒸）飯が十分にむせる。○ふかしたる飯。

十一畫

【饉】キン　震

○うう、うゑる、穀の實らざるを飢、野菜の凶作を一といふ。一說、五穀中の三穀升らざるを一といふ「凶一」「荒一」「歉一」韓詩外傳「一穀不升曰歉、二穀不升曰飢、三穀不升、謂之一」○うゑ。論、先進「因之以飢一」

【饅】ベン　寒

一頭デウは餅の類、小麥粉に酒を和し、圓形にして蒸したる食物。東晳、餅賦「三春之初、陰陽交至、于時宴享、則一頭宜設」事物紀原「諸葛亮南征、將渡瀘水、土俗殺人首以祭神、亮令以羊豕代取、刻麪人頭祭之、一頭名始此」‖包子・饅頭・蠻頭。

【饂】ヲ　歌　有　遇

あく。‖飥。

十二畫

【饐】㊀イ　寘　㊁エイ　屋　㊂イク　質

㊀すゆ、すえる、飯がむれてくさる、臭くして味が變る。說文「飯傷濕也」論、鄕黨「食一而餲」㊁むせぶ。飯がのどにつまる。‖噎。

【饋】キ　遇　餽に通ず

○おくる（贈遺）進む。○かれいひをおくる、食物をおくる。孟、萬章「亟一鼎肉」○特に尊き人に食物を進める。周禮、膳夫「掌王之一」○めし（食事）かれいひ。○おくりもの「厚一」論、鄕黨「朋友之一、雖車馬、非祭肉不拜」○そなへもの。

同訓異字　饋・送・贈・餽・餽・餽・貽・遺等の訓は送（一九四五頁三段）の條を見よ。

【饋給】キフ　おくりあてがふ。宋史、眞宗紀「所在量軍儲一一、勿三擾レ民飛輓一」‖餽給。

【饋人】キン　君の食膳を治める者。左、成十「晉侯欲レ殺、使三匄人獻七寒、一一爲レ之」‖膳夫。

【饋食】キシ　祭記に熟食を獻ずるをいふ。儀禮に特牲一一禮あり。

【饋奠】キテン　尊者にすすめる飯食。後漢書、清河王慶傳「慶母宋貴人、長二于人事一、供二奉長樂宮一、身執一一一、太后憐レ之」

【饋奠】キテン　物を供へて神を祭る。又、其の供へ物。禮記「可三以與二於一一之事一乎」

【饋レ米】コンヅメ　米を送る。晉書、謝玄傳「孫恩寇レ饋、支餉二丞米二千斛一」‖餉米。

【饋藥】キヤク　くすりをおくる。論、鄕黨「康子一レ、拜而受レ之」

【饋路】キロ　餽食をはこぶみち。宋史、張亢傳「時麟州一一猶未レ通」‖糧道。

【饋糧】キリヤウ　かてをおくる。孫子「帶甲十萬、一一千里」

【饑】キ　微

○穀物が熟せず。又、其の年「荒一」「一歲」○うう。うゑ。‖飢。

同訓異字　饑・餓・飢・饉の訓は餓（食部七畫）の條を見よ。

【饑饉】キキン　うゑる。孟子「朝不レ食、夕不レ食、一一不レ能レ出レ門」

【饑寒】キカン　うゑこごえる。後漢書、馮異傳「昨得二公孫豆粥一、一一俱解」‖

飢寒。

【饑渴】キカツ　うえてかわく。後漢書、張奮傳「比年不レ登、人用二一一、今復久旱、秋稼未レ立、夫國以レ民爲レ本、民以レ穀爲レ命、政之急務、憂之重者也」

【饑饉】キキン　作物の熟せざる時、凶年。穀物の實らざるを饑といふ。野菜物の出來ざるを饉といふ。詩、先遣「如レ之以二卿旅一、因レ之以二一一一」＝飢饉。

【饑窮】キキウ　うえてくるしむ。漢書、班超傳「但當二收レ穀堅守一、彼一一自降、不レ過二數十日一決矣」

【饑驅】キク　うえの爲めに迫られる。陶潛詩「饑來驅レ我去、不レ知覺二何之一」

【饑僕】キボク　食に乏しくしてうみつかれる。戰國策「以二士卒一一、可二且休一」

【饑喘】キセン　うえて食足らず。喘一に歡に作る。蘇子良啓「穀價踊レ和、比室一一、纔喘レ餘、門羅二饑色一」

【饑歡】キカン　前條に同じ。また饑饉の略。舊唐書、德宗紀「內有二一一一、切在二慰安一」

【饑色】キショク　うえたる容貌。孟、滕文公「民有二一一一、野有二餓莩一」＝飢色。

【饑餓】キガ　うえる。孟、離婁句「裂レ裳裹レ足、不レ忍二其一一一」

【饑腸】キチヤウ

貨志「及二孝武時一、國用一一、而民不レ益レ賦」‖饒足・豐給。
【饒修】ゼウ　ゆたかに足る。論衡「貧人不レ足、富人一一」‖富足・饒衍。
【饒舌】セウ　しゃべる。多辯。隋書、五行志「齊時語、言老公背受二大斧一、一一老母不レ得レ語」傳燈錄「二人笑曰、豐干一一、久而放レ之」
【饒贍】セウ　ゆたかに足る。後漢書、張讓傳「資產一一」
【饒多】タ　ゆたかに多し。たくさん。戰國策「沃野千里、蓄積一一」
【饒培】バイ　十分につちかふ。韓愈詩「松蓋遭二挫抑一、漸擢獲二一一一」
【饒飽】パウ　食が豐かにあく。翰林「東山之邑、中有二肥土一、可二以一一」
【饒富】フ　ゆたかに富む。漢書、王莽傳「多齎二珍寶猛獸一、欲レ視二一用饒中山東一」‖富饒・豐富。
【饒沃】ヨク　土地がゆたかにこえる。晉書、武帝紀「以二襄陽淮南一一地一各立二一縣一以居レ之」（俘虜を居く）‖沃饒・肥饒。

【饗】（十三畫）

㊀キャウ　㊁キャウ　㊂ヒャウ　享に通ず

㊀もてなす、ねぎらふ。酒食を以て人を勞ふ。○あへ、さかもり、鄉人が集りて飲酒する。もてなし「一應」○うく（受）神が供物をうける「尙來！」○あたる（當）○のむ（飲）くらふ（食）○すすむ（侑）たてまつる（獻）○さけさかな（酒食）○合せ祭る。㊁うく（受）神が祭を受納して福を降す。漢書、郊祀歌「關二流離一抑不レ祥、賓二百寮一山河一」○あたる（當）
【饗宴】エン　もてなしのさかもり。晉書、明帝紀「停二一一之禮一」‖享燕。
【饗應】オウ　酒食を以て人をもてなす。
【饗慶】ケイ　さいはひを受ける。晉書、惠帝紀「豈在二予一人獨饗一其慶一、宗廟社稷、實有レ賴焉」‖受慶。
【饗告】コク　禮先の靈などに供物をそなへて祭る。唐書、殷盈孫傳「一一如二宗廟一」
【饗薦】セン　王者が祖先の大祭に供物をささげる。禮記「一一有レ樂、而食警無レ樂」
【饗報】ハウ　馳走して其の功德に報ずる。又、神を祭りて其の惠に報ずる。晉書、禮志「昭告二神祇一一一功德一、是以災厲不レ作、而風雨寒暑以レ時」
【饗福】フク　幸を受ける。饗は一に享に作る。晉書「實長者所二以一一一、息慾者所二以招一レ患」‖享福・受福。

【饘】（十一畫）

セン　先　覲　又、餋に作る

かゆ（糜）厚きを一といひ希きを粥といふ。
【饘餬】コ　こきかゆと、うすきかゆと。禮記「婦事二舅姑一、一一酒醴一」
【饘粥】シュク　こきかゆと、うすきかゆと。字解參看。檀弓「一一之食」

【饕】（十三畫）

トウ　豪

○むさぼる（食）財を貪る。○惡獸の名、古、鐘鼎などに多く其の形を刻みて飾と爲す。轉じて惡人の喩とす。
【饕餮】テツ　むさぼりてたもち據る。晉書、惠帝紀「留日、逆臣孫秀、奉二趙王倫一、一一天位一」
【饕餮】テツ　○饕は財をむさぼる。餮は飲食をむさぼる。左、文十八「緡雲氏有二不才子一、貪二於飲食一、冒二於貨賄一、天下謂二之一一一」○惡獸の名。一名狼鶏、性貪惏にして人を食ふ。因りて凶人の號とす。
【饕餮仙】セン　よく深き道士をそしりていふ。淸異錄「近世事二仙道一者、不レ務二靜欲一、多搜二黃白術一、貪婪無レ厭、宜レ謂二之一一一」
【饕戾】レイ　むさぼりもとる。蔡邕文「一一是黜、英才是烈」

【饋】（十二畫）

フン　ホン　文

○むす、飯を蒸す。○半蒸しの飯。

【饕】（十四畫）

ヨウ　宋　駘に通ず

○あさけ、あさめし（朝食）飧の對。孟、滕文公「一飧而治」○にたる食物（熟食）又、食物を料理する「一膳」○殺したるいけにへ。饌の對。
【饕餮】セツ　饕は殺したるいけにへ、餮は生けるいけにへ。儀禮、聘禮「君使二卿韋弁歸二一一五牢一」
【饕人】ジン　古の官名、割烹の事を掌る。‖雍人。
【饕正】セイ　饕人即ち料理人のかしら。
【饕膳】ゼン　饕は熟食（ジュクシキノ膳は具食（グシキノ膳）漢書、杜欽傳「陛下視二高之一一、致二晨昏之定省一」
【饕飧】ソン　熟食をいふ。朝飧とん飯と。孟、滕文公「賢者與レ民竝耕而食、一一而治」（朝夕の炊事をしながら政を執る）

【饜】（十四畫）

エン　豔　駘に通ず

○あく（飽）十分に飽き足る。孟、離婁「一酒食而後反」○心に滿足する。孟、梁惠王「不一一」

同訓異字　饜・飽・飫・厭の別は飽（食

部五畫）の條を見よ。

【饕足】ソク　酒食に飽き足る。孟、離婁「此其爲ニ――一之道也」

【饕飽】ホウ　あく。‖厭飽。

【饕厭】エン　食にあき足る。左傳序「饕而厭レ之」曲游詩「豹胎日――」‖厭飫・飽食。

【饛】ボウ　東　食物を器にやまもりに盛りし貌。詩、小雅「有ニ――簋飧」

【簋】キ　饌（食部十二畫）の古字。

十七畫

【饞】サン　咸　むさぼる（饕）食物を貪る。又、財利を貪る「貪ニ――」「老ニ――」

【饞嘴】ケン　深く物事に心を寄せたしなむ。譚子「ニ――者、必忘ニ於治苦ニ、饑寒者、必輕ニ於性命ニ」

【饞涎】セン　美味を見て流すよだれ。陸游詩「麴車未レ用隆ニ――ニ」

【饞吻】フン　うるて食を貪り欲する口。吻はくちばし。范成大、河豚詩「朝來里中子、――不レ待レ熟」

【饟】ジョウ　餉（食部六畫）に同じ。

【饟道】ドウ　兵糧をおくるみち。史、吳王濞傳「輕兵絕ニ吳――ニ」‖餉道・糧道。

首部

【首】㊀シュ・シュウ　㊁シュ・シュウ　玄　有

㊀かしら（頭）くび、かうべ。○かみ（髮）○かみ（上位）「一座」○さき（先）まへ（前）○かなめ（要）○もとづく（本）○はじめ（始）○かしら（魁帥）をさ（長）○元ー（君主。○つか（拇）○いしづき（鎚）○あらはす（表）○詩歌の篇數を示す語「唐詩三百ー」㊁はうす、つける、己の罪を白狀する「自ー」漢書、文三王傳「驕慢不ー」○したがふ（降服）後漢書、西域傳「雖有降ニ――一、曾莫ニ懲革ニ」○むかふ（向）頭をむける「ー丘」禮、玉藻「寢恒東ー」○國おびと。古の姓の一。

同訓異語　首・初・始・肇・創・伸・昉・胡の訓は初（二三八頁一段）の條を見よ。

【首惡】アク　惡人のかしら。春秋繁露「春秋之論ニ――一、惡也、――者罪特重」‖罪魁。

【首尾】ビ　首を長れ尾を長れば、一身長れざる所なし。恐懼の甚だしきに喩ふ。左、文十七「――、身其餘幾」

【首夏】カ　なつのはじめ。首は始。謝靈運詩「――猶清和、芳草亦未レ歇」‖初夏・孟夏。

【首冠】カン　かぶと。書經、疏「兜鍪、――也」‖首甲。

【首行】コウ　國本店。

【首顧】コ　うなづく、承知する。毛令詩「曾莫ニ――一」‖首肯。

【首揆】キ　總理大臣をいふ、首相に同じ。古、宰輔の官、百揆を總ぶ、後世は宰相一人にあらず、故に其の首位に居る者を――といふ。

【首丘】キュウ　狐は死する時、首をもと住みたる丘に向ける。其の本を忘れざるに喩ふ。禮記「古之人有レ言曰、狐死、正ニ丘首一仁也」‖丘首。

【首級】キュウ　秦の法、敵の一首を斬れば、爵一級を賜ふを以て、一首を一級といふ。北史、張奕之傳「短刀接レ刃、親獲ニ――一」

【首虐】ギャク　かしらとなりて物をそこなふ。わるもののかしら。史、黥布傳「項氏之所ニ坑殺一人、以ニ千萬一數、而布當爲ニ――一」

【首魁】カイ　かしら。‖頭目・張本人。

【首功】コウ　敵の首をきりしてがら。史、魯仲連傳「被殺者稟ニ鑄義一而上ニ――一之國也」

【上ニ首功一】コウヲ　敵の首を獲る者をたっとび賞す。前條參看。

【首肯】コウ　うなづく。承知する。嗣府錄「張公――久之」

【首席】セキ　上座にすわる席。又、僧の職名。釋氏要覽「――之名、即上座也（中略）唐宣宗署ニ僧錄一、爲ニ三教ー一、此爲レ始」‖首衆。

【首歲】サイ　としのはじめ、正月。梁元帝纂要「孟春曰ニ――一」‖開歲・發歲・獻歲・肇歲。

【首子】シ　はじめての子。韓非、十過「易牙蒸ニ其ー一一而進レ之」‖長子・嫡子。

【首秋】シュウ　あきのはじめ。陰曆の七月の異名。梁元帝纂要「七月曰ニ――一」王僧孺詩「――雲物警、書暑月猶涼」‖孟秋・上秋。

【首實】ジツ　實を首する、事實を白狀する。

【首相】ショウ　○同時の宰輔の職の首席者。宋史、韓琦傳ニ――一、法令典故問ニ曾公亮一、文學之事、問ニ歐陽修一、三人同レ心輔レ政」‖首揆。○國內閣總理大臣の異稱。

【首唱】ショウ　○となへはじめる、先だちてとなへる。南史、傅亮傳「我ー一大義、興ニ復王室一」○一座中にて先づ詩が出來る。白居易詩「尙書ー一郎中和」

【首種】シュ　穀の異名。禮、月令「――不レ入」疏「百穀、穀先種故也」

【首席】セキ　一番の上位「――數險」‖首座・首班。

【不ノ首】フシュ　其の罪に伏せざる漢書、文三王傳「驕慢ー（ノ）ー」
【首善】シュゼン　教化のはじめ、天下の模範を立つる義。漢書、儒林傳「故教化之行也、建ニー（ノ）ー一自ニ京師一始」よりて京師を「ー（ノ）ー之地」と稱す。
【首選】シュセン　科擧の試驗に第一名にはいりし者。宋史、選擧志「宜ノ擢ニー（ノ）ー一」
【首鼠】シュソ　識首をいふ。王義之文「日往月來、元正ー（ノ）ー」
【首足】シュソク　くびと、あしと。孟嘗「父子、ー（ノ）ー也」＝頭足。
【首足異ノ處】シュソクコトスル　胴体せられる。史、孔子世家「匹夫而爲ニ諸侯一、歿嘗ノ誅、諸命ニ有司一、有司加ノ法焉、——」＝頭足異ノ處。
【首鼠兩端】シュソリョウタン　鼠の性疑深く穴を出でて擧動し、進退容易に決せずの故に兩端を持する者に喩ふ、ひよりみ。史、魏其・武安傳「田蚡怒曰、與ニ長孺一共ニ老禿翁一、何爲ニ——」一說、首鼠は首施に同じく、猶退の義。
【首陀】シュダ　印度の社會階級に四別（一、總雜門卽ち賤族。二、刹帝利卽ち王族・軍人。三、毘舍卽ち商賈、四、ー（ノ）ー）ある中の最下級、農夫をいふ。楞嚴經、注「四天覆賤、族分ニ四姓一、ー（ノ）ー農夫也」＝修陀・須陀。
【首痛】シュツウ　かしらがいたむ。又其の山名。後漢書、四域傳「身熱ー（ノ）ー、風災鬼蠱之域」注「大頭痛・小頭痛之山、赤土身熱之阪」＝頭痛。
【首都】シュト　國中一番のみやこ、帝城又、中央政府のある所。＝首府。
【首途】シュト　かどで、はじめてたびだち。道にのぼる。北史、蕭深傳「卽日ー（ノ）ー」＝首塗・首路。
【首塗】シュト　前條に同じ。杜甫詩「登隆將ニー（ノ）ー」
【首腦】シュノウ　おもなるもの、主要たる者。
【首雄】シュユウ　最も先に雄を發する。管子「賤臣ー（ノ）ー」
【首座】シュザ　首席に同じ。
【首尾】シュビ　○くびと、をと。○はじめと、をはりと。＝本末・終始。○一事の始末。○始から終まで相共にする。後漢書、皇甫規傳「共相ー（ノ）ー」○國事の施行、始末、都合「上ー（ノ）ー」
【首尾吟】シュビギン　首尾に同一の句を用ふる詩の一體、宋の邵康節に始まる。陳輝詩、春日田園雜興「春來非ニ是愛ニ吟詩一、詩是田園漫興時、無ノ事花邊緩ニ覓句一、有ノ時乘下課ニ牛背一、午陰父老ニ看ノ秧去、還共ニ兒童一飼ニ草歸、偶物興懷渾不ノ奈、春來非ニ是愛ニ吟詩一」
【首尾俱至】シュビグシ　常山の蛇勢にて、前後相應ずるにいふ。孫子「善用ノ兵者、譬如ニ率然一、率然者常山之蛇也、擊ニ其首一則尾至、擊ニ其尾一則首至、擊ニ其中一則——」＝首尾俱救・首尾相衞。
【首府】シュフ　國の中央政府のあるみやこ。＝首都。
【首伏】シュフク　白狀して服罪する。葉隱「比事「今欲ニー（ノ）ー一」＝首服。
【首服】シュフク　○自首して罪に服す。柳宗元文「宿蠶綴妻、披鎖ー（ノ）ー」＝首伏。○首の服飾、くびかざり。寇をいふ。周禮、天官「享ニ王后之ー（ノ）ー一」
【首謀】シュボウ　かしらだちてよからぬ事をたくらむ。又其の人。漢書、武帝紀「將軍王恢坐ニー（ノ）ー不ニ進、下ノ獄死」
【首陽山】シュヤウザン　伯夷・叔齊が義を守りて餓死せし山。山四省永濟縣の南に在り。＝首山・雷首山。
【首陵】シュリョウ　首級と捕虜と。淮書、衞青傳「遂至ニ於隴西一、捕ニー（ノ）ー數千ニ、遂取ニ河南地一、爲ニ朔方郡一」
【首領】シュレイ　○くび（頭頸）左、妻十三「得下保ニー（ノ）ー以沒上」保ニー（ノ）ーは身を全くし保つ義。○かしらだつ者。陰書、郭榮傳「勢安ニー（ノ）ー由權制、阻ニ清江一作ノ亂」
【首路】シュロ　かどで、初めて出發する。諸葛亮文「旌麾ニー（ノ）ー日首途。
【搔ノ首】カカノコウベ　○あたまをかく。心に悲ある時の形容。詩、邶風「ー（ノ）ー踟躕」○國恥ぢる時の形容。
【風ノ首ノ書】フウシュノショ　師に就き頭をさげて教を受ける。史、蘇秦傳「夫士業已ニ——」
【俛ノ首】フベンシュ　かしらを垂れてこびへつらふ。＝俯首、應ニ科目一時與ノ人書「ー（ノ）ー帖ノ耳」
【疾ノ首ノ蹙ノ額】シッシュノシュクガク　頭痛を訴へ鼻頭にしわをよせる。あふる形容。孟、梁惠王「百姓聞ニ王鐘鼓之聲、管籥之音一、擧ニ——而相告曰、吾王之好ニ鼓樂一、夫何使ニ我至ニ於此極一也」

【首】 二 畫

首（前條）の古字。

【馗】 八 畫

㊀ クヮク　㊁ キク　九 支　編 廟

㊀きりたる敵の耳、古、敵を殺して其の左耳を獻ず。又、きりたる敵の首「俘ー（ノ）ー」○みみきる（截耳）くびきる（斷首）㊁おもて（面）莊、列禦寇「槁項黃ー（ノ）ー」
【馘耳】クヮクジ　みみをきる。又、きりたる耳。魏收文「塞ノ川滿ノ野、ー（ノ）ー截鼻、以ニ千萬ニ計」

【馗】 キ　九 支

○ははぼね（頬骨）○みち、九達の道。＝逵。王粲詩「士女滿ニ莊ー（ノ）ー」○癸に同じ。○ー尉は菌の名。○鍾ー（ノ）ーは人名。

【鼠首】くびをきる。陳琳、檄武帝「克復一ノ、梟二其鼠首一」
【鼠竊】くびをきる。晉書、劉琨傳「譲當三躬自執ノ戟一ニ一ニ虜一」

香部

【香】キャウ　カ。　陽

○にほひ、かをり（芳）か「一氣」「國一」○たきもの「芳一」「異一」「清一」（古は一氣・穢氣皆之を臭といふ、今は穢氣を臭といひて一と對す）にはひぶくろ。○瑞一は花の名、一名丁子一丁一。○かうばし。○うつくし（美）呂覽、仲冬「水泉必一」

【香醪】カウラウ　香をたくけむり。又、花の満開せる形容。劉禹錫詩「柔風細細吹二醉影一ニ一微微引二清香一ニ」
【香案】カウアン　香爐をのせるつくゑ。唐書、儀衛志「瀛壺一ニ一」元稹詩「我是玉皇一ニ吏、謫居猶得近二蓬萊一ニ」
【香油】カウユ　にはひよきあぶら。北史、波斯國傳「其俗出レ穽、剪レ髮、無二跪拜之禮一、以ニ一ニ一遙レ身」
【香國粉陣】カウコクフンヂン　美人にとりまかれる形容。
【香煙】カウエン　香火のけむり。庾信詩「一梁虞ノ塔、花雨積爲ノ塵」
【香醴】カウレイ　かをりよくうるはし。許渾詩「梅含ニ一ニ一吐二輕風一ニ」
【行ノ香】ヤウカウ　香を焚きて手を煽し、又は香を散じて穢を去る。南史、王僧達傳「何尚之於ノ宅、設二八關齋一、大集二朝士一、自一ノ一」
【聞ノ香】ブンカウ　數人相集りて香を焚き、其の優劣をかぎわける。品字箋「倣レ鼻ノ氣爲ノ聞者借用也」
【鬪香】トウカウ　數人相集りて、各携ふる所の香を焚きて、優劣を爭ふ。清異錄「各携二名香一比二試優劣一、名曰ニ一ニ一」
【香界】カウカイ　佛寺（行錄錄）高適詩「一一退藏有一」‖香早。
【香杭】カウカウ　にはひよき米。唐書、地理志「蘇州吳郡、貢二大小一ニ一」‖香粳。香珠米。
【香莖】カウケイ　かをりたかくき。白居易詩「一一與二奥葉一日夜俱長久」
【香等】カウトウ　にはひあるはなぶさ。徐陵伯詩「一一綴二紅滋一垂條繁二綠縟一」
【香合】カウガフ　○かうばこ。宋史、禮志「奥中設二銀獅子一ニ一」‖香盒。○婆娑の異名（曲禮）○圖種種の香料を調合し蒸きてかぎわける一種の遊戲。‖香道。
【香盒】カウガフ　かうばこ。‖香合。
【香氣】カウキ　善きにほひ。大智度論「譬如二妙高一、一人貿一人賈、芳人在レ邊亦得ニ一ニ一」
【香蛸】カウセウ　酒の異名。李莊詩「一一且同酌」
【香橘】カウキツ　にはひよきたちばな、くねんぼ、韓翃詩「把レ手開歌一ニ一下」
【香芹】カウキン　かをりよきせり。杜甫詩「鮮鯽銀絲膾、一ニ碧澗甕」
【香魚】カウギョ　鮎ノ漢名。臨江逸志「一ニ鱗細不レ覺、春初生、月長一寸、至二冬月一長尺餘、則赴二湖際一生レ卵」‖紀月魚。
【香具師】カウグシ　圖○たき物香袋などを商ふ商人。○やし、みせものし。和傳「有ニ一ニ因緣一」
【香火】カウクワ　香をたく火。北齊書、陸法
【香火院】カウクワヰン　菩提寺だんなでら。委悲雜談「妙智禪師年最一ニ一」‖香華院。
【香火兄弟】カウクワケイテイ　遊女などの互に氣の合ひたる者が義兄弟の約束したる者。敎坊記「坊中婧女、以二氣類相似一、約爲ニ一ニ一」
【香火情】カウクワジヤウ　佛前にて誓約したる心。唐書、突厥傳「泰王驍レ騎出二突利一日、爾往與レ我盟二急難相助一、今無ニ一ニ一耶」
【香果】カウクワ　をんなかづら。本草「蔓蘼一名ニ一」
【香花】カウクワ　佛に供する香と花と。北史、王劭傳「佛放二大光明一、以ニ一ニ一妓樂一、來迎レ之」
【香華】カウゲ　前條に同じ。法華經「一ニ一伎樂、常以供養」
【香華院】カウゲヰン　香火院に同じ。
【香桂】カウケイ　にほひよきかつらの木。元氏掖庭記「一ニ爲レ柱」
【香蕙】カウケイ　ふせご（薰籠）宋元詩「春寒不レ熱一ニ一火」
【香骨】カウコツ　美人のほね。盧小志「美人一ニ一、化作二車塵一」
【香魂】カウコン　花の精、又、美人のたましひなど。沈佺期詩「僧老言何證、一ニ一事永遠」
【香菜】カウサイ　かをりぐさ。月令廣義「一ニ一蓼也」
【香草】カウサウ　○草の一種、かをりぐさ。爾雅、注「一ニ一葉小如二委狀一」○かをりよきくさ。王維詩「一ニ一爲二君子一、名花是長卿」‖芳草。
【香燻】カウクン　支那、華嚴宗の第三祖賢首大師をいふ。唐の貞觀十七年に生る。一ニは時の帝王より追謚せられし名。
【香山居士】カウザンコジ　唐の白樂天の別號。舊唐書、白居易傳「會昌中以二刑部尚書一致仕、與二香山僧如滿一結二香火社一、每月與往來、白衣鳩杖自稱一ニ一」
【香臭】カウシウ　○にほひ。荀子「氣之臭」鼻者爲レ臭、故香亦謂二之臭一」○かんばしきと、くさきと。易林「鼻目易レ處、不レ知ニ一ニ一」芳しきと臭きとを知らず。可否善惡の別を辨へず。前條參看。

【香室】シャウ 佛堂（法苑珠林）
【香餌下必有二死魚一】カウジノシタニハカナラズシニウヲアリ 魚は香ばしきえばに、釣られて死す。利にいざなはれて身を滅ぼすに喩ふ。三略「——、重賞之下、必有二勇夫一」
【香新】シン 香木を刻て薪とする。吳均詩「——桂火炊二雕胡一」
【香車】シャ 美くしき車。李嶠、香賦「跨二浮雲之翼蓋一、頓二流水之——一」
【香樹】ジュ にほひよき木。列仙傳「有二五色蛾一、止二其——一、宋一」＝芳樹。
【香乘】ジョウ 書名、二十八卷、明の周嘉胄撰す、香の名品、製法、典故、藝文一一詳述、香事を考ふる者の必讀書。
【香水】スイ ○よきにほひあるみづ。述異記「——在二井州一、其水香潔、浴レ之去レ病」○香料をとかし入れし水、化粧用とす。
【香蕉】セウ 芭蕉の實を結ぶもの、亞細亞の熱帶地に產す。＝甘蕉。
【香醬】セウ 白くしてかをりある花を醬に比していふ。黃庭詩「滿壇——猪二梨花一」
【香袋】タイ にほひぶくろ。通鑑、注「猶二今之——一」＝香囊。
【香道】ダウ 圖香合。
【香奠】デン 死者の靈前への供物。＝香典・香料。
【香餘】トウ かぐはしき、もちいね。餘疑飲、喜雨詩「焦心聞二救農一、虛」口待二——一」
【香南雪北】ナンセツホク 天竺の香醉山の南、大雪山の北、佛の居りし地。傳燈錄「問金粟如來爲二什麼一、卻降二此娑婆一耶、曰、香山南雪山北」＝雪北香南。
【香薰】クン 香を入れるふくろ。にほひぶくろ。通典「執二香爐一——、燒瀉護二衣服一」＝香臭。
【香芳】ハウ にほひてかんばし。又、其のもの。養生論「——腐二其骨髓一、喜怒悖二其正氣一」＝芳香。
【香被】ヒ かをりよき夜具。王初詩「湘女怨蛾愁不レ掃、鄂君——夢蘭レ窮」
【香皇】クワウ 佛寺。江總詩「息レ舟候二——一」＝香界。
【香醑】ショ かをり。徐陵文「聽二鐘磬一而致レ敬、尊二——一以生レ心」＝芬馥。
【香粉】フン にほひよきこ。齊民要術「作二——一法、唯多著二丁香於粉合中一、自然芬馥」
【香袂】ベイ かをりよきたもと。杜牧詩「獨掩二此門一明月夜、淚流二——一倚二欄干一」
【香藥】ヤク 香をすきこのむくせ。洞天清錄「朱高初、本優妙、又擅二——一」
【香片】ペン 茶葉の茉莉花を混じたるものの稱、其の芳香を賞するも、上品の茶にはあらず。
【香木】ボク にほひよき木。五代史、占城國傳「其表以二貝葉一書レ之、以二一一貝レ函」
【香夢】ム かうばしきゆめ。花下などにて見るゆめ。武元衡詩「春風一夜吹二——一、夢逐二春風一到二洛城一」
【香霧】ム かをりをふくめるきり。春時花園などにこめしきり。張泌詩「花滿二羅樓一——一翻」
【香蜜】ミツ 朱欒（ザボン）の一種。＝文旦。
【香料】レウ 香氣に同じ。＝香資。
【香篆】テン からうこ。氣一に篆に作る。李後主詩「玉筍猶殘レ藥、——已染レ塵」
【香奩體】レンタイ 美人の事を詠じたる詩の一體、唐の韓偓より始まる。奩は鏡箱。又、香箱。時人玉屑「韓偓之詩、有二綺羅脂粉之語一、在二香奩集一」
【香爐】ロ 香を焚くに用ふる具。北史、陸法和傳「手持二一一、步從二路車一至二於館一」白居易、戲二禮經老僧一「香火一爐燈一盞、白頭夜禮佛名經」
【香爐峯】ホウ 江西省九江縣の西南、廬山の北の峯。雲氣蒸しのぼりて香爐に似たるが故に名つく。白居易詩「——雪撥レ簾看」＝香山。
【香港】コウ 地名、廣東省珠江口外の一島、港灣ひく水深く、世界最良港の一たり、清の道光二十二年英國に割讓す、英政府、總督を設けて之を治め、四周皆礮臺を設く。

九畫

【馥】フク 屋
○かうばし、かんばし「芳！」「——郁」梁元帝文「桂——蘭芳」○かをる。○かをり、にほひ。
【馥郁】イク にほひの盛んなる貌。漢史、蕭后傳「生有二盛氣一、——久之」陳傳良詩「——田家楊柳發」
【馥氣】フキ よきにほひ。夏侯湛賦「飲二風衣之——一」＝香氣。
【馥馥】フクフク 香氣の盛んなる貌。晉康詩「——黛芳、順レ風而宜」＝馥郁。

十一畫

【馨】㊀ケイ・キャウ 青 ㊁ケイ・キャウ 徑
㊀かをる、かんばし、香が遠く聞える。書、酒誥「黍稷非——、明德維——」○にほひ、かをり「芬——」○德化聲聞の傳はるに喩ふ。晉書「化盛隆周、垂——千祀」㊁語勢を助けるに用ふる字。晉書、王衍傳「何物老嫗生此寧——兒」
【馨逸】イツ 香氣が常に異る。水經、注「採二艷河流一釀成二芳酎一、蘭蕙彌越、自成二一一」
【馨香】コウ よきかをり。書、君陳「至治——、感二于神明一」
【馨氣】キ にほひ。書、君陳、傳「政治

之至者、芬芳ー！、動ニ千神明ニ」＝香氣。

馬部

【馬】 バ・メ　ボ・ム　馬 通音バ・メ・マ

○うま、家畜の一「肥ー」「良ー」「老ー」「駑ー」「駿ー」「千里ー」「汗血ー」○かずとり、投壺の戯の勝算（カケカズ）「籌ー（カケカズ）」禮、投壺「爲ニ勝者ニ立ツルー」○野ー＝は春日田野に浮ぶ氣、いとゆふ。＝遊絲。○司ー＝は周代、六卿の一、軍旅の事を掌る。後世は兵部尚書を稱して大司ー＝と爲す。○ー克（ルー）は獨逸の貨幣の稱、我が國の四十八九錢に當る。圓○うま、普通の物よりは特に大いなる物の形容「ー蛭」「ー芹」○不拂ひの遊興費を取り立てる爲めに其の客につきて行くかけとり。

【馬杙】（バクヨク）　うまのむながい。後漢書、周章傳「拔ニ佩刀一絕ニ一ー一」

【馬醫】（バイ）　うまのいしゃ。列、黃帝「范氏門徒、路ニ逢ニ乞兒ー一、非ニ敢解一也」

【馬紲】（バエイ）　馬をつなぐに用ふるなは。念載語、註「轡、ー一也」

【馬縣】（バケン）　うまのむながい。唐照鄰詩「翠羽裝ニ劍鞘一、黃金鏤ニ一ー一」

【馬騘】（バサウ）　しゅくば。孫逖詩「遊ニ舟當ニ三橋一、置ニ騎爲ニ一ー一」

【馬援】（バエン）　字は文淵、後漢の茂陵の人、少くして大志あり、皆て賓客に謂つて曰く「丈夫立レ志、窮當ニ益堅一、老當ニ益壯一」と、建武中拜して伏波將軍となる、交趾を擊ち之を平げ、銅柱を立てて以て功を表す、曰く男兒、要は當に邊野に死し、馬革を以て屍を裹むべきのみと、武陵五溪蠻反す、援年八十餘自ら行かんと請ひ、鞍に據り顧眄して以て用ふべきを示す、帝笑ひて曰く、矍鑠たるかな是の翁やと、進んで壺頭に登し、病みて卒す、女は明帝の后となり、總後宮に冠たり、贈じて明德と諡す。＝馬伏波。

【馬遠】（バエン）　宋の錢塘の人、善く山水人物花鳥を畫く、光宗の時、特詔を授けらる、畫院の獨歩たり。

【馬嵬】（バカイ）　うまや。後漢書、李愛傳「埋ニ屍ー一」＝廐。

【馬鹿】（バカ）　國おろか、愚人、俚語の轉（痴漢又無賴漢の義）より出づ。一說、秦の趙高が鹿を二世に獻じて馬といひし故事に本づく。

【馬鐙】（バイ）　馬に著せるよろひ。太平御覽「ー一三百具」

【馬鞭】（バベン）　桑根の地上にあらはれたるもの。本草「桑根見ニ地上一者、名ニ一ー一、有ニ毒殺レ人」　戰場にて死するをいふ。後漢書、馬援傳「男兒要當下死ニ于邊野一、以ニ馬革一裹レ屍還葬上耳、何能臥ニ牀上一、在ニ兒女子手中一耶」

【馬肝】（バカン）　○馬の肝臟毒ありといふ。史、封禪書、文成食ニ一ー一死耳」○藥品にする石。又硯材とす。蘇軾詩「谿石琢ニ一ー一」

【馬衡】（バカウ）　○うまのくつわ。＝馬勒。○海神の名。水經、海賦「海童遊レ路、一ー當レ孫」注「海童、一ー、皆神名」

【馬韓】（バカン）　古の國名、今の朝鮮の西南部、忠清・全羅兩道の地、漢初、箕滿朝鮮を滅し、朝鮮王貸準此地に遁れ一ー王となる、後ち百濟のために併呑せらる。

【馬伎】（バギ）　うまをつかふわざ。曲馬の類。唐書、回鶻黠戛斯傳「樂有ニ笛・鼓・笙・簫・鞀・鈴一、戲有ニ角抵・師子一ー一、繩伎一」＝馬技。

【馬技】（バギ）　前條に同じ。

【馬蜣】（バキョウ）　大いなる蜣。酉陽雜俎「蜣中多ニ巨黑蜣一、好レ鬬、俗呼爲ニ一ー一」

【馬飢】（バキ）　馬の食料。國語「ー一不レ過ニ一粮芻一」

【馬廐】（バキウ）　うまや。漢書、公孫弘傳「壞以爲ニ一ー一」

【馬牛而襟裾】（バギウニシテキンキョ）　學識なき者を罵りていふ。韓愈、符讀ニ書城南一詩「人不レ通ニ古今一、ー一」

【馬季長】（バキチャウ）　馬融を見よ。

【馬羅】（バラ）　うまのはづな。楊僕斯詩「朱絲不ニ絶凡ー一、天閑十二皆龍駿」

【馬蹄】（バテイ）　詐りの謝罪をいふ。元曲、陳州糶米劇「第ニ出馬脚一來」

【馬圈】（バケン）　うまかひ。左傳「馬有レ圈、牛有レ牧」＝圈人。

【馬具】（バグ）　馬を使ふに用ふる道具、くら・あぶみ・たづななど。晉書、桓伊傳「謝安ニ輸ー一裝百具步鎧五百領一」

【馬嵬】（バカイ）　楊貴妃の殺されし地、陝西省興平縣の西二十五支那里に在り。楊太眞外傳「上幸レ蜀、貴妃從、至ニ一ー一賜レ死」

【馬前】（バゼン）　おにあざみ。

【馬蛭】（バシツ）　馬蝗に同じ。

【馬語】（バゴ）　馬の嘶き聲。蘇軾詩「老馬冀官騎且顧、前身作レ馬通ニ一ー一」＝馬聲。

【馬口鐵】（バコウテツ）　馬の稅金。漢書、孝昭紀「令ニ三郡國毋レ斂ニ今年一ー一」

【馬期】（バキ）　馬上にて用ふる長きほこ。事物紀原「梁簡文帝ー一讚序、ー一爲レ用、雖ニ非ニ遠法一、近代相傳稍以成レ義、接賓揮父子橫レ槊賦ニ詩於戰馬之間一、則ー一之事已見ニ於此一矣」

【馬棰】（バスイ）　うまやのむち。戰國策「秦攻ニ之、而埋ニ一ー之下一」

【馬矢】シ　うまのふん。矢は屎。左、文十八「殺而埋二之ーー之中一」＝馬糞。

【馬市】シ　○金帛・茶の類と蒙古地方の馬とを交易する。○圖シ馬のせり売り。

【馬史】シ　史記。司馬遷の撰びし史の義。

【馬齒】シバ　馬の歯は年齢に随ひて異る、故に自分の齢の謙称とす。漢書、趙充國傳「犬馬之齒、七十六」＝馬齢。

【馬祖】シバ　うまのしりがい。蘇軾詩「羽客知二人意一、瑤琴繫二ーー一」

【馬耳東風】バジトウフウ　物事を聞くも少しも感ぜざる義。馬の耳に念佛。李白詩「世人聞レ之皆掉レ頭、有レ如二東風射二馬耳一」

【馬車】シャ　うまにひかする車。後漢書「貴人不レ得レ乘二ーー一」

【馬社】シバ　乗馬を始めし者を祭れる社。周禮、校人「秋祭二ーー一禡レ」

【馬上相逢無二紙筆一】バジョウアイホウムシヒツ　馬の上にて出逢ひて紙筆の用意なし。岑參、逢二入レ京使一詩「故園東望路漫漫、雙袖龍鍾淚不レ乾、——、遙レ憐傳語報二平安一」

【馬上得レ之】バジョウトクシ　千戈を以て天下を取る義。史、陸賈傳「陸生時時前說誦二詩書一、高帝罵曰、迺公居二馬上一而得レ之、安事二詩書一、陸生曰、居二馬上一得レ之、寧可下以二馬上一治レ之乎」

【馬術】バジュツ　馬にのるわざ、乗馬の術。

【馬首東】シバシュトウ　馬の首を東に向けて行く。左、襄十四「樂黶曰、余馬首欲レ東」王昌齡、出塞行「秋天曠野行人絶、——來知是誰」

【馬食】シバショク　○七箸を用ひず馬の如く口を食器につけて食ふ。史、范雎傳「坐須賈於堂下、置二芻豆其前一、令二兩黥徒夾而ーー之一」○馬の如く大食する。「牛飲ーー」

【馬箠】バスイ　うまのむち。史、張耳・陳餘傳「杖ーー、下二趙數十城一」

【馬酔木】バスイボク　あしび、あせみ、山野に自生する小木、葉は常緑楕圓形にして、春、小白花開く。牛馬之を食へば中毒す。＝椅木。

【馬政】バセイ　○乘馬に關する政令（禮、月令）○馬に關する一切の法規。

【馬跡】バセキ　うまのあしあと。左、昭十二「將三皆必有二車轍ーー一焉一」＝馬迹。

【馬前】バゼン　君主又は貴人の騎馬の前。曲禮「君車將レ駕、則僕執レ策立二於ーー一」

【馬蜱】バヒ　おほぜみ。圖譜、注「蜩中最大者食ーーー一」＝蚱蟬。

【馬蹄】バテイ　うまの下ぐら。海錄碎事「蘇秦既貧、張儀來謁、坐二於ーー一而食レ之」

【馬組】バソ　天鵞絨の異稱。周禮、校人「掌三王馬之政一、春祭二ーーー一」＝房星。

【馬賊】バゾク　滿洲地方にて馬に乗り隊を成して横行する盗賊。

【馬足塵】バソクジン　馬の足にて蹴たてるちり。歌、杜詩「驅驅——」

【馬箠】バスイ　馬のむち。棰は箠。左傳、注「策ーー一」＝馬策・馬策。

【馬隊】バタイ　騎兵隊。＝馬兵。

【馬銜】バカン　馬のはらおび。銜はくみひも、さなだひも。

【馬端臨】バタンリン　字は貴與、宋の江西樂平の人、博く羣書を極む、陸を以て永事郎に補す、宋亡び鄉里に閉居教授す、遠近之を師とす、著すところ大學集傳・文獻通考等あり。

【馬場】バジョウ　○馬の牧場。北史、宇文福傳「南北千里、皆二牧地一、今之ーー是也」○圖乘馬の稽古をする所。＝馬埒バラツ

【馬通】バツウ　馬のふん。漢書、戴就傳「以ーーー薰レ之」注「本草、ーー、馬矢也」＝馬矢・馬糞。

【馬丁】バテイ　べったう。馬のくちとり、うまかた、まご。

【馬蹄】バテイ　○うまのひづめ。莊、馬蹄「ーー可三以雖二霜雪一」○ーー香は杜蘅ヒヨウの異名。爾雅「杜蘅」疏「葉似レ葵、形如ーー、故俗云ーー香」

【馬蹄銀】バテイギン　清代銀貨の一、形馬蹄に似、大小同じからず、目方により價格を定む。＝紋銀・寶銀。

【馬蛭】バシツ　大いなる一種のひる。

【馬頭】バトウ　○馬のかしら。漢書、五行志「青雨雹、大如ーーー」＝馬首。○馬の上。雍陶詩「ーー始見米囊花」

【米囊花】ベイノウカ　罌粟花ケシの○はとばは。通鑑、唐穆宗紀「衆ーー、爲二度河之勢一」＝車頭・轅頭。

【馬頭娘】バトウジョウ　蠶の神。孫顧、神女傳「婦既新レ蠶者置二女子之像一、被二蠶皮一、謂二之ーーー一」

【馬乳】バニュウ　葡萄ブドウの異名。圖經本草「潘葡子紫白二色、又有下似ーーー者上、韓愈、葡萄詩「若欲三酒盞堆ーーー、莫レ辭添レ竹引二龍鬚一」

【馬班】バハン　○司馬遷と班固と。皆漢の史家。馬は史記、班は漢書を著す。＝遷固、班馬。○馬援と班超と、皆漢代に功を異域に立てし人。

【馬尾藻】バビソウ　ほんだはら、海草の一、褐使の香便。なのりそ。

【馬脾風】バヒフウ　病名、一二歳より十歳までの小兒、多くこれを患ふ、咳出で痰壅れ呼吸苦だ苦しく、極めて急にして危し、一名、實布的里症ジフテリア。

【馬四】バシ　馬をいふ。馬、中字、六月種、ーー亡无レ告」

【馬尾蜂】バビホウ　木中に生ずる一種の蜂、雌の尻に馬尾に似たる長毛あり。

【馬舞之災】バブノサイ　火災をいふ、馬舞は舞の名。晉書、藝術傳「黃平間二衆於二門一、我昨夜夢二舍中馬舞數十人向レ馬拍レ手、此何祥也、於曰、馬者火也、舞爲二火起一、向レ馬拍レ手、故

ノ火人也、平未ノ餘燼火作」

【馬糞紙】バフン　圖英などにて造りし黃色粗惡の西洋紙の板がみ、ボール紙。

【馬兵】バヘイ　騎兵に同じ。‖馬隊。

【馬繩】バジョウ　うまをこのむくせ。晉書、杜預傳「濟有ニ一ノ嵇有ニ二ノ絕繩一」濟は王濟、嵇は和嶠。

【馬報】バホウ　うまのむち。毛詩「惜ノ則添ニ一ノ鞭、ノ岐贈ニ一ノ一」‖馬鞭・馬綱。

【馬鞭草】バベンサウ　くまつづら、野草の一、夏、淡紫色の小花を開き秋に至る。

【馬歩】バホ　馬に災害を與ふる神。周禮、校人「冬祭ニ一ノ一」

【馬陸】バリク　圖うまやに（殿）

【馬勃】バボツ　○馬屁菌バヘキンの異名。濕地に生じ、打てば灰の如き粉となりて散るもの。韓愈、進學解「牛溲ノ一、敗鼓之皮」○馬のふん。‖馬矢。

【馬面】バメン　うまづら。北史、解律光傳「光ノ一ノ鬚、神爽雄傑」

【馬援】バエン　後漢の茂陵の人、字は季長、安帝の時、校尉となる。高才博學、活遠於だ富む、世の通儒たり、其の門に儒玄あり。

【馬力】バリキ　一分間に三萬三千ポンドの重さを一フートの高さに擧げ得る力を標準としたる工率の單位。

【馬蝗】バコウ　やすで、ゑんざむし、形むかでに似たる小蟲、濕地に生じ、草根又腐敗物を食ふ。‖馬蛭・馬蝨。

【馬陵】バリョウ　春秋の衞の地、今の直隸大名縣の東南、戰國の時、魏の龐涓の敗死せし所。

【馬齒】バシ　馬齒に同じ。

【馬鈴薯】バレイショ　じゃがたらいも、もと南米の智利國に產す。

【馬蜂】バホウ　うまやのねだ。又、うまのかひをけ。史、建元以來侯者年表「寄ニ宿霍氏第舍ノ一ノ一閒ニ」

【馬鬣封】バリョウノホウ　馬の鬣の如く薄く反き形に土を高くもりし墳墓。檀弓「吾見ニ封之若ノ堂者一矣、見ニ若ノ坊者一矣、見ニ若ノ覆ニ夏屋一者上矣、見ニ若ノ斧者一矣、從ニ若ノ斧者一焉、——之謂也」

【馬蠟】バロウ　圖紙又は革を細長くあちてまとひに卷き下げるもの。

【馬路】バロ　街衢の名。左、昭二十「遇ニ公於ノ一之衢ニ」後世大街路を「ノ一ノ」といふは此に本づく「三ノ一ノ」「四ノ一ノ」

【馬頭】バトウ　圖地獄の獄卒にして馬の頭なるもの。

【馬腦】バナウ　寶石の一。宋史、渤海國傳「永徽五年、遣ノ使獻ニ琥珀ノ一ノ一」‖瑪瑙。

【馬上得之】バジョウエシ　周の武王、殷を滅して、戰に用ひたる馬を、邙山の南に放ち歸して、天下に復た兵を用ひざるを示したる故事。書、武成「既四月哉生明王來、自ノ商至ニ于豐ニ一乃偃ノ武修ノ文、——、放ニ牛于桃林之野ニ一、示ニ天下弗ニ一服」

【相ノ馬失之瘦】コウバヲアヤマツテコレヲヤセシム　馬の良否を鑑定するに往往その瘦せたるを以て、鑑則を誤るをいふ。史、滑稽傳「——、相ノ士失ニ之貧ニ」

【立馬吳山第一峯】リツバゴザンダイイチホウ　金の廢帝亮が、宋の都臨安の地圖に題せし詩の句。曰く「萬里車書合ニ混同ニ一、江南那有ニ別提封ニ一、移ノ兵百萬江潮上、——」

【馬生ノ角】バセイツノ　決して無きことの喩。史記、索隱「燕丹子曰、丹求ノ歸、秦王曰、烏頭白、——、乃許耳、丹乃仰ノ天歎、烏頭即白、馬亦生ノ角、風俗通及論衡皆有ニ此說ニ」

【秣ノ馬利ノ兵】マグサヲアタヘテヘイヲススム　馬にまくさを食はせ、刀劍をみがきて出兵の準備をなす。左、成十六「蒐ノ乘補ノ卒、——」

【飲ノ馬投ノ錢】ウマニノマセテゼニヲナゲイル　馬に水を飲ませるに、錢を水中に投じて、水の價を償ふ、廉潔の行をいふ。風俗通「飲川黃子廉、每ノ飲ノ馬、輒投ニ一錢於水ニ」

【侍ノ馬可ノ待】マツニハカルベシ　人の文を作るの速かなるをいふ。李白、上韓荊州ノ書「請試ニ萬言ノ一ノ一」

【馭】ギョ　去

圖　御に同じ

○あつかふ、馬を使ふ。○人を使ひをさむ。又、其の事。

【馳ノ馭】ハセギョ　○馬を使ふ手をゆるめる。○轉じて政治の寬に流れるに喩ふ。晉書、李特載記「習ノ一ノ一」

【馭者】ギシャ　次條に同じ。‖御者。

【馭夫】ギフ　馬をあつかふ男。周禮、夏官「一ノ一掌ノ馭ニ貳車從車使車ニ一」‖馭者。

【馭風客】ギョフウカク　仙人をいふ。盧湘文「倒騎鯨者、可ニ以遊ニ馭風之客ニ」

【馭遠】ギョエン　國境をしづめ守る。北史、隨載傳「皆於ノ一ノ一莊有ニ馭略ニ」‖治遠。

【馮】㊀ヒョウ　㊁フウ　蒸

㊀とくはす、馬の行くこと疾き貌。○しのぐ（陵）○のる（乘）○のぼる（登）○たのむ（恃）○川をかちわたりする、徒渉する。論、述而「暴ノ虎ノ一河」‖憑。○怒ることの盛んなる貌「一怒」○不滿の意。○ほこる（矜）○よる（依）もたれる（凭）「一几」○一は盛んなる貌。又、馬の疾く行く貌。又、鐙を堅むる聲。○一夷は水神の名。㊁姓。一異は後漢の光武帝の功臣、人と爲り謙退なり、

諸将功を論ずるに、異獨り大樹の下に坐す、軍中號して大樹將軍と爲す。

【馮夷】ヒョウイ　○水神。莊子―ー得ル之、以遊ニ大川ニ」蘇軾、後赤壁賦「餉ニー之幽宮ニ」＝河伯・冰夷。○天神。

【馮河】ヒョウカ　黄河をかちわたりする、舟なくして河を渡る。論、述而「暴虎ー、死而無ル悔者、吾不ル與也」

【馮虚】ヒョウキョ　おほぞらをしのぎのぼる。赤壁賦「浩浩乎如ニー冷ル風、而不ル知ニ其所ニ止」

【馮怒】ヒョウド　盛んに怒る。左、昭五「今君奮発、震電ー」

【馮馮】ヒョウヒョウ　○盛んに滿つる貌。漢書、禮樂志「桂華ー」異翼」○馬の疾く行く貌。蘇軾詩「驕馬七尺行ー」」○擁をおびる貌。詩、大雅「削屢ー」

【馮陵】ヒョウリョウ　をかしのぐ、勢を恃みて侵し迫る。左、襄二五「介ニ恃楚衆ニ、以ー我敝邑ニ」＝凌陵。

【馮諼】フウケン　戦國時代、齊の孟嘗君の食客。＝馮煖。

【馮婦】フウフ　人名。孟、盡心「晉人有ニー者ー、善搏ル虎、卒爲ニ善士ニ」

【馲】　カン　㬎

○あれうま。＝駻。○馬が奔突する。○東夷の別種。

【馬幷】　シュ　シュク　虞　屋

○左の後足の白き馬。詩、秦風「駕我騏ー」○ほだす、馬の足を繋ぐ。

【馴】　㊀ジュン・ジュン　㊁クン　問　眞

○なる(狎)鳥獣が人になれしたしむ。○なれる、熟練する「雖ー」○次第にさうなる、漸くにして至る「一致」○すなほなる馬。轉じて廣く柔順の義とす。したがふ(從)○ならす。○よし(善)㊁訓(一七八九頁三段)の古字「教ー」

同訓異字　馴・狎・褻・媟・暱の別は狎(一二六頁一段)の條を見よ。

【馴行】ジュンコウ　よきおこなひ。史、管蔡世家「皆有ニー行ー」

【馴良】ジュンリョウ　かひならーたる象。漢書、武帝紀「渙流獣ニー能百鳥ニ」後漢書、獻帝紀「獣ニー一ニ」注「ー、謂レ随ニ人意ニ也」

【馴臥】ジュンガ　なれたるけもの。後漢書、梁鴻傳「奇禽ー、飛ニ走其間ニ」

【馴狎】ジュンコウ　人になれ近づきて飛ぶ。梁書、孝行傳「雁ニ於墓ニ哀鳴過レ禮、常有ニ雙白鶴ニ、ニニ雁側ニ」

【馴制】ジュンセイ　ならして服從せしむ。唐書、虞世南傳「太原統退渾契苾沙陀三部雜ニー一ニ」

【馴擾】ジュンジョウ　柔順なり。書、泰誓「ー一而果毅」

【馴致】ジュンチ　次第にうつりかはる。易、坤卦「履レ霜堅冰、陰始凝也。ー一其道ー、至ニ堅冰ー也」

【馴雉】ナジュン　なれたるきじ。後漢書、魯恭傳「拜ニ中牟令ー、建初七年、郡國螟傷レ穀、犬牙緣レ界、不レ入ニ中牟ー、河南尹袁安聞レ之、疑ニ其不ー實、使ニ仁恕掾肥親往察ニ之ー、悉隨行ニ阡陌ー、俱在ニ桑下ー、有ニ雉過ー止ニ其傍ー、傍有ニ童兒ー、親目ニ兒何不ー捕レ之、兒言雉方將レ雛、親嘿然而起、與レ歌訣曰、所ニ以來ー者、欲レ察ニ君之政迹ー耳、今歳不レ犯レ境、此一異也、化及ニ鳥獣ー、此二異也、豎子有ニ仁心ー、此三異也、遂レ府縣以レ狀白レ安、安因上書言ニ狀、帝異レ之」

【馴駁】ジュンバク　なれたるまだらうま。司馬相如賦「駕ニー一之駟ー、乘ニ雕玉之輿ニ」

【馴伏】ジュンフク　なれしたがふ。錄異記「有ニ神獅ー」順レ意、猛虎ー一」

【馴服】ジュンフク　なれしたがふ。史、秦紀「鳥獣多ー一」

【馴養】ジュンヨウ　動物をならしやしなふ。

【馴擾】ジュンジョウ　盧思道文「有ニ雛鶯之擾レ籠者ー、野人ー一貢ニ之於余ニ」貫重詩「主人ー一情方狎」

【馴鹿】ジュンロク　となかい、鹿の一種、北方の寒地に産し、牝牡共に掌の肢をなせる枝ある角を有す。

【馱】　㊀タ・ダ　歌　㊁タイ・ダイ　哿　泰　箇

駄は俗字

○のす、おはす(負)馬が荷を負ふ。㊁馬の背に負ひたる物品。蘇軾詩「疲馬解ニ鞍ー」○名詞に冠して粗く劣りたる意をあらはす「ー菓子」○馬の負ひたる荷物を數ふる數詞「炭一ー」○はきもの「下ー」「足ー」

【馳】　チ　支

○はす、はしる(奔)かける。○かる、疾く車馬を驅る(疾驅)「驅ー」「奔ー」詩、鄘風「載ー載驅」はしらす。○遂ふ「ー逐」○心を其の方に向け往かしむ「神ー」○しく(布)つたはる(傳播)孟郊詩「英名日四ー」○ゆく(逝)去りて留まらず。三國志「年與時ー」やる(行)○きそふ(競)

【駟馬】シバ　四ひきの馬。○駟は、一車に駕する馬の数。

【駟】シ　四ひきの馬。

【駢】ヘン　二ひきの馬が並ぶ。

【駢闐】ヘンテン　車馬が多く並んで、道をふさぐ。

【駢肩】ヘンケン　肩を並べる。

【駢拇】ヘンボ　足の親指が、二本並んでいる。

【駢枝】ヘンシ　二本並んだ枝。

【駢指】ヘンシ　二本並んだ指。

【駢死】ヘンシ　多くの人が、一緒に死ぬ。

【駢首】ヘンシュ　多くの人が、首を並べる。

【駢脅】ヘンキョウ　あばらぼねが、一つになっている。

【駢胸】ヘンキョウ　胸が、一つになっている。

【駢生】ヘンセイ　二つ並んで生える。

【駢足】ヘンソク　二本並んだ足。

【駢拇枝指】ヘンボシシ　足の親指が二本並んでいたり、手の指が六本あったりする。

【駢列】ヘンレツ　並ぶ。

【駢羅】ヘンラ　

【駁】ヘク　圏 駁に同じ

○まだら、ぶち、馬の毛色純ならず。○ぶち馬。○まじる(雑)たがふ、みだる(雑乱)にごる。○ただす(正)否認する、人の説などを非難攻撃する「辯ー」「難ー」「一議」○圏 貨物を轉載する義とす「ー船」「ー岸」

【駁羽】バクハ　まだらいろのはね。擊虞、鸚鵡賦「斑毛頼膺、ーー朱掖」

【駁議】バクギ　他人の議論を駁難して正す。駁論に同じ。後漢書、應劭傳「劭又集ーー三十篇」以レ類相從、凡八十二事」獨斷「凡羣臣上書於天子者有二四名一一曰章、二曰奏、三曰表、四曰ーー」ー駁議。

【駁撃】バクゲキ　人の言論を非難攻撃する。

【駁雑】バクザツ　いりまじる、純粋ならず。石介詩「詞レ之體ーー、亦文中駁雑」ー雑駁、紛錯。

【駁辟】バクヘキ　純正ならざることば。史通「竹簡書多ーー、宜孔子所レ不レ取」

【駁正】バクセイ　是非を判別して誤をただす。後漢書、延篤傳「論二解經傳一多レ所ニーー一、後儒服度邨、以爲二折衷一」ー駁正。

【駁論】バクロン　他人の意見議論を非難攻撃する。又、其の議論。晉書、杜預傳「博聞廣渉、奏議ーー、多見二施用一」ー駁議。

【駅】　題(馬部十六畫)の俗字。

五畫

【駕】カ　圏 通 ガ

○のりもの(車馬)「柱ー」「大ー」「車ー」「鍋ー」○のす。のる(乗)騎する「ー鍋」○くはふ。くははる(加)○あぐ。あがる(膝)「ー說」○つかふ、あつかふ。○馬を車につけて走らせる用意をする。論、鄭篇「不俟レ駕行矣」○のりこす、其の上に出る。しのぐ(陵)「陵ー」左、昭元「詐晉而ー焉」○馬が車轅の中にある。○車轅につけたる馬。

【解】馬を以て車に加ふるなり、故に加に从ひ馬に从ふ。

【駕レ駕】ガガ　馬車の馬を解きて休息する、我は殷に過ず。人の落ち附く處を得る義。史、李斯傳「物極則衰、吾未レ知レ所ーレー也」

【駕馭】ガギョ　駕御に同じ。馭は御に通ず。杜甫詩「君王自神武、ーー必英雄」(車馬を臣下に喩へ、御者を天子に喩ふ)

【駕御】ガギョ　馬をつかひならす。轉じて人をあつかひ使ふ義とす。吳志、張昭傳「爲二人君一者、ーニー英雄一、驅二使羣賢一」ー駕馭。

【駕輕就熟】ジュクジュク　其の事に習熟する義。韓愈文「若下駑馬駕二輕車一、就二熟路一、而王良造父爲中之先後上也」とあるに本づく。

【駕跨】コカ　うまにのる。范凌詩「ーニー八駿一驅二東四一」

【駕士】ガシ　天子の御車を引く士。宋史、輿服志「ーー衣服」

【駕說】ガセツ　自分の説を盛んにのべたてる。駕は騰ゲ揚子法言「仲尼ーー者也」

【駕肥】ガヒ　ふとりたる馬に乗る。李嶠、幽懐賦「因二盤食一而飄飲兮、寧服レ輕而ーレー」駕二肥馬一の略。

【駕浪】ガロウ　舟にてなみの上をこぎ行く。元稹詩「ーレー沈レ四日、吞レ空接レ曙河」

【駕六】ガロク　天子の車、天子は六頭立の馬車に乗るが故。晉書、輿服志「天子所レ駕則ーー、其餘竝駕四」

【駐】チュ　圏

ーー騅は騅馬に似たる小さき馬。唐書、李賀傳「從小奚奴騎ーー騅」

【駒】ク　國 通

【駈】　題(馬部十一畫)に同じ。

【駉】ケイ　青

馬のたくましく腹の張る貌。

【駉駉】ケイケイ　馬の肥えて壯盛なる貌。詩、魯頌「ーー牡馬、在二坰之野一」

○こま、馬の少壯なる者。又、二歳の馬。五尺以上は一、六尺以上は馬。○驪ーは送別の時歌ふ歌曲(漢書、儒林傳)○玄ーは蠅の異名。圖○こま、馬の總稱。○種種なる小形のものの稱に用ふ「將棋のー」「三味線のー」

【駒影】コエイ　日影。貫休詩「痕窗ーー催」

白駒過レ隙(二九七頁二段)を見よ。‖駒光。

【駒光】クコウ　光陰をいふ。白駒過レ隙(二九七頁二段)を見よ。

【駒隙】クゲキ　光陰の過ぎ易く、人生のはかなき義。王褒詩「ーー漫拘攣」白駒過レ隙(二九七頁二段)を見よ。

【駒齒】クシ　○小兒の齒の未だぬけかはらざるもの。○轉じて幼年者を指す。北齊書、楊愔傳「此見ーー未レ識、已是我家龍文、更十歳、當レ求二之千里外一」(稱愔をいふ)

【駒馬】バこまと、うまと。馬は六尺以上のもの。韓非子「水擊二鵠雁一、陸斬二ーー一」

【駉那】ケイ　詩の魯頌の駉の詩と、商頌の那の詩と。文心雕龍「或揚三清駉、或絶二一一一」

【駔】㊀サウ　㊁ソ　養　虞

㊀壯馬。駿馬。○あらし(荒)。「一工」○馬駿なり。○すあひ、わらがしこき仲買人(牙儈)呂覧、尊師「段干木、晉國之大一也」㊁くみひも。‖組。

【駔儈】サウクワイ　仲買人。史、貨殖傳「一一會二兩家交易一者、如二今之度市一也」‖牙儈・牙子・牙人・牙郎・互郎。

【駔工】サウコウ　劣工といふに同じ。王充論衡、此則一一庸師、何奇而世稱レ之」

【駔駿】シユンシユン　さかんに勢よき駿馬の左思、魏都賦「我馬埴レ廄一一」

【駟】シ　寘

○一車に四頭つけたる馬。古の馬車は多く四頭立とす。外側の左右を驂又、騑といひ、中の左右を服といふ。兩服兩驂故に一といふ。論、季氏「齊景公有馬千一」○四頭立の馬にてひく疾く走る車。論、顔淵「一不レ及レ舌」○天一は星の名。‖房星。

【結レ駟連レ騎】ケツシレンキ　行列の盛んなる貌。騎は騎馬。史、仲尼弟子傳「蓋在二草澤中一子貢相レ衛、而一一、排二擊者一入二窮閭一過二謝二原憲一」

【駟介】シカイ　一乘四馬にして甲を被る士三人をいふ。左傳「獻捷俘於王一一一百乘」

【駟過隙】シクワゲキ　駟馬即ち四頭立の馬車にて疾く、日隙を過ぐる。時の經過の甚だ速かなるに喩ふ。前漢鄒陽傳。

【若二駟之過一隙】コトシシクワゲキ　歳月の速かに過ぐるに喩ふ。前漢鄒陽傳。

【駟馬】シバ　一乘の車につくる四頭の馬。又、其の車。漢書、于定國傳「少高二大門一、令レ容二一一高蓋車一、我治レ獄多二陰徳一、未レ嘗有二所レ冤、子孫必有二興者一」ここの故事に本づきて、人の後嗣の昌大なる者を祝して一一門といふ。

【駟不レ及レ舌】シフキフゼツ　一旦口外せし言は四頭立の馬車にて疾く追ひても、とりかへし出來ず。言の謹むべきをいふ。論、顔淵「惜乎、夫子之說二君子一也、一一」說苑「口者關也、舌者機也、出レ舌不レ當、駟馬不レ能レ追也」

【駛】シ　寘　紙

○馬がはやくはしる(馬行疾)○轉じてすべて物の疾く行くにいふ。蘇軾詩「君帆一何一」○とし、はやし(疾)「湍一」「迅一」「奔一」

【駛用】シヨウ　ゆふだち。急雨に同じ。北史、雲泰傳「電光等目、一一霑灑」元好問、喜雨詩「今日復何日、一一東南來」

【駛河】シカ　はやく流れる河。法苑珠林「天地始終、謂二之一劫一劫盡壞時、火災時レ起、四大一一、皆悉枯竭」‖急流。

【駛急】シキフ　はやし、すみやか。‖急駛・迅急。

【駛走】シソウ　はやくはしる。‖疾走。

【駛足】シソク　はやあし。唐書、劉晏傳「諸道巡院皆募二一一置驛相望、四方貨殖低仰及官利害、雖二甚遠一不二數日一卽知」‖疾足・逸足。

【駝】タ　歌

○駱一ラクは獣の名、駱(馬部六畫)を見よ。‖橐駝。○一馬バは大鳥の名。○のす、おはす。○せむし、くぐせ(佝僂)其の背隆起して駱一に似たる故。

【駝鳥】ダテウ　駝鳥の異名。稽遠考「海外竹步國出二一一、有二六七尺高者一」

【駝島】ダタウ　熱地に産する大鳥の名。後漢書、和帝紀「安息國、遣レ使獻二大爵一」注「大爵、頸及身皆肥、都似二駝鳥一、舉レ頭高八九尺、張レ翅丈餘、食二大麥一、其卵如レ甕、卽今之一一也」‖鴕鳥。

【駝峯炙】ダホウシヤ　駱駝の背上の隆起せる所の肉のあぶりもの、極めて美味とす。鄴字鈔「將軍曲良翰、爲二一一一一」杜甫詩「紫駝之峯出二翠釜一」

【駝鵝】ダガ　らくだと、らばと。魏書、于闐國傳「出多二美玉一有二好馬一一一」

【駘】タイ　灰　賄

○にぶき馬。又、にぶき者「駑一」○にぶし(駑下)○むなし、ひろし、のびやか、春ののどかなる貌「一蕩」○ぬぐ、はづれる(脫)馬がくつわをはづす。崔寔文「馬一其銜」○衰一は醜き貌(莊、徳充符)

【駘蕩】タイタウ　○廣く大いなる貌。曠なく廣也‖貌。莊、天下「惟平曠蕩之才、一一而不レ得、逐二萬物一而不レ反」○春景ののどかなる貌。謝朓詩「朋情以叡陶、春物方一一」正字通「春色舒放曰一一」

【駐】チユ　遇

○とどむ。梁簡文帝詩「空一使君車」○とどまる、たちとどまる。車馬が止まる。○一定の

地に留まり居る。「―在」「―紮」同訓異義 ヌカヅク・止・留・停・過・逗・稽の別は止（一〇〇七頁一段）の條を見よ。

【駐駕】チュウガ みくるまをとどむ。後漢書、霊帝紀「光和三年二月、公府―之廬自壞」‖駐蹕。

【駐蓋】チュウガイ くるまをとどめる。蓋は車蓋。白易居詩「門閭堪――。堂室可―舖」

【駐顔】チュウガン 顔色を調めて老いざらしむ。李白詩「又無―大薬駐―朱顔」

【駐在】チュウザイ ○一定の所に留まり居る「――所」○駐紮に同じ。

【駐紮】チュウサツ 官吏が其の任地に留まり居る。‖駐劄・駐在。

【駐劄】チュウサツ 前條に同じ。劄は紮。

【駐車】チュウシャ くるまをとどめる。劉逸詩「―レ―憑二険岸一」

【駐旌】チュウセイ はたをとどめる。呉志、臨蹇傳「少レ駐―レ―、観二望麾蓋一」

【駐屯】チュウトン 軍隊が一所に留まりたむろする。也は駐。「―一軍」‖留屯。

【駐馬】チュウバ うまをとどめる。遡異記「今烏江長亭亭下、有二一塘一云二項羽―処一」

【駐泊】チュウハク 船をとどめる。志怪錄「偶―二一門首一」‖停泊。

【駐蹕】チュウヒツ 天子の御車をとどめる。左思賦「弾レ箭頓レ轡、齊レ鑣―レ―」

【駐蹕山】チュウヒツザン 奉天遼陽縣の西南十五支那里に在り、一名は首山。酉唐書、太宗紀、貞観十九年六月、高麗別將高延壽等、以二其衆一降、因名二所レ幸山一為―――「刻レ石紀レ功焉」

【駐歩】チュウホ たちとまる。晉四曲歌「逢レ人レ―看、揚レ摩皆言好」

【駐留】チュウリュウ とどまる。方干詩「日月空夜轉、年光難二―一」

【駐輦】チュウレン 天子の御車をとどめる。唐太宗詩「崇文聊―レ―」‖駐蹕。

【駑】ド 魚

○にぶき馬、最下の馬。○轉じて人の才能の鈍づく劣れるにいふ「―鈍」「愚―」史、藺相如傳「相如雖―、獨畏二廉將軍一哉」

【駑駘】ドタイ にぶくしてくらし。荀勗文「非二臣一―所下宜二参籍一」

【駑鈍】ドドン 駑馬と、鈍刀と。よりて才能の庸劣に喩ふ。張九齢詩「―――難二自勉一、倉廩素非レ實」

【駑下】ドカ 才能ににぶくして劣る。又、己を卑下していふ。戦國燕策「臣―――恐不レ足二任使一」‖駑劣。

【駑劣】ドレツ 駑駘に同じ。孔叢子「―――同レ轍、伯樂為レ之者嗟」

【駑頑】ドガン おろかにしてかたくな。蘇軾詩「奇変逓相寄二―――一」

【駑怯】ドキョウ おとりてよわし。漢書、蘇武傳「陵雖二―――一云云」蜀志「―――偷レ生、自寘二蠻貊一」‖庸怯。

【駑犬】ドケン にぶきいぬ。史、春申君傳「此猶三兩虎相與鬪、而―――受二其弊一」

【駑選】ドセン 鈍くしておそし、愚にあしなへ（疲）漢書、鼂錯傳「―――之乘、不レ騁二千里之塗一」

【駑材】ドザイ 駑馬と散材と。凡庸の質に喩ふ。荀子「庸衆―――、則劫レ之以二師友一」（劫は奪ひ去る、師友を以て其の悪性を去る義）

【駑弱】ドジャク 才劣りて力よわし。傅咸文「臣既―――、不レ勝二重任一」

【駑駿】ドシュン あゆみのおそき馬と、はやき馬と。以て賢人と愚人とに喩ふ。東方朔文「―――雑而不レ分矣」‖駑良・駑驥。

【駑駘】ドタイ ○にぶく劣れる馬。駑鈍同能。莊辭「乗二―――一而驅驅」○轉じて才能の劣れる義とす。

【駑鈍】ドドン おろかにしてにぶし。諸葛亮、出師表「庶竭二―――一、攘二除姦凶一」

【駑馬】ドバ にぶきうま。戦國策「識二職之衰也、―――先レ之」‖駑駘。

【駑馬戀二棧豆一】ドバレンサントウ 凡庸なる人の祿位を戀ふに喩ふ。魏志、曹爽傳、注「蔣濟書桓範智矣、――、爽必不レ能レ用也」

【駑馬十駕】ドバジュウガ 才なき者も、勉めて怠らざれば、才ある者に及ぶ喩。荀、勧學「騏一日而千里、――則亦及レ之矣」

【駑良】ドリョウ 足ののろき馬と、はやき馬と。‖駑劣。

【駑劣】ドレツ 才能にぶくおとる。又、其の者。後漢書、段熲傳「臣庶錫二―――一、伏待二節度一」‖駑鈍・愚劣。

【駙】フ 遇

○そへうま（副馬）副車の馬。○はやし（疾）駕を並べて齊しく驅る。○ちかづく（近）

【駙馬】フバ 官名。―――都尉の略。天子の副車の馬を掌る。漢の武帝置く、魏晉以後、公主（天子の女）の夫たる者は必ずこの官に拜す。よりて天子又、王の女壻の稱に用ふ。白居易

【駞】ヒ 支

○走る貌。○馬の毛の黄白雑りしもの。白鹿毛カゲ‖桃花馬。

【駞駞】ヒヒ 走る貌。宋玉、招魂「逐二人一―――一些」（些は助辭）

【駜】ヒツ 質 質

馬の肥えて壯んなる貌。詩、魯頌「有レ―有レ―、―彼乗黄」

【駝】ハ 哿

―職ハは馬の頭をうごかす貌。杜甫詩「―職揚施旌」又、高大なる貌。揚雄、甘泉賦「崇二丘陵之―職一」

詩「威里皆爲二賢一ーこ

【駰】イン 眞

六畫

淺黒の毛に白毛の雜れる馬。泥華毛アシゲ。‖泥驄馬。

【駭】カイ 駴 通音ガイ

○おどろく。馬がおどろく。又ひろく驚き起つ「驚ー」「震ー」「惶ー」さわぐ（擾）○おどろかす。呂覽「鳴將ー」人」○ちらす。ちる（散）○ーは鼓の聲。

【駭愕】ガイ おどろく。宿史、宋景陵王謀傳「宮中夜開坐、有二赤光一照レ室、見者莫レ不ニーーこ‖驚愕・驚駭・惶駭。

【駭汗】カイ おどろきてひやあせが出る。韓愈詩「ーー如レ寫」

【駭遽】ガイキョ おどろきてあわてる。驚駭急遽。‖遑遽。

【駭懼】ガイ おどろきおそれる。劉琨表「城府ーー、志在二自守一」‖惶駭・懼駭・驚懼。

【駭惶】ガイクワイ おどろきおそれる。馬融、廣成賦「橫行陣亂兮、敵心ーー」‖惶駭・惧駭・怖駭。

【駭耳】ガイ みみをおどろかす。後漢書、虞傳傳「遠蠶起レ懷、雷霆ーレレ」‖驚耳。

【駭視】ガイ おどろきみる。楊修文「觀者ーー而拭レ目」

【駭神】ガイシン 心をおどろかす。琴賦「煉二飛猛一而ーレレ」

【駭援】ガイエン おどろきさわぐ。‖驚援。

【駭歎】ガイタン おどろきなげく。唐書、孫逖傳「理越不レ凡、日用ーー」‖驚歎。

【駭突】ガイトツ おどろき奔りてつきかかる。驚駭して奔突する。謝朓文「歡窮ーー」

【駭逝】ガイセイ おどろきてにげる。宋史、王德傳「大呼曰、王師大至矣、賊ーー」‖駭奔・驚逝。

【駭飄】ガイヘウ はげしきつむじかぜ。上林賦「凌二驚風一歷ニーーこ」

【駭浪】ガイラウ わきたつ大なみ。謝靈運賦「湯湯驚波、滔滔ーー」

【駭懾】ガイセフ おどろきおそれる。唐書、李宗閔傳「時訓注欲レ以レ撫市二天下一、凡不レ附レ己者逐去、人人ーー」‖驚慴。

【駭悔】ガイクワイ おどろきなげく。宋書、顧琛傳「莫レ不ニーーこ」唐書、劉晏傳「先レ誅後レ詔、天下ーー」‖驚悔。

【駪】シン 眞

駸ーシンは周の穆王の馬の名。

【駪】シン 眞 又、侁に作る

○ーレンは馬の衆き貌。杜甫詩「萬馬齊ーー」○物のおほき貌。詩、小雅「ーー征夫」

【駰】駰（一五一五頁三段）の本字。

【駮】ハク 覺

○猛獸の名、形馬に似て、虎豹を食ふといふ。○馬の毛の青白雜色のもの、まだら馬。○まゆみ、樹皮青白色。○馬に似たるが故。詩、秦風「駟有二六ー」○人の說を非難攻撃する。‖駁。

【駮議】ハクギ 他人の議論などを非難攻撃する。駁議を見よ。‖駁解・駁論。

【駮牛】ハクギウ まだらうし。易林「舍レ車而徒、亡二其ーー」

【駮雜】ハクザフ いりまじりて純一ならず。石介詩「詔レ之變ニーー、赤文中騏驎」‖雜駁・錯雜。（駮一に駁に作る）

【駮犖】ハクラク まじる。梅堯臣詩「俚歌縱喧譁、怪說多ニーーこ」

【駮正】ハクセイ 非難してただす。後漢書、延篤傳「論二解經傳一、多レ所ニーーこ」

駮一に駁に作る。

【駮犖】ハクラク まだらのらば。洞冥記「天曆四年、修彌國獻ニーー、高十尺、毛色赤斑、皆有二日月之象一」

【駢】

駢（馬部八畫）の俗字。

【駱】ラク 藥

○黒き鬣ある白馬。○ーは駝ダに似て熱地に產する高さ八九尺ある大獸、性溫順にして力強く、能く重を負ひ遠きに行く、其の背に一個或は二個の肉塊の隆起するあり、之を駝峯といふ、又胃の側に多くの小袋ありて飲料を貯ふ、故に數日間渴に耐へて沙漠内を通過するを得。○ーー越は古の百越の一種（漢書）○絡（一四七三頁四段）に通ず「ーー驛」

【駱驛】ラクエキ 往來の絶えざる貌。漢書、王莽傳「ーーニーー道路」‖絡繹。

【駱丞】ラクジョウ 唐の駱賓王、臨海の丞に官す、世にーーと稱す「ーー集」

【駱馬】バク 黒き鬣ある白馬。詩、小雅「皎皎ーーこ」

【駱賓王】ラクヒンワウ 唐の婺州義烏の人、七歲能く詩を賦し、文章に工なり、王勃・楊炯・盧照隣と文章を以て名を齊しうす、海内これを四傑と稱す、武后の時、臨海の丞となる、徐敬業の兵を起すや、爲めに檄を天下に傳へ、武后の罪を暴斥す、后之を讀みて嬉笑するのみなりしが「一杯之土未レ乾、六尺之孤安在」の句に至り愀然として曰はく、誰かこの檄を作れると、或人賓王を以て對

ふ、后曰はく宰相安んぞ此の人を失ふを得んと、敎業敗れ、賓王亡命して之く所ろを知らず、著すところ駱丞集一卷あり。

七畫

【騋】 ガ 御 歌

駿一ガは高大なる貌。又、馬の頭を掻かす貌。

【騭】 カイ 賄

○うつ、鼓をどろどろと撃つ。○おどろく。おどろかす。‖駭。○百姓の視聽をおどろかして改めしめる。駭に通ず。莊、外物「聖人之所以駭天下」

【駁】 ㊀ガイ ㊁ジ 紙 麥

㊀おろか(愚・癡)「愚一」「癡一」漢書、息夫躬傳「内實一、不曉政事」○馬が勇ましく行く。㊁駁一は、獸の行く貌。張衡、西京賦「衆鳥翩翩、羣獸駁一」【駁蔡】ガイおろか。胡天游詩「陋儒刑レ恨駁且悪」【駁女】ガイおろかなる女子。白居易詩「痴男一一喚二駁雛一」

【駜】 カン 翰

○あらうま、はねうま。奔突する馬。○高さ六尺の馬。**別義**悍惡の馬、故に悍の省畫に从ふ。

【駜突】カン 梁馴ならざる馬、あらうま。漢書、刑法志「今漢承二衰周暴秦極敝之流一、俗已薄二于三代一、而行二亡國弊之刑一、是猶三以レ馴而御二駜突一、遲二救レ時之宜一矣」【駜馬】カンあらうま。韓非、五蠹「如欲下以二寛政一治中急世上之民一、猶中無二轡策一御上駜馬一也、此不智之患也」

【駧】 クン 先 銑

青黑色の馬(青驪)詩、魯頌「駉彼乘一一‖鐵駧。

【駿】 シン 震 軫

○はしる、馬の行く貌。○物事の疾く進む貌。【駿發】シンフツ馬の疾く行く貌。詩、小雅「駕二彼四駱一載駿一一」「嵯高維嶽、一極于天」○大いなり。詩、周頌「一惠二我文王」○すぐれる。すぐれたる者。史、屈原傳「詩一疑傑」‖俊。【駿逸】シュンイツ○すぐれて疾し。又、勢がはげしくさかんなり。南史、侯景傳「侯景所レ乘白馬、毎レ戰將レ勝、輒踶齧嘶鳴、意氣一一」○轉じて人才のすぐれたるにいふ。‖俊逸。【駿傑】シュンすぐれてよきうま。齊書、王融傳「率四實北、實多二一一」‖良傑。【駿惠】シュンおほいなるめぐみ。字解參看。陸雲賦「一一南施、景福雲行」‖大惠。【駿犬】シュンすばやきいぬ。博物志「宋有二一一一日レ韝」【駿骨】シュンコツ駿馬のほね。長安客話「昭王時、燕人郭隗謂レ王、昔有下以二千金一買上二一一者上、期年而千里馬至者三」【駿壯】シュンすぐれてさかんなり。杜牧詩「武事何一一、文理何優柔」【駿爽】シュンはげしくさわやか。文心雕龍、「結言端直、則文骨成焉、意氣一一則文風清焉」【駿足】シュン 駿馬の南史、鄱陽之傳「嘗葉公好レ龍而眞龍見、燕昭市二骨而一一至、明公以二肝食一待レ士、豈患二海内無一人、次條參看。【駿足思二長阪一】シュンソクオモフチヤウハン 駿異の士が大難に遭ひて其の才を實地に試みんと欲するに喩ふ。陸厥詩「一一、梁車長二危轍一」【駿馬】シュン すぐれてよきうま。戰國策「一一盈二外廐一、美女充二後庭一」‖駿足。【食二駿馬之肉一】シュンバノニク 秦の穆公(穆・繆通ず)の駿馬を野人が殺して食ひしに、公之を罰せずして酒を飲ましめたれば、野人其の惠に感じ、晉との戰に野人の力を得て大勝せし故事。呂覽、愛士「昔者繆公右服失、繆公自往求レ之、見二野人方將レ食二之於岐山之陽一、繆公笑曰、——、而不レ飲レ酒、余恐二其傷一レ汝也、於レ是徧飲而去、處一年爲二韓原之戰一、野人三百有餘人、畢レ力疾鬪、遂大克レ晉、及擒二惠公一以歸」【駿厲】シュンレイ 大いに厚し。詩、商頌「受二小共大共一爲二下國一一」【駿敏】シュンすぐれてさとし。陸機賦「伊玆羽之一一、似二商賓之啓卵一」【駿奔】シュンすみやかにはしる。字解參看。楊烱賦「奔父棄レ策、無二以方二其一一」【駿良】シュンすぐれてよし。歐陽修撰、賜二文彦博一詔「乃因二祭廟之均恩一、首効二一一一而來獻」

【駢】 セイ 庚

○赤黄色の馬。○犧牲(イケニヘ)の毛色赤し、○赤色の牲。論、雍也「―有角」○―は弓の工合よく調和せる貌。詩、小雅「―角弓」

【騂剛】(セイ)　四頭立の赤馬。易林「―奔走」

【騂牲】(セイ)　赤き毛色のいけにへ。周禮「凡陽記、用二―一毛一之」

【騂犢】(セイトク)　赤きこうし。周禮「祭レ地也用二―一」

【騂馬】(セイ)　赤黄色の馬。漢書、匈奴傳「冒頓隨二高帝于白登一、西方盡白馬、東方盡青騧馬、北方盡烏騅馬、南方盡―一」

【騂牡】(セイボ)　赤き毛色のをうし。詩經「祭以二清酒一、從以二―一」

【騂騂】(セイ)　あか馬と、くろ馬と。易林「―一同レ力、無レ有二虧離一」

【騂剛】(セイリウ)　あかくりげ。晉書、王接傳「夫―不レ總レ轡、則非二造父之肆一、明月不レ流レ光、則非二隋侯之掌一」

【駾】タイ　泰

○たけりつく、驚きて奔突する。詩、大雅「混夷―矣」○馬の行く貌。

【駧】ティ　銑

○はす(走)直馳(マハスル)する「馳―」○ほしいままにする、すべて奔放の義とす。孔融文「飛辯―」辭」○のべる、十分に發展する「―能」

同訓異字　→騎・馳・驚・驅の別は馳(馬部三畫)の條を見よ。

【騁懷】(テイクワイ)　心に思ふ所ろを開き暢べる。王羲之、蘭亭集序「所二以遊レ目―レ、足二以極一視聽之娯一、信可レ樂也」

【騁觀】(テイクワン)　あちこちと目をはせのぞむ。邊讓、章華賦「遠目廣望、―紛日」

【騁志】(テイ)　こころざしをのばす。曹植文「歌以詠レ言、文以―レ」

【騁神】(テイ)　心をほしいままにはす。琴賦「華藻鴻レ法、般倕―レ」

【騁足】(テイソク)　力を盡くして馳せる。晉書、蔣洪傳自序「―レ則能追レ風蹶レ景」

【騁能】(テイノウ)　才能を展べ布く。晉書、阮裕傳「豈以―レ、私計故耳」

【騁望】(テイバウ)　ほしいままになかめる。李白詩「銘二功會稽嶺一、―二鄒魯一」

【騁轡】(テイ)　馬をはす。轡はたづな。曹植詩「翻翔九天上、―遨行遊」

【騁歩】(テイ)　はしりゆく。蔡邕文「禮遊迅以―一」

【騁謀】(テイ)　ほしいままにはかりごとをめぐらす。陸賈文「智者―レ、勇者奮レ力」

【騁遇】(テイ)　はせゆく。遇は行。晉書、庾峻傳「方レ軌齊進、水陸―一」

【騁目】(テイ)　目をほしいままにして見る。沈約賦「臨二巽維一而―レ一」‖縱目。

【騅】ト　虞

○黒白のまだらうま。○青色の馬。漢書、匈奴傳「匈奴騎、其西方盡白、東方盡―一」○ひたひじろ。○雜色の牲(イケニヘ)。周禮、秋官、犬人「用―可也」○舟―は西南地方の蠻族の名。今の四川省茂縣の地。

【駑】パウ　江

○くりげうま。黒色のたてがみある赤馬。詩、秦風「騏―是中」‖騋。○華―(クワ)は古の名馬。漢書、地理志「華―綠耳之乘」注「華―言其色如二華之赤一」

【駓】リウ　尤　又、驪・騮に通ず

○黒き鬣ある赤きこうま。史記「作二四時一、祠二白帝一、其牲、用二―黄牛羝羊各一一」

八畫

【騎】(一)キ　支　(二)キ　寘

㊀のる、またがる(跨)馬に跨る。○轉じて廣くまたがる義とす「―鶴」㊁馬に乗りし兵士「一兵」「一卒」「單―」「胡―」「輕―」「遲―」○のりうま(乘馬)○騎兵又、其の馬の數にいふ「萬―」「三千―」

【騎鶴】(キカク)　つるにまたがる。鶴(鳥部十畫)の條を見よ。

【騎馭】(キギョ)　馬をあつかふ。南史、侯安都傳「招二豪文武士一、―馳騁、或命以二詩筆一、第二其高下一、以差次二賞二賜之一」

【騎鯨客】(キゲイカク)　唐の李白自ら著して海上――といふ。張裕浩詩「詩情滄海――」

【騎月雨】(キゲツウ)　つきごしのあめ。隨游詩「炎氣收圍――」註「俗謂二二十四五日間一有レ雨、往往輒成二霖潦一、謂二之――一」

【騎箕】(キキ)　戰陣にて用ふるつづみの一種。說文「鼙、―也」

【騎虎之勢】(キコノイキホヒ)　虎に乗りて走り中途にて下る能はざる勢。事物の中止すべからざるに喩ふ。隋書、獨孤皇后傳「后使二人謂二高祖一曰、大事已然、――、必不レ得レ下、勉レ之」

【騎士】(キシ)　馬に乗れる兵士。漢書、百官公卿表「屯―校尉掌二―一」‖馬

兵・馬隊。

【騎射】キシャ　○馬に乘ると、弓をいるとの術。漢書、侯幸傳「善ニ――一」○ナキ　馬に乘り、又弓を射る。

【騎將】キショウ　きへいの大將。五代史、盧文進傳「文進范陽人也、爲ニ劉守光一―一」王維、燕支行「羽林相逢ニ――一、朝廷不レ數武師功」

【騎牆】キショウ　○かきの上にのる。廣古今五行記「阿惹師騎ニ一破牆上一坐、以レ杖擊レ牆、口唱ニ吐吐一所レ騎之牆、忽然昇上、舉レ手謝ニ鄉里一曰好在、百姓見者無レ不ニ驚拜一、須臾映レ雲而滅」○圖兩者の間にあるかきに跨がれば左すべく、又右すべし。意見の定まらざるに喩ふ。日兩可。

【騎從】キジュウ　○馬に乘りて從ひゆく。晉書、王導傳「導及諸名勝皆ニ――一」○騎馬の侍從。舊唐書、明皇紀「敢追ニ吾ニ――一」

【騎吹】キスイ　鏡歌（三〇六頁一段）に同じ。

【騎卒】キソツ　騎兵に同じ。漢書、文帝紀「車千乘、――十萬人、上親勞レ軍、勃レ兵申ニ教令一」

【騎隊】キタイ　きへいのくみ。晉書、輿服志「――五在レ左、五在レ右、各五十匹」＝馬隊。

【騎遞】キテイ　宿ノ次ツぎ。又其の馬（傳馬）

淡賓、李陵傳「抵ニ受降城一休レ士、四ニ――一以聞」＝馬驛。

【騎馬】キバ　馬にのる。＝乘馬。

【騎兵】キヘイ　馬に乘る兵士。漢書、趙充國傳「組ニ――一習ニ弓矢一」＝騎卒。

【騎縫】キホウ　二枚の紙の中縫即ち合せ目に跨る處、重要の書類など、其の紛失又は作僞を妨ぐために割印を其の處に捺すを――印といふ。其の割、北魏明帝の時に始まる「北史」

【騎馬】キバ　うさぎ馬に乘る。黃庭堅詩「――レ――覓レ驢但可レ笑、以レ馬喰レ馬亦成レ癡」騎レ驢覓レ驢は其の本を有るを忘れて他に求むるに喩ふ。

【騏】キ　支

○青黑色の馬。詩、秦風「駕ニ我一騏ニ」○轉じて青黑色。○すぐれたる馬（駿馬）○白騏ハクキは白鯉。古今注「兗州人呼ニ白鯉一爲ニ白――一」

【騏驥】キキ　すぐれてよき馬。荀、勸學「――一躍不レ能ニ十步一、駑馬十駕、功在レ不レ舍」戰國策「――盛壯之時、一日而馳ニ千里一」

【騏驥一日千里】キキイチジツセンリ　駿馬は一日に千里を行く。荀、勸學「騏一日而千里、駑馬十駕、則亦及レ之矣」（愚者も勉めて倦まざるときは、賢者と同じく功を成すに喩ふ）

【騏驎】キリン　○駿馬をいふ、次條を見よ。○麒麟に通ず。字文虛中詩「重臣新佩玉――」麒麟符をいふ、隋代、玉麟符を造りて銅虎符に代ふ。

【騏驥之衰也駑馬先レ之】キリンノオトロフルヤドバヲマツ　騏驥は一日に千里を走る駿馬をいふ。英雄も老衰しては常人に及ばざるに喩ふ。戰國策「――、孟賁之倫也、女子勝レ之」

【騅】スキ　支

○あしげうま、蒼白雜毛の馬。詩、魯頌「有レ――有レ駓」○楚の項羽の乘りし名馬。

【騅駓】スキ　あしげ馬と、しらかげ馬と。字解參看。

【騅不レ逝】スカズ　項羽の故事に本づき「て、疲窮まりて奈何ともすべきやうなきにいふ。史、項羽紀「項王夜起飲ニ帳中一、有ニ美人一名虞、常幸從、駿馬名騅、常騎レ之、於レ是項王乃悲歌忼慨、自爲レ詩曰、力拔レ山兮氣蓋レ世、時不レ利兮――、――兮可ニ奈何一虞兮虞兮奈レ若何」

【騘】

騣（馬部十一畫）の俗字。

【騝】

騣（次頁四段）の俗字。

【騊】タウ　豪

――駼トウは良馬の名、北國に産す、――塗ともいふ。

【騑】ヒ　微

○そへうま（副馬）驂馬の左右の外側の馬（中の兩馬を服といふ）＝驂馬。○三歲の馬。○廣く馬の稱。柳宗元詩「天路下ニ征一」○――は馬行きて止まらざる貌。詩、小雅「四牡――」

【騑驂】ヒサン　副馬の左右の外側なるそへ馬。曹植詩「――陵レ路、戲驅載興」＝驂騑。

【駢】ヘン　先　青

○ならぶ（竝）二頭立の車馬、となる、物事の竝び列るにいふ。○くむ（朋比）○むだもの。○となり、ならび（列）くみ。○併に同じ。齊の地名。論、憲問「一邑三百」

【駢拇】ボム　駢・竝・併・幷・比・雙・排の別は竝（二四四頁一段）の條を見よ。

【駢雅】ヘンガ　書名、七卷、明の朱謀瑋撰す、爾雅の體例に依り、釋詁・釋訓・釋名稱・釋宮・釋服食・釋器・釋天・釋地・釋草・釋木・釋蟲魚・釋鳥・釋獸の――三篇に分ちて訓釋せり、引據頗る詳博、尤も詞章に益あり。

【駢頭】ヘントウ　くびをならべる。楊先文「呂氏男女無ニ小長一レ――就レ戮」

【駢肩】ヘンケン　ならびさま。曾鞏詩「朱

碧萬頃相一ㇾ」

【駢脅】ヘンキョウ　一枚あばら、肋骨が相ならびて一枚の骨の如し。かかる人は多力なりといふ。左、昭二三「聞二其一一一、欲レ観二其裸一浴、薄而観レ之」史、商君傳「多力而一一者、爲二総率一」

【駢肩】ケン　衆人がこみ合ひてかたをならべる。徐庾伯賦「成一一一而側足」歐陽修文「夾道之人、相與一一聚迹、瞻望咨嗟」

【駢死】シ　首をならべて死す、死する者の多きをいふ。韓愈、張中丞傳後敍「一一一於睢陽之間一」

【駢枝】シ　駢拇枝指の略語。

【駢指】シン　前條の一枚になりて生するもの。五代史、南唐世家「李煜、豐額一一」

【駢肩】ケン　ならびそびえる。裴説詩「二室嵩連、四山一一」

【駢植】ショク　ならびたつ。＝竝立。

【駢嶋】シュウ　ならべてのぞむ。廬山記「東南際二諸嶺一不レ得一一一」

【駢字類編】ハンジ　二百四十巻、清の康熙五十八年の勅撰、天地・時令・山水・居處・珍寶・數目・方隅・采色・草木・鳥獣・蟲魚の十二門に分ち、其の熟語を頭字によりて輯め、專ら詞藻對偶の用と爲す。

【駢四儷六】ヘイシレイ　四字と六字との對句を用ひて作れる華麗なる文、即ち六朝時代に多く行はれし文體。

【駢列】レツ　ならぶ。遼史、地理志「非邑一一、最爲二衝會一」＝駢比・連列。

【駢拇】ボ　駢四儷六の文體をいふ。前條參看。「一一文鈔」は三十一巻、清の李兆洛編す。＝駢體文・駢文。

【駢趾】シ　並びはす。琴賦「發美音於一一一之間」

【駢羅】ラ　ならびてそびえる。鮑良時「冰溪澈森沈、玉山鬱一一」

【駢比】ヒ　聚りてならびつらなる。張衡賦「麈鹿麋麚、一一個仄」＝駢闐〔王粲賦〕

【駢闐】テン　前條に同じ。王粲賦「稻鑑翠精、一一上路之遊」

【駢比】ヒ　多くならぶ。水經、注「池之四周、民居一一」＝駢列。

【駢脅】キョウ　ひぢをならべる。魚藻威文「露王機師、一一東立」

【駢拇枝指】シシ　駢拇はよつゆび、足の大指と第二指と相連る。枝指はよつゆび、手に六指あるをいふ。莊、駢拇「一一、出乎性一哉、而修二於德一」

【駢鏃】ソク　ならびつらなる。遊覽「翠行兮上下、一一兮列陳」

【駢脣】シン　次條に同じ。揮塵三錄「以レ不レ習一一一、不二肯就一レ職」

【駢儷】レイ　駢四儷六の略。其の俗參看。東觀餘論「梁簡文集二六朝一一體一、故自清麗可レ喜、不レ失レ爲二佳文一」

九畫

【西妖】エ　（艤）

一裏は金喙赤色にして一日に一萬八千里を行くといふ神馬〔上林賦〕

【駁】カ　（麻）

まだらうま。赤白雜色の馬。詩、魯頌「有一一有騢有」

【駃】キ　（支）

一ㇾは馬の行くに威儀ある貌。又、馬の強く壯んなる貌。

又、強めて息まざる貌。詩、小雅「四牡一一」

【騆】クヮイ　（佳）（麻）

喙の黒き黄馬。詩、秦風「一一騧是驂」

【騞】カク　（陌）

刀にて物を解く聲。

【騞然】カクゼン　物のはなれる音の形容。沈佺期、簪裾引「始見レ羽以一一」

【騞然】カクゼン　刀にて牛を解く聲の形容。莊、養生主「奏レ刀一一」

【騂】シュン　（軫）

○にぶきうま（鈍馬）○馬のまだら。

【騣】ソウ　（東）　騣は俗字

馬のたてがみ（馬鬃）

【騘】　（馬部十一畫）に同じ。

【騠】テイ　（齊）

駃一ㇾは良馬。

【騖】ブ　（遇）

○はす、縦横にかけまはる

「驍ー」「騁ー」「駿ー」漢書、昔義「直騁曰驍、徇驍曰ー」○すみやか。素問「脾脈ー緩」○ほしいまま（放縦）

【驍騎】ケウキ　驍・騎・騁・騎の別は騎（馬部三畫）の條を見よ。

【驍捷】ケウセフ　かちをいそがせて舟を進める。謝朓詩「ー一ノ把ニ流方ニ趙ノ山助ニ遠眺ニ」

【驍雄】ケウユウ　容貌にそなへたるはやうま。淮南子「論ニ驍傳ー一ニ不ニ若ノ此其亟ニ」

【驍馳】ケウチ　車馬をはす。漢書、賈山傳「從者纔騎、四馬ー一」ニ驍騎。

【驕】ケウ　驍に同じ

○躍りて馬に乗る。○圖たばかる、かたる義とす「ー取」「欺ー」

【驕馬】ケウバ　馬上の遊戯の事。ニ馬戯・戯馬。

十畫

【騎】キ　置支

○こひねがふ。冀に通ず。○千里の馬。ニ驥。

【驈】キ　置

くろくりげ、淺黒色の馬。

【驃】ケイ　齊

前足の皆白き馬。

【驃】㊀ケン　㊁ケン　先　鹽

㊀かく（快・劇）○かろがろし、輕儇躁進の貌。○さわがし。○馬の腹のやまひ。○人の姓。㊁にぶきうま（駑）「一馬」

【驃汚】ケンヲ　かけてけがれる。損辱の義。缺點を生ずる。漢書、竇嬰傳「外無ニー一之名ニ」

【驃勇】ケンユウ　勢よく飛動する。法書要錄「梁蕭子雲評ニ逸小篆ニ飛白ニ寫趨風馳、點畫之際、若ノ有ニー一ニ」

【驃驃】ケンケン　○かろがろし、輕儇躁進の貌。柳宗元、乞巧文「杳杳ー一、恣ニ口所ニ言ニ」○飛ぶ貌。獨孤及詩「ー一兩黃鸝」

【驃騰】ケウトウ　飛びあがる。杜甫詩「ー一坐可ノ致」（仕進の道に喩ふ）ニ飛騰。

【驃馬】ケウバ　劣れるうま。論衡「乘ニー一之ノ野」ニ駑馬。

【驃崩】ケウホウ　かけくづれる。詩、小雅「如ニ南山之壽ニ不ノ騫不ノ崩」

【驄】ゲン　元

かけうま。たてがみ黒く、腹の白き赤馬。詩、大雅「騏ー彭彭」

【騷】㊀サウ・ソウ　㊁サウ・ソウ　豪　蕭

㊀さわぐ。さわがす。さわぎ。○さわがし、擾動する貌、秩序なくみだれ動く。詩、大雅「徐方驚ー」○うごく。うごかす（動）○さびしくすずし（蕭涼）○うれひ（愁憂）慇の假字。離ニはうれひにかかる。○みだる（擾）○あしなへ（跛）○ーーはにはか、急疾の貌。又、風のつよき貌。○詩の一體、楚の屈原の離ーに始り、其の徒宋玉等の作りし悲憤の氣ある詞賦。○轉じて、多感の詩人をー人といふ。㊁はらふ。掃に通ず。史、黥布傳「大王宜ーー淮南之兵ニ」

【騷人】サウジン　○詩人をいふ。正字通「屈原作ニ離騷ニ、目ノ遭ニ憂也、今謂ニ詩人ニ爲ニー一ニ」ニ騒客・詩客。○憂を抱ける人。范仲淹、岳陽樓記「遷客ー一、多會ニ于此ニ」

【騷人墨客】サウジンボクカク　詩人や書畫を善くする風雅の士。宜和畫譜、運思高妙、如ニ——、登ノ高賦ニ詩ニ」

【騷擾】サウジョウ　さわぎみだれる。國語「唯有ニ語侯ニ欲ー一ニ焉」

【騷屑】サウセツ　風のすずしく吹く貌。楚辭「風ー一以搖ノ水」謝靈運詩「ー一出ノ穴風」

【騷然】サウゼン　さわがしき貌。陸游詩「孤村風雨夜ー一」

【騷體】サウタイ　屈原の離騷に倣ひて作りし詩賦、語尾に皆兮の字を用ふ。或は謂ふ、虞舜の南風歌はーーの起源なりと。

【騷動】サウドウ　○さわぎてゐちつかず。史記、自序「形神ー一」○さわぎ、みだれ。孫子、用閒「出征千里、日費ニ千金ニ、內外ー一」ニ騷亂。

【驗】レウ　先

○えびすの大馬。○もとむ、さがす（索）捜に通ず。

【騘】㊀シウ・ス　尤　通音スウ　㊁ソウ

㊀はしる。＝趨。○のりうま（騎馬）○うまのり（騎士）○うまかひ（駿御）御者、車馬を掌る吏。○ともまはり、前後に供奉する人「前ー」「ー従」左、成十八「使訓羣ー」知ㇾ禮」○良き矢。＝箭。○ー獸ㇲは獣獣の名、聖人の至徳に感じて見ㇵるるといふ。詩、召南「登發五豝」又天子の囿を掌る人（賈誼「新書」）㊁騶に同じ。

【騘御】スウ　御者。何遜詩「脊掟紛排擲、十ー或四東」

【騘度】ダク　霊獣の名、白質黒文にして、尾は軀より長し、一名騘吾。字解参看。

【騘唱】シャウ　騘従ㇳモと傳呼ㇵウこと。北史、郭祚傳「刊二正故事一、令僕中丞、ーー而入二宮門一」

【騘従】スヰ　貴人のともまはりの騎士。東齊紀事「紛紛ニーー傳呼一」＝騘僕。

【騘走】スウ　はしりゆく。戦國策「不伝腹ノ疾、不ㇾ能ニーー一」

【騘卒】ソツ　身分賤しき徒隷など。北史、魏太武帝紀「其百工伎巧、ーー子息、皆習二其父兄所一ㇾ業、不ㇾ聽二私立一學校一」＝徐卒。

【騘僕】ともまはりのしもべ。唐書、倪若水傳「班公是行若二登仙一、晋恨不ㇾ得ㇾ爲ニーー一」＝騘従。

【騭】シツ・シチ　質　職は誤字

○さだむ（定）きめる。書、洪範「天陰ㇾ下民一」（吉凶禍福は天の定むる所たる義）○のぼる（陟）馬に乗りて山に登る。○をうま（牡馬）

【騬】シウ　蕭　裄

馬の勢を割く。又、其の去勢せし馬（猪馬）

【騸】セン　㒳

○馬を去勢する。又、去勢せし馬。○つぎ木（接樹）月令廣義に一樹法あり。

【騰】トウ　蒸

○あがる。あぐ（擧）○のぼる。のぼす（升）「上ー」「升ー」○をどる（躍）○はしる（奔馳）○物價が高くなる「ー貴」「暴ー」○のる。のす（乘）こゆ（超）○去勢したる馬。（猪馬）＝騬。○しゅくつぎの馬。○醉ー㊀は醉の未だ醒めずして、ぼんやりとしたる貌。陰鏗詩「年光已付醉ー醉」

【騰上】ジャウ　騰・上・升・昇・陞・登・躋・陟の別は上（三六頁一段の條を見よ。

【騰踏】トウ　をどりあがる。梁簡詩「旁無二獣者一氣ーー」

【騰降】コウ　のぼりくだる。歐陽修詩「陰陽在二天地一、ーー而相推」＝登降。

【騰蛟起鳳】キフ　をどりあがるみづち、飛びたつ鳳凰。才華のすぐれたるに喩ふ。王勃文「ーー、孟學士之詞宗」

【騰貴】キ　物價が高くなる。＝騰踊。

【騰空】クウ　おほぞらにのぼりゆく。沈約詩「瓊樓宿未ㇾ浴、羽翰已ーーノー」

【騰黄】クワウ　すぐれたる神馬。符瑞圖「ーー神馬也、其色黄、一名乘黄、其狀如ㇾ狐、背上有二兩角一」

【騰場】ジャウ　のぼりあがる。吳均詩「飄然欲ニーーー」

【騰驤】トウ　とびあがりこえる。晉書、夏侯湛傳「警二迅于雲霄之際一ニーー于四極之外一」張衡賦「乃會」翅而ーー」＝超越。

【騰蔣】ショウ　騰踊に同じ、蔣は踊。柳宗元、興州江運記「顧踏ーー」

【騰達】タツ　飛び行くことの速くしてはやき義。李白賦「獵犬之所ニーー」＝騰逸。

【騰閃】セン　はねあがりてひらめく。韓愈詩「芰花翻二浪氣一、幽獣工ニーー」

【騰踐】セン　晃などの上をふみ越えて行く。後漢書、光武紀「走者相ーー」＝騰蹋。

【騰踏】トウ　のぼりうごく。謝惠文「雲騎ーー、即川野雲昏」

【騰踊】ヨウ　○立身する。耶律楚材詩「一旦ーー時、獣衆宜二誅戮一」＝登踊。○のぼりあがる。劉基詩「陰氣方ーー、密雨已霑漫」

【騰超】テウ　のぼりをどる。張華詩「ーー如二激電一、廻旋如二流光一」

【騰踏】タフ　はねあがり行く。王安石詩「天閑久索ㇾ騰、駿足方ーー」

【騰馬】バ　さかりがつきて奔騰せる馬。禮、月令「季春之月、乃合二累牛ーー一、遊二牝于牧一」疏「累牛、謂二相累之牛一、ーー、相騰逐之馬也」

【騰翔】ショウ　たかくとびひるがへる。李賀、日賦「海水血色、魚龍ーー、焦烟倒捲之狀也」

【騰驁】ガウ　のぼりかける。十洲記「百神迭走、蛟龍ーー」

【騰沸】フツ　わきあがる。盛時泰詩「海波途ーー、浪起如二山丘一」

【騰驤】ジャウ　たかく飛びあがる。異苑「脫二衣帖一、服二仙羽一、升ㇾ虚而ーー」

【騰躍】ヤク　をどりあがる。

【騰踊】ヨウ　物價が甚だしくあがる。唐書、魏相傳「今錢不ㇾ重、穀帛ーー」

【驃】ヘウ　因

―は馬の壯んなる貌。又、馬の行く貌。詩、小雅「四牡――」‖彭彭。

【驃田】リウ　尤　又、騮・騮に作る

くりげ、かげ。黑き尾ある赤馬「騅―」「紫―」

【驃騎】クワウ　くりげの馬。高啓詩「青海異種多二―一」

十一畫

【驁】ガウ　豪　號

○おごる、馬が驕りて人に馴れず「悍―」○轉じてすべて驕りて馴れざる義。漢書、賈嬰傳「諸公稍自引而忘―」○かろんず、輕視する。莊、外物「―萬世之患」○よきうま（駿馬）「駿―」呂覽、察今「良馬不期乎驥―」○策―は驕悍ガウカンの貌。

【驁蕩】ガウ　おどりてわがまま。唐書、劉闢傳「益―求レ統二三川一」

【驁放】バウ　おどりてほしいまま、性に任せて物に傲る。唐書、李白傳「自知レ不レ爲二親近所一レ容、益―不二自檢一」

【驂】サン　覃　驔

○かる、馬に策ムチうちて疾く行く「疾―」「長―」○おふ（逐遣）逐ひはらふ。孟、滕文公「―二飛廉於海隅一」○せまる（逼迫）柳宗元詩「我爲名―苦俗塵」○はす（馳）馬に乘りて馳せる。○軍隊の行列「先―」「中―」

同訓異義　驅・馳・驟・騁の別は馳（馬部三畫）の條を見よ。

【驅役】ヤク　人をおひたてつかふ。潘岳詩「―一宰二兩邑一、政績竟無レ施」‖驅使。

【驅駕】ガ　○馬をかりて走らせる。○人をかり使ふ。

【驅逐】チク　おひはらひおどす。司馬光詩「細蝱趁二眉睫一―不レ可レ攘」

【驅疾】シツ　おこりの病をかり除く。楊萬里詩「不レ須社何能―レ」古今詩話「有二病レ瘧者一、子美云、驅二瘧詩一可レ治」

【驅役】エキ　おひたててつかふ。賈誼文「―二丁壯一、墨二髠子原野一」

【驅遣】ケン　おひたてて去らしむ。古詩「仍更被二―一、何盲復來還」

【驅策】サク　貴人の爲めに使役せられる、馬に喩へていふ。王禹偁詩「卑吏風―、徵消效二升斗一」

【驅使】シ　○おひたてつかふ。○人におひ使はれる。古詩「愛二母鏡臺一」‖驅役。

【驅悉】シツ　うれひを驅り去る。白居易詩「―レ知二酒力一破レ睡見二茶功一」蘇舜欽詩「白雲已有終身約、醉酒聊驅萬古愁」

【驅叱】シツ　おひまはししかる。雲笈七籤、飛鍵レ之―、甚二于僕隸一」

【驅集】シフ　かりあつめる。後漢書、郅惲傳「卜者王郎、假レ名因レ勢―二一烏合之衆一、遂震二燕趙之地一」

【驅偏】ヘン　そそのかす、おだてる。齊書、陳顯達傳「因醜劇於、專事二侵掠一、二一異類一、蠭二聚西偏一」

【驅儺】ダ　おにやらい、追儺に疫鬼を逐ひ拂ふ。隋朝樂事「呼者塗抹、裝二成鬼形一、叫跳―!、索二乞利物一」

【驅迫】ハク　大なみをかり立たしむ。柳宗元文「江漢之水、疾風―レ」

【驅馳】チ　○馬をかけはしらす。○使はれてかけまはる、人の爲めに奔走する。諸葛亮、出師表「遂許二先帝一以二―一」

【驅逐】チク　おひはらふ。後漢書、桓帝紀「不レ得二迫二脅一―一良庶一」

【驅逐艦】カン　敵の水雷艇を驅逐破壞するに用ふるいくさぶね、水雷艇に似て大きく、速射砲を備ふ。

【驅蟲劑】ザイ　腸の内の寄生蟲をかり除く藥、セメンなど。

【驅除】ジョ　かりのぞく、おひたてはらふ。范成大詩「頻將二殘暑一―一盡一」

【驅騁】テイ　馬をはしらす。孟、盡心「般樂飲レ酒、―二田獵一、後車千乘、我得レ志、弗レ爲也」

【驅馳】チ　こうしをかりおふ。王維詩「牧人―レ返、盤馬帶レ禽歸」

【驅掠】リャク　おびやかして財を奪ふ。五代史、唐臣傳「將二數千人一夜行、所レ過―一居人一」

【驂】サン　覃　驔

○そへのり（陪乘）○そへうま（騑馬）馬車の馬の兩旁に在るもの。‖兩驂。

【說レ驂】ダツサン　人の喪に香典を贈るの厚きにいふ。檀弓「孔子之レ衛、遇二舊館人之喪一、入而哭レ之哀、出、使二子貢一―レ而贈レ之」

【驂御】ギョ　馭者。又、侍從の職。王維詩「謬以二道門子一、徵爲二―一臣一」

【驂乘】ジョウ　そへのり。古、乘車の法、御者車の中に居り、君は左に居り、右に護衛者一人を乘せて車の傾かざるやうにす、其の右に乘る者を―といふ。左、文十八、齊懿公納二國歜之妻一而使二歜―一―一」‖陪乘車右。

【驂騑】ヒ　驂馬の兩旁に在る者。蔡邕又「車服誡」略、―加レ鞍」

【驌】シャウ　㊥　又驅に作る

驌ー（シュウ）は古の良馬。＝庾亮・鍾夷・驍騰。

【驄】ソウ　㊦

あしけ、あをうま。青白雜毛の馬。

【驀馬】バク　あをうま。後漢書、祖興傳「拜二侍御史一、常乘二ー一一、京師長樂、爲レ之語曰、行行且止、避二ー一一御史一」

【執馬】チ　㊦

○もとる（很）○馬が重くして足の泥中に陷る貌。史、晉世家「惠公馬ー不レ能レ進」

【莫驀】バク　㊥

○こゆ（超越）のりこえる。○まっしぐら、たちまちに、眞一文字に「ー然」

【驀然】バクゼン　次條に同じ。＝忽然。

【驀地】バクチ　まっしぐら。たちまちに。地は助字。賈耳集「嵩山極峻法堂、壁上有二詩一、曰、一團茅草亂蓬蓬、ー一燃天ー一空」＝忽然。

【驃】ヘウ　㊥

○しらかけ（白鹿毛）黃白色の馬。○つよくいさむ（驍勇）又、票に作る。○馬の疾行する貌。

【驃騎】ヘウキ　將軍の名號、漢武帝始めて置去病を以てー一將軍と爲す、秩祿、大將軍と等し（漢書、武帝紀）＝票騎。

【驟】ス　㊦

らば、驢馬の牡と、牝馬との混合種、體小にして健く、能く力役に任ふ。＝騾。

【驟綿】スイ　らばの驟れ行くもの。商旅除を結びて行き前後相續くにいふ。宣和畫譜「王維善畫、尤精二山水一、御府所藏、有二ー一圖一一」

【驟駝鞍】スイダ　二本の長き棒を前後二匹の背に架し、上に轎ゴを置き、旅客を坐臥せしめて行く、轎車に比すれば較や靜穩なり、支那の北方數省の旅行に多く之を用ふ。

【驟雨】スイ　らばと、うさぎうまと。梅堯臣詩「又與二ー一走二長阿一」

十一畫

【驊】クワ　㊦

ー騮（クワリウ）は駿馬、周の穆王の天下を周遊する時に用ひし八駿馬の一。通じて華に作る。＝華騮。

【驅】ク　㊦

○おごる、ほこる（矜）たかぶる（高）○ほしいまま（放縱）論、學而「富而無レ驕」ー○馬がすぐれてつよくして人の制御を受けず。○士卒が靜肅ならず。周語「師輕而ー一」○壯んなる貌。詩、碩人「四牡有ー一」○六尺の高さある馬。○めでる、寵する。

同訓異字　驕・奢・侈・泆・傲・倨・泰の別は奢（四四二頁）の條を見よ。

【驕易】キヤウエキ　おごりあなどる、易は侮。開見前錄「范文公戒二子孫一詩、其畧曰、戒レ爾學レ立レ身、莫レ若レ先二孝弟一、治レ怡奉二親長一、不三敢生ニー一」＝驕慢・慢易。

【驕淫】キヤウイン　おごりて分に過ぐ。史、平準書「當二此之時一、網疏而民富、役レ財ー一、或至三兼并豪富之徒一、以武斷二於鄉曲一」＝驕奢。

【驕榮】キヤウエイ　おごりたかぶる。韓非子「齊過二定公女樂一以ー一其志一」

【驕奢】キヤウシヤ　心おごりて分限不相應の奢に走ける。新序「呂蒼・呂禄、ー一無レ厭」＝驕縱。

【驕傲】キヤウガウ　おごりたかぶる。離騷「保二厥美一以ー一兮」

【驕蹇】キヤウケン　おごりてわがまま。漢書、王吉傳「車多ー一、不レ通二古今一」

【驕邪】キヤウジヤ　おごれる。北史、魏文帝紀「ー一公路」

【驕悍】キヤウカン　おごりてあらし、祖逖傳、周嵩傳「嵩驍ー一」晉書、祖逖傳「縱使劉、爲レ人ー一」

【驕恣】キヤウシ　おごりて他をいむ。後漢書、桓帝鄧后紀「后、恃レ寵ー一」

【驕氣】キヤウキ　おごりたかぶるきぶん。史、老子傳「去二子之ー一與二多欲一」

【驕倨】キヤウキヨ　おごりたかぶる。呂覽、貴爲二天子一、而不ニー一」

【驕矜】キヤウキン　たかぶりほこる。史、信陵君傳「公子聞レ之、意ー一而有二自功之色一」

【驕頑】キヤウグワン　心おごりてかたくな。元稹詩「怪我久不レ識、先來問ニー一」

【驕縱】キヤウシユウ　盛んなる貌。詩、齊風「無レ田二甫田一、維莠ー一」

【驕奢】キヤウシヤ　おごりてわがまま。漢書、淮南王傳「及二孝文初即レ位、自以爲二最親一、ー一數不レ奉レ法」＝驕傲・驕蹇。

【驕子】キヤウシ　愛にまかせておごれる子ども。漢書、汲黯傳「侍養若レ奉ニー一」＝驕兒。

【驕兒】キヤウジ　心おごれるこども。杜甫詩「ー一惡臥踏裏裂」＝驕子。

【驕恣】キヤウシ　おごりてほしいまま。漢書、淮南王傳「王歸レ國、益ー一不レ用二漢法一」

【驕縱】キヤウシユウ　心おごりてほしいまま。韓詩外傳「厲二ー一之容一」＝驕蹇・

粋肆。

【驕人】ケウジン おごりて、ほしいままなる人。又、奢侈にして人を蔑して高位にある人。詩、小雅「―一舒舒、勞人草草」

【驕奢】キヤウシヤ おごる。おごり、奢は衣食住などにおごる。南史、徐湛之傳「後世若有―一不ㇾ師者、可ㇾ以ㇾ此衣ㇾ示之」

【驕尚】キヤウシヤウ おごりたかぶる。後漢書、張衡傳「少善屬ㇾ文、通ㇾ五經、貫ㇾ六藝、瞻ㇾ才高ㇾ于世、而無ㇾ―一之情」

【驕雄】キヤウ 馬が勢壯んにいななく。杜甫、驄馬行「願ㇾ隨ㇾ君驤ㇾ―一自矜ㇾ能」

【驕戰】キヤウセン 強きを恃みてたたかふ。高適詩「力爭固難ㇾ恃、―一曷能久」

【驕惰】キヤウダ おごりて事におこたる。宋史、韓琦傳「故行而尚ㇾ乘ㇾ賊―一、破ㇾ之必矣」‖敖惰・矜惰・驕怠。

【驕代】キヤウダイ おごりを好む時代。張華詩「末世多―一、―一好ㇾ浮華」

【驕怠】キヤウタイ 心おごりておこたる。唐書、柳公權傳「不ㇾ宜ㇾ奏ㇾ樂ㇾ以日開ㇾ之使ㇾ二人―一」‖驕惰。

【驕逸】キヤウイツ 心おごりてゐばる。大學「必忠信以得ㇾ之、―一以失ㇾ之」

【驕縱】キヤウジユウ たかぶりてゐろか。宋之問詩「幼稚―一侯門策」

【驕恃】キヤウジ たかぶりて道にさかふ。李九、彈銘「晉室―一、軍臣悉彈、衆其如ㇾ麗、雖如ㇾ鋼ㇾ丸」

【驕豪】キヤウガウ おごりてあばれる。荀子「剛強猛毅、思ㇾ所ㇾ不ㇾ信、非ㇾ―一也」

【驕婦】キヤウフ おごりて夫をかろんずるつま。後漢書、朱浮傳「內聽ㇾ―一之失計、外信ㇾ讒邪之譖言」‖傲婦。

【驕兵】キヤウヘイ 心おごりて敵に威を示さんとする軍勢。漢書、魏相傳「欲ㇾ見ㇾ威於敵ㇾ者、謂ㇾ之―一、兵驕者滅」

【驕詩】キヤウシ おごりて道にさかふ。蔡邕、七石序「頗而紕ㇾ之、以賢ㇾ乎讒構、譏而矢ㇾ之、以矜ㇾ乎―一」

【驕慢】キヤウマン おごりたかぶる。漢書、五行志「奢淫―一、則士失ㇾ其性」‖驕傲。

【驕滿】キヤウマン おごりて高心する。後漢書、皇后紀贊「皆集ㇾ―一、福協ㇾ貞信」‖矜滿。

【驕揚】キヤウヤウ 驕りて威張る。漢書、五行志「―一奢侈」

【驕陽】キヤウヤウ 夏の烈しき日。杜甫詩「三伏日既過、―一化爲ㇾ霖」

【驕橫】キヤウワウ おごりてほしいまま。後漢書、梁冀傳「貴帝少聰慧、知ㇾ冀―一、嘗朝ㇾ羣臣、目ㇾ冀曰、此跋扈將軍也」南史、宋武帝紀「貪淫―一」

【驍】ケウ

○よき馬(良馬)○つよし、たけし(勇健)すばやくつよし「―勇」衆に通ず。

【驍銳】ケウエイ つよくするどし。唐書、王智興傳「智興少―一、爲ㇾ徐州牙兵」‖勁銳・猛銳・勇銳。

【驍悍】ケウカン たけくつよし。吳志、孫翊傳「翊雄壯也、―一果烈、有ㇾ兄策風」‖標悍。

【驍毅】ケウキ たけくつよし。唐書、黑齒常之傳「常之七尺餘、―一有ㇾ謀略」

【驍騎】ケウキ ○つよき騎兵。班固、東都賦「輕車電激、―一雷驚」○官名。將軍の名號。史、李將軍傳「吳楚軍時、爲ㇾ―一都尉」

【驍果】ケウクワ つよくしておもひきりよし。驍勇果斷。晉書、謝幼度傳「―一多ㇾ權略」

【驍騰】ケウトウ 勇み往く貌。陸雲詩「悠悠山川、―一征邁」

【驍將】ケウシヤウ つよくたけき大將。北史、賀拔勝傳「賀拔爵北開―一、爾宜ㇾ慎ㇾ之」‖勇將。

【驍騰】ケウトウ いさましくつよし。杜甫、兵車胡馬詩「―一有ㇾ如ㇾ此、萬里可ㇾ横行」‖勇健。

【驍武】ケウブ たけくつよし。晉書、苻洪載記「―一善ㇾ騎射」‖勇武。

【驍猛】ケウマウ たけくあらし。後漢書、鮮卑傳「石槐―一、最有ㇾ單于之地」‖驍悍・勇猛。

【驍名】ケウメイ 勇武なるほまれ。‖勇名・雄名。

【驍勇】ケウユウ つよくいさましい。孫楚、與ㇾ孫皓ㇾ書「―一百萬、蓄ㇾ力待ㇾ時」

【驍烈】ケウレツ つよくいさましい。魏書、道武七王傳「河南王長子提、―一有ㇾ父風」‖猛烈・勁烈・勇烈。

【驒】タン・ダン・ダ・ダイ・テイ

○あしけ、魚鱗に似たる斑文ある馬。‖連錢驄。○慣の黑き白馬。詩、魯頌「有ㇾ―一有ㇾ駱」

【驔】タン

○くろくりけ、脊の黃なる黑馬。○脛の毛の白き馬。詩、魯頌「有ㇾ―一有ㇾ魚」

【驎】リン

○まだらうま。○くろきくちびるの馬。○麒―は獣麟に通ず。

十三畫

【驛】エキ

○うまや(傳舍)ふなつき、しゅくば「宿―」「一卒」「水―」「古―」常に舟車人馬等を備へ置きて交通通信などの便利を圖

る所。○つぐ、つたふ（譯）○はやうま、しゅくばにて交代してつぎ立てる人馬舟車など。○ー＝は苗の生ずる貌。詩、周頌「ー＝其達」○絡ー＝は往來の絶えざる貌。＝絡繹。○圖汽車の發著所、停車場シヤジヤウ「品川ー」

【驛館】エキクワン　しゅくばのはたごや。王惲詩「ー＝殘紅暗色分」＝傳舍。

【驛券】エキケン　古、宿驛にて人馬を徵するに用ふるわりふ。宋史、西南溪峒蠻傳「貢進則給以ニー＝」

【驛騷】エキサウ　しゅくばがさわぐ。又、さわぎみだれる義とす。吳師道詩「嫩逢ニ騎ー＝」＝驛騷・擾亂。

【驛使】エキシ　宿驛より諸方へ信書などを送遞する使者。今の郵便脚夫。陸凱詩「折レ花逢ニー＝、寄與隴頭人」

【驛舍】エキシヤ　しゅくばのはたごや。宋史、李重誨傳「重誨純愿寡過、眞宗惇三其沒二於道一、命二其子一乘レ傳往護レ柩、尋ニー＝レ止ニー＝之則次ー」

【驛樹】エキジユ　宿場に植ゑたる木。國史補「開元末、西國獻二獅子一、至二長安西道中一、繫二於ー＝ー」

【驛丞】エキジヨウ　宿驛の事を掌る官の名。清會典「專設ニー＝一管理」

【驛卒】エキソツ　宿驛を守る卒。南唐近事「韓熙載命二妓樂扇一詩爲ニー＝女ー」

【驛道】エキダウ　うまやぢ、宿驛の路。宋貴、柳元景傳「分二五百人一屯ニー＝ー」＝驛路。

【驛站】エキタン　○しゅくば、站は居だまり。水滸傳「臣等ー＝而來」○停車場シヤジヤウ＝國車站。

【驛長】エキチヤウ　○宿場のをさ。唐律「ー＝私借二人馬一」＝亭長。○停車場の長。

【驛亭】エキテイ　しゅくば、宿驛、亭は停、道路にて人を舍して停集せしむる所。晉書、天文志「東壁北十星、曰二天廐一、主馬之官、若二今ー＝一也」白居易詩「領レ到ニー＝先下レ馬」＝郵亭・驛站。

【驛程】エキテイ　たびぢ。貫生詩「駑質辭二官貴一、歸心數ニー＝」

【驛遞】エキテイ　○うまつぎ、しゅくつぎ。○宿驛より次の宿驛へと次第に送り屆ける。

【驛傳】エキデン　宿つぎの馬、傳馬。張籍詩「送叨乘ニー＝、偏與戒二整場一」

【驛馬】エキバ　しゅくばに備へて客の用に供する馬。史、郷當時傳「常置ニー＝長安諸郊一、請二謝資客一」

【驛梅】エキバイ　宿驛に植ゑたる梅。田錫、壘鮮樓賦「ー＝江梅動二遊官之芳懷一、風觀錄塞起二高明之逸意一」

【驛舫】エキハウ　てんまぶね。岑參詩「ー＝宿二湖月一、州城浸二海雲一」

【驛吏】エキリ　宿驛の役人。唐書、王君㚟傳「居レ職不レ守二法度一、會被レ召、至二渭南一、縱ニー＝ー二奔突一」

【驛給】エキキフ　國しゅくばにて人馬を徵發する爲めにならすすず、王朝時代、朝廷より地方に出張する官吏に授けしもの。

【驛路鈴懸】エキロスヾカケ　宿つぎ馬のすずのこと。杜荀鶴詩「逸舟火影寒時レ浦、ー＝夜過レ山」鈴浦一本に換レ浪に作る。

【驛樓】エキロウ　しゅくばにある重屋ヂウヲクの樓。蘇軾「書烏郎偉射雷游二湘中一、宿二于ー＝一夜遇二女子一詩」

【驚】　ケイ　キヤウ　庚

○馬が駭ヂヤクく。又、廣くおどろく義とす。易、震卦「震ー百里」おどる、さわぎ亂れる、さわぎ立つ「ー濤」○おどろかす、おどろかしむ。○小兒の病の名、ー風の簡稱「急ー」

【驚異】キヤウイ　おどろきあやしむ。北史、神武紀「時見二赤蛇繞一牀、乃益ー＝」

【驚逸】キヤウイツ　おどろきにげる。晉書、荀崧張氏傳「廢馬ー＝、武庫兵器有レ靡」

【驚插】キヤウサウ　はげしくうごく。陳學詩「水波忽ー＝、大魚亂跳舞」

【驚魘】キヤウエン　惡夢におそはる。楊巨詩「夜深忽ー＝」

【驚駭】キヤウガイ　おどろく。史、倉仲通傳「天下震動、諸侯ー＝、威加二突厥一」＝驚愕。

【驚蟄】キヤウチツ　おどろきおそれる。易、震卦疏「震既威動、莫レ不ニー＝ー」＝驚怖・驚愕。

【驚愕】キヤウガク　おどろきおそれる。＝驚蟄。

【驚悸】キヤウキ　おどろきさけぶ。吳萊詩「北州驟見擧ー＝」

【驚悸】キヤウキ　おどろきおそれる。史、項羽紀「見二使者一、伴ー＝曰、晉以爲二亞父使者一、乃反項王使者」＝驚愕・驚駭。

【驚汗】キヤウカン　おどろきてひやあせをながす。北史、貨恭傳「寢而ー＝、總有レ孕而生レ泰」

【驚起】キヤウキ　おどろきたつ。杜牧詩「ー＝鷺鷥無レ恨、一雙飛去卻回レ頭」

【驚悸】キヤウキ　おどろきおそれて甚だしくどうきがする。北史、魏宣武紀「帝母曰二高夫人一、初夢爲レ日所レ逐、避二于牀下一、日化爲レ龍、繞二己數匝一、寤而ー＝、遂有レ娠」＝驚怖・震悸。

【驚喜】キヤウキ　おどろきよろこぶ。宋蕙詩「ー＝非二眷親一、披尋得二新親一」

【驚恐】キヤウキヨウ　おどろきおそれる。後漢書、魏霸傳「吏人悶二六兵卒至一、皆ー＝自救」＝驚怖。

【驚懼】キヤウク　おどろきおそれる。易、震卦疏「震既威動、莫レ不ニー＝ー」＝驚怖・驚愕。

【驚怖】キヤウフ　おどろきおそれる。＝驚懼。

【驚濤】キヤウタウ　おどろきつひゆ。陸龜蒙詩、湯奧傳「赤眉不二復謝則一、衆遂ー＝」＝震潰。

【驚慌】キヤウクワウ　おどろきおそれる。晉書、

劉琨傳「拜レ命ニ一、五情戰悸」
【驚駭】ケイガイ　おどろきてかまびすしくさわぐ。孟浩然詩「渚禽□ニ一」
【驚波】ケイハ　○おどろきたつおほとり。美人の體の輕盈なる形容。曹植、洛神賦「翩如ニ一、婉若二游龍一」○轉じて美人の義とす。陸游詩「傷心橋下春波綠、曾是ニ一照レ影來」
【驚魂】ケイコン　心をおどろかす。劉長卿詩「ニ一同二野鶴一、倦縁值二晨鐘一」
【驚猜】ケイサイ　おどろきうたがふ。高適賦「望二鳳沼一而輕舉、超二羽族一以ニ一」
【驚誤】ケイゴ　おどろきさわぐ。誤は曉に通ず。後漢書、五行志「京都夜有二大光一轉行、民相ニ一」
【驚騷】ケイソウ　おどろきさわぐ。王安石詩「尚傳邊警敢ニ一」‖驚擾。
【驚殺】ケイサツ　甚だおどろく、殺は助字。‖驚倒。
【驚振】ケイシン　おどろきはづ。常袞文「承レ命ニ一、戴レ恩慎怖」
【驚浸】ケイシン　浪のさわぎたつ大水。子華子「如レ涉ニ一」
【驚心動魄】ケイシンドウハク　甚だしく心をおどろかし動かす。詩品「ニ一、可レ謂レ歟二乎一字千金ニ」‖驚魂動魄。
【驚翔】ケイショウ　おどろきてとびまはる。吳越春秋「ニ一之鳥、相隨而集」
【驚惶】ケイコウ　おどろきおそれる。歐陽修詩「還憐衆鳥性、樊籠免ニ一」‖驚怕・驚怖。
【驚起】ケイキ　おどろきたつ。孟浩然詩「渚禽□ニ一」
【驚急】ケイキュウ　おどろきてせまる。
【驚給】ケイキュウ　おどろきてたまはる。
【驚喜】ケイキ　おどろきよろこぶ。
【驚寤】ケイゴ　おどろきさめる。
【驚起】ケイキ　おどろきたつ。
【驚嘆】ケイタン　おどろきほめる。
【驚動】ケイドウ　おどろきうごく。
【驚愕】ケイガク　おどろきおそれる。
【驚異】ケイイ　おどろきあやしむ。
【驚歎】ケイタン　おどろきなげく。
【驚嘆】ケイタン　おどろきほめる。
【驚喜】ケイキ　おどろきよろこぶ。
【驚怪】ケイカイ　おどろきあやしむ。
【驚恐】ケイキョウ　おどろきおそれる。
【驚懼】ケイク　おどろきおそれる。
【驚疑】ケイギ　おどろきうたがふ。
【驚嘆】ケイタン　おどろきほめる

【驚風】ケイフウ　小兒の病氣の名。國民病の類。單に驚ともいふ。急驚・慢驚の二種あり。

【驗】ゲン　㊥ 通音ケン　驗は俗字

○しるし。きざし（兆候）○あかし、しょうこ（證信）「左―」「符―」「證―」史、晉世家「何以爲―」○いさを（成績）○むくい（應報）○ききめ（效能）「靈―」「效―」金史「言ニ禍福一有ニ奇―一」○しらべる、ためす、こころみる（嘗試）「實―」○しらべ、ためし、こころみ「試―」

【驗疫】ケンエキ　傳染病流行の時、汽車・汽船等の旅客の身體を檢査し或は消毒法を行ひて豫防する。

【驗效】カウ　しるし。風俗通「費甚多而方不ニ―一」＝效驗。

【驗左】ケンサ　しるし、しょうこ。唐書、敍郎傳「―一不レ存」＝左驗・左證・證左。

【驗訊】ケンジン　しらべたづねる。唐書、崔邠傳「帝馳ニ遣御史楊璟一―一」＝審訊。

【驗治】ケンヂ　しらべをさめる。演義、于定國傳「吏―一、孝婦自誣服、具レ獄上レ府」

【驗視】ケンシ　かさねてしらべ明かにす。吳志、趙達傳「―一果信」

【驗問】ケンモン　しらべたづねる。漢書、平帝紀「其當レ驗者、卽―一」＝驗訊。

【驥】テツ　㊥ 鐵

くろくりげ。赤黑色の馬。詩、秦風「騏―孔阜」（阜は雄大）

【驫】ヒョウ　㊥ 標

驫（馬部十一畫）に同じ。

十四畫

【驟】シウ　㊥ 宥　ソウ

○はやし、はしる、馬が疾く走る。詩、小雅「載―駸駸」はしらす。○しばしば（頻數）左、襄十一「晉能一來」○にはか、すみやか（急疾）「一雨」

同訓異語　驟・遽・倏・暴・頓・卒・猝の別は遽（一九八六頁四段）の條を見よ。

【驟雨】シウウ　にはかあめ、ゆふだち。擧參詩「―一鳴漸遠」

【驟雨不レ終レ日】シウウフヘカラズジツヲ　ゆふだちは一日とふりつづかず。勢のたけき者は久しくつづかざる喩。老子「飄風不レ終レ朝、――」

【驟課】シウクワ　しばしばいさむ。國語「富民曰、昔晉―一王、王弗レ從」

【驟至】シウシ　にはかにいたる。左傳「郤人―一、以ニ諸侯之車一弗レ能レ報也」

【驟雪】シウセツ　にはかのあつさ。貫華詩「扁舟放ニ河流一、―一消ニ雨鮫一」

【驟起】シウキ　にはかにたちきる。左傳「―一之、不レ亡何待」

【驌】シュク　㊥ 屋

―驪ハ良馬の名。杜甫詩「仍殘老―驌」＝驌驦・驌驦。

【驍】ケウ　㊥ 駘

驍（馬部三畫）に同じ。「―駝」

十五畫

【驕】キョウ　㊥ 蕭

くつわ、くつばみ（馬銜）＝鑣。

十六畫

【驢】リョ　㊥ 魚　驢は俗字

ろば、うさぎうま。馬よりは小にして長き耳あり、性溫順、能く物を負ふ。

【驢坑】リョカウ　地名、安徽省歙縣の境に在り、硯石を產するを以て名あり、佳なる者は金紋絲暈、金星硯と稱す、硯石に較ぶれば、尤も貴重と爲す。

【驢車】リョシャ　うさぎ馬に引かす車。後漢書、張楷傳「家貧無ニ以爲ニ業、常乘ニ―一ニ、以ニ驢ヲ賃ス一レ車ヲ」

【驢上】リョジャウ　うさぎ馬のせなかの上。全唐詩話「相國鄭綮善レ詩、或曰、相國近爲ニ新詩一否、對曰、詩思在ニ灞橋風雪中驢子上一、此何以得レ之」＝驢背。

【騎レ驢覓レ驢】キレイロベキレイロ　驢に乘りてわながら驢を尋ね求める。道を身外に求むるの愚なるに喩ふ。大慧一覺「參禪有ニ二病一、一是――、一是騎不レ肯下一」＝騎レ牛覓レ牛（傳燈錄）

【驢馬】リョバ　○うさぎうま。齊民要術「凡――、駒初生、悪ニ灰氣一、遇ニ新出ノ嬭者一輒死」○うさぎうまと馬と。世說「譬下言ニ――一、不ニ言ニ馬驢一、驢率勝ニ馬耶」

【驢背】リョハイ　ろばのせなか。曹伯啓詩「家家此日勝ニ金榜一、――愁レ詩睡正昏」驢上參看。

【驢鳴】リョメイ　うさぎ馬が鳴く。後漢書、戴良傳「良少誕節、毋喜ニ――一、良嘗學レ之、以娛樂焉」世說「王仲宣好ニ――一、既葬、文帝臨ニ其喪一、顧語ニ同遊ニ曰、王好ニ――一、可ヲ各作ニ一聲一以送之、赴客皆一作ニ――一」

【驢鳴犬吠】リョメイケンハイ　うさぎ馬の嘶き、犬の吠ゆ、聽くに足らざるもの、文の劣れるに喩ふ。世說、輕詆「庾信至レ北、唯愛ニ溫子昇寒山寺碑一、後還レ南、人問北方何如、信曰、唯寒山寺一片石堪ニ共語一、餘若ニ――一耳」顧野王戲「唯有ニ韓陵山一片石一堪ニ共語一、自餘驢鳴狗吠、聒レ耳而已」

【騷擾】ソウジョウ うさぎうまと、らばと。史、匈奴傳「其奇畜則橐駝ー―騊駼」

【騷駁】ソウバク うさぎ馬にひかすてぐるま。後漢書、路粹傳「更用ニー―一議、貨值萬計」

【騭】チツ　十七畫　入

○良馬、千里の馬。論、憲問「ー不ニ稱ニ其力一稱ニ其德一也」○人の才能のすぐれたる者に喩ふ。晉州先賢傳「陳仲擧昂昂如ニ千里ー一」

【騭服二鹽車一】チツフクスレバエンシャヲ 賢者の賤役に服するに喩ふ。戰國策「――上ニ太山一、中坂遷延、負ニ轅不ニ能ー一上一」賈誼、弔ニ屈原一文「騰ニ駕罷牛一兮驂ニ蹇驢一、驥垂ニ兩耳一兮服ニ鹽車一」

【騭馬之馬】チツバノバ 千里の馬となるべきことを窺ひ認む馬の法官、掌行「――、赤顙之乘也、師ニ顏之人、亦顏之徒也」乘は副馬、顏は顏回。

【騭馬之馬赤顙之乘也】チツバノバセキソウノジョウナリ 志のあるだけにても、其の仲間なりとの意。前條參看。

【使ニ騭捕ニ鼠】チツヲシテネズミヲトラエシム 千里の馬に鼠を捕へさす。人を使ふ道を誤り、賢人をつまらぬ官職に任ずるに喩ふ。莊、秋水「騏驥驊騮一日而馳ニ千里一、捕ニ鼠不ニ如ニ狸狌一」

【騭相】チツソウ ㊥。

騭ーダレュウは良馬の名。＝驌驦。騭駿。

【騭尾】チツビ 駿馬の尾。轡にて、すぐれたる人のしりへの喩。史、伯夷傳「顏淵雖ニ篤學一、附ニ驥尾一而行益顯」

【附ニ驥尾一】フビス 蒼蠅は驥尾に附きて千里に致す。後進の士が先輩により名を成すに喩ふ。後漢書、隗囂傳「帝報以ニ手書一曰、蒼蠅之飛、不ニ過ニ數步一、而託ニ驥尾一、得ニ以絶ニ羣」注「張敞書曰、蒼蠅之飛、不ニ過ニ十步一、自託ニ驥之尾一、乃騰ニ千里之路一」前條參看。

【騭馬】チツバ 駿馬の種。高玉詩、ー一ー「騭ニ馬、飼ニ錦已作ニ行」

【騭子龍文】チツシリュウブン 二人の賢き子の稱。北史「裴宣明二子玄鸞・景鴻、並有ニ逸才一、河東呼ニ景鸞一爲ニ騭子一、景鴻爲ニ龍文一」

【騭足】チツソク 駿馬の足。轉じて、すぐれたる才能ある俊人に喩ふ。次條參看。

【展ニ騭足一】テンチツソクヲ 豪傑の士が、十分に其の才を展ぶるに喩ふ。騭は一日千里を行く名馬。蜀志、關統傳「吳將孫邵遺ニ先主書一曰、龐士元非ニ百里才一也、使ニ處ニ治中別駕之任一、始當ニ展ニ其騭足一耳」

【騭尾】チツビ 駿馬の尾。轡にて、すぐれたる人のしりへの喩。史、伯夷傳「顏淵雖ニ篤學一、附ニ驥尾一而行益顯」

【附ニ騭尾一】フビス 蒼蠅は騭尾に附きて千里に致す。後進の士が先輩により名を成すに喩ふ。後漢書、隗囂傳「帝報以ニ手書一曰、蒼蠅之飛、不ニ過ニ數步一、而託ニ驥尾一、得ニ以絶ニ羣」注「張敞書曰、蒼蠅之飛、不ニ過ニ十步一、自託ニ驥之尾一、乃騰ニ千里之路一」前條參看。

【驤】ジョウ　十八畫　陽　通昔ジョウ

○あぐ。あがる(擧)馬が首を擧けて速にかける。吳師道詩「千官馬首ー」○をどる(踊)蜀志、諸葛亮傳「進欲龍ー虎視、苞括四海」○はす(馳)張衡賦「奮翅而騰ー」

【驩】クヮン　十八畫　寒

○よろこぶ「交ー」＝歡。○馬の和樂する貌。

【驩洽】クヮンカフ よろこびやはらぐ。漢書、文帝紀「施ニ惠於天下一、驩侯四夷一、遠近ー一」

【驩感】クヮンカン よろこびたのしむ。孟、盡心「覇者之民、ー一如也、王者之民、皞皞如也」(皞皞は廣大自得の貌)＝歡娛。

【驩迎】クヮンゲイ よろこびむかふ。陶潛文「僮僕ー一、稚子候ニ門一」＝歡迎。

【驩然】クヮンゼン 心よろこびてうちとけた貌。漢書、董仲舒傳「粲然有ニ文以相接一、ー一有ニ恩以相愛一」

【驩兜】クヮンタウ 唐堯の時の人、共工と比周して惡を爲す、舜之を崇山に放つ。崇山は今の湖南大庸縣の西南。

【驩附】クヮンフ よろこびてしたがよふ。唐書「度ニ朝廷可ニ行者一、益軍中ー一」＝歡附・悅附・歡悅等附。

【驪】リ　十九畫　支　通黎

○くろごま、純黒色の馬。讀、月令「冬駕ニ鐵ー一」○ならぶ、驩を併ぶ。○盜ー=は千里の馬。

【驪歌】リカ 告別のうた。驪駒を見よ。于志寧詩「黃龍未ニ平時、ー一不ニ用ニ兵一」

【驪姬】リキ 驪戎(周の時の國名)の女、晉の獻公の妃、太子申生を譖して死せしむ。

【驪駒】リク ○くろごま。○送別の時にうたう歌。漢書、儒林傳「客歌ニー一ニ」註「逸詩云、ー一在ニ門、僕夫具存、ー一在ニ路、僕夫整ニ駕」

【驪山温泉】リサンオンセン 驪山(陝西省西安府即ち古の長安の附近に在り)に在るいでゆ。唐代、温泉宮を作る。度書、地理志「京兆府昭應縣、本新豐、有ニ宮在ニ驪山下一(中略)始名ニ温泉宮一、天寶六載、更ニ温泉一曰ニ華清宮一」長安志「驪戎來居ニ此山一、故名」

【驪珠】リシュ 得難くして價の貴きたま。莊、列禦寇「千金之珠、必在ニ九重之淵、而驪龍頷下一」

【探ニ驪頷一】タンリガン 驪龍即ち黒き龍の頷下を探りて其の珠を獲る。前條

參看。世說、文學「元徽之與二劉夢得一、皆趨若二在二白傅第一、各賦二金谷懷古詩一、劉先成、白覽レ之曰、四人——、于先潛探レ珠、所レ餘謂爪、何用レ邪」白傳は白樂天。

【驪龍之珠】ハリュウノタマ　黒色の龍のあごの下に在る名珠。得難き寶に喩ふ。驪珠を見よ。

骨部

【骨】コツ　月

○ほね、動物の肉中に在りて體を支持する堅牢なる物質「一骼」「肌一」「筋一」「骸一」○ほねがら、ほねぐみ「一相」「仙一」○かばね、むくろ、からだ「病一」○きはみ（極致）○ひとがら（風度）人の品格「風一」○氣だて、意氣剛直にして妄りに人に屈せざる氣象「俠一」「氣一」○物事をくみ立てて支持する者「扇一」○文の體格。李白詩「遙藥文章建安一」○死人に喩ふ。晉書「下無二怨一、上無二怨人一」○こつ、火葬して後に殘る白骨。○調子、呼吸「一を覺える」

【骨梗】コツカウ　すぢばりてこはし。古董品錄、用レ筆——、甚有二節法一」

【骨鯁】コツカウ　剛直にして君主の過失を直諫する。又其の人。晉書、嵇紹傳「一一下（同二於物一）疑一に假に作る（次條參看）＝剛腹。

【骨鯁之臣】コツカウノシン　剛直なるけらひ。假は魚骨、直言の受け難きこと骨の喉にとどまるが如きに喩ふ。史、刺客傳「方今與外困二於楚一、而內空無二——一、是無二如レ我何一」韓愈、爭臣論「朝廷有二直言——一」

【骨格】コツカク　ほねぐみ。吳融詩「——凌レ秋勁」＝骨骼・骨法。

【骨骼】コツカク　前條に同じ。衆くの骨を聯ねて成るもの、人類の如く肉の內に在るものを內——といひ、甲殼動物の如く肉の外に在るものを外——といふ。

【骨幹】コツカン　ほねぐみ。世說「韓康伯雖レ無二——一、然亦膚立」

【骨關節】コツクワンセツ　兩骨の相接するところのふし。其の活動すべき者を動關節といひ、活動する能はざる者を定關節といふ。

【骨相】コツサウ　にんさう、人の體格狀貌「一學」酉陽雜俎「君——無二道氣一」

【骨像】コツザウ　ほねがまへ。曹植文「奇服曠レ世、——應レ圖」

【骨子】コツシ　かなめ、要點。

【骨質】コツシツ　骨を構成する原質、堅き石灰類と柔き膠類とより成る。

【骨醉】コツスヰ　○ほねまで五はしめる。唐書、王縉皇傳「帝聞行至二四所一、倜然傷レ之、武后促レ詔割二其手足一、反接投二醯甕中一、曰、令二驅——一」○徒世は借りて沈酔の義に用ふ。蘇軾、老饕賦「各眼瀝二于秋水一、或——二于春醪一」

【骨相】コツサウ　○ほねと其の心と。又、骨の心レ輔弼、嘗考「在——一、司命之所レ屬」○心のしんそこ。史、鄭鮮傳「總論二于——一」○本の要點、眼目。文心雕龍「練二文骨之一——」

【骨節】コツセツ　骨のつがひ。＝骨關節。

【骨窠】コツクワ　火葬せし骨を納める窠。＝納骨窠。

【骨炭】コツタン　獸骨を蒸燒にせし炭。＝獸炭。

【骨董】コツトウ　○古道具、古物。露書錄「——乃方言、初無二定義一、東坡嘗作二一一一

——」【折ル骨】非常に力を勞する。荀、脩身「一レ一絕レ筋」【炊レ骨易レ子】兵糧が乏しくして死體の骨をたき、己の子は人情として殺すこと能はざる故に、他人の子と取りかへて之を食ふ。史、平原君傳「鄙鄙之民、——而食、可レ謂レ窮矣」左、宣十五「敬邑易レ子而食、析レ骸以爨」【刺レ骨之恨】甚だしきうらみ。楓窗小牘「——、豈忍而可レ悕」【發レ骨】死して原野に骨をさらす。又、其のさらせし骨。左、襄九「一レ一以還」【骨鯁肉飛】勇者の鬪り舞みて過む形容。吳越春秋「鯁忌之勇、萬人莫レ當、——、拥レ膝而行百里」【刻レ骨銘レ心】深く心に記憶する。後漢書、郭陳傳「刻レ骨定レ分、有レ死無レ二」吳志、周魴傳「銘レ心立レ報、永矢無レ貳」

三畫

【肌】キ　膚に同じ

○はぐ、まける(曲)漢書、淮南厲王傳「一天下正法」○まがる、屈曲する。楚辭、招隱士「林木茂一」○あつむ。あつまる(纏)

【肌膚】キフ　文勢の紆曲せる貌。又、邪曲せる貌。漢書、枚乘傳「其文一一」

【骭】カン　膞(前條)に同じ。

【骭】カン　膞　膕　腨　すね、はぎ(脛骨)膝の下、脛の上「衣至一袖至腕」

四畫

【骫】カ　養

一骾は體が肥かにやすらか。唐韻「一骾、體盤也」注「盤、安舒也」又、たかぶる貌。高元裕直の貌。越堂詩「一骾倚門邊」＝抗骾。

【骰】トウ　尤

さい、すごろくのさい、正方六面形につくりし小さき賭具一より六までの數を記す、塗るに紅黒二色を以てす、故に色子ともいふ。温庭筠詩「玲瓏一子安紅豆」【骰子】すごろくのさい(博戲具)子は助字。五代史、吳越世家「董昌累戰、不レ能レ決、乃以二兵馬一與二一擲一之、而勝者爲レ度」＝博子。

五畫

【骴】シ　支　賁　卦　膏に同じ

○死人の骨のなほ肉ある者。周禮、秋官、蜡氏「掌レ除一一」○鳥獸の殘骸。說文「鳥獸殘骨、臭體可レ惡也」

【骯】コウ　冥　へ。　庚　圏

一髒は骨のやじり(骨鏃)をつけたる矢。通鑑「乃更以一筋射其睛」

【骲】ヒ　質

骯髒(本頁二段)を見よ。

【骯】體(次頁四段)の俗字。

六畫

【骸】カイ　佳

○ほね(骨)「筋一」○からだ、かばね、むくろ、形體の總稱「形一」「一骸」白居易詩「病一漸似レ木」○枯れ朽ちたるほね。左、宣十五「析一以薪」○ばらばらほね(脛骨)

【骸骨】カイコツ　仕官中は其の身を君に捧げしものにて、己の有にあらず、故に辭職を求むるを——といふ。前條參看。史、項羽紀「范增大怒曰、天下事大定矣、君王自爲レ之、願賜二骸骨一歸二卒伍一」歐陽修詩「何時乞二殘骸一」＝乞レ身・乞レ骸。

【骸炭】瓦斯を取りたる後の石炭、コークス。高熱燃料とす。

【骸語】かばね。唐書、文藝傳「編身首分裂、將士一一不レ掩、宜下於二雒陽一相二掃高原一、起二大冢一招魂而葬上、旌二善之戰也」

【骸筋】からだの骨と、すぢと。歐陽修詩「嬉子學レ讀レ勞、徒自苦二一一」＝筋骸。

【骸骨】かばね。又、からだ。史、魏陰侯傳「爲二一一於中野一」漢書、趙充國傳「充國乞二一一」

【乞二骸骨一】

【骹】カ。　肴　巧

○はぎ、あしくび、脛骨の足に近くして細き處。○あしくびの狀をなせるものの稱。○ひざした(膝下)

【骼】カク　陌

○ほね、されこうべ(枯骨)禮、月令「掩一胔一」禽獸の骨。○人類全體の骨「骨一」「筋一」

【骷】ク　圏

○こしぼね（腰骨）○また（股間）＝胯跨。

七畫

【骾】カウ　梗

○食ひし骨の咽の中に留まるにいふ。○轉じて人のかどだちて流俗に從はざる義とす「骨ー之臣」晉書、崔洪傳「骨ー不同於物」＝鯁。

【骾訐】カウケツ　直言して人の惡をあばく。唐書、李密傳「條二指失政、其骨ー訐、不ン避二宰相一」

【骭】カン　寒

もも（股）＝脛・脾。

八畫

【髁】（一）クワ　（二）クヮ　麻　圓

（一）ひざのほね（膝骨）○ものほね（髀骨）（二）誤ークヮイは正しからざる讀。莊、天下「誤ー無任」（誤も同義）

【髀】ヘイ　薺　紙

○もも（股）○股の骨。漢書、賈誼傳「至於髖ー之所」

【髀肉之歎】ヒニクノタン　英雄が久しく馬に乘りて戰場に出でず、股の肉のみ肥えて功業の成らざるを歎くにいふ（常に馬に跨りて戰場を馳驅する時は髀肉がやせるものなるが故）蜀志、先主傳「劉備日、常時身不ン離ン鞍、髀肉皆消、今不二復騎一、髀裏肉生、日月如ン流、老將ン至、功業不ン建、是以悲耳」

【髀】ヒ　髀（前條）に同じ。

【骿】ヘン　先

一枚あばら、肋骨が連合して一となる（幷脅・駢脅）

【骿脅】ヘンケフ　一枚あばら。晉語「閉二其一一以ン觀二其狀一」＝駢脅。

十畫

【髆】ハク　藥

かたのほね、かひがね、かひがらぼね（肩甲・肩胛）＝膊。

【髕】ヒン　眞

【髕】ヒン　（一）ヒン　（二）ヘン　（三）ビン　軫　（四）ヒン　震

（一）ひざのほね（膝骨）（二）ヘンは髕胖なる貌。又、たかぶりて屈せざる貌。後漢書、趙壹傳「抗ー倚門邊」＝骫髒。

【髑】トク　屋

○髑髏。

【髑髏】トクロ　○しゃれこうべ。○頭蓋骨。

十一畫

【髏】ロウ　尤

○白骨の貌。莊、至樂「莊子之楚、見空髑髏ー然有形」○骨の讀。

【髓】ズイ　紙

○骨中の心に在る脂の如きもの「腦ー」「骨ー」○植物の莖幹の中心にある柔かなる部分。○すべて物事の中心たる要所「神ー」○物事の精華。李商隱用詩「筆下滿滿文章ー」

【髓腦】ズイナウ　○なうみそ。沈約、內典序「戒爲二鬼神之功一、戒實二ー一之力一」○轉じて首要の職に用ふ。隋書、藝文志「周易ー二卷、易腦經二卷、鄭氏撰」

【體】テイ　紙　俗は体に作る　体は別字

○からだ「身ー」「父母之遺ー」○てあし（四肢）論、孟子「四ー不動」○もと、物事のどだい「本ー」○もの「物ー」「液ー」○もちまへ（本性）○すがた（容姿）○かたち、つくる（成形）○かたち、なり、すがた、さま（形狀）「形ー」○のっとる（法）○のり（道法）○ことわり（理）○おこなふ（行）淮南、氾論「聖人以身ー之」○よる（依）○わかつ、きまりよくわける。周禮、天官「ー國經野」○むすぶ（結）○まじはる（接）○そだつ（生）したしむ（親）禮、學記「就賢ー遠」○察する「ー察」「ー恤」○うらかた（兆象）詩、衞風「ー無咎言」○かた、きまり、一定の格式「ー裁」「文ー」「詩ー」「政ー」「國ー」○いけに、「性ー」○子孫、血統。○ついで（順序）○禮する「ー貌」○ーは一律の義。史、叙布傳「同功一ー之人也」

【體育】テイイク　身體を强健にする爲めの

教育。德育・智育の對。

【體要】タイヨウ ○物事の大切なるところ。切實にして簡要なる點。書、畢命「政貴レ有レ恆、辭尚ニ―一」○大體と綱要と。荀悅文「通ニ遂―一、以述ニ漢紀ニ」

【得レ體】タイ 上下尊卑等、凡て容體の宜しきを得る。禮記「官得ニ其體一、政事得ニ其施一」疏「體者容體、謂ニ設レ官分レ職各得ニ其容卑之體一」

【具體】グタイ 全體をそなへる。孟、公孫丑「舟牛・圭子・顏淵則一レ―而微」（聖人たる全體の德を具へてゐれど人物が小いさし）

【體溫】タイ からだの溫度「―ー表」

【體解】タイ 古の酷刑、四體即ち手足をきりはなす。史、荊軻傳「ニ―軻」以徇」

【體行】タイ 實際に身に行ふ。後漢書、註「―猶ニ躬行一也」

【體格】カク ○からだ、ほねぐみ、肉づきなどのやうす。研北雜志「李邕得ニ其氣一而失ニ于―ー」○詩文の體製。

【體軀】タイ からだ、身體。

【體令】タイレイ よく其の眞義を體しさとる（參照）＝體察領會。

【體刑】タイ 死刑以外に、人體に加へる刑罰。笞杖徒流など。＝體罰。

【體系】タイ 別別にはなれたる物を一まとめにして 秩序正しく組み立てしもの。

【體言】タイ 文法にて名詞其の他すべて語尾の變化せざる語。川言の對。

【體徳】タイ からだがうみつかれる。事「神迷―ー、人事曠而不レ修」

【體意】タイ てほん。又、のっとる、法を取る。文心雕龍「楚辭者ー―ニ於三代一、而風ニ雅於戰國ニ」

【體國經レ野】タイコクケイヤ 都城と邑里とを地わりして營む。體は分ケ國は城中、經は里數を定める。周禮、天官「――、設レ官分レ職、以爲ニ民極ニ」

【體裁】タイサイ ○ありさま。かたち。又、文詞の格式、即ち體制と剪裁と。鄧文原詩「上ニ下漢唐一觀ニ―ー、古今李杜擅ニ雄豪ニ」＝體製。○みえ、體面。

【體操】タイ 身體を動かして體育の發達をはかる學科。

【體悉】タイ 身を其の人の地位におきて詳しく其の心を察し知る。體諒して其の心曲を洞燭する。北史、許聰傳「帝欲ニ進以ニ名位一、輒皆讓不レ受、帝亦雅相ー―」

【體貌】タイ ○からだ（身體）容貌、南陽王保傳「ー―勁健、善自將重八百斤」○性質。東坡題跋「先期ー―恭儉、在位四十有二年、宮室苑囿無レ所レ益」

【體恤】タイジュツ 己の身を假に其の人の境遇に置きて察しあはれむ。

【體制】タイ 詩文の體裁。詩、周頌、譜疏「比ニ於商頌ハ一ー又異」＝體裁・體製。

【體製】タイ ほねぐみ。又、詩文などの體裁。製一に制に作る。滄浪詩話「詩之法有レ五、一曰ー―」劉夢得外集「崔白工畫ニ花竹翎毛ニ、ー―清麗作用疏通」＝體格・體裁。

【體認】タイ 心にふかく認識して實踐躬行する。

【體貌】タイ ○かたち。形體と、相貌と。宋玉賦「玉爲レ人ー―閑都、目多ニ微辭ニ」○禮容をなして敬意を表する。後書、賈誼傳「ニ―大臣ニ而屬ニ其節ニ」＝禮貌。

【體魄】タイハク からだ、肉體。禮記「ー―則降、知ニ氣在レ上」

【體例】タイレイ 體制に同じ。

【體驗】タイケン てほん。劉孟見聞錄「置ニ近代之師承、合ニ當時之ー―ニ」＝模範。

【體膚】タイフ からだと、はだへと。又、からだ。孟、告子「猶ニ其ー―ニ、空ニ乏其身ニ」

【體面】タイメン みえ、面目、ていさい（體裁）

【體用】タイヨウ 事物の本體と其の作用と。華嚴經疏「ー―一源、顯微無レ閒」

【體量】タイリョウ からだのめかた。身體の寸法。

【體驅】タイク 己の身を其の地位に置きておもひやる。＝體恤。

十四畫

【髑】トク ドク 屋

されかうべ、雨風にさらされ肉の全くおちて白骨となりしかしら。莊、至樂「見空ー髏髐然有レ形」

【髑髏】トクロ されかうべ。廣雅「顱顖謂ニ―ー一」

十五畫

【髖】㊀クヮン 寒 ㊁コン 元

㊀ものうへ、こしぼね、軀幹の下部に在りて兩股の端に連接する者（解上骨）＝臗。㊁しり、ゐさらひ（臀）

十八畫

【髑】ケン　先　ほほぼね（輔骨）＝顴。

高部

【高】㊀カウ　㊁カウ　豪　號　高は俗字

㊀たかし（崇）低又卑・下の對。「ー山」「ー樓」「禮器「爲ー必因丘陵」爲」下必因川澤」○おほし（多）大いなり。○あがる（揚）のぼる（騰）○たかぶる。○たっとぶ、たっとし（貴・尊）○物價がたかい。韓愈詩「少室山人索價ー」○たかしとする、たかくする。○まさる（勝）あらはる（著）○けだかし、流俗に超えたる者「ー尚」「ー蹈」「ー行」○たかき德。たかき位。たかきおこなひ。○老ゆ「ー年」○ー麗（カウライ）は國名。漢代、ー句驪と名づく、後、朝鮮、又、韓國と改む。今、我邦に併合す。㊁たかさ。○圖たか、物のかず、數量「金ー」「石ー」「收穫ー」

解字 高は崇なり、古は臺觀の高き形に象とり、口口に从ふ、冂は臺の下部の形に象どる、俗に高に作るは非。

同訓異義 カウ、高・崇・屋・齊・邵○高は下又は卑の反、巍峩し高年は年老いたる義、高手は上手の義。○崇は山のさかしく高きなり。轉じて崇敬の義とす。書經「功崇惟志、業廣惟勤」○屋は中央高きなり、天の形を穹窿といふ。○齊は、すらりと高きなり。詩經「出ー自二幽谷一遷二于喬木一」○邵は德の高きにいふ。揚子「年彌高、而德彌邵」

【高壓】カウアツ　空氣の壓力強し、高度の壓力。

【高位】カウ　高きくらゐ。漢書董仲舒傳「身寵而居ニーー一」＝崇位。

【高意】カウイ　たかくすぐれたる心。孟郊詩「ーー還卓卓」

【高峻】カウシュン　名だかきいしゃ。唐書、甄權傳「究二習方書一、遂爲ニーー一」＝高手醫・良醫。

【高獻】カウケン　すぐれたるはかりごと。曹毘文「ーー遠謀、朝有二證芳一」＝高謀・高誤。

【高逸】カウイツ　たかくすぐれる。宣和畫譜「風氣ーー、前所レ未レ見」

【高韻】カウイン　たかきおもむき。孟郊詩「物表即ーー、人間訪二宣公一」

【高詠】カウエイ　○聲だかにうたふ。晉書、王羲之傳「興レ盲ーー」○他人の詩歌の敬稱。杜甫詩「ーー實劍篇、神交付二冥漠一」

【高遠】カウエン　○高くよはし。孟、離婁「天之高也、星辰之遠也、苟求二其故一、千歳之日至、可二坐而致一也」○志が高くして遠し。魏志、郝原傳、注「原以ニーー清白一顧レ志、澹泊口無レ擇言一、身無二擇行一、故英偉之士向レ之」

【高臺】カウダイ　高きのき、樓は樓に同じ。元稹詩「樓臺ーー雨、窗來激箭風」

【高屋建瓴】カウヲクケンレイ　高き屋根の上より瓶の水をこぼす。勢の盛んにして防ぐべからざる喩。一說に瓴は屋上の瓦溝。史、高祖紀「譬猶下居二高屋之上一建中瓴水上也」

【高恩】カウオン　高きめぐみ。＝洪恩・鴻恩。

【高牙】カウガ　たかくおしたてたる牙旗。潘岳詩「桓桓梁征、ーー乃建」

【高牙大纛】カウガダイトク　高き牙旗と、から牛の尾にて飾りし大いなるさしものを。皆高位に居る者の儀仗。歐陽修、畫錦堂記「ーー、不レ足レ爲二公榮一」

【高柯】カウカ　たかきえだ。鮑照詩「ーー危且竦、鉢石横復仄」＝崇柯。

【高歌】カウカ　聲だかにうたふ。舊唐書、裴度傳「ーー放目、以二詩酒琴書一自樂」

【高廈】カウカ　たかきいへ。陳雲詩「栽栽ーー、有二蔭其涼一」＝崇廈。

【高雅】カウガ　けだかくしてみやび。魏志、崔林傳「稟二自然之正性一、體ニーー之弘量一」

【高厦】カウカ　○高きねだん。仲之元、玉臺、卿光顯篇「ーー連城」○よき評判、高き聲價。高適詩「ーー人爭重」

【高仰】カウギャウ　○高くあふぎうやまふ。詩、小雅「高山仰止、景行行止」○高くあふむく貌。左傳「ーー、鼻也」卽一に卬に作る。

【高抗】カウカウ　心を高くして屈せず。後漢書、梁鴻傳「ーー終身不レ仕」＝高尚。

【高眼】カウ　けだかくして剛直。唐書、吳筠傳「性ーー不レ耐レ浮二沈於時一」

【高閣】カウカク　たかどの。後漢書、樂安傳「其所レ起屬舍皆有二重堂ーー一、陂池羅注」溫庭筠詩「ーー清香生二靜境一、夜堂疏磬發二禪心一」

【東二高閣一】カウカクニ　たばねて高き棚の上に置く。久しく使用せざる義。晉書、陳壽傳「京兆杜父・陳郡殷浩、並才名冠レ世、而翼鳥之重也、每時レ人曰、此聖宜下束二之高閣一、俟二天下太平一然後議中其任上耳」

【高下在レ心】カウカコロニアリ　○高くするも低くするも皆心に在る。時に因りて宜しきを制する義。左、宣十五「隨曰、——川澤納レ汚、山藪藏レ疾」○進退貧賤の擇をほしいままにする義。後漢書、何邁傳「今將軍龍驤虎步、——」

【高加索】カウカサス　山名、黑海・裏海の間に跨り、歐・亞二洲の分界を爲す。

【高架鐵道】カウカテツダウ　土を盛りて市街の地上に高く架設せし鐵道。

【高岸】カウガン　高ききし。詩、小雅「ーー爲

ン谷、深谷為ン陵」土地、又、人世の變遷に喩ふ(陵谷之變)

【高岸深谷】カウガンシンコク　山河の變轉するをいふ。前條參看。

【高奇】カウキ　高尚にして他と異る。宋史、王安石傳「安石議論一一、皆以二辨博一資二其說一」

【高軌】カウキ　高尚なるみち。採納、喰道論「被二服弘訓一懇ン齊一一一」

【高氣】カウキ　けだかき氣象、高尚なる志氣。吳志、虞翻傳、注「翻少好ン學、有二一一一」

【高基】カウキ　上手のどうち。劉基詩「死中求ン活是一一」

【高貴】カウキ　○身分が高くたっとし。又、其の人。〓貴顯。○價たかし。

【高義】カウギ　たかき德行。又、人の爲めに盡すきりだて。史、信陵君傳「以ン公子之一一、爲二能急一人之困一」

【高誼】カウギ　○高き義理。〓漢書、董仲舒傳「講二問一一之日久矣」〓高義。○あつきよしみ、他人の情の敬稱。

【高議】カウギ　高遠なる議論。說苑「猛獸狐疑、不ン若二蜂蠆之致ン毒也、一一而不ン可ン及、不ン若二庸論之有ン功也」

【高丘】カウキウ　高きをか。宋玉、高唐賦序「妾在二巫山之陽、一一之岨一」〓高阜。高陵。

【高其佩】カウキハイ　清の鐵嶺の漢軍人、字は韋之、且園又、南村と號す。天資超邁、詩に工に、指頭畫を以て名あり。

【高脚】カウキャク　ながきあし。爾雅「鵠如ン鶴」注「似ン鶴而長頭一一、猛悪多ン力」

【高尊】カウソン　高く弓なりになりたるおほぞら。沈約文「天體一一、地形欵厚」

【高舉】カウキョ　○遠方へ行く。漢書、東方朔傳「今先生率然一一、遠集二吳地一」○俗を脫してけだかく隱れ居る。屈原、卜居「寧超然一一以保ン眞乎」〓高蹈。

【高拱】カウキョウ　何事もせず兩手を高くこまぬく。史、蘇秦傳「今君一一而兩有ン之、此臣之所二以爲ン君願一也」

【高興】カウキョウ　たかくすぐれたるおもむき。興趣の旺盛なる義。杜甫詩「青雲動筆一一、脚事亦可ン悅」〓高趣。

【高炬】カウキョ　高尚なるのり。張華詩「先民有ン作、貽ン我一一一」

【高空】カウクウ　高きそら。杜甫詩「胡笳樓上發、一聲入二一一一」

【高訓】カウクン　たふときをしへ。後漢書、崔駰傳「因二天賦之自然一、誦二上哲之一一一」〓高教。

【高句驪】カウクリ　國名、一に高句麗に作る、省して高麗と稱す、其の先はもと漢の縣、今の奉天興京老城地方、眞番郡に屬す、其の王莽を——侯といふ、後漢の世、勢漸く盛んなり、遂に王國を建つ、漢、——縣治を潦陽附近に徙して之を過く、東晉以後、奉天の南部、朝鮮の北部の地、悉く其の有に歸す、唐初高宗の爲めに滅ぼさる。

【高臥】カウガ　世俗をはなれてけだかく隱居する。晉書、謝安傳「隱二一一東山一」

【高科】カウクワ　科擧即ち官吏登用試驗に優等の成績を得る。晉唐書、元載傳「策入二一一一」

【高華】カウクワ　高き名望。晉書、王恭傳「自負二才地一一、恒有二宰輔之望一」

【高晦】カウカイ　けだかく隱れ居りて己が才をくらます。謝靈運文「曩世歷紀一一二潤澤一」

【高會】カウクワイ　盛んなるまとゐ。史、高祖紀「置酒二一一一」〓盛會。

【高懷】カウクワイ　けだかき心。杜甫詩「一一見二物理一識者安肯哂」

【高廣】カウクワウ　○たかきと、ひろきと。精神綠「其一一與二寺樓一等」○たかくひろし。

【高暢】カウチャウ　心高くしてむなし。常應物詩「一一出二塵表一、遺遙澹二心神一」

【高官】カウクワン　位の高き官職。〓大官。

【高冠】カウクワン　高くりっぱなる冠。後漢書、宦者傳論「一一長劍、紆ン朱懷ン金者、布二滿宮闈一、盡子「昔齊桓公一一博帶、以治二其國一」

【高館】カウクワン　高きやかた。晉書、郗鑒傳「遣二一一一以候ン賢、設二重閣一以待ン士」

【高觀】カウクワン　高きたかどの。王粲賦「登二城隅之一一、紹臨」下以翔翔」

【高家】カウケ　國德川時代、幕府の禮式をつかさどりし家。吉良氏の類。

【高勁】カウケイ　けだかくしてつよし。宣和書譜「修蕙一一、柔ン雲凌ン霜」

【高啓】カウケイ　高青邱を見よ。

【高弊】カウヘイ　たかきもとどり。後漢書、馬援傳「城中好ン一一、四方高一尺」

【高屐】カウゲキ　たかきあしだ、高き木履。

【高傑】カウケツ　けだかくすぐれる。又、其の人。沈約、七賢論「神才一一」

【高潔】カウケツ　利にまよはずして心高くいさぎよし。漢書、馬宮傳「卽升二宮行殿一一」

【高見】カウケン　○高くすぐれしかんがへ。○他人の意見に對する敬語。

【高言】カウゲン　○身分不相應なる大いなることを言ふ。〓大言・壯語。○高尚なることば。韓愈詩「大句幹二元造一一、軋二香酵一」〓高辭。

【高原】カウゲン　山麓に連る高き原野。王維詩「山下孤烟遠村、天邊獨樹一一」

【高軒】カウケン　○たかきのき。潘都賦「聯二一一以臨ン山、列二綺窗一而瞰ン江」○高き軒車。唐書、文藝傳「李賀字長吉、七歲能二辭章一、韓愈、皇甫湜始聞未ン信、過二其家一、使二賀賦一詩、援ン筆輒就、如二素構一、自目曰一一一過二二人大驚、自ン是有ン名」此の故事によりて貴人の來訪を一一過といふ。

【高軒過】カウケンクワ　貴人の來臨を尊う

せしにいふ。前條參看。

【高賢】カウケン　德たかくすぐれる。又、其の人。漢書、禮樂志「一一愉愉民所レ懷」

【高峯】カウホウ　たかくあがる。嶮遠、三峯洞詩「下入裂二坤軸一、一一插二青冥一」

【高鵬】カウホウ　高きほほばね。北齊書、神武紀「長頭一一」‖高擧。

【高顯】カウケン　たかくあらはれる。杜篤、論都賦「一一弘麗、可レ思可レ觀」詩、魯頌閟宮「大庭氏之庫」疏「魯於二其地一作レ庫、一一故登以望レ氣」

【高古】カウコ　けだかくして古雅。劉勰新語「詩格極二於一一一」

【高悟】カウゴ　すぐれたるさとり。十六國春秋「待レ匠故世有二一一之期一」

【高枯】カウコ　高く秀でたる梧桐。後漢書、馬融傳「棲二鳳凰于一一一」

【高庭】カウテイ　古の戲術、つなわたり（走索）通典、後漢時、賀正旦、以二大繩一繫二兩柱一、相去數丈、使二兩伎女舞行二繩上一、相逢比肩不レ墜、唐時謂二之走軟索一」

【高樓】カウロウ　たかきかまへ。宋宏三國名臣贊「志在二一一一、翔レ雲及レ陸」

【高座】カウザ　○たかき座席。李白詩「黃金師子乘二一一一」○圖寄席などの演壇。

【高才】カウサイ　すぐれたるはたらき。又其のはたらきある人。後漢書、賈逵傳「諸生一一者二十人」

【高柴】カウサイ　孔子の弟子の名。史、仲尼弟子傳「一一字子羔、長不レ盈二五尺一、受二業孔子一、孔子以爲レ愚」

【高選】カウセン　俗氣なくしてさっぱりする。蘇舜欽詩「余心本一一、慎爲二廬土一傷」

【高材疾足】カウサイシツソク　からだが高く、足力はやし。すぐれたるはたらきある人に喩ふ。史、淮陰侯傳「秦失二其鹿一、天下共逐レ之、於レ是——者、先得レ瑟」鹿は帝位に喩ふ。

【高壯】カウサウ　すぐれて高くさかんなり。宅經「德位一一」

【高燥】カウサウ　高くしてかわく。南史、高昌國傳「其地一一、築レ土爲レ城、架レ木爲レ屋」

【高顴】カウカン　高きひたひ。‖隆顴、隆顴。

【高策】カウサク　すぐれたるはかりごと。王粲、上二劉右相一書「遠凝二一一一、上應二忠貫一」

【高札】カウサツ　圖○たかふだ。德川時代に法律命令などを高く通路にかかげし札。‖高榜。○入札中の第一番の高價を記したる札。

【高山】カウザン　高き山。詩、小雅「一一仰止、景行行止」說苑「一一之巓、無二美木一、傷二於多陽一也、大樹之下、無二美草一、傷二於多陰一也」

【高山冠】カウザンクワン　外官謁者儀制の服する冠の名。後漢書、輿服志「——、一曰レ側」注「制如二通天冠一」‖方山冠（宋史、陳希亮傳）

【高山景行】カウザンケイカウ　高き山と大いなる道と。高山は人の仰ぐもの、景行は人の行く所、よりて天下の萬人に尊敬せらるるものに喩ふ。詩、小雅「高山仰止、景行行止」止は助字。

【高山流水】カウザンリウスイ　音樂の微妙なる形容。列、湯問「伯牙善レ琴、鍾子期善聽、伯牙鼓レ琴、志在二高山一、子期曰、善哉、峩峩兮若二泰山一、志在二流水一、子期曰、善哉、洋洋兮若二江河一、伯牙所レ念、子期必得レ之」この故事によりて知音・知己の義に用ふ。

【高掛】カウクワイ　高もかけはし。李端詩「蜀門參樹合、一一有二猿悲一」

【高士】カウシ　德たかきむらひ。志高尚にして仕へざる人。史、谷仲連傳「新垣衍曰、吾聞、谷仲連先生、齊國之一一也」‖高人。

【高旨】カウシ　○他人の意旨の敬稱。隋書、楊素傳「一一峻筆、有レ若二天陛一」○高尚なる心。盧諶詩「謙懷遐躋、有レ愧二一一一」‖高懷。

【高志】カウシ　○けだかきこころざし。論衡「一一妙操之人」○他人の意志の敬稱。

【高雛】カウスウ　ほらのある高き山。許渾詩「一一乍疑三峽近」

【高秀】カウシウ　○才行がたかくひいでる。後漢書、列女傳序「才行尤一一者、不三必專在二一掃一而已一」○風采がすぐれて秀でる。元好問詩「大似二廬外人一眉宇見一一一」

【高秋】カウシウ　あきのたけなはなる時節。杜審言詩「明月一一到、愁人獨夜看」

【高識】カウシキ　たかき見識。晉書、謝鯤傳「雖簡有二一一一」

【高人】カウジン　心高尚にして仕へざる人。駱賓王詩「一一儻有訪、興盡扳須レ回」‖高士。

【高深】カウシン　高きと、ふかきと。又、高くしてふかし。嵇康琴詩「曲終山水契二一一一」

【高紳】カウシン　身分たかきむらひ。紳は縉紳。歐陽修文「在二一一一學士家一」

【高庭】カウテイ　始めて封侯せられたる君の堂。說苑「一一者、始封君之謂也」

【高謝】カウシャ　たかきうてな。阮籍詩「華館臨二皎日一、一一隔二微塵一」

【高尚】カウシャウ　けだかし。卓風ならず。易、蠱卦「上九、不レ事二王侯一、一二其事一」

【高爽】カウサウ　秋をいふ。爽は五音の一、秋に配するが故。梁元帝纂要「秋曰二素商一、亦曰二一一一」

【高唱】カウシャウ　聲だかにうたふ。西京雜記「後宮美レ首一一、聲入二雲霄一」‖入二雲霄一は聲調の激越なる形容。

【高情】カウジャウ　○けだかきこころ、けだかきおもむき。謝靈運詩「逸人貴二自我一、一一屬二天運一」○人の己に盡しくれたる志の敬稱。

【高翔】カウシャウ　たかく飛びかける。戰國策「黃鵠舉二其六翮一而凌二清風一、飄搖乎一一」

【高航】カウカウ　たかくうちひらける。漢書、宣帝紀、注「謂陵育雖ニ一一地一爲レ之」

【高爵】カウシャク　高き身分。貴き爵位。史、傳斬等傳贊「陽陵侯傅寬、信武侯靳歙皆一一」＝尊爵。

【高手】カウシュ　すぐれてたくみ、上手。又、其の人。次條參看。

【高手醫】カウシュイ　すぐれてたくみなるいしゃ。後漢書「東平王蒼到レ國病、詔遣二太醫丞一將二一一一視レ病」＝國手。

【高嘉】カウカ　ながきよはひ。宋史、富弼・文彦博傳「又皆享二一一於承平之秋一」＝高年。

【高趣】カウシュ　けだかきおもむき。南史、陶潛傳「少有二一一」

【高峻】カウシュン　○山が高くけはし。嵇康、鸞鳳賦「故其嬉二遊一一一樣二時幽深一」○けだかし。南史、謝瑍傳「風格一一」

【高峰】カウシン　たかく聳ゆ。水經、注「建白樓甚一一」＝高聳。

【高春】カウシュク　午後四時頃。淮南、天文「日至二淵虞一曰二一一」

【高蹤】カウショウ　けだかきおこなひ。漢書、揚雄傳「踵二三皇之一一」＝高行。高躅。

【高遠】カウエン　たかくしてふかし。孫綽文「德既純固、茲宇一一」

【高世】カウセイ　高く流俗に超ゆる義。唐書、崔威傳「威素有二一一志、遊談新進」

【高世之主】カウセイノシュ　高く世にすぐれたる有德の君。樂毅、報二燕惠王一書「只レ有二高二世主一之心一」より出づ。晉書、江統傳「上書曰、——、不レ尚二異物一、故能正二天下之俗一、刑二四方之風一」

【高逝】カウセイ　たかく去りゆく。遠思道獄「行雖離而一一、聲嘯雖而相續」

【高棲】カウセイ　俗をはなれてけだかく住む。謝靈運、山居賦「遊二自然之神趣一、盡二一一之意得一」

【高製】カウセイ　他人の詩文の敬稱。徐陵文「爭造二陸門一、請レ觀二一一」

【高聲】カウセイ　大音聲。龍城錄「一一論二義一卷」

【高青邱】カウセイキウ　明初長州の人、名は啓、字は季迪、吳淞江の青邱に居る、因りて青邱子と號す、博學にして詩に工なり。楊基・張羽・徐賁と竝稱して四傑の目あり、其の作りし文、太祖の怒に觸れ、洪武七年、市に腰斬せらる、時に年三十九、其の詩文集を——全集といふ。

【高嘯】カウセウ　聲だかにうそぶく。齊書、劉善明傳「一一閑軒、鼓琴自翫」

【高卑】カウヒ　高きはなすび。蘇軾詩「一一濃鐵散二荊蛾一」

【高節】カウセツ　けだかきみさを。左思、吳都賦「端委之所レ彫、一一之所レ興」

【高說】カウセツ　○すぐれたる言論。後漢書、徐防傳「引文明者爲二一一」○他人の言論の敬稱。

【高漸離擊レ筑】カウゼンリゲキチク　荊軻の友、高漸離が巧く筑を撃ちし故事。史、荊軻傳「荊軻至レ燕、愛二燕之善擊レ筑者、高漸離一飲於燕市一、——、荊軻和而歌、相樂也、後荊軻奉二太子丹命一、刺二秦始皇一、不レ果而死、始皇召二見高漸離一、悟二其善擊一、與レ之、赦レ之、乃矐二其目一、使レ擊レ筑」

【高祖】カウソ　○祖父の祖父。○遠祖をいふ。○受命の君をいふ。○漢唐二代は創業の帝を稱す。

【高祖父】カウソフ　曾祖父母のちち。

【高祖母】カウソボ　曾祖父母のはは。

【高祖王姑】カウソワウコ　高祖王父の姉妹。爾雅「高祖王父之姊妹、爲二一一」

【高祖王父】カウソワウフ　おほぢぢ。爾雅「曾祖王父之考、爲二一一曾祖王父之妣、爲二高祖王母一」

【高僧】カウソウ　德たかき僧侶。韋應物詩「夜對二一一無二言一」

【高堂】カウダウ　たかくかさなる。最上段。杜荀鶴詩「獨上二層一一」

【高足】カウソク　弟子中のすぐれたる者。世說、文學「郗玄在二嶌融門下一、三年不レ得二相見一、一一弟子傳授而已」＝高弟・上足。

【高足弟子】カウソクテイシ　すぐれたる門人。前條參看。

【高大】カウダイ　○貴きやから。○高姓の一族。魏書、宗族傳「遵矣一一世記二丹圖一」

【高第】カウダイ　高科に同じ。等第の高きもの。官吏登用試驗の成績優秀なるもの。漢書、尹翁歸傳「以二一一一入爲二右扶風一」

【高蓋】カウガイ　たかきうてな、又高くしてたかなる地面。左思、吳都賦「遵二姑蘇之一一一」褚亮詩「一一晉俯臨、飛甍望二輕雲一」

【高堂】カウダウ　○たかく立派なるいへ。蜀都賦「置二酒一一、以御二嘉賓一」○人の家の敬稱。○父母をいふ。李白詩「仗レ劍辭一一一」

【高蹈】カウトウ　○遠く行く。左、哀二一一「使二我一一一」○俗を脫し身をいさぎよくして隱れ居る。張協、七命「嘉遯龍盤、甄世一一」

【高達】カウタツ　才が高くして通達する。後漢書、戴良傳「才說一一、而識論尙奇」

【高談】カウダン　高尙なるはなし。晉書、殷浩傳「一一莊老說、空務レ日、雖レ云レ談レ道、實長二華競一」

【高壇】カウダン　高き祭の壇。唐樂章「奠二玉一一、燔二柴廣庭一」

【高直】カウチ　○たかね。唐書、韋湊傳「一一傷レ廉」＝高値。○圓たかね。＝高價・貴價。

【高致】カウチ　けだかきおもむき。晉書、哲庾傳、呂安服二哲廉一一」＝高趣。

【高情】カウジャウ　貴き家のよつぎ。宋書、蔡興宗傳「名門一一、多欲レ結レ姻」

【高秩】カウチツ　祿を多くする。位を高くす

る。又、多く高き縁位。後漢書、朱暉傳論「——厚禮、允答二元功一」‖厚秩。

【高枕】カウチン　まくらを高くする。安心して眠る。漢書、高后紀、退下レ——而王二千里一」

【高殿】カウデン　たかき官衙。白居易詩「——大館居二中央一」

【高燈】カウトウ　たかくすむ。雲笈七籤「氣清——、積陽成レ天」

【高閣】カウカク　高尚なる行のあと。歐陽修、祠堂賦「知二其無一可二奈何一而安レ之兮、乃聖賢之——」

【高低】カウテイ　高きと、ひくきと。楊倞、皇徽賦「屈曲溝趾、——稽畦」‖高卑。

【高弟】カウテイ　高足に同じ。史、禮書「子夏、聖門之——也」‖高足弟子。

【高鳥】カウテウ　たかくとぶとり。史、淮陰侯傳「——盡良弓藏」

【高談】カウダン　たかくをどりあがる。杜甫詩「虎豹——以虛攫」

【高超】カウテウ　高くすぐれて俗をこえる。梁簡文帝詩「英遇八解心、——七花宮」

【高闊】カウクワツ　○高さしらべ。馬融、長笛賦「超延促柱號鐘——」○圓己の意見・主義などを力說する。

【高潮】カウテウ　○滿潮時の極度。○圖時勢・感情などの最も盛んにはげしくなりし時期。

【高遠】カウエン　字は雖夫、唐の渤海の人、玄宗の時、有道の科に擧げられ、蜀彭州刺史、刑部侍郎、左散騎常侍に累官す、氣を負ひ放言し、權近目を側つ、年五十にして始めて詩をつくり、卽ち工なり、一篇出る毎に、好事者輒ち傳布す、高常侍集十卷あり。

【高殿】カウデン　たかき殿堂。梁、昭明太子詩「置酒臨二——一」‖高閣。

【高等】カウトウ　高き試驗に等第する。後漢書、蔡玄傳「以二——一擢拜二議郎一」

【高等官】カウトウクワン　國官吏の等級の一、一等より九等に分つ、三等以下を奏任官、二等以上を敕任官といふ。

【高騰】カウトウ　たかくのぼる。雲笈七籤「超卓——、正可下策二蹇雲龍一、遊中騁五嶽上」

【高德】カウトク　高き德。又其の德ある人。常袞、吏部尙書制「漢魏以來、多用二宿儒一——」

【高年】カウネン　としより。漢書、武帝紀「予鄉聖二先二者文一奉二——一古之道也」‖老年。

【高謀】カウバイ　天子の子を求める祭の名。又其の神。禮、月令「仲春之月、以二太牢一祠二于——一」

【高抱】カウハウ　けだかき心。陸龜蒙詩「——相逢各絕レ塵」‖高懷。

【高望】カウバウ　○高き所よりながめる。傅汝舟詩「秋日同——、秋空指顧閒」○志望を高くす。又、高き志望。史、孔子世家「——而遠志焉」

【高榜】カウバウ　高きたてふだ。蘇軾詩「飛簷臨二古道一、——動二遊人一」

【高遊】カウユウ　たかくとばし。王禹偁詩「以レ鼓近二擊利一安得レ成——一」‖高邁。

【高庇】カウヒ　○高き樹又家のかげ。韓愈詩「夏陰倘——」○他人より受けし惠の敬語、おかげ(御蔭)

【高批】カウヒ　他人より受けし批評の敬語。‖高評。

【高卑】カウヒ　○高きと、ひくきと。‖高下・高低。○たっときと、いやしきと。‖貴賤。

【高庳】カウヒ　たかきと、ひくきと。貴きと賤しきと。淮南子「孟冬之月、蟄二丘隴之小大一——一」‖高卑。

【高飛】カウヒ　たかくとぶ。詩經「有レ鳥——、亦傳二于天一」吳越春秋、勾踐陰謀傳「大夫種曰、——之鳥、死二於美食一、深泉之魚、死二於芳餌一」‖高翔。

【高鼻】カウビ　たかきはな。隋書、南蠻傳「林邑人、深目——、髮拳色黑、俗皆徒跣」

【高髮】カウハツ　たかきそら。韓愈詩「寒鴻鳴渚耳、宿霧裹——」‖九霄。

【高品】カウヒン　閑雅の品格の高きをいふ。沈約、基品序「漢魏名賢、——間出」

【高評】カウヒヤウ　○他人より受けし批評をいふ敬稱。○よきひょうばん。

【高息】カウソク　たかきをかの宋史、韓世忠傳「數分二隊一、據——一」‖高岡。

【高風】カウフウ　○すぐれて高きみさを。夏侯湛、東方朔畫贊序「覩二先生之餘一

彩一想二先生之——一」‖高節。○高き風の風。曹植、仙人篇「飛龍繞二景雲一——吹二我輿一」

【高芬】カウフン　たかきかをり。晉書、郗鑒傳贊「道徹忠勤、——遠映」

【高文典冊】カウブンテンサク　敕命によりて作れる貴重の文書。詔勅祭文の類。阿房雜記「楊子雲曰、筆札之際、我爲之師、飛書馳檄、用二枚皐一鄙劣下、朝廷之中、——、用二相如一」

【高廟】カウベウ　高祖のおたまや。史、叔孫通傳「衣冠月出、出二游——一」

【高壁】カウヘキ　たかきかべ。魏志、陳泰傳「——深壘、挫二其銳氣一」

【高篇】カウヘン　すぐれたる詩文。韓維詩「——藻成レ誦」‖雄篇。

【高誤】カウゴ　すぐれたるはかりごと。梁書、王僧孺傳、奇才絕學、壓略——」‖高策・深謀・淵謀。

【高朋】カウホウ　けだかきとも。王勃、滕王閣詩序「勝友如レ雲、千里逢迎、——蒲レ座」

【高邁】カウマイ　たかくすぐれる。晉書、裴楷傳「風神——、容儀俊爽」‖超邁。

【高慢】カウマン　じまん、たかぶりおごる。梁簡論「恃レ此——」‖自負・驕慢。

【高味】カウミ　すぐれたるおもむき。韓偓、雨詩「此時——更誰論、擁レ鼻微吟空佇立」

【高名】カウメイ　たかきほまれ。後漢書、殿光傳「少有——、與二光武一同遊學」‖高譽・盛名。

【高明】カウメイ ○見識たかく智慧あきらか。董仲舒、對策「尊ニ其所ニ聞則ー矣」○高くあかるき邸宅、富貴の家。揚雄、解嘲「ー之家、鬼瞰ニ其室ニ」○たかどの、樓觀。韻、月令「仲夏之月、可ニ以居ニー」○人に對する敬稱、あなた。漢書、孔融傳「ー雖父、曾與ノ僕有ニ恩舊ー乎」○志高くして物に屈せず、事理に明か。晉、洪範「ー柔克」

【高冥】カウメイ ○高くしておくぶかし。後漢書、蔡邕傳「沈精重淵、抗志ー」○高くをぐらきそら。孟郊詩「愛屬立ニ平地ー、棲稜矜ニー」

【高妙】カウメウ すぐれてたくみ。北史、姚僧垣傳「僧垣醫術ー、爲ニ當時所ノ推」

【高免】カウメン 園ごめん、おゆるし。

【高茂】カウモ たかくしげる。水經、注「林木ー、猿鳴至清」

【高門】カウモン ○高きもん。又、門をたかくす。曹植文「建ニー之蜚峨ー兮」○高貴の家。魏志、賈詡傳「男女之嫁娶、不ノ結ニー」○漢代の宮殿の名。三輔黃圖「未央宮中、有ニー殿ー也」

【高聳】カウソン 高くとびあがる。晉書、墓容虔記「垂猶ノ鷹也、飢則附ノ人、飽便ー」

【高陽酒徒】カウヤウシュト 酒のみをいふ。酈食其ガ其ガ漢王に見えて自ら「吾ー也、非ニ儒人ー也」といひし故事に本づく、高陽は地名（史、酈食其傳）

【高躍】カウヤク たかくをどる。戰國策「惕ニ雖虛喝、ー而不ニ敢進ー」

【高論】カウロン たゝきさとし。他人の說論の敬稱。束晳文「未ニ敢聞ニ子之ー」‖高教。

【高晉】カウシン たかきほまれ。晉書、左思傳「安定皇甫謐有ニー」‖高名。

【高麗】カウライ ○朝鮮の古名、こま。石介詩「東逾ニ滄海東ー射破ー城」○高句驪の略稱。張衡詩「佛法傳ニ過高句麗」高句麗は卽ち高句驪、北史に始めて麗に作る。高句驪參看。

【高麗盆】カウライボン 高麗の國にて製せし盆。鮮軾詩「盛以ニ――ー」

【高浪】カウラウ たかきなみ。杜甫詩「長風擧ニー」‖洪浩自ニ太古ー」

【高朗】カウラウ 高くほがらか。詩經「ー令終」魏氏春秋「夏侯太初、風格ー、弘雅博暢」

【高廊】カウラウ たかきわたどの。成公綏賦「左馮ニ廣庭ー、右依ニー」

【高棚】カウホウ たかきらんかん。梁元帝、臨ニ荊州ー詩「ー來ニ蕙氣ー、疎簾復曉光」

【高利】カウリ ○多く利を得る。大いなるまうけ。盧餘、欲ニ待ノ價而沽以射ニー」○準ノ上の高き利息「ー貸」

【高力士】カウリキシ 唐の宦官、玄宗の時、蕭寧等を誅せし功を以て寵任せらる、肅宗の東宮に在るや、兄を以て之に事ふ、後、李輔國の爲めに勢を奪はれて巫州に流さる、唐の宦官の跋扈は力士より始まる。

【高林】カウリン たかき木のはやし。列子「遊ニ晉國ー者、不ノ思ニー嘯澤ー」

【高粱】カウリャウ 穆ビの別名、たかきび、滿州地方に多し。‖黏粟。

【高隆】カウリュウ たかくさかんなり。淮南子、惡之所ノ在、雖ニ一世不ノ能ノ貴」

【高陵】カウリョウ ○たかきをか。易經「伏ニ戎于莽、升ニ其ー」、三歲不ノ興」○蘇の名。史、孝文紀「乘ノ傳詣ニ長安ー、至ニー止」

【高舉】カウキョ たかきとりで。又、とりでを高くする。史、淮陰侯傳「李左車說ニ成安君ー曰、足下深ノ溝ー壁ノ毋ノ與ニ戰」

【高厲】カウレイ すぐれてはげし。人物志「以ノ陵ニ上爲ニー」

【高齡】カウレイ 高年に同じ。‖長齡、遐齡。

【高祿】カウロク 多く受けるふち。‖厚祿。

【高論】カウロン ○俗をはなれたるけだかき論。莊、列禦寇「列ノ窓倘ノ行、離ノ世異ノ俗、ー怨誹、爲ノ亢而已矣」‖高議。○他人の議論をいふ敬稱。

【高話】カウワ ○高尙なるはなし。儲光羲詩「腹中無ニ一物ー、義皇年」○他人の說話の敬稱。

【高哉】カウサイ 山の高峻をいふ感歎詩。李白、蜀道難「噫嘻嚱危乎ー！、蜀道之難、難ニ於上ニ青天ー」

【登ノ高而招】ノボリテカウニシテマネク 高處に登りて人を招く。最も便利よき喩。荀、勸學「――、非ノ加ノ長也、而見者遠、順ノ風而呼、聲非ノ加ノ疾也、而聞者彰」

【登ノ高】ノボリテカウニス 陰曆の九月九日の節句に高山にのぼりて災厄をはらふ年中行事の一、汝南の桓景が費長房の敎によりて行ひし故事に本づく。續齊諧記「汝南桓景、隨ニ費長房ー遊學累年、長房謂曰、九月九日、汝家中宮ノ有ノ災、宜ニ急去ー令ニ家人各作ニ絳囊ー盛ニ茱萸ー以繫ノ臂、ー ノ飲ニ菊花酒ー、此禍可ノ除、景如ノ言、齊家登ノ山、夕還見ニ雞犬牛羊ー、一時暴死、長房聞ノ之、曰、此可ノ代也、今世人九日ー ノ飲ニ酒、婦人帶ニ茱萸ー、始ニ於此ー」

【登ノ高自卑】タカキニノボルニミヅカラヒクキヨリス 高き所に登るには低き所より始める。物事を行ふには順序をふむべきに喩ふ。中庸「君子之道、譬ノ如ニ行ノ遠必自ニ邇ー、譬ノ如ニ登ノ高必自ニ卑ー」書、太甲「升ノ高必自ニ卑ー」

【登ノ高必賦】タカキニノボリテカナラズフヲナス 君子は高山に登れば必ず詩を賦して感想をのべる。孔子の語（韓詩外傳）

【高自標置】カウジヒョウチ 自ら高くかまへて人に下らず。晉書、劉惔傳「裴遐皆問ニ曾積ニ曰談更遜邪、惔曰、楨遜、然故第二流耳、遐曰、第一、復誰、曰、故在ニ我第ー、其――如ノ此」‖高自標榜（唐書、王義方傳）

【高御座】タカミクラ 皇祖皇靈の中央に在る天皇の御座所。轉じてみくらゐ。＝皇位。

髟部

【髟】ヘフ ヒウ 尤 蕭 ○長髪の垂れたる貌。○—鬚は羽旄の飛揚する貌。後漢書、馬融傳「羽毛紛其—鬚」○圖かみがしら。字畫上の用語。

二畫

【髡】髡(次條)の俗字。

三畫

【髡】コン 元 髡は俗字 ○かみをそる。○古の刑の名、髪をそり落す刑。又、其の刑に處する。史、季布傳「—鉗季布」○えだをきる。齊民要術「種柳千樹足柴、歳可—二百樹」○人名。淳于—は齊の辯士(孟子、註)

【髡鉗】カンケン かみをそり、くびがせを施す。又、其の刑に處せられし罪人。史、張耳傳「皆—爲城旦」

【髣】ハウ 養 ○髣髴は似たり、見ることの定まらざる貌。見て審かならざる貌。楚辭「時—以遙見兮」＝彷彿・仿佛。

【髦】(一)バウ (二)ボウ 尤 豪 (一)たれがみ、小兒の髪の垂れて眉にかかれるもの。子が父母に事ふる飾とす。詩、鄘風「髪彼兩—」○ながき毛、毛の中の長毫。○轉じてすぐれる(俊)又、すぐれたる人「才—」「英—」「俊—」「時—」○—丘は前の高き丘。○旄と通ず。○たてがみ(馬鬣)(二)西夷の異稱。詩、小雅「如蟊如—」

【髦士】バウシ 髦は毛中の長毫、因りてすぐれたるさむらひの稱とす。詩、小雅「烝我—士」註「士中之俊、猶二毛中之髦一」＝俊士。

【髦俊】バウシュン 才智が衆人にすぐれる。又、其の人。漢書、敘傳「曁吾照衰、—並作」＝俊髦・英髦。

【髦彊】バウキョウ さげがみのこども。周伯琦詩「稺實豐三黃雲一擊壤喧—」

【髣】髴(本頁二段)の俗字。

【髣髴】ホウフツ かみをそられし罪人。周禮、秋官「—使レ守レ積」

【髢】テイ 霽 ○かもじ、いれげ、そへがみ(髪)他人の髪を染めて、己の髪に添へ加へて多くする。かつら。又、それを入れる。詩、鄘風「鬒髪如レ雲、不レ屑二—一也」

四畫

【髣】キウ 尤 髪の古字 ○うるしぬる、漆ツを以て物を塗る。漢書、趙皇后傳「其中庭形朱、而殿上—漆」○あかぐろきうるし「—飾」

【髯】ゼン 鹽 髯は俗字 ○ひげ。ほほひげ(頬須)「美—」「霜—」「鬚—」漢書、高帝紀「美須—」(顔ニ在るを須ヒゲといひ、頬に在るを—といふ)○蒼—叟は松の異名。

【髯翁】ゼンオウ 明の楊布中髯多くして逢迎を善くすること閹人卽ち宦官に似たり、閹人は鬚なし、故に嘲りて有鬚の閹人と稱す。癸辛雜識「楊存中人號爲二—一、以三其多鬚而善二逢迎一也」

【髯鬚】ゼンシュ ひげをやく、然は燃の本字。度量の寛弘なるをいふ。然レ髯(二六九頁二段)を見よ。

【髯參軍】ゼンサングン 晉の部超の異稱、鬚多くして超温の參軍たり、故にいふ(晉書、部超傳)

【髯主簿】ゼンシュボ 羊の異名(古今注)

【髯蘇】ゼンソ 蘇軾の異稱。鄭尤輯、東坡赤壁圖詩「圖得清風明月一在、鋼レ鬚レ酒付二—一」

【髣】タン 覃 ○かみの垂れたる貌。詩、鄘風「—彼兩髦」

【髣】ヘウ 篠 仿と同じ ＝—髴

五畫

【髭】シ 支 ひげ、くちひげ、うはひげ、口の上の須(須は鬚、口の下のひげ)「白—」「霜—」「美—」

【髭髯】シゼン ひげ。白居易詩「頷下—半是絲」

【髭髮】シハツ 口ひげと、かみの毛と。陳御道詩「—雖レ藏レ老、湖山認客レ身」

【髭眉】シビ 口ひげと、まゆと。統合詩「鬼深髭露齒—」

【髯】髴(本頁二段)の俗字。

【髫】テウ　畫
○うなゐ、たれがみ。男女兒の垂髪(たれがみ)「垂―」○轉じて年の幼き者の稱。陶潛、桃花源記「黄髪垂―」
【髫齔】テウシン　たれがみのいとけなきとし。北史、柳遐傳「幼而爽邁、神彩雋然、――便有二成人之量一、能好二文學一、動合二規矩一」
【髫齓】テウシン　たれがみのよはひ、いとけなきもの。李陵文「秀發二孩髫一、惠彰二齓齔一」
【髫齔】テウシン　たれがみして齒がぬけ代る、七八歳のこども、齓は毀齒。後漢書、逸讀傳「――夙孤、不レ識二家訓一」＝齓髫。俗に髫を齠に作る。庾信、周齊王廟神道碑「未レ逾二――一、已騰二論天下事一」
【髫稚】テウチ　たれがみの幼兒、稚は稚。劉克莊詩「高吟雜二髫選一、序齒遠二――一」
【髫髮】テウハツ　○幼兒の垂れ髪。○轉じて、幼兒の齢。後漢書、伏湛傳「――屬レ志」
【髫齠】テウテウ　おみたるたれ髪。轉じて幼年の齢とす。附靈運、廬陵法師誄「慧心朗識、髫齠――」

【髻】ケイ　畫
○髪の多き貌。○圖たば、つと、婦人の髪を結びて後方に張り出すもの。

【髳】ベウ　尤　髦に同じ
西方蠻族の一種、今の雲南姚安縣以南の地に住せし者。書、牧誓「羌―微盧」

【髮】ハツ　月
○かみ、頭上の毛「散―」「白―」「理―」「怒―」「結―」「亂―」○け(毛)けすぢ。○束―ソクは成童の歳。○窮―キウは北方のはてなる不毛の地、―は毛、草木に喩ふ。
【髮逆】ハツギヤク　長髪賊をいふ。湯平―圖記二十二卷は白雲山人の著。
【髮光可レ鑑】ハツクワカカン　髪黒くして漆の如く、其の光は鑑とすべし。左、昭二八「昔有仍氏生レ女、黒而甚美、光可二以鑑一、名曰二玄妻一」
【髮指】ハツシ　甚だ怒れる形容。史、項羽紀「樊噲(中略)瞋目視二項王一、頭髪上指、目眦盡裂」に本づく。
【髮禿】ハツトク　かみの毛がぬけてはげる。韓愈詩「我髮レ未二盡老一、――骨力羸」
【髮時】ハツジ　かみのはへぎは。鄭谷詩「年來――未レ垂レ白」
【髮圖】ハツヅ　清朝の洪秀全の亂、一名髮賊。＝髮逆。
【髮膚】ハツプ　かみと、はだへと。孝經「身體――、受二之父母一」不二敢毀傷一、孝之始也」
【髮杪】ハツベウ　かみの毛のさき。王規文「鍼鋒於レ毎止息、――可二以翻頗一」＝髮末。
【髮而櫛】ハツジシツ　髪を理むるに、一筋づつ選びて梳る、瑣末の事にとらはれるに喩ふ。莊、庚桑楚「――、數レ米而炊」
【髮易レ貸】ハツエキカリ　家貧しく書籍を購ふこと能はず、母が其の頭髪を剪りて之を賣りて錢を得、書を買ひて子に讀ましたる故事。元史、陳祐傳「祐少好レ學、家貧、母張氏嘗――使レ讀之、長遂博二通經史一」
【髮披レ緇】ハツヒシ　髪をそりて墨染めの法衣を著ける、僧形となる義。宋史、王旦傳「旦及レ寇、遣令――以歸」
【髮易レ酒】ハツエキシユ　己の髪を剪りて酒にかへ、客をもてなす。晉書、陶侃傳「侃孤貧、孝廉范逵嘗過、侃家卒無二以待一レ賓、母湛氏、乃截レ髪以易レ酒、又徹二所レ臥新蓆一、自剪給二其馬一、逵過二廬江一守張夔一稱之、夔召レ侃補二督護一」
【髮膚レ毀】ハツプキ　つみのおほくしてつぐなひきれざる義。史、范雎傳「擢二賈之髪一不レ足以贖二賈之罪一」
【髮短心長】ハツタンシンチヤウ　年は老いたれども智計は深し。左、昭三「彼其髪短、而心甚長」
【髮蒼レ蒼】ハツサウサウ　はげしくいかれる貌。戰國策「士皆瞋レ目、髮盡上、衝レ冠」詩、黍王詩「此地則二燕丹一、壯士――」

【髮】ヒ　支　鬘に同じ
―髻は猛獣のたてがみを富ふ貌。張衡、西京賦「及其猛毅―髻」

【髮】ヒ　眞
かつら、そへがみ、かもじ(髪)「―子」晉書、陶侃傳「侃時食卒、無以待レ賓、其母乃截二髪―一、易レ酒」

【髯】フツ　物
○髣―ハウフツは、さもにたり、髣(前頁二段)を見よ。○婦人の首飾なる歩搖修詩「蓬首不レ加レ―」

六　畫

【髹】キウ　尤　柒は古字
うるしを物にぬる。うるしぬり。史、貨殖傳「木器―者千枚」

【髮】ハツ うるしをぬる。‖髹漆。

【髻】キョク 仄
○ちぢれがみ。○まげ。髷ワゲの総を曲げて結びしもの。○圖丸ーマルの略語。

【髺】㊀ケイ 霽 ㊁キツ 質
㊀もとどり、たぶさ（總髪）髪を頭上にあつめて束ねたるもの「一子」「高ー」○かみ、むすびがみ。㊁かまどの神。莊、達生「竈有ー」

【髻根】ケイコン もとどりのねもと。韓偓詩「ー一撮慢玉鈿垂」

【髻子】ケイシ もとどり、子は助辭。楊維楨詩「新興ー一換二宮粧」

【髻梳】ケイソ もとどりをくしけづる。陳後主詩「春攪ー一弱、南頌鏡相臨」

【髻】ジ 支
○けぶかし、毛の多き貌。○頬ほおの毛。‖彫。

七畫

【髽】サ 麻
婦人の喪中に結ふ髪にて笄などを用ひず。又、其の髪を結ふ。儀禮、士喪禮「婦人ー一於室」

【髾】ショウ 蕭
○髪の長き貌。○髪の飾。

【髫】チョウ 蕭
○小兒の垂髪。

【髭】シ 支
○くちひげ。

【髯】ゼン 塩
○ほおひげ。

【髦】ボウ 豪
○えりがみ。○俊士。

【髪】ハツ 月
○かみ。

【髣】ホウ 養
○髣髴ホウフツ。

【髴】フツ 物
○髣髴ホウフツ。

【髹】キュウ 尤
○うるしをぬる。

【髺】ケツ 屑
○もとどり。

八畫

【髷】キョク 沃
○まげ。髪を曲げて結びしもの。

【髽】サ 麻
○髪を束ねて髻とする。

【髻】ケイ 霽
○もとどり。

【髻】ケン 先
○まげがみ（髪曲）髪を分けて結ふ。○かみうるはし（髪好）詩、齊風「其人美且ー」

【鬆】ショウ 東 多
○髪の亂れる貌。○あらし（粗）ゆるし。緊の對。すべて物が虚にして實ならず。又、寛くして急ならず「粗ー」

【鬃】ソウ 江 多
○高きもとどり（高髻）○馬のたてがみ（馬鬣）

【鬃鬣】ソウリョウ たてがみ。曹唐詩「欲下騎二ー一ー一追二飛燕一乞二得新城利鈹刀一」

【鬃】テイ 霽 セキ 錫 陌
○かもじ（髢）○をさむ（治）のぞく（除）‖剔。○そる（剃）髪を剃り落す。漢書、司馬遷傳「其次ー毛髪嬰二金鐵一受レ辱」○とく（解）

【鬅】ホウ 庚
ー一髻ホウは髪の亂れる貌、被髪の狀。陸游詩「傍架討蕈書散亂、倚レ扉吟嘯髪ー一髻」又、轉じて廣く物の亂れる貌。白居易詩「ー一香雲滿レ衣」

九畫

【鬍】コ 虞
ー一子は鬚の俗稱。ーもと胡に作る、胡下に生ずるが故。‖胡子。

【鬈】㊀セン 銑 ㊁セン 先 願
㊀女の髪の垂れる貌。楚辭「長髪髮ー一」㊁かみをそる。

【鬐】キ 支
○馬のたてがみ（馬鬣）○魚のひれ（魚脊鰭）

十畫

【鬒】シン 軫
○かみおほし（稠髪）○黒く美くしき髪。左、昭二八「有仍氏生レ女、ー一黒而甚美」

【鬒髮】シンハツ くろく美くしきかみ。詩、鄘風「ー一如レ雲、不レ屑レ髢也」

十一畫

【鬖】サン 侵 咸 覃
○髪のみだれたる貌。○毛の垂れる貌。

【鬖髿】サンソウ 髪の亂れる貌。郭璞、江賦「綠苔ー一乎蔚上」

【鬖鬖】サンサン 髪の亂れ垂れる貌。東觀餘論「紅羽ー一然」

【鬘】㊀バン　㊁マン　㊀通音　㊁マン

㊀かつら、かもじ。○かみかざり、瓔珞ヨウラクの類「華ー」㊁髪の美くしき貌。○ー蒲ブドウは佛書にて茉莉ジャスミン花の異名、髪カミを飾るべきが故（翻譯名義集）

十二畫

【髭】シュ　スㇾ　㊀本、須に作る

○ひげ、あごひげ、おとがひのひげ、口上の毛は髭、頤下オトガヒの毛は鬚。史記「其人皆深眼多ー」○凡そ動物の口の毛をいふ「鳳ー」「蝦ー」「虎ー」○廣くひげの狀をせしもの「ー根」「苔ー」「梅ー」「花ー」

【髭鬚】シュ　ひげあるほほ。周邵詩「坐久清冰落ニーー一」

【髭根】コン　植物の根の分れて髭の狀を爲せる者、稻、麥などの根の類。

【髭鬚】シュ　うはひげと、あごひげと。

【髭髯】シュ　あごひげと、ほほひげと。史、高祖紀「爲人隆準而龍顏、美ニーー一」

【髭鬚如ノ戟】ルゴトシ　ひげの甚だしく剛つき形容。南史、稽康同傳「公ー、何無ニ丈夫氣一」

【髭二張鷹一】ハルタカヲ　上官にこびへつらふ喩。宋史、寇準傳「初丁謂出ニ準門一、重ㇾ參政一、準ノ準共謀、嘗會ニ食中書一、謂ㇾ丁曰、參政、國之大臣、乃爲ニ宮長一所ニ髭邪一、謂ㇾ丁曰、參政、國之大臣、乃爲ニ宮長一所ニ髭邪一、謂起徐拂ノ之、準笑

鬥部

【鬥】トウ　ヅ　冬

○たたかふ。＝鬪。○圖たたかひがまへ、字畫上の語。

五畫

【鬧】ダウ　效

○かまびすし、さわがし、靜かならず、さわぐ、みだる(擾)「熱ー」「喧ー」柳宗元、論師道書「以召ー取怒乎」○しけく盛んなり(繁盛)宋祁詩「紅香枝頭春意ー」

【鬧歌】ダウカ　かまびすしくうたふ。又、其の歌。李頎詩「ー一聊數ノ樽」

【鬧搶】ダウサウ　唐の末、宮女の低く結びし髻。唐詩「還梳ニ一一學ニ宮妝ニ」＝鬧粧粧。

【鬧粧粧】ダウサウサウ　前條に同じ。三唐紀「唐末宮中髻、名ニ一一、望仙髻・隋馬之類」解頤・隋馬は皆に髻の名。

【鬧事】ダウジ　妄りに風波を起す義(國史補)

【鬧鐘】ダウシヨウ　圖目ざまし時計。

【鬧熱】ダウネツ　にぎやか、繁盛。白居易詩「紅塵ー一白雲冷」＝熱鬧。

六畫

【鬨】コウ　カウ　送　絳

○たたかふ(鬪)孟、梁惠王「鄰與魯ー」○たたかふこゑ(鬪聲)とき、ときのこゑ「屯ー」○あつまりさわぐ(衆鬧)「笑ー」「喧ー」

八畫

【鬩】ケキ　カク　錫　陌

○せめぐ、もとる、うったふ、うらむ、互に相怨み爭ふ「怨ー」「鬪ー」「ー訟」○しづか、ひっそり。閟に通ず。

【鬩牆】カクシヤウ　うちわもめがする。兄弟喧嘩。詩、小雅「兄弟既ニ于ー一、外禦ニ其務ニ」(務は侮アナドリ)

【鬩鬩】カクカク　せめぎたたかふ。隋書「兄弟孰相ー一」＝鬩閱。

十畫

【鬪】闘(本頁三段)の俗字。

十二畫

【鬮】㊀カン　㊁カン　覃　豏

㊀さけぶ、ほゆ「咿ー」「豗ー」虎の聲。詩、大雅「ー如ニ虓虎ニ」㊁けものの怒れる聲。

【鬮鬮】カンカン　○虎などのほえる聲。○たけく怒る貌。劉峻、地官、保氏、注「軍旅之容、ー一仰仰」＝闞闞。

十四畫

【鬭】トウ　ヅ　宥　闘は俗字

○たたかふ(戰)互にたたき合ふ「私ー」「搏ー」「爭ー」「苦ー」「奮ー」あらそふ(爭)○けんくわする。○互に勝を爭ふ「ー雞」「ー酒」「ー草」○たたかひ、あらそひ、けんくわ。

【鬭戰場】トウセンヂヤウ　鬪・戰・搏・鬩の別は戰(七一四頁四段)の條を見よ。

【鬭舸】トウカ　船の競漕をいふ。陸游、重午詩「ー一紅旗滿ニ急流ニ」

【鬭閒】トウカン　きそひひらく。蘇軾詩「雪白鷺鷥也ー一」

【鬭角】トウカク　扈根のかどが四方より相向かひて集り合ふ處。杜牧、阿房宮賦「鉤心ー一」

【鬭巧】トウカウ　いくさぶね。吳志、周瑜傳「乃取ニ蒙衝ー一數十、實ニ以ニ薪草ニ、膏油灌ニ其中ニ」＝戰艦。

【鬭牛】トウギウ　牛をたたかはせて勝敗を爭ふ戲。事物紀原「ー一之戲、今俗尙或有レ之、蓋自ニ秦世ニ之始也」

【鬭雀】トウジヤク　こほろぎをたたかはす戲。又は蟋蟀。負暄雜錄「ー一之戲、始ニ於天寶間ニ長安富人、鏤ニ象牙ニ爲レ籠而養レ之、以ニ萬金之資ニ付ニ之一喙ニ」＝鬪蟋蟀。

【鬭具】トウグ　戰爭に用ふる具。魏志、注「鎧甲ー一器械等」＝兵器。

【鬭花】トウクワ　花あはせ、唐天寶の時、長安の士女が春時に行ふ戲。競ひて奇花を戴き插み、多きを以て勝とし、皆千金を以て名花を市ふ(天寶遺事)

【鬭鷄】トウケイ　にはとりのけあひ。荊楚歲時記「寒食ー一レ」

【鬭撃】トウゲキ　たたかひうつ。神仙傳、夫妻各呪ニ一棘ニ使ニ相ー一ニ」

【鬭閱】トウエツ　兄弟中惡しく相あらそふ。魏志、管寧傳、或男女雜錯、或爭レ井ー一、寧患レ之、隋書、宇文化傳「兄弟數ニ相ー一」

【鬭狠】トウコン　あらそひて怒りもとる。孟、離婁「好レ勇ー一、以危ニ父母ニ五之不孝也」

【鬭爭】トウサウ　あらそふ。あらそひ。韓愈文「四方無ニ一一金革之聲ニ」＝爭鬪。

【鬭草】トウサウ　草あはせ。花くらべの戲。荊楚歲時記「端午、結ニ雜綵ニ爲レ樂、鬪ニ百草ニ」荊楚歲時記「競採ニ百藥ニ、鬪百草以爲ニ除毒氣ニ、故世有ニ百草之戲ニ」

【鬪志】シトウ　戰はんとする意志。左傳「特二其城一莫レ有二ー一」
【鬪詩】シトウ　詩を作りて其の巧拙をたたかはす。‖戰詩。
【鬪蟋蟀】シトウシツソツ　こほろぎをたたかはす戲。宋の賈似道半閒堂に於てこの戲を爲す（宋史）‖鬪蟋蟀條參看。‖鬪促織。
【鬪射】シトウ　弓術の優劣をたたかはす。神仙傳「與レ人共ーレー」
【鬪船】セン　いくさぶね。南史、陳後主紀「江中無二ー一ー」‖鬪艦・戰船。
【鬪賤】セン　たたかふ。たたかひ。（後漢文）「豈當習二戲墓之事一、而棄二其ー一之危一也」‖戰鬪。
【鬪促織】シトウシヨク　鬪蟋蟀に同じ。帝京景物略「七月始――、壯夫士人亦爲レ之、鬪有レ場、場有二主者一、其養レ之又有レ師」
【鬪ノ智】トウタクバス　鬪智（六七一頁三段）を見よ。
【鬪茶】トウ　茶の佳劣を爭ふ。江隣幾、雜志「蘇才翁曾與二蔡君謨一ーレー、蔡茶水用二惠山泉一、蘇茶小劣、改用二竹瀝水一煎、遂能取レ勝」
【鬪八】ハツ　天井をいふ。夢溪筆談「屋上渡橡、古人謂二之綺井一、亦曰二藻井一、又謂二之覆海一、今文中謂二之ーー一」
【鬪鶉】イン　たたかひてたふれる。北史、李渾傳「猛獸因レ鬪而傷レ兵」
【鬪而傷レ兵】ヘイ　泥棒を捕へて縄をなふといふに同じ。時を失ふに喩ふ。素問「病已成而後平レ之、猶二渴而鑿レ井、鬪而鑄レ兵、不二亦晚一乎。

十七畫

【鬮】キウ　尤　有
○とる。たたかひて取る。○くじ、紙、又は木の札に記號をつけそれを抽き取りて吉凶可否を卜するもの「拈ーー」「探ーー」‖籤。

鬯部

【鬯】チヤウ　漾
○にほひぐさ、一種の香草（ニホヒグサ）。鬱金草「鬱ー」○祭祀に用ふる香酒の名。ー草と黑黍とをまぜて釀したるもの、芬香にして上下に條暢する「秬ー」○轉じてのぶ「ー茂」「明ー」‖暢。○ゆみぶくろ（弓衣）‖韔。
【鬯人】チヤウ　官名、秬鬯（字解參看）を神に供へることを掌る（周禮、春官）
【鬯酒】チヤウ　鬱金といふ香草と、くろきびとにてつくりたる酒。詩經、魯「王賜二召虎一、以ニー一卣、以祭二其宗廟一、告二其先祖一」‖秬鬯。
【鬯達】チヤウ　のびてあまねくゆきわたる。楊雄復文「和氣順氣、發ー自二廟廊一、而ーー於幽遐一」
【鬯茂】モウ　のびのびとしてしげる。漢書、郊祀志「草木ーー」‖暢茂。

十九畫

【鬱】ウツ　物　俗字鬰は
○しげる（茂）むらがる（叢）又、木の叢り生ずる者。○木の茂りて盛んなる貌「深ー」「蒼ー」「叢ー」詩、秦風「ー彼北林」○物事の盛んなる貌。○うこん、よき香ある一種の草、高さ一尺許、葉は楕圓形にて初夏、紅藍に似たる花開く、香氣高く、百草の長として古代、ー鬯酒をつくるに用ふ「ー金香」○おこる（起）○むす（蒸）○くさし（臭）くさる（腐）○かぐはし（香）○くらし、かすか。○ながし、そだつ。○盛んなる氣、佳き氣。○ふさぐ。ふさがる（塞）心がむすぼれふさがる「ー結」「紆ー」○のびず、あがらず。○しづむ（沈）とどこほる（滯）くったくする。○つむ（積）○うれふ（愛）心が憂ひふさがる「ー愛」○にはうめ。棣の屬　櫻桃（ユスラウメ）に似たる果樹。
【鬱棣】ウツワイ　むしあつし。王褒、聖主得二賢臣一頌「不レ苦二盛暑之ーー一」
【鬱伊】イツ　心結ぼれて伸びざる貌、伊は噫に通ず。後漢書、崔寔傳「智士ーー二ー於下一」
【鬱猶】イツ　しげりて美くしく盛んなり。郭璞、山海經圖贊「蜚海幽薄、從容ーー」
【鬱悒】イツ　心がむすぼれてのびず。方言「ーー懊惱」注「ーー猶二鬱陶一也」
【鬱郁】イツ　香はしき貌。劉孝標文「百ーー二ー於蘭臺一」
【鬱邑】イツ　愁ふる貌。邑は悒。楚辭「心ーー余佗傺兮」‖鬱悒。
【鬱悒】イツ　心むすぼれ憂ふる貌、悒は愁。司馬遷、報二任安一書「是以獨ーー而誰與語」‖鬱邑。
【鬱紆】ウツ　○氣が結ぼれて樂まざる貌。曹植詩「ーー時何念、親愛在二離居一」‖紆鬱・鬱悒。○山阪などの曲りくねる貌。後漢書、馮衍傳「ーー陵二高岫一、出沒望二平原一」
【鬱鬱】ウツ　○志を得ずして氣のふさがる貌。漢書、韓信傳「王日、吾亦欲レ東耳、安能ーー久居レ此乎」‖鬱悒。○樹木のしげれる貌。古詩「青青河畔柳、ーー園中樹」○氣の盛んなる貌。後漢書、光武紀「氣佳哉、ーー葱葱然」

【鬱茂】ウツ　盛んなる貌。孔稚圭、上二劉注律文一表「卓錫之謀、指ニ掌可ヲ致、杜郎之策、一一何遠」‖鬱然。

【鬱湧】ウツ　さかんなる貌。朱松詩「興百室二鄉閭、資物方一一」

【鬱風】ウツ　○心ひすぼれて伸びず。韓愈詩「一一倘不ヲ平」‖鬱結。○地勢などのまがりくねる貌。蘇軾詩「五觀二五丈原、一一如二長蛇」‖鬱紆。

【鬱結】ウツ　こんもりとしてたかし。陸倕文「一一重軒、穿ニ窪反宇」

【鬱結】ウツ　心がむすぼれて伸びず。史、太史公自序「蓋有ヲ所ニ一一」‖鬱風。

【鬱金香】ウコン　○春時、小黄花を開く一種の香草の名。魏略「一一生二大秦國一、二三月花如二紅藍一、四五月採レ之」○美酒の名。李白詩「開ニ瓊美酒一一」

【鬱茂】ウツ　樹木が青青としげれる貌。又、氣の盛んなる貌。‖鬱蒸・鬱鬱蒸蒸。

【鬱森】ウツ　樹木がこんもりとしげる。陳有守詩「寒林氣一一」

【鬱然】ウツ　こもりふさがる。李時勉、北京賦「基ニ壓ニ磅礴一而一一」‖鬱塞。

【鬱塞】ウツ　氣がむすぼれてふさがる。劉蕡、賢良方正策「低徊一一以俟」

【鬱蒸】ウツ　○こんもりとしげれる貌。○氣の盛んなる貌。悲は蒸。曳漢書、光武紀「氣佳哉觀觀蒸蒸」

【鬱陶】ウツ　○氣ふさがりてのびざる貌。書、五子之歌「一一乎予心、顚厚有ニ泄悁一」○天氣がむしあつし。夏侯湛、大暑賦「何太陽之赫曦、乃一一興レ暑」‖陶鬱。○圖くもりてはれはれせぬ「一一しき天氣」

【鬱陶二鄉閭一】ウツトウキンシン　心の憂を晴らす。北夢瑣言「小紹游二鄭寺一以——」

【鬱悒】ウツユウ　○綠に用ふる酒に和して釀す一種の香草の名（一說、鬱と鬯との二草となすは非）周禮「凡祭祀賓客之禮事、和ニ一一以實レ彝而陳レ之」○轉じて其の香酒の名とす。

【鬱怒】ウツ　むすぼれて解けざるいかり。郭璞詩「沈慨一一猶羅レ平」

【鬱盤】バン　おほひめぐる。蘆斷「王維詩跋二輞川圖一「山谷一一、雲水飛動」徐勉詩「此江稱二險峻一、此山復一一」

【鬱佛】ウツ　心ふさがる。劉向賦「志隱陋而一一兮」‖佛鬱。

【鬱慎】ウツ　むすぼれてとけざるいきどほり、胸に鎖つる不平。李商隱文「精靈何處、一一徒極」‖鬱怒。

【鬱閉】ウツ　川などがふさがりて流れず。管子「通ニ一一、以二雍塞一」

【鬱物】ウツ　○氣の盛んなる貌。武帝內傳「雲彩一一、盡爲二香氣一」‖蔚勃。○草木のこんもりと茂る貌。○元氣の盛んなる貌。

【鬱密】ウツ　ふさがりこもりてひらかず。陸龜蒙詩「時當二暑雨後一氣象仍一一」

【鬱茂】ウツ　草木がこんもりとしげる。‖鬱田賦「原隰一一、百草滋榮」

【鬱悶】ウツ　心むすぼれてもだえる。柳宗元文「一一結誰、孤憂厭蘇」

【鬱律】ウツ　煙の上がる貌。郭璞賦「時一一其如レ煙」

【鬱林石】ウツリンセキ　下の故事に因りて、官に在りて清廉なるをいふ。唐書、陸象先傳「陸氏在二姑蘇一、其門有二巨石一、遠近競致爲二鬱林守一、餉錢無レ算、舟輕不レ可レ越レ海、取レ石爲レ重、人稱二其廉一、號二一一一」‖鬱林は郡名、漢代に置く。今の廣西省貴縣の南。

【鬱陵】ウツ　あつさがさかんなり。山海經圖讚、炎氣是蒸、以散二一一一」

【鬱攸神荼】シンウツユ　○鬱壘と神荼と。百鬼の理に循はざる者を簡閱し、執らへて以て虎を飼ふといふ兄弟二神の名（論衡、訂鬼）○門を守る神。風俗通「故今以爲二門神一」

鬲　部

【鬲】（一）レキ　（二）カク　陽　（一）は又、甌に作る

（一）かなへ（鼎）足と足との間のあきて隔たりたるかなへ。一說、足の中空なる鼎。又、足の曲れる鼎、古、盛饌には鼎を用ひ、常飪には一を用ふ「釜一」○かま（釜）（二）へだつ。へだたり。‖隔。○かめ、もたひ（瓦甁）○圖よろひの胸板

六畫

【鬳】ケン　圓　鬲の類。獻の字は之に从ふ。

七畫

【鬴】フ　虞　○かま、なべ（鍋）鍑の屬。○量の名、內方外圓の量器、六斗四升を入る。‖釜。

八畫

【鬻】セン　ジン・シン　寒　おほがま、甑に似たる大形の釜「釜一」

九畫

【鬵】ソウ　東　○すべる（總）すべ集まる。○もろもろ（叢）詩、陳風「越以一邁」○すすむ。奏と通ず。詩、周頌「一假無言」○釜の類。

十一畫

【饟】シャウ　陽　にる（飪）食物を煮煮する。史、封禪書「皆嘗烹―上帝鬼神」

十一畫

【饕】㊀イク　屋　㊁キク　屋　支　㊂シュク　屋　㊀ひさぐ、うる（賣）「販―」「―文」「―米」「―薪」左、昭三「有―」師者」○そだつ（生）やしなふ（養）○てらふ（衒）「衒―」○嫁す。○燠―イク―は匈奴の別名。○淫―イク―は水が溪谷の間を流れる貌。㊁やしなふ（養）○をさなし（稚）㊂かゆ（糜）ゆるきかゆ。＝粥。○かゆを食ふ。左、昭七「饘於是―於是」（饘は厚きかゆ）

【鬻技】イク　技藝を賣りて生活する。莊子「一朝而―百金」

【鬻獄】イク　罪人より金錢を取りて罪を輕減する。北史、韋孝寬傳「―賣官、唯利是視」

【鬻子】イク　書名、一卷、周の鬻熊撰すと題すれども、同旨廣漠、決して三代の舊文にあらず、蓋し唐人の僞託なるべし。

【鬻爵】シャク　爵位を賣り與へる。唐書、鶻宗紀「詔始―レ」

【鬻寶】ヒン　うる、ひさぐ。荀子「儒者―之徒」＝賣買。

【鬻レ文】ブンヲヒサグ　人の爲めに文を撰びて其の報酬を得る。舊唐書、李邕傳「尤長二碑頌一、中朝衣冠、及天下寺觀、多齎二持金帛一往求二其文一、時謂以爲、自レ古一レ―獲レ財、未レ有二如レ邕者一」＝賣文。

十二畫

【鬻餗】ソク　饘（前頁四段）に同じ。

十五畫

【鬻】シ・　眞　にる。にゆ（烹）「―鹽」＝煮。

鬼部

【鬼】キ　尾　○おに。○たましひ（幽魂）死者の靈魂、と雖。○かみ、神として祭れる幽魂。人に害を與ふる惡神、惡魔「惡―」○人の陰險なる者に喩ふ「―蜮」○想像上の一種の怪物、形人の如く頭に角あり、口裂け牙長く虎皮の褌を著く。○佛說にて地獄界に於て亡者を取扱ふ者。ばけもの、もののけ。○たまほめ、二十八宿の一。○方は遠方、一說に國名。○鳥―は鵺鴞。國○おに。すぐれて勇猛なる者の形容「―將軍」○殘忍なる者の形容「―夫婦」○普通よりは特に大いなる物の形容「―百合」「―瓜」○きねう（鬼繞）字畫上の語。

【鬼雄】キユウ　死せし英雄、百鬼の雄傑。楚辭「身既死兮神以靈、魂魄毅兮爲二―一」

【鬼蜮】キヨク　鬼と蜮と。蜮は短狐ハイドロ沙を含みて水中の人影を射れば其の人輒ち病む、而して其の形を見るべからず、二者共に暗中に人を害する者、以て陰險なる人に喩ふ。詩、小雅「爲レ鬼爲レ蜮、則不レ可レ得」

【鬼戰】キセン　鬼神は盈滿を惡む、故に富貴の家を瞰ひて、禍を降さんとするをいふ。揚雄、解嘲「高明之家、―二其宅一」

【鬼氣】キキ　ものすごきけはひ。

【鬼國】キコク　鬼のゐる方位。きもん。典引「仁風翔二乎海裔一、威靈行二乎―一」

【鬼火】キクワ　おにび。楚辭「――兮熒熒」李益詩「寒狐嘯二青塚一、――燒二白楊一」＝燐火。

【鬼瞰赫人】キカンカクジン　虛勢を張りて人をおどかす譬。鹽鐵「乘レ勢作レ威者、如下大人裂二鬼瞰一以驚二小兒一、有レ似レ此」

【鬼工】キコウ　鬼神のたくみ、人間の力にて成し能はざる細工。杜甫詩「峰巒如二―一」＝鬼斧。

【鬼哭】キコク　人鬼のなきごゑ。李白詩「夜靜天寒聞二―一、夜三更泣仿レ此」

【鬼谷子】キコクシ　縱橫家の祖、周代の楚の人、姓名なく、其の鬼谷（河南登封縣の東南）に隱るるに因りて、自ら鬼谷先生と號す。蘇秦・張儀の徒之に師事す、世に傳ふる―一卷は、其の著なりと稱すれども、蓋し後人の僞託に係る。

【鬼市】キシ　○鬼物の來る處。歲時記「秣本坊四門―一、或風雨曉時、告聞二其喧聚之聲一、○夜閉火を點せずして相聚り貿易する處。唐書、四域傳「西海有市貿易不二相見一、各置二直物於旁一、各―一二

【鬼子母神】キシモジン　國千人の子を有すといふ、印度の女神の名、初め人の子を捕へ食ふ惡神なりしが、後に佛戒を得て正法に歸依し、兒育ての神となる。＝訶梨帝母キリテイモ

【鬼神】キシン　○かみ、おにかみ。神明。鬼は陰の神、神は陽の神。中庸「―之爲レ德、其盛乎」○國恐ろしく強暴なるもの。

【質二鬼神一】キシンニタダス　是非を神明に問ひただす。中庸「質二諸鬼神一而無レ疑」

【鬼神害レ盈】キシンガエイヲガイス　神は盈滿を惡みきらふ。易、謙卦「――而福レ謙、人

道怒ノ至而舒ル據ル

【鬼神避之】自ら斷行すれば鬼神と雖も之を避けて妨を爲さず。史、李斯傳「斷而敢行、——」

【鬼薪】秦漢時代の刑の名。薪を採りて宗廟に給せしむる者。史、秦紀「鬼薪白粲二——一」

【鬼出電入】鬼出は蹤跡なきをいひ、電入は其の迅速なるをいふ。淮南、原道「——、龍興雲集」

【鬼吹】怪物のはく氣、邪氣を形容していふ。靈寶七籤「地氣不レ入、——不レ干」

【鬼祟】鬼物のたたり、俗に人の行事の光明ならざるを譏りて鬼祟祟といふ。

【鬼錄】鬼錄に同じ、冥官が死者の姓名を記す帳面。冥官は閻魔ニ

【鬼設】神わざの如き巧みなるこしらへかた。唐賈、孟郊傳「郊爲レ詩神苦——」

【鬼胎】ひそかにおそれを抱ク。

【鬼設】子孫斷絶して先祖の祭をなす者なきをいふ。左、宣四「鬼猶求レ食、若敖氏之鬼、不二其餒一而」而は助字。

【鬼道】○あやしき術、邪術。後漢書、劉焉傳「張魯母有二姿色一、善二——一、往來焉家一」＝魔法。○國六道の一、餓鬼道の略。

【鬼二鬼關一】酸語。破二鬼膽一（二二一頁四段）を見よ。

【鬼畜】おにと畜生と。殘忍非道の者を罵りていふ。

【鬼燈】ほほづき提燈。

【鬼薑狐】鬼神怪物のことを記す良史、薑狐は春秋の世、直筆を以て名ありし史家なるが故。晉書、干寶傳「寶選二集古今神祇靈異人物變化一、名爲二搜神記一、凡二十卷、以示二劉惔一、惔曰、卿可レ謂二鬼之薑狐一」

【鬼方】甚だ遠き地。易、既濟「高宗伐二——一、三年克レ之」一說に地名、今の貴州の地。

【鬼貌】みにくくおそろしき面貌。唐賈、盧杞傳「體陋甚、——藍色」

【鬼斧】鬼神が斧にて削りし如き巧みなる細工。吳聚詩「鉗落——鎚」＝鬼工・神工。

【鬼母】神の名。述異記「南海小屍山中有二——一、產二子鬼一、朝產レ之、暮食レ之、今著梧有二——一神一是也、虎頭龍足、蟒目蛟眉」

【鬼魅】ばけもの、へんげ、妖怪。易經、疏「——謂レ車、怪異之其也」

【鬼面】おにのめん。瀛涯勝覽「往往皆二——一」

【鬼門】○二十八宿中の鬼宿のある方角、艮方即ち東北の隅。陰陽家の忌むところ。隋書、蕭吉傳「廻レ從二長地一——來」○萬鬼の集るところ。文選、注「海東經云、東海有レ山、曰二度朔一、名曰二——一萬鬼所レ聚」

【鬼門關】廣西省に在る關の名、關南瘴氣多く、去る者生還を得ること稀なりといふ、故に名づく。李德裕詩「盧州在二何處一生度——」

【鬼燐】おにび、きつねび。張籍、經二戰地一詩「日入——生」＝鬼火。

【鬼緣】人の死をいふ。又、冥官が死者の姓名を記す帳。魏文帝文「昔年疾疫、親故多罹二其災一、裁二其姓名一、已登二——一」

【鬼話】○妖怪へんげなどの話。調菖長語「一切——啓蒙故事收レ之」○うそいつはりのはなし。通俗編「今以二虛誕辭一爲二——一、當レ屬二說話之類一」

【爲レ鬼所レ笑】貧乏神にわらはれる、運命を知らざる者をあざける語。南史、劉粹傳、劉伯龍者、貧窶尤甚、常在レ家、慨然召二左右一、將レ營二十一之法一、見二一鬼在レ後、撫レ掌大笑一、伯龍歎曰、貧窮固有レ命、乃復——也、遂止」

四畫

【魁】クヮイ　因

○さきがけ、第一。○かしら、をさ、首領「一帥」「首一」「渠一」おも（主）○すぐれる、雄傑。○大いなり、偉大、高大、雄大。史、孟嘗君傳「始以薛公爲一然也」○北斗の第一星。支那にて文運を掌る者と信ぜられ、科擧に應ずる人、之に祈る。○科擧の時、五經に分ちて試驗し、每經の首選一人を一といふ。故に五一又、經一といふ。○おやいも（芋根）廣志「一大子多」○はまぐり（蛤蜊）○小なるをか（小阜）「一陵」○科に通ず。一頭は科頭。○塊に通ず。漢書、東方朔傳「一然無徒」

【魁偉】體が大きく立派。後漢書、郭泰傳「好獎二訓士類一、容納一一」＝魁梧奇偉。

【魁甲】進士の試驗に第一の成績を得たる義。宋史、章衡傳「章衡登二嘉祐二年進士第一一、神宗曰、朕爲二仁宗朝一得一一」＝狀元。

【魁岸】大きくかどばりてたくましく、體貌雄傑の義、岸は廉稜あるなり。漢書、江充傳「充爲レ人一長、容貌甚壯」＝瑰岸。

【魁奇】すぐれて衆人と異なり。韓愈、送二廣道士一序「宜必有二——思信材德之民一生其閒一」

【魁閎】すぐれて大いなり。韓愈文「植槐沈謀一一宜通之士」

【魁傑】すぐれる。又、すぐれたる人。十六國春秋「荷堅委說一一」

【魁元】國科擧の試驗に及第せる

第一番の人。‖狀元・魁甲。
【魁健】クヮイ　たくましく力つよし。唐書、魚朝恩傳「――能二騎射一」
【魁梧】クヮイ　身體壯大なり。史、晉侯世家「吾以爲其人――奇偉」
【魁壯】クヮイ　大いにして立派なる容貌。北史、魏、永昌王健傳「容貌――、所在征戰、常有二大功一」‖魁梧・偉壯。
【魁士】クヮイ　すぐれたる士。呂覽、孟夏紀「――名人」‖名士。
【魁秀】クヮイ　すぐれて大いにひいでる。唐書、李靖傳「姿貌――」
【魁首】クヮイ　〇かしら。明代、科擧、五經を分ちて士を取る、其の首選の者を――といふ。‖首魁。〇わるもののかしら。‖渠魁。
【魁宿】クヮイ　おもだちたる老功の人、老いたる親分。漢書、尹賞傳「所レ當皆――、或故更善家子」注「魁、根本也、宿、久舊也」
【魁帥】クヮイ　かしら、大將。晉書、江逌傳「召二其――一」
【魁星】クヮイ　〇北斗の第一星。奎宿星志「太學奎運歸レ壁、各有二光芒之瑞一、狀元則經二魁位一―杯梓一謂二之〇〇一」〇轉じて狀元の義とす。
【魁然】クヮイ　〇肚大なる貌。史、孟嘗君傳「始以二薛公一爲二一一也、今視レ之乃眇小丈夫耳」〇つちくれの如く動かざる貌。魁は塊と音通。漢書、東方朔傳「――無レ徒、脈然獨居」
【魁選】クヮイ　科擧の試驗に優等にて及第せし義。宋史、洪遵傳「與二兄适一同試二博學宏詞科一、中二―一」
【魁薦】クヮイ　賊どものかしらぶん。後漢書、李固傳「斂二其―一、六百餘人一」
【魁頭】クヮイ　すあたま、何もかぶらぬ頭。後漢書、東夷傳、扶餘人、大率皆―一」‖科頭。
【魁杓】クヮイ　北斗星の首と末と。禮記、注「天文、北斗魁爲レ首、杓爲レ末」
【魁岸】クヮイ　小高きをかと、たかきをかと。周語「幽王爲以爲二―一、讓土落瀆、其有レ陵乎」
【魁梧】クヮイ　すぐれてたくまし、雄傑。後漢書、鮑宣傳「朝臣仁レ有二大儒畜雅自首者又―一之士一」‖魁岸。

【魂】コン　元　又、霓に作る

〇たましひ、人の精神。〇陽に屬する生氣。陰に屬する魄の對。左、昭七「人生始化爲レ魄、既生レ魄、陽曰レ―」疏「附レ形之靈爲レ魄、附レ氣神之爲レ―」〇こころ、意念「詩―一」「旅―一」〇―一は多き貌。
【魂ノ魂】コンバク　心を驚せる、魂は意念。許敬宗、謝表「―ニ―魄一」
【魂氣】コンキ　たましひ。禮、郊特性「―一歸二于天一、形魄歸二于地一」
【魂魂】コン　多き貌。揚子太玄經「―一萬物」‖芸芸。
【魂館】コンクヮン　たましひがきえる、たまげる、甚だしく驚く。元稹詩「感極都無レ夢、―一轉易レ驚」
【魂膽】コンタン　〇たましひと、きもと。心。北齊書、杜弼傳「賀拔破胡―一―一」〇圓くめん、おもはく。
【魂魄】コンパク　たましひ。魂は陽にて神氣、魄は陰にて形體。左、昭七、疏「附レ形之靈爲レ魄、附レ氣之神爲レ魂」

【魄】五　職　ハク　㊀　タク　㊁

㊀たましひ、陰に屬する氣。陽に屬する魂の對。〇こころ（心）〇かたち、からだ（軀體）「形―一」「體―一」〇すきま、ひま。〇つきかけ、月の光「蟾―一」「桂―一」駱賓王詩「露濕論臺―一」〇月の輪廓の光なき部分。死―は月光の全く消滅せし時、陰曆の月の一日。書、武成「惟一月壬辰旁死―一」（旁死魄は二日をいふ、旁は近）〇虎―一は實石の一、樹脂の久しく地中に在りて化石せしもの。‖琥珀。〇蜀―一は杜鵑（ほとゝぎす）の異名。㊁かす。古、帛に通ず。莊、天道「古人之糟―已夫」〇物のこる。史、周紀「其卒―一（烏の鳴聲）〇ひろし。‖薄。旁薄は亦旁―に作る。㊂おちぶれる（零落）「落―一」
【寄ノ魄】キハクをたのむ。賜爵を喜ぶ。左、宣六「厥叔必有二大貴天寄之魄一矣」
【魄史】ハクシ　性。雲笈七籤、情者魄之使、性者魄之吏」

【魅】ビ　寘

〇ばけもの、へんげ、もののけ、妖怪、山林の異氣の生ずる怪物、人の害を爲す者「蝮―一」「山―一」「木―一」〇みいる、人をばかす。
【魅虐】ビギヤク　鬼物の名。王延壽賦「斫二―一一」注「說文、魅、老物也、謂二耗鬼一」

也」【魅狐】ケ 人をたぶらかすきつね。元稹詩「金雞不ㇾ鳴狐ニ―ー」

七畫

【魈】セウ 蕭 すだま。山―は山鬼、木石の怪、一本足の鬼、夜出でて人を犯すといふ。＝山臊。

八畫

【魁】キ 灰 ○みにくし（魏）○―頭は追儺ノトキニカブル四目ある鬼の面。＝類頭。

【魏】㊀ギ ㊁ギ 微 未 グイ 灰 ㊀たかし、高大。魏に通ず。○國の名。戰國の初、晉の大夫―斯、韓趙と共に晉の國を分ちて建てし國。今の河南省の北部、山西省の西南部。後、秦に滅ぼさる。○朝の名。三國の時曹操の子曹丕が東漢に代りて建つ、五世四十六年にして亡ぶ。○東晉の時、拓跋珪建つ、後、東西の二に分れ、東―は北齊に、西―は北周に滅ぼさる。㊁大いなり「―ー乎」【魏魏】ケ 高大なる貌。莊、知北遊「―ー乎其終則復始也」＝巍巍。【魏晉】ケ 清初寧都の人、字は冰叔、勺庭と號す、兄際瑞、弟禧と、皆文章を以て稱せらる、時人寧都の三魏と號す、而して禧尤も著る、稱して魏叔子と爲す、明亡びて仕へず、魏叔子文集二十二卷あり。【魏闕】ケ 高大なる門、宮城の正門にて法令を懸くる所。轉じて朝廷の稱。莊、讓王「身在二江海之上一、心居二乎―ー之下一」＝象魏。【魏紫姚黃】ケ 牡丹の異名、もと魏・姚二氏の栽培に係るが故。牡丹譜「人謂二牡丹花王一、今姚黃眞爲レ王、魏紫后爾」【魏書】ケ 百十四卷、北齊の魏收勅を奉じて撰す。收性輕薄、撰述粗を以て好惡を爲す、穢史の稱あり。＝北魏書。【魏徵】ケ 字は玄成、唐太宗の名臣、徵狀貌揚らず、面を犯し敢諫し、上書二百餘奏、皆剴切ならざるなし、太宗敬憚し鄭國公に封じ、文貞と諡す。【魏武帝】ケ 曹操（六八七―二四五）なり。【魏文帝】ケ 曹操の長子、名は丕、漢を纂ひ洛陽に都す、三國の魏の始祖たり、性文學を好み、博聞強識、著述を以て務と爲す、在位六年。【魏野】ケ 字は仲先、宋の陝縣の人、東郊に居り、草堂を築き、自ら草堂居士と號す、性吟詠を喜み、聞達を求めず、眞宗之を召せども、應ぜず、當て寇準に詩を與へていふ「好去上天辭二宮闕一、歸來平地作二神仙一」と、後ち準貶せらるるに及び、野の言を用ひざりしを悔いぬ、詩を善る精苦、唐人の風格あり、草堂集十卷の著あり。

【魈】㊀タイ 灰 ㊁ツキ 支 ㊀しゃぐま（赤熊）○桓―は人名（論、述而）○頗に通ず、額が出る。史記「―顏蹙齃學」㊁つち、さいづち。＝椎。【魋結】ケ さいづちまげ。結は髻に通ず。史、陸賈傳「尉佗―ー箕踞」＝椎頭髻。

【魍】バウ 養 すだま、水神。又、木石の怪。＝蜩。【魍魎】ケ 水中の怪精。韓愈詩「―ー暫出沒、蛟蟒互蝟蠐」【魍魎】ケ すだま、水の神。又、木石の怪。形三歲の小兒の如く、體は赤黑色にして耳長く、能く人聲をまねて人をだますといふ。家語「木石之怪、夔―ー」韓愈詩「山林民可ㇾ入、―ー莫ㇾ深」＝四兩・蝄蜮・蜮蛹。【魍】リャウ 養 又、兩・蝄に作る 魍（前條）を見よ。

十一畫

【魑】チ 支 すだま、ばけもの。＝蜮。【魑魅】ケ 山林の異氣の生ずる怪物。人面獸身四足、好んで人を惑はす。左、宣三「―ー罔兩、莫二能逢一之」＝蜮魅。

【魔】バ 歌 ○おに、人に障害をなす鬼類「惡―」楞嚴經「降服諸―」○人の心を惑亂し修道のさまたけを爲す者「妖―」「邪―」○外道のあやしき術「―術」「―法」○嗜好ふかきの癖を爲す者「酒―」「詩―」○天―は舞の名。王建、宮詞「十六天―舞袖長」【魔媼】ケ あやしき妖術を爲す老女。南史、東昏侯紀「師巫―ー、殺迎不ㇾ絕」【魔鬼】ケ 惡しき鬼。南史、陳武紀「同泰寺災、帝自、撲―ー也」【魔窟】ケ ○惡魔のすむ所。○轉じて不正の業を爲す者のあつまり居

所をいふ。

【魔軍】マグン　惡魔のむれ。實積經「高座念佛、一一退散」

【魔障】マグワ　㊀正道を修むるさはりとなるもの、得道の邪魔。

【魔術】マグワ　○惡魔の力にて人をまどはすあやしきわざ。‖魔法。○不思議ナルのわざ、手品の類。

【魔道】マダウ　○㊀正法の妨害を爲す邪道。○轉じて廣く藝術などの邪徑に入るにもいふ。

【魔撓】マダウ　みいりて惑はしみだす。關尹子、注「變化百種、一一其人一」

【魔法】マフ　ふしぎなるあやしきわざ。‖魔術。

【魔魅】マミ　ばけもの。錄異記「役二使鬼神一、種二種一一」

【魔方】マホウ　魔術のちから。又、不思議なる力、非常の能力を具有して人をして之を信仰せしむるにもいふ。

【魔王】マワウ　㊀佛法修行の障害を爲す惡鬼のかしら。法華經科註、假二他所作一、以成二己業一一一也」

十二畫

魑（魑）

キ・

㊀

えやみのおに（耗鬼）「菱一」

十四畫

魔

エン

㊀

おそはる。おそふ、夢におそろしき物を見て驚く。正字通「人氣壓心懼神亂則一」梅堯臣詩「夜深忽驚一」

魏

シウ

有　尤

○すつ（悪）○にくむ（惡）醜と通ず。詩、鄭風「無我一兮」

魚部

魚

ギョ

㊀

○うを、いを、鱗のある水族「池一」「海一」「大一」「生一」「乾一」易、中孚「豚一吉」○官吏の身に佩びる魚の形せるおびもの。金史、輿服志「親王佩玉一、一品玉四品佩金一以下佩銀一」遼史、興宗紀「緋衣銀一」○われ。吾に通ず。列、黃帝「姬一語女」（姬は居）○獸の名。其の皮は以て物を飾るべし「一服」○兩目の白き馬。詩、魯頌「有駜有一」○㊀一は衣前、又書紙中に生ずる小蟲、しみ。

【魚鉄】ギョテツ　魚苗の稍大いなる者。

【魚油】ギョユ　鯨・鯖などの魚類より採りしあぶら。雞肋編「食二一一頗腥氣」

【魚乙】ギョオツ　うをの腸。爾雅「魚枕前二之丁二、魚腸謂二之乙一」一說、魚の腰の骨、形乙字に似たりと。

【魚鱗雲】ギョリンウン　魚や鱗の多くあつまるむら地。陸游、雜詩「海上一一、烟中雞犬靜」

【魚鹽之中】ギョエンノナカ　うををすなどり、しほを煮る仲間。孟、告子「膠兩居二於一一一」

【魚鹽之利】ギョエンノリ　うををすなどり、しほを製する利益。史、齊太公世家「通二商工之業一、便二一一一而人民多歸レ齊」

【魚牙】ギョガ　㊀さかな問屋　牙は仲買、口入の義。‖魚牙子。

【魚蝦】ギョカ　うをと、えび。赤壁賦「侶二一一一而友二麋鹿一」‖魚蝦。

【魚介】ギョカイ　うをと、かひと。魚類と貝類と。

【魚蟹】ギョカイ　うをと、かにと。北史、魏宗室傳「秋冬獵二雉兎一、春夏捕二一一一」

【魚肚】ギョト　うをのしほから。膚、內則「膾膚一一」

【魚眼】ギョガン　○うをのめ。王維詩「驚身映レ天黑、一一射レ波紅」○玉に似て非なる者。東方朔、七諫「貫二一一一與二珠璣一」‖魚目。○湯の沸きて泡の立つ形容。李羣玉詩「松聲起二一一一、雨點飜二清露一」‖蟹眼。

【魚雁】ギョガン　てがみ。㊀傳古詩「天涯一一幾浮沈」‖書札。帛書（五六六頁三段）參看。

【魚潰】ギョカイ　軍れるうをが亂れちる。甚だしく敗れて亂れ走る形容。隋書、楊素傳「兵刃交、魚潰一一」

【魚貫】ギョカン　魚を串に貫きたる如く、引き連りて進む。魏志、龐淯傳「將士皆攀レ木緣レ崖一一而進」

【魚形水雷】ギョケイスイライ　魚の形せし黃銅製の水雷、水雷艇より發射して敵艦を爆沈するに用ふ。‖魚雷。

【魚虧】ギョキ　魚獸の皮にて飾れる諸侯の夫人の車。左傳「齊侯歸二夫人一一一」

【魚鼈】ギョベツ　紙の異名。程大昌詩「書籠警二一一一」

【魚戶】ギョコ　れふしの家。魚を捕ふる人の家。盤谿「錢氏閒居二一一盤戶一」‖魚家・漁家。

【魚虎】ギョコ　○河豚の類。はりせんぼん。○翡翠の異名。‖魚狗。○しゃちほこ。頭は虎に似て背に刺あり、勇猛の狀を爲す想像上の魚。‖鯱。

【魚狗】ギョク　翡翠の異名「本草綱目」

【魚鼓】ギョコ　魚のいけす。

【魚翅】ギョシ　ふかのひれ、沙魚の鰭を食用とす。

【魚兒】ギョジ　うをのこ。杜甫詩「瓶罌一一出、銀瓮金甕斜」‖魚子・魚苗。

【魚龍變文】ギョリョウヘンモン　外觀は龍の如くい

かめしけれども、質實は魚なり。事の是に似て非なるに喩ふ。抱朴子「——、似レ是而非、遊レ水面喪、見レ殺即悲」

【魚須】ギョシュ　鮫魚の脊皮、削ひて竹を飾り貝にて物を貼すの器。玉海「筍、天子以二球玉一、諸侯以レ銀、大夫以二一文竹一」

【魚水】ギョスイ　○うをと、みづと。君臣の相得るに喩ふ。蜀志、諸葛孔傳「先主曰、孤之有二孔明一、猶二魚之有一レ水也」‖水魚之交。○夫婦の關係にもいふ。管、小問「詩有レ之、洁洁者水、宵宵者魚、未レ有二室家一」

【魚水緣】ギョスイエン　君臣相得て親む。前條參看。杜甫詩「稍合二社稷安、自笑——」

【魚水契】ギョスイケイ　君臣の深きちぎり。劉備と諸葛亮との故事。李白詩「感遇君臣分、義激——」魚水參看。

【魚生】ギョセイ　生魚の膾。南越筆記「粵俗嗜二生一、以レ鯉以レ鱠玉云、粵は越の也」‖魚膾

【魚稅】ギョゼイ　漁家に課する稅。‖魚賦

【魚潮】ギョチョウ　魚群。

【魚腥】ギョセイ　なまぐさし。うをの臭氣。李綱詩「江村合市厭二腥一」

【魚蔬】ギョソ　うをと野菜と。韓維詩「提攜上二樽酒一、饋不レ過二一一」

【魚膾】ギョカイ　うををすなどろ四つ手あみ。杜甫詩「野食待二一一一」

【魚族】ギョゾク　魚類に同じ。

【魚袋】ギョタイ　魚の形の袋にて、官吏の佩ぶる物。舊唐書、輿服志「咸亨三年五月、五品以上陽二新魚袋一、並飾以レ銀」

【魚涿】ギョタク　うをのむれ。陳鴻祖詩「鳥行沈二蓉蕖一、一一破二漁涿一」‖魚撃。

【魚鼓】ギョコ　魚がくさる。論、輯寇「一一而陶敗不レ合」‖魚爛。

【魚肠】ギョチョウ　○うをのはらわた。爾雅「魚枕謂二之丁一、一謂二之乙一、魚尾謂二之丙一」（丁・乙・丙とはこの三字の篆書の形に似たるが故）○古の寶劍の名。昊の闔廬が用ひて王僚を刺せし者。

【魚鳥】ギョチョウ　うをと、とりと。慈悲、絕交書「山澤一一、心甚樂レ之」

【魚田】ギョデン　國魚附樂ブナの略。魚に味噌をつけて炙りたる料理。

【魚肉】ギョニク　○魚とにく。○魚と獸肉と。○魚や肉をきる如く斬り殺される義。史、項羽紀、樊噲曰、如今人方爲二刀俎一、我爲二一一一、何辭レ矣、張儀傳「毋三爲レ秦所二一一一也」

【魚二魚肉一】ギョニクニスル　魚と肉との如くに斬り殺される。前條參看。

【魚肥】ギョヒ　○魚がこえふとる。○魚の肥、酔翁亭記「溪深而一一」○國さかなごえ、鯡ニシなどにて製せし肥料。

【魚服】ギョフク　えびら。魚獣の皮を張りてつくりし箙。詩、小雅「四牡翼翼、象弭一一」

【魚腹二葬一】ギョフクニホウム　水中に溺死する。屈原、懷沙賦「曾唫二常流一而死二乎江魚之腹中一耳」

【魚米】ギョベイ　○魚と米と。晉書、劉超傳「超家貧、妻子不レ堪二帝手詔饋一之、賜以二一一、超辭不レ受」白居易詩「何況江頭一一腹、赤鱗黃粟香紬飯」○魚を米に代へて食ふ。田家詩「地窩魚養レ米、山芳桂是燃」

【魚苗】ギョビョウ　池に養ふ魚兒、蓋殼の前に比していふ。蜃華錄識「江州等處水澤產一一、地主要レ夏皆取レ之、出售以レ此爲レ利」‖魚秧。

【魚蓮】ギョレン　うをと、すっぽんと。中庸「龍蠖蛟龍一一安焉」

【魚網】ギョモウ　うをを捕ふるあみ。詩、邶風「一一之設、鴻則離レ之」‖魚罔、漁網。

【魚網鴻離】ギョモウコウリ　魚を捕らへんとして網を張りたるに鴻がかかる。求むる所の物を得ずして、反りて求めざる者を得たる喩。詩、邶風「魚網之設、鴻則離レ之、燕婉之求、得二此戚施一」（燕婉は美人、戚施は醜惡の人）

【魚目燕石】ギョモクエンセキ　魚の目と燕山の石と、皆珠に似て非なるもの。虚僞の眞を亂るに喩ふ。韓詩外傳「白骨類レ象、魚目似レ珠、韓愈文「裏二燕石一而屬二玄圃一、帶二魚目一而遊二漲海一、賦取二肆耳一」（玄圃・漲海は珠玉の多く出づる處）

【魚躍】ギョヤク　魚がはねおどる。詩、大雅「鳶飛戾レ天一一二于淵一」

【魚鱗】ギョリン　うをの形せる鎧。兵圖錄「門錦必以レ魚者、取二其不レ厭レ目守レ夜之義一」

【魚鷹】ギョヨウ　みさご。元史、順帝紀「俄布二一一一羣飛啄二食之一」‖雎鳩。

【魚雷】ギョライ　魚形水雷に同じ。

【魚鱗】ギョリン　うをのうろこ。○うろこの如く相次ぎて並ぶ。史、淮陰侯傳「雲合霧集、一一雜遝、燿玉風起」○陣だての形の一。漢書、陳湯傳「夾レ門爲二一一一陣一」

【魚鱗鶴翼】ギョリンカクヨク　魚の鱗を比べたるが如く、又、鶴の翼を張りたるが如き陣形。唐太宗文「躬擐二甲冑一、親當二矢石一、夕對二魚鱗之陣一、朝臨二鶴翼之圍一」

【魚梁】ギョリョウ　川の水を堰きて魚を捕ふるやな。孟浩然詩「水落一一淺、天寒夢澤深」

【魚龍】ギョリュウ　魚と龍と。周禮、大司徒、注「鱗物、一一之屬」

【魚類】ギョルイ　水中に棲む冷血動物。多く

は角質の鱗ロコを有し、鰭ヒレと體筋とにて游泳し、鰓エラにて呼吸し鰾フクロにて體重を加減して浮沈す。‖魚族。

【魚餌】ギョジ　うろこの如くに相次ぎてならぶ。後漢書、宣紹傳贊「一一漢軸、雲也震焉」

【得レ魚而忘レ筌】センヲワスル　筌は竹にて作れる捕魚の具、すでに魚を得て仕舞へば最早筌に用は無し。學問が成就すれば書籍は不用となる如くすべて事物の本を得れば末をば忘るるも可なりとの譬。莊、外物「筌者所二以在一レ魚、——」博雅錄「得レ意而忘レ言、悟レ理而遺レ教、亦猶二——、得レ兎而忘レ蹄」

【煮レ魚】ニルヲ　魚を煮る。韓詩外傳「一レ烹則碎、治レ民煩則敗」

【以レ魚驅レ蠅】ハエヲカルニ　驅逐するに、其の方法を誤れるに喩ふ。以レ肉去レ蠅（一五五七頁一段）を見よ。

【魚藏薪荷動】ウヲカクスニシンカウゴク　池の魚がたはむれて、新らしく生ぜし蓮の葉がゆれうごく。謝朓、游二東園一詩「遠樹曖芊芊、生煙紛漠漠、——、鳥散餘花落」

【魚懸由二於甘餌一】ウヲカケルハカンジニヨル　人は利のために生命を失ふに喩ふ。晉書、段灼傳「臣聞——、勇夫死二於重報一」

【若二魚遊一釜中一】ナンヂガフヲノナカニアソブ　生存すと雖も久しからざるに喩ふ。蘆鰾、漢順帝紀「愚人相聚修生、——、知二其不一レ可レ久」

【魚乘レ水】ウヲノミヅニノル　魚は水に乘りて行く、物は各恃む所あるに喩ふ。說苑「——、猶二風乘一レ風、草木乘二於時一」

一畫

【乁】アツ　㊀　ぎざ、げばり（鮃乁黃顙魚）

二畫

【刀】タウ　㊁　鰹ーはたうを、えつ、だつ。‖鰹魚。

【刁】（國字）　ゑり、水中に箔スダレを竝べ立てて魚を入れて捕ふる仕かけ。‖簀魚箔。

四畫

【攵】カイ　㊃　かれひ。‖比目魚。

【攴】㊀ダッ　㊁ゲン　㊂早　㊃昭　一斷ーダンは、まろくかどなし、圭角なき貌。莊、天下「不レ免於一ー斷」㊁おほうみがめ。‖龜、大鼈。

【鰹】ケツ　㊄　ほしうを、ひもの（枯魚）めざし、竹を以て魚を貫きて乾したるもの。

【鮫】サ　㊅　○さめ（鮫魚）○はぜ。‖鯊。

【鮎】ダッ　㊆　さんせうを（鯢）兩棲動物の一。谷部方物志「一魚、出二溪谷及雅江一、有二足能緣木一、其聲如二兒啼一」

【鈍】トン　㊇　本、豚に作る　河ーンはふぐ。‖河豚。

【魴】ハウ　㊈　をしきうを。本草「一魚一名鯿魚、小頭縮項、穹脊闊腹、扁身細鱗、其色青白、腹內有レ肪、味最肥美」

【魴魚赬尾】ハウギョアカキヲ　をしきうをの尾はもと白し、而るに其の赤きは勞するの甚だしきなり。以て人の勞苦の甚だしきに喩ふ。詩、周南「——、王室如レ燬」

【魨鮐】ハウタイ　㊉　一種の海魚、背部は淡黑色、腹部は白色、體側に棒色の雜點を有す、肉は白く味淡く美なり。‖竹莢魚。

【魯】ロ　㊋　○おろか、にぶし「一鈍」「愚ー」論、先進「參也ー」○すなほ（樸直）「朴ー」「椎ー」○國の名。周武王、其の弟周公旦を封ぜし國にて曲阜に都す、後、楚に滅ぼさる。今の山東省兗州府地方。

【魯魏之敗】兄弟也】ロギノヤブレハケイテイナリ　魯と魏との敗事の能く相似たるをいふ、孔子の語（論、子路）

【魯縞】ロカウ　魯の國に產する薄く細かなるしろ絹の義、韓安國傳「雖二魯縞之末力一、不レ能レ入二一一一」注「縞、素也、曲阜之地、俗善作レ之、尤爲二輕細一、故以取レ喻」

【魯魚之誤】ロギョノアヤマリ　魯と魚とは、字形相似たるに因りて誤る、形の似たる文字を誤るにいふ。抱朴子「諺曰、書三寫、魯爲レ魚、虛爲レ虎」‖焉

馬之誤。

【魯桑】ロサ　葉の少き一種の桑。王禎農書「葚多葉少」

【魯削】ロサ　魯の國より出だす、よくきれる小刀。周禮「鄭之刀、宋之斤、魯之削、吳越之劍、遷乎其地而弗能爲良、地氣然也」削は書刀、古、未だ紙あらざりし時、小刀にて木を削りて書す。

【魯酒薄而邯鄲圍】ロシュハクシカンタンヰ　魯酒は味の薄き酒、人の爲めに意外の關を蒙るをいふ。莊、胠篋「——、聖人生而大盜起」釋文「許慎注淮南」云、楚會二諸侯一、魯趙俱獻二酒於楚王一、魯酒薄而趙酒厚、楚之主酒吏求二趙酒一於趙一、趙不レ與、吏怒、乃以二趙厚酒一易二魯薄酒一奏レ之、楚王以二趙酒薄一、故圍二邯鄲一」

【魯叟】ロソウ　孔子をいふ。蘇軾詩「空餘二一乘椁一、叟は長老の稱。

【魯男子】ロダンシ　下の故事に本づきて、人の女色を好まざる者をいふ。詩、小雅、巷伯篇、毛傳「魯有二男子一、獨處二于室一、鄰人婦繼又獨處二于室一、夜暴風雨至、而室壞、鄰人趨而託レ之、男子閉レ戸而不レ納（中略）婦人曰、子何不レ若二柳下惠一（中略）男子曰、柳下惠則可、吾固不可、吾得レ以吾不可一學二柳下惠之可一乎、孔子曰、欲レ學二柳下惠一者、未レ有レ似二於魯一也」

【魯仲連】ロチュウレン　戰國の時の齊の辯士、燕軍の趙の邯鄲を圍むや、魏、新垣衍をして趙に說き、秦を帝とせんとす、仲連、衍を見て曰く、彼れ若し帝とならば、連、東海を蹈んで死せんのみと、秦軍これを聞きて卻く。史、魯仲連傳「——者、齊人也、好二奇偉俶儻之畫策一而不二肯仕宦任職一、好持二高節一」左思、詠史詩「吾慕——、談笑卻二秦軍一」

【魯鈍】ロドン　おろかにしてにぶし。晉書、桑虞論傳「豈我居不レ擇レ隣、敎有レ所レ闕、何謂——之甚也」‖愚鈍・鈍鈍

【魯陽雲梯】ロヨウウンテイ　魯陽は周代、機械を作るに巧なりし人、雲梯は雲までも達する梯子にて攻城の具。淮南、脩務「楚欲レ攻レ宋、墨子聞而悼之、見二楚王一曰、臣見二大王之必傷一レ義而不レ得レ宋、王曰、公輸天下巧士、作二爲雲梯之械一、設以攻レ宋、曷爲弗レ取、墨子曰、令二公輸般設攻一、臣請守レ之、於レ是公輸般設二攻レ宋之械一、墨子設二守レ宋之備一、九攻而墨子九卻レ之、弗レ能レ入、乃罷レ兵不レ攻、公輸、魯班也」

【魯朴】ロボク　おろかにして飾なし。朴は樸。杜陽雜編「——未二魯爛一入臣籍一」

【魯陽之戈】ロヨウノホコ　天日を招きかへしたる故事、努力の盛んなるにいふ。淮南、覽冥「魯陽公與レ韓搆レ難、戰酣、援レ戈而麾之、日爲レ之反三舍」魯陽は今の河南省魯山縣の治。

【魯靈光殿賦】ロレイクワンデンフ　後漢の王延壽の作、漢の景帝程姬の子恭王餘の立てたる魯靈光殿の賦、文選賦類に載す。世說、汰侈「劉玄碩在レ洛、車服飲食、擬爲二侯王一、伴爽數十、能爲二解樂一、悉敎二鼓讀一——」

【魯論】ロロン　論語に齊論・古論——の三種あり、一は魯人の傳へしもの、後世論語の異名とす。何晏、論語集解序「安昌侯張禹、本受二一、魯夫子所說一、善者從レ之、號曰二張侯論一、爲二世所レ敎」宇文虛中、時習齋詩「——二萬二千字、悟入從初一句中」

【鮞】（魚部十畫）に同じ。

【鮓】鮨（魚部十畫）に同じ。

圖かます。海魚の一、鋭尖りて鋒の如く、身圓く肥えて長し、多く乾魚とす。‖梭魚。

【鮊】鮠（魚部十六畫）の俗字。

【鮎】（國字）なまづ（鮎）

五畫

【鮪】イウ　尤　はえ。‖鮥。

【鮭】カイ　佳　一蝶は鰈の多く竝べる貌。又、裝飾の重なれる貌。潘岳、笙賦「一蝶參差」

【鮓】サ　禡　○すし、つけうを（鮨）魚を鹽、又糟につけたるもの、おしずし。醃魚・糟魚の類。○圖すし、煮たる野菜魚などを縱へたる條に酢を加へしもの。

【鮦】シウ　尤　はや、はえ（鯈）‖鮥。

【鯊】セイ　麻　支　たちのうを（刀魚）えつ、身狹く薄くして頭長く恰も刀形をなせる一種の魚。‖鰿。

【鮭】セイ　齊　○なまぐさし（魚臭）○圖さけ（鮭）

【鮀】タ 哿

○沙を吹く小魚、すなふき、鯊などの類。本草圖經「一魚生二湖畔土窟中一」○人名。論、雍也「祝一之佞」

【鮐】タイ 灰 支

○ふぐ（河豚）海魚の一、腹白くふくれて大いなり、背に帶黃青黑色の斑點あり。‖河豚。○としより、老人。皮膚にふぐの斑點に似たるしみを生ずるが故「若一」

【鮐背】老人の稱。人老ゆれば、背に鮐の如きしみを生ずるが故。爾雅名「九十曰二一一一背有二鮐文一也」鮐一に、台に作る。詩、豳頌「黃髮台背」

【鮎】デン 霰

○なまづ（鯰魚）淡水魚の一、體圓くして長く、頭扁にして大、背黑く、腹白く、口邊に長き鬚あり。○國あゆ（年魚）淡水魚の一、味尤も美なり。‖香魚。

【鮑】ハ。 巧

○くさりうを、ひらきうを、しほうを。○姓。齊語「一叔牙、齊大夫」○國あはび（鮑）‖石決明。

【鮑魚之肆】小人などの集れる所に喩ふ。家語、六本「與二不善人一居、如レ入二一一一、久而不レ聞二其臭一、亦與レ之化矣」（惡人と交るときは知らず識らず惡に化せらるるに喩ふ）

【鮑參軍】劉宋の詩人鮑照（字は明遠）臨海王の子頊の前州を治めし時、照其の參軍たり、故にいふ。詩は謝宣遠と名を齊らし鮑謝と並稱す。杜甫詩「俊逸一一」

【鮑肆】ひものをうるみせ。鮑魚之肆の略。轉して、くさき所の喩。抱朴子「俗儒沈論一一、固二于識穢一」

【鮑照】鮑參軍を見よ。

【鮅】ヒツ 質

○ます（鱒）○むつ、かはむつ（石鮅魚）

【鮒】フ 虞 遇

○ふな、淡水魚の一、形鯉に似たり。‖鯽魚。○人名、孔一は秦の時の人、孔子九世の孫、孔叢子を著す。

【鮮】セン 銑

ひらめ、海魚の一、體扁平にして菱形をなし、右側は白く、左側は灰黑色にして兩眼あり、比目魚ともの類。

【鮫】（同字）

このしろ。‖鰶（魚部十一畫）

六畫

【鮭】イ 支 齊

○おはなまづ（大鮎）○鰯一ワの魚のはらわたのしほから（鹽藏の魚腸）

【鮪】ヰ イウ 有 尾

しび、まぐろ（金鎗魚）海產の大魚、口は頷下に在り、大なる者は六七尺、背は蒼黑色、腹は銀白色なり。詩、衞風「鱣一發發」

【鮫】カ。 肴

○さめ、海魚の一、體は圓錐形にして厚き皮あり、尾鰭は刃の如く鋭く、能く人を傷く、鰭にと肉とは食用とし、皮は乾して物を磨く料とし、又、刀のつかなとを卷くに用ふ。‖沙魚。○みつち。蛟に通ず「一龍」

【鮫函】さめの皮のよろひ。左思、吳都賦「屬帶一一」

【鮫人】水中に居るといふ怪しき人、海人の類。述異記「南海中有二一一一、水居如レ魚、不レ廢二機織一、其眼能泣、泣則成レ珠」木華、海賦「其垠則有二天綵一、水禽一一之室」

【鮠】ク。イ 灰

○鮎に似て大いなる一種の淡水魚、長き者は三四尺に至る、色は青白背に肉鬣あり、鱗なし、膾と爲すべし。○國はえ（鮠）

【鮭】㊀ケイ ㊁カイ 佳 蟹

㊀ふぐ（河豚）王充論衡「一肝死人」○國さけ、しゃけ、河海の間に產する魚、形鱒に似て鱗細く、秋、河にさかのぼりて卵を產す、肉は淡紅色にして脂肪多し。㊁調理せし魚菜の總稱「一菜」

【鮨】㊀シ 支 ㊁キ 支

㊀しび(鮪)○魚のししびしほ(魚醤)㊁つけうを、魚のすし(鮓)

【鮪】ジ ヴィ 尾 支

○はらご、魚の子の未だ魚とならざるもの、魚のたまご。○魚の名。呂覧、本味「魚之美者、洞庭之鱒、東海之一」

【鯊】 蕭(魚部八畳)の俗字。

【鮮】㊀セン ㊁セン 銑 先

㊀あざやか、はなやか(華)あきらか(明)「一明」「澄一」いさぎよし(潔)○なまうを(生魚)○鳥獣の新に殺したる者「一肉」「肥一」儀礼、士昏礼「腊必用一」○よし(善)みめよし(好)○なま(生)◎あらた、あたらし「新一」○一卑ヒは後漢の時の東胡の國名。今の黒龍江の南、吉林の西北境。○朝一は國の名。風俗通「武王封箕子於一一」㊁すくなし(少、寡)＝尟。詩、小雅「巧言令色、鮮矣仁」○まれなり(罕)○とぼし(乏)○つく(盡)

同韻字彙 鮮・少・尠・尟の別は少(三二月三見)の條を見よ。

【鮮衣】あざやかなるころも。漢書、賈敬傳「選將軍欲レ與二一一」

【鮮于】姓。元の漁陽の人、字は伯機、酒を嗜み、豪放にして詩を吟ず、字を作るに奇態横生、行草を善くす、趙文敏極めて之を推重す。

【鮮雲】あざやかなるくも。陸機詩「和風飛二清響一、一一垂二海陰一」

【鮮露】あざやかにかがやく。陳書、高祖紀「有レ鼠見二于水濱一、高五丈許、五采一一、軍民観者数萬人」

【鮮艶】あざやかにうつくし。瑯嬛記「天寶十三年宮中下二紅雨一、色若二桃花一、太眞喜甚、命二宮人一各以二桃粉一承レ之、用染二衣裙一、天然一一」

【鮮舒】あざやかにしてうつくし。曹植、飛龍篇「忽逢二二龍一、顔色一一」

【鮮養】あたらしきさかな。郭璞賦「膾二一之柔魚一」

【鮮潤】あきらかなるひかり。文同詩「一一散二滴滴一」

【鮮魚】あたらしきうを、新鮮なる魚。儀禮、聘禮「一一鮮腊」

【鮮花】あたらしくうつくしきはな。陳子昂詩「細草猶含レ綠、一一未レ吐レ紅」

【鮮華】あざやかにしてはなやか。陸賈、新語「性識倫、事易二衣服一、不レ尚二一一一」

【鮮肥】あたらしきいけにへ。宋史、禮志「取二一一一一而祭二圜丘一所レ以昭二敬德一也」

【鮮新】あざやかにしてあたらし。韓愈詩「是時山水秋、光景何一一」＝新鮮。

【鮮浄】あざやかにきよし。書經、疏「以二其新殺一一、故名爲レ鮮」

【鮮品】あざやかにひかる。梁冶文「表裏洞徹、上下一一」

【鮮車怒馬】うつくしく立派なる車と、勢たくましき馬と。後漢書、第五倫傳「聞地肥饒、人吏富實、遠史家貲多至二千萬一、皆——、以二財貨一自通」

【鮮色】あざやかなる色。謝靈運詩「朽貌改二一一、悴容變二柔顔一」

【鮮食】新に殺したる鳥獣の肉食。書、益稷、傳「鳥獣新殺曰レ鮮」

【鮮飾】あざやかなるかざり。魏武帝文「孤不レ鮮二一一」

【鮮盛】あざやかに盛んなり。詩、疏「一一者爲レ雄、雄曰レ虹、闇者爲レ雌、雌曰レ蜺」

【鮮腥】あたらしくしてなまぐさし。論衡「一一猩二少肥一、燔炙臭二發老一也」

【鮮少】すくなし。＝尟少・尠少。

【鮮明】あざやかにしげく盛んなり。楊巍詩「桃李自二一一一」

【鮮膳】鮮は善、膳は厚、自ら尊大にする。蘇軾、諷俊論「偕偕一一而深折レ之」

【鮮白】あざやかに白し。黄汝良賦「皎精明而澄澈、皓一一而含レ章」＝鮮白。

【鮮肥】あたらしくしてこえたる肉。黄庭堅詩「煩レ公一一一一」

【鮮卑】古、支那の北方に住みし夷族、魏の祖先にして黄帝の後裔氏より出づ。後漢書、鮮卑傳「一一鉄一一山、故因號焉」

【鮮媚】○新力があざやかにしてやさしくうつくし。法書要錄「筆力一一、規矩備存」○容色があざやかにしておだやかに美くし。劉長卿詩「此行季春月、時物正一一」

【鮮服】うつくしきもの。劉基詩「郭北有二名子、一一明二春園一」＝鮮衣。

【鮮麦】うつくしきもやう。魏文帝

文「冬則羅紈綺穀、衣曼ニー一ニ」
【鮮毛】セン あざやかなるけ。齊書、庾易傳「終歲ー一之衣、驅二騁日月之車一、得レ保二自耕之績一」
【鮮明】セン ○はなやかにうつくし。聞見後錄「王勝車馬極ー一」○あざやかにはっきりする。温庭筠詩「微風和暖日ー一」○明かにしてまぎらはしからず「旗幟ー一」
【鮮鯉】セン あたらしきこひ。七發「薄者之炙、ー一之膾」
【鮮麗】セン あざやかにうるはし。南史、何敬容傳「自智美鮮、性矜莊、衣冠ー一」
【鮮鱗】セン たべひ少し。揚子法言「類聞以レ退筋レ進、天下ー一焉」
【鮮哉】スタイ すくなきこと、嘆息する辭。潘岳、籍田賦「昔者明王以レ孝治二天下一、其或纏レ之者、ー一希矣」
【鮮矣】スタイ 物の少きを極言する辭。論、學而「巧言令色ー一仁」

【鮒】フ ヘイ 通 ○みごひ、淡水に産す、形鯉に似て體圓く色白し、味鯉より劣り、小骨多し、一名、さい。‖白魚。○國あみ。

【鮀】【國字】 ○鰊ハウは海魚の一、頭は扁圓にして、肉厚く腹大いにして尾細長く、形琵琶に似たり、口は甚だ大きく、口上に釣絲を垂れたる如き兩鬚あり、背は淡褐色にして腹は稍白し、肉は冬春を美なりとす。‖琵琶魚、華臍魚。

【鮌】【國字】 ○まて(竹蟹)海産の介の一種。○こち(鮃)‖牛尾魚。

【鮓】【國字】 おはぼら、とど、鯨の十分に成長せしもの。

魚 書

【鯈】イウ チウ 尤 はえ、香魚に似たる川魚。韭、秋水「ー一魚出游」‖鱖鱠參條魚。

【鯁】カウ 梗 ○魚のほねっ‖骾。○魚骨が喉にたつ。○ふさがる。‖梗。○轉じて正直にして直言し、人にへつらはず。後漢書、來歙傳「骨ー可レ任」註「骨ー鯁正直ニ」

【鯁訐】カウ キツ はばからずして正言する。唐書、李慶傳贊「文本才猷、世南ー一」
【鯁毅】カウ 剛直にしてつよし。唐書、盧景亮傳「書數上、ー一無レ所レ回」
【鯁言】ガウ ○正しき言論。後漢書、任隗傳「ー一直臣、無レ所二回避一」‖讜言。○はばからずして正しくいふ。又、其の言。晉書、王恭傳「王恭ー一時政、有二昔賢之風一」‖直言。
【鯁骨】カウ 剛直なる人。度日休詩「ー一殘形如幾秋」‖骨鯁。
【鯁正】カウ 剛直にしてただし。唐書、賈敬傳「敬、以ニー一爲二擯近一所レ忌」‖鯁直。
【鯁切】カウ 剛直にして誠實。唐書、薛逵傳「持論ー一、以二謀略一高自標顯一」
【鯁直】カウ つよくただし。北史、李文傳「性貞介ー一、好レ學不レ倦」‖梗直。
【鯁輔】カウ 剛直なる補佐の人。輔は助なり、弼なり。魏志、高堂隆傳「從レ命奔走、惟恐不レ勝、是則具臣、非ニー一也」
【鯁烈】カウ 剛直にしてはげし。魏書、李順傳「性ー一、敢言直言」
【鯁論】カウ 剛直なる議論。宋史、范純仁傳「對惟草レ遺詔レ畢、陳三示簾帳一、庶幾ー一嘉謀、日聞二忠告一」‖讜論。

【鯇元】クヮン コン 通 草 魚 或は鯇に作る ○はめ、あめのうを。淡水魚の一、形長く四五寸許、背は暗蒼色にして黒色の斑點あり、腹は銀白色なり。青ー白ーの二あり、白きもの味美なり。‖草魚、鰱魚。

【鯀】コン 阮 ○おほうを(大魚)○人名。夏の禹王の父。書、堯典「於ー哉」

【鯊】サ 麻 ○はぜ、河海の間に棲む小魚、形細長くして圓く、口ひろく鰓が大きく、常に口を張りて沙を吹く、背は褐色にして黒き斑紋あり。‖蝦虎魚。○國さめ(鮫)沙魚二字を誤り合して一字とせしなり。‖沙魚。

【鯊】鯊(前條)に同じ。

【鮹】サク セキ 陌 ○馬の鞍に似たる一種の淡水魚、尾に兩鬚あり(本草)○國たこ(蛸)章魚の形が蝟蛸

ニに似たるによりて之を蛸といひ、更に訛りてイに作りしならん。‖章魚。

【鯑】テイ　圏

おほなまづ（大鮎）‖鮎。

【鯛】チョウ　薬

○たなご（青衣魚）○しほびきうを（鹽漬魚）漢書、貨殖傳「一鮑千鈞」一説、鹽を用ひずしてすぼしにしたる魚。

【鰾】フ　虞

いるか（江豚）の別名（海に在るを海豚といふ）「一魚」太平御覽「魏武帝、四時食制曰、一魚黒色、大如百斤豬、黄肥不可食、出淮及五湖」

【鰌】ベン　メン　銑

○にべ（鰌）海魚の一、長さ一尺餘、背は銀灰色にして黒き斑點あり、腹は淡黄色、其の鰾は膠の原料とす。‖黄花魚。○いしもち、にべの未だ十分に成長せざるもの。‖石首魚。

【鯉】リ　紙

○こひ、鮒に似たる淡水魚、緋・黒・黄の三種あり、口邊に鬚あり、脇鱗皆三十六、毎鱗に小黒點あり。‖六六鱗。○てがみ、書札の義とす。熟語の鯉素を見よ。

【鯉魚風】陰暦九月の風。提要錄「九月——」李賀詩「門外流水江陵道、——起芙蓉老」

【鯉素】手紙をいふ。鯉魚尺素の略。古詩「客從二遠方一來、餽二我雙鯉魚一、呼レ童烹二鯉魚一、中有二尺素書一、長跪讀二素書一、書中竟何如、上有レ加二餐飯一、下有二長相憶一」とあるに本づく。孔稚珪「北山移文」「聽レ鳳倒レ影——猿、聞レ鐘迴二清聽一」

【鯉庭】こひのせなか。鯉脊、石櫚詩「衡レ風倒レ影——猿、金鐘挽二清響一」

【鯉鮒】こひと、ふなと。金瓶梅「——！盤餐」注「鯉即今之鯉魚、鮒今餽鯉也、亦呼爲レ鮒」

【鯑】〔國字〕

鰯ーはかすのこ、鯑ニのはらごを乾したるもの。‖膏魚鰾。

【鯑】〔國字〕

うぐひ、淡水魚の一、形は鯇ニに似て鱗細く、鰓やや赤く、長さ六七寸、あかはら、‖石斑魚。

【鯑】〔國字〕

すばしり（洲走）鯔ニの二寸許なる者の稱、いなの若き者。

【鯒】〔國字〕

こち、海魚の一、形は魴鯊ニに似、頭大きく、口は横に闊く、尾尖り、背は灰色にして腹は黄白なり。‖牛尾魚。

【鯏】〔國字〕

あさり（蜊の誤用）

八　黠

【鯁】エキ　陌

○魚の名。○劃するめ、烏賊ニを割き開きて乾したるもの。

【鯨】ケイ　キャウ　庚　敬　通音ゲイ

○くぢら、海産の大獣、體長さ數丈、體毛なく、頭上の孔より高く水を吹き上げて呼吸す、種類多し、肉及皮は食用とし、油は蠟燭・香油等を製すべし。○又特に雄くぢらをいふ。鯨ニの對。

【鯨飲】多量に酒をのむ。杜甫、飲中八仙歌「左相日興費二萬錢一、飲如二長鯨吸二百川一」

【鯨書】鯨ニの牽。張衡、四京賦「發二鯨魚一兮鼓二華鐘一」注「海中有二大魚一名レ鯨、海島亦有二大獣一、名二蒲牢一、蒲牢長二鯨魚一、鯨魚一擊二蒲牢一、輒大鳴吼、凡鐘欲レ令二聲大一、故作二蒲牢于上一、所二以擊一之者、爲二鯨魚一、鐘有二姿刻文一、故曰二華鐘一也」

【鯨鐘】くぢらと、わにと。鄒陽詩「高論篤二詞懐一、千琴射二——一」

【鯨魚】くぢら。杜甫、短歌行「——露翻レ風白日動、——跋浪滄溟開」

【鯨鯢】○鯨はをくぢら、鯢はめくぢら、猛惡にして小魚を呑食す。よりて強國を呑食する不義の人に喩ふ。左、宣十二「取二其——一而封レ之以爲二大戮一、於レ是乎、有二京觀一」○轉じて殺さるる義とす。李陵、答二蘇武一書「妻子無レ辜、並爲二——一」

【鯨吼】○くぢらが吼える。林寛詩「洗翻夜作レ雷、——聲爲レ浦」○つりがねの音、鯨音を見よ。陳海詩「劫火不レ能レ壞二洪鐘一、雷震——摩隆隆」

【鯨鯤】共に海中の大なる動物。楊炎、杜公碑「——雖レ波、戰而爲レ陸」

鯤鵬（本頁二段）參看。

【鯨鬚】ゲイ　くぢらのひげ、纖維性の角質より成り、形櫛の齒の如し。上顎より生じて長き者は丈餘に至る。色黑く、柔軟にして折れ難し、種種の工藝品と爲す。

【鯨鯢】ゲイ　くぢらと、海中のおほかめと、鯢は雄。楚辭「一一今齊湯」

【鯨鯛】ゲイ　くぢらと、みづち。と。韓愈詩「曲池驅三蝦蟆一深浪驚二一一一」

【鯨呑】ゲイ　くぢらの如くにのむ。強者が弱者を併呑するにいふ。晉唐雲、晉紀等傳論「小則鼠竊狗偷、大則一一虎據」

【鯨波】ハイ　○おほなみ。劉禹錫詩「日浴一一萬頃金」‖鯨濤。○俗にときのこゑに喩ふ。祖庭事苑「鯨當以二五月一就レ岸、生二數萬子一至二八月一、鼓レ波成レ雷、噴レ水成レ雨」より出づ。

【鯨尺】ゲイシャク　圖ものさしの一種、其の一尺は曲尺（ものさし）の一尺二寸に當る。布帛を度るに用ふ、初、鯨鬚にて作り、今は多く竹にて作る。

【鯤】　コン　元

○はらご、魚の子（卵）魯語「魚禁二一鯤一」○想像上の大魚。一鵬を見よ。

【鯤鵬】コン　莊子が假設せし大魚と、大鳥と、以て運大の物に喩ふ。莊、逍遙遊「北冥有レ魚、其名爲レ鯤、鯤之大不レ知二其幾千里一也、化而爲レ鳥、其名爲レ鵬、鵬之大不レ知二其幾千里一也」‖鵬鯤。

【鰌】　シ　支

○ほら、なよし、形圓く長く、頭平たくして短く、背は蒼黑色にして腹は白し、初め淡水に産し、長じて海に棲む。○いな、ほらの小なる者。

【鰯】　シャウ　養　俗に鰺に作る

ひもの、ほしうを（魚腊）‖乾魚。

【鯖】　セイ・シャウ　庚　青

○脛に通ず。魚又、鳥獸の肉などを雜ぜて煮たる料理、よせなべの類「五侯一」（八二頁二段）參看。○にしん（鯡）‖青魚。○圖さば、海魚の一、長さ尺許、背に青黑色の線紋あり、腹は銀白色。‖青花魚。

【鯵】　ソウ・ス　シウ　セン　蕭　尤　尤　有

○ひらさうを（膊魚）○みごひ（白魚）○ざこ（雜小魚）○小人の貌。○自己の謙稱。

【鯵生】ソウセイ　○いやしき小人を形容していふ。史、項羽紀「沛公曰、一一敢與我、距二關無一納二諸侯一乘地可二王一也」○轉じて、自己の謙稱とす。趙孟頫詩「一一小技眞愛二遇」

【鯛】　チウ　蕭

たひ、海魚中の最も美味なる者、形扁圓にして、齒鯖鱗共に剛く、全體淡紅色を呈し、水を離るれば、赤色に變ず。‖紅魚・鯛魚・鋼盆魚。

【鯡】　ヒ　未

○魚の子。○圖にしん（鯡）海魚の一、鰯に似て大いなり、其の鱗を數子ありといふ。‖青魚。

【鯪】　リョウ　蒸

○こひ（鯉）○一鯉リョウは爪哇・蘇門答臘などの熱地に産する獸の名、長さ三尺餘、全身角質の鱗甲を被る。せんざんかふ（穿山甲）

【鰌】　〔國字〕

どぢやう。池沼に棲む小魚、形、鰻に似て小なり。‖泥鰌。

【鮫】　〔國字〕

○しやちほこ。伊勢の海にありといふ魚に似たる海獸の名、其の形を模して宮殿又は城などの棟の兩端につける飾物とす。‖魚虎。○海獸の一種、さかまたの一名。

【鮫】　〔國字〕　九　畫

なまづ（鮎）

【鰋】エン　阮
なまづ（鮎）の類。詩、小雅「魚麗」「―鯉」

【鰕】カ　馬
○えび（海老）節足動物の一、形細長く、甲殻を被り、八足と長き二對の觸角とを有す「魚―」＝蝦沙虹。○めくぢら（鯢）

【鰐】ガク　藥
わに。＝鱷（魚部十六畫）

【鰹】クツ　陽
○鰹（魚部十三畫）と義同じ。○鰤ひがひ。近江の琵琶湖に産する魚、形はぜに似たり、明治天皇が此魚を好まれたるによりて皇魚に從ひ此字を造る。

【鰒】㊀ヤイ　㊁シ　紙　灰
㊀あぎと、えら、魚類の呼吸器、頭部頬の中に在りて深紅色、梯の齒の狀を爲す。㊀―はおそれる貌。
【鰒鰒】シ　おそれる貌。漢書、刑法志「――常恐三天下之一合、而共執已也」＝慙惡。

【鰍】シウ　尤
○どぢやう。＝鰌。國○いなだ、ぶりの幼期の稱。○かじか、溪流の石の間に棲む小魚、形はぜに似、背うす黑く腹は淺黃色。ごり。＝杜父魚。

【鰌】シウ　尤　又、鰍に作る
○どぢやう。鰻に似て小なる魚、田沼などに産す「泥―」○くぢら「海―」○海―カイは兵船の名、形の鯨に似たるが故。宋史、虞允文傳「官軍以海―船衝敵軍」

【鰆】シュン　眞
○海魚の一。○國さはら。形、鯖に似て長さ三尺に至る。＝馬鮫魚。

【鰈】タフ　テフ　葉　合
かれひ。ひらめに似たる海魚。＝比目魚・板魚・王餘魚。
【鰈域】カウ　朝鮮の異稱。東海に鰈魚を産するによりて名づく。漢書、郊祀志「東海致二比目之魚一」注「四海致二比翼之鳥一」注「比目魚、其名謂二之鰈一」＝極域・鰈林。
【鰈海】カウ　朝鮮の近海をいふ。前條を見よ。
【鰈鰭】タフ　○比目魚と、比翼の鳥と。鰈域參看。上官儀文「東鰈西鯤、日月波翻」○掃いて伏屍カウカウの厚き者に喩ふ。

【鰉】ティ　㊀㊁　霽　紙　寒
○なまづ（大鮎）其の皮を以て冠を作る「―冠」○國ひしこ、鰯に似て小なり。

【鰒】フク　ハク　覺　屋
○とこぶし。石決明アワビの類にして小なるもの。一說、あはび。○國ふぐ（河豚）字音を借りて用ふ。
【鰒魚】フク　○あはびの類、俗に鮑魚に作る。後漢書、伏隆傳「謂ノ閩上百蔌ニ―ニ」注「鰒似ノ蛤偏ニ著石ニ也」＝慙惡。

【鰥】エン　先
○一種の魚の名。○國にしん（鯡）＝青魚。

【鰊】レン　軫
（石決明）○とこぶし。

【鰭】ヘン　ハン　銑　先
をしきうを（折敷魚）琵琶湖に産す、身平たく薄く長さ三四寸。＝鰷・舫魚。

【鰥】エン　十　畫　蕭
○文―ニウはとびのうを（飛魚）海魚の一、體長さ尺許、形圓長、左右の鰭、鳥翼の如く、時時水を離れて飛ぶ。○えひ、あかえひ（鰐）

【鰭】キ　支
ひれ。魚類の脊、胸腹に附著せる翼狀のもの、游泳のはたらきをなす「修―」「鼓―」
【鰭脚類】キヤク　動物學の名詞、哺乳類中の一種、其の特徴は體の形、紡錘狀を爲し、四肢は短くして圓く、各五趾あり、趾間に膜あり、鰭の如し、游泳すること便捷なり、鯨肭・

海豹など之に屬す。

【鰥】クヮン　㊥

○一種の大魚。詩、齊風「其魚魴一」○やもを、妻なき男、一は矜やの假字、憐むべき者の義。「鰥一」書、堯典「有一在下、曰虞舜」○やむ（病）＝癏。○愁悶してねむる能はざる貌。

【鰥居】クヮンキョ　老いて妻なくして獨り居るの謂。鰥は、釋名に「愁悶不レ寐、目恆鰥然、故鰥字從レ魚、魚目恆不レ閉」とあり。北里志「一一僑寓」

【鰥寡孤獨】コウクヮンコドク　鰥は老いて妻なきもの、寡は老いて夫なきもの、孤は幼くして父なきもの、獨は老いて子なきもの。孟、梁惠王「老而無レ妻曰レ鰥、老而無レ夫曰レ寡、幼而無レ父曰レ孤、老而無レ子曰レ獨、此四者天下之窮民而無二告者一」史、司馬相如傳「恤二鰥寡一存二孤獨一」

【鰥鰥】クヮンクヮン　目がさめて眠られぬ貌。李商隱詩「羅綃一一夜景長」

【鰥鰥】クヮンクヮン　妻なくして獨りをろ。司馬相如賦「一一獨居、室宇遼廓」＝鰥居。

【鰥民】クヮンミン　老いて妻なきもの。詩經、序「國無二一一一也」

【鰥寡】クヮンクヮ　やもをと、やもめと。老いて妻なき者と、をっとなき女子と。柳宗元文「用二聖典一以感二發鰥寡一」

【鰊】ケン　カン　㊥㊦

かれひ（鰈、比目魚）

【鰶】サ　㊥

つけうを（鹹魚）＝鯊。

【鰤】シ　㊦

○老魚。一說、毒ある魚。＝鮪。○㊥ぶり。いなだの成長せし者、體肥えて尾狹小、背は淡蒼色、長さ三尺餘に至る者あり。

【鰣】ジ　㊦

魴に似たる魚、形扁にして長く、大いなる者は三尺許、色白くして銀の如く肉中に細刺あり、脂肪多く味美なり、每年夏初、揚子江に產す、水を離るれば卽ち死す、最も餒敗し易し。本草「一魚胃」網而不レ動、護二其鱗一也」

【鰧】トウ　㊥

をこぜ、海魚の一、形、鰻に似て、體二三寸、頭、大きくして、とげ多し。＝虎魚。

【鱸】音未詳。

○馬鮫ざめに似たる小魚。○㊥いわし（鰯）うるめいわし。

【鰯】〔國字〕

いわし、海產の小魚、形細長く、四五寸、背は蒼黑色、腹は銀白色、水を離るれば直ちに死す、故に弱に從ふ。＝鰮。

【鰰】〔國字〕

一種の海魚、はたはた。＝鰰。

十一畫

【鰲】ガウ　㊦

鼇（二三三七頁二段）の俗字。

【鰹】ケン　㊦

○鯛の大いなるもの。○㊥かつを（松魚）體肥大にして長さ二尺許、背は蒼黑色、腹は灰白色、肉を乾して肺としたるを一節といふ。＝鰹鰺魚。

【鰺】サウ　㊦

○なまぐさし。鰛の國字。○㊥あぢ、海魚の一、長楕圓形、背は蒼くして微に赤色を帶び、體側に一條の刺線あり。＝竹筴魚。

【鱣】シ・ウ　㊥

たこ。閩書「一魚、一名望潮魚」＝章魚。

【鰷】シ・ウ　㊦

鰷ヨウに似て黑き色の魚の名。

【鰶】セイ　㊦

このしろ、海魚の一、背は蒼青色にして蒼黑色の斑點あり、當歲なるを江一魚といふ。鮗ショウは國字。

【鱄】セン　㊦

魚の大いなる者の稱。呂覽「魚之美者、洞庭之一」

【鰆】チク　㊥

一鮫はしほから。魚のはらわたを鹽づけとせしもの。又、魚胞＝魚脬。

【鰈】テフ・デフ　セフ　㊥㊦

はえ（鯑）「白―」本草「―魚、長僅數寸、形狹而扁、狀如柳葉、鱗細而密、潔白可愛、性好羣遊」

【鰻】バン　マン　寒　願

うなぎ、淡水魚の一、細長くして圓筒狀をなす、粘滑にして鱗無く、背は黑く腹は白黃色なり。本草「一鱺似鱓而腹大」【鰻鱺】うなぎ、字解を見よ。

【鰾】ヘウ　篠

○うをのふえ、うきぶくろ、魚の腹中にある氣嚢、其の張縮によりて自由に浮沈する。‖魚肶・魚胞。○―膠はにべ、魚のうきぶくろを煮て膠とせしもの。‖魚膠。

【鰱】レン　先

たなご（鰱）淡水に產する小魚「白―」

【鯀】〔國字〕

鮫―は海魚の一、鮫（魚部六畫）を見よ。

【鱈】〔國字〕

たら。海魚の一、長さ三尺許、口大きく、鱗細く、背は淡黑色、微に黃を帶ぶ、肉は雪の如く白し。‖大口魚。

十二畫

【鱖】ケイ　ケツ　月　霽

巨口にして細鱗、背鰭に刺ありて甚だ硬し、色微黃にして黑斑あり。張志和詩「西塞山前白鷺飛、桃花流水―魚肥」

【鱣】ジン　震

○えひ（鱘）殊に電―にいふ。○頷下に口のある一種の魚、かぢき。

【鱐】シュク　シウ　尤　屋

ほしうを（乾魚）

【鱓】㊀セン・ゼン　㊁タン・ダ　銑　歡

㊀うみへび、形蛇に似たる海魚、鱗無く粘滑にして、泥中に棲む。淮南、覽冥「蛇―著泥」‖鱔。㊁鼉（二三三七頁三段）に同じ。史記、自序「龜―與處」○圖ごまめ、ひしこをすぼしにせしもの、たつくり（田作）

【鱔】鱓（前條）に同じ。

【鱒】ソン　セン　阮

ます、あかめうを（赤目魚）鮭の一種、形やや小にして、肉の色は鮭よりも赤し、河海の間に棲み、夏河にさかのぼりて卵を產む。

【鱗】リン　眞

○うろこ（魚甲）いろこ、うろくづ、魚の身を保護するもの。○うろこを有する動物。特に、魚類の總名「羽毛―介」「潛―」「常―」「枯―」「細―」○六六―は鯉の異名。○九九―は龍の異名。

【鱗蟲】魚類。孫綽、望海賦「―萬殊、甲產無方」

【鱗羽】魚類と鳥類と。南史、宗測傳「性同――、愛―止―山壑」

【鱗介】魚類と貝類と。淮南子「―者、夏食而冬蟄」

【鱗甲】○うろこと、かふらと。左傳、疏「―不足―以爲―器用」○魚貝類。劉禹錫詩「蘆萃曉風起、秋江――至」○鱗の狀をなす堅きかたち。鮫の皮瑁（タイマイ）の甲の類。○心に城府があるに喩ふ。到志、陳震傳「腹中有――、鄉黨以爲―不―可―近」

【鱗鱗】うろこと、ふれと。水經、注「――首尾」

【鱗萃】魚のむれ。眞諦「玄瀾浩汗、則――競赴」

【鱗栉】魚のうろこの如くかまへ竝ぶ。庾開文「靈巖霞蔚、石室――」

【鱗次】うろこの如くつづきならぶ。鮑照詩「京城十二衢、飛甍如――」‖櫛比。

【鱗集】うろこの如く多く列りあつまる。羣集するに喩ふ。漢書、劉向傳「子弟――於朝」‖鱗萃。

【鱗萃】前條に同じ。華陽國志「文翁爲―守、學徒――、蜀學比之齊魯」

【鱗砌】魚のうろこの如きいしだたみ。東京夢華錄「華綵――」

【鱗接】魚のうろこの如くつづく。孔叢子「超魏與之――、而強弱不―敵」

【鱗邊】うろこある動物。家語、執轡「――三百有六十、而龍爲之長」

長一＝鱗物。
【鱗比】リンピ　魚のうろこの如くにならぶ。何晏、景福殿賦「星居宿陳、綺錯一一」＝鱗次。
【鱗布】リンフ　うろこの如くしきならぶ。胡瑗、大閲賦「玄甲一一、長戈岳立」
【鱗物】リンブツ　龍蛇の類。周禮、地官「二曰川澤、其動物宜二一一一」
【鱗文】リンブン　龍のうろこの如きあや。南史、齊高帝紀「高帝委裘英異、龍顔鍾聲、長七尺五寸、一一掩二其體一」
【鱗毛】リンモウ　農家、蟲魚鳥獣を謂ふ。花卉と竝稱す。
【鱗羅】リンラ　うろこの如くつづきつらなる。羽獵賦「一一布列」＝鱗比。
【鱗鴻】リンコウ　魚のうろこの如きさざなみ。馬融、長笛賦「波瀾一一」
【鱗鱗】リンリン　○水紋のうろこの狀をなせる形容。蘇軾詩「曲池流水細一一」○うろこの如く鮮かに麗はしき貌。鮑昭詩「一一夕雲起」
【鰲】すっぽん、鼈（三三七頁四段）に同じ。
【鰭】〔國字〕きす、形、かますに似たる海魚の一、體圓くして長く、頭尖る。＝風頭魚。
【鰛】〔國字〕
【鰹】〔國字〕

十三畫

【鰥】ゲン　㊥㊦　通音ケン　㊥㊦
【鰥魚】ゲンギョ　魚の口の動く貌。＝喁喁。
【鰐】コウ　㊥㊦　アク　㊥㊦
○かぶとがに、盤の一種。○俗に虹の稱。農政全書「東一時、西一雨」
【鰌】シュウ　㊥㊦　ヨウ　㊥㊦
○ちひさきうを（小魚）○うをのはらご、魚の子の未だ魚と成らざる者。
【鱣】㊀テン　㊁セン　㊀㊥先　㊁㊥銑
㊀鱣に似たる大魚、口は頷下に在り、鱗なくして甲あり、肉の黄なるにより江東にては黄魚と稱す。漢書、賈誼傳「横江湖之一鯨」㊁うみへび。＝鮮。○うなぎ。
【鱧】〔國字〕ぬそ、海魚の一、形かますに似て平たく、上吻の長さ寸許、尾長し、かまぼこと爲すによろし。

十四畫

【鱶】シャウ　㊥
【鱶魚】（一五八一頁三段）に同じ。
【鱶殺魚】しらうを。鱶殺魚（一五八一頁三段）を見よ。
【鱶】鰉（魚部十畫）に同じ。
【鱸】〔國字〕
はたはた、海魚の一、長さ尺許、背は淡褐色、腹は銀白色、雷鳴の時に羣り出づ。＝雷魚・鯛。

十五畫

【鱷】シン　㊥㊦
さより、海魚の一、形細長く、下顎は突出して烏の嘴の如く、背は淡黒にして腹は銀白色。＝針魚・針鱵魚。
【鱷】シャウ　㊥
○鱶（魚部八畫）に同じ。○ふか、暖帶の海洋に棲む大魚、長さ二三丈に至る、性猛くして、蝦魚を噉ふ。
【鱸】レン　㊥㊦
○魚の名。○圖からすみ、ぼら又、さはらめなだのはらご

【鱷序】次條に同じ。易略例序「鼓鱷一一」注「學校也、鱷室之類」
【鱷室】楊震の故事に本づきて講堂の稱とす。後漢書、楊震傳「有二冠雀一銜二三鱷魚一、飛集二講堂前一、都講取レ魚進曰、蛇鱷者卿大夫服之象也、鱣三者、法二三台一也、先生自レ此升矣」＝鱷序。
【鱧】レイ　㊥
○うなぎ。＝鰻。○やつめうなぎ。＝烏魚・七星魚。○圖はも（海鰻）海魚の一、鰻に似て背鰭が尾に連る。
【鱠】膾（二五八一頁三段）に同じ。

を乾し堅めたる食品。酒の下物ナドの最も佳なるもの、からすみとは形の唐鞋に似たるが故。＝鰾魚。

十四畫

【鱷】 ガク　㊥又、鰐に作る

わに。四足長尾の大いなる蟲、長さ二三丈に至る。熱帯地方の河邊に棲む、背に鱗甲ありて甚だ堅硬なり、性猛惡にして、人畜を喰ふ。＝鰐魚。

【鱷魚】わに。唐書、南蛮西「波至ル潮、閩民疾苦、皆曰、惡渓有ニ一ー一、食ニ民畜産一、且盡、民以ル是窮」【鱷渓】浙東省湖安縣城の東北に在る地名、又、惡渓と名づく、唐代鱷魚ありて民を害す、韓愈文を作りて之を逐る、是により潮州鱷魚の患なし。＝鱷魚文は韓昌黎全集に載す。

【鱸】 ロ　㊥

すずき、せいごの成長して二尺餘に及びしもの、口巨ナルにして、鱗細く、背は淡蒼色にして黒點あり、河海の間に棲む、呉の松江（今の江蘇省呉淞江）の産最も名高し「蒲ー」「銀ー」「玉花ー」「松江ー」

【鱸魚】すずき。名義、張翰傳「張翰字季鷹、齊王冏辟爲ニ東曹掾一、翰因ニ秋風起一、思ニ呉中菰菜蓴羹ー一鱠一曰、人生貴ル得ル適ル志、何能羈ニ宦數千里一以要ニ名爵一乎、遂命ル駕馳、俄而冏敗、人謂ニ之見ル機」郭祥正詩「秋風不ニ敢憶ニ一ー一」【鱸魚話】次條に同じ。前條參看。李白、秋下ニ荊門一詩「此行不ル爲ニ一ー一、自愛ニ名山一入ニ剡中一」【鱸膾】すずきの膾肉ナマス。膾一に鱠に作る。前條を見よ。

十九畫

【鱷】 レイ　㊥㊦

うなぎ「鰻ー」

鳥部

【鳥】 テウ　㊥

○とり、禽の長尾なる者。又すべて兩翼二脚ある動物の總稱とす「飛ー」「禽ー」「好ー」「怪ー」○朱ーは星の名、南方の七宿。○羊ーは烏の異名。○乙ーは燕の異名。

【鳥歌】○鳥が鳴く。又鳥の聲。歐陽修詩「ーー花舞太守醉、明日酒醒春已歸」○唐の則天武后の造りし樂曲の名。舊唐書、音樂志「ーー萬歲樂、武后所ル造也」

【鳥喙】○とりのくちばし。呉越春秋「越王長頸ーー、可ル與ニ共患一、不ル可ニ以共ニ安樂一」一本に、烏を鳥に作る。○星宿の名。＝喙・柳宿。

【鳥革翬飛】革は翼、翬は雉、鳥の翼を張れる如く、雉の飛ぶが如く宮室の美くしく立派なる形容。詩、小雅「如ニ鳥斯革一、如ニ翬斯飛一」

【鳥罟】とりを捕ふるあみ。詩雅「ーー謂ニ之罹一」＝鳥羅。

【鳥語】○とりの啼きごゑ。白居易詩「ーー人言無ル不ル通」＝鳥聲・禽聲。○とりの言語、孔子の弟子、公冶長、善くーーを解せしといふ（論、公冶長、皇侃義疏）○夷狄の言語、鳥のさへづるに似たるが故。後漢書、南蛮西南夷傳「獣居ーー之類」＝鴃舌

【鳥爪】手のつめの細く長きに喩ふ。神仙傳、麻姑ーー」

【鳥葬】死者を野原に棄ててとりの啄むに任する。南史、扶南國傳「國俗、死者有ニ四葬一、水葬則投ニ之江流一、火葬則焚ニ之於ニ江流一、土葬則埋ニ之一ー一則棄ニ之中野一」

【鳥道】とりの飛ぶ如くちりぢりにのがれかくれる。呉志、陸遜傳「當ニ乘ル勝ニ夏、未ル染ニ王化一ーー荒裔、拒ニ迎王師一」

【鳥集】鳥の集る如く多く集まる。張衡賦「環貨方至、ーー蝟合」＝鳥萃。

【鳥獣】とりとけだもの。論、微子「惟ニ我與ニ爾一ー一、不ル可ニ以與同ル羣、吾非ニ斯人之徒與一而誰與」（人はとりけだものと一所に住むべからざるをいふ）＝禽獣。

【鳥人】巧妙なる空中飛行家を鳥に比していふ。

【鳥銃】とりうちてつぽう。武備要略「皆以ニ此銃一穿ル林打ル鳥、故名曰ニーー」

【鳥聲】とりの鳴きごゑ。陳子昂詩「新年ーー千種囀、二月傷花滿路飛」＝鳥音。

【鳥迹】とりの足あと。轉じて跡に同じ。孟、滕文公「如ニ一ー一之道、文ニ于中國一」

【鳥跡】鳥の足あと。又、文字をいふ。事物原始「蒼頡觀ニーー一、因而遂通、則謂ニ之字一」（蒼頡は黄帝の臣）

【鳥道】とりのみ通ふけはしき險路。華陽國志「ーー四百里、以ニ其險絕一獣猶無ル蹤、特上有ニ飛鳥之道一耳」＝鳥路。

【鳥黐】とりもち、もち、多くは冬青樹ソヨゴの皮の粘性の物質にて製す、鳥又は蝉を捕ふるに用ふ。

【鳥中之仲參】鳥をいふ。仲參は孔子の弟子にて孝を以て聞ゆ、鳥に反哺の孝あり、故に喩ふ。白居

易、慈烏夜啼詩「慈烏失二其母一、啞啞吐二哀音一、夜夜不二飛去一、經レ年守二故林一、夜夜夜半啼、聞者爲沾レ襟、聲中如二告訴一、未レ盡反哺心、百鳥豈無レ母、爾獨哀怨深（中略）慈烏復慈烏、——」

【烏篆】ウテン　○古文の篆書、烏跡に似たるが故。後漢書、蔡邕傳「諮篇」尺牘、及工書二一者一、皆加二引召一」資治通鑑、九疑山賦「一一穿碑、刺史元公之筆」‖烏畫。○烏のあしあと、篆文に似たるが故。韓愈詩「臥看二一印一蒼苔一」

【烏挼】ウダ　をとり。鳥をつなぎ留めて他の鳥を誘ひ捕ふるに用ふるもの。說文「挼レ鳥者繫二生鳥一以來レ之、名曰レ鴾」注「鴾者誘二禽鳥一也、卽今一一也」

【烏面鵲形】ウメンジャクケイ　飢ゑて甚だしくやせたる形容。海錄碎事「候景之亂、所在荒飢、其絕レ粒久者、——」

【烏目】ウモク　圓ぜに、背錢の孔ナが鵲鳥の眼に似たる故。‖鵲眼。

【烏罥】ウケン　とりを捕ふるあみ。かすみ。孟郊詩「魚網不レ在レ天、一一不レ張レ水」‖烏罟。

【烏路】ウロ　鳥の飛ぶみち。又、一直線のみちすぢにいふ。謝朓詩「驅嚻不レ可レ接、何況隔二兩鄉一風雲有二一一一、江漢恨レ無レ梁」

【烏龍】ウリョウ　とりかど。元稹詩「一一捻摧君應レ會、十步向前非二我州一」

【烏鳶刑喙】ウエンケイカイ　鳥は逃ひつめられて窮する時は、卻りて相手の者を啄ばむ。荀、哀公「——、獸窮則攫、人窮則詐」

【烏起者伏也】ウキシャフクヤ　とりの下らんとして忽ち高く飛び立つは、其の下にふせ勢あるなり。孫子、行軍「——、獸駭者覆也」

【烏倦飛而知レ還】カケンヒジカン　鳥が終日飛び翔りて、倦みたれば、歸り去ることを知る。人の出處の自然なるに比す。歸去來辭「雲無レ心而出レ岫、——」

【烏之將レ死其鳴也悲】ウシショウシキメイヤヒ　人は死に臨みては本心にたちかへるもの故、其のいふことばには善多しとの意を明かにせん爲めの對句。論、泰伯「曾子有レ疾、孟敬子問レ之、曾子言曰、——、人之將レ死其言也善」

【如二烏過一目一】ジョカカモクイチ　鳥が目前を飛び過ぐるが如く去るの疾きに喩ふ。張協詩「人生二遘海內一、忽——」

【烏高飛以避二增弋之害一】ウコウヒイヒゾウヨクノガイ　無知の鳥すらも、害を避くることを知るをいふ。增弋は絲を矢に附け飛鳥を射て取る、いぐるみ。莊、應帝王「——、鼷鼠深穴乎神丘之下、以避二熏鑿之患一」

【烏盡弓藏】ウジンキュウゾウ　鳥が盡きて後は弓は用ふる所なし。天下定りて功臣を遺棄するに喩ふ。狡兎死走狗烹

（一一二八頁二段）を見よ。

【烏啼山客猶眠】カテイサンカクユウミン　花落家僮未レ掃（一六一九頁一段）を見よ。

【烏啼山更幽】ウテイサンコウユウ　山の幽靜なるが上に、其の閑寂を破りて異鳥の啼くを聞けば、か〳〵りて一層幽靜を感ずる心地せらる。梁、王籍、入二若耶溪一「蟬噪林逾靜、——、此地動二歸念一、長年悲二倦遊一」王安石は此の句を翻案して「一鳥不レ啼山更幽」となせり。

一畫

乙

イツ　㊀㊁　又、乙に作る

つばめ（燕）‖玄鳥、乙鳥。

二畫

九

キウ

【鳩】

○はと、きじばと、頭小に、胸凸起し、尾短く、兩翼長大にして善く飛ぶ。禽經「拙者莫如レ鳩、不能爲巢」疏、月令「仲春鷹化爲レ鳩」○あつむ、あつまる（衆）ーは能く陽氣に衆るが故。‖糾。○やすし、やすんず（安集）左、襄十六「敢使魯無レ乎」○衆ーは鵓鴿

【鳩鷹道話】キウヨウダウワ　圓三卷、柴田鳩翁の心學に關する講話を、其の男貞藏の筆記せしもの。

【鳩合】キウガフ　あつむ。あつまる。陳禎、五節諸侯論「一一同志、以謀二王室一」

【鳩鷗類】キウオウルイ　鳥の分類の一、嘴短小、足短くして赤く、翼は長大にして翔り居るもの、かはらばとときばとの類。

【鳩居鵲巢】キウキョジャクサウ　はとは性拙くして自ら巢をつくる能はず、かささぎのつくりし巢に居る。以て妻が夫の家を吾家とするに喩ふ。詩、召南「維鵲有レ巢、維鳩居レ之」

【鳩胸】キウキョウ　はとむね、人の胸の鳩の胸の如く凸起せるもの。‖鷄胸。

【鳩形鵠面】キウケイコクメン　久しく飢ゑて痩せたる形容。鳩形は腹が陷りて胸がつき出る、鵠面は兩類が痩せ削られる。通鑑、梁簡文時、江南百姓乏レ食、皆——‖烏面鵲形。

【鳩巢】キウサウ　はとのす、鳩は性巢をつくるに拙しといふ。鳩居鵲巢を見よ。

【鳩集】キウシフ　よせあつめる。劉峻、答二劉之遴一書「一一新文」‖鳩聚。

【鳩車】キウシャ　はとぐるま。小兒の玩具の一、鳩の形せしものを載せたる小車。博物志、小兒五歲有二一一之戲一、七歲有二竹馬之戲一」

【鳩首】キウシュ　くびをあつめる、集りて相談する。

【鳩聚】キウシュウ　鳩集に同じ。禮記、正義、序「猶ホ―ー以レ類相附」＝聚集。

【鳩拙】キウセツ　はとの性の拙き義。禽經「―ー而安」注「鳩、鴟鳩也、方言云、自關二之拙鳥一、不二善營一レ巢、取二鳥巢一居レ之、雖レ拙而安也」

【鳩率】キウソツ　あつめひきゐる。晉書、石季龍載記「應ヂーニー宗族一、悉率二同王化一」＝糾率。

【鳩杖】キウヂヤウ　○老人の用ふる鳩の飾ある杖。後漢書、禮儀志「年七十者、授レ之以二玉杖一、餔二之糜粥一、八十九十隨有レ加、賜二玉杖一、長尺、端以二鳩鳥一爲レ飾、鳩者不レ噎之鳥也、欲レ老人如二鳩不一レ噎」○鳩のかざりある老人のつく杖。風俗通「俗說、高祖與二項羽一戰敗二於京索一、逃二竪薄中一、羽追求レ之、時鳩止鳴二其上一、追者以鳥在無レ人、遂得レ脫、及レ即レ位、異二此鳥一、故作ニーー以賜二老者一」

【鳩尾】キウビ　○みづおち。胸と腹との間の凹みたる所。＝心窩子。○鎧の附屬具、左のかたひもの上をおほふもの。

【鳩婦】キウフ　はとのめす。埤雅「鳩、陰則屏逐二其婦一、晴則呼レ之、語曰、天欲レ雨、鳩逐レ婦、既雨、鳩呼レ婦」林光朝詩「疎籬短短花枝罅、ーー不レ鳴天雨寒」

【鳩レ民】キウミン　民を安んじ集める。左、隱八「君歸二三國之圖一、以鳩二其民一」

【鳩槃茶】キウバンダ　㊀天部に屬する惡神の名。圓覺經「――、食二人精血一、其疾如レ風、變化稍多」槃一に盤に作る。本事詩、嘲戲「中宗朝、御史大夫裴談、學二奉釋氏一、妻悍妒、談畏レ之如二嚴君一、常謂レ人、妻有二可レ畏者三、少妙之時、視レ之如二生菩薩一、安有二人不レ畏二長生菩薩一耶、及二男女滿レ前、視レ之如二九子魔母一、安有二人不レ畏二九子魔母一耶、及二五十六十一、薄施二敷粉一、或青或黑、視レ之如ニ――、安有二人不レ畏ニ――一耶」

【鳩摩羅什】クマラジフ　西域龜玆國の僧、後秦の時、長安に來り、經論三百卷を譯す、三論宗の開祖たり。＝羅什三藏。

【鴆】チン　新

ーー鴆は、よしきり、よしわりすずめ、好みて莘の皮をわりて其の中の蟲を食ふ小鳥。＝割莘。

【鳧】フ　國　鳧は俗字

○かも、水鳥の一、鴨の小なる者（一說に野に在るはー、家に在るは鴨）背は扁平にして黃色、雄の頸毛は濃紫色に綠を帶び、背は淡黑色にして紫斑あり、甚だ美くし、秋來り春去る。詩、鄭風「ヤ雁」＝野鴨。○圓けり。鴨に似たる水鳥、頭背は灰色、胸腹は白し。○信ーシンは鳧の一種。本草「又海中一種、隨潮往來、謂之信ーー」○圓過去終止の意を示す助動詞の「けり」のあて字。○きまり、結局「ーが著く」

【鳧鷖】フエイ　野がもと、こがもと。詩、大雅「ーー在レ潀、公尸來燕來寧」

【鳧影】フエイ　かもの飛ぶかげ。杜甫、橋陵詩「太史候ニーー、王喬臨二鏡餉一」

【鳧鷖】フエイ　かものくびげ。又、かも。黃庭堅詩「春漢蒲稗沒ニーー」

【鳧鴨】フオウ　かもと、かもめと。杜牧、賞春詩「ーー皆相識、惟漢獨含レ情」

【鳧雁】フカン　かもと、かりがねと。詩、鄭風「將翱將翔、弋二鳧與一レ雁」

【鳧葵】フキ　蓴菜ジュンサイの一種。後漢書、桂陽ーー「葉似レ蓴、生二水中一、俗名二水葵一」

【鳧花】フクワ　酒の名。皮日休詩「竹葉鳥紅徐、ーー波蕩漾」

【鳧藻】フサウ　其の所を得て、よろこび和らぐ。鳧は藻を得れば悅ぶが故。後漢書、杜詩傳「將帥和睦、士卒ーー」注「言二歡悅一如二鳧鷖一レ藻」

【鳧氏】フシ　金を攻むる工人、初めて鐘を造りし者【周禮、考工記】

【鳧舟】フシウ　かもの形せる舟。顧景陽文「乘ニーー一兮爲二水嬉一」注「舟爲二鳧形一、今吳之青雀舸、其遺象也」＝鳧舄。

【鳧鷁】フゲキ　かもと、あひると。李尤、弩銘「丸彈之利、以弋ニーー」

【鳧脛雖レ短續之則憂】フケイスイタンゾクレバスナハチウレフ　鳧脛の短きを續ぐ則憂ふ。物には各天より授けて貰しき所あり、自然にまかせて、妄に損益すべからずとの喩。莊、駢拇「長者不レ爲レ有レ餘、短者不レ爲レ不レ足、是故――、鳧脛雖レ長、斷レ之則悲、故性長非レ所レ斷、性短非レ所レ續、無レ所レ去レ憂也」

【鳲】【國字】

○にほ、かいつぶり。水鳥の一、嘴は堅くして尖り、兩翼短小、巧みに水中に出沒する。＝鷿鷉。○ーー海ウミは琵琶湖の異稱。

三畫

【鳶】エン　エン　先

○とび、とんび、鴟の屬、猛鳥の一、狀鷹に似たり、只脚やや短く、尾やや長し、全身茶褐色にして微に紫を帶ぶ、飛ぶ力強く、喜みて空中を翔旋す。＝鳶。○とびいろ、とびの羽の色に似たる色、茶褐色。○風ー

紙ーはいかのぼり、たこ。唐宋、田悦傳「以紙爲鳳ー」

【鳶魚】エンギョ　とびと、うをと。陸游、贈二梁右相一啓「一氣ーー、或遂二飛潜之性一」鳶飛魚躍を見よ。

【鳶肩】エンケン　かたのそばだちて富に似たるにいふ。晉語「叔魚生、其母視レ之曰、是虎目而豕喙、ーー而牛腹」後漢書、梁冀傳「爲レ人ーー豺目」

【鳶跕】エンテン　鳶が空の稲氣にふれて落ちる。後漢書、馬援像「下據上蹲、垂氣重蒸、仰視二飛鳶跕跕墮二水中一」高適詩「猿啼山不レ斷、ーー路難レ登」ll跕墮。

【鳶尾】エンビ　いちはつ、多年生草、庭園に多く栽う、初夏花開く、頗る大、淡紫綠色。

【鳶飛魚躍】エンピギョヤク　道は、天地間在らざるところなきをいふ。詩、大雅、旱麓「鳶飛戻レ天、魚躍二于淵一」中庸に此の二句を引き、下に「言二其上下察一也」とあり（戻は至、察は著なり、此詩を引きて、化育流行上下昭著、此理の用に非る莫きを明かにす）

【鴟】コウ　東　鴻の古字　ひしくひ、おほとり。

【鴟】シ　支　ーー鳩シは、ふふどり、つつどり、なはしろどり、全身黑くして腹は淡黄色、白黑の斑文あり。詩、曹風「ー鳩在レ桑、其子七兮」ll尸鳩、布穀、桑鳩、穫穀。

【鳳】ホウ　送　おほとり、ほうわう。聖人が世に出づれば之に應じて見はれるといふ瑞鳥、梧桐に非ざれば棲まず、竹實に非ざれば食はず、醴泉に非ざれば飲まず、羽毛五色にして聲五音に中り、世に道あれば見はれ、飛べば羣鳥之に從ふといふ。雄を凰、雌を鳳といふ。論、子罕「ー鳥不レ至、河不レ出圖」

【鳳友】ホウユウ　孔雀の異名。韓愈、孔雀詩「穆穆鸞ーー、何年來止レ茲」

【鳳旌】ホウセイ　太子の宮庭。旌は宮闕の左右の旌門。元萬頃詩「和レ摩膊ニーー、交レ影步二鸞輝一」ll隨旌。

【鳳苑】ホウエン　御所の花園（唐書、百官志）陳嗣詩「青春光ニーー、艸草偏二龍池一」

【鳳レ凰】ホウクワイス　鳳字を見よ。

【鳳駕】ホウガ　○天子ののりもの。揚雄賦「選二整鳳之駕一」曹希逸詩「鑒興選二上苑一、ーー歌二層城一」○仙人の乘る車。王官、七夕詩「天河横欲レ映、ーー鸞鳳レ飛」

【鳳盞】ホウサン　天子の儀仗、盞は蓋の盞。班固賦「登二龍舟一張ニーーニ」

【鳳閣】ホウカク　中書省の異稱。唐書、百官志、注「光宅元年、改二中書省一曰ニーー一」謝靈運詩「朝游登ニーー一、日暮集二華沼一」

【鳳吟】ホウギン　竹の聲を鳳の聲に比していふ。吳筠、竹賦「上點點以雲戰、下裕洽而ーー」

【鳳冠】ホウカン　古、皇太后・皇妃などのかんむりの名。漢の制、太皇太后・皇太后が廟に入る時の首服、飾るに鳳凰を以てす。明會典「皇妃常服、花釵ーー」

【鳳気】ホウキ　文采の香氣するところ。北史、文苑傳「曹王陳阮負二逸衿之思一、捷二棟幹於鄧林一、潘陸張左、擅二修靡之才一、飾二羽儀於ーーニ」

【鳳闕】ホウケツ　○宮城の門。兩觀の上に銅製の鳳凰を置くが故。漢書、郊祀志「ーー高二十餘丈一」ll鳳門。○轉じて宮城の義とす。李白詩「寵劍朝二ーー一、樓船侍二龍池一」

【鳳釵】ホウサイ　鳳凰の飾あるかんざし。中華古今注「釵子、蓋古笄之遺像、始皇以二金銀一作二鳳頭一、以二玳瑁一爲レ脚、號曰ニーーニ」

【鳳子】ホウシ　大いなる蜂蝶（古今注）韓偓詩「ーー經蓋風粉蝶」ll鳳蝶。

【鳳字】ホウジ　凡鳥の雌雄、人の凡庸なるをあざける語。世說、荀慧、嵇紹與二呂安一善、毎二相思一、千里命レ駕、安後來、値二康不一在、喜出レ戸延レ之、不レ入、題二門上一作ニーーニ而去、喜不レ覺、嚬以爲レ欣、ーー凡鳥也」（喜は康の兄）ll題鳳。

【鳳兒】ホウジ　賢きこども。指月錄「龍生二龍子一、鳳生ニーーニ」ll鳳雛。

【鳳姿】ホウシ　けだかきすがた。晉書、紀瞻像「瞻士氷形儀、不二自藻飾一、人以爲二鸑鷟一ーー、天質自然」ll鳳容。

【鳳觜】ホウシ　にかは。古、鳳の嘴を煮て作りきといふ。十洲記「鱗州上多二鳳麟一、生二鱗角一ーー一、爲レ膠、可レ續二斷絃一」

【鳳車】ホウシャ　○大いなる蝶アゲハの異名。古今注「蛺蝶、一名ーー」ll鳳子。○天子のみくるま。漢官儀簿「乘輿大駕、則御二鳳凰車一、以二金根一爲レ列」ll鳳輦。○仙人の乘る車。張協詩「九色耀中紫ーー」ll五鳳車。

【鳳城】ホウジョウ　○どしょ、宮城。王維詩「柳暗百花明、春深五ーー」ll禁城。○地名、鳳凰城に同じ。今の奉天東邊道に屬す、清の光緒三十二年、開きて商埠と爲す。

【鳳翔】ホウショウ　○ほうわうがかけるとよ。易林「景星明堂、麟遊ーー」○府の名、冀の右扶風の地。今の陝西ーー縣は其の舊治なり。

【鳳舉】ホウキョ　○ほうわうが高く飛よ。盧照ーー一「ーー鸞翔、百羽從レ之」ll鳳翔。○ほうわうの飛びあがる如く、人

品の極めてけだかき狼。田獵、祭二王和甫一文「龍驤ーー　始見二俊人一」【鳳吹】ホウスイ　笙・簫の類をいふ。古樂府「丈人少徘徊。ーー方寸差」【鳳翹】ホウギョウ　鳳凰の翹、珍味とす、隨は骨中の脂。李嶠用詩「雪凝堪杯ーー　融、紅施象筋盤特細」【鳳雛】ホウスウ　○ほうわっのひな、英俊なる少年に喩ふ。晉書、陸雲傳「陸雲六歲能屬レ文、吳尚書顧邵見而奇レ之曰、此兒若非二龍駒一當是ーー」‖鳳兒・麒麟兒・龍駒。○未だ世にあらはれざる英雄に喩ふ。蜀志、諸葛亮傳、注「司馬德操曰、此間自有二伏龍ーー一劉備問爲レ誰、曰、諸葛孔明・龐士元也」【鳳髪】ホウハツ　他人に傳言をたのむ敬稱。手紙の用語。‖鴈髪。【鳳沼】ホウショウ　鳳池に同じ。杜甫詩「ーー　接二宸衷一」‖鳳凰池。【鳳詔】ホウショウ　天子の詔。事物紀原「後趙石季龍置二騶馬觀一、觀上安二詔書一、用二五色紙一、衛二於木鳳口一而頒レ之、今大禮御レ楼、肆赦亦用二其事一、自二石季龍一始也」梁元帝、蕭懸墓銘「爾升ーー　三侍二龍樓一」【鳳韶】ホウショウ　虞舜の樂。丁儀年詩「ーー　九奏黃金殿、鈞天三朝自二茲一」【鳳占】ホウセン　婚姻の成るをいふ。左、莊二二「初懿氏卜レ妻二敬仲一、其妻卜レ之、曰吉、是謂二鳳皇于飛、和鳴鏘鏘一、有レ媯之後、將レ育二於姜一、五世其昌、並二於正卿一、八世之後、莫二之與京一」注「懿氏、大夫、雄曰レ鳳、雌曰レ皇、雄雌俱飛、相和而鳴、猶二敬仲夫妻一、相隨適レ齊有二聲譽一、媯・陳姓、姜齊姓」【鳳凰】ホウオウ　ほうわっをふがきたるうちは。陳遵詩「龍旌ーー　相迎」【鳳仙花】ホウセンカ　草花の一、長さ二三尺に至り、葉は披針狀、紅・白色蝶形の花さく、其の實を鳳仙子といふ。女子多く其の花を取りて指甲を染む。故に亦指甲花とも稱す。【鳳胎】ホウタイ　鳳凰の孕み子。玉壺清話「太宗問二蘇易簡一曰、食何品何物最珍、對曰、物無二定味一適レ口者珍、臣止知二蓴羹鱸膾爲レ美、自餘、上界仙廚、實靣ーー、殆恐不レ及」【鳳臺】ホウダイ　秦の穆公の時、簫史が簫を吹きし臺、穆公の女弄玉、簫を好む、公爲めに臺を築き之を居く、一名鳳女臺、今の陝西省寶雞縣の東南に其の故趾あり、簫史は後ち鳳に乘りて天に昇りと。鮑照、汴天行「ーー　無二遼鶴一、簫管有二餘聲一」【鳳團】ホウダン　上茶の異名。石林燕語「建州歲貢二大龍ーー茶一、仁宗時、蔡君謨始造二小龍團十斤一以獻」周邦彥詩「開緘ニーー　餡二蝦蔓一、靜看蒸子鼈二新堤一」【鳳池】ホウチ　○鳳凰池の略。禁苑中に在りて中書省の所在地、因りて中書省の異名とす。晉書、荀勗傳「勗久停死二後、寮臣無二敢謀者一、李豐感晉令二其關閉機鍵、或有二竊レ之者一、勗因レ事一謫、人以爲二鳳鳴二朝陽一」【鳳蝶】ホウチョウ　蝶の一種、あげはのてふ。形大きく、止まるとき翅を背にあげて合せる。【鳳頭釵】ホウトウサ　女子のはきもの、鳳を以て飾とするが故。王建詩「試穿金線ーー」【鳳德】ホウトク　聖人の德に喩ふ。楚の狂接輿が「鳳兮鳳兮、何德之衰」といひて孔子を誹りたるに本づく（論語、微子）晉書、周顗傳「周侯末年、所謂ーー之衰也」【鳳笳】ホウカ　樂器の名。楊維楨詩「日落海門吹ニーー」【鳳尾草】ホウビソウ　うらじろ、隱花植物の一、其の葉羽狀を爲し、分裂して鳳尾に似たるが故。冬、背に子嚢を羣生す、色黃なり、故に亦金星草とも稱す。識者の飾物に用ふ。【鳳尾蕉】ホウビショウ　蘇鐵ダの漢名。高き支幹、塞に鱗片ありて之に被る、葉は塞頂に生じ、長大にして堅勁、羽狀を爲す、故に名つく。五雜俎「ーー、其木蘇、巨葉、四五尺、蜜比如二鉄刺一般、高者亦丈餘」‖鳳尾松・鐵羅漢・鐵樹。【鳳舞】ホウブ　鳳凰が舞ひ遊ぶ。太平の象にいふ。易林「鳳遊ーー、龍鳴民喜」【鳳團】ホウダン　上茶の名。大觀茶論「本朝之興、歲修二建溪之貢一、龍鳳ーー、名冠二天下一、而壓顏之品、亦自レ此而

盛」＝鳳闕。

【鳳毛】ホウモウ　人の文采あるを稱していふ。南齊書、謝超宗傳「顧寵逝宋臨川內史、超宗對レ客、有二文辭一、新安王子鸞、彭城劉儁等、超宗作レ謀害レ之、帝大嗟賞、曰、超宗殊有二鳳毛一」、恩澤運復出」帝は宋孝武帝。

【鳳凰】ホウワウ　鳳凰が鳴く。漢書、律歷志「黃帝制二十二筒一、以聽二鳳之鳴一」鳳鳴二朝陽一參看。

【鳳門】ホウモン　鳳闕に同じ。洛陽記「鳳凰門、五層樓、去レ地三十丈、安二金鳳皇二頭一」

【鳳兮鳳兮】ホウケイホウケイ　鳳凰は國に道ある時見はれ、道なき時は隱る、故に借りて孔子の聖德ありて隱れざるを譬る。論、微子「楚狂接輿歌而過レ孔子之門一曰、——、何德之衰、往者不レ可レ諫、來者猶可レ追、已而已而、今之從レ政者殆而」

【鳳輿】ホウヨ　鳳駕に同じ。杜甫詩「通籍盛二豪印一、差肩列二一一一

に世に知らるるに喩ふ)

【鳴雁】ガイ　なくかりがね。詩、都風、匏有苦葉「雝雝鳴雁、旭日始旦」雝雝は鳥聲の和げるなり。この詩、嫁娶の時を言ふ、故に借りて婚期の候とす。楊炯文「三星照レ夜、忻稽二一之期一」雁は鴈。ノ

【鳴珂里】カイ　○珂は貴人の用ふる馬具の飾りの玉、珂を鳴らす里とは貴人の居る里の號。唐書、張嘉貞傳「昆弟上レ朝、軒蓋騈溢二閭巷一、時號二所レ居坊一曰二——一」○轉じて人の鄉里を尊稱して珂里・珂鄉といふは此に本づく。

【鳴琴】センキンス　○ことをかなでる。說苑「子賤宰二單父一、一レ年而治、巫馬期亦宰二單父一、以レ星入、日夜不レ處、以レ身親レ之、而單父亦治」(一レ年而治は道を以て民を化し、勢せずして治まるをいふ)‖彈琴。○瀑布などの音に喩ふ。王勃詩「斷山疑二雷障一、懸溜瀉二一一」

【鳴禽類】メイキン　鳥の分類の一、形小さく、多くは囀音を有して善くさへづるもの、燕雀の類。

【鳴管】メイクワン　鳥類の氣管の下部に在りて、美くしき聲を發する器官。

【鳴雖吠狗烟火萬里】エンクワバイコウ　雞の鳴く聲や狗の吠ゆる聲が聞えて、人家が萬里も續く。太平の世をいふ。史、律書「孝文卽レ位、百姓無二內外之繇一、得レ息二肩於田畝一、天下殷實、粟重三十餘鎭一——、可レ謂二和樂者一乎」

【鳴弦】メイ　○弓づるを鳴らす。楊師道詩「雁落遥二一一」○圓つるうち、物のけをはらふ爲め弦をならす。

【鳴柷】メイ　ことをならす。宗楚客詩「影圓二明月一、圖二訊鼉一、聲轉二流水一、雜二一一」

【鳴弦】コウイスン　つづみをうちならす。轉じて罪をならして賞め立てるにいふ。論、先進「非二吾徒一也、小子一レ、而攻レ之可也」

【鳴絲】メイ　琴の音。李白詩「魏姝弄二一一」

【鳴起】メイ　ことをならす。江淹賦「媚二北里之一一」

【鳴謝】メイ　禮をのべる、感謝する。

【鳴鐘】メイ　つりがねのなること。謝朓詩「一一發二幽抱一」

【鳴騶】スウ　ともまはりの馬がいななく。貴人の車馬の際をいふ。孔稚圭、北山移文「一一入レ谷、鶴書赴レ徵」

【鳴蚓】メイ　○みみずの異名。古今注「蚯蚓善長吟于地中、江東人謂二之馱女一、或謂二之一一」○いしだたみにあたりてなる。陸游詩「浙浙南一一」

【鳴笳】メイ　鳴鏑に同じ。

【鳴條】メイ　地名、殷の湯王が夏の桀王を敗りし處、今の山西省安邑縣、一一岡。

【鳴蜩】メイ　秋鳴く蟬。詩、小雅「菀彼柳斯、一一嘒嘒」

【鳴笛】メイ　ふえをふく。韓愈詩「一一急吹催二落日一」

【鳴鏑】メイ　なりかぶら、ひきめ、矢のさきに木にて作りし中空の蕪形の筒をつけし箭、射れば風に激して自らひびく。漢書、匈奴傳「習傳乃作二爲一一一」‖舞箭。

【鳴天鼓】テンコ　道家修煉の一法。兩掌を以て兩耳を掩ひ、食指と中指とにて腦の後を擊ちて聲を作さしむるをいふ。

【鳴動】メイ　なりうごく。

【鳴吠】メイ　○雞がなき、犬がほえる。陶潛詩「荒路曖交通、雞犬互一一」○轉じてつまらぬ技能に喩ふ。柳宗元啓「一一之能、猶希二收用一」

【鳴鞭】メイ　古、儀仗中に用ふる器、之を振ひて聲を發せしめ、人をして靜肅ならしむる者、亦之を靜鞭ともいふ(宋史、儀衛志)

【鳴篇】メイ　ふえ。韓愈詩「脊蛾髻二長袖一、紅顏吹二一一」

【鳴鑾】メイ　天子の車につける鈴、天子の出行にいふ。鑾は和鈴。班固、西都賦「大輅一一、容與徘徊」王勃詩「佩玉一一雜二歌舞一」

【鴉】ア　四　畫　麻　又、鴉に作る

○からす。はしぶとがらす、みやまがらす、鳥の一種、形小さく黠にふとく、腹白し「昏一」「暮一」「歸一」「翠一」(雅「純黑反哺者謂之烏、小而腹下白、不反哺者、謂之一」)○黑き色にいふ、まっくろ「一髮」「一鬢」

【鴉軋】アア　舟の櫓。又、轆轤などのすれあふおと。元稹詩「一一深林井」

【鴉頭】アア　はぜの木、卽ち烏桕。其の實蠟を製すべし。陸龜蒙詩「行歌倚二一一影」

【鴉翠】アクン　烏のむれ。鮑文蔚、寒過賦「共時天語未レ華一一已散、朔吹捲レ沙、荒櫪羅レ岸」

【鴉鬢】アクン　○黑き髮の毛。于濆詩「一一未レ成レ翳、鬢鏡徒相知」○婦女の稱(宋人異聞雜錄)

【鴉背勤】アヒ　烏のくちばしに似たる銳利なる鋤。陸游詩「題レ詩又插牛腰東、采レ藥常携一一」略して單に鴉背ともいふ。

【鴉陣】アヂン　からすがならび飛ぶにいふ。陸游詩「乍起道行橫野去、欲レ棲一一暗天飛」

【鴉背】アイ　烏のせなか。溫庭筠、春日野行詩「蝶翎朝粉重、一一夕陽多」

【鴉鬢】アビン　びんの毛のまっ黑きをいふ。古詩「翠彩香子紅、一一青蛾色」

【鴉片】アペン　阿片(二〇九八二)に同じ。

【鴉片戰爭】センソウ 清の宣宗の時、英人鴉片を販運し毒を支那全國に流すを以て、林則徐に命じて廣東に赴きて之を禁ぜしめ、英人の互市を絕ち、鴉片二萬餘箱を焚く、英人兵を以て沿海を擾し、進みて南京を攻む、乃ち林則徐を斥け英人と和し、兵費を償ひ、沿海の五口ゴカウを開きて商埠とし、香港を割きて之に與へ、事乃ち已む。

【鴉鷺】ア 黑きからすと白きさぎと。＝烏鷺。

【鴈】ガン 諫 又、雁に作る、雁の條參看

○かり、がん。水鳥の一、羽毛淡紫褐色、腹は白色、共に黑色の斑點あり、秋來りて春歸り、翌りて列を成して飛ぶ「旅―」「歸―」＝隨陽鳥・陽鳥。○舒―は贅の異名。○にせ（僞物）屢に通ず「―雁」＝贋。

【鴈行】ガン ○がんの斜に列を成す如く一步づつ後れて竝び進む。禮、王制「父之齒隨行、兄之齒―一」○一番さきに行く。戰國燕策、使二翁燕一―一」＝雁行。

【鴈帛】ガン 手紙をいふ。雁帛（二三頁一段）を見よ。書言故事、「寄レ書曰レ傳二―一」

【鴃】ケキ 缺 又、鴂に作る、通音ケキ

もず、小鳥の一、頭背は黃褐色、胸は白色、腹は黃赤色にして黑き斑條あり、上嘴は曲りて鋸齒狀をなし、善く小蟲類を捕食す、其の聲かまびすし。＝伯勞・博勞鳥。

【鴃舌】ゲキ もずの鳴き聲。野蠻人の言語に比していふ。孟、滕文公「今也南蠻―之人、非二先王之道一」

【鴆】（一）ケツ（二）ケイ 屑 （一）鶺ヅの一種、鷦の類。○鷽―はみそさざい。＝巧婦・工雀・女匠。（二）鷽―はほととぎす（鵑）＝鵲鴆。

【鴆】チン タン 軫 旱 駘に通ず

○毒ある鳥の名、此の鳥の羽を浸したる酒を飲めば即ち死すといふ。晉語「置レ於酒一」本草集解「陶弘景曰、―鳥出二廣之深山中一、啖レ蛇、人誤食二其肉一立死、昔人用レ毛羽一毒レ酒、故名レ酒」埤雅「―似レ雁而紫黑、喙長七八寸、作二銅色一、食レ蛇、蛇入口輒爛、屎溺著レ石、石亦爛之爛、羽翮有レ毒、以攪レ酒、飲殺人、惟屎角可二以解一、故有レ毒必有レ解」又、其の酒にて毒殺する。○轉じて廣く毒殺の義とす。○一媒は讒言（楚辭）

【鴆殺】サツ 毒殺する。字解參看。漢書、高五王傳「呂太后殺レ王、到二長安一ニ―之一」

【鴆酒】シュ 鴆毒を入れたる酒。字解參看。漢書、高五王傳「酌二兩巵一―一置レ前」＝毒酒。

【鴆毒】ドク ○鴆の羽を酒に浸したる毒。荷悅、申鑒「甘醴有二一一一、藥酒有レ治レ病」○毒の甚だしき者に喩ふ。左、閔元「管敬仲言二於齊侯一曰、寡安一一、不レ可レ懷也」注「以二寡安一比二之一一一」＝耽毒。○毒酒にて人を殺す。後漢書、單超傳「乘レ夢忌憚、多レ所二―一」＝鴆殺。

【鴆肉】ニク 鴆鳥の肉。太平御覽「―一在レ俎、餓能不レ食、毒鳥の肉は俎の上にあるも、縱令飢ゑたる人と雖も食はずとの義。

【鴇】ホウ 皓 ○のがん、雁に似て大なり、斑文あり、後趾なし。詩、唐風「鴇羽―羽」○俗に最も多淫の鳥にて何の鳥にても交尾するといふ、故に倡妓を一兒、やりてなどかるを一母といふ。○くろあしけ（烏驪）詩、鄭風「叔于田、乘レ乘一一」○國ときの（鵠）

【鴇羽之嗟】ハウ 庶民征役に勞して、其の父母を養ふことを得ざるなげき。詩、唐風、鴇羽篇「肅肅鴇羽、集二于苞栩一、王事靡レ盬、不レ能レ藝二稷黍一、父母何怙、悠悠蒼天、曷其有レ所」（鴇羽は時を刺る詩、君子征役に從ひ其の父母を養ふを得ずして、この詩を作る）

【鴇母】ボ やりて、遊女屋にて女郎の世話をする女。字解參看。＝倡母・妓母・花車シャ香車シャ

【鴨】アフ 治 五畫

○あひる（鴛）○かも（鴨）＝匹。

○かも（鳧）○あひる（鴛）「家ー」「鳧ー」‖舒鳧家鴛。

【鴨脚樹】アフキャクジュ　公孫樹ぎんなんの異名、葉の形の似たるが故。陸游詩「鴨脚葉黄烏桕丹」脚は脚の俗字。

【鴨黄】アフワウ　かもの雄其の毛の黄なるが故。圖繪寶鑑「魯宗貴善ー寫、尤長二寫生一、錬鵝ー一、最有二生意一」

【鴨兒芹】アフヂキン　野蒿ぜりの異名。

【鴨跖草】アフセキサウ　つゆくさ（蘇頌）又蠻草ともいふ、多年生草、平野に自生す、葉尺許、柔かにして下垂す、花は藍色、花を搾り汁をしぼりて紙料と爲す。

【鴨頭】アフトウ　水の綠色を鴨のくびの毛の色にたとへていふ。李白詩「遙看漢水ー一綠、恰似葡萄初醸ー醅」

【鴨綠江】アフロクカウ　支那と朝鮮との界を流れる江名、長白山に發源す、其の水鴨頭の如く綠なるが故、一名淥水、綠一に涙に作る。‖馬訾水。

【鴨爐】アフ　鴨の形に作りたる香爐。陸游詩「香殘冷ニー一」‖鴨鑪。

【打ー鴨驚ー鴛鴦】キアタアフキンアフシヤウ　一人を罰して他の衆人を驚すに喩ふ。梅聖兪詩「莫ー打ー鴨驚ニ鴛鴦一、鴛鴦新向二西池一落、不レ比孤洲老鶴鶏」

【鴃】イツ　カツ　物　質　イク　屋

○鵙かなどの疾く飛ぶ貌。詩、秦風「ー彼晨風一」（晨風は鵙）○はやし（疾）

【鴛】エン　ヲン　元

○をし、をしどり、水鳥の一、形は鴨に似てやや小、雄には羽毛美くしく、頭に紫黒色の羽冠あり、雌雄相親みて離れず、故に夫婦の和睦するに喩ふ「ー鴦契」‖匹鳥。○特に、其の雄の稱。雌は鴛。○古、鴛に通ず。

【鴛鴦】エンワウ　をしどり。字解參看。詩、小雅「ー一于飛、駕ー之羅ー之」

【鴛鴦瓦】エンワウグワ　瓦の偶を成すもの。三國志「魏文帝夢二兩瓦落レ地爲二鴛鴦一」白居易詩「ー冷霜華重」‖鴛瓦。

【鴛鴦繩出從二君着一】エンアウシヤウシユツジユンキチヤクをしどりをぬひとりする妙技は人の看るにまかすも、其の秘訣は容易に其の人に授けるを惜む。元好問、論詩絶句「ー、莫下把二金鍼一度中與人上」

【鴛鴦偶】エンアウグウ　をしどりのつがひ、睦まじき夫婦に喩ふ。李白詩「常嵌玳瑁孤、猫喫ー」

【鴛鴦契】エンアウケイ　をしどりの雌雄常に相離れざるを夫婦の相親むに喩ふ。列異傳「宋康王埋二韓凭夫妻一、宿少文梓生、有二鴛鴦雌雄各一、恒棲二樹上一、晨夕交レ頸、音聲感レ人」

【鴛鴦被】エンアウヒ　被ぎの偶を成す者の稱。西京雜記「趙飛燕女弟、上二ー一一」‖鴛被、鴛衾。

【鴛機】エンキ　刺繍えの具。錢起詩「豔家少婦事ニー一一」

【鴛瓦】エングワ　鴛鴦瓦の略。李商隱詩「秦樓ー一漢宮盤」

【鴛侶】エンリヨ　○鴛は雄と雌とず、仕宦の同僚に喩ふ。韓愈文「某則困頓於龍津、博士則翔於ー一」○今は鴛鴦の鴛と爲して用ひ、匹偶を指して言ふ。

【鴛鷺】エンロ　朝官の班次をいふ、鴛は雄に通ず。劉禹錫詩「暫別瑤池ー一行」

【鴈】カ　麻　がてう（鵝鳥）のがり（野鵝）

【鴛】カ　巧

みそさざい。‖鷦鷯巧婦鳥・工雀。

【鴛巧】巧に從ふ、巢をつくるの巧なるが故。

【鴟】㊀ク　虞　㊁コウ・ク　尤　㊂コウ・ク　有

㊀ー鴞ケウは、はは、はってう、鴟に似て雛あり、羣を成して飛ぶ、五月五日に其の舌端を剪りて囀くし語を教ふれば能く人言をなすといふ（閑明錄）‖哺哺鳥八哥鳥。鴟は鵄（鳥部十八畫）に同じ、㊁みみづく（鵂鶹）㊂烏のこと。○雄なく。

【鴟鴞眼】ガウガン　石上に圓き斑點あり、大なるは五銖錢の如く、小なるは芥子の如し、外、暈ありて千餘重に至るものをいふ。硯譜「端溪中之硯石、有二ー一一、黄黑相間、品望可レ愛、謂二之活眼一」硯林「石之青脈者、必有レ眼、脈則眼多、老則眼少、嫩者翻涸發愛、所二以貴一有レ眼」

【鴟鴞舞】フガウ　舞樂の名。晉書、謝尚傳「王導以三其有二勝會一、謂曰、聞君能作二ー一一、一座傾想、尚便著二衣幘一而舞、導令二坐者撫レ掌擊一節、尚俯二仰其中一、旁若レ無レ人」

【鴟】ケウ　肴

ふくろふ（梟）鴟の類、惡聲の鳥「鴟ー」詩、陳風「有ー萃止」‖鵂。

【鴟音】ケウオン　凶暴の人の言。唐論二燕州一檄「豕心蛇ー一不レ革」

【鴟炙】シケウ　ふくろふの肉のあぶりもの、最も美味とす。莊、齊物「且汝亦大早計、見レ卵而求二時夜一、見レ彈而求ニー一」

【鴟】コ　虞

鵂ーシヤは鳥の名。鵂（鳥部十一

蠆）を見よ。

【鴟】シ　支

○ふくろふ（梟）夜出でて他の鳥の子をとらへ食ふ惡鳥。○轉じて惡人に喩ふ。史、賈誼傳「鵩鳥伏寢今ー梟翺翔」○角ーは梟鵂（キウ）＝怪鳥。○蹲ーは芋の異名。○ーー夷（ヰ）は革嚢。吳語「盛以ーー夷而投之江」又、酒を盛る器。揚雄、酒箴「自用如此、不如ーー夷」○かめ、酒甁。蘇軾詩「金錢百萬酒千ーー」

【鴟夷】イ　○馬の革にて作りたるふくろ。史、伍子胥傳「盛以ーー革、浮之江中」○酒を盛る器。字解參看。

【鴟蠆】カイ　蠆は怒る聲、莊子と惠子との問答に本づきて心卑しきものが他の祿しとする者を疑んじて、他に奪はれんことを恐るるに喩ふ。莊子、秋水「ーー夜撮レ蚤、察二見毫末一、晝出瞋目而不レ見二丘山一」みみづくの目は晝は丘山をも見るを得ざれども、夜は小さき蚤をも捕ふ、以て其の身の利害を觀ること能はざる人も、國家の存亡を察することあるに喩ふ。＝角鴟。

【鴟梟】レウ　鴟鴞に同じ、惡鳥なり、因りて奸惡の人に喩ふ。賈誼、弔二屈原一文「當二時不詳一、鸞鳳伏匿、ーー翱翔」

【鴟蹲】クワ　ふくろふ、鵂は梟。詩、豳風「ーーーー、既取二我子一、無レ毀二我室一」

【鴟顧】レ　身動かずして首のみかへりみる。後漢書、方術傳「古之仙者、爲二導引之事一、熊經ーー、引挽腰體一、動二諸關節一、以求レ難レ老」

【鴟張】チャウ　ふくろふの翼を張れる如く勢の強く悍ましき貌。吳志、孫堅傳「卓不レ怖レ郡、而ーー大語」（卓は董卓）

【鴟尾】ビ　○宮殿の棟のかざり、しゃちほこの類。倭遊錄「漢以二宮殿多一レ災、術者言、天上有二魚尾星一、宜下爲二其象一、冠上於屋一以禳之、唐以來寺觀殿宇、尚有下爲二飛魚形一、尾指レ上者上、不知下何時易レ名曰中ーー上」一說、鴟は蛟（海獸の名）の說。＝鴟吻・鴟甍。○國ー古、牛車の後にながえの如くつき出たるかざり。

【鴟靡】シ　ほしいままにしておごる。魏收文「內惡ーー、外逞二殘賊一」＝侈靡。

【鴟吻】フン　鴟尾を見よ。

【鴟目虎吻】シモクコフン　むさぼりもとる容貌。狼戾の貌。漢書、王莽傳「群所レ謂ーー豺狼之聖者也」

【鴟】シ　鳥　雖に同じ

ーー鳩（キウ）はみさご。＝雎鳩王雎。

【鴕】タ　歌

だてう。熱地に產する駱駝に似たる大鳥、脚太く脛長く、高さ八九尺に至る、翼小にして飛ぶ能はず、脚強くして善く疾走す、今は其の羽毛は歐米の婦女の冠の飾とす。駝の字を通じ用ふ。＝大鳥爵。

【鵡】ブ・ム　國　布　鸚に同じ

鸚ーは、能く言ふ鳥。正字通「鸚ー能言鳥有二綠色・紫赤色・白色・五色數種一」＝鸚鵡。

【鴉】ヤ　陽　ア

○をしどり。又、をしどりのめす。鴛（前頁）を見よ。○屋瓦の名「鴛ー瓦」

【鴒】レイ　リャウ　青　又、令に作る

鵝ーは小鳥の一、みちをしへどり、いしたたき。鶺（鳥部十畫）を見よ。＝脊令。

【鵐】〔國字〕

しぎ（鷸）夏秋、田澤に居る、くひな（秧雞）に似て小なり。

六畫

【鵝】ア　歌

ふなしうづら。＝鵝（鳥部十畫）

【鵁】カウ　巧

ーー鶄ーは、あをさぎ、ごろさぎ、鷺の一種、脚長く頭に毛冠あり。一說、嘴赤く脛青く、紅毛冠ありて甚だ美くしき一種の水鳥。

【鵠】カク　沃　覺

○すずめ（荒鳥）雀の屬。○ちどり（衝千鳥）小鳥の一、頭嘴蒼黑、背青黑、頰白く翅黑く、河海の水澄に棲棲す。

【鵠】カツ　黠　質　キツ

ーー鵠ーはふふどり、鳩の類。雅「鶻鳩、ーー」＝布穀。桑鳩。

【鴐】 カ 合

○いへばと、鳩の屬、野ー家ーの二種あり、野ーは全體暗黒色、ただ背の中央のみ灰白色、林中に棲棲して田禾等をあらす害鳥。家ーは野ーの變種にして種類甚だ多し。又一種軍用ー卽ち傳書鳩あり、軍中に用ひて書信を傳遞せしむ、俗に鴿鳩と稱す。○蒲ー（＊）は瓜の名。杜甫詩「傾筐滿ー青」

【鴐裘】鴐の羽の如き、暗黒色のすみ。賈島詩「ー毛初生酒力微」

【鴞】 キウ 尤 宥

みみづく、このはづく（怪鳥）梟の類、大さ鳶の如く、頭は猫に似、毛角ありて兩耳の如し、眼甚だ大いにして圓く、晝は深林中に伏して夜出づ、鳴けば雌雄相喚ぶ、聲老人の如し「ー鴞」「鴟ー」

【鴞鴞】みみづく、其の聲遒轉して休留休留といふが如し、故に名づく。＝角鴟・貓頭鷹。

【鵠】 鴝（鳥部七畫）の俗字。

【鴻】 ㊀ コウ 東 ㊁ コウ 董

㊀おほとり、はくてう、ひしくひ、水鳥の一、雁の大いなる者、背と頸とは灰色、翅は黒く腹は白し、水邊に集まり菱芡の實などを食ふ。○おほいなり。洪に通ず、廣大「ー業」「ー恩」「ー儒」「ー寶」○おほみづ（洪水）㊁頂に同じ。ー濛ー蒙は自然の元氣。又、海上の氣。又、東方の日の出づる所の地。㊂ー洞は深遠なる貌。又、相連次なせる貌。

【鴻猷】大いなるはかりごと。史、儒林傳「興ー化致ー理、ーー克贊」＝鴻圖。

【鴻益】大いなる利益。＝洪益。

【鴻恩】大いなるめぐみ。吳越春秋「蒙ー大王ーー」＝洪恩・大恩。

【鴻號】大いなるとなへ、天子の御名。陸倕、爭臣論「照ーー於無窮」

【鴻雁】○大いなるかり。大を鴻、小を雁といふ。禮、月令「季秋之月、ーー來賓」○詩經、小雅の篇名、周の宣王の德を美めたる詩、離散せし民を勞來し安集せし事を述ぶ、因りて災亂にて流離せし民を謂ひてーー又、哀鴻といふ。次條參看。

【鴻雁之哀】詩經の小雅鴻雁篇は鴻雁の哀鳴を小民が憩境に在るに喩ふ。因りて災亂流離の民のあはれなる狀とす。前條參看。

【鴻基】大事業のもとゐ。隋書、地理志「式固ーー、華ー厥王畿」＝洪基・丕基。

【鴻儀】人の風采の美稱。易、漸卦「鴻漸ー于陸、其羽可ー用爲ー儀」に出づ。又、人の贈物を謝するにもいふ。

【鴻藏】大いなるさいはひ。宋史、樂志「ーー累禩、副宴嘉辰」＝大福・景福。

【鴻篇】大いなるさいはひ。徐彦伯賦「逈ーー之無算ー」楊基詩「衣冠陳ー盛典、稍覺降ーー」＝鴻禧。

【鴻徽】大いなる善。謝莊、爵ー封諸侯ー「ーー洽ー于海表ー、威稜震ー乎沙外ー」

【鴻均】昇平をいふ。王褒文「夫ーー之世、何物不ー樂」

【鴻荒】おほむかし、太古。王延壽、魯靈光殿賦「ーー朴略、厥狀瞿盱」＝洪荒。

【鴻經】大いなる聖人の書。魏書、崔光傳「聖與ーー、炳勒ー金石ー理爲ー國楷ー、垂威ー家範ー」

【鴻教】大いなるをしへ。文心雕龍「經也者、恆久之至道、不刊之ーー也」

【鴻業】大いなる事業。帝王の業。後漢書、光武帝紀「皇帝幼沖、承ー統ーー」

【鴻勳】○漢の高祖と楚の項羽とが天下を中分せし時の境域の地名。今の河南省にして古の汴水の分流。史、項羽紀「項王乃與ー漢約、中ー分天下、割ーー以西者爲ー漢、ーー而東者爲ー楚」○轉じて大いなるへだてを劃する境とす。

【鴻鵠歌】漢の高帝の作、高祖、太子を廢して戚夫人の子趙王如意を立てんと欲し、果さず、戚夫人泣涕す、帝曰く、我が爲めに楚舞せよ、我若がの爲めに楚歌せんと、舞に曰く、「鴻鵠高飛、一舉千里云云」故に——と名づく、大旨に曰ふ大子、四皓を得て輔と爲す、羽翼すでに成る易ふべからざるなりと。

【鴻鵠之志】偉大なるこころざし。史、陳涉世家「嗟乎、燕雀安知ーー哉」

【鴻鵠將至】教を受けながら鳥を射ることなどを考へて心が他に放たれ散るにいふ。孟、告子「一人雖ー聽之、一心以爲有ー鴻鵠將ー至、思ー援ー弓繳ー而射之」

【鴻爪】鴻の飛ぶとき、雪に爪痕をのこして心覺えとすれども、二たび來るときには雪消えて知れず、以て人の逝歿の跡の遺らざるに喩ふ。蘇軾詩「人生到處知何似、應ー似飛鴻踏ー雪泥、泥上偶然留ー指爪、鴻飛那復計ー東西ー」指爪は一に爪印に作る。

【鴻漾】博大なる文章。班固、答ー賓戲「觀ーー

【鴻志】コウ 大いなるこころざし。戴叔倫詩「一一不二汝欺一、書レ空起二高飛一」大志・洪志。

【鴻儒】コウジュ 大学者。晉書、儒林傳「一一頗学、無レ乏二子時一」＝大儒・碩儒。

【鴻緒】コウショ 王者の国家を統治する大業。又、帝王の系統。後漢書、順帝紀「奉二遵一一一、恢二郊廟主一、承二鴻緒一」＝洪業。

【鴻恩】コウオン 大いなるつりがね。揚雄、羽猟賦「撞二一一一、震二九旅一」＝洪鐘。

【鴻水】コウスイ おほみづ。史、河渠書「禹抑二一一一」＝洪水・洚水。

【鴻瑞】コウズイ 大いなるめでたきしるし。文心雕龍「昔黄帝神鼎、克慶二一一一」

【鴻生】コウセイ 鴻は大、生は先生の略、大先生の義。隋書、牛弘傳「一一碩儒、總レ轡而集」

【鴻聲】コウセイ 雁の鳴く聲。鴻は雁の大いなるもの。武元衡、秋夜詩「螢影疎簾外、一一暗南中」

【鴻漸之翼】コウゼンノツバサ 鴻は大いなる翼あり、一挙して千里の遠きに遇むべし。漸は進、有為の才に喩ふ。易、漸卦「鴻漸二于陸一」より出づ。漢書、公孫弘傳贊「公孫弘・兒寛皆以二一一一、因二於蓑弁一、遠二迹羊豕之間一」

【鴻大】コウダイ 大いなり。＝洪大。

【鴻都】コウト 漢代、蔵書の所。後漢書、霊帝紀「光和元年、始置二一一門学士一」＝鴻都門学

【鴻圖】コウト ○大いなるはかりごと。賈誼、挙和帝親政「一一累聖餘レ烈」＝洪猷・丕圖・鴻猷。○大いなる版圖。晉書「克固二一一一、戡清二天步一」

【鴻洞】コウドウ ○ひろやかにむなし。淮南子「與二天地一一一」○相連なる貌。王褒、洞簫賦「風一一而不レ絶兮」

【鴻寶】コウホウ 大いなるたから、秘書をいふ。漢書、劉向傳「淮南有二枕中一一苑秘書一、世人莫レ見」蘇軾詩「家有二一一一書一」

【鴻博】コウハク 学問の博大なるにいふ。丁晉公談錄「杜鎬倘書、一一之士也」

【鴻飛】ヒ 高く世外に超然たる喩。高鳳漫録引の意に用ふ。後漢書、逸民傳序「揚雄曰、一一冥冥、弋者何篤焉」孟浩然詩「書冥冥外去、誰不レ羨一一」

【鴻筆】コウヒツ すぐれたる文筆、大文章をかく。論衡「古之帝王、建二鴻德一者、必須二一一之臣一」晉書、文苑傳序「今撰二一一之彦者一」＝椽大之筆・大手筆。

【鴻毛】コウモウ おほとりのけ。物の極めて輕きに喩ふ。史、韓安國傳「籠鳥之極矢、不能レ穿二魯縞一、衝風之末力、不レ能レ漂二一一一」司馬遷、報二任安一書「死或重二於泰山一、或輕二於一一一」「以二鴻毛一燎二於爐炭之上一」

【鴻業】コウギョウ 事の極めて易きに譬ふ。史、刺客傳「夫一一、必無レ事矣」

【鴻名】コウメイ 大いなる名譽。史、司馬相如傳「前聖之所下以永保二一一一而常爲中稱首上者用レ此」＝大名。

【鴻蒙】コウモウ 天地自然の元氣。莊、在宥「一一方将二拊レ肫雀躍而遊一」＝鴻濛。

【鴻濛】コウモウ 元氣の未だ分れざる貌、又、天地自然の元氣。淮南子「西窮二杳冥之黒、東開二一一之先一」

【鴻門玉斗】コウモンギョクト 鴻門即ち今の陝西省臨潼縣の東の地にて漢の高祖と楚の項羽との會見に漢王が項羽の臣范增に玉のひしゃく一雙を贈りしに增が劍を抜きて之を撞き碎きたる故事「史、項羽紀」晉書、庾美人草詩「一一紛如レ雪、千萬降兵夜流レ血」

【鴻溶】コウヨウ わきあがる貌。楚辭、九歎「一一溢而沼蕩」

【鴻烈】コウレツ ○大いなるてがら。後漢書、馮衍傳「著二盛德于前一、垂二一一于後一」○漢の淮南王劉安、淮南子二十一卷を撰す、高誘、註して淮南一一解といふ、鴻は大、烈は明、以て大いに道を明かにする意。

【鴻臚館】コウロカン 國王朝時代京都に設けたる外國の使臣の接待所。次條參看。

【鴻臚寺】コウロジ 唐代の官衙の名、外國に關する事務・朝貢來聘の事などを掌る。

【鴻臚寺卿】コウロジノカミ 四夷朝貢の事を掌る官衙の長官。唐代之を置く。唐書、百官志「一一一人從三品（中略）掌二賓客及凶儀之事一、諸蕃朝貢、進貢使入貢所レ獻之物、先上二其數於一一一」

【鵷】エン ㊀シン 支 ㊁シン 眞

㊀鵷（鳥部五畫）に同じ。㊁とび（鳶）＝鵷「金一一勳章」

【鵝】ジ 支

○鵞一一はつばめ（燕）＝玄鳥。○一一鵝は龍鳥の屬、南洋に產す。

【鴛】シ 魚

○かやぐき（鴾母）○ふなしうづら（鷸）「鶉一一」○いへばと（鴿）

【鵜】テイ 齊

○やまどり（山雞）○一一胡はがちんてう。

【鵝】ボウ ム 尤

○一母はかやぐき、鶉の一種。○圖とき（鵯）

【鵆】【國字】

ちどり（鴴）

【鴾】（国字）

○とき、鸂鶒に似たる渉水鳥、背は灰色、翅の裏は淡紅色、鴾鵜の二字をもあてて用ふ。‖桃花鳥。○とき色、ときの羽の裏の色に似たる色。

七畫

【鵝】が　㊀又、鴚に作る。

○がてう、雁に似て大、身白く頸長く、嘴は大にして黄を帯ぶ、體肥えて尾脚皆短し、翼の力弱くして飛ぶこと能はず、一種、毛の黒き者を蒼ーといふ（野に在るを雁といひ、家に在るをーといふ）‖家雁舒雁。○軍陣の名。左、昭二一「鄭翩願爲鵝、其御願爲ー」

【鵝眼】がん　ぜに、あなぜんの異名。宋書、顔竣傳「孝和元年、沈慶之啓通、私鋳、市ン是錢貨亂改、一千錢長不ン盈三寸、大小稱ン此、謂ニ之ーー錢ー」‖孔方。

【鵝黄】がわう　鵝兒は黄色、よりて黄色にして嬌美なるものの形容。王安石、柳詩「弄ン日ーー數鳥垂」

【鵝黄酒】がわうしゅ　黄色を帯びたるよきさけ。杜甫詩「鵝兒黄似ン酒、對ン酒愛ニ新鵝ー」とあるに本づく。蘇軾詩「醪」傾ニ宇熟ー、照見新晴卵碧天」

【鵝湖】がこ　山の名、江西省鉛山縣の北に在り、宋代ーー寺あり、朱熹、陸九淵兄弟と學を此に講ず。

【鵝口瘡】がこうさう　小兒の口中が白くただれる病。

【鵝池】がち　今の浙江省紹興縣治の東北なる蘭山戒珠寺の前に在り、相傳ふ王羲之が鵞を愛ひし處なりと、寺は即ち羲之の舊宅なり。

【換ン鵝】くわんがのかう　換鵞（七七〇頁二段）を見よ。

【鵝毛雪】がまうのゆき　がてうの羽毛の如くまっしろき雪。白居易詩「可ン憐今夜ーー、引得高情鶴氅人」同人詩「雪似ニ鵝毛一飛散亂、人被ニ鵝鸘一立徘徊」

【鵝毛被】がまうのふすま　がてうの羽毛を入れたるふとん。譚賓錄異記「ーー、南越之貢蕉、多遲ニ鵝之細毛一夾以ニ布帛一、號而爲ン被」

【鵝鈎】がかう　がてうのはね。長爾「取ニーー一代繪、驛ニ奏其事一」

【鶖】

鵝（前條）に同じ。

【鵊】カ　ケ　㊀

○ほととぎす（杜鵑）の類。○鵊ーは天の明くるを催す鳥の名。歐陽修詞「綠窗鵊ー催ン天明」‖夏雞。

【鶏】キャウ　㊀

○鷄の屬、よたか。○㊀くそとび、鳶よりは小、性猛く、好みて野鼠を捕へ食ふ、農家に益あり。

【鵑】ケキ　㊀本、鷄に作る通音ゲキ

もず（伯勞鳥）鶡鶲に似て喙ナガバシ黒し。詩、豳風「七月鳴ーー」‖鵙。

【鵑】ケン　㊁

○ほととぎす、たうさどり、しでのたをさ（杜鵑・子規・謝豹・杜宇・郭公・不如歸・窗魂・蜀魄）鵜ヒバリより稍大、體やせて尾長く、背は淡黒色、腹は白色に黒きすぢあり、口大にして内赤し、晩春鳴き、其の聲淒絶、不如歸去と聞ゆといふ。宣字記「蜀之後主、名杜宇、號ニ望帝一、讓ニ位鼈靈一、望帝自逃、後欲ニ復位一不ニ得、死、化爲ニーー一、每ニ春月間一、晝夜悲鳴、蜀人聞之曰、我望帝魂也」（望帝名は杜宇）○杜ー花はやまつつじ、さつきつつじ、山野に自生し、初夏五瓣の紅花開く。李白詩「宣城還見杜ー花」‖山石榴。山躑躅。映山紅。

【鵶】コク　㊁

○くぐひ、はくてう（白鳥）雁に似て大、全體白色、頸長く、嘴の根に黄赤色の瘤あり、飛翔すること甚だ高し、俗に天鵞といふ。一種蒼黄色の者あり、黄ーといふ、仙人の乗る所といふ。○企竢の狀に喩ふ。○ーーはくてうの脛の形容。○まと、弓の的の正中の黒ほし。中庸「失ニ諸正ー」

【劉ン鵠不ン成尚類ン鶩】ほこくをなさずなほあひるにるい　鵠と鶩とは、大小は異なれども形は相似たり、よりて識敏の人を學びて、及ばずとも、尚ほ善人となる喩。後漢書、馬援傳「效ニ伯高一不ン得、猶爲ニ謹敕之士一所ン謂ーー者也」

【貴ン鵲賤ン雞】きしゃくとけいとをたっとぶ　人情遠きを貴び近きを賤むに喩ふ。論衡「雷工好畫ニ上古之人一、不ニ肯圖ニ近世之士一者、貴ン古卑ン今也、ーー者、鵲遠而雞近也」

【鵲企】しゃくき　首をのばし足をつまだて

望む。十六國春秋「趙錄遣騎、一一鳥瞰」＝鳥瞰。
【鵠鵠】コク　はくてうの聲の形容。顏師古文「鵠、水鳥、其聲一一」
【鵠志】コクシ　高遠のこころざしをいふ。仇遠詩「衆雀豈能知一一、一雞何足レ用二牛刀一」＝鴻鵠之志。
【鵠待】コクタイ　鵠の立つ如く側に直立する。寃越、朝鮮賦「從官皆一二於中外一」
【鵠的】コクテキ　矢のまと。戰國策「今夫一一、非レ智二於人一」＝正鵠。
【鵠望】コクバウ　つまだちてのぞむ。晉書、乞伏乾歸載記「乾歸運再興、四海一一」＝鵠企。
【鵠髮】コクハツ　しらが。後漢書、吳良傳「大儀一一」注「一一白髮也」（大儀は吳良の字）＝鶴髮、鮐髮。
【鵠不レ浴而白】コクフヨクジハク　天賦美なるものは、學ばずして善良なるに喩ふ。莊、天運「鵠不二日浴一而白、烏不二日黔一而黑」
【鵠面】コクメン　飢ゑやせて面貌の鵠に似たるをいふ。通鑑、梁簡文紀「江南百姓貪苛、死者藉レ野、宮室無レ食、皆鳥形一一、擾二金玉一伏二牀待一レ死」
王惲詩「一一鳥形猶努力」
【鵠卵】コクラン　はくてうのたまご、其の大に喩ふ。莊、庚桑楚「越雞不レ能レ伏二一一一」淮南子「蜉蝣不レ容二一一一」
【鵠立】コクリツ　はくてうの立つ如くに佇立する、領を引きのばして遠望して立つ。後漢書、袁紹傳「瞻望一一」注「企佇之狀、如二一一一也」＝鵠企、鵠望。

【鵂】キウ　國うを使ひて魚を捕へる「長良川の一一」＝烏鬼。

【鵂鶹】キウリウ　鵂（鳥部十六畫）を見よ。

【鵂鶹】ボツ　月　鵂（鳥部十六畫）を見よ。

【鵂】ブ　虞　鵂に同じ

【鵂】ヨク　灰　○一鵂は鳩の一種、斑鳩のやや小なる者。又、勃姑ともいふ。＝布穀。○一鳩は鳩の一種、天陰れば其の匹を呼び逐ひ、晴るれば之を呼びかへすといふ。陸璣、詩疏「一鳩灰色無二繡項一陰則鳴逐其匹、晴則呼之、語曰、天將雨、鳩逐レ婦」

【鵂】ヨク　沃　露一一ははってう。露（鳥部十八畫）を見よ。

【鵂】〔國字〕　いかるが。斑鳩（八二六頁二段）を見よ。

【鵂】〔國字〕　かけす（懸巢）鳩に似て小さく、羽毛はまだらにして翅は紫黑色、毛冠あり、性猛くして小鳥を捕へ食ふ。かしどり。

八畫

【鵐】シ　眞（鳥部四畫）に同じ。

【鵄】シ　編（鳥部十一畫）に同じ。

【鵷】エン　元　又、鴛に作る　○一雛は鳳凰の一種。莊、秋水「南方有レ鳥、其名一一雛」陸璣、詩疏「凡鳳有二五、多二赤色一者乃鳳、多二黃色一者一一雛」＝鴛雛。

【鵷行】エンカウ　朝廷にならぶ官吏の行列。鵷鶵を見よ。杜甫詩「五更三點入二一一一」＝朝班。

【鵷閣】エンカク　鳳閣に同じ。全唐詩話「徐彥伯爲レ文、多變易レ新、以二鳳閣一爲二一一一、龍門爲二虬戶一」

【鵷鶵】エンスウ　鵷雛と、さきと。朝廷に列する百官の閑雅整齊にして序あるに比していふ。隋書、音樂志「懷二黃綬一白、一一成レ行」＝鵷鶵班、鵷鶵。

【鵝】カ　麻　鵞に同じ。

【鵝】キウ　はてうせんうぐひす。鶯の類。＝倉庚。

【鵜】テイ　齊　鵜（鳥部十畫）に同じ。

【鵜】ボク　屋　鵜に同じ。

【鵜】ヨク　職　鵜に同じ。

【鵜】ヨク　職　鵜に同じ。

【鵜】ヨク　職

鵨ーはふふどり、くゝつこう。

【鵙】 鵙（支部六畫）を見よ。

【鵙】 ㊀ゲキ ㊁ゲイ 陌 錫

㊀鷁に似たる水鳥。史、宋世家「六ー退飛」‖鷁。㊁ーーは鵙の鳴く聲。孟、滕文公「惡用ㇾ此ーーー者」爲哉」

【鵁】 コウ 東

○一種の怪鳥の名。圖○ぬえ（鵺）大さ鳩の如く、體黄赤、蒼かくれて夜出づ、其の聲幼兒の泣く如く、聞く者をして病ましむといふ。○首は猿、體は虎、尾は蛇に似たる怪物、源三位賴政の禁中に射落したるもの。

【鵑】 コン 元

たつまる、雞の類にて大いなり。楚辭、九辯「ー雞啁哳而悲鳴」‖鶤。

【鵑絃】 琴絃をいふ。絃一に弦に作る。劉孝綽、烏夜啼樂府「鵑弦且斷ㇾ弄、鶴操暫停ㇾ徹」鵑雞は哀鳴す、故に借りて絲聲の哀きを形容す、猶ほ哀絃といふが如し。

【鵲】 シャク サク 藥 通音 ジャク

○かささぎ、てうせんがらす、烏に似て、尾の長さ六七寸、身と相等し、背は黑く、紫綠色の光澤あり、肩腹及、翼の下羽は皆白し、性最も濕を惡む、故に乾ーといふ、又、喜を報ずる鳥といふ「喜ー」禽經「靈ー兆喜」注「ー噪則喜生」○猲と通ず。宋ーは駿犬の名。○人名。扁ーシャクは古の名醫。

【鵲鏡】 かがみ、神異經に見ゆる鏡が鵲に化したる故事に本づきて古鏡の背、多く鵲の形を鑄るが故。王勃文「ーー臨存、妍媸自遠」‖鸞鏡。

【鵲橋】 七夕の夜、鵲が天漢の上に架けて牽牛・織女を會せしむといふ橋。白帖「烏鵲塡ㇾ河成ㇾ橋、而渡二織女一」

【鵲語】 かささぎの聲、喜の兆とす。陳遘詩「ーー報著ㇾ花」

【鵲巢】 妻が夫の家を吾家として居るに喩ふ。詩、召南「維鵲有ㇾ巢、維鳩居ㇾ之」傳「鳲鳩不二自爲一ㇾ巢、居二鵲之成巢一」

【鵲巢知二風之所一ㇾ起】 鵲の巢に因りて風の起るを知る、風ある年は巢を遷ること下に在りといふ。淮南子「ーー、曉穴知二水之高下一」

【鵲噪】 かささぎがなきてさわぐ、吉事の前兆とす。四京雜記「乾ーー而行人至、蜘蛛集而百事喜」

【鵲聲】 かささぎの聲。天寶遺事「時人之家、聞ーー一以爲二喜兆一、故謂二之鵲報一喜」‖鵲語。

【鵲王】 名醫扁鵲をいふ。名勝志「逢鵲山、在二滄山縣西南一、扁鵲特二祠太子一、採二藥於此一、其下有二ーー廟一」

【鶉】 ㊀シュン・ジュン ㊁トン ㊂タン 軫 元 眞

㊀うづら、野鳥の一、形雞の雛の如く、體肥滿し、頭小さく尾短く、背は茶褐色、腹は赤くして灰色の斑點あり。○うづらの尾の短く禿せる如く衣の短くきれてみすぼらしきにいふ「衣如ㇾ懸ー」㊁わし（鵰）詩、小雅「匪ーー匪鳶」○圖うづら、東京にて芝居の下棧敷の稱。

【鶉衣】 みすぼらしきつづれの衣服。荀、大略「子夏貧、衣若二縣鶉一、人曰、子何不ㇾ仕、曰、諸侯之驕ㇾ我者、吾不ㇾ爲ㇾ臣、大夫之驕ㇾ我者、吾不二復見一」（縣は懸）杜甫詩「ーー寸寸針」

【鶉居】 ○住所の定まらざるをいふ。莊、天地「聖人ーー而數食」注「ーー如三鳥無二常處一」○天文にて井宿より柳宿に至るを鶉首といふ、柳の分野に當る、故に國中をーーと謂ふ〔漢書〕

【鶉火】 星次の名。禮、月令、疏「午爲ニーー、初二柳九度一、終二張十六度一」‖柳・咮。

【鶉之奔奔】 鶉奔を見よ。

【鶉首】 星次の名。古、秦の分野と爲す〔張衡賦〕埤雅「南方朱鳥宿、曰ニーー鶉火鶉尾一」

【鶉服】 鶉衣に同じ。權德輿詩「ーー我久安、荊釵君所ㇾ容」

【鶉奔】 詩經鄘風の鶉之奔奔篇の略。曰く「鶉之奔奔、鵲之彊彊、人之無ㇾ良、我以爲ㇾ兄」鄭箋「奔奔彊彊、言其居有二常匹一、飛則相隨之貌」此詩は、鶉の奔る雌雄相隨ひて常匹あり、淫亂の人、鶉に若かざるを刺る。

【鵻】 スイ 支

鳩の一種。こばと（小鳩）‖祝鳩・鵻鳩。

【鵻】 セイ 庚

鵻ーはごろさぎ、鵁（鳥部六畫）を見よ。

【鵯】テウ　蕭　又、雕に作る

おほわし（大鷲）くまたか。胡地に産する鷲鳥の一、兩翼を張れば八九尺に至る。全體羽毛暗褐色、頸後暗赤色、嘴は強大にして鉤の如く曲り、性慮よりも猛く、よく犬羊を捕へ食ふ。李時珍文「青―最俊者、謂之海東青」

【鵰悍】ケウカン　くまたかの如くつよくあらし。左思、呉都賦「料二其虓勇一、則――狻戾」

【鵰隼】テウジュン　一種のたか、はやぶさ。張融、海賦「――飛而未レ半、鯤龍趙而不レ進」

【鵪】トウ　東

○鳥の一。○圖つぐみ、山林に棲む小鳥の一、形もすゞめに似て稍大、全體紫灰色、腹は黄白色にして紫黄色の斑點あり。てうま（鳥媽）鵪は國字。

【鵪】ヒ　支　ヒツ　質

○はしぶとがらす、みやまがらす（鴉鳥）「―烏」○―鵝は夜の明けるを催す鳥の名。歐陽修詩「綠窗―鵝催天明」○圖ひえどり（稗鳥）ひよどり、つぐみに似て、尾長く脚細く、背は蒼灰色、胸腹は灰青色にして黒き斑點あり。

【鵬】フク　ボク　屋　又、服に作る

みみづく（山鵟）惡聲の鳥。又、不祥の鳥とす。一説にふくろふ。史記の賈誼傳に「―鳥賦」を載す。西京雜記「賈誼在二長沙一、―鳥集二其承塵一、長沙俗、以―鳥至二人家一、主人死、誼作二―鳥賦一、辭二死生一等二榮辱一、以遣二憂累一焉」

【鵬賦】フクフ　鵬鳥賦の略、字解參看。戴叔倫詩「楚鄉卑濕歎二殊方一、―一人非二宅口兇一」＝服賦。

【鵬】ホウ　蒸

おほとり、想像上の大鳥の名。莊、逍遙遊「鯤之大不レ知二其幾千里一也、化而爲二鳥一、其名爲二―一」

【鵬翼】ホウヨク　大鵬が九萬里も飛ばんとせしを、斥鴳が笑ひしといふ、莊子の逍遙遊に在る寓言。小大甚だしく懸殊して物情の齊しからざる喩。沈炯詩「龍蟄非レ不レ風、―一但逍遙」

【鵬擧】ホウキョ　鵬の如く遠く飛びあがる。曹植賦「希二―一一以搏レ天、翬二青雲一而奮レ翼」白居易詩「―一夢曜レ天」

【鵬鯤】ホウコン　想像上の大鳥と大魚と。莊、逍遙遊に出づ、字解を見よ。すべて甚だ大いなる事物に喩ふ。李白詩「滄海不二揚濤一、何以驚二―一」

【鵬際】ホウサイ　鵬のかけるはるかなる大空。宋之問詩「宿霧―一落、殘月衆中開」

【鵬雰】ホウフン　遠きおほぞら。李嶠詩「御レ氣―一近、升レ高鳳野開」

【鵬程】ホウテイ　鵬の飛び行く極めて遠きみちのり。莊、逍遙遊「鵬之徙二於南冥一也、水擊三千里、摶二扶搖一而上者九萬里」呂定、登二東嶽一詩「―一九萬扶搖近、世界三千指顧低」

【鵬圖】ホウト　鵬が北から南へ一擧に九萬里も飛び行かんとするはかりごと。すべて大なる計畫、又、壯志に喩ふ。杜甫詩「―一仍矯レ翼」

【鵬背】ホウハイ　鵬のせなか。莊、逍遙遊「化而爲レ鳥、其名爲レ鵬、鵬之背、不レ知二其幾千里一也、怒而飛、其翼若二垂天之雲一」

【鵬飛】ホウヒ　鵬の飛ぶが如く高く飛ぶ。劉禹錫詩「誰謂青雲高、―一終背レ負」

【鵬翼】ホウヨク　鵬のつばさ、大事業をなす計畫に喩ふ。謝靈運賦「憎二圖南之蹉跼一、恨二―一之未一擧」鳥背を見よ。

【鵬力】ホウリョク　大いなるちから。駱賓王、兗州道破賊露布「擧二―一一以掃レ威、壓二鯨鯢一而奮レ勇」＝鼎力。

【鵝】ヤ　麻　○雉に似たる鳥。○圖ぬえ（鵺）

【鵝】レイ　支　靈　てっせんうぐひす（倉庚、鶯雀）＝鸝。

【鵝】〔國字〕

いすか、大いさ、うその如く、頭と背とは帶赤青色、腹と胸とは帶紫赤色、嘴は上下くひ違ひて叉の狀を爲す。＝交喙。

【鵝】〔國字〕

きくいただき（菊戴）形めじろに似て小、背は綠色、腹は灰色、頭上に菊花に似たる黄毛冠を戴く。＝戴勝鳥。

九畫

【鵝】ガク　藥

みさご、鷹鸇の屬、水邊に棲み、鷹に似て土黄色、嘴甚だ短

く、魚を捕り食ふ、性峙立を好む、俗に魚鷹と稱す。‖鵜鳩。

【鵜殼】コクカク　みさごのひな。抱朴子「鷙子有二吞牛之容一、一有二凌厲之貌一」

【鵜視】レイシ　日つきのみさごの如く猛威ある視。左思賦「鷹騁一一」梁武帝文「一一爭先、龍躍竝驅」

【鵜懲】レイチョウ　人を推薦する書。次條參看。陳遺詩「含香一一職、領此錦雲篇」‖薦書。

【鵜薦】レイセン　人の仕途に上りしを賀していふ。後漢書、文苑傳「蘭臺少有二才績一、孔融疏薦レ之曰、鷙鳥累百、不レ如二一鵜一、使二衝立一朝、必有レ可レ觀」とあるに本づく。書言故事「古時、鷙禽薦時來二衆庶一」蘇軾詩「親戚紛二一一一」

【鷙鴈】シガン　驚き懼るる貌。靈泉賦「如二發レ矧羽一、虎驅一一」

【鷙表】シヒョウ　人を推薦する上書。鷙薦を見よ。

【鴟】カツ　曷

○やまどり、雉に似たる野鳥、色は黒褐にして尾長し、性僻黨を愛し、侵さるる者あれば、直ちに赴き鬪ひ、死すとも止まず、故に其の尾は古、武人の冠の飾とす。後漢書、輿服志「虎賁皆一冠」又、勇退の義に取りて隱士の冠とす。‖鶡。○一旦ダンは夜鳴きて旦を求むる鳥の名。禮、月令「一旦不レ鳴」

【鶡冠子】カッカンシ　書名、十九篇、作者詳かならず、或はいふ楚人深山に居り鶡を以て冠と爲す隱者の作なりと、大旨黄老の道德に本づき、刑名を雜へ、其の文も亦博辯宏肆なり、故に劉向・韓愈皆之を稱す。

【鶡蘇】カツソ　やまどりの尾を用ひて洗舞ヲドリとし冠の飾とするもの。司馬相如賦「冢二一一」

【鶏】

鷄（鳥部七畫）の本字。

【鶘】コ　虞

鵜一ティはがらんてう（伽藍鳥）鵜（鳥部七畫）を見よ。

【鶤】コン　元

○たうまる（大雞）‖鵾。○一雞は鳳凰の異名。淮南、覽冥「軼二一雞於姑餘一」

【鶖】シウ　尤

う、しまつどり、水鳥の一。詩、小雅「有二一在レ梁」‖扶老・禿秋。

【鶩】ボク　ブ・ム　屋　遇

○あひる（家鴨）家禽の一、まがものの變種、形色かもに似て大、羽翼は飛ぶに堪へず。‖舒鳧。曲禮、疏「野鴨曰二鳧一、家鴨曰二一一」○亂れ馳す。

【鶩檻】ボクカン　次條に同じ。謝靈運詩「一一逐二驚波一」

【鶩舲】ボクレイ　小舟をいふ、水鳥を愛して飾とするが故。鮑照詩「一一臨二桂浦一」‖鶩檻。

【鶩列】ボクレツ　あひるの如く百官がならぶ。周邦彥賦「千官一一以就レ次」‖鶩列。

【鶫】〔國字〕

つぐみ（鶇）

【鶯】ア　庚　畳は俗字

○かっらいうぐひす、てっせんうぐひす、小鳥の一、形我が國にていふ、うぐひすよりも大、背は灰黄色、尾は黄黒相まじる、雌雄雙飛し、初春始めて鳴く、其の聲宛轉として清し「一囀一」「一曙一」「一殘一」岑參詩「雞鳴染陌一曙光來、一轉皇州春色開」‖黄鶯・黄鳥・黄鸝・黄鳥・倉庚・鸎鶊・金衣鳥・金衣公子。○あや、鳥の羽の美くしき文章ヤアある貌。詩、小雅「有一其羽」○圖うぐひす、形めじろに似て背は綠褐色、腹は灰色、早春鳴く、其の聲愛すべし。はるつげどり、はなみどり、報春鳥。

【鶯鶯】アアウ　唐の崔氏の女の名、美色を以て聞ゆ。元稹、會眞記「張生遊二於蒲一、有二崔氏孀婦一、命二女一一一出拜、顏色艷異、光輝動レ人」李紳、鶯鶯歌「綠窗嬌女字一一、金雀鳴鶯年十七」

【鶯衣】イ　うぐひすの羽毛。雌游、小園獨立詩「新添二燕尸一細雨濕二一一一」

【鶯語】ゴ　鶯のこゑ。顧野王詩「風輕一一綫、露重落花遲」‖鶯音・鶯聲・鶯舌。

【鶯粟】ゾク　○うぐひすと、つばめと、共に春時の鳥。皇甫冉詩「鶯啼燕語報二新年一」張登詩「花柳巧爲一一地、管絃遮遍洛陽人」○轉じて花柳界遊治の地に喩へ、又、妓女に喩へていふ。

【鶯歌】カ　鶯の聲を歌にたとへていふ。李適詩「蝶舞飛行飄二御席一、一一度曲機二仙杼一」‖鶯吟・鶯啼。

【鶯吭】コウ　うぐひすののんど。鶯游、山家暮春詩「晴光生二綠粉一、煖律變二一一一」‖鶯喉。

【鶯吟】アン　鶯のなきごゑ。李白詩「魚躍青池滿、—啼綠樹低」

【鶯花】アン クワ　鶯と、はなと。韓愈詩「遶地—少、年來未覺新」

【鶯笛】アン テキ　鶯の聲を笛の音に比していふ。歐陽修詩「暖入—聲舌漸調」

【鶯花海】カイ　百花滿開して、黃鶯が亂れ囀き、春色の繁盛なる處を海に比していふ。陸游詩「邦人莫訝心情嬾、新出—程一來」

【鶯語】ゴ　鶯のなきごゑ。孫綽詩「—吟脩竹、遊鯉戲淸漣」‖鶯聲。

【鶯口】コウ　うぐひすのくち。陸龜蒙詩「綠萼花謝—乞、黃帽少年人未歸」‖鶯舌・鶯喉。

【鶯喉】コウ　うぐひすののんど。劉禹錫詩「靚頂迎秋秀、—入夏痕」

【鶯梭】ソ　鶯の枝より枝に飛びかふを梭のをさをやるに喩ふ。張養浩詩「柳岸—巧穿綠」

【鶯兒】ジ　鶯のひな。曹松詩「學—語—飛未穩」

【鶯雛】スウ　うぐひすのくちばる。陸龜蒙詩「閑眼接—路蚊、—映—花老」

【鶯宿梅】シュク　園梅の一種、花は白色單辨又重辨にして香氣殊に高きもの。一說、紅白まじりて咲く梅。

【鶯囀】テン　鶯のひな。馬臻詩「—未省逢—人避、直向—路傍花上啼」‖鶯兒。

【鶯聲】セイ　鶯のなく聲。白居易、春江詩「閉—開只暫朝暮鼓、上—樓空望往來船、—誘引來—花下、草色勾留坐—水邊」‖鶯語。

【鶯舌】ゼツ　鶯のした。鶯の聲をいふ。沈與求詩「宿露園林——亂、暖風庭院囀牌香」

【鶯遷】セン　進士の試驗に及第するをいふ。盧照鄰文「雲騰羽毛、谷變—」‖尚書故實「今謂—進士登第爲—」遷鶯者久矣、蓋自—伐木詩、伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶、出—自—幽谷、遷—於喬木、又曰、嚶其鳴矣、求—其友—聲、如無—鶯字、頃歲省試、早鶯求—友詩、又鶯出—谷詩、別書固無—證據、豈非—誤用」今は官位の升進、又移居を賀するにも用ふ。

【鶯粟】ソク　鳳粟ノ異名、子ハ白米の如く脆カに煮るべし。蘇軾詩「童子能煎——湯」

【鶯桃】タウ　櫻桃ユスラノ異名〔埤雅〕‖含桃。

【鶯啼】テイ　うぐひすがなく。趙師秀詩「—一聲出—樹、花落片隨—波」‖鶯鳴。

【鶯囀】テン　うぐひすがさへづる。盧照鄰詩「花開綠野靜、——紫巖風」

【鶯鳴】メイ　うぐひすが鳴く。禽經「——嚶嚶」宗懍詩「—一兩囀、花樹數重開」

【鶯時】ジ　うぐひすのなきごゑ。劉克莊詩「昨遊感——、今至聞—蟬吟」

【鶺】セキ　鶺は俗字

【鶺鴒】セキレイ　小鳥、鶺は形極めて大なる鳥。莊、逍遙遊に出づ。識量の大小同じからず、見る所各異るに喩ふ。錢選詩「—一俱有—意、開艾不—同—根」‖鶺鴒。

【鶺鴒】セキレイ　形はしだか、はいだか、鷹に似て小、背は灰黑色、腹白く、黃黑或は赤白色の斑點あり、人之を愛ひ小鳥を捕へしむ。

【鵝】ガ　鵞

かやぐき（鴈）ふなしうづら（鶴）羽に斑紋なく、腹白し「斥—」‖鵞。

【鵝鵬】ガホウ　鵝は斥鴈ノ小鳥、鵬は極めて大なる鳥。莊、逍遙遊に出づ。識量の大小同じからず、見る所各異るに喩ふ。錢選詩「—一俱有—意、開艾不—同—根」‖鵬鵝。

【鵝】ガ　鵞

○水鳥の一種、形鴈に似て大、羽は蒼白色、善く翔りて風を畏れず、故に其の形を船首に畫く。春秋、僖十六「六—退飛、過宋都」○—鳥を畫きたる船「避—」「彩—」「戰—」司馬相如、子虛賦「浮文—」

【鵝舸】ガカ　鵝首の飾ある大船。庾信詩「秋光屢—晩天、—泛—中川」

【鵝首】シュ　鵝鳥を船のへさきに刻み又は畫きたる船、字解を見よ。淮南、本經「龍舟—、浮吹以娛」

【鵝鸛】ガカン　○太子のみくるま。列仙傳「王子喬、周靈王太子晉也、吹—笙作—鳳鳴、後於—綏氏山、乘—白鵝—而去、故太子之駕曰——」○仙人のりもの。羅隱詩「五——琴—滄海」

【鵝鵝】ガガ　羽毛の白き貌。孟、梁惠王「白鳥——」‖鵞鵞（詩、大雅）

【鵝企】ガキ　鵝が首をのばし足をつまだてる如くして待ち望む。待つ心の切なるにいふ。晉書、郭瑀傳「遣—使者、以虞左授綏——先生」

【鵝冠】ガカン　太子の冠をいふ。鵝鸛參看。李德裕詩「梅福連——」

【鶴宮】クワクキウ 皇太子の在す宮殿。又、皇太子の稱。漢官開疏「——太子所レ居、凡人不レ得レ入」鶴駕參看。＝鶴禁。

【鶴警】クワイ つるの性よく警戒するをいふ。風土記「鳴鶴戒レ露、此鳥性警、至二八月露降、流二於草葉之上、滴滴有レ聲、則高鳴相警、徙二所レ宿處一、虞レ有二變害一也」

【鶴膝】シツ 作詩上の八病の一。五言の詩の第一句の五字目と、第三句の五字目とに同聲の字を用ふるをいふ。蘇軾詩「蜂腰——嘲二希逸一」

【鶴髦】つるの羽ごろも。晉書、王恭傳「王恭字孟伯、清操過レ人、美二姿儀一、嘗被二——裘一、涉レ雪而行、孟昶窺見之歎曰、此眞神仙中人也」

【鶴首】つるの如く首をのばす、待ち望む心の切なるにいふ。＝翹首・鶴企。

【鶴齡】長き齡。陸機、詩疏「——千歳」王建詩「——千年也未レ神」今、人の齡を祝して鶴算といふは此に本づく。

【鶴壽千歳】センサイ 鶴は千年の齡を重ねる。淮南子「——以極二其游一、蜉蝣朝生暮死而蟲二其樂一」

【鶴書】カクシヨ 朝廷より召し出しの書狀。孔稚圭、北山移文「鳴鶴入レ谷、——趾レ誰」注「蕭子良古今篆隸文體曰、鶴頭書與二蝦蟆書一俱詔板所レ用」＝鶴頭書・尺一牘。

【鶴汀】カクテイ つるの居るみぎは、汀は水際の平沙。王勃、滕王閣詩序「——鳧渚、窮二島嶼之縈迴一」

【鶴頭書】レンヅルガキ 鶴書を見よ。

【鶴望】カクバウ 鶴企に同じ。蜀志、楊戲傳「今寇虐作レ害、民被二荼毒一、思レ漢之士、延レ頸——」＝鶴望。

【鶴髮】カクハツ 白き髮。陳信、竹杖賦「——雞皮、鬢頭皤齒」

【鶴板】カクバン 天子の召文。詩、鶴鳴參看。王勃文「——徵レ賢、累發二非常之詔一」＝詔板・鶴書。

【鶴鳴】カクメイ 鶴の鳴き聲。晉子「——禽子問曰、多官有レ益乎、對曰、蝦蟇日夜鳴、口乾而人不レ聽レ之、鶴雖二時夜鳴一而天下振動、多寸何益乎」

【鶴翼】カクヨク つるのつばさを張りたるが如き陣形。唐太宗文「夕對二魚鱗之陣一、朝臨——之圍一」沈炯詩「已卻魚麗陣、將レ雄——圍」＝鶴列。

【鶴立企佇】キチヨ 思ひ望む心の切なる貌。魏志、陳思王植「是臣懷慕之誠、願所二獨守一、實願二——之心一」

【鶴林】カクリン ○寺觀をいふ、潤州に一寺あり（續仙傳）○轉じて廣く僧寺の稱とす。杜甫詩「牛頭見二——一」元稹詩「——築二古道一」

【鶴林玉露】カクリンギヨクロ 十六卷、宋の羅大經（字景綸）撰す、其の體例、詩話・語錄の間に在り。

【鶴喙】カクカイ つるのなきごゑ。晉書、謝玄傳「苻堅飛檄二百萬二列レ陣臨二肥水一、玄帥二精銳八千一渉レ流、堅衆奔潰、棄レ甲曳レ兵、聞二風聲一一、皆以爲二王師一」＝鶴鳴。

【鶴列】カクレツ 左右にはりたる陣形の名。列子「君亦必無レ盛二——於麗譙之閒一」淸孤及、八陣圖記「魏之——、鄂之魚麗」魚麗も亦陣形の名。

【鶴鳴二九皐一聲聞二于天一】フルキウカウノコエテンニキコユ 皐は九曲にもまがれる深く入りこみし澤、君子は其の身深く隱るるも、名聲自ら高く揚るに喩ふ（詩、小雅、鶴鳴）

【鶴立雞羣】カクリツケイグン 鶴が家雞の中に立つ。衆傑の衆人と異るに喩ふ。晉書、嵇紹傳「儼然如二野鶴之在一雞羣一」

【鶴軒】カクケン 鶴は仙禽、宜しく山中に棲むべきに、大夫の車に乘るは、其の宜しきを失へるなり。左、閔二狄人伐レ衛、衛懿公、好レ鶴、鶴有二乘レ軒者一將レ戰、國人受レ甲者皆曰、使レ鶴、鶴實有二祿位一、余焉能戰」

【鶴上揚州】カクシヤウヨウシウ 多くの快樂を一身に兼ねんとするをいふ。殷芸小說「有二客相從一、各言二所志一、或願レ爲二揚州刺史一、或願レ多レ貲財一、或願二騎レ鶴上昇一、其一人曰、願レ腰二十萬貫一——、欲レ兼二三者一、輒以決レ之、實行レ難、衆以爲二貪惏之必戮一」

【鶴脛雖レ長斷之必悲】カクケイナガシトイヘドモタツトキカナシ 物には各其の天より與へたる性あり、人力にて之に損益すべからざる喩。烏脛雖レ短續之則憂（二三九二頁四段）を見よ。

【鷄】ケイ

雞（二三四五頁三段）に同じ。

【鷬】ケン 元

とぶ、鳥の飛ぶ貌、かける「——翥」韓愈詩「挾勢欲二騰一」

【鷬騰】ケントウ 高く翔けあがる。杜甫詩「筆飛驚雙立、壁畫風——」＝騰鷬。

【鷇】ケン 圓

——は、比翼鳥の異名。爾雅「南方有二比翼鳥一焉、不レ比不レ飛、其名謂之——」

【鷇】コウ 宥 遇

ひよこ、燕雀などの子の卵より出でんと欲する者、親鳥の哺ぐみをうくるひよこ（白ら哺むを雛といふ）

【鵐】コツ クツ 黠 月

○かむりどり、あさなきどり、鳩の屬、青黑色にして尾短く、聲多し「一鳩」○くまだか、はやぶさ、鷹の屬。博雅「食經曰、鷹不レ擊伏、一不レ擊妊、蓋其養

性如此」（康熙字典には禽經を引きて妊を胎に作る）後赤壁賦「繫ニ一之危巢一」○同ー（クワイ）は北方の夷の名、其の先は匈奴。＝高車部に詳紀。

【鵰影】（ケイ）はやぶさの飛ぶかげ。

【鵰鳩】（コウ）斑鳩（ハンカ）の異名。

【鵰突】（トツ）明かならざる貌。又、事を濁らざるの意。糊塗の轉語。呂原明、家塾記「呂婦之爲ニ人糊塗一」注「糊塗猶爲ニ一ー一」

【鷲】シ　支

鷲ー（ハシマツ）はしまつどり、う。鷲（鳥部十六畫）を見よ。

【鵻】（ヂュ）鵻（前條）に同じ。

【鶬】（一）シャウ　陽　（二）サウ　陽

（一）ー（ソウ）は聲の和ぐ貌。詩、商頌「八鸞ー一」○金屬の飾の貌。詩、周頌「鞗革有ー一」（二）まなづる（灰鶴）鶴の一種。○ー庚（サウカウ）はかっらいうぐひす、てっせんうぐひす。＝倉庚鶯。

【鶬鶊】（サウカウ）てっせんうぐひす。阮籍賦「草蟲哀鳴、ー一振レ羽」

【鶺】ジャク　陌

○たっまる（鵲）雀の一種、しゃもよりは大、性猛くてしてよく鬪ふ。＝昆鳥。○（ヒワ）ひわ、小鳥の一、雀に似てやや小、羽毛は帶青黄色、よく囀る。

【鶺】セキ　陌

ー鴒（セキレイ）はいしたたき、みちをしへどり、小鳥の一、形雀に似て尾長く背は灰色、腹は白色、頸に黒斑あり、飛ぶ時は波狀を爲し、行く時は常に尾を上下して火急の狀あり、故に危急困難の譬に引く。詩、小雅「脊令在ニ原一、兄弟急難」（脊令は一鴒の古字）

【鶺鴒在レ原】（セキレイ）兄弟の互に急難を救ふに喩ふ。字解を見よ。

【鶺】テイ　霽

蹄ー（テイ）は、にほとり、かいつぶり、むぐり（鵜は國字）

【鶹】リウ　尤　もと鷗に作る

鶹ー（ロウ）はみみづく。

十二畫

【鶻】アン　翰

ふなしうづら「ー鶉」

【鷖】エイ　霽

かもめ（鷗）鳧の屬、體、蒼黒色、羣りて飛鳴し、潮に隨ひて往來す、故に信鳧ともいふ「浮ー」「鳧ー」埤雅「鳧好レ沒、ー好レ浮」

【鷹】ユウ　ケウ　イ　蒸　篠　嶝　又、噰に作る

なく、雌雄が鳴く。又、其の聲。詩、邶風「有ー雄鳴」

【鷗】オウ　尤

かもめ（鷖）水鳥の一、水上に浮び、輕きこと漚の如し、本、漚に作る、全體白色、翅は灰白、嘴は鉤曲して強し、魚介類を捕食す「海ー」「信ー」「閒ー」＝信鳧。水鷖。

【鷗鷺】かもめと、つると。白居易詩「且圖鷗鷺末、莫遊ー一後」「鷗鷺は絢班をいふ。

【鷗洲】かもめの居るす。韓翃詩「客舍不レ離青雀舫、人家滿在ニ白ー一」

【鷗江】かもめの居るみぎは。薩都剌詩「春波綠占白ー一」＝鷗渚・鷗洲。

【鷗鳥】かもめ。鷗一に漚に作る。列、黄帝「海上之人好レ漚、每旦之ニ海上一、從ニ漚鳥一遊、漚鳥之至者百數、其父曰、取來、吾玩レ之、明日之ニ海上一、漚鳥舞而不レ下」魏志、高柔傳、注「機心萌則ー一不レ下」

【鷗波】かもめは水中に游泳して悠悠と自適す、よりて退隱の地に喩ふ。方岳詩「自知機事淺、誠可レ共ニ一ー一」

【鷗盟】○隱居してかもめと友となる。黄庭堅詩「此心吾與ニ白鷗一盟」○世外に超然たる風流のまじはり。陳造詩「誰曉ー一要二束尊一」

【鷗鷺】かもめと、さぎと。白居易詩「波聞戲二魚鼈一、風靜下ニ一ー一」

【鷗鷺忘機】琴曲の名、隱居自適、人世の治亂紛紜を忘るるを言ふ、列子の海上の人、鷗と伴侶たりし故事に本づく。鷗鳥參看。

【鷙】（一）シ　（二）チツ　寘　質

（一）あらそとり、猛禽の總名「一鳥」「鷹鸇の類。○轉じてあらきけもの「一獸」○あらし、たけし（猛）はげし、とし（疾驅）擊に通ず。○ふる（抵）○うつ（擊）（二）うたがふ（疑）○行の平かならざること。莊、在宥「天

下始爲結草ー」

【鷙】チ・ク　鳥　又、鶩に作る

【鷙】は猛鳥、能く衆鳥を執へ伏す、故に執に从ふ。

【鷙悍】ヂン　あらくつよし。宋書、夏國傳「羌人ー一、但驅率而已」‖鷙悍。

【鷙禽】ヂン　たけきとり。鷲・鷹などの類。劉禹錫詩「朔風悲老驥、秋霜動ニー一ー」‖鷙鳥・猛禽。

【鷙強】ヂャウ　たけくつよし。後漢書、吳漢傳「吳公ー一、實爲ニ龍驅ニ同、何進傳「今將軍總ニ皇威ニ握ニ兵要ニ一ー虎步、高下在レ心」

【鷙距】ヂン　疑ひて止まる、鷙は疑、距は止。管子「止」之以レ力、則往者不レ反、來者ー一」其の役の煩を聞きて疑ひ止まる義。

【鷙隼】ヂュン　つよきはやぶさ。劉孝威詩「猜懲ー一何由遂」

【鷙鳥】ヂウ　たけきとり。新論「ー一不レ擊、必俛ニ其首ニ猛獸不レ觸、必匿ニ其爪ニ虎豺不レ外ニ其牙ニ噬犬不レ見ニ其齒ニ」（能ある鷹は爪を匿すの意）

【鷙鳥將レ擊卑飛斂レ翼】シヂウケフトスルトキハヒククトビツバサヲヲサム　鷹などのたけき鳥が將に飛禽を擊たんとするや、先づ我が形を匿して目立たぬやうにする。六韜「ー一、猛獸將レ搏、弭レ耳俯伏」

【鷙鳥累レ百不レ如ニ一鶚ニ】シヂテウルヰヒヤクモイチガクニシカズ　無能の者百人聚るとも、有爲の士の一人に及ばずといふ。（漢書、鄭陽傳）後漢書、鍾離傳「鍾離始冠、而融四十、遂與爲ニ交友ニ上書薦レ之、有レ云、ー一」融は孔融。

【鷙忍】ヂン　たけくしてむごし。清異錄「天稟ー一、以ニ決斷ニ爲レ樂」

【鷙猛】マウ　たけくあらし。辨命論「論ニ一ー一致ニ人爵ニ」

【鷙勇】ユウ　あらくしてつよし。魏志、曹眞傳「射レ虎、應レ聲而倒、太祖壯ニ其ー一ー」‖悍勇・猛勇。

【鷙戾】レイ　粗暴にして道理にもとる。十道志「渤海風俗ー一」

【鵙】シャ　鵙

ー鳩シャは鳩の一種、形鶉ジュンに似て稍大、胸に白色の圓點あり、背に紫赤色の波文あり、古の南越の地に多し、常に日に向ひて飛び、霜露を畏れ、朝夕は出づること希なりといふ。其の鳴聲、行不得也哥哥と曰ふが如し。‖越雉・懷南・逐影。

【鵙鵙】シャ　鳥の名。字解參看。

【鵙】㊀シャウ・サッ　鵙　㊁シャウ・サッ　鵙　又、爽に作る

鵙ーシュクは西方の神鳥。ー俗に鵙に作る。鵙（次頁一段）を見よ。㊁ー鳩サウはたか（鷹）‖爽鳩。

【鷦】ソク　鳧

竇（鳥部十四畫）を見よ。

十二畫

【鷲】チュ　鳥　又、鶖に作る

鷲ーシュウは、をしどりの類。鷲（次頁四段）を見よ。

【鷚】リウ　キウ　尤　宥　ボウ　レウ　篠　尤

ひばり（告天干・雲雀・天雀）「天ー」

【鷄】イツ　質

○しぎ、涉水鳥の一、形水雞ケイに似、堅くして長き嘴と脚とを有す、背は黒褐色にして灰白色の斑點あり、胸腹は白し、常に水田中に棲みて蟲魚を捕食す、鷸ユツは國字。○かはせみ（翠鳥・翡翠・魚狗）背は長大にして尾と脚とは短く、羽毛翠色にして美くし、水邊に棲み、小魚を捕食す、古代、此鳥の羽を冠の飾とす「翠ー」左、傳二四「鄭子臧好ニ聚ー一冠」○疾く飛ぶ貌。

【鷸蚌之爭】イツバウノアラソヒ　兩者相爭ひて下らざる間に他の第三者に其の利を攫らるる喩。戰國策「趙且レ伐レ燕、蘇代爲レ燕謂ニ惠王一曰、今日臣來過ニ易水ニ、蚌方出曝、而鷸喙ニ其肉ニ、蚌合而箝ニ其喙ニ、鷸曰、今日不レ雨、明日不レ雨、即有ニ死蚌ニ蚌亦謂レ鷸曰、今日不レ出、明日不レ出、即有ニ死鷸ニ兩者不レ肯ニ相捨ニ、漁者得而幷擒之ニ、今趙且レ伐レ燕、燕趙久相支以敝ニ大衆ニ、臣恐ニ強秦之爲ニ漁父ニ也、惠王曰、善、乃止」蚌は蛤。

【鷄】イン　震　寒

はいだか（鷄）能く雀を捕ふ。‖員雀。

【鷳】カン　鵬　鵬は俗字

しらさぎ、雉の一種、形は鶏雞に似、羽毛は白色にして黒點あり、尾の長さ二三尺、嘴シと爪とは皆赤し、多く揚子江以南に産す。雍陶詩「自起開ニ籠放ニ白ー一」

【鷴】（前條）の俗字。　灰

【鷄】ケ。　薺

○雉の一種、長尾にして善く走るもの、肉は甚だ美なり。おほやまどり「ー雉」○ー息ケイソクは古の道士の導引の法。後漢書、華陀傳「屈頸ー一息」

【鶻】コツ　月　みさご（王鵰）鷹に似て尾上に一白點あり、善く鳧を捕ふ。‖印尾鷹・楊鳥。

【鵙】シ　支　又、斯に作る　○みやまがらす、はしぶとがらす（鴉烏）○鷲ー㊀は鴉に似て小、腹の下白し、多く墓り棲む。‖鷲斯。

【鷥】シ　支　鷺ー㊀は、さぎ。‖頭上の毛、絲に似たり、故に絲に從ふ。

【鷲】シウ　ジュ　宥　わし（鵰）鷹（鳥部八畫）の字解參看。

【鷲山】センジュ　靈鷲山の略。大鵬に同じ。

【鷲鵰】ジュチョウ　天竺の靈鷲山センジュセンの略、印度摩訶陀國、王舍城の東北に在り、釋迦嘗て此に居り說法す、わしのおやま。大藏法數「ー山名也、以其山形似於鷲鳥、故以名焉、中爲二精舍一佛居レ此而說レ法也」‖鷲山・鷲頭山・耆闍崛山ギシャクセン

【鵰】シュク　屋　ー鵰シュクは西方の神鳥、雁に似て頸長く、羽毛綠色、皮にて裘ガンモを作る、鵰一に鶻に作る。西京雜記「司馬相如、初與卓文君一還成都一居貧愁悒、以所著鶻鵰裘一就レ市貰レ酒、與二文君一爲レ歡」‖蒲爽。

【鷓】セキ　陌　ー鵲セキはさざき、みそさざい、たくみどり、雀に似て小、全身灰色、黑褐色の細斑あり、巧みに巢窠を以て巢を作る。說苑「ー鵲巢二於葦苕一繫之以髮」‖巧雀・女匠功・女鵲雀・桃蟲・桃雀・黃雀・黃脰雀・巧婦鳥。

【鷓鴣巢レ林不レ過二一枝一】セキコクはみそさざいは林に巢をつくれども、ただ一枝に過ぎず。人各其の分に安んずべきに喩ふ。莊、逍遙遊「ー、偃鼠飲レ河、不レ過二滿腹一」

【鷓鴣】シャコ　麻　ハン　元　通音ベン　ばん、大小二種あり、黑色短尾、嘴は末黃にして本赤し。‖田雞・骨頂。

【鷩】ヘツ　屑　ヘイ　霽　きんけいてっ、やまどりに似たる野鳥、頸は綠、腹は赤く、黃冠を有す。‖金雞・錦雞・赤雉・山雞・鷓鴣。

【鷷】ソウ　送　鷷ーソウはみそさざい。鷷（本頁二段）を見よ。

十三畫

【鷺】㊀アク　㊁カク　覺　ヨク　沃　クッ　物　㊀をながどり、さんじゃく（山鵲）かささぎに似て文彩あり、長尾にして豬脚赤し。㊁こばと（小鳩）○圖うそ、小鳥の一、雀より大、嘴は短黑、頭と尾とは深黑、兩頰より頸にかけて深紅、體は灰青にして赤色を帶ぶ。

【鷺鴛笑レ鵬】カクエンショウホウ　小さきじゅずかけばとが、おほ鳥を笑ひ嘲る。賤しき者が反りて貴き者を嘲り笑ふに喩ふ。莊子、逍遙遊に出づ。成語考「賤反類レ貴、似二鷺鴛反笑二大鵬一」

【鷺鷥】カンシ　圖新年に筑前太宰府と京都井戸の天滿宮にて正月七日・二十四日・二十五日の三日行ふ神事。當日參詣人が互に木遊の鷺をとり替へる。

【鷾】イ　寘　ー鷾は、つばめ（燕）莊、山木「烏莫レ知二於ー鷾一」註「燕也」‖鷾而。

【鷾】ギ　支　鷾ーシュンはきんけいてっ、鷾（鳥部七畫）を見よ。

【鸂】ケイ　齊　ー鶒ケイは、をしどり（鴛鴦）に似て稍大なる水鳥、羽は五彩にして紫色多し、頭に纓あり。杜甫詩「一雙ー鶒對沈浮」‖紫鴛鴦。

【鸇】セン　先　あらとり、はやぶさ、鷹の屬、鵰に似て羽色青黃なり。孟、滕婁「爲二叢驅一爵者ー也」（爵は雀）‖晨風。

【鸊】ヘキ　ハク　陌　鷁　又、鷁に作る　ー鷁はにほとり（鴨烏）かいつぶり、むぐり、鴨に似て小、

頭・背翅皆蒼黑、斑點あり、脚は赤くして常に水に出没し、蘆葦などを以て水上に巢を浮べ作る。＝油鴨。

【鸂鶒】かいつぶりのあぶら、刀劍に塗れば錆ゼずといふ。〔韓愈詩〕「馬銜旨蓿葉、劍愛――」

【鷹】ヨウ オウ 蒸

たか、あらとり、鷲鳥の一、翼は鳶よりも長く、鉤曲して強し、背は暗褐色、腹は白色にして、黄褐色の横紋を有す、眼力甚だすぐるゝ、羽翼亦強く、鉤爪尖利にして小鳥を捕食す、飼ひて狩獵に使用し禽兎を捕へしむ。＝題扇雀鳥爽鳩鵰鳩。

【鷹眼】たかのめ。王維、觀ル獵詩「草枯――疾、雪淨馬蹄輕」

【鷹撃】民を治むるの厳しきに喩ふ。漢書、魯經傳「擬以ニ――毛撃一」

【鷹犬】〇たかと、いぬと、共に獵に用ふる者。後漢書、楊喬傳「親ニ――之執一、極ニ繋攣之苦一」〇轉じて手先に使ひて己に異る者を排撃せしむる者に喩ふ。宋史、唐垌傳「張商英乃安石ノ――」〇其の材の郵使に供すべき者に喩ふ。陳琳文「謂其ノ之才、爪牙可レ恃」

【鷹爪】〇たかのつめ。揚雄、執金吾箴「如ニ虎有ル牙、如ニ鷹有ル爪一」〇茶の異名。貞觀雜錄「雀舌・――以ニ其勁直纖銳一故號ニ茶芽一」楊萬里詩「半甌――中秋近」

【鷹師】鷹を使ひて鳥兎などを捕ふるもの、鷹匠。北魏書、后妃傳「孝文詔免ニ――身一」

【鷹視】たかの如くするどく見る、狼戻の貌。吳越春秋「越王長頸烏喙、――狼歩」

【鷹茶】茶の異名。劉禹錫、試ル茶歌「宛然爲ル客振ル衣起、自倚ニ芳叢一摘ニ――一」＝鷹爪。

【鷹鷙】たかと、わしと。既苑「――以ル山爲ル卑、而增ニ巢其上一、羅ル魚鷙、以ル淵爲ル淺、而穿ニ穴其中一」物は皆其の居處を擇びて他の害を避くるをいふ。

【鷹準】〇たかと、はやぶさと。漢書、五行志「立秋而――撃、秋分而徹箭除」＝鵰準。〇筆力のつよき形容。法書要錄「歐殳爲ニ――、褚薛爲ニ雀距一」

【鷹鸇志】たかや、はやぶさの鳥雀を捕つが如くに、猛威を振ふ志。左、文十八「誅ル之如ニ鷹鸇之逐ニ鳥雀一」に出づ。後漢書、循吏傳「主簿即ニ陳元之過一、不レ罪而化レ之、得レ無レ少ニ――一」耶、號曰、以爲ニ鷹鸇、不レ若ニ鸞鳳一」主簿は仇覽。

【鷹坊】たかを飼ふ所。唐書、百官志「開殿使押五坊、以供ニ時狩一、一曰鵰坊、二曰鷂坊、三曰鶻坊、四曰――、五曰狗坊」

【鷹揚】〇たかの空に飛揚するが如く、ゆったりとして武勇を奮ふにいふ。詩、大雅「維師尚父、時維――」〇文學などを以て一世に雄視する。隋書、文學傳序「――河朔ニ步漢南一」〇圖にせつかね、大業なの誤。

【鷹洋】歐外國の銀貨、俗に洋銀と稱す、省して洋といふ、面に鷹の形あり、故に――と名づく、商埠皆之を通用す。

【鷹化爲鳩】仲春の節をいふ。禮、月令「始雨水、桃始華、倉庚鳴、――」雨水は季節の名。

【鴨】（雨曲）

鷗（次頁一段）の俗字。

【鷺】ロ 遇

〇さぎ、しらさぎ、涉水鳥の一、全身雪白色、頂に長き白毛あり、水邊に棲みて魚類を捕食す。＝白鷺・雪客・雪鷺・絲禽・鷺鷥・春鋤。〇白――洲は江蘇省江寧縣の西南、揚子江中に在り、宋の曹彬、南唐の兵を此に破る。李白詩「二水中分白――洲」

【鷺鷥】さぎと、かもめと。韓愈詩「楼上清風鷺鷂靜、田頭白水――驚」

【鷺吟】さぎのなきごゑ。李白詩「魚躍青池滿、――絲樹低」

【鷺鷺】しらさぎ。顧野王輿地志「婁湖善ニ――一杆牛一」

【鷺鷥】しらさぎ。林逋詩「蒼茫沙嶼――眠、片水無ン痕浸ニ碧天一」

【鷺洲】地名。明一統志「――書院、在ニ吉安府白――上、宋淳祐間、知吉州江萬里建、延ニ歐陽守道一以教ニ俊秀一、守道作ニ記」＝白鷺洲。

【鷺序】朝官の班次、官僚を指していふ、さぎの飛ぶ次序あるに喩ふる。白帖、袁紫雛誄、旭傑――一」

【鷺汀】さぎの立てるなぎさ。韓偓詩「人來白――」＝鷺渚。

【鷺門】島の名。廈門の別名。

【鷺約】世俗の外なる風流のちぎり。高觀國詞「一堤風月、六橋煙水、――鷗盟在」

十四畫

【鷺】ア 麻

鷺の俗字、一說、鴉に同じ（鳥部十畫）を見よ。

【鸞】ガク 覺

――鸞ソウは神鳥、鳳凰の屬。周

語「周之興也一鸑鷟於岐山」又、鳳に似て大、目の赤き水鳥（本草）

【鸐】テキ　タク　國　鸞の俗字

やまどり（山雞・山雉）（雉は原野に居り、一は山林に居る）

【鸏】㊀ボウ・モウ　㊁バク・モク　東　江

㊀一鶴は九眞交趾より出づる一種の水鳥、大さ孔雀の如し、喙長さ尺許、ほうでん。㊁鳩の類。

【鸐】ヨ　風　御

やまがらす、はしぶと、小にして多く羣り、腹白し。詩、小雅「弁彼一斯」（斯は鸐）‖鵲烏。

十五畫

【鸐】ベツ　屑

たくみどり、みそさざい。‖工雀方婦。鷦（鳥部十二畫）參看。

【鸐】ルキ　ライ　灰　紙

むささび、ももんぐゎ、狀は鼯鼠に似て大さは鴟の如き一種の獣。李時珍文「此物肉翅連尾、飛不能上、易至碍墜故謂之一」‖飛生。一鼠はむささび（鼯鼠）の一種。

十六畫

【鸐】ロ　リ　虞　魚

一鸐はう（鵝）しまつどり、形鳥に似て黒く、喉は白し、巧に水を潜りて魚を捕へ呑む、飼養して魚を漁せしむ。夔州圖經「一鸐捕魚」‖鳥鬼・水老鴉。

【鸐觚】酒器の名。李白詩「一、鸐觚杯、百年三萬六千日、一日須傾三百杯」謝氏詩源「金母召二董仙一宴二於赤水一、坐有二碧金鸐鸐杯一、白玉一一杯乾則杓自挹、欲飲則杯自傾、故太白一一、鸐鸐杯、非二指二廣南海蝶杯杓一也」

【鸐】鶴（鳥部十畫）に同じ。

十七畫

【鸐】ア　ヤ　馬

○一鸐アは熱帯地方に産する鳥の名、羽毛は純白にして、冠毛を頂き、上背大にして短く、鉤曲し、舌肥厚にして能く人語を學ぶ。‖鸐母・鸐鵡。能言鳥・雪衣蠻。○一哥ロはー鸐の一種、羽毛赤青紫色相交りて甚だ美くし。本草「一鸐小者、爲一哥」○一螺アは貝の一種、あっむがひ。

【鸐猩】アイ　あっむと、しゃうじゃうと、二者は共に人言をまねるもの。漢武帝、李息賦「證戒則二於飛走一、言語異二於一一」鸐鸐參看。

【鸐鵡】アウ　鳥の名、鸚は一に母・鸐に作る。字解を見よ。山海經「數歷之山、其鳥多一一」

【鸐鵡】アウ　鳥の名、字解を見よ。曲禮「一一能言、不レ離二禽獣一、猩猩能言、不レ離二禽獣一、今人而無レ禮、雖二能言一、不二亦禽獣之心一乎」

【鸐鵡洲】アウム　地名、今の武昌縣の四南江中に在り、後漢の末、黄祖、江夏の太守たり、祖の長子射、大いに賓客を會す、鸐鵡を獻ずる者あり、禰衡、賦を作る、故に名づく。崔顥詩「晴川歷歷漢陽樹、芳草萋萋一一」

【鸐鵡石】ヤウム　○孔雀石の一種、淡黄綠色を帯ぶ。○圖音の反響する石。‖鸚石。

【鸐鵡杯】アウム　あっむがひ、狀きかづきに似たるが故。南州異物志「鸐鵡杯、頭如二烏頭一、向二其嘴一説、似二鸐鵡一、故以爲レ名」又、其の杯。鸐鵡杓（本頁二段）參看。

十八畫

【鸛】ク　國　又鵠に作る

一鵠クは、ははって、形もまに似、黒くして翼下に白點あり、其の舌端をきればよく人語をまねるといふ。鵠（鳥部五畫）を見よ。

【鸛鵠眼】カクコク　鸛鵠の眼の如き文ある硯にて最上品とす。歐陽修、硯譜「端石出二端溪一有二一一者一爲レ貴」陸游詩「硯滴一一」

【鸛】クヮン　圖

こふづる、こふのとり、鶴に似て頂は丹からず、全身灰白色、嘴と尾とはうす黒し、高樹に巣くふ。こふ、しりぐろ。‖負釜黒尻・背雁卓裙・穫雀。

【鸛雀樓】クヮンジャクロウ　樓名、雀一に鵲に作る、今の山西省永濟縣治に在り。夢溪筆談「河中府一一、三層、前瞰二中條一下瞰二大河一、唐人詩レ詩者甚多」李益詩「一一四百尺、汀洲蒼樹共花充」

十九畫

【鸞】ラン 平

○神鳥、鳳凰の屬、形雞に似、羽毛赤色に五彩を交へ、聲は五音にかなふ。一說、赤色多き者は鳳、青色多き者は鸞。○天子の車の鑣につけたる鈴「一車」「一輿」詩、小雅「和一雝雝」傳「在軾曰和、在鑣曰鸞」

【鸞旌】ランセイ 鸞鑾に同じ。楊汝士詩「文旒旌節擁二一輪李新陰在二鏗鏘一」

【鸞駕】ランガ 天子のみくるま。李庾、東都賦「一一總車、往二來於中天一」

【鸞輿】ランヨ 鸞駕。

【鸞膠】ランカウ 鸞鳥のあぶらにて製せしにかは。漢武外傳「西海獻二一、武帝弦斷、以レ膠續レ之、弦兩頭途相著、終日射不レ斷、帝大悅、名二續弦膠一」孫覿詩「朱弦久客落、一續二其斷一」

【鸞圖】ランヅ 鸞鳥の形を圖の上に立つるが故。李紳、登二禹廟一遇二降雲一詩「粉凝一一下、銀結鳳池傍」

【鸞鳳】ランホウ 鸞は神鳥、鳳は仙鳥、共に仙人の乘る所のもの。湯惠休曲「駐二駕一一、往二來仙靈一」

【鸞旗】ランキ 天子の御はた。鸞鈴をつけて飾るが故。漢書、賈捐之傳「一一在レ前、鸞車在レ後」

【鸞鏡】ランキヤウ かがみ。異苑「罽賓王、一鸞三年不レ鳴、夫人曰、聞見レ影則鳴、懸レ鏡照之、鸞覩レ影悲鳴、中宵一奮而絕」とある故事によりて鸞鳥を背に刻むが故。陸賓王詩「龍鱗去無二消息一一一朝朝減二容色一」

【鸞和】ランワ 二字共に天子の御くるまにつけるすず。字解を見よ。禮、明堂位、疏「鸞車、車有二一一也」

【鸞軫】ランシン 天子の御くるま。宋書、孝武紀「漢帝一一、鳳翔二五數一」

【鸞車】ランシヤ ○帝嚳の乘車。禮、明堂位「一一、有虞氏之路也」○廣く天子の御くるま。元萬頃詩「一一避レ日轉二丹闕一」

【鸞路】ランロ 鸞輅。鸞輿。

【鸞翔鳳翥】ランシヤウホウシヨ 用筆の妙を形容す。韓愈、石鼓歌「——梁仙下、珊瑚碧樹交二枝柯一」

【鸞輅】ランロ 鸞鳥のかたちを畫きたるはたぼこ。顧瑛詩「龍旂照二雲旆一一、步驟追隨帝二曲江一」

【鸞飄鳳泊】ランヘウホウハク ○書法の妙に喩ふ。韓愈、夠雄碑詩「——擧虎墳」○國夫婦の離散するに喩ふ。

【鸞鳳】ランホウ ○王德の瑞光として現はるといふ神鳥。英俊の士に喩ふ。後漢書、循吏傳「根缺非二一所二植、百里是大賢之路」○君子正人に喩ふ。王逸文「亂龍一一以託二君子一」後漢書、劉陶傳「放二鴟梟一而四二一一」○夫婦の契に喩ふ。盧照鄰、催妝詩「早歌三一一下二妝樓一」

【成二鸞鳳一】セイランホウ 夫婦の契を結ぶをいふ。唐僖宗宮人韓氏詩「今日已看——、方知紅葉是良媒」

【鸞輿】ランヨ 天子の御くるま。班固、西都賦「乘二一一、偏二法駕一」

【鸞鈴】ランレイ 天子の御くるまにつけるすず。王融詩「楚望候二龍旗一日館仰二一一」

【鸞路】ランロ 天子の御くるまの一に鸞に作る。禮、月令「乘二一一、駕二蒼龍一」同車。

【鸞絡】ランラク 前條に同じ。李嶠、五等論「一一龍旂」龍旂は天子の御旗。

【鸞儀】ランギ 鸞顯の威儀に比していふ。柳宗元爲二崔中丞一賀二朝覲一狀「企二一一於榮養一、獨無二羽翼一」

【鸝】リ レイ 平 支

黃一クワウは、てっせんうぐひす。同黃鶯・倉庚。

鹵部

【鹵】ロ 上 慶

○しほ(鹽)天生を一といひ、人造を鹽といふ。しほのけ(鹽氣)○鹽氣を含みて耕作に適せざる土地。又、澤「澤一」「斥一」「舄一」「鹹一」○草木の生ぜざる地、不毛の地、やせち、あれち。○かすむ(掠)擄に通ず。○たて、矢をふせぐ大形の楯。楯に通ず。○一簿は天子の車駕の次第。○おろか。魯と通ず「頑一」劉楨詩「小臣信頑一」

【鹵虜】ロリヨ 虜は盾、戰場にて多く人を殺し流血が盾を漂す。漢書、項籍傳「流血一一」同漂杵。

【鹵碱】ロカン 小石多きやせ地。

【鹵獲】ロクワク 敵の軍用品等を分捕りする。又、其の物。

【鹵田】ロデン 鹽氣のあるやせ地。蔡邕文「盈之一一、化爲二甘壤一」

【鹵簿】ロボ 天子の行列の次第。漢官儀「天子車駕次第、謂之一一、兵衛以二甲盾一居レ外爲二前導一、皆書之一一、兵衛簿、故曰二一一一」文獻通考「唐者大

屑也、施二一部僕仗前(連後從)一謂二之一一一」＝儀仗。

【鹵莽】ロバウ　かろがろしくして心を用ひず、事を爲すに粗略なる義。莊、則陽「君爲レ政勿レ勿二鹵莽一、治レ民勿二滅裂一、昔予爲レ禾、耕而一一二之一、則其實亦一一而報レ予、芸而滅二裂之一、其實亦滅裂而報レ予」＝莽鹵。

【鹵莽滅裂】ロバウメツレツ　事を作すの粗率なる義。前條參看。

【鹵味】ロミ　しほけ。書經、疏「水性本甘、久浸二其地一、變而爲レ鹵、一一乃鹹」

【鹵掠】ロリヤク　人の財物をかすめとる。漢書、高帝紀「所レ過無レ得一一一」＝擄掠。

八畫

【塩】

鹽(本頁二段)に同じ。

九畫

【鹹】カン　俗字

○しほはゆし、しほけ(鹽味)

○にがし(苦)爾雅「一、苦也」

【鹹苦】カンからくにがし。北史、房豹傳「瀕海水味多一一、豹命鑿二井一、遂得二甘泉一、遠邇以爲二政化所一致」

【鹹湖】カンコ　しほ水をふくめる湖。塞海・死海など。＝鹹水湖。

【鹹鯷】カンテイ　祭記に用ふるしほ。曲禮「鹽曰二一一一」注「大鹹曰レ鯷」

【鹹漿】カンシヤウ　しほけのある土地。楊倞賦「一一宜二北鄉之羊一」＝鹹土・鹹地。

【鹹水魚】カンスイギヨ　海に栖むうを。淡水魚の對。曹植文「鹹水之魚、不レ游二於江一」

【鹹腥】カンセイ　しほはゆくしてなまぐさし。楊萬里詩「金陵江水只一一」

【鹹渇】カンカツ　しほはゆ、しほけを含めるひかた。周禮「凡藏レ種、一一用レ鼏」注「渇、鹵也」

【鹹泉】カンセン　しほをふくめるいづみ。錄異記「此山直下、有二一一一一焉」

【鹹地】カンチ　鹹土に同じ。張籍詩「風吹二一一一結二陰鹵一」

【鹹土】カンド　鹽分を含めるつち。後漢書、西南夷傳「地有二一一一一、煮以爲レ鹽」＝鹹壤。

【鹹鹵】カンロ　しほはち。漢書、河渠志、注「師古曰、引二淤濁之水一灌二一一之田一、更令二肥美一」

十畫

【鹺】サ　シ　俗字

大いにしほはゆし、にがし、しほけ厚し。曲禮「鹽曰二一一」

【鹺使】サシ　鹽運使の異稱。

十三畫

【鹽】㊀エン　㊁エン　俗字

㊀しほ、海水を煮て製する白色にしてしほからき結晶物。○元素の一、黄褐色にして劇臭ある氣體「一素」㊁一に潰かす、鹽漬ヅケにする。

【鹽引】エンイン　稅を納れて鹽を賣ることを許されたる券ケン。宋代の鹽鈔に始まる。

【鹽漬】エンセキ　しほづけにする。＝鹽藏。

【鹽汗】エンカン　あせ、白汗はしほはゆし、故にいふ。淮南、精神「一一交流、喘息潺レ喉」

【鹽禁】エンキン　民の私に鹽を製することを禁ずる。魏書、甄琛傳「願弛二禁一一、使二沛然道及一依二周禮一置二川衡之法一、使三之監導一而已」

【鹽化】エンクワ　鹽素と化合する。

【鹽官】エンクワン　漢代、鹽を産する郡縣に置きて鹽稅を司らしめたる官吏。漢書、王莽傳「補二遂四一一長一」又、後世、政府が鹽を專賣せしめる爲めに置きたる官吏。

【鹽監】エンカン　しほと、すと。韓愈、李君墓誌銘「五嶽三牲、一一果蓏、人所二常御一」

【鹽月】エンゲツ　しほを製するを業とする家。宋史「食貨」鹽圖「一一、驚レ鹽實額二鹽商一」

【鹽梁】エンリヤウ　しほと青物と。周禮、亨人、注「大羹不レ致二五味一也、鉶羹加二一一一一矣」

【鹽鹵】エンロ　しほがま、鹽を焼く竈。宋史、食貨志「一一乃計二千四百餘所」

【鹽酸】エンサン　藥品の一、鹽化水素の水溶液。

【鹽豉】エンシ　みそ・納豆ナットの類、豉は味噌八史、貨殖傳「醯醬千一一千苔」世說「千里蓴鱸、未レ下二一一一」

【鹽汁】エンジフ　しほのしる。晉書、胡貴嬪傳「帝多二内寵一、常乘二羊車一、恣二其所レ之、宮人取二竹葉一插レ戸、以二一一一灑レ地、而引二帝車一」

【鹽車憊】エンシヤノヒ　良馬が駑馬と同じく鹽を運ぶ車を曳かされるを憤む。俊才の士の不遇を耻くに喩ふ。戰國策「驥之齒至矣、服二鹽車一而上二太行一(中略)遇二汁瀆一、白汗交流、中阪遷延、負レ轅而不レ能レ上」晉書、甲二屈原一賦「驥垂二兩耳一、服二鹽車一兮、章甫薦レ屨兮漸不レ可レ久」

【鹽水選】エンスイセン　穀物の種子を鹽水につけて精選する法。

【鹽井】エンセイ　しほを産すうむど。四川・雲南の兩省に多し。

【鹽稅】エンゼイ　食鹽の稅。後漢書、王符傳「求レ假二一一一」＝鹽賦。

【鹽車】エンシヤ　鹽は菜を細かに切りて、鹽に混ぜて漬けたるもの。周禮、鹽人、注「凡鹽所レ和、細切爲レ虀」歐陽修詩「念子朝夕勤二一一」

【鹽泉】エンセン　しほけをふくめる泉。廣志「湖縣有二一一一、煮則爲レ鹽」

【鹽素】エンソ　元素の一、字解參看。

【鹽池】エン　しほをつくる池。漢書、平倉傳「勃海ー一、可三且ツ禁以救二民急一」

【鹽鐵】エン　しほと、てつと、漢の武帝の時、此二品を政府の專賣とす。桓寬、其の非を論ぜし言を集めてー一論と名づく。漢書、昭帝紀「罷二ー一権酤一」

【鹽田】エン　鹽を製する田。宋史、食貨志「隨處利路茶戸山園如二ー一例免二方盛均稅一」

【鹽梅】エイ　よきほどの味に加減する、あんばいよくする。轉じて、君を輔佐して善政を行はしむる。書、說命「若作二和羹一、爾惟ー一」

【鹽賦】エン　食鹽の稅。南史「陳天嘉二年以二國用不足一、立二煮海ー一及権酤科一」＝鹽稅。

【鹽分】エン　しほけ（鹽氣）＝鹽味。

【鹽米】エイ　しほと米と。齊書、孝義傳「資數千卷、ー一數十斛而已」

【鹽泊】エン　海水を煮て鹽を製し、鐵山を採掘して、冶金をなす。鹽鐵論「故ー一之處、大校在下依二山川一近中鐵炭上」

【鹽鹵】エン　○しほけ（鹽は人造、鹵は天然產のしほ）○山にほ。史記「山東食二海鹽一、山西食二ー一一」注「四方鹹地也」

【鹼】㊀ゲン　㊁カン・ケン　塩

㊀しほけ（鹵）地質に含める鹽分。㊁しほみづ。○あく。灰に水を和し、濾して得たる液汁、垢穢を去るに用ふ。○圖石ーなは曹達ーに蠟ラを混じて製したる洗料。しゃぼん。

【鹼化】ケン　蠟ラと曹達ーの化合をいふ。

鹿部

【鹿】ロク　屋

○しか、さをしか、か、森林に棲む獸、四肢細長、性質溫順、牡は枝ある角を有す。○ふもと。麓に通ず。○天下を掌握する權位即ち多くの英雄が互に驅逐して獲んとする目的物。一說、祿と音通、天祿即ち帝位。史、淮陰侯傳「山東大擾、異姓竝起、英俊鳥集、麋失其ー一、天下共逐之」魏徵詩「中原還逐ーー」○こめぐら、方形の米廩。圓き倉を困といふの對。○ーーは凡庸の貌。錄錄碌碌に通ず。

【鹿苑】ロク　○しかを飼ふ園圃。左、成十八「鹿圃」注「築ー壇宮ニーー一」○圖ジシ鹿野苑の略、釋迦が最初に說法せし所。翻譯名義集「有ー一名二波羅奈一、去ー其不ー遠、過二立王城一、或過二江邊城一、亦曰ニーー一」＝仙苑。

【鹿角】ロク　しかのつの。禮、月令「仲夏之月、ーー解、蟬始鳴」

【鹿角菜】ロクカク　海草の一、鹿ラの石に多く叢生す、長さ二三寸、形の似たるが故。煮せば淡黃となる、糊ノとなし、又、婦人の髮を洗ふに用ふ。ふのり（布海苔）

【鹿韭】ロク　牡丹の異名。本草「牡丹、一名百兩金、一名鼠姑、一名ーー」

【鹿裘】ロク　しかのかはごろも。史記、自序「夏日葛衣、冬日ーー」

【鹿柴】ロクサイ　○さかもぎ、竹木を樹てて敵の進入を防ぐ障害物。＝鹿寨・鹿砦・鹿角砦。○鹿を飼ふ所。唐の王維に「ーーの詩あり。

【鹿砦】ロクサイ　前條に同じ。

【鹿寨】ロクサイ　鹿柴に同じ。

【鹿幘】ロクサク　しかの皮にてつくれる頭巾。唐書、隱逸傳「遺以二衣服一ーー履舄一」

【鹿豕】ロクシ　しかと、ゐのこと。孟、盡心「舜之居二深山之中一、與二木石一居、與二ーー一遊」

【鹿車】ロクシャ　わづかに一鹿を容れる程の小さきくるま。後漢書、任末傳「躬推ーー一載二奉徐窪一、致二其墓所一」

【鹿茸】ロクジョウ　しかのふくろづの、藥用とす、東三省に出づる者、最も名あり、之を鹿茸ーーといふ。本草綱目「ーー味甘溫無毒」

【鹿臺】ロクダイ　殷の紂王の財を蓄へし地。書、武成「散二ーー之財一、發二鉅橋之粟一」

【鹿場】ロクジョウ　しかの遊び居る所。詩、幽風「町畽ーー」鮑照詩「不ー一覩二車馬跡一、但見二麋鹿ーー一」

【鹿洞】ロクドウ　白鹿洞の略。朱熹の學を講ぜし所。韓補、紫陽山賦「既裂二裳於ーー一、宜ー一敷二錦字粉檀一」白鹿洞（ーー二九頁一段）を見よ。

【鹿皮】ロクヒ　鹿のかは。古、婚姻の贈りもの。儀禮、士冠禮「束帛儷皮」鄭注「儷皮、兩ーー也」

【鹿尾菜】ロクビサイ　圖海草の一、ひじき、海岸の岩石に叢生する青紫色の藻、煮れば黑く、食ふべし。＝羊栖菜。

【鹿鹿】ロクロク　しか、轉は鹿の小なるもの。後漢書、禮儀志「其儀乘輿御二我路一、白馬朱鬣、躬執レ轡、射レ雉、雉以ニーー一」

【鹿鳴之宴】ロクメイノエン　貢舉即ち州縣より擧げられて京師に貢せらるる人を送るさかもり。詩、小雅、鹿鳴篇を歌ふが故。其の第三章「呦呦鹿鳴、食二野之芩一、我有二嘉賓一、鼓レ瑟鼓レ琴、和樂且湛、我有二旨酒一、以燕二樂嘉賓之心一」

【鹿毛】ロク　鹿の毛。轉じて栗毛に同じ。

【鹿門山】ロクモンザン　湖北省襄陽縣の東南地無二狐兎一、用ニーー野狸毛一爲レ筆」

三十支那里に在り、本名は蘇嶺山、漢末、龐徳公、此山に登り、藥を採りて返らず、唐の孟浩然も亦此に隱居す。

【鹿苑】ロクオン　鹿苑を見よ。

【鹿蹄】ロクテイ　○物をひき又はつるし上げるに用ふる滑車。漢書、揚雄傳、注「古長劍首、以玉作二井一一形一」‖曉雛。○一一形の玉の飾ある劍。古樂府「腰間一一劍、可レ直二千萬餘一」○一一の一種。

【鹿鹿】ロクロク　凡庸なる貌。漢書、蕭實傳贊「錄錄未有二奇節一」注「錄錄猶二一一一」‖碌碌・碌碌。

【逐レ鹿者不レ顧レ兔】チクロクシャハトヲカヘリミズ　大利に志す者は、小利を顧みざる喩。淮南、說林「一一、決二千金之實一者、不レ爭二錙銖之價一」

【逐レ鹿宿不レ見レ山】チクロクシュクシテヤマヲミズ　利慾に遂ふ者は、道理を忘れるに喩ふ。虛堂錄「一一、擲レ金者不レ見レ人」淮南、說林「逐レ獸者目不レ見二太山一」

【指レ鹿爲レ馬】シロクヲウマトス　事を設けて人を欺くにいふ。趙高が樂の二世皇帝に鹿を獻じて馬なりといふ、左右或は高に阿りて亦馬なりといふものあり、左右或は鹿なりと正言せしに中つるに法を以てせしかば、羣臣皆高を畏れたる故事に本づく(史、始皇紀)

【鹿死不レ擇レ音】シカシテオトヲエラバズ　鹿は牝の優雅なるものなれども、死に迫る時は、好音を擇ぶ暇なし。人の危急に迫れる時には惡聲を出すに喩ふ。左、文十七「一一、小國事二大國一也、德則其人也、不レ德則其鹿也、鹿而走レ險、急何能擇」(一說音と蔭と音通、蔭隱する處なり、鹿の將に死せんとする時には、休蔭の處を擇ぶに暇あらず、以て人の危急の時は亦擇ぶに暇あらざるに喩ふと)

【鹿死二誰手一】シカシテタレガテニシス　天下は當に誰の手に歸すべきといふの喩。晉書、石勒載記「勒因二漫酒一、笑曰、劉季・項羽各欲二南面一稱レ孤耳、會當二北面而事一レ之、與二韓彭一挾レ弧而驅レ先耳、陛遇二光武一、當三並驅二於中原一、未レ知二鹿死誰手一」字解參看。

二畫

【鹿】イ　尤

○めじか(牝鹿)○めす(牝)

【麀】牝鹿なり、七は牝の省畫。

【麀鹿】ユウロク　麀は牝鹿、父子麀を共にすとは亂倫の喩。曲禮「夫惟禽獸無レ禮、父子一レ一」

【麀聚】イシュウ　しかの牝と牡と。陳師道詩「一一願二其子一燕雀各相隨」

【麀鹿】ユウロク　めじか。詩、大雅「王在二靈囿一、一一攸伏、一一濯濯」

【麃】ヒョウ　宵(麻部二十二畫)の俗字。

四畫

【麆】アイ　泰　ニ。藥ナイの子。

【麈】○ヘイ　○ヘイ　靜　有　靜

○なれしか。○くさぎる(鋤)詩、周頌「綿綿其一」(綿綿はねんごろに力を用ふる貌)○一一(ハウ)はつよく武き貌。詩、鄭風「駟介一一」

五畫

【麇】○キン　眞　クン　文　○クン　吻

○くじか、のろ(麞)鹿より小にして角なし。○國の名。○地の名。○むらがる。衆に通ず「一至」○しばる、束縛する。左、哀二「羅無勇一之」(羅は人名)

【麇至】シンシ　むらがりいたる。又、くじかの如く羣り至る。左、昭五「求二諸侯一而一一」

【麈】シュ　虞　おほしか(大鹿)藥ナイの屬、鹿よりは大、其の尾はよく塵を避けるといふ、よりて拂子ホッスを造るに用ふ。一尾を見よ。

【麈談】シュダン　麈尾ホッスを執りて話をする。晉書、王衍傳「唯談二老莊一爲レ事、每提二玉柄麈尾一、與レ手同レ色」林慮賦詩「疑是神仙接二一一一」

【麈尾】シュビ　ほっす(拂子)麈ナイの尾は、よく塵を避けるといひ、又羣鹿が塵の尾の轉ずるを見てこれに從ひ住くといふ傳說によりて佛老の徒が其の尾にて拂子を造り談話の時に執り揮ふ。晉書、孫盛傳「盛晉譜レ浩談論、對食賓二揮一一」毛悉落二飯中一」‖拂塵。

六畫

【麋】ビ　支

○となかい、鹿の屬、形水牛に似、牡は青黑色、枝ある角を有し、牝は褐色、鹿の角は夏至に落ち、一の角は冬至に落つ。○まゆ。眉に通ず「一壽」荀、非相「面無二一一」○ほとり、みぎは。湄に通ず。詩、小雅「居二河之一一」○藥に通ず。一蕪ブは茸蕈タケナの一名。

【麋角】ビカク　なれしかのつの。禮、月令「仲冬之月、一一解」

【麋豪二虎皮一】ビカウニコヒヲ　晉侯が天子の名馬を收むるに喩ふ。史、楚世家「若使三漢中麋豪虎之皮一入之攻レ之、必萬二之於虎一」

【麋沸】ビフツ　さわぎ亂れる喩。淮南子「天下爲レ之一一蝗動」（蝗は蜚）揚雄、長楊賦「一一雲擾、麋沸黎爲レ之不レ寧」

【麋鹿】ビロク　○おほしかと、しかと。孟、梁惠王「麋三其有二一一魚鼈一」○麋野シヤに喰ふ。朱熹、送二郭拱辰一序「宛然一一之麋、林野之性」

七畫

【麌】ゲ・ゴ　麌　麋

○をじか（牡鹿）をのろ（牡麌）○一一は鹿の群り聚まる貌。詩、小雅「獸之所レ同、麌鹿一一」注「一一衆多也」

八畫

【麒】キ　支

一一麟リンは想像上の靈獸、聖人出でて王道行はるれば見はるといふ、牝を一といひ、牡を麟といふ（一說、麟に似て角なき者）格物論「一一麟者、麝身馬足牛尾黃色、圓蹄而有レ角」

【麒閣】キカク　麒麟閣の略。劉孝儀之詩「一一一代良、熊軒千里陽」＝麟閣。

【麒麟角】キリンカク　霸王樹サボテンの異名。

【麒麟閣】キリンカク　前漢の武帝が麒麟を獲たりし時、築きしたかどの、孝宣帝、功臣の像を畫きて閣上に掲げしむ。漢書、蘇武傳「上思二股肱之美一、遠圖二盡其人一乎――」（十一人は張安世・韓增・趙充國・魏相・丙吉・杜延年・劉德・梁丘賀・蕭望之・蘇武）＝麟閣・麒閣。

【麒麟兒】キリンジ　すぐれて賢き小兒。金璧故事「昔徐陵四歲、家人抱見二僧誌上人一、上人乃以レ手摩二其頂一曰、天上石麒麟也」杜甫、見二徐卿二子一詩「徐卿二子生絕奇、感應吉夢一相追隨、孔子稱レ兒親抱送、如是天上――」＝龍駒・鳳雛。

【鹿】㊀キン　㊁クン　眞　文　麋に同じ

㊀麋クワンの類の總稱、性最も臆病にして水を飲むに己の影を見ても怖れ奔るといふ。詩、召南「野有二死一」㊁むらがる（羣）【鹿至】シンきり來る。陽は一に麋に作る。左、昭五「求二諸侯一而屢至」

【麑】ゲイ　齊

○かのこ、鹿の子。○しし（獅子）＝猊「狻一」○國一島シマは鹿兒島の別稱。

【麑裘】ゲイキウ　鹿の子のかはごろも。論、鄉黨「素衣一一、黃衣狐裘」

【麑蠻】ゲイバン　しかの子と、とりの雛と。蘇軾論「網羅捕二捉一一」

【麑母】ゲイボ　鹿の子の母。韓非、說林「孟孫獵、得レ麑、使二秦西巴一載レ之持歸、其母隨レ之而啼、秦西巴弗レ忍而與レ之、孟孫歸至而求レ麑、答曰、余不レ忍而與二其母一、孟孫大怒逐レ之、居三月復召以爲二其子傅一（中略）曰、夫不レ忍レ與、又且忍二吾子一乎、故曰、巧詐不レ如二拙誠一」

【麑鹿】ゲイロク　鹿の子。古、贄となして贈るもの。白虎通「贈大夫鹿、古以二一一、今以二羔雁一、何以爲、古者貴取二其肉一、謂得二美草一鳴相呼、今文取二其外一、謂羔跪乳腥有二行列一也」

【麗】㊀レイ・ライ　齊　㊁リ　支　レイ・ライ　齊

㊀うるはし、うらら か、うつくし（美）「佳一」「美一」「艷一」「秀一」○はなやか、きらびやか「華一」○あざやか、いさぎよし（鮮潔）「鮮一」○よし（美好）立派である。○かがやく、ひかる（光華）○つく（附著）易、離卦「日月一乎天」つらなる（連）つなぐ（繫）○つらなりゆく（旅行）○ほどこしおこなふ（施行）○つる（繩）ならぶ（偶）ふたつのかは（兩皮）儷に通ず。○やのむね。＝櫪。○かず（數）歷數の歷の轉音。詩、大雅「商之孫子、其一不億」○魚一一は陣の名。㊁はなる（離）○高一一は國の名、古の高句一（麗一に驪に作る）今の朝鮮。○驪に同じ。

【麗逸】レイイツ　うるはしくしてぬきんでる。南史、王筠傳「奉レ勅製二開善寺寶誌法師碑文一、辭甚一一」

【麗靡】レイビ　うるはしくつややか。＝艷麗。

【麗億】レイオク　數の多きをいふ。詩、大雅「商之子孫、其一不億」

【麗雅】レイガ　うるはしく正し。文心雕龍「文辭一一爲二詞賦之宗一」＝雅麗。

【麗蠅】レイヨウ　うるはしくしてしとやか、蠅は雅ヤサビ魏文帝、登凌雲臺賦「登二高臺一以騁レ望、好二景雀之一一一」

【麗曲】レイキヨク　うるはしき音樂のふし。白居易詩「寄レ殼一一越二寒玉一」

【麗句】レイク　うつくしき句。武元衡詩「雄詞封禪草、一一陽春曲」

【麗娟】レイケン　○うるはし。○美人の名。郭憲、洞冥記「帝所レ幸宮人名一一、年十四、玉情柔軟、吹レ氣似レ蘭」（帝は、漢の武帝）

【麗采】レイサイ　うるはしきいろどり。梁簡

文帝、謝ㇾ賜二王佩一啓「盛用ㇾ一、擁水錦文」

【麗藻】うるはしくすぐれし詩文。陸機、文賦序「苞二一之彬彬一」

【麗辭】うるはしきことば。皇甫謐、三都賦序「觀ㇾ類而長ㇾ之、故辭必盡ㇾ麗」

【麗日】うららかなる日。楊師道詩「朝光欲ㇾ動千門曙、一一初照百花明」

【麗質】うるはしきうまれつき。梁簡文帝詩「名都多二一一、本自恃二容姿一」白居易詩「天成一一難二自棄一」

【麗人】うるはしき人。杜甫詩「三月三日天氣新、長安水邊多二一一一」‖美人・佳人・麗女。

【麗神】うるはしき精靈。陳暄詩「飄酒歌二醪曲一、臨溜逢二一一一」

【麗姝】うるはしきをんな。姝は美好。唐書、韓令坤傳「宮人、更求二一一知レ書者一」‖名姝・美姝・艷姝。

【麗樹】うつくしき木。梁簡文帝文「如二浮波之遠騖一、若二一一之爭榮一」

【麗春花】ひなげしの異名（花木考）‖虞美人草。

【麗色】うつくしくのどかなる色。何遜詩「一一明二珠箔一、餘香裊二綺紗一」○うるはしきかほいろ。沈約詩「婉容一一心相知」

【麗飾】うるはしきかざり。後漢書、班固傳「去二后宮之一一一、損二乘輿之服御一」

【麗瞩】うるはしきながめ。南史、陸倕傳論、松山桂清、非二止素玩一、碧澗清源、翻成二一一一」

【麗藻】うつくしき花しべ。孟郊詩「一一惜未レ摘、菀枝長更紆」

【麗水生レ金】麗水は浙江省の川の名、金を生ず。韓非、內儲說「荊南之地、麗水之中生レ金」千字文「金生二麗水一」

【麗譙】敵をうかがひ、又、遠方を望む爲め、門上にたてたるものを譙といふ。又美麗なる高どの。白帖「魏武有二一一一樓一」

【麗女】麗人に同じ。宋玉賦「一一盛飾、嫮如二春花一」

【麗都】うるはしくみやびやか。戰國策「妻子衣服一一」

【麗哉】うるはしきを感歎する辭。揚雄、羽獵賦「一一神聖、慙二於文宮一、富二於與レ地乎倂レ時、貴又與レ天乎比レ崇」

【麗盤】うつくしき盆。梁簡文帝文「施二彫金之一一一」

【麗皮】二枚の鹿の皮、婚禮の時、男女相ちぎれるしるしとして用ふ。史記「太昊始制二嫁娶一一爲レ禮」註「麗、偶數也」‖儷皮（儀禮）

【麗妃】唐代の女官の名。惠妃の下に位す、正一品（唐書、百官志）

【麗美】うつくしく、論衡「佞人才高、論說一一」‖美麗。

【麗閣】うるはしくはでやか。後漢書、王符傳「金銀錯鏤、窮二極一一一」拳度賦「一一過美、則與レ情相悖」‖麗麗。

【麗風】西北の風（淮南、地形）

【麗服】みごとなる衣服。北史、周高祖紀「金銀寶器、珠玉一一」

【麗文】うるはしきあや。梁書、謝幾卿傳「清波之辯、懸河不レ足レ喻、春藻之辭、一一無二以匹一」

【麗密】うつくしくこまやか。宋史、杜杲傳「能爲レ文、一一清敏」

【麗妙】うるはしくたへなり。水經、注「東都西域、俱爲二一一一矣」

【麗容】うるはしきすがた。‖美容。

【麗視】しやぶにらみ。韓名「眸子明而不レ正曰二通視一、又謂二之一一一、麗、離也、言二目視レ天、一目視レ地、目明分離、所レ視不レ同也」

【麗澤】朋友相資けて學を講じ德を修める。易、兌卦「一一兌、君子以朋友講習」（兌は易象にて澤を示す、兌卦は兩澤相麗ナリて互に相滋益するの象、故に一一といふ）

【麓】ロク　屋

○ふもと（山足、山脚）詩、大雅「瞻彼旱一一」（旱は山の名）○ふもとの林。周禮、地官、林衡、注「竹木生二平地一曰レ林、山足曰レ一」○やまもり、山林を守る官吏。○しるす（錄）‖書、舜典、傳）

【麤】ソ　九畫　麁

○鹿の子（鹿）○すべて、獸の初生のものにいふ（曲禮、註）

【麤天】獸の子の未だ成長せざるもの。淮南子「先王之法、敢不レ掩レ羣、不レ取二一一一」

【麤噍】鹿の子と、子牛とをいふ。檀弓「唐子西云、徐穉步二山徑一、攜二松竹雛一二一一」

【麤卵】獸の子と、鳥の卵とをいふ。曲禮「國君春田不レ圍レ澤、大夫不レ掩レ羣、士不レ取二一一一」

【麝】シャ　十畫　麋　セキ　ジャ　通香

じゃ、鹿に似たる獸、角なし、長さ三尺許、毛は灰白色にして長し、臍に香料を有す、之を一香といふ。

【麝香】じゃの臍にある香料。本經「魏章仲將用二眞珠一一二物一」

【麝香鹿】麝の屬、中央亞細亞に產す、喜馬拉耶山上に在り、身すばやく、善く跳る、雌雄皆角あり、雄

の臍に香あり。

【麝香】ジャカウ　麝香に同じ。李商隱詩「蜥蜴金猊冷、一一微度繡芙蓉」

【麝臍】ジセイ　麝のへそ、香氣烈し。談苑「南汝山中多ㇾ麝、絕愛ㇾ其臍」林逋、梅花詩「疎影橫斜水淺、暗香浮動月黃昏」

【麝煤】ジバイ　墨の異名。韓偓詩「剡紙一ー重三百張、越甌犀液發二茶香一」

【麝香】ジャカウ　麝香に同じ。鮑照、擬行路難「外發二龍鱗之丹綵一、內含二ー之紫烟一」

【麝墨】ジャボク　香のよき墨。王勃、秋日餞別序「研二精ー一、運二思龍章一」‖麝煤。

十一畫

【麞】シャウ　㊥

のろ、くじか、麋ビの屬、脚より小にして美、角なく、體は褐色、性甚く驚く、其の革は細軟なり。‖獐。

【麞麞】ショウショウ　鹿中の美なるもの、故に衆に從ふ、善は文辭の美なり。

【麞牙】ショウガ　〇のろのきば。古今注「兎有ㇾ角而不ㇾ能ㇾ觸、麞有ㇾ牙而不ㇾ能ㇾ噬」〇稍の異稱。白居易詩「祿米一ー稍」

【麞香草】ショウカウサウ　蘭ランの異名（清異錄）

十二畫

【麤】ソ　㊥

〇きりん、古代の想像上の神獸、麒（鹿部八畫）を見よ。家語、執轡「毛蟲三百六十、而ー爲之長」〇あきらか（光明）燐と通ず。揚雄文「炳炳ー一」

【麟角】リンカク　極めて稀なる喩。北史、文苑傳「學者如二牛毛一、成者如ニー一」（學に志す者は、牛毛程多きも、成業する者は、麒麟の角の如く少し）

【麟角鳳嘴】リンカクホウシ　極めて稀にある者に喩ふ。杜甫詩「——世莫ㇾ雌、前脚續張奇自見」

【麟閣】リンカク　麒麟閣（十二畫二四三頁）に同じ。李白詩「功成拂ニー一、獨有二黃石公一」

【麟閣像】リンカクザウ　漢の宣帝の時、麒麟閣上に功臣の像を畫かしめたるをいふ。漢書、宣帝紀「圖二功臣霍光張安世等十一人于麒麟閣一」麒麟閣（十二畫二四三頁）參看。

【麟經】リンケイ　孔子の著はされし春秋の異稱。春秋は魯國の歷史、隱公元年より筆を起し哀公十四年春西狩獲麟にて筆を止めたるが故。馬祖常詩「聖儲修ニー一、諸將宣ニ勞略一」

【麟史】リンシ　前條に同じ。前條參看。張說詩「風池傷二酒草一、ー一泣二遺編一」

【麟趾之化】リンシノクワ　文王の后妃の德、身に修りて、子孫宗族皆善に化せり、故に詩人麟之趾の詩を作りて之を稱す。轉じて皇后の德化の美とす。詩、召南、麟之趾、書序「麟之趾、關雎之應也、關雎之化行、則天下無ㇾ犯二非禮一」

【麟臺】リンダイ　きりんの臺命。抱朴子「ー一三千歲」唐雅「ー一千歲」

【麟孫】リンソン　他人の子孫を稱めていふ。向子諲、臨江仙詞「ー一風女、厚ㇾ德正卿堂」

【麟坐】リンザ　〇唐の武后、祕書省を改めてー一と爲す。〇麒麟閣の異名。李九齡、代二邊將一詩「據ㇾ鞍遙指長安路、須ㇾ刻ー一第一功」

【麟德】リンドク　〇唐の高宗の年號。〇唐の宮殿の名。舊唐書「明皇天性嚴肅、雖二遊宴一、而辛無ㇾ所ㇾ撓、有二魚鼈千數一、重ニー一殿一」

【麟臧】リンセン　きりんを深く嘆美せし辭。黃庭堅、麟趾贊「麟有ㇾ趾而不ㇾ踶、仁哉、ー一、有ㇾ額而不ㇾ抵、仁哉、ー一、有ㇾ角而不ㇾ觸、仁哉、ー一」

【麟筆】リンピツ　史官の筆。麟經參看。吳融詩「偶持ニー一侍二金閨一」‖史筆。

【麟脯】リンポ　麒麟の肉の乾したるもの。極めて珍味とす。列仙傳「王方平住二霄門縣經家一、召二薛姑二玉、各進二行廚一、肴ㇾ脯而食ㇾ之、云ニー一」

【麟鳳】リンポウ　きりんと、ほうわうと。すぐれたる賢人に比していふ。元史、閻郎傳「自ㇾ京還ㇾ家、居十三年、縉紳望ㇾ之若二景星ー一、鄉里稱爲二先生一而不ㇾ姓」

【麟鳳在二郊藪一】リンポウザイカウソウ　麒麟と鳳凰とが郊藪に在るは聖人の出る瑞祥。漢書、武帝紀「詔曰、周之成康、刑措不ㇾ用、德及二鳥獸一、故麒麟鳳凰、星辰不ㇾ孛、日月不ㇾ蝕、ーー、河洛出二圖書一、何施而臻ㇾ此與」

【麟鳳龜龍】リンポウキリュウ　四つのすぐれたる動物。禮、禮運「ーー謂二之四靈一」

【麟麟】リンリン　光明なる貌。揚雄、劇秦美新「炳炳ー一、蔚不ㇾ鬱哉」

廿二畫

【麤】ソ　㊥

麁に通ず　俗に麤に作る

〇あらし（粗猶）精の對。精ハしからず。〇うとし（疏）〇あらまし（略）ほゞ（大概）史、陸賈傳「ー一述存亡之徵」〇おほまか。文章軌範、小序「白ー一入細」〇大いなり。〇くろごめ（糙）玄米「ー一糲」左、哀十三「粱則無矣、ー一則有之」（粱は上米）〇はけし「ー一風」あらあらし「ー一暴」〇とほし（遠）

【麤惡】ソアク　あらくしてわろし。閻選、天官、疏「布帛之精、大者則ー一」

【麤獷】ソクワウ　あらあらし。北史、馬榮傳「榮、少ー一、有二武藝一好ㇾ氣以陵ㇾ人」獷は麤惡。

【麤言細語】ソゲンサイゴ　あらき言と、こまかなる

語と。傳燈錄「麤言及麤語、皆歸二第一義一」

【麤才】ソサイ あらくして精しからざるはたらき。又、其の人。蘇軾詩「一一杜牧眞似レ癡」

【麤醜】ソシウ みにくし。魏志、管輅傳「輅容貌一一無二威儀一」

【麤枝大葉】ソシタイヨウ あらく大いなる枝と葉と。文章の細ニかき法則に拘泥せずして自由に筆力を揮ひしものに喩ふ。文章軌範、侯字集小序「此集皆——之文」

【麤疎】ソソ そそっかし（疎忽）晉書、謝鯤傳「王敦怒曰、君一一邪」‖麤疏。

【麤麤】ソソ あらまかなる貌。蘇軾詩「薄酒勝二茶湯一一一布勝レ無レ裘」

【麤飯】ソハン そまつなるめし（粗飯）陸游詩「渴酲一一餐二餘生一」‖疏食。

【麤服】ソフク 粗末なるきもの、修飾せざるをいふ。世說「裴令公有二儁容儀一、脫二冠冕一一一亂頭、皆好」（令公は裴楷）‖惡衣。

【麤策】ソサク あらあらしく武骨なり。宋書、王微傳「王樂小兒時尤一一」

【麤入レ細】ソニュウサイ あらまかなるより精細に入る。作文は初はあまり規則などに拘泥せずして思ふままに綴り、熟するに從ひて精細に進むべきをいふ（文章軌範、小序）

【麤率】ソソツ そそっかし、周密ならず。英雄記「丁原、爲レ人一一有二武勇一」‖麤射

【麤糲】ソレイ 舂きて精げざる米、麤は玄米。史、劉裕傳「進二百金一者、皆用爲二夫人一一之費一」

麥部

【麥】バク キョク 麦は俗字

○むぎ、五穀の一、莖に節あり、夏月花開き實を結ぶ、大一小一種一等の種類あり。○國ばくねう（麥縄）字書上の用語。

【麥英】バクエイ 櫻桃ノ異名。吳氏本草「櫻桃、一名朱蔡、一名一一」

【麥稈】バクカン むぎわら。春渚紀聞「散レ膠盡塗二場圃一一一」

【麥曲之英】バクキョクノエイ 酒をいふ、麥曲は麴なり、麴に同じ、酒は麴を醸して成るが故。白居易、酒功贊幷序「一一、米泉之精、作合爲レ酒、孕レ和產レ靈」

【麥光】バクコウ 紙の名。蘇軾詩「一一餉レ几淨無レ瑕、入夜青燈照二眼花一」

【麥舟】バクシュウ ○むぎを運ぶ舟。冷齋夜話「范文正公仲淹、遣二子堯夫到二姑蘇一、取二麥五百斛一、舟次丹陽一、見二石曼卿一、曼卿曰、三喪在二殯土一、秋葬レ之、無レ可二與謀一者、堯夫以二所載一一付レ之、到レ家、文正曰、汝不レ足レ見二故舊一乎、曰、曼卿爲二三喪未レ葬、方滯二丹陽一、公曰、何不レ以二一一與レ之、堯夫曰、已付レ之矣」○この故事に本づきて物を贈りて人の喪を助くるにいふ。

【麥秋】バクシウ 陰曆四月の異名。百穀の熟するは秋なり、麥は四月熟す、故にいふ。禮、月令「是月（四月）也、一一至」

【麥秀之歌】バクシュウノウタ ○殷の箕子が故の殷の都の墟を過ぎて作りし歌。史、宋世家「麥秀漸漸兮、禾黍油油兮、彼狡童兮、不二與レ我好一兮」（狡童は殷の紂王を指す）○轉じて故國の滅亡を歎ずるを麥秀之歌といふ。

【麥人】バクジン むぎの心ノ蘇軾詩「夏早雖二一一」注「麥之心曰レ人」

【麥酒】バクシュ ○むぎにて造りたる酒。後漢書、范冉傳「冉與二弟協一步、齎二一壺酒一設レ壚以待レ之」○洋酒の一、ビール。‖國噫酒・皮酒。

【麥蔽】バクヘイ むぎと、まめと。淮南子「大火中則種二一一一」‖蔽麥。

【麥穗】バクスイ むぎのほ。戴叔倫詩「暖日柔心稠、晴煙一一抽」

【麥糖兩岐】バクトウリョウキ 麥の穗が二またになりて實る。豐年の兆とす。後漢書、張堪傳「百姓歌曰、桑無二附枝一、麥有二兩岐一、張君爲レ政、樂不レ可レ支」

【麥稭】バクカウ 麥穗に同じ。徐陵文「宋徽子一一之歌、周大夫黍離之歎」

【麥麵】バクメン むぎのかゆ。皮日休詩「朝食有二一一一、晨起有二布衣一」

【麥奴】バクド むぎのくろんぼ。陸游詩「雨足年豐少二一一」

【麥飯】バクハン むぎめし。後漢書、馮異傳「諸目、倉卒無二菽豆粥一、唐花河一一、厚意久不レ報」

【麥餅】バクヘイ むぎのだんご。齊書、禮志「諸二太廟一四時祭二宜薦一者一、薦二一一鴨臛一並平生所レ嗜也」

【麥苗】バクビョウ むぎのなへ。宋史、食貨志「自レ冬及レ春、雨雪及レ時、一一滋盛」

【麥餅】バクヘイ むぎ粉にて製せし麵類。麵復古詩「一一不レ療レ饑、冬衣猶未レ卸」餅は麵の正字。

【麥門冬】バクモンドウ りゅうのひげ（龍鬚）古名、やますげ。根を藥用とす。

【麥浪】バクロウ 青き麥畑が風にて波の如く搖ぐ狀をいふ。僧惠洪詩「花信風來一一寒」歐陽修詩「野闊風搖一一麥」

【麥粒】バクリュウ むぎのつぶ。晉愛詩「一一牧來品絕倫」

【麥雕】バクチョウ むぎばたけのうね。庾信詩「一一靜レ經繡」‖麥壟。

【麥壟】バクロウ 前條に同じ。李白詩「川光淨二一一一、日色明二桑枝一」

【流レ麥】リュウバク 後漢の高鳳が閉書にふけりて暴雨の降り來りしに氣づかず、庭に曝せる麥を流したる故事。後漢書、逸民傳「高鳳字文通、南陽葉人、家以レ農爲レ業、嘗

事稍弛懈、晝夜不ㇾ息、麥菽之ㇾ田、隴ニ麥於庭ニ令ニ風霽ヲ難、時天暴雨、而風持ㇾ竿誦ㇾ經、不ㇾ覺ニ潦水流一ㇾ疫、要重怪問、方悟、後爲ニ名僧一」、梁元帝文「漢人ノ一ㇾ、晉人聚ㇾ蚕」

【麦】ボク（前條）の俗字。

四畫

【麩】セウ　蘇

こがし、むぎこがし。本草、註「一卽麨、以ニ麥蒸爲ニ成屑一」

【麩】フ　虞

○ふすま、むぎかす、小麥の粉を取りしかす。○圖ふ。小麥粉にて製せし餅の如き食品、煮て食ふ。

【麩炭】フタン　炭の水に入りて浮ぶ者、けしずみの類。白居易詩「日其半燒一ㇾ火」‖浮炭（老學庵筆記）

【麪】ベン　メン　銑　麵は俗字

○むぎこ。麥の粉、うどんこ、めりけんこ。又其の粉にて製せし絲狀の食品、索ー（サク）麵（メン）、湯餅（タウベン）の類。○圖ー麭（パン）はパン。‖餅包。

【麩】ヘン　霰

○ふすま、むぎかす、小麥の粉を取りしかす。○圖ふ。小麥粉にて製せし餅の如き食品、煮て食ふ。

【麩炭】フタン　炭の水に入りて浮ぶ者、けしずみの類。白居易詩「日其半燒一ㇾ火」‖浮炭（老學庵筆記）

【麪】ベン　メン　銑　麵は俗字

○むぎこ。麥の粉、うどんこ、めりけんこ。又其の粉にて製せし絲狀の食品、索ー（サク）麵（メン）、湯餅（タウベン）の類。○圖ー麭（パン）はパン。‖餅包。

【麩】ヘン　霰

○だんご（餌）○圖餅ーはパン。‖餅包。

六畫

【麴】キク　屋　古、本に作る

かうぢ。劉伶、酒德頌「枕ニ一ㇾ糟」‖麴（次畫）

【麩】キク　屋　又、麴に作る

○かうぢ、麥又米を蒸し、暖室内に置き、黴を生ぜしめたるもの、酒醬油等釀造の原料とす。‖酒母、糵（糵は國字）○さけ。○一塵は鶴子草といふ淡黄色の草花の名。天子の御衣は其の花の色に染め、一塵衣又一衣といふ。一說、一の細菌の淡黄色の義。一一に綉に作る。周禮、天官、內司服「天子乃爲ニ鞠衣一」

【麴衣】キクイ　麴塵衣に同じ。字解參看。‖鞠衣。

【麴院】キクヰン　酒を釀す場所。宋史、食貨志「在ニ京一ー酒戶」‖酒坊。

【麴君】キククン　酒の異名。陳卽道詩「眞味如ニ一ー一」麴生參看。

【麴蘗】キクゲツ　○かうぢ。酒をかもす酒母。書、說命「若作ニ酒醴一爾惟ー一」○轉じて、酒をいふ。韓愈、送ニ王秀才ニ序「衛何ー一之託而晉冥之逃邪」柳氏家訓「偏ニ好優游一就ニ嗜麴蘗一」（麴は麴に同じ）

【麴秀才】キクシウサイ　酒の異名。麴生を見よ。

【麴塵】キクヂン　かうぢのむろ。皮日休、酒塲詩「移來近ニ一一倒應臨ニ糟牀一」

【麴車】キクシヤ　酒をのせたるくるま。杜甫、飲中八仙歌「汝陽三斗始朝ㇾ天、道逢ニ一ー一口流ㇾ涎」

【麴生】キクセイ　酒の異名。明天傳信記「葉法善居ニ玄眞館一、常有ニ朝客十餘人一謁ㇾ之、滿坐思ㇾ酒、忽有ㇾ人叩ㇾ門云麴秀才、傲睨直入、法善密以ニ小劍一刺ㇾ之、隨ㇾ手褰ㇾ元、墜ニ于階下一、化爲ニ甁榼一、一坐驚遽、視ニ其處所一、乃盆ニ甁釀醞也、咸大笑飲ㇾ之、醉而撫ニ其甁一曰、一一風味不ㇾ可ㇾ忘也」

【麴塵】キクヂン　草花の名。嶺南錄異「鶴子草、蔓生也、其花一ー」一說、酒の麴に生ずる細菌、淡黄色にして輕く揚りて塵となるもの。又、其の色。鄧禹鍋、楊柳枝詞「龍池遙望一ー綠」（麴一に綉に作る）

【麴部尙書】キクブシヤウショ　唐の汝陽王、酒を好みて戲れに自ら稱す。雲仙雜記「汝陽王璡、取ニ蜜漬石ニ鮓三泛香醞一以薦ニ酒、作ニ金銀魚一浮ニ沈其中一、爲ニ酌ㇾ酒具一、自稱ニ麴王爵ーー」

九畫

【麵】 麪（前頁一段）の俗字。

十八畫

【麷】フク 麥部

いりむぎ（熬麥）又、その粉。

麻部

【麻】マ 麻部

○あさ、を（大麻）草の一、葉の長さ七八尺、花は雌雄株を異にす、雄を枲又牡一、雌を苴一又子一といふ、皮の纖維にて絲を製し布を織る、其の質を實といひ食用とす。禮、月令「食二黍一與犬」＝油麻脂麻。○あさぬの、あさいと、あさごろも。○みことのり、敕書、唐代綸命を書するに一にてすきたる黃白の紙を用ひし故（翰林は白一、中書は黃一を用ふ）○ごま（胡麻）一名、巨勝。○しびれ。しびれる。＝痺。○ふりつゞみ（大鼓）○あさを治む。○俗に面に痘痕あるをいふ。

【麻紵】 あさのくつ。古今注「一一起二自伊尹一以草爲レ之、周文王以レ麻爲レ之、名曰二一一一一至レ秦以レ絲爲レ之」

【麻衣】○白布の衣服。詩、曹風「蜉蝣掘閱、一一如レ雪」○白き麻の喪服。禮、雜記「卜二宅與二葬日一有司一一」

【麻油】 あさの實のあぶら。魏志、滿寵傳「折レ松爲レ炬、灌以二一一一一

【麼】麼（俗字）の俗字。

【麾】キ　支　戟に通ず

○さしづばた、あいづばた、旌旗の屬、さいはい（采配）○さしまねく、手にて招く、召す。左、隱十一「一而呼」＝揭。○さしづする、指揮する、下知げする「指一」書、牧誓「右秉白旄以一」○こころよし（快）

【麾銭】ケン　大將の旗と、まさかりと。南史、齊太祖紀「一一臨、因鑄冰洋、此則齊業之基、勒王之始也」

【麾下】カ　大將のはたもと、大將の部下。史、李廣傳「廣廉、得二賞賜一輒分二其一一一飲食與二士共一之」＝戲下。

【麾蓋】ガイ　儀仗中のさしづばたと繖がさと。晉書、衛瓘傳「大車官駿、一一鼓吹諸威儀、一如二舊典一」

【麾節】ガンセツ　兵士にさしづする。史記「一一引二兵去一」庾信文「白羽一一」

【麾節】セツ　さしづばた、旌旗をいふ。李華文「介胄之士、垂二十萬人、贈二我一一、以爲二進退一」

七畫

【麼】〔國字〕

○まろ。麻呂の合字、われ、おのれ、自稱の代名詞。○人名に添へる詞「人一」「濟一」

黃部

【黃】クワウ　陽

○き、きいろ、五色の一、支那にて中央の色。又、土の色とす。○きばむ、一色になる。○きいろのもの。○こがね（黃金）○わうだん。○老人の白髮がきいろくなる「一髮」「一耆」○馬が病める色。○きいろのすぐれたる馬。詩、魯頌「有騂有一」○だいわう（大黃）いわう（硫黃）しわう（蘗黃）などの藥品の略稱。○軒轅氏の稱。又、之を祖とせる敎法「一老」○一道は日月五星の行く所の道。○一口は小兒。又、いとけなし（幼）唐代に三歲以下を一といふ。○倉一はあわてる貌。

【黃埃】アイ　黃色のほこり。鮑照、蕪城賦「直視千里外、惟見起二一一一」＝黃塵。

【黃鷺】ロ　うぐひす。唐無名氏、伊州歌「打二起一一兒、莫レ敎二枝上啼一」＝黃鳥・黃鸝。

【黃鵠】コク　をしどりの異名。本草「鴛鴦、一名一一」

【黃衣黃食】イ　黃衣は宦官の衣服、廩食は扶持米。

【黃紙】シ　○黃色の雲。洛書「黃帝起、一一扶レ日」○黃熱したる參などの形容。高啓、打參詩「行割一一一隨レ手斷」

【黃鉞】エツ　黃金にてかざれるまさかり、天子の征伐に用ふるもの。書、牧誓「王左杖二一一一、右秉二白旄一、以麾」

【黃葉】エフ　秋になりてきいろになる木の葉。易林「桑芳將レ落、隕二其一一一」

【黃屋左纛】ヲクタウ　天子の御車、黃屋は車上に青蓋を立て黃綢を以て蓋裏とす。左纛は乘輿の車衡の左方の上に立つる毛羽幢。漢書、高帝紀「車駕二一一一」

【黃白對レ白】ハクタイ　巧に四六騈儷の文を作る義。柳宗元、乞巧文「一一、時時舉史」（時時は鳥の聲）

【黃海】カイ　鴨綠江口の以西、揚子江口の以北に在り、卒天直隸・山東及江蘇北部の海岸は皆其の區域、渤海の濁流及遼・沽諸水の泥沙を受けて水黃色を帶ぶ、故に名つく。

【黃鵠磯】コクキ　今の湖北省武昌縣の西南隅に在り、一名は黃鶴山、四北二支那里に黃鶴磯あり、樓其の上に在り。述異記「荊楚之江夏一一上、望二西南一有レ物飄然降レ自二雲漢一、乃駕鶴之資也、賓主歡對、辭去、跨レ鶴騰レ空眇然烟滅」崔顥の黃鶴樓詩「昔人已乘二白雲一去、此地空餘一一、黃鶴一去不二復返一、白雲千載空悠悠、晴川歷歷漢陽樹、芳草萋萋鸚鵡洲、日暮鄉關何處是、烟波江上使二人愁一」

【黃柑】カン　かうじみかん。張衡、七辯「荔枝一一、蹇梨乾棟」

【黃顱兒】ロジ　乳をのむこども、人を見さげていふ語。北史、崔棱傳「一一何足レ拜也」＝乳臭兒。

【黃綠】リヨク　き色のあをひ。潘嶽久詩「一樹一一金盞側」

【黃綬組林】ジユソ　秋に至りて草木の葉が黃色のしぼり色になる林。白居易詩「一一寒有レ葉、綠筠隔水猶無レ風」

【黃河如帶泰山若レ厲】タイザンジヤクレイカハヲオビノゴトシ　黃河が帶の如く細くなり、泰山が砥石の如く小さくなる。絕無の事に喩ふ。厲は礪と同、砥石。史、高祖功臣表「封誓之辭曰、使二黃河如レ帶泰山若レ厲、國以永寧、爰及二苗裔一」

【黃閣】カク　宰相の官署。漢百僚表「丞相聽レ事閤曰一一、無二雌鈴一」＝黃扉。

【黄綺】クワウキ　商山の四皓中の夏黄・綺里季二人。陶潜詩「一一之二商山一伊人亦云遠」

【黄牛瀬】クワウギウライ　地名。水経注「黄牛山下有レ瀬、名曰二一一一一南岸重嶺疊起、最高、崖間有レ石、如二人負レ刀挙一レ牛、人望レ牛黄、民就分明、此蹊既レ高、江湍紆迴、雖二遥信一猶望二見此物一、故行者諺曰、朝見二黄牛一、暮見二黄牛一、言二水紆廻望レ之如レ一矣」

【黄菊】クワウキク　きぎく。姚合詩「吟レ詩紅葉寺、対レ酒一一籬」

【黄橘】クワウキツ　き色のたちばな。橘録「一一状、比二之柑一差偏小、而香気多二于柑一」

【黄巾賊】クワウキンゾク　後漢の霊帝の末年、鉅鹿の張角、妖術を数授して人心を誑誘し、衆を聚むること数十萬、一時倶に起る、皆黄巾を著け、所在擾動す、旬月の間、天下騒擾す。

【黄宮】クワウキウ　道家にて脳頂をいふ。蘇軾詩、注「道家以二鼻下一為二丹田一、脳頂為二一一一」

【黄玉石】クワウギヨクセキ　透明又は黄色の宝石、光沢強くして、質は水晶よりも堅し。

【黄花】クワウクワ　○菊の異名。花一に華に作る。礪、月令「季秋之月、鞠有二黄華一」○菜花の異名。司空表聖詩「一一入二参軍一」

【黄猄】クワウクワツ　黄色人種即ち亜細亜人が白色人種即ち欧洲人を侵害する綽名。英語Yellow-peril の譯。

【黄黄】クワウクワウ　き色の貌。詩、小雅「彼都人士、狐裘一一」

【黄巻】クワウクワン　書籍をいふ。書言故事「書籍名二一一一有レ所レ自、古人為レ書、皆用二黄紙一用二黄蘗一染レ之、以辟レ蠹、故曰二一一一」唐書、狄仁傑伝「一一中方興二聖教一對」

【黄冠】クワウクワン　野人即ち平民、又、道士のかんむり。礪、郊特牲「野夫一一」

【黄絹幼婦外孫虀臼】クワウケンエウフグワイソンセイキウ　黄絹は色絲、色と糸とを合せば絶となる、幼婦は少女、少と女とを合せば妙となる、外孫は女の子なり、女と子とは好、虀臼は辛を受く、受と辛とは辞となる、絶妙好辞は文詞の極めて善きを賛する語、此八字は曹娥の碑に刻せしものにて、楊修が魏の武帝に従ひて碑下を過ぎ、帝と問答せし故事。世説「魏武嘗過二曹娥碑下一、楊修従、碑背上題作二一一八字一、魏武問二修解否一、答曰解、魏武曰、卿未レ可レ言、待二我思一之、行三十里、魏武曰、吾已得、令二修別記一所レ知、修曰、黄絹色絲也、于レ字為レ絶、幼婦少女也、于レ字為レ妙、外孫女子也、于レ字為レ好、虀臼受辛也、于レ字為レ辞、所レ謂絶妙好辞也、魏武之記與レ修同、歎曰、我才不レ及レ卿、乃覚二三十里一」

【黄姑】クワウコ　星の名。荊楚歳時記「一一、牽牛星、一曰二河鼓一」

【黄口】クワウコウ　○鳥の雛。説苑、孔子見二羅雀者一、其所レ得者皆一一也」○轉じて、幼児をいふ。淮南子「古之使レ民、不レ斬二一一一、不レ殺二一毛一」

【黄耆】クワウキ　老人。黄は白髪の黄を帯るをいひ、耆は老人の面のしみ、凍梨色にして垢の浮べる如きをいふ。詩、豳頌「稼二我烝畀一、一一無レ罹」

【黄潦】クワウラウ　き色の水潦。淮南子「黄埃五百歳、生二一一一」

【黄公酒壚】クワウコウシユロ　黄公が酒を飲みたる所。壚は酒肆、即ち酒妻を置く所。世説、儁遊「王濬沖経二一一一下、過顧謂二後車客一、吾昔與二嵇叔夜一、阮嗣宗一酣二飲于此一、自二爾已来一、二十後、視レ此鄙レ近、遺若二山河一」

【黄公望】クワウコウバウ　元の常熟の人、字は子久、一峯又、大癡道人と號す、畫山水を善くす、董源・巨然を師として一家を成す、王蒙・倪瓚・呉鎮と元末四大家と稱す。‖黄子久。

【黄鵠】クワウコク　黄色を帯びたるはくちょう。屈平、卜居「寧與二一一一一

【黄綬】クワウジュ き色の印のひも。委・尉などの官の称。漢書、百官志「比二百石以上、皆銅印ー一」後漢書、明帝紀「中二千石、下至ニー一」

【黄綬養章】クワウジュヨウシャウ 国私財を献納して国家の事業を賛助せし者に賜はる褒章。

【黄熟】クワウジュク き色に実のる。韓維詩「黍苗ー一稲苗青」

【黄黍】クワウショ もちきび。古今注「禾之黏者為レ黍、亦謂二之稌一、亦曰ニー一」

【黄鐘】クワウシャウ 音律の名、十二律の一、六律六呂の基本となる音。陰暦十一月に配す。よりて十一月の異称とす。わうじき。礒、月令「仲冬之月律中ニー一」⇒黄鍾。

【黄塵】クワウヂン 君子が排斥せらるるに喩ふ。屈原、卜居「ー一、瓦釜雷鳴」（瓦釜雷鳴は小人の跋扈するに喩ふ）

【黄色人種】クワウショクジンシュ 皮膚の黄色なる人種、亜細亜の諸国はこの人種に属す。

【黄石公】コウセキコウ 張良に兵書を授けたりといふ老人。史、留侯世家「張良游二下邳圮上一、有二一老父一、出二一編書一曰、読レ此則為二王者師一、後十三年見二我済北穀城山下一、黄石即我矣」

【黄雪】クワウセツ 桂花の形容。張船山、桂華詩「秋光黯ニー一」

【黄泉】クワウセン ○地下のいづみ。孟、滕文公「蚓上食二槁壌一、下飲ニー一」○死者のゆく所、よみぢ、冥土。左、隠元「誓レ之曰、不レ及ニー一、無二相見一也」

【黄顙】クワウサウ 黄色でやはらか。顙一音ナン白居易詩「柳絲ー一欲二春風一」

【黄堂】クワウダウ 太守の居る所。又、太守（知事）の異称。湘素雑記「天子曰二黄閤一、三公曰二黄閣一、給事舎人曰二黄扉一、太守曰ニー一」

【黄道】クワウダウ 日の運行する軌道。漢書、天文志「日有二中道一、月有二九行一、中道者ー一、一曰二光道一」

【黄道吉日】クワウダウキチジツ よきひがら。陰陽道にて事を行ふによき日とす。

【黄道帯】クワウダウタイ 天文学にて、黄道をかこむ天球上の帯、十二等分して十二宮に配す。

【黄橙】クワウダイ きいろに熟したる九年母

【黄団】クワウダン 白居易詩「紅綸ー一香稲飯」

【黄門】クワウモン 王宮の門、き色にぬるが故。又、王宮のうち。後漢書、百官志、注「禁門曰ニー一、以二中人一主レ之、故曰二黄門一令」⇒禁闥。

【黄塵】クワウヂン ○き色の土けむり。楊炯詩「寸心明二白日一、千里暗ニー一」⇒黄埃。○世間の俗事。

【黄中内潤】クワウチュウナイジュン 才徳を深く蔵して外貌に顕はれざる義。易、文言「君子黄中通レ理、正レ位居レ体」魏書、高允傳「高子ー一、文明外昭、必為ニー一代傑器一、但恐二吾不レ見耳一」

【黄庭堅】クワウテイケン 字は魯直、山谷と号す、宋の分寧の人、治平四年の進士、蘇軾、其の詩文を見て、其の高物の表に面立するを歎称す、詩は専ら杜甫を学び、宋代の大家たり、蘇軾と並称して蘇黄といふ。又、行草書を善くす。⇒黄山谷。

【黄鳥】クワウテウ てうせんうぐひす。詩、周南「ー一于飛」⇒黄鶯。

【黄紹】クワウセウ きいろのてん。漢書、元后傳「莽更二漢家黒貂一、著ニー一」

【黄銀鑞】クワウギンラフ 鐵と硫黄と化合せし黄金色の鑞物。

【黄蜡】クワウラフ きいろのてふ。司空圖詩「鏡レ鑑野菜飛ニー一」

【黄土】クワウド ○黄色のつち、地。○赤土にて製する帯黄赤色の粉、絵具とす。

【黄狗】クワウコウ 黄鑑（二三四頁一段）に同じ。

【黄銅鑞】クワウドウラフ 黄金色をなせる銅鑞、錫鑞中の主要なるもの。

【黄頭郎】クワウトウラウ き色の帽を被りて船を行る者、船頭。史、倭幸傳「郎通以レ楫レ船、為ニー一」

【黄鵠】クワウコク きいろのこうし。杜甫詩「憶年十五心尚孩、健如ニー一走復来」

【黄梅】クワウバイ ○梅の実の黄熟せしもの。備光義詩「五月ー一時、陰気蔽二遠邇一」○蠟梅バイの一名（梅譜）○園灌木の一、樹は有節叢状、早春に緑黄色合瓣の花開く。⇒迎春花。

【黄梅雨】クワウバイウ つゆ、さみだれ。風土記「夏至之日雨、名ニー一」⇒梅雨。

【黄茅】クワウバウ きいろのちがや。本草「ー一似二管茅一而堅上開レ穂、可レ為二衆御一」

【黄袍】クワウハウ 黄色の上衣、隋以後天子の御服とす。宋史、石守信傳「人執不レ欲二富貴一、一旦有レ以ニー一加二汝之身一、雖レ欲レ不レ為、其可レ得乎」

【黄榜】クワウバウ 勅命を書きしふだ、古、即ち黄紙に記するが故。元史、世祖紀「賞ニー一安二諭中外軍民一」

【黄白】クワウハク ○き色と、しろ色と。共に正色とす。中説「君子非ニー一不レ御、婦人則有二青碧一」○こがねと、しろがねと、かね。史、平準書「漢興之幣、金為三品一、或黄、或白、或赤、或鋳、或刀、或龜或貝」○道士が丹薬を煉りて黄金白銀を化成する術、神仙傳「淮南王作二中篇一、言二神仙一ー一之事一」

【黄髪】クワウハツ ○老人の白髪が更に黄を帯ぶるをいふ。詩、魯頌「ー一台背」○轉じて、老人をいふ。曲禮「君子式ニー一」

【黄髪垂髫】クワウハツスイテウ 髪の毛の黄にして更にしろき貌。史、秦紀「謀ー一、則無レ所レ遇」垂髫は髫髪。

【黄吻】クワウフン 鳥の雛のくちばたの黄なるより、経験なき少年をいふ。世説

「――少年、勿レ爲レ評二論宿士一」‖黄口。

【黄米】クワウベイ　もちごめ。唐書、五行志「都人以二――及黒豆屑一蒸食之」

【黄牒】クワウテフ　詔書をいふ。――紙に書くが故（内事には白麻を用ふ）唐會要「開元三年十月、始用二――紙一寫レ詔」

【黄霧四塞】クワウムシソク　き色のきりが四方をふさぐ。天下の亂るる兆とす。漢書、成帝紀、建始元年夏四月、――」

【黄目】クワウモク　周代の緑の名。目の形を畫き、黄金にて飾るが故。禮、明堂位「鬱鬯用二――一」

【黄門】クワウモン　○宮城の御門、禁門は黄闥、故に名づく。漢書、元帝紀「龍二――一乘二輿御馬一」○禁門内、侍從の臣の出仕する役所。後漢書、百官志「――侍郎六百石」○宦官の異稱。後漢の世、宦官をして禁門を監せしめし故。○婦を娶るも終身子なきもの。輟耕錄「世有下男子雖レ娶レ婦、而終身無二嗣育一者上、謂二之天閹一、世俗則謂二之――一」○圖中納言の異稱「水戸――」

【黄冶】クワウヤ　道家の術にて、丹砂を化して黄金とすること。漢書、郊祀志「――變化」注「黄者鑄二黄金一也、道家言、冶二丹砂一、令二變化一、可二鑄作一黄金一也」

【黄楊】クワウヤウ　つげ、常緑樹、材堅くして黄色を帶ぶ。印材とし、又櫛などをつくるに用ふ。

【黄塵】クワウヂン　一説のたか。廣志「一歲曰二――一」三歲曰二骨鷹一」

【黄潦】クワウラウ　にごりたるたまりみづ。晉書、束晳傳「朝開而――殊」

【黄老學】クワウラウガク　黄帝及び老子の學。史、申不害傳、學本二黄老一」

【黄落】クワウラク　草木の葉がきばみおつ。禮、月令「草木――、乃伐レ薪爲レ炭」

【黄綬】クワウジュ　うぐひす。李白詩「春陽如二昨日一、碧樹語二――一」‖黄鳥・黄鸝。

【黄粱】クワウリャウ　おほあは。隋書、禮儀志「――以レ黍、白粱以レ蓋」

【黄粱一炊夢】クワウリャウイッスイノユメ　唐の開元十九年、道者呂翁、邯鄲の郵舍中に於て、少年盧生に値ふ、盧生身の困窮を訴せしに、道士嚢中の枕を出し之を授けて曰ふ、此を枕とせば、榮適意の如くなるべしと、時に舍主は黄粱を炊ぐ、盧生寐中に貴紳の女を娶り、高位に上り、榮盛比なし、老いて骸骨を乞ふ、許されず、官に死すと夢む、欠伸して寤むれば、飯未だ熟せず、呂翁笑ひて曰く、人生の事亦猶是の如きのみと、この故事により、人生榮華のはかなきことにいふ「枕中記」

【黄龍】クワウリョウ　き色のりょう。河圖「――負レ圖授二黄帝一」

【黄櫨】クワウロ　きはだ。子虚賦、注「――今用レ染者、黄屑之木也」

【黄墟】クワウキョ　地の底、よみぢ。淮南、兵略「放二乎九天之上一、墜二乎――之下一」‖九泉。

【黄櫨】クワウロ　はぜ、はに、漆樹に似て緑地に生ず、秋に至り紅葉す、其の實、大豆に似て蠟を製す。漢書、司馬相如傳、注「櫨即――木也」

【黄櫨染】クワウロゼン　圓天皇の御袍の染色、はじ・蘇芳・米・酢・灰などにて染め、桐竹・鳳凰の紋章をつける。

【黄楊】クワウヤウ　やはらぎ、もめんづる、藥草の一、葉は羽狀複葉、夏月、あづきの花に似たる花開き、實を結ぶ、根を藥用とす。

【黄金】クワウキン　こがね。管子「上有二丹砂一者、下有二――一」

【黄金時代】クワウキンジダイ　この上なき立派なる理想の時代、英語 Golden age の譯。

【黄疸】クワウダン　身體が黄色になる病の名。内經「目黄溺黄赤、安臥者――」

【黄蘗】クワウバク　きはだ、落葉喬木、樹幹三四丈、葉は羽狀複葉、夏月綱黄花開く、幹の内皮は色黄、實と共に藥用又染料とす、檗一に蘗に作る。

【黄檗宗】クワウバクシュウ　禪宗の一派、唐の僧希運禪師（臨濟宗の祖、臨玄の師）を祖とす　希運は黄檗山（福建省福州府）に住せしが故。我國にては、後光明天皇の時、明の僧隱元が來りて、山城宇治に一宇（黄檗山萬福寺）を建てて此宗を弘めしに始まる。檗一に蘗に作る。

【黄表紙版】クワウビョウシバン　圖黄檗宗の鐵眼禪師が延寶の頃、翻刻せし六千九百五十六卷の大藏經版をいふ。‖嚆矢版

【黄連】クワウレン　藥草の一、葉は三個複葉春期莖頭に白花を著け、莢を結ぶ。物類相感志「敗レ筆束披用二――煎湯一洗二輕粉一、蘸レ筆、候レ乾收レ之」

五畫

【黈】トウ　有

○みみだま、みみふさぎ、黄色の纊にて作りし球を冕に懸けて兩耳の旁に垂れ、安りに聞くことを戒むるもの。○きいろ（黄色）○一金は增金の義

【黈纊】トウコウ　黄綿にて作りしみみふさぎ。漢書、東方朔傳「――充レ耳、所二以塞一レ聽」

【馬融賦】

十三畫

【黌】クワウ　庚

ものまなびどころ（學舍）

【黌宇】クワウウ　學問を教うる處。後漢書、儒林傳、贊帝感二董醇之言一、更修二――一「凡所二造構一二百四十間、千八百五十室、自レ是游學增盛、至二三萬餘

生」‖學舍。
【黌校】クワウカウ 前條に同じ。晉書、戴邈傳「古之建國者、明堂辟雍之制、鄉有二庠序一一之儀」
【黌室】クワウシツ 黌宇に同じ。唐彦謙詩「一一青衿盛、梁門火旅揚」‖校室。
【黌堂】クワウダウ 前條に同じ。余靖、文廟記「建閣二一一、以登二師儒一、肅列二校室一、以來二俊秀一」

黍部

【黍】シ・ 圖

○きび、もちきび、五穀の一、禾の黏するもの、蔕に似て高さ丈餘に至り、秋、穗を生じ、實を結ぶ、實は赤黄黒の數種あり（一はもちきび、稷はうるちきび）○古、一の粒を單位として、物の輕重を量りしより、最少の重さの稱とす、百一を一銖とす。○角一はちまき（茅卷）黏米を裹みて之を作る、楚の俗、五月五日に汨羅の水に投じて屈原を祭る。‖粽。
【黍禾】シクワ きび。白虎通、「派風至、一一乾」‖禾黍。
【黍粢】シシ きび。椎南子、「食二勞農一飯二一一」‖黍。
【黍稷】シショク もちきびと、うるちきびと。書、君陳「一一非レ馨、明德惟馨」
【黍稻】シタウ もちきびと、いねと。韋莊詩「早霽濕二於雨一田深一一低」
【黍酷】シカク もちきびにて作りし酒。陸游詩「一一新壓野雞肥」
【黍苗若レ仰二陰雨一】シビョウジャクギョウインウ 恩に浴せんと望むことの切なる喩。晉語「子餘使二公子賦一黍苗一曰、重耳之卬レ君也、若二黍苗之卬二陰雨一也」もと詩、小雅「芃芃黍苗、陰雨膏レ之」より出づ。卬は仰。
【黍離】シリ 故の異名（中華古今注）
【黍離之歎】シリノタン 國滅びて宗廟宮室の墟の空しくきび畑となりしなげき。詩、王風、黍離「彼黍離離、彼稷之苗」（離離は穗の垂れる貌）
【黍粒】シリフ 量の極めて少なきをいふ。十粟を累として、十累を銖とす。洗冤、律歷志「權二輕重一者、不レ失二一一」（少しの間違ひもなし）

黎 三 畫 支

【黎】レイ リ

○くろし（黒）昔、堯典「一一民」傳「一黒也、一民黒髪之人」‖黧。○ころほひ、ころ「一明」‖遲。○おほし、もろもろ（衆）詩經「黎一百姓」○藜に同じ「黎一一」○環に同じ。梁四公記「實碧頗一鏡」
【黎祁】レイキ 豆腐の異名。陸游詩「洗鋪煮二一一一」自注「一一蜀人以名二豆腐一」
【黎元】レイグワン もろもろのたみ、元は善、人は皆善なるものの義（一說に黎は黒、元は首なり、黔首に同じ）漢書、郊祀志「俾レ舉二其禮一、助者懽悅、大路所レ歷、一一不レ知」
【黎獻】レイケン 黎民中の賢者。書、益稷「至于海隅蒼生、萬邦一一、共惟帝臣」
【黎黒】レイコク うすぐろし。荀子「顏色一一、而不レ失二其所一」
【黎首】レイシュ 黎民に同じ。周興嗣、千字文「愛育一一」
【黎庶】レイショ もろもろのたみ。韓詩外傳「一一歡樂、衍溢方外」‖庶黎。
【黎蒸】レイジョウ 黎庶に同じ。曹植文「漢餘靡手一一」‖黎元。
【黎民】レイミン もろもろのたみ（衆民）黎は衆。一說、黎は黒、庶民は冠を著けずして黒髪をあらはすが故。魯、堯典「一一於變時雍」‖黎首。
【黎明】レイメイ あけがた。黎は比明くる頃。一說に黎は天の色の黒き義。史、高祖紀「一一圍二宛城一三市」
【黎老】レイラウ 老人をいふ。國語「今王播二棄一一」注「黎、凍梨也、言徹古、黎梨遏ず、老人の面色凍梨の如きなり。

黏 五 畫 四 粘は俗字

【黏】デン ネン

○つく（相著）ねばりつく。戰國策「膠漆至一也」○ねばらす。○ねばる。○ねばり、ねばり氣のあるもの、粥の糊の膠など。
【黏液質】ネンエキシツ 心理學の名詞、古、希臘人、冷性の人を稱していふ、其の人黏膜液に富むが故にいふ、この質の人は容易に物に感動せずといふ。
【黏著】ネンチャク ねばりつく。周禮、注「謂二泥不レ一一轉一也」釋名「念、黏也、意相親、愛心一一、不レ能レ忘也」
【黏土】ネンド ねばつち、地質學の語、韓愈詩「土脈膏且黏」
【黏板岩】ネンバンガン 地質學にて黏土が凝結して成れる岩石中炭質を含むもの、故に多くは灰色又は黒色を爲す、石版・硯・碁子などを製するに適す。
【黏膜】ネンマク 生理學にて內腔の表面を掩蔽する薄き膜、色紅にして滑潤なり。肺膜・胸膜など。
【黏力】ネンリョク 物理學にて兩種の物體、其の表面の小部分が互に相吸引する力をいふ。‖黏著力。

十畫

【鶐】チ　支

もち、とりもち、主として鳥を捕るに用ふるねばりけある物、冬青ソヨゴの樹皮をつきて製す。

【鶐粘】チネン　鳥を捕ふるに用ふるもち。陸游詩「劒南作ル答餞再疾、正如ニ病翼還ニ一ニ」

【鶐木】チボク　細葉冬青ソヨゴの異名、其の樹皮にてとりもちを製するが故。

黑部

【黑】コク　總　黒は俗字

○くろ、五色の一、火の熏する所の色、北方の陰色とす、玄色「漆ー」「純ー」○くろし、色黒し。○くらし（晦冥）日光がくらくなる「天ー」「夜ー」「暗ー」「昏ー」○くろくす。○くろむ、くろずむ。○くろきもの。○白に對して惡しきものの意とす「ー白」○羊家。

【黑衣】コクイ　○くろき色のころも。疇、月令、孟冬之月、天子衣ニ一ー一、服ニ玄玉ニ一。○王宮の衛士の稱、一ー一を著るが故。史、趙世家「願得ル胡ニ一之數ニ以衛ニ王宮ト一。○すみぞめの衣、僧服。＝緇衣。

【黑衣宰相】コクイサイシヤウ　僧侶の身にて天下の政權に參與する者。宋の惠琳道人のあだ名「通鑑、宋、文帝紀」

【黑雲】コクウン　黒き雲。漢書、天文志「日出時、有ニ一ー一、狀如ニ飛鳳一ニ」蘇軾、望湖樓醉書「ー一翻レ墨未レ遮レ山、白雨跳レ珠亂入レ船」

【黑琉璃】コクルリ　玻璃性の火山岩、未開時代に矢の根に使用せしもの。

【黑鉛】コクエン　灰黒色の光澤ある軟かき鑛物、鉛筆の心とす。＝石墨。

【黑鵂】コクキウ　くろきはね。九道飛行羽經「白鬱之車、ー一之鳳」

【黑牛生ニ白犢一】コクギウハクトクヲ　言必ずしも言ならず、因必ずしも因ならずとの意、漢翁馬といふに同じ。列子「宋人有レ好レ行ニ仁義一者、三世不レ懈、家無レ紋ー一、以問ニ孔子一、孔子曰、此吉祥也、以應ニ上帝一、居一年、其父無レ故而盲、其牛又復生ニ白犢一、其父又復令ニ其子問ニ孔子一、其子曰、前問レ之而失レ明、又何問乎、父曰、聖人之言、先迕後合、其事未レ究、姑復問レ之、其子又復問ニ孔子一、孔子曰、吉祥也、復教以祭、其子歸致レ命、其父曰、行ニ孔子之言一也、居一年、其子又無レ故而盲、其後楚攻レ宋、圍ニ其城一、民易レ子而食レ之、析レ骸而炊レ之、丁壯者皆乘レ城而戰、死者太半、此人以ニ父子一有ニ與皆免一、及ニ圍解一而疾復」

【黑倉】コクサウ　林檎リンゴの異名。廣志「林檎似ニ赤柰子一、亦名ニ一ー一赤名ニ來禽一」

【黑粗】コクソ　くろきび。疇、月令、疏「ー一黍爲ニ一分一」

【黑月】コクゲツ　ひと月の下半分。大藏法數「白月初日在レ前、ー一朔日在レ後」

【黑子】コクシ　○ほくろ。史、高祖紀「左股有ニ七十二ー一ー」＝黒痣。○極めて小さきものの形容。庾信、哀江南賦「地慳ー一、城猶彈丸」

【黑子之地】コクシノチ　ほくろ程のせまき地。前條參看。漢書、賈誼傳「淮陽之北大諸侯、僅如ニ黑子之著ニ一面一、適足以餌ニ大國一耳」

【黑芝】コクシ　くろき色のれいし。抱朴子「ー一生ニ於山之陰、大谷中一」

【黑痣】コクシ　ほくろ。黒き土地に喩ふ。通鑑長編「彈丸ー一之地、將何所レ避」＝黒子。

【黑菽】コクシュク　くろきは。又、其の變族の名。唐書、藝文志傳「穀變種類、有ニ一ー一金齒銀齒三種一」

【黑魚】コクギョ　くろくしてみにくし。爲林「編螺生レ子、深目ー一」＝醜黒。

【黑漆】コクシツ　黒色のうるしぬり。後漢書、酷吏志「公孫瓊、棒格ー一」

【黑死病】コクシビヤウ　ペスト、傳染病の一種、腺部の黒變して死する病。＝腫。

【黑豹】コクヒヤウ　狩　黒きして、黒色のうすきぬの。

【黑氣】コクキ　瓜などのくろきわた。本草記「實如レ瓜、青皮ー一」

【黑黍】コクショ　くろきび。爾雅「秬、ー一」蘇軾詩「ー一黄粱初熟後、朱柑綠橘半酣時」

【黑黍酒】コクショシユ　くろきびにて造りたるさけ。詩經「秬黍一卣」箋「秬黍、ー一也」

【黑湯】コクタウ　鉛ケの異名「圖書日札」

【黑檀】コクタン　木の名、葉は細長橢圓狀、淡黄色の花開く、材黒くして堅緻、器物を作るに適す。＝烏文木・烏木。

【黑丑】コクチウ　牽牛花アサガホの種子、藥用とす。

【黑帝】コクテイ　五帝の一、北方の神の名、其の精を玄武と爲す。

【黑潮】コクテウ　くろしほ、海水の潮流の一、深藍色をなす、臺灣の南端より東北流して一は九州の西岸より日本海に至り、北海道西岸を北進し、一は九州四國本州の南岸より下總國犬吠岬に至り、北米の西岸に轉流す。

【黑痣之裘】コクシノキウ　黒きてんのかはごろも。戰國策「蘇秦說ニ燕王一書十上、面說不レ行、ー一敝、黄金百斤盡、貲用乏絕」

【黑甜】コクテン　ひるね（午睡）青箱雜記「北人以ニ晝寢ニ爲ニ一ー一」蘇軾詩「三杯軟飽後、一枕ー一鄉」

【黑奴】コクド　○くろんぼ、黒人をいやしめていふ。○生物に寄生して

害をなす菌類、稻奴・蓼奴など。
【黒頭公】コクトウコウ　壮年にして三公の位に登るをいふ。晉書、諸葛恢傳「候嗣冠知レ名（中略）王導曾謂曰、明府當レ爲二一一」
【黒白】コクハク　○くろきと、しろきと。史、倉頡傳「天出二五色一以知二一一一、地出二五穀一以知二善惡一」○ヒクク轉じて、是非・善惡・正邪に喩ふ。春秋繁露「一一分明、然後民知レ所二去就一」
【黒髪】コクハツ　くろきかみ。白髪の對。王建詩「應レ得二丹砂力一、春來一一新」
【黒風】コクフウ　あらきかぜ、暴風。李洗詩「一一白雨打頭吼」
【黒眸】コクボウ　くろきひとみ。北史、王崇傳「有二一小鳥一、素質一一、形大於雀一、栖二於崇廬一、朝夕不レ去」
【黒牡丹】コクボタン　牛の異名。事類全書「唐末劉訓者、京師富人（中略）京師恭遊、以レ觀二牡丹一爲二勝賞一、訓遊レ客賞レ花、乃繫二水牛數百一在レ前、指曰、此劉氏一一也」
【黒羊】コクヤウ　豚の異名。詩經、傳「一一、豚也」
【黒淳】コクジュン　くろ〳〵にごりたるたまりみづ。馬子才文「一一滿レ道、馬如二遊龍一」

【黝】イ　アイ　未　佳　畫

黒だくろし（深黒）
【黝黮】アイタン　深黒。韓愈、祭二王廣津一「圖像之威、一一就滅」

【黓】ヨク　イキ　職　畫

○くろし（黒）＝七。○玄一一は十干の壬の異名。爾雅、釋天「太歲在レ壬、曰二玄一一」

【黟】キ　未　畫

○黒き貌。○物の生ずる貌。左思、吳都賦「萬物蕃生、芸芸一一」
【黟黟】キキ　物の生ずる貌。左思、吳都賦「萬物蕃生、芸芸一一」

【黔】ケン　キン　鹽　琰

○くろし（黎）くろむ。韓愈、諍臣論「黽突不レ得レ一」○鈐に通ず。○地名、貴州省の異稱。古の一中の地なるが故。
【黔首】ケンシュ　人民、民は愚なるものなりとの意。韋瑾文「一一皆害二子始作一」黔首參看。
【黔細】ケンサイ　前條に同じ、細は細民。郭璞賦「臣主未レ審二於上一一一未レ般二於下一」
【黔中】ケンチュウ　地名、春秋の楚の地。今の湖南省沅陵縣の四。秦始皇の時、郡を置く、湖南の舊辰州・常德・永順・澧州の諸府州、及び貴州の舊黎平・思南の諸府は皆其の地。
【黔突】ケンツ　くろみたるけむりだし。淮南子「孔子無二一一、墨子無二煖席一」
【黔高】ケンカウ　造化の神の名。遊仙、遠遊「召二一一一而見レ之兮」＝黔首。
【黔黎】ケンレイ　もろもろのたみ（庶民）唐太宗詩「願蒙二四海一編二一一一」＝黔庶・黔首。
【黔廬之技】ケンロノギ　黔の地には驢馬なし、或人驢馬をたづさへ行きしに、虎大に之を恐る、其の後驢馬が虎を蹴りしかば、虎は其の異能なきを知りて、遂に卻りて虎に喰ひ殺されたる故事。人の拙劣なる技倆に喩ふ。柳宗元、三戒、黔之驢「黔無レ驢、有二好事者一載レ往、放二山下一、虎見レ之、龐然大物也、以二林間一窺レ之、驢一鳴、虎大駭以遠レ一已、然往來觀レ之、覺レ無二異能一、稍近、益狎、驢不レ勝レ怒、蹄之、虎因喜、計曰、技止レ此耳、跳踉大嗥、斷二其喉一、盡二其肉一乃去」

【黕】タン　チン　寒　震

○あか（淳垢）けがれ、しみ。○黒き貌。潘岳賦「擧幕一一以蓋布」
【黕點】タンテン　けがす。楚辭、九辯「或一一而汙レ之」

【默】ボク　モク　職　俗字　墨は俗字

○だまる、もだす、ものを言はぬ、語らず「沈一」中庸「其一足一以容」○しづか（靜・幽）書、說命「恭一思道」しづまる。
【默改】モクカイ　言論を用ひずしてあらためる。論衡、一一一政治、清二易操一、不レ彰二子外一」
【默考】モクカウ　だまってかんがへる。
【默薦】モクセン　心の中にて組立てたる詩文などの草案。蘇軾詩「袖手閲不レ盡、一一已在レ腹」＝腹藁。
【默求】モクキウ　口に言はずして考へもとめる。張耒浩詩「一一二詩句一爲二相答一、半醉揮出落二端虹一」
【默吟】モクギン　聲を發せずして詩歌を誦ひ。孟郊詩「孤省編帙倦、一一覓二精神一」
【默許】モクキョ　めこぼし。みのがしゆる

す。

【默契】ケイ　互に言はずして心が一致する。名賢集「眞四山越山新居成、名二其窩一曰二學易一、帖云、坐看吳越開山秀、一一義文千古心、朱晦翁見レ之曰、吾且當二避レ此三舍一」

【默語】モクゴ　だまると、かたると。易、繫辭「君子之道、或出或處、或默或語」

【默口】モクコウ　ものいはず。孔叢子「吾以レ是一一于小道一蹇二耳于諸子一久矣」

【默坐】モクザ　ものいはずしてすわる。劉得仁詩「一一看レ山久、閒行值レ寺過」

【默期】モクキ　だまりて言はざる貌。鄭谷詩「從來甘二一一一、自レ此倍怡然」‖默然。

【默識】モクシキ　言はずして心の中におぼえこむ。識は音シ記なり。音シキに讀むは誤。論、述而「默而識レ之、學而不レ厭、誨レ人不レ倦、何有二於我一哉」

【默默】モクモク　だまりて心の中にてかぞへる。蘇軾詩「此生定向二江湖一老、一一淮中十往來」

【默省】モクセイ　しづかにかんがへる。黃滔詩「支レ頤一一酒林泉」

【默存】モクソン　口をきかずして心の中にてかんがへ思ふ。列子「左右曰、王一一耳」

【默識】モクシキ　心の中にていのる。韓愈詩「潛心一一若レ有レ聽、豈非二正直能通一」

【默獸】モクジュウ　○口を閉ぢてものいはざる獸。又むなしく無き貌。莊、在宥「至道之極、昏昏一一」○富を得ざる貌。楚辭、九歌「杼一一兮、誰知二吾之路良一」‖默默・嘿嘿。

【默禱】モクトウ　無言にて敬禱する。

五畫　黒部

【黝】イウ　有

○あをぐろ、あをぐろし（青黒色）○うすぐろし（微青黒色）○一糸イツは特出せる貌。一說に林木の相連綿レンメンする貌。○人名。北宮一（孟、公孫丑）

【黝鬱】イウウツ　樹木の盛んに茂れる貌。李非、乾元國清寺碑「樓松一一、下有二泉源一」

【黝堊】イウアク　あをぐろくぬる。禮記「天子諸侯之樓一一」

【黝堊丹漆】イウアクタンシツ　あをぐろく塗ると、赤く塗ると。李覯、袁州學記「殿堂門廡、一一、皆以二法故一」

【黝黝】イウイウ　うすぐろき貌。樹の茂りて暗き貌。任昉詩「一一桑柘繁、芃芃麻麥盛」‖陰黒。

【黝珩】イウコウ　あをぐろきおびだま。詩經「三百赤芾」朱注「一命纁芾一一、再命赤芾一一」

【黝斜】イウシャ　特出せる貌。又、林木の相連り繞る貌。王延壽、魯靈光殿賦「亙一一而據負」

【黝牛】イウギュウ　あをぐろきうし。詩經、疏「社稷用二一一一」

【黝牲】イウセイ　祭に供する青黒色のいけにへ。周禮、凡陽記用二辭牲一、毛レ之、除記用二一一一毛レ之」

【黝黃】イウコウ　北宮黝と孟賁との二勇士。柳宗元歌「孟軻四十乃始持レ心兮、猶希二勇乎一一一」

【代】タイ　隊

○まゆがき、まゆずみ、眉をいろどる青黒色の墨「粉一一」「翠一一」「青一一」「眉一一」說文「一、畫眉墨也」○まゆずみにて畫きし眉、ひきまゆ。楚辭、大招「粉白一一黒」○青黒色。○轉じて青青したる山の形容。

補註 黛は代なり、眉毛を去り、黒色の墨を畫きて之れに代ふるなり。故に代黒に从ふ。

【黛綠】タイリョク　女子の黒くつやある結髪。貫師泰、宮詞「一一不レ整紅梁釋、禍院楊花夢覺時」

【黛黒】タイコク　まゆずみ。列子「粉白一一」

【黛樹】タイジュ　遠に青くみゆる木。謝莊賦「鏡屏分若レ虹、一一分如レ畫」

【黛青】タイセイ　眉墨の如く遠くあをし。岑參詩「一一天際峯」

【黛眉】タイビ　まゆずみにて畫きしまゆ。

【黛色】タイショク　○しりぞく（退）○おとす（貶下）官位を降しさげる。陟の對「貶一」「一陟」○しりぞけらる。論、微子「柳下惠爲二士師三一」○さる、すつ（去）捨ステけ去る。莊、徐無鬼「君將一一嗜慾」○おひはらふ（放逐）はなちたつ（放絕）○へらす、のぞく（減）○廢す、やめる。晉語「公將一一太子申生」

同訓異義 黜・退・屏・斥・卻・揆・說の別は退（一九四六頁一段）の條を見よ。

【黜飾】チュッショク　浮華なる虛飾をしりぞけ去る。晉唐書、禮儀志「倘レ古一レ今」

【黜落】チュツラク　しりぞけとばけける。左傳「皆以上下有レ禮、而能黜一一」

【黜陟】チュツチ　しりぞけ陟てる。宋史、牛冕傳「眞宗語二宰相一曰、牛冕素純

等、——大夫、量宜三點級一」

【點遣】テンケン　しりぞけてはなちやる。後漢書、畠甫規傳「規對策曰、其常侍尤無ン狀者、亟便——」（無狀に常狀なし）＝黜放。

【點升】テンショウ　無能者をしりぞけると、人才を進め用ふると。歐陽修文「相所ニ——（惟否惟能）」＝黜陟。

【點斥】テンセキ　しりぞける。論衡「涉世落魄、仕數——」＝斥黜。

【點實】テンセツ　しりぞけせむ。後漢書、王丹傳「其輕點遊蕩廢ン業爲ン患者、輒喚ニ其父兄一使ン——ニ之」

【點陟】テンチョク　功無き者をしりぞけると、功ある者を進め用ふると。晉、韓琬傳「諺附者、無ニ——之患一、正直者有ニ後時之歎一」

【點刑】テンケイ　無能の官吏をしりぞけ罰する。

【點否】テンピ　無能者をしりぞける。晉書、紀瞻傳「漸尚ニ簡樸一、則貴夫不ン黜、賤ン貴ン——一、賢不仁者進」

【點免】テンメン　官をやめしりぞける。唐書、畢構傳「罷拜旌賞以勸ン善、點伐——以懲ン惡」＝免黜。

【點】テン　俗に啄して点に作る

○ほし、ほち、ちょぼ。○しるし、くぎり。○文字構成上、筆を一所に落す「一畫」○てんをうつ、ほちをつける。○箇所、部分「要ー」「歸著ー」○けし。けす、筆にて字を滅消する。なほし、字句の訂正。○轉じて物を改め作る。列仙傳「一石成ン金」○しづく、したたり（滴）○ひら（落片）○そそぐ（注）さす、入れる「一茶」○あらはす（著）○ふかく（墨）○しらべる（檢）○評價する「評ー」○けがす（汚）けがれ（汚垢）しみ。○きず（過疵）○うなづく（諾）「一頭」○ともす（燈）「一燈」○みづどけい。又、時計の時を數ふるに用ふ「午下三ー」○物のてんをうちたるが如き狀をなすにいふ。○數學にて位置のみありて大小長短厚薄のなきもの。

【點額】テンガク　試驗に落第するをいふ。登ること能はざる者は其のひたひをうち傷つけて還るが故。水經、注「龍經出ニ黎大一三月上旬一龍門一得ン波爲ン龍、否則一一而還」李白詩「一一不ン成ン龍」

【點勘】テンカン　しるしをつけてしらべる。韓愈詩「丹鉛事ニ——一」＝校勘。

【點鬼簿】テンキブ　死者の名を錄する册子、過去帳。詩文中に多く古人の名を入れる病をいふ。胡野食貨「楊炯爲ン文、好以ニ古人姓名一連綴、如ニ張平子之談略、陸士衡之所ン記、潘安仁之所ン賦、宜其陋矣、仲長統何足ニ以知ニ之、號ニ——一」王泉子「王・楊・盧・駱、有ニ文名一人聞ニ其疵一日、楊好用ニ古人姓名一謂ニ之——一、駱好用ニ數目一作ン對、謂ニ之算博士一」王は王勃、盧は盧照鄰、駱は駱賓王。

【點火】テンカ　○火をもやしつける。○あかりをつける。＝點燈。

【點化】テンカ　○道家の語、從來の物を改めて新にする。岡老談苑「顧以ニ堯舜之道一一ニ天下一」○前人の作りし詩文を改めて別に新機軸を出す。周必大詩「紅紫丁寧容ニ老圃一丹青一一腦ニ詩仙一」

【點畫】テンカク　文字を構成するてんと線と。書苑「文字之一一稀少者、欲ニ其彼此相映帶一」

【點火】テンカ　灸治をする處に艾にて點をつける。善世傳先「一一法、晉葛ア平三正四體一無ン使ニ歪斜一」

【點燈】テンケン　けがれたるねちど、俗にいふ鉄點の點。白虎通、災變「行有ニ一一一氣溜ニ于天一、情感變出、以飛ニ人也」

【點檢】テンケン　○てんをうちて一一あらためしらべる。唐唐書、儀宗紀「一ニ一兵萬一千一匹ニ行營一」○官名、五代より宋初に至るまで殿前都一一あり、侍衛扈從の事を掌る、金代も亦この官あり「金史、百官志」

【點呼】テンコ　ひとりづつ名を呼びて人數をあらためしらべる。「指名一一」

【點茶】テンチャ　茶を入れる。「點燈新話、注「點心之點、與ニ一一之點一同ン義」

【點在】テンザイ　あちこちにぽつぽつとある。

【點竄】テンザン　○文章の字句を改め易ふる。册府元龜「梁任昉等屬ン文、起ン草即成、不ン加ニ一一」○和算の代數學。

【點字】テンジ　盲人の使用する文字、點の組合せによりて文字の記號とするもの。

【點差】テンサ　異き形容。世說「面如ニ凝脂一眼如ニ一一一」

【點心】テンシン　○あひだぐひをする。河東記「板橋三娘子、匿ニ新作燒餅于食牀上一、與ニ客一一」○又其の食物。集子の類。輟耕錄「今以ニ早飯前及午前後小食一爲ニ一一」

【點心師】テンシン 菓子屋。
【點者】テンジャ 國和歌・俳句などに點を加へて批評をする人。
【點數】テンスウ ○數字にてあらはしたる評價。‖得點數・評點數。○しなかず（品數）
【點睛】テンセイ 動物を描きて最後にひとみを入れる。主要なる點を加ふるに喩ふ。水衡記「張僧繇於三金陵安樂寺一畫二兩龍一不レ點レ睛、每云、點レ之即飛去、人以爲レ妄、因點二其一一、須臾雷電破レ壁、一龍上レ天、一龍不レ點レ睛者見在」
【點染】テンセン ○そめつける。宋史、食貨志「往往以レ藥一一、與二銅錢一相亂」○畫家が景物を點綴し、又色どるをいふ。成吳鎮、張僧繇、翠峰寒林圖詩「一縑一一空青點、六法精深秀色圓」○文章を潤色する。
【點辱】テンジョク 汚點をつけて物をけがす。又人を辱しむるにもいふ。東觀、自叙詩「鮮伴二良苗一英二之一一」‖汚辱。
【點定】テンテイ 文章を正す。冷齋夜話「東坡藏記、一一一字一一」
【點綴】テンテイ 程よくとりあはせて飾る。張九齡詩「藥作二參差一賢、枝從一一新」蘇軾詩「雲散月明誰一一」
【點滴】テンテキ したたり。あまだれ。陸游詩「遊レ西一一如二琴絃一」‖零滴。
【點ノ鹹皮ヲ金】テンノカンピヲキンニス 鹹を點化して黃金と爲す。前人の語を運用して名文となすに喩ふ。閒見後錄「黃魯直、稱二杜老詩一、如二靈丹一一粒、點ノ鐵成レ金」
【點點】テンテン ○しづくのしたたる貌。劉長卿詩「一一閒二殘淚一枝枝寄二此心一」○てんをうちし如くここかしこに散在する貌。庾信詩「可レ憐數行雁、一一遠空排」
【點燈】テントウ あかりをつける。蘇軾詩「爲レ鼠常開レ飯、憐レ蛾不レ一一」
【點頭】テントウ うなづく、首肯する。侯鯖錄「歐陽修知二貢擧一、每レ遇二考試一、坐後常設二一朱衣人一、時復一一、然後其文入レ格」
【點ノ白】テンノハク しろきものにほしをつけてけがす。鮑照詩「貪苗實碩鼠、一一信有レ蠅」‖點污。
【點佛睛】テンブツセイ 佛像佛畫の成りし時其の眼を入れる、開眼ともいふ。法苑珠林「爲二種本后一、遊二弘福寺一、寺成之後、帝親幸焉、自點二佛睛一、極盛二親施一」
【點名】テンメイ 衙署生・兵士等の點呼。

六畫

【黟】エイ 齊 支
○こくたん（黒木）○くろし。
【黟然】エンゼン 黒き貌。歐陽修、秋聲賦「一一黒者爲二星星一」
【黠】カツ 黠

○さとし、さかし（慧）「一兒」晉書「愷之體中癢一一爭牢」○さとき人。○わるがしこし、ずるし「狡一」「姦一」○わるがしこき者。
【黠虜】カツロ わるがしこし。唐書、陳子昂傳「吐蕃一一、抗二天誅一者二十餘年」‖狡虜。
【黠慧】カツケイ こさがし。北史、宦者傳論「閹二選一一者數十人、以爲二左右慧黠一出處給與、閹宦一相繼」
【黠兒】カツジ かしこき小兒。顏氏家訓「北齊武成帝子琅琊王儼、生而聰穎、帝稱レ之、爲二一一一」
【黠鼠】カツソ わるがしこきねずみ。蘇軾「一一賦」あり。范成大詩「一一緣二鈴索一」
【黠智】カツチ わるがしこきちゑ。王惲詩「除盡道二老蛾一、火鼠騁二一一一」

七畫

【黯】アン 覃 國 ニン 寒 國
面に黒き氣あるにいふ、うすぐろし。列、黃帝「肌色一一」

八畫

【黮】タン 感 國 ドン 寒 國
あをぐろし（青黒）
【黮闇】タンアン くらき貌。劉伶詩「一一夜陰」
【黜】ウツ 月 職
○くろぐろ（黃黒色）○色壞ける、色あす。韋莊詩「淚霑紅袖一」かびてしみが出る（黴斑）周處、風土記「梅雨沾レ衣、服皆敗一」
【黝】ケイ 廣 通音 ゲイ
いれずみ、面の墨刑。又、其の刑に處する。
【黝罪】ケイザイ 古のいれずみの刑。漢書、食貨志「鬬禁二傷錢一、死罪贖下、今公鋳レ錢、一一積下、爲レ法若レ此、上何報焉」注「下、報也、積累下報論レ之也」‖墨刑・墨罪・墨罰。
【黝首】ケイシュ いれずみしたるひたひ。後漢書、朱穆傳「臣願一一緊獄」注「一一謂二黥而涅レ墨也」
【黝垽】ケイ いれずみの罪にあてられたる奴隷。史、范雎傳「今雖一一夷而屬二食之一」
【黝布】ケイフ 漢の英布の別名。史、黥布傳「姓英氏、少年、有レ客相レ之曰、當二刑而王、及レ壯坐レ法、一一笑曰、人相レ我當二刑而王一、幾是乎（中略）項羽封爲二九江王一、漢四年、立爲二淮南王一」
【黝髹】ケイキュウ いれずみの罪。晉紀、一一

疑赦」‖寛評。
【黯面】ガンかほにいれずみする。いれ墨したるかほ。後漢書、東夷傳「依二山島一爲レ居、男子皆一一文身」

【黨】タ。 儻

○周制にて行政區劃上、五百家の稱。論、雍也「以與二爾鄰里鄕一乎」○轉じて己の生れたる邑里（鄕里）○とも（朋）ともがら（族）くみ（組）なかま「一類」意氣相同じき人のくみ「政」「朋一」論、里仁「各於二其一」○おもねる（阿）つく（附）「阿一」○たすく（助）互に相助けて非を匿す。論、述而「君子不レ」○かたよる（偏倚）不公平、偏頗。書、洪範「無レ偏無一」○したしむ（親）○しきりに（頻）かさねて（累）○しる（知）○さとる（悟）○よし（善）正がし。荀、非相「實博而一正」‖讀。うつくし（美）○たぐふ、たくらぶ（比）○ところ（所）左、哀五「何一之乎」○みより、親族、姻戚、親戚。禮、坊記「睦二於父母之一」○こひねがふ（冀）‖儻。○もし。古、儻に通ず。漢書、董仲舒傳「一可レ得」見乎。

【引レ黨】己のなかまをつくる。晉語「一レ一以封レ己」
【黨錮】○其の黨派の主張する議論。○妄りに朋黨を結びて反抗する者と見なされて罪を論ぜられる。後漢書、黨錮傳「若二范滂・張儉之徒一、清心息レ惡、終陷二一一一」
【黨禁】黨人を禁錮する義。後漢書、陳紀傳「一一解、四府竝命、無レ所二屈就一」
【黨錮】黨派より起るわざはひ、漢の黨錮、唐の清流、宋の黨禍、明の東林の類。劉克莊文「一一東都最慘、唐次レ之、本朝又次レ之」
【黨魁】ガンカイ徒黨のかしら。唐書、楊慎卿傳「故時號二一一一」
【黨見】ケン しきりにみゆ。荀、天論「怪星之一一、是無二世而不一レ有レ之」‖頻見也」
【黨錮之禍】黨人の禍ともいふ。後漢の末世、宦官政權を專にせしかば、桓帝の時、陳蕃・李膺等、氣節の士之を惡み、大いに之を攻撃せしかば宦官之を怨み、目して黨人といひ、終身を禁錮す、之を黨錮の禍といふ。靈帝の時、竇武・陳蕃等相謀りて宦官を誅せんとせしが謀漏れ、其の徒百餘人と共に皆殺さる。後漢書に黨錮傳あり。後漢書、靈帝紀「中常侍侯覽二有司一奏、前司空虞放・太僕杜密・長樂少府李膺等、皆爲二鉤黨一下レ獄死者百餘人、妻子徙レ邊、諸附從者錮及二五屬一」
【黨讎】己のなかまと、かたきと。元稹詩「發言當二道理一、不レ顧二黨與一讎」
【黨人】○なかま、相助けて非をかくすともがら。後漢書、黨錮傳「一一之禍、自レ是始矣」歐陽修、朋黨論「後漢獻帝時、盡取二天下名士一、目爲二一一一一」○同じ郷黨の人。
【黨首】黨派のかしら、一黨の首領。‖黨魁。
【黨正】○ただしく善し。荀、非相「一博而一一」‖讀正。○官名、周代の黨即ち五百家の長、其の黨の政令教治を掌る（周禮、地官）
【黨同伐異】同志の者を助けて己と異る者を攻める、門戸の見を存する。後漢書、黨錮傳序「有二石渠分爭之論一、——之說」
【黨派】主義目的の同じき一つのなかま。
【黨魁】同じきなかま。顏延之、庭誥「呻二吟於壻室之內一、喧二尊於一一之間一」‖黨類。
【黨朋】なかま。韓愈詩「古人貴二從晦一、君子忌二一一一」‖朋黨。
【黨與】なかま、同じ黨派の人。晉子、詩譜得二子上一、一一成二于下一」‖黨類・徒黨。
【黨類】なかま。後漢書、伸長統傳「親二其一一一」
【黨論】○ただしき議論。張平子碑「一一允諧」‖正論・讜論・讜議。○其の黨派の主張する議論。‖黨議。

【黧】レイ 齊 ライ 佳 支 通じて黎・犁に作る

○くろし（黒）○黒くして黄色を帶ぶ。
【黧牛】黒くして黄を帶びたる牛。戰國策、齊策「幽莽之幼也似レ禾、一一之黄也似レ虎」
【黧黄】かっらいうぐひすの異名。爾雅、釋鳥「倉庚、一一也」註「其色皆黒而黄、因名」
【黧黑】くろくして黄を帶ぶ。戰國策、齊策「面目一一、狀有二愧色一」

九 【黝】 畫 ユウ 有 國 或

○くろし（深黒）○くらし（暗）○かなしむ、別離を傷む貌「慘一」
【黝然】くらくたちこめたるもや。李頎詩「一一天時陰」
【黝黑】くらし。くろし。韓詩外傳「顏色一一、手足胼胝」
【黝然】○くらき貌。史、孔子世家「一一而黑」○別を憎みてかなしむ貌。江淹、別賦「一一銷魂者、惟別而已矣」

【黯淡】アンタン うすぐらし。潘岳文「凄雲ー—、酒常孤村」郭熙、山水訓「山水之氣、四時不ㇾ同、春融怡、夏蓊鬱、秋疎薄、冬ー—」

【黯澹】アンタン くらくふかし。元稹詩「怪底滄浪釣ー—」

【黯澹】アンタン 黯淡に同じ。吳融詩「不ㇾ奈春烟籠ー—、可ㇾ堪秋雨洗分明」

【黯黮】アンタン 除りて明かならざる貌。楚辭「常日月之照明兮、尙ー—而有ㇾ曖」ㇾ賦黯。

【黯淚】アンタン をぐらし。蔡邕文「潛二幽室之ー—一、情二昭明之景輝一」

【黮】タン 感

直ちに聚まる氣。莊、庚桑楚「有生ー—也」（黮は鍋・釜の底に生ずる煤氣ㇾ人の生命もなほなべずみの如き者にて實相を有するものにあらず）

【黮闇】アン 闇 闇

くろし（黑）

【黮然】アンゼン 黑き貌。史、天官書、與二黃昏尾星一同出日二天關一、ー—黑色甚明」

【黯】エン 豏 アン 豏 感

○くろし、黑色の貌。○にはか、卒爾として至る貌。

【黯然】アンゼン 卒ㇾかに至る貌。荀、强國「ー—而單擧ㇾ之」ㇾ卒爾。

【黯黮】アンタン 雲の黑き貌「廣韻」

【黮】（一）タン 感 チン 寢 （二）ジン

㊀其だくろし（深黑）桑の實が黑し。○にごる（濁）○くらし（闇）○ー—は雲の色の明かならざる貌。㊁くはの實。詩、魯頌「食ㇾ我桑ー—」ㇾ甚。

【黮闇】タンアン くらき貌。莊、齊物「人間受二其ー—一、吾催使ㇾ正ㇾ之」

【黮黯】タンアン 雲の黑き貌。王延壽賦「雲霓ー—洞杳溟兮」

【黮黮】タンタン 雲などの黑き貌。東晉、郭璞「ー—重雲、輔ㇾ輧和風」ㇾ黯黮。

十畫

【黲】シン 沁 又、黲に作る

うつくしき黑髮。左、昭二八「晉有ㇾ伯氏生女、ー—黑而甚美、光可ㇾ以鑑」黑髮がうつくし。

【黵】ヂン 篠（黑部五畫）に同じ。

まゆずみ。深青色。杜甫、古柏行「ー—色參天二千尺」

十一畫

【黲】サン 感

○うすぐろし（淺青黑色）○くらし（黯）

【黴】（一）ビ （二）バイ 支 泰 通音バイ

㊀有機物に寄生する下等植物「ー—菌」○かび、物がくされて表面に生ずる毛の如き苔。○かびる、かびが生ずる。○かさ、花柳病の一、梅毒「ー—毒」○面が垢つきて黑し。㊁筆を點ず、筆をくだす、下筆。

【黴黑】バイコク あかつきてくろし。淮南、修務「神農憔悴、嘗ㇾ藥鼎、一ー—、禹胼胝、由ㇾ此觀ㇾ之、聖人之憂ニ勞百姓一甚矣」

【黴青】バイセイ あかつきてやせる。唐書、陸贄傳「憔悴ー—、禹胼胝、彼聖人也、吾一褐衣、敢不ㇾ勁乎」

【黴梅】バイバイ かさ、惡性の花柳病。ㇾ瘡毒・梅瘡。

【黴黯】バイアン 色くろし。楚辭、九歎「顏ー—以沮敗」註「面黑也」

十四畫

【黶】エン 豏 アン 豏

○ほくろ（黑子）皮膚上に生ずる黑きあざ。漢書、高帝紀「左股有ニ七十二黑子一」注「今中國通呼爲ニ子」ㇾ誌。○くろきあと（黑痕）

十五畫

【黷】トク 屋

○けがす。けがる（汚）よごれる、たびたび手にふれてあかがつく。○みだる（亂）○にごる（濁）○しばしばす（煩數）○はづかしむ、はづべき事をする「ー—職」○なる（狎嫌）「媟ー—」○あなどる（慢）しばしばして狎れあなどる。○はづかしめ。○あか。

【同訓異語】黷・汙・汚・涜・黷・瀆等の別は汗（一〇四七頁二段）の條を見よ。

【黷祭】トクサイ まつるべからざる神にまつりひて祀る。書、說命「黷ニ于祭祀一、時謂ニ弗ㇾ欽」

【黷職】トクショク 官公吏などが其の職務をはづかしめる如き不都合の行爲をする。

【黷煩】トクハン はづかしわづらはす。歐陽修文「愚裏懇迫、倘敢ー—」

【黷武】トクブ 武力をたのみて兵を用ひて武德をけがす。後漢書、劉虞傳「公孫瓚累ㇾ嘗ニ黷二所ㇾ敗、而猶攻ㇾ之不ㇾ已、虞患ニ其ー—ㇾ」

黹部

【黹】チ 縦

○ぬふ、さす、縫ひ刺す。轉じて女工を總ー（といふ。○ぬひもの、裁縫せし衣服。ぬひとり（刺繍）

五畫

【黻】フツ 物

○ひざかけ（蔽膝）黹ガハシにて作りしまへだれ（蔽膝）禮服を著くる時、膝を覆ふもの。○ぬひ、あや。○半青半黒、兩の己の字の相背ける模様を施したる古代の禮服の名。周禮、司服、註疏「ー取臣民背惡向善、亦取合離之義、去就之理」一說、兩弓字相背ける形をぬひとりせし禮服。又其のぬひもやう。黼の斧形に對してーに弓形を附す。

【黻衣】フツ 兩己相背ける模様ある祭服。詩、秦風「君子至止、ーー繡裳」

【黻冕】フツベン 黻衣を被る貴顯の士の列位。張載、確論「軒冕ーー之士」

【黻文】フツブン 兩己相背ける模様。醜雅、注「黼文如レ斧、ーー如二兩己相背一」

【黻冕】フツベン ひざかけと、かんむりと。並に祭服。論、泰伯「惡二衣服一而致二美乎ーー一」

七畫

【黼】フホ 慶

○あや、ぬひ。○半黒半白の斧の形を背中合せにぬひとりしたる祭服。又、其のぬひもやう。考工記「白與黒謂之ー」

【黼衣】フイ 斧の模様をぬひとりせし禮服。漢書、韋賢傳「繡黼丹雘、國自二冢宰一ーー朱紱、四牡龍旂」

【黼扆】フイ 次條に同じ。禮、明堂位「昔者周公朝二諸侯於明堂之位一天子負二ーー一南鄉而立」

【黼扆】フイ 斧を畫きたる赤き絹地の屏風、古、天子の諸侯に對する時、之を御座の背に立てしもの。斧は威を示す所以、柄なきは之を用ひざるの意。書、顧命「狄設二ーー一」ー黼依。

【黼座】フザ 天子の御座の前條を見よ。揚雄賦「前二ーー一而造二縣令、聽二玉音之雍雍一」袁枚詩「香擁二袞龍一開二ーー一」

【黼藻】フサウ 斧の形と唐草の模様と。新論「夫樟木雖二根錮一枝（中略）匠者採レ形、製爲二殿堂一、以二丹漆一雕爲二ーー一」

【黻】フツ

○おほすっぽん（大鼈）古、其の肉を以て珍味と爲す。左、宣四「楚人獻ー於鄭靈公一」○るもり（蜥蜴）又、蛇に作る。

【黻盤】フツ おほすっぽんと、鰐ワニの類とを。中庸「今夫水一勺之多、及二其不レ測一ーー蛟龍魚鼈生焉、貨財殖焉」

【黻腦】フツ おほすっぽんを煮たるかなへ。○范成大詩「ーー子公烹、羊斐華元餉」二事皆左傳に見ゆ、飲食の細故を以て亂を致すをいふ。子公は鄭の大夫、卽ち公子宋なり、鄭の靈公、大夫に黿を食はしむ、子公を召せども與へず、子公怒り、指を鼎に染め、之を嘗めて出づ、公怒りて之を殺さんと欲す、子公遂に靈公を弑す。染指（九三四頁二段）食指動（三二四頁二段）參看。

【黿鼎鼈臑】ベンテイベツジ 君臣の相厭するに喩ふ。後漢書、張衡傳「故樊噲披レ帷入見、高祖踞洗以對二ーー生一、當二此之

黽部

【黽】ビン 梗 静 ベン・メン 寒

○あをがへる、蛙の屬、「蠻ーー」○金線蛙。○つとむ（勉）勉強する「ー勉」○ー池ヂは漢の縣の名。卽ち今の河南澠池縣。

【黽勉】ビンベン つとむ、勉強する。詩、小雅「ーー從レ事」詩、邶風「ーー同レ心、不レ宜レ有レ怒」詩緝「力所レ不レ堪、心所レ不レ欲、而勉強爲レ之曰ーー」ー强勉。

四畫

【黿】ゲン グヮン 寒 元

○おほすっぽん（大鼈）古、其の肉を以て珍味と爲す。左、宣四「楚人獻ー於鄭靈公一」○るもり（蜥蜴）又、蛇に作る。

【黿盤】ゲン おほすっぽんと、鰐ワニの類とを。中庸「今夫水一勺之多、及二其不レ測一ーー蛟龍魚鼈生焉、貨財殖焉」

【黿腦】ゲン おほすっぽんを煮たるかなへ。○范成大詩「ーー子公烹、羊斐華元餉」二事皆左傳に見ゆ、飲食の細故を以て亂を致すをいふ。子公は鄭の大夫、卽ち公子宋なり、鄭の靈公、大夫に黿を食はしむ、子公を召せども與へず、子公怒り、指を鼎に染め、之を嘗めて出づ、公怒りて之を殺さんと欲す、子公遂に靈公を弑す。染指（九三四頁二段）食指動（三二四頁二段）參看。

【黿鼎鼈臑】ベンテイベツジ 君臣の相厭するに喩ふ。後漢書、張衡傳「故樊噲披レ帷入見、高祖踞洗以對二ーー生一、當二此之

會、乃龜鳴而雷應也」埤雅「龜、大雷也、闇一大、雷以爲ノ雄、龜鳴而雷應、所ノ謂雄鳴ニ於上風、雌鳴ニ於下風ニ而風化、卽此類也」

五畫

【龜】テウ　蕭

○姓、一錯ソは漢の潁川の人、申商刑名の學を學び、文帝の時、太子の家令となり、才辯を以て幸せられ、稱して智嚢と爲す、景帝立ちて益貴幸せられて事を用ふ、諸侯の封地を削らんと請ひ、吳楚七國の亂を起す、一一に晁に作る。○あさ。漢書、嚴助傳「一不ノ及ノ夕」＝朝。

六畫

【龝】ア　麻　又、龝に作る。蛙の古字

○かへる。○みだりがはしき音樂の聲「淫一」

【龝咬】カウ　俗樂をいふ。張衡賦「成池不レ齊ニ度於一一、而衆聽者疑惑」

【龞聲】ヤイ　みだりがはしき樂聲、正しからざる音樂。漢書、王莽傳贊「紫色一一、餘分閏位、聖王之臨除云爾」（王莽の篡立は猶ほ色の閏色あり、樂の散樂俗曲あり、層の閏位あるが如し、故に光武の爲めに驅除せらるるをいふ）＝邪音。

【龍】　龝（前條）に同じ。

十一畫

【龞】ガ　豪　繁は俗字

海中に棲むおほすっぽん。

【龞掖】エキ　翰苑卽ち翰林院の異稱。程史「慶元間、有ニ宿儒、以ニ文名一入ニ一一爲ニ承旨一」＝龞禁。

【龞禁】キン　前條に同じ。馬通常詩「珥レ筆游ニ一一こ

【龞山】ザン　○大いなるうみがめが戴けりといふ海中の山。神仙の棲むところといふ。列、湯問「渤海之東、有ニ大壑ニ焉、中有ニ五山一無レ所ニ連著ニ、常隨レ波上下、帝恐レ流ニ于西域ニ、使ニ巨鰲十五舉レ首戴ニ之、山始不レ動」（繁は龍）○山名、湖南常德縣城の北、七十支那里に在り、昔、僧鑿冥・魏存・文遙三人、同じく此に遊び悟道す、故に其の徒一一悟道と稱す。○だし、龞山にかたどりて造る。乾淳歲時記「元夕二鼓上乘ニ小輦ニ幸ニ宣德門ニ觀ニ一一、山燈凡數千百種、其上俗官奏樂、其下爲ニ大露臺ニ百戲聚工、觀呈ニ奇技ニ觀ニ終於燈月之下一」＝山車・山棚。

【龞身】シン　うみがめのからだ。王維詩「一一映レ天黑、魚眼射レ波紅」

【龞足】ソク　おほすっぽんのあし。史、三皇紀「斷ニ一一ニ以立ニ四極ニ」

【龞戴】タイ　大いなる海龜が山をいただき負ふ。龞山參看。徐陵文「一一三山、孰知ニ其重ニ」後世用ひて感戴の義とす。

【龞頭】トウ　○龞峯の故事に本づきて狀元、卽ち官吏登用試驗の首席及第者をいふ。玉堂清話「李翰於ニ和凝榜ニ及第、後與ニ座主同任ニ學士ニ、凝作レ相、翰爲ニ承旨ニ、適當レ批ニ詔、次日閣ニ凝薦閣ニ悉取ニ圖書器玩ニ留レ詩云、座主登庸歸ニ鳳閣ニ、門生批レ詔立ニ一一、玉堂應閣多ニ珍玩ニ、可レ作ニ四遊洞筆ニ不」類書纂要「貢レ中ニ狀元ニ曰ニ龞頭ニ一一」＝繁頭。○圖書物の上の欄外に書き入れたる注解。＝頭注・標注。

【龞峯】ホウ　龞山のみね、神仙の棲所に比して翰苑卽ち翰林院をいふ。東軒筆錄「宋景文守ニ益州ニ、以ニ翰林學士承旨ニ召、作レ詩曰、粉署重來憶ニ舊遊ニ、蟾桃開盡海山秋、寧知不ニ是神仙骨ニ、上到ニ一一更上頭」＝龞掖。

十二畫

【龗】ボ・ダ　タン・ダン　歌　參　線に同じ

【龍】　龝（前條）に同じ。

【龠】ヤク　藥　○すっぽん、どろがめ、淡水に產する龜の一種、背は褐色、邊緣は甚だ柔かく、腹は白く口は尖る、肉は美味にして滋養分に富む。＝鼈魚・河伯從事。○わらび（蕨）其の初生のものの脚に似たるが故「一菜」

【龠甲】カフ　○すっぽんの背殼、藥用とす。○圓瓊瑣ガの甲を煮て柔皮の如く製せしもの。梔・茸等に遊る。

【龠裙】クン　すっぽんの周緣の柔かき肉、味最も肥美なり。五代史補「僧齊光有ニ才辯ニ飲ニ酒食ニ肉、嘗云但願鵝生ニ四掌ニ龜留ニ兩裙ニ足矣」

【龡龡】ケイ　筍の室帝より王位を讓られたりといふ傳說上の人物。鳳

（二三〇二頁三段）を見よ。張衡賦「一一瓊而尸亡兮、取二蜀禅一而引レ世」

鼎部

【鼎】 テイ 選

○かなへ、金属にて作れる一種の鍋形は竈に似て多くは三足両耳あり、大小同じからず、用途も亦異り、食物を煮、丹を煉り、又罪人を煮殺するに用ふ。事物紀原「黄帝採首山之銅鑄一於荊山、此一之始也、後宝夏禹復鑄以象物、白氏六帖、黄帝作一三象二天地人一禹收二九牧之金一以鑄九一」○夏の禹王が九州即ち支那全國の金を收めて九一を鑄り、遂に傳國の重器となりし故事により、轉じて、王位帝業の稱にいふ。○かなへの三足を三公にかたどりて相位の稱とす「台一」○あたる（當）まさに（方）漢書、賈誼傳「天子春秋一盛」○一一はゆるやか（寛慢）のぶ（舒）形體のしまりなき貌。又、光陰の速かに過ぐる貌。○重き形容「九一大呂」○易の卦の名、巽下離上。○一の三足に比して、三方に向ひ合ひし形にいふ「一坐」「一立」「一峙」

同訓異字 鼎・正・政・方・適・的・祇・多・將の別は正（一〇〇八頁二段）の條を見よ。

【鼎位】テイ 宰相のくらゐ。蓬蒿詩「奕葉金章貴、連枝一一尊」

【鼎彝】テイイ かなへ。彝は宗廟に常に備へつける祭器にて古、功績ある者の事蹟を銘記せしもの。宋書、劉穆之傳「功銘二一一一」‖鼎鐘。

【鼎運】テイウン 帝王の運命。宋書、武帝紀「一一雖レ改、而民未レ忘レ漢」‖鼎祚・國運・聖運・帝運。

【定レ鼎】テイテイ 周の成王、九鼎を郟鄏（洛陽の地）に奠き王都と定む、より、て、都を定むる義とす。左、宣三「成王定二鼎於郟鄏一、卜世三十、卜レ年七百、天所レ命也」

【鼎鑄玉石】テイチウヲイシヲトカス 鼎を鑄るの如くにし玉を石の如くにする。奢侈の甚だしき形容。杜牧、阿房宮賦「一一、金塊珠礫、弃擲邐迤、秦人視レ之、亦不二甚惜一」

【鼎鼐】テイナイ 料理女。條鮮指南「掌レ饌姫曰二一一一」

【鼎革】テイカク 易の鼎卦は新を取り、革卦は故を去るの義あり、よりて、王者の易姓革命をいふ。徐浩、謁二禹廟一詩「一一固天啓、運異臣二人謀一」

【鼎甲】テイカフ ○盛大にして首出する義。薛廷珪文「一一華宗、松茂茂行」○科擧の試驗に最優等の三人の稱。

【鼎鑊】テイクワク 大いなるかなへ、鑊は鼎の大いにして足なきもの。古は肉を煮るに用ひ、後には人を刑する具とす。史、廉頗・藺相如傳「臣知下欺二大王一之罪當レ誅也、臣請就二一一一正氣歌「一一甘如レ飴、求レ之不レ可レ得」

【鼎彝】テイイ 王業をいふ。姚崇詩「恭聞帝里生二雲沼一、應レ報明君一一新」

【鼎貳】テイジ 鼎は貴重なるもの、人に託して事をいはしむるにいふ。晉書、故事「託レ人言レ事、曰レ信二一一、趙平原君曰、毛先生一至レ楚、使三趙重二九鼎太呂一」

【鼎鉉】テイケン ○かなへのみみづる。○轉じて三公の位に比す。潘尼詩「翦冠步二一一、既立宰三河一」

【鼎湖】テイコ 黄帝鼎を荊山の下に鑄、鼎成りて龍に乗りて上仙す、後人其の地を名づけて一一といふ「史、封禪書」後人帝王の崩御に常に此の語を用ふ。

【鼎鉉】テイケン かなへと、なべと。鉉は兩耳三足ある鍋の類。宋史「大觀叱二雷霆一曰、一一尚有レ耳、汝不レ聞二鼎鉉貴之社稷之臣一乎」（かなへでさへも耳あり、而るに人でありながら之を聞かざるかとの意）

【鼎士】テイシ 鼎を持ちあげる力ある勇士。漢書、鄒陽傳「武力一一」注「能舉レ鼎者」

【鼎臣】テイシン ○三公などの大臣をいふ。後漢書、李膺傳「上帝震怒、貶二黜一一一」○かなへを扛げもつ力ある勇士。齊書、王慈傳「武功一一」‖鼎士。

【鼎新】テイシン 舊き物事を改める。易、雜卦「鼎取レ新也」に本づく。鼎は物を烹る器、腥き者を熟せしめ、堅き者を柔かくす、故に革新の義あり。參同契「御政之首、一一革故」一說、鼎は助字、まさにと讀む。入蜀記「時陰又云、皇上一二文物、敎被二華夷一、如來妙旨、悉已圓窮」鼎革參看。

【鼎鐘】テイショク かなへと、つりがねと、皆宗廟に備ふる器。古、人の功績をほりつけしもの。魏志、陳思王傳「功名著二於一一一、名稱垂二於竹帛一」‖鼎鐘。

【鼎食】テイショク 貴人の食物。美味珍膳の物宜なるにいふ。史、主父偃傳「生不レ食二五鼎一、則死亦五鼎」家語「直レ酉而坐、列レ鼎而食」

【鼎盛】テイセイ まさに天子の齢が壯盛に當る。漢書、賈誼傳「天子春秋一一」

【鼎俎】テイソ ○かなへと、まないたと。○轉じて、陳二其犧牲一、備二其一一一」○かなへにて煮、まないたにて割く。淮南、說山訓「雖レ知レ將レ且、猶知二夜半一而不レ免二於一一一」

【鼎祚】テイソ 帝王の位。又、国運をいふ。晉書、石弘載記「魏任二司馬懿父子一、終二於一一一治修一」〓鼎運。

【鼎足】テイソク ○かなへの足の如く三方に割據するに喩ふ。史、淮陰侯傳「三分二天下一、一一而居」○鼎に三足ある如く、三人相助けるに喩ふ。呂覽「吾三人者於二齊國一也、譬レ之猶二鼎之有一レ足、去一焉則不レ成矣」〓三人は鼎峙・鼎談・鼎論

【鼎族】テイゾク 大いにして盛んなる家がもつ大家。徐陵、貽二王儀同一書「五陵一一、家傳二軒冕一」〓巨室。

【鼎鉉】テイケン ○かなへのもりもの。鳥。鼎卦「鼎折レ足覆二公餗一」鼎の足が折れて君の餗、即ち中の實を覆すは任に堪へざるなり」○轉じて三公の任務の義とす。傳咸、時「過謝佐二台輔一、安能任二一一一一」

【鼎鼐】テイダイ かなへ、鼐はおはがなへ。宰相の位に喩ふ。國老談苑「寇準出二入宰相一三十年、不レ營二私第一、魏野贈レ詩曰、有レ官居二一一一、無二地起一二幾園一」

【鼎峙】テイジ かなへの足の如く三方にそばだつ。吳志、孫權傳「權居レ身恐レ爭、任レ才耐レ計（中略）故能自擅二江表一、成二一一之業一」〓鼎立。

【鼎鼎】テイテイ ○貧慢にして形體のしまりなき號。慵り、喪事一一猶則小人」○轉じて盛大の義に用ふ「大名一一」陸游詩「新春一一來」○光陰の速かに過ぐる形容。陸游詩「一一百年如レ逆旅」

【鼎沸】テイフツ かなへのわく如くさわぎたつ。漢書、霍光傳「羣下一一、社稷時レ傾、今日之議、不レ得レ決レ謀」

【鼎臣】テイシン 三公となりて大子を輔佐する人。魏志、崔琰傳「孫權・盧毓始入二東府一、琰曰、孫賊完充烈、卿能隣二盛德一明理、百謀不レ消、皆公才也、後咸至二一一一」

【鼎味】テイミ ○料理の味。唐書、李絳傳「操二刀鼎一鑊和二一一一一公等皆レ之、若二弼諧旨論一周盛一鑊矣」○天下の政をととのふるに喩ふ。宋書、周續之傳「江州刺史劉柳薦二之高祖一曰、若升二之宰府一、必一一斯和」

【鼎銘】テイメイ かなへにほりたる銘の文。左、昭七「正考父一云、一命而僂、再命而傴、三命而俯」

【鼎立】テイリツ かなへの足の如く三方に向かひて立つ。晉書、周處傳「漢末分裂、三國一一」〓鼎峙。

【鼎呂】テイリョ 九鼎大呂の略。九鼎は夏の禹王九州の金をあつめて鑄たる九個の鼎。夏殷周三代相傳の寶器。大呂は周の宗廟にある大鐘。大呂の調に合する音を發する故にいふ。皆非常に重く貴きものに喩ふ。史、平原君傳「毛先生一至レ楚、使二趙重二於九鼎大呂一」范成大詩「安レ國如二一一一」

【鼎彝】テイイ 鼎（前條）の俗字。

鼓部

【鼓】コ 鼓は俗字

○つづみ たいこ、樂器の一、木（古は瓦）の胴に皮を張り桴にて擊ち鳴らすもの。○俗に鼓ツヅミ（次條）に通用す。○ます（斛）

【鼓】 鼓は名詞つづみ 支に從ふ。動詞即ちつづみうつの義の字は攴に從ひ鼓に作る 今は多く混用す。

【伐鼓】バッコ つづみを擊つ。詩、小雅「鉦人一一」〓擊鼓。

【聞レ鼓而已不レ聞レ金矣】古の戰は進むに鼓を打ち、退くに金を打つ、よりて進むことを知りて、退くことを知らざる義とす。左、哀十一「陳書曰、此行也、吾一一」

【鳴レ鼓而攻之】其の人の罪を數へてせめたてる。論、先進「求也非二吾徒一、一一可也」

【鼓角】コカク 軍中にて用ふるつづみとつのぶえ。岑參詩「日落轅門一一鳴、平明歸出二蕃城一」陸游詩「一一眞當使、江湖日夜聞」

【鼓拳】コケン つづみのひびき。梁簡文帝、謝賚論「策門之下、一一聒聞、喧

記之際、鐘聲猶在」

【鼓子花】コシ ひるがほ。牽牛花に似て小。＝旋花。

【鼓鉦】セイ つづみと、どらと。朱熹詩「田舎占二煙火一軍家候二一一一」

【鼓旗】タク つづみと、大旗と。唐書、薛延陀傳「太宗遣二遊擊將軍崔智辯一、齎二詔書一一一册拜」

【鼓栃】タク つづみと、ひゃうし木と。鼓栃とは異り。宋史、王友直傳「一一相聞、益整暇自持」

【鼓鍔】タク つづみと、おほすずと。周禮、鄉師「掌二其一一旗物兵器一」

【鼓笛】つづみと笛と。白居易詩「堂上坐部笙歌清、堂下立部一一鳴」＝鼓吹。

【鼓動】ドウ ○たいこのひびき。白居易詩「一一出二新昌一鐘鳴赴二講章一」○どうき（動気）心臓のうつひびき。動悸。

【鼓舞】つづみと、かねと。周禮、凡縣者、鐘有二一一一」

【鼓浮】つづみのばち。元稹文「況是爲二刺史一、豈復援二一一一」

【鼓篋】こめだいこ。稗にて、戰爭の戰とす。篋一に鞞に作る。禮、樂記「一一之聲、謹譆以立、動動以進、衆君子聽二一一之聲一、則思二將帥之臣一」＝擊鼓。

【鼓膜】コマク 耳の穴の奥にありて音響を傳ふることを掌る膜、耳のしゃうじ「一一炎」

【鼓】コ 圓

○つづみうつ。左、莊十「長勺之戰、公將二一之一」うつ（擊）うちならす「一腹」○ひく（彈）「一琴」○うごかす。うごく（動）○ふる、ふるふ（振動）○ふるひおこす、はげます「一勇」おこる、あふる、あふぐ、火を扇ぎて熾んならしむ。

會意 支に从ひ、壹に从ふ。鼓舞の鼓は支に从ふ。鎧鼓の鼓は皮に从ふ。

【鼓枻】コエイ かぢ（楫）をうごかして船を行る。楚辭「漁父莞爾而笑、一一而去」＝鼓楫。

【鼓舌】コゼツ 舌などをならしうごかしてしゃべる。北史、柳虬傳「劉孫書生、一一辱舌、適足二以相誣一」

【鼓腹】コフク わきの下をうちならす。四子講德論「鼓二腹謳吟一、一一而笑」

【鼓行】コカウ つづみうちて進みゆく。漢書、項籍傳「引レ兵一一而西、必擧レ梁矣」

【鼓瑟】コシツ つづみをならして音樂を奏する。孟、梁惠王「今王一一於此一」

【鼓舷】コゲン はばたきする。郭璞文「飛鳧一一、翩然皆臆」

【鼓盛】コセイ ひれをうごかしてすすむ。符子「有二一魚一、奮レ鰭一一、而登二平陸門一而爲レ龍」

【鼓琴悲】コキンノカナシミ 琴を彈じて悲む。知己の死を悲むにいふ。世說、傷逝「顧彦先、平生好レ琴、及レ喪、家人常以レ琴置二靈牀上一、張季鷹往哭レ之、不レ勝二其慟一、遂徑上レ牀鼓レ琴、作二數曲一、竟撫レ琴曰、顧彦先頗復賞レ此不、因又大慟、遂不レ執二孝子手一而出」季鷹、名は翰。

【鼓舌】コゼツ 舌をふをならす。詩經「既見二君子一、竝坐一一」

【鼓脅】コキョウ 腋の下をうちならす。王令詩「時節適使レ然、一一亦有レ辱」

【鼓篋】コキョウ 學に就くをいふ。鼓をうちて學生を集め、篋を發きて書籍を出す。禮、學記「入學一一、孫二其業一也」

【鼓險】コケン 險阻の地に乘じ、つづみをうちて猛擊する。穀梁傳「楚來我少、レ一而擊レ之」

【鼓掌】コショウ つづみをうちてきわぐ。左、哀十七「一一而遁」

【鼓儳】コサン 敵陣の整はざるに乘じて、つづみを擊ちて攻める。左、僖二二「一一可也」（一說、儳は巉險、敵を險阻に擊つ義）

【鼓瑟】コシツ 大いなる琴をかきならす。詩、小雅「一一吹レ笙」論、先進「一一希」

【鼓掌】コショウ てのひらをうつ。陳文燭、遊二峨山一記「至二黑水寺一、訪二八音池一、每二有人鼓レ掌、則幕蛙鳴レ、今は多く歡悅の意を表示する義と

す）＝擊掌。

【鼓鐘】コショウ 金鐘の類をとかしいる、鼓は鼓排イを動かして火をあふる。史、貨殖傳「卽二鑄山一一一」漢書、蘇峻傳「卽東發國、一一一鑄錢」注「鼓レ熾火、謂レ之鼓一」

【鼓鍵】コケン かぎをうつ。詩經「一一一于宮、鞗革有二于外一」

【鼓吹】スイ 鼓をうち笛を吹き鳴らす。轉じて、すすめはげます義とす。世說「孫興公云、三都二京、五經一一」

【鼓舌】コゼツ 舌をならしてしゃべる。莊子「不レ耕而食、不レ織而衣、搖二脣一一、擅生二是非一」後漢書、袁紹傳、注「周書曰、賢智鉗レ口、小人一一」

【鼓刀】コトウ 庖丁を使ふ。戰國策「孟嘗君曰、嗟乎、政乃市井之人、一一以屠」

【鼓枻】コエイ うごかしたわむ。周易雜辨「風能一一萬物」

【鼓栃】コシツ ひゃうし木をうちならす。鼓栃とは異り。山海經「其音如レ一一」

【鼓湍】コタン つづみをうつ如き音するはやせ。陳道詩、似レ聞二湍瀨聲一、亦復一一一」

【鼓筑】コチク ちく（琴の一種）をうちならす。沈炯文「秦人清歌、趙女一一」＝擊筑。

【鼓徵】コチョウ 大鼓のあひづにて部生を召しあつめる。禮、學記「大昕一一、所二以警レ衆也」

【鼓怒】コド　水の激してなり響く形容。梁簡文帝詩「洪濤鼓ー一、雷聲尚凄清」

【鼓排】コハイ　ふいご。又、ふいごをうごかす。排は輔と通ず。世說、伍被、郭舜、唐方大樹下鍛、向子湖爲佐ー一、康揚ー遠不ー顧、帝若ー無ー人」＝風箱。

【鼓舞】コブ　鼓をうち鳴らして舞はしむ。轉じて感動して奮發興起せしめる。法言「ー一萬物一者、其唯風雷乎、ー一萬民一者其惟命乎」

【鼓缶】コフ　ほとぎをうちならす。韓愈、幸臺傳「或促ー膝以持ー盾、或鼓ー缶而ーレー」

【鼓腹】コフ　はらつづみをうつ、食に飽きて太平を樂む形容。莊、馬蹄「含ー哺而熙、ーレー而遊」

【鼓吻】コフン　言はんと欲して脣をうごかす。「陸都賦」「疑ー鉄ーレー舌文學ー」

【鼓盆】コボン　莊子の故事によりて、妻を喪ふにいふ。莊、至樂「莊子妻死、惠子弔ー之、莊子則方箕踞、ーレー而歌」

【鼓怒】コド　ふえをふきならす。皮日休文「松竹爲ー氣、其正聲雅音、笙師之吹ー竽、瞽人之ーレー、不ー能ー過也」

【鼓翼】コヨク　はばたきする。鳥の飛ぶにいふ。潘尼賦「翔鳥ー一、海魚戲ー浮」

【鼓浪】コロウ　なみをうごかしおこす。古今注「鰕魚者、海魚也、大者長千里、小者數十丈（中略）ーレー成ー雷、噴沫爲ー雨、水族驚長皆逃匿、莫ー敢當ー者」

【鼓勵】コレイ　言語を以て人をはげまし奮起せしむ「ー一士氣」

【鼓惑】コワク　おだててまどはす。宋史、李光傳「察京兄弟、祖ー述王安石之說ー五十年間、毒流ー四海ー今又風ー示中外、ー一民聽ー宜朝廷之福」

五畫

【鼕】トウ　㊇　つづみのこゑ。

【鼕鼕】トウ　鼓の聲の形容。唐書、馬周傳「詰朝ー二六街鼓、鼕爲ー一ー鼓」

六畫

【鼗】タウ　㊇　又、鞉、鞀に作る　ふりつづみ、鼓に似て小、左右にさげふりあり、其の柄を持して搖かせば、さげふりが鼓を擊つやつに作りしもの。

【鼗鼓】タウコ　ふりつづみのおと。李嶠詩「舞日諧ー一、巍年韻ー七聲」

【鼗鼓】タウコ　ふりつづみ。書、益稷「下管ー一、合止柷敔」

【鼓】フン　㊇　古、賁に通用す　ちんだいこ、戰陣に用ふる長さ八尺の大鼓。古、賁に作る。

【鼓鼓】コフン　軍事用のおほつづみ、ちんだいこ。周禮、地官「以ー一ー鼓ー軍事」＝賁鼓（詩、大雅）

八畫

【鼙】ヘイ　㊈　先　ーーは鼓の聲。詩、商頌「鞉鼓ーー」＝鞉鼓。

【鼛】カウ　㊇　長さ一丈二尺あるおほつづみ「ー鼓」

【鼜】ヘイ　㊈　○せめつづみ、騎兵が馬上にて鳴らすつづみ。うまのりつづみ（騎鼓）白居易、長恨歌「漁陽ー鼓動地來」（漁陽は安祿山の叛せし地名）○古、鼙に通ず。ーー婆は毘舍の異名（搜神記）

【鼜舞】ヘイブ　雅樂の名。齊書、樂志、漢章帝造ーー」

十一畫

【鼷】ケイ（本段）に同じ

鼠部

【鼠】ソ　㊈　遇　○ねずみ、ね、ねず、人家又、田野に棲む小獸、齒銳くしてよく噛む。＝社君ー家鼮。○ひそかに害をなす者に喩ふ「ー賊」○うれふ（憂）古、竊に通ず「ー思」㊐○ねずみ。うすずみ色、淡黒色。

【鼠疫】ソエキ　黒死病ペストの別名。鼠に寄生する蚤により傳染するが故。強熱を發して身體に核を生じ、死後の體に黒斑を生ず。＝核子瘟。

【鼠牙雀角】ソガジャクカク　事訟をいふ。詩、召南、行露「誰謂女無ー家、何以速ー我獄ー雖ー速ー我獄ー室家不ー足、誰謂鼠無ー牙、何以穿ー我墉ー誰謂女無ー家、何以速ー我訟ー雖ー速ー我訟ー亦不ー女從ー」とあるに本づく。＝雀角鼠牙。

【鼠肝蟲臂】ソカンチュウヒ　鼠のきもと、蟲のひぢと、至微至賤にして取るに足らざるものに喩ふ。莊、大宗師「以ー汝爲ー鼠肝乎、以ー汝爲ー蟲臂ー乎」謝枋得、初神授「蟲臂鼠肝、隨ー天付與ー」（天地造化の自然に委かす義）

【鼠麴草】ソキクサ　ははこぐさ（母子草）古、上巳に此葉にて餅を製せり。汝にもちよもぎの名あり、其實に代

へ用ふ。春の七草の御形ゴギヤウ＝＝葉母。

【鼠姑】ソコ　○牡丹の異名。本草「牡丹、一名―ー」○わらぢむし、せきだむし、おめむし。＝鼠婦。

【鼠耳】ジニ　ねずみのにけるが如くこそこそと逃げかくれる。漢書、嗣通傳「ーー以歸二漢王一」

【鼠思】シ　うれへおもふ。詩、小雅「ーー泣レ血、無二言不一レ疾」＝憂思・愛思。

【鼠梓】シ　ねずみもち。實は鼠の糞に似て葉は冬青に似たる灌木。＝女貞。

【鼠鬚筆】ヒツシユ　鼠の日ひげにて作りし筆。筆經「世傳、張芝・鍾繇用二――一筆鋒勁張有二鋒芒一、余未二之信一」

【鼠竊狗偸】シセツクタウ　鼠や狗の如くこそこそと物をぬすむ小ぬすびと。史、叔孫通傳「此特竊盜、――耳」

【鼠蝕】ショク　こねずびと。＝鼠盜・竊盜。

【鼠盜】タウ　前條に同じ。

【鼠遁】トン　ねずみののがれるが如くにげる。游宦紀聞「魚伏ーー、能全レ命者無レ幾」＝鼠竄。

【鼠竄】ザン　○ねずみの如きともがら、小人をいふ。趙志、鄒陀傳「太祖曰、不レ養二天下智一無二此ーー一耶」○多くのねずみ。李後民詩「欺レ人ーー爭出レ頭、復行如二人盜不一レ休」

【鼠尾】ビ　たむらさき、一名やまにら、黒色を染むるに用ふ。爾雅「蔚、ーー」

【鼠尾芥】ビカイ　こがねやなぎ。本草「黄芩、一名――」

【鼠負】フ　わらぢむし。爾雅「蟋、ーー」＝鼠婦。

【鼠婦】フ　前條に同じ。詩、豳風、伊威在レ室」疏「伊威、一名ーー」

【鼠朴】ボク　次條に同じ。陸游詩「玉井二ーー一何勞レ斲」

【鼠樸】ボク　ねずみの乾物。無用なるものに喩ふ。戰國策「鄒人謂二玉未レ理者璞一、周人謂二鼠未レ腊者樸一、周人有二樸過一而賈一曰、欲レ賈レ樸乎、鄙賈曰、欲レ之、出二五樸一乃鼠也、因謝不レ取」＝鼠朴・鼠璞。

【鼠璞】ボク　前條を見よ。

【鼠狼】ラウ　鼬鼠の異名。蜻蛉、爾雅、注「鼬鼠、狀如レ鼠、赤黄色、大尾、能ー二鼠一、俗呼ーー」

【鼠李】リ　落葉灌木の一、高さ丈許、枝幹に針あり、葉は楕圓にして互生し、春末淡黄色の小花を開く、實は小豆の如く色黒し、汁を取りて綠色の染料とし、亦藥に用ふ。

【鼠憂】ユウ　社而貴】ねずみが社に巣くへば、穴を爛べて之を捕らんとするも、社の燒けんことを恐れて敢てせず、以て君の威をかる小人に喩ふ。文選「鼠憂レ社貴、狐假二虎威一」

【不レ可レ以無レ鼠蓋三不レ捕之猫一】無益の者を養ふべからざるに喩ふ。韓林玉露「東坡云、養レ猫以捕レ鼠、不レ可レ以無レ鼠而養二不レ捕之猫一、蓄レ犬以防レ盜、不レ可レ以無レ盜而蓄二不レ吠之犬一」

【投レ鼠忌レ器】鼠に投げ付けて之を殺さんとすれども、傍の器物を傷はんことを恐る。君側の奸を除かんとするも、君を傷はんことを恐るる喩。漢書、賈誼傳「里諺曰、欲レ投レ鼠而忌レ器、此善諭也、鼠近二於器一、尚憚不レ投、恐レ傷二其器一、況於貴臣之近一主乎」

四畫

【鼢】フン　㊀文

○むぐらもち（土龍・田鼠）＝鼹鼠。○太古の時の獸、鼠に似て體の大いさ象の如きもの、常に西伯利亞の氷居中に於て其の遺骨を發見す。

五畫

【鼬】イウ　㊀宥

いたち、體長さ一尺許、色赤褐、四肢短小にして敏捷、善く鼠を捕へ、又、夜出でて人家の雞の血を吸ひて、肉を食はず、若し人に追迫せらるれば、肛門より惡臭を放出し、人をして耐へ難からしめ、藉りて以て免る、其の毛、筆を製すべし、之を狼毫といふ。＝地猴・鼬鼠・黄鼠狼。

【鼭】セイ　㊀庚

○いたち（鼬）前條參看。○むささび（鼯）＝飛生鼠。

【鼭鼬之運】いたちの行きかふ小みち。莊、徐無鬼「逃二空虚一者、聲聞・跫音之relation」

【鼫】セキ　㊀四

○をかつぎ、栗鼠に似たる獸、全體青黄色、頭は兎に似、尾は長大にして毛あり、常に卷きて背上にかつぐ、好みて田中に在りて、粟豆等を食ひ、農家の害を爲す。＝碩鼠・雀鼠・五技鼠。○けら（螻蛄）＝蟋鼠。

【鼨】昭（一八五五―五六）の古字。史、貨殖傳「狐ーー裘千皮」

七畫

【鼯】ゴ　㊀虞

むささび、ももんぐわ(鼯)體長さ七八寸、背は暗褐色、腹は白し、尾長くして長毛を密生す、上下肢間に膜ありて、能く樹間を飛行す。‖五技鼠、飛生鼠、夷由飛鼠。

【鼯鼬】ゴユウ　むささびと、いたちとの總稱、崔光傳「今發二樣賦一而弗レ捕、爲ニ一一所二棲宿一」

【鼯嘯】ゴセウ　むささびがなく。韓愈詩「猿呼ー一鵂鶹啼」

【鼯鼠之技】ゴソノギ　技多けれども、一も上達せしものなきに喩ふ。鼯鼠はむささび。荀、勸學「鼯鼠五技而窮」（能く飛ぶも屋に上る能はず、能く緣るも木を窮むる能はず、能く游ぐも谷を渡る能はず、能く穴ほるも身を掩ふ能はず、能く走るも人に先だつ能はざるをいふ、說文には鼫（鼠部五畫）を以て五技鼠と爲す）

【鼮】テイ　酉　まだらねずみ。豹の如き文彩あるもの。‖豹文鼠。

八畫

【鼷】セイ　シャウ　医　鼫（未段）に同じ。

【鼸】ケイ　齊　はつかねずみ(鼷鼬)鼠の一種、鼠より小、人家の倉庫中に棲む、毒あり。あまくちねずみ。‖甘口鼠。

【鼸鼠】ケイソ　はつかねずみ。春秋、成七「一一食二郊牛之角一」

十五畫

【鼹】ルキ　支　むささび、ももんぐわ(鼯鼠)

鼻部

【鼻】ヒ　寘　○はな、動物の嗅官、及び呼吸を司る器官。○器物のつまみ(鈕)とって(把)隋書「三命以上、銅印銅一」○獸のはなを穿ちて繩などをとほし繫ぐ。張衡賦「一赤魚」○はじめ(始)人類の胚胎する最初にーが先づ形を受けるといふ傳說に本づく「一祖」

【鼻】自に從ひ、畀に從ふ、一の系を引く畀を白しとする說、俗に白に從ふは誤。

【鼻飲】ビイン　はなを以て水をのむ。漢書、賈捐之傳「路越之人父子同レ川而浴、相習以レー一、與二禽獸一無レ異」

【鼻加答兒】ビカタル　感冒時又、傳染によりて起る病、鼻腔はれ腫れて、鼻孔ふさがり、多く水漏出を分泌す。

【鼻肝】ビカン　いびき。通雅錄「子睡ー一如レ雷」

【鼻齆】ビクウ　はなのあな。蘇軾、焚香詩「不二是聞思所一及、且令ニー一先參一」

【鼻竅】ビケウ　はなばしら。說文「頰、ー一也」

【鼻血】ビケツ　はなぢ。太平廣記「ー一大出」‖鼻衄、衄血。

【鼻衄】ビジク　せせらわらひ。劉子翬詩「少年ー一輕二流俗一、歛レ銳收レ巡今曝乾」

【鼻祖】ビソ　第一のせんぞ、人の始めて生を受くるには、鼻より形を成すといふによる。正字通「人之胚胎、鼻先受レ形、故謂二始祖一爲ニー一」揚雄、反離騷「或ニー於汾陽一」

【鼻息】ビソク　○はないき。元稹詩「ー一荐雷吼」○轉じて他人のきげん、又意向の義とす。後漢書、竇融傳「孤客窮軍、仰二我ー一」

【鼻衄】ビヂク　はなぢ、鼻より血を出す。素問「ー一、又脾移二熱於肝一、則爲二驚衄一」‖衄血。

【鼻窒】ビチツ　はなのあなふさがる。列子

「鼻祈ン室者、先覺二焦灼一」
【鼻孔】ビコウ　地名。史、五帝紀、注「括地志云、一一神在二幽陵北六十里一、故老傳云、舜葬二九疑一、象來主二此、後人立レ祠、因二一一神一」
【鼻液】ビエキ　はなしる、洟。鼻汁。北史、皇甫玉傳「令下道北使二一一者上」＝鼻涕。
【鼻涕】ビテイ　鼽鼻(キウビ)の異名(正字通)
【鼻頭出レ火】ビトウシュツクワ　はなの端より火を出す、勢の極めて盛んなる形容。南史、曹景宗傳「騎三快馬如二飛電一(中略)鼻頭出レ火」＝鼻端出レ火。
【鼻端】ビタン　はなばしら。＝鼻準
【指レ鼻】シビ　自分の鼻を指す、自慢ンする貌。夜談隨錄「自指二其鼻一曰、我三官保望重ン人者」

二畫

【劓】キウ　はなつまり。かぜひいて鼻が塞ッがる。
【劓歟】キウヨ　鼻つまりて、せきが出る。前漢「醫和二神仙之藝一以治ー一ー」
【劓室】キウシツ　鼻ふさがりてつまる。漢書、五行志「秋行二夏令一、民多二一一一」＝鼻塞。
【劓噎】キウエツ　鼻つまりてむせよ。痰、月令「季秋行二夏令一、民多二一一一」＝咽

三畫

【鼾】カン　いびき、ねいき(臥息)○はないき(齁)＝鼻息。
【鼾睡】カンスイ　いびきをかきてねむる。程史「二陵之日、江南亦何郎、但天下一家、風檣之側、豈容二伯人一ー」耶」
【鼾息】カンソク　いびき。范成大詩「睡仙吾所レ羨、行步亦ー一」
【鼾雷】カンライ　おおいびき。黃庭堅、題二東坡字後一「卿雲就レ臥、鼻鼾如レ雷」

四畫

【齁】ゴウ　はなぢ(鼻血)＝鼽。

五畫

【齁】コウ　はないき(鼻息鼻声)
【齁齁】コウコウ　はないきの音の形容。謝詩「鼻息一一自成レ韻」
【齁睡】コウスイ　いびきのこと。皮日休詩「鼻息一一自成レ韻」
【齁鼾】コウカン　いびきをかいて眠る。樂善錄「既而ー一」

九畫

【齆】オウ　もがさ(面瘡)＝齇。

十畫

【齆】キウ　はなばしら(鼻梁)史、蔡澤傳「鵰顏蹙ー膝撃」＝頞(二一九〇頁二段)

十一畫

【齺】サイ　ざくろばな、鼻のもがさ(鼻上疱)鼻の上に赤き斑ある病。＝酒糟鼻。
【齺主】サイシュ　ざくろばなの王氏の義。錢曹、王錢龍傳「王氏世、齺鼻、江東謂二之一一」(錢龍鼻大、浩曰、眞貴種也」浩は後浩。

齊部

【齊】(一)セイ・サイ　(二)セイ・サイ　(三)サイ　(一)ひとし(等)たひらか(平)「一一」說文「禾麥吐穗、上平也」○ただし(正)○ひとしく、みな(皆)おしなべて。史、平準書「民不ー出二于南畝一」○ととのふ(整)ととのへをさめる。論、爲政「一レ之以レ刑」○をさまる(治)大學「家一而后國治」○おなじ(同)孟、公孫丑「地醜德一」○そろふ(揃)○つらぬ、つらなる(列)○おごそか(莊)つつしむ(愼)○ひとしくする。○なか(中位・中正)○はど、かぎり(制限)○わかつ、わきまふ(辨)○すみやか(速)○つよし(壯)○そなふ(備)○ほぞ、へそ。古、臍に通ず。左、莊六「後君嘔ー一」○のぼる(升)騎に通ず。禮、樂記「地氣上ー一」○國名。周代の諸侯、後、秦に滅ぼさる。今の山東省濟南府地方。○朝名。南朝にて齊道成を祖とす、七世二十二年にして梁に禪る。又、北朝にて高洋を祖とす、五世二十八年にして後周に滅ぼさる。(二)調和した

る食味、料理のあんばい。周礼、食医「八珍之一」○あへもの。薬に通ず。㊁ものいみ。論、述而「子之所慎、一戦疾」‖齋。㊂もすそ。裳下の縁。論、郷党「摂一下堂」○なづな、草の名。薺に通ず。

同訓異義　齊・調・整・匀の別は調（一八一六頁三段）の條を見よ。○齊・伴・均・等。○齊は禾麥の長短なく、そろひて生ぜる義、ととなふとも訓む。○伴は齊等也、同じやうなる義。衛風「淇與二人一伴」○均は土器を造るろくろなり、ひとしと訓むとき、平かにして高低なき義、分の肉均、被覆物の類、皆等分の意なり、鈞に作るも同じ。○等は差等・等級などと通用す、しなと訓む、段のことなり、ひとしと訓むとき、同の字に同じ。通典「齊等二公侯一」

【齊安】地名。今の湖北黄岡縣の西北百二十支那里に在り。杜牧に「九日一一登高詩」あり。

【齊一】ひとし、一つにそろふ。後漢書、班彪傳「多不一一」

【齊整】ひとしくそろふ。禮記、疏「言語一一、與人之德音、皆一一不二參差一」

【齊雲】古、江蘇省吳縣の子城の上に在りし高樓の名。五代史「錢鏐、昭宗幸二其國一、登一一樓一、西北望二京師一、思レ歸」王禹偁、黄州竹樓記「一一落星、高則高矣」

【齊家】家庭をよくととのへをさめる。字解参看。‖治家。

【齊譜】古書の名。莊、逍遙遊「一一者志レ怪者也」（一説に、齊國に行はるる諧謔の書。又、一説、一一は、怪談を善くする人の姓名）

【齊制】ひとしくたちわる。南史、張永傳「永參二時師一、進與二王卒一同二甘苦一、朝廷所二給賜一隨レ減、必莫レ一一、手自頒賜」

【齊眸】眸を合せてひとしくながめる。盧照鄰詩「衡レ淚一一、雙レ流レ赴二海鳥一飛」

【齊給】○才智がはやくまはる。韓詩外傳「一一便捷、不二以敬一レ人」○ひとしくあてがふ。

【齊均】ひとしくそろふ。其綱證賦「厚薄一一、當照如レ一」

【齊社】そでをそろへて奉儀を記しくす。說苑「王北面正レ領一レ日、先生何知之早也」

【齊恭】○つつしむ。○（だてなくうやまふ。沈約文「分レ階等禮、異レ列一一」

【齊肩】ひとしく馬をかけらす。才力が相等し。漢記文「臣與二二子一一、然校レ德考レ年、彼皆有二一日之長一」二子は宋璟・陸象先。

【齊敗】ひとしくよろこぶ。宋史、樂志、三宮一一、萬福咸歸」

【齊相晉文】五霸の中にて最も勢力ありし齊の桓公と晉の文公と。孟、梁惠王「一一之事、可レ得レ聞乎」

【齊敬】○心身をととのへつつしむ。禮、祭義「豈知神之所レ饗、亦以主人有二一一之心一也」○心をととのへてつつしむ。

【齊明】ひとしくさけよ。南史、宋武帝紀、義熙檄入一一、莫レ不歡歎」

【齊肩】かたをならべる。李白詩「小兒名二伯禽一、與レ姉亦一レ一」‖並肩。

【齊整】かざり。晉書、羊琇傳「琇性奢侈、用無二復一一」

【齊整】つつしみおごそか。賈山、至言「一一之色、動容之容」

【齊國】中國をいふ。列、黄帝「華胥之國、在二弇州之西、台州之北一、不レ知下幾一一一萬里上」（一説は誤）‖齊州。

【齊莊】おごそか。中庸「一一中正、足二以有レ敬也」‖嚴莊。

【齊插】一様にさしはさむ。海瑞臣詩「一一二宮花一洋關」

【齊志】こころざしをひとしくす。四庫賦「都邑游俠張趙之倫、一レ一無レ恩」

【齊齒】ひとしくならぶ。隋記、與二家僕一雜居一一、非レ國也」

【齊衆敗績】齊國の軍兵は世に珍重せられども、もとふるき軍卒ら自相レを染めなほしたるに過ぎず。功は即ち敗よりも生ずといふ喩。戰國策「智者之舉事也、轉レ禍而爲レ福、因レ敗而成レ功者也、齊人第一敗績也、而霸十倍」史、蔡澤傳「智者轉レ事、因レ禍爲レ福、轉レ敗爲レ功、一一也」

【齊心】○夫婦が心をあはす。古詩「一一同レ所レ願」‖同心。○士卒が心を一にする。後漢書「一一合レ衆、郎鄂不レ足レ圖也」

【齊如】おごそかに敬ふ貌。論、鄉黨「一一、鞠二躬如一レ也」

【齊整】五十九卷、梁の蕭子顯撰す、本紀八卷、志十一卷、列傳四十卷に分つ。

【齊吹】樂人が口をそろへてふく。樂書、內傳說「齊宣王使二人吹レ竽、必三百人一一」

【齊正】ととのへただす。詩經、疏「天子設加二四海一、一一萬方一」

【齊整】うやうやしくつつしむ貌。禮、祭統「一一乎其敬也、愉愉乎其忠也」

【齊整】つつしみふかくかしこし。書、微子之命「克一一厥德」

【齊整】ひとしくととのふ。魏志、韓暨傳「村落一一如レ一」三代史、魏彦章傳「晉人望二其行陣一一一、知二彦章必在一レ此也」

【齊邁】つつしみてちかまる。國、王褒「見二所レ尊者一一一」

【齊侯】サイ　爵は五級の一の第縲なる泰山、周代の齊の國にあるが故。莊子「天子之劍、以三燕谿石城一爲レ鋒、一ー爲レ鍔、晉魏爲レ脊、周宋爲レ鐔、韓魏爲レ鋏」

【齊女】サイジョ　蟬の異名。古今注「一名玉女」蔡仲舒、答問書「董仲舒曰、齊王之后、怨レ王而死、變爲レ蟬、故名二一ー一」

【齊東野人之語】サイトウノヤジンノカタリ　齊の東邊の野人は愚にして其の言、信ずるに足らず、よりて信じ難き妄說をいふ。孟、萬章「此非二君子之言一ー也」

【在レ齊太史簡】ザイセイノタイシノカン　齊の太史が直筆して罪を畏れざりしをいふ、古は竹簡を用ふ、文天祥の正氣歌の句。左、襄二五「齊崔杼殺二莊公一、太史書曰、崔杼弑二其君一、崔子殺レ之、其弟嗣書、而死者二人、其弟又書、乃舍レ之、南史氏聞二太史盡死一、執レ簡以往、聞二既書一矣、乃還」

【齊年】サイネン　同じ年に進士に及第せし人人。晉唐書、武元衡傳「始元衡與二吉甫一ー一、又同日爲二宰相一」ー同年。

【齊髭】サイヒゲ　たてがみをきりそろへる。宜和畫譜「如下馬不ニー一ー一人不レ修二沐上」

【齊眉之禮】サイビノレイ　つつしみて夫によく事へる禮法。漢書、梁鴻傳「鴻妻孟光每ニ供食一ー、擧レ案齊レ眉」

【齊斧】サイフ　征伐に用ふるをの。晉書書鵠「ー一征伐斧也、以整二齊天下一也」

【齊平】サイヘイ　ひとし。謝靈運文「綱遠邪互、側直ー一」

【齊編】サイヘン　ひとしく組み入れる。抱朴子「ー一庶民一、而心數二于有士一」

【齊民】サイミン　平民。民は齊等にして貴賤なきが故。史、平準書「ー一無二藏蓋一」

【齊民要術】セイミンヨウジュツ　書名、九十二篇、後魏の賈思勰撰す、農圃衣食の法を詳述す、文章古雅、援據博奧、農家の書の最も古くして典核なる者。

【齊名】サイメイ　其の名をひとしくする。北史「范陽祖瑩、與二陳郡袁翻一ー一レ秀出、時人爲レ之語曰、京師楚楚袁與レ祖、洛中翩翩祖與レ袁」

【齊盟】サイメイ　同盟をいふ。國語「諸侯有レ貳未レ退、而谷背レ之、安用ニー一」

【齊慄】サイリツ　おそれわななく。晉、舜典「祇載見二瞽瞍一、夔夔ー一」ー齊栗。

【齊力】サイリキ　ちからを同じくあはせて事をする。揚雄「戎事ー一レ、田獵齊レ足」

【齊魯】サイロ　春秋時代の二國の名、皆文學の興盛の地、故に文化を盲ふ者、仮に之を稱す。蘇軾詩「我生本四南、爲レ學慕ニー一」

【齊論】サイロン　論語の別本、齊人の習ふ所の者、今傳ふる所の魯論に比すれば問王・知道の二篇多し、合せて二十二篇、篇内章句、亦頗る異あり。

【齊戒】サイカイ　ものいみして修省する。易經「君子以レ此ー一」ー齊戒。

【齊宿】サイシュク　ものいみして一夜をすごす、誠を致す義。孟、公孫丑「弟子ー一而後敢言」ー齊戒越宿。

【齊明】サイメイ　ものいみをして心を正しくする。中庸「ー一盛服、非レ禮不レ動」

【齊衰】シサイ　喪中の服、麻にて作り裳をぬひ合せたるもの。喪服の斬衰に次ぐもの。儀禮、喪服「疏衰裳齊」傳「齊者何、緝也」鄭注「疏、猶レ麤也」

【齊盛】セイセイ　黍稷をもりて神に供へる。禮記「天子親耕二於南郊一、以共ニー一ー一」ー粢盛。

【齊疏】シソ　喪服の名、あらき麻布にて作り、裳の下をぬひあつめたるもの。孟、滕文公「齊衰參省。

三畫

【齋】㊀サイ・セイ 俚 ㊁シ 支

㊀ものいみ。神佛を祭る時などに若干日の間、飲食行爲をつつしみ心身を齋へて一にする行爲。古、齊に作る「散ー」「致ー」「精進潔ー」「ー浴沐浴」〇ものいみする、ものいみして謹愼する、ものいみし祭る。〇へや、學問をするへや。又燕居のへや「山ー」「書ー」名臣言行錄「學中故有二經義一ー治事ー」〇齋ときゝ、僧を召して經を誦せしめる。法會のときの食事。㊁喪服の名。裳のすそをぬひしもの（又齊に作る）孟、滕文公「ー一疏之服」ー繐。〇圖いつく。けがれを去りて神に謹み仕へる。

【齋院】サイイン　祭の前日に事を執る者のものいみする所。唐書、禮樂志「潔齋三日乃祈二社稷一、七日不レ雨、更ー一如レ初」ー齋時。

【齋屋】サイオク　ものいみするいへ。晉史「王延之清貧、居宇穿漏、宋明帝敕二材官一、爲起二三間ー一」ー齋舍。

【齋戒】サイカイ　ものいみする、神を祭る時に、心身又飲食を愼み、穢を去る、又其の行爲。禮記「ー一以事二鬼神一」ー齊戒。

【齋祈】サイキ　ものいみしていのる。晉書、禮儀志「潔齋三日乃祈二社稷一、七日不レ雨、更ー一如レ初」ー齋時。

【齋宮】サイグウ　〇いつきのみや。天子の大嘗の祭に齋を致すの所。周語「王卽ニー一、百官御事、各卽二其齋三日一」漢書、宣帝紀「神光燭二未ー一」〇圖ゲイ古、天子卽位の時毎に、伊勢の神宮に奉仕せしめられし齋王の稱。

【齋供】サイグ　ときのめし（齋飯）を供する。列仙傳「出赴ニー一ー」

【齋潔】サイケツ　つつしみていさぎよくす

る。後書、胡國珍傳「年老雅敬二佛法一、時非二一一一自齋禮拜一」‖潔齋。

【齋庫】サイコ　祭祀用の物品を蔵めおくくら。南史、齊豫章王嶷傳「一一失レ火、燒二荊州還齊評直二千餘萬一」

【齋座】サイザ　ものいみするばしょ。宋書、吉翰傳「時子二一一見二其事一」

【齋日】サイジツ　ものいみする日。後漢書、禮儀志「凡齋、天地七日、宗廟山川五日、小祠三日」皮日休詩「野客掏時分二竹米一、隣翁一一食二藤花一」

【齋車】サイシャ　まつりに用ふるくるま。禮記「天子巡狩以遷二廟主一行二載於一一一

ぜたる食品。‖醢。○しほから（醢醬）○くだく（碎）○まぜる（和）

齒部

【齒】シ　俗字

○は、小兒の一は二十、之を乳一といひ、成人の一は、約三十二、之を永久一といふ「兒一」「屑一」「皓一」「齲一ム」○きば（牙）○すべて物の排列して一の狀をなすものの稱「鋸一」「一車」「屐一」○はじめ（始）○よはひ（齡）とし（年）「年一」「壯一」「暮一」論、意問「沒一無怨言」としばへ（年次）としかさ、中庸「所以序一」○つらなる（列）同列にならぶ、比肩する。左、隱十一「不敢與諸任」「」○かぞふ（數）馬の年齡をかぞへる。曲禮「一路馬」有詠（路馬は天子の乘馬、敬を廣むる所以）○たゞひ（頰）○はの生えること。○石の棱などのならべる貌。

【齒ノ通】ボウヴォワス　壽命が終る。字解參看。‖終身。

【齒牙】ガは。はと、きば。史、叔孫通傳「此特竊鼠狗盜耳、何足ル置二之一一間一」（說二一一は論議する義）‖牙齒。

【齒ノ惜二齒牙餘論一】シノアシトシノ人の言語は齒牙の間より出づ、故に推稱せられんことを人に請ふ辭。世說「謝玄嘗好ム奬二人才一、會稽孔顗齒有二文義一、未レ爲二時人所一レ知、孔稚圭曾令レ其二論表一以榮二玄曜一、玄曜嗟歎良久、自折レ簡寫レ之、語二稚圭一曰、是子齒名未レ立、應二共奬成一、——」

【齒落】シイ　齒の上下ふれあたらところ。正韻「一一、脣上下相接處」

【齒位】シはかゐ　もと、序上下相接處」序一一錄者之意、合經時流之集」

【齒痒】シンはがゆき。‖齒噬。

【齒根】シン　齒條に同じ。

【齒科】シンクワ　齒の病を治療する醫術。

【齒德】シイ　みづは。老人の齒の落ちて更に生ずる小さき齒。柳宗元、萬石亭記「吾傷生爲レ病二蚤一、眉髮一一、未レ曾知二老一」‖乳齒。

【齒根浮】シンコン　はの根がうきて動く。歐陽修、奏二禮院一論「一時「齲齒已自——」

【齒間】シの　齒の根のはまる頷骨の穴。

【齒次】シ　年齡順にならぶ。又、同列にならぶ。北史、崔浩傳「與相一一、厚存二接之一」

【齒痕】シ　多くの石のかどのならべる貌。‖齒牙。

【齒德】トク　年齡と德行と。禹年と德齒と。三途歸（三三三頁參看）

【齒髮】シノ　人老ゆれば齒落ち髮白し。故に一一を以て年齡の徵驗とす。杜甫詩「鏡中看二一一一御同知命謙」、「河上有二齒髮一白屬易誰」

【齒物】フル　はと、くちきと。韓非子「一一形資、伯樂不レ能二以必一馬」

【齒老】シラウ　としよる。史、晉世家「公笑曰、馬則吾馬、齒亦老矣」‖年老。

【齒輪】シン　工業器械の一、用ひて以て力を助くる者、軸の周圍に齒あり、互に相嚙接し、旋轉する時、甲輪より乙輪に傳達し、以て各種の器械を運動する用を爲す。

【齒冷】シ　嘲笑の貌。南史、齊、蕭惠開「人笑稱公一至今一一」

【齒列】シンれつ　ならび、又其の如く同等にならぶ、同じならび。後漢書、五行傳「其不レ從二法制一、不レ式二王命一、謂レ之參身、雖レ會二故舍一、不レ得二一一」

【齒錄】シロク　收錄する記。北史、齊、文宣帝紀「酒動乃然、未レ能一一者、悉求班貿」

【不レ見レ齒】ハズメ　激しく笑ふ、大いに笑ふときは齒の本を露はす、中くらゐに笑ふときは齒を露はす、微笑ふときは齒を露はさず。禮記「高子皐之執二親之喪一也、泣血三年、未二嘗見レ齒、君子以爲一難」

【齒如二瓠犀一】ハコトシ　齒ならびの美くしき形容、瓠犀はゆふがほのたね。

詩、衞風「碩如二膚寸一——」【固蔽舌存】ソンスル則なる者は先づ破れ、柔なる者は永く存在する喩。老子の言。說苑「夫舌之存也、豈非レ以二其柔一耶、齒之亡也、豈非レ以二其剛一耶」＝齒亡舌存。

齔 書

【齔】シン 說(次條)に同じ。

齕 書

【齕】シン 齔 說 又、齟に作る。

○齒がぬけかはる(毀齒)說文「男八月生齒、八歲而一、女子七月生齒、七歲而一」○はのぬけかはる頃のこども、いとけなし「幼一」「沖一」後漢書「年皆童一」

【齕若】シンジャク 說は齒がぬけかはる、齔は髮を垂れる貌。よりて幼兒の貌とす。潘岳、楊仲武誄「皆未二一一一、如二彼危根當二此齒齕一」＝齔齕。

【齕童】シンドウ 齒のぬけかはるとしごろのこども。東觀漢紀「耿弇歷二語高之節一一時、介然特立、不レ與二於時一」＝齔說)

齒 書

【齒】ケツ 屑 月

かむ、かじる(齧)「齟一」曲禮「恒瓜處人一之」

【齒齕】ケツコツ かじる。陸雲「浪所レ過輒碎、被撓、未嘗未熟、輒一一投注」＝齟齕。

【齒苦】ケツク まめがらをかむ。方回詩「一一老馬腹中寒」

【齒齧】ケツゲツ かむ。蘇軾、人參詩「上藥無二他奇一、一一盛二根柢一」

【齒咋】ケツサク かみくらふ。淮南子「一一黑二白肥一肌膚充」

【齒噬】ケツゼイ かむ。晉書、孔坦之傳「今六軍誠疲、水陸資賴、無二齒噬勝一、一一爭レ先」

【齒嚙】ケツコウ かみくらふ。潘岳、楊仲武誄「慎中常訓二爾鋒一、無レ對二讒官一、過レ隙亦齒一一」

【齒吞】ケツドン 動物中、物を食ふに噛まずして呑むもの、禽鳥の類。淮南子「一一者八竅而卵生、胎生者九竅而胎生」

齒 四 畫

【齒】ガ 禡 禡

○歯一ガは人の語をききいれざること。○齒牙かならず。

齗 カイ 卦

○はぎしる、齒が相切する、はがみする。○齒一は齒の上下相抵するところ。

齦 ギン 文

○はぐき、齒の根を圍める肉、はじし。＝齦。○一一ゲンはあらそひ爭ふ貌。

【齦齦】ギンギン はぐき。柳宗元文「石首魚然陰二峻流一、若二列領一一一」

【齦齦】ギンギン ○辯じ爭ふ貌。史、孔子世家「孔子曰、甚矣魯道之衰也、洙泗之間、一一如レ也」○いかりにくむ貌。五に怨疾する。後漢書、劉向傳「朝臣一一」

齪 サク 藥 五畫

【齪】サク シャク 藥

かむ、かじる(齧)＝齰。

【齪齪】サクサク かみきる。＝齰齪。

【齪舌】サクゼツ したをかむ。史、滑稽傳「魏其必齪レ舌、杜レ門一一自殺」

【齟】シャク 藥

脚本傳奇類の一回を一一といふ。きり、くぎり、一節。路史「高則誠琵琶、有二第一一第二一」、考二諸韻書一、竝無二此字一、必齟之誤也、牛食呑而復吐曰齟、似レ慢人入而復出也」齟は昔チ、北音尺ジャと近し。字彙補「傳奇中一回爲二一一」

齟 ソ 魚 通音 ソ

○かむ(齧)○一齬は齒がくひちがふ貌とす。

【齟齬】ソゴ 上下の齒が不正にして相値ゞはず。轉じて物事がくひちがふ。太玄經「其志一一」又、鉏鋙に作る。楚辭、九辯「圜鑿而方枘兮、吾固知二其鉏鋙而難レ入」

齠 テウ 蕭

○始めてぬけかはる齒、みそっぱ、乳齒、毀齒。○齒がぬけかはる。又、其のころの幼兒。＝齠。

【齠齔】テウシン 齒のぬけかはる頃のをさなきとし。又、其のこども。揚雄、典文「凡爾一一務レ學、好學不レ遲」＝齠年。

【齠齔】テウシン 七八歲のこども。陳信文「來レ遊二一一一已聽二論天下事一」白居易詩「一一七八歲」

【齠童】テウドウ 幼きこどもと、年老いたる者と。宋郎、明堂頌「存二問一一一、尊受賢童」

【齠年】テウネン 齠齔に同じ。陳信文「結愛

巍然、一一成ㇾ鋸」元稹詩「恰背原翔城、一一淨淨栄」＝幼稚。

【齠髮】ヂウ 幼きこども。韶は髫の俗字。庾信文「觀三虎於蜜一一不ㇾ驚」

【齡】レイ 詩

よはひ、とし(年齒)震雒「一年也、古者謂ㇾ年爲ㇾ一、齒亦一也」「年一」「幼一」「妙一」「延一」「高一」「馬一」

六畫

【齩】カウ ゲウ 肴

かむ(齧)郡伯溫、聞見錄「汪信民常言、人常一得菜根則百事可作」＝咬。

【齩齧】カウゲツ かじりてかむ。蘇軾詩「我貧如二飢鼠一晨夜空一一」

【齦】㊀ギン ㊁コン 㒳文 㒳

㊀はぐき(齗)「齒一」㊁かむ(齧)韓愈、贈成王碑「蘇枯弱彊一其姦猖」

【齧】ゲツ 屑

○かむ(噬)かじる、くひつく、「噬一」「蹄一」「齟一」曲禮「毋一骨」○かみくだく、くひやぶる。○齒をくひしばる、切齒する。○くひ入る、くひこむ、侵蝕する。戰國策「水一其基」○くらふ、くふ「啗一」

【齧岸】ゲツガン 水の勢にて岸にくひ入る。金史、河渠志「水性湍渦、峻則奔流漩洄、一ㇾ一善崩、湍則泥沙淤塞、積淖成ㇾ淺、不ㇾ能ㇾ勝ㇾ舟」

【齧殺】ゲツサツ かみころす。漢書、江都王傳「或齧ㇾ狼令二一一之」

【齧膝】ゲツシツ 良馬の名。王褒文「駕二一一」杜甫詩「爭ㇾ道朱蹄驕一一」(馬怒して餘氣あれば常に膝をかみて行くが故)

【齧噬】ゲツゼイ かむ。論衡「他物大小、連相一一」＝噬齧。

【齧雪】ゲツセツ ゆきをかみくらふ。漢書、蘇武傳「臥ㇾ武、置二大窖中一、絕不二飲食一、天雨ㇾ雪、武臥ㇾ一、與二旃毛一幷嚥ㇾ之」

【齧粉】ゲツフン いねをかむ。易林「螟齧二我稻一、雖不ㇾ可ㇾ去」

【齧破】ゲツハ かみやぶる。晉書、王濟傳「一一而吐之」

【齧ㇾ肥】ゲツヒ 肥えて美味き肉をくらふ。劉禹錫文「可二以持ㇾ鬪而一ㇾ一、飴ㇾ子而衣ㇾ妻」

七畫

【齬】ギョ 魚 通呉

【齟】サク 藥 【齪】同

かむ(齧)＝齪。

【齟齬】サクヨ かむ。急就篇、注「齟者齧ㇾ物口中之骨主二一一者ㇾ也」

【齷】シク 沃

握一アクは急促の貌。齷齪アクセクに同じ。漢書、鄭食其傳「握一好苛禮」齷(次畫)を見よ。

九畫

【齷】アク 覺

○一齪アクは齒のこまかく密なる貌。○轉じて心がせまし、こせつく、あくせくする。鮑照、短歌行「小人自一一齪、寧知曠士志」＝握齷促。促握齪。○小さき事柄。小事。○圖不潔の義。

【齷齪】ガク 藥

はぐき(齗)「斷一」＝噛。

【齲】ク 虞

○むしば、むしくひば、朽ちて缺けたる齒。○むし齒がいたむ。後漢書、梁冀傳「冀妻、能爲一齒笑」(齒の痛む如き口つきして笑ひこびる)

【齲齒】クシ むしば。史、倉公傳「齊中大

夫病ニー一」

【齲病】クウ　むしばにていたむ。王襃之ニ、賦姉姑吾ニー所ン作讒又恐不ン任」

【齧】グン　齒がぬける、齒が落ちる。又其の形容。‖齲。

【齲然】ゼン　齒のぬけ落ちたる貌。韓詩外傳「太公年七十二、ー一而齒墜矣」

【齪】サク　齒の相近づく貌。轉じてすべて上下相向ふ貌。荀、王霸「上下一然相信」

龍部

【龍】㊀リュウ　㊁ロウ　㊂バウ　冬　腫　江　㊀の通音　竜は古字

㊀たつ、想像上の神靈なる動物、鳳、麟、龜と合せて四靈といふ、鱗蟲の長、よく雲を起し雨を呼ぶといふ、其の鱗あるを蛟ー、翼あるを應ー、角あるを虬ー、角無きを螭ー、未だ天に昇らざるを蟠ーといふ。埤雅「ー八十一鱗、具ニ九九之數一、九、陽也」說文「ー、鱗蟲之長、春分而登レ天、秋分而入レ川、順也」○轉じて天子に關する物事にいふ、易の乾卦の「飛ー在レ天」の語に本づく「ー顏」「ー駕」○歲星をいふ。左、襄二八「ー宋鄭之星也」○高さ八尺以上の馬。禮、月令「繫ニ著ー」○いつくしみ。古、龍に通ず。詩、商頌「何天之ー」（何は荷）○すぐれたる豪傑の士に喩ふ「伏ー」「臥ー」㊁こだかきうね。古、壟に通ず。孟、公孫丑「有ニ私ー斷焉」㊂まだら（雜色）黑白のぶち。‖尨。

【龍逝】リュウセイ　龍が逃し去る。貴人の隱れて野に在るに喩ふ。晉書、東晳傳「在レ野者ー一、在レ朝者鳳集」

【龍淵】エン　龍の棲むふち。淮南、地形「清水有ニ黃金ー一、有ニ玉英ー」

【龍淵太阿】タイア　龍泉、太阿に同じ。戰國策「ー一、皆陸斷ニ馬牛ー、水擊ニ鵠雁ー」

【龍興而致レ雲】ウンヲイタスニ　聖德ある天子は、賢明なる臣を用ふるに喩ふ。王褒、聖主得ニ賢臣ー頌「世必有ニ聖智之君ー、而後有ニ賢明之臣ー、故虎嘯而風烈、ー一」

【龍蟠虎踞】コキョ　地勢の雄壯なるを形容す。晉書、周顗傳「江山之固、此乃天然之險、誠如レ卿言」

【龍章】ショウ　天子のみくるま。隋書、音樂志「飾ニー一、建ニ鳳旂ー、指ニ閶闔ー、趨ニ脣城ー」杜知之詩「隨遊ー一轉、天樂鳳笙聞」‖鸞鑣、鳳駕。

【龍蛟】コウ　たつと、みづち。北齊、皇夏樂歌「風雲驟ニ九城ー一、躍ニ四溟ー」‖蛟龍。

【龍行虎步】コウコホ　りゅうの如く行き、とらの如く歩む。すぐれたる威儀ある貌。宋書、武帝紀「高祖ー一、龍瞳不レ凡」

【龍袞】コン　りゅうをきざめるたるき。魯靈光殿賦「雲龍蜿蜒、ー一雕鐫」

【龍眼】ガン　熱帶地方に產する植物。圓き茶褐色の果實を一一肉といふ。後漢書、和帝紀「嘉南海、獻ニー一・荔枝ー」海錄碎事「ー一、名亞荔枝」‖益智。

【龍顏】ガン　たつのあぎと。註「高祖隆準而ー一、下ニ子龍得ニ玉者必遵ニ其曜ー也」陸機、珠還合浦賦「利用博博何必取ニ之千ー一」

【探ニ龍頷ー】タンリュウガン　美利を獲んが爲めに甚だしき危險を犯すに喩ふ。前條を見よ。

【龍顏】ガン　天子の御顏。史、高祖紀「高祖爲ニ人、隆準而ー一」史記周紀集解「帝王世紀曰、文王ー一虎眉、身長十尺、有ニ四乳ー」李白、上雲樂「拜ニー一獻聖壽」

【龍龍】リュウ　佛像を入れるづし。李嶠文「車轍馬跡、猶鳴ニ於四昇之山ー、佛影ー一、不レ紀ニ於東林之石ー」

【龍忌】キ　火を焚くことを禁ずる日。後漢書、周舉傳「太原一郡、舊俗以ニ介子推焚ー、有ニー一之禁ー、士民每冬中輒一月寒食、莫ニ敢煙爨ー、舉既到レ州、乃作ニ書設ニ子子推之廟ー、宜ニ示愚民ー、使ニ還ニ温食ー」

【龍旂】キ　交龍を描き、鈴を懸けたる旗。詩、釋天「有レ鈴曰レ旂」註「縣ニ鈴于竿頭ー、畫ニ交龍於旒ー」禮記「ー一九旒、天子之旌也」詩、周頌「ー一陽陽、和鈴央央」

【龍旗】キ　前條に同じ。騰蛇將、旗銘

「一一所レ指、八表澄清」【龍殿】リョウデン 天子のうまや。魏書、成淹傳「賜二淹一一上馬一四」通典「梁太僕有二一一一、唐改二一一一一爲二典厩署一」【龍吟】リョウギン ○たつがうそぶく。易經、疏「一一則景雲出、虎嘯則谷風生」○鮮樂の調の一。荘南傑、陽春曲「風叫一一白日長」【龍宮】リュウグウ 海中にありといふ龍王の宮殿。錄異記「入二一一一得二水仙一矣」【龍馭】リュウギョ ○天子の馬車を御する。晉唐書、音樂志「歌二泰畤一、今禮獻終、六一一、今神將レ昇」○天子が民を治める。錢起、觀二法駕一詩「聖情蘇二品物一、一一圖二雲背一」【龍駒】リュウク ○すぐれたるこうま。張說、舞馬詞「帝皐一一沛艾、星開驅子稱奇」○轉じてすぐれたるオある兒。晉書、陸雲傳「此兒若非一一當二是龍雛一」【龍光】リュウコウ ○君子の徳を賞賛していふ。龍は龍に通ず。詩、小雅「既見二君子一、爲レ龍爲レ光」○人のやうすの敬稱。風采。後漢書、高彪傳「裂一一見二一一、以救二腹心之願一」○刀劍の氣。王勃、滕王閣詩序「物華天寶一一射二斗牛之墟一」＝劍光。【龍溪】リュウケイ 地名。今の福建、汀州府に屬す。宋史、食貨志「散茶出二淮南一、有二一一一雨前雨後之類一」王昌齡、送二崔參軍往二龍溪一「一一只在二龍標上一、秋月孤山兩相向」【龍華會】リュウゲエ 四月八日の灌佛會をいふ。荊楚歲時記「四月八日、諸寺各設レ齋、以二五香水一浴レ佛、作二一一一」【龍虎】リュウコ ○たつと、とらと。易、乾卦「雲從レ龍、風從レ虎、聖人作、而萬物覩」○異常の雲氣。史、項羽紀「吾令二人望二其氣一、皆爲二一一一一成二五采一、此天子氣也、急擊勿レ失」○文章のすぐれたるをいふ。班固、答賓戲「源二道德一、經二之文一蓋矣」○風采のすぐれたるをいふ。應璩、與二侍郎諸郎一書「以二一一之姿一、遭二風雲之會一」【龍虎榜】リュウコボウ 傑出せる人が同時に進士の試驗に及第せしはりだし。聞奇類林「陸宣公主レ試、得二韓愈、歐陽詹等一皆天下英傑偉傑之士、號二一一一一」【龍骨車】リュウコツシャ みづぐるま。蘇軾文「江浙間、人日二水車一爲二一一一一」陸游詩「一一鳴水入レ塘、雨來猶可レ望二豐穰一」＝翻車。【龍袞】リュウコン ○りょうのあやある天子のころも。禮、禮器「天子一一、諸侯黼、大夫黻」○古の大臣の服。禮、王制「上公服二一一一」【龍旂】リュウキ 頭の日月角、即ち中央の高きひたひ。天子の相貌。劉峻、辨命論「一一日角、帝王之表、河目龜文、公侯之相」【龍象】リュウゾウ 龍も象もすぐれたる動物。學德ともにすぐれし僧侶に喩ふ。維摩經「菩薩勢力壁如二一一一」に本づく。【龍脚】リュウキャク 肉の高く起りたるひたひ。晉書、王浚傳「身長七尺八寸、一一大異、少二言語一」【龍變】リュウヘン すぐれたるそへうま。魏書、李平傳「雲軒鑒轅、行幸有レ期、鳳服一一、莊駕近日」【龍山落帽】リュウザンラクボウ 晉の孟嘉が龍山（今の湖北省江陵縣の西北十五支那里に在り）の會に帽子を落したる故事。晉の孟嘉、桓溫の參軍たり、色和にして正なり、溫甚だ之を重んず、九月九日、溫、龍山に遊ぶ、參僚擧く集る、時に佐吏竝に戎服を著く、風至るあり、嘉の帽を吹いて墮落す、嘉之を覺らず、溫、左右及び賓客を勅して言ふ勿からしめ、以て其の擧止を觀る、嘉良や久うして厠に如く、溫取りて之を還さしめ、孫盛に命じて文を作り、嘉を嘲らしめ、嘉の坐處に置く、嘉還り見て卽ち之に答ふ、其の文甚だ美なりき（晉書、孟嘉傳、事文類聚前集卷十一）【龍子】リュウシ ○たつの子。列仙傳、琴高入二涿水中一、取二一一一一」○名馬の名。西京雜記「漢文帝良馬九匹、一名二一一一」○蜥蜴の異名。【龍子衣】リュウシイ 蛤のぬけがら。本草「蛤蜕、一名一一」【龍蜥】リュウセキ 良馬の四頭立の馬車をいふ。淮方生、七啓「策二一一一以間遊、問二處人于中林一」【龍舟】リュウシュウ 天子のみふね。隋天子傳「天子乘二一一一鳥舟一、浮二於大沼一」隋書、食貨志「煬帝造二一一一」【龍湫】リュウシュウ たき（瀑布）横鎗、大龍湫詩「廬落山中最奇絶、一一一派天下無」天台志「廬落山有二一一一」【龍集】リュウシュウ 年號の下に記す語、大正十一歲一一壬戌の類。龍は歲星の名、集は次、この星は年に一次周行するが故。何承天、天贊「軒轅改レ物、以經二天人一、容成造レ曆、大撓創レ辰、一一有レ次、星紀乃分」【龍神】リュウジン 水の神、わたつみのかみ。唐庚詩「寄謝一一且安處、熟二睡深潭一不レ驚レ汝」＝水神、龍王。【龍神祠】リュウジンシ 龍神を祭れる社。平定準噶爾方畧、命建二一一於瀚海外路多戈壁、從前無二水泉一、今年大兵經過、鑿井數處、俱得二甘泉一、水勢騰湧、普濟二軍行一云」＝龍王廟。【龍車】リュウシャ 天子のみくるま。金史、道路儀衛、紅繖傘一、一一一等應物、琢綠華賦、「鼓吹簫條兮駕二一一一」【龍涎】リュウゼン 香の名。酒異錄「紙閘香貯二一一香末一」＝龍誕。【龍章】リュウショウ ○りょうのもやう。禮記「旂十有二旒、一一而設二日月一、以象

ン天也」○すぐれた容姿。晉書、郗愔傳「嘗有二風儀一而士二木形骸一不二自藻飾一人以爲二一龍婿一天實自然ニ」

【龍驤虎視】リョウジョウコシ　龍ののぼるが如く、虎の視るが如く志氣の高遠なる形容。蜀志、諸葛亮傳、費詩「亮之業志、進欲二龍驤虎視一苞二括四海一」

【龍驤虎歩】リョウジョウコホ　前條に同じ。後漢書、何進傳「今將軍總二皇威一握二兵要一、——、高下在レ心」

【龍驤鳳振】リョウジョウホウシン　龍ののぼるが如く、鳳のふるふが如きすぐれて武き威勢。晉書、段灼傳「郭文受レ命忘レ身、——、前無二與敵一」

【龍珠】リュウジュ　龍の頷の下にありといふ玉。龍頷を見よ。

【龍種】リュウシュ　○すぐれてよきうま。天馬のたねの意。唐書、吐谷渾傳「有二青海者一周八九百里、中有レ山、須二氷合一游二牝馬其上一、明年生レ駒、龍二一一一

りし時の故宅、監慶坊に在り、宅に井あり、井水溢れて池を成す、中宗の時、しばしば黄龍の祥あり。長安志「一一在二南内南薫殿北龍門南一、本是平地、垂拱後、因二雨水流潦一成二小池一、後又引二龍首支渠一分二流之一、日以滋廣、至二神龍以後一、彌亘数頃、深至二数丈一、常有二雲氣一、或見二黄龍出一其中一、謂二之一一一」唐會要、禮樂志「帝即レ位、作二一一樂一」唐会要「開元二年、詔令レ祠二一一一、十六年、詔置二壇及祠堂一、仲春・仲秋則奏レ之」沈佺期、龍池篇「一一躍レ龍龍已飛、龍德先レ天天不レ違」

【龍茶】リュウダ　上等のちゃの名。宋史、地理志、建寧府貢二一一一」

【龍場】リュウジョウ　地名、今の貴州貴陽府修文縣に在り、明の王陽明は此地の驛丞たり。陽明先生出身始末錄「一一、地在二貴州之四北一、宣慰使之所居、萬山叢棘中、蛇虺成レ堆、魍魎鼠狼、瘴癘蠱毒、苦不レ可レ言、夷人語言、又皆鴃舌難レ解、居無二室廬一、惟累レ土爲レ窟、寢二息其中一而已」

【龍馬】リュウバ　帝王の未だ即位せざるにのやしき。元史、禮樂志「冕旒二一一之沿、久敬二鳳儀之奏一」二鳳闕。

【龍圖】リュウト　神龍が圖を負ひて黄河より出でたる瑞祥をいふ。竹書紀年「一一出レ河、龜書出レ洛、赤文緑字、以授二軒轅一」

【龍脇】リュウキョウ　龍ののぼるが如きすぐれたる勢。曲禮「前二朱雀一、而後二玄武一、左二青龍一、而右二白虎一」疏「如二鳥之翼一、如二蛇之毒一、一一虎賁、無二豆能離一此四物一、虚照隋文「高談則一一豹變、下筆則標飛霧凝」

【龍頭鷁首】リュウトウゲキシュ　天子乘用の舟。龍頭をほり、鷁首をきざむ、鷁は能く風に堪ふる鳥なるが故。淮南、本經「一一、浮吹以娯」注「龍舟、大舟、刻以二龍文一、以爲レ飾也、鷁、大鳥、畫二其象一著二船首一、故曰二鷁首一」

【龍頭蛇尾】リュウトウダビ　始は盛んにして、終は衰ふるに喩ふ。碧巖集「似則似、是則未レ是、只恐一一」傳燈錄「可レ惜龍頭、翻成二蛇尾一」

【龍腹鳳喙】リュウフクホウカイ　龍のひとみと、ほうわうのくびと。極めて貴き人相。唐書、方伎傳「袁天綱、成都人、武后之幼、姆抱以見、紿以レ男、天綱視二其步視一目、驚曰、一一、極貴驗也、若爲レ女當レ作二天子一」

【龍徳】リュウトク　天子の徳をいふ。易、文言「初九曰、潛龍勿レ用、何謂也、子曰、一一而隱者也」

【化レ龍】ケリュウ　仙術にて、竹杖が忽ち龍となりし故事。後漢書、方術傳「費長房隨二壺公一入レ山、以二竹杖一與騎至レ家、長房以レ杖投二妓陂一、顧視則龍也」

【龍馬】リュウバ　○すぐれてたくましき馬。周禮「馬八尺以上爲レ龍」祖錡、雁門行「夫壻乘二一一一、出入有二光儀一」李白、白馬篇「一一花鬣毛、金鞍五陵豪」○伏羲の時、黄河より八卦を背に負ひて出でしといふ神馬。

【龍媒】リュウバイ　よきうま。漢書、禮樂志「武帝天馬歌、天馬徠兮龍之媒」とあるに本づく。劉子翬詩「天廐一一十萬騎」

【龍伯高】リュウハクコウ　後漢の人、名は述、京兆の人、仙都の長となる。馬援誉てその兄の子を戒めて曰く、——は敦厚周慎にして口に擇言なく、謙約節儉廉公にして威あり、吾之を愛し之を重んず、願はくは汝が尊の之に效はんことを、伯高に效ひて得ざるも、猶ほ謹飭の士とならん、所謂鵠を刻みて成らざるも尚ほ鶩に類する者なりと。

【龍場】リュウジョウ　蒙儉の野に潜み居るに喩ふ。李白詩「聽レ學二諏邪人一一一事二躬耕一」二臥龍。

【龍蟠虎踞】リュウバンコキョ　地形の險阻にして要害の堅固なる貌。六朝事迹「諸葛亮論二金陵地形一曰、鍾阜龍蟠、石城虎踞、眞帝王之宅」

【龍蟠鳳逸之士】リュウバンホウイツノシ　非凡の才を抱きて、野に在り、未だ志を展ぶるを得ざる士。李白、與二韓荊州一書「一一、皆欲レ收二名定一レ價於君侯一」

【龍蟠虎踞】リュウバンコキョ　山のけはしく要害の堅固なる貌。又、勢の盛んなる貌。西京雜記「見二其文章一、或如二一一一二」二龍蟠虎踞。

【龍尾】リュウビ　星の名。國語「實謂有レ之、曰、丙之晨、一一伏レ辰」二箕宿。

【龍尾硯】リュウビケン　歙州の硯石の最も佳なる者、安徽省婺源縣龍尾山に出づ、其の石堅緻、發墨に易し、金星を以て貴と爲す、最上の者は形龍尾の如し、之を龍尾金星といふ（文房肆考）

【龍飛鳳舞】リュウヒホウブ　りょうが飛び鳳がまふ。山形の靈異なる形容。吳越備史「郭璞撰二臨安志一云、天目山前兩乳長、——到二餘杭二海門一山起横爲レ案、五百年生二異姓王一、至レ是果驗」蔡襄、書二思親碑「天目之山、苕水出焉、——、苯于臨安」二龍游鳳舞。

【龍文】リュウブン　神童をいふ。北齊書、祖惱傳「此兒駒尚未レ落、已是我家一一、更十歳後、當レ求二之千里外一」

【龍補】リュウホ　玉の名。左傳「昭公二十九年、公使レ獻二一一於齊侯一」

【龍鳳】リュウホウ　すぐれたる人物に喩ふ。南史、王僧虔傳「王家門中優者一一、劣猶二虎豹一」

【龍鳳花箋】リュウホウカセン　龍と鳳凰との紋様ある美くしき詩箋。玉湖「淳化元年、上以二草書一一、及納二龍一鳳二王公近臣一」

【龍鳳團】リュウホウダン　最も上品の茶の餅田錄「茶之品莫レ貴二於一一一」

【龍鳳之姿】リュウホウノシ　すぐれて貴き相貌。唐書、太宗紀「太宗生四歳、有二奇

生一見之日、——、天日之表、其年豐ノ延、必能濟ノ世安ノ民」

【龍逢比干】 關龍逢は、夏の桀王の臣、比干は、殷の紂王の臣、共に忠諫を以て殺さる。漢書、朱雲傳「上大怒曰、小臣居ノ下訕ノ上、廷ニ辱師傅一、罪死不ノ赦、御史將ノ雲下、雲攀ノ檻檻ノ折、呼曰、臣得ノ下從ニ龍逢・比干一、遊ニ於地下ニ足矣、未ノ知ニ聖朝何如一耳」＝龍比。

【龍門】 一名は河津、禹が河水を鑿通せし處、廣さ八十歩、漢の司馬遷はこの地に生まる、故に其の著史記を——史ともいふ。史記、太史公自序「太史公有ノ子曰ノ遷、遷生ニ——一耕ニ牧河山之陽一」又條參看。

【龍門點額】 進士の試驗に落第して退る者の喩。水經「河水又南得ニ鯉魚一」鄒道元注「爾雅曰、鱣、鮪也、出ニ孟冬、三月則上ノ渡ニ龍門一、得ノ渡ノ爲ノ龍矣、否則點ノ額而還ル、白居易醉別二程秀才一詩「五度龍門點ノ額還」

【龍門之遊】 人品のすぐれた人入のあそび。南史、陸倕傳「任昉爲ニ中丞一、簪裾騁ニ譽、預ニ其論一者、殷芸・到洽・劉苞・劉孝綽・殷鈞・劉孝綽及倕而已、號曰ニ——一、雖ニ貴公子孫一、不レ得レ預也」

【龍陽】 男色をいふ、魏王の幸臣を——君といひし故事に本づく。戰國魏策「魏王與ニ——君一共ノ船而釣、——君得ニ十餘魚一而涕下、王曰、何寡、曰臣爲ニ所ノ得魚一也、臣之始得レ魚也、臣甚喜、後得又益大、今臣直欲レ棄ニ臣前之所ノ得魚一也、臣亦將レ棄矣、安能無ニ涕出一乎、魏王於レ是布ニ令於四境之內一曰、有下敢言ニ美人一者上族」阮籍詩「昔日繁華子、安陵與ニ——一」

【龍圖ノ野】 天下がみだれて血を流す喩。易、坤卦「龍戰ニ于野一、其血玄黃」

【龍旗】 天子のみくるまの武士思詩「鳳駕臨ニ香池一、——上ニ翠徽一」

【龍樓】 〇たつのろうこ。後漢書、光武紀「其計固望ニ其變一、——附ニ風翼一、以威ニ中其所ノ志耳」〇松の幹に喩ふ。王維詩「閑戸著ノ書多ニ歲月一、種ノ松皆老作ニ——一」

【攀ニ龍鱗一】 龍のうろこにつかまる。英雄に從ひて大功を立てる喩。前條參看。

【龍樓】 〇宮中の樓門の名。漢書、成帝紀「成帝初居ニ桂宮一、脩ニ太子宮一、爲ニ——門一」注「門樓上有ニ銅龍一、故曰ニ——一」〇轉じて太子の宮殿をいふ。唐高宗、太子納妃太平公主出降詩「——光ニ諸景一、儲館啓ニ朝扉一」

【龍勒】 天子のみくるまを牽く馬につけるくつわ。周禮「革路——」

【龍王】 龍神に同じ。北史、四域傳「波知國、在ニ鉢和西南一、大池有ニ——一」＝龍神。

【龍樹菩薩】 佛滅後七百年の頃（後漢の末）南天竺、婆羅門種の富家の家に生る、佛典の奥義を究め、大乘諸宗の祖師と仰がれ、教化洽く及ぶ、十住毘婆沙論・大智度論・中論・十二門論等は其の主なる論述にして其の疏釋頗る多し。法苑珠林「有ニ大士一名曰ニ龍樹一、天聰奇悟、事不ニ再問一、建ニ立法幢一、摧ニ伏異道一、話ニ生南天竺國一」＝龍猛・龍勝。

【龍腦】 〇香の名。本草「——香消香諸國皆有レ之、乃深山窮谷中、千年老杉樹、其枝幹不ニ曾損動一者、則有レ香、若損動、則氣洩無レ脳」〇支那より舶載し來りて藥品となす。樟腦を精煉せしものなりといふ、透明にして香氣樟腦に似たり、防蟲劑として用ふ。

【龍蛇】 草書（四〇三頁二段）に同じ。

龍 リョウ 東 江

㊀ 書

㊁ 高大なり「一大」柳宗元、三戒「形之一也、類有ニ德」〇みだる（亂）亂雜になる。書、周官「不和政一」〇人の姓。一説は戰國魏の兵法家、後、孫臏と戰ひて敗死す。㊂肥えたる貌。充實せる貌「一洪」詩、小雅「四牡——」

【龍鍾】 いりみだれる（錐亂）唐書、李勉傳「汴州水陸都會、俗——、號レ難レ治、勉撫レ之好抉レ瞷、有レ名於時一」＝龐雜。

【龐統】 字は士元、三國の蜀漢襄陽の人、少時樸鈍未だ識る者あらず、司馬徽人を知るの鑑あり、統を稱す、當に南州の士の冠冕たるべしと、先主荊州を領せし時、統、從事を以て耒陽に守たり、縣に在りて治まらず、官を免す、吳の將魯肅、先主に書を遣りて曰く「龐士元非ニ百里才一也（百里才は縣令をいふ）使レ處ニ治中別駕之任一始當ニ展ニ驥足一耳」と、諸葛亮も亦之を先主に言ふ、先主以て治中從事と爲す、親待すること亮に亞ぐ（蜀志）

【龐德公】 東漢の襄陽の人、嶇山の南に居り、未だ曾て城市に入らず、劉表數〻延請すれども屈する能はず、後、其の妻子を攜へて、鹿門山に登り、藥を采りて返らず。

【龐眉皓髮】 龐は大、皓は白、眉大いにして髮白し。張衡、思玄賦、註「謂ニ漢文帝時翁一、至ニ武帝

時、鑿過三郎署、見二碑——、上問曰、東何時爲レ郡、何其老也」

六畫

【龕】カン　㊀通音ガン

○寺の塔。又塔の下の室。杜甫詩「禪一只晏如」○神佛を安置する小さき箱、づし。佛壇「山ー」「石ー」「佛ー」「經ー」

【龔】キョウ　多

○そなふ（給）＝供。○うやうやし、つつしむ（慤）＝恭。○姓。ー遂は漢の宣帝の時の渤海の太守、治民の事あり。

【龔黃】キョウコウ　漢の循吏、龔遂と黃霸との劉子翬詩「治兵唐推黃霸績、治民漢許ー最」

【龔舍】キョウシャ　漢の武原の人、字は君倩、龔勝と竝に名節を著す、世に之を楚の兩龔と謂ふ、少くして學を好み、經に明かにして仕へず、哀帝の時、龔勝の義を以て徵されて諫大夫と爲り、光祿大夫に累拜す、辭して勝と鄕に還る、郡の二千石長史、初めて官に到れば、皆其の家に至る、師弟子の禮の如し。

【龔勝】キョウショウ　漢の彭城の人、三たび孝廉に舉げらる、哀帝の時、徵されて諫議大夫と爲る、王莽政を秉るに及び、老を告げて鄕に歸る、莽使を以て印綬を奉じ安車駟馬にて之を徵し上卿に拜せしむ、勝曰はく、臣豈一身にして二姓に事へんやと、遂に食はずして死す。謝枋得詩「天下久無ー一深、人間何獨伯夷淸」

龜部

【龜】㊀キ　㊁キン　支　通　龜は本字、龜は略字

㊀かめ、爬蟲の一、腹背皆甲あり、頭・尾・四足を出入する孔を有す、性延齡なり。說文「一外骨內肉者也」謂會「一、甲蟲之長」古の四靈の一。禮記「麟鳳ー龍謂之四靈」壽萬年を經るといひ、人の壽を祝するに用ふ、甲は卜筮に用ひ、又貨幣に用ふ。漢書、食貨志「天用莫」如龍、地用莫」如馬、人用莫」如ー」○有位有官者の佩物。謝靈運詩「解ー在窮年」○うらなふ。又うらなひ。古、一甲を灼きて卜ひしが故「ー卜」○せぼね、脊骨。左、宣十二「射ー貫臂」（臂は著く）○印。古、印の紐ヲにーを刻みしが故「雙ー」○圖人を畫るの詞とす、唐代、樂戶皆綠頭巾を著く、ーの頭が綠色なるが故に、綠頭巾を著くる者を目してーと爲す、樂戶の妻女は皆歌伎、故に妓院を設け妻女をして淫を賣らしむる者を目してーと爲す。輟耕錄に「嘯傲家子孫詩、宅舍皆爲增目冤、舍人總作綠頭ー」の文を載すれば、元の時、すでに人を詈罵するの語と爲したるを知るべし。○ー茲は西域の國名。唐の代、ー茲都督府を置く。今の新疆庫車縣の地。㊁ひひ。ひびがきれる。皹に同じ。莊、逍遙遊「宋人有善爲不ー手之藥者也」不ーは凍りても皹瘃せざるなり。

【灼ー】シャクー　龜卜師ち龜甲を灼きて、其の割れ方に由りて、吉凶を卜ふ。史、龜筴傳「揲レ策定レ數、一レ一觀レ兆」

【龜殼】カメのから。文同詩「除蹄供二藏肥一、一問二陰陽一」＝龜甲。

【龜鑑】カメ　かめと、つると。奴に長生するもの、人の長壽に比す。梁簡、神仙傳論「仙人之徒、化レ金以爲レ丹、鍊レ氣以在レ身、與二千百年唐一於六合之內」是類ニー大椿二龜長且久不レ足レ尙也」大椿も長壽に喩ふ。大椿之壽（自二〇五一頁）參看。

【龜甲】カウ　○龜のから。○圖きっかふがた。六角形をつなぎあはせたる如き模樣。

【龜鐵】カンのり、てにん、模範（龜は吉凶を卜ふもの、鑑は物をてらすもの、皆のっとるべきもの）唐書、劉黃傳「元凱之考課何先、叔子之克平何務、惟此ー一、揆二乎中庸一」綠軒、乞下校二正陸贄奏議一進御上劄子「聚二古今之精英一、實治亂之ー一」＝龜鑑。

【龜鏡】前條に同じ。北史、長孫紹遠傳「此數事者、照二明典章一、揚二搉前言一、足レ爲二ー一」＝龜照鄰文「思二欲爲レ龜爲レ鏡、立德立言」

【龜脚】きぼてんの異名。＝仙人掌（一〇七四一段）

【龜胸】はとむね、胸がたかくつき出る。南史「陳新安王伯固、生而ー一」＝鳩胸・雞胸。

【龜王】かめの甲と、たまと。竝に貴重なる物。論、承兵「ー一致二於楡中一是誰之過與」

【龜筮】かめの甲を灼きてトすると筮竹にて占ふと。史記にー一俱あり。＝筮龜・龜筴。

【龜筴】トに用ふるかめと、めどぎと。搜神「牲死則埋レ之、一一骸猶レ之」

【龜山操】孔子の作と傳ふる歌曲

の名。呉操「學龜子愛二齊女樂一、孔子欲レ諫不レ得、退而望二管龜山一作レ詩、喩二季氏之蔽一也」其の詞に曰く「予欲レ望レ魯兮、龜山蔽レ之、予無二奈柯一、奈二龜山一何」この龜山は山東省沂水縣の東北に在りて、蒙陰縣の蒙山と相連る、詩經、魯頌に「荘二有龜蒙一」とあるは卽ち此なり。

【龜山集】書名、四十二卷、宋の楊時撰す、奏狀・表・劄子・經筵講義・辯・經解・史論・語錄・答問・銘・碑・詩に至るまでを收む。楊時學を程子に受け之を羅從彦に傳へ、再傳して李侗となり、三傳して朱熹となる、南宋道學者の宗にして所謂龜山學派の祖と爲す、其の學、人生の準的は聖人に在り、而して致知格物を以て力を致すの方と爲すといふに在り。

【龜山書院】福建將樂縣の北封山の麓に在り、山の支峯を龜山といふ、宋の楊時、此に歸休し、自ら龜山と號す、歿後の翌、其の故宅を以て書院と爲す。江蘇武進縣の東南六支瀝里にも亦一あり、もと楊時が講道の所と爲す。

【龜紫】金紫に同じ。歐陽修、謝ル表二龜紫一啓、一之辺、唐制所レ賜、武元衡・牛僧孺爲二宰相一、裴度爲二中丞一、李宗閔爲二學士一、方有二此賜一」に同じ。

【龜茲】ヤ　洛書（一〇九三頁）に同じ。

水經、注「黄帝東巡レ河過レ洛、觀レ壇沈レ璧、受二龍圖於河一、於レ洛、赤文綠字」

【龜筮】キ　かめにて占ふと、めどぎにて占ふと。書經「鬼神其依、一一協レ從」

【龜蛇】カ　かめと、へびと。周禮「一一四游、以象二營室一也」

【龜坼】キ　○古の占卜の名。○地面が龜の甲の如く裂ける。康熙字典「周禮春官、龜占墨卜人占坼、今江淮間、天旱田裂、亦曰二一一一」○龜裂。

【龜紐】ク　次條に同じ。

【龜鈕】ク　かめの形を刻める印のつまみ。鈕一に紐に作る。漢官儀「丞相黄金一一、文曰レ璽」

【龜鼎】キ　元龜と九鼎と。天子の位に喩ふ。後漢書。宦者傳「因レ之盜二一一一一」注「一一、國之守器、以論二帝位一也」

【龜頭】ト　かり、陰莖のあたま。形の似たるが故。

【龜貝】キ　かめの甲と、かひがらと。古代貨幣に用ひしもの。史、平準書「一一金錢刀布之幣興焉」

【龜背】キ　せむし、背がまがれる病。北史、劉焯傳「犀額一一、望レ高視レ遠、以二儒學一知レ名」○佝僂・痀僂。

【龜趺】フ　石碑の龜石に龜の形を刻みしもの。宋楊時「一一負二寶石一浮趾極二莫修一」王洋「淳化三年、御書孝經、勒二之碑陰一、龜趺二厥趺一、龍螭二其頭一」

【龜文鳥跡】キブンチョウセキ　かめの甲のあやもやうと、鳥の足あと。書斷「按古文者、黄帝史蒼頡所レ造也、頡首有二四目一、通二於神明一、仰觀二奎星圜曲之勢一、俯察二一一之象一、博采二衆美一、合而爲レ字、是曰二古文一」

【龜幣】キ　漢代の貨幣の一、重き四銖、金石宋に圖あり。

【龜蹼】ク　○かめと、すっぽんと。揚雄「語曰、龜思レ蹼望、今一一皆隔レ津望レ卵」○人を罵んじいやしめる語。魏書、嬌嬌國傳「劉縞隆欲レ犯二河南一、世祖聞而大笑曰、一一小豎、自救不レ暇、何能爲也」

【龜卜】キ　かめの甲を灼きてうらなふ。韓愈文「若二燭照數計而一一」也」

【龜毛】キ　極めてめづらしきものの譬にいふ。述異記「龜千年生レ毛、龜壽五千年、謂二之神龜一、萬年曰二靈龜一」

【龜鱗】リン　かめと、きりんと。並に靈物。喬琳賦「豈比二夫一一龍鳳一、徒在二平宮沼郊藪一」

【龜龍壽】ジュ　かめと、りょうとは共になが生きす、よりて人の長壽を祝するにいふ。揚子「龜龍鴻鵠、不二亦壽一乎、曰壽、曰人可レ壽乎、曰物以二其性一、人以二其仁一」

【龜齡】レイ　長きよはひ。唐五行記補「一一經二萬歲一」鮑照詩「一一安可レ獲、喬宗限已迫」

【龜裂】キ　○われめ、かめの甲の如くひびわれる。○あかぎれ、ひび。韓駒詩「破袖流風手一一」

【龜手】シュ　ひびのきれたる手。莊、逍遙遊「宋人有下善爲二不一一龜一者上」

【龜萬年】マンネン　龜は一萬年生きるといふ。龜齡を見よ。

龠部

【龠】ヤク　籥

○ふえ（篇）樂器の一。三孔ある竹の笛、以て衆聲を和するもの。○ますめの名、一合の十分の一、一勺（黍の粒千二百を容る）又其のますの稱。

五畫

【龢】和（三二八頁）の古字。

【龡】秋（三八〇頁）の古字。

五畫

【龢】○ととのふ（調）やはらぐ（和・諧）左、襄十一「如二樂之一」○一雛は宮殿の名。張衡、東京賦

「前殿雲臺、一曰安福」

【顧】ユヤク　通　顧の正字

九　畫

○よぶ（呼）字寫疾首號呼也、一作顧」者、妄增「無辜」「天」傳「一、呼也」○やはらぐ（和）書、盤庚「率一衆感出矢言」注「一、和也、率和衆姦之人出正直之言」

群馬信校

學惡乎始、惡乎終。曰、其數則始乎誦經、終乎讀禮。其義則始乎爲士、終乎爲聖人。眞積力久則入。學至乎沒而後止也。故學數有終、若其義則不可須臾舍也。爲之人也、舍之禽獸也。故書者、政事之紀也。詩者、中聲之所止也。禮者、法之大分、類之綱紀也。故學至乎禮而後止矣。夫是之謂道法之極。禮之敬文也、樂之中和也、詩書之博也、春秋之微也、在天地之間者畢矣。（荀子、勸學篇）

字源　終